ティアムーン帝国物語　～断頭台から始まる、姫の転生逆転ストーリー～

餅月望

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
ティアムーン帝国物語　～断頭台から始まる、姫の転生逆転ストーリー～

【Ｎコード】
Ｎ８９２０ＥＸ

【作者名】
餅月望

【あらすじ】
２０２３年、アニメ化。
書籍版：１～１５巻発売中。
コミックス：１～７巻発売中・ＷＥＢにてコミカライズ連載中！
スピンオフ漫画「ティアムーン帝国物語～従者たちのお茶会～」１巻発売中！　ＷＥＢ連載中！
舞台版ＤＶＤ「ティアムーン帝国物語　ＴＨＥ　ＳＴＡＧＥ」Ⅰ、Ⅱともに絶賛発売中。

ドラマCD1，2　絶賛発売中。

「なぜ、こんなことに……？」
大国ティアムーン帝国の皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンは断頭台（ギロチン）の上でつぶやく。
彼女を取り囲む観衆の顔には、例外なく怒りの色があった。
重税に耐えかねた民衆の革命、その手にかかって、ミーアは断頭台で処刑されてしまう。
けれど次に目が覚めた時、彼女はベッドの上に寝ていた。
八年も前、まだ子どもだった頃の姿で……。
一瞬、夢か？　と安心しかけるミーアだったのだが、その枕元には彼女自身が綴った血染めの日記帳が転がっていた。
豪奢な皇女の部屋に、ミーアのあられもない悲鳴が響いた。

これは、やり直しの物語。
それほど悪辣ではなかったけれど、他人の痛みにも空腹にも思いを致すことができなくて……それを知った時にはすべてが手遅れだった姫殿下。過去の自分へと逆行転生した彼女は、血染めの日記帳と自らの記憶をもとに、西へ東へ奔走する。
斜陽の帝国の未来を救うため？
内戦により命を落とす多くの兵士のため？
民衆を飢饉から救うため？

否、彼女の目的はただ一つ。
「すべてはギロチンの運命を回避するために！」
TOブックスさまより書籍化決定いたしました。

※COMICOチャレンジに投稿していた「ティアムーン帝国物語～断頭台から始まる姫の逆転ストーリー～」を、吹き出し無しの小

説形式にリメイクして投稿して来ましたが、ＣＯＭＩＣＯさんの方は完結。その後、書籍化に伴い削除いたしました。

第一話　断頭台から始まる

赤い、燃えるように赤い夕日が視界を焼く。
帝都名物の大広場に設営された断頭台。錆の浮いた無骨な刃が、陽の光を受けてギラリと輝きを放っていた。
その前に立ち、ティアムーン帝国第一皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、呆然と周りを見回していた。
突き刺さるような声、声、声。
聞いているだけで耳をふさぎたくなるような罵声、怒号。その多くは自分を非難するものだ。
「……どうして、どうして、こんなことに」
栄えあるティアムーン帝国の第一皇女である自分が、どうしてこんな目に遭わなくてはならないのか。
パンがなければ、肉を食べればいいと笑ったからだろうか？
フラれた腹いせに貧乏貴族の娘にビンタしたからだろうか？
嫌いな野菜である黄月（おうげつ）トマトの入った料理を作ったコックを、その場でクビにしたからか？？
いや、そりゃ全部だろ、と、ツッコミを受けそうなことを心の中で嘆きながら、彼女は、憎悪に燃える民衆の顔を見た。
その先頭で、兵士たちに指示をする青年の姿が見えた。
シオン・ソール・サンクランド。
大国、サンクランド王国の第一王子。白銀の髪をした凛々しい青年だ。
そして、その隣に凛と立つ少女。ティアムーンの聖女と呼ばれる少女。
辺境の貧乏貴族の出身ながら、シオンの協力を得て、苦しむ民のために革命を起こした令嬢。
ティオーナ・ルドルフォン。

自身を貶めた存在、憎しみの対象。
けれど、すでに、その憎しみの炎も消えて、後に残ったのは灰のような諦めだけだった。
「……どうして、こんなことに」
力なく、ただただ、そうつぶやくのみ。
やがて、後ろにやってきた兵士が、彼女を力ずくでひざまずかせた。
目の前に、無骨な木の板が見えた。
三つの穴があいたそれは、断頭台に囚人を固定するための器具だ。
ささくれ立った木は、触れただけでトゲが刺さり、彼女の体を痛めつける。
「どうして、こんなことに……」
三度目の問いかけ、それに答える声があった。
「帝国のためですよ、大人しく死になさい。お姫様」
視線を上げると、自らを連れてきた兵士が冷たい目で見降ろしていた。
むき出しの殺意に恐怖を覚える間もなく、重たい鉄の塊が落ちてきて。
どつっと、鈍い音がして……周りの景色がぐるり、ぐるり、と回って……。
ぱさり、と、唯一持つことを許された、使い古した日記帳が……、地面に落ちて、それが、じんわり赤く、赤く染まっていき……。
そうして、ミーア・ルーナ・ティアムーンは死んだ。

という夢を見た。
「ひぃやあああああああああああ！」
ミーアは絶叫した。
帝国の姫君に相応しくない、ちょっと品のない悲鳴だった。
「く、くくく、くび、くびくびくびくびぃいいいい！」
ぺたぺたと、自分の首がついていることを手で触って確認。確認

っ！
――あっ、ありますわ、大丈夫、大丈夫
今度は、こわごわと自分の体を見下ろす。
ボロボロのごわごわした布に包まれていたはずの体を包むのは、豪奢な寝間着だった。
ふわふわ、フリルがふんだんに使われている、さわり心地のいいやつだ。
擦り傷だらけだった肌は、すべすべになっていて、見つめた手の平は夢で見たより縮んでいた。
――まるで、子どもみたい……。
ぼんやり、ベッドから降りて、大きな姿見の前に立つ。
きょとん、と丸く見開かれた蒼い瞳、肩の辺りで切りそろえられた白金の髪と、ほんのり紅潮した健康的な頬。
そこに映ったのは、１１、２歳ぐらいのころの自分の姿だった。
それは、まだ帝国が大陸で有数の栄華と繁栄を誇っていたころで……。
――おかしいですわ。たしか、わたくしは二十歳だったはずですが……。
十七歳、逃亡の途中に捕らえられて、地下牢に三年間幽閉されて……、それで。
苦しい日々が目の前に、次々に浮かぶ。
辛かった日々、泣いた日々、地下牢の固い石の感触、ひんやり湿った毛布の感触。
記憶の混乱、けれど、それ以上に大きな安堵。
「……お、おほほ、で、ですわよねぇ」
ミーアは笑った。
「い、いやですわ、あんなこと、起こるはずがございませんのに」
悪い夢を笑い飛ばすように高笑い。
「つまらない夢ですわ。子どもっぽくって、我ながら呆れてしまいますわ」

本当の子どもは、子どもっぽい悪夢なんて思わないのだけど……、それを不思議と思えるだけの余裕もなく、ともかく、笑って。笑って。

それから、何気なく枕元を見て……

「……あら？」

ミーアは首を傾げた。

そこには、異様なものが、置かれていたからだ。

それは、古びた日記帳だった。

表紙を見る限り、十歳の時からつけ続けている日記帳に間違いはない。それはいいのだけど、なんだか全体的に古びているような……。

……というか、黒ずんだシミに覆われている。

それは、夢の中、最後に見た日記帳とそっくりで。

震える手で、日記帳に触れる。

こわごわ表紙をめくると、赤黒く染まったページが目に入ってきて。

そこにびっしりと書かれた恨み言は、先ほどの長い夢の中で、彼女が延々と書き連ねた物に他ならなくって……。

牢獄の苦しみを、断頭台への恐れを、書き連ねた物に他ならなくって。

「ひぃやあああああああああああああああああああああ！」

再びミーアは悲鳴を上げ、ベッドの上に、こてりん、と倒れ、そのまま気絶した。

第二話　ミーアの嫌いなもの

意識を取り戻した後も、ミーアはぐったりとベッドに横たわったままだった。だらんとだらしなく手足を投げ出して、

「気分が……優れませんわ」

食事ものどを通らなくって、ろくにランチを食べることができなかった。

あれは、悪夢だったと信じたい。

けれど、その割には残っている記憶はリアルで、こうして血染めの日記帳を見てしまった後となっては、とても夢だとは思えなくなってしまって。

「うー……」

うなり声をあげ、ごろごろ、ごろごろ、ベッドの上を転がる、転がる。

悩み、悩み、悩むこと……30分。

「……お腹がすきましたわ」

ぐぅ、とお腹が鳴った。

昼食を辞退してから、1時間もたっていなかった。

「そうですわ、たしか物を考える時には甘い物がいい、と聞いたことがありましたわ」

ぽん、と手を叩く。

こいつはいいアイデアだ！　と、その顔がぱぁっと明るくなる。

スタスタとベッドから降りると、ミーアは自室から飛び出した。

ミーアたち、皇帝一族が暮らすのは白月宮殿と呼ばれるお城だった。

緑金と白月石に飾られた廊下、絢爛豪華な装飾は、没落する前、繁栄の絶頂期の帝国の姿そのものだった。

とてとてと廊下を歩き、やってきたのは、四つある食堂の一つ、白夜の食堂だった。
広い部屋に入ると、中にいた男が怪訝そうな顔を向けてきた。
「これは、ミーア姫殿下、いかがなさいましたか？」
クマのような大きな体と、もこもこのヒゲという特徴的な顔を見て、ミーアは少しだけ驚く。
――こいつは……、たしか、わたくしがクビを言い渡してやった料理長じゃなかったかしら？
嫌いな野菜ばかりを出してくる料理長に、ミーアがクビを言い渡したのは、彼女の１４歳の誕生日の時だった。
「今から2年後ぐらいかしら……」
「あの、なにか？」
「いえ、なんでもありませんわ。お腹がすいたので、おやつを用意していただけるかしら？　ムーンベリーのパイなんか素敵ね」
それを聞くと、料理長は渋い顔をした。
「まことに言いづらいことなのですが、お昼の食事をされずに、おやつを出すというわけにはいきません」
その言葉が、なんだか懐かしく感じてしまい、ミーアは思わず微笑んでしまう。
思えば、こんな風にミーアに意見してくれたのは、彼だけだったのだ。
彼の後に来たシェフは、ミーアの言うとおりの物を作ってくるだけだったから、結局、ミーアは飽きてしまった。なんでも自分の思い通りというのは、それはそれでつまらないものなのだ。
「そうですわね。でしたら、お昼の残りでよろしいから、出していただけるかしら？」
「は？」
ミーアの言葉を聞いて、なぜだか、目をまん丸くする料理長。
「なにか？」
「いえ、なんでもありません。それでは、ただいまお持ちいたしま

す」
大して時間がたたないうちに、ミーアの目の前に料理が並んで行く。
ふんわりと香ばしい焼きたてパン、季節の野菜がふんだんに入ったシチュー、紅魚（ルジェサーモン）のマリネ、それに、フルーツの盛り合わせだった。
「ああ、懐かしいですわ、これ」
ミーアは、特に野菜たっぷりのシチューを見て、頬をゆるめた。
シチューには、しっかりと、ミーアが嫌いな黄月トマトまで入っている。
――この酸味が、ダメなんですのよね。
ミーアはスプーンに乗せた黄月トマトを見つめて。
――でも、これ、なんとなく美味しそうですわね。
ふいに、牢屋の中で食べさせられた物を思い出した。
歯が折れそうなほどに硬いパン。その表面にはカビのようなものまで生えていて、ボソボソしててとても食べづらかった。
時々出てくるシチューもどきも、何が入っているものか、灰色に濁っていて、使われている野菜は雑草じゃないか、と思うものだった。
マズイだけならまだしも、数日間、お腹が痛くなるのは、なんとかしてほしかった。
飢饉が続いて食べ物がなかったと聞いてはいたけれど、あれは、ただの嫌がらせだったに違いない、とミーアは思っている。
その証拠に、ミーアが嫌いだと知って、しなびた黄月トマトのみの日もあったのだ。
――あれは辛かったですわ……。
無理やり口に押し込まれた時の、あの何とも言えない青臭さと酸っぱさとえぐみ……。
思い出すだけで鳥肌が立つ。
そこで、改めて、目の前の黄月トマトに目線を戻した。
――あの時の物と比べると……、なんだか、すごくツヤツヤして

ますわ。
　残すつもりでいたミーアだったが、ほんの少し興味をひかれて、トマトの欠片を口に入れてみた。
瞬間、その瞳が、カッと見開かれる！
「シェフ！　これ、シェフをお呼びなさい！」
　ミーアの剣幕に、メイドたちが震えあがる。
「あっ、あの、ミーア姫殿下、いかがなさいましたか？」
「いいから、料理長をお呼びなさい！」
「なにか、お気に召さぬことでも……？」
　騒ぎを聞きつけて、料理長が現れた。その顔は緊張で、いささか強張って見えた。
「これは……、なんですの？」
　ミーアは、スプーンに乗せた物、黄月トマトを料理長の鼻先に突きつけた。

第三話　記憶の中の声

「これはなんですのっ！」
「旬の野菜のシチューですが……」
どこかとぼけた口調で言う料理長。けれど、ミーアは誤魔化されるつもりはなかった。
「この野菜は、なんだと聞いているのです」
ぐぐい、っと料理長の顔の前にスプーンを近づける。
大がらな料理長とミーアとでは身長差があるので、背伸びして、つま先立ちになって、ぐぐぐいっと……。
「……黄月トマト、でございますか？」
突きつけられたものを見て、観念した、という様子で料理長が言った。周りで見ているメイドたちも、心配そうに様子を見ている。
「そんな……、これが、これが、黄月トマトだというんですの？」
信じられぬ思いで、ミーアはそれを見つめ、それから震える手でスプーンを口に入れる。
舌の先に触れた瞬間、口の中に広がる爽やかな酸味。その中に隠れたほのかな甘み。ほどよく煮込まれた野菜は、口の中で、ほろり、と崩れ、間もなくとけて消えていく。
口の中に素晴らしい余韻を残して……。
記憶の中とは異なる、絶品の味が、ミーアの感情を揺さぶった。
夢中で、ミーアはスプーンを動かした。
濃厚なとろみを残し、舌の上でとろけるシチュー、ふんわりと甘味を残すパン……。
「パンとは、こんなにも柔らかなものだったかしら？」
つぶやく声が、震えていた。気づけば、その頬を、ぽろぽろ、ぽろぽろ……、涙が伝っていた。
「ひっ、姫さま、いかがなさいましたか？　私の料理になにか問題

が……？」
あせった様子で、料理長が話しかけてくる。
口いっぱいに料理を頬張ったミーアは、返事をしようとしたものの、ふがふがと言葉にならない声が出るだけだった。
あげく、喉につまらせかけて、手足をじたばた……。
あわてたメイドの一人が持ってきた水で、なんとか落ちついて……、などと、高貴なる姫君には相応しくない姿を見せた後、
「堪能しましたわ、シェフ、あなた、いい腕をしてますわね」
かたわらで落ちつかなげにしていた料理長に、ミーアは微笑みかけた。
「おほめにあずかり光栄です。ですが、姫さま、本日のシチューは素材のおいしさを活かす料理でしたから、私の手柄（てがら）ではありません」
「まぁ、そうでしたの？　でも、例えば、そうですわ、黄月トマト。黄月トマトとは、もっと青臭くて、渋みの強いものではなかったかしら？」
牢獄で無理やりに食べさせられた物を思い出す。固くて、苦くて、物によっては傷んでいて、とてもとてもまずかった。
「ああ……」
苦笑いを浮かべてから、料理長は言った。
「黄月トマトの場合、煮込みの手間を省くと、そのような味になることもありますな。そちらは三日かけて煮込んだものです。火加減にさえ気を付ければ、誰にでも作れるものですよ」
「……まぁ、そんなに？　でも、そんなに手間がかかるのであれば、無理して食べずとも……」
「いえ、それでは姫殿下のお体に障ります。帝室の皆さまの健康をお守りするのも、臣下たる我らの務めゆえ」
胸に手を当てて、深々と頭を下げて、臣下の礼をとる料理長。かつてミーアは、それは当然、自分にささげられるものだと思いこんでいた。
でも、違った……そう、違ったのだ。

革命によって零落した彼女を、このように気づかう者はほとんどいなかった。
だから、彼女はわずかに頬をゆるめて、柔らかな笑みを浮かべて言った。
「それは、御苦労でした。堪能(たんのう)いたしましたわ」
「へっ……？」
素直な労(ねぎらい)いの言葉に、料理長は驚愕した。それはもう、腰を抜かしかねないばかりに驚愕した。
大きな体を飛び上がらせて、二歩、三歩と後ずさってしまったほどだ。
まさか、このわがまま姫からこんなに優しい言葉をかけられるとは、思ってもみなかったのだ。
……ミーアの日頃の行いがしのばれる。
ぽかん、と口を開け、さながら空を飛ぶ魔法使いでも目にしたかのような顔で、瞳を瞬かせた後、
「きょ、きょきょ、恐縮です」
ようやく、一言だけ答えた。
それから、照れ隠しなのだろうか、居心地悪そうに頬を掻きながら、
「ま、まぁ、もっとも、単純に値段の問題かもしれませんが……。本日お出ししたものは、庶民が一か月働いて得る給金と同程度の高級なものですからな」
「あら、そうなんですの？」
値段の話をされても、いま一つパッとこないミーアである。
そもそもが、わがまま勝手に育てられた姫君である。欲しいものは、流し目一つで手に入れてきた女なのである。
自分の生活費や、食費がいくらかかっているかとか、庶民の給金がどうとか、興味もなければ関心もないのである。
だから、料理長の言葉を聞き流しても、なんの不思議もない……。はずだったのだが、

『あなたたち王族の食事にいくらかかっているか、知っているのか？』

ふいに脳裏によみがえる嫌味っぽい声。

びっくりして、ミーアは辺りをキョロキョロと見まわした。

――なっ、なんですの！？　今のは……。

聞き覚えのある声、その声の主は……。

第四話　再会

「……あの声、いったい誰だったかしら？」
食事が終わった後、ミーアは空中庭園内のサロンに移動した。
空中庭園と言っても、本当に浮いているわけではない。白月宮殿の屋上、その少し張り出したところに造られているのだ。
国内から様々な美しい草花を集めて造った庭園は、他国の王族を招いても恥ずかしくないぐらいに見事な場所だった。
しばし庭園内を歩き回り、美しい花の香りを楽しんだというのに、ミーアの頭の中のモヤモヤは晴れなかった。
なにかどうしても思い出さなければならないことがあるような……、けれど、その大切な記憶は霧のベールの向こう側にあるようで……、いくら手を伸ばしても決して届かなかった。
「……やはり、これは、甘いものが足りないのですわ。これ、メイド！　誰ぞ、なにか甘い物を持ってきてちょうだい」
先ほど食べ損ねたおやつをせしめるべく、ミーアはぱんぱん、っと手を叩いた。
庭園の一角に備え付けられたテーブル席に移動して待つことしばし。いそいそと若いメイドがやってくるのが見えた。
彼女が運んで来ているものを見て、ミーアの瞳が大きく見開かれた。
――あっ、あれは、まさかっ！
それは、ケーキだった。クリームたっぷり、てっぺんにふんだんに朝摘みイチゴがのった、なんの変哲もないショートケーキ……、なのだが……。
――け、け、ケーキなんて、食べるの、久し振りすぎますわ！
捕らえられ、牢獄に入れられてからはもちろんのこと、帝国の財政が悪化してきたころには、すでにケーキなど食べられる状況では

なかったのだ。
自然とウキウキ、体が踊りだそうというものである。
そんなミーアの目の前を……、
「お、お待たせしまし、きゃっ！」
メイドが飛んだ！　もちろん、いっしょにケーキも……。
ぽかん、と口を開けるミーアの目の前をゆっくりと横切って行くケーキ、とメイド……。それを止めるものはなにもなく……。
べちゃあ……！
床に激突し、無残にもぺしゃんこになるケーキ。その上にメイドが落ちてきて、完膚なきまでにそれを押しつぶしてしまう大惨事！
ミーア……言葉を失う。
「ちょっと、アンヌさん、何をしているんですか！」
一連の騒動を見ていた年配のメイドたちがバタバタと走ってくる。
「ミーア様、申し訳ありません。お怪我はございませんか？」
ショックで呆然としていたミーアであったが、すぐに正気を取り戻して、笑顔を見せる。
「ええ、問題ありませんわ。ありがとう」
本来であれば、罵倒の言葉の一つでも飛ばしてやりたいところである。
現に、恐らく以前のミーアであれば間違いなく、そうしていたはずだった。
けれど辛い牢獄での生活を経験したミーアは、ケーキ皿よりは深く、ティーカップぐらいには広い心を持つようになっていた。
翻訳するならば、つまりは、人並みには遠く及ばないまでも、ギリギリわがまま娘とは呼ばれない程度の忍耐力は持ち合わせるようになっていた、ということだ。
これは、大きな成長と言えることだった。
そう、人は成長するものなのだ。
それが例え亀よりも……、否、カタツムリよりも遅い歩みであったとしても。

ミーアは成長しているのだ！
だから、今も、口元に引きつった笑みを浮かべつつ、
「ケーキは新しい物を持ってきていただけば、良いだけの話ですわ」
そうフォローを入れるばかりか、
「それより、そちらの彼女の方は大丈夫ですの？」
転んだメイドを気遣う余裕すら見せることができる。
そう、なにしろケーキは替えの物を用意すればいいのだから、なんの問題も……、
「ミーア様、申し訳ありません。実は、本日のケーキはあれしか手に入らず……」
「あなたっ！　その場におなおりなさい！」
キレた！　一瞬だった。
ミーアの寛大さなど、ケーキを台無しにされたことの前では、吹けば飛ぶ枯れ葉程度のものでしかない。
ケーキは、偉大なのである！
特に数年ぶりに食べるケーキは容易に人の理性を吹き飛ばすものなのだ。
「わっ、私のケーキを、こんなにして……、あなたっ、顔をおあげなさい！」
「ひぅっ！」
だんだんだん、っと足をふみならすミーア。怯えた様子の若いメイドは、ぎくしゃくとした仕草で、ミーアの方に顔を向けた。
現れたのはミーアより年上の、十代の半ばの少女の顔だった。
生クリームまみれの赤い髪、鼻先にちった薄いそばかす、薄っすらと涙ぐんだ青くて丸い瞳……。
美人というよりは可愛らしいといったほうがしっくりくるような顔だった。といっても、ダンスパーティーで見られるような垢ぬけた雰囲気ではない。どちらかといえば、田舎の村娘といった風貌の、素朴な少女である。
「……あなたは」

その顔を見た時、ミーアの脳裏に、ある光景が蘇ってきた。
それは、最低最悪の日の記憶、彼女の処刑当日の記憶。
地下牢で一人、『その時』が来るのを待っている、そんな時のことだった。

第五話　忠義のメイド

薄暗い地下牢。
ひんやりと、肌寒いその部屋で、ミーアは一人、膝を抱えて〝その時〟を待っていた。
ミーアが牢獄に囚われてから、実に三年の月日が流れていた。
彼女を取り囲んでいた大勢の使用人の姿も今はない。最初の数週間は、面会に来る者もいたが、ミーアが権力の座に返り咲くことがないと察すると、すぐに離れて行ってしまった。
そうして、ミーアは孤独になった。
けれど、数少ない例外は……、
「ミーアさま、御髪（おぐし）を整えにまいりました」
赤い髪の、年若いメイド、アンヌだった。
やってきたアンヌはかたわらに立つ兵士に一礼すると、牢獄の中に足を踏み入れる。ミーアはすでに麻痺しているが、牢獄の中は、それはそれは酷い臭いがした。最下層の貧民地区に匹敵する、そこは最低の環境。
けれど、アンヌは一切躊躇うそぶりを見せず、ミーアの後ろに回る。
それから、懐に入れていた櫛をくすんでしまった金髪に通す。
何日も洗っていない髪は、なかなかまとまらず、それでも確実に、アンヌはミーアの髪を整えていく。
「すみません、ミーアさま。私、昔から櫛を使うのが上手くなくって……」
「……どうして、あなたは、わたくしに尽くしてくれるんですの？」
ぽつり、と、ミーアの口から言葉がこぼれた。
この地下牢に捕らわれてから、アンヌは足しげく通ってくれていた。三日に一度か、一日置きにか。

時に差し入れを持って、あるいは、入浴できないミーアの体を拭いて身の回りを整えてくれるために、献身的に尽くしてくれた。
けれど、ミーアにはその理由がよくわからなかった。
ミーアは皇帝の娘だ。だから、その周りで美味しい思いをした者たちもいないことはない、というか、むしろ、結構いると思う。
けれど、目の前のメイド、アンヌは、そうではない。どちらかと言えば、ミーアのわがままに迷惑かけられた方なのだ。
一応、誤解がないように言っておくと、ミーアは別に暴君というわけではなかった。
そりゃあ、ドジすれば口汚く罵るし、キレれば手は出る。時には足だって出たし、場合によっては頭突きだってする。
……おおよそ高貴な身分にふさわしくないことだったと反省するミーアである。
けれど、それ以上はない。
ムチで叩いたり、その場にいた兵士に「無礼者を切り捨てなさい！」とはならなかった。だってそれって、痛そうだし……。
ミーアは痛いのが、あんまり好きじゃないのだ。
でも、だからと言って良い皇女では、決してなかった。
誰が好き好んで、罵倒され、足蹴にされた相手に尽くすだろう？
そんなのは一部の少し変わった嗜好の人だけだ。目の前のメイドは、おそらく違うだろう。
「わたくしは、あなたになにも良くしておりませんわ。むしろ……」
「はい。よく叩かれました。蹴られたこともあったかな？」
アンヌは、懐かしそうに微笑んで言った。
「知ってますか？　ミーアさま、ミーアさまの蹴りは全然痛くないんですよ？」
「え？　そうなんですの？」
「はい。弟たちとケンカした時と比べたら、全然です。ふふ」
それから、アンヌは、一度黙ってから、
「こうして、ミーアさまの御世話をさせていただいたのは、ただ、

放っておけなかったってだけだから。特に理由なんてありませんよ」
そう優しい笑みを浮かべた。
穏やかな時間は長くはなかった。じきにやってきた兵士が、ミーアを処刑台まで連行していく。
別れ際、ミーアはアンヌの方を向いて、深々と頭を下げた。
「今の私は、あなたの忠義に報いることができませんわ。ありがとう、と、言うことしか、できないわたくしを、どうか許して」
次の瞬間、ふんわり、と、ミーアの体が温もりに包まれた。
「ミーアさまに、神のご加護がありますように、お祈りしています」
アンヌに抱きしめられたのだとわかった時、ミーアの瞳に、ふいに涙があふれ出た。こうして優しく抱きしめられたことなど、囚われの生活で一度もなかったから。
アンヌの溢れるような優しさが、ぬくもりが、嬉しくて……、でも口惜しい。
良くしてくれた彼女になにもしてやれないことが、ミーアの心に深い心残りとして刻まれたのだった。
どうにもならない未練を胸に抱きながら、ミーアは処刑台へと向かった。

「……思い出しましたわ」
ミーアは、目の前で両手を床について謝罪するアンヌの、そのかたわらに静かに膝をついた。
「姫さま、ドレスがクリームで……」
「お黙りなさい！」
取り巻きのメイドを一喝すると、ミーアはアンヌの肩をそっと抱き起した。
「アンヌさん、お顔をあげて」
「ももも、申し訳ありません。姫殿下」
「別に怒ってはおりませんわ」
そう言って、ミーアが浮かべた笑みは柔らかで優しげなものだっ

た。
「さっ、お立ちになって。ケガは本当にないのですわね？」
「は、はい、あの、ありがとう、ございます」
ミーアに抱き起こされたアンヌは、目を白黒させている。そんなアンヌに、ミーアは、
「今こそ、私はあなたの忠義に報いることができますわ」
そうして、おごそかに告げる。
「あなたを今から、私の専属のメイドにいたします。以後、私の身の回りを担当なさい」
「……えっ？」
「ひっ、姫さま！？」
周囲の、ミーアの取り巻きのメイドたちに一斉に動揺が走った。

第六話　可愛い忠義の示し方

皇女専属のメイド。
それは大変に名誉な立場であり、城に仕えるメイドたちの目指すべき終着点でもある。
その任に就くのは間違っても平民などではない。貴族の次女、三女と言ったそれなりの家柄の者であることが常である。
そして、それ以上に重要なのは、給金が高いことである。一般的なメイドと比べると倍近く、平民出身で新人のアンヌの給金と比較すれば、実に三倍近くにもなる。
平民出身のアンヌが、しかも、どこか抜けたところもある、とても優秀とは言えない彼女が、そんな役職に任命されたのだから驚くなという方が無理がある。
いきなりそんな抜擢をされてしまうと、下手をするとメイド仲間からいじめられそうなもの。
けれど、ミーアは、高らかに、ニコやかにこう宣言したのだ。
「今より、アンヌはわたくしの専属メイド。わたくしの庇護下に入りますの。みなさま、その意味、よーっくお考えになりなさいね」
こうなると、もう誰にも手だしできない。
なにせ、わがままで知られるミーア姫の、直々のご指名である。
気まぐれでクビにされた使用人を何人も見てきているメイドたちに、わがまま姫さまのご機嫌を損なう危険は、当然、冒せないわけで。
「あの、アンヌさん、その、今までのことなんですけど……」
この日を境に、アンヌに対する先輩メイドたちの反応が変わった。理由もなくいじめられることはなくなったどころか、逆に親切にされるようになってしまった。
多少のドジも、助けてもらえるようになった。

この急変に、当のアンヌは戸惑うばかりだった。
――お給金も上がっていいことずくめだけど……。
その理由がわからないものだから、かえって不気味に感じられるのだ。
なにしろ、あのミーア姫である。気持ち一つで使用人をクビにすると噂のわがまま姫なのだ。
理由もなく親切にされてしまうと、アンヌとしては怖くて仕方ないわけで……。
だから、アンヌは思い切って聞いてみることにした。
「あの、姫さま、どうして、私にそんなに良くしてくださるんですか？」
その日、ミーアは自室のベッドサイドの椅子に腰かけて、古ぼけた日記帳を読んでいた。
なにが楽しいのか、最近のミーアはずっとあれを読んでいる。
――誰か、高名な方の日記なのかしら……？
アンヌの呼びかけを受けて顔を上げたミーアは、可愛らしい笑みを浮かべて言った。
「あなたの忠義に報いているだけですわ」
そう言われても、まったく心当たりのないアンヌである。
「私、姫さまに何かしたでしょうか？」
「なにもせずとも、あなたは、忠に厚い人、わたくしはそれに報いた。それだけのこと、お話はそれでおしまいですわ」
――私、そんなに忠義に厚くないんですけどっ！
内心で悲鳴を上げるアンヌである。
彼女は、別に皇帝陛下や姫殿下に忠義をささげるために、白月宮殿に来ているわけではない。
では何のためかと言ったら、ぶっちゃけお金のためである。
彼女の家は、貧しい商家である。しかも、まだ小さい弟と妹が合わせて五人いる。両親の稼ぎでは全然間に合わないわけで、アンヌの収入は生命線といってもいい。

だから、増えるのは大歓迎だけど、でも、その理由が現実の自分とはほど遠い忠義に厚い、とか言うものだったりすると……。
――胃がキリキリするよぅ……
そんなアンヌの心の内なんか、全然気にしていないように、ミーアはにこにこしながら言った。
「ということで、早速、あなたの忠義を見せていただきたいんですけれど……」
「うぇっ！？」
忠義とかないです！　と言ってしまいたいアンヌであったが、さすがにそんなことを言えず。
――いったい、なにを要求されるんだろ……？
なんて、ドキドキしていると、ミーアはそっと顔をよせて、まるで悪戯を企む子どものような顔で――まぁ、実際にミーアは子どもではあるのだけど。
「これで、民草のお菓子を仕入れてきてもらえないかしら？」
「……へっ？」
ものすごく可愛らしい忠義の示し方だった。
緊張に固まっていたアンヌは、思わず拍子抜けして、笑いそうになって……、
「これで……」
差し出されたものを見て、悲鳴を上げた。
「ちょちょちょ、ひ、姫さまっ！　これっ、多すぎますって！」
ミーアの手にあったのは、満月金貨と呼ばれる巨大な金貨だった。それ一つで一般のメイドの給金、６０日分にもなる。
「あら、そうですの？　でも、手元にあまりお金がなくって……。ああ、そうですわ、でしたら、あまりであなたのご家族に何か美味しいものでも買って帰るといいですわ」
――どんな一流レストランに行けば、使い切れるのよっ！
「ああ、それと、以降、私のことは、姫さまではなく、ミーアと呼ぶように」

「えっ？　あの……」
「では、頼みましたわね。なるべく急ぎで。やはり、考えごとの際には甘いお菓子が必要ですから……。うふふ、民草のおやつ、楽しみですわ」
鼻歌を歌うミーアをぼんやりと眺めることしかできないアンヌだった。

第七話　ミーア姫、やる気を出す

白月宮殿には、ティアムーン帝国全土の知識を集めた大図書館（ライブラリー）がある。

その大図書館に備え付けられた木製の机に頬杖をついて、ミーアは憂鬱（ゆううつ）そうに、ため息を吐いた。

「うーん、どうしたものでしょう……」

ミーアは、ここ数日、ずっと図書館にこもっていた。

あの日、アンヌのことを思い出したミーアは、一週間かけて日記帳を見直しながら、記憶を整理した。

その結果、ようやくアレが夢なんかではなく、実際に起きたこと……いや、正確には、これから起こることだということが理解できたのであった。

その結果！

「そそそ、そんなの、まっぴらごめんですわっ！」

ミーアは一念発起した。

もう一度、断頭台にかけられるなど、冗談じゃなかった。なんとかして、あの未来から逃れなければならない。

ということでミーアは図書館にこもって、現在のティアムーン帝国について調べてみた。

確か、ミーアの記憶によれば、あと数年のうちに帝国の財政は悪化。追い討ちをかけるように飢饉が来て、疫病（えきびょう）が蔓延（まんえん）し、民衆が革命を起こして、近隣国が革命軍に手を貸して介入してくる。

だいたい、そんな感じ……、だった気がする。

図書館で、その記憶を頼りに調べていった結論としては、

「難しい、ですわ」

それはそうだろう。なにしろ、甘やかされて育った彼女である。いきなり政治や経済のことを調べ始めたってわかるはずがない。

なにが起こるかはわかっているのに、どうすればいいのかわからないもどかしさに、ミーアは頭を抱える。
いくら甘い物を食べて頭の働きをよくしても、まったくいいアイデアが思い浮かばなかった。
さすがに自分の食事一回分が、民衆の一か月分の給金に等しいというのは、まずいのではないか、ということは理解できたけれど……。
「やはり、あの方を探し出さねばならないでしょうね……」
アンヌのことを思い出すのと同時に、ミーアは、もう一人の忠臣のことを思い出していた。
傾いた帝国を立て直すため、ひいてはミーアたち皇帝一族を助けるために、身を粉にして働いてくれた、優秀な青年文官。
ミーアがどん底に落ちても、見捨てることなく、最後まで働いてくれた人、にもかかわらず、
――どこにも名前が書いてないんですのよね。ものすっごーく、失礼なヤツだったのはおぼえているのですが……。
陰険（いんけん）メガネ、くそメガネ、くされメガネ……などなど。いろいろ呼んでた記憶はあれど、そう言えば、彼の名前を呼んだことはなかった気がする。
「名前がわからないとどうにもなりませんわね。なんとか、手がかりになりそうなものでも書いていないかしら……？」
そう思い、改めて日記を読みなおしてみると、はじめて会った日のページに、
『中央から地方に飛ばされたバカ』
と小さく書かれているのを見つけた。
「そうですわ、確か、しばらくは帝都に任官してたと言ってた気がしますわ……。探しに行ってみようかしら？」
もしかしたら、まだ、帝都にいるかもしれない。
思い立ったら即行動。ミーアは立ちあがると、アンヌに外出の準備をさせた。

ティアムーン帝国、帝都ルナティアには、皇帝の統治（とうち）を助ける五つの月省（げっしょう）が存在している。
首都の行政を担う青月省（せいげつしょう）
税関係を扱う金月省（きんげつしょう）
地方の行政を担う赤月省（せきげつしょう）
外交を担う緑月省（りょくげつしょう）
そして、帝国七軍をまとめあげる黒月省（こくげつしょう）である。

ミーアが向かったのは、白月城に最も近い位置にある金月省だった。
特に理由があったわけではない。彼が帝国の財政立て直しに駆けまわっていたから、とか、お金のことにやたら細かかったからとか、きちんと考えていたわけではない。
ぶっちゃけ、ただの勘である。
「あの、ミーアさま、こんなところに、いったいなんの用があるんですか？」
首を傾げるアンヌに、ミーアは、
「会いたい方がいるのですわ」
ただ、一言答えるのみだった。
「会いたい人って……まさか……」
ハッと口元を押さえるアンヌ。それから、納得したようにうなずいて、
「そう言うことでしたら、このアンヌ、しっかり協力させていただきます」
「……？？　まぁ、そう言っていただけるなら、嬉しいですわ」
なぜ急にアンヌが張り切りだしたのか、わからなかったが、まぁ、いいか、と気持ちを入れ替える。
「いてくだされればよろしいのですが……あら？」
歩いている途中、誰かが言い争うような声が聞こえてきた。

「なぜ、こんな無駄使いが通るんですか？　こんなことでは、帝国の財政は近いうちに破綻してしまいますよ。あなただってわかっているはずです」
「ええい、うるさい」
「しかし……」
「黙れ！　そのような細かいことを言っていて、なんとするか」
「細かくなどありません。このままでは帝国は……」
「あら？」
聞き覚えのある、どこか懐かしい声が聞こえてきて、ミーアはにんまり笑みを浮かべる。
「あたり、ですわ。図書館にこもった甲斐がありましたわ！」
図書館で得られた知識はまったくもって関係ないわけだが……。
それでも少なくともミーアが幸運に恵まれていることは確かなようだった。

第八話　ミーア姫、ドヤ顔を披露する

彼との出会いは、最悪だった。
その日、ミーアは、とある青年文官のもとに慰労に訪れていた。
第一印象は、それほど悪くなかった。いや、むしろ良いほうだった。
耳が隠れるぐらいまで伸ばしたサラサラの髪、外国製の小さなメガネのレンズの向こう側、涼やかな瞳が知的な光を放っていた。
少し冷たい感じはするものの、とても端整な顔立ちは、ミーアの審美眼にも十分かなうものだった。
だから、ミーアは、平民には滅多に見せない微笑みを浮かべて、優しく声をかけたのだ。
にもかかわらず、返ってきた答えは、
「あなたたち王族の食事にいくらかかっているか、知っているのか？」
これだった。しかも、大変冷たい、凍えるような声で、だ。
「な、なんですの？　あなた、少し失礼じゃないかしら？」
突然のことに、ミーアは目を白黒させた。
目の前のメガネの青年は、どうやら怒っているようだったが、なぜ、怒っているのかがまったくわからない。
誰かに怒られたことなんか、ほとんどないミーアである。
まして、初対面の相手にそんなことを言われるとか、意味がわからない。
「そもそも、どうして、労いに来て、そんなことを言われなければならないんですのっ！」
そうなのだ。彼女は、今、目の前の人物にありがたいお言葉をかけにきているのだ。
財政破綻に、流行病、少数部族の反乱によって、窮地に立たされ

た帝国。多くの文官と武官、大臣まで逃げ出しかねない状況にあって、孤軍奮闘している青年文官がいるという話を聞いたミーアは、
「なかなか感心なお話ですわ。このわたくしがじきじきに訪問してあげるべきですわね」
と思い、こうしてやってきたのだ。やってきてやったのだ！
なのにっ！　なのになのにっ！
忠義の青年文官は、眼鏡の奥の冷めた瞳を、ちらり、とこちらに向けて、冷たく一言。
「あなたたち王族の……」
なぁんて、言いやがったのだ。その上、
「いつまでもそんなところに突っ立っていられると邪魔です。時間があるなら、お姫様にしかできない仕事をやってください、ミーア姫殿下」
――なんて仕打ちですの！　この男、絶対許してはおけませんわ！
ミーアはその日、腹立ちのあまり眠れなかった。
ベッドに入ってからも、ギリギリ歯ぎしりしつつ、枕をバンバン叩いて……手足をジタバタ暴れさせていたら、気づいたら朝になっていたのだ。

とまぁ、そんな感じで出会いは最悪だった。
でも彼が、ミーアが牢に捕らえられてからも帝国を立て直すために、各地を走り回っていたのは事実だった。
ミーアを釈放するようにも訴えてくれたらしいし、たくさんいた家臣の中でも、処刑される日に会いに来てくれたのは、彼とアンヌの二人だけだった。
それだけに、ミーアの彼に対する信頼は大きい。
――まぁ、もう少し口がよければ、言うことないのですが。
「……ふん、そこまで言うのであれば、ルードヴィッヒ三等税務官、貴官に赤月省への出向を命ずる」
そうこうしている間に、事態は転がりだしていた。

――ああ、そうですわ。ルードヴィッヒでしたわ、あいつの名前……、って、赤月省？
「……地方に行け、ということですか？」
「そのとおり。地方の税を増やせば、貴官の言う帝国の危機とやらも回避できるだろう？」
「ですが……」
――ああ、まずいですわ。これ、あの陰険メガネ、さっそく地方に飛ばされそうになってますわ！
ミーアは大いに焦った。
地方に飛ばされた彼が帝都に戻ってくるのは、ティアムーン帝国がどうにもならなくなってからなのだ。
それはすなわち……、
――ぎっ、ギロチンまっしぐらですわっ！
いそいで物影から飛び出したミーアは、二人の前に踏み出した。
「ちょっ、ちょっとお待ちなさい！」
「なんだ、おま……なっ……。み、ミーア姫殿下」
「お話は、大体聞かせていただきましたわ」
「これは、お見苦しいところをお見せしまして……」
突如現れたミーアに、上司の男は額に浮いた脂汗を拭きつつ言った。
「構いませんわ。それより、あまり感心いたしませんわ。安易に若い役人を地方に飛ばそうというのは。大いに議論を重ねて、帝国のために働いていただきたいですわ」
「はっ、いえ、ですが……」
なにか言いたげな役人に、ミーアはちらり、と一睨み。
「あら？　わたくしの言うことが聞けないのかしら？」
「うぇ？　いえ、めめ、めっそうもございません」
「そう、よかったですわ。ところで、そこの若い方、えーと、確か、ルードヴィッヒさんとか、言ったかしら？」
「え、ああ、はぁ……」

突然、話を振られて、ルードヴィッヒが戸惑い気味の声を上げる。
「ちょっとお話があるのですが、よろしいかしら？」
ミーアはルードヴィッヒの手をつかむと、建物の裏に連れだした。
「あの、なんでしょうか？　俺……いえ、私は仕事があるのですが……」
先ほどまでは、どこか呆気にとられた様子だったルードヴィッヒだったが、冷静さを取り戻したのか、今は白けた様子だった。
「少しお話したいんですの」
「あの、俺、忙しいって言ったんですけど……」
「ちょっと教えていただきたいことがあるんですの」
「……お構いなしですか。聞きしに勝るわがままっぷりですね」
ちょっと呆れた様子で肩をすくめてから、ルードヴィッヒはため息を吐いた。
「で、なにが聞きたいんですか？」
「そうですわね、単刀直入に言うなら、帝国の財政をどうすれば立て直せるか、ということになるかしら」
それを聞いて、ルードヴィッヒの瞳が、すぅっと細くなった。
「ふん、ならば、聞きましょうか。ミーア姫殿下、あなたの食事にいくらかかっているか、あなたは知っていますか？」
まるで、バカにするように鼻で笑って、ルードヴィッヒは言った。
それに対して、
「そうですわね、一食あたり、あなたのお給金の一か月分ぐらい、三日月金貨一枚と言ったところじゃないかしら？」
最上のドヤ顔で答えるミーアだった。

第九話　最大の味方

ミーアの答えにルードヴィッヒは驚き、固まる。
それを見たミーアは、
――なっ、なんか、すっごく気持ちいいですわ！
完全に調子に乗った。ノリノリだった。
「そもそも、帝国の財政的問題は簡単に言ってしまうと、入ってくるお金より出ていくお金の方が多いこと。それを解決するためには……」
するするとミーアの口から、ティアムーン帝国が抱える問題点が出てくる。
それはここ数日間、大図書館にこもってミーアが考え出したもの……ではない。もちろんない。
おわかりのこととは思うが……。
それは、未来世界において、ルードヴィッヒが語ったものである。
つまりは完全なるパクリである。
脳裏によみがえるのは、あの日の彼の顔だ。
皮肉を交えつつ、偉そうにお説教混じりにされた解説。彼が何を言っているか、ぶっちゃけ一割も理解できていなかったミーアではあるのだが……、
――あの屈辱の日々……、忘れられようはずがありませんわっ！
一字一句、記憶に刻みつけられるぐらいに、彼女にとっては屈辱的な出来事だったのだ。
甦る屈辱の記憶。その時の彼の言葉をそのまま、ミーアは繰り返して見せた。
帝国の問題、貴族の問題、帝都の問題、隣国との問題、その他もろもろの問題について。
未来の二人の会話を聞いていた人がいれば、そのまんまじゃない

ですか！　と言いたくなるような……、それはもう、いっそ潔(いさぎよ)いと言ってしまえるほどの完全無欠のパクリだった。
　にもかかわらず、ルードヴィッヒの表情はいつしか驚愕から、畏(い)敬(けい)へと変わっていた。
「……もう、結構です」
　片手をあげて、ミーアの言葉を止めて……、そのまま、その場で片膝をつき、臣下の礼をとるルードヴィッヒ。
「帝室に、あなたのような聡明な方がいるとは、感服いたしました」
　その言葉に、ずがががーん、っと、ミーアの体に衝撃が走った。
　――そっ、聡明ですってっ！？　あの、陰険メガネが……、わたくしを、ほ、褒め称えているというんですのっ！？
　ミーアは歓喜に打ち震えた。
　――ああ、なんか、この日のために、転生した気がいたしますわ。興奮の絶頂にいたミーアだったが、
「ですが、そこまで、わかっているのであれば、俺なんかの力を借りずとも、この国を立て直すことができるのではないですか？」
　その一言で青くなった。
　――ああ、まずいですわ！　調子に乗り過ぎましたわっ！
　大誤算である。
　確かに、ミーアが口にしたのはルードヴィッヒの言葉である。けれどそれは、彼が地方を回り、外国の事情を調べた上でのもの。
　いわば未来のルードヴィッヒが苦労の末にたどり着いた結論なのである。
　今の役人になりたての彼からすれば、ミーアの言葉は、あまりにも素晴らしすぎたのだ。
　完璧な現状認識と未来予測――それを齢十二歳の皇女殿下がなしたというのが、ルードヴィッヒに与えた衝撃は、大きすぎた。
　だから、彼が「自分が何かしなくても、この知恵の女神のごときお姫さまに任せておけば大丈夫」と思ってしまったとしても無理のないことである。

実際には、残念皇女なミーアに任せてしまうと大変なことになってしまうわけで――、ミーアは必死に頭を働かせる。が……

――だ、だめですわ。なにも思い浮かびませんわ！

さすがは残念皇女である。

けれど、幸いにして目の前にいたのは、優秀な青年文官である。

「ああ、でも、そうか。確かにミーア姫殿下はまだ幼い。真面目に話を聞いてもらえないかもしれない、と、もしかしたら、そうお考えですか？」

勝手に、ミーアに都合のいい解釈をしてくれた。

「まさにその通りですわ！」

ミーアは、その流れに乗った。自分を押し上げようとする流れに、乗らないわけにはいかなかった。

さらに、この時のミーアは、珍しく冴えてもいた。

「それに、いくらわたくしが聡明だと言っても、間違うこともあると思うんですの。だから、あなたも考えて、遠慮なくわたくしに言ってもらいたいんですの」

聡明とか、自分で言うかね……。などと、冷静な人ならツッコミを入れただろう。

冷静じゃなくっても、ごくごく普通の感性を持った人なら、きっと呆れたことだろう。

けれど、ルードヴィッヒの目は先ほどの衝撃のゆえに、見事に曇っていた。

「知性におごることなく、臣下の進言にも耳を貸そうというのですか……。あなたは、なんという……」

先ほど、上司に自身の進言を切って捨てられた彼にとって、ミーアの言葉は感動を与えた。タイミングもミーアに味方していたのだ。

ルードヴィッヒの知恵がなければ、ミーアがなにもできない残念皇女であるなどと、夢にも思わないルードヴィッヒである。

「そういうことでしたら……」

ルードヴィッヒは、改めて、臣下の礼をとる。深々と頭を下げた

まま、
「このルードヴィッヒ、全身全霊をかけて、ご協力させていただきます」
「ええ、よろしくお願いしますわね」
殊勝(しゅしょう)な態度のルードヴィッヒに、ご満悦(まんえつ)なミーアであった。
こうしてミーアは、忠義のメイド、アンヌに続き、最大の味方を手に入れたのだった。

第十話　予言×血染めの日記

「んふふ……」
るんるん、と笑みを浮かべるミーアを見て、アンヌが小さく首を傾げた。
「ご機嫌ですね、ミーアさま」
「あら？　わかりますの？」
自室に帰ってからも、ミーアはご機嫌だった。超ご機嫌だった。
なにせ、あの陰険メガネ……、もといルードヴィッヒに「聡明」と言ってもらえたのだ。
――聡明……このわたくしが聡明ですって。んふふふふ
天にも昇るとは、こういう時の気持ちを言うのだろう。ミーアのテンションは、しばらくは変わりそうもなかった。
「あ、そうですわ。記念すべき今日の日の出来事を忘れないように日記帳に書かねば……」
さっそく、ミーアは日記帳を手に取ると、ベッドの上にダイブした。
ふかふかのベッドに小さな体を弾ませながら、ごろごろ転がってみる。ごろごろ、ごろごろ、転がってみる。
高級ベッドには、月光鳥（げっこうちょう）の羽毛が使われていて、ミーアの体を優しく包み込んでくれる。
ふわふわの毛布に顔をうずめながら、ミーアはくすぐったそうに足をバタバタさせた。部屋着のスカートがめくれ、幼いおみ足があらわになって、ちょっぴりあられもない格好である。
「うふふふ、うふふ」
「……ミーアさま、そんなはしたない……」
アンヌの諫言もどこ吹く風、ミーアはご機嫌な笑みを浮かべたまま、

「うふふ～、わたくしは聡明なる帝国のミーア姫殿下ですのよ？
なんの問題もございませんわ」
うざっ！　などと思われてしまいそうな言動……だったが、アンヌは、むしろ微笑ましいものを見るような目で、ミーアを見ていた。
（想いを寄せる男性にほめてもらえたことが、よっぽどうれしいんですね！）
アンヌはアンヌで、ミーアに変な誤解をしているために、むしろ、妹の初恋を見守る姉のような気持ちになってしまって……、優しい気持ちになってしまうのである。
一度かけ違ってしまったボタンを直すのは難しいという良い例ではないだろうか。
それはさておき、足をバタバタさせつつ、ミーアは日記帳に新しい文字を書いていく。
アンヌを専属メイドにしてから今日までの出来事を、多少の脚色を加えつつ、綴っていく。
――あら！　もしや、わたくし、詩や作劇の才能があるのかしら？　こんなにするする書けるなんて！
よほど嬉しかったのだろう。ミーアの筆は流れるようにはかどった。
すべてを書き終え、ページを閉じたところで、ふいにミーアは思う。
――そうですわ、もしわたくしが、日記帳の記述を変えたら、未来の日記帳はどうなるのかしら？
それは、ちょっとした好奇心だった。
目の前にある、まだ綺麗な日記帳と血染めの日記帳。この二冊が同じものであるというのなら、ここで書きなおしたことは、どうなるのか？
なにげなく、血染めの日記帳を開いたミーアは、
「なっ！　なんですの、これ！」
思わず、驚愕の声をあげた。

日記の中の文字がぐにゃり、とゆがみ、書き変わっていく。先ほどミーアが書きなおしたところは、その通りに書き変わり、さらに、その先の記述も合わせて書きなおされていく。

それは、まるで、未来が書き変わっていくようにも見えて……。

――そう見えるだけではなく、実際に未来が書き変わっているのですわ！

ミーアは気づいた。

ルードヴィッヒの協力を取り付け、彼に早くから動いてもらうことで、歴史に大きな変化が生まれてきたのだ、ということに。

――これは、もしかして……？

すっと起き上がり、ベッドの上に正座するミーア。

それから、ふるえる手で続くページをめくっていく。日記帳の最後のページに差し掛かった時、ミーアの口から細く悲しげなため息がこぼれた。

――まだ、変わらないなんて……、そんな。

最後の記述、そこでは、変わらず、ミーアの処刑が予言されていた。

――どうして、こんなことに……。

絶望に、目の前が真黒く染まっていく。悲惨な末路を前に、どこか遠くに逃げ出したいような、そんな焦燥が胸を焼く。

――大丈夫、大丈夫ですわ。まだ、時間はございますわ。

一度、深呼吸をして、気分を落ち着けてから、改めてミーアは日記を読み直した。

そこには、ルードヴィッヒの協力を取り付け、財政面では多少、改善されたものの、それだけでは、変えようがなかった出来事がいくつも書き入れられていた。

帝都貧民街（スラム）における疫病、辺境域における少数民族の反乱などなど。

問題は山積していた。

しかも、どう解決したものか、ミーアには皆目見当のつかないも

のばかりだった。
――まっ、まずいですわ。ルードヴィッヒに褒められたなんて、調子に乗っている場合ではございませんわ！
頭から冷や水をぶっかけられた心持で、がばっと立ち上ったミーアは、
「アンヌさん！」
自らの専属メイドに向かって、高々と言い放った。
「頭の働きを良くするために、甘いものを所望しますわ！」
……割としょーもないことを。

第十一話　帝都ルナティアの影

光あるところには、必ず闇が生まれる……。
大国ティアムーン帝国の華やかなる帝都、ルナティアにも、薄暗く、人々が目を背けるような地区がある。
城壁近くの貧民街、通称「新月地区」がそれである。
最下層の貧民が住まうそこは、満足に食べる物もなく、病気になれば、そのまま道に捨てられているような場所。
小さな教会と孤児院以外、人間らしい営みがほとんど絶えてしまった場所。
まさに、そこは見捨てられた地区だった。
そんな街角を、場違いな、美しいドレスを身にまとった少女が歩いていた。
他ならぬティアムーン帝国、皇帝の娘、ミーア・ルーナ・ティアムーンその人である。
物珍しげに辺りをキョロキョロしつつ、ひょこひょこ、ひょこひょこ、と道を歩いて行く。
「ミーア姫殿下、あまり、前に行かれますと危険です。我々より前に出ないようにしていただかないと……」
少女の周りには、武装した護衛の兵士が四人、さらに、専属メイドのアンヌと、先日仲間に引き入れたルードヴィッヒの姿まであった。
いかにも周囲の目を引きそうなこの団体が、なぜ、このような場所を訪れることになったのか……。
話は数時間前にさかのぼる。
「……やはり、片付けるべき問題はこれ……ですわよね」
アンヌが持ってきたお菓子のおかげか、ミーアの頭はいつになく

冴えていた。
改めて日記帳を読みなおしたミーアは、その中に気になる記述を見つけたのだ。
「流行病（はやりやまい）、このせいで卵とかぶつけられましたわね」
今から数年後に、帝都で大流行する疫病。
帝都の民衆の一割が命を落とすことになるこの大事件は、さすがのルードヴィッヒも予測できなかったらしい。
書き変わった日記帳では、せっかくルードヴィッヒのおかげで改善しかけた財政が、これで一気に悪化していることが読み取れた。
「うーん、放っておくわけにはいかないのでしょうが……。疫病ってどうすれば防げるんですの？」
基本的に、ミーアは努力があまり好きではない。必要があれば、大図書館にこもりもするが長続きはしないし、そもそも調べ物や勉強は大嫌いだ。
ならば、どうするか……。
「とりあえず、わからないことは聞けばいいのですわ」
答えは簡単。誰かに聞いて、頼ればいい、である。今やミーアには便利な知恵袋がついているのだ。
「アンヌさん、出かけますわよ」
「どちらにお出かけですか？　ミーア様」
「くされめが……じゃなくって、ルードヴィッヒのところですわ」
「ああ、先日の……、でしたら、お召し物を直さなければなりませんね」
急に鼻息が荒くなるアンヌである。
「そう？　今のままでも十分だと思いますけど……」
ミーアが着ているのは、部屋着用のシックな黒いドレスだった。舞踏会などに行くならばともかく、人と会う分には何の問題もない格好だと思ったのだが……。
「いけません！　そう言うところで、男性にアピールせずにどうしますか。さ、ドレスルームに行きますよ、ミーア様」

半ば強引に、衣裳部屋へと連れて来られたミーア。
アンヌはそばにいたベテランメイドの手も借りて、ミーアの服装を整えていく。
蒼月桜（そうげつざくら）をあしらった青いドレスは、スカートの丈が比較的短くて、それが可愛らしさと活動しやすさを両立するデザインとなっている。
「あら、このドレス、はじめて見ましたわ」
ドレスなど腐るほど持っているミーアである。その全てを把握するのはもちろん無理なので、一度も袖を通すことなく着られなくなってしまうドレスというのが、たくさんあるのだ。
「ふふ、よくお似合いですよ、ミーア様」
そう微笑むと、今度はアンヌはミーアの髪を整え始める。
十分に櫛を入れて、輝くような白金色の髪を整え終えて後、仕上げに、と、虹色に輝く宝石のついたかんざしを付けた。
「あら？　それは……」
鏡を見たミーアは、そのかんざしを見て、微かに瞳を細めた。
「どうかなさいましたか？　ミーア様」
アンヌの疑問に答えたのは、ミーアではなく、別のベテランメイドだった。
「それは、昨年、さる大商人がミーア様に献上されたものですよ。ミーア様も大層お喜びになられておりましたわね」
衣裳部屋担当のベテランメイドの話を聞いて、アンヌは嬉しそうに笑った。
「そうなんですか。それなら、ちょうどいいですね」
「そうですわね……」
答えたミーアの声は、ちょっと沈み気味だったが……、
――正直これ、ちょっと微妙ですわ……。
別に、かんざしのデザインが気に入らないわけではないし、実際、その見栄えは嫌いではないのだが……。
ミーアには、このかんざしを心から喜んでつけられない理由があったのだ。

――でも、くされメガネに会いに行くのであれば、これで十分ですかしら？

そう思いなおし、ミーアはあえて何も言わずにいた。

第十二話　天が遣わしたる偉大な指導者（注　大きな誤解

ルードヴィッヒにとって、その出会いは衝撃的なものだった。
商人の次男としてこの世に生を受けた彼は、幼いころから頭の良い子どもだった。実家の店は長兄が継ぐため、早いうちから国家の役人を志していた彼は、その勉強をはじめてすぐに、このティアムーン帝国がいかに腐っているかを実感した。
原因はさまざまだったが、多くは皇帝を頂点とした門閥（もんばつ）貴族にあることは明らかだった。
だからだろう、彼は貴族や帝室の人間、いわゆる高貴な人々を軽蔑していた。
そんな彼の前に、ある日、少女は突然に現れた。
ミーア・ルーナ・ティアムーン。
帝国の第一皇女という、いわば高貴な人々の頂点付近に位置する少女は、月光を溶かしこんだような美しい白金色の髪を揺らしながら言った。
この帝国を立て直すのに力を貸せ、と。
彼女の見せた知性のきらめきは、さながら月の女神のごとく、あまりにもまぶしくって……。その光に刺されたルードヴィッヒは、未だに心が高ぶるのを押さえることができない。
あの日以来、彼はミーアの信頼に応えて、仕事に勤しんでいた。
上司の反対は、概（おおむ）ね、帝国皇女の威光を利用して封じた。
そのことは当然ミーアの耳に入っているのだろうが、なにも言ってこないところを見ると、彼女の思惑どおりに、自分は動けているのだろう。
恐らく彼女は、帝国に対する自分の考えを伝えれば、ルードヴィッヒが自発的に動くと考えているのだろう。
大まかな方針を示し、細かな判断は現場の専門家の意志を尊重す

る。ごく当たり前のことながら、その判断ができずに滅びた国は多くある。
その正しい判断を、十二歳の少女が行ったことに、ルードヴィッヒは戦慄する。
「彼女こそ、帝国に天が遣わした偉大な指導者なのではないか……？」
そんなことまで考える始末である。
……無論、そんなものは妄想以外の何物でもないのだが。

「こんにちは、ルードヴィッヒ」
「これは、ミーア姫殿下。ようこそいらっしゃいました」
仕事をする手を止め、ルードヴィッヒは、立ちあがる。それを手で制し、ミーアは薄く笑みを浮かべた。
「お仕事、ご苦労様ですわね、ルードヴィッヒ」
「いえ、姫殿下のおかげでだいぶやりやすくなりました。ありがとうございます」
頭を下げるルードヴィッヒに、ご機嫌そうにうなずくミーア。
どうやら、今日までの自身の行動に間違いはなかったと、ルードヴィッヒはホッと一息吐く。なにしろ、相手は自分をはるかに上回る知恵の持ち主なのだ。気を抜くわけにはいかない。
「ところで、今日は折り入って相談したいことがあったので来ましたの」
「ふむ、相談……、ですか」
腕組みをしつつ、ルードヴィッヒは考える。
――姫殿下の様子を見ると、別に俺の仕事に不満があるわけじゃなさそうだけど……、でも、もしかしたら、なにか俺が気づいていないことがあるのかもしれない。
なにしろ、相手は、月の女神のごとき知性の持ち主である。
ルードヴィッヒの中でのミーアの評価は、もはや手が付けられないレベルまで急騰していた……大変、不幸なことである。

「そうですわね、ここでお話してもよろしいのですが……。ちょっと連れて行ってもらいたいところがありますの」
意味深にそう言って、ミステリアスな笑みを浮かべるミーア。
「どこですか？」
「新月地区……」
その一言に、ルードヴィッヒは驚愕した。
「――っ！？　貧民（スラム）地区に、行かれるというのですか？」
思わず、うめき声が漏れる。
帝都ルナティアの、城壁に最も近い貧民街。新月地区。
そこは王侯貴族はもちろんのこと、一般的な民衆であっても足を向けることはない場所。
ルードヴィッヒとて、一度も行ったことのない場所だし、好き好んで行きたいとも思わない場所だ。
たとえ天地がひっくり返ったとしても、帝国第一皇女が行くような場所ではない。
「ミーア様、いくらなんでも、そんなところに行くなんて！」
たまらず悲鳴を上げたのは、いっしょに来ていた専属メイドのアンヌだった。
てっきりルードヴィッヒに会いに来ただけだと思いこんでいた彼女としても、ミーアの発言は寝耳に水であったのだ。うら若き乙女である彼女としても、新月地区はあまり近づきたくない場所だった。
「危ないから近づくな」と親に言われているし、同じように妹や弟たちに彼女自身が言い聞かせている場所なのだ。
けれど、二人の反対に、ただ首を振って答えて、ミーアは言った。
「必要なことですの。ルードヴィッヒに直接見てもらって、考えてもらいたいんですの」
決然とした口調で言った。

第十三話　流行り病の臭い

ミーアの命を受けて、急きょ、ルードヴィッヒは護衛の兵士を手配する。
突然のことだったので四人しか集められなかったが、集まったのはいずれも腕利きの兵ばかりだった。
戦場への視察と言うならばともかく、仮にも帝都の中であるならば、これでほとんど問題ないはずだった。
――本当なら、もう十人はほしいところだが、急だったから仕方ないか。
ルードヴィッヒはため息をこぼした。
なにしろ、至高の皇帝のご息女が街に出るというのである。護衛にいくら手をかけても十分ということはない。
「ちなみに、姫殿下、今日のことは皇帝陛下は承知しているのですか？」
「へ？　お父様ですの？」
きょとん、と小首を傾げるミーア。だったが、
「それなら大丈夫ですわ。後でわたくしの方から言っておけば、このぐらいは」
堂々と胸を張るミーアに、一抹の不安を覚えるルードヴィッヒであった。
そうしてやってきた新月地区は酷い有様だった。一歩踏み入れただけで、それまでの地区とは明らかに違う空気。
それは、ごく簡単に言ってしまうなら、
「ひどい臭いですね」
兵士の一人が思わずと言った様子で、鼻を押さえた。
街全体が腐った臭いというか、汗の臭いというか、不潔な臭いに支配されているようだった。

城や、高級住宅地では決してかぐことのない、鼻を突くような臭いに兵たちはおろか、アンヌや、ルードヴィッヒまで思わず顔をしかめていた。
けれど、
「そうかしら？　そこまで気にはならないですけど……」
ミーアは平然としていた。
地下牢に二年も閉じ込められていたミーアとしては、風が通っている分、こちらの方が全然マシだった。
「このようなところにいる方々はきっと湯浴みをするのも簡単ではないのでしょう？　三日も身を清めなければ臭うようになるのは、人間ならば当然のこと。遠方より来る旅人と、そう変わりはございませんわ」
あっさりとそう言ってから、
「さ、そんなことより、行きますわよ」
ミーアは歩き出した。
そんな豪胆な皇女の姿を、取り巻きの兵たちは茫然と見つめることしかできなかった。

汚れた道、薄暗い路地裏、崩れかけの民家……。
それらの物陰からは、場違いな一行への怪訝そうな視線が送られてきていた。
そんな物に構わず、ミーアはずんずん、歩いて行く。
「ミーア姫殿下、目的地は一体どこなのですか？」
リーダー格の兵士が尋ねてきた。
「んー、そうですわね、特に決めておりませんが……、あれは？」
ふと、道の外れに目をやったミーアは、そこで倒れるようにしてうずくまっている一人の子どもの方に足を向けた。
服とも呼べないようなボロボロの布に身を包んだ男の子、ミーアよりさらに幼い五、六歳ぐらいの子どもの、その痩せ衰えた肩に、そっと優しく手をかける。

「ちょっ、姫殿下っ！」
「もし、あなた、大丈夫ですの？」
ゆるゆると顔を上げた少年はミーアの姿を見ても特に驚く様子を見せなかった。その瞳はどんよりと濁っていて、子どもらしい元気がまったく感じられない。
「あなた、どこか具合が悪いのではなくって？」
「……」
カサカサの唇が微かに動くが、そこから声が発せられることはなく。代わりに、後ろのルードヴィッヒから答えが返ってきた。
「見たところ、病ではなく空腹でしょう。この辺りではありふれたことです」
「そう……。お腹がすくのは、確かにつらいでしょうね」
ミーアはアンヌに、手持ちのお菓子を少年に分け与えるように指示してから、改めてルードヴィッヒの方を見た。
「ルードヴィッヒ、お聞きしたいことがありますの」
「なんでしょうか？」
「ここで、将来、流行り病が起こらないようにするには、どうすればいいかしら？」
「流行り病……それは……」
そのミーアの言葉に、ルードヴィッヒは頭をガーン、と殴られたようなショックを受けた。
考えてもいなかったことだからだ。
帝国の財政が数年後に確実に破綻するであろうことは知っていた。だから、それをなんとかしなければとは思い、支出を減らし、税収を増やすための施策を必死に考えていたし、実施したものはどれも効果があったと自負している。
けれど、そんなもの、ひとたび流行り病が起きてしまえば、たちまち無意味になってしまう。
そして、目の前の小さな姫殿下は、まさにその危険性を指摘しているのだ。

「流行り、病を防ぐためには……」
「ミーア様、この子、やっぱりどこかで休ませてあげた方がよさそうです。近くに教会があるみたいなんですが、そちらに行ってみませんか？」
アンヌの言葉で、ルードヴィッヒの思考は中断させられた。
「そうですわね。いろいろ見てみたいと思っておりましたから、ちょうど良かったですわ」
ニコニコと笑うミーアの顔をぼんやり眺めながら、ルードヴィッヒはなぜ、彼女が自分をここに連れて来たのかを思い知った。

第十四話　かんざしの秘密

狭い入り組んだ路地裏に、目的の場所はあった。
小さな、傾きかけの教会。広い庭からは、子どもたちの元気な声が聞こえてくる。
先ほどの子どもをシスターに預けた後、ルードヴィッヒは教会を改めて眺めた。
「病人の手当てができるのは、ここだけか……」
教会は質素で、併設された孤児院を入れても、そうたくさんの人が入れるわけではない。ここで、この辺り一帯の病人の手当てと食事の配給を賄(まかな)うのは、とても不可能だ。
――実際に見てみなければわからなかったけど、確かにミーア姫殿下の言う通りだ。この辺りで疫病(えきびょう)が流行る可能性は、かなり高い。
考えこむルードヴィッヒ。
一方、ミーアは教会を任されている神父と交流を図っていた。
別に、彼女が特別に信仰厚い人というわけではない。国をまたいだ組織である教会にコネを作っておけば、いざという時、亡命の助けになるだろうという打算である。
どんな時でも、“自分ファースト”なミーアである。
「神父様、このたびの病人の受け入れ、感謝いたしますわ」
「いえ、我々は神に仕える者として当然のことをしているまでのこと。それより、姫殿下にこのような場所にまで足を運んでいただき、恐縮です」
「大したことではありませんわ。だって、この場所もわたくしの愛する国の中ではございませんの。ところで、神父様、あなた、外国にお友だちは……」
などとアピールに余念のないミーアである。
「ミーア姫殿下……」

その時だった。ルードヴィッヒが声をかけてきた。
「あら、ルードヴィッヒ、もう時間ですの？」
「いえ、姫殿下のお考え、よくわかりました」
それを聞き、ミーアは満足げに頷いた。
「そう。それはなによりですわ。さすがはルードヴィッヒですわね。それで、新月地区で流行り病が起こらないようにするには、どうすればよろしいですの？」
「……疫病を防ぐ方法は二つ。食糧を行き渡らせて住民に体力をつけさせること。そして、医療機関を充実させることです」
口に出して、ルードヴィッヒは改めて、その困難を実感する。
彼がここ最近やっていた仕事は〝支出を減らすこと〟だ。
帝国の財政を健全化させるためには、収入を増やすか、支出を減らすかの二つに一つ。
収入は簡単に増えたりはしないから、必然的に無駄遣いを減らしていくことが主な職務となっていた。
けれど、食糧を配給するのにも、病院を作るのにも、莫大（ばくだい）なお金がかかる。
その状況を維持していくだけで、どれだけのお金が必要か、そもそもそんなお金を本当に用意できるのか、ルードヴィッヒには見当もつかなかった。
例え、ミーアが姫としての権威を振るったとしても、不可能なのではないだろうか。
なにしろ、彼女はまだ幼い少女なのだから。
だというのに……、
「ということは、お金が必要ですのね……。なるほど」
ミーアは小さく頷き、なにかを考えるかのように腕組みをして、
「では……、そうですわね、これを売れば少しは足りるかしら？」
おもむろに、髪につけていたかんざしを外した。
「……は？」
大きな赤い宝玉のついたそれは、つい先日、名だたる大商人が献

上してきた品だった。
「ミーア様、それは！？　お気に入りのものではないですか！」
アンヌが驚きの声を上げた。
けれど、ミーアは小さく首を振り、
「べつに、構いませんわ。いかに大切なものであろうと、力の限り握りしめていても、なくなる時にはなくなるし、壊れる時には壊れるもの。ならば、せいぜい、意味のある使い方をすべきですもの」
「ミーア姫殿下……」
ルードヴィッヒは、冷静な彼にしては珍しく大変感動した。
文字通り、ミーアが聖女に見えた。
もちろん、錯覚である。
ご承知のとおり、ミーアは聖女でもなんでもない。だから彼女が「売ってしまえ！」と言ったのにはきちんと理由がある。
その理由とは……、
――あんな連中に奪われるぐらいなら、さっさと売ってしまった方がマシですわ。
そう、そのかんざし、何を隠そう、彼女が革命軍に捕らえられた時に奪われてしまうものなのだ。
しかも、粗野で乱暴なひげ面の男に、である……まぁ、イケメンの爽やかな男になら奪われても構わない、というものでもないわけだが。
――あんな奴の物になるなら、自分から手放して、わたくしのために使った方がいいですわ。
どこまでも打算的なミーアである。
けれどそんな事情など、当然、ルードヴィッヒは知らない。
「ミーア様のお気持ち、しっかりと承りました。このルードヴィッヒ、賜りましたこの宝、最善に活用させていただきます」
例え、かんざしを売ったところで、必要な額にはとても足りない。
けれど、ルードヴィッヒには、あえてかんざしを差し出したミーアの意図がわかっていた。

翌日から、ルードヴィッヒは、貧民街のためにミーアが大事な宝物を人々のために差し出したことを大々的に喧伝(けんでん)して回った。

幼き姫が示した最上位の慈悲。

民衆は慈悲深きミーアの行ないに驚き、貴族たちは、自分たちもお金を出さないわけにはいかなくなってしまったのだった。

こうして、二十日後、新月地区に大きな病院が建設されることが決まったのであった。

第十五話　お茶会

その日、ミーアはティアムーン帝国四大公爵家の令嬢、エメラルダ・エトワ・グリーンムーンの誘いを受けて、お茶会に来ていた。

貴族の令嬢にとって、お茶会はステータスである。

名のあるお客を招くことができれば、それだけ権力を示すことができる。その意味で、皇女であるミーアは人気者だった。

広大な庭の一角で開かれたお茶会には、たくさんの門閥貴族の令嬢が集っていた。

「それにしましても、ミーア様、ずいぶんと思いきったことをなさったとか……」

お茶会の主催者、エメラルダは、碧月水晶（エメラルド）色の髪をふわり、と波打たせながら言った。

「はて、なんのことですの？」

紅茶を一すすりしつつ、ミーアは涼しい顔で首を傾げる。

「聞いておりますわよ、先日の貧民街のこと」

公爵令嬢は、ほほほ、と笑って言った。

「けれど、どうして、あんな無駄なことを？　民草のために大切なかんざしを差し出されたとか？　父上も首をひねっておりましたわ」

「ああ、あれですの……」

「ただの気まぐれだとは思いましたけれど、ミーア様のことですから、なにか深い意味でもあったのではないかと、私、ずっと考えておりましたの。けど、どうしても理由が思いつかなくって……」

ずずい、と身を乗り出すエメラルダ。

正直なところ、ミーアは彼女のことが好きではなかった。

なにしろ、彼女、ミーアの一番の親友と周囲に言いふらしながらも、革命が起こるや否や一番に裏切った人なのである。

好きになれるはずもない。

だから、正直なところお茶会になども来たくはなかったのだが、かといって簡単に断るわけにもいかない。なにしろ、彼女は、皇帝一族に次ぐ大貴族の令嬢なのだ。
なので、今日のミーアの目標は、なるべく労力をかけずに無難に過ごすこと、であった。
ということで……、
「深い意味などございませんわ。ただ、わたくしは心のおもむくままに行動したまでのこと」
などと、適当に答えておく。
意味は、やりたいからやった、文句あっか？　この野郎……、という辺りである。
相手がルードヴィッヒであれば、答えに注意する必要があれど、貴族の娘たちが相手ならばこのぐらいで十分である。
「素晴らしいですわ、さすがはミーア様。お心が広い」
「民草のことにまでお気を使われるなんて、私たちには真似できませんわ」
取り巻きの貴族のご令嬢たちが口々にほめたたえるのを聞き流しつつ、
――あー、早く終わらないかしら……。
ミーアは内心でため息を吐いた。

「お疲れ様です、ミーア様」
帰りの馬車に乗りこんで早々、アンヌが話しかけてきた。
「肩がこりましたわ」
首をぽきぽき鳴らすミーアに、アンヌは同情めいた目を向けた。
「やっぱり、ミーア様もあの空気、なじめないんですか？」
別になじめないわけでもない……、というか、むしろミーアはあちらの空気の中で育ってきた人間である。
だから、アンヌの物言いが、なんとなく気になった。
「やっぱり、とはどういうことですの？」

手渡されたおみやげを確認しつつ、なにげない口調でミーアが尋ねると、
「ミーア様とあの方たちとでは、違いますから」
――あら、氷菓子ですわ。これ、美味しいんですのよね！
などと、不真面目なことを思っているうちに、アンヌの話は続く。
「あの方たちは、自分から貧しい者の住む場所に足を運んだり、憐れみから自分の持ち物を恵んだりなんて、決してしないはずです。ミーア様とは違います」
「そっ……、そうですの？」
きらっきらの瞳で力説されて、ミーアは思わずうろたえた。
なにしろ善意で行動したことなど、ただの一度もないミーアである。
そんなつもりはないのに手放しの賞賛を受けてしまうと、いたたまれないというか、なんと言うか……。
アンヌの純粋な信頼感を前に、ミーアの良心がぐらぐら揺れた。
結果、バランスを取るために、なんだか無性に良いことがしたくなってしまって……。
「……では、優しい姫殿下が特別に、これをあなたに下賜（かし）いたしますわ」
お土産の氷菓子をアンヌに差し出してしまった。
「えっ？　いいんですか、こんなに高級そうな物！」
「構いませんわ。特に珍しいものでもございませんし……」
「わぁ、ありがとうございます」
アンヌは、嬉しそうに歓声を上げて……、それから、ほんの少し考えこむように黙りこんだ。
「どうかなさいまして？」
「いえ、妹たちにも食べさせてあげたいなって、思ってしまって……」
「ああ、そうですわね。それなら、これからあなたのお家に寄るというのはいかがかしら？」

「……は？」
「氷菓子ですから、すぐに食べてしまわないと、溶けてしまいますわ。妹さんに食べさせるなら、急ぎましょう」
「ちょっ、待ってください。ミーア様、そんなこと……。いくらなんでも一般庶民の家にいらっしゃるなんて、許されるはずが……」
「あら、あなた、知らなかったんですの？　わたくしは、とても自分勝手な皇女殿下ですのよ？」
有無を言わさぬミーアに、アンヌは言葉を失った。

第十六話　ミーア姫、悟りを開く

アンヌの自宅は、城下町の外れにあった。一般的な木造の民家が並んだ一角に建つ、小さな家。

可愛らしい花が咲いた庭には、たくさんの干された服が風に揺れていた。

お世辞にも裕福そうには見えない、けれど、とても家庭的で温かみを感じる家だった。

「ミーア様、私がいいって言うまで、馬車でお待ち下さい」

そう言い残して、アンヌはそそくさと家の中へ。

待つこと数分、アンヌといっしょに出てきたのは、顔をほんの少し青くした壮年の男女だった。

「あら、そちらの方は、もしかして……」

「ほっ、ほほ、本日はご機嫌麗しゅうございます、姫殿下。アンヌの父でございます」

男性の方が妙に上ずった声で言って、それからかたわらにいる女性はアンヌの母だ、と紹介する。

対して、ミーアは、スカートの裾をちょこん、と上げて、

「はじめまして、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ。いつもアンヌにはお世話になっておりますわ」

愛らしい笑顔を浮かべた。

「い、いえ、こちらこそ、娘を格別にお引き立ていただき、感謝の言葉もありません」

「な、なにもおもてなしはできませんが……」

「気にしなくても大丈夫ですわ。いつもアンヌにはお世話になっておりますし、今日はおみやげを届けるついでに寄っただけですから」

ミーアはにっこり、実に模範的な笑みを浮かべる。外面の良いミーアである。

「さ、アンヌ、早く妹さんのところに案内してくださいまし」
氷菓子が溶けないうちに食べたかったから、ミーアは焦っていた。
幸いにも、数えてみると、陶器のカップに入った氷菓子は、八個も入っていた。
これだけあればアンヌの家族にあげても、ミーアにも回ってきそうだった。
――さすがは、四大公爵家。太っ腹ですわ！
ひさしぶりに口にする氷菓子に、ミーアはワクワク、弾んでいた。のだけれど……。
案内された狭い客間、そこに集まった子どもたちを見て、少しばかり心配になった。
そこにいたのは、四人の子どもだった。最年長が男の子で、恐らく、ミーアより少しばかり年上だろうか。後の三人は女の子で、ミーアより年下に見える。
「……アンヌの弟と妹ですわね」
アンヌを合わせて、五人。両親を合わせて……、七人だ！
――あっ、危ないところでしたわ……。
これで、余った一個は自分に回ってくるはず。
しかも、おみやげを惜しげもなく分けるという聖人並みの行ないを示したのだ。
アンヌの中の優しい皇女殿下像も、壊さずにいられるに違いない。
実際には特に大したことをしたわけでもないのだが、ともかく、ミーアは上機嫌でアンヌの弟妹（きょうだい）の自己紹介を聞き流していたのだが……。
「それで、すみません、ミーア様。次女のエリスは少し体が弱くって、この時間はいつもお部屋で休んでるんです。本当なら、ご挨拶に出てこなければいけないところなんですけど……」
「へっ……？」
その一言に、ミーア固まる。
まさかの、一人、追加である。

しかも……、
「わぁっ、姫殿下、こんなもの、本当に頂いていいんですか？」
「ありがとう、ミーア姫殿下。ほら、パパもママも食べよっ！」
「こら、姫さまの前で……。申し訳ありません、姫殿下」
アンヌの家族の嬉しそうな顔を見せられてしまっては、もうどうしようもない。
アンヌの前で、優しい皇女殿下像を維持するためにも、一つよこせ、とは言えない小心者のミーアである。
――よっ、四大公爵家なら、ケチケチせずに十個ぐらい入れときなさい！　あほーっ！
やり場のない感情を、公爵令嬢にぶつける。
さんざん八つ当たりして、ようやく平静を取り戻しかけたところで、
「申し訳ありません、姫殿下。本来であれば、どのような事情があったとしても、お出迎えに出なければならないところを……、このようなご無礼を……」
「え？　あ、ああ、そんなのはどうでもいいことですわ。わたくしが急に来たのがいけないのですし、それに、体の調子がすぐれないなら仕方ないですわ。それより、アンヌ、溶けてしまってももったいないですから、早くみなさんに食べていただきなさい」
それから、一度だけ、氷菓子の方に切なげな視線を送ってから……、
「そうですわ、食べていただいている間に、わたくしたちは、そのお部屋にいる妹さんのところに氷菓子を持っていきませんこと？」
念のために言っておくと、別に、病人を気遣って言っているわけではない。
ただ単に、目の前で美味しい物を食べているのを見せられて、なおかつそれが自分の口に入らないのを見ていられるほど、人間ができていないだけの話である。
にもかかわらず、

「ミーア様……っ！」
アンヌは、感動したように、言葉を詰まらせた。
「お気づかい頂いて、ありがとうございます。ミーア様にお見舞いに来ていただくなんて、きっと妹も喜びます！」
「あー、それはなによりですわー」
対して、ミーアの声は半ば投げやり気味の棒読みだった。

第十六話　ミーア姫、悟りを開く（後書き）

とりあえず、ここまでで。以降はのんびり更新に戻ります。

第十七話　未完の小説

「そう、妹さん、エリスさんって言うんですの」
アンヌの案内で二階に上がるミーア。
「はい、ミーア様と同い歳なんですけど、体が弱くって……。ミーア様と同じぐらい元気ならいいんですけど……」
アンヌは寂しげな笑みを浮かべる。
「……大変ですわね」
「いえ、でも、なにか病気というわけではありませんから。ミーア様のおかげで、私のお給金も上がりましたから。栄養のあるものたくさん食べさせてあげられるから、だんだんと元気になって来てるんですよ？」
そう言いながら、アンヌはドアをノックした。
「エリス、起きてる？」
「あっ、お姉ちゃん、どうぞ」
小さな声、それを聞いたアンヌがドアを開ける。
そこは狭い部屋だった。
物であふれたミーアの部屋とは違い、木の机とベッドだけしか家具がない部屋。
机の上には、何度も読んだのであろう、ボロボロになった本が並べられていた。本は貴重品だから、何度も読むのはわかるけれど、それにしたってどの本もよくよく読み込まれた様子だった。
「ごめんなさい、お姉ちゃん。ごあいさつ出来なくって……」
寝起きだったのだろうか。目元をこすりこすりする赤毛の少女。元気よくあちこちにはねた髪は、いかにも癖が強そうで、アンヌによく似ている。
「もう、姫殿下、帰っちゃったよね……。あーあ、お姫さま、見てみたかったな……」

そう言いながら、少女、エリスは枕元に置いてあった大きなメガネをかけて……、
「はぇ……？」
アンヌの隣に立つミーアの顔を見て、口をぽかーん、と開けた。
「はじめまして、エリスさん。ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ。いつもお姉さんのアンヌさんにはお世話になっておりますの」
「わ、わ、わ、あ、えっと、は、はじめまして。こんな格好で、失礼します、姫殿下さま、私は……」
「聞いておりますわ。エリスさんでしょう。無理せず楽になさって結構ですわ」
起きあがろうとしたエリスをミーアは押しとどめて微笑みを浮かべる。
「で、でも……」
「エリス、お言葉に甘えなさい。ミーア様はとてもお心が広い方だから、このぐらいのご無礼であれば許してもらえるわ」
「うむ、苦しゅうない、ですわ」
褒められるのは得意なミーアである。
それから、しばらくの間、ミーアはエリスと歓談を楽しんだ。
なによりミーアを喜ばせたのは、エリスが氷菓子を辞退したことだった。
「姫殿下から頂いたものをお断りするのは、心苦しいんですが、体が冷えてしまいそうなので」
ものすごくすまなそうに言うエリスが、ミーアは一発で好きになった。
もちろん、念願の氷菓子が自分に回ってきたからである。
ミーア、にっこにこである。上機嫌過ぎて体が弾んでるぐらいだ。
「よかったわね、エリス。あなた、ミーア様にお会いしたいって言ってたものね」
アンヌも、エリスの横で嬉しそうに微笑んでいる。
「あら、そんなにわたくしに会いたかったんですの？」

「はい！　あの、えっと、私、物語を書いていて……」
興奮した様子で言ってから、エリスは机の端に置かれていた紙の束を持ってきた。
その表紙には「貧しい王子と黄金の竜」と、タイトルらしいものが書かれていた。
――あら、このタイトル、どこかで……？
ミーアの頭の中に、よみがえってくる記憶があった。

地下牢での生活は、ともかく退屈だった。なにせ、なにもすることはないのだ。
裁判と称して皆の前に連れだされて罵倒されるのも嫌だったが、なにもすることがないのも同じぐらい、ミーアにとって苦痛な時間だった。
そんな折、アンヌが話してくれたのが、貧しい王子と黄金の竜、だった。
それは、ミーアが聞いたこともないようなお話、貧しい人に宝を分け与えて貧乏になってしまった王子さまが、ケガをして動けなくなった竜を助けたところから始まる冒険劇だった。
ティアムーン帝国では、あまり見られないファンタジー小説で、ミーアは気に入っていたのだが、結局、最後まで聞くことはできなかった。
聞く前に処刑されてしまった、というわけではない。
作者であるアンヌの妹が、それを書きあげる前に飢饉で亡くなってしまうのだ。
処刑される前、ミーアの心残りの最たるものの一つが、このお話のエンディングを聞くことができなかったことだった。

――すっかり、忘れていましたわ。
ミーアは、考えこんでしまう。
運命は、少しずつだが、変わってきている。飢饉が起こるかはわ

からないし、ルードヴィッヒが上手く動けば、それほど悲惨なことにはならないかもしれない。
けれど……。
パラパラと、紙の束をめくった後、ミーアはエリスの方を見た。
「このお話、とても面白いですわ」
「えっ？」
エリスは不思議そうな顔で首を傾げた。
さすがに、こんなにすぐに読めるとは思えなかったのだろう。しかし、彼女の反応に構わず、ミーアは言った。
「あなた、わたくしのお抱え芸術家として仕えなさい」
「……はっ？」

第十八話　聖女ミーア皇女伝

聖女ミーア皇女伝、という本がある。
実話(ノンフィクション)をうたいつつ、内容はミーアを礼賛(らいさん)する高純度の妄想(フィクション)である。
書いたのは、帝国にファンタジーという人気ジャンルを確立した大作家、エリス・リトシュタイン。
ミーア姫のお抱え作家にして、長く彼女に仕えた専属メイド、アンヌ・リトシュタインの妹である。
その本の書き出しは、こんな感じだった。

ミーア皇女殿下と初めて会ったのは、私が十二歳になったばかりのころだった。
そのころの私は体が弱くて、同年代の友だちといっしょに外で遊ぶことができなかった。その欲求を小説とも言えないような物語を書くことで発散させるだけの小娘にすぎなかった。
姫殿下は、そんな私の原稿を軽く流し読んだだけで、私をお抱えの作家にすることを決めてしまった。
しかも、ほんの一瞬で私の物語をすべて理解してしまったのだ。
速読と呼ぶにもあまりに異質な才能、天才にして多才なる姫殿下の、能力の一端がうかがえるエピソードではないだろうか。

……もう一度、確認するが、それはエリスの誤解、否、妄想であって、そこには一片の真実も存在していない。
にもかかわらず、この本、売れに売れまくるのである。
帝国は、いろいろな意味で末期である。
ちなみに、この本のおかげでミーアは窮地を救われることになるのだが、それは、また別のお話である。

「私が、姫殿下の？」
突然のミーアの申し出に、エリスは瞳を瞬かせた。
お抱え芸術家とは、貴族や帝室がスポンサーになり、生活を支える制度だ。
良いスポンサーに恵まれればお金の心配をせずに、自分の創作活動に集中することができるという、芸術家垂涎の立場だ。
これ以上はない、という美味しい話に、けれど、エリスは首を横に振った。
「あの、やめてください」
「へ？」
意外な返事に、ミーアは首を傾げた。
「なぜですの？　あなたにとって悪いお話ではないと思いますけど」
ミーアお抱えの作家となれば、城の大図書館だって使うことができる。資料集めだってやりやすいはずなのに……。
「お姉ちゃんの妹だからって、ひいきしないでください」
「エリスっ！　あなた、ミーア様になんてことを……」
「私は、自分の作ったお話で勝負したい。お姉ちゃんのおこぼれで、お抱えの作家にはなりたくない」
怒ったように言うエリスに、ミーアは何気ない口調で返す。
「あら、わたくしは、そのつもりですけれど……」
「ウソです。そんなにすぐに読めるはずがありません」
「エリスさん、一つおぼえておくとよろしいですわ」
ミーアはきっぱりとした口調で言った。
「わたくし、ウソって嫌いなんですの。わたくしは、あなたのお話の内容を見て、提案させていただいておりますわ」
そう言って、ミーアは頬に人差し指を当てて、少し上を見つめた。
「そうですわね、このお話のよいところは、まず……」
あの日、地下牢で聞いた物語を思い出す。
自分が気に入っていたところ、印象に残っているところ、面白かったところ……。

ミーアは語った。語り倒した。
まるで、好き勝手に作品批評を語って、いい気分になるおっさん批評家のようなドヤ顔で。
「……すごい」
エリスの顔に驚愕が浮かぶ。が、それが徐々に、怪訝そうなものになっていく。
「あの、姫殿下……？」
ちょうど話がひと段落ついたところで、エリスがおずおずと話しかけてきた。
「ん？　なんですの？」
首を傾げるミーアに、エリスは不思議そうな顔で、
「どうして……、まだ書いてないところまで、知ってるんですか？」
「……へ？」
衝撃の事実を告げた。
――し、しまったぁああ、ですわ！
そうなのだ、ミーアが知っている物語は、今から数年後のものなのだ。
当然、今あるものよりも、後まで書かれているわけで……。
――ぜんっぜん、考えないで、気持ちよく語ってしまいましたわ！
痛恨のミスである。
冷や汗をかきつつ、焦るミーア。
そんなミーアに構うことなく、救いの手は伸ばされた。
「べつに、驚くことはないわ、エリス。ミーア様なら、途中まで読めば、話の流れぐらい簡単にわかるのよ」
ルードヴィッヒも大概だが、アンヌの方もかなりの重症だった。
天気が良いのもミーアのおかげだし、雨が降るのも、ミーアが農民を気遣ってのこと……。
そんな風に考えるほど、アンヌはミーア姫殿下びいきになっていた。
「ですよね、ミーア様」

満面の笑みでそう問いかけられ、反射的にミーアはうなずいた。
「そっ、そうですわね。そんな感じですわ」
――って！　そんな感じって、どんな感じですのっ！
当人であるミーアから見ても、滅茶苦茶な論理。
けれど、乗っかってしまった以上、行くところまで行くしかない。
強引に、ミーアは話を進める。
「改めて、言いますわ。エリス、わたくしのお抱え作家になりなさい。そして、このお話をしっかりと書きあげなさい」
「……ミーア姫殿下……お姉ちゃん」
エリスは、姉とミーアの無茶苦茶な論理に……、
「ありがとうございます」
コロッと乗せられてしまった。
かくして、熱烈なミーア信者がもう一人、帝国に生まれたのだった。

第十九話　冬の日の誓い

ティアムーン帝国の冬は、冷える。
雪が降ることもしばしばで、各家庭では暖炉が重宝される。
その日も、雪のチラつく寒さが厳しい日だった。
「うう、寒い……」
微かに白く色づく息を吐きながら、アンヌが廊下を歩いていた。
年の瀬の、一年で最後の日。
街を見渡せば、今日から仕事を休んでいるお店も多いが、お城ではそうも言っていられない。
普段と変わらない様子で立ち働く同僚たちに軽く挨拶をしながら、アンヌはミーアの部屋を訪れた。
「失礼します、ミーア様」
「ああ、アンヌ。来ましたわね」
暖炉のそばに腰かけて、本を読んでいたミーアは、アンヌの姿を見とめると、立ち上がって、
「寒かったでしょう。少し、温まるとよろしいですわ」
そう言って、アンヌを暖炉のそばに案内する。
「ありがとうございます、ミーア様。お言葉に甘えさせていただきます」
以前までは、遠慮していたアンヌだったが、最近では素直にその厚意を受け取るようにしている。
遠慮をすること自体失礼にあたる、とミーアにたしなめられたためだ。
なので、厚意には忠義で答えようと、心に決めているアンヌである。
並んで暖炉に当たるアンヌとミーア。
――少し、背がお伸びになったかしら……。

今では妹のように可愛く感じられる皇女殿下を見ながら、アンヌは柔らかな笑みを浮かべる。
「ねぇ、アンヌ、少し、よろしいかしら……」
ふいに、ミーアが口を開いた。その様子を見て、アンヌは少し首をかしげる。
自分と目を合わそうとしないミーア。こういう微妙に気まずげな顔をしている時は、大抵、なにか頼みづらいことをお願いしようとしている時だ。
「はい、なんでしょう、ミーア様」
疑問に思いつつも、アンヌは返事をする。
「わたくし、来年の春から学校に行きますの」
「ええ、存じております。ご入学おめでとうございます」
高貴なる家柄である貴族の子弟は、十三になる年の春から専門の教育機関である学校に行くことが決められていた。
そこで、さまざまな知識を学び、国を治るに相応しい人物に整えられていくのだ。
学校に行った後、この聖女のような姫殿下がどれほど立派な女性になるのか、今から楽しみなアンヌである。
「ありがとう、アンヌ。それでね……」
ほんの少し微笑んだミーアだったが、すぐにその顔が曇る。
しばしの沈黙の後、ミーアは意を決したように顔を上げると、
「あなたにも、使用人として、いっしょに来てもらいたいと思っていますの」
「……え？」
その申し出に、アンヌは固まる。
「私が、ですか？」
アンヌが驚くのは、もっともなことだった。
学校は、王侯貴族の子弟が集まる場所だ。そして、貴族の子弟とは将来の貴族である。
貴族の学校とは将来を見越して、国の未来を担う者たちと友誼と

人脈を築く大切な場所なのだ。粗相は、決して許されない。
ましてミーアが行く学校は国内にはない……。
ミーアは、これからの数年間、城を離れ、学校内の寮で生活することになるのだ。
そして、連れていけるのは、ただ一人の使用人のみ。
他のベテランメイドたちの力を借りることはできないのだ。
「あの……、ミーア様、お申し出は大変うれしいのですけど、その、私で、いいんでしょうか？」
アンヌは決して出来の良いメイドではない。どちらかと言えば、ドジで鈍くさい方だ。
ミーアが自分を信用し、恐れ多くも多少なりとも親愛のようなものを感じてくれていることは知ってはいるが、悲しいことに、それとメイドとしての能力は関係ない。
誰か能力の高いベテランを連れて行った方がいいのでは？　と、そう考えるアンヌ。
そのアンヌの手が、ふいに温かな温もりに包まれる。
驚いて思わず視線を下げると、アンヌの冷えた手をミーアの小さな手のひらがギュッと握っているのが見えた。
「あの、ミーア様、私の手、冷たいですから……」
「アンヌ、わたくしは、あなたがいいと言っておりますの」
「っ！　ミーア様……」
アンヌの胸に、じわり、と熱いものが込み上げた。
これほどの信用を、信頼を、好意を受けて、それを返さずにいられるはずがあるだろうか。
心に生まれた感動に突き動かされるように、アンヌはその場に膝をついた。
「精一杯、努めさせていただきます。ミーア様、よろしくお願いいたします」
――ふぅ、よかったですわ。これで後顧（こうこ）の憂いはなくなりました

わ。
ミーアは安堵の息を吐いた。
これからミーアが向かう場所、学校には彼女の生涯の敵たる二人の人物が待っているのだ。
帝国革命を主導した辺境貴族、後の世に聖女と謳(うた)われることになるティオーナ・ルドルフォンと、彼女を助ける大国、サンクランド王国の王子、シオン・ソール・サンクランドの二人が。
ミーアのギロチンに直結する二人の人物は、彼女の学友でもあるのだ。
――そんな中で側近まで信頼できないなんて、悪夢以外の何物でもありませんわ。
とりあえず、最低限の状況を整えたことで、ミーアは安堵の内に新年を迎えるのだった。

第十九話　冬の日の誓い（後書き）

明日は土曜日なのでちょっとだけ多め（９時、１２時、１５時、２１時の四話分）に投稿予定です。
お楽しみいただけると嬉しいです。

第二十話　新たなる地へ

数多の国家がひしめく大陸、その中央に、小さな国があった。
神に祝福を受けた国、神聖ヴェールガ公国。
大陸の民に古くから信仰されている中央正教会の本拠地であるこの国は、一切の軍事力を持っていないにもかかわらず、絶大な発言権を持っていた。
それを証明するかのように、この国には一つの『学校』があった。
セントノエル学園――近隣諸国の王侯貴族の子弟が集められた超エリート校である。
通常、自国で丁寧に、大切に育てるべき次世代の権力者たちを一つ所に集め、六年という決して短くはない期間、教育を施す。
それだけを取って見ても、この国の権威がいかに絶大なものか窺えることだろう。
この春からミーアが通うのは、そんな学校だった。

「わぁ！　すっごーい！」
馬車で揺られること一週間、ようやくたどり着いたセントノエル学園を見て、アンヌは歓声を上げた。
窓に張り付き、離れようとしないアンヌを見て、ミーアは、思わず苦笑を浮かべる。
「今から、そんな様子では、疲れてしまいますわよ、アンヌ」
「で、でも、ミーア様、すごいですよ。海、ほら海が……」
「あれは、湖ですわ」
訂正しつつ、ミーアも窓の外の景色に目を移した。
緑豊かな木々が彩る道、小さな森を抜けた先に見えてくるのは、巨大な湖だった。
豊かな自然で知られる公国の、国土の三分の一以上を占めるノエ

リージュ湖が、降り注ぐ太陽を反射してキラキラ輝いていた。
湖の中央部には大きな島があり、そこに白く美しい、まるでお城のような校舎がそびえ立っていた。
それは、まるで、おとぎ話の舞台のような光景だった。
思わず歓声を上げたくなる気持ちもわからなくはないのだが……。
――さすがに、五年近くも見てたら、見あきてしまいますわね。
なにしろ、前の時間軸で数年間も共にした学び舎である。
その環境に文句があるわけではないけど、感動するということもない。
「ミーア様は、さすがに落ちついておられるのですね」
感心のため息を吐くアンヌに曖昧（あいまい）に笑い返してから、ミーアはそっと瞳を閉じた。
――これからの六年間が大切ですわ。
学園に来る前、ミーアは自らの日記帳を精査して、ここでの過ごし方を考えていた。
その結果、二つのルールを自らに課すことにした。

その一、危険には決して近づかない。特に自分のギロチンにつながりそうな人間とは出来る限り付き合わないようにする。

その二、もし万が一、帝国の改革が失敗し、不幸な革命が起きてしまった時のために、できる限り有益な人脈を築いておく。

これである。
――なにより、重要なのは危険に近づかないことですわ。東方の格言いわく、君子危うきに近寄らず、と言いますし。
自分を破滅へと追いやった憎き二人の人物の顔を思い浮かべる……と言って、別に恨みを晴らそうだとか、戦おうなどとは思っていない。
復讐だとかとんでもない！

痛い思いも苦しい思いもしたくないミーアは、怠惰(たいだ)なる平和主義者なのだ。
危ないものには近づかない。知り合いにならなければ、個人的な恨みを買うこともないわけだし。
――と言って、いざという時の備えをしないのも愚の骨頂。となれば、できるだけ目立たないように、コネを作って行く必要がありますわね。はて、どなたと人脈を築いておこうかしら……？
ミーアが思考に沈もうとしたところで、急に馬車が止まった。
「あいつら……」
「……ん？」
ふいに前方から、御者の苦々しい声が聞こえてきた。
「どうかなさいまして？」
「あっ、姫殿下、申し訳ございません。実は、島に渡る船に馬車を移そうとしたのですが、他国に先を越されてしまいました」
「はぁ……、それで？」
「本来であれば、我ら帝国に先を譲るべきところ、行ってそのように言い渡してきます」
鼻息荒くそう言う御者に、ミーアは小さくため息を吐く。
「……別に構いませんわ」
「で、ですが、それでは帝国の威信に……」
「順番などという細かいことにこだわっている方がよほど帝国の威信にかかわりますわ」
言いつつ、ミーアは軽く頭を抱える。
正直なところ、ミーアから見て御者の言動は痛い。実に痛い。
たかだか島に渡る順番程度で騒ぎ立てるなど、見苦しいことこの上ない。
けれど、真にミーアが痛いのは、まったく同じ行動を前の時間軸で自分がしていたからだ。
……さらに、その挙句、馬車ごと湖に落ちた。
思い出すにつけ、実に……痛い。

あの時は、とても大変だった。お気に入りの重厚なドレスを着ていったものだから、水にぬれて重くなるわ、おぼれそうになるわ……。

なんとか岸にはたどり着いたものの、周りで見ていた生徒たちに大笑いされたのだ。

今、思い出しても、羞恥の炎で灰になってしまいそうである。

かつて自分がやっていた痛い行動を目の前で見せつけられる、これほどに痛いことはない。

――なんて、恥ずかしいヤツ……。我ながら過去のわたくしをぶっ飛ばしてやりたいですわ！

「だっ、大丈夫ですか？　ミーア様」

「いえ、お気になさらず。長旅でしたから、少し疲れただけですわ」

そう言って、ミーアは窓を開けた。

湖畔の風は爽やかで、まるでミーアを慰めてくれているようだった。

第二十一話　血税の無駄遣い

湖に浮かぶ豪奢な船、数十台の馬車を載せることができる巨大なそれを見あげて、アンヌが首を傾げた。
「それにしても、ミーア様、どうして島に橋をかけるなりしないんでしょうか？　船にしても、馬車ごと運ばなくっても良いような気がするんですが……」
「なんでも、昔は橋だったそうですが、入学書類のチェックや、随伴する使用人の確認なんかで、もめたらしいですわよ」
橋の場合、どれだけ幅を広くしようと、あるいは本数を増やそうと渋滞は発生する。
そもそも、学生すべてが同じ日に、全員馬車で運ばれてくるのだ。渋滞しても仕方ない。にもかかわらず、乗っているのは、待たされることに慣れていない王侯貴族の子弟である。
もめれば、担当の首が飛びかねないし、かといって、絶対に渋滞が起きないぐらい橋の幅を広くしたり、本数を増やすのは、使用頻度から言って無駄以外のなにものでもない。
「それに、船で学生を運んでいた時には、船室の場所でもめた方がいらっしゃったとか」
王侯貴族の子弟は、基本的にプライドが高い。
自分より家格が落ちる者や同等の者が、自分の船室より上に部屋をとることが許せない。自分より広い部屋を使うことも許せないのだ。
それらの事情をすべて踏まえたうえで部屋割りなど、担当者の胃に穴が開くこと請け合いだ。
「まったく、くだらないですわね。そんなことでもめるなんて……」
おほほ、と笑うのは、前の時間軸で、どの馬車を先に乗せるかで大もめにもめた、モンスタークレーマー姫殿下である。どの口が、

そんなことを言うのだろうか……？
だが、そんなことを露とも知らぬアンヌは、
――さすがはミーア様、お心が広いわ！
などと、よりいっそう、忠誠心を厚くしてしまうのだ。

そんなこんなで、たどり着いた港。
そこで送迎用の馬車と、警護についていた近衛騎士団とはお別れとなる。
「みなの者、警護の任ご苦労さまですわ。道中気をつけてお帰りなさい」
「はっ、ミーア姫殿下の、学園生活が神の祝福にあふれますよう、国民一同お祈りしております」
頭を下げる近衛騎士団長に、ミーアはもう一度、丁寧なねぎらいの言葉をかける。
革命の際、ほとんどの帝国軍が裏切る中で、彼ら近衛騎士団は最後まで、ミーアたちを守って散っていった忠義の者たちである。
ミーアとしては“仲良くしておきたい部類”の人たちであるから、対応が丁寧になるのも当たり前のことだった。
「……姫殿下」
自分たちの仕える姫君からの、温かなねぎらいの言葉に、近衛騎士たちは思わず感動する。
なにしろ、はじめてだったのだ。こんなに気遣ってもらったのは。
皇帝一族の警護を勤め、時に暗殺すら未然に防ぐ腕利きの彼らだが、その働きはしょせんは仕事である。
それで怪我をしようと、命を落とそうと、警護対象者が気にすることではない。それが仕事だから、任務だから、当たり前だから……。
だというのに、目の前の幼き姫君は、帰りの心配までしてくれているのだ。ほのかな感動と、ミーアに対する揺るぎなき忠誠心を胸に、彼らは帰還の途についたのだった。

「さて……、それでは、学園に向かいましょうか」
それからミーアは改めて、決戦の地、セントノエル学園へと視線を向けた。

セントノエル学園のある湖中の島は、一つの町としての機能を備えた、いわゆる学園都市というものであった。
そこには、レストランや、洋服の仕立て屋、靴屋、鍛冶屋、宝飾品店に文具屋など、さまざまな商店が軒を連ねている。
しかも、貴族の子弟を満足させるために、そのすべてが超高級店だ。
「うわぁ……」
その近寄りがたいオーラに、アンヌが若干ひきつった顔をする。
「はっ、入るのが怖いお店がたくさん……」
「ふふ、そうですわね。ですが、それも表通りだけですわ。この島に住んでいる一般の方たち向けの、安いお店もきちんとありますのよ？　学校の中にも購買部があるのですが、そちらならば、そこそこのお値段で生活に必要なものは揃えられますわ」
――よかった。それなら私が使うものは、そちらで済ませれば……。
「なので、アンヌ、あなたは明日からしばらくの間、このあたりのお店を調べてみてもらえるかしら？」
「……へ？」
「そして、手ごろな価格で、それなりの品質のものが買えるお店を、すべてチェックしておいてもらいますわ」
ミーアは何でもないことのような口調で言った。
「で、ですが、ミーア様、生活には困らないように仕送りは十分に送られてくるって……」
「むろん、帝国の姫として、威信を守るための必要経費というのはありますわ。でも……」
あたりを見回して、眉をひそめる。

「血税を無駄遣いしているようで、気が引けますの」
「ミーア様……」
アンヌは、思わず感動に声を震わせたのだが……。
「無駄遣いなど、できませんわ。絶対に……」
ミーアにとって、税とは、文字通り自分の「血」につながるものだ。
金貨一枚の分、ギロチンが迫ってくると思えば、無駄遣いなんかとてもする気にはならない。
「仕送りの半分は、ルードヴィッヒに送って有効に使ってもらうことにいたしますわ」
その時、ふいにミーアが立ち止まった。
「ミーア様？」
「……あれは」
その視線の先、立っていたのは……。

第二十二話　ミーア姫、種をまく

ミーアたちの学年には、絶大な人気を誇る男子生徒が存在していた。

シオン・ソール・サンクランド。

ティアムーン帝国と並ぶ大国にして、歴史と伝統を持つ国、サンクランド王国の第一王子である彼は、全女子生徒の憧れの的だった。

白銀の髪と、涼しげな瞳、端正な顔立ちと甘い声。その上、穏やかで、気さくながらも正義感にあふれた性格。

勉学の成績も極めて優秀、剣の腕前に至っては上級生はもちろん、教師の中でも並ぶ者はごくわずかと言った具合だった。

まさにパーフェクトな王子さま、憧れるなという方が無茶な話である。

そんな魅力的な少年にミーアは恋をした……無謀にも。

いや、はっきり言えば、それは恋というよりもう少し傲慢な思いだった。

つまり、大国サンクランド王国の王子と釣り合う人間など、大国ティアムーン帝国の皇女たる自分しかいないだろう、と……、そう信じ切っていたのだ。

だからこそ、自分を差し置いて、彼と親しくなった少女のことが許せなかった。まして彼女が帝国の、それも貧乏貴族の娘であったのだから、なおのことであった。

ティオーナ・ルドルフォン。

帝国の南の外れ、農耕地が広がる辺境地域に領地を持つ、貧乏貴族の令嬢。そんな田舎者が自分を差し置いて意中の人の気持ちを射止めるなど、到底認めることができなかった。

ミーアは、彼女をいびった。口汚く罵倒したし、他の貴族令嬢たちがやっている嫌がらせにも積極的に参加した。

そして、その時の嫌がらせがティオーナの原動力となった。
彼女は、民衆の怒りを代弁する革命の指導者となる。聖女と呼ばれた彼女の指揮によって、ミーアはギロチンで殺されるはめになるのだ。
――我ながら、愚かなことをいたしましたわ。
二年間の地下牢での生活で、概ね似たような嫌がらせをされたミーアは、一つの真理を悟ったのだ。
すなわち、自分でまいた種は自分で収穫しなければならないのだ、ということを。
他人にした嫌がらせは自分に返ってくるものなのだ、ということを。

「ミーア様、あれ……」
アンヌの声で、ミーアは記憶の海から引き揚げられる。彼女の指さす先、街の一角で、ティオーナが数人の女子に囲まれていた。
――ああ、これは。
ミーアは気づく。
これは、前の時間軸、自分とティオーナがはじめて出会った時とまったく同じ状況だ、と。
この時、ティオーナは他国の有力貴族の令嬢とのトラブルに巻き込まれていたのだ。
――使用人が無礼を働いたとかなんとか、そんなのではなかったかしら？
そして、ちょうど通りかかったミーアはこの時、ティオーナを冷たくあしらったのだ。
「どうしますか？　ミーア様……」
「どうって……、そんなの決まってるじゃありませんか」
危ない物には近づかない。馬車の中で確認した方針に従うのである。
少しでも敵対的な態度をとることはもちろん、近づいて傍観者認

定すらされたくはない。
　ああいう場面に立ち会って、敵にも味方にもならない、というのはなかなか難しい。なにもしない傍観者というのは、阻害されている者にとっては敵に他ならないのだ。
　巻き込まれでもしたら面倒なことこの上ない。
　ここは、道を変えて……、などと思っていたミーアは、ふいに背筋に粟立つような感覚を覚えた。
　――なっ、なんですの？　今のは……。
　それはちょっとした違和感……、されど、取り扱いを間違うととんでもないことを引き込んでしまいそうな、予兆……。
　しばし考え込んだミーアは一つの疑問を覚えた。
　――そうですわ……。アンヌはどうして、わたくしに尋ねたのかしら？
　右に行くか、左に行くか、という状況であれば、アンヌが自分に尋ねるのはわかるのだ。けれど、この場合、ミーアに助けてやる義理はない。
　同国人とはいえ、わざわざ行って助けてやる必要はない。
　にもかかわらず、アンヌは聞いてきたのだ。どうするか？　と。
　これでは、まるで自分がティオーナをどうにかしなければいけないような……。
　そう、アンヌが考えているような……。
　ミーアは、改めて、アンヌの方を見て……、自らの推理が正しいことを察する。
　自分を信頼しきった目で見つめてくるアンヌ。彼女は、助けるか、助けないかを聞いているのではない。
　『どうやって、助けますか？』と聞いているのだ。
　アンヌは、敬愛するミーア皇女殿下が困っている人を助けないなどと、夢にも思っていないのだ。
　――こっ、ここ、これは……究極の選択ですわ！
　目の前に突きつけられた選択肢は、どちらも選び難いものだった。

自分の仇敵を助けるか？　一番の忠臣の信頼を失うか？
ほどなくして、ミーアは結論を下す。今この時に、アンヌの信頼を失うわけにはいかない、と。
「仕方ありませんわね、行きますわよ、アンヌ」
「はい、ミーア様！」

二年間の牢獄生活で、ミーアは真理を悟った。いや、悟ったつもりになっていた。
けれど、彼女が理解していたのは、半分だけだった。
自分がまいた種は、自分で収穫しなければならない……それが悪いものであっても、良いものであっても。
他人にした嫌がらせが自分に返ってくるように、他人にした良いことだって、いつか自分に返ってくるのだということを。
この時のミーアは理解していなかった。

第二十二話　ミーア姫、種をまく（後書き）

ラストは２１時ぐらいに。

第二十三話　ミーア姫の口撃！　ティオーナは……回復した！？

「ちょっと、そこのあなたたち、なにをなさっているの？」
ずんずん、と足音を立てて、ミーアは、その人垣に乗り込んでいった。
ティオーナを囲む少女たちの数は三。前の時間軸で見かけたことがある、それなりの国の、それなりの家柄の貴族の娘たちだ。そう……、あくまでも、それなりの、だ。
「はぁ？　なんですの、あなたいきなり……」
突然の乱入に、不機嫌そうな声で答えるリーダー格の少女。
だったが……、
「みっ、ミーア姫殿下……」
ティオーナの唖然とした声を聞いて、青ざめた。
「みっ、ミーア、姫殿下って、まさか……」
「いかにも、ティアムーン帝国第一皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ。以後お見知りおきを」
スカートをちょこん、と持ち上げ、華麗に一礼。その瞬間、ミーアの背後では、帝国の威光が燦然と輝いていた。
それを見た少女たちは、思わず、その場にひれ伏しそうになる。
「それで……、あなたたち、なにをなさっているんですの？」
「え、あ、その、これは……」
少女たちの顔色が、徐々に白くなっていく。なぜなら、ミーアが……、敵に回してはいけない大帝国の姫君が……、激昂（げっこう）していたからだ。
そう、ミーアはキレていたのだ。マジギレと言っても過言ではないぐらいに。
自分に、よりにもよって仇敵に助け舟を出させるなんて……。やりたくもないことをやる場面を作った少女たちに向かって、燃え上

がる憎悪の視線を向ける。
「わたくしの、帝国の臣民に、無礼を働いているように見えましたが……」
「い、いえ、ですが、帝国貴族と言っても、辺境貴族。社交界も知らぬ田舎者だって……」
「聞こえなかったんですの？」
助けざるを得ないのは、仕方がない。
けれど、ミーアは、往生際が悪い少女だった。そもそも、ギロチンで往生したくないから頑張っているわけで、それはわかりきったことではあるのだが。
この期に及んで、ミーアはほんの少しでも溜飲を下げたいとばかりに、言葉をつむぐ。
「わたくしは、あまねくすべての臣民に寵愛を与えておりますの。例え最底辺の奴隷の子どもさえ、わたくしの寵愛の中から漏れることはございませんわ。わたくしは、帝国臣民であれば、誰であれ、無礼を働かれているところを見過ごすつもりはございませんわ」
意味するところは、ずばり、別にティオーナが特別だから助けたんじゃないですよ、ということだ。
つまり、いじめられているのが、奴隷の力のない子どもであっても助けますよ、と言う意味であり、つまり、お前なんぞ奴隷の子ども程度の扱いだこの野郎！　と言う意味である。
どうせ助けるのだから、せっかくなら気持ちよく助ければいいのに、と思わなくもないが、この往生際の悪さこそ、ミーアの真骨頂なのである。
ティオーナに向けて、キラキラと、やりきった笑顔を見せるミーア。
――助けてあげたのですから、なにを言われても文句は言えないでしょう？
ああ、けれど……、悲しいことに、ミーアの真意はティオーナには届かない。

ティオーナの実家は、歴史の浅い家系である。
彼女の祖父は、もともと近隣の農民たちのリーダーであり、盗賊退治の褒美によって貴族になった、いわゆる成り上がりである。
そもそも、彼女の家のある地域は、帝国に編入された時期が遅かったため、貴族扱いされないどころか帝国臣民と見られないことがほとんどだった。
準帝国人などと呼ばれるのはまだ良い方で、酷いものになると農奴の末裔だの、植民地人だの散々なことを言われた。
だから、セントノエル学園に入学した。
一生懸命に勉強し、礼儀作法を身につけ、宮廷剣術すら体得してきた。
すべては、自分を馬鹿にした貴族の娘たちを見返すため、最低限、馬鹿にされないため。
そして、帝国貴族として認められるためだ。
それなのに初日からこんな風に嫌がらせを受けて、早くも気が滅入ってしまっていたのだ。
どれだけ努力をしたって、認められない、自分は、ルドルフォンの家の者は、領民は、永遠に帝国人として認められない。
そんな絶望にとらわれかけたところに、彼女は現れたのだ。
ティアムーン帝国の頂点に連なる高貴なる姫君、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、堂々と言ったのだ。
わたくしの臣民、と。誰であれ、わたくしの帝国の臣民に無礼を働く者は、許さない、と。
――えっ？
最初、ティオーナは、なにを言われたのかわからなかった。
助けてもらえることも期待していなかったし、まして、自身が帝国の民と認められるとは、思ってもみなかったのだ。
呆然とするティオーナだったが、ふいに自分に向けられている視線に気づいて顔を上げる。

――ミーア、姫殿下……。
そこには、温かで、優しげな笑みを浮かべる少女の姿があった。
「あっ……」
ふいに、その頬に涙が伝い落ちるのを感じる。
努力が認められたから、ではない。
なんの力もなく取るに足りない存在であったとしても、寵愛を与え庇護すると、目の前の姫君が保証してくれたから……。
何かに追いたてられるようにして生きてきたティオーナは、生まれてはじめておぼえる安心感に、涙を止めることができなかった。

第二十三話　ミーア姫の口撃！　ティオーナは……回復した！？
（後書き）

本日はこれにて終了です。
お楽しみいただけたなら幸いです。
明日はいつも通り１２時に更新予定です。

第二十四話　役者はそろいて……

シオン・ソール・サンクランドは、サンクランド王国国王の長子として、この世に生を受けた。

「民の上に立つ者、常に正義を愛し、公正を重んじよ」

幼い日に父から言われた言葉……。それが彼の信条となり、事実、今まで彼はそのように生きてきた。

王族や貴族、民の上に立つ者は、常に誇り高く、自らを律し、その生き方をもって人々の模範とならなければならない。そう思ってきたのだが……。

成長するにつれて、嫌でも見えてきてしまう。

貴族にも色々な人間がいて……。父の言うように生きている者は、必ずしも多くはない、ということに。

それでも、セントノエル学園には期待していたのだ。

なんと言っても優秀な貴族の子弟が集まる学校である。そこには、自分が今まで会ったことのないほど立派な、それこそ、人の上に立つにふさわしい人間がたくさんいるのだろうと……。

そんな彼だったから、湖を渡る順番待ちなどと言うつまらないことでもめる生徒たちを見て、早くも嫌気がさしていた。

そして、その直後、彼はまたしても、貴族にふさわしからぬ場面に出会ってしまう。

粗相をした使用人と、それをかばった貴族の少女とを、三人の貴族の娘たちがイジメていたのだ。

「……はぁ、ここも同じか」

「残念ながら、各国の王侯貴族の腐敗は進む一方。国王陛下やシオン殿下のような志を持った人なんて、なかなかいるもんじゃないさ」

かたわらに控える執事、キースウッドが、肩をすくめながら言った。その顔にはいつも変わらない皮肉気な笑みが浮かべられていた。

シオンとキースウッドは、幼い日からともに育てられた幼馴染だった。
もともとは戦災孤児だったキースウッドだが、国王に引き取られてからは、実の息子のようにして育てられた。
それゆえに、二人の間には兄弟にも近い信頼の絆が結ばれていた。
「で、どうする？　面倒くさいことになりそうだけど、助けに入る？」
「当然だ」
一切の躊躇なく、シオンはうなずく。
一方的に罵られる少女を放っておくことが、正義に反することは明白だからだ。走り出そうとした、そんな彼らの視界に、突如として、一筋の光が舞い踊った。
「あなたたち、なにをしておりますの！？」
まるで、月の光をそのまま溶かしこんだかのような、淡く輝く髪を揺らし、傲然と言い放つ少女。
その美しい顔にあふれる怒りの表情を浮かべて、少女、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、現れたのだ。
「あれが、帝国の叡智（えいち）とうたわれるミーア姫、か」
その光景を、どこかぼんやりと、シオンは見つめていた。
弱き者が虐げられている場に、敢然と乗り込んだこともさることながら、彼は、ミーアが怒りにかられていることに、思わず感心してしまった。
義憤、悪が行われていることに、正当に怒れるということ、それは、民の上に立つ者として、持っていなければならない資質だとシオンは考えている。
けれど、はたしてどれだけの者が他人の苦しみにより添い、あまつさえ自分のことのように怒ることができるだろうか。
シオン自身ですら、助けに入ろうと思ったのは、義務感からなのだ。
不正に対して心から怒れるミーアに、シオンは自らの理想とする、

王としての姿を見たような気がした。
……人間とは、どこまで行ってもわかり合えないことがよくわかる光景である。
「聞くところによれば、彼女の手配で貧民街に病院を作ったとか」
「ああ、あの話を聞いて以来、会ってみたいとは思っていたんだが……」
シオンは、改めて、ミーアの方を見た。
「てっきり、物の価値がわかっていない箱入りか、あるいは慈悲しか持ち合わせていないお人よしかと思っていたが……」
お人よしな無能であっても、積極的に悪政をなす権力者よりは全然マシと、シオンとしては一定の評価をしているつもりだったが、今の状況に出会ったことで、彼はその評価を大きく修正する。
「自分からかんざしを差し出したこと、おそらく、その効果を見越しての行動だったんだろうな」
ただのお人よしには、自分から騒動に首を突っ込み、悪を一蹴することは不可能。
彼女には、帝国の皇帝に連なる者にふさわしい叡智と、正義を愛する心があるに違いない。
「彼女と知己（ちき）になれるだけでも、セントノエルに来た甲斐があったというものだ」
ハイパーインフレ気味の評価を下しつつ、シオンの機嫌はたちまちに良くなるのだった。

一方、ミーアは、おろおろしていた。
つい先ほどまで、嫌味を言っていい気分だったのに、ティオーナを泣かしてしまい、途端にじくじくと罪悪感に責め苛まれていたのだ。
――こんなに簡単に泣くなんて、想定外すぎますわ！
もともと、小物なミーアである。暴君としての資質に著しく欠ける彼女には、小さいながらも中途半端な良心があるのだ。

「あ、ああ、えっと、わ、わたくしも言い過ぎましたわ。その、泣きやんでくださいまし」
などと、わけのわからないことを言って、それからハンカチを押し付けるようにしてティオーナに渡して……。
「そっ、それで顔を拭きなさい！」
逃げるように去っていった。

第二十五話　ガールズトーク

女子寮の部屋にたどり着いた途端、ミーアは大きくため息をついた。

あの後、ティアムーン帝国皇女の名に引かれた人々が、次々に挨拶に来たため、その対応に追われていたのだ。

――有象無象との挨拶など、ぜーんぶ投げ出してしまいたいですわ。

などと、傲慢なことを考えつつも、そこはそれ、中途半端に小心者なミーアである。

アンヌの手前もあり、礼を尽くして挨拶してくる相手を無視していくことができずに、いちいち相手をしてしまったわけである。

「……疲れましたわ」

適当に靴を脱ぎ散らしたミーアは、そのままベッドに倒れこんだ。だらんと両手足を投げ出した姿は、皇女にあるまじきはしたなさだったが……、

――関係ありませんわ！　わたくしは栄えある帝国皇女。だれに文句を言われる筋合いもありませんわ！

心の中では強気なミーアである。

「お疲れ様です、ミーアさま」

ミーアを気遣うように、アンヌが笑みを浮かべた。

「ええ、本当に疲れましたわ」

「お茶でもお持ちいたしますか？　それとも、湯浴みの準備にいたしますか？」

「そうですわね……」

部屋には、きちんとバスルームが据え付けられている。お湯さえもらってくれれば、いつでもお風呂に入ることが可能だ。

そもそも水が豊かなこの国では上下水道がいきわたっているため、

水を節約する必要がない。
砂漠の国出身の者などから見れば、言語道断の贅沢国なのである。
ゆっくりお湯につかって、馬車で凝り固まった体をほぐしたい、そう思わないでもないミーアだったが、すぐに首を振った。
「いえ、それには及びませんわ。あと一時間もしたら、共同浴場が開きますから、そちらに行きましょう」
女子寮には、決まった時間に入ることが許される温泉設備が完備されている。手足を伸ばして湯浴みするために、今は我慢することにしたのだ。
「それより、アンヌ、少し聞きたいことがあるのですけれど……」
「はい、なんでしょうか？」
ミーアは、改めてベッドのふちに腰かけると、アンヌにも、隣に置かれたベッドに座るように指示する。
ちなみに、ベッドの大きさや豪華さに違いはない。本来、貴族令嬢と使用人とが同じ部屋に暮らすということは、あり得ないことだが、セントノエル学園の場合、ついてきた使用人自体が大貴族の血筋ということもあり得る。
なので、学校側は、貴族の子弟が二人過ごしても問題ないように設備を整えているのだ。
そんな豪奢なベッドに、こわごわとした様子で、腰を下ろすアンヌ。
「あの……なんですか？　ミーア様……」
「折り入って、相談がありますの」
「相談……ですか？」
首を傾げるアンヌ。
「ええ、大事なことなのですが……」
「大事なこと……」
こくり、とアンヌが、唾を飲み込んだ。
そんなアンヌを見つめてから、ミーアは大きく息を吸って、吐いて、

「理想的な殿方との出会い方、というのは、どのように演出すればよろしいのかしら？」
「……へ？」

前の時間軸において、ミーアは、自分がシオンと結ばれるものと確信していた。偉大なる帝国皇女である自分にふさわしいのは、サンクランド王国王子のシオンしかいないと思っていたし、逆もまた同じだと思っていた。

なので、ミーアのシオンに対するスタンスは、常に「誘ってもよろしくってよ？」というものだった。

ダンスパーティーでもそう、晩餐会でもそう、休日の前日もそうである。

シオンの前に行っては「誘ってもよろしくってよ？」アピールをするのである……ウザいことこの上ない。

今ではミーアも薄々は、それが間違いであったことに気づいていた。

成長である。大きな一歩である。人類にとっての大きな一歩ではないかもしれないが、ミーアにとっては十分大きな一歩だったのだ。

もちろん「シオンの性格が歪んでいるのが原因だ！」と思いはするものの、地下牢での生活が、ミーアに「もしや、わたくしにも悪いところがあったのでは？」という、多少はマシな常識観を植え付けたのである。

シオンに恋愛アプローチをかけるつもりは、さらさらないミーアではあるのだが、自身をギロチンから救うコネは作っておかなければならない。

その筆頭となるのは、やはり、恋人であり、結婚相手なのである。

なのでミーアは、自分の恋愛アプローチが間違っていないか、アンヌに聞いてみようと思ったのだが……。

「……ミーア様、それ、誰に聞いたやり方ですか？」

話を聞き終えたアンヌは、引きつった顔で言った。

「誰って……」
わたくし自身ですが……、と言おうとしたミーアの肩を、アンヌがガシッとつかんだ。
「いいですか、ミーア様、それ、全部間違ってます！　どこの大貴族の令嬢にお聞きになったのか知りませんが、そんな上から目線の人、誰も相手にしてくれませんよ」
「そっ……そうかしら？」
「そうです。確かにミーア様は皇女殿下ですから、それでもお付き合いしてもらえるかもしれません。でも、それは、ミーア様の権力を見てのこと、ミーア様個人に好意を抱いてではありません。第一、そんなのミーア様に相応しくないです」
ふん、と鼻息荒く言ってから、
「それで、ミーア様、どなたにアプローチをかけるつもりなんですか？　作戦を考えましょう！」
やる気満々と言った様子で、アンヌは言った。

第二十六話　美貌の秘訣

「素晴らしいお風呂ですわっ！」
共同浴場が開くと同時に、意気揚々とやってきたミーア。
セントノエル学園の女子寮にある共同浴場で使っているお湯は、地下深くから引いてきた天然の温泉だ。
溢れんばかりのお湯を湛えた湯船、人気のない浴場内を見て、ミーアは満面の笑みを弾けさせる。
「ここは、天国ではないかしら……」
――ミーア様、本当にお風呂がお好きなのね。
そんなミーアを見て、アンヌは小さく笑みをこぼす。
貴族社会において、入浴の習慣を持つ者は意外にも多くない。むしろ少ない。
そもそも、大陸には火山が希少なため、天然の温泉がほとんどない。お湯に全身を浸からせるためには、わざわざ水を汲んで来て沸かさなければならないわけで、それに意味を見いだす貴族があまりいなかったのだ。
「別に、水拭きでよくね？」と彼らは考えたわけだ。
むしろ入浴に親しんでいたのは、額に汗して働く労働者たちの方だった。たくさんの娯楽を持つ貴族とは違い、庶民には楽しみが少ない。
都市に点在する公衆浴場は、数少ない庶民の娯楽として浸透していた。
そんな中、ミーアは国内随一の風呂好きとして知られていた。基本的には贅沢をしないミーアだったが、唯一の贅沢がお風呂だった。
毎日のように、お湯を沸かさせて入っているのだから、そのお風呂好きぶりは、メイドたちの間では有名なものだった。
最初からそうだったわけではない。少なくとも前の時間軸におい

ては、そんなことはなかったのだ。
けれど……、二年間の地下牢生活が彼女を変えた。
一週間に一度、桶いっぱいの冷たい水をもらえるだけという生活……それを二年間も続けていれば、お湯が無性に恋しくなる。
けれど、いくら求めても彼女はギロチンにかけられるまで、それを与えられなかったのだ。
その時の反動から、生まれ変わったミーアは、毎日お風呂を所望した。
贅沢はギロチンに直結すると知ってはいても、その欲望を抑えることができなかったのだ。
ミーアの希望を聞いたアンヌは戸惑った。
庶民のものであるはずの、入浴を帝国皇女であるミーアが求めるものだろうか？
そんな疑問を持った彼女だったが、気持ち良さそうにお風呂に浸かるミーアを見てからは、街を走り回り入浴環境を整えて行った。
評判の良い入浴草（バスハーブ）を探したり、滅多にない温泉のお湯をもらってきたり、恩返しの機会とばかりに、最上の環境を整えたのだ。
その結果……、ミーアは知らず知らずのうちに手に入れた。
輝くばかりに艶やかな、珠（たま）のお肌を。
サラサラの美しい髪を。
けれど、毎日、気持ちよくお風呂に入って満足しているミーアは、そんなことには気づいていない。
帝国社交界において、密かに「月の女神のよう」などと注目を集めていることなど、まったく気づかず。
――最近やけに肌がきれいだとか、髪が美しいだとか言われますわね……？
程度にしか思っていないミーアである。
「それでは、お体洗わせていただきます、ミーア様」
「ええ、お願いいたしますわ」
優しくミーアの背中をこすりつつ、肌の状態をチェックする。

――長旅だったから、少しお肌が荒れているかしら？
幸いにも、ここの浴場の泉質は、肌荒れや疲労回復に効くという。軽く香草石鹸でマッサージをして、ゆっくり浸かれば大丈夫だろう。
――それにしても、ミーア様がアプローチしたい相手って、誰なんだろう？
先ほどは、はぐらかされてしまったが、アンヌの興味は尽きない。
――てっきりルードヴィッヒさんのことが好きなんだと思ってたけど……。
と、そこまで来てアンヌは首を振る。
――いずれにしても、どんな殿方からも、好感を持っていただけるように、完璧にお手入れして差し上げないと……。
体を洗い終え、今度は髪を念入りに洗う。ついでに枝毛がないかもチェック、色、艶ともに問題なし。
「はい、洗い終わりましたよ、ミーア様」
満足げに頷いてから、アンヌは言った。
「いつも御苦労さまですわ、アンヌ」
上機嫌な様子で振り返ったミーアだったが、それから、何事か思いついたような顔をして、
「あっ、そうですわ、たまには、わたくしがあなたの背中を流して差し上げますわ」
などと、ニコニコしながら言い出した。
「なっ、そそ、そんな、滅相もございません！　姫さまに洗っていただくなんて、そんなこと、できるはずないじゃないですかっ！」
「遠慮しなくてもいいですわ。今は他に人がいるわけでもございませんし、あなたも疲れているでしょう。日頃のお礼ですわ」
ミーアにとって、アンヌは大切な協力者で忠臣だ。
けれど、それ以上に、死の寸前まで自分に寄り添ってくれた、返しきれない恩義があった。
強引にアンヌを座らせると、ミーアはそそくさと後ろに回り込み、背中を流して行く。

「さっ、終わりましたわ。それでは、入りましょう」
そう言って、湯船に向かおうとした、まさにその時、
「うふふ、仲がおよろしいのね」
やわらかな声が、ミーアの耳に届いた。

第二十六話　美貌の秘訣（後書き）

レビューをつけていただいた方、ありがとうございます。
感想ページにはお礼を書くことができるのですが、レビューにはつけられないため、この場を借りてお礼をば。とても嬉しかったです。
ありがとうございます。

第二十七話　ヴェールガ公爵令嬢

各国の権力者の子弟が集まるこのセントノエル学園においても、ミーアが姿勢を正すべき相手というのは、ほとんどいない。

ティアムーン帝国は、大陸における二大強国の一国。

それゆえ、その第一皇女であるミーアは、並ぶもののない権威を持っている。例外は、サンクランド王国のシオン王子ともう一人ぐらいで……。

けれど、

「あなたは……」

目の前に現れたのが、その数少ない例外だったから、ミーアは思わず姿勢を正した。

「ラフィーナさま」

ラフィーナ・オルカ・ヴェールガ。

セントノエル学園が建つヴェールガ公国を治めるヴェールガ公オルレアンの長女である。

ミーアの記憶が確かならば、ラフィーナはミーアより二歳年上の十四歳。入学以来、セントノエル学園の生徒会長を務めている学園随一の権力者である。

その上、ヴェールガ公国は近隣諸国で信奉される宗教の聖地、その頂点に与するラフィーナは、ミーアと言えど侮ることのできない人物である。

侮れないというか……、正直、怖い人物だった。

「お初にお目にかかりますわ、ラフィーナ様。わたくしは……」

「ミーア・ルーナ・ティアムーン皇女殿下。お会いできてうれしいわ、お噂はかねがね」

その言葉を聞いて、ミーアは一瞬、きょとん、とした。

ラフィーナが、自分の名前を知っているということが、あまりに

も衝撃的だったからだ。
前の時間軸において、ミーアはラフィーナに接近した。
ラフィーナの権力はミーアにとって魅力的であったし、ぜひともお友だちになっておきたい人物だったのだ。
けれど、さまざまなプレゼントを贈り、お茶会の席でも近くに座り、最大限努力をしたにもかかわらず、ラフィーナと友誼（ゆうぎ）を結ぶことはできなかった。
それどころか、彼女はミーアの名前をおぼえることすらしなかったのだ。
まるで、価値のない物を見るかのような目で見られるたび、ミーアの自尊心はズタズタに切り刻まれていき、しまいには恐ろしくなった。
それなのに……、
――どうして、この方、わたくしの名前を知っておりますの！？
思わず立ちつくしたミーアに、ラフィーナは柔らかな笑みを浮かべた。
「そんなところに立っていたら、風邪をひいてしまいますよ。どうぞ、いっしょにお風呂を楽しみましょう」
確かに、気づけば体が少し冷えて来ていた。のだが……、
――この方に優しくされると、なんかちょっと怖いですわね。
警戒しつつ、ミーアは浴槽に足を入れかけて、
「で……、では、お言葉に甘えて……」
ふとそこで気づく。
風邪をひくのは、アンヌとて同じこと。けれど、さすがにラフィーナの前で、同じ湯船に浸かることはできない。
では、部屋に帰らすしかないが、そうなればミーアはラフィーナと二人きりで残されることになる。
――そっ、そんな怖いこと、できるはずがないですわ！
前の時間軸では二十歳だったミーア。一方目の前のラフィーナは十四歳。

相手は小娘と言っても過言ではない年下である。
にもかかわらず、そうにもかかわらずなのだ。ミーアの小心（リトルハート）が、相手からにじみ出る大物感に震えずにはいられないのだ。
「そちらのメイドさんもどうぞ」
激しい葛藤の渦にあったミーアは、思わぬ申し出にハッと振り向いた。
「一糸をもまとう事なきこの場では、姫も貴族も民もなく、ただの人と人があるばかり。あなたもそうお思いでしょう？　ミーア姫」
「まさに！　その通りですわ！　アンヌ、ラフィーナさまがこうおっしゃられておりますわ、さぁ、わたくしの隣にいらっしゃい！」
これ幸いに、と乗っかるミーア。
「で、ですが……」
はじめは恐縮した様子のアンヌだったが、ミーアがぐいぐいと手を引っ張るものだから、やがて観念したのか……、
「はい、わかりました」
しぶしぶと言った様子で、浴槽の端の方に入った。
「そこではゆっくり温まれないでしょう。もっとこちらに寄りなさい」
ミーアは、さらにアンヌの腕を抱きしめて、自分の方に引き寄せる。その様子を見たラフィーナは、小さく笑みを浮かべる。
「ふふ、本当に仲がおよろしいのですね」
「もちろんですわ、アンヌはわたくしの腹心ですから」
だから、もしケンカになったら二対一になりますよー、いくらあなたが大物でも、腹心の彼女は裏切りませんよー、と暗にアピールするミーアである。
「ふ……腹心？」
一方の、アンヌは泣きそうになっていた。
誠心誠意、ミーアに仕えてきた彼女ではあるが、自分が必ずしも優れたメイドだと思ったことはない。むしろ、ドジをやることの方が多かったぐらいだ。

そのアンヌにとってミーアの言葉は、報われるに十分なものだった。

……知らぬが仏、とはよく言ったものである。

もっとも「腹心」という言葉自体は別に偽りではないので、もしもアンヌがミーアの内心を知ったとしても、多少、幻滅するぐらいで済むかもしれないけれど……。

「ふふ、なるほど。確かにあなたは帝国の叡智の名に恥じぬようですね。ミーア姫」

そんな二人の関係を見て、ラフィーナは微笑みを浮かべるのだった。

第二十七話　ヴェールガ公爵令嬢（後書き）

設定資料

神聖ヴェールガ公国

「公国」というのは基本的には、王や皇帝ではなく、貴族位である「公爵」、あるいは王族の分家が「大公」として治める国のことを言います。

いわゆる大きな国から権威を認められた国と言うことができますが、ヴェールガ公国の場合は、事情が異なります。

れっきとした独立国であるこの国が「公国」を名乗るのは、彼らが仰ぐべき王は「神」のみであり、その神に権威を認められた公爵が国を治めるという形をとっているからです。

つまり、この国を治める公爵は、政治のトップであると同時に祭司としての役割を帯びた存在なのです。

ラフィーナは父親の手伝いとして各種の儀式にも顔を出すアイドルのような少女です。人々からの人気は大変高いものになっています。

絶対に敵に回したらダメな人ですね（笑）

第二十八話　一万の軍勢

肩までつかって温まり、ぽーっと気持よくなってきたところで、
「ところで、ミーア姫、明後日に入学記念パーティーがあるのはご存じかしら？」
ラフィーナは聞いてきた。
「入学記念パーティー？　はて……」
ミーアは首を傾げた。
そんな話を聞いた覚えもなければ、前の時間軸の記憶もない。
いったいなぜ？　そんなミーアの疑問はすぐに解消される。
「新入生を歓迎するためのダンスパーティーなのですが、お聞きではないかしら？　てっきり、もう、どなたかからダンスに誘われているものと思っていたのだけど」
ダンスと聞いた瞬間、ミーアの背筋に稲妻が走った！
――そうでしたわっ！　あの忌々しい時間のこと、すっかり記憶から消し去っておりましたわっ！
前の時間軸において、ミーアは、シオン王子と付き合うものだとばかり思っていた。
だから、当然、ダンスパーティーのお誘いも向こうからやってくるものだと信じきっていたし、周りにもそのように吹聴して回っていた。
そのため、当日、彼女は地獄を見るのだ。
なにしろ、シオン王子にその気はない。けれど、事前に言いふらしていたせいで、自分をダンスに誘おうという者もおらず。
パーティーが半分終わったころに、ようやく気が付いた者たちが声をかけてくるが、それはすべて自国の顔なじみばかり。
しかも、その顔に気遣わしげな、困ったような笑顔が張り付いていれば、ミーアの自尊心が申し出を受け入れるはずもなく。

結局、ミーアはその日、ボッチパーティーを満喫するはめになるのだ。
――あ、あ、あんな思い、もう二度とごめんですわ！
幸い、今回はシオンとダンスの約束が、などと言うウソは言っていない。申し込みはある……、そのはずだ、なきゃおかしい！
――あっ、ありますように……。
などと、弱気にお祈りをしそうになって、ミーアはあわてて首を振る。
――そんな弱気ではだめですわ。それに、これはコネを築くための絶好のチャンスですわ！
そう、ミーアが目標に掲げる二つのこと。
危ない人たちとコネを築かないこと、それに、自分を助けてくれる人とコネを築くこと。
一つ目は早くも危ういけれど、二つ目に関してはこれからなのだ。チャンスは積極的に狙っていきたい。

かつて、ミーアはシオン・ソール・サンクランドという、最上の男子を射止めようと考えた。
なにしろ、シオンはイケメンだ。笑顔がとても爽やかだ。
ミーアはどちらかと言えば面食いなのである。
さらに剣術は同級生どころか、上級生ですら並ぶ者がいないほどだ。
剣術大会の時などは、相手が自分より大きくとも勇敢に立ち向かい、けれど、普段は優しくて穏やか、ともなれば、文句のつけようがない。
少なくともミーアはそう思っていた。
……大いなる間違いだった。
直接にではないにせよ、彼のせいでギロチンにかけられたミーアは、彼の性格が偽りのものだと見抜いていた（ミーアの中ではそうなっている！）

しかし、彼個人の人柄以前の問題として、第一王子を婿に取ろうなど、そもそも不可能なのだ。
ミーア以外に後継者がいない帝国から、ミーアが嫁に出ることは不可能だし、サンクランド王国の側としても、シオンを婿に出すことなどありえないだろう。
――むしろ、狙い目としては、第二王子以降、王位継承権がそこまで高くない方ですわ。
そうして考えて行く時、ミーアには思い当たる人が一人いた。
ティアムーン帝国とサンクランド王国、二つの一級国家には及ばないまでも、中堅の国家群の中では比較的大きく、なおかつ軍事力が充実した国。
さらに、ティアムーン帝国からは多少距離があるものの、ちょうどサンクランド王国の反対側に位置している国。
国名をレムノ王国という。
そして、幸運なことに、レムノ王国の第二王子、アベル・レムノは、ミーアたちの同級生なのだ。
もし、アベルを婿にするか、最低限、恋仲になっておけば、サンクランド王国に攻められた時、援軍を頼めるだろう。
そうすれば、挟み撃ちで、サンクランドを討てるではないか。
――学校が始まってからゆっくりアプローチをしようと思っておりましたが、そうも言ってられないようですわ！
共同浴場を後にして、部屋に入ったとたん、ミーアはアンヌに言った。
「作戦会議をいたしますわ、アンヌ。あなたの恋愛知識を総動員していただきますわ」
ミーアの号令を聞き、アンヌはすっと姿勢を正した。
「わかりました、ミーア様。不肖、このアンヌ、ミーア様のために全身全霊、知恵を絞らせていただきます」
気合いの入った返事に、ミーアは満足げにうなずいた。

……ミーアは知らないのだ。
頼りにしているアンヌの恋愛知識が、妹が書いていた恋愛小説をもとにしたものであることを。
まさか、自分より五歳も年上のアンヌが、まだ恋すらしたことがない恋愛初心者であるということなど……。
想像すらしなかったのだ……。
「たのもしいですわ、アンヌ。わたくし、一万の軍勢を味方につけた気分ですわ！」
その一万の軍勢がハリボテに過ぎないということなど。

第２８．５話　ミーア姫、復讐（リベンジ）する！（前書き）

せっかくなので、不定期で番外編です。
以降、数字の０，５話は番外編となります。

第２８．５話　ミーア姫、復讐（リベンジ）する！

ティアムーン帝国の冬は冷える。一番寒い時だと雪も降るし、水たまりには氷も張る。

ミーアが閉じ込められた地下牢もまた、じっとしていると凍えてしまいそうなほどに冷え込む場所だった。

そんな冷え込んだ地下牢で、ミーアは一糸まとわぬ華奢な裸身を外気にさらしていた。

「うう、冷えますわね……」

「そうですね、もう冬ですから」

今日は週に一度、体を清めるための水をもらえる日なのだ。

「正直、あまり気のりはしませんが……」

夏ならばともかく、冬の寒さの中で水拭きは体にこたえる。しかも、水には嫌がらせで時々氷が浮いていたりもするのだ。

けれど、この機会を逃しては次に水がもらえるのは一週間後。それまで体が汚れたままというのも、それはそれでつらい。

仕方なくミーアは服を脱ぎ、鳥肌が立つ肌をさすっていた。

アンヌは、ミーアの白い背中を見ながら、水の入った桶に手を入れた。

氷の浮かぶ水は、痛みを感じるぐらいに冷たい。

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべて、桶を渡してきた水くみ係の顔を思い出し、アンヌは静かな怒りを覚える。一度、抗議してみたことがあるけれど、あっさり無視され、状況が改善されることはなかった。

仕方なくアンヌは、少しでも冷たくないように、湿らせた布を自分の手の中で温めてから使うことにしている。

誰にも知られることのない彼女のささやかな抵抗である。

……まぁ、ミーアは気づいていたのだが。

しばし生まれる手持ち無沙汰な時間、黙っているのも気まずいから、アンヌはミーアにいつも世間話をしてあげることにしていた。
その日の会話はというと……、
「大きなお風呂……ですの？」
「そうなんです。町には大きな浴槽に一杯お湯をためた、公衆浴場というところがあって……ご存知なかったですか？」
「ええ、初耳ですわ」
ある程度の温度になった濡れ布でミーアの背中を拭きながら、アンヌは話を続ける。
「妹たちと一緒に行ったりするんですよ。一日の仕事が終わった後に寄ると、体の疲れが吹き飛ぶんです。この前なんか……」
穏やかな声で、妹たちとの楽しい時間を話してくれるアンヌ。ミーアの目には、そんなアンヌの姿がまぶしく感じられた。
――わたくしも、いっしょに行ってみたかったですわ。
そのささやかな願いを、ミーアは口に出すことなく飲み込んだ。
それが絶対にかなわない願いだと知っていたから……。そんなことを言っても、アンヌを困らせることが目に見えていたから。
代わりにミーアは笑みを浮かべて言った。
「そんなので楽しめるなんて、わたくしにはよくわかりませんわ。しょせんは庶民の楽しみですわね」
「ミーアさま……」
その憎まれ口にアンヌは怒らなかった。
むしろ、その顔に浮かぶ笑みが寂しげなことに気づき、かつての高慢な姫殿下が肩を落としている姿が痛ましく感じてしまった。
かといって、ここで慰めたら、ミーアのプライドを傷つけるに違いない。
しばし考えた末、アンヌはちょっとした悪戯をすることにした。
水につけて、冷たくなった指先でミーアの首筋を、
「えいっ！」
撫でた！

「ひんっ！」
ミーアの華奢な体がぴょんこっと跳ねた。
「なっ、なっ、なっ！？」
びっくりして振り向いたミーアに、アンヌは笑みを浮かべた。
「どうですか？　楽しくないですか？　お話ししただけではわからないかと思って、実演してみました。えいっ！」
「ひゃあっ！　おっ、おやめなさい、アンヌ！　こらっ！」
さんざん冷たい手で首筋やら脇腹やらを撫でられて、ミーアは、ぷくーっと頬を膨らませた。
「覚えておくといいですわ、アンヌ。もしも、あなたと一緒にお風呂に行くことがあったら、必ず復讐してやりますわよ？　わたくし、こう見えても結構根に持つ方ですわよ？」
「残念、それは無理ですよー。だって、皇女殿下と平民が同じお風呂に入るなんてありえません」
アンヌはしたり顔で言う。
「あら？　それはわかりませんわよ。もしもここから出られる日が来たならば、恐らくわたくしは皇女ではないでしょう？　身分が剥奪されていれば、わたくしはあなたと同じ平民ですわ。当然、一緒にお風呂に行くことだってできますわよ？」
勝気な笑みを浮かべるミーアに、アンヌは笑みを返した。
「あはは、それは確かにそうですね。それじゃ、その時には一緒に入りましょう。私、返り討ちにしてあげますから」
ミーアにはよくわかっていた。そんな日は決して訪れないということ。
ミーアがこの地下牢から出される時は、彼女が処刑される時であるということも。
それは、きっとアンヌも同じで……。
だけど、そんなこと微塵も感じさせずにただ素直に笑みで答えてくれるアンヌに、ミーアは心から感謝した。

――まさか、そんな機会が本当に訪れるなんて、その時には思ってもみなかったのだ。

転生してから後も、その約束はなかなか果たされなかった。

考えてみれば当たり前のことで、まさか帝国皇女たる者が庶民の公衆浴場に行けるはずもない。かといって、城の中、ミーアのために入れた風呂にアンヌが入るわけにもいかない。

けれど、ミーアはぜひアンヌと一緒にお風呂に入りたいと思っていた。あの時に聞いた女子同士での楽しいお風呂というのを体験してみたかったのだ。

その機会は、セントノエル学園にきて、すぐに訪れた。のだが……。

――あの時は、ラフィーナさまがいらして、ゆっくりできませんでしたわ。

ということで、

「アンヌ、お風呂に行きますわよ？」

ラフィーナとお風呂場で鉢合わせした数日後、ミーアは改めてアンヌを誘って大浴場に向かった。

先日と同様、大浴場は貸し切り状態だった。これで気兼ねなくアンヌと一緒に入れる、と、ニコニコのミーアである。

まぁ、誰かいたとしても文句を言わせるミーアではないのだが……。

「では、ミーアさま、お背中流させていただきます」

長い赤毛を頭の上でまとめたアンヌが、しずしずとミーアのそばに膝をついた。

そんなアンヌにミーアは早速、提案する。

「ねぇねぇ、アンヌ、またこの前と同じように、洗いっこしませんこと？」

ミーアは一緒にお風呂に入るだけでなく、楽しく入りたいのだ。

要するに、じゃれあいたいのだ！

先日もアンヌの背中を流したものの、あの時はアンヌが緊張で硬くなってしまっていた。
――あんなの聞いていたのと違いますわ！
ミーアが憧れるのは水を掛け合ったり、くすぐりあったり、そういう楽しいお風呂なのだ。
ということで、今日のミーアはリベンジに燃えていた！　そう、復讐（リベンジ）である。
「いえ、あの、ミーアさま、それはやっぱり、あの、さすがに……」
この前と同じように抵抗しようとするアンヌに、ミーアはすまし顔で言った。
「アンヌ、残念ですが……、これは命令ですわ。わたくしがわがままなこと、あなたも知っているでしょう？　さ、そこに座りなさい。わたくしが先にやりますわよ！」
今日のミーアは強引なリベンジャーなのだ！

そんなわけで、アンヌの艶やかな背中を流し始めて数分。
――んー、おかしいですわ。アンヌ、やっぱり緊張してますわね。これじゃ楽しくありませんわ。
むーっと不満に頬を膨らませるミーアである。
――どうしたものかしら……、あ、そうですわ！
そんな彼女の脳裏を不意にかつての光景がよぎった。
「……ああ、そういえば思い出しましたわ……」
ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「わたくし、あなたに恩義だけでなく、恨みもあったんでしたわ……」
「……へ？　あの、ミーアさま、なんのことでしょうか？」
びっくりして、振り向こうとするアンヌに、ミーアはニンマリと笑みを浮かべて。それから冷たい手の平をアンヌの背中に押し付けた。
「えいっ！」

「うひゃっ！」
おかしな悲鳴を上げて、アンヌが飛び上がった。
「なっ、なっ、なにするんですか！　ミーアさま！？」
「うふふ、お返し、復讐ですわ！」
「お、お返し？」
不思議そうに首を傾げるアンヌではあったが、楽しそうに笑うミーアを見て彼女が何を求めているのか察したらしく、仕方ないですね、と笑みを浮かべた。
「ミーアさま、ラフィーナさまが言っていたこと、覚えていますか？　一糸をもまとわぬお風呂においては、平民も貴族も関係ないと……」
「え？」
言うが早いかミーアの脇腹に手を伸ばした。
もちろん、彼女の手は今は冷たくない。
氷の浮いた水をミーアに押し付ける意地悪は、ここにはいないからだ。
されど、アンヌには姉妹でお風呂に行ったときに培われたテクニックがあるのだ。
そう、楽しい楽しいじゃれあいテクニックが。
ミーアのすべすべのお腹に触れると、そのままワキワキ動かしてくすぐる！
当たり前のことだが、ミーアは今までくすぐられたことなどない。そんな恐れ多いことをしよう、などという者は一人もいなかったのだ。
免疫が一切ないミーアは、見事に飛び上がった！
「はぇ？　うひゃぅっ！」
しかも、アンヌ、妹たちとの戦いでくすぐるコツを心得ているテクニシャンである。
「やっ、やや、やめっ。ひゃああっ！」
ミーアに対抗できるはずもなく、一方的にくすぐり倒されること

になった。
こうして復讐者ミーアは呆気なく返り討ちにあい、心からお風呂を満喫するのだった。

……ちなみに翌日、ラフィーナから「大浴場ではお静かにお願いしますね、ミーアさん」と笑顔で注意を受けた。
滅茶苦茶怖くて涙目になったミーアは、
「やっぱり復讐なんてするもんじゃありませんわ！」
との思いを新たにしたとか。

めでたし、めでたし。

第２８．５話　ミーア姫、復讐（リベンジ）する！（後書き）

悪役令嬢といえば復讐！　なので、今回はミーアの復讐譚でした。
誰が何と言おうと復讐譚です。
ミーアがアンヌに復讐する話で、ミーアがアンヌとイチャイチャする話じゃありません。

第二十九話　叡智と軍師の恋愛会議

「落し物がいいのではないかと思います」
「……へ？」
唐突なアンヌのもの言いに、ミーアは瞳を瞬かせた。
この子、何を言っているのかしら？　と小首を傾げるミーアに、アンヌは世界の真理を諭すかのような顔で続ける。
「いいですか、姫さま。人と人が知り合うには自然な理由が必要なんです」
「ええ、それはわかりますが」
確かに、知り合いでもなんでもない人に声をかけるのは難しい。勇気が必要だ。
小心者（チキンハート）のミーアには、相当な無理難題と言える。
さらに、ダンスに誘うとなれば、難しい事情が付きまとう。そう、普通はダンスに誘うのは男子の側からなのだ。
貴族の社交界において、女子は誘われる側であり、男子に誘われるために努力をする者、というのが一般的な価値観だ。
女子の方から声をかければ、軽いだのはしたないだの、恥知らずだのと悪い噂が立ってしまうのだ。
それゆえに、ミーアがダンスに誘われるためには、まず自然な出会いを演出しつつ、それなりに親しくなり、声をかけやすくするという段階を踏まなければならない。
もちろん、見ず知らずの相手からダンスパートナーに選ばれる可能性もないことではない。
その日まで約束を取り付けずに適当に声をかけようという男子も、いないわけではない。けれども、適当に声をかけるにしては、帝国皇女という身分は重すぎる。
そもそもミーアが改心して、聖女や叡智などと言われ始めたのは

最近の話。周辺諸国に対して、それなりにしっかりとした情報網を持った国でなければ知られていないことなのだ。
それ以前は、わがまま勝手に権力を振りかざす高慢な姫君だったわけだから、なにも好き好んでそんな厄介者に声をかける者はいないのだ。
ゆえに、ミーアは残された時間の中で「わたくし、怖くないですのよ」というアピールをしなければならないのだ。
……なかなかに厳しい。
「そこで、落し物です。アプローチしたい殿方の目の前で自然な動作で物を落とすんです。そうするとどうなりますか？」
「なるほど、たしかに目の前で落とし物をされれば、拾わざるを得ないですわね」
「そうです。そして、そこでお礼を言いながらさりげなく、ダンスの予定を聞くんです。それで、もしまだ約束がないようだったら……」
「会話のきっかけを作り、自然な流れで、誘わせる。上手いやり方ですわね」
ミーアは腹心の策謀に感銘を受けた。
まさか、アンヌにこれほど綿密な作戦を立てる力があるとは思ってもみなかった。アンヌが、帝国全軍の指揮権を持つ軍師のように見えて、頼もしさすらおぼえるミーアである。
「相手の方が少し鈍感な場合には、今日のお礼に、と言ってミーア様がお誘いする方法もありますけど……」
確かに、女子の側から誘うのはタブーとされている。けれども、なにかのお礼に、というのであれば、はしたないとは言われないだろう。
なんの理由もないのにプレゼントを渡すのは、相手の関心を買おうという安っぽい行動と見なされるが、なにかのお礼であれば、しない方がケチ臭いと思われる、というわけだ。
「しかも、落とすものによっては、ミーア様のセンスの良さや女の

子らしさをアピールすることもできます。素敵なハンカチなんかがおすすめです」
「素晴らしいですわ、アンヌ……」
気づけば、ミーアは拍手をしていた。
彼女は、アンヌの提案が気に入った。聞けば聞くほどに、落し物作戦の完璧さが理解できた。
……その作戦が、すべて彼女の妹が書いたお話の中に出てくるシチュエーションであることなど、気づきもしないミーアである。
けれども、それは無理もないことかもしれない。
なにしろアンヌが提案しているのは、ミーアが読んでいたお話よりだいぶ前、エリスが物語を書き始めた最初のころに書いたものだったのだ。それだけに、少女の夢と妄想が色濃く出たシチュエーションになっているのだが……。
ミーアも、アンヌもそれに気づかない。
恋愛初心者な二人には、物語と現実との区別がつかないのだ。
「さぁ、いきますわよ」
鼻息荒く、悠然とした様子で、ハンカチ落としに臨むミーアであった。

第二十九話　叡智と軍師の恋愛会議（後書き）

明日は土曜日なので四回ぐらい投稿します。
お楽しみいただけると嬉しいです。

第三十話　ハンカチ投下作戦

セントノエル学園の男子寮と女子寮の間には美しい中庭がある。
水の庭園と呼ばれるそこには、豊富な水源を持つこの国に相応しく、大きな噴水と水路が整備されている。
色とりどりの花々に彩られたそこは、非常にロマンチックな場所であり、数多の恋人たちの告白の場として利用されてきた。
――出会いを演出するにはうってつけの場所ですわ！
ミーアは、用意したハンカチをギュッと握りしめて、悪い笑顔を浮かべた。
それは、ラフィーナと出会った翌日のことだった。
アンヌの諜報活動の結果、もうすぐアベルがこの場所を通るらしいという情報をキャッチしたミーアは、現在、中庭のベンチにすわって、その時を待っていた。
ちなみに、今日からミーアは学校支給の制服を身にまとっている。真新しい上着（ブレザー）と折り目正しいプリーツスカートからなる制服は、ミーアの心中とは対照的な純白で、一点の曇りもない。
そんな美しい制服に身を包んだミーアは、見た目には清楚（せいそ）で美しい、まさに帝国の聖女といったたたずまいをしていた。
そよそよと、噴水が奏でる音色に耳を傾けることしばし、目的の人物がやってきた。
――来ましたわね！
獲物を目にしたミーアは小さく息を吐いて、ベンチから立ち上がる。
アベルの少し前の位置を歩きだしたミーアは、ちらちらと後ろを窺いつつ、タイミングをうかがって……、
――今ですわ！
ハンカチを投下する。

ひらひら、と、軽やかに舞ったハンカチは、狙いたがわずアベルの足元に落ちた。
それを見たミーアは、内心で快哉を上げる。
――我ながら、完璧なコントロールですわ。これなら！
ミーアは、呼ばれるのを今か今かと待ちながら、できるだけゆっくり歩く、歩く……歩いているのに……まだ呼ばれない。
――おかしいですわね？
ハンカチの状態を確認すると、むなしく草に引っ掛かり、風に揺れているだけだった。
――なっ、なっ、なぜ、ハンカチを拾わないんですの！？
今度はアベルの方をうかがう、と、アベルは、そのすぐ脇にいた女の子に声をかけていた。
「お困りですか？　お嬢さん」
なぁんて、キザな言葉が聞こえてくる。
完全に、ミーアは忘れていた。
そうなのだ、一方にハンカチが落ちていて、もう一方に困ってる女の子がいた場合、アベルは迷うことなく女の子に直行する。
そして、あわよくばお近づきになろうとする！
軽くてキザな残念イケメン、それこそがアベル・レムノという少年の本質なのだ。
さらに、不幸は続く。
「うん？　これは……、落し物か？」
ミーアのハンカチを拾い上げた人物がいた。
美しい白銀の髪と、鬱陶しくなるぐらい凛々しい顔、ミーアの仇敵シオンが、優雅な動作でハンカチを拾い上げたのだ。
「だれか、ハンカチを落としたものはいないか？」
「なっ、なっ、なっ！」
思わず歯ぎしりしつつ、ミーアはその場を去ることにする。シオンとティオーナとは知り合いにならないことが、ミーアの第一目標だからだ。

絶対に声をかけられてはいけない、そんなことになったらお終いだ！
気づかないふりをして撤退するほかない。
歩き出そうとしたミーアだったが……、
「あっ、それ、ミーア様のものですよ」
もう一人の仇敵の声が、追い討ちをかけてきた。
シオンのそばに走り寄るのは、ティオーナ・ルドルフォン。
「私も昨日、同じ物をお借りしたので、間違いありません」
そう言って、彼女は大切に洗ったハンカチを取り出して見せた。
ミーアの使うハンカチは帝室の職人が作ったものだ。腕利きの職人たちは、敬愛する皇女殿下の私物に趣向を凝らし、端の部分のレースに独特の模様を入れたのだ。
それが動かぬ証拠となった。
「あ、あそこに、ミーア様が！」
――よよ、余計な事を！
もはや、こうなっては逃げようもない。観念したミーアは、優雅に後ろを振り返り、それから、自らの制服をたたいて、
「あら、本当ですわ。うっかり落としてしまったようね」
笑みを浮かべた。
「教えていただいて、どうもありがとうございます」
「そうか。これは、ミーア皇女殿下のものだったか」
シオンはそう言うと、ミーアの前まで来て、胸に手を当てて一礼。
「お初にお目にかかる。サンクランド王国の王子シオン・ソール・サンクランドだ。ミーア皇女殿下、お噂はかねがね」
「これは、ご丁寧に。ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
ミーアも、スカートの裾をちょこんと持ち上げて一礼。
では、これで、とそそくさとその場を立ち去ろうとしたのだが……。
「ちょうど良いところで出会った。ミーア殿下、失礼だが、明日のダンスパートナーはお決まりですか？」

イヤな予感がした。
「もし、まだであれば、ぜひ立候補したいのだが……」
――どうして、なぜ、このようなことにっ！？
女の子であれば、誰でも一撃で降参したくなるような、シオンの笑顔を見て、ミーアは内心で悲鳴をあげた。

第三十一話　光明

――どっどっどうすれば、どうすればいいんですの……！？

ミーアは混乱の渦中にあった。

もしシオンのダンスパートナーになどなってしまったら、これ以上ないぐらいにガッチリと、コネができてしまう。

関係が深まってしまえば、いつ間違いが起きて「革命→王国の参戦→ギロチン！！！」へのルートが開いてしまってもおかしくはない。

それはまずい、まず過ぎる。

けれど、ここでお断りしてしまえば、シオンの心証は悪くなるだろう。

さらに、断る口実として、ほかにダンスパートナーがいるなどとウソを言ったりしたら、当日までに相手を見つけることは限りなく不可能に近づいてしまう。

なにしろ「シオンの誘いを断った帝国皇女」に玉砕覚悟でパートナーの申し出をしようなんて奇特な人物がいるはずがないのだ。

八方塞がりな状況、そんな中、ミーアはなんとか起死回生の手段を模索する。

沈みゆく船にあって、逃げ道を探る小さな鼠のように、感覚を研ぎ澄ませる。

そんな時だった。ミーアの視界の端に、とんでもない光景が入ってきた。

先ほど、ハンカチを綺麗に無視してくれた少年、アベルが上級生の男子に連れられて、建物の裏に入っていったのだ。

どこか剣呑な雰囲気に、ミーアのネズミの嗅覚が鋭く反応する。

――好機到来ですわ！

「んっ？　あれは……？」

どうやら、シオンの方も気づいたらしい。
「ちょっと失礼いたしますわ」
逃げ出すよい口実と、ミーアは、さっとシオンのかたわらを通り過ぎた。

「お前は……、なにをやっている？」
「ですから、お兄さま、ボクはダンスのパートナーを、と……」
答えようとしたアベルのほおを、その少年は思い切り殴りとばした。
――あら、ずいぶんと野蛮な方ですわね。アベル王子のお兄さまということは、あの方が第一王子ということかしら……？
その光景をミーアは物陰から眺めていた。
「軟弱者が……、卑屈に女にヘコヘコしやがって。誇りあるレムノの王家に連なる者ならば、もっと剣の腕を鍛えろ。そうすれば女の方が寄ってくる」
見下すように、アベルを見下ろして、
「ふん、まぁ、お前のような負け犬には、ダンスパートナーといってもロクな女が寄ってこないだろうさ。いくら情けなく、ご機嫌とりをしてもな」
――かたよってますわね、困ってる女子に声をかけることは、マナーだと思いますけど……。
ミーアは内心でちょっと呆れながら、声をあげた。
「なにをしておりますの？」
アベルとその兄は、ミーアの突然の登場に、驚いた顔をした。
「なんだ、お前は……」
不機嫌そうな声。
「今、取り込み中なんだ。お嬢ちゃん。ああ、心配しなくっても兄弟喧嘩みたいなもんだから、気にしてくれなくってもいい。だから、大人しくあっちへ行ってくれないか？　な？」
そう言って、アベルの兄は顔を近づけて、真っ直ぐミーアの目を

のぞきこんだ。
子どもと話す時は目線を合わせて……などという心遣いではもちろんなくって、それは、自分より年下の少女に対するあからさまな恫喝（どうかつ）だった。
対してミーアは、
――あら、やんちゃなこと！
なんだか、微笑ましい気持ちになっていた。
ミーアの中身は、二十歳すぎの女性だ。地下牢で二年余りの時を過ごしたとはいえ、精神的に若干未成熟な部分があるとはいえ、一応は立派な大人といっていい。
しかも、革命軍の殺気立った暴徒に剣を向けられる程度の修羅場をくぐり抜けている。
本物の殺気を叩きつけられたことだってあるのだ。
対して、アベルの兄はどれだけ上級生ぶってすごんで見せても、しょせんは温室育ちの王子さま。
しかも、第一王子とは言っても、ティアムーン帝国より格が劣るレムノ王国。
――恐るるに足らず、ですわね。
ミーアは鼻でせせら笑って言った。
「なっ、なにがおかしいんだ！」
「あら失礼。ですが、あまりわたくしのダンスパートナーの顔を殴られると、わたくし困ってしまいますの」
そう言って、ミーアはつかつかとアベルのもとに歩み寄る。
どうやら、口の端を切ってしまったらしいアベルの、その口元に、そっと真っ白なハンカチを当て、笑みを浮かべる。
「もう、アベル王子。わたくしにダンスを申し込んでおきながら、それを忘れて他の女の子に優しくするから、こんなことになるんですのよ？」
「え……？」
ぽかーんと口を開くアベル。

そんな彼に構わず、ミーアはスカートのすそをちょこんと持って、
「お初にお目にかかりますわ。レムノ王国の第一王子殿。わたくしはティアムーン帝国皇女ミーア・ルーナ・ティアムーン」
上機嫌な笑顔を浮かべた。
「あなたの弟様に寄ってきたロクでもない女ですわ」

第三十二話　ミーア皇女、光臨

アベル・レムノは、自分が二流の負け犬であることを自覚していた。

レムノ王国は、剣術の腕が重視される国だった。サンクランド王国のような歴史と格式もなく、ティアムーン帝国のような強大な国力もなく、ヴェールガ公国のような権威も、周辺国からの尊敬もない。

そんな中で、かろうじて、武力を強化することによって、周辺の一流国に対抗しようとしているのだ。

それゆえ、レムノの男たちはみな剣の腕を磨き、武勇を競っていた。

王族であるアベルも幼いころから厳しく剣術を教え込まれた。王に連なるものである以上、一番になれと言われ続けた。

けれど、兄である第一王子には、ただの一度も勝てた試しがなかった。

それでも、彼は努力したのだ。なんとか兄に勝ちたい、一番になりたいと研鑽（けんさん）を積み重ねた。

けれど、そんな彼は知ってしまう。この世界には、どれだけ努力を積み重ねようとも到達できない才能の領域があるということを。

それはサンクランド王国を訪れた折、シオン・ソール・サンクランドの剣を見た時のことだった。

それは、恐ろしい剣だった。

本職の騎士たちをも圧倒する技の冴え。

体重やリーチ差をものともせず、次々に練習相手の大人を圧倒していく、天賦の才の持ち主は、ただの一度も勝てない兄とすら比べ物にならないほど強い、その少年は、自分と同い年で……。

さらに、彼が一流国であるサンクランド王国の第一王子であることを知った時、アベルの中で何かが折れた気がした。

ああ、神に選ばれた者というのは確かにいて……、そうではない自分は、どれだけ頑張ったとしても、しょせんはそこには到達し得ないのだ、と。

二流にしかなれないのだ、と……。

そう考えたら、なんだか頑張るのがバカバカしくなった。

それならば、なにも苦しいことをする必要はない。幸いにも、彼は母親譲りの端整な顔立ちをしていた。レムノ王国はもともと男尊女卑の傾向が強い国だったから、ほんのちょっとでも優しくしさえすれば、ちやほやしてもらえた。

メイドたちからのアベルの評判は上々なのだ。

そうして、生涯に数十人もの妾をはべらせた稀代のプレイボーイとして、二流王子の運命を辿るはずだったアベルの前に、彼女は燦然と光臨した。

ティアムーン帝国の皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーン。

強大な権勢を誇る帝国皇女にして、一部では聖女と謳われる叡智の持ち主の少女は、アベルの軽薄なだけだった未来を正面から張り飛ばしたのだ。

彼女は周囲の生徒たちの前で高らかに言ってのけた。

アベルが自らのダンスパートナーだと。しかも……、

「そういうわけですから、シオン王子、真に残念なお話ではございますが、先ほどのお誘いの件、お受けするわけにはいきませんの」

あろうことか、神に選ばれた者、超一流の王族であるシオン・ソール・サンクランドの誘いを断ってだ。

――じょ、冗談ではない！

アベルは慌てた。

こんな事はあり得ない。自分とミーア姫では、とてもではないが釣り合うはずがない。そんなことはわかりきったことだ。ゆえに、

「ミーア姫！」

騒ぎがひと段落してすぐに、彼はミーアのもとに走り寄った。

「先ほどは、助かりました。けれど、あれで十分。ダンスパーティ

ーではシオン王子をパートナーにしていただきたい」
「あら？　わたくしに恥をかかせるおつもりですの？」
「いえ、そうではなく！　ボクなどと踊ってもしかたないでしょう。ボクとあなたとでは、とてもではないが、釣り合わない！」
「ならば、わたくしのために、自分を磨きなさい。わたくしに釣り合うように」
「は？」
アベルはぽかん、と口を開いてから……。
「で、でも、残念ながら、ボクには才能がないのです。ミーア姫。どれほどがんばっても、シオン王子はおろか、たぶん兄にだってかなわない……」
血を吐くような声。悔しさがにじみ出たその言葉は、ひさしく見せていなかったアベルの本音だった。
どれだけ努力してもかなわないということが、悔しくないはずがないのだ。
けれど、そんなアベルにミーアは優しく微笑みかける。
「アベル王子、あなたが知っているのは“今のこと”。今彼らにかなわないということ、それだけではなくって？」
「……え？」
「今日釣り合わなければ明日、明日でダメならその次の日に。研鑽を積み上げて至る場所は、どんな人間にだってわからぬもの。あなたの命が終わる時、あなたがシオン王子の上に立っていないなどと、たとえあなた自身にも言えぬことですわ。でも……」
それから、ミーアはそっと瞳を閉じて、
「このわたくしで良ければ、保証をして差し上げますわ。わたくしがダンスパートナーに選んだのです。あなたがシオン王子や、まして、あなたの兄君に勝てぬなど、絶対にあり得ぬこと。このミーア・ルーナ・ティアムーンが保証しますわ」
その言葉は、まるで神託のように、アベルの胸に突き刺さった。
――あのダメ兄に邪魔されて、いざという時に援軍が出せないな

んてことになったら困りますし、アベル王子にはがんばっていただかなければ……。ふふ、それにしても公衆の面前でシオン王子の誘いをお断りしたのは、痛快でしたわ！

腹の中は大変ゲスなミーア姫殿下ではあったのだが。

そんな思惑とは裏腹に、かくて、アベル・レムノの運命は大きく変わり始めたのだった。

第三十三話　聖女か、策士か、小悪魔か？

「あらら、見事にフラれてしまいましたね、シオン殿下」
ミーアとアベルが去った後、残されたシオンにキースウッドが歩み寄る。
「しかし、まさか断られるとはね。あのお姫さまもなかなかやるなぁ。まぁ、確かに、友誼（ゆうぎ）を深める良い機会ではあるが、これが最後というわけでもないのだし、気を落とすことも……おや？」
とそこで、キースウッドは違和感をおぼえる。
シオンが……、幼いころから王族としての節度と自制心を鍛えられてきた、自らの主が……、とてもとても珍しいことに、不機嫌そうな顔をしていた。
いや、不機嫌そうというか、どこかふてくされたような顔で……。
「もしかして、ダンスのお誘いを断られて機嫌を損ねたって言うんじゃないでしょうね？」
「べつに、そんなことはない」
シオンは笑みを浮かべるが、その笑みはわずかばかり引きつっている。
「彼女の行動は立派だったし、アベル王子の面目も立った。レムノ王国の第一王子もあまり褒められた性格ではなかったし、アベル王子に肩入れすることは、よくわかる」
――って、まるで自分に言い聞かせてるみたいだな。
シオンより四つ年上のキースウッドがシオンに抱く思いは、一言では言い表せないものがある。
それは尊敬すべき主に向ける尊敬であり、恩義を受けた王の息子に対する忠義であり、ともに育った幼馴染に対する友情でもある。
そして、今、彼がシオンに対して抱くのは、弟をからかってやりたいという、兄のような感情だった。

「それに、申し込んだのはこちらだ。当然、受けるにしろ拒否するにしろ、あちらに選択権があることぐらいわかっている」
「なのに、なんとなくモヤモヤすると？」
「だから、べつにモヤモヤなんかしてないって！」
その子どもっぽい反論に、キースウッドは少し驚く。
「ただ、少し残念だっただけだ。気にしてなんかない」
そう言いつつも、シオンは唇を尖らせる。
――ふむ、殿下がこんなにムキになるとは、珍しいこともあるもんだ。
いつもは、キースウッドがからかっても、冷静にあしらわれてしまうのに。
――もしかすると、冷静な興味以上の感情を抱き始めてるのかもしれないな……。
シオン自身すら気づいていない心理を、キースウッドは正確に読み取っていた。今彼が抱いている感情が、気になる女の子に冷たくされて、ちょっと不機嫌になった男子とよく似ているということに。
――ミーア皇女殿下、か。
彼にとっても、ミーアの返答は意外なものだった。
こう言ってはなんだが、キースウッドが見たところ、アベルにはシオンに勝っているところなど一つもなかった。
なるほど、確かに見栄えは悪くない。顔立ちは整っていたし、立ち居振る舞いも一見すると華麗に見える。
学校が始まれば人気を集めるだろう。
……が、それだけだ。
キースウッドが見たところ、アベルの魅力はとても表面的なものだ。いわばメッキ。そのようなものに惑わされるような人物など、とるに足らない人物。
――普通ならそうなんだが、問題は比較対象がシオン殿下ってことなんだよな。
そうなのだ、アベルとシオンとを比較した場合、例え表面的なも

のに限ったとしても、シオンの方が圧倒してしまうのだ。
見た目に惑わされる者であろうと、本質を見抜く賢者であろうと、あまねく魅了する本物が、シオン・ソール・サンクランドという王子だった。
にもかかわらず、ミーアはシオンとダンスパートナーとなる権利を蹴ってまで、アベルをダンスパートナーに選んだ。
本人が辞退しようとしていたにもかかわらず、だ。
――アベル王子の誇りを守るため、というのは理解できないことではないが……。
それ以外にも理由があるような気がしてならなかった。
あの時にかけた言葉も、なんだか、楔を入れているようにも見えたし。
――俺には見えないアベル王子の資質が見えていたとでもいうのか？
仮にも帝国の叡智と謳われる皇女殿下だ。なにか考えがあってのことなのかもしれない。
――相手の誇りを慮る慈愛の聖女か、緻密な計算に基づいた策士の行動か……。
ふいに、キースウッドは、ミーアの顔を思い出しながら、苦笑する。
――あるいは、シオン殿下をからかっていただけ、とか？　あの時の笑みは聖女というより小悪魔って感じだったしな……聡明な殿下を手玉に取る小悪魔がいるとはな。

キースウッドがミーアの思惑（と彼本人が思うもの）を知るのは、少しあとのことになる。
その時、彼はミーアが帝国の叡智と呼ばれる理由を、まざまざと見せつけられ（たつもりに本人がなってるだけ）戦慄することになるのだが。
それはまた別の話。今、確かなことは一つだけ。

ミーアが当人の知らぬ間に、称号「小悪魔」を取得してしまったことのみだった。

第三十四話　素顔のままで

新入生歓迎舞踏会の一時間前、ミーアは一人、大浴場にいた。
姫君の余裕……、というわけではない。なぜなら、ミーアは半泣きだった。
「うう、最悪……、最悪ですわ！」
そもそも、王族や貴族の娘たちに人気なのは、幾重にも重ね着した豪勢なドレスだ。化粧を含めて、その準備には優に数時間はかかるだろう。
にもかかわらず……、ミーアは浴場にいるのだ。しかも、本来そばにいるはずのアンヌの姿もなく、ただ一人で、である。
ごしごし、焦った様子で髪を洗うミーア。その髪にはねっちょり、何やら粘液めいたものがついていて……。
彼女がこんなことになっているのは、ちょっとした事情があった。

その日、ミーアは朝早く起きた。
朝、昼と食事を済ませ、それからたっぷり余裕を持って、ドレスに着替えた。
娘を溺愛する皇帝から送られてきた最高級のドレスは身につけるのに時間がかかるものの、他国では決して手に入らない極めて豪勢なものだった。
そんなド派手なドレスを着こみ、お化粧も完璧。すべての準備が終わったのは、パーティーが始まる二時間前だった。
その、微妙な時間の余裕が命取りとなった。
「まだ時間があるから、少し校内を見て回ろうかしら……」
そう思い立ったミーアは、その途中、珍しい物に出会った。
馬術部が、馬の散歩をしていたのだ。
――こんな近くで見るのは初めてですわね。

などと思いながら、ぽけーっと眺めていたミーア。そこに、馬が鼻を寄せてきた。
ミーアは動物が嫌いではない。親しげに鼻を寄せてくる馬に気をよくしたミーアは、撫でて差し上げようかしら、などと手を伸ばしかけ……。
ぶぇえくしょんっ！　というド派手な馬のくしゃみに巻き込まれた。
「ひぁあああああっ！」
突風が吹いた後、そこにいたのは、馬のいろいろな粘液でびしょびしょになったミーアの姿だった。

「うう、どうして……、どうしてこんなことに……」
べそべそ、泣きべそをかきながら、鼻をすするミーア。
それは、不運としか言いようがない出来事だった。
実のところ、ミーアがお気に入りの香水を張りきって振りかけていたから、いささか匂いがきつかったという事情もあるにはあるのだが、それでも、同情を禁じ得ない状況ではあった。
とぼとぼと、悄然とした様子で戻ってきたミーアを見て、アンヌは思わず気が遠くなりかけた。
半泣きのミーアをなだめつつ、お風呂で身をきよめてくるように指示するものの、アンヌとしてもどうにもできない。
そうは思ったのだが……、
「……仕方ありませんわ、アンヌ、適当に恥ずかしくない程度にお化粧を……、ドレスは、その辺ので適当に見繕って」
しょんぼり、そんなことを言われてしまったものだから、メイド魂に火が付いた。
――姫さまに恥をかかせるわけにはいかないわ！
アンヌは燃えた。燃え上がった！
――ミーア様は、もとがいいんだから、そんなにお化粧しなくっても可愛い！

そう考えたアンヌは、ちょっぴりきつい印象の目元を和らげるようアイラインを描くだけにとどめ、あとはドレスの着付けに全力を割いた。
今からでは、正式な物は無理。略式であるならば派手なものは避けるべきということで、アンヌは白一色のドレスを選んだ。
肩が出ていて、スカートもやや短めのダンスを踊るのにちょうどいいものを選んだ。
さらに仕上げに、ミーアが自分で使ったのとは違い、ほのかに香る程度に香水を振りかけたところで時間切れとなった。

パーティー会場に集まっていた男子は、現れたミーアの姿に思わず目を奪われた。
豪奢なドレスを身につけた少女たちが溢れる中にあって、質素なドレスを身につけたミーアは、誰よりも健康的に輝いて見えた。
理由はとても簡単だ。
会場の少女たちは、ほとんどがコルセットの締め付けによって青白い顔をしていたのだ。白く美しい、というよりは、単純に顔色が悪い。
対して、ミーアはコルセットを付けていない。しかも、お風呂上がりで血色が良い。
ほんのり赤くなった頬は愛らしく、お風呂上がりのつやつやお肌は輝いて見えた。
さらに本当ならば分厚いドレスの内に隠されるはずだったミーアのすべすべお肌は、略式ドレスのおかげで惜しげもなく晒されているのだ。
豪華さに欠けるドレスのはずなのに、かえって、アンヌが手塩にかけたミーアのすべすべお肌の魅力を十全に引き立たせる効果を発揮していた。
そんなすべての状況が、絶対評価「かろうじて美少女」なミーアを、相対評価「普通に美少女」にまで引き上げた。

絶世の美少女ではない。
傾城とも傾国と言うにも足りない。
されど、その美しさは間違いなく会場にいた男子たちの気を引くには十分だった。
そんな美少女のミーアが、切なげなため息などついたりするものだから、なおのこと注目を集めてしまっている。
――ああ、やはり、こんな軽装でパーティーに来たら、目立ってしまいますわね。
そんな彼女の心中も、彼女が「馬のくしゃみ」に巻き込まれるなどと言うトホホな理由で略式ドレスを着るはめになったことも知ることなく、会場の男子の何人かが、心を射抜かれてしまったのだった。

第三十五話　ミーアの特技

ご存じだろうか？
化粧しないで美人なのが一番、着飾らない素のままの可愛さこそ貴重……。
うぶで純粋で、ちょっとおバカな男子の間には、こんな価値基準が存在しているということを。
それは、確かにそうなのかもしれない。オシャレしなくっても化粧をしなくても、美しく、可愛らしく、魅力を放つことができる。
それができるなら、それに越したことはない。
……まったく、着飾る側の女子からすると、ふざけんな！　と言ってやりたくなるような価値観ではあるのだが……、けれど残念なことに、さながら信仰のごとく敬虔に、男子はこの価値観を、胸に大事に抱いているのだ。
そして、その傾向は、オシャレにお金をかけられない庶民より、普段から着飾った女性に囲まれている貴族の子弟に、より強く現れる。
アベル・レムノもまた、そんな価値観に毒された一人だった。
――あれは、本当に現実のことだったのか？
ミーアを待つ間、アベルは不安をおぼえていた。
すべて夢だったのではないだろうかと、そう感じてしまうほどに、あの日の出来事は現実感がなかった。
まさか、大国ティアムーン帝国の姫君と、ダンスパートナーになるとは……。とてもではないが、信じられなかったのだ。
だから、現れたミーアが、夢幻の中の存在のように可愛かったから、その気持ちは強くなった。
――なんと、美しい……。
会場の、ほのかな明かりに照らされたミーアは、まるで月の女神

のように美しく見えたのだ。
俗に言う夜目遠目、というやつである。
――彼女と、ダンスをする？　本当に、夢なんじゃないか？
そんなことを思っていたから、みなの視線を一身に集めたミーアがやってきて、
「申し訳ありません、アベル王子」
突然に謝った時、てっきりパートナーを断られるのだと思った。
――まぁ、当たり前だろう。彼女と釣り合うのはやっぱりシオン王子だろうしな。
残念に思う反面、ほんの少しだけホッとして、思わず軽口が出る。
「いや、別に構わないよ。君は、とても美しいから」
ボクなんかには、もったいない。どうぞシオン王子のもとに行ってください、と、言外に込めて伝えると、ミーアは小さな胸に手を当てて、ホッと安堵の吐息をこぼして。
「ありがとうございます、アベル王子。あなたは、お優しい方ですわね」
それから、なぜか、アベルの右手を、小さな両手でつかむと、
「では、いきましょう」
「……は？」
ダンス会場の中央に誘った。

ミーアは張り切っていた。
予定していたオシャレができなかったのだ。にもかかわらず、アベルは優しく微笑んで、しかも、気を使って美しいと言ってくれたのだ。
――さすが、アベル王子は紳士ですわ。ドレスのこと、なにも言わないなんて。
けれど、いつまでもそれに甘えてばかりはいられない。ここでなんとしてでも、挽回（ばんかい）しなければ……。
幼き日より、帝国皇女として、帝王教育を施されてきたミーア。

ではあったが、実際のところ、その成績はあまり芳(かんば)しくない。
転生以降は、自分なりに頑張っては来たのだが、それでも、せいぜい平均よりややマシといった程度だった。
そんなミーアであるが、ただ一つだけ、ほかの誰にも負けない特技があった。
それこそが、社交ダンスである。
ミーアのダンステクニックは、文句なく超一流。
それは、彼女自身が美しく踊れる、などといった独りよがりの技術ではない。きちんと踊る相手の実力を把握して、それに合わせて気持ちよく躍らせる、いわゆる接待ダンスができるほどなのだ。
そんなミーア自慢の技能ではあるのだが、前の時間軸では、ただの一度も披露されることはなかった。
一年生最初の、新入生歓迎ダンスパーティーで、ことごとく踊りの誘いを断ってボッチを貫いた結果、ダンス嫌いなのではないか？
との認識を周囲に植えつけてしまったのだ。
以降、ミーアはただの一度もダンスに誘われることはなく、とてもとても寂しい思いをしていたのだ。
――今こそ、わたくしのテクニックを披露する時ですわ！
アベルの手を優しく引いて、ミーアは微笑みを浮かべる。
「さ、踊りましょう、アベル王子」
「なっ、わっ！」
戸惑った様子のアベルだったが、すぐに、ダンスのステップを踏み始める。
――ふむ、なかなか。筋は悪くないようですわね。
ミーアは目の前で懸命に踊るアベルを見て、満足げにうなずく。
ステップにぎこちなさを感じるが、これはダンスに慣れていないというよりは、万に一つもミーアの足を踏まないように気を使いすぎているからのようだった。
――レディの足を踏まないようにするのは、最低限のマナーですものね。上手に踊ることに気を取られて、相手を気遣えないよりず

っといいですわ。もっとも、相手がわたくしである場合には無用の心配ではございますが……。
なにしろ、ミーアは足を踏まれない。
ミーアのダンス技能は、そんなレベルにはないのだ。
――これは鍛えがいがありそうですわ！
そんなことを思いながら、ミーアは、アベルよりほんの少し上手にステップを踏む。ついてこれなくもないが、ついていくのが大変な、踊り終わった時に技術が上がるようなレベルのステップを。

第三十六話　シャルウィーダンス？

ミーア・ルーナ・ティアムーンが、すべての学生たちの前に光臨した伝説の夜。

その始まりは、いささか不穏なものだった。

注目を集めに集めたミーアだったが、そのダンスはとても凡庸（ぼんよう）なものだった。

「……なによ、目立ってたくせに、ダンスは大したことないのね」

「……まぁ、大国のお姫さまと言ってもお子様ですし、仕方ないんじゃないかしら」

そんな嫉妬と嘲笑が入り混じった声が、会場のところどころで囁かれる。

なにしろ、せっかく苦労して着飾ってきたのに、完全に引き立て役にされてしまったのだ。ミーアと同学年の新入生たちはともかく、上級生たちにしたら面白くない話である。

面と向かっては言えないまでも、陰口、嫌味ぐらいは言いたくもなるだろう。

ミーア自身はどこ吹く風だったが……。

「そうですわ、アベル王子。なかなか、おじょうずなステップですわよ」

とても丁寧に、模範的に、アベルをリードするミーア。しかもそれを周囲には一切悟らせず、一見するとアベルのリードに任せているように見せている。

しっかりとパートナーの男子に華を持たせて、気持よく躍らせている。

見事な接待ダンス。できる女は違うのである。

そんな中で、

――これは……。
ただ一人、アベルだけは、ミーアの様子に気づいていた。
――もしかして、ミーア姫は、ボクのレベルに合わせてくれているのではないか？
同時に、彼は周囲の反応にも気づいていた。
ミーアに対して注がれる会場からの厳しい目。パーティーの主役のような登場をした彼女が、物笑いの種に転落することを嘲笑う者たちの視線。
その原因が自分にあることが、アベルは口惜しく、また、申し訳なくもあった。
――ボクを信じると言ってくれた彼女が、はずかしめを受けるなど……。
平然とした顔で踊るミーア。
自分が気にしないように、と、気遣ってくれているのだろう。それが、アベルには耐えられなかった。
そんな時、ふいにアベルの目に飛び込んできたもの、それは、この場において唯一、ミーアとつり合いが取れる人物……。
シオン・ソール・サンクランド。
彼が、ほかの女子に囲まれて談笑している姿だった。
ダンスの曲が終わったところで、アベルはミーアを連れて、シオンの方へと向かった。
「アベル王子？　どちらへ？」
その問いかけに答えず、まっすぐシオンの前にやって来た彼は、
「シオン王子、頼みがある」
「どうかしたのか？」
突然のことに、シオンは少し驚いたような顔を見せた。
「ボクは少し疲れてしまってね。少し休みたいんだが、その間、姫君のお相手をお願いできるだろうか？」
「アベル王子！？」
驚愕の声をあげるミーア。だったが、そんなことには構わず、ア

ベルはシオンを見つめる。
しばし無言だったシオンだが、
「なるほど。確かにミーア姫とはダンスにお付き合い願いたいと思っていた。よい機会だし、一曲お願いできるかな？」
「なっ！？」
ミーアは、一瞬、アベルの方に視線を向けた。
「飲み物をもらってるよ。ボクは、少し疲れてしまったから」
しばし、沈黙したミーアだったが、
「……そうですわね、では一曲だけ」
可憐な笑みをシオンに向けて、言った。
一瞬……、アベルの胸に痛みが走る。
その笑みが、先ほどまで自分に向けられていた愛らしい笑みが、自分以外に向けられるということに。
悔しさと、切なさと、嫉妬と……、さまざまな感情がごっちゃになって、叫びだしたいような衝動に襲われる。
――ボクに、力がないから……。
シオンと出会って以来、はじめて、アベルは思った。
負けたくない、と。
かつて、どう努力しようとも勝ちえない相手と思った相手に対して……。
負けたくない、諦めたくない、と。
生まれてから、ただの一度も抱いたことのない熱情が、その身を焼いているようだった。
「……次は、絶対に……ゆずらない」
唇を噛みしめ、アベルは踵を返した。
ちなみに、シオンに笑みを浮かべた時のミーアは、こんなことを考えていた。
――せっかくの機会ですし、華麗に転ばせて差し上げますわ。みんなの前で、せいぜい恥をかかれるとよろしいですわ！

正直、シオンとダンスとかまっぴらだったが、どうせしなければならないのであれば、最大限、チャンスを生かして恥をかかせてやろう、などと……。
ゲスな気持ちが、ついつい顔に出てしまったのだ。
そんな腹黒い笑顔が、可憐な笑みに見えてしまうほどに、すでにアベルの目は曇ってしまっていたのだ。彼にとっては、とても不幸な話である。

けれど、ミーアの企みは、失敗することになる。
彼女は忘れていたのだ。
シオン・ソール・サンクランド。
かの王子が、あらゆる面においてパーフェクトだということに。
ダンスの技能のみパーフェクトなミーアと違い、何から何まで出来る少年、それがシオンなのだ。
当然、そのダンスの腕前は……。

かくて、伝説の夜はクライマックスを迎える。

第三十七話　冷たい優しさ

転ばせるとは言ったものの、ミーアは別に足を引っかけたり、といった露骨な行動をとるつもりはなかった。
もちろんミーアほどの者になれば、こっそり足を引っかけることなど造作もないことだ。
しかし、足首まで隠れるドレスならばともかく、スカート丈の短い今のドレスでは隠しきることは難しい。
それに、そもそもミーアは別に積極的にシオンに攻撃したいわけではない。
なにせ下手にシオンの怒りを買っては、ギロチンルートに直行してしまうかもしれない。
――ま、足をかけずとも、どうせわたくしの全力のダンスについてこられなくって、足をもつれさせるに決まってますわ！
などとたかをくくっていたのだ。
――わたくしについてこれずに転ぶ、無様な姿を晒すがいいですわ！
完璧極まる作戦だったのだ……ミーアの中では。
その結果……、
「お淑(しと)やかなお姫様かと思ったが、意外とじゃじゃ馬なんだな」
爽やかかつ、余裕の笑みを浮かべるシオンの姿が、目の前にあった。
――そ、そ、想定外ですわ！
内心で悲鳴を上げつつも、難しいステップを踏む。
くるり、くるりと軽やかに舞う様は、花畑に舞う可憐な妖精のようで、美しく輝く肌は、月光の女神のようで……。
ダンスに興じていた者たちも動きを止め、いつしか踊っているのはミーアたちだけになっていた。

始まってすぐは、シオンのリードが上手いだけだ、などと揶揄(やゆ)していた者たちも、すぐに黙らざるを得なくなった。
一人だけダンスが上手くても、空回りするだけだということは、貴族の子女であれば誰しも知っていることだった。
見るものを魅了する華麗なダンスは、双方の技量が高いからこそ実現するものなのだ。
軽やかにミーアが回る。
その体を優しく受け止め、次の動きへと流れるようにいざなうシオン。
優雅にして華麗なリード。
柔らかに抱きとめられて、不本意ながらミーアはほんの少しキュンとしてしまう。
――ああ……素敵……じゃありませんわ！　ありえませんわ！
こいつが素敵なんて感じるなんて、ありえませんわ！
ミーアが激しい葛藤に身悶(みもだ)えしていたそんな時……、偶然にも、彼女の視界に入ってきたものがあった。
それは……。
――あら、あれは、アベル王子？
グラスを二つ持って、バーカウンターの方へと向かうアベルの姿だった。
手に持った空のグラスを見て……、ミーアは思わず微笑ましい気持ちになってしまった。
――お優しい方、なのですわね。
やがて、曲が終わりを迎える。
スカートの裾をちょこんと持って、優雅に一礼するミーアに、
「どうかな？　ミーア姫、できれば、次は静かなものも一曲付き合ってもらいたいが……」
「いえ、遠慮しておきますわ。シオン王子、あなたには、もっとふさわしい方がいらっしゃるのではないかしら？」
お前じゃ力不足だよ！　というニュアンスで言ったのだが、完全

なる負け惜しみである。
キョトンと瞳を瞬かせるシオンに一礼すると、ミーアはその場を後にした。

「アベル王子！」
やってきたミーアを見て、アベルは少しだけ意外に感じる。てっきり、もう二、三曲は踊ってくるものだと思っていたのだ。
それぐらいに、二人の息は合っていたのだが……。
アベルは、飲み物のグラスをミーアに渡し、笑顔を向ける。
「やあ、ミーア姫。素晴らしいダンスであったよ」
「あら、それはありがとうございます」
はにかむミーアがまぶしくて、アベルはつい視線を外してしまう。
「それにしても……かなわないな」
「なにがですの？」
「シオン王子さ。ボクでは、残念だけど、君の魅力をあそこまで引き出すことはできないからね」
次こそは負けないと、どれだけ意気込んでも、くじけてしまいそうになる圧倒的な実力差。
けれど、ミーアは……、
「これ、ありがとうございます。冷たくて、とても美味しいですわ」
アベルが持ってきたジュースに口をつけて……、
「あなたは優しい素敵な方ですわ、アベル王子」
「自分の分だけ飲み物を取ってくる男と思われていたのなら、心外だが……？」
「ダンスが、動きが激しいものだと見て、取り替えに行ってくれたのでしょう？」
そう指摘され、思わず、アベルはぽかんと口を開ける。
そうなのだ、アベルはダンスが始まってすぐに飲み物を取ってきたのだ。けれど、ミーアのダンスを見て、暑くなるだろうから冷たい物の方がいいだろう、と途中で取り替えに行ったのだ。

「アベル王子、どうかご自分を卑下しないでください。あなたは、とても素敵な方ですわ」
その言葉は、ミーアにしては珍しく嘘偽りのない、心からの優しい言葉だった。
はじめてだったのだ、同年代の男子に優しくされたのは。
皇女としてではなく、女の子として優しくしてもらったのは……。
だから、嬉しくって、ついついらしくないことを言ってしまったのだ。
「でも、できればボクは、ダンスでもシオン王子に負けたくないのだが……」
「でしたら、わたくしが稽古を付けて差し上げますわ。厳しくいたしますから、覚悟をなさるとよろしいですわ」
この日、ミーアは生まれて初めて、心ときめくダンスに興じることができたのだった。

キャラ紹介　※随時更新予定　ネタバレあり　（前書き）

以前リクエストがあったキャラ紹介を作ってみました。
随時、更新予定。
ネタバレもありますので、読んだ後の確認用にどうぞ。

キャラ紹介　※随時更新予定　ネタバレあり

○ミーア・ルーナ・ティアムーン（１２歳）→中学一年生相当
大陸の二大強国の一つ、ティアムーン帝国の皇女。幼き日より、わがまま姫として知られていた。皇帝である父親の愛情をいっぱいに受ける。自分ファーストな姫殿下。
白金色の髪、緑色がかった瞳を持ち、容姿やや端麗というスペックを誇る。
運動能力は並ながら、ダンスだけは超一級品。いつか格好いい王子様と踊れることを信じて練習に励んでいた。

○アンヌ・リトシュタイン（１７）
ティアムーン帝国のメイド。実家は貧しい商家。妹が四人、弟が一人の六人姉弟の長女。
実家の助けになるために、城に働きに出る。
基本的に情け深く、捨てられてる犬猫を放っておけないタイプ。

ミーアへの評価（前）
「あんまり好きじゃないけど、でも可哀想。地下牢での生活は辛いだろうし、私以外にお世話をしてあげる人、いなさそうだから……」

ミーアへの評価（今）
「尊敬するミーア様。とっても優しくて、頭もよくって、まさに聖女と呼ばれるのにふさわしい方だわ。時々、可愛らしいユーモアも見せてくださるところとかも、とても魅力的。受けた恩義に報いるために、私のすべてをささげなくては……」

○ルードヴィッヒ・ヒューイット（２２）
少壮の文官。帝国の財政に不安を抱いていたが、毒舌が災いして地方に飛ばされる。最後まで帝国財政の立て直しに頑張った人であり、ミーアが断頭台に送られた際も、最後まで、その姿を見守ったことから、彼女の信頼を勝ち得る。だが、毒舌。

ミーアへの評価（前）
「ミーア姫か……。仕えるようになってわかったが、あの人は悪い人ではない。あまり頭は良くないし、意地っ張りで、正直面倒くさい人だが、悪い人ではないんだ。ただ、頭があまり良くないだけで、悪人ではない。ただ、もう少し賢明だと……」

ミーアへの評価（後）
「ミーア姫殿下か……。あれほど仕えがいのある主君はいないだろう。未来を見通す目、必要なものを瞬時に悟り、最適な答えを出す叡智。俺などには思いもよらぬ数々の思考が、あの方の頭の中には詰まっているのだろう。あのお年であれほどの賢明さをお持ちとは、あの方が女帝となられた暁には、帝国の繁栄は約束されたも同じだな。俺も粉骨砕身の覚悟でお仕えせねば」

○シオン・ソール・サンクランド（１２歳）
大陸の二大強国の一つ、サンクランド王国の第一王子。あらゆることに優れた才能を発揮する万能の天才。特に剣術については、並の騎士では太刀打ちできないほどの実力を誇る。
見目麗しい少年で、大国の王子に相応しくいつでも公正と正義を心がける。
帝国革命時に、革命軍の指導者であるティオーナを助けた。

ミーアへの評価（前）
「民を弾圧する無能な統治者だ。大国の姫にはとても相応しからぬ

高慢な女だ。民の手にかかり処刑されても、仕方ないだろうな」

ミーアへの評価（今）

「さすがは帝国の叡智だ。慈悲深いだけでなく、不正に対してきちんと立ち向かうことができる。相手が誰であっても臆することのない勇気をも持っている。彼女と面識を持てただけでも、この学園に来た甲斐があったといえるだろうな」

○キースウッド（１７）

シオン王子の従者。幼き日よりシオン王子とともに、兄弟同然に育てられる。二人きりの時はため口になる。斜に構えており、時に皮肉を口にする。剣術の腕前はシオンにも劣らない。

ミーアへの評価（前）

「ミーア姫？　ああ、あの……。典型的な姫君という感じだね。あまり殿下には近づけたくない種類の人間かな。シオン殿下もあまり好きなタイプじゃないんじゃないかな」

ミーアへの評価（後）

「ミーア姫？　ああ、帝国の叡智の名に恥じぬ素晴らしい英才だね。シオン殿下でさえ及ばない器の大きさと視野の広さは見事だ。殿下も友誼を結ぶことで、きっと得るものがたくさんあると思うよ」

○アベル・レムノ（１２歳）

レムノ王国の第二王子。もともと優しい少年だったが、剣の腕が重視されるレムノ王国において、兄に負け続け、さらにはシオン王子の剣の才能を見せつけられて諦念にとらわれる。前の時間軸では希代のプレイボーイとして知られ、女性の恨みを買うこともしばしばだった。

ミーアへの評価（前）
「ああ……ミーア姫、ね。んー、ボクはどんな女の子でも大歓迎なんだけど、彼女はいろいろと難しそうかなぁ。いや、もちろんあちらがいいなら、大歓迎だよ！　ははは」

ミーアへの評価（後）
「ミーア姫……。彼女は……素晴らしい少女だ。勇敢で、知性にあふれていて、そして、美しい。彼女のダンスパートナーを務められたことは、ボクの誇りとなるだろう。ボクも頑張らなければな。彼女の、信に応えるためにも」

○ティオーナ・ルドルフォン（12歳）
ティアムーン帝国の貴族令嬢。帝国の辺境域を治めるルドルフォン辺土伯の長女。実家の領地は広めながらも未開拓地が多く、田舎者と蔑まれている。それを見返すために勉学のみならず、剣術も習得している。
ルドルフォン伯爵家は、比較的、領民に近しい立ち位置のため、彼女本人も民衆の苦しみには敏感。それゆえに帝国革命時には革命軍を主導し、帝国の聖女とあがめられる。

※辺土伯・辺土貴族について
基本的にティアムーン帝国では、帝都を中心とした地域に中央貴族が、新しく編入された外縁部を辺土貴族が治めている。江戸時代でいうところの外様大名のようなものである。
爵位の頭に辺土とつく場合、格が一つないし二つは劣るものと見られており、新参者、田舎者として馬鹿にされるのが一般的である。

ミーアへの評価（前）

「民を苦しめるなんて、絶対に許せません……」

ミーアへの評価（後）
「お優しい方です。私のようなものにまで、目をかけていただけるなんて……。お借りしたハンカチは洗ってお返ししますね」

○ラフィーナ・オルカ・ヴェールガ（１４）中学二年生相当、春先が誕生日！
ヴェールガ公国の公爵令嬢。セントノエル学園の生徒会長にして、実質的な支配者。帝国革命時には、シオンとティオーナを裏からサポートする。ヴェールガ公国は周辺国一帯に信奉される宗教の聖地であり、ラフィーナは、祭司としての役割を務める父とともに各種の儀式にも顔を出すアイドル的な人気を誇っている。公正を重んじており、必要に応じて容赦なく他者をさばける人。張りぼて聖女のミーアとは違う、本物の聖女様。

ミーアへの評価（前）
「ミーアさん？　……あら？　そんな人、セントノエルにいたかしら？」（ニッコリ！）

ミーアへの評価（後）
「ミーアさん？　私のお友達よ。とても親しくさせてもらってるわ」（優しい笑みで）

○リオラ・ルールー（１１）
ティオーナ・ルドルフォンのメイド。森林の少数民族ルールー族の出身。いまだ公用語に不慣れで、たどたどしいしゃべり方をする。弓の名手で身体能力は抜群。また、肉焼きが得意でもある。ティオ

ーナにはよく懐いており、ティオーナに優しくしてくれたミーアにも好感を抱いているが……。

ミーアへの評価（前）
「……殺す、です」
※伏線

ミーアへの評価（後）
「……とてもいい人。ティオーナさまに、優しくしてくれたから、好き、です」

※1　年齢表記は、今時間軸のものとなっています。
※2　ミーアと同学年の人たちは中学一年生相当とお考え下さい。セントノエル学園は中高一貫校扱い。ちょっと幼いかとも思うのですが、学生のうちに結婚することも珍しくない世界観なので。
※3　リオラの前評価がすこぶるヒドイのは、後々本編にて。

第三十八話　メイド暗躍　その1

さて、時間は少しさかのぼる。
「アンヌ、手を出しなさい」
ドレスを着替え直し、パーティーに出かける準備がすべて終わったところで、ミーアはアンヌに言った。
その手に持ったヴェールガ公国の金貨をアンヌに手渡し、
「自由にお使いなさい」
ミーアは言った。
ミーアは、基本的に節約思考だ。なにしろ、無駄遣いが即ギロチンにつながりかねないのだ。それに、なにを買っても革命軍に持って行かれるかもしれないと思えば、購買意欲も失せるというものである。
しかし、唯一の例外が腹心アンヌに渡す分のお金だった。
前の時間軸でのことはもちろん、こうして家族と離れてついてきてくれた忠臣に対して、できる限り恩義を返そうと考えているミーアである。
「わたくしがパーティーに行っている間は休暇といたしますわ。町に出かけても構いませんし、寮にいていただいてもよろしいですわ」
まだ、こちらに来てから三日に過ぎないのだが、それでも新しい環境で疲れもあるだろう。今だって、急ピッチで着付けをしてくれたのだ。
少しの時間とはいえ、休んでリフレッシュしてもらえればいい、と、アンヌを労うつもりで、ミーアは言った……つもりだったのだが……。
「かしこまりました。ミーア様。必ずやご期待にお応えいたします」
なぜか、気合いの入ったアンヌの返事に、首を傾げるのだった。

専属メイドになって以来、アンヌの生活は激変していた。
実家にほとんど送ってしまっているとはいえ、金銭的に困るという事は今ではまるでない。それに、妹のエリスも皇女殿下お抱えの芸術家になっているので、実家も比較的裕福な生活を送れている。
それゆえにアンヌは、ミーアから渡された金貨を「自由に使っていいお小遣い」などとは思わなかった。
――ミーア様に自由裁量（じゆうさいりょう）を認められたんだ。ご期待にお応えしないといけない！
金貨と時間を預けられ、「なにかをなせ」と使命を与えられたと、アンヌは考えたのだ。
――どうすれば、ミーアさまのためになれるだろう？
なにを期待されているのか……、じっくりと考えた末、アンヌが出した結論は、奇しくもミーアがしようとしていたことと同じだった。
そう、人脈作りである。
もちろん、アンヌには学園に通う貴族の子弟とコネを築く方法はない。けれど、学園で働く庭師や料理人、寮の管理人などの平民であれば話は別だ。
城勤めをしていて、アンヌは学んだことがあったのだ。
それは、城の日常を支えているのは多くの使用人たちであるということ。
彼らの力は決して小さくはない。
――ミーアさまの恋を応援するためにも、学園生活を快適に過ごしていただくためにも、いろいろなところに人脈を作っておかないとだめよね……。
金貨を握りしめて、アンヌは街に繰り出した。
手荒れが酷そうな炊事場の人たちには上質な馬の油を、庭周りの職人には栄養価が高い食べ物を、それぞれ喜ばれそうなものを手配していく。
手元に物が有り余っている貴族とは違い、平民はちょっとしたプ

レゼントでも喜んでくれるものなのだ。活用しない手はない。
すべてを終えた時、渡された金貨は半分ほどになっていた。
「こんな感じかな……」
街を歩いていたアンヌは、その途中、一軒の服屋の前で立ちどまった。
「わぁ、綺麗……」
そこに飾られていたのは、一着のドレスだった。水色を基調としたドレスは、清楚さと可憐さを兼ね備えた、春の野に咲く花のようなデザインだった。
「んー、素敵なドレスだけど、ミーアさまには少しだけサイズが大きいかしら？」
値段は、ちょうどアンヌが今持っているのと同じだった。少しだけ迷ったけれど、アンヌはそのまま店の前を通りすぎた。

学園に戻ると、アンヌは小さく息を吐いた。
「パーティーが終わるまで、あと二時間ぐらいか」
少し部屋で休もうかと思った彼女だったが、中庭に目をやった時、
「あれ？」
ある少女を見かけた。
きょろきょろ、あたりを見回しては、泣きそうな顔をしている少女。腰のあたりまで伸ばした銀髪と、健康的な小麦色の肌。
それはティアムーン帝国の少数民族、ルールー族の特徴だった。
けれど、それ以上に、アンヌは少女に見覚えがあった。
「あなたは……、確か、ティオーナさまの？」
辺土伯（へんど）ルドルフォン家の令嬢、ティオーナ付きメイド。
ミーアたちが、セントノエル学園に来た初日、貴族の娘たちにからまれていた少女だ。
「どうかしたんですか？」
アンヌが話しかけると、少女は困り顔で首を振り……。
「お願い、ティオーナさま、大変、です。助けて、お願い」

片言の共通語で言った。

第三十八話　メイド暗躍　その１（後書き）

レビューを書いていただき、ありがとうございました。
感想と違ってレスがつけられないので、こちらにて一言お礼をば……。

第三十九話　メイド暗躍　その2

リオラ・ルールー。
ティアムーン帝国森林地域に住む少数民族、ルール―族出身。
メイドとしてのスキルはともかく、未だに大陸共通語が苦手な彼女は、本来、セントノエル学園に連れてこられるような人材ではない。
にもかかわらず彼女が選ばれたのは、ほかに人がいないという、極めて消極的な理由だった。
ただでさえ、金銭的に余裕がないルドルフォン家としては、娘をセントノエルに送るだけですでに、かなりの無理をしている。
ヴェールガ公爵令嬢ラフィーナの方針により、学園の門戸は大貴族や名門貴族のみならず、貧乏貴族や弱小貴族にも開かれている。それゆえに入学自体は可能だ。けれど、金銭的な補助があるわけではない。
給金の高いベテランメイドをティオーナに随伴（ずいはん）させるわけにはいかなかったのだ。
加えてもう一つ、彼女が選ばれた理由があった。
それは……、
「リオラ、無茶しないで」
頭の上、窓から顔を出したティオーナが言った。
「ティオーナさまこそ、危ない、です。あまり、体を出さないで」
そう言って、リオラは足元に目をやった。
高い……、落ちたら、たぶん命はないだろう。
ティオーナたちが閉じ込められたのは、セントノエル学園校舎の中で、もっとも高い場所だった。
星見の教室と呼ばれるその場所は、校舎の北に立つ塔の最上階に存在している。出入り口は一つしかなく、そこを閉じられてしまえば

出ることはできない。
一応、窓はあるけれど、そこから逃げ出すなんて無茶をするはずがない、と……、二人を閉じ込めた者たちは判断したのだろう。
けれど、彼らにとって予想外だったのは、リオラの存在だった。
森に住むルール―族は、非常に身体能力の高い人々だった。
幼いころから森に住む獲物を追いかけ、木登りも楽々こなす彼らにとって、高いところは苦にならない。
するすると壁伝いに降りていき、ほどなく地上についたリオラは、一番に目についたアンヌに声をかけたのだ。

「ティオーナさま、閉じ込められて、ます」
「え……？」
リオラの言葉を聞いて、アンヌは耳を疑った。
「閉じ込められてるって……、いったいだれに？」
それに、なんのために？
「わからない、です。私だけ、逃げること、できました」
上目づかいにアンヌを見つめて、リオラは言った。
「お願い、です。ティオーナさま、助けてください。お願い、です」
「わかりました。力をお貸しします」
戸惑いつつも、アンヌは即答した。そして、その行動に、少なからず驚いた。
――私、ぜんぜん迷わないで返事しちゃった……。
以前までの自分では考えられもしない行動、けれど、アンヌは自分がなぜそうしたのかがよくわかっていた。
――ミーアさまから自由裁量を認められているんだ、私はミーアさまの恥にならないように行動しなきゃならないんだ。
きっと、優しくて正義感にあふれたミーアならばそうするに違いない、そんな確信が一切の迷いも、躊躇いも許さないのだ。
ちなみに、その確信は、実は間違ってはいない。
確かにミーアがこの場にいたならばティオーナを助けるために行

動しただろう。
なぜなら、ミーアは優しくて正義感にあふれているから……、ということでは、もちろんない。
ただ単に、小心者であるからだ。
ここで無視を決め込んだら、ギロチンルートに直行かもしれないし、それ以上に、忠臣アンヌの期待に満ちた視線を向けられたりしたら、もうどうしようもない。
ミーアは心の中で血の涙を流しつつも、助けに行ったことだろう。
ここに、主従の行動選択は完全なる一致を見たのである。
その心のうちは完全にすれ違っていたのだけれども……。

リオラに連れられて、アンヌは、学園の校舎に向かった。
広い校舎内は、しんと静まり返っていた。授業が行われていない時の校舎というのは、意外と人気のない場所だ。
まして今は、生徒はすべてパーティーの方に行っているし、使用人たちは寮で待機しているか、アンヌと同じように休暇を与えられ街に出ている。
普段以上に人がいないこの場所は、なにか悪だくみを行うには良い場所なのだろう。
北塔の長い螺旋階段を上り、上り、ようやくたどり着いた細い廊下。薄暗い廊下の奥に、かろうじて人影が確認できた。
「あれは……？」
「しっ！　気を付けて、です。見はり、です」
「見はり……？」
暗さに目が慣れてくると、アンヌにもはっきりと見えてきた。
星見の教室の前には、二人の男が立っていたのだ。
この距離では、彼らが何者かはわからないけれど、一見した感じでは、屈強な印象を受ける。
使用人の中には主人を護衛するための武勇に優れた者もいると聞くけど、彼らももしかしたらそうなのかもしれない。

「どうしよう……？」
アンヌには、残念ながら武術の心得はない。彼らが普通の男であったとしても、殴り倒して先を進むなどと言うことは不可能だった。
では、説得が可能かと言われると、それもまた怪しい。
「……どうしよう、どうすれば……」
「おや？　どうかしましたか？　お嬢さん方」
その時、ふいに、背後から声をかけられた。
びっくりして、飛び上がった二人。あわてて振り返ると、そこに立っていたのは……、
「あなたは……」
「なにか、お困りのことでも？」
「たしか、シオン殿下の……？」
親しげな笑みを浮かべたキースウッドだった。

第四十話　メイド暗躍　その3

「たしか、キースウッドさん、ですよね？」
「覚えていていただけたとは、光栄の至り。ミーア皇女殿下のところの、アンヌさん」
キースウッドはニコニコとした笑いを崩さないまま、リオラの方に目を向けた。
「で、そちらのお嬢さんは帝国の？」
「あ、はい、そうです。えっと、ルドルフォン辺土伯令嬢のメイドの……」
「リオラ・ルール―です。お願い、です、ティオーナさまを、助けて」
事情を聞いた後のキースウッドは、腕組みしてつぶやく。
「ふーん、見張りが二人か。中には何人？」
「わからない、です。でも、私たちを閉じ込めたのは、四人。男女、でした」
「ってことは、君が逃げたことに気がついて中にも見張りが付いたか、男二人残してこの場を離れたか、か。まぁ、お嬢さん方が困ってるのを見て、放っておいたらシオン殿下に怒られるからね。協力させてもらおうかな」
「本当、ですか？　お願い、します！」
「でも、どうするんですか？」
おびき寄せて、その隙に……、とか、てっきりなにか作戦があるのだと思っていたアンヌだったのだが……。
「なに、麗しの貴族のご令嬢を、悪者の手から取り戻す。それだけさ」
気軽な口調でそう言うと、キースウッドは獰猛な笑みを浮かべた。
それからの出来事は、あまりに早くて、アンヌはただ呆然と見て

いることしかできなかった。
音もなく見張りに駆けよったキースウッドは手近な一人の腹に思い切り膝を叩きこんだのだ。そうして、驚いて動けなかったもう一人の腕をつかみ、そのまま床に投げ落す。
まばたき一つする間の出来事だった。
「あの……、男性の使用人の方は、みんなそんなこと、できるんですか？」
呆然とそう問いかけたアンヌに、キースウッドは苦笑いを浮かべて肩をすくめる。
「まぁ、俺の場合には色々事情があってね。なにせ、仕えているのが正義感の塊みたいなお方なもので」
そうこうしているうちに、リオラがドアへと駆けより、急いで鍵を開ける。
「ティオーナさま！　大丈夫、です！？」
「リオラ？　無事だったの？」
中から出てきたティオーナには、幸いなことに怪我をした様子はなかった。
「ご無事で何よりでした。ルドルフォンさま」
「あなたは……、ミーアさまの？」

「部屋に戻ったら、ドレスがなかったの」
ティオーナによれば、彼女とリオラが部屋にもどった時、すでに部屋の中は荒らされ、置き手紙が残されていたのだという。
そこには、ドレスを返してほしくば、校舎の北塔に来い、とのメッセージが書かれていた。
「そんな……、いったい誰がこんなことを……」
「たぶん、君やミーア殿下の知り合いじゃない？」
「？　どういう意味ですか？」
「ほら、これ。外の見張りが持ってたよ」
キースウッドの手にあったのは、見まごう事なき、ティアムーン

帝国の紋章が入ったハンカチだった。
「まさか……」
「ああ、たぶん、あいつら、帝国貴族の使いの者だよ」
それは、アンヌにとっては予想外のことだった。てっきり、先日ティオーナたちにからんでいた貴族の仕業だと思いこんでいたのだが。
「帝国貴族の恥をさらすから、パーティーには行くなって、言われた」
怒るでもなく、ほんの少し寂しそうに……、ティオーナは抱きかかえていたものを差し出した。
それは、ボロボロに切り裂かれたドレスだった。
「……ひどい」
「にしても、ドレスのためとはいえ、無茶では？　女性だけでこんなところに来るなんて」
ほんの少し、瞳を細めて、キースウッドが苦言を呈した。対して、ティオーナは微かに苦笑を浮かべて首を振る。
「当家にはドレスを何着も用意するほど、備えがないから」
そうして、あきらめたようにため息を吐く。
「だから、リオラ、無茶をしなくても……、そんなに焦る必要なんかなかったのよ」
「ティオーナさま……」
ティオーナを見つめるリオラは、小さく唇をかみしめていた。
アンヌには、その気持ちがよくわかった。
自分も同じ立場だったら……、閉じ込められたのがミーアだったとしたら、きっと口惜しくてたまらなかっただろう。
そっと握りしめていた手の平を開く。
そこには、ミーアから託されたお金が入っていた。
「リオラさんは、街のお店に行ってドレスを買ってきてください。お金はこれで……」
躊躇（ためら）いなく、リオラにお金を渡す。

「これ、は……？」
「ミーアさまからお預かりしていたものです」
ミーアなら、きっと同じようにするだろう……、アンヌの中の確信は揺らぐことはない。
「その間に、ティオーナさま、お化粧を直しましょう。目元のメイクが、涙で崩れてしまっています」
そうして動き出そうとしたアンヌを、ふいにキースウッドが呼び止めた。
「いいのかい？　ミーア殿下のメイドである君が、協力しても？」
「？　どういう意味ですか？」
「ミーア殿下は帝国貴族の頂点に君臨する人。ティオーナ伯爵令嬢を閉じ込めたのが同じ帝国貴族なら、それは、ミーア殿下の意向という可能性だって考えられるだろう？」
「……へ？」

第四十一話　メイド暗躍　その４

少しだけ、前の時間軸の話をしよう。
ティオーナの監禁事件は、前の時間軸においても起きていた。
パーティー当日、監禁されたティオーナは従者たちの活躍によって助け出され、遅れて会場に到着。
その後、シオン王子にダンスパートナーとして誘いを受け、完璧なダンスを披露して、周囲の生徒たちから一目置かれるようになるのだ。
そして、大きな違いとして、救出の場所にアンヌはいなかった。
ミーアが連れて来ていたメイドは、中央貴族の三女だった。一応、ミーアの言うことは聞くものの、決して働き者とは言えず、この時も仲間同士でお茶会などを開いていたのだ。
だから、ティオーナを助け出したのは、キースウッドとメイドのリオラの二人だけだった。
そして切り刻まれたドレスをなんとかするべく、彼らが頼ったのは学園の支配者、ラフィーナ公爵令嬢だった。
ここに、ティアムーン帝国における革命の主導者ティオーナと、協力者シオン王子、さらに、その後ろ盾となる聖女ラフィーナの三人の強力なつながりが生まれたのだ。
そして、その敵役として疑いをかけられた者こそ、帝国貴族の頂点に君臨するミーアだった。
自らに疑惑がかけられたと知ったミーアは、けれど、その疑いを解くことはしなかった。
たかだか辺境貴族の娘が、どうなろうが、自分に疑いがかけられようが、そんなもの取るに足らないことと、気にもかけなかったのだ。
貴族が平民を虐げるのは当然のこと、同じように中央の門閥貴族

が辺境の田舎貴族を虐げることは、とがめられることではないと彼女は思っていたのだ。
帝国革命の火種が、いったいいつ生まれたのか……、それを断定することは難しい。
飢饉が原因と言う者もいれば、大貴族の暴虐や皇帝の無能を挙げる者もいる。
けれど、帝国皇女ミーアがギロチンにかけられることがいつ確定したのかと言えば、まさにこの事件が発端ということができるだろう。
強大な歴史の流れは、今まさにミーアをギロチンへと押し流そうとしていた。
そんな、破滅へと怒涛の如く向かいつつある歴史の激流に、今、アンヌが敢然（かんぜん）と立ちふさがる。
「ミーアさまが？　犯人？」
つぶやいたアンヌは、次の瞬間、
「そんなこと、あるわけないじゃないですか」
笑いだした。
あまりにありえない話だったので、怒りより先に、笑いが出てしまったのだ。
「キースウッドさん、本気で言ってるんですか？」
――へー、一片の疑いも持たないのか……。
そのアンヌの反応に、キースウッドは感心する。
――きちんと側近の心を掌握しているということか。
実のところキースウッドとしても、ミーアが犯人だなどとは思っていなかった。それでも念のため、アンヌの反応を見てみようと言ってみたことだったが……。
「あ、あの、キースウッドさん、私もミーア姫殿下は、そんなこと、しないと思います」
被害者であるティオーナも、横から口を挟んできた。
「なるほど、まぁ、被害者ご本人がそう言うんなら、それで納得し

ますよ」
肩をすくめて見せる。
そんな彼に、アンヌがおずおずと話しかけた。
「あの、キースウッドさん、もしかしたら、あなたの王国では、上に立つ者が下々の者の責任を負う、という考え方があるのかもしれません。そう言う意味では、帝国貴族のしたことは、ミーアさまの責任になってしまうのかもしれません」
その理屈は奇しくも前の時間軸において、ラフィーナがミーアを軽蔑したのと同じ理屈だった。
ラフィーナはミーアが直接的な犯人であるとは考えていなかった。ただ、弱者への横暴を、咎めるべき立場のミーアが黙認したことに失望したのだ。
統治者としての資格なし。
その烙印（らくいん）を押されたからこそ、ミーアはついにラフィーナの友人となり得なかったのだ。
「だから、恐れ多いことながら、今だけはこの私がミーアさまの腕の代わりに、その責任を取りたいと思います。ティオーナさまを必ず、パーティー会場に届けて見せます！」
気合いの入った“ミーアの腕代理”の発言である。
それは、ミーア本人から見ると腕が勝手に動いて、憎き仇を助けようとしている怪奇（ホラー）現象以外の何物でもない。
「ティオーナさま、どうぞ、そちらにおかけください。今、メイクを直します」
アンヌの手際は神速を極めた。
なにしろ、ミーアで同じことをやった後である。
……考えようによっては、自らの主人を練習台にしたと言えなくもないが……。
――もしかしたら、ミーアさま、こういうことを予期して、自分を練習台に？　って、そんなことないか。
無論、そんなことはない。

そんなことはありえない、と、ミーアに毒されたアンヌであっても、よく考えればわかることである。
けれど、あるいはミーアならば……、と思うほどにはアンヌは毒されているのだ。
――ミーアさまの信頼に応えるためにも頑張らないと……。
気合いの入った『ミーアの腕』は、その剛腕ぶりをいかんなく発揮して歴史の流れを力づくで捻じ曲げていった。

第四十二話　メイド暗躍　顛末

綺麗にドレスアップしたティオーナに、キースウッドは一枚のメモ用紙を手渡した。
「申し訳ありません、ルドルフォン嬢。もしよろしければ、この手紙をシオン殿下にお渡しいただけますか？」
「？　はい、わかりました」
小さくうなずくと、ティオーナは会場に向かった。

ダンス会場に遅れて現れたティオーナ。
けれど、誰も彼女の存在を気にするものはいなかった。なぜなら、ちょうど今まさに、ミーアとシオンのダンスが終わったところだったからだ。
その見事なダンスは、会場中の視線を釘付けにしており、ティオーナは注目を集めることなく会場に入ることができたのだ。
ダンスが終わり、複数の女子に囲まれているシオン。そこに向かうのは、多少の勇気を必要としたが……。
――せっかく、みんながここまで連れてきてくれたんだから。
覚悟を決めて、ティオーナはシオンに歩み寄った。
「あの……」
「おや、君は、確か……」
「ティオーナ・ルドルフォンと申します、シオン殿下。あの、キースウッドさんから、これを……」
「うん？　ちょっと失礼」
周りに集まっていた女子たちを遠ざけ、シオンはメモに目を通した。そこには事件の概要と犯人のことが書かれていた。
さらには、念のためと前置きした上で、ミーアが関与している可能性にも言及されていた。

――キースウッドのやつ、慎重にもほどがあるな。
シオンは思わず苦笑した。
キースウッドの仕事は、シオンの気づかない可能性を指摘して、その視野を広げることだ。主たるシオンが好意的な人物に対しては、余計に厳しい視線を向けなければならない。
恐らく、ミーアの関与を本気で疑っているわけではないのだろう。
――というか、あいつだって好きなタイプだろうに。
にもかかわらず、私情を挟まず、ただ、シオンが考察する材料を提供しようとする姿勢は、優秀というよりは苦労人という感じだった。
――それにしても……。
改めて、シオンは先ほどのミーアの態度を思い出していた。
恐らく、ミーアは先ほどのダンスの最中に、ティオーナの姿を見つけていたのだ。
ひと目見て、彼女になにがあったのか、大体のところを察した彼女は、せめてこのパーティーを楽しんでもらえるよう、ティオーナをシオンに託したのだ。
普通ならばミーア自身がケアに乗り出しそうなものだが、ダンスの場合、パートナーとなる男子になんとかしてもらうのが一番手っ取り早い。
――俺に相応しい……、つまり、俺の力を必要としている者がいる、ということか。
そんな風に助力を乞われてしまえば、シオンとしてはやはり断れない。
――しかし、相応しいというのは、少し意味合いが違うんじゃないか？
シオンは、先ほどの言葉を思い出し、小さく笑みを浮かべた。
完璧に見えるミーアの、ちょっとした弱点を見つけた気になって、ほんの少し微笑ましい気持ちになったのだ。
「あの、シオン王子？」

「ん？　ああ、いや、失礼。ルドルフォン嬢、俺と一曲踊ってもらえるだろうか？」
かくて、ダンスパーティーの夜は明けて行く。

翌日……。
ミーアは、気持ちの良い目覚めを経験していた。
昨夜は、たっぷりダンスで体力を使い、程よく汗をかいた後に、ゆっくり入浴。
それから、心地よい疲労感に促されるままふかふかのベッドに入り、そのまま朝までぐっすりと眠ることができた。
まさに理想的な睡眠。疲れも取れて、まさに爽快な朝である。
鼻歌など口ずさみつつ、今日の朝食は何かしら……？　などとのんきに食堂にやってきたミーア。
席に座り、アンヌが食事の手配に行くのを見送っていたところで……、
――あら？
そのアンヌに近づく者の姿に気が付いた。精悍（せいかん）な顔をした青年だった。ぴちっとした執事服に身を包んでいるところを見ると、どこかの生徒の連れてきた使用人なのだろう。立ち居振る舞いは、どこか優雅で気品があり、魅力的な人物と言えた。
それが、ただのイケメンだったら、ミーアも何も言わなかっただろう。
アンヌにいい人ができたのかしら？　などと、むしろ応援すらしたかもしれない。
けれど……、それが、宿敵、シオン王子の使用人であるならば、話は別だ。
しかも、彼の隣にいる少女が、さらに問題だった。帝国少数民族の特徴を有した少女は、紛れもなく、ティオーナ・ルドルフォンの使用人、リオラだった。
前の時間軸、恨みのこもった目で矢を向けられたのは、今でもミ

ーアの脳裏に焼き付いて離れない経験だった。
――ど、ど、どうして、アンヌがあいつらと親しげに話しているんですのっ！？

ミーアは、戻ってきたアンヌに事情を尋ねた。
「あとで、お話するつもりだったんですが……」
遠慮がちにアンヌの報告が始まる。話をすべて聞き終えた時……、
「……」
ミーアは固まっていた。その小さな体がゆっくりと傾いていき、傾いていき……。
「きゃあっ！　ミーア様っ！」
ミーアはそのまま真横に倒れた。
その顔色は、月光のように青白くなっていた。

第四十三話　ミーア姫、冴え渡る！

赤く揺れる炎、燃え上がる帝都……、人々の憎悪の声、声、声。
そして、ゴロリと転がる自分の生首……。
「ひいゃあああああああああああ！」
久しぶりに見た自らが処刑される夢に、ミーアは悲鳴をあげて飛び起きた。
そこは、学園の医務室のベッドの上だった。冷や汗まみれの体、すぐにお風呂に入りたいところだったが、今はそれどころではない。
かたわらに控え、心配そうな顔をしているアンヌにミーアはてきぱきと指示を飛ばした。

まずミーアが行ったことは、事件に直接関与した従者四人を帝国本国に強制送還することだった。
すぐさま、その抗議に訪れた従者の主の生徒たちを、ミーアは一瞥（べつ）した。
――正念場、ですわね。
ここで、間違えると自らが危機に陥るであろうことを、ミーアはきちんと理解していた。
いや、正確に言えば知っていた。
医務室で目をさましたミーアは、アンヌを送り出してから、すぐに持って来ていた血まみれの日記帳を確認した。
その最初の方のページには、確かに、ティオーナの監禁事件のことが書いてあった。
なんのことか、書いていた時にはまったくわからなかったのだが、まさか、裏でこんな事件が起きていたとは思わなかった。
処分を曖昧（あいまい）にすれば、恐らくはラフィーナの怒りを買う。シオン王子やティオーナも、あまり良い印象は持たないだろう。

だから、きっちりと断罪する必要はあるのだが、問題は犯人である従者の主たちだった。
関与を否定している彼らだったが、ミーアから見ると到底潔白とは言えない。せいぜいが灰色と言ったところだ。
けれど、絶対に関係しているかと言われると、そうとも言い切れないところがある。
普通、従者が平民である場合、命令もなく、貴族の娘を監禁するなどあり得ないことだ。けれど、犯人の従者たちは、全員、貴族の家の出だった。
家督（かとく）を継ぐことはないが、中央貴族の家で、人々から敬われて育ってきた者たち。相応に、プライドを持っていたはずだ。
――帝国の印の入った持ち物を身につけていたところからも、そんな臭いがしますわね。
正直、ミーアにしてみれば、身分がバレるようなものを身につけて悪いことするな！　と言ってやりたいところではあるのだが……。
ともかく、そんなプライドの高い彼らが、自分たちを差し置いて「田舎貴族」であるティオーナが、歓迎パーティーに出席することを快く思わなかったとしても不思議ではない。
主たちとは違って、従者の側には動機があるのだ。
「納得いきません、姫殿下。どうして、われわれの従者が……、たかが田舎貴族の娘を監禁しただけで……」
それは帝国の価値観に則った抗議だった。
中央の門閥貴族は、平民はもちろん地方貴族に対しても、どれだけ無礼を働いても許される。
――それが、どれほど人々の憎悪を買うか、わからないのですわね。
ミーアの胸にあるのは怒りではなく、むしろ憐れみだった。なにしろ、ミーア自身、地下牢に入れられるまではわからなかったことだ。
その状況に追い込まれなければ決して気づけないこと、けれど、

それに気づいた時には既に手遅れで……。
――他者を虐げれば、自らもまた、その種を刈り取るのだと言ってもこの人たちには伝わらないのでしょうね。
ため息混じりにミーアは首を振った。
「なるほど……、確かにそのとおり。あなたたちの言うことは間違ってはいないのかもしれませんわ。もしここが帝国であったならば……、ですけど」
「え？」
「あなたたちは、この学園の支配者が誰なのか、考える必要がありますわ」
ミーアは一計を案じた。
ミーア自身の価値観に基づいて断罪したとなれば、彼らの不満はミーアに向かう。それを避けるために、別の人間に責任を押し付けたのだ。
すなわち、この学園の支配者、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガに。
「ラフィーナ様は高潔な方。あの方が、学園の大切な生徒に対するこのような狼藉を見過ごされるとお思い？」
一度、言葉を切って、ミーアは瞳を閉じた。
「それに、わたくしもあまり、その考え方、好きではありませんわ。よってたかって力の無いものを虐げるなど、とても高貴な者のすることではございませんわ」
ほんの少しだけ本音が混じる。
革命軍によってたかってイジメられたミーアとしては、彼らと同じことをする気にはならなかった。
口汚く罵られればつらいし、暴力をふるわれれば痛い。
するのも、されるのも、ミーアはイヤだった。
「本来であれば、あなたたちにも責任を取ってこの学園を辞めていただかなければならない所だとは思いますが……、それはさすがに可哀想とわたくしは思っておりますの」

「ミーア様……」
「今回のこと、わたくしに免じてラフィーナ様には納得していただこうと思っておりますわ」
きっちり恩も売っておく。
これで彼らは、ミーアに罰せられたにもかかわらず、ミーアに恩義を感じざるを得ない。
――これで、なんとかおさまってくれればいいのですけど。
どっと疲れを感じながらも、ミーアはラフィーナへの面会を求めた。

第四十四話　はじめてのお友達！

「あの、ラフィーナ様、少しよろしいでしょうか？」
昼休み、緊張にコチコチに固まりながら、ミーアはラフィーナの教室を訪ねた。
「あら、ミーアさん、なにか御用かしら？」
顔を上げたラフィーナはいつもと変わらない涼しげな笑みを浮かべていた。が、それでミーアが安心することはない。
聖女と謳われるラフィーナは、基本的に笑顔なのだ。顔のデフォルトが笑顔なのだ。笑いながらミーアをザックリ切り捨てることだってあり得る。
油断はできない。
「折り入ってお話があるのですけれど……」
恐る恐る、ミーアは上目遣いにラフィーナを見つめた。
「そう。ならば、そうね、ちょうどお昼を食べようと思っていたところだから、ご一緒にいかが？」
ラフィーナは、普段と同じおだやかな声で、ミーアを自室へと案内した。
「ああ、そうだ。ご挨拶の品をありがとう、職員の皆が喜んでいたわ」
ぽん、と手を打って、嬉しそうに話をするラフィーナ。
アンヌから報告を受けていなかったミーアには、なにがなにやら、と言ったところだったが、とりあえず、ラフィーナの機嫌が良さそうなことに安堵して、笑みを浮かべる。
――よかった、これならば……、なんとかなりそうですわ！
席につき、机の上に二人分の昼食が並んだところで、おもむろに、ミーアは頭を下げた。
「このたびのこと、申し訳ありませんでしたわ」

ギロチンがかかっているので、躊躇は一切なかった。
「頭をあげてください、ミーア姫。別にあなたがしたことではないのでしょう？」
「いえ、帝国貴族のしたことは、皇女たるわたくしの責任ですわ」
ミーアは言った。できるだけ健気に見えるように。
実際には、はい、わたくしの預かり知らぬところで行われたことですわ！　などと主張したいところだが、ここは我慢だ。
「それで、処分はどのように？」
「はい、直接関与した従者は本国へ帰還させましたわ。主である生徒たちは、関与がはっきりいたしませんので、謹慎といたしました」
「それは、少し処分が甘いのではないかしら？」
すぅっとラフィーナは瞳を細める。
――ひぃいっ！
その冷たい視線に、ミーアは震え上がった。
やはり、主の方にももっと重い処分を下すべきだったかと後悔するが、もはや後の祭りだ。
なんとか、彼らを軽い処分で済ませたことの、正当性を訴えなければならない。
「ミーア姫、あなたは、ずいぶんと慈悲深い方のようですね」
――どどど、どうしましょう、どうすればっ！？
さながら、のっそりと起き上がったライオンにらまれた猫のように、ミーアは懸命に逃げ道を探す。
けれど、すでに知恵熱気味の頭では、なにも考えることができなくって……。
そんな時、ふと、目の前に置かれたスープが目に飛び込んできた。黄色い野菜の入ったスープ、それは、懐かしい黄月トマトの入ったスープだった。
ふと、帝国の料理長の顔が思い浮かんだ。
ミーアが嫌っていた黄月トマトを、工夫して料理してくれた、あの頑固な男の姿が……。

「……黄月トマトをまずいと言って残すことが罪深いことだと気づくのは、食べるものがなくなった後のこと……」
転生した後に食べた黄月トマトの味を思い出す。
あんなにも丁寧に作ってもらっていた料理を残していたのだと思うと、いかにかつての自分がひどいことをしていたのかがわかる。
――って、現実逃避してますわ！　いまはそれどころではなくって……。
「つまり、悪いことをするのは、それが悪いことだと知らないからだ、ということかしら？」
「……へ？」
「さしたる被害もなかったから、被害者に対する配慮も容易。なるほど、それを見越して、腹心のアンヌさんを送りこんだのですね……」
先ほどとは打って変わって、ラフィーナはやわらかな笑みを浮かべた。
罰には二つの側面がある。
一つは被害者の心を慰めるため。もう一つは加害者に反省を促すため。
そして、今回の場合、アンヌの活躍により被害は軽微に抑えられているのだ。
「となれば、加害者の側に反省を促して、それで成長を期待する……確かに、その方が学び舎に相応しいやり方なのかもしれませんね」
「まさに、その通りですわ！」
ミーアは……乗っかった。よくわからないが、ともかくこの場をやり過ごすことができれば、この際なんでも良い。
「ミーアさん」
改めて、ラフィーナはミーアの手を取った。
「悪人さえも更生を促そうとするその慈悲深さは、私にはないものです。さすがは帝国の叡智、感服いたしました」
「こっ、光栄ですわ」

そんなに感心されると、さすがに居心地が悪い。ミーアは若干引きつった笑みを浮かべる。
「それで……、その、ミーアさん、えっと……」
ふいに、ラフィーナの歯切れが悪くなった。
――ま、まだなにかありますの？
思わず逃げ出したくなるミーアに、ラフィーナは思わぬことを告げた。
「あの、私とお友だちになってくれませんか？」
「へ……？」
この日、ミーアはラフィーナ公爵令嬢と友だちになった。

ラフィーナと別れて自室に帰ってから、ミーアは改めてアンヌを心からねぎらった。
恐縮するアンヌを無理やり連れて街に繰り出したミーアは、褒美と称して、楽しくスイーツめぐりをするのだが……。
それはまた別の話である。

第四十五話　授業開始！

新入生歓迎ダンスパーティーから二日後のこと。
もろもろのオリエンテーションが終わり、いよいよ本格的な授業が始まった。
新生活、はじめて体験する授業に、ちょっぴり不安げなクラスメイトたちを横目に、ミーアは余裕の笑みを浮かべていた。
それも当然のこと、なにしろミーアとしてはすでに一度、経験したことである。
しかも、勉強内容についても、遥か昔に学んだところ。
自分はすでにその応用まで学んでいる。
――ふふん、余裕ですわ！
などと、調子に乗った挙句、
「わからないところがあったら、わたくしが教えて差し上げますわ！」
などと、一部の生徒に吹聴（ふいちょう）してしまったりもした。
よせばいいのに……。
授業が始まって、数分。
「あ、あら？」
ミーアは気づいた。
――おかしいですわ。ぜんぜん、記憶にございませんわ。
ミーアは、完全に忘れていた。自分が、あまり優秀な生徒でなかったことを。
「都合の悪いことはすっきり忘れる」という政治家固有のスキルを、ミーアは生まれながらにして身につけていたのだ！
一応、国にいた時、ギロチンを避けるのに必要そうなことは勉強した。けれど、それには偏りがあるわけで。
人様に教えようなんて、おこがましいレベルの知識しか、持ち合

わせていなかったのだ。
特にミーアを苦しめたのは、最新の算術だった。消極的文系人間（理系が苦手だから文系選びましたって言う……）のミーアは、計算しようとすると、頭がクラクラしてしまうのだ。
――まっ、まま、まずいですわ！
ミーアは焦った。
大口をたたいてしまった以上、答えられないなんて、あんまりにも恥ずかしすぎる！
一日のスケジュールを終えたミーアは、誰にも話しかけられない内に、さっさと自室に戻った。
「アンヌ！　アンヌぅ！」
「ミーアさま、どうしたんですか？」
部屋に駆けこんできたミーアを見て、アンヌはびっくりした顔をした。
「アンヌ、明日から算術の授業にいっしょに出なさい」
「え？」
セントノエル学園では、授業に従者を随伴させることができるようになっている。隣で勉強を手伝わせるため、勉学に長けた従者を連れてくる者も少なくはないのだ。
けれど、アンヌにはその心得はない。だから、アンヌは返事を躊躇っていた。
それを見たミーアは、少しだけ考えて……、
「ああ、授業に出る以上、一日の労働量はきちんと調整してくれて構いませんわ。お部屋の掃除は二日に一度で構いませんし、わたくしもお手伝いいたしますわ」
「そんなっ！　そんなこと、できません。やるなら、きちんと一日の仕事もこなします！」
「いえ、それでは授業の復習とかできません」
「えっ？」
「あっ……」

こぼれ落ちてしまった失言。ミーアにだってプライドはあるのだ。
自分を信用し信頼し、尊敬すらしてくれているアンヌに、まさか、「苦手な勉強を自分の代わりに勉強して、後で教えて！」とは言えない。
「さ、算術はアンヌの役にも立つはずですわ」
苦し紛れに、ミーアは言った。
ちなみに、算術は確かに役に立つ。商売をするには必須の技術であるし、セントノエル学園で学ぶことのできるのは、最新の知識だ。真面目に学べば、いろいろなところで重宝されるだろう。
「み、ミーアさま……、私のために……」
感極まった様子で、アンヌは言った。
「お心遣い、本当にありがとうございます、ミーアさま。ご恩に報いることができますよう、頑張ります」
「え、ええ……」
アンヌの素直な反応に、ミーアはチクチクと罪悪感を刺激された。
「べ、別に、気にする必要はありませんわ。わたくしも、わからなくなりそうだから、あなたにも手伝ってもらいたいだけですわ」
本音の部分を付け足して、なんとか心のバランスを取ろうとする。いつも通りの小心者である。
「ミーアさま……」
アンヌには、その言葉が、自分に気を使わせないようにあわてて付け足した言い訳のように見えた。
平民が、無料どころか給金をもらってセントノエルで知識を身につけることができる、それは、普通は考えられないほどの恩情なのだ。
アンヌは、この先、ミーアがどこに行くのにも、お供しようと思っていた。どこかの外国に嫁ぐのであっても、ついて行って、最後までお世話をしようと思っている。
けれど、それはあくまでもアンヌの側の話であって、もしかしたら、いつか、ミーアの専属メイドを辞める日が来るかもしれない。

ミーアは、恐らく、そんな日が来た時のために、知識を身につけろと言っているのだろう。
――それとも……。
もしかしたら、ミーアは、本気で自分を腹心だと思ってくれているのかもしれない。そして、腹心として必要な知識を身に着けさせようと思っているのかもしれない。
より高い能力を求められるということ、それは信頼の裏返しだ。
それは、あまりにも都合がいい想像だと、アンヌは自覚してはいたけれど……。
「ミーアさま、私、頑張ります」
彼女のモチベーションは否応なく上がっていくのだった。

第四十六話　ミーア姫の体験入部

セントノエル学園には無数のクラブが存在している。
各種の学術探究を目的とした学問系のクラブに、剣術、槍術などの技術向上を目的とした武術系のクラブ、さらに、令嬢たちに人気なお茶会クラブをはじめとした趣味系のクラブに至るまで。
授業のみならず、セレブな生徒たちの要望に応えられるように、さまざまなものがそろっている。
そんな中、ミーアには目を付けているクラブがあった。
それは……、

「ここですわね」
ミーアがやってきたのは厩舎（きゅうしゃ）だった。
「なるほど、さすがはセントノエル学園ですわ」
厩舎には三十頭以上の馬がいる。これは、帝国の近衛部隊の一隊に匹敵するほどの量だ。
きょろきょろ興味深げに馬を眺める小さな姫君を見て、馬術部の生徒たちは一様に緊張していた。
厩舎に女生徒がやってくることは滅多にない。
馬特有の臭気は、この島ではあまりなじみのないものであり、それを嫌う女子は多いのだ。にもかかわらず、大帝国の姫君がやってくるなど、よほどのことに違いない。
誰もが話しかけるのを躊躇う中、一人の男子がミーアの前に歩み出た。
「こんな場所になんの用だい、お嬢ちゃん？　道に迷ったのか？」
臆することなく話しかけてきたのは、ミーアより五つ年上の高等部二年の少年だった。がっちりとした体格で、こんがり日焼けした彼に、ミーアは見覚えがあった。

「あら……？　あなたは、確かパーティーの前に馬を連れてらした方かしら？」
「あー、あの時のお嬢ちゃんか」
少年の方も思い出したらしい。おでこをぴしゃっと叩いて、豪快に笑った。
あの日、パーティーの直前、ミーアをくしゃみに巻き込んで散々な目に遭わせた馬、それこそ彼が連れていた馬だった。
「あの時はすまなかったな。俺は、高等部二年で馬術クラブの長、林馬龍（リンマーロン）だ」
「ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
ちょこん、とスカートの裾を持ち上げて礼をしてから、
「お名前の響きからすると、もしや、騎馬王国出身の方ですの？」
「おお、ティアムーンの姫君に知られてるとは光栄だ」
馬龍は、にやりと笑みを浮かべる。それから不意に真剣な顔をして、
「んで、今日はどうしたんだい？　今日はあの時の文句でも言いに来たのか？　まさかとは思うがあの時の馬を処分しろ、とか」
かつて、粗相（そそう）を働いた馬を殺処分にしろと怒鳴り込んできた女生徒がいた。文句を言うだけならまだしも、もしそんな理不尽な要求をしてきたら、その時は……。
「処分？　はて、なぜですの？」
「いや、ドレスをダメにしちまっただろ？」
「ああ、そんなの、大したことではございませんわ」
ミーアは笑った。
ミーアからすればどちらが貴い存在かは自明のこと。ドレスで革命軍から逃げることはできないが、馬はそうではない。
「今日は、ただ、馬術クラブの見学に来ただけですわ」
ミーアには馬に乗れるようになりたい切実な理由がある。
かつて、革命軍に追われた際、馬車で脱出を図った彼女は、あっさりと捕まってしまう。重たい馬車を曳いて騎馬兵から逃げ切るこ

とは、いかな名馬にも不可能だったからだ。
革命が起きないことが最も望ましい。けれど、もし起きてしまったならば、速やかに逃げて隣国に脱出する。
そのためには、馬に乗れるようにならなければならない。
ギロチンを回避するためならば、例え鼻水を引っかけてきた馬でも、自分を乗せて逃げてくれるのであれば笑って許せる寛容さをミーアは持ち合わせているのだ。
「見学、ねぇ……」
馬龍は、首を傾げた。
生まれた時から馬に乗っていると言われる騎馬王国の出身者ならばともかく、ティアムーン帝国の姫君が馬術クラブに興味を持つなど、にわかには信じがたいことだった。
そもそも、貴族の子弟にとって乗馬とは、優雅な趣味に類するものではない。乗馬とは、軍馬に乗るための技術であり、実践的な戦争のための技術なのだ。
そのため、男子ならばともかく、女子生徒には不要の技術と言える。ごくごくごく稀に、狩猟が趣味だという女子生徒はいないではないが……。
馬龍が見たところ、ミーアは弓をたしなむようにも見えない。
「別に見るのは構わないが、もしかして、入部も考えてるのかい？」
「入部すれば、わたくしでも馬に乗れるようになりますかしら？」
「そりゃあ、もちろんだが……。馬に乗りたいのかい？」
「ええ、ぜひ」
「なぜだい？」
「どこまでも遠くに連れて行ってくれるからですわ」
できるだけ、革命軍から遠い位置まで運んでもらえるから。
馬は現実的な脱出手段、ミーアはそう信じて疑わない。
「ほう……」
ミーアの答えは、馬龍の心に響いた。
なぜなら、それは、彼の民族が幼いころから刻み込まれる真理だ

ったからだ。
馬はどこまでも遠くに、自由に、自らを高めてくれる相棒。それは、馬を戦争の道具としか見ていない者や、愛玩用として可愛がるだけの者は決して口にできない言葉だった。
――このお嬢ちゃん、見かけによらず、ただのお姫様ってわけでもなさそうだな。
「ミーア姫、なぜ、ここに？」
その時、聞き覚えのある声が、その場に響いた。

第四十六話　ミーア姫の体験入部（後書き）

設定資料　「騎馬王国」
十二の部族からなる騎馬民族からなる国。
この国の民は、生まれた時から馬に乗り、馬とともに生きて死ぬと言われる。
ヴェールガ公国の東、大陸中央部に広がる広大な平野に、馬を放牧しながら暮らしている。
この国の人々は大陸共通語にあまり慣れていないため、総じて荒々しい物言いになるが、別に蛮族というわけではない。精強な騎馬部隊は、大陸随一。レムノ王国と仲がいい。
林馬龍は、十二部族の一つ、龍族の族長の係累で、部族の中でも指折りの戦士。
革命軍を力でねじ伏せるならば、ぜひとも築いておきたい人脈　↑オススメ！

第四十七話　馬上の誤算

「ミーア姫、なぜ、ここに？」
「あら、アベル王子？　奇遇ですわね」
声のした方を見たミーアは、意外な人物の登場に少しだけ驚いた。
ミーアの記憶が確かなら、アベルは前の時間軸、カード遊戯部に所属していたはずである。アベルとの仲を深めるためにミーアも入部を検討はしてみたのだが、その内実が賭けごとに興じる退廃的な部活であったため、アンヌに止められたのだ。
――てっきり自堕落な学生生活を送るものと思っておりましたが……。
かつての、少し病的な顔をしていたアベルの顔が、ミーアの頭に浮かんだ。あのころの彼は、いつだってヘラヘラ情けない笑みを浮かべ、制服もだらしないぐらいに着崩していたものだったのに。
「馬術部に入られたんですの？」
「うん？　ああ、そうなのだ。一応、ボクもレムノ王国の王子、最低限、馬術と剣術ぐらいは鍛えておこうと思ってね」
そう答える彼の顔には、退廃とはかけ離れた爽やかな笑みが浮かんでいた。乗馬用の服をきちんと着こなした彼は、実に健康的な雰囲気をまとっていた。
「それで、キミの方はなにをしているのかね？」
「わたくしは見学ですわ。馬術に興味がありまして」
「ミーア姫が、馬術に？　それは、少し意外な気がするが……」
「おう、アベル、お前、このお嬢ちゃんの知り合いか？」
「ああ、馬龍先輩。ええ、先日、新入生歓迎パーティーで、パートナーになっていただきまして」
「ほう、そいつはちょうどいい。せっかく見学に来たんだ。お前、馬に乗せてやれ」

「……は？」
唐突な言葉に、アベルは目をパチパチと瞬かせた。
「せっかく馬に興味を持ってもらえるというなら、むげにも扱えないだろう」
そう言って、馬龍はいたずらっぽくウィンクした。
「いや、しかし……」
アベルはミーアの方をチラッと見て、すぐにそっぽを向いてしまう。心なしか、その頬がほんのり赤く染まっている。
――あら、まぁ……。
ミーアは、それでピンときた。
――もしかして、アベル王子、照れてますの？
馬に二人乗りするというのは、ロマンチックな雰囲気。そのせいで、アベルが照れて緊張していたとしてもおかしくはないのではないか。
――うふふ、アベル王子、案外、ウブなんですのね。
ミーアは上から目線に、アベルを見た。
なにしろ前の時間軸において、ミーアは二十歳まで生きた、いわば大人の女性である。例え恋愛経験がなくとも、中等部の男子の心理を把握することなど簡単なことなのだ……と、信じきって疑わないミーアである。
もっとも、この時は、確かにミーアの女の勘は当たっていたのだが。そう、俗に言うビギナーズラックというやつである。
――まぁ、そういうことでしたら、ここはお姉さんであるわたくしが、きっちりリードして差し上げないと。
ミーアはるんるんで、アベルに言った。
「わたくしからも、エスコートをお願いしたいですわ、アベル王子。せっかくパーティーでご縁ができたわけですし……」
そう言って、ちら、っと上目づかいに見つめる。あざとい態度である。
「む？　ミーア姫がそう言うのであれば……」

「あは、うれしいですわ」
ミーアは可愛らしい笑みを浮かべた……笑みを浮かべていられたのは、ここまでだった。

――ひぃっ！　た、たた、高い高い、高いですわ！
馬龍に手伝ってもらって、馬に乗ったミーアは、思わず悲鳴をあげそうになった。
そう、馬の背は、高いのだ。しかも、今日のミーアはセントノエル学園の制服を着ている。
セントノエル学園の制服は、大陸最先端のデザイナーによってデザインされた、斬新なものだった。
白いブラウスとその上から着るブレザー、さらに、きっちり折り目のついたプリーツスカートは、貴族の間で通常着られるドレスとは一線を画するものだった。
ここで重要なことは、ミーアがズボンではなくスカートをはいているということだった。
そう、この格好で馬に乗ろうと思った場合、どうしても足を揃えての横座りになってしまう。
これは怖い……。
普通に馬の背にまたがることができれば、その視界は馬の頭越しに前を見ることになるのだが、横座りの場合、少し視線を下に転じれば地面が見えてしまう。
さらに、体勢的にも不安定極まりない。
少し油断すれば、バランスを崩して、呆気なく落下してしまいかねないのだ。
結果……、ミーアはロマンチックがどうとか、アベルをリードしてあげるとか、そんな余裕を一切喪失してしまった。
「それでは、ミーア姫、しっかりとボクに……、うわぁ！」
アベル王子がなにか言っていたが、聞いている余裕はなかった。
ミーアはひっしとアベルの腰に腕を回し、ぎゅううっと抱きついた。

「みっ、みっ、ミーア姫、そ、そんなにつかまらなくても大丈夫……」
「わ、わわ、わかってますわ。ここ、こんなの、余裕、余裕ですわ！」
馬への恐怖から余裕を失ったミーアと、気になる女の子との馬の二人乗りで余裕を失ったアベル王子の、いろんな意味でのドキドキ乗馬デートが始まる。

第四十八話　ちょっとしたすれ違い

先に落ちつきを取り戻したのは、馬に乗り慣れているアベルの方だった。
「ほら、ミーア姫、目を開けてみたまえ。馬の上から見る景色は、なかなか味のあるものだよ？」
「そ、そうですわね……では」
ミーアは小さく深呼吸をしてから、意を決して目を開けた。
「まぁ……」
普段より、少しだけ高くなった視点。それは、お城などの高い場所から見る風景とも違う、少しだけ新鮮な眺めだった。
爽やかにそよぐ風が、髪を静かになびかせる。
つい先ほどまで怖くてしかたなかった、馬が歩く時の揺れも、今はなんだか、心地よい。
――なんか、眠くなってきてしまいそうですわ……。
そっとアベルの背中に頬をよせ、ミーアはちょっぴり瞳を閉じる。
「おっ、おわ、ひ、姫、なにを……あ、ほ、ほら、見たまえ。君の従者のレディも来ているぞ」
「あら、本当ですわ。アンヌ～！」
ミーアは、ぶんぶんと、遠くに見えたアンヌに手を振った。
元気よく……、両手で！
……慣れは、油断を生むものである。
「こら、姫、手を放しては……っ！？」
「あら？」
瞬間、ミーアの体がぐるん、と傾(かし)いだ。
「ひゃああっ！」
悲鳴とともに、ミーアの体が地面へと落ちていき……どさっ！
とすごい音がして……。

けれど、予想していたより、その衝撃は小さかった。
「あ……、あら？　いったい何が？」
「いたた……」
すぐそばで聞こえるアベルの声。ミーアはこわごわ目を開けて……、
「あっ、アベル王子！　これは……っ！？」
そこで、ミーアははじめて気づいた！　自分がアベルの腕の中にいるということに！
アベルが、自分を助けるためにいっしょに落ちて、抱きとめてくれたということに！！
「あっ、わっ、うぇっ！？」
思わず、ヘンテコな悲鳴が口からもれた。心臓がどきどき、うるさいほど鳴っていた。
――なっ、なっ、なにをあわてておりますの。べつにアベル王子に抱きしめられようと、騒ぐ必要はないではないですか。ダンスの時に、そんなのは経験済みで……。
ミーアは、そう自分に言い聞かせて、なんとか胸の高鳴りを押さえようとする。
――そうですわ、そもそも、アベル王子はまだ子ども。わたくしより八歳も年下……。
「どうかしたのかい、ミーア姫。もしや、どこか怪我でも？」
心配そうに、顔をのぞきこんでくるアベル。その真剣な瞳に、鋭い視線に射抜かれて、
――そっ、そそ、そんな目で見つめないで！
ミーアは、顔を真っ赤にしながら目を背けた。
「だっ、大丈夫、ですわ。アベル王子、その、大丈夫ですから、は、はなれて、いただけないかしら」
「あ、ああ、そうか。すまない、失礼した」
アベルは、あわてた様子でミーアから離れた。その顔は、しゅんと、ちょっぴり沈んでしまっていた。

「あっ、誤解しないでくださいまし、アベル王子。べつに、あなたにくっつかれるのが嫌とか、そう言うことではないのですわ」
「うん、ああ、そうだな……。わかっているさ」
そう言いつつも、アベルの顔は晴れない。
がっかりしたような、寂しげな顔を見ていると、なんだかミーアは落ちつかない気持ちになってしまう。
――ああ、これは、きっとあれですわ。ここでアベル王子に嫌われると、援軍を出してもらえないからで……。
それだけの理由ではこんな気持ちにならないのでは？　などと思わなくもなかったが、無理やり自分を納得させて、ミーアは考える。
――どうすれば……、あっ、そうですわ！
ミーアは一歩アベルに近づくと、その手をぎゅっと両手で握りしめた。
「なっ、ミーア姫？」
「先ほどは、助けてくださり、ありがとうございました、アベル王子！」
そう言って、ぐぐっとアベルに近づいた。それはもう顔と顔とがくっつくか、というところまで近づき、じーっと上目づかいにアベルを見つめる。
――人は、必要以上に近づかれると、自然と距離を取ってしまうものですわ。それを実体験してもらえばいい、我ながら冴えてますわ！
「お、あ、う、うむ……、わ、わかった……。わかったから、その、少し離れて、もらえないだろうか？」
顔を真っ赤にしたアベルが目をそらしたところで、
「ほら、あなただって、顔を背けるではないですか？　なぜ、顔を背けたのですか？」
ミーアは、にんまりと勝ち誇った笑みを浮かべた。
「それは……」
「先ほどのわたくしも、今のあなたと同じですわ、アベル王子」

「なっ……」
――わたくしは繊細ですから、必要以上に他人に近づかれると緊張してしまう。それだけの話ですわ。
「だ、だが、ボクはたぶん君より……、その気持ちは強いはずだ」
「あら、負けず嫌いですわね」
妙なところで、負けん気を出すアベルが可愛くって、ミーアは笑った。
――わたくしより、繊細だって言いたいのかしら？
首を傾げるミーアは気づいていなかった。
緊張する条件が、「他人に必要以上に近づかれると」と「好きな女の子に近づかれると」という具合に、アベルとミーアでは若干異なっていることにも。
ミーア自身も「ちょっと気になる男の子」に近づかれて緊張していたのだということにも。

第四十九話　ミーア姫はボッチじゃない

突然だが、ミーアは別にボッチではない。

大国、ティアムーン帝国の姫に相応しく、その周囲にはいつも数多くの取り巻きの女子たちがついている。

アンヌに関してなにも言わなかった者、という条件が付くので、前の時間軸よりは、その数が減ってはいるものの、それでも、クラスの最大派閥と言っても過言ではなかった。

さて、そんな彼女のクラスにはミーア派を筆頭に、いくつかのグループが存在している。

部活であったり、共通の故郷であったり、結びつきはさまざまだが、ともあれ、生徒たちは気の合う仲間たちと、あるいは利害の一致する者たちと、ともに行動し集団を構成する。

けれど、ごく当たり前の話だが、そんな集団に属せない、真にボッチとも言うべき者は、どうしても出てきてしまう。

ミーアのクラスにも、そんな少女がいた。

名前は、クロエ・フォークロード。もっさりとした黒髪と、分厚い眼鏡が特徴的な内気な少女である。

授業の終わりを告げる鐘が鳴る。

「はぁ……」

口々に解放を喜ぶ生徒たちの中で、クロエは、深く長いため息を吐いた。

彼女の実家は、それなりに大きな商家だった。

父も母も小さなキャラバン隊から商会を立ち上げ、果ては爵位を賜るまでに至った世渡り上手の人たちであったが、その娘のクロエは生まれつき大人しい性格をしていた。

どちらかと言えば人見知りをする方だったのに、幼いころからいろいろなところに連れて行かれ、さまざまな人たちと引き合わされ

たせいで、かえって、その人見知りの傾向は悪化していた。
それを見かねた両親は多額の寄付とコネを使い、大陸最高峰のセントノエル学園にクロエを入学させたが……。家柄と伝統を重んじる貴族の子弟たちの中にあって、金で爵位を買った新参者は浮くばかり。
かくて、クロエは孤独な学園生活を送ることになってしまったのだ。
クラスになじめない者にとって、一番つらいのは、なんと言っても休み時間である。
“友だちと楽しくおしゃべりを楽しむ時間”を一人でどう過ごすか、クロエはいつも悩んでいた。
そんな彼女の一番の助けは、実家から持ってきた本だった。
知識の集積である本は、もともと高値で取引される有力な商品だ。クロエの実家であるフォークロード商会でも、昔から主力商品として取り扱っており、クロエも本に親しんでいた。
入学の際にも多くの本を持ってきていたのだが……。
――これが最後の一冊か……。
毎日のように、休み時間に読み進めていたら、すぐに読み終わってしまうのも不思議ではなかった。
――明日から、どうしよう……？
読んでる本は残り二十ページを切っていた。どれだけゆっくり読んだとしても、明日には読み終わってしまう。
――勇気を出して誰かに話しかける？　そんなの、絶対に無理。
勇気を出すのであれば、学校が始まってすぐでなければならなかったのだ。こうして、クラス内にある程度のグループができてしまっては、もう手遅れで……。
――いっそ消えちゃいたい……。
なんて、ことまで思ってしまって……クロエは机に突っ伏した。
別に悲しいわけじゃないのに、目にはじんわり、涙が浮かびあがる。
そんな時だった。
「ちょっと、あなた……」

「はぁ……」
「ねぇ、少しよろしいかしら？」
「……え？」
クロエは、ぼんやりと顔をあげた。
にじんだ視界の向こう側に、その少女は立っていた。
「……ぇ？」
クロエは、驚愕のあまり、一瞬固まった。
そこにいたのは、このクラスの覇者、学年有数の有名人である、大帝国の皇女殿下。
ミーア・ルーナ・ティアムーンだったからだ。
「あ……ぇっと、え？」
混乱のあまり上手く言葉が出ないクロエをよそに、ミーアは、机の上に置かれていた本を眺めていた。
「なにを読んでいますの？」
「あ、それ、えっと……、砂漠の、植物の図鑑……。ど、どうやって水をとってるかとか、そういうことが、書いてあって、それで……」
なんだか、この学校に来てはじめて、人とまともに会話したような気がした。クロエは少しだけ前のめりになりながら、懸命にミーアに説明する。
説明を聞いたミーアは眉間にしわを寄せながら、
「……それ、面白いんですの？」
「はい！　……あ、いえ。あの、読んでもあんまり面白くない、かも。私は面白いんですけど……、ほかの人は面白くない、かも……」
「ふーん……。よく本を読んでるようですけど、物語とかは読みませんの？」
「あ、はい。読みます。小さな国の王子さまとお姫さまの恋物語とか、好き。でも、持ってきた本、全部読んじゃって、それで……」
っと、なぜだろう……。ミーアの瞳が、一瞬、ぎらり、と輝いたように感じた。それはまるで、ネズミを狙う猫のような……。

一瞬、身を引きかけたクロエ。その手を、逃がさん、とばかりに捕まえたミーアは満面の笑みを浮かべて、
「あなたのような方を、探しておりましたの。あなた、わたくしとお友だちになりません？」
クロエが思いもしなかった提案をするのだった。

第四十九話　ミーア姫はボッチじゃない（後書き）

土曜日に四回投稿しておりましたが、諸事情により通常と同じ１２時投稿の一回に変更することにいたしました。
楽しみにされていた方、申し訳ありません。

第五十話　読み友

――ふふふ、予想通りの方、のようですわね。
クロエの話を聞いたミーアは、内心でほくそ笑んでいた。
ミーアが彼女に目を付けたのは、もちろん彼女がいつも一人でいて、寂しそうにしているのが可哀想だったから……ではない。
ただ、彼女が休み時間ごとに一人で本を読んでいたからだった。
そう……、ミーアは、欲しくなってしまったのだ。自分の読む本の中身を語らい合う友、読み友が……。

その日、ミーアは自室のベッドにうつぶせになって、アンヌの妹、エリスが送ってきた原稿を読んでいた。
――ああ、こうして改めて文章で読むと、とっても面白いですわ！
物語は、まだ、ミーアが知っているところまでだったのだが、細かな描写が、かつてアンヌから聞いた話とは微妙に違っていて、それがとても新鮮だった。
頬杖を突き、足をパタパタさせつつ、上機嫌に鼻歌を歌うミーア。
お姫様としてはあるまじきはしたなさだが、かたわらに控えるアンヌは眉をひそめることもなければ、注意することもない。
普段から緊張感を強いられる立場のミーアだから、自室ではできる限り自由にくつろいでほしいと思っているのだ。
世間ではこれを“甘やかし”という。
やがて、原稿を最後まで読み終わったミーアは、満足げなため息を吐く。
「ありがとう、アンヌ。今回も堪能いたしましたわ」
原稿を返しつつ、ミーアは首を傾げた。
「ところで、ご実家の方には変わりはありませんの？　エリスは、大丈夫ですの？」

ミーアにとって、この原稿は大いなる楽しみの一つだった。エリスには健康に、最後まで書き終わってもらう必要があるのだ。
「お気づかいありがとうございます。ですが、元気にやってるみたいです」
そう微笑んだアンヌの顔は朗らかで、ウソをついたり、なにかを隠したりしている様子はまったくなかった。
「それはなによりですわ。なにかあったら、すぐにわたくしに言うんですのよ？　エリスはわたくしのお抱えなんですから」
そうアンヌに言い含めてから、
「でも、惜しいですわ。これを読んでるのがわたくしとアンヌだけだなんて……」
ミーアは、ため息を吐いた。
面白い本を読んだら、誰かと語り合いたくなるもの。それは、本好きのサガとも言うべきものである。
その程度のこと、アンヌとすればいいとも思うのだが、残念なことに、アンヌはどうやら、この手のお話にあまり興味がないようなのだ。
読んではいるらしいが、それは、妹が書いたものだから。楽しんでいる様子はあまりない。
――っていうか、地下牢で聞いた話とだいぶ違いますし、アンヌ、結構、適当に読んでいるのではないかしら？
けれど、取り巻きに勧めてみるというのも却下だ。
どうせ、一も二もなく絶賛するだけで、ミーアの求めるような作品に対する語り合いなんてできないに違いない。
――だれか、適任はいないかしら……？
そんなことを思っていた時、ミーアは見つけたのだ。休み時間ごとに本を読みふける、無類の本好き、クロエを。
――友だちとも話さずに、時間を惜しんで読んでるんですから、本ならなんでも大好きな方に違いありませんわ！
……実際のところ、クロエが本を読んでいるのは、一人でいるの

が気まずいからであって、ミーアが思ってるほどには本好きではないのだが。
「あなた、わたくしとお友だちになりません？」
「……え？」
クロエは、目をパチパチ、と瞬かせた。
「あ、あの……、その、私……、どうして？」
クロエは、大いに戸惑っていた。
なぜ、いきなりそんなことを言われたのか、理由がまったくわからなかったからだ。
なにしろ、相手は大帝国の姫君にして、クラス一の有力者だ。しかも、その人脈もすさまじい。
シオン王子や、アベル王子といった、女子の憧れを集める華やかな王子さまたちに、ラフィーナ公爵令嬢といった学園の大物とまで親交があるという。
そんな人が、地味な自分に声をかけてくる理由が、クロエには見当たらなかったのだ。
いや、一つだけ、その理由が思い当たらないでもなかったのだ。
それは、自分に同情したから。
――いつも一人でいるのを見て、可哀想だと憐れんだから、とか？
相手は、帝国の聖女とも呼ばれる人、思いやりに溢れる人なんだろう。
だけど……、
――もしそうだったら、イヤだな……。
それが、なんだかものすごくみじめなことだと思えてしまって……。だから、
「あなたが本好きだからですわ。実は、あなたに読んでもらいたいものがあるんですの」
ミーアの予想外の答えに、クロエはぽかん、としてしまった。
「だから、もしよろしかったら、わたくしと読み友になってもらえないかしら？」

商会を継いだクロエが、本の出版に力を入れ、複数国を相手取る巨大な出版会社を設立するのは、十年後のことだった。

彼女が手がけた本はどれも売れたが、中でも最も有名なものが、彼女の学友たる帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンからもたらされたものだったというのは、有名なお話である。

第五十一話　お弁当の約束を

「はぁ？　剣術大会、ですの？」
その日、ミーアは取り巻きの少女たちといっしょに、食堂でランチを楽しんでいた。
「はい、男子たちがすごく騒いでましたわ。夏休み前の最後の週に、学校を上げて行われるとか……」
「ご存じなかったですか？」
「はて……、記憶にありませんわね……うっ、頭が」
思い出そうとしたミーアは、突如、頭痛に襲われる。
剣術大会……、ボッチ……。
なんだか、その言葉にはとってもイヤな思い出があったような……。
「それで、その剣術大会には、自分が好きな殿方のためにお弁当を用意するのが慣例となっているみたいなのですが、姫殿下はもう手配されましたかしら、と……」
――お弁当！！
ミーアの脳裏に鮮やかによみがえってくる光景があった。
前の時間軸の記憶、目の前には、張り切って注文した豪華なお弁当……。
「わたくしが用意したお弁当のおかげで優勝したって言わせてみせますわ！」
そう意気込んでいたミーアだったが、それを渡す相手、シオン王子は決してそれを受け取ろうとしなかった。
そんなことを、まさか周りの誰にも言うこともできずに、仕方なく、ミーアは一人でそれを食べることになったのだ。
部屋の中でぽそぽそと、半泣きになりながら……。
――あれは……、とても、辛かったですわ……。

すぅっと、ミーアの頬に涙が伝う。
「なっ、ひっ、姫殿下！　涙が、なぜいきなり」
「だっ、誰ぞ！　ハンカチを持ってきて！」
いきなり、声もなく泣きだしたミーアに、周囲の取り巻きたちは大あわてだ。
「ああ、いえ、なんでもありませんわ。教えてくれて助かりましたわ」
ミーアは指先で涙をぬぐった後、笑みを浮かべて取り巻きたちに言った。
――アホのシオン王子とは違って、アベル王子は紳士ですから、ちゃんと食べてくれますわ。そうに違いありませんわ！
あの時とは状況が違うし、その上、今のミーアは、前の時間軸とは一味違う。
――とりあえず、事前に約束を取り付けておくべきですわね。
そう、今の彼女は、ちょっとだけ常識というものを身につけているのだ。相手にも相手の事情がある、という事をミーアはちゃんと知っている。
ミーアのほかに、自前でお弁当を用意していないとも限らない。だからこそ、事前に、弁当を持って行く旨を伝えておく必要があるのだ。
――後で早速行ってみましょう！

その日の放課後、ミーアはアベルのもとに向かった。
この日は、馬術部の日でもあったので、簡単に見つけることができた。
「アベル王子」
「ああ、ミーア姫。今日も、乗馬の練習かな？」
乗馬用のチョッキに長ズボンという、凛々しい乗馬服に身を包んだミーアを見て、アベルは言った。
「馬龍先輩がほめていたよ。お姫さまの気まぐれかと思ったが、真

面目に取り組んでるって」
部活は、基本的に自由参加だ。毎日来る必要もないし、自由気ままな貴族が多い学園なので、ミーアのように頻繁にやってくるのは割と珍しい。
ミーアは脱出手段の確保のため、乗馬技術の習得は必須なので毎日来てはいるが……、本音を言えば放課後は部屋でゴロゴロしていたいところではあるのだが。
「とりあえず、今はこの馬しかいないのだが、よければいっしょに乗っていくかね？」
そう言って、アベルは手袋を外して、ミーアに手を差し出した。
「よろしいんですの？　では、お言葉に甘えまして……」
ミーアは、差し出されたアベルの手を取ろうとして、
「あら……？」
「ん？　どうかしたかね？」
「いえ、手のひらがずいぶんと固くなっておりますわね」
アベルの手の平をさらり、と撫でてから、ミーアは上目づかいにアベルを見た。
「ん、ああ。実は、今度、剣術大会があってね、その鍛練で……」
「なるほど、頑張っておられるのですわね……」
そう言えば、本国の騎士もこんな風に硬い手の平をしていたかしら……？　などと。
目の前の、アベルはまだあどけなさを残した少年にしか見えないのに、なんとなく、その顔にちょっとだけたくましさを感じてしまって……、ミーアはちょっぴりドキドキした。
アベルの後ろに乗り、ちゃっかり、その背中に腕を回しつつ、ミーアはおずおずと口を開いた。
「あの、アベル王子、その、剣術大会の当日の、ことなのですけれど……」
「うん？　どうかしたかね？」
「その……、お昼のお弁当の約束、どなたかとございますかしら？」

「いや、特にはいないが……」
その答えに、ミーアはホッと胸をなでおろした。
「それはなによりですわ。でしたら、アベル王子、お昼のお弁当、わたくしに用意させていただけないかしら？」
「え？　ボクのために……？」
「ええ、アベル王子が勝てるよう、精一杯のものを用意させていただきますわ」

この時のミーアには、油断があった。
これで、あの時のようなひとりぼっちで弁当を食べる、なんて寂しいことにならないと。その安堵感が、中途半端な常識が、ミーアを油断させたのだ。
ちょっと考えればわかることだったのに、ミーアには、そんなこと思いもよらなかったのだ。
弁当の手配を早めにしておかないといけないなんて。
当日は、どのお店も大忙しになるから、一週間前には、予約を打ちきってしまうなんて。
「うふふ、楽しみですわ」
穏やかに微笑むミーアは、想像すらしていなかったのだ。

第五十二話　アンヌの妙案

「どっ、どういうことですの？」
事態が判明したのは、剣術大会まであと三日と差し迫った時だった。島で一番の弁当屋に向かったミーアは、厳しい現実を突きつけられていた。
「ちょっとその日はねぇ。ここら辺の店は、みんな手一杯だから、今から追加ってのは難しいと思いますよ」
迂闊と言わざるを得なかった。
お弁当を用意するのは「自分の手で！」と、取り巻きから聞いていたミーアは、アンヌに相談することなく、自らで注文しようと考えた。
本国では商人とやり取りすることはあったし、ルードヴィッヒの隣で買い付けの様子を眺めていたこともある。だから、そんなの余裕でできると思っていた。
それがあだとなった。
――ど、ど、どうしましょう……？　どうすれば……！？
予約はすでに締め切られていると聞かされて、ミーアの背筋に冷たい汗が流れる。
――金貨を積めば……、もしかしたら……。
金にあかして、というのは一番簡単な方法だ。大金を積めばこちらの仕事を優先してもらえるかもしれない。けれど……、
――それは、できませんわ。
ミーアはすぐに、それを否定する。何度か会食を重ねるうちにわかってきたことだが、学園の支配者、ラフィーナ公爵令嬢は潔癖な人だ。
金貨を積んで、弁当屋が無理をして作ってくれた、というのならば、まだ許されるだろう。けれど、ほかの予約をキャンセルしてミ

ーアを優先する、なんてことが起きたらどうなるか……。
ラフィーナはきっと幻滅して、二度とミーアと顔を合わせようとはしないだろう。
「それは……、怖すぎますわ！！！」
けれど、ほかに妙案は浮かばずに……、結局のところ、
「あ、アンヌぅ！」
ミーアが頼ったのは、自室で待機していた忠臣だった。
「ミーアさま、落ちついてください」
半泣きで帰ってきたミーアを見て慌てたアンヌだったが、事情を聞いてすぐに行動を開始する。
――とりあえず、市場で事情を聴くのが一番ね……。
ミーアが学校生活を満喫する間に、アンヌは着々とコネを築きつつあった。はじめは、セントノエル学園の職員たちと。次に、学園と関係のある商人、その商人の知り合いの商人へ。
町にも足しげく通い、市場の人たちとは、すでに顔見知り以上の関係にはなっていた。そんなコネをフル活用した結果、アンヌは大まかな状況を理解した。
「なるほど、確かにそれは厳しいですね」
そもそも、ミーアが求めるような素敵なお弁当というのは、この辺りの店では大変レアな代物なのだ。
お弁当というのは、出かけた先で食べる食物のことだ。
それが必要とされるのは、主に長旅の途中のことなのだが、一般民衆がイメージするそれは、干し肉とか乾燥させたパンといった、腐りづらい代わりに味気もない食物のことだ。
そして、実のところ、その事情は貴族でもあまり変わりはない。
まず食べてもお腹をこわさないこと、栄養を補給することが重要視されるのであって、味なんて二の次なのだ。
だから……、男子に喜んでもらう〝美味しいお弁当〟というのは、はっきり言って需要がないのだ。
民衆はそんなものをわざわざ金を出して買わないし、学園に通う

生徒たちにしても、いつも必要というものでもない。
それを扱うお店の数は限られており、今から注文しても対応できないという状況ができあがったというわけだ。
「ということは、足りないのは労働力、ということですね」
とりあえず、最悪の事態は免れた、とアンヌは安堵のため息を吐く。
アンヌが最も恐れていた事、それは、食材の不足だった。弁当の材料が手に入らなければ話にならない。
「でも、これで……」
アンヌは市場をめぐり、弁当の食材を手配。そうして、ミーアのもとへと戻ってきた。
「ど、どうでした？　アンヌ、なんとかなりまして？」
不安げな様子ですがりついてくるミーアに、アンヌは小さくうなずいて見せた。
「なんとか、できると思います」
その答えに、思わずミーアは、ほぅ、っと安堵のため息を吐き、
「さすがですわ！　アンヌ、作ってくれるお店が見つかったんですのね？」
「いえ、ミーアさま。それは無理でした」
次の言葉で再び青くなる。
「で、では、どうするんですの？」
「作りましょう」
アンヌは、何かを決意するような顔でミーアのほうを見た。
「……へ？」
きょとん、と首を傾げるミーアの手をぎゅっと握って、
「私もお手伝いしますから、ミーアさまご自身がアベル王子のお弁当を作るんです」
「つっ、作る？　わたくしが、ですの？」
当然のことながら、ミーアは料理などしたことはない。
「はい。ご存じないかもしれないですが、民衆の間では、夫のため

に妻が作ったお弁当のことを『愛妻弁当』などと言って、喜ぶ習慣があります。男性というのは、女性に料理を作ってもらうと、嬉しいものなのです」

そんなことを、したり顔で言うアンヌ。

「そっ、そういうものなんですのね。ちなみに、アンヌ……、アンヌはお料理とか得意なんですの？」

「……パンぐらいなら、焼いたことは、あります」

――あっ、これ、ダメなやつですわ！

その言葉のニュアンスに含まれるキケンな香りをミーアは敏感に感じ取るのだった。

第五十三話　ミーア姫、冴え渡る2

アンヌの言葉に危機感を刺激されたミーアは、早速、助っ人集めに乗り出した。

といっても、使えるコネはそれほど多くはない。なにしろ、ミーアの取り巻きは料理なんかしたこともないような貴族の令嬢ばかりで、セントノエル学園に通う生徒のほとんどもまた、料理などしたことがない貴族だからだ。

けれど、例外はいる。

まずミーアが向かったのは、クロエのところだった。

彼女の実家、フォークロード家は貴族ではあるものの、その爵位は金で買ったものだ。

現在もその生活は商家としての性質が強い。

料理ができる可能性は十分にあった。

「あ、ミーアさま……、え？　料理……ですか？」

突然の質問に、きょとりんと首を傾げたクロエだったが、

「はい、知ってます。読んだことありますよ」

ニコニコ、笑顔で答えた。

知っている……、読んだことが、ある……。

――この子も、なんかダメっぽいですわ。

クロエの言葉からも、そこはかとなく危険な香りをかぎとったミーアは、それでもとりあえず戦力としてキープしておくべく、クロエを弁当作りに誘った。

背に腹は代えられない。

「はい、べつにその日でしたら、予定はないので大丈夫ですけど……」

快諾してくれたクロエに別れを告げて、ミーアはさらにスカウトに走る。

次にミーアが向かったのは……、
「……他に思い当たる方がいらっしゃいませんわ！」
早くも手づまりだった。
コネつくりを頑張ってきたという自負があっただけに、これはミーアにとってショックなことだった。
――そもそも、この学園で料理ができるなんて方を探そうなんて、無理難題もいいとこですわ！
いじけて不貞寝をしようと自室に戻ろうとしたところで、アンヌがやってくるのが見えた。
「ミーアさま！　見つかりました。料理ができる人」
「本当ですの！？　アンヌの知り合いで料理ができる方といえば……」
しばし考えて、すぐに結論に至る。
「ああ、もしかすると、リオラさんですの？」
ティオーナの従者、リオラのことを咄嗟に思い浮かべたミーアだったが……、
「あ、いえ、その……。リオラさんはとってきた野うさぎとかを、その場でさばいたり、丸焼きにしたりと言うのは得意みたいなんですが……」
わりとワイルドな料理法である。森の民として森で暮らすには必須のスキルかもしれないが……、弁当作りでどの程度使えるかは未知数だ。
「リオラさんではなく、ティオーナさまが、料理がお得意だそうですよ」
「てぃ、ティオーナさん……ですの？」
ミーアは、思わずたじろいだ。
できる限り、お近づきにならないように、なるべくコネを作らないようにしてきた筆頭である。自分をギロチンにかけた、憎き相手でもある。

けれど……、
「はい、なんでも、時々、お家の台所でお手伝いをしていたとか……」
なるほど、ルドルフォン家は貴族と言うのもおこがましいレベルの貧乏貴族。しかも、広大な土地で農業を行っている。
使用人のほとんどはそちらに取られてしまい、ティオーナが料理を手伝っていたというのも、わからなくはない。
いかにも戦力になりそうだ。
「うう、や、やむをえませんわ……」
血の涙を流す思いで、ミーアはティオーナのところを訪れた。
「あっ、ミーアさま……、どうかされたんですか？」
突然の来訪に驚きを見せるティオーナに、ミーアは言った。
「ティオーナさん、お料理が得意とお聞きしましたが、それは本当ですの？」
「はい、そうですね」
頷くティオーナ。これはいけるか？　と一瞬、喜びかけたミーアだったが……。
「いつも野菜を刻んでいましたから。千切りとか、自信あります」
それを聞いて、とたんに不安になる。
「……それ以外は？」
「みじん切りもばっちりです」
ミーアには料理の知識はない……。ないが、ミーアの本能が訴えかけている。
使えないこともなさそうだが、微妙……、と。
それでも、ミーアとしては、もはや頼らざるを得ない。使えるものは、猫でも使う！
「ティオーナさん、実は、わたくし、剣術大会の日にアベル王子にお弁当を作って持っていこうと思っているのですけれど……、あなたもいっしょにいかが？」
「え？　そんな……、私なんかが姫様とごいっしょするなんて……。

それに、私、あげる人なんて、誰も……」
その言葉を聴いた時……、ふいに、ミーアの脳裏に悪魔的な閃きが生まれた。
「あっ、そうですわ。でしたら、あいつ……オホン！　えーと、シオン王子にもおすそ分けを作って持って行くのはいかがかしら？」
ミーアの予想では、この弁当作りが成功する可能性はあまり高くない。下手をすれば、ミーアたちが作ったヘンテコなものを食べたせいで、アベル王子が体調を崩してしまい、剣術大会で上手く結果が出せないかもしれない。
けれど……、それをシオン王子にも食べさせることができれば……。
――そうすれば、巻き添えにできる。ちょうど良い復讐になるかもしれませんわ！
すでに、弁当作りは引くことのできない段階になってしまっている。とすれば、だからこそ、ただ転ぶだけでは終わらない。
憎き敵に一矢報いる機会として活かしてやろうじゃないか！　と。
そう、ミーアはポジティブに考えたのだ！　ポジティブってなんだろう？
――しかも、わたくしだけが悪いのではなく、ティオーナまで関係しているとあっては、シオン王子も、わたくしだけを恨むことはできないはず。素晴らしい復讐方法ですわ！
暗い笑みを浮かべるミーア。
されど、シオン王子をも巻き込むことで、彼女の企みはあらぬ方向へと転がっていくのだった。

第五十四話　キースウッドも冴え渡る！

シオン・ソール・サンクランドは、鍛錬場で素振りをしていた。
その剣筋は鋭く、大人であっても、並の兵士には太刀打ちできないほどの高みへと到達しつつあった。
鋭い踏み込みからの横薙ぎを放ったところで、ぱちぱちと拍手が聞こえてきた。
「朝から頑張ってるねぇ、王子殿下」
「キースウッドか。相変わらず、気配を消すのが上手いな。誰が来たかと思った」
従者の出現を機に、一息入れようと思ったのか、シオンは模擬剣を置き、汗をぬぐう。サラサラとした髪から飛び散った汗が、キラキラと日の光を反射していた。
こういう仕草に、心を奪われる女子は多いんだろうなぁ、なんて思いつつ、キースウッドは口を開いた。
「で、誰にお弁当もらうか、決めたのかい？」
「誰にもらう予定もない」
唐突な問いかけに対する王子の答えはにべもない。
シオン王子のもとには、すでに数十人の女子から、申し出が届いていた。けれど、シオンは、その一つ一つを丁重にお断りしているのだ。
「おや、ということは、もしや俺の手作り弁当をご所望で」
キースウッドの軽口に、シオンはにやり、と悪戯っぽい笑みを返す。
「そうだな。たまにはお前の料理も味わってみたいものだ。国にいるときはよく作ってくれただろ？」
子どもの時から徹底した帝王教育を施されてきたシオンは、その食べ物にいたるまで厳しく管理されていた。

聡明で聞き分けの良いシオンは、一度として、その味気ない料理に文句を言ったことなどなかったが、親友たるキースウッドにはよく不満をこぼしていた。
そこで、キースウッドは、夜な夜な調理室に忍び込んで、夜食を作ってシオンに届けた。
その結果、シオンがむし歯になって二人で怒られたのは良い思い出である。
「こっちは善意でやってるのに、ずいぶん文句を言われた気がするんだが……」
「当然だな。なにしろ、俺は大国の王子殿下だぞ？　味にはこだわるさ」
おどけて笑みを浮かべてから、シオンは言った。
「まぁ、冗談はおいておくとして。手配はしてあるんだろう？」
シオンは誰かから弁当をもらおうとは思っていない。サンクランド王国の王子という肩書は、影響力が大きい。大きすぎるのだ。
気軽に特定の誰かと仲良くしてしまっては、後々、国にとって不利なことがあるかもしれない。
――なぁんてこと、考えてるんだろうなぁ、我が主（あるじ）さまは。
はぁ、とため息をつき、キースウッドは肩をすくめた。
――まぁ、間違っちゃいないんだが、もう少し肩の力抜いてもいいんじゃないかねぇ。
シオンとて、年頃の少年だ。かつて、美味しいものが食べたいと不満をこぼしたように、今回も、誰からもお弁当をもらえないことを寂しく感じてはいないだろうか。
「なにか言いたそうだな」
「いえいえ、べつに」
ひらひらと手を振りながら、キースウッドは鍛錬場を後にした。
「……しっかし、シオン殿下がもらっても大丈夫な人って言ったら、限られるからなぁ」

第一候補として思い浮かぶのは、サンクランドと同格の大国であるティアムーン帝国の姫君の顔だった。
「ミーア姫が申し出てくれたら、シオン様も断らないような気がするが……」
残念ながら、あの聡明なる姫君は、アベル王子に弁当を持っていく約束をしているらしい。キースウッドは未だに理解できないながら、彼女はアベル王子にずいぶんとご執心なのだ。
「あっ、キースウッドさん、ちょうどいいところに」
ふいに呼び止められて、キースウッドは振り返る。
「これは、ルドルフォン伯爵令嬢」
声をかけてきたのはティアムーン帝国の辺土伯爵の令嬢、ティオーナ・ルドルフォンだった。
「本日はどのようなご用向きで？」
「ええ、実は……」
話を聞いたキースウッドは、内心で思わずうなってしまった。
――三人の合作で、そのうち一人は低位の貴族、もう一人は貴族に成り上がった商人の娘。さらに、あげる相手がもう一人いる、ねぇ。
確かに、それならば、シオンが特定の女子と恋仲、などと言う厄介な噂を立てられずにすむ。しかも、それでいて、ミーア姫からの友好の意志だけはしっかりと伝えることができる。
――さすがはミーア姫だなぁ。
二重にも、三重にも張り巡らされた思惑。
なるほど、帝国の叡智は衰えを知らないな、などと感心しかけたキースウッドだったが……。
ふいに、ぞくり……と。
背筋に冷たいものが走った。それは悪寒、もしくは世間一般で言うところの虫の知らせというやつだったかもしれない。
なんだか、自らの主に、大変な危機が迫っているような……。今ここで、自分が頷いてしまったら、剣術大会が大変なことになって

しまいそうな、そんな圧倒的な予感。
目の前でニコニコしているティオーナから、悪意は感じられない。けれど、
――一応、様子だけは見させてもらうか？
かくして、主の体調に切実な危機が迫っていることを察したキースウッドは、ミーアの料理隊に参加することになる。
彼の英断が、シオン王子、アベル王子の体調を守るために、多大なる貢献をしたということは、関係者の誰一人気づかない事実だった。

第五十五話　キースウッドの料理教室

剣術大会の三日前。調理場で弁当作りの予行演習をするというミーアたちを、キースウッドは視察した。

そして……、その惨状に天を仰いだ。

「ミーア姫殿下……、そのパンは？」

ぺったん、ぺったん、と、パン生地をこねて形を作っていたミーアは、キースウッドの問いかけに、得意げな顔で答える。

「ええ、アベル王子は馬術部に入られるぐらい馬が好きですし。きっと喜んでいただけると思いますわ」

頬に小麦粉をつけたまま、ぐぐいっと胸を張る。自らの〝作品〟を前にして会心のドヤ顔である。

「なるほど、確かに相手のことを考えて料理するのは基本ですね」

キースウッドは感心した様子でうなずいてから、

「ですが、ミーア姫殿下、このパンには致命的な欠陥があります。アンヌ嬢、頼む」

隣にいたアンヌに話を振った。

アンヌは心得た、とばかりに済まし顔でうなずいた。さすがにパン焼きに慣れているので、ミーアのパンの問題点をしっかりと見抜いているのだろう。

「はい。ミーア様、馬でしたら、もう少し、こう、耳のところがですね……」

「違います。こんなに大きくて、ぶ厚かったら、生地の中まで火が通らないんです。どの窯で子馬サイズのパンを焼こうっていうんですか。もっと小さく平たくしてください」

ミーアの手前に置かれた実物大の子馬サイズのパン生地。まるで彫刻のようなそれを、容赦なくちぎりとり、バン、と潰して見せる。

ミーアの、ああ！　という悲しげな悲鳴が聞こえたが無視である。

「このぐらいの大きさにしてください。いいですね！　ミーア姫殿下」
「……」
ぷくーっと不満げに頬を膨らますミーアに、もう一度念押し、
「い・い・で・す・ね！？」
「……はぁ、仕方ありませんわね」
やれやれ、みたいに肩をすくめるミーアに、一瞬、イラッとするキースウッドであるが、ここは我慢である。
「キースウッドさん、私の野菜はどうですか？」
「ああ、ルドルフォン伯爵令嬢……。野菜を切るのがお得意のようで」
キースウッドは、ティオーナがこしらえた千切りを見て、頬をひきつらせた。
「ですが……、シオン殿下もアベル王子も、草食動物ではないので、野菜の千切りばっかりそんなにたくさんは食べられないと思いますよ」
大皿四皿に大盛りって、どんだけ千切りしてんだよ！　と、鋭いツッコミを入れたくなるのを、キースウッドは懸命にこらえた。
なにしろ相手は伯爵令嬢、しかも大国ティアムーン帝国の、である。ここは我慢である。
試されるキースウッドの忍耐力である。
「んっ？　この匂いは……」
「肉、焼けた、です」
調理場の裏の扉を開けて、リオラが入ってきた。
「これは……、とても美味しそうに焼けたね、リオラ嬢」
ジュウジュウと音を立て、肉汁を滴らせる鶏肉。ところどころ焦げてはいるが、実に美味しそうではある。
美味しそうではあるのだが……。
「あとは、お料理をお出しする相手のことを少し考えてもらえればいいんだけどね……」

なぜ、調理場のオーブンを使わないのか！
なぜ、わざわざ中庭にもっていって、たき火の熾火で肉を焼かなければならないのか！？
ワイルド過ぎる上に、清潔さの点で、ものすごく出しづらいのである。と、注文を付けようとしたところで、隣から口を出してくる者がいた。
「そうですよ、リオラさん。相手は王子様なんですよ？」
クロエは、分厚い料理の本を片手に言った。
――ああ、さすがはフォークロード商会のお嬢さんだ。しっかりとした常識を……。
「素材のうま味を生かすには、生肉が……」
「絶対だめです。やめてください」
神速で切り返すキースウッド。
クロエの持っていた本のタイトルが「秘境の珍味レシピ」だったことに今更ながらに気づくキースウッドである。
「え？　でも、馬のレバーの刺身はおいしいって、本に書いてありましたよ。それに、馬術部に入っておられるアベル王子には馬のお料理がいいかなって……」
「まず、内臓の刺身とやらは、専門のお店に行って食べるものです。そしてそれ以上に、ミーア姫殿下みたいなノリで馬料理とか言わないでください。馬術部に入っている方に馬肉とかいやがらせです。パンを馬型にするのとは違う次元の嫌がらせですから！」
半端に知識を持った料理初心者が一番アブナイことに、キースウッドは今更ながらに気づかされるのだった。
――これは、大変なことになってきたぞ。
手遅れになる前に、彼は早々に動き出すことにした。
「お姫様&淑女のみなさん（プリンセス&レイディース）、今から俺の言うことをよく聞いてください」
いっそ、厳かともいえるほど静かで、威厳のある声で、キースウッドは言った。

「お弁当作りの当日は、俺の指示に従いやがれ……ください」
ポロッと本音が零れてしまうが、今はそれどころじゃない。
「当日のメニューは簡単なサンドイッチにします。いいですね？」
「えー？　もっと手の込んだものの方が……」
「い・い・で・す・ね！？」
「ひぃっ！　わわ、わかりましたわ」
ついつい殺気を叩き付けてしまったことを軽く後悔しつつも、キースウッドは引くに引けない戦地に足を踏み入れたことを悟ったのである。

第五十六話　ミーア姫、キュンとする！

剣術大会の二日前。ミーアは、アベルのところに事情を説明に訪れた。

これから、ちょうど湖畔に剣の素振りをしに行くということなので、並んで歩きながら話すことにする。

「そうか、手作り弁当か……」

普通であれば、きちんとした店に注文するところを、素人以下の自分たちが作るのだ。

ミーアとしては、

――わたくしの料理、結構、イケてるのではないかしら？

などと、キースウッドが聞いたら卒倒しそうなことを確信してはいるのだが。

そこはそれ、さすがにお店のプロにかなわないことぐらいは自覚はしている。

そこで事前に、ちょっとだけまずかったらごめんなさい、という予防線を張りに来たのだ。

「もうしわけございませんわ、アベル王子。本来であれば最高級のお店で注文するはずのところを……」

「いや、かまわないよ。かまわないというか、むしろ嬉しいぐらいだ」

「嬉しい、ですの？」

「ああ、母上が時折、作ってくれたからね」

レムノ王国では、貴族と言えど、女性の立場はあまり高くない。

基本的には、それは良いことではないが、逆に言えばそれは、貴族の女性であっても平民のように行動できるということでもある。

貴族であっても夫や子どものために料理を作ることが、ほかの国に比べて珍しいことではないのだ。

「確かに、専門の料理長が作るより味は落ちるのかもしれないが、それでも一生懸命に母上や姉上が作ってくれただけで嬉しいものだったよ」
優しげに、楽しみにしてるよ、と言うアベル。想定外の反応を見て、ミーアは、手作り弁当に要求されるレベルがワンランク上がったのを感じた。
――まさか、アベル王子が手作り弁当を食べ慣れているなんて……。手作りだから味が落ちる、なんて言えなくなってしまいますわ。ここは、やはり、もっと凝ったものを……。
などと……、ミーアの思考がよからぬ方向に向かいつつある時だった。
「わぁ……」
突如、目の前に広がった光景を見て、ミーアは小さく歓声を上げた。
見渡すかぎりの青。澄み渡る湖面が日の光にはじけて、キラキラと輝いて見えた。
白く美しい砂浜には、ほとんど人の気配はなく、静かな波の音だけが響いていた。
「こんな素敵なところがあるなんて、知らなかったですわ……」
前の時間軸でも一度も来たことがない場所である。
「そうか。気に入ってもらえたのならば、よかった」
アベルはそう言うと、そっと手を差し出してきた。
「足元に気を付けたまえ」
流れるような自然なエスコートに、ミーアは少しだけキュンとしてしまった。
――ま、まぁ、男子として当たり前のことですわ！
ちょこん、と手を握る。
予想していたよりも固くてたくましい手の平に、ミーアは再びキュンとした。
――ああ、こんなきれいな湖畔を殿方と歩く日が来るなんて……。

地下牢にいた時には、想像もしなかった瞬間である。
ミーアがしみじみ幸せを噛みしめていると、
「でも、少しだけ残念ではあるな」
アベルがつぶやく。不思議そうにミーアは首を傾げた。
「なにがですの？」
「いや、ミーア姫のお弁当を一人占めできないのが……」
「……え？」
いたずらっぽい笑みを浮かべるアベル。その突然の一言に、ドキリ、と心臓が高鳴った。
――なっ、なっ、なに言いだすんですの、この人っ！？　て、天然なんですの？
地下牢で幾度となく想像し、妄想した、空想上のシチュエーション。
恋仲の男性とともにやってくる浜辺……。
甘い会話……。
なんの覚悟もなく、そんな状況に叩きこまれたミーアはパニック寸前だった。
――お、落ちつかなければ。そ、そう、深呼吸ですわ！
突如、顔を赤くして、呼吸を荒くし始めたミーア。それを見たアベルは、心配そうにミーアの顔を覗き込む。
「ん？　少し疲れたかね？」
「え？　あ、ええ、そ、そそ、そうですわね」
アベルは砂浜の、木陰になっているところにミーアを連れていき、自らの上着を砂浜の上に広げて、
「しばらく、そこに座って休んでいくといい。退屈するだろうから、回復したら先に帰っていてくれたまえ」
ミーアを座らせると、おもむろに素振りを始めた。
「まぁ、ずいぶんと熱心に励んでおられるようですわね」
先ほど握ったアベルの手の平は、すっかり固くなっていた。それは、彼がどれだけ剣を振り続けたかを表していた。

「はは、我ながら、こんなに必死に剣を振ったことなど、今まで一度もないよ。なにしろ、どうしても勝ちたい相手がいるからね」
そう言ってからアベルは、ふとなにかを思いついたような顔をした。
「だから、そうだな。お弁当のこと、残念だが、少しだけ安心もしているのだ」
「……へ？」
「いや、ボクだけミーア姫のお弁当を食べたとなると、そのおかげでシオン王子に勝てたなどと言われるかもしれないからね」
そう言って、輝くような笑みを浮かべるアベル。その爽やかな顔を見たミーアは、
「……はぇ？」
息が抜けるような、ヘンテコな声を上げることしか、できなかった。

第五十七話　完成！　馬型サンドイッチ！

剣術大会の当日の朝。
キースウッド総監修のもと、サンドイッチ作りが始まった。
「じゃあ、リオラ嬢は予定通り肉を、そこのオーブンで焼くんだ。少しばかりいつもと違うけど、火加減はむしろ調節しやすいと思うから」
「はい、です。わかった、です」
リオラはビシッと背筋を伸ばすと肉の下ごしらえを始めた。
使うのは鶏肉だった。羽をムシムシとむしって、ガリガリ表面を削って、内臓を処理して。
塩と香草、香辛料で下ごしらえ、そして……、ひょいっとオーブンに放りこんだ。
べちゃ、っと嫌な音が聞こえた気がするが……、キースウッドは聞こえないふりをした。
いちいち気にしていては、胃に穴が開くことを彼は確信していた。
焼けば……、火さえ通っていれば、食べられないことはないはずだ。
自らに言い聞かせて、次に行く。
「肉に関しては形が悪くても問題ない。あとは……」
「キースウッドさん、こんな感じでどうですか？」
やってきたのはティオーナだった。その細い腕に抱えたものを見て、キースウッドは大きくうなずいた。
「いいですね。さすがはルドルフォン伯爵令嬢です」
キースウッドの賛辞に、ティオーナははにかんだ。
もともと、分量さえ間違えなければ、ティオーナは十分に戦力になり得るのだ。問題なのは……、
「パンの方も、もう焼き始めてよろしいかしら？」

そう言って、ミーアが差し出してきたものを見た時……、キースウッドは思わず頭を抱えたくなった。
幸い、生地の方はアンヌが全面的に手を加えたのだろう。きちんとしたものに仕上がっている……ように見えなくはない。
だから、あとは形さえしっかりすれば……、サンドイッチにしやすい形にしてもらえれば良いのだが……。
ミーア作のそれは、前回と同じ馬の形をしていた。
――四角くしろって言ったんだが……。
いや、幾分か成長の兆しも見られるのだ。きちんと中まで火が通るように平たく作ってあるし、大きさも常識的なパンの範疇にはいるものになっている。
けれど、やはり問題なのはその形だった。
……なにせ馬である。胴体部分も妙にリアルに作ってあるから、微妙に細い。
そんな形でどうやって中身挟むんだよ！　と、思わずたたきつぶして、生地の状態に戻したくなるが……。
ワクワク顔で返事を待つミーアには、さすがにそれは言いづらい。
国家外交的な観点はもちろんのこと、ミーアが一生懸命作った形跡が見えるそれをつぶすことは、キースウッドとしても気が引けることだった。
しかし、このままでは確実に中身がズレてしまう。かぶりついた時に中身が飛びだして切ない思いをしてしまうことは確実だ。
――とすると。
「フォークロード嬢、すまないが、アンヌさんといっしょにホワイトソースを作ってもらえるかな？　材料は……」
「あ、大丈夫です、読んだこと、ありますから。アンヌさん今から言うものを……」
クロエの指示で、素早くアンヌは材料をそろえていく。
もともと、クロエの知識はキースウッドに負けないぐらいのものがあるのだ。

正しい知識（生肉とか珍味ではなく、断じて、そういうマニアックなものではなく）を引き出してあげさえすれば、彼女は十分に戦力になるのだ。

――よし、そのソースを糊代わりにして。

ミーアのパンの最大の問題は、中に挟んだ肉と野菜が落ちてしまうことだ。だから、キースウッドはソースを使って、中身を固定しようというのだ。

焼き上がってきた馬型パンにたっぷりソースをぬり、その上に野菜を。さらにその上にソースを塗って肉を挟んで……。

「よし、完成だ……」

こうして、キースウッド苦心の作、馬型サンドイッチは無事に完成したのだった。

すべての作業を終えた時、キースウッドのもとにミーアがやってきた。

「ありがとうございましたわ、キースウッドさん。助かりましたわ」

ミーアからのお礼を受けて、キースウッドは小さく頭を下げた。

「もったいないお言葉です。シオン殿下にお伝えしておきます」

従者の手柄は主人の手柄、従者への賛辞は主君への賛辞。だから当然、ミーアの言葉はシオンへの物だと、キースウッドは思っていた。

しかし、

「いえ、シオン王子にではありませんわ。あなたに感謝いたしますわ、キースウッドさん」

ミーアは真っ直ぐにキースウッドの目を見つめて、

「あなたのおかげで、こうしてお弁当を作ることができましたわ」

そう言って、輝くような笑みを浮かべた。

――ああ、なるほど。こうやって相手の心を掴んでいくってわけか。

そんなミーアを見て、キースウッドは内心で感心した。

普通、貴族は従者に頭を下げたりしない。プライドが許さないからだ。
けれど、ミーア姫は、そんなつまらない常識にとらわれない。
素直にお礼を口にする。
長く貴族社会に浸ってきたキースウッドにとって、それは、新鮮な驚きだった。
――シオン殿下の前に出会っていたら、仕えていたかもしれないな。
キースウッドは知らない、ミーアが腹の中でなにを考えているのか……。

――あんな奴にお礼を言うなんてまっぴらですわ！
などと、実に心の狭いことを考えているなど想像もしない。
実のところ、前の時間軸ではキースウッドにも十分痛い目に遭わされていたのだが、そこはそれ……。
――従者の罪は主君の罪。すべてあいつが悪いんですわ！
実に貴族的かつ常識的な思考をミーアがしているとは、夢にも思わないキースウッドだった。

第五十八話　剣術大会１

セントノエル学園では、夏と冬の二回、剣術大会を開いている。
原則として全男子生徒への参加が義務付けられているこの大会は、一大イベントとして、毎年、盛況を誇っていた。
「すごい活気ですね、ミーアさま」
「そうですわね。学園内に街ごと移動してきたみたいですわ」
広い校庭には、三つの特設競技場が設けられ、その周りには、たくさんの出店が並んでいる。
セントノエル学園は王侯貴族の子弟が集まる学校、普通ならばこんな風に無造作に一般民衆が足を踏み入れることはできない。
けれど、この日は特別だった。ラフィーナの厳しい審査を通過した商人たちは、思い思いに店を広げ、校庭はさながらお祭り会場のようだった。
――そう言えば、前の時間軸でも、出店めぐりをしたものですわ……、一人で。
前の時間軸のミーアは、この出店をシオンと回る気でいたのだ。断られることなんか、まったく想像していなかったために、取り巻きたちの誘いを断った上でのことだった。
結果、用意したお弁当は食べてもらえず、出店もいっしょに回れず。
ミーアは一人でお弁当を食べ、一人で出店を回ったのだ。
――あれは……、辛かったですわ。
楽しそうに回る学友たちの姿にすら腹が立ち、恨みがましい目を向けてしまった結果、ミーア姫は剣術大会が嫌いなんだと噂が立ち、それ以降の年も誰からも誘われなくなってしまったのだ。
「あ、ほら、ミーアさま、あれ、美味しそうです」
「そうですわね、では、アンヌ、すみませんが、わたくしとクロエ

とあなたの分、買ってきてくださいな」
「はい、わかりました！」
小走りに向かったアンヌは、すぐに小さな紙箱におさめられた食べ物を持って帰ってきた。
甘ったるいチープな匂いの食べ物だった。上の方にあった赤いものをひょいと指でつまみあげ口に入れた時、じわ、っと鼻の奥が熱くなった。
同時に、ミーアは気がついた。
自らの頬に涙が伝い落ちて行くことに……。
――ああ、わたくし、感動してるんですのね……。
こんな風にアンヌとクロエ、二人の気心が知れた者たちと一緒に出店を回れるのがなんとも幸せなことか。
――わたくし、たぶん今、とっても幸せで……、それで涙が……。
「ミーアさま！　それ、それ！」
あわてた様子で、クロエが手をぶんぶんさせていた。
「はへ？」
「それ紅辛子（べにがらし）です。すっごく辛いやつ！　口から出して、早くっ！」
「は？　ぁっ、かっ、からい！　カラいですわっ！　鼻がつーんとしますわ！」
大きな瞳からポロポロ、涙を流すミーア。辛すぎて鼻の頭が真っ赤になってしまう。
「みっ、水、お水、どなたかっ……」
「ほら、これを飲みたまえ」
ふいに脇から差し出された飲み物を、ガッと受け取ると、ミーアは一気に口の中に流し込む。
爽やかな、かんきつ類の風味が口の中に広がり、辛子の辛さが消えていく……。
「ああ……、助かりましたわ。ありがとうございました」
涙目で見上げたその先に立っていたのは……、
「いや、役に立ててなによりだ」

「あっ、アベル王子っ！」
そこにいたのは、模擬戦用の騎士の鎧を身につけたアベルだった。革製の胸当てと肘当てという軽装ながら、戦装束に身を包んだその姿は、凛々しくて、ミーアは思わず……、
――こっ、この程度でときめくはずがございませんわっ！
と、内心で踏みとどまった。
「あっ、申し訳ございません。もしや、これ、試合中に飲まれるものでしたか？」
ミーアは手の中の水筒を見て言った。
「すぐに代わりのものを買って……」
「べつに構わないさ。まだ、半分以上残ってるしね」
そう言って、アベルはミーアから自然に水筒を受け取り、腰の部分に結わいた。その様子を見て……、
――あ、あら？　アベル王子ったら、あの水筒、そのまま飲むつもりですの？　でも、あれは、今しがたわたくしが口を付けたもので……、それをそのまま飲んだりしたら……あら？
ミーアは、頭が真っ白になってしまう。
いわゆる、意識しすぎというやつである。
そもそも、アベルは十二歳の男子である。男女の恋愛というやつにさほど詳しいわけでもなく……。
さらには、試合前ということもあって、ミーアのように無駄に妄想を膨らませる余地などない。
――これって、間接キスなんじゃ！？
などと、妄想が暴走しつつあるミーアの心情など、わかるはずもなく……。
「どうかしたのかい？　ミーア姫、なんだか、顔が……」
「なっ、なんでもございませんわっ！」
バッと顔を上げると、すぐ目の前、アベルの心配そうな顔が思いのほか近くにあって……。
「……ぁっ！」

ミーアは息を呑み込んだ。
「少し熱があるのではないか？」
「だっ、だだだ、大丈夫ですわ問題ございませんわ、そそそれより、アベル王子、初戦のお相手は……」
あわてて、話題を変えようとしたミーアだったが、それを遮るように、
「おや、これはこれは。ミーア姫殿下ではございませんか？」
そこに立っていたのは、いつぞやミーアにへこまされた少年、レムノ王国第一王子だった。

第五十九話　剣術大会2

「あなたは……、確かアベル王子のお兄さま」
「はは、おぼえていてもらえたとは光栄ですよ。ミーア姫殿下」
殷懃無礼（いんぎんぶれい）に頭を下げて、アベルの兄は言った。
「ところで、聞くところによれば、我が弟のために弁当を作ってくださったとか」
「ええ、腕によりをかけて作らせていただきましたわ」
胸を張るミーアに、第一王子は小ばかにしたような笑みを浮かべた。
「くく、それはそれは、なんというか……。残念なことですな」
「は？　なんのことですの？」
「いえね、アベルの初戦の相手は、この俺だったものですから。くくく、つまり、こいつは初戦で負け。負けた後で、食べる弁当の味は、くく、さぞかし美味しいことでしょう。よき敗戦の慰めとなりましょう」
にやにやと馬鹿にしたような笑みを浮かべて、
「いやいや、それにしてもまさか、本当に我が弟に恋をするとは、帝国の叡智などと言ってもしょせんは子ども。見る目がないことだ」
「お兄さま、ミーア姫に失礼なことを言わないでください」
アベルは焦って口を挟む。
兄は、レムノ王国の女性を基準にミーア姫を図っているようだが、それは大きな間違いだ。
確かにミーア姫は寛容で慈愛にあふれた少女（注：アベルから見ると）だが、決して大人しくはない。
不正には敢然と立ち向かう聖女（注：アベル基準では）で、無礼に対してはきちんと立ち向かう自尊心と高い叡智を兼ね備えた少女（注：アベルの曲解に基づいた評価）なのだ。

それゆえ、兄の不平に、ミーア姫が怒りをおぼえないはずがない。アベルはとっさに、ミーアの顔をうかがった。
けれど、ミーアはなにも言わず、そっとアベルの後ろに下がった、身を引いたのだ。
――ミーア姫、なぜ……？
一瞬、怪訝に思うアベルだったが、すぐにミーアの真意に気づいた。
――もしかして、ボクに花を持たせようと言うのか……？
ミーアであれば、ここで反撃しようと思えばいくらでもできるはず。彼女の聡明さをもってすれば、兄のつまらない嫌味など、いくらでも封じることができるはず。
けれど、ミーアはそれをしない。
ミーアが言ったのは、ただ一言。
「どうぞ、お勝ちください。アベル王子」
ミーアは、穏やかな顔で言った。
――ボクが勝つと、信じてくれているのか？
確かに、アベルが兄に勝てば、ミーアの名誉は守られる。けれど……。
アベルは改めて、兄を見た。
ただの一度も勝ったことのない兄。自分より、遥かに剣の才能に勝る兄。
体格だって、兄のほうが自分より頭一つ分は大きい。
――ボクに勝つことが、できるのか？
不安に揺れる心に、一瞬、目の前が真っ暗に染まりかけた時、
「勝って食べたお弁当の方が、美味しいはずですわ」
ミーアの一言が、緊張に固まった心を溶かした。
アベルは小さく笑った。
「ああ……、そうか。確かに、その通りだね」

「あなたは、確かアベル王子のお兄さま……」
名前は、なんだったかしら？　と、ミーアは小さく首をかしげる。
ごちゃごちゃとなにか言いつつ敵意を笑みの形に変えて向けてくる少年に、ミーアは小さくため息を吐いた。
――これは、ずいぶんと恨まれておりますわね。少し困りましたわ。
ミーアは、アベルの兄に悪い印象は抱いていない……というか、印象も何も、そもそも眼中にない。
覚えてすらいなかった。
あの時は、シオンから逃げることと、アベルとコネを作ることしか頭になかったし、それ以降も、別に気にするべき人物でもなかったからだ。
しかし、彼がレムノ王国第一王子であるということは、さすがに考慮せざるを得ない。
もともとアベルに近づいたのは、なにかあった時にレムノ王国から援軍を出してもらうためだ。
せっかくアベルと仲良くなっても、第一王子の反対で援軍を得られないなんてことになったら、目も当てられない。
好かれようとは思わないが、あまり反感も抱かれたくないのがミーアの本音だった。
――となれば、表だって敵対しないことが大事ですわ！
ミーアは一歩引いて、彼の敵意をそらしにかかる。ミーアの思考の大部分はギロチン回避でできている。
その行動も言動も、すべてはギロチン回避のための計算に基づいたもの。
――あとはアベル王子が適当に負けて、彼の兄が自尊心を満足させればいいですわ……、それでアベル王子を慰めて仲を深めていけば一石二鳥。
と、ミーアは計算して……でも。
「どうぞ、お勝ちください、アベル王子」

気づけば、本音がこぼれていた。
なぜなら、ミーアはアベルの固くなった手の平を思い出したから。
彼が一生懸命に剣術の鍛練をしていたことを、知っていたから。
そんな彼が負けるのを見るのが、なんとなくイヤだったから。
――あら、おかしいですわ。わたくし、どうして？
不意にこぼれてしまった一言に、ミーアは戸惑い……、やがて一つの結論に至った。
――ああ、そうですわ。せっかく作ったお弁当を暗い気持ちで食べられたくないからですわ。負けて暗い気持ちで食べたら、せっかく美味しく作ったサンドイッチがまずく感じるかもしれませんし……。
きっとそうに違いない、と頷き、ミーアは言うのだ。
「勝って食べたお弁当の方が美味しいはずですわ」
と。

第六十話　剣術大会3　―アベルの戦い―

「それでは、予選第七試合を始めます。アベル・レムノくん、ゲイン・レムノくん、闘技場の上にあがってください」
審判の声に呼ばれて、アベルは小さく息を吐いた。それから、静かに闘技場の階段を上がり、中央まで行ったところで、剣を抜いて構える。
刃引きした練習用の剣を挟んで、目の前に立つのは、幾度も負け続けてきた兄の姿。
緊張に、腹がピリピリと痛んだ。
――だけど、負けるわけにはいかない。
しっかりと剣を構え、兄、ゲイン・レムノを睨みつける。
「さてと、それじゃあ、どれだけ成長したか、俺が試してやろう。我が弟よ」
剣を肩にのせ、ニヤニヤと意地わるげな笑みを浮かべる兄。と、次の瞬間、いきなり踏み込み斬りつけてくる。
「ぐっ……」
重たい斬撃を受け止めた瞬間、刀身がきしむ。
両腕から痺れが走り、危うく剣をとり落としそうになってしまった。
刃を潰してあるとはいえ、重量のある金属製の剣だ。当たれば切れはしないが、あざぐらいはできるし、当たり所が悪ければ当然、骨だって折れる。
数年前、兄に折られた骨の痛みを思い出し、自然と体が固くなるのをアベルは感じた。
「ふん、まぁ、そんなものだろうな。お前など」
軽蔑した目で見つめてくる兄に、アベルは歯を食いしばる。
――ぐっ、強い。

十代前半の男子は、一年経つごとに体が大きく成長する。それゆえ、兄との年齢差は、絶対的な力の差となって現われてくる。
防戦一方のアベルを嘲笑うように、ゲインが言った。
「しかし、良い女を引っかけたじゃないか。アベル」
「え？」
剣と剣を合わせ、つばぜり合いの状態を作ってから、ゲインはアベルに顔を寄せた。
「弱いくせに、帝国の姫君を落とすとはな。父上もさぞかしお喜びになるだろうさ」
品のない笑いを浮かべて、ゲインは視線をアベルの後ろへと動かした。そこには、アベルの試合を観戦しているミーアの姿があった。
「それにしても、今日はずいぶん大人しかったな。ふん、帝国の叡智などと言っても、しょせんはガキ、少しばかり脅してやれば大人しくなると思ってたが予想通りだったな」
「それは……」
違う、という否定の言葉。それが口にのぼる前に、兄の言葉が続いた。
「もしアベルと婚儀を結ぶなどということになれば、我が国に呼んでやろう。一週間ほど滞在させれば、その間にきっちりと俺がしつけてやろう」
アベルの脳裏に、母や、姉、それに城のメイドたちのことが思い浮かぶ。
「なぁに、少しばかり痛い目見せてやれば、大人しくなるだろう。その方があとあと、お前も楽だろうしな。帝国も思うがままに……」
虐げられ、粗雑に、時に暴力的に扱われる、その姿が……、暗い目をした彼女たちの姿が、ミーアと重なる。
先ほどまで恐ろしい速さで打っていた心臓の音が徐々に遅くなり、目の前の景色がはっきりとしたような気がした。
兄の剣で打たれれば痛い、ケガをするかもしれない。
けれど、そんなことどうでもよくって……、そんなものよりはる

かに大切なものがあることに、気づいてしまったのだ。
「兄上」
気づけば、口を開いていた。
その響きの冷たさに、アベルは自分でも驚きを感じる。
「んっ？」
その口調が変わったことはゲインも気づいた。
剣を引き、間合いを取る。
「ボクのことは、なんと言っていただいても結構。ご自由になさるがいい。けれど」
兄に鋭い視線を叩きつけながら、アベルは言った。
「ミーア姫を貶(おとし)めるようなことをこれ以上言うというのなら……」
帝国の叡智と謳われた彼女が、その輝きを無理やりに奪われる……。
そんなことを、許していいはずがない。
「言うのなら？　なんだ？」
片手でヒラヒラと剣を揺らすゲイン。その馬鹿にしきった態度を冷静に見つめながら、アベルは構えを上段に変える。
振りおろしの一撃に、自らの持てるすべてをこめるその構えはレムノ王家に伝わる剣術の第一の構え。
相手よりも速く攻撃を当てる、その一点のみに力を注ぎ、守りのことは気にしない、攻め一辺倒の構え。
それを見て、ゲインは再び嘲笑を浮かべる。
なぜなら、それは、剣術を始めた者が最初に習う基礎の構えだったから。
「第一の構えか。まぁ、お前はしょせんそんな程度だろうな」
余裕の態度で剣を構え直す兄を、決して倒すことのできなかった兄を、しっかりと見据えて、アベルは息を吸って、吐いて。
仕掛ける！
どん！　と、闘技場を踏みぬかんばかりの重い踏み込み、
「これ以上、彼女を貶めることは絶対に許さない！」

叫ぶと同時に剣を振りおろす。
加速する刃は、日の光を受けて、一筋の稲光と化した。
勝負は……、一瞬でついた。
「へ……うぁ……ぎゃあああああっ！」
痛みに、情けない悲鳴をあげるゲイン。音を立てて、その手から剣がこぼれ落ちる。
彼の肩には、アベルの剣がしっかりと入っていた。
「勝負あり！」
審判の声、直後、闘技場が歓声に埋め尽くされる。
呆然と、運ばれていく兄を見つめていたアベルだったが、
「アベル王子！」
どこかから聞こえた、その声に、ようやく肩から力を抜いたのだった。

第六十一話　波乱のランチ、キースウッドは泣いていい

アベルの快進撃は続いた。続く二試合でも上級生に勝利した彼は、負けなしで昼食の時間を迎えることができた。
中庭の一角、ぽかぽかと日当りのいい芝生に敷物を敷き、アンヌとクロエが食事の準備を進めていた。
そのかたわらで、ミーアはアベルに微笑みかけた。
「すごかったですわ！　アベル王子」
両手をぶんぶんさせ、興奮した様子で話しかけてくるミーアに、アベルは照れくさそうに笑みを浮かべた。
「いや、ミーア姫の応援のおかげだよ」
「そんなことありませんわ。アベル王子の努力の成果ですわ」
などと言いつつも、悪い気はしないミーアである。
上機嫌に鼻歌混じりに、ミーアは言った。
「それにしても、本当にお強いんですのね。わたくし、ぜんぜん知りませんでしたわ」
それは、ミーアにとって、とても予想外の出来事だった。
――まさか、ここまで強いとは思いませんでしたわ。これならもしかしたら、シオン王子をぎゃふんと言わせることができるかも知れませんわ！
ミーアは、別にシオンやティオーナに復讐しようなんて大それたことは考えていない。
理由はもちろん危ないからだ。
なにしろ、ヘタなことをして恨みでも買おうものなら、ギロチンまっしぐらになってしまうかもしれない。
そんな危険を冒すぐらいならば、近づかない方がいい。
けれど、もし……、もしもその危険を冒すことなく、ぎゃふんと言わせることができるというのなら……それを応援するのはやぶさ

かではない。
いや、むしろ積極的に、全力で、全身全霊をもって！　応援してやりたいぐらいである。
「これならば、優勝も夢ではございませんわ」
「いや……、さすがにそれは、難しいと思う。なにせ、シオン王子がいるからね」
「大丈夫ですわ。アベル王子、必ず勝てますわ。自信をお持ち下さいな」
自分のことでもないのに、自信満々に断言して、どん、と力強く胸を叩くミーア。
「あなたは強いですわ。どうか、あのにっくきシオン王子を……」
「うん？　俺がどうかしたかな？　ミーア姫」
「っ！？　シオン王子？」
突然のことに、ミーアはぴょこんと飛び上がる。
――なな、なぜ、こんなところに、こいつらがいるんですのっ！？
ミーアの後ろには、シオンとキースウッド、ティオーナとリオラが立っていた。
シオンの分のサンドイッチはティオーナに持って行かせたはず。今頃は、どこか校舎の別のところで昼食を食べているはずなのに。
疑問をこめて、視線をティオーナの方に向けると、ティオーナは、なぜか、やってやりましたよ！　みたいな顔をしていた。
親指をぐっと立てていい笑顔を浮かべている。
「ルドルフォン伯爵令嬢が、せっかくだから、ミーア姫たちと一緒に食べたらどうか、と言ってくれてね。お邪魔だったかな？」
「い、い、いえ、そそ、そんなことは、ございませんわ……おほほ」
そう答えつつ、ミーアは、思わず顔が引きつるのを感じる。
――前の時間軸で散々、わたくしの誘いを断ったくせに、こんなにもあっさりとっ！
そうなのである。ミーアは、前の時間軸、シオンに誘いを断られた挙句、この剣術大会をぼっちで過ごさざるを得なくなったのだ。

ボッチで泣きべそをかきながら、用意したお弁当を食べたのだ……。
にもかかわらず、この態度……。
優しげな笑みを浮かべつつ、ティオーナやアンヌに話しかけるシオンを見ると、ミーアのお腹に、ふつふつと怒りの炎がわき上がってきて……。
「おや、このサンドイッチ、ずいぶん面白いな」
その炎は、アベルの声であっけなく消えてしまった。
「あ、あら、気づかれましたの？」
とたんに、ミーアはもじもじする。
アベルが、自分が作ったサンドイッチを手に取ったのを見て、急に落ちつかない気持ちになったのだ。
――アベル王子が、わたくしが作ったサンドイッチを見てますわ。ああ、そんなに見られると緊張いたしますわね。
ミーアは生唾を飲み込んで、アベル王子の反応を窺っていた。じーっと緊張に顔をこわばらせて……。
「ああ、これは、馬だね」
アベルは微笑みながら、サンドイッチをほおばった。
「うん、すごくおいしい。このサンドイッチ、すごくよくできているね」
その言葉に、ミーアは、ぱぁっと笑みを浮かべた。
「気に入っていただけたなら、なによりですわ」
サンドイッチを褒められて、ミーアは、なんだかすごく嬉しくなってしまった。
自然と体が弾んでしまったぐらいだ。
なにしろ、このサンドイッチの特徴は、言うまでもなく馬型なところである。
では、サンドイッチを馬型にしようと提案したのは誰か？
そう、ほかならぬ、ミーア自身である。
ならば、このサンドイッチに対する賞賛は、そのまま自分に対する賞賛と言っても良いのではないか？

ミーアの脳内では、そんなロジックが展開されていた。
ヘンテコな形のパンにはさめるように、中の具を調整したことも、パンがずれないように工夫を凝らしたことも……、キースウッドの汗と涙の努力はミーアの頭から飛んでしまっていた。
……キースウッドは泣いていい。
「アベル王子、少しいいだろうか？」
その時だった。
ティオーナたちとの会話がひと段落したのか、シオンがアベルのもとに歩み寄った。

第六十二話　ミーアのため息

「シオン王子、ボクになにか用かな？」
不思議そうに首を傾げるアベルに、シオンが言った。
「遅くなったが、兄君への初勝利おめでとう」
「ああ、それはわざわざ、ありがとう」
屈託のない笑みを浮かべるアベルに、シオンは小さく頭を下げた。
「そして、俺は君に謝らなければならない」
「？　なんのことだい？」
首をかしげるアベルに、シオンは続ける。
「俺はてっきり君が負けるものと思っていた。君と兄君との実力の差は明らかだと思っていたからな」
――まぁ！　なんて失礼なっ！　アベル王子があんなダメ兄に負けるはずがありませんわ！
ミーアのシオンに対する好感度が下がった。
しかし、アベルは、シオンの言葉に苦笑いを浮かべる。
「その見立ては正しいと思うよ。ボクが勝てたのは運が良かったのさ。シオン王子のような実力で勝ち進めたわけじゃない」
――まぁ！　なんて謙虚な！
ミーアのアベルに対する好感度が上がった。
「運という要素は大事だよ、アベル王子。俺だって実力だけで勝ってきたわけじゃないさ」
――まぁ、当たり前ですわ。あなたが勝ってこられたのは、当然、運が良かっただけですわ！
ミーアは同意した。
「シオン王子にそう言ってもらえるとは、光栄だ。誇らしいよ」
――そんなことありませんわ、アベル王子。こんな奴に認められたからって、大したことございませんわ！

ミーアは反対した。
「なんにせよ、次の試合、いい戦いにしよう」
そう言って、シオンは手を差し出した。その顔には余裕の笑みが浮かべられていた。
熱い男の子同士の友情である。
ミーアの隣に座るクロエから、
「……素敵」
などと言うため息がこぼれる。
アンヌもティオーナも、対戦を前にした二人の王子に、うっとり見とれている。
ちなみに、リオラはサンドイッチの中の肉の焼き具合を調べて満足げにうなずいている。ぶれない少女である。
そして、ミーアもまた、そんな男子の熱い友情になど興味はなかった。
むしろさっきまで良い雰囲気だったアベル王子をシオンにとられたようで、不機嫌になっている。
ぷくーっと頬をふくらませ、不機嫌そうにサンドイッチをかじる、ちょっぴり心が狭い皇女殿下である。
中身が二十歳の女性だと思うと、心が狭いというかなんと言うか……。
――せっかく、アベル王子がわたくしのサンドイッチを褒めてくださっていたのに、邪魔しないでほしいですわ！
そう思い、ミーアは、くいっと軽くアベルの服の裾を引っぱった。気づいたアベルが振り向いたのを見て、その目をじっと見つめて訴える。
――わたくしのサンドイッチ、もっと褒めてくださってもよろしいんですのよ……？
実に、こう……、ウザいミーアであった。
シオンから差しだされた手に対して、アベルはいつも通り、当た

り障りのない笑みを浮かべた。
敵を作らないための笑み、誰からも悪印象を抱かれないような、ただそれだけの笑み。
そんな笑みを浮かべて言うのだ。
「いい勝負をしよう」と。
「どこまでできるかわからないが、胸を借りるつもりで精いっぱいにやるつもりだ」と。
負けた時の事を考えて……。負けても、自分が傷つかないように予防線を張って。
それが、アベルの処世術。体に染みついた、幼い時からの生き方だ。
けれど……、そこで、くいっと、服が引っぱられるのを感じる。
――うん？　なんだ？
振り返ると、ミーアが服の裾を掴んでいるのが見えた。
じっと見つめてくる瞳、美しい瞳には真剣な光が灯り、まるでなにかをアベルに語りかけているかのようだった。
――あなたは強いですわ、アベル王子。
アベルの脳裏に響くのは、先ほどミーアから言われた言葉だった。
彼女は言ったのだ。
あなたは強い、と。
自信を持て、と。
必ず勝てる、と。
彼女は言った、言ってくれたのだ。
――ならば……、ボクは。
勝たなければならない、とアベルは思った。
彼女の言葉をウソにしてしまわないように。
信じてくれた彼女の気持ちを無駄にしないために。
「覚悟してもらおうか、シオン王子」
気づけば、アベルは言っていた。
その声には、アベルが今まで生きてきて、一度も経験がないぐら

いの、決意が込められていた。
「覚悟してもらおうか、シオン・ソール・サンクランド」
「うん？」
不思議そうに首をかしげたシオンに、アベルは告げる。
「ボクは、アベル・レムノは、君に負けるつもりはない」
その、堂々たる宣戦布告に、シオンはにやり、と挑戦的な笑みを浮かべる。
「そうか。大歓迎だ、アベル・レムノ王子。君を全力で倒すことをここに誓おう」
そんな熱いやり取りに、クロエ、アンヌ、ティオーナの三人は、ほぅっと熱い吐息をこぼして、リオラは、自分の作った焼肉の美味しさに、ほぅっと熱い吐息をこぼして……。
――わたくしの、サンドイッチの話題は……？
ミーアは、なんとも悲しげなため息をこぼすのだった。

第六十三話　剣術大会４　―決戦―

「それでは、次の試合を始めます。シオン・ソール・サンクランドくん、アベル・レムノくん、闘技場に上がってください」
名を呼ばれた二人の王子は、ゆっくりと闘技場の上に歩を進めた。
闘技場の周りには、多くの生徒たちが集まっていた。
剣の天才と名高い大王国の王子、シオンはもちろんのこと、新入生ながらに快進撃を進めるアベルに対する注目も、否応なく高まっていたのだ。
――やれやれ、まさかボクがここまで注目を集めてしまうとは。予想外ではあったな。
苦笑いを浮かべつつ、アベルはシオンに礼をする。
それから、引き抜いた剣を頭上まで引き上げる。
いわゆる上段、王家に伝わる剣術の第一の構え、攻撃的な構えだった。
それに対して、シオンは、剣をだらりと下げた下段構えだった。
シオンの剣は天才の剣。
相手の一撃を受け止め、受け流し、相手の態勢が崩れたところで反撃を打つ。
カウンター、後の先をとる剣術。
その一撃は必殺の一撃。体勢を崩された相手は、避けることも受けることもできず、敗北する。
相手のどんな攻撃をも受けきることができるという自信がなければ、絶対にできないやり方、アベルにはとてもできないやり方だった。
アベル・レムノは凡人だ。
彼は生まれた時からそれを自覚していたが、その想いが決定的になったのは、かつてシオンと剣を交えた時のことだった。

生まれながらの才能の差はあって、それを埋めることはきっとできない。そんな実感があった。
だから、彼は諦めた。それが賢い選択だと思った。
埋められない才能の差があるのなら、頑張るだけ無駄。
だから、頑張らない。
とても理にかなった考え方だと思ったのだ。
だけど……、セントノエル学園に来て、ミーアと出会って、アベルの中に想いが生まれた。
シオンに負けたくない、勝ちたい。
勝って、ミーアの期待に、信頼に応えたいと。
けれど、ああ……、現実は残酷だ。
想いがあれど、実力の差も才能の差も埋められない。
相手が才能におぼれ努力を怠る者であれば、努力を積み重ねることで勝てる。
けれど、シオンは天才でありながら、決して鍛錬を怠ることはなかった。才ある者が凡人と同じように鍛錬し、実力を高めていく。
それでは差は埋まらないどころか、むしろ開いていくばかり……。
普通のやり方では無理なのだ。
……それゆえに、アベルは捨てた。
それはとてもとても、単純なことだったのだ。
剣術では勝てない、ならば、鍛錬をより限定すればいい。
より、絞り込めばいい。
守りを捨て、フェイントを捨て、突きを捨て、横なぎを捨て……。
彼は、ただ一つのことにのみ努力を集中する。
振り上げた剣を振り下ろす。その動きの研鑽のみに、すべての努力を傾けた。
あの日、ダンスパーティーの夜から、ただただ毎日、剣を振り下ろすことのみに心血を注ぎ続けた。
その積み上げた研鑽が、努力が、今、天才の剣に届く！

ガィィインッ！
甲高い金属の音と、遅れてくる鈍い手応え。
アベルは己の一撃が、防がれたことを悟った。
――まだ、届かなかったか。
失意に目の前が暗くなる。
けれど……、いつまでたっても、シオンの反撃はない。
つばぜり合いになった刃は、むしろ自分の方が優勢で……、シオンは大きく闘技場の端まで下がった。
「手加減はしないという話ではなかったかな？」
不満げに言うアベルに、シオンは苦笑で応える。
「期待に応えられずに申し訳ないが、こちらにはこちらの事情があるんでね」
「ボクを愚弄（ぐろう）するつもり……、というわけでもないのか。まぁ、どちらにしろ……」
アベルは再び、上段に剣を構え直し、
「ボクにできることは限られているのだがね」
次なる一撃を放つ。

「くっ！」
シオンは、その一撃を紙一重で避ける。狙ってやったことではない。その鋭さゆえに、紙一重になってしまうのだ。
――まさか、これほどとは……。
相手を低く見ているつもりはなかった。
しかし、アベルの一撃はシオンの予想をはるかに上回る鋭さと重さをもっていた。
なんとか、アベルの一撃の前に刃をねじ込むことに成功はしたが、それがせいぜいで……。
その威力を受け流すこともできず、その破壊力はもろにシオンの腕を襲った。
――腕がしびれたのは、父上との鍛練以来だ。

反撃はおろか、剣を持っていることさえ危うい。紛れもなく、アベルの一撃はシオンを追い詰めていた。
されど……、
「はぁっ！」
アベルの再度の振りおろし、それをシオンは足運びのみによって避ける。
シオン・ソール・サンクランドは紛れもない天才だ。ゆえに、一撃目ですでに、アベルの間合いを完全に見きっていた。
――それにしても、振り下ろしだけだからまだ何とかなっているが……。
シオンは気づいていた。
アベルの攻撃が、振り下ろしに限定されているから避けられているが、もしこれにほかの動きが混ざっていたら……。
振り下ろしほど威力がなくてもいい。
必殺の一撃があるのであれば、それを活かすように立ちまわればいい。
シオンはアベルの秘めた可能性に、危険を感じていた。
――ともかく回復を待つしかない。しびれが治るのにあと何秒かかるのかは知らないが……。
ふと思いついたことを聞いてみる。
「アベル王子……、君をここまで強くしたのは、やはりミーア姫か？」
「ああ、そうだ。ミーア姫はこのボクを信じて、勝利を願ってくれた……。ゆえに、ボクは負けるわけにはいかない」
「そうか……。それは、うらやましいな」
小さくため息を吐き、剣を構え直す。
「だが、負けられないのは俺の方も同じだ」
腕のしびれがとれるまで、あと少し。
反撃の機を待つ彼の刃先に、ぽつり、と雨粒が降ってきた。

第六十四話　ミーア姫の本質＝キースウッドの妄想

――ふむ……、シオン殿下、油断したな。
闘技場の下で、キースウッドは冷静に試合の状況を見ていた。
――一初撃を止められるという自信、自らの才能におぼれたか。
確かに、シオン殿下に防げない一撃なんか滅多にないんだろうが……。
アベルの斬撃を、間一髪で避けるシオン。一撃でも当てられれば、それで終わりという剛撃（ごうげき）を、シオンは紙一重で避けていく。
その剣術センスは、天才の名に恥じないものだったが。
――しかし、まさか、アベル王子がここまでやるとはねぇ。
キースウッドは、アベルの剣の技量をしっかりと把握していた。
彼はまず間違いなく凡人だ。
この学校に来た時点での彼の腕前は、天才シオンに遠く及ばないものだった。
にもかかわらず、アベルはシオンを追い詰めつつある。
――なるほど、この俺もアベル王子の実力を見誤っていたということかね。
ここにいたってキースウッドは、アベルの資質というものを正確に見極めることができていた。
アベルは自分というものを知っている。
才能のなさを冷静に分析できている。
そして、その上で諦めるのではなく、相手に勝つ方法を考え、それを実行してきた。
己を知り、相手を知り、未来へと向かう方法を知る。
それは、シオンの天才にも決して劣ることのない資質。
むしろこれからのレムノ王国には、より必要とされる才能であるだろう。

――王に必要な資質、か。なるほど、アベル王子がもしレムノ国王にでもなれば、あの国は強くなるな……。
才能の開花。優れた名君の誕生は、一平民としては喜ぶべきことなのかもしれないが……。
――シオン殿下に仕える者としては、いささか複雑だなぁ。将来的にレムノ王国との仲がこじれたら、厄介だ。
それにしても、とキースウッドは、視線を転じる。その先にいたのは、試合に釘づけになっているミーアだった。
――真に恐るべきは、ミーア姫、か。
この状況を作り出した者……。
もちろん、アベル王子の努力は称賛に値するものだ。その才も、正当に評価し警戒すべきものではある。
けれど、では、そのようにアベル王子を動かした者……、状況がこうなるように促し、流れを作った者の存在を、キースウッドは意識せずにはいられなかった。
「なるほど……、ミーア姫は、才を惜しむ人間か……」
ぽつり、とキースウッドはつぶやいた。
ここに至り、彼はようやくミーアの本質に思い至った。
ミーア姫は惜しんだのだ。
アベル王子の中に眠る資質、それが、兄やシオンにへし折られて、くすぶってしまうことを。
思えばあの時、シオンをダンスパートナーに選ぶことは、とても簡単なことだったのだ。仮にも帝国の叡智と呼ばれるミーアが、シオンの才能を見抜けないはずがないからだ。
にもかかわらず、ミーアはアベルを選んだ。
それはひとえに、彼の内に眠る才能を開花させるため……。
と、そこまで考えた時、キースウッドの背筋に冷たい戦慄が走った。
――いや、話はそう簡単じゃない。
才を惜しむ、それもまた王者の資質の一つ。

仮に敵国の将兵であっても、才能があり、己に忠誠を誓うならば重用する。それもまた、国を強くする立派な資質ではある。
しかし、それは、驚くべきことではない。
それならば、シオンやサンクランド国王でも持っている。
名君には珍しくない資質と言える。
……されどアベル王子は、別にミーア姫の従者ではないのだ。
出会ったあの時点で、レムノ王国とティアムーン帝国とは同盟国でもなければ、友好国でもない。
場合によっては敵対国になる可能性さえあるにもかかわらず、ミーアはアベルの才を惜しんだ。
だとすると、それは……、
――ミーア姫の視座は、国の違いにとらわれない、ということか？
敵国かどうかなど、ミーアにとっては些細なことなのだ。彼女は、ただ純粋に、そこに才を持つ者がいて、その才が腐ることを憂うのだ。
さらに言うならば、恐らく、彼女は才の大きさにさえこだわらない。
ティオーナに無礼を働いた者たちに対し、ミーアはとても寛容な態度をとった。
自分の頭を下げてまで、ラフィーナに赦しを求めたのだ。
その結果、赦された者たちは才無き身ながらも、ミーアの恩情に応えるため学業に励んでいると聞く。
――あらゆる人間を見て、その才が活かされないことを赦さない。それが帝国の叡智の本質か。
その視点は、己が主、シオンにすら勝るもの……、キースウッドは自分がミーア姫に心酔しつつあるのを実感する。
己が主はシオンのみ、と心を引き締めつつも、
――もしも帝国との仲がこじれるようなことがあっても、ミーア姫とだけは敵対しないように、殿下に進言すべきだろうな。
キースウッドは心に固く誓うのだった。

……無論、言うまでもないことではあるが、すべてはキースウッドの妄想である。
妄想以上でも以下でもない、妄想以外のなにものでもない。
ザ・妄想である。
しかしながら、誰にとっての幸か不幸か、彼がこの妄想からさめる確率は高くはなさそうだった。

第六十五話　剣術大会５　ー再戦の約束をー

ガィンっと甲高い金属音が響く。二人の刃が交わったのは、この試合が始まって二度目のことだった。

勝負に訪れた微妙な変化。見守る者たちにとって、それは些細な変化ではあったが。

戦っている当人たちにとっては、とても大きなものだった。

「なるほど、ようやく本気、というわけかい？」

剣から返ってきた手ごたえに、アベルは顔をしかめた。完璧にはじき返されたのならばまだマシだった。

けれど、放った斬撃は大した抵抗も返されずに、受け流されてしまった。

危うく崩されそうになった体勢を、足を踏ん張って立て直す。

「いや、信じてもらえるかはわからないが、今までだって俺は本気だったさ」

そんなアベルを静かに見つめながら、シオンは不敵な笑みを浮かべた。

「しかし、わかっていても、受けとめるのは一苦労だな。その斬撃は、本当に大したものだ」

剣をだらりと下げて、下段に構え直すと、シオンは笑みを浮かべた。

「その鋭い攻撃に敬意を表して忠告するが、次に“今までと同じ攻撃”をしてきたら……、君の負けだ、アベル王子」

今までのものとは違う、不敵で獰猛（どうもう）な笑み。アベルは彼の言葉に嘘偽りがないことを察して……、

「そうか。ならば、なすべきことはただ一つ、だね」

剣を、高々と頭上に掲げる。今までと何一つ変わることのない構え。

堂々たる攻めの構え。
「諦めたということか？」
それを見たシオンはわずかに眉をひそめる。対してアベルは不敵に笑った。
「いいや、まさか。勝つためさ、シオン王子」
「そうか。いや、改めて敬意を表するよ、アベル・レムノ。全力を持って君を倒そう」
もしも、シオンの言葉によって戦術を変えるようならば、アベルの負けは確実なものだったろう。
彼のどんな攻撃であっても、シオンの天より与えられた才能を超えることはなかっただろうから。
けれど、アベルは今までと同じ、最も自信がある構えを取った。
しかも、ほかに何もできないという諦めからではなく、勝つために。
言いかえるならば、それは“今までと同じ攻撃”をするつもりはないという意志、今までの物を超える攻撃を繰り出そうという決意。
それゆえに、シオンは認めた。
自分を倒す唯一の可能性に賭ける相手を、全力を持って当たるべき好敵手（ライバル）として。
二人は互いの間合いギリギリのところに立ち、動きを止める。
少し前から激しくなってきた雨が、互いの体を打ってはいたが、そんなことはもはや気にする余裕はなかった。
アベルは最高の一撃をシオンに打ち込むことのみを考え、集中力を高めていた。
それゆえに彼が忘れていたとしても、それは無理のないことだったのかもしれない。
これが命をかけた決闘でも、戦闘でもないということを。
学生同士の親睦を深めるための、ただの試合なのだということを。
それは出場者に風邪をひかせてまでするものでもなく、雨の中で無理をして続けるものでもない以上、当然……、

「両者そこまで！」
審判から中断の声がかかってしまうのだった。
「なっ！」
その声に半ば呆然となってしまうアベルと、
「ああ、やはりそうなったか」
剣を鞘におさめ、肩をすくめるシオン。
どうやら彼の方は、そのことをきちんと理解していたらしく、特に驚いた様子はない。
「この勝負の決着はいずれつけたいものだが……。さしあたっては今年の冬の剣術大会あたりが一番近い機会となるかな」
そう言って、シオンはアベルに笑みを浮かべた。
「どうだろう、アベル王子。この俺との再戦を約束してもらえるかな？」
そうして差し出された手を、
「ああ、望むところだ」
アベルは握り返す。
こうして、固くかわされた握手をもって、二人の戦いは幕を閉じた。

「アベル王子ー！」
闘技場を降りたアベルに、ミーアは走り寄った。
あと一歩でにっくきシオンを倒せそうだったアベルに、ミーアは最大限のねぎらいの言葉をかける。
「すごかったですわ、惜しかったですわ。あと一歩でしたのに」
「いや……、ミーア姫、あのまま続けていたら、ボクは……」
目を白黒させるアベルに気づかず、ミーアは続ける。
「きっと、アベル王子の勝利を嫉んだ誰かが、浅ましくも雨乞いでもしたに決まってますわ！　ホントに、あと一歩でしたのに、正々堂々たる勝負に水を差すなんて、けしからんやつですわ！」
……ちなみに、前の時間軸においてボッチ弁当を食べ終えたミー

アは、一人自室に引きこもっていた。
その際、憎きシオンが優勝しそうだと聞いたミーアは一心不乱に雨乞いをし、雨で大会が中止になったと聞いた時は、快哉(かいさい)を叫んだものなのだが。
浅ましく、けしからんやつだった自分自身のことなどきれいさっぱり忘れているミーアなのであった。

かくして、この年の剣術大会は雨により中止となった。
王子たち二人が交わした再戦の約束、それは当人たちも予想もしていないほど早く、なおかつ予想外の場所で成就することとなる。
それは闘技場の上ではなく戦場で、しかも互いに真剣でのこととなるのだが……。
それは、まだ少し先の話である。

第六十六話　風邪ひきミーアは夢うつつ　前編

「うーん……、うーん」
自室のベッドの上で、ミーアは苦しそうにうなっていた。
剣術大会の日、雨に打たれて、水も滴る良い女（自称）になってしまったミーアは、アベルの奮闘にすっかり興奮してしまった。
アンヌの忠告も聞かずに、濡れた髪のままで動き回ったために、すっかり風邪をひいてしまったのだった。
お昼過ぎに、目をさましたミーアは、
「アンヌ？　おりますの、アンヌ？」
ぼんやりとかすんだ瞳で部屋の中を見まわして、
「あら、おかしいですわ」
部屋の様子に首を傾げた。
しん、と静まった部屋の中には、人の気配はなかった。
雑然とした室内、適当にたたまれたミーアの服と、机の上に出しっぱなしになっているペン。
片付けが行き届いていない、どこか投げやりに管理された部屋に、ミーアは見覚えがあった。
――ああ、これは昔の……。
それは、前の時間軸のこと。
同じくミーアは風邪を引いたのだ。
「そうですわ。確か目をさましたとき、あの娘は部屋にいなくて」
ミーアの専属メイドである少女は、眠っているミーアを置いて外に出ていた。
さる大貴族の三女で、ミーアと話をする時はいつもニコニコ、お世辞を言ってきた。自分をほめたたえる声は耳に心地よく、ミーアのお気に入りだったが。
――風邪をうつされたくないからって、同じ従者の友だちのとこ

ろでお茶してたとか、後で他の方から告げ口されましたっけ……。
ふいに目をさました昼下がり。たった一人の部屋が、なんだか妙に心細くて……。
まるで、世界にたった一人で取り残されたように感じたのだ。

「ミーアさま、ミーアさま……」
ゆさゆさと体を揺すられる感覚。ミーアがぼんやりと目を開けると……。
「ミーアさま、大丈夫ですか？」
すぐ目の前に心配そうなアンヌの顔があった。
「ふぇ？　あっ、アンヌ……、あら、では、先ほどのは夢？」
混乱に、あたりをキョトキョトと見回すミーア。ミーアが寝ている間に掃除をしたのだろうか。部屋の中はきちんと整理整頓されており、埃一つ落ちていなかった。
それだけじゃなく、なんとなくミーアは気持ちが落ち着くのを感じていた。夢の中の部屋は、なんだか落ち着かなくって、自分の部屋じゃないみたいに思えたものだったけど。
「ずいぶんうなされていたみたいですけど……」
「あ、ああ、心配ありませんわ」
その答えに安堵の息を吐くアンヌ。どうやらベッドの脇に椅子を置き、ずっと見守ってくれていたようだった。
「アンヌ、風邪がうつりますわ。あまり近づかない方が……」
「なに言ってるんですか、ミーアさま。私は頑丈ですから大丈夫です。余計なことを心配してないで、寝てください」
アンヌはドンと胸を叩くと、ミーアのおでこに乗っていた布を別の物に変えた。ひんやりと冷えた布の感触が気持よくって、ミーアは再び眠りに落ちていく。

「ミーアさま、あの子、また一人で本読んでますよ」
「あら、またですの？」
それは、ある日の昼下がりのことだった。
ミーアの取り巻きの一人が、教室の片隅で本を読むクロエを見て意地悪な笑みを浮かべていた。
ミーアの前世の記憶にはクロエは存在していなかった。別に友だちではなかったし、接点はほとんどなかったから。
だから、その日のこともまったく本当に、おぼえてはいなかったのだ。
「ねぇ、どう思いますか？　ミーアさま、あのクロエって子」
「なんでも、爵位をお金で買ったとか。そんな方が学園にいるなんて」
好き勝手に陰口をたたく取り巻きの女子たち。
ミーアは、それに加わることもなかったが、止めることもなかった。
「あまり興味ありませんわ。それより聞きまして？　シオン王子のこと。従者の方も平民ながらなかなかの美男子で……」

「あっ、ミーアさま、目がさめたんですか？」
再び目覚めた時、ベッドのかたわらにいたのはクロエだった。
「ああ、クロエ……」
読んでいた本をそっと閉じて、クロエはミーアに顔を寄せた。
「なにかしてほしいこととかありますか？　水が飲みたいとか、食べたいものとか……」
「お見舞いには感謝いたしますわ。ですが、あまり近づいては風邪がうつ……なんですの、それ？」
ミーアは思わずツッコミを入れる。クロエの顔の下半分、鼻と口を白い布が覆っていた。
「マスクと言って、風邪がうつるのを防いでくれるものです」

さすがに大商会の娘、クロエは案外しっかり者だった。
「それとアンヌさんは、今、冷たいお水を汲みに行ってます。あと、前にお父様が送ってくれた風邪薬を持ってきたので、後で飲んでください」
そう言ってほほ笑むクロエに、ミーアは言いにくそうに言った。
「わたくし、あなたに謝らなければいけませんわ」
「へ……？」
突然のことに、きょとんと首をかしげるクロエ。そんな彼女にミーアは言った。
「あの時、あなたが苦しんでいるのに見て見ぬふりをいたしました。本当に、申し訳ありませんでしたわ」
「……えっと、ミーアさま、夢でも見たんですか？」
クロエはくすくすと笑った。
夢……、そうなのかもしれない。
本当はあんなことなかったかもしれないし、それに、もう訪れない未来なんか、夢と同じようなものなのかもしれない。
それでも、ミーアの胸にある罪悪感は、チクチクと鈍い痛みを放っていた。だけど、
「私、ミーアさまとお友だちになってから、すごく楽しいんです。サンドイッチをいっしょに作ったこともそうですけど、それより、お友だちと物語の話ができるなんて、夢みたいで。だから謝っていただくことなんかないです」
その言葉に、ミーアはほんの少しだけ心が軽くなったのを感じる。
ほのかに眠気を感じつつ、ミーアは小さな声で言った。
「……なにかお話を、して下さらないかしら……」
「え？」
「……してほしいこと。最近読んだ本で面白い物がございましたら、そのお話を」
「わかりました。そうですね、それじゃあ……」
クロエの、はにかむような声を聞きながら、再びミーアは眠りに

落ちて行った。

第六十七話　風邪ひきミーアは夢うつつ　後編

「では、ティオーナ嬢、道中気をつけて」
夏休み前の最後の日。
シオンは爽やかな笑みでティオーナを見送った。馬車の中から顔を出したティオーナもまた、親しげな笑みを返している。
シオンの周りには他にも、彼に挨拶をしようという人間が集まっていた。
それをチラチラ気にしつつも、ミーアは自分の周りの取り巻きたちからの挨拶を受けていた。
「ミーアさま、私の父がぜひ、ミーアさまにお会いしたいと……」
「僕もぜひ。夏休みの間に一度ミーアさまと、それに皇帝陛下に拝謁願えれば……」
「いやいや、我が国にこそぜひ。小さいですが避暑地としては最適で……」
それに適当に答えつつ、ミーアはシオンの方を見た。
不意に、その涼しげな瞳と目が合う。
ほんの一瞬、そこに不快げな光が宿って、すぐに興味を失ったかのようにシオンはミーアから視線を外した。
けれど、ミーアには彼の表情の意味がわからなかった。
――なぜ、シオン王子は、わたくしに挨拶にいらっしゃらないのかしら……。あっ、きっと、お弁当を断って、それで気まずいのですわね。そんなの気にしなくってもいいのに。
ミーアは革命が起きるまで、シオンやティオーナが抱いている気持ちに気づかなかった。それだけでなく、周囲の取り巻きたちの心さえ把握できていなかった。
誰の気持ちも考えることなく、その時を迎えてしまった。
だから……、財政がひっ迫し、各地で紛争が起き、帝国が傾きつ

つあった年。
ミーアが学校に行けた最後の年の休み前……、
「どうして、こんなことに？」
ミーアに挨拶をしに来る者は一人もいなくなっていた。ミーア以外の帝国貴族は子どもを学園に送る余裕はなく、他国の者は斜陽の帝国の姫という厄介者と関わることを避けたのだ。
ミーアはひとりぼっちになっていた。
そんな中、変わらず周りに人々を集めていたシオンは、ミーアを冷たい目で見つめて、尖った声で言った。
「俺はあなたを軽蔑してるよ、ミーア姫」

「ひやぁあっ！」
ミーアは飛び起きた。
体中が汗でびっしょり濡れている。
「あ……ああ、夢、ですの？」
その時、すっと隣からコップが差し出された。冷たい水が入ったそれをミーアは一気に飲み干して……、
「ありがとう、美味しかったですわ」
「どういたしまして。しかし、うなされていたようだったが、悪い夢でも見たのかね？」
ひたり、と冷たい手が頬に触れる。その心地よさに思わずうっとりしかけたミーアだったが……。
――あ、あら、今の声は……？
恐る恐る隣を見たミーアは、
「ふひゃあっ！」
ヘンテコな悲鳴を上げながら、ベッドの上で飛び上がった。
ミーアの顔をのぞきこんでいた人物、それは、
「あっ、あっ、アベル……王子？　どうして、ここに？」
柔らかで、優し気な視線を向けるアベル王子だった。
「ああ、すまない。レディーの寝顔を見るのはどうかと思ったんだ

が、アンヌ嬢から頼まれてね、しばらくの間、君を見ていてほしいと」
アンヌが親指をグッとあげる姿が目に浮かぶようだった。
――気の使い方が全力で間違ってますわっ！　アンヌっ！
毛布を口元までぐぐいっと持ち上げつつ、
「お見舞いには感謝いたしますわ。ですが、風邪がうつりますから、もう帰られた方がよろしいのではないかしら？」
「ああ、それは好都合かもしれないな」
「へ？　どういう意味ですの？」
「いや、なに、ボクの国の言い伝えに、風邪は他人にうつすと治るというのがあってね。ボクが風邪になり、ミーア姫が治るのであれば、本望だと思ってね」
そう言って、アベルはおどけたように笑った。
「まぁ……」
その幼くも朗らかな笑みにつられてミーアも笑みを浮かべる。その後も、ミーアはアベルとのおしゃべりを楽しんだ。
「そういえば、もうすぐ夏休みですわね」
「ミーア姫はやっぱり帝国に帰るのかい？」
「そうですわね。国で、いろいろとすることがございますから。休みの間はずっと帝国にいるつもりですわ」
長期の休みだからと言ってのんびりしてはいられない。ギロチンの運命から逃れるために、できる限りのことをしなければ。
「アベル王子はどうされるんですの？」
「ボクも帰るつもりだが、少し早めに学校にもどろうと思っているんだ。もしかしたら、君と夏休み中に、どこかにご一緒できるかと思っていたのだが、少し残念だな」
――なんで、この人、ドキッとするようなこと、真顔で言うのかしら……。
ミーアはアベルから視線をそらして、気持ちを落ち着けるように、ふぅと小さく息を吐く。

と、そこで、ノックの音が聞こえてきた。
「ああ、そういえば、シオン王子とティオーナ嬢も後でお見舞いに来ると言っていたな」
「まぁ、なんだか、忙しいですわね」
まったく、風邪で伏せっているというのに、迷惑なやつらだ……。
そんな風に思いつつも、ミーアは小さく首を傾げる。
二人の来訪を、それほど不快に感じていない自分に。
たくさん寝たからだろうか？
熱を持って、ボーっと重たかった頭は、いつの間にかスッキリ軽くなりはじめていた。
「失礼する。ミーア姫、風邪はどのような具合だ？」
「ミーア様、これ実家から送られてきた熱冷ましです。弟が育てた香草から作ったもので、粗末なもので申し訳ないんですけれど……」
ミーアの部屋に、どこか温かでにぎやかな空気が満ちた。
それは、前の時間軸では決して訪れなかった、穏やかな時間だった。

第六十八話　気味の悪い違和感

セントノエル学園は夏休みに入った。
多くの生徒が帰路につく中、ミーアもまた帝国への馬車の中にあった。ガタゴト揺れる馬車にて、ミーアは久しぶりに血染めの日記帳を再び読み直すことにした。
もしかしたら、未来が変わっているかも、なんて期待していたミーアだったが。
「ですわよねぇ……」
思わず、ミーアは落胆のため息を吐く。
日記帳は、未だにミーアが断頭台で処刑されることを示していた。基本的な部分は変わらない。
飢饉が起こり、革命が起こり、帝室は滅ぼされるのだ。
もちろん、多少の変化はあった。
前の時間軸では、帝室への非難一辺倒だった民衆だが、新月地区の住民を中心に、若干名の義勇兵が立ち上がった。
帝室全体のためではなく、ミーア個人を助けるための部隊だったようで、近衛兵との連携により、革命軍にかなりの被害を出していた。
ほかにも、住民たちの中には、それなりの数、ミーアの助命を訴える者がいたらしい。
そのおかげかはわからないが、ミーアをめぐる境遇も改善された。幽閉される場所が地下牢から、城の一室に変わったし、料理長の温情で食事はマシになった。
それどころか処刑される前日は、最後の晩餐で大盤振る舞いだったらしい。黄月トマトのシチューが絶品だった、などと日記に書いてあるのだから相当である。
あるいは、シオンの反応。従者から強く勧められたこともあり、

彼は多少なりともミーアの処刑に反対してくれたらしい。
逆にミーアの行動によって悪化したこともあった。
アンヌはミーアを助け出そうとした挙句、失敗。一家離散で、本人は罪人として捕らえられてしまう。
アベルもまた、ミーアを助けようと帝国に潜入までしてくれたらしいが、見つかり、大勢を道連れに討ち死にしている。
これにより、レムノ王国との仲もこじれて、帝国はさらに苦境に陥ることになる。
「……あまり、愉快なことではございませんわね」
日記の記述は、アベル王子の訃報に動揺したのか、震えるような字で記されていた。微妙に字が滲み、ページが濡れたことを思わせるのは恐怖で汗が垂れたからか、それとも……。
そのような微妙な変化こそあれ、結果は変わることはなかった。
――飢饉は、以前よりはマシになっているようですが。
革命の一番の原因は、やはり変わらずに食糧不足のようだった。
ルードヴィッヒに指示している食料備蓄で、多少は改善したものの、やはり飢餓が起こるのは防げないようだった。
備蓄がまだ足りないのだ。
――それに、辺境の少数部族との争い。
日記帳に記されていたのは森の民、ルールー族との地域紛争だ。
これは前の時間軸でも起きていたのかもしれないが、ミーアはほとんど記憶にない出来事だった。その当時のミーアは興味がなかったので、事件の原因などはわからない。
けれど、この事件の何がまずかったのかは、今となってはよくわかる。
――ルールー族……、ティオーナさんの従者の出身部族なんですのね。
リオラ・ルールー。
彼女の出身地に対して行われる非道な行為、そこにミーアが絡んでいたとすれば、ティオーナが悪印象を抱いても無理のないことだ

った。
この事件がもとで彼女との仲がこじれてしまうと、日記にも書かれている。
逆に言えば、この事件さえ何とかできれば、少なくともティオーナは敵に回らないかもしれない。
――ルドルフォン家の所領の農作物は魅力的ですわ。もしも友好関係が築ければ、食糧事情はかなり改善されるはず。
それだけには頼れないが、大きな要素であることには変わりはない。
――それはそうと、この記述は気になりますわね。
それ以上にミーアが注目したのは、革命がおこるきっかけとなる事件。
ルドルフォン辺土伯の拉致事件である。
食糧不足であえぐ民たちに、自身の保有する食料を分け与え、人気を集めていた辺土伯に対して嫉妬した皇帝が起こした事件と、日記には書かれている。
それに怒った民衆が一斉蜂起し、革命の火種となる、と。
それは、前の時間軸においても、変わることのなかったきっかけの事件。
けれど、思えばミーアは不思議だったのだ。
確かに父である皇帝は、並み居る貴族たちと比べても清廉潔白とはとても言えない。
けれど民衆の人気を集める貴族がいたからといって、それに嫉妬するかというと、疑問が残る。
――そもそも、お父様は、わたくしの好感にしか興味がない方ですし。
可愛い娘に乞われれば戦争も辞さないが、それ以外はおおむね無害な人。頭に超が付くぐらいの親馬鹿、それがミーアの持つ父親に対するイメージである。
無害なだけであって、有益ではないところが問題といえば問題だ

が、少なくとも悪い人ではないのだと思う。
――この事件、なんだかお父様らしくないですわ。
疑念はミーアの脳裏にこびりつき、気持ちの悪い感触を残した。
まるで何者かが革命がおこるように事件をでっち上げたかのような……。あるいは、運命を司る神が帝国の滅亡を望んでいるかのような、なんとも不吉な予感。
お腹からせり上がってくるような、気持ちの悪さ……。
その名状しがたい感覚を、あえて説明するとすれば、それは……っ！
「うう、気持ち悪い……」
そう、馬車酔いである。
揺れる馬車の中で、じっと文字なんか読んでいるもんだから、ミーアはすっかり酔ってしまったのだ。
「……あ、アンヌ、アンヌぅ……気持ち悪い」
日記を読むからと、御者台に行ってもらっていた忠義のメイドに助けを求める。
涙目でうずくまるその姿には、セントノエル学園で一目置かれる智者の面影は、どこにも見当たらなかった。

第六十九話　ミーア姫、冴え渡る3

ミーアのもとにルードヴィッヒが現れたのは、彼女が帝国に帰ってから五日後のことだった。

「……疲れましたわ」

父である皇帝への挨拶、大貴族への挨拶周りと、帰還記念パーティー。大帝国の姫君も暇ではないのだ。

「気楽な学園生活が懐かしいですわ」

早くも、学園に戻りたくなってくるミーアである。

忠臣ルードヴィッヒが訪ねてきたのは、そんな折のことだった。

「お久しゅうございます、ミーア姫殿下。ご無事のご帰還、心よりお喜び申し上げます」

相変わらずの不愛想。

むすっとしたその顔が、なんとなく懐かしい。

「あなたのほうも元気そうでなによりですわ、ルードヴィッヒ」

挨拶もそこそこに、ルードヴィッヒは、ミーアがいない間の帝国内政について報告を始める。

「足りませんわね……」

一通りの報告を受け、ミーアはため息を吐いた。

「確かに、食料備蓄は十分とは言えません。ですが、ミーア様、これ以上、穀物を倉庫に置いておくことは、無駄になる可能性がとても高いと考えます」

ルードヴィッヒとしては、ミーアの懸念には首を傾げざるを得ないところだった。

彼女の指定する分量は、いまだかつて存在しなかったような大規模な飢饉（ききん）を想定しているとしか思えない。

数年間、まるで農作物が取れなかったとしても、民衆を食べさせることができる量……。

いくらなんでも、これでは心配が過ぎる。
むしろ財政破綻の危機の方が、よほど現実味を帯びた問題のように、彼には感じられた。
備蓄というのは言い換えるならば、農作物を倉庫で寝かせておくことだ。
何事も起きなければ、そこで使われたお金はそのまま無駄となる。保管しておく金だって必要になるのだ。それがわからないミーアではないはず。
にも関わらず、ミーアは浮かぬ顔をしている。
「ミーア様、俺はあなたのことを信じています。だから、納得はいきませんが、備蓄を増やせというのなら増やしましょう。ですが、他の貴族の方たちには説明する必要があるでしょう」
「どういうことですの？」
「ただでさえ、無駄遣いは控えるようにと、通達を出しています。下手をすると、姫殿下自身が無駄遣いをしていると揚げ足を取られることならないかと」
「確かにそうですわね。相手の失敗を探すのが上手い方たちですものね」
ミーアからすると、備蓄を増やすのは当然のことだった。
なにしろ、数年後に大規模な飢饉が襲ってくると知っているのだから。
現在の備蓄では足りないことが分かっているのに、説明できないことがもどかしかった。
「考え方を変える必要がありそうですわね」
ミーアは小さく息を吐き、頭を切り替える。
「ルードヴィッヒ、わたくしを信じてくださるというのなら、数年後に大飢饉が起こることを前提に考えてくださいな」
それを聞いて、ルードヴィッヒの瞳が、すっと細くなる。
「万が一の備えではなく確実に必要になるものと考えよ、と、そういうことですか？」

「そうですわ。その上で、聞きたいのですが、もし、食料をためておけないなら、飢饉が起きた時、どうするのがよろしいかしら？」
「普通に考えれば、商人を使って運んでくるしかないでしょう」
そう、ミーアもそのぐらいならわかる。でも……、
「それでは、やはり財政が破綻いたしますわ。飢饉の時の食料ほど高いものはございませんでしょう？」
「仕方ありません。需要が供給を上回れば価格が高くなる。ほしい人が多ければ多いほど物の値段が上がるのは自然なことですから」
「それも程度によりますわ」
小麦一袋で城が買える。それほどの地獄が帝国を襲うのだ。
――商人たちに足元を見られないようにするには、備蓄を増やす以外にはございませんが……。
それはできない。かといって、供給を増やすのも望み薄だ。
近隣の作物はほとんど全滅する。
例えば、帝国内の畑を十倍にしたとしても足りないし、それはあまり効率が良くない。
――そもそも、理不尽な話ですわ！　世界中からすべて、食べ物がなくなるわけではございませんのに！
ミーアは別に、学園で遊びほうけていたわけではない。
多少、恋愛にうつつを抜かしたりはしたが、きちんと勉強もしていたのだ。
ある時、飢饉について調べていたミーアは、自分が勘違いをしていることを知った。
飢饉は食料の絶対量の不足によって起きるのではない。物の流れが滞るから起こるのだ。
食べ物が〝なくなる〟わけではない。〝届かなく〟なるのだ。
だから、その食べ物を飢餓の地域に持っていき、高額で売りつけるなんて言う商売が成り立つわけで……。
「あっ、そうですわっ！」
その時、ミーアはひらめいた。ひらめいてしまった！　グッドア

イデアを。
そもそも、飢饉の時であっても商人から安く食べ物を仕入れられるなら、それで問題は解決するのだから……。
――お友達価格ですわ。お友達価格！
ミーアが思いついたことは実に安直で、割と自分本位なことだったのだが……。
「なるほど……」
それを聞いたルードヴィッヒは、数分の黙考の末、
「それは……、素晴らしい考えですね」
なぜか、感心の声を上げたのだった。

第七十話　商談

クロエの父、マルコ・フォークロードは、一代で大商会へと育て上げた商人だった。

商人としての深い見識と冷静沈着な判断のできる傑物として、同業の者たちから一目置かれる人物である。

そんな切れ者の彼が、娘をセントノエル学園に入れたのは純粋に娘の将来を思ってのことだった。大陸最高の環境で知識を学んでもらいたかったし、人見知りな娘にいい友達ができればいいと思っていた。

ただ……、まぁ、そのお友達がどこぞの貴族様で、コネができたらいいなぁ！　ぐらいには思っていたが。

なにしろ、彼は根っからの商人なのだ。

利に敏く、転んでもただでは起きず、儲け話は見逃さない。

知恵を尽くし、いかに自分に有利な条件で取引するか、彼にとって商売とは、勝つか負けるかの勝負事だった。

それゆえ、どんな機会でも見逃さず活かしていくのが彼のモットーだった。

そんな彼でも、まさか、娘が大帝国の姫君と友達になるとは思っていなかった。

――娘よ、ご令嬢と友達になるのはいいが、もう少し、こう、加減ができたら、父としては嬉しかったのだが……。

などと思いつつも、彼はティアムーン帝国を訪れていた。

突如降ってわいた幸運を活かさない手はなかったし、それ以上に、娘の初めての友人に挨拶しておこうと思ったのだ。

ちょうど、帝国近くで取引があった折、彼はミーアへの面会を求めた。

帝国の叡智と噂されるミーア姫のこと、さぞかし多忙なことと思

っていたのだが。
――十日以上は待たされると思っていたが、まさかこんなに早く面会がかなうとは……。
謁見の間に通されたマルコは、改めて上機嫌な笑みを浮かべる少女――ミーア・ルーナ・ティアムーンを見た。
クロエから聞いた通り、利発そうな瞳をした少女だ。
「お初にお目にかかります、姫殿下。クロエの父、マルコ・フォークロードと申します。商会の長ですが、騎士の爵位をいただいております」
「ようこそいらっしゃいましたわ。フォークロード卿。クロエはお元気かしら？」
「はい、おかげさまで……」
しばしの談笑を続けた後、ミーアは一瞬黙り込む。
再び口を開いた時、
「ところで、フォークロード卿、試みに問いたいのですけれど、海の向こう側から物を運んでもらうことは可能かしら？」
静かな口調でミーアは言った。
「は？　あ、ええ、可能でございます。我々の商会では、商船も多数保有しておりますので、なんでもご用命くだされば……」
これは、もしや、商売のチャンスなのでは？　明るい笑みを浮かべて言った。
「それで、ご入用のものはなんでしょうか？　香辛料ですか？　それとも絨毯（じゅうたん）ですか？　あちらの物は品質が良く、帝国貴族のみなさまにも、人気で……」
「小麦ですわ」
「は？」
ミーアの口から出た言葉に、マルコは一瞬目を丸くする。
海の向こうから小麦を持ってくる……、それは商人の常識では考えづらいことだった。
なぜなら、小麦なら、海外から持ってくる必要がないからだ。

帝国内でも近隣国でも小麦は取れる。わざわざ遠い場所から、長い時間をかけて運んでくる必要もなければ、メリットもない。
それが「ある」場所で買い取り、それが「ない」場所で高く売る。
それこそが商売の基本だ。
飢饉が起きて食糧が不足したならば、ひと儲けできるだろうが、普通ならば安く買い叩かれて、輸送費を回収することだとてままならないのが道理というもの。
地元産の安い小麦があるというのに、たいして味の変わらない海外の、それも輸送費込みの高い小麦を買う人間がどこにいるだろうか？
しかし、それだけではなかった。
ミーアが付け足した条件に、マルコは思わず目をむいた。
「それに条件がございますわ。値段は先に決めておいて、どんなことがあっても動かさないこと」
「それは、つまり……？」
「もしも、飢饉が起きていたとしても値段をつり上げることは許しませんわ」
「なっ……」
ほとんど滅茶苦茶な要求だった。
それでは、フォークロード商会にはなんのうま味もない。
むろんティアムーン帝国としては万が一の時のために、食糧の仕入れ先を確保しておくことに意味はあるのだろうが、それはあまりに一方的で……。
いや、とマルコは思いとどまる。
クロエから聞いた限り、ミーア姫と言う人は、権力を使って無理を通す性格ではないはず。で、あるならば、彼女の言葉の裏には必ず意味があるはず……。
――試されている、ということなのか？
マルコは、背筋が微かに冷たくなるのを感じる。気づかぬうちに彼は引きずりこまれていたのだ。

言葉と言葉で刃を交わす商談の場に。
――ミーア姫の言葉には、必ず意味があるはず。それに気づけるか気づかないかで、私が取引する価値がある人間かどうか、試そうというのか？
考える必要があった。
この取引、マルコが契約を結びたくなるようななにかとは、いったいなんなのか。
「ああ、そうでしたわ。言い忘れていましたが……」
その時、わざとらしく、ミーアが付け足す。
「最低限、決まった分量を買い取らせていただきますわ」
決まった値段、決まった分量を買い取る……。
どのような状況であっても、値段は動かさない。
飢饉であっても……、あるいは。
――そうでなかったとしても……？　それはつまり。
ミーアの言ったいくつかの条件がマルコの脳裏で組み上がり、一つの結論を導き出す。
――物価の変動に左右されない商品、ということか？
瞬時に、そのメリット、デメリットを検討し、マルコは戦慄を覚えた。

第七十一話　ルードヴィッヒ、忖度（そんたく）する

「海外から輸送するとなれば、その分、割高の値段設定となりますが、その辺りはいかがお考えですか？」
自身の推測の裏付けを得るべくマルコは言った。
それに応えたのは、ミーアの後ろに控えていた青年の文官、ルードヴィッヒだった。
「こちらが、契約の具体的な内容になります」
手渡された羊皮紙を見て、マルコは再び唸り声を上げた。
――これは……、絶妙な値段設定だ。
安く小麦を仕入れられるとホクホク顔のミーア。けれど、彼女と一般人の感覚には決定的なズレが生じていた。
ミーアはなにと比較して安い値段設定と考えているのか。
そう、かの大飢饉の時、小麦一袋で城が買えると言われた狂った時代の物価なのである。
では、一般的な感覚で、ミーアが提示する「割安価格」を見るとどうなるのか？
――遠隔地から輸送することを考えても、なお割高な価格設定、か。これならば、よほど仕入れ値が高騰していない限り、儲けが出る。
ミーアの提案はある種の交換条件なのだと、マルコは認識した。
普段、余分なお金を払う代わりに、飢饉の時には助けろという取引。
それは言うなれば、この世界には未だ生まれていない「保険」に近い概念である。
――いや、それだけではあるまい……。
有能なる商人であるマルコは、さらに、この提案に含まれたものを読み取った。

ミーアの提案に乗った際に得られる最大のメリット「流通ルートの維持」に、彼は気づいたのだ。
そもそも、なぜ飢饉の時の食料は高いのか？
むろん需要と供給のバランスなのだが、もしそれを差し引いたとしても、やはり小麦の値段は高くならざるを得ない。
なぜなら、実際にコストがかかるからである。
仮に、普段扱っていない小麦を海外から輸入しようとする。その場合、フォークロード商会では、海外で麦を栽培している農家を紹介してもらうところから始めなければならない。
また、輸送船はどのようなものにすればよいだろうか？
運ぶ際に注意すべき点は？
小麦の場合、それほど気を使う必要はないのかもしれないが、それでも、それなりにノウハウは必要だろうし、知識を持った人間を雇う必要もあるかもしれない。
流通態勢を一から整えようというなら、コストをかける必要がある。
存在しない流れを作り出そうという時には莫大なエネルギーが必要となるのだ。
けれど、細々とであっても、流通が維持できていたらどうだろう？　細い流れを広げる方が、絶えた流れを復活させるより楽ではないか？
――もし流通経路さえ維持できていれば、いざ飢饉が起きた際にはどこよりも早くスムーズに、なおかつ低コストで輸送することができるだろう。
それを維持できない理由もまた、コストの問題だ。
飢饉の時にのみ利益を生み出す販路を継続することなど不合理なこと。
儲けを優先するならば、当然、切って捨てるべきだ。
――その分を、ミーア姫は担おうというのか。
平時の利益は帝国が保証し、飢饉が起きた際には確実に食料を供

給できる流通システム。
飢饉が起きた際、帝国に約束の商品を売ったとしても、他の商会に先んじて食料を売りさばくことができるのだ。
――自国の民を餓えさせぬ体制を築きつつ、商談相手である私にも利益を提供するとは……、なんという。
マルコをとらえたのは、畏怖(いふ)とも呼ぶべき感情だった。
――クロエ、お前は何という方を友人にしたのだ……。
感嘆しつつも、マルコは頭を下げた。
「フォークロード商会は、この条件で姫殿下と契約を結ばせていただきます」
それを聞いてミーアは、満足げに笑みを浮かべるのだった。

――ミーア様の智謀は、衰えることを知らないな……。
頭を下げるマルコを見つつ、ルードヴィッヒはミーアのさらなる狙いに思いを馳せていた。
ミーアのつぶやいてた言葉「お友達価格」。
彼はそこに特別な意味を見出していた。
――ミーア様は、自らを貶めることで、貴族たちが納得いく理由を用意したのだ。
“民衆を餓えさせぬため”に無駄遣いをすると言えば、貴族たちは反発する。
高潔な志というのは彼らには理解できないから。
民衆が餓えようが死のうが、彼らは興味がない。だから理解も共感も得られない。
けれど、友人に利益を供与するため、と言えばどうだろう？
それならば、貴族は理解できる。彼ら自身もよくやることだからだ。
確かに、自分たちの不正を咎(とが)めた者自身が不正を働いていれば、不興を買うだろう。しかしながら、その身勝手さは“皇帝の血族の傲慢”で済ますことができる。

彼ら貴族の常識では、その程度の傲慢は〝当然、許されるべきもの〟と認識されるのだ。
――いや、ミーアさまであれば、あるいは……。
ルードヴィッヒは、ミーアが学園に行っている間にしてきた仕事に自信を持っていた。
しかし、引き締め過ぎたという実感がないではないのだ。そのことを感じたミーアは、率先して自身が不正を働くことで、この程度の利益供与であれば構わないと手綱を緩めようとしたのではないか。
政治は清廉潔白ばかりではいられない。
飴と鞭、その使い分けによるガス抜き。
――いったい、この方の頭にはどれほどの計略が潜んでいるのだ？
言うまでもなく、そんなものなど、まるでないのだが。

第七十二話　一角馬（ユニコーン）のかんざし

クロエの父との商談を終えた翌週、ミーアは帝都の貧困地域、新月地区に視察に訪れた。

その訪問はミーアたっての願いとのことで、ルードヴィッヒの指示の元、今回は十人規模の近衛小隊が派遣されることとなった。

急な任務に兵たちの中には、ひそかに不満をこぼす者もいた。

「姫殿下も物好きな。わざわざ治安の悪い貧困地区になんか行かなくてもいいのに……。余計な手間だよなぁ」

「ご自分で建てられた病院を見たいんだろう。人気取りのために建てただけじゃなく、その後もほうっておかないとは、さすがに帝国の叡智、抜け目ないな」

皇女になにかあっては一大事。

できれば、城の中で大人しくしていてくれれば、警護だってしやすいのに。

そんな若い騎士たちの揶揄（やゆ）を聞きとがめたのは、前回、ミーアに同行したベテランの近衛騎士だった。

「貴様ら、滅多なことを言うものじゃない。姫殿下はな……違うんだ。少なくともお前たちが思っているような貴族様とはまったく違う方だ。愚弄（ぐろう）するのは許さんぞ」

治安の悪い地区であっても必要があれば躊躇わずに足を踏み入れる勇敢さ、薄汚れた子どもを厭（いと）うことなく助け起こす慈悲深さ、貧困地区に必要な病院を英断によって建て上げた賢明さ。

彼のミーアに対する評価は、ルードヴィッヒに負けず劣らずに、インフレしているのだ。

「今日はよろしくお願いいたしますわね、みなさん」

ちょうどそこに、ミーアがやってきた。

慌てて姿勢を正す騎士たちに、ミーアはニコニコ笑みを浮かべる。

革命時に、近衛騎士団はほとんど裏切ることなく自分と運命を共にしてくれた。
ミーアの好感度が非常に高い騎士団である。
笑顔ぐらいならば、いくらでも見せてやろうと思う所存である。
そうなると現金なもので、若い騎士の士気は否応なしに引き上げられる。
なにしろミーアは絶世の美少女とまではいかないが、かろうじて美少女のカテゴリーに滑り込める程度の容姿は持っているのである。
しかも、大帝国の姫君というステータスもある。
さらにさらに、今日のミーアは乗馬用に仕立てたブラウスと半ズボンという、ちょっとだけアクティブな服を着ている。
貴族と言えば、ドレスに身を固めているものと思い込んでいた彼らにとって、これは良い意味での不意打ちだった。
そんなミーアがニコニコと親し気な笑みを浮かべてくれるのだ。
嬉しくないはずがない。
「では、まいりましょうか」
「はっ、はい！」
いささか士気の上がった近衛騎士たちを引き連れて、ミーアは城を後にした。

「あら、少し雰囲気が変わりましたかしら？」
足を踏み入れてすぐに、ミーアはその変化に気づいた。
心なしか人通りが増えた気がする。すれ違う人々の顔も少しだけ明るくなっているようにも感じる。
なにより町全体を覆っていた臭気が薄れ、侵入を拒絶するような雰囲気が薄れているようだった。
「病院が稼動し始めましたから。それに、食料の配給も以前の倍にはなっています。路上で死ぬ者も減り、徐々に活気が戻ってきていると報告があります」
生きるか死ぬかの状況では生活環境を気にしている余裕はない。

明日死ぬかもしれないのに、身ぎれいにしても仕方がない。
けれど、そんな危険が遠のいた途端に、現金なもので、周囲の不潔さが気になってくる。
最初は病院に派遣されたスタッフたちが自主的にやっていた町の清掃は、やがて住人たちの間に広がっていった。
さらに綺麗になってくれば、そこは帝都の一角でもある。
土地の利用価値はいくらでもあった。
人が溢れる都市であるルナティアは、いつでも住環境が不足した地域でもある。そこに目を付けたルードヴィッヒは、新月地区の端の方に新しく宿屋を建て、身ぎれいにさせた住人たちを従業員として雇うように指示を出した。
状況が整った場所に、労働の機会を与え、そこに金の流れを生み出したのだ。
宿屋が軌道に乗りさえすれば、今度はそこに商機を見出した商人たちが訪れ、商売を展開していく。
帝都の中の壊死しかかっていた地域に、流通という名の血液を注ぎこもうとしているのだ。
一通りルードヴィッヒから情報を聞いたミーアは満足げにうなずいた。
「そう、それは何よりですわ」
「あっ、ひめでんか！」
その時だった。遠くの方で声が上がった。
見ると、路地で遊んでいた子どもたちの中から、一人の幼い男の子がこちらに走ってきていた。
「こら、とまれっ！」
護衛の騎士たちの間に、緊張が生まれる。けれど、
「あら、あなたは……、確かあの時の……」
ミーアは彼らを片手で制し、男の子の方を見た。
やってきたのは以前、来た時にミーアが見つけた、衰弱していた子どもだった。いまだに少し痩せてはいるものの、今はその肌には

健康的な張りがあり、その瞳には輝きがあった。
「きちんと、食事をしてますの？」
ミーアの問いかけに、元気よくうなずき、
「うん、ひめでんかのおかげです。ありがと！」
男の子が笑った。
それから、ポケットからなにやら取り出して、ミーアの目の前に差し出した。
「なんですの？」
「あげる！　この前のお礼！」
「これは？」
それは白いかんざしだった。その表面は微かに虹色（プリズム）の輝きを帯びて、見る角度によって色が変わる。
「一角馬（ユニコーン）のかんざしです」
「まぁ、一角馬ですの！？」
ミーアは驚きの声を上げ、マジマジとかんざしを見つめた。
そのかんざしは確かに見たことのない輝きを帯びていて、確かに伝説の一角馬の角を削りだして作ったもののように見えた。
そんなミーアの様子に、男の子はくすくすと笑い声を上げて、
「ぼくの故郷の木を削って作ったんです。一角馬のかんざしって呼ばれてます」
「まぁ、そうなんですのね」
ミーアは、改めてかんざしを見た。
「いいですわね、これ」
ミーアはご機嫌で、一角獣のかんざしをつけた。
「ありがとう、嬉しいですわ」
ミーアがにっこり笑みを浮かべると、男の子はポッと頬を赤くして、それから走って行ってしまった。
「それはあの子の母親の形見ですよ」
「えっ？」
いつの間に来たのか、いつぞやの神父がそこに立っていた。

このあたり唯一の孤児院を運営していた人物だ。
「あら、神父様、お久しぶりですわね」
ミーアは、礼儀正しく、半ズボンのすそをちょこん、と持ち上げて挨拶して見せた。

第七十三話　ミーア姫、察する

「どうぞ、こちらへ」
いつぞや通された教会の中、神父の部屋は相変わらず質素で、あまり物がなかった。
「何もなくて申し訳ありません。手厚くご支援いただいているのですが、なかなか忙しくて手が回りませんで」
そう苦笑する神父だったが、その割には教会や孤児院の外壁の補修などは進んでいるように見えた。
これならば、少なくとも隙間風に悩まされるようなことはないだろう。
――自分の部屋を後回しにするというのは、いかにもこの方らしい態度ですわ。
貧困地区で働く人間すべてが、清廉潔白とは限らない。国の援助を目当てにし、私腹を肥やそうという人間だっているのだ。
ルードヴィッヒの手配した財政的な援助が入っても、なお態度を変えない彼の姿勢に、思わず感心してしまうミーア……だったのだが。
「そういえば、姫殿下は、聖女さまとご友誼を結ばれたとか……」
ふと思い出しました！　という顔で、神父が言った。
「聖女さま……、ああ、ラフィーナさまのことですわね。ええ、確かにお友達になりましたわ」
あまり、お近づきになりたくなかったけれど……、と心の中で付け足す。
――だって、あの人、怖いんですもの……。
などと思っているミーアなのだが、どうも気に入られてしまったらしく、夏休み中だというのに手紙が送られてきていた。
まさか返さないわけにもいかないから、お返事を書かなければい

けないのだが……。
――ああ、憂鬱ですわ。下手なこと書いて嫌われでもしたら大変ですわ！
などとため息を吐くミーアであった。
「おお、なんとっ！　やはり、噂は本当でしたかっ！」
ミーアの言葉を聞いて、神父が興奮したように声を上げた。心なしか……、彼の瞳がキラキラ輝いているように見える。
中央正教会に属する彼にとって、ラフィーナは雲の上の存在だ。だから、興奮するのはわからないではないが……。
――なんだか、舞台女優（アイドル）のファンみたいな反応ですわね？
ミーアは、以前、観覧に訪れた大劇場での出来事を思い出していた。
あの時は、人気の女優を大勢のお客さんで取り囲んで、それで……、
「あの、もしよろしければ、今度サインなどを……」
――ホントにファンでしたわ！
神父から、ものすごーく嫌そうな顔でラフィーナの肖像画を受け取り、「できれば、私の名前も入れていただけるととても嬉しいのですが……」などと事細かにサインの指示を受けるミーア。
ちなみに、その肖像画だが、ヴェールガ公国でラフィーナが誕生した時に大量に作られたものらしい。
たくさんの画家を呼んで、娘の肖像画を作っては、大喜びで配っているヴェールガ公に、ミーアは自らの父親と同じ匂いを嗅ぎ取った！
――ラフィーナさまも大変なんですのね……。
ちょっとだけ同情するミーアである。
……という感じの愉快なやり取りを経て、ようやくミーアは本題にたどり着く。
「ところで、このかんざしが形見というのは……」
「ああ、ええ、そうでした」

ラフィーナの素晴らしさを語りだそうとしていた神父は気持ちを切り替えるように大きくうなずいて、
「あの子の母親は、帝国辺境部の森林地帯に住む少数部族の出身のようなのですが、他の部族の男と関係を持ち、あの子を産んだようなのです。それが原因で親と喧嘩をして、赤子だったあの子を連れて帝都に出てきたとか。けれどあの子が幼い時に病を患い、亡くなられたのです」
“辺境の少数部族”、その言葉を聞いた瞬間、ミーアの背筋に嫌な寒気が走った。
日記の記述が脳裏を過る。
ミーアの本能が告げる。
自分はすでに、死地に足を踏みいれかけているということを！
「……もっ、もしや、その部族というのは、ルールー族ではありませんの？」
「おお、さすがは姫殿下。ご存知でしたか……」
神父は少し驚いた顔をしたが、すぐに納得した様子でうなずいた。
「もっとも姫殿下であれば、ご存じでも不思議はございませんな。あのラフィーナさまのお友達なのですから……」
妙な感じでミーアへの評価を上げる神父。
ミーアに対しての評価はもともと高かったが、すでにほかの人物のファンである彼は、ミーアファンクラブに入ったりはしないようだった。
それはさておき……、
「まぁ！　そんなに大切なものなんでしたら、いただくわけにはいきませんわ！」
いささか芝居がかった声音で、ミーアは言った。つい受け取ってしまったかんざしだったが、これがきっかけでどんなことが起こるかわからない。
ここは、早々に返してしまうのが、最善の手……。
「いえ、それはぜひお受け取りください。あの子がどうしても、と

言って渡したものですから」
神父は、微笑ましげに瞳を細める。
「姫殿下によって、運び込まれて以来、あの子はずっとお礼がしたいと言っておりました。そのかんざしは、あの子の心からの贈り物です」
――そんなの形見って時点で、よーっくわかってますわ！　言われるまでもございませんわ！
「ですから、どうかお願いいたします。姫殿下から見れば、粗末な品に見えるかもしれませんが、捨ててしまったりしませんように……」
「とっ、当然ですわ。傷一つつけませんわ！」
逃げ道をふさがれたミーアは、次善の策をとる。それは……、
「それと、ここにいらっしゃる時には、たまにでもかまいません……、身に着けていただければ……」
「毎日だってつけますわ！」
返却できないのであれば、仕方がない。
できるだけ大切にし、なおかつ、あの男の子と友好的な関係を築くことのみ。
逃げ道がそこにしかないならば、そこを全力で駆け抜けるのみだ。
「あの子に、わたくしがとても喜んでいたと、伝えていただけるかしら？」
「そうですか。姫殿下に気に入っていただけたなら、きっとあの子も喜びますよ」
ホッと安心した様子で、神父は微笑んだ。
その行動が思わぬところに影響を及ぼすことに、ミーアは気づいていなかった。

第七十四話　賽（さい）はミーアの手の中に

『ミーア姫の呪い箱』という宝石箱がある。
豪奢な宝石や希少な鉱石をふんだんに使い、極めて高い芸術性を誇るその箱は、数多の持ち主を破滅へと誘い続けた呪いの箱として知られている。
その最初の持ち主が、かの断頭台の姫君ことミーア・ルーナ・ティアムーンであることは広く知られたことであるが、箱を作った者の名は意外に知られていない。
ベルマン子爵――ティオーナの実家であるルドルフォン伯爵領の隣に領地を持つこの貴族こそ、帝国が滅ぶ遠因を作り出した人物であった。
「ベルマン様、やはり、ルドルフォン伯はこちらの要求を呑みませんでした」
「伯爵などとたいそうな名で呼ぶな。頭に〝辺土〟とつけよ、愚か者め！」
恭しく頭を下げる従者の報告を受け、ベルマン子爵は舌打ちを返した。
「忌々しい田舎貴族めが……」
ことの発端は、実にくだらないことだった。

「それにしても、ベルマン子爵は伝統と格式ある中央貴族であらせられるのに、なぜ、成り上がりの田舎者であるルドルフォン辺土伯のほうが広い領地をもっておられるのか、私には理解できませぬな」
とあるパーティー会場にて、偶然にも言われた言葉。
若干、むっとしつつも、ベルマンは答える。
「辺土伯の領地は、広いとはいえ、ほとんどが農地か森林地帯。広さを誇れるものでもありますまい」

「そうだとしても、でございますよ。あのような土臭い貴族に一つでも負けているものがあるというのはいかがなものか、と。ああ、いえ、子爵が気にならないのであればよろしいのですが……」
反論しようとしたベルマンだったが、確かに、その言葉には一理あると思ってしまった。
あのような、田舎者に一つでも負けているものがあると、そう考えただけで彼には不快だった。
そんな彼の耳元で、その男は囁いた。
「よい知恵がありますよ。子爵。静海（セイレント）の森を開墾すればいいのです」
「静海（セイレント）の森を？」
ベルマン子爵とルドルフォン伯爵との領地の境には、帝国有数の広大な森林地帯が広がっていた。
そして両者の領地の境界線は厳密には決められておらず、大まかにその森を境にして、程度にしか決まっていなかった。
面倒なので、森の中に分け入って、わざわざ決めるということはしていないのだ。
「なるほど、我らの側から森を切り開いていけば、その分、こちらの領地を広げられるということか」
静海の森のどこに境界線を引くかは決まっていない。
極端な話、木を一列残し、そこ以外をすべて開墾してしまえば、自領をそれだけ広げることができるかもしれない。
それは帝国貴族にありがちな身勝手で、さして珍しくもない考え方だった。
彼はさっそく、行動を開始する。
けれど、そこで問題が起きた。
森に住む少数部族、ルールー族が森の開墾に反対し、徹底抗戦の構えを見せたのだ。
「生意気な……」
子爵は、即座に軍務を司る黒月省（こくげつしょう）に訴える。
その結果、日頃の賄賂が物を言い、すぐに百人隊を送ってくれた。

しかしながら、派遣された百人隊長は、
「あくまでも治安維持が目的ですので」
などとのたまって戦いを始めようとはしなかった。
「どいつもこいつも……、私の言うことを聞かぬとは！」
いら立ちを募らせた子爵は、とある贈り物によって状況を打開しようとする。
皇帝の溺愛する皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンへの贈り物によって。
作戦は、とても単純だ。豪勢な宝石箱を作り、その一部に目立たないように、あの森の特徴的な木を使う。
「ユニコーンの角」などと呼ばれるあの森の木を使い、小さな彫刻でもつけておけばいい。
そして言うのだ。
「姫様がお望みならば、同じものをいくらでも作れるのですが……。そのためにはある森を手に入れる必要がございまして……」
そうしてミーアの後ろ盾を得る。
そうすれば帝国軍も動くし、ルールー族を殲滅することなどたやすいこと。
そう考えたのだ。
同時に、子爵は別の作戦も考えていた。
ルールー族の子どもをさらい、人買いに売り渡してしまおうというのだ。そうして、それを帝国兵の仕業に見せかければ……。
逆上したルールー族による攻撃があれば、軍としても動かざるを得なくなるはず。そうなれば、わざわざ宝石箱の完成を待たずとも状況は動く……。
と、そんな彼の作戦だったが、実際に行われることはなかった。
「最近、姫殿下はユニコーンの角の髪飾りを大層お気に入りとか……。毎日のようにつけておいでで……」
そんな声が、子爵の耳に入ってきたのだ。
もしそうならば、なにも宝石箱など作らずとも良い。

ユニコーンの角は、まさに静海の森でとれる木から作られている。
そんなものでよいならば、すぐにでも用意をしよう、と。

かくして、歴史の流れがミーアを間に合わせた。
紛争の始まる直前、いまだ問題がこじれる前の瞬間に。
賽は未だ投げられることなく、ミーアの手の平の上に静かに転がっている。
「ミーアさま、ベルマン子爵が面会に訪れておりますが……」
「あら、どなたかしら？　聞き覚えがないお名前ですわ」
運命は今まさに、来客の姿をとってミーアの前に現れる。
自分が運命の分岐点の真上に立っていることに、ミーアはまだ気づいていなかった。

第七十五話　馬シャンと姫のわがまま

「お初にお目にかかりますわ、ベルマン子爵」
――ほお、これは……。
現れたミーア姫に、ベルマンは思わず見とれてしまった。その美しさに目を奪われたのだ。
さて突然だが、ここ最近、ミーアは輝いていた。
以前までは「可愛いか可愛くないかで言えば、まぁ可愛いほうに分類される」と言う程度の容姿だったのだが、今は一味違う。
今のミーアはミーア史上最高の美しさを誇っていたのだ。
その理由は、輝くような珠の肌……、ではなかった。
もちろんそちらも、アンヌのお手入れによって、いっそう磨きがかかってはいるのだが、それ以上にミーアを輝かせているのは、その美しい髪の方だった。
――まるで、戦場を駆ける名馬の毛並みのような、美しさだ。
ベルマンを魅了するその髪の美しさは、アベル王子が送ってきた洗髪薬（シャンプー）によるものだった。
「これは汚れが取れるだけでなく、毛に栄養を与えて艶を増させると評判のものだ。普通のプレゼントはもらいなれていると思うが、これは気に入ってもらえると思う」
そんな手紙の添えられたプレゼントを、ミーアは非常に喜んだ。
大喜びで毎日のように使うようにした。
鼻歌を歌いつつ、毎日、お風呂を楽しみにするミーアを見て、アンヌも微笑ましい気持ちで、
――さすがは、アベル王子だわ。素晴らしいプレゼントね。
などと……、見守っていた……のだが。
実はその洗髪薬……、馬用である。馬術部に所属するミーアに、愛馬の手入れに使うといい、と、アベルが気を利かせて送ってきた

最高級の馬用洗毛薬（シャンプー）なのだ。
馬は人間よりも毛が繊細で、だから、ミーアの髪はこの帝国でもトップクラスにサラサラ、つやつや、美しく煌（きら）めいていたのだ。
後日、帝国内で、馬用洗毛薬が大流行するのだが、それはまた別の話である。

――なるほど、この美貌で、帝国の叡智などと、奉（たてまつ）られていたわけか。
ベルマンは、最近のミーアの評判を、その見た目の効果だと判断した。
――叡智だ、聖女だなどと言うのも、恐らくはあの美貌に惑わされた者たちの戯言。ミーア姫殿下は、やはり、わがまま勝手な小娘に過ぎないのだ。
その証拠に、先日、ミーア姫は、自分の友達の父親に便宜を図ったらしい。
確かに、平民上がりの名ばかり貴族に便宜を図った点は、変わっていると言えば変わっているが、裏を返せば、それはミーアのわがままぶりを表しているだけのこと。
恐らく、今回も気に入る品さえ提示できれば、自分の狙い通りに動いてくれるに違いない。
――ミーア姫殿下といえど、貢物をもらえば悪い気持ちはしないはず。それが最近、はまっているものであればなおさらだ。
そんな確信を持ちつつ、ベルマンは貢物を取り出した。
「ここのところ、姫殿下は一角馬の角の飾り物が気に入られているとお聞きしまして……」
言いつつ、彼の視線はミーアの髪へ。
そこには、確かに一角馬の角のかんざしがつけられていた。
――ふむ、たかが木製の飾り物と思っていたが、つける者によっては、なかなかに見られるではないか。
そんなベルマンを見て、ミーアの瞳が、すっと細くなった。

「確かに、最近はこちらのかんざしをつけるようにしておりますが……」
「ふふ、そうでしょう。では、これはいかがでしょう？」
ベルマンは職人に作らせたかんざしを、ミーアの前に並べさせる。
それはミーアがつけているものよりも派手で、ゴテゴテしていて、いかにも子ども受けしそうなデザインだった。
「そうですわね……。とても興味がございますわ」
それを見て、ミーアは、にっこりと笑みを浮かべる。
「そうですか。実はですな、その飾り物は、とある森の木から作っているのですが……」
内心で「してやったり」と舌を出しつつ、ベルマンは静海（セイレント）の森の話を始める。
「まぁ、そのようなことが……」
ミーアは驚いた様子で瞳を真ん丸くする。畳みかけるようにベルマンは前のめりになった。
「はい、ですからもし、姫殿下にご興味がおありでしたら――」
「ええ、わたくし、大変興味がございますから、直接行ってその森のことをしっかりと視察いたしますわ」
「……は？」
続くミーアの言葉に、ベルマンは凍り付く。
「あ、その……、姫殿下にわざわざいらしていただくのは……」
「ルードヴィッヒ、今すぐに向かいますわ。準備をなさい」
「いっ、今すぐっ！？　そんな――」
それでは、見られてまずいものを隠す時間もない。
――さっ、さすがに、そんなことが、できるはずが……。
慌てた様子で、ベルマンはミーア姫のそばに立つ、メガネの青年文官のほうを見る。
「まったく、ミーア様にはかないませんね……」
青年文官、ルードヴィッヒは、やれやれ、と肩をすくめて首を振った。

「あら？　知らなかったんですの？　わたくしは、わがままな姫殿下ですのよ？」
悪戯っぽい笑みを浮かべるミーアに、ベルマンは、言葉を失うのだった。

第七十五話　馬シャンと姫のわがまま（後書き）

表記の変更のお知らせ。
ルドルフォン辺境伯なのですが、辺境伯という地位は結構高いんじゃ？　というご指摘を何人かの方から受けておりまして、このたび「辺境伯」から「辺土伯」に変更いたしました。
一応、「辺境」にしろ「辺土」にしろ「田舎者！」と揶揄するニュアンスで中央の貴族が使うものと想定しております。外様大名的な、新しく編入された土地を領地として持つ新参者的な印象ですね。

第七十六話　馬車中の怒れるミーア

ティアムーン帝国近衛部隊には、皇女専属部隊（プリンセスガード）が存在している。ルードヴィッヒの要請で作られたその部隊は、いついかなる時もミーア姫の気まぐれに対応できるよう、ルードヴィッヒが組織した即応部隊である。

そんな忠義の兵たちに守られて、ミーアを乗せた馬車は一路、ベルマン子爵領へと向かっていた。

「指示を出してから半刻（はんとき）で出発できるとは、さすがですわね、ルードヴィッヒ」

「いえ、以前の貧困地区（スラム）への訪問で懲りましたから」

答えるルードヴィッヒの顔に、不機嫌さは見えなかった。

ミーアの行動には基本的に誤りがなく、それが善意と知性に基づいたものであることに、ルードヴィッヒは一定の信頼を置いているからだ。

優秀な役人であるルードヴィッヒは、ベルマン子爵領で起こりつつある問題をきちんと把握していた。だから、子爵がミーアに面会にやってくる時点で、何か起こるのではないかと予想し、あらかじめ準備を整えておいたのだ。

――しかし、今回は情報を持っていたから何とかなったが、できればもう少しお考えを、俺たちにも明かしておいてもらいたいが……。いや、姫殿下の心情をきちんと読み取ってこその臣下か。

天才ゆえの論理の飛躍が、時折、ミーアの言動には見られる。

頭の回転が速いゆえに、他者より一手も二手も先を考えていることに、本人が気づかないのだ。

けれど、それはミーアが幼い故ということもあるだろう。

このまま成長すれば、さぞや聡明な君主になられるだろうとルードヴィッヒの期待と忠誠心は天井知らずに高まっていくのだった。

「それで、ルードヴィッヒ、できれば子爵領のことを、教えていただけないかしら」
にっこりと笑みを浮かべるミーア。
――姫殿下のことだ。恐らく、ベルマン子爵領の状況など、とうに知っているのだろう。それなのに、あえて俺から情報が聞きたいということは……。
あどけなさの残る幼い笑み、何も考えていないようにさえ見えてしまうその笑顔の裏で、いったいどれほどの思考がめぐらされているのか……。
ルードヴィッヒはできるだけミーアの意向を読み取って行動しようと考えているが、それでも、半分も理解できていないのだろうな、と苦い不甲斐なさを覚える。
――恐らくはご自分の持つ情報がどの程度正しいかの確認、それに、問題をどのように解決するのか、話しながら考えをまとめていくおつもりなのだろうが……。
「それでは、ご説明させていただきます。ベルマン子爵領には、現在……」

ルードヴィッヒの話を聞くうちに、ミーアは、自らの背筋に冷たい汗が流れ落ちることを感じた。
「俺が持っている情報はそんなところですが……」
彼の説明をすべて聞き終えたところで、ミーアは、
――あ、あぶねー……！
思わず、胸中で品のない言葉をつぶやいてしまう。
もっとも、それも無理のないことではある。
静海の森を切り開く、そのために少数民族ルールー族を排除する、その森を挟んだ先にあるのはルドルフォン辺土伯領、ミーアの全面的な支持を受けてすべてを行う……。
思い当たる危険ワードがモリモリと盛り込まれた話だった。

日記帳で幾度も見て、だけど、まったくもってミーアが身に覚えがなかったこと。
まさか、自分のあずかり知らぬところで、こんなことになっていたとは……。
――なるほど、確かにこれでは、ティオーナさんとの仲だってこじれるってもんですわ。
前の時間軸ならばともかく、日記帳によれば今回の時間軸でも変わらずに、ティオーナとの仲はこじれてしまう。
学校生活ではそんな兆候がまるでなかったから、ミーアは疑問に思っていたのだが……。
――謎はすべて解けましたわ……、ベルマン子爵、許すまじ、ですわ！
ミーアの腹の中で、ふつふつと怒りが沸き上がる。
そんなミーアを見て、ルードヴィッヒは、やはりこの方は貴族の横暴に、しっかりと怒れる人なのだ、と好感度を上げた。
「俺の知っているのは、そのぐらいです。今の段階だとベルマン子爵に非があることは確かだと思いますが……」
ルードヴィッヒはそこで言葉を切った。
実際のところ、難しいのはそこから先だった。ベルマン子爵のやろうとしていることは、実のところ、咎めるにはいささかグレーゾーンの占める部分が大きいことだった。
森を切り開いて土地を作り出すことは悪いことではないし、自領でやるなら文句を言われる筋合いのあることではない。
ルドルフォン伯爵領との境も確かに曖昧だから、それを理由にやめろとも言いづらいし、少数民族の声と子爵の声とであれば、帝国中央政府は子爵を支持するだろう。
さらに軍部としても、一度、部隊を派遣してしまった以上、撤退させるには「現地の治安の回復」のような、きちんとした理由が必要となる。
これらの問題を解決する術を、ルードヴィッヒは思いつけなかっ

た。だというのに……、
「それで、ミーア様、どうなさるおつもりですか？」
「決まってますわ。ぶっ潰しますわ！」
ミーアは、鼻息荒く言い放ったのだった。

第七十七話　仇敵

ティアムーン帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンの仇敵と言えば、言わずと知れた二名、シオン・ソール・サンクランドとティオーナ・ルドルフォンが有名である。

しかし、革命軍に捕らわれたミーアを実際に処刑したのは、実はそのどちらでもなかった。

うら若き女性に手をかけるなどという後味の悪い栄誉を賜ったのは、ディオン・アライアという帝国軍の元将兵だった。

革命が起きてすぐに革命軍に転向した彼は、名だたる将兵を己が剣で屠り、帝国軍を瓦解させるのに、大きな役割を果たした。

革命軍一の功労者である彼が求めた褒美こそ、皇女ミーアの首だった。

彼の願いを聞き、当初は困惑したシオンだったが、彼の経歴を聞いて納得した。

ミーアのわがままによって始まった紛争、静海（セイレント）の森の戦いにおいて、彼の部下は彼を残して全滅したのだ。

部下の敵討ち、それこそが、彼を革命軍に転向させた動機だった。

「なぜ、まだ戦端を開いていないのだ？　軍はやる気がないのか？」

ベルマン子爵の館に呼びつけられたディオン・アライア百人隊長は、ニコニコ笑顔を崩すことなく、以前言ったのとまったく同じ言葉を返す。

「ですから、我々の目的はあくまでも治安維持。不必要な戦闘をする必要はないかと……」

先日も同じことを申しましたが、頭が悪いんですか？　と口に出さないだけの分別は持っているつもりだったが、そのうち、こちらの理性も焼き切れるかもしれないなぁ、などと、他人事のように思

う。
「あの森は、ルールー族のテリトリー。戦えばこちらにも相応の被害が出ます」
自分一人であれば生き残る自信はあるが、部下たちは厳しいというのがディオンの見立てである。
「兵は領主のために命を張るものだろう？　何のために養ってやっていると思っている？」
「我らは皇帝陛下の兵です。子爵ともあろう方が不見識ですね」
つい付け加えてしまった本音に、子爵の頬がひくっとひきつる。
「我らはあくまでも皇帝陛下の信認を得た黒月省より、森の治安を維持せよとの命を受けてきております。勝手に戦端を開くことは皇帝陛下の……」
「ああ、もうよい」
子爵はうんざり顔で、手をひらひら振った。

「やれやれ、まったく貴族様ってのは、気軽に殺しあえなんて言うんだから、気楽なもんだね」
館から出て、思わずため息。
「お、隊長、終わったんですかい？」
ディオンを見つけたのか、門の所で待っていた大柄な兵士が小走りに寄ってきた。
ひげ面で、山賊か？　とツッコミを入れたくなるような風体の男だが、その瞳には、訓練された兵士特有の鋭い光が宿っていた。
「で、首尾はどんな感じで？」
「変わんないよ。あの森で戦うのは危険が大きすぎる。僕と君ぐらいじゃないか？　生きて帰れるのは」
「はは、ちげえねえや。けど、隊長と副長だけ生き残るってのも風聞が悪いですからな」
豪快に笑う副長に、ディオンは小さく肩をすくめる。

「しかし、帝都に行ったっていうから、てっきり皇帝陛下の勅命でも持って帰ってきたのかと警戒したけど、どうやらあまりうまくはいかなかったみたいだね……」
「そいつは、どうだか。安心するのは、ちぃっとばっかし早いかもしれないですぜ？」
「うん？　それはどういう……」
ディオンは言葉を切って、前方からやってくる一団に目をとめた。
帝国軍の一般的な装備とは違う、儀礼的な美しい鎧。実用性の薄い装飾過多な鎧を身にまとうは、帝室を守り奉る帝国軍一の忠義者の集団。
「近衛兵、か」
「ええ、なんでも噂によると、帝都から皇女殿下が視察にいらっしゃったとか」
「それはまた……」
いかにも嫌そうな顔をするディオンに、副長は苦笑いを返す。
「せっかくお姫様がいらしてるのにずいぶん不敬な顔をしてますな」
「あいにくと、王女様だの王子様だので盛り上がれるほどウブじゃない。それに……」
「やっぱり、隊長もきな臭いとお感じになりますかい？」
「タイミングがタイミングだ。子爵が帝都に行って連れてきたとみるべきだろうね。さてさて、子爵に何を吹き込まれたやら……」
「そんでも、うちの国の姫殿下はたいそう頭がおよろしいと聞きましたがね」
もじゃもじゃのヒゲをなでながら、副長が言う。
「こうあってほしいという通りには、絶対にならないものだ」
「そいつはまた、悲観的な。どこの哲学者のお言葉で？」
「僕だよ。希望的観測はたいてい外れる。そのおかげで、剣の腕も上がったわけだから、悪いことばかりでもない」
「そいつは要するに、何が起きても対応できるぐらいの腕っぷしがあればいいってことですかい？」

「簡単に言うとそうなるかな」
がはは、と豪快に、副長が笑う。
「そいつは実に隊長らしい哲学ですな」
その時、近衛に守られるようにして、小さな女の子が現れた。
――ふーん、ミーア姫、ねぇ……。
ディオンはなんとはなしに、そちらを見る。
ちょうど、顔を上げたミーア姫と目が合って……。
「ひえええっ！」
なぜか……、ミーア姫は卒倒した。
「……んで、こいつはどう乗り切るんですかい？」
「知らんよ」
副長のツッコミに肩をすくめて答えるディオンだった。

第七十八話　ルードヴィッヒ、謀（たばか）る

――どっどっど、どうして、この男がこんなところに、おりますのっ！？

意識を取り戻したミーアは、目の前に立つディオンに目を向ける。

「ご気分はいかがですか？　ミーア姫殿下」

愛想のいい笑みを浮かべて、ディオンは頭を下げた。

「お初にお目にかかります。僕はディオン・アライア。この地に派遣された帝国軍の指揮をとっています」

悪意の感じられない完全無欠な笑み。けれど、ミーアはその笑みに刺し貫くような恐怖しか感じなかった。

その顔を見ると、首筋に、冷たい刃の感触がよみがえってきそうで……。

「？　どうかしましたか？　姫殿下」

呼びかけられ、顔を上げる。と、そこには、ディオンの顔があった。

すぐ目の前、まるでミーアの心を見通すかのように、じっとミーアの目を見つめてくる。

「ひっ、ひぃっ」

思わず、腰が抜けて座り込みそうになるのを、横に立っていた大柄な副隊長が慌てて止める。

「大丈夫ですかい？　姫さん、馬車で酔われたんじゃねぇのかい？」

気遣うような言葉も耳には入ってこない。

ミーアは、ディオンから視線を外すことができなかった。

「僕の顔に何か？」

「なな、なんでもありませんわ。こ、この、副隊長さんが、熊のようで怖かっただけですわ」

「ははは、熊はよかったな。まぁ、確かにお姫さんには俺の顔は怖

いでしょうなぁ」
豪快な笑い声をあげる副隊長。けれど、ディオンは冷静にミーアを観察していた。
――嘘だな。この子、さっきから僕に怯えてる。
そう推察したディオンは、ミーアの観察眼の正しさを認めた。
悪人面ではあっても子どもに甘いところがある副隊長は、よほどのことがない限りミーアに手をかけるようなことはない。
例えばミーアが武器を構えて襲ったとしても、その武器のみを狙うような、そんな優しさがある。
一方、一見して優男のディオンだが、必要があれば子どもであろうが容赦なく殺す。
相手が武器を持ってこちらを殺しに来るならば、容赦することはない。しかも、強さで言ってもディオンの方が圧倒的に上なのだ。
だから、ディオンの方を警戒するという態度は正しいのだが……。
――戦場で対峙した戦士というならともかく、帝室育ちのお姫様が、そんなことを見取ったのだとしたら、侮れないな。
そんなことを考えている時だった。
ミーアの付き添いで来ていたメガネをかけた文官、ルードヴィッヒが唐突に口を開いた。
「ミーア様、ディオン隊長とともに森の査察に行ってきてください」

「……はへ？」
ぽかんと口を開けて、ミーアは間の抜けた声を出した。
――お、おほほ、まったくもう、何を言っているのかしら、このメガネ……。
などと、一瞬、現実逃避しかけるミーアであったが……。
「このまま子爵邸に行っては妨害される恐れがあります。秘密裏にミーア様だけ行かれる方が、状況をしっかり把握できるはずです」
ルードヴィッヒが本気で言っていると気づいて、慌て始める。

「なっ、ちょっ、まっ！」
「勝手に話を進められても困るよ、ルードヴィッヒ殿」
ディオンが面倒くさそうに、顔をゆがめる。
「それに、もしも森にお連れするにしても、ミーア様だけということになりますよ？」
「それはどういう意味ですかな？　我ら近衛は当然同行を……」
「鎧が目立ちすぎるよ。森は今、緊張状態。ルールー族を刺激して、戦が始まったら君ら、責任とれるの？　それとも……」
ディオンは、口元にいたずらっぽい笑みを浮かべて言う。
「脱ぐかい？　近衛の証であるその鎧を……」
「そうせねばならぬなら、そうするのみ。姫殿下に付き従うことこそ、我らが誇りだ。全員、武装を解除、鎧を脱ぎ、剣のみ携えて姫殿下に続け」
朗らかな笑みを浮かべ、近衛隊長が言う。その命令に、一切の迷いもなく従おうとする近衛たち。
さすがのディオンも、驚きに目を見開く。
近衛兵と言えば、忠義と武力の双方を認められた、帝国軍一プライドの高いエリート集団だ。にもかかわらずの、この行動である。
「……それだけミーア姫に心酔している、ということか？」
口の中で小さくつぶやく。
「そのぐらいにしてくれ、近衛隊長。君たちには俺たちといっしょにきて、ベルマン子爵へのカモフラージュをしてもらわなければならない」
「ですがっ！」
「二名だ。二名をミーア様に同行させ、他は我々とともに子爵邸に」
そういうと、ルードヴィッヒはディオンの方を見た。
「それで、どうですか？」
「あー、うーん、まぁ、そういうことなら、仕方ない、かな」
ここまで相手に折れられては、ディオンとしてもノーとは言えない。それに、少しだけ興味が出てきてもいたのだ。

近衛兵たちにここまでさせるミーア姫という存在に。
「そういうことで、よろしいですね、ミーア様」
一方のミーアだが、
――ぜっ、ぜぜ、ぜんぜんよろしくないですわっ！
引くに引けない状況、すでに自分が口を差しはさめる状況ではないことを敏感に察してしまい……、
――ぜんっぜん、よろしくないですわっ！！！
心の中で大絶叫を上げるのだった。

第七十九話　ミーア姫、同情する

――ああ、なぜ、このようなことに……。
馬上で、ミーアは小さくため息を吐いた。
先頭を行くディオン隊長、まさか自分を殺した相手の先導で目的地に行くなどとは、思ってもみなかった。
憂鬱で体に力が入らず、ミーアはぐったり、馬に揺られていた。
「ほう、姫さん、なかなか馬の乗り方が様になっておりますな」
ミーアのやや前を行く副隊長が話しかけてきた。
「きちんと力を抜いて、馬の動きに委ねてますな。普通の貴族のお嬢さんじゃあ、こうはいかねぇはずだが……」
「まぁ、それはありがとうございます」
ミーアは、悪人面の副隊長に会釈を返した。
ミーアの見たところこの副隊長、見た目はさておき、人柄は悪くない。
先ほどから自分の方を気にしてくれていたことに、ミーアは気づいていた。
それに、副隊長と言う肩書を考えてもディオンを諌(いさ)められる立場にいるものなのだろう。
いざという時、ディオンに対しての歯止め役として使えるのではないだろうか。
ミーアの打算的な直感が告げる。
この副隊長と仲良くしておいた方がよさそうだな、と。
さらに言えば、乗馬技術をほめられたこともちょっとだけ嬉しかった。夏休みに入ってからも、ミーアは時間があれば馬に乗るようにしていた。
なにしろ、乗馬技術はミーアにとって文字通りの死活問題。
いざ何かが起きた時、頼りになるのは忠実な部下たちと物理的な

移動力である。
　馬をいかにうまく乗りこなすかで、ギロチンかそうでないかが決まるのだから練習にも身が入ろうってもんである。
「どうかしら？　もし仮に、わたくしがディオン隊長から逃げるとして無事に国境まで逃げ切れるかしら？」
「あー、まぁ、そいつは……」
「それは無理ですねぇ。悪いですが、三日もあれば追いつけますよ」
　ふと顔を上げると、ディオンがにっこにこの笑みでこちらを振り向いていた。
「だから、駆け落ちでもして国外に出るんだったら、僕の目の届かないところでやった方がいいですよ？」
「ま、まぁ、でも、あれだ。今から十年も鍛えれば、隊長にだって負けねぇ乗り手になれますぜ」
「……ああ、そうですのね。十年……」
　日記のままに歴史が進めば、革命が起きるのは今から、遅くても五年後だ。
　ミーア、しょんぼりである。
　そんなミーアを慰めるように、副隊長の馬がひひんといなないた。
「あら、その馬……」
　ミーアは副隊長の騎乗する馬を見る。
　しなやかに力強く躍動する筋肉と、それを覆う黒く艶やかな毛並みが美しい馬だった。
「いい馬ですわね。特に毛ツヤがとても美しいですわ」
「おっ、姫さん、わかるのかい」
　ほめられて、まんざらでもない笑みを浮かべる副隊長。
「へへへ、こいつはな、外国から取り寄せた馬用洗薬（シャンプー）を使って、しっかり手入れしてるんで」
「まぁ、そうなんですの。なぜでしょう？　なんだか、他人とは思えませんわ。すごく親しみがわきますわ」
　馬はミーアの方を横目に見て、ぶふふん、と親し気に鼻を鳴らし

た。

およそ半日で、ミーア達一行は、静海の森の入り口に辿り着いた。ディオンが率いる帝国軍の百人隊は、森から少し距離を置いた平地に陣を敷いていた。

即席の幕屋が整然と立ち並び、その周辺を簡易の柵が覆う。その柵の内側で兵士たちが忙しげに動いている。

きびきびとした動きは、兵の練度を表すものかもしれないが、ミーアは、なんとなく嫌な臭いを感じ取っていた。

「なんだか、みなさん、ピリピリしてますわね」

「姫殿下がいらっしゃったのですから、緊張するのは当たり前では？」

近衛の問いかけに、ミーアは首を振った。

「……いえ、そういうのとは、少し違いますわ」

張り詰めたような気配、火が燃え上がる寸前の緊張感。

その感覚にミーアは覚えがあった。

――革命が起きる前夜の空気に、どこか似てますわ。

「なるほど、姫殿下はやはり、いい感覚をしているみたいですね」

ディオンが、ミーアの傍らに立って笑みを浮かべた。

「ここは戦場ですから。いつ戦いが始まってもいいように、兵たちは心構えを整えているんです。そうしないと、命を失いますから」

「まぁ！」

そんな過酷な環境にいるなんて……。ただでさえ、鬼のような戦闘狂（サーカー）である隊長（ディオン）のもとでしごかれているのに……。

人を人とも思わない酷い男（ディオン）の下で仕事をするだけでも大変でしょうに。

「兵たちが、かわいそうですわ……」

ミーアは深く深く兵たちに同情した。

――ふーん、貴族の横暴に振り回される兵たちに同情できるのか。

このお姫さん、噂通り知恵者かもしれないな……。
　幸いディオンに読心術の持ち合わせはない。
「ここに、兵を駐屯させておく必要があるのかしら？」
「僕の個人的な意見ですが、必要ないですね。むしろ、ここにいるだけで戦いが始まるリスクが高まると思いますよ」
「でしたら……」
「しかし、あいにくと、僕らは命令を受けて来てるだけですから。引いた方がいいとわかっていても、理由がないと動けないんですよ」
　ディオンがやれやれ、と肩をすくめた。
「兵を引く理由……」
　ミーアは、かすかにうつむいて考え込んだ。

第八十話　わがままシチュエーション

駐屯地の兵たちに、慰労の笑みを浮かべつつもミーアは考え続けていた。

――兵を引く……。

自身のギロチンへと直結するような戦いが今まさに始まろうとしている。

その危機が、炎のように燃え上がりつつあるこの状況……、ミーアの脳は悲鳴を上げんばかりに回転速度を上げていた。

ぼんやりと宙に視線をさまよわせつつも、兵たちと目が合えば、にっこり愛想よく微笑みを浮かべるミーア。

兵たちは、思わず息をのんだ。

もともと、アンヌが手塩にかけて手入れしているすべすべお肌と、馬シャン効果でサラサラ美しい髪を完備している今のミーアは、ミーア史上最強の可愛らしさを持っている。

加えて、その服装は大貴族が着ないような、どちらかといえば庶民的な、乗馬用の服である。

そんなお姫様が、どこか焦点の外れたような、ぼんやりとした目をしている……、その浮世離れしたＴＨＥ姫殿下、という雰囲気に、ディオンの精兵たちはコロッとやられた。

「おお、なんとお美しい……、あれがミーア姫殿下か」

「俺たちのような下っ端の兵のために慰労に来ていただけるとは……なんという」

そんなことをうっとりつぶやいたりなんかしている。なんともチョロい精兵たちであった。

感動に打ち震える兵たちをしり目に、ミーアは考え事を続けていた。

ミーアには切り札が存在している。

そう、わがままである。
大抵のことは、ミーアのわがままで通ってしまう。軍令部である黒月省の命令であれど、帝室のわがままで覆せる。
これは数多の悲劇を生んだ致命的な欠陥ではあるが、今回の場合は大きな武器と言える。
けれど、それは決して万能ではないのだ。
問題は、わがままを言う条件を整えられるかどうか、ということである。
――なかなかに難しいですわ。
なにかほしい物をねだるとかならばともかく、兵をわがままで引かせるという状況が、ミーアにはいまいちうまく想像できなかった。
例えばの話、ミーアが何の前触れもなく「兵を引け」と言い出したとする。
どうなるだろうか？　ディオン隊長は真に受けて、兵を引いてくれるだろうか？
答えは、恐らく否だろう。
きっと副隊長あたりが、
「はっはっは、将軍ごっこですか。姫殿下、なかなか勇ましいですな」
などと笑い飛ばして終わりである。
支離滅裂な子どもの戯れ言だと思われてはいけないのだ。
わがままを言ってもおかしくはない状況を、ミーアは作り出す必要があるのだ。
――なにか上手い方法があればよろしいんですけど……、あら？
そこで、ミーアは不意に気がついた。なんだか、あたりの景色が微妙に変わっているような？
見上げるばかりに大きな木、木、木。
そこは、アンヌの妹、エリスが書く物語に出てくるような、深い森の中だった。
ミーアたちが立つ獣道も細く曲がりくねり、先が全く見通せない。

「あの……ここは？」
「ん？　先ほど言いましたよね。森に入るって」
「……へ？」
ミーアは、思わず、ぽかん、と口を開けた。
「ですから、森の中、最前線ですよ」
「さっ、ささ、最前線っ！？」
「そうです、と言っても、まだ戦は始まってませんからね。なにもしなければ、いきなり攻撃されるなんてこともないと思いますけどね」
と、付け加えたが、ミーアはまったく聞いていなかった。
――わっ、わたくしが考え事をしている隙に、なんてとこに連れ込んでくれますのっ！？
視察といっても、ミーアは別に森が見たかったわけではない。というか、そもそも駐屯地にだって来たいとも思っていなかった。
ミーアは、あくまでも紛争を止めるために来ただけなのだ。それなのにっ！
思わず文句を言おうとしたミーアに、ディオンが低い声で囁いた。
「ああ、先に言っておきますよ、姫殿下、どうぞ、不用意に森のものに手を触れませんように」
「え？」
「彼らにとってこの森の木は、神から与えられた大切な財産。それを粗末に扱われたら、矢が飛んできても文句は言えないでしょう？」
――文句言いますわ！　いきなり矢が飛んでくるとか、怖くてしょうがありませんわ！
ミーアはこわごわと周りの木々に目をやった。
心なしか、暗がりに矢を構えた男たちの姿が見えた気がして、小心者の心臓がすくみ上る。
「もっ、もう結構ですわ。早く町に帰り……ふぎゃっ！」
どでーんっと、盛大な音を立てて、ミーアがすっころんだ。
ぐねぐねと盛り上がった根っこに足を取られてしまったのだ。

「姫殿下、大丈夫ですかっ！？」
「お怪我はっ！？」
近衛たちが心配そうな声を上げる。
対照的に、ディオンはあきれ顔でため息を吐いた。
「気を付けてくださいよ、姫殿下。帝都じゃないんですから」
それでも、ミーアに手を差し伸べてくる。ミーアはその手を取りつつ、
「こっ、こんなところに根っこが出てるのが悪いんですわ。この木が……あっ」
瞬間……、ミーアは閃いた。
「そう、そうですわ……。この木が悪いんですわ！」
にんまり、悪い笑みを浮かべて、木を見上げるミーアであった。

第八十一話　目力姫（ハイパワーアイ・プリンセス）

「そうですわ、この木が悪いんですわ……、この木が」
「ミーア姫殿下？」
ぶつぶつとつぶやくミーアを、不審そうな顔で見つめるディオンだったが……。
「わたくしの足を引っかけるとは、生意気な木ですわっ！」
ヒステリックな声を上げると、ゲシっと音を立てて、ミーアが木の幹を思いっきり蹴りつけた。皇女らしからぬ、ちょっぴり品のない蹴り方だった。
直後、ディオンの背筋に緊張が走る。放たれた殺気の塊がミーアに殺到していくことを感じ取ったのだ。
「ちぃっ」
舌打ちと踏み込みと抜刀が、ほぼ同時だった。ミーアの前に躍り出て、かすかに聞き取った風切り音の方に視線を向ける。
うなりをあげ、飛んで来る矢は……四本。
「さすがは、狩猟民族、狙いが正確だ。だが、それ故に……」
ディオンは剣を振るう。
一閃、二閃、三閃。
三つの斬撃が、ほぼ同時に繰り出されたかのような錯覚を覚える、見事な剣技。
直後、彼の足元に切り裂かれた三本の矢が落ちる。
残りの一本は、と言えば……。
「……え、あ……、え？」
きょとん、と瞳を瞬かせて、呆然としているミーア。その小さな頭のすぐ上の部分の木に、最後の一本が突き刺さっていた。
矢の軌道を読んだディオンが、あえて無視した一本である。
ゆっくりと、頭上の矢に目をやったミーアは、

「ひっ、ひゃあっ！」
ひきつるような悲鳴を上げて、その場に尻餅をついた。
その拍子に、彼女が頭につけていた髪飾りが、地面に落ちる。
そんなミーアを素早く小脇に抱える、と同時に、再度、飛んでくる矢を剣で切り落とす。
「隊長！」
遅れて、剣を抜いた副隊長、さらに近衛たちが駆けつけるが……、
「下がるぞ。森の外に退避する」
ミーアを片腕で抱えたまま、ディオンは走り出した。
「僭越ながら、ぶっ殺しますよ、姫様」
怒りに任せて、ミーアをにらみつける。
「ひっ、ひぃっ！」
ディオンの殺気じみた視線を受けて、ミーアは、先ほど矢に狙われた時以上に怯えを見せた。
「言いましたよね、不用意に森のものに触れるなって……」
涙目で、びくびく体を震わせるミーアは、かすれるような声で言った。
「にっ、にに、逃げますわよ！」
「言われなくても、すぐに駐屯地までお連れしますよ」
「領都までですわ。子爵邸まで下がらなければ、安心など、できませんわ」
ディオンの目を見つめながら、ミーアが言った。
それは、好都合、とディオンは頷く。
「ええ、どうぞ、近衛のお二人と自由にお下がりください。護衛に一部隊つけますよ」
しょせんは子ども……、わがままな子どもか。
ため息を吐くディオンだったのだが。
「そっ、それでは足りませんわ」
未だに、ミーアはディオンの目を見つめ続けている。その目に宿る力強さに、ディオンは小さく首を傾げる。

「どういう意味でしょう？」
「精鋭たる近衛たちならばいざ知らず、皇女たるわたくしの護衛が一部隊で務まると思っておりますの？」
「……何が言いたいのでしょうか？」
「全軍ですわ。すべての兵をもって、わたくしを護衛し、領都まで戻りなさい」
「いや、姫さん、そりゃあ、ちょっと、いくら何でも……ねぇ、隊長？」
普段ならば、傾聴に値する副隊長の声。
けれど、ディオンは、ミーアから目線を外すことはなかった。
その美しい瞳の中、宿る意志の意味を図ろうとするかのように。
「軍を動かすには、時間がかかるものなんですよ、姫殿下。陣を畳んだり、物資の輸送だって手配しなければ……」
「わたくしの護衛以上に大切なことが、ございますの？」
ディオンの目を、まっすぐに見つめ返し、ミーアは言った。その言葉を聞いて、ディオンは小さくため息を吐く。
それから、片腕で野良猫のように抱えていたミーアを、両腕を使ってお姫様抱っこの形に抱えなおす。
「ああ、なるほど、確かにその通りだ……。副隊長、聞いての通りだ。陣についたら馬と兵をできるだけ早く動かせるようにしろ」
「たっ、隊長？」
「ご命令とあらば、仕方がない。どうやら姫殿下は、我々の実力を過小評価されているようだから、栄えある皇女殿下の護衛に相応しく、一糸も乱れぬ隊列にて領都まで転進する」
それからディオンは、なぜだか安堵したように瞳を閉じているミーアに言った。
「しばし、ご辛抱ください、姫殿下。すぐに森を抜けますので」
――こっ、ここ、怖かったですわっ！
ディオンの腕の中、ミーアは、今さらながらに背筋に冷や汗が噴

き出すのを感じた。
計画は、思いのほかうまくいったのだが……。
――まさか、本当に矢で狙ってくるなんて。
あの革命戦争の時だとて、まず警告と威嚇射撃があった。今回も、それと同じだと思っていたのだが……。
さらに、その後のディオンの反応である。
ミーアは確信した。
先に目を離したら、殺される！
ゆえに、ミーアは必死にディオンの目を見つめ続けた。目をそらさないことに、ミーアは、まさに、全意志力を使い果たしたのだ。
――し、死ぬほど、疲れましたわ！
頭上で、ディオンが何か言っているようだが、かまわず、ミーアは瞳を閉じた。
あまりに目を見開きすぎて、瞬きすら忘れていたので、目がちょっぴり痛くなってしまったミーアであった。

第八十二話　他人の不幸を笑うものは……

「いいですわね、あの森でのことはあくまでも他言無用にお願いいたしますわ。わたくしは、木の根に転んで、少し混乱してしまっただけ。よろしいですわね？」

領都についたミーアは同行したディオンたち四人にそう言い含めてから、ルードヴィッヒらと合流した。

一方のディオンたちだったが、その後の処理はいささか大変であった。

なにしろ、ディオンの部隊は百人隊である。未だ犠牲が出ていないから、ぴったり百人の人間の受け入れ先を探す必要がある。

帝都であればいざ知らず、子爵領の一つの町でそれだけの人数を一度に受け入れることは到底できず、仕方なく彼は、隊を十個に分散させて、近隣の村々に駐留させることにしたのだ。

すべての指示を終え、領都に戻った時には、さすがのディオンといえども、いささかの疲労感は禁じ得ないところだった。

「なかなか大変でしたな……」

「まだ百人隊でよかったよ。これが千人、一万人ともなれば、寝床や糧食の手配で一苦労だ。やっぱり、これ以上は出世したくはないな」

「欲がありませんな。相変わらず」

豪快に笑ってから、副隊長は言った。

「それにしても、隊長の勘が当たりましたな」

「うん？　なんのことだい？」

「希望的観測は当たってほしい方には当たらないってやつですよ。あのお姫さん、帝国の叡智なんて言われてるもんだから、もう少しまともかと思ったが……。まぁ、貴族なんてあんなもんですかな」

髭をじょりじょり、なでながらつぶやく副隊長に、

「あまり、あのお姫さんをナメない方がいい」
ディオンは小さく首を振って答えた。
「は？　いや、ですが……」
「あれは、相当の切れ者だ。軍師でもやらせたら、負けてると見せて、最後にちゃっかり勝ちをさらっていく。そういう類の人物だよ」
納得しかねる、と言った顔の副隊長を伴って、ディオンは酒場を訪れた。
そこには、先客がいた。
「あっ、ディオン百人隊長……」
「お疲れ様です。手配は無事に済みましたか？」
ミーアと同行した二人の近衛兵だった。ディオンたちの姿を見つけると、すぐに立ち上がり、姿勢を正した。
「やあ、君たちも飲んでるのか？」
気安げに手を上げるディオンに、近衛二人は大きく頭を下げた。
「このたびは、我々の姫殿下が大変なご迷惑を……」
「迷惑？」
「普段はあんなに高慢な方ではないのですが……、こたびは、命を狙われて、動揺されたのだと思います。なにとぞ、ご容赦をいただければ」
――あー、こいつらもかぁ。んー、こういうのは僕の役どころじゃないと思うんだけどねぇ……。
ディオンは小さくため息を吐いてから、
「別に気にしてない。というより、姫殿下には助けていただいたと思ってるよ」
「え……？　いえ、あの、それはどういう……？」
驚愕に、目をパチクリさせる兵士たちに、ディオンは苦笑いを浮かべた。
「わからない？　あれはブラフ、演技だよ」
それから彼は、近衛たちのテーブルにつき、酒を注文した。
少しして、注文した麦酒が来たところで、待ちきれないとばかり

に兵の一人が言った。
「それで、あの、ディオン殿、ブラフと言うのは……？」
ディオンは木製のコップの中身を半分ぐらいあおってから、
「あまり戦場慣れしてない近衛の諸君はわからないかもしれないけどね、軍隊ってのは、そこにいるだけでプレッシャーになるんだ。それは、悪さをしようって盗賊なんかを押さえつけるには有効だけど、覚悟を決めた戦士が相手の場合、無駄に戦いを引き起こしてしまうきっかけになることもある」
互いに抜身の剣を突きつけあっていれば、ちょっとしたきっかけで殺し合いが始まってしまう。
「相手が先に斬りつけてくるのではないか？」という疑心暗鬼は、容易に敵への殺意へと変容する。
「その緊張状態を、君たちの姫殿下は良しとしなかったのさ。もともとルールー族は、別に森から出てきて悪さをするってわけじゃない。森にさえ手を出さなければ無駄な戦いをせずに済む。でも、そういう機微（きび）は、なかなか上層部にはわかってもらえない。だからこその力業、対症療法的な措置だろうね」
とりあえず、軍を下がらせて緊張状態を緩和する。けれど、それはあくまでも一時的なことに過ぎない。
――さて、その間に、何をするつもりやら……。
ディオンは、自分がミーア姫の行動を楽しんでいることを自覚して、思わず苦笑を浮かべる。
「で、わかってるよね、君たち」
「え？」
「ミーア姫殿下の思惑、君たち次第では台無しになるってこと。ルールー族が撃ってきたなんて聞いたら、皇帝陛下も黙ってはいられないだろう？　だから、君たちは、姫殿下の言った通り、あの森のことを黙っていなければならない」
「は……、はいっ！　それは、もちろん……」
姿勢を正す近衛たちを見て、ディオンはそっとため息を吐いた。

――なんで、僕がミーア姫の弁護をしてるんだろう……？
ふと、ディオンは、ミーアのそばに控えていた文官のことを思い出した。
恐らくミーア姫は知恵が働きすぎるがゆえに、周囲に自分の考えを伝えることを怠る傾向にあるのだろう。
その分、彼女のそばにいる知恵者たちが苦労をこうむっているのだとすると、あの男も相当、苦労させられていることだろう。
苦労人に乾杯、と他人の不幸を笑っていたディオンだったが、
「ディオン隊長、少しいいだろうか？」
まさに、その本人が酒場に現れた時、ふと嫌な予感を覚えた。
もしや、その苦労の輪の中に、自分も巻き込まれつつあるのでは……？　という、いやぁな予感を……。

第八十三話　無下に扱ってはいけないもの

領都についた際、ミーアはやり切ったという心地よい疲労感をおぼえていた。

――ああ、ベッド、ベッドが恋しいですわ。

もちろん、今すぐに寝るわけにはいかないのだが。

ミーアはとりあえず、ディオン他、三名に森でのことを黙っておくように、言い含めておく。

――さすがに、ただの木に八つ当たりしたなんて、言いふらされたらたまりませんわ。

周囲の者は誰も意外には思わなかったのだが、ミーア的には、あの行動は割と恥ずかしいものだった。木につまづいて、八つ当たりした挙句に矢で射られるなんて、恥ずかしいにもほどがある、とミーアは感じたのだ。

妙なところに、羞恥のポイントがあるミーアである。

そうして、子爵邸についたミーアは、即座に、ベルマン子爵に呼び出しを受ける。

本来、皇女たるミーアは、そんなものを聞く必要もないのだが、今回はミーアの側でも彼に言っておくことがあったので、素直に応じることにしたのだ。

「姫殿下、なんということをしてくださったんですか。このようなことをされて、もし現場に混乱があったら……」

「あら、では子爵はわたくしの護衛が、ものの数人でいいと、そうおっしゃいますの？　あなたが言う危険地帯から帰ってくるのに、近衛二人の護衛で十分であると？」

「う……、い、いえ、決してそのようなことは……。ですが、そもそも勝手にあのような危険な場所に行かれては、我々としても困ってしまうと言いますか……」

「帝国の土地はあまねく、我ら帝室の土地。皇帝の娘たるわたくしが行きたいと願えば、行けない場所はなく、妨げる者もない。そうではなくって？」
実に、様になっている高慢かつ身勝手な言い分である。
それもそのはず、前の時間軸において、ミーアは大体、こんな感じの理屈で動いていたのだ。
――ああ、昔を思い出して、なんだか、すごく爽快な気分ですわ！
久しぶりの本領発揮に、ミーアの顔はつやつや輝いていた。
「ああ、それと、あの土地のことで、お父さまに相談したきことができましたので、しばし、木々の伐採や軍を動かすことを控えていただきますわ」
「馬鹿なっ！　あ、ああ、いえ、ですが、それはいささか危険に過ぎます。軍の派遣なくして、いかにしてやつらの暴虐を防げというのですか？」
「あら？　領都の守りさえ固めておけばよろしいのではなくって？
近隣の村など捨て置いても何も問題はないでしょう？」
きょとん、と首を傾げるミーア。顔に浮かぶのは、小悪魔じみた意地の悪い笑みである。
ミーアが口にしているのは、普段であれば、子爵自身が考えていることだった。と同時に、一般的に貴族が持っている価値観でもある。
それを覆してしまうと、何かしらの“特別な思惑”を持ってることが露見しかねない以上、ベルマンは黙る以外になかった。
「では、そういうことなので、よろしくお願いしますわね」
半ズボンの裾を、ちょこんと持ち上げて、慇懃無礼な礼をしてから、ミーアは子爵の部屋を出た。

そうして、もろもろの後始末を終えて、子爵邸の貴賓室についた時、ミーアは重大なことを知らされた。

「あれ？　ミーア様、髪飾りはどうしたんですか？」
着替えを手伝ってもらっていたアンヌにそう問われ、ミーアは慌てて自分の頭に手をやった。
「あら？　ホントですわ……。変ですわね」
領都に帰って以降、着替えるのはこれが初めてだ。
前線の駐屯地でもそんな機会はなかったし、髪飾りを取った記憶もない。
小さく首を傾げつつ、記憶を整理したミーアは、次の瞬間、すぅっと青くなった。
――あの時、あの弓矢で狙われた時に、落としたんですわ……。
あるいは、木につまずいた時かもしれないが、いずれにしても、あの森の中にあるのは間違いなさそうだった。
――まっ、ままま、まずい、まずいですわっ！
ミーアは、焦った。
ここで起こるはずの紛争は、おおむね止められたという実感はあった。けれど、あの髪飾りは森に由来の物である……。
紛争に関係の深いもの、と言えるだろう。
そんなものを落としてしまうのは、なんとも不吉なことだった。
ちょっとしたきっかけで紛争が起こってしまい、革命に飛び火する可能性がある。
そして、ギロチン……、首コロコロ……。
――そっ、そんなのは……、ごめんですわ！
それに、もう一つ、あの髪飾りを取り戻したい理由があった。
それは、あれをくれた子どものため。
ただのプレゼントであれば、さほど気にはしないのだが、あれが母親の形見だった、と聞かされると、さすがのミーアも落ち着かない。
せっかく大事なものをプレゼントしたのに、それを無くしたなどと聞いたら、きっとあの子は悲しむに違いない。
怒りも買いたくはないが、ガッカリされたり、悲しそうにされた

りするのは、なんだか嫌なミーアである。
――好意を無下に扱って、いいことなんか一つもございませんわ。
そうなると、ミーアがすべきことは一つである。
「取りもどしに戻らなければ、いけませんわ」
「どうかなさいましたか？　ミーア様？」
「アンヌ、すまないのだけど、ルードヴィッヒを呼んでもらえるかしら」

第八十四話　ルードヴィッヒ、スカウトする

「お呼び立てしてしまい、申し訳なかったですわね、ディオン隊長」
「いえいえ、姫殿下の御意にあらせられれば、我ら末端の兵士、どのような時であっても参上するは、当然のこと」
片膝をつき、頭を垂れるディオン。自身の部下たちの命を救ってくれた姫殿下に敬意を払い、彼にしては珍しく殊勝な態度であった。
もっとも、それでも「慇懃」というよりは、そのあとに「無礼」をつけたくなってしまうような雰囲気ではあるのだが。
「そっ、そうですの？　なんだか、あなたからそんなことを言われるのは、少し気味が悪いですけれど……、まぁ、いいですわ。実はお願いしたいことがございますの」
なぜだか、やたらと警戒した顔で見つめていたミーアであったが、気を取り直したように一度咳払いをして話し出した。
「かんざしを取り戻しに森に行きたい……ですか」
事情を聴いたディオンは、思わず首を傾げた。
――よほど高価なもの、ということか？　しかし、あまりそういう価値に固執するようにも見えないが……、それとも、だれか特別な相手からのプレゼントか？
などと推測するディオンだったが、詳しく聞いてさらに混乱を深めることになった。
「貧民街の子どもからもらったもの、ですか……」
いくらその子どもの母親の形見だといっても、そんなもののためにわざわざ森まで戻ろうというのは理解できなかった。
「わがままだということは、存じておりますわ。ですが」
「別に構いませんけどね」
「……へ？」
「姫殿下には、兵を引くきっかけを作っていただいた恩があります

からね。このぐらいのわがままなら聞きますよ」
それに、どうせ、ただのわがままじゃないんでしょう？　と心の中で付け加え、ディオンは躊躇いなく言った。
「まぁ、兵は動かせませんがね、僕一人でよろしければ、お連れしますよ」
「あ、あなたと二人きり、ですのっ！？」
ミーアは一瞬、顔を真っ青にさせたが……、
「やっや、やむを、えませんわ……」
絞り出すように言った。
その声は、なぜだか、泣き出しそうなぐらいに震えていた。

「ディオン隊長」
部屋を出たところで、呼び止める者がいた。
「ああ、ルードヴィッヒ殿か」
立っていたのは、ミーアの腹心、ルードヴィッヒだった。
「どうか、くれぐれも、ミーア様のことをお願いしたい。ミーア様は、これからの帝国に必要な方ですから」
「まぁ、最善を尽くすよ。姫殿下には恩義があるからね」
軽く言って踵（きびす）を返そうとするディオン、だったのだが……。
「もう一つ、お願いしたいことがあるのだ」
そのどこか決意のこもったような視線に、ディオンはわずかに表情を引き締める。
「なにかな？　ルードヴィッヒ殿」
「今回のことが無事に片付いたら、あなたにも姫様の協力者になっていただきたいのだ」
「協力者？　それはまた思い切ったことを言うね。僕はあまり、姫殿下に好かれてないと思ってたんだけど……」
腹心の部下が来た以上、そんなことはないのだろう。
「でも、協力って言ったってねぇ。近衛兵団にでも入って、姫殿下

を守り奉ればいいのかな？　まぁ、それも楽しそうだけど」
「あなたの剣の腕を持ってすれば、誰よりも頼りになる守り手となれるだろうな。それは確かに魅力的な提案ではあるが、そうではない」
小さく首を振った後、ルードヴィッヒは思わぬことを言った。
「あなたには、将軍になっていただきたい」
「は？　僕が？　しょ、将軍？」
さすがのディオンも、ぽかん、と口を開けて固まる。
「私は、金月省や内政を司る省には働きかけることができる。知人もいる。しかし、軍部、つまり黒月省には残念ながらツテがない。ミーア様のやりたいことのためには、私のような文官だけではだめなのだ。軍部にも協力者が必要になる。それも実力があり、姫殿下の胸の内をわかっている人物が……」
「そのために、僕に軍で出世して、その上で協力しろと？」
それは、ある意味で、近衛になって命をかけて守れ、という以上に困難なことだった。出世にまるで関心がないディオンにとっては、面倒この上ない話でもある。
だから、
「そうだねぇ。それも楽しそうかもしれないな」
そう答えてしまった自分が、ディオンには意外だった。
だが、少なくともミーアの指示のもとで剣を振るっていれば、どこぞのわけのわからない貴族の命令で死地に送りこまれるよりは、良い死に場所を得ることができるように、彼には思えたのだ。
「まぁ、なんにせよ、今なにを言っても無意味だね。森から無事に生きて帰ってこれる保証もないし、上手くことをおさめる保証も……、って、なにを笑っているのかな？」
「いや、なに。大したことではないさ」
「姫殿下なら、確実に上手くやるだろうから、心配するだけ損とか、もしかして、そういうこと思ってる？」
「それもあるが。なにより、そう思っているのはほかならぬディオ

ン殿のように見えたのでね」
指摘され、ディオンは少しだけ驚いた。
なるほど、確かに自分は不安を感じていない。それは、自らの剣の腕を信じるが故だとばかり思っていたが。
――姫殿下に任せておけば、そう悪いことにはならないと、僕自身も思ってるのか？
それは、なんだか、業腹だなぁ、などと思うディオンだった。

この日の夜の密談は、後世の歴史書に載る出来事となる。
後に、ミーア四天王と呼ばれる名宰相ルードヴィッヒと、同じく四天王の一角を担うことになる大将軍ディオン・アライア。
盟友にして親友、生涯をミーアに捧げることになる男たちの、それが初めての出会いだった。

第八十四話　ルードヴィッヒ、スカウトする（後書き）

ちなみに、ミーア四天王の中にアンヌさんも入るのだと思います。
もう一人は未定……。
そして言うまでもなく最弱なのは四天王の誰かではなく、それを率いるミーア自身であるという……。
そんなお話でした。

第八十五話　ミーア姫、勘づく！

静海（セイレント）の森、ルールー族の隠れ里。

二百人近い者たちが住まう集落は、前の時間軸において悲劇の地として知られている。

姫殿下のわがままによって壊滅した里……そのようにあだ名されるその場所では、凄惨な虐殺が行われることになる。

ルールー族の屈強な弓兵の前に大きな犠牲を出した帝国軍は、事態の鎮静を図るため、森を焼き払い、ルールー族を皆殺しにするのだ。

各地に出稼ぎに出ていた部族の生き残りたちは、帝室に対する怒りを胸に革命軍に身を投じ、熟練の弓兵（スナイパー）として、多くの帝国将兵を血祭りにあげることになる。

凄惨な虐殺を温床とし、数多の復讐者を生み出した血なまぐさい土地。

されど、少なくとも現時点においては一定の静けさを保っていた。

それが永遠のものではなく、戦の前の張り詰めた空気、いわゆる嵐の前の静けさであると、知っていた部族の戦士たちは、みな一様に緊張の面持ちをしていたのだが。

「帝国兵が、引いたじゃと……？」

前線に詰めていた見張りからの報告に、族長がうめくような声をもらした。

「それは、我らを誘い出すための罠ではないのか？」

戦士の一人が疑問を呈するが……。

「十分に考えられますが……。しかし、陣はもぬけの殻、食料などもそのままになっており、いささか奇妙に思います」

そう報告した見張りの顔には困惑があった。

彼とて、昨日今日、成人を迎えた若造ではない。戦が始まるか始

まらないか、部族の未来を決める大切な時に、見張りを任せられる男なのだ。
単純な罠を見逃すようなことはしない。
「いずれにせよ、様子見、じゃな」
腕組みをした族長は、蓄えた髭をショリショリと撫でてから、重々しく言った。
それから、傍らに控える少女に視線を向ける。
「せっかく来てもらったのに、すまなんだな。辺土伯の話を帝国軍の部隊長にも聞いてもらいたかったのじゃが……」
「いえ、一族の危機であれば、駆けつけるのが当然のこと……」
少女は静かな表情で頷いて見せた。
「ティオーナ様にお願いして、もっと上の方に調停をお願いすることも考えていましたが……」
「そうだな……、場合によってはそれも考えねばならぬが……。果たして我らを助けようなどと言う奇特な貴族が、ルドルフォン伯以外にいるものじゃろうか？」
ルールー族は、しょせんは辺境の一部族に過ぎない。そのようなものをわざわざ助ける道理はない。そう思う族長であったが……。
「族長は悲観しすぎです。貴族様にだって、ご立派な方はいますよ。それに……」
「失礼します、族長、森に来た娘がこれを落としていったんですが……」
「なんじゃ……むっ！　その髪飾りは……」
見張りの手にしていたものを見た瞬間、族長の眉間に、深いしわが刻まれた。

――う、うう、なぜ、こんなことに……。
馬に揺られつつ、ミーアは、身を固くしていた。その目の前には、すらりと高い背中が見えていた。

夜の乗馬は危険ということで、ミーアは現在、ディオンと二人乗りしているのだ。
きちんと、掴まっているように言われてはいるのだが、下手なところに掴まろうものなら怒りを買ってしまいそうで、緊張に体を固くするミーアである。
「いったん陣に寄りますよ、姫殿下」
「陣に？　なぜですの？」
「松明を補充する必要があるからですよ。まさか、明かりもなしに、夜の森で探し物をするつもりだったんですか？」
それから、呆れたようなため息が返ってきた。
「肝心なところが抜けてますね、姫殿下」
――抜けてる？　なんのことですの？
きょとりん、とミーアは首を傾げた。
「そもそも夜に探し物をしようというところからして、ダメですよ。夜の森に行く言い分としては雑。細部の詰めが甘いですね。うちの副隊長ぐらいだったら騙せるかもしれないけど……」
そう言って、ディオンは肩越しに振り向いた。
「こっそり一人で、向こうの部族と話つけに行くっていうんでしょう？」
「……は？」
「あれ？　違うんですか？　ゆっくり酒飲んでるところを連れ出されたからには、そのぐらいは期待してもいいものと思ってたんですけどね」
不意に、ディオンの背中から、圧力のようなものが立ち上ったような気がした。
背筋に冷たい何かが走るのを感じつつ、ミーアは慌てて口を開く。
「そっ、そそ、そうですわ。もちろんですわ。ディオンさんに協力していただくんですから」
「だと思った。やっぱり、姫殿下は面白いな！」
あはは、っと愉快そうに笑い声をあげるディオン。と同時に、圧

力は霧散する。
「まぁ、どうするつもりなのか知らないけど、お供しますよ。場合によっては地獄までね」
振り返るディオンの顔を見て、ミーアは、遅まきながら気が付いた。
――あら？　これって、もしかして、ちょっとヤバイ状況なんじゃ……？
そうして、思い出す。
前の時間軸で自分が、目の前の男に殺されたのだということを。
――なっ、わたくし、いったい何を？
油断があったとしか、言いようがなかった。
兵を引いただけで、すべてが片付いたと……、髪飾りを探しに行くのなど、あくまで念のためだと……。
その思い込みが、ミーアの危機察知能力を鈍らせたのだ。
――これは、あれですわ。前菜がおいしいからって、食べ過ぎて、お腹いっぱいになってしまって、本当においしいデザートを食べそこなうという……、って、上手いこと言ってる場合じゃないですわ！
そもそも、あんまり上手くもないわけだが……。
そんなわけのわからないことをつぶやいてしまうほど、ミーアは混乱していた。

第八十六話　涙目ミーアは孤立無援

「さすがに暗い……ですわね」
静海の森は濃密な夜の闇に包まれていた。
ミーアの前を行くディオンの手には、煌々と明かりを放つ松明が握られてはいるものの、その程度の明かりでは、せいぜい自分たちの周りの闇を払しょくする程度。
昼間に来た時とはまるで違う異界のような森に、ミーアが気を取られていると……。
「姫殿下」
「ひぃっ！」
突然、呼びかけられ、ミーアは小さく飛び上がった。
「なっ、なっ、なっ、なんですの？」
「いえ、昼間、襲われた場所についたので、お呼びしただけですよ」
ディオンはニコニコ微笑みながら、そんなことを言った。
「あ、そ、そうですの……。わかりましたわ」
ミーアはあたりを見回して、首を傾げた。
「ここ、本当に昼間の場所ですの？」
「間違いありませんよ。ほら、そこの木に矢の跡がついてますし」
そう言われれば、確かに、という感じではあるのだが……。
――全然、わかりませんわ。というか、ここで探し物とか、無理ではないかしら……？
今さらながらにそう気づいたミーアであったが、すでに手遅れだった。
ディオンに今から帰りたいと言ったところで、呆れられるだけだろう。
いや、呆れられるだけならまだしも、逆鱗に触れるようなことになったら大変である。なにしろ相手は、自分を殺した相手だ。怒り

をできる限り買わないようにしなければ……。
なんとかして髪飾りを探そうと、地面に目を凝らすミーアであったが……。
「姫殿下、どうやら、狙い通りに事が運びそうですよ」
「……へっ？」
ディオンに言われて、ミーアは間の抜けた声を上げた。
「おい、見てないで、出てきたらどうだい？」
松明を茂みの方に向けながら、ディオンが言う。と……、突如、ガサガサと茂みが揺れて、そこから武骨な男たちが現れた。
細く引き締まった体を獣の体に包み込んだ者たち。
――あれがルールー族。もしかすると、リオラさんの血縁の方もいらっしゃるかもしれませんわね。
そんな風にミーアがぼんやり観察している間にも、話は進んでいく。
「いきなり撃ってこないところを見ると、戦いに来たってわけじゃないんだろう？」
「サスガ帝国ノ戦士タチノ長デアルナ。悪クナイ洞察デアル」
戦士たちをかきわけるようにして、前に歩み出た男。見事な白髭の初老の男は、ギロリ、とディオンを睨(にら)み、次いでミーアを睨んだ。
「娘、オマエハ、昼間、ココニ来タ者ダナ？」
いきなり話を振られて瞳をパチクリさせるミーアだったが、とりあえず嘘を吐いても仕方ない、と頷く。
「そうですわ。わたくしは……」
「娘、コレ、ドコデ手ニ入レタ？」
男は、低い声で言った。その手には、ミーアの髪飾り「一角馬の髪飾り」が握られていた。
「あら、それは……」
「ドコデ手ニ入レタ、聞イテル。答エ次第デハ……」
「あー、そこまでにしてもらおうかな」
とそこで、ディオンが一歩前に出る。

「あまり、無礼なことをされると困るな。こちらにおわすのは、この帝国の姫君で、僕が守らないといけない方なんだ。一応ね」
剣の柄に手をかけ、声を低くする。
「場合によっては、こちらが容赦しない」
「貴様……！」
バチバチと、火花が散りそうなほどに高まる緊張、一触即発の空気の中、ミーアは……、
――ああ、これは……！
うっとりと感動に身を震わせていた。
――快感ですわ……、たまりませんわ！
それはもう、感涙を目に浮かべてしまうほどに、今の状況にうっとりしていた。
なにしろ、ディオンは自分を殺した男である。直接的な仇で、一番の敵対者と言っても過言ではない。
そのような人物が、身を挺して自らをかばおうとしている……、実に、実に……、痛快極まりない状況だった。
――ああ、これはあれですわ。ルードヴィッヒを感心させた時と同じ感覚。ああ、気分爽快ですわ！
思わず高笑いでも始めそうになったところで、
「ところで、姫殿下……、これ、当然、収拾を付ける算段はできてるんでしょうね？」
「……へ？」
頭から冷や水をぶっかけられる。
「えーっと……」
「もし、これも計算の内ならば、僕があいつらを斬っていいのか、ダメなのか、交戦か撤退か、指示をいただけると嬉しいんですがね」
にっこにこと、実にいい笑顔を浮かべて、ディオンが言った。
その笑顔に含まれた「なにも考えてなかったら許さない」というニュアンスを敏感に感じ取ったミーアは、さぁ、っと顔を青くした。
――ああ、そうでしたわ。気持ちよくなってる場合じゃないんで

したわ！　なんとかしないと……。
とは思うものの、だ。そもそもがノープランである。
その上、なぜだか、いたくお怒りの様子のルールー族の男が目の前にいる。この状況を、血を見ずに解決するのは難しそうだった。
さらに、よくよく考えるとディオンも手放しの味方というわけでもない。別に友だちでもないし、忠誠を誓う部下でもない。
あくまでも条件付きだし、どちらかと言うと敵っぽい雰囲気すらある。
――あら、つまり、わたくしの味方っていないんじゃ？
孤立無援の状況、いつでも自分を助けてくれる腹心、アンヌもルードヴィッヒもいない苦境に、ミーアはすっかり涙目だ。
――ともかく、なにか……、なにか考えなければ……。
焦るミーアに、意外な方向から助けが入った。
「待ってほしい、です！」
「あら……、あなたは……リオラさん！？」
突然の、顔見知りの登場にミーアは驚きの声を上げた。

第八十六話　涙目ミーアは孤立無援（後書き）

孤立無援のミーアの目の前に現れた人物……。それは！！！

第八十七話　ミーア姫は揺らがない

「姫殿下……、ご機嫌うるわしゅう、です」
頭を下げるリオラに、はて、とミーアは首を傾げた。
「なぜ、あなたがこのようなところに……。いえ、それより、そちらの方は、先ほどから何を怒ってらっしゃいますの？」
「はい、です。実は、あの人はルールー族の族長さま、です。それで……」
「コノ、カンザシ、我ガ、妻ニ、送リシ物ダ。ソシテ、妻ガ死ンダ後、娘ガ継イダ」
「娘さん……、ですの」
ミーアは、小さく首を傾げるが、すぐに合点がいったと頷いた。
「なるほど……。大変言いにくいことなのですが、あなたの娘さんは残念ながら亡くなっておりますわ」
「死ンダ……？」
呆然とした顔で、つぶやく族長。ミーアはできるだけ相手を刺激しないように、ゆっくりとした口調で続けた。
「それは、たぶんあなたのお孫さんから、わたくしがいただいたものですの」
「詳シク、聞カセテ、モライタイ」

一通りミーアの話が終わったところで、静寂が訪れた。
話の真偽を窺うように、各々の顔を見比べる、そんな沈黙がしばらくの間続いた。
「族長さま、姫殿下は嘘を言われる方ではない、です。それに、私の知る姫殿下のお人柄と、今の話は合致する、です」
口火を切ったのは、リオラだった。

続いて、ディオンが、加勢するように言った。
「どうでもいいことだけど、僕たちの軍が引いたのも、そこの姫殿下のお計らいだから」
「ナンダト？　嘘、言ウナ。ソノ娘、我ラノ木、蹴ッタダケ」
口を挟んできたルールー族の戦士を一睨みしてから、
「軍隊ってのは、引くのにも相応の理由が必要でね。下っ端の雑兵ならともかく、族長殿にはわかってもらえると思うけど」
ディオンは、試すような視線を族長に向ける。
族長は厳しい顔で、ディオンの方を見て、それから重々しい口調で言った。
「確カニ。ダガ、全テ信ジロト言ウモ、難シイ、モ、ワカルハズ」
「確かにそうですわね。それなら、あの子に来ていただいたらよろしいですわ。あのまま貧民街にいるのも、あの子のためになるとは思いませんし。それはすぐに手配いたしますわ。それで判断するといいですわ」
そう言うと、ミーアは踵を返そうとした。
このまま帰る流れに乗っていけば上手くいくんじゃないかしら？
と思ったミーアであったが……。
「姫殿下、まさか、それで終わりじゃないよね？」
「……へ？」
「いやだなぁ。この森の紛争、全部解決するつもりなんでしょう？」
ミーアはさっと頬を青くした。笑みを浮かべるディオンの瞳に、剣呑な光を見取ったからだ。
「もっ、もちろんですわ。ルドルフォン伯爵家のリオラさんまで来てるのは好都合。きっちりお話聞かせていただきますわ！」
半ばやけくそ気味に、ミーアは言うのだった。

事情の聞き取りも終わり、帰ろうとしたところで族長が一人でやってきた。

「姫殿下、先ホドハ、失礼シタ」
「あら、信じないのではなかったのかしら？」
殊勝な口調で謝罪する族長に、ミーアは眉をひそめた。
「部族ノ者タチノ手前、ソウ言ッタ」
族長は大まじめな顔でそう言うと、
「敵地ニ部下一人ノミ連レテ来タ、勇敢ナル者、嘘ツク、アリエナイ」
大きく頭を下げた。
「孫ガ世話ニナッタ。先ホドノ無礼、謝罪スル」
ルールー族は誇りを重んじる部族である。
自分たちに無礼を働く者であれば、相手が貴族であっても牙をむく。
けれど、ミーアは恩人だ。しかも、この大帝国の姫である。
その気になれば、自分たちなど踏みつぶしてしまえるだけの権力を持った相手が、礼を尽くしているのだから、こちらが礼を尽くさない理由はない。
そうしなければ、相手の誇りを傷つけることになる。
そう判断した族長であったのだが……、
「不要ですわ。わたくしも、あなたたちの大切な資産であるこの森の木を蹴ってしまいましたし、それでおあいこ、ということでどうかしら？」
ミーアはそう言って笑う。
まるで、そのような誇りなど意味がないことであると言うかのように。
「それより、お孫さんにきちんと優しくしてあげるんですわよ」
その一言で、族長はミーアの言わんとしていることがわかった。
かつて、自分は、族長としての意地と誇りに縛られて娘と対立した。その結果、取り返しのつかないことになってしまった。
孫に対しては同じ過ちを犯さぬように、と、目の前の幼き姫君は諭しているのだ、と、族長はそう理解したのだ。

「姫殿下ノオ心ヅカイ、痛ミ入ル」
絞りだすような族長の声は、微かに震えていた。
まだ幼い少女の示した溢れるほどの思いやりに、心を打たれたのだ。

……が、もちろん、ミーアは別に溢れる思いやりから、そのようなことを言ったのではない。
――あの子がルールー族の族長の孫だとすると、孤児院にいられると大変ですわ。
多少、改善されたとはいえ、貧民街。なにがあるかわかったものではない。
そして、何かあれば、ルールー族の者たちは各地で蜂起するだろう。
危険の芽は今のうちに摘んでおくに越したことはないだろう。
――あの子には、この森に戻っていただくのがベスト。そのためには、族長には優しく受け入れてもらって、孤児院に帰りたいなんて思わせないようにしなければ……。

揺らがない自分ファースト。
ミーアの言葉が溢れる打算に裏打ちされた発言だということに気付いたものは、その場に一人もいなかった。

第八十八話　ミーアのおねだり

朝方に、森から領都へと戻ったミーアの行動は迅速を極めた。
事情を問おうとするベルマン子爵を放置して、随伴の者たちを率いて帝都へと出発する。寝る間さえ惜しんで、睡眠など馬車の中でとればよい、と言わんばかりに。
「機を見るに敏、兵だけでなく、智者も拙速を貴ぶ……か。さすがミーア姫だねぇ」
その行動を、ディオンはため息まじりに見守った。
状況を整え、必要な手を打った以上、自身の居場所はここではない。戦うべき場所は別にある。
恐らく、そういうことなのだろうと、ディオンは思った。
「すべて計算の内、ということか。なーんか、その割にはビクビクしてるけど、あれも演技なんだろうねぇ」
かつて助けた子どもの祖父が、もめている部族の族長だったなどという偶然があるはずがない。
子どもを助けた時からわかっていたとはさすがに思わないが、森に来る前にはすでに情報を握っていたに違いない。
「帝国の叡智か……」
ふと、彼の脳裏をルードヴィッヒの言葉が過ぎる。
「出世とか、ほんと、やめてほしいんだけど……。あのお姫さんのためなら、ちょっと頑張ってみてもいいかもねぇ」
などと……、なんとなくやる気になっている彼には非常に申し訳ない話ではあるが、もちろんミーアは機を見るに敏、というわけではない。
単純に、危険地帯から……、もっと言えばディオンのそばから、とっとと逃げ出したいと思っているだけである。
――こっ、こんな危険地帯とっとと離れないと、命がいくつあっ

ても足りませんわ！

さて、帝都に戻ったミーアは、すぐに新月地区に使いをやった。孤児院の、例の子どもを静海の森に送り届けるためだ。

もめ事が起きないように、きちんと護衛の手配も怠りがない。

そんなことをしていると、ミーアの父、皇帝から呼び出しがかかった。

「お父様、いったいなにかしら？　しかも、謁見の間に呼び出しなんて……」

基本的に、ティアムーン帝国において、皇帝一族の距離は近い。国によっては、統治者たる皇帝や王は神聖不可侵な存在として、血のつながった家族であっても自由に会うことはできない、などということもあるが、帝国においてはそんなことはない。

むしろ、ミーアとしては暇さえあれば会いに来る父親が、若干ウザイ時もあるほどである。

そんな事情もあって、公式な場所である謁見の間への呼び出しには、いささか不可解なものを感じはしたのだが……。

その場に集められた顔ぶれを見て、すぐに納得した。

そこにいたのは自らの父である皇帝と、腹心であるルードヴィッヒ、そして……。渦中の人であるベルマン子爵だった。

「おお、愛しき我が娘、ミーアよ！」

「陛下、ご機嫌麗しゅう。お呼び出しに応じ、参上いたしましたわ」

スカートの裾を持ち上げ、頭を下げるミーアに、皇帝の叱責が飛ぶ！

「陛下などと申すでない。寂しくなるではないかっ！　気軽にお父様か、もしくはもっと砕けた感じでパパなどと……」

「お話を続けてください、お父様」

娘にすげなく扱われ、しょんぼり肩を落とす皇帝。

……困った人である。

「まぁ、お父様でも構わんか……。それより、ミーア、今日呼んだのは他でもない。過日、ベルマン子爵領へ行った件で話を聞きたいと思ったのだ」
――やっぱり、その件ですのね。
ミーアは、ベルマンの方を見た。彼は、微妙に青い顔をして固まっていた。
貴族とは言え、辺境地域にほど近い所領の、田舎貴族（本人は認めないだろうが）である。
国の頂点に立つ皇帝と謁見がかなうことなど、年に一度あるかないかといったところ。
緊張するなという方が難しいのは、容易に想像ができた。
――ならば、彼が圧倒されているうちに、話をつけてしまうのがよろしいかしら？
などと、腹の中で計算を立てていると……。
「聞けば、子爵領の紛争地帯に行ったとか。聞いた時は驚愕のあまり気を失いそうになったぞ」
「あら、危険など、なにもございませんでしたわ」
ミーアはシレっとした顔で言った。なにせ下手なことを言えば、森ごと滅ぼしつくしてやる！　と言い出しかねない父である。
はっきりと言っておく方がよいだろう。
「そうは言うがな、周辺の警備にあたっていた兵をすべて引き連れて戻ってきたというではないか。これはよほどのことがあったと思うのが、当然のことではないか？」
――あらあら、余計なことをチクリやがったのはどなたかしら？
涼しい顔で、ベルマンの方を見てから、ミーアは首を振る。
「お恥ずかしい話ですわ。木に足をとられて、すっかり動転してしまいましたの。ただ、それだけの話ですわ」
「なにっ！？　ミーアを転ばせるとは、けしからん木だ！　森ごと焼き尽くして……」
「いえ、お父様。その木は切り倒して、わたくしのかんざしにする

よう、手配いたしますから、大丈夫ですわ」
ミーアはにっこりと笑みを浮かべて、それから、ベルマンの方を窺いながら言った。
「それより、お父様、わたくし、あの森のこと、とても気に入ってしまいましたの。ぜひ、あの森をわたくしの、皇女直轄領に加えていただきたいですわ」
まるで、可愛いぬいぐるみをねだるような口調で、ミーアは言うのだった。

第八十九話　ルードヴィッヒの末期的妄想

「なに？　そんなによいところなのか？」
ミーアの話を聞いて、皇帝はわずかに前のめりになった。
「ええ、美しい森で、静養には良いところと思いましたわ」
「なるほど。そういうことであれば……」
そのやり取りを端で見ていたルードヴィッヒは、
――なんということだ。
微かな失望を感じていた。
確かに皇女直轄領にしてしまえば、静海の森は救われる。ルール族との対立は解消されるだろう。
けれど、代わりにベルマン子爵からは恨みを買う。
ベルマン子爵はルードヴィッヒの見立てでは、あまり有益な人物ではない。どちらかというと、お付き合いを避けるべき短絡的な人間のように見える。
しかしながら、彼は貴族だ。
あの地の統治を任された者なのだ。
ミーアのやろうとしている（と彼が信じている）改革のためには、どうしても、多くの人々の協力が必要となる。できる限り不必要な恨みを買わない方が良いに決まっている。
あるいは、ルール族の件は恨みを買ってでもなすべきこと、とミーアが判断したのかもしれないが。
それは、正義ではあるし、皇女として賞賛されるべき態度ではあるのだろうが……。
――それでも、ミーア様ならば上手く治めてしまうのではないかと思っていた。俺はあの方のことを、買いかぶっていたのか？
そう、ルードヴィッヒは、もはやその程度では満足がいかない体になってしまっていたのだ。

妄想の末期症状とも言える状態である。ちょっぴりアブナイ……。
けれどその失望により、ついに彼の目からはミーアに対する信仰という名の曇りが取り除かれようとしていた。
そう、ミーアは別に叡智でもなく、聖女でもなく。
どちらかというと、ちょっぴり残念な皇女殿下であると……、彼がその真実に到達しそうになった、まさにその時！
「ならば、ベルマンよ、その森のそばに皇女の町（プリンセス・タウン）を作れ。ミーアのための城を建てるのだ」
皇帝の言葉に、ルードヴィッヒは頭を抱えそうになった。
――火に油だ。余計なことを……！
自分の領地を減らされたばかりか、そこに町を建て、挙句に城まで建てよ、とは。
――確かにベルマン子爵に命じれば帝国のお金を浪費せずに済むが、その分、余計な恨みを買ってしまう。
そうため息を吐きかけた彼は、ベルマンの顔に浮かぶ表情に気付いた。
「お、おお……陛下、そ、それは……」
まるで感動に打ち震えるかのごときその様子に、ルードヴィッヒは混乱した。
――なっ、なんだ、いったい何が……？
必死に考えた結果、彼は、あることに気づき……戦慄を覚えた。
――そういうこと、なのか……？　いや、だが、まさか……。
相手が商人であった場合、ミーアの選択は恨みを買うものだった。それはそうだろう、自らの資産を、皇帝の権力を持って接収するのだ。
命令に逆らうようなことはなくとも、歓迎されるはずもない。
けれど……、ああ、けれど、違うのだ。
ベルマン子爵は貴族なのだ。そして、貴族は常に名誉を何より重んじる生き物なのだ。
ミーアはそんな相手の特性を完璧に把握したうえで与えたのだ。

この上もない「名誉」を。
そもそもベルマン子爵が、今回のような暴挙に出たのはなにゆえか？
それはルドルフォン辺土伯への対抗意識を刺激されたためだ。
そんな彼の心の渇望に気付いたミーアは、自領に皇女の特別領を抱えるという名誉を、皇女のための町を用意するという栄誉を、与えたのだ。
それは、貴族にとってこの上ない誉れと言える。
なにしろ、あの森がミーアの領地となるのであれば、当然、一緒に皇帝も足を運ぶ機会も増えるからだ。
その栄誉は、貴族にとって何物にも代えがたいものだ。
――ミーアさまは、一切自腹を切ることなく、森を保護する条件を整えたというのか？
さらに、森のそばに皇女の町（プリンセス・タウン）を作ることで、迷惑を被ったルールー族にも、繁栄の道を用意した。
あとは彼ら次第ではあるが、近くに町があることで、物流も盛んになる。
それも、ベルマン子爵の恨みを買わないどころか感謝すら得られる方法で、だ。
――俺であれば、謀略によってベルマン子爵を失脚させる。ディオン隊長ならば、やはり実力を持って子爵を排除するだろう。
けれど、それは次善の策だ。
貴族、すなわち領主というのは社会を回すための歯車の一つだ。もしも、不具合が生じたからと言って、排除してしまえば必ず混乱が起こる。
そうしないためには次の領主をできるだけ早く決めて、引継ぎをしてやらなければならないが……、それでも混乱は免れない。
領民の心は乱れ、領地は荒れるだろう。そうしないためには、どうするか？
簡単だ。領主を上手く動くようにしてやればいい。

ミーアはいとも簡単に、それをなした。
――たぶん、これで終わりじゃないだろう。ルドルフォン辺土伯の方にも、きちんと配慮するはずだ。
ルードヴィッヒの末期症状的な予想は、何の因果か、次の週に当たることになった。
帝都に帰ったミーアのもとに、ルドルフォン辺土伯の娘、ティオーナから手紙が届いたのだ。

第九十話　ミーア、怒られる！

ベルマン子爵領の一件から戻ってしばらく、ミーアはダラダラしていた。

学校がないのと、せっかく休みで帰ってきているのだからのんびり過ごしなさい、という皇帝の配慮によって、公務から解放されたミーアは、まさに休みを満喫していた。

ベッドの上でグデーっと手足を投げ出して、グータラ日々を過ごす。しかも、ドレスも着ずに肌着のみというあられもない姿である。

自室だからと言って、完全にだらけている……、だらけ切っている！

そこに帝国の叡智と呼ばれる凛々しさは、どこにも見当たらなかった。

「……そう言えば、最近、アベル王子からお手紙ありませんわね」

はぁ、と切なげなため息を吐く。

実は、それもミーアがいまいちやる気が出ない理由の一つだった。ほぼ十日置きにやり取りがあったアベル王子からの手紙が、届いていないのだ。

ちなみに、ティアムーン帝国とレムノ王国とは大体、早馬を飛ばして五日はかかる距離なので、これはかなり頻繁な文通と言えた。

時にアンヌの妹であるエリスにも知恵を借りつつ、前の時間軸では一生かけても書けないぐらいの手紙を、すでにミーアは書いていた。

と言っても、三通ぐらいだが……。

前世のミーアの筆不精がしのばれる話ではある。

それはともかく、そんなアベルではあったのだが、すでにミーアが手紙を出してから十五日が経とうとしていた。

夏休みも終わりに近づき、またすぐに学校で会えるとは言え、少

しだけ寂しいミーアである。
だからと言って、ベッドで寝て過ごしていいというものでもないが……。
「ミーアさま、お手紙が……」
そんなミーアだったから、アンヌが部屋に入ってきた時、文字通り飛び上がって喜んだ。
「まぁ、やっとですの。どうしたのかと心配しておりましたが……、てっきり、街道で山崩れでもあって、通れなくなっているのではないかと思いましたが、このぐらいの遅れでしたら、許してあげますわ」
「あ、あの、ミーアさま、それが……実はアベル王子からのお手紙ではありません」
「……へ？」
にっこにこのミーアに、アンヌはちょっとだけ申し訳ない気持ちになりながら、
「実は、ルドルフォン辺土伯令嬢からのお手紙なんですけど……」
ベッドの上で前のめりになっていたミーアは、すすす、っと音もなく後退するとベッドの上に仰向けに倒れ込んだ。
「あー、ティオーナさん、ですのね」
はふぅっとテンションだだ下がりなため息を零し、
「開けて、読んでちょうだい」
グデーっとやる気のない調子で言った。
言うまでもなく、ティオーナ・ルドルフォンは前時間軸の仇だ。積極的に復讐しようとも思わないが、さりとて楽しく文通する相手でもない。
これがクロエあたりであれば、お友達との文通ということで、少しは楽しい気持ちにもなるのだが……。
――ですが、ルドルフォン辺土伯の貯蔵する小麦は魅力的。
それゆえ、無下にも扱えない。
仕方なく、渋々ながらもミーアは手紙を読んでやろうという気に

なっていた……のだけれど、
「ミーアさま！」
思いのほか鋭いアンヌの声で、ミーアは少しだけ驚いた。
「なっ、なんですの？　アンヌ、そんな怖い顔して……」
「アベル王子からのお手紙がなくて寂しいのはわかります。けれど、こんな姿を見たら、アベル王子が、どうお思いになるか」
「そんな固いこと言わなくても、部屋の中ですし……」
ぐずぐずと言い訳するミーアに、アンヌはきっぱりと言う。
「誰が見ているかわかったものではありません。ミーアさま、使用人たちの口は、とても軽いのでございます」
それでミーアは思い出す。前の時間軸でのこと……。
皇女付きの使用人たちが、こぞってあることないこと訴えたこと。
自分の失敗は瞬く間に使用人たちの間に知れ渡っていたし、確かに彼らの口はとても軽かった。
そんな彼らが、もし仮にアベル王子の使者に自身の醜態をチクったりしたら……。
想像して、ミーアは一瞬にして青くなった。
「あっ、アンヌ……、アンヌぅ……」
早くも泣きべそなミーアに、アンヌは頼もしく頷いた。
「大丈夫です、ミーアさま。ミーアさまのお世話はすべて私がやるようにしておりますし、この部屋の中のことも、知っているのは私だけですから。でも、ミーアさま、いつどこで誰が見ているのかわからないのですから……」
「わかりましたわ、シャンといたしますわ」
いつどこでアベル王子に見られても、恥ずかしくないように！
ミーアは心を入れ替えた。
……とても単純である。
そんな素直な主が、アンヌには少しだけ誇らしかった。
「出過ぎたことを言ってしまい、申し訳ありません」
「いえ、むしろあなたにはいつも助けられてばかりですわ、アンヌ」

本来であれば、このような差し出口は、処罰されてもおかしくはない。けれど、どれだけ気が抜けていても、やはりミーアはミーア、尊敬する自らの主君なのだと、アンヌは嬉しくなった。

改めて、ドレスを身にまとったミーアは、ティオーナからの手紙に目を通した。

「ふむ、ティオーナさんの、弟君、ですの……」

その文面を見て、ミーアの脳裏によみがえる記憶があった。

第九十一話　ズルい弟……

ティオーナ・ルドルフォン。

革命軍の聖女と言われた彼女が、その名声を得た一番の要因は、民に食料を分け与えたことにあった。激しい飢饉に苦しんでいた民衆は搾取するだけの帝室を見限り、ティオーナが率いる革命軍を支持した。

そんな様子を、ミーアは苦々しく見つめていた。

「どういうことですの！？　ルードヴィッヒ、どうして、あの女は、あんなにも食べ物を持っておりますの？」

ミーアには不思議でならなかった。

いかにルドルフォン辺土伯が広い土地を持ち、領地に数多の農民を抱えているとはいえ、帝国全土を襲った飢饉から影響を受けないはずがない。

小麦をため込んでいたにしても、多くの民に分け与えるほどになるとも思えなかった。

そんなミーアの疑問に、今や唯一となってしまった従者は呆れの混じった顔で言った。

「帝室の一員なのに、不勉強ですね、姫殿下。新型の小麦が開発されたこと、ご存じないんですか？」

「新型の小麦、ですの？」

「そうです。ティオーナ嬢の弟、セロ・ルドルフォンが開発した、寒さに強い麦です。天候不順の時にでも、ほとんど通常と変わらない出荷量を得られるらしいですよ」

「聞いてませんわ、そんなのっ！」

「……まぁ、セロ殿は、ラフィーナ公爵令嬢の庇護のもと、ヴェールガ公国の研究機関にいましたから、ご存じなくても仕方ないかもしれませんがね。やれやれ、しかし、ラフィーナ公爵令嬢も先見の

明がありますね。どっかの誰かとは大違いだ」
「ぐ、ぐぬぬ……。ズルいですわ、シオン王子のみならず、弟まで優秀なんて、ズルすぎですわ！　わたくしも欲しいですわ、優秀な弟が！」
ギリギリ、と歯ぎしりしつつ、天を恨むミーアであった。

そんな記憶が……、ミーアの脳裏によみがえってきた。
「天才児、セロ・ルドルフォン……ズルい弟……」
「ミーアさま？　どうかされましたか？」
手紙から顔を上げたミーアは、
「すぐに返事を書きますわ。アンヌ、準備をお願いできるかしら？」
キリリとした顔で、そう言った。
その帝国の叡智に相応しい鋭い顔に、アンヌは嬉しげに頷いた。
「ああ、それとルードヴィッヒに連絡を。少しお金が必要になりそうですわ」
「はい、かしこまりました」
ミーアの指示を受け、アンヌはすぐに動き出した。ルードヴィッヒに知らせを走らせてから羊皮紙と墨と羽ペンを用意する。
そうして部屋に戻ると、ミーアがベッドに腰かけてニマニマしているのが見えた。
「なんだか、ご機嫌ですね、ミーアさま。お手紙に何か良いことでも書かれていたのですか？」
「んー、そうですわね……」
ミーアは足をパタパタ、楽しそうに動かしながら言った。
「ティオーナさんの弟、セロ君という子のことなんですけど……とても優秀らしいのですが、どうやら、財政難で学校にいけないらしいんですの」
「まぁ……」
ミーアの話を聞いて、アンヌは小さく首を傾げた。

――とてもお可哀想な話なのに、ミーアさま、すごく嬉しそうね。
話を続けるミーアは、今にも鼻歌でも歌い出しそうなほど上機嫌だ。他人の不幸を喜ぶようなミーアではないと信じているアンヌは、そこから推理を働かせた。
――もしかして、ミーアさま、お友達のお役に立てるのが嬉しいのかしら？
慈悲深いミーアは、誰かのためになることを喜びとする聖女の中の聖女だ。
きっとティオーナさまのために、なにかしてあげるんだろうな！
などと思っていたアンヌはすぐに自分の推理が当たったことを知る。
「それで、わたくしにラフィーナ公爵令嬢への執り成しをお願いしてきたんですの」
「ラフィーナさま……、ということは、ヴェールガ公国に留学できるよう、ミーアさまのお力添えをお願いするお手紙だったんですね」
ミーアは、ラフィーナとも親しい友人だ。それに、ヴェールガ公国は最先端の知識の集まる場所でもある。留学し、知識を得るには良い場所だ。
きっと、ラフィーナに手紙を書くのだろうな、と予想するアンヌだったのだが……。
「もちろん、そんなことさせませんわ」
次のミーアの一言で驚いてしまう。
「どうして、ですか？　ミーアさま」
「この帝国で勉学に励んでいただくためですわ。わたくしがきちんと責任を持って、手配をいたしますわ」
ミーアは、鼻息荒く言った。
なるほど、それも一つの手ではあるとは思う。帝国だとて公国には負けていない。勉学の水準もかなり高いと聞いている。
けれど、アンヌは疑問だった。
どうして、素直にヴェールガ公国に行かせないのか、と。

ティオーナの弟のセロという子どもが優秀なのであれば、ヴェールガのような知識の集まる国に行き、育てた方が良いのではないか？　と。

ミーアは、自分の手でティオーナを助けてあげたいあまりに、判断を誤っているのではないか、と。

そんなアンヌの疑問だが……、ルードヴィッヒに会って、すぐに氷解してしまう。

アンヌは、改めてミーアの配慮の深さに感嘆することになるのだが……。

妄想と妄想の掛け算がどのような答えを生み出すのか……、今はまだ、誰も知らない。

第九十二話　妄想、はかどる！（ルードヴィッヒの）

「わかりました。それでは、姫殿下のご意向に沿えるよう取り計らいましょう」
「よろしく頼みましたわよ、ルードヴィッヒ。すぐにティオーナさんに来るように……、いえ、わたくしがあちらに行った方がいろいろと都合がよろしいですわね。そういうことで、手配をよろしくお願いするわね」
一礼し、ミーアの前を辞するルードヴィッヒ。その後をアンヌは小走りに追いかけた。
「ルードヴィッヒさん、少しいいですか？」
「ん？　ああ、どうかしたのかい？」
アンヌに話しかけられることは珍しかったから、ルードヴィッヒは少し驚いた顔をした。
「あの、つかぬ事をお聞きしますが、ルードヴィッヒさんはミーアさまのお話を聞いて、どう思われましたか？」
「ああ、そうだな……、一言で言ってしまうと、さすがはミーアさま、といったところだろうか」
その答えを聞き、アンヌは安堵のため息を吐いた。
「ルードヴィッヒさんが納得してるということは、ミーアさまの考えは間違ってなかったんですね……、よかった」
「うん？　どういう意味だ？」
「実は……」
首を傾げるルードヴィッヒに、アンヌは先ほどまで自分が抱えていた不安を話した。
「なるほど……、そういうことか」
「でも、大丈夫ですよね？　ミーアさま、正しいことをしてるんですよね？」

「正しいかどうか、というのは一概には言えないな。姫殿下のお考えが上手くいくかはわからないし、俺にあの方の狙いのすべてが理解できるとも思わないから。けれど、少なくとも理にかなったことをしているとは思うよ」
「理にかなったこと……ですか？」
不思議そうにつぶやくアンヌを見て、ルードヴィッヒは頷いた。
「そうか……、君は平民の出だったな。それだったら、ピンときづらいかもしれないな。実はルドルフォン辺土伯の子は、長女のティオーナさまと、弟君のセロさまだけなんだ」
「それが、なにか関係しているんですか？」
「平民もそうだろうけど、貴族にとって跡取りというのは特別に重要だ。そんな大切な跡取りを二人とも国外の学校に行かせるというのは、ルドルフォン卿にとってあまり嬉しい話じゃないってことさ」
仮に、公国で政変が起きた場合。あるいは、公国が他国から侵略を受けた場合。
もしくは、もっとありえそうな話として、学園で火事が起こり、生徒に犠牲が出た場合。
「その場合、ルドルフォン卿は、一度に跡取りを失ってしまうことになる。それは貴族として避けたいはず。それに勉学だけでなく、領地のこともしっかり教育したいはずなんだ。なんといっても貴族は領主だからね」
自らの治める土地がどのような場所か、そこにどんな人々が住み、どんな町があり、どんな産業があるのか。
それをどのようにして治めていくか……。
貴族が覚えるべきことは山のようにある。
「だから、もしも、同じ条件で勉学に励めるとするならば、きっと帝国国内ですることをルドルフォン卿は望むはずだ」
「なるほど……、そんなご事情が」
「それに、ミーアさまのご学友には、フォークロード商会の令嬢がいる。かの商会は、本の流通にも携わっている。となれば、ご学友

の力を借りて必要なものは集めるつもりなのだろう。公国で得られるのと遜色ないぐらいには知識を集めると思う。ルドルフォン卿の心をおもんぱかって、帝国内で最高の教育を受けられるよう手配するだろう」

もちろん、ミーアはクロエを頼って、たくさんの本を得るつもりではいる。

しかしながら言うまでもなく、ルドルフォン辺土伯の気持ちをおもんぱかって、などということではまるでない。

あくまでも、寒さに強い麦のため……、だ。

実利を真っすぐに追い求める、きわめて打算的な判断に基づくものなのだ。

にもかかわらず、ルードヴィッヒの推理という名の妄想は加速していく。

――そして、恐らく、これはバランスを取るためでもあるんだろうな……。

ルードヴィッヒは心の中で付け加える。

先の静海の森の件で、一番の損をしたのはルドルフォン辺土伯だ。名誉を得たベルマン子爵、繁栄への道を用意されたルールー族、それに対して、ルドルフォン辺土伯は自らの土地を切り取られただけだ。

あの場所で紛争が起こらなかっただけで御の字とはならないだろう。

ルールー族とも友好関係にあったのだから、表向きは平和裏に収まってよかったと言うかもしれないが、やはり釈然としないものを感じるはずだ。

そのことに対しての、償いのつもりなのだろうが……。

――さすがだ、ミーアさま……。あの方は、情に厚いことを無能の言い訳にしない方だ。

聖女と謳われるミーアは、友を大切にし、民に対しては情け深く……、それ以上に賢い。

民のためだからと言ってムダ金を使うこともせず、友のためだからと言って、ただ便宜を図ることもない。
きちんと政治的なバランスと友情と思いやりとを完全に両立する。
慈愛の聖女にして、帝国の叡智なのだ。
――俺にわかるのはこれだけだが……、ほかにも何か狙いがあるのだろうか？

数年の後、セロ・ルドルフォンが生み出すことになる強靭な小麦を見て、ルードヴィッヒは腰を抜かすことになるのだが、それはまた別の話である。

第九十三話　セロ・ルドルフォン

セロ・ルドルフォンにとって、姉は世界で一番信頼を置いている人だった。
花を育てることが好きで、本が好きで、勉強が好きだった彼は、対照的に運動がとても苦手だった。
領主に求められる乗馬や戦など、彼ではとてもではないがこなせないと思われていた。
肩身の狭い思いをしているセロに、けれど、姉のティオーナは優しく接してくれた。
「セロは勉強ができるんだから、きちんと学校に行って勉強しないとダメだよ」
そう言って、いつもセロを励ましてくれた。
そんな姉が外国のセントノエル学園に行くと聞いた時、セロはとても心配だった。
「私じゃなくってセロが行ければよかったのに」
なんて、姉は言っていたけど、そんなことどうでもよかった。勉強は確かに楽しいし、もし行けるものなら行ってみたいとも思うけど。
それよりなにより、姉が大貴族の子弟であふれる学校に行って、いじめられずに済むのか、そればかりが心配だった。
だから、夏休みに帰ってきた姉が、とても元気そうなのを見てホッと安心した。
それだけではない。姉の交友関係を聞いて、彼は驚いてしまう。
かのサンクランド王国のシオン王子や、ミーア姫殿下と友誼を結んできたというではないか。
「ミーア・ルーナ・ティアムーン皇女殿下……かぁ」
セロは別にミーア姫殿下に対して、良いものも悪いものも、特に

感情を持っていなかった。
――わがまま姫っていう人と、帝国の叡智ってほめる人といるけど、どっちが本当なのかな……。
せいぜいがそのぐらいの興味だった。
けれど、ルールー族とベルマン子爵の一件を、ほかならぬ姫殿下が解決したと聞いて、少しだけ興味を持ち出したのだ。
「さすがはミーア姫殿下だな。血も流さずにこの件を治めるとは見事だ」
「でも、父上、いいの？　土地を不当にとられちゃったのに……」
「不当……なことではないな。帝室の方々には、そうした権限が与えられている。まぁ、我々としては面白い話ではないが……」
そう言う父の顔は、けれど、決して不快げではなかった。
「それにな、民が苦しまずに済むのであれば、悪いことではないさ」
ルドルフォン家は、もともとこの地に住まう農民たちのリーダー格だった。普通の貴族以上に領民に対しての情が深い。
しかもルールー族とは、かなり古い時代から友好関係を築いている。そんな彼らが傷つくことなく事態が治まったのだから、満足すべきことではあった。
「へー、そうなんだ……」
セロは、素直に感心した。
父の言葉もそうだが、姉も、従者として付き従ったリオラも、ミーアのことを好意的に話しているのも大きかった。
いつしかセロの中で、ミーアは素晴らしい、聖女のような少女になっていった。
そんな皇女殿下が、なんと、ここにやってくるという。
「ミーア姫殿下はなにをしにくるの？」
そう尋ねるセロに、父はもちろん、ティオーナも困惑気味だった。ルドルフォン辺土伯爵家は、まごうことなき貧乏貴族だ。
好んで帝室の姫が足を運ぶような場所ではない。
「恐らくは先日の森での一件についての話だとは思うのだが……」

自信なさげな父のつぶやき。一方、
「確かにお手紙は出したけど……まさか直接いらっしゃるなんて……」
驚きつつも、どこか納得した様子の姉の姿があった。
「姫殿下らしいわ」
そう微笑む姉の姿を見て、
――ああ、もしかすると姉さまのところに、あそびにくるのかな？
セロはそう判断した。
いずれにしても、用があるのは父と姉。自分はあんまり関係ないんだろうな、と判断して、セロは日課にしている花壇の水やりに向かった。
公的な訪問であれば一族で迎える必要があるが、お忍びで遊びに来るのであれば、恐らくは必要ないだろうと思ったのだ。
――それにしても、姉様すごいなぁ。ミーア皇女殿下とお友達になるなんて。
そんなことを思いつつ、咲き誇る花に目をやる。花の手入れはなかなかに大変だ。
ただ単純に水をやっていればいいというものではない。一本一本の様子を見て、栄養が足りているか、病気になっていないか、チェックしていかなければならない。
そんな風にして、集中していたから……、セロは気づかなかった。
「あら……、なかなか素敵なお花ですわね」
自分のすぐそばに人が立っていることに。
びっくりして振り向くと、そこに一人の少女が立っていた。
美しい少女だった。
艶やかに輝く髪、健康的な張りのある肌、切れ長の瞳には、どこか知的な輝きが宿っていた。
驚いて固まるセロをしり目に、少女はわずかに膝を曲げて、花に手を添えた。
「これは、月蜜花（スィートムーン）……だったかしら？」

「あ、うん、そうです」
セロは少女の格好を見て、敬語を使うべきかどうか悩んだ。
彼女は、いわゆる貴族が着るような豪奢なドレスではなく、夏らしい身軽なドレスを身にまとっていたからだ。
貴族相手には敬語だが、領民だったらあまり丁寧すぎるのもおかしい。
悩む彼に答えを出してくれたのは、少女の従者の声だった。
「ミーアさま、そろそろ……」
「ああ、わかりましたわ……」
「……へ？」
セロ・ルドルフォンが生涯の忠誠をささげる相手との、これが最初の出会いだった。

第九十四話　ミーア姫、あざとい笑みを浮かべる

中庭から離れ、ルドルフォン邸に入ったところで、
――やってやりましたわ！
ミーアは心の中で快哉を叫んでいた。ついつい我慢しても、顔がニヤニヤしてしまう。
……ちょっぴり怖い。

十分ほど前、
――あー、すっごく行きたくありませんわー。
ルドルフォン邸に到着したミーアはとっても憂鬱な気分になっていた。必要なこととはいえ、やる気はまったく出なかった。
なにしろ前世の仇敵、ティオーナ・ルドルフォンの生家である。いわば敵の本陣なのだ。
愉快でいられようはずもない。
――適当に時間を潰して、やる気が出たら入ろうかしら。
などと考えていたミーアの目の前に、その少年は現れた。
――あら、可愛らしい子どもですわ。
花を愛でる少年は、まるで女の子のように可憐な雰囲気があった。
「花を……愛でる？」
とたんに、ミーアはピンと来た。
セロ・ルドルフォン。
新種の小麦を生み出したという事は、植物に詳しいはず。
花＝植物！
ミーアの脳内で、情報が繋がった！
出来るだけ相手を驚かせないようにして、ミーアはこっそり忍び寄る。
足音を殺し、抜き足差し足、その姿は帝国の叡智とはとても思え

ない、どこぞのこそ泥のようだった。
　そうして、そろーりと接近したミーアは満を持して少年に話しかけた。
「あら……、なかなか素敵なお花ですわね」
　ミーアの脳内を、かつて軍師アンヌから聞いた「恋愛術」の話が過ぎる。
「殿方は、自分のした仕事を褒められるととても嬉しいらしいですよ、ミーア様」
「そうなんですの！？　ということは、アベル王子の……、お仕事ってなにかしら？」
「なにか、ご趣味でもあるとよろしいんですけどね、やはり馬術か剣術でしょうか」
「なるほど、さすがはアンヌですわ。参考になりますわ」
　お忘れかもしれないが、そのアンヌ、恋愛経験は皆無だったりするのだが……けれど、幸運なことに、この時のアンヌの助言は的を射ていた。
　ど真ん中だった。
　――殿方は、ご自分の仕事を褒められるととても喜ぶ。ということは、このセロという子もきっと自分が育てた花を褒められたら喜ぶはずですわ！
　さらに、ミーアは花のそばにしゃがみ込むと、
「これは、月蜜花（スィートムーン）……だったかしら？」
　そう、言葉を続ける。
　わたくし、きちんと花の名前にも精通してますのよ……、という女の子らしさアピールと同時に、殿方の仕事に対する理解をも見せていくスタンスである。
　……実にあざとい。
　――ふふん、これで好感度ゲットですわ。上手く事を運べば、新型小麦はわたくしのものですわ！
　アンヌに呼ばれたのをきっかけに立ち上がると、すべてをやり切

った充実感に満たされたミーアは渾身のどや顔をセロの方に向け、それからその場を後にした。

「これはミーア姫殿下、遠いところをようこそおいでくださいました」

「初めまして、ルドルフォン辺土伯。ご機嫌麗しゅう」

ルドルフォンのあいさつに完璧な礼で返したミーアは、親しげな笑みを浮かべた。

その顔には、貧乏貴族を馬鹿にするような雰囲気はまるでなかった。

――今まで出会った大貴族の令嬢は、大抵、私のことを見下すような目で見ていたものだったが……。

内心は定かではないが、少なくとも表面上は完全な礼節を保った姫君に、ルドルフォンは感心する。

辺土伯……、あるいは辺土伯爵。それがルドルフォンに与えられた爵位だ。

帝国伯爵というのは、かなりの爵位だ。社交界においても一目置かれてしかるべきものといえるだろう。

けれど、その頭に「辺土」の二文字を付け加えると、途端にその意味は変わってくる。

そもそも、この爵位が生まれたのは帝国の国土拡張政策と深い関係がある。

ティアムーン帝国は建国以来、積極的に領土を広げていった。

未だ国の体裁をとっていない未開地に出ていっては、時に武力により、時に説得により、積極的に自国の領土へと取り込んでいく。

そうして新しく得た領地を、当初、帝国政府は中央の貴族に与え、そこを治めさせようとした。

けれど、もともとその地に住まう者たちの反応が予想以上に悪く、その方針は早々に転換された。

次に彼らは、もともとその地を治めていた権力者をそのまま帝国貴族に叙し、その地を領地として治めさせようと考えた。
この政策は思いのほか上手くいった。統治者の変更による無用な混乱もなく、領地の併呑は順調に進んでいた。
けれど、ある時、問題が起きた。
それは、いくつもの部族を束ねる大部族長を貴族として迎え入れようとした時のことだった。
彼らの治める土地は広く、場所的にも交通の要衝であったことから、帝国としてはどうしてもその地を領土としたかった。
交渉を担当する帝国緑月省は、その所領の大きさ、重要さを鑑みて、大部族長に「伯爵」の爵位を約束し、見事に、かの地を併呑することに成功する。
そこまではよかった……。けれど、問題はその後だった。
中央の貴族たちが猛反発したのである。
「新参者の田舎者を伯爵にするとは何事か？」
そんな彼らの訴えは激しく、緑月省としても対応せざるを得なかった。
中央貴族たちを納得させるには、伯爵より低い爵位にしなければならない。けれど一度、与えると約束してしまったことを覆しては帝国の信用にかかわる。
高級官吏たちが悩み、知恵を絞りあって、なんとか出した結論こそ「辺土伯」の爵位だった。
大部族長には、辺土“伯爵”の地位を与えると言いながら、貴族たちには公然と「辺土伯は伯にあらず」と宣言したのだ。
以来「辺土伯」という新しい爵位が帝国内に誕生することになる。
その扱いは子爵以上伯爵未満という微妙なものだったが、なまじっか「辺土」を冠する爵位ゆえに、中央貴族界からは常によそ者として扱われ、時に最下級貴族である男爵から嘲笑を受けても、それが許容されるような空気が、長い年月を経て醸成されていた。
それは、中央貴族と辺土貴族との間に亀裂を生み、国を割る要因

にもなりかねない危険な状況であった。

ともあれ、そのような事情を鑑みれば、ミーアの態度がいかに異例のものかがよくわかる。

ルドルフォン辺土伯は無意識に背筋を伸ばしてから、改めて口を開いた。

「学園では、娘がご寵愛を賜っているとのこと、重ねて感謝を申し上げます」

「いえいえ、寵愛などと、そのようなものを与えた覚えはございませんわ」

「そうですか……。ですが、こちらはお礼を言わせていただきたい」

「なんのことですの？」

「先日の静海の森の件です。ベルマン子爵と話をつけていただきました。心から感謝いたします。ルールー族の者たちの分も合わせまして……」

「ああ、そんなこともございましたわね」

ミーアは、言われて思い出したとばかりに、ポン、と手を打った。

――その件で来られたのだろうに、なかなかお心を見せぬ方だ。

まさか、本当にミーアが忘れていたなどと、夢にも思わないルドルフォン辺土伯である。

そんな彼に、ミーアは可憐な笑みを浮かべて、歌うように言った。

「そんなことよりも、ルドルフォン卿、本日、わたくし、あなたに提案があってきましたの」

「……ほう、提案、ですか」

ルドルフォンは姿勢を正し、ミーアの方を見た。

――姫殿下は先日の件で、ベルマン子爵とのバランスをとるためにいらしている。ということは、さほど悪いことにはならないと思うが……。

かといって、単純な提案がなされるわけでもないだろう、という予感があった。

相手は帝国の叡智、森の件では、すまなかったから、金貨数百枚を渡そうなどという話にはならないはず。

――なにか、私の思いもよらぬ提案がなされるはず。

この上もなく高い期待値が設定されていることに、気づくことなく、ミーアは静かに口を開いた。

第九十五話　来たる！　ビッグウェーブ！！！

「ティオーナさんにお聞きしたのですけど、ご子息のセロ君は、とてもご聡明な子だとか。なんでもすごく勉強ができるそうですわね」

ミーアのその言葉で、ルドルフォン辺土伯は、即座に理解した。

――なるほど、つまり姫殿下の提案というのは……。

恐らくは、セロをどこぞの学校に入れる、その口添えをしてくれるとでもいうのだろう。

領地の代償としては少しばかり安い気もするが……。

――いや、そこがただの学校であるとは限らないか？

ルドルフォンは、一瞬考えこんでから、口を開いた。

「ミーア姫殿下、もしや、セントノエル学園にセロを入学させるために、お口添えをいただけると、そういったことでしょうか？」

大陸最高峰の教育環境を誇るセントノエル学園への入学ならば、確かに破格。先日のことへの代償としても十二分に釣り合いが取れるというもの。

――ミーア姫は、ラフィーナ公爵令嬢と友誼を結ばれていると聞く。もしも、ティオーナがそれを依頼していたとすると、ありえない話ではないが……。

ルドルフォンは、そこで厳しい顔をする。

もしそうであるならば、それは願い下げだった。彼は後継ぎである息子を帝国の外に出すつもりはなかった。

けれど、そんな彼に、ミーアは首を振って見せた。

「そうではございませんわ。我が国が誇る人材を、わざわざ国外に流出させるような愚を犯すわけにはいきませんわ」

手紙をもらって以来、ミーアは考えていた。

もし仮に、セロがセントノエルに入学した場合、その手柄はどこに還元されるか？
言うまでもなく、それはセントノエル学園、あるいはヴェールガ公国の聖女、ラフィーナ公爵令嬢にだろう。
あるいは、姉であるティオーナに、だろうか？
少なくともラフィーナに口添えしただけの自分でないことは確かである。
ミーアにとって大切なことは、セロ・ルドルフォンの功績を自らのものにすること。そのためには、セロにはミーアの庇護下にいてもらわなければならない。
しかし、それでは帝国の学校に入れればいいかといわれると、そんなこともない。
なぜなら、ティアムーン帝国内にはセントノエル学園レベルの学校は存在しないからだ。
教育水準に劣る学校にセロを入学させた場合、最悪、新型の小麦は生み出されないかもしれない。
その矛盾をどう解決するか……。
ミーアは悩んだ末に、一つの答えを出した。
「望み通りの学校がないなら、作っちゃえばいいじゃない！」
閃いた瞬間、ミーアの脳裏でいくつもの要素が革新的な結びつきを果たした。
「そういえば、わたくしの町ができるんだったかしら。それならば……」

「ベルマン子爵領にプリンセスタウンができること、ご存知かしら？」
急な話の展開に、ルドルフォンは目を白黒させる。
「え？　あ、ええ、それはもちろんですが……」
「わたくし、その町に学校を作ろうと思っておりますの」

「学校を、でございますか？」
「そう、セントノエルのような学園都市が帝国内にもあったら、素敵だと思わないかしら？」
ミーアは何でもないことのように言って、悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「どうかしら？　セロくんを、わたくしの学校の生徒第一号にしてみる気はないかしら？」
ルドルフォンは、内心で舌を巻いていた。
森を皇女直轄領とすることで、争いを収めること。
ベルマン子爵領にプリンセスタウンを建てさせて、子爵の自尊心をくすぐること。
――姫殿下は、その一連の流れの中に、我がルドルフォン家に対する利点をも組み込もうとされているのか？
子爵領であれば隣接領。しかも、森に住まうルールー族は友好部族だ。
帝都に通うよりよほど簡単である。
恐らく、その計画には莫大なお金がかかるだろう。されど、皇女の町を作るという計画に他の貴族たちが参与しないわけにはいかない。
ミーアは、必ずその計画を実現させるだろう……。
そんな確信を抱いてしまう、ルドルフォン辺土伯であった。
彼は深く頭を垂れる。
「かようなご配慮、身に余る光栄です。当家にできることはなにもございませんかと思いますが、もしも、なにか私にできることがございましたら……」

「んー、そうですわね……」
何気なさを装って、ミーアは小さく首を傾げて見せた。
なにがいいかしらー、などとつぶやきつつも、彼女は敏感にそれ

を感じ取っていた。
――これは、好機ですわ！
そう、自らを強力な力で押し上げるビッグウェーブを！
ミーアは、それに身をゆだねる。
「では、御当家で保有されている小麦が欲しいですわ」
「は？　小麦、ですか？」
「ええ、普段から小麦を安売りすることなく、できるだけ蓄えておいていただきたいんですの。そして、飢饉が起きた際には……」
「それは、もちろん、ご下命あれば小麦は帝室に供出いたしますが……」
「いえ、そうではありませんわ。辺土伯」
それは、とてもまずいことになる。ミーアの本能が告げていた。
もしそんなことをすれば、帝室は中央貴族や自分たちのためだけに小麦を貯めこみ、民は飢える。
結果、怒った民衆は革命を起こす。
断頭台へとまっしぐらだ。
「小麦は、ルドルフォン家から直接、民衆に配っていただきたいのですの。その際に、わたくしの名前を出していただければ……」
ものすごく図々しいお願い……を口にするミーアに対し、辺土伯が向けるまなざしには――なぜか、尊敬の光が宿っていた！？

第九十六話　皇女ミーアの名によりて、それをなせ！

「……それは、穀物を民衆に配る際、ミーア姫殿下のお名前で、それをなせと、お名前を使ってもよいと、そういうことでしょうか？」
ルドルフォンは、久しくなかった感動に身を震わせながら言った。
「そうですわ。ぜひ大々的に、わたくしの名でやっていただきたいですわ」
「感服いたしました。姫殿下」
自らの娘と同い年の、小さき姫の見せた知恵に、彼は驚嘆を禁じえなかったのだ。
ルドルフォン辺土伯は、広い領地をもち、その領民のほとんどは農民。そのことは広く知れ渡っていることである。
それゆえに今までも、農作物の不作などで食料が不足した時には大貴族たちがやってきては小麦を奪っていった。
帝室に献上するゆえに、という名目で、実際には自らの貯えとするために。
彼らは、民が飢えようとも関係ないのだ。
自分たちが飢える可能性があるというのに、民草に食料を配るなど考えられぬこと。そのような常識で大貴族は動いている。
厄介なのは、彼らの大半はそこまで贅沢をしようとは考えていないことである。
確かに民からすると貴族の生活は贅沢ではあるのだが、なにもその贅沢さを維持するために小麦を欲しているのではないのだ。
ではなぜか、といえば、不安だからだ。
不作がいつまで続くかわからない状況、自分たちが飢えないために、できうる限りの食料をため込んでおこうとするのだ。
自分たちの「安心」のために、民を苦しめるのだ。
贅沢ならば咎められる。けれど、飢えぬための備えと言われては、

誰も文句は言えない。
そのような状況で、無償で民に食料を配ったりしたらどうなるか？　下手に訴えられれば、帝国に対する反逆と言われかねない状況だ。
それを見越して、ミーアは言ったのだ。
自らの名によって、それをなせ、と。
皇女の命令として、それを行えと。
「大変、ぶしつけなことですが、それは、書面にしていただいても？」
「書面？　ええ、構いませんわ。確かにそのほうが安心というものですわね」
と言いつつも、ミーアは首を傾げる。
なにしろ、自分が求めているのは、面倒ごとはそっちでやって手柄だけ自分によこせ、という、ミーアでも多少やりすぎかな？　と思うぐらいに都合のいいことだ。
学校に入学させるお礼というから、このぐらいは許されるかな？
とは思ったものの、内心ドキドキしていたのだが。
――そこまで下手に出られると、ちょっと怖いですわね。何か企んでいるのかしら？
じっとりと疑いのまなざしで、ルドルフォンを観察するミーア。
――それとも、忠誠心をささげるから厚く取り立ててください、とでも言うつもりかしら？
セロ・ルドルフォンの知識は確かに欲しいが、さりとて慣れ合うつもりはない。
相手は、自らの仇の家、ルドルフォン家である。
――そんなにすり寄ってこられても迷惑ですわ。ここは、きっちりとケジメをつけておく必要がありますわ！
ミーアは、ふんすっと鼻息を荒くして言った。
「誤解がないように言っておきますけれど、セロくんを通わせる学校、大貴族の方が通うような豪華さはございませんわよ？　むろん、

知識のレベルはセントノエルに劣らぬように手配は致しますが、近隣のルールー族や民衆からも広く生徒を受け入れようと思っておりますの」
だから、お前の息子を取り立てて、立派な名のある学校に入れてやるわけじゃないぞ、と。
しょせんは、お前の家など民衆と扱いは変わらないんだから、調子に乗るな、この野郎……。
そんなメッセージを込めて、ミーアは言ったのだが、
「それは……、重ねてのご配慮、感謝に堪えません」
ルドルフォンは、感動の涙すら浮かべつつ、言った。
――セロが中央の大貴族の子弟に気兼ねなく学べるよう、環境を整えようというのか。しかも、近隣のルールー族と同じ学校に通うことで、かの部族との友好関係にもご配慮いただけるとは……。
正直なところ、ルドルフォンはあまり帝室に好感を抱いていなかった。けれど……、
――私は、忠義をささげるべき方を、ようやく見出し得たのかもしれないな。
腹の奥底からあふれ出す喜びに、その瞳は熱く滲んでいた。
……それを見たミーアは……、若干引いていた。
――こっ、この人、もしかして、あれかしら？　いじわるとか、痛いこととかされると気持ちよくなってしまう方なのではないかしら……？
これだけ突き放しても、なんだか嬉しそうなおじさんを見て、ちょっとだけ怖くなってしまうミーアである。
――ま、まぁ、ティオーナさんの御父上ですし、別に驚きませんけれど……。
なんにせよ、セロ・ルドルフォンを手中に収め、ルドルフォン家の所有する穀物類をも、実質手に入れることができたのだ。
――直接やってきて、大正解でしたわ！
満足げに微笑んで、馬車に揺られつつ帝都に帰還するミーアであ

った。

……かくて、すべての準備は整った。

運命の大河は新たな流れに移り行き、そして……。

第九十七話　消失・幕間狂言

「さすがに、少し疲れましたわ」
夏休みも残すところあとわずかになったその日。
夜遅くに部屋に戻ってきたミーアは、ドレスのままベッドにポーンと横になった。
アンヌあたりに見つかれば怒られてしまいそうな格好だが、今ぐらいは大目に見てもらいたいミーアである。
ルドルフォン辺土伯と話をつけてからも、ミーアは精力的に帝国内を飛び回っていた。
麦のことに手ごたえを感じたミーアは、帝国にいる間にできる限りのことをと思い、貧民街に行って病院の視察をし、食料備蓄を確認し、それから学園都市設立のための各貴族へのあいさつ回りを敢行した。
「うー……」
ずーんっとのしかかってくる疲労感。それに耐えて、ミーアは何とか顔を上げる。
「そういえば、最近、確認してませんでしたわ……」
のそのそと起き上がり、ミーアが向かったのは豪奢な机の方だった。その引き出しの一番奥に、大切にしまい込んだもの。
それは血染めの日記帳……、ミーアの道しるべだった。
夏休みに入ってすぐに見たきりになっていた日記帳、それを手に取り、ミーアは疲れた笑みを浮かべる。
「……これで、全然変わらずにギロチンコースだったら、さすがにちょっとへこみますわね」
それから、ミーアはこわごわページをめくっていき……、問題のページに到達したとき、
「……へっ！？」

思わず変な声が出てしまった。
問題の、ギロチンにかかった日のページ。そのページにある文字が、まるで糸がほどけるように、するする、と紙の中に溶けていき……。
同時に、ページを覆っていた赤いしみが見る間に消えていく。
もともとそんなもの、なかったかのように、真っ白なページが表れて、
「なっ、なんですの、これ、あっ」
思わず取り落としてしまった日記帳は、まるで月の光のような淡い輝きを放ちだし、次の瞬間、光の粒となって消えた。
「これ……は」
呆然と、その光景を眺めていたミーアは、一瞬、何が起きたのかわからずに、困惑の声をあげてしまう。
「どっ、どういう、ことですの？　なぜ、日記帳が……」
ミーアは失われた日記帳を探しつつ、おろおろするばかり。
なにせ、あれはミーアの行動の指針だ。あれには、どうやって自分がギロチンにかけられるのかが書かれているのであって、あれがなければ、何をどうやってギロチンを回避すればいいのかがわからなくって……。
「……あら？」
と、そこでミーアは気が付いた。
そう、あの日記帳は未来のミーアが書き残した指針だ。
ギロチンにかけられるミーアがいる限り、あの日記帳はずっと存在し続けるわけで……。
「つまり、あの日記帳がある限り、わたくしはギロチンにかけられることが決まっていて……では、その日記帳が消えた、ということは……」
ぐるぐると、混乱に惑っていた思考が一つの流れを作り、やがてある結論に至る。
すなわち、

「……もしかして、ギロチンの未来も消えたと……、そういうことですの？」
呆然とした口調で、ミーアはつぶやいた。
「やっ……た、んですの？　わたくし、ついにっ！」
次の瞬間、ミーアは高々と小さな握り拳を天に突き上げた。いささかおしとやかさに欠ける行動だったが、関係なかった。
くるりん、くるりん、と部屋の中を回りながら、ひとしきり喜びのダンスを踊ったミーアは、少しだけ落ち着いてから、
「そうですわ。アベル王子にお手紙、書きましょう！」
ぱん、と手を叩き、嬉しそうな笑みを浮かべた。
実際のところ、残りの夏休みの日数的には手紙が返ってくる可能性は低い。
学校が再開したら、直接、お話すればいいことかもしれない。
けれど、この嬉しい気持ちを、今すぐに誰かに知らせたくって……。
そして、一番に知らせたいのは、やっぱり……。
「アベル王子、お元気かしら？　まぁ学校が始まれば、お会いできるでしょうけれど、今から待ち遠しいですわ」

そして、運命の歯車は、ゆっくりと動き出す。

同時刻、とある地下酒場にて。四人の男たちが、ひそひそと話をしていた。
「帝国は、どうやら持ち直してしまいそうだな」
「いろいろ貴族たちをたきつけてみましたが、難しそうですな」
「あの金月省の文官、ルードヴィッヒなる若者は、なかなかに優秀なようで……」
「飢饉の一つでも起きれば、と思っておりましたが、こうも完ぺきに体制を整えられては……」
「皇女ミーアとシオン王子殿下との関係も良好だと聞く。分断工作

に失敗したと考えるべきだろうな」
「ふん、帝国の叡智か……。まったく忌々しいガキだ」
「仕方がないさ。聡明をもって知られるシオン王子殿下のみならず、ヴェールガのラフィーナ公爵令嬢あたりまで一目置く人物だ」
「いずれにせよ、我々がなすべきことは変わらん。帝国に対する計画はいったん凍結。標的を変える……」

……アベルからの手紙は、結局届かなかった。

第九十八話　楽しいお茶会、そして……

「ああ、久しぶりですわね」
清々しい気持ちで、ミーアは学園を見上げた。
「まさか、この学校に帰ってくるのを嬉しく感じる日が来るなんて、思いもしませんでしたわ」
ミーアがセントノエル学園に着いたのは、新学期が始まる一週間前のことだった。
正直、学校などあまり好きではなかったミーアではあるのだが、ギロチンから解放された解放感に浮かされて、ついつい早めに帝国を出てしまったのだ。
鼻歌を歌いながら学園の門をくぐると、
「あっ、ミーアさま！」
「あら、クロエ、ごきげんよう」
ミーアは、かしこまった様子で、ちょこん、とスカートの裾を持ち上げる。
クロエもあわてて同じようにして……、それから二人は顔を見合わせて笑った。
「久しぶりですわね、クロエ。元気にしていたかしら？」
「はい、ミーアさまもお元気そうでなによりです」
「お父上もお変わりはないかしら？」
「あっ、はい、先日は父がお世話になりました。とても良い商談ができたと喜んでました」
「まぁ、それはよかったですわ」
「それに、すごく驚いてました。ミーアさまは、まぎれもなく帝国の叡智だって……」
「あら、それは過大評価というものですわ」
まったくである！

珍しく、真っ当なことを言ってしまうミーアである。
そんな風にして、楽しくお話をしながら校内を歩いていると、中庭のところで近づいてくる人物がいた。
「あら、お久しぶりね、ミーアさん、ごきげんよう」
「これは、ラフィーナさま……、ごきげんよう。お変わりなきようでなによりですわ」
二人は貴族にふさわしく、優雅な礼を交わす。
それから、ラフィーナはクロエのほうを見て、優しげな笑みを浮かべた。
「クロエさんも、ごきげんよう」
「あっ、えっ、あ、は、はい。ら、ラフィーナさま、ごきげんよう」
緊張で硬くなるクロエを見て、くすくす楽しそうに笑ってから、ラフィーナはミーアの方を見た。
「ミーアさんは、クロエさんともお友だちなのね」
「ええ、親友ですわ」
あっさりと言ったミーアに、クロエは目をまん丸くした。
「しっ、親友……？」
「よく読んだ本の感想などを、いっしょにお話ししたりしますわ」
「あら、そうなのね」
ラフィーナは嬉しそうに微笑んで、
「どうかしら？　これからお茶にしようと思っていたのだけど、一緒にどうかしら？」
「あ、では、私はこれで……」
「あら？　クロエ、なにか用があるのかしら？」
「いえ、でも、お邪魔になりそうですし……」
「そんなことないわ。私は三人でお茶を、と思っていたのだけど」
そう微笑んでから、ラフィーナはミーアの方を見た。ミーアも小さく頷いて、
「わたくしも、あなたとお茶したいですわ、クロエ。ラフィーナさまもああ言っておられますし、一緒に行きましょう」

そう言って、クロエの手を取った。

「聞きましたよ。ミーアさん、なんでも学校を作るとか？」

ラフィーナの部屋でお茶会が始まってから、一時間ほどたった時のことだった。

紅茶のカップに口をつけながら、ラフィーナは上目遣いにミーアを見つめた。

「民衆にも門戸を開くと聞きましたが、思い切ったことをしましたね」

それを聞いて、クロエがびっくりしたように、瞳を瞬かせた。

「ミーアさま、そんなことをしようとなさってたんですか？」

二人の視線を受けて、ミーアはちょっとだけ……、ビビった。

――もっ、もしや、ティオーナさんの弟を貴族だけの学校に入れたくないから、民衆を通わせようとしていることが、バレたんじゃ？

確かにギロチンからは解放されたわけだが、それでも、ラフィーナに睨まれていいことはないだろう。

ミーアは慌てて言い訳を考える。

「べっ、別にそれほど驚くことでもないのではないかしら？　才能を持つ者は家柄に関係ありませんし？」

なにしろ、門閥貴族でも何でもないティオーナの弟が新しい小麦を発明するのだ。

血筋に才能は関係ないのだ。そのはずだ！

苦し紛れの言い訳は、幸いなことにラフィーナに通じたらしく……、いや、むしろ、深々と突き刺さったらしく、

「まさしくそのとおりよ。さすがは、ミーアさん、私のお友達ね」

ラフィーナは感動に瞳すら潤ませつつ、ミーアの手を取った。

その様子に、目を白黒させるミーアである。

なにせ、適当なことを言ったら、なぜだか、感動されてしまったのである。

普通であれば、警戒してしかるべきところであるのだが……、
「それほどでも、ございませんわ」
ミーアはニマニマ、笑みを浮かべた。
ミーアは乗っていた。
先日感じたビッグウェーブが、今なお勢いを失っていないのを感じる。
――来てますわ、波が……。抑えきれないビッグウェーブがわたくしを押し上げようとしていますわ！
そんな風に調子に乗っていたから、だろうか。
「失礼いたします、ミーアさま」
血相を変えて入ってきたアンヌの様子に気づくことなく、なんの心の準備もなく、聞いてしまった。
「どうかしましたの？」
ミーアの顔を見て、アンヌは一度深呼吸してから、おもむろに言った。
「革命が……、おこりました」
「……へ？」
かくて、事態は急転する。

第九十九話　帝国の叡智（恋愛脳）の選択

「かっ、かか、革命って、どういうことですの？　なっ、なぜ……、そんな、わたくしの、今までの努力は？　いったいどうして、急に帝国で革命なんか……」

かくん、と体の力が抜ける。ミーアは、目の前が真っ白に染まっていくのを感じて……

「きゃあっ！　お、落ち着いてください、ミーアさま。ティアムーン帝国じゃありません」

「へ？　ど、どういうことですの？」

きょとん、と首を傾げるミーアに、アンヌは言った。

「レムノ王国で革命が起こったって……。さっき、キースウッドさんが教えてくれたんです」

「え？　なっ？　うえぇ？」

何が起きているのか意味が分からなくって、思わずミーアは間の抜けた声を上げてしまった。

「どっどっど、どういうことですの？　いっ、いったいなにが……」

まったくもって意味がわからなかった。

どうして、なぜ、レムノ王国で革命が？　それもこんな急に？

「失礼します、ラフィーナ公爵令嬢」

その時だった。

ノックとともに入ってきたのは、シオン王子と従者のキースウッド、加えて、その後ろにはティオーナの姿もあった。

「ミーア姫がこちらにいらっしゃるとお聞きしましたが……」

「ちょうどいいところにいらっしゃったわね。シオン王子」

硬い顔をしたラフィーナが言った。

「どうぞ、お入りになって。今、お茶を用意するわ」

席について早々に、キースウッドは話し始めた。
「正確には、革命を訴えて民衆が蜂起したという段階だと思うのですが……」
キースウッドの言葉は、どこか歯切れの悪いものだった。
「誤解を与えるような言い方になってしまい申し訳ありません」
アンヌに誤解を与えるような言い方になってしまったことには実のところ事情があった。
彼自身、戸惑いがあったのだ。
サンクランド王国は、建国初期の時代から、情報というものを重視していた。
王国内には専用の諜報機関「風鴉（かざがらす）」が存在しており、各国に間者（かんじゃ）を送り込んでは、諜報網を作り上げている。
レムノ王国内に潜む間者から、その知らせが来たのはつい最近のことだった。
曰く、

「レムノ王国内において、王権の打倒、すなわち革命に繋がりうる内乱の兆しあり。それに伴い民衆への弾圧が予想される。民を暴虐から守るため、サンクランド王国の軍事介入の必要を認（みとむ）」

本来、王子の従者とはいえ、国家機密に触れることなどできようはずもないのだが……、それはそれ。
サンクランド王国といえど、一枚岩ではない。
シオンに好意的で、手柄を立てさせようと考える武官、文官は数（あ）多（また）いるわけで、キースウッドはそれらの人脈をきちんと把握していた。
いろいろと無茶をしがちなシオン王子のこと、このぐらいのコネは作っておかなければ、キースウッドの胃に穴が開いてしまう。
今回の情報は、その筋からもたらされた情報だった。

キースウッドはすぐさまシオンと相談し、ミーア姫にも知らせたほうが良いだろうという結論に達したまでは良かったのだが……。
「ほとんど、詳しいことはまだわかってないというのが実際のところです」
情報から読み取れたのは、革命に至るかもしれない内乱の兆しあり、という何とも曖昧なものだった。
それでも、軍事介入を求めてくる一文が、わずかばかりキースウッドをも焦らせた。
ついつい、革命へと繋がるという部分をそのままアンヌに話してしまったのは、彼らしくない失敗だといえるかも知れない。
己の未熟さを自覚して、ため息交じりに首を振りつつ、キースウッドは言った。
「ただ、レムノ王国の政情が不安定化する、その兆候は数年前からありました」
強力な軍と重税、もともとレムノ王国の政情は危ういバランスで成り立っていた。
そのバランスが一気に崩れた原因は、国王がさらなる税の引き上げを言い出したことにあった。
当然、反対も出た。
真っ先に異を唱えたのは、レムノ王国の宰相、ダサエフ・ドノヴァン伯爵だった。
不満にいきり立つ民衆たちの声を代表するように、彼は声を上げたのだ。
「あの方のことは、私も存じております。確かに賢明な方ですが、温和なお人柄であったと思いますが……」
ラフィーナは小さく首を傾げる。
彼女の疑問を引き継ぐように、シオンが口を開いた。
「俺も同じ印象ですね。事実としてダサエフ宰相は民衆たちと王家との間を取り持つために動かれていたようです。けれど、何かがあった……」

そこで黙って、シオンは腕組みしつつ、うつむいた。
「……何か」
重たい沈黙が生まれる。
――どういうことですのどういうことですのどういうことですのっ！！？？
そんな中、ミーアは大混乱の渦中にあった。
頭がごちゃごちゃして、目が回りそうだった。
レムノ王国で革命が起こる、なんて記憶は、もちろんミーアにはなかった。
それは、自国のことで手いっぱいだったからというわけではない。
この時点ではまだ、帝国内で目立った事件は起きていなかったはず……。少なくともミーア自身が余裕をなくすほどの状況ではなかったはずなのだ。
だから、どこかの国で革命が起きたり、内乱が起きたりしたら、覚えていないはずがない。
にもかかわらず、何かが……起きた。
しかも、場所は帝国ではなく、レムノ王国だ。
まったく意味がわからなかった。
――ま、まぁ、それでも、とりあえずは帝国でなかったことを喜ぶべき、ですわね。
ミーアは、自分に言い聞かせるように、思い直した。
もし仮にレムノ王国の王家が革命で滅ぼされたとしても、ミーアがギロチンにかかることはないわけで……。だから、ミーアとしては何もする必要はなくって……。
むしろ、危うきに近づかないことこそが知恵ある者のなすべきことで……。
でも……。
「ミーアさま……、行きたいんですか？」
「……はぇ？」
突然の声。顔を上げると、アンヌが顔を覗き込んでいた。その顔

は真剣そのもので、ふざけている様子はない。
「なっ、何を言っておりますの、アンヌ。そんなこと、誰も……」
「でも……、ミーアさま、泣きそうな、顔してます……」
「え？　や、そんなこと……ありませんわ」
――だって、そう、わたくしは、今までギロチンにかからないために、行動してきましたし……。
頭の中、今までの出来事が過ぎる。
ギロチンの死の運命を避けるため、懸命に頑張ってきたのだ。
――だから、そんな危ないところに行くなんてまっぴらごめんですわ。遠慮するのが正しい選択ですわ……。
それは自明のことだ。
「……でも」
そう思えば思うほど、頭を過るのは、優しげな彼の顔だった。
一緒に馬に乗ったこと、笑顔でサンドイッチを頬張る顔、ダンスをした時の照れくさそうな顔……。
そんな顔ばかりが、思い浮かんでしまって……さらに。
ミーアは周りを見回した。
アンヌの、クロエの、シオンの、キースウッドの、ラフィーナの、ティオーナの……、自分に集まった視線を肌で感じる。
「……これで行かない、とはさすがに言えないですわね」
小さなつぶやきとは裏腹に、ミーアの顔には朗らかな笑みが浮かんでいた。
「行きたいですわ、アベル王子のところに……。わたくしは、行きたい」
死の運命、血まみれの日記帳に縛られ続けていたミーアがする、これが、最初の選択。
それから、ミーアは周りの全員を見回して言った。
「協力をお願いできるかしら？」
――べっ、別にアベル王子に会いたいからこんなこと言ってるわけじゃありませんわ！　あくまでも、みなさんを幻滅させてギロチ

ンにかけられないためですわ！

心の中で、なんともツンデレっぽいことをつぶやいてしまうミーアであった。

第一〇〇話　築き上げてきた絆（コネ）

「わたくしは、行きたい。協力をお願いできるかしら？」
静かなミーアの声。
帝国の叡智と謳われる少女の、心からの願い。
普通であれば、それは否定されるべき願いだ。
無茶苦茶で、諌（いさ）められて当然の願いだ。
けれど……、
「行きたいと言われても、そう簡単ではないですよ、ミーア姫。レムノ王国は、現在、緊張状態にあります。そこに近衛でも引き連れていこうものなら、侵略を疑われかねません。少なくとも身分を偽り、秘密裏に行く必要があるでしょうが……」
「そうだな。こんな時期だし、身分の不確かな者は国境を越えられないだろう。なにか作戦を立てる必要があるな」
「そうですね……。何とかできないかしら」
その場に集う、誰一人として、ミーアの願いを否定しなかった。
真剣な顔で、ミーアの願いを受け取り、それに応えるべく頭をひねる。
行って何ができる、とか、そんなことできるはずない、とか……。当然口にされるべき疑問は、囁かれることさえなかった。
まるでミーアに協力するのが当たり前のことだと言うかのように。
そして、圧倒的に絶望的な状況で、光明は差した。
それも、ごくごくあっさりと、である。
そうなのだ、例えミーア自身がポンコツであったとしても、この場には超豪華なメンバーが集まっているのだ。
彼らがその気になれば、大体のことはなんとかなってしまう、心強いメンバーが。
そんな中で、けれど、最初に口を開いたのは意外な人物だった。

「あの……」
おずおずと声を上げたのは、クロエ・フォークロードだった。
そうそうたるメンバーの視線を集めてしまったことで、びくんっと体を震わせつつも、クロエは続ける。
「うちの商会の隊商（キャラバン）が……レムノ王国に行く予定があって……、その、馬車に紛れていく、というのはどうでしょうか？」
「それは……なるほど」
腕組みして、一瞬考え込むも、すぐに頷くキースウッド。
「確かに、それならば秘密裏に行くこともできるかもしれない。商人であれば、民衆たちから敵意を買う可能性も低いか……」
少なくとも、他国の王族や、身元不詳の不審人物として入国するよりは、よほど動きやすいだろう。
わずかばかりに表情を明るくするキースウッドであったのだが……。
「決まりだな。それならば、俺も行こう」
「ちょっ！」
自らの主君の言葉に思わず絶句した。
もちろん、キースウッドとて、ミーアに好感を抱いている。彼女のために何かをするのはやぶさかではないし、シオンの許可さえもらえれば、自分自身が同行してもいいとすら思っていた。
だからこそ、ミーアに情報を持ってきたわけだし、力を貸す気満々であるとすら言っても過言ではない。大人気のミーアである。
けれど、シオン自身が危険地帯に赴くと言い出せば、反対せざるを得ない。
「シオン殿下、さすがにそれは……。ご自分のお立場をお考え下さい。あなたは、サンクランド王国の王子なんですよ」
民衆の蜂起によって、政情の乱れた国に行くなど言語道断。
基本的には自身のわがままより自国の未来を優先し、正論を重んじるシオンのこと。当然、諫言に耳を傾けてもらえると思ったのだが……。

シオンはなぜか、してやったりという笑みを浮かべて言った。
「だからこそだ、キースウッド。立場を考えればこそ、俺も同行すると言っているんだ」
「それは……、どういう意味ですか？」
「俺は、別に良き王が勇敢な者である必要はないと思っている。剣の腕で国を治めることもできはしないとも。しかし、同時に、惰弱（だじゃく）な王では大国であるサンクランドを治めることはできないとも思う。違うか？」
「いえ、お言葉の通りだと思いますが……」
否定できない正論を突き付けられて、キースウッドは実に嫌な予感がした。
こう……、どうあがいても説得されてしまいそうな……実に嫌な予感を。
「ところで、俺と同じように大国の姫君に生まれながら、学友の身を案じて危険地帯に赴かんとしている者がいる。あろうことか、その者は戦う力を持っていないにもかかわらず、だ」
シオンはおどけて肩をすくめて、
「そんな姫君の決断を目にして、俺が行くのを躊躇ったりしたら、悪評が立ちかねないと思わないか？」
「それは……」
暴論……とは言い切れない。
なにしろ、シオンは大国サンクランドの王子。
政敵には事欠かない。
彼らに対して醜聞となりえるような事態は、できうる限りなくすのは理にかなったことと言えないこともなくって……。
――反論……できないか？　くそ、仕方ない。俺が同行するのはもちろんだが、レムノ王国に潜伏してる諜報員にも連絡しておかなければなるまい。
幸いなことに、レムノ王国内にも味方はいる。大国サンクランドでは専門の機関を設け、長い期間をかけて、いくつかの国に諜報網

を敷いている。
情報戦の重要性を早い時期から認識した、サンクランド国王の先見性を表すものといえるだろう。
今回のレムノ王国における民衆蜂起の情報も、この諜報機関を通して入ってきたものだった。
すでに本国では、軍事介入をするか否かの軍議が開かれているはずだ。
――って、それでもこの時期に王子がそんな危険地帯に行くとか、冗談じゃないんだけどなぁ。ああもう！
キースウッドの頭痛の種は尽きない。
「ミーアさま、私も同行いたします」
シオンに続き、ティオーナが声を上げた。
彼女は剣術も嗜んでいる。腕前は未熟ながら、盗賊を討ち果たす程度の実力はある。というか、少なくともミーアよりは強い。
近衛を連れていけない以上、同行者としては悪くない人材だった。
ミーアは、ただ黙って、頭を深々と下げた。
彼女の厚意に甘えることにしたのだ。けれど、
「ミーアさま……、私も行きます。連れて行ってください」
最後に声を上げた人物を前に、考え込まざるを得なかった。

第一〇一話　すべての駒は盤上にそろいて……

「ミーアさま、私も……」
おずおずと、アンヌが口を開く。
ミーアは一瞬黙り込んでから、そっと目をそらした。
「残念ですが、アンヌ、あなたを連れて行くわけにはいきませんわ」
もちろん、アンヌが一緒に来てくれれば、身の回りのことをすべて引き受けてくれるので、ありがたくはある。
けれど、それでも、アンヌを同行させるわけにはいかないのだ。
理由はとても簡単なこと。
アンヌは――馬に乗れないからだ！
例えばの話である。アンヌを連れて行って、万が一危機的状況に陥ったとする。
そこに馬が何頭かいたとする。
その中でもっとも乗りやすい馬、もしくは、足の速い良い馬は、どう考えてもアンヌを後ろに乗せる人物のものになる。
恐らくキースウッドあたりになるかとは思うのだが。
二人乗りが必要であるならば、その二人に良い馬を回すことが当たり前のことである。
ただの従者ならばいざ知らず、アンヌに恩義を感じているミーアとしては、それに反対はできないし、したくない。
彼女の忠義には誠心誠意返したいミーアである。
では、逆にアンヌを連れて行かなかった場合、すなわち全員馬に乗れる状態ならばどうか？
その場合は、レディーファースト。
自分に良い馬が回ってくる可能性は極めて高い。
逃げ切れる可能性がグンとアップするというわけだ。
生き残るために最善を尽くす、ミーアの自分ファーストが冴え渡

る。
「アンヌ、あなたは馬に乗れませんわ。だから、足手まといになる可能性がとても高いんですの。これから行くところは、たぶん、すごく危ないところですから」
「ミーアさま、ですが……」
アンヌは泣きそうになっていた。
足手まといだと、突き放されたからではなかった。
わざと嫌われるような態度をとって自分と距離を置こうとしているミーアの気持ちがよくわかってしまったから。
そして事実として、自分が足手まといだから、だから連れて行ってもらえないこともわかったから。
アンヌは自分が不甲斐なくて泣きそうになっているのだ。
「ああ、泣かないで、アンヌ。大丈夫ですわ。わたくしは、必ず戻ってきますから」
アンヌを安心させるようにミーアは柔らかな笑みを浮かべた。
「ですから、あなたは残って自分のお仕事をしっかりとすること。いいですわね？」
きっと学園に帰って来たら、ホッと一息吐きたくて、お茶のいっぱいも飲みたくなるに違いない。
あるいは、疲れ果ててすぐにベッドに飛び込みたくなるかも？
あるいはお風呂に心行くまでつかりたくなるかも。
帰還したミーアの求めを忖度することも重要な職務だから、と。
その準備を怠らないように、と……。
もちろん、それは半ばは冗談で、暗く沈むアンヌに元気を出してもらいたくて言ったことだったが。
残念ながら、それを聞いてもアンヌの表情は晴れなかった。
潜入の段取りをつけるとのことで、ミーアたちが立ち去った室内。
アンヌは呆然とその場に立ち尽くしていた。
――私が、馬に乗れないから、ミーアさまの足手まといになって

しまった。
うつむくアンヌの瞳からは、ぽろぽろ、ぽろぽろ涙が零れ落ちる。
「顔をお上げなさい、アンヌさん」
突如、凛とした声に呼ばれて、アンヌははっとした。
ふと見ると、そこには静かな表情で自分を見つめるラフィーナの姿があった。
「ラフィーナ、さま……」
「こんなところで落ち込んでいる時間は、ないのではないかしら？」
「でも……、私……自分が不甲斐ないです。私が馬に乗れていれば、ミーアさまといっしょに」
「あなたは、ミーアさんのなに？」
「え？　わ、私は……ミーアさまの専属メイドで」
その答えに、ラフィーナは首を振った。
「そうではないはずでしょう。前にミーアさんがなんと言っていたか、あなたは忘れてしまったのかしら？」
ラフィーナはまっすぐにアンヌを見つめて言った。
「ミーアさんはあなたのことを、腹心だと言ったのよ。右腕だと」
その言葉に、アンヌは雷に打たれたような衝撃を受けた。
「ミーアさんは、あなたに自分の仕事をしろ、と言っていたわ。あなたにできることは、ここでうつむき、立ち尽くすことではないのではないかしら？」
「私にできること……」
「ミーアさんの腹心にしかできないことよ。きっとあるのではなくって？」
アンヌは、しばし黙り込み、それから一礼して出て行った。
その後ろ姿には、先ほどまでの弱弱しさは微塵もない。

そうして、暗躍するメイド、アンヌは動き出した。
ミーアたちが旅立った翌日、アンヌもまた学園を後にしたのだ。
自らにできること、自らにしかできないことを胸に秘めて……向

かう先はティアムーン帝国。
その彼女の忠誠は実を結び、帝国最強の駒を盤上に召喚することになるのだが。
それは少し先の話になる。

かくて、すべての駒は盤上に揃う。
レムノ王国を盤面とした陰謀劇（ゲーム）
白の女王駒たるミーアの呼びかけで集まりし仲間たち。
はたして黒の陣営に孤立した騎士（シュヴァリエ）、アベル王子を救い出すことはできるのか。
未来がどこに行き着くのか、いまだに見通せるものはいない。

第一〇二話　悲壮な祈りと乙女の吐息……

神聖ヴェールガ公国外れの町にて、フォークロード商会の馬車に移乗して三日。
馬車の荷台に身を潜めたミーアたち四人の間には、重苦しい沈黙が横たわっていた。
頬をかすかに青ざめさせて、うつむいたまま、一言もしゃべらないミーア。
乗馬用のブラウスと、動きやすい半ズボンに身を包んだミーアは、折り曲げた膝をギュッと抱きしめて、
「ふぅ……」
時折、細い溜息を吐く。
その顔を見たティオーナは、心配そうに眉をひそめる。
――ミーアさま、やっぱり心配されてるんだろうな。
危険地帯にいる思い人、アベル王子。
彼のことを思うと気が気ではないのだろう。
――なんとしてでも、ミーアさまをお守りして、アベル王子のところにお連れしないと……。
ティオーナは腰に据え付けた細身の剣をぎゅっと握りしめる。
――願わくば、アベル王子がご無事でありますように。
声に出さず、ティオーナは祈る。

一方、キースウッドは別の見方をしていた。
――やはり、ミーア姫といえど、緊張は免れないか。
彼らの向かう地、レムノ王国は危険地帯だ。
未だに全体的には治安は保たれているものの、民衆が蜂起した地域は間違いなく危険地帯といえる。

彼らが抱くレムノ王家への怒りが、そのまま他国の王族や貴族へと転化される可能性は十分に考えられる以上、こちらの身分がバレれば命の危険すらある。
それがわからないミーアではない。帝国の叡智と謳(うた)われた彼女が、そんな自明のことに気づかないはずがない。
当然、危険性に気づいていて、その上で恐怖を乗り越えて、ここにいるのだ。
――やはり、立派な方だ。頭がいいだけでなく、きちんと勇気の使いどころをご存知とは。
できることなら、自らの主であるシオンと婚儀を挙げてもらいたいものだが、などと内心で思ってしまうキースウッドだった。

さて、では実際のところ、ミーアが何を考えていたかというと……、
――う、うぅ、き、気持ち、悪い、ですわ……。
……ただ酔ってただけだった……。
ひどい馬車酔いである。
そもそもミーアは、帝室用の極めて高級な馬車でしか旅をしたことがない。
乗り心地と快適さを追求した馬車に乗りなれていた彼女は、当然、商人の荷馬車になど乗ったことはなかった。
固い木の床にお尻はジンジンと痛くなるし、ガタゴト激しい揺れに、すっかり三半規管が参っていた。
「ふぅ……、ふぅ」
時折、細く息を吐いて我慢しているが……、甘酸っぱい何かがせりあがってくるようで油断できない。
一応、自分のためについてきてくれた三人に対して、黙り込んでいるのも態度が悪いかと、話題を探してみるのだが、頭がぐるんぐるん回って、それどころではなかった。

――吐いてしまいそうで、口が開けられませんわ。
かといって、吐きそうだなどということは、まさか言えるはずもない。仮にも帝国の皇女、プライドがあるのだ。
ということで、ミーアはうつむき、必死に吐き気に耐えていた。
ちなみに、蜂起した民衆に正体がバレたら、とか、そんなことは全く気にしていなかったし、そもそも気づいていなかった。
もちろん、アベルのことは心配ではあったのだが……、それについてはできるだけ考えないようにしていた。
――大丈夫ですわ、わたくしだって、殺されるまで時間がありましたし……。間に合いますわ。
悲壮な乙女の祈りを胸に、ミーアは口元を押さえた。
――それはそうと、気持ち、悪い……。
そろそろ限界かもしれない。
「もうすぐ国境を越える。みんな、もうひと頑張りだ」
御者台に様子を見に行っていたシオンが戻ってきた。
アベル王子に会うための第一の関門が、国境だった。事前に入手した情報によれば、レムノ王国は現在厳戒態勢。
一部の商会を除き、他国からの人の出入りを厳しく制限しているとのことだった。
「当たり前の措置だろうな。内乱に乗じて、周辺国は人を送り込むだろうし。どちらかに手を貸して恩を売るか、混乱に乗じて国を乗っ取ろうとするか。特にレムノ王国は軍事強国だ。この機に軍隊の弱体化を図るなどというのは、凡百の指導者でも考えることだ」
シオンの言に、キースウッドとティオーナが頷いた。
ミーアはぼんやりその光景を眺めていた。
――ああ、帝国で革命を起こした時も、この方たちってこんな感じだったのかしら……？
「それにしても、上手くいくものだな」
「クロエ嬢の作戦がはまりましたね。それに、潜伏していた我が国の諜報部隊の策定したルートも……」

と、そこで、キースウッドが言葉を切った。
直後、御者台のほうから悲鳴のようなものがあがった。
「とっ、盗賊だぁっ！　襲ってきたぞぉっ！」
「盗賊……？」
シオンが眉をひそめ、キースウッドと視線を交わす。
「妙だな、この規模の商隊（キャラバン）に……」
フォークロード商会の商隊は、馬車十台からなる、比較的規模の大きなものだ。当然、この規模になれば私設の傭兵団も随伴している。
盗賊としては、リスクが大きすぎるはずなのだが……。
「治安が悪化しているとはいえ、気になるな」
シオンとキースウッドが同時に立ち上がった。

第一〇三話　ミーア姫、落ちる！

「ミーア姫、こっちに！」
「きゃあっ！」
突如、体を引き寄せられて、ミーアはつんのめるようにして、馬車の前方に転がる。
「うっぷ！？　なっ、何事ですのっ！？」
危うく口から出ちゃいけない物が零れ落ちそうだったぞ、この野郎！　と、文句を言おうとしたミーアだったが、顔を上げた先、鋭い表情を浮かべるシオンに言葉を失う。
彼の視線の向かう先、それを追って、ミーアもそちらに顔を向けて……。
「なっ！？」
ミーアは息を呑んだ。
馬車の荷台の幌をめくり、一人の男が入ってきた。
それは、黒装束に身を包んだ、細身の男だった。
顔まで黒い布で覆い隠した男は、四人に視線を向けてから、腰の剣を引き抜いた。
それは通常の騎士が持っているものより、少しばかり短く見えた。
「とっとっと、盗賊、ですの？」
ギラリと光る刃に、ミーアが震える声を上げた。
「やれやれ、淑女（レディー）を怯えさせるとは、あまり感心しないな」
言うが早いか、キースウッドが踏み込んだ。すでに、その手には抜かれた剣が握られている。
踏み込みと同時に放たれるのは、鋭い突き。狙うは敵の、刃物を持った方の腕だ。
それは、シオン王子にも劣らない鋭い刺突。
けれど――がいん、っと鈍い音を立てて刃が受け止められる。

と同時に、敵の反撃。強力な一撃に、キースウッドはわずかに眉をひそめながら、一歩間合いを取る――かと思いきや、再びの踏み込み！
不規則なリズムで一度、二度と斬りかかる。
けれど、敵もさるもの、キースウッドの鋭い攻撃を右に左にとそらしていく。
斬撃の応酬に、馬車の幌が無残に切り裂かれ、風でバタバタとはためいた。
「俺の攻撃を止める……か。やるなぁ。殿下、こいつただの盗賊じゃないみたいですよ」
「みたいだな。動きが素人じゃない」
シオンは厳しい顔で頷く。
「お前、何者だ？　暗殺者か何かか？」
「って、暗殺者だったら、素直に言わないのでは？　っと！」
二人のやり取りの合間にも、敵が斬りこんでくる。
一歩下がりつつ、キースウッドはそれを受け流す。それはさながら、ダンスのステップのように、流れる動作はいっそ美しささえ感じてしまいそうなほどに華麗だ。
「他人が会話をしてる時を狙うなんて、さすがに暗殺者。卑怯者だなぁ」
呆れたように、からかうように、キースウッドが鼻で笑う。
けれど、そんな態度にも特に腹を立てた様子もなく、敵はじりじりと距離を詰めてくる。
「そう簡単に間合いを詰めさせるとでも？」
今度はキースウッドが動く。
狭い荷台でも差支えのない、刺突を中心にした剣技。
止められても、即座に次の動きにつなげる完璧な攻撃は、致命傷こそ与えられないものの、相手の足止めには十分なはずで……。
「妙だな……。こいつ、かなりの手練れなのに、そんなこともわからないのか……。そうかっ！」

その時、彼の顔に焦りの表情が浮かぶ。
「殿下、気をつけて。こいつ、たぶん仲間がっ！」
その言葉の終わりを待たずに、異変は現れた。
ザクザク、と荷馬車の幌が切り開かれる音。そこから新たに二人、黒覆面が現れた。
馬車の前方から、ちょうどミーアたちを挟撃するような形だ。
――にっ、にに、逃げ場がございませんわっ！
ミーアは必死にキョロキョロと辺りを見回すが、当然のことながら、どこにも逃げ場などはない。
かといって、シオンがいくら強いとは言っても、二対一では……。
久しぶりに、命の危険をリアルに感じて、ミーアはすっかり涙目になっている。けれど、
「さして広くもないのに、挟撃とはご苦労なことだ……」
シオンは貫禄たっぷりの堂々たる態度で剣を引き抜くと、牽制するように現れた敵をにらみつけた。
放たれたのは、殺気。
それを肌で感じて、ミーアは懐かしさと同時に、
――ああ、そういえば、前の時間軸では、わたくしがあの殺気を一身に受けていたのだったかしら……。
頼もしさをも覚えていた。なにしろ、かつて脅威を覚えた力が、今は自分を守るために使われているのだ。なんだか、ついつい気持ちが大きくなってくるミーアである。
――さすが、シオン王子。これは、何とかなりそうですわっ！
きっと今までに幾人も賊を討ち取ってきたに違いありませんわ！
楽観的になって、応援でもしてやろうか、などと余裕すら生まれてきたミーアだったのだが。
「さて、どちらが栄誉に預かりたいんだ？　俺の、初めて討ち取った相手という栄誉にな」
――って、初めてだったんですのっ！？
途端に不安がぶり返してきた。

――やっ、やっぱり、もう少し安全そうな所へ……。
そうして、ずりずり、ずりずり、とミーアが安全地帯を目指して移動しようとした、まさにその時だった。
なにかに乗り上げでもしたのだろうか、馬車が大きくバウンドした。
「……へ？」
ミーアが感じたのは奇妙な浮遊感。
破れた幌に体が当たり、するり、とそこから零れ落ちるような感覚。
馬車はちょうど、国境沿いの大きな川を渡っている最中で。
目の前には湖かっ！？　と思ってしまいそうなほどに太くて、流れの激しそうな川が、しぶきをあげていて……。
「ひぃいいいいやあああああああっ！」
いささかはしたない絶叫を上げながら、ミーアが川へと落ちていく。
「くそっ、ミーア姫、今行く！」
どこか焦ったような声が追いかけてきて……。
二大大国の皇女と王子は、激流の中へと姿を消した。

第一〇四話　ミーア姫と正しい人工呼吸

浮遊感の直後、襲ってきたのは冷たい水の感触だった。
頭から川に落ちたミーアは、その水深の深さに救われて……、次の瞬間、その深さに殺されそうになる。
「あばばばば……」
そう、ミーアは……泳げないのだ。
いや、厳密に言うと泳げないかどうかは不明だった。なぜなら、ミーア、そもそも泳いだことがない。
足がつかないほど深い水に入ったことがないのだ。
川や海で泳ぐという文化は、ティアムーン帝国にはなかった。
ミーアはお風呂が好きだから、その分、水に親しんでいたといえるかもしれないが、それで泳ぐのが得意とはとても言えないわけで。
「がぼぼぼぼ……」
口から泡を吐き出しつつ、ミーアの体は激流にもみくちゃにされ、徐々に川底へと沈んでいく。
息ができずに胸が苦しくなって、目の前がチカチカし始めた。
――ああ、それに、なんだか、とっても気持ちが悪い、がぼっ……。
上も下もなく、ぐるんぐるん、目が回り、すでに馬車酔いで疲弊しきったミーアの三半規管は限界を迎えて……。
――ああ、わたくし、ここで死ぬのですわね。でも、ギロチンよりは多少マシな死に方だったのではないかしら……？　おえ……。
そう考えると、なんだか、ちょっとだけ胸の中のつかえがとれたような……、気持ち悪いのがほんの少しだけなくなったような気がして……。
後に残ったのは切ないような、甘酸っぱくて、ちょっぴり苦い後味……。

そうして、ミーアの意識は闇の中に沈んでいった。

「……ア姫、おい、返事をしろ、ミーア姫っ！」

どこか遠くで、自分を呼ぶ声。

次いで、ゆさゆさと、体が揺さぶられる感触。

ぺちぺち、と頬を叩かれる感触。

……そして、口の中にかすかに残る酸味も。

どれも、すべてが遠くて……、まるで水面越しに何かをされているような感じがした。

――うう、これ、は？　わたくしは、いったい、どうなって……？

ミーアは全精力を振り絞って、なんとか目を開けようとする。

と、すぐ目の前に、シオン王子の端整な顔が見えた。

――シオン王子？　いったいなにを？

ぼんやりと霞がかかったような思考、そこに、昔、アンヌとした話がよみがえってきた。

――ああ、そう言えば……エリスの小説に、書いてたってアンヌが言って、ましたわね。

溺れた人の息を戻すために、接吻して息を吹き込むとか、何とか……。

――こんなのイヤらしい！　って言いつつ、でもステキって思いましたっけ……。と、いうことは……あら？

ミーアは、ピンときた！

――まっ、まさか、シオン王子、わ、わたくしに、接吻（キス）を？　そっ、そんな、わたくしの初めては、アベル王子にって、思ってましたのにっ！

前世と今世を合わせて、初めての事態に、ミーアは大いに混乱した。

まさか、自分がそんな境遇に陥るなんて思っていなかったのだ。

しかも、相手が憎き仇敵であるシオン王子であるなどと……。

――ああ、アベル王子、申し訳ございません……。で、でも、ま

ぁ……、確かにこのシチュエーションはちょっぴりステキですわね。
これは、仕方ありませんわ、多少ドキドキしたとしても。これは、
そう、相手が誰であれ、ドキドキするシチュエーションですし……、
そう不可抗力ですわね、不可抗力……。
などと思い、ミーアはギュッと目を閉じた。
ついでに、口の中に水が溜まっているのもどうかと思ったので、
こっそり苦みのある水を吐き出した。
次の瞬間！　ミーアの顔が横に向けられて……。
――ん？　あら、なぜ横向きに……？
などと疑問に感じる暇もなく、唇に何かが触れて……、
――ひんっ！
ミーアが情けない悲鳴を心の中で上げた次の瞬間！
……ソレが口の中に入ってきた。
微妙に硬いそれは、ミーアの想像とはちょっぴり違って……。
――あ、あら？　これはいったい？
それは、見る間にミーアの喉奥まで入ってきて、
「おげっ！」
ロマンチックとは程遠い声を上げて、ミーアの意識は覚醒した。

※サンクランド式人工呼吸の注意点！
③　溺れた人が吐いた場合
溺れた人が吐いた場合、直ちに首を横に向けましょう。その後、
指などで異物をかき出して、口の中を綺麗にしてから、人工呼吸を
続けましょう。

……かくして、シオンのちょっぴり不慣れながらも、適切な処置
により、ミーアの初接吻（ファーストキッス）は守られたのだった。
よかったね！

涙目で、四つん這いになり、その場にひとしきり水を吐き出してから、ミーアはげっそりした顔を上げた。
「ああ、よかった。息を吹き返したか」
目の前には、いかにも安堵した表情のシオンがいた。
「し、死ぬかと思いましたわ」
「ああ、あの激流は、確かに危なかったな」
――違いますわっ！　喉の奥に指突っ込まれて、苦しかったからですわっ！　レディーになんて声出させてますのっ！
微妙に不埒な妄想にふけってしまった分、余計に恥ずかしいミーアである。
まぁ、しかし、さすがに命を救われておいてそれはないか、と思い直して、
「助けていただいて、ありがとうございました。シオン王子」
殊勝にお礼など言ってみるが、シオンの表情は優れなかった。
「お礼を言うには、少しばかり早いな……」
そう言ってあたりを見回すシオン。
その視線を追って、ミーアも改めて周囲に目を配る。
「ここは……」
「先ほど落ちた川の下流だ。以前、見た地図から推測すると、恐らくレムノ王国の北西部じゃないかと思うが……」
「ああ、レムノ王国に、入ることができたんですのね……」
「入れたは入れたんだが……」
苦虫を噛み潰したような顔で、シオンは続ける。
「位置がかなり悪い。王都からはかなりの距離があると思うし、隣国との国境を越えるには川を越えて……」
シオンの視線の先には、峻厳な山が横たわっていた。

第一〇四話　ミーア姫と正しい人工呼吸（後書き）

そろそろストックがピンチになってまいりました。
もう少ししたら、更新速度を落とさせていただきます。
詳しくはまた後日

第一〇五話　ダメな大人のお姉さん

河原にパチパチ、と火が爆ぜる。
夜の闇をぼんやりと照らし出す炎は暖かで、ミーアは思わず安堵の息を漏らした。
「とりあえず、これで風邪をひくようなことはなさそうですわね」
レムノ王国は北方の国ということはないものの、毎日熱帯夜が続くような南国ということもない。
体が冷えては体調を崩しかねない。ということで、二人は早々に焚火を起こしたのだが……。
「それにしましても、まさか火おこしができるとは思ってませんでしたわ」
「……まぁ、狩猟に行くことはあったからな。その時にいろいろと教わったんだ」
そう答えるシオンはなぜか、そっぽを向いていた。その頬はほんのり赤い。
それもそのはず、二人は濡れた服を乾かすために肌着のみになっているのだ。
シオンはなるべくミーアの方を見ないように、目を逸らしているのだった。
紳士である！
一方のミーアは、といえば、抱えた膝の上にあごを乗せたまま、シオンを眺めていた。
――あら、可愛らしい反応ですわ！
完璧超人なシオンのウブな反応にご満悦だった。
もちろんミーアとて恥ずかしくないわけではない。濡れた肌着のみの姿を異性に見られれば羞恥心だって刺激される。
けれど、そうはいってもシオンは十二、三歳の少年。対してミー

アの中身は二十歳。否、転生してから一年が経とうとしているので、二十一歳である。
大人のお姉さんなのである！
余裕というものがあるのだ。頬をほんのり赤くする完璧美少年をニマニマ眺めていられる大人の余裕というものが！
……ダメな大人のお姉さんである。
「むしろ、俺の方が驚きだった。まさか食べられる野草まで知っているとは。さすがは帝国の叡智というところなのかな」
「うふふ、別に、驚くほどのことでは、ございませんわ」
したり顔で、そんなことを言うミーア。
その態度からは余裕がにじみ出ている。
それには理由があった。何を隠そう、ミーアは森の中で一夜を過ごすという経験をすでにしているのだ。
それは、静海の森での出来事よりもさらに前、前の時間軸でのことだった。
革命軍の手から逃れるため、ミーアは森の中に隠れ潜んだのだ。その時に一緒にいたのは、頼りにならないメイドが一人きり。
――あれは辛い経験でしたわ。
飲み水の確保もできず、食べ物もなく。護衛と離れたものだから、野生の獣も恐ろしく……。
しかも、近くにはすでに追手が来ていたから、誰かに助けを求めることもかなわない状態。
早々にメイドは脱落した。
こんなことに巻き込みやがって、とミーアを罵倒しながら村へと逃げていき、ミーアは一人ぼっちになった。
夜の闇と孤独、渇きと空腹に耐えきれなくなって、近隣の村に出て行ったところで、ミーアは革命軍の手に落ちた。
――あの時と比べれば、こんなのへっちゃらですわ。
何しろ近くに川がある。飲み水の確保は容易だ。
それに、この大陸の森にどんな食べ物があるのか、ミーアはすで

に本で調べつくしていた。
ギロチンから逃れることに余念のないミーアは、今や生存術のスペシャリストといっても過言ではないだけの知識を得ているのだ。
食べられる野草、木の実……。
ひもじい思いは当分しなくても済む。さらに極めつけは、シオン王子が近くにいることだ。
――クマや狼が襲ってきたらどうしようか、とあの時は震えたりもしましたが、こいつがいれば一安心ですわ。
心を満たす安心感で思わずニコニコしてしまうミーアである。
さすがに、シオンといえど、クマや狼を相手に戦えというのは厳しいのだが……。
それをつっこむものは、ここにはいなかった。
――それにしましても、こいつがわたくしの護衛をしているだなんて、よく考えると不思議な気がしますわね。
森の方に視線をやっているシオンの、その横顔をぼんやりと眺めながらミーアは思った。
その、憎らしくなるぐらいに綺麗な顔を見ていると、なんだか、ちょっぴり意地悪がしたくなってしまって……。
「ねぇ、シオン王子、お聞きしたいことがあるのですけれど、よろしいかしら？」
ミーアは口を開いた。
「ああ、答えられることなら答えるが……」
一瞬、顔をミーアの方に向けかけて、すぐに背けるシオン。
ミーアは、シオンから視線を外さずに静かな声で言った。
「あなたは、もしもご学友であるアベル王子が、民の弾圧に加担していたら彼を斬りますの？」
「……それは」
「ラフィーナさまに負けず劣らず、あなたは高潔な方であるとお聞きしていますわ。シオン王子。そんなあなただから聞いてみたいのです。あなたは、相手が顔見知りで、友人であったとしても、もし

悪に手を染めていたら、その剣で断罪するのですか？」
それは、ミーアがずっと聞いてみたかったことだった。
前の時間軸、シオン王子とティオーナ率いる革命軍は、自分の命を奪った。
なるほど、確かに飢えた民の怒りはわかる。自分を処刑する動機も、たぶん彼らは持っていたのだと思う。
では……、はたしてシオンはどんな気持ちで自分を殺したのか？
ミーアはそれが気になっていた。

第一〇六話　激おこ！　ミーア姫！！

「ずいぶんと、突然だな。ミーア姫」
思ってもいなかった問いかけに、シオンは考え込んでしまう。
――その可能性は考えなかったが……。
迷いは一瞬、それからシオンは言った。
「もしも、アベル王子が民衆の弾圧に加担して、その剣をふるったのであれば……、そうだな、俺は彼に剣を向けなければならないかもしれない」
それは、ぶれることのないシオンの信念だった。
幼き日より大国サンクランド王国の王子として育てられた彼は、公正たれと育てられてきた。目の前で悪をなす者を放置するなど、できることではない。
けれど、
「場合によってはアベル王子を斬ることがあると、それがあなたのお考えですの？　シオン王子」
その言葉には、さすがに即答しかねた。
アベル・レムノとは、そこまで深く付き合いを持っていたわけではない。ないが、それでも、セントノエル学園での日々は、アベルを友人と呼んでも差し支えのないだけの情を、シオンの中に育んでいた。
そんなアベルを、斬ることができるのか？
そこに躊躇はないのか？
小さな迷いに心を揺らされながらも、シオンは答える。
「そうだな。そういうこともあるかもしれない」
それから、彼にしては珍しく言い訳のように付け足した。
「けれど、それは仕方がないことではないか？　アベル王子が選択したことであり、俺にはどうすることもできない」

悪をなした者に適切な裁きを与えること。公正を貫くことは、国を統べる王族としての義務だ。
それは幼き日より、シオンが教え込まれてきた自己を律するルールで……。
「仕方がない、どうすることもできない……、本当にそうかしら？」
だけどミーアは……、帝国の叡智と称される目の前の少女は、そう言った。
「違うとでも言うつもりか？」
問いかけるシオンの声は固かった。
一瞬、彼は思ったのだ。もしかすると、ミーアは恋心……私情で、アベルをかばおうとしているのではないか？　と。
だが……、
――いや、違う。
すぐさまシオンは否定する。ミーアの瞳に宿る光に気づいたから。
そこにあったのは、すがるような色でも、悲しみでもなく……。
怒り……。帝国の叡智が、シオンの言葉に怒っていた。
「あなたのお言葉は、そうならないように努めた者のみが言える言葉、そうではございませんか？　シオン王子」
貫くようなミーアの視線を受けて、シオンは息を呑んだ。
仕方なく相手を裁く。相手が悪をなしたから断罪する。
シオンにとって当たり前の、その価値観に、ミーアは疑問を呈していた。
それでは、あなたは……、仕方がないと言うあなたは……、相手が悪をなさないように、どのような努力をしたのですか？　と。
シオンは、レムノ王国の窮状を知らないわけではなかった。
夏休みの間も、レムノ王国内に潜伏した諜報員から情報を得ていて、不穏な空気は感じていた。
あるいは、自国が軍事介入することもあるかもしれないと覚悟していた。
けれど、それだけだ。ほかには何もしなかった。

民を苦しめたことを断罪する、正義の言葉を吐きながら、民が苦しまずに済むように働きかけることは一切しなかった。
そんな自分に、アベル王子を断罪する、その資格があるのか……？
シオンの心のうちに、大きな迷いが生まれつつあった。
それと同時に疑問も一つ。
――ミーア姫がアベル王子のところに向かっているのは、もしかして、ただ会いたいからではなくって……、彼が悪をなすことを防ごうというのか？
それは、すなわち……、
――まさかとは思うが、レムノ王国で起きつつある革命を止めようとでもいうのか？　そんなことが、本当に可能なのか？
黙ったまま、炎を眺めるミーア。
その静かな横顔に、シオンは畏怖（いふ）を覚えつつあった。

……まぁ、言うまでもないことだが、革命を止めるプランなどミーアにはない。
シオンの信条とか、ぶっちゃけた話、知ったこっちゃなかった！
では、何にミーアが怒っていたかというと……。
――仕方ないで片付けられたらたまりませんわっ！
これである。
なるほど、確かにあの時のティアムーン帝国は酷い状況だった。
民たちは、帝室や門閥貴族を恨む理由があったし、他国の批判も甘んじて受け入れるべきではあっただろう。
だけど……、とミーアは思うのだ。
――革命が起きたり、ギロチンにかけたりする前に、一言ぐらい注意とか、警告とか、あってもよろしいんじゃないかしらっ！
同じ学校に通っていたわけだし、せめて注意ぐらいはしてもらいたかったのだ。
君の態度、よくないよ！　とかなんとか言ってくれれば、もしかしたら、何かが変わったかもしれないではないか。

それを、手遅れになった時に颯爽とやってきて「やむを得ず断罪する！」「君自身の行いの報いだ！」なぁんて、したり顔で言われた日には腹が立ってしょうがない。

――やっぱり、こいつ嫌いですわ！

腹の中でプリプリ怒りまくるミーア。

その頭には、翌日以降のプランは一切ないのであった。

第一〇七話　ミーア姫、キノコに手を出す！

翌日、朝早くのこと。ミーアたちは川沿いに、道なき道を歩き始めた。
やみくもに森の中に分け入るよりは、水場のそばに村落が作られている可能性に賭けたのだ。
――それに、水がないのは、やっぱりちょっと怖いですわ。
前の時間軸、飲み水の不足による渇きの苦しみを知っているミーアは、そう判断して、シオンもそれに同意してくれた……のだが……。
――ちょっ、ちょっと、失敗だったかも、しれませんわ。
ぜはぜは、息を切らしながら、ミーアは早くも後悔していた。
河原は、大きな岩がゴロゴロ転がり、ミーアの体力をゴリゴリ削っていった。
いざという時のために体力をつけるようにしていたミーアであるが、それでも限度というものがある。
少女の足に、その道は少しばかり過酷すぎた。
ミーアの額からはダラダラ汗が零れ落ち、頬はほのかに赤く染まっていた。
膝ががくがくして、今にも座り込んでしまいそうだった。
「大丈夫か？　ミーア姫」
岩の上から、シオンが手を伸ばした。
その手をとって何とか岩を乗り越える。
「ありがとう、助かりますわ、シオン王子」
額の汗をぬぐいながら、ミーアはあたりを見渡した。
残念ながら、見える範囲に、村のようなものはなかった。
「それにしましても、馬車とは言いませんが、馬が欲しいところですわね」

「ああ、そうか。ミーア姫は乗馬ができるんだったな」
シオンは小さく肩をすくめてから言った。
「ただ、残念ながら野生の馬は見つけられないだろうな。オオカミぐらいならばいるかもしれないが……」
「まぁ！　シオン王子、まさか、オオカミに乗れますの！？」
そう言えば、エリスの書いていた原稿に、オオカミに乗った王子の登場人物がいたっけな、とミーアは思い出す。
そんなミーアを見て、シオンは小さく噴き出した。
「さすがにオオカミには乗れないな。ミーア姫は面白いことを言うな」
「なっ！」
微妙にムッとするミーアである。
――どうせ、わたくしは世間知らずですわ！　やっぱりイヤなヤツですわ！
けれど、さすがに怒りをぶつけるわけにもいかず、ミーアは、別方向に怒りを向けることにする。つまり、
「……それもこれも、全部、あの馬車を襲ってきた連中のせいですわ」
そのつぶやきを聞き、シオンはわずかに眉をひそめた。
「どうかなさいましたの？　シオン王子」
「いや、少しだけおかしいと思ってな」
「といいますと？」
「確かに、レムノ王国は現在、政情不安で危険地帯といえる。だから、商隊が襲われるのは不思議ではない。けれど、あの時、俺たちがまみえたのは、ただの盗賊じゃなかった」
「そういえば、暗殺者、とか言っておりましたわね」
「そう。あいつらは専門の戦闘訓練を受けた刺客だった。言うまでもないことだが、ああいう輩は、治安が悪いから湧き出るものじゃない」
「まぁ！　ではあなたは、何者かがわたくしたちの命を狙って刺客

を放ったと、そうおっしゃりたいんですの？」
シオンは肩をすくめて首を振る。
「俺たち、というか、俺か君をだろうな。まぁ、ティオーナ嬢ということもあり得るが……」
いずれにせよ、あの馬車には要人が揃っていたのだ。刺客が放たれたとしても驚くことではないのかもしれないが……。
「ですが、あの馬車にわたくしたちが乗っていることは、誰も知らないはずでは……？　どこかから情報が漏れていたということですの？」
「そう考えるのが自然だろうな。しかし……」
それっきり、シオンは黙り込んでしまった。どうやら、あの馬車の中でのことを思い出して、いろいろ考えているらしい。
一方、ミーアは、
――まぁ、こいつが考えてるなら、わたくしは別に考える必要はないかしら？
そう判断して、代わりにあたりの食べられそうなものを探し始めた。
――といっても、まさか魚を捕るわけにもいきませんし。河原に生える野草が何種類かあったかしら？　あら？　あれは……。
その時、ミーアの目にあるものが映った。
それは、河原に生える、水キノコというキノコだった。
燃え上がる炎のような形で、真っ赤で、とても綺麗だ。思わず手を伸ばしかけたミーアだったが、ふと、その脳裏を料理長の言葉がよぎった。
「姫殿下、野生の食べ物にご興味を持つのはよろしいのですが、一つだけ。キノコだけは、毒を持ったものとそうでないものとを見分けるのがとても難しいのです。玄人でないと危険なので、手を出さない方がよろしいでしょう」
「あれがキノコ、水キノコ……ですのね」
忠告を思い出し、ミーアは、伸ばそうとした手を引っ込めようと

して……。
――でも、よくよく考えると、わたくしって玄人じゃないかしら？　森での生存術とかいろいろ調べてますし……。
森の中で一夜を過ごしたことで、ミーアの中に奇妙な自信が芽生えていた。
こう、食べられるのとヤバイやつを見分けられるんじゃないか、なんて、奇妙な自信が。
「あんなに綺麗なんだから、食べられるに決まってますわ」
そうして、ミーアが手を伸ばしかけたところで、
「そいつは、やめといた方がいいな」
誰かに声をかけられて、ミーアは飛び上がった。

第一〇七話　ミーア姫、キノコに手を出す！（後書き）

やめてー！　作者のＨＰはもうゼロよ！

……えー、こんにちは、餅月です。
ついにストックが尽きました。
ということで、今週の土曜日、十日をもちまして毎日更新を終わらせていただきます。
長きにわたりお付き合いありがとうございました。
今後は、火曜日、金曜日の二回更新を目標に頑張りたいと思います。
頑張れると思います……、頑張れるだろうか？
では、失礼いたします。

第一〇八話　出会い、辺境の村へ

「ミーア、こっちだ！」
「ふぇっ？」
突然、腕を引っ張られて、ミーアはバランスを崩しかける。
が、それ以上にミーアをドキっとさせたのは、シオンが呼び捨てにしたことだった。
昨夜、王子や姫と呼び合うのは問題があるだろうということで、お互いに呼び捨てにしようと決めたのだ。
――わたくしを呼び捨てにしようだなんて、生意気ですわ！
などと、昨晩は思っていたのだが、実際に呼ばれてみると……、
――こっ、これ、すごく心臓に悪いですわ！
などと、頬を真っ赤にしたミーアが恋愛脳全開でドギマギしている間に、シオンは一歩前に出た。
ミーアを背中にかばうようにして、突如現れた男に視線を向ける。
そこに立っていたのは、豊かな髭を蓄えた大柄な男だった。一見すると、猟師かなにかに見えなくもないが……。
「……それに化けた何者か、ということもありえるか」
口の中でつぶやいて、シオンは細く息を吐く。
川に落ちた時、泳ぐのに邪魔な剣は捨ててしまっていた。もしも馬車で襲ってきた暗殺者の仲間であれば、戦うのは厳しい。
いざという時は、ミーア姫だけでも逃がそう。と、そんな風に覚悟を決めるシオンであったが、肝心の男の方は近づいてくるでもなく、ただミーアがとろうとしていた赤いキノコを指さした。
「こいつはなぁ、お嬢ちゃん、火蜥蜴茸（サラマンドレイク）といって、触っただけでも手がかぶれる毒キノコだ。食ったら大変なことになるぞ」
「まぁ！　そうなんですの？　こんなにキレイなんだから、食べられるものと思いましたわ！」

「ミーア、君……」
言いかけた言葉を飲み込んで、シオンはお腹をさすった。
昨日、食べた野草は大丈夫だったんだろうか……、帝国の叡智への信頼が一瞬揺らぎかけるシオンである。
「お前ら、ここら辺の子どもじゃねぇな？　どっから来た？」
「わたくしたちは……んむ？」
ミーアの口をふさぎ、シオンが言った。
「あなたは……、誰ですか？」
シオンは静かに男を観察していた。仕草を見ると、戦闘の訓練を受けた暗殺者には見えなかったが、油断はできない。
相手が盗賊であった場合、下手なことを言うと危害を加えられるかもしれない。
身代金のネタにされるかもしれないし、最悪、人買いに売り飛ばされるかも……。
シオンの警戒はもっともと言えた。
「うん？　おー、人に尋ねる前に自分が名乗れってか？　はは、確かにそうだな。オラぁ、この近くのドニ村ってとこで猟師をやっとるムジクってもんだ」
ほれ、と言って、ムジクは腰に括り付けていたものを持ち上げた。
それは、白黒の縞模様の入った大きなウサギだった。
「まぁ！　それは……、もしかして、それ、食べるんですの？」
「ああ、よかったら後で食うか？　結構、うめえぞ？」
「ええ、いただきますわ。実はわたくしたち、仲間と離れてしまいまして、とってもお腹が空いておりましたのよ」
――ミーア姫、少し迂闊じゃないか？
一瞬、不安を覚えるシオンだったが、すぐに自らの考えを否定する。
ミーア姫ほどの人物が、この程度の危険を理解できないわけがない。先ほどはキノコでやらかしそうになっていたが、あれは純粋に好奇心からくる失敗だ。

自分に迫る危険の兆候を見逃すということは考えづらい。
――であれば……。
横目にミーアの顔を見る。そこには、微塵の不安も見出せなかった。
ただ静かに、男に目を向けている。
――どちらにせよ、このまま川沿いに進んでも埒が明かない、ということ、なんだろうな。
苦笑いを浮かべ、首を振る。
――なるほど、彼女の方がよっぽど覚悟が決まってるってわけか。これは、俺の方も負けていられんな。
ならば、とシオンも肚を決める。
「俺たちは、商隊の子どもです。橋のところで盗賊団に襲われて、親たちとはぐれてしまいました」
事前に決めておいた偽の身分（ダミー）を名乗る。
「おー、そうだったんか。そりゃ大変だったなぁ」
ムジクは豪快な笑みを浮かべて、
「オラたちの村はこのすぐ近くにあるんだ。よかったら来ねぇか？」
「それはとてもありがたいんですけど……、俺たち、王都に向かわないといけないんです」
「王都？　ああ、じゃあ、村のもんで行くやつがいるかどうか、探してやるよ」
ムジクを先頭に、ミーアとシオンは歩き出した。

大体、想像はつくと思うのだが……、あえて言わせていただくなら、ミーアは別に覚悟を決めていたわけではない。
森の中での生存術（サバイバル）本を読んでいたミーアは、とある記述を覚えていたのだ。
『森でとれる食材の中でも、特に美味なのはウサギ肉である。特に白黒の縞模様をした半月ウサギのスープは特筆に値する味である』
と。

――ウサギ肉……、ちょっぴり楽しみですわ！
要するに、お腹が減っていただけだった。
――べっ、別に、わたくしが食い意地が張ってるとかそういうことじゃありませんわ。こういう時ですから、きちんと栄養のあるものを食べなければいけないというだけのことですわ！
言い訳がてら付け足されるド直球の正論が、実になんともウザいミーアであった。

第一〇八話　出会い、辺境の村へ（後書き）

ちなみに、火蜥蜴茸ですが日本で言うところのカエンタケみたいなやつです。
食べて大丈夫かどうか、気になった方はググってみてください。
ではでは。

第一〇九話　ミーアが打つ！　絶品ウサギ汁に舌鼓を！

ムジクの後を追い、森の中を歩く。獣道のように曲がりくねった細い道は、川原を歩くのと同じ程度には過酷なものだった。

もはや疲労困憊のミーアであったが、かといって置いて行かれるわけにもいかない。

鬱蒼（うっそう）と茂る木々は、降り注ぐ日を遮っていて、森の中は全体的に薄暗い。

木陰から、ひょいっと得体のしれない化け物が現れるかも？　などと要らぬ想像をして、震え上がるミーアである。

別に、お化けを信じているわけではないが、なんにでも怖がれるのが小心者（チキンハート）の真骨頂。

出てくるのが幽霊でもオオカミでも、等しく飛び上がれるミーアである。

そんな、何が出てくるかわからない森に取り残されるなど、まっぴらごめんと、気合を入れて、一心に足を動かすミーアであった。

けれど、

――途中で休みを入れないとと思ったが、意外と体力があるんだな。馬術部に入ってると言っていたが、さすがはミーア姫だ。俺も負けてられないな。

ミーアの様子をうかがって、シオンは感心していた。

……完全な裏目であった。

よろよろ、よたよた、必死に歩き続けて、

「あら？　目の前にチカチカ光が瞬いてる？　とってもキレイですわ……」

などと、ミーアが訳のわからないことをつぶやき始めたところで、

「着いたぞ」

目の前を覆う木々が一気に開けた。

たどり着いたドニ村は、十軒前後の民家があるだけの、小さな村だった。
どの家も木を組んで作った粗末な作りの家だ。
――猟師や木こりが集まってできた集落、といったところか……。
ざっと村を見て、シオンは判断する。
「うちは、ほれ、あっこだよ？　あの丸い屋根の家だ」
ムジクの指さす先にあったのは、ほかの家と大差ない掘立小屋のような家だった。
「王都に行くにしても、明日になってからだんべ。今日はもう遅いから、うちに泊まっていくといい」
その言葉を聞き、シオンはホッと安堵の息を吐いた。
――今夜は、屋根のある場所で寝られそうだな。
そこで、ふとミーアの方に目を向ける。
森に狩猟に出ることもあるシオンにとっては、この手の小屋は比較的馴染みのある場所だ。けれど、大国の姫君のミーアにとってはそうではない。
もしかすると、家の造りを見て消沈しているかも……、と心配したシオンであったが……。
「ウサギはどうやって食べるんですの？　やっぱり丸焼き？」
「おお、それもうめぇんだけどよ？　今日は鍋にしようと思って、野菜も用意してたんだ」
「まぁ！　煮込み料理！　それは素晴らしいですわ！　あっ、キノコとかも入れたら……」
「あー、お嬢ちゃん、キノコは見極めが難しいから、簡単に手出したら危ねぇぞ？」
「では、食べられる物を教えていただけないかしら？　わたくし、ぜひともお料理を食べていただきたい方がいるんですの」
キラキラ瞳を輝かせながら、ミーアは料理に夢中だった。

家の様子などを気にしている様子は全くなかった。
――杞憂もいいところだな。野宿でも気にした様子はなかったし、意外とタフなのか。
シオンは苦笑いしつつも、改めてムジクの方を見た。
「ところで、大変なことになってるみたいですね」
「んー？　なにがだ？」
「内戦が起きているのですよね？」
「んー？　おお、よう知っとるなぁ。なんでもどっかの町で、そっだら下らんことで騒いでるみてぇだな」
「……くだらないこと、ですか。この辺では騒ぎになってないんですか？」
「いんにゃ？　この辺りでは聞かんねぇ。なにせ、ほれ、ここいら田舎もんばっかでよ、そんなことやってるほど暇じゃねーのよ」
がはは、と豪快な笑い声を上げるムジク。それを見て、シオンは眉をひそめる。
――報告とだいぶ違うな……。てっきり、レムノ王国全土に及ぶ革命が起きたのだと思ったんだが……。
軍備拡張のために国王の課した重税、それに耐えかねて、怒りを爆発させた住民。
そんな情報を聞かされていたのだが……。
――ここが国境沿いの僻地だから……、そういうことなのか？
微妙な情報のズレに、シオンは小さく首を傾げた。

一方のミーアも、首を傾げていた。
木のお椀にたっぷりと入ったウサギ汁を飲みながら……。
――さすがに、本に載ってただけのことはありますわ。絶品ですわ！
口の中でとろける柔らかな肉、野性味あふれるワイルドな味と、豊かな山菜の味にミーアは舌鼓を打ち、初めのうちはご満悦だった

のだが……。
ポカポカ、体が温かくなってきたところで、ふいに気づいたのだ。
「……これ、おかしいですわ」
お椀の中のウサギ汁をまじまじと観察する。
「食べるものは、普通にあるみたいですわね……」
考えてみれば、それは当たり前のことで、大陸を飢饉が襲うのは、もう何年か先の話だ。
食料は別に不足していない。
だから、不思議ではない。ないのだが……。
「……なんだか、おかしいですわ」
それは小さな違和感のようなもの……、いや、違和感とも言えないような、違和感の種のようなもの……。
けれど、奇妙に引っかかる。
「……ああ、甘いものがほしいですわ」
そんなことをつぶやきながら、ミーアはパクっとウサギ肉を口に放り込んだ。
「美味しい、けど、甘いものがほしい……」
贅沢極まりないミーアであった。

第一一〇話　奇跡への布石とアンヌの信頼

ミーアが絶品ウサギ鍋に舌鼓を打っているころ。
ティアムーン帝国に帰還を果たしたアンヌもまた動き始めていた。
旅の疲れをものともせず、彼女はルードヴィッヒに会いに行き、そこでミーアの行動を正確に、細大漏らさずに伝えた。
「ああ……」
ルードヴィッヒは、嘆くようなため息を吐いて、天を仰いだ。
「確かに、レムノ王国で、騒乱が起きているという話は聞いていたが……、まさかミーア姫殿下が……。ああ、くそっ。姫殿下のご学友がいることをすっかり忘れていた」
自分の迂闊さを呪うように、舌打ちして、ルードヴィッヒは立ち上がった。
「この状況で軍を動かせば、侵略を企図してのものだと無用な疑いを抱かれそうだな。となれば……」
本来、ミーアの身の安全を確保するために、皇女専属近衛部隊（プリンセスガード）を派遣したいところではある。
それが難しいとなれば、対案として、部隊に匹敵する人員を派遣する。
それは、すなわち……、
「それで、僕にお呼びがかかったということか」
ルードヴィッヒとアンヌの訪問を受けたディオンは、小さく肩をすくめた。
「まったく相変わらず、楽しいことやってくれるな、姫さんは」
実に愉快そうな笑みを浮かべるディオンに、ルードヴィッヒは苦い表情をする。
「笑い事じゃないぞ。俺としてはもしもミーアさまになにかあったらと気が気じゃないんだ」

「大丈夫なんじゃない？　サンクランドのシオン王子といえば、剣の天才で有名だし、僕みたいなヤバいのと出会わない限りは何とかなるよ。たぶんね」
「本来ならばそうだろうが……、少し気になることがある……」
そこで、一度言葉を切ってから、ルードヴィッヒは言った。
「レムノ王国は、革命が起こるような状態にはない」
「え……？　あの、それってどういう……？」
首を傾げるアンヌに、ルードヴィッヒは考えをまとめるように少しだけ黙って、それから続ける。
「革命には危険が伴う。参加する者は失敗すれば処刑されるわけだから、その危険を飲み込んでいでも行動せざるを得ない、そういう状況に置かれていなければ理屈に合わない」
「えーっと……」
瞳をパチクリさせるアンヌに、ディオンがニコニコ笑みを浮かべながら言った。
「つまりね、死んだほうがマシ。死ぬよりしんどい目に遭ってる人間じゃないと、命をかけて王族に逆らおうなんてしない、って話さ。死ぬよりしんどい目に遭ってる人間だったら、成功すれば現状を打破できるし、例え失敗しても死ぬだけだ」
「あ、ああ、なるほど。そして、レムノ王国は、そこまでひどい状態にないということですか？」
「我が国の諜報部の集めた情報によれば、ね……」
ミーアのために役立てるべく、着々と官吏の間に人脈を築きつつあるルードヴィッヒである。
他国のものとはいえ、内情程度であれば情報を得ることは可能だった。
「俺も少しばかり検証してみた。確かに税の引き上げによって民の不満は高まっているが……、影響が致命的になるのはまだ先のはずなんだ」
腕組みしながら、ルードヴィッヒは続ける。

「起こらないはずの革命が起こる。そこに何者かの作為を感じる」
「自然発火ではなく放火、火が起こらないはずの場所に、誰かが無理やり革命の火をつけようとしてる、か。なるほど！　確かに危険地帯だね」
相も変わらず、楽しそうなディオンである。
「だけど、それなら、逆に止めることだって……」
誰かが無理やり騒乱を作り出しているというのであれば、その犯人を捕らえればいい。
もしかしたら、ミーアならばそれができるかもしれない、と思いかけたアンヌであったが……。
「それは無理。まぁ、血が流れる前なら可能かもしれないけど」
ディオンは、小さく首を振った。
「えっと、どういう意味ですか？」
「人の死は争いを加速させて、後戻りできないようにするってことさ」
それは、人を殺してはいけません、という倫理の話ではない。
人の死が〝不可逆〟のものであるという、合理的な話だ。
不可逆であるからこそ……、後戻りできない。
「だから、ディオンさんは、ルールー族との戦端を開かなかったんですか？」
「んー、そういうわけでもないんだけどねー。でも、後々、あんまり禍根を残したくないから、あんまり犠牲が出ないようにとは思ってたよ」
それから、ディオンは苦笑いをした。
「僕が姫さんがすごいと思ったのは、ベルマン子爵の話を聞いてすぐに行動したってことだね。一つでも命が失われていたら、ああも綺麗に解決はできなかった。人の死が絡めば、争いの原因を取り除いたところで戦いは終わらない。双方が引くに引けなくなるからね。でも、姫さんは手遅れになる前に、その危険を遠ざけた上で、おおもとの原因を取り除いたんだ。見事としか言いようがないね」

「ミーアさま……」
アンヌは遠い地にいる自らの主に思いをはせる。
「まぁ、だから、もしも姫さんが今回の事態を上手く片付けようと思ったら、レムノ王国軍にしろ、革命軍にしろ、一人の死者を出すことなく争いの原因を排除する必要があるわけなんだけど……どう考えても無理でしょ？　それ」
ルードヴィッヒも、ディオンも、とてもではないがそんなことが起こるとは思っていなかった。
けれど、ただ一人、アンヌだけは……。
「それでも、ミーアさまなら……」
そう、小さくつぶやくのだった。
翌日、ディオンとルードヴィッヒ、それにアンヌの三人はレムノ王国に旅立った。

図らずもミーアが蒔いてしまっていた奇跡の種が、革命の放火犯の内で萌芽し、どのような花を咲かせるのか……。
今はまだ誰も知らない。

第百十一話　出撃！　恐怖の金剛歩兵団！

二日間、村で疲れを癒した二人は、近隣の町に行くという商人を紹介してもらい、村を後にした。
「気を付けるんだぞー！」
大きな声で叫ぶムジクに手を振り返すミーア。
「すっかりお世話になってしまいましたわね。お礼ができないで心苦しいですわ」
そうつぶやきながら、シオンの方を見る。っと、
「キースウッドたちが無事ならばいいんだが……」
シオンが小さくつぶやいた。わずかばかり、不安げな彼の様子にミーアは首を傾げかけて……、思い出す。
――そうか、そういえば、そうでしたわね……。
自分たちが川に落ちた原因、それは馬車を暗殺者に襲われたからだった。
あの後、馬車がどうなったのか、キースウッドとティオーナが無事なのかはわからないのだ。
――あら？　でも、別にあの二人に何があっても、そんなに問題ないんじゃないかしら？
なにしろ、仇敵二人組である。けれど、
――まぁ、でも、無事を祈ってあげようかしら……？
ミーアは思い直す。
恐らくキースウッドはシオンにとって大切な人間なのだろう。
自分にとっての忠臣アンヌと同じように。
――こいつにも、人間らしいところがあるんですのね。ちょっと意外でしたわね。
その殊勝さに免じて、無事を祈ってやらないでもない。
――フォークロード商会の馬車になにかあったら、クロエに申し

訳ありませんし、御者さんのついでで、ぐらいには無事をお祈りしてさしあげますわ。キースウッドさんには、サンドイッチの時に少しとはいえ、お世話になりましたし。ティオーナさんにも……。
「……あの連中に襲われたら、俺一人では、厳しいだろうからな」
ふいに、シオンのつぶやきが耳に届く。
「えーと、つかぬ事をお聞きしますが、厳しいというのは、どういう意味ですの？」
「……君だけでも無事に逃がすよう、努力だけはさせてもらう」
――キースウッドさん！　どうかご無事でいてくださいませっ！
ミーアは、ここ最近で二番目に気合の入った祈りをささげた。

「それにしても、この辺りは平和そうですわね」
森を出て街道を歩くこと半日。その間、特に大きなトラブルはなかった。
いかにも田舎といったのどかな風景の中、道行く人々は、国内で紛争が起こっているとは信じられないほどにのんきな顔をしている。
「ここいら辺は盗賊とかも出ないし、うちら商人には商売がやりやすい場所なんだよ」
「……でも、内戦が起きてるんですよね？」
「ここらじゃ関係ないねぇ。ドノヴァン伯爵領の町で暴動が起きたって話は聞いたけど。なんでも、反乱を治めるために、精兵の金剛歩兵団を出したって噂だ」
「金剛歩兵団だと？　それでは、戦いにならない。一方的な虐殺になるぞ」
シオンは呆れたようにつぶやいた。
「金剛歩兵団……って、なんなんですの？」
首を傾げるミーアに、シオンは苦々しげに答えた。
「国王が直々に編成した精鋭部隊だ」

金剛歩兵団、それは、現レムノ国王の大号令により、生み出された部隊だった。
「一騎当千の兵のみで構成された最強の重装歩兵団を！」
そんな王の求めに応じて、人員集めが始まったのは十年前のこと。
身分は問わず、国籍も問わず、罪歴すら問わず……。
国内外、様々な場所から巨躯の持ち主を見つけては、厳しい選抜試験を課し、それに合格した者に徹底した軍事鍛錬を施す。
そうして生まれるのは、巨躯の英傑のみによる恐るべき歩兵団だ。
「聞くところによれば、全身金属の鎧をまとい、巨大な斧を片手で軽々と振るえるほどの剛の者たちだとか……」
深刻そうな口調のシオンとは対照的に、ミーアは、その夢のような兵団に瞳をキラキラさせていた。
――それ……、すっごく強そうですわっ！
基本的に、ミーアは大男が嫌いではない。
料理長や、ディオンのところの副隊長など、なぜかミーアは大男との相性が良いのだ。
――わたくしの近衛にも、何人かスカウトできないかしら？

「……被害の大きさは、想像を絶するだろうな」
革命軍とはいえ、この国の民だ。
それも、重税に耐えかねて立ち上がった人々なのだ。
その弾圧のために、容赦なく強力な戦力を当てた国王に、シオンはかすかな怒りを覚える。
確かに、王権を守るためには反乱を厳しくたたく必要があるのはわかる。
味方の部隊の被害が出ないよう、敵よりも強い兵力をもってあたらなければならないことも、理解はできる。
けれど、それでも限度がある。

金剛歩兵団のような強力な武力を向けるべき相手は、同じく、訓練を受けた他国の正規軍であるべきだ。
しかも、シオンの記憶では、これは彼らの初陣だ。
手柄を立てるため、士気は相当に高いはず。
……それがわからないはずがないのに、なぜだろう、ミーアは先ほどから上機嫌に微笑みを浮かべていた。
不審に思いつつも、商人に話を振ったシオンは、すぐに、その理由を知ることになる。
「それで、被害はどのぐらい出ているのですか？」
「俺が聞いた話だと、まだ出てないみたいだぞ」
「……は？」
「まだ、一度も矛を交えてないって話だ。ほら、なにせ奴ら、金剛石（ダイヤモンド）の兵団だからさ」
商人の一言で、シオンは何が起きているのかを察し……、その背筋を戦慄が駆け抜けた。
――ま……、まさか、ミーア姫はそれすらも読み切って、だから笑っていたというのか？
事態は、あらゆる者にとって、想定外の方向に転がっていた。

第百十二話　策謀家は混乱した！

――どうしてこうなった！？

その男、レムノ王国では、グレアムと名乗っている男は焦燥の極みにあった。

帝国に潜伏中の仲間からの連絡。

帝国への破壊工作の失敗と、それに伴い、レムノ王国への計画を早めよという指示。

――冗談ではない！

本来、レムノ王国を革命の騒乱の中に追い落とす計画は、帝国が滅びた後に動き出すはずのものだった。

少なくとも十年以上の時を経て、国土を荒廃させ、権力を腐敗させ……。醸成された腐葉土に多くの民の血を注ぎ、ようやく革命の内乱を萌芽させる。

そうして、その実りを得る、そのはずだったのだ。

それを今すぐにやれなど、無茶が過ぎるというもの。

――だが、やるしかない。やるしかないのだ。

今すぐにでも動き出さなければ、企てを帝国の叡智に潰される。せっかく王政府に潜り込んだ自分も、革命派に潜入している仲間も。いずれ根付いてこの国を枯死させるはずだったすべての種が、根こそぎ一掃されてしまう。

彼は焦っていた。

いったい、なにが彼をこんなにも追い詰めたのか？

それは、夏休みに入ってから密かに始まった……そう、ミーアとアベルとの「文通」だった。

グレアムと彼の仲間は、王国政府のかなり深い部分にまで食い込んでいた。

正式な親書ならばともかく、王子と皇女の私的な手紙であれば中

身を確認することなど容易い。
そうして文面を確認した彼らは、首をひねった。
そこに書かれていたのは、他愛ない、そう、実に他愛ない恋文だった。
いや、恋文以前の、こう、甘酸っぱい、何かだったのだ……。
それを確認した彼らはひとまずの安心を得た……わけがない。
彼らは一層深刻な疑問に囚われたのだ。
「あのミーア姫が、こんな他愛もない恋文など送るだろうか？」
それも、これほど頻繁に、である。普通の少女であればいざ知らず、相手は帝国の叡智だ。
そこに書かれているものが、普通の恋文であるなど、とても信じられなかった。
彼らは躍起になって、その文に含まれる暗号を探した。
しかしながら、いくら分析しても、それはただの恋文なのだ。
あぶり出しなどの方法も考えられるが、さすがに、それを試してみるわけにもいかない。
自分たちの正体が露見して、レムノ王国に浸透してきた労力が無駄になってしまう。
それで何も見つからなかったら悲惨なこと極まりない。
さらに、アベル王子の送ったプレゼントが、彼らの混乱に拍車をかけた。はたして、年頃の少女に馬用の洗髪薬などプレゼントするだろうか？
これは騎兵をどうにかするとか、早馬を用意するとか、何か意味があることなのではないか？　あるいは、この洗髪薬をかけると文字が浮かび上がるとか？
そんなことまで考えてしまう始末である。
彼らが、セントノエルに潜む協力者から、二人が馬術部であること、割とイチャイチャしていたことを聞いていれば、その判断は変わったかもしれないが……。
いずれにせよ、彼らは二人が何をやり取りしているのか、まった

くわからなかった。
「いや、だが少なくとも、これは一つのことを明確に物語っていることだけはわかる」
それは極めて秘匿性の高い情報を、ミーア姫がアベル王子とやり取りしているということ。
そして、そのミーア姫こそが、綿密に長い年月をかけて計画されていた帝国崩壊の企みを、完全無欠に打ち砕いた人物なのだ。
「今やらなければ……、動き出さねばならない。そうしなければ、帝国の叡智にすべての企てを潰される」
なにかに追い立てられるようにして、彼らは動き出した。

計画の第一段階は、民衆の代弁者、擁護者を拉致、あるいは暗殺することだった。
ティアムーン帝国においては、ルドルフォン辺土伯が担うはずだった役割は、レムノ王国においては、良識派として知られる宰相ダサエフ・ドノヴァン伯が担うことになった。
この年、六十歳を迎える老練の政治家は良心的な人として知られ、先日来、国王によって発令された軍備増強と、それに伴う税の引き上げにも反対していた。
そのドノヴァン卿を拉致し、同時に国王が自らに逆らった老政治家を監禁したという噂を流す。
その後、前もって目をつけておいた王国政府に不満を持つ者たちを焚きつけて蜂起を促すのだ。
はじめは、王国政府の転覆などという大それたものを目標にする必要はない。
「自分たちの大切な領主を取り返すため。代弁者を取り返すため」
そんな大義名分を与えた上で、人々を扇動し、ドノヴァン伯の地方都市を占拠させる。
当然、レムノ王国は、乱を治めるために軍隊を派遣するだろう。

そこでの戦いで、革命派が勝てば簡単だ。戦果を高々と誇り、各地の民衆に反乱軍に入るように訴えればいい。
逆に王国軍が勝った場合には、酷い弾圧を行った王国政府を糾弾すればいい。
王国各地に憎悪が醸成されていれば、自然と革命の火は飛び火し、各地で延焼を始める。
そうして、計画の第二段階、すなわち、町の占拠までは実に上手く行った。
「……いや、本当に上手く行ったのだろうか？」
グレアムは、仲間からの報告書を見て、微かな違和感を覚えた。
「政府施設を無血開城……、戦うことなく、守備兵を武装解除……、理想的な展開だが……」
何かが……、何かが間違っているような……。
自分たちが、何者かの手の平の上で踊っているような気がしてならなかった。

第百十三話　金剛石（ダイアモンド）の兵士たち（前書き）

本日で、毎日投稿を終わりにいたします。
長らくおつきあいいただきありがとうございました。
来週から、火曜日、金曜日の週二回投稿で頑張るつもりです……、
頑張れるだろうか……？
引き続きミーアの活躍を楽しみにしていただけると幸いです。

第百十三話　金剛石（ダイアモンド）の兵士たち

政府施設を無血開城、戦闘に及ぶことなく、町の守備兵を武装解除。

それは、革命派の主導部に指示していた理想的な形だった。

レムノ王国の地方都市の守備軍は、ほとんどがその町出身の者で構成されている。

敵国が攻めてきた際には守備軍で遅滞戦闘を行うとともに、王国軍中央即応部隊を直ちに派遣して防衛するというのが、基本的な戦術構想だ。

王都から派遣された兵を守備軍とした場合、劣勢に立たされれば逃亡する恐れがある。逃亡はしないまでも、士気は高くなりようがない。

けれど、そこが自分の故郷で、愛する家族がいる場所であったとするならば、死に物狂いで戦うに違いない。

そのような考えから造られた体制ではあるのだが、これは逆に民衆蜂起に対してはもろさを見せる。

重税により、あるいは飢餓により、身内である町民が苦しんでいることを知っていて、その彼らが不平を訴えて立ち上がる時、果たして、守備兵は剣を向けるものだろうか？

相手が苦しんでいる家族で、友人で、兄弟なのに？

愛する者を苦しめる王侯貴族を守るために、愛する者たちに剣を向ける？

それは、大いなる矛盾だ。

ゆえに、守備兵たちは剣をとって反乱軍に加わる。愛する友人たちとともに戦おうとする可能性が非常に高い。

守備兵は後々、反乱軍の戦力になる可能性が非常に高い者たちといえるだろう。

だから、できるだけ殺さず、ケガも負わせずに捕獲したい。
そして、言うまでもないことながら味方もあまり被害を出したくない。
消耗戦となれば、非正規軍である反乱軍のほうが不利なのは自明の理である。
そのような事情を鑑みての無血開城である。
革命派の指導者たちはまさに、グレアムらの指示を忠実に守ったと言えるのかもしれないが……。
「あの計画は、全部、重税と国民の疲弊が前提になっていたのだが……」
グレアムは、苦虫を噛み潰したような顔をする。
そもそもの、前提が狂っている以上、計画が想定通りに動くはずもない。
重税により、飢えで愛するものを失ったわけでもなく、王権への憎悪は醸成されるに至らず……。若干の不満がくすぶっているのみの現状で、一滴の血も流れない無血開城……。
「……茶番だな。茶番以外の何物でもない。何たるざまだ」
報告書によれば、決起した革命派の連中は、まるでお祭り気分だった。
いっそ町に派遣された王国政府の人間を惨殺したり、守備兵を皆殺しにしたりしてくれればよかったのだが……、当然のことながら、そんなことをするほどの怒りも憎悪もない。
血なまぐさい騒乱を引き起こし、王権を覆すほどの破壊力を生み出すためには、憎悪という熱量が圧倒的に足りていないのだ。
鎮圧に出てくるレムノ王国軍も、少し目端が利く指揮官が反乱軍のありさまを見れば呆れて解散を命じるか、説得に出るだろう。
このままでは、王国全土に燃え広がらないどころか、町一つの騒乱程度で鎮火されてしまう勢いだ。
「だが、まだだ。挽回のチャンスはまだある……」
大切なことは、反乱軍を徹底的に残酷に痛めつけ、民衆に王国政

府への憎悪を植え付けることだ。
そこまで考えた時、グレアムの頭に、帝国の静海の森の出来事が思い浮かんだ。
かの帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンが起こした奇跡。
熟練指揮官が開戦を止めている内に、ミーア姫がやってきて、強引に軍を撤退させて緊張を緩和。
さらに、少女らしからぬ勇気を奮い、ルールー族族長のもとに少ない手勢で乗り込み直談判。
なんの禍根もなく、すんなりと解決してしまったというあの一件である。
「あのようなことは、そう簡単に起こらないだろうが……」
重要なことは、確実に戦闘を起こすこと。
身内が殺されれば、少しばかりの言葉など、耳に入りようもない。
いかに、帝国の叡智が暗躍しようとも、このまま平穏に元通り、などという奇跡は起こらない。否、起こさせない。
同じ過ちは二度と犯さない。
そうして、グレアムが目を付けたのが金剛歩兵団だった。
民衆を虐殺する兵力、敵の状況を見極められるほどの経験を持たず、何よりも手柄が欲しい初陣の部隊。
うってつけだった。
王を交えた軍議の場で、グレアムは満を持して口を開く。

「反乱軍などという不逞な輩を打つのに、王の剣、金剛歩兵団以上に相応しい者がおりましょうか？」
グレアムの発言に、軍議の場は一瞬騒然となった。けれど、すぐに、
「それは素晴らしい」
「確かに、その通りだ」
賛成の声が上がる。

「国王陛下の誉れある金剛歩兵団の初陣ですな！」
それに満足げに頷き、レムノ国王は言う。
「では、金剛歩兵団長ゴリアルよ、特別にお前に命ずる。見事、革命軍を僭称する不逞な輩どもを蹴散らして参れ！」
「御意！」
国王直々の命令に、ゴリアルの心は沸き立った。
「必ずや、反乱軍の者共の首を取り、陛下のもとに参上仕ります」
「うむ、戦働き、期待しておるぞ……ところでな、ゴリアル」
「はっ！」
ちょいちょい、と手で、ゴリアルを呼ぶ国王。
すすす、っと音もなく国王のもとに行き、許しを得て顔を寄せるゴリアル。
「おぬしも知っている通り、金剛歩兵団は十年の歳月を経て、探し、鍛え上げた余の自慢の精兵部隊だ」
「お褒めにあずかり光栄です、陛下」
その言葉に、ゴリアルの目頭が熱くなる。
そこまでの信頼を王が寄せているのだと思うと、必ずやその信頼に報いたいと、体は自然と武者震いを始める。のだが……。
「うむ……、そういうわけだからな、ゴリアルよ。一兵も損なうことなく、見事に戦功をあげてこい」
「はっ！　……はっ？」
一瞬、聞き間違いかと思い、ゴリアルは首を傾げた。
「一兵も損なうことなくだぞ。かすり傷ぐらいは構わぬが、命を落とすことはもちろん、戦士として再起がかなわぬような傷は決して負わせるでないぞ」
続く国王のその言葉に、ゴリアルは唖然とした。

それは、少し考えればわかることだ。
例えば金剛石（ダイヤモンド）でできた鎧があったとする。
とても固くて軽く、性能的には文句のつけようがないその鎧だが、

では、それを戦場に着ていくだろうか？
たぶん……着ていかない。
なぜなら高価過ぎるから。
傷つけたくないから。
価値が下がるから。
……もっとぶっちゃけて言ってしまうと、もったいないから。

では、ここに、世にも稀なる巨躯の持ち主のみを選抜し、長い年月をかけて鍛え上げた、とてもとても高級な！　金剛石の歩兵団が存在する。
そんな彼らを地方の反乱に派遣して、一兵でも損なう危険性を冒すことができるだろうか？
一兵に金貨数千枚の価値があるのに？

ゴリアルは、どうすれば兵を損なわずに敵を皆殺しにできるのか、知恵を尽くさなければならなかった。
戦場において、そんな方法など、決して存在しないというのに……。

第百十三話　金剛石（ダイアモンド）の兵士たち（後書き）

ちなみに、この金剛歩兵団なのですが「そんなバカなー！」と思われるかもしれませんが、実は元ネタがあります。
巨人ばかりを集めた最強の兵団だけど、実戦経験がものすごーく薄いという……。
でも、そりゃーそうです、だってもったいないのだもの。
元ネタの方だと、そもそも大きい男性と大きい女性をさらってきて、結婚させて子どもを産ませて、という交配のようなことまでやっております。さすがにそこまでやるとちょっと生々しいので、レムノ王国ではやっていませんが、確かにそこまでして育てた兵士を簡単に戦場で失うのはもったいないですよね。

第百十四話　ミーア姫、誘拐事件！

――金剛歩兵団が兵を惜しんで、戦いを躊躇うことは十分に理解できるが……。その状況を一瞬で看破するなんて、さすがにミーア姫だな……。

感心してミーアの方を見るシオン。

ミーアは、切れ者の風格など微塵も感じさせることのない、ぽやーっとした笑みを浮かべて、商人に手を振っていた。

その顔はどちらかというと……、いや、あえて言うまい。

――知恵持つ獅子は鋭き爪を隠すと聞くが……。なるほど、この普段の何も考えていなさそうな姿も演技ということか……。

「お世話になりましたわ。ムジクさんにもよろしくお伝えくださいな」

「おー、お嬢ちゃんたちも、仲間と会えるといいな」

ぶんぶんぶんっと手を振った後、ミーアはシオンの方を見た。

「ところで、こうして町まで出てきたのはいいのですけど、これからどうしますの？」

きょとりん、と首を傾げるミーア。

そのいかにも「なーんも考えずに聞いてますー」という姿に、わかっていても騙されそうになるシオンである。

「そうだな……、とりあえず、キースウッドたちと合流したい」

事前に、はぐれた際の合流場所は決まっていた。

先ほど商人に聞いたところ、合流場所までは、ここから馬車で半日ほどの距離だという。

「幸い、乗り合い馬車が定期的に出ていると言うが……」

苦々しげにつぶやくシオンを見て、ミーアは、ふいに悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「あら、シオン、あなた、もしかして持ち合わせが？」

「金の類はすべてキースウッドに預けてある」
「まぁ！」
口に手を当てて、むふふ、っと笑ってから、
「もう、仕方ありませんわね」
偉そうに言うと、ミーアはその場にしゃがみこんだ。
それから、おもむろに白い靴下をおろす。
露になった白く幼いふくらはぎには、銀色に輝く硬貨が、片足につき銀貨が三枚ずつ張り付いていた。
「それは……？」
「もしもの時の備えですわ。靴の中というのも考えたのですけれど、歩きづらくていけませんでしたわ」
前に試してみたが、危うくマメができてしまいそうになった。
「だが、なんでそんなところに？」
「むろん、簡単に盗られないために決まってますわ！」
それは、過去の経験に基づいた、ミーアなりの備えだった。
前の時間軸、革命軍の手に落ちたミーアは、身に着けていた金目のものはすべて奪い取られてしまったのだ。
まさか、こっそり隠していた金貨袋の場所を、
「もっ、もう何も持ってませんわ！　ホントですわっ！」
「嘘つけ、ちょっとそこで跳んでみろ！」
『チャリチャリ！』
「音がするぞ。お前、まだ持ってるだろっ！　いいから全部出せっ！」
などというやり取りで見つけられてしまうとは、思ってもみなかったのだ。
――まさか、あんな方法があるとは……。勉強になりましたけれど……、すっごくムカつきましたわ！
あの、人を小ばかにするような、革命軍の兵士の嫌らしげな笑み……思い出すだけで腹が立った。
――ともかく、同じ轍は踏みませんわ！　音の出ない場所で、あ

の時、探られなかった場所、しかもすぐに取り出せる場所となると、やっぱり靴下の中がよろしいんじゃないかしら？
なーんにも考えていないように見えても、少しは考えているミーアである。そう、少しは……。
しかも、革命が起きた時にスムーズに逃げられるように周辺諸国の硬貨を集めていたのも、今回は幸いした。
きちんと、レムノ王国の銀貨を用意してきているのだ。
ルードヴィッヒあたりは、ミーアが各国の金貨の金の含有率を調べ始めて、周辺諸国の事情を探っているのでは、などとあらぬ想像をして、勝手に慄いていたりするのだが……。
そんなの知ったこっちゃないミーアである。
――本当は、ムジクさんにもお礼に一枚ぐらいお渡ししたかったんですけれど……。
ミーアは手のひらの上の銀貨を大切そうに撫でてから、
「これで馬車に乗ることはできるかしら？」
「さすがに用意がいいな」
シオンはミーアの手の中にある銀貨をのぞき込んで、小さく首を傾げた。
若干、不安そうである。
「たぶんそれだけあれば大丈夫なのだろうが……」
なにしろ、大国の王子と皇女である。乗り合い馬車の相場など、わかろうはずがない。
ミーアとて、何かあって帝都を脱出する際には忠臣アンヌかルードヴィッヒが随伴している予定である。
馬車の乗車賃の相場まではさすがに調べていなかった。
「交渉は任せてもよろしいのかしら？」
「そうだな……。レディに銀貨を払わせておいて、俺の方は何もしないというのは、ちょっと格好悪いからな」
そうは言いつつも、微妙に不安げなシオンである。
普段とは違って自信なさげなその顔が、ちょっぴり可愛く感じて

しまうミーアである。
――うふふ、完璧超人のコイツでも、苦手なことってあるんですのね。
そんなことを思いつつ、御者のところに行くシオンの背中を見送っていたミーアだったのだが……。
急に、ミーアは後ろから抱き上げられた。
「はぇ？　んんぅっ！？」
次の瞬間、その口を微妙に湿った布が覆った。
手足をばたつかせるミーアだったが、直後に、漂ってきた甘い香りに、頭がポーッとなってしまって……。
「急げ、もう一人のガキが帰ってくる前に行くぞ」
ぼんやりと夢見心地ながらも、自分がひょい、っと抱えあげられたことを感じて……。
――あっ、あら、わたくし、これは、まずい……の、で、は？
「ミーアっ！？　くそっ、お前らっ！」
遠くの方、シオンの声が聞こえたような気がしたけれども……。
ミーアの意識は暗い闇の中へと落ちていった。

第百十四話　ミーア姫、誘拐事件！（後書き）

こんにちは、餅月です。いつも応援コメントありがとうございます。
ということで、火曜日更新です。
運動能力・格闘能力はからきしなミーア姫ですが、はたして無事に生き残れるのか……。
そもそも彼女をさらったのは何者か……！？
では、また金曜日にお会いできると嬉しいです。

第百十五話　ミーア姫、見破られる！

ごそごそ、体が揺すられるような感触で、ミーアは目を覚ました。
「ん……んぅ？」
ぼんやりと、目の前が霞んでいる。目をこすろうとすると……、腕が動かないことに気づく。
どうやら、後ろ手に縛られているらしく、手首に縄が食い込んで、かすかに痛みが走った。
仕方なく、瞬きを何度もして、それからもう一度辺りを見回す。
どこかの部屋……、結構広いけれど、土埃に汚れた床は、あまり横になっていたい場所ではなかった。
「こ、ここは……？」
「おっ、目が覚めたみたいだな」
頭上から声が聞こえる。
――わたくし、どうして――っ！　そうですわ、確かあの時、誰かに捕まって……。
ミーアの脳裏に、馬車で襲われた時の記憶が蘇る。
――まさか、わたくしたちを狙ったという、あいつらの仲間ですの？
一瞬、身構えるミーアだったが、目の前に現れたのは二人の少年だった。
ミーアよりは少し年上、十六、七歳といったところだろうか。そこら辺の町の中を歩いていても、不思議ではない、普通の少年たちである。
――なんか、ちょっと違うみたいですわね。
思わず拍子抜けするミーアである。
「あー、さっそくなんだけどさ、お嬢ちゃん、お金持ってない？金貨とか銀貨とか……。恰好からすると、どこぞの商家の娘さんっ

てところ？　それなら、アクセサリーとか……」
その言葉に、一瞬、前の時間軸で革命軍に捕まった時のことが頭を過る。
その場で飛び跳ねさせられて、金貨の音がしたら、ものすごーく馬鹿にした目で見られて……。
あの時の屈辱感が甦ってきた！
「そんなの持ってませんわ」
ぷいっと顔を背けて、ミーアは言った。
「ほんとかよ？　じゃあさ、そこで飛び跳ねてみろよ」
「ふふん、よろしくってよ？」
ミーアは勝ち誇ったドヤ顔でその場で飛び跳ねて見せる。当然、音は出ない。
――そんな程度で見つけられると考えてるなんて、甘いですわ。音が出るような場所に大切なものを隠しておくはずが……。
「靴か、靴下の中じゃないか？　子どもが隠す定番だし、調べてみろよ」
「なっ！」
あっさり見抜かれてしまった。しょせんは、ミーアの浅知恵である。
子どもが隠す定番などと言われてしまった屈辱感に震えるミーアをよそに、少年はミーアの靴を奪い、さらに靴下を脱がせたが……、当然そこにもない。すでに銀貨はシオンに渡してあるのだ。
「外れかー。くそー」
「まぁ、よく考えたらこんな子供に金持たさないか」
「ふふん！　だからないって言いましたわ！」
悔し紛れに言うミーアに、少年がムッとした顔で、
「このガキ、生意気だな。お前なんか、人買いに売り飛ばして……あたっ！」
すぱーんっと、突如、小気味いい音が鳴って、直後、少年たちが「いってー！」と声を上げた。

「あんたたち、そんな小さな子をからかって楽しい？」
いつの間にやら少年たちの後ろには、彼らと同い年ぐらいの少女が立っていた。
肩のあたりまで伸ばした髪を揺らしつつ、あきれ顔でため息を吐く少女。その手には、自身が履いていたであろう、使い古した靴が握られていた。
「り、リンシャ。いや、その……、ちょっと脅せば、金目のものが出てくるかなって……」
慌てて言い訳しようとする少年だったが、その頭を再び、少女リンシャが引っ叩いた。
「その子を連れて来いってのがジェムの命令でしょ？　ここの見張りはいいから、とっとと手はずを整えてきなさい」
「て、手はずって……」
「まさか、縛り上げた女の子を抱えて歩いて行くつもり？　革命派で自由に使える馬車がいくつかあるはずだから準備して。それと決行前の準備にも人手が必要でしょう？　そっちのほうも様子を見てきて」
「わかったよ。けど、逃がすなよ」
少年たちはしぶしぶといった様子で、その場を後にした。
それを見送ってから、リンシャは改めてミーアの方に目を向けた。
「それで、あなた……、いったい何者なの？」
「それは……」
その質問に、ミーアは思わず考えてしまう。
さすがに、自身の身分をしゃべることがまずいことぐらい、ミーアにだってわかっている。けれど、冷静になって考えてみると、先ほどは結構ヤバかったような気がしないではない。
――人買いに売ってやるとか、言ってましたし……。
思い出すと、ちょっぴり怖くなってきて、頭の中がぐるぐるし始める。
――どっ、どう答えるのが正解なんですの？

うつむき、考え込むミーアを見て、リンシャはため息を吐いた。
「言いたくない？　まぁ、別にいいけど……。というか、これでペラペラしゃべられても、それはそれで心配だしね……」
それから、少女は懐からナイフを取り出した。
「動かないでね」
「……はぇ？」
ごくごく唐突に、刃を向けられて、ミーアはただただポカーンと口を開けるのみ。
そんな彼女に向け、ナイフが振り下ろされて！
ぷつり……。
ミーアの腕を縛っていた縄が切り落とされた。
「え？　あ……へ？」
「ねぇ、あなたは、この革命を止められる？」
呆然と、手を握ったり閉じたりするミーアに、リンシャは真剣そのものの顔で続ける。
「もし、止めることができるなら、お願い。兄さんを助けて」
必死に懇願する人の口調で、リンシャは言った。

第百十五話　ミーア姫、見破られる！（後書き）

こんにちは、餅月です。
ということで、金曜日更新でした。
新キャラ登場ですね。はたして、物語にどのように絡んでいくのか……。
では、また火曜日にお会いできるとうれしいです。

キャラクター紹介2

○クロエ・フォークロード（12）
フォークロード商会の娘。内気な少女で、クラス内で孤立していた。黒くてもっさりした髪と珍しい眼鏡が特徴。本は好きだけど、なければ死んでしまうほどではない。休み時間、お話できる人がいたら、ちゃんと会話を楽しめる子。そう、お話できる気心の知れた人がいれば……。

ミーアの評価（前）
「……怖そうな人、ですよね。あんまりお話したくないな……」

ミーアの評価（後）
「大切な……、お友達です。ミーアさまのお持ちの本は、すごく面白くって、お話しするのがいつも楽しみなんですよ。私なんかに話しかけてくれて、すごく優しい人なんです」

○ディオン・アライア（27）
帝国軍の百人隊長。傭兵上がりでその腕を買われて士官する。帝国最強の剣士。前の時間軸、断頭台でミーアを殺したミーアの天敵。橋の上など、一対一ないし二対一で立ち回れる環境で、百人を足止めしろと言われた場合、五十人程度を殺した後、飽きて転身するタイプ。ちなみに、二百人に取り囲まれて一斉に襲われた場合、二百人＋増援五十人を道連れにする程度にはバーサーカー※逃げ道を奪って死兵にすると、被害がシャレにならないことになるので要注意！戦友にはそれなりに情をもっており、理不尽に殺されれば当然、復讐する。基本的には二刀流の使い手。

ミーアの評価（前）
「姫殿下？　ああ、もちろん殺すよ（ニッコリ！）別に仲間意識とかそんなにはないけどさ、一応は部下だった連中の仇は討ってやらないといけないしね」

ミーアの評価（後）
「姫さん？　ああ、面白い子だね。見てて飽きないよ。別に忠誠を尽くそうとは思わないけど、借りができちゃったからな。面倒なことになりそうだけど、しばらくは我が剣を預けるよ（やれやれ）」

○グレアム（３０代）
？？？？？？？国諜報部隊「？？」の特務部隊「？？」の一員。レムノ王国に潜入して諜報活動に従事している。祖国のために暗躍する。生真面目な性格で、計画通りに物事が進まないと胃が痛くなる。

ミーアの評価（前）
「大国の権力を持つに足らぬ愚かな女だ。我々の手のひらの上で踊るがいい」

ミーアの評価（後）
「恐るべきは帝国の叡智だ。まるで、すべて彼女の手のひらの上で踊らされているかのようだ」

○セロ・ルドルフォン（１０）
ティオーナ・ルドルフォンの弟。ルドルフォン辺土伯の長男。お姉ちゃんと植物が好き。将来、環境変化に強い小麦を作る。学者肌で勉強は大好き。ラフィーナの庇護のもと、研究に没頭する予定だっ

たのだが……。

ミーアの評価（前）
「姉さまをいじめたやつだ。それに父さまを殺したやつの娘……絶対に許さない」

ミーアの評価（後）
「ぼくの花をほめてくれた人……。そんなの今までは姉さましかいなかったから、すごくうれしかったな……（頬を赤くして）。それにティオーナ姉さまの大切な友達だし、ぼくも失礼なことをしないようにしないと」

○マティアス・ルーナ・ティアムーン（４８）
ティアムーン帝国皇帝。ミーアの父親。妻とは“ラブラブちゅっちゅ”だったため、亡くなった後も再婚せずにいる。家臣たちからすると、ちょっと困りもののおっさん。
「跡継ぎをもっと増やせ？　知らん！」
遅くできた子であるミーアのことが、天使に見えて仕方ない病にかかっている。最近の悩みはミーアがよそよそしいこと（パパと呼んでくれないこと。ミーア的には結構甘えているのだが……）
統治者としては可もなく不可もなく。名君ではないが暴君でもない。横暴さも一般的な権力者程度。帝国が安泰の時代に皇帝をやっていれば、少々の財政悪化ぐらいで乗り切れたのだが……。

ミーアの評価（前）
「おお、ついついミーアのお願いは聞いてしまうな……。まぁ、仕方ない。天使だからな！」

ミーアの評価（後）
「ミーアは民草にまで思いやりを注ぐのか。なんと優しい子なのだ。

きっと天使に違いない！」

キャラクター紹介2（後書き）

リクエストがあったキャラ紹介②
あとは……ほかには誰がいるだろう？
クロエの父親とか、皇帝陛下とかティオーナの父親とか……？
今気づきましたが、このお話に出てくる娘持ちの父親は親バカが多いような？　ラフィーナのお父さんもアレだし……。

百十六話　ササヤキソソノカスモノ

「革命を止める？　お兄さまを助けるって……、どういうことですの？」
縛られていた腕をさすりながら、ミーアは言った。
「時間がない。ここから出ながら話すわ。靴を履いて」
とりあえず、リンシャの言うとおりにして、外に出る。と、そこは、薄暗い路地裏だった。
「ここは……」
「地下革命派の拠点の一つよ。この辺はあんまり治安が良くないから、私から離れないで」
「わっ、わかりましたわ。ん？　革命派……？」
とりあえず、うなずきかけたミーアだったが、不意に聞き捨てならない単語が聞こえてきて、思わず眉をひそめた。
「あの、つかぬ事をお聞きしますが、もしかすると、革命派というのは、今、レムノ王国で騒乱を起こしている方たちなんですの？」
リンシャは一瞬黙ってから、
「ええ、彼らの同志よ」
小さくうなずいた。
「私の兄さんはね……、革命派を率いているの」
「率いて？　え？　あ、あなたのお兄さまが革命組織の首魁（しゅかい）なんですの？」
ついて行って大丈夫かしら？　と不安になるミーアだったが……。
「乗せられてるだけよ。兄さんは、ただ酒場で憂さを晴らすような人だもの。革命の指導者になんか、なれるわけがない」
苦々しく、吐き捨てるように言ってから、彼女は話し始めた。
もともとリンシャの家は没落した貴族だった。彼女の兄は王都で学生をしていたが、家の没落とともに田舎町に行くことを余儀なく

された。
それでも新しい地で職人になったまではよかったが、すぐに仕事の厳しさに音を上げた。
厳しい肉体労働に毎日クタクタに疲れ果てる日々。唯一の楽しみは酒場で愚痴ることだった。
ある日、そんな兄に一人の男が近づいてきた。
「いや、まったく君の言うとおり。このままでは、国は悪くなる一方だ。どうだろう？　同志を募ってみては？」
ジェムと名乗った、とても愛想のいい男の甘い言葉に誘われて、リンシャの兄は革命派の中心人物になった。
生来の口の上手さもあって、彼は徐々に人々の内に組織を築いていった。
成り行きでリンシャも、一応は革命組織の一員ということにはなっているのだけど……。
「組織なんて呼べるものじゃない。ただの不平屋の集まりよ。なのに、ジェムのやつに、みんな乗せられて……」
「……あの、ちょっとよろしいかしら？」
そこまで聞いたところで、ミーアの脳裏に危険を告げる警鐘が鳴り始める。
「どうして、わたくしに、そんな革命組織の中のこととか、話しておられますの？」
そう尋ねると、リンシャはにんまりと怖い笑みを浮かべる。
「ジェムのやつがね、言ってたのよ。あなたは革命組織にとって危険だから、絶対に捕らえろって。これって裏を返せば、あなたは革命を止めて組織を解散させることができる、その力を持ってるってことよね？」
探るように見つめてくるリンシャに、ミーアは誤魔化すように笑い返す。
「お、おほほ、買い被りも甚だしいですわ。こ、こんな子供に何ができるって言うんですの？」

「そう？　さっきあいつらに絡まれてる時も随分余裕っぽかったし、今だって落ち着き払ってるじゃない？　ただの子供とも思えないんだけど」
「う……」
確かにその通りだった。
過去の革命軍に比較して、あるいは、先日の静海の森の時に比較して……。今の状況は、正直、そこまでミーアを恐れさせるものではなかった。
目の前の少女にしろ、先ほどの少年たちにしろ、その実、ただの不良といった感じで……。
血走った目で自分に刃を突き付けてくる帝国革命軍やら、容赦なくえげつない殺気をたたきつけてくるディオン隊長に比べると、正直、微笑ましくなってくるような連中なので。
――つ、ついつい、気が抜けてしまっておりましたわ。気を引き締めなければ……。
ミーアはキリリ、と表情を整えて、それから改めて考える。
――ジェムという男は馬車でわたくしたちを襲ってきた男の仲間と考えるべきでしょうか？
馬車から落ちたミーアたちがどのあたりにいるのか、予想がつく者は彼らぐらいのものだろう。
――そして、彼らは、わたくしたちの正体に気付いている？
自分に革命を止める方法があるとも思わないのだが、少なくともそのジェムという男は、こちらの正体を知っているような気がした。
なにしろ、ミーアは帝国皇女という身分がなければ、ただの子どもに過ぎないわけで……。
――あとは……、ああ、甘いものが食べたい。
そこで、ミーアはさじを投げた。
もともと、それほど上等ではない頭は、すでに知恵熱で暖まり始めていた。
――氷菓子を所望いたしますわ！

などと、ミーアがアホなことを考え始めた時だった。
「あっ、リンシャ、てめぇっ！　手柄を独り占めするつもりだったのか！？」
怒声が響いた。先ほどの、見張りの少年が戻ってきたのだ。
「くっ……、ずいぶんと早く戻ってきたじゃない。もう、手配が済んだの？」
リンシャがこわばった顔で少年の方を睨んだ。けれど、その顔に、すぐに不審の色が浮かぶ。
なぜなら、少年が……、
「い、いやー、それが……」
などと頭をかいて、微妙に気まずそうな顔をしているからだ。
っと、次の瞬間、
「案内、ご苦労」
「ぐえっ！」
少年が、その場に崩れ落ちる。
その後ろから現れたのは、
「あっ！　シオン」
「すまない。探すのに、少してこずった。こいつがうろうろしててくれて、助かったよ」
鞘に納めたままの剣で、少年たちを殴り倒したシオン・ソール・サンクランドの姿だった。

百十六話　ササヤキソソノカスモノ（後書き）

こんにちは、餅月です。いつも応援コメントありがとうございます。
今回は、白馬の王子様が助けにやってきた！　というお話ですね。
ミーアがちゃんとヒロインやってて、よかったよかったw
ということで、それではまた金曜日にお会いできると嬉しいです。

第百十七話　仕組まれた火種

「ケガはないか？　ミーア」
「え、ええ、問題ございませんわ」
微妙にもじもじしつつ、ミーアは答えた。未だに、シオンに呼び捨てにされるのに慣れないミーアである。
「ところで、そちらのお嬢（フロイライン）さんは、どなたかな？」
ちらり、とシオンが瞳を向ける。涼やかなその眼には、けれど、明確な敵意の色がうかがえた。
「え、や、あ、あの……」
その迫力に、リンシャは気圧されたように言いよどむ。
それを見たミーアは……、ちょっとだけ同情する。
「ちょっとシオン、あなたはただでさえ迫力があるのですから、そんな風に睨んだらかわいそうですわ」
ミーアは、シオンからリンシャを守るように一歩前に出る。
「この方はリンシャ。地下革命組織の方だったのですが、わたくしを助けてくださいましたの。いろいろ情報も聞くことができましたわ。革命派の首魁のこととか、彼女のお兄様なんですけれど……、あとは、いろいろと興味深いお話を聞かせていただきましたわ。いろいろと……」
まぁ、それが何に関係するのかはよくわからないのですけど……と心の中で付け足すミーア。
ところで……、おわかりいただけただろうか？
ミーアはあくまでもありのまま起こったことを話しただけである。嘘も誇張もそこにはない。何も考えずにありのままをしゃべっただけである。
しかしながら、シオンには、このように聞こえた。
「この短時間で革命派の情報を持っている人間を味方につけた」と。

――相変わらず、底が知れない知恵といったところか。
ありえないこととはわかっているのだが、もしかして情報を得るために、わざと誘拐されたのではないか？　とまで疑ってしまうシオンである。
――もし、俺だったら、どうだったろうな。
同時に、そう考えざるを得ない。
足元で気絶している少年のことを見ると、恐らく、脱出することは難しくはない。
――だが、機転を利かせて仲間に引き入れることは恐らく不可能だろうな。
ただ脱出するだけでなく、囚われたという状況を敵組織の内情を知る機会とする。そのようなことは、到底可能とは思えない。
――というか、そんなこと考えつきもしないだろうな。ミーア姫以外であれば。
もちろん、言うまでもないことではあるが、そんなことミーアだって考えついてはいなかった。
ミーアがやっていたのは、見張りの少年相手に、ちょっとばかしイキっていたことぐらいである。
≪イキリ皇女さま≫なのである！
まぁ……、そのしょーもない行動自体も失敗したので、もはや目も当てられないのだが……。
それはさておき、
「味方、ということでよろしいんですわよね？」
ミーアはリンシャの方をうかがう。リンシャは慎重な態度でうなずいて、
「あなたが革命を止めてくれるのなら、協力するわ」
「革命を止める……か。だが、そのためにはレムノ国王と会う必要があるだろうな。重税をなんとかしないとならないだろうな」
そもそも、民衆が不満を爆発させている原因は、増税による負担が増えたことに由来する。

そのように聞いていたシオンは、解決は容易ではないと難しい顔をしていたのだが……。
「いえ、そうじゃないわ。そもそも今、兄さんたちが訴えているのは、税を下げることじゃないの」
リンシャは、小さく首を振ってから言った。
「王政府に囚われているダサエフ・ドノヴァンさまを解放してもらうことよ」
「……それは、どういう意味だ？」
怪訝そうに、シオンが首を傾げた。
「国王陛下は、宰相であるドノヴァンさまの口を封じるために、どこかに監禁しているらしいの。兄さんたちは、ドノヴァンさまを助け出すために立ち上がったのよ」
「諫言を告げてくれる臣下を牢に入れたのか……。愚かな」
出発前にラフィーナとした会話が思い出される。
「何かがあった……」と、ラフィーナは言っていたが……。なるほど、これでは反乱がおきても不思議ではない。
「勇を持ち、主君の誤りを諫める者こそ忠臣だ。それに、民を代弁するような立場の者を害すればどうなるのか、わからなかったというのか……」
シオンの横顔には、わずかながら怒りの色が見え隠れしていた。
その時、ふいにミーアの脳裏に声が響いたような気がした。
それは前の時間軸……、囚われのミーアに面会した時のこと……。
「ルドルフォン辺土伯は、君たち帝室や、大貴族が見捨てた民に食料を与えた人物だ。民草の恩人だ。そのような者を殺せば、どんな事態を招くのか、考えなかったのか？」
どこか呆れた様子でシオンが肩をすくめた。
「君たちは、そんな簡単なことも考えてなかったのか？」
あの時、ミーアは何も言い返すことができなかった。
事実として、ルドルフォン辺土伯は処刑されていて、それに怒った民衆の手によって、革命はなったからだ。

だけど、だけれど……。
本当は、ミーアは言いたかった。
したり顔で、偉そうに言うシオンにぶつけてやりたかったのだ。
そんな馬鹿な話はない、と。
――お父様が、そんなことをしたとは思えませんわ。
ミーアの父親である皇帝は人気取りのために、臣下を処刑したりはしない。なにせ、興味がないのだから。
逆説的に、民衆の人気を気にするような人ならば、あそこまで帝国が悪化することもなかったのだが、それはさておき……。
あの時に体を襲った、何とも言えないねっとりとしたような違和感。
飲み込んだ反論、言いたかった言葉を、ミーアは満を持して言った。
「……それ、なんだかちょっとおかしいですわ」
けれど、続く言葉は、新たなる闖入者によってかき消されてしまった。

第百十七話　仕組まれた火種（後書き）

こんにちは、餅月です。いつも応援ありがとうございます。
ということで、第百十七話でした。
ところで、最近の〝なろう〟アニメ化作品には、みんな「イキリ〇〇」の称号が与えられるようですね。
……ふむ、つまり、アニメ化するには、イキリを入れる必要があるのか！
ということで、流れに乗っかってみました……。お楽しみいただけたら嬉しいです。
では、また来週お会いできると幸いです。

第百十八話　ミーア姫、切り替えていく

「たったっ、たいへんだ！　えっ？」
どうやら先ほどのもう一人の少年が戻ってきたらしい。
自由になったミーアと、剣を下げたシオンを見て悲鳴を上げた少年は、踵（きびす）を返してその場から逃げ出そうとしたが……。
「おい、そんなに焦ることはないだろう。少し話につきあってくれ」
呆気なくシオンに殴り倒された。さらに、抜身の剣を突き付けられて、ひやぁっ！　っと情けない悲鳴を上げた。
――ちょっとだけ可哀そうですわね……。
かつての自分と同じような醜態（しゅうたい）を晒す少年に、ミーアはちょっぴり同情しそうになって……、
――あ！　でも、こいつ、さっきわたくしに、ジャンプしてみろ、とか言ってたやつですわね。ざまぁみろ！　ですわっ！
すぐに気持ちを切り替えた。
切り替えが早いのがミーアの良いところである。
その場に正座させられる少年をニマニマ笑いながら見ていると、その前にリンシャが膝をついた。
「どういうこと？　この騒ぎはなに？」
「リンシャ！　こりゃいったい、どうなって……」
「いいから、早く答えて」
「あ、ああ……。実は同志たちが決起して、自警団の詰め所を押さえたらしい。武器を奪って、今は都市長の家に向かってる」
「なにそれ？　決行は明後日のはずでしょう？　なんでそんなこと……、ジェムのやつの指示なの？」
「いや、お前の兄貴の独断だ。軍と対峙してる同志たちを助けるために、これ以上、待たせることはできないって。広場で支援を募って、殴り込みをかけたんだとか」

「ああ、もう、実に兄さんらしい」
リンシャは頭を抱えて、吐き捨てるように言った。
「それで、被害は？」
「ほとんど戦闘にならなかったって。詰め所にいた守備兵は十人ぐらいだったんだが、広場で数百人規模の民衆を煽動して取り囲ませたらしい。自警団長のやつ、泡食って逃げちまったってよ。しかし、お前の兄貴、相変わらずすげーな」
「ええ、あの人の口の上手さは天才よ。きっと王様にでもなったら、みんな大喜びで税を納めるようになるでしょうね」
はぁあ、っと深いため息を吐いてから、リンシャは言った。
「計画では詰め所を押さえた後は、都市長の館に向かったはずよ。行きましょう」
――はぁ？
ごく当たり前のように行こうとするリンシャにミーアは、思わず呆れる。
――おほほ、なに、この人、わたくしたちがついていくのを前提で言ってるのかしら？　そんな危なそうな場所に、このわたくしが行くはずが……。
「やれやれ、それはかなり危険だと思うが……」
横からシオンが同意してくれる。
――ですわよねぇ。
視線を転じてシオンの顔を見たミーアは……、そこに攻撃的な笑みを見つけて、嫌な予感に襲われた。
「だが、どうしても行くというのなら、付き合うぞ」
彼は剣の柄に手を添えて、力強い声で言った。
「え？　あ、で、でも……」
いやいやいや、行くとか誰も言ってないし！　とミーアが主張する前に、シオンは怪訝そうな顔をしていたが、
「なんだ？　なにか間違っていたか……、いや、そうか……」
すぐに納得した様子でうなずいた。

「キースウッドたちのことなら心配しなくってもいい。本当は、早く合流したいところだが、せっかくミーアが作った革命軍の内情を探るチャンスだ」
「い、いえ、わたくしは何も……」
「さぁ、行くわよ。急ぎましょう」
リンシャの声にせかされるようにして、ミーアは立ち上がった。
――これ、もしかして、行くのを断れない流れなんじゃ？
ミーアは察した。すでに、自分が何を言っても、この流れは止められないと。
そうして……、すぐに切り替えた。
――まぁ、シオン王子がいれば、最悪、なんとか守ってくれるんじゃないかしら。こちらには、革命軍のリーダーの妹もいるわけですし、そこまで危険はないかも？
そう……、切り替えが早いのがミーアの良いところである。
それに、気にもなっていたのだ。
先ほど、自らを襲ってきた違和感の正体が……。

「ところで、さっきから気になってたんだが、ジェムっていうのは、誰なんだ？」
道すがら、何気ない口調でシオンが言った。
「革命軍の同志よ。兄さんは酒場で会ったって言ってたけど……」
「そいつが、ミーアを誘拐しろと言ったのか？」
「ええ、革命の邪魔になるからって」
「馬車で襲ってきた連中の仲間か……。しかし」
シオンは、先ほどの少年たちのことを思い出した。
造作もなく一ひねりにできた彼らは、とてもではないが戦闘の訓練を受けたようには見えなかった。
――馬車の連中とは程遠かったが……。
その時だった。
裏路地を抜けたミーアたちの目の前に、水路と船着き場が広がっ

た。
　小型ながらも船が何艘もついていて、市場のような光景が広がっていた。
「ああ、先ほどは気づきませんでしたが……。わたくしたちが落ちた川が近くを流れているんですのね」
「そのようだな。交通の要衝ということか……なるほど」
　シオンは納得したような声を上げた。
「もしかすると、この町を騒乱の舞台に選んだのがそのジェムという男なのか？」
　怪訝そうな顔をするリンシャに、シオンは続ける。
「もしそうだとすると、確かに、攻めるべき場所をきちんと選んでいる気がする。馬車で襲ってきた連中ともイメージが一致するな」

第百十八話　ミーア姫、切り替えていく（後書き）

こっそりとキャラ紹介に皇帝陛下を追加しました。
ではまた次回、金曜日にお会いできると嬉しいです。

第百十九話　先導者・扇動者ランベール

ミーアたち三人は、なるべく目立たないように都市長の館を目指した。

変装のためにシオンは帽子を、ミーアは布を頭にかけ、ベールのようにして……。

シオンの方はともかく、ミーアは、こそこそ、きょときょと、落ち着きがなくって、実にアヤしい……。

もっとも、それどころじゃないからか、二人が注目を集めることはなかった。

町のところどころには、武器を手にした若者たちの姿があった。

みな着の身着のままで、正規の軍隊のような統一性はそこにはなく。ただただ、その顔を興奮と高揚に紅潮させていること以外に共通点はない。

「革命軍……」

前の時間軸を一瞬思いだしたミーアであったが、すぐにその違いに気づく。

その瞳に宿る光は、どちらかというと祭りの前のような純粋な興奮。

あの時の帝国革命軍のような刺すような憎悪も、ねっとりと絡みつく暗い欲望の色も感じ取れなかった。

通り沿いの家は巻き添えを避けるためか、どこも固く戸を閉ざしてはいるが……。

見た限りでは、略奪行為などは行われていないし、騒然としてはいるものの殺伐とはしていない。

――さっきの連中も、人を殺せそうには見えませんでしたし……。

「あれが、革命派の同志よ。ほら、あそこを見て」

リンシャが指さした先には人だかりができていた。そして人だか

りから離れていく者たちの手には青い布のようなものが握られていた。
「あれは……？」
「革命派のシンボルみたいなものかな。あれを頭に巻くんだって。蒼巾党とか名乗ってたかな」
「そっ、そうきんとう……？」
ミーアは口の中でつぶやいてから、
――んー、微妙な名前ですわ。なんか、パクリっぽいような。どこかの怪しげな教祖に率いられた連中みたいな名前ですわね。
冴えわたるミーアの勘が、ついに異世界の情報をもキャッチした！
……勘の無駄遣いである。
――金剛歩兵団の方がぜんぜん強そうですわ。
「ちなみに、彼らにはどのぐらい俺たちのことが知られてるんだ？
まさか全員ではないんだろうが……」
「もともとの同志には連絡は行ってると思うけど、あの人たちはどうかしら？　多分、兄さんの呼びかけに反応して集まってきた人たちだと思うから……」
「なるほど。それならば好都合だ。あいつらに紛れて急ごう」
シオンは小走りに人垣の方に行くと、青い布をもって戻ってきた。
「ほら、ミーア、君も」
「だ、大丈夫かしら……？」
ミーアは、頭に青い布を巻いた。
「まぁ、そうね……。頭から布をかぶってるよりはマシかしら」
リンシャは、小さくため息を吐きながら言った。

都市長の館は、ちょっとした貴族のお屋敷といった風情の建物だった。
すでに、騒乱は収まっており、広い庭には、続々と青い布を頭に巻いた男たちが集まってきていた。

そして、その彼らを煽り立てるように、一人の青年が声を上げていた。
リンシャと同じ、ブラウンの髪と深みのある青い瞳。その瞳にはどこか陶然(とうぜん)とした光が宿っていた。
「我々は当たり前の要求をしているだけだ。重税によって苦しむ我々の声を届けたい。その代弁者たるダサエフ宰相を我々のもとに返してもらいたい。それだけだ。しかし、王政府は我々の声に耳を貸さない。こんなことが許されるだろうか？　ゆえに我々は立ちあがったのだ。都市長は、我々が館を包囲する前に護衛を伴って逃亡した。我らの訴えを無視して、無責任にもだ」
それは、聞き惚れるような歌手のような声ではない。
力強い騎士団長の声とも違う。
絶妙に抑揚のついたそれは、ある種のカリスマを持った政治家が国民を鼓舞し、あるいは扇動(せんどう)するときの声音に非常に似ていた。
「それを阻止できなかったのは残念だが、こうして町を無事に押さえることができた。すべては我々の訴えに応えてくれた同志諸君のおかげだ。みんな、ありがとう」
その声に、広場の若者たちが一斉に吠える。別に戦闘に勝利したわけでもないというのに、その士気は非常に高い。
「扇動者(せんどうしゃ)……か。民を惹(ひ)きつける語りは見事だが……。リンシャ、もしかすると、あれが君の兄君かな？」
シオンの問いかけに、リンシャが返事をする前に、
「ああ、リンシャ。来ていたのか……」
青年がこちらに目を向けた。
「ランベール兄さん……」
「おや？　その子どもたちは？」
ランベールは怪訝そうな顔で、シオンたちの方を見たが、
「ひょっとすると、ジェムが言っていた子たちかな？　革命を邪魔する危険性があるとか、何とか……」
それを聞き、彼の周りにいた者たちが一斉に剣に手をかける。

呼応するように、シオンもまた身構えるが……。
「やめておこう。年端もいかぬ子どもに剣を向けたとあっては、誰も我々の話など聞いてくれなくなるよ」
ランベールは手を挙げて、周囲の者たちを制した。
「お願い、兄さん。この子たちと話をして」
「話を……か」
彼は静かにシオンとミーアの顔を見つめてから、薄っすらと笑みを浮かべた。

第百十九話　先導者・扇動者ランベール（後書き）

こんにちは、餅月です。もうすぐ十二月ですね。
寒くなるのでお体に気を付けてお過ごしくださいませ。
では、また火曜日にお会いできると嬉しいです。

第百二十話　ミーアとシオン、見解の一致を見る！

「話すといっても、ここではなんだな……。とりあえず、館の中で話そうか」

そういうランベールの後について、ミーアたちは館に足を踏み入れた。

「さぁ、どうぞ……といっても、私の家ではないけどね」

余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）に微笑むランベールは、まるで、どこぞの貴族様のような優雅な足取りで進んでいく。

「確か、この奥が執務室だったはずだが……」

立派な扉を開いた先、目の前に広がったのは都市長の館に恥じぬ、豪華な部屋だった。

天井には簡易なものながら、シャンデリアが釣り下がっていた。

透明度の高い水晶は、外からの明かりを受けて、きらきらと輝きを放っていた。

「ふふ、私たちから税をふんだくっておきながら、勝手なものだね」

呆れた様子で肩をすくめてから、ランベールは、大股に執務机のほうに向かうと、傲慢にも都市長の椅子に腰かけた。

「金はかかっているのだろうけど、あまり座り心地がいいものじゃないな」

「兄さん！　いい加減にして。こんなことして、なんになるっていうの！」

「黙りなさい、リンシャ。女であるお前と政治について話すつもりはないよ。無駄なことだ」

ランベールは小馬鹿にした様子でリンシャのほうに目を向ける。

――そういえば、レムノ王国では、男尊女卑の思想が浸透してるんでしたっけ。

ミーアの中で、ランベールの評価が急落した。

まぁ、もともと高くもなかったが……。
「私が興味があるのは、むしろそちらの方たちのほうでね」
ランベールはミーアとシオンの顔を順番に見つめてから、柔らかな笑みを浮かべた。
「とりあえず、くつろいでくれ。今、お茶菓子でも用意させよう」
――まぁ！　お茶菓子！　この方、なかなか気が利きますわね！
ミーアの中で、ランベールの好感度が、ちょっぴりアップした。
アベルの兄のなんとかと言う王子よりは、上位に食い込んできた！
ちなみに、話に聞いた金剛歩兵団よりは下である。
ミーアは大男が好きなのだ。
「お気遣いはありがたいが……、あまりゆっくりもしていられないのだろう？　話を聞かせてもらおうか」
シオンは、接客用のソファに座ることなく、ランベールをにらみつける。その立ち居振る舞いには微塵も隙は無い。
ちなみにミーアの方はといえば、すでにソファに座っていた。背もたれにだらーっと寄りかかり、すっかりくつろいでいる！
けれど、お茶菓子が来るのを見逃さぬように鋭さを増した視線だけは、シオンと同じように微塵も隙は無かった。
「おお、素晴らしい迫力だ。さすがはシオン・ソール・サンクランド殿下」
ランベールは無邪気に拍手をしながら、何気ない口調で言った。
はたで聞いていたリンシャなどは驚愕で目を見開いているが、当人は落ち着いたものだった。
「しかし、大国の王子が身一つで乗り込んでくるとは、噂に違わぬ蛮勇だ」
「気づいていたのか」
「もちろんだとも。そうでなければ、帯剣を許したままここに案内したりはしないさ」
ランベールは変わらずにくつろいだ様子で座っている。
「なるほど。てっきり子どもだからと馬鹿にされているのかと思っ

ていた」
シオンは剣の柄に軽く触れ、鋭い視線でランベールを射抜いた。
「それで？　革命を邪魔するかもしれないと言われている俺たちを案内した理由は？　敵になるかもしれない俺たちに武器を持たせたままで懐深くに招き入れて、貴殿に何の得があるのだろうか？」
「無論、理由はあるよ。正直なところ我々は君の国の助けを期待しているんだ、サンクランド王国王子。なにしろ、私たちだけでは、いかにも戦力不足だからね」
「簡単に言わないでもらいたいな。軍隊を動かすのは国の大事だ」
「これは……、正義と公正を重んじるシオン殿下らしからぬ物言いだ。この国の有様を見て、何も思うところはないと？　民のためを思う良識ある政治家が獄に繋がれ、民には重税が課される。横暴な王族のありようを見過ごすというのかね？」
実際のところ、民の困窮自体は、シオンは見ていない。
けれど、諫言（かんげん）を呈（てい）してくれた忠臣を牢につないだとあれば、それは確かに見過ごすことはできないことだった。
「仮に我が国が反乱軍に味方するとして、君たちが、それまで持ちこたえられる保証はないと思うが……」
シオンの言葉に、ランベールはにんまりと笑みを浮かべた。
「ここは王都とドノヴァン伯爵領との中間地点に位置している。わかるかい？　つまり……」
「金剛歩兵団と王都を分断するつもりか。兵站（へいたん）を叩こうということだな」
腕組みしつつ、考え込むシオン。
もちろんここは敵国ではなく、レムノ王国の中だ。
王都との間を分断したとて、周囲から補給を受けることは可能だ。されど、その手配には時間がかかる。一時的な混乱と、兵の動揺は避けられないはずだ。
それをも見込んで、この町で騒乱を起こしたとするなら……。
――烏合の衆かと思ったが、そうでもないのか？

シオンの脳裏に警鐘が鳴る。
――扇動者か……。まだ何とも言えないが、あなどれない男のようだな。
シオンは、ランベールに対する警戒を一つ上げた。

一方ミーアは、
――まぁ！　クッキー！　それも細工が細かいですわっ！
出されたお茶菓子に、内心で喝采（かっさい）を送っていた。
なにしろ待望の甘いものである。有無を言わさず口に入れ、とろけるような甘味に思わずうっとりしてしまう。
ひとしきりクッキーの出来の良さに感銘を受けながら、ミーアはランベールの方を見やった。
――この方……、なかなかやりますわね。あなどれませんわ！
奇しくも、二人の見解は一致を見たのであった。

第百二十一話　ミーア姫は揺らがな……くもなかったかも……？

「目の付け所は間違っていないだろう？　シオン王子」
そう言って、ランベールは得意げに地図を広げた。
レムノ王国北に位置する王都。その左下にあるのが現在、ミーアたちがいる町『セニア』だ。
セニアのそばには、王国中央部を走る太い街道が、南方のドノヴァン伯爵領まで伸びていた。
「この街道を使った補給路を分断するか。この街道を通らずに行くことは？」
「できなくはない。が、簡単でもない。どちらにせよ、準備にはそれなりに時間がかかるだろう」
レムノ王国が他国に比して誇るもの、それは精強な軍隊……ではない。
真に、かの国が誇るべきもの、それは国内に整備された広い街道だった。
――各貴族内を繋ぐ太い街道、それを前提とした高い機動力を持った即応軍。それがレムノ王国の強みだと、キースウッドは言っていたな。
通常では機動力が低い歩兵すらも馬車に乗せて輸送することで実現した高い展開力と、円滑な補給線の構築。
それこそが、精鋭な中央即応軍の戦力を集中運用することを可能とするものだった。
完成された防衛の仕組み、もしそこにさらなる増強を加えるとすれば、それは内向きのものではなく外向きのもの、すなわち……。
ランベールは、考え込むシオンをさらに揺らすように言葉を続ける。
「だが、そうした戦術的な話よりも、もっと大切なことがあるだろ

う。シオン王子、この国の王政府は、民を弾圧するために金剛歩兵団という強力すぎる兵力を派遣したのだ。それだけでも、彼らには民を率いる資格がないとは思わないか？　幸い、いまだに戦端は開かれていないが……、もし一度戦いが始まれば……」

思わず、シオンは言葉を飲み込んだ。

そう、その一事のみを見ても、王政府に非がないとは言えないのだ。

一方的な虐殺が行われようとしている……、それを黙って見過ごすことなどできようはずがないのだ。

――様々な事情はあろうが……、民に重税を課した挙句、民の代弁者たる家臣を投獄。それだけでも、民の上に立つ資格はないのではないか？　ミーア姫の付き添いで来ただけのつもりだったが……こうして国内の事情を知ることができて、革命派とつながりが作れたことは僥倖だったのではないか……？

カチャリ……。

思考の沼に沈み込みそうになったシオンの耳に、不意に陶器のぶつかる音が聞こえた。

視線を転じれば、そこには、すまし顔で紅茶をするミーアがいた。

満足げに息を吐き、微笑みすら浮かべているミーア、心なしか、その頬はかすかに紅潮して、つやを増しているように見える。

その余裕の顔を見て、シオンは、すっと頭が冷えたような気がした。

――呑まれかけていたな……俺は。

扇動者、ランベール。

目の前の男は、侮りがたい魅力を持っている。

その言葉には人の心を魅了する、詐欺師のような巧みさがあった。

「私は、この国を変えたいのだ。こんな不条理がまかり通るような国を……」

「革命を邪魔するものではなかったかな？　俺たちは……」

詐欺師の話を長く聞いてはいけない。シオンは話を変えるべく口を開いた。
「あなたたちの仲間の、確かジェムとかいう男が、そう言っていたのだと聞いたが……」
「ああ、そうだったね……」
ランベールは笑みを浮かべて、ミーアの方に目を向けた。
「それも何とかしようと思っていた。ミーア・ルーナ・ティアムーン」
「はぁ……？」
きょとん、とした顔で首をかしげるミーアに、ランベールは続ける。
「我々の崇高な抵抗運動を邪魔するようなことをしてほしくないのだ」

ランベールは会話をしながら、ジェムの言葉を思い出していた。
サンクランドの王子とティアムーンの皇女がこの国に潜入してくること。
シオン王子は味方につけるべきだが、ミーア姫の方は革命を阻害する恐れがあるため、シオン王子に気づかれないように排除すべきこと。
――だが、愚かな妹のせいで、それはかなわなくなった。
この期に及んで、ミーア姫を害すようなことがあっては、シオンの協力を得ることはままならない。
であるならば、次善の策をとるべきだ。
――ミーア姫をも味方につけるか、最低限、口を閉じておいてもらわなければならない。
幸い、相手は少女だ。いろいろと噂を聞いてはいるが、しょせんは子ども。
――簡単に言い含めることができるだろう。
そう考えていたランベールは上機嫌に笑みを浮かべる。

「まぁ、今日はいろいろあって疲れたんじゃないかな？　よければ、今日はここに泊まっていくといい。王宮並みとは言えないが、大きな風呂とベッドがあるだろう」
「まぁ！　お風呂！」
目を真ん丸にするミーアに、ランベールは内心で笑みを浮かべた。
――ティアムーン帝国皇女は無類の風呂好きか。噂に聞いた通りだな。
この調子で、接待していけば、ミーアの心を掴むのも時間の問題……。
内心で皮算用を整えるランベールであった。

第百二十二話　ミーア姫、血行が良くなる

「いくらなんでも、迂闊だったのではないか？　ミーア姫」
「はて？　なんのことですの？」
ドア越しに聞こえてくる声に、シオンはため息を吐いた。
「確かに我がサンクランドの兵力をあてにしているのであれば、君を害するようなことはしないだろうが……」
そんなことをすればシオンの不興を買うことになる。その上、まず間違いなくティアムーン帝国をも敵に回すことになるのだ。
加えて、ジェムという男の存在がある。ここを出て行って、現状を把握していないジェムと鉢合わせになった場合、ミーアに命の危険が及ぶ可能性がある。であるならば、現在の状況をランベールが説明してくれる分、ここにいたほうが安全だとさえいえる。
「だが、だからといって、ここに一泊するのは……」
っと、シオンの言葉を遮るように、ぱしゃり、と水の音が聞こえる。
そう、ミーアは今、湯あみの真っ最中なのだ。いい気なもんである。
何かあった時のためにとドアの前で護衛を買って出たシオンであったが、時折、中から聞こえてくる水音に、何とも落ち着かない気分になってしまって……。
それを隠すために微妙に愚痴っぽく、ミーアに文句を言ってしまうわけだが……。

――あら、可愛らしいですわ！
妙なところで勘の鋭さを見せるミーアは正確にそのことを洞察して……にんまり笑みを浮かべていた。

あの完璧超人であるシオンを翻弄している優越感からついつい調子に乗ってしまうミーアである。
わざとらしくお湯をちゃぽちゃぽいわせながら、ドアの外にいるシオンには見えないのに、湯船から足を出してセクシーポーズを決めてみたりする。
――うふふ……復讐してやりますわ！
完全に小悪魔モード全開のミーアである。
そんな若干うざい姿を見せられて、あきれ顔をしているのは、一緒に湯あみに付き合わされているリンシャだった。
万が一、中で何かあった時のためにと言われてはいるものの、その役目は自分でいいのだろうか？　とついつい首を傾げてしまう。
そうこうしている間に、ミーアは湯船から出て、髪を洗い出した。
洗髪薬（シャンプー）が入った瓶を傾け、中身を掌の上に出したミーアだったが……。
シャワシャワ、と両手をこすり合わせつつ、首を傾げた。
「はて、レムノ王国のものにしては、いまいち泡立ちが悪いですわね……。やはり、アベル王子にいただいたものは特別製だったということかしら……」
「王子から洗髪薬のプレゼントって……、ほんとにあなた、帝国のお姫様なのね……。ちなみに、なんていう洗髪薬だったの？」
「可愛らしいお馬さんの絵がついたのでしたわね。名前はおぼえておりませんが……」
「え……、それって確か……」
首を傾げるリンシャ。だったが……。
「とってもいい洗髪薬でしたわ。アベル王子にお会いした時には厚くお礼を言わねばなりませんわ」
にっこにこと笑みを浮かべるミーアを見たリンシャは……空気を読んだ。
「そう、なのね。うん、それは、よかった……ね？」
「うふふ、心配しなくっても、いつかリンシャさんにも、そういう

殿方が現れますわよ」
優越感に浸っているミーアが若干うざかったが、グッと我慢のリンシャである。
実に大人である。
――ああ、それにしても、こうしてお風呂に入っていると、アンヌが恋しくなりますわね。
普段だったら、優しく背中を流してくれるところである。さすがにリンシャにそれを求めようとは思わないが……。
「ところで、ちゃんと兄さんを止めてくれるのよね？」
「……あ、あまり、焦るものではございませんわ。せっかくですから、今はお風呂を楽しみましょう」
とりあえず、そうごまかしつつも、ミーアは考えていた。
これから、どうすればいいのかを……。
そう……、甘いものを摂取し、なおかつお風呂で血行が良くなったミーアは、普段通りの脳の働きを取り戻しつつあるのだ。
ありていに言ってしまうと、気分爽快絶好調なのだ！
……だからどうした、という話ではあるが……。
こうして、数日分の汗と埃をすっかり洗い落としたミーアは、普段の八割ほどの美しさを取り戻すことに成功したものの、良いアイデアはついに浮かんでこなかった。

浴室から出てきたミーアは、頭からホカホカ湯気を上げていた。
用意されていた着替えは少しばかり大きかったものの、風呂上がりで火照った体には、そのぐらいがちょうどよかった。
「ふぅ、すっきりいたしましたわ……。あら？　どうかなさいましたの？」
微妙に疲れた顔をしているシオンに首を傾げるミーア。
ため息を吐いて、首を振ってからシオンは言った。
「君の頭の中の計画が気になるところではあるが……。しかし、いずれにせよ、やはりキースウッドたちと合流すべきだろう。恐らく

あいつのことだから、もう風鴉と連絡を取り合って、こちらを探しているころだと思うが……。それに本国にも連絡を入れてもらわなければ……」

もっとも、事態が動くまで数日は余裕があるだろうけど、とシオンは判断していた。

けれど……、その思惑は外れる。

翌日、革命派の斥候が一つの知らせをもって戻ってきたのだ。

王都より遣わされた騎士団が街道沿いに布陣したとの急報が。

そして、それを率いていたのが……。

第百二十三話　黒き鴉と白き鴉

モニカ・ブエンディア。
それは前の時間軸、アベル王子を暗殺したメイドの名だ。
名うての遊び人として知られたアベル王子のこと、その動機は痴情のもつれと言われていたが……、詳しい事情は、ついに明らかになることはなかった。

時は流転し、少しばかり遡る……。
ミーアたちが川に落下した翌日。
レムノ王国の王城の廊下をモニカは歩いていた。向かう先には、とある官吏の執務室があった。
扉の前に立ち一定のリズムでノックする。と、扉は音もなく開いた。
「グレアムさま」
「モニカか……」
グレアムはいつも以上に気難しげで、不機嫌さを隠さない顔でモニカを迎えた。
「金剛歩兵団のやつら……、未だに動かないとはいったいどういうつもりだ……。まさか、これも帝国の叡智の策動、などということはないだろうな……」
疑心暗鬼に染まり切った口調でつぶやいてから、グレアムはモニカのほうをうかがう。
「それで、何の用か？」
「はい、今朝方こちらが届きました」
モニカは手の中、小さく折りたたんだ植物紙（パピルス）をグレアムに差し出す。
「くっ……皇女ミーアとシオン王子が……」

一読したグレアムは、苦々しげにつぶやいた。
それから、ため息をこぼした後、代わりの植物紙をモニカへと渡す。
「本国にこれを、送ってくれ」
「失礼します」
暗号化された書状をさらに伝書鳥用の文字に書き換えるのは、モニカの仕事だ。
グレアムから受け取った書状を一読して、モニカは眉をひそめた。
「あの、ほんとうに、よろしいのでしょうか？」
「どういう意味だ？」
「これは、本国を戦火に巻き込む……、誤った情報です。本当にこれを送ってもよろしいのでしょうか？」
「お前たち黒き鴉はそれでもいいさ。目立たぬよう、影でこそこそ情報を集めているがいい。だが、私は白鴉（はくあ）だ。祖国の栄光のために、情報を武器にして戦うのが、我々の本懐だ」
その言葉にモニカは小さく歯噛みする。
サンクランド王国、諜報部隊「風鴉（かざがらす）」
数代前の国王の時代に建てられた諜報機関の主要な任務は各国に潜入し、様々な情報を自国に持ち帰ること。
持ち帰った情報は、王国内にて外交・軍事のために役立てられる。
それは、ある種、受け身の機関ともいえる組織だった。
けれど、そこに変化が訪れる。
ジェムと呼ばれる男によって提唱された領土拡張のための計画。
情報を持ち帰るだけでなく、それを用いて他国を弱体化、分断し、正義の名のもとにサンクランド王国の領土を拡張していく。
その計画を実施するために、風鴉の中に作られた部隊。
その名を「白鴉（はくあ）」
サンクランドの栄光を全地に告げ知らせる白き鳥だ。
「心得ているのだろう？　我々白き鴉の任務は何者にも優先される」
「……はい」

うなずきはしたものの……、モニカの中に消化しきれない感情が渦巻いていた。

グレアムの部屋を出て、モニカは小さくため息を吐いた。

――なにをしているんだろう、私は。

モニカは母国であるサンクランドに誇りを持っていた。

正義と公義を重んじる王室、不正を見逃さない王政府は、彼女の中で燦然と輝く栄光あふれる母国だった。

――私たちは……、その栄光に泥を塗ろうとしているんじゃないの？

深刻な疑念が彼女の体を支配しかけたその時だった。

どん、っという衝撃が体を襲った。

「きゃっ……」

勢いあまってその場に倒れて、手に持っていた書類をばらまいてしまう。

暗号化が施されているとはいえ、あまり他人の目に触れてよいものではない。

慌てて拾い集めようとしたモニカだったが、彼女が伸ばした手の先に落ちている植物紙を、何者かが踏みつけた。

「あっ……」

顔を上げるとそこには、ニヤニヤと嫌らしげな笑みを浮かべる中年の文官が立っていた。

「そのような場所で余所見をするな、邪魔くさい」

蔑むような目でモニカを見て、文官は言った。

王室付きのメイドとして、情報を集めるのが彼女の使命だ。女性を蔑むレムノ王国では、驚くほど簡単に彼女たち使用人に情報を漏らす。

何を聞いたとしても、それが大事なことだとは判断できないだろうと、そう考えているのだ。

だから、蔑まれることは、望むべくことであり……。

けれど……、だから平気というわけがない。当たり前のようにぶつけられる悪意に、心は簡単にすり減っていく。
同僚のメイドが同じように蔑みの目で見られているのを目の当たりにすれば、吐き気にも似た憎悪が沸き上がる。
――こんな国ならば……、滅んでしまってもいいかもしれない。
例え民の血が流れたとしても、こんな理不尽が変えられるというのなら、サンクランドの公正な統治にゆだねるべきではないか？
彼女がそう思いかけた……、その時だった。
「拾いたまえ」
少年の声が耳に届いた。いまだに幼さを残したそれは、けれど、どこか芯の通った凛々しい声だった。
振り返ったモニカの、その視線に映った者……それは。
「非礼を詫びて、彼女の落としたものを拾えと言ったのだが、聞こえなかったかな？」
アベル・レムノ。
レムノ王国の第二王子、アベル・レムノの姿だった。

第百二十三話　黒き鴉と白き鴉（後書き）

設定解説

サンクランド王国諜報部隊「風鴉（かざがらす）」
サンクランド王国では古くより情報の重要性を認識していたため、各国に諜報員を送り込んで緻密な諜報網を作り上げていた。彼らは伝書鳥である夜鴉（ナイトクロウ）を介して情報をやり取りしていたため風鴉の名がついた。
また古くからサンクランドでは吉報は白い鴉が、秘密は黒い鴉が運んで来るという格言があり、情報と鴉との関係性が深い国でもある。

情報更新
○グレアム（３０代）
サンクランド王国諜報部隊「風鴉」の特務部隊「白鴉」の一員。
レムノ王国に潜入して諜報活動に従事している。祖国のために暗躍する。生真面目な性格で、計画通りに物事が進まないと胃が痛くなる。

第百二十四話　希望の雑草は増え広がりて

「あっ、こ、これは、アベル王子殿下」
中年の文官が慌てて足を退けて、一歩、二歩と後ずさった。
「これは、その……、そこの女がですね、余所見を……」
「拾え……と言ったはずだが聞こえなかったか？」
有無を言わさぬ声で、再度、アベルが言った。と同時に一歩足を踏み出す。
「それとも、惰弱な第二王子の言うことなど、聞くに値しないかな？」
「い、いえ……滅相もございません」
文官は慌てて植物紙（パピルス）を拾い上げると、乱暴な手つきでモニカに渡す。それから、あきらめ悪くモニカを睨みつけたが……。
「重ねて言っておく。もしも彼女にこれ以上の無礼を働くようなことがあれば、それは、ボクにしたのと同じことだと思ってくれたまえ」
それ以上に鋭い目つきで、アベルは文官を睨みつけた。
それは戦場の騎士たちが帯びる刃のような気配……紛れもない殺気だった。
――この方は、こんな顔ができるようになったのね……。
アベルのその表情に、モニカは感慨を覚える。以前から、アベル・レムノに対する彼女の評価は悪いものではなかった。
このような国の状況にあって、親切にしてくれる心優しい少年。母親や姉妹に対してだけでなく、使用人であるメイドにも思いやりを見せることができる人物。
モニカもまるで弟のように、微笑ましくアベルのことを見ていた。
けれど同時に、統治者として、人の上に立つには不適格な人物とも思っていた。

優柔不断で甘さが目立つ性格。いざという時、権力者としての厳格な判断ができないのではないかと、そう考えていたのだが……。
――以前までだったら今の場面でも、へらへら笑ってやり過ごしたはずだ。助けてはくれたのだろうけれど、咎めることはしなかったはず……。それなのに、変わった。
今のアベルは、まるで母国のシオン王子のようだった。
彼ならば、あるいは、この国に巣食う悪しき慣習を変えることができるのではないかと、思ってしまうほどの変化。
いったい、なにが彼をこんなにも変えたのか……。
「大丈夫かい？」
気が付けば、アベルが覗き込んでいた。
「あ、申し訳ありません。王子殿下」
「いや、こちらこそ申し訳ない。君たちには、さぞ働きづらいことと思う。何とかしていかなければと思っているのだが、なかなか簡単ではなくてね」
苦笑いを浮かべつつ、アベルは頬をかいた。
「あの、このようなことを言ったら失礼に当たるかもしれないのですが、変わられましたね、アベル殿下」
「ん？　そうかな？」
「はい、たくましくなられました」
「ははは、まぁね。情けないところを≪彼女≫には見せられないからね……」
彼女……。
それが誰を指すのか、モニカはよく知っている。
ティアムーン帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーン。
帝国の叡知。グレアムが蛇蝎（だかつ）のごとく嫌う、彼の天敵。
ただ優しいだけだったアベルを、雄々しき若獅子へと変えた少女……。
噂に聞く帝国の叡智に、モニカは好奇心をくすぐられる。
「どのような方なのですか？　ミーア皇女殿下というのは……」

「うーん、そうだな……」
アベルはしばしうつむき、考え込んでから、わずかに照れくさそうな笑顔で言った。
「今のボクでは到底手が届かないほど魅力的で……、だけど、ボクが追いつけるって心から信じてくれた人だ。ボクが今よりもっと前に進めると、信頼して、励ましてくれた人だ」
愛しげに、大切な思いを語る人の口調でアベルは言った。けれど、
「だから、ボクは彼女の信頼に応えなければならない。もっと頑張らなければ……と、そう思っていたんだが……」
ふいに、アベルの顔がくもった。それで、モニカは気づく。
彼が鎧を身に着けていることに……。
「アベル殿下、まさか……」
「ん？　ああ、そうなんだ。戦線が膠着（こうちゃく）しているらしくてね。兵たちを鼓舞するためにボクも出ることになった。本当は、兄の方が適任なんだが……」
そう言ってアベルは肩をすくめた。
「ケガをさせたのがボクなんだから、文句は言えないな。王族としての責任をきちんとはたしてくるつもりだ。王権の失墜は、混乱と破壊を生むからね……」
わずかに背筋を伸ばすアベルだったが、相変わらず、その表情は冴えない。
「なにか、気がかりなことがおありですか？」
「ああ、いや……。なんでもないよ。ただね……」
顔を上げ、遠くを見つめてアベルは言った。
「……民の弾圧に加担したボクを、きっと彼女は許さないだろうと、そう思ってね」
寂しげな顔で、そうつぶやいた。
「殿下……」
「では、失礼する」

そうして、出征するアベル一行を見送ってから、モニカは伝書鳥を放った。
本国への報せを携えた白き鴉と、もう一羽。
真実を携えた黒き鴉を。
黒衣の鳥は風に乗って、空を舞う。
報せが彼女の願い通りの人物のもとに届く保証はない。それでも、――もしも、それが届いたとしたら……、それは運命がそれを選択したということ……。
その向かう先は……。

かくて、ミーアがせっせと蒔いた種は芽吹き、さながら雑草のように次々と広がっていく。

第百二十五話　ミーア姫、決意表明する

都市長の館の客室。ミーアに与えられた部屋はひときわ広く、豪勢な部屋だった。

寝相がいささか残念なミーアでも落ちないぐらいに広いベッド、ふわふわの毛布にくるまって、ミーアは惰眠をむさぼっていた。

なにせ、久しぶりのベッドである。

翌日にはキースウッドたちと合流するために旅立たなければならないと思うと、ついつい、起きる気が削がれていくわけで……。

シオンなどは寝首をかかれやしないかと警戒して、あまり眠れなかったのだが、そんなことを気にするミーアではない。

というか……、そもそもそんなこと考えすらしないわけだが。

そんなわけでミーアは微睡の中をたゆたっていた。

むにゅむにゅ、口を動かして、キノコ鍋おいしいですわ……などと、だらしない笑みを浮かべている。

そんな気持ちの良い夢見心地を破るように、廊下から騒がしい声が聞こえてきた。

「ん……ぅ？　ふわぁ、うるさいですわね……。何事、ですの？」

目元をこすりこすり、ベッドから降りる。小さな裸足に感じるのは、毛足の長いカーペットの感触。

そのまま部屋の入口にある靴を履いて廊下に出る。っと、ちょうどよいところに、シオンが通りかかった。

「あ、シオン、ちょうどよかったですわ。いったい、どういたしましたの？」

「ああ、実は……、あー、ミーア、君、着替えてきたほうがいいのではないか？」

「へ……？」

きょとりん、と首を傾げ、瞳をぱちくり瞬かせるミーアであった

が、自らの格好を見下ろして小さく頷いた。
「そうですわね……」
現在、ミーアは、もっこもこに膨らんだ、羊毛をふんだんに使ったワンピースタイプの寝間着と魔女の帽子のようなナイトキャップ、それに革靴という、いささかアンバランスな格好をしている。
というか、寝間着で人前に出ること自体、どうなのかという話なのだが……。
「確かに、あまり気を抜いていると、アンヌに怒られてしまいそうですわね。仕方ありませんわ、着替えることにいたしましょう」
ミーアは部屋に戻って手早く着替えをすますと、シオンとともに、都市長の部屋に向かった。

「馬鹿な……。こんなに早く部隊が派遣されるはずが……」
部屋に入ると、すぐに、ランベールの声が聞こえてきた。
「しかし、実際に、こちらの降伏を促すための使者も先ほど送られてきました」
「いったい、どうしたんだ？」
振り向いたランベールの顔は、心なしか青白く見えた。
「実は、今しがた同志から報告があった。王政府の軍が街道沿いに展開していて、それを率いているのが第二王子のアベル・レムノだと」
「まぁ！　アベル王子が！」
思わぬ知らせに、ミーアは声を上げた。
嬉しさが胸にこみあげてくる。
そうなのだ、大部分の方はお忘れかもしれないが、ミーアの構成成分の何割かは「恋する乙女」でできているのだ。後の何割かは、美少年の体を見てニマニマしたり、不良少年相手にイキったりする乙女以外のナニカでできているわけだが……。
ともあれ、ミーアの中に眠る乙女の心が、彼女の心臓を高鳴らせ

た。
――ああ、昨日、お風呂に入れてよかったですわ！
などと大喜びのミーアであったが、そんなウキウキ感はすぐにしぼんでしまう。なぜなら、
「王族が自ら部隊を率いてきたとなれば目的は鼓舞だろうな」
シオンが、すぐ隣で苦々しげな顔をしていたからだ。
「展開している金剛歩兵団に対して、援軍とともに王の命令を携えてきたか。アベル王子、それがお前の選んだ道か」
つぶやくように言って、それからシオンは改めて、ランベールのほうを見た。
「使者が何と言ってきたのか詳しく教えてくれ。それと、軍が展開している場所も聞きたい」
「いや、しかし……」
「我が国の助けを期待しているのならば、言うとおりにすべきだと思うが？」
ランベールは思案げな顔をしていたが、すぐにうなずき、部下の男に指示を出した。

それから、シオンはミーアの方を見た。
「ミーア、君は行きたいんじゃないか？」
「え……？　あ、いえ、でも……」
一瞬、躊躇する。
なにしろ、これから向かう場所は、戦場になるかもしれない危険地帯だ。そんな場所においそれと行けるはずもなくって……。
「まぁ、君が行かなくっても俺は行くが……。そうだな、君はついてきてくれないほうがやりやすいかもしれない」
「へ？　どうして……？」
「アベル王子に聞かなくてはいけないことができた。場合によっては……」
シオンは腰に下げた剣の柄に軽く手で触れ、瞳を鋭く細める。

「あの日の夜、君に言ったことを実践しなければならなくなるだろう。民が虐殺されるのを、むざむざと見過ごすわけにはいかない」
「アベル王子を……、殺すんですの？」
ミーアは自分の声が震えるのを感じた。
「そうならなければいいとは思うが……」
それを聞いて……、ミーアは覚悟を決めた。それはミーアが生きてきた中で、一世一代の覚悟といえるほど、重たく固い覚悟だった。
ミーアは、アベルに死んでほしくはなかった。
そして、シオンにも……、こんなところで死んでもらいたくはなかったのだ。
自分になにかできるとは思わないけれど、自分が与り知らないところで二人が殺しあうなどというのは御免だった。
ミーアは小さく息を吸って、吐いてから、小心者の心に精いっぱいの気合を入れて、言った！
「シオン王子、わたくしも……、わたくしも、いきまちゅわ！」
……噛んだ。
慣れないことはするものではないという、良い見本である。
鋭く覚悟のこもった視線を、シオンに向けるミーア。
その瞳は痛みのせいで、ほんのり潤んでいた。

第百二十六話　再会と決闘と……

「反乱分子からは、まだ何も言ってこないのか？」
馬の立ち並ぶ中、アベルの隣で騎乗する補佐を任された長身の男が鋭い声を上げる。
豊かな口ひげと鷹のように鋭い目が特徴的な、男の名はベルナルド・ヴァージル。
レムノ王国即応軍、第二騎士団の団長を務める、剛鉄槍（ごうてつそう）の二つ名を持ったレムノ王国有数の戦士である。
木の先端に金属製の穂先を付けた通常の槍とは異なり、そのすべてを一本の鋼の棒から作り出した錬鉄の槍、普通の人間には重すぎるその槍を軽々と扱うことから、ついたあだ名が≪剛鉄槍（ごうてつそう）≫。
金剛歩兵団とは違い、数多の盗賊団を壊滅させ、隣国との戦闘にもことごとく勝利し、その都度武勲を上げてきた正真正銘の熟練騎士である。
――実際的な指揮はベルナルドがとり、随伴したボクの初陣を飾らせようということか……。
アベルなどは、そう判断していたのだが……、
「王子、いかがなさいますか？　これ以上、時を与える必要はないかと考えますが……。幸い、セニアは城壁も低く、反乱分子どもが築いたバリケードも貧弱です。突破は難しくないでしょう」
ベルナルドは、きちんとその都度、アベルに指示を求めた。
惰弱なる第二王子を軽視する者が多い中で、きちんとアベルの考えを尊重するその姿勢は臣の礼としては完ぺきではあったが、アベルにとっては重たいものだった。
自分自身の判断で、民への弾圧を進めなければならないからだ。
「王子としての務め……か」
小さく口の中でつぶやいてから、アベルは視線を上げた。

「捨て置くには面倒な場所だ。兵の士気を上げるためにも、ここは一思いに……」
「報告！　町に動きあり」
慌てて駆け込んできた兵士の声で、一気に緊張が高まる。
「なんだ？　使者でも送ってきたか？」
ベルナルドの鋭い問いに、その若い兵士は困惑顔で答えた。
「いえ、それが……、子どもが二人やってきて……。アベル王子殿下との会見を求めています」
「愚かな。反乱分子風情が、アベル殿下と目通りがかなうはずがなかろうに……。しかし、子どもというのは？」
「そ、それがその……、ただの子どもではなく、アベル殿下のご学友を名乗っておりまして……」
「学友……？　いったい……」
「失礼する」
伝令の兵を押しのけるようにして、一人の少年が現れた。
凛とした立ち居振る舞い、他を圧倒する絶対的な王者の雰囲気に、気圧されたように兵士たちが道を開けていた。
「シオン・ソール・サンクランド、なぜ君がここに？　いや、待て……。ということは、まさか……」
アベルは驚愕に瞳を見開いた。シオンのすぐ後ろに、彼女の姿が見えたから……。
「ミーア姫……」
「お久しぶりですわ、アベル王子」
日の光を受けて、月光のように輝く白金色の髪、深く知性の輝きを宿した美しい瞳と、つやつやとした肌……。あの日、あのダンスパーティーの夜と変わらぬ美しいきらめきをまとって、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、アベル・レムノの前に現れた。
「ボクに会いに来てくれたのだったら、嬉しいのだが……」
「あら？　それ以外には、ないのではなくて？」
ミーアはきょとん、と首を傾げて見せる。けれど、アベルにはよ

くわかっていた。
もちろん、自分に会いに来てくれたというのは、そうなのかもしれないが……、それ以上に、きっと彼女は、この愚かな争いをおさめに来たのだ。
帝国の叡智、ミーア姫が自分のためだけに会いに来てくれるとは、さすがにアベルには思えなかった。
――たぶん、ミーア姫は、ボクの味方はしてくれないだろうな……。それでも、ボクは……。
一瞬の動揺の後、アベルは覚悟を決めるように息を吐くと、
「シオン王子、君はどうかな？　まさか、君までミーア姫と同じように、ボクに会いに来てくれた、というわけではないのだろう？」
「ああ、そうだな。今回、俺は、ミーア姫の護衛だけするつもりだったのだが……、ここに至っては、黙っていられなくなってな」
シオンは、腰に下げた剣の柄に軽く触れ……、
「少しばかり予想よりは早かったが……、夏前の再戦の約束、果たさせてもらうとしようか」
アベルは、一瞬、虚を突かれたかのように、きょとんとしたが……、
「それは、つまり……、ボクに決闘を申し込んでいるということかい？」
「お前が剣を抜かぬまま、王都に戻るというのならば、冬の剣術大会まで待ってもいいのだがな」
肩をすくめるシオンに、アベルが答えようとした瞬間、傍らに控えていたベルナルドが足を踏み出した。
「聞く必要はございません。アベル殿下、一軍を率いる王子自らが一騎打ちなど……」
「控えよ、ベルナルド。大国の第一王子が、自らの信じる正義のために、命をかけた決闘を挑んできているのだ。申し出を断われば、兵たちの士気にかかわるだろう」
アベルはその諫言を一蹴する。

それから、ちらりとミーアの方に視線を向けて、かすかに苦笑を浮かべる。
――それに、彼女の目の前では引くわけにはいかないから、か。我ながら……。
小さく息を吐き、アベルは言った。
「わかった。シオン王子、その決闘の申し出を受けよう」

第百二十七話　約束は果たされん……

――あ、あら？　おかしいですわね……。
目の前で展開される状況に、ミーアは首を傾げていた。
――わ、わたくし、言いましたわよね？　アベル王子にお会いしに来たって……。エリスの物語では、こういう時は、こう……、ギュっとして、いい雰囲気になって、それで解決になるのではなかったかしら……？
だからこそ、ミーアは両腕を大きく広げて、アベル王子を抱きしめる準備をして待っていたというのに……。
なぜか、話の中心はミーアではなく、アベルとシオンの二人に移ってしまっていた。
――ああ、こんなこと、以前もございましたわ。確か、剣術大会のお昼にサンドイッチを食べていた時ですわ。あの時も、わたくしを置き去りにして、お二人で話を進めてしまって……。
「我が国の街道は、広く、平らにならしてある。そこならば、戦いの場所として不足はないだろう」
そうこうしている間にも、シオンとアベルは歩き出していた。
「アベル王子！　お待ちになって、決闘なんて、そんなっ！」
ミーアは大慌てで、アベルのもとに走り寄ろうとしたが、寸でのところで、ベルナルドに止められた。
「ベルナルド、特別に君に命じる。彼女、帝国のミーア姫殿下のそばで彼女を守れ。決して、彼女に傷一つつけるな」
「よろしいのですか？」
「姫にはボクとシオン王子の決闘が正当なものであったと証言してもらわなければならない。レムノでもサンクランドでもない、彼女の言葉ならば、サンクランド国王も文句は言うまい」
「ダメですわ！　アベル王子、そんなのっ！」

「君とはもっと違った形で再会を喜び合いたかったところだが……もっと……」
アベルは小さく首を振って、自嘲の笑みを浮かべる。
「はは、未練がましいな、我ながら……」
まるで、その気持ちを断ち切るかのように、アベルはミーアから視線を外して……、
「アベル王子っ！」
二度と、その声に振り返ることはなかった。その視線が向かう先に立っていたのは、一人の少年だった。
「ミーアの言葉は、届かなかったか？」
「たとえ相手が誰であれ、止まることはできないさ。君ならばわかっているはずだ。シオン王子」
「腐った王権のために殉じるか、アベル・レムノ」
「それでも、なお王権は必要なのだ。秩序なき世界ではより多くの民衆が苦しむことになる。腐っていたとしても王の剣は必要なのだ」
もしも王族も貴族も、すべて一掃してしまえば治安は荒れ、賊が跋扈（ばっこ）する。
「もし、権力が腐敗しているというのであれば、それを正すのがボクの役目だ」
決然と言い放ち、アベルは静かに剣を抜いた。
「それでも、お前たちが民を踏みつけにすることを見過ごすことはできない」
そのためには、自国の介入も辞さない。腐った権力者を廃し、新たな統治機構が動き出すまで、自国がその役割を担うことをも視野に入れたシオンと、レムノ王家に属するアベルの見解は、どこまで行ってもすれ違う。
「もし、お前が民を虐げることに加担するというのなら、ここで我が剣の前に散れ、アベル・レムノ」
鋭い視線でアベルを睨みつけて、シオンが剣を抜いた。
いつぞやと同じ、アベルは頭上高くに振り上げた、攻撃的な上段

の構え。
対するシオンは、だらりと腕を垂らし、後の先を狙う下段構え。
「あの時と同じになるとは思わぬことだ。今日の俺には油断はない」
「思わないがね。もっとも、もとよりボクが君相手にできることは一つきりなのでね」
次の瞬間――先に仕掛けたのは……シオンだった！

奇襲っ！

低い態勢のまま、一足飛びにアベルの懐に飛び込む。
敵の攻撃を待つことを基本にしているシオンの先制攻撃。それは、確実にアベルの意表を突いた。
狙いは当たった。その不意打ちにアベルは一歩後ろに下がり、姿勢を崩す。
けれど――上手くいったのはそこまでだった。下がりながら放たれた迎撃の斬撃が……、その鋭さが、シオンの予想を上回ったから。
「ぐっ！」
振り上げた刃で重い一撃を受ける。と同時に一歩後退、衝撃を殺す。
「万全の姿勢でなくともこの威力か。まともにやられたら、どんな威力になるのかな」
さらにもう一歩下がって、間合いを開ける。
「なるほど……、再戦のために鍛錬を積んでいたのは、俺だけではなかったということか」
「天才の君を上回ろうというのだ。気合も入ろうというものだよ。なにしろ、ボクは不器用なものでね」
構えを取り直したアベルは、今度こそ攻撃に打って出る。
「努力は買おう。だが、簡単にくれてやるほど、安い首だと思うな」
力強い踏み込みから、流れるような動作で繰り出された剛撃、それをシオンは剣を傾けて受け流す。

刃の上を火花が散り、受け止めきれなかった衝撃に、腕に切り傷が走った。けれど、
「はぁっ！」
直後、ついにシオンの斬撃が走る。
剣術大会の日にも一度として見られなかったシオン本来の返しの剣。
それは正確に、鋭く、アベルの脇腹を切り裂く。が……、
「はぁあああっ！」
気合の声をあげながら、アベルは肩口から、シオンに体当たりをくらわせた。
「……くっ、あえて近づくことで、間合いを外すか。やるじゃないか、アベル・レムノ」
「そちらこそ……。間合いを殺さなければ、今のでやられていたところだよ。鎖帷子を軽々と切り裂くとはさすがだね、シオン王子」
血が滲む脇腹を軽くたたきつつ、アベルが笑った。

第百二十八話　その声に応えて

剣を構えた二人が交差するたび、紅い鮮血が散る。
アベルの度重なる剛撃をさばきつつ、確実に反撃を当てていくシオン。その剣術はさながら剣舞。
あの夜のダンスパーティーの姿を彷彿(ほうふつ)とさせる華麗なる動きに、見守る兵たちは息を呑む。
天才の名に恥じぬ圧倒的な剣技に対して、立ち向かうアベルの武器はただ一つ。
それは、引けないという決意……。
普通の人間であれば感じる躊躇、シオンの斬撃に対する無意識の瞬間的な硬直、それによって生じる距離をアベルは軽々と踏み越える。
恐怖を飲み込み、なお一歩踏み出すことで、シオンの間合いを微妙にずらし、結果的にアベルは致命傷を受けずにすんでいた。
さらに、アベルの側が戦場用の防具を身に着けていることも、ダメージの軽減に役立っていた。けれど……、
「ここまでやるとは……、やはりお前はあなどれない男のようだな」
「ふふ、君を失望させずに済んで、なによりだよ」
やせ我慢に笑みを浮かべるアベルであったが……、その顔にはすでに余裕はない。少し前から、シオンの斬撃の威力が上がってきていることを、アベルは感じ取っていた。
シオン・ソール・サンクランドの剣は天才の剣。
戦いながら、間合いを調整することなど、容易いことなのだ。
――もう、もたないな……。次が最後、ぐらいか……。
膝をつき、痛みにわずかばかり顔をしかめて、アベルはため息を吐く。
それから、わずかに視線を動かして……、ミーアの方を見る。

――そうだ……、ボクは、彼女の前で無様な姿は見せられない。
大きく息を吸い、アベルは再び立ち上がる。
「構えたまえ、シオン王子。最後の勝負だ！」
剣を握りしめ、次の一撃にすべてをかけるべく、アベルは力をこめる。

「もうやめてくださいまし！　お二人とも、本当に死んでしまいますわっ！」
二人の様子を見て、不吉な予感に襲われたミーアは再び声を上げた。けれど……、やはり、ミーアの声は届かない。
二人が剣を収める様子はなかった。
それを見て、ミーアの心を絶望が支配する。
――ああ、わたくしの言葉は、結局、届かないのですわね……。
思い出されるのは、前の時間軸のことだ。
憎悪と怒りに支配された民衆に、ミーアは幾度も声をかけた。
ルードヴィッヒとともに帝国各地を回っていた時、帝国の姫として声を上げたのだ。けれど、ついに、人々の信頼を勝ち取ることはできなかった。
――あの時と、同じですわ……。
目の前で、今まさに斬り結ばんとする二人の姿を、ミーアは絶望に侵されながら見つめていた。
考えてみれば、それは当たり前のことなのかもしれない。
剣を持ち、戦う意思を固めた人間の前では、しょせん言葉は無力だ。
だから、ミーアの言葉だって……届きはしないのだ。

……本当に？

本当に、ミーアの声は、願いは……、届かないのだろうか？

否――そうではない！

例え、決闘に臨む王子たちにその声は届かなかったとしても――築いてきた絆は、彼女の声を届かせる。

いったい誰に？

彼女の、頼りになる忠臣たちにだ！

「困るなぁ……」

ミーアのすぐそばを駆け抜ける一陣の疾風。

その風に、ミーアの頬を伝う涙が宙に舞い、キラキラと光を放った。

「うちの姫さんを泣かすなんて、ちょっとやんちゃが過ぎるんじゃない？　王子さま方」

風は止まることなく、決闘の中心……剣を振り下ろさんとするアベルと、それを迎撃しようと剣を振り上げるシオンの間へと割り込んで。

鋭い金属音、その数は……、二つ！

直後、宙に舞うは二本の剣。

剣を喪失し、動きを止めた二人の王子の間には一人の男。

両手に持った剣をアベルとシオンにそれぞれ突き付けて、その男……、ディオン・アライアは朗らかな笑みを浮かべた。

「うちの姫さんは泣き虫なんだから、あまり泣かせないでもらえるかな？」

「あっ……」

突然の味方の到来に、不意に、ミーアは体から力が抜けるのを感じた。

かくん、っと膝が折れ、ふらふらーっと後ろに倒れかけたミーア

だったが、直後、ふわりと柔らかなものが彼女を抱きとめた。
「ミーアさま……！」
懐かしい声、ミーアが慌てて振り返ると、そこには、
「ご無事でよかったです！」
「あ、アンヌ……」
瞳いっぱいに涙をためた一番の忠臣が立っていた。
「アンヌ、アンヌぅ……」
ミーアがぎゅぅぅっとアンヌに抱き着いた次の瞬間、すぐそばで激情の声が上がった。

「無礼者っ！　貴様、殿下にいつまで剣を突き付けているっ！」
ミーアの護衛を任されていた男……、剛鉄槍ベルナルドが憤怒の表情でディオンを睨みつけていた。
「王族同士の神聖な決闘に水を差すとは無粋なことを」
「あはは、まぁ、そうだねー。命かけてる王子の家臣が我慢してるのに、勝手なことすんなって感じかな。でもさ、僕が剣を預けているのは、どちらの殿下でもないものでね」
「黙れ！　その無礼、万死に値する！　命をもって償うがいい！」
直後、ベルナルドが走り出した。
それを見たディオンは嬉しそうな笑みを浮かべると、左手の剣を地面に突き刺し、右の剣を両手持ちに持ち替えた。

第百二十八話　その声に応えて（後書き）

メリークリスマス！
みなさま、良いクリスマスをお過ごしくださいませ。

第百二十九話　帝国最強ＶＳ剛鉄槍

剛鉄槍――それは、穂先から持ち手に至るすべてが鋼で作られた鋭く剛重な槍を使うことから、ベルナルドにつけられた二つ名だ。
普通の兵士では、長く持っていることすらできない、その重たい槍を軽々と構えたまま、ベルナルドは突撃した。
「数々の無礼、万死に値する。我が槍で突き殺してくれるわ！」
騎兵のごときすさまじい突進から、すべての勢いを乗せた突き。
それはさながら、地を這う竜巻のごとく、ディオンへと繰り出された！

激突！

ガィンッ！　と重く響く金属の音。
交錯は一瞬、ベルナルドはディオンの後ろへと駆け抜けていく。
刹那の静寂、その後、剣を振り切った姿勢のまま、ディオンは言った。
「なるほど、すさまじい突きだ……。称賛に値するね。でも、一つだけ興味があるな……」
剣を構えなおしながら振り返り、ディオンは笑う。
「その穂先を失った槍で、どうやってこの僕を刺し殺すつもりだ？」
直後、ひゅんひゅん、っと風切り音を立てて、綺麗に斬られた穂先が天空から降ってきた。
それは、戦場ではよくある風景……、集まっていた兵士は何気なくそれを見ていて……。
直後に、思い出す。
それが決して尋常ではないということに。
そう、ベルナルドが使っている槍は普通の槍ではない。それは一

本の鋼なのだ。その穂先が斬られたということは、すなわち……。
「鉄を斬るとは、敵ながら見事なり」
振り返ったベルナルドの手にあるのは、きれいな切断面を覗かせる鋼の棒だった。
交錯したあの一瞬に、ディオンの振り上げた高速の刃が、その鋼を切り裂き、槍を単なる棒へとならしめたのだ。
「まぁ、主君の前だし、このぐらいはね。で？　どうするんだい？」
「知れたこと……。突き殺せぬとあらば……殴殺するのみ」
ぶん、っと鋼の棒を振るって、ベルナルドが笑う。
軽々と超重量の鋼の棒を振るうベルナルドが持てば、それはただの槍の残骸にあらず。頭をかすめれば意識を刈り取り、まともに当たれば骨をも砕く恐るべき凶器となる。
未だ衰えるどころか、いや増すばかりのその殺気に、今度はディオンが称賛を送る。
「ははは、見事、見事。レムノ王国にも楽しいやつがいるなぁ。名前を聞いても？」
「ベルナルド・ヴァージル。第二騎士団、団長である」
「おー、噂に名高い剛鉄槍か。なるほどなるほど、確かに噂にたがわぬ豪傑ぶり。アンタのような者がいるとは、なかなかどうして、レムノ王国もあなどれないな」
「わしも名前を聞いておこうか、帝国の騎士よ」
「ディオン・アライア。僭越（せんえつ）ながら、帝国最強の騎士を自負しているよ」
軽口を叩くディオンを、ベルナルドは鼻で笑い飛ばした。
「ふふん、貴公程度で最強とは、ティアムーン帝国の底が知れるな」
「……言うねぇ、剛鉄槍。その軽口、後悔することにならなければいいけどね」
ディオンは、地面に刺した剣を引き抜き、再びの二刀流になる。
「突撃、突進、突破こそが槍使いの誉れよ。後悔なんぞと軟弱なことをする暇なぞないわ」

ベルナルドは、鋼鉄の棒を突きつけるようにして構え、迎撃の構えをとる。
一触即発、再び緊張が火花を散らしかけたまさにその時……！
「双方、そこまでにしてもらおう！」
鋭くも凛とした声が高々と響いた。
「わきまえよ！　ミーア姫殿下の御前である。双方、速やかに武器を収めよ！」
いつの間に現れたのか……。ミーアのすぐ隣、ルードヴィッヒが高々に声を張り上げる。
ちらり、とそちらに目をやったディオンが、やれやれとばかりにため息を吐き、それから両手の剣を地面に突き刺した。
それから、ベルナルドの方を一睨みする。
「ちっ……」
対するベルナルドは、苦々しげな顔をしながら構えを解いた。
彼が突撃した理由は二つあった。
一つは、無論、王子のそばに得体のしれない男が剣を持って立っているという状況を打開するため。
雰囲気的には王子に害を加えるとは思いづらかったが、さりとて放っておくことはできなかった。
けれど、それに輪をかけてもう一つの理由が大きかった。
それは、その場の主導権を握ることだったのだが……。
ベルナルドが構えを解いたことで、自然、みなの視線が、ミーアへと向いた。
主導権を握るもの、この場の支配者たるミーアのもとへ……。
「はぇ……？」
そもそも……殿下の御前というのであれば、アベルもそうだし、ミーアと同格のシオンだとて、この場にはいるのだ。
されど、強力な騎士であるベルナルドを圧倒したディオンが……、この場における最強の戦士たる男が素直に命令に従い、剣をおさめたことで、この場における主導権は完全にミーアに流れていた。

ルードヴィッヒの絶妙かつ巧妙な誘導である。
その上で、満を持してルードヴィッヒはミーアの方を見た。
さぁ、ここから先はあなたの出番ですよ、とばかりに誇らしげな顔で……。
……ぶっちゃけミーアとしては、いい迷惑である。
なにしろ、今のミーアは腰が抜けた上に、泣きべそ状態である。
――え？　え？　なんで、みなさん、わたくしの方を見ておりますの？
兵たちの視線を受けて、早くも小心者の心が悲鳴（チキンハート）を上げる。
けれど……、今のミーアには頼りになる忠臣がついているのだ。
助けを求めて、アンヌの方を向くと、第一の忠臣は頼もしげに頷き、ミーアの涙を拭い、顔をキレイにして、すっすと髪を整えてから、もう一度、頷いた。
「私たちがついてますから……」
――あ、ああ……、逃げられませんのね……。
その言葉に、ミーアはついに覚悟を決め、兵たちの方を振り向いた。
前日にお風呂に入ったことに加え、わずかに潤みを残したその瞳は、ミーアに美少女めいた風格を付け加えていた。
後に出版されたミーア皇女伝にはその場にいた兵士の証言が載っていた。
「その姿は戦場に舞い降りた月の女神のようだった」（注：エリス意訳）

第百三十話　ミーアの〝かみ〟演説

お忘れかもしれないが、ミーアとて皇女としてこの世に生を受けた者。実のところ大勢の前で話をするのは慣れていた。

前の時間軸での話ではあるが、怒号が飛び交う場所にルードヴィッヒとともに行き、演説をすることは、ないことではなかった。

けれど……、

――なっ、なんか、ちょっと怖いですわ！

自分に集まる視線に、ミーアは若干ビビっていた。何しろ、完全武装の若い男たちが静まり返って、みな熱心にミーアの声に耳を傾けようとしているのだ。

――もう！　もっと騒々しくしていてくだされば、いいのに。

これでは、少しも言い間違いができないではないか！　と憤っていたのが、悪かったのだろうか。

「みなさま、聞いてくださいませ。わたくしはミーア・ルーにゃ……」

噛んだ。

盛大に噛んでしまった。しかも、自分の名前のところでだ。

先日、噛んだ箇所と同じだったために、口内炎が若干心配になってしまう。

それはさておき……、緊張にこわばった顔をしていた兵士たちだったが、それだけに、この不意打ちにはやられた。

何人かが噴き出し、何人かが頬を赤く染めるミーアに微笑ましげな視線を向ける。

一方、最初の自己紹介の時点で、兵たちの心をガッチリ掴んだミーアに、ルードヴィッヒは瞠目（どうもく）した。

「まさか、今のもわざとなのか……？」

などと的外れなことをつぶやいていたりするわけだが、とうのミ

ーアはそれどころではない。
ブルブル震えながら、よろよろと踵を返して、アンヌの洋服に顔をうずめた。
「……もう、いやですわ」
「みっ、ミーアさま、頑張ってください！」
「……こんな辱めを受けたのは初めてですわ！」
恥ずかしさを紛らわすために憤怒の声を上げるミーア。まぁ、自分のせいだから、誰にも当たれないわけだが……。
それでも、気を取り直して、ミーアは話し始め……ようとして気づいた。
――あら、わたくし、何を話せばよろしいんですの？
考えてみるまでもなく、ミーアにレムノ王国軍を止めるプランはない。そもそもの話、ミーアがここまでやってきたのはアベルに会うためなのだ。
その目的を達成してしまったわけで……、今までも決して考えがあっての行動ではないが、ここから先はより一層のノープランなのだ。
――どっどっどうすれば……？
などという内心の動揺を隠すために、ミーアは極上の笑みを浮かべる。笑って誤魔化す作戦である。
その笑みに、ますます兵士たちの熱気と期待は高まっていく。前日のお風呂で取り戻した肌艶の威力はダテではないのだ！
けれど、それにも限界がある。
――こっ、これ以上、黙っているわけにはいきませんわっ！
沈黙に耐え切れずに、ペラペラと余計なことをしゃべってしまう人が時々いるが……、ミーアはまさにそれだった。
何も……、何一つ考えないまま、ミーアが口にしたのはベールで飾ることすら忘れた願望だった。すなわち……、
「レムノ王国軍の皆さまには、このまま剣を抜くことなく、王都にお戻りいただきたいのですわ」

これである！　当然……、
「馬鹿な。何もせぬまま、反乱軍を放置したまま、我々に戻れというのかっ！」
反論はすぐに飛んできた……ものすごい勢いだった。
憤怒の声を上げたのはベルナルドだ。何を言うんだ、この小娘は！　という視線にミーアはひるみまくった。
――ひぃっ！　こっこっこの方、怖いですわ！　ディオン隊長と同じにおいを感じますわ！
その迫力によって、ようやくミーアの脳みそが回転を始める。今さら感は否めないが、仕方がない。最後までボーっとしているよりはマシである。
そうして、ミーアが出した結論、この窮地を脱する方法、それはっ！
「だ、だって馬鹿馬鹿しいですわ。あなたたちが戦うなんて……」
ヨイショだった……。
相手は烏合の衆ですよー？　あなたたちのような立派な騎士様が相手にすることなんかないですよー、という、ミーアなりの全力全開のヨイショである。
けれど、その言葉に、ある兵たちはさらに怒りの色を濃くした。
命がけで治安回復のために戦おうという自分たちの勇気を馬鹿にされたように感じたのだから、それは当然のことだった。
また、ある兵たちは違和感を覚えた。
民を虐殺することは非道であると非難されるならばわかる。
あるいは、単純に血を流すこと、戦をすることを忌避するようなことを言われたのでも納得はいく。
相手は年端もいかない少女、戦いを恐怖する気持ちから、そのようなことを口にする可能性は十分にあるだろう。
だが――よりにもよって馬鹿馬鹿しいとは？　どういう意味なのだろうか？
その奇妙な言い回しに首を傾げざるを得なかった。

そして……、ミーアを知る者、すなわちアベル王子から帝国の叡智の噂を聞き、軟弱な王子を頼りになる若き主君へと成長させた相手こそが彼女であると知っていた者たちは……、こう考えた。
「あの帝国の叡智が馬鹿馬鹿しいというのであれば、本当にこの戦いは馬鹿馬鹿しいものなのではないか？」と。
深刻な疑問を突き付けられた彼らは、次のミーアの言葉を、より一層の熱心をもって待った。
――ひぃっ！　こっ、この方たち、わたくしのお世辞が通じませんわ！
もともとミーアのお世辞はあまり上手くないので、たいていの人には通じないのだが、それはともかく……。
怒りにしろ、好奇心にしろ、自らに向けられた視線の変化を、ミーアは敏感に感じとった。
これは、ヤバいことになってきたのでは？　と冷や汗だらだらのミーアに、横から声がかけられる。
「馬鹿らしいというのは穏やかじゃないな、ミーア。そう言えば君は前も気になることを言っていたな。確か、違和感があるとか……」
手当を終えたシオンが、腕組みしてミーアの方を見ていた。
「それですわっ！」
ミーアは、それに乗っかった。話を変えられれば、何でもいいと思ったのだ。
「ええ、ええ、そうですわ。確かに言いましたわ」
人々の命運をかけたミーアの名演説は、迷走し、いまだ着地点を見いだせずにいた。

第百三十一話　黒き鴉の届け物

言葉にしてみて、改めて実感する。
この状況はおかしい、明らかに納得がいかない。
それは帝国で起きた革命、その前の、国が傾いていく様子をつぶさに見ていたミーアだからこそ、ルードヴィッヒに一つ一つ嫌味交じりに解説してもらっていたからこそ気づけた違和感。
レムノ王国で目にしてきたことと、かつてのティアムーン帝国の置かれていた状況は全く違う。
にもかかわらず、内乱が起きた原因も、その後の流れも非常に似通っているのだ。
ルドルフォン辺土伯とダサエフ・ドノヴァン宰相。
民の味方である貴族が害されたことで、内乱が起きる。そして、どちらも、圧政に苦しむ民衆を救うのはサンクランド王国だ。
条件が全く違う二つの場所で……そんな偶然がありえるだろうか？
――絶対に、そんなことありえませんわ。
これではまるで、何者かがサンクランド王国を正義の執行者に仕立て上げようとしているかのようではないか。
何者か……、運命の神か、はたまた残酷な悪魔の……、
「狡猾な企みのよう……ですわね」
そこまで考えて、ミーアははたと気づく。
――あら？　でも、これ……、どうやって説明すればよろしいのかしら？
そうなのだ、すべては、ミーアの前世の知識を前提にしたこと。ミーアは自らの違和感を説明する術をもっていないのだ。
――ど、ど、どうすればっ！？
焦るミーアだったが、すぐそばで、意外な人物が納得の声を上げた。

「狡猾な企み……。なるほど、もしや、姫殿下はこの反乱を何者かの奸計（かんけい）であると考えているわけですか。我が国を分断するための反乱であり、その者の思惑に踊らされて、同胞同士で血を流すのは『馬鹿らしいことだ』と……姫殿下はそう言いたいわけですな？」

ベルナルドは、先ほどの剣呑な気配とは打って変わって、興味深げな視線をミーアに向けていた。

「はぇ……？」

「さすがはミーア姫殿下。やはりお気づきでしたか」

「さすがです、ミーアさま！」

ぽかん、と口を開けるミーアを、ルードヴィッヒとアンヌの忠臣二名が感嘆の声ではやし立てる。

唯一、ディオンだけは腕組みして、じっと成り行きを見守っていたが……。

「ということは、もしや、シオン王子が体を張ってアベル王子を止めようとされたのもそういう事情があったからですかな？」

ベルナルドがシオンの方に視線を向ける。シオンはゆっくりと首を振り、

「いや、俺は……」

――なっ、なに丸くおさまりそうなのに、馬鹿正直に否定しようとしてますのっ！？

ミーアは大慌ててシオンの口を塞いだ。

シオンとしては、自分の譲れないものがあったからこそ戦ったわけで、戦った相手であるアベルもまた、そのはずで……、それを誤解されたままにすることは、アベルにも失礼になるとかなんとか、いろいろ考えて口を開いたわけだが……ぶっちゃけ、そんなこと知ったこっちゃないミーアである。

口を塞いだ上で、なんとかシオンを納得させる論理を組み立てる。

この時、ミーアの脳の回転は過去最速を誇っていた。

「よっ、より正確を期するならば、半分正解ですわ」

「半分？」

怪訝そうな顔をするベルナルド。同じく首を傾げるシオンにミーアは素早く耳打ちする。
「あなたは、わたくしを守るためにいらっしゃったわけですから、わたくしの目的がその狡猾な企みとやらを解決することであるならば、少なくとも半分はそのために来たと言えるのではなくって？と言えますわよね？」
というか、それで納得しやがれ、という意思を込めて、ミーアはシオンを睨み付ける。
「まぁ、そう言えないこともないとは思うが……」
「と、言うことですのっ！」
強引に言い切り、ミーアはギンっと周りを見回した。
――これでどうですのっ！？　きっ、切り抜けたのではなくってっ！？
誰も口を開かぬことに安堵して、ぱぁっと顔を輝かせかけた、まさにその時！
「しかし……」
重々しい口調で、ベルナルドが言った。
「残念ながら、姫殿下、それでは我々が帰る理由にはなりませぬ。姫殿下のおっしゃることの根拠もお聞きしたいところではあるが……。仮に、そのような思惑を持つ者がいたとしても、我々としては反乱軍を解体して、当地の治安を回復せねばならぬのは変わりませぬ」
――ああ、やっぱり……、そう簡単にはいきませんでしたわ。
がっくり肩を落とすミーア、であったが……
「連中とて税の引き下げがかなわぬとなれば、そう簡単には矛を収めるつもりはないと思いますが……」
その言葉に、再び息を吹き返す。
「あら、それは間違いですわ。反乱軍、つまり、蜂起した民たちが求めているのは、宰相ダサエフ・ドノヴァン卿の解放ですわ」
ミーアはリンシャが言っていたことを一字一句違わず伝える。

すると……、反応は劇的だった。
「……アベル王子、ドノヴァン伯を牢に捕らえたという話を、陛下から聞いておられますか？」
「いや……、そのようなことは聞かない。陛下は言っておられなかったし、ボクも初耳だ」
話を振られたアベルは、驚いた顔で首を振った。ちなみに、すでに手当はすんでいる。どうやら、大きなケガはなさそうで、ホッと安堵の息を吐くミーアである。
「なるほど……、どうやら、姫殿下の言には聞くべきところがありそうだが……、それもドノヴァン伯がどこに捕らえられているのかわからなければ、意味がありませぬな。ドノヴァン伯を助け出すことができれば、確かに反乱軍の連中を納得させられるでしょうが……」
ベルナルドの言葉に、ディオンが首肯する。
「そう、僕もそれに興味があったんだ、ミーア姫殿下。当然、囚われている場所の見当もついているのだと思うけど、しかし、そもそも殺されているんじゃないか？」
宰相ダサエフ・ドノヴァンは人質ではない。
民衆を蜂起させる、そのきっかけにさえなればいいのだから、何も生かしておく必要はない。
現に帝国革命のきっかけとなったルドルフォン伯は殺害されていたのだ。
ディオンの質問は、当然のものであったが……。
「はぇ……？」
当たり前のことだが、そんなことミーアに答えられるはずもない。何しろ……、すでに話は、ミーアの制御を完全に失っているのだ。
「え？　あ、や、それは、その……」
けれど……、助けはまたしても、意外な方向からもたらされた。
「それは、俺の方からお答えした方がよさそうですね」
聞き覚えのある声、視線を転じれば、赤い髪をかきつつ困ったよ

うな笑顔を浮かべる青年、キースウッドが立っていた。
そして、その肩には黒く美しい羽根をした鳥がとまっていた。
「キースウッド、無事だったのか？　というか、なんだ、その鴉は……」
シオンのその問いに、キースウッドは小さく肩をすくめた。
「吉報の使いですよ。いや、我々には悲報かもしれませんけどね」

ミーアが蒔いた種は遠き異国の地できれいな花を咲かせ、その地に住まう黒い鳥を魅了した。
鳥は、種をまいた者に、自らの持つ新たな希望の種を届ける。
かくて、モニカの託した希望は黒き鴉とともに届いた。
帝国の叡智のもとに集いし悲劇を覆す種子。
その芽吹きの時は、間近に迫っていた。

第百三十一話　黒き鴉の届け物（後書き）

レビューをつけていただきありがとうございます。
漫画化……いいですね。憧れますw

第百三十二話　ミーア姫、大人の余裕を見せつける！（前書き）

次回、３１日も投稿する予定です。キリが悪いので三話ぐらい……
お時間がございましたら、どうぞ。

第百三十二話　ミーア姫、大人の余裕を見せつける！

「先にシオン王子に報告したいのですが、それでよろしいですか？」
そう言ってキースウッドとシオンが離れていくのを見送ってから、ミーアはアベルの方に歩み寄った。
とりあえず、すぐに事態が動くようなことはないだろうと判断したのだ。
「アベル王子、お怪我は大丈夫ですの？」
「ああ、君の家臣に救われたよ。あのまま続けていたら、やられていた。まだまだ鍛錬（たんれん）が足りないな」
その言葉で、ミーアは気づいた。
――なんだか、アベル王子……、また少したくましくなりましたわね。
夏休み前より、わずかばかり鋭さを増した凛々しい気配……。少し筋肉を増した体を見つめて、ミーアは、ほわぁっとため息を吐いた。
「ん？　ミーア姫、どうかしたのかい？」
ミーアの視線に気づいたのか、アベルは小さく首を傾げた。ミーアは慌てて目をそらす。
「なっ、なんでもございませんわ」
「だが、顔が赤いようだが……。ここまで来るのに無理をしたのではないか？」
「あら、無理ならば、むしろあなたの方が……あっ」
と、そこでミーアは思い出した。
「ふん、知りませんわ！」
「なっ、ど、どうしたのかね？　ミーア姫、ボクが何か……」
慌てた様子のアベルに、ミーアは言ってやる！
「先ほど、わたくしのことを無視して、危ないことされてましたわ

ね。アベル王子！　わたくしがどんな気持ちでいたかなんて、きっとあなたにはわからないですわ」
　そうして、ぷいっと顔を背ける。思い出したら、腹が立ってきたのだ。
「まったく、シオンもシオンですわ。本気でアベル王子に斬りかかるなんて、信じられませんわっ！」
　プリプリ怒るミーアを見て、アベルは苦笑いを浮かべた。それから、ちょっぴり寂しそうに、
「しかし……、シオン王子は、呼び捨てなのだな」
　小さな声でつぶやいた。
　一瞬、ミーアはなんのことかわからなかったのだが……。
　――あら？　もしかしてアベル王子、やきもちを焼いているんですの？　わたくしとシオンが互いの名前を呼び捨てにしてるから……。
　すぐにピンときた！　ミーアの勘はしょーもない時ほど冴えわたるのだ。
　そうして……、ちょっぴり微笑ましくなった。
　――もう、別に、呼び捨てにするぐらい、大したことでもございませんのに。
　シオンを呼び捨てにする時には、たいそう照れていたミーアだったが……。当然、そんなことは記憶の彼方に放り投げている。
「これは、身分を隠すためで、深い意味はございませんわ。今回はお忍びできているんですのよ？」
「ああ……、なるほど、そういうことだったのか……。よかった」
　心底から安堵の笑みを浮かべるアベルに、ミーアはますます気をよくした。
　当然、先ほどまで怒っていたことも、記憶の彼方に放り投げている。
　ミーアの記憶の彼方は、ミーアの肩で投げても届く程度の近さにあるのだ。

――もう、仕方ありませんわね。特別に、アベル王子も、呼び捨てにして差し上げますわ。まぁ、そもそも、アベル王子はまだ子どもですし、わたくしが呼び捨てにすることなど、むしろ普通のことですけれど……。

ミーアは、大人の余裕いっぱいに、アベルに声をかける。

そう、余裕あふれる、ごくごく冷静な声を……、

「あの……、えーっと、その……あ、あ、ああ、アベル……」

小声で『王子』、とついつい付け足してしまうミーア。

全然、冷静じゃなかった！

それでも、幸いなことに付け足した方は聞こえていなかったらしく、アベルはびっくりしたような顔で、ミーアの方を見た。

「別に、その、かまいませんわ。わたくしのことを、その……ミーア、と呼び捨てになされても。そっ、そのかわり、わたくしも、その……、あ、ああ、アベル、と……そう、お呼びいたしますわ」

口をアワアワさせつつ、いっぱいいっぱいになりながらも、ミーアは言った。

すると……、アベルの顔に輝くような笑みが浮かんだ。

「本当かい！？　それは、とても光栄だ」

子どものように純粋で、裏表のない、心からのまぶしい笑顔。

つい先ほどまで、またちょっと男らしくなったかしら……などと思っていた相手の、そんな無垢（むく）な笑みを見て、あまりのギャップにミーアはキュンとした。

一瞬で、心臓が高鳴る！

頬がものすごーく熱くなり、ふにゃあっと目の前が歪むような……、なんともふわふわした気持ちになってしまったのだ。

大人の余裕とか……全然なかった！

「あー、えーっと、それでは、さっそく……、その、み、ミーア……」

「はっ、はいっ！」

名前を呼ばれた瞬間、ミーアは背筋をピンと伸ばした。

それから、はぁふぅ、と息を荒げながら、
「あ、ああ、アベル……」
なんとか、アベルの名前を呼ぶ。
それから急に恥ずかしくなってしまって、真っ赤になってうつむいた。

などという……甘酸っぱい恋愛空間から少し離れた場所で……、
シオンとキースウッドが深刻な顔で話し込んでいた。
やがて、話が終わったのか、戻ってきたシオンはほんの少し青い顔をしていた。
「アベル王子、ミーア、話がある」
その声は、思いのほか硬かった。

第百三十二話　ミーア姫、大人の余裕を見せつける！（後書き）

叱咤激励レビュー恐縮です。ありがとうございます。
スピードを取り戻せるように頑張りますね

第百三十三話　進め！　帝国の叡智の照らした道を！

「どうかしましたの？　シオン、なんだか、顔が怖いですわよ」
まぁ、いつもですけど、と軽口を叩こうとするミーアだったが、寸でのところでその言葉を飲みこんだ。
なぜならシオンの顔は怖いというよりも蒼白で、なんとなくだが生気がないように思えたからだ。
「シオン、いったいなにが……」
ミーアの問いかけに答えずに、シオンはアベルの方に近づくと、地面に膝をつき、そのまま手をついた。
「ひぃっ！？」
あまりの予想外すぎる行動にミーアは息を呑んだ。それから、慌てて空に目を向ける。
槍でも降ってこないか、と心配になったのだ。
なにしろ、あの、シオン・ソール・サンクランドが、臆面もなく土下座をしているのだ。
こんな光景、滅多に拝めるものでもない。
ミーアは、それを見てスッキリする……というよりは、むしろ不気味さに鳥肌が立った。
――これは、不吉ですわ。この男が土下座なんて、何か恐ろしいことが起こらなければよろしいのですけど……。
などと若干失礼なことを考えつつ、ミーアはその光景を見守っていた。
「シオン王子、これは、いったい……？　とりあえず、顔を上げてもらえるかい？」
アベルは驚きつつも、シオンのそばに膝をつく。
けれど、シオンは顔を上げようとしなかった。
「すまなかった、アベル王子……。俺は、謝らなければならない」

「どういうことなのかね？」
厳しい顔をするアベルに、隣にいたキースウッドが代わりに答える。
「我が国の諜報部隊≪風鴉≫の中の一部隊が暴走して、このような事態を巻き起こしてしまったらしいのです」
そうして、キースウッドの口から語られた事実に、ミーアは口をあんぐり開けた。
それは、いささかお淑やかさに欠けるというか……、ちょっぴりおバカに見える顔だったが、そのようなことにかまってはいられなかった。
――なっ、なっ、なっ……なんですってー！
混乱に頭がグルグルしてしょうがなかった。
――たったしかに、そうですわ。帝国とレムノ王国、どちらの内乱でも美味しいところを持っていくのはサンクランドですし、全部、サンクランドが仕掛けたことと言うのであれば納得はいきますけど……。
ふいに、まぶたの裏にあの日の光景が甦ってくる。
赤い夕陽、死の恐怖に震えながら上がる断頭台。
それが、裁く側の手によって引き起こされていたというのだ。
地に頭をつけるシオンを見下ろして、ミーアは思う。
――ああ、これは、わたくしが頭を下げられているのと同じですわね……。
これは、ある種の意趣返し、復讐の結末。本当ならば……、それは快いはずの光景のはずで……、なのに、
――あんまり、見ていて気持ちのいいものでは、ございませんわ。
ミーアの胸には、なんとも言えない苦みが走る。
それは恐らく、シオンの首を断罪の刃で切り落としても同じことだろう。
ミーアはそれを不思議なことだとは思わなかった。同じ学校に通い、ともに旅をした相手が裁かれるのを見て気持ちいいと感じるよ

うな者は、きっと嫌な奴に違いない。
――シオンは頭が固いから、いろいろ縛られてるみたいですけれど……、わたくしまでこいつの哲学に従う必要はございませんわ。
嫌なものは嫌、どんな時でも自分の感性ファーストなミーアなのである。
――ですけど、アベル王子は、どうされるつもりかしら……？
不安なのはアベル王子だった。彼にはシオンを断罪する資格があるし、それはほかならぬシオンが貫いてきた態度でもあるのだ。
権力を持つ者は責任を負うべきで、罪があれば裁かれるべき。
厳密に言えば、レムノ王国を陥れたのはシオン個人ではない。責任を負うべきもまず第一に、サンクランド国王であるべきだ。
しかし、シオンはそれを潔しとはしない。
彼が教え込まれ、彼自身を縛るルールに照らし合わせれば、そこに罪がないとは絶対に言えないのだ。
固唾をのんで見守るミーア。その目の前で、アベルは一歩、シオンに近づく。
「顔をあげたまえ、シオン王子。君にそのような態度は似合わないだろう」
「……しかし」
「頭を下げるのも、まぁ、いいが……。あえて言うならば、王族には王族の責任の取り方があるはずではないかね？」
「責任の取り方……」
「我らがなすべきは、民を安んじて治めること。そのためにボクはこの戦を『武』によって平定すべきだと思った。けれど……この争いを止める術を示してくれた者がいるのだ。そう、この『馬鹿げた争い』をね……」
それから、アベルはミーアの方を見て、ふっと表情を和らげた。
「進むべき道を光で照らしてくれた者がいる。ならば、我らがすべきことは、その道を突き進むことだ。違うだろうか？」
「なるほど、その通りだな」

シオンは、小さく息を吐き、それから立ち上がる。
「頭を下げ、許しをこうても……、裁かれることを望んでも、それは自己満足に過ぎない、そういうことか」
「救われたのだよ、ボクも君も。民の上に立つ者として正しきことができる。その機会を与えられたのだから、それに感謝して力を尽くすべきだと、ボクは思うよ」
「帝国の叡智が照らしてくれた道を今は行くのみ、か」
そうして、二人はミーアの方へと視線を向ける。と、ミーアはとても満足そうな笑みを浮かべて歩み寄ってきた。

第百三十三話　進め！　帝国の叡智の照らした道を！（後書き）

大晦日特別投稿：次は１２時に投稿します。
念のために言っておくと、ミーアの「ざまぁ！」は、これからです。

第百三十四話　ミーア姫、ハイキック！

ミーアは、一歩引いたところでアベルとシオンとのやり取りを見ていた。どうやら、アベルはシオンのことを許したらしい。

――よかったですわ……、さすがはアベル。

彼が自分と同じ判断をしてくれたことが、ちょっぴり嬉しいミーアである。

――それにしても、当分はシオンにでかい顔されずに済みそうですわね。

ミーアはニマニマしながら、シオンに歩み寄った。

「許してもらえたみたいで、よかったですわ」

「ああ、君のおかげだ、ミーア」

シオンはミーアに顔を向けて、静かに頭を下げる。その隣で、アベルが苦笑しつつ肩をすくめた。

「まぁ、正直、父上に罪がないとは言えないからね。サンクランドのせいにばかりはできないさ」

アベルの言葉の正しさを、ミーアはよく知っていた。すべての責任を陰謀に押し付けるわけにはいかないのだ。

あの時の帝国は確かに腐っていて……、それは裁かれても仕方がないことだった。

だからこそ、ミーアが文句を言いたいのは一つだけだ。

「シオン、ようやくあなたも知りましたわね、失敗を」

ミーアの指摘に、シオンはきょとんとした顔をした。

「あなたのような方は知らないかもしれませんけれど、人間は失敗するものなのですわ。完璧に生きられる人間など、いはしない。だからこそ、せめてやり直しの機会を与えてあげることですわ」

特に、わたくしには！　と心の中で付け足すミーアである。

何しろ、前の時間軸はその機会が一切与えられなかったわけで…

…。
「でも……そう考えると……なんだか」
少し落ち着いてミーアは腕組みした。
――今回のレムノ王国と同じことが、帝国革命の時にも起こっていたなら……、正義の味方面してたこいつも、決して悪くなかったとは言えないわけで……。そう考えると……、なんだか、こう、ちょっとムカついてきましたわね……。
すまなそうな顔をするシオンを見て……ミーアの耳元で黒いミーアが囁いた。
――今だったら、ちょっとぐらい痛い目にあわせてやっても……大丈夫なんじゃないかしら？
……ちょっぴり調子に乗りやすいミーアである。
「シオン、あなたの失敗を忘れぬよう、その身に刻み込んで差し上げますわ」
「……？　なんのことだ？」
問いかけるシオンに、ミーアはわざとらしく、重々しい口調で言う。
「罪は罰が与えられて初めて完結するもの……。アベル王子には許していただけたようですけれど、それではあなたの心が納得しないのではなくて？」
「罰って、ちょっ、ミーア姫殿下！」
慌てた様子のキースウッドを、シオンは片手で制した。
「いや……、その通りだ。甘んじて罰を受けよう。俺は何をすればいい？」
「ふふん、いい心がけですわ！　シオン、ならば、そこにお立ちなさい」
鼻息荒くそう言うと、ミーアはじりじりと、瞳を閉じたシオンの周りをまわる。
一つの剣の型を鍛え続けたアベルと同じく……、ミーアにも磨き上げたものがあった。

アンヌに痛くないと言われた日より、それを懸命に鍛え上げ続けた。
いつか使う機会があるかと思い、その威力を高め続けたのだ。
その足から繰り出されるキックの威力を！
――思いっきり、痛くして差し上げますわ！
〝痛いの嫌い〟を返上して気合一閃！　力強く踏み込み、ハイキックを繰り出した！
思いっきり上げた足はシオンの頭……までは当然届かず……。
肩……までも届くことなく……。
脇腹……よりさらに下のお尻のところを直撃した！
ぺちぃっ！　という……何やら微妙な音が辺りに流れて……、
「その痛みとともに、心に刻み込むがよろしいですわ！　シオン」
やり切った顔で、ミーアが言った。

覚悟していたほどの痛みもなく……拍子抜けするほど弱弱しい蹴りをもらったシオンは、呆然とミーアの方を見つめた。
「今のはいったい……」
けれど、すぐに気づく。
――まさか、わざとか……？
罪は罰によって終わり過ちは裁かれることで完結する。
アベルに許しを与えられて、それで終わりでは、お前は気が済まないだろう？　と帝国の叡智は問うた。
罪には罰が必要で、罰によって終わるもので、だから……、だからこそ――ミーアはそれを許さない。
表向きは、今のでシオンに対する罰は与えられたことになる。だから、これ以降は誰もシオンに罰を与えてはくれない。
けれど、実際にそれが与えられなかったことを他ならぬシオン自身が知っている。
ゆえに、その罪は、その苦みは……決して消えることはない。

これから先、シオンは、正義を行おうとする時、必ず今日の失敗を思い出す。
その苦みを思い出し、立ち止まり、それが本当に正しいことなのか、と自分に問いかけなければならない。
そして自身が許されたように、相手もまた許される余地があるのではないか、と……、やり直しの機会を、慈悲を与えるべきなのではないか？　と、問い直すことになるだろう。
――今日の日の教訓を決して忘れることなく刻み込め、か……。
公正に裁けと、正義を行えと……。
幼き日より言われ続けた言葉、その本当の意味を、真の重みを、難しさを、シオンは初めて知ったような気がした。

後年、思慮深さと慈悲深さを称えられ「天秤王」の名を冠されたシオン・ソール・サンクランドは苦笑しつつ忠臣キースウッドに語ったという。
「あの日が俺にとっての分かれ道だった。もしもあの苦みを味わうことがなかったら俺は民の憎悪を買って首を取られていただろう。そして、もしもあの苦みを、取り返しがつかぬ段階で味わったなら、俺は過ちを認めることができなかっただろう」
と。

第百三十四話　ミーア姫、ハイキック！（後書き）

番外編「断罪王とミーアの忠臣」をアップしました。
前時間軸のエピソードで、深煎りビターブレンドぐらい、ほろ苦いだけのエピソードなので、そういうの嫌いな人は読まない方が良いかもしれません。

第１３４，５話　断罪王とミーアの忠臣（前書き）

※注：深煎りビターブレンドぐらいほろ苦い、前時間軸のお話。
ミーアの処刑の二日前にあったルードヴィッヒとシオンのやり取りです。

第１３４，５話　断罪王とミーアの忠臣

ティアムーン帝国、白月宮殿。
歴代のティアムーン帝国皇帝が住まう美しき城は、帝国全土が革命の炎に焼かれても、その美しさを失うことはなかった。
革命軍は、その城に首脳部の指揮所を置いた。
各地の戦が終わり、この国を腐らせた大貴族どもを滅ぼし尽くせば、またここが、この国の中枢となるはずだった。
その謁見の間に呼び出されたルードヴィッヒは、目の前の玉座に座る青年に片膝をついて、頭を垂れた。
「此度のお申し付け、大変うれしく思います。私はもともと帝国の官吏です。この国の民のために働くのは望むところです。ただ……、そのために、殿下に一つ頼みがあります」
そうして、ルードヴィッヒは顔を上げた。
その視線の先、美しい白銀の髪を持つ青年は、興味深げにルードヴィッヒに目を向けた。
「なんだろう？　この私にできることであれば、できる限りは聞こうと思うが……」
「私が願うのは一つだけです。シオン殿下。ミーア姫殿下の助命を……」
「残念だが、ミーア姫の処刑を取りやめることはできない」
最後まで、ルードヴィッヒの言葉を聞かずに、シオンは重々しく首を振った。
「血が流れすぎたのだ。大貴族や帝室の横暴に対しての民の怒りはあまりに大きい。処刑を取りやめれば、革命軍の首脳部に対する非難は大きくなる」
サンクランド王国の軍事力を持ってすれば民を抑えつけることはできる。されど、それでは混乱は長引き、国は一層疲弊する。多く

の民が苦しむことになる。
「一刻も早く混乱を収める必要がある。そのためには、革命軍には腐敗した権力を是正する正義の使徒として、民の信頼を集めてもらわねばならないのだ」
民の信認によって立つ新たな指導者。その下で帝国は新しく生まれ変わる。
それが最もスムーズで、無理のない復興への道。
まごうことなき正論で、公正極まる判断だった。
そのことはルードヴィッヒとてわかっていて……、だから、彼はため息を吐いて立ち上がった。
「そうですか……」
小さく肩をすくめて、踵を返す。
それは、一国の王族を前にして取るには、いささか以上に無礼な態度だった。
シオンの傍らに控えた兵士が思わず剣に手をかけるが、シオンはそれを片手で制した。
「力を貸してはもらえないだろうか？　帝国を立て直すためだ」
「シオン王子……、あなたは理想の主君だ。聡明で、公正で、きっと優秀な方なのだろう」
あのバカ姫殿下とは違って……。そう心の中で、ルードヴィッヒは付け加える。
セントノエル学園に通いつつ、その意味を全く理解しておらず、外交的配慮など一切なく好き勝手に付き合いを続けた結果……、一切の好意を受けられなかった彼女。
もしかしたら、支援をしてくれるかもしれなかった国の姫君と同級生だったにも関わらず、名前を忘れて……、
「えーっと、どなただったかしら？」
などと本人の前で言ってしまう体たらく……。
――せめて、クラスにいた有力者の名前とか、国ぐらいは覚えておけ！

という悪態を、何とか飲み干し、諫言したことが幾度あったことか……。

けれど、ルードヴィッヒが怒り切れなかったのは、そう指摘して以来、彼女が相手の名前と国の書かれたメモを片手に、何とか記憶しようと努力していたからだ。

そう、努力していたのだ……彼女は、ミーア姫殿下は……。

改めて、眼前のシオン王子を見る。

敵であるミーアに仕えていた自分にすら声をかける懐の深さ、聡明なる判断と適切な政治手腕。仕えるのに、眼前の人物ほど相応しい人物はいないとわかっているのに……。

ルードヴィッヒは寂しげな笑みを浮かべた。

「きっと、あなたは間違ったことなどないのだろうな。ただの一度も……だから……」

わからなかったのだろう、あの方の気持ちも、頑張りも……。

その言葉を飲み込んで、首を振る。

正しいことができる時に正しいことを行うこと。

それは、統治者の立派な資質だ。

手元に自由に使える金があったとして、それを正しきことのために使える者が果たしてどれほどいるだろうか。

目の前の、シオン・ソール・サンクランドは、間違いなくその金を正しいことに使える、そのような人間だ。

けれど……、同時に、それは幸運なことでもあるのだ。

正しいことを行うことができない状況に追い込まれることだって、世の中にはいくらだってある。

困窮した国民に食べ物を与えたくとも、それが手元にないことだってある。

民を豊かにするべく、正しく治めようとした時に、その能力も、国力もない場合だってある。

それでも……、その最悪な状況であがいたのが、自らの主君であったのだ。

小さく息を吐き、ルードヴィッヒはシオンの方を見た。
「あなたには、俺の力が必要とは思えない。優秀な部下など、いくらでもいるのでしょう」
自らが、感傷的になっていることを、ルードヴィッヒは自覚した。
頑張った、努力した、そんなもの言い訳にならない。
実際、多くの民が帝室の無能で、門閥貴族の横暴で死んだのだ。
その遺族の怒りは、どんな言葉によっても癒されることはない。
けれど、それでも……、彼女の努力が報われないことが悲しかった。
「俺は、あなたや、ティオーナ伯爵令嬢に仕える気にはならない。失礼する」
静かな声。そこにかすかな怒りが含まれていることに、驚きつつも、ルードヴィッヒはその場を後にした。
シオンが、そんな彼を罰することはなかった。
その二日後、帝都の広場にて。
ミーア・ルーナ・ティアムーンの処刑が行われ……、以降、ルードヴィッヒの姿を見た者はいなかった。

「ミーア姫には、案外、人望があったということか」
処刑が終わった後、執務室に戻ってから、シオンはつぶやいた。
彼の知るミーア・ルーナ・ティアムーンという少女は、わがままで勝手に権力を乱用する者だった。気に食わない下級貴族の娘には辛く当たり、わかりやすい価値を求める、そんなつまらない人間。
民を踏みつけにして、国自体を弱らせる、愚かな統治者に連なる者……。
到底、好意を抱きようがない人物であったはずだが……。
「俺の知らない面が、彼女にもあった……、そういうことなのだろうか」
そう考えると、ふいに、かの帝国皇女の顔が頭を過ぎった。

かつて、学び舎を共にし、言葉を交わした人間の首をはねるのだ。気分が良いはずもないが……、単なる感傷以上の、奇妙な苦みが彼の中に残った。

やがて、時は巡る。

ティアムーン帝国の崩壊をきっかけにして、大陸には混乱の時期が訪れる。

ヴェールガ公国におけるラフィーナの暗殺事件、レムノ王国での革命、そして、その波はサンクランド王国をも飲み込んだ。

数多の戦乱と国内の権力闘争、そのすべてを、国王シオンを中心に、彼の優秀な家臣団は乗り切った。国土の何割かを失い、民の犠牲も出たが、それでも、その数は他国に比して圧倒的に少なかった。

まず善政といってもよい、公正な統治だった。

しかし……、綺麗ごとで済まない判断を強いられるたび、シオンの脳裏に蘇るのは、あの日の紅い断頭台のことだった。

――間違ってはいなかったはずだ。あれは……、仕方のないことだった。

その都度、彼は自身に言い聞かせ続けた。

自分でも気づいていなかったが、それは明確な傷だった。

長いこと治療されることもなく、無視され続けた傷は、ことあるごとに彼を苦しめ続けた。

後年、〝断罪王〟の名で呼ばれたシオン・ソール・サンクランドは、善王としての名声を得るも、孤独のうちに生涯を閉じることになった。親しみでも好意でもなく、畏怖と恐怖の目で見られる、そのような人生だった。

それは、やがて、訪れるかもしれなかった一つの終焉。

ミーアが全力のへなちょこキックで蹴り飛ばしてやった未来の一つの形である。

第百三十五話　優しい信念

「あ、あのー、シオン……」
苦悶の表情を浮かべるシオンに、ちょっぴり心配になってミーアは声をかけた。
「ミーア、礼を言う。君は確かに帝国の叡智だ」
神妙な顔でお礼を言うシオンにミーアは……若干引いた。
――こ、こいつ、蹴られてお礼を言うって、どういうことですの？　もしかして、痛くされると嬉しくなってしまう、ティオーナさんのお父さまと同じ類のアレなんじゃ……。
「君に言われなければきっと気づくことができなかっただろう」
――ひぃっ！　きっ、気づく？　なっ、なにに？　なにに気づいてしまったんですのっ？　それに帝国の叡智とか、蹴るのに知恵は関係ないんじゃ……、つ、強さとか、角度が大事ということですのっ！？　蹴るのが上手いから、また今度、蹴ってくれとか頼まれたら、どうすればいいんですのっ！？
ミーアは、ひきつった笑みを浮かべて、
「そ、そう、それはよかったですわね」
それだけ言うと、どこかすっきりした顔をするシオンから、すすすっと視線をそらした。
なんだか、自分が取り返しのつかないことをやってしまったような気がしたが、考えないようにした。
そして、
「と、ところで、ダサエフ宰相が囚われている場所は分かったんですの？」
話を変える。問題の棚上げはミーアの常套手段である。
「ああ……、キースウッド、説明を」
シオンの言葉を受けて、キースウッドが頷いた

「情報によると、どうやらドノヴァン卿は、この町、セニアに監禁されているようです」
「なんですってっ！？」
驚愕に目を見開くミーア。
「アベル王子、この場所なのですが、わかりますか？」
キースウッドの問いかけに、アベルは静かに首を振る。
「いや、だが兵士の中に知っている者はいるかもしれない。聞いてみるか……」
「あら、それならリンシャさんに聞くのがよろしいんじゃないかしら」
ミーアはふと、思い付きを口にした。
――そもそもわたくしにだけ面倒ごとを押し付けてご自分は何もしないというのは、ちょっと甘いんじゃないかしら？
そんなことを考えながら、ミーアはちょーっぴり意地の悪い笑みを浮かべるのだった。

なんとも可愛らしい、輝くような笑みを浮かべるミーアに、アベルは一瞬、見とれそうになる。
それでも、何とか視線をそらし、咳払いしてから、改めて疑問を口にする。
「リンシャ？　それは誰だい？」
「ああ、実は、反乱軍のリーダーの妹と知り合いになりましたの。その方がリンシャさんといいまして……」
ミーアの説明を聞いたアベルは、思わず感嘆のため息をこぼす。
「そうか……。そんなことが……」
それだけで、アベルにはミーアの考えがわかったような気がした。
それは……、
――減刑を願ってのことか？
先ほど、ミーアが言っていたことを思い出す。

人は誰しも過ちを犯すもの。ゆえに、やり直す機会を与えてやれ、と。

いかに他国の間諜に乗せられたからと言って、反乱軍の参加者、特に中心となった者たちについてはお咎(とが)めなしとはいかない。

このままいけばおそらく極刑は免れないところだろう。

けれど元を正せば、彼らは重税に不満を持つ民衆なのだ。原因は王家の側にもあって、それを承知しているミーアは、彼らを憐れんだのではないか。

少しでも刑を軽くするために、彼らに機会を与えようと、そういうことなのではないか。

例えば、もしも、ここで少しでも事態の解決の役に立ったとすれば、あるいは情状酌量の余地は出てくるかもしれない。

――サンクランドの間諜に騙されたが、途中で心を入れ替え、姑息なる陰謀を妨害するためにレムノ王国軍に協力……などと言えば、父上のことだから、案外、納得なさるかもしれないな……。

レムノ国王は単純な男なのである……。

さらに、そこにティアムーン帝国の姫であるミーアの口添えがあれば、さらにその可能性は高まる。

――確実に、そのぐらい先のことまでは見通しているのだろうな……。

アベルは、感心すると同時に、少しだけ嬉しくなった。

彼女の叡智が、過ちを犯した者たちへの憐れみに向けられていることが、なぜだか、無性に嬉しくって……。

それは、慈悲深いというよりは甘い考え方だ。統治者にあるまじき考え方のはずだった。

にもかかわらず、アベルの胸にあるのは憧憬(しょうけい)だ。

なぜなら、ミーアのそれは甘いだけでなく、しっかりとした合理性に固められた考えだったからだ。

リンシャという少女がこのあたりに住んでいるのであれば、地理に詳しいだろう。

反乱軍の関係者であれば、監禁場所についての知識もあるかもしれない。
それに加えて、後処理のこともある。
仮にも民の代表者である革命派のリーダーを処刑したのであれば、相応に軋轢(あつれき)も生まれる。少なくとも、国王に反対する勢力には攻撃の材料を与えてしまうことになる。
かといって、体制を維持するためには厳罰を与えること、少なくともその姿勢を示すことは絶対に必要だ。正当な理由なく、それを怠れば、権力の維持に支障をきたす。
そう、正当な理由がない場合は……。
だからこそ、それをしないで済む、あるいはさせない理由を作ることこそが、ミーアがしようとしていることだ。
そして、無数の理によって固められてはいても、その中心にあるのはミーアの優しい信念だ。
――さすがはミーアだ……。今は無理でも、ボクもいつかは……。

……アベルがミーアの優しい信念とやらの正体に気づく日は……残念ながら来そうになかった。

第百三十五話　優しい信念（後書き）

ということで、今年の投稿はここまでにしたいと思います。
良い新年をお過ごしください。
お正月は、一日休んで二日からもう少し走り続けます。箱根駅伝の日ですしね。

第百三十六話　ミーア姫、悟りを開く

「しかし……サンクランドの間諜、風鴉だったか。我が国の王家の、ずいぶん深いところまで潜り込んでいるようだな」
ふと思い出したような口調で、アベルが言った。
「いったい誰なのやら……」
「ああ、知らせてくれたのはメイドのモニカ・ブエンティアだ」
「ちょっ、シオン殿下、それはっ……！」
驚いたキースウッドが止めようとするが、シオンは首を振って答える。
「いいんだ。風鴉は全員国に引きあげさせる。そのように父上に提案するつもりだ」
そう言われてしまうと、キースウッドとしては何も言えない。
それに、恐らくそれはシオンの提案の有無に関係なく、なされることでもあるだろう。
現状、サンクランドにしろ、レムノにしろ全面戦争などという事態は避けたいのだ。
レムノの側は戦力的な面から、サンクランドの側は外聞的な理由で。
そうなれば、極秘裏に会談が開かれることになり、恐らく賠償金などの形で解決が図られることになるのだろう。
その会談に先立って、レムノ側が風鴉の国外退去、自国内の諜報網の一掃をサンクランドに求めるのは、想像に難くない。
直接、陰謀に加担した者に、どのような処罰が下されるかは外交交渉次第だろうが……。
「それに、アベル王子であれば、彼女をどうこうしようとも思わないだろう？」
「ああ、それは信用してもらおう。しかし、モニカ……。そうか…

…、彼女が……」
アベルは、先日顔を合わせたメイドの顔を思い出した。
――ミーア姫の言いようではないが、彼女にはあまり厳罰を科してもらいたくはないな……。となると……。
アベルは苦笑しつつ、ミーアの方を見た。
「ミーア姫、すまないが君の家臣の、あの男を一緒に連れて行っても構わないだろうか？」
「……へ？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、アベルは肩をすくめた。
「本来はベルナルドに行ってもらうのが筋なんだろうが、彼はどうも融通が利かなくってね。できればまだ、サンクランドがこの件に関わっていたとは教えたくないんだ」
「ああ、そうなんですのね。まぁ……嫌とは言わないと思いますけれど……」
ミーアは微妙に気が進まない顔で、ディオンのもとに向かった。
「まぁ、姫殿下が行くというのなら、僕が行かないわけにはいかないよね」
ディオンは肩をすくめて、やれやれ、と首を振った。
――ああ、これ……わたくしも当然のごとく一緒に行くことになってるんですのね。ええ、ええ、知ってましたわ。
ミーアは悟りきった瞳で、ふぅーっとため息を吐いた。

結局、宰相ダサエフ・ドノヴァン救出に向かうのは、二人の王子とキースウッド、ディオン、さらにミーアとアンヌというメンバーになった。
ルードヴィッヒはランベールのもとに行き、ドノヴァン伯が返された場合には、即時、反乱軍を解散させるように交渉することになり、多少は剣の腕に覚えのあるティオーナもルードヴィッヒに同行することになった。

王子自らが現場に行くことには異論も上がったが、最終的にはこれ以外のメンバーを出すことができなかったのだ。
レムノ王国軍の兵士を入れることは、ランベールら地下革命派「蒼巾党」のメンバーが警戒して許さなかった。
といって、その革命派から兵を捻出することも、実力と信用という二つの理由からできない。
結果として、現在動ける中で、最も頼りになるのがミーアたちということになってしまったのだ。
――正直、僕だけでもいいぐらいだけど……まぁ、何かあったら、姫さんとお付きのメイドちゃんだけ守ればいいかなぁ。姫さんのお気に入りの王子殿下は、まぁ、自分で戦ってもらうとして……。
モニカからもたらされた情報によれば、監禁場所にいる敵は多くない。
戦闘訓練を受けた諜報員、風鴉が数名とジェムがいるのみだという。
少なくともその三倍はいないと面白くないなぁ、などと不穏なことを思ってしまうディオンであったが、今回はミーアが同行するということで、少しばかり気を引き締めておく。
「しかし戦闘に関しては特に心配してないけど……実際のところ、どうなのかな……？」
別れ際、ディオンはルードヴィッヒに尋ねた。
「なんのことだ？」
「敵を全滅させろってんならわかるんだけどさ、ダサエフ宰相を生きて取り返せってのはどうなのかね。どうも、僕には、この段階まで生かしておくとは思えないんだけど」
ダサエフ・ドノヴァンは、あくまでも民衆を蜂起させるきっかけに過ぎない。
生かしておく意味は、あまりないように思えるのだが……。
「なるほど……。しかし、ないことでもない、と俺は思ってる」
ルードヴィッヒの返答に、ディオンは意外そうな顔をした。

「そうなのかい。それは、また、どうして……？」
「ミーアさまに聞いたんだが……、革命派の主導者は口が上手い軽そうな男、だということだ」
その答えに首を傾げるディオンだったが、すぐに納得の声を上げた。
「ああ、そういうことか……。なるほど、生かしておく理由がないわけじゃないということだね。まぁ、なんにせよ、姫さんは僕の命に代えても守るから、おたくの方はきちんと革命派の連中を抑えといてくれ」
ひらひらと手を振って、ディオンは踵を返した。

第百三十六話　ミーア姫、悟りを開く　（後書き）

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

レムノ王国が片付くまで毎日投稿でいきます。あと数話の予定なので……。

第百三十七話　来る！（ミーア姫が……）

セニアの中心街、比較的、裕福な者たちが住まう地区にその館は建っていた。かつて、財を築いた商人が住んでいたというその館は広く、調度品も見事なものだった。

その地下室に、宰相ダサエフ・ドノヴァンは捕らえられていた。

境遇としては、さほど悪くはなかった。

監禁している者たちは、ダサエフが高齢であるということにしっかりと配慮を見せていた。だからといってずっと捕まっていたいかと言われると、もちろんそんなことはないのだが……。

「なぁ、そろそろオレらに協力する気になんねぇか？」

部屋に入ってきた軽薄そうな男に鋭い視線を向けてから、ダサエフは無言で首を振る。

「わっかんねぇな。あんたには家族もないし親族もいない。民衆のためを思えば、今こそ立つ時じゃねーの？」

「わしは、国王陛下が決定的な間違いを犯したとは思うておらぬよ。わが諫言（かんげん）をお聞き入れくださるまで幾度も言葉を尽くすのみ。剣によって陛下を討てば混乱に拍車がかかり、民はいっそう苦しもう」

「あんたが代わりに上に立てばいいだろう。やるべきことが見えてんなら、そのほうが早い。　興味がないわけでもねぇんだろ？」

国の頂点に立て……、それは貴族や政治家ならば、誰しも一度は憧れるものだ。

けれど、ダサエフは即座に首を振る。

「そもそも、まともに名を名乗らぬ者の言葉に従えというつもりかね？」

「あん？　そうだったか？　ちゃんと最初に名乗ったと思ったが……オレの名は」

「ジェム……だったな」

それは、この地域では、最もありふれた名だった。
名を名乗らぬ者を「名無しのジェム」と言ったりするほどにありふれた……。
ゆえに、ダサエフは男が本名を名乗っているとは思えなかった。
「消えよ。何度来ても無駄なこと、怪しげな男の誘惑に乗るほど、わしは若くはない」
「まぁ、いいけどよ。しかし、いつまでも、優しくしてもらえるとは思わんことだぜ？」
ジェムは、肩をすくめて部屋を後にした。

「ああ、くそ忌々しい……。あのじいさん、いい加減、ムカついてきたぜ」
廊下に出ると、ジェムは荒々しい口調でつぶやいた。
「本当なら、ぶっ殺してやれるところなんだが……。くそ、グレアムの野郎、とっとと使える奴を見つけて来いよ……」
風鴉で受けた戦闘訓練をもってすれば、ダサエフを殺すのは容易いことだった。もともとの予定ではそうする予定だったのだ。
けれど、それができずにいるのには、ある事情があった。
ティアムーン帝国におけるティオーナ・ルドルフォンのような存在が、ダサエフ・ドノヴァンにはいなかったのだ。
彼には子がなく、妻も亡くなって久しい。
親族もみな年老いて、国王に従属する者のみ。反逆など思いもよらない者たちばかりで、それ故に、ダサエフの死によって、復讐の大義名分を上手く活用できる者を見出せずにいるのだ。
ランベールは確かに口が上手い。それに加えジェムの指導により、ある程度ならば相手の心を読み取れるようにもなっている。
人間を熱狂させることなど、容易いこと。
その者の望んでいる言葉を読み取り、それに自分が望む方向性をつけてやるだけでよい。耳心地の良い言葉にくるんで、相手を狂わ

せる毒を混ぜ込めばいい。
現に、彼はその方法で幾人もの人間を操っている。
レムノ王国地下革命派の連中も、サンクランドの風鴉の者たちも。
けれど……、革命を成功させるためにはそれでは不足だ。暴徒の熱狂をまとめ上げる核としては不足なのだ。
「本来なら今頃は、帝国の混乱を焚きつけてりゃあいいころだったのに、まったく厄介なことだぜ……」
すべては帝国の叡智のせい……。あらゆることが準備不足、時間が圧倒的に足りなかった。
仕方なく彼は計画を変更した。用意された代替のシナリオはこうだ。
まず、ランベール率いる革命軍が宰相ダサエフ・ドノヴァンを救出。助け出されたドノヴァン卿は、そのまま革命軍に合流。民を率いて反政府活動を展開すると同時に、王政府の非を徹底的に弾劾してもらう。
ゆえに、この町、セニアに監禁されていたのだ。説得さえ上手くいっていれば修正は可能と判断していたのだが……。
「あのバカ野郎が……」
説得が終わるまで蜂起を見合わせていたというのに、ランベールは民を扇動して、騒乱を起こしてしまった。
口が上手く、民を操るのに長けているだけに、勝手に動かれては非常に厄介だ。
「やっぱり人選を誤ってやがるな。キープのつもりでとっておいただけだが。どうにも時間が足りねぇのがたまんねぇぜ……」
ジェムは、歪んだ笑みを浮かべながら、懐から一冊の本を取り出した。
黒塗りの表紙を持ったその本は、どこか気味の悪い空気を放っているように見えた。
「帝国の叡智……、ミーア・ルーナ・ティアムーン。かのラフィーナ・オルカ・ヴェールガの友人だというが……、よもやあの女の密

命を帯びた者じゃねぇだろうな……」
忌々し気につぶやき、本の表紙をなぞる。
と、そこに、うっすらと何かが浮かび上がる。細いひものようなそれは不格好ながらヘビのように見えた。
「帝国の崩壊を皮切りに、あらゆる国家の連鎖的な崩壊……。秩序の破壊によって訪れる混沌。それこそが我らの悲願……邪魔はさせねぇ」
どうやって、ダサエフ・ドノヴァンを懐柔しようか……、思案する彼は知らなかった。
計画の完全崩壊が、少女の姿をしてすぐそばまでやってきていることを。
ミーアが≪来る≫まで、あと数分。

第百三十八話　あの日と同じ夕陽の下で

ミーアの予想通り、リンシャはその建物の場所を知っていた。
「確か、もともと商人か何かの館よね。革命派の建物として使ったことはないと思うけど……」
その言葉で、さらに信ぴょう性は高まったといえた。素人である革命派の人間に隠されていたというのが、建物の重要さをかえって証明しているように思えるからだ。
ちなみにミーアから事情を聴いたリンシャは、二つ返事で案内を快諾してくれた。それは良かったのだが……。
「どうかしましたの？」
なぜだろう、マジマジと自身の顔を覗き込んでくるリンシャに、ミーアは首を傾げた。
「え、あ、ううん。何でもないんだけど……、まさか、ほんとにこの争いを止めてくれるなんて思わなかったから……。あなたのこと、てっきり……」
「てっきり……なんですの？」
首を傾げるミーアに、リンシャは無言で首を振る。
「……なんでもない。行きましょう」
「なんだか、ものすごく失礼なことを考えてたような気がいたしますけれど……」
ミーアは、微妙に釈然としない顔をしていたが、それでもリンシャの後について走り出した。

セニアはしんと静まり返っていた。道を行く者の姿は少ない。ほとんどいないといっても過言ではなかった。
「まずいな。これじゃあ、こっちの動きがまるわかりだ」
キースウッドは恨めしげにあたりを見回した。

「仕方ないわ。誰も無用な争いに巻き込まれたいなんて思わないでしょうし」
リンシャは肩をすくめてから、狭い路地に向かった。いくつかの角を曲がり、やがて……。
「あれよ！」
リンシャが指さす先に、大きな館が見えた。
館の周りには広い庭が広がっていた。身を隠せそうな植木などもなく、館まで遮蔽物もなさそうだ。
「どうする？　暗くなるまで待ってもいいけど……」
そのリンシャの言葉と同時に、あたりがほのかに暗くなったように感じた。
空を見上げたミーアは、
「ああ、もう、こんな時間、なんですのね……」
思わずつぶやき、微かに瞳を細めた。
いつの間にやら夕暮れ時が迫っていた。
赤い、燃えるように赤い夕陽が視界を焼く。
それは、まるで、そう……あの日のように……。
耳に届くは、罵倒の声。数多の憎悪の視線に晒されて歩く、心細さ。
あの日の孤独が蘇ってきて……。
――なんだか……、嫌な感じですわ……。
あの痛みの原因を作った者が、目の前の建物の中にいる。そう思うとふいに、ぞわっと背筋が粟立った。
ミーアは思わず腕をさするが、その身を覆う寒気はねっとりと体にまとわりついて、離れようとしなくって……。
「怖いのかい？　ミーア」
「はぇ？」
ふと横を見ると、アベルがじっと真剣な顔で見つめていた。
「あ……アベル……、いえ、なんでも、ありませんわ」
ミーアは小さく首を振った。

だって……、ただ、似たような光景で昔を思い出してしまっただけなのだ。
それは、ただの気持ちの問題に過ぎないのだから……。
なのに……、アベルはじっとミーアの顔を見つめてから、そっと、ミーアの手をつかんだ。
「……ぇ？」
突然のことに、ミーアはぴくん、っと体を震わせる。
「えっ、なっ、なっ、なっ！」
ミーアの心を占領していた不安感が粉みじんに消し飛んだっ！
優しく、ミーアの手を包み込むアベルの手のひら。温かな少年の温もりに、ミーアの口から、ほわぁっと息がこぼれた。
「突然すまない。昔、母上に、こうされたら落ち着いたものだから……」
言い訳するようにそう言って、アベルはそっと目をそらした。その鼻先は赤く染まっている。
「お、おお、お気遣い、ありがとうございますわ……アベル」
ミーアは耳の先まで赤くなりつつ、それだけ答えるのがやっとだった。
しかも、声はところどころかすれているし、微妙に震えてしまっていた。
いっぱいいっぱいである。
……ちなみに、あえて確認するまでもないことではあるのだが……、手を握られただけである。
それだけ！　なのである。
……とっても純情乙女なミーアである。
「二人とも、どうかしたのか？」
と、その時、前を行くシオンが声をかけてきた。
――いっ、今、いいところでしたのにっ！
などと、内心でつぶやきつつ、実はちょっぴりホッとしてしまうミーア。

慣れない恋愛シチュエーションに、ミーアの小心（チキンハート）は、早くも限界突破しつつあったのだ。
……手を握られただけなのだが……。
「お国の存続のために必要なのはわかってるけど、時と場所を選んだ方がいいですよ、姫さん」
ディオンが呆れた様子で、やれやれ、と首を振った。
「それに、さすがにまだ、お世継ぎを産むのは早いですよ」
「なっ！　てっ、手をつないだぐらいで、子どもなんか産まれませんわっ！　た、たぶん」
たぶんどころか、絶対になわけだが……、微妙に自信なさげなミーアである。
そんなミーアをかばうように、アンヌがディオンとの間に立った。
「ディオンさん、あんまりミーアさまをからかわないでください」
「ははは、ルードヴィッヒ殿といい、アンヌ嬢といい過保護だなぁ」
まったく反省した様子のないディオンを、ミーアは恨めし気な目でにらむ。
けれど、すぐに、その表情は柔らかなものになった。
あの日と同じ夕暮れ時。赤く不吉に染まった空の下……。けれど、一人ぼっちではないことが心強かった。
アベルがいる。シオンが、キースウッドが、ディオンがいる。
そして、すぐそばには忠臣のアンヌが、離れていてもルードヴィッヒが、ついでに宿敵だったティオーナまでもがいる。
――大丈夫、絶対にうまくいきますわ。
頷くミーアを、
「あんたたち、隠れて行く気、ないでしょ？」
ただ一人、リンシャだけが疲れ切った顔で見ていた。

第百三十八話　あの日と同じ夕陽の下で（後書き）

土日休んでまた月曜日から。

第百三十九話　わたくし、戦場から帰ったら……　ｂｙミーア

隠れて行く気がない……などとリンシャに揶揄されたものの……、
「館内にいる者たちよ。武器を捨てて、出てこい。我が名はシオン・ソール・サンクランド。すでに白鴉の企みは露見している。お前たちが戦う意味はない」
まさか、突入前に大声で呼びかける、などとは思ってもみなかったミーアである。
――本当にこれで大丈夫かしら？
思わず、不安になってディオンの方を見るが、ディオンは涼しい顔で小さく肩をすくめた。
「素直に信じるかは微妙なところですけどね。まぁ、迷ってはくれると思いますよ」
それから、ディオンは剣を抜いて肩に担いだ。
「それじゃあ、貴き方々、どうか我が後ろより前に出ぬように。うっかり前に出たら命の保証は致しかねますよ」
ミーアたちは、二手に分かれて館に潜入することにした。表からは、シオン、ディオンとアベル、それにミーアとアンヌである。
アンヌはともかく、ミーアが完全におまけであることは言うまでもない。
ちなみに裏手にはリンシャとキースウッドが回っている。
「では、行きますか」
剣を一閃、ディオンが正面の扉を破った。
薄闇に包まれた屋内を確認し、ディオンはつぶっていた眼を開いた。それは暗い屋内に突入する際、すぐに視界を確保するための技術だったが……それが、功を奏した。
直後、ガィン、という金属音。
死角から突きだされた刃をあっさりと受け止めてディオンがうっ

すら苦笑を浮かべた。
「おっと、奇襲攻撃か」
死角からの、完全なる不意打ち。にもかかわらず、ディオンは驚く様子もなく、肩をすくめた。
「さすがは間諜、騎士というよりは、やり方が暗殺者めいてるなぁ。空間が限られる屋内なら剣を振り回せないとでも思った？　それとも暗闇に目が慣れる前に倒してしまおうと思ってたとか」
やれやれ、と首を振って続ける。
「悪いが、その程度の突撃だったら、目をつぶってても対処できるよ。どうも剛鉄槍のせいで、期待値が上がってたかなぁ」
刃物を持った男の腕を思い切り握る。と、ミシリときしむような音がして、男の顔がわずかばかり苦痛にゆがむ。
ディオンはそのまま顔を寄せ、男の目を覗き込み、獰猛な笑みを浮かべた。
「ところで、さ。聞こえてたと思うんだけど、こちらにはシオン王子がついてる」
それを聞き、男が目を動かした。その視線の先には、まさに、そのシオン王子の姿があった。
「そんな仕事やってんだから、夜目は利くんだろ？　よく確かめなよ」
いっそ優しげともいえるような口調で、ディオンは言った。
「おたくら白鴉とやらの企みも大体露見してるんだけど……まだやる？　命を捨てて、かかってくるというのなら、その覚悟に応えて容赦はしないよ」
言いたいことだけ言って、それから、男を思い切り蹴り飛ばした。
倒れる男の腕を踏みつけ、刃を鼻先に突きつける。
「投降しなよ。あと、仲間にもそう伝えてくれ。無駄な戦いはしたくないんだ」
それから、やる気なさげに剣を肩に担いで、ディオンが言った。
「あら、意外ですわね、ディオン隊長。てっきりあなたは戦うのが

好きな方かと思ってましたけど……」
「それは心外ですねぇ、姫さん。僕だって相手を選びますよ。あんまり実力差があると、弱いものイジメになってしまいますからね。あの剛鉄槍みたいな使い手なら喜んで戦いますけど」
そう言って、倒れた男を冷めた目で見下ろす。それは、男たちの戦意をくじくには十分すぎるやり方だった。
自らが従う王家の王子が敵に回り、自分たちが決してかなわない強者が立ちふさがる状況。
どちらかだけならまだしも、その両方がそろってなお戦おうという気には、さすがにならないだろう。
投降した男に命じて、館内のランプを次々にともしていく。
と、その明かりに照らされたシオン王子の姿を見て、館の奥から、ぽつりぽつり、と武装解除した男たちが投降してきた。

――これは、なんとかなりそうですわね。
そんな様子を見て、ミーアは胸をなでおろした。
「ミーアさま、少し御髪(おぐし)が荒れてますね……」
安心したのはアンヌも同じだったのか、彼女はミーアの髪を見て小さくため息を吐いた。
「あっ、わかりまして？　実は、洗髪薬(シャンプー)がいまいちで、アベルにいただいたものはもう少しヌルヌルしてた気がしますわ」
「ご安心ください、ミーアさま。ほら」
そう言って、アンヌは、ごそごそと懐を探って小瓶を取り出した。
「ちゃんと持参いたしました」
「まぁっ！　素晴らしいですわ、アンヌっ！　さすがはわたくしのアンヌですわ」
ミーアは、アンヌから小瓶を受け取ると、それを抱きかかえたまま、くるり、くるり、と踊るようにスキップした。
……迂闊(うかつ)だったとしか言いようがない。

「わたくし、この戦いが終わったら心置きなくお風呂に入るつもりでしたの。楽しみが増えましたわ！」
ほとんど勝っている状況で……、戦場で決して言ってはいけないセリフを朗らかに、高らかに口にするミーア。
そんなフラグが回収されないわけもなく！
「はぇ？」
直後、ミーアは自分が足を踏み外したことを感じる。
ランプが照らしきれなかった暗闇、そこに唐突に口を開けていた地下への階段……。
「ひぃゃあああああっ！」
がくん、と体が投げ出される感覚、ぐるんぐるん、と体が回る。
やがて、ぱりん、っという何かが割れる音とともに、ようやく体が止まった。
「う、うう、気持ち悪い、ですわ」
ぐらぐら、と回る視界、その瞳が不意に一人の男の姿を映す。
「これはこれは、ミーア皇女殿下。お会いできて光栄です」
狡猾そうな笑みを浮かべて自分を見下ろしていたのは……、仲間たちからジェムの名で呼ばれている男だった。

第百三十九話　馬シャンの奇跡（摩擦係数的な……）

「あっ、あ、あなた、は？」
「ははは。かの帝国の叡智に名乗るなど、とてもとても……。そのようなおこがましい真似はできませんよ」
小馬鹿にしたような、ふざけた口調で言って、芝居がかった仕草でお辞儀までして見せてから、男は小憎らしげな笑みを浮かべた。
「ミーア、無事かっ！？」
直後、慌てた様子のアベルとシオンの両王子、さらにアンヌとディオンとが下りてきた。
「お前がジェムか？」
シオンの鋭い問いかけに、ジェムはやれやれと肩をすくめてみせた。
「俺の名を知ってるってことは、もしかすると、白鴉の計画もすでにご存じってことですかね？」
「その通りだ。お前たちの企みはすべて露見しているぞ」
そう言って、シオンは剣を抜き放つ。
「お前の仲間たちも投降している。無駄な抵抗はやめろ」
「仲間、ねぇ……」
ジェムは、なぜか、苦笑いを浮かべて首を振った。
「それにしてもグレアムの奴も可哀想に。せっかくの国家への忠誠もお若く潔癖な殿下には受け入れられなかったか」
「諦めなよ。ダサエフ・ドノヴァン伯もすでに救出した。あとはお前だけだ」
反対方向、すなわち地下の方角から声が響いた。
暗がりから現れたのは、涼しげな顔をしたキースウッドだった。
これで、ジェムは挟み撃ち状態である。
「抜け道まで見つかったのかよ。やれやれ、シオン王子だけじゃな

く、従者の方も噂に違わぬってやつだな……」
階段の上にはシオン、地下にはキースウッド。
挟み込まれるようにして立つジェムと……、その場をこっそり逃げようとしているミーア。
――こ、この隙に逃げませんと……。
さりげなく、何気ない風を装ってその場を離れようとしたミーアであったが、
「おおっと、動かないでもらおうか？」
直後、ひたりと冷たい金属の感触が首筋に走った。
「ひんっ！」
ミーアは息を呑んで飛び上がった。
自らの首筋に突き付けられた抜身の刃、脳裏によみがえってくるのはギロチンの、冷たく重たい刃の記憶だ。
「下手なことは考えるなよ。お前の首を切り落とすことなんか簡単なんだぜ」
ジェムの言葉に、こくこくと頷き、ミーアは体を固くした。
「馬鹿な真似はやめろ。サンクランド本国は風鴉も白鴉も擁護しない。もうすでにお前たちの計画は破綻しているんだぞ」
「そんなつれないこと言わないでくださいよ、シオン殿下。あんまりショックで手が滑って、この小娘の首を切り落としてしまうかもしれませんよ？」
ジェムは、まるでいたぶるかのように、刃で、とんとんとミーアの肩を叩いた。
「なにせ、こっちはこの小娘に計画つぶされて恨み骨髄なんすから、ね」
「ひぃい……」
ミーアのひきつるような悲鳴の直後――ぴちょん、と湿った音が響いた。
何かが垂れる音……、ジェムはミーアを見下ろして馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「へっ、帝国の叡智っつっても、ガキはガキ。無様なことで」
ミーアのスカート、それが濡れているのを見て、その場の誰もが思った。
ああ、恐怖のあまり、ミーアが粗相をしてしまったんだ……と。

けれど、ただ一人――それが違うことに気づいた者がいた。
ミーアの一番の忠臣、アンヌだ。
――違う！　この匂いは……。
鼻をくすぐるのは花の香り、それが嗅ぎ慣れた香りで……。
自らの、大切な主君の髪を飾る芳しい香りだと気づいたから……。
『アベルにいただいたものはもう少しヌルヌルしていた気がしますわ』
その洗髪薬は、油の配合のせいなのか、普通のものよりさらにぬるぬるしていて……。
だから、つまり、それはっ！
「ミーアさまっ！　走ってっ！」
突然、声を上げたアンヌにその場にいた全員が一瞬、動きを止める。
けれど、ミーアは……ミーアだけは！　その忠臣の指示を信じ切って思い切り走ろうと、足を踏ん張った！
直後、時間は動き出す。
「このガキがっ！」
逃げ出そうとしたミーアに気づいたジェムは、憎き帝国の叡智の首を刈ろうと剣を振り上げて、思い切り真横に振るい……。
それは、ミーアの細く幼い首筋を造作もなく斬りおとす――かに思われたのだが……。
つるんっ！
踏み出したミーアの足が、思い切り後ろに滑った。
「ひゃあっ！」

靴底をたっぷり濡らす洗髪薬が生み出したのは、戦闘訓練を積んだ者であっても予想できない、想定外の動き。
ミーアはそのまま勢いよく前のめりにすっころんだ。
その後頭部をびゅんっという、風切り音が走った。
「うひゃあっ！」
ちょっぴりはしたない悲鳴を上げてしまうミーアだったが、それを咎(とが)める者は一人もいない。
「くそっ、このっ！　うおっ！」
再度、剣を振り上げて、ミーアを突き殺そうとしたジェムであったが、歩み寄った際に、洗髪薬を踏んでしまい、真後ろにすっころんだ！
その手から、剣が離れて飛んでいく。
「ミーアさま、早く、早くこっちにっ！」
「ひ、ひぃっ！　ひぃっ！」
立ち上がり、ジタバタとアンヌの方に向かおうとしたミーアが、再度すっころぶ。
その足は勢いよく、後方へと投げ出された。そして……、その先にはちょうど立ち上がり、ミーアを捕まえんと追いかけようとしていたジェムの姿があった。
「このガキっ、待ちやが……おぐっ！？」
……それは、たまたま起きてしまった不幸な事故だった。
たまたますっころんだミーアの足の高さが、ちょうどよく、こう……、ジェムのた……いや、あえてどことは言うまい。あまりにもしょーもなさすぎる……。
ともかく、蹴り上げたのだ。思い切り、ミーアが……。
「ぐぉおおうっ！」
くぐもった声を漏らして、ジェムがその場にしゃがみ込む。
そんな彼に、剣を構えたディオンが歩み寄るが……、
「あー……、まさか、姫さんがとどめを刺すとは思ってなかったな……」

呆れたような口調で、言った。
かくして、黒幕の一人、ジェムは見事、撃退された。
事件を終結させた決まり手はいずれも帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンの麗しき脚から繰り出された華麗なる蹴りであった。

第百四十話　それぞれの妄想

「うう、くそが……」
ミーアたちの目の前には縛り上げられた風鴉のメンバーが並べられていた。
といっても、未だに抵抗の意思を見せているのはただ一人。恨みがましい目で睨んでくるジェムのみだった。
ミーアは黙ってそれを見つめていたが……アベルの方を見て口を開いた。
「アベル王子……、シオン王子、お二人にお願いがあるんですの。この方たち……命だけはなんとか助けていただけないかしら？」
それを聞いたアベルの驚きは、それほど大きなものではなかった。むしろ、
――ああ、やはり、ミーアが望むのはそれか。
心を占めるのはそんな感情だ。
白鴉の者たちは、国家の転覆を企てた者たちだ。風鴉のように、ただ情報収集をしていただけでなく、直接的に攻撃を仕掛けてきた者たちなのだ。
極刑でもまだ生ぬるい。他国の者でなければ一族郎党皆殺しの目にあっても不思議ではない。
にもかかわらず、ミーアは助命を願ってきたのだ。
普通であればそれを聞くことなど、当然できない。できないのだが……にもかかわらず、アベルは考えてしまう。
――帝国の姫に請われたと言ったら、父上は聞いてくださるだろうか？
基本的に彼は……女の子のお願いには弱い男なのだ。
――諜報機関員の連中は……、なんとか説得して最大限譲歩したら国外追放か……。むしろ、大変なのは国内で革命活動にかかわっ

た連中だろうな……乗せられただけの連中はむち打ち刑で済むかもしれないけど、リンシャとその兄のランベールは普通に考えれば極刑だ……。そちらについてはミーアはどう考えているんだろう？
疑問には思うが心配はしていなかった。そのようなことをミーアが考えていないはずがないからだ。

シオンもまた、アベルと同じように見ていた。
ミーアが自分に対して言ったこと、やり直しの機会を目の前の者たちに与えようとしているのだと考えた。
そして、その願いを通すために彼女が動いてきたのだとも思っていた。
白鴉が原因で泥沼の殺し合いが起きていたら、恐らくはこの者たちを処刑せずにいるのは不可能だっただろう。レムノ王国とサンクランドとの関係は悪化するし、戦（いくさ）になるのは避けられないところだろう。
そうなれば、もはや取り返しがつかない。
けれど、今回の被害はそこまでではない。
少なくともレムノ王国は、大国サンクランドを敵に回して、開戦しようと考えるほどではないだろう。
交渉次第とはいえ、ギリギリのラインを保てたと考えられる。
そのうえでのミーアの言葉である。
――仕方ないと言えるのは、そうならないように努めた者のみが言える言葉……か。
ミーアは、その最善の努力を尽くした。であるならば……、
――俺は、俺の持てる権限のすべてをもって、彼女の言葉に応えるべきだろう。
彼女にやり直しの機会を与えられたシオンとしては、せめて、それぐらいはしなければならなかった。
そして、そのためには、綿密なバランスを図る必要がある。

――仮にレムノ王国が国外追放などの軽い処分をしたとしたら、サンクランドの側も処刑はしづらいな。口封じのためにやったと思われるだろう。そのあたりをアベル王子のほうから念押ししてもらうとして……問題は、こいつらの処遇だが……。どうするのが妥当か……。

「へっ、俺たちを処刑しないって、正気かよ？　なんだ、拷問にでもかけようってか？」

ひきつるような笑い声をあげて、ジェムが言った。

「ひひ、そんなことしたって何もしゃべんねーぞ」

癇（しゃく）に障るその声に、シオンは思わず眉をひそめた。

――ふーん、拷問ねぇ。なるほど、姫さんは、まだ裏に何かが隠れてる、と踏んだわけか……。

唯一、ディオンだけはまったく別のことを考えていた。

ここにやってくるまでに、もろもろの事情を聴かされた彼は、一つの疑惑を抱えていたのだ。

それは風鴉の変質だ。受け身だった風鴉という組織が、白鴉へと変貌していく、そのきっかけとなった男……。

――ジェムという男……、なんだか臭うんだよねぇ。

拷問でもなんでもやってみろという言葉。

それは、国家に忠誠を誓った者であれば、口にしてもおかしくはない言葉だ。

それこそ間諜（スパイ）に類する者であれば、当然の心得ではあると思うのだが……。

けれど、その口調は、ディオンにはただの忠誠には聞こえなかった。例えて言うならば、それは、そう……、

――狂信者が口にするような……、そういうものに似た響きがあったな。

組織が歪められた……その裏に潜む何かを敏感に嗅ぎつけたから

こそ、ミーアは目の前の連中の助命を願っているのではないか、と、そう推測したのだ。

――しかし、あいつ、自分で言ってる通り、簡単には口を割りそうにないけど、姫さん、どう考えてるのかな？　案外、なんにも考えてなかったりして……。

……後半だけディオンが正解である。

ミーアが口にしているのは、単なる願望で、実際にどうするかなど当然考えてはいない。

そもそもの話……、その願望自体が自分ファーストに裏打ちされたことであったりもするのだが……。

第百四十一話　大事に育ててきたものを枯らさないために

アベルもシオンも、ミーアが慈悲深い聖女のような存在であると微塵も疑っていないわけであるが……、もちろんそれは誤りである。

言うまでもないことながら、ミーアは別に慈悲をかけているわけではなかった。

ミーアは聖女でもなければ、特別広い心を持っているわけでもない。むしろ、どちらかというとちょっぴり狭い方だ。

嫌なことをされれば相応に腹が立つし、目の前の男たちのせいで自身がギロチンにかけられたと思えば、あえて助けてやろうなどとは思わない。

かといって、ディオンが考えているように、何か不審を抱いたわけでもない。

では、なぜ、そんなことを言い出したのかといえば、一つの不安に囚われたからだ。

すなわち……、

――わたくしが与えられたようなやり直しの機会が、この方たちに与えられる、なんてことはないのかしら？

自身が時間転生を経験している以上、ほかの人間も同じチャンスを得る可能性は否定できない。

――だとすれば、その条件はなにかしら？

はっきりとはわからない。わからない以上、実際にそれを経験した自分を基準に考えるしかない。

例えば、あの日と同じ日、同じ時間の同じ場所で殺されることとか……。

あるいは、ギロチンで首を落とされることとか、無念を残して死ぬこととか……。

――この陰謀の関係者が処刑されたら……、なんて可能性もある

かしら？
ともかく、自分と同じような殺され方をした目の前の男たちが、やり直しの機会を得てしまったら、どうなるか？
せっかく今まで頑張って歴史を改変してきたのが、すべてひっくり返されてしまうかもしれない。
――ぎっ、ギロチンに逆戻りなんて、まっぴらごめんですわ！
それは、転生してから一貫してミーアを囚える想いだ。でも……。
それ以上に強い一つの感情があることを、ミーアは自覚する。
――それだけではございませんわ。わたくしは、今の、この「時」が気に入っているのですわ。
ミーアは視線を巡らせた。
この場にいる者たち……。
かつて敵だったシオン、その従者であるキースウッド、さらに自分の首を落としたディオン。
そしてまた、かつては他人も同然だったアベルがいて……。
ここに来るまでに手を貸してくれたティオーナがいて、クロエがいて、ラフィーナがいて……。
アンヌとルードヴィッヒだけだったミーアの周りは、今やたくさんの仲間たちであふれていた。その温かな世界を、ミーアは、思いのほか気に入っている自分を見つけて、少しだけ戸惑う。
シオンやティオーナにすら、今のまま自分のそばにいてもらいたいと思っている自分に気づいて……、
――べっ、べつに、あなたたちのことを好きになったわけじゃございませんわ！　勘違いされては困りますわ！
などと、ついつい心の中でツンデレてしまう。
ちなみに、ディオンに関してだけは変わらない。
――できれば、あんまりお近づきになりたくないですわ……。
ブレないミーアである。
「アベル、あなたのこと、困らせてしまうってわかってますけれど、でも……」

不安げに言うミーアに、アベルは、苦笑いを浮かべて首を振った。
「ああ、わかった。君がいなければ、こんな風に解決はできなかったわけだしね。父上は……ボクがなんとか説得してみようと思うよ」
「だが、仮に彼らを処刑から助けたとして、どうするつもりだ？」
シオンのもっともな問いかけに、ミーアはきょとりん、と首を傾げた。
「んー、そうですわねぇ……」
ミーアとしては正直なところ、生かしてさえおいてくれれば、ほかのことはどうでもいいのだが……。
――レムノ王国で投獄だと暗殺とかされそうですし……、サンクランドで投獄というのは、レムノ王国の側が納得しないでしょう。ティアムーンに連れて行ってもよろしいですけれど……。
と、その時だった。
「おいおい、本気で俺たちを生かしておくつもりかよ？　とんだお人好しだなぁ」
ニヤニヤ笑うジェムの憎らしげな顔が見えた。
――こいつ、なんかちょっとムカつきますわ……。
微妙にイラっとしたミーアは、ふいに思い付いた。思いついてしまった！
究極の嫌がらせを！
「ああ、そうですわ。でしたら、ラフィーナさまのもとに預けて、三年間ぐらい毎日お説教していただく、というのはいかがかしら？」
ミーアの提案に、シオンもアベルも納得の表情を浮かべた。
実際のところ、その提案はミーアにしてはまっとうなものだった。ヴェールガに預けるというのは、もっとも文句が出づらいはずだったから。
ディオンあたりは「甘いなぁ……」とつぶやいていたりしたが、それもまた妥当で、かなり温情のある沙汰と言えた。
実際、白鴉のほとんどの者たちは拍子抜けした顔をしていた。
……しかし。

「ふっ、ふざけるなっ！　そんなナメた真似をっ！」
ただ一人、ジェムだけが血相を変えて叫んだ。その顔は、わずかばかり青ざめて見えた。
先ほどまで憎まれ口を叩いていた男の、焦っている顔を見て、ミーアはにんまり意地の悪い笑みを浮かべた。
「あら、拷問でもなんでもしてみろ、ではなかったかしら？」
いい気味ですわ！　と笑うミーアは……、けれど知らなかった。
この提案が、どのような意味を持つのか……。
この判断が歴史の陰に潜む闇を暴き出す、その最初の一撃になるということなど……、夢にも思わなかったのだ。

かくて、一連のレムノ王国の騒乱は終息へと向かう。
懸念されたランベール、リンシャ兄妹をはじめ、革命軍の中心メンバーにも、温情が与えられた。
ミーアの意を汲んだルードヴィッヒが意気揚々と王都に赴いて説得したのだ。
曰く、自国内の民の責任を問えば、サンクランドの非が軽くなりはしませんか？　と。
責任を分散させず、サンクランドのみに帰することで、より多くの利を引き出すのが良いのではないか、との彼の言に、レムノ国王が耳を傾けたのだ。

そうして、騒動を無事に治め、学園へと帰還を果たしたミーアは、中間試験なるものに泣かされることになるのであるが、それはまた別の話である。

第一部エピローグ　貪欲かつ自分ファーストなお姫様

大陸に訪れた三百年にも及ぶ繁栄と平和の時代。その始まりには、数多の英雄が台頭する。

天秤王と呼ばれた賢王シオン・ソール・サンクランドと、その一番の腹心キースウッド。

民衆に救いの道を説き、国家同士の平和に尽力した聖女ラフィーナ・オルカ・ヴェールガ。

大陸全土に相互援助の仕組み『ミーアネット』を確立した、フォークロード商会の長、クロエ・フォークロードに、邪神教徒や大規模盗賊団との戦いで活躍したディオン・アライア。

ティアムーン帝国の体制を改革し、活力を取り戻させた辣腕家（らつわんか）ルードヴィッヒ、新型小麦を始め、数々の有用な植物を発見したセロ・ルドルフォンとティオーナ・ルドルフォンなど、名をあげればきりがない。

そんな綺羅星（きらぼし）のように輝く偉人たちの中心にいて、ひときわ明るく輝く月がある。

大国ティアムーン帝国の女帝、ミーア・ルーナ・ティアムーン。

帝国の叡智と謳われ、多くの英雄たちから慕われた彼女であったが、実は、自身が表舞台に立って何かをなしたという記録はかなり少ない。

けれど……、偉人たちが何か功績を成す時、必ずと言っていいほど、女帝ミーアの姿がそばにあるというのは、歴史家の間では有名な話である。

そんな謎に包まれた彼女だが、帝国臣民の間では大変に人気が高く、数多の伝説やエピソードが語り継がれている。

様々な話の中で、最も好まれているのは「王子救出」の物語だ。

とある事件において、国王の不興を買ってしまった恋仲の王子を、

ミーア自らが助けに行き、そのまま帝国に連れ帰ってしまうという、彼女の『情熱の女性』としての一面が垣間見えるエピソードである。

その後、彼女はその王子を自らの夫として、正式に帝国に迎えることになる。

それは当時の帝国貴族たちの反感を買った。

なぜ、廃嫡された王子となど婚儀を結ぶのか。まったくの無駄ではないか、と。

そんな反論を彼女は、そして彼女の臣下たちは、全力で叩き潰した。

情熱の女性、皇女ミーアは横暴に権力を振りかざすことはなかったが、己の恋を貫くためには、叡智と権勢を思うままに振るった女性だった。

そして彼女は情熱の人であったが、恋多き人ではなかった。幼き日の恋心を生涯を通して貫いた女性であった。

それもまた、人々に好まれ、親しみを寄せられる一因となった。

その後、女帝となったミーアを、夫である元王子は献身的に支えた。帝国は栄え、夫婦の八人の子どもたちによって、帝室の血筋は一層の繁栄を……

「八人って……、ちょっと多すぎますわ……」

ミーアは、手に持った、古びた歴史書から目を上げた。それは、セントノエル学園の図書室でのことだった。

クロエと待ち合わせをしていたミーアは、ふと目についた歴史書を、何気なく開いてみたのだ。

そこに書かれていたのはティアムーン帝国の女帝、ミーア・ルーナ・ティアムーンの生涯についてだった。普通であれば、驚くところではあるのだが、あいにくとミーアは似たようなもののことを知っている。

「ああ、あの日記帳みたいなものですわね……」

などと軽い気持ちで読んでみたわけだが……。

「八人……わっ、わたくし、ずいぶん頑張りましたわね……そう、アベルとの子どもが八人も……」
「ん？　ミーアじゃないか。こんなところで、なにをしているのかね？」
「うひゃあっ！？」
突然、声をかけられて、ミーアは飛び上がった。ぎくしゃくと振り返った先、アベルが不思議そうに首を傾げていた。
「あ、あ、アベル、どうしましたの？　こんなところに……」
「少し調べ物があってね。ミーアは何を読んでいるのかね？」
「えーと、その……あら？」
さすがに、これをアベルに見せるわけには、とページに目を戻すと、微妙な違和感があった。先ほどまで読んでいた記述がどこにも見当たらなかったのだ。
「変ですわね……先ほどまで、確かに……」
つぶやくミーアの視界の端に、一瞬、金色の輝きが映った。
ページから浮かび上がった文字のようなそれは、すぐに糸のようにほどけて、空中に溶けて消えた。
「今のは……？」
「ミーア？」
ミーアは小さく首を振り、アベルに目を向けた。
「いえ、なんでもありませんわ」
歴史書の記述が消えたこと、ミーアにはそれが、決まりかけていた未来が再び未定になった証のように思えた。
幸福そうな未来が……、泡と消えて……でも、ミーアは特に気にした様子もなく言った。
「まぁ、構いませんわ。あれでは不満でしたし……」
なぜなら、あの未来では、アベルが実家に帰れなくなってしまうし、家族にも会えなくなってしまうからだ。
それでは、完全に幸せな未来とは言えない。
貪欲に幸せを求めていくのがミーアのスタイルなのだ。

揺らがぬ自分ファーストを貫く、ミーアの、変わることのない生き方なのだ。
だから、
「せっかく断頭台の運命を回避したのですから、あの程度の幸せで満足などいたしませんわ。ええ、満足などしてあげるものですか」
未来は未だ定まることなく、ミーアの生涯がどのようなものになるかは、わからない。
ただ一つ変わらないことはミーアは決して妥協しないということ。
自分の幸せにも、そして……自分の大切な人たちの幸せにも……。

これは、ちょっぴり自分ファーストなお姫様のやり直しの物語。
彼女の蒔いた希望の種が、どのように未来を彩るのか……。
それはまだ、誰も知らない。

第一部　断頭台の姫君

Ｆｉｎ　第二部　導の少女に続く……

第二部　プロローグ　その誇り高き名を抱いて！

荒れ果てた廃墟の町を一人の少女が走っていた。
かつて≪美しき月の町≫と呼ばれた帝都も、度重なる戦乱の前に焼け落ち、瓦礫で舗装された無法地帯となっていた。道には骸が打ち捨てられ、それを片付ける者もいない。
かつての貧民街、新月地区よりもひどい有様だった。
だから……年端もいかぬ少女が、武装した男たちに追いかけられていても、助けようという物好きは現れなかった。
息も絶え絶えに、少女は走る。
恐らく長い間洗っていないであろう、くすんだ白金色の髪は汗に濡れ、少女の頬にはり付いていた。泥に汚れた頬は青白く血色が悪い。
か細くやせ細った肩が、激しく弾んだ息に合わせて激しく上下していた。
けれど、少女は足を止めなかった。何度も何度も後ろを振り返りながら、追跡者から逃れるべく、懸命に足を動かし続ける。
もう動けないというところまで走って、走って……、やがて少女は転んだ。
「あっ……」
その拍子に、少女が持っていたものが道に投げ出された。
それは古びた本だった。焚書にされ、今やこの世界にはほとんど存在しない、その本の名は「ミーア皇女伝」
少女の親代わりだった人の書いた本だった。
「……エリス母さま」
今は亡き人の、優しい笑顔を思い出す。
「いい？　ベル。その本にはね、『真実』が書かれている。あなたは、本当のことを知らなくてはならないわ。あなたのお祖母様がど

んな方であったか……。いくら世界が本当のことを偽りで覆い隠そうとしても、あなただけは、知らなくてはならないの……」
そう言って〝ベル〟という愛称で呼ばれる少女の頭を撫でてくれた。
「アンヌ母さま」
精一杯の愛情を注ぎ、育ててくれた人の、温もりを思い出す。
「お逃げなさい。誇り高き、その名を胸に抱いて。あなたは、あの方の血を引く者、こんな場所で死んではダメよ」
自らの体を血に染め上げつつも、ベルを抱きしめて、優しく微笑んだ。
もう、見られない愛しい人の顔を思い出す。
優しい人たちの、その顔を思い出す。
「ティオーナおばさま、クロエおばさま、ルードヴィッヒ先生、ディオンおじさま……」
みんなみんな死んでしまった。
彼女に優しくしてくれた人は、彼女を守るために……死んでしまった。
ある者は口惜しげに、ある者は苦笑を浮かべて、同じことをつぶやきながら……。
あの方がご存命ならば……、こんなことにはならなかったのに……と。
帝国の叡智が、慈愛に満ちた聖女がいてくれたならば、きっと帝国は……世界は……、こんな酷いことにならなかったのに、と。
皆が口々に称える“その人”のことを、ベルは覚えていなかった。ただ、うっすらと優しい人だったという印象だけが、残っていた。だから、彼女が持つ“その人”の知識は、すべて本から得たものだった。
〝その人〟はまさに、叡智と呼ばれるのに相応しい人だった。慈悲深い聖女で、救国の皇女だった。
ある時から“その人”のことも帝室のことも口に出してはいけな

いことになってしまったけれど、それでも、こっそり“その人”のことを話す人は、必ずと言っていいほど笑顔だった。
だから……、ベルは誇らしかったのだ。
その人の血が自分の中にも流れていると考えるだけで、胸に暖かな光が灯るような気がした。
「ようやく諦めたか、ガキ」
温かな思い出に浸っていたベルを、荒々しい声が現実へと引き戻した。
視線を転じると、粗末な革鎧に身を包んだ男が、暴力的な笑みを浮かべていた。
「悪いな。俺たちも気は進まねぇんだが、お前の首にかかってる金貨が魅力でなぁ」
その隣の男が、腰に佩(は)いた剣を抜く。
「大人しくついてきてもらおうか。ああ、言うまでもないことだが逃げたら殺すぜ？　生死は問わずってことらしいからな。絞首台か俺様の剣か、好みの方を選ぶといいさ」
「しっかし、こう薄汚れてたら人相書きと同じガキかわかんねぇな。おい、ガキ、お前の名前はなんだ？　正直に言えよ？」
ねっとりと絡みついてくる殺気……。ベルは恐怖に身を震わせた。
――怖い……。怖いよ、母さま……。
胸に抱いた本をギュッと抱きしめる。
――助けて……お祖母さま……。
その瞬間……、大切な人達の声が聞こえた気がした。
「その誇り高き名前を抱いて……行きなさい。そして、どうか生き残って……伝えて。あの方のことを……さまのことを……どうか……」
彼女は唐突に思い出した。
自分が、何者に連なるものかということを……。
己が内に流れる血が、人々の希望を体現した者から受け継がれたものであるということを。

雷にも似た感情の高ぶりが、ベルを襲った。
か細い体のまとう震えは、その種類を変えた。怯えではなく、闘志へと。
その激情に促されるように彼女は静かに立ち上がり、男たちを見据える。
その瞳には、青く澄んだ輝きが宿っていた。
「下がりなさい……無礼者！」
胸を張りベルが声を張る。その声には、帝国の叡智の血筋に相応しい威厳が宿っていた。
……本家の帝国の叡智など、比べ物にならないほど、大真面目な迫力が……。
そうして、彼女は告げる。自らの、その誇り高き名を。
「我が名はミーアベル、ミーアベル・ルーナ・ティアムーン。帝国の叡智にして聖女、誇り高きミーア・ルーナ・ティアムーンの血を受け継ぐ者である！」

――瞬間！　ベルの視界を光が焼いた。
胸に抱えた本が開き、そこに書かれていた文字が、黄金の輝きを帯びて浮かび上がった。
文字は解け、黄金の糸となり、彼女の体に絡みついていく。
「……あ？　え？　え？」
呆然と立ち尽くすベル、その体が浮かび上がり……、次の瞬間、光とともに忽然と消えた。

……かくて、時間は流転する。

第一話　帝国の叡智の優雅なる春休み

かの帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンは優雅なる春休みを、セントノエル学園で過ごしていた。

女子寮の自室のベッドの上で優雅に、実に優雅に……ゴロゴロしていた。

広いベッドを確認するかのようにゴロゴロ……、ギリギリ落ちるかどうかというところまで行き、今度は反対側にゴロゴロ……。

枕を胸に抱いて、ゴロゴロゴロ……。

実に優雅……別の言い方をするなら、

「あー、ひまですわー」

自堕落で、不毛な時間を過ごしていた。

本来は、こんなはずではなかったのだ。学校が始まるまでは、帝国内でのんびり遊び倒す予定だったのだ。にもかかわらず、彼女がセントノエルにいるのには、ちょっとした事情があった。

レムノ王国から無事帰還を果たしたミーアは、そのまま本国へは帰らず、セントノエルに向かった。そして、冬休みに入るまで一度も帰らなかったのだが……。

それが……とてもまずかった。

帝国に帰ったミーアを迎えたのは、涙にむせぶ皇帝だった。

「おお、ミーア、ミーアよ！　我が愛しの娘よ！　いったい帝国に帰らずになにをやっていたのだ！？」

帰ってきたミーアを思い切り抱きしめた皇帝は、無茶をしたミーアにお仕置きを命じたのだ。

ミーアのプライドをずたずたに傷つける、きわめて屈辱的なお仕置きを。

すなわち！

「次の冬が来るまで、わしのことをパパと呼びなさい。それ以外の

呼び方は許さぬ」
実に……実に無情なお達しだった。
「そっ、そんな、それはっ！　おっ、お父様っ！」
「パパだ。パパ。それ以外は返事せぬからなっ！」
プイっと顔を背ける皇帝を、光の宿らない陶製人形のような瞳で見つめて、ミーアはお腹をさすった。
――ああ、なんか、お腹痛くなってきましたわ。
しかも、いざ「パパ」と呼んでやると、ご機嫌になった皇帝は、事あるごとにミーアのもとに通うようになった。
……こう……、ウザくてしょうがなかった。
微妙なお年頃のミーアなのである。
ちなみに、ルードヴィッヒもディオンもティオーナもアンヌも、レムノ王国の件ではお咎めなしだった。というか、むしろ暴走したミーアを守った者として、皇帝陛下直々のお褒めをいただいたほどだった。
そういうことにしておかないと、四人が処刑されてしまいかねなかったから仕方ないとはいえ……、自分だけお仕置きされることも微妙に不満なミーアである。
そんなわけで散々な冬休みを経験したミーアは、春休みはあえて帝国に帰らずに、セントノエルに残ることを選択したのだ。
それはいいのだが……。
「あー、ひま、ひますぎますわ。クロエもいませんし、アベルも……」
ミーアと遊んでくれる友だちは、現在、学園には誰もいないのだ。
まぁ、ラフィーナは普通にいるのだが……、ミーアとしては仲良く遊ぼうという気にはならない。誘いを受けたら行ってあげてもいいけれど、自分から誘おうとは思わないのである。
結果、ミーアはアンヌといっしょに島内の町に出てスィーツを食べるか、ダラダラ寝るか……、時々、乗馬するぐらいしかやることがなかった。

大変、自堕落な生活だった。

「ミーアさま……」

部屋に戻ってきたアンヌは、そんなダラけきっている主に対して、呆れたような、心底から失望したような視線を向け……ではいなかった。

むしろ、その視線はどこか優しい。

それはまるで、可愛い妹に向けるような、慈しみに満ちたものだった。

最近、アンヌは気づいたことがあった。

ミーアは……、勉強があまり好きではない。

先日、学年末の試験勉強を手伝った時、ものすごく苦労していたのを、アンヌはしっかり見ていた。涙目になりつつ必死に勉強したミーアは、見事、学年トップ二〇にランクインした。快挙である！

ちなみに、ミーアの学年は……八十名弱である。

まぁ、それでも快挙ではあるだろう。上位四分の一に入ることなど、前の時間軸では考えられないことだ。

それはともかく試験直前になって慌てて勉強したり、そこで力を使い果たしてダラダラしている姿が、なんだか弟たちみたいで、ちょっぴり微笑ましく感じてしまったのだ。

――ミーアさま、こういう試験みたいなお勉強は苦手なのね……。

そして、それを知ったからと言って、アンヌの尊敬は揺るぎもしなかった。いや、むしろ……

――うちの弟たちと変わらないぐらいの若さで……、あの小さな肩には重い責任が乗っているのね……。

そんなことを考えて、胸が熱くなった。

自らの敬愛する主（あるじ）の聡明さが生来のものではなく、努力によって培われたものだと知って……。そして、そんな主から頼られているのだと知って……。

なんだか、こみ上げてくるものがあったのだ。だから！
――私が、しっかりとお支えして差しあげないと。
こっそりと、そんな新年の目標を立ててしまったアンヌである。
――緩めるところは緩めて、きちんとしていただく時にはそうしていただく。ちゃんと言えばわかってくださる方だから、私がきちんと考えて、ミーアさまのご負担を軽くしてあげるんだ。
すっかり、ミーアの秘書としての役割を自任するようになったアンヌである。
そんなわけで、学校が始まるまでの休みの間は、せめてのんびりしてもらおうと思っていたアンヌだったが……今日のところはそうも言っていられない事情があった。
「ミーアさま」
ベッドのわきに歩み寄ると、ミーアがぽやーっとした目で見上げてくる。
「ああ、アンヌ、ちょうどよいところに来ましたわ。そこに座ってなんぞ子守歌でも……」
「残念ですが、本日のお昼寝はお控えください。ラフィーナさまから、午後のお茶のお誘いです」
「あら？　ラフィーナさまが？　でも、確かお茶会でしたら昨日も……」
「本日、アベル殿下がこちらに到着されるらしく、ごいっしょに、とのことです」
「まぁっ！」
途端に、ミーアはぱぁあっと笑みを輝かせた。
「もっと後になるかと思ってましたのに、もしや、わたくしが学園に残ったのを知って、予定を早めてくださったのかしら？」
すちゃっとベッドの上に身を起こすと、きびきびとした声で言い放つ。
「アンヌ、ドレスを選んで。急ぎますわよ！」
それは、帝国の叡智に相応しい、凛々しい態度だった。

もっとも……首から下に身に着けていたのは、くしゃくしゃのシワのついた寝間着という、いささか格好のつかないものではあったのだが……。

第一話　帝国の叡智の優雅なる春休み（後書き）

以上、第二部冒頭部でした。ここから始まるミーア姫二年生の物語を、お楽しみいただけると嬉しいです。
来週はお休みで、次回は２１日からの投稿を目指します。
では、また！

第二話　激キュン！　ミーア姫！

ベッドから起き上がったミーアは、迅速に行動を開始した。
まず、彼女が向かったのは言うまでもなく……お風呂だった。
「いつでもお風呂に入れるというのは、やっぱり素晴らしいことですわ！」
ちなみに……、風呂好きなミーアは朝起きて一番に風呂に入る。
血行を良くするために、朝起きてすぐ熱めの湯を浴びることは、セントノエルでも推奨されていることではあるが、ミーアの場合は一味違う。
「ああ、なんか、体がポカポカしてきて……ちょっぴり眠くなってきましたわ」
などと言って、そのままベッドに戻ってしまうのである。
自堕落の極みと言えるだろう……。
まぁ、それはそれとして……。
少しばかり急ぎ目の入浴だったものの、ミーアは普段の肌艶と、髪の輝きを取り戻した。
さらに、新しい洗い立てのドレスに身を包み、精いっぱいのオシャレをしてから、ミーアはラフィーナの部屋に向かった。
「ああ、来たわね、ミーアさん」
「ご機嫌よう、ラフィーナさま。お茶会へのお誘い、感謝いたしますわ」
スカートのすそをちょこん、とつまみ、優雅に礼をして、それから部屋に足を踏み入れる。と、
「やあ、ミーア、久しぶりだね」
「まぁ！　アベル、もう来ておりましたの？」
「さっきついたところだよ。それにしても……、ミーア、今日はいつにもまして綺麗だね」

そう言って、アベルは爽やかな笑みを浮かべた。
それを見たミーアは……、一瞬で頬を赤く染めた。
「まっ、まぁ！　まぁっ！　アベルったら、ずいぶんと口が上手くなりましたわね。そういうこと、あんまり女の子に言わないほうがいいですわ。軽い男と思われてしまいますわよ！」
アワアワしつつ、そう言うと、アベルはいかにも傷ついたという顔をして、
「誰にでも言ってると思われるのは心外だ。本当に思ったから、そう言っただけだよ」
そんなことを言うものだから……、ミーアは口から、ほぁあっと声にならない息を漏らしてしまう。
――なっ、なっ、なんですの、やっぱり、アベル、ちょっと天然なんですの？　と、突然、そんなこと、人前でっ！
などと、恋に戯(たわ)けているミーアの耳に、小さな咳払いが聞こえた。
「あー、ミーア姫殿下……、我が主をあまりないがしろにしないでいただけますか？」
「あら！　キースウッドさん、あなたもいらしてましたの？　それに、ああ……シオン。あなたまで？」
そんなミーアの反応に、しゅんと肩を落としたシオンは、キースウッドに言った。
「……キースウッド、俺は、婦女子にモテたいなどと思ったことはない。というか、言い寄ってこられると煩(わずら)わしくさえ思っていた……。だが、なんだろう、俺はもしかして、かなり恵まれていたのだろうか？」
そうして、シオンは、しょんぼりうつむいた。罪悪感を刺激されてしまったミーアは、大慌てでフォローを入れる。
「もっ、もう、冗談ですわ。シオン、真に受けないでくださいな。あなたにも会いたかったですわ。元気そうでなによりですわ」
っと、次の瞬間、シオンは顔を上げ、したり顔で言った。
「なに、気にすることはない。こちらも冗談だ」

「なっ！」
「そして、俺の方も会いたかったよ。ミーア。君も元気そうで何よりだが……、しかし」
にやり、と笑みを浮かべてシオンは続けた。
「ミーア、君は相変わらずお人よしだな」
「なっ！！」
ミーアの顔が、再び赤く染まる。
いわゆる≪激おこ≫である！
――こっ、こいつ！　前より性格が悪くなってませんこと！？
まさか、わたくしに蹴られたことを、まだ根に持っているんですのっ！？
ミーアが言い返そうとした、その瞬間、ぽん、とミーアの肩に手が置かれた。
振り返ると、そこには、アベルが不思議そうな顔をして立っていた。
「何を言ってるんだ、シオン王子。そこがミーアのいいところじゃないか」
「はぇ……？」
再びのアベルの甘い言葉に、ミーアは再び声を失った。
その頬がさらに赤くなり、口から、ほぁあっと息が漏れる！
いわゆる≪激キュン≫である！
……そんな単語はない。
とまぁ、そんな甘々恋愛空間（ラブコメタイム）に酔っていたミーアは、完全に油断していた。
血染めの日記帳が消え、断頭台の恐怖から解放され……、また、危険地帯であるレムノ王国からも無事に脱出したミーアの危険察知の嗅覚は、今は完全に眠ってしまっていたのだ。
なにも、冬眠するクマ状態だったのは、ミーア本体だけではなかったのだ。
けれど……、直後に、それは覚醒する。

「失礼いたします。え？　ミーアさま？」
さらに遅れて部屋に入ってきた人物、それはティオーナ・ルドルフォンとその従者、リオラ・ルールーだった。
「まぁ、あなたたちも招待されておりましたのね。ティオーナさん、セロ君はお元気かしら？」
「あ、はい。ミーアさまのお建てになる学校を楽しみに、勉学に励んでいます」
「そう、それは何より……あら？」
ふいに……、ミーアの背筋に寒気が走る。
――なんでしょう……、この顔合わせ、なんか、ちょっと引っ掛かりますわ。
シオンとアベル、それにティオーナ……。それは、レムノ王国に乗り込んだ際にミーアに同行した者たちばかりで……。なんとも不穏な顔合わせで……。
けれど、逃げる暇はなかった。
「そろったようですね。それでは、お茶会を始めましょう」
にこやかに告げるラフィーナ。
その瞬間、ミーアは、自分が新たなる危険の渦中に吸い込まれていくのを感じた。

第二話　激キュン！　ミーア姫！（後書き）

次は水曜日に投稿いたします。

第三話　混沌の蛇とジャムと紅茶

「あら、ラフィーナさま、このクッキー、とても美味しいですわ！」
お茶菓子のクッキーを一口かじって、ミーアは歓声を上げた。
甘いお菓子さえあれば、不吉な予感など彼方に放り投げてしまえるのが、ミーアの良いところなのである。
……良いところだろうか？
「そう。気に入っていただけたならよかったわ」
ラフィーナは嬉しそうに、パン、と手を鳴らした。
ニコニコと上機嫌に笑って、それから、ラフィーナは話し始めた。
「ところで、ミーアさんに預けていただいた、あのジェムという方なのですが……ミーアさんのご提案通り、毎日、お説教をして差し上げました」
――おやまぁ、それは……。お可哀そうに、ですわ。
ミーアは、ニマニマしながら紅茶を一口すすった。
芳しい花の香りにうっとりしつつ、ジェムの憎らしげな顔を思い出した。
――いい気味ですわ。ああ、とても気分がすっきりいたしましたわ。嫌な予感とか、気のせいでしたわ。
気分爽快、朗らかな笑みを浮かべるミーアを見て、ラフィーナは小さく頷いた。
「やはり、ミーアさんはわかっていたのね。彼の背後にいるもののこと……」
――へ？　背後にいるもの……？
きょとんと首を傾げるミーアに代わって、シオンが口を開いた。
「それはどういう意味でしょう？　ラフィーナさま。あの者たちは、我がサンクランドの間諜の……」
「ええ、風鴉（かざがらす）……、いえ、白鴉（はくあ）だったかしらね。サンクランドが誇

る情報戦の専門家ね」
ラフィーナは、明るい笑みを浮かべて言った。
「あの中で、ほとんどの方は国に忠誠を誓う、善良で無垢な間諜だったわ」
「……善良で無垢……」
およそ間諜には相応しからぬ評価に、その場の皆が絶句する。
それにも構わず、ラフィーナは軽やかな口調で続けた。
「けれど、あのジェムという者……彼だけは違った。他のみなさんは私の話を聞くことにも聖典を読むことにも、なんの抵抗もなかったのに、彼だけは強い拒絶を示したわ」
「拒絶……、ですの？」
ミーアは不審げな顔で首を傾げた。
ヴェールガ公国を中心に、このあたりの国は「中央正教会」による単一の宗教圏を形成している。
思想・道徳の基礎を築いたのは、ヴェールガが保有する神聖典（バイブル）であり、個人差はあれど、その価値観はこの地に住まう人々に広く根付いたものになっていた。
ゆえに、ラフィーナのお説教は「聞き飽きた退屈なもの」になることはあっても、強い拒否感を示されることは、あまりない。
特に、現実主義者であることを求められる間諜などは、そもそもその信仰をもっていない可能性だってある。小娘のする道徳的な話など、聞き流しさえすればいいもののはず。
にもかかわらず、
「いえ、むしろ拒絶というよりは……、恐慌をきたしたという感じだったわ」
信仰があるならば、ラフィーナの話をありがたく聞けばいい。
信仰がないのなら、聞き流すか、最低限、無関心を装えばいい。
それすらできなかったとすれば、それは……反対方向の信仰心の持ち主ということになる。すなわち……。
「まさか、悪魔憑（あくまつ）き……？」

ティオーナが、恐る恐るといった様子でつぶやいた。
それを聞いたラフィーナは……、意表を突かれたように、パチパチと瞳を瞬かせた。
「ああ、そうね。そういったものも確かにいるわね」
神に敵対する存在、邪神。それに仕える下級悪魔に憑りつかれて悪さをするのが悪魔憑きと呼ばれるものだ。
ヴェールガ公国には、その対応に当たる者たち祓魔神父（エクソシスト）と呼ばれる者たちがいるが……。
「ただ私が知る限り悪魔憑きというのは、ああいう振る舞いはしない。獣のように振る舞い、暴れるだけ。徒党を組み、知性的に陰謀を張り巡らすようなことはしない。だから、あのジェムという者は、恐らく別のものよ」
「別のもの、か……。先ほどから聞いていると、どうも、ラフィーナさまは、その正体に心当たりがあるように聞こえるな」
アベルが、真剣な顔で言った。当事者である以上、犯人の正体には無関心ではいられないのだろう。
ちなみに、前時間軸での当事者であるミーアは、紅茶に入れるジャムを発見して上機嫌に話を聞き流している。
ジェムよりジャムに関心があるミーアである……別にダジャレではない。
――ああ、やはり。このお紅茶、野イチゴのジャムが合うと思いましたが、絶妙でしたわ。
そんなミーアをよそに、まじめな会合は続いていた。
「そう。アベル王子のおっしゃる通り、私が考えているのは、もっと現実的な脅威よ」
「というと……？」
ラフィーナは、一度間を置くように優雅な動作で紅茶に口をつけて、それから静かに告げる。
「我がヴェールガ公国に、中央正教会に、はては世界に仇なす破壊者の集団、歴史の裏で暗躍する秘密結社、名を『混沌（こんとん）の蛇（へび）』」

その名を告げる時、聖女ラフィーナの顔には珍しく嫌悪の色が浮かんでいた。
「混沌の蛇……聞いたことがないが、それは、いわゆる邪神教団ですか？」
眉をひそめつつ、シオンが問いかける。
邪神崇拝、悪魔崇拝。
この地に数多生み出されては、人々に忌避され、泡のように消えていく邪教。
その一種なのか？　との問いかけに、けれど、ラフィーナの返事は歯切れが悪かった。
「恐らくは……。けれど、残念ながら詳しい教義などはわかっていない。というより、彼らについてわかっていることは二つだけ。一つは我らの神の聖典を嫌うこと。そこから、逆算して、彼らが邪神を奉ずる者たちではないかという推理が成立するのだけど……」
ラフィーナは一度言葉を切り、その場の全員の顔を見回してから……。
「もう一つは人間が造り出す秩序を徹底的に破壊しようとしていること。私はむしろ、こちらの方が現実的な脅威だと思っているの」
重々しい口調で告げた。
「秩序の破壊……というと？」
「ありとあらゆる秩序のね。国も法も文化も学問も……日々の平穏な営みさえもね」
それは、極端な言い方をしてしまえば、
「世界の敵、いや、人間の敵のような者たちですね……そのような危険な者たちが、放置されてきたというのですか？」
怪訝そうな顔で、アベルが問いかけた。
「そんなことはないわ。けれど、彼らはどこにでもいる。時に貴族、時に商人、時に農民、時に文官。果ては、邪教徒討伐軍の指揮官まで」
ラフィーナは、はぁ、と悩ましげなため息を吐いて首を振る。

「彼らは我々の社会に、国に、巧みに入りこんでいる。間諜と似たようなものかしらね。まさか、本当に間諜をやっているとは思わなかったけれど……」
どこにでもいて、誰がそれかわからない。ゆえに、対処が非常に難しい。
「通常の邪神教団は信者が集まって神殿などで生活している。時に徒党を組んで戦いを挑んでくるから、村などに被害は出るが、討伐はたやすい……か。確かに、どこにいるかわからないというのは、厄介だな……。ああ、なるほど……。だから、俺たちに声をかけたということか。蛇とすでに敵対した者であれば、確実に白であると言えるから……」
「話が早くて助かるわ、シオン王子」
そのシオンのつぶやきに、ラフィーナは満足げに頷いた。それから、彼女はミーアの方を見た。
その視線を受けて、ミーアは……、背中にダラダラと冷や汗が流れるのを感じた。
――あら？　これ、もしかして、聞いたらダメなアレなんじゃ……。
ミーアの小心者の嗅覚が、敏感にそれを感じ取った。
……いや、それはいささか遅きに失していた。
このお茶会に招かれた時点で、あるいは、そう、レムノ王国事件の際、ジェムをラフィーナに押し付けるという提案をしてしまった時点で……、すでにミーアは巻き込まれていたのだ。
――というか、なぜ、わたくしまでこの場に呼ばれてるんですの？　ジェムの事後報告しようと思っただけとか……。そっ、そうですわ。きっとジェムのことを話すのに、どうしても必要なことだから話しただけで……、別にわたくしには、なにも関係ないということも、ありえるのでは？
一縷（いちる）の希望をかけて、ラフィーナの方を見つめ返すと……。ラフィーナはにこり、とミーアに微笑みかけた。

「ええ、ミーアさんの想像の通りよ……。ラフィーナ・オルカ・ヴェールガは、ここに要請します。混沌の蛇に対抗する協力体制の樹立と、参加を！」

第三話　混沌の蛇とジャムと紅茶（後書き）

また、金曜日にお会いできると嬉しいです。

第四話　図書に願いを

――あ、これ、すごくヤバイやつですわ……。
ようやく働き始めたミーアの勘が告げる。
これは、先日の革命未遂騒動の比ではないぐらいに、危険なものであると……。
――ひっ、ひぃい……、なっ、なっ、なっ、なんとかお断りを……。
などと考え始めるが後の祭りである。
「さっきも言ったけれど、蛇はどこにでもいる。だから、今はあなたたちにしか声をかけられないの」
「ん？　だが、神聖典に反応するというのであれば、それで炙り出せば良いのではないかね？」
首を傾げるアベルに、シオンが難しい顔を向ける。
「いや、無駄だろう。アベル王子、白鴉のことを思い出せばいい。騒動の中心人物は確かにジェムだったが、実際に動いたのは、そのほかの人員だ」
「そうか……。敵は秘密結社、混沌の蛇の構成員とそれに操られた者たちか……」
「その通り。そして彼らは決して愚かではない、とても狡猾よ。だから、ボロが出るような場所には決して出てこない。神聖典の読み上げられるような場所には絶対に出てこないし、必要があれば、自分たちの息のかかった者を送り込む」
「なるほど、あのジェムという者を捕らえられたのは、ある意味、奇跡的なことだったということか……」
アベルが感心した様子で、ミーアの方を見る。
「ええ、本当に。それに、こんな状況にあっても、これだけの方に全面的な信頼を置いて声を掛けられる。むしろ、これは僥倖であったと言うべきね」

ラフィーナもまたミーアの方を見て、優しい笑みを浮かべた。
「それもこれも、すべてミーアさんのおかげね。さすがは私のお友だち」
「あ、え、お、と、当然ですわ！　わたくしとラフィーナさまは、おっ、お友だちですし」
「そうか……。ミーアが協力するのであれば僕が参加しないわけにはいかないな。我が国は直接的に被害を受けているわけだし、喜んで協力させてもらおう」
力強く、アベルが頷く。
――え？　え？　わ、わたくし、言いましたかしら？　協力するとか？　あら？　そんなこと、一言も言ってな……。
「俺もだ。とても放置しておける問題ではないし、ほかならぬ我が国の間諜にも紛れ込んでいたわけだからな。誰が信用できるかわからない以上、少なくとも信頼がおける者たちと情報の共有はしておきたい」
「あの、私、何ができるかわかりませんけど、でも、私も協力します」
シオンに続いて、ティオーナも名乗りを上げる。
そして、ミーアは……、
――ああ、このクッキーの甘味が……、心に沁みますわ。涙が出てきそうなぐらいに、美味しいですわ。
現実逃避に移っていた。
――こんなに美味しいお菓子なんて、もしかしたら、これって夢なのではないかしら？　ああ、そうですわ！　きっと朝起きたら、ああ、もう少しのところで美味しいお菓子が食べられたのにって、後悔して二度寝するみたいに……。ほら、あの美味しそうなケーキに手を伸ばした瞬間に、目が覚めて……。
結局……、テーブルのお菓子すべてを食べ終わっても、ミーアの目が覚めることはなかった。
そして、お腹いっぱいでご飯が食べられなくなって、アンヌにち

ょっぴり叱られた。

翌日の夕刻……。

「……ああ、やっぱり、夢ではございませんでしたわ……」

ミーアはようやく、昨日の出来事を諦め、受け入れ……そうして動き出した。

なにしろ、こう見えてもミーアは断頭台の運命を覆し、生存ルートを勝ち取った猛者である。

とてもそうは見えないかもしれないが……、ダラダラと無為に時間を過ごしている間に、状況がどうしようもなく悪化してしまうことがあることを、しっかりと知っているのだ……まったくもって、そうは見えないだろうが……。

とはいえ、基本的にミーアは面倒くさがりである。ズルをして楽ができるならば、そうしたい。

そんなミーアだから……、

「なにか、指針が欲しいですわ。これからの危険を上手く乗り切るような、あの日記帳のようなものが……」

ついつい、そんなことを考えてしまう。

けれど、残念ながら、あの日記帳は消えてしまったままである。

それに、自分の断頭台までの日々が綴られた日記を読むのは、やっぱり、あまりやりたいことではない。

「はて、そう言えば……最近なにか、似たようなものがあったような……」

ふいに、ミーアは思い出す。

そういえば、ああ、あの日記帳みたいなものね、と、ごくごく最近思ったことがあったような……。

「あれは、確か……っ！　そうですわ……。あの、歴史書。もしかしたら、あそこに何か書かれているかもしれませんわ！」

あの歴史書の未来の記述……、あの後、いくら見直しても記述がよみがえることはなかったのだが……、もしかしたら、今ならば復

活しているかもしれない。
善は急げ、とベッドから起き上がったミーアは、一人で図書室の方に足を向けた。

セントノエル学園の図書室は、男子寮と女子寮の連結部分にあたる、共用の建物部分に存在している。
本は貴重品のため入口には警備の職員が立っているものの、読むだけならば生徒だけでなく、従者にも許可されている。
そのため、普段であればそれなりに人で賑わっているのだが……、今はまだ休みだからか、室内にはミーアだけしかいなかった。
探し物をするには、大変、好都合だったのだが……。
「ああ、やっぱり、そう簡単にはいきませんわね……」
歴史書自体はすぐに見つかったものの、肝心の記述がどこをどう探しても見つからなかった。
「あら、でも……、あの記述自体がどこかからの抜粋みたいなことが書かれていなかったかしら。そう、確か……、ミーア皇女伝からの抜粋とか、そんなことが書かれていたかしら……ミーア皇女伝……」
そのタイトルを口ずさみ、ミーアは……とても嫌そうな顔をした。
……ちょっと試してみていただきたいのだが、自分の名前の後に『伝』という字面が続く本を想像してみていただきたい。なかなかの破壊力ではないだろうか？
「……うっかり読んだが最後、心が削られそうなタイトルですわね」
そうつぶやきつつも、一応、探してみるミーアであったが……、それも空振りに終わる。
本棚に「ミーア皇女伝」なる奇怪なタイトルの本は見つけることはできなかった。
「……まぁ、そうですわよね。期待はしておりませんでしたが」
そうは思うものの、少なからず落胆してしまうミーアである。
「ああ、あの日記帳ほどでなくても構わないけれど、何かないかし

ら……。こう、行動の指針になりそうなもの……わたくしの導になってくれそうなものが……降ってこないものかしら……？」
空からお金が降ってこないかしら？　ぐらい不毛なことをつぶやくミーアである。
はぁっと悲しげなため息を吐いて、ミーアが帰ろうと立ち上がった、まさにその瞬間だったっ！
ミーアの視界を、突如として黄金の輝きが埋め尽くした。
「うひゃあっ！？」
図書室で上げると怒られてしまいそうな悲鳴を上げて、ミーアが腰を抜かす。
「なっ、なっ、なんですのっ！？　いったい、なにがっ！？」
じりじりと床を後ずさり、光から離れるミーア。ある程度のところまで後退してから、改めて怪しげな光の方に目をやる。
光は徐々に弱くなっていった。けれど……目の錯覚だろうか……？
ミーアには、その光の中に人影のようなものが見えた気がした。
「あっ、あれ……は、な、なんですの？」
と……そこで、ミーアは唐突に気づいてしまった。
広い図書室にいるのが、ミーアだけだということに！
今、ミーアがいる場所は広い図書室の奥の奥だ。入口の職員のところまでは、かなり離れている。
しかも絶妙に薄暗い。シーンと静まり返っていて空気全体が淀んでいるような……。
つまり簡単に言ってしまうと、ちょっぴり気味の悪い場所なのだ。
ミーアは、別にお化けや幽霊などというものを信じてはいない。
「お、おほほ、いやですわ。そんなの、子どもじゃないんですから、そそそ、そんなのいるわけないですわ。ひ、ひ、一つ目の、お化けとか？　ばばば、バカバカしいですわ。歯をとっていく悪い妖精とか、人に乗り移る悪魔とか、そそ、そんなの、いるはず、ないですわ。ないですわっ！」
そう、なんといってもミーアの中身は二十歳過ぎの大人の女性な

のである。
幽霊とか、お化けとか、そんなの信じているはずがないのだ。
なにしろ、ミーアは大人……。
ずずずずっ！
消えつつある光の中、人影のようなものが、突如、ミーアに近づいてきた！
這いずるように近づいてくるのを見たミーアは……っ！
「……っ！」
口をパクパクさせながら逃げ出した。
アンヌ、アンヌぅっ！　と助けを求めようとするものの、怖すぎて声が出なかったのだ。
脇目も振らず、図書室を後にしたミーアは、全速力で自室に帰り、ベッドの中に飛び込んだのだった。

……その後、泣きべそをかくミーアを、アンヌが部屋でなだめる際……、
「もう、ミーアさま、大丈夫です。幽霊なんていないんですよ。きっと怖い夢でも見られただけですから、ね……」
小さな小さな子どもをあやすように頭を撫でられたことは、ミーアの名誉のために秘密である。

第四話　図書に願いを（後書き）

今週はここまで次回はまた月曜日予定です。
新学期が始まります！

第五話　ミーア姫、絶好調！

さて……、ミーアが図書室で受けた心の傷を癒しているうちに、季節はめぐり春がやってきた。

新学期になり、ミーアは無事に二年生になった。

今年の冬には十四歳になるのだ。

「いつまでも、いもしないお化けに怯えて、一人で寝られないとかありえませんわ！」

などという偉そうな宣言を自らにした後、ミーアは春休みの間ずっとお世話になっていたアンヌのベッドから、自分のベッドに進級した。

……断じて、新学期が始まり、クロエをはじめ友人たちが戻ってきて、怖いのがちょっぴり薄れたから、などという単純な理由ではない。ミーアの名誉のために一言書き添えておこう。

そうして、クロエらとの再会もほどほどにミーアの新学期が始まった。

「それでは、この紋章が読み解ける方はどなたか……いかがですか？　ミーア殿下」

教室の前に据え付けられた大きな白石板（ホワイトボード）。そこに、赤い特殊な樹液（ペイント）で描かれた紋章を見上げて、ミーアは颯爽と立ち上がった。

「ふふん、そんなの簡単ですわ！」

教室中の視線を一身に集めつつ、ミーアは紋章の前に悠然と歩み寄る。

現在、ミーアたちのクラスでは『紋章学』の授業を行っていた。

紋章学とは、その名の通り、紋章に込められた意味を読み解く授業である。

特に貴族の子女の場合、相手の家紋からその血筋、家々の結びつきを読み解けることは必須のスキルといえる。
「ふむ……」
ミーアは描かれた紋章の前に立ち、じっと見つめて、その意味を読み取っていく。
紋章を描くのには法則がある。
ある貴族の男子と貴族の女子が結婚する場合、基本的には家紋を半分ずつ組み合わせたような新しい家紋を継承することになるのである。
例えばの話、ミーアとアベルが結婚した場合、ティアムーンの紋章である「三日月」とレムノ王家の紋章である「戦狼（いくさおおかみ）」とを合わせた紋章になるのだ。
つまり、各貴族の家に伝わる紋章を知っていれば、相手の家同士の繋がりを知ることができるのである。
……ちなみに、例えは、あくまでも〝例え〟である。
別にミーアが暇な時に、自室の鏡にちょこちょこと落書きして、
「ああ、アベル王子と結婚すると、こんな紋章になるのですわね……月に吠える狼、相性ぴったりですわ！」
などと、一人でうっとりしていた……なんてことはない。大きな誤解、あらぬ疑いというものである。
ちなみに、前時間軸ではサンクランドの紋章である太陽とティアムーンの月とを組み合わせて、
「ああ、シオン王子と……以下略」
などと、一人でうっとりしていた……なんていうこともない。ミーアに対しての悪意ある醜聞（フェイクニュース）である！
「ふむ、この家紋の右側は、ガーラント伯爵家、左下はサンクランドの門閥貴族ウェスレー侯爵、右上は……」
ミーアの答えに、初老の女教師は満足げに頷いた。
「正解です。さすがミーア殿下。よく復習されていますね」
いつも厳しい教師の手放しの称賛に、ミーアは胸を張って、渾身

のドヤ顔を見せる。
「ふふん、このぐらいわたくしにかかれば簡単ですわ」
新学期、ミーアは順調な滑り出しを見せていた……意外なことだが。
それもこれも、すべてはアンヌのお手柄だった。
あの日、図書室で深い深い心の傷を負ったミーアは、一人では眠れなくなった。
アンヌに添い寝してもらうようにしたまではよかったのだが……、それでもなかなか眠れないミーアである。
それを見たアンヌは一計を案じた。
「ミーアさま、せっかく眠れないのであれば、一年生の授業の復習をするのはどうでしょうか？」
そうして、アンヌは子守歌の代わりに授業で習った知識を一つ一つ、ミーアに語って聞かせたのだ。
テストで苦労していたミーアの負担を少しでも減らそうというアンヌの思い付きだったが、これが思いのほか上手くいった。
アンヌが話し始めるとすぐにミーアはコロッと眠りに落ちてしまったのだ。いつでも、アンヌが気が付いた時には、すーすー、気持ちよさそうに寝息を立てていた。
けれど、不思議なことに、ミーアは寝ている間に聞いていた話を、きちんと覚えていたのだ。
≪アンヌ式・睡眠学習法≫が誕生した瞬間である！
そういうわけで、今のミーアは帝国の叡智に相応しい行動ができる体になっていた。
実に全く奇跡である！
クラスメイトの賞賛の視線を感じながら、ミーアは朗らかな笑みを浮かべる。
――ああ、とても気持ちいいですわ。やはり、わたくしはこうでなければいけませんわ。
すっかり調子に乗っている……。

けれど、まぁ、当然のことと言えば当然のことながら……人生はそうそう上手くいかないもので……。
ミーアの心の傷を鮮やかに蘇らせるソレは、昼休みのランチタイムにやってきた。

その日、ミーアは取り巻きの少女たちとともに中庭で昼食をとっていた。
食堂でサンドイッチを作ってもらい、気分はすっかりピクニック。晴れ渡る空は青く、春の日差しはポカポカと、なんとも心地よい。
――ああ、絶好のピクニック日和ですわ。それに、このサンドイッチの塩漬け肉、絶品ですわね。ついつい食べ過ぎてしまいますわ。
などと、ミーアはご機嫌にサンドイッチを食べていたのだが……。
楽しい歓談の時間は、そう長くは続かなかった。
昼休みも半分を過ぎたころ、ミーアの取り巻きの一人、グライリッヒ伯爵家の令嬢、ドーラがおもむろに口を開いたのだ。
「そういえば、ミーアさま、お聞きになりまして？」
サンドイッチを食べることに夢中になっていたミーアは、
「ん？　なんの話ですの？」
ドーラの醸し出す、危険な雰囲気に気づけなかった。
「……なんでも、出た、みたいなんです」
声をひそめるドーラに、ミーアは首を傾げた。
「出た、とは？　いったいなにがですの？」
ミーアの興味を引こうとするかのように、ドーラはたっぷり溜めてから、
「幽霊……」
恐ろしげな声で言った。
「はぇ？」
ぽかーん、と口を開けるミーアにかまわず、ドーラは話し出した。

第五話　ミーア姫、絶好調！（後書き）

今週は、月火、木金更新予定です。

第六話　クロエとティオーナとミーア式三段論法

「ゆゆ、幽霊、ですの……？」
尋ねるミーアに重々しく頷いて、ドーラは話し始めた。
「私のお友だちが実際に見たらしいのですけれど、夜、女子寮を歩いていた時、見たっていうんです……」
そこで言葉を切って、上目遣いにミーアを見つめて……、
「ボロボロの格好をした女の子の幽霊を！」
――そっ、そういう無駄な演出はいりませんわっ！
内心で絶叫を上げつつも、ミーアは浮かべた笑みを崩すことはなかった。
注意してみると、その頬が微妙に強張っていることに気が付くだろうが……。幸いなことに、この場にはあまり観察眼に優れた者はいなかった。
「噂では恋敗れて自ら命を絶った女生徒の幽霊とも、湖で溺れた町民の子どもの幽霊とも言われてるようで……」
「まぁ、怖い！　ミーアさま、やはり幽霊とかっているのでしょうか？」
きゃあきゃあ言いながら怖がる取り巻きの少女たち。その一人に話を振られたミーアは、
「そうですわねぇ、お話としては楽しいかもしれませんけれど……」
余裕たっぷりの笑みを浮かべて、首を振った。
「残念ですが、それで怖がることができるほど子どもではございませんわ」
それから、優雅な仕草で目の前のサンドイッチをひょいっと口に入れて、
「では失礼、わたくし、次の授業の準備がございますから、先に行きますわね」

ミーアは、ちょこん、とスカートのすそを持ち上げると、そそくさと中庭を後にした。

校舎に入ると、ミーアは小走りになった。

階段を上るころには、全速力になっていた。スカートを軽やかに翻し、貴族の子女としては、ちょっぴりはしたない走り方かもしれないが……、知ったこっちゃないミーアである。

階段を一段抜かしでぴょこぴょこ上り、向かう先は教室だった。

「クロエ、クロエっ！」

入るや否や辺りに視線を走らせる。っと、目当ての人物が、ちょっぴり驚いた顔でミーアの方を見た。

「あれ？　ミーアさま？　どうかされたんですか？」

どうやら、教室で次の授業の準備をしていたらしいクロエ。そのそばには一緒に談笑を楽しんでいたのか、ティオーナの姿もあった。

ちなみに、ミーアを介して知り合いになったこの二人だが意外と話が合うらしい。

実家の手伝いで農作業もするティオーナにとって、植物にも造詣が深いクロエの知識は、とても有用なものだったとか。

今もそんな話で盛り上がっていたところなのだが……ミーアにそんな空気を読んでいる余裕はなかった。

開口一番、ミーアは尋ねる。

「クロエ、つかぬ事をお聞きしますが……幽霊って、本当にいるんですの？」

基本的に、ミーアは幽霊など信じていない。

そんなものを信じるなんて、いかにも子どもじみていると思っている。

思っているけれど……それでも怖くなってしまうのが、小心者で臆病なミーアという少女なのである。

だからこそ、誰かに否定して保証してもらいたい時があるのだ。

まして、先日見てしまった、アレのことがある。

ミーアの中で図書室での出来事は、ただの見間違いとして処理されているが、それでも現在のミーアはナイーブ乙女モードなのだ。
幽霊なんかいないと、どうしても誰かに保証してもらいたいのである。
この場合、誰でもいいわけではない。
アンヌなどは否定して安心させてくれるだろうけれど、それは、ミーアを安心させるために言っている可能性がある。
かといって、アベルやシオンに聞くわけにもいかない。アベルに「怖がりだなぁ」と笑われつつ、思い切り甘えるというのは一瞬考えないでもなかったが……、
――そ、そ、そんなはしたないことっ、できませんわっ！
などと、変なプライドが邪魔するのだ。当然、シオンに子ども扱いされて笑われるのは論外である。
また、ラフィーナなどは確かにその手の専門家なのかもしれないが……、それだけに怖いものがある。
「あら？　知らないのかしら？　幽霊はちゃんといますよ。ほら、ミーアさんの後ろにも……」
なーんて言われたりしたら、ミーアの心に回復不能な傷がついてしまう危険性がある。
そう考えた時、一番否定してくれそうで、なおかつ、その言葉に信用が置けそうな人物こそ、クロエであった。
自分などよりもよく本を読むクロエであれば、きっと冷静に、理知的に否定してくれるに違いない……そう信頼して尋ねたミーアであったが……。
クロエは……笑わなかった。
そっとうつむき、何事か考え事をしている様子。メガネに光が反射して瞳が見えなくなって……、その顔が、ちょっとだけ不気味に感じられる。
「あの、ミーアさま、私は幽霊についてはちょっとわからないんですけど……」

かわって口を開いたのは、ティオーナだった。
「でも、悪魔憑きは、領内によく出るから知ってます」
一般的に、悪魔憑きというのは、都会よりは田舎の農村部に出やすいと言われている。
ティオーナの住むルドルフォン辺土伯領は帝都から遠い地域である。当然、そうしたものと接する機会も多かったのかもしれないが……。
「悪魔憑きと幽霊と、どういう関係がございますの？」
首を傾げるミーアに、ティオーナは思いがけないことを言った。
「いえ、悪魔みたいな目に見えない怪物がいるんだったら、幽霊だっていてもおかしくないんじゃないかな、って思って……」
ティオーナの言葉は完全に盲点をついていて……、なおかつミーアを怯え上がらせるのに十分だった。
なぜなら、ミーアもまた、不可思議な現象に巻き込まれた経験があるからである。
時間転生、そのような奇跡を起こせるものは神さま以外にはあり得ないとミーアは素朴に信じていた。
「わたくしは偉大なる神の恩寵を受けた、特別な存在なのですわ……」
……などといささか調子に乗ってたりすることもあるが……、それはともかく。
神が存在するのであれば、当然、神聖典（バイブル）に書かれた他のものだって、存在する可能性は高い。すなわち、神の敵である邪神……、そして、悪魔……。
恐ろしい怪物どもが存在してもおかしくはない。
とすれば、幽霊だっていてもおかしくないのかも……。
ミーア式三段論法の完成である。
――なっ、なっ、なんで、怖くなるようなこと言うんですの！？
やっぱり、この子、嫌いですわ！
ティオーナのことを睨みつけるミーア。そんなミーアに追い打ち

をかけるように、
「ミーアさま、実は、こんな本があるんですけど……」
静かな声に、振り返ったミーアは思わず悲鳴を上げそうになった。
クロエが……何やら不気味な骸骨の絵が描かれた本を、ミーアに差し出してきたからだ。
「ひぃ？　な、なな、なんの、本ですの？」
「うふふ、これはですね、なんと、東の島国に伝わる妖怪図版集と言って、えーっと怖い怪物の絵を集めたものなんです」
そうして、クロエは本を開いた。
そこに見えたのは、首がやたらと長いナニカや、目玉が三つあるナニカや、人間を丸飲みにしているナニカや、他には……。
「う、うーん……」
そこまでだった……。くらーっと、ゆっくりミーアの体が傾いだ。
「きゃあ！　み、ミーアさま、どうされたんですかっ！？」
慌てた様子でティオーナが抱き留める。っと、ミーアは真っ青な顔で、小さく首を振った。
「だっ、だっ、大丈夫、ですわ。ちょ、ちょっと、めまいがしただけ……。すぐによく、なりますわ」
「大変。今、アンヌさんを呼んできますね」
そうして、すっかり気分が悪くなってしまったミーアは、その日の午後の授業を休むことにして、部屋で長いお昼寝をすることになった。
回復したのは夕食時のこと。
ティータイムのオヤツを食べ損なってしまったから、と、たくさん食べて、心行くまで飲んだのだが……。
それが、さらなる悲劇を生むことになるとは思いもしないミーアであった。

第七話　蛮勇を奮え！　帝国の誇りを守るために！

その日の夜のことだった。
真夜中……ふいに目が覚めたミーアは、自らの体を襲う違和感に思わず背筋を震わせた。
違和感、そう、それは……。
――う、うう……。と、トイレに行きたい、ですわ……。
昼間のサンドイッチが塩辛かったこと、その結果、夕食時にガブガブ水を飲んでしまったことが仇となった。
もぞもぞと寝返りを打ち、そのまま寝てしまおうと目をぎゅっと閉じるミーアだったが……。
――こ、このまま寝たら、別の意味で大変なことになってしまいそうな予感がいたしますわ……。
我慢しきれずに、起き上がった。
暗い部屋の中を、ほのかな月明りを頼りに、ミーアはアンヌのベッドに歩み寄る。
トイレについてきてもらおうと思ったのだが……、すーすーと気持ちよさそうに寝息を立てるアンヌに思いとどまる。
――春休みの間、わたくしのせいで、ずっとアンヌを寝不足にしてしまいましたわね……。
休みの間、図書室で見た影に怯えるミーアが寝付くまで、ずっとお話をしてくれていたアンヌ。ただの子守歌ではなかなか寝付けないからと、かなり遅くまで付き合わせてしまった。
それがアンヌの負担になっていたらと思うと気軽に起こしていいものなのか……。
ミーアは思わず迷ってしまう。
――もしも、アンヌが体調を崩したら大変ですわ。
臣下に優しい、聖女のようなミーアである。

――こっ、この部屋で一人で寝るとか、ありえませんわっ！

……自分ファーストなだけだった。

ちなみに、余談ではあるのだが、セントノエル学園の消灯時刻というのは月の刻（こく）九つ鐘の時（午後九時）である。

しかし、健康優良児であるミーアは、消灯時間より鐘一つ分（一時間）早くベッドに入る。そして、「寝られない！」と焦りだすのは、だいたいベッドに入ってから鐘一つ分（一時間）の時間が経ってから、つまり消灯時間と同じぐらいの時間である。

それから半鐘分（三十分）ほど怖い怖ーい想像に悩まされた後、ようやく眠りにつく。

つまり、ミーアが全然眠れないという時、消灯時間から半鐘分（三十分）遅く眠りについている計算になる。十分に寝ている……。

さらに、アンヌが子守歌代わりの授業の復習を読み上げてくれるようになってからは、ベッドに入ってから数呼吸で眠りにつけるようになった。

アンヌはその後、鐘一つ分（一時間）程、それを続けてから眠りについて、翌朝、日の刻五つ鐘の時（午前五時）に起床する。

睡眠時間にすると、およそ鐘九つ分（九時間）は寝ている。

一概には言えないが……恐らく、アンヌが体を壊すとしたら、寝不足以外の原因によるのではないかと思われるのだが……そんなこと露ほども思わないミーアである。

「う、うう、仕方……、ありませんわ」

ミーアは室内靴（スリッパ）に履き替えて、部屋を後にした。

寮内の廊下は完全な闇に沈んでいる……ということはなかった。

壁に活けられたホタルツツジが、ぼんやりとした明かりを放っているおかげで、ランプがなくとも歩けるようになっているのだ。

普段であれば、まるで夢の中の世界に迷い込んでしまったような幻想的な光景のはずなのだが……、今のミーアにはただただ不気味に見えた。

廊下に残されたちょっとした暗がりから、クロエの本に描かれていたような、恐ろしいナニカがひょっこり顔を出しそうで……。
「や、やっぱり、我慢しようかしら……。そうですわ、朝までなら何とか……」
踵を返しかけたミーアの背筋を、ふいに吹き付けてきた風が撫で上げる。
春先の風は冷たく、ミーアは、ぶるりと体を震わせた。と同時に、気づいてしまった。
すでに、自分が、のっぴきならない状況に陥っているということに……。
――あ、ああ、ここで蛮勇を奮って、お手洗いに行かなければ、わたくしは……、まったく別の心の傷を負うことになるのですわね。
シミのついたシーツを干しているアンヌの姿を想像して……ミーアは震え上がった。
――い、今こそ、勇気の出しどころですわ、ミーア・ルーナ・ティアムーン！　わたくしは帝国皇女、ティアムーンを代表する者。わたくしの恥は、帝国の恥、帝国の誇りが踏みにじられようとしている時に戦わずして、いつ戦うというのですの！？
戦地に赴く孤高の騎士のように、悲壮なる覚悟を固めて、ミーアは廊下に足を踏み出した。
目的地であるトイレは、運が悪いことに、ミーアの部屋からはかなり離れていた。
大帝国の姫君であるミーアの部屋をトイレの近くにはできないという配慮が働いたのだが……今のミーアには迷惑な話だった。
「う……うぅ……。遠いですわ……。どうして、こんなに遠いんですの？　それに、暗い……ひぃっ！」
暗がりに怯え、風の音に怯え……、寿命を数週間ばかりすり減らして、ミーアはようやくトイレにたどり着いた。

しばしの時間経過の後……

「ふぅ……」

トイレから出てきたミーアは、すっきり顔でため息を吐いた。

「やっぱり、勇気を出して正解でしたわ。これで気持ちよく眠れそう……」

つぶやきつつ、視線を前にやり……ふいに恐怖がよみがえってきた。

「……今から、戻るのですわね。で、でも、帰るだけですし、さっさと行けば問題ないはずですわ……」

自分を励ますようにそう言って、ミーアは歩き始めた。

第八話　ミーアの新春怪談ナイト

歩き始めてすぐミーアは喉の渇きを覚えた。
「……部屋に水差しが用意してあったはずですわね……」
いつも寝る前にアンヌが用意しておいてくれたものがあったはず……とは思うものの、一度寝れば、まず夜のうちに起きることはないミーアである。
夜中に目が覚めて水を飲む経験など一度もない。ゆえに、机の上に置いてある水差しの中身が、夜のうちに用意されたものか、朝一番にアンヌが汲んできてくれたものなのか、いまいち自信が持てなかった。
実際には寝る前に汲んで、朝起きたら汲みなおしているアンヌである。忠臣である。
それはともかく……、
「……ああ、部屋に帰ってもしもなかったら、喉が渇いて眠れなくなりそうな気がいたしますわ……」
一度気になりだすと、止めることができない心配性なミーアである。飲んだら飲んだで、またトイレに行きたくなりそうではあるが、今はとにかく水が飲みたかった。
――ここから食堂までは、そんなに離れておりませんわ。一度、部屋に戻るよりは……。
食堂には、いつでも飲めるように湧水が引いてある。さすがに水が豊富にあるヴェールガ公国だけあって各部屋に引くまではいかずとも、全体的に水関係の設備は整っていた。
トイレまで何事もなく来ることができたのが、ミーアの気を大きくしたのだろうか。
ミーアは、そのまま食堂の方へと足を向けた。
……まるで、何者かに、誘い込まれるかのように。

食堂の入口まで来た時……、
「あら？　何かしら……」
ミーアの耳が捉えた音、それは、すん、すん、と鼻を鳴らすような……音で。もっと言ってしまうと、それは、女の子が泣いているような……。
瞬間、ミーアの脳裏に昼間に聞いた話が蘇る。
自ら命を絶った女生徒の幽霊の話が……！
「ま、まさか、ありえませんわ、そんなの絶対に……」
踵を返し、逃げ出すべきだった。
けれど、ミーアは、ついつい見てしまった。
音の鳴っている方を……。
「ひっ！」
思わず、ミーアは息を呑んで固まる。
そこにいたのは、一人の少女だった。年のころは、恐らくミーアより少し年下といったところ。
ボサボサに伸びた髪、ボロボロにすり切れた服と薄汚れた肌は、セントノエルの学生には相応しくない、貧民街の住人のような格好だった。
けれど……、それ以上にミーアの目を引いたもの、それは、少女の体中を染め上げる赤い色だった。
食堂を照らす明かりは、決して強くはない。にもかかわらず、その赤は、ミーアの目に焼き付いた。
頭から上半身にかけて滴る赤い液体……、それは、まるで……！
「ひぃいいいっ！」
ミーアは絶叫したつもりだった。
けれど、口から出てきたのは、かすれたような、か細い悲鳴だけだった。
――なっ、なっ、なんですのっ！？　あれ、ち、血まみれの女学生の幽霊！？　ひぃいいっ！

よたよたと食堂から転がり出ると、ミーアは自室を目指して走り出した。
室内靴（スリッパ）がどこかに飛んでいくが、そんなものに構っている余裕はない。
裸足で廊下の床をけり、全力で走ろうとする……けれど、まるで悪夢の世界にいるかのように、体はなかなか前に進んでいかなかった。
そして、気のせいだと思いたかったのだけど……、
――ひぃいいいいっ！　ななな、なにかが、何かが追いかけてきてますわっ！
すた、すた、という足音が、ミーアの後をつけてきていたのだ。
その足取りは、ミーアより確実に早い。
徐々に近づいてくる足音に泣きべそをかきながら、ミーアは自室に逃げ込んだ。
「アンヌっ！　アンヌぅっ！」
弱々しい悲鳴を上げつつアンヌのベッドに飛び込む。けれど、なぜかベッドには誰もいなかった。
「アンヌ、ど、どうしてっ！　どうして、いないんですのっ？」
その時、ふいにミーアの脳裏にいやぁな想像が過ぎる。
この世界に、自分と得体のしれないナニカ以外いなくなってしまったような……。
そんな話を、前の時間軸で聞いたことがあったような。
あの時、楽しげに怖い話大好きなドーラが話していたような……。
――どっどど、どうして、こんな時に、そんな怖い話を思い出すんですのっ！？　そんなのありえないですわ！　きっと、そう！
目が覚めた時に、わたくしがいなくなってたから、心配になって探しに行っただけですわ。みんないなくなってしまったなんて、そんな怖いこと……。あっ。
その時、ミーアは重大なミスに気づいてしまった。
――か、カギ、かけ忘れて……ひぃっ！

瞬間、ガチャリ、とドアが開く音。
ミーアは慌てて毛布をかぶり、必死に目を閉じた。
――きっきき、きっと、アンヌですわ。アンヌが帰ってきたのですわ。そうに違いありませんわ……！　それ以外に、ありえませんわ。ありえませ……ひんっ！
のそり、のそり……、なにかがベッドに上ってきた。
――お、おかしいですわ。アンヌだったら、わたくしに、ひと声かけるはずですわ！
恐る恐る、ミーアは薄っすらとまぶたを開ける。と、そこには……、真っ赤な何かに染まった少女の顔が、すぐ近くに見えて、こちらを覗き込んでいてっ！
――ひっ、ひぃいいいっ！　あっ……。
かくん、と、ミーアは意識を失った。

第九話　ミーア姫、推理する

ゆさ、ゆさ……。
体がゆすられる感触、ミーアは、うぅん、と呻いて、目元をこすった。
――夢？　なんだか、すごく怖い夢を見たような気がいたしますわ……。
ミーアは、ゆっくり目を開いて……、目の前に自分をのぞき込む少女の幽霊の顔が見えて……、
「うっ、うーん……」
再び、かくんっ！　と意識を失いかける。でも、
「あの、寝たふりしないでください」
――はぇ？　い、今、声が……？
遠慮がちにかけられたその声で、ミーアはかろうじて踏みとどまった。
それから恐る恐る少女を観察する。
上目遣いにミーアを見つめている少女、表情に乏しい顔には、けれど、わずかばかり戸惑いの色が見て取れた。
――あっ、この子……、幽霊じゃありませんわ。
ミーアは察した。幽霊は戸惑ったりしない、とミーアの常識が告げていた。
と同時に手を伸ばし、少女の髪に触れる。そこについた粘り気のある液体……、
――この赤いのは……。
よく見れば、血というには赤すぎるその液体……それは、
「ああ、なるほど、これは……、白石板に板書するための樹液ですわね」
そう問うと、少女は小さく首を傾げて、

「ああ、なにかはわかりませんが、容器をひっくり返してしまいました。でも、ちゃんと片づけましたから、心配しないでください」
生真面目に答えた。
「なるほど、そういうことですのね……」
つぶやきつつ、ミーアは考える。
――まぁ、もちろん幽霊などではなく、普通に人間であることは初めからわかってましたけれど……、ええ、幽霊などいるはずがないと、もちろんわかっておりましたけれど……。はて？　では、この子、いったい何者かしら？
見たところ帝都の新月地区にいてもおかしくはない風貌（ふうぼう）。何日も洗っていないであろうボサボサの髪と、擦り切れたぼろ布のようなワンピース、そこから伸びたやせ細った手足……。
“食うに困って、学園に忍び込んだ子ども”
一見すると、そんな印象の少女だが……。
「それで、いったいここには何をしに来ましたの？」
「……これを落としたみたいだったから、届けに」
そういって、少女が差し出してきたのは、先ほどまでミーアが履いていた室内靴（スリッパ）だった。
「まぁ、わざわざこれを届けに？」
ミーアが尋ねると、少女は小さく首を振った。
「いえ、それだけじゃありません。お願いがあってきました」
――お願い……。食べ物でもわけてほしいのかしら？
などというミーアの予想をよそに、少女は言った。
「ボクがここにいること、誰にも言わないでください。お願いします」
そう言って、少女はスッと頭を下げた。それを聞いてミーアは、
――ボク……？　ははぁん、読めましたわ……！
しばしの黙考の後、にんまり、と意地の悪い笑みを浮かべた。
見たところ少女は、貧しさに耐えかねた無辜（むこ）の民といった風情である。

授業で使う白石板用（ホワイトボード）の樹液を誤って頭から浴びたなどと言って、過剰なほどに哀れな姿をしている……、否！　それを装っている！
けれど、ミーアは知っている。
――貧しさに窮（きゅう）した一般民衆が入って来られるほど、セントノエルの警備は甘くはありませんわ。
島に踏み入るだけでも一苦労。加えて、学園自体は城といっても過言ではないほどの警備体制を誇っているのだ。
――ということは、この子は、厳重な警備をかいくぐってこられる者ということになりますわ。
しかも、ミーアは気づいていた。少女は自分のことを『ボク』と言っていた。
どこからどう見ても女の子、なのに、少年のような一人称……、
――あわよくば、少年のように振舞おうとしている、身分を偽りたいのですわね。
そんなことをしてまで、このセントノエルに忍び込まなければならない存在、そして、それを実現させてしまう存在は、一つしか思い当たらなかった。
すなわち、世界の破壊をもくろむ秘密結社……。
――混沌の蛇！　その正体、このミーアがしかと見破りましたわ！
ミーアの推理が冴え渡る！
……まぁ、言うまでもないことではあるが、迷推理なのだが……。
――ふふん、さっそく、やってきましたのね！　ラフィーナさまのところに突き出してやりますわ。
ミーアは、ふんすっと鼻息を荒くして、少女をにらむ。
――さて、正体がわかれば怖くなんかありませんわ。だまされたふりをするのが得策ですわね。
いかに少女といえど、こうして潜入してきているのだから、強いのかもしれない。
であれば、だまされたふりをして、逆に騙すのが得策……。
策士ミーアの脳みそが唸りを上げる！

罠に溺れなければいいのだが……。
「ボクのこと、秘密にしてたってバレたら、ひどい目に合うって知ってます。でも、どうかお願いします。誰にも言わないで、お願いします」
「ふふふ、ええ、もちろんですわ」
ミーアは、優しげな笑みを浮かべて言った。
「あなたのこと、秘密にしておいて差し上げますわ」
「……へ？」
その答えに少女は、驚いた顔をした。
「それよりあなた、もしかして、お腹が空いているんではないかしら？」
ミーアは机の上に置いてあった小箱を手に取った。
箱の中身はクッキーだ。
ミーアの部屋には、いざという時のために非常食（＝オヤツ）が備蓄してあるのだ。少なくとも、三日は部屋に籠城（＝引きこもり）出来るようになっているのである。
しかも、そのクッキー、ただのクッキーではない。
ミーアがアンヌに命じて行った調査の結果、安く入手できるものの中では、最も味が良いと判断したものなのだ。
――ふふふ、空腹の時にこれを食べてしまえば、心を奪われざるを得ませんわ。
そう、腹の中で皮算用をしていたミーアであったが……、少女は小さく首を振った。
「いえ、大丈夫です。減ってません」
「へ？　でも……」
「ほんとです。減ってません」
その少女の言葉を否定するように、きゅるる、という切なげな音が鳴った。
「……」
無言で少女の方を見つめるミーア。少女は、表情一つ変えずに、

むしろ胸を張った。
「嘘じゃありません。なんでしたら、ボクの尊敬するお祖母(ばあ)さまのお名前に誓います」
――まあ、ずいぶんと安いお祖母さまのお名前ですわ！
ミーアは呆れつつも、クッキーを取り出した。
「別に、遠慮することはございませんわよ？　ほら、たっぷりありますし……」
「でも……、食べ物は貴重なはずです……」
少女は、食い入るようにクッキーを見つめつつ言った。
「……ボクのこと、黙っててもらうだけで、すごく迷惑かけてるし……」
そう言いつつも、少女の視線はクッキーにくぎ付けだ。
試しに、ミーアは手に持ったクッキーをスーッと横に動かしてみた。
すると、それを追うように、少女の顔の向きが変わる。
「……その上、たっ、食べ物をもらうなんて……」
ミーアはひょい、っとクッキーを少女の方に投げた。
少女は、パクっとそれに食いついた！
もぐもぐ、クッキーを食べてから、彼女は瞳を潤ませて……、
「おっ、美味しい……」
それから、ミーアの方をじっと見つめて……、
「お姉さまは、慈愛の女神さまかなにかなんですか？」
鼻をすすりながら言った。
――あっ、この子、チョロイですわ。
ミーアは確信する。それから、愛想の良い笑みを浮かべて、
「たっぷりあるから、遠慮する必要はありませんわ。とりあえず、今はそれしかございませんけれど、明日の朝になったら、なにかお食事を作っていただきますわね。それと……」
少女の体を眺めまわして、ミーアはうなずいた。
「お風呂が必要ですわね」

ラフィーナのところに突き出すにしても、こんな汚れたままにはできない。
――わたくしでさえ憐れみを覚えてしまう格好ですし……ラフィーナさまも判断を誤られる可能性がございますわ。
その時だった。部屋のドアが開いた。
「ああ、ミーアさま、よかった、お帰りだったんですね」
立っていたのは、アンヌだった。ミーアの顔を見て、小さくホッと息を吐く。
どうやら、ミーアを心配して、探しに出ていたらしい。
「ええ、お手洗いに行っておりましたの。ちょうどいいところに帰ってきましたわね、アンヌ。すまないのだけど、お風呂の準備をしてもらえるかしら？」
「それは構いませんけれど、ミーアさま、その方は……」
――はて、なんと答えたものかしら……。
ミーアは、わずかばかりに悩みつつ、少女の方を見る。と、
「え……、アンヌ、かあ、さま……？　それに、いま、ミーアって……え？」
少女は混乱したように、アンヌの方を見て、それから、ミーアを見つめた。
「えーと……？」
一方のミーアは、わけもわからず、首を傾げるばかりだった。

第九話　ミーア姫、推理する（後書き）

ちなみに、一部の愛好家の方には大変申し訳ないのですが、ミーアベルはボクっ子な女の子です。
男の娘ではないのです。

第十話　祖母と孫の感動の対面

「ミーアさま、どういたしますか？」
「そうですわね……。とりあえず、共同浴場に連れて行きましょうか」
ミーアは、呆然とする少女をうかがいつつ、アンヌに指示する。
女子寮の共同浴場は、基本的には入浴時間が決まっている。けれど、それはあくまでも表向きのこと。
温泉を引いているため、常時、湯はたまっている。そして、どうしてもという場合には、管理人に言って、こっそり入ることも可能なのである。
天井の一部がステンドグラスになっている浴場で、淡い月明かりを浴びつつ、入浴するとたいそう風流なのだとか。
まぁ、夜は寝ることに無上の喜びを感じているミーアには縁のない話ではあるのだが。
「とりあえず、この子の服は洗うとして……。着替えはわたくしのものを適当に見繕（みつくろ）ってちょうだい」
「ミーアさまは、いかがいたしますか？」
「へ？　わたくし、ですの？」
ミーアは、ふと自分の体を見下ろした。
気が付けば、ミーアは汗まみれだった。先ほど廊下を全力で走ったのだから、当然のことだ。
――このまま寝るのは、確かに少し気持ち悪いかもしれませんわね。
小さく頷き、ミーアはベッドから起き上がった。
「そうですわね、月夜のお風呂というのも風流でしょう」

ミーアは少女とアンヌを引き連れて、共同浴場にやってきた。
その間、少女はずっと黙ったままだった。
――どうかしたのかしら？　なにか、企んでいるとか……？
ちらちら横目で監視するミーア。だったが、少女は悪だくみをしている様子はなく、むしろ、かすかにうかがえるのは戸惑いの様子だった。
脱衣所につくと、手早くアンヌが少女の服を脱がせていく。
少女は、特に抵抗する様子もなく、なすがままにされていた。
ミーアはさりげなく、その様子を見つめていたが……、
――ふむ、武器などは持ってないようですし……。なにか武術をやっているようにも見えませんわね。
自分とあまり変わらない……というより、むしろ貧相ですらある少女の裸身だった。
あばら骨がわずかに浮いていて、あまり食べていないことがうかがえる。肌艶もあまりよくないし、頬は痩せこけて、顔色も青白い。
先ほど触れた時も思ったことだが髪質も悪い。
貧民街の住人を装った、混沌の蛇の関係者……。そう予想していたミーアであったが、その姿には、ついつい憐れみの念を抱いてしまう。
――地下牢での生活を思い出してしまいますわね。
食べられないのは……辛いことなのだ。
先ほど少女の反応を見て、チョロイなどと思ってしまったことを、ミーアは思わず反省する。お腹が減っていれば、ミーアだって、食べ物をくれた人を女神と崇めるぐらいは……。
――いや、さすがに、あそこまではやりませんわ！　やっぱりこの子、ちょっとチョロイ子だと思いますわ。
「ミーアさま……」
ふと見ると、アンヌが生真面目な視線をミーアに向ける。
「ミーアさまの洗髪薬と洗身薬、それに肌を潤す香油をお使いしてもよろしいでしょうか？」

普段から、ミーアのもろもろのお手入れを手伝っているアンヌである。その仕事には、こだわりを持っている。そんなアンヌだからこそ、少女の状況を見て、肌艶&髪質保持職人（スペシャリスト）の魂に火がついてしまったようだ。

「ええ、かまいませんわ。わたくしは寝汗を流すだけですし。その子の入浴を手伝ってあげてちょうだい」

それから、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「せっかくですから、ダンスパーティーに出ても恥ずかしくないぐらいに、綺麗にしてあげるといいですわ」

さっさと汗を洗い流したミーアは、浴槽に浸かって、はふーっと息を吐いた。

――あー、生き返りますわ……。

手足をぐいーっと伸ばして、疲れがたまった筋肉を解していく。

……大した運動はしていないように思うのだが、なまりきった体には、先ほどの全力疾走がこたえたのだ。

――っと、気を抜くわけにはいきませんわね。

気分を入れ替え、ミーアは改めて少女の方を見た。

アンヌのされるがままにしている少女。今はわしゃわしゃと長い髪を洗われている。ぎゅっと目をつむり、じっとしている、その姿は、まるでお風呂に入れられた猫みたいだった。

――あの子、いったい何者なのかしら……？

当初、混沌の蛇から送り込まれた破壊工作員か何かだと疑っていたミーアだったが、少女を見ていると、なんだか、疑っているのが馬鹿らしくなってきた。

――それに、あの子がさっきつぶやいた言葉……。

「アンヌ母さま……とか言ってましたわね」

やがて、汚れを落とした少女が浴槽に入ってきた。

「では、ミーアさま、私はお着替えと香油の準備をしてきます」

「ええ、よろしくお願いするわね」
頭を下げ、踵を返すアンヌ。その後姿を、少女はジーっと見つめていた。
浴室の扉が閉まったところで、
「……やっぱり、アンヌ母さまだ……」
ぽつん、とつぶやく。
「……でも、おかしい。確かにアンヌ母さまなのに、なんだかすごく若い……」
ぶつぶつ、戸惑うようにつぶやいていた少女だったが、突然、顔を上げて、パンっと手を叩いた。
「あっ、そうか。つまり、これ、夢なのですね」
意味のわからない状況を「夢」で片付けてしまう精神性に、ミーアは微妙な親近感を覚えた。
――なっ、なんかこの子……とても他人とは思えませんわ。
そうして、改めて見てみると、少女はどことなくミーアに似ていた。
しっかりと洗い清められた髪の色は、ミーアと同じ白金色だった。切れ長の美しい瞳の色はミーアとは違って、緑月石（エメラルド）のような緑色だけど、その形はやはりミーアと似ている。
っと、その瞳がミーアの方を見て、驚きに見開かれた。
「あ、ごめんなさい。えーと、遅くなりましたが、お初にお目にかかります。ボクはベル。ミーアベル・ルーナ・ティアムーン。ミーアお祖母さまの孫娘です」
「はぇ……？」
ミーアはぽっかーんと口を開けた。

第十一話　帝国の叡智の虚像

「わ、わたくしの、孫……？　孫ということは、わたくしの子どもの、娘ということですわね？」
ごく初歩的な単語の意味の確認をしつつ、ミーアは、呆然と少女を見つめた。確かに言われてみれば少女の顔は、どことなく自分に似ているように見えないこともないが……。
普通であれば疑うべきこと。けれど、ミーアはそれをあり得ないとは言えなかった。
なぜなら、もしもベルが混沌の蛇の関係者で、ミーアをだまそうとしているのであれば、そんな突飛な嘘をつく必要がないからだ。
そもそも時間を飛び越えて過去にやってきたなど、どんなおとぎ話でも聞いたことのない話である。唯一、ミーアが思い当たるものこそ……自身の経験だった。
想像の外の出来事、物語より奇妙なる現実……。
それゆえに、ミーアはベルの言葉を信じることができた。
「ということは……、もしかしてミーアベル、あなた……」
「あっ、ベルって呼んでください。お祖母さま」
ベルは、ごくごく小さくはにかみながら言った。
「わかりましたわ。では、わたくしも名前で」
「はい、わかりました。ミーアお祖母さま」
ぐむ、っとミーアの喉が変な音を立てた。
ミーアは前の時間軸、で二十年の人生を過ごした。そして転生してからは三年近くの時間が過ぎている。
精神年齢はさておくとして、実質的に二十二、三歳の女性ということができるだろう。
……が、さすがにお祖母ちゃんと言われるのには抵抗があった。
お母さんぐらいならば、葛藤とともに受け入れることもできたか

もしれないが……、お祖母ちゃんと呼ばれるのは、なんというか……、こう、心に来るものがあるのだ。
ちゃぽり、とお湯に波紋を立てつつ、ミーアはベルの方に近づいた。それから、無言でベルの華奢な肩をぐいいっと掴んで、笑みを浮かべた。
「お・ね・え・さ・ま、と呼んでいただきたいですわ」
「え？　でも、おば……」
ベルに顔を寄せて、ニコニコ笑みを浮かべながら、
「お姉さま、いいですわね？　お姉さま」
「え？　え？　でも、あ、いたっ！　痛いです。肩に指が、食い込んで……」
「練習してみるのがよろしいですわね。わたくしに続いて言ってみなさい、ベル。はい、ミーア、お・ね・え・さ・ま」
「ミーア……お姉……さま？」
恐怖のゆえか、フルフル震えだしたベルを見て、ミーアはようやく離れた。
「と、まぁ、些細なことは置いておいて、ベル、もしかして、あなた……、断頭台で首を刎(は)ねられましたの？」
「……はぇ？」
ミーアの突然の問いに、ベルは瞳をぱちくりさせてから、
「ふふふ、面白いこと言いますね、ミーアお姉さま」
クスクス笑い声をあげた。
「じゃあ、お姉さまは、断頭台にかけられたことがあるんですか？」
ええ、ありますわ！　……などとは、さすがに言えないミーアである。
――なるほど、つまり時間をさかのぼる条件は断頭台がではないということですのね……。でも、よく考えると、そもそも時間のさかのぼり方もわたくしの時とは違いますわね。もしかすると、これはまったく別のものなのでは……。
その瞬間、ミーアの脳裏に蘇ってくる記憶があった。

――そういえば、あの時、確かわたくしは……、導(しるべ)を求めたのでしたわ……。
血まみれの日記帳のような、行動の指針になるようなものを……。
――だとすると、この子こそが？
ミーアはベルの方を見た。すると、ベルは寂しそうな笑みを浮かべた。
「でも、ミーアお姉さまの言う通りなのかもしれません」
「ん？　なんのことですの？」
「実はボク、追手の者たちに捕らえられる寸前だったんです。だから、きっとその時に気を失ってしまったんだと思います。この夢から覚めたらお姉さまの言う通り、断頭台にかけられてしまうかもしれません」
それから、ベルは、まっすぐにミーアの方を見つめた。
「でも、最後に見た夢が、こんな風に楽しい夢でよかったです。ボク、ずっとお祖母さま……じゃない、お姉さまにお会いしたかったんですよ」
そうして小さく笑みを浮かべた。それは、笑い慣れていない子どもが無理に笑うかのように、ぎこちない笑みだった。
気づいた時……ミーアは、ベルの手を握りしめていた。
「大丈夫ですわ、ベル」
真っすぐに、ベルの瞳を見つめる。
「大丈夫、あなたの夢は、このわたくし、ミーア・ルーナ・ティアムーンが……、いいえ」
ミーアは、そっと首を振ってから、優しい笑みを浮かべて、
「あなたの尊敬するお祖母さまが、決して終わらせはしませんわ」
そっと胸を張った。
「だから、話しなさい。いったい何がございましたの？　なぜ、帝室の一員であるあなたが追われねばならなかったんですの？」
「それは……」
「それは？」

ミーアはゴクリ、と喉を鳴らして、続く言葉を待つ。が……、その答えが返ってくる前に……、
「あっ……目が……」
突如、ベルの体がぐらり、と揺れる。そのままふらーっとお湯の中に倒れこんでいく。
「ちょっ、ベル……。ああ、湯あたりしましたのね？」
ミーアは慌てて、ベルの体を抱きとめる。
「もう、しょうがありませんわね……」
そのまま、ベルを連れて浴槽から出ようとして……、
「あっ、あら？」
直後、くらっと目が回る。
よくよく考えれば、ミーアの方がベルよりもずっと長くお風呂に入っていたわけで……。
「めっ、目が回ります、わ……」
ふらーっとその体が傾いていき、浴場の床にこてん、と倒れるミーア。
「ああ……床が、気持ちいいですわ……」

数分後、浴場に戻ってきたアンヌは、真っ赤な顔をしたミーアとベルが、目を回して倒れているのを見て大いに慌てたという。
けれど、幸運なことに先に目を回してしまったベルは、尊敬するミーアの醜態を見ずに済んだため、帝国の叡智の虚像は無事に守られることになったのだった。
めでたし、めでたし！

第十二話　祖母と孫とのパジャマトーク（シリアスな）

――不思議な夢……。

お湯につかり、目の前の少女と話しながら、ベルは思った。

追手に捕まりそうになって、光に飲み込まれて、気が付いたら変な建物の中にいた。

大きくて、とても豪華な内装の、お城のような建物。

突然の変化に驚いたベルは、警戒してすぐに身を隠した。

――ちょっとだけ、もったいなかったかも……。

はじめから夢だってわかってたら、もっといろいろ回れたかもしれない。食べ物がなくてひもじい思いもしなかったかもしれないし、それに……。

――もしかしたら、アンヌお母さまとだって、もっと早くお会いできたかもしれない。それに……。

目の前の、ベルの祖母を名乗る少女、ミーア・ルーナ・ティアムーン。

ベルの周りにいた人たち、みんなが慕い、その死を惜しんだ人……。

その姿は少しだけ、ベルに似ていて、でも……。

「あなたの尊敬するお祖母さまが、決して終わらせはしませんわ」

力強い宣言とともに、自分を安心させるように笑みを浮かべる。

その力強い笑みに、ベルは見惚れて、憧れた。

――ああ、これが……これが帝国の叡智……。

ベルの姿を見て、惜しむことなく、すぐにお菓子を出してくれた。

遠慮するベルに、無理矢理に食べさせて、その後で労わるように、お風呂に連れてきてくれた。

――とっても温かくて、頼りになる人……。尊敬するお祖母さま……。もっと早くお会いしたかったな。そしたら、もっともっとた

くさんお話しできたのに……。
最初はちょっぴり怖い夢かと思った。だけど、今ではすごく楽しくって、ベルは久しぶりに笑った。それは本当に本当に、久しぶりのことだった。
アンヌとエリスが命を落としてから、楽しいなんて思うことはなくなってしまったから。
――もしかしたら……ボクが最後まで誇りを失わなかったから、ご褒美にこんな素敵な夢、見れたのかな……。
最後……、そう、ベルは自分の命運がすでに尽きていることを知っていた。
追手の手に落ちれば、皇帝の血を引く自分は、確実に処刑される。断頭台で首を落とされるか、それともっと別の、恐ろしい方法でなされるのかはわからないけれど……。
それを思うと、恐怖で体が震えた。
――できれば、もう少しだけ、この世界にいたいな……。
温かで、優しい世界。
大切な人たちが、まだ生きていて……自分を抱きしめてくれる幸せな世界。
ここにずっと居たいと、心からそう願う。
だけど、そんなベルの想いと裏腹に、目の前の景色が霞み始めた。
夢の終わり……。
どれだけ楽しくても、夢は終わる。ずっと居たいと思っていても、人は夢の中に居続けることはできない。
――お祖母さま……お会いできて、嬉しかったです。
そうして、ベルの意識は、白い湯気の中に溶けて行って……。
「あっ……」
目が覚めた時、ベルは自分が泣いていることに気が付いた。
慌てて、目元をぬぐう。
夢は終わった。これからやってくるのは、辛く苦しい現実だ。

自分は追手の手に落ちて、今は絶望的な状況。あがいてもどうしようもないかもしれないけれど、それでも……、とベルは身構えようとして……唐突に気が付いた。
自分がふかふかの、気持ちの良いベッドに寝かされているということに。
体を見下ろせば、いつの間にやら着替えさせられていて……。今着ている服は、なんだかふわふわしてて、とても気持ちいい上質なもので。それに、ほのかに香る花の匂いがとっても素敵だった。
――ボク……いったいどうなって？
「あら、目が覚めましたのね？」
そのベッドに腰かけて、ベルの顔を覗き込む一人の少女がいた。未だ夜明け前の、ほのかな月明かりに照らされて、その美しい髪は淡く白金色に輝きを帯びていた。
「まぁ？　どうしましたの？　そんなに泣いて……。ベルは泣き虫ですわね」
ベルの目尻についた涙を、指先で拭う、彼女こそ……。
「ミーア、お祖母さま……？」
「お姉さまですわ！！」
ミーアはちょっぴり不機嫌な声で言った。

――やっと起きたと思ったら、失敬なやつですわ！
ミーアはプリプリ怒りつつ、ベルの隣に横になった。
「あの、アンヌ母さまは……？」
「もうすぐ食堂で準備が始まる時間ですから、あなたの分も作ってもらえるようお願いに行っていますわ。起きるにはまだ早い時間ですし、わたくしたちはもう少し、ここで休みましょう」
「え？　おば……お姉さまのお隣で、ですか……？」
ベルは戸惑ったような声を上げて、体をぎゅっと縮こまらせる。
「そんな恐れ多いこと……」

「あなたの分のベッドは急には用意できないでしょう？　アンヌのベッドを使わせてもらってもよろしいんですけど……」
ミーアの視線を追ったベルは、きょとん、と首を傾げた。
「あれ？　でも、ミーアお姉さま、確か、さっきはあっちの方に寝てませんでしたか？」
「……気のせいですわ」
ミーアは微妙に目を逸らしつつ、
「それはそうと、あなたには聞きたいことがあるんですの」
そう言うと、ミーアは、毛布を頭の上までずり上げた。
小さい二人の少女は、これですっぽり、その中に潜り込んでしまう。
そうして、声が外に漏れないようにしてから、ミーアは改めてベルに問う。
「ベル、いったいあなたに何が起きたのか、聞かせてくださらないかしら？　こう言ってはなんですけど、あなた、帝室に連なる者とはとても思えないような見た目をしてましたわよ？」
ボロボロの粗末な服、伸び放題で手入れのされていない髪、やせ細った体……。
帝室の一員どころか、貴族の娘にすら見えない、悲惨な状態だった。
「ティアムーン帝国は、帝室は……、わたくしと子どもたちは、どうなりましたの？」
ミーアの問いかけに、ベルは一瞬、黙り込み、やがて小さく口を開く。
「ティアムーン帝国は……もうありません」

第十三話　ミーア姫、やらかす……

ベルの言葉に、ミーアは衝撃を受けた。
彼女の有様からある程度は予想していたとはいえ、衝撃は簡単にはなくせない。
「そんな、いったいどうして？　やはり飢饉を乗り切れなかったんですの？」
「飢饉……？　たぶんですけど、それは大丈夫だったはずです。ボクが生まれるずっと前というか、ボクのお母さまが生まれるよりも前のことなのでよくは知りませんけど……。ミーアお姉さまの功績を称えるご本に書いてありました。蓄えで十分に乗り切れたし、周辺の困窮している国にも救いの手を伸ばした、と書かれていました」
「そう、ですわね。言われてみれば確かに、あの飢饉が起きるのは今から数年後のこと、ベルには関係ないか……」
ほう、っとミーアが胸を撫でおろしたのもつかの間……、
「あっ、でも、その時にミーアお姉さまの栄誉を称えるために、金の像が立ちます」
「え……？　きっ、金の像……ですの？」
「はい、天を衝くがごとくものすごく大きな像だったって、エリス母さまも言ってました」
「てっ、天を衝くがごとく……」
ミーアは、巨大な自らの像が立っているのを想像した。
腕組みして、得意げに笑みを浮かべる自身の姿。そんな金ぴかの像が帝都の広場に聳え立つ姿を思い浮かべて……、ついでにそれが革命軍に引き倒されるシーンまでしっかり想像できてしまった。
――しかも、金の像とか、引き倒された後、ボコボコに解体されて売り飛ばされるに決まってますわ。別に自分がやられてるわけじゃないのに、あれ、結構、ショックなんですのよね……。

前の時間軸において、自身の肖像画がどのように扱われたのか、忘れてはいないミーアである。ルードヴィッヒとともに困窮する民衆のもとを訪問した帰り道、広場で肖像画が山積みにされて焼かれているのを見て、こう、無性に悲しい気持ちになったものである。

「それは、絶対にやめさせなければなりませんわね……。ルードヴィッヒにくれぐれも言っておかなければ……」

「へ？　なぜですか？　とても素晴らしい出来栄えだったと聞いてますけど……」

「覚えておくといいですわ、ベル。帝室は、税金を自らのお金だと思っては絶対にいけませんわ」

ミーアはキリッとした顔で言った。

「自らの……、血だと思いなさい！」

「血……ですか？」

「そうですわ！　それこそが生き残るためのコツですわ！」

ギロチン被害の第一人者であるミーアの言葉に、ベルは神妙な顔で頷いた。

「それで、話を戻しますけど、結局、帝国になにがあったのですの？」

「ボクも直接知っているわけではありません。すべて、ルードヴィッヒ先生から聞いたことです」

そう前置きして、ベルは話し始めた。

「ボクの曽祖父、ミーアお姉さまのお父さまが亡くなった後、ミーアお姉さまは帝位を継ぎませんでした。そのために帝位を継ぐのは、四大公爵家の一つということになったのですが……」

ミーアの一応の友人、エメラルダ・エトワ・グリーンムーンの実家であるグリーンムーン家と莫大な資産を抱えるブルームーン家、軍部に強いコネクションを持つレッドムーン家にイエロームーン家を加えたティアムーン帝国四大公爵家は現皇帝の血族である。すなわち、正当な皇位継承権を持っているのだ。

各家の権勢には若干の差異はあるものの、いずれも皇帝に次ぐ大貴族として知られている。当然のごとくそれぞれの家が貴族社会に派閥を持ち、権力闘争を繰り返していた。

「まさかとは思いますけれど、継承権争いが悪化して内戦……などとは言いませんわよね？」

「さすがはミーアお姉さま。よくおわかりになりましたね。二家同士が互いに手を結び、対立。帝国内の各貴族は、ごく一部を除き、どちらかの陣営に入り、帝国は二つに割れてしまいました」

ベルは、小さくため息を吐いた。

「ルードヴィッヒ先生が嘆いておられました。ミーアさまが、もしも女帝になっていただけていたら、ここまで酷いことにはならなかったって……」

それから、慌てた様子で付け足す。

「あっ、もちろん、きっと何か考えがあったんだろうって、言っておられましたけど……」

それを聞いて、ミーアの背中を、だらだらと汗が流れ落ちた。

――あ、ああ、や、やってしまいましたわ。これ、きっとアレですわ。たぶん、わたくし、なぁーんにも考えてませんでしたわ……。

ミーアには未来の自分の思考が手に取るようにわかった。何しろ自分のことだし。

――あ、あの歴史書を読んだせいですわ。あれに八人も子どもができて、国は安泰だって書かれてたものだから……。

ミーアは確信する。絶対に、未来の自分は面倒くさがって、女帝にならなかったのだ。積極的に拒否したのか、それとも消極的になる努力をしなかったのかはわからない。

けれどいずれにせよ、特に理由もなく、深い考えもなく、その椅子を他者に譲ってしまったに違いない。

「それでも、内乱が起きて帝国が割れそうになった時、ルードヴィッヒ先生たちは、ミーアお姉さまを女帝の地位につけようとしたそうです。だけど……」

「だけど……？」
「その矢先に、お姉さまは毒殺されてしまったんです」
「ど……毒殺！？」
それを聞き、ミーアは一瞬、考える。
――ま、まぁ、でも、ギロチンよりはマシなのかしら……？
ミーアの脳裏をよぎるのは、おとぎ話だった。
愛し合う姫と騎士とが報われぬ恋の末、ともに毒をあおって命を落とす物語。
――首を落とされるよりは、だいぶ……。
「お見事なお最後だったそうです。ミーアお姉さまは、三十日の間、猛毒と気高く戦った末……」
ミーアは脳内で、三十日間、毒で苦しんで、と翻訳した。
「その身を深紅の鮮血に沈めながらも、わが人生に一点の曇りなし、と高らかに朗らかに叫ばれた、って」
ミーアは脳内で、全身から血を流しつつ苦しみながら死んだ、と翻訳した。
「ミーア皇女伝に書いてありました」
――ひぃいいっ！　全然マシじゃございませんわ！　エリスの脚色がだいぶ入ってますけど、これ、実際にはものすごーく悲惨な死に方ですわ！
リアルに想像してしまい、ミーアは震え上がった。
――しかも、そのお話、なんだかすごく盛られてる気がいたしますわ。
毒で弱っているのに、高らかに朗らかに格好いいことを叫ぶ自分の姿がまったく想像できないミーアである。
キラキラした目で見つめてくるベルを見て、ミーアは、遅まきながら不安になる。
――この子、わたくしのことどんな風に教えられてるのかしら……？
聞いてみたいけれど、怖いから聞かずに棚上げするミーアである。

「それで、ミーアお姉さまのお子様方、ボクから見ると叔父上や叔母上に当たる方たちなのですが、身の危険を感じ、離散の憂き目に逢いました。ボクは、お母さまが亡くなる直前に、アンヌ母さまのもとに預けられたんです」

ベルは、一度言葉を切ってから、少しだけかすれた声で続ける。

「でも、アンヌ母さまはボクをかばうために……。そして、その後、育ててくださったエリス母さまも……」

――ああ……アンヌ……、それにエリス。あなたたちは、わたくしが死んだ後も、忠義を尽くしてくださいましたのね……。でも、エリス、いくら何でも脚色しすぎ……。

ミーアは小さくため息を吐きながら、改めて疑問を口にする。

「ですが、仮にわたくしが死んだとしても、そう簡単に帝国が滅びたりはしませんでしょう？　そうですわ、シオン。あのでしゃばりはどうしましたの？　あいつが他国のこととはいえ、貴族の愚かな行いで、民が苦しむのを見過ごしにするなんて思えませんわ。それに、ラフィーナさま……、あの方が、そのような帝国の窮状を見過ごしにされたんですの？」

「ラフィーナさま、というのは、司教帝ラフィーナ・オルカ・ヴェールガのことでしょうか？」

「ええ、そう、ですわ……？　ん？　司教帝？」

聞きなれない言葉に、ミーアは首を傾げた。

第十四話　司教帝ラフィーナ

そうして、話し込んでいるうちに朝がやってきた。
すっかり寝不足気味のミーアはあくびを噛み殺しながら、食堂にて朝食をとった。
部屋に残してきたベルには、アンヌが朝食を持って行っているはずだった。
一緒にテーブルについた取り巻きとの会話もほどほどに、搾りたての甘い牛乳を飲みながら、ミーアはぼんやりと、ベルから聞いた話を思い出す。
――司教帝ラフィーナ様……。にわかには信じがたいお話でしたわね。
ヴェールガ公国は、軍事力を持たない小国だ。
そして、大陸に広く普及した中央正教会の総本山であり、宗教的権威に裏打ちされた国である。
ヴェールガには、国を統べる王がいない。唯一の神を王とし、その王に任命された最高位たる公爵こそが国を統べる王にして、宗教的指導者である司祭なのだ。
それゆえに、軍は持たないし、王をも名乗らない。
それは絶対的な権力を持つ自己を律するための謙虚さであり、配慮であったはずなのだが……。
――にもかかわらず、ラフィーナ様は皇帝を名乗られ、そして、自ら剣を取られた。
ベッドの中でベルは言った。
「司教帝ラフィーナは邪教結社「混沌の蛇」との戦いを訴え、近隣国に義勇兵を募りました。そうして集まった兵をヴェールガの軍、聖瓶軍（せいびょうぐん）として組織しました」
「まぁ、ラフィーナ様が、そんなことを？」

確かに、彼女は混沌の蛇との戦いを宣言し、ミーアたちに協力を要請した。
けれど、自ら軍を持ち、それを率いて戦いに参加するとは、ミーアは思っていなかった。
「それだけではありません。ヴェールガ公国を神聖ヴェールガ帝国に移行、周囲の国々に恭順を求めることになります」
「そっ、それでは、侵略ではございませんの？　いったいなぜ、そのようなことに？」
「徹底した管理体制による破壊活動の防止。司教帝の手足となって動く聖瓶軍を用いて、潜んだ邪教徒の掃滅をしようとしたのだ……って、ルードヴィッヒ先生は言ってました」
ベルの微妙なルードヴィッヒ物真似に、ミーアは苦笑いした。
「……それにしても、邪教徒の掃滅なんて……、なんとも物騒ですわ。ティアムーンは混乱の中にあったとしても、サンクランド王国のシオンは黙っていたんですの？」
「残念ですが、サンクランドも内乱状態でした。司教帝につくことを主張する貴族派と、そのやり方に反対する天秤王シオンの派閥に分かれて……」
善政を敷いたシオンでさえ、国を割られてしまう。それほどに、『聖女』の言葉は重い。
「ティアムーンにも、その流れは来ます。四大公爵家のうち、二つは司教帝の側につき、もう片方は天秤王につきます。そして、天秤王についたほうが負けます。結果、帝国は聖瓶軍の管理下に置かれます」
「話を聞いていると、ラフィーナ様がすべての問題の発端になっているように聞こえますわね」
ミーアはてっきり、混沌の蛇がすべての元凶だと思っていた。けれど……、
――これは矛盾ですわ。ラフィーナ様は混沌の蛇を排除するために管理体制を強くしている。そのせいで、逆に世界がよくない方向

に行っておりますわ。これでは、ラフィーナ様が元凶だということになってしまいますわ。
　そもそも、ミーアにはいまいち、ラフィーナがそんなことをするようには思えなかった。
「いったい、どうして、ラフィーナ様はそのようなことを？」
「それは……」
「それは？」
「……すみません。よくわかりません。ルードヴィッヒ先生に何か聞いたような気はするんですけど。その時、ウトウトしてしまってました」
　――まぁ、あのルードヴィッヒの話の途中で寝るなんて、大した度胸ですわね。ネチネチ嫌味を言われたでしょうに。
　素直に感心してしまうミーアであったのだが……。
「えへへ、ルードヴィッヒ先生、とても優しくしていただいたんですけど、そのせいで眠たくなってしまって……」
　ベルの言葉に愕然となる。
「やっ、やや、優しいって、あのルードヴィッヒが、ですの？」
　声が、震える。
「はい。とてもよくしていただきました。ボクが寝てるのが悪いのに、自分の教え方が悪かった、と言って謝ってくれたり、寝ないで最後まで聞いてただけなのに、よく頑張ったね、って頭を撫でてくれたりしました。ボクの大好きなおじいちゃんです」
　――ちょ、な、ルードヴィッヒ、な、なんなんですの！？　この扱いの差は！　さっ、差別ですわ！　わたくし、大変、不当な扱いを受けましたわ！
　そもそもミーアがウトウトして怒られたのは十六、七歳のころで、ベルは十歳前後なので、その時点で大きな違いがあるのだが、当然、そんなことは考えないミーアである。
　そんなこんなで、夜は更けていったのだった。
　――結局、あの後も、有益な話は聞けませんでしたわね。まぁ、

何か思い出すこともあるでしょうけれど、それにしても、気になりますわ、ラフィーナ様のこと。
　そうして、朝食を終えたミーアは、ちょうど食堂から出ようとしていたラフィーナの姿を見つける。
「ラフィーナ様、おはようございます」
「あら、ミーアさん。ご機嫌よう。どうかした？　なんだか眠そうだけど」
　優しい笑みを浮かべるラフィーナに、ミーアはあいまいな笑みを返してから、
「ええ、少し寝不足で。それより、折り入ってお話があるのですけれど、お昼にうかがってもよろしいかしら？」
「まぁ、奇遇ね。私もミーアさんにお話があったのよ。ちょうどよかったわ」
　ニコニコ笑うラフィーナに、ミーアはきょとんと首を傾げるのだった。

第十四話　司教帝ラフィーナ（後書き）

改稿　聖帝軍→聖瓶軍（せいびょうぐん）

まったく想定外でしたが、さすがに世紀末臭が強すぎるので直しました。

第十五話　ラフィーナの誘い

一日の授業を終えたミーアは、早速ラフィーナの部屋を訪れた。
ヴェールガの最高権力者の娘であるラフィーナであるが、普段暮らしているのはミーアたちと同じ女子寮だ。
距離的には、実家から通っても問題ないのだが、各国の次世代を担う者たちとの交流を重視して、そのようにしているのだという。
「さ、行きますわよ」
ミーアは自らの後ろに控える少女に声をかけた。
少女……、ミーアの孫娘であるベルは緊張に強張った顔で、ミーアを見つめた。
「あの、おば……、お姉様……、本当に大丈夫でしょうか？」
「そうですわね、あなたがわたくしのこと、うっかりお祖母さま、なんて呼ばなければ大丈夫なのではないかしら？」
「むー、お姉様、意地悪です……」
ぷーっと頬を膨らませるベルの肩を押して、ミーアはドアをノックした。
「失礼いたします、ラフィーナ様」
「ああ、いらっしゃい、ミーアさん。あら？　その子は……？」
笑顔でミーアを出迎えたラフィーナは、ベルの方に目を向けて、小さく首を傾げた。
「ええ、実は話というのは他ならぬこの子のことですの。同席をお許しいただけますかしら？」
「ええ、それは構わないのだけど……」
わずかばかり困惑した顔をしつつも、ラフィーナは、
「困ったわ。お茶菓子、ミーアさんの分しか用意してなかったの」
「まぁ！　それは大問題ですわ！」
半ば本気でミーアは心配した。

部屋に入り、椅子に座って落ち着いたところで、ベルの分の紅茶とお茶菓子がそろう。
ラフィーナは自らの前に置かれたティーカップを持ち上げ、その香りを楽しむように深く息を吸ってから、ミーアの方に目を向けた。
「それで、お話とはなにかしら？」
「ええ……その」
ミーアは、わざとらしく言い淀んで見せてから、紅茶を一口。口の中に広がるのは甘い花の香りだった。
気分を落ち着けるように……そう見えるように、ミーアはほうっとため息を吐いてから、
「実はこの子は、わたくしの、その……妹ですの」
用意していた答えを口にする。
さも言いにくいことを言うかのような様子で……。あまり深く触れてくれるな、と言外に主張するように。
「え？　だけど、ティアムーン帝国の皇女は確か……」
首を傾げるラフィーナに、意味深に頷いて見せて、ミーアは答える。
「ええ、わたくし一人、ということになっておりますわ。公式には……」
公式も非公式もなく、実際、皇帝の血を引くのはミーア一人だけなのだが……。
――申し訳ありません、お父さま。少しだけ泥をかぶっていただきますわ。
そうして、再びのアピール！　突っ込まれればボロが出る。言いにくいことなので、そっとしておいて、と全力でアピールである。
そんなミーアの目くばせで、ラフィーナはすべてを察した様子だった。
「まぁ、国を統べる者としては当然のことね。お世継ぎがミーアさん一人では何かあった時に大変でしょうし……」

それから、ラフィーナはベルの方に目を向けた。
「なるほど、確かによく見るとミーアさんに似てるわね。それで、ミーアさんの妹さんの、えーっと……」
「あ、ご挨拶が遅れました。ミーアベル・ルーナ・ティアムーンです。よろしくお願いします、ラフィーナ司教て……いたっ！」
ベルの足を隣で踏んづけてから、ミーアは、おほほ、と笑みを浮かべた。
「それで、ラフィーナ様にお願いがございますの。この子を、この学園に通わせていただけないでしょうか？」
ミーアは少しばかり緊張しながら言った。
セントノエル学園に通うこと、それは、ある種の特権だ。
ティアムーン帝国の中にも、金や地位がありながら、通うことのできなかった者たちが数多存在している。反対に、ティオーナのような田舎貴族や一般の民衆であっても、ラフィーナのお眼鏡にかなえば通うことができる。
たいていのことは、わがままで通せてしまうミーアだが、今回ばかりは権力に頼るわけにはいかないのだ。
「妹さんをこの学園に、ね……」
ラフィーナは一瞬、ベルの方に視線をやってから、
「お友だちの頼みは、無下にはできないわね」
「ありがとうございます、ラフィーナ様」
ホッと安堵しつつ、頭を下げるミーアに、ラフィーナは楽しそうな笑みを浮かべた。
「ふふ、それにしても、ミーアさん、今日はやけに演技が下手ね」
「……へ？」
「別に私は、ミーアさんが言いたくないことまで聞こうなんて思わないわよ？　素直にそう言ってくだされればいいのに。妹さんのこと、よっぽど大切に思ってるのね。だから、そんなに必死になるのね」
そうして、ラフィーナは、ベルの方に目を向けた。
「これから、よろしくね、ミーアベルさん」

「あっ、えっと、ベルって呼んでください。ラフィーナ様」
どうやらベルも、だいぶ緊張が解けてきたらしい。
そんな二人のやり取りをしり目に、ミーアは目の前の焼き菓子に手を伸ばす。
もう、自分の仕事は終わった、と思っていた彼女であったのだが……、
「ところで、ミーアさん、私からも折り入って相談したいことがあったの。いいかしら？」
ラフィーナに話しかけられて、顔を上げる。
「まぁ、ラフィーナ様がわたくしに相談なんて……、いったい何かしら……？　もしや、例の？」
このタイミングで持ち掛けられる相談事など、混沌の蛇関係以外に思いつかなかったのだが、ラフィーナが口にしたのは意外なことだった。
「いえ、そうではないのよ。実はね、もうすぐ生徒会の選挙があるのだけど……」
一度、言葉を切ってから、ラフィーナはミーアの目を見つめた。
「それでね、よかったら、ミーアさんにも、生徒会に入ってもらいたいのよ」

第十六話　分岐点

「まぁ、わたくしに生徒会に？」
ミーアは、思わず驚きの声を上げていた。
セントノエル学園生徒会――それは、単純な学生の自治組織ではない。
なぜなら、この学園に通う者は選ばれた者たちだから。
次世代の権力者たちが集うこの学園において、生徒会に入ることは大変な名誉であり、それ以上に、実質的な発言力を得ることでもある。
前の時間軸のミーアも当然のごとく、この生徒会の役職を狙っていた。
けれど、会長こそ自由投票によって決まるものの、それ以下、副会長二名と、書記二名に関しては、生徒会長に選出された者の推挙によって決められるようになっている。
ラフィーナに蛇蝎（だかつ）のごとく嫌われていた、というか、そもそも存在の認識すらされていなかったミーアは、当然のことながら役職に選ばれることはなかった。選択肢に入ることすらなかった。
かといって、ラフィーナを蹴落として生徒会長になろう、などと大それたことを考えるはずもなく。
結局、ミーアは、ラフィーナに票を入れつつ、自分にお声がかからないかしら？　などとソワソワしつつ、この選挙期間を過ごしていたのだ。
まぁ、ただの一度も声がかかることはなかったのだが……。
そんなミーアだから、このお誘いは素直に嬉しかった……かというと、実はそうではない。正直、どちらかというと、面倒くさいと思ってしまったのだ。
そうなのだ、ミーアは、あの頃のミーアとは違うのだ。

無上の権威を誉れとし、純粋無垢に喜びを覚える、うぶな小娘ではない。
二十歳を過ぎた、色々知っている大人の女なのだ。
ミーアは知っているのだ。権威や名誉には、必ず強大な責任がついて回るということを。
そして、もしもラフィーナから推薦を受けておきながら、サボったり手を抜いたりしたが最後、ラフィーナの不興を買うことを。
ただでさえ、混沌の蛇やベルのことで、いろいろ頭を使わなければならないのだ。
そんな面倒ごとを引き受けるのは、ミーアとしては遠慮したいところだった。
なんとか穏便に断れないかしら？　と頭をひねったミーアはとりあえず無難な言い訳を使ってみる。
「ですが、ラフィーナ様、わたくしはティアムーンの皇女ですのよ？」
セントノエル学園生徒会には、不文律が存在している。
それは、ティアムーンとサンクランド、および、その陣営に属する国の貴族を役職に就けないこと。
生徒会の持つ絶大な権威を求めて、かつて、数多の工作がなされてきた。大国の者たちを中心に、熾烈で、けれど極めて不毛な派閥工作が行われ、やがては学園生活にまで支障をきたすようになった。
そのような過去の反省から、生徒会には、両大国とその息のかかった者たちは招いてはいけない、というルールが生まれた。
ラフィーナの誘いは、そのルールを逸脱するものであった。のだけれど……、
「あら、別に明文化されたルールではないわ。それに、学園に通う誰しもに開かれた生徒会というのは理想ではないかしら？　ミーアさんなら、一緒に理想を追求できるのではないかと思っているのだけど……」
ラフィーナは澄んだ瞳で、ミーアを見つめた。

「あなたは、家柄や血筋に惑わされずに、人を見ることができる人でしょう？」
その言葉でミーアの脳裏に、いくつかの記憶が過ぎる。
――そういえば、わたくしがアンヌやクロエ、それにティオーナさんと仲良くしてるのを見て、なんだか嬉しそうにされてましたわね。ラフィーナ様……。うう、信頼が重たいですわ。
その時だった。
「生徒会……？」
小さなつぶやきが耳に届いた。その声は、弱弱しく、かすかに震えていた。
声の方に視線を転じれば、ケーキに手を伸ばしかけていたベルが、真っ青な顔をして、ラフィーナの方を見つめていた。
――一体、どうしたというんですの？　ベル……、この話になにか……？
唐突に、ミーアは思い出す。
……ベルが何者であったのかを。
彼女はミーアの孫娘だ。しかし、それ以前に彼女は……、彼女は。
――導、ベルは、わたくしの行動指針。
ミーアの願いに応えて送られてきた存在、仮にそれがミーアの思い過ごしであったとしても、未来を知るベルが青ざめた顔をしているのは、ただ事ではない。
――これは、慎重に考える必要がありますわね……。
チリチリとした、なにかアブない兆候をとらえ、ミーアの、小心者の心臓が高鳴る。
――なにやら、この答えを間違うと大変なことになりそうな、そんな気がいたしますわ。
直感の告げるまま、ミーアは口を開いた。
「とても……ええ、とても光栄なことですわ。ですが、わたくしにその重責が担えるかどうか、少し心配ですわ。考えさせていただいても？」

ミーアの答えを聞いて、ラフィーナは微笑みを浮かべた。
「もちろんよ。答えはそこまで急いでいないから」
紅茶に口をつけてから、ラフィーナは涼しい笑みを浮かべた。
「それにしても、権力や名誉に飛びつかないのは、さすがね。ミーアさん」
「いえいえ、ラフィーナ様にご迷惑を掛けたら大変ですから」
ミーアもまた、ティーカップを持ち上げる。
今まで気づかなかったが、のどがカラカラに乾いていた。

第十七話　枕を涙で濡らす夜

しばらくの間、ベルはミーアたちと同室になることになった。
ベッドなどを入れると少しばかり手狭な感は否めないが、無理を通した以上贅沢は言えない。
それにミーアとしても、ベルから話を聞くためにはこの方が都合がよかった。
「それで、どういたしましたの、ベル？」
ラフィーナの部屋にいる時から様子がおかしかったベルに声をかける。
ベッドに隣り合って座る二人。うつむき青ざめたベルをミーアは優しく見守った。
そのまなざしには孫を見守るお祖母ちゃんの温もりがあった。ミーアに祖母性が芽生えた瞬間である。
そんなミーアの方を見て、ベルはおずおずと口を開いた。
「思い出しました……、お姉さま」
「なにをですの？」
「ルードヴィッヒ先生が言ってたんです。そもそも世界が混乱へと転がり始める、その分水嶺が、この生徒会選挙だったって。もしもミーアお姉さまがこの選挙に出ていたらって、ルードヴィッヒ先生、すごく口惜しそうに言ってました」
それを聞いて、ミーアは疲れたため息を吐いた。
――ああ、よくわかりませんが、わたくし、やっぱりサボれないみたいですわ。やれやれ、仕方ありませんわね……。
などと諦めに身を委ねられていた時は、実はまだ幸せだった。
……ミーアは誤解していたのだ。
ベルの言葉の持つ意味、その本当の恐ろしさに気づくことができなかったのだ。

だからこそ、落ち着き払った様子でミーアは頷いた。
「わかりましたわ。本当ならば生徒会のお話は断りたかったのですけれど、あのルードヴィッヒが言ったなら仕方ありませんわ。ラフィーナ様のお話、正式に引き受け……、ん？　なんですの？」
ミーアは気づいた。ベルが小さく首を振っていることに。
「そうじゃありません、ミーアお姉さま」
「どういうことですの？」
「ルードヴィッヒ先生は言ってました……。ミーアお姉さまが選挙に出て、ラフィーナ司教帝を負かしたなら、きっとその後の歴史の流れは変わっていただろうって」
「……はぇ？」
ミーアはきょとんと首を傾げた。
「な、なにを言っておりますの？　ベル、だってさっき……うん？」
冷静になって、ミーアは先ほどのベルの言葉を反芻（はんすう）する。結果……、
――た、確かに言ってましたわ。ベル。わたくしが選挙に出ればって……！　で、でも、それって……。
その言葉の持つ意味を改めて確認して、ミーアは震え上がった。
なぜなら、それは弓引く行為だからだ。
誰に？　もちろん、最恐の聖女であるラフィーナ・オルカ・ヴェールガにである！
前の時間軸、まったく相手にされなかったトラウマがミーアの心に蘇る。
うぐぅ、と呻きつつ胸を押さえたミーアは、直後、ベルに笑みを向けた。
「お、おほほ、まったく、なにを言い出すかと思えば？　ベル、それがなにを意味するかわかっているんですの？」
そんなミーアに対して、ベルの答えは極めて非情なものだった。
ベルは、きょとんとした顔で言ったのだ。
「ボクはよくわかりません。でも、ルードヴィッヒ先生はそう言っ

てました」
　それがベルの言葉であればミーアは否定することができただろう。けれど、ルードヴィッヒがそう言っていたと聞いてしまえば、ミーアとしても考えざるを得ないわけで。
「あっ、で、でも、ほら、言ってましたわよね？　ウトウトしてたって。それなら、聞き間違えという可能性も……」
「そうなんでしょうか？」
「きっとそうですわ」
「わかりました。尊敬するミーアお姉様がそう言うのであれば、きっとボクの誤解だったんだと思います」
「もう、ベルはおっちょこちょいですわね、おほほほ」
　そうして、二人で笑いあって……。
　――って、ベルを説得しても、なんの解決にもなっておりませんわ！
　内心で絶叫するミーアである。
　さらにベルの反応を見たミーアは察してしまった。
　ベルが言っていることは恐らく真実で、決して勘違いなどではないということ。
　だとすれば、ルードヴィッヒは本当にそう言っていたということで……、ミーアが生徒会選挙に出てラフィーナを打ち負かしていれば、運命が好転すると予想していたということで……。
　――で、ですが、あのクソメガネ、ルードヴィッヒが予想を間違う可能性だって、ないことはないはずですわ。そうですわ、きっと耄碌（もうろく）したルードヴィッヒが間違えたに違いありませんわ。
　自分を落ち着けるように大きく息を吸って、吐いて……。
　ふいに……ミーアの瞳から、つつぅっと涙が零れ落ち頬を伝った。
　――あ、ああ、もう、もうダメなんですのね？　わたくし、諦めて死地に赴かねばならないのですわね？
　ミーアの直感が理解してしまったのだ。ルードヴィッヒが誤るはずがないと。

あのルードヴィッヒがそう言っているならば、ミーアが生徒会選挙で勝てなかったらきっといろいろなことが大変なことになってしまうのだと。

行くも地獄、戻るも地獄の泥沼に踏み込んでしまったことを理解して、自らの人生を儚んで……ミーアは、ついつい涙をこぼしてしまったのだ。

――ああ、わたくし、死にましたわ。これは、もう助かりませんわ……うう、ううう。

よろよろとベッドに向かったミーアは、涙に潤んだ目を枕に押し付けて……そのまま寝てしまった。

ちなみに、突然泣き出したミーアを見たベルは大いに慌てたのだが……。

――ああ、ルードヴィッヒ先生がボクの面倒を見てくれたって聞いて、その忠誠に感動されたんですね。それにきっと、ルードヴィッヒ先生の最期を思って泣かれているんだ……。

などと一人で納得した。

――お祖母さまは、臣下の気持ちをしっかりと受け止めて、そのことに感動できる。繊細で、とってもお心の優しい方なんだ！

などと……、一人で勝手にミーアへの尊敬を厚くしたのだった。

こうしてミーアは、導の少女にくっきりと道を指し示されてしまったわけなのだが……。

にもかかわらず、立候補の届けを出したのは、それから八日後のことだった。

八日の間、あきらめ悪く無駄な抵抗を続けていたミーアなのであった。

その届け出が受理された日、セントノエル学園に激震が走った。

第十八話　ミーア……ナニかを踏む

八日の間、ミーアは全力の悪あがきをした。
ベルから話を聞いた翌日、ミーアは体調が優れないと言って授業を休んだ。
その日一日、絶望の涙に暮れていた。一日目。
翌日、心配したアベルやシオン、その他クラスメイト達がお見舞いにやってきて、チヤホヤしてくれて、ちょっとだけ元気が出てきた。二日目。
「諦めるのはまだ早いですわ。ルードヴィッヒが言っていることを冷静に分析する必要がありますわ！」
そう一念発起して、改めて自分が助かる道を模索し始めた。三日目。
その翌日、甘いものが食べたくなったから授業に復帰。久しぶりのお勉強で知恵熱を出す。四日目。
これで半分である。
さらにその翌日、すなわちダラダラ過ごした五日目の夜、万年冬眠を決め込んでいるミーアの灰色の脳細胞が、ついに一つの推理を組み立てた。すなわち！
――生徒会選挙でわたくしがラフィーナ様を負かせば後の歴史が変わる。ということは、要するにラフィーナ様が生徒会長にならなければいいのですわ！　つまり、わたくしが候補者として立つ必要はないわけですわ。どなたかラフィーナさまの他に有力な候補者さえ立てられれば！
まるで霧が晴れるかのように目の前に開いた道。ミーアは勇んでその道に足を踏み入れた。
そうして、六日目。
ミーアは動き出す。自分が危機を逃れるためならば努力は惜しま

ないミーアである。
彼女が候補者として思いついたのは、シオン王子だった。
人気と人望が極めて高いシオン王子であれば、ラフィーナに太刀打ちできるのではないか？　と思ったのは、ミーアにしてはまともな判断だった。
数日かけてウォーミングアップしたミーアの脳細胞は、十分に温まっていたのだ！
そうして放課後、ミーアはさっそくシオンのクラスに向かった。
鼻歌交じりに、上機嫌な顔で。
――ふふん、わたくしがラフィーナさまに睨まれないだけでなく、シオンのやつに面倒ごとを押し付けられるなんて我ながら素晴らしいアイデアですわ！
ちなみにセントノエルは各学年、二クラスずつの構成だ。シオンとアベルはミーアとは違うクラスに属している。ティオーナとクロエは同じクラスである。
――どうせならアベルと同じクラスがよかったですわ。シオンのやつは、まぁ、別にどうでもいいですけど……。まぁ、でも？　せっかくですし？　あいつがどうしてもって言うなら、みんな同じクラスでも一向に構いませんけれど……。一人だけだと、いくらあいつでも寂しがるかもしれませんし？
ちょっぴりツンデレなミーアである。
「ちょっと、よろしいかしら？」
教室に入り、扉近くで話に花を咲かせている女生徒の一団に話しかける。
「はい、あっ、ミーア姫殿下？」
突然の大物の登場に、ぴょこんと飛び上がる女生徒。ミーアはそんな彼女に愛想笑いを浮かべる。
「ご機嫌よう。シオンはいらっしゃいまして？」
「え？　あ、はい。シオン殿下は、剣術の鍛練に行かれました」
「まぁ、精が出ますわね。ということは、鍛練場の方かしら？」

「どうなんでしょうか。あ、ですが、アベル殿下もご一緒でしたよ？」
ちょっぴり慌てた様子で、隣の女生徒がアベルの情報も追加する。
こっそり、ひそめた声で。
それを見てミーアは「はて？」と首を傾げつつ、
「あら、アベルもなんですの？　ということは……もしかすると、あの場所ということもありえるかしら……」
ミーアの言葉を聞いて、女生徒たちは一様にビックリした顔をした。
「ん？　どうかされましたの？」
「あ、いえ、なんでもありません」
「まぁ、いいですわ。ありがとう、助かりましたわ」
スカートをちょこんと持ち上げて、ミーアは教室を後にした。

ミーアが去って後、女生徒たちは顔を見合わせた。
「ねぇ、ちょっと……、今の聞いた？」
「聞いた聞いた！　ミーア姫殿下、シオン殿下のこと呼び捨てだったね！」
「もしかして、ミーア姫殿下とシオン殿下って……」
「えー？　でも、剣術大会ではアベル殿下を応援してたよ？　それにアベル殿下のことも呼び捨てだったし」
「どっちが本命なのかな？」
きゃーきゃー、黄色い悲鳴が上がる教室にて、一躍噂の中心人物に成り上がってしまったミーアであった。

そんなこととはつゆ知らず、ミーアは鍛練場を訪れ、予想通りそこにいないのを確認すると今度は厩舎の方に向かった。
もしかすると、騎乗での剣術訓練を行っているかもしれないと思ったのだが……。
「やっぱり、いないですわね」

「おお、誰かと思えば、ティアムーンのお嬢ちゃんじゃねぇか」
と、そこで唐突に声をかけられる。
視線を転じたミーアは、その先に大柄な先輩の姿を見つけた。
馬用のブラシを片手にミーアを見下ろしていたのは……。
「あら、これは馬龍（マーロン）先輩、ご機嫌よう。お久しぶりですわね」
「おう、久しぶりだな、嬢ちゃん。休みの間、きちんと馬に乗ってたか？」
そう言って、馬術部の部長、林馬龍は豪快な笑みを浮かべた。
「ええ、もちろんですわ。もう、馬龍先輩より上手くなったのではないかしら？」
すまし顔で言うミーアに、馬龍は再び笑い声をあげた。
「ははは、言うなぁ。よし、じゃあ今度、勝負するか？」
「ええ、よろしくってよ、負けませんわ」
勝気な笑みを浮かべてから、ミーアは小さく首を傾げた。
「ところで馬龍先輩、こちらにシオンとアベルは来ませんでした？」
「いや、見てないな。俺は授業が終わってから、ずっと馬たちの世話をしてたが……」
「ということは、やっぱりあそこかしら」
ミーアは、ふむと頷いて、
「ありがとうございました、馬龍先輩。わたくし、そろそろ行きますわね」
「ああ、と、そうだ。お嬢ちゃん、足元気を付けた方がいいぞ。さっきその辺りで、こいつが……」
「えっ……？」
踏み出したミーアの足、その下で、不意に、ぺしょりと不吉な音が鳴った。
ちょっと湿ったような、水っぽいような、実になんとも、こう、嫌な音が……。
――い、今のは……まさか？
ミーアは、とてもとても気が進まなかったが、それでも嫌々なが

らも、足元に目を落として……。
「あ、ああ……」
悲しげな声を上げた。

――う、うう、わたくしの、靴が……。うう。
ミーアは、宮殿の奥の奥で、純粋培養で育てられた高貴なる姫君ではない。
前の時間軸、不潔な地下牢での生活という地獄を味わっているし、貧民街に足を踏み入れることにも特に抵抗はない。
だからまぁ、ナニを踏んだと言っても別に大して騒いだりはしないのだ。
別にケガをしたわけでもないし、靴が使えなくなるわけでもない。そんなに気にする必要はないのだ。
ただまぁ……だからと言ってショックでなかったかというと、そんなこともなくって。少なくとも、そのテンションはダダ下がりにはなっていた。
とぼとぼ、うつむきつつ、ミーアは学園の裏手の細道に向かった。
まるで森の中を行く獣道のようなその細道の先には、以前、アベルが剣の素振りをしていた砂浜があるのだ。
やがて、道の先で大きく視界が開ける。
「ああ、相変わらず美しいところですわね」
耳に届くのはかすかな波の音。寄せては返す波に、さらさらと形を変えるのは、白く美しい砂粒だ。春の日の、柔らかな日差しに照らされ、その一粒一粒がキラキラと美しくきらめいて見えた。
まばゆいばかりに美しい砂浜、その波打ち際で、剣を構えた二人の王子が向かい合っているのが見えた。
「やはり、こちらでしたのね……」
つぶやきつつ、ミーアは、ぷくーっと頬を膨らませた。
――それにしても、案外アベルも乙女心がわからないんですのね。この場所、二人だけの秘密の場所にしたかったのに。

そのまま砂浜に出ようとして、ミーアは立ち止まった。
自らの靴をまじまじと見つめ、それから白く美しい砂浜を見つめる。
白い砂浜に点々と茶色の足跡がつくのを想像して……。
「それは……ちょっと嫌ですわね」
おずおずと靴を脱いだ。
「まぁ、砂浜だから、おかしいことはございませんわね」
そのまま裸足になったミーアは、ちょこちょこと小走りで王子たちの方に向かおうとして、
「おや？　ミーア姫殿下」
ミーアに気づいて声をかけてきたのはキースウッドだった。
砂浜に転がった巨大な岩に寄り掛かるようにして二人の王子を見守っていた彼は、ミーアの方を見て目を丸くした。
「あら、こんにちは。キースウッドさん。ご機嫌いかがかしら？」
ミーアはスカートの裾を、ちょこんと持ち上げて、キースウッドに挨拶した。

第十九話　白き砂浜の天然小悪魔！　ミーア姫！！

砂を巻き上げながら、アベルが踏み込む。
「はぁっ！」
裂帛（れっぱく）の気合を込めた一撃を、シオンは正面から受け止める。
響きわたる剣戟（けんげき）の音を聞きながら、キースウッドはため息を吐いた。
――アベル王子はまた実力をつけたな……。
以前まではシオンの方が圧倒的に上回っていたものの、今ではアベルの腕前もかなり迫ってきている。上段からの斬り下ろしという必殺の一撃を手に入れたことで、それ以外の剣技も全体的にレベルアップした印象だ。けれど……、
「まぁ、そんなことで満足はしないかな、どちらも」
レムノ王国での事件。その際に見た帝国最強の騎士ディオン・アライア。
剛鉄槍の槍を涼しい顔で斬り飛ばし、笑みすら浮かべていたあの男。
その凄まじい剣を見てから、シオンはさらに剣術の鍛練に力を入れるようになっていた。
どうやらそれはアベルも同じらしく、最近二人はともに剣術の研鑽に勤めている。
互いに高みを目指すために。
「まぁ、それはいいんだけどね。なにもこんな暑い日に暑い場所でやらなくっても……ん？」
その時、キースウッドの目が一人の少女の姿をとらえた。
さくさく、と小さな裸足で砂浜を踏みしめる少女。
――これはこれは、相変わらずの美しさだな。
キースウッドは一瞬見とれつつも、かろうじてミーアに声をかけ

た。
「おや？　ミーア姫殿下」
「あら、こんにちは。キースウッドさん、ご機嫌いかがかしら？」
そう言って、ちょこんとスカートの裾を持ち上げる。
輝くような笑みを浮かべるミーアに、キースウッドは思わず考え込んでしまった。
――ミーア姫殿下……、これは、わざとやってるのか？
それほどまでに、今のミーアは可愛らしかったのだ。
その理由は、この砂浜という場所にあまりにも似合いすぎるその格好だった。
白く美しい砂浜に、ジャストフィットした裸足。
それは、そのまま波打ち際まで走っていって無邪気に水かけに興じるような、どこか無防備で、それゆえに保護欲を刺激されるような、そんな魅力をミーアに増し加えていた。
――普通、姫君というのは肌の露出を嫌うもの。先日のダンスパーティーの時は効果的な演出だったが、靴を脱いで裸足で外を歩くなんて、下手をすればはしたないと思われてしまいそうなものだ。
けれどこの砂浜という場所が、そんなミーアを極めて魅力的なものにしている。
「ん？　どうかしましたの？」
きょとんと首を傾げ、上目遣いに見つめてくるミーアにキースウッドは苦笑いを浮かべた。
――俺が年下に興味がないから良いようなものの、これは聡明なシオン殿下でもクラッとやられてしまいそうだな。
などと思いつつ、キースウッドは口を開いた。
「ところでどうしたんですか？　こんなところに」
「ええ、少しシオンにお話ししたいことがありまして……」
「お話ですか？」
「ええ。でも、ちょっぴり許せませんわね。わたくしが来ているのに気づきもしないなんて」

ミーアは、未だに鍛練を続けるシオンとアベルの方に目を向けて、
「あ、そうですわ。いきなり声をかけて、驚かせてやるというのはどうかしら」
ちょっぴり悪戯っぽい笑みを浮かべた。
――これ……意識してやってるなら小悪魔だけど、もし意識してないんだったら天然の小悪魔だな。将来が恐ろしい限りだ。
こうして、キースウッドの中のミーア評は『小悪魔』から『天然小悪魔』に格上げされたのだった。
ちなみに、なぜミーアが裸足で砂浜に来たのか……。その残念極まる事情をキースウッドが知ることはなかった。

ミーアは、そーっと砂浜の上を歩く。
二人の王子は鍛練に夢中で、ミーアの方に気づくことはない。
ある程度まで近づいたところで、ミーアは少し大きめの声で言った。
「精が出ますわね、お二人とも」
「え？　あ、ミーア？　いつの間に？」
先に気づいたのはアベルだった。ミーアの方を見て笑みを浮かべたものの、すぐに頬を赤らめて、視線をそらした。
――あら？　どうかしたのかしら？
首を傾げつつ、ミーアは汗拭き布（タオル）を手渡した。
『運動をした後の殿方には、良い匂いを付けた汗拭き用の布を渡すこと！』
アンヌの教えを忠実に守っているミーアである。
「あ、ああ、すまない。ありがとう」
アベルはちらちら落ち着きなく視線を惑わしつつも、ミーアから受け取った布で顔を拭う。それを横目に、シオンはキースウッドの方に向かおうとした。ちょっぴりその背が寂しげだ。
そんなシオンにミーアはニッコリ笑みを浮かべて、

「シオンも、汗を拭かないと風邪をひきますわよ」
珍しくシオンにも優しいミーアである。
それもそのはず、なにしろミーアはシオンにお願いに来たのである。
必要とあらば愛想笑いはもちろん、頭を下げることも辞さないミーアである。
「ああ、すまない」
シオンはちょっと意外そうな顔をしてから、汗拭きを受け取った。
「ところで、どうかしたのかい？　ミーア、こんなところに。まさか、ボクたちの剣術の鍛練の見学というわけでもないんだろう？」
「ふふ、そうですわね。それも楽しそうですけれど、実はシオンにお願いがあってきましたの」
「俺にお願い？」
「シオン、あなた、生徒会長選挙に立候補するつもりはございませんの？」
「はぁっ！？」
シオンは、彼にしては珍しく素っ頓狂な声を上げた。

第二十話　ミーア姫、退路を断たれる

「ミーア……、何を言っているのかわかっているのか？　君は」
シオンは大変焦った顔でミーアを見つめた。
それは、そばで話を聞いていたキースウッドも同じことだった。
彼はその真意を窺うようにミーアを見つめていた。
「ラフィーナさまと生徒会長の座をめぐって争えということか？」
「ええ。ですが、そう驚くこともございませんでしょう？　別にヴェールガ公爵家の者が生徒会長を務めるとは決まっていないのですし。皆に名乗り出る権利が与えられてしかるべきですわ」
ミーアのその言葉に、キースウッドは息を呑んだ。
――なるほど……、つまりミーア殿下は、会長選挙が有名無実化しているこの現状に問題を感じているということなのか？
その指摘の意味に気づいた時、久しぶりに彼の脳裏に衝撃が走った。
制度というものは、必ず存在する理由がある。
そして、セントノエルで生徒会長選挙などというものをやっている理由は、極めて単純かつ重要なものだった。
若者の集まる学校という場所では、とかく問題が起こりがちだ。
けれど多くの貴族や王族が通うこの学校では問題の処理を誤れば国同士の軋轢（あつれき）にまで発展しかねない。
その調停役こそが生徒会長の重要な役割だ。
では、その役割を果たすために必要なものは何か？
それは、生徒たちからの支持である。
権力を身に帯びた者たちに言うことを聞かせるために、生徒会長は絶対的な支持を得ていなければならない。
そして、それを明らかにするものこそ生徒会長選挙なのである。
けれど、今やその制度は形骸化している。

ラフィーナ・オルカ・ヴェールガが生徒会長をするのは当然のこと。そのように、キースウッドの聡明なる主、シオンですら思い込んでいたのだ。

――生徒会長選挙を経て、自らが選んだ会長であると一人一人が表明したという、その事実を鮮明にする必要がある。今はその時期であると、ミーア姫は考えたのか。

キースウッドは先日のことを思い出した。

秘密結社『混沌の蛇』への共闘を訴えるラフィーナ。このような非常事態にあって、ラフィーナは自らが絶対的な支持を集める存在であることを、証明しなければならない。

自分たちが選んだ人なのだから、支持した人なのだから、その選択の責任は当然負わなければならない。

彼女の言葉に耳を傾けざるを得ない、そのような状況を作り出そうとミーアが考えたのだとしたら……。

――もしそうならば、しっかりとした対抗馬を立てる必要がある。選挙として成立させるために。だからシオン殿下に声をかけたということか。

どうしようもない対抗馬であれば意味がない。

ラフィーナ以外の選択肢をきちんと提供し、その上で選んだという形を作る必要があるのだ。

そうしてこそ自己の選択に責任が生じ、信任を受けた者の言葉に重みが生まれるのだ。

――正式な手順を経て選ばれるのであれば、ラフィーナさまを蹴落としたとしても仕方がないとまで考えているのだろうが……。だが、それならばなぜご自分で立候補しないんだ？

そんなキースウッドの疑問はすぐに氷解することになる。

「大丈夫ですわ、シオン。あなたならばきっとその重責をこなすことができますわ」

ミーアはにっこり優しい笑みを浮かべて言った。まるで、シオンを励ますように。

シオンを立候補させるためにミーアはきちんと作戦を考えていた
それは恋愛軍師、男心を知り尽くした（とミーアが信じる）忠臣アンヌの助言に基づいた作戦である。
以前、ティオーナの弟にも用いた作戦。
――男性は自分の仕事が認められるとうれしいもの。その役割に足る力があると、おだてて差し上げれば乗せられるに決まってますわ！
それは「あなたならできる！」という主張を過剰に修飾した賛辞をシオンにぶつけること、すなわち！
「大丈夫ですわ、シオン。あなたならばきっとその重責をこなすことができますわ」
……ヨイショである。
無論、ただのヨイショではない。
仮にもラフィーナに弓引く行為。生半可なヨイショではシオンの心は動かないだろう。
……ゆえに、今日のミーア、すでに羞恥心を捨てている。
リミッターを解除した、口に出すのもはばかられる全力全開のヨイショを展開すべく、聞いてるだけで体がかゆくなってきそうな美辞麗句の数々を頭の中に用意してきている。
――褒め殺して、断れなくして差し上げますわ！
そうして、ミーアが怒涛のヨイショを繰り広げようとした、まさにその時、
「すまないが、ミーア。その話を受けることはできない」
シオンは真面目腐った顔で言った。
「え、いや、ちょっ……」
「悪いがミーア、君の狙いはわかっている」
――ばっ、バレてる！？　わたくしが厄介ごとを押し付けようとしてること、バレてますのっ！？

ミーアの背筋に冷や汗が浮かび上がる。けれど……、
「レムノ王国でのことの挽回をさせようというつもりだろう？」
「はぇ……？」
この人、なに言ってるのかしら？　と首を傾げるミーアをよそに、シオンは首を振った。
「生徒会選挙をしっかりと成立させることの意義をわからせた上で、ラフィーナさまの対抗候補という大役を俺に務めさせることで、それをもってあの日の失地を取り戻す機会とする、か。その気遣いには素直に感謝する。けれど、俺にも意地というものがあるんだ」
シオンは静かにミーアの横を通り過ぎる。
「名誉挽回の機会ぐらいは自分で用意するさ。それまで君に用意されては、さすがに立つ瀬がなさすぎる」
――え？　え？　なんのこと？　なんのことですのっ！？
意味がわからず、ぽっかーんとするミーアの目の前を、シオンは颯爽と去っていった。
助けを求めるように、アベルの方を見ると、苦笑しつつ首を振って見せた。
「仕方ないさ。彼は誇り高いサンクランドの王子だからね。でも、ミーアの思いやりの気持ちはしっかり伝わったと思うよ」
――いえ、そういうことではなくって……。
何がどうなっているのかまったくわからず、おろおろと混乱するミーア。
その時点でミーアは気づくべきだった。
天才軍師の軍略が崩れたこと、すでに、戦線の立て直しは困難を通り越して不可能であり、だからこそ、ここは速やかに撤退する必要があることを……。
けれど残念ながら、ミーアは撤退のしどころを誤った。
ゆえに、その退路はすぐに閉ざされる。
「それはそうとミーア。もしも君が立候補するというのなら、ボクは全力で君を応援しよう」

「……はぇ？」
「ラフィーナさまに対抗して立候補をするなら、きっと全校生徒から奇異の目で見られることだろうが、少なくともボクは最後まで君の味方だ」
「あ、アベル……」
ミーアの両手をつかみ、真剣な顔で見つめてくるアベル。その鋭い瞳にミーアは、頭がポーっとしてしまうのだった。

そうして、
「……ああ、アベル、格好いいですわ」
などとキュンキュンしつつ部屋に戻ったミーアは、その日の夜……。
「う、うう……どうしてこんなことに……」
冷静になって、自分が引くに引けないところに到達してしまったことをようやく理解したのだった。
そうしてさらに二日間、枕を涙で濡らしてから、ついにミーアは決意した。
かくてミーアの会長選挙立候補の報が学園内を駆け巡った。
陰謀うごめく生徒会選挙が始まる。

第二十一話　目力姫（ハイパワーアイプリンセス）再び

立候補した翌日の朝。
寮の食堂に入ったミーアは、前日とは違う空気を敏感に嗅ぎ取っていた。
「ご機嫌よう、みなさん」
テーブルで食事をしていた者たちに声をかける。
同じクラスで何度も顔を合わせている女子生徒だ。けれど彼女は一瞬気まずそうに目をそらして、小さく「おはようございます」と囁くように言うのみだった。
それからそそくさと自分の食事を片付けて離れて行ってしまう。
――ああ、なんだか、前の時間軸を思い出しますわ。革命前の扱いはこんな感じでしたっけ……。
誰もがミーアと関わり合いになりたくないという雰囲気を醸し出しているような、微妙な雰囲気が食堂に漂っていた。
さすがに露骨に嫌がらせを受けるようなことはない。
すれ違いざまに足を引っかけられたり、頭から水をかけられたり、そんな嫌がらせをされるほどには、帝国の権威は落ちてはいないのだ。
それに恐らく帝国貴族の子弟たちは、票自体は入れてくれるだろうとミーアは思っている。
――でも、表立って支持を表明はしてくれないでしょうね。
誰も好き好んで大陸最高の権威に楯突きたいとは思わない。ミーア自身だって思わない。
心の底から思わない！！
――わたくし、なぜこんなことになっておりますの！？
実に諦めの悪いミーアであった。
さらに悪いことは重なるもの。シオンとアベルに会いに行ってい

たということも不要な憶測を生む原因になっていた。ラフィーナに勝つためにミーアが多数派工作を行っていたという、不穏な噂を陰で囁く者までいる始末。
自分で思っている以上にアンタッチャブルな存在になってしまったミーアである。

ラフィーナと鉢合わせしないように、そそくさと朝食を終え、一度部屋に戻ってから授業の準備をする。
ちなみにアンヌにはベルの教室について行ってもらっている。正直、今ほどアンヌにそばにいてもらいたいと思ったことはないのだが、やむを得ないところであった。
――本当ならば誰か信用のおける方をそばにつけて、アンヌにはそばにいてもらいたいところなのですけど……そんなアテはございませんし……。
深い深いため息を吐いて、ミーアは教室に向かった。
廊下を歩いている間も、すれ違う者たちの視線が微妙に気になってしまうミーアである。
いつもであればミーアの周りには取り巻きの娘たちがたむろしてくるのだが、今日は誰も近づいても来ない。
教室に入ってもその状況は変わらなかった。
クロエはさすがにこんなことはしないで普通に接してくれると思いたいミーアであったが……。残念ながらまだ教室に来ていなかった。
――そういえば、割と朝はのんびりしてましたわね、クロエ。
ラフィーナと顔を合わさなくてよいように、早めに朝食を食べに行ったのが失敗だっただろうか。
一人寂しく席に着き、やることがないから授業の準備など始めるミーア。実にらしくない。
――まぁ、こんなものですわよね。仕方ないですわ。わたくしだって同じことをするでしょうし。授業が始まるまで隣のアベルのと

ころに行ってようかしら……。
などと思いはするが、そこでふと思う。
――いえ、そうではありませんわ。むしろここは目立たないことこそ肝要。
ラフィーナに反抗すると、表立って名乗りを上げることの方が損が大きい。であれば、勝つにしても静かに、地味に、勝つ。気づいたら「あれ？　勝ってる？」みたいなのが理想。
――どうせ選挙なんて興味がない連中がほとんどでしょうし、帝国貴族と友好国の貴族を動員して……。あとは、シオンですわね。サンクランド勢にも裏から手を回してもらえれば、案外、半分以上は票を集められるのではないかしら？
となれば、大事なのは帝国貴族の票をきちんと確実に固めておくことだ。
――確か今は、帝国四大公爵家の者たちもこの学園に通っているはずですわ。まずは彼らの支持を取り付けて……あら？　こう考えると今の状況ってそこまで悲観するものではないんじゃ……？
そんな感じでミーアの意識が低きへ低きへと流れていこうとした、まさにその時だった。
「ミーアさま！」
ミーアに歩み寄ってきた者がいた！
朝日にきらめくのは金色の髪、それを凛々しくポニーテールにして……。その瞳には強い意志の輝きを宿して、真っすぐにミーアを見つめてくる少女。それは、
「あら、ティオーナさん、どうなさいましたの？」
ミーアは驚愕しつつも、なんとか答える。今のミーアに最初に声をかけてくるのはクロエしかいないと思っていたからだ。
呆気にとられるミーアに、ティオーナは、どこか決意のこもった声で言った。
「お話はシオン王子とアベル王子から聞きました」
「え、えーと……？」

「ミーアさま、私はミーアさまを応援します」
「へ……？」
思わずぽっかーんと口を開けるミーア。そんなミーアに構わず、ティオーナは続ける。
「今度の生徒会選挙、ミーアさまのお手伝いをさせてください」
「ちょっ、まっ！」
ミーアは大いに慌てた。
まさについさっき、あまり目立たずに選挙をやり過ごしたいわ、などと思っていたところだったのだ。
にもかかわらず、教室で、こんな目立つ形で声を上げたら……。
教室内をキョロキョロと見回すと、みんなの視線がザクザク刺さってきた。
――ここ、これは、まずいですわ！　ものすっごーく！　目立ってますわ！
「あ、あなた、ご自分が何を言っているか、わかってますの？」
ミーアはティオーナを懐柔するために口を開く。
ラフィーナに逆らうと怖いですよー、だから、票だけくれれば表立って応援とかしなくってもいいですよーっと、言外に臭わせる。
さらにアイコンタクト。ティオーナの瞳をじぃいっと見る。
目力姫（ハイパワーアイプリンセス）の面目躍如である。
そんなミーアを見つめ返して、ティオーナは大きく頷く。
――ああ、わかってくれましたのね？
心の中で安堵の息を吐くミーア。だったのだが……、ティオーナは言うのだ。
「はい、ちゃんとわかってます。その上で言ってます」
――こっ、こいつ、全然わかっておりませんわ！
ミーアの絶叫が、ミーアの心の中でだけ響いた。

第二十二話　笛吹ミーアを先頭に

臆する様子のまったくないティオーナ。
折れることのない頑なで真っすぐな意思を感じ取り、ミーアは不意に前時間軸のことを思い出した。
――そういえば、この人って、革命軍の聖女でしたわね……。
いろいろあって弱体化していたとはいえ、帝国という強大な権威を相手に喧嘩しようなどと考える輩である。
――しかも、お父さまのルドルフォン伯は痛いことされるのが好きな、ちょっと変わった方……。
ミーアの脳裏に、ムチャぶりをした時のルドルフォン伯の嬉しそうな顔が思い浮かぶ。
あんなことを言われて喜ぶなんて、変態に違いない、と確信するミーア。
とんだ濡れ衣である！
――弟さんのセロ君は可愛らしい感じの男の子でしたけど、ルドルフォンの方々は基本的に変わった方々でしたし、ラフィーナさまに楯突くことなんかなんとも思ってないのかもしれませんわね。
ミーアは早々に説得を諦める。
実際のところ、大々的にやらないにしても選挙活動は必要なわけで。そのための手伝いは何人か必要なこともまた事実なのである。
改めてティオーナを見て、それからミーアはため息交じりに、
「そこまで言うのであれば、よろ……」
……しくお願いしますわね、と続けようとした。けれど、その前にティオーナの後ろから歩み寄ってくる者の姿が、ミーアの視界に入った。
「ミーア姫殿下……」
「あら、あなたたちは……」

男子二人に女子二人という面々に、ミーアは見覚えがあった。
――確かダンスパーティーの時にティオーナさんを監禁した犯人……いえ、犯人は従者の方ということにしたんだったかしら？
首を傾げるミーアであったが、その前に男子生徒が膝をつく。
「ミーア姫殿下、ランジェス男爵家のウロスです。あの時の御恩をお返しいたしたく参上しました。我々も姫殿下を支持いたします」
それに続いて、他の三人も同じように恭しく、ミーアの前で膝をつく。
――え？　え？　これは、どうなってますの！？
「退学させられるところだった私たちを、姫殿下はかばってくださいました」
「あの日以来、勉学に励み、様々な奉仕活動に身を粉にしてきました。それもすべて今日、この時のため……。私たちが勝ち得た信頼を、ミーア姫殿下のために用いることができるのであれば、これ以上の喜びはありません」
それから四人はティオーナにそれぞれ頭を下げる。
「あの時はごめんなさい。ティオーナさん」
「我々を許してもらえるだろうか？」
その謝罪を受け、ティオーナは優しい笑みを浮かべる。
「過ちは誰にでもあるものですから。もう、気にしてません。それにミーアさまのもとに馳せ参じ、ともに戦う仲間じゃないですか」
すべてを受け入れ、呑み込んで、なお笑みを浮かべられるその精神性（メンタリティ）。
ミーアは、ティオーナの中に確かに聖女の慈愛を見た気がした。
自愛の聖女たるミーアとは大違いである。
「ああ……、ありがとう。君の寛容さに応えるためにも、誠心誠意、ミーア姫殿下を応援させてもらうよ」
ミーアを中心にして、素晴らしい友情のワンシーンが展開されていく。
ミーアとしてはいい迷惑である。

さらに、こうなるとミーアの取り巻きたちも黙っていられない。
そもそもが普段からミーアを慕い、ともにあることを望んだ者たちである。
しかも、ミーア自身はまったく気づいていなかったのだが、その取り巻きたちも微妙に前の時間軸とは違っていた。
最低条件として『アンヌが専属メイドをやっていることになにも言わないこと』というのが定められている。それを許容できる者というのは、実はさほど多くない。
その条件をクリアできる時点で頭がそれなりに柔軟で、それ以上にミーアと一緒にいたいという相応の気持ちを持っている。
打算はもちろんある。けれど、それ以上にミーアのことが個人的に気に入っている者たちが残った形。いわばミーアの篩(ふる)いにかけられた、ミーアエリートというような集団なのだ。
ゆえに……ティオーナや、普段ミーアの周りにいない者たちに遅れをとるわけにはいかない。
「ミーアさま、もちろん、私たちも応援します」
後から後から周りに集ってくる者たちに、意気上がる彼らを前に、ミーアは泣きそうになっていた。
――ああ、やめて、そんな目立つようなこと、しないで……。わたくしは、もっと静かにしてたいんですのっ！　このままじゃ、ラフィーナさまに睨まれてしまいますわ！

「ミーアさま……」
ベルのところをいったん抜け出したアンヌは、急ぎ足でミーアの教室に向かっていた。
やはりミーアが心配になってしまったのだ。
教室の入り口まで来たところで、アンヌはクロエの姿を見つけた。
なぜか、ドアのところからこっそり室内をのぞいているクロエ。
「クロエさま……？」

「あっ、アンヌさん。しっ！」
唇に指をあてて、しーっと言ってから、クロエは手招きした。
首を傾げつつ、歩み寄ったアンヌだったが……。
「今、いい場面ですから」
そう言ってクロエが指さした先を見て、思わず微笑みを浮かべた。
「ミーアさま……」
ミーアの周りには、大勢の生徒が集まり、口々にミーアへの応援を叫んでいる。
それを聞いて、うつむき、泣きそうな顔をしているミーアが見えて……。
「やっぱり、ミーアさま、不安だったんですね。みんなに応援してもらえるか」
クロエの言葉に頷いて応えて、アンヌはもう一度、ミーアの方を見た。
「ミーアさま、良かったですね……」

決して多くはない。けれど、ミーアの予想していたよりは多くの者たちがミーアのもとに集った。
かくて少数派閥、ミーア派は絶対権力者ラフィーナに弓引くことになったのである。

ティオーナを自らの陣営に加えたことでミーアは、打算的な希望を打ち砕かれ、それゆえに窮地を免れることにもなるのだが……。
今のミーアにはそのようなこと、知る由もなかった。

第二十三話　ミーア姫、宣誓する

生徒会選挙は全日程二十日間で行われる一大行事だ。
いつもであれば立候補者はラフィーナしかいないため、その日程は五日ほどに短縮されるのが常となっているが、今回はミーアという無謀なる挑戦者がいるため、通常の手順を踏んで進められることになった。
その開幕を飾るのが、大聖堂で行われる開会宣言ミサだった。
いわゆる立候補者の紹介である。
学園の大聖堂に全校生徒を集めて行われる一大式典はきわめて厳格で、格調高く、それ以上に立候補者が大変目立つものだった。
なにしろ、この日は服装自体が違う。
生徒会選挙という神聖なものを執り行うために、候補者は聖衣と呼ばれる清らかな服を着る必要があるのだ。
まず頭には純白の生地で作った薄いベールを被る。髪にはアクセサリーはもちろん、簡単な髪留めもつけてはならない。
次に服。こちらも真っ白な生地で作られた上下一体（ワンピース）の服を着ることになっている。腰には同じく白いベルトを巻き、唯一、その表面に刺繍されたイルカの模様が飾りらしい飾りだった。
着飾ることを一切許されず、地味な服装で、しかも座る位置は司式をする司祭の真ん前。全校生徒と向かい合う格好だ。
皇女として生を受け、多くの者の視線を受けるのに慣れているミーアであっても、あるいは、自らの美貌に自信（……やや過剰な）を持つミーアであっても、これはなかなかのプレッシャーである。
しかし、それ以上にプレッシャーなのは、ミーアの隣にいるもう一人の候補者、というか大本命の候補者の存在だった。
「なんだか、久しぶりね、ミーアさん」
ラフィーナがやわらかな笑みを浮かべて座っていた。

「そ、そうでしたかしら？　お、おほほ、すっかりご無沙汰してしまいまして……」
ラフィーナの視線を受けて、ミーアはぎこちない笑みを浮かべた。
あの日、ベルのことをお願いに行って以来、ラフィーナとは顔を合わせていなかった。
気まずい……というのはもちろんあったけど、それ以上に怖いし。
呼び出されれば仕方ないと思っていたし、無視するつもりもなかったのだが、そうでないならば、できるだけ会わずに済ませたいというのが本音だった。
けれど、この日ばかりは、ミーアとしても避けようがない。
これから一時間近くラフィーナと隣り合って座っていなければならないと思うと、ミーアの背筋には冷たぁい汗がびっしりと浮かび上がるのだ。
「残念ね、ミーアさん。あなたには、私の下で生徒会の仕事をしてもらいたいと思っていたのよ。次の生徒会長はあなたにしてもらいたくって。そのために、いろいろ生徒会のことを学んでほしかったんだけど……」
「ラフィーナさま……」
少しだけ悲しげにうつむくラフィーナに、ミーアはなんだか申し訳ない気持ちになってしまうが……。次の瞬間、ラフィーナは笑みを浮かべた。
「でもね、楽しみでもあるのよ。だって、私の下で生徒会には入りたくないということは、ミーアさんにもやりたいことがあるということだものね」
「……へ？」
「私が考えるのより良い生徒会を運営できるというのなら、それは大歓迎よ。みなさんのためになることだし。そうなのよね？　ミーアさん」
ミーアは、そこで気づいた。
笑みを浮かべるラフィーナの、その瞳は……まったく笑っていな

いということにっ！
――ひっ、ひぃいいいっ！　ら、ラフィーナさま、めちゃくちゃ怒ってますわ……！
ミーアは心の底から震え上がるのだった。
「ミーアさんがどんな選挙公約を出すのか、とっても楽しみよ」
ラフィーナの言葉を聞いて、すぅっと血の気が引くミーアだった。

やがて式が始まった。
神聖典が読み上げられ、聖堂のロウソクに火が灯される。それから起立して聖歌をみなで歌い、祈りの文章が読み上げられ……。
それをすべて、全校生徒の視線を受けてやらなければならないわけで。
――これ……、ラフィーナさまの隣に座ってなくっても結構しんどいですわ……。
なにしろ今のミーアは、ラフィーナに対して勝ち目のない喧嘩を吹っかけている身の程知らず……、恥ずかしくてイタいヤツと思われている可能性が大変に高い。
そう考えるとなんだか居たたまれない気分になってしまって……。
――ああ、なんだか、みなさんわたくしの方を見てる気がしますわ。きっと腹の中では身の程知らずってあざ笑ってますのね……。うう、ひどい辱(はずかし)めですわ。
実際のところ、身の程知らずと思っている者はもちろんいたのだが、同時にミーアの格好に見とれている者というのも少なからずいたのだ。
全身白の衣装は見方によっては花嫁衣裳のようでもある。年頃の女子の着る花嫁衣装というのは、それだけで神秘的かつ美しい、なんとも言えない魅力を放つものなのだ。
しかも、夏休み以降、馬シャン効果で健康的な輝きを放つ髪と、アンヌの手入れによって保たれている肌艶、それが薄いベールによ

ってぼんやりと見えることによって、人々の想像力を掻き立てる効果を発揮していた。
人間の妄想力は偉大なのだ。
ちなみに純粋な美しさでいえばラフィーナの方がまったく上である。勝負にもならない。
けれど、式典などで聖衣を着る機会の多いラフィーナとは違い、ミーアはほぼ初お披露目の服装である。いわゆるレア度がまったく違うのだ！　ＳＳＲなのだ！
自然、生徒たちの目は見慣れない方、ベールによってうっすら隠された美少女風のミーアの方に集まっていった。
やがて……、式典はいよいよ佳境に入り、候補者の宣誓の時になる。
「それでは、立候補者は双方、神の前に誓いを立ててください」
凛とした声を上げ、さながら歌うようにラフィーナの宣誓がなされる。
それに続いて、ミーアが席を立ち、顔を上げる。
自分に集まる視線、視線、視線。
それを見て、一瞬、頭がクラっとする。
気分を落ち着けるため、大きく息を吸って、吐いてから、ミーアは声を上げた。
「わたくし、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、セントノエル学園生徒会長に立候補いたします。そして、正々堂々とこの選挙を戦いにゅく……」
……噛んだ。
「……こっ、ことを誓います。うう……」
なんとか最後まで続ける。
ちなみに、中央正教会の神さまは寛容なので、宣言の途中で噛んだり止まったりしてもお咎めはない。
ないが……、大勢の前で噛んで胸を張れるほどの胆力も、ミーアにはない。

――うう、もう、帰りたい。帝都のお部屋でゆっくり寝て過ごしたいですわ。

すっかり涙目なミーアだったが、幸いなことに、ベールに覆い隠されて、それを見る者はいなかった。

第二十四話　帝国四大公爵家のお茶会

「ふ、ふふふ、来た。来たよ。ついにこのオレにもチャンスが！」
セントノエル学園の一角で、そのお茶会は密かに開かれていた。
広い室内にデーンと置かれた大きな机。その上にはあふれるばかりのお茶菓子が乗せられている。
その量に比して、その場に集う人数は少ない。
たったの二人である。
けれど、彼らの正体を知るものがいれば瞠目したことだろう。ことに、ティアムーン帝国の貴族であれば絶対に無視することなどできなかっただろう。
なぜならば、彼らこそ大国ティアムーン帝国の中央貴族を束ねし者たち。帝国四大公爵の血筋の者たちだからである。
「あら？　今日はルヴィさんは来ませんのね。せっかく、我ら四大公爵家の親睦を深めようというのに、勝手な方。それに、シュトリナの小娘。新参者のくせに休むなんて随分と生意気ね」
グリーンムーン家長女、エメラルダ・エトワ・グリーンムーンは、緩やかにウェーブを描く豊かな髪を、ふぁっさ！　っとなびかせた。
はぁ、と大きくため息を吐き、優雅に紅茶を一啜り。
「って、おいおいおい！　何を落ち着いているんだい？　エメラルダくん。君、オレの話を聞いていたのかい？」
そんなエメラルダに食って掛かるのは、青い髪の少年だった。切り揃えた髪は、時間をかけて整えたらしく、激しく動いても崩れる様子はなかった。
年の頃は十代の半ばを過ぎたころ。エメラルダと同年代であろうか。そんな少年に、エメラルダは心底から迷惑そうな顔をした。
「ちょっと、サフィアスさん、あまり大きな声を出さないでくださる？」

少年こと、ブルームーン家長男、サフィアス・エトワ・ブルームーンはため息交じりに首を振った。
「やれやれ、君、やれやれだよ、まったく。わからないのか？　このチャンス。セントノエルの生徒会に入れるかもしれない名誉なんて、なかなかあるもんじゃないんだよ？　バカみたいな不文律のせいで、我々、帝国貴族はセントノエルの生徒会には入れないんだ。だが、ミーア姫殿下が生徒会長にさえなってくれれば、そんな不文律、無視してオレたちを役員に任命してくれるに違いないさ」
と、そこまで興奮した口調で言ってから、サフィアスは小さくため息を吐いた。
「それにしても、ラフィーナさまに喧嘩を売って立候補なんてするだけあって、なっちゃいないな。我が国の姫殿下は。こう言ってはなんだが、あまり頭がおよろしくはないようだ」
そのストレートな物言いに、エメラルダがすまし顔でツッコミを入れる。
「ちょっと、不敬よ、サフィアス。いくらあなたが四大公爵家の人間であっても、皇女殿下をけなすようなことを口にするべきではないのではなくって？」
「そうか？　君だって、姫殿下は民衆になれなれしくし過ぎだと言って悪口を言っていたのではないか？」
「私のは正当な批判、あなたのは誹謗中傷。一緒にしないでいただけるかしら？　私のお茶会を欠席して民草であるメイドの実家に遊びに行くなんて言語道断。貴い血筋に相応しい振る舞いを考えていただくのが当然よ」
すまし顔で紅茶をすするエメラルダに、サフィアスはやれやれと首を振った。
「まぁ、君の言うこともわからないではないがね。だが、オレの話にも少しは耳を傾けてくれよ。このままではミーア姫殿下は確実に負けるよ」
「あら、やっぱり不敬。我が国の姫殿下が、小国の公爵令嬢なんか

に負けるとお思い？」
「ヴェールガを小国呼ばわりとは、君だってずいぶん不敬だと思うけどねぇ」
　呆れた様子で首を振り、サフィアスは言った。
「いいかい？　エメラルダくん。ミーア姫殿下ははっきり言ってやり方が下手すぎるよ。教室で騒ぎを起こしたりとか。もっと静かに、目立たぬように裏工作をすべきなんだ。派手に敵対なんかすべきじゃない。気づいたら勝ってたぐらいでちょうどいいというのに駆け引きが下手すぎるんだよ」
　姑息な笑みを浮かべ、自らの考えを開示するサフィアス。奇しくも彼の姑息な考えは、ミーアの思考と奇跡的な一致をみたのである！
　実になんとも、小物臭の漂う少年である。
「まぁ仕方ない。ここはこのオレが直々に姫殿下に教授して来よう。その代わりといってはなんだが、生徒会長の座に就いた暁には、このオレを副会長に推薦してくださるように掛け合ってみるとしよう」
　それから、サフィアスはエメラルダの方に目を向けて言った。
「ちなみに、君はどうするつもりかな？　エメラルダくん。グリーンムーン家の意向はどうなっているのか、聞けるものなら聞いておきたいけど……」
　エメラルダはわざとらしく、きょとんと首を傾げてから、
「興味ないですわ。生徒会なんて。まぁ、ミーア姫殿下がどうしてもとおっしゃるなら、やってあげないこともないけれど」
　あっけらかんと言った。それから、クスクスと笑い声をあげた。
「しかし、父さまもだけど、ずいぶんと役職にこだわるのね、殿方というものは。私にはとても理解できないけど」
　それから、目の前のケーキを切り分けながら、
「まぁ、せいぜい頑張りなさい。別に手助けはしないけど、邪魔もしないから」
「そうかい。それじゃお言葉に甘えようかな」
　こうして、策謀家を気取る二人は、意味深な笑みを浮かべて笑い

あう。
……ちなみに、確認する必要もないと思うが、四大公爵家の人間にはミーアと同じ帝室の血が流れている。ミーアと同じ血が流れているのである。
まぁ、だからどうした、ということもないのだが……。

第二十五話　ミーア姫、未来の自分にイチャモンをつける！

開会ミサの翌日の放課後、ミーアは悲壮な覚悟のこもった顔で図書室にやってきた。

「裏工作をするにしても、しっかりと体裁を整えないとラフィーナさまに見限られてしまいますわ！」

ミーアは自身の考えの甘さを痛感していた。

裏工作はもちろんするし、しなきゃ勝てないだろうとは思っているが、それだけではミーアがズルをしたことが一目瞭然である。

ズルいことなんか全然しなくても勝てるという、少なくともラフィーナを納得させられるような、そんな状況を作り出す必要が出てきてしまったのだ。

――でもラフィーナさまを納得させる……って、難しすぎますわ……。

早くも憂鬱になりかけているミーアである。

ちなみに、ミーアの周りには現在一人の生徒もいなかった。

ミーア派の面々には、これからどのような選挙戦を展開するのかを考えてもらっている。いわゆる実務的なことだが、とても重要なことだ。

選挙というのは帝国にはないから、ミーアはよく知らなかったけれど、クロエによると、選挙を行っている国では様々な候補者アピールが行われているらしい。

自らの肖像画を配って名前を売ったり、吟遊詩人を雇って自らの功績を人々の間に広めたりと、やり方は様々だ。

肖像画はさすがに間に合わないにしても、羊皮紙に名前を書いて校内に張り出すぐらいのことはやってもよいかもしれない。

クロエにも陣営に入ってもらい、いろいろなアイデアを提案してもらって、現在、企画会議の真っ最中なのだ。

――クロエだけだと少しだけ心配ですけれど、ティオーナさんがいるから大丈夫かしら……。
クロエだけでは、他の貴族の子女を抑えられないだろうが、ティオーナも一緒にいる。
教室でのあの出来事、緊迫した空気の中で一番に支持を表明したティオーナは、ミーア派の面々から一目置かれる存在になっていた。
能力的な面はさておくとして、少なくともラフィーナに怒られるような汚い真似はしないはずだ、と、ミーアも一定の信頼を寄せている。
それに、みなが声を上げない時に勇気を奮って自身を支持してくれた以上、無下に扱うわけにもいかない。ということで、一応のまとめ役はティオーナに任せてあるのだ。
「クロエとも仲が良いみたいですし、上手く動いてくれればいいのですけれど……。やることが多すぎて目が回りそうですわ」
小さくため息を吐いてから、ミーアは頬杖をついた。
「ともかく、選挙公約ですわ。わたくしが生徒会長になったら、どんなことをするのか……、きちんと伝えていかなければいけないようですし……」
クロエのアドバイスを頭の中で反芻しつつ、ミーアは、自分が生徒会長になってやりたいことを植物紙（パピルス）に書きだしていった。
①食堂のおやつを増やす。
②紅茶に入れるジャムの充実。
③冬のキノコ鍋（ミーアお手製の）パーティー。
④入浴施設の拡張（蒸し風呂など興味あり）
……などなど、書き出されたのは純度の高いミーアの欲望だった。
……紙の無駄遣いだった。
「ミーアお姉さま」
さらさらと自らの選挙公約候補を書き連ねている時、不意に後ろから声がかけられた。
「ん？　あらベル、それにアンヌ！　来てくれましたのね」

図書室にやってきた援軍二人を見て、ミーアは輝くような笑みを浮かべた。
ベルはともかく、自らの腹心アンヌには期待するところ大である。
「こちらにいらっしゃるとお聞きして、駆け付けました。私も何かお手伝いいたします」
「助かりますわ、アンヌ。ぜひ知恵を貸してもらいたいですわ」
そうして、ミーアは早速、書き上げた紙を二人に見せた。
「これは……？」
「わたくしが生徒会長になったら、やりたいことですわ」
堂々と胸を張るミーア。
「ミーアお姉さま……これ」
ベルは紙をじっくり見つめ……、それからミーアの顔を見て、
「とってもステキです！」
目をキラキラさせた。
「さすがはミーアお姉さまです！　このクリームのパイ包みとか、とても素晴らしいと思います！　甘いものを増やすの、ボク、大賛成です！」
大絶賛である！　食堂の追加メニュー候補を見てじゅるり、とよだれをぬぐったりしている。さすがはミーアご自慢の孫娘である！
「そうですね。枠にはめずに自由にアイデアを出していくことが大切だと、エリスもよく言ってました」
アンヌもさすがはミーアさま、と感心の表情を見せる。
二人の反応を受けてミーアも気をよくしてしまう。
「ふむ！　乗ってきましたわ！　それじゃあ、枠にとらわれずにドンドン書き出していきますわよ！」
そうしてミーアが、破滅の崖っぷちへと向かい、ズンズン歩き出そうとしたところで……。
「やぁ、ミーア。精が出るね」
図書室に、新たなる人物が現れた。
「まぁ！　アベル！　もしかして、手伝いに来てくださいましたの

？」
「ああ、君が図書室でいろいろ考え事をしてると聞いてね。もしかすると役に立つんじゃないかと思って、いろいろ調べてきたんだ。ラフィーナさまが会長になって以来、どんなことをしてきたのか、とか」
そう言ってから、アベルはしかつめらしい顔をして言った。
「レムノ王国に伝わる古い格言があってね。いわく、戦に勝利するには敵を知らなければならないってね」
「なるほど、確かにそうですわね。ラフィーナさまがどのような選挙公約を打ち出すのか、予想しておくことは意味がありますわね」
それからミーアはニコニコとアベルに微笑みかける。
「さすがはアベルですわ。頼りになりますわ」
実際のところミーアとしては、こうして自分に味方するために来てくれただけで、とっても嬉しくなってしまったわけだが……。
そんなミーアを見て、アベルは照れ臭そうに目を逸らした。それから、ふと不思議そうに首を傾げる。
「おや、君は……」
その視線の先にいたのは、目をまん丸くしてアベルを見つめるベルの姿だった。
「君が噂の……ミーアの縁戚にあたるお嬢さんかな？」
「はい、よろしくお願いします。アベルおじ……王子。ミーアベルといいます。ベルって呼んでください」
「ああ、こちらこそよろしく頼む、ベル。アベル・レムノ。レムノ王国の王子だ」
アベルは優しい笑みを浮かべてベルの方を見て、それから、くすくすと小さく笑った。
「あら？　どうかいたしましたの？」
「いや、よく考えるとミーアベルってミーアの名前とボクの名前を合わせたものみたいだなって、思ってね」
そう言われて、ミーアも気づく。

ミーアベル＝ミーア＋アベル。
なるほど、確かにベルの名前は、そのように考えることもできて……。
「まぁ、アベルったら。いやですわ、おほほ」
ミーアは、ちょっぴり頬を赤らめて笑った。
――まったく、いくらわたくしたちのことが大好きだからって単純すぎますわ。こんな名前の付け方するなんて……我が子ながら、ベルの親はなにをしてますの？　子どもの名前はもっとまじめに……。
「はい、お祖母さまにつけていただいた、大切な名前です」
――なっ、なっ、なっ、なんてことしてますのっ！　未来のわたくしぃっ！
ミーアは、内心で悲鳴を上げた。

第二十六話　アベルおじいちゃんは泣いていい……

「そっ、それで、アベル、あなたが調べてきてくださったものは……」

ミーアはなんとか気を取り直して言った。

「ああ、そうだったね。わかりやすいかと思って書き上げてきたんだ」

そう言うと、アベルは二枚の紙を取り出して机の上に置いた。

「こっちがラフィーナさまが生徒会長になって以来、やってきた仕事をまとめたものだ。それともう一枚は……」

と、アベルは照れくさそうな顔をして付け足した。

「一応……、なにかの役に立つかと思って、ボクが考えてみた選挙公約だ。君の役に立てるなんて自信はまったくないんだけど……」

「まぁ！　そんなことございませんわ。とっても嬉しいですわ！」

ミーアは大切そうに、アベルの持ってきた紙を手に取った。

「まず、ラフィーナさまの方から読んでみてくれ。ボクのはついでで構わないよ。本当に、見せるのが恥ずかしいぐらいで……おや？」

アベルは先に机に置かれていたミーアの選挙公約に目を留めた。それを手に取り、しばらく眺めて……。

それからミーアの方を見て……すぐに納得した様子でベルの方に視線を向ける。

「ベル、君もミーアの手伝いをしているのかな？」

「はいっ！　偉大なるミーアおば、お姉さまを手伝えるなんて、とっても光栄なことですから、張り切っています！」

元気よく答えたベル。その頭をアベルが優しく撫でる。

――なっ！　アベルに優しくしてもらうなんて、ズルいですわ！

孫娘にジェラシーを燃やす、偉大なるミーアお姉さまである。微妙に大人げない……。

――そもそも、なぜわたくしの選挙公約を見て、ベルの話をするんですのっ！？　あれは、わたくしのっ！

などとプリプリ怒っていたミーアだったが、アベルが持ってきた資料を見て青くなった。

「これは……、古くなっていた学校施設の大胆な改修、不要な行事を廃して、新たな行事を計画……？」

自分の考えていたものとは、次元の違うナニカが、そこにはあった。

生徒からの要望に耳を傾けつつ、きちんと先を見据え、十年後、二十年後まで残るような意義のある仕事。的確な現状認識と、それに対する解決手段を、しかもミーアでも理解できるぐらいに簡潔にまとめる、その手腕……。

――こっ、これと同じようなものを、わたくしが作らなければならないんですのっ！？

ミーアの考案しようとしていた「学食スィーツ増産計画」など、児戯にも等しい。

――なるほど、それで、わたくしではなく、ベルが考えたものだと思ったんですわね。っていうか、ラフィーナさまの選挙公約、微妙にルードヴィッヒとかに近い臭いがいたしますわ……。

ミーアはラフィーナの政治手腕をまったくもって知らなかったが……もしもルードヴィッヒと同等の行政能力を有しているのであれば、それは、勝ち目のない戦と言わざるを得ないものだった。

――どっ、どうすればいいのか、見当もつきませんわ……。

早くも涙目になりかけていたミーア。だったのだが、そこに新たな人物がやってきた。

「ああ、ミーア、ここにいたのか」

「あら……シオン？」

新たに図書室に入ってきたのは、シオンだった。

走ってきたのか、その額にはうっすらと汗が浮いていた。

そのままミーアたちのところに歩み寄ってきた彼は、ベルの方を

見て不思議そうな顔をした。
「ん？　君は……。ああ、そうか。ラフィーナさまから聞いていたな。確かミーアの縁戚の……」
「はい！　ミーアベルです。ベルって呼んでください」
「これはご丁寧に。俺はシオン・ソール・サンクランドだ」
その自己紹介を聞き、ベルは驚愕の表情を浮かべた。
「てっ……天秤王シオン……、ふわぁっ！　ほ、本物……？」
「天秤王……？」
小さく首を傾げるシオンだったが、ふと、机の上に置かれた紙を見て、
「これは、ラフィーナさまの施政記録か？」
「ああ、さすがにまったく隙がないよ」
肩をすくめるアベル。シオンは資料にざっと目を通して、
「なるほど。さすがはラフィーナさまだ……おや？　そっちの紙は……？」
「あっ、それは……っ！」
止める間もなく、シオンはミーアの選挙公約を手に取った。
それに一通り目を通してからシオンは慌てるミーア……ではなく、その隣できょとんと首を傾げたベルの方に目を向けた。
「君もミーアのことを手伝っているのかい？」
「はいっ！　ボクも尊敬するミーアおば、お姉さまを全力でお手伝いしたいって思ってます」
「そうか。いい子だね」
そうして、シオンは優しい笑みを浮かべてベルの頭を撫でた。
「えへへ……」
先ほどと同じような展開だったが……、心なしかベルの食いつきは先ほどより良かった。なんだか、ものすごく幸せそうな顔を浮かべるベル。有名人でイケメンな天秤王に頭を撫でられてすっかりご満悦のようだった。
アベルおじいちゃんは泣いていい……。

――この子……意外とミーハーですわね。まぁ、あれをわたくしが書いたってバレなくって良かったですけど……。
微妙に複雑な気持ちになるミーアである。そんなミーアの方に顔を向け、シオンは言った。
「で、ミーア、肝心の君の選挙公約はどうなってるんだ？」
うるせぇ、お前が持ってるのがそうだよ！　などとは当然言えるわけもなく、ミーアは一瞬、黙り込む。刹那の思考、そして閃く！
「あら、シオン。そんなに心配してくれるなんて、もしかしてわたくしの手伝いをしてくれるんですの？」
ミーア、シオンをも巻き込みにかかる。
ラフィーナの怒りを買うにしても、「この選挙公約はシオンも一緒に考えましたー！」と主張すれば、少しは軽くなるかもしれないではないか！
それに、ルードヴィッヒほどではないにしても、シオンの頭脳は利用しがいがありそうでもある。
使えるものはなんでも使う。なりふり構っていられなくなったミーアである。
対してシオンは……。
「いや、残念だが、今回は中立の立場をとらせてもらうよ」
それを華麗にもスルー。
憎らしいぐらいに涼しい笑みを浮かべる。
――ちっ、逃げられましたわ。やっぱり。そう上手くはいきませんわよね……。
ぐぬっと呻くミーアをしり目に、シオンは肩をすくめて見せた。
「手伝いたいのはやまやまなんだが、立場があるだろう。サンクランドとティアムーンが手を結び、ヴェールガに逆らうなんて、シャレになってないだろう」
「それでは、なにをしに来たんですの？」
手伝う気がないんなら帰れ！　と言外に主張するような、トゲトゲしい口調でミーアは言った。

「ああ、忘れるところだった」
シオンは不意に真剣な顔をする。それからベルの方をチラっと見てから、
「蛇の関係のことなんだが、彼女は大丈夫だろうか？」
蛇……秘密結社、混沌の蛇。
人知れず、社会に溶け込み、よからぬことを企む不届き者たち……。
どこにその関係者がいるか、誰が信用できるか判断がつかない以上、あまり多くの耳に入れるべき話ではないが……。
ミーアは小さく頷く。
「ベルは、信用できる子ですわ」
むしろ、ミーアとしては、ベルにはできるだけ情報を与えておきたいところである。
――帝国が大変なことになるって、絶対に混沌の蛇も関係しているんでしょうし……。
「そうか。それならば話そう。これはまだ確実なことではないから、そのつもりで聞いてもらいたいんだが……。ミーア、ティアムーンに混沌の蛇の関係者がいるらしい」
「ああ、やっぱり、そうですのね」
それは十分に納得のいくことだった。
混沌の蛇の構成員は社会に溶け込み、どこにいるのかわからない。だから当然、ティアムーンにもいると、ミーアは思っていたが……。
「帝国の中央貴族、それもどうやら四大公爵家のいずれかの家が関与しているらしいんだ」
「よっ、四大公爵家が、ですのっ！？」
さすがに、その言葉は予想外だった。

第二十七話　疑心暗鬼

「どういうことですの？　シオン、四大公爵家のどれかが混沌の蛇の関係者だなんて……」
慌てた様子でミーアは尋ねた。
帝国四大公爵家、それは最も皇帝に近しい貴族。
皇帝と血のつながりがあり、皇位継承権も持っている者たち。
だから信用できるというものではないのだが、少なくとも一般的な貴族よりは信用できなくてはいけない者たちのはずだった。
「その話は確かなことなんですの？」
問いかけに、シオンは思案げに黙り込む。
「まぁ、普通に考えれば、確度としてはそこまで高くはないだろうな。もともとは帝国に派遣していた風鴉から上がってきた情報なんだが、いかんせん古い。長らく放置されていた情報だ。あまり重視されなかったから、埋もれていたと考えるべきだろう」
「普通に考えれば……か。引っかかる言い方だね、シオン王子。裏を返せば普通でない見方もできるということかな？」
そう尋ねるアベルに、シオンは一つ頷いて、
「物事にはいろいろな側面があるからな。当然、普通じゃない見方だってできるさ」
それから、にやりと悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「そして、俺としてはそちらの見方の方がしっくりくるんだ。つまり情報が埋もれていた理由が、もしも重視されていなかったからではなく、逆であったなら……」
「ああ、なるほど。風鴉にも混沌の蛇が潜り込んでいたわけだしね。ジェムか、それ以外の者が意図的に情報を隠していたとしたら……逆に怪しいと。そういうことか」
「それは……確かに怪しいですわね。ぜひ、もっと詳しいお話が聞

きたいですわ」
もしも、それが本当だったら大変だ。なにしろ帝国四大公爵家である！
彼らこそ、国を支えるために貴族をまとめ上げ、帝室に最後まで忠誠を誓う者たちで……などと思いかけたミーアだったが、ふと思い出す。
――あら？　でも、前の時間軸ではわたくし、エメラルダさんに裏切られたんだったかしら……？
ミーアの親友を名乗っていたエメラルダは、革命が起きて早々に帝国を見捨てて国外に脱出した。それも一族郎党そろって、である。
グリーンムーン家は帆船を保有しており、海外とも交流がある。そのコネを用いて、見事、危険地帯を脱出したというわけだ。
最後に会った時、エメラルダはいつもと変わらない優雅な笑みで言っていたのだ。
「ミーアさま、今度、当家でお茶会を開きましょう。たくさんお客さんを呼んで盛大に。そして、誇り高き帝国貴族としてこの帝国のために力を尽くすことをともに誓い合うの。とっても素敵でしょう？」
ミーアはその言葉にとても慰められたし、勇気をもらいもした。
連日、ルードヴィッヒと出かけて行っては帝国内の窮状を見て、落ち込みがちになっていたミーアだったから、親友であるエメラルダのことがとても心強かったのだ。
そうして、お茶会の約束の日。
ミーアが目の当たりにしたのは、もぬけの殻になったグリーンムーン邸だった。
以降、幾度も裏切られることになるミーアだったが、この時が初めてだったので、たいそうショックを受けた。
「うう、せっかく、久しぶりにケーキが食べられると思っておりましたのに……」
頑張った自分にご褒美！　と思い、ケーキを楽しみにしていたの

で、その衝撃はひとしおだった。
――ふむ、思い返してみると四大公爵家の連中って、どこも似たり寄ったりでしたっけ……。
飢饉による民の困窮をやわらげるべく協力を要請しに行ったら断られたり、帝都を守るために兵の派遣を要請したら断られたり……。
その家柄の格的に、生半可な者を派遣するわけにもいかず。割とミーアがお使いに出されることが多かったわけだが……、その都度、相手の冷たい態度に、心をザクザク切り刻まれたものである。
さらに、イエロームーン家に至っては裏で革命軍とつながってたんじゃないか、なんて噂される始末だったのだ。
――今さらあの中に裏切り者がいるなんて言われても、そんなにショックではございませんし……そうですわ！　むしろ、四分の一の確率で敵の尻尾を捕まえられるかもしれないのだから、幸運と考えるべきなのかもしれませんわ！　その首を手柄にラフィーナさまに詫びを入れにいけば、少しばかり選挙公約がダメでも許していただけるかもしれませんわ……。
ちょっとだけポジティブになったミーアは、シオンの方を見た。しかし、シオンは小さく首を振って、
「残念ながら……、時間が経ちすぎているからな。詳細を調べるのはなかなか難しいだろう」
「まぁ、そうですわよね……」
「それに、情報を送ってきた者は連絡を絶っているんだ」
「それって……」
ミーアは思わず言葉を失う。
「自然に考えれば、口封じのために殺されたと考えるのが妥当だろう」
シオンは重々しい口調で言って、それから腕組みする。
「いずれにせよはっきりしたことは言えない。そもそも、関係しているというのが、どのレベルでかもわからないわけだし。最初にも言った通り、この情報がどの程度、信ぴょう性のあるものかもわか

らない。だけど、用心するに越したことはないはずだ」
その言葉を、ミーアはどこか遠くで聞いていた。
なぜなら、シオンの持ってきた情報をベルからもらった情報と組み合わせると、別のものが見えてきてしまうからだ。つまり……。
――帝国の覇権をめぐって四大公爵家が対立。二対二で内戦になるって言っておりましたけれど……、それって、本当にただの権力闘争だったのかしら？
自然、そんな疑念を抱いてしまう。いずれかの公爵家に隠れ潜んだ混沌の蛇の策動によるものであったとすれば……普通に覇権争いと言われるより納得できてしまうわけで。
――四大公爵家の者たちには、警戒が必要なようですわね……。
四大公爵家の一角、ブルームーン家長男サフィアス・エトワ・ブルームーンが訪ねてきたのは、翌日のことだった。

第二十八話　青月の貴公子の誘い（デストラップ）

図書室にてミーアは、アベルが持ってきてくれたものを参考に、なんとか選挙公約を完成させた。
もちろん、アベルに手伝ってもらったが、ついでにシオンも巻き込んだ。
「俺は中立だから、ミーアの味方はできないんだが……」
などとぶつぶつ言いつつも、なんだかんだで手伝ってくれたシオン。
あら、以前に比べて少しだけ甘くなったかしら？　などと思いつつ、微笑ましい気持ちでいたミーアだったのだが……。
すべての作業を終えて知恵熱で頭から湯気を吹くミーアに、シオンはちょっぴり、すまなそうな顔をした。
「すまない、ミーア」
「……はぇ？　なんのことですの？」
ぽけーっと答えるミーアに、シオンは言った。
「いや、四大公爵家のことがショックで、普段通りの思考ができなかったんだろう。今日は叡智の冴えがまったくもって見えなかった。情報を持ってくるにしても、もう少し時を選ぶべきだったな」
気づかわしげに言っているが、要はミーアの全力の頭脳活動を一蹴しているわけである。
――なっ！　わ、わたくし、かなり頑張りましたのに……。
思わずムッとするミーアではあったが、言い返す気力もなく。
また、シオンの協力が大きかったこともあって、ここはグッと我慢である。大人なミーアなのである。
そのまま部屋に戻ったミーアはベッドの上に倒れこみ、泥のように眠り込んでしまった。

そうして翌日、選挙対策本部として借りている教室にて、ミーアが、ミーア派の面々とともに選挙戦略を練っていた時のこと。
サフィアス・エトワ・ブルームーンが面会を求めてやってきたのだ。
「やぁ、ミーア姫殿下。ごきげん麗しゅう」
「あら、ごきげんよう、サフィアス殿。お父上はご壮健かしら？」
「それはもう。皇帝陛下のご寵愛をいただきまして、ますます励んでおります。いやぁ、それにしても、本日も実にお美しい。このサフィアス、いつも姫殿下の魅力に心を奪われてしまうのですよ」
「まぁ、お上手ですわね……おほほ」
などという歯の浮くようなやり取りをしつつ、ミーアは思っていた。
――来ましたわね……。ついに！
サフィアスが面会に来たと聞いた時……、ミーアはピンと来ていた。
昨日、シオンに聞いたことが脳裏に甦る。
――混沌の蛇……、わたくしを策謀によって飲み込みに来たのでしたら、そうはいきませんわ！　逆に尻尾を掴んで、ラフィーナさまのところに引っ立ててやりますわ！
ふんすっ！　と鼻息を荒くするミーアである。
「それで、早速なのですが、姫殿下、お人払いをお願いできます？」
サフィアスは教室内の者たちに、視線を送る。
それだけで、幾人かはいそいそと教室の外に出始める。
帝国四大公爵の権威は、そこらの小国の王族を軽く凌駕するのだ。
「ミーア……」
気づかわしげな視線を送ってきたのはアベルだった。
「大丈夫ですわ、アベル。みんなのことをお願いいたしますわ」
そう言って、それからそのすぐ隣にいたティオーナにも一応は頷いて見せておく。
剣の腕が立つ二人には、ぜひそばにいてもらいたかったが仕方な

い。
満足げに教室を出ていく者たちを見守っていたサフィアスだったが、ふと、ミーアの背後に目を向けて首を傾げた。
「あっれー、聞こえなかった？　そこのメイド、君もだよ」
その視線を受けて、一瞬、びくんと背を震わせるアンヌ。だったが、そんな彼女をかばうように、ミーアが一歩前に出る。
「この者はわたくしの専属メイド。わたくしの手足であり、わたくしの一部。あなたはこのわたくしの手足をもごうと言うのかしら？」
そう言って、ミーアはサフィアスを睨んだ。
「いえいえ、そんなつもりはありません。姫殿下がそうおっしゃるなら、わたくしめとしては、なにも申すことはありません」
恭しく頭を下げるサフィアスを見て、ミーアは、ふんっと鼻息を吐いた。
――混沌の蛇の構成員と二人きりになるなど、危なくって仕方ありませんわ！
「ミーアさま……」
そんなミーアを感動に瞳をウルウルさせながら、アンヌが見つめていた。

「それで、ご用件はなにかしら？」
改めて問うミーアに、サフィアスは愛想のよい笑みを浮かべた。
「我がブルームーン家は姫殿下の会長選挙を全面的に支持し、応援させていただきます」
「まぁ、それはとても良いお話ですわね。今日は、わざわざそれを言いに来てくださったの？」
「いえ、それだけではありません。姫殿下に勝つための策を準備してきました」
「……ほう？」
ミーア、少しだけ前のめりになる。
なにしろ現在、ラフィーナに勝利するプランはないのだ。

「そんな方法があるんですの？」
「ええ、簡単なことです。ラフィーナさまの欠点を徹底的に突けばいいのです」
「欠点……ですの？」
それは、いわゆるネガティブキャンペーンと呼ばれる手法だ。
自身の政策の出来の良さではなく、相手のあらを探して攻撃の材料とする。
確かに有効な手段ではあるかもしれないが……。
「ですが、凡百の貴族ならばいざ知らず、ラフィーナさまに、そのような欠点がございますかしら？」
「なぁに、なければ作れば良いのです」
「は？」
「ラフィーナ・オルカ・ヴェールガは高潔な聖女。ゆえに、ちょっとした汚点をつけてやれば、それだけで大きな痛手となる。簡単な裏工作です。造作もないことだ。ぜひ、この俺にお任せいただきたい」
サフィアスは狡猾な笑みを浮かべて言った。
それを聞いてミーアは……、
――なっ、なるほど、盲点でしたわ……！
素直に感心していた！
ラフィーナの政策の隙のなさを知っているミーアにとって、欠点がなければ欠点を作ってやれというのは、まさに画期的。革新的！
目から鱗の体験であった。
――でも、思い返してみると、わたくしも帝国革命の時にものすごくやられたんでしたわね……。ちまたに流布したわたくしの批判の八割は流言飛語の類でしたし。
……大嘘である。少なくとも六割強は、真実の批判であった。
しかしながら……確かにそのすべてが真実ではなかった。そして……、
――あの類のものは、わたくし自身が偽りだと申し開きしても、

信じてもらえないことが多かったですわね……。
サフィアスの策謀は、ミーアの目には実に理にかなって見えた。ゆえに、ミーアの心は一瞬揺らぎかける。でも……。ミーアの中のなにかが……警告を発していた。それは……。
――あれ、やられるとすごく腹が立つんですのよね。
そう、端的に言って……身に覚えのないことで罵詈雑言を浴びせられるのは、かなりイライラすることなのである。相手の強い恨みを買ってしまうのだ。
――温厚で寛大なわたくしですらムカついたのですから、ラフィーナさまの逆鱗に触れてしまうことは間違いありませんわ。もしそうなると……。
ミーアは想像してみた。
ラフィーナが、冷たい怒りの表情で自分を見つめている場面を……想像……して……。
その後につながる断頭台に至る道が、ミーアの目にはっきりと映った！
――ひぃいいっ！　ヤバイですわっ！　これ、なんの脈絡もなくギロチンにかけられるパターンですわ！
そう……かつてのミーアであればともかく、今のミーアは数多の経験を経て知っている。
自分で蒔いた種は自分で刈り取らねばならないということを。
そして、恐らくサフィアスの蒔こうとしている種は、一時的には綺麗な花を咲かせたとしても、実った果実は苦く、毒を持ったものであるということを。
「ヴェールガのような小国の公爵令嬢ごとき、我ら偉大なる帝国貴族の手にかかれば一ひねりですよ。はっは」
などと偉そうにふんぞり返って笑っているサフィアスを見て、不意にミーアはピンと来た。
――ははぁん、なるほど。わかりましたわ。つまり混沌の蛇は、わたくしとラフィーナさまとを分断するつもりなのですわね……？

そうはいくものですかっ！

第二十九話　正々堂々と……

「それで選挙に勝った暁には、わたくしめを生徒会役員に」
未だ得意げに自己アピールを続けるサフィアスに、ミーアは、ふふんと鼻を鳴らして言ってやった。
「……あなたの企みなど、お見通しですわ」
お前の秘密などすべて知っているぞ、と言わんばかりに、意味深にタメを作って言ってやったのだ！
その言葉に、きょとんと首を傾げるサフィアス。だったが、すぐに気を取り直したように、
「ふふ、姫殿下、警戒しすぎですよ。ラフィーナ・オルカ・ヴェールガは、それほどの人物ではありませんよ」
軽薄な笑みを浮かべて言った。
その言葉は、完全にミーアの予想と合致していた。
――ああ、やっぱり、そう誤魔化しますわよね。わたくしを上げて、ラフィーナさまを下げる。ラフィーナさまを恐れるに足らない人物ということにしておいて、敵対しても大したことないと主張する。だからこそ、わたくしとラフィーナさまの間を分断するような、そんな無意味な陰謀など立てるはずがない。誤解だと……そう言いたいのですわね？
頭の悪い王族であれば「聖女ラフィーナより、あなたさまの方が優れています！」などと言われれば、調子に乗ってしまうところだが……。
――あいにくとわたくしは、そこまでバカではございませんわ！
ミーアは相手の策謀を読み切った満足感に浸りながら、渾身のドヤ顔で告げる。
「サフィアス殿。あなたの狡猾な企みに乗ることはできませんわね」
ミーアは偉そうに胸を張ってサフィアスを睨む。

――わたくしとラフィーナさまを敵対させようなどという狡猾な企み、断じて乗ってなるものですかっ！
「こっ、後悔しても知りませんよ？　この俺の策に乗らなかったこと！」
悔しげに言って、部屋を出ていくサフィアス。
その背中をスッキリした顔で見送ったミーアであったが、しばらくした後、はたと気づく。
――しかし、裏工作はまずいですけど、四大公爵家の者たちには、票の取りまとめはお願いしなければならないんでしたわ……。とりあえず、明日にでもフォローに行かなければならないかしら……。
そんなことを思っていたミーアであったが……。事態は、そんなミーアの思惑を置き去りに、転がり始めていた。

「くそっ、せっかく俺が勝たせてやるって言ってんのに。小心者のアホ姫が……」
怒り冷めやらぬ様子で、サフィアスは廊下の壁を蹴り……上げようとしてやめた。足が痛そうだし……。
『あなたの企みなど、すべてお見通しですわ』
先ほどのミーアの言葉が頭に響く。
「この俺の完璧な企みが、ラフィーナさまにバレているだと？　警戒のし過ぎもいいところじゃないか。あの臆病者め……。しかも、狡猾な企みだと？　結構なことじゃないか。相手に勝つのに必要な策を講じるまでのこと。そこに善悪などないではないか」
うじうじと文句を言いつつ、その場を去るサフィアス。が、しばらく歩いたところで、
「あの、サフィアスさま」
呼び止められる。反射的に振り向いた彼は、その視線の先に、一人の少女の姿を認めた。
「うん？　ああ……、貧乏田舎貴族の娘か。許しもなくこの俺に話しかけるなんて、ミーア姫殿下の寵愛を受けて調子に乗ったかな？」

ティオーナ・ルドルフォン。ルドルフォン辺土伯令嬢。
中央貴族の頂点に立つ、ブルームーン家の長男たる自分に話しかけてきた田舎貴族の令嬢に、サフィアスは苛立ちをぶつけるように鋭い視線を叩きつける。
ティオーナは一瞬怯んだように一歩下がりかけるが……。ギュッと拳を握りしめ、その場に踏みとどまる。
それから上目遣いに、キッとサフィアスを睨みつけ、
「ミーア姫殿下の邪魔をしないでください」
震える声で言った。
「姫殿下は……、あなたたちとは違います。卑怯なことは、お嫌いなはずです」
一瞬、きょとんとしたサフィアスだったが、年下の、しかも身分の低い小娘に批判されたとわかって、苦笑を浮かべた。
「なぁんだ、盗み聞きしてたのか。さすがは卑賤の家の出だ」
「はい。私は田舎者の辺土伯の娘です。でもミーア姫殿下は、身分の違いにとらわれない方ですから」
その返事を聞き、サフィアスの頬がひくっとひきつる。
「貧乏貴族の娘が、言うじゃないか。生意気にも。これは少しばかりお仕置きが必要かな……」
脅しつけるように一歩ティオーナに歩み寄ろうとするサフィアス。けれど、その足が唐突に止まる。
「そこまでにしていただこうか」
いつの間にやってきたのか、ティオーナの後ろにアベルが立っていた。
「あまり淑女を脅すようなことはしないほうがよろしいと思うが……」
「アベル・レムノか。二級国の第二王子風情が、帝国四大貴族のこの俺に、逆らう？」
見下すような態度のまま、サフィアスはジロリとアベルを睨み付けた。

「まぁ、外交的にはまずいだろうけどね。なにしろ、帝国とレムノ王国とでは国力が違うから……」
対するアベルは苦笑いを浮かべて肩をすくめた。
「ただ、ここで黙って見ていると、君たちのところの姫殿下に怒られてしまいそうなのでね。ボクの目の前でレディーへの狼藉は控えてもらえるかな？」
帝国の権威を持って脅しても一歩も引かないどころか、静かな笑みの中に、敵意を向けてくるアベル。
それを見たサフィアスは……若干ビビった。
サフィアス・エトワ・ブルームーン。
ミーアとも血縁関係にある彼には、ミーアと同じ美徳があった。
彼は……痛いのが嫌いなのだ。
いや、より正確に言うならば彼は、血を見るのが嫌いだ。
嫌いというか、見ると卒倒する。
転んで擦りむいたレベルで、気持ちが悪くなる自信がある。
そんな彼だから、召使を折檻するにしてもせいぜいが平手で打つぐらい。それだって、自分の手が痛くなるから、滅多にやらない。部下に任せればいいと思うかもしれないが、力加減を誤って流血沙汰になって、自分が気絶することになりそうだし。
そんなわけだから、彼は暴力が、とてもとても苦手な少年なのだ。
ゆえに、剣術大会も当然出場を見合わせているし、鍛練など積んだこともない。権力を抜きにして、単純な剣の腕でいえばティオーナにも劣るほどなのだ。
しかも、アベルは、ティアムーンには劣るとはいえ一応は他国の王族で、皇女ミーアのお気に入りだ。ちょっとした口喧嘩程度ならばともかく、大事になれば自分の方が立場は不利……。
素早く、脳内で計算を組み立てたサフィアスは、
「ふ、ふん。いい気になるなよ？　我がブルームーン家に与する帝国貴族は多いんだぞ？　他の四大公爵家にも声をかけておくぞ。協力を得られるなんて、思わないことだな！」

「そんなもの……なくても、ミーア姫殿下なら大丈夫です。正々堂々、ラフィーナさまを破って見せますから！」
ティオーナは、堂々と胸を張り、サフィアスに言う。
「姫殿下なら、絶対に大丈夫ですから」

そんな一連のやり取りをミーアが聞いたのは、翌日のことだった。
帝国票を取りまとめてもらえるよう、フォローを入れようと思っていたミーアだったのに……。
――ぐ、ぐぬぬ、わ、わたくしに一体なんの恨みがございますのっ！？　やっぱり、こいつ天敵ですわっ！
などと思ったものの……。一緒にアベル王子もついていて、しかも、彼もティオーナの味方をしたとあっては、もう、なにも言えない。
「う、うう、それは、ご苦労でしたわね、ティオーナさん。わ、わたくしが、言いたかったことを、代わりに言ってくださったんですのね」
「お褒めにあずかり、光栄です」
――褒めてませんわ！　ぜんっぜん褒めてませんわっ！
かくてミーアは、帝国貴族票という確実な票を失うことになったのであるが……。
このティオーナの勇気が、最終的にどのような結末を連れてくるのか、ミーアはまだ知らない。

第三十話　サフィアスさん、呼び出しを受ける……

「くそ、くそくそくそっ！　あいつら、ナメやがって、くそがっ！」
部屋に戻ったサフィアスは、ベッドの上に置いてあった枕を殴った。ぽすぽすと気の抜けた音が室内に響く。
しばらく暴れて、虚しくなったサフィアスは、はぁーっと深いため息を吐いた。
「俺は……、生徒会の役員にならなければならないんだ。こんなところで、つまずくわけにはいかないというのに……」
極めて深刻な、追いつめられたような顔でつぶやく。
それから、サフィアスは机に目をやった。
机の上には、一通の書きかけの手紙が置かれていた。
それは……、

愛しのマイハニーへ
元気にしているかな？
俺の方は変わらず健康に過ごしている。ただ、君に会えないので、気持ちが落ち込むことが多いけれど。

そんな文面で始まる、甘い……甘ーい！　ラブレターだった！
そう、なにを隠そうこのサフィアス、幼い頃より定められた許嫁がいるのだ。
それはさほど珍しいことでもなかった。互いの家同士を結び付ける婚姻は、貴族社会という政争の場では重要な要素だ。
時に家柄、時に財力、時に武力。様々な打算のもと、婚姻関係は結ばれていく。
その中には、望まぬ結婚というものも数多く存在しているのだが……、サフィアスの場合は……意外なことに相思相愛だった。

それはもう、手紙でイチャイチャ、どこかに出かけてイチャイチャ、お互いの家に行ってもイチャイチャ、イチャイチャ……。
同じ空間に置いておくと胸やけするから、と互いの親族がげんなりするほどのバカップルっぷりを誇っているのだ。
お相手は、四大公爵家には劣るものの伝統と格式のある侯爵家であり、血筋的には申し分なく、見た目も可憐でお淑やか。
しかも、サフィアスのことを尊敬できる立派な青年と思う程度には、その恋愛レンズは歪んでいた。
結果、生まれたのは理想的大貴族のカップルだった。
ちなみに、その恋愛脳的メンタリティは、ミーアに非常に似ているのだが、もちろん当人たちは認めようとはしない。
まぁ、それ自体は問題ないのだが、問題だったのはサフィアスが「生徒会役員になる」などと、大口を叩いた手紙を許嫁に送ってしまったことだった。
「今さら、あれは間違いだったとでも言えというのか？　そんな恥ずかしいことができるわけがない！」
頭を抱え、うおーっと叫ぶ。
恋に悩める男の、悲しい叫びである。
ちなみに……彼と同室の従者の少年、名をダリオというのだが……、サフィアスの婚約者の弟である。姉のコネによって、サフィアスの従者としてセントノエルに来て、大陸最高峰の教育を受けている。
本人的には、それは大満足なのだが……、時折、こうして、姉へのラブレターで悩みまくる将来の義兄の姿を見せられるという、結構な地獄を味わっていた。
「なぁ、ダリオ。どうすればいいだろう？　俺は許してもらえるだろうか？」
「あー、たぶん大丈夫じゃないっすかね……。姉さん、結構、適当なところあるし」
微妙にやる気のない返事を返すダリオ。

家に帰れば帰ったで、姉からサフィアスとののろけ話を聞かされるので、彼としては、この程度の失敗で姉の好意が薄れることはないと思うのだが……。
「いや、だが、やはりメンツが……。ぐぐ、くそ、おのれ、ミーア姫殿下。俺の言うとおりにしておけば、上手く恩さえ売れれば、うぐぐ……」
そんな、ダリオにとってなんともいたたまれない時間は、けれど、長くは続かなかった。
部屋のドアを、礼儀正しくノックする音が響いたのだ。
「おっと、ちょっとすみません。サフィアスさま」
「様、などと他人行儀に呼ばなくともいいぞ？　俺たちは近いうちに兄弟になるわけだし……」
「はい、わかりました。サフィアスさま」
ダリオはこれ幸いにとドアの方に向かい……、そこに立っていた男に首を傾げた。
「失礼いたします。サフィアス・エトワ・ブルームーンさま。ラフィーナさまがお呼びです」
その言葉に、サフィアスは、
「……はぇ？」
ただただ、首を傾げた。
それは地獄からの使者……もとい、学園の支配者、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガの使者だった。

「らっ、ラフィーナさま……。あの、わたくしめに、なにか……？」
サフィアスが連れてこられたのは、生徒会室だった。
憧れの生徒会室に足を踏み入れたサフィアスだったが……、満足感に浸るような余裕はなかった。
なぜなら、すぐ目の前、椅子に深々と腰かけたラフィーナが、嫣然たる笑みを浮かべて、ティーカップに口をつけていたからだ。
通常、呼び出しておいて自分だけ紅茶を楽しんでいる、などとい

うことは許されない無礼だ。もしも、それが成立してしまうとしたら、それは、呼び出された側に相応の非がある場合のみであって……。

そして、サフィアスには、それに心当たりがあった。

いや、まさか、バレるはずがない……。そうは思っても、なんとも落ち着かない気持ちになってしまう。

そんなサフィアスの心情を知ってか知らずか、ラフィーナは静かに、紅茶の色を確かめるようにティーカップを見つめていたが……。

「あ……あの？」

「ふふ、ごめんなさいね……。ただ、少し考えていたの」

「へ？　え、えーっと、なにをでしょうか？」

「こんな時、私のお友達ならどうするかなって」

「えーっと？　それは……あっ！」

そこで、サフィアスは気づいた。

ラフィーナの後ろに立っている少女……。顔を真っ青にした彼女こそが、ラフィーナの悪口を喧伝するために、買収したはずの人物であるということに。

「なんだか、いろいろと裏でやろうとしていたみたいだけど……もう少し隠れてやらないと、身を滅ぼすことになるわね」

凛と美しい声で言って、ラフィーナはようやくサフィアスに目を向けた。

清らかな、山の朝露のような澄み切った視線を向けられ、サフィアスは震えあがった。

『すべてお見通し……』

ミーアに言われた言葉が脳裏を過ぎる。

――まっ、まさか、本当に？

驚愕に固まるサフィアスに、ラフィーナは、いっそ優しいといえるような口調で、

「でも、どうするべきかしら……。私はね、サフィアスさん、悪人は裁かれるべきだと思うの。もちろん、人は過ちを犯すもの、そこ

に慈悲は与えられるべきなのかもしれないけれど、あなたは、公爵家の長男でしょう？」
けれど、凍えるほどに冷たい、氷の視線で、サフィアスを突き刺した。
そう、ゾッとするほど澄み渡り、純粋で……、けれども温かみのない視線で……。
「国は違えど、私と同じ身分。当然、その身分に相応しく、きちんと自分の行いには責任を取らなければならない……。そのぐらいのことは、あなただってわかっているでしょう？」
サフィアスは、震え上がった。
たかが小国の公爵令嬢と侮っていた少女は、裁きの剣を突き付けてくる、聖い神の執行官だった。罪は許さず、必ず裁く。断固たる意志がラフィーナにはあった。
けれど、その口調がふっと緩む。
「ミーアさんは、あなたのことを許すんでしょうね。ここは学校、教育の場所。一度の過ちで退学になどしたら可哀そうって、きっとあなたのことを憐れむはずだわ」
罰には二つの役割がある。
加害者を痛めつけることで被害者の心を慰めることと、過ちを犯した者に対するお仕置き……すなわち教育するということ。
「うーん、今回の被害者は、私ということになるのかしら？」
頬に手を当て、きょとんと首を傾げるラフィーナ。
「でも、被害者になり損なってしまったのね……。ティオーナさんの時と同じ。被害者の心を慰める必要がないのであれば、過ちを犯した者に悔い改めを迫ればいい」
サフィアスの知らないことを言って、それから、くすくすとラフィーナは笑った。
「ねぇ、サフィアスさん、ミーアさん、なにか言っていたかしら？」
「正々堂々とラフィーナさまと戦うと……、言っておりました」
従者の言葉は、主の言葉。それが貴族の常識だ。

そして、サフィアスにとって、ティオーナごとき貧乏貴族は、従者も同じ。
ゆえに、ティオーナが勝手に言った言葉は、ミーアの言葉として、ラフィーナに伝えられる。
「ああ……そうね。そう言うでしょうね、ミーアさんなら。そういう人だものね、私のお友達は……」
ラフィーナは、そこで悲しそうなため息を吐いた。
「ああ、それなのに、どうして私の誘いを受けてくれなかったのかしら……」

第三十一話　聖女（真）の憂鬱

「ああ……失敗。少し話し過ぎてしまったわ」
サフィアスが去った後、ラフィーナは苦笑いを浮かべた。
カップに残っていた紅茶の残りを口にする。舌に広がる仄かな苦みに顔をしかめつつ、ラフィーナはつぶやく。
「きっと自分で思ってる以上に、ショックだったのね。ミーアさんに断られて……」

ラフィーナ・オルカ・ヴェールガ。
ヴェールガの聖女――人々から崇め奉られる少女には、もともと友達がいなかった。
それを不幸だと思ったことはなかった。父はたくさんの愛情を注いでくれたし、国民も彼女を慈しみ、慕ってくれた。むしろ恵まれた境遇と言えるだろう。
みながみな、彼女を特別扱いする。
特別……、それはそうだろうとラフィーナは思う。
彼女は自分が「特別」な存在であることを否定しない。
ヴェールガの聖女は一人しかいない。唯一の存在で特別で、だから、特別扱いされてしかるべきだとも思う。
けれど……、とラフィーナは同時に思う。
それは、ほかの人だって同じだ、と。
みながみな、そのように造られた。
神から個別に設計されて、それぞれが違う、特別な形を帯びている唯一の存在。
それぞれに神の寵愛を受けている。
だからこそ、それぞれが尊重されるべき存在なのだ、と。
そう神は教えている。ヴェールガの聖典には、そう教えが書かれ

ている。
ゆえに、自分だけが特別扱いされることが、ラフィーナには不満だった。
自分もほかの子も変わらない。普通に友達になってくれたっていいのに、と、そう思っていた。
そんなある時、彼女の前に、さる大貴族の令嬢が現れた。
「ラフィーナさま、私とお友達になってくださらない？」
その言葉に、ラフィーナは喜んだ。
ようやく、自分を特別扱いしない、普通の友達になってくれる相手に出会えたのだ、と。
心から、喜んでいたのに……。
ある日、ラフィーナは見てしまった。
その友達が、自分の従者を棒で殴っているところを。
「なぜ、そんなことができるの？」
ラフィーナは混乱した。
だって、彼女のお友達は、聖女だとか貴族だとか……そういう身分にとらわれない人。そういう『偽りの特別』に左右されない人のはずで……。だから友達になってくれたはずなのに……。
それなのに、どうしてそんな酷いことができるのだろう？
考えた末に、ラフィーナは気が付いた。
少女がラフィーナを特別扱いしなかった理由。
なんのことはない、少女はラフィーナだけでなく、自分自身をも特別な存在と思っているだけだったのだ。神に選ばれ寵愛を受ける、特別な存在であると……、思い上がっていただけなのだ。
なんて横暴な考え方……。
ラフィーナはこの地に住まう者たち、神を信じて敬い、その寵愛を受けた信徒の共同体を、一つの家族のようなものだと考えている。そして、貴族や平民、奴隷などは、すべて役割の違いに過ぎないと。
長男として生まれた者には、家督を継ぐ権利と義務とが課される。同じように次男には次男の、長女には長女の、父には父の、母には

母の、それぞれ役割と権利、義務がある。
そして、その役割は別に比べられるものではない。どちらが優れていて、どちらが劣っているか、などと言えるものではない。ただ果たすべき役割が違う、それだけの違いだ。
だから貴族だからと言って、平民を虐げ、奴隷を足蹴にする者を、ラフィーナは心底軽蔑する。
自身に与えられた特権に相応しく、自らを律し、義務を果たそうとしない者を、ラフィーナは許すことができないのだ。
そんなラフィーナに、友達はできなかった。
近づいてくる貴族は、ラフィーナの聖女としての名にひかれて近づいてくる下種な者ばかり。友達になるに値しない。
かといって平民は、ラフィーナを敬うことはあっても、決して友となろうとはしなかった。
これはヴェールガの聖女として生を受けた自身が負うべき試練なのだろうか？　と半ばラフィーナが諦めかけた時、彼女は現れたのだ。
「ミーア・ルーナ・ティアムーン」
帝国で彼女がなしてきたことを知った時、ラフィーナは少しだけ驚いた。
統治者たる皇帝の娘として、相応しい働きをする姫。与えられた立場に相応しく、民に恩恵を与え、貧民にすら思いやりを注ぐことができる慈愛の人。
自分と同じ「聖女」の名で、ミーアを呼ぶ者もいると聞いて、ラフィーナは心が躍るのを感じた。
「もしかしたら、この方ならば、私を友としてくれるんじゃないかしら……」
ラフィーナは、ミーアが入学してくるのを心待ちにしていた。
そうして、共同浴場で、ラフィーナははじめてミーアを見つけた。
自身の従者たる平民のメイドに気遣いを見せ、あまつさえ腹心だと言ってのけたミーア。人間を立場や血筋などという表面的なこと

ではなく、もっと深い部分で見ることができる彼女のありようは、ラフィーナに少なからぬ衝撃と感動を与えたのだ。
彼女は、自分が求めていた人だ、とラフィーナは思った。
けれど……違った。
「私の思っている以上の人だったわね、ミーアさんは」
ダンスパーティーの事件の際、ミーアの見せた寛容さ、過ちを犯した者にさえ、可能であればやり直しの機会を与えること。それを実現するために、あらゆる手を打つこと。
その姿勢は、ラフィーナにはない、未知のもので……でも。
「人は過ちを犯すもの。過ちだと知らずに罪を犯すこともある。ゆえに、やり直しの機会をできるだけ与えてあげる……。ミーアさんは、私などよりもよほど優しい人だわ」
ラフィーナは、それを心地よく感じている自分に気づいて、少しだけ驚く。
罰を曖昧にすることは、腐敗の温床になる。
犯人への罰が軽ければ、被害を受けた者の心の痛みが和らぐこともない。
だからミーアのように、あの犯人たちを許そうとする者を、ラフィーナは軽蔑する。
罰は罰。権力を持つ者は悪を裁き、不正を正すべきなのだ。
けれど、ミーアは知恵により、悪が成される前に、あるいは被害が大きくなる前に動き、犯人に≪やり直しの機会を与えられる状況≫を作り出す。
考えたこともなかった優しい在り方に、ラフィーナは憧れさえ抱いていた。
だけど、
「残念だけど、ミーアさん、あなたでは私に勝てないわ」
ラフィーナは小さくつぶやく。
彼女には、これから先の正確な予想がすでに見えていた。
ミーアは確実に負ける。

もしもサフィアスの策謀に乗るぐらい、悪に徹することができたら、まだ勝ち目はあった。
けれど、ミーアはそれを拒んだのだ。
「正々堂々と、そして、優しい信念をもって……、ミーアさんの美徳が彼女自身を縛る鎖になる。だから、私には絶対に勝てない……」
ラフィーナは、ミーアの正義を愛する心を信じている。ゆえに、自らの勝利をも確信している。
皮肉な話だ。ミーアが正しさに居続ける限り、彼女には決して勝ち目はないのだ。
なぜなら……、それは。
「あーあ、応援してほしかったなぁ……」
思考を断ち切るように、ラフィーナはつぶやく。それはまるで年相応の少女のように幼く、少しだけ寂しげなものだった。
「お友達なら、わかってくれると思ったのに……」
目の前の机にグデーっと力なく横たわって、ラフィーナは唇を尖らせる。
もちろん、ラフィーナはミーアが立候補した理由も察している。
選挙という制度を公正に機能させるために、ラフィーナの対抗馬として立つこと。それ自体はラフィーナ自身の潔白を証しするためにも必要なことだった。そしてそれは、ラフィーナを絶対視しないお友達にしかできないことであって……。でも。
「あーあ……」
それがわかっていてもなお、ラフィーナは寂しげにため息を吐く。
「私、頑張ってるんだけどなぁ」
混沌の蛇への対策とヴェールガの聖女としての役割、それに生徒会長の仕事もあって、さすがのラフィーナも、疲労の色を隠しきれなかった。
「頑張ってるんだけど……なぁ」
つぶやいて、ラフィーナはそっと瞳を閉じて、睡魔に身を委ねるのだった。

第三十二話　聖女（なんちゃって）の憂鬱

選挙期間も半ばに差し掛かろうとしている頃のこと。

「ミーアさま、ここまでの選挙戦ですが……劣勢です」

ミーアが選挙対策室として借りている空き教室。

そこに、クロエの重々しい声が響いた。

――ああ、まぁ、ですわよねぇ……。

それを聞いても、ミーアに驚きはない。というか、むしろ納得してしまう。

なにしろ、自分でもラフィーナに勝てるビジョンがまったく思い浮かばないのだ。

選挙公約はアベルとシオンの協力によって、それなりのものを作ったつもりだ。それこそ、ラフィーナにだって引けを取らないぐらいに堅実なものが作れたのだが……。

それだけだ。ラフィーナを大きく凌駕するものは作れていない。それでは、明らかに不足なのだ。

――計算外のことが起こりすぎましたわ……。

そうなのだ、ミーアにも一応の戦略はあったのだ。一応は……。きちんとした選挙公約を用意し、生徒会長になってもおかしくない状況を表向きでは整える。そして、裏ではティアムーン帝国派、サンクランド王国派、それぞれの票を取りまとめて、ギリギリでラフィーナに勝つ。

けれど、その戦略はすでに瓦解した。

ティオーナが大見栄を切ったせいで、サフィアスのみならず、他の四大公爵家の者たちの協力を得ることも難しくなってしまったのだ。

これには、さすがのミーアも参った。

いくら『混沌の蛇』と関係があるかもしれないとは言っても、帝

国の貴族たちをまとめるためには、やはり彼らの協力が不可欠だったわけで。
そして、帝国票が難しいとなれば当然のことながら、サンクランド票の取りまとめだって難しい。自国の貴族たちの支持すら集められない者を、どうして支持できるだろう？
もとより中立の立場をとるとシオンも明言しているわけで……、ミーアとしては手の出しようもない。
結果……事前の調査では、支持の大半はラフィーナへと流れてしまっている。
「現在、支持者的にはラフィーナさま九、ミーアさま一といった割合です」
――まぁ！　わたくしに、一割も支持者がいるんですのっ！？
むしろ、その事実に驚きのミーアである。
――よほど、泥船に乗るのがお好きな方がいらっしゃるのね、おほほ！
もはや、自虐に走り出す始末である。
乾いた笑みを浮かべるミーアに、クロエは言った。
「なんとか、挽回するために手を打たなければなりません」
「そうは言いましても……」
ミーアは肌身で、敗戦の気配を感じ取っていた。
部屋に集う面々の顔を見て、ふと思い出す。
――ああ、この顔……、帝国革命末期の近衛兵団たちの顔に似てますわ。
全滅覚悟で革命軍に突貫する兵士たち。彼らの顔に浮かんでいた清々しいほど隠す気のない、諦め顔。
それそっくりの表情をして、ミーアの方を見つめる者たちがいた。
――これ、もしかして、負ける前提で考えて行動したほうがいいんじゃないかしら？
諦めムードにあてられて、ミーアも半ば投げやりである。
まだ勝利を信じていそうなのはアベルとティオーナ、それに……。

「なにか、具体的なアイデアはありませんか？」
今、司会をしてくれているクロエだけだった。ちなみにクロエには各教室を回って、情勢分析などを行ってもらっている。
そんなクロエの問いかけに、静かに手を挙げる者が一人……。
ティオーナ・ルドルフォンが元気よく手を挙げていた。
「イメージカラーを決めるというのはどうでしょうか？」
みんなの疑問の視線を受けて、ティオーナが続ける。
「ミーアさまを応援する者は、同じ色のものを身に着けるんです。お揃いで。服も全部同じ色にするのは難しいかもしれないんですけど……」
「なるほど、わかりやすいイメージ戦略ですね。同じ色のスカーフを揃えて腕に巻きつけるとか、効果はあると思います。見た目は大事ですから」
クロエは頷き、以前にもどこかの国の選挙で、そのような戦略がとられたことを説明してくれる。
「戦場でも有効な手だ。サンクランドには、全身を漆黒で固めた精強無比の騎士団があると聞くし、味方であることをわかりやすく示すことは団結を高める意味にもなるからね。そうすると、問題は何色にするかということか」
アベルの問いかけに、ミーアの取り巻きの一人が答える。
「ラフィーナさまはイメージカラー的には白だから、同じように静かな色で、青系統はどうでしょう？」
「青……」
それを聞き、ミーアは思わず頬を引きつらせる。
その色は、こう、なんというか……。以前、レムノ王国で革命に敗れた者たちを、ミーアの脳裏に呼び起こした。
――蒼巾党だったかしら……。あれを思い出させますわね。
実に不吉だ。勝てるものも勝てないような気になってくる。
――まぁ、もともと勝てませんけど……。
自虐モードのミーアである。

その後も、黄色、緑、桃色、オレンジ、様々な色のアイデアが出てくるが……。
「染料の都合で、すぐに揃えられる色は、そこまでないと思います」
クロエの現実的な指摘によって、おのずと選択肢は狭められた。
結果、ド派手な黄色か、赤系統か、という話になった。
「赤は、夕焼け野バラ（トワイライトローズ）という花の染料で染める深い赤ですね。名前はそのまま夕焼け野バラ（トワイライトローズ）の赤（レッド）と呼ばれる色です。黄色は、えっと、この色です」
そうして、クロエが差し出したのは一枚のハンカチで……、実に、こう、目が痛くなるような、派手な黄色だった。それは、ミーアであっても、
――これを身に着けるのは、ちょっとバカっぽいですわ……。
などと、若干、引くような色だった。
こんな色を身に着けていたら、軽薄で派手好きなどというよからぬイメージがついてしまいそうだ。
そんなやり取りを経て、ミーア派のイメージカラーが決まる。
「ああ、もう、なんでもいいですわ」
そう投げやりに推移を見守っていたミーアだったが、数日後に出来上がって来たものを見て後悔する。
「こっ、この色は……」
夕焼け野バラの赤、血のように濃い赤色の別名はギロチンレッド……。
ギロチンのなにの赤色かは、あえて言うまい。
けれど、その赤は、ミーアの中の不吉極まりない記憶を喚起するには十分で……。
「ああ、わたくし、やっぱり、もう、おしまいですのね……、う、うーん」
などと、その場で倒れてしまい、アンヌたちを大いに慌てさせることになるのだが……。
かくて、楽しい選挙戦は終盤を迎えていくのだった。

第三十三話　ミーア姫、追いつめられる

「ミーア姫殿下に清き一票をお願いします！」
イメージカラーを定め、心機一転、ミーア派は動き出した。
ギロチンレッドを胸に抱き、各メンバーは声を張り上げて支持を訴える。
当のミーアも愛想よく、自らの選挙公約を訴えていった。
ラフィーナにできないことをしなければ、と考えた結果、アベルの発案で馬に乗りながら演説した時には、さすがにちょっぴり迷走してるんじゃないかしら？　などと思ったものだが……。
ちなみにその演出は、騎馬民族出身の生徒達にはすこぶる人気で、予想外の効果があった。さすがはアベル！　と感心しきりのミーアであった。
そんなこんなでジワジワとではあるが、ミーアの支持者は増え始めた。
けれど……それでもラフィーナにはまだまだ遠く、まったくもって届きそうになかった。
「クロエの情勢分析によると……、支持率は二割弱まできているようですけれど……」
そこで頭打ちだった。やはり、勝負にはならない。
選挙対策室にて、ミーアは、ふぅと疲れたため息を吐いた。
――かといって、引くわけにもいきませんし……。
昨夜もミーアはベルから話を聞いた。結果、わかったことは「なんかよくわかんないけど、ルードヴィッヒが確信に満ちた顔で、ミーアが生徒会長にならないと世界が滅ぶって言ってた！」ということのみ。
それのみなのである！
――これでは、対策の立てようがございませんわ……。

しかも、未だにベルもアンヌもティオーナもクロエも、ミーアの勝利を一切疑っていないのだ。
もしも、これで生徒会長になれなかったりしたら……、みんなのガッカリした顔を想像するだけで……。
――う、うう、お、お腹が痛いですわ……。
そんなミーアの前に、深刻そうな顔をしたアベルがやってきた。
「ミーア、少しいいだろうか？」
「あら、アベル、どうかしましたの？」
「すまない、ボクに気を使って選挙公約を作ったせいで、こんなことに……」
「へっ……？」
きょとんと首を傾げるミーアに、アベルは苦々しげに言った。
「君が発表した選挙公約は、ほとんどボクが原型を作ってきたものだった。この結果は、すべてボクに責任がある。君のことだ、もしかしたらボクが思いもよらないような政策を考えていて……、だけど、気を使って、ボクが持ってきたものを採用してくれたんじゃないのか？」
「まさかっ！　そんなこと、ぜんぜんございませんわ！」
もっともである。
「アベルがいらっしゃらなければ、わたくし、選挙公約を完成させることだってできませんでしたわ！」
百二十パーセント真実である。
そんな混じりっ気のない純然たる真実の言葉を、肯定するものがいた。
「そうだな。あまり、自分を卑下するものじゃない。アベル王子」
部屋に入ってきたシオンは、彼にしては珍しく苦笑いを浮かべていた。
「だが……」
「ラフィーナさまの公約を見ただろう？　文句のつけようがない完璧な政策だった。仮に、あれを上回る出来のものを打ち出せたとし

ても、そこまでの差はつかないだろう。もともとのラフィーナさまとミーアとの差を逆転させることは無理だっただろう」
ラフィーナとミーアの差、いわゆる現職の強みというやつである。今までの実績があるラフィーナは、堅実な選挙公約を打ち出せばよいのだ。逆に政治手腕が未知数、実績ゼロのミーアが勝利するためには、よほど画期的な、生徒たちの心をつかむような公約を打ち出す必要があったのだ。
「いずれにせよ、真っ当な公約では、ラフィーナさまを超えることはできなかったということだな」
「あら？　真っ当でないものというのがございますの？」
シオンの物言いに首を傾げるミーア。そんなミーアに、シオンは肩をすくめて、
「白々しいな、ミーア。君は気づいていたんだろう？」
「はて？　なんのことかしら……」
「ベル嬢に聞いたよ。図書館で見た選挙公約は、君が書いたものらしいな」
「……はぇ？」
なんのことか、一瞬わからなかったが……。その脳裏に、自身の欲望に埋め尽くされた選挙公約がよぎる。
――べっ、ベルっ！　わたくしを裏切りましたわね！　せっかく、そのことはわたくしがお墓まで持って行こうと思ってましたのにっ！
ミーアは心の中で絶叫した。
別に口止めしていたわけでもないので、裏切ったわけではないのだが……。
「それは、どういう……？」
「あっ、ち、違いますのよ。あれは、その……」
困惑した様子のアベルに、ミーアは思わず言い訳しようとして……。
「あれは、試みとしては実に正しい考え方だったな」
シオンはあっさりと言った。

「……はぇ？」
「わかっていたんだろう？　堅実に、あるいは公正に……そうした考え方ではラフィーナさまに太刀打ちできないと。だから、思考実験的に俗っぽい公約を考えてみた」
「なるほど。そういうことだったのか」
アベルは感心した様子で、ミーアの方を見た。
王子たち二人の、どこか尊敬するような視線を前に、ミーアは、
「ま、まぁ、そんな感じですわ……」
乗った！　乗らざるを得なかった。
ミーアは背中に冷たーい汗をかきつつも、むしろ「今ごろ気づきましたの？」という表情を作り出す。ミーアほどの者になれば、どのような状況でも憶することなくドヤ顔を作り出せるのだ。
「だからアベル王子、別に恥じる必要はないんだ。ミーアはラフィーナさまに勝つ方法を模索して、その上で、その道を放棄したんだ」
「どういうことだ？　勝ちの目があるのに、その道を放棄するとは……？」
「わからないか？　その思考を突き詰めていくとどこに到達するのか……。ラフィーナさまと異なる方向に突き詰めた公約というのは、たとえば……そうだな。大貴族を優遇する公約とかだろう」
「は？　いや、シオン王子、それはなにかの冗談なのかい？」
目をぱちくりと瞬かせるアベルに、シオンは首を振った。
「残念ながら、きわめてまっとうな戦略だ。ラフィーナさまは平民にも貴族にも等しく慈悲を与える。むしろ、貴族に対する評価の方が厳しいぐらいだ。そのことを快く思わない貴族は多いだろう」
「なるほど、ラフィーナさまと同じようなことをやっていては、ミーアに票を入れる意味がない。だから、もし仮に、ラフィーナさまが完璧かつ公正極まる選挙公約を打ち出してきた場合、手の出しようがないということか」
現在のセントノエル学園の状況、生徒会の動かせる予算と労力、それらの制約の中にあってできることというのは限られてくる。

たとえば、セントノエル学園の改善すべき問題が二十あるとする。生徒会で動かせる労力が十であるとする。その場合、その十の力をどのように割り振っていくのかのというバリエーションは、実はそう多くない。

学園の現状を正確に把握する目があり、生徒会の力を推し量る分析力があれば、自ずと違いを出せるポイントは、優先順位のつけ方に絞られる。

すなわち、なにを一番大切にして活動していくのかということだ。

ゆえに、ラフィーナが善に与する選挙公約を打ち出せば、ミーアは悪の選挙公約を、ラフィーナがすべての生徒に公正な選挙公約を打ち出せば、ミーアは一部の生徒が得をする不公正な選挙公約を打ち出すことでしか、違いが出せなくなってしまう。

制限がある以上、その収束点の形は大体決まってしまっていて、その最善のものをラフィーナに出されてしまっては、もはやミーアにはどうしようもない。

二人の会話を聞きながら、ミーアは頬を膨らませた。

――公約に使えそうなことをすべて一人でやってしまうなんて、ズルいですわ！　ラフィーナさま。

第三十四話　ミーアはやさぐれモードに進化した！

こうして情勢を覆せないまま、ついに選挙当日がやってきた。

「う、うう……、どうすれば……」

万策尽きたミーアは脳みそをフル回転して打開策を探っていた。

もう数日前からそんな状態で、慢性的な知恵熱のせいで微妙に熱っぽくてふらふらするぐらいである。

そうして、考えに考えて、考えて、考えた結果……、良いアイデアは出てこなかった。

あとは投票前の最終演説を残すのみ。

逆転の一手は……ない。

その時、ミーアは気が付いた！

――ああ、来てませんわ……！　わたくしの周りになんの風も感じられませんわ。

今まではことあるごとにミーアの体を押し上げてくれていた力を、今はまったく感じない。

――無風！　まったくの無風ですわ……。

もしかしたら、これは時間転生して以来、最大のピンチなのでは……？

ミーアは遅まきながら思った。

さて、セントノエルにおいて選挙というのは神聖な儀式だ。

先日の開会ミサしかり。今日の投票についても同様である。

今日は特に、会長を選び出す神聖な投票日である。立候補者は慎み深く身を清め、純白の聖衣を身にまとう必要があった。

セントノエル学園の地下には清めの泉と呼ばれる場所がある。

白く磨き抜かれた石が敷き詰められたその空間は、静謐（せいひつ）な空気に包まれていた。

広い空間の真ん中には、さらさらと清らかな水の湧き出す泉があり、立候補者はそこで身を清めることが習わしとなっているのだ。
入り口ですべての衣服を脱ぎ、一糸まとわぬ姿となって、ミーアはその身を泉に浸す。
わずかに湯の混じった水は、震えるほどに冷たいということはなかったが、それでも十分に冷たかった。知恵熱で火照った体には心地よい。
「ふぅ……」
小さく息を吐き、ふと横を見る。と、
――それにしても、ラフィーナさま、憎らしいぐらいにお美しいですわ……。
そこには、自分と同じく水浴びするラフィーナの姿があった。
白く透き通るような肌、清らかな水にきらめく長く美しい髪は、同性のミーアから見ても、この上なく魅力的に見えてしまって……。
――ぐぬぬ、不公平ですわっ！　ズルいですわっ！
ネガティブモードに入っているミーアは、ここにきて容姿でもラフィーナに完膚なきまでに負けていることを悟ってしまう。
「あら？　どうかなさったの？　ミーアさん」
ミーアの視線に気づいたのか、ラフィーナは小さく首を傾げた。
「い、いえ、なんでもございませんわ。おほほ」
誤魔化すように笑ってから、
「ただ、ずいぶんと、お疲れのご様子ですわね、ラフィーナさま」
ミーアは珍しく皮肉を言った。
なんとミーアはネガティブモードから、やさぐれモードへと進化した！
――水も漏らさぬ完璧な施政は、さぞや疲れるでしょうね！
胸の中で強気な皮肉を口にするミーアである。やさぐれたミーアには怖いものなどないのだ！
――まったく、そんなにお美しくて頭もよいなら、さぞや楽しい人生でしょうね！

まぁ、決して口から出すことはしないが……。
腹立ちまぎれに、ごしごしと布で肌をこすっていると……、
「ねぇ……、ミーアさん」
ふいにラフィーナが話しかけてきた。泉の中に体を沈め、顔だけをミーアの方に向けて、ラフィーナは言った。
「ミーアさん、立候補を取り下げていただけないかしら？」
「ラフィーナさま……、それは、どういうことですの？」
ミーアは硬い表情のまま、ラフィーナを見つめ返す。その視線を涼やかな笑顔で受け流し、ラフィーナは続ける。
「ミーアさんのことだから、もう知っているでしょう？　投票するまでもなく、ミーアさんは私には勝てないわ」
事前の調査でわかるのは、ある程度の票の動きのみである。けれど、それでも確定してしまうほどに、両者の差は大きいものだった。
「結果が出る前に辞退してくれたら、傷は少なくて済むでしょう？」
どのような思惑があったとしても、周囲のミーアへの評価はあまり良いものではない。
身の程知らずのわがまま姫。このままでは、その評価が定着してしまう。けれど、ここで引き際を悟って立候補を辞退すれば、少なくとも時流はきちんと読める者として、多少の名誉は守られるのではないか……。
「ミーアさんはお友達だから……。戦いたくないし傷つけたくもないの。わかってもらえるかしら？」
それは、ラフィーナからお友達に対しての、せめてもの慈悲で……。
だけど……。
「申し訳ありません。ラフィーナさま、それはできませんわ」
ミーアは小さく首を振った。
「わたくしは、負けるわけにはいきませんの……」
破滅の未来を回避するため……、なんとしてでもラフィーナに勝たなければならないのだ。

方法は、まるでわからないけれど……。
ミーアの返事を聞いたラフィーナは、ちょっとだけ悲しそうな顔をして言った。
「……お友達だって、思ってたのに……」
「お友達だからこそ……ではないかしら？」
ミーアは、小さな声でつぶやく。
一瞬、きょとんとした顔をしたラフィーナをミーアは恨みがましい目で見つめる。
――〝お友達だからこそ〟、少しぐらい譲ってくださってもよろしいの〝ではないかしら？〟
今のセントノエルに必要そうな政策のすべてをラフィーナは公約でカバーしてしまった。すべてだ。なに一つ、ミーアには残されていなかったから、ミーアたちが作った公約は、ラフィーナのものと大差ないものに過ぎないのだ。
当然のことながら、それでは勝てない。勝ち目すら見当たらない。
――ずるいですわっ！　一人で全部やってしまうなんて……、わたくしにも残しておいてほしかったですわ！　お友達なのに、こんなに完膚なきまでにわたくしを叩き潰すなんてっ！　ひどいですわ！
ミーアは、やさぐれモード全開で、
「ラフィーナさまは、ぜんぶ一人でしてしまうんですのね！」
いじけた口調で言った。

第三十五話　涙に潤んだ二人の瞳

「ラフィーナさまは、ぜんぶ一人でしてしまうんですのね！」
「……え？」
ミーアに言われたその一言、それは確かにラフィーナの意表を突いた。
「ミーアさん、それはいったい……」
その問いかけに振り返ることなく、ミーアは行ってしまった。
それでラフィーナは、自分がミーアを怒らせてしまったことに気が付いた。
「ミーアさん……どうして？」
なぜミーアが怒っているのか、ラフィーナにはわからなかった。見当もつかなかった。
――本当に、そうかしら？
彼女の中、ほかならぬ自分が問いかけてくる。
ミーアの言葉が脳裏をよぎる。先ほど、水を浴びている際に、ミーアは言ったのだ。
言いづらそうに、少しだけ心配そうな様子で……。
「ずいぶんとお疲れの様子ですわね、ラフィーナさま」
――私のことを、心配してくれていた……？
そのことに気づいた時……、ラフィーナはミーアが、なぜ怒っているのかに気が付いた。
――ミーアさんは、私のことを心配して……私の負担を軽くするために……？
最近のラフィーナは、確かに少し疲れていた。
ただでさえ多忙なことに加えて、混沌の蛇の存在が彼女への負担を大きくしていた。
そんな彼女のことを、ミーアは、ずっとずっと友人として気遣っ

てくれていたのではなかったか？
ヴェールガ公爵令嬢としての役割を代わりに担うことはできない。
邪教の秘密結社たる混沌の蛇に対抗する者たちを統率するのも、ヴェールガの聖女たるラフィーナの仕事だ。
けれど、生徒会長は……そうではない。
ミーアは自身が唯一担えるラフィーナの仕事を共に担おうと、そう、手を差し伸べてくれていたのではなかったか？
友とはなにか？　それは重荷を分かち合い、苦楽を共にする者だ。
ミーアはまさに、ラフィーナの友たらんと行動していたのだ。
ラフィーナを絶対視せず、特別扱いしない友達だから、ミーアは立候補を表明した。
ラフィーナの隣に立つ者として……。その重荷を共に分かち合うために。
そうして、ラフィーナは気づく。
ミーアの選挙公約……。かの帝国の叡智の提示した選挙公約はラフィーナと大差ないもの。
ほとんど同じといっても過言ではない程度のものだった。
レムノ王国の革命を止め、自国で次々と改革を行ってきた……あの帝国の叡智の冴えが、その程度にとどまるものだろうか？
――まさか、わざと……？
革新的な政策を提案することなど、実は簡単なことではなかったか？
にもかかわらず、ミーアは、あえてラフィーナの施政をなぞるような政策を提示した。
なぜなら、それはラフィーナを負かすことを目的とはしていないから。
あなたの仕事を引き継ぎ、あなたの重荷を背負いましょうというミーアからのメッセージだったから。
ラフィーナが、安心してミーアに仕事を任せられるような、そういう配慮から。

――それなのに、私、ミーアさんに、なにを言ったの……？
ラフィーナは、自身の言葉を思い出して……愕然とした。
勝てないから、立候補を取り下げろと……。
ラフィーナの負担を共に担おうと、手を差し伸べてくれたミーアの……、その手を振り払うかのようにして……。
大切なお友達に……傲慢にも慈悲を与えようとした。
――もしかしたら私は、お友達だなんて言って……ミーアさんのことを信用していなかったんじゃないの……？
「あ……み、ミーアさん……」
口からこぼれ落ちた声は思いのほか弱々しくて……小さく震えていた。
去り行く背中に手を伸ばしかけ、その手は、けれど空を切る。
いったい、どんな言葉をかけられるというのだろう？
どんな顔をして、話しかければいいのだろう？
――今さら、お友達だなんて、都合が良すぎる……。
そう思った時、もはや声は出てこなくって……。
ラフィーナが絶望の渦に飲み込まれそうになった、まさにその時！
ふいにミーアが立ち止まった。
「ラフィーナさま……、わたくし思うのですけど……」
振り返りもせずミーアは言った。
「お友達って多少の過ちや、失礼を許しあってこその存在だと思いますわ」
「……ぇっ？」
耳に届いたその言葉が、信じられなくて……ラフィーナはかすれる声でつぶやく。
――ミーアさんは……私のことを、許してくれるというの？　でも……。
「〝お友達〟とはそういうもの……。ですわよね、ラフィーナさま」
そう言ってミーアは振り返り、はにかむような笑みを浮かべた。

――お友達……。これが、私のお友達……？
瞬間、ラフィーナは理解する。
確かに目の前の少女、ミーア・ルーナ・ティアムーンが、紛れもなく自身が求めていたお友達であるということに。
ずっとずっと、こんな風にわかりあって、心を許しあえる人を求めていたのだということに気づいて……。
「……っ！」
ふいに、ラフィーナの視界がぐにゃりとゆがむ。
その美しい瞳には、じわりと大粒の涙が浮かび上がっていた。
咄嗟にラフィーナはうつむき、唇を噛み締める。
――どうして、涙が？　なんで、私、泣いてるの？
人前で泣くことなど滅多になかったラフィーナは、自分自身の堪えようのない感情に、翻弄されて戸惑ってしまった。
――嬉しいのに、どうして……？　こんな顔、ミーアさんには見せられないわ……。
なんとか、我慢しようとする。けれど……、涙は後から後から湧き出してきて、止めようがなくって、気づけば、鼻もくすん、と音を立て始めて……。
ラフィーナは、くるりと踵を返し、泉に歩み寄ると、冷たい水で顔を洗った。
ばしゃばしゃと、頭から水をかぶり、目元をごしごし、何度もこすって……。
それから、改めてミーアの方を見た。
ありがとう、も、ごめんなさい、も言葉にはできなかった。
声を出してしまったら、また、涙で震えてしまいそうだったから。
ただ、精一杯の泣き笑いを浮かべて、ミーアを見つめる。
――ああ、ミーアさんとお友達になれてよかった……。
その美しい瞳は涙のせいで、ほのかに赤く染まっていた。
「ミーアさん……」

その声を聴いた瞬間、ミーアの頭がすっと冷えた。
ぞわわっと背筋に走る悪寒……。
その身を戦慄が駆け抜ける！
いつでも落ち着き払い、穏やかだったラフィーナの声。その声が震えていた。
ミーアは今までの自身の行動を顧みて……、悟る。
あ、これは、やらかしたぞ？　と。
やけくそになり、思いっきり皮肉をぶつけた挙句、ラフィーナの呼びかけを無視してしまった。
結果、ラフィーナは声を震わせるほどに――怒っている！
名前を呼ぶぐらいしかできないほどに、激怒！　怒り狂っている！
――ひっ、ひぃいいいいっ！　まままま、まずい！　まずいですわっ！
ミーアは完全に忘れていた。
選挙で負けようが、なんだろうが……そこで世界が終わるわけではない！
ラフィーナを怒らせていいはずがないのだ！
――ど、どどど、どうすれば？　どうすればいいんですのっ！？
もう、さっきのわたくしのバカっ！
ミーアは懸命に考える。
なんとか、先ほどの自身の行動の言い訳をしようと、考えて、考えて……結果！
「ラフィーナさま、わたくし思うのですけど……」
怖くて、ラフィーナの顔が見られない。なので、背中越しに、ミーアは必死に訴えかける！
「お友達って、多少の過ちや、失礼を許しあってこその存在だと思いますわ！」
ミーアとラフィーナはお友達。ならば、そう！
お友達の条件に、無礼を許しあうというものを含めてしまえばいいのである。

ミーアはそこに活路を見出した。そうして勝手に定義を決め、押し付けて、その上で、ミーアは続ける。
「〝お友達〟とは、そういうもの……。ですわよね、ラフィーナさま」
お友達になろうと言い出したのは、あなたの方ですよね？　ということは、許さないわけにはいかないですよね？
……などという、先に申し入れた方の弱みにつけこんだ論法である。
実に姑息である。
その上で、ミーアは笑みを浮かべた。
ちょっとうっかりやっちゃったけど、許してね！　という誤魔化しの笑み。
そう、いわゆる〝てへぺろ！〟である。
それを見たラフィーナは、そっとうつむいた。
よく見るとその美しい肩はフルフルと震え、しかも、ぎゅっと唇を噛み締めている！
――ひ、ひいいいっ！　やっぱり、すごく怒ってますわ。やばいですわっ！
素直に謝るべきだったと後悔するミーアであるが、その言葉を待たずにラフィーナはくるりと踵を返した。
そのままずんずん、と泉の方に向かって歩いていくと、その水を思い切り頭からかぶった。
――そっ、それほど？　頭を水で冷やさなければならないほどに、ラフィーナさまの怒りは深いんですの？
そのまま、くるりとラフィーナは後ろを振り向いた。
それから、無理矢理に笑みを浮かべる。
怒りからか、頬はひくひく震えていて、なにより、その瞳は真っ赤に染まっていて……。
――ひぃいいいっ！　ここ、怖いですわ……。ラフィーナさま、目を真っ赤にするほど怒ってらっしゃるのですわね。けれど、お友

達だから、許そうと……。そのような葛藤をされているのですわね。
これは、なんとか、許していただけたのかしら……。
その笑みを見て、一応は安堵のため息を吐くミーアであった。
――ラフィーナさまとお友達になっておいて、よかったですわ……。
ミーアの瞳は恐怖のあまり、わずかに涙ぐんでいた……。

第三十六話　朱に交わりて……

清めの泉で、すっかり精神力をすり減らしてしまったミーアは、ふらふらになりながらアンヌの前に現れた。
「ミーアさま、大丈夫ですか？」
「ええ、問題、ございませんわ」
「そうですか……？」
首を傾げつつも、てきぱきとミーアの髪を拭いて、それから聖衣を着させていくアンヌ。
すべての作業を終えて一歩下がって全身を見てから、満足げに一つ頷いて……。
「ミーアさま、頑張ってくださいね」
元気づけるように言う。
けれど、それを聞くミーアは、どこか上の空だ。
先ほどのラフィーナの恐ろしい顔を見て、すっかり魂が抜けかけているのだ。
「あ、それとミーアさま、以前も申しましたが、ベールは軽くて落ちやすいので動く時には気を付けてくださいね」
「……はぇ？　あ、え、ええ。わかりましたわ。ありがとう、アンヌ」
そこで、ようやく、口から抜けかけていた魂が戻ってきた。
ミーアは自らの格好を見て、ふっと疲れた笑みを浮かべた。
――ああ……負け戦ではありますが、将が戦場に行かぬわけにはいきませんわね……。

生徒会長選挙。
それは、投票と厳かなる儀式によって構成される学校行事だった。
会場となる大聖堂、前方には大きな聖餐卓が配置されている。卓

の上には大きな銀の盃が置かれ、そこには血のように赤い葡萄酒がなみなみと注がれている。
それは聖人の血を表すものだった。
生徒会長に選出された者は盃から葡萄酒を飲み、聖人の血をその身に取り込むことで、清廉潔白、公明正大な会長になることを、神の前で誓うのだ。
すでに、大聖堂には生徒たちが集まっていた。
最後に現れた立候補者たるミーアとラフィーナの入場によって、投票の儀は始まった。
いくつかの聖歌を歌った後、立候補者の最後の演説の時となる。
先に演説をするのはミーアだ。
聖餐卓の前に進み出たミーアは、静かに生徒たちに目を向ける。
っと、その時だった。
「ミーアさま、頑張れっ！」
いくつかのそんな声が、耳に入ってきた。
セントノエル学園において、生徒会長選挙は神聖なる儀式だ。
当然、立候補者への声援などもってのほか……ではあるものの、まぁ、でも、中央正教会の神さまは寛容なので、この程度のことではお咎めはない。
「これこれ、静かにしなさい」
会を取り仕切る司祭が少しばかり注意するぐらいで、退場処分などにはなったりしない。
ミーアは声援が聞こえてきた方、腕に赤い布を巻いた一団――自らの支持者たちの方にそっと目を向けた。
――てっきり、みなさん、諦めて、早々に離れて行くと思ってましたのに……。
完全なる負け戦。にもかかわらず彼らは団結し、誰一人脱落することなく、ミーアに付き従ってきてくれた。
一緒に選挙期間を駆け抜けた者たち、ともに苦労し、声を上げ、笑いあう、そんな思い出が脳裏をよぎり、ミーアは静かに微笑みを

浮かべた。
――なんだか、ちょっと楽しかったですわ。
思えば前の時間軸では、こんな風にして学校の行事を楽しむことなどなかった。
かつての近衛に負けない忠義者たちに心からの感謝をこめて、ミーアは深々と頭を下げる。
――ありがとう。いずれあなたたちの忠義には、必ず報いさせていただきますわ……。
と、その時だった。
ふいに、ミーアの頭にかかっていたベールがするりと滑り落ちた。
「あっ……」
ベールは風に流されて、そのまま、ちゃぽん、と銀の盃の中に落ちた。
見る見る、純白のベールは血を吸ったかのように赤く染まっていく。
――ああ、もう、最後までしまりませんわね……。
ミーアは慌てて、そのベールを拾い上げようとして……、
「……え？」
ふわり、とその頭に真新しいベールがかけられる。そして、ミーアの横から伸びた手が、そのまま濡れたベールを拾い上げてしまった。
恐る恐るそちらに目を向けたミーアは、驚愕のあまり固まる。
「らっ、ラフィーナさま？」
自らのベールをミーアの頭にかけたラフィーナは、そのままミーアの濡れたベールを軽く絞り、聖衣が汚れるのも気にせず、自らの腕に巻いた。赤く染まったベールを腕に巻き付ける、それは――証。
ミーア・ルーナ・ティアムーンを支持するという、その表明！
「らっ、ラフィーナさま、これは……」
傍で見ていた司祭の方をちらりと見て、それからラフィーナは一歩前に進み出た。

「私を支持してくださったみなさま、申し訳ありません。私、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガは今ここに、生徒会長への立候補を取り下げ、我が友、ミーア・ルーナ・ティアムーンを、生徒会長に推薦いたします」

凛とした声で、ラフィーナは宣言する。

「らっ、ラフィーナさまっ！」

長いセントノエルの歴史の中で、このようなことはただの一度もなかった。

投票日の当日、最終演説を前にしての立候補取り下げ。しかも、それをしたのが現生徒会長にして、ヴェールガの公爵令嬢たる者であるなど……。

あまりに常識外の事態に、悲鳴のような声を上げる司祭。

騒然とする生徒たち。

そんな中、ラフィーナはミーアの方に顔を向けた。

そのまま悪戯っぽい笑みを浮かべると、ちらっと小さく舌を出した。

――こっ、これは、いったい……？　なにが、どうなっているんですの？

ミーアは、ただただ混乱しつつも、その場に立ち尽くすことしかできなかった。

セントノエル学園において、選挙は神聖なる儀式だ。それは、神の前にささげられる厳かなるものだ。

けれど、中央正教会の神さまは寛容をもって知られている。

その行動が悪ふざけに類するものであれば当然裁かれもするし、儀式自体が無効と判断されることもある。

しかしながら、もしもその行動が真摯で、誠実な思いからの行動であるとするならば……、いかに儀式の慣習から外れようと許容される。

そう、開会の儀式の宣言において、セリフを噛もうとも……。

あるいは、投票の儀式において、常識外れの方法で立候補を取り下げても……。

かくて、セントノエル学園に新生徒会長が誕生した。
ミーア・ルーナ・ティアムーン。
帝国皇女の生徒会長就任は、決して少なくない影響を歴史に及ぼしていくのであるが、それはまだ先の話である。

第三十七話　聖女の悲劇とミーアの野望

「ふーむ……」

帝都ルナティア、新月地区の一角。朽ち果てた小屋の中に、一人の老人のうなり声が響く。

ルードヴィッヒ・ヒューイット。かつては帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンのもとで、その才覚をいかんなく発揮した彼も、年老いて、今やすっかり好々爺然とした風貌になっていた。

「ミーアベル殿下は、あまり勉学が得意ではないな……」

白く染まった口ひげを撫でながら、ルードヴィッヒは、ベッドに眠りこけるミーアベルを見る。

「よくお眠りだ……。しかし、やはりあの方の面影があるな」

頬にかかったサラサラの髪をそっと指で梳きながら、ルードヴィッヒはつぶやいた。

「ミーアベル殿下は、まだ若い。これからいかようにも育ち、伸びていけるはずだ。あの方の血を継いでいるのだから……」

静かに瞳を閉じる。まぶたの裏に甦るのは、彼の誇るべき主君である姫殿下の姿だ。

人々が希望を抱くに足る鮮烈なる叡智の冴え。それを体現した輝きに満ちた姿だ。

「我々には、未来への希望が必要だ。ミーア姫殿下のように、導となる光が必要なのだ」

帝国を導く道しるべ……。

帝国の叡智の血を引くミーアベルは、帝国臣民を糾合するための核となるかもしれない人だった。その際に必要な最低限の知識は身につけさせてあげたいと思っているルードヴィッヒだったが。

「これは、先が長そうだな……」

苦笑いを浮かべ、彼は古ぼけた机の前に腰掛けた。そこには何枚

もの羊皮紙が無造作に重ねられている。
「ラフィーナ・オルカ・ヴェールガ、か……」
年を取り、すでに第一線からは身を引いたルードヴィッヒだったが、かつての敏腕文官の元には、情報はいくらでも入ってくる。
無駄に腐らせておくこともないかと、彼は、現在の世界情勢とそこに至った時代の流れを思索することを、最近の日課としているのだが……。
「やはり、司教帝ラフィーナが世界に及ぼした影響は軽視しえないものがあるか」
彼女と、彼女の手足である聖瓶軍（せいびょうぐん）は、いまや世界を席巻するほどの勢力となった。
反乱分子をあぶり出し、徹底的に監視し、弾圧することによって、仮初の平和を実現する。その暴力的なやり方には反発も根強く、大陸は大規模な戦乱の渦中にあった。
「しかし、本来の聖女ラフィーナは、その程度のことが予測できないほど愚劣でもなく、そのような圧政を敷くほどには悪辣でもなかったはずだ」
幼年期から、ミーアと学び舎を共にしていた時期にかけてのラフィーナは、優れた知性と安定した精神性を両立した善良な人物だった。
同時代の英雄、天秤王シオン・ソール・サンクランドにも引けを取らないほどに、優れた指導者だと思われていた。
「いったい、なにが彼女をここまで変えてしまったのか……」
あえて言葉にしてみたものの、ルードヴィッヒの目には、その変化の原因は明らかであった。
「聖夜祭（せいやさい）における、生徒の大量毒殺事件……」
セントノエル学園の冬の一大イベント、聖夜祭。
そこで起きた無差別テロは聖女ラフィーナの名声を地に落とした。
同情すべき点はあった。
その当時、ラフィーナは多忙を極め、極度の疲労から病床に伏す

こともしばしばだった。
祭典の警備にまで目が行き届かなくても仕方がない面はあった。
さらに、敵の策謀もまた常軌を逸していた。
ラフィーナは確かに優れた知性の持ち主ではあったけれど、残念ながら、彼女は秀才ではあっても天才ではなかった。
彼女は敵の思惑のすべてを見抜くことはできなかったのだ。
暗殺自体は警戒していた。
混沌の蛇という秘密結社を相手にしていたのだから、その配慮は当然のことで……。自分を含めた要人たちには暗殺の魔手が伸びないように、しっかりとした警備体制を整えてはいたのだ。
けれど、彼女は見誤っていた。
まさか敵が、セントノエルの生徒ではなく、その使用人たちをターゲットにした無差別テロを起こすなどと、考えもしなかったのだ。
祭りの日、日ごろの働きを労うために振舞われた豪勢な煮込み料理。その中に、まさか、毒が仕込まれているなどとは、思いもよらなかったのだ。
”ラフィーナの名声を攻撃する”――ただそれだけのことのために、使用人（ソフトターゲット）を無差別に虐殺する、そんな非道がこの世にあることなど、ラフィーナは想像すらしなかったのだ。
通常であれば……、使用人が何人死のうが貴族たちは気にしない。
貴族以外は、人にあらず、というのが貴族の価値観だからだ。
けれど、ラフィーナはヴェールガの聖女だった。
たとえ、平民であろうと貧民であろうと見捨てることは許されない、そのような立場の人だった。
ゆえに……聖女の名は失墜する。
貴族の生徒たちの警備は完璧だったのに使用人たちに対しては手を抜いた……。そう非難する声があったのだ。
清廉にして潔白なガラスの聖女の名声は、傷物になってしまった。
その傷は、余裕のないラフィーナにとって致命傷となった。
幾度となく胸を襲う罪悪感は、いつしか憎悪へと形を変え、ラフ

ィーナを強権の指導者へと変貌させる。
人々の中に隠れ潜む「混沌の蛇」を狩り出すため、彼女は苛烈な管理体制を敷いた。
黒はもとより、灰色すらも許さない。疑わしき芽はすべて摘み取る、完全無欠な管理体制。
これにより、秘密結社「混沌の蛇」はひとたまりもなく壊滅すると、そう思われていたのだが……。
ルードヴィッヒは、帝国内で捕らえられた「混沌の蛇」の男を尋問した時のことを思い出した。
「お前たちがやったことは、お前たち自身の首を絞めているのではないか？」
そう問いかけたルードヴィッヒに、男は勝ち誇った笑みを浮かべて答えた。
「蛇は死なない。なぜなら、この状況こそが我らの描いた状況なのだから」
と。
その言葉を聞いた時、ルードヴィッヒは慄然とした。
混沌の蛇の目的が、秩序の破壊だというのであれば、確かに、彼の言っていることは理に適っていたからだ。
司教帝ラフィーナの恐怖政治は、中央正教会の築いた秩序に対する攻撃であった。
ラフィーナが中央正教会の権威のもと強圧的な行動をすればするほど、人々の心は中央聖教会から離れていく。この地の秩序を担っていたもの、価値基準となっていた「神の権威」はラフィーナ自身の手によって、今まさに破壊されている。
そして、何年かの後、ヴェールガは倒れ、周辺の国々は正義と公正の根拠を失う。
後に残るのは、混沌のみだ。
「混沌の蛇……。人が造ったすべての秩序の破壊を目的とした秘密結社か……」

ルードヴィッヒは、男の言い分の正しさを認めないわけにはいかなかった。
世界は、確かに混沌の渦中にあるからだ。
「だが、もしも、ミーア姫殿下だったら……」
わかっている。それが、希望的観測に過ぎないということに。
けれど、ルードヴィッヒは思わずにはいられなかった。
「帝国の叡智の智謀の冴えをもってすれば……、いや、もし仮にあの方にできなかったのであれば、誰であっても、防ぐことはできなかっただろう。唯一可能性があったのが、ミーア姫殿下だったのだ」
もしも、セントノエルの学園行事を取り仕切る生徒会長が、ミーアであったならば……。
混沌の蛇の悪辣な企みをも看破して、世界を救うことができたのではないか……。
「帝国の叡智、輝ける月の女神たる、ミーア殿下であったのなら……」
「ふぁ？　ルードヴィッヒ先生……？」
「ああ、ミーアベル殿下……、お目覚めですか？」
ルードヴィッヒは、優しげな笑みをベルの方に向けた。
「いま、なにか言ってましたか？」
「いえ、なんでもありません。それよりよく眠れましたか？」

ミーアベルは、この時のルードヴィッヒのひとり言をほとんど聞いてはいなかった。
ゆえに、ミーアは知らない。
聖夜祭の陰謀も。ラフィーナの代わりに、自身が何をしなければならないかも……。
ルードヴィッヒの過剰な期待が、自らの双肩にのしかかってくることなど、まったく想像すらせずに……。
「難しい公約は置いといて……。とりあえず……、あ、そうですわ

！　聖夜祭で、わたくしの手作りキノコ鍋を振る舞うのは絶対にやりたいですわね！！」

などと、不穏なことを考えるミーアなのであった。

第三十七話　聖女の悲劇とミーアの野望（後書き）

本日、コミコ版を削除する関係で、あちらにしか載せていなかった番外編をこちらに移します。
また、そのタイミングで活動報告に告知を載せたいと思いますので、よろしければ足を運んでいただけると幸いです。

番外編　十日遅れの誕生日会（前書き）

コミコ版の完結記念番外編をこちらに移したものです。
本日は番外編と本編一話分の二話投稿となっております。

番外編　十日遅れの誕生日会

ミーアの地下牢での生活は基本的にはとても退屈なものだった。

娯楽などは当然与えられないし見張り役は、罵詈雑言が飛んでこないだけマシという者ばかりだったから、楽しい会話など望むべくもない。

結果、ミーアは

「五千六百一、五千六百二……」

地下牢の石に入ったヒビの数を数えるという、いささかヤバイ遊びに没頭するようになっていた。精神的に結構キテいるといっても過言ではないだろう。

ちなみに石の数や石についたシミの数は、すでに数え済みだ。

……いろいろと末期である。

「こんにちは、ミーア姫殿下」

ふいに、地下牢には珍しい可愛い声が聞こえた。

「あら？　幻聴かしら」

などと、ボケーっと顔を上げたミーアの視界に映ったのは自分の身の回りの世話をしてくれている女性、アンヌの姿だった。

「まぁまぁ！　アンヌ、よく来ましたわね！」

それは、年末も差し迫った冬の日の出来事だった。

平民は冬の準備に忙しく、ここ七日ほどはアンヌも姿を見せていなかった。

これはいよいよ見捨てられたか？　とミーアがさめざめと泣いていたのが今から三日前のこと。

見捨てられてなかった喜びを胸にミーアは、久しぶりの会話相手を満面の笑みで迎え入れる。

っと、その視線が、アンヌの首元に留まった。

「あら、面白いものつけてますわね」
「あ、はい。えへへ、実は今日、私の誕生日なんですよ」
アンヌは、首に巻いた襟巻を指でつまんで見せた。
網目が不ぞろいで、安い毛糸を使っているため決して上等とは言えない代物。けれどアンヌは、とても幸せそうな笑みを浮かべている。
「……良いご家族なんですのね」
小さくつぶやき、ミーアはすでに処刑された父親のことを思い出した。
過保護に自分を甘やかしてくれた父。皇帝としてはどうだったかはわからないけれど、娘であるミーアにはいつでも優しい人だった。
なんだかちょっとだけ、しんみりしそうになったから、ミーアは小さく首を振って、話を変えることにした。
「そう、誕生日。そういえば、わたくしもこの前でしたわね」
「え……？」
アンヌはびっくりした様子で、瞳を瞬かせた。
「み、ミーア様、お誕生日だったんですか？」
「……もう七日も前ですわ」
ミーアは、ちょっとだけ呆れた顔でアンヌの方を見た。
「というか、あなた、帝都に住みながら、わたくしの誕生祭とか行ったことがありませんの？」
皇女ミーアの誕生祭といえば、毎年冬に五日もかけて行われる盛大なお祭りだ。皇帝の大号令のもと、帝国がまだ豊かだった頃には多くの露店が立ち並び帝国中から大勢の人が観光に訪れていたものだったが……。
「すみません。冬の時期は家の手伝いとかいろいろ忙しかったから……」
アンヌは言い訳をするような口調で言った。
「そういえば、妹たちにせがまれて行ったような記憶がありますけど、なんのお祭りだかまでは……」

「まぁ、それも今は昔の話ですわね」
あの頃の賑やかさを思い出し、ミーアは少しだけ寂しげな笑みを浮かべた。
「やっている当時は煩わしいと思ってましたけれど、なくなってしまうと、ちょっとだけ寂しいですわね」
「……そうですね」
アンヌは、何事か考えている様子だったが、結局は短く同意しただけだった。
それから、アンヌの妹が書いていたという物語の話を聞いたり、街の様子を聞いたりして、その日はお開きとなったのだが……。

次にアンヌが訪れたのは三日後のことだった。
こそこそと見張りの方をうかがいつつも、アンヌは素早くミーアの地下牢に入った。
「どうかしましたの？　アンヌ」
「しっ。ミーア姫殿下、いつも通りにしてください」
ささやき声でそう言うと、アンヌは見張りに背を向けるようにして、ミーアの方を見た。
「今日は御髪（おぐし）を整えますね。どうぞ、後ろを向いてください」
そう言って、そそくさと、ミーアの向きを変えてしまう。
「ちょっ……、どうしましたの？　アンヌ、そんな強引に……え？」
アンヌはミーアの髪を整えるふりをして、さっと、ミーアの手に〝あるもの〟を手渡した。
「これは……クッキー？」
「はい、たまたま手に入れることができました」
「まぁ！」
ミーアは小さく声を上げた。
大陸全土を大飢饉が襲って以来、帝国の食糧事情は極端に悪化している。皇女であるミーアでも甘い物を口にすることは極めて稀なことであった。

まして地下牢に堕とされて後はなおのことである。
「お早く。見つかったら食べられてしまいます」
「あっ、そうでしたわね。では……」
ミーアは、久しぶりの焼き菓子を大切そうに両手で持った。
それから、わずかばかり震える口に、それを入れる。舌の上に乗せた瞬間、それはカサカサの乾いた土のような感触を返した。
けれど、かみ砕いた途端、それは甘味へと姿を変える。どこか安っぽい、けれど、まぎれもなくそれは甘味。香ばしい焼いた麦の香りと、わずかにまぶされた香料の花のような香り……。
「ああ……」
思わず息を吐く。この地下牢にきて以来、それは一番のご馳走だった。
「お誕生日、おめでとうございます」
ふいに、アンヌが声をかけてきた。
「これは、そのために……？」
「はい。十日も遅くなってしまい、申し訳ありません」
「……手に入れるの、大変だったのではなくって？」
このお菓子を手に入れるのが、どれだけ大変だったことか、ミーアにだって察しが付く。
それを家族でもない自分に渡してしまってよかったのか……。ミーアはとても気になった。
「はい。特別です。ミーア様、お誕生日だったから」
「だからって……」
「だって、やっぱり寂しいじゃないですか？　お誕生日をお祝いしないのって。この世界に生まれてきたことを誰だって祝ってもらう権利があるって私は思うんです」
鼻息荒くいってから、アンヌはちらっと舌を出して、
「えへへ、ちょっと偉そうに言ってしまいましたね。無礼をお許しください、ミーア姫殿下」
かしこまった口調で、頭を下げるアンヌにミーアは思わず吹き出

すのだった。
その十日遅れの誕生日のことを、ミーアは、ずっと忘れなかった。
断頭台の上でも……その先の時間でも。

かくて、時は流転して……。

「ああ、疲れ、ましたわ」
国をあげての誕生祭、それに続く四公爵家でのパーティー。
九日にも及ぶ外出で、ずっと愛想笑いを続けていたためミーアの顔はすっかり筋肉痛になっていた。
「なくなってしまうと寂しいと思っておりましたけれど、やっぱり煩わしいですわ」
ミーアは夏に冬が恋しくなり冬に夏が恋しくなってしまうタイプである。秋と春は、食べ物が美味しいので、恋しくなったりはしない。
幸せな性格なのである。
ドレスを脱ぎ捨てて、ベッドに横たわるミーア。ぐでーっと脱力して、そのまま寝てしまいそうになるが……。
「そんな格好で寝てはお風邪をひいてしまいますよ。せめて、部屋着に着替えましょう」
アンヌは苦笑しつつ、ミーアのそばに歩み寄る。
ミーアは、彼女が持っているお盆に目を向けた。
「あら、それは？」
「料理長からです。お疲れだろうから、って。牛の乳（ミルク）を温かくしたものみたいですよ」
「……美味しいんですの？」
「わかりませんけど、ハチミツで甘みもつけてあるとか」
「いただきますわ！」
ミーアは、甘味がついていれば大抵のものは美味しく感じる。
幸せな味覚なのである。

ベッドのふちに腰かけ、アンヌから陶器の器を受け取る。白くホカホカのミルクからは、あまーい匂いが漂ってきて……ミーアは、ほわぁっと満足そうなため息を吐いた。
「ところで、ミーアさま、今日これからのことなんですけど……」
「ああ、そういえば、アンヌのお誕生日でしたわね」
今、気づきました、とばかりにパンと手を叩くミーア。実にくさい演技である。
それからミーアは、隠しておいたプレゼントをアンヌに差し出した。
「え？　あの……それは？」
「プレゼントですわ」
中身は、高級なお菓子である。
「あっ、ありがとうございます」
お礼を言うアンヌ……だったが、ミーアは彼女が、なにか言いたげな顔をしていることに気が付いた。
「どうかなさいましたの？　ああ、ご家族でお誕生日会をするから今日は帰りたいとか、そういうことかしら？」
「いえ、違うんです。えっと」
アンヌは、もじもじ、ソワソワしてから、
「すごく失礼なことだとはわかっているのですが、ミーア様にも来ていただけないかと……」
「はぇ？」
口をぽかーんと開けるミーア。
「あ、あの、妹たちが、その……ミーア様にも一緒にお祝いするんだって張り切ってしまって……」
アンヌは、ちらっとミーアの顔を見て、それから誤魔化すように微笑んで、
「あ、はは、でも、お疲れのようですし……ダメですよね。申し訳ありません。変なことを言ってしまって……」
「あなたは、いつも十日遅れで誕生日をお祝いしてくださるんです

のね」
ミーアは、ぎゅっとアンヌの手を握りしめた。
「へ？　あの、み、ミーア様？」
「もちろん、行かせていただきますわ、アンヌ。ええ、喜んで」
そうして顔を上げたミーアは輝くような笑みを浮かべていた。
その数日後。
ミーアはアンヌにセントノエル学園に一緒に行ってほしいと切り出すことになる。
その先に、どんな冒険が待っているのか、今はまだ知らないミーアであった。

番外編　十日遅れの誕生日会（後書き）

本日、告知したいことがあり、活動報告を更新いたしました。
お手数ですが御覧いただけると幸いです。

第三十八話　ミーア姫、できる女になる……

「うーん……むむむ……ぬぬぬ」

生徒会室にミーアのうめき声が響き渡っていた。

新生徒会長ミーアの最初の仕事は、生徒会の陣容を決めることだった。

基本的に行政能力が皆無なミーアにとって、しっかりと側近を固めることは極めて重要なことだった。

凡百の者であれば短絡的に、自分に都合の良いイエスマンを配するところだが……、その点、ミーアは一味違う。

そう、彼女は理解している。

「下手な人間を選んだら……わたくしの首が飛びますわ」

それも物理的に……である。

なにしろ、あのラフィーナから生徒会長の座を譲られてしまったのだ。

選挙で勝ったならばまだよかった。投票したやつが悪いと言うこともできるのだから。

けれどラフィーナは、ミーアを信用して会長の立場を譲ったのだ。

その信用を裏切ったりしたら、どんなことになるか……。

「ただでさえ、清めの泉でやらかしたのを許していただいているのですし……、もしここで、わたくしが変なことをしようものならば……、ひぃいっ！」

ミーアは、真っ赤に染まったラフィーナの瞳を思い出して、震え上がる。

正直なところ、なぜ、ラフィーナが会長の座を譲ってくれたのかはわからない……わからないが、ここで自分がさらにやらかすと、どういうことになるのかはわかる。よくわかる。ありありと、実感を伴って、そのヴィジョンを見ることだってできる！

「ら、ラフィーナさまの信用に全力でお応えしなければ……大変なことにっ！」
ゆえに、ミーアは選ばなければならないのだ。ルードヴィッヒ並みに頭の切れる生徒会役員たちを！
その者たちが上げてきた進言に、一言二言つけて許可を出してさえいれば、物事が回っていくことこそがミーアの理想。
そう、ミーアは周りにイエスマンを置きたいのではない。自らがイエスマンになりたいのだ！
「まずは、副会長はラフィーナさまにやっていただくとして……」
取り返しがつかない状況になって怒りを買うより、早い段階で指摘してもらうほうがまし。さらに失敗しても「ラフィーナさまの責任でもある！」と言える！　なぁんて姑息な考えがあったりする。
「もう一人の副会長は……、シオンですわね」
同じ考えから、ミーアはシオンを巻き込む。
ティアムーンだけでなく、サンクランドまでしくじったとなれば誰も文句は言うまい。
「というか、あいつだけ楽をするとか、ありえませんわ！」
積極的に周囲を巻き込んでいくスタイルである。
さらに、
「会長補佐としてアベルには近くにいていただくとして……」
ちゃっかり、自分の欲望も反映させておく。肉食系乙女なミーアである。
「あとは、書記にティオーナさん……かしらね。うーん、選挙活動ではお世話になりましたし、クロエにも会計をやっていただくとして……」
この辺りは、選挙活動中のお礼という意味合いである。
「なんだか、これでは混沌の蛇と戦ういつものメンバーという感じですわね……ふむ」
っと、そこでミーアは思いつく。
「そうですわ……サフィアスさんにも、書記補佐として入っていた

だくのがよろしいですわね」
　ミーアはにんまりと意地の悪い笑みを浮かべた。
「こいつが混沌の蛇の関係者だということは、はっきりしてますし……。だとすれば、下手に自由にさせておくより、生徒会の中に組み込んでしまって監視下に置いたほうが得策ですわ。周りを反混沌の蛇の者たちに囲まれていては、さぞや居心地が悪いことでしょうし……」
　これは、よいことを思いついた、とミーアは鼻歌交じりに、朗らかに言った。
　ちなみに、サフィアスが混沌の蛇の関係者だということは、別にはっきりとはしていないのだが……。
「たっぷりと、こき使ってやりますわ！　悪いことなど企めないぐらいに」
　ミーアは上機嫌に言うのだった。

　ミーアから副会長になってほしいという依頼を受けたラフィーナは二つ返事で了承した。
　引継ぎの観点から見れば、それは妥当な人事だと思えた。
「それに、人心の安定を図ってかしら……？」
　本来、ヴェールガ公爵家の人間が、生徒会長から外れただけでも大変なことなのだ。その上、生徒会にも入らなければ、さすがに影響が大きすぎるだろう。
　ラフィーナの負担軽減という観点から見れば好ましいことではないが、それでも副会長であれば、生徒会長の時と比べると、はるかに気楽でいられた。
「ミーアさんのおかげで気持ちが楽になったのだから、このぐらいのお手伝いはなんともないのだけど……」
　小さく首を傾げながら、ラフィーナはミーアの生徒会人事を頭の中で反芻する。
「思い切ったことをしたものね、ミーアさん」

基本的に、生徒会にはティアムーンやサンクランドの影響の薄い生徒を選ぶのが慣習だった。
けれど、ミーアの人選は、その慣習をあっさりと無視したものだった。
「シオン王子を選ぶとは思わなかったわ。それに、アベル王子も……」
後で聞いた話ではあるが、ミーアの選挙公約作りには二人の王子の協力があったのだという。
「選挙公約を手伝ってくれた二人に、そのまま生徒会の運営にも携わってもらう。とても自然な流れね……。そして、同じく選挙活動で貢献したティオーナさんとクロエさんを生徒会に入れる……。表向きは納得感がある人選……だけど」
ラフィーナは、スゥっと瞳を細める。
「これは……、ティアムーンとサンクランド、レムノ……そして、ヴェールガが手を結んで混沌の蛇と戦う、その表明のように見えるわね……」
混沌の蛇と戦う者たちを、セントノエル学園の生徒会に集めること。この学園生活を通じても歩調を合わせていく……。
ラフィーナは、そんなミーアの思惑を見て取っていた。
「それに、そう。あのサフィアス・エトワ・ブルームーンを生徒会に、ね……」
ラフィーナは瞑目して、先日のサフィアスの顔を思い浮かべる。
おどおど、びくびくと、実に頼りない、狡猾な小物といった印象だったが……。
「あまり好ましい人材とも思えないけど……。でも、こういう風に機会を与えられたら、必死で働かざるを得ない……。そういうことなのかしら……」
先日の失敗を咎めることなく、むしろ起用する。
その意気に感じて、サフィアスが奮起すれば儲けもの。
「ミーアさんの立場であれば、いずれにしても四大公爵家の誰かを

入れないわけにはいかない。であれば、むしろ、彼が御しやすい……」

ちなみに、混沌の蛇が帝国四大公爵家のいずれかに接触していたという情報は、ラフィーナのもとにも届いているのだが……、さすがにサフィアスがそうだとは思っていないラフィーナである。

「あとはそうね……ティアムーン国内の貴族と、それ以外の生徒たちへのメッセージかしら……」

恐らく、ミーアは線引きしたのだ。

帝国貴族に対する優遇を、どの程度するのかということの。

えこひいきをまったくしないというのは、それはそれで怪しい。

ラフィーナのような立場の者ならばともかく、帝国皇女が生徒会長になりながら、自国の貴族を役員に起用しないというのは、いかにも不自然。

ティオーナは、選挙活動中からミーアを応援していた、ある種の子飼いの者と見なされるだろうから、それ以外に、誰かを起用する必要があった。

「四大公爵全員を入れても、本来はおかしくない。けれど、それでは周囲からの反感を買う。一人を起用するというのは、なるほど、絶妙ね……」

全方位に張り巡らされたミーアの配慮に、ラフィーナはただただため息を吐く。

「ミーアさんは、政治もできる方なのね……」

ラフィーナの中で、ミーアの評価が「できる女」に格上げされた。

……自身の評価が割と大変なことになっていることを、ミーアはまだ知らない。

第三十九話　扇動者ミーア！

生徒会の陣容が決まると、ミーアは意気揚々とサフィアスのもとを訪れた。
「サフィアスさん、いらっしゃるかしら？」
鼻息荒く扉をノックすると、中からはげっそりした顔のサフィアスが出てきた。
「こっ、これは、ミーア姫殿下……。申し訳ありません。今、部屋が散らかっておりまして、すぐにでも……」
びくびくと応対するサフィアスに威厳たっぷりに首を振った。
「いえ。ここで結構ですわ。サフィアスさん、わたくし、あなたを生徒会の書記補佐に任命いたしましたの」
「……はぇ？」
きょとん、と首を傾げるサフィアスにミーアは続ける。
「副会長にはラフィーナさまとシオン王子を、会長補佐としてアベル王子を、会計にはわたくしの大切なお友達のクロエを、書記にはティオーナさんを指名いたしましたわ」
混沌の蛇の手の者ならば、レムノ王国でのことはすでに知っているだろう。
シオンとアベルとが、ともに混沌の蛇に敵対していることは知られていることだった。さらに、邪教すべての敵対者たるラフィーナがおり、ミーアのお友達のクロエもいる。
ティオーナは……まぁ、ついでだが、彼女もレムノ王国に同行している。
つまり、ミーアは言っているのだ。
『お前の周りを、反混沌の蛇の者たちで固めて監視してやるから覚悟しとけよ、この野郎！』と。
ちなみに、加えて言うならば、辺土貴族のティオーナの補佐にサ

フィアスを付けたことも、ミーアの小粋な嫌がらせだったりするのだが。
その上で……、煽る！
「まぁ、いろいろやりづらいこともあるかと思いますから、別に断っていただいてもよろしいですわ。ただ、それでもこれはチャンスだと思いますけれど……」
勝ち誇った笑みを浮かべて、煽る煽るっ！
サフィアスが混沌の蛇だった場合、生徒会は敵地に他ならない。けれど、逆に言えばそこは、敵対勢力の懐ともいえる場所だった。獅子の穴に入らねば、獅子の子を捕らえることはできない。であれば、これはチャンスのはず……。
――ふふん、断りづらいでしょう？　けれど、もしも生徒会に入ったが最後、くだらない陰謀など企めないように、全員でがっちり監視してやりますわっ！
ミーアは、ふんすっと鼻を鳴らして、サフィアスの部屋を後にした。

「まさか、こんな結果が待っていようとは、思わなかった……」
ミーアを見送ったサフィアスは、へにゃへにゃと床に座り込んだ。ラフィーナに呼び出されて以来、サフィアスは部屋に閉じこもっていた。ラフィーナにさんざん脅されて以来、外に出るのが恐ろしくなってしまったのだ。
加えて、許嫁への手紙が彼の心を重くした。
サフィアスが生徒会に入れると知った許嫁は、心からサフィアスを祝福し、激励してくれたのだ。
『未来の夫であるサフィアス様が、ミーア姫殿下に厚く用いられていること、嬉しく思います。サフィアス様の資質をきちんと見極めて、評価してくださったミーア姫殿下には感謝の言葉もありません。姫殿下をお支えする大任、どうぞ立派にお勤めくださいませ』

こんな手紙をもらってしまったら、とてもではないが、ダメでしたとは言えない。
それは、あまりにも惨めすぎる。
そんなこんなで、すっかり生きる気力を失いかけていたところで、先ほどのミーアの来訪である。
「ああ、なにはともあれ、手紙だ。愛しのマイハニーに手紙を書かなければ……」
筆を取ったサフィアスだったが、唐突に、その手が止まる。
「……俺の資質を評価した……か」
それが間違いであることは、サフィアス自身がよくわかっていた。
自身が、愚にもつかない小物であることは、ここ一週間のやり取りで、痛いほど実感できていた。
「それでもなお、この俺にチャンスを与えてくださった……そういうことなのだろうか……」
ミーアは言っていた。ラフィーナもいるし、自分が見下していたティオーナもいる。
やりづらい環境だろうが、チャンスでもあると……。
「期待……はされていないだろうが……。いや、それでも、まったく期待がなければ声すらかけてはいただけなかっただろう」
与えられた生徒会役員という地位、それはサフィアスが自身の力で勝ち取ったものではない。
ミーアの、ただ一方的な温情によって与えられたものだ。
「ミーア姫殿下をお支えする、大任、か」
そんなものは、建前であると思っていた。
けれど……、今の彼には、その言葉が重みをもっているように感じられた。
「我が名誉を保ってくださったミーア姫殿下のために、チャンスを与えてくださったあの方に報いるために……。このご恩を無下にしたりしたら……俺は一生、ダメな男で終わる気がする……」

顔を上げた時、サフィアスの顔は、わずかながら凛々しさを増したように見えた。

ティアムーン帝国四大公爵家によるお茶会。通称「月光会（クレール・サユンヌ）」
定期的に行われるその会合に、珍しい人物が顔を出した。
「あら、珍しい。あなたが来るなんて何回ぶりかしら？　ルヴィさん」
エメラルダは、入ってきた人物を見て意外そうな顔をした。
「やぁ、ひさしぶりだね、緑月の姫君」
そう朗らかに笑みを浮かべたのは、四大公爵家の一角、レッドムーン家の令嬢、ルヴィ・エトワ・レッドムーンである。
短く肩のあたりで切り揃えた鮮やかな赤い髪。端整な顔には、男装の麗人という言葉がぴったりで、女子生徒でもついつい見とれてしまいそうな凛々しさがあった。
涼やかな瞳で室内を見回したルヴィは小さく首を傾げる。
「おや？　今日は一人かい？　蒼月の貴公子くんは来てないの？」
そう尋ねると、一転、エメラルダはムスっと不機嫌そうな顔で言った。
「生徒会の仕事が忙しいのだそうよ」
「ああ、そういえば、彼は生徒会に召集されたんだったか。だが、黄月の姫君はどうしたんだい？　確か、今年からセントノエルに通うはずだろう」
「ただ幸運のみによって地位を保ってきたイエロームーンなど知りませんわ。最古で最弱の黄色がいようがいまいが、関係などありませんでしょう」
「それはそうだけど、それでも一人で紅茶を飲むよりはいいと思うけどなぁ」
ルヴィは苦笑しつつ、エメラルダの正面に座った。
「じゃあ、せっかく来たのだし、私ももらおうかな」

「あら？　本当に珍しい。てっきりちょっと顔を出しただけかと思っておりましたわ」
「あまりサボってると、父上に怒られてしまうからね」
肩をすくめて、ルヴィは苦笑する。
「しかし、ミーア姫殿下には驚いたね。まさか、生徒会長に立候補するなんて……。しかも、ラフィーナさまに立候補を辞退させてしまうとは、なかなかどうして……」
目の前に出てきた紅茶を一口すすって、ルヴィは、ほうっと息を吐く。
「ペルージャン農業国産の紅茶だね。いやぁ、さすがに農奴の末裔なだけあって、大した品質だ」
「別に産地なんて知りませんわ」
ぞんざいに言って、エメラルダは不機嫌そうに鼻を鳴らす。
「私のもとに最高の品質のものが届けられる。それさえ徹底されていれば、産地の違いなど些細なこと」
「ん？　なんか怒ってないかな？　エメラルダ。もしかしてミーア姫殿下が生徒会長になったことが気に入らないとか？」
「ふん、別になんとも思ってませんわ。ただ、見る目がないと思っただけですわ」
「見る目がない？」
「どうして、サフィアスなんて無能者を選んで、私を選ばないのかしら……。しかも、ティオーナ・ルドルフォンなんて、田舎貴族まで選ぶなんて……許せませんわ。どうしてくれようか……」
その手に持つ紅茶が、プルプル震えていた。
「あー、一応言っておくけど、あんまり大きな騒ぎを起こさないようにね。まぁ、止めないけど……」
「あら、止めなくていいの？」
「あはは、だってさ、目をつけてた騎士を引き抜かれてしまったんだよ？　そりゃあ、私だって少しは、姫殿下には思うところがあるさ」

笑うルヴィの目は、しかしながら、まったくもって笑っていなかった。

かくして、四大公爵家の跡取りたちは、それぞれの思惑をもって動き出すのだった。

第四十話　再び集いし……

その日、ミーアはラフィーナにランチのお誘いを受けていた。
セントノエル学園の敷地内にある花園、通称「秘密の花園」にて、昼食会は行われた。
一面を薄紅色の花に彩られた花園。咲き誇る愛らしい花「姫君（プリンセ）の紅頬（スローズ）」の香りにうっとりしつつ、ミーアは、ラフィーナの用意した食事に舌鼓を打つ。
「これ、すごぉく美味しいです！　ミーアお姉さま」
ちなみに、本日は、ベルとアンヌも同行している。
超豪華ランチを前に、ベルは満面の笑みを浮かべていた。
「うふふ、ベルさんはすごく美味しそうに食べるわね」
ラフィーナは嬉しそうにベルの方に目をやった。
「えへへ、とっても美味しいから、仕方ありません」
ニコニコ笑うベルを、ラフィーナは微笑ましげな様子で見つめている。
つい最近まで、ラフィーナのことを怖がっていたと思っていたが……。
――この子、案外、世渡り上手かもしれませんわね……。
そういえば、ベルと接する時はいつもみんな、優しい表情を浮かべている。
――年齢的にはアベルとかシオンより一つ年下なだけのはずなのですけど、やたら子ども扱いされてますわね……。
「ねぇ、ミーアさん」
っと、不意にラフィーナが話しかけてきた。
「ミーアさんにとって、ベルさんって、大切な人なのよね？」
「もちろんですわ。わたくしの大切な……」
孫娘、などと口走りそうになって、慌ててミーアは黙り込んだ。

小さく言葉を呑み込んだ後、続ける。
「大切な、妹ですから」
「あら、珍しいわ。ミーアさんが言いよどむなんて……。ふふ、ミーアさんはお父さまのことが好きなのね」
ミーアベルがミーアの父親が外で作った子どもだと思っているラフィーナはそんなことを言う。
そういうことにしたのはミーアなので、なんとも言えないところだが……。
――お父さまが外で、わたくし以外の子どもを作ってきたからわたくしが嫉妬している……、などと思われるのはちょっと心外ですわ……。
ミーア的に父親のことは別に嫌いじゃあないのだが……、そんなに大好きと思われたくもない。
難しいお年頃なのである。
それはともかく、
「それで、ベルがどうかなさいましたの？」
「いえ、ベルさんがミーアさんの大切な人なのであれば、従者にはきちんとした人をつけなければいけないと思って。蛇が付け入る隙になるかもしれないでしょう」
「ボクの従者……ですか？」
ベルはきょとんと首を傾げた。
「ええ、ベルさんのお世話をアンヌさんがするのは大変だろうなって思って」
「そうですね……。ベルさまは、大抵のことはお一人でできてしまいますから、負担はそこまでではありませんが、ミーアさまと授業をご一緒できないのは……」
――そうですわ。アンヌにいてもらいたい時がどれほどあったことか……。
ミーアは心の中で同意する。
もしも、ベルに信頼のおける従者を用意できるのであれば、それ

に越したことはない。
問題は、それに見合った人材を探せなかったことだが……。
――ラフィーナさまの推薦なさる方ならば……。あっ！
ミーアは慌てて口を開いた。
「ですけど、部屋はわたくしたちと同じにしておいていただきたいですわ」
「え？　でも、狭いのではないかしら？」
それは否定できないところではあるのだが……、ミーアとしては、いつでもベルの話を聞ける状況を整えておきたかった。
「大丈夫ですわ。問題ありませんわ。いろいろ、お話したいこととかございますし……」
「あら、ふふふ。ミーアさんは案外、妹さんに甘いのね」
ラフィーナはおかしそうに笑って、それから、頬に手を当てて首を傾げた。
「でも、そうね。それならば、当分、ベルさんはミーアさんと同室ということにしておくわね」
「お心遣い感謝いたしますわ」
「それで、改めて、ベルさんの従者をしてもらう人なのだけど……」
そう言うと、ラフィーナはパンパンっと手を叩いた。
それを合図に、一人の少女がそこに入ってきた。
「あら、あなたは……」
「お久しぶりです、ミーア姫殿下」
「まぁまぁ！　リンシャさんではありませんの、お久しぶりですわね」
数か月ぶりに再会した懐かしい顔に、ミーアは思わず笑みを浮かべた。
レムノ王国での革命事件以降、彼女とは会っていなかった。
アベルやラフィーナの口添えもあって、酷い刑罰を与えられるということはないと聞いていたのだが……。直接、顔を見て、少しだけ安心する。

「元気そうでなによりですわ」
「兄ともども、その節は、大変お世話になりました」
深々と頭を下げるリンシャに、
「あら、やけに殊勝な態度ですわね……。どうかなさいましたの？」
ミーアは小さく首を傾げる。
あの時は、もっと砕けた口調で話しかけてきたように思ったのだが……。
「い、いえ……さすがに、その……、ティアムーン帝国の姫殿下に、失礼なことは……」
「ふふふ、その姫殿下を眠らせてさらった者たちのお仲間がなにを言っておりますの？　それが許されたのですから、今さら気持ちの悪い話し方をしないでいただきたいですわ」
冗談めかして言うミーア。それを見たリンシャは、一瞬、きょとんとした顔をして、それからラフィーナの顔をうかがってから……、
「それなら、お言葉に甘えさせてもらうわ」
諦めたように肩をすくめた。
「それで、リンシャさんがベルの従者として仕えてくださるんですの？」
確かに、リンシャは混沌の蛇とは敵対関係である。一定の信用が置けるだろう。それに、あの危機をともに乗り越えたリンシャに対して、ミーアは親近感を抱いていた。
「ありがとう、それはとても助かりますわ」
「こちらこそよ。セントノエルで学べるなんていい話、願ったりかなったりだったから」
ミーアの素直なお礼に、リンシャはちょっぴり照れくさそうな顔をした。
「うふふ、リンシャさんね、ミーアさんの役に立てるなら喜んでって、すぐに引き受けてくれてね」
「ちょっ、ら、ラフィーナさまっ！」
珍しく、慌てふためいた様子のリンシャに、ミーアは楽しげな笑

みを浮かべた。
　それから、ベルの方に目を向ける。
「ベル。こちらはリンシャさん。レムノ王国の人で、わたくしがとってもお世話になった方ですわ」
「そうなんですか？　よろしくお願いします、リンシャさん。ボクはミーアベルといいます。ベルって呼んでください。ミーアおば……お姉さまの、えーっと……」
「妹、ですわ。お父さまの隠し子で、あまり公にはできないあれやこれやがありますの」
「わかった。詳しくは聞かないわ」
　その様子を静かに見ていたラフィーナは上品な笑みを浮かべた。
「うふふ、よかった。じゃあ決まりね。それともう一人、ミーアさんには紹介したい人がいるの。どうぞ、モニカさんも入って」
　ラフィーナの声を合図に、メイド服に身を包んだ女性が入ってきた。
「お初にお目にかかります。ミーア姫殿下。モニカ・ブエンティアと申します」
「モニカさん……？　あら、あなた、もしかして、アベルのところにいた……」
　ミーアにしては珍しく、その名前を憶えていた。
　――たしか……、話してくれた時、ちょっと嬉しそうにしていた方でしたわね。
　知らない女の人の話を嬉しそうにするアベルに、ちょっぴりヤキモチを焼いてしまったミーアである。
　――ふーん、この方がモニカさんなんですのね。ふーん、へー。そうなんですのね！　アベルもやっぱり、大人のお姉さんには弱いんですのね！
　改めてモニカを見てミーアは頬を膨らませた。
「あの時は、姫殿下のおかげで、仲間たちも温情をいただくことができました」

「いいえ、こちらこそ助かりましたわ。あなたがいなければ、レムノ王国はもっと悲惨なことになっていたことでしょう」
ミーアは、ニコニコ笑みを浮かべつつ、
――ふん！　アベルは絶対に、渡しませんわっ！
心の中ではファイティングポーズをとるのだった。

かくして、ラフィーナの手配により混沌の蛇に抗する者たちは集められていく。
そんな折、ミーアのもとに、帝国からとある知らせが届けられる。
それは……。

第四十一話　質問上手のミーアさま

「ということで、第一回の生徒会の会合を開きます。といっても、今日は顔見せ程度ですわね」

ミーアは、生徒会室に集まった面々を見回して微笑みを浮かべて……それから、机の上に並べられた煌びやかなお菓子に目を向けてから、輝くような笑みを浮かべた。

「まぁ、自己紹介が必要とも思いませんから、早速、ケーキの方を……」

「いえ、ミーア会長。こういうのは形も大切ですよ」

優しい微笑みを浮かべたラフィーナにズバッとツッコミを受けて、ミーアは言葉を呑み込む。

「そ、そうですわね。では、手短に自己紹介と意気込みを……」

そのようにして、会合は始まった。

ミーア、ラフィーナ、アベルにシオン。もはや顔なじみになったビッグネームの卒ない自己紹介の後、クロエとティオーナの、ちょっとおどおどした自己紹介が続く。

そうして、最後に立ち上がったのが、緊張でやや強張った顔をしたサフィアスだった。

「このようにして、名誉ある立場の末席に加わることができ光栄に思います。不肖の身なれど、ミーア姫殿下の信頼を裏切らぬよう精一杯務めさせていただく所存です」

誰よりもお堅い挨拶をした後、席に着くサフィアス。それを見たミーアはちょっぴり意外な感じがした。

――ふむ、案外まじめな挨拶でしたわね。まぁさすがに混沌の蛇の者であっても、いきなり宣戦布告をするような真似はしませんわね。

などと考えていたミーアだったが、そんなものは目の前の甘いケ

ーキ群を前にしては、軽々と吹き飛んでしまう。
「では、硬い挨拶もここまでにして……、早速……」
「そうね。ではお茶とケーキを嗜みつつ……予算のお話をしましょうか」
「……はぇ？」
「各クラブから今年の予算配分について意見が集まっているわ。それに目を通して、ある程度のことを決めてしまいましょう」
「え？　あ、いえ、ラフィーナさま。その、そういうことはまた……」
「うふふ、数字の難しい話をする時にはやっぱり甘いものよね。さすがはミーアさんね」
にっこり笑みを浮かべるラフィーナ。
可愛らしく脇腹のところで拳を握り締めて、ぐっと気合を入れて、
「頑張って終わらせてしまいましょうね」
そんな風に言われてしまっては、もはやミーアはなにも言えない。
「そ、そうです、わね……。わたくしも、予算のことは、は、早く片付けた方がいいと思っておりましたわ。おほほ、が、頑張りましょう」
ミーアはしょんぼりしつつ、ため息を吐いた。
そうして、話し合いが始まった……のだが……。
ミーアはキョロキョロ、メンバーの顔をうかがい、空気を読みつつ……。
「あの、ラフィーナさま、ここなのですけど……」
わからないところの質問をしていく。
前の時間軸において、ルードヴィッヒと一緒に、帝国のあれやこれやを処理していたミーアは知っている。
この手の事柄は、わからないことをわからないままに話を進めると……後で、ものすごく怒られるということを。
……幾度もルードヴィッヒに怒られて涙目になったものである。
あまり初歩的なことを尋ねるのも問題ではあるが……、聞くべき

ところではきちんと聞いておかなければ、かえって相手の信用を損なってしまう。
そして、質問箇所の判断基準として、ミーアが参考にしたものこそ、他のメンバーの顔色である。
もっともシオンに関しては参考にならない。アベルも、ミーアの中では「できる男」認定されている。そこまで参考にはならない。クロエもなんだかんだで数字には強そうだ。参考にならない。
ミーアが特に参考にしたのは、ティオーナ、そしてサフィアスである。
彼らがわからなそうな顔をしている箇所であれば、恐らくそれなりに難しい話のはず。
すなわち、そこであれば聞くことができる！
ミーアは、わからないところを書き出しつつ、質問できそうなところは質問していく。
……そして、実のところミーアは質問するのが下手ではない。
これまた前の時間軸のことである。
幾度も、ルードヴィッヒに嫌味を言われたのだ。
「質問するのはいいです。ですが、考える前から、なんでもかんでも質問するのはやめてください」
「どこがわかっていないのかが、そもそもわかっていませんね。そのようなあいまいな質問ではなく、もっと具体的に」
幾度も……悔し泣きさせられたのだ。
ふぐふぐ鼻を鳴らしながら、懸命に歯を食いしばって、涙を堪えた苦い記憶が甦る！
そうして、ルードヴィッヒの薫陶のよろしきを得たミーアは、すっかり質問上手になっていたのである。
そう、ミーアは自分が何がわかってないのか、わかる人に成長したのである！
ミーアにとって成長の大きな一歩だ！

そんなミーアを見たラフィーナは……、
――ミーアさん……、ティオーナさんとサフィアスさんを本気で鍛えるつもりなのね……。
心底から感心していた。
話の最中、ミーアはずっとメモを取り、二人のことを気にしていた。
そうして彼らが理解していないであろうところは、わかりやすい質問をすることで、その理解を助けている。
自身が話している内容を、ラフィーナは理解することができている。けれど、それを誰かにわかりやすく説明することは、結構難しい。
まして、適切な質問を出すことで、ラフィーナの口から説明を引き出し、わかっていない者たちに理解させるのは容易ではない。
――二人のプライドを守りつつ、しっかりと知識を教え込む……。
さすがだわ。
ラフィーナの中でミーアの評価がバブリー気味に膨らんでいく。
いつかはじけて大暴落しないか、とても心配だ。

さて、生徒会の顔合わせもひと段落して、しばらく経ったころ。
ちょうど引継ぎの関係で、アンヌとリンシャがいない日があったため、ミーアは改めてベルから未来の話を聞こうとした。
すると……、
「あっ、そうです。だったら『ミーア皇女伝』を読むのが、いいと思います」
「聞き覚えのある書物……ですわね」
確か、図書室で見た歴史書の一節に登場していた書物だった。
「……ミーア皇女伝」
「はい、エリス母さまが書いた、ミーアお祖母さまの記録です」

ベルによると、図書室で目をさました際、焚書にされないように本棚に隠したのだという。
「なるほど、本を隠すならば図書館の中、ということですのね……」
ベルの後について、ミーアは図書室を訪れた。
「こっちです。お姉さま」
ベルは、まっすぐに図書室の奥へ。やがて一つの本棚の前で立ち止まる。
そこは以前、ミーアが歴史書を見つけた本棚だった。
分厚い本を数冊取り出すと、その裏から一冊のぼろぼろの本が出てきた。
「これがそうです、ミーアお姉さま」
ベルが取り出した本……、擦り切れた表紙のタイトルは、確かに「ミーア皇女伝」とある。
その本を手に取った時……ミーアは、いやぁな予感がした。
本全体から、得体のしれない瘴気が漂いだしているような、そんな悪寒が背筋を走った。
いやだなぁ、読みたくないなぁ、と思いつつ、まさか読まずにいるわけにもいかない。
ミーアは思い切って、本を開いた！
悶絶した！！
「こっ、これは……」
そこに溢れるのは、自身を褒めたたえる美辞麗句の数々。読んでいるだけで、腕に鳥肌が立ってくる。
ページをめくるたびに、顔が熱くなって、体が自然とグニグニし始める。
……ちょっと怖い。
気持ちを落ち着けるために、はふぅっと大きく息を吐き、ミーアは、
「へ、へぇー、このミーアって人、すごいんですのね。なんだか、物語の登場人物みたいな人ですわ」

なんとか、それだけつぶやいた。
「あはは、ミーアお姉さま。さすがにそれはオーバーですよー。ちゃんと、現実にいるじゃないですか」
おかしそうに笑うベル。本に書かれた超人ミーアと現実のミーアとを同一視するベルに、ミーアは頬を引きつらせる。
――いったいぜんたい、なにがどうなればこんな人間が現実にいるって思えますのっ！？
ミーア皇女伝いわく、ミーア・ルーナ・ティアムーンなる人物は幼少の頃より、毎日、十冊以上の本を読み、その叡智は、百年、千年先を見通す。のだとか……。
厳しい帝国の財政を立て直し、清貧で、天馬さえも巧みに乗りこなし、空中を舞う（比喩でなく）ダンスをし、その美しさは月の女神のごとく……。
――って、これ、わたくしの容姿のこと以外、全部大嘘ですわ！
ミーアは呆れ返ってため息を吐いた。
……まぁ、ツッコミはさておき。。
――というか、この海で溺れそうになった時に、人食い巨大魚（メーガロドゥン）が襲ってきて、その鼻先を殴って倒した、ってどういうことですのっ！？
そもそも、叡智とか関係なくなっている。腕力である。
まぁ、鼻先に感覚器が集まっているから、そこをぶん殴れば撃退できる、というのは、一応知識の一環なのかもしれないが……。
明らかにフィクション。盛りに盛ったエピソードだった。
なにしろミーア、そもそも泳げないのだから。
――ベルがわたくしのこと、こんな超人だと思っていたら、大問題ですわね……。
そう思いつつ、ミーアはその本を手に取った。
「とりあえず、こんな危険な本は回収する必要がありますわね……」
こんなもの、下手に誰かの目に触れたら大変だ。
――羞恥心、姫を殺すと申しますし……。

恥ずかしすぎて死ぬのは、さすがに嫌すぎるからと、ミーアは本を胸に抱えてそそくさと図書館を後にする。
途中、司書に止められたが、前に来た時に本を忘れていったと説明して乗り切った。
記録と照らし合わせても、タイトルが出てこなかったために信じてもらえたのだ。
タイトルを見られたミーアは、羞恥心で息が止まりそうになったが……。
「本当、自分の名前が付いた本とか、どうかと思いますわね……。今度会ったら、エリスに言っておきませんと……」
そんなことをつぶやきつつ、ミーアは自室へ帰ってきた。のだが……。
「あら？」
その扉の前に、一人の少女が立っていた。
「あ、ミーアさま、ごきげんよう」
ミーアに気づき、スカートの裾をちょこんと持ち上げる少女。
小麦色の健康的な肌、夜空を溶かし込んだような漆黒の髪は、ティアムーン帝国の南方にある国で暮らす民の証。
深みのある緑色の瞳と、可愛らしく笑みを浮かべるその顔に、ミーアは見おぼえがあった。
「まぁ、ラーニャさん。よくいらっしゃいましたわね」
ラーニャ・タフリーフ・ペルージャン。
ペルージャン農業国の第三王女に、ミーアは愛想のよい笑みを返した。

さて、すでにだいぶいい加減なことになってきてはいるが……、ミーアはセントノエルで生活するにあたり、二つのルールを定めていた。
一つは、自らのギロチンの運命につながるような人間には、極力近づかないこと。

もう一つは、ギロチンを回避するために、有益な人物たちとコネを築くこと……。
すでに一つ目は半ば瓦解しているが、二つ目の方はせっせと励んでいたりもするわけで……。
そして、目の前の人物、ラーニャは、ミーアのコネ作りにおいて数少ない成功例なのであった。
「とりあえず、部屋の中にお入りになって」

第四十二話　ミーアは知っている。ケーキもパンも小麦からできているということを……

ペルージャン農業国はティアムーン帝国の南西に位置する国だ。国土のほとんどが農地、国民も農業関係者がほとんどというその国を軽視する帝国貴族は多い。

農奴の末裔、ティアムーンの属国……そのような目で見る者たちすらいる始末である。

……けれど、ミーアは知っている。

もしも、ペルージャンから農作物の輸入ができなくなった場合、帝国はシャレにならない状況に陥るということを。

そして、いざという時、一番、大切なものは綺麗な絹でも煌びやかな宝石でも貴金属でもない。

腹を満たす農作物であるということを。

――そう、わたくしは知っておりますわ。パンとケーキとが、実は同じ小麦からできているということを！

ゆえに、パンがなければケーキを食べれば……などということは、もう言わないミーアである。

前の時間軸、それを言ったら、ルードヴィッヒに心底呆れられたのだ。同じ轍は踏まない。

ペルージャンの第三王女であるラーニャに対しても、失礼な態度などもってのほか。

丁重に、最大限の礼をもって臨むミーアである。

「失礼いたします。ミーアさま、申し訳ありません。突然、押しかけてしまって……」

「構いませんわ。ただ、今はアンヌが出てしまっているので、お茶を出すことができないのですけれど……」

「あっ、ミーアお姉さま、ボクが行ってきます」

「あら？　気が利きますわね、ベル」

「えへへ」
ニコニコと嬉しそうなベルを見て、ミーアはピンと来た。
――ああ、そういえば最近、ベルはあまーいホットココアにはまってるんでしたわね。飲みすぎると体に悪いから、アンヌに止められてましたけど……、もらってくるつもりですわね！　ちゃっかりしてますわ。まったく、誰に似たのかしら……？
などと思いつつ、ミーアは止めない。
理由はとても簡単。自分も飲みたいからである。孫娘と祖母との共犯関係がここに成立した！
ベルは、ラーニャに会釈して部屋を出て行った。
「ふふ、可愛らしいですね。妹さんですか？」
「ええ、まぁ……。そんなようなものですわ。それで、今日はどうなさいましたの？」
ミーアはラーニャに椅子をすすめ、自らもその対面に座った。
椅子に腰かけたラーニャは、一瞬、考え込むように黙り込んでから……口を開いた。
「実は、二番目の姉のことなんです」
「はて、お姉さま……？」
ミーアはきょとんと首を傾げた。それから、おもむろに頭の中でつぶやきだす。
――ラーニャさんのお姉さんの名前……、なんだったかしら……。えーっと、あ、あ、い、い、う、う、え、お……。んー、ア行だった気がいたしますわね。あ、あ、あっ！
「たしかアーシャ・タフリーフ・ペルージャンさま、でしたかしら？」
「はい。さすがミーアさま。ご存知でしたか？」
ラーニャは嬉しそうに笑みを浮かべた。
一方のミーアも、朗らかな笑みを浮かべる。思い出せたスッキリ感で、思わず微笑んでしまったのだ。
――思い出す努力が大事だと、ルードヴィッヒも言ってましたわ

ね、確か。
そう、ボケ防止には思い出す努力が大事なのだ。
「アーシャ姉さまは、このセントノエルで六年間学び、専門の知識を身に着けました。国をもっと豊かにしたいからって一生懸命に……。でも、父は、そのことを認めようとはしませんでした。ペルージャンのためになる国と親交を深めるために、姉に嫁入りをするようにって、言うんです」
「ふむ、なるほど……」
それは、よくある話ではある。王族の婚儀とは、そういうものだ。国の行く末を視野に入れ、その上でより良い国の貴人と婚姻関係を結ぶ。
学問や個人の能力によって国を富ませることよりは、少なくとも一般的な考え方なのだ。
――ふむ……、ラーニャさんの御父上のおっしゃりようは理解できますわね。
ミーアは、なにやら厄介ごとの気配を敏感に察知しつつ、ラーニャの方を見る。
「それで、わたくしにお姉さまのことを話してくださった理由は？」
「姉の気持ちを無駄にしたくないんです。なんとか、その……ラフィーナさまに、お取次ぎいただけないでしょうか？　この、セントノエルで働けるように……。それで、実力さえ認められれば、お父さまだって話を聞いてくださるはず」
――ああ、やっぱり、そういうことですのね……。
ふーむ、と鼻を鳴らしてミーアは考える。
正直なところラーニャとの関係は、ミーアにとって大切にしておきたいものだ。だから、できる限りのことはしてあげたいと思う。
けれど、そのせいでペルージャン国王から悪印象を持たれるのは得策ではない。
――ラーニャさんのお願いを聞きつつ、ペルージャン国王の心証の悪化も防ぐ手立てを考える必要がありますわね……。

うなりつつ、ミーアは腕組みする。
「ラフィーナさまにお願いするのは、問題ございませんけれど、ちなみに、姉上はどのようなことを学んでおられましたの？」
「はい。植物学を専攻しています。妹の私が言うのもどうかと思うのですが、優秀な成績をおさめていると思います」
「なるほど。植物学……」
その時の、ラーニャの言葉をミーアが思い出すのは少し後のことになる。
ほどなくして、ベルがホットココアとともに部屋に戻ってきて。
さらにそのすぐ後で、焦り顔のアンヌが、帝国からの報せを手に帰ってきたため、いろいろなことがうやむやになってしまったのだ。

第四十三話　帝都への帰還

アンヌが持ってきたのは、ルードヴィッヒからの知らせだった。
曰く、
『学園都市計画のことでご相談したきことがあり。至急、帝国に戻られたし』
とのことだった。
「まぁ、珍しいですわね、ルードヴィッヒからの呼び出しなんて……」
基本的に、優秀なルードヴィッヒがミーアの手を煩わすことはほとんどない。
時折、名前を貸してくれとかなんとか言ってくるので、その都度よく考えもせずに許可を出しているミーアである。
ミーアは昔からイエスマンなのである！
……悪い男に騙されないか、少しばかり心配だ。
それはともかく……。
手際よく、文（ふみ）とともに皇女専属近衛部隊も派遣されてきていたらしい。
湖畔に部隊が待機中とのことで、翌日、早々にミーアは帝国に戻ることになった。
同伴者はアンヌとベル、それに、ベルの従者であるリンシャだった。
「ごめんなさいね、リンシャさん。せっかくのセントノエルで勉学の機会を……」
ミーアの謝罪に、リンシャは肩をすくめて見せた。
「仕事ですから気にしないでください。それに、ティアムーン帝国には行ったことがないので、後学のためです」
そうして四人を乗せた馬車は護衛の小部隊を引き連れて、帝国へ

の道を急いだ。

「それにしても、学園都市計画のこと……、なんですのね。たしか建物の方はすでに建設が始まってて、夏ぐらいから生徒たちの勉強を始める予定と聞いておりましたけれど……」

さて、なにが起きたのだろう、などと首をひねりつつ、ミーアは持参した「ミーア皇女伝」を取り出した。

馬車に乗っている間は時間があるし、今のうちに検証作業を進めておきたい、と考えたのだ。

あまり他人に見せてよいものでもないが、まぁ、この三人なら適当に誤魔化せばいいか、という適当な判断である。

「あら？　ミーアさま、なにをお読みですか？」

早速、尋ねてきたのはリンシャだった。興味深げに、本を覗き込もうとする。

「ああ、これはですわね……」

図書室で借りた外国の本……などと口から出まかせを吐こうとした、まさにその時！

「うっふっふ、それはですねぇ。ミーアお姉さまの功績を讃えるために書かれた『ミーア皇女伝』なのです！」

ベルが、得意げに言った。

「なっ！？」

衝撃に、思わず声を失うミーア。その間にも話がどんどん進んでいく。

「ミーア皇女伝って……。ああ、もしかして、どこかの国の誰かが勝手に書いて出版されたのを入手して、分析してる、とか？　世間の評価を知ることは王族にとっても益になるでしょうしね、うん……」

などと納得して頷いているリンシャに、

「書いたのは、ミーアお姉さまのお抱え作家のエリスかあ……、エリスさんなのです」

ベルはペラペラと説明する。
「まぁ、エリス、いつの間にそんなもの書いたのかしら……？」
不思議そうな顔をするアンヌ。
その隣でリンシャが、しらーっとした目で、ミーアの方を見ていた。
『あんた、自分のお抱え作家に、自分の功績を褒めたたえる本を書かせたの？　っていうか、それを馬車の中で読むの？　私たちに見せびらかしながら……？　え？　正気？』そんな気持ちがありありと感じられるような目で見られたミーアは……、
「う、うう……。やっ、やめて、見ないでっ！　そんな目でわたくしを見ないでくださいましっ！」
顔を両手で覆い、ぶんぶんっと頭を振る。
羞恥心は姫をも殺す、恐ろしいものなのだ。
――や、やっぱり、この本は危険ですわ！
リンシャの前で読むのは心が持たないと判断したミーアは、アンヌとリンシャに言って、御者台の方に移ってもらった。
幸い、今夜の宿営場所や夕食の手配のことなど、近衛騎士たちと打ち合わせることもあったので、二人にはそれをしてもらうことにした。
さて、ベルと二人きりになったミーアは、しっかりとベルに注意した後、改めて『ミーア皇女伝』を開いて……違和感を覚える。
――なんだか……変ですわね。これ、この前、読んだ時と記述が微妙に異なっているような……あっ！
その時、ミーアは見つけてしまう。
ある記述の欠落……それは。
「……ベル、つかぬことをお聞きしますけれど、わたくしはティアムーン帝国内に学園都市を築きますわよね？」
「はい。聖ミーア学園のことですね？」
……不穏な名前が聞こえて、ミーアは思わず固まる。
「えーっと、今、なんと……？」

「聖ミーア学園です。静海の森のすぐそばの皇女直轄領にある、ティアムーン帝国で最も格式高い学校で、様々な学問の研究をしてます」
「あー……まぁ、名前はちょっとどうかと思いますけど、それで間違いないですわね」
どこのどいつだ、そんな名前をつけやがったのは！　などと思いつつ、ミーアは、小さく首を傾げた。
「だとしたら、余計におかしいですわ。この皇女伝に……その学校のことが全然載ってませんわ」
その名前の学校であるならば、まず間違いなく、この本に載っているはず。にもかかわらず……、ミーア皇女伝には、その学校のことが一切書かれていないのだった。
「え……？　そんなはずないです。だって、ボク、読んだことありますよ」
本を覗き込んだベルは、あれ？　と声を上げる。
「え？　え？　そんな……どうして？　これ、変です」
混乱した様子のベルを見て、ミーアはなにが起きたのかを察する。
――恐らく、あの日記帳や歴史書の記述と同じ……なのでしょうね。なにかのきっかけで記述が書き換わったんですわ……。あら？　でも、ベルの記憶自体は変わっていない？　つまり記憶は書き換わらないか、それとも時間差で書き換わるということかしら？
文字とは違い、記憶というのは、確かに書き換えるのに時間がかかりそうな印象があった。
――うーん、わからないことが多いですわね……。
ミーアは首を傾げる。
――いったい、これはどういうことなんですの？
首をひねり、ミーアは考える。考える。考え、考え……、ミーアは一つの真理にたどり着いた。
――そうですわ。ベルはわたくしが求めた導としてここに来たんでしたっけ？　ということは、この皇女伝の変化する記述と、変化

しないベルの記憶とを比較することで、いろいろなことがわかるようになる。そのために、このようになっているのですわ！

それは、「なぜ、そのようになるのか」という、現象に対する分析ではない。

ベルと『皇女伝』がここにそろったことに「どのような意味があるのか？」と問う、まったく別の視点であり、アプローチだ。

……断じて「難しいことをこれ以上考えるの面倒臭いですわ！」という手抜きではない。

……決して「考えてもわからないことを考えても疲れるだけですし、誰かに聞くことでもないから、なにがわかってて、なにがわかってないかとか、別に考える必要ないですし……とりあえず、そう思っとけばいいですわ」という思考の放棄ではない。それは大きな誤解である！

まぁ、それはさておき……。

「うーん、それに新型の小麦のことも」

「へ？　新型小麦……？　それは、えっと……なんのことですか？　ミーアお姉さま」

ベルの表情を見て、ミーアは思わずうなった。

――なるほど……つまり、ベルのいた未来では、学園都市はあっても新型小麦は開発されなかったんですわね……。まぁ、飢饉は食料の備蓄とクロエの商会のおかげで乗り越えられるって話なのでしょうけれど……。

ミーアの深い深い思索は続いていくのだった。

第四十四話　ミーア記念日

帝都ルナティアに到着したミーアは、早速、父のもとへ帰還の挨拶に向かった。
ちなみにリンシャとベルは、アンヌの実家でお世話になることになっている。
アンヌはミーアの専属メイドなので後ほど白月宮殿に来ることになっているが、さすがにベルを連れて城内に入るわけにはいかない。
自室で着替えたミーアは、早速、謁見の間へと向かう。が……、
――そういえば、パパと呼べとか、騒いでましたっけ……。
思い出し、微妙に気分が重くなる。
もう遠い昔のことのように思えるが……、そのせいでミーアは早めにセントノエルに行っていたのだった。
――まさか、まだそんなことを言うとは思いませんけれど……。
そこはかとなく不安を覚えていたミーアだったが……。出迎えた父は、思いのほか冷静だった。
「おお、ミーア、帰っていたか。息災なようでなによりだ」
「ありがとうございます。陛下、無事に先ほど到着いたしました」
「いつも言っていると思うが、お父さま、ないし、パパと呼ぶように」
「では、お言葉に甘えまして、お父さま。おひさしゅうございます」
この辺りは、いつものやり取りである。
とりあえず、パパ呼びを強制されることがなくって、ホッと安堵の息を吐くミーアである。
「そうか……。セントノエルは楽しいか」
「はい。最近ではラフィーナさまやシオン王子、アベル王子などとも懇意にさせていただいておりますわ。他国の貴族の方々と交流を持つと視野が広がりますし、とても楽しく過ごさせていただいてお

りますわ」
　ミーアの学園での生活を聞いて、うんうんと嬉しそうに頷いていた皇帝だったが……、ふいにその顔が曇る。
「しかし……、お前が重用している文官、ルードヴィッヒだったか……。あの者は少しばかり咎める必要がありそうだな……」
「……へっ？」
　一瞬、意味が分からず、瞳をぱちくりさせるミーアだったが……。
「皇女たるお前を呼びつけた挙句、楽しい学園生活を中断させるなど、到底、許されることではない。先日のレムノ王国での事件における功績があるから処刑にはせぬが、日の出とともに辺境の流刑地に飛ばして……」
「やめてください。お父さま。わたくし、こうして帝国に帰ってこられてむしろ嬉しいぐらいですわ。それに、必要があるから帰ってきたまでのこと。帝国皇女として当然のことですわ」
　ミーアはきっぱりと言った。ここでルードヴィッヒを失ったら大変なことになる。
　きちんと釘を刺しておかなければならない。
「本当にそれでよいのか？　咎める必要がないと、お前はそう言うのだな？」
「はい、その通りですわ」
　大きく頷くミーアを見て、皇帝はふぅとため息を吐いた。
「そうか。お前がよいというのならば、わしは心置きなく彼を激賞することにしよう」
「……は？」
「不思議そうな顔をするでない。わしはこれでも皇帝なのだ。お前の父であると同時に皇帝でもあるのだから、その都度、顔を使い分けねばならぬ。時には私人としての意見を飲み込む必要もあるのは、当然のことだ」
　その言を聞き、ミーアは少しだけ感心した。
　――お父さまって、てっきりダメな皇帝なのかと思ってましたけ

ど、きちんと考えることは考えてるんですのね……。
思わず感心してしまうミーアだったが……。
「ゆえに、わしは皇帝として彼を大いに激賞しようと思う」
続く父の言葉に、思わず笑ってしまう。
「もう、肝心なところが間違っておりますわ。お父さま。皇帝としてではなく、わたくしの父として、わたくしが帰ってきたことを喜んでくださっているのですよね？」
「ん？　別に間違ってはおらぬぞ？　ミーア。お前が帝都にいれば帝国臣民すべてが嬉しいし、お前がヴェールガ公国に行ってしまえば、帝国臣民すべてが悲しい。だから、お前がこうして帰ってきてくれるきっかけを作ったルードヴィッヒ君は、皇帝として激賞する。どこも間違ってはいないではないか？」
「……」
心底から、当たり前のことを言いました！　という様子の父親に、ミーアは頭がクラッとした。
自分が父親から溺愛されていることは知っていたミーアだったが、まさかこれほどとは……。
――なんだか……わたくしが、帝国のことをきちんと考えてくださいませ、って頑張ってお願いしたら、いろいろなんとかなってしまいそうな気がしますわね……。
危うく究極の真理に気づきそうになるミーアだったが、さすがに、そんなことはないかと思い直す。
――それにしても相変わらずですわね、お父さま……。
自分の帰還を満面の笑みで迎えてくれた父が、ちょっぴり嬉しくて、まぁまぁウザく感じてしまうミーアである。
「よし。ミーアが帰ってきてくれたから、今日はミーア記念日としよう！　今日から十日間、国を挙げての一大祭典を……」
「いえ、それはまたの機会に……」
だいぶウザく感じてしまうミーアである。
――ああ、でも……、お父さまにはベルの関係で、いろいろと泥

をかぶってもらったんでしたわね……。
ラフィーナにすっかり誤解されてしまっている父を思い、ミーアは若干罪悪感を刺激された。なんとなく、父に対して優しい気持ちになってしまったミーアは、
「お父さま、国の者に祝っていただくのは、もちろん嬉しいのですけれど……。わたくし、今日は、お父さまと一緒にゆっくりディナーがしたいですわ」
そう言ってやわらかな笑みを浮かべた。
それを見た皇帝は……、
「おお……おおぅっ！」
泣いた。その瞳から、滝のように涙がダバダバ流れ落ちる。
「ミーアが……、可愛いミーアが、わしとの食事を望むと……、くぅ、なんという……。よぉし、わかった。お前のために至高の料理を用意させよう！　森を焼き払い、ちょうどいい焼き加減のウサギ肉を……」
「いえ、やめてくださいまし。普通に黄月トマトのシチューとかで構いませんから……」
大変、ウザく感じてしまうミーアなのであった。

第四十五話　帝国にかけられし呪い

「ミーア姫殿下、お久しぶりです」
ミーア帰還の報を受け、ルードヴィッヒは白月宮殿を訪れた。その表情は思いのほか暗い。
それもそのはず、彼としては、こうしてわざわざミーアの手を煩わせなければならないのは、極めて不本意なことなのだ。
――だが、仕方ない。この問題は下手をするとかなり大きくなる。無理に俺が解決しようとして、傷を広げることはできない。
そうして、謁見の間で向かい合ったミーアは……少々疲れた顔をしていた。
恐らく強行軍だったからだろう。
眠たげにあくびをし、こしこしと目じりをこするミーアを見ると、ルードヴィッヒの胸にジワリと申し訳なさが湧いてくる。
――セントノエルでは、ずいぶんとご活躍だということだったからな……。
異例の生徒会長選挙への出馬。
その知らせを聞いた時は肝を冷やしたものだったが、その後の展開は彼の想像もしなかったものだった。
支持率劣勢からの、まさかの逆転劇。その裏でなにがあったのかは明らかにされていない。なんらかの取引があったのか、どうなのか。
その後のラフィーナの様子から見て、脅迫といった物騒なことではなく、あくまでも両者納得の上でだったことがうかがえる。
この度の選挙には不平を漏らす者も多いと聞く。
投票を行わずに勝利を確定させたことが不満なのだ。
剣を交えずして、なにが勝利か？　そんなものは勝利とは呼べない、卑怯だ、などと声を上げる者がいるのだ。

けれど、ルードヴィッヒはそうは思わない。
戦上手な戦術家がいれば、戦が始まる前の準備段階において相手を撤退させてしまう戦略家もいる。それよりさらに前の外交段階において有利な条件を勝ち取る政治家もいる。
ミーアは、投票という戦が始まる前の段階、戦略の段階でラフィーナに勝利した……。そういうことなのだろうとルードヴィッヒは理解している。
そして、生徒会長にミーアが立候補した理由も……今になってみれば手に取るようにわかった。
――セントノエルで生徒会長を務めることで、学校運営を学ぼうとされているということか……。
そこで得られた知識を、ティアムーン初の学園都市にも活用する。なるほど、大陸広しと言えども、学園都市などというものは、セントノエルを除いてほかにはない。手本にするならば、あそこ以外にはありえないではないか。
ミーアの思考は極めて合理的なものだったのだ。
にもかかわらず、彼女の行動の邪魔をしてしまったことが、ルードヴィッヒには、なんとも口惜しい。我が身の不甲斐なさを呪いたくなるルードヴィッヒである。
「申し訳ありません、ミーア殿下。呼びつけるような形になってしまいまして……やはり、お疲れですね」
「いえ、問題ありませんわ。ふぁ。昨夜は、お父さまが、積もる話を聞きたいとあまり眠らせてくださらなかったので……」
恐らくは気を使ってくれたのだろう。そんな冗談を言ってから、ミーアはもう一度、あくびを噛み殺して……、ちょっぴりうるんだ瞳をルードヴィッヒに向けた。
「わざわざ来ていただいたんですのね。後でこちらから行くつもりでしたのよ？　あなたも忙しいでしょうから」
「いえ。セントノエルでの学業を中断させてまで、お呼び立てしてしまいました。その上で訪ねていただくことなどできません」

膝をつき、臣下の礼をとったルードヴィッヒは、ミーアの方に生真面目な視線を向ける。
「お元気そうでなによりです」
「あなたも変わりなさそうでなによりですわ。こうして顔を合わせるのは、ずいぶんと久しぶりな気がいたしますわね」
ミーアはそうして、懐かしげに瞳を細めた。
「それで、わたくしに相談したいことというのは？」
静かに話を向けてくるミーアに、ルードヴィッヒは一瞬黙り、考えてから、
「いえ、本題に行く前に、いくつかご報告しておきたいことがあります」
せっかくこうして帝都まで戻ってきてもらえたのだ。帝国の現状を報告し、指示を仰いでおきたいところだった。
なにしろ、相手は帝国の叡智。彼自身の知能の及ばぬところまで見通す存在なのだから。
「まず、ミーアさまのご命令で行ってる食糧備蓄ですが、順調に進んでいます。現状では、一年間まったく収穫がなかったとしても、全国民を最低限、飢えさせないだけの蓄えはあるのではないかと推測されます」
これは、あくまでも推測の域を出ない。なぜなら、各地の貴族たちがどの程度の備蓄をしているかがはっきりしないためだ。報告は上がってくるが、どこまで本当のことかはわからない。
「さらに、フォークロード商会からの買い上げ分を計算すれば、かなりの規模の飢饉にも対応できるのではないかと思われます」
「ふむ……。順調ですわね」
渡された羊皮紙を眺めて、ミーアは小さく頷いた。
「そしてもうすぐ収穫期を迎える小麦なのですが……、今年は収穫量が少し減りそうです」
「減る……というと、どの程度ですの？」
「はい。だいたいの予想ではありますが、昨年と比較して一割程度

は減るのではないかと報告が上がってきています」
「一割……ふむ……」
ミーアは頬に手を当てて、小さく首を傾げた。
その値は、別に問題にすべき値ではなかったかもしれない。その程度であれば、翌年の収穫で十分に補うことができるからだ。
また、そもそも収穫量の減少自体、ティアムーン帝国ではよくあることでもあった。
帝国貴族には農民を蔑視する者が多い。
もともと、この地は肥沃な三日月地帯と呼ばれる、農業に適した土地だった。
種をまき、水をやり、雑草さえ刈り取っておけば、あとは適当でも実りが得られる土地。そのように言われるほどに、なんの工夫もなく収穫が見込める豊かな土地だったのだ。
そして、そこには素朴な先住民が住んでいた。
飢えることを知らず、争う必要のなかった彼らは平和な農耕生活を営んでいた。
そこに、精強なる侵略者、近郊の狩猟部族が攻めてきた。
ティアムーンの祖たる狩猟部族の者たちは、武力によって先住民たちを農奴と貶め、この地の実りを自らのものとした。
それが、ティアムーン帝国の始まりだった。
初代皇帝たる狩猟部族の族長は、自分たちのように武に優れた者たちを高貴なる者、貴族とし、農業を営む先住民を臆病者の奴隷と蔑んだ。そうすることで、自分たちの支配権を正当化したのだ。
その名残で、ティアムーンには病巣ともいえる悪しき思想が深く深く根付いている。
すなわち『この地で農業を営む者は、ほかの仕事で食っていくことのできない無能者である』という、根拠のない侮蔑が……。
農奴という制度は、すでに廃れて久しい。
農業を営む者たちが制度的に、不当に遇されることはもうない。
それはきちんとした一つの職業であり、そのことを理由に虐げら

れることはない。
それゆえに……、問題は逆に深刻だった。
制度に問題があれば、制度を変えればよい。
不当に地位が低いというのであれば、地位の改善をし、暴力を受けるならば、暴力をなくすよう働きかければよい。
けれど……実害がほとんどない、理由のない感情的な思い込みを正すのは難しい。
「なんとなく、やりたくない」「好きじゃない」「理由はないけど、それはよくないものだ」
そんな無意識下の思い込みが、今も人々の心に根付き、気づかぬうちに様々な行動に影響を及ぼしている。
なんの合理的理由もなく、ただ歴史的に培われた非合理な偏見によって、ティアムーン帝国の自給率は上がりにくい傾向があるのだ。
そしてルードヴィッヒは……そこに、なにか悪意のようなものさえ感じ取っていた。
まるで……この帝国が自ら死へと向かっていくかのような……。
この地の、殺された先住民たちの呪いが、帝国全土を殺そうとしているかのような……。そんな錯覚さえ覚えてしまう。
益体もない想像ながら、なぜだろう、ルードヴィッヒはその想像を笑うことはできなかった。
現に帝国内の食糧の流通は、ミーアが手を下す前までは、かなりの綱渡りだったのだから。
「……ついに、来ましたわね」
ミーアのつぶやきが、ルードヴィッヒを現実に戻した。
「来た、とは……、どういうことでしょうか？」
眼鏡を軽く直しつつ、慎重に問いかける。
「減産の理由は天候不良のようですが……」
さすがに農地をすべてなくしてしまうわけには当然いかないから、各貴族たちには領内の農地を一定以上に保つように通達が出されている。

貴族たち自身も危機は覚えているから、おおむね、その通達には従っているだろう。
「ただの天候不良が原因であれば、一年後には収穫量も回復している可能性も……」
「いえ、残念ながらそうはなりませんわ。恐らくこれは始まりに過ぎない。来年はもっと減るはずですわ」
ミーアは静かに断言する。それから、すぅっと静かな視線をルードヴィッヒに向けて、
「もしも、あなたが必要と感じたならば、備蓄を取り崩して、小麦を配給しなさい。判断はあなたに委ねますわ」
ルードヴィッヒは自らを合理主義者と認識している。ゆえに、根拠のないミーアの心配は諌めるべきかとも思ったのだが……。
それをさせないほどに、ミーアは確信に満ちた顔をしていた。
ゆえに、ルードヴィッヒは無言で頷きを返すのだった。
「以上が報告いたしたきことでした。そして、本題なのですが……」
ルードヴィッヒは生真面目な表情を崩すことなく言った。
「ミーア姫殿下肝いりの学園計画なのですが……、このままでは開校できないかもしれません」
「……はぇ？」
ミーアは、ぱちくりと瞳を瞬かせるのだった。

第四十六話　記憶の残滓～果たされなかった約束～

「学校が開校できない……」

昨夜の父娘の語らい合いで、寝不足でボーっとした頭が、ルードヴィッヒの一言で一気に覚醒する。

――ま、まぁ……、そうですわね。そんなことだろうと思ってましたわ。

すでに、ルードヴィッヒからの知らせと皇女伝とを鑑みて、大体の事態を予想していたので、衝撃はそれほどではなかった。

深くため息を吐き、それから、ゆっくり冷静に、静かな声でルードヴィッヒに尋ねる。

「それはなぜですの？」

どうせ、ベルマン子爵あたりがイチャモンをつけてきたのだろう、と予想していたミーアであったが、ルードヴィッヒの答えは予想外のものだった。

「実は、声をかけていた講師たちが次々に辞退を申し出てきました。学長をお願いしていたバッハマン卿も、宗教学の権威であるヒラーベック卿も……」

ミーアの目指す学園開校のため、ルードヴィッヒは自身の人脈をフル活用して優秀な人材を集めようとした。

皇女ミーアの名を最大限に使ったおかげで資金集めは順調、講師陣も名だたる人材が集まりつつあったのだ。

少なくとも、ミーアはそのように報告を受けていた。

「それぱかりではなく、姫殿下の意向を受け、学園都市の設立に賛同してくれていた者たちも、協力を渋り始めています」

「どっ、どういうことですの？　いったいなぜそのようなことに？」

さすがに、そこまでは予想していなかったミーアは、思わず椅子から腰を浮かせる。そんなミーアに、ルードヴィッヒは、ここしば

らく調査してわかったことを伝える。
「まだ断定はできないのですが……、どうやら……グリーンムーン家が裏で糸を引いているようです」
「ああ、エメラルダさんのお家ですわね。ふむ……」
腕組みするミーア。
――確かグリーンムーン公爵もお父さまと同じで、エメラルダさんには甘かったはず……。となれば、わたくしがエメラルダさんにお願いすれば……。
などというミーアの考えを打ち砕くように、非情なるルードヴィッヒの指摘が入る。
「どうやらそのエメラルダさまの指示で、すべて行われているようなのですが……、ミーアさま、なにか、お心当たりはございますか？」
「なっ！」
驚愕にぽかーんと口を開けたミーアは、次の瞬間、ぎりぎりと歯ぎしりを始める。
「ぐぬぬ……。エメラルダさん……、わたくしになにか恨みでもあるんですの？」
ミーアの脳裏に、おほほと高笑いをする茶飲み友達の顔が思い浮かんだ。

ミーアが「うがー」っと絶叫していたその頃……、当のエメラルダは、ベッドの中で遅い目覚めを迎えていた。
「あふ……」
小さく欠伸をし、ぼんやりとかすんだ目で室内を見回す。微かに開いた唇から、小さなつぶやきが漏れた。
「嫌な夢を見たものですわ……」
思い出すだけで怖気が走る……、それはティアムーン帝国崩壊の夢だった。

食糧難と財政破綻、少数民族の反乱と流行り病によって、帝国が傾きつつある世界。
日々、悪化する状況に気鬱になったエメラルダは、ある日、白月宮殿を訪れる。
どのような時も変わることのない威容を誇る美しき城はエメラルダの心を高揚させ、帝国貴族としての誇りを胸の内に滾(たぎ)らせた。
「ああ、帝国は大丈夫ですわ……。私たちの栄光のティアムーン帝国が傾くことなど、ありえないこと」
元気を取り戻し、軽やかな歩調で宮殿内の廊下を歩いていたエメラルダは、そこで暗く沈んだ顔をする親友、ミーア・ルーナ・ティアムーンの姿を見つけた。
「あら、ごきげんよう、ミーアさま」
話しかけたミーアは、なんだかすごく疲れた様子だった。
聞けば、帝国のために、忠義に厚い文官とともに各地を走り回っているらしい。
――皇女たる者がそのようなこと、せずともよろしいのに。
わずかばかり呆れつつも、ミーアを元気づけようと、エメラルダは言った。
「そうだわ。ミーアさま、今度、当家でお茶会を開きましょう。たくさんお客さんを呼んで盛大に。そして、誇り高き帝国貴族としてこの帝国のために力を尽くすことをともに誓い合うの。ミーアさまのお好きなケーキも用意して、ね？　とっても素敵ではありませんこと？」
そう言うとミーアは、嬉しそうに微笑んだ。
「それは、とてもいいですわね。では、楽しみにしておりますわ、エメラルダさん」
「ええ、ご期待にはきちんと応えますわ、ミーアさま」
エメラルダは、ミーアの表情が明るくなったのを見て、わずかに満足感をおぼえる。
「まったく、心配しすぎなんですわ。ミーアさまは……。この栄光

のティアムーン帝国が、この程度でどうにかなるはずもありませんのに。頭の悪い駄犬がいかに吠え猛ろうと、無視してしまえばいいだけなのに」
やれやれ、と肩をすくめつつ、エメラルダは自らの屋敷に帰った。

その日の夜のことだった。
「エメラルダ、おい、エメラルダ……」
彼女は、ゆさゆさと体を揺すられるのを感じた。
大貴族の令嬢たる彼女に、そのような無礼が許されるはずもなし。
一瞬で怒りを沸騰させ、目を開けたエメラルダだったが……、暗い部屋に立つ人物を見て、小さく首を傾げた。
「あら、お父さま？　このような夜中に、どうされましたの？」
「ああ、その、実はな……。急な話なのだが、我らグリーンムーンの者たちは、帝都を離れることになった」
「……は？　離れるとは？　どういうことですの？」
「お前も聞いているとは思うのだが、帝国は危険な状況だ。それで、外国にいるわしの友だちが、避難してこないかと言ってくれてな。どうせならばその言葉に甘えようかと思うのだ」
「……よくわからないのですが、お父さま、それは、我がグリーンムーン家は、この帝国から尻尾を巻いて逃げ出すと……、そう仰っているんですの？」
かっと瞳を怒らせて、エメラルダは勢いよくベッドから立ち上がった。
「冗談ではございませんわ。我ら栄光ある四大公爵家の者が、皇帝陛下に付き従わずに、なんとします？　それに、私は約束したのです。ミーア姫殿下と、お茶会を……」
「無論、わしだとて帝国が持ち直すとは思っている。だが、そのためにこそ、再起を図らなければならぬ。下賤な者どもを打ち滅ぼす力を蓄えねばならぬのだ」
そう言うと、グリーンムーン公爵はエメラルダの腕をつかんだ。

「行くぞ。時間がない」
「ですが、皇帝陛下は？　それに、ミーア姫殿下は！？」
「大丈夫だ。他の四大公爵家は陛下を守り奉るだろう。その間に、我らが海の向こうで、反撃の体制を整えるのだ」
「でも、でも約束があるのです。お父さま、だってミーアさまは、あんなに嬉しそうに！」
「ええい。うるさい。いいから行くぞ」
「痛っ！　お父さま、お放し下さい。私は……」
かくして、グリーンムーン一族は、海外への逃亡を果たす。
エメラルダは幾度も、帝国への帰還の方法を探ったが、ついにその機会は訪れることはなく……。
ミーアとのお茶会の約束は、ついに果たされることはなかった。

「……嫌な夢。まったく、どうしてあんな変な夢を見てしまったのかしら？」
ベッドから起きだしたエメラルダは、そのまま、寝汗で濡れたドレスを脱ぎ捨てる。
裸身をさらした彼女の後ろに、音もなく従者の少女が近づき、セントノエルの制服を身につけさせていく。
「ねぇ、あなた、本家はきちんと、私のお願い通りに動いているかしら？」
「はい。エメラルダさま。お館さまより知らせが届いております。すでに、ミーア姫殿下の学園計画に対して、妨害工作が始まっているとのことです」
「そう……。それは重畳。ミーアさま、困っておられますわね、きっと。うふふ……」
長く豊かな髪を、軽くかき上げてエメラルダは微笑む。
「すべてあなたのせいですわよ？　ミーアさま。この私のこと、軽視するから、こんなことになるのですわ」
エメラルダ・エトワ・グリーンムーン。

帝国四大公爵家が一角、グリーンムーン家の令嬢は……、ミーアの親友を自任し、ライバルだとさえ思っている彼女は……、最近ミーアがかまってくれないのが、とてもとても不満なのだった。
お茶会に誘ってもあまり長くは居てくれないし、お茶会に誘ってもくれないしで、とてもとてもとても不満なのだ。
彼女は……とてもとてもとても……困った少女なのであった。

第四十七話　ルードヴィッヒ、感動に打ち震える！

「グリーンムーン家はもともと平民軽視の傾向が強くありましたから。貴族のみならず、平民にも門戸を開くという姫殿下の方針に対しての抗議なのではないかと思われます。残念ながらそれに賛同する貴族も多く、事態は深刻です」

帆船を保有しているグリーンムーン家は、古くから海外の国と強いつながりを持っている。

海の向こうからやってくる知識の有用性に早い段階で気付いたグリーンムーン家は、以降、積極的に学問に投資することになった。

そのような経緯から、グリーンムーン公爵は帝国内の学閥に大きな影響力を持っているのだ。

それゆえ、その影響力は決して無視できないものだった。

また、今回の場合、ミーアに不満を抱く貴族たちを糾合するための旗印に、グリーンムーン家がなっている形である。以前から、平民に対して寛容で有利な動きをしてきたミーアを快く思っていない貴族は、少なくないのだ。

バレないのであれば公爵家の方に協力したとしても、決して不思議ではなかった。

もっともそれとは反対に、心ある文官たちはミーアとルードヴィッヒの行動を支持しているため、グリーンムーン家の暗躍の情報などが、ルードヴィッヒのもとに集まってきたりはするのだが……。

「ちなみに他の四大公爵家の動向はどうなっておりますの？」

「レッドムーン家、イエロームーン家、ともに静観を決め込んでいます。ブルームーン家だけは、資金援助を申し出てくれました。かなりの額です」

「あら……それは意外ですわね……」

これは、生徒会に入ったサフィアスをよろしく、という意図があ

りそうだったが……。
「あるいは蛇がすり寄ってきたと見るべきかしら……。どうあれ、この際は味方してくれるというのならば、問題ありませんわ」
「ええ。ありがたいことに資金繰りは、今のところ心配ありません。建物もベルマン子爵が音頭を取って、上手く進んでいます」
「まぁ、それも意外ですわ。てっきり彼がなにか渋っているのかと思いましたわ」
心の中で、こっそりと謝るミーアである。
「それにしましても……どうしたものかしら……？」
「そうですね。説得するか、あるいは別の人材を探すか、どちらかでしょう」
ルードヴィッヒの言うのは、もっともなことではあったが、同時にそれは容易なことではなかった。
「簡単ではありませんわね。グリーンムーン家に逆らおうなんて方、そうそういらっしゃいませんし……ん？　グリーンムーン家の影響力の外？　はて？　なにやら、最近、そんな話をどこかで聞いたような……？」
うーん、とうなり声をあげ、考え込むことしばし……。ミーアはようやく思い出した。
――ああ、そうでしたわ。ラーニャさんのお姉さんが確か植物学の先生とかでしたわね……。ペルージャン国王は、どこぞの貴族と結婚して、国のために繋がりを作りたいということでしたけれど……。わたくしの学園で講師をするということで、わたくしが頭を下げれば、少しは納得していただけないかしら？
少なくとも、どこぞの変な貴族のもとに嫁入りするよりは、よほど良い人脈であるはずと、ミーアは自分のことを評価している。それに、なにも十年も講師をやってもらおうというわけではない。
二、三年教鞭をとってもらい、その後、退職して結婚なりしてもらっても、こちらとしては構わないのだ。
その間に次の者を探してくることはできるだろうし、時間的余裕

が作れるのが大きい。
――それに、セロに新型小麦を開発してもらうために、植物学を教えられる人間は必須ですわ。
なんだか、ものすごくよいことを思い付いてしまったように感じて、ミーアは思わず笑みを浮かべる。
「ルードヴィッヒ、講師候補ですが、わたくしに一人、心当たりがございますわ」
「心当たり、ですか……？　それは？」
「ペルージャン農業国、第二王女……。アーシャ・タフリーフ・ペルージャン姫はセントノエルで植物学を学ばれていたとか……。そして、その知識の生かし先を探しているということですわ」
ミーアはあっさりとした口調で言って、
「わたくしの学園都市にちょうど良い人材ですわ」
自信満々に言い切った。

――ミーアさま……、やはり、そういうこと、なのか？
告げられた名、そしてその人物が習得している学問に、ルードヴィッヒは息を呑む。
農業国の姫を、植物学の講師として呼ぶ……。それが意味するところ、それは……っ！
――この帝国に巣食う≪悪しき反農思想≫と、ミーアさまは真っ向から戦おうとされているということか！
思えば、非合理な差別や迷信を一掃する一番の方法は教育だ。
ミーアは学園都市と自らの学校によって、ティアムーン帝国の最大の問題を解決しようとしているのだ。
ルードヴィッヒの体を、突如、戦慄が震えとなって駆け抜けた。
激しい感動に、鳥肌が立って仕方なかった。
――ああ、この方は……やはり、紛れもなく帝国の叡智なのだ。
斜陽のこの国に天が遣わした知恵の天使なのだ……。

ルードヴィッヒの目に映るミーアの、その背には確かに月影をまとった輝く翼があった。
そのような至高の存在の指示で働けることが誇らしくて……、ルードヴィッヒは彼らしくもなく、朗らかに笑った。
「ふふ、そうでしたか……。すでに講師にちょうど良い人材に目をつけておられたとは……」
「いえ、まだ直接、声をかけたわけではございませんわ。それに、講師が一人だけというわけにもいかないでしょうし……。なにより、学園の顔である学園長のことは頭が痛いですわ」
たしかに、それはその通りだった。
当初は、帝国内でも高名な知識人として知られるバッハマン伯爵を学長に据える予定だった。
その名声に惹かれて、講師に名乗り出てくれた者も何人かいたのだ。
講師たちの上に立つ者には、やはりそれなりに知られた人間を据える必要があるのだ。
だが……。
「その件についてですが……。私に任せていただけないでしょうか」
「あら？　心当たりがございますの？」
「はい。一人だけ……。正直なところ気が進まなかったのですが……。でも、ミーアさまのお覚悟を聞いて、私も決心ができました」
「……はて？　覚悟？　ま、まぁ、いいですわ。それはいったい誰なんですの？」
ルードヴィッヒはしばし目を閉じてから、静かな口調で告げる。
「私の……師匠です」

第四十八話　元凶……？

時間は少しばかり遡る。
ミーアが父親から学園での出来事を逐一、細かーく、微に入り細を穿ち、尋問されている頃……。
ベルとリンシャはアンヌの家でささやかな歓待を受けていた。
――これが、アンヌ母さまとエリス母さまのご実家……なんですね。
優しげな笑みを浮かべる父親とおっとりとした母親。楽しげに笑う子供たち。
心地よいぬくもりに包まれた食卓の雰囲気は、ベルが育てられてきた環境にどこか似ていた。
――エリス母さま……。
懐かしき育ての親の顔を思い出す。
目じりの優しげな皺、寝る前のお話をしてくれる時の穏やかな声、大切なミーア皇女伝をベルに託した時の凛とした顔……。
ルードヴィッヒが死に、アンヌが死に……、最後までベルの面倒を見てくれたのはエリスだった。
だからこそベルは、もしも本当に過去に戻ったのだとしたら、どうしてもエリスに会いたいと思っていたのだ。
――エリス、母さま……？　当たり前ですけど、ずいぶんと、お若いです……。
ミーアのお抱え作家でミーア皇女伝の執筆者でもある彼女のことを、ベルは尊敬していた。
その偉大なる育ての母であるエリスの幼少期の姿を見るのは、なんだか不思議な感じがした。
おんぶされて、寝かしつけられる時、いつでもエリスの背中はベルには大きく感じられたものだったのだが、さすがに自分と同い年

のエリスからは、そんな印象を受けたりはしなかった。
「ん？　どうかしましたか？　ベルさま」
じっとベルが見つめていることに気付いたのか隣に座っていたエリスが小さく首を傾げた。
ちなみに、ベルは知る由もなかったが、病弱だったエリスの顔色はだいぶ良くなっている。
肌艶がまし、やせ気味だった体は平均的なものになっている。
アンヌから送られてくるお金と、エリス自身がお抱え作家として得ている給金によって、食べるものには困らなくなっているのだ。
「あ……あの？　あっ……」
困惑した様子のエリスだったが、不意になにかに気が付いたのか、
「ベルさま、少し失礼します」
そう言って、そっとベルの襟元に手を伸ばした。そこについていたパン屑を優しくはらってから、
「差し出がましいことを言うようですけれど、だめですよ。ベルさま。ミーアさまに連なる者なのですから、気を付けなくては」
しかつめらしい顔で言う。
瞬間、ベルは、しみじみと実感してしまう。
――ああ、エリス母さまだ……。
と。
懐かしさと愛おしさが、思わず胸にこみ上げてきて……、
「あの、えーと、エリスか……、さん、えと、今夜は一緒に寝ても、いいですか？　物語のお話とか聞きたいんですけど……」
思わず、そう言っていた。
「え？　あ、でも、ベルさまは従者の方と……」
慌てた様子でリンシャの方に目を向けるエリスだったが、リンシャは苦笑いを浮かべて肩をすくめた。
「普通は貴族とか王族が平民と一緒に寝るなんてことはありえないと思うんですけど、ミーアさまもベルさまも、その辺りはだいぶ緩いみたいよ。それと、ベルさまは、自分のことは自分でできるから、

心配しなくても大丈夫」
「そう、なんですか？」
「はい。エリ……じゃなくって母さまに、恥ずかしくないようにってしっかりとしつけられましたから」
そう言って、なぜか得意げな笑みを浮かべるベルに、エリスは首を傾げるばかりだった。

そうして、見事にエリスのベッドで眠ることを許されたベルは、横になって肌かけにくるまり、思い切り息を吸い込んだ。
――ああ、エリス母さまの匂いがする……。
自分を守るため、命を散らした育ての母。その包み込むような温かさと、確かにつながるものを感じて、ベルはほんの少しだけ涙ぐんだ。
「そ、それでは、失礼します……」
と、すぐ後ろに、ゆっくりとエリスが入ってきた。
そのまま、ベルに背を向けて横になると体を固くしてしまう。
「あの、エリスか……さん？」
「はっ、はい、なんでしょうか？」
どこか緊張した声。
これでは楽しく夜のお話、とはならないかもしれない。
昔、眠れなかった時、エリスは優しくおとぎ話を語ってくれたものだった。それは、眠る前には甚だ不適切な大冒険活劇だった。
興奮して眠れない時もあったけど、気づけば、楽しい夢の中にいた時もあった。
あの時の、かけがえのない時間をもう一度だけ味わいたいと思うベルにとって、この状況は少しだけ不満だった。
むーっと頬を膨らませて、ベルは考える。
――なんとかしてエリス母さまに、緊張をほぐしてもらわないと……。
むむむ、と考えた末、ベルはとっておきの小話を披露することに

した。
「あの……エリスかあ……、さん？　ミーアお姉さまのお話、聞きたくないですか？」
「聞きたいです！」
ぐるり、と寝返りを打って、エリスがまっすぐに見つめてくる。
――ああ、やっぱりミーアお祖母さまのお話には、興味があるんですね……。
ベルは自分の作戦が上手くいったことにホッとしつつ、わずかばかり声を落とす。
「そうですか。では、これはここだけの話にしてもらいたいんですけど……ミーアお姉さまは、天馬も乗りこなせるんです」
「えっ、て、天馬……ですか？」
ぎょっとするエリスに、ベルは知ったかぶりで答える。
「はい。あ、ちなみに天馬というのは、なんでも、天を翔ける馬みたいですよ。ボクも見たことがないんですけど、翼がついた馬みたいです。きっと普通の馬よりずっと乗りづらいと思います」
「そ、それは、そうでしょうね。空を飛んでるわけですし……。天馬……、本当にいたんだ……」
ごくり、と喉を鳴らすエリス。
「それを乗りこなすなんて、すごいですね、ミーアさま」
「あ、それとですね、幼い日から毎日十冊ずつ本を読んでたんだそうですよ。ボクも、挑戦してみましたが、毎日一冊ずつが限界でした」
「一日一冊でもすごいです。私もそんなに本があるところで暮らしてみたい」
一日一冊が限界で三日しか続かなかった……などと真実は言わないベルである。
「それから、あとはですねー、ダンスをする時、本気になると、ビューンって空を舞うみたいですよ……」
ミーアの話題をきっかけに、ようやくエリスは緊張を解いてくれ

た。
それからは、エリスも自分が考えている物語のことを中心に、いろいろな話をしてくれた。
かつての育ての母の空気を思い出して、大変ご満悦のミーアベルなのであった。

……その夜、ベルから聞いた話を、エリスはすべてメモにとっておいた。
「さすがはミーアさまね。すごく小説のネタになりそう……。いや、これならむしろ、本当の話を書いた方が面白いかも……。ミーアさまの記録、ミーア皇女伝……か。いつか書いてみたいな」
そのような不吉なことをエリスが考えていることなど、まったくあずかり知らぬミーアなのであった。

第四十九話　ミーア姫、気を利かせる

ルードヴィッヒと面会した翌日のこと。
ミーアはベルたちとともに、新月地区に向かうことになった。
どうやら、ルードヴィッヒの師匠は住居不定らしく、すぐには居場所が分からないらしい。
なので、学園長のことはとりあえず置いておいて、ほかの講師探しをすることになったのである。
「でも、探すといっても、難しいんじゃないかしら……」
そう首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒは、
「そうですね……。もしよろしければ、新月地区の神父さまに相談してみるのはいかがでしょうか？」
「まぁ、神父さまに？」
一瞬、首を傾げるミーアだったが、
「なるほど……。確かにそうですわね……」
すぐに理解の頷きを返す。
貴族の影響を受けにくい知識層として、確かに中央正教会は検討の余地がありそうだった。
「もともと教会は学校をやっているところもございますし……。そのノウハウを活用できるかもしれませんわね。とすると……ふむ、学園には広く一般民衆も受け入れるつもりでしたけど、教会孤児院で保護している子どもなども何人か受け入れるというのはどうかしら……」
そうすれば資金の供給先として貴族たちだけでなく、中央正教会もあてにできるかもしれない。
などと早くも皮算用を始めたミーアだったが、ルードヴィッヒは若干渋い顔で口を開いた。
「もっとも、少しだけ難しいかもしれませんが……」

「はて？　なぜですの？　あの神父さまならば快く引き受けていただけるように思いますけど……」
「ミーア姫殿下のお考えを実現するために、私はセントノエル学園を引き合いにして、各貴族家に呼びかけました。セントノエル学園に匹敵する学園都市を帝国内にも、と……」
「ええ、それは知っておりますけれど……」
説明を受けていたミーアは、その必要性がきっちりわかっている。
貴族たちの愛国心を煽り、より多くの資金を供出させる。
結果としてミーアの学園都市計画は、資金面においては、まず安心できるだけの状況にあるのだ。
「あの時はそれが最善だと判断していました。けれど、セントノエル学園は中央正教会の聖地、ヴェールガ公国に建つ権威ある学園です。しかも、ミーア姫殿下は、事情はどうあれ、聖女ラフィーナさまを蹴落として、セントノエル学園の生徒会長になられた。その中央正教会の協力を得るのは……、なかなか難しいかもしれません」
「あぁ……」
そこまで言われて、ミーアは気づく。
自分は、あの神父に嫌われそうなことを、結構やっているということに……。
――というか、あの神父さまって、熱狂的なラフィーナさまファンではなかったかしら……？
であれば、いっそラフィーナの協力を仰いでは……などと思うのだが、今回の場合はその手も使えない。
なぜならそれは、下手をするとラフィーナの慈悲を仰いだと、他の貴族にとられかねないからだ。
そうなると、孤児院の子どもたちに枠を設けるのも、ラフィーナに慈悲を求めた結果、枠を無理やりにねじ込まれた、ととられかねない。
学園都市計画に反対する者たちにも、攻撃材料となりかねない。
ティアムーン帝国対ヴェールガ公国という構図で競争心を煽った

以上、協力をお願いできるのは、あくまでも帝国内の教会組織に限られる。安易にはラフィーナには頼めないのだ。
それがわかっているからこそ、ルードヴィッヒも渋い顔をしているのだろう。
正直、ミーアとしては、面倒だなーという感じなのだが……、そうも言っていられない。
ベルマン子爵の例を引くまでもなく貴族とはプライドに生きる者。今回は特にそのプライドに訴えかけて資金を出させた以上、無視するわけにもいかない。けれど……。
――まぁでも、ラフィーナさまを相手取った時よりよほど気が楽ですし……。ともかくできる限りの準備をしていけばなんとかなるのではないかしら？
幾度となく絶望的な経験を乗り越えてきたミーアは、この程度でへこたれたりはしないのだ。
一晩寝ずに作戦を考える……どころか、一晩ぐっすり寝て……寝ぼけ眼でぼけーっと朝食を食べている時、ミーアは唐突に思い出した。
「そうですわ！　あの方は熱狂的なラフィーナさまファン。ということは例のお土産を持っていって、ご機嫌取りすれば、あるいは……！」
ミーアは神父から頼まれていたことを、きちんと忘れずにやっていた過去の自分を、思わず褒めてやりたくなるのだった。しかも気を利かせて、頼まれていた以上の……やや過剰なサービスまでやっていたのだ。
――さすがは、わたくしですわ。よく気が利く出来る女ですわ！
そうして、完璧な作戦とともにミーアは近衛を引き連れて、アンヌの実家へ向かった。
その道すがら……。
「あら？　あなたは、たしか……」

ふと、隣を歩いていた皇女専属近衛兵（プリンセスガード）の顔を見て、ミーアは首を傾げた。
「ディオンさんのところの、副隊長さんではなかったかしら？」
「おっ？　へへ、おぼえていていただけましたか？」
熊のような巨漢の近衛兵は、照れ笑いを浮かべて頭をかいた。
「実はルードヴィッヒの旦那が皇女専属近衛兵団の増強を図るとかで……。あの時の隊のほとんどが、編入されたんでさ」
「まぁ、そうなんですのね。ぜんぜん知りませんでしたわ」
「俺たちみたいなガラの悪いのが近衛なんて、とは思ったんですがね」
と、そこで、副隊長はそっとミーアに顔を寄せた。
「どうも、厄介な連中と喧嘩してるみたいじゃないですか。暗殺ってのは、存外、防ぎにくいもんなんでね。一人でも多く腕利きが欲しいとかで」
「なるほど、そういうことなんですのね……」
「ええ、まぁ、むさくるしいかと思いますが、勘弁してくださいよ」
「とんでもない。わたくしの方からぜひお願いいたしますわ。副隊長さん」
「へへ、相変わらず気持ちいいぐらいの割り切りですね、姫殿下。もう副隊長じゃねぇんで、俺のことはバノスと呼んでもらえるかい？」
「ええ、わかりましたわ。バノス。では、道中よろしくお願いしますわね」
ミーアは上機嫌に、スカートのすそを、ちょこんと持ち上げた。
ミーアは大男との相性がいいのだ。
「あっ、ミーアさま！」
やがて、アンヌの実家に到着した。出迎えてくれたのはアンヌの弟と妹たちだった。
輝くような笑顔で迎えてくれる子どもたちに「うむ、苦しゅうな

い」などと、ミーアも満更でもない雰囲気であった。
「ご機嫌麗しゅうございます。ミーアさま」
「ああ、エリス。久しぶりですわね。いつも、あなたのお話、楽しんで読ませていただいておりますわ」
「えへへ、ありがとうございます。ミーアさま」
自身の書いた物語を褒められて、嬉しそうに微笑むエリスである。
「あ！　あの、ところで、ミーアさま……。天、あ、あれは秘密だって言ってたっけ。えっと、その、そう、トクベツな馬に乗れる……っていうのは本当なんですか？」
「特別な馬……ですの？」
はて、なんのことかしら？　と首を傾げるミーアだったが……。
「ああ、特別な……。そうですわね、確かに特別な馬にも乗ったことがありますわ」
セントノエルの馬術クラブでは、いろいろな馬を飼っている。
基本的には戦場で乗るようなゴツイ馬がメインではあるのだが、その他にも速く走ることを目的とした種類の馬（体力があるため、伝令に使われるらしい）や、一見すると仔馬のような小さな種類（ポニー）もいる。
――あのちっちゃい馬なんかは、わたくしも知らなかったですし、特別な馬といえますわね。すごく可愛かったですわ……。
などと、思い出していると……。
「やっぱり……そうなんだ……」
なぜだろうか。エリスは瞳をきらっきらさせながら、ミーアに頭を下げた。
「あの、ミーアさま、お忙しいことは重々承知していますが……、その、もしもお時間がある時は、特別な馬に乗った時のお話を聞かせていただけないでしょうか？」
「そんなこと聞いてどうするんですの？」
「もちろん、参考にします！」
――ああ、確かに、エリスの書いてる物語には王子が乗る馬とか

出てきますし……。馬に乗るとどんな感じか、とか聞きたいんですのね……。

納得顔で頷くミーアは……

――ということは、普通に馬に乗った感じをお話しするのでは面白くないでしょうね。草原を駆け回るようなスピード感がきっと大事ですわ。まるで、飛んでいるかのような、スピード感……。ふむ、少しオーバーにお話ししてあげた方が迫力があっていいですわね！

エリスの書く物語を面白くするため、しっかりと気を利かせる。

ミーアは気が利く出来る女なのである！

……こうして、偽史皇女（ぎしこうじょ）ミーア伝の完成が、また一歩近づいたのであった。

第五十話　ミーア姫、政治を語りだす

そんなこんなで、無事にベルと合流した一行は、そのまま新月地区へと向かった。

上機嫌に、鼻歌交じりにスキップするベルを見たミーアは少しばかり心配になった。

「ところで、ベル。ちょっといいかしら？」

「はい？　なんですか、ミーアお姉さま」

きょとんと首を傾げるベルに、ミーアはひそめた声で言う。

「実は、新月地区の教会でルードヴィッヒたちと合流することになっておりますの」

「えっ！？　ルードヴィッヒ先生にお会いできるんですかっ！？」

思わずといった感じで、ぱぁあっと顔を輝かせるベルに、ミーアは釘をさしておくことにする。

「それで、一応注意しておきますけど……くれぐれも、不用意なことは言わないようにすること」

「不用意なこと……？　どんなことでしょうか？」

「たとえば、未来に関することとかですわ」

そう言うと、ベルは、あはは、とおかしそうに笑った。

「もう、ミーアお姉さま、そんなこと言われるまでもないです。お姉さまのお邪魔になるようなことは、絶対言いません！」

言い切るベルである。

前夜、エリスに語ったことは、すでに記憶の彼方に放り投げている。ベルの記憶の彼方は、ベルの肩でも届く程度の距離にあるのだ……。

実にミーアの孫なのである。

「よろしい。殊勝な心掛けですわ」

偉そうに頷いたミーアは、ふと、周りの町並みに目をやって首を

傾げた。
「それにしましても、この辺りも随分と活気が出てきましたわね……」
少し前までは、多少は清潔になったものの、まだまだ貧困地区の雰囲気の残っていた「新月地区」だが、今では、往来に露店の並ぶ活気あふれる地区に様変わりしていた。
なるほど、雑然と並ぶ露店の中には怪しげなものも多く、さすがに買ってみようとは思わないが……。その洗練されていない、どこかいかがわしくもある空気が、逆に帝都の他の地域にはない活気を生み出しているかのようだった。
「なんでも、ルードヴィッヒの旦那が特区だかに指定したとかで。安く商売ができるってんで、商人たちが集まってきてるみたいですぜ」
さりげなく、ミーアたちをかばう位置を歩いているバノスが、豪快な笑みを浮かべながら説明してくれる。
「特区……、あ、もしかすると、ここってミーア大通り……」
「ミーア大通り……？」
不穏な単語を聞きつけて、ミーアは素早くベルに耳打ちする。
「なんですの？　それは？」
「あ、はい。帝都名物の場所だったみたいです。いっつもお祭りをやってるみたいな場所だったんだって聞きました。ミーア焼きっていう、ミーアお姉さまを象ったお菓子が有名みたいで……」
「……ミーア焼き」
なんだか、火あぶりにされる自分の姿を幻視するミーアである。
「頭の方にクリームがたくさん入っているので、頭からかじる派と最後まで頭をとっておく派にわかれるんだって、エリスか……さんが言ってました」
「頭からかじる……」
ミーアは頭がなくなった自分を想像し、次に、頭だけ残された自分の姿を想像した。

――なんだかギロチンを彷彿とさせて不吉ですわ……。これはルードヴィッヒに言って、早めに禁止にした方が……。
「えへへ、ボクも一度だけ食べたことがあるんですけど、独特の香ばしさと甘いクリームがとっても美味しいお菓子でした」
「お、美味しいんですの？」
「はい。もう、ほっぺが落ちちゃうかと思いました」
手をぶんぶんさせるベルを見て、ミーアは、ふむ、と鼻を鳴らした。
――まぁ、民衆が盛り上がっているところを邪魔するのも野暮というもの。今回は大目に見ることにいたしましょう！
ミーアは心が広いのだ。
断じて、そのお菓子を自分も食べてみたいから、というわけではない。
「ねぇ、ベル。そのお菓子って、いつぐらいに完成したものなのかしら？」
……食べてみたいから、というわけではない。たぶん。

そうこうしているうちに、一行は教会に到着した。
ルードヴィッヒとは、ここで待ち合わせることになっている。
「ルードヴィッヒは、少し遅れてくると言っておりましたし、先に神父さまと話を進めておきましょうか」
そうつぶやいてから……、ミーアはベルの方に目をやった。
――ベルもティアムーン帝室に連なる身……。政治のことも少しは学んでおく必要がありますわね。
ちょっと抜けたところのある孫娘を見ていると、なんだか心配になって……、お祖母ちゃん心が刺激されてしまうミーアである。
「ベル、一つ教えておいてあげますわ」
「はい！　なんでしょう、ミーアおば……お姉さま」
言い間違えかけたのは、自分に偉大なる祖母としての威厳があるからに違いない、と頭の中で解釈して、スルーするミーア。ミーア

のスルースキルは意外にも割と高い。
「わたくしたちは、これから、神父さまにお願いに行くのですけど……、基本的に誰かにお願いをする時には、贈り物を持っていくと話が円滑に進みますわ」
そう……ミーアが立てた神父篭絡のための作戦。それは一言で言ってしまえば贈り物。すなわち賄賂である。
極めてありがちな作戦……にもかかわらず、ミーアは偉そうに胸を張る。
「ベル、よく覚えておきなさい。政治というのは綺麗事だけでは済まないもの……。ちょっとした贈り物で話し合いを円滑に進められるのであれば、むしろ積極的にすべきであるとわたくしは考えますわ」
「なるほど！　勉強になります。ミーアお姉さま」
そんなミーアをキラキラ、尊敬のまなざしで見つめるベル。
「ところで、あの兵士の人が持ってるのが、その賄賂なのですか？」
ベルが視線を向けた先、護衛の兵士が抱えているのは四角い布に包まれたものだった。

第五十一話　ミーア姫、苦言を呈する

「これは、ミーア姫殿下。お久しゅうございます」
ミーアたちの到来を察したのか、教会から神父が出てきた。
相も変らぬ穏やかで優しげな笑みを浮かべる神父に、ミーアはなんだか少しだけ懐かしさをおぼえる。
「ええ、本当に、ずいぶんとご無沙汰してしまいましたわね」
ミーアはいつも通り、スカートの裾をちょこんと持ち上げて礼を返してから、傍らにいるベルを神父に紹介する。
「ああ、ミーア姫殿下の血縁の方ですか……。たしかに面影が少し似ておいでだ……。はじめまして」
「は、はい。はじめまして」
ベルはちょこんっと頭を下げてから、じっと神父の顔を見つめて……、それからミーアの耳元に顔を寄せた。
「あの、ミーアお姉さま……」
「ん？　なんですの？」
「この人……、なんだかあんまり賄賂とかで心が動く人には見えないですけど……」
むしろ、賄賂で心証が悪化するんじゃあ？　と心配そうなベルに、ミーアは余裕の笑みを浮かべる。
たしかに、世の中にはそういう人間もいる。
だが……。
「ふふふ、心配ありませんわ。あの方もまた、心持つ人間。であれば誘惑することは十二分に可能ですわ……。そして、賄賂じゃなく手土産ですわ」
賄賂なんて人聞きが悪い、と……悪女のような笑い声をあげてから、ミーアは言った。
「よくおぼえておくといいですわ、ベル。こういったことのほとん

どは、事前に相手の情報をいかに得られるかで決まるものですわ」
それからミーアは、神父の方に目を向けた。
「今日は神父さまにお願いしたきことがあり、こうして参りましたの」
「おお、それはわざわざ足を運んでいただいて恐縮です。それでは、どうぞ、お話は私の部屋で……」
そう言って歩き出した神父の後について、孤児院の中を進む。
「そういえば、あの子はお元気かしら。あのルールー族の……、この髪飾りをくれた子ですわ」
そう言って、ミーアは自らの髪に手をやった。ちょっぴりわざとらしく……。
そこには、虹色に輝く髪飾りが、淡い輝きを放っていた。
それはルールー族族長の娘の形見……では、実はない。
例の髪飾りは、すでに族長のもとに返されている。これは先日、新たに贈られたものなのだ。
なんでも、あの少年がはじめて削って作ったものだとか……。
つけておくだけで少年のみならず恐らくは神父の好感度が上がることに加え、つけずに少年と会った場合は大変に気まずい。
ならば、つけない理由はない！　というミーアの危機管理能力が光るファッションである。
「はい。先日訪ねてきてくれました。森で採れた果物をたくさん持って……。ふふ、その髪飾りも大切にしていただけているようで、きっとあの子も喜びます」
「会えなくって残念ですわ。ぜひお礼を言いたかったのに。よろしく伝えておいてくださいませね」
「はい。わかりました」
と、その時だった。ふいにミーアは、視界の中に入ってきたものに、足を止めた。
その視線の先にあったもの、それは、広い部屋で子どもたちが書き物をしている光景だった。

真新しい机を囲み、熱心に書き物をする子どもたち。もちろん、退屈そうにしている子もいるが、ほとんどの子はまじめに教師役の修道女の話を聞いている。
「文字を教えているのです、姫殿下」
後ろから、神父が説明してくれる。
「中央正教会では、識字教育に力を入れているんですのね」
「はい。読み書きと計算さえできれば、いろいろな仕事ができます。それに、自分で聖典を読むことができますから」
神父や司祭を通してだけではなく、一人一人が直接に神からの教えを受けることができるように大陸すべての人に識字教育を……。
それは古くからの、中央正教会の方針であった。
――ふむ、この神父さまも、やはり教育には熱心ですのね。衣食住に余裕が出てくれれば、今度は子どもの教育にお金を回したんですのね……。
真新しい机とわずかにほつれた神父の服とを見比べて、ミーアは……にやりとほくそ笑む。
――これならば学園計画に協力していただけそうですわ。手土産で上手く心をつかむことができれば……。

神父の部屋に入り、ちょっぴり固い椅子にお尻を落ち着けたところで、
「あっ、そうでした。忘れておりましたわ」
ミーアはわざとらしく、ぽんっと手を打つと、ミーアは持ってきていた手土産を神父の前に置いた。
お願いする立場である以上、こうした気遣いは不可欠である。それは言うなれば潤滑油のようなものなのだ。
なくても話は通るかもしれないが、あればよりスムーズに話を進めることができる。
「これ、お願いされていたものですわ」
そのミーアの言葉に、神父の目の色が変わる。

「そっ、それは、まさかっ！？」
震える手で、神父が持ち上げたもの……それは一枚の肖像画だった。
「以前、お願いされたラフィーナさまの肖像画にサインをしていただきましたわ」
「ああ、ありがとうございます。ミーア姫殿下……。無理なお願いを聞いていただきまして……」
感動に、わずかばかり声を震わせる神父に、ここぞとばかりにミーアは追い打ちをかける。
「ふふ、それだけではございませんわ。実はもう一枚あるんですの」
「……もう一枚？」
きょとんと首を傾げる神父に、ミーアは会心の笑みを浮かべて、
「これですわ！」
どどーんっと効果音付きで、こっそり背後に隠しておいたものを差し出す！
それはっ！
「先日、セントノエル学園で売っていたものに、ラフィーナさまにサインしていただきましたの。どうかしら？　これって珍しいものなのではないかしら？」
得意げに微笑むミーア。だったが、神父は無反応だった……否、そうではなかった！
その体が、かすかに、震えていて……。
やがて！
「お、おおおっ！　そっ！　そそ、それはっ！　まさかっ！」
地の底から響くような声を上げ、神父はその肖像画を手に取った。
「まさか、ヴェールガ公国内はおろか、セントノエル学園においても期間限定でしか買えない……特別限定伝説級版（スーパーレア レジェンドクラス）、生徒会長選挙Ｖｅｒっ！？」
さらに、彼はその下の部分に書かれたラフィーナのサインと自らの名前、さらに、

「いつもお仕事お疲れさまです。あなたに神の祝福がございますように」
との、ありがたいメッセージまで見つけてしまい……、「ひょーっ！」と悲鳴を上げた。
……ちょっと怖い。
「……とっ、特別限定伝説級版？　そっ、そうなんですのね？　正直、詳しいことはわかりませんが……」
神父の食いつき加減に、若干引き気味なミーアである。
まぁ、それでも喜んでもらえたのだからよかったのだろう、と気を取り直して……。
「とっ、ところで、肝心の今日ここに来た件なのですが……」
「はい。それはもう。ルードヴィッヒ殿からすでにお話を聞いております。少し検討させていただきたいとお答えしておりましたが、ぜひ喜んで、最大限、協力させていただきます！」
「はぇ……？」
さすがに想定外の事態に、ミーアは目を白黒させる。
一方ベルの方はといえば……。
「こ、これが、賄賂の力……」
潤滑油……どころか、摩擦係数がマイナスになって、空の彼方にすっ飛んでいきそうなぐらいの勢いに、ごくりと喉を鳴らすのであった。

――これは……もしかして賄賂……じゃなかった。お土産、必要なかったかしら……？
などと思わなくもないミーアではあったが、まぁ、それでも神父が喜んでくれたのでよしとしておく。
――この方も、蒔いた種に相応しくたまには報われてしかるべきですわ。
そんなことを思いつつ、ミーアはそっと心の中で、快くサインしてくれたラフィーナに感謝するのだった。

「こっ、これは寝室に飾らせていただきます！」
「どうぞ、ご自由に……」
「ベッドの上の天井に飾るとよい夢が見られると、仲間内で評判でして……」
「……あなたへの敬意が薄れてしまいそうですので、具体的に言わなくっても結構ですわ」
ラフィーナには使い道を黙っておこう、などと思いながら、珍しくまっとうな苦言を呈するミーアであった。

第五十二話　写本≪地を這うモノの書≫

ミーアが新月地区にて、神父と戯れているのと同じころ。
「ああ、ミーアさんがいないと、なんだかつまらないわね……」
セントノエル学園、生徒会室では、ラフィーナがため息を吐いていた。
「本当ですね……。あ、ラフィーナさま、この予算なんですが、食堂関連のものを少し増やしたいってミーアさまが……」
クロエが予算の書かれた羊皮紙をラフィーナに手渡した。
「食堂関連……なにか不備があったかしら？」
首を傾げるラフィーナに、ティオーナが手を挙げた。
「あの、それなんですが……。クロエさんともお話しして調べたんですけど、しっかりいろいろな種類のものを食べないと健康に悪いという学説があって……」
そう言ってティオーナが差し出してきたのは、クロエが取り寄せた栄養学の本だった。
「たぶん、ミーアさま、これを知ってたんじゃないかって思います。ほら、ミーアさまよくキノコ、キノコって言ってるじゃないですか。ここにはキノコはすごく体にいいって書いてありますから、きっとこういう本を読まれたに違いありません」
それから、ティオーナはちょっぴり微笑んでから続ける。
「ミーアさまは頭が良すぎるから、時々説明を省いてしまう時があるんだろうって……。キースウッドさんが前に言ってました」
「ああ、そう……。たしかにそうかもしれないわ。うふふ」
遠く帝国の地にいる友人のことを思い出し、ラフィーナも微笑んだ。
「本当に生徒会長選挙の時にも、もう少し説明してくれればよかったのに。あんな風に回りくどいことをして……」

そうして、三人の女子たちは顔を見合わせて楽しそうに笑った。
……と、その時だった。
コンコンと、控えめなノックの音が響いた。
「失礼いたします。ラフィーナさま……」
「あら、モニカさん、帰っていたのね」
扉を開けて入ってきたのは、元風鴉の構成員、モニカ・ブエンティアだった。
今日の彼女はメイド服ではなく、灰色の厚手の外套を身にまとっていた。
「ただいま戻りました」
「ご苦労さま。それで、どう？　見つかったかしら？」
「はい。例の館から発見されました」
そう言ってからモニカは布に包まれた四角いものを、ラフィーナの目の前の机の上に置いた。
「そう。リンシャさんの言っていたとおりね」
「ラフィーナさま、それはいったい……」
二人のやり取りを見て不思議そうに首を傾げるティオーナに、ラフィーナは意味深な笑みを浮かべる。
「これはね……混沌の蛇の教典……『地を這うモノの書』の写本よ……」
そう言いながら、ラフィーナは布をめくった。
現れたのは、古びた一冊の本。黒いごつごつとした表紙に目をやり、ラフィーナは嫌悪に顔をゆがめる。
「私が知る限り……この写本が歴史の表舞台に出てくることはほとんどなかった。私も見るのははじめてだわ」
そうして、なにげなくラフィーナは本の表面を撫でた。
瞬間――その指先におぞましい悪寒が走った。
それはまるで、肌の上を蛇が這いまわるような感触……。指先から腕を伝い、体中を駆け巡るような強烈な不快感に、ラフィーナは思わず息を呑んだ。

「……今のは？」
自らの手の平を呆然と見つめるラフィーナ。そんなラフィーナに、モニカが心配げな視線を向けてきた。
「どうかなさいましたか？　ラフィーナさま」
「……いえ、なんでもないわ」
誤魔化すように微笑んで、それから、ラフィーナは改めてモニカの報告を促す。
「ところで、モニカさん、この本の内容は、読んだかしら？」
「はい。許可をいただいておりましたので、一通りは」
「そう……。それで、どうだった？」
その問いかけに、モニカは一瞬黙ってから、
「そうですね……。端的に言ってしまうと、その本には革命によって国が滅ぶ、その過程が書かれています」
「それは……レムノ王国の革命事件を予言していたとか、そういうことかしら？」
「いえ、違います」
首を振るモニカ。その答えに、ラフィーナは眉をひそめた。
「違う……？　どういう意味かしら？」
「予言書というより……、これは、なんというか……」
刹那の逡巡、その後、モニカは言った。
「そう、悪意の塊のような……」
その声は、なぜだろう、かすかに震えていた。
「悪意の……塊？　それは、なんだか……、少し感覚的な表現ね」
「申し訳ありません。自分でもそう思います」
そう言うと、モニカは小さくため息を吐いた。それから、冷静さを装うような平坦な声で続ける。
「書かれている内容は、国という秩序をどのように破壊するのか、その方法論（マニュアル）です。王権を腐敗させ、国を荒れさせる方法、人の死を蓄積させて憎悪を醸成する方法、それを土壌にして革命戦争を起こす方法……、どのようにして民衆の心を操り、王権という秩序を破

壊させるのか。そうした知識がたくさん書かれた書物です」
そこで、ふいにモニカは腕をさすった。
「読んでいる内に、これを書いた者の悪意が染み込んでくるような……そんな禍々しさを感じました」
訓練を受け、常に冷静であることを求められる間諜が見せた微かな怯え……。
それを見たラフィーナは一瞬、何事か考え込んだ様子だったが……、すぐに小さく首を振った。
「いずれにせよ……、その本を分析すれば混沌の蛇の手掛かりがつかめるかもしれない。さすがね、ミーアさん」
「えっ？　その本を見つけたのって、ミーアさまなんですか？」
驚いた様子で、クロエが目をまん丸くした。
「ええ、そうよ。ミーアさんは、あのジェムという男を殺さないように、シオン王子とアベル王子にお願いした。そうして私のもとに送った……。きっとこの本か、これに似たようなものを手に入れようって、思ったからに違いないわ」
「なるほど、たしかにそうですね。ミーアさまならば、当然、そのぐらいのこと考えていてもおかしくないと思います」
「ああ……そうですね。ミーアさまなら……」
ラフィーナの推測に、ティオーナとクロエが同意する。
その様子を見たモニカは……。
――とんでもない方なのね、ミーア姫殿下は……。こんな事態まで想定しているなんて……。
畏怖の念を新たに刻み込むのだった。

第五十三話　他人の不幸を笑うものは……ミーアの場合

神父の部屋で、しばらく歓談していると……。
「失礼いたします。ミーアさま、ルードヴィッヒさんがいらっしゃいました」
アンヌに連れられて、ルードヴィッヒが現れた。
「お待たせしてしまい、申し訳ありませんでした。ミーア姫殿下」
深々と頭を下げるルードヴィッヒに、ミーアは鷹揚（おうよう）に頷いた。
「あなたもいろいろとお忙しいでしょうし、きちんと話をつけておきましたから問題はありませんわ」
ふふん、っと微妙に偉そうなミーアである。
見る人が見れば、イラっとする態度だろうが……、ルードヴィッヒはむしろ尊敬のまなざしを向けていた。
「そうですか……。もう協力を取り付けられたとはさすがですね……。ところでミーア姫殿下、そちらの隣にいる方は……」
「ああ、手紙で書いたわたくしの腹違いの妹ですわ。あ、このことは絶対に他言無用でお願いいたしますわね。神父さまも」
ミーアが視線を向けると、神父は「心得た！」とばかりに頷いた。
安堵しつつ、ミーアは改めてベルの方を見て、
「ベル、自己紹介を……」
「ルードヴィッヒ先生……」
ベルのこぼしたつぶやきは、やけに大きくはっきりと、その場に響いた。
「ん？　先生？」
不思議そうに首を傾げるルードヴィッヒ。一方、ミーアも驚愕に固まっていた。
――え？　いきなりですの！？
時々、ポカをやらかす孫娘だとは思っていたが……、あれだけ偉

そうなことを言っておいていきなり、まずいことを口にするとは、さすがに予想できなかったミーアである。
ベルの方もすぐに自分のやらかしに気づいたか、あわわわ、などと慌てた挙句、
「な、なんでもないです」
なんの言い訳にもなっていないことを言って、黙ってしまった。
そんな誤魔化しが通じるのは、アンヌの一家ぐらいなもの。
――これは、なにか誤魔化しておく必要がありますわ。
そう判断したミーアは、素早く頭を働かせる。結果！
「えーっと……、ああ、そうですわ。わたくしがそう呼ぶようにベルに言っておいたんですの。あなたから学ぶことは多いでしょうから」
なんとか誤魔化そうと、ミーアがよいしょを始めた。
褒められて嬉しくない人間などいない。
男性は、自分の仕事を褒められることに弱い。
アンヌの言っていたアドバイスを活かして、適切に、よいしょよいしょっとやっていく。
「あなたの識見はとても貴重なもの。ですからこの子にとっても、将来きっと役に立つって、わたくしは確信しておりますの。だから先生と呼ぶように、と。あ、そうですわ。どうせならば、あなたも学園で教鞭をとってはいかがかしら？」
やたら、早口にまくし立てていく。
反論を許さないスタイルである。
「残念ですが、私などとてもではありませんが、先生と呼ばれるに値しません。どうぞ、ベル殿下。私のことは、ルードヴィッヒと呼び捨てにしてください」
「あら？　ずいぶんと謙遜ですわね、ルードヴィッヒ。わたくしは、あなたの手腕をとても評価しておりますのよ」
評価しているどころの話ではなく……、ミーアがなにかやろうと思えば、一から十までルードヴィッヒの力を借りなければならない

わけで……。
全面的に頼り切りなのに、なぜだか偉そうなミーアである。
「それはありがたいのですが……。我が師のことを想像すると、どうしても私には、他人に何かを教える資質があるとは思えないのです。私などが「師」と名乗って良いはずがない」
苦笑しつつ、ルードヴィッヒは肩をすくめた。
「まぁ、あくまでも個人的なこだわりなのですが……。恐らく、ミーア姫殿下も、私の師とお会いいただければ、わかっていただけるかと……」
「ふむ……、ということは、まさか……」
「はい、師匠の居所がわかりました」
ルードヴィッヒが、彼にしては珍しく嬉しげな笑みを浮かべた。
「まぁ！　ずいぶんと早いですわね」
「お褒めにあずかり光栄です。実は、姫殿下をお呼びするのとともに、私の同門の者に捜索を依頼していたのです。どうやら予想していたよりも早く見つけてくれたようです」
「あら、そんな方がいらっしゃるんですのね。今度、紹介していただきたいものですわ」
思いのほかあっさりと解決しそうな状況に、ミーアはルンルンである。
教会から派遣してもらえるであろう講師と、ペルージャンのアーシャ姫、加えてルードヴィッヒの師匠と、その呼びかけに応えて集まる者たちを加えれば……。
「ふむ、この問題は解決したも同然ですわね」
などと、楽観的に考えるミーアであった。
けれど、ルードヴィッヒは一転、表情を暗くする。
「いえ、むしろこれからが大変なのです」
「ん？　どういうことですの？　あとは、そのお師匠さんとやらにルードヴィッヒがお願いすればよろしいだけではありませんの？」
不思議そうに首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒは言いづらそ

うな顔で首を振る。
「実はその……師匠は貴族嫌いでして……ゆえに、ミーア姫殿下の学園都市計画に協力を要請するのは、簡単ではないのです」
「まぁ、そうなんですのね……」
なるほど、それでグリーンムーン家の影響を受けないのか、とミーアは納得する。
貴族が嫌いなら、裏でグリーンムーン家がいかに圧力をかけてきても関係ない。
「しかも、頑固者ゆえ、説得はなかなかに骨が折れるのではないかと思います」
苦々しい口調で続けるルードヴィッヒ。
「そう……。それは大変ですのね」
相槌を打ちつつ、半ば他人事なミーアである。いや、むしろ……、――前の時間軸で、さんざんわたくしに嫌味を吐いたクソ眼鏡……もとい、ルードヴィッヒが師匠にペコペコするなんて、これは愉快痛快。せいぜい、その怖い師匠……教師と名乗れないぐらいに心の傷を植え付けられてしまうような、こわーい師匠に嫌味を言われるがよいですわ！
ミーアは、にっこにこと実に良い笑顔を浮かべる。
……けれど、ミーアは知らないのだ。
かつてルードヴィッヒの不幸を笑った男が、どうなったのか……。
他人の不幸を笑う者がどのような目に遭うのか……を。
その伏線は、思いのほか迅速に回収されることになる。
「ええ、私ではとても説得は不可能です。だからこそ、ミーア姫殿下に帰ってきていただいたのです」
「……はぇ？」
「ミーア姫殿下、その叡智をもって、どうか我が師を説得していただきたい」
「……はぇ？」
ぽっかーんと口を開けるミーアであった。

第五十四話　紅茶には、たっぷりの砂糖と涙を一滴

「せ、説得……わたくしが、ですの？」
「はい……」
まっすぐにミーアを見つめてくるルードヴィッヒ。
冗談を言っている様子は……、ない。
――というか、ルードヴィッヒが冗談を言うのはあんまり見たことがありませんし、え？　では、本気なんですの？
突然の展開についていけないミーアであったが、
「え、えーっと、ルードヴィッヒ、できればあなたの師匠のことを詳しく聞きたいのですけど」
とりあえず態勢を立て直すべく言った。
「そうですね……」
ミーアのお願いに、「もっともだ」とばかりに頷いて、ルードヴィッヒは腕組みした。
「そうですね、師匠は……厳しい人です。弟子になりたいとやってきて、初日に心を折られて故郷に帰った者もいます。私なども叱責されて、三日三晩食事が喉を通らなかったこともありました」
――ええ……。
最初の一言で、ミーアのやる気が八割減退した。
「この世の理（ことわり）を解き明かすため、あらゆる知識に精通しています。兵法について学びたいと思えば戦場跡地に行って槍を持って走り回り、人の心を学びたいと思えば市や酒場でさまざまな人に交じって話を聞く。毒の効果を知りたいから、と自ら薄めた毒を喰らって倒れたこともありました。自由奔放に実地に行き、見て、聞いて、触れて、それらを自らの知としていく。巷では放浪の賢者などと呼ばれています」
――変人！　相当な変人ですわ！　説得できる気がまったくいた

しませんわ！
ミーアのやる気がさらに八割減退した。
正直、説得とか絶対にしたくないし、会いたいとも思わない。
けれど、それでもなんとかひきつった笑みを浮かべて、ミーアは言った。
「……そう、それは……あ、頭のよろしい方なんですのね」
「はい。その知識量は帝国随一と言えるでしょう。それに、人を育てる師としても非常に優れた方です。時に厳しく、時に穏やかに我々を教え、諭し、育ててくださったのです」
――なるほど……時に厳しく嫌味を言い、時に穏やかに嫌味を言う……。緩急をつける感じかしら……。ただ淡々と嫌味でチクチクされるより、傷が深そうですわ。
いろいろな角度から、いろいろな強さで刺される。心がズタズタのボロボロにされてしまいそうな予感にミーアは震える。
言うまでもないことながら、ミーアのやる気はすでにまるでない。ミーアのやる気総量をはるかに上回るやる気が失われてしまったミーアは、心の底からルードヴィッヒの師匠に会いたくなくなった。
ゆえに、ミーアは懸念という名の反対意見を口にした。
「そっ、そんな方を学園の長にしてしまって、その、平気……かしら？」
わたくしのように心を折られる子がいるのでは？　という言葉を呑み込みつつも、察しろ！　とルードヴィッヒの目を見つめる。
「やめといた方が良くない？」と、目力全開で訴えかけるが……。
ルードヴィッヒはそんなミーアを安心させるかのように、優しげな笑みを見せた。
「姫殿下のご懸念はもっともです。けれど、それは大丈夫。師匠は厳しいですが、それにはいつだって納得のいく理由があるのです。たとえば、そうですね。少しでも考えればわかることを聞いたりとか、考える努力を怠った時には容赦のない叱責が飛んできますね」
――あ、ああ……実に、それは、ルードヴィッヒのお師匠さまで

すわ。
ミーアは死んだ魚のような瞳で、ルードヴィッヒの顔を見つめた。
――あなたは違うのかもしれませんが……納得のいく理由があってもなくっても……嫌味を言われたら人は傷つくんですのよ、クソメガネ……。
むしろ、自分が悪いとわかっていることを、改めて突っ込まれる方がしんどいのだ。
くらーい顔になるミーアを見て、ルードヴィッヒは苦笑する。
「心配せずとも大丈夫。ミーア姫殿下であれば、師匠の話にもきっとついていけます。むしろ帝国の叡智たるミーア姫殿下とまともに討論できるのは師匠だけかもしれません。師匠はミーア姫殿下のかけがえのない知己となりえるでしょう」
――そっ、そんなお友達いりませんわ！　ルードヴィッヒ以上に頭の良い方とお話なんか、まっぴらですわ！　どう考えてもついていけませんし……。しかも、厳しいとか、怖いとか……。絶対に会いたくありませんわ！　会いたくありませんわっ！
お腹がキリキリ痛くなってくるミーアである。
なにせ、学園長への勧誘さえ成功すればいいというものではないのだ。
もしも学園長に就任されてしまったら、ミーアは幾度も、その恐ろしく厳しい男と顔を合わさなければならないのだ。
そんなのは真っ平ごめんだ。ルードヴィッヒは一人で十分。ルードヴィッヒ以上にルードヴィッヒらしいのとなんか、会いたくもなかった。
「あっ、でも、貴族が嫌いだって言ってましたし、それじゃ、わたくしもダメじゃないかしら？」
「いえ。師匠が嫌いなのは礼を失する高慢な貴族です。しかも、既存の概念から一歩も出ようとしない頭の固い貴族です。けれど、ミーア姫殿下はそんなことはありません」
「い、いえ、わたくしも結構、頭、固いですわよ？　カチコチです

わ」
ミーアはこつこつ、と自分の頭を叩いて見せる。っと、
「はは、ご謙遜ですね」
冗談だと思ったようで、ルードヴィッヒは笑い声を上げた。
それにつられるように、ベルと神父も笑った。
アンヌも優しげな瞳で、ミーアを見守っている。
和やかな雰囲気だった！
――わっ、笑いごとじゃございませんわ！　笑いごとじゃございませんわっ！
ミーア一人だけ必死である。
こいつら人の気も知らないで、のんきな顔で笑いやがって、とミーアは、一人で心の中で絶叫した。
けれど、ミーアはすでに察してもいたのだ。
これはもう、会わないわけにはいかない流れだ……と。
それは、そう……。市場に引かれていく子牛にも似た気持ちだった。
――ああ、もう、これは……抵抗しても……無駄、ですわね。
ならば、無駄な労力は使わない、とばかりに、諦念に身をゆだねるミーア。
ぐんにょりと椅子の上で脱力しかけるミーアに、ふと、すぐ隣から、紅茶のカップが差し出された。
「ミーアお姉さま、このお紅茶、甘くてとっても美味しいですよ」
「あ……ああ、本当ですわね。ぐすっ……、とっても、美味しい……」
じんわりと、口の中に広がる味は、甘くって……でも、なぜか、ちょっぴりしょっぱかった。
「それでは、失礼します」
その時だった！　ミーアの耳に、可愛らしい少女の声が聞こえた。
部屋にいる誰とも違う声……。そこでミーアは気づいた。
――そういえば、この紅茶、いったい、誰がいつ！？

素早く顔を上げ、あたりを見回したミーアは、まさに今、扉を開けて部屋から出ていこうとしている少女の姿を見つけた。
ミーアよりは少し年下の、恐らくは、この孤児院で預かっている少女……。
そこに、ミーアは一縷の望みをかける。
「ねぇ、ちょっと、そこのあなた……よろしいかしら？」
「はい？」
きょとんと首を傾げる少女に、ミーアは優しく語りかけた。

第五十五話　ニガシマセンワ……

新月地区の孤児院では、読み書きと計算の基礎を教え込んでいる。それは中央正教会のすべての孤児院で行われているのと同じで、その教育はそれなりの水準であり、まず良心的といってもよいものだった。

それは、孤児院を出ていく子どもたちが自分の力で生きられるようにするための最大限の配慮だった。

けれどそれでも……、そこを出て行った者のすべてが幸せになれるわけではない。

孤児院を出て、とある商家に引き取られた少女、セリアもその一人だった。

セリアは孤児院きっての優等生だった。

いつも真面目に積極的に文字を学び、本を読んだ。

どこかの学校に入れば、きっと偉大な学者になるだろうと言われた彼女であったが……その機会はついぞ訪れなかった。

商家に引き取られた後の彼女の生活は、幸せなものではなかった。

もちろん、食べるものがあるだけマシで、住む場所があるだけマシで、着るものがあるだけマシだ。

親もなく、貧民街で育った彼女にとって、それは望みうる最高の環境であったのかもしれない。

贅沢を言い出せばきりがない。

「満足するべきだ。まともな人間として生きていけるんだから……」

そう自分に言い聞かせて、彼女は自らの感情にふたをした。

諦めたのだ。

そうして、彼女のその知性は本来の力を発揮することなく……なにか、素晴らしいものを生み出すかもしれなかった、その可能性の種子は芽吹くことなく。

柔らかな土に落ちることも、水を注がれることもなく、静かに砕けて散った。
徐々に年老いていき、知性のきらめきを失ったセリアは病床の中で自らの人生を顧みる。
口惜しさはあった。けれど、それ以上に大きかったのは枯れ果てた諦め。
「仕方ない。私は孤児だったんだから……。ベッドの上で死ねることに感謝しなくてはいけないね」
そうして、彼女のすり切れたような人生は幕を閉じた。

……そんな夢を見た朝。
孤児院のベッドで目を覚ましたセリアは、深い絶望の中にあった。
どれだけ頑張ってもすべてが無駄に終わる……。
それを否定したくて、がむしゃらに勉強してみるのだけど……。
やればやるほどに、自身の道が行き止まりであることを実感してしまう。
そんな折、その少女はやってきた。
輝ける帝国の栄光。帝国皇女ミーア・ルーナ・ティアムーン。
この孤児院の恩人で、新月地区を変えた人。
お茶を持っていくように修道女に言いつけられたセリアは、粗相がないよう最大限の注意を払って、自らの仕事を遂行した。
そうして、部屋から出ようとしたまさにその時、当のミーアが話しかけてきた。
「ねぇ、ちょっとそこのあなた、よろしいかしら？」
「……え？　私、でしょうか？　あの、わ、私、なにか……？」
「いえ、やはりこういうことは当事者の意見を聞くべきかと思いまして」
ミーアは、じっとなにかを訴えかけるようにセリアの瞳を見つめてから、笑みを浮かべた。
「ねぇ、あなた、勉強はやっぱり優しい先生に教わりたいですわよ

ね？」
「……どういう意味ですか？」
「あなた、たしか先ほど、熱心に書き物をしていた子ですわよね？
それってやっぱり、ここの修道女さんが優しいから、やる気になるんですわよね？　もしもの話ですけど、この孤児院の修道女さんが、ものすごーく厳しい方だったら……、理不尽じゃなくても、自分が間違えた時には的確にそれを鋭くえぐってくるような、鬼のような人だったら、やる気にはなりませんわよね？」
ミーアは厳格で、恐ろしくすら感じられるような声で続ける。
「もしも、あなたが無料で学校に通えると言われたとして、そこの先生がものすごく厳しい先生だったら、通う？　どれだけ苦しくても辛くても勉強を続けるものかしら？　逃げ出してしまったりするんじゃないかしら？」
「……そんなの、関係ない」
気づけば、セリアは言っていた。
「厳しくっても、苦しくっても、辛くても学ぶことができるなら……、希望があるなら……。私は勉強したいです。理不尽だって構いません。教えてもらえるなら……希望があるなら、それが見えているなら、頑張れます」
セリアに立ちふさがるのは、高い山ではない。
ただの、無慈悲な壁だ。
つるつるとして、手をかける場所さえないから、乗り越えることも壊すことも不可能。ただ、彼女が前に進めないようにするためだけにあるような、残酷な壁なのだ。
山であれば、どれだけ高くても、頂上まで辿り着ける希望がある。
けれど壁ではどうにもならない。諦めてその前に座り込むことしかできない。
そんなセリアにとって、ミーアの問いかけに対する答えは明白なものだった。
どれだけ険しくても、山であれば……つまずき、傷つき、転がり

落ちて死んでしまったとしても……、そこには希望がある。頂上を目指して前に進める可能性があるのだ。
ならば、頑張れる。
セリアは、まっすぐにミーアの瞳を見つめて言った。
「もしも勉強をさせてもらえるならば、私だったら、どれだけ厳しくっても頑張ります。学ぶことのできる環境を与えられて頑張れないなんて、贅沢な話だと思います」
と、そこまで言ってしまい、セリアは青くなった。
帝国皇女に対して、セリアは相当に礼を失した物言いをしてしまったのではないか？
慌てて謝ろうとしたセリアだったが……、ふとミーアの方を見て思わず言葉を失った。
ミーアが、その瞳にいっぱいの涙を湛えていたからだ……。
「では……、あなた、その言葉をしっかりと実現なさい」
「え？」
「今、わたくしは、ここに誓いますわ。もしも、わたくしが厳しい厳しい学園長を無事にスカウト出来たら、あなたはわたくしの学園に通いなさい。そして、学園長に直接いろいろなことを教わるのです」
「え……？　え？」
「あなたが言ったのですわ。学びたいと……。その責任を取りなさい」
セリアの肩を力強く握り、ミーアは声を震わせる。
突如、目の前に開かれた道に、セリアはただただ驚き、言葉を失った。
すぐそばでそれを見ていたルードヴィッヒは、感動に打ち震えるミーアを見て、自身もわずかながら、心が震えるのを感じた。
――ミーア姫殿下は変わらないな……。相変わらず、情に厚い方だ。

恐らくは、この孤児院の少女の思いにミーアは打たれたのだ。そして、
「ルードヴィッヒ、あなたにも当然、手伝っていただきますわ。ともに来ていただきますわよ！」
自らを奮い立たせるような声で、ミーアは言った。
厳しい教育を受ける子どもたちを心配して、いろいろ懸念していたミーアであったが、生徒として受け入れる対象の、孤児院の子どもの覚悟を受けて、自身も覚悟を決めたのだろう。
「もちろんです。最大限、私も協力させていただきます」
ミーアに仕えることができて自分は幸せ者だと実感するルードヴィッヒであった。

さて……、まぁ、すでにお気づきのこととは思うのだが、当然、ミーアはセリアの覚悟に感動したわけではない。
ルードヴィッヒの師匠に会いに行きたくないがゆえに……、ミーアは最後の希望にすがったのだ。
すなわち、学園に実際に通うかもしれない生徒の声である。
ミーアの常識からして、勉強などというものは、厳しくされてまでやりたいものではない。
帝国皇女という立場から勉強しないわけにはいかないが、できれば優しく、楽にやりたいものなのだ。
それゆえに……。
――きっと、この女の子だってやりたくないって思うに決まってますわ。そもそも、庶民は読み書き計算ができれば普通に暮らせるのでしょうし。小難しい勉強を、厳しく怒られてまでやりたいなんて思わないはず……。そして、当事者がそんなことを言っているのを聞けば、ルードヴィッヒだって、お師匠さまをスカウトするのを諦めるはずですわ！
そのような計算のもと、少女に話を振ったミーアであったが……見事に玉砕する。

――ああ、やはり……、わたくしがルードヴィッヒの鬼師匠に嫌味でボコボコに殴られるのは、変えられない流れなのですわ。
悲嘆の涙を瞳に浮かべたミーアは、ぎんっ！　と少女を睨みつける。
「では……、あなた、その言葉をしっかりと実現なさい」
呆然とする少女の顔を見て、逃がさない、とばかりにがっちりその肩を握りしめる。
――好き勝手なことを言っておきながら、逃げようったってそうはいきませんわ！　厳しいのがいいですって？　いいでしょう……ならば、あなたの望み通りにして差し上げますわ。
ミーアはにやりと意地の悪い笑みを浮かべる。
「今、わたくしは、ここに誓いますわ。もしも、わたくしが厳しい厳しい学園長を無事にスカウト出来たら、あなたはわたくしの学園に通いなさい。そして、学園長に直接、いろいろなことを教わるのです」
――ええ、ええ、わたくし一人が苦労するなんて絶対に許しませんわ！　自分だけが嫌な思いなんて絶対にしない。そんな執念とともに、ミーアは誓いを立てる。
周りを積極的に巻き込んでいくスタイルである。
かくて、セリアは半年後、ミーア学園に入学することになった。

ちなみにこの時にミーアが言い出したことは、後に孤児院からの選抜によって構成される学園長直轄の特別クラスという形で実現することになる。
ルードヴィッヒたちを放浪の賢者の教えを得た第一世代とするならば、ここに集った子どもたちは第二世代の賢者の弟子たちと言えるだろう。
放浪の賢者の教えを受けた子どもたちは、第一世代の者たちに引けを取らぬ才能を発揮していく。

そして、彼らには第一世代にはない、一つの思いがあった。
それは、皇女ミーアに救い上げられたという感謝の気持ち。そして、それは揺らぐことのない忠誠心へとつながる。
ミーアの寵愛を受けた彼らは、成長し、少壮の官吏として各月省に入省する。そこで、女帝ミーアの目指す改革（とルードヴィッヒが説明するもの）を実現すべく、その才能をいかんなく発揮していくことになる。
そんな、次世代の帝国を支える能吏たちの筆頭であるセリアは、万能の才女として、宰相ルードヴィッヒから重用されることになるのだが……。
それは未だ実現していない夢幻の未来の光景。
その夢が、現実のものとなるか否かは、ほかならぬミーアの肩にかかっている。
いるのだが……。
「ふぐぅ……、ど、どうして……こんなことに……」
そんなこととはつゆ知らず、涙にくれるミーアなのであった。

第五十六話　ベルの無駄遣い

「それでは、いってらっしゃいませ、お気をつけて行ってきてください、ミーアお姉さま」
ルードヴィッヒの師匠は、現在、静海の森に滞在しているらしい。帝国の少数民族の調査のために、彼らに交じって生活しているのだ。
そこで、ミーアはアンヌとルードヴィッヒとをともなって会いに行くことになったのだが……。
「ボクは行っても役に立たないと思いますので、帝都に残ります」
ミーアベルは、そう言って別行動を願い出た。どうしても、帝都でやりたいことがあったのだ。
「大丈夫ですの？」
心配するミーアであったが、結局はその願いを聞き入れて、別行動をとることになった。
そうして、なぜだか、ぐんにょりやる気がなさそうな顔をするミーアを送り出した後、ベルはリンシャとともに帝都ルナティアの散策に出かけた。
「今日は、どうされるんですか？　ベルさま」
「はい。帝都を少し見て回りたいです」
ベルはリンシャの方を見て頭を下げる。
「すみません、リンシャさん。今日はたくさん歩きますね」
「別に謝っていただくようなことでは……」
比較的、斜に構えることが多いリンシャにとって、素直で純朴なところがあるベルは、ちょっぴりやりづらい相手だった。
――ていうか、ミーア姫殿下も大概よね……。もっと傲慢にふるまってもらったほうが調子が出るんだけど……。
などとため息を吐きつつ、リンシャは改めて尋ねる。

「それで、どちらに行かれますか？」
「そうですね。新月地区の方に行きたいと思うんですけど……」
「え……？　あの、あそこって、元貧民地区ですよね……？　危なくないですか？」
「うふふ、リンシャさん、心配性ですね。別に新月地区は危なくなんかありません。ミーアおば、お姉さまをお慕いしている、優しい人たちがたくさんいるところですから」
ベルはなにやら意味のわからないことを言ってから、嬉しそうにちょこちょこと走り出した。

新月地区に入ってすぐに、ベルはきょろきょろし始めた。
それは、まるで何かを思い出そうとするかのように。
あるいは、今は見えぬなにかを幻視するかのように。
声をかけるのもはばかられて、リンシャは黙って、ベルに付き従う。
「あっ、あのお店……」
やがて、なにかを見つけたのか、ベルが走り出した。
「ちょっ、ベルさま！」
慌てて追いかけるリンシャの目の前で、ベルは寂れたお店に駆け込むと、
「えっと、おじさん……、そこのお菓子くださいな」
「はいよ、まいど。三日月銅貨五枚だよ」
威勢の良いおじさんに、にこにこ笑みを返しながら、ベルはリンシャの方に手を差し出した。
「リンシャさん、ボクのお小遣いをください」
「はいはい。もう、しょうがありませんね」
リンシャはため息を吐きつつ、ベルに硬貨袋を渡した。
すると、ベルは迷うことなく銀貨の中では二番目に価値が高い半月銀貨を取り出すと、店主に手渡し、
「お釣りはいりません。ありがとうございました」

「……へっ！？」
笑顔で固まる店主のおじさんに構わず、ベルは店を飛び出した。
「ちょっ！　ベルさま！　なにしてるんですか！」
リンシャは慌てて、ベルを追いかけた。
三日月銅貨五枚であれば、半月銀貨を出せば銅貨ではなく、れっきとした銀貨である三日月銀貨でお釣りで返ってくるはずだ。
お釣りはいらない、などと言って、チップ代わりにするにはあまりにも額が大きすぎる。
やがて、店主が追ってこられない位置まで走ったところで、ベルはようやく立ち止まった。
そんなベルを捕まえて、リンシャは苦い顔をした。
「ベルさま、どこでご覧になったのかは知りませんけど、ああいう風に格好つけるためにお金を無駄にするのは、よくないことですよ」
キザな貴族が好みそうな行動を、当然のごとくリンシャは咎める。
確かに、ベルにはお小遣いとして自由に使えるお金が渡されてはいる。けれどそれは、無駄遣いしていいということではない。なにかあった時のためのものなのだ。
「あんな風に無駄遣いしたら、ミーア姫殿下に怒られてしまいますよ」
そうリンシャが苦言を呈すると……、
「いえ、無駄遣いでは、ありません」
思いのほか、しっかりとした口調で返事が返ってきた。
強い意志の輝きを宿した瞳に貫かれ、リンシャは思わず息を呑んだ。
時折、ベルが見せる凛とした表情。
王者の風格すら感じさせるそれに、リンシャはハッとさせられるのだ。
――普段は全然忘れてるけど……、この子もミーア姫殿下の係累。大帝国ティアムーンの帝室に連なる者なのよね……。
わずかながら、身を固くするリンシャにベルはにっこりと無邪気

な笑みを浮かべる。
「恩義を受けた者には、きちんと返さなければならない……。そのように、ミーアおば……お姉さまは言っておられました。だから、きっと大丈夫です」
ベルがなんのことを言っているのかは、リンシャにはわからなかった。けれど、少なくともベルが、わがままによって無駄遣いをしようとしているのではないことは分かった。
「よくわかりませんけど……、いいんですね？」
「はい。必要なことなので……。やらせてもらえると、嬉しいです」
そうして、笑みを浮かべるベルに、リンシャは小さくため息を吐くのだった。

「ミーアベルさま、これ、お食べください」
寂れたお店の前を通るたび、優しい声が聞こえてくる。
「ミーアベルさま。こっちだ。うちでしばらく隠れていくといい」
小さな家の前を通るたび、自分を助けてくれようとした人たちの声が甦る。
帝国を二分する戦い。荒れ果てて、地獄と化した帝都。そんな場所にも優しい人たちはいた。
司教帝の軍である聖瓶軍に追われたベルを匿ってくれた人たち、助けてくれた人たちは確かにいたのだ。命を散らしてでも、ベルを愛し、守ってくれた人たちが。
ベルはそれをおぼえていた。
一つ一つ忘れずに、大切に胸にしまい込み……、いつか機会があればお礼がしたいと思っていた。
「恩を受けたならば、忘れることなく、必ず返さなければいけない……」
偉大なる祖母ミーアから受け継がれた大切な教えを胸に、ベルは新月地区を走り回るのだった。

第五十七話　別に逃げてしまっても構わないのでしょう？

ぱかぽこぱかぽこ、ミーアを乗せた馬車が行く。
馬車を引く馬は、その主たるミーアのやる気を読み取ったかのように、微妙にやる気のない足取りだ。
――あぁ、気が進みませんわ。気が進みませんわ。
ふぅうっと深い深いため息が馬車の中に響いた。
ちなみに現在、馬車の中にはミーアとアンヌしかいない。
ルードヴィッヒはミーアの受け入れ準備を整えるために先行しているし、ベルとリンシャは別行動中だ。
結果、狭い馬車の中にはミーアのため息だけが響く、微妙に気だるい空間が出来上がってしまっていた。
――そもそも、ルードヴィッヒのお師匠さまなのだから、ルードヴィッヒが説得してくれるのでもいいのに……。あー、向こうに着いたら全部、話がついてたりしないかしら……？
ご存知のこととは思うのだが、ミーアはサボれるものならサボりたいタイプである。
夜寝ている間に月の妖精がやってきて、問題をすべて解決してくれているのがベストだ。
ついた瞬間、ルードヴィッヒがやってきて、説得が終わっているのが理想なのだ！
……当然ながら、そんなに都合のいい話はない。
「はぁ……ふぅ」
ミーアが、何度目かになる、切なげなため息を吐いたところで、
「ミーアさま、大丈夫ですか？」
気づかわしげな顔をして、アンヌが声をかけてきた。
「あら？　なぜですの？」
「その……元気がないように感じたので……」

「そんなことございませんわ。心配には及びませんわ」
そう言って、ミーアは微笑みを浮かべて、はふぅっと深い深いため息を吐く。
それを見ていたアンヌは、なにやら覚悟を決めたような顔をすると、御者台の方に出て行った。
と、すぐに戻ってきたアンヌは唐突に言った。
「あの……ミーアさま、せっかくですから、馬に乗りませんか？」
「へ……？　馬に、ですの……？」
きょとんと首を傾げるミーアに、アンヌは優しい笑みを浮かべた。
「はい。ミーアさま、遠乗りがお好きでしたし。先ほどバノスさんに聞いてきたんですけど、このあたりの道はよく整備されているから、馬にも乗りやすいんじゃないかって……」
「んー、まぁ、気分転換にはいいかもしれませんけれど……、あら？　でも、アンヌは乗れないのではなかったかしら？」
そう尋ねると、アンヌはなぜだか、もじもじしてから、
「実はその……。私も馬に乗れるようになりたくって、この前から空いた時間に練習していたんです」
「まぁ！　アンヌが馬に？　それは初耳ですわね。いったいなぜ、そのようなことを？」
首を傾げるミーアに、アンヌは凛々しい顔で言った。
「ミーアさまの足手まといになりたくなかったから、です」
「あら、別にあなたのことを足手まといだなんて思ったことは……」
「レムノ王国の時、連れて行っていただけませんでした。ミーアさまが、一番危険な目に遭われているのに、私は、馬に乗れなかったから……おそばにいることができませんでした」
悔しげに、小さく震える声でアンヌが言った。
「アンヌ……」
「でも、これでどのような時にでも、ミーアさまのおそばについていくことができます」
アンヌは、そっと自らの胸に手を当てて、それから小さく微笑ん

だ。
「だから、ミーアさま、どうぞあまり気負わないでください。ミーアさまであれば、私はどんな問題でも解決できるって信じていますけど、でも、もしもどうにもならなくなったら、逃げてしまえばいいんです。私はいついかなる時でも、たとえ地の果てであろうと、ミーアさまについていきますから」
だから、そんなに気負わないでほしい……、と。
そんな思いのこもったアンヌの励ましの言葉だった。
緊張しすぎて失敗しないようにという気持ちのこもった優しい言葉だった。
それを聞いたミーアは、いたく感動した。
「あ、ああ、アンヌ……、そう、そうですわよね……」
感動した上で……、
――そうですわ。もう、いっそどこか遠くへ逃げてしまえばよいのですわ。相手があまりに強力ならば、別に逃げてしまっても構わないのですわ。わたくしとしたことが、うっかり正面から真面目に説得することにばかり気を取られていて……大切なことを見逃しておりましたわ。わたくしが逃げてしまったら、きっとルードヴィッヒあたりが何とかしてくれるはずですし。そう、ダメなら逃げてしまってもいいじゃない？
……見事に曲解した！
人間は、自分が聞きたいものだけを聞き、見たいものだけを見る生き物なのだ。
もっとも、実際にはそう簡単に逃げられるはずもないのだが……。
暗い鬱々とした気分から解放されたミーアは、軽やかな気持ちで馬車を降りた。
そこには、すでに近衛の乗っていた馬が二頭用意されていた。
「どうぞ、ミーア姫殿下。こちらの馬をお使いください」
「うふふ、どうもありがとう。それでは、少しお借りしますわね」

上機嫌に馬に乗るミーア。同じく、隣の馬に乗ったアンヌを見て微笑みを浮かべる。
「うふふ、なかなかさまになってますわよ、アンヌ。では、参りましょうか」
そうして、馬を歩かせ始めて、ミーアはふと思う。
――ああ、そういえば馬に乗るのは久しぶりですわね。
最初の内は、この揺れや馬の背の高さが怖かったものだが、今ではすっかり慣れてしまった……慣れきってしまった。
ミーアはすっかり先輩面で、隣を歩くアンヌの方を見た。
アンヌはアンヌで、どうやらかなり練習したらしく、危なげなく馬に乗りこなしている。
「なかなか上手いですわよ、アンヌ。あ、そうですわ。どうせですし……、あそこの丘まで競争いたしましょう！」
言うが早いか、ミーアは馬の脇腹を蹴った。
「はいよー！　シルバームーン！」
「姫殿下、その馬はそのような名前では……」
などという近衛のツッコミの声を置き去りに、ミーアを乗せたシルバームーン（仮）が走り出した。
びゅんっと風が体に吹き付けてくる。
髪が風に揺られて、ふわふわ、頬をくすぐった。
「うふふ、気持ちいいですわ。ほら、もっと速く速く！」
ミーアの掛け声に応えるように、ぐんぐん馬が加速していく。草原の草を蹴り上げ、小さな段差をものともせずに、風のように走る！
――ああ、すごいですわ。なんだかわたくし、天馬にでも乗っているかのよう！　やはりこういう体験をエリスに教えてあげないといけませんわね！
そんな風に、ミーアが自分に酔っていると突如として、
「姫殿下、馬を止めろ！　速すぎる！」
後ろから、声が追いかけてきた。

「はぇ……？」
それでようやくミーアは我に返った。
馬が……いつの間にやら、シャレにならない速度で走っているということに。
「ああ、調子に乗りすぎてしまいましたわ……。おほほ、わたくしとしたことが。ええっと、止めるには……」
冷静にならなくてはいけないわ、と、ミーアは自分に言い聞かせつつ、手綱を持つ手に力を入れて……引く！
けれど……この時のミーアはいささか慌てていた。ゆえに、手綱を引く力が強すぎた。
直後、馬が前脚を振り上げる。
突然、思い切り手綱を引かれたせいで、驚いてしまったのだ。
「……はぇ？」
そんな、ちょっぴり間の抜けた声を上げた瞬間、ミーアの体はびゅんっと空中に投げ出されていた。それも、結構なスピードで、である。
――あ、あら？　これ、まずいんじゃ……？
とは思うものの、もはや落馬は避けられない。
「ミーアさまっ！」
アンヌの悲痛な悲鳴を遠くに聞きながら、ミーアは思い切り地面に叩きつけ――られそうになったところで、突如、お腹のところになにかが巻き付いてきた。
太くて硬いそれがなにか考える間もなく、お腹がギュッと締め付けられる。
「ぐえっ！」
まるで、つぶれたカエルのような声を上げるミーア。こみ上げた吐き気をなんとか飲み込みつつ、視線を巡らせる。と、
「ふぅ、間に合ったか。大丈夫ですかい？　姫殿下」
苦笑いを浮かべるバノスの顔が見えた。
それで、ようやくミーアは気づく。

自らの脇腹を締め上げているものがバノスの太い腕で……自身がバノスの小脇に抱えられているということに……。
「危ないところでしたな。間に合ってよかったですよ」
そう言いつつ、バノスはミーアを自身の馬にまたがらせた。
ミーアは素直にバノスの前に乗って体勢を落ち着けてから、改めて首を巡らせてバノスの方を見る。
「助かりましたわ、バノスさん。申し訳なかったですわね、調子に乗りすぎてしまいましたわ」
「まったくですぜ、姫殿下。あんたになにかあっちゃあ、ディオン隊長もルードヴィッヒの旦那もガッカリしちまいますぜ。あのメイドのお嬢ちゃんもね」
ふと後ろを見ると、真っ青な顔をしたアンヌが懸命に馬を操ってこちらに向かってきていた。
「ああ、アンヌにも心配をかけてしまいましたわね……」
これで万が一にも落ちてケガでもしていたら、アンヌが卒倒していただろう。
「気を付けなければなりませんわね」
「しかし、ミーア姫殿下も俺に無礼者とか言い出さねぇんですね」
「あら？　助けられたのだから、当たり前ではなくって？」
「いやぁ、俺も同意見なんですがね。世の中、そういう貴族の方ばっかりでもなくってね」
バノスは苦笑いを浮かべる。
「それにしましても、バノスさん、あなた、近くで見るとずいぶんと大きいですわね」
「お？　へへ、まぁ、帝国有数を自負してまさぁ。けど、でかいだけと思われるのも、ちょっとシャクだ。さすがに、ディオン隊長には及ばねぇけど、腕前の方もかなり立ちますぜ」
バノスはガハハと豪快な笑い声を上げる。
「俺よりでかい帝国兵はいるし、俺より強い帝国兵もいるが、俺ぐらいでかくて強い帝国兵ってのはいないんじゃないかって思います

ぜ。へへ、だから、まぁ、鎧を着こめば盾にはちょうどいいってね」
「まぁ、それは頼もしいですわね。けれど、ご自分のことを盾だなどと揶揄するのは感心いたしませんわ。あなたは皇女専属近衛になったのですから、胸を張ってわたくしの護衛騎士を名乗ればよろしいですわ」
そう言って微笑むミーアに、バノスは愉快そうに笑みを返した。
「へへ、姫殿下、やっぱりあんた、気持ちがいいお人だね。それでこそ仕えがいがあるってもんだ」
そうして顔を見合わせた二人は笑った。
ミーアは大男と相性がいいのだ。
「ミーアさま！　お怪我はありませんか！？」
そこに、血相を変えたアンヌがやってきた。
そんなアンヌに、ミーアは平謝りに頭を下げるのだった。

第五十八話　黄金の巨大ミーア像建造を阻止せよ！

ベルマン子爵領に着いたミーアは、翌日、建設中の学園の説明を受けることになった。

せっかくの機会ということで、ルードヴィッヒが視察の予定を入れたのだ。

――まぁ、いざとなれば逃げればいいですし……。

アンヌの言葉でやる気を取り戻したミーアは、少なくとも普段と変わらぬテンションで、もろもろの公務をこなしていく。

ベルマン子爵への挨拶、労いの言葉をかけ、その後、子爵の館にて、皇女の町（プリンセスタウン）の建設計画の説明を受ける。

「現在は、学園の建物を先に建てています。一刻も早く開校したいとのことでしたから、そのように手配しておりますが……」

「ええ、それで問題ございませんわ」

以前、会った時には卑屈な笑みを浮かべていたベルマンだったが、今は心なしか、少しばかり誇らしげな顔をしている。それは仕事にやりがいを感じている人が浮かべる笑みに似ていた。

そのすぐ隣には、赤月省から派遣された文官の姿があった。豪奢な金髪と綺麗に整えられた洒落た髭、人懐っこそうな笑みを浮かべる顔にはどこか気品があり、良家の出であることが窺える。

年のころは、ちょうどルードヴィッヒと同じぐらいだろうか……。

――あの方、どこかの貴族の家の方かしら……？

ミーアはじっくり観察してから、にっこり笑みを浮かべておく。

いずれにせよ、敵は作らないに越したことはない。笑みを浮かべるだけならば無料である。文官は、ちょっと驚いた顔をしつつも、ベルマン子爵の説明を受け継ぐ。

「校舎と学生が暮らす寮を優先して建設中です。近隣のルールー族の協力を得て、静海の森の木によって校舎を建てています。姫殿下

のお気に入りの木材であるとお聞きしておりますが……」
そう言って、ミーアの頭に目をやった。そこには、ルールー族の少年からもらったかんざしが、今もつけられている。
「それは良いですわね……。さぞかし美しい校舎になるでしょう」
静海の森の木は削って磨けば虹色に輝く。淡く輝く校舎を想像して、ミーアは満足げに頷いた。
基本的に、お金をかけた豪華な建物などにはさほどこだわらないミーアなのだが、だからと言って美しいものが嫌いというわけではないのだ。
っと、そんなミーアに、ベルマンが話しかけてきた。
「姫殿下、こちらも見ていただきたいのですが……」
差し出されたのは一枚の羊皮紙だった。
「はて、なんですの？」
そうして、手を伸ばそうとしたミーアはふと気づく。
得意げな顔をするベルマン、のすぐ後ろ……。苦り切った顔をして立つ文官の姿に……。
――なんだか、嫌な予感がいたしますわ……。
そう思いつつ、羊皮紙に目を落としたミーアは、ぽっかーんと口を開けた。
「こっ……これは？」
「はい！　ミーア姫殿下の巨大黄金像です！」
「きょっ、巨大……黄金像……ですの？」
その響きに、頭がクラっとする。
「はい。高さは白月宮殿の尖塔ぐらいの高さにしようと考えております」
それ、いくらかかるのかしら……？　などと、それだけでげっそりしてしまうミーアであったが、それに気づかず、ベルマンは続ける。
「しかも、内部は空洞になっていて、中に入ることができます」
「なっ、中に、ですの？」

ミーアは急いで、羊皮紙をめくる。と、そこには、巨像の内部の設計図が綿密に書き込まれていた。
「はい。目と口のところから外の景色を見られるようになっております」
「へ、へー、そうなんですのね……」
「夜は、そこから光を放てるようにしようかと考えております。ただ、これを建てるにはいささか資金の方が足りないのです。そこで姫殿下、ここはぜひ……」
「……あー、却下ですわ」
力なく言って、ミーアはため息を吐いた。
――そんな無駄遣いしたらルードヴィッヒに怒られてしまいますし……、いや、それ以前に、それ、ちょっと悪趣味すぎないかしら……。
夜になると、目と口から光を放つ黄金の像を想像し、その顔がほかならぬ自身のものを模していることを想像し……ミーアは背筋を震わせる。
――この方……、以前のかんざしの時にも思いましたけど、いささか趣味が悪いようですわね。
「なっ、なぜです？　姫殿下、もしも、それが完成すればこの帝国一の名物になりえるでしょうに……」
「なぜって……」
理由を説明しないとわからないのか、とミーアは内心でため息を吐く。
いちいち納得させるのも面倒だし、命令で済ませてしまおうか……などと油断していたミーアであったが……。
「もし資金的に難しいようでしたら、皇帝陛下に相談させていただこうかとも思っております」
「……絶対にやめていただきたいですわ」
ミーアは即座に言った。
――っていうか、お父さまが聞いたら、絶対にノリノリで特別増

税とかやりますわ！　わたくしを模した金の像を建てるために増税とか、民に恨まれること疑いようもありませんわ。
　しかし、目の前の男、ベルマンは、ここでミーアがやめろと言っても、皇帝に直訴する可能性が非常に高い。ここはなんとしてもベルマンを説得しなければならない。
　ミーアは痛む頭を懸命に働かせて、言いくるめに移る。
「ベルマン子爵、あなた、心得違いをしておりますわ」
「心得違い、ですか？　それはどういう……？」
「わたくしの栄光とは、すなわちこの学校に通う生徒たち。そして、ここから巣立っていった者たちが生み出す数多の功績ですわ！　ですから、黄金の像などを建てるお金があれば、むしろ生徒たちにもっとお金をかけたいと思うのです」
　堂々と胸を張り、ミーアは言い放つ。
　――まぁ、数多の功績というか、具体的に言えばセロ・ルドルフォンの生み出す新型の小麦が目的ですけど……。
　などと、心の中で付け足しながら。
「そのようなものにですか……？　しかし」
「考えてもみなさい、この地にそれを建てたところで、その輝きは、ここを訪れた者しか目にできないのです。けれど、ここを出た生徒たちが目覚ましい活躍をすれば、やがてその名声は、大陸中を席巻することになるでしょう。世界で活躍する英才、それを育んだのは帝国初の学園都市、そして、その都市があるのが、ベルマン子爵領ということになりますのよ？　それって、とても素敵だと思わないかしら？」
「なるほど……、人は王城、人は城壁、ですか……」
　ふいに、ミーアの耳に小さなつぶやきが入ってきた。
　声の方に視線を向けると、先ほどの文官が興味深げにミーアの方を見つめていた。
「なんですの？　それ？」
「おや？　ご存知なかったですか？　東方の有名な国王の言葉です。

いかに立派な城を建てようと、人がいなければ意味がなく、人を大切にしていれば、時に人は城のように堅固に、城壁のごとく強硬に守ってくれる。そのような意味なのですが……」

ミーアは一瞬、もちろん知っていると答えようとした。けれど、寸でのところで踏みとどまる。

ミーアの嗅覚が、なにやら危険な臭いを察知したのだ……。

――頭の良い者の前で知ったかぶりをするのは危険ですわ。この方、なんだか、ルードヴィッヒとかと同じ臭いがいたしますし……。ここは……。

ミーアは取り澄ました顔で言った。

「まったく知りませんでしたわ。あなた、博識ですのね」

「いえ、私などは……」

首を振る文官。なにか考えているようなその様子が気になったミーアだったのだが……。

「なるほど、さすがはミーア姫殿下……。そのご見識、心から感服いたしました」

などというベルマンの言葉に満足してしまい、追及することはなかった。

こうして、なんとか黄金巨大像計画を阻止したミーアであったが、学園には後日、ベルマンによって、別の像が建てられる。

ベルマンの依頼を受けたルールー族の精鋭によって作られたその像は、大きさこそそれほどではないものの、素晴らしい出来であったという。

静海の森の木を削って作った像は、ミーアと一角馬とが戯れる姿を象(かたど)ったもので……。

たまたま、妄想癖が激しい某お抱え作家がそれを見てしまい、胸に燃える熱い妄想の炎に油を注がれた挙句、皇女伝がより一層過激なものになってしまったりもするのだが……。

まぁ、それはどうでもいい話なのであった。

第五十九話　三顧の礼～賢者の試験～

静海の森……。
ルールー族が暮らすその森に、一人の男がやってきた。
豪奢な金髪と理知的な光を宿したブラウンの瞳……。ベルマン子爵のもとで、皇女の町の建設に携わる赤月省の文官……、その名をバルタザル・ブラントという。
伯爵家の三男としてこの世に生を受けた彼は、ルードヴィッヒの旧友にして同門の男でもあった。
ここ最近、町の建設の打ち合わせで、幾度も行き来した細い道を歩く彼の顔は、深い思案に沈んでいた。ルールー族の村を過ぎ、さらに森の奥へと進んでいく。そんな彼の目の前に、小さな幕屋（テント）が現れた。
ごわごわした厚手の布で作られたそれは、とある少数部族に伝わる即席の住居だった。
その前に立つ見慣れた青年の姿を見つけて、バルタザルは気安げな声をかけた。
「よう、ルードヴィッヒ。姫殿下のところにいないから、どこにいるのかと思ったぞ」
それで振り返ったルードヴィッヒは、小さく肩をすくめて見せた。
「別に俺がいてもできることはないからな」
「なんだ、ずいぶん冷たいじゃないか。あの姫殿下に忠誠を誓っているんだろう？」
「ふん、俺がいなくても、姫殿下はお前を感心させて見せたんじゃないか？」
悪戯っぽい笑みを浮かべるルードヴィッヒにバルタザルは苦笑いした。
「確かにな。あの姫殿下、なんと、あの巨大像の建設を止めて見せ

たぞ」
「いや、バルタザル……、それはさすがにミーア姫殿下を馬鹿にしすぎだろう」
ルードヴィッヒは呆れ顔で首を振った。
「あれを止めるのは、当然だろう。いくらかかると思ってるんだ？」
理の当然といった様子の旧友に、けれど、バルタザルは首を振った。
「いや、そうでもないぞ。歴史的に見て巨大像に憧れる統治者というのはかなり多い。肥大化した自己顕示欲は腐敗した統治者の特徴だ。その欲求に負けて国の財政を傾かせる者というのも少なくはない」
「なるほど、確かにその通りだな……。ミーア殿下に仕えているうちに、どうも、帝国の叡智を基準に物事を考えてしまっていたようだ」
ルードヴィッヒは、バルタザルの言葉の正しさを認めた。
国中に自己の銅像を建てて、時間ごとにそれを拝むように命じた国王がいた。
世界で最も巨大な像を欲した皇帝がいた。
自己を崇めさせ、神格化しようとする欲求は、統治者にとっては非常に大きなものなのだ。
「あのお年で……、しかもあのような美貌をお持ちなのに、自己顕示欲に支配されぬとは……、なるほど、お前が心酔するのも少しわかるような気がするな」
腕組みしながら頷いて、それから、ふとバルタザルは首を傾げた。
「ときにルードヴィッヒ、お前はなにをやっているんだ？」
「ああ、師匠に姫殿下とお会いいただけるように、事前に約束を取り付けておこうと思ったのだが……」
ルードヴィッヒは苦笑を浮かべて、幕屋の方を見た。
「どうやら、なにか思索中らしい」
「なるほど、それでだんまりか。相変わらず師匠らしいな」

やれやれ、とバルタザルは首を振る。
「困ったものだな。我が師匠にも」
「ふふ、まったくだな」
肩をすくめて笑いあう二人だったが、
「ほほう、ずいぶんじゃなぁ。師匠の住処の前で……」
突如、かけられた声に飛び上がる。
慌てて姿勢を正し、視線を転じれば、そこには一人の老人が立っていた。
長く美しい白髪、同じく白くて立派な髭を伸ばしたその老人は、ルードヴィッヒの方を見て、にやりと笑みを浮かべた。
「ったく、人が考え事をしているというのに、騒ぎおって。集中できぬじゃろうが……」
「お久しぶりです。我が師」
ルードヴィッヒの礼を受け、その老人も深々と頭を下げる。
「うむ、我が弟子、ルードヴィッヒよ。壮健なようで、なによりじゃな」
胸のあたりまで垂れた長い髭を軽くなでながら、老人は言った。
「して、今日は何用できた？　お前にはすでに教えることはないと言ったはずじゃが……？」
「はい。師匠のお力をお借りしたく、参上いたしました」
「ふふん、この老骨に何ができるとも思わぬが……」
「ぜひ、お聞きください。師よ。ことは帝国の存亡に関わることです」
真剣な口調で言うルードヴィッヒ。対して、老人は面倒そうに首を振った。
「聞いておるぞ。ルードヴィッヒ、お前、帝国の姫に仕えておるそうじゃな……。その関係か？」
「はい。ミーア・ルーナ・ティアムーン殿下にお仕えしております」
「噂に名高い帝国の叡智か。あまり気は進まんなぁ……ほれ、お前も知っておろう。わし、貴族嫌いじゃし……」

「それは存じております。その上でお願いしているのです。我が師よ」
「それほどなのか？　ルードヴィッヒ。このわしに引き合わせようとするほどの？」
「僭越ながら……、私が生涯の忠誠を捧げようと、心を定めた方ですので」
その言葉に、老人は、わずかばかりに瞳を細めた。
「ほう、お前ほどの者がそこまで入れ込むか……。それは確かに興味深くはあるのう。バルタザル、お前も同じ考えかの？」
話を振られたバルタザルは、深々と頷いてから、
「人は王城、人は城壁……」
「ほう、その格言を知っていたか？　なかなかに勤勉じゃな」
感心したように頷く老人に、けれど、バルタザルは首を振った。
「いえ、言葉自体は知りませんでした。されど、そこに含まれる真理をしっかりとつかんでおられた。格言を知らずとも、自らの思考によって一面の真理へと辿り着いておられた。あの方は……まさに叡智と呼ぶに相応しい方だと、私も判断いたします」
バルタザルは、先ほど見たミーアの姿を思い出して、かすかに鳥肌が立つのを感じた。
ルードヴィッヒから聞いてはいた。けれど、実際に目の当たりにした時の驚きは格別だった。
「我が師よ。ミーアさまとお会いください。そして、お話しください。ご自身の目で、あの方を見定め、そして、もしも師の心にかなうのであれば、どうかお力をお貸しください」
「ふーむ……まぁ、可愛い弟子のお願いじゃしなぁ。聞いてやらんでもないぞ？　ほれ、お前たちも知っての通り、わし、優しいし」
どこがだよ！　とツッコミを入れたくなる二人であるが、ここはぐっと堪える。
「ただ、そうじゃなぁ……。お前たちのことを疑うわけではないが……試させてもらおうかのぅ、東国の古の故事……三顧の礼をもっ

て」
どこか不敵な笑みを浮かべる師匠に、嫌な予感をおぼえるルードヴィッヒであった。

第六十話　三顧の礼～ミーアの計～

ベルマン子爵邸で学園建設計画の説明を受けたさらに翌日、ミーアは実際に建設途中の学園を視察した。
視察といっても軽く様子を見る程度、本題はむしろその後だった。
そう、いよいよミーアは対面するのだ。
ルードヴィッヒの師匠、放浪の賢者と。
「ミーア姫殿下……そろそろ」
ルードヴィッヒに声をかけられ、ミーアは一度、パンと自分の頬を叩き、
「では……行きましょうか」
覚悟を決めて、静海の森に足を踏み入れた。
そうなのだ、ベルマン子爵邸にて、甘いお菓子の歓待を受けたミーアは冷静になってから思ったのだ。
どうも、やっぱり逃げるのは難しそうだぞ、と……。
そして、同時にアンヌが自分を励ましてくれようとしていたことにも気が付いていた。
――これは……やっぱり逃げるわけにはいきませんわね。
基本的に、忠臣たちの誠意にはきちんと応えなければならないと思っているミーアである。
意外と根は真面目なのである。
――それに、ルードヴィッヒも自分ではできないから、わたくしを頼ったわけですし……。
意外と根は真面目なのである。
――きっとわたくしが見事に説得して見せたら、目をまん丸くして驚くに決まっておりますわ。それはすごく気持ちよさそうですわ！
意外でもなく、根が不純なミーアなのであった。
というわけで、ミーアは思考を切り替えた。切り替えが早いのが

ミーアのいいところだ。
どうすれば、ルードヴィッヒの師である放浪の賢者の協力を取り付けることができるのか……。
昨晩、ミーアはベッドの中で考えて、考えて……起きた時には朝になっていた。
よいアイデアは浮かんでいない……当たり前である。
ともあれ、よく寝てすっきりした頭でミーアは思った。
「いろいろやってみるほかにありませんわ！」
かくして、ミーアの蠢動（しゅんどう）が始まった。
「ところで、ルードヴィッヒ、このような格好では、お師匠さまに失礼にあたるのではないかしら？」
本日のミーアは、野外活動用の厚手の服を着用している。上は長そで、下も厚手のズボンで、足首まで布で覆われている。
ルードヴィッヒの師匠は、ルールー族の村よりさらに森の奥深くにいるらしく……、草や枝で肌を傷つけないように、そのような格好になっているわけだが……。
「礼を大切にされる方なのでしょう。ここは、やはりドレスの方が……」
「いえ、我が師は過度な装飾を嫌います。森には森に適した服があると……。そういう考え方なので、むしろドレスで行った方が印象は悪いでしょう」
「まぁ、そうですの……？」
ミーアはちょっぴり残念そうだった。
――ふーむ、この不格好な服では、わたくしの美貌を活かして交渉を有利に進めることは難しそうですわね……。残念ですわ。
……突っ込んではいけない。
「あっ、そうですわ。それでしたら、なにか手土産などを持っていくのはいかがかしら？　お師匠さまお好きなものって、なにかない

かしら？」
新月地区の神父を相手に使った手である。
策士ミーアの智謀が冴えわたる！
「師匠の好きなもの……ですか？　うーん、なんでも食べる人だから、どうでしょうね……。以前、森で捕まえたウサギを鍋にして食べるのが絶品とか……」
「ああ、わたくしも食しましたわ。なるほど、なかなかの通ですわね」
ミーアはレムノ王国で食べた絶品ウサギ鍋を思い出して、じゅるりと口元をぬぐった。
美食家ミーアの食欲が燃えたぎる！
――とはいえ……、運よくあの美味しいウサギが捕まえられるわけもありませんし……、賄賂で心証をよくするのも難しそうですわ……。残念……。
そうこうしている内に、森はどんどん深くなっていく。
「せっかくですから、ルールー族の方たちにも挨拶していきたいところですけど……」
「そうですね……。その機会も設ける予定です。彼らも学園建設の協力者ですから」
「そう。それはよかったですわ」
道は曲がりくねり、狭くなり、頭上を覆う木々の葉は濃さを増していく。
「ここで戦う羽目にならなくって、ホッとしますぜ。姫殿下には改めてお礼を申し上げなきゃなりませんな」
バノスが、辺りに目を向けて二の腕をさする。
視界は最悪。地の利がない側にとって、このような場所で戦うなど、想像もしたくないことだろう。
そんな薄暗い視界が、一気に開けた。
そこは小さな広場のような場所。その真ん中には、小さな幕屋が建っていて……。

「着きました。あれが師の仮住まいです」
「まぁ、あれが……」
ミーアは物珍しげに、小さな幕屋を眺めまわした。
「……ふむ、これがあれば……なにかあった時にはいいですわね……。あとで構造を教えてもらおうかしら……」
などと、しばらくぶつぶつつぶやいていたミーアだったが……。
やがて、覚悟を決めたように、ふぅっと大きく息を吐いて、吸ってから。
「放浪の賢者殿、いらっしゃいますかしら？」
幕屋に呼びかけ、返事を待つ。
返事は……なかった。
「……あら？」
小さく首を傾げるミーア。
――聞こえなかったのかしら？　賢者などと呼ばれているのですから、相応のお歳でしょうし、耳が遠いのかもしれませんわね。
そう思いなおして、改めてミーアは声をかけた。けれど、返事はやっぱりない。
「お留守かしら……？　念のために聞きますけど、ルードヴィッヒ、わたくしが今日来ることは、お師匠さまには？」
「もちろん、伝えてあります」
ルードヴィッヒはしばし考えこんでから、
「ただ師は……、時折、思考に没頭すると外界からの呼びかけを無視することがあります。私が知っている中で、最も長かったのは五日間ぐらいでしょうか。閉じこもって、一度も外に出てこなかったことがあります」
「なっ！」
それを聞き、アンヌが絶句した。けれど、すぐさま、
「ミーアさまに対して、失礼じゃないですか！」
珍しく、怒声を上げた。それに同調するように，周りの近衛兵たちも顔に怒りの表情を湛えている。けれど、ミーアはそれを片手で

制した。
「別に構いませんわ。こちらはお願いに来ているわけですし。あちらにはあちらのご事情があるでしょう」
「でっ、でも、ミーアさま……」
「では、しばらくここで待たせていただきましょうか」
そう言ったミーアは、特に怒るでもなく、静かな顔をしていた。
……否、よく見ると、その口元は、微かに笑みすら浮かべていた！
――これは好機到来ですわっ！
ついに、ミーアの優れた戦略眼が万に一つの勝機を見出した。
会うという約束をしておきながら留守にする。あるいは無視する。
それは、明確に相手の非である。
――反撃のための絶好の材料ですわ！　なにか嫌味を言われたら、これを言い返してやればいいですわ。そのためには……。
「ミーアさま、でしたら、どこかにお座りになって……」
「いえ、構いませんわ。ここでそのまま待ちますわ」
だらけた格好で待っていたら、そこを突かれるかもしれない。この状況を完璧に相手の失点にするためには、ミーアは完全無欠の礼節をもって相手を待つ必要があるのだ。
――となれば、会話もあまりしない方がよいですわ。黙って、姿勢を正して待つ必要がございますわ。
幸いなことに、ミーアは地下牢生活で時間のつぶし方を心得ている。
あの時は、何日間も地下牢の石の数を数えたりしたものであるが……。
――あの時に比べれば全然マシですわ。そうですわね、その辺の草の数でも数えて待ちましょうか……。一本、二本、三本……。
無表情に直立不動のまま、ミーアは草を数えだした。
……ちょっぴり怖い。
やがて、草の数が三万を超えるころ……。
――ふむ、このぐらいで十分かしら……。

ミーアは満足げに頷いて、周りの者たちに声をかける。
「今日は無理のようですわね。残念ですけれど一度戻って、日を改めて……」
その時、ミーアの脳裏に悪魔的な閃きが到来した。
――そうですわ！　この失態を、さらに致命的なものにできれば交渉を圧倒的に有利に運ぶことができるのではないかしら？
ミーアの耳に、先ほどのルードヴィッヒの言葉が甦る。
――確か、五日間閉じこもって、返事がなかったとか言っておりましたわ……。ということは……。今日から何日か連続で訪れれば、さらに相手の弱みを握ることができるのでは？
たとえば、一度来た際に応対できないというのは、礼を失することではあってもギリギリ許されるかもしれない。けれど、それが二度続いたら？　あるいは、まかり間違って三度続いたとしたら……？
これは致命的な失態である。
それこそ「貴族は礼儀がなってないから嫌い」などと言えないぐらいの重大な失態だ。
なにせ、それを言う側が著しく礼を失しているのだから、その発言に説得力はない。というか、嫌味を言うことさえ羞恥を感じるほどの失態なのだ。
――それほどの弱みを握ることができれば……、もはやわたくしのお願いを聞かないわけにはいきませんわ！　我ながら素晴らしいアイデアですわ！
自らが考え出した完全無欠の計略に、ミーアは思わず震える。
そんな素晴らしいアイデアを実現すべく、静かにミーアは動き出した。
「ルードヴィッヒ、申し訳ないのですけど、どなたかにルールー族の村に行っていただけないかしら？」
「ん？　それは……、どういうことでしょうか？」
首を傾げるルードヴィッヒに、ミーアは微笑みを浮かべて言った。
「もしも今日、あなたのお師匠さまにお会いできなかったら、ルー

ルー族の村に泊めていただくのが良いのではないかと思って。ほら、いちいち、ベルマン子爵の館まで戻るのは、面倒でしょう？」
ベルマン子爵邸まで戻ってしまうと、なんやかやとあって、連日この場所に来るのは難しくなるかもしれない。けれど、ルールー族の村に泊まれば、そんなことはない。
ルードヴィッヒの師匠が思索にふけっているうちに「何回か会いに行っても会えなかった」という状況を作りたいミーアである。最低でも明日もう一度。欲を言えば明後日さらにもう一度……。
「で、ですが、森の中ではいろいろとご不自由があるかと思いますが……」
「あら？　わたくし、別に構いませんわ。レムノ王国では外で焚火を囲んで寝たりもしましたのよ？」
クスクスとおかしそうに笑うミーアに、ルードヴィッヒは呆然とした顔をするのだった。

かくて、堅固なる放浪の賢者を陥落せしめるべく、≪ミーアの計≫は静かに始まった。

第六十一話　年下キラーなミーアさま

ルールー族の村にやってきたミーアは大歓迎を受けた。
先行したルードヴィッヒから、ミーアの訪問の知らせを受けた族長は、歓迎のために村の広場に宴会の準備を整えさせた。
村の男衆に狩って来させた巨大な月輪（ツキノワ）イノシシの丸焼きをメインディッシュにした宴会。大きな焚火を囲んだ村人総出の宴会に、ミーアは目を丸くする。
「急なことでしたのに、すごい歓迎ぶりですわね……」
「ミーア姫殿下がいらっしゃると聞いて、大変な騒ぎでしたよ。あまり派手にしなくても構わないと言ったのですが……」
先に来て準備を手伝っていたルードヴィッヒは、苦笑しながら首を振った。
「これもミーアさまの人徳ですね」
冗談めかして言っているが、実のところルードヴィッヒの言葉は正しかった。
もともとが恩義を大切にしているルールー族である。族長の孫の恩人にして、一族を滅亡の危機から救ったミーアに対しては、非好意的でいられようはずもなかった。
そして、その人気はミーアやルードヴィッヒが想像しているよりも遥かに高い。
この森に住まう者たちはもちろんのこと、リオラのように出稼ぎに出ている一族の者たちの好意をも、今やミーアは獲得していた。それは、帝国各地に住む腕利きの弓兵たちを味方にしているのと同義だった。
もしもミーアが本気で逃げ出したいと思ったならば、案外上手くいってしまうかもしれないほどに、その戦力は侮りがたいものがあった。

そんなこととはまったく知らないミーアとしては、夕食に供された巨大なイノシシの丸焼きに、興味津々だったが……。
「あのイノシシはこの森で獲れたものですの？」
「うん、そうです。ひめでんか！　ぼくもいっしょについていったんだよ」
ニコニコ、上機嫌にミーアに説明してくれたのは、以前、新月地区でミーアが保護した少年、族長の孫だった。
「まぁ、そうなんですのね。それは勇ましい……あ、そうでしたわ……」
ミーアは、ぱんと手を打って、少年の顔を覗き込んだ。
「そういえば、わたくし、あなたのお名前を聞いてなかったのですわ。改めて……」
少年に向き合うと、ミーアはチョコン、とズボンの裾を持ち上げて、
「わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーン。帝国の皇女ですわ」
それを見た少年は、ほわぁ……、と口を開けて、それから顔を真っ赤にしながら慌てて膝をつき、頭を下げる。
「ワグルです。ひめでんか。あらためて、ありがとうございました。ぼくを助けてくれたこと、一生忘れません」
顔を上げた時、真っすぐにミーアを見つめるその瞳は、美しく澄み渡っていた。
「あら、お礼ならばもう十分にもらいましたし、別に忘れてしまっても構いませんわよ？」
ミーアはおどけた様子で微笑んだ。
それを見て、ワグルは、再び頬を赤く染める。
……実に、年下キラーなミーアなのであった。
「ご機嫌麗しゅう、です。ミーア姫殿下」
遅れてそこにやってきた族長がミーアの前で頭を下げた。
「ご機嫌よう、族長さま。ワグルとは仲良くやっているようですわね」

族長は、少しだけ照れくさそうに相好を崩した。
「すべて姫殿下のおかげに、ございます」
「そんなことはございませんけど……、ところで族長さま、少し帝国語が流暢になったのではないかしら？」
ミーアは興味深げに族長の顔を見る。と、族長はまたしても恥ずかしげに頬をかく。
「放浪の賢者殿に教わり、少しばかり、練習してみました。ワグルも……その、帝国語の方が話しやすいようなので……」
「あら？　賢者さまにお会いできたんですのね」
「よく村の方に来られますが……、姫殿下は、お会いになれませんでしたか？」
「ええ、なにやら考え事をされているとかで、お返事をいただくことはできませんでしたわ」
言いつつ、ミーアは切り分けられたイノシシのお肉を口に放り込む。
熾火でジリジリ焼かれた肉は、噛みしめるたびに、口の中にジワっと肉汁が湧き出してきて、素晴らしい味だった。
――ああ、絶品ですわ！　これもルードヴィッヒのお師匠さまと会えなかったおかげですわね。その上、わたくしに付け入る隙も見せてくれるなんて、案外甘い方ですわね。恐るるに足りず、ですわ。
上機嫌に笑みを浮かべるミーア。けれど、そのすぐ隣で、ワグルがプリプリ怒っていた。
「ミーアさまを無視するなんて、ゆるせない……」
「ふふ、わたくしのために怒ってくれて感謝いたしますわ。でも、わたくしは別にそれでいいと思っておりますのよ、ワグル」
「え？　どういうことです？」
不思議そうな顔をするワグルにミーアは悪戯っぽい笑みを向ける。
「そのおかげでルールー族の村に寄ることができましたし、あなたの様子を見ることもできましたわ」
それから、ミーアはワグルの頬に手を伸ばした。きょとんとする

ワグルの、その頬についた肉のかけらをとってあげる。
目をまん丸くしたワグルは、再び頬を赤く染めてうつむいてしまうのだった。
……実になんとも年下キラーなミーアなのであった。
「ルードヴィッヒも、ご苦労でしたわね。その手際、見事ですわ」
「いえ、それより我が師に代わり謝罪いたします。姫殿下に予定外の外泊をさせてしまいました。大変、申し訳ありません」
頭を下げるルードヴィッヒにミーアは、くすりと笑みを浮かべる。
「あら、話を聞いてもらうのに必要なことですもの。この程度、なんでもございませんわ。そうでしょう？」
そう問いかければ、ルードヴィッヒは少しだけ驚いた顔をする。
「必要なこと……、なるほど。やはり……、ミーアさまはお気づきでしたか……」
「当たり前ですわ」
――ふふん、これが会談を有利に進めるための好材料であること……、ルードヴィッヒも気づいていたようですわね……。
ミーアは、ふんすっと鼻息を荒くして、美味しいお肉を口に放り込む。
――さぁ、明日もわたくしのこと無視させて、さらに有利な条件を整えて差し上げますわ！

第六十二話　ミーア姫は容赦しない！

宴会による歓迎を受けた後、ミーアは村で一夜を過ごした。
ミーアとアンヌがお世話になったのは、年配の女性の小屋で、質素な造りながら清潔なのが好感が持てた。
ちなみにミーアは、ベッドがなくても熟睡できるタイプである。
これもまた地下牢の生活で鍛えられたのだ。
なにしろ、そこは固い石造りの床と汚い肌掛けがあるのみだったのだ。眠れないなどとぜいたくを言っていられるのはせいぜい十日というところだった。
ではあるのだけど……。
「ふむ……これは、なかなかでしたわ」
朝……。チチチという小鳥の鳴き声とともに気持ちいい目覚めを迎えたミーアは、自分がくるまっていた布団をぽふぽふ叩いてみた。
「これは、なにかの毛が入っているのかしら……。触り心地といい、くるまり心地といい、温かみといい極上……。今まで寝具にはさほどこだわっておりませんでしたが……考えてみれば、わたくしの一生の内、かなりの部分をお布団の中で過ごすわけですし、そこに気を遣うのは賢いやり方なのではないかしら……」
なんだか、高いお布団を売りに来る怪しげな行商人のようなことをつぶやきつつ、ミーアは起き上がった。
ぽかぽかと温かい体がわずかに汗っぽく感じられた。昨夜は焚火を囲んでの宴会だったので、微妙に煙っぽくもある。
「水浴びでもしたいところですわね……」
などとアンヌと話していたら、タイミングよく家主がやってきて、村の女性たちと一緒に近くの小川に水浴びに行くことになった。
そうして身ぎれいにした後、着替えまで用意してもらって、ミーアはすっきり爽やかな気分になった。

「ルールー族の服も、なかなか可愛いですわね」
それはなにかの動物の毛皮で作った、もこもこした服だった。ふわふわもこもこした毛の感触が気持ちよくって、ミーアは上機嫌に笑った。
「すっかりお世話になってしまいましたわね」
そうして、笑みを浮かべるミーアに、族長が頭を下げる。
「もしも必要があれば、また、村にご滞在ください」
「けれど、ご迷惑ではなくて？」
「いえ、孫も、喜びますゆえ……」
「そう、ですの？　でしたら、賢者さまにお会いできるまで、村への滞在を許可いただけるかしら？」
「許可などと……、恐れ多いこと。あなたは我が一族の恩人です。どうぞ、ご遠慮のなきように」
と、そこまで言ってから、族長はなにかを思いついたように頷く。
「そうだ、姫殿下はなにか食べたい物など、ございますか？　言っていただければ、できるだけご希望に沿いたいと思いますが……」
「食べたいもの……そうですわね。甘い物は昨日も果物をいただきましたし……ハチミツかなにか……ああ、そうですわ！」
そうして、ミーアはパンっと手を叩いた。脳裏に浮かんだのは、昨日ルードヴィッヒと話していて、思い出したもの。すなわち……。
「ウサギ鍋、あれがもう一度食べたいですわ！」
「ほう、ウサギ鍋……」
ミーアから、ウサギの特徴を聞いた族長は頷いて見せた。
「村の者に言って、できるだけ探してみましょう」
「頼みましたわね」
そうして、晴れやかな気持ちでミーアはルードヴィッヒの師匠を訪ねた。
「おはようございます。放浪の賢者さま。いらっしゃいますかしら？」

幕屋の前に行き、ミーアは声をかける。
できるだけ刺激しないように、静かめで、控えめな声で……。
――別にいいですけど、できればまだ出てこないでいただけるとありがたいですわね。
そんなことを思いながら……。
答えは……やはりない。ミーア、ニンマリである。
「では、また少しここで待たせていただきますわね」
そう言って、ミーアは姿勢を正してその場に立つ。
「姫殿下、どうぞお座りください」
そんなミーアを見たルードヴィッヒは自らの上着を脱いで地面に敷いた。
「どうぞ、こちらに」
ミーアはそれを見下ろすと、おもむろに上着を拾い、ぱんぱんと手ではたいてから、
「無用ですわ。ルードヴィッヒ。この場に立ち、姿勢を正してお待ちする。それでこそ、礼節を尽くすということになるのではなくって？」
「いや、さすがにそれは……。我が師もそこまでは求めないと思います。どうか……」
少しばかり焦った顔をするルードヴィッヒに、ミーアは静かに首を振った。
「ルードヴィッヒ、それは受け取る側によって変わること……、そうではございませんの？」
ミーアは思うのだ……。ケチなんか、つけようと思えばいくらだってつけられる、と。
人は、自分が不利な状況に置かれれば、相手の粗さがしに必死になる生き物なのだ。
ミーアだとて、必要があれば、相手の非をあげつらうことに躊躇はない。というか……今がまさにそうだ。
訪問されながら、応対に出てこないという極めて失礼な行為。そ

れを交渉材料として、会談を優位に運ぶ。そのために万全を尽くしたいのだ。
完璧な、どこから見ても文句のつけようのない〝待ちの姿勢〟を整える。それにより、相手を追い詰めていくのだ。
――うふふ、逃しませんわ。嫌味なんか言えないぐらいに完璧な弱みを作って差し上げますわ！
ミーアは勝ち誇ったように笑い、ルードヴィッヒに言った。
「わたくしが、こうして立って待っているのは、それをする必要があるからしているまでのこと。それをする価値があると、わたくしは判断したのです。だから、あなたの気持ちは嬉しいですけれど、今は無用のことですわ」

――それをする価値がある……、か。
ルードヴィッヒは、ミーアの言葉に少しだけ感動した。
なぜなら、それはルードヴィッヒに対するミーアの信頼を表すものだからだ。
ミーアはルードヴィッヒの師と直接的な面識があるわけではない。彼女の持つ情報というのは、すべてルードヴィッヒを通して得たもののはずなのだ。
――師匠を学園長に迎えることに価値を見出してくださっている。俺の言葉を信用して、そのために、ここまでしてくださっている……。
そのことを、心から嬉しく思いつつ、絶対にミーアの計画を実現しようと誓うルードヴィッヒだった。

第六十三話　その命の使い道～冬の季節、未だ終わらず～

残された命の日数（ひかず）を、ふと数えてみる。

別に、なにか死に至るような難病に侵されているわけではない。けれど、老年を迎えた自身には、それほど多くの時は残されてはいまい、と、その老人は思う。

仮にも賢者の名を冠された彼は、自分が永遠に生きるなどと愚かなことを考えることはできなかった。

人の一生は、せいぜい長くても百年には届かない。

自分に残された時間は十年か、多くとも二十年はないだろう、と思う。

死を見つめ、自身の人生に思いを馳せる時が増えた。

まず、幸福な人生であったといえるだろう。

季節の移り変わりのようなものが人生にもあるとしたら、自分は間違いなく冬の時期に入っている。

才芽吹く春を超え、華々しく苛烈な夏を過ぎ、充実した実りの秋を終えた先にある季節。

寒々しい枯葉の季節、されどそれは、新たなる春の到来に備える時期でもある。

知りたいことを、自己の欲求のままとことんまで調べ、学び、大陸の様々な場所に足を運んだ。

充実した春、夏、秋を終え冬……多くの若者が充実した春を迎えられるよう、自身の知恵を惜しむことなく与え続けた。

出会いに恵まれ、多くの優秀な弟子を世に送り出すことができた。

そうして、冬の季節も終わりに差し掛かり、残された少ない時間をいかに使おうか、考えることが増えてきた……そんな折、愛弟子のルードヴィッヒが自身を探していることを知った。

手塩にかけた大切な弟子、ルードヴィッヒは才気にあふれる若者

だった。
鋭い分析力と極めて理性的で合理的な思考ができる青年……これから先、その才をなにに用いていくのか、密かに楽しみにしていたものだった。
その彼が、今は帝国皇女に仕えているという。
正直、愚かな話に思えた。
老人が知る限り、貴族や王族などというものは高慢で愚かな者ばかりだった。そのような者のもとで若者が優れた才能を浪費する……。そのような愚行を見過ごすわけにはいかない。
そんな思いに捕らわれた時、老人は見つけたような気がしたのだ。
自分の……残された命の使い方。
三顧の礼の試験は〝放浪の賢者〟が皇女ミーアを測るためにするのではない。
弟子であるルードヴィッヒに、帝国の叡智の本性を測らせるためのものだった。
もしもこの無礼に対して、激高して殺すようなことがあれば、それは凡庸以下の行いだ。
皇女ミーアはルードヴィッヒが仕えるのに相応しくない存在であることが明らかになる。
けれど、もしルードヴィッヒの進言を聞き入れて、形はどうあれ三度もこの場所に訪れたならば……、それは少なくとも臣下の忠言を聞き入れる柔軟さと、相手の無礼を許す寛容さの持ち主と言えるだろう。
それは自身の命を使った試験……。
それこそが自分の最後の務めだと信じた老人の……大切な弟子へのはなむけ。
そのはずだったのだが……。
「なんということだ……」
放浪の賢者は、幕屋の前に立ち尽くすミーアを見て、驚愕に目を

見開いていた。
ちなみにこの老人、現在、幕屋の中ではなく、その後ろにある森の木に登って、そこからミーアたちのことを眺めていた。
……元気なおじいちゃんなのである。あと三十年ぐらいは生きそうである。
「――確かにルードヴィッヒには三顧の礼をもって試すと言ったが……、まさか、あのまま、立ったままでお待ちになるとは……。ルードヴィッヒは、ミーア殿下に話したのだろうか……？」
彼は小さく首を傾げた。
「いや、もしも三顧の礼のことを聞いていたとしても、あの待ち方……。座りもせず、部下と雑談するでもなく……、ただわしに会うためだけに、待っておられるとは……」
老人は、そっと瞳を細めた。
誤解している者も多いが、時間というものは、ただではない。
それが帝国皇女のものとなれば、なおのことだ。
その一分一秒は、黄金の価値を有するといっても過言ではない。
「にもかかわらず……姫殿下は“ただ待って”おられる……」
もしも仮に、ミーアが本を読みながら待っていたとするならば、彼女は自身の時間を「待つ」のに半分、「本を読む」のに半分使ったことになる。
けれど……、ミーアはただ待っているのだ。ただ、放浪の賢者に会うという……、そのためだけに自身の時間を費やしているのだ。
その時だった。
ふいに、老人は、見つめる先のミーアと目が合ったような気がした。
「……先ほどからじっとこちらの木の方を見つめておられる。つまりは、わしの存在に気づいていると……そういうことか！」
……んなわきゃあない。
なにしろこの老人、こっそり隠れて観察するために全身に木の葉をくっつけた、いわゆる迷彩処理の施された服を身に着けているの

だ。その服のまま、木に登り、上からミーアたちの様子を眺めているのである。
森には森に適した服がある――森に溶け込む服がある。そんな持論を口にする人物に相応しい服装といえる……のかもしれない。
……愉快なおじいちゃんなのである。
ともあれ、それゆえに、ミーアであろうがディオンであろうが、ルールー族の熟練の狩人であろうが、この距離で見えるわけがない。
それはいわゆる「舞台女優と目が合っちゃったよ！」と騒ぐのと同レベルの錯覚なのだった。
放浪の賢者と呼ばれた男が、耄碌（もうろく）したものである。
「……なるほど、見事だ、ルードヴィッヒ。見誤っていたのは、わしの方であったな。ふふ、わしも耄碌したものじゃわい」
……まったくである。
「これほどの礼を示されてしまっては……仕方あるまいな。冬の季節は未だ終わらずか。ふふ、しかし、人生の最後も最後という時に、まさか、このわしが帝国皇女の命に従うことになるとは。わからぬものじゃ。人生は……。だが、だからこそ面白い、か……」
老人は笑った。その笑みは、どこか活力に溢れた嬉しげなものだった。
ちなみに……ミーアは待ち時間を森の木の葉を数えるなんぞという、完全無欠の時間の浪費をしていたわけだが……。
その事実を放浪の賢者が知ることは、ついになかった。

第六十四話　ウサギ鍋でお祝いを

放浪の賢者の幕屋を訪問するのも、三日目を迎えた。
もはや通いなれた道を悠然と歩いて行ったミーアであったが、目的地が近づいてきた時、いち早く異変に気が付いた。
「あれは……」
小さな幕屋の前に、一人の老人が立っているのが見えたのだ。
豪奢な白髪と見事な白髭の持ち主……。一見した印象はまさに、森の賢者といった風貌だった。
――なるほど、あれがルードヴィッヒのお師匠さまですのね。ああ、残念ですわ……。あと一日、失態を広げられれば決定的でしたのに……。
ちょっぴり残念がるミーアであるのだが……、すぐに態勢を整える。
――でも、もう手遅れというものですわ。このわたくしに隙を見せたのが運の尽き。嫌味を言う隙なんか見せませんわよ！
鼻息荒く気合を入れて、ミーアは放浪の賢者に歩み寄る。
「お初にお目にかかります。放浪の賢者殿。わたくしは、ミーア・るーにゃ……」
噛んだ！　失態である！！　早々に隙を見せてしまったことに、ミーアは心の中で舌打ちする。
――ぐっ、わたくしとしたことがっ！　このような失敗をっ！
一瞬焦りかけるが、すぐに気持ちを切り替える。
――大丈夫、大丈夫ですわ……。このぐらい失態の内には入りませんし、相手の方が依然として非は大きいはずですわ。
ぐっと顔を上げ、ミーアは胸を張って言う。
「ミーア・ルーナ・ティアムーン。わたくしがティアムーン帝国の皇女ですわ」

「ご丁寧な挨拶、痛み入ります。ミーア姫殿下。ガルヴァヌス・アルミノスでございます。お会いできて誠に光栄至極にございます」
深く澄んだ、知性的な輝きをたたえた瞳を、ミーアに向けてくる老人。
静かな迫力に、ミーアは一歩後じさり逃げかけるも、すぐに気を取り直して老人の服に目を向ける。
彼は……、皇帝の前に出てもおかしくはないほどに、きっちりとした礼服を着込んでいたのだ。
ここでも、ミーアは自らの失態を悟る。
今のミーアは、ルールー族から借りたモコモコの毛皮を着ていた。寝る時に着るのにちょうどいい、実に触り心地のいい一品で、部屋でゴロゴロする時にはぜひともほしい一品……ではあるのだが、重要人物との会談に着てくるようなものではない。
――くっ、やはりきちんとした服を着てくるべきでしたわ。まさか、森の中であのような正式な礼服を着て待っているなんて……。話が違いますわよ、ルードヴィッヒ！
胸の中で恨み言をつぶやきつつも、ミーアはなんとか笑みを浮かべる。
「はて……、珍しい格好をしておりますわね。ルードヴィッヒによれば、あなたは、その場所に相応しき服がある……と、そういう考えの方ではなかったかしら？」
「姫殿下の前に出るに、これ以上、相応しき服がありましょうか……。どうぞ、これまでの臣の非礼を、お許しくださりますように」
そう言うと、彼はその場に膝をつき、地面につかんばかりに頭を下げる。
思わぬ展開にミーアは一瞬戸惑うが……、
「許すなどと……。お願いがあって来たのですから、待つのは当然のことですわ」
すぐにニッコリ優しげな笑みを浮かべる。
――ふふん、そうですわ。あなたはわたくしにとっても失礼なこ

とをいたしました。ええ、ええ、謝ったって許してなんかあげませんわ！　あなたはとっても、とーっても失礼なことをしてくれたんですのよ？　許してもらいたいと思ったら、素直にわたくしの依頼を受けることですわね。

などという胸の内を一切見せずに、ミーアは言った。

「こうしてお会いできて、よかったですわ。ご高名なあなたに、ぜひともお願いしたいことがございまして……」

「謹んで、拝命いたします」

「……はぇ？」

刹那の切り返しに、ミーアは瞳をパチクリと瞬かせる。

「え、えーと、まだ、わたくしなにをお願いするとも言っていないのですけれど……」

「どのようなご下命であろうとも、お受けいたします。外国に潜み、情報をとってこいと言われるのであればそういたします。槍を持ち前線に出ることを望まれるのであれば、一番槍を務めましょう」

老人は、静かな瞳でミーアを見上げた。

「さぁ、臣に、姫殿下のお望みをお聞かせください」

――こっ、これは……いったい？

ミーアは混乱する。けれど、気を取り直してすぐに説明を始める。なんだか知らないが、ともかく相手の気が変わらない内に、一気に話をつけてしまう構えだ。

機を見るに敏、どんなに小さな兆候であろうとも、自らを押し上げる波を見つけるのが上手い、ミーアは熟練の波乗り（サーファー）職人なのである。

「あなたには、わたくしが建てる学校の、学園長をしていただきたいんですの」

「学校……でございますか」

「ええ。ベルマン子爵領にできる予定の皇女の町（プリンセスタウン）を学園都市にする予定ですの。そこに帝国中の優秀な子どもたちを集めて……」

「優秀な子どもたち、と言いますと……」

「我が師よ。ミーア姫殿下は中央正教会の協力を取り付け、孤児院の優秀な子どもたちを無料で学校に入学させようとされているのです」
「なるほど、確かに知恵働きは金のあるなし、身分の高い低いに関係の無き事……。さすがは姫殿下、ご慧眼でございますな……」
ルードヴィッヒの言葉に、感心の声を上げる老人。感嘆のにじみ出た視線を向けてくる。
対してミーアは……、
――ふふんっ！　もっと褒めても良いですわ！　どんどん褒めていいんですわよ？
褒められてご満悦なミーアは、ちょっぴり胸を張る。
「師よ……それだけではありません。ミーア姫殿下は、その子どもたち、帝国の次世代を担う若者たちによって、この国に巣食う悪しき反農思想を根底から改革しようとお考えなのです」
「おお！　なんと、それは……」
ルードヴィッヒの言葉に、驚愕の呻きを上げる老人。感嘆のにじみ出た視線を向けてくる。
対してミーアは……、
――はて？
思わず、首を傾げる。
ミーアとしては、ミーア学園の一番の目的はセロ・ルドルフォンの新型麦作りを実現させることだ。
なので、悪しき反農思想とか言われても、なにがなにやら……といったところである。
けれど……、
――まぁ、ルードヴィッヒが言っているのですし、とりあえず乗っかっておけば間違いはございませんわ。お師匠さまも感心している様子ですし。
瞬時の判断、波に乗ることを選択！　そう、ミーアは熟練の波乗り師なのである！

「その通りですわ」
そうして、再び、ぐぐっと胸を張る。
「そのために、すでにペルージャンの姫君を講師に迎えることをお考えです」
「なるほど……ペルージャン農業国……。確かにかの国の農業技術は帝国にとって非常に有益なもの。実現すれば、これは歴史を変える大偉業になり得ましょう」
そうして、放浪の賢者は、わずかばかり潤んだ瞳でミーアを見つめた。
「もはや死するばかりであったこの老骨めに、かような栄光に携わる機会をお与えいただけるとは……」
――なんだか、よくわかりませんけれど……。
盛り上がる男たちについていけないミーアであったが、とりあえず、確認しておくことにする。
「それでは、改めて放浪の賢者どの……」
「かの帝国の叡智に臣のような者が、賢者と呼ばれては面映ゆうございます。どうぞ、ガルヴとお呼びください」
「そうですの？　それでは、ガルヴ殿……、改めてお願いいたしますわ。どうか、我が学園の長をしていただけないかしら？」
ミーアの問いかけに放浪の賢者、ガルヴは頭を深々と下げ、
「謹んで、拝命いたします」
そう答えるのだった。
そんなガルヴを見下ろしながら、
――ふふん、チョロイものですわ！
渾身のドヤ顔を披露しつつ、上機嫌にミーアは言った。
「あ、そうですわ。今日は一緒に食事をなさらない？　せっかくガルヴ殿にお会いできたのですし、お祝いしなくてはなりませんわ」
その夜、ルールー族の村にて、放浪の賢者を交えての大宴会が開かれた。
その日のメニューは、ミーアがお願いしていたウサギ鍋だった。

「臣の大好物のウサギ鍋を用意していただけるとは……」
そのもてなしに感激した放浪の賢者は、改めてミーアへの忠誠を誓ったのだった。

第六十五話　老賢者の最後の教え～ルードヴィッヒの相談ごと～

ルールー族の村での宴会が終わり、夜も更けたころ……。
族長の家に泊まっていた放浪の賢者ガルヴのもとに、ルードヴィッヒがやってきた。
「ふむ、お前か、ルードヴィッヒ」
巨大な木を組んで作られた族長の家、その入口は少し高い所にあり、そこに行くには丸太の階段を上っていく必要がある。
その階段の中ほどに、ガルヴが腰をおろしていた。
その手には濁った酒の入った木の器があった。森の木を透かして見える月を肴（さかな）に、酒盛りの続きをしていたようだった。
その姿を見て、ルードヴィッヒは少しだけ驚く。
酒に強く、あまり酔ったところを見たことがないガルヴが、上機嫌に顔を赤らめていたからだ。
「飲みすぎではないですか、我が師よ」
眉をひそめるルードヴィッヒに、ガルヴは意地の悪い笑みを浮かべる。
「そりゃあ、お前のせいじゃ。お前が愉快な出会いをもたらしたせいで、ほれ、わしもまだまだ働かなくてはならなくなったじゃないか。はは、人知れず枯れて死ぬ予定が、とんだ計算違いじゃて」
言葉とは裏腹に、ガルヴの声は明るい。
それは良いのだが、こんなに酔っていては相談はできないだろうか、と、ルードヴィッヒは懸念する。
けれど……、
「なにか相談ごとか？　ルードヴィッヒ」
ふと見れば、師の瞳には鋭く明敏な光が宿っていた。
かなわないな、と苦笑しつつ、ルードヴィッヒは師の隣に腰かけた。

そうして、小さく息を吐いてから、
「実は私は、ミーアさまに女帝になっていただこうと……そう考えています。つきましては、師よ、ぜひとも協力をお願いしたいのです」
単刀直入に切り出す。回りくどいことを嫌う、師の性格を慮ってのことだ。
「ほう……女帝」
ガルヴは盃を満たした酒に目を落とし、思案げに瞳を細めた。
「なるほど。ミーア姫殿下は明敏な方。帝国の叡智の名に相応しいあの方であれば、国は良い方向に動き出すかもしれぬな……じゃが……」
それから、ガルヴは鋭い視線をルードヴィッヒに向けた。
「ルードヴィッヒよ、お前に一つ問いたいことがある」
「は、なんでしょうか、我が師よ」
姿勢を正すルードヴィッヒ。その耳に、かつて教えを受けていた時と変わることのない、深く静かな声が届いた。
「お前が、姫殿下を女帝に推すのは、あの方の叡智ゆえか？」
と。
その当たり前過ぎる問いかけに、ルードヴィッヒは戸惑う。一瞬、何か裏があるのではないか？　と不安にすらなりながらも、彼は大きく頷いた。
「その通りです、師よ。あの方の叡智はあなたにも匹敵する。女帝となれば、きっとこの国をよく導き、悪しき慣習を……」
「では、あの方に叡智がなければ、どうじゃ？」
続く言葉に、ルードヴィッヒは首をひねった。
「それは……どういう意味でしょうか？」
「そうじゃな……、別の聞き方をしよう。もしもあのお方が、その知恵を悪しきことに用いたなら、お前は、どうするつもりか？」
「そのようなこと、なさるはずがありません。あの方には優れた叡智がある」

「悪にも優れた叡智はあるよ、ルードヴィッヒ。愚者が悪を成すのではない。愚者には愚者の悪があり、愚者の善がある。同じように知者には知者の悪があり、善がある。叡智とは善きことにも、悪しきことにも使えるものなのだ」

重々しい口調で言ってから、賢者は静かにルードヴィッヒを見つめる。

「その上で問おう。ルードヴィッヒ。お前があの方に仕えるのはなにゆえか？　あの方の叡智のゆえか？　それともほかのものに由来するのか？」

「それは……」

ルードヴィッヒは答えることができなかった。

「なにゆえにあの方に従うのか……。それ次第では、お前はあの方と敵対することだってある。はっきりしておくべきであろうな」

そう言って、師は静かに笑うのだった。

その夜のことだった。

ルードヴィッヒは夢を見た。

それは、不思議な夢だった。

ティアムーン帝国が斜陽を迎える不吉な夢。

大飢饉、疫病によって財政は悪化し、官吏は次々に国を離れていく。そんな中でルードヴィッヒは、皇女ミーアのもとで国の立て直しに邁進していく……そんな夢だ。

不思議なことに、夢の中のルードヴィッヒは、ミーアのことを嫌悪していた。

無能なる帝室の姫、国を傾けておいて安穏と生きる唾棄すべき輩。本来ならば、助けてやる義理などまったくないのだが、国を立て直すためには仕方ない、と嫌々ながらに協力している状況。

その日、ルードヴィッヒはミーアとともに小さな村を訪れていた。

疫病の蔓延からは免れ、大飢饉の影響も比較的少ない村。にもかかわらず、村人たちは腹を空かせているし、人々は諦念に身をゆだ

ね、あるいは貴族を憎悪し、運命を呪っていた。
ミーア一行に対しても、あまり好意的ではなかったが、かといって近衛部隊に逆らってまで、剣を取ろうという者はいなかった。
そこで村の様子を見て、治安維持に腐心する兵士たちの慰問を終えた後、馬車の中で、ミーアは言った。
「ああ、ケーキが欲しいですわ、ケーキ。どこかにないものかしら。ねぇ、ルードヴィッヒ、パンはなくっても、ケーキはどこかに……あったりは……」
「ありません。ケーキもパンも小麦から作られておりますから」
「そう……ですの？」
ミーアはしょんぼり肩を落とす。それを見たルードヴィッヒは、少しだけイラっとする。
――小さなパンさえ手に入れるのが一苦労だというのに、言うに事欠いてケーキとはな……。
「ワンホールぐらいあればいいですわね」
――しかも、ワンホールとは……。どれだけ贅沢なんだ……。
苛立ちはすぐに呆れへと変わる。これだから、お貴族さまは……と、ため息を吐きかけたルードヴィッヒだったのだが……。
「それだけあれば、あの村の者全員とは言わないまでも、子どもたちには行き渡るでしょうし……」
「え……？」
続く言葉に……、一瞬だけ固まる。
「大きなケーキがいいですわね。みなにイチゴが行き渡るぐらい大きな……。そうしたら、イライラした気持ちだって落ち着きますわ」
――自分ですべて食べる気かと思ったのだがな……。
少なくとも、ルードヴィッヒのイメージするミーアはそういう人間だった。だからこそ、彼は不意に意地の悪いことを聞いてみたくなったのだ。
「姫殿下、もしも、私が一人分のケーキの用意ならできると言ったら、どうしますか？」

「本当ですのっ！？」
「いえ、仮にです。あくまで仮に……」
「え……う、うーん、そう、ですわね……。一人分……その一人というのは、巨漢の兵士一人分ということには……」
「なりません。あくまでもミーア姫殿下一人の分です」
それはあくまでも仮定の話。にもかかわらず、ミーアは実に真剣な顔で、ううーん、とうなった後に、
「そ、その場合は、くっ、し、仕方ありませんわ。わたくしも、一口で我慢いたしますわ……。あっ、でも、イチゴって一口サイズではないかしら？　ということは、わたくしはイチゴがもらえるから、それで……」
眉間に皺を寄せて、ぶつぶつと何事かつぶやいているミーア。それを見て、ルードヴィッヒは衝撃を受けた。
――それを、悩むのか……。
偽善者ならば悩まない。すべて民に譲ると言えばいい。
高慢なる帝国皇女ならば悩まない。すべて自分が食べると、当たり前のように言えばいい。
にもかかわらず、ミーアは悩んだ。その挙句に、イチゴをもらうと言った。イチゴさえもらえれば、と言ったのだ。
自分が食べる分があれば、他者に恵んでやろうという人間はいる。それならばまだマシな方で、貴族というのは、自分が今日、明日、明後日、一年後、十年後まで餓えずにいられる保証がない限り、民に施そうなどとは思わないもの。
ルードヴィッヒは、ミーアに対しても、そんな印象を持っていた。
ゆえに、ミーアの答えは衝撃的だったのだ。
「ん？　なんですの？　ルードヴィッヒ。なにか、言いたそうですわね」
怪訝そうな顔をするミーアに、ルードヴィッヒは小さく首を振った。
「いえ、ただ、少しだけ驚きました。てっきり、自分だけで独り占

めするものとばかり……」
「まぁ！　ルードヴィッヒ、あなたはあの村の様子を見たわたくしがケーキを独り占めにすると、そう思っていたんですの！？」
「ええ、まったく疑いもしませんでした」
ノータイムでの返答に、ミーアが歯ぎしりする。
「ぐぬっ……、このクソメガネ……」
ミーアは何事か、ぶつぶつつぶやいていたが、自分を落ち着けるように、はふぅっと大きくため息を吐き、
「わたくしが……知っていて、なおかつ手を差し伸べることができるにも拘らず、倒れた者を放っておくと……そう思われるのは、いささか心外というものですわ。だって、そのようなことをしたら、とっても気分が悪いですわ」
やれやれ、と首を振りながら言った。そんなミーアに、ルードヴィッヒは、心から感心した様子で答える。
「なるほど……。ミーア姫殿下、あなたはどうやら、ある程度はまともな方のようですね」
「なっ！？　ある程度はってどういうことですの？　このクソメガネ……、相変わらず口が悪いですわ！」
「どっちがですか……仮にも皇女たる方が『クソ』などと品がないですよ」
そんな風に、毒づきつつも、ルードヴィッヒは思ったのだ。
この方は、主君として最善ではないのかもしれないが……仕え甲斐がある方かもしれないな、と。
そして、彼は知っていく。
なるほど、ミーアは高慢だ。そのくせ文句を言いつつも、ルードヴィッヒの進言によく耳を傾けた。
なるほど、ミーアは小心者だ。そのくせ逃げもせずに、帝国に踏みとどまり、国を立て直すために努力している。
なるほど、ミーアは頭が悪い。そのくせ、ルードヴィッヒに嫌味を言われて、泣きべそをかきつつ、必死に必要なことを覚えようと

する。
そんな彼女を見るうちに、ルードヴィッヒは願うようになっていた。
どうか、この愚かな姫の頑張りが、少しでも報われますように、と。
そして、いつしか夢見るようになった。
もしも帝国がこの窮地から脱することができたその日には……。
このどうしようもなく頼りない主君の傍らで、助言し、彼女のもとで働くことを。この国をよりよい形にするために、彼女の臣下として力を尽くすことを。
そんな未来を悪くないと思う自分を、ルードヴィッヒはきちんと自覚していた。
だからこそ、ミーアが断頭台にかけられた時、彼は……。

そこで、目が覚めた。
「今のは……夢、だったのか？」
ルードヴィッヒは冷や汗をかいていた。
つい今しがたまで見ていた夢……、それは記憶といっても差し支えがないぐらいにリアルで……。
「馬鹿なことを……。ミーア姫殿下があんなに愚かなはずがないのに……」
ありえない夢だ。帝国の叡智たるミーアに対して、ずいぶんと失礼な夢だった。
ルードヴィッヒは苦笑しようとして、けれど、笑うことができなかった。
彼の心の深い部分が、笑い飛ばすことを拒絶していた。
あれは、笑ってはいけないもの……決して忘れえぬ大切な記憶であったと……。
そして、同時に思っていた。
あれは、あの夢の中にいた者は紛れもない自らの主、ミーア・ル

ーナ・ティアムーンであると……。
表面上はまったく違いながら、その芯の部分は、同じであったと……。
ルードヴィッヒの脳裏に、貧民街での光景が甦る。
薄汚れた子どものところに駆け寄り、それを介抱したミーア。
なるほど、目の前で子どもが倒れていたならば、それを助けるのは当たり前のことだ。
道義的にそうすべきだし、周りの目を慮り、打算的に判断してもそうすべきだ。
けれど、打算であれ、計算であれ、叡智であれ……、それが例え必要なことだと頭でわかっていたとしても……。
果たして、どれだけの貴族が、汚れた弱者を助け起こすだろうか？
平民の自分であっても、貧民街に入ることを躊躇ったのだ。
けれど、ミーアはそれをした。
それをするのが、ミーア・ルーナ・ティアムーンなのだ。
倒れている者がいると知り、手を差し伸べずにいるのは気分が悪いという、それこそがミーアの芯の部分であって……。
「……ああ、そうか」
ルードヴィッヒはようやく気付く。
あふれる叡智への尊敬の念はある。それは揺らぐことはない。
けれど、自身の忠誠の向かう先はむしろ……。
「それこそが、俺が忠義を捧げるべき、ミーアさまの本質か」
そうしてルードヴィッヒの胸に去来するのは、万感の思いだ。
ずっと忘れていた気持ちを……、かなわなかった夢を思い出したような気がした。
――ああ、俺は……帝国の叡智にではなく……ミーア姫殿下に仕え、その腕として働くことを……、ずっとそれを夢見ていたような気がする。
翌日、再びルードヴィッヒは師のもとを訪れた。

弟子の、どこか吹っ切れたような顔を見て、ガルヴは静かな笑みを浮かべた。
今日、その手には酒杯はない。
弟子の覚悟を聞くのに、酔っていては礼を失するからだ。
「答えは、出たようだな、ルードヴィッヒ」
「はい。我が師よ」
「ならば、問おう。ルードヴィッヒよ。お前はなぜ、ミーア姫殿下を女帝へと推すのだ？」
ルードヴィッヒは、投げかけられた質問を自分の中で消化するように、わずかな間、黙り込んで後……、答える。
「ミーアさまは……知らずに間違うことがあったとしても、知っていて間違いを正さないことは、されぬ方ゆえに……」
倒れている者がいることを知らずにいることはあるかもしれない。されど、それを知ったならば、決してそれを放ってはおかない。それを放置することを嫌悪できる心を持っている。
ゆえに、ルードヴィッヒは己が忠誠、身命さえも捧げんと誓う。
「もしもあの方がその知恵を失ったとしても、私が知らせましょう。そうすれば、あの方は決して間違えたりはしないでしょう」
その答えに、ガルヴは満足したように頷く。
「見事……、己が道を見出したか、ルードヴィッヒ」
「はい。我が師よ。教えを感謝いたします」
「それはお前に対する我が最後の教えとなろう。ミーア姫殿下のために励めよ、ルードヴィッヒ」
「はっ。師匠も、ミーアさまのために、ご協力をよろしくお願い致します」
そうして、ルードヴィッヒは深々と頭を下げるのだった。
そのような極めて真面目な会合がもたれていたとは露知らず、
「ふふん！　ルードヴィッヒも大したことございませんわ！　あの程度の話をまとめること、わたくしにかかればチョロイもんですわ

！」

ミーアは得意満面にベルマン子爵領の領都に帰還を果たすのだった。

ガルヴの呼びかけによって、彼の弟子たちを加えたミーア学園の講師陣の問題は一気に解決する。

もっとも、この後、ペルージャンの姫君、アーシャ・タフリーフ・ペルージャンを講師に迎えるにあたり、ちょっぴり騒動が起きたりするのだが、それはまた別の話である。

第六十五話　老賢者の最後の教え～ルードヴィッヒの相談ごと～（後書き）

活動報告を更新しました。
今週と来週あたりはまったり狭間の日常エピソードになるかと思います。

第六十六話　ミーア姫と忠義の者たち

「はぁ……なんだか、すっごく疲れましたわ……」
帝都に戻ったミーアは、ふかふかのベッドの上で気だるい朝を迎えていた。
ルールー族の村からもらってきた、ふわふわもこもこの寝間着に顔をすりすりすりこすりつけて、ミーアは「うううっ！」とうなる。
「まだ、寝ていたいですわ……」
ヴェールガからティアムーンへの馬車旅、新月地区への訪問、そこからベルマン子爵領に行き、さらにはルールー族の村にまで足を延ばしての強行軍である。
さすがのミーアも、疲労の色を隠せないところだった。
「べっ、別に、森で立って待ってた疲れが数日遅れで来たとか、そういうことではありませんわ！　わたくし、まだまだ体も心も十三歳の若者ですし！」
などと……、誰に言うでもなくつぶやくミーアである。
……しかし、心は二十を過ぎているはずなのだが……。
「ミーアさま、朝食の準備ができたとのことなのですが、いかがいたしますか？」
起こしに来たアンヌに、ミーアはぽやーっとした瞳を向けた。
「なんだか、年々、朝が来るのが早くなるような気がいたしますわ」
などと言いつつも、ミーアは起き上がって、伸びをした。
眠気まなこをこすりつつ食堂にずりずり歩いて行こうとして……。
「ミーアさま、お着替えを済ませてしまいましょう。さすがに、その格好で外に出るのは……」
アンヌはミーアを呼び止めると、素早く、その寝間着を脱がせた。
露わになった上質な肌着、さらには肌の状態を素早く確認、それほど汗をかいていないと判断すると、すぐさま、今日のドレスをセレ

クトする。
外に出た際に感じた気温、室内の気温、ミーアの行動範囲を予想し、一日を快適に過ごせるものを、なおかつ、自らの主を飾るのに相応しいドレスをセレクトする。
そうして取り出したるは、華やかな黄色のドレスだ。ゆったりとした室内用のドレスは、コルセットでお腹を締めずに楽に着られる仕立てのものだった。
それをミーアに着させていく。ぽーっと突っ立っているミーアの邪魔をしないよう、丁寧に、けれど、できるだけ素早く。
その動きは、まさに熟練のメイドの技術と言えた。
基本的にあまり器用ではないアンヌが、これほどの技を身に着けたのは、ひとえに反復練習の賜物といえた。
そうなのだ、馬の練習だけではない。
メイドとしての技術はもちろん、セントノエルでの勉学、さらにミーアの役に立つべく料理に至るまで……。
コツコツ努力を積み上げているアンヌは、今や、究極のメイドに至る道を一歩一歩、着実に歩み始めているのだ。
そんなこととは露知らぬミーアであるのだが……、アンヌはそれでいいと思っている。
着替えの時、やり方が上手くなった、下手になったなどと、意識されているようではまだまだなのだ。
自然に、当たり前に、主の身の回りの世話をしてこそのメイド……。
アンヌはそんな風に考えている。でも、だからこそ……。
「ふぁ……、うふふ、今日はすっかり甘えてしまいましたわ。いつもありがとう、アンヌ」
アクビまじりの涙目で、そんな風にお礼を言われてしまうと、なんとも嬉しくなってしまうのだった。
当たり前に自分の仕事をしているだけなのに、それを評価してくれる人がいることが嬉しくって……。

「はい、ありがとうございます、ミーアさま」
ついつい、わけのわからないお礼を返してしまうアンヌなのであった。

さて、黄色のドレスに着替えたミーアは、ずりずりと食堂に向かった。
――あー、もっと寝てたいですわ、だらだらしてたいですわ……。
などという心の声が漏れ聞こえてきそうなぐらいに、だらだら、ぐんにょりしつつ、食堂へ。
大きな机を前に、椅子の上に小さなお尻をちょこんと乗せて、もう一度、ふわぁ、っとあくびをする。
「おはようございます、姫殿下」
「おふぁようございまふわ……」
目尻に浮かんだ涙をこしこしこすりつつ、ミーアは料理長の方に目を向けた。
料理長は眉間にしわを寄せ、気づかわしげな顔で言った。
「だいぶお疲れのご様子ですね」
「そうですわね。皇女の町の視察にいったり、いろいろ忙しかったので、少し疲れてしまいましたわ。だから、今日はちょっとぐらいわたくしに優しくしてもバチは当たらないと思いますわよ？」
「優しく……、といいますと？」
「そうですわね、朝食代わりにお菓子を出すとか……」
そう言うと、料理長はむっつり黙ってしまった。
ミーアの言葉に呆れたのか、料理長はそのまま無言で踵を返した。
それを見送り、ミーアはため息を吐いた。
「ま、さすがに、朝から甘いものは出てきませんわよね。ここのお料理は美味しいんですけど……クッキーとかケーキとか、朝から食べられたら元気が出ますのに……。まぁ、そんなこと、絶対にありえないでしょうけれど……」
などと言っていたミーアであったから……、料理長が手ずから机

の上に置いたものを見て、驚愕の悲鳴を上げた！
「まぁっ！　こっ、これは、けっ、ケーキっ！？」
ミーアの前に置かれたもの、それは、ふかふかとした黄色い生地のケーキだったのだ！
立ち上るのは甘い香り。食欲をそそる果物の酸味と、香ばしい焼き菓子のような匂いがまじりあい、ミーアの嗅覚を刺激する。
思わず、じゅるり、と高貴な身分にあるまじき音を口から鳴らしつつ、
「こんな朝から、よろしいんですのっ！？」
ミーアは瞳をまん丸くしつつ、料理長を見つめた。
「はい。姫殿下がお疲れのご様子でしたから……、その、作ってまいりました」
あまりにミーアが喜んでくれたので、少々照れくさくなったのか……熊のような料理長は気まずげに頬をかいた。
「で、でも、確か以前に、お菓子ばかり食べていては体を壊すと、あなたは言ってなかったかしら？」
そう言いつつ、ミーアはケーキ皿を抱え込む。
気が変わって、持っていかれては大変と警戒しつつも、それでも疑問は拭えなかった。
そんなミーアに、料理長は柔らかな笑みを浮かべた。
「ああ、おぼえていていただけましたか……。はい、その通りでございます。あまり甘いものばかり食べていては、お体にさわります。ゆえに……」
そうして料理長は、少しだけ胸を張って言った。
「新しいメニューに挑戦してみました。そのケーキは野菜でできているのです」
「なっ、やっ、野菜で、ですのっ！？」
ミーアは不思議そうに、そのケーキを眺めた。
見た感じ、どこからどう見てもケーキにしか見えない。野菜感はゼロである。

ミーアは恐々とした様子でフォークをつかむと、その先っぽでつんつん、とつついてみる。それから、小さな切れ端を思い切って口の中に入れてみて……。
「ほわぁ……」
その顔が見る見る幸せそうにとろけた。
「甘くてとっても美味しい……。ああ、たまりませんわ」
幸せそうな吐息をこぼした後、ミーアは料理長の方を見た。
「もう、冗談がお上手ですわね、料理長。このケーキとっても甘いですわよ？　これが野菜でできているとおっしゃるんですの？」
「野菜とは、本来、とても甘いものなのです。このケーキは黄月トマトと黄月キャロット、さらにミニカボチャなどで甘みと酸味を出しています」
「まぁ、そのような野菜で、こんなに美味しいケーキができるなんて……」
感心のため息を吐くミーアであったが、次の料理長の一言には感動を禁じえなかった。
すなわち、
「そして、野菜で作ってあるため、健康のためにもなります」
「なっ！？　そっ、それはつまり、このケーキならばいくら食べても大丈夫ということですのっ！？」
そんな夢のようなものがっ！？　と、ミーアは驚愕の視線をケーキに向ける。
「いえ、さすがにいくらでも、というわけにはいきませんが……。それであれば、朝から食べても問題はございません」
苦笑しつつ答える料理長だったが、すでにミーアは聞いちゃあいなかった。
素早い動作でケーキを切り分けると、ひょいひょいと口の中に放り込んでいく。
ミーアにとって、ケーキは飲み物なのだ！
「ああ、素晴らしい……。素晴らしい仕事ですわ、料理長。あなた

の腕前にわたくし敬意を表しますわ！」
と、フォークを握る手が不意に止まった。
「もしかして、ですけど、料理長……このケーキ、わたくしのために考えてくださったんですの？」
「皇帝陛下とミーア姫殿下のご健康を守るのも、臣下たる我々の務めなれば……」
静かに頭を下げる料理長に、ミーアは感動した！
「それは、ご苦労なことでした。改めてお礼を言わせていただきますわ、料理長。わたくし、心の底からあなたのお料理に感服いたしました」
ミーアは改めて料理長を労い、その勢いとドサクサに紛れてケーキを三回おかわりしようとして……、さすがにアンヌに止められることになるのだが……。
それもこれも、すべて穏やかなミーアの日常の一幕なのであった。

第六十七話　ミーア姫、決死のプレゼンをする

――どうして、このようなことにっ！？
目の前の現実に、ミーアは絶望に暮れる。
ミーアを呑み込まんとするもの、それは極めて巨大で、残酷な現実だった。
――なっ、なぜ、なぜなんですのっ！？
目の前が真っ暗く染まっていくのを感じつつ、ミーアは事態の打開を図る。

時間は少し前にさかのぼる。
ベルとリンシャと合流したミーアは、後のことをルードヴィッヒらに任せて、セントノエル学園に帰還を果たした。
「これでようやくのんびり出来ますわ！」
などとニコニコしていたミーアは、久しぶりに生徒会室に顔を出した。
「お久しぶりですわね、みなさま。すっかり留守にしてしまいまして……ご迷惑をおかけしましたわ」
生徒会室に集まっていた面々に頭を下げたのち、ミーアは溜まっていた仕事を片付けにかかる。
――といっても、ほとんど書類仕事ですし。ラフィーナさまがここまで上げてきたものは、わたくしがなにか言う必要もございませんわね……。
などと……油断をしていたのが悪かったのだろうか。
ラフィーナから手渡された資料を見て、ミーアは思わず目をむいた。
新たにやってきた問題、それは、ミーアにとっては、むしろ学園都市建設以上の深刻さを秘めていたのだ！　すなわちっ！

「え？　え？　な、なぜ、なぜですの？　どうして食堂のスイーツのメニューが減っておりますの？」
ラフィーナから渡された資料には食堂のスイーツのメニューを減らした刷新案が記載されていたのだ。
ちなみに、ミーアの大好物のフルーツタルトもなくなっていて……、
――なっ、なぜ、こんなことに？　どういうことですのっ！？
ミーアはすっかり涙目である。
「ふふ、ミーアさんがいない間に、私たち三人でしっかり調べたの。栄養学って楽しいものなのね」
ラフィーナとティオーナ、さらにクロエまでもが、にっこにこと笑みを交わす。
――えっ、えいようがく、って、なんですのっ！？
一方、ミーアは混乱するばかりだ。
えいようがく、なるものがなにかはわからないし、なぜそれで甘いもののメニュー数が減らされるのかもまったくわからない。
それでも、なんとか態勢を立て直すべく、ミーアは気を取り直した。
「なるほど……えいよう、がく……」
「ええ、私も盲点だったわ。食べ物と健康の関係……、まさかこんな学問があったなんて……。だから、ミーアさんのご提案通りに、生徒の健康を考えていろいろ栄養バランスを考えると、スイーツを減らして、その代わりにもっとお野菜を使ったメニューを増やした方がいいんじゃないかって思ったの」
――そっ、そんなことまったく提案しておりませんわ。わたくし、そんなこと一言も言っておりませんわっ！
抗議の言葉を飲み込み、ミーアは懸命に打開策を考える。
甘いものを守るため、帝国の叡智がうなりを上げる！
「ただ、いくら体によいからといって、甘いものを減らして野菜料理を増やすとなると……、やはり文句が出るのでしょうね。問題は

そこね」
悩ましげなラフィーナの言葉に、ミーアは活路を見出した。
――そっ、それ！　それですわ！　その線で押していけば！
ミーアは思い切りしかつめらしい顔を作って頷く。
「そう。それは大変深刻な問題ですわ。ですから、ここは無理せずに現状維持ということも……。今後の継続課題ということにしておいて、とりあえずは……」
「いえ、せっかくミーアさんが打ち出した政策ですもの。なんとか実現したいわ」
ラフィーナは熱意に溢れる顔で言った。それに合わせて、クロエとティオーナも頷く。
――なんで、そんなに結託しておりますのっ！？
友人二人の、ミーアに対する友情が、ミーアをゴリゴリ追い詰めていく。
「なるほど。確かに、民の上に立つ者として健康を維持することは大切なことだが……。栄養学というのは俺も聞いたことがなかったな……。だから、キノコにあんなにこだわりを持っていたのか。さすがだな、ミーア」
シオンも珍しく感心した様子である。
アベルもサフィアスも頷いていて、特に反対意見はないようだった。
スイーツ男子がいなかったことが、この際は悔やまれる。
――う、うう……、なんとか、なんとかしなくては……。
大勢がほぼ決したような状況の中、ミーアは懸命に策を練る。
孤立無援であっても、逃げられない戦いがそこにはあった。
――わたくしのスイーツたちを生き残らせるための、妙案……、妙案はありませんの？　なにか、なにか……はっ！
刹那、ミーアの脳裏に、熊のような料理長の顔が思い浮かんだ。
『姫殿下のために、考案いたしました。野菜のケーキでございます』
「そうですわっ！　や、野菜のケーキっ！」

起死回生の妙案、来る！
瞬時に、ミーアは自らの思考を組み立てる。
甘いものを食べると冴えるミーアの思考が、甘いものを守るために冴え渡る。
そこに生まれたのは、美しい循環、まさに助け合いの精神である。
……そうだろうか？
やがて、ミーアは静かに語りだす。
「しっかりとお野菜を食べさせることと、スイーツのメニューを減らさないことの両立……。ラフィーナさま、わたくしは提案いたしますわ。体にいいケーキをメニューに加えることを」
「体にいいケーキ？　そんなものがあるの？」
びっくりした様子で、ラフィーナが聞き返す。それに、余裕たっぷりに頷き返し、ミーアは言った。
「帝国の技術力の粋を集めしもの……野菜ケーキなるものが、ございますわ！」
「や、野菜ケーキっ！？」
ミーアは熱心に、その利点を説く。
「まず、メニューの刷新ですが、甘いものはそのままでよろしいですわ。その代わり人気の低いこの野菜サラダと、濃厚グリーンスープをカット。そこに代わりの野菜ケーキを加えるのですわ」
「で、でも、ミーアさま！　スイーツのメニュー数を減らさなければ、甘いものを食べすぎてしまう問題は解決しないんじゃ……」
疑問を呈したクロエに、ミーアは静かな顔で首を振る。
「心配いりませんわ。クロエ。野菜のケーキは、思わず手が伸びてしまうほど美味しかったですし……」
その言葉に、ラフィーナは納得の頷きを見せる。
「なるほど。つまりミーアさんの提案はこうね。美味しいものをメニューからなくし、あまり美味しくない健康に良いものを食べさせるのではなく、健康に良い美味しいものをメニューに加える、と。そして、そのあてがある、と」

「まさにその通りですわ。ラフィーナさま」
自信満々に頷くミーアに、ラフィーナは静かに頷き返した。
「さすがね、ミーアさん……。私には食堂のメニューと生徒の健康とを関連付ける視点はなかった。しかも、そのためのメニューまで用意しているなんて……」
「私も、帝都に行ったことあるのに、そんなケーキがあるなんて知りませんでした」
「本でも読んだことがありません……。ミーアさま、すごいなぁ」
三人の少女たちの尊敬の視線を受けて、ミーアは鷹揚に頷いた。
「もしもわたくしの案を採用していただけるならば、すぐにでも帝都に手紙を書きますけれど、どういたしますかしら？」
偉そうに腕組みするミーアなのであった。

会議が終わってすぐに、ミーアは帝都に手紙を書いた。
遠い地にいる忠義のシェフ、料理長に野菜ケーキの作り方を教わるためだった。
ミーア考案のヘルシー野菜ケーキは、セントノエル学園の食堂の名物メニューとなり……。学園を卒業した後、ミーアはその料理長の功績を高く評価。自由ミーア勲章を授与することになるのだが……、まぁ、それは、どうでもいいか。

第六十八話　ミーア姫、小心者に共感する

――ふぅ、なんとかなりましたわね……。
無事に野菜ケーキのプレゼンを終え、やり切った顔で紅茶に口をつけようとしていたミーアだったが……。
「さて……それじゃあ、ミーアさん。そろそろ本題に入りましょうか……」
ラフィーナの言葉に冷や水をぶっかけられる。
――はて、本題？　なんのことですの……？
首を傾げるミーア。それはシオンやアベル、サフィアスも同じで……。けれど、ティオーナとクロエはなぜだか、事情がわかっている様子だった。
みなの視線を受けたラフィーナは、おもむろに一冊の本を取り出した。
「これは、地を這うモノの書の写本……。邪教の秘密結社、混沌の蛇の聖典よ」
「なっ……」
告げられた言葉は衝撃的だった。
ミーアはとっさに、サフィアスの方に目をやる。
「ラフィーナさま、ちょっと、この場でそのお話は……」
大慌てで、アイコンタクトを送る眼力姫（ハイパワーアイプリンセス）！
――ラフィーナさま、正気ですのっ！？　その混沌の蛇の一味の者が、そこにっ！　そこにっ！
などと……、懸命に訴えかける。と、ラフィーナは納得した様子で頷いた。
「ええ、大丈夫よ、ミーアさん」
その答えに、一瞬、安堵するミーアであったが、、
「この際だから、サフィアスさんにも味方になっていただきましょ

う」
――ぜっ、全然、わかっておりませんわっ！
ミーアは心の中で悲鳴を上げた。
「サフィアスさんは、ミーアさんがいない間にとっても頑張ってくれたわ。もちろん、まだまだ頑張ってもらいたいけれど……、とりあえず信用してもよろしいのではないかしら。結局のところ、相手が蛇ではないという保証はどこにもないのだから……」
「それは……まぁ、そうかもしれませんけど……」
「ラフィーナさま……、この俺を信用してくださると……うう……」
サフィアスは感動したのか、うるうると瞳を潤ませていたのだが……、ふと首を傾げた。
「はて……？　邪教の秘密結社……、あの、つかぬことをお聞きしますが、それはここ最近、授業が終わってから神聖典の書き取りを山ほどさせられたり、得体のしれぬ男たちとともに、ラフィーナさまの説教を朝昼晩と聞かされたことと、なにか関係が……」
ラフィーナは静かな瞳をサフィアスに向けて、清らかな笑みを浮かべた。
「信用しておりますね、サフィアスさん」
「あ、はい……」
その笑みに、傍で見ていたミーアも震え上がる。
――おっ、恐ろしい。ラフィーナさま、こっそりサフィアスさんのことを、チェックしていたのですわね……。恐らく、身辺調査もきっちりと行っているのではないかしら……。
そんな疑いを、思わず抱いてしまうミーアであった。
「それで、その写本にはどのようなことが？」
気を取り直したように、口を開いたのはシオンだった。
「そう、ね……。簡単に言ってしまえば、国の滅ぼし方が書いてある。どういう手順で、どのように人の心を操って、被害を大きくするのか……とか」
「あ、悪質な本ですわ……」

ミーアは震える声で言った。
実際問題、被害者であるミーアにとって、それはシャレにならない本だ。
帝国の、あのどうしようもない状況の元凶が、まさに、その目の前にあるのだ。
「そして、これはあくまでも写本の一部らしいの。『国崩し』と呼ばれる章を写したもので、写本はほかにも何冊もあるみたい。かつて公国で入手したものとも、今回のものは違っていたから」
シオンは、受け取った本をパラパラとめくりながら、小さくうなる。
「それがすべて手に入れば、蛇の全容が解明できるかもしれない、か……」
一方、アベルとティオーナから説明を受けたサフィアスは、
「混沌の蛇……そんなものが、我が帝国にも潜んでいる……？」
わずかに顔を青くしていた。
本来であれば、それは一笑に付すべき情報だ。現実離れしすぎているし、無条件に信じるには危険すぎるものだ。
けれど……、ここは生徒会だ。
セントノエル学園の生徒会で語られることは、時に小国を滅ぼしかねないほどの重みをもつことがある。
笑い飛ばすことは、決してできない。
それでも、信じられないのか、サフィアスは笑みを浮かべた。
「は、はは……。俺をだまそうとしてるんじゃないでしょうね……」
ひどく怯えた様子を見せるサフィアスに、ミーアは思わずホッとする。
――ですわよねぇ。普通はビビるものですわ。なんだか、みなさん、ごく当たり前みたいな感じで落ち着いてますから勘違いしておりましたけど、やっぱりこれが普通の反応。ここにいる方たちの反応の方がどうかしているのですわ。
ミーアは自分と同じくビビりなサフィアスに、ちょっぴり親近感

を覚えた。
「別に気分が乗らなければ、逃げてしまっても構わないと思いますわよ、サフィアスさん。わたくしはそういうわけにはいきませんけど……」
だから、ちょっとだけ優しい気持ちになる。
もともと彼は、混沌の蛇っぽいから、生徒会の役員に誘ったわけで……、別に、一緒に戦うことを期待していたわけではないのだ。
逃げたいならば、逃げてしまっても構わない。
そうだ。逃げたいならば、大好きな王子さまと忠義のメイドと、まぁ、少しばかり小うるさいけど、いろいろ任せられるメガネを連れて……逃げてしまってもいい。
――うう、むしろ、逃げてしまいたいですわ……。
ちょっぴり弱気になるミーアである。
が……、
「逃げる……？　ふ、ふふ、侮っていただいては困りますよ、姫殿下」
そう言って、サフィアスは小さく笑みを浮かべた。
「……はぇ？」
予想外の反応に、きょとりんと首を傾げるミーア。
そんなミーアの前で片膝をつきサフィアスは言った。
「ミーア姫殿下が先陣を切って戦おうとされているのに、旗を持ち、民を鼓舞しようとされているのに、四大公爵家の一角たるブルームーン家の者が戦わずして、なんとします！　それに、そのような危険な輩が跋扈（ばっこ）していては、我が愛しの人も安心できません。ぜひ、その戦列に加わることを認めていただきたい」
それは、堂々たる忠誠の誓い。ミーアの陣営へと加わるという宣言。
帝国四大公爵家の一角、ブルームーン家の嫡男が、ついにミーアの陣営へと加わろうとしていた。
そのような歴史的瞬間に、ミーアは……っ！

――ああ、わたくし、ついに先陣を切って旗を振らなければならなくなったのですわね……。今度は弓で射られて死ぬのかしら……。うう、痛そう……。

死んだ魚のような目で、深い深いため息を吐くのだった。

第六十九話　ミーア姫、学園生活をエンジョイする

季節は巡る。

セントノエルに帰還し、溜まっていた生徒会の仕事を無難にこなしている内に、飛ぶように、時間は過ぎていった。

その日……、学生寮の食堂に顔を出したミーアは、メニューを見つつ夏の到来を実感していた。

「ああ、冷製スープが増えてきましたわね」

ちなみに、セントノエル学園の学生寮では、夕食のみ決まっていて、朝、昼はメニューの中から自由に選べるようになっている。

それは一つには、いくつもの国からやってきているため、食の好みが多岐にわたるためであり、さらには、他国の文化を知る良い機会であるためであった。

やろうと思えば、この食堂は他国の食文化をかなり詳しく学ぶことも可能な場所なのだ。

……だからこそ、先日のメニュー刷新のような問題が出てきたりするわけだが。

「今年は涼しいですから、全然意識しておりませんでしたけど……、もうすぐ夏なんですのね……んっ？」

その時、不意にミーアはなにか忘れているような……そんな予感にとらわれた。

「はて……？　夏……？　変ですわね。なにか忘れていたような……？」

うーんっと考えた末、ミーアは一つの答えを得た。すなわち……。

「ああ、そういえば、夏の試験がもうすぐでしたわね……。でも、まぁ別に……。ちょっと悪くても……最悪、進級さえできれば……」

セントノエルは、ラフィーナの方針により、貴族の子弟が通う学校にしては厳しいシステムをとっている。試験の結果が悪ければ、

進級に響くことがあるのだ。
そこには一切の容赦はない。いかに身分の高い者であったとしても、進級できない時はできないのだ。
ともあれ……、それは非常に悪い点を取ってしまった時の場合だ。
ミーアは決して勉強ができるわけではなかったが……、頑張れば、なんとか乗り切れる程度の暗記力は持ち合わせているのだ。
「甘いものがあれば頑張れますし……、今回も、それで頑張ればいいですわね……」
などと、安直なことを考えていたから、バチが当たったのかもしれない。
食堂で出会ったラフィーナは、ミーアに衝撃的なことを言ったのだ。
「あっ、そういえば、ミーアさん、もうすぐ夏前の試験ね」
「もうそんな時期なのですね。時間が経つのが早いですわ」
そんな何気ない会話……のはずだったのだが……。
「今度、生徒会でも話題に出そうと思っているのだけど、最近、試験の結果があまり芳しくない方が多いのよ」
「まぁ、それは良くないことですわね」
ミーア自身、どちらかというと、その良くない方に属する者なのだが、そこはそれ……。
まったく他人事のような顔で返事をするミーア。だったのだが……。
「それでね、ミーアさんが忙しくしているのは知っているから、とっても申し訳ないんだけど……、生徒会でキャンペーンを張ろうと思っているの」
「キャンペーン……？」
「そう。成績の良い生徒の試験結果を廊下に貼り出して、みなのやる気を高めるのよ」
「なるほど、そんなこともするんですのね……」
半分より下、最下層よりは上の位置、それが前時間軸でのミーア

の定位置だ。
従って、そのキャンペーンなるものは、本来、ミーアにはまったく関係のないもの……であったのだが……、
「それで、一般生徒はそれでもいいのだけど、主導する立場の私たち自身の姿を示す必要があると思うのよ」
微妙にきな臭い話の流れを、ミーアは敏感に察知した。
「え、えーっと、それはどういう……？」
「端的に言ってしまうとね、例年、生徒会役員の試験の点数は、みなの前で発表されることになってるのよ」
「……はぇ？」
ミーアは口をぽかーんっと開ける。
「えーっと、それは……、点数が良くても悪くても？」
「ええ、そうよ。まぁ、たぶんミーアさんなら大丈夫だとは思うけれど、最近、忙しかったから勉強、出来てないかもしれないと思って一応念のためにね。あ、でも、別に点数が悪くても、進級できないぐらい悪くなければ、なにかあるわけじゃないから気にしないでね」
微笑みながら言うラフィーナ。けれど、ミーアは冷静ではいられない。
なぜなら、これでも、ミーアにだってプライドがあるのだ！
――も、もしも、わたくしが悪い点をとったら……、アベルは優しいから、調子が悪かったと思ってくれるかもしれませんけど、シオンが見たら……鼻で笑われるに決まってますわ。
言ってしまえば、それは恥ずかしいだけのことだ。
処刑につながるわけでもないし、地下牢に捕らわれるわけでもない。
『断頭台よりはマシ……』それは、魔法の言葉だ。
別に、なにか失敗して恥をかいても、断頭台よりはマシと考えるのはミーアの一番の逃げ道なのだ。
では、あるのだけれど……。

生徒全体の成績が悪いからキャンペーンを張り、叱咤激励しているにも拘らず、その激励する立場の生徒会長自身の点数が悪い。
……まぁ、悪いとまではいかないにしても、パッとしない。
そんなことになった時にどうなるのか……？
――さっ、晒しものですわっ！　わたくし、恥ずかし過ぎて死んでしまいますわ。
しかも、夏休み前には、例年、生徒会長が訓辞を垂れなければならないのだ。
原稿はラフィーナか誰かにお願いするにしても……、それを偉そうな態度で読むのはミーア自身なのだ。
そんな場に出なければならないというのに、直前のテストで悪い点など取った日には……。
――み、みなさんの視線が痛すぎますわ……。会長選挙の時の比じゃないぐらいの視線が突き刺さってきそうですわ！
断頭台よりマシな状況だからといって、我慢できるものでもないのだ。
そんな生き恥をさらすなど、まっぴらだった。
さらに……、そんな不甲斐ない態度をとってしまった場合、会長の座を渡してくれたラフィーナが、どんな反応をするのか……。
「ミーアさんなら、大丈夫だと思うけど……」
その笑顔に、ミーアは恐怖する。
それはもう、恥ずかしいとか、恥ずかしくないとか、そういう問題ですらない。
ことは、猛獣の尾を踏むか否かという話になってきている。
眠れる獅子、ラフィーナの尾を踏むか、否かの瀬戸際に、ミーアは立たされているのだ！
――こっ、これっ、下手なことできませんわ！
ミーアは、ラフィーナに余裕の笑みを見せて、
「もちろんですわ！　当然のことですわ」
強気に言って、どんと胸を叩く。けれど……、その背中には冷や

汗が滝のように流れていた。
「うふふ、さすがはミーアさんね。あと心配なのはサフィアスさんだけど……」
そんなことをつぶやくラフィーナに一礼した後、ミーアは脱兎のごとく食堂を後にした。

第六十九話　ミーア姫、学園生活をエンジョイする（後書き）

今週も助走期間。学校でまったりミーアです。
〇〇編的に言うと、先週までが学園都市編で、今週は「夏休み編序」みたいな感じになっています。

第七十話　ミーア姫、勉強論を熱く語る（圧倒的物量作戦！）

自室に戻り、ミーアは改めて試験の範囲を確認する。
「う、うう、さすがにおぼえることがいっぱいですわ……。ぐっ、これを全部おぼえるのは不可能ですわ」
実のところ……ミーアの試験への向き合い方は勘や運に頼ったものではない。
なにしろミーアは、大帝国たるティアムーン帝国の皇女である。
ゆえに、その戦術は正々堂々、正面から。
圧倒的な物量によって押しつぶす。
そう、すなわち、丸暗記である！
出そうなところも、そうでないところも、一切の区別なく頭の中に叩き込む。
ケーキとクッキーを友として、ともかく、おぼえておぼえて、おぼえまくるのだ。
だが、まぁ……、当たり前の話だが、おぼえまくれるならば苦労はない。
気力が続かず、ついついサボってしまい、いつも大事なところがおぼえきれなくって、いい点が取れないのが前時間軸のミーアであった。
ちなみに、現時間軸においては、アンヌの協力もあり、ミーアは前回のテストで上位四分の一の位置をキープしていた。
けれど、今回に関していえば帝国に帰っていたので、授業に参加できていなかったことが大きい。
「……これは、地獄ですわ」
いい点を取るならば、範囲をすべておぼえなければならない。
ごくり、と生唾を飲むミーアであったが、地獄を見たのはミーアだけではなかった。

ミーアが部屋に戻ると、ベルがうーうー、うなっていた。
セントノエルに無事に編入を果たしたベルであったが、そのレベルの高さに早くも悲鳴を上げていたのだ。
「う、うう、おかしいです。ここは、ルードヴィッヒ先生に教えてもらったはずなのに、全然、記憶にありません。絶対変です」
……お察しである。
「う、うう、ミーアおば……お姉さま、なにか楽におぼえられる勉強法がありませんか？　これ、全部おぼえれば、たぶん何とかなるような……」
涙目で訴えかけてくるベルを見て、ミーアは思う。
――ああ、わたくしが目の前にいますわ……。
ミーアは、うぐうぐ泣きべそをかくベルを、死んだ魚のように、まるで感情の宿っていない瞳で見つめた。それから、
「ベル……、普段から勉強してないのが悪いのですから、楽をする方法なんてございませんわ」
実感のこもった重たい一言を伝える。
「それは自業自得というものですわ。人は……自分の蒔いた種を自らで刈り取らなければならないのですわ」
含蓄のこもった言葉を、底なしに暗い目をしたミーアが言う。
「うう、おばあさまは帝国の叡智だから、わからないのでしょうけど、勉強は、嫌いな人にとっては、拷問にも等しい過酷なものなんですよ」
「無論知っておりますわ。それでもね、ベル……」
ミーアは孫の肩をしっかりとつかむ。その手は、何かを堪えるかのように、プルプルと小さく震えていた。
「やらなければならないことがございますの……。戦わなければいけない時が、ございますの……」
それから、ミーアは首を傾げた。
「あら……？　というか、ベル……、あなたは別に、そんなにいい点とらなくってもよろしいのではなくって？　結果が貼り出される

わけでもございませんし……」
「この前の点数が十点だったので、次に悪い点を取ってしまうと夏休みなしだって、言われました……。セントノエル始まって以来の悪い点だって……」
「なっ！？」
ベルの言葉に、ミーアは戦慄した。ちなみに、セントノエルのテストは基本的に百点満点だ。
「え？　じゅ、十点？　なんですの、その点数！？」
勉強が不得手で、なおかつサボリ癖のあるミーアであっても、そのような点数を取ったことはない。
というか、そもそもミーア、テスト期間に完全にサボるということができない性格なのだ。
みなが勉強して良い点を目指すのに、自分だけが寝て過ごす？　そんな勇気、あろうはずがない。授業中だってそうだ。適当にではあるが、話を完全に聞かない、なんて勇気はミーアにはないのだ。
ゆえに、テストでも、十点など取れないのだ。
――この子……、わたくしより豪胆ですわ。テストの点数が貼りだされても平然としているんじゃないかしら……。
思わず、ミーアはベルに尊敬のまなざしを向け……ようとして慌てて首を振る。
――って、この子、ラフィーナさまにお願いして、編入させたんでしたわ。また悪い点を取ったりしたら、わたくしが睨まれてしまうかもしれませんわ。
それよりなにより、孫の将来が思わず心配になるミーアでもある。
「ここは、わたくしがなんとかしてあげないとダメですわね……」
そうして、ミーアはベルを連れて部屋を出た。
経験上、ミーアは知っているのだ。
自室、しかもベッドがすぐ近くにあり、息をするように寝転がれる環境にあっては、勉強など到底できないということを……。
さらに頼りになるメイド、アンヌも仕事に出ていて今はいなかっ

た。
見守りの目がない環境で、自室で勉強をすることなどほぼ不可能である。
ここ一番、集中して勉強しようという時には、個室にこもっていてはだめなのだ。
「わたくしが、きっちりお勉強を教えて差し上げますわ。要は物量、どんな問題が出ても対応できるように、ともかくおぼえることが……」
などと、勉強根性論を語りつつ、ミーアが向かったのは図書室だった。
「時々、甘いものを食べながら、テスト範囲をすべておぼえる！それこそが、勝利の……」
その時だった。
「やあ、ミーア、これから図書室で勉強かい？」
突然、話しかけられて、ミーアはそこで立ち止まった。
振り返ると、そこに立っていたのは……。
「まぁ、アベル、ご機嫌よう」
ミーアはニコニコ、明るい笑みを浮かべながら言った。
「わたくしは、ベルにお勉強させようと思ってきましたの。あなたもテスト勉強かしら？」
そう尋ねると、アベルは、なぜか気まずそうに頬をかいて、
「えーっと、まぁ勉強しに来たというのは、そうなのだが……。これを……」
そう言って、数枚の植物紙（パピルス）の束を渡してきた。
「あら、それは？」
「一応、君がいない間に授業でやった内容をまとめたんだ。教本には載ってないものもあったから、念のために……。まぁ、君には必要ないかと思ったんだが……」
気まずそうに、あるいは、照れくさそうにそっぽを向いているアベル……。ミーアはその手をぎゅっと両手でつかんだ。

「ああ……アベル。あなたは……」
感動に瞳を潤ませつつ、上目遣いに見つめる。
「お気遣い、感謝いたしますわ」
「い、いや、気を使わないでくれ。君ならば、そんなものなくたって……」
「気など使っておりませんわ。わたくし、本当に心から感謝しておりますのよ？」
そうして見つめあう二人を……、傍でじっと観察していたベルは、何事かを思いついたのか、わざとらしく、ぽんっと手を打った。
「あ、そうです。ボク、お邪魔みたいなので、失礼して……」
などと、もにゅもにゅ言い訳しつつ、その場から立ち去ろうとするベルの襟首を、ミーアは、がっしとつかんだ。
「変な気を回さなくっても大丈夫ですわよ、ベル。あなたもいっしょにお勉強しないとね」
「う、うう、ミーアお姉さまがルードヴィッヒ先生より厳しいです……うう」
べそべそ泣きべそをかくベルに、なんとなく自身の面影を見てしまい、複雑な気分のミーアなのであった。

第七十一話　楽しい勉強会〜赤点も、みんなでとれば！　の精神で〜

即時撤退の構えを見せたベルをミーアはしっかりと捕まえた。

――この子、すごい判断力ですわ。

自身と同じスタンス、なおかつ迷いのない逃走力に舌を巻きつつも、逃げ出さないようにがっしりと。

しかしミーアは、別にベルに勉強させたいがためにベルを捕まえたわけではなかった。では、その心の中はどのようなことになっていたかというと……。

――あ、あら？　これってもしかして、アベルと二人きりで勉強することになるのでは……？

これである……。純然たる危機感からなのである。

少し前まででであったならば、ミーアはこの状況にニンマリしていたかもしれない。

なんといっても、アベルは年下の男の子でイケメンである。

「大人のお姉さんの余裕で、リードしてあげますわ！」

などと、余裕ぶって状況を楽しめていたかもしれない。

……大慌てでアワアワいう確率と、半々ぐらいといったところだろう。

しかしながら、ここ最近、シオンと剣術に勤しむようになったアベルは、すっかりたくましい青年になりつつあったのだ。体も引き締まり、顔にも凛々しさが見え隠れしている。

そんな格好いい人に優しくされて、なおかつ二人きりでお勉強……などと想像しただけで、すでにだめだった。

――あら、変ですわね……。なんだか、胸が苦しくって、それになんだか熱っぽいような……。

などと、フラフラしてしまう始末。

……重症である。ということで……。

そそくさと逃げ出そうとしたベルを、ミーアは素早く捕まえたのだ。
――今、ベルに行かれたら、アベルと二人きりになってしまう……。嬉しいですけれど、うう、そ、それは、まだ心の準備が……。そうですわ、まだ少しそういうのは早いと思いますわ！
“どういうの”が早いのかは不明だが、ミーアはそう判断したのだ。
いつも通りヘタレなミーアなのであった。

そんなわけで、ミーアとベル、それにアベルは連れ立って図書室にやってきた。
「あっ、ミーアさま……」
図書室の片隅の席にはクロエが座っていた。
ミーアは軽く手を挙げて、そちらに向かう。
――ふぅ、これで二人きりになる危険性はほとんどなくなりましたわ。
などと思いつつ、チラリとアベルの方をうかがうと……。アベルは特に気にする風もなく、残念がるでもなく、ごく自然な仕草でクロエに挨拶していた。
――ちょっとぐらい、二人きりになれなくって残念とか、そういうところを見せてもいいんじゃないかしら？
実に、こう、面倒くさ……、いや、複雑なミーアの乙女心なのであった。
「今日はどうされたんですか？　ミーアさま」
不思議そうに聞いてくるクロエに、ミーアは気を取り直して答える。
「テストの勉強をしに参りましたの」
「あっ、ミーアさまもなんですね。私もです」
「あら、そうなんですの。それは奇遇……、でもないですわね」
なにしろテスト前である。勉強するのは当たり前のことだ。

「では、ご一緒させていただいてもよろしいかしら」
「あ、はい。どうぞ」
クロエは、少しだけ机の端に寄ると、
「うふふ……」
小さく笑みをこぼした。
「ん？　どうかなさいまして？」
「あ、すみません、こんな風にお友達と一緒にお勉強するの、はじめてで」
「あら、そうなんですの？　もしかして邪魔をしてしまったかしら？」
「いえ、そんなことありません。楽しいなって、嬉しくなっただけですから」
と、その時だった。
「あっ、こんにちは、ミーアさま」
そんな声が聞こえてきた。ふと顔を上げると、そこにはティオーナが立っていた。隣にはリオラ・ルールーの姿もあった。
「ご機嫌よう、です。ミーア姫殿下……」
「ああ、ティオーナさん。リオラさんもお久しぶりですわね。この前、わたくし、ルールー族の村に行ってきたんですのよ」
「なんと、そうだった、ですか？」
「ええ。族長さんが帝国語がすごく上手くなっていて。お孫さんのワグルくんとも仲良くやっているようですわ」
などと世間話モードに入ったミーアの脳裏に、突如、警鐘が鳴り響いた。
――あっ、これ、楽しくお話しちゃって、あんまり勉強できないやつですわ！
取り巻きとの経験上、ミーアは、なんとなく察してしまう。
図書室という、静かにするのが原則の場所。
けれど、仲の良い同年代の者たちが集まれば、必然的に始まるひそひそ話。

静かにしなければいけないというルールがあればこそ、それをちょっとだけ破る快感に、抗いようがあるはずもなく……。
――さて、どうしたものかしら……。
ミーアは考える。答えは、すぐに出た！
――あ、そうですわ、こうなったらシオンのやつも巻き込んでやるのがいいですわ！
熱い足の引っ張り合いである！
もっとも、引っ張っているのはおおむねミーアなのだが。
かくて、ミーアは巻き込んでいく。
シオンと……さらに、シオンの手助けもできないようにキースウッドまでも。
――生徒会メンバー全員の成績が悪ければ、ラフィーナさまだって、あまり言えないはずですわ！
被害の分散……ダメージコントロールである。怒られる対象を複数人に増やすことで、自分へのダメージを極力薄めていく。
「となれば……、そうですわ。サフィアスさんも誘って……」
先陣にて旗を振る皇女に、付き従わんと宣誓したのである。
旗振りの皇女が討ち死にする時には、当然、ともに命を散らせてもらわなければならない。
一蓮托生である。
こうして生徒会役員による、図書室の一角を占拠してのにぎやかな勉強会が始まるのであった。

ちなみに……この時の試験でミーアは、学年十五位というミーア史上初の大記録を記録することに成功した。
アベルの作ってきたメモが、実に適切に押さえるべき場所を押さえていたのだ。さすがに努力の人である。さらには、アンヌの多大なる協力もあった。睡眠学習法の効果は、やはり大きかったのだ。
生徒会役員の中では最下位だったが……、それでも良いのだ。
「こっ、今回は少し忙しかったですし、学園を離れざるを得なかっ

たから力を発揮できませんでしたわ」
ミーアは、ニヤニヤしそうになるのを必死に我慢しつつ、しかつめらしい顔で言った。
「本当であれば、もっと高い点数がとれたはずですのに残念ですわ」
頬をひくつかせるミーアを見たラフィーナが、
「よほど悔しかったのね……」
などと可哀そうに思って、もう一度、日を改めて試験を受けなおすか？　と聞いたところ、ミーアはそれを断った。
「いえ、それは卑怯というもの。わたくし、この結果で満足は決してしておりませんが、結果は結果。受け入れますわ」
そう言うミーアを見て、
「やっぱり、ミーアさんは高潔な人なのね……」
などと感心しきりなラフィーナであった。

……そして、ベルは四十点平均だった。
頑張ってはいたのだが、このままでは進級できないということで……。夏休みの間、学園に残って勉強することになってしまったのであった。
もっとも、ベルはそれほど嫌がってはいなかったのだが……。
廃墟と化した帝都に比べれば、この学園は楽園のようなもの。
「こんなに素晴らしい場所にいられるのですから、文句なんてあるはずがありません。毎日ココアさえ飲めるのに、文句を言っていたら、罰が当たります」
などと、キリッとした顔で言うのであった。
ちなみに当初、ベルはしょんぼりしていた。
エリス母さまのもとで過ごせるとウッキウキだったのに補習で夏休みも帰れないとわかったからだ。
そんなベルに、とっさの機転を利かせたリンシャが、セントノエルにいれば毎日ココアが飲み放題と囁いたらしい。実になんともミーアの孫なミーアベルなのであった。

第七十二話　エメラルダ、イイコトを思いつく！

ティアムーン帝国、四大公爵家の親睦を図るためのお茶会。「月光会（ルー・ド・リュンヌ）」

最近は、すっかり参加者が減ってしまったこの会では、今日も一人、エメラルダが紅茶をすすっていた。眉間にしわを寄せ、不機嫌そうにケーキを細かく解体している。

「あれ？　今日もサフィアスくんはお休みかい？」

現れたのは、涼しげな笑みを浮かべるルヴィだった。

「それに、イエロームーンの姫君もやっぱり欠席か……」

部屋の中を見回して、肩をすくめる。

「というか、今日もなんだか機嫌が悪いみたいだね、エメラルダ」

「別に、そんなことはありませんわ。ええ、この私が機嫌が悪い？　ありえませんことよ」

ほほほ、と笑いながら、エメラルダは紅茶に口をつけて、

「ああ、まずい。このお紅茶どこのものかは知りませんけれど、とってもまずいですわね……。次から仕入れ先は変えませんと」

「そう？　いい匂いだと思うけど……」

ルヴィは苦笑いを浮かべて、エメラルダの前に座った。

「で、なにをそんなに不機嫌になってるんだい？」

「サフィアスのやつ、ミーアさまと一緒に図書室で勉強なんてしてましたのよ？」

ぐぬぬ、とうなりながら、エメラルダは言った。

「テスト前だからね。生徒会の役員は一緒に勉強してたんじゃ……、って、そんなことが聞きたいんじゃないか……」

途中で、自分の言葉などまるで聞いていない様子のエメラルダに気づき、ルヴィはやれやれ、と首を振った。

「まったく、何を好き好んであんな連中とつるんでいるのやら……。

しかも、平民や、ルドルフォンの小娘まで一緒でしたわ」
ギリっと歯ぎしりしつつ、エメラルダは吐き捨てた。
「姫殿下の平民びいきも本当に困ったものですし、それに取り入ろうとするサフィアスのやつも気に入りませんわ」
どぼどぼ、と紅茶に砂糖を投げ入れて、がちゃがちゃ、音を立てながらかき混ぜる。大貴族の令嬢らしい品格は、そこには見られなかった。
「そういえば、話は変わるけど、君の狙いは失敗だったみたいだね、エメラルダ」
ルヴィは、自分の分のティーカップを持ち上げながら、話を向けた。
「……狙い？　はて、なんのことかしら？」
すまし顔で、きょとんと首を傾げるエメラルダ。
「ここでの話は他言無用が不文律……とはいえ、将来の政敵にそんなこと話さない、か」
「口にする必要もないことではなくって？」
嫣然（えんぜん）とした笑みを浮かべて、それから、エメラルダは言った。
「それより、あなたの方は動きませんの？　なにかやるようなこと言ってましたけど……」
「あはは、私はどうも裏工作って苦手だからね。正々堂々と姫殿下に挑む機会を待ってるんだけど……」
「あら、挑むだなんて勇ましい。殿方のように剣の勝負でも挑むおつもり？」
「私と姫殿下が剣で切り結ぶのか……。それはそれで楽しそうな気もするけどね。ふふ」
レッドムーン家は、軍部との繋がりの強い家柄だ。
幼き日より、ダンスより剣術に親しんで育ってきたルヴィは、かなりの腕前を誇っている。もちろん、シオンなどにはかなわないものの、並大抵の男子生徒であれば、太刀打ちできないほどには強いのだ。

「まぁ、でも手加減が大変そうだから、やめておくよ。うっかり姫殿下にケガでもさせたら、我が公爵家と皇帝陛下とで戦(いくさ)が起きてしまう」
冗談にならない冗談を、朗らかな笑顔で言うルヴィ。
「それより君の方はどうするんだい？　緑月の姫君。まさか、学園都市の妨害失敗で諦めるわけじゃないんだろう？」
「あら、妨害だなんて、私がそんな品のないことするはずがないではありませんの？」
おほほっと笑ってから、エメラルダは言った。
「ともあれ、このまま黙っているのも業腹。なんとかしたいものですけれど、ふむ……」
考え込むエメラルダを見て、ルヴィはため息をこぼす。
「前も言ったけど、あまり騒ぎを大きくしないようにね。グリーンムーン家が皇帝陛下に反するようなことになったら、我がレッドムーン家は討伐に動かなきゃならないし」
「まぁ、同じ小(エトワ)さな星を身に帯びた四大公爵家なのに、冷たいこと……」
白々しい態度で驚いて見せてから、エメラルダは笑う。
「おや、緑月の姫君は、我がレッドムーンと組んで、帝国を二分しての戦がお望みかい？」
「あら？　危ないご発言。戦闘狂のレッドムーン家の願望に、我がグリーンムーン家を巻き込まないでくださらない？」
その物言いに、ルヴィはただただ苦笑を浮かべる。
「やれやれ、まったく。まぁ、戦に心躍るのは事実だけれどね。帝国軍を二つに分けての派手な戦であれば、それこそ言うまでもないけれど……。でも、まぁ、今は遠慮願いたいね。姫殿下の近衛隊とは、剣を交えたくないんだ……個人的な事情があってね」
「ふーん、そうなんですの」
「まぁ、なんにしても、早いところ動いた方がいいんじゃないかな？　もうすぐ夏休みだし。今年の夏は涼しいようだけど、それでも

夏にいろいろやるのは面倒だろう？」
「ああ、そういえば、もう夏休みなんですのねぇ。ああ、いやだいやだ。私、暑いの嫌いですわ。海にでも行って……海？」
ふいに、エメラルダは、顔を輝かせた。
「いいことを思いつきましたわ。これならば、ミーアさまと一緒に遊べ……じゃない、ミーアさまに恥をかかせることができるはず……。ふふふ、今から楽しみですわ、船遊び（クルーズ）……」
意地の悪い笑みを浮かべるエメラルダに、ルヴィは呆れ顔で首を振った。
「……素直に夏休みに一緒に遊びに行きたいって、言えばいいのに……」
……かくて、物語は再び動きだす。

第七十二話　エメラルダ、イイコトを思いつく！（後書き）

来週からは、波乱の夏休み編
エメラルダとの決着と、判明する新事実……。

第七十三話　ミーアは信じる！　エメラルダのポンコツを！

「……へ？　船遊び……ですの？」
寮の部屋に訪ねてきた少女の話を聞いて、ミーアは瞳をまん丸くした。
その少女……、エメラルダの従者が語ったのは驚くべき内容だった。
すなわち……、
「わたくしを船遊びに誘う、というんですの？　エメラルダさんが？」
「はい。エメラルダお嬢さまは、毎年、夏休みにガレリア海に船遊びに出かけております。非常に穏やかな海で、無数に存在する島々は最高の避暑地にございます。詳しくはこちらの招待状をご覧くださいませ」
そうして、従者の少女は一礼すると、その場を後にした。
ミーアは手の中に残された招待状を眺めて、思わず苦笑いを浮かべた。
「なんとも、エメラルダさんらしいですわね……」
先日の、学園都市計画への妨害行為などなかったかのような態度に、ミーアは怒るより先に笑いの方が出てきてしまうのだ。
「信じられません。ミーアさまの邪魔をしながら、こんなこと言うなんてっ！」
一方、傍らで話を聞いていたアンヌが激昂していた。温厚なアンヌの怒り顔に、ミーアは首を振って見せる。
「別に珍しいことではございませんわ。アンヌ、そんなに怒ることではありませんわ」
どうせエメラルダは、学園都市の妨害に関与していたということを認めるはずがない。明確な証拠がない限りは知らぬ存ぜぬ記憶に

ないで乗り切るはず。
この程度の腹芸、貴族の社交場ではよくあることだった。
「でも……」
「大丈夫ですわ。そりゃあ、なんとも思わないというわけではございませんけれど……、大したことではありませんわ」
ミーアとしては、むしろこの手紙の扱いの方にこそ、頭を悩ませる必要を感じていた。
「ミーアさま、それは、お断りになるんですよね？」
「そう……ですわね」
ミーアは、しばし考える。
前の時間軸でのエメラルダの人となりと照らし合わせてみると、恐らくこれは、なにか企んでいるのだろうが……。
――いや、でも案外、ただ単に遊びたいだけって可能性も捨てきれませんわね。
確率としては半々ぐらいな気がする。
――もしくは、この前のお詫びとか……。
ただ、いずれにしろ素直についていくのは愚行というものだ。冷静に考えれば、エメラルダが何か企んで罠にはめよう（その罠がどれだけ馬鹿らしいものであったとしても）としている以上、素直についていく必要はない。
お断りしてしまえば、なんの危険もない。確実だ。でも……。
――もしも、ただ遊ぶために誘っただけだったり、この前のことのお詫びの意味もあったら、ちょっとだけ気まずいようにも思いますわね。
なにかちょっかいをかけてきたと思ったら、そんなことはまったく忘れているかのように、普通に遊びに誘ってくる。
それがエメラルダという少女なのだ。
けれど、それ以上にもっと実際的な問題で、ミーアは悩んでいた。
それは……。
――ミーア皇女伝の内容も、気にはなりますのよね。

ミーアの脳裏を過ぎるのは、人食いの巨大魚をミーアが殴り倒すというエピソードだ。
もちろん、ミーアも、この話を本当だとは思わない。恐らくは盛った話だ。盛りに盛って、原形すら留めない話になっている可能性は決して否定はできない。
――さすがにわたくしでも、そんな怪物を殴り倒せるなんて思えませんけれど……でも、いずれ泳ぐ機会が訪れる可能性は否定できないのではないかしら……。
盛るにしても、なにかしら元になるエピソードは必要なはずなのだ。
そして、そのエピソードが「ミーアが海に落ちること」をもとにしたものという可能性は大いにあるように思えた。
――その時までに、泳げるようになっておかなければいけないのではないかしら……？
知っての通り、ミーアは風呂好きではあるが泳げない。
もしも泳げたら、セントノエルの大浴場で泳いで、ラフィーナから怒られていたはずだ。
……入浴がトラウマにならないでなによりであった。
それはともかく、泳げないこと自体は別に珍しいことでもない。ティアムーン帝国は海に面していない。海水浴など海で遊ぶような伝統はないのだ。だから、帝国貴族は泳ぐことができる者はほとんどいなかった。
だが……エメラルダはその例外。極めて珍しい、泳げる貴族だった。
幼き日より海で遊んでいたことが、その泳ぐ技術に大きく貢献していたのだと聞いたことがある。
――海は体が浮きやすいとか水が塩辛いとか、わけのわからないことを言っておりましたけど……。
はたして泳げる人間に教えてもらえる機会を逃してよいものだろうか？　今後、そんな機会はないかもしれないのに？

腕組みしつつミーアは考え……、一つの結論へと至った。
――まぁ、そうですわね。エメラルダさんがなにを企んでるか知りませんが、たぶん、その程度ならば大したことないんじゃないかしら？　よくよく考えたら、あの方が狡猾な蛇とも思えませんし……。
そう、ミーアは信じることにしたのだ。
エメラルダのポンコツが……、サフィアスを大きく上回るということを。
――あれがポンコツのふりをしているだけとも思えませんし……、大丈夫なのではないかしら？
他人のポンコツぶりは冷静に分析できるミーアなのであった。

翌日、ミーアは念のために、生徒会のメンバーに夏の予定を伝えた。
結果……、思わぬところに影響が出ることになるのだが……。
かくて、ミーアにとって忘れられない夏が始まる！

第七十三話　ミーアは信じる！　エメラルダのポンコツを！（後書き）

夏と海と無人島と……あと足りないものは……。

今週は夏の旅行の準備です。

第七十四話　同伴者と何かのフラグ……

「夏休みに、グリーンムーン家の令嬢と船遊び？」
ミーアの話を聞いた生徒会の面々は、一様に心配そうな顔をした。
「大丈夫なのかい？　ミーア、その……、四大公爵家の中には確か……」
眉をひそめ、気づかわしげな顔をするアベルに、ミーアは笑みを浮かべて見せた。
「ええ、おぼえておりますわ。けれど、恐らく大丈夫じゃないかしら。エメラルダさんは、そうした陰謀に加担して平然としていられるような性格ではありませんし……」
「いえ、それでもやはり危険ではありませんか、ミーア姫殿下。そのように油断しては……」
横から苦言を呈したのは、サフィアスだった。
「どのように善良な顔をしていても、腹の中では何を考えているかわからないもの。それはあのエメラルダ嬢だって同じこと！」
……俗に言う「お前が言うな！」というやつである。
ラフィーナの笑みが、出来の悪い子に向ける母親のような色を帯びる。その視線の生暖かさが逆に怖いミーアであった。それはさておき……。
「ご心配でしたら、あなたも一緒にいらっしゃいます？　サフィアスさん」
エメラルダと同じ四大公爵家の者であるサフィアスであれば同行するのも問題ないだろうと考えて、ミーアは話を振ってみた。のだが……。
「うえ？　あ、あー、えーとですね。ご一緒したいのはもちろんですし、本来であれば姫殿下の傍らに侍るのが、臣下の当然の務めではあると思うのですが、その……、実は許婚と遊び……じゃない。

出かける予定がありまして」
ちょっと慌てた様子で、サフィアスは首を振った。
皇女の安全より許嫁との夏休みを優先するサフィアスであった。
――ふむ……、この方、ブレませんわね。こうして見るとサフィアスさんには、お父さまに近いものを感じますわ。
大好きな人に一途な想いを寄せる。一人の女性を何物にも優先してしまう、その一直線さ……。そこにミーアは、自身の父に通じる気質を感じ取っていた。
――まぁ、妻になる方にとっては浮気をされなくて良いかもしれませんが……娘でも生まれたら、きっとウザがられますわね……お可哀そうに……。
将来、娘にウザイと言われて、しょんぼりするサフィアスを想像して、ミーアは憐みの目を向けた。
「？　あの、なにか？」
「いえ、なにも……」
正直なところ、サフィアスが同行したからと言って、どうなるものでもないとミーアは思っていた。
――護衛として役に立つとは思えませんし……。
ミーアの生暖かい視線に耐えかねたのか、やがてサフィアスは用があると言って、逃げるように席を立った。
「まぁ、サフィアスさんのことはさておいて、近衛兵も何人か随行いたしますし、大丈夫ではないかしら？」
ミーアがそう言っても、アベルはずっと難しい顔をしていた。
「……シオン、少しいいだろうか？」
それから、そっとシオンに耳打ちする。
「ん？　お二人とも、どうかしましたの？」
不審に思ったミーアが話しかけてみるが……。
「いや、なんでもないよ。大丈夫」
アベルが慌てた様子で首を振った。
「そうですの？　でも……」

ミーアが話しかけるのを無視して、二人は部屋の外に出て行ってしまった。

しばらくして、戻ってきたアベルは、早々にミーアに言った。
「ミーア、一つお願いがあるんだが、聞いてもらえるかい？」
「はて？　お願い、ですの？」
きょとりんと首を傾げるミーアに、アベルはまじめ腐った顔で言った。
「我がレムノ王国とサンクランド王国から、それぞれ護衛を出させてもらいたいと思ってね」
「まぁ！　護衛を？」
驚くミーアに、アベルの隣で腕組みしていたシオンが頷く。
「君は大丈夫だと言っていたが、やはりグリーンムーン家の令嬢の件は気になる。護衛の人選はこれからになるが、ぜひ願いを聞いてもらいたい」
生真面目な顔をするシオンを眺めつつ、ミーアは、ふむ、と考える。
――シオンの信頼に厚い護衛というとキースウッドさんあたりになるかしら？　アベルの方はよく知りませんけれど……あの槍の人ということはないでしょうし……。あるいは噂に聞く金剛歩兵団の兵員とかかしら……？　それはそれで、ちょっぴり楽しみかもしれませんわね。
ミーアは小さく首を傾げた。
――まぁ、でもキースウッドさんならば、確かに安心できますわね。見映えがするから、エメラルダさんも嫌とは言わないでしょうし……、レムノ王国の方はわかりませんけど……。
実のところミーアも護衛に関しては、少しばかり頭を痛めていたのだ。
さすがに身一つでエメラルダの誘いを受けようなどとは思ってはいないが、かといって、遊びに行くのに護衛の兵団を連れて行くわ

けにもいかない。
なんといっても、相手は帝国の四大派閥の一角の長、グリーンムーン家なのだ。
当然、自前の護衛を用意しているだろうし、もしも過剰な兵をミーアが連れて行くとしたら、それは、相手を信用していないことになってしまう。
となれば、連れて行けるのは、せいぜい一人か二人……。
――ということはバノスさんあたりに同行してもらえればベスト。ですが、あの方、荒くれ者の見た目ですし、エメラルダさんは了承しないでしょうね……。となると……。
見映えと剣の腕を鑑みれば一番の候補はディオンなのだが、ミーアにとってその人選はあり得ない。
――あの方を伴って船遊びとか、恐怖以外感じませんわ……。
溺れでもしたら、面倒くさがって助けてくれないんじゃないかとまで思ってしまうミーアである。
――とはいえ、そのお二人以外だと、剣の腕前がいささか不安なところもございますわね。
顔がいいだけの護衛など頼りないし、目の前で身を挺してかばわれでもしたら、寝覚めが悪い。
それゆえに、二人の王子からの提案は都合がよかった。特にキースウッドの腕前には、ミーアも一目を置いているのだ。
エメラルダの方も、シオンやアベルの心遣いと言われては嫌とも言えまい。
それよりなにより、エメラルダは確か面食いだったはず。となれば……。
ミーアはキースウッドの顔を見て、
「ん？　どうかしましたか？　ミーア姫殿下……。私の顔になにか？」
「いえ、別に……」
そう答えつつも、心の中で、ふむ、合格！　と大きく頷くミーア

なのであった。

その後、王子二人とキースウッドは用があるからと相次いで部屋を出ていき、室内は女子だけになった。

「ところで、ミーアさん……、ちょっといいかしら？」

そうして、おもむろにラフィーナが口を開いた。

第七十五話　ミーア姫、ＦＮＹる

「船遊びをするのであれば、もしかして、水着を仕立てる必要があるのではないかしら？」
男子たちが離れていったのを見て、ラフィーナがミーアに話しかけてきた。
「はて……？　水着、ですの？」
聞いたことのない単語に、ミーアは瞳をパチクリする。
「そう。泳ぐための服よ。さすがにドレスや普通の服で泳ぐのは難しいのではないかしら……」
ラフィーナは制服の裾をちらっと持ち上げながら言った。
「なるほど、確かに泳ぎづらかったおぼえがありますわ」
川に落ちたり、湖に落ちたり……。溺れそうになった時のことを思い出し、ミーアは深々と頷いた。
「となると、なるほど。新しく服を仕立てる必要がございますわね……。ふむ……」
ミーアは、腕組みして考え込む。
ティアムーンには、あまり水遊びの文化がない。従って、そのための服というのも、恐らくほとんどないように思われる。
「ちなみに、ラフィーナさまは、そのような仕立て屋に心当たりが？」
「そうね……。ノエリージュ湖で遊ぶために、私も仕立ててもらったことがあるわ。その職人さんだったら、ミーアさんに紹介できると思う」
それから、ラフィーナは眉をひそめながら言う。
「しっかりとしたお店で仕立ててもらわないとね、いかがわしいデザインの服もあるみたいですし」
「いっ、いかがわしい、ですの？」

ミーアはビックリして声を上げた。
「ええ、なんでも、こう……お腹のところが丸出しになっていたりとか……」
「まぁっ！　お腹がっ！？　なんていかがわしい！」
ミーアは無意識に、自らの腹部に手を当てた。
……心なしか、ふにょふにょしている気がする！
「実に、いかがわしいっ！　お腹が露出してるなんて由々しき問題、けしからんことですわっ！」
激しく同意するミーアに、ラフィーナは重々しく頷いた。
「泳ぐわけだから、多少は肌の露出はあると思うのだけど、過剰になれば貞節が損なわれるわ。慎重に仕立てなくては……」
「まったくですわ。お腹が出てるなんて、信じられませんわ！　そんな服、ありえませんわ！」
「そうよね。わかっていただけて嬉しいわ！　ミーアさん」
一見すると“わかりあった二人”に見えないこともないが……、致命的な部分でなにかがズレていることに、その場の誰も気づかなかった。
「だから、そうね……。もしよろしければ、今度、仕立て屋さんを呼びましょう。ちょうど私も新調しようと思っていたところだし……。あ、みなさんもよかったら……」
かくて、生徒会女子部のメンバーで水着を仕立てることになったのだが……。

ラフィーナ御用達の仕立て屋は、三日後にやってきた。
「本日は、よろしくお願いいたします」
キリっと鋭い顔をした女性の職人は、てきぱきと仕事を進めていく。
詳しい採寸をする前に、とりあえず、ということで、水着の試着をさせてもらうことになった。
「サイズの調整などは後でいたしますが、とりあえず、デザインな

どをご確認いただければ幸いです。ラフィーナさまのご指示で、露出を控えめにするとのことですので……」
いくつか水着を取り出して並べる。
それは、ミーアがダンスパーティーの時に身に着けていたドレスのスカートを短くしたようなデザインだった。さらに、そのスカートの下に太ももの半ばぐらいまでの長さの半ズボンをはくようになっている。
「そうですね……。ミーア姫殿下は、お体が小さいので、このぐらいで……」
などと職人がズボンを取り出す。「これを下に何も着ずに着ます」
「まぁ、下着のようですわね」
「そうお考えいただいてもよろしいかと。それとサイズですが、体にぴったりくっつく方が泳ぎやすいので、少しきつめになっております」
その言葉に頷きつつ、ミーアは渡された水着をはいてみた。
――ちょっと……というか、ものすごくキツイですわ、これ……。コルセットと同じぐらいキツイけれど、こういうものなのかしら……？
首を傾げつつ、ぐいぐい、水着を着ようとするミーア。不意に、その耳に、
「……あら？」
と、仕立て屋の意外そうな声が聞こえてきた！
「……どうかなさいまして？」
「ああ、いえいえ、なんでもありませんよ。そうですか、それでと、少しキツイかもしれませんね……えーっと……」
焦ったような声を出す仕立て屋。
ミーアはそれを見て、ふむ、とうなる。
――この方、デザインの方はラフィーナさまのお墨付きをいただいているようですけど、サイズの見立てはいまいちみたいですわね……。

などと、思っていると、
「ああ、他のみなさまはちょうどいいみたいですね。では、姫殿下のみ、もう少し大きめのサイズで……」
などという声が聞こえてきた！
ミーアは一瞬、はて？　と首を傾げる。けれど……、ふと顔を上げた先、アンヌが衝撃を受けたような顔で……、
「……そういえば、最近、少しキツくなったっていうドレスがあったような……。ううん、違う。ミーアさまは成長期なんだから、そういうことも……」
などと、ぶつぶつつぶやいているのが見えた。
ミーアは、すとん、っと表情の消えた顔で、自らのお腹をさすってみた。
心なしか……、ふにょふにょしてるような気がする！！！
「……アンヌ、忌憚なき意見を聞きたいのですけれど、わたくし……少し太りまして？」
「い、いえ、ミーアさま、決して、そのような……。そう、成長！　ミーアさまは成長期だから、体が大きくなられる時期なので……」
「なるほど、確かに少しずつ身長が伸びていることはわたくしも知っておりますわ。けれど、アンヌ、身長と比較して著しく横に膨らんでいったら、それは成長ではなく、膨張ですわ！」
ちょっぴり上手いことを言って、ミーアはアンヌの顔を上目遣いに見つめる。
「アンヌ、もう一度聞きますわ。あなたはわたくしに嘘は言いませんわね？　あなたは、わたくしの忠臣ですから。ねぇ、アンヌ、わたくし……ちょっとだけ、太りまして？」
そう聞かれたアンヌは、わずかばかり、視線を逸らして……、
「少しだけ……ですが。最近、ケーキやお菓子を含めて少し食べすぎのことが続いておられたのが、気にはなっていたんですけど……」
自らの一番の忠臣に認められてしまった瞬間、ミーアは、ひぃっ！　っと息を呑んだ。

頭をよぎるいくつかの光景。
そういえば、馬に乗った時、馬が一瞬固まったような……。
ベッドに寝転んだ時、ギシギシきしむ音が大きかったような……。
それから、それから……。
「ミーアさま、あの……、運動とかするとやせるって、本に書いてありました」
横からクロエが気づかわしげな声をかけてくる。
ちなみに、クロエは、仕立て屋が渡した水着を難なく着こなしている。
裏切り者に向けるような瞳を向けて、ミーアは言った。
「ああ……、そういえば、最近、あまり馬に乗ってませんでしたしね……。ダンスの鍛練も少しサボり気味でしたし……、ああ、そういうことですのね」
悲しげに、ずーんっと沈んだ顔をするミーアに、クロエは、あわわ、と慌てた声を出す。
「わかりましたわ……。もっと馬に乗って、ダンスも頑張るようにいたしますわ」
「ああ、それはとても良い心がけですね、姫殿下」
傍で聞いていた仕立て屋が偉そうに言った。
「水着とは関係ございませんが、二の腕などにも、少しお肉がついて来ています。今ならば、少し運動を増やすだけでもまだ間に合うでしょう。乗馬は足やお尻の引き締めにも効果があるかと思いますし……」
仕立て屋の説得力のある言葉に力を得て、ミーアはやる気を取り戻した。
「頑張りますわ。帝国に戻ってからも、毎日、馬に乗るようにいたしますわ。それにダンス……、頑張りますわよ！」
結局、ミーアはやせることを見越して、結構キツめのサイズで仕立ててもらうことにした。

これからの短い時間で、どれだけ痩せられるかが勝負である！

第七十六話　天秤王とミーアの忠臣

帝都の一角、主に貴族の子弟が乗馬練習をする練馬場「月馬庭（つきばてい）」にて。

ミーアは乗馬訓練に勤しんでいた。

「はいよー！　シルバームーン！」

ノリで、適当に馬の名前を呼び、手綱を操る。

走り出した馬の背に揺られつつ、ミーアは上機嫌に笑った。

「ああ、なんだか、わたくし、だんだんと馬に乗るのが上手くなってきたように思いますわ。どうかしら？」

馬に話しかけると、ぶふふん、っと馬が鼻を鳴らした。

『くだらないこと言う前に、もう少し軽くなれや』

と言われているように感じて、ミーアはムッとする。

……被害妄想もいいところである。

帝都ルナティアに帰還して以来、ミーアは毎日、乗馬練習を繰り返していた。

一日二時間みっちりと馬に乗り、さらにダンスの鍛練も欠かさない。

かつて、ミーアがこれほど勤勉であったことがあるだろうか……？　いや、ない！　などと思ってしまいそうなほどに、ミーアは運動の夏を満喫していた。

「ああ、やはり体を動かすのは気持ちいいですわね……あら？　あれは……」

ふと、練馬場の入口に目を向けたミーアは、小さく首を傾げた。

そこには、更衣室で待機しているはずのアンヌの姿があった。

「アンヌ、どうかしまして？」

「ミーアさま、サンクランド王国ならびにレムノ王国から使者の方がいらっしゃいました」

「ああ、例の……。やっぱりキースウッドさんでしたでしょう？」
馬から下りつつ、ミーアは言った。アンヌが差し出してきた、ふわふわのタオルで汗をぬぐいつつ、ふぅっとため息を吐く。
「それが……」
アンヌは、困ったような顔で、後ろを振り向いた。
そこにいたのは……旅用のフードを被った三人の者たちだった。
――ふむ……、思っていたよりは小柄ですわね。
ちょっぴり残念そうなミーアである。
ミーアは大男と相性がいいのだ。
――まぁ、キースウッドさんはさほど大柄な方ではないと思っておりましたけど……、他の方も同じぐらいですわね。レムノ王国からは金剛歩兵団の方ではありませんでしたわね。残念……。
などと、余裕を持っていられたのは、けれど最初だけだった。
「ご無沙汰しております。ミーア姫殿下」
先頭の一人がフードを取ると、そこから現れたのは予想の通りキースウッドの顔だった。
「キースウッドさん、ご機嫌よう。この度は感謝いたしますわ。よろしくお願いいたしますわね」
それから、後ろの二人に目をやった。
「そちらの方々は、はじめまして、かしら？」
完全無欠の愛想笑いを浮かべつつ目を向けるミーア。であったが……、
「ふふ、夏休み中も乗馬練習に励んでいるとは、やっぱり君は勤勉だね、ミーア」
聞き覚えのある声に、思わずギョッとする。
「え？　え？　ど、どういうこと、ですの？　これは？」
混乱の声を上げるミーア。その目の前で、フードをとったのは……、
「アベル？　それにシオンまで？　なぜこんなところに？」
驚くミーアを見て、二人の王子は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「実はボクがシオンに相談したんだ。ミーアが、少し心配だったから、なんとかしたいってね」
「え……？　えっと、それは、つまり……え？」
「つまり、ボクらも護衛としてミーアに同行させてもらおうと思ったんだ。いや、こんな風に国を抜け出す方法があるとは思ってもなかったよ」
「だけど……、大丈夫なんですの？　そんなことして……」
少しだけ心配そうな顔をするミーアであったが、そんな彼女に、シオンは小さく肩をすくめた。
「もちろんお忍びだが、まぁ、問題はないだろう。君やグリーンムーン公爵令嬢といっしょに、船遊びに行くだけだからな」
悪びれる様子もなく、そう言うシオンの後ろでキースウッドが遠い目をしていた。
「シオン殿下はいろいろやんちゃをやってますからね。お忍びで外国に来るぐらいならば、まぁ……よくあることと言いますか……」
まるで、自分に言い聞かせるように、ぶつぶつ言っている。
――ああ、この方もいろいろと苦労しておりますのね……。お可哀そうに……。まぁ、主（あるじ）がシオンじゃ仕方ありませんわね……。
かつての弁当作りのことなど完全に忘れて、ミーアはキースウッドに同情する。
ミーアは、他人のことはよく見えるのだ。
「失礼いたします。ミーアさま……、お話の最中に申し訳ありません」
その時だった。
ルードヴィッヒが急ぎ足でやってきた。
「ミーアさま、本日のご予定なのですが……」
「やあ、久しぶりだね、ルードヴィッヒ殿。レムノ王国で会って以来だ」
声をかけられたルードヴィッヒは一瞬虚を突かれたように瞳を瞬かせていたが……、

「なっ！　し、シオン殿下にアベル殿下……？　なぜ、我が帝国に？」
驚愕に固まるルードヴィッヒに、傍らに控えていたキースウッドが説明する。
「ああ、そうでしたか……。ミーアさまのために……」
「まぁ、今回は半ばは遊びのようなものだと思っているが、これからは、ともに戦うこともあるかもしれないから、改めてよろしくお願いする」
快活に言うシオンに、ルードヴィッヒは深々と頭を下げる。
「いえ、こちらこそ、よろしくお願いいたします。名高きお二方の王子殿下が味方にいるというのは、実に心強い」
そんなルードヴィッヒを見て、シオンは不思議そうに首を傾げた。
「ああ、なんだか……。ふふ、君にそう言われるのは、少しだけ感慨深いな。なぜだろうな。レムノ王国で少し顔を合わせただけだと思ったが……、君に認めてもらうのが、なんだか嬉しく感じる」
「それは私としても光栄なことです。どうかこれからもミーア姫殿下のこと、そしてこの帝国のことを、よろしくお願いいたします」
ルードヴィッヒは、シオンとアベルの目を見つめて、再び頭を下げるのだった。
ここに帝国の叡智の忠臣、ルードヴィッヒ・ヒューイットと後の天秤王シオン・ソール・サンクランドとの間に縁が結ばれることになるのだった。
前の時間軸において、ついには交わることのなかった二人が、今、帝国の叡智ミーアのもと、固く結び合わされたのだ！

……ちなみに、その、絆を結び合わせた張本人、ミーアはなにをしていたかというと……。
「あら……？　ですけど、護衛として同伴ということは、一緒に船遊びをするということですわね？　ということは、あの水着姿も……あら？」

ミーアは、無意識に自らのお腹に触ってみた……。
……心なしか……、ちょっとだけ！　ふにょふにょしてる気がする！
ミーアの乗馬練習とダンスレッスンに一層の熱が入ったことは、言うまでもないことであった。

第七十七話　ミーア姫、考察する

白月宮殿、白夜の食堂にて。
ミーアは少し遅めの昼食をとっていた。
ちなみに、シオンやアベルの姿は、そこにはない。
本来であれば他国の王族が自分を訪ねてきた以上、もてなすのが礼儀ではあるのだが、お忍びで来ている彼らを、あまり大っぴらにはできない。
「せっかくだから、帝都見学をさせてもらうよ」
そう言って去っていった三人が、実は新月地区に赴き、ミーアの建てた病院やら教会の様子を見学に行ったことなど、まったくもって知らないミーアであった。
さてそんなわけで、ミーアは優雅に昼食を楽しみつつ、ルードヴィッヒからの報告を受けていた。
それは、夏休みの旅程についてのことだった。
ティアムーン帝国は海に接してはいない。だから船遊びをする場合、近隣の友好国まで行かなければならない。
これから向かう先の国名を聞いた時、ミーアは小さく首を傾げた。
「はて、この国の名前、どこかで……」
グリーンムーン公爵家の保有する帆船「エメラルドスター号」が停泊しているのは、ガヌドス港湾国という小国だった。
ティアムーン帝国西部と国境線を接するこの小国は、古くから帝国に恭順を誓う友好国だった。国力、軍事力ともに帝国とは比べるべくもない弱小国、ガレリア海という内海に接している以外には、なんの特徴もない国。
門閥貴族の中には、帝国の庇護を受ける属国扱いする者も多かったが……、帝国の崩壊を目の当たりにしたミーアは知っている。
この国からの豊かな海産物が、ペルージャン農業国の収穫物とと

もに、帝国の食糧供給に大きな影響を及ぼすのだということを。
――ルードヴィッヒといっしょに頭を下げに行きましたわね……。
思い出されるのは苦い記憶。
きわめて重要で、けれど従順なはずだったこの国との交渉は頓挫（とんざ）することになるのだ。
「それもこれもグリーンムーン公爵家がとっとと逃げてしまったからですわ」
ミーアは恨めしげにうなった。
古くから、グリーンムーン公爵家は外国、海外に目を向けていた。そこから得られる富の巨大さに目を付けた公爵家は、海に接した外国と積極的に交流を図り、影響力を行使してきた。
そして、このガヌドス港湾国も、その一つなのであった。
――あの時の苦労をもう一度ということになるのは避けたいところですわね。革命が起こらなければ、グリーンムーン公爵家が国外に逃げることはないのでしょうけれど……。
万が一の可能性もある。
来年には、あの恐ろしい大飢饉が帝国に襲い来るのだ。
――グリーンムーン公爵家以外にも、顔つなぎをしておくのは必要なことですわね……。食糧が不足してからだと足元を見られるでしょうけど、今ならば皇女の名を使えばチョロイはず……。
安全策を幾重にも張り巡らせるのが小心者の真骨頂。
フォークロード商会から得られる穀物とペルージャンとの友好関係、新型小麦の開発と積極的な食糧備蓄。
それに加えて、ガレリア海の海産物の供給を確実なものにできるのであれば、まさに万全の態勢といえる。
加えて、自身が遊んでいる間にやっておいてもらえるのであれば、これほど素晴らしいことはない。
ミーアはルードヴィッヒの方に視線を向けた。
「ルードヴィッヒ、今度の船遊びですけれど、あなた、ガヌドスまで同行いたしなさい」

「はっ。かしこまりました。ガヌドスとの交渉の口を設けると、そういうことでしょうか？」
「ええ、その通りですわ」
パンに甘いジャムをたっぷりつけて、一口。
それから、ミーアはふと首を傾げる。
――それにしても、ガヌドスは帝国が持ち直した時にはどうするつもりだったのかしら……？
ティアムーンが革命によって滅びたからよかったものの、飢饉を乗り切り、国を立て直した場合……。食糧の輸入を渋ったガヌドスに制裁が科されないはずがないというのに。
――まさか、帝国に対する捨て身の攻撃だったということはないでしょうけれど……。少し気になりますわね。あるいは案外、グリーンムーン家が蛇の関係者という、みなさんの危惧が当たっている可能性もあるのかしら……？
エメラルダ自身は関係ないにしても、グリーンムーン家の者が関係していないとまでは言い切れないかもしれない。
――エメラルダさんもろともに海に沈められる……とはさすがに思いませんけれど……どれほど小さくても可能性の芽はつぶしておく必要がございますわね。
もぐもぐ……、甘くて柔らかいパンを飲み込んでから、ミーアは紅茶に口をつける。
その香りをゆっくり楽しんでから、改めてルードヴィッヒの方を見た。
「付け加えますわ。わたくしたちが船で遊びに出た後、ディオンさんも呼んで合流。ガヌドスでは行動をともにするようにしてくださいまし」
「ディオン殿ですか？　それほどの事態が起こると？」
「あくまでも念のため、ですわ。皇女専属近衛隊やバノスさんのことを信用しないわけではございませんけれど……、荒事になった時にディオンさんほど頼りになる方もなかなかいないでしょう？」

いっしょに船遊びなど、もっての外ではあるのだが……、何かあった時のためにはそばにいてもらったほうが良い。
ディオンのことが苦手ではあっても、信頼はしているミーアなのであった。
――帝国から船の上に呼び寄せるよりは、ガヌドスにいていただいた方がはるかに来やすいでしょうし……。
自らの身の安全には抜け目のないミーアである。
「あちらでの行動はあなたたちに一任いたしますわ」
最後にそう言って、ミーアは昼食を終えるのであった。

第七十八話　エメラルダの作戦

エメラルダ・エトワ・グリーンムーンは、ミーアたちに先駆けてガヌドス港湾国にやってきていた。

国の重鎮たちの挨拶を面倒くさげに聞き流しつつも、優雅な毎日を過ごしていた。

そもそもが国力でいえば帝国の足元にも及ばず、財力に至っては四大公爵家にも劣る弱小国である。それでも、唯一見るべき点があるとするならば、それは船舶建造の技術だった。

グリーンムーン家が保有する帆船、エメラルドスター号は、この国で建造された船だった。毎年、夏にエメラルダが使う以外、ずっと港に停泊したこの船は、極めて美しく、優美な姿を誇っていた。

鮮やかな緑に染め上げられた船体、二本の立派なマストと船首に取り付けられた芸術的な船首像（フィギュアヘッド）、その完成されたシルエットは、さすがのエメラルダといえども文句のつけようもないものだった。

そのエメラルドスター号の船長室で、エメラルダは上機嫌に鼻歌を歌っていた。

「ほほほ、まんまとはまってくださいましたわね、ミーアさま」

自身の企みが上手くはまったのが嬉しくてたまらないエメラルダである。

ゆらゆらと揺れる船体さえ、なんだか楽しくって、笑いが止まらない。

そんな彼女のもとに、一人の少女がやってきた。それは、幼き日より、ずっと身の回りの面倒を見てくれている、エメラルダより二歳年上の少女で……。

「失礼いたします。エメラルダさま」

「あら、何か御用かしら……。えーっと……」

「ニーナです。エメラルダさま」

表情を変えることなく、ニーナは自らの名前を告げる。
「ああ、そう。ごめんなさいね、いちいち使用人の名前は憶えないようにしておりますのよ」
それを当然のこととして、エメラルダは思っている。
あたかも、味さえ良ければ紅茶の産地など興味を持たぬかのように。
自分は選ばれた者で、最良のものを与えられるのも当然で……。
だから、それは使用人も同じこと……。身の回りの世話を完璧にするならば、誰であれ関係ない。
高貴な者はかくあるべしと、エメラルダは教え込まれているのだ。
「はい。存じ上げております。エメラルダさま」
「それで、何かあったの？」
「はい、ミーア姫殿下が港に到着されたのですが……」
ニーナは、困惑した様子で続ける。
「少し、気になることが……。姫殿下がお連れの護衛のことなのですが……」
「護衛……？」
「はい。皇女専属の近衛兵団を帯同されておられるのですが……」
「あら、それは当たり前のことではなくって？　皇女殿下なのですから、驚く必要はどこにもございませんでしょう。高貴な血筋なのですから、そのぐらいの意識でいてくださりませんと……」
なんでもない、といった様子で首を振るエメラルダ。だったが……、
「船遊びにも、五人ほど帯同されたいとのことですが……」
「あら、そんなに？」
これにはさすがに、眉をひそめる。
「一人、二人であればわかりますけれど、五人は少し多い気がいたしますわね。当家でもきちんと護衛の準備はしておりますのに」
そもそも、グリーンムーン公爵家は皇帝の臣下である。
敵対的な外国の船に乗るならばいざ知らず、乗組員全員が味方と

いってもよい状況のはずなのだが……。
「ははぁん、さては、海賊なり海の魔物なり、恐ろしいものが出てくると思っておりますのね。ほほほ、案外、ミーアさまもお気が小さい」
まさか、自分が疑われているなどとは、まったく思わないエメラルダである。
「まぁ、そのぐらいなんでもございませんけれど……。ああ、でも、ちょっぴり可哀そうかしら？　無様なところを自分の近しい護衛に見られるなんて……ほほほ」
エメラルダは、意地の悪い笑みを浮かべて言った。
「楽しみですわ。とっても……」
こうして、ミーアはエメラルダの恐るべき企みの中に足を踏み入れることになるのだった。
ちなみに、エメラルダの恐るべき企みは二段構えになっていた。
まず、泳げないミーアの姿を見て、笑ってやること！
別に溺れさせようなどと、危ないことは思っていない。多分、水に顔をつけることもできないんだろうなぁ、などと思い、その無様を笑ってやろうというのだ……。
そして、そんなミーアに、お姉さんぶって泳ぎのレッスンをしてあげるのが企みの第二段階である！
先日、してやられた復讐をしつつ、いっしょに楽しく遊べるという素晴らしい作戦だったのだ。
基本的にはミーアの親友のつもりであるエメラルダなのだった。
ちなみに、いかにミーアといえども水に顔をつけることぐらいはできる。そう、お風呂好きなミーアが、浴槽に頭から潜ってみるという誘惑に勝てるはずもないのだ！
まぁ、そんなことはどうでもよくって……。
「おほほ、楽しみ楽しみ。とっても楽しみですわ」
歌うように笑って、エメラルダは船長室を後にした。

……さらに、ちなみになのだが……、エメラルダは、きちんと抜かりなくミーアの分の水着もきちんと用意してあった。
専門の仕立屋に作らせた最新式のデザインのもので、なんとお腹が露出しているいかがわしいやつだ！
そして、エメラルダとお揃いでもある……。
……ミーアは、ものすごーく嫌がるだろうが別に嫌がらせではない。
あくまでも、親友としての好意なのであった。

第七十九話　雌雄の決する時！

「あれが、エメラルドスター号……ですのね」
港に停泊しているひときわ美しい帆船、エメラルドスター号。
様々な技術を駆使して洗練された造形、無数の島々が浮かぶガレリア海の特性を考慮した、小回りの利くコンパクトさを実現した素晴らしい船を見て……、ミーアは、
「なんだか予想していたよりもチャチですわね……」
小さく感想をこぼした。
ちなみに、ミーアが知る船というのはセントノエル学園が誇る巨大船……のみである。
ミーアにとって船とは馬車を何台も載せて移動する、恐ろしく巨大なものなのだ。
堂々としていて、息を呑むほどに大きくて立派なものだ。
それに比べれば、エメラルドスター号は、せいぜい馬車の二、三倍といった大きさである。
「エメラルダさんが自慢げに話しておられましたから、てっきり、ものすごーく大きいものだと思っておりましたのに拍子抜けですわ」
……ミーアは基本的に、なんでも大きいものが好きなのだ。
スケール感が大事なのだ。大きさこそ迫力、大きさこそ感動なのだ。
それからすると目の前の船は、なんだかオモチャみたいで、若干ガッカリ感があるのである。
用途的に言えば、エメラルドスター号は遊ぶための船である。
大量に荷を運ぶ商船ではないので、それほど大きくなくてもよいし、軍艦ではないので、大砲を積む必要もない。むしろ、必要な機能を維持した上で可能な限り小型化した、きわめて先鋭的な船なのだが……。

そんなこと、知ったこっちゃないミーアなのである。

腕組みして、偉そうに船を見上げるミーア。

その彼女を守るように護衛の兵団が立ち並び、ミーアの後ろには、すぐにでも前に出られるようにアベルが控えていた。

それを遠巻きに眺めながら、シオンはルードヴィッヒに声をかける。

「ところで、ルードヴィッヒ殿、ミーアは何を考えて今回の船遊びに来たのだろうか？」

「さて……、なにを考えて、とは？」

「いや、別にただ遊びに来たということなら、それでも構わないんだ。彼女とて人間だからな。ただ……」

シオンは、少しだけ瞳を細めて続ける。

「混沌の蛇という、正体不明の危険な組織が暗躍しているこの状況だ。はたしてそんな時に、彼女がただ遊ぶために出かけたりするだろうか？」

そんな問いかけを受けて、ルードヴィッヒは静かに頷く。

「さすがはシオン殿下。ご慧眼ですね……。実はミーアさまは、近いうちに大きな飢饉が大陸を襲うと、そのように予想しておられるのです」

「飢饉……？」

「はい。それも大陸全土を襲う、極めて深刻なものです」

それから、ルードヴィッヒは、そのための備えとして、ミーアがしてきたことを一つ一つ丁寧に説明した。

「それは、初耳だな……」

「話されなかったのは、恐らく、確実性のない話だからでしょう。私とて、そのことには半信半疑だったのです。未来を見通すようなことが人間にできようはずがない。だから、それは、帝国の食糧供給体制の不備を指摘するための比喩であると、そう思っていたのですが……」

そこで、ルードヴィッヒは言葉を切った。
「今年の夏は、とても涼しい。こういう年の収穫物は減る傾向にあります」
それから、ルードヴィッヒは、キラキラと日の光を反射する海に目をやる。
「それゆえに、このガヌドス港湾国からの海産物の輸入は、きわめて重要なものになる。けれど、この国との交渉を一手に握っているのは、グリーンムーン公爵家です。その状況を姫殿下は危険視されている、そういうことなのだと私は理解しています」
そんなルードヴィッヒの話を聞いたシオンは、思わず驚愕にうなった。
「俺は……、まだ彼女のことを見誤っていたようだ。そこまで民草のことを考えて動いていたとは……」
評価はしているつもりだった。けれど、それでも足りなかった。
「飢饉が起きた時の備蓄まではわかる。貧困地区への働きかけも見事としか言いようがなかった。が、クロエ嬢の実家を使った海外からの輸送網の確立、学園都市計画による啓蒙活動……。そこまでのことをしているとは思いもしなかった」
それからシオンは、ふと何か思いついたように瞳を瞬かせた。
「では、ルードヴィッヒ殿は、ミーアが海に出ている間に、この国の政府と交渉をされるつもりなのか？」
「できる限りのことはするつもりですが……。いずれにせよ、グリーンムーン公爵家の協力を取り付けないことには交渉は容易ではないでしょう。そして、それがわからない姫殿下ではない……。ゆえにこそ、ミーアさまは、エメラルダさまの誘いに乗ったのでしょう」
それから、ルードヴィッヒはミーアの背中に目を向けた。
「ミーア姫殿下が星持ち公爵令嬢エメラルダと雌雄を決されるのをお待ちしつつ、私は私にできることをするつもりです」
「ご機嫌よう、ミーアさま」

「ああ、エメラルダさん、ご機嫌よう」
船から降りてきたエメラルダに、ミーアはドレスの裾を持ち上げて、ニッコリと笑みを浮かべる。非の打ちどころのない、完璧な愛想笑いである。
「この度は楽しい旅行のお誘い、感謝いたしますわ」
「なにを言っておりますの、ミーアさま。私たち親友でしょう？」
対して、エメラルダは嬉しそうに、ニッコニコな笑みを浮かべる。ちなみに、こちらに裏表はない。割と本気で、ミーアと遊ぶ気満々なエメラルダなのであった。
「ところで、ミーアさまは護衛をたくさん連れていらしたとか……」
「ええ、そうですわ。五名の同行を許可いただきたいのですけれど……」
「うーん、許可したいのはやまやまですけれど、わたくしの船に乗る男性は、みな容姿端麗でなければなりませんのよ？」
そういってエメラルダは両腕を広げた。すると、その後ろにずらりと彼女の護衛たちが並んだ。みな見目麗しい青年たちである。
「いかがかしら？　私の船に相応しい華麗なる護衛たちの姿は……」
エメラルダは、それから、くすり、とミーアを小馬鹿にするような笑みを浮かべた。
「確かミーアさまの皇女専属近衛隊（プリンセスガード）は、荒くれものの方たちも多いとか？　近衛としての風格といいますか、そういうものをもっと気にされた方がよいのではないかしら？」
そんな彼女の態度に、近衛たちが一斉に剣呑な顔をした。背後から沸き立つ圧のような感覚に、ミーアは察した。
――ああ、これは……、戦わざるを得ない場面ですわね。
ここで黙っていては、近衛たちの士気に関わるだろう。
いったい誰が、自身の名誉を守ってもくれない主君のために命を張ろうとするだろうか？
ミーアにとって近衛兵は、前の時間軸以来の数少ない味方である。編入されたディオンの元部下たちも前の時間軸ではすでにいなかっ

たため、ミーア的に含むところはなく。むしろ無駄な戦いから、ミーアの手で救われた彼らの士気は、なかなかのものである。
それをわざわざ下げる必要もない。降りかかる火の粉は払わなければならない。
ミーアは毅然とした顔で、口を開いた。
「あら？　わたくし、別に彼らが近衛に相応しからぬ者だなどとは思っておりませんのよ？　わたくしの身を守る護衛は強者揃いですし、頼りになる方々ですわ」
まず、皇女専属近衛隊の面々に対するヨイショを見せる。その上で、
「それに、近衛隊から同行していただくのは二人だけですわ。あとは、わたくしの友人の方たちですの」
マウントを取りに行く！
「は？　友人？　それは……？　なっ！？」
きょとんと、目をまん丸くしたエメラルダだったが……、直後、ミーアの後ろに立つ三人の姿を見て、驚愕の悲鳴を上げる。
「この方たちならば、エメラルダさんのお眼鏡にもかなうのではなくって？」
「なっ、なっ、なぜ、シオン王子が？　それに、そちらにいるのは、レムノ王国の王子殿下ではございませんのっ！？」
ミーアが連れてきた二人のイケメン王子に、エメラルダが悲鳴を上げた。
ミーアが評したように、エメラルダはイケメン好きである。ゆえに、きちんとセントノエルの男子生徒の情報を仕入れている。
年下だけど、シオン殿下は、アリ……ですわね！　あの従者のキースウッドさんもなかなかですし、これは、ねらい目ではないかしら！？　などと思っていたのだ。
……ミーアと似た者同士なエメラルダなのである。
ともあれ、そんな彼女にとってシオンとアベル、さらにはキースウッドのそろい踏みは刺激が強すぎた。

ふらふらーっと、倒れそうになるエメラルダ。それを慌てた様子で支えるイケメン護衛たち。
それを見たミーアは、ちょっぴり優越感に浸っていた。
――ふふん、雌雄は決しましたわね！
ドヤァ！　っと調子に乗った笑みを浮かべつつ、ミーアは言った。
「実は、アベルとシオンは、わたくしのことを心配して護衛を買って出てくださいましたのよ。船遊びにご一緒することを許していただけるかしら？」

第八十話　ミーア姫、充実する（なにかのフラグ……）

ミーアたちを乗せたエメラルドスター号は出港した。

いっぱいに張った帆が、程よく吹いた風を掴まえて、船はどんどん加速していく。

天気は晴天。雲一つない青空からは、さんさんと日の光が降り注ぐ。

今年の夏は涼しい日が続いているが、そうは言っても日差しはそれなりには強い。

そんな強烈な日差しを受けて、ミーアの髪がキラキラ煌いていた。

甲板を吹き抜ける潮風、その少し強めの風に、白金色の髪を躍らせながら、ミーアは船首に立っていた。

両腕を大きく広げて、体いっぱいに風を受けて、朗らかにほほ笑んだ。

「うふふ、素晴らしいですわ。わたくし、まるで飛んでいるようですわ！」

乗る前まで感じていたエメラルドスター号への不満は、記憶の彼方に、ぽーんっ！　っと放り投げてしまっている。ミーアの記憶の彼方はとても近い位置にあるのだ。

そんなわけで、ミーアは実に上機嫌だった。

ここ最近、ずっと運動と痩せることに明け暮れていたミーアは、若干のストレスがたまっていたのだ。久しぶりの解放感に身をゆだねてしまうのは、仕方のない話だろう。

それでも、いささか調子に乗りすぎではあったが……。

ひときわ高い波が、船の横からたたきつけてきた。

ばっしゃん、としぶきが飛び散り、船が、まるで丘か何かに乗り上げたようにぽーんと上がったかと思うと、次の瞬間には、落ちた。

「……はぇ？」

当然、そんな急激な動きについていくことなどできるはずもなく、身を乗り出していたミーアの体は簡単に投げ出され……そうになったが！

「危ないっ！」

声とともに、ミーアを抱きとめる者がいた。

「あ、ああ、助かりましたわ。えーっと、うひゃあっ！」

振り返り、思わず悲鳴を上げるミーア。そう、背後から優しくミーアを抱きしめた人物、それはっ！

「あっ、あ、あ、アベル！？」

すぐそば、アベルの顔を見た瞬間っ！　ふんっ！　と気合を入れて、ミーアはお腹を引っ込めた！

ミーアの乙女心の塊が、素早い反射行動の姿をとったのだ。

それに気づいた様子もなく、アベルは、ほぅっと一息吐いて。

「ミーア、君は意外と子どもっぽいところがあるのだな……」

思わずといった様子でつぶやいた。

「なっ、あ、アベル、見ておりましたの？」

先ほどの自身の行動を思い出し……、ミーアは頬を赤く染める。

「も、もう、意地悪ですわ！　見ていたなら、声をかけてくださっても……」

「いや、見ていたというか。見とれていたというか……」

頬をかきつつ、アベルはそっと目をそらした。

「君がその、あまりに綺麗だったから……」

「――っ！？」

ミーアは、アベルの言葉を聞いて……照れた。体がカッと熱くなり、心臓の音が先ほどの高波以上の高まりを見せる。

――なっ、なな、なんてこと言いますの？　やっぱり、アベル、ちょっと天然ですわっ！　そんな恥ずかしいことを平然とっ！

大いに心の中で悶絶して後、自分を落ち着けるために、ほふぅっと小さく息を吐く。

それから、

――わたくしはお姉さん。アベルはすごく年下、年下、年下年下……。

などと心の中で唱えて後、

「あら？　レムノ王国の王子さまは、キザなことをおっしゃりますのね？」

大人のお姉さんの余裕たっぷりの口調で言った。

……普段通りの口調で返せず、ちょっぴりふざけた口調でしか返せなかったミーアを責めてはいけない。今の彼女は大人の余裕たっぷりなのではなく、そう装わなければ、まともにアベルに向き合えない精神状態なのだ！

そんなミーアに、アベルはおどけた口調で返した。

「おや、帝国の叡智たるお方がご存じないのかな？　ボクはこう見えても、結構キザな性格なんだ」

そう言って、アベルはミーアの腰に手をかけて、

「失礼。お嬢さん」

「はぇ？　ひゃあああああっ！」

ひょいっとミーアの体を持ち上げた。

先ほど立っていたところよりもさらに前、舳先の一段高くなったところに、ミーアを立たせる。

「なっ、なな、なに、なにをっ！？」

「ほら、ミーア、前を見てみたらどうだい？」

アベルに誘われるように視線を前に向けたミーアは小さく歓声を上げた。

「ふわぁ……先ほどより、さらに良い眺めですわ……」

青一色だった空には、もくもくと白い雲が浮かんでいた。真っ白な雲から零れ落ちる日差しが複雑な模様を作り出し、絵画のような、なんとも幻想的な光景を生み出していた。

先ほどよりも少しばかり高くなった波。白く弾ける飛沫（しぶき）が日の光を反射して、きらきら宝石のように輝いた。

「どうだい？　先ほどより、飛んでいる気分が味わえたかな？」

「ええ。堪能いたしましたわ」
ニコニコ笑みを浮かべるミーアであったが、不意に、何かに気づいたようにうつむいた。
「ん？　どうかしたかな？」
「あの、先ほどわたくしを持ち上げた時、その……重かったのではなくって？」
もじもじするミーアに、アベルは思わずといった様子で笑みを見せる。
「君が？　重い？　ははは、それはなにかの冗談かい？」
「え？　え？　でも……」
「ボクがこうして君を掴まえているのは、君が飛んで行ってしまわないようにだよ。君は、羽毛のように軽いから」
「まっ……まぁっ！」
その、あまりにも甘い言葉に、ミーアは頬を真っ赤に染めた。
「あ、アベル、そんな歯の浮くようなお世辞を……あなたやっぱりキザですわ……」
「ふふふ、それならば、君の叡智にしっかり刻み込んでおいてくれ」
そんなアベルとのやり取りを経て、ミーアは思った。
――わたくし今、すごく……充実しておりますわ！

いまだかつてないほど充実を見せる自らの人生に、ミーアは幸せをじんわり噛みしめる。
そんなミーアに応えるように、遠くの方……、白い雲が徐々に黒さを帯び始めていたのだが……。
ミーアが気づくことはなかった。

第八十一話　その高慢の流れ着く場所

船首にて、ものすごく楽しそうにキャッキャするミーアを見て、エメラルダは満足げな笑みを浮かべた。
「ふふふ、ミーアさま、お楽しみいただいているようでなによりですわ。高貴なる血を持つ者にとっては、生涯の伴侶探しは義務ですものね……。てっきり、シオン殿下の方が好みなのかと思っておりましたけど、レムノ王国の王子殿下……確かアベル王子でしたかしら？　あちらの方がお好みなんですのね。ふむ、どちらにしても面食いですわ。うふふ」
そんな風に満足げにつぶやいていた……のだが……。
「でも、私のことを放っておくのは、少しだけ気に入りませんわね。後でしっかりいじめて差し上げないと……。お顔に水をかけて差し上げますわ！」
気合いの入るエメラルダである。
と、その時だった。
「失礼いたします、エメラルダさま」
彼女のそばに、音もなくメイドのニーナがやってきた。
「あら、ニ……ではなく、メイド、なにか御用かしら？」
「はい、実は船長が、今日、明日中に嵐が来るので、島に停泊するのは控えるべきだ、と申しておりまして……」
「まぁ、嵐が？」
エメラルダは、怪訝そうな顔で空を見上げた。
「こんなに晴れているではございませんの。船長の気のせいではないのかしら？」
「ですが……」
「それに、この私が船遊びに来ておりますのに？　そのように良くないことがおこると、あなた本当に思っておりますの？」

チラリ、とニーナをにらむエメラルダ。それを受けて、ニーナはそっと頭を下げた。
「申し訳ございません。過ぎたことを申しましたことを、ご容赦ください」
「わかればいいのですわ。それでは、船長には予定通りにするようにと伝えてちょうだい」
そう指示を出すと、エメラルダは楽しげな歩調で、船首の方に向かっていった。
その背を見つめて、深々とため息を吐くニーナに気づくことなく。

「ミーアさま、楽しんでいただけておりますかしら？」
アベルとイチャイチャしていたミーアは、その声にハッとした。
いつの間に来たのか、エメラルダがそばに立ち、ニコニコ機嫌の良さそうな笑みを浮かべていたのだ。
アベルに支えてもらって、船首に立って大はしゃぎ！　などという……、後から思い出すと悶絶物の所業を行っていたミーアは、若干の気恥かしさをおぼえつつ、エメラルダに笑みを見せた。
「ええ、まぁまぁですわ。この船、少しチャチかなと思いましたけれど、こうして乗ってみるとなかなかに快適ですわ」
「おほほ、ミーアさまにそのように評していただけるなんて、光栄なことですわ。父にもそのようにお伝えしておきますわね……」
「ところで、エメラルダさん。船遊びというのは、こうして船に乗って移動するだけなんですの？」
ふと、なにかを思い出したような顔をして、ミーアが言った。
「ん？　どういうことですの？」
「いえ、てっきり泳いだりするものだと思っていたのですけど……」
というか……、泳ぎ方を教えてもらえなければ来たかいがないというものである！
――いえ、まぁ、それならそれで……、いろいろと堪能できそうですけれど……。

先ほど生まれたラブラブ空間を思い出し、ミーアは、ほうっと切なげなため息を吐く。
――あれはあれで良きものでしたわね。むしろ、泳ぎの練習とかなくっても問題ないかも……。
などと、なんともふぬけたことを考えるミーアに、エメラルダは、心得たとばかりに頷いて見せた。
「もちろん、泳ぐ時間もございますわ。今向かっているのは島なんですの。そこの浜辺で泳ぎますのよ」
「へぇ、島ですか。島というとセントノエル島ぐらいしか想像できませんけど、どのような場所なのですか？」
横で聞いていたアベルが口を開いた。
エメラルダは会話に入ってきたアベルを見て、頭のてっぺんからつま先までを視線でねめつけてから、大きく一度頷いた。
「あいにくとセントノエル島ほどの広さはございませんわ。アベル王子殿下。ただ、泳ぐにはちょうど良い入り江がございますの。白い砂浜、星の砂粒、青く澄み渡る海水、まさにパラダイスのような場所ですわよ」
ニコニコと笑顔で応対する。どうやらアベルの顔は、エメラルダ的に合格だったらしい。
「それにしましても、ミーアさまには、とっても良いお友達がいらっしゃりますのね。うらやましいですわ」
「ふふ、まぁ、そうですわね」
自慢のアベルのことを褒められて、ミーアはちょっぴりご満悦である。
「お話し中のところ失礼いたします、ミーアさま」
「ああ、アンヌ。どうしましたの？」
「はい。ラフィーナさまから、お預かりしている水着の準備を……」
「あら、ミーアさん、きちんとメイドの名前なんかおぼえてますのね？」
ちょっぴり小馬鹿にした様子で、エメラルダが笑った。

「ええ、彼女はただのメイドではなく、わたくしの大切な忠臣なので、当然おぼえておりますわ」
「み、ミーアさま……」
その言葉を受けて、一瞬、感動に声を震わせるアンヌだったが、すぐに、エメラルダの方に顔を向けた。
「ご挨拶が遅れてしまい申し訳ございません。私はミーアさまのお世話をさせていただいております、アンヌ・リトシュタインと申します」
「まぁ！　別に聞いてませんけど？　それにしても、ミーアさまからそのような分不相応な評価を受けている割に、なんか貴女、どんくさそうですわねぇ。おほほ」
エメラルダは冷たい声で言った。
「一応、言っておきますわね、ミーアさまのメイド。私は、いちいち下々の者の名前はおぼえないようにしておりますの。だから、あなたのことも名前で呼ぶことはないと思うけれど、悪く思わないでちょうだいね」
大貴族の令嬢に相応しい高慢な笑みを浮かべて、エメラルダは続ける。
「それにしてもミーアさまは、いちいちご自分の従者の名前までおぼえるなんて、変わってますわね。高貴な血筋はもっと堂々と、細かなことを気にしないようにしていないと、体がもちませんわよ。おほほ」
そんなエメラルダを、ミーアは複雑な表情で見守っていた。
ミーアはすでに知っている。
その高慢さがどこに繋がっているのかを……。
――忠告しても聞いていただけないでしょうね……。なにかあって気付いていただければいいのですけど……。
大貴族のやらかしは、皇帝一族の連帯責任にされる可能性が高いので、ミーア的にはできるだけエメラルダにはきちんとしてもらいたいところである。

それに、エメラルダが処刑でもされたら、それはそれで後味が悪そうだし……。

第八十一話　その高慢の流れ着く場所（後書き）

活動報告を更新いたしました。

第八十二話　転覆！～ミーア姫、魔性の妙技を披露する～

ミーアたち一行は順調に海を進んでいった。
エメラルドスター号は、とても足の速い船だった。
波を切り裂く刃のように尖った船首、海上を吹く風を極めて効率的に推進力へと変えるマスト。
しかも、船底に施されたいくつかの細工によって、揺れもかなり軽減されている。
結果、ミーアは極めて快適な船旅を満喫していた。
「あ、ほら、見えてきましたわよ。あれが私が毎年夏を過ごす無人島ですの！」
甲板に敷いた敷物の上で、ダラダラ昼寝をしていたミーアは、エメラルダの声で目を覚ました。
「……あら、着きましたのね……」
こしこしと目元をこすって起き上がる。と、ボヤけた視界の中に、その島が映り込んできた。
大きさは、セントノエル島よりも、だいぶ小さいだろうか。
それでも、住民がいても不思議ではない規模の島だった。山のように中央部がせり上がっていて、島全体を濃い緑が覆っている。
白い砂浜も見えはするが、その途中には、まるで船の侵入を拒むかのように、海面からそそり立つ岩がいくつも見えた。
そのだいぶ前で、エメラルドスター号は錨を下した。
島までの距離はおよそ三〇〇m（ムーンテール）といったところだろうか。
当然、泳いで行ける距離ではないので、小舟を出していくことになるのだが……。
「結構、離れておりますのね……」
ミーアは少し心配そうに、小舟に掴まる。
エメラルドスター号に搭載されている小舟は三艘あった。

最初のものにエメラルダとミーア、ニーナとアンヌ、さらに漕ぎ手とエメラルダの護衛が一名同乗する。
二艘目にシオンとアベル、キースウッド、さらにミーアの護衛と漕ぎ手が、三艘目は少し大きくて、そこには島で滞在中に使う荷物が載せられている。
こうして、島への上陸が開始されたわけだが……エメラルダはここで仕掛ける！
そう！　作戦の一つ目。泳げないミーアに無様な姿を晒させるために！
「ほら、ミーアさま、あれをご覧になって！」
ふいに、エメラルダが身を乗り出して島の方を指さす。
「はて？　なんですの？」
きょとーんと首を傾げ、エメラルダの方に身を寄せるミーア。
「ほらほら、あれですわ、あれ……」
近づいてきたミーアを見て、エメラルダは意地の悪い笑みを浮かべる。
――おほほ、小さい舟ってバランスをとるのが難しいんですのよね。だから……。
直後、ぐらりと舟がバランスを崩した。
「……はぇ？」
間の抜けた声を上げながら、ミーアはどっぼーんと海の中に投げ出された！
「ひっ、ひぃいいっ！　お、おぼれますわ。お、おぼれ……がぼぼっ……」
「ミーアさまっ！」
アンヌの悲痛な悲鳴が響く中、ばっちゃばっちゃ、と海面を叩き、パニックに陥っているミーア。それを見て、けれど、エメラルダは余裕を崩さない。
――島までは遠浅ですし……落ち着けば足もつきますわ。ですから、存分に慌てふためいた無様なお姿をさらすとよいですわ！

ここまでは、見事にエメラルダの作戦は当たっていた。
さすがに王子たちが同乗していれば、そんなことはできないが……、彼女たちの乗る舟には、エメラルダの手の者とミーアの従者であるアンヌしかいない。
従者のことなど完全に無視したエメラルダの、自ら海に落ちることも覚悟の捨て身の作戦に、ミーアは見事に陥り、無様な姿をさらして……。けれど……。
直後、エメラルダは目にすることになる。
かつてキースウッドが小悪魔と評したミーアの魔性の妙技を！
「だっ、誰か、たたた、助け、がぼぼ……」
「ミーア、今行く！」
「落ち着け。すぐに助ける！」
勇ましい声と同時に、小舟に乗っていた二人の王子が一斉に海に飛び込んだのだ。
どうやら王子たちはどちらも泳げるらしく、見る間にミーアへと近づいていく。
「ミーア、落ち着け。ボクの方を見るんだ！」
正面から近づくアベル。けれど、その直後、ミーアに抱き着かれてバランスを崩す。
溺れる人間に正面から近づいてはいけない。鉄則である。
一方のシオンは、ミーアの後ろから近づいて来て、ミーアを支えるように腕を伸ばした。
「ミーア、落ち着け。力を抜け。人間は浮くようにできてい……、ん？」
っと、ふいに何かに気付いたのか、シオンが動きを止めた。
それから、小さくため息を吐いて首を振る。
「おい、二人とも、本当に落ち着け。どうやら、足がつくようだぞ」
「……はぇ？」
その声に、ミーアが動きを止めた。それから体の力を抜く。と、その靴の先が海底について……。

「ま、まぁ、本当ですわね……。お、おほほ、いやですわ、わたくしったら……」
などと笑っていたが……、その顔を上げた時……、
「……っ！」
とてもとても真剣なアベルの顔が見えた。しかも、ものすごく近い！
それでようやく、ミーアは気づいた。
自分が、思いっきりアベルに抱き着いているということにっ！
しかも、後ろからはシオンが身を寄せている。つまり今のミーアは、水も滴るイケメン王子二人に抱かれて、海の中にたたずんでいるのだ！
かつて、これほどまでにミーアの人生が充実していたことはあっただろうか？　いや、ない！
そのあまりの豪華さに、一瞬、ミーアはクラっとして……。それを慌てて王子たちが支える。
シオンはアベルの方に目を向けて、
「これは、このまま俺たちがエスコートした方がよさそうだな。舟の他の者たちはキースウッドに任せて、俺たちはミーアを浜辺まで連れて行こう」
「ああ、そうだね。それがいいだろうな」
それから、アベルはミーアの方を見て言った。
「しかし、ミーア、あまり心配をかけないでくれたまえ」
「ええ、申し訳ありません。お二人とも……」
シュンとうつむくミーアであったが、その頬は未だに紅色に染まっていた。
――アベルもシオンも、なんだか、前よりさらにたくましくなってますわね……。
などと……、まったく反省していないミーアなのであった。
それを遠くで見ていたエメラルダは混乱の中にあった。

「どっ、どういうことですの？　ミーアさまは無様な姿を晒したはず……。それなのに、なぜ、あのようにいい雰囲気に……、ニー……じゃない、あなた、説明してくださらない？」
エメラルダはそばで眺めていたニーナに説明を求める。
っと、ニーナは生真面目な顔で言った。
「……僭越ながら、エメラルダさま。殿方というのは、女性のできない部分にもときめいてしまう生き物なのだと聞いております」
「それは、どういう意味ですの？」
「なるほど、エメラルダさまは泳げます。ですから、このように舟が転覆しても慌てずにいられますし、顔に水がかかっても動じずにいられます。ご立派なお姿です。が……」
ニーナはそこで言葉を切ってから、小さく首を振った。
「それならば、別に助ける必要がないではありませんか？」
「……あ」
意表を突かれたように、口をぽかんと開けるエメラルダ。そんな彼女に追い打ちをかけるように、ニーナは言う。
「適度に隙を見せることも大切なことなのです。ゆめゆめ、お忘れになりませぬように」
その助言は、なんちゃって恋愛軍師のアンヌとは違い、実に的を射たものだった。
エメラルダは考え込むようにうつむいてから、改めてミーアの方に目を向けた。
ちゃぽちゃぽと波を受けつつ、二人の王子に支えられるようにして進むミーア。
輝くような笑みを弾けさせるその姿に、エメラルダはすごみのようなものを感じてしまう。
「……なるほど、あれが、お二人の王子たちを誑（たら）し込んだ魔性の魅力……。くぅ、ミーアさま、やりますわね」
ミーアのすさまじさを改めて実感する（一人で勝手に……）エメラルダであった。

その後、海に投げ出された者たちは、キースウッドの指揮する二艘目の小舟に引き上げられて、救出されることになるのだった。

第八十三話　二人の小心者（チキン）

二人の王子に付き添われて、ミーアは無事に島に上陸を果たした。
サクサクと音を立てる白い砂浜に、ミーアは思わず歓声を上げた。
「まぁ、素晴らしい景色ですわ……」
サラサラ、キラキラ光る砂粒は、よく見ると星の形をしていて、実になんとも幻想的だ。
あまり人が立ち入った形跡のない、処女雪のような砂浜に、ミーアはちょこちょこ走り出した。
振り返れば、エメラルド色の海と、たなびく夏の雲が浮かぶ青い空。
ちゃぷん、ちゃぷんと音を立てる波は穏やかで、平和そのものだった。
「ここは、まさに楽園ですわね」
「ふふん、気に入っていただけたならば、なによりですわ」
いつの間に上陸したのだろうか。振り返れば、長い髪から水を滴らせたエメラルダが、浜辺に立っていた。腰に手を当てて、胸を張り、清々しいまでのドヤ顔を浮かべていた。
「私、毎年夏はここにきて、バカンスを楽しんでおりますのよ」
「ふむ……、ちなみに、エメラルダさん、夜はどうしておりますの？」
「少し離れたところに即席の幕屋を作らせますわ。虫の声を聴きつつ眠るというのも、なかなか風流なものですわよ？」
意外とアウトドアなエメラルダである。
普通の貴族のご令嬢は外で寝ることを嫌うが、大貴族の娘であるエメラルダは一周回って、自然を楽しむことを知っているのだ。
そして、その余裕は、ミーアも持ち合わせているものでもある。
――なるほど……、虫の声を聴きながら、星空を見上げながら、

あるいは焚火を囲んでアベル王子と愛を語らいあう……、悪くない趣向ですわ。とてもステキなシチュエーション……、ああ、でも、やっぱりまだ少し早いのではないかしら？

船に乗って以来、恋愛脳全開のミーアなのである。

もろもろの場面を妄想して、思わず頬を染めて悶絶してしまう……。ちょっと怖い。

「さ、とりあえず、幕屋ができたらそこで水着に着替えますわよ。ミーアさまの分も用意してきたんですのよ？」

「……ん？」

突如、耳に入ってきた不穏な言葉に、ミーアは一気に現実に引き戻される。

「エメラルダさんが用意した水着……ですの？」

嫌な予感をおぼえるミーアであった。

浜辺から少し離れた場所に急遽作られた即席の幕屋。

その中には、四人の少女たちの姿があった。

ミーアとエメラルダ、それに従者のアンヌとニーナである。

当初、エメラルダが用意したと聞いて嫌な予感をおぼえたミーアであったが、それでも、せっかくだから試着してみようかしら……、などと思い直して着替えてみた。

のだが……。

「まっ！　なんていかがわしい！」

ミーアは水着を身に着けた自らの姿を見て、悲鳴を上げた。

「この水着、お腹が出てますわ！」

そうなのだ。エメラルダが用意してきた水着は上下で水着が分かれたセパレートタイプのものだった。ミーアの白いお腹と小さなおへそが完全に露出している！

……ちなみに、心配されたミーアのお腹ＦＮＹ問題ではあるが、一応は、春先の頃の状態にまで持ち直していた。不断の努力が実を結んだのだ。流した汗（九割）と涙（一割）はミーアを裏切らなか

ったのだ！
それはさておき……、下の水着（ボトム）も問題だった。ラフィーナの紹介で作ったものより短いのだ！
ミーアが持参したものは膝のすぐ上までが覆われているが、エメラルダのは太ももの半ばまでが露出してしまう。大変なことである！
「こんな恥ずかしいものを着ろというんですの？　しかも、スカートがついてませんわ！」
そう、ミーア持参のものには腰の部分から短くも、ひらひらしたスカートがついているが、エメラルダのものは、ただの半ズボンのような形をしているのだ。
別に、それで露出が増えるわけでもなく……。ミーアが外で活動（アクティブ）的に行動する際に着るような、半ズボンと大差ないものではあるのだが……。
けれど、それは気分の問題なのである！　ミーアにとって水着とは、水に入るときに身に着ける下着なのである。スカートが着いていないなど、あり得ない！
「大変、いかがわしいですわ！　却下ですわ！」
そう断言するミーアに、エメラルダは、きょとんと首を傾げた。
「あら、ですけど、泳ぎづらいと思いますわよ？　そんなのがくっついてると」
当然、抵抗は少ない方がいい。
エメラルダが選んだ水着はデザインはもちろん、表面の素材に魚の皮の構造を応用した、水の抵抗を出来る限り少なくした、極めて機能的なものだった。
泳ぎ方を教えることについては、割と真面目にやるつもりのエメラルダである。
水着選びも、ガチなのだ。……まぁ、お揃いなのは趣味だけど。
「とっ、ともかく、お二人の王子がいらっしゃいますのに、あまりはしたない格好はできませんわ。今日のところは、わたくしは持参した水着を使いますわ！」

それを聞いたエメラルダは、ちょっぴり残念そうな顔をした。
「まぁ……、ミーアさまがそうおっしゃるなら、私も以前まで使っていたものにいたしますわ」
そう言って、エメラルダが身に着けた物は……、なんとお腹が出ていないおとなしい水着だった！　しかも、スカート状のヒラヒラもばっちりついている！
……自分一人では、攻めたデザインのものを着る勇気のないエメラルダなのであった。
ミーアに負けずに、小心者である。
「王子殿下がお二人もいらっしゃるなんて、聞いておりませんでしたし？　こういうのは、心の準備がございますしね。ねぇ、ニー……、あなた、そう思うでしょう？」
尋ねられたニーナは、一瞬エメラルダの姿を眺めて、しばし視線を宙にさ迷わせた後、
「あ、はい。ごもっともな判断かと……」
深々と頷くのだった。

第八十四話　忠臣たち、暗躍する

ガヌドス港湾国は、一つの首都といくつかの小さな漁村によってなる、ごくごく小さな国である。

一応の王家はあるものの、貴族はおらず。代わりに、いくつかの商工業組合（ギルド）の長による議会、元老院を設けている。

ギルドの中でも海運ギルドと船舶職人ギルドは規模が大きく、グリーンムーン公爵家との関係も深い。

ゆえに、ルードヴィッヒはその二つを避け、別の元老議員にコンタクトを取ろうとしたのだが……。

「困りますな。ルードヴィッヒ殿。そういうお話は、グリーンムーン公爵を通していただかなければ」

結果は散々なものだった。さすがに面会自体はかなうものの、反応はまるで芳しくない。

――いや、散々というよりは、これはむしろ……。

「どうでしたかい？　ルードヴィッヒの旦那」

館の主の部屋を出たルードヴィッヒにバノスが尋ねてくる。それに、ルードヴィッヒはただただ苦笑を浮かべて肩をすくめた。

「ダメだな。取りつく島もない」

グリーンムーン公爵家への配慮もあり、できるだけ彼らとの繋がりの薄そうな、味方に引き入れることができそうな者たちを選んだはずであったが。

それにも拘らず、まともに話ができた者はほとんどいなかった。

「そいつはまた……。よほど、グリーンムーン公爵の影響がデカいってことですかい」

そうつぶやいたバノスだったが、すぐに思案げな表情を浮かべた。

「……いや、しかし、そいつはちっと妙な話か」

「やはり、そう思うか？」

眼鏡の位置を直しつつ、ルードヴィッヒは、バノスの顔を眺めやる。
「そりゃあそうでしょう。なにせ、うちらは非公式にしろ皇女殿下の遣いだ。どこぞの弱小貴族ならばともかく、皇帝の一人娘の使者を軽く扱うのは、ちょいと引っかかりますな」
帝国四大公爵家の一角、グリーンムーン公爵家。
保有する財力も、武力も、小国にとっては敵に回したくない存在ではあるだろう。だがそれを言うならば、ミーアも同じことなのだ。
皇帝の娘たるミーアの影響力は計り知れない。ゆえに腹の中ではどうであれ、表面上は友好的な関係を築いておいた方がよいはずなのである。
にもかかわらず……、この扱いなのだ。
さすがに奇妙と言わざるを得ないところではあるのだが。
「……しかし、まぁ、絶対にありえないとも言えないんだ。それは」
「へぇ？　そうなんですかい？」
「保守的な政治家はいるわけだしね。今現在、利益を得ている者は現状を変えることを望まない。グリーンムーン公爵との関係で利益を受けている者は、当然、その状況を変化させたくはないはずだから、我々は歓迎されないだろう。下手をすると公爵の怒りを呼ぶ結果になるからね……。だが……」
「だが……？」
「それでも、ここまで強硬に拒絶されるのは、やはり不自然だ。帝国とのつながりをグリーンムーン家のみに絞ることの危険性に気づかぬ者ばかりではないだろう」
現在のガヌドス港湾国は、グリーンムーン家の気分次第で帝国との繋がりが絶たれるという、極めて不安定な状況にあるのである。
足元を見られて、不利な取引を持ち掛けられることだとて、きっとあったはずなのに。
「ガヌドス港湾国にとって、帝国はよい取引先のはずだ。にもかかわらず、この状況を放置していることは気になるな……」

ルードヴィッヒは、瞳を閉じて顎に手を添える。
「これは……、取引の維持、あるいはそこから得られる利益自体が目的ではない、ということか？　グリーンムーンのみに取引を集中させる、その意味は……」
ぶつぶつと、つぶやいていたルードヴィッヒだったが、やがて、小さく首を振った。
「ダメだな……。これは、なにかのパラダイムシフトが必要だ」
つぶやいて、ルードヴィッヒは歩き出した。
その後を追いながら、バノスが首を傾げる。
「それで、どうしますかい？　宿に戻って明日に備えますかい？」
「いや、このままでは明日も同じことだろう。だから、そうだな……。とりあえず、いろいろと調べてみるのがいいだろうか……。皇女専属近衛隊（プリンセスガード）の他の者たちは？」
ミーアに随伴して来た近衛の数はバノスを合わせて三十名。二人がミーアと共に船遊びに同行しているため、残りは二十八名だ。
「全員、宿で休ませてまさ。旦那の護衛は俺がしっかりやらせていただきますんで、ご安心を」
どんと胸を叩くバノスに、ルードヴィッヒは苦笑を浮かべた。
「そうか。付き合わせてすまない。本来ならば、バノス殿にも、休んでいてもらってもいいのだが。都でなにかあるとも思えないしね……」
「けど、ミーア姫殿下がディオンの旦那を呼べって言ったんでしょう？」
バノスは、ヒゲをじょりじょり撫でながら言った。
「そんじゃあ、警戒の必要はあるんじゃねぇですかい？　なんせ、ルードヴィッヒの旦那も、ミーア姫殿下にとっちゃ替えの利かないお人でしょう？」
「どうだろうな……。ミーア姫殿下にとっては、バノス殿もディオン殿も、近衛の一人ひとりも、すべてかけがえのない存在なのではないかな？」

そう言ってから、ルードヴィッヒは悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「そういうお方なんだよ。あの方は……」
「なるほど。確かに、そうでしたな。まったく仕えがいのあるお姫さまですな。はは」
バノスは豪快な笑い声を上げるのだった。

第八十五話　”下弦の海月”のミーア

着替えを終えたミーアは、もじもじしながら幕屋の外に出た。
そこには、すでに水着に着替え終えたアベルとシオンが待っていた。
下は膝丈の半ズボン、上半身は裸という格好でだ。
剣術の鍛練によって引き締まった少年の筋肉に、普段のミーアであれば舌なめずりをするところだったが……、今はそんな余裕はない。
もじもじ、もじもじと、わずかに体をよじりながら、うつむき加減でミーアは言った。
「どう……でしょう？　これ、似合っておりますかしら？」
ちらっと上目遣いに見つめつつ、そんなことを聞いてくるミーア。
そのミーアの格好は端的に言って、こう……もっさりしていた。
上下一体型の水着は、下は膝のすぐ上までが覆われているし、腰の周りには飾りなのか、スカートのような布が巻かれていて、少々野暮ったい印象が拭えない。
上半身を覆うのは、袖なしのシャツのような形状の水着だった。鎖骨やら肩やら、ちょっぴりフニッ！　とした二の腕やらは露出しているが……、ぶっちゃけそれがどうしたという話である。
そんなもの、以前、ダンスパーティーで着たドレスだって同じだったのだ。別に露出が増えるでもなし、見栄えがするわけでもなしなのである。
ということで、その水着、普通に考えれば地味なデザインの……はずだった。むしろ、恥ずかしげにモジモジすることがおこがましいというものである。おこがましいというものなのである！　まったくおこがましい話だ！
……そのはずなのだが！

「あ、ああ、うん。いいんじゃないかな？」
そう答えたアベルは頬を赤くしながら、チラっとミーアの方を見て、それからすぐに目をそらしてしまった。照れている！　とても照れている！　しかも……、
「と、とっても似合ってると思うよ……、君もそう思うだろう、シオン」
アベルに話を振られたシオンもまた、ほんのり頬を赤くしていた。それからアベルと同じように、ちら、ちらとミーアの方を見てから、
「あ、ああ、そうだな……。似合ってると思う」
わずかにかすれた声で言った。
そう、この二人の王子殿下は……剣の腕では大人の騎士にも引けを取らず、勇に優れたこの二人の若者は……、ミーアの水着姿に見とれてしまっていたのだ。
まさにそれは魅了の魔法にかかってしまったかのよう、あるいは、夏の砂浜マジックに騙されているようなものであった。
海辺で会う同級生の少女の普段は見せない姿に、二人の審美眼は大きく歪められてしまったのだ。
今の二人は、ミーアの背景に照り輝く後光が見えている……、ミーアの白い肌にキラキラと美しい輝きを見出してしまっているのだ。
そんな二人の反応を見たミーアは、
「まぁ！　ありがとうございます。お二人とも、ほめていただいて嬉しいですわ！」
そうして満面の笑みを浮かべた。
ミーアにしてはたいそう可愛らしい微笑み、無意識の追撃に二人の王子は、呆気なく胸を撃ち抜かれてしまうのであった。

それはさておき……、水着の披露が一通り終わったところで、ミーアは早速、エメラルダから泳ぎを習うことにした。
「ところで、ミーアさま、お顔を水につけるのはできまして？」
お腹の部分まで水に浸かるぐらいの深さまで海に入って、エメラ

ルダは言った。
「あら、そんなことできない方がおりますの？」
などとすまし顔で言いつつ、ミーアはエメラルダに借りた水中眼鏡を物珍しそうに眺めていた。
「では、それをつけて水に浮くところから始めてみましょうか。ミーアさま、こう、腕を思いっきり挙げて、頭の後ろにつけて」
エメラルダの指示通り、ミーアは腕をぐいいーっと持ち上げる。
「そうそう。で、そのまま、水の上に倒れる感じですわ」
そう言って、エメラルダは見本を見せるように、水の上に身を投げ出した。
すっと伸びた体、綺麗な蹴伸びの姿勢に、近くで見ていたニーナが拍手した。
「マーベラス！　さすがはエメラルダお嬢さま。まるで伝説の人魚姫のようです」
そばで見守っていたエメラルダの護衛たちも、それに続いて拍手を始める。
「マーベラス、マーベラス！　さすがはエメラルダお嬢さま！」
万雷の拍手の中、ぱっしゃっとキラキラ輝く水しぶきを上げて顔を上げたエメラルダは、長い髪をかき上げながらミーアの方に顔を向けた。
「こんな感じで、足もきちんと伸ばすんですのよ？　では、どうぞ」
「ふふん、こんなの簡単ですわ！」
意気揚々と、ミーアは海に身を投げ出した。
そうして公開されたミーアの初蹴伸び！　海面にぷかーっと浮いた、その姿は実にこう……残念なものだった。
一瞬、呆気にとられた顔をしたアンヌが、それでも懸命に拍手をし、それに次いでまばらな拍手の音が響く。
やがて、ぱっしゃっと水しぶきを上げつつ顔を上げたミーアは、キラキラ輝く笑みを浮かべて、周りにいた人々の顔をうかがう。
「どうでした？　わたくしも、人魚姫のようでしたかしら？」

そう問われた者たちは、一様に困った顔を見せる。
自然、ミーアの視線は二人の王子の方に向いた。
二人の王子たち……、ミーアの魅了の魔法にかけられて、審美眼を大きく歪められている、この二人の王子の目には、ミーアの姿は……たいそう素晴らしいものに映って……、
「う、うーん、そ、そうだな。えーっと……」
いなかった！
ミーアの問いかけに、王子たち二人は微妙に目をそらした。感想を言うのを一瞬だけ躊躇したのだ！
そう、この二人のピントをずらされた審美眼をもってしても、あるいは、二人にかけられたナニカの魔法ですらも、まるで修正が間に合わぬほど、ミーアの姿は残念さにあふれていたのだ。
ピンとまっすぐに伸びていなければならないはずの体は、けれど微妙なカーブを描いていた。
例えていうならば、それは弦を下にした弓のような形。お尻を突き出すような、なんとも残念な形だった。それが、さながら海月（くらげ）のように、ぷかぷかーっと、脱力して浮いているのだ。
ミーアに新たなる称号「下弦の海月のミーア」がつけられてしまうほどに、それは残念な姿だった。
しかも、潜るのが怖いから、足のほうが沈んでいるために……、さらに絶妙に残念な格好になってしまっていたのだ。
けれど、その残念さを指摘できる胆力は、残念ながら男子たちにはなかった。
剣の試合において、一歩たりとも引かない、王子二人は大いに狼狽えていた。
「う、うん、なかなかのものだった。そ、そうだね？　シオン？」
「あ、あ、ああ、うん、そう、だな……。人魚……のように、見えないこともなかったような気がするかな……？」
アベルから振られて、珍しく歯切れの悪いことを言ってから、シオンはキースウッドの方に目を向けた。

それを受けたキースウッドは爽やかな笑みを浮かべて、
「はい、あまりの美しさに、目がつぶれてしまうかと思いました。ミーア姫殿下」
シレっとお世辞を言った。それから、立ち尽くす二人の王子に耳打ちする。
「偽証は悪徳。されど、女性を喜ばすための嘘は許されるものですよ」
若い王子殿下より、圧倒的に経験豊富なキースウッドであった。
そんな中……、ただ一人、ミーアに否を叩きつける人物がいた。
「ミーアさま、そんなのでは、全然駄目ですわ」
他ならぬエメラルダである。
エメラルダは怒っていた。
自身がライバルと認める大切な妹分の姫君が晒した無様な姿に、下弦の海月のミーアに腹を立てていたのだ！
……そもそも、泳げないミーアに無様な姿を晒させようと考えていたのは、他ならぬエメラルダなのだが、そのようなことはとっくに、記憶の彼方に放り投げている。
エメラルダの記憶の彼方は比較的近くにあるのだ。
「ミーアさま、足を下にしてはかえって体は浮かぬもの。もっと思い切って頭を深くまで潜らせるべきですわ」
元よりエメラルダは、ミーアに泳ぎを教えることに関しては一切手を抜くつもりはない。
つまりは、ガチである。
そして……。
「まぁ！　では、なにができておりませんの？」
ミーアもまた、ガチだった。
その瞳には、真剣みを増した光が宿っていた。
なにしろ、ミーアはいつになるかはわからないが、海に落ちるであろうことが確定しているのだ。
小舟での出来事が、ミーアの危機感に火をつけていた。

我が身の安全のためであれば、全力を尽くすことに躊躇のないミーアである。

この日、エメラルダの熱血指導によって、ミーアは蹴伸びとバタ足、さらには背泳ぎのように、仰向けで水に浮かぶ術をマスターした。

「……あら？　仰向けに浮いていれば、息継ぎとかいう難しいのをマスターしなくっても息ができますし……、溺れることはないのではないかしら？」

……などと、しょーもない事実に気づいてしまったりもした海月のミーアなのであった……。

第八十五話　”下弦の海月”　のミーア（後書き）

下弦の月、弓の弦を下にした形の月ですね。理科の授業で習ったときは格好いい！　と思ったものです。

※下弦の月って半月のことなんじゃ……？　というご指摘を読者さまから受けまして一部修正しました。

下弦の月→下弦の海月に……。

より酷いことになってしまったような気がしないではないですが……。

第八十六話　ミーア姫、とっておきの怪談を披露する

パチパチと火の粉がはぜる音がする。
浜辺に作った巨大な焚火（キャンプファイヤー）は、ゆらゆら風に揺られながらも、辺りをぼんやり赤く照らしていた。
その炎を見ながら、砂浜に敷いた敷物の上に膝を抱えて座り……ミーアはぼんやりしていた。
昼間の水泳トレーニングによって体力を削られたミーアは、落ちてくるまぶたと懸命に戦っていた。
とはいえ、すでにやるべきことはすべて終えている。海水でベタつく体はすでに清めてあるし、さすがはグリーンムーン公爵家というディナーに舌鼓を打ったので、すでにミーアのお腹は充実していた。
あとは、浜辺から少し離れた場所にある幕屋に戻って寝るばかりではあるのだが……、この寝る前の微睡の時間、焚火の淡い明りに照らされて過ごすこのひと時が、幕屋に入って寝ようというミーアの気持ちを鈍らせるのであった。
――それでも……、そろそろ限界ですわ。戻って休もうかしら……。
などと、ミーアが立ち上がろうとした、まさにその時、
「では、そろそろ始めましょうか」
静寂を破って、エメラルダの少し低い声が響いた。
「始める？　はて……なんのことですの？」
きょとんと首を傾げるミーアに、エメラルダは意味深に頷いてから、意地の悪い笑みを浮かべる。
「もちろん、怪談噺（ばなし）、ですわ」
「……はぇ？」
「夏の夜、無人島にバカンス……、とくれば、当然やるべきイベン

トではありませんの？」
「まぁ！　そんな馬鹿なことをするつもりでしたの？」
エメラルダの予想外の返答に驚きの声を上げつつ、ミーアは暗い海を見て、次に、ざわざわ風に揺れる森の方を見た。
……どちらも、なにか得体のしれないバケモノが潜んでいそうな……なんとも不気味な雰囲気だった。
ミーアは、別に幽霊やらオバケやらを信じていない。だから、別に怖くなどない。
――むしろ、そう。怪談などバカバカしいですわ、そんなのが楽しいなんて、とんだお子さま！　別に聞いてるだけならどうということもございませんけど？　でも、一緒にされたくありませんし？
反対しておこうかしら？　少し強めに反対しておくのがよろしいのではないかしら？
ミーアは、かすかにひきつった顔で、懸命に笑顔を作り、
「そっ、そんなのが楽しいだなんてエメラルダさんは、とんだお子さま……」
「あら、ミーアさま、もしかして怖いんですの？」
「ここ、怖くなんかないですわ。そんなの、ぜんっぜん怖いなんて思わないですわ」
「では、問題ないですわよね？　どうぞ、子どもっぽいお話を聞いて、お笑いになってくださいまし」
「うぐ、ぐぬぬ……」
かるーく丸め込まれてしまうミーアである。
「では、早速ですが提案者である私から。とっておきの恐ろしいものを……」
「お待ちになって、エメラルダさん」
ミーアは慌てて口を挟んだ。
――こんなことを言い出したということは、エメラルダさん、相当、怖い話が好きなはず……。きっと学園の同期生からもとっておきの恐ろしい話を聞いているに違いありませんわ……。そんなもの

聞いたら……、眠れなくなってしまいますわ……、アンヌが！
エメラルダは、船の上でもアンヌに辛く当たっていた。きっとこのこわーい話で、アンヌを怖がらせていじめるに違いない。
ミーアは自らの大切な忠臣を守るべく、敢然と立ち上がる。
……決してミーアが怖いから、聞きたくないから……ではない。断じてないのである。
――かといって、他に話を振れそうな者は……。
ミーアはその場の皆の顔を見比べる。
――シオンは、なんでも卒なくこなしますから怪談だって上手いはず。キースウッドさんは……、ふむ、この人もモテそうな顔をしてますわね。女性にせがまれてこういった話をされる機会も多いかもしれませんわ。あとは、アベル……。アベルも、レムノ王国伝来の怪談を知っている可能性がございますわ。
怪談といっても、筋書きを知っているものであればそこまでは怖くない。けれど、未知の恐怖話など聞かされた日には、間違いなく眠れなくなってしまう。
――もちろん、アンヌが……ですけど。でも、アベルも船の上でのことを思い出すに、割と茶目っ気がございますし……。わたくしやエメラルダさんを怖がらせるために、張り切って、すごーく怖い話をするかもしれませんわ。油断できませんわ！
となると、ミーアができることは一つだけである。
「僭越ながら、わたくしがさせていただきますわ」
ミーアが立てた作戦は極めてシンプルだ。
自分の創作怪談を長くすることで、他の者が語る時間を削ること。
さすがに自分で作った話であれば、ミーア自身は怖くない。夜もたっぷり眠れることだろう……もちろん、アンヌが。
……最後の方は若干、論理が破綻しているように感じないではなかったミーアであるが、細かいことは気にしない。器の大きいミーアなのであった。
――でも、困りましたわ。わたくし、怪談なんかあまり聞きませ

んし……。もちろん、別に怖いわけではなく、あくまでも下らないお話が多いからですけれど……。
ふーむ、としばし悩んだ末、ミーアは静かに話し出した……。
自らの体験談を！
「これは、そう、ギロチンにかけられて殺されたお姫様のお話ですの」
若干の脚色を交えつつ、過去の自身の経験を語る。
長く語らなければならないため、懸命に思い出して、語る、語る。
お城に現れる首なし幽霊が語る物語。
その幽霊が残した血まみれの日記帳。
ギロチンにかけられるまでの恐怖と、ギロチンにかけられた瞬間の絶望感……。
時に哀しげに、時に恐ろしげに……。
語っている内にミーアは気づいた。
その場に集う一同の顔が、一様に恐怖にひきつっていることに。
――あら、わたくしの話を聞いて、みなさん怖がってるみたいですわね。うふふ……。
そうとわかってしまうと、ミーアは興が乗ってきた。なんというか、他の人を怖がらせることが、なんだかちょっぴり楽しくなってきてしまったのだ。
より一層、感情をこめに込めて、語る、語る。
やがて、話し終わった時、その場は静まり返っていた。
――ああ、わたくしのお話、よっぽど怖かったのですわね……。
などと、満足感に浸っているミーア。だったのだが、
「まるで、実際にギロチンにかけられたことがあるような話しぶりだな……」
シオンの指摘にハッとさせられる。
それから、改めてみなの顔を見て、ミーアは自身の勘違いに気づいた。
そう……彼らは恐怖していたのではない。引いていたのだ！

それも、どん引きである！
なにせ、ミーアの話したギロチン体験記はどこまでも真実なのである。
刃が落ちる瞬間の気持ち、その音や匂い、処刑場の空気感などなど。あまりにもリアル過ぎて、若干、えげつなくって、高貴なる者たちはいささか以上に引いていた。
「ま、まぁ、ミーアさまは物語がお好きということでしたし……。想像力が豊かなのですわね」
その場を取り繕うような、エメラルダの声が響いた。

――ああ、なるほど。ミーア姫殿下は、たとえ話をされているのか。
ミーアの語る怪談と呼べるか微妙な話。それを脇で聞いていたキースウッドは、最初、首を傾げていたのだが、何のことはない。ミーアはいつも通りのことをやっているだけだった。
――エメラルダさまの行動を諌（いさ）めるために、怪談の形でたとえ話を創って、語りかけているのか。
理解力のない相手に、難しい諭しを行う際、有効な手段の一つがたとえ話だ。
中央正教会の神父やラフィーナも、神の教えを説く際には、よくたとえを用いているが、ミーアもまた、エメラルダを諭すために、それを使ったのだ。
そもそも、すべての人間を見捨てず、その可能性を伸ばそうというのがミーアの本質である（とキースウッドは思っている）のだから、友人であるエメラルダの行動を見ていられなかったというのは、十分に理解できることだった。
――高慢なる姫君、あの話の愚かな姫のように民衆を顧みずにいると、いずれこうなると、そういうことが言いたいのか。ふふ、それにしても、ミーア姫殿下もなかなか辛らつだな。いくらエメラルダさまとはいっても、パンが手に入らないのにケーキをよこせ、な

んて言わないだろうに。一応、国が傾いた後は努力しているという部分で、善性をアピールしてバランスをとっているのだろうが……。
ミーアの話を興味深げに聞いていたキースウッドはエメラルダの方に目を向けた。
――問題は、この話をエメラルダさまが自分のこととして聞いてくれるかどうかだが。
彼が視線を向けた先、エメラルダは意気揚々と声を上げた。
「では、次は、不肖この私が。そうですわね、島にまつわるこわーいお話をいたしますわ」
胸に手を当ててエメラルダは、嬉しそうに話し出す。
……どうやら、ミーアの思惑は外れてしまったらしい……とキースウッドは苦笑して、肩をすくめるのだった。

一方、別の意味で思惑を外されてしまったミーアは、頭を抱えたくなるのを懸命に堪えていた。
時間配分を間違ってしまったために、エメラルダが怪談を話すことを阻止できなかったのだ。
――う、うう、痛恨の失敗ですわ。
などと思うものの、もうエメラルダを止めることはできなかった。
「題して……、さ迷い歩く邪教徒の幽霊……これは、ガヌドス港湾国に古くから伝わるお話なのですけれど……」
そうして、エメラルダは話し始めた。
「昔、それはもう、私たちの帝国ができるよりも前のお話。海の向こうのさる国を追われた邪教の徒がおりましたの。国を憎み、人々を憎みながら彼らは、今、私たちがいるような無人島に隠れ住みましたの。そうして、密かに、その島の地下に邪神の神殿を築きましたの。いつの日にか国に戻ることを、憎い者たちに復讐をすることを心に誓って、日々を過ごしておりましたの……。けれど」
ここで、エメラルダは言葉を切った。それから、全員の顔をじろおり、と見つめてから……。

「残念ながら、戻ることはできなかった。深い恨みを残して死に絶えた彼らは、未だに島をさ迷い歩いているんですの……。その島、もしかしたら、今、私たちのいるこの島かもしれませんわ」
瞬間、ひょおお、っと悲しげな悲鳴のような声が聞こえた。
煽られた焚火がぼおおっと勢いを強くし、それに驚いたミーアが、
「ひぃいっ！」
っと、小さく息を呑んだ。
それから、こっそりと、すぐ後ろに控えていたアンヌのスカートの裾をつかんだ。
アンヌが眠れなくならないように、配慮してのことだ。アンヌもミーアの行動に気づいたのか、そっとミーアの手に自らの手を添えた。
「どうやら、風がだいぶ強くなってきたようだね」
少しだけ心配そうなアベルの声。護衛の者たちも心なしか不安げな顔をして、あたりを見回していた。
「この分だと海の方も荒れるだろうが、君の船は大丈夫なのか？」
「御心配には及びませんわ、シオン王子。あの船は、ちょっとやそっとでは沈みませんし、船長も熟練の者を乗せておりますのよ」
そう言って胸を張るエメラルダだった。

第八十七話　エメラルダ、やらかす

その日、ミーアは眠れぬ夜を過ごすことになった。
即席の幕屋の中……、バタバタと布が煽られる音、ガサガサ、葉っぱがこすれる音。
その中にも、時折、ひょおおおおっと悲鳴のような音が鳴り響いて……。ついつい怖い想像が頭を駆け巡って、ミーアは寝袋に入ってから、なんと一時間近くも、ゴロゴロ寝返りを打っていたのだ。
ちなみに船旅の疲れもあるからということで、今日のミーアは普段より一時間以上早く寝袋に入っていたのだが。
……まぁ、それはさておき、眠れぬ一夜を過ごしたミーアは、翌日、激しい風音で目を覚ました。
バサバサと幕屋が軋む音に、ミーアは思わず飛び起きた。
「なっ、なんですの、これは……。いったいなにが！？」
辺りをキョロキョロ見回すと、すでにエメラルダとニーナの姿はなく、アンヌが一人、ミーアの目覚めを待っていた。
……ちなみに、ミーアが起きる割と前から風はものすごい音を立てていた。
ということで、ミーア以外のメンバーはみな目を覚ましていたのだが……、すさまじい風音の中でもスヤスヤ、気持ちよさそうに寝るミーアを起こさずにおいてくれたのだ。
ミーアの周りは優しい人で満ちていた。
「おはようございます。ミーアさま。早々に大変申し訳ないのですが、何事か異変が起きたようです。すぐにお着替えを済ませてしまいましょう」
「ええ、わかりましたわ。よろしくお願いしますわね」
ということで、アンヌに手伝ってもらい、素早く着替えを済ませたミーアは幕屋の外に出て……、瞬間、ぶわわっと風に煽られて、

危うくすっ転びそうになった。
寸でのところをアンヌに支えてもらい、なんとか体勢を立て直す。
「すごい風ですわね。これはいったい……？」
ミーアたちが一夜を過ごした幕屋は、浜辺から少し離れた高台に設置されていた。
近くには大きな木が何本も生えていて、そこに括り付けるような形で設置したのだが……。その、お城の柱にも使えそうな太い木が、ぎし、ぎしと軋んでいた。
空を見上げれば、灰色の雲がものすごいスピードで流されていく。
雨こそ降ってはいないものの、遠くの空は時折、白く瞬いていて……、なんとも不穏な雰囲気を醸し出していた。
「大変でございますわ！　ミーアさま！」
と、そこに血相を変えたエメラルダが飛んできた。
「まぁ、どうしましたの？　そんなに慌てて……」
余裕をもってエメラルダを迎えたミーアだったが、彼女の答えに、一瞬、呆然としてしまう。
「ありませんの……。エメラルドスター号が」
「……はぇ？」

エメラルダの後について、浜辺へと向かったミーアは、あんぐりと口を開けた。
浜辺の様子は、昨日とは一変していた。荒々しく波が打ち付ける砂浜、その面積は昨日の三分の一もない。
そして、問題のエメラルドスター号がいるはずの沖合からは、その姿は忽然と消えていた。
「もしや、海賊にでも襲われたんじゃ……」
エメラルダは蒼白な顔でつぶやく。けれど、
「いや、恐らくは、この風を避けるためにどこかの島陰に避難したと考えるべきでしょう」
キースウッドの冷静な声が、エメラルダの危惧を否定する。

それから、キースウッドは空を見上げた。その視線の先には、黒い雲が渦巻いている。
「昨日から、少し心配していたのですが……嵐が来るようですね」
「ともかく、ここにいるのは少し危険だな。どこかに雨風を防げる場所を探してみよう」
シオンの言葉に、キースウッドとアベルが頷く。
「エメラルダ嬢、どこか、この島で安全な場所はあるか？　洞窟でもあればいいのだが……」
「え、あ、いえ、その……、私もこの浜辺しか知りませんので」
「なるほど。つまり、島の奥に何があるのかは、わからないか」
「シオン殿下、ミーア姫殿下かエメラルダさまの護衛をお借りして、斥候に出てもらうのはいかがでしょうか？　あるいは、私がそれをしてもかまいませんが」
「いや、今はバラバラになるのは危険だろう。動くならばみなで一斉に、だ」
ふと、そこで、シオンが辺りを見回した。
「というか、それ以前に護衛の者の姿が見当たらないが……、ミーア、君の専属近衛隊の者はどこに行かせているんだ？」
それで、ミーアもようやく気付く。
いつもそばに侍り、ミーアを守るべき、皇女専属近衛隊の随行員二人の姿が、どこにも見当たらなかった。さらに言えば、エメラルダの護衛の姿も見当たらない。
すなわち、今この場には、二人の王子とキースウッド、ミーアとエメラルダ、それにアンヌとニーナという、七人しかいないのだ。
護衛たちの姿が……、忽然と消えていた！
――これは、どういうことですの……？
ミーアの脳裏に、昨日、エメラルダが披露した怪談が甦ってくる。例の、島をさ迷い歩く幽霊の後に、嬉々として語られたものだ。
確か船の上から忽然と人がいなくなり、幽霊船が生まれる話……みたいな話だったような……。

ぶるる、っと思わず背筋を震わせたミーアだったが、直後、微妙に気まずそうな顔をしているエメラルダを見てピンときた！
「……エメラルダさん、あなた……やりましたわね？」
ミーアはジトッとした瞳で、エメラルダを見つめた。
「や、やった？　はて、なんのことですの？　なんのことだか、わかりかねますわね」
思い当たることはありませーん！　という顔をするエメラルダに、ミーアはずずいっと詰め寄る。
「とぼけるものではございませんわ。エメラルダさん、あなた、護衛を夜のうちに船に帰しましたわね？　しかも、わたくしの護衛も上手く言いくるめて……」
「そそそ、そんなことするはずがないではありませんの？　この私が、そのような……」
ミーアは無言でじぃいっとエメラルダを見つめる。見つめる、見つめ続ける……。
「う、うう、だ、だって、ミーアさま、もしかしたら、護衛には聞かせられないような睦言とか、交わされるかもしれませんでしょう？　他の者がいたら聞かせられないような話を、王子殿下たちがされるかもしれないじゃないですの？　私の気遣いは常識的ですわ」
つまり、着替えや身の回りの世話をさせるためにニーナとアンヌは残らせたが、護衛連中は邪魔っぽいから帰らせたということだ。
アベルがミーアに何らかのアプローチをかけて、こう……いろいろあるかもしれないし！　などとエメラルダが余計な気を利かせたのだ。
否……、それだけではあるまい、と、ミーアはエメラルダを見つめる。
――たぶん「私にもシオン王子が話しかけてこないかしら？」なんて、思ってるに違いありませんわ。まったく、エメラルダさんは……。
呆れ気味に首を振るミーア。

――そんな都合がいいことが起きるはずがありませんのに。呆れたものですわ。
前時間軸の自らの行いなど、完全に記憶の彼方に放り投げているミーアなのであった。
ミーアの記憶の彼方は……以下略。
「話は後だ。ともかく避難しよう。キースウッド、先導を頼む」
シオンの指示のもと、一行は動き出した。

第八十八話　最弱・最古の最後の公爵

日暮れまでの間、ルードヴィッヒはガヌドスの王都を練り歩いた。市場や町の商店などで、様々な噂話を聞いて回った後に、宿に戻り、付設された酒場で遅い夕食をとることにした。

席について早々に、バノスはおもむろに手を挙げて二人分の酒を頼んだ。

それから、ふと何事か思い出したように、

「……そういや、姫さんたちは、楽しくやってますかね」

「ん？　なにか心配事でもあるのか？」

「いやね、同行した部下が少し……。ああ、誤解しないでくださいよ？　腕っぷしに関しちゃ一級品でさ。ディオン隊長に鍛えられましたからね。戦働きに関しちゃ疑いようがない。あのグリーンムーン公爵のところの護衛なんざ、二人で十分にさばけるぐらいの腕前ですから、賊が現れても問題なく、姫さんを守りおおせますぜ」

ルードヴィッヒは、増強された皇女専属近衛隊の者たちを思い出した。

荒くれ者揃いではあるが、確かに、戦場では頼りになりそうな者たちだった。

「帝国への忠誠に関しちゃちょっと怪しいもんですが、姫殿下には恩義がありますからね。戦いになったら命を張るってことには疑いはないんだが……」

バノスは苦笑いを浮かべた。

「いかんせん、ガラがよろしくないもんでね。姫殿下への忠誠と酒とを比べっちまうと、ちょっと怪しいところがありやしてね」

……お察しである。

「まぁ、それをここで心配しても詮無き事だろうな。ミーアさまのご学友の王子殿下お二人は腕が立つということだし、従者のキース

ウッド殿もいるのだ。今は我々にできることをしよう」
　ルードヴィッヒは小さく肩をすくめてから、少しだけ表情を引き締めた。
「情報を整理しておこう。あくまでも短時間、話を聞いて回っただけの印象だが……グリーンムーン公爵家の評判はあまりよくないようだ」
「ですなぁ。必死でかばわれるようなこともしてねぇみたいだし、これなら、うちの姫殿下の方が人徳があろうってもんです」
　腕組みし、うんうん、と頷くバノス。
「にもかかわらず、交渉はすべてグリーンムーン家を通すように、だ。国の上の方はなんらかの利益供与を受けている可能性はあるが、それにしても不自然だ……」
　上層部すべてを買収できるほど、グリーンムーン公爵家が太っ腹だとも思いにくい。にもかかわらずのこの状況。これはいったい、どういうことか……。
「おたくさん方、ガレリア海の向こうの国から来なさったんで？」
　っと、店の主人が声をかけてきた。わずかに腰の曲がった老人だったが、料理を作る腕前は遠目に見ただけでも熟練のものとわかるほど見事なものだった。
「いや、我々は大陸の……、帝国から来たんだ」
「ああ、帝国の……。したら、今、イエロームーン公爵さまのお家は、どうされておるんかいね？」
　老人の問いかけに、ルードヴィッヒは小さく首を傾げた。
「ん？　ああ、グリーンムーン公爵家のことでしょうか？　それでしたら……」
「違う違う。じゃなくって、イエロームーン公爵さまよ。おいらの婆さまに、大昔に聞いたところじゃ、港湾国は、その昔はお世話になりっぱなしだったんだって話だよ？　それがある時期からパッタリ聞かなくなったから、ずーっと心配してたんだ」
「イエロームーン公爵家、ですか……ええ、公爵さまはご壮健です

よ。ご令嬢はセントノエル学園に通っていて……」
などと話しつつも、ルードヴィッヒは戸惑う様子を見せていた。
イエロームーン公爵家とガヌドス港湾国の繋がりなど、今の今まで聞いたことすらなかったからだ。
老人との話を終えた後、考え込んでしまうルードヴィッヒに、バノスは肩をすくめて見せた。
「……妙な話になってきましたな。最古にして最弱の星持ち公爵、イエロームーンの名をここで聞くことになるとはねぇ」
などと言いつつ、バノスはやってきた酒に口をつけた。強い酒精にくぅうっと旨そうな声を上げ、それから、つまみの肴に手を伸ばす。
ガヌドス名物の新鮮な生魚は、近隣に名を轟かすほどに有名なものだった。
舌の上に乗せた瞬間にとろける甘い脂に、バノスは思わず頬をほころばせた。
「旨い……へへ、こいつは役得ですな」
と、そこでバノスは手を止めた。ルードヴィッヒが深い思考に沈み込み、一向に食事に手を付けようとしないからだ。
「なにか、気になることでもありましたかい？」
「気になること、か。そうだな……バノス殿は我らの帝国のルーツについて聞いたことがあるか？」
「いやぁ、あいにくと歴史には詳しくねぇもんで」
「肥沃なる三日月地帯、そこで作物を育てていた農耕民族に、精強な狩猟民族が攻め込んだ。そうして、多くの農奴と領地を確保した。それが帝国の興りだと言われている」
広く世に知られた常識、帝国の始まりを諳（そら）んじてから、ルードヴィッヒはわずかにうつむく。
「だが……、実は我々の先祖は海を渡って来たとする説がある。一定の信ぴょう性もあって、すべてではないにしろ、少なくとも民の一部は海の向こう、すなわちガレリア海の向こう側から渡ってきた

者たちだというのが有力な説として提唱されているんだ」
「はぁ、まぁ、そいつはわかりましたがね。それが一体なんだっていうんです？　今、関係ないんじゃ？」
疑問の表情を浮かべるバノスにルードヴィッヒは首を振った。
「海を渡ってきたとして……その者たちはどこを通るだろう？　ガレリア海から肥沃なる三日月地帯、今の帝都がある場所まで行くのに、どのような進行ルートを通る？」
「ああ、なるほど。つまり、帝国のご先祖さまたちは、このガヌドス港湾国を通ったはずだと、ルードヴィッヒの旦那は、そう言いたいので？」
「ああ。もちろんその頃には、まだ国としての形をとってはいなかっただろう。帝国と港湾国の建国時期は、ほぼ同じころだと言われているからな……。けれど……、帝国とガヌドス港湾国とは建国時から付き合いがあったと考えるべきなのかもしれない。そして、その交渉役を任されていたのは、四大公爵家最古にして最弱と言われている……、イエロームーン公爵家だったとしたら……」
「それがいつの間にかグリーンムーン公爵家が交渉を一手に担うようになっていて、その内に、それが当たり前のことになっている、ねぇ。なるほど、なんだかきな臭いことになってきましたな、ルードヴィッヒの旦那」
「情報が必要だろう。すまないがバノス殿、明日も元老議員との面会の後、少し付き合ってもらうことになりそうだ」
「なにか思いついたので？」
「まだ、何とも言えないんだが……」
腕組みをし、思案顔でルードヴィッヒは続ける。
「俺の知る限り、良からぬことを考えるのは表立って名前の出ている方ではなく、裏で隠れている方だ」
「奇遇ですな。俺の知ってる常識でも、そういうことになってますぜ」
ニヤリ、と笑うバノスにルードヴィッヒは肩をすくめた。

「なんとなくイエロームーン公爵家のことは、この国の中では秘匿されているような感じがするな。だから、それを中心に調べたいんだが……」
「話を聞きに行って、はいそうですか、と教えてはくれなさそうですけど、どうしやすかい？」
「この手の記録をとっている場所というのは通常は二つ。国と教会だ。国の方が信用ならないのだとするなら、別の方を当たってみるまでのことだ」
かくて、翌日、二人は中央正教会の教会堂へと向かうことになった……。

第八十九話　暴風雨……

ボタリ……ポタリ！
頭に小石が降ってくるかのような感覚。反射的に顔を上げたミーアに大粒の雨が叩きつけてきた。
「ああ、降ってきましたわね……」
ミーアの声に意地悪なナニモノかが応えるようにして、見る間に雨の量が増えていく。
豪雨は吹き荒れる暴風にあおられて、さながら、たなびくカーテンのように視界を遮った。
「す、すごい雨ですわね……」
両手で顔にかかる水をぬぐいながら、ミーアがつぶやく。それから小さく笑みを浮かべた。
――ふふ、まぁ、泳ぐ練習に来たんですから濡れるのは覚悟しましたけど、こんな風に島の上でも濡れるとは思っておりませんでしたわ。
身に着けた服は水を吸い、肌にまとわりついてきて、微妙に重くなった。
けれど、それが服を着たままで水浴びをしているような、なんだかヘンテコなことをやっているような感じがして、ちょっぴり楽しくなってきてしまうミーアである。
「みんな、絶対に離れるなよ。アベル、後ろを頼めるか？」
「心得た。殿（しんがり）はボクに任せたまえ」
そのやり取りだけで、役割分担を済ませる二人の王子。
キースウッドに先行させ、先頭にシオンが、そこから、ミーア、アンヌ、エメラルダ、ニーナが続き、最後にアベルが殿を守って、一行は慎重に幕屋（テント）への道を急いだ。
ぬかるむ地面に足を取られないよう、ミーアは懸命に足を動かす。

ぐしゅぐしゅと、水を吸った靴が音を立てて、なんとも歩きにくかった。
何度も転びそうになりつつも、なんとか幕屋へと辿り着いた。
見えてきた幕屋の布は、強風にバタバタと音を立てていた。今にも風に吹き飛ばされそうだ。
「たっ、大変ですわ！　幕屋が飛ばされますわ！　早く荷物を運び出さないと！」
慌てて、中の物を持ち出すようにニーナに指示しようとするエメラルダだったが、
「それはやめておいたほうがいい。危険だ」
横からシオンが制止する。
「そうだね。この風の中、荷物を運ぶのは現実的じゃないな。避難を優先しよう」
アベルが同意し、シオンに頷いて見せた。
「どこか、風を避けられる場所を探そう。キースウッド、頼む」
「ですね。島の中央に向かいましょう。お姫さま方もしっかりついてきてくださいよ」
キースウッドを先頭に、一行は島の奥へと足を踏み入れた。
しばらくすると、背の高い木々が繁茂する、深い森が現れた。
そのまま、森の中に足を踏み入れる。わずかながら風は収まったものの、木々の葉を叩く雨音は、かえって強まったように感じた。
バタバタ、ボタボタ……。葉が揺れ、こすれ、叩き合わされる音。
その音に、一瞬、仲間たちの声がかき消された。
激しい雨音の中で生まれた刹那の孤独、ふと、頭上に目をやったミーアは黒々とした木々の葉に、思わず記憶を刺激された。
――ああ、未だに森に入ると、あの時のことを思い出してしまいますのね……。
革命軍に追い回されていた時のこと……。
メイドに見捨てられたミーアは、一人で森の中をさ迷い歩いたのだ。

――早々に転んでしまって、足を怪我してしまったんでしたわね。それで、別れ際には足手まといだなんだと言われたんでしたわ……。
足を伝い落ちる雨粒の感触で、あの日、擦りむいた膝から流れ落ちた血の感触を思い出してしまう。
擦り傷がひりひり傷んで、流れ出た血がぬるぬるして、気持ち悪かったなぁ……なんてことをぼんやり思い出して、油断していたからだろうか。
「あっ……」
ずるっと、足元が滑った。
前のめりに倒れつつ、ミーアは我が身の迂闊を呪う。
――ああ、あの時と同じように……ここでケガをしたら足手まといに……。
「危ないっ！」
直後、声が響き、体が後ろから抱き留められるのを感じる。
「み、ミーアさま、大丈夫ですか？」
ふんわりと柔らかな感触に振り返れば、心配そうな顔をしたアンヌが、ミーアの体を抱きしめていた。
「あ……え、ええ、問題ございませんわ」
あの時になかったもの……今の自分が持っているものを思い、ミーアは少しだけ微笑んだ。
本当なら、不安に震えなければならないようなこの状況でも、何とかなると思えてしまうのが、少しだけ不思議だった。
「気を付けていかなければなりませんわね。アンヌも、足元には十分に注意するんですのよ」
そう言って、改めて歩き出そうとした、まさにその時、
「この先に洞窟があります。しばし、そこで雨風をしのぐのはどうでしょうか」
雨に煙る前方より、キースウッドの声が聞こえた。再び、先行し、周辺を探っていたようだ。
「でかした、キースウッド。みんな、キースウッドの後についてい

くんだ。絶対はぐれるなよ」
シオンの叱咤激励を聞きながら、ミーアたちはさらに、森の奥へと向かった。
木々をかき分け、茂みをくぐったその先に、それは静かにたたずんでいた。
コケの繁茂した岩肌に、唐突にぽっかりと口を開けた洞窟。屈まなければ入れないような小さな穴に見えるが……。
「中は広くなっております。どうぞ、お早く」
そうして、キースウッドの後を追い、ミーアは洞窟に足を踏み入れた。
――なんだか、バケモノのお腹の中に入っていくみたいですわね……。不吉な場所って感じがしますわ。

ミーアの時々当たる勘が、この時、見事に的中していた。
彼らが踏み入った場所、歴史の流れに忘れ去られたその場所は……。

第九十話　形勢逆転！　アベル、後の先をとる

キースウッドの言葉通り、洞窟は思ったより広く深かった。
入口がすぼまったように小さくなっているし、わずかに曲がっているから風も入ってこない。少し奥まで行くと快適だった。
それは良いのだが……。
洞窟の途中で、キースウッドはシオンに耳打ちした。
「シオン殿下、この洞窟……少し妙な感じがしますね」
「ん？　どういう意味だ？」
「確実なことは言えませんけど、人の手が入っているんじゃないかな、と」
それからキースウッドは洞窟の壁を手の平でなでる。
「……警戒が必要か？」
「どうでしょうね。人がいるという感じではないですが……。どちらかというと、いるのは骸骨とか歩く死者とか、そういう類じゃないかと思いますよ」
新しい痕跡という感じではない。ここまで来るにも道らしい道もなかったし、もし人がいたとしても、かなり昔のことではないか。
おどけて見せるキースウッドに、シオンは外に目をやった。
「そうだな……。どちらかというとこの嵐の方が難敵か……。いや、だが、警戒するに越したことはないだろう。なにしろ、俺たちは帝国の叡智を守り奉らなければならないからな」
そう言って、シオンは洞窟の入り口近くで、外の様子をうかがうミーアの方に目を向けた。
「そうですね。全員に情報を共有しておきましょう。それと単独行動は避けるべきですね」
などと、シリアスな会話が繰り広げられる一方……、洞窟の入り口の方では……。

「すごい豪雨でしたわね。びしょ濡れになってしまいましたわ」
そう言って、ミーアは水を吸った服をぎゅっと絞った。
ボタボタ、音を立てて垂れる水に、先ほどの雨のすさまじさがうかがえた。
「夏とはいえ、風邪でもひいてしまいそうですわね」
「……ああ、そうだね」
「……ん？」
ふと、ミーアは違和感を覚えた。アベルの返事があるまでの、微妙な間に……。
ちらりとアベルの方に視線を送ったミーアは……、微妙に頬を赤くして、目をそらすアベルを見つけた。
それから、改めて自らの体を見下ろす。肌に張り付いて、ちょっぴり肌着が透けてしまっている服を見て……、ミーアはピンときた！
――あらあら、もしかしてアベル、照れてますのね？　わたくしの姿に、ちょっぴりときめいてしまってますのね？
にんまり、と小悪魔めいた笑みを浮かべるミーア。先ほどとは打って変わって、余裕の態度である。
それもそのはず、ミーアにとって水着は水に入るための下着である。いくらデザインがもさーっとしてても、露出が少なくても、恥ずかしいものは恥ずかしい。
けれど、現在のミーアは服を身に着けている。若干、肌が透けていようが関係ない。余裕の態度をとることができる。そうなのだ、ミーアの中身はお姉さん！
アベルが少しだけ成長して、体が引き締まって凛々しくなってきてはいても……それはそれ。
まだまだ、年上のアドバンテージというものがあるのだ。
ということで……、
――うふふ、もう、アベルったら、なかなか可愛らしいですわね。
ミーアはちょっぴり、アベルをからかってみることにした。

そう、ミーアお姉さんはからかい上手なのだ！
それはもう完全なる優位。
大人のお姉さんが、ウブな反応を見せる可愛い少年をからかうという完全無欠な上から目線で……、ミーアは、からかってみようと口を開きかけた……のだが……。
「少し失礼するよ」
そう言ってアベルは、とてもとってーも優しい手つきで……、自らの羽織っていた薄手の上着をミーアの肩にかけた。
「……はぇ？」
突然のことに、ぽっかーんと口を開け、首を傾げるミーア。
その一瞬の隙に、アベル、気合の踏み込み！
「先ほどから、その……、ふ、服が透けていたからね。ボクの服も濡れていて申し訳ないんだが……」
極めて紳士的に、上着のボタンを留めていき、それから実に生真面目な顔をしてから、
「ミーア、君は……少し自分の魅力を自覚するべきだ。君の美しい肌は、すごく魅力的だから、無防備でいてもらうと……その、困るんだ」
そう言って、アベルは、再び気まずそうに目をそらした。
「……はぇ？」
ミーアはなんとも間の抜けた声を上げて……、それから、アベルの姿を改めて見た。
上着を脱ぎ、半袖のシャツ一枚になったアベル、剣術で引き締まった二の腕がちらりと覗く。
実に凛々しく、たくましくって……もう、ともかく格好良かった！
なので、ミーアは思わずキュンとしてしまった！
余裕ぶっていたミーアお姉さんは、アベルの返す刀で見事に撃退されてしまったのだ。
完全なる形勢逆転である！
――なっ、なっ、なっ、なんなんですの、アベル、ほんとにもう、

なんなんですのっ！？　そ、そそ、そんなキザで恥ずかしいこと、なに、サラッとやってくれちゃってますのっ！　もうっ、もうっ！！
頬を真っ赤に染め、あわあわと口を震わせるミーア。であったのだが、幸いなことに、アベルはすでにシオンたちの方に行ってしまっていて、それに気づいていない。
羞恥に染まった顔を見られずに済んだミーアは一安心である。
そう、一安心ではあるのだが……。
――っていうか、アベル！？　なんで、わたくしのことをシレっと恥ずかしがらせて、そのまま放置しておりますのっ！？　こっ、この、心のモヤモヤをわたくしは、どうすればいいんですのっ！？
胸の奥、なんともこそばゆい感情を持て余し、ミーアは、うがーっと叫びたくなるのを懸命に我慢するのだった。
そんな中で、
「あら、湿気がこもってるからかしら？　この洞窟、なんだか入り口と奥の方とで温度差がありますわね。ねぇ、ニー……、じゃない。あなたもそう思わない？」
エメラルダの声がのんきに響くのだった。

第九十一話　一粒の麦、一枚のクッキー

幸いなことに、嵐は翌日には過ぎ去っていた。
洞窟の中で、ミーアが石の数を数えつつ、ぽけーっとしている間に通り過ぎていたのだ。
風が弱まったのを確認すると、シオンの命を受けたキースウッドがすぐさま周辺の探索に出かけた。その際、サバイバル巧者なミーアから、
「キースウッドさん、どこかに湧き水か小川がないか、探してきていただけるかしら？」
という追加注文が入った。
飲み水の確保は、サバイバルの基本中の基本である。
一人で森に潜み、革命軍からも逃げられるよう、知識収集に余念のなかったミーアに死角はない！
ということで、洞窟を離れ、しばらくして戻ってきたキースウッドは、
「とりあえず用心するに越したことはないでしょうが、危険な動物の痕跡は発見できませんでした。せいぜい、ウサギがいるぐらいで……」
「ほぅ……！　ウサギ……」
ミーアの瞳が、ぎらりと光った。昨日は食事抜きだったため、非常に腹ペコ猛獣（ハングリーモンスター）なミーアである。ウサギの命は風前の灯火だ。
「それと、幕屋は一つだけ残っていましたが、中がどうなってるかはわかりません。ご婦人方の幕屋でしたので、中は確認できませんでした。それと、森の中を少し行ったところに水源地を確認。小さな泉です」
「そうか、ご苦労、キースウッド。相変わらず仕事が早いな」
シオンの労いに、キースウッドは肩をすくめた。

「まぁ、いろいろできないとシオン殿下の従者なんかやっていられませんから」
相も変わらず、苦労人である。

とりあえず、当座の拠点は洞窟にするとして、急いでするべきは幕屋の中に残っている道具の回収だ。
上手くすれば食料が残っているかもしれないと思ってのことだったが……。残念ながら、そうそう都合よくはいかなかった。
傾き、倒れかけの幕屋の中は風雨にさらされてボロボロだった。
四大公爵の一角、グリーンムーン家が威信をかけて用意した素晴らしい調度品は、泥まみれで、破壊しつくされていた。
そして、食料品なども見当たらない。
「まぁ、わたくしたちが寝るための幕屋でしたしね……」
さらに、もともと大部分の食料はエメラルドスター号の方にあり、こちらに運び込まれていたのはわずかだったのだ。
「食べられるものなどあるはずが……あ、そうですわ」
ミーアは、ふと思い出して自らの私物を探した。
着替えのドレスなどは旅行鞄の蓋が開いてしまったために飛ばされてしまっていたが、鞄の片隅に括り付けられていた小さな木箱をミーアは目ざとく見つけだした。
それは、ミーアが趣味で持ち込んでいたクッキーだった。
「無人島とはいえ、寝る前に甘いものは必須ですわ！」
との固い信念のもと、ミーアが鞄の中に放り込んだものである。
中を確認すると、大判のクッキーが全部で十枚入っていた。
「ああ……無事でなによりですわ……」
じわり、と瞳に涙を浮かべつつ木箱を取り出すと、さっそく一枚取り出……そうとしてやめる。
寸でのところで、はたと思ったのだ。
――これは、みなの前できちんと平等に分けた方がいいような気がいたしますわ。

そう、ミーアは知っているのだ。
食べ物の恨みはギロチンに直結するのだ、ということを。
クッキー一枚を先に食べてしまったことで、恨まれてギロチンにかけられる可能性だってゼロではないかもしれない。巨大なイチゴケーキを丸ごと、しかもイチゴも全部食べたというのであれば、それも致し方ないかもしれない。
されど、クッキー一枚を食べてギロチンにかけられるというのは、割に合わない。
そんなわけで、ミーアは満身の自制心を振り絞り、食欲との格闘を開始する。
ふ、ふ、ふー、ふ、ふ、ふー。と自分を鎮めるように、深く息を吐く。その様は、さながら、獲物を前にした猛獣のごとく。
それでも、なんとか自身の欲望を押さえ込んだミーアは、クッキーの木箱を持って、みなの下に戻った。
「よくこんなものを持ち込んでいましたね、ミーア姫殿下」
感心した様子のキースウッドに、ミーアは得意げに鼻を鳴らす。
「備えあれば憂いなし、ですわ。まぁ、わたくしにかかればこのぐらい、当然のことですわ」
「それはよろしいのですけれど、なぜ、平民にまで当たり前にクッキーを与えるんですの？　納得いきませんわ」
などと、不満顔なのはエメラルダである。
彼女の考え方は貴族としてはごく一般的なものであるのだが……。
――エメラルダさんは、根本的なことが分かっておりませんわね。このクッキーが何を意味しているのか……。
ミーアは、ため息まじりに彼女を見つめていた。
なるほど、確かにクッキーを多めに食べれば、お腹はその分、満ちることになるだろう。
されど、逆に言ってしまえばクッキー一枚を、ただ自分で食べてしまっては、クッキー一枚の分、お腹が満ちるだけなのである。
それだけなのだ。

逆に、ここでみなにクッキーを分け与えればどうなるだろうか？
きっと大きな恩義を感じてくれるのではあるまいか？
これは種蒔きなのだ。
一粒の麦が死ななければ、一粒のままであるのと同じように、一枚のクッキーは食べてしまえば、一枚のクッキーでしかない。けれど、それを種として蒔けば、いずれ大きな見返りが返ってくるかもしれない。
――今は味方ですけれど、この先、キースウッドにしても、シオンにしても、なにかの都合で敵に回ることが絶対にないなんて言えないはずですわ。
例えば、どこかの巨大な赤い河の上。急造の水軍を率いて大敗を喫した場合、逃げ延びた先にキースウッドが立っているとして……。追い詰められた時にミーアは言うのだ。
「あの日……クッキー、あげたじゃない？」と。
そうして、逃がしてもらえればしめたもの。後は国に逃げ帰り態勢を立て直すことだってできるかもしれない。
とまぁ……、どこかで聞いたことのあるおとぎ話を連想したミーアであるのだが、ともかく、他人にクッキー一枚で恩を売れるのであれば、それは大変コスパが良いことなのだ。
さらに言うならば、そういった計算をなくしても、クッキーを従者に分けないという選択はミーアの中にはなかった。
アンヌにあげるのは当然のことだ。
また、キースウッドにあげなければ、シオンの怒りを買って怖い。それにキースウッドを元気にしておくと、場合によってはクッキーがウサギ鍋になって、返ってくるかもしれない。ミーアは未来のウサギ鍋のために、クッキー一枚を投資したのだ。
そして、ニーナに関しては……、ぶっちゃけ空腹で倒れられると、エメラルダが面倒くさそうだし……。
ということで、今は全員の健康状態維持を優先したいミーアであった。

甘いクッキーは栄養たっぷりで、それだけで、一行に笑顔が戻ったようだった。
ちなみにミーア含めて七枚を消費し、残りも割って分配してしまった。
――下手にとっておいて、奪い合いにでもなったら、大変ですわ。食欲は人を変えてしまうものですもの……。
腹ペコ猛獣（ハングリーモンスター）ミーアは、その危険性をきちんと認識していたのだ。
お腹に入れてしまえば奪い合いようがない。ミーアなりの危機回避術である。

さて、その後も幕屋を物色した一行だったが、ほかに発見できたものといえば、あまり見ないように、と鞄の底の方にしまい込んでいた……、
「ああ、水着……。それもエメラルダさんが用意したいかがわしい方ですわ……。これは、使えませんわね……」
ぽーいっと捨てようとしたミーアだったが……、
「あっ、ミーアさま、少し待ってください」
それを見たアンヌが、慌てて水着をキャッチした。
まじまじとそれを検分してから、アンヌはわずかに瞳を見開いた。
「これ……使えます、ミーアさま」

第九十二話　騒乱の匂いに誘われて……

中央正教会は古い歴史を持つ宗教組織である。
その興りは、ティアムーン帝国やガヌドス港湾国よりも古い。組織の形をとる以前の彼らは、神の言葉を受け取る預言者を指導者とした集団だった。
彼らは、聖典に従って教えを広めていくことで、かの地に道徳的・倫理的な共通基盤を築くと同時に、各国の歴史を編纂、人々の歩みを後世に書き残すことを一つの使命としていた。
それは、彼らの信仰する神が「人を祝福し、その築き上げたものを自らへの捧げものとして喜ぶ存在」として教えられているためである。
人の築き上げた歴史、文化、秩序を書き記し、それを神へと捧げることは、神に仕える者たちの大切な使命なのだ。
そんな中央正教会に属する教会は、ガヌドス港湾国にも当然存在している。
町の一角、大きくも小さくもなく、また、孤児院なども併設されていないシンプルな建物、その地下にある書物庫にルードヴィッヒらが訪れたのは、昼を過ぎ、日の光が徐々に弱まってくる夕刻近くのことだった。
この日も、何人かの元老院議員と接触したものの、結果は芳しくなかった。
「まぁ、おおむねそれは予想通りといったところか……」
特に落胆するでもなく、ルードヴィッヒはつぶやく。
それはそれとして、今日も白々しいまでに連呼されるグリーンムーン公爵家の名前に、若干のうさん臭さを覚えたぐらいだ。
教会堂の入り口にて、神父への挨拶を済ませたルードヴィッヒは、早速、ガヌドスの歴史を記した書物を紐解いたのだが……。

「……さて、これは……どうしたものかな……」
ルードヴィッヒは思わず頭を抱えたくなった。
目当ての情報がまるで見つからずに途方に暮れたわけではない。逆である。
ごくごくあっさりと得られてしまったがゆえに、思わず、唖然としてしまったのだ。
あっさりと目の前に提示されたもの、それはルードヴィッヒの知らない歴史だった。
「イエロームーン公爵はガヌドス港湾国の建国以来、ずっとこの国との友好関係を築いてきた。時に私財を投じて、国への貢献もしてきた。それが、ある時からグリーンムーン公爵に引き継がれた……か」
確認するように歴史書を目で追ってから、そっと閉じて、天を仰ぐ。
「こんな事実は、少なくとも帝国政府は把握していないぞ。あるいは俺が知らなかっただけなのか……。知らないということを知れ、か。師匠の教えが痛いほど刺さるな……」
ルードヴィッヒは知っていた。秘密とは、隠蔽しようとすればするほどに目立つのだということを。
ゆえに、秘密の内容を知ることは難しくとも、そこに重要な何かがあるのだということ自体は察知することができるのだ。
けれど、目の前にある事実は、別に秘密でもなんでもなかった。
聞けば出てくる情報で、調べればわかる情報だ。
にもかかわらず、ルードヴィッヒが知らなかったのは、それが些細なことだから。
報告に上げるまでもない、どうということもない情報だから。
「隠されるわけでもなく、些細なことだから、もし誰かが知ったとしても気にかけなかったと……そういうことか」
港湾国自体が小さな国で、せいぜいがガレリア海への通過点に過ぎなくって……だから、誰が交渉の矢面に立っていても気にならな

かった。イエロームーン公爵家からグリーンムーン公爵家へと、交渉担当が代わっても、誰も、何も気にしなかった。
ルードヴィッヒは思考する。
これは、はたして偶然か？　なんの意図もなくできた状況なのだろうか？　と。
一見すると、その可能性は否定できないような気はするが……。
「だが、否だ。これには何者かの意志が働いていると考えるべきだ」
なぜなら……、そう、ミーアが調べろと言ったから。
帝国の叡智にして、ルードヴィッヒの主たる姫殿下が、この国には何かがあると感じ、ルードヴィッヒだけでなく、己が動かせる最強の武力、ディオン・アライアまで呼び寄せたのだから……。
だからこそ、ルードヴィッヒは思考する。
そこに何者かの意志が、策略が、存在しているものとして……。
「もしも、この状況が作られたものだとして……その目的はなんだ？　グリーンムーン公爵家に交渉を一本化する意味は？」
まず考えられるのは、グリーンムーン公爵が交渉のしやすい相手であるということ。要は手玉に取りやすく、自分たちに有利な条件を押し付けやすいから、代えてくれるなということだろう。
実際、それは大いにありそうな話だが……。
「しかし、その場合、グリーンムーン公爵に何かがあった際には逆効果になる可能性もある。例えば、グリーンムーン公爵が暗殺されるというようなことがあれば……港湾国との取引は一時的に止まる可能性もあるわけで、その間の利益は……。いや、逆に、それが目的だとしたら……」
ティアムーン帝国は、食料自給率が低い。ゆえに、外国からの輸入に、かなりの部分を依存している。そして、港湾国は重要な供給源の一つでもある。
「しかし、それは極めて限定的な影響に過ぎないんじゃないか？」
さすがに、輸入を止められたからと言って、すぐに国が傾くようなことにはならない。

代理の者を立てる時間的余裕は十分にあるし、なんだったら、港湾国を切ってしまっても、なんとかやっていくことができてしまうわけで……。

ふいに、ルードヴィッヒの脳裏に、雷が走ったような気がした。

出会って以来、一貫してミーアが気にしていたこと……。近い将来に起こる危機として警戒しておいて欲しいと、何度も言われたこと。

それは……。

「……ああ、それで、飢饉なのか」

ガチっと、頭の中で何かがはまったような気がした。

もしも飢饉が起き、帝国内部での食料自給率が極端に下がり、なおかつ、港湾国からの食糧の流れも断たれてしまったら……。

今でこそミーアの指導のもと、食料の備蓄も進み、フォークロード商会という新たな供給源を確保できてはいるものの、もしも何の備えもなく、そのような事態に陥っていたら、帝国はどうなるのか。

「とするならば、その場合はグリーンムーン公爵には死ぬよりも生きていてもらう方がいいな。ミーアさまがおっしゃるような飢饉があったら、グリーンムーン公爵が国外に脱出しても何ら不思議ではない。港湾国としては、裏で脱出の手引きをしつつ、彼の代理として立てられた者に対しては、グリーンムーンを通せの一点張りで突っぱねる。暗殺したならば、代理の者が立ってしまうが、国外脱出の場合には一応はごねることができる。そして、それだけのことで、ガヌドスは帝国に多大なダメージを与えることができる」

依存させておいて、それを断つ。

直接軍事力に頼るわけでもなく、ガヌドスは帝国に強大なダメージを与えることができる、そうした体制が築かれているのだ。

「どうかしやしたかい？　ルードヴィッヒの旦那、なんだか、顔色が優れないご様子だが……」

心配そうに尋ねてきたバノスに、ルードヴィッヒは厳しい顔で言った。

「大丈夫だ。欲しいものは手に入った。行こう」
教会堂から出ると、外はすっかり暗くなっていた。
どうやら、かなりの時間、思考に沈んでいたらしい。
「俺も師匠っぽくなってきてしまったか……」
苦笑いをしつつ、ルードヴィッヒは首を振った。
「それで、なにがわかったので？」
宿への道すがら、ルードヴィッヒは自身の推理をバノスに語って聞かせる。ふんふん、と熱心に頷いていたバノスであったが……、
「だいたいわかりやしたが……、その戦略には一つ欠けがあるんじゃないですかね？」
「ああ、実は、そうなんだ。それがまだ考えがまとまっていな……」
「ちょいと失礼！」
直後、バノスがルードヴィッヒの肩を引く。と同時に、腰に下げていた剣を一息に抜き放った。
ガィン、と硬質な金属のぶつかり合う音。
薄闇に散る火花に目を凝らせば、闇に溶け込むような、黒装束の男たちが立っているのが見えた。
その数は五人。その手には曲線を描く片手剣があった。
「これは……」
「ちぃっ！　こいつら、いつの間に……」
剣を構えつつ、バノスは刺客たちを睨みつける。
「ガヌドスの刺客か？」
「さてね。武器的にゃあ、海賊上がりって感じだが……」
睨みあいは二呼吸、その後、刺客たちが動き出す。
左右からの連携、それを熟練の剣技でさばきつつも、バノスは舌打ちする。
「なかなかどうして、隙がねぇな。ただの海賊ってわけでもなさそうだ」
「厳しそうか？」

「じり貧になりますからね。やるんなら、捨て身で仕留めるのがいいんですが、俺の命に代えても三人ってとこですね。もう一人行けるかなぁ……、へへ、あんまり捨て身ってのは好きじゃねぇんですがね」
バノスの鍛え抜かれた太い腕、その筋肉が力強く盛り上がる。
凶悪そうな笑みを浮かべて、バノスは言った。
「まぁ、できる限りのことはしますんで、あとは上手く逃げてくださいや。ルードヴィッヒ殿。もし生きて逃げられたら、姫殿下にもよろしくお伝えくださいよ」
「バノス殿！」
ルードヴィッヒの制止の声を合図に、バノスは走り出す。
爆発的な突進、一気に間合いを詰める。
それを迎え打つべく、刺客たちは剣を構える。その独特の曲線を描く刃に、刹那、横合いから一陣の風がぶち当たった。
直後に響くは、何かが割れるような硬質な音。
パキャアアン、という、ちょっぴり滑稽ですらある音に、刺客たちは驚愕の声を上げた。
「なっ！」
いっせいに自らの得物に目を落とした彼らは、手の中の剣の刃が、根元で断ち切られていることに気付いた。
慌てて背後を振り返ろうとして……、
「あはは、振り返ったら、殺すよ」
軽薄そうな声……、けれど、叩き付けられた殺気は彼らを震え上がらせるのには、十分すぎた。
直後、肩の上に乗せられた重たい刃に、刺客の一人が小さく悲鳴を上げる。
「あー、前に、ジェムが姫さんにやってたけど、なるほど、確かにこれは楽しいかもしれないな。びくびく震えるのが見てて楽しい」
などと、ぽんぽんっと刃の横腹で賊の肩を叩いている男。それは……、

「やぁ、危なかった、ルードヴィッヒ殿」
帝国最強の騎士、ディオン・アライアだった。

第九十三話　澄んだ泉の名探偵ミーア

そよそよと、澄んだ水が流れる音が響いていた。
黒々とした森の一角。生き生きと繁茂した木々が、ふいに途切れた広場のような空間。
そこに美しい泉があった。
小高い岩壁から落ちる小さな滝、絶え間なく注がれる水が泉の表面を小さく揺らしていた。
泉はセントノエルの大浴場の二倍以上の広さがあるだろうか……、周りには小さな花が生き生きと咲き誇っていた。
そこはさながら、おとぎ話に出てくるような幻想的な場所。泉の女神が住まうような美しいな場所だった。
そんな泉のほとりには清らかな乙女の姿があった。その身を水浴のための愛らしい衣に包んだ少女は、水辺にそっとつま先をつける。
裸足に感じる水の冷たさに小さく悲鳴を上げて、それでも乙女は、覚悟を決めたように手のひらで水をすくうと、か細き肢体へとかけた。
輝くように艶やかな肌の上を、玉になった水がこぼれ落ちていく。
……とまぁ、一見、美少女キャラの登場シーンのような感じではあるが……誤解のないように言っておくとミーアの登場シーンである。
ちなみに、水の冷たさに驚いた時の悲鳴も「きゃっ！」などという可愛らしいものではなく「ふひゃあっ！？」という、ちょっぴりヘンテコなものだった。
まぁ、だからどうしたということでもないのだが……。
そもそも、なぜ、ミーアが泉に来ているかというと、すべてはアンヌの発案によるものだった。
「水着を着て、泉で水浴びさせていただくのは、どうでしょうか？」

そんなアンヌの提案は、エメラルダからも支持を得た。
豪雨の中、ぬかるんだ道を歩いたせいで、服はもとより体も泥まみれだったのだ。
正直なところ、地下牢で鍛えられたミーアとしては、一日や二日、水浴びしなくっても特に問題ないと思ってしまうのだが……。
「ああ、申し訳ありません、ミーアさま……。御髪の泥が、上手く拭き取れません。うう、ミーアさまの美しい御髪が……」
などと、悲嘆に暮れるアンヌを見ていると、早めに水浴びに行ったほうがいいかしら、などと思ってしまったわけである。
幸いなことに、エメラルダの用意した水着もある。
外で裸身を晒すことには、さすがに少し抵抗があるミーアも、これならば問題なく水浴びができるだろう。
――とは思いましたけれど……、やっぱり、これ、ちょっとだけ恥ずかしいですわね。
そうして、ミーアはふと横を見た。
そこには、すまし顔で水浴びをするエメラルダの姿があった。ファサっと髪をかき上げながら偉そうな笑みを浮かべる。ちなみに、エメラルダの方もミーアとお揃いの水着を着ていた。こちらはニーナがいざという時のために、肌身離さず持っていたため、吹き飛ばされずに済んだのだとか……。
それを聞いた時には「どういうことなのか？」と首をひねってしまったミーアだったが、エメラルダは、特に気にした様子はない。
「エメラルダお嬢さまは、ミーア姫殿下とお揃いの水着で遊ぶことを、大変楽しみにしておられましたから……。何かあっては大変と、私の懐で温めておきました」
シレッとした顔で言うニーナであった。
――さすがにエメラルダさんのメイドというだけあって、相当な変わり者ですわね……。
などと、ミーアが思い出していると、ふいにエメラルダの上機嫌な声が聞こえてきた。

「ふふん、平民にしては良い考えでしたわね、ミーアさまのメイド」
――ああ、もう、また偉そうに……。まったく、エメラルダさんもいい加減にしないと大変なことに……あら？
ふいに……ミーアの視線が、ある一点に釘付けになった。
それは……そう、もう言うまでもなく……、エメラルダの露出したお腹に、であった。
ほどよく水泳で引き締まったお腹である。
美しいラインを描くお腹である！
ミーアの理想とするべきお腹が、そこにあったのだ！
「あ……ぁっ」
衝撃に、口からうめき声が漏れる。
それから自らのお腹を撫でてみるミーア。そこは確かに春休み前ぐらいまでは復帰している……、触ってみた感じ、ふにょふにょはしていない。でも、ふにょ……ぐらいはしている！
もう一度、エメラルダのお腹を見て……ミーアは、その事実を認めざるを得なかった。すなわち、
――負けた……、わたくし、エメラルダさんに負けておりますわ！
「では、ミーアさま、御髪を先に洗わせていただきますね」
「え、ええ……お願いいたしますわ……」
敗北感に打ちひしがれて、力なく答えるミーアであったが……、ふと、アンヌの言葉に違和感を覚えた。
「……先に、とおっしゃいまして？」
引っかかったのは、その一言だった。
ミーアは、エメラルダや他の大貴族とは違い、自分の体は自分で洗える。このような状況で、アンヌにすべてやってもらうということは、ありえない。
それを知らないアンヌではないはずだ。
だから、アンヌが「先に」と言ったということは「髪の後で体を洗いますね」ということではない。その後で他のナニカを洗うということだ。

さらに言えば、アンヌ自身が水浴びをするということでも、恐らくない。アンヌは口に出さずとも自分自身のことを後にするだろう。
――では、髪の後になにを洗うと言いますの……？
そうして……周囲に視線を走らせたミーアはある物を見つけて、戦慄する！
それは……そう、自らが脱いだ服。泥で汚れた服である。
嵐の過ぎ去った後の空は、晴れ渡っていた。日の光は強い。ここで洗って干しておけば、そう時間が経たずに乾くはずである。
だから……ミーアの髪を洗った後、アンヌが洗うのは……ミーアの着ていた服である。
それはいい。別に構わない。
水浴びをした後で、あの泥にまみれた服を着たいとはミーアも思わないからだ。
けれど、問題なのは……、それが乾くまで、ここで待つことになるかどうか、ということだ……。
恐らく、アンヌは言うだろう。
「服を洗って乾かしますから、ミーアさまはお先に王子殿下たちのところに戻っていてください」
恐らく、エメラルダは応じるだろう。
「そうですわ。洗濯など従者に任せるのが当然のこと。高貴なる私たちは、先に王子殿下たちのところに、戻っているべきですわ」
などと！　余計なことを！！
加えて言うならば、すべての作業が終わるまで、すなわち服が乾いて着られるようになるまでここにいては、さすがに待たせすぎになってしまうということは、ミーア自身も同意することだった。
――恐らく、この島でとれる食糧について最も詳しいのはこのわたくしのはず……。そのわたくしが、ここで時間をつぶしてしまえば、今夜の食糧事情に深刻なダメージを与えてしまいますわ！
そうして、ミーアは泣く泣くエメラルダとともに戻ることになるのだ。お腹の露出した水着姿でだ！

公開処刑もいいところである！
自らの頭脳がはじき出した恐怖の未来予想図を前に、ミーアは急ぎ、行動を開始する。
「そっ、そうですわ！　アンヌ。せっかくですから、わたくしの服をとってくださらないかしら？」
「へ？　なぜですか？」
「あなたに髪を洗ってもらっている間に、服を洗っておこうかと思って……」
「なっ、そんな……。それは、私の仕事です。ミーアさまのお手を煩わせるなんて……」
「そうですわ。ミーアさま。そのようなことは、メイドに任せればよろしいのに」
横から口を挟んでくるエメラルダ。その引き締まったお腹に、微妙にイラっとするミーア。
ふん、っと鼻を鳴らしてから、
「なにを言っておりますの。メイドだ主だと言っている時ではございませんでしょう？　できることはしっかりとやるべきですわ」
それから、アンヌの方を見る。
「アンヌ、あなたはあなたの仕事をしていただきたいですわ。丁寧に、綺麗に洗ってくださいませね」
そう言って、ミーアは自らの服を洗い出した。
――アンヌが髪を洗ってくれている間に、わたくしは服を洗う。そうして、干してしまいましょう。そうすれば、体を洗い終わる頃には、きっと服も乾いておりますわ！　急いで洗って、乾かして……、着て戻らなければなりませんわ！
ミーアはごしごし、ごしごし……と、服を洗う手を動かし続けた。

第九十四話　トクゥンッ！

「さて、これからどうしたものかな……」
女子チームが水浴びに興じているころ、男子チームは浜辺にやってきていた。
荒れ果てた砂浜に目をやり、シオンは腕組みする。
「一応、見た感じ、船が沈んだような痕跡はない、とは思うけどね……」
アベルの言葉の通り、漂着物の中にエメラルドスター号の残骸などは見当たらない。流れ着いた負傷者や、水死体の類も……だ。
「あの船が沈んでいるかいないかによって、今後の方針が変わるな。もしも、風を避けるためにどこかの島の陰で停泊していただけであれば、戻ってくるのを待てばいい。どこかに損傷があったとしても、航行が可能ならば港湾国に戻るなりして、助けを呼んでくることもできるだろう……が」
シオンの言葉を受けて、キースウッドが頷いた。
「あの嵐でしたからね。エメラルダ嬢は自信満々のようでしたが……」
「あまり信用はできない感じがするね。こういう言い方はどうかと思うが、ありがちな大貴族の思想に染まった人という印象だったよ」
アベルの評価に、シオンが首肯して見せる。
「そうだな。少なくとも彼女の言葉を全面的に信頼して行動をするのは、まぁ、危険だろうな……」
シオンの中でのエメラルダの評価も、おおむねアベルと同じだった。
「あの船が沈んだものとして行動するべきだろう」
エメラルドスターが無事であるならば話は簡単なのだ。ただ、助けが来るまで、ここで生き抜けばいい。それも恐らくそう長くはな

いだろう。
一週間かそこらで、助けが来ることも期待できるはずである。
一方、エメラルドスター号が沈んでいた場合にはどうなるか？
「自分たちで脱出の手段を探す……のは現実的ではないな」
そのつぶやきに、目の前のアベルが苦笑を浮かべた。
「さすがに船を造るのは難しいだろうね……。まぁでもミーアだったら、なにか思いつくかもしれないけど……」
当人の知らないところで、ミーアの肩に重たい期待が乗せられようとしていた。
それはともかく……、
「より現実的なのはミーア姫殿下の家臣、ないし、グリーンムーン公爵家の誰かが異変に気付いて助けにきてくれることでしょうね。特にルードヴィッヒ殿は、話した感じではかなりの切れ者という印象でしたし……」
「そうだな。その場合、この島の場所を知らせる必要があるだろうな」
「とすると……狼煙かなにかを上げるかい？」
アベルの発案は、意外性はないものの堅実なものだった。
「決まりだな。よし、狼煙を上げて助けを呼ぶことと、食料の確保。当面はこの二つのために行動していこう」
そこで言葉を止めて、シオンは小さく笑みを浮かべた。
「しかし、食料といえば先ほどのミーアの行動には驚いたな……」
主の言葉に、キースウッドが深々と頷いた。
「ええ、まさか何の迷いもなく、自らの食料をあんなにあっさり分配してしまうとは。しかも、我々、従者にまで……」
「ミーアが帝国でやっていた政策を見ると、食料の重要性がわかっていないということは、ないだろう。にもかかわらずだからな……。彼女が人格者であると知ってはいても、驚かずにはいられないな……」
そう言いつつ、シオンは思っていた。

――この島で生活していくには、リーダーを決めるべきだ。俺かミーア、あるいはアベルと思っていたが……。あの思い切りを見せられてしまうと俺が引き受けるのはいささか躊躇われるな……。

ミーアとアンヌは一足早く、男子チームのいる浜辺にやってきた。ちなみに、ミーアの服はからっからに乾いているが、アンヌの方は若干湿り気味だ。

「着ていれば乾きます」

などと笑って言っているアンヌだったが、空から照り付ける日の光を見ていると、むしろ涼しそうでうらやましいかも、などと思ってしまうミーアであった。

「ああ、ミーア。来たか……ん？　エメラルダ嬢はどうした？」

「ニーナさんが服を洗うのを待つと言っておりましたわ」

ミーアの説明に首を傾げるシオンたち。だったが、アンヌの補足説明によって、少しばかり呆れた顔をした。

「なるほど、そうか……」

シオンは小さくため息を吐き、

「少し大切な話だから、彼女たちも待とう」

そうして一時間ほどたって、浜辺に狼煙をたくための準備が整ったところで、ようやく、エメラルダとニーナが戻ってきた。

全員が揃ったのを見て、シオンがおもむろに口を開いた。

「この無人島を脱出するまでの間のリーダーを決めておいたほうがいいと思うんだが……」

「なるほど、確かにそうですわね。船長が多いと、船は月に向かう、と言いますし……」

同意するミーアであったが、そこでふと考える。

――ふむ……そういうことでしたら、わたくしが立候補してもよろしいのですけど。

ミーアには自負があった。

このメンバーの中で、最もサバイバルに精通しているのは、恐ら

く……自分であると。
食べられる山菜だってわかるし、魚も川魚ならばとり方を知っている。
今ならば、難しいと言われているキノコと毒キノコの見極めだってできる自信があるのだ……自信だけは……あるのだ。
さらに、通常は面倒くさがりなミーアであるが、この場面ではそうも言っていられない。これは、我が身の安全に関わるような事態だ。決して手を抜くことなどできない。
――ですけど……、ここでわたくしが立候補すると、いささか面倒なことになりそうですわね。
ちらりとエメラルダの方を見て、ミーアは思った。
そもそも、この船旅のホストはエメラルダだ。本来であれば、彼女がこの場をリードするのは、ごくごく自然な流れのような気がしないではない。けれど……、
――不思議ですわ……。エメラルダさんがリーダーになったりしたら、生きて帰れる気がぜんっぜんいたしませんわ……。
ミーアの危機察知能力が、強力に訴えかけているかのようだった。
エメラルダはやばい。他の誰がリーダーになるにしても、エメラルダよりはマシだ、と。
そして、ミーアはその勘に従うことにする。
「こういったことは、殿方に任せるのがよろしいと思いますわ。エメラルダさんも、そう思うでしょう？」
シレっとした顔で……、エメラルダがリーダーになる流れを一切作り出さぬよう、細心の注意をもって、話し合いを誘導する。
「ええ、確かに、こういった場合には殿方にリードしていただきたいですわね。ミーアさまのおっしゃる通りだと思いますわ」
エメラルダは、感心した様子で頷く。
もともとエメラルダは、どちらかといえば保守的な考え方をしがちな人だった。そこを見越したミーアの見事な誘導である。
「そうか……。そうだな……」

そしてシオンもどうやらそれを察したのか、エメラルダの方にチラッと視線をやってから頷いた。
「わかった。アベルと俺のどちらかで……」
「いや、すまないがシオン、その仕事は君に任せるよ」
「なぜだ？　遠慮する必要などどこにもないんだぞ？」
その問いかけに、アベルは一瞬、複雑そうな顔をしたが、すぐに首を振った。
「別に、適材適所ということだよ。それにボクは、すでに一軍を率いて指揮を執ったこともあるからね。今回はこの場を指揮することで君に経験を積んでもらおうということさ」
肩をすくめつつ、おどけた口調で続ける。
「ボクの方は、今回はミーアを守ることだけに集中するつもりだよ」

そうして笑うアベルの心中は、少しだけ複雑だった。
ここで、シオンに任せるということは彼のプライドに関わることだからだ。
だからこそシオンも気を使って、わざわざ聞いてくれているのだ。
けれど……、
――もしも、ボクが出しゃばることで、ミーアを危険に晒すようなことがあったら、ボクは生涯、ボク自身を許すことができない。
アベルは自分を知っている。
努力を、鍛練を怠るようなことはしないし諦めることもないのだけど、それでも、今はまだ、シオンの優秀さに届かないことを知っている。
だからこそ、この場の指揮をシオンに任せるのだ。
ミーアを守るために、あえて一歩を引く判断をしたのだ。
……けれど、それで悔しくないわけもなく……。そのモヤモヤを呑み込むために、あえておどけて見せたのだ。
「ボクの方は、今回はミーアを守ることだけに集中するつもりだよ」と。

けれど、そんな彼の複雑な心中など、まったく知らないミーアは、
「まぁ、アベル……」
などと、トクゥンッ！　と胸を高鳴らせてしまうのであった……。
恋する乙女なのであった。

第九十五話　ホントに大丈夫ですので……

かくて、ミーアたちは、シオンの指導のもと、行動を開始した。
狼煙はすでに準備ができていたので、早速、火をつける。
「確か、木をすり合わせてつけるんでしたわよね？」
「ああ、よくご存じですね。ミーア姫殿下。ですが、今回は私が携帯用の火打石をもっておりますので……」
そう答えつつ、キースウッドは……察した！
ミーアが、中途半端にサバイバルの知識を持っているということに。
そして……彼は知っている。
中途半端な知識ほど、失敗すると大けがになりやすいということを。
――これは、ミーア姫殿下のことを気にしておいた方が良いか……。
などと思っていたキースウッドは……、
「あっ、そうですわ。食料探しでしたら、わたくしを森の方の担当にしていただけないかしら？　わたくし、詳しいんですのよ。山菜とかキノコとか……」
「それは素晴らしいですね。では、僭越ながら俺が同行させていただきますので、どうぞ、ミーア姫殿下は危険なことをせずに、指示にしたがえ……ってくださいね」
ニコニコ、笑みを浮かべるキースウッドだったが、その目がまったく笑っていないことに、ミーアは気づいていなかった。
「あっ、あの山菜は確か、なんとかヨモギと言って、苦いけど食べられるはずですわ」
「おお、さすがに目がいいですね。あれは、南洋ヨモギですね。湯

がくと多少苦さも薄れるはずです。栄養もたっぷりあります」
結局、役割分担は、ミーアとキースウッドが森の中に食料探しに。シオンとアベルは狼煙を守りつつ、海釣りを。そして、アンヌとニーナ（……とエメラルダ）が洞窟に残り、料理の準備をすることになった。
「グリーンムーン公爵家の威信にかけて、ニ……うちのメイドが料理いたしますわ。道具はございませんけれど、できますわよね？」
エメラルダに話を振られたニーナは、視線を斜め上に向けて、何事か考えこんでいたようだったが……、
「そうですね。メニューは限られるかと思いますが、食材がございましたら、なんとかいたしましょう」
そう請け負って見せた。
「ふむ……、まぁ、あのエメラルダさんに振り回されて鍛えられているのですから、多分、大丈夫でしょうけれど」
などと言うミーアの独り言を、キースウッドが光の宿らない目で見ていたのは秘密である。
それはさておき、ミーアによって次々に食べられる山菜類が集まっていく。
それを見て、キースウッドは不覚にも感心してしまった。
これは、もしかしたら、中途半端なサバイバル知識ではなく、本格的な知識なのではないか？　などと錯覚しそうにもなった。
しかしっ！
「あ、このキノコは確か食べられるはずですわ。わたくしの勘が、そう告げておりますわ」
そう言って手を伸ばそうとしたミーアを、キースウッドが慌てて止める。
「いえ、その、ミーアさま、キノコは大丈夫ですので」
厳然と告げる。
「……はて？　大丈夫とはどういうことですの？」
小さく首を傾げるミーアに、キースウッドは断固とした口調で言

った。
「ともかく、大丈夫ですので」
「ですから、大丈夫ってどういう意味ですの？」
「ええ、ほんとに大丈夫なので。大丈夫です」
などというやり取りを経て、ミーアはしぶしぶ、そのキノコから手を離した。
「もったいないですわ。美味しそうですのに……」
ちなみにそのキノコ、三日マイタケと言って、食べると文字通り、三日三晩踊り続けるという毒キノコである。やべーやつなのである！
またしても、主の命を救ったキースウッドであった。
「あっ、それと、あそこについてる実。あれは、美味しそうに見えますけれど、毒ですわ」
「鬼殺（オーガスレイヤー）ですね。本当によくご存じですね」
キノコ以外は、と心の中で付け足してしまうキースウッドである。
――本当に、どうしてキノコに関しては異常なこだわりを見せるのに、知識がいい加減なのか……。
などと物思いにふけりつつ、キースウッドはさっとミーアの手首をつかんだ。
「……なにか、ございましたか？」
ミーアが手を伸ばした先、そこには、真っ白なキノコがあった。
輝くほど白くて……、ものすごく……、毒っぽい！
「い、いえ……、ちょっと、見たこともないキノコがございましたので、こう、隠し味的なのに使えないかなって……」
「ええ……使えません」
「でも、もしかしたら、とってもいいお味に……」
「使えません……」
「キノコが入ってると、味が一味も二味もよくなりますのよ？　ウサギ鍋にするのであれば……」
「まず、ウサギ鍋にするんだったら、ウサギを捕まえる必要がありますし、そもそも鍋がありません。なので、ウサギと鍋が手に入っ

てから、隠し味の心配をするのでも遅くはないと思いますよ、ミーア姫殿下」
にっこり、笑みを浮かべるキースウッド。その目は、やっぱり笑っていない。
「うう、まったく……。あなたは相変わらず融通が利きませんわね」
ふぅっとため息を吐くミーアに、若干イラッとするキースウッドだったが、なんとか、それを呑み込んだ。
そう、ミーアには恩義があるのだ。クッキー一枚分の恩義が！
「キノコ以外で、できるだけ調理の必要がないものだけに絞りましょう。ご協力いただけますね？　ミーア姫殿下」
「やれやれ、仕方ありませんわね……」
肩をすくめるミーアに、再びイラッとするキースウッドであった。

第九十六話　ルードヴィッヒ、妄想させる……

ディオンによって、からくも刺客の手を逃れた……というか、刺客を返り討ちにしたうえで、全員拘束したルードヴィッヒたちは、その捕らえた刺客を連れて宿に戻った。

「お、お客さん、この方たちは……」

「ああ、ルードヴィッヒ殿、任せるよ」

などと軽く言うディオン。ルードヴィッヒは、やれやれと首を振りつつ、宿屋の主人の相手をする。

一方、刺客たちは後ろ手に縛られたまま、宿の一室に連れてこられた。

そこには、すでに皇女専属近衛部隊の者たちが詰めていた。

強面な者、忠義に厚い者……、様々な者たちがひしめき合っている。

そんな中にあっても、刺客たちは一切動じた様子は見せなかったのだが……。

「さて、と、じゃあ、いろいろ聞かせてもらおうかな」

聞こえよがしにそう言って、ディオンが剣を抜いたところで、空気が一変する。

先ほどディオンが見せた圧倒的な剣技を思い出し……、恐怖が甦ってきたのだ。

「ディオン隊長、この部屋に全員集めてよかったんですか？」

暗に、こういう尋問は一人ずつやるものでは？　と問われたディオンは肩をすくめた。

「僕はもう君たちの隊長でもないんだけどね。まぁいいや。いいんだ、その方が。だってみんな一緒にいた方が仲間が殺されたり、痛めつけられてたりする姿が見えて、怖いだろ」

「そっ、そんな脅迫、俺たちに効くとでも思ってんのか？」

「そうだ。ミーア姫は寛大で、拷問とか嫌いなんだと聞いてるぞ」
口々に抗議する刺客たち。それに答えたのは、ディオンではなく、遅れて入ってきたルードヴィッヒだった。
「そうだな。お前たちの言うことは正しい。ミーア姫殿下はとても寛大な方だ」
それから、彼はわずかばかり微笑んで続けた。
「これは、公表はされていないことなんだが、以前、レムノ王国でミーアさまに敵対した者たちがいたんだ。さる国の間諜の者たちでな、一人はミーアさまに剣を突き付けた大罪人だった」
突然、始まった無関係な話に、刺客たちは戸惑った様子を見せた。
「その者たちは、全員生きて捕らえられたのだが……、今、どうなってると思う？」
「はんっ、なんだ？　そこのおっかねぇ兄さんに首でも切り落とされたかい？　それとも拷問の果てに牢獄で死んじまったとか……」
ルードヴィッヒは静かに首を振って答える。
「全員生きている。今はラフィーナさまのもとで、毎日、説教を聞き、聖典を書写し、奉仕に従事しているとのことだ。とても模範的にな」
それを聞き、刺客たちは一瞬、目を点にした後、口々にミーアを嘲笑った。
「なんだそりゃ。どんだけ甘いんだ、お前たちのお姫さまはよ。まったく、お笑い草だぜ！」
……けれど、それも長くは続かなかった。
刺客たちの中のリーダー格の男が唐突に、笑うのを止めたからだ。
その顔が真剣そのもののものになり、徐々に、頬から血の気が失われていく……。
「あん？　おい、どうしたんだよ？　なに黙ってんだ？」
仲間の問いかけには答えず、男がルードヴィッヒの方を見て、問うた。
「そいつらは……、本当に間諜だったのかい？　ただの一般兵とか

じゃなく……」
「いずれも間者として優秀な、厳しい訓練を受けた者たちだった。他人の命も、自分の命も、目的のためならば、何の感慨もなく刈り取れるような者たちで、拷問に対する耐え方も、しっかりと叩き込まれた者たちだった」
それを聞き、男は再び黙り込んだ。
その様子に、仲間たちも異変を察知する。
「な、なんだよ、おい。一体どうしたってんだよ？」
「俺の言うことが間違ってたら言ってもらいたいんだが……、優秀な間者が、人の命を命とも思わないような連中が、毎日、説教を聞き、聖典を書写して奉仕に従事する清廉潔白な人間になっちまう……、一体全体なにがどうなれば……そんなことになる？」
その問いかけに、その場がしぃん、と静まり返る。
みな、気づいてしまったのだ。
そうなのだ……実際問題として、騒乱を起こし、なおかつ大国の姫に刃を突き付けた者がなんのお咎めもなくいられるなどということは……ありえないことなのだ。
であるならば、恐らくなにがしかの罰を受けたはずなのだ。
そう……彼らはそのナニカを経験し……「熱心に神を求める人間」になったのだ。
ならされてしまったのだ……。
では、いったいナニガあれば、人を人とも思わないような連中が、そのような清廉潔白な人間になるだろう？
「……そ、そいつは、つまり……毎日、聖典の書き取りをしたり、司祭に頼らなけりゃいけないほどの恐怖を味わっちまったってことか？」
人が神に頼るのはいつか？
考えるまでもなく、耐え難い恐怖を経験した時だ。
先ほどディオンと対峙した際に、彼ら全員が等しく神に助けを求めたように。

では、これから先、ずっとその助けに期待しなければならないほどの恐怖というのは……、果たしてどのようなものか……？
されど、追い打ちをかけるようにルードヴィッヒは首を振った。
「別に、彼らは恐怖から逃れるために、それをしているわけではないということだ」
しぃん……、とその場が静まり返った。
恐怖ならば……理解はできる。
肉体の痛み、精神的な痛み、死への恐れ……。人に恐れを与えるための方法は想像できるがゆえに、彼らの抱く恐怖の上限は決まっている。
既知のものに落とし込むことで、なんとか呑み込み耐えることだってできるかもしれない。
けれど……、それが恐怖から逃れるためではないと言われてしまったら……どうなるか？
間者たちになにがあったのかは、完全に「未知のもの」へと変貌する。
一体、どのようなことがあれば間者たちが、清廉で生真面目な信徒へと変貌するというのだろうか？　そんなことはあり得ない。
それこそ人格が書き換わってしまうような、ナニカがなければ、そんなことはあり得ないのではないか？
では……、そのナニカとはなにか？
既知の恐怖には上限があるが、未知の恐怖には上限がない。
際限なく広がっていく恐怖の妄想に、刺客たちは黙り込んでしまう。
そんな彼らに、ルードヴィッヒはいっそ優しげとも言えるような笑みを浮かべた。
「だから、大丈夫さ。拷問も処刑も行われない。お前たちも同じようになるだけだから」
そうして、彼は一番近くにいた刺客の肩に、ポンっと手を置いた。
「ひぃっ！」

瞬間、刺客は体を震わせた。
彼は考えざるを得ないのだ。
自分がこれから経験する恐ろしいナニカを。否、恐ろしいとさえ規定することのできない、想像もできないようなナニカを……。
「そう怯えることはないさ。ミーア様はとてもお優しい方だ」
無論、そのルードヴィッヒの言葉を額面通りに受け取る者は一人もいない。
「乱暴な手段をとらずとも、君たちの心を開かれるだろう」
心を開かれるが「心を切り開かれる」に聞こえてしまう刺客たちである。
ひぃいっと悲鳴が上がる。
「喉が渇いたんじゃないか？　酒でも用意させようか……」
もう二度と酒を楽しむことなどできなくなるのだから……と、ルードヴィッヒが言外に言っているように聞こえてしまって……。
さらに、舞台装置も極めて効果的に働いていた。
先ほどから、すぐ近くでディオンが絶望的なまでの殺気を放っているのだ。
その後に出てくるであろう、彼よりも恐ろしいミーア・ルーナ・ティアムーンという少女に対する恐怖は効果的に膨らんでいき……、そして！
「お、俺たちに命令したのは……、こ、港湾国の国王陛下だ……」
刺客たちは、あっさり折れたのだった。

第九十六話　ルードヴィッヒ、妄想させる……（後書き）

あるホラー作家さん曰く、怪現象が起きた際、それが幽霊の仕業であると原因がわかってしまっては恐ろしくないそうです。怪現象が起こるアパートで過去に凄惨な殺人事件があった、みたいなことがわかってしまっては恐ろしさが減ってしまうと……。
なにも事件などなく、原因が全くないはずのに、そんな怪現象が起こるはずがないのに、なぜか怪現象が起こる方が恐ろしいと……。
既知の恐怖より未知の恐怖……というお話でした。

第九十七話　進め！　ミーア探検隊！

食物を求めて、ミーア探検隊は森の奥深くへと足を踏み入れた。
すでに、野草の類は結構な量になっていたが、ミーアには目標の物があったのだ。
――できればウサギ……、ほかの肉類でもいいですけれど……。
ミーアの頭の中では、すでにウサギは肉類に分類されている。
島のウサギたちに、今、重大な危機が訪れようとしていた。
「あ、そう言えばカエルは、鶏肉みたいな味がすると聞いたことがございますわ。キースウッドさんは、試したことは？」
「……いえ、あいにくとないですね」
微妙にひきつった顔をしているキースウッドに気づくことなく、ミーアは、ふむ、と考え込んだ。
「南の方に住まう者たちは虫を食することもあると聞きますが……、さすがに少し、それは抵抗がございますわね。ヘビなんかは火さえ通せば、さほど抵抗なく食べられるかしら……、でも、やはりここはキノコが……」
などと、ぶつぶつつぶやいていたミーアに、キースウッドが口を開いた。
「ミーア姫殿下、大変失礼ながらお聞きしても？」
「あら？　なにかしら？」
「ずいぶんと野生の食物に詳しいようですけど、それは、いずれ来るとお考えの飢饉に備えているがゆえなのでしょうか？」
「はて……、その話、どこでお聞きになりましたの？」
「ルードヴィッヒ殿に、馬車で教えていただきました」
ミーアは、その答えにしばし黙り込むが……、
「なるほど、さすがはルードヴィッヒですわ。よい判断ですわね」
すぐに、深々と頷いて見せた。

「ええ、その通りですわ。来年から数年にわたり不作の年が続きます。飢饉は大陸全土にまで及ぶことでしょう。ですから、備えをしておくのが大切ですわ」
はっきりとした口調で、ミーアはそう告げた。
正直なところ……、サンクランド王国がどうなろうと、根本的には知ったこっちゃないミーアである。前の時間軸で普通に飢饉を乗り切っていたので、今回もどうせなんとかなるんだろうな、と思っているのだ。
けれど、ミーアは思い出した。以前、シオンに対して思ったことを……。
レムノ王国に潜入した時、焚火を囲みながらミーアは思ったのだ。いきなり処断するのではなく、事前に警告してくれたってよかったのではないか、と。
同じ学校に通っていて、知らない仲ではなかったのだから、せめて一言でも言っておいてくれれば、ギロチンにかけられることはなかったのに……と。
それゆえに……、ミーアはキースウッドに警告するのだ。
自分がしてもらいたいと思っていることを相手にもするようにという、ごくごく当たり前の良心に従って……では、もちろんない。
全然違う！　それをする理由は、もちろん……。
――わたくしの場合は心が広いので、それで恨みに思うようなことはございませんでしたけれど、シオンの場合にはわかりませんわね……。腹いせに、なにか嫌がらせをしてくるかもしれませんわ！
その点を危惧するミーアである。
――まぁ、それに、シオンやキースウッドさんにもちょっぴり恩はありますし、ここで返しておくのも悪くはありませんし……。
などという複雑な心の動きを経て、ミーアは忠告する。
「サンクランドでも、備えておくに越したことはないと思いますわ」
けれど、キースウッドは小さく首を傾げた。

「ミーア姫殿下のお言葉を疑うわけではありませんが、そのようなこと、わかるものなのですか？」
その疑問を、当然のこととミーアは受け止める。
彼らには未来の記憶も、あの日記帳もないのだ。
いきなりそんなことを言われても、信じるのは難しいだろう。
ゆえに、ミーアは言う。
「信じる信じないは、もちろん、あなたたちの自由ですわ。ただ、わたくしはこう考えておりますの。飢饉が来ることを信じ込み、備えて準備をしていて、けれど実際には飢饉が来なかった場合と、飢饉など来ないと備えを怠って、飢饉が来てしまった場合と、果たしてどちらが悲劇か、ということを」
「なるほど、常に最悪に備えよ、ですか……」
感心した様子のキースウッドに、ミーアは、けれど首を振る。
それから、悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「いいえ。笑って誤魔化せるのはどちらかという話ですわ。もしも、わたくしが飢饉が来るぞと言って、備蓄を増やさせて……それで実際に来なかった場合には、溢れた備蓄はわたくしの誕生祭にでも、民衆に振る舞って、食べてしまえばいいのです」
それは、わがまま皇女の無駄遣い。されど、食事を振る舞われた側も苦笑いで済ますことができるわがままだ。
「どちらにせよ、そう悪いことにはならないのではないかしら？」
もしも未来が変わって小麦が大量に余ったら、お腹いっぱいケーキを食べてやろうと企むミーアなのである。それはそれで幸せな結末になるだろうと、ミーアは信じて疑わない。
そう、ケーキがないより、余っているほうが、きっと人は幸せになれるのだ。
「なるほど、素晴らしいお考えですね」
そんなミーアを見て、キースウッドは尊敬の念を新たにするのだった。
そうこうしている間に、二人は森を抜けた先の岩場に到達した。

島の中央から、やや西側に寄った場所だ。
「この辺りは少し歩きにくいですわね……。ひゃっ！？」
直後、ガラリと石が崩れる。バランスを崩しかけたミーアを、キースウッドが素早く抱き寄せた。
「気を付けてください。地盤が緩くなって、崩れやすくなっているみたいですから。あまり、こちらには来ない方が良いかもしれません」
「そうですわね。みなにも警告しておいた方がよさそうですわ。泉とは反対方向ですし、あえてこちらに来る必要はございませんわね……」
ミーアは、すぐそばでキースウッドを見上げて、それから、からかうような笑みを浮かべた。
「それにしても、キースウッドさんは女の子の扱いが上手いですわね。相当な戦果を挙げられているのではないかしら？」
「ははは、勘弁してください。シオン殿下のお供で、そんな暇ありませんよ」
頬をかきつつ、苦笑いを浮かべるキースウッドであった。

第九十八話　和気あいあいサバイバル

ミーアたちが大量の野草と木の実類を抱えて戻ってくると、浜辺ではすでに料理の準備が進んでいた。

パチパチと音を立てる焚火、木の枝で作った即席の台の上には立派な金属製の鍋がかけられていて、中にはぶつ切りにされた魚がぐつぐつと煮込まれていた。

ほかにも貝や海藻類も入っていて、豪華海鮮鍋といった様相を呈していた。

「まぁ、鍋！」

それを見たミーアが、思わず歓声を上げる。

仮にウサギを捕らえたとしても、鍋ばかりはどうにもならないとあきらめていたのだが……、ここに、絶品ウサギ鍋への道が開けたのだった。

この島に住むウサギたちがミーアの胃袋に収まる日も、そう遠くないのかもしれない。

「よく鍋なんか見つけましたね」

感心した様子のキースウッドに、ニーナは表情一つ動かさずに言った。

「大人数用の鍋でしたから、多分、風で飛ばされることはないと思いまして。上手く木に引っかかっていてなによりでした。大体のものは煮込むか焼くかすればなんとかなりますから鍋があると便利かと」

その言葉に、キースウッドは遠い目をした。

「ああ……それは至言ですね……。料理に熟達した方の実に素晴らしい考え方です。あなたのような方がいてくださって、とても心強いです」

まるで遠い異国の地で同胞を発見した時のような……そんな顔を

するキースウッド。それを見て首を傾げていたミーアであったが、すぐに、まぁいいか、という感じで、
「鍋があるのは素晴らしいことですわ。ウサギを煮るのもよし、キノコを入れるのもよし……」
キースウッドがまたしても遠い目をしたが、ミーアは特に気にしなかった。
細かいことは気にしない、目の前の鍋よりも器が大きいミーアなのである。
「それにしても、海藻はともかく魚なんかよくとれましたわね。釣り竿なんか持ってましたの？」
「竿は、そのあたりの木を使ってね。釣り糸は、申し訳ないが君の従者の大切なものを少しわけてもらった」
「え？　アンヌの？」
ミーアはアンヌの方に目を向けた。アンヌの赤みを帯びた長い髪を見て……。
「まさか……」
「女性にとって髪は命だということはわかっていたんだがね……」
申し訳なさそうに言うアベルに、アンヌはおかしそうに笑った。
「放っておいても伸びてくるものですし、釣り糸に使うぐらいなら切っても、そんなに変わりません。それに、ミーアさまにお腹一杯お魚を食べていただけるなら……お役に立てるなら、それが私にとってなによりの幸せですから」
「アンヌ……」
忠臣の健気な言葉に、思わずウルっと来てしまうミーアである。
「けれど、海鮮鍋ですと、わたくしたちが収穫してきたものは、合わないかもしれませんわね……」
そう言って、ミーアがその場に並べたのは、複数種類の野草と木の実だった。
「おお、すごいな。そんなにたくさんとってきたのかい？」
目を丸くするアベル。シオンやニーナも驚いた顔をしている。

「ふふん、このぐらい大したことでは、ございませんわ」
パッと聞いた感じ、謙虚なことを言っているミーアであるが、その顔は、これ以上ないぐらいの渾身のドヤァ！　顔だった。
「キースウッドさんにも手伝っていただきましたし……」
「いえ、ミーア姫殿下のお知恵には感服いたしました……」
深々と頭を下げてから、キースウッドは遠くを見つめた。
「……できればキノコへの好奇心については、もう少し抑えて慎重になっていただけると、なお良いのですが……」
などと、ぶつぶつつぶやき始めたが……、ミーアは小さく首を傾げるのみだった。
細かいことは一切気にしない、大器ミーアである！
「ああ、それと満月ヤシの木も発見いたしましたの。甘い果汁が素敵ですけれど、硬い殻が食器として使えるのではないかと思いまして……」
「一つ、参考のために持ってきました。割ってみて使えそうでしたら、あとで採って参りましょう」
それを聞いて、ニーナが大きく頷いた。
「ありがとうございます。鍋ですとどうしても食器が必要と思っていたところです」
それから、ミーアが採ってきたものに目をやって、小さく首を傾げた。
「お持ちいただいた野草の類も、下処理して鍋に入れてしまいましょう。あとはヤシの果汁も、味に深みをつけるのに使えるかもしれません」
その〝できる女〟といった口調に、ミーアは瞳を見開いた。
「まぁ、ニーナさん、まさか、この状況でも問題なく料理ができるというのは本当でしたの？」
「帝国の皇女殿下であらせられるミーアさまや、王子さま方にお出しするには、はなはだ不足ではございますが……、最善を尽くそうと思っております」

頭を下げるニーナに、ミーアは感嘆の声を上げる。
「いえ、この状況の中で十分すぎますわ。このお鍋、すごくいい匂いがしておりますわよ」
「そうですね。これは、味付けは塩のみなのですか？」
作るのを見ていなかったキースウッドが尋ねると、ニーナは小さく首を振り、
「いつでもエメラルダお嬢さまに美味しい食事を食べていただけますよう、魔法の粉を常備するようにしています」
「ま、魔法の粉、ですの？」
小さく首を傾げるミーアに、ニーナは首に下げていた小瓶を取り出して見せた。
「海外でとれる香辛料にございます。これを一振りすると、味が格段によくなるのです」
「まぁ！　そのようなものがっ！？」
興味津々に目を輝かせるミーアだった。

和気あいあいとした雰囲気。その様子をただ一人、エメラルダだけが、むっすーっと頬を膨らませながら見つめていた。

第九十九話　エメラルダとミーアの眠れない夜

――まったく、納得がいきませんわ！
不満たっぷりにエメラルダは、ニーナ特製海鮮鍋を口に入れる。
満月ヤシの汁のコクと海水の塩気、さらにニーナの魔法の粉（香辛料）のおかげで、ポッと体が温まる素晴らしい味だった。
ミーアたちのとってきた野草の類も程よい茹で加減で、ちょっとした町の宿屋の食事より美味な鍋料理が出来上がっている。
それはいい。グリーンムーン公爵家のメイドとして、このぐらいのものが作れなければ話にならない。
けれど、不満なのは……、
――どうして、みなさん、私を褒めたたえませんの？
ということだった。
従者の手柄は主の手柄。であれば、ニーナが美味しい料理を作ったのは、エメラルダの功績として讃えられなければならないはず。
にもかかわらず、ミーアたちはニーナの料理の腕を褒めるばかりだった。
――こんなの納得いきませんわ！
ちなみに、エメラルダも実は仕事を手伝っていた。
男子である王子殿下たちはまだしも、ミーアまで働いているとあっては、まさかサボるわけにもいかない。もしもミーアがサボっていれば、
「高貴な身分の者がそのような仕事をするなど……」
「力仕事は殿方にお任せいたしますわ！」
などと言うこともできたのだが……。
自分より高貴な身分かつ年下で女子なミーアが働いていては、自分が働かない理由はない。
それゆえ不満の矛先は、自然、ミーアの方に向いていく。

――昔からミーアさまはこうでしたわ。私たち、高貴なる血を持つ者たちは、堂々と平民が働くのを見ていればよろしいのですわ。それが伝統というものですわ！

格式と伝統、大貴族とはかくあるべしという教えは、エメラルダの思考の根底にあるものだった。

そんなエメラルダにとって、ミーアの行動はまるで理解できなかった。

いちいち従者の名前をおぼえ、つまらない疲れる仕事でも積極的に自分からしようとする。そんなミーアの行動は、エメラルダから見ると常識を大きく逸脱した、皇女にあるまじき行動に見えたのだ。

――ミーアさまのせいで、私まで……。まったく迷惑な話。

そのムカムカは、その日の夜まで続いた。

みなが慣れない島での生活に疲れて深い眠りに落ちる中、エメラルダ一人が、腹立ちのせいで眠れずにいたのだ。

「……ぜんっぜん、眠れませんわ……。少し散歩でもしてこようかしら……」

むくりと体を起こしたエメラルダは、暗い中に目を凝らす。

ぐっすりと眠っていて、起きだしてくる気配が一切ない面々を見て満足げに頷いてから、エメラルダは立ち上がった。それから洞窟の出口の方に向かおうとして、はたと立ち止まる。

「……そういえば、この洞窟の奥には行くなって、言ってましたわね……」

シオンとキースウッドが言っていたことを思い出し、エメラルダはにんまり笑みを浮かべた。

「そういうことであれば……行かないわけにはいきませんわね。誰もこの私を縛ることなど、できなくってよ」

ちなみに森の奥の岩場にも行くなと言われていたが、さすがに夜の森を抜けようなどとは思わない。だって怖いし……。

だから、せいぜい洞窟の入り口から出てすぐのところをウロウロするだけのつもりだったが、洞窟の中であれば話は別だ。

ということで、エメラルダはこっそり足音を潜ませつつ、洞窟の奥の方へと足を踏み入れた。
壁に手をつき、ある程度ミーアたちから離れたところまで来ると、
「ふっふっふ、この暗さでは行けないと油断しましたわね」
そっと胸元のペンダントを取り出した。
蓋を開けると、暗闇の中に、ぼんやりとかすかな明かりが灯った。
そのペンダントには、月灯石（アリスタル）と呼ばれる、とても貴重な石が使われていた。
日光を吸収し、夜になると光りだすその石は海外から取り寄せたものだった。
「それにしましても……、この洞窟、かなり深いですわね。奥はどうなっているのかしら？」
エメラルダは首を傾げつつ、ずんずん洞窟の奥に向かっていく。
行くなと言われると余計に行きたくなるのは、恐らくは血筋だろうか。徐々に狭くなっていく洞窟に構うことなく、身を屈めながら進む。
進んで、進んで行く……のだが、一向に何もない。
面白いものもないし、変わったものも見当たらない。
「ふむ、なにがあるのかと思えば……、特になにもないのではございませんの」
飽きたから、そろそろ帰ろうかしら……などと思った時だった。
かすかに上り坂になっているところを越えると、その先にあったのは……。
「あら？　この先は、下り坂になってますわね」
近場にあった、ちょうど握りやすい太さの鍾乳石を掴みつつ、坂の下はどうなってるのかしら……、と灯りをかざしながら身を乗り出したところで……。
「あら……」
ボコッと言う嫌な音を手の平に感じる。
「あ……あらっ！？　あらあらっ！？」

などと間抜けな声を上げながら、エメラルダは坂を転がり落ちていった。

その日の夜、ミーアは遠くで女の人の悲鳴のような声を聞いてしまったような気がした。

もしや幽霊なんじゃ？　と想像力をたくましくしてしまったミーアは、すっかり眠れなくなってしまって。

「お、おほほ、いやですわ。邪教徒の幽霊とか、そんなの作り話にきまってますわ。あれは、風の音、風の音に決まってますわ。それ以外にありませんわ……。あ、アンヌ、アンヌぅ……」

結局はアンヌに抱き着いて寝たのだが、まぁ、どうでもいい話なのであった。

第百話　呪いの盟約

「これはまた……、意外な大物が釣れたもんだね」
刺客たちを皇女専属近衛団の者たちに任せて、ルードヴィッヒ、ディオン、バノスの三人は部屋を移した。今後のことを相談するために。
「まさか、ガヌドスの王家が関係しているとは思わなかったですな」
バノスはため息混じりに首を振る。
「ここは、まさに敵地といったところですが。さぁて、この先なにがあるやら……」
「んー、なにもないんじゃない？　表立って帝国に敵対したらつぶされるだけだ。まぁ、そう簡単に関与を認めないだろうけどね」
ディオンは言葉を切って、ルードヴィッヒの方を向いた。
「問題は僕たちの方がどうするかってことだろうね。どうする、ルードヴィッヒ殿？」
「そうだな……。相手が敵か味方か、はっきりしているだけで、だいぶやりやすくはなるだろう」
腕組みをしつつ、ルードヴィッヒは言った。
「こちらが暗殺者の雇人の正体に気付いている、少なくとも疑いを持っていると知らせれば、ある種の牽制にはなるだろう。あるいはミーアさまが帰られれば、なんらかの交渉の材料として使われるかもしれない。が……」
その上で……、
「やはり、少し気になるな……。ガヌドス国王とは早いうちに会っておいた方がいいように思う」
イエロームーン公爵家と港湾国との関係性……。そこから浮かび上がる推論……。
その真偽を確かめるためには、どうしても国王からの話を聞いて

おきたいところだった。
「となると、殴り込みでもかけるかい？　まぁ、僕とルードヴィッヒ殿だけならば、忍び込むことも可能だとは思うが……」
「いや、正々堂々と謁見を申し込もう。暗殺者がこちらの手にある以上、無視もできないはずだ」
ティアムーンにとってもガヌドスにとっても、関係がこじれるのは望ましいことではない。ゆえに、可能であれば、ただの会談という形でいろいろと決着をつけたいし、相手もそのはずだ。
そんなルードヴィッヒの読みは当たる。
二日後には謁見の許可が下り、ルードヴィッヒとディオンは揃って城の一角、謁見の間を訪れることになった。
小国とはいえ、相手が国の長たる国王であることを考えれば、これは異例中の異例の出来事と言えるだろう。
「これはこれは、かの帝国の叡智、ミーア皇女殿下の右腕と名高いルードヴィッヒ・ヒューイット殿と、帝国が誇る最強の騎士ディオン・アライア殿。両名とも噂はかねがね聞いておるぞ」
ガヌドス国王は、およそ王族というには相応しからぬ風貌の男だった。
どこか媚びるような卑屈さを感じさせる笑みと口調からは、さながら老齢の文官のような雰囲気さえ感じられた。
「このたびは急な会談に応じていただき、感謝いたします」
「なに、かの帝国の叡智の忠臣を無下にはできんよ。それに聞けば何やら重大な誤解がある様子。帝国と我が港湾国との間に無用なる争いを巻き起こしては互いの得にはなるまい」
穏やかな口調で話す王を、ルードヴィッヒはジッと観察していた。
一見すると小物、臆病で卑屈という印象を受けるガヌドス王であったが……、その瞳には鋭い知恵の輝きが見て取れた。
知恵者で策謀家。決して油断のできる相手ではないとルードヴィッヒは判断する。
ゆえに……自身に御しえない相手でもない、とも。

なぜなら、真の知者であれば……、例えば尊敬する師匠や、忠誠を捧げる主であったなら完全に愚者を演じ切るであろうから。
知性のきらめきの、その一片すらも隠蔽し、相手の油断を誘うだろうから。
それができていない時点で、相手は十分に打ち倒しうる存在と、ルードヴィッヒは見ていた。
「では、さっそく詳しい話を聞こう」
国王のその言葉とともに、ルードヴィッヒは小さく息を吸い、思考を切り替える。
「実は、先日、私は命を狙われまして……」
「ほう。それは、この港湾国内でのことかね？」
「王都の一角、教会のそばの路地において」
「それは大変失礼をした。あの辺りは、確かにあまり治安がいい地域ではないのでな。この港湾国は土地柄ゆえか、どうしても海賊上がりのならず者が絶えなくてな」
――なるほど、無法者が勝手にやったこと、と言い張るつもりか。
ルードヴィッヒは小さく眼鏡を押し上げて、
「その者たちを捕らえ、尋問したところ、彼らはあなたの密命を受けてことに及んだと、そのように申しております」
「なんと！　愚かなことを。まさか、貴公、そのような下賤（げせん）な者どもの言うことを真に受けて、ここにやってきたのではあるまいな？」
大げさに驚いて見せる国王。それをルードヴィッヒは黙って観察していた。
「しかし、ただの無法者の暴挙と思ったが、あるいは我が国と帝国との仲をこじれさせようという策謀やも……。ふむ。どうやら、貴公は、そのならず者どもの言葉を信じているようだな」
「そうですね。彼らの言を信じるに足る確証を得ています」
無論、ただのブラフだが……、ここはあえて踏み込む。
国王からなにがしかの反応を引き出したいと考えてのものだったが……。

「ははは、ならば仕方あるまい。元海賊を訓練してみたのだが、どうやら鍛え方が足りなかったか。なにしろ、我が国は軍隊の整備もままならぬ小国ゆえ、使える手ごまが少なくてな」
「……つまり認める、と？」
わずかばかり驚きつつも、ルードヴィッヒは問いただす。
「わしがいかに否定しても貴公は納得せんであろう。であれば、その前提に乗って話をするも一興。なに、どうせここで何を言っても、どうということもない。そのぐらい、貴公もわかっていよう」
――なるほど、言った言わないの水掛け論にするつもりか……。海賊上がりの者たちを使ったのは、そのためでもあるのだろうな。
いかに、ルードヴィッヒやディオンがガヌドス国王の自白を主張しようとも、王本人が否定してしまえば意味がない。
この国と関係の深いグリーンムーン公爵は平民であるルードヴィッヒより、国王の言葉に信を置くだろう。海賊の証言などあてにならないと主張し、とりなそうとするだろう。
この場にミーアがいれば、決して国王は認めなかったに違いない。
瞬時にそこまで考えて、ルードヴィッヒは頷いた。それなら、それで構わない、と。
そんなことは些末な問題である。むしろ聞きたいのは、その先の部分なのだから。
「では、この場限りのことということで単刀直入にお聞きしますが……、私を狙った理由はやはり、イエロームーン公爵家とガヌドスとの関係を知られないためですか？」
「さて……、なんのことやらわかりかねるな。イエロームーン公爵家とは、確かに古くは付き合いがあったが、それが何か……」
「グリーンムーン公爵家は切りやすい命綱。そういうことではありませんか？」
ルードヴィッヒは推測した。
ガヌドス港湾国の目的……、それはすなわち、ティアムーン帝国を依存させ、時期が来たら餓死させることではないか、と。

現在の帝国の食糧自給率は極めて低い。言い方を変えるならばそれは、かなりの割合を外国からの輸入に頼っているということだ。
当たり前のことだが食べ物が手に入る算段が付かないのに、自領の農地を減らそうなどとは、さすがに貴族たちも思わない。いかに反農思想という馬鹿げた思想にとりつかれていたとしてもだ。
そして、その輸入先の一つがガヌドスであった。
海に面したガヌドス港湾国は海産資源の豊かな国だ。豊富な海の幸は帝国の食の一部を確実に彩るものであり、今やなくてはならないものになりつつある。
ゆえにこそ……、飢饉などにより食料が不足した際に、ガヌドスからの輸入が途絶えれば、帝国にとっての影響は計り知れないものになる。
もしも、その状態を作り出すことがガヌドス港湾国の目的であったとするなら……。
「その場合、避けたいのは早期の帝国の軍事介入だ。疲弊しきる前に帝国に軍を動かされては、港湾国の戦力では抗しようがない。ゆえに、港湾国は一貫して、帝国の友好国であるふりをしなければならない。輸入を制限するのも、あくまでも交渉の不備のせいにしておかなければならない。だから、盟友であるイエロームーン公爵家が交渉役ではいけなかった」
グリーンムーン公爵をそそのかして国外にでも脱出させる。そうしておきながら、表ではグリーンムーン家としか交渉しないと突っぱねる。
さらに万が一、軍を動かされそうになった場合には、四大公爵家の一角、イエロームーン公爵に働きかけてもらい妨害する。帝国内に大貴族の協力者がいれば、なにかと便利だろう。
無論、グリーンムーン公爵が計算通りに動くかはわからないが、もしも上手く行かなくても暗殺して、死体を隠して行方不明にしてしまえば良いのだ。
グリーンムーン家の家督の継承など、ごたついている間にも時間

は稼げる。
ルードヴィッヒの考えは、そのような形のものだった。
「あなたたちは帝国に敵対して、勝てるつもりだったのか？」
「さて……敵対？」
国王は、口元を穏やかに微笑ませて言った。
「我が国が帝国に敵対するなど思いもよらぬこと。そうではないかな？　港湾国には海賊を取り締まるための治安維持軍はあるが、強大なる帝国軍と比べればそれは微々たるもの。ろくな武力を持たぬ我々が強大無比な帝国に敵対するなど悪い冗談だ」
その物言いに、ルードヴィッヒは慄然とした。
まさか、軍隊の弱さを自国の潔白に利用しようなどと……、陰謀を覆い隠すベールにしようなどとは思いつきもしなかったから。
「飢饉が起きた時に帝国への食糧輸出を止めること、仮にそのような企みがあるとして……それを理由に戦端を開くような真似ができるとお思いか？」
それが軍事行動であったなら……。帝国への軍隊による侵攻計画を掴んだというのであれば、それは立派な開戦の理由になるのだろう。なぜなら、それは明確な攻撃であるからだ。
けれども将来「もしも飢饉が起きた」ならば「食料を売ることを止める」ということは攻撃とは言い難い。
あまりにも婉曲的に過ぎて、危機感をいまいち実感しづらいのだ。
その計画は、そもそも飢饉が起きなければ発動しないわけで……。
つまるところ、ガヌドス港湾国の陰謀は積極性にも攻撃性にも欠けるものなのだ。
極めて曖昧で、そもそも陰謀とすら呼べないような、それゆえに存在の確認も糾弾も難しいものなのだ。
ルードヴィッヒは自身の推論に、ある程度の自信を持ってはいるのだが、あくまでもそれは推論の範囲を出るものではない。
夢物語であると言われてしまえば、言い返すことのできないものであり、それを理由に港湾国に戦争を仕掛けられるとは思えなかっ

た。
蛮族の住まう国であるならばいざ知らず、同じ中央正教会の神を信仰する者同士、大義名分もなく戦端を開いては、他国に糾弾する隙を与えることになるからだ。
――そもそも帝国がしっかりと食料自給の体制を整えさえすれば、ガヌドスの行動は攻撃にはならない。
悪しき反農思想……、それさえなければ、ガヌドスの企むようなことは起こりえないことなのだ。
ルードヴィッヒが違和感を覚えるのは、むしろそこだった。
――気が遠くなるほど長い年月をかけて執拗に計画されてきたにもかかわらず、相手国の失敗や天候に頼る要素が大きすぎる。飢饉に関して言うならば、数十年に一度は起こるものということができるが、帝国の失政については、下手をするとあっさり覆されてしまうことだってあるだろう。
反農思想自体が、ガヌドスの盟友イエロームーン公爵家が広めたものと考えられなくもないが、どこか引っかかるものを感じる。
いかに四大公爵家の一角とはいえ、果たしてそこまでの影響力を行使できるものだろうか。貴族には、ほかの四大公爵家の派閥の者もいるのだが。
そこまで考えたところで、ルードヴィッヒは小さく首を振った。
「いずれにせよ……、我々はミーアさまのもと、帝国を改革していきます。食料自給の体制がきちんと整えば、ガヌドス港湾国の計略も形を成さなくなることでしょう」
そう告げられても、ガヌドス王は特に取り乱すこともなかった。
「そうか。友好国の問題が改善されるのは我が国としても喜ばしいこと。我が国との食料の取引が減ってしまうかもしれぬのは少しばかり残念ではあるが、まぁ、帝国内のことには、なにも口は出せぬな。我が国は弱小国なのだから」
その言葉を聞き、ルードヴィッヒは得体の知れない不安を覚えるのだった。

ルードヴィッヒらを見送った後で、王は穏やかな笑みを浮かべた。
「最古の忠臣イエロームーン公爵家と、皇帝の寵愛を受けし皇女とが対立するか。なるほど、我ながら面白い時代に生まれたものだ……」
帝国を縛る呪いの盟約、それが今、明らかになろうとしていた。

第百一話　チキン探偵ミーア、推理する！

「ん……、うーん……アンヌ？」
ミーアはぽやーっとした寝ぼけまなこを、こしこし両手でこすった。
ぼんやりと霞む視界の中に、忠義のメイドの姿はなかった。
「あら……？」
……というか、むしろ誰の姿もなかった。
「……あら？」
首を傾げつつ、そっと身を起こす。
薄暗い洞窟の中に目を凝らすが、やはり誰の姿もない。
「変ですわね……昨日は、確かにアンヌと一緒に……っ！？」
唐突に、昨晩の記憶が脳裏に甦る。
遠くの方で聞こえた世にも恐ろしい悲鳴……。
この島には自分たち以外いないと思っていたのに聞こえてしまった人の声。
あれは、いったいなんだったのか？
「わたくしたちだけしかいないって……そう思い込んでおりましたけど……」
もしかしたら……いたのかもしれない。
それも、人間ではない別のナニカが……。
そう、それは、例えば……邪教徒の亡霊とか……。
「ひぃっ！」
ミーアは息を呑み込んだ。
背筋を冷たい手で撫でられたように、ゾワゾワッと悪寒が全身を駆け抜ける。
「あっ……アンヌ、アンヌぅ」
小さくかすれるような声で、名前を呼びながら、洞窟の入り口に

向かう。
大きな声は出すことができない。なぜなら……、そんなことをしてしまったら、自分がいることがバレてしまうから……。
この島に巣食う、オソロシイ、ナニカに……。
「ひぃいいっ！　あ、アンヌ、どこですの、アンヌぅ……」
微妙に涙目になりつつ洞窟から顔を出したミーアは、直後っ！
こちらに駆け寄ってくる人影に、悲鳴を上げそうになって！
「大変です、ミーアさまっ！」
「あ、アンヌぅ……」
「わぁっ！」
起きて早々抱き着いてくる暑苦しいミーア。驚きの声を上げつつも、アンヌは冷静に、その小さな体を受け止めた。
「どうかされたんですか？　ミーアさま、悪い夢でも見られたんですか？」
アンヌに優しく背中をさすってもらい、ようやく人心地つくミーアであった。
「あ、アンヌの方こそどうしたんですの？　それに、みなさんはどこに？」
「あ、そうでした。大変なんです。詳しい話はみなさんが戻ってきてからなんですけど、実は、エメラルダさまがいなくなってしまわれたようなんです」
「は？　エメラルダさんがいない……？　どういうことですの？　それは……」
やがて、シオンとアベル、キースウッドとニーナが洞窟へと戻ってきた。
改めて、説明を聞くと……、
「朝、起きた時に、エメラルダさまがいらっしゃらなかったんです」
ニーナは、わずかばかり困惑した様子で言った。
どうやら、それ以上のことはわからないらしい。
少なくとも、この周辺にはエメラルダの姿はなかったようだが…

…。
「ふむ……」
そこで名探偵ミーアは、一瞬で推理を組み立てる。
一、自分だけ除け者にされて、いじけて家出した……家じゃないけど……。
二、無人島を冒険してみたくなった
三、美味しい食べ物を探しに……
――ぶっちゃけどれもありそうですわ……。あるいは、わたくしが考えつかないようなしょーもない理由で出て行ったのかもしれませんし……。
ミーアは、ため息混じりに首を振る。
「ああ、もう、本当に、あの方は……」
「もしかしたら……お一人で泉の方に行かれたのかもしれません。朝の水浴びか、水を飲むために……」
おずおずと発せられたニーナの言葉に、ミーアは頷いて見せる。
「なるほど、あり得ますわね……。朝一番には、澄んだお水を口にできるのが当然、なんて言いかねませんし……。では、急ぎ泉の周りを探してみましょうか」
「いや、全員で行っても意味がない。キースウッド、すまないが、浜辺の方に様子を見に行ってくれ。海岸線沿いに、海の様子を一通り見てくるんだ」
「エメラルドスター号が帰ってきているか見に行ったかもしれない、ということですね？」
「それと海賊だ。万が一、怪しげな船が泊まっていたら、拉致された恐れもある」
シオンの指摘で思い出す。
――そういえば、この洞窟も、人の手が入っている可能性があるって言ってましたわね。

とすると、海賊の拠点になっている可能性も、まぁ、ないではないのかもしれない。
「彼女が自分以外の者の意志によって戻ってこないのだとすると、島に何者かが潜んでいたか、海の外からやってきた何者かに捕らわれたと考えるべきだ。あくまでも念のためだが、一応警戒しておこう……。それと、ニーナ嬢とは俺が一緒に行く。アベルは……」
「わたくしももちろん行きますわ。泉と反対側を探しましょう」
サバイバルの専門家を自任するミーアは、ふんすっと鼻息荒く言った。
それから、ミーアはアンヌの方を見つめる。
「アンヌ、申し訳ないのですけど、あなたにはここで留守番をしていただきますわ。エメラルダさんが帰ってきたら、しっかりと引き留めておくのですわよ」
「わかりました。お食事の準備も、できる限りでしておきます」
幸い、昨日、ミーアが考えなしに山ほどとってきた野草の類がある。
きちんと食べられるかどうかは、キースウッドのチェック済みだ。
「では、昨日もしましたが、そこの野草の節をとって、それから……」
ニーナが処理の仕方を話している間に、キースウッドは先行して出発する。
「アンヌ嬢、単独で行動させてしまい申し訳ない。もしも怪しげな者がやってきたら、躊躇わずに身を隠してくれ」
そんな指示を残しつつ、シオンとニーナも出発する。
「では、行ってまいりますわね、アンヌ」
「はい、お気をつけて。ミーアさま」
最後にミーアとアベルの二人が洞窟を後にした。
向かう先は泉の反対側。昨日、キースウッドと探索した辺りである。

第百二話　生きるべきか、死すべきか……

森の中、木々の間を縫うようにして伸びる曲がりくねった獣道を行く。
ただでさえ木の根が顔を出し、ボコボコとしている上に、土の部分も微妙にぬかるんでいて……、ミーアは幾度となく足を取られそうになりながらも懸命に足を動かした。
「昨日、ボクたちが寝ている間に、また一雨降ったみたいだね。足元に気を付けて」
そう言って、アベルが差し出してきた手をしっかりと握って、ミーアは笑みを浮かべた。
「ありがとうございます、アベルはやっぱり紳士ですわね」
ミーアの言葉を聞いて、アベルは、微妙に視線を逸らした。
「こ、転んだら大変だからね。大したことはしていないよ。それより、今年はよく雨が降るね」
空を見上げながら、アベルは言った。
それでミーアは思い出す。アベルにも話しておかなければならない大切なことを。
いや……思い出すというのは正確ではない。
実は、少し前から考えてはいたのだ。
アベルに、未来の知識にまつわることを教えるべきか否か、ということを。
先に起こることを知っている……などと、そんなことを言い出したら、どんな風に思われるのか……。特に、アベルにだけはどうしても信じて備えていてほしかったから、失敗はできない。
ついつい不安になってしまって、今まで言い出すことができなかったのだ。
だが、タイムリミットは迫っている。

ミーアは意を決して、アベルに言った。
「そうですわね。ねぇ、アベル、キースウッドさんにはすでに言ったことなのですけど、あなたにもきちんとお話しておきますわね。近いうちに大きな飢饉が来ますわ」
ミーアは、あえて淡々とした口調で、それを伝えた。
正直な話、サンクランドはどうなろうと知ったことではないが、レムノ王国は心配なのだ。なにしろ、少し前に革命騒ぎが起きているし、アベルの故郷でもある。
できれば、平和であってもらいたい。
ゆえに、あえて大げさではなく、事実を伝えるようなさりげない口調で告げたのだ。
それを聞いたアベルは少しだけ驚いた顔をしたが……。
「それは、確かなことなのかい？」
「無論、確たる証拠は提示できないのですけど……でも」
言葉を続けようとするミーアに、アベルは優しげな笑みを浮かべた。
「いや、ミーアが言うのだったら、そうなんだろう。信じるよ」
その答えが、ごくあっさりとしたものだったから、ミーアは逆に驚いてしまった。
「え……？　あ、し、信じてくださいますの？」
「ああ、この島から出られたら信用のおける者たちに話して、それから父上にも話を通しておこう。信じてもらえるかは微妙なところだけど、この夏の様子を見れば動く者は必ずいると思う」
「いえ、でも……どうして？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、アベルは苦笑いで肩をすくめた。
「君がボクを騙す理由がないしね。それに、もしも飢饉が来なかったとしても、ミーアの言ったことだ。なにか意味があるのだろう。あるいは、たとえ意味がなくっても……君が優しさから警告してくれたのだと、ボクは信じるよ」

「え、あ……、はぇ……？」
自らを真っすぐに見つめてくるアベルに、その澄んだ視線に、ミーアは言葉を失った。
アベルが合理性ではなく、ただ純粋にミーアへの信頼から、その言葉を受け入れると言ってくれたから……。
そのことを理解して嬉しいやら、なんやらで、頭がポーっとしてしまったのだ。
「さぁ、行こう」
ぷいっと前を向き、ミーアの手を引くアベル。どうやら、彼も言った後で自分の言葉が恥ずかしくなってしまったらしく……。その耳が少しだけ赤くなっていることに、ミーアは気づいた。
――もっ、もう、ぐいぐい来すぎですわ！　アベル。でも、そこが素敵ですわ……。
ミーアの脳内には今、ぽやぽやと大輪の花が咲き誇っていた！
そんな幸せ気分を満喫していたミーアの目の前に、昨日も来た岩場が現れた。
森の緑が唐突に失せ、茶色っぽい地肌がむき出しになっている。地面の岩は無数のヒビが入り、砕けて、実になんとも歩きづらそうだ。
「ここには、さすがに入っていかないんじゃないかな？」
疑問を呈するアベルに、ミーアは静かに首を振る。
「確かにいかにも、危なそうですわ。進む意味などなさそうですし、無駄な労力といえるかもしれませんけれど……、だからこそ、エメラルダさんならあえて行きそうですわ！」
そもそも、ミーアが知る限りエメラルダという人は、自分より目上の者、例えば親などに言われた言いつけはきちんと守るくせに、自分と同じか下だと思っている者の言葉には、積極的に逆らいたくなる厄介な性格をしている。
――とっても面倒くさい性格ですものね、エメラルダさんって……。

ちなみに、ミーア自身も手を出すなと言われているキノコにこそ、積極的に手を出したくなってしまう性格なわけだが……。
人は、自分の欠点にはあまり目がいかないものなのであった。
二人は似た者同士なのだ。
「昨日、わたくしの口からきちんと注意しておけばよかったのですけど……、キースウッドさんに説明を任せたのは失敗だったかしら……？」
イケメンならば、きちんと話を聞くかと思っていたが、甘かったかもしれない。
「先がどうなっているかわかりませんが、注意しながら行きましょう」
そう言って、ミーアは岩場に足を踏み入れて……。
がらり……。と、どこかで、なにかが崩れる音がした。
……どこで？
ミーアは不思議に思いながら、足元に目を移し……、真っ暗な闇を見つけた。
まるで、大地が口を開けて自分を飲み込もうとしているみたい……などと思ったところで。
「……はぇ？」
ぐらり、と体が投げ出される感覚があった。
――ああ、この感じは……ひさしくなかった浮遊感。また、わたくし、落ちるのですわね……。あら？　でもこれ、下が川とかじゃないと死んじゃうんじゃ……？
「ミーア！」
直後に聞こえたアベルの声。次の瞬間、ミーアは自分が力強く抱きしめられたことに気づく。アベルが、ミーアを守るべく、自らも虚空に身を投じてくれたのだ。
「きゃっ、あ、アベル……？」
アベルの胸に頬を押し付けるような形になりながら、ミーアは思った。

――これって、死に方としては結構、ありかもしれませんわ！
割と……しょーもないことを。
――うーむ、生きるべきか死ぬべきか……、これは大変な問題ですわ……。
過去最高にステキな死に様を前に、若干哲学的なような、そうでもないようなことで頭を悩ませつつも、ミーアは落ちていくのだった。

第百二話　生きるべきか、死すべきか……（後書き）

こういうことを考えている人が死んじゃうことはあまりありません……。

第百三話　アンヌの決意

「ああ、お仕事、終わっちゃった……」
ニーナに指示されていた野草の下処理をすべて終えてしまったアンヌは、深々とため息を吐いた。
まさか、こんな風に島に取り残されるなんて想像もしていなかったから、なにをしていいのか、いまいち定まらないのだ。
「あーあ、ミーアさまがいらっしゃれば、いろいろとしたいことはあるのに……」
こんな場所だ。髪や肌の状態は常にチェックして、早め早めにケアしていきたいところである。アンヌは、ミーアの美しさの維持に余念がないのだ。
「それにしても、エメラルダさまは、どこに行かれてしまったんだろう？」
アンヌ自身は別にエメラルダのことは好きではない。だからと言って、死んでしまえとか、ケガをしろとは思わない。無事で見つかってくれればいいな、とごく自然に思っていた。
ミーアがなんだかんだ言いつつも友だち扱いしているから、なおのことそう思う。
だからこそ、エメラルダの行方は気になった。
「……本当に森の中に行ったのかな……」
実は、アンヌは先ほどからずっと気になっていることがあった。
それは、
「エメラルダさまが……、一人でこの洞窟を出て行かれるかしら？」
そのことだった。
みなはごく当たり前のように、エメラルダが洞窟から出て行ったと言っていたけれど……。
「一人で森の中を歩くような勇気があるようには見えなかったけど

な……」
アンヌは、ぽつんと、そんなことをつぶやく。
無茶をするにも、それなりに勇気がいるものなのだ。もしも、いじけて出ていくとしても、暗い夜の森を一人で歩くのは相当な勇気がいることである。
はたして、それがあのエメラルダという人物に可能なことだろうか？
「ミーアさまだったらまだしも……、あの方がそんなことをするとは思えない」
ミーアは怖がりだが、必要とあらば闇の中にだって踏み出す勇気を持っている……。
そうアンヌは信じている。現実はどうかは別として……。
けれど、エメラルダにそこまでの勇気があるとは思えない。だとすると……、なぜ、エメラルダの姿が洞窟内になかったのか？
もしも、外に出ていないとしたら、その行先は……。
「まだ、洞窟の中にいる？」
最初に思ったのが、洞窟のどこかに身を潜めて、みなが慌てるのをこっそりと眺めているという行動だった。
それは、実にエメラルダというお貴族さまに合っているような感じがして、アンヌは少しだけ腹を立てながら洞窟の中を探してみた。
けれど……、
「やっぱり、いないよね……」
入り口付近の物陰をいかに探しても、エメラルダの姿はなかった。
当たり前だ。広くなっているといっても、身を潜められる場所は少ない。
とすれば、やはり外に出て行ったのか、もしくは……。
「洞窟の深いところに行って、戻ってこれなくなった？」
洞窟から離れて暗い森を歩くよりは、みなが寝ている洞窟の奥の方に行く方があり得るような気がした。
「行くなって言われてたけど……、ダメって言われてることをやり

たがるのは大貴族さまっぽいし……」
貴族や王族の中にも立派な人がいることを、アンヌはよく知っている。
けれども、やっぱり貴族さまといえば、高慢ちきで他人の進言をあまり聞かない人間という印象がぬぐえない。
一人で、洞窟の奥を探検してみようという無謀な行いもまた、エメラルダのイメージに合致する。
「いずれにせよ、外はミーアさまたちが探しているんだから……」
ここで一人で待機しているのも立派な役割だ。けれど、なにもせず、ここで待っていることは耐えきれなかった。みんなが島中を歩き回って捜索しているのだから、自分もなにかの役に立ちたかったのだ。
しばしの逡巡、その後、アンヌは決意する。
「私だけがここで休んでるわけにはいかない」
それから、アンヌは念のために地面に文字を残した。
万が一エメラルダが戻ってきた時のために。そして、ミーアたちが戻ってきた時のために。
「あとは、洞窟の奥まで行くなら、明かりが必要かな……」
アンヌは浜辺に出て狼煙のところまで行く。鍋を火にかけるために使った太めの枝、その余りの枝を使わせてもらうことにした。
三、四本の枝を束ね、その先端に枯葉や、樹脂の多そうな細い枝を押し込み、森の中で見つけた太めの蔦でまとめる。釣り糸には太すぎると思われた蔦だが、松明を作るには丈夫でよさそうだった。
そうして出来上がったのは即席の松明だ。
「これに火をつければ……」
最低限、明かりに使えればいいと思っていたけれど、なんとかなりそうだ。
そう思ったのだけど……。
いざ、洞窟の奥に入ってみると、その明かりはいかにも心細かった。

ゆらゆらと揺らめく赤い炎は、当然のことながら洞窟の闇をすべて払拭してはくれない。それでも、アンヌは歩き出した。
「ミーアさまのお友だちを探すためだもの……」
そう自分を励まして。

洞窟の中は曲がりくねり、時に上り、時に下り。
屈まなければならなくなったと思えば、ジャンプしても天井に届かないようなところもあって。
その内に、天井から氷柱のように、鍾乳石が垂れ下がっている場所に出た。
進む先の道は狭くなっており、先が見通せなくなっていた。
「この先は、下ってるのか……。降りたら上がってこられない、よね……」
道は下り坂になっており、しかも、かなり下まで降りているのか、行く先は闇に沈み込んでいた。
ここまでか……と戻ろうとした矢先、視界の外れに映ったものに、アンヌは違和感を覚えた。
それは、半ばほどで折れた鍾乳石だった。坂の直前、ちょうど手を伸ばせば届くような位置にある。
「これ……」
アンヌは顔を寄せ、折れた部分を観察してみる。
周りには似たような岩があるにも拘わらず、その一本だけがポッキリと折れている。しかも、地面には、その折れた先は見当たらない。
「ここ、ちょうど掴まるのにいい位置だよね……。掴まって、それで……」
身を乗り出して、坂の下を覗く……。だとすると……、
「大変、もしも……ここから落ちたんだとしたら、早く、みんなに知らせなきゃ」
そう思い、戻ろうとした、まさにその時だった。

突如として、ガラガラという石が崩れ落ちる音が聞こえた。
「きゃあっ！」
悲鳴を上げつつ、アンヌはその場にしゃがみ込む。両腕で頭を守るようにして、身を固くすることしばし……。
顔を上げたアンヌは、口元を袖口で覆いつつ松明を目の前に掲げる。っと、先ほどまで歩いてきた道が、石の壁に塞がれていた。
「そんなっ……」
思わず、息を呑む。
脳裏にいくつもの思いが駆け巡る。
この洞窟から出られないかもしれない。
ここで死んでしまうかもしれない。
家族ともう二度と会えないかもしれない。
でも、それ以上に……。
――ミーアさまに、もうお仕えできなくなるかもしれない……。
まだ、受けた恩を一つも返してないのに……。
ジワリ、と目元が熱くなり、視界がぐにゃりと歪む。
「ミーアさま……」
小さくすがるように、助けを求めるように、自らの主の名を呼ぶ。
「……ミーアさま……」
もう一度……、震える声で、そうつぶやいて……。
アンヌは、大きく息を吐いた。
「落ち着かなきゃ……。私は、ミーアさまの専属メイドなんだから……」
ミーアは言ってくれたのだ。自分のことを腹心であると。
ならば、こんなところで諦めるわけにはいかない。
こんなところで膝を屈して、泣き崩れてしまうような者は……、帝国の叡智の右腕に相応しくない。
「ううん、ミーアさまの頑張りに……相応しくない」
アンヌは、改めて松明で道を照らす。
その光の向かう先は戻る道ではなく、進む道。

下り坂の方だった。
「もともと、こちらへ行くつもりだったのだから……、進めばいい」
泣いて諦めるにはまだ早い。
それをするのは、この命が尽きる時でいい。
「ミーアさま……必ず、また……」
小さくつぶやき、アンヌは下り坂を滑り降りた。

アンヌは知らない。
その岩崩の原因を作ったのは、尊敬する自らの主であるということを。

第百四話　最後のオトモダチ

さて……ところ変わって、セントノエル学園でのこと。
尊敬するミーアお祖母さまや、アンヌ母さま、さらにルードヴィッヒ先生がいろいろと苦労しているころ、ミーアベルはなにをしていたかというと……。
「ああ、やっぱりここって夢の中に違いありません。幸せすぎて怖いぐらいです……」
満喫していた……学園生活を。
どのぐらい満喫していたかといえば、朝は、甘いパンケーキで始まり、夜は寝る前の甘いココアで終わる生活と言ったら、大体、想像はつくだろうか。
もちろんミーアと違い、そこそこに勤勉なところがあるベルは、きちんと運動も欠かさない。美しい学園の中を散策し、時に湖の浜辺を走ってみたり、ちょっぴり泳いでみたり……。実に健康的に、理想の学園生活を満喫していたのだ。
まぁ……、そもそも夏休み学園に居残ることになった原因である勉強に関しては若干アレな部分はあったが、リンシャにしっかりと監視されている手前、サボりきりにもなっていなかった。
もともと、頑張ればそこそこのところまではいけるのが、ミーアの血筋である。
一歩一歩ではあっても着実に、その歩みは前進していた。
そんなわけで、今日も今日とて、ベルは学園の図書室を訪れていた。
夏休み中ということもあって、中に人はほとんどいない。
というか、ベルとお付きのリンシャ、あとは司書の教師しかいなかった。
ベルはお気に入りの窓際の席に陣取ると、うーんっと思い切り伸

びをしてから、机の上に突っ伏してスヤスヤと……。
「ベルさま……、勉強のために訪れたのでは？」
ベルの目の前の席に座ったリンシャがじっとりした視線を向けてくる。ちなみに、そのリンシャは、ベルが勉強している間、自分も勉強する気満々で、本を持ってきている。
兄があんななので、彼女は彼女で大変なのだ。
「あはは、冗談です。もう、リンシャさん、目つきが怖いですよ」
ベルは笑って、ひらひらと手を振った。が、リンシャは手綱を緩めない。
「今日の課題はきっちりとやってもらいますよ。逃げようとしても無意味ですよ」
うぐぅ、っとうめき声を漏らしてから、ベルは再び机の上に突っ伏した。
ぼんやりと、机の上に積まれた課題の山を見て、
「ああ、なんか、幸せだな……」
小さな笑みを浮かべる。

それから一時間ほど、じっくり勉強した後、ベルは図書室の中の散策を始めた。
決められた課題をやった後は、本を読んでもよいことになっているのだ。
作家であるエリスのもとで育てられたベルは、本に慣れ親しんでいた。焚書の横行していた世界しか知らないベルにとって、セントノエルの図書室の充実ぶりは、天国のようなものだった。
「えへへ、今日はなにを読もうかな……。やっぱり動物図鑑がいいかな、それとも可愛らしい植物の図鑑とか……」
「ねぇ、あなた、もしかして、ミーアさまと仲良くしているっていう子？」
本棚の前で、じっくり背表紙を眺めていたベルに、話しかけてくる声があった。

きょとんと首を傾げつつ、視線を転じると、そこにはこちらを興味深げに見つめている少女がいた。
年の頃は、ベルと同じぐらいだろうか。
ふわふわの輝くような金髪と、人形のように綺麗な灰色の瞳が印象的な少女だった。ニコニコと華やかな笑みを浮かべる少女は、ベルの返事を待つように、小さく首を傾げた。
「あ、はい……。ミーアおば……お姉さまは、ボクの尊敬する人です」
「え？　ミーア、お姉さま……？」
不思議そうにつぶやく少女。頬に指をあてたまま、もう一度、小さく首を傾げる。
ふわりと髪が揺れた途端に、ベルはかすかに香る花の香りに気づく。思わず、頭がぼーっとしてきそうな、綺麗な香りだった。
「まぁ、いいや。それより、あなた、最近ずっと図書室でお勉強してるけど、夏休みは帰らないの？」
「そうなんです。恥ずかしながら、夏休み前のテストの点が悪かったので……」
「ふーん、そうなんだ。ふふ、そんなのどうでもいいのにね」
少女はニッコリ笑みを浮かべてから、言った。
「ね、よかったら、あなた、リーナとお友だちにならない？」
大きな瞳に、キラキラと笑みを輝かせながら、彼女は言った。
「リーナ？」
「ん？　ああ、名前よ、名前」
そうして、少女は、一歩下がり、ちょこん、とスカートの裾を持ち上げる。ちらりと覗いたその脚の、透き通るような白さがベルの目に焼き付いた。その白さは、どこか病的なようにすら見えてしまって……。
「以後お見知りおきを。シュトリナ・エトワ・イエロームーン。あなたと同じ一年生よ、ミーアベルちゃん」
そう言って、少女、シュトリナは可憐な笑みを浮かべる。

「仲がいいお友だちは、リーナって呼んでくれるわ。だから、あなたもリーナって呼んでくれると嬉しいな」
「なるほど。わかりました。それじゃあ、ボクのことは、ベルって呼んでください。リーナちゃん」
ベルも、スカートの裾を持ち上げつつ言った。
「うふふ、わかったわ。ベルちゃん。リーナと仲良くしてね」
小鳥がさえずるように、可愛らしい笑い方をする女の子だな……、とミーアベルはなんとなく思うのだった。

第百四話　最後のオトモダチ（後書き）

かくて四大公爵家、最後の令嬢。イエロームーンの姫君が登場したところで次回に続きます。

第百五話　ミーア姫、クライマックスを迎える！（ミーアの中では）

周囲の岩とともに落ちていくミーア。
アベルの腕の中、そのぬくもりにうっとりしつつ……、
――ああ、やっぱり、わたくしこのまま死んじゃうんですわ……。幸せすぎて……。
などと、たわけたことを考えていたミーアであったが、直後、ざぶんっ！　と頭から水をかぶって目が覚めた。
否、正確に言えば、頭から水の中に飛び込んで、目が覚めた、というべきだろうか。
がぼぼ、がぼ、っと口の中に、突然、水が入ってきたので、ミーアは大いに慌てふためく。
バタバタと暴れそうになったミーアだが、ギュッと、アベルの腕に力が入るのを感じて、力を抜いた。
――アベルに任せていれば、大丈夫ですわ……。
恋と信頼の混合物のような甘ーい感情が、ミーアの体から、ふにゃあっと力を抜けさせたのだ。
それから、数秒の後……、
「ぷはっ！」
顔の周りから水がなくなったのを察して、ミーアは思いっきり息を吸い込んだ。
「こっ、ここはいったい？　ひっ！　いっ、痛っ！？　目……、目が！　目が沁みますわ！　それに口の中が、しょっぱい。これは……海水？」
片手で目をコシコシこすりつつ、アベルの顔を見上げる。っと、アベルは厳しい顔で、頭上を見上げていた。
つられてミーアも視線を上げると……、そこには、かなり高い位置に岩の天井が見えた。

「あ、あんなところから落ちたんですのね……。水が溜まってなかったら危なかったですわね」
「ああ、ありがたいな。しかし、このまま水に浸かっているのは危険だ。体が冷えてしまう。水から上がれる場所に行こう」
アベルが指さした先は壁際、少し高くなり、ちょうど岸辺のようになっているところだった。
「ミーア、泳げるかい？」
「ふふん、当然ですわ。練習の成果、きっちり見せて差し上げますわ」
そうして、ミーアはくるりと回転して、仰向けに水に浮き……。背泳ぎ状態のバタ足で泳ぎ始めた。息継ぎが必要なく、顔を水につけなくてもいい。溺れた時には、脱力して、ぐんにょり浮いていればいいという、ミーアの考えた最強の泳ぎ方である。
特に、大した努力をせずに息継ぎができる、という点が素晴らしい。
「あ、ぶつかりそうでしたら、ちゃんと教えてくださいませね」
「ああ、わかった。じゃあ、とりあえず、あそこまで行こう」
そうして、二人は泳ぎだした。

水から上がって、ミーアは安堵の息を吐いた。
「痛むところはないかい？」
「ええ、アベルのおかげですわ。アベルは？」
「ボクも問題ない。下が水面だったから助かったな」
確かに、その通りだ、と思いつつ、ミーアは改めて岩壁を見上げた。
高い。城の三階ぐらいの高さはあるだろうか。
天井に空いた亀裂からは日の光が入ってきているから、一応、地上までは通じているのだろうけれど……。
「ふむ、登るのは……無理ですわね」
岩壁は表面がつるつるしていて、いかにも滑りやすそうだった。

掴んで登っていくことなど、普通の人間には無理そうだ。
――まぁ、ディオンさん辺りだったら、余裕で登って行けそうですけど。あれは例外というものですわね……。
少なくとも自分には無理だ、とミーアは判断する。
とすると、仮に落ちて死ななかったとしても、脱出は……。
「アベル、ごめんなさい。あなたのこと、巻き込んでしまいましたわ」
珍しく、しょんぼりと肩を落とすミーア。しかし、そんなミーアにアベルは首を振って見せた。
「いや、むしろボクはこの場所にいることができて、よかったと思っている」
「あら……、どういうことですの？」
「大切な人が危険な時に、そばにいて守ることができない。それはとても口惜しいことだから」
「まぁ……」
ミーアは口に手を当てて、アベルを見つめた。すると、アベルはちょっとだけ気まずそうに、顔を背けた。その頬はやっぱり赤く染まっている。
――ふふ、恥ずかしいならば、言わなければよろしいのに……。
ミーアも、ちょっぴり顔を赤くしているものの、さすがにそこは二十歳過ぎのお姉さんである。
先ほどは不意打ちで赤くなったものの、すでに余裕を取り戻している。
そう、ミーアはすでにアベルの性格を学んでいる。
彼が誠実で、まっすぐな人間で、だから思ったことを正直に口に出すことがあることを、ミーアはすでに知っている。
それゆえに、わずかではあるが心の準備をすることができたのだ。
これこそが、大人のお姉さんの余裕なのである！
とはいうものの、さすがに少しは照れ臭い。このまま黙ってしまうのは、ちょっぴり気まずくもある。

ということで……。
「それにしても、これではどうにもできませんわね。助けが来るのを待つか、状況が変化するのを待つか……。いずれにせよ、今は迂闊には動けま……くちゅんっ！」
っと、ミーアは小さくくしゃみをした。
直後、ぶるぶるっと体が震える。
予想よりも体が冷えていたらしく、肌にはいつの間にか鳥肌が立っていた。
「大丈夫かい？　ミーア」
「え、ええ。問題ございませんわ。ただ、体が濡れたので、少しだけ寒いだけですから」
くしゃみをしてしまったのが、ちょっぴり恥ずかしかったミーアは照れ隠しに笑みを浮かべた……。けれど、アベルは真剣な顔をしていた。
「そうか。体が冷えると体力を奪われるからな……」
彼は、なにかを躊躇うように黙ってから……、
「すまない。ミーア」
「へ？　なんのことで……ぁぇっ？」
ミーアの声が途切れる。
混乱のあまり、声が出なかった。
突然、アベルが、自分のことを、ぎゅっと抱きしめてきたから……。
――え？　あ？　え？　お？
大人のお姉さんの余裕など、粉々に吹き飛んだ！
混乱にぐらんぐらんと目を回しかけるミーアの耳に、アベルの声が聞こえてくる。
「すまない。礼を失することだとは心得ているが……、今はこうして互いの体温で温めあう必要があるんだ」
断固とした声。と同時に、抱きしめる腕にグッと力が入る。
――ああ、これは、たぶんあれですわ……。わたくしに拒絶され

てでも、それをする必要があるから、というアベルの判断で……だから、わたくしを逃がさないようにって、力を入れてるのであって……。

などと、若干、現実逃避気味に分析をし始めてしまうミーアである。

けれど、いつまでも逃げ続けてもいられない。

心地よい少年の温もり……。

少しだけ不器用で、力が入りすぎているから、ちょっとだけ痛い抱擁。

静寂の中、かすかに聞こえるアベルの息遣いと自分自身の息遣い。

荒い呼気が、相手の耳元にかかってしまわないように、ミーアは息を鎮めようと我慢する。

どくん、どくん、と高まる心臓の音を聞きながら、ミーアは、ぽーっと熱っぽい頭で考える。

――わっ、わたくし、やっぱり死んでしまったのではないかしら？　ここは、きっと噂に聞く天国で……。そうじゃないと説明がつきませんわ！　幸せすぎてっ！！

断頭台から始まったミーアの人生は、今まさにクライマックスを迎えていた！

……まぁ、ミーアの中では、なのだが……。

<i3954463|28707>

第百五話　ミーア姫、クライマックスを迎える！（ミーアの中では）（後書き）

リクエストにあった地図を作ってみました……。が、ザックリ気味なので、ここ違くない？　というところは多めに見ていただけると幸いです。絵は……ダメです。

ミーアの進撃経路は高地などもあって大きく迂回。さらに森を切り開きながらなので、若干時間がかかった。

一方で洞窟は比較的まっすぐだったため、アンヌは浜辺で松明を用意する時間を含めても、ミーアたちの近くまで行くことができた……みたいな感じでしょうか。

第百六話　青く光る道を行く

アベルとイチャイチャしたことで、ミーアは、すっかりポカポカになっていた。つい先ほどまで、寒さで震えていたことなど完全に忘れ、頬は微かに紅潮していた。

――アベルと二人きりなら、ここで暮らすのもよいのではないかしら。そう、アベルのそばが、わたくしの楽園であり、宮殿なのですわ！

などと……なんとも、たわけたことをミーアが考え始めたところで……。

「ミーア、ちょっと見てくれ」

「……はぇ？」

突如、アベルが声を上げた。

「ほら、水が引いてるみたいだ」

言われてミーアも視線を転じる。と、確かに、つい先ほどまでミーアたちのすぐそばにあった水位が、だいぶ下がっていた。

もう少しすれば、水底を歩くこともできそうではあった。のだけど……。

「ですけど……」

ミーアは悔しげに頭上を仰ぐ。岩の天井から零れ落ちる光量は、先ほどから確実に減ってきていた。夜が迫っていることがうかがえる。

「せっかく水が引いて脱出できるかもしれませんのに……。暗い中で動き回るのは少し危険ですわね」

潮の満ち引きがある以上、出口は恐らく海だろう。

暗い夜の海を泳ぐ自信は、さすがにミーアにはなかった。

「うん……そうかもしれないが……」

アベルは、なにかを思案するように腕組みした。

「そうだな……。ただ、ここにずっといたら手詰まりになる。状況の変化を見逃さないようにしよう」
アベルのそれは、まるで予言のようだった。
やがて辺りが完全に夜闇に包み込まれた時、アベルが歓声を上げた。
「見たまえ、ミーア。ここの水面！」
「まぁ……これは！？」
ミーアも驚愕に目を見開く。なぜなら、低くなった水面が、淡く、青い光を放っていたからだ。
その光量は日光や松明には及ばないまでも、周囲を照らすぐらいは十分で。
むしろ洞窟の奥深くまで光が続いているために、日の光が見えていた時より行動しやすくなったとさえ言えた。
「この好機を逃すわけにもいかない。行ってみよう。ここで立ち止まっていても体力を消費するだけだ」
そのアベルの言葉に、ミーアは一瞬、考える。
遭難した時には動かずに体力を温存するのがセオリー。だけど、この島にいるメンバーで助けに来るのは難しそうな気がする。
なにより、生存術のエキスパートたる自分が動かないなど、あり得ぬこと。
ミーアは鼻息荒く頷くと、
「ええ、行きましょう……」
アベルの手を取った。

アベルに手を引かれて、青い光の道を行く。
ミーアたちがいた場所には無数の穴が開いていたが、その青い光の道が出ていくのは二か所。水深が深くなっていく方と、浅くなっていく方だった。
気温が下がる夜に水泳は自殺行為。となれば、必然、ミーアたちが行くのは水深が浅くなっていく方だ。

「そこは少し地面がデコボコしている。気を付けたまえ。ほら、しっかり手を握っているんだ」
たびたび振り返っては、声をかけてくれるアベルに、ミーアは思わず笑みを浮かべた。
「ふふ、本当にアベルは紳士ですわね」
このような状況にあっても、彼はきちんとミーアの速度に合わせて歩いている。
ミーアが転ばないように気を使い、つないだ手も、まるでダンスでもするかのように優しく力強い。
「姉さまに言われているからね。どんな状況であっても、女の子には優しくするように、と」
「はて？　お姉さま……というと……」
前の時間軸に関していえば、ミーアにはレムノ王家の記憶はあまりない。せいぜいアベルを知っているぐらいだった。なにせ、シオンが声をかけてくるのをひたすらに待ち続けていたのだから、レムノ王国になど関心はなかったのだ。
けれど、今のミーアは違う。当然、調べている。
なぜか？　アベルを婚儀を結ぶ相手として、ターゲッティングしていたからである。恋愛戦略家のミーアなのである。
「確か……、クラリッサ王女殿下、だったかしら？」
アベルより三つ年上だったはずである。
ミーアが持っている情報だと、つつましくて、どちらかというと内向的な人ということだったが……。
――少しイメージが違いますわね……。
首を傾げるミーアに、アベルは小さく首を振った。
「いや、これをボクに言ったのは、一番上の姉でね」
「一番上のお姉さま？　まぁ、そのような方が……」
「知らなくても無理ないよ。亡くなったんだ、五年前にね……」
アベルは少しだけ寂しそうな顔をした。
「ボクは、大好きだったんだ。姉さまのこと……。優しくて、だけ

どそれ以上に強くて、格好いい人だった。その人が言ったんだ。レムノ王国のみんなの考えはおかしいんだって。だからボクだけは、女の子に優しくしてほしいって……」
男尊女卑の傾向の強いレムノ王国。
「恥ずかしながら、ボク自身も忘れていた。なぜ、女性に優しくするのか……。ちょっとした気まぐれでそうするようになったんだと思っていたけど、違ったんだ。ずっと、姉さまの与えてくれた指針を胸に生きてきたんだ……ボクは」
――アベルに、そんな大きな影響を与えた人がいたんですのね……。会ってみたかったですわ……。
なんとなく、そんなことを思いつつ、ミーアは問うた。
「その方のお名前は……、なんというんですの？」
「ヴァレンティナ・レムノ。レムノ王国の第一王女だった人だ」
「そう、ヴァレンティナさん……」
その名をミーアが思い出すことになるのは、少し先のことになる。

第百七話　アンヌ、帝国の叡智（アンヌの中の……）を語る

闇に沈んだ洞窟。静寂に包まれたその場所に、ぐず、ぐず、と鼻を鳴らす音が響いていた。

「……ああ、私、死ぬのかしら……？」

ぼんやりと光るペンダントを手に、エメラルダは泣きべそをかいていた。

岩に寄りかかり、足を投げ出した状態で、ぐずぐずと鼻を鳴らす。

ちょっぴり、右足の位置を変えようとするも、直後に走った痛みに、再び足から力を抜く。

「うう、すごく、痛い……痛い。えぐっ。うう、これは、きっと骨が折れたっていう状態ですわ。そうに違いありませんわ。このまま、動けなくって、ここで野垂れ死ぬんですわ。うううう」

ずずーんっと暗い雰囲気をまとったエメラルダは、普段の五割り増しぐらい面倒くさそうな感じだった。

そんな、涙で歪んだ彼女の視界に、不意に、赤いボーっとした光が入ってきた。

「……っ！？」

思わず息を呑むエメラルダ。

脳裏に思い浮かぶのは、自身の怪談話。無人島をさまよう邪教徒の幽霊のことだった。

けれど、すぐに思い直す。そんなものいるはずがない。

そもそも、その赤い光が来るのは洞窟の入り口の方なのだ。

であるならば……。

「ニーナっ！？　来てくれたんですのっ！？」

次に浮かぶのは、自身の忠実なる従者の姿だ。

その想像は、すぐに確信へと変わる。

「そうですわ。私がこのようなところで朽ち果てるなどありえない

こと。きっとニー……じゃない、メイドが来てくれたに違いありませんわ！」
そうして、エメラルダは、その明かりが近づいてくるのを待った。
やがて……、
「あっ、エメラルダさま？　ご無事ですか？」
現れたのは、赤い髪を両側で結んだメイド、アンヌだった。
「あら、あなたはアン……じゃない。ミーアさまのメイド」
慣れ親しんだニーナではなかったことで、ちょっぴりガッカリするエメラルダだったが、それでも助けが来た安堵から、ついついニコニコしてしまう。
調子に乗って立ち上がった瞬間、痛みが走って、小さく悲鳴を上げる。
「？　エメラルダさま、どこかお怪我を？」
「あ、ええ。そうなんですの。実は、そこの坂を滑り落ちる時に、足首をケガしてしまいましたの。恐らく、骨が折れていると思いますわ」
「大変っ！　そこにお座りください。足を伸ばして」
「仕方ありませんわね……。ミーアさまに免じて、特別に言うとおりにして差し上げますわ」
エメラルダは言われた通りに素直に座り、足を伸ばす。と、アンヌはその足元にしゃがみ込んだ。
「あら、感心。あなた、手当てができますの？」
「弟が一度だけ骨を折ったことがあります」
「まぁ、それでは素人なのですわね。やはり、平民に過度な期待はできませんわね」
などと言いつつ、ちょっぴり、心が落ち着くのをエメラルダは感じる。
心なしか痛みも少しだけ引いてきたように感じる。
「痛みますか？」
「ええ、もう、立っていられないぐらい痛いですわ。絶対、折れて

るに違いありませんわ」
「失礼します」
アンヌは、さらに、エメラルダの足首に手を当てる。
それから、自らのスカートの裾を破ると、エメラルダの足首を固定し始めた。
「ど、どうですの？　や、やっぱり折れてる？」
「いえ、骨折はしていないみたいです。痣にはなっていますけど……。でも、あまり動かさないほうがいいですね」
「そう、ですの……」
アンヌの言葉に、エメラルダは、さらに心がスッと軽くなるのを感じた。
足の痛みまでも、さらにさらに軽くなってきたように感じる。今なら歩けそうだ。
……単純な人なのである。
「ところで、どうしてお一人でこんなところにいらしたんですか？　洞窟の奥は危ないってキースウッドさんが言ってましたよね？」
「あら？　平民ごときが私に差し出口を？　あなた、ミーアさまのお付きだからって、少し調子に乗っているのではなくって？」
わずかばかり口調に苛立ちを乗せる。いつもであれば、これで、ニーナやほかのメイドたちは口をつぐんでしまう。
けれど、アンヌは黙らなかった。
「私は、あなたがどうなろうと知りません。でも、ミーアさまに迷惑をかけるのはやめてください。ミーアさまは、きっとあなたのこと、心配しています。あなたが勝手なことをしてなにかあったら、ミーアさまが悲しみます。どれだけ迷惑をかけたか、わからないんですか？」
「なっ！？」
返ってきた強い反論に、エメラルダは言葉を呑み込む。けれど、次の瞬間、一気に頭に血が上った。
「あ、あなた……、おぼえてなさい！　そのようなこと私に言って

……、ミーアさまに報告して差し上げますわ。それに、皇帝陛下にも進言して……」
「そういうことは、ここから無事に出られたらにしてください」
「……へ？」
エメラルダは、瞳をぱちくりと瞬かせた。
「出られたらって……、出られますわよね？　だって、こうして助けが来ているわけで」
「洞窟が崩れました。私が来た道は、残念ですが使えません。この先に出口があればいいんですけど……」
「なっ、そ、そんな！　あ、あなた、ひどいですわよ？　こんなに私を喜ばせてから突き落とすなんて、ひどすぎますわ！」
涙目になって抗議するエメラルダを、アンヌはキッとにらみつける。
ひぃっと、息を呑むエメラルダに、アンヌは言った。
「エメラルダさま、ここから生きて出るには、力を合わせる必要があります。だから、ここから出るまでは勝手なことをしないでください」
「……うぅ、そんなに強い口調で言わなくっても……。わ、わかりましたわ。あなたの言うとおりにいたしますわ」
しぶしぶ頷くエメラルダに、アンヌは言った。
「では、私が脱出口を探してきますから、ここでお待ちください。必ず迎えに来ますから」
そうして、アンヌは踵を返した。
「ちょっ、待って。置いて行かないでくださいまし、あっ、アンヌさん！」
「え……？」
呼びかけにアンヌが足を止めた。それから、マジマジとエメラルダの顔を見つめてくる。
若干、気まずくて視線を逸らすエメラルダ。構わず、アンヌは口を開いた。

「エメラルダさま、私の名前、おぼえてたんですか？」
「当り前ですわ。もしかして、あなた、私を馬鹿だと思っておりますわね？」
「……」
「ちょっ、なんですのっ！？　今の沈黙は……」
「あ、いえ。馬鹿とは思ってませんけど、でも、名前をおぼえられているのは意外でした。てっきり、そういうのおぼえない人なんだと……」
「もちろん、おぼえておりますわ。ニーナも、アンヌさんも、キースウッドさんも。そのぐらいの名前がおぼえられないと、本気で思われるのは少しばかり心外ですわ」
「じゃあ、どうして、おぼえてないふりなんかするんですか？　私はともかく、ニーナさんが可哀そうです」
アンヌの抗議に、エメラルダは胸を張って答えた。
「だって、それが貴族というものですもの」
エメラルダはそう教わった。
『貴族たる者、平民の名などおぼえる者ではない。いちいち、有象無象の名をおぼえているなど、労力の無駄だし、変に情が移れば判断を誤ることだとてある。皇帝陛下の手足として、国を治める我らは、いついかなる時も冷静で合理的な判断をしなければならぬ』
『貴族たる者、先祖への感謝を忘れず、誇り高き歴史と伝統を重んじ、皇帝陛下に忠を尽くすように』
『星持ち公爵令嬢のお前に、最上級のものが用意されるのは当然のことである。いちいち、感謝を口にする必要などなし。当然のものを、当たり前のように受け取れ』
父の教えに、エメラルダは忠実だった。
それこそが、自身の生きる道なのだと彼女は疑ったことがなかった。
だからこそ……、エメラルダにはミーアのありようが信じられなかった。

「むしろ、おかしいのはミーアさまの方ですわ。我々、貴族の伝統をどうお考えなのかしら？」
「でも、だからこそ、私はミーアさまに忠義をお捧げしています」
ふいに、聞こえてきたのは強い声。エメラルダは声の主の方を見た。
「ミーアさまは、私の名前を呼んでくれます。私に優しくして、私の家族をも気遣ってくださります。だから、私はミーアさまのためならば命だって惜しみません。私が死んだら、ミーアさまはきっと泣いてくれます。そんなミーアさまだから、私は命を惜しまないし、ミーアさまを泣かさないために、私はこんなところで死ぬわけにはいかないんです」
その力強い宣言に、エメラルダは思わず揺らいだ。
今、目の前にいるメイドは、自身の命を惜しまないという。
なるほど、それは、大した忠誠心だが、その程度の者ならば自分の周りにもいる……。
そう豪語したかったけれど……、でも、どうしても思ってしまう。
本当にそうだろうか、と。
ニーナは、護衛の者たちは、はたして、この目の前のメイドと同じように自分のために命を捨ててくれるだろうか？
あまつさえ、彼女は言ったのだ。
ミーアを泣かせないために、生きるのだ、と。
絶望に膝を屈しても仕方ないような、この暗闇の中、松明のごとく消えることのない決意の炎。
自分の従者たちは、彼女のように考えてくれるだろうか？
自分は、彼女の中のミーアのような存在に、なれているだろうか？
――私が死んだら、ニーナは悲しんでくれるかしら？
きっと悲しんでくれないだろうな、となんとなく思う。けれど、それ以上に怖いのは、
――私は、ニーナが死んだら、悲しまないでいることができるかしら？　ニーナの命を犠牲にせざるを得ない時に、私はその判断が

できるかしら？
心に生まれたのは、深刻な疑問だ。
エメラルダがしようとしていたのは、目を背けること。
貴族の伝統を言い訳に、自分の心を鈍感にして、悲しまずに済むようにする、ただの逃避……。
そんなエメラルダにミーアの忠臣は叩きつける。
「名前を呼ばずに、相手を一人の人として見ずにいること、それで切り捨てやすくするというのは甘えです。ミーアさまは誰一人切り捨てたくない。切り捨てたら悲しい。だから、誰も切り捨てなくてもいいように、努力して行動されます。だから、あの方は叡智と呼ばれ、みんなから慕われるんです」
「叡智……」
ふいに、思い出される感情があった。
エメラルダは、ミーアのありようが信じられなくって、その行動は常識外れの、とんでもない行いに見えて……。だけど……。だけど……。
「エメラルダさま。置いて行かれたくないのでしたら一緒に来ていただくことしかできません。私は足を止めることはしません。私についてきていただけますか？」
思い出に沈みかけたエメラルダを、アンヌの声が引き留めた。
そうだ、今は考え込んでいる時ではない。
小さく頷くと、エメラルダはゆっくりと立ち上がった。

第百七話　アンヌ、帝国の叡智（アンヌの中の……）を語る（後書き）

本日、活動報告を更新いたしました。
お時間の許される方はチラリと覗いて行っていただけると嬉しいです！

第百八話　ミーアルーツ

「不思議ですわ。これ、いったい、どうして光っているんですの？」
ミーアは足元の水を手ですくってみる。が、手のひらが光るということはなかった。
水自体が光っているのかと思ったのだが、どうやら違うようだった。
「この明かりは、なんとなく夜灯虫（ほたる）に似てるな。もしかすると、なにか水の中に光る生物がいるのかもしれないね」
そう言ってからアベルは、思案するように黙り込んだ。それから、わずかに緊張した声で続ける。
「ねぇ、ミーア、これは狙ってやっているんだと思うかい？」
「へ？　どういうことですの？」
「ほら、シオンが言っていたじゃないか。ボクたちがいた洞窟には人の手が入っているって。この、洞窟が光る仕掛けも何者かが作ったものだとしたら……」
ミーアの脳裏に、エメラルダの話が甦ってきた。
「邪教の地下神殿……、なるほど、あの怪談話に急に現実味が出てきてしまいましたわね……」
そうは言うものの、さすがに、そんなトンデモなものが見つかるとは思っていないミーアである。むしろ、大事なのは……、
「それはそれで、考えようによっては朗報かもしれないな。人の手が入った場所なら、出入口があるということになるからね」
「ああ、確かにそうですわ。もしかしたら、この先に出口があるかもしれませんわね！」
もしもこちらでなくても逆方向にも道があったし、なんとか出口に辿り着くことができるかもしれない。
心なしか気分が軽くなったミーアは、足取り軽く進んでいく。

けれど、そんな二人の目の前に現れたものは、残念ながら出口ではなかった。
曲がりくねった隧道を抜けた先にあったのは巨大な地下空洞だったのだ。
「これ……は？」
そこは不可思議な空間だった。先ほどまでは足元にしかなかった青い光が、広い空洞の中に満ちていた。水の中で光るものが空気中に漂っているわけではない。
あちこちにある透き通った石が青い光を乱反射させて、空洞を照らし出しているのだ。
そして、その光に照らし出されるようにして、それが静かに佇んでいた。
それは……、まさに神殿だった。
まるで氷のような、半透明の石で作られた建造物。巨大な柱も、その柱に支えられた屋根も、そのすべてが透き通っていて……、外から受けた光を周囲に反射している。
まるで建物自体が輝きを放っているようにすら見えた。
それはとても幻想的で……けれど、どこか冒涜的に見える光景。美しいのだけれど、なぜだろう。ミーアはその光景に、背徳的な空気をかぎ取った。
「ほっ、ホントにありましたわ……。地下神殿。まさか、あるとは思っておりませんでしたけれど……これが、まさか、邪教団の地下神殿……なのかしら？」
「どうだろうな……こんな場所に隠されているんだから、まともなものではないだろうが……」
アベルは半ば呆気にとられたように、言葉が少なかった。
当たり前だ。このような光景、今までどこでも見たことがない。
どの時代の、どのような建築法で建てられたものなのか、まったくもって見当がつかなかった。けれども、ただ一つ、わかることは……。

「だけど……、なんとなく、あれは気味が悪いな……」
自身の心情を代弁してくれたようなアベルの言葉に、ミーアは黙って頷いた。
そうなのだ、それこそ、夢幻(ゆめまぼろし)に出てくるほどに美しく、幻想的な建物を前にしているというのに……、ミーアが感じるのは奇妙な嫌悪だった。
あるいは、違和感といってもいいかもしれない。
神殿とは「神の栄光を顕わす」という設計思想によって建てあげられるもの。そこには調和があり、完成された美があってしかるべきである。
にもかかわらず、目の前の神殿は……どこかがズレているような、そんな感覚があった。
あるべき場所にあるべきものがなく、あるべきでないものが、そこにある。そうした小さくも奇妙な違和感が積み重なり、見ているとどこか落ち着かない気分になってくる。
「邪教徒の神殿……」
その言葉が、ここまでしっくりくる建物は、そうはなさそうだった。
「ミーア、ボクは邪教と聞くと、つい例の者たちのことを思い出してしまうよ」
「ええ、混沌の蛇ですわね。わたくしも、それを考えておりましたわ」
人の作り出した秩序を嫌い、それに反する者たち。であれば、このような、設計思想のことごとくを冒涜し、それに逆らうような建て方をしたとしても、不思議ではないのかもしれない。
「これは思わぬところで、思わぬものを見つけてしまったかもしれませんわ！」
謎に包まれた組織、混沌の蛇。
その尻尾を捕まえられる可能性が出てきたとあって、ミーアの鼻息は荒い。

「早速、入ってみましょう！」
そう言うと、ミーアはずんずん神殿の中に足を踏み入れた。
「これは……すごいですわね……」
神殿の中もまた、夢のような景色が広がっていた。
足元から、壁から、天井から、青く淡い光が降り注いでいた。それは、まるで、大地を照らす日の光に対抗するかのような、奇妙な光だった。
「なんだか、ここ、落ち着きませんわね……」
そうつぶやきつつ、ミーアは周囲に視線を走らせた。
神殿にはドアや仕切りはなく、あるのはただ、太い柱のみだった。
否……、もう一つ。もっとも奥まった場所に、それは掲げてあった。
透き通った神殿の中にあって、唯一、色を持ったもの。
灰色のそれは、岩から切り出した石板だった。
「なにか書いてあるな……」
アベルは、石板に顔を寄せたが、すぐにため息混じりに首を振った。
「だめだ。大陸共通語じゃない。ミーアは読めるかい？」
「ええ、これは、古代帝国語ですわ」
現在、ミーアが使っているのは大陸共通語である。対して、そこに書かれていたのは、はるか昔、ティアムーン帝国で使われていた言語だった。
ちなみにミーアも多少その心得がある。皇女の基礎教養というやつである。
「本当かい？　さすがはミーアだ」
アベルに褒められて、ちょっぴり得意げな顔をするミーア。であったのだが……。
「ふふん、ちょちょいのちょいで読んでやりますわ」
そんな風に軽口を叩けていたのは最初だけだった。

読み進める都度、ミーアの眉間には深いしわが刻まれていった。
そこに書かれていたのは……ある男の妄念……、あるいは、呪いだった。
彼は、大切な人を理不尽に失い、心の中に底知れぬ憎悪を秘めた者だった。
この神殿を訪れた彼は、そこで、大陸を追われて身を潜めていた蛇と出会う。
人の作る秩序すべてを憎む蛇、その破滅的な考えに共感した男は、その理念を実現、あるいは、利用し世界に復讐することを望んだ。
そんな彼に蛇は言う。
大陸には、肥沃なる三日月地帯と呼ばれる祝福された土地があるのだ、と。
豊作が約束されたその地には食料が有り余っており、それによって大陸全土は安定を約束されているのだ、と。
男は知っていた。
食べる物があれば、人は、たいがいのことを許すことができる。
人が剣を取り、殺戮に駆り立てられるのは、食べる物がなくなった時であるのだ。
それゆえに、人の作りし文明のすべてを滅ぼすためには、世界を混沌に堕(おと)し復讐するためには、肥沃なる三日月地帯が邪魔だった。
いったい、どうすればいいだろう？
けれど、悩むことはなかった。
男には叡智が与えられていたからだ。
人の邪悪を読み解く、悪の叡智が。

彼は思った。
その三日月地帯を穢す思想を広めようと。
食料を生み出す農業を、蔑み憎む思想を広めようと。

彼は考えた。
思想を効率的に広めるには、どうすればいいだろう？　と。

答えはすぐに出た。
思想を広めるには国を建てるのがいい。
その国を使って≪反農の思想≫を自然に、緩やかに、その地に住まう者たちに広めて……肥沃なる土地を農地以外のものへと変質させ、使えないほどに汚染させる。

そうして、彼は決意した。
肥沃なる『三日月（ムーン）』を『涙（ティア）』で染める国を作ろう、と。
それは、ある男の妄念。あるいは……帝国を生み出した呪い。

男の名は、アレクシス。
三日月（ムーン）を涙（ティア）で染め上げる帝国初代皇帝である。

第百九話　ミーア姫、ステータスを盛る

「ミーア、今の話は本当なのかい？」
「……本当かどうかはわかりませんけれど、ここには確かに、そのように書かれておりますわ」
こいつぁ、トンデモないものを見つけてしまいましたわ……、などとミーアは頭を抱えた。
さらに、石板の最後には、

『我が血族は忘れるなかれ。その記憶に刻み込め。我らは世界を憎む者。混沌と破壊をもって、世に復讐する者である。努々（ゆめゆめ）忘れず、励め！』

などと、ご丁寧にも激励文（げきれいぶん）がついていた。
――うるさいですわっ！
思わず、ご先祖さまにツッコミを入れてしまうミーアである。
と、同時に、妙に納得する部分も確かにあった。
あの革命の時、ミーアがどれほど頑張っても上手くいかなかったこと。
その原因は、帝国内に潜伏していたサンクランドの密偵「白鴉」のせいだとばかり思っていたが、違ったのだ。帝国は最初から、「混沌の蛇」という滅びの因子を内包した存在であったのだ。
――すべての貴族が、初代皇帝の思惑を受けて行動しているとは思いませんけれど、帝国の長い歴史をかけて醸成された流れを簡単に覆せなかったのは納得ですわ。それに、混沌の蛇に四大公爵家が関係しているというお話も……。
最初、それを聞いた時には「そんな国の重鎮が！？」などと思ったものだが、こうして聞いてみると納得だ。

公爵が混沌の蛇にそそのかされたのではない。
初代皇帝がすでにそそのかされていて、帝室がその初志を忘れていただけなのだ。
――まぁ、忘れても当然とは言えますけれど……。
なにせ、おぼえておく価値のないものである。
こんなものおぼえていたって、百害あって一利なしの、しょーもないものである。
――というか、これ、見なかったことにできないかしら……？
変にこんなの知ったら、騒ぎ出す連中がいそうですわ。
普通の貴族にとって、初代皇帝の思惑は、はっきり言って邪魔な代物だ。
今現在の体制で利得を得られている者にとって、その枠組みを揺るがすような要素は見なかったことにしたいもののはずで……。だからこそ、みんな忘れていったのだ。
――恐らく、お父さまも知らないはずですわ。今を幸せに生きるのに、邪魔でしかないものですもの。忘れて当然ですわ。
けれども、影響はゼロではないのだ。
例えば、没落した貴族などは、初代皇帝陛下の意向が云々などと言って、現在の体制を糾弾する材料にするかもしれない。
あるいは、歴史や伝統を無批判に受け入れてしまうような者に知られてしまったら……。
――これ……、少なくともエメラルダさんには絶対に見せない方が……。
「なっ、なんなんですの、それは……ミーアさま？」
その声に、ミーアは思わず飛び上がった。
思考にふけるあまり、ミーアは気づいていなかったのだ。
神殿の中に入ってきた者たちの存在に……。
「ミーアさま……」
不安げな顔で自身を見つめるのは、ミーアの大切な忠臣の姿で……。そして、彼女に肩を借りるようにして立っていたのは……。

「アンヌ……それに、エメラルダさんまで、どうしてこのようなところに？」
「そんなことより、先ほどのお話ですわ。本当なんですの？」
ミーアは思わず舌打ちしたくなった。
――厄介な方に聞かれてしまいましたわ。
正直な話……ミーアとしては、初代皇帝の意志など知ったことではない。
たとえこの石板の記述が本物で、ティアムーン初代皇帝が、ここに書かれているような動機で国を建て上げたのだとしても……。
ミーアとしては、いちいちそれに従ってやる道理はない。
――というか、馬鹿正直にご先祖さまの言うことを聞いていたら、またギロチンの憂き目にあってしまいますわ！
ミーアとしては、こんなためにならないものなど、とっとと海の底にでも沈めてしまいたいぐらいである。
それは、国民のため？
それとも、内戦で命を落とす兵士のため？
否、もちろん、自分自身のためである。
ミーアは自分ファーストなのだ。
それゆえに国が亡びることなど望まないし、革命が起きることなど望むはずがない。
いつでも甘い物が食べられて、自分はベッドでゴロゴロしていられる生活。
それこそが、ミーアの理想！
その理想の前では、先祖の遺言など戯言に過ぎず。
否！　むしろ、害悪ですらある。
帝国がどんな目的で作られたとしても、知ったこっちゃないのである！
目の前に新品のギロチンがあったとしたら、ミーアは処刑に使ったりなどしない。固い果実を割って、甘いジュースを得るために使うのだ。

なんのために作られたかではない。今、なにに使うのが一番役に立つかが重要なのだ。
けれど、そのように考えられない人も当然いる。
その筆頭が、今まさに、ミーアの前に立っていた。
――エメラルダさんに知られてしまったのは、失敗でしたわね。なんてタイミングが悪い。
ミーアは知っている。エメラルダは、貴族の伝統やら親の言いつけやらに縛られがちな人間である。
――エメラルダさん、わたくしと違って、いささかチョロイところがありますから、こんなのでもコロッと影響を受けてしまうかもしれませんわ。
「そんな……、そんなことを、初代の陛下が……」
ふるふると震えつつ、石板の文字をじっと読んでいるエメラルダ。
「こっ、こんなの気にする必要はありませんわ。大丈夫……」
ミーアがそう声をかけても、まったく反応を示さない。
「私たちの帝国が、このようなことを？　初代陛下の御心を行うために……」
――ああ、まずいですわ。ぜんっぜん、わたくしの声が聞こえておりませんわ！
うつろな目で、ぶつぶつとつぶやくエメラルダにミーアは慌てる。
――あああ、もう！　エメラルダさんって権威主義的なところがございますし、初代皇帝の権威を持ち出されては、いささか不利かもしれませんわ。
確かに、ミーアは皇帝の娘であって、至尊の皇帝自身ではない。しかも、エメラルダとは血のつながりもある、いわゆる親戚の娘なのである。
〝ありがたみ〟としては、どう考えても、初代皇帝の言葉の方が上である。
――うううう、これは、なんとかしなければ。エメラルダさんまで、蛇に傾倒していきそうですわ！

ミーアは、今のところエメラルダやグリーンムーン公爵は、混沌の蛇とは無関係であると考えている。
この初代皇帝の極めて迷惑かつ悪質な想いを律義に汲んでいるのは、きっと、別の公爵家の者だろう。
――そもそも、皇女たるわたくしや、お父さまさえ継承していないであろうものを、勝手に実現しようとか思わないでもらいたいですわ！
それはさておき、そんな現在は無害なエメラルダであるが、このまま初代皇帝の言葉に影響されてしまうと、これは極めて厄介である。
どうすべきか……、しばしの黙考……直後、閃いた！
――そうですわ……、わたくしの、皇女の言葉が軽いというのならば、もっと重要度（ステータス）を盛ってやればいいのですわ！
権威では勝てない。けれど、ミーアには初代皇帝に勝るものがある。
すなわち、それはっ！
「ねぇ、エメラルダさん……」
ミーアは、エメラルダの正面に立ち、そっとその瞳を覗き込む。
「確かに、初代皇帝陛下のお言葉は、とても重いかもしれませんわ。わたくしの言葉では……到底かなうものではございませんわ。ですから、言い直しますわ。エメラルダさん、耳を傾けていただけないかしら？　あなたの……親友であるこのわたくしの言葉に」
そう……、ミーアは自身の皇女という立場に上積みしたのだ。
「親友」という要素を。
確かに、エメラルダは普段から、ミーアの親友を公言している人物ではある。けれど、ミーアはそれを認めたことは、ほとんどなかった。
別に親友とも思ってなかったし……。
けれど、今ここに、ミーアは正式に言うのだ。
「あなたを、わたくしの親友ポジションに認定して差し上げてもよ

ろしくってよ？」
と。
なるほど、確かに初代皇帝の言葉は重い。初代皇帝を大切にし、その言葉を守ることは帝国貴族として当然の、称賛されるべき姿勢なのかもしれない。
けれど、初代皇帝の言葉に接した時、それをするのは別にエメラルダだけではない。
ゆえに、初代皇帝の言葉を忠実に守る忠臣というのは……、別に美味しいステータスではない。だって、当たり前のことだから。
けれど「皇女の親友」というポジション……、これは美味しい。
ミーアの親友を公言できる人間というのは、物理的にはそう多くはない。
茶飲み友だちは百人できるかもしれないが、親友は百人できないのだ。
となれば、レア度はどちらが上かは考えるまでもなく明らか……。
その上で、ミーアは言うのだ。
親友としての言葉の重みを、エメラルダに突きつけるのだ。
「初代皇帝陛下がどのような思惑で、帝国を建て上げられたのであろうと、それは些細なこと。それよりも大切なことがございますわ」
「た、大切な……こと？」
「民を安んじて治めることですわ」
それが……、それこそが、食べたい時に甘い物を食べられる環境を維持するということ。
ゴロゴロとベッドに横になっていても、あまり文句を言われずに済む環境を維持するということ。
ミーアの理想！　黄金郷のヴィジョンにして、真に価値ある未来だ。
「もしも、ティアムーン帝国が、そのような悪しき目的のために作られたのだとしたら……、今、この時、わたくしが、それを破棄いたしますわ」

そう言ってから、ミーアは笑みを浮かべた。
「ねぇ、エメラルダさん、初代の皇帝陛下ではなく、わたくしの言葉に耳を傾けていただけないかしら？　過去の盟約に縛られて初代皇帝に忠義を尽くすのではなく、親友であるわたくしとの友誼を選んでいただけないかしら？」
そうすれば、公式に皇女の親友と名乗ってもいいのよ？　と、ちょっぴり媚びたような、ゲスい笑みを浮かべるミーアなのであった。

第百十話　親友

――ああ、いつも、この方はこうですわ……。
「こんなの気にする必要はありませんわ。大丈夫……」
目の前で、困ったような笑みを浮かべるミーアを見ながら、エメラルダは思い出していた。

それは、今から五年前のこと。
グリーンムーン公爵家で開かれたお茶会での出来事だった。
その日、エメラルダは少しだけ緊張していた。
なぜならば、その日のお茶会には皇女ミーア・ルーナ・ティアムーンが来る予定になっていたためだ。
皇女殿下のお茶会デビューを自身の屋敷でする。それが決まって以来、エメラルダは父の元で、しっかりと準備をしていた。
その甲斐あってか、お茶会はつつがなく進んでいった。
美味しいケーキにご満悦な様子のミーアは、お代わりを持ってきたメイドにニコニコ上機嫌に笑いかけた。
「あら、ありがと。えーっと、ニーナさん。また、食べ終わったら、お代わりお願いね」
得意げにその名前を口にするミーア。どうやら、メイドたちのやり取りを聞いて、名前をおぼえていたらしい。
そのことを誇るかのようなその態度に、エメラルダは思わず苦笑する。
きっと、その無作法を幼き姫殿下は知らないのだと、そう思ったから……。
年上のお姉さんとして教えてあげなければならないと思ったのだ。
「ミーアさま、高貴なる身分の方は平民の名前などいちいちおぼえないものですわ。だから、メイドの名前なんか呼んではいけません

わ」
「あら？　なぜですの？」
きょとん、と首を傾げてミーアは言った。
「なぜ、名前を呼んではいけませんの？」
「それは……」
エメラルダは一瞬、考え込んでから、
「それは、私やミーアさまが貴い血筋の者だからです。民の上に立つ者だからです。それが貴族というものの伝統であって……」
それは、エメラルダが立つ土台。いわば彼女の常識だ。
けれど……、
「そんなのバカらしいですわ」
幼き姫殿下は、たった一言でそれを切って捨てた。
「名前をおぼえる方が楽ですのに、どうして、そんなことをしなければならないのかしら？」
その言葉は、エメラルダにとって衝撃的だった。衝撃的過ぎた……。
あまりに衝撃的だったために……、
「だって、あの方、わたくしたちとあまり年齢も代わりませんでしょう。どれだけケーキのお代わりをお願いしても断らなさそうですわ。お願いする時に名前を呼べた方が楽……」
という、その後のちょっとアレな言葉を聞き逃してしまったほどだ。
昔から、ちゃっかり者のミーアである。
齢八つにして、この打算……後の帝国の叡智の片鱗が見られるエピソードのような、そうでもないような……。
それはともかく、エメラルダはミーアの一言に感動してしまったのだ。
その言葉（聞き逃したところ以外）は、まさにエメラルダの胸中と合致したものだったからだ。
メイドの名前をおぼえておいて、慣れ親しんだメイドを指名して

世話をしてもらう。
遊び相手や話し相手になってもらう。
なにかをしてもらったらお礼をして、悪いことをしたら謝る。
その方がよほど楽で気持ちいいのに、どうしてしてはいけないんだろう？
それをしてはいけない理由って、なんだろう？
生まれた疑問を、エメラルダは父に尋ねた。
けれど、返ってきたのは困ったような笑顔だ。
「それが貴族というものだよ、エメラルダ」
その答えは到底納得のいくものではなくって……。けれど、そういうものか、とエメラルダは理解した。
納得する必要などない。そうなっているから、そうなのだ、と。
それは、いつしか、エメラルダを縛る鎖となった。
貴族のしきたりはエメラルダを形作ると同時に、彼女を縛る頑丈な鎖なのだ。
そして……だからこそ憧れたのだ。
その鎖に縛られない幼き姫殿下、ミーア・ルーナ・ティアムーンに。

「ねぇ、エメラルダさん……」
初代皇帝の、尊重すべきティアムーン帝国の開祖の、縛られるべき貴い言葉を前にしても……、ミーアの態度は変わらない。
気にする必要はないと言う。
エメラルダが抵抗すら諦めてしまうような強大な権威を前にしても、ミーアは揺らぐことはない。
いつだって、そうなのだ。
いつだって、変わることがないのだ。
貴族の常識という鎖に縛られない自由な翼を持った人。
エメラルダは、それを常識外れと思う。
皇女らしくない、帝室の権威と伝統を踏みにじる行為だと批難す

る。
だけど、本当はずっと……ずっと。
――ああ、そう。そうでしたわ……。私は、ミーアさまに憧れていたのですわ……。
エメラルダは思い出した。
ミーアに憧れて、だからずっと、ミーアの隣に立つ親友になりたいと思っていたのだ。
エメラルダは知っている。自分は本当は、ミーアの親友などではない。
親友になりたいと、ずっと願っていたけれど……そうはなれなかった。
だって。ミーアのように、自由ではいられないから。
エメラルダを縛る鎖は、予想より遥かに太くて頑丈だったのだ。
それを断ち切る勇気が自分にはないことを、彼女は痛いほどによくわかっていた。
自分はきっと、ミーアの友となるには相応しくない。
そんな諦めが、いつだってエメラルダの胸にはあって……だというのに……、
「過去の盟約に縛られて初代皇帝に忠義を尽くすのではなく、親友であるわたくしとの友誼を選んでいただけないかしら？」
ミーアは軽々と踏み込んでくる。簡単に、エメラルダの常識を裏切ってしまう。
こんなにもあっさりと親友であると……、初代皇帝への忠義ではなく、自身との友誼を選べと……。
それが、エメラルダにもできるのだと、呼びかける。
どうということもないことだと、いたずらっぽい笑みさえ浮かべながら……。
でも……、
「そんなの……無理ですわ」
口から零れ落ちたのは、否定の言葉だった。

それは、彼女を縛る貴族のしきたりのせいか？
あるいは、初代皇帝の権威が彼女を屈服させたのか？
否、そうではなかった。
それらの鎖は、ミーアが手を差し伸べてくれた時に、すべて溶けて消えてしまっていた。
けれど、最後の最後に、残るものがあった。
ミーアの手を取るのをエメラルダに躊躇わせたもの、それは彼女の胸に突き刺さった小さな棘だった。
取るに足りない夢の出来事、あの日、打ちひしがれたミーアをお茶会に誘いながら、その約束を果たせなかったという悔い。
いつ、どこで、どんな風にかはわからないけれど、ミーアを裏切ってしまったという……気持ち。
決して本当にあったこととは思えないけれど、でも、胸に残る痛みは本物で。
それが、エメラルダに、ミーアの友と名乗らせることを許さない。
「私は、ミーアさま……、あなたを裏切りましたわ」
零れ落ちるは告解の言葉。
「はて？　そんなこと、ございましたかしら？」
きょとんと小さく首を傾げるミーアに、エメラルダは続ける。
「ミーアさまを、お茶会にお誘いして、その約束を守ることができませんでしたわ」
自分はいったいなにを言っているんだろう……、エメラルダは思わず呆れてしまう。
夢の話をされたって、ミーアも困るだけだろうと思って……。
でも、だけど……。
「そう、ですわね……。でしたら……」
ミーアは笑わなかった。それどころか、ものすごく真面目な顔をして……、何事か考えこんでから……、
「わたくし、甘いケーキを所望いたしますわ」
口から出たのは意外な言葉。

「え？」
思わず、瞳を瞬かせたエメラルダだったが、直後に続いた言葉に息を呑んだ。
「うん、ケーキ。とっても美味しいケーキが食べたいですわ。だから……、この島から出たら、わたくしをお茶会に誘ってくださらない？」
ミーアは言ったのだ。
「そこで帝国への忠誠を誓いあうんですの」
エメラルダをまっすぐに見つめて……。
「大陸を滅ぼすための古い帝国にではなくって、すべての臣民の安寧を願い、そのために力を尽くす、そのような、新しい帝国への忠誠を」
その時、ふいにエメラルダは気づいた。
自らの頬に、すぅっと熱い雫が流れ落ちたことを。
――泣いてる？　私、どうして……？　泣くような理由なんか、どこにもございませんのに……。
それは、遠き日の約束。
果たされることなく、夢と消えた悲しい約束。
――あれは、ただの夢ですわ……。ミーアさまが知ってるはずございませんわ。でも……。
エメラルダは、ミーアを見つめた。
その顔に、なぜだろう、エメラルダは……、あの夢の中のミーアを見た気がした。
ミーアが……、あの時の約束を果たす、その機会を与えてくれているように見えて……。だから。
「はい……。ミーアさま、必ずお誘いいたしますわ。最高のお菓子職人を招いて、最高のケーキを……用意いたしますわ」
エメラルダは、差し出された手を取った。
かけがえのない親友の手を。

ちなみに……この時、すでに時刻は夜になっている。
朝、昼、夕と食事を抜いたミーアは……、とても……とーってもお腹が空いていた。
まぁ、だから、どうということもないのだが……。

第百十一話　「すぐに戻りますわ」と言い残して、エメラルダは姿を消した

「さて……、エメラルダさんの招いてくださるお茶会に参加するためにも、なんとか脱出する必要がございますわね……。アンヌ、あなたたちは、どうやってここに？　というか、そもそもどうして、こんなところにおりますの？」

エメラルダの言いくるめに成功したミーアは、改めて状況の確認に入る。

「はい。実は……」

アンヌの説明を聞いて、ミーアは思わずため息を吐いた。

「なるほど、では、そちらからの道も崩れてしまったのですのね？」

自分たちが来たのとは別のルートがあると聞いて、少しだけ喜んだミーアだったが、すぐにその希望はしぼんでしまった。

「はい。崩れた瓦礫を取り除くのは私たちでは難しそうです。それに、急な坂を上らないといけませんから……」

アンヌは、ちらりとエメラルダの足元に目を落としてから、

「残念ですけれど、こちらから出ることは難しそうです。ミーアさまたちは？」

「それが、わたくしたちも地面の崩落に巻き込まれてしまって……」

ミーアは先ほど落ちた場所を思い出す。

「やはり、登るのは不可能そうですわ」

「そうだろうね。エメラルダ嬢がケガをしているというのなら、余計に厳しい」

「一応、落ちてきた場所には、反対側にも洞窟が伸びていたのですけれど……」

それが地上に通じている保証はどこにもないわけで……。

「とりあえず、この神殿の周りに、ほかに出口がないかどうか調べてみましょう。そして、もしもほかにないようでしたら、先ほど、

わたくしたちが落ちた場所まで戻るのがよろしいのではないかしら？」
生存術（サバイバル）の専門家（スペシャリスト）ミーアの提案に、その場の皆が素直に頷く……。
大丈夫なのだろうか？
っと、そこで、それまで黙っていたアンヌが、そっと手を挙げた。
「あの、ミーアさま。少し休憩されてはいかがでしょうか？　エメラルダさまは、足にケガをなさっていますし、ミーアさまも少しお疲れに見えます」
指摘された瞬間、ふわわっと、ミーアの口からあくびが漏れた。
「なるほど、確かにそうですわね……。では、少し休んでから行動を開始いたしましょうか」

しばし仮眠をとった後、ミーアたちは神殿の周りを調べた。より正確に言えば、ミーアが長めの仮眠をとっている間に、短期睡眠を終えた三人が手分けしてあたりの捜索を行ったのだが……。
その結果、やはり進めそうなルートは、アンヌたちがやってきたところと、ミーアたちがやってきたところの二か所にしかないことが判明した。
「あのもう一方の道が、外へとつながっているとよろしいのですけど……」
一縷の望みをかけて一行は、ミーアとアベルとの落下地点へと戻った。
着いてすぐに、アベルが口を開いた。
「水位が、また上がってるな。ここに来るまでの道もそうだけど、さっきより水が上がっている気がする」
その言葉の通り、先ほどまでは足首までだった水位が、今はまた膝の上ぐらいになっている。
「なるほど、潮の満ち引きがあるということでしたら望みがありますわ。外の海に通じているということになりますもの」
エメラルダは、手に水をつけて、口元にもっていった。

「しょっぱいし、間違いなく海水ですわね。外につながっている可能性は十分に高いですわ。ただ……」
天井を見上げてから、ミーアたちの方に視線を向ける。
「外に出るのは少し待った方が良いと思いますわ。夜の海は大変危険だと、聞いたことがございますの」
エメラルダの進言を入れて、ミーアたちは、再び仮眠をとることにした。
洞窟の中は若干冷えるため、皆で固まってである。
――この寒さは地下牢を思い出させますけど、ふふふ、なんだか、不思議と楽しいですわね。
お腹が減ってはいたが、なんだか楽しくなってきてしまうミーアであった。
――願わくば……これが、ひと夏の楽しい思い出になってくれればいいのですけれど。

やがて天井の穴から、うっすらと日が入ってくるようになった。
朝が来たのだ。
不思議なことに、日の光が見えだすと、水の中の青い光は消えていった。
――ふむ、夜になると光りだす生き物、なのかしら？
問題は、これから向かう先が闇に沈んでいることだった。
当たり前のことながら、洞窟の中までは光は入ってこない。かといって、松明を持って……というわけにも当然いかない。水の中を潜らなければならなくなったら火が消えてしまう。
「こんなこともあろうかと、ですわ！」
そんな時、得意げな声を上げたのはエメラルダだった。
おもむろに、エメラルダが胸元から取り出したペンダント。そこにはめ込まれた石は、淡い光を放っている。
「これがあれば、しばらくは視界が確保できますわ。この先がどうなっているのかわかりませんし、私が様子見をして参ります。途中

で潜水する必要も出てくるかもしれませんし……」
　そう言って、颯爽と服を脱ぎ捨てるエメラルダ。水浴びの時から着たままの水着姿になると、水の中に入っていこうとする。
「待ちたまえ。ここはボクが。ご婦人方は、ここで休んでいてくれたまえ」
　慌ててアベルが止めるが、そんな彼をエメラルダは見下ろして言った。
「そういうわけには参りませんわ。アベル王子、試みに聞きますが、あなた、泳ぎが得意ですの？」
「いや、一応は泳げるが、得意というほどではないな……」
　バツが悪そうな顔をするアベルに、エメラルダは勝ち誇ったように笑う。
「そう。では、ここは私に任せていただきたいですわ。私は幼い頃より、毎夏泳いでおりますのよ」
「しかし、そんな危険なことをご婦人にさせられないよ」
「お気遣いには感謝いたしますわ。けれど、アベル王子、あなた、少し自覚が足りないのではなくって？」
「自覚？　どういうことだろうか？」
　首を傾げるアベルに、エメラルダは、ふふふ、と笑みを浮かべて、
「無論、決まっておりますわ。ミーアさまの伴侶となる自覚です」
「なぁっ！？」
　かっちーん、と固まったアベルに、エメラルダは高らかに笑い声をあげる。
「星持ち（エトワーリン）公爵令嬢たるこの私が、親友であり、皇女でもあるミーアさまの旦那さまを危険な目に遭わせるなど、ありえぬこと。まして、これはミーアさまご自身の命にも関わることでございますわ。失敗は絶対に許されない。ここは譲れませんわね」
　今度は横で話を聞いていたアンヌが手を挙げた。
「でも、エメラルダさま、足首のケガは？」
「へ……？　ケガ、ですの？　あっ……」

っと、エメラルダは、少し気まずげに目をそらして……。
「わっ、忘れておりましたわ。あっ、ああ、アンヌ……さんの手当てがよかった……のかもしれませんわね」
「はて……？」
エメラルダの言を聞き、きょとん、とミーアが首を傾げる。
「なっ、なにか文句でもありますの？　ミーアさま！」
ムッとした顔をするエメラルダに、ミーアは小さく笑みを浮かべた。
「いいえ。なんでもありませんわ」
それから、深々と頭を下げてから、言った。
「よろしくお願いいたしますわね、エメラルダさん」
そんなミーアに、エメラルダは小さく笑みを浮かべた。
「ええ。必ずや朗報を持ち帰ってみせますわ。そうして、この島から無事に帰ったら今度こそ、ミーアさまと盛大なお茶会をするのですわ！」
なんとなく……言ってはいけないセリフを、堂々と胸を張って言い放ってから、エメラルダは笑みを浮かべた。
それは柔らかな、およそ彼女が浮かべたことのないような、優しい笑みだった……。
「大丈夫。すぐに戻ってまいりますわ」

けれど……その言葉とは裏腹に……、水の中に姿を消したエメラルダは戻ってこなかった。

……『すぐ』には。

第百十二話　ミーア姫、牽引される

「エメラルダさんの、あんな素直な笑顔、はじめて見ましたわ……」
水の中に消えたエメラルダを見送ってから、ミーアはぽつり、とつぶやいた。
まるで、毒気が抜けてしまった笑顔。
それは、いい笑顔なのだけど……なんとなく、胸がざわつく。
なぜだろう、ミーアは、あのお茶会の約束をした日のことを思い出してしまった。
あの日の別れ際のエメラルダも、あんな感じのいい笑顔をしていたのではなかったか？
「なんだか、エメラルダさんらしからぬ頼もしさでしたし……。なんだか、少し心配ですわね……」
そうして、そのまま、五分が経った。
「エメラルダさん、大丈夫かしら……」
心配そうにつぶやくミーアに、アンヌが笑みを浮かべた。
「大丈夫ですよ、ミーアさま。それに、まだ五分ぐらいですよ。エメラルダさまを信じましょう」
「ええ、そうですわね……」
そのまま、十分が経った。
「……大丈夫かしら、エメラルダさん。無理してケガしたりなんかは……」
「大丈夫だ、ミーア。彼女は、ボクたちの中でも泳ぎが一番上手いし、滅多なことはないさ」
ミーアを安心させるためだろうか。明るく軽い口調で、アベルが言う。
けれど、ミーアは重々しく頷くのみだった。
そして……、だんだん、だんだんとミーアの口数は少なくなって

いき、三十分が経った頃には、すでに半泣きになっていた。
時間が経つにつれ、脳裏に無限に悪い想像が膨らんでくる。
このような場所で、様子を見に行った者が帰ってこないということが、なにを意味するのか……？
それは考えるまでもなく明らかで……。さらに、先ほどの優しい笑顔が思い出されて……。
ミーアは、思っていた。
別に、エメラルダのことは親友だなんて思ってないし、せいぜいがちょっとした友達程度のものだと……。
しかし、思い返してみると、彼女との付き合いは割と長いのだ。
それはもう、お茶会デビューもそうだったし、お誕生会にも何度も招待されたし、ミーア自身の誕生日もしっかりとお祝いしてくれた。
最近は忙しくてそこまででもなかったが、昔は一緒にお揃いのドレスを仕立てて笑いあったこともある。
だから……ミーアは別に、エメラルダのことを唯一無二の親友だなどとは思わないけれど……、それでも、いい友だちには変わりなかったのだ。
失ってしまえば、涙が出るぐらいには……親しい人だったのだ。
「う、うう、エメラルダさん……。ひくっ、だ、大丈夫だって……、必ず、帰ってくるって……言ってましたのに……。ひどい、ひどいですわ……、うう、あなたは……また、わたくしを、裏切って……」
一時間も経つ頃にはミーアは大泣き状態になっていた。
顔中を涙でベットベトにして、えぐえぐ、としゃくりあげるミーア。その頭を優しく撫でつつ、慰めているアンヌも、若干涙目になってきたところで……。
ぱしゃり、と、後ろで水音が響いた。
と同時に、ぷはっと息を吐く音が聞こえて……。
「ふぅ、お待たせしてしまい申し訳ございませんでした。ただいま戻りましたわ」

あっけらかんとした顔をしたエメラルダが戻ってきた。
泳いで気持ちよかったのだろうか。若干、その顔はツヤツヤして、実に元気そうだった。
「外までは、ここから五分というところですわね。大丈夫、少し潜るところもございますが、ミーアさまでも行けそうですわ」
水を滴らせつつ、ミーアたちのところに来たエメラルダは、はて？　と首を傾げた。
「どうかなさいましたの？　なんだか、雰囲気が……」
「ずいぶんと、時間がかかりましたわね……」
すすす、っと近づいてきたミーアに、エメラルダは胸元のペンダントを差し出した。
「ああ、月灯石に日光を集めておりましたの。明かりがないと少し厳しい道のりですし。それと、冷えてしまった体を温めるために、少し岩の上で日光浴を……あら？　どうかなさいましたの？　ミーアさま？　はひっ！？」
言葉の途中で、ミーアがひっしとエメラルダに抱き着いた。そのまま、お腹のあたりをギュウギュウと締め上げて、ミーアが言った。
「心配いたしましたわ！　すっごく心配したんですのよ！　もう、帰ってこないんじゃないかって……」
「まぁ、ミーアさま……」
エメラルダはちょっぴり驚いた顔をしたが……、
「大丈夫、大丈夫ですわ、ミーアさま。私は決して、親友であるあなたを裏切ることはございません。ええ、もう、二度と……」
すぐに優しい笑みを浮かべるのだった。

落ち着いたところで、改めてエメラルダからこの先のことを聞く。
「先ほども申しましたけれど、それほど距離はございませんわ。道も一本道で、迷うこともないでしょう。一か所、二か所、水の中を進まなければならない場所がございますけれど……ミーアさまぐらい泳げれば問題ないと思いますわ」

それを聞いて、顔を曇らせたのはアンヌだった。
平民であるアンヌは、ミーア以上に泳いだ経験がなかったのだ。
「ふむ、でしたら、アンヌさんは私と一緒に行くのがよろしいですわ」
こともなげに言ったエメラルダ。けれど、さすがにミーアは眉をひそめる。
「あなた……、エメラルダさん、ですわよね？　どうかなさいましたの？　頭でも打ったとか……」
「まっ！　酷いですわ、ミーアさま。私はただ、親友たるミーアさまの大切なメイドだから、少しは優しくしてやってもいいかな、と思っただけですわ！」
強い口調でそう言って、それから、エメラルダはわずかに瞳を逸らした。
「それに、その……、いろいろお世話になりましたし……。恩義をきちんと返すのも、高貴なる血筋の者の礼というものではなくって？」
――ああ、ほんと、エメラルダさんは、面倒くさい性格ですわ。わたくしの親類とはとても思えませんわね……。
そうは思いつつ、ミーアは頷いた。
「わかりましたわ。エメラルダさん、アンヌのこと、お願いいたしますわね」
こうして、隊列は決まった。
先頭をエメラルダが先導し、続いてアンヌが。さらにその後に、アベルとミーアが続く。
本来であれば、アベルが殿を守るべきではあるのだが、彼がミーアの前に出なければならないのには理由があった。それは……。
「ここからは少し深いな。足がつかなそうだよ」
「わかりましたわ！」
ミーアは心得た、とばかりに頷くと、すっと後ろを向き……、背泳ぎの形に浮いた。

そのミーアの襟首を掴んで、アベルが前を泳いでいく。
そう、この順番にした理由は、アベルがミーアを牽引して泳がなければならないためだったのだ！
……まぁ、それはともかく。
前を行くエメラルダの、掲げた明かりを追って行く。
エメラルダの言う通り、道のりはそこまで厳しくもない。
何度か泳ぎ、潜り、を繰り返し……、やがて前方に光が見えてきた。
「もうひと頑張りですわ。みなさん！」
エメラルダの励ます声が聞こえてくる。
別に頑張ってなかったが、それでもミーアはその声に励まされて、水をかく手足に力を入れた。そして……。
「ぁっ……」
視界に走ったまぶしさに、ミーアは思わず顔を覆う。
直後に感じたのは強い潮風。耳に入るのは、寄せては返す穏やかな波の音。
徐々に慣れてきた目には、晴れ渡る青い空が入ってきて……。
「あ……、ああ、無事に、出られたんですのね……」
思わず、安堵に力が抜けそうになる。といっても、仰向けに浮いているので、別に今まで力が入っていたわけではないのだが……。
それから、ミーアは改めて、近くにいる面々に目を移す。
少し離れたところにはエメラルダとアンヌ。そして、自分のすぐ近くにはアベルの姿があった。
――ああ、全員で生きて出られるなんて……夢みたいですわ。
思わず感動しそうになるミーアであったが、さらに、夢のような出来事は続く。
「あっ！　あれは、エメラルドスター号ですわ！」
歓声を上げつつ、エメラルダが指さした先、懐かしい船の姿があった。
「助かった……わたくしたち、助かったんですの？」

そうつぶやいて笑みを浮かべるミーアは、あと少しすると……思い出すことになる。
ミーア皇女伝のとある記述……。
自身が、こんな無人島に来ることになった、その原因の記述を。

平和な海に現れた巨大な影……。
それが、自分たちの背後に、音もなく近づきつつあることに、ミーアはまだ気づいていなかった……。

第百十三話　大海の勇者、ミーア姫、猛々しい雄たけびを上げる！

「ほらー！　ほらほらほら、ほーらっ！　　無事でしたわ、やっぱり！　私のエメラルドスター号があの程度のショボい嵐で沈んじゃうわけないって思ってましたわ！　ほらー、ぜんっぜん無傷！　あの威容！　さすがは私のエメラルドスター号ですわ！」

なぜだか、エメラルダが勝ち誇った笑みを浮かべた。

いささか、ウザッ！　と思ったミーアであったが、まぁ、このまま何事もなく帰れるなら、これでいいか、と思い直す。

それよりも大事なことは……、

「さて、どういたします？　あそこまで泳ぐのは結構、大変そうですけど……」

エメラルドスター号までの距離は、およそ四〇〇m（ムーンテール）といったところである。

――助けが来たのは嬉しいですけれど……、空腹にグッとくる距離ですわね。あちらから来ていただけると楽なんですけど……。

ミーアは小さく首を傾げて言った。

「例の小舟を出していただけると楽でいいですわね……。ここから呼びかけて届かないかしら？」

「さすがにこの距離は難しいんじゃないかな……」

ミーアの言葉に、苦笑したアベルは、

「よし。それじゃあ、ボクが先に行って、小舟を出してもらおう」

そう言って、颯爽と泳いで行ってしまう。

「ふむ、アベルに一人で苦労していただくのは少し気が引けますけれど……。確かに、あそこまで泳いでいくのは大変そうですわね……」

高きところから低きところに流れていく、流水のごとき柔軟さがミーアの思考の特徴だ。

少しでも近づいていた方が向こうからの助けと合流するのも早くなるはず……などと思ったりは当然しない。
――ああ、本当、海は力を抜けば体が浮くから楽ちんですわー。
などと、ぼんやり、空を見上げている。
下弦の海月の面目躍如である。
そうして、ポーっと海面を眺めていたミーアは、不意に気付いた。
自分の方にすぃーっと寄ってくる背びれに！
「……あら？　なにかしら、あれは？」
ぽけーっと首を傾げるミーアであったが、直後、後ろの方で悲鳴が上がった。
「みっ、ミーアさまっ！　たっ、たた、大変！　大変ですわ、あれ、あれあれっ！　ひっ、人食い魚ですわっ！」
「……はぇ？」
一瞬、何を言われたのか、まったくわからなかったミーアであるが、ぽけーっと再び背びれに目を向け……その大きさを確認し……、それが人食い魚のものであった場合にどうなるのかを、即座に理解する。
すなわち、自分は今……生きるか死ぬかの瀬戸際にいるということを！
「急いでエメラルドスター号まで逃げますわよっ！　あっ、あちらも気づいて小舟を出してくれてますわ。ともかく、お急ぎになってっ！」
言うが早いか、アンヌの手を引いたままのエメラルダが泳ぎだした。
「ひっ、ひぃいっ！　ひいいいいいっ！」
ミーアも慌てて泳ぎだす。といってても、ミーアにできることはそう多くはない。
くるりと華麗に裏返り、背泳ぎの体勢をとり、バタ足する！
小さく頼りない足で、懸命に水を蹴る、蹴るっ！
けれど……当然、そのスピードはお察しである。

今は焦っているせいで、余計に、ぱっちゃぱっちゃ、と小さな水しぶきが立つばかりで、その体は一向に前へと進まない。
さらに、
「ひいいいっ、ひぃいいいいいいいっ！」
ミーアの泳ぎ方は、息継ぎが楽な反面、後ろがとてもよく見える。すぃーっと自分の方に向かってくる、太くて巨大な背びれが、ガッツリ見えてしまって。
「ひぃややあああああ、きっ、来てますわっ、近づいて来てますわっ！」
本来であれば、人食い巨大魚（メーガロドゥン）に狙われた時点で、逃げ切れるものではないのだが……、ミーアを追いかけてきている背びれは、なぜか、急いで距離を詰めてこようとはしなかった。
まるで、獲物をいたぶるかのように……、ゆっくり、ゆっくり近づいてきているのだ。
――う、ぐぐ、おっ、おのれ、バカにしておりますわね。かくなる上は……っ！
もはやこれまで……とばかりにミーアは覚悟を決めた。
そうなのだ、そもそも皇女伝の記述が本当ならば、自分はあの人食い巨大魚を殴り倒すことになっているのだ。倒せるのだっ！
ギリっと歯を食いしばると、ミーアは雄々しくも気合の雄たけびを上げる。
歴戦の戦士が上げるような、猛々しい雄たけび（ミーアの中では）は……、周囲の者の耳には、
「ふひゃあああっ！」
などという奇声に聞こえていたが、そのようなことを気にしている余裕は、もはやミーアにはない。
ミーアは近づいてくる巨大怪魚に向けて思い切り腕をブンブン、と振り回した。
それは、ちょうど、幼い男子が、こうすれば誰も近づいてこられないから最強だ！　と考えてするような、腕をぶんぶんぶん回す動

作だった。誰をも傷つけられそうもない、そんなヘナチョコパンチであったのだが……、そこで奇跡が起きた！

ミーアの手が、巨大怪魚の鼻っ面をぴしゃん、とひっぱたいたのだっ！

ぶにょぅん、という微妙な手ごたえ。反射的に目を開いたミーアは、自分から遠ざかっていく背びれの姿を見つけた。

直後、小舟が近づいてきた。

「すごい！　すごいですわ、ミーアさま！　人食い巨大魚を殴り倒すなんて！」

小舟の上から、エメラルダが差し伸ばした手を取り、引きあげてもらう。

「ふ、ふふふ、あ、ああ、当たり前ですわ。このぐらい、わたくしにかかれば、かかっ、簡単っ、簡単ですわっ！　どんとこいですわっ！」

得意げに胸を張るミーアであったが……、そそくさと引き上げられた小舟の真ん中の方に場所を移して、しっかりと、落ちないように掴まる。

「さっ、さぁ、帰りますわよっ！　とっとと！　急いでっ！」

そうして、涙目で勇ましく言うのだった。

……ちなみに、すでにお察しのこととは思うが、ミーアが殴り倒したのは人食い巨大魚（メーガロドゥン）ではなかった。

平べったい魚を縦にしたような、大人しい魚……、学術名『オーシャン・フルムーンフィッシュ』、通称『ムーンボウ』と呼ばれる魚だった。

岩にぶつかっただけで死んでしまうこともあるムーンボウだったが、幸いにもミーアのへなちょこパンチでケガをすることはなく……。

えらい災難だったなぁ、などと思いつつ、すぃーっと泳ぎ去っていくのだった。

平和な海の光景だった。

第百十三話　大海の勇者、ミーア姫、猛々しい雄たけびを上げる！（後書き）

ちなみにオーシャン　サン　フィッシュ＝マンボウですが、オーシャン・フルムーンフィッシュ＝ムーンボウは、背びれを海面から出す近い種類の魚とお考えいただけると……。

第百十四話　人それぞれの忠心（フェティッシュ）

一方、ミーアたちが地下にいる間、シオンたちが何をしていたかというと……。

話は、少し前に遡る。

エメラルダを探すべく、シオンとニーナは泉の周辺をくまなく見て回ってから、洞窟へと戻ってきた。

けれど、洞窟で待っているはずのアンヌの姿はなく、しかもミーアとアベルも帰ってこなかった。

「やれやれ……、ティアムーンの女性たちの間では、無人島で姿を消すのが流行ってるのか？」

そう軽口を叩いたシオンだったが、さすがに困惑を隠せていなかった。

戻ってきたキースウッドと合流したシオンは、とりあえず、所在のわかっているアンヌの行方を追った。そして、洞窟の奥が崩落しているのを発見してしまう。

さらに、ミーアたちの向かった先で、がけ崩れの痕跡を発見して、さすがに言葉を失った。

そんなシオンに、キースウッドの努めて冷静な声が届いた。

「もしここから落ちたのだとしたら……、下でケガをして動けなくなっているのかもしれません」

「ああ……、そうだな」

彼の指摘が何を意味するのか、わからないシオンではなかった。

仮にミーアたちが生きていたとしても、助け上げるのは、ほとんど不可能。

つまりは、ミーアたちが助かるのは絶望的であるということで……。

――いや、諦めるな。方法はあるはずだ。
膝を屈することなくシオンは、考えを巡らせる。けれど、いくら考えても助け出す方法は思いつかなくって……。
だが、その直後に状況は一変する。
浜辺で海岸線を見張っていたニーナが、小走りにやってきたのだ。
「エメラルドスター号が戻ってきました」
「なんだって？　それならば、急ぎ船員の手を借りたい。縄があれば、あそこから降りていくこともできるかもしれない。まだ、希望を捨てるには早い」
そう思っていたシオンだったが、直後に入った続報で、さらに驚愕することになる。
「まさか、全員無事で、すでに船に乗っているとは……」
なにがどうなって、そのようなことになったのか……。シオンにはまったく理解できなかった。
「いったい、どんな魔法を使ったんだ？　ミーアは……」
「すごかったんですよ！　巨大な人食い魚を殴りつけて倒してしまったんですから！」
船員の話を聞いたシオンは、再びつぶやく。
「……いったい、どんな魔法を使ったんだ？　ミーアは……」
ともあれ……、シオンたち三人が乗った小舟の空気は明るいものになった。
なにしろ、生存が絶望視されていた全員が、大したケガもなく、すでに保護されているというのだ。
自然、みなの口は軽くなった。
「それにしても、あなたも大変ですね。ニーナ嬢」
ふと思い出したといった様子で、キースウッドが言った。
「なんのことでしょうか？」
唐突にキースウッドに話しかけられて、ニーナは小さく首を傾げた。
「貴女の主であるエメラルダさまのことですよ。苦労が絶えないの

では？」
　その問いに、ニーナは微かに首を傾げて、宙を見つめてから、
「そんなことはありません。楽しくお仕事をさせていただいておりますが……」
　ニコリともせずに答える。
「え？　いや、しかし、名前も呼んでもらえないようですし……」
「そこがいいんじゃないですか！」
　食い気味に返ってきた答えに、一瞬、黙り込むキースウッド。そんな彼に、ニーナは小さくため息を吐いた。まるで、聞き分けのない子どもを優しく諭すように……。
「ベタベタしない、そういうドライなところがイイのです。そこがグッとくるのです」
　……ちょっと何を言ってるのかわからない、という顔をするキースウッドとシオンであったが、ニーナは構わずに続ける。どうやら、エメラルダがこの場にいないのと、彼女が無事だったことで、テンションが非常に上がっているらしい。
「そして、時々そういう設定を忘れて、名前を呼びそうになって慌ててるのも、また、趣があってよいのです。ミーア姫殿下のことが大好きで、一緒に遊びたいのに意地になって誘えないのも見ていて微笑ましい。大胆な水着を着て王子殿下を誘惑してやろうと意気込んでたのに、いざとなったら、まったくもって勇気が出ない、あの小心者ぶりなど、見ているだけで、もう……」
　キースウッドの目から見ると、ニーナは、まるで路傍の石に芸術性を見出す、売れない芸術家のようだった。
　――これは、理解できない世界かもしれない。
　などと、思っているキースウッドの肩を、ぽん、と叩いてニーナが言った。
「エメラルダさまの良さがわからないなんて、キースウッドさんは女性を見る目がありませんね。それに、振り回されることもまた、仕える喜びではありませんか？」

「なるほど。前半部分は同意しかねますが、後半に関してはわかる気がします」
そうして、キースウッドとニーナは笑いあった。それは、どこか共犯者めいた笑いだった。
お互い、難儀な主に仕えてはいるが、なるほど、仕えがいがあるという点においては、もしかしたら、一致している部分があるのかもしれないと……。
そんな風に笑いあう二人を見て、シオンは不思議そうな顔をするのだった。

さて、エメラルドスター号に引き上げられたミーアは、先に乗っていたアベル、エメラルダとアンヌと、無事を喜び合った。どうやら、エメラルドスター号は、嵐の際に、風をよけるために船を移動させたものの、船体が損傷。流されてしまったのだという。修理に時間がかかったことを、船長から謝罪されたが、それは仕方のないことだろう。
さらに、ほどなくして、島へと送り込まれた者たちとともに、シオン、キースウッド、ニーナの三人も合流することができた。
ミーアたちを見たシオンは、開口一番に言った。
「あまり心配かけないでくれ。ミーア。エメラルダ嬢が無事だったのはよかったが……、いったい何があったんだ？」
「話せば長いですけれど、地下でとんでもないものを見つけてしまいましたわ」
「とんでもないもの、か……」
シオンは、ちょっと苦笑いを浮かべてから、
「君たちが、誰一人欠けることなくここにいるってことが、そもそもとんでもないことだから、これ以上、驚きようがないと思うが……。というか、君は化け物魚を殴り倒したと聞いたが……、それ以上にとんでもないことなのか？」

そんな二人をしり目に、エメラルダへと歩み寄る者がいた。
メイドのニーナだ。
彼女は、エメラルダが元気そうなのを見て取ると、思わず安堵のため息を吐いてから、
「エメラルダお嬢さま、ご無事でなによりです」
いつも通りの口調で話しかけた。
「ああ……ええ、そうね。少し足をひねってしまいましたけれど……」
「そうでしたか。私がついていながら、エメラルダお嬢さまにご不便をおかけしたこと、大変申し訳ありませんでした」
「いや、そんなことはございませんわ。あれは、私が勝手にしたことであって……」
もにゅもにゅ、と、何やら歯切れ悪く言いながら、まるで、助けを求めるように、エメラルダが視線を巡らせる。その視線の先には、ミーアのそばに付き従うアンヌの姿があった。
アンヌは、エメラルダの視線に気づいたのか、小さく笑みを浮かべて、それから、グッとこぶしを握って見せた。
それは精いっぱいの勇気を出そうとしているエメラルダへのエール。ともに苦境を潜り抜けた仲間への励ましだ。
それを受けたエメラルダは、小さく頷いて見せてから、なけなしの勇気を振り絞った。
「あなたにも心配をかけましたわね……。あー、えっと……、に、にに、ニーナ……」
「……は？」
エメラルダに名前を呼ばれたニーナは、なんとも言えない微妙な顔をした。
「あの、どうされたのですか？　お嬢さま……、そんないきなり私の名前を呼ぶなど……」
おろおろと、先ほど足をケガしたと聞いた時以上に、狼狽しているニーナに、エメラルダは殊勝な顔で説明する。

「私は、反省いたしましたの。今まで、あなたにずいぶんと失礼なことをしておりましたわ。名前だって、あなたは気づいていないかもしれませんけれど、ちゃんと、おぼえておりますのよ？　それを私は……、本当に悪いことをしてしまいましたわ」
真摯（しんし）に謝罪の言葉を口にするエメラルダに対して、ニーナは……、
「えー……それ、言っちゃうんですかー」
なぜだか、ものすごーくガッカリした顔をした！
「あの……、お、お嬢さま？　その、そういうの大丈夫なので。あの、いつも通りでいてください。私のことは、どうぞ、今まで通り、そこのメイドとかなんとか適当に呼んでいただければ……」
「まぁ、なぜですの？　私がニーナの名前を呼ぶと、なにか問題がございますの？」
「イメージというものがあるといいますか……あっ、そうです。メイドの名前とか呼ぶのは、グリーンムーン公爵家のしきたり的にも、貴族の常識的にも、あまりよろしくないというか……」
ニーナは、ぴしゃりと言う。
「ともかく、そういうのは、ちょっと……あの、ほんとに結構ですから」
それを聞いたエメラルダが、すーっと視線を動かした。その向かう先には、アンヌの姿があって……。
遠くからエメラルダたちの様子を見ていたアンヌは……、そっと目をそらすのだった。
世の中にはいろいろな忠誠の形があるんだということを、初めて知ったアンヌであった。

「さっ、なにはともあれ、帰りますわよ！」
これ以上、ここにいても仕方ない。
ミーアの号令を受けて、エメラルドスター号は、ガヌドスへの帰還の途についたのであった。

第百十四話　人それぞれの忠心（フェティッシュ）（後書き）

さて、突然ですが、次話をもちまして、ティアムーン帝国物語、第二部は終了となります。
番外編を一日はさみ、次の一週間は夏休み。その翌週の月曜日１９日から、第三部を始めていきたいと思います。……始められるといいな。。。
ということで、軽く今後の予定でした。

エピローグ　開戦の序曲

無人島を出港してから二日。
エメラルドスター号は、予定より少し遅れてガヌドス港湾国に帰港した。
港にはグリーンムーン公爵家の家臣団のほか、皇女専属近衛団の者たちも揃っていた。
「ああ、ようやく着きましたのね……。なんだか、文明の匂いがいたしますわ」
基本的に極めて豪華で、贅沢な船上生活を営むことができるエメラルドスター号ではあったが、ミーア的にはお風呂が楽しめないのが致命的だった。
そんなわけで、港についてホッとため息を吐いてしまうミーアであった。
どうやら、安堵したのはミーアだけではないらしく、二人の王子殿下も、従者の面々も疲れた顔をしていた。
さすがに無人島での暮らしは慣れない者たちには、相応の負担だったらしい。
唯一、エメラルダだけがツヤツヤした顔をしていたが……。
「ミーアさま、ご無事のご帰還、心からお祝いいたします」
船を降りて早々、ディオン、バノスを従えたルードヴィッヒが歩み寄ってきた。
「ああ、ただいま帰りましたわ……。なかなか大変でしたわ。ふぁあ……」
あくびを噛み殺しつつ、ミーアは、ルードヴィッヒの方に目をやった。
「積もる話は、また明日ということにして、今夜はエメラルダさんのところでのんびりさせていただきますわね」

「そうですか……。では、護衛として、ディオン殿とバノス殿がご一緒することを、許可いただきたく思います」
「はて……？」
一瞬、首を傾げたミーアであったが、直後、その鼻が危険な香りを察知する。
ルードヴィッヒの言に、わずかながらも緊張を感じ取ったのだ。
「……警戒すべき事態が起きた、ということですわね。わかりましたわ。エメラルダさんにお願いしてみますわね……」
ちなみに、ミーアのお願いは、エメラルダに二つ返事で了承された。
それどころか、ルードヴィッヒや他の皇女専属近衛兵たちも、館の中に泊まることも許可してしまったのだ。
以前からは考えられない協力的な態度に、ルードヴィッヒは察したのだ。
「……ああ、ミーアさまは……、ついにエメラルダさままで籠絡されたのか」
と。

そうして、一同は、ガヌドス港湾国内にあるグリーンムーン公爵家の別邸へと場所を移した。
ちなみに別邸には、海で泳いで帰ってきた時のために、小さいながらも浴場が備えられていた。
ということで、着いて早々、ミーアは湯浴みを楽しんだ。
それから、ふわっふわのガウンに着替えたミーアは、そのままベッドにダイブして足をパタパタさせていた。
「うふふ、ふかふかのベッド。ひさしぶりですわ」
などと、上機嫌に毛布に顔をモフモフ押し付けているところに、ルードヴィッヒたちが改めて訪ねてきた。
「まぁ、ルードヴィッヒたちが……。ふむ、確かに先ほどの感じは少し気になりましたわね。かまいませんわ、通して」

そうして、部屋に入ってきたのは、ルードヴィッヒとディオンの二人だった。
ルードヴィッヒは、お風呂上がりで、くつろぎモードのミーアを見て、少しだけ目を見開いた。
「これは……お疲れのところ、大変申し訳ありません」
「かまいませんわ。寝るには少しばかり早い時間ですし」
少しどころか、今はようやく夕方に差し掛かった時間だったが、ツッコミを入れる者はいなかった。無言で、ディオンが楽しそうに笑みを浮かべているのみであった。
「そうでしたか。実は、一刻も早くこのガヌドスについてお聞きいただきたいことがございまして、こうして参上した次第です」
「ええ、こちらもいろいろと話しておく必要がありますわ。まずは、そちらの話から聞かせていただこうかしら……」
そうして、ルードヴィッヒの口から語られたのは、ガヌドスに張り巡らされていた、極めて婉曲的な陰謀の話だった。
――あの帝国革命の裏に、そんな陰謀まであったんですのね……。
少なからず衝撃を受けつつも、今度はミーアが無人島で見たものの事を、ルードヴィッヒに話した。
正直、あれが本物かどうかはわからないし、今後どうしていくのがよいのかも、あまりわかっていないミーアである。
ここはぜひ、思考・考察担当であるルードヴィッヒに頼りたいところであった。
「……ミーアさまが見たという石板は、我々の祖先がガレリア海を越えてやってきたという説を実証するものと言えるでしょうね……」
ミーアの話を一通り聞いたルードヴィッヒは、深々とため息を吐いた。
それから、部屋に備え付けられていた机の上に地図を広げる。
「ミーアさまが発見なされた神殿が、恐らくはこのあたりの島でしょう。その先、ガレリア海を越えた場所の、いずれかの地より、我らの祖先は海を渡ったという説があります。理由は不明でしたが、

その石板の文言を鑑みると、恐らくはなんらかの争いに敗れたのでしょう」
手ひどい被害を受けて、多くの犠牲を出したその者たちは、安住の地を求めて海を渡った。そうして、たどり着いたのがあの島だった。
「その後、疲れ果てて、すでに希望を失いかけていた者たちを鼓舞して、無人島から大陸へと渡らせたリーダー、それが、初代の皇帝陛下だった。そして、彼らがたどり着いた最初の土地が……」
「ガヌドス港湾国だった……か。なるほど」
ルードヴィッヒの話を引き継ぎ、ディオンが口を開いた。
「その時に、初代の皇帝陛下の頭の中には、ある程度の陰謀が形を成していた。だからこそ、いつでも切れる食糧供給ルートを確保するために、この地の者たちと密約を結んだ上で、肥沃なる三日月地帯に進んだ、か」
ルードヴィッヒは頷いてから、少しの間だけ黙り込んだ。
「あるいは、初代皇帝はこの地に信頼のおける者を残したのかもしれない。ガヌドス港湾国はこの地に住まう漁師たちがまとまってできた国だが、彼らをまとめ上げたのは、もしかしたら初代皇帝の縁者だった可能性もある。そして同じく、自らの信頼のおける側近だったイエロームーン公爵に、ガヌドス国王とともに、体制を作らせた」
「最古にして最弱の公爵。イエロームーン公爵家ですわね……」
そういえば、とミーアは思う。
自分の中には、イエロームーン公爵への印象はほとんどなかった。
その娘はセントノエル学園に通っていたはずだったが、にもかかわらず、そちらもまったくと言っていいほど、顔の印象がない……。
まるで、ミーアから姿を隠しているかのように。あるいは、印象に残らないよう立ち回ってでもいるかのように……。
「で、どうします？　姫さん。ここはいっそのこと、わかりやすく僕がいってサクッと……」

考え事に没頭していたミーアは、危うく聞き逃しそうだったディオンの言葉を聞きとがめる。
「そんなことしたら、大混乱ですわっ！」
仮にも星持ち公爵。帝国を代表する四大公爵家の一角なのだ。暗殺などされたら一大事である。
しかし、それ以上に、ミーア的には、そうしたくない理由がある。
そう、ミーアは自信があるのだ！
もし仮に、そんな大陰謀に携わる陰謀家が、ミーアと同じく過去の世界に飛ばされてしまったら……、まず間違いなく自分では勝てない。
だからこそ、ミーアは、できれば死なせずにことを収めたいのである。
「それに、来年には飢饉が来ますわ……。その時には、帝国内すべての貴族の助けが必要になる。ここでイエロームーン公爵を失っては、彼の派閥の貴族に無用な混乱を生むことになりますわ」
イエロームーンの派閥に連なるすべての貴族が黒であるならばわかりやすくてよいのだが、もしも、まともな貴族がいるなら、それを排除して混乱を生むことは、それはそれでイエロームーンの企み通りということになってしまうかもしれない。
となると……。
――理想はイエロームーン公爵家の中で、混沌の蛇の関係者のみを拘束して、血縁の者に後を引き継がせることですわ。公爵のみが、初代皇帝の意を受けて陰謀に加担しているというのであれば、とても楽でいいのですけど……。
ミーアはため息混じりに、首を振った。
「イエロームーン公爵ならびにその周辺への監視の強化。それと、彼らのどの層までが陰謀に加担しているのか、調べることができますかしら？」
ミーアの顔を見て、ルードヴィッヒは小さく頷く。
「ミーア姫殿下の仰せとあらば、この身に代えましても……」

かくて、戦いは始まる。
それはティアムーン帝国を縛る、初代皇帝の盟約を破棄するための戦い。
その結末がどこへ向かうのか、今はまだ誰も知らない。

第二部　導の少女　了　第三部　『月と星々の新たなる盟約』へ続く

エピローグ　開戦の序曲（後書き）

本日、活動報告を更新予定です。
いいご報告ができるかも？　です。

第６６．５話　小さな祈りが届く時（前書き）

今回は番外編。ラーニャのお姉さんをスカウトするお話

第６６．５話　小さな祈りが届く時

「どうか……、こんな不幸なことが、世界からなくなりますように……」

それは、ある少女の祈り。

とある国の姫だった少女は、飢餓に見舞われた村を訪れた時、死にかけた子どもが、助けを求めて伸ばした手を取ることができなかった。

その時の光景は、いつまでもいつまでも、彼女の心から消えることはなかった。

だから、少女は、その祈りを胸に抱いた。

けれど、幾度も祈ろうと、どれだけ強く願おうと、それが聞かれることはなかった。

神の気まぐれのごとく、飢饉は国を襲い、人々を痛めつけた。

いつしか、少女は思うようになっていた。

自分の祈りは、神に届いていないのではないか？

神は、自分の祈りなど、気にも留めていないのではないか？

ならば、仕方ない。

ならば、私は私の力で、その不幸をなくして見せる。

少女は努力した。

自国を富ませ、民が飢えることのなきように、ひたすらに努力を積み上げる。

そして、少女は自らの『祈り』を忘れた。

ペルージャン農業国の姫君は、夏休み前から母国へ帰国するのが習わしになっている。

それは、農作物の収穫をする先頭に立つため。

さらには、その収穫を神に感謝し、来年の豊作を祈る、収穫祭の

巫女を務めるためである。
中央正教会も公認の行事であるため、セントノエル学園の方でも正式に、休みを取ることが認められている。
もっとも、そのせいで、夏前の剣術大会などのイベントには参加できないわけだが……。
学生時代、アーシャ・タフリーフ・ペルージャンは、そのことを一度も寂しいと思ったことはなかった。その年の収穫量次第で民が死に、国が傾く『農業国』の姫として、豊作を祈ることは大切な務めだからだ。
その考えに、少しだけ変化が生まれたのは彼女が十五の年になった時のこと。セントノエル学園で、植物学という学問に出会った日のことだった。
知識の有無で収穫量が大きく変わる。その事実は、アーシャにとって衝撃的だった。
農業国の姫でありながら、国民である農民たちがどのような研鑽を積み重ねてきたのか、知らなかったことを恥じた。
それと同時に、彼女は見つけたと思った。
農業国の姫としてできること……。
植物学の知識を生かして、より良い作物を作って、国を豊かにする。
貧しいペルージャンから、飢餓を一掃する。
以来、アーシャは勉学に力を入れるようになる。
努力のかいもあって、その知識は学園の講師にも匹敵するほどのものとなった。
身に着けたその知識を使い、国をもっと富ませる。農業を改革する。強い小麦を作る。
セントノエル学園を卒業する日、アーシャの胸には熱く燃える思いがあった。
そうして、希望を胸に帰ってきた彼女に、父親である国王は言った。

「折を見て、どこかの国の貴族と婚儀を結ぶように」と。
当然、アーシャは反発した。
自分は技術者として、研究者として、ペルージャンを支えていきたいのだ。どうして、それをわかってくれないのか、と。
けれど……、母から諭され、姉から諭される中で、彼女の熱意はしぼんでいった。
自分がやってきたことは自己満足にすぎないことで……、荒れ地に種を蒔くような不毛なことだったのではなかったか……。
そんな風に落ち込む彼女の唯一の味方になってくれたのは、妹であるラーニャ姫だった。
いつでも、アーシャの勉学の応援をしてくれていたラーニャであったが、セントノエル学園より帰って早々、アーシャに驚くべきことを告げた。
「ねぇ、アーシャ姉さま、ティアムーン帝国に新しくできる学園都市で講師の仕事をしてみる気はない？」
「えっと、どういうことかしら？」
詳しく聞いてみて、アーシャは納得する。
なるほど、ラーニャはティアムーン帝国の皇女ミーアと親しくしていると言っていた。
ラーニャは「アーシャ姉さまの見識を、ミーアさまがすごく評価してくださって」などと言っているが……。恐らく、今のアーシャの境遇を何とかしようと思って、ラーニャがお願いしたのだろう。
けれど……。
「王女であるアーシャ姉さまが皇女殿下の学園で講師をするとなれば、どこかの貴族と結婚するよりよっぽどいいコネを作ることになるわ。ペルージャンとティアムーンとの関係だって強まるし、それに……」
「残念だけど、ラーニャ。そのお話は受けられません」
ラーニャの話を途中で遮り、アーシャはゆっくりと首を振った。
「え……？」

まさか、断られるとは思っていなかったのだろう。ラーニャはポカンと口を開いてから、
「そんな……、どうして？」
「説明する必要があるでしょうか？　あのような屈辱を受けて……、ティアムーンの姫の下で働くなど、とても考えられないことです」
アーシャが企画した、ペルージャンの農作物披露パーティーにおける帝国貴族の子弟たちの振る舞い……。
弱小国の貧しい果物だ、家畜が食べるような野菜だ、と、彼らは散々にペルージャンを馬鹿にした。あまつさえ、農民たちが苦労して作った野菜を、果物を、床に放り捨てたのだ。
あの日の屈辱を思い出すたびに、アーシャの腹の中に、ぐつぐつと熱い怒りが沸き上がる。
「あなたは上手く姫殿下と友誼を結べたようだけど、私には無理。協力する義理もありません。だから、姫殿下には正式にお断りすると、あなたの方から伝えておいてください」

ラーニャからの手紙がミーアのもとに届いたのは、二日後のことだった。
ベルマン子爵領にて、ようやくルードヴィッヒの師匠、賢者ガルヴの勧誘に成功したミーアは、帝都でつかの間の休息を楽しんでいたところだったのだが……。
「って！　なにやってますのっ！？　あいつら、ほんとに、なにやってますのっ！？」
ベッドにうつぶせになって、ラーニャからの手紙を読んでいたミーアは、ぐあーーっ！　っと頭を抱えて、足をパタパタさせた。
それから、おもむろにベッドの上の枕を取り上げ、ポスポスと叩き始めた。
しばし暴れて、それからようやく落ち着きを取り戻し……、
「しかし……、とりあえず、そういうことでしたら、詫びを入れておくのが良いですわね」

必要とあらば、いくらでも頭を下げる所存のミーアである。むしろ、頭を下げるだけならば安いものだとさえ考えている。
……まぁ、実際、ミーアの頭は安いものであるが。
ということで、ミーアは早速、謝罪の手紙をしたためると、早馬に託してペルージャンに送った。けれど、ことはそう簡単には進まないもので。
ラーニャから戻ってきた手紙を見たミーアは、思わずため息を吐いた。
「まぁ、そうですわよね……」
手紙には「別に、ミーアに謝ってもらわなくても構わない」という趣旨のことをアーシャが言っていると書かれていた。当然のことながら、それで納得して、講師の話を引き受けてくれるとはならない。
ちょびっと謝っただけで、すべてが上手くいくならば苦労はないのである。
「やはり、当事者に心からの謝罪をさせる必要がございますわね……」
ということで、ミーアは一計を案じた。
要するに、パーティーの席でアーシャを馬鹿にした連中に、ペルージャンの農作物の味を認めさせ、その上で謝罪させればいいのだ。
「ペルージャンの農作物は美味しいものが多いですし、料理次第では、心を打つことなど容易な気がいたしますけれど……、でも、いくら美味しくても、あの方たちって、あんまり感動しなさそうな気がいたしますわね」
帝国には、農業に対して理不尽な嫌悪感を抱く貴族が多い。農作物に対しても同様に、どこか低く見るような傾向がある。だから、どれだけ美味しくて感動したとしても、それを素直に褒めない可能性が高い。
ならばどうするか？
「ただの農作物で褒めないなら、彼らが褒めざるを得ないようにす

ればよいのですわ」
ただの≪美味しい農作物≫では褒めない。
では≪美味しい〝栄光ある帝国産〟の農作物≫ならば、どうか？
あるいは……、
「≪〝弱小国ペルージャンより〟美味しい帝国産の農作物≫ならば……どうかしら？」
アーシャを馬鹿にしたのは、帝国中央の門閥貴族の子弟だ。帝国に対するプライドで凝り固まった彼らは、自国を誇り、他国を貶めることを至上の喜びとしている者たちである。
――そんな者たちを手の平の上で転がすことなど、簡単ですわ！
などと、ミーアは、にんまりと策士っぽい笑みを浮かべる。あくまでも策士っぽいだけであって、別にミーアは策士ではないのだが……。
ともあれ、プランはすんなりと固まった。
まず、アーシャと、彼女を馬鹿にした貴族の子弟を、ミーアがお茶会に招待する。
そこにペルージャン産の農作物の料理を並べておくのだ。もちろん、どこ産とは言わずに。
そうして、そこでミーアが言ってやるのだ。
「このお料理に使われている野菜は絶品ですわ！」
と。
そうすると、呼ばれた方はミーアの言葉を聞き、次に招待されたアーシャを見て思うわけだ。
「なるほど、ミーア姫殿下は、帝国産の農産物がペルージャン農業国のものより優れていると言いたいのか！」
などと、勝手に誤解するのだ。
「ペルージャンの招待を受けておきながら、パーティー会場で悪しざまに言うような連中ですし、きっとそう考えるはずですわ。そして、恐らくわたくしの後について褒めるはず。そこでネタバラしということになりますわね。とすると場所は、やはり帝国内がよろし

いですわね……」
基本的に、農業全般を低く見ている貴族たちではあるが、そこは比較の問題である。
ペルージャンの農作物と、帝国でとれる農作物との比較であれば、彼らはきっとこぞって、褒め称えるに違いない。そこで、実は、この農作物はすべてペルージャンで作られたものである、とネタバラしをして、一気に、アーシャに謝罪させるわけである。
「そのためには、最もよさそうな場所は……ルドルフォン辺土伯にお願いするのがベストの選択……かしら」
辺土伯もまた、帝国貴族には嫌われている存在ではあるが、それでも帝国貴族ではある。彼らが、属国と見下す小国ペルージャンよりは、仲間意識を持たれているだろう。
そこで豊富な農作物を振舞えば、きっと彼らは、それをルドルフォン辺土伯の領地でとれたものと誤解し、帝国の収穫物の方が素晴らしい！　などと言ってくれるはず。
さらに場所的にも、ペルージャンに近く、ミーア学園の建設予定地にもほど近い。
そのままの流れで、学園の見学にどうぞ、などとやるには、場所としてはベストな立地といえる。
「正直、ルドルフォン辺土伯に頭を下げるのは少し癪ですけれど……」
まぁでも、自分が頭を下げれば解決するならば問題ない。
ミーアの頭など安いものなのである。
「あとは……、そうですわね。演出効果を狙って、学園に通う予定の子どもたちも呼んでおくのも、効果的かもしれませんわ」
ミーアはさらに、用意周到に思考を進めていく。
もし仮に貴族たちが謝罪したとしても、講師の話を引き受けてもらえるとは限らない。
ゆえに、講師の話を断りづらい環境を整える。
作戦は簡単だ。

アーシャに、教える対象の子どもたちを、実際に見せてやるのだ。
「セロくんは、見るからに賢そうな子ですし、呼んでおくとよさそうですわね。自由に質問してもらって、講師意欲を高めるのがよろしいですわね……」
質問内容を指定しないのは、当然、ミーアが全く知識がないからである。
わからない部分は詳しい人間に放り投げる。ミーアのスタンスである。
「それに、ワグルは、いい子だから、きっと気に入るはずですわ。あとは、あの孤児院の……セリアさんと言ったかしら？　あの子もせっかくですから呼んでおきましょうか」
セロ以外の二人については、境遇をアピールしてもらおうと考えている。
恐らく、アーシャ姫は帝国貴族に対して良い印象を持っていない。であるならば、生徒は貴族の子弟ばかりでなく、むしろ、平民からとりますよ、孤児院からも優秀な子を呼びますよ、とアピールするのだ。
ペルージャンの王族は民との距離が近しいという。ならば、二人の存在は必ずや、「依頼を断りづらい要因」になるはずなのだ。
戦いが始まる前に、すでに勝利を確定させてしまいたい。ミーアの小心（チキンハート）が、外堀をせっせと埋めさせていく。
こうして万全の態勢を整えて、ミーアはお茶会を開催した。

「ようこそ、おいでくださいました。アーシャ・タフリーフ・ペルージャン姫殿下。収穫祭の準備でお忙しいところを、お越しいただき、感謝いたしますわ」
にこやかに笑みを浮かべるミーアを見て、アーシャは招待に応じてしまったことを少しだけ後悔していた。先日、講師の話を断ってしまったこともあって、さすがに断りづらかったわけだが……。
「いえ、お招きにあずかり光栄です、ミーア姫殿下」

言いつつ、アーシャは招待客に目をやった。
そこに揃っていたのは、あの日、パーティーでアーシャを馬鹿にした者たちばかりだ。ニヤニヤと、今もアーシャを蔑むような眼で見つめていた。
――ミーアさまは、先日、私がお断りしたから、その腹いせに馬鹿にするつもりかしら？　けれど、ラーニャから聞いていたお人柄では、そういうことはなさらない方のはず。とすれば、逆に彼らに命じて、謝罪でもさせるつもりでしょうか……？
今さら謝ってもらっても、講師の話を引き受けるつもりはないのだが……、とアーシャは小さくため息を吐いた。
そうして始まったお茶会は、アーシャの目から見ると、いささか白々しいものだった。
供される料理、そのすべてに、ペルージャン産の野菜や果物が使われているのだ。
一口食べただけで、アーシャはそのことに気づいた。
そして、ミーアはその料理をあからさまに褒めた。褒めて褒めて褒めまくった。
いくらなんでも褒めすぎだろう、というぐらいに、それはもう、本当にほっぺたが落ちてしまうのではないか、というぐらいの勢いで食べて食べて、褒めまくる。
――見え見えのお世辞ですね。もっとも、あの演技は見事ですけど……。
心の底から料理を堪能しているように見えるミーアに、アーシャは半ば呆れ、半ば感心する。
「本当に、絶品ですわ。このケーキ。このフルーツがたまりませんわ！」
「そうですね。さすがは、我が帝国産の果物、どこぞの弱小の農業国とは比べ物になりません」
不用意に、一人の青年貴族が口にした一言……。それを聞いたミーアは、にんまりと笑みを浮かべて……、

「あら、実は……今日のお料理に使われている農作物は、すべて、ペルージャン産のものなんですのよ？」
猿芝居を始めた。
――なるほど、さんざん褒めていた野菜が馬鹿にしていたペルージャン産のものだと突き付けて、そうして謝罪をさせようということですか。
どこか白けた様子で、アーシャは、そのやり取りを見つめていた。
恐らく彼らはミーアの命令を受けて、謝罪するために呼ばれたのだろう。
――本当に下らないお芝居。もし本気で、そんなことを考えてるんだとしたら、ミーア姫殿下も大した人とは思えないですね……。
しかし、そこまで体裁を整えられてしまえば、アーシャとしても謝罪を受け入れないわけにはいかない。さらに、ミーアの要請にも応えなければならないかもしれない。
理由もなく、依頼を断れるほど、帝国の姫の権威は軽くはないのだ。
――それもこれも、我が国が弱いから……。貧しいから……。
暗澹たる気持ちで成り行きを見守っていたアーシャだったが……、そんな彼女の目の前で、予想外の事態が展開されていた。
自分たちが美味しいと褒め称えていたもの、それがあろうことか、馬鹿にしていたペルージャン産のものだと指摘された貴族の子弟たちは……。
「ああ、なるほど、ペルージャン産のつまらない果物を使い、これだけ美味しいケーキを作るとは、さすがは我が帝国の料理人というわけですな！」
「つまり、今日の会は、いかに品質の劣る材料を使って味の良い料理を作るか、とそういうことなのですね」
予想の斜め上を行く、トンデモなことを言い出した。
「……はぇ？」
さすがに、その答えは予想外だったのか、ミーアもきょとんと瞳

を瞬かせている。
一方のアーシャは、冷めた目で、貴族の子弟たちのことを眺めていた。
――ああ、なんて、つまらない人たちでしょう……。
この期に及んで、まだ自らの間違いを認めることができないなんて、謝ることができないなんて……、なんて愚かな者たちなのだろう……。そう呆れるのと同時に、アーシャは疑問を覚えた。
――でも、いったいミーア姫殿下はなにをしたかったのかしら？
あの人たちに謝らせたいなら、事前に命令しておけばいいのに……。
当然、それをすべきである。こんなことになることを予想できない者が、帝国の叡智などという大仰な名前で呼ばれるはずがないわけで……。
っと、その時だった。
「あの、アーシャ姫殿下……」
おずおずと、お茶会に参加していた少年が話しかけてきた。年の頃は、ラーニャよりも少し下だろうか。少年のそばには、同い年ぐらいの少年と少女もいた。ほかの参加者に比べて幼い印象の彼らのことは、アーシャも気にはなっていたのだ。
「なにかしら？　えーっと……」
アーシャは穏やかな笑みを浮かべつつも考える。
このお茶会が、アーシャに対する謝罪の場であるとするなら、この子たちはなにか？　と。
そんなアーシャの疑問を察したのか、少年は、セロ・ルドルフォンと名乗った。
どうやら、この地の領主の息子らしい。その隣の少年はワグル、さらにその隣の少女はセリアと名乗った。
「丁寧な自己紹介をありがとう。それで？」
「あ、はい。このパスタに使われている粉は、もしかすると……、冷月蕎麦の実ですか？」

「そうだと思いますけど……」
料理の材料をなんでこっちに聞きますかね？　と思いつつ、アーシャは頷いて見せた。
「それがなにか？」
「はい。もしも、これが冷月蕎麦の実だとしたら、すごいと思って」
「……あら、どうしてですか？」
アーシャの瞳が、すっと細くなる。じっと見つめる先で、セロは小さな声で言った。
「この蕎麦の実は、この季節には採れません。冬の間に収穫したはずです。だけど、このパスタ、採れたての新鮮な冷月蕎麦の風味がします。これはどうなっているんでしょうか？」
セロの言葉を聞いて、アーシャは驚愕した。
目の前の少年は……、ペルージャンの技術の高さを、しっかりと見抜いているのだ。
「よくわかりましたね。それは品種改良によって、少し温かい時期に実をつけるようにした冷月蕎麦です」
「えっ？　そんなものがあるのですか？　それはどうやって……」
驚きの声を上げるセロ。それから、次々に投げかけられた質問は、彼の植物への知識の深さを証明していた。
――この子は、いったい……？
そんな疑問を覚えたアーシャだったが、すぐに答えは提示された。
「僕たち、ミーアさまの学園に通わせていただく予定なんです」
――ああ、なるほど……この子たちが生徒になるのですね……。
そう思うと、少しだけだけど興味が出てきた。あの無礼な者たちへの憎しみなど、どうでもいいと思えるぐらいには……。
――そうか……。もしかして、ミーア姫殿下は、あんなつまらない連中の謝罪なんか意味がないって、それを見せたかったということでしょうか……？
アーシャはふと思った。
そもそも、それはアーシャ自身が言ったことだ。

『ミーアに謝罪してもらっても意味がない』と。
同じようにミーアの命令で、無理やり謝らせることにも、きっと意味はなくって。むしろ、愚にもつかない連中の謝罪なんか、もらったところで、なんの得にもなりはしないのだ。
そんなつまらない感情に捉われて、優秀な子どもたちに教育を施す、その機会を逸するのか？　と。
あるいは、意義深い研究を続けることを放棄するのか、と。
ミーアが、そんな風に問うてきているように、アーシャは思った。
けれど……、そうではなかった。
「それにしても、ミーアさまは、どうして、植物学を教える学校を帝国内に造ろうと考えられたのでしょう？」
疑問に感じたアーシャは、思わずつぶやいていた。
帝国では、農業やそれに関するものは低く見られがちな傾向にある。だから、わざわざ皇女の肝いりの学園に、植物学の授業を設ける必要はないのではないか？
その疑問に答えてくれたのは、ワグルという少年だった。
「ミーアさま、言ってました。飢えてさえいなければ、何事もなんとかなるものだ、って……」
より正確に言うならば「飢えてさえいなければ、何事もなんとかなるもの。革命も起こらないし、ギロチンにかけられる心配だってないのだから」という趣旨のことだったが……。当然、アーシャは知る由もない。
それから、ワグルは少しだけ恥ずかしそうな笑みを浮かべながら、ミーアとの出会いの話をした。
ワグルが貧民街で飢えて倒れているところを助けたというエピソードを。
それに次いで、セリアも口を開いた。彼女もまた、孤児院の出身で、飢えを知る少女だった。
「飢えてさえいなければ、何事もなんとかなるもの……。だから、食料が必要……。たくさんの食料を得るために、植物学の知識が必

要。農業技術の向上が必要になってくる……」
ミーアの言葉は、アーシャの胸に深々と突き刺さり、えぐった。
なぜならそれは、アーシャの原点とも言える言葉だったから。

農業国と呼ばれるペルージャンも、かつて飢饉に襲われたことがあった。
その年は雨が多く、日の恵みが足りないせいで、様々な農作物の収穫量が激減した年だった。
ペルージャンの王族は、国民たる農民と近しい間柄にあった。
それゆえに、アーシャは父である王について、各地の農村を巡り歩いた。
空腹に倒れる民を見て……、年端もいかぬ子どもが、助けを求めて伸ばす手を見て……。
こんなものは見たくないと。こんな不幸が、二度とあってはならないと思って……。
だから、こんな不幸が世界からなくなるように、と祈ったのだ。

アーシャは改めて、目の前の少年たちを見た。
一見すると、衣食が整えられた子どもたち。そんな彼らが、あの日見た、死にかけの子どもたちと重なって見えた……。
ペルージャン一国が豊かになっても意味がないのだ。
帝国を上回る力を得て、すべての国を席巻するほどに強くなったとしても、それは一国だけのことなのだ、と。
それでは、あの日の不幸な光景がなくなることは決してないのだ。
ペルージャンで見なくなるだけのことなのだ。世界のどこかでは、やっぱり同じような不幸が起きて、空腹に倒れる子どもたちがいる。
そして、それは、今、目の前にいる子どもたちであるかもしれない。
――私は、なんのためにセントノエルに行ったんだったっけ？
農業国の農業技術を高めて、国を富ませるため？　ペルージャン

の民の安寧のため？
否、そうではない。そうではなかったのだ。
あの不幸を繰り返したくないから……。誰もが空腹に倒れることがないような世界にしたかったから……。
――だから、私は、植物学を勉強しようって、思ったのでしたね……。

それは、幼き少女の小さな祈りだった。
どうか、この世界に、そんな不幸なことが起こらないようにしてください、と。
けれど、いくら祈っても、祈っても、収穫が減る時は減る。
飢えて死ぬ者はなくならなかった。
だから、祈りは聞かれないと、意味などないと、いつしか諦めていた。
だけど……。

目の前に差し伸べられた手があった。
小さくも気高き、帝国の姫殿下の手。
彼女は、ふいに気が付いた。
ずっと自分の祈る声は届いていないのだと思っていた。でも、もしかしたら、違うのかもしれない。
目の前の、この少女こそが、祈りへの答えなのかもしれない。
世界から、あのような不幸をなくす、そのための道が、今、目の前に開かれているのかもしれない。
――それなら、私は……。私は……！
ジワジワと、胸の奥から湧き上がる、不思議な感情に背中を押されて、アーシャはミーアに言った。
「ミーア姫殿下、あの、講師のお話なのですが、ぜひ引き受けたく思います」
「……ふぁぇ？」

すっかり作戦が外れたと思い、ケーキのやけ食いをしていたミーアは、口いっぱいに入れていたケーキのせいで、うまく答えることができなかった。

アーシャ・タフリーフ・ペルージャン。

それは、歴史に刻まれるべき英雄の名。天才寵児セロ・ルドルフォンと共同で、冷害に強い麦を産み出し、大陸から飢餓を一掃した、偉大なる女性学者の名だ……。

かくて、先見性に優れた稀代の戦略家ミーアは見事にアーシャを口説き落とすことに成功した。

そう、準備の段階で、すでに帝国の叡智は勝利を確定させていたのだ。

戦いが始まる前から勝利を手にするという離れ業をやった〝先読みの人〟ミーアはすっかり上機嫌に、お腹一杯、ケーキやお菓子を楽しんだ。無計画に、甘いものをたくさんたくさん食べた……。

ミーアは忘れていたのだ。今が夏前の……割と大事な時期であることを……。

未来を読めなかったのだ。

まさか、一か月ほど先に、あのような屈辱的な出来事が待っているなんて……。

ミーアが自分がＦＮＹってることに気づくまで……、あと……四十日。

第６６．５話　小さな祈りが届く時（後書き）

昔、宣教師さんに聞いたお話。

ある所に海に落ちて溺れている男がいた。
そんな男を助けようと、近くの船から浮き輪が投げ入れられた。
けれど、男は浮き輪を受け取らずに言った。
「いや、神様が助けてくれるから大丈夫」
その後も何度も浮き輪が投げ入れられ、ライフセイバーが男を助けに行ったが、男の答えは変わらない。
「いや、神様が助けてくれるから大丈夫」
やがて、男は溺れ死んでしまった。
天国に行った男は神様に尋ねた。
「神様、どうして助けてくれなかったんですか？」
神様は答えた。
「……いや、あんなにたくさん助けを送ったじゃない？」

人は自分が期待する形の助けを求めるが、神は人が想像していないような形で助けを送ることがある。
祈りが聞かれないのか、祈りは聞かれたけど人が気づいていないだけなのか……。
そんなお話を思い出しつつ、今回のお話を書きました。

そんなこんなで、第二部も一区切りということで、来週は夏休みということにさせていただきます。
再来週の月曜日から、また投稿再開……の予定です。
またお会いできる日を楽しみにしております。

プロローグ　ルードヴィッヒ、飛翔する！

ミーアは、グリーンムーン公爵家の別荘にて三日間の静養期間を経て後、ガヌドス港湾国を後にした。
ガヌドス側が表立って害を加えてくることはないだろうが、それでも念には念を入れての早めの行動である。
「ああ、なんだか、海を離れる時になって、急に暑くなってきましたわね……」
奇しくも、その日は冷夏の中にあって、例外的に気温が大変高い日だった。
風通しのあまりよくない馬車の中……、先行して母国へと帰っていったシオン、アベルらの姿もなく、いるのはルードヴィッヒとアンヌのみ。
ということで、ダラダラ汗を垂らしたミーアは、ぐんにょり脱力していた。
――ああ、本当に暑いですわ……。こう、避暑地でもう二、三日ゆっくりしていきたいですわね……。ああ、そういえば、クロエが北の方の国は、夏でも涼しいって言ってましたわね……。
ぼんやーり、そんなことを考えていたミーアは、うっかり……。
「あー、北に行きたいですわね……」
などとつぶやいてしまった。
それを聞いたルードヴィッヒは、一瞬、思案顔で黙り込んだ後……、
「なるほど……そういうことですか……さすがですね」
合点がいったという顔で頷いた。
「……はぇ？」
きょとりん、と首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒは力強い笑みを浮かべる。

「初代皇帝陛下のあの陰謀が本当なのだとしたら……、歴史のある門閥貴族であればあるほど、信用できなくなる。むしろ新参の貴族……、すなわち辺土の貴族たちの方が信用できるし、説得も容易ということになる。そういうことですね？」
ティアムーン帝国は、帝都ルナティアを中心に広がる、中央貴族領から始まり、南北へと領土を拡大していった。必然的に、辺土と呼ばれる新しい領土は北と南に存在することになる。
そして、南にはルドルフォン辺土伯がいるため、次に味方につけるべきは北……。
「……ということでしょうか？」
全然、そういうことではなかったわけだが……。
「……ええ、まぁ、そんなところですわ。よくわかりましたわね、さすがはルードヴィッヒですわ」
当然のように、ミーアは乗る。
どんな小さな波であれ、逆らうことなく身を委ねる。
そう、ミーアはついにマスターしたのだ。
究極の奥義「背浮き」を。
これさえあれば、どんなことがあっても溺れることはない！
牽引してくれる相手さえしっかりしていれば、ミーアは脱力しているだけでよいのだ！
「であれば、専門家がいた方が良いでしょう……。連絡の時間も含めて、三日ほどいただきたいのですが……」
「ええ、構いませんわ」
そんなこんなで、急遽、ミーアの寄り道が決まったのだ。
「できれば、こういうことは事前に言っておいていただけるとありがたいんですがね、ミーア姫殿下」
帝国北部、ギルデン辺土伯領の領都。その宿屋にやってきたバルタザルはがっくり疲れた顔をしていた。
ルードヴィッヒの言葉通り、ちょうど三日後のことだった。

そんなバルタザルに対して、ルードヴィッヒは一言。
「慣れろ」
無慈悲に切って捨てる。それから、
「それで、事前に知っておくべき情報は？」
「エーリッキ・ギルデン辺土伯爵。二十八歳。父から継いだ領地をなんとか盛り立てようとしてるところだ。中央貴族からは、例に漏れず、反農思想をしっかり植え付けられてるよ」
バルタザルは、ガシガシと頭をかいてから、
「俺は何度か来て説得してるが、農地をつぶして円形闘技場を作ったり、劇場を作ったり、遊興施設を大々的に作って、貴族の避暑地にしてしまいたいらしい」
「ほう……」
ミーアは、思わず、感心の声を上げた。
――確かに、ここは少し涼しいですし、避暑地にはちょうどいいですわね。海があるわけではないけれど、帝都などよりは過ごしやすいですし……。それはなかなかに悪くない考えのような気がいたしますわね……。
ミーアとしても、涼しくて、遊ぶ場所がたくさんある場所ならば、夏の間、引きこもることもやぶさかではない。
「物見遊山の地として経済を成り立たせようということか。鉱山のような資源がない場所にあっては、正しい考え方と言えるのかもしれないが……」
ルードヴィッヒは難しい顔で黙り込むが、すぐに首を振った。
「ともかく、実際に会って話してみよう」

ギルデン辺土伯邸の応接室に通されたミーアは、しばらくして現れたエーリッキ・ギルデンを素早く観察する。
――ふむ、見た目的には悪い印象はありませんわね……。
成金貴族のような過度に飾り立てるでもなく、さりとて、異教の蛮族のような異文化の服を身にまとうでもなし。

ごく常識的で、どちらかというと堅実な格好をしている。
もっとも辺土といっても、この地が帝国に編入されたのは、ミーアが生まれる前のこと。
いつまでも蛮族のような格好をしているはずもないのだが……。
――辺土という言葉が持つイメージですわね。
「お初にお目にかかります。ミーア姫殿下。エーリッキ・ギルデンにございます。この地を統べる辺土伯の地位をいただいている者です」
「ご機嫌よう、ギルデン辺土伯。此度は、急な面会に応じていただき、感謝いたしますわ」
ミーアはニコリ、と完璧な皇女スマイルを浮かべ、スカートの裾をちょこん、と持ち上げる。
「姫殿下の求めならば、応ずるのが臣として当然のこと。我がギルデン家としても、これほど光栄なことはございませぬ。ですが……本日はどのようなご用件で？」
いぶかしげに首を傾げるギルデンに、ミーアは単刀直入に切り出す。
「なんでも、この地の農地を縮小し、代わりにさまざまな施設を作ろうとしているとか……。そのお話を聞きにきましたの」
「なるほど……」
ギルデンは、ミーアの背後に控えるバルタザルに目を向けてから、納得の笑みを浮かべた。
「やはり、その話でしたか……」
それから、ギルデンは姿勢を正し、両手を組んで、ミーアを見つめた。
「ご存知かはわかりませんが、我が領土は帝国の北の果て。この地は寒さで、もともと作物が育ちづらいのです。ですから、使えない農地は全て潰して別荘地にしたり、あるいは、なにか、ほかの産業を生み出せればと考え、領民を説得しているところなのです」
――ふむ……、本音が半分、建前が半分といったところかしら…

…。
ミーアは冷静に分析する。
恐らくは、この地で作物が育てづらいこと、すなわち、この地が農地にはあまり向いていないと彼が考えているのは本当だろう。けれど、それ以上に、他の貴族の反農思想に当てられてという部分が大きいのではないだろうか。
「なるほど……。あなたの考えはわかりますけれど、それよりは、もっと、この土地特有のものを大切にした方がいいのではないかしら？　広大な農地をせっかく持っているのにそれを潰してしまうのはもったいないですわ」
ミーアの言葉に、ギルデンは冷ややかな反応を返す。
「しかし、帝国では、いかに農地が広かろうと、なんの評価にもならないではないですか？」
――やはり、そう来ますわよね……。うーん、手ごわいですわ。
この地に蒔かれた反農思想の種に、ミーアは頭を抱える。
それでも諦めることなく、ミーアは続ける。
「なるほど、しかし、評価にならないのは人の集まらぬ無駄な建造物を造るのも同じこと。果たして、石造りの大規模な闘技場や劇場を造ったとして、人々は来てくれるかしら？　農地を潰し、農業ができなくなった上、役立たずの建物しか残らなかった、などと言ったら目も当てられませんわ」
ギルデンは、なるほど、しっかりと知識を身に着けている。どのようにして人を呼び、お金を落とさせるのか、しっかりと考えてもいるのだろう。
されど、そのアイデアは、別に彼独自のものではない。
莫大なお金をかけて、北の果てに、遊山のスポットを作ったところで、人が来てくれるか？　とミーアは揺さぶりをかける。
ちなみに、涼しい場所に劇場や遊技場があれば、ミーアならば迷わず利用するのだが……。
――涼しくて遊べる場所があるならば、そんなに素晴らしいこと

はございませんわ！　その上で冷たい氷菓子など用意していただければ、言うことなしですわ！

そうは思うのだが……、ここはあえて、私情を捨てて大義をとる。指導者の鑑なのである。

「だから、わたくしとしては、しっかりと農業自体も維持しつつ、避暑地として人を集められるような魅力を用意すればいいと思っておりますわ」

「……では、具体的にはどうせよと？」

まるで試すように、ギルデンが見つめてくる。好き勝手言うからには、きちんと対案があるんだろうな、この野郎……というやつである。

「そうですわね……うーん、例えば……」

ふいにミーアの脳裏に、セントノエル学園にある花園の光景が浮かぶ。

ラフィーナが、丹精込めて手入れしている花園は、それはそれは素晴らしいものだった。

そう、帝国貴族も農業は軽視しているが、園芸は評価するのだ。

そのような、美しい花畑を作れば、農地としての機能もしっかり維持できるのではないか。

元より、ミーアがすべきことは時間稼ぎだ。来年にもやってくる大飢饉まで、農地を維持させておければそれでよいのだ。あれを経験すれば、農地を減らす、などということを言い出せるはずもなし。

そんな発想から、ミーアは言った。

「……では、花などを植える、とかどうかしら？」

「は？　花……でございますか？」

思わず、といった様子で聞き返すギルデンに、ミーアは深々と頷いて見せた。

「セントノエル学園には美しい花園がございますの。あれは一見の価値がありますわ。ぜひに、と他人に勧めたくなりますわ。そして、同じように、この地にも他人に勧めたくなるような花園を作ったら

いかがかしら？　そうすれば、農地を潰さずとも良いんじゃなくって？」
「しかし……、そんなもので客が来ますでしょうか？」
「植える花の美しさ次第でしょうけれど……。中央正教会の教えでは、わたくしたちが死した後に行く天国は、美しい花で飾り立てられた場所だと聞きますわ。この地も、ひと夏を過ごす天国のような避暑地として、周囲に宣伝すれば人も集まるのではないかしら？」
ギルデンは、黙って思案に暮れていたが、不意に顔を上げてミーアを見た。
「一つお聞きしたいのですが、姫殿下は、なぜ、そこまでして農地を残すようにとおっしゃるのですか？」
その問いに、ミーアは一瞬悩んだ。
――飢饉が来るからできるだけ農地は減らしたくない、とはさすがに言えないですわね……。
ルードヴィッヒたちならばいざ知らず、初対面のギルデン辺土伯には通じないだろう。となれば、ミーアが取る戦略は一つしかない。
できるだけ、高慢に見えるような笑みを浮かべて、ミーアは言った。
「ラフィーナさまがお持ちの立派な花園をわたくしも羨ましくなった……。それ以外の答えが必要かしら？」
皇女のわがままで押し切る！　ミーアはそもそも、わがまま姫として知られているのだ。
――この程度のわがまま、通せぬはずがありませんわ！
ミーアは自信をもって胸を張る。
「……なるほど」
そんなミーアを見て、ギルデンは納得したような顔で頷いた。
ミーアにとっての誤算が、一つだけあった。
それは目の前の男、ギルデンが予想以上の切れ者であったということ。

情報収集に余念のなかったギルデンは、すでにミーアが一部で≪帝国の叡智≫とあだ名されていることを知っていた。
ゆえに、読む。
ミーアの意志を深読みする。
深く深く掘り下げ、掘り下げて、そして読み切る！
結果、彼は到達した。ミーアがなにを言いたいのか。
――なるほど、ミーア姫殿下は辺土貴族の我々に対しても慈悲深き方と聞く。我が領地の窮状を知り、できるだけ領民に負担がかからぬ形で問題を解決せよ、と言っておられるのか……。
実際問題、ギルデンは苦労していた。
農民たちの中には、未だに不満を口にする者も多く、少しでも失敗すれば、ギルデンへの信頼は一気に揺らぐことになるだろう。
さらに、円形闘技場などの巨大施設を作るには、金銭が圧倒的に不足している。結果、多額の負債を抱え込むことになるため、決して失敗などできないのだ。
――けれど、姫殿下の提案されるようなことであれば……、支出はそれほどではない。金を借りずとも済むはず。しかも……。
それを「ミーアがラフィーナに対抗するために作った」と宣伝することができれば……。ミーア姫殿下のお墨付きの避暑地であると、ふれ回ることができれば……。
それは極めて強力な宣伝となる。
もしかしたら、皇帝陛下も足を運ぶかもしれないのだ。中央貴族たちも、決してこの地を軽視したりはしなくなるはずだ。
――夏の間、花を植えるだけであれば、領民の負担も最小限。それで、避暑地として外貨を集められれば……。
素早く、頭の中で計算するギルデンであった。

一方、一連のやり取りに驚愕したのは、ルードヴィッヒの隣に控えていたバルタザルだった。
彼は一瞬、唖然とした後、

「麦を植えていない時期に……、花を植え、土が痩せるのを防げと……、そういうことですか……」
震える声で言った。
「ん？　どういうことだ、バルタザル」
不思議そうに尋ねてくるルードヴィッヒに、バルタザルは興奮した様子で答える。
「ああ、知らなくても無理はないだろうな……。実は俺も知ったのはつい最近のことなんだが……、一つの作物を同じ土地に植え続けると、土が痩せ、作物が病気にかかるらしい。連作障害というらしいのだが……」
声を潜めて、バルタザルは続ける。
「だから、ペルージャン農業国などでは、同じ土地に二種類の違う作物を植えることで、それを防いでいるらしいんだ」
「なんだって？　それでは、どうして国内で、その技術を広めないんだ？」
「あいにくと農民ってのは保守的でな。自分たちの農地にあまり手は加えたくないらしい。それに、あのクソッたれな反農思想のせいで、領主の貴族も農業改革に興味がないんだよ」
本来なら、そういうところで、貴族の強権を使ってもらいたいところなのだが……と、バルタザルは呆れた様子で首を振った。
「ところがどうだ？　ミーア姫殿下の提案は。この地の農民は、自分たちの農地を潰すことに、すでに渋々ながらも納得している。それよりは、麦を植える合間に花を植えろと言われた方がマシだろう。反対はほとんど出ないはずだ」
では、領主の方はどうか？
彼もまた断りはしないだろう。一面の花畑を作り、貴族の避暑地として魅力が出ればいいのだから。しかも、皇女ミーア公認の避暑地というお墨付きがもらえるならば、文句のつけようもない。
あえて、農地を潰して、などとは言いださないはずだ。
「あとは、麦の裏作になり、貴族連中を惹きつけるような花を探せ

ばいい……か」
　ルードヴィッヒも感心した様子で頷いた。
「しかし、ミーアさまは、まさかその花にまで、なにか心当たりがあるのだろうか……？」
　と、つぶやいてから、バルタザルは、思わずといった様子で苦笑した。
「いや、ここまで方向性を示していただいたのに、仕上げまでやられては、我々の立つ瀬がないな。よし、花の選定は俺の方で進めさせてもらおう」
　やる気を刺激されているバルタザルを横目に、ルードヴィッヒは思っていた。
　――とはいえ、この北の地が、あまり農地としては適さないのも確かだ……。恐らくミーアさまは、そのような北の地であっても例外なく、農地を減らさないという姿勢を見せるために、このようなことをしたのだろうな……。

　そんな予想をしていたルードヴィッヒであったから……、この北の地が、聖ミーア学園の優秀なる研究者、アーシャとセロの両名の実験地となり……ついには、寒冷地に強い小麦を生み出すことになった時には、あまりのことに目を回しかけた。
「ミーアさまは、そこまで……そこまで考えておられたということか……」
　こうして、ルードヴィッヒは、妄想の翼を力強く羽ばたかせ、どこまでもどこまでも高く高く、飛翔していくのだった。

第一話　痩せる……ミーア皇女伝が！

ギルデン辺土伯領を後にして、ようやく帝都に着いたミーアは、さすがに疲労の色を隠せなかった。

「ああ、遊びに出かけたはずなのに、なんだか、どっと疲れましたわ……」

などと色々言い訳をしつつ、ミーアは十日ほどベッドの上でゴロゴロ過ごした。

しかしながら、当然のごとく、そんなおサボりモードのミーアを放っておいてくれるほど、この世界は優しくなかった。

二日ほど経った頃には、ルードヴィッヒが訪ねてきて、帝国内の状況の報告を入れるようになった。

まぁ、それでもミーアはゴロゴロを止めなかったが……。

意地があるのだ……。ミーアにだって。皇女のプライドというものが……。

ゴロゴロすると決めた以上は、ゴロゴロするのだ！

「それにしましても……、帝国の食糧自給率の低さが、まさか、初代皇帝のせいだったなんて思ってもみませんでしたわ……」

ミーアは、改めてルードヴィッヒから渡された資料を流し見た。

「でも、あのギルデン辺土伯については、まだ、わからないではなかったですけれど……」

彼の所領は、農耕に向いていない気候ではあった。

貧しい領地をどうにかしようときちんと考えていたし、気持ちはわからないでもない。

「でも、ほかの貴族たちはこの状況を見ても、まだ農地を減らそうとしてるんですの？　これでは、いずれ国が傾くなんてこと、わかりそうなものですけど……」

「人は、見たくないものは見えなくなってしまうもの。自分にとっ

て都合のいいものだけに目を向けるものですから……」
ルードヴィッヒはため息まじりに首を振る。
「みながみな、ミーアさまのように、ありのままの情報に耳を傾けてくだされば よろしいのですが……」
そんなルードヴィッヒにミーアは小さく首を振った。
「そんなことはありませんわ……。わたくしだって見たくないものを見ないことがございますわ……」
ミーアの中にあるのは苦い実感だった。なぜなら彼女もまた、そのミスをしてしまっていたからだ。
思い出すのは前の時間軸でのこと……ではなかった。つい先日の、無人島での経験である！
――わたくしは……読むのが恥ずかしいから、ミーア皇女伝を、あまりまともに取り扱っておりませんでしたわ。
自分にとって都合の悪いもの、見たくないものを遠ざけた。過剰な脚色がなされていて参考にならないと、思い込もうとした。
その結果が、あの海での出来事だ。
――まさか、本当にあんな化物魚がいるだなんて、思ってもみませんでしたわ……。恐ろしい怪物でしたわ。あの背びれの大きさから考えるに、きっと口の大きさは、人間など容易く呑み込んでしまえるぐらいあるのではないかしら……。
ミーアの脳裏に、ギザギザの歯を備えた超巨大魚の姿が思い浮かぶ。
――あの事件はきちんと書いてありましたのに……。事前に知ることができたのに……、失敗でしたわ。もっと備えをしておくべきだった。運よくわたくしのところに来たから、わたくしの華麗なる一撃をもって倒すことができましたけれど、先にアンヌやエメラルダさんのところに行っていたら……。それに、もしもアベルが食べられていたら……。
自分の大切な人たちに危害が及んでいたらと想像するだけで、ミーアは背筋が寒くなる。

――こんなことではいけませんわ。もっとしっかりしなければ……。
気を引き締めるミーアである。
パンパンっと自ら頬を張り、思いっきり気合を入れる。
――二度と、あのような失敗はいたしませんわ。どれだけ不都合な真実があろうと、わたくしは決して目を逸らすことはいたしませんわ！
……ちなみに、こんなにシリアスになっているのだが……、ミーアが殴り倒したのは言うまでもなく、巨大人食い魚ではなく、ムーンボウである。
恐らく、海に棲む生物の中では、トップクラスに温厚なお魚さんである。

まぁ、なにはともあれ、ミーアは学園に戻ったらもう一度、皇女伝を読み直してみようと決めるのだった。

そうして、夏休みが終わり……、ミーアはセントノエルに帰還を果たした。
「お帰りなさいませ、ミーアお姉さま！」
部屋に入ると、元気のいい声でベルが出迎えてくれた。
心なしかツヤツヤ、ぷっくりした顔のベルを見て、ミーアは思わず息を呑む。
「まぁ、ベル、少し太りましたわね……」
「？　そうでしょうか？　えへへ、そんなこと、ないと思いますけど……」
ニコニコ笑うベルを見て、ミーアはため息を吐く。
――アンヌがいないからって、甘いものをたくさん食べてましたわね。リンシャさんは、少しベルに甘いのかしら……。まったく……。
まぁそれでも、出会った頃の悲惨な様子を思えば、こちらの方が

全然いい、と思い直すミーアである。
「ベル、あなた、少し運動した方が良いですわ。わたくしと一緒に馬術部に入りなさい。それと、ダンスも教えて差し上げますわ」
「え？　ミーアお姉さまが、教えてくださるんですか？」
「ええ、よく考えたら、冬に行われる聖夜祭でもダンスの時間があるでしょうし、わたくしの孫娘として、恥ずかしくないようにして差し上げますわ」
それを聞いたベルは、瞳をキラキラ輝かせて、ミーアを見つめてきた。
「ありがとうございます！　ミーアお祖母さま！　ボク、頑張ります！」
ミーアは、うむ……などと偉そうに頷いてから、
「あっと、そうでしたわ。それより、ベル、申し訳ないのですけど、あなたの皇女伝を少し見させていただいてもよろしいかしら？」
「え？　はい、もちろんいいですけど……」
不思議そうな顔をしていたベルだったが、すぐに自らの枕の下から一冊の本を取り出した……枕の高さ調節に使っているのだろうか？
――この子って、変なところで適当なところがありますわね。誰に似たのかしら……？
しきりに首を傾げるミーアである。
「どうぞ、ミーアお姉さま」
「ああ、どうもありがとう」
差し出された『ミーア皇女伝』を受け取ったミーアは、んっ？と小さく首を傾げた。
「あら……変ですわね……。なんか、心なしか、皇女伝が……痩せたような？」
以前は、もっと重かったような気がするが、今はミーアの日記の半分程度の重さしかない。試しに、指で厚さを図ってみるが、前より確実に薄くなっている気がする。
「変ですわね。ねぇ、ベル、これ、何ページか抜けてるのではなく

って？」
ミーアは皇女伝を裏返して、詳しく観察を続ける。
――うーん、特に異常はないようですわね。
てっきり皇女伝の秘密を知った何者かがページを抜き取ったのかと思ったが、そんな痕跡はない。
どちらかというと、本自体が薄くなった印象なのだ。
それは、そう……まるで、最初から皇女伝が、この厚さで作られたかのようだった。
――不思議なことですわ……。これはいったいどうなって……。
本を開いたミーアは……、その深刻さにすぐに気づくことになった。
なぜなら……、皇女伝は、しっかりと終わりまで書いてあったのだ。
「なっ……こっ、これは……」
ミーアの人生を最初から最後まで書き記した皇女伝、その厚さが短くなるというのは、すなわち……っ！
「わっ、わっ、わたくしが、死ぬ……？　こっ、この、冬に……！？」
ミーア・ルーナ・ティアムーン。享年十四歳。
聖夜祭の夜に殺される。

第二話　ミーアベル、お祖母ちゃんにお友だちを紹介する！

「なっ、こっ……、ふぁぇっ？」
などと、なんとも言えない声を上げつつも、
――わたくし、一体全体、どんな死に方をするんですの？
ついつい自分の死因を確認してしまうのは、ミーアの悲しいサガである。
ギロチンに毒殺……。その後に来るのは、果たしてなにか……？
楽に死ねるのか、あるいは……。
まず一番の興味はそこだった。
ミーアは素早く皇女伝に目を通していく。その結果……、
「やっ、夜盗に襲われた挙句、殺されて……、その後、死体はオオカミにかじられる？　これは、ろくな死に方じゃなさそうですわ……」
ミーア、震える。
毒によって全身血まみれで死ぬというのも結構な酷さだったが……、今回のものは、それと同じぐらいには酷そうだ。ベッドの上で死ねない分、むしろ悪化したといえるのかもしれない。
「ま、まぁ、殺されてから食べられるだけならば、それに関しては痛くもないんでしょうけれど……夜盗に殺されるっていうのは……どうなのかしら？」
ミーアは仮にも帝国の皇女殿下である。
人質としての価値は当然あるはずなのに、身代金が支払われたりした様子もない。
「……ということは、捕まる以前に殺されてしまったということですわね。弓で射られたのか、刃で突き殺されたのか……。う、ぐふぅ……、想像したら気が遠くなってきましたわ……」
ミーアは、ふらふら、っとベッドの方に歩み寄ると、そのままこ

てん、と転がった。
「それにしても……、わたくし、どうして、夜盗に襲われることに……？」
ミーアは、改めて皇女伝に目を通す。結果、以下のことが分かった。
まずミーアが、聖夜祭の最中にセントノエル島を抜け出したということ。
どうやら、島の外にある平原を、馬で夜駆けしている際に、夜盗に襲われたということ……。
「なるほど……、ふーむ……むむむ……」
ミーアは、二度、三度とそのページを見直した後に、深々とため息を吐いた。
「まーったく、わかりませんわ。わたくしが、いったいどうして、このようなことに？」
そもそも、聖夜祭の時にセントノエル学園を抜け出すこと自体が考えづらいことである。
いったいなぜ、そのようなことをしたのか……？
「なにやら、しょーもない目的のために抜け出した……という臭いがいたしますわね。でもまぁ……、幸いにして、セントノエル学園に引きこもっている分には問題ないはずですわ。不用意に島を離れるなんてことをしなければ、大丈夫……大丈夫なはず……」
そもそも、このセントノエル島は、ラフィーナによって築かれた安全地帯。島を渡ることも容易ではないはず……。
そうは思うのだが、ミーアの中に一抹の不安が残った。
なぜなら、その日は聖夜祭。セントノエルにおいて、最も人の出入りが激しい時期なのである。
なるほど、確かに暗殺者などの対策から、入ってくる者に対しては万全の対応を行うだろう。けれど……、では、出ていく分にはどうか？
こっそり、なにかに隠れて出ていくことは可能なのではないか？

ミーアが、こっそりお金を握らせるなどして、夜駆けに行きたいから、と、商人に声をかけることは……、もしかしたら、可能なのではないか？
もし可能だったとして、いったいなぜ、そのような事態に陥ったのか……？
「ともかく油断は命取りになりますわね……。セントノエル島に引きこもっているのが最善策。けれど、いざという時のための備えをしなければなりませんわ」
この場合、まずできるのは聖夜祭に、どのようなことが起こるのか、しっかりと事前に予想しておくこと。
「まずはラフィーナさまに聖夜祭の時にどのようなことをするのか、聞いておく必要がございますわ。情報収集ですわね」
それともう一つ……。
「馬で出かけるというのであれば……、乗馬技術を磨いておく必要がありますわ」
相手は夜盗。あるいは狼である。
自分の足で走るならばまだしも、馬に乗ってさえいれば、なんとか逃げられる可能性もあるかもしれない。
「減量のためにも、ここは、馬術部の活動をみっちりやっておかなければなりませんわね……。それにしても……」
当面の方針を決めたところで、ミーアの関心は別のものに移る。
皇女伝は、ミーアが死亡したところで終わっている。だから、学園都市がどうなるかも、新型の小麦や、飢饉がどうなるかもわからない。
そして、それ以上に気になるのが……。
――わたくしの子孫、特にベルのことは気になりますわね……。わたくしが死んでしまったなら、孫娘であるベルだって生まれてこないはずで……。それってどうなっておりますの？
見たところ、目の前で首を傾げるベルに異変はなさそうだが、それは皇女伝の記述と食い違っているのだ。

――まさか……、ベルがウソを言っている？　わたくしを騙そうとしている刺客なんじゃ！？

ミーアはじとーっとした目で、ベルを見つめた。ベルは、どうかしましたかー？　といった感じで首を傾げている。頬がつやつやして、とても平和な雰囲気だ。

……とても殺伐とした刺客には見えない。

――それに、そもそもが皇女伝を持ってきたのはベルですわ。皇女伝を信じ、ベルの言葉を信じないというのもおかしな話。一つを信じるならば、もう一つも信じるべきですわね。つまり、記述が食い違うことには、やはりなにかの理由があるのですわ。

ふーむ、と唸りつつミーアは、ベルと皇女伝を見比べて……、やがて一つの結論に辿り着いた！　それは……。

「ああ……なるほど。面倒くさいから、ですわね……」

すとん、とミーアの中で、腑に落ちる感覚があった。

つまりはこういうことだ。

日記や皇女伝の記述を書き換えること、それは、恐らく、そう難しいことではない。少ない労力でできることなのだ。ゆえに、ちょくちょく書き換わる。

けれど、ベル……。すなわち、人間の記憶を書き換えたり、あるいは、その人間を消したり、再び出現させたり、それをするのは、恐らく大変なことなのだ。

自身のちょっとした行動いかんで、それをいちいち修正するのは、とても疲れることなのだろう。

――だから、神さまは、ある程度、歴史の向かう先が決まってから修正をする、ということなのではないかしら？

考えてみれば、それはとても簡単な話だ。

パンに塗るジャムの種類であれば、簡単に変えることができる。けれど、ディナーのメニューをコロコロ変えられては、材料を用意する方はたまったものではない。

全部、最初に決めて、定まってから命令を下せ、と言われること

だろう。
……というか、前の時間軸で、そのようなことを言われた記憶が、ミーアにはあった。その当時は、まだまだミーアのわがままが通る時だったから、とてもとても婉曲に言われたわけだが……。
――うふふ、それにしても、労力をできるだけ少なくだなんて、案外、神さまもナマケモノですわ。
勝手に推理をした挙句、勝手に親しみを感じてしまうミーアなのであった。
っと、そんな感じで難しいことを考えていたからだろうか。ミーアはベルの話を聞き流していた。
「あの、ミーアお姉さま、聞いてますか？」
「あっ、ええ、聞いておりませんでしたわ。ごめんなさいね」
ミーアは、はふぅっと小さく息を吐いて首を振った。
「いろいろありすぎて、少し考え事をしておりましたわ。それで、なにかしら？」
「はい、実はですね、ミーアお姉さま。ボク、夏休みの間にすごく仲良くなったお友だちがいて……、その子を紹介したいんですけど……」
「まぁ、ベルにお友だちが？　それはぜひ、会っておかなければいけませんわね」
素早くベッドから起き上がると、にっこり、優しいお祖母ちゃんスマイルを浮かべるミーア。であったが、直後、その笑みがひきつる。
なぜなら……、
「お初にお目にかかります。ミーア姫殿下……」
部屋に入ってきた少女が……、にっこりと可憐な笑みを浮かべる少女が……、
「皇帝陛下の忠実なる臣、イエロームーン公爵家が長女、シュトリナ・エトワ・イエロームーンです」
そう、名乗ったから……。

第二話　ミーアベル、お祖母ちゃんにお友だちを紹介する！（後書き）

※考察用の設定開示
ミーアの推理はそれなりには当たっているのですが、一応、考察したいという方のために一部設定を開示。ネタバレになる＆ＳＦではないので、ある程度ふわっと……ですが、興味があればどうぞ。

「タイムパラドックスと抵抗力」
基本的に、この物語においてタイムパラドックスが発生した場合、それを正す方向へと修正力が働くようになっております。日記帳、皇女伝の記述などは、修正力によって書き換えがなされています。そして、時間移動した物によっては、修正力の影響を受けやすいものと、ある程度、抵抗し、現在の形を維持しようとする物とが存在します。
基本的には
記述された文字＜道具（存在）＜生物＜？？？
の順番で抵抗力が高くなり、生物であれば、ほとんどその影響を受けずにいられることになります。しかし、自分の時間軸と完全に切れたわけではないため、死亡したりすると……。
また「？？？」に関しては、一切の影響を受けることなく形を維持し続けますが、いずれは一つの時間軸に統合されて、それは～～として処理されるため、当人は気づくことなく……。

第三話　真理の体現者、ミーア姫

「……はぇ？」
ミーアは、思わず、ぽっかーんと口を開けて、目の前の少女のことを見つめた。
ふわふわと輝く黄金の髪、風で髪が揺れるたび、心地よい花の香りが漂ってくる。頬をかすかに赤く染めたシュトリナは華やかな笑みを浮かべて、ミーアの方を見つめていた。
けれど、その灰色の瞳に、徐々に怪訝そうな光が宿っていく。
ミーアが、ずっと黙って見つめていたからだ……。
――あっ、まずいですわ……。
ミーア、咄嗟に笑みを繕いなおして、口を開いた。
「はじめまして、わたくしはミーア・ルーナ・ティアムーン。以後、お見知りおきをお願いしますわね」
それから、ミーアは小さく首を傾げた。
「それにしましても、縁戚でもあるイエロームーン家のあなたと初対面なんて、なんだか不思議な感じがいたしますわね」
「はい。申し訳ありません。リーナは生まれた時から体が弱く……。ミーアさまのお誕生会にも参加することができませんでした」
「まぁ、そうでしたの。これは変なことを聞いてしまいましたわね」
「ふふ、もう昔のことです。ミーアさまは、お優しい方なのですね」
そうして、シュトリナは、そよそよと揺れる花のように笑った。
森で歌う小鳥のように、笑った。
完全無欠な貴族の令嬢、よく笑い、愛らしく明るく……およそ、悪印象の抱きようのない少女だった。
ゆえに、ミーアの脳裏では、カーンカーンカーンッ！　と警鐘が鳴り響き続けていた。
――こっ、このタイミングでイエロームーン公爵家の令嬢が、わ

たくしに近づいてくる？　どっ、どう考えても怪しすぎますわっ！
　そもそもなんで、わたくしはこの子のこと知らないんですのっ！？　おかしすぎますわ！
　前の時間軸を合わせても、ミーアにはシュトリナの記憶がなかった。というよりは……イエロームーン家の関係者の記憶自体が、そもそもとても少ない。
　他の四大公爵家の者たちのことは、それなりに印象に残っているというのに……。
『我らは古いだけで、四大公爵家としては最弱ですから……』
　そんな、謙遜な言葉を言われた記憶があるが……せいぜいがその程度。
　彼らに対する情報が圧倒的に不足しているのだ。
　これはいったいどうなっているのか？　と焦るミーアに、ベルが嬉しそうに話を続ける。
「リーナちゃん、じゃなかった。シュトリナさんとは図書室で知り合ったんです。それから、ずっと一緒にお勉強してもらってるんですよ」
「あっ、え、えーと、そう、なんですのね……。それはお世話になりましたわね、シュトリナさん」
　ミーアが目を向けると、シュトリナは澄まし顔で頭を下げる。
「いいえ、とんでもありません。ご挨拶にうかがうのが遅れてしまい、申し訳ありませんでした」
「それは別に構いませんけど……」
　と言いつつも、ミーアはじっくりシュトリナの観察を続ける。
　――確かに、入学して以来、わたくしのところには、まったく顔を見せませんでしたわね。それなのにこのタイミングで……？　絶対に怪しいですわ！
　判明した初代皇帝の思惑、それに合わせるように痩せ細ったミーア皇女伝。
　そして……、現れたイエロームーン公爵の関係者。

すべてが一本の糸で繋がっているようにしか思えなくって……。
――実に怪しい、怪しすぎますわ！
名探偵ミーアの勘が告げていた。
目の前の少女は黒。犯人！　お近づきになるにはあまりにも危険、と。
――これは、びしっとベルに近づくなと言うべきかしら……？
ミーアは、しばし思案する。が……。
――いえ、そうですわね。わたくしが与り知らぬところで動かれるのは、むしろ恐ろしいですわ。でしたらいっそ、ここでしっかりと繋がりを持っておいたほうがいいでしょう。せっかく敵の側から来てくださったのですから、その方が監視しやすいはず。
サフィアスを生徒会に入れたのと同じ理屈である。
それに……、とミーアはベルの方を見た。
ニコニコとご機嫌に笑っているベル。嬉しそうにお友達を紹介する孫娘を前に、ミーアとしてはあまり水を差すようなことは言いたくはなかった。
それでも、一応は「気をつけるように」と従者であるリンシャには言っておこうと思うけれど。
「これからも、どうかベルと仲良くしてあげてね、シュトリナさん」
「はい。リーナも素敵なお友達ができて、すごく嬉しいです」
シュトリナは、花のように華やかな笑みを浮かべた。
その、非の打ちどころのない笑みに、やっぱりミーアは警戒心を抱いてしまう。
――ふふん、下手なことをしたら、すぐに尻尾を掴んでさしあげ……。
「あ、そういえば、ミーアさまは、野草の類にご興味がおありとか……」
不意に、シュトリナは言った。
「あら……？　よくご存知ですわね。ベルに聞いたのかしら？」
「いえ、噂を耳にしただけなんですけど、実はリーナも好きなんで

す。草花って。だから、領地の中の野草を採ってきてみたり、ご本を読んで勉強もしてるんですよ」
「……ほう！」
ミーア、少しだけシュトリナを見直す。
てっきり屋敷にこもって、なにか怪しげな策謀に加担する不気味な少女と思っていたのだが……。
――ふむ、わたくしと同じ生存術（サバイバル）の心得があるとは思いませんでしたわね……。惜しいですわ……。もしも敵でなかったら、一緒に、革命が起きた時にどうやって生き残るかで……、盛り上がることができたかもしれませんのに……。
などと、ちょっぴり残念に思うミーアであったが……。
「それに、キノコとかも楽しいですよね」
その一言に釣られる。
「まぁっ！　シュトリナさん、キノコ好きなんですの！？」
釣り上げられる。
「はい。実はキノコも研究してて、採ってきて食べたりもしてるんです。お鍋料理なんか、いいですよね」
「まぁ、まぁっ！　それ、わたくしもやってみたかったんですのよ？　よかったら、今度、教えてくださらないかしら？」
見事な一本釣りだった！
「もちろんです。今度、一緒にキノコ狩りにいきましょう」
ずががーんっ！　とミーアの背筋に雷が落ちた。
かつて、ミーアをキノコ採りなどという、危険な遊びに誘った者がいただろうか？　否、いない！
ミーアは、ほわわあっ！　と笑みを浮かべた。
シュトリナに対する好感度が、一気に上がり、
――もしかして、シュトリナさん、普通にいい子なのかもしれませんわ。お父さまのイエロームーン公爵はダメでしょうけど、この子は陰謀とかに関係ないのかも……？
などと……、すっかり気を許しそうになっているミーアである。

人は、見たいものだけを見て、見たくないものは見ないもの。
そんな真理の体現者こそが、ミーアなのであった。

第四話　その恨みの消費期限

さて……、アツいキノコ談義によりシュトリナとの親交を深めた後、ミーアはラフィーナの部屋を訪れた。
「ご機嫌よう、ラフィーナさま。ご無沙汰しておりますわ」
自室を訪ねてきたミーアを見て、ラフィーナはぱぁっと春の日差しのような、明るい笑みを浮かべた。
「まぁ、ミーアさん、お久しぶりね。どうぞ入って」
「……失礼いたしますわ」
対して、ミーアの表情は硬い。それも当たり前のことだろう。初代皇帝が、ラフィーナの天敵、混沌の蛇の陰謀に加担していたと報告しなければならないのだ。
――さすがにラフィーナさまであれば、先祖の罪は子孫の罪、なんてことは言わないでしょうけれど……。
それでも、気分の良いものではないだろう。
まして、今回話すべきことは、それではない。
――聖夜祭のこと、少しでも情報を得て、備えをしなければなりませんわ。なんとか、死の運命から逃れなければ……。
悲痛な覚悟を固めていたミーアであったが……。
そんなミーアの緊張を感じ取ったのか、ラフィーナは少し黙って、まじまじとミーアの顔を見つめてから、
「今、お茶を用意するわね。ミーアさんと一緒に食べようって思って、特製のベリーパイを用意してあるのよ」
「まぁっ！　そのようなものが？　いただきますわ！」
一気にテンションがV字回復したミーアである。
サクサク、ほろほろの甘いパイを食べて、ほふぅ、っと幸せなため息を吐く。幸せが口から漏れ出してしまったのだ。
「ああ、このパイ生地の甘みと、ステラベリーの酸味が絶妙ですわ

ね。素晴らしいですわ。とっても幸せな気分になりますわね」
にっこにこ、と満面の笑みを浮かべるミーア。
そんなミーアを見て、ラフィーナも、嬉しそうな顔をする。
「ふふ、良かった。元気が出たみたいね。それで、良い夏休みは過ごせたかしら？」
言われて、ミーアは思い出した。自分がなんのために、ここに来たのかを。
「そうですわね……。とても有意義な夏休みだった、と言えると思いますわ……」
そうして、ミーアは話し出した。この夏のこと、あの島のことを……。
南の島での大冒険を楽しそうに聞いていたラフィーナだったが、初代皇帝の話になると、さすがに驚愕を隠せない様子だった。
「そう……。そんなことが……。まさか、ティアムーン帝国にそんな秘密があっただなんて……」
ラフィーナは思案顔で小さくため息を吐いた。
「話を整理しましょうか……。つまりはこういうことね？　大昔、大陸を追われた邪教集団がいた。後に混沌の蛇と呼ばれるようになる者たちは、ガレリア海の小島に身を潜め、そこでひそかに隠れ住んでいた」
「地下の神殿がございましたけれど、立派なものでしたわ」
暗闇でも光を得て、行動できるようにするあの工夫は……。あの島に暮らしていた者たちの技術の高さを窺わせた。
「その辺りのことを調べると、蛇のルーツがわかるかもしれないわね。その神殿の造りを調べれば、いつの時代のどういう建築様式に基づくものなのか、とか……」
ラフィーナは、しばし思案に暮れていたが……。
「そうして、島で生活していた彼らに、やがて転機が訪れる。それが、ティアムーン帝国の祖先である狩猟民族の者たちだった。初代皇帝に率いられ、同じく故郷を追われた彼らは、混沌の蛇の者たち

と出会い、そして感化された……」
「それが、初代皇帝のみなのか、他の貴族たちもなのかは不明ですけれど……」
「受けた影響の深さも問題ね。果たして、初代皇帝は心の底から混沌の蛇に傾倒してしまったのか？　あるいは、それを利用しようとしたのか……」
今までに出会ってきた陰謀に加担する者たちの中にも、白鴉のような者たちもいれば、ジェムのような者もいる。
「ティアムーン帝国という大国を造ってしまうような優秀な人だから、蛇の教義なり、考え方なり、信者なりを利用したとも思えるけれど……。逆に、自分の願望のために国一つを造ろうなんて、妄執的なところもあるから、蛇への強力な信仰を持ってしまったのかもしれない」
と、そこで、ラフィーナは小さく首を傾げる。
「それはそうと、ミーアさまのお父さま……、ティアムーン帝国の皇帝陛下は、そのことをご存知なの？」
「はて……お父さまが、ですの？」
ミーアは一瞬、頭に父親の顔を思い浮かべてから、
「それはあり得ませんわ」
きっぱりと断言する。
ミーアの中での、父に対する信頼は揺らぐことはない。そう、ミーアは心から信頼しているのだ。
「お父さまは、わたくしにどれだけ好かれるかしか、考えておられない方ですから」
父親の、ウザさを……！
娘に「パパと呼びなさい！」と命令してくるような父が、娘の命を危険に晒すような陰謀に加担するわけがない。
「うふふ、そう。お互い苦労するわね。もっとも皇帝一族が、そんな風になるなんていう計算違いのおかげで、こうして笑っていられるのだけど……」

ラフィーナは苦笑して、それから不意に黙った。
なにか、思いもかけないようなことに気づいてしまったかのように……、深刻な表情を浮かべている。
「どうかなさいまして？」
「いえ、別に大したことはないんだけど……、少しだけ思ったの。一から国を建てあげる、そんな能力の高い人が、そんな計算違いするかなって」
ラフィーナは、いったん間を置くように、紅茶に口をつけた。しばし、考えをまとめるためか、瞳を閉じて、黙ってから……。
「恨みは、幸福に上書きされるものよ、ミーアさん。もしも、皇帝となった時、それでもなお、人は先祖の復讐心を持ち続けて実現しようとするものかしら？」
ラフィーナの問うているのは、至極、まっとうなことだった。
例えばの話、父親が抱いた恨みを子が晴らすことは、あり得ないことではないだろう。祖父の恨みを孫が晴らすことだってあり得るかもしれない。では、曾祖父は？　その先は……？
見たこともない先祖のために、復讐心を持ち続けることは、可能なのだろうか？
「しかも、それだけではないわ。自分で国を建てあげるということは、必然的に自らが民を従える、もっとも高い身分につくということ。現に、その人は初代皇帝となり、その血筋はミーアさんたちに受け継がれた。でも、国の頂点についた、二代目、三代目が、国を挙げて世界を滅ぼそうなんてするかしら？　自分が幸せなのに？　それを壊してまで、先祖の恨みを晴らそうとするものかしら？」
自らの置かれている環境、それが幸せであればあるほど、先祖の復讐心を維持するのは難しい。そんなもの無視して、今を楽しんでしまえ！　となる可能性が高いからだ。
初代皇帝の戦略は、最初から破綻していたと言っても過言ではない。
「それは計算違いかしら……、それとも、それすらも計画に入って

いるのか」
思案に暮れるラフィーナをしり目に、ミーアは……、
――いずれにしても迷惑な話ですわ！　お父さまといい、ご先祖さまといい、まったくうちの一族は……。こんなだから、常識人のわたくしが苦労するのですわ！
などと、プリプリ怒っていた。
真の常識人であるルードヴィッヒの苦労が偲ばれる話である。
それはさておき……。
「あの、ラフィーナさま、それで、お願いがあるのですけれど……。ヴェールガ公国からあの島に人を送って、調べていただけないでしょうか？」
本来であれば、ティアムーンから調査団を送って詳しく調べたいところだ。しかしながら、初代皇帝の陰謀を知ってしまった今となっては、とてもではないが、それはできない。
「陰謀家の子孫がそれをするわけにはいきませんし……」
「そうね……。混沌の蛇のルーツがわかるかもしれない貴重な島だわ。我がヴェールガが動かないわけにはいかなそうね……」
ラフィーナに快く引き受けてもらえて、ミーアは少しだけ気持ちが軽くなる。
「助かりますわ。海図の手配なんかはエメラルダさんの方にも話を通しておきますわね……。ところで、ラフィーナさま、お聞きしてもよろしいでしょうか？」
「あら？　なにかしら？」
きょとん、と首を傾げるラフィーナに、
「この冬に行われる聖夜祭のことなのですけれど……」
ミーアはおずおずと言った。
「どのような準備をして、わたくしは何をすれば良いのか、早めに教えていただけないでしょうか？」
それを聞いて、ラフィーナは嬉しそうに微笑んだ。
「あら……、こんな時なのに生徒会長の仕事のことを考えてくれて

るのね」
「もっ、もちろんですわ！　ラフィーナさまに任されたことですから」
ミーアは誤魔化すように笑みを浮かべた。

第五話　小心者の戦術論（チキンタクティクス）

「ミーアさんは、去年の聖夜祭のこと、覚えてるかしら？」
「ええ、もちろんですわ」
ラフィーナの問いかけに頷きつつ、ミーアは昨年の出来事を思い出していた。
聖夜祭――それはセントノエル最大の行事だ。地上に下った聖神が、人に希望の灯を与えたという伝承に基づき、その一年の感謝を神にささげる祭りである。
一年の最後の月の初週に開かれるそれは、厳粛な燭火（キャンドルサービス）ミサとその後のにぎやかな祝祭とによって構成されている。
ミサは、みなで聖堂に集い、各々が使い捨ての木製ランプを手に持って行う。決められた聖歌とラフィーナの説教があり、さらに、最後にみなで、ランプを外の焚き木（キャンプファイヤー）に投げ込んで、大きな炎とするのだ。
神の希望が地上を照らすことを象徴的に表現した、厳粛な儀式である。
その後、夜を徹しての宴会が開かれる。
宴会は学園の中のみならず、セントノエル島全体で行われ、生徒たちはこぞって街に繰り出し、その日を祝うのだ。
去年はミーアも友人たちとともに露店巡りをし、寮に戻ってからもクロエの部屋に集まり、朝までおしゃべりに興じたのだ。
……ちなみに、前時間軸のミーアについては、おおむねお察しの通りである。
シオンが誘いに来るのを部屋でじっと待っていたのだ。
途中でエメラルダあたりが遊ぼうと誘いに来たが、もしも一緒に出かけている間に、シオンが誘いに来たら大変である。
だから、ずっと待っていたのだ。約束もしていないのに、じーっ

と。
待って、待ち続けて……気づいたら朝、鳥がチュンチュン鳴いてるのを聞いて起きるパターンである。
そんな寂しいイベントを過ごしていたものだから、去年の聖夜祭は、それはそれは楽しかった。忘れられない思い出になっているのだ。
「そう。それでは、お祭りの流れ自体はわかってるわね。生徒会で担当しなければならないのは、主に後半の祝祭の方なの。普段は学園に入らない商人の出入りもあるから事前に審査したり、警備体制も普段とは変える必要があるわ。といっても、生徒会が直接細かいことを指示するのではなく、各担当者から上がってくる報告書をチェックして、欠けがないか確認する作業だけど……」
「なるほど。事前の作業が多そうですわね。当日はどうなっておりますの？」
「当日は、生徒会の仕事はあまりないわね。いちいちこちらに報告を上げずに、現場で対処できるように準備をしておくから」
――ふむ、なるほど。確かに、ラフィーナさまは、当日は自由に動けませんものね。
ヴェールガ公国公爵令嬢ラフィーナは、中央正教会の聖女でもある。
聖夜祭の当日は、学園付き（チャプレン）司祭の手伝いとして燭火ミサに参加し、その後のパーティーでは、来賓への挨拶回りなど、とにかく忙しい。
ゆえに、事前にラフィーナがいなくとも、問題なく動くように体制を整えておくのだ。
「大変そうだけど、毎年のことだから。警備責任者も運営を取り仕切る執事長も動きはよくわかってると思うから、そこまでの負担ではないと思うわ」
ラフィーナはミーアを励ますように優しげな笑みを浮かべる。
けれど、ミーアはほっと一安心、とは当然ならなかった。
むしろ、不安感は増すばかりだ。

なぜなら、当日の仕事があまりないということは、言い換えれば……。

――外に出ようと思えば、いくらでも出られるということですわ……。

生徒会の仕事に忙殺されるのなら、あるいは、生徒会室にこもって仕事をしなければならないと言われたら……、ミーアが島を出て野盗に襲われることは物理的に不可能になる。

ラフィーナや他のメンバーを説得してまで、ミーアが一人で島外に出るなどということは、考えづらいからだ。

けれど、自由行動が許されているなら、一気に皇女伝の記述が現実味を帯びてくる。ミーアが島外に出るハードルが下がってしまうのだ。

――あ、でも、この皇女伝のわたくしは、島の外に出たら殺されるってことを知らなかったわけですし、迂闊にも遠乗りのために、島外に出た可能性も……。

ミーアは、そんな自分を思い浮かべてみた。

――大いにありえそうですわ！

思わず、つぶやく。

例えば、事前の準備で、いろいろな欲求が溜まっていて、それを発散するために馬で島外に出るだとか。

祭りで賑わう島を馬で駆けるわけにはいかないから、当然、場所は島外になるわけで……。そんなことを自分がやらかす可能性は十分に高いようにミーアには思えて……。

――ならば、話は簡単ですわ。どれだけ忙しくって、いろいろ欲求がたまっていたとしても、このセントノエルから出ていくなんて、馬鹿なことをしなければいいだけのことですわ。というか、部屋から一歩も出ずにいればいいだけのこと。なんなら生徒会室で慰労会など開いて一晩明かすことにしてしまってもよいですわね……。そこでキノコ鍋でも出せば……。

そう納得しようとするのだが……。なぜだか、胸の内のモヤモヤ

は一向に収まらなかった。
――とっ、ともかく、当日までにできることをやっておくべきですわ。それだけは確かなことですわ！
油断は簡単に死に繋がる。
だから、ミーアは決して油断しないのだ。
それこそが、小心者（チキン）の戦術（タクティクス）論なのだ。

第六話　赤月の麗しの令嬢からの挑戦状

翌日から、ミーアの馬術特訓が始まった。
毎日毎日、授業が終わると馬術訓練用の馬場に行き、夕方まで馬に乗る日々。
おかげで体中が筋肉痛になったが、構っている暇などなかった。
「ああ、嬢ちゃん。今日も来たのか？」
飼育小屋に行くと、林馬龍（リン・マーロン）が苦笑で出迎えてくれた。
「最近、王子殿下たちより熱心に練習してるんじゃないか？」
「あら？　そんなことございませんわ」
ミーアはそう言いながら、飼育小屋の馬の顔ぶれを見ていく。
ちなみに、セントノエルの飼育小屋には、馬が二十頭ほど揃っている。
ミーアのお気に入りは、気性の穏やかな白馬である。素人であっても乗りこなせる良馬であり、毛並みも美しいとあって、ミーアもお気に入りなのだ。
「まぁ、熱心に練習するのはいいことだが……。ん？　もしかして、嬢ちゃん、今度の……」
「失礼するよ」
と、馬龍の言葉をさえぎって、凛とした少女の声が響いた。
「あら……この声は……」
ミーアは、その声に聞き覚えがあった。
なにげなく声の方に目を向けると、そこにいたのは、
「ご機嫌麗しゅう。ミーア姫殿下」
恭しく頭を下げる赤髪の令嬢……、ルヴィ・エトワ・レッドムーンだった。
「まぁ、ルヴィさん……？　こんなところで、どうしましたの？」
それを見て、ミーアはきょとんと首を傾げた。

ちなみにミーアは、ルヴィとは顔見知り程度での関係である。
四大公爵家の邸宅に行く機会は少なくはないし、行けば相手をしてもらっていた記憶はあるのだが……。
――かといって、じっくり話をするという感じではありませんでしたし。仲がいいとはとても言えませんわね。
なので、ミーアの印象としては良くもなく悪くもなく……。
もっともレッドムーン公爵家自体には、前時間軸において兵を出し渋られたことから、あまり良い印象はないのだが……。
――まぁ、あの当時は、どこの貴族も自らの領地を守るので必死だったというのはわかりますけれど、精強なレッドムーン家の私兵団を派兵できていたら、戦況は変わっていたかもしれませんわね……。あ、でも、あの時点で、敵にはシオンと鬼のディオンさんが揃ってましたし……、そうなるとレッドムーン家の援軍があってもあまり意味があるようには思えませんわね……。
などと、いろいろ考え事をしていたものだから、危うく、ルヴィの言葉を聞き逃すところだった。
「実は、姫殿下に決闘を挑もうと思って、参上しました」
「……はて？　決闘……ですの？」
ルヴィは涼しげな笑みを浮かべながら、飼育小屋の方に歩み寄った。
「少し小耳に挟んだのですが、姫殿下は、最近、馬術の鍛練に熱心に取り組んでおられるとか……」
飼育小屋の馬の鼻面を撫でながら言う。なんだか、馬の扱いに慣れてそうだなぁ、とか、そういえば、レッドムーン家では、女子も剣術や馬術を習わされるって聞いたことがありましたわね……、などと思いつつ、ミーアは頷いた。
「ええ、まぁ、そうですけど……。それがなにか？」
「それはつまり……、秋に開かれる馬術大会へ出場されるつもり、ということですね？」
「……はて？」

馬術大会？　と首を傾げるミーア。そういえば、そんなのもあったなぁ、などと思い出す。どうやら、アベルとシオンも出場する予定らしく、ここ最近はミーアと同じく、ここに通っているらしい。
まぁ、正直、ミーアとしてはそれどころではないので、出る予定は一切なかったのだが……。
「おお！　やっぱりそうだったか。最近、熱心に練習してるからそうじゃないかと思ってたんだ」
馬龍が納得の声を上げた。
――いや、まだ、わたくしなにも言ってないのですけど……。
と、ミーアが反論する間を与えず、ルヴィは言った。
「そこで、馬術大会の≪速乗り≫で、姫殿下に決闘を挑みたい」
涼しげな顔に挑発的な笑みを浮かべて、それから、ルヴィは片膝をつく。
「ミーア姫殿下、受けていただけるだろうか？」
正々堂々たる決闘の申し込み。
それに対して、ミーアは……。
――これ、受ける理由が一つもございませんわね……。
断る気しか起きなかった。
あいにくと、ミーアには挑まれた勝負を律儀に受けてやる義理はない。
なるほど、エメラルダのように、裏でコソコソ動き回られるよりは、こちらの方がマシと言えるのかもしれないが、だからと言ってそんな面倒なことを受ける必要がどこにもない。
――そもそも、ただ勝負を挑んできてるわけではないでしょうし……。
ただ単に、馬術の腕を競いたいだけであるならば、こんなことをせずに馬術大会に出ればいいだけである。ミーアが出場すると思い込んでいるのだから、おのずとそこで優劣は明らかになるのだから。
それを、わざわざ『決闘』と言ってきているあたりが、実に臭い。
そんなミーアの予想は当たる。

「そして、もしも私が勝った暁には、ミーア姫殿下の兵を一人、私にいただきたい」
「ああ、レッドムーンの良兵集め、ですわね……」
ミーアは納得のつぶやきをこぼした。
軍政を司る黒月省に強いつながりがあるレッドムーン公爵家は、自家の私兵団の強化に余念がない。国の内外から、見込みのありそうな兵士を貪欲にスカウトしているのだ。
そのありようは「レッドムーンの良兵集め」と呼ばれ、広く知られていた。
――けれど、あいにくとそんな勝負、わたくしの側には受ける理由が……。
「いいじゃねぇか。嬢ちゃん。こんな風に堂々と勝負を挑まれたら、人の上に立つ者として受けないわけにはいかないってもんだぜ」
「……はぇ？」
ふと見れば、馬龍が実によい笑顔で、ミーアの方を見ていた。
その顔からは、ミーアが断るなどと微塵も思っていないことが窺えた。
「え……？　あ、でも……」
「心配すんなって。馬術部でも全力で応援するし。アベルのやつもきっと応援してくれると思うぜ」
豪快な笑みを浮かべる馬龍を見て、ミーア、早くも察する。
――こっ、こ、これは……。
ミーアは、唖然としつつ、自らを飲み込まんとする流れに気がついた。
――ぐっ！　いつもの断れない流れができつつありますわ。
過去の反省から、ミーアは自分にとって重要そうな人物の観察と分析を怠らないようにしている。
そして、林馬龍という先輩は……、馬好きに対して無条件に甘いところがある。チョロイ男なのである！
そして、先ほど、馬の鼻面を優しくなでるルヴィに、温かな目を

向けていた。
実にチョロイ男である！
また、裏表がなく豪快な性格をしている。すなわち、正々堂々、正面から申し込まれた決闘とか、大好きなのだ。
それゆえ、その決闘の申し出をここで断れば、確実に馬龍と気まずい雰囲気になってしまう。
馬術の研鑽において、彼の助言はかなり有効だ。
そして、これからの危機を乗り切るために必要不可欠なものといえる。であれば、できるだけ仲良くしておきたいところではある。
加えて、彼はアベルの兄貴分のような存在でもあるのだ。今後、一点の曇りもなく、アベルとイチャイチャするためには、馬龍の祝福をもらわなければならないのだ！
ミーアはしばし黙考、メリットとデメリットの検討に移る。
――とりあえず、勝負を受けなければ、わたくしが兵を失うこともない代わりに、馬龍先輩との仲が若干悪くなる。できればそれは避けたいところ。では、勝負を受けた場合はどうかしら？
ミーアが勝った場合は当然、兵を失うこともない。さらに、なにかしらの条件だって当然、付けておけるだろう。例えば、レッドムーン家の私兵団から、兵を借りて何かをする、といったこともできるかもしれない。
では、負けた場合はどうか……？
――ルヴィさんが欲しい兵といえば、十中八九ディオンさんでしょうね……。
ミーアの脳裏に、鋼鉄の槍をあっさりと斬り飛ばす、凶悪な笑顔の騎士が浮かんだ。
帝国最強を豪語してはばからないあの実力、確かにレッドムーン家が欲しがったとしても不思議ではない。
「うーん、ディオンさんなら……まぁ、別に……」
思わず、つぶやきが漏れる。
なにしろ、自らの首を斬り落とした男である。

もちろん、彼がレッドムーン家のスカウトを受け入れるかはわからないが、そうなったとしても、さほどの痛手ではあるまい……などと考えるミーアであったのだが……。
なぜだろう、少しだけ心がざわついた。
かの騎士を失うことが……なにやら、大きな損失のように思えて仕方ないのだ。
――よくよく考えてみれば、あの方にはいろいろと命を救っていただきましたし……、一度の首狩りが、一度の救命によって贖われるものだとしたら、彼の功績は十分のはずで……。よくよく考えると、結構な忠臣という気も？　でも、あの方、近くで剣を持ってると、なんか油断すると首を落とされそうな嫌な緊張感があるんですのよね……。
悶々とするミーアに、ルヴィは小さく首を傾げた。
「うん？　ディオン？　誰それ……」
腕組みし、しばし思案に暮れていたルヴィだったが、すぐにポンと手を打った。
「ああ、そういえばいたな。腕のいい騎士だって聞きましたが……。帝国最強とか、名高い騎士でしたっけ……。でも……」
ルヴィはすぅっと瞳を細めて、ミーアを見つめる。
「生憎と私が欲しいのは彼ではありませんよ」
まるで歴戦の騎士のごとく、鋭い殺気を放つ眼光をミーアに向けて……ルヴィは言った！
「だって、彼……」
胸を張って言い放った！
「ちょっと、小さいでしょう？　背が……」
「……えーっと」
ミーアは思わず、ディオンの姿を脳裏に浮かべる。
「別に小さく、はないんじゃないかしら？　平均的な殿方よりはむしろ大きい方かと思いますけど……」
「わかってないですね、姫殿下。騎士っていうのは、もっと大きく

て、力強くないとダメなんですよ！　体の大きさは魂の大きさ、人としての器の大きさでしょう！　強いだけじゃダメ。大きくないと！」

……言い放ったっ！

ルヴィ・エトワ・レッドムーン。

帝国軍に多大なる影響を誇る、レッドムーン公爵家の麗しきご令嬢は……。

「大きくないと！」

無類の大男好き（マッスルマニア）として、知られていた。

第六話　赤月の麗しの令嬢からの挑戦状（後書き）

レッドムーン家の令嬢が狙ってる騎士はディオンさんだと言ったな……。あれは嘘だ……。

ということで、四大公爵家の子どもたちは、それぞれミーア属性を持たされてしまいました……。

1．サフィアス・エトワ・ブルームーン
↓小心者（チキンハート）

2．エメラルダ・エトワ・グリーンムーン
↓釣らない野伏せ（好きな相手が声をかけてくれるまでひたすら待ちぶせ）
※釣り野伏せ戦術参照。

3．ルヴィ・エトワ・レッドムーン
↓大男好き（マッスルマニア）

4．シュトリナ・エトワ・イエロームーン
↓キノコの同好の士。野草や薬草なども詳しい。

第七話　ミーア姫、決闘を快く受け入れる！（前書き）

本日、夜、活動報告更新します。

第七話　ミーア姫、決闘を快く受け入れる！

「はて……？　大きい方というと……」
ああ、そう言えばルヴィがそんなフェチだと聞いた気がするなぁ、などと思いつつ、ミーアは自らの皇女専属近衛部隊の人員を思い浮かべる。
その中で、該当するのは……、
「もしや……バノスさんのこと、ですの？」
問いかけに、ルヴィはうっとりとした顔で頷いた。
「そう。私は彼が欲しい。ああ、彼に我がレッドムーンの私兵団を率いてもらえたら……」
――でぃ、ディオンさんを止められる唯一の良心ではございませんのっ！？　あの方を失ったら、わたくし、心の安定を維持できませんわ。引き抜きとか、ありえませんわっ！
仮に、この勝負に乗るとして……、なにを賭ければバノスと釣り合うだろうか……。
しばし検討するが、ミーアはその答えを見いだせなかった。
ミーアの中で、天秤が一気に傾きかける。勝負を引き受けないという方向に。
――ぐぅっ……しっ、しかし、馬龍先輩との関係が……。なっ、なんとか、しなければ……、どうすれば……。
窮地に陥ったミーアの脳が、急速に活性化する。
どうすればこの危機を乗り切ることができるのか……。
思考の時間はせいぜい数瞬。されど、ミーアの叡智はここで、一つの真理に到達する！
それは、そう……、決闘を成立させるのに、必要にして不可欠な法。
すなわち……なにかを賭けた勝負事というのは〝賭ける物が等価

”でなければ成立しないという究極の真理。誰が安い金銭のために命をチップとして賭けのテーブルに乗せるだろう？
命を懸けた勝負の場合には、勝利によって得られるものは、命と同等、あるいはそれ以上の価値を持つものである必要があるのだ。
ミーアは朗らかに笑った。
その真理にこそ到達してしまえば、あとは逃げ出すのは容易。
――わたくしが断るのではなく……、相手に断らせればいいのですわ！　ふっふっふ、存分に吹っ掛けてやりますわ！
即座に作戦を組み立て、満を持してミーアは口を開く。
「勝負を引き受けること、それ自体は構いませんけれど……、もしも、わたくしが勝った場合には……どういたしますの？」
「無論、姫殿下が望まれる者を差し出しますとも」
その答えにミーアは、ニンマリしそうになるのを懸命にこらえて、しかつめらしい顔を作ると、
「では、そうですわね……。わたくしは、あなたの……剣を所望いたしますわ」
「え……？」
ルヴィは、きょとん、と瞳を瞬かせた。
「それは……あの、どういう意味でしょうか？」
「言葉の通りですわ。レッドムーン家は武門の家。その家に生まれし者は男も女も剣術を叩き込まれる。剣をなによりも大切とし、誇りとする家柄なのでしょう？」
「つまり……、私が負ければ、剣を捨てよ、と」
そう、ミーアが差し出せと言っているものは、まさにそれだった。
ルヴィの最も大切なもの、誇りである剣。それをベットしろと、ミーアは言っているのだ。
――ふふん、レッドムーンの良兵集めとは言っても、しょせんはコレクション感覚のはず。きっと、これも、軽い戯れのつもりで持ち掛けてきた勝負に違いありませんわ。
そもそも……、とミーアは冷静に分析する。

公爵家の令嬢が皇帝の娘たるミーアに堂々と表立って決闘を申し込んでくることなど、あり得るだろうか？　否、あり得ない。

そう、ティアムーン皇帝の権勢は未だに健在なのだ。

自分にルヴィが「本気の決闘」を申し込んでくることはあり得ないはずだ。

であるならば、彼女の言っている決闘を、どのように解釈すればよいだろうか……？

――本気の決闘でないのならば、それは、あくまでも軽い戯れ……お遊びということになりますわ。

そうなのだ、それがあり得るとするならば、それは決闘と銘打ったお遊びに過ぎないはずなのだ。

考えてみれば、ルヴィが差し出せと言っている人物……、バノスは、なるほど、ミーアにとっては重要な人物である。けれど、客観的に見れば、彼はあくまでも庶民。一兵士に過ぎないのだ。

一庶民の処遇をめぐっての勝負など、四大公爵家の者にとってはお遊びに過ぎない。

しかも、なにも命を差し出せと言っているのではない。帝国軍から公爵の私兵団への移動とはいえ、言ってしまえば、ただの帝国内の配置換えに過ぎないのだ。

――大方、わたくしが馬術大会に出ると知って、暇つぶしに遊んでみよう、ぐらいのつもりなのでしょうけど……。

ゆえに……そのようなお遊びに「命ほどに重い剣」、すなわち「自らの誇り」を差し出せと言われては、彼女も取り下げざるを得ないはずだ。

さらにさらに！

「解釈はご自由に。ですが、わたくしの兵は例外なくわたくしの大切な忠臣なのです。本来、それを賭け事の賞品のように扱うこと自体、不快極まるというもの。それでも、あなたがそれを求めるというのであれば、相応の覚悟をしていただきたいですわ」

単なるお遊びに、なんてものを求めやがる！　というクレームを

受けないよう、予防線もしっかり張っておく。
バノスは自分にとって大切なものなのだ！　と主張しておくことで、相手にも、相応に重いものを求めることができるようにしておくのだ。
これはただのお遊びでは済まないが、それでもよろしいか？　と、ミーアは脅しをかけたのだ。
――ふふん？　どうかしら？　たかが一兵士を自分のところに移籍させるためだけに、あなたの大切なものを懸けられて？　やれるものなら、やってみるとよろしいですわ！
すべてをやり終えた爽快感に身を浸しながら、ミーアは満足げに息を吐き……、
「……わかりました」
「……はぁ？」
ルヴィは、真っ直ぐにミーアを見つめてから、言った。
「私の誇り、魂でさえある剣を賭ける……、確かに、それでこそ、私の覚悟に相応しい」
涼やかな笑みさえ浮かべ、ルヴィは言う。
「それでこそ、決闘に相応しい。ミーア姫殿下、あなたのお覚悟はしかと受け取りました」
――え？　え？　断らない？　な、なんですの？　この方、どんだけ大男好きなんですのっ！？
ミーアは、見誤っていた。
ルヴィの中にあるもの……。それが、単なる収集欲であると……。
レムノ国王のような、趣味の延長に過ぎないのだと……。
その気持ちが、もっと純粋で……身を裂くような思いであることなど……、その覚悟が、身を滅ぼしかねないほどに強い炎であることなど……。
想像もしなかったのだ。
「正々堂々、勝負です。ミーア姫殿下」
そうして、大きく頭を下げると、ルヴィ・エトワ・レッドムーン

は颯爽とその場を後にした。
「……はぇ？」
残されたミーアは、ただ茫然と、その背中を見送ることしかできなかった。

――なっ、なぜ、このようなことに……？
しばしの忘我の時を経て後、ミーアは焦り始めていた。
――よ、よくよく考えたら……、イエロームーン公爵家も怪しいですけれど、レッドムーン公爵も信用できるわけではございませんし……。
なにも、混沌の蛇と関係している四大公爵家が一つだけとも限らない。ベルのいた未来世界では、四大公爵家は二対二で争っていたと言う。
――レッドムーンも混沌の蛇と関係があって、わたくしの戦力を削ぎに来たという可能性は大いに考えられますわ。ここでバノスさんを失いでもしたら、戦力ダウンはもちろん、ディオンさんを抑えるものがいなくなってしまう。
ミーアは、うぐぅっと唸った。
お腹を押さえて、もう一度、うぐぐ、っと唸る。
「お、お腹が痛くなってきましたわ……。く、どうして、こんなことに……」
「はっはっは、いやぁ、嬢ちゃんもなかなか言うなぁ。格好良かったぜ」
一連のやり取りを横で見守っていた馬龍が、豪快な笑い声を上げた。
「まぁ、馬術部でも全面的に応援してやるから、頑張りな」
――うう、笑い事ではございませんのに。馬龍先輩、他人事だと思ってますわね……。
恨めしげな目で見つめるミーアをしり目に、馬龍は腕組みした。
「しかし、速乗り勝負だとすると、嬢ちゃん、『月兎馬（つきとば）』を乗りこ

なさないとなんねぇな」
「……月兎馬……？　はて、それはなんですの？」
「その名のごとく、月の兎（うさぎ）のごとく、速き馬のことだ。歴史上に出てくる有名な騎士なんかは、大抵この馬に乗ってる。早馬って呼ばれるのも大体が、月兎馬のことなんだ。馬術部の飼育小屋にいるのは二頭なんだが……。一頭は今、出産を控えてて動けねぇんだ。もう一頭は……」
と、そこで、馬龍は悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「ああ、縁があるな。嬢ちゃん」
「はて？　なんのことですの？」
「今、動ける月兎馬は、嬢ちゃんにくしゃみを吹っ掛けたあの馬だよ」
言われて思い出すのは、新入生ダンスパーティーの日の出来事で……。
「ああ、あの馬ですのね……」
ミーアは若干ひきつった顔で、飼育小屋に目を向けた。

第七話　ミーア姫、決闘を快く受け入れる！（後書き）

設定

月兎馬（つきとば）

……赤兎馬（せきとば）ではない。

古くからこの大陸に存在している、強く速い馬。希少種であり、非常に高価。百人隊長クラスだと手に入らないので、ディオンは一般的な馬に乗っている。二匹も飼っているとは、さすがはセントノエル学園。

気性が荒い馬が多く、乗りこなすのは一苦労。だから、貴族の中でもこの馬を持っている者は結構少ない。

交配により、安価かつ乗りやすい馬が増えてはきているが、速さ、力強さの面から言えば、この馬に勝てる種類はない。頭がよく、しばしば人を馬鹿にするところも……。

ミーアがクシャミをぶっかけられたのは……、もしかすると、馬にからかわれた……のかもしれない。

第八話　変幻自在のミーアの手のひら

馬龍の連れてきた馬を見て、ミーアは、ふーむと唸り声を上げた。
「この子が月兎馬……。ちなみに、名前はございますの？」
「ああ、こいつは荒嵐（こうらん）って名前だな」
「荒嵐……。なんだか、すごく勇ましい名前ですわ」
ミーアが見つめると、荒嵐は、ぶっふと鼻を鳴らし、口をにいいっと広げた。
「……あら？　この馬、もしかして、今、わたくしに笑いかけましたの？」
「ははは、さすがに馬が笑ったところは見たことねぇな」
馬龍は苦笑いして肩をすくめる。
「そ、そうですわよね？　ですけど、なぜでしょう……なんだか、ものすごーく、馬鹿にするみたいな笑いに見えましたけど……。やっぱり気のせいかしら……」
ぶつぶつ言いつつ、ミーアは馬を観察した。
その馬は見た目でいえば、普通の馬と大差なかった。
大きさも普通だし、角が生えてたり、翼がついてたりということもない。どこにでもいそうな馬だ……。
「ふーむ……見ただけではわかりませんわね。やはり、乗ってみなければ……はて？」
と、そこでミーアは思い出す。
「そう言えば、わたくし、この馬に乗ったことございませんわね……」
首を傾げるミーアに、馬龍は悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「そりゃそうだ。なんせこいつらは、ともかく速い。よっぽど慣れた生徒じゃないとすぐに落とされてケガしちまうからな」
「ほう！」

ミーアは、再び月兎馬、荒嵐に目をやった。
――なるほど……、つまり馬龍先輩は、わたくしであればこの馬に乗っても問題ないと、そう判断されたということですわね……？
ミーアの顔が一瞬、ドヤ顔になりかけるが……。
「まぁ、正直、嬢ちゃんは頑丈そうだし、落ちてもなんだかんだで、なんとかなるだろ」
「……ん？　あら？　変ですわね。褒められたはずなのに、あまり嬉しくないような……」
「ははは。まぁ、冗談は置いておくとして、どうだ？　ちょっと乗ってみるかい？」
「ああ、そうですわね。慣れておいた方がいいでしょうし……」
馬龍がああは言っていたものの、実際のところミーアには自信があった。
なにしろ、ここ最近のミーアはかつてないぐらいに頑張っていたのだ。
――ふふん、月兎馬、なにするものぞ、ですわ。このわたくしが、見事に乗りこなして差し上げますわ。
鼻息荒く、ミーアは荒嵐に飛び乗った。

……はずだったのだが……。
――おかしいですわ。なぜ、わたくしが、こんな扱いに……？
荒嵐の背に、ちょこん、とおさまったミーア。その後ろには、
「しっかりつかまってるんだぞ、嬢ちゃん。手を緩めたら危ないからな」
ミーアを包み込むようにして、馬龍の大きな体があった。
――こ、これではまるで、わたくしが子ども扱いではございませんの？
などという抗議の意味を込めて、ミーアは言った。
「あの、馬龍先輩？　まぁ、二人乗りをするのはよろしいのですけど、前にアベルと一緒に乗った時には、わたくしが後ろで、こう…

…、前の方につかまる感じでしたけど……」
「ああ、あれはうちの一族の乗り方なんだ。普通は乗り慣れてない方が前に乗る方が安定するんだよ」
「あら？　それは知りませんでしたわ」
てっきりああして乗るのが普通だと思ってましたけど……、などと首を傾げるミーアに、馬龍は微笑んで見せた。
「うちの一族じゃ、老人から女子供に至るまで、みんな馬に乗れるのが普通だからな」
「まぁ、それでしたら、きちんとアベルに教えてくださればよろしかったのに。人が悪いですわ」
ミーアは、唇を尖らせた。
――わたくしが落ちるなんておかしいと思いましたわ！　やっぱり乗り方がおかしかったんですのね！
ミーアがよそ見をしたのが主な落下原因であるのだが……。
――まったく、馬龍先輩、肝心なところで気が利かないですわね。そう言えば先ほどもルヴィさんのお話にホイホイ乗せられてしまいましたし……。
むぅうっとミーアは唇を尖らせる。
ミーアの中の馬龍の好感度が1弱下がった。
「ははは、すまねぇな。しかしまぁ、嬢ちゃんが乗るにはやっぱりあの位置じゃねぇかと思ったのさ。なにしろ、嬢ちゃんは、アベルの大切な人なんだろう？」
馬龍はそう言って、意味深な笑みを浮かべる。
「ん？　どういうことですの？」
「もともと、あの乗り方は夫婦（めおと）乗りって言ってな、戦士が大切な恋人を背中にかばいながら戦う時の乗り方なんだ。俺たちの祖先の大英雄が、愛する妻を背にかばいつつ、数百人の敵の中を駆け抜けたって話に由来しててな。だから、あの乗り方で後ろに乗るのは、その男にとって大切な人ってことになるんだが……」
馬龍は、茶目っけたっぷりに片目を閉じた。

「アベルと嬢ちゃんにぴったりの乗り方だろ？」
――さすがは馬龍先輩！　実に気が利きますわっ！　よくよく考えれば、あの乗り方のおかげで、アベルといい雰囲気になれましたし！　いいことづくめでしたわっ！　それに、ルヴィさんのことだって、こうして月兎馬と出会うきっかけになりましたし。本当に、さすが馬龍先輩ですわ！
ミーアの中の馬龍の好感度が１２０上がった！
表から裏、裏から表、ミーアの手のひらは変幻自在に翻る。
「しかし、まさか落ちるとは思わなかったから、あの時は随分と肝を冷やしたっけな。ああ、そう言えばきちんと謝ってなかったっけな。あの時はすまなかったな」
「うふふ、そんなの全然気にしておりませんわ。馬龍先輩らしくもない。謝る必要なんかぜんっぜんございませんわ！」
ミーアはよく翻る手のひらをヒラヒラ振りながら上機嫌に笑った。
先ほど感じた不満は、すでに記憶の彼方である。記憶の彼方がすぐ近くにあるのが、ミーアの数少ない美点である。
「そうか。はは、さすがは嬢ちゃんだ。相変わらず器がでっかいな」
感心したように笑う馬龍だったが、ミーアはすでに聞いちゃいなかった。
――それにしても、実になんともいい名前ですわね。夫婦乗り、アベルとわたくしが、夫婦。うふふ、なんだか、あの馬に乗った時から運命で結ばれてたって感じで……、こう……いいですわね！
あの時、かばってくれたアベル、すごく格好良かったっけ……、などと甘々妄想モードに入っていたミーア。
次に馬龍が口にした不穏な言葉をも、華麗にスルーした。
「まぁ、今回は嬢ちゃんを後ろにしたら飛ばされちまいそうだし、ちょっとシャレにはならないからな。そんなことしたら、アベルに怒られちまうよ」
そんな不穏な言葉を……。
「さて、それじゃあ行くか。しっかり掴まっててくれよ、嬢ちゃん。

振り落とされるなよ？」
「へ？　あ、ああ、そんなの余裕ですわ。見事、乗りこなしてみせますわ」
ミーアは胸を張って言い放った。
「むしろ、馬龍先輩がいなくっても軽ーく乗りこなしてみせますわ！　ここ数日のわたくしの努力、披露して差し上げますわ」
そう豪語していたミーアは……、数瞬の後、風になった！

第九話　ミーア姫、風になる

「ひぃいいいいいやあああああああっ！」
広い馬場に、ミーアの大絶叫が響き渡る。
小さな体を押し倒そうとするかのように、前方から吹き付けてくる風！　強風！　暴風！
それはまるで、分厚い壁のごとく、ミーアの全身にぶち当たってきた。
幸いなことに、ミーアの後ろには、馬龍の分厚い体があるから、後ろに吹き飛ばされないのは良いのだが……、その分、豪風と胸板という、二枚の壁に押しはさまれて、ミーアはぺしゃんこになりそうになっていた。
流れる風に髪が乱れ、恐ろしい勢いで踊っている。
ミーアは吹き飛ばされないように、懸命に手綱を握りしめ、ギュッと、前のめりに体を固くする。
涙で滲んだ視界の隅で、周囲の景色が糸を引きながら後方へと飛び去って行くのが見える。
馬場と外とを隔てる柵が、青々と茂る木が、草が、周りで見ている人が、すさまじい勢いで後方へと飛び去って行く。
ふいに、前方で舞い上がる落ち葉。それが、ものすごい勢いで、ミーアの髪をかすめて消えた。通り過ぎる瞬間、びしゅんっ！　と鋭い音が耳元で鳴った。
その音に似たものをミーアは知っていた。
以前、ルールー族に矢を射られた時、そっくりなものを聞いた記憶がある！
「ふひゃあああああっ、ひやあああああああっ！」
絶叫しつつ、ミーアは少し前の自身の発言を悔いていた。
――ああ、なぜ、わたくしは、あんなことを言ってしまったのか

しら？　なぜ、あんなことを……？

馬場に出てきたミーアは、早速、馬龍の操る月兎馬に試乗した。

一周、二周と回る、そのスピードは、先日、ミーアが馬を暴走させた時よりも速かった。

その暴力的なまでの速度感に、早くも若干の涙目になるミーア。

そんな様子を察した馬龍は言ってくれたのだ。

「今日は、軽く流すだけにしておくか？　徐々に慣れていけばいいわけだし……」

それに対して……ミーアは引きつった笑みを浮かべる……。

――軽く？　いっ、今ので軽く流しただけなんですの？

などと、内心ではビビりまくるミーア。

その時に、素直に言っておけばよかったのだ。今日は、もうこれで終わりにしましょう、と。今日は軽く流すだけでやめておきましょう、と……。

けれど、ミーア、ついつい言ってしまった。

「ふふん、余裕ですわ。軽く流しただけとおっしゃいますが、確かにこの程度、軽いもんですわね」

見栄があったのだ……。馬龍なしでも乗りこなして見せるとか、そんな大口を叩いてしまった以上、弱気なところは見せられない。

さらに、

「そっ、想像してたより、ぜんぜん大したこと、ございませんわね。月兎馬なんて言っても、チョロイものですわ！」

そんなことまで口にしてしまった。

『もう、月兎馬の実力も見極めましたし、今日はこのぐらいで勘弁してやりますわ』

などと言って、さっさか逃げ出そうとしていたミーアは、そこでふと気が付いた。

目の前、馬の耳が微妙に角度が変えていることに。

まるで、自分たちの会話を聞こうとするかのように、こちらを向

いていることに……。
直後、荒嵐がぶひひぃいいいんっと高くいなないた。
「あっ、やべ……」
後ろから、馬龍の不穏なつぶやき。直後に、
「嬢ちゃん、しっかり掴まってな。あと、口を開くな。舌を噛むぞ！」
「……はぇ？」
鋭い警告の声。同時に再びの太く雄々しいいなきの後、荒嵐は走り出す。
ごう、っと、風の出す轟音が、耳に飛び込んできて……。
そして、ミーアは風になった。

――あ、ああ、ついつい調子に乗ってしまう。わたくしの悪い癖ですわ……。
荒嵐がコーナーを曲がる。と同時に、体が吹き飛ばされそうになるのを、ミーアは必死にこらえる。根性でしがみつき、なんとか目を見開く。
瞬間、視界に飛び込んできたもの、それは、こちらをチラッと振り返る荒嵐の顔だった。
その口元が、にぃっと笑ったように見えて……。
――くっ、こっ、こいつ……わたくしのこと、ナメてますわね！？　ナメくさっておりますわねっ！？
ミーアの闘志に火が付いた。
――こっ、この程度で音を上げるなどと思ったら大間違いですわ。こっ、こんなの、ギロチンに比べれば……、それに、ディオンさんに殺気を向けられることを思えば、よ、よゆ、よゆー！　……あ、やっぱり嘘。ごめんなさい、ごめんなさい、ひぃいいい！　許してくださいましー！
そんな感じで、月兎馬を堪能したミーアは、ようやく、馬から降りることができた。

地面に足をつけた瞬間、体が、フラーっと揺れる。
「っと、嬢ちゃん、大丈夫か？」
慌てて、馬龍が駆け寄ろうとするが、その前に……。
「おっと、ミーア。足元、気をつけたまえ」
「君にしては不用心だな」
「……はぇ？」
両腕を支えられる。ぼやーっと顔を上げると、そこには、二人の王子がミーアの顔を覗き込んでいるのが見えた。
「……あ、あら？　アベルとシオン……。こんなところでなにを？」
「馬術の鍛練だが……。来たら、ミーアが速乗りをしていたから、見学させてもらってたんだ」
涼しい顔で言うシオン。その言葉を継いで、アベルが言った。
「ついにミーアも月兎馬デビューか。乗り心地はどうだったかね？　足元がおぼつかないようだけど、大丈夫かい？」
優しげな笑みを浮かべるアベルに、ミーアは思わず見とれそうになって……。
「え、ええ、問題ありませんわ」
精一杯の虚勢を張って、ミーアは言った。
「ふ、ふふん、こ、こんなの、わたくしにかかれば、よ、よゆう……ですわ」
支えてくれた二人にお礼を言ってから、ミーアは優雅に荒嵐の方に歩み寄る。
優しくその鼻先を撫でつつ、小さな声でつぶやく。
「……先ほど、わたくしのこと、笑ってましたわね？　ずいぶんとナメた真似をしてくれたものですわ。わたくしが、誰だか、わかって……んっ？」
と、不意に荒嵐が、大きく息を吸い込んだ、かと思った次の瞬間……、ミーアの方を向いて……。
ぶわぁあああっくしょんっ！　と、ド派手なくしゃみをした。
「うひゃあああっ！」

風と涎と鼻水の嵐に巻き込まれたミーアは、こてん、っとその場に尻もちをついた。
「あ……あぁ……」
呆然と荒嵐の方を見て、それから自らの身体を見下ろす。
ベタベタと頬に張り付く髪の感触、ぐっちょり濡れたシャツがなんとも気持ち悪かった。
「あー、嬢ちゃん。荒嵐は人間の言葉をある程度理解できるから、あんまりナメられないように気をつけな」
馬龍の注意の言葉と同時に、荒嵐は、にぃいっと口角を上げてミーアを見下ろした。
――こっ、こいつ、わたくしのこと、完全にナメてますわっ！

第十話　ミーア姫、復讐鬼と化す！

「……ああ、酷い目に、遭いましたわ……」
ぐじゅぐじゅ、と湿った足音をさせながら、ミーアは共同浴場に向かった。
「大丈夫ですよ、ミーアさま。すぐに洗い落とせますから」
ミーアの傍らで、そうアンヌが慰めてくれる。
「すぐに、いつもの綺麗なミーアさまにしますから！」
腕まくりをするアンヌの瞳には、闘志の炎が燃え上がっていた。
幸いなことに、セントノエルの共同浴場は、温泉を引いてきている関係上、いつでもお湯が溜まっている。すぐにでも入ることができるのだ。
「うう、ぐちょぐちょですわ……」
ねっちょり濡れた服を脱いでも、顔や髪がネトネトしているので、気分はまったく良くならない。
どよーんっと重たい気持ちのまま、浴場に足を踏み入れたミーアであったが……。
「あら？」
鼻をくすぐる香りに、小さく首を傾げた。
湯気とともに漂ってきたのは、香草のなんとも芳（かぐわ）しい香り。それは、嗅いでいると心地よくて、眠たくなってしまいそうな、気分を落ち着かせる香りだった。
「なんだか、いい匂いがしますわね」
いつもとは違う空気に、ミーアがあたりを見回す、と……。、
「こんにちは、ミーア姫殿下」
「あれ？　ミーアお姉さま？　どうしてここに？」
浴槽の方から声が聞こえる。視線を巡らせたミーアは、そこに知人の姿を見出した。

「それはこちらのセリフですわ、ベル。それにシュトリナさんまで、こんなところでどうしましたの？」
孫娘ミーアベルと、その友人シュトリナだった。
――ふーむ、こんな時間に二人でお風呂に入ってるなんて、珍しいですわね……。
首を傾げつつもミーアは、洗い場に据えられた木の椅子に腰を下ろす。と、すぐさまアンヌが歩み寄ってきて、ミーアの髪を洗い始めた。
シャワシャワと、頭の上で鳴る心地よい音、ミーアは気持ちよさそうに瞳を閉じた。
馬のネバネバ粘液が洗い流され、サラサラな髪が戻ってくるのを実感しつつ、ミーアはシュトリナに声をかけた。
「珍しいですわね。ティアムーンの貴族はあまり、共同浴場は好まないと思っておりましたけれど……」
そう言いつつ、ミーアはシュトリナの方を横目で観察する。
――わたくしのこと、上手いこと丸め込んだと思ってるのかもしれませんけど、そうはいきませんわ！
ミーアは鼻息を荒くする。
なにしろ、相手は敵の可能性が極めて濃厚なイエロームーン公爵家の令嬢である。油断することなど、あり得ぬこと。怪しい素振りを見せれば、すぐに糾弾してやる、とミーアは視線を鋭くする。
浴槽のふちに腰かけたシュトリナ、その幼くも華奢な肢体は、先日見た時と同様、造りの良いお人形さんのようだった。
肉付きの薄いか細い手脚、その肌は病的なまでに白い。
なるほど、病弱と自分で言っていたのも嘘ではないのかもしれない。
少なくともあまり力が強そうには思えない。
――っていうか、この子……、殴り合いの喧嘩をしても勝てるんじゃないかしら……？
持ち前の観察眼によって、相手の戦闘能力のおおよその部分を察

知したミーアは……、妙な自信を覚えてしまう。
そんなミーアに、シュトリナは可憐な笑みを浮かべた。
「実は……ベルちゃんと相談して……、後でミーア姫殿下もお呼びするつもりだったんです」
「あら、わたくしを……？　ここに、ですの？」
「ええ。ラフィーナさまにお願いして、リーナの知ってる香草をお風呂に入れてもらったんです」
そう言って、シュトリナは、両手でお湯をすくい上げた。
「ほう……」
先ほど入ってきた時の良い香りは、それか……などと思いつつ、身を清めたミーアは、いそいそと浴槽に近づく。と、お湯にぷかぷか浮いている草花の入った袋が見えた。
「これは、なんの草ですの？」
「はい。それは、ムーンビーズと言うハーブですね。体のこりをほぐす効果があるって言われてます。どうぞ、お試しください」
そう言ってシュトリナは、にっこり笑みを浮かべた。
その笑みに誘われるようにして、ミーアは、お湯の中に身を沈める。
思わず……、声が漏れた。
「ああ……、これは……。確かに、体がほぐれていく感じがしますわ。じんわり温かくて、とっても気持ちいいですわ」
湯船に首まで浸かって、ミーアは、両手足をうーんっと伸ばした。つま先から、じわじわと心地よい熱が伝わっていく。
小さく口を開き、ミーアは、おふぅ、っと息を吐いた。
……なんというか、ちょっと……残念な吐息だった。
「ベルちゃんから、最近、ミーア姫殿下が馬術の特訓をしてるって聞いて。少しでも疲れがとれたらいいなって思ったんです」
再びお湯に入り、ミーアのすぐそばまでやってきたシュトリナ。
その優しさにあふれた言葉に、ミーアは、
「まぁ！　そうなんですのね！」

ひどく感動した！　心から湧き上がる感動に、その瞳には涙さえ浮かんでいる。
基本的に、チョロインであり、なおかつフロインであるミーアは、オフロ関係のことに高倍率の好感度ポイントが存在している。
シュトリナの行動は、見事、そのポイントを射抜いた。
この上、なにかお風呂で食べられるスイーツなど持参していたりしたら、親友（マブダチ）認定されていたかもしれない。
「ベルは、とってもいいお友達を持ちましたわね」
ニコニコ、上機嫌な笑みを浮かべるミーア。それに応えるように、ベルも満面の笑みを浮かべる。
「うふふ、ありがとうございます。ミーアお姉さま。ボクも、リーナちゃんのこと、大好きです」
上機嫌に笑いあう、祖母と孫。実に平和な光景だった。
「ああ、本当に素晴らしい湯加減ですわ……」
ミーアは、すべすべになった右腕をお湯の上にあげる。両手でお湯をすくい上げ、顔にぱしゃぱしゃとかける。
この、ちょっと熱めなお湯が、実になんとも気持ちよかった。
ミーアお祖母ちゃんは、ポカポカが後まで残る、ちょっぴり熱めが好みなのだ。
「ところで、ミーア姫殿下、そんなに馬術の鍛練をされているということは、もしかして、秋の馬術大会に出場なさるんですか？」
不意に、シュトリナが言った。
「ああ、やっぱりそう思われてしまうのですわね。本当は、そんなつもりもなかったのですけど、成り行きで出ることになりそうですわね……」
ミーアは、先ほどのやり取りを思い出して、ため息を吐いた。
「それじゃあ、今度、練習の見学に行ってもいいですか？」
「あら、シュトリナさんも馬術に興味がありますの？」
きょとんと首を傾げるミーアだったが、すぐに笑みを浮かべた。
「なら、遠慮なさらずに来たらよろしいですわ。馬も結構可愛らし

いですし……一部を除けばですけど……」
ミーアの脳裏に、にやにやとくしゃみをぶっかけてきた、あの馬のことが思い浮かぶ。
――あいつだけは、許しませんけれど……。ええ、あのクソ生意気な馬だけは絶対に許しませんわっ！
グッと拳を握りしめ、心に誓う復讐鬼ミーア。
――今度、目の前でスイートニンジンケーキを食べて差し上げますわ！　見せつけてやりますわ！
……ちなみにそれは、帝国から料理長が考案し、レシピを送ってくれたお野菜スイーツだった。
食堂で採用予定のメニューだった。

第十一話　その恋に、身を焼かれたとしても……

ルヴィ・エトワ・レッドムーンが初恋をしたのは、彼女が十歳の時のことだった。

ティアムーン帝国四大公爵家の一角、レッドムーン家に生を受けた彼女は、順風満帆な人生を送っていた。

生まれながらにして、運動能力に恵まれた彼女は、剣術も馬術もお手の物だった。

三人いる弟たちを凌駕するその剣の腕前に、父であるレッドムーン公爵もご満悦で、「婿をとらせて、我が家を継がせよう」などと半ば本気で吹聴するぐらいだった。

また、彼女自身も幼心（おさなごころ）に、自らにかかる父の期待に精一杯応えるべく、研鑽を積み重ねていた。

輝かしき英雄の才は、彼女の明るい将来を約束するものだった。

そんな彼女に、一つの転機が訪れる。

それは、彼女が父と共に軍の見学に行った時のことだった。

「強そうな方々がいっぱいですね、父上」

「ははは、そうだな。こう……強そうな大男を見ると、ワクワクするな！」

良兵集めが趣味の父は、血がうずくのか、子どものようにはしゃいでいた。

その後、軍首脳部との会合に向かうという父と別れ、ルヴィは練（れん）馬場（ばじょう）にやってきた。

「退屈だったら、馬にでも乗せてもらいなさい」

そんな父の言葉に従って来たのだ。

すでに幾度も乗馬経験を積み重ねていた彼女は、その日も、ごく普通に馬に乗って時間をつぶすはずだった。

けれど、そこで事故が起こる。
ルヴィの乗っていた馬が、突如として暴走してしまったのだ。
「こっ、こら、止まって！　だ、だめ、だめだってっ！」
なんとか馬を止めようと手綱を思い切り引っ張った瞬間、驚いた馬が前足を大きく振り上げた。
「あっ……」
びゅんっと体が投げ出される。
ぐるん、ぐるん、回る視界。
音を消した世界、奇妙に速度を失った時間……、ゆっくりと迫ってくる地面。
ルヴィはぎゅっと目を閉じて体を固くする。
受け身をとれ、と剣術の師匠には言われていたけれど、咄嗟のことに、体は思うように動かなかった。
彼女にできたのは、ただただ、襲ってくるであろう痛みに、覚悟を決めるだけ……。
けれど、地面に向かっていた体が、急に止まる。
「……ぇ？」
なにが起きたのかわからず、固まったままのルヴィに、
「大丈夫ですかい？　お嬢さま」
声がかけられた。太くて、深みのある男の声。
恐る恐る目を開けたルヴィはそこに、一人の男の姿を見た。
――ふわぁ……、大きな人……。
少女を怖がらせないようにと、不器用な笑みを浮かべた男、それこそがバノスだった。

その日の胸の高鳴りは、ルヴィの内から決して消えることはなかった。
言ってしまえば、それは、ただの一目惚れ……。
幼き日の一瞬のときめき、年端も行かぬ少女の憧れ、恋未満の他愛もない感情であったかもしれない。

けれど、ルヴィの中で、その一瞬は、宝物のように輝き、その光を増し続けた。
――あの人に、会いたい。もう一度、あの人と会って、言葉を交わして……そして。
その想いはいつしか、彼女の生きる目的へと変わっていた。
成長し、軍内部のことをある程度理解できるようになったルヴィは黒月省に通った。
あの日、自分を助けてくれた者が何者なのか……、まだ、生きているのか？
数年の時をかけて調べを進めたルヴィは、ついにその男を見つけ出す。
百人隊副隊長バノス。
それが男の名だった。
見つけ出しさえすれば、自身の手中に収める方法はいくらでもあると、ルヴィは考えた。
最も簡単なものは監督官として、私兵団に来てもらうことだ。
黒月省に圧力をかければ、その程度のことは容易いこと。良兵集めが趣味の父も、腕利きのバノスであれば、文句は言わないだろう。
あとは、お近づきになったバノスに、徐々にアプローチしていけばいい。
身分差があるから、すんなりと結ばれることはないだろうが、いざとなれば家など捨ててしまえるほどに、ルヴィの恋心は激しかった。
ルヴィは大男好きであると同時に、恋の炎に身を焼く情熱の人でもあった。
ともかく、彼を自分の近くに置いておきたい。それが一番の望みだった。
けれど、その計画が実現することはなかった。
ルヴィが動くよりも先に皇女ミーアが、彼と彼の部隊とを近衛に引き抜いてしまったからだ。しかも、皇女専属近衛部隊という、自

らの直轄部隊に編入してしまったのだ。
皇女の権限の強い、半ば私兵団のようなあの部隊には、黒月省であっても、おいそれと口出しできない。
結果、ルヴィは、恋する男をミーアに奪われた形になってしまった。
「人の恋路を邪魔するなんて、ミーア姫殿下もずいぶんと野暮なことをするな……」
ぼやきはしたけれど、彼女が足を止めることはなかった。大切な者を得るための彼女の戦いはすでに、数年前から始まっていたのだ。
この程度のことで諦めることはあり得ない。
ミーアがセントノエル学園にいるうちに、とルヴィはずっと機会をうかがっていたのだ。

そして、時機が来たと見て……動いた。

正直な話、決闘を申し込んだところで、引き受けてもらえるかどうかはわからなかった。
そもそも、皇女に公爵令嬢が決闘を挑むこと自体が非常識極まりないこと、帝国内ではとてもではないが、できないことだった。
だからこそ、ルヴィは、ここ、セントノエル学園で仕掛けた。
中央正教会という権威のもと、聖女ラフィーナが治めるこの学園であれば、多少のことであれば、大目に見てもらえる。年若い者同士のトラブルというのは、日常茶飯事であり、それをいちいち国家間、あるいは貴族の家同士の問題として取り扱うことはできないからだ。
さらに、エメラルダやサフィアスから聞いた、ミーア姫の人となり。最近の皇女殿下はたいそう寛容で、少々の無礼は意に介さない人物に成長されたという。
これならば、決闘を引き受けてもらえるかもしれない。
また、馬術部に決闘を申し込みに来たのも、立会人として林馬龍

を選んだのも計算の内だった。比較的、高身長の馬龍もまた、ルヴィの興味の対象であり、それゆえ、彼の性格もすでに調べてあった。
あの場で挑めば、恐らくは別の決闘内容にはならないだろう、とルヴィは計算していた。
ミーアは馬術大会に向けて猛特訓を繰り返していたらしいし、馬龍の手前、別のもので勝負とは言いづらい。
かくて、ルヴィは、自身にとって圧倒的に有利な決闘条件「馬術大会での勝負」を設定することに成功する。
戦（いくさ）とは、戦い始める前に、趨勢（すうせい）が決まるもの。
剣を交えるのは、あくまでも、結果を確定させるための行為に過ぎず、実際の勝敗はすでにその前の段階で決まっている。
かつて、聞いた戦略論の話が頭を過る。
それゆえ、負けた時のリスクなど、考慮に値しない。否、そうではなく……。
「いや、あの方を、我が手に収めるためだ。少しばかりの無茶ならばしなければね。私の命ぐらいは安いもの……。我が公爵家の存続にだって興味もない」
それに、仮に、勝算がなかったとしても、それはそれで構わない。
一番辛いのは、負けることではない。大切な者を得るために、戦いすらできないことなのだから。
今も、胸を焦がす感情があった。
あの日の出会いによって生じた恋の炎、未だに少女の胸に宿り、決して消えることはない。
「バノスさま、あなたを必ず、我がもとに……」
ルヴィ・エトワ・レッドムーン。
赤き月の公爵令嬢は、燃えるような恋の情熱を持った少女だった。

一方、そんなこととは露知らぬミーアは……。
「うふふ、スイートニンジンケーキ、作っていただきましたわ。予定通り、これを目の前で食べて、見せびらかしてやりますわ！　別

に、復讐なんて器の小さいことではありませんわ。あくまでも馬術の向上のため……、そう、馬にナメられないためですわ！」
ルンルン、鼻歌を歌いつつ、飼育小屋に向かったミーアは……。
「ふふーん、ああ、とーっても美味しいですわ。最高ですわ。うふふ、どう？　うらやましいでしょう？　ぜーんぶ、あなたの目の前で全部食べて差し上げ――ひゃっ！？　や……、ちょっ、まっ、こ、これは、わたくしの、あ、あああ！　だ、ダメ！　わ、わたくしのケーキが……」
無事にニンジンケーキを荒嵐と一緒に食べて、親睦を深めたのだった。
めでたし、めでたし。

第十一話　その恋に、身を焼かれたとしても……（後書き）

情報更新

3．ルヴィ・エトワ・レッドムーン

×大男好き（マッスルマニア）

○恋に生きる情熱の人……大男好きでもある　→ＮＥＷ

第十二話　天馬姫（ペガプリ）ミーア、苦戦する

「行きますわよ、荒嵐」
その日も、ミーアは馬場を訪れた。
ここ数日、ミーアは月兎馬（つきとば）、荒嵐との練習に明け暮れていた。
優しく、その首筋を撫でて、それからミーアは軽く馬の脇腹を蹴った。
実のところ……ミーアは馬術に関しては結構、真面目に取り組んでいた。
なにしろ、ギロチンの運命にとらわれていた時から、馬はミーアの命綱。馬術は決して手を抜くことのできぬ技術であると、ミーアは心得ていたのだ。
そして、最近の集中乗馬訓練もあった。その結果、ミーアはここに来て、ついに一つの真理へと到達する。
「乗馬とは、結局のところ馬と呼吸を合わせることが肝要……。つまりは、ダンスのステップと同じようなものですわ！」
という真理に。
ゆっくりと歩きだす馬。その脇腹を、ミーアは、右、左、と軽く合図を送る。
この際、馬が歩きやすいリズムで合図を出してやるのが大切である。これにより、馬は気持ちよく、スムーズに歩くことができるのだ。
さらに、速度を上げる時も同じだ。馬の呼吸に合わせて体のバランスをとりつつ、足で適切に指示を与えていくのが大切である。
――要は、馬の呼吸に合わせることが大切ですわ。
そして、ミーアは気づいたのだ。
相手の呼吸を読み、動きを合わせること……。なんのことはない、それは、ダンスと同じではないか、と。相手のステップに合わせ、

音楽に合わせ、体を動かすこと。
それはまさに、社交ダンスと同じなのである。
ところで、すでにお忘れかと思うが、ミーアはダンス上手である。達人の域に達していると言っても過言ではない。ゆえに、ミーアは、比較的スムーズに馬術を体得した。
すでに普通に走らせるのは問題ないどころか、その腕前はなかなかのもので、これはもう、「天馬姫（ペガプリ）」を名乗ってしまおうかしら？
などと調子に乗っているぐらいである。
「ふむ、この速さの時には三拍子、もう少し速くなると四拍子の足運びになりますわね。ということは、こちらからの合図のタイミングは……」
などと……、自らのダンス経験と馬術をつなげて、より理解を深めていく。
そう、ついに、ミーアは「ダンス技能」から「乗馬技能Ｃ－」をスキル派生させてしまったのだ！
だから、月兎馬を乗りこなすことだって可能とミーアが思ったとしても、不思議はなかった……のだが……。
「ぐぬっ……」
馬龍の勧めで、ゆっくりとした歩み、常歩（なみあし）で荒嵐を進ませていたミーアだったが、馬上で小さく呻き声を上げた。
――微妙にリズムがズレるんですのよね、こいつ……。こっちが気持ちよく乗っている時に限って……。
そうなのだ……。ミーアが気持ちよーくリズムに乗って合図を送っていると、不意に、荒嵐がリズムを変えてしまうのだ。
それも露骨にではなく、徐々に、じわじわーっと変えてくるので、そのズレた感じが、微妙に気持ち悪いのだ。
これが常歩ならばよいのだが、少し速度を速めた速歩（はやあし）の場合には、もっと大変だ。馬の上下動が大きくなるため、馬上の人間は、座ったり立ったりを繰り返して、その衝撃を緩和する「軽速歩（けいはやあし）」という動作をする必要があるのだが……。

これもなぜか、荒嵐と微妙に呼吸が合わずに、ミーアは何度もお尻をぶつけることになってしまったのだ……。
「うう、お、お尻がジンジンしますわ……。こ、こいつ、絶対わざとやってますわ！」
などという恨み言が聞こえたのかどうなのか……、荒嵐はくるりとミーアの方を振り向いて、ぶひひん、っと口の端を上げて見せた。
「お、おのれ……。こいつ……、昨日、目の前で、ニンジンケーキを食べてやったのを根に持っておりますのね……っていうか、あれ、半分以上、あなたが食べてしまったでしょうに……」
歯ぎしりしつつ、ミーアは荒嵐から降りる。
――ああ、相性最悪ですわ……。わたくし、もっと素直で可愛らしい馬の方が好みですのに……。
ちなみに、馬術大会に参加する者たちは、ほとんどが自分の家から馬を連れてきていた。
そして、速乗りに参加する者たちは、そのほとんどが月兎馬を連れてきており、当然のことながらルヴィも月兎馬を用意しているだろう。
対抗するには同じく月兎馬に乗るしかないのだが……。
――ぐぬぬ、どうして、馬術部にはこんなやつしかいないんですの？
かといって、帝国から馬を送ってもらうわけにもいかない。以前、馬術部に入りたての頃に普通の馬を送るようお願いした時にも、
「大きい馬に乗って、落ちたりしたら大変ではないかっ！」
などと、皇帝からの横槍が入り、安全な小型馬（ポニー）しか送ってもらえなかったのだ。
――それにしても、どうしたものかしら……。このままでは勝負にならないですし……。
腕組みしつつ、考え込むミーア。と、その時だった。
「やぁ、ミーア。調子はどうだい？」
ぱから、ぱから、と馬を駆り、アベルが近づいて来るのが見えた。

「あら、アベル。今日も鍛練ですの？」
「もちろん、勝ちたいからね」
ちなみに、アベルが出るのは、馬上剣術の部門である。シオンも同じだ。
「それにしても、さすがはアベル。しっかりと馬を乗りこなしておりますわね」
「そうかい？　ミーアだって頑張っていると思うけど……」
「わたくしは頑張っているのですけど、この馬が……ひゃっ！」
どす、っと後ろから押されて、ミーアは思わず転びそうになる。
「んなっ！？」
振り返ったミーアは、自らを鼻っ面で押す荒嵐の姿を見つける
――こっ、こいつ……、やっぱりわたくしを馬鹿にして……？
きぃっと睨みつけようとするミーアだったが……。
「ああ、もしかすると、ボクがミーアと仲良くしてるから、嫉妬したのかもしれないな」
ふと、アベルが思いついたように言った。
「きっと、ミーアのことが好きなんだよ」
「まぁ、わたくしのことが……？」
ミーアは、小さく首を傾げる。
――ふむ、なるほど……。そう言えば男子は、好きな女の子の気を引くために、意地悪をするもの、とアンヌが言っておりましたっけ……。
ミーアは、荒嵐の方を見て、ニマァっと、こう……実に、うざぁい笑みを浮かべた。
「なぁんだ、そういうことでしたの？　そういうことなら……ん？」
と、ミーアは気づく。荒嵐の鼻がひくひくとしていることに……。
こういう動きをした後には、大体の場合……。
「ま、まさか……、逃げっ！　うひゃあああああっ！」
ぶぇえええくしょんっ！
びちゃびちゃびちゃ……。

暴風のようなくしゃみに巻き込まれたミーアは、こてん、っと尻餅をつくのだった。

第十三話　ミーア姫、応援する！　……馬を

「もっ、もも、もう、我慢なりませんわっ！　我慢なりませんわっ！」

厩（うまや）に荒嵐を引っ張ってきたミーアは、ぎりぎりと歯ぎしりする。

布で拭いたものの、その髪はしっとり……ナニカに濡れていた。

「うう、早くお風呂に入りたい……。でも、その前にっ！　馬龍先輩に、相方の馬を変えてもらいますわっ！」

覚悟を決めて、馬龍がいるという、特別厩舎の方に向かったミーア……、であったのだが……。

「あら？　おりませんわね……」

厩舎の中には誰もいなかった。「誰も」というか「一頭も」というか……。

不思議なことに、小屋はがらんとして、馬の姿がまるで見当たらなかった。

「そう言えば、ここに入るのって、初めてですわね……あっ」

と、そこで、ミーアは気づいた。

小屋にただ一頭だけでたたずむ馬がいることを。

「まぁ……すごく綺麗な馬ですわ……」

ミーアは、思わず、その姿に見とれる。それは、純白の毛並みの美しい馬だった。

まるで、女王のような気高い様子で、馬はまっすぐにミーアを見つめていた。

「あなたは……」

「こいつはな、花陽（かよう）。荒嵐と同じ、月兎馬だよ」

ふと見れば、すぐ後ろに馬龍が立っていた。

掃除の最中だったのか、手に巨大な馬房用のフォークを持っていた。

「月兎馬……、ああ、そういえば、出産を控えて走れない子がいるって言ってましたわね」
言われてみれば、確かに、その馬の体はふっくら丸みを帯びているように見えた。
「とても美しい馬ですわね……」
ミーアは小さく笑みを浮かべる。と、そんなミーアを花陽は、じっと静かに見つめていた。その瞳は、やわらかな温かみを感じさせるものだった。
「まぁ、この子……とても優しい目をしておりますわね……」
「そうだな。こいつは雌だし、月兎馬の中ではかなり穏やかな方だ。こいつが走れるなら、こいつに乗ってもらうところなんだが……」
「あー、それはとても残念ですわ……」
と言いつつも、ミーアは、ふむ、と考える。
――今回の馬術大会では間に合わないかもしれませんけど……、冬までは、どうかしら？
聖夜祭の夜……、ミーアは遠駈けに出かけて、野盗に殺されるのだ。
その際、もしも、足の速い月兎馬に乗ることができていれば、命が助かるかもしれない……。この花陽であれば、こちらの意を汲んで走ってくれそうだし……。あのバカ馬と違って……。
ミーアは期待を込めて、馬龍の方を見た。
「ちなみに、なんですけど……、馬龍先輩？　この子、いつ出産で、いつぐらいから走れるようになるのかしら？」
「あー、そうだな。大体、あと十日ぐらいで産まれるかな。そうしたらすぐにも走れるが、人を乗せて全力で走るとなると、一週間もあれば行けると思うぜ」
「ほう……ということは……」
十分に冬の聖夜祭までは、間に合うではないか……。
それからミーアは、改めて花陽の方を見た。ジッとミーアを見つめてくる澄んだ瞳。そこには実に知的な光が灯っていた。

――ああ、荒嵐のアホ面とは大違いですわ！　そう言えば月兎馬は、とても頭のいい馬だと言っておりましたし、きっとあの荒嵐のアホが例外なんですのね……。

感心しつつも、ミーアは思う。

――頭がいいということは、きっと恩義を受けたら、しっかりと覚えておけるはずですわ。あの荒嵐は知りませんけど……、この子は賢そうですし、間違いありませんわ……。ということは……。

ミーアの本能が告げる。

この馬とは仲良くしておくべき。この馬に恩を売っておけ！　と。

ミーアは、一つ大きく頷くと、馬龍の方を見た。

「あの、馬龍先輩、わたくしもこの馬のお世話をお手伝いしたいのですけど、よろしいかしら？」

「うん？　いや、まぁ、構わないが……。手伝いというと？」

「お掃除とか、体を拭いて綺麗にしたり、ですわ」

馬術部とはいっても、ミーアたちは、馬のお世話はしていない。それを担当するのは、学園の職員であり、尊き身分のミーアたちは、ただ乗馬の技術を磨くのみである。

騎馬王国の馬龍やその影響を受けたアベルなどは、馬術とは馬の世話とセットである、と言って、厩舎の掃除などもやっているが、それをするのはあくまでも一部の者のみ。

そんな中、まさか、大帝国の姫がそのようなことをすると言い出すなど、あまりに予想外すぎて、馬龍はぽかーんと口を開けた。

「ああ、もちろん、できる範囲で、ですわよ？　毎日、早朝に起きて、なんていうのは難しいですけど、でも、人手が必要なのではなくって？　その……、大変なのでしょう？　子どもを産むというのは……」

打算とは別の想いも、ミーアの中にはあった。

少し前までは、赤ん坊って大きな鳥かなにかが運んでくるのかしらー？　などと、とぼけたことを言っていたミーアであるが、さすがに最近は正しい知識を身に着けつつある。

なにせ、歴史書の通りに行けば、八人産まなければならないわけで……。
子どもって実際のところ、どうやって産まれるのかしらー、などとクロエに相談したところ、無言で本を渡されたのだ。
「これに書いてありますけど……、その、びっくりしないでくださいね、ミーアさま」
などと、言われて、おっかなびっくり読んだミーアである。
ゆえに、知っている。
子を産むのは、とても……、とても大変なのだということを。
――わたくし、大丈夫かしら……？　八人も……？　うう……。
などと心配になりつつも、ミーアは花陽のお腹を軽く撫でる。
「頑張るんですのよ。立派な子を産みなさい」
微妙に、花陽にシンパシーを覚えるミーアなのであった。

第十四話　朗報！　馬龍、またしてもミーアに感心してしまう

『我ら、騎馬王国の民は馬と共にこの大地を駆ける者。馬は我らをあらゆる束縛から解き放ち、果て無き彼方の地を見せ、されど、いかな場所にいても、我らを大地に結び合わせるもの。馬は我らの魂。ゆえに、決して粗雑に扱ってはならぬのだ』

それは、林馬龍の体に染みついた言葉、族長である祖父の教えだった。

中央正教会の誇る広大なる宗教圏、馬龍の母国である騎馬王国もまた、その中に位置していた。だから彼らが信仰する神もまた、他の国々と同じく、この地を創りし唯一神である聖神だ。

ゆえに、彼らは「馬」そのものを神聖視することはない。けれど、彼らの信仰は、周りの国々と比較して、少しだけ特殊だった。

ティアムーン帝国の少数部族ルールー族が、森の木々を通して神を見るように、騎馬王国の民は、馬を通して神を見るのだ。

馬とは神に貸与された最も偉大な力であり、比類なき財であり、神と自分たちとをつなぐ糸だ。中央正教会の聖典を通して語られる神の恩恵、その最も大きなものを彼らは「馬」という形で認識しているのだ。

それゆえに、他の国とは比べ物にならないほどに、彼らは馬を大切にしていた。

馬龍もまた、そのような教えの中で育てられてきた。

だからこそ、

「馬なんて汚らしい。このように臭い獣が学園内にいるなんて、信じられないわ」

ある貴族の令嬢が吐いたその言葉は、到底、許せるものではなかった。

セントノエル学園に入学したての頃の馬龍は、そのことにいちい

ち憤慨し、周囲との軋轢を深めていた。
しかし、徐々に彼は知っていく。
この学園では、そして、他国の常識ではそうなのだ、と。
騎馬王国では、生まれた頃から馬と共にあり、馬と共に生活し、馬は家族だった。
されど、他国において馬はただの家畜で、場合によっては武器という扱いである。
男ならば、戦場で世話になるのだから、愛着も沸くだろう。商人、あるいは農民であれば、馬は貴重な労働力。同じく大切に扱うだろう。
しかしながら……、貴族のご令嬢にとってみれば、馬はただ、臭いだけの動物だ。
なるほど、仔馬などは可愛らしいかもしれないが、あくまでもそれは、観賞用、愛玩用に過ぎない。無味無臭で綺麗なもの、絵画の中に描かれるような、あるいは、無機質な布でできたぬいぐるみのような、そういうものを、彼女たちは理想としている。
生き物であれば物を食べ、糞をする。
どれだけ綺麗にしていても、多少は臭うもの。それが生きるということだ。
そんな当たり前のことを受け入れられない狭量な者たち……。
いつしか、馬龍は、そんな女子たちと距離を置くようになっていった。
だから……、はじめてミーアが馬術部を訪ねて来た時、馬龍が受けた衝撃は、決して小さいものではなかった。
はじめ、彼は警戒していた。
ミーアが、馬に危害を加えるのではないか、と。
以前、馬の糞を踏んだ貴族の令嬢が、馬を処分しろと怒鳴り込んできたことがあった。
くだらない戯言と馬龍は一笑に付したけれど、今回も同じだと思ったのだ。

けれど、ミーアは……。自分の不注意で糞を踏んだわけではなく、馬にくしゃみを吹っ掛けられて、ドレスをダメにされてしまうという、より酷い目にあったミーアは……、それにもかかわらず、笑ったのだ。

「ああ、そんなの大したことありませんわ」

なんでもないことのように言って、あっさり、それを許したのだ。

それだけでも衝撃的であったのに、さらには馬に乗りたがり、あろうことか馬術部に入ってしまったのだ。

以来、真面目に馬術に取り組むミーアを見て、馬龍はひそかに感心していたのだ。

その感心の度合いは、ここ最近になって、さらに大きなものになっていた。

――大したもんだな……、この嬢ちゃんは……。

何度も、荒嵐にくしゃみを吹っ掛けられても乗ることを諦めない姿勢。いや、それどころか……。

――最近は、荒嵐の呼吸を読もうとしているようにも見えるな……。

言うことを聞かないから、と、嫌ったり、不貞腐れたりするのではなく……、正面から立ち向かい、乗り越えようとする姿勢。

なにより、馬に真摯に向き合うあり方に、馬龍は、まるで国の妹たちに向けるように、温かな気持ちを抱いていたのだ。

けれど、ミーアは、そこに留まることはなかった。

今度は、馬の世話をしたい……である。

――俺の予想を、簡単に上回ってくるな……。この嬢ちゃんは……。

普通のお貴族さまの令嬢であれば、厩は臭い、などと言って近づいてはこない。

まして、彼女は大帝国の皇女殿下である。

けれど、ミーアは言ったのだ。

馬の世話がしたいと。仔を産むのは大変だろうから、と。

慈しむような瞳で、花陽を見ながら、言ったのだ。
もちろん、彼女は素人である。なにかの役に立つとも思えない。
けれど、馬龍は、その言葉自体が嬉しかったのだ。
「ああ、わかった……。それじゃあ、手伝ってもらおうか……。もちろん、できる範囲で構わない」

そんな、じんわりとした感動に胸を熱くする馬龍をしり目に……。
――ふふん、きっちり恩を売っておかないといけませんわね！
そう胸算用するミーアなのであった。

こうして、ミーアは、花陽の世話を手伝うことになるのだった。

第十五話　その魂に刻まれたもの

それは、前の時間軸。
語られることのない、小さな失恋の物語。

「ああ……」
体から、力が抜けるような感触……。
ルヴィ・エトワ・レッドムーンは、その報せに、その場にへたり込んだ。
初恋の人の行方を探っていたルヴィに突き付けられた、残酷な現実……。
静海の森で起きた紛争、辺境の部族、ルールー族との戦いによって、バノスは死んでいた。
彼は、その身に何本もの矢を受け、それでも斃れた部下二人を担いで森から退却し……、自陣の中で息絶えたという。
幼き日に見た彼の、あの優しい顔が、その死に様に重なる。
――ああ、あの人は……、本当に死んでしまったんだ……。
その認識が実感として、重く腹の中に落ちてきた。
「いったい、どうして……、なんで、そんなことに？」
森という相手の領域に、なぜ、踏み込むことになったのか？
そもそも、どうして……、自国の少数民族との紛争が勃発したのか？
「はじめは、ベルマン子爵の要請でした。しかし、子爵はどうやら、もっと上の方からの命を受けていたようなのです」
「もっと上……？　というと？」
百人隊の生き残りを自称する男は、どこか軽薄な口調で言った。
「皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーン殿下が……、その森の木を欲したというのです」

「ミーア姫殿下が……？」
「はい……。たいそう豪勢な飾り箱を作るとか……。その材料に使うようですが……」
男は言った。
「その邪魔をしようとしているルールー族を排除する……。我々の部隊はそのために派兵されたようなのです……」
その言葉は、するりとルヴィの耳に入ってくる。まるで、狡猾な蛇のように……。
「それ……だけの、ために？」
刹那の忘我、次いで生まれた怒りは、ルヴィの全身に絡みつき、その身をがんじがらめにした。

時は流れ……、帝国を大飢饉が襲う。
飢えが広がり、死と怒りとが帝国内に満ちた時、革命の種は芽吹いた。
そんな折、彼女はやってきた。
ミーア・ルーナ・ティアムーン。
帝国の皇女は、部下一人を伴ってやってきたのだ……。レッドムーン公爵家の私兵団の派遣を求めて……。
その求めは実際の武力という意味で重要なものであったけれど、それ以上に、皇帝と貴族とが一枚岩であることをアピールするためにも、重要なものだった。
革命軍の意志を刈り取るために、帝国内の貴族が一丸となっていることを、国内外に知らしめるために……。
――今、このタイミングであれば、止めることはできる……。
それがわかっていながら……、ルヴィは父をそそのかす。
「今は動く時ではないと思います……」
自身の持てる知恵のすべてをもって、戦術論の限りを尽くして、彼女は言った。
今は戦うべきではない……と。

そして、革命軍を勢いづけることを間接的に手伝ったのだ。
やがて……、帝都は火に包まれ、革命は成った。
その火は皇帝一族にとどまることなく、各地の大貴族の領地にも燃え広がった。
精強を誇るレッドムーン公爵家の私兵団だったが、それも帝国軍本隊との連携がなければ、各個撃破の好餌になるのみ。
徹底抗戦の構えで、激戦を繰り広げるも、ついには、革命軍の勢いを削ぐことはできなかった。
兵を引き連れて出陣した父も、弟たちも、ついには帰ってくることなく……。
怒涛の勢いで迫る革命軍、燃え上がる領都をぼんやりと見つめながら、ルヴィはつぶやく。
「あれ……？　私……、なにがしたかったんだったっけ？」
すでに、帝都は革命軍の手に落ちていた。
帝国軍もすでに組織的な戦いができる状態ではなく、各貴族たちも、自領の防衛のためにのみ兵を動かし、共同で戦うという姿勢は見せなかった。
帝国最大の門閥である、レッドムーン公爵家が一切の兵を出さず、自分たちのみの安寧を図っている。ならば、自分たちも領地を守るためだけに兵を使って悪い理由はない。
率先して、軍事に明るいレッドムーン公爵が兵を出さなかったことで、他の貴族たちへの範を示してしまった形である。
ルヴィがそそのかし、ミーアの依頼を断ったことが影響を及ぼしていた。
すべては計算通りに進んでいた。
バノスを死に追いやったミーア皇女は革命軍の手に堕ち、処刑される。
復讐は成った。それは紛れもない勝利のはずだ。けれど……、
「こんなことをしたかったわけじゃない……」
胸に残るのは、ただただ空しい感情だ。

ルヴィは派兵の話を断るよう、父に進言した以外、なにもしていなかった。
恨みを晴らすため、帝室に弓引くこともせず、自ら兵を率いてミーアの首を刈りに行くわけでもなく……、ただ領地に引きこもるのみだった。
彼女は、戦わなかったのだ。
なぜなら、彼女には、すでに戦う理由がなかったから……。
もう彼女は、戦ってまで得たいものも、戦ってまで守りたいものも、持ち合わせてはいないのだから……。
館の正面、門が打ち砕かれる音がする。
もうすぐ、革命軍の者たちが押し寄せてくるだろう。
ルヴィは剣を抜き、首に当てる。
「生まれた日から、戦うことを教わってきた。剣の使い方も、兵の率い方も、馬に乗る術も……。だというのに、命を懸ける場を与えられずに死ぬとは、滑稽だね……」
小さく、疲れた笑みを浮かべてから、ルヴィは剣を引いた。
とめどもなく溢れる自らの血に沈みながら、彼女は無限の空虚と失意の中に、その生涯を終えた。
……望むもののために戦うことができなかった、という想い。
その後悔はルヴィの魂に深く刻まれることになった。

第十六話　ミーア姫、無敵モードになる

ミーアは、基本的に早起きが苦手である。

寝ていられるものならば昼までだって寝ていたいし、ダラダラとベッドの上で過ごしたい方である。自堕落を至上の価値観とする類の人物なのである。

けれど……、ここ最近、その生活スタイルが少しだけ変化している。

最近のミーアは熱心に馬術に取り組み、体力をすっかり使い果たしてから部屋に戻るということを繰り返していた。

余計な体力の一切を使い果たしてしまうことから、その寝つきは極めて良くなっていたのだ。

夜はすこぶるよく眠れているし、その眠りはとても深い。泥のように眠る、という言葉がぴったりの有様である。

だから……、その翌朝は、早くにしゃっきり目を覚ますようになっていたのだ。

早寝早起きで適度な運動。健康優良児もここに極まれり、なのである。

そんなわけで、最近はすっかりアンヌと同じ時刻に起きるようになったミーアなのだが……。

今までであれば、ベッドの上でゴロゴロしたり、アンヌの妹、エリスから送られてきた小説を繰り返し読んだりしていたのだが……、

「ふむ、せっかく早起きしたんだったら行ってみようかしら……。ああ言ってしまった手前、毎日は無理でも時々は……、というか、せめて最初の日ぐらいは、朝のうちに顔を出しておかないと、少し落ち着きませんし……」

と、持ち前の小心者的発想から、いそいそと着替えを済ませて、殊勝にも厩舎に向かったのだった。

「おお、嬢ちゃん……随分と早いな……」
ミーアの姿を見た馬龍は、さすがに驚きを隠せないといった顔で、ミーアの方を見た。
「まさか、こんな時間から来るとは思わなかったぜ……」
「それはこちらのセリフですわ」
ミーアも、少し驚いたような口調で言った。
「こんな時間から馬の世話をしてるなんて、思っていませんでしたわ。まさか、毎日、この時間から？」
「いや、まぁ、もうじき子どもが生まれるからな。気になったってだけだ。それに、できるだけ厩舎の中は綺麗にしてやりたいからな」
「では、お手伝いいたしますわ。なにをすればいいんですの？」
「ああ、そうだな。じゃあ、一緒に掃除を手伝ってもらえるか？」
「ええ、わかりましたわ」
ミーアは馬龍から馬房用の大きなフォークを受け取ると、腕まくりした。
――やるとなれば、手は抜きませんわ。馬龍先輩もアンヌも見てますし、きっちりと花陽に恩を売って差し上げますわ！

そうして一通りの作業を終えたミーアは、厩舎を後にする。
「あー、疲れましたわ……。うう、腕が痛い……」
不意に、汗で湿った首筋に気持ちいい風が吹いてきたのを感じて、うーんっと大きく伸びをして……、直後っ！　飛び上がる！
「ひゃあっ！　な、なんですの？　ああ……」
と、ミーアのそばには、いつの間に来たのか、のっそり荒嵐がそばに立っていた。どうやら、先ほどの風は、荒嵐の鼻息だったようだ。爽やかさが一気に吹き飛んでしまう。
鼻面を、ミーアの後ろ髪に近づける荒嵐。その鼻がいつものようにひくひくするのを見たミーアは……、逃げることなく、むしろ堂々と胸を張る。
「ふふん、どうせこの後、朝風呂に入りますから、どれだけ汚れて

も平気ですわよ！　ほら、やれるもんなら、やってみなさい！」
そうなのだ……。今のミーアは無敵なのである。
厩舎の掃除をして、すっかり汗で汚れてしまったので、これから朝風呂へとしゃれこむつもりのミーアである。ゆえに、その前に、どれだけ汚されても問題ないという発想！
それは、言うなれば、パンに塗るハチミツを使った遊びに似ている。
朝、目の前に出されたパンとハチミツ。
パンを真っ二つに割り、現れた白い部分に、ハチミツを塗って食すのがミーアの流儀である。が、その際、最終的にはハチミツは満遍なく塗ってしまう。それゆえに、その前に、ハチミツでちょっとした落書きで遊べるのだ。
例えば、これはあくまでも例えばであるが、「ミーア　アベル」などと書いてニヤニヤした後で、上からハチミツをかけて塗りつぶして隠すとか……。そういう遊びである。
……別に実際にミーアがそれをしているわけではない。そういうことをした方がハチミツもたっぷり塗れるし……などと、ミーアが頻繁にやっているなどというのは、よくあるフェイクニュースの類である。
それはともかく、どうせ塗りつぶしてしまうの精神のごとく、あるいは、どうせ食べてしまえば誰にも見られないし……の精神のごとく、どうせ風呂に入って洗い流してしまえるし、の精神を持った今のミーアは無敵だった。
これから、ここに寝転んで泥遊びをしてしまってもいいぐらいの気分になっていたのだ。
「ほらほら、ほーら！　いつものクシャミはどういたしましたの？　いくらでも、わたくしに浴びせかけても構わないんですのよ～」
などと、勝ち誇った笑みを浮かべて、荒嵐を挑発するミーア！
実に、こう……控えめに言ってもウザイ。
一方の荒嵐は、と言うと……、ふいっと顔を背けて歩いて行って

しまった。
「あ、あら……？　クシャミしませんの？」
置いてけぼりを食ったミーアは、なぜだか、ちょっとガッカリした顔をする。
「ぐぬぬ、せっかくクシャミなんかされてもへっちゃらだというところを、見せつけてやるチャンスですのに……。こいつ、やっぱりわかっててクシャミをかけてきてたのかしら……。ん？　それとも、もしかして、ようやくわたくしの前に膝を屈するつもりになったとか？」
と、その言葉をまるで理解しているかのように、荒嵐が立ち止まり……、
「ぶひひん……」
などと、口の端を上げて笑みを浮かべた。
「なっ、なんですのっ！？　その笑い方！　ぐっ、こいつ、やっぱり、わたくしのことを馬鹿にしてますわね！　そうなんですのね！？」
荒嵐は、今度は振り返ることなく、ただ、その太く立派な尻尾がゆらーん、ゆらーん、っとミーアを小馬鹿にするように振られるのみだった。

第十七話　馬の威を借れ！　ミーア姫！

「ふむ……、こんなものかしら？」
もっさもっさと巨大なフォークで牧草を整えるミーア。
早起きして、花陽のもとへ通うようになってから、早七日が経とうとしていた。
本当は初日のみで、後はサボってしまおうと思ったミーアだったのだが……、花陽のお世話をした後の荒嵐が、すこぶる乗りやすかったのが気になってしまったのだ。
試しに、翌日も花陽の世話をした後、荒嵐のところに行くと、やっぱり荒嵐は、比較的ではあるが素直にミーアの指示に従った。くしゃみをぶっかけられることもない。
「これは、いったいなぜ……？」
そこで、ミーアは推理した。
考えつつスイーツをモグモグし、モグモグしつつ考えて、モグモグしつつモグモグして……、結果、一つの結論にたどり着く！
「ははぁん、なるほど……。そういうことですのね。要するに、花陽は……」
カッと目を開き、言い放つ！
「荒嵐のボスなんですのね！」
そうして見てみると、花陽には、荒嵐にはない気品のようなものが感じられる。荒嵐には、というか、他のどの馬にもないような、女王然とした気品と、堂々たる雰囲気が花陽にはあるのだ。
馬の上に立つ馬という風格があるのである！
「ということは、荒嵐のやつは……ビビッているんですのね……。ふふん、あのような態度をとっていても、しょせんは荒嵐は月兎馬の中では小物ということですわね」
そうだ、思い返してみればミーアの知る限り、変に威張っていた

り、偉そうな態度をとっている奴というのは、たいていが小物に過ぎないのだ。
自分の前にも確か、そんな貴族が媚びを売りにきたことがあったではないか。あれと同じことである。
「恐らく荒嵐も、花陽の匂いを身にまとったわたくしに恐れをなしたに違いありませんわ」
そして、その気持ちが理解できないミーアではない。ラフィーナやシオンを恐れていたミーアは、荒嵐の気持ちがよくわかる。時に、絶対に逆らってはいけないものというのがこの世にはいるのだ。ゆえに……、
「そういうことならば、これを利用しない手はございませんわね！」
ミーアは、そう心に決めた。
馬の威を借るミーアである。
ということで、翌日以降も毎日、ミーアは花陽のもとに通った。
さらに、自らに花陽の匂いをつけるべく、熱心にその体を拭いてあげたり、馬龍の指示に従って、毛を梳いてやったりしたのだ。
「ふむ……。なんだか、この毛並み……、なぜかしら、親近感がわきますわね……」
などと、ぶつぶつつぶやきながら……。
そうして、八日目の午後のこと。いつも通り、ミーアは厩舎を訪れた。
「ご機嫌よう、花陽。お元気？」
ミーアが声をかけると、花陽が静かに顔を上げた。ゆっくりとしたその動きに、微妙な違和感を覚える。
「あら？　少し様子がおかしいような……？　ふむ、後で馬龍先輩に言っておいたほうがいいかしら？」
などとつぶやきつつも、掃除を始める。
ちなみに、その頭には布の被り物をし、その服は汚れてもよいように長袖長ズボンの専用のものである。
すっかり掃除が板についてきたミーアである。気分は完全に馬の

専門家だ。
「ふふふ、なんだか、こうして働いているとちょっぴり爽快な気持ちになってきますわね」
よく食べ、よく馬に乗り、よく食べて、よく働いて、よく食べて、よく寝る。
完全無欠に健康優良児を極めているミーアである。
ちなみに、少し運動量が減ると途端にＦＮＹ街道まっしぐらの、綱渡りの生活と言えないこともないが……。
ともあれ、掃除をして綺麗になった馬房を見ると、なんとも言えぬ達成感があって……、ミーアは思わず笑みを浮かべる。
「ペルージャン農業国では王族が刈り入れの陣頭指揮に立つと言いますし、ルドルフォン辺土伯のところでも同じような感じと聞きますわね。なるほど、額に汗して働くというのも、なかなかに良いものですわ」
そうして、ミーアが、汗をキラキラ輝かせながら、掃除を続けていると……、
「こんにちは、ミーアお姉さま」
「お邪魔します。ミーア姫殿下」
厩舎の入り口の方から可愛らしい声が聞こえてきた。
「あら、ベル。それに、リーナさんも……、あ、もしかして、見学に来ましたの？」
先日、共同浴場で言われたことを、ミーアは思い出した。
「そう言えば、馬に興味がある、みたいなこと言ってましたものね？」
「はい、今日はお邪魔させてもらいました」
シュトリナはニコニコと華やかな笑みを浮かべながら言った。ちなみに、二人の服装はいかにも見学者に相応しい普通の制服だった。厩舎に入るには、やや不適切と言えるだろう。
それを見たミーアは、
――ふふん、素人さんに、しっかりとベテランの技を見せてやら

ねばなりませんわね。
ちょっぴり、上から目線で思うのだった。ややウザいドヤ顔をしつつ……。
「それにしても、すごく綺麗な馬ですね、ミーアおば、お姉さま」
ベルが花陽の方に歩み寄りながら言った。
「そうですわね。その馬は、恐らくこの学園で飼っている馬の中で、一番綺麗な馬ですわ」
どこかの荒嵐とは大違い！　と心の中で付け足すミーア。
「ここの掃除が終わったら、わたくしが馬に乗ってるところもお見せいたしますわね」
「ふふ、そうなんです。リーナさん。ミーアお姉さま、すごいんですよ。馬を完全に乗りこなして……あれ？」
と、そこでベルが不思議そうな声を上げた。
「ミーアお姉さま、変です。なんだか、この馬、苦しそう……」
「はぇ……？」

そして……、かつてない修羅場がミーアを待っていた。

第十八話　生命の神秘と奇妙な既視感

「どっ、どど、どうしましたの？　花陽？」
慌てて、花陽のそばに歩み寄るミーア。花陽は横向きに倒れたまま、苦しそうに息を荒げていた。
「たっ、大変ですわっ！　アンヌっ！　馬龍先輩を呼んできて！」
「はい、わかりました！」
駆け出したアンヌを見送ってから、ミーアは花陽の傍らにしゃがみこんだ。
「しっかりするんですのよ、花陽。今、すぐに馬龍先輩がいらっしゃいますわ。そうしたら……」
と、優しく話しかけているところに、馬龍が駆け込んできた。
「どうした、嬢ちゃん。花陽がどうかしたのか？」
「ああ、馬龍先輩……」
ミーアは、安堵に座り込みそうになりつつ、馬龍に場所を空けた。
「花陽が、すごく苦しそうで……。あ、もしかしたら、産まれる時は、みんなこうなのかもしれませんけれど……」
ミーアの言葉は、尻すぼみに消えた。
馬龍の顔が、とても厳しいものだったからだ。
「……普通、馬は俺たちが手を出さなくっても、子を産めるはずなんだ。それが上手くできないってことは……」
ごくり、と喉を動かしてから馬龍は、ミーアの顔を見て言った。
「逆子かもしれない……」
「逆子？」
けれど、その説明はなかった。
馬龍が口を開きかけたところで、ひときわ高く花陽がいなないたからだ。
と同時に、花陽のお尻の方から、小さな馬の後ろ足が出ているの

が見えた。
「くっ、時間が惜しい。嬢ちゃんの従者に、飼育員を呼んでくるように頼んでるんだが、このままだと間に合わない。俺たちで引っ張り出すぞ。嬢ちゃん、手を貸してくれ」
「……はぇ？」
咄嗟に言われて、ミーアは、「はて、引っ張り出すって、誰に言っているのかしら？」などと思わずあたりをキョロキョロと見まわしてしまう。
それから、ようやく、
――え？　え？　も、もしかして、わたくしに言っているんですのっ！？
一瞬の躊躇。けれど、直後にミーアは見つけてしまう。
ちょっぴり不安そうにこちらを見つめるシュトリナと、期待に瞳をキラキラさせた孫娘の姿を……。
引くに引けない戦いがあるのだ……。
「わ、わかりましたわ、やりましょう」
決然とした表情を浮かべて、ミーアは言った。それから花陽の方を見る。
――安心なさい、花陽。わたくしが、助けて差し上げますわ！
それは、花陽に大きな恩を売るため……ではなかった。
端的に言ってしまうと、ミーアは、子を産まんとする花陽に共感を覚えていたのだ。
――この子は、将来のわたくしですわ……。
そう思えばこそ、気合も入る。
なんとか、花陽を助けるべく、ミーアは腕まくりをした。

そこから先のことは、あまりにも必死すぎて、おぼろげにしか覚えていないミーアである。
馬龍の合図に合わせて、飛び出た足を思いっきり引っ張って……、休んで、もう一度引っ張って……。

そんな断片的な光景は思い出せるのだが……、上手く一つながりの記憶として思い出せなかった。
そうして、気づくと、ミーアは厩舎の中で、腰が抜けたように、へたり込んでいた。疲労感から、手足に力が入らなった。
その目の前、ぐったりと倒れた仔馬と、その前に膝をついた馬龍の姿が見えた。
「くそ、息が止まってる！」
馬龍が舌打ちをする。それから、仔馬の口元を服で拭い、そこに口をつけた。
ミーアは、ただ茫然と、それを見守ることしかできない。
一度、二度、三度、四度……。どれぐらい、それを続けたいたのだろうか。
顔を上げた馬龍は、動かない仔馬を見下ろして……、
「くっ……ダメか……」
悔しそうな、血を吐きそうな声でつぶやいた。
「そんな……」
ミーアは呆然と、花陽の方を見た。その瞳は、どこか悲しげな色を帯びているように、ミーアには見えて……。
「諦めたら、ダメですわ。まだ、なにかできることが……きっとあるはずですわ」
気づけば、ミーアは言っていた。
ミーアは深く深く、花陽に共感していたのだ。
「何か……、何かできることは……」
必死に考えるミーア。と、助けは意外な方向からもたらされた。
「……もしかしたら、これがお役に立つかもしれません」
そう言って、一歩進み出たのはシュトリナだった。その手には、小さな布袋が握られていた。
「それは？」
怪訝そうな顔をする馬龍に、シュトリナは真剣そのものの顔で言った。

「薬草です。強心性の薬草で、心の臓に刺激を与えて、再び活力を取り戻させると言われています」
そう言って差し出された袋に、馬龍は躊躇いがちに手を伸ばした。
しばしの逡巡、されど、すぐに首を振る。
「どちらにしろ、このままじゃ助からない。なら、試してみるか」
自分に言い聞かせるようにつぶやくと、ぐったりとした仔馬の口に、袋の中身を注ぎ込む。
一瞬の静寂……、その後……、けほっ！　っと小さな声が聞こえてきた。
「っ！　よしっ！　息を吹き返したぞっ！」
直後、馬龍が快哉を上げた！　それに応えるように、仔馬がぶるるっと体を震わせると、よろよろ起き上がろうとする。
「あ……、あぁ、ああ！　やりましたのねっ！」
ミーアは、思わずといった様子で、深々と息を吐いた。
それから、シュトリナの方を見て、
「ありがとう、リーナさん。あなたのおかげで、仔馬は救われましたわ！」
「いえ、お役に立ててよかったです」
シュトリナはいつもと変わらない、可憐な笑みを浮かべるのみだった。
それから、ミーアは花陽の方に歩み寄る。
「よく頑張りましたわね……。元気な仔馬が生まれましたわよ」
優しく首を撫でると、花陽はミーアの方に穏やかな瞳を向けた。
そこには、大きな仕事をやり遂げた自信のようなものが見て取れた。
「うふふ、それじゃあ、花陽、わたくしもお先に、あなたの子を見させていただきますわね」
上機嫌に笑い、ルンルンと仔馬に歩み寄りつつ、ふとミーアは思った。
――そう言えば、花陽のお相手って、どの馬なのかしら……？
きっとすごく良い馬だと思うのですけど……。

ミーアは、花陽に深く深く深く共感しているのだ。それはもはや、自己同一視にも近い感覚である。将来の自分を見ているような気分だ。

ゆえに、花陽の選んだ相手は、きっとすごく良い馬に違いない、という確信があるのだ。

なぜならミーアは、自分の男を見る目に自信を持っているからだ。

そんなことを考えつつ、仔馬を見たミーアは……、

「あら？　なんだか、この子、どこかで見たことがあるような……？」

んー？　どこでだったかしら？　と、眉をひそめつつ、顔を寄せたミーア。それを見た仔馬は、鼻をひくひくさせてから……、

「くっちゅん！」

小さく、可愛らしいくしゃみをした……。

ちょっぴり、仔馬のナニカまみれになったミーアは……、何か重大な真実にたどり着きかけた！

けれど、そこに到達する直前に、脳が、理解を拒んだ！

なぜなら、ミーアは花陽に深く深く深く深く共感していたから。未来の自分であるから！

男を見る目は確かなはずで……、あんな、しょーもない馬を相手に選ぶなんてこと、あり得ないから！

そんな無意識下の想いがミーアの認識を阻害して……、

「……うーん、わたくし、馬にくしゃみをかけられる呪いでも、かけられてるのかしら？」

見たくないものは見えないのが人間というものなのである。

第十九話　夕日のごとき赤き馬

「う、うう……、なんだか、ものすごーく疲れましたわ……」
いささかゲッソリした顔で、ミーアは厩舎を出る。っと、その前に一頭の馬の姿があった。
それは、ミーアの乗馬パートナーである……、
「あら……、荒嵐」
声をかけると、荒嵐は、ぶひひん、といなないた。
心なしか、少し元気がないように見える。いや、元気がないというよりも……。
「もしかして、ボスのことが心配になって来ましたの？　ふむ、なかなかに感心な部下ですわね」
ミーアは優しげな笑みを浮かべながら、荒嵐の首筋を撫でた。
「うふふ、安心するとよろしいですわ。あなたのボスは無事に仔馬を産みましたわよ」
根本的にミーアは、自らに媚びへつらってくる人間を評価しない。それは、権力を失えば簡単に覆るものだと、前時間軸でよく知っているからである。
……そんな中途半端なものを、ミーアは認めない。
例えば、もしも手のひら返しをした後に、再び、相手が権力を取り戻したらどうするのか？　権力者の持つ印象は、最初から敵対していた者以上に悪くなるのではないか？
そんな首尾一貫しないようなものを、ミーアは認めない。
死んでしまった後、時間が巻き戻るなどという奇跡が、この世には存在しているのである。相手の状態次第で引っ込めてしまうような媚びではダメなのだ。
もちろん、ミーアは絶対的な力を持つ者を全力でヨイショする気持ちというものが理解できないわけでもない。むしろ、その気持ち

はよくわかる。というか、ミーアは割とそれをよくやる。
ゆえに、ミーアは中途半端に媚びを売る奴のことは認めないが、徹頭徹尾、相手に媚びを売る者は同志として認識する。
そして……、
「ボスが出産で弱っている時にも、変わらず様子を見に来て、常に頭を低くするその姿勢……。ふむ、荒嵐……あなた、なかなかですわね」
ミーアは、荒嵐に強いシンパシーを感じた！
そして、そういう手合いだからこそ……、
「ねぇ、荒嵐？　わたくし、友人と一緒にあなたの大切なボスのお手伝いをしましたのよ？　後で、花陽に直接聞いてもらってもいいのですけど、ボスのお子さん、危ないところでしたの。それをなんとか、わたくしのお友だちの機転で救うことができましたのよ」
ミーア、渾身のアピールである。
自分はボスだけじゃなく、ボスの血を継ぐ次世代の権力者の覚えもいいのですよ？　と、猛烈にアピールしておく。
円らな瞳でじっと見つめてくる荒嵐に、ミーアは微笑みかけた。
「だから、ね。馬術大会では、一つお願いいたしますわ」
これで一つ、よろしく頼むよ、と、賄賂を渡す政治家の笑みを浮かべて、ミーアは荒嵐に言った。
それに対して、荒嵐は、わかっているのかいないのか。神妙な仏頂面で、ミーアの言葉を聞いていた。
と、不意に、その耳がピクリと動いた。
それから、荒嵐は顔を上げ、ゆっくりと辺りを見回す。
「あら？　どうかしまして？」
ミーアは、きょとんと首を傾げる。けれど、いかに頭が良いからと言って、馬が返事をするわけでもなし。
答えは、意外な方向からもたらされた。
ぱかぽ、ぱかぽ、っと馬が歩く音。直後に、
「やぁ、ミーア姫殿下。ご機嫌麗しゅう」

そんな爽やかな声を、ミーアの耳がとらえた。
視線を向けると、そこにいたのは、
「あら、ルヴィさん。ご機嫌よう」
馬に乗った少女、ルヴィ・エトワ・レッドムーンだった。
下馬して、ミーアの目の前まで歩いてきた彼女は、もう一度、正式な臣下の礼をとる。
「これから、練馬場に行くんですの？　……というか、立派な馬ですわね……」
ミーアは改めて、ルヴィが乗っていた馬を見た。
それは……、恐ろしく速そうな馬だった。
大地を踏みしめるは、逞(たく)ましい脚、後ろ脚の筋肉はしなやかに盛り上がり、力強さを感じさせた。
その体躯もまた見事。細く引き締まった胴体部は、されど、ルヴィを乗せていても揺るぎもしない、芯の通った体幹を窺わせた。
けれど、それ以上に、特徴的なのは、
「そのように、赤い毛並みの馬がいるんですのね」
夕日のように赤く燃え上がる、立派な毛並みだった。夏の日の陽炎のごとく、ゆらゆらと波打つたてがみは、その馬に、さながら王者のような風格を付け加えているかのようだった。
「お褒めにあずかり、恐悦至極。この馬は、我がレッドムーン家にも二頭といない、最高最速の月兎馬なので」
赤い馬の首筋を撫でながら、ルヴィは言った。
「到来する月夜の鼻先をかすめるように逃げる、赤き夕焼けの兎、名を『夕兎(せきと)』といいます」
「夕兎……」
名前を呼ばれたのがわかったのか、夕兎は賢そうな瞳でミーアを見て、ふひひん、と小さくいなないた。
――あら、なんだか気品すら感じさせる面立ちですわね……。貴族の馬という感じがいたしますわ……。
それから、ミーアは、自分のそばにたたずむ荒嵐の方を見て……。

――これは……、荒嵐では太刀打ちできないかしら……？
などと、小さくため息を吐く。
っと、その時、ミーアは気づいた。
自身に敬意を表すように優しい目を向けていた夕兎が、荒嵐の方を見て……「ふっ」と鼻で笑ったのを……。
反射的に、ミーアは悟る。
――あ、この馬、嫌なやつですわ！
「では、私はこれで。馬術大会、本番を楽しみにしております」
そう言うと、ルヴィはひらりと、夕兎に飛び乗った。そして……、ルヴィは文字通り赤き風になる。
ミーアと荒嵐が見つめる目の前で、夕兎は練馬場に向けて、颯爽と走って行ってしまった。
その速さを見たミーアは、確信する！
――あっ、これ、負けましたわ……。荒嵐を上手く乗りこなすとか、乗りこなさないとか、そういう問題じゃございませんわ。
それから、ミーアは荒嵐の方を見た。
荒嵐は、怒るでもなく、ムッとするでもなく、実に穏やかな顔で、夕兎のことを見送っていた。
――ああ、荒嵐も察してしまいましたのね……？　あいつには勝てないって……。
ミーアは、どよーんっと気持ちが沈むのを感じた。
馬術大会の本番は、三日後に迫っていた。

第二十話　ミーア姫は、どんな時にも自分らしさを失わない

時間はあっという間に過ぎ去り、馬術大会の当日がやってきた。
会場は、いつもミーアが練習に使っていた練馬場だ。
晴れ渡る青空、そよそよと吹く秋の風が心地よくて、ミーアは思い切り伸びをした。
「それにしましても……」
それから、ミーアは改めて会場を眺めた。
会場となる練馬場は、きわめて広大な面積を誇っている。一周するのに、ミーアであれば半日とは言わないまでも、途中であきらめてしまいそうな距離があった。
馬龍によると、コースの長さは一周１０００ｍ（ムーンテイル）あるという。そのコースを二周してゴールになるとか。
そして、そのコースを囲みこむようにして、少し距離を開けて、無数の幕屋が建てられていた。露店も複数出ているらしく、漂ってくる香ばしい匂いに、ミーアは思わず鼻をひくひくさせる。
露店は、なにも食べ物屋ばかりでなく、馬術用の服を売ったり、あるいは、少し変わったものだと馬のぬいぐるみを売っている店もあった。
「なんだか、ものすごい活気ですわね……」
楽しい雰囲気に思わず笑みを浮かべつつも、ミーアは小さく首を傾げた。
――不思議ですわ。わたくし、ぜんっぜん記憶にないんですけれど……。
そうなのだ……、生徒会に上がってくる馬術大会準備の報告を見ながら、ミーアは首を傾げていたのだ。
――こんなの……あったかしら？
前時間軸において、ミーアは最低でも二度は、馬術大会を目にし

ているはずだった。それ以降は国が大変なことになってしまったから、それどころではなかったのかもしれないけれど……。
だというのに、このイベントの記憶はまるでなかった。
気になったミーアは、傍らに控えるアンヌに聞いてみることにした。と言っても、前時間軸のことを聞くわけにはいかないので……。
「ねぇ、アンヌ、去年の今頃って、こんな大会やっていたかしら？」
「昨年の今頃は、レムノ王国の紛争の解決のために、動かれていたのではないかと思います」
アンヌの言葉に、ミーアは、ああ、と頷いた。
「なるほど、確かにこのぐらいの時期でしたわね。レムノ王国に向かったのが夏休み明けてすぐでしたから……、帰ってきて、後処理をしていた頃かしら……？」
正確に言えば、後処理はすべてルードヴィッヒに任せて、気力を使い果たしたミーアは、ベッドの上でゴロゴロしていた頃なのである。
――授業に出るのすら億劫でしたから、この大会は見に来ていないのかもしれませんわね。アベルやシオンも自国のことにかかりきりで、出ていないはずですし……。
などと思っていると……。
「それだけじゃないぞ。今年の馬術大会が盛り上がってるのは、ほかならぬ嬢ちゃんのせいでもあるんだ」
「あら、馬龍先輩」
振り返ると、すぐそばに、林馬龍の姿があった……のだが。
「今日は、素敵な格好をされておりますのね」
ミーアは、ふむ、と唸って、一歩後ろに下がる。腕組みしつつ、馬龍の格好を上から下まで眺め回す。
黒に金に赤、青に黄色に緑。様々な原色の糸で大きな馬が刺繍されたその服は、おそらくは騎馬王国の民族衣装なのだろう。前合わせの東方風の服に、下は足首の上までを覆う長ズボンだ。
頭の上には、小さな丸い帽子をかぶった馬龍は、豪快な笑みを浮

かべた。
「うちの部族の晴れ着だ。今日ぐらいは俺もお洒落しないとな」
そう言ってから、彼は、感無量といった様子で辺りを見回した。
「それにしても……、まさか、馬術大会がここまで盛り上がることになるとはな……。俺が卒業するまでに、こんな光景が見られるなんて思ってなかったぜ」
「えっと、どういうことですの？　そう言えば先ほど、わたくしのせいとかなんとか……」
きょとん、と首を傾げるミーア。それを見た馬龍は、にやりと笑みを浮かべる。
「なんだ、知らねぇのか。セントノエルでは最近、乗馬がちょっとした人気になってるんだぜ？」
「まぁ、そうなんですの？」
瞳を瞬かせるミーア。
しかし、言われてみると確かに、馬術部に入部してくる者が増えていたような気はしていた。それに、教室でも、なにやら、馬の話題を聞くことが増えたような記憶もあった。
てっきり、馬術大会が近いから、だと思っていたのだが……。
「けれど、それがわたくしのせいというのは、どういうことですの？」
「覚えてないか？　生徒会長選挙の時、嬢ちゃん、馬に乗って選挙活動してたよな？」
「あー、ありましたわね……。そんなことが……」
遥か遠い記憶過ぎて忘れていたミーアである。
なるほど、確かに、そんなことをやった覚えはあった。
――とっても、迷走してるって思ったものですわ……。
遠い目をするミーアだったが……。
「新生徒会長の趣味が乗馬と聞いて、やってみようってやつもいたらしい。生徒会選挙なんて緊張する場面でも、〝自分らしさ〟を失わない姿が格好良かったって、女子の中でも人気が高まってるらし

くってな」
馬に乗った凛々しい姿のミーアは、実のところ、それなりのインパクトを残していたのだ。
「なるほど、そんな裏があったんですのね……」
思わぬところに、自分が与えた影響に、ミーアは深く思いを馳せ……
「あ、あの串に刺さった焼き菓子、美味しそうですわね……」
てはいなかった。
どんな時にも〝自分らしさ〟を失わない姿を披露するミーアなのであった。

第二十一話　波乱の予感

「ふむ……こんなものかしら？」
「はい。よくお似合いですよ、ミーアさま」
着替え用に準備された幕屋（テント）にて、ミーアは、騎乗服に着替えた。
純白のブラウスとブラウンの上着、長ズボンとブーツを身に着けたミーアは、キリッとした顔で帽子を被り……、
「……心なしかお腹が苦しいような……」
自らのお腹をぽむぽむ、と叩いた。
「……やはり、露店で食べすぎたのは、よくなかったですわね……」
着替えるミーアのすぐ横、備え付けられた小さな机の上には、先ほどまで焼き菓子に刺さっていた串が、一、二、三……六本……、六本っ！？
カップケーキのようなものを串に刺したそのお菓子は、たいそう美味で、ついつい食べ過ぎてしまったミーアなのであった。体重の増量に、荒嵐が職場放棄をしないか心配だ。
「ふわぁ、それになんだか少し眠くなってきましたわね。微妙にやる気が起きませんわ。でも、あの匂いは反則……、わたくしのせいではございませんわ」
などと誰にするでもなく言い訳していると……。
「失礼いたします、ミーアさま」
外から声が聞こえた。
「あら、クロエ。どうぞ、入って」
ミーアの許可を待って、クロエが中に入ってきた。さらに、その後ろには、ぞろぞろと一団の少年、少女の姿があった。
「まぁ、ティオーナさん、それに、みなさんも……」
クロエ、ティオーナを筆頭に入ってきたのは、生徒会選挙の時にミーアの陣営だった者たちの姿があった。

どうやら、みんな、ミーアを応援するために集まってくれたようなのだが……。
ふと、ミーアはティオーナの手元に、串に刺した焼き菓子を見つけて、思わず苦笑いである。
――まぁ、生徒会長選挙の時とは違いますわよね。
今回は、あくまでも遊び気分。みな、馬術大会を楽しんでいるのだろう。
と、ミーアの視線に気づいたティオーナが、
「あっ、えっと、これは……」
慌てて隠そうとするが、ミーアは、菓子のなくなった串を一本見せて微笑んだ。
「買ってしまいますわよね、美味しそうでしたし」
そうして、二人は、まるで悪戯がバレた子どものような顔で笑い合った。
「頑張ってください、ミーア姫殿下。我々は、みな、殿下のことを応援しています」
「まぁ、ありがとう。みなさん。頑張らせていただきますわ」
ミーアは応援団に、小さく頭を下げる。せっかく自分を応援してくれようというのだから、丁重に礼を返しておく。
――もっとも、今回は応援の面では心配しておりませんけど。
相手がラフィーナであるならばともかく、である。いかに四大公爵、いかに星持ち公爵令嬢とはいえ……、今回は皇女たるミーアの方が断然格上である。
その上、生徒会の付き合いからサフィアスが、腐れ縁でエメラルダあたりも今回は応援に回ってくれるだろう。さらにさらに、ベルがシュトリナを懐柔して、一緒に応援してくれるから……。
――あら！　もしかして今回、勢力的には、わたくし、結構すごいことになってませんこと？　四大公爵家の内、三つを掌中に収めておりますわ。
そこに、聖女ラフィーナ、シオン、アベルの三人の応援を取り付

け、騎馬王国の馬龍の応援まで得られるこの状況。
そう、ミーアの権勢は今まさに、大陸全土をうかがえるほど絶大なものとなっていた！
――ふっ、勝ちましたわね。
勝利を確信して、笑顔を浮かべるミーア。その笑みは、どこか乾いた、虚しい笑みだった。
――ああ、これが生徒会長選挙だったら、わたくしの心は安らかでいられたのに……。
現実逃避の虚しさに、ミーアは、はふぅっと切なげなため息を吐いた。
そうなのだ、今回、人気というものは、あまり役に立たないのだ。問われるのは、ミーアの乗馬技術と、なにより馬の足の速さであって……。
――あの赤い馬……夕兎とか言ってたかしら……。荒嵐では、あれに対抗するのは難しいでしょうねぇ……。
半ば諦めモードに入っているミーア。そんなミーアに、頼りになる参謀、クロエが進言する。
「それで、ミーアさま、私たちでコースを少し見てきたんですけど……」
クロエは、メガネをキラリと光らせつつ、ミーアの方を見つめて……、
「今回の大会、波乱が起きそうです」
「……それは、どういう意味ですの？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、クロエは小さく頷いて見せた。
「実は、先ほど確認したところ、雨でぬかるんでいるところがかなりあるみたいなんです」
大会当日である今日は見事な晴れ模様なのだが、前日は一日ずっと雨が降っていた。
コースにぬかるみ、水たまりができていても、まったく不思議ではなかったが……。

「ぬかるみ……」
ミーアは、ちょっぴり渋い顔になる。
――それは、ちょっと乗りづらそうですわね……。
今まで練習していた通りの地面ならばいざ知らず、コースが荒れていたら、下手をすると振り落とされてしまうかもしれない……。
――どうせ、勝てないんだったら、いっそのこと棄権してしまうという選択肢も……。
などと、ますます弱気になるミーアに、クロエは笑顔で言った。
「これは、とっても面白いことになりますよ、ミーアさま」
「はぇ？　えっと、どういうことですの？」
「つまり……、単純な馬の速さでは勝負が決まらなくなった。馬を操る技術や戦略、そして運が関係するようになる、ということです」
ミーアが出るレース、女子の部の参加者は……、二人だけだったりする。
いくら女子に人気が出てきたとはいえ、まだまだ乗馬ができる姫君は、あまり多くはないのだ。実のところ、本当は馬龍の妹もエントリーしてはいたのだが……。
「ははは、ちょっと嬢ちゃんたちじゃ相手にならないからな。せっかくの決闘なのに、二位と三位じゃあ、盛り上がらないだろ？」
そんな馬龍の気遣いによって、馬龍の妹君は男子の部にエントリーすることになった。
ということで、ミーアとルヴィは無事に一騎打ちをする形になったのだが……、大方の予想は、ルヴィ有利というものだった。
理由は、乗り手の問題というよりも、やはり……、馬の問題だった。
ルヴィが連れてきた夕兎。あれは、大陸有数の名馬と名高い馬だったのだ。
「セントノエルで飼育している馬も確かにいい馬だが、あれには勝てないだろう」
「レッドムーン公爵家も、大人げない。あのような馬を学校の馬術

大会に駆り出してくるとは……」
そんな声が、あちらこちらから聞かれる始末。
そのような状況を踏まえた上で、クロエは言うのだ。
「これで、万に一つも勝てる可能性が出てきましたよ、ミーアさま！」
と。
そんなクロエの声を聞きながら、ミーアは……。
――ああ、やっぱり万に一つなんですのね……。
と、小さくため息を吐くのだった。

第二十二話　ミーアが煽る。夕兎も煽る！

「ふむ……、なるほど、足元がぬかるんでいるので、あまり速く走らせすぎると後半が苦しい勝負になる。クロエの言う通りみたいですわね……」

先に行われた「速駆け、男子の部」の合間に、練習の時間を与えられたミーアは、荒嵐に乗って、軽く、かるーく流してコースを一周した。

「昨日の雨の影響がかなりありますわね。下手をすると、転んでしまいそうですわ……。やはり、一度、試しておいてよかったですわ……」

調子に乗りやすく、サボりやすいミーアではあるのだが……、彼女の本質は、やはり小心者であった。下見ができるなら当然そうする。

クロエから危ないですよ、と事前に知らされていたのであれば、当然、確認するのがミーアの小心者の戦略論なのである。

「ぐぬぬ、クロエはああ言っておりましたけれど……、この中を走らせるのは、なかなかに大変ですわ……」

額に薄っすらと浮いた汗をぬぐいつつ、ミーアはため息を吐く。

ごくり、と生唾を飲みつつ、今まさに走ってきたコースをミーアは振り返った。

……いや、〝走ってきた〟というのは、少しばかり正確さに欠ける表現かもしれない。

馬の用語的に言えば、駈足（かけあし）……よりは、遅い速足（はやあし）……よりもさらに遅い常足（なみあし）……をもう少しだけ控えめにした速度で、ミーアはコースを一周してきたのだ。

慎重に、慎重に、慎重を重ねたミーアの、試乗であった。

あまりにのんびりしていたので、荒嵐の頭には、飛んできた小鳥

がとまり、なんとも平和な光景が展開されてしまったほどだ。
それはともかく……。
「これは、無事にゴールするためにも、速度は遅めに入るのが肝要ですわね。最後の直線は、多少は乾いているから、あそこに入るまではひたすらゆっくりと走って……。いや、いっそ、ルヴィさんが自滅して転ぶのを期待するということも……？」
自分ファーストかつセーフティーファーストなミーアは早速、まともに勝負する道を放棄する。
「とすれば、勝負の前に、最初から全力で行くことを見せつけておかなければ……。それで、焦って先行させて、ぬかるみに上手いことはまらせれば、あるいは……？」
などと作戦を立てていると、時間はあっという間に過ぎていった。

女子の部に参加するのは、ミーアとルヴィの二人のみ。
くじ引きによって、決められたコースを見て、ミーアは内心でにやり、とほくそ笑んだ。
――これは、よいコースが取れましたわ！
その目が見つめる前方、ルヴィと夕兎とのコースにはすぐに、ぬかるみが見えていた。
真っすぐに進めば、ぬかるみに突っ込むし、避けようと思えば遠回りになるだろう。
――今のわたくしにとっては、数少ない好材料ですわ。これだけで太刀打ちできるとは思いませんけれど、何もないよりはマシですわ……。
そう思いつつ、ミーアは荒嵐の顔を見た。
「それにしても、荒嵐から、まったく闘志を感じませんわね……」
昨日は雨だったので、練習はできなかったものの、花陽の出産以降、荒嵐はますます穏やかな顔を見せるようになっていた。
――うう、どうしたというんですの、荒嵐……。なんだか、先日からひどく達観してしまっておりますわ。

夕兎の無礼な態度に対しても、一切気にした様子のない荒嵐。そのまなざしは、なんだか、大人が子どもに向けるようだった……。やんちゃ坊主に対して、「やれやれ、仕方ないなぁ……」と微笑ましく思うような、そんな視線に見えてしまって……。

「荒嵐、わたくしを振り落とさんばかりの、あなたの迫力はどこへ行ってしまいましたの？　あの迫力がなければ、万に一つも勝ち目はございませんのに……」

と、その時だった。ミーアの視界に、ある馬の姿が入ってきた。

「あっ、ほら、荒嵐、あなたのボスが見てますわよ」

それは、もう一頭の月兎馬、花陽だった。優雅な足取りで歩いてきた花陽、その手綱を引いているのは馬龍だ。

「これは、気合を入れなければいけませんわよ、荒嵐。ボスの前で無様は見せられませんわ！」

ミーアは煽る。けれど、荒嵐は、むしろニコやかに、花陽の方を見ていた。

やる気は……、やはり、見えない。

「荒嵐、笑ってごまかしてる場合ではございませんわ！　そんなことでどうしますのっ！　勝てないにしても、意地というものがっ……あっ……」

っと、そんな花陽の前を一頭の馬が横切っていく。それは、ルヴィを乗せた夕兎で……。

ひひぃん……っと、夕兎は美しい声でいなないた。それから、花陽の方を見て、アピールするように尻尾を一振りする。

その優美な姿に、ミーアは、

――ああ、花陽にぴったりな優雅な振る舞いですわね……。

などと、ついつい思ってしまったのだ。が……、

「あら？」

ふいに……、ミーアは感じる。

今、荒嵐の背からナニカ……、ものすごく熱いナニカが発散されたような感触を……。

「荒嵐……、どうかなさいまして？」
ぶひひん、っと鼻を鳴らす荒嵐。その顔は、先ほどと同じように、穏やかなものではあったのだが……。
「あら、変ですわね、さっき確かに……」
しきりと首を傾げるミーア。

かくて、死闘の幕は切って落とされたのだ。

第二十三話　ミーア姫、ぬかるみに突っ込む！

「いいですわね、荒嵐。最初から……全力で行きますわよ？　先行逃げ切りですわ！」

わざとらしく、ルヴィに聞こえるように勇ましく言う。

もちろん、ブラフである。大嘘である。

荒れたコースに足を取らせて、ルヴィの自滅を誘うのがミーアの作戦だ。

――うふふ、今回は、あまり頭を使わなくっていいから楽ちんですわ。

ミーアは鼻歌交じりに、ペラペラとブラフを口にする。

少し前まででであれば、それはできないことだった。

荒嵐に本当の指示であると捉えられてしまうかもしれないからだ。

相手は馬である。頭がいいといっても、あくまでも馬。ゆえに、事前にブラフを口にしますよ、と言っておいても理解できるとは思えない。だから、言い方を気を付け、言葉を選ぶ必要があったのだ。

だが、幸か不幸か、今の荒嵐にその心配はない。

すっかり腑抜けてしまった荒嵐は、ミーアがいかに言葉をかけたところで、まるでやる気を出さないからだ。どれだけ煽っても、やる気が出るとは思えない。

だからこそ……、ミーアは、ルヴィに聞かせるために高々と言う。

「いいですわね！　荒嵐。勝つことこそが正義。綺麗に勝つことなど必要ありませんわ」

セオリー通り、後半勝負にする必要などまったくない、とミーアは声高に主張する。

最初から飛ばしていこうぜ、と……ルヴィに訴えかける！

「最初が勝負！　最初が勝負ですわよ。真っ直ぐに突っ込んで、先手を取るんですわよ！」

と、その時だった。
ぶひひん、っと荒嵐のいななきが聞こえた。ゆっくりと振り返る荒嵐。その口の端は、にやり、と上がり……。
まるで「おう、任せろ！」と言ってるように見えた……。
「……あら？」
ミーアは、少しばかり嫌な予感に捉われるのだった。
そうして、荒嵐と夕兎、ミーアとルヴィが隣同士に並ぶ。
「ミーア姫殿下は先行逃げ切りの作戦をとられるんですか」
ミーアの方を見て、ルヴィが爽やかな笑みを浮かべた。
「ええ、やはり、こういった競争では、最初が肝心かと思いまして」
「ふふ、見かけによらず姫殿下は豪胆ですね」
ルヴィは、そっと細めた瞳で、コースを眺めてから……、
「私は、慎重に行かせてもらいますよ。このコースで最初から飛ばしてしまうと、後でバテてしまいますから……」
ミーアの作戦、早々に瓦解する。
「えっ、ちょっ、まっ……」
けれど、その精神的動揺から立ち直る前に、
「双方、位置について、よーい、始めっ！」
鋭い声、と同時に開始の合図、旗が振られる。
直後、二頭は一斉に駆け出した。
ルヴィの言葉通り、悠々としたスタートの夕兎。その足取りは堂々たるもので、決して焦らず、余裕を持ったものだった。対して、荒嵐は……。
「ちょっ、こっ、荒嵐、はっ、速いですわ、速すぎますわっ！」
ミーアの言葉通り、全力スタートだ！　否、それは全力を超えた全力。
魂の力を絞り出すかのような、恐ろしい速さのスタートダッシュだった！
「ひゃあああっ！」
暴走すれすれの速度に、ミーアは、悲鳴を上げた。

ぐんぐんスピードを上げていく荒嵐。見る間に、夕兎との距離が離れていく。
――ああ、こんなに、最初から飛ばしたら、後半で失速してしまいますわ。というか、これ、途中で絶対に転びますわ！
さらに、ミーアにとって想定外のことが起こる！　それは……。
「あっ、そっ、そちらはっ！」
目の前に迫ってきたのは、例のぬかるみだった。
そうなのだ。荒嵐は、夕兎の方のコースに斜めに突っ走っていったのだ。
はた目から見ると、それは完全な暴走だった。
ここ最近、上手いこと荒嵐を乗りこなしていたミーアは、混乱に頭がグルグルする。
「なっ、なぜ、わざわざ走りづらいほうにぃっ！？」
悲鳴交じりのミーアの抗議に、荒嵐はちらりと振り返り、ぶっふ、と鼻を鳴らして……。
なんの躊躇いもなく、大きなぬかるみに飛び込んだ。
「ひやあああっ！」
びっしゃあんっと、泥しぶきが上がる。
ミーアは思わず、体を固くする。手綱をギュッと握った直後、荒嵐のお尻が高々と上がり、ミーアの体が空中に飛びそうになる……。が……、
「あっ……」
ゆっくりと回転する視界、その中に、ミーアはしっかりと見た。
びっしゃっ！
荒嵐の力強い後ろ脚で蹴りだされた泥水が……、今まさに、余裕で走っていた夕兎とルヴィにぶっかけられるところを！
ひひぃいんっ！　と甲高いいななき、泥水の目つぶしを食った夕兎が驚いた様子で立ちすくんだ。その勢いが完全に殺され、ルヴィも振り落とされそうになっているのが見えて……。
「な……ぁっ！」

驚愕の声を漏らすミーア。直後、荒嵐の考えが、ミーアにも理解できた。
――つまり、夕兎の前に出て、ぬかるみの泥を蹴りつけてやろうと、さては、これを最初から狙ってましたのね！　荒嵐んんん！？
思考をまとめる余裕などなかった。
荒嵐は再び、ぐんぐん加速していく。
目の前にあるぬかるみを避けて、踏み越え、ジャンプして……。
恐るべき勢いでコースを駆け抜けていく。
……実に姑息、実に卑怯なこの作戦……。
けれど、それを非難する者は誰もいなかった。
いや、むしろ……。
「おお、やるな、姫殿下……」
馬龍が小さくつぶやいたその感想に同意する者がほとんどだった。
そもそも、馬術とは、なにか……？　貴族の令嬢の優雅な趣味だろうか？
否、そうではない。そうではないのだ！
馬術とは、端的に言って戦(いくさ)の技術。相手に勝つための技術なのだ。
ただ速く走るだけではない。勝つため、相手を蹴落とすために最善を尽くすためのものなのだ。
にもかかわらず、周囲の者たちは誤解してしまっていた。
大国の姫の道楽、大貴族の令嬢のただの趣味。
ぬかるみを避け、力を温存し、最後の直線のみで勝負するなどという、高貴なるお嬢さま同士の小奇麗な、おとなしいレースを想像してしまっていたのだ。
その予想を大きく上回る、なりふり構わないミーアの戦術、さらに、その奇襲を跳ね除け、即座に追撃の体勢を整えつつあるルヴィに、周囲の熱は一気に上がった。
「あれが、ミーア姫殿下の馬術……。いや、ルヴィ嬢の粘りもなかなか……」
そう感心する者たちの目には、

「ひぃいいいいっ！」
などとミーアが悲鳴を上げつつ、落ちそうになっている姿も戦術の一環なのではないか、と見えるのだった。
そんなわけはないのだが……。

第二十四話　我が名は、ミーア・ルーナ・シームーン

「あはは、やってくれるな、ミーア姫殿下」
ルヴィは、顔にかかった泥を拭いながら笑った。
「うん、これでこそ、だ。これでこそだよ、ミーア殿下」
なにより、大切なものを賭けて、戦いができることが嬉しかった。
あの時は戦うことができなかったから……。
一瞬、心に浮かびかけた言葉に、ルヴィは首を傾げた。
「あの時って、いつだっけ……？」
考えても思い出せない記憶。けれど、否定しようがなく自分を動かしている後悔があった。
なるほど、負けることよりも、戦えないことの方がよほど苦しいのだと……、心のどこかで彼女は理解していたのだ。ゆえに、ルヴィは楽しげに笑うのだ。
「まだまだ、勝負は始まったばかりですよ、姫殿下。行くよ、夕兎」
ルヴィの指示に答え、夕兎が猛然と走り出す。
その華麗にして軽やかな走りは、まさに駿馬の名に相応しいものだった。
コース上を駆け抜ける赤き疾風のごとく、ぬかるみを避けつつも加速していく。
そして、その夕兎を駆るルヴィにもまた、注目が集まっていく。
「馬自体の見事さはもちろんだが、レッドムーン公爵令嬢の乗馬の腕前もなかなかのものだな」
そんな声があちこちから聞こえ始める。
大貴族のご令嬢の道楽に過ぎない、そう揶揄していた者たちは、見事に夕兎を乗りこなすルヴィにさっさと手の平を返したのだ。
けれど、それに対するミーアも負けてはいなかった。
最初こそ、ひーひー、と情けない悲鳴を上げていたミーアだった

が、今は静かに淡々と騎乗していた。後ろからぐんぐんルヴィに追いすがられているが、気にするでもなく、焦るでもなく。
……もちろん、言うまでもないことだが、別に気絶しているわけでもない！
静かに前を見据える瞳。その顔には一切の表情は浮かばず、完全な無表情を保っていた。
そこから受ける印象は凪。感情の起伏の消えた、見事な乗りこなしである。
そう、走り出してからしばらくして、ミーアは気づいたのだ。
――これはもう……、わたくしがどうにかできることではないのではないかしら？
人が、大海で嵐に出会った時、その波に抗うことができるだろうか？
否、できるはずがない。
では、嵐のように暴走する荒嵐をミーアが制御することは？　やはりそれもできはしないのだ。
ならば、どうすればよいのか？
ミーアはその答えを、すでに夏に発見していた。
そう、すなわち「背浮き」である！
大自然の中にあっては、人間は無力。大海原の脅威の前では、人間に抗う術はない。波にさらわれた時にすべきは、その流れに抗うのではなく、力を抜いて身をゆだねること。
――そう、海に漂う海月（くらげ）が大いに参考になりますわ。わたくしは海月、わたくしは海月……、ミーア・ルーナ・シームーン（海月）……。
などとブツブツつぶやきつつ、ミーアは荒嵐の動きに合わせることに終始する。
それは、ミーアが見出した、彼女にとっての理想的な乗馬法。
ミーアはずっとなりたいと思っていたのだ。イエスマンに。
それができる人材にすべてを任せて、自分はベッドでゴロゴロし

ているのが、ミーアの理想なのだ。
では、乗馬においてはどうなのか？
速駆けにおける〝達成すべき目標〟は、言うまでもなく「他の誰よりも早くゴールに飛び込む」こと。
では、それをするのは誰か？
ここにミーアの中で一つの誤解があった。
ミーアは自分が、それをしなければならないと思っていた。
けれど、違うのだ。馬術大会で走るのは……「馬」なのである。
馬が、誰よりも速く走る術を知っているのだ。
ならば、ミーアがすべきは何か？　速く走れる者、すなわち馬に身をゆだねてしまうのである。
そして、決して邪魔をしないことが大事だ。
ゆえに、ミーアは百パーセントの力をもって、荒嵐の動きに合わせる。その動きを邪魔して、荒嵐に無駄な力を使わせないように。そして、それ以上に……落ちないように！　なぜなら、落ちたら痛そうだからっ！
そうして、荒嵐のレース運びに任せていると、
「ようやく追いついたよ、ミーア姫殿下」
一周目の最終コーナーを曲がったあたりで、そんな声が聞こえてきた。
振り返ると、すぐそばに、赤い馬を駆る、男装の麗人の姿があった。
ミーアは、ルヴィの顔を見て、次にその馬、夕兎を眺めた。貴族然としていたその顔は、今や泥にまみれて見る影もない。その眼には、明確な怒りの色が見え隠れしていて……。
「今度はこちらの番だ」
ルヴィの言葉を聞いた瞬間、ミーアは悟る！
「あっ！　こいつらぶつけてくるつもりでひゃあああ！？」
言葉は最後まで言えなかった。
体の傾きを感じた直後、ドスンという重たい衝撃が襲ってきたの

だ。
そして、ミーアは見る。
前方で振り返る荒嵐の……得意げな顔を！
そうなのだ、荒嵐は――夕兎が体当たりしようとするのに先駆けて、自分の方から体をぶつけに行ったのだ。
「くっ、やるな。ミーア殿下」
そのタイミングは、まさに絶妙だった。
自分の方から攻め込もうとする、まさに直前の不意打ち。
体当たりに向けて体に力を入れようとした瞬間の奇襲である。
さしもの夕兎も面食らったようにバランスを崩す。それをしり目に、荒嵐は再び加速！　一気に、また差を広げてしまう。

一周目を終えて、その差は二馬身ほどになっていた。
観客の熱狂を浴びながら、レースは怒涛の二周目に入る！

第二十五話　くねくねミーア

二周目に入って早々に、夕兎が仕掛けてきた。
先ほどのお返し、とばかりの不意打ち。今度は荒嵐がバランスを崩して、ぬかるみに突っ込んだ。
ばしゃりっと跳ね上がった泥が顔にかかり、
「ふひゃあっ！」
ミーアの悲鳴が響いた。体勢を崩しかけるミーア。それを気遣ったのか、荒嵐がちら、と後ろを振り向いて……、ニヤリ、と口の端を上げた。
――あっ、これ、気遣ってなんかいませんわ。「まだまだいけるよな、相棒？」って顔ですわ！
察した直後、ミーアは思い切り手綱をギュッと握りしめて……。
次の瞬間、今度は荒嵐が仕掛ける。
夕兎がぶつかってくるのに対して、真っ向から押し返す！
バランスを崩しかける夕兎だったが、構わず、再度の反撃。
それに合わせて、荒嵐も体を寄せていく。
一度、二度、三度、激しい体当たりの応酬は、馬上の二人を幾度も、衝撃で揺さぶった。
「くっ！」
額に汗を散らし、なんとか夕兎をコントロールしようとするルヴィ。
一方のミーアは、と言えば、それとは真逆のやり方で、事態を乗り切ろうとしていた。
海月の境地、第一の奥義「受け流し！」である。
それは、ミーアが生徒会の書類仕事をしている時に習得したものだった。
生徒会には、日々、様々な相談事が舞い込んでくる。

それをミーアは、息をするように受け流す。
クロエから上がってきた報告をさらりとラフィーナへと受け流し、サフィアスから上がってきた報告をするりとシオンへと受け流す。
そうして、彼らの返答に「いいね！」と言ってあげればいいのだ。
下から上へ、右から左へ、ミーアはやってきたものを、そのままの形で、ごく自然に受け流す。
まるで、天井から吊るされた布のごとく、あるいは、風に舞う花弁のように。
くねくね、くねくね……、衝撃に逆らうことなく、くねくね……。あえて力を抜いて流れに身を委ねて、くねくね……。
その（見ようによっては）華麗な乗りこなしに、観客の間に感心のため息が漏れる。
「ミーアさまっ！　頑張って！」
ふいに響く応援の声。そこにいたのは、ミーア応援団の面々だった。それに合わせて、方々から応援の声が鳴り響いた。
そんな彼らの目の前で、ミーアは手綱から片手を離して、ひらひらと振った。
余裕の態度に、歓声はますます大きくなっていった。
……が、もちろん、言うまでもないことではあるが、あえて言うならば、んなわきゃーない！
ミーアには、すでに余裕など、欠片ほども残されていなかったのだ。
片手をヒラヒラさせているのは、手綱から外れてしまった手を、必死に戻そうとしているだけだった。
――ひっ、ひぃいいいいいっ！　お、おおち、落ちる！　落ちてしまいますわっ！
涙目になって、懸命に荒嵐の後頭部を見つめるミーア。全身全霊の精神力を眼力に費やし、眼力姫の名に恥じぬ眼光を突き刺した！
そのかいあってか、荒嵐は、不意に後ろを振り返った。
――あっ！　よかった、通じましたのね！

と、一瞬、安堵しそうになるミーアだったが……荒嵐は、ニヤリ、と口の端を上げて答える。
それはまるで、
「わかってるって。必ず勝つから、俺に任せておきな！　これからもっともっと速く走ってやるぜぃ！」
などという……、気合の入りまくった顔に思えてしまって……。
――ひぃいいいっ！　ぜっぜ、全然通じておりませんわ！
さらに涙目になるミーアだった。
そんなミーアに、真横からルヴィの声がかかる。
「さて、ネタも尽きたなら、そろそろ、逆転させてもらおうかな」
勝利を確信した顔で、ルヴィは言うのだった。

――ここまでは、苦戦させられたけど、これで終わりだ、ミーア姫殿下……。
真横に並んだミーアを見て、ルヴィは内心でつぶやいた。
折しも、そこは二周目のカーブを抜けた先の、ゴールまでの直線だった。
まともな勝負で優位に立てる、ルヴィに極めて有利な場所……。
勝負をかけるならば、ここだ、とルヴィが思っていた場所……。
多少、差をつけられていても、ここで逆転できると踏んでいた場所……。
その、圧倒的有利な直線コース。そこに到達する直前に追いつけたことに、ルヴィは勝利を確信し……、不意に違和感を覚えた。
そんなに都合がいいことが、果たして起こるものだろうか？　と。
そう……、戦術を学んだことがあるルヴィは知っている。この世界に、極めて稀に出現する天才の存在……。
相手に勝ちを確信させつつも、巧緻な罠にはめていくというやり口……。それは歴史上、幾度も戦場に現出してきた、軍略の天才たちによる、一つの芸術品だ。
天才的な軍略家というものは、相手に決して気づかせず、ともす

れば相手が自ら喜んで、死地に足を踏み入れるような……、そうした計略を立てるものなのだ。
そして、ルヴィは知っている。
目の前の少女、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、一部の有力者からは、帝国の叡智と恐れられる存在であることを。
彼女の目の前には、自らの馬をじっと見つめるミーアの姿があった。その目は決して死んでいない。
――しまった！　そういうことか。
ここに、ルヴィは自らの失敗を悟る。
ミーアのブラフに、完全に乗せられてしまっていたことに遅まきながら気づいたのだ。
単純な速さ勝負ならば夕兎の方が有利……。ゆえに、相手は最初から奇襲を仕掛け、体当たりをし、速さで勝負しないやり方をしてきたのだと思った。
けれど、もしもその前提が間違っていたとしたら……？
――ミーア姫殿下の馬が、まっとうにやっても夕兎より少し遅い程度、いや……互角の速さを持っていたとしたら？　最初から、奇策に翻弄され続けたこちら側と、作戦通りの走りをしてきたミーア姫殿下の側と、どちらに余裕がある？
つまり、今までのレース展開が、互いの馬の実力差を埋めるためのものではなく……『勝利を確実にするためのもの』だったとするなら……？
ごくり、と生唾を飲み込むルヴィ。
ここに、レースは最終局面に至る。

……ちなみに、最初からここに至るまで、ずっと状況に翻弄……
……もとい、状況を受け流し続けたミーアは、この場の誰より余力はないわけだが……。
「も、もう、ダメですわ……。わ、わたくし、お、落ちてしまいますわ……」

弱々しい泣き言は、大きな歓声にかき消され、誰の耳にも届くことはなかった。

第二十六話　決着の時！　ついに心、重なる！　……重なる？

始まりの合図がなんであったのかは、わからない。
けれど、二頭の馬は、ほぼ同時に速度を増した。
荒れた地面を蹴り上げ、泥を散らしながら走る夕兎と荒嵐。
夕兎のお尻にピシパシとムチを入れるルヴィと、両腕をピシパシと手綱に叩かれるミーア。
「いけええ、夕兎。もっと速く、速く！」
ルヴィの気合の声が空に響けば、
――ひぃいいいいいっ！　おっ、落ちる！　落ちちゃいますわっ！
ミーアの情けない声がミーアの心の中に響く。
ぐらん、ぐらん、揺れる体。足は鐙から外れかけ、本気で落ちそうになったことが幾度もあった。
何度もブレーキをかけようとしたミーアだったが、それでも、速度は決して緩まなかった。
涙目になり、鼻をスンスン鳴らしつつも、ミーアは歯を食いしばる。
懸命に、自らに言い聞かせる。
もしも、ここで速度を緩めてしまったら、どうなるか？
そうしたら、きっと、例の皇女伝に書かれていた未来も、変わらないに違いない。
こんな状況で、なお、逃げ切らんとする意志を持ち続けられたなら、きっと、これから先、どんな状況にあっても、決して逃げることを諦めることはないだろうと……。
――そうですわ……、わたくしは、この戦いに勝って、それで、また一つ成長するんですわ。だから、この速度は決して緩めてはいけな……あっ、やっぱり無理ですわ。止めて、止めてぇ！

……ただ単に「止まれ」の指示に、荒嵐が従ってくれなかっただけだった。
自分を何とか納得させて励まそうとしたミーアだったが、無理だった……。
すでに限界を超えつつあり、目の前が涙でぐんにょり歪んでいた。
ゴールまでは、あと直線の半分を残すのみ。一進一退の攻防は、わずかながら、荒嵐の方がリードしていた。けれど……、
「ああ……もう、本気で無理かも、しれませんわ……うっぷ」
その馬上で、ミーアは小さくつぶやいた。口の中いっぱいに、酸っぱい何かがたまっていて、なんだか、目の前がグルングルン、回っていた。
その弱々しい声に、ピクリ、と荒嵐の耳が動いた。
わずかな一瞬、荒嵐はチラリ、と顔を横に向けた。
それは、まるで「本当に無理なら止まるけど、どうする？」と、ミーアを気遣うために、振り返ったかのようだった。少なくとも、ミーアにはそう見えた。
必死の勝負の最中、乗り手である自分を気遣ってくれる荒嵐。
それなのに、自分が頑張らなくていいのか？
ミーアは、静かに瞳を閉じる。
刹那、まぶたの裏に甦るのは、これまでの荒嵐との日々だ。
幾度も、このコースを共に駆け回り、息が合わずに何度もお尻を打ってしまったこと。
撫でようと思ったらくしゃみを吹っかけられたり、なんだか知らないけど、くしゃみを吹っかけられたり、吹っかけられたり、吹っかけ……。
そんな温かな練習風景が、目の前にありありと甦ってきた。
なんだか、馬鹿にされてるような気がしたことは何度もあったけれど、それでも、きっと荒嵐は気遣ってくれていたのだろう。
なぜなら、今日までミーアが大ケガをしたことはない。本気の荒嵐の前では、何度落ちたとしても不思議はなかったのに……。

――わたくしが気付かなかっただけで、きちんと気にしてくれていたのに違いありませんわ。
そう考えると、今日までの鍛練の日々が、なんだか、すごく楽しい時間に思えてしまって……。
一つ一つの思い出のシーンがキラキラ輝いて見えて……。
……それは、人が一生を終える寸前に見てしまう例のアレにも似ていたが……、まぁ、それはともかく。
そんな日々の、一つの結実は今日なのだとしたら、ここで立ち止まることなどできるはずもなくって。
だから！
「最後のひと頑張りですわよ！　荒嵐！」
ミーアは、やせ我慢の一言を絞り出す。
「絶対に……、絶対に負けるんじゃ、ありませんわよっ！」
ミーアが声をかけた刹那、どこかで小さな馬のいななきが聞こえた。
それを合図にしたのかどうなのか……、荒嵐はそこからさらに加速する。
――絶対に勝ちますわよ！　荒嵐！
ミーアは、荒嵐と一緒になって走っているような、そんな一体感を覚えていた。
人と馬との心が重なるというのは、こういうことなのか……と感動すら覚えるミーアである。
すぐ後ろ、夕兎の荒々しい吐息を感じる。その足音は決して離れず、ただひたすらについてきていた。
いつもであれば、そのプレッシャーに吐きそうになるであろうミーアであったが、今はまるで不安はない。
「負けませんわよ。荒嵐は、あなたなどには絶対に負けませんわ！
そうですわよね？　荒嵐！」
その声に、応えるかのように、再度のいななき！
行ける、行ける、どこまでだって！

荒嵐ならば、地の果てにだって、自分を連れて行ってくれるかもしれない……。そんなことさえ思ってしまって……。でも、

「あっ……」

そんな楽しい時間は、長くは続かなかった。

ミーアは、唐突に気づいた。

ゴールラインは、すでに、自分たちの後ろに過ぎ去っていることに……。

「あっ……」

次の瞬間、遠のいていた音が一気に戻ってきた。

歓声、歓声、大歓声！

ミーアの勝利を讃える声が、ミーア応援団の面々の声が、ミーアの耳に届いて……。

「……わっ、わたくし、勝ちましたの？」

辺りをきょろきょろと見まわしたミーアは、自分の仲間たちが笑顔で手を振っているのを見つけて……。

「ああ……勝ちましたのね！　やりましたわっ！」

思わずといった様子で、ミーアは両手を上げた！　そのまま、ブンブンと応援してくれた仲間たちに手を振る。

ブンブン、ブンブンと……。

そして、当然のことながら……その手は、手綱を握ってはいなかった！

「……あら？」

刹那、奇妙な浮遊感がミーアを襲った。

そう、ミーアは忘れていたのだ。

つい先ほどまで、荒嵐の滅茶苦茶なスピードに慣らされてしまっていたから、ついつい、止まっているんじゃないかしら？　などと騙されてしまったのだ。

ゴール直後のミーアも、それはそれは結構な速度で進んでいて……、だから……、

「あら？　あら？」

ぐるん、ぐるん、視界が回る。その場で立ち止まる荒嵐の姿がゆっくりと遠のいていって……。

そして……ミーアは……飛んだ！

「……はぇ？」

ぽかーんと口を開けたまま、すっ飛ばされていくミーア。

その前に風のように駆けつける影があった。

「っと、気をつけろよ、嬢ちゃん」

それは、ゴール付近にて待機していた林馬龍だった。

ぽーんっと綺麗な放物線を描いて飛んできたミーアを、馬龍は乗っていた馬を操って、見事にキャッチ。そのまま小脇に抱えて、コースを軽く流す。

「馬に乗ってる時はよそ見をしたり、手綱を放したらだめだぞ、嬢ちゃん。馬術部では何を教えてるんだ、ってことになっちまうからな」

お説教されたミーアは……、しょんぼり肩を落としてしまう。

「うう、面目次第もございませんわ……」

怒られた子犬のような顔をするミーア。

ちょっぴりしまらないヴィクトリーランを披露してしまうミーアであったが、それでも、健闘を称える声が小さくなることはなかった。

コースを一周した後、大地に降り立ったミーアは……、

「くぅっ……、とっとと、とんだ恥をかいてしまいましたわ」

つぶやきつつも、自らの愛馬の姿を探す。

「それにしても、やっぱり楽しかったですわね。最後の瞬間は、きちんとわたくしの想いをくみ取って加速してくれましたし、こう、荒嵐と心が一つになったような気がいたしましたわ。褒めてあげなければいけませんわね」

そうして、ミーアは荒嵐の姿を探す。と……、
「あら……？」
ゴール付近で、仲睦まじく過ごす三頭の馬の姿が目に入った。
それは、レースを見に来ていた荒嵐のボス、花陽と、その子どもの馬で……。
その二頭に実に馴れ馴れしく、体を摺り寄せる荒嵐の姿があって……。
その姿は、まるで……仲の良い家族のように見えて……。
「おお、荒嵐、息子と奥さんにいいとこ見せられて良かったなぁ」
仲睦まじい三頭の姿を見て、馬龍が言った。
「……はぇ？」
ぽかん、と口を開けるミーア。その目の前で、荒嵐が、ぶふふん、っと上機嫌に尻尾を振っていた。
――あ、ああ、なるほど……。言われてみれば、あの仔馬、荒嵐に似てましたわね。
なんとなく納得してしまうミーアである。が……、
「あら……？　そう言えば先ほど荒嵐が加速したのって……、そう言えば花陽たちがいた場所だったような……？　それに、あの時、顔を横に向けたのも、もしかして、そちらを見つめていたから……？　最後、頑張ったのは、もしかして奥さんや子どもにいいところを見せたかったからなんじゃ……？」
一瞬、心に思い浮かんだ想像を、ミーアは即座に否定する。
「そっ、そんなわけないですわよね。あれは、わたくしと荒嵐の心が一つになったから。その結果の勝利ですわ。うん……」
これ以上、このことを考えても決して幸せになれないような気がしたミーアは、その想像を丸めて、思考の彼方に放り投げた。
記憶の彼方と同様に、思考の彼方も、とても近くにあるミーアなのであった。
――それにしても、花陽……あなた、将来のわたくしだと思っておりましたけれど、男を見る目はなかったみたいですわね。

ちょっぴり、憐みのこもった目を向けるミーア。それを見て、不思議そうに首を傾げる花陽。そして……。

「あら？」

ミーアは、ふと、首筋に涼しい風を感じる。

それは、以前も感じた感触で……。

「まっ、まさか……」

振り向いたミーアの目の前、鼻をひくひくさせる荒嵐の姿が……。

「ひっ、ひぃいいいいっ！」

……まぁ、そんな感じで、速駆け部門の勝者となったミーアなのであった。

よかった……ね？

第二十七話　唸れ！　恋愛脳！

ゴールラインを超えた時、ルヴィは静かに瞳を閉じた。
耳に響き渡る歓声。
賞賛の声が飛び交う中、目を開けたルヴィは、前を行くミーアの姿を見た。
ついに届かなかった、その小さな背中を、ただただ見つめることしかできなかった。
――ああ……、負けたんだ……。
その実感は、遅れてやってきた。
だけど、後悔はなかった……ないはずだった。
だって死力を尽くして、できることをやって、それで……負けたんだから。
大切なものを手に入れるために全力を尽くすことができた。戦うことができた。
それ自体は、とても幸せなことのはずで……そのはずで……だから悔いはないし、思い残すことなんかあるはずもなくって……。
「いい勝負だった……な。うん、勝負なんだから、当然、負けることだってあるってことぐらいわかってたし……ひくっ……」
不意に、口から息が漏れる。ひく、ひくっと息が切れて、上手く息が吸えなかった。
ぐにゃり、と目の前の景色が歪む。
ぽろぽろ、ぽろぽろ、とその瞳から、なにかが零れ落ちる感触……。
両手で懸命に拭うけれど、溢れる涙を止めることはできなくって……。
ルヴィは、幼い少女のように泣きじゃくった。

――うぐぐ、か、勝ったのに、どうしてこんな目に？
しょんぼりヴィクトリーランを披露してしまった上に、荒嵐のくしゃみで吹き飛ばされるというオチまでつけてしまったミーアは、着替えるために幕屋に向かっていた。
「お疲れさまです、ミーアさま。とっても、格好良かったですよ！すぐに、綺麗にして戻りましょう」
「うう、よろしくお願いいたしますわね、アンヌ」
その途中のことだった。
ミーアは、ルヴィの後姿を見つけた。
――ふむ……、まぁ、いささか情けない姿を晒してしまいましたが勝ちは勝ちですわ。これでバノスさんのことでとやかく言われることはございませんわね。それで良しとしなければなりませんわ。
ふんす、と鼻息を吐いてから、
――それにしても、そもそもルヴィさんが、こんなことに巻き込んでくれなければ、わたくしが恥をかくことはございませんでしたし……。ここは思いっきり勝ち誇って、少しでも憂さを晴らさなければなりませんわ！
ミーアは思いっきりドヤってやるべく、ルヴィの前に歩み出て……。
「……ぇ？」
思わず、言葉を呑み込んだ。
ルヴィが、子どもみたいに泣きじゃくっていたから……。
――え？　え？　どういう……え？　なんでこの人、泣いてるんですの？
ミーア、混乱！
さらに……。
「さっきのミーアさまの乗馬、素晴らしかったですね」
「ええ、さすがはミーアさん。すごいレースでした」
などと……タイミング悪く、ティオーナとラフィーナの声が近づいてくるのを、ミーアの耳が敏感にも察知する。

――まっ、まずいですわ。こんなところを見られたら……、わたくしがルヴィさんをイジメてるみたいに思われてしまいますわ！
刹那の判断！　ミーアはルヴィの手を引いて、着替え用の幕屋に向かった。
「とっ、とりあえず、こちらへ。さ、早くお入りなさい」
幸いなことに、大会への女子の参加者は、ミーアたち以外だと馬龍の妹のみ。当分、この幕屋には誰も入ってこないだろう。
「アンヌ、申し訳ないのだけど、誰も入ってこないように外で見張っていてくれないかしら？」
念には念を入れて、アンヌに指示。それから、改めてルヴィと向き合う。
ルヴィは、ここに来るまでに泣き止んでいた。もっとも、その顔は、涙でベタベタになっていて、ひどいものだったが。
荒嵐のくしゃみでベタベタになっているミーアと、どちらがマシか、微妙なところだった。いや、そうでもないか……？
「まぁ、とりあえず、顔を拭きなさい」
そう言って汗拭きを手渡しつつ、ミーアは考える。
なぜ、ルヴィが泣いていたのか……？　ということを。
――いいえ、そんなの考えるまでもありませんわね。わたくし、こういう話題には結構、鋭いんですのよ！
最近、クロエから借りた恋愛小説に、ちょっぴりはまったミーアである。
気分は、すっかり、恋愛マスターだ！　そんなミーアの優秀な〝恋愛脳〟が告げる。すなわち！
「ルヴィさん、あなた……、バノスさんのことが好きなんですのね？」
そう指摘しつつも、
――なぁんて、ね……。まさか、そんなはずないですわよね。
思わず、自らの推理に苦笑するミーアである。
――確かに、バノスさんは独身だったはずですけど、お二人では

年の差はもちろん、身分差もございますし……。なにより、バノスさん、いい人ですけど、顔は若干、山賊入ってますし……。
恐らくは自分に負けたことが悔しくて泣いていたんだろう、とミーアは判断する。
なので、あくまでも、「恋愛」に関することはジョークとして言っていたわけだが……。
「よく、わかりましたね……。ミーア殿下」
小さく頷きつつ、頬を染めるルヴィにミーアは思わず飛び上がった。
「うえぇ！？」
想定外の事態に、動揺を隠しきれないミーアである。
「あー、そ、そうなんですのね……。ああ、そうじゃないかと思ってましたけど？　でも、ちょっぴり大胆といいますか、驚いてしまいましたわ……」
などとブツブツ言いつつ……、ミーアは改めて冷静に考えてみる。
――ということは、わたくしは恋の邪魔者ということになりますわね……。馬に蹴られないように注意しなければ……あら？　でも確か、こういう恋を邪魔する役目の人って、刺されたりすることもあるんじゃなかったかしら……？
クロエ蔵書から得た知識を思い出し、ミーアはちょっぴり背筋が寒くなる。
剣術の鍛練を積んでいるルヴィの前にあっては、自分など、とても相手にならない。
ミーアは、ちらりとルヴィの方を見る。
涙で赤く濁った瞳をしているルヴィ。今は、その瞳には恨みの色は見られないが……。
――これは、やりそうな顔してますわね！
ミーアは思い出していた。かつてあったことを……。
大飢饉の際に何があったのかを……。
援軍の依頼をしに行った時、断られたこと。その理由が、バノス

の死にあったとするなら……。
――静海の森での事件が、わたくしのせいにされているのでしたら、ルヴィさんがわたくしを恨んでいたとしても、不思議はないはず。だから、あの時に断った。
あらゆることが、ルヴィの恋心を中心に、つながっていく。
かつてないほどの冴えを見せるミーアの頭脳。ミーアの恋愛脳が唸りを上げていた。
――恋した男の復讐のために、わたくしの依頼を断ったのですわね……。身を滅ぼしてでも、恋を貫く……。なんて、素敵……じゃない。危険な発想法ですわ！
ルヴィをこのまま放置するのは危険。そう判断したミーアは、しばしの逡巡の後、口を開く。
「ルヴィ・エトワ・レッドムーン、約束を守っていただきますわ」
ぴくん、っとルヴィの肩が揺れる。
それを完全に無視して、ミーアは続ける。それは危険な人物から剣を取り上げるため？　否、そうではなくて……。
「あなたの剣を、わたくしに預けなさい」
彼女の剣を自らのものとするために……。ミーアは静かに手を差し出す。
「あなたには、わたくしの皇女専属近衛部隊の責任を担っていただきますわ」
「……え？」
パチクリとルヴィが瞳を瞬かせていたが、構わずミーアは続ける。
「現在の部隊長であるバノス隊長の副官として、彼をサポート。作戦立案などの補助をしなさい」
厳かに、ミーアは言った。
そこには、刹那の計算があった。
ルヴィが混沌の蛇であるという疑いはもちろんある。
彼女の涙が嘘だとは思いたくないが、それでも、蛇であればそのぐらいの演技をやってくると、ミーアはきちんと理解していた。

その上で、ミーアは考えたのだ。
――ルヴィさんがすでに蛇である可能性と、今後、蛇になる可能性……。それを慎重に検討しないといけませんわ。
もしも、ルヴィをバノスから引き離し、なおかつ彼女の剣を取り上げるようなことをしたら、どうなるか？
そんな傷心の彼女を、はたして混沌の蛇が放っておくだろうか？
――レッドムーン公爵家は、軍部に多大な影響力を持っている。もしも、蛇の連中が帝国を瓦解させようとするならば、ルヴィさんは、とても都合が良い人材と言えますわ。
ミーアに恨みを抱いたルヴィが、混沌の蛇の一員となる……、それは最悪の未来と言える。
では逆に、彼女をバノスのそばに置いた場合はどうか？
当然、彼女が今現在、蛇でなかった場合には、将来的に蛇になることを防ぐことになる。
大きな恩を売ることができる！
では、もしも、彼女が蛇であった場合はどうか？
バノスへの恋情がすべてウソで、ミーアの陣営に潜入しようとしていた場合は？
――サフィアスさんの場合と同じことですわね。それ……。バノスさんのそばにつけてやって、しっかり監視させれば、動きが取れなくなるはずですわ。
バノスに恋しているという名目でミーアに近づいてきた以上、彼から離れるような行動はとりづらくなるはずだ。どれだけ監視されたとしても、文句を言われる筋合いはないということである。
――野放しにするよりは、むしろ、そちらの方が対処がとりやすいかもしれませんわね。
と、そこまでは計算していたのだが……。
……けれど、実のところこの計算、最初から一つの流れに沿ってされたものだったりする。
それは、ルヴィとバノスの恋愛を成立させるというもので……つ

まりは！
――身分違いの恋とか……燃えますわね！　実に！
これである！
クロエから借りた本の中にあった、騎士と姫君の恋愛劇……。それを実際に間近で見られる機会……。それを逃すことなどできるだろうか？
否、できない！
――ぜひ、見てみたいですわ！
もっともらしい理由をこねくり回しつつも、実になんとも恋愛脳なミーアなのである。
「私を……、皇女専属近衛部隊に……？」
呆然とつぶやくルヴィに、ミーアは言った。
「ルヴィさん、あなたにだけ話しておきますけれど……近い将来、皇女専属近衛部隊に重要な役割を課そうと思っておりますの。護衛だけでなく、わたくしの手足となって働く部隊になってもらいたいって思っておりますの」
大飢饉の時、苦労してルードヴィッヒが用意した食料の輸送部隊は、幾度も襲われた。
飢えた民衆や、食糧不足にあえぐ兵士の一部は盗賊となり、襲い掛かってきたのだ。
補給につけた護衛自体が略奪部隊に変貌することもしばしばで……、裏切りに遭う都度、ミーアは思っていたのだ。
――ああ、頼りになる部隊が欲しいですわ……。裏切らないで、きちんと仕事をする兵が……。
もしかして、裏切るかも……？　などと不安に思わずにいられることは幸せなこと。
ミーアは肝心の食糧輸送部隊に、自らの最も信頼する部隊である皇女専属近衛部隊を使えないかと考えていたのだ。
――もしも、ルヴィさんに入ってもらえたなら、結構、美味しいことですわ。上手くすると、精強と名高いレッドムーン家の私兵団

を派遣していただけるかもしれませんし……。
前の時間軸で断られてしまった援軍……。そこから兵を出してもらうことも可能となるかもしれない。
――まぁ、そこまで上手くいくかはわかりませんが……なにはともあれ、バノスさんとルヴィさんの恋模様は気になりますし。ふふ、ちょっぴり楽しみですわね！
ほくそ笑むミーアであった。

ティアムーン帝国女帝、ミーア・ルーナ・ティアムーンは友人が多い人物として知られている。
彼女の親友と言った時、まず思い浮かぶのは、聖女ラフィーナや星持ち公爵令嬢であるエメラルダ、フォークロード商会のクロエや辺土伯令嬢のティオーナなどだろうか。
身分も出自も様々な女性たちが、彼女の友人として、深い絆を育んでいた。
では、女帝ミーアの盟友と言った時に、一番に名が挙がるのは誰だろうか？
様々な見解があるだろうが、筆者はルヴィ・エトワ・レッドムーンの名を挙げたいと考える。
四大公爵家の一角、レッドムーン公爵家に生まれた彼女であるが、その名はむしろ、帝国史上初の黒務卿（こくむきょう）を務めた女性として知られているのではないだろうか。
軍務を司る黒月省のトップ、黒務卿となった彼女は、自らの実家の影響力をフルに活用し、また大将軍ディオン・アライアらとも協力し、帝国軍に改革をもたらした女性だ。
古き慣習によって生じていた無駄を一掃、極めて合理的なシステムを構築することで、女帝ミーアの改革に一役も二役も買った人物として記録されている。
ところで、大貴族の令嬢である彼女がどのような経緯で軍務に足

を踏み入れたのかは、謎とされている。レッドムーン公爵家は確かに黒月省に近しい家柄ではあったものの、なぜ、その家の令嬢が、そのような殺伐とした世界に進んだのかは、はっきりとした記録が残っていないのだ。

彼女の軍人生活の出発点が皇女専属近衛部隊であったことから、後の女帝、皇女ミーアの意向が働いたものと考えるのが妥当だろうが、あくまでそれは推測の域を出ない。

謎と言えば、もう一つ。彼女の夫についての記録も、不思議なことにどこにも残されていなかった。

帝国四大公爵と言えば、皇帝を除けば、帝国最高位の貴族として知られている。その令嬢の夫の名がどこにも記されていないことは、大きな謎である。

一説には、歳の離れた平民の兵士を夫に選び、生涯、その者に添い遂げた、などという荒唐無稽なものまで存在している。

その身分違いの恋をかなえるべく、女帝ミーアとその仲間たちが後押しした、などという話も残されているが、これはさすがに飛躍が過ぎるというものだろう。

彼女の三人の息子が偉丈夫で、並外れた高身長を誇っていたこと、そして、彼女の相手として釣り合う貴族の男子に、そのような高身長の者が見当たらないことを理由に出てきた俗説の一つだろう。

とある歴史家の論文より

第二十八話　インフレ×インフルエンサー

「レッドムーン公爵家の令嬢を味方に引き入れた……？」
ミーアから送られてきた報告書に目を通したルードヴィッヒは、思わず感嘆のため息を漏らした。
「……相変わらず、ミーアさまは素晴らしいな」
そこは金月省の一角。ルードヴィッヒの執務室だった。
「なるほど、レッドムーン公爵家の令嬢が味方になってくれるのであれば、軍部の改革も進めることができる。それに……、なるほど、皇女専属近衛部隊（プリンセスガード）の増強も視野に入れてのことか……。さて、どうやって、味方に引き入れたのやら……」
ミーアの使った手練手管がどのようなものであったのか……。想像するだけで、知識欲を刺激されて、ついついニヤけてしまうルードヴィッヒである。
相変わらず、彼の中のミーアの評価はインフレ気味だ。しかも……、
「そうだ！　今度、ミーアさまに詳しく聞いておいて、バルタザルとの酒飲み話にしよう。師匠も呼んで、同門の者たちも何人か……」
被害者を増やそうとする、立派なインフルエンサーぶりだ！
「あはは、そうだねぇ。その話は近衛隊員でも聞きたいやつが多いんじゃないかな？」
ふと、明るい笑い声の方に視線を向けると、そこにはディオン・アライアが立っていた。
今日も今日とて、軍務の一環と称して、ルードヴィッヒのところにサボりに来たディオンである。
百人隊長を解任された彼は、黒月省の官吏である三等武官となっていた。
ティアムーン帝国における軍隊とは、大きく分けて二つの組織に

分類することができる。
すなわち実働部隊である「帝国軍」と、その作戦立案・運用・人事などを統括する「黒月省」である。
言うまでもないことながら、ディオンのかつての役職である百人隊長は帝国軍に属するものだ。その彼が、後方勤務である黒月省に配置換えになったのは軍のシステム上のことであった。
かつて、戦場において大きな戦果を挙げた騎士が将軍となり、無能な判断から大損害を被ったことがあった。
有能な兵士が、有能な指揮官になるとは限らない。
その反省からティアムーン帝国では、百人隊長より上、千人隊を率いる「千人少将」より先に歩を進める者は、必ず、黒月省で後方勤務をすることになっている。そこで部隊の運用、補給線の構築、作戦立案についてなどを学び、広い視野を身につけた上で、現場に戻っていくシステムなのだ。
ディオンとしては、退屈そうなので黒月省での仕事はまっぴらだと、出世するつもりはなかったのだが、ミーアの意（ルードヴィッヒの独断）を受けて、仕方なく、黒月省に転任した形だ。出世には違いないが……、微妙に不満顔なディオンであった。
「本当、あの姫さんは飽きない子だよね。いつも予想外のことをやってくれるよ。まさか、この僕が、黒月省に勤めることになるとはねぇ」
肩をすくめて苦笑するディオン。それを見て、ルードヴィッヒは深々と頷く。
「そうだな……。ただこれで、ディオン殿には前線に戻ってもらってもよくなるかもしれない」
今後、ディオンの進むべき道は二つある。
帝国軍に戻り、将官としてより多くの兵を率いるようになるか、あるいは、黒月省に残り、軍の組織構造に口出しできる軍官僚となるか、だ。
ルードヴィッヒが欲していたのは、黒月省内へのパイプ、すなわ

ち高等武官であったのだが……。その部分をレッドムーン公爵家の後ろ盾で賄えるのだとしたら……、おのずとディオンに求められる役割も変わる。
現場に対する影響力、そちらの方がむしろ重要になってくるかもしれないのだ。
「まぁ、それは僕としても願ったりだけどね」
と、苦笑いを浮かべるディオンであったが……、
「それに、そもそも、出世はそこまで急がなくてもよさそうだ」
続くルードヴィッヒの言葉には、わずかばかりに眉をひそめた。
「……というと？」
「当面は、別のことのために働いてもらった方がいいんじゃないかと思ってね……」
「別のこと、ねぇ」
ディオンは腕組みして、少しばかり表情を引き締める。
「イエロームーン公爵家か。夏以来、なにか怪しい兆候は？」
「部下に探らせているが……、静かなものだ。静かすぎて逆に怪しいとさえ思えるぐらいだ」
「まぁ、ガヌドス港湾国からは、当然、連絡が行っているだろうしね。表立って帝国に反旗を翻そうって言うんじゃなければ、さすがに今は動かない、か……」
「そう。だから、より深く調べる必要があると思うんだ。幸い、学園都市計画に関しては師匠に、財政再建に関してはバルタザルに任せてしまえる。つまり、私はしばらく手が空いている」
ルードヴィッヒの言葉を聞いて、ディオンは、にやりと笑みを浮かべた。
「手が空いてるんじゃなくって、手を空けたの間違いなんじゃない？」
「解釈の違いというやつだな。学問ではよくあることだよ」
肩をすくめつつ、ルードヴィッヒは言う。
「ミーア姫殿下は、混沌の蛇に関与した家の者といえど、あまり裁

きたくはないようだ。直接的な関係者以外には累が及ばないようにしたいとお考えなのだろう。そのための調査を、我らを信頼してお命じになられたのだ。その信頼には応えなくてはなるまい」
軽く、メガネの位置を直してから、ルードヴィッヒはディオンを見た。
「力を貸してもらうぞ、ディオン殿」
「イエロームーン公爵家……。最古の貴族か」
ディオンは、ふん、と鼻を鳴らして、
「少しは骨のある暗殺者とか、送って来ないものかな……」
帝国の、裏の歴史が明らかになろうとしていた。

第二十九話　悲報！　例の計画、ついに動き出す！

馬術大会も終わり、季節はすっかり秋本番。
天高く、姫肥ゆる秋……。美味しい物が増えてきたこの季節。
いつもであればミーアにとっては最も楽しい季節のはずなのに……。
「ふぅ……」
ミーアの口からは、切なげなため息がこぼれた。
理由は簡単……、ＦＮＹったから甘いものが食べられないため……ではない。もちろん違う！
言うまでもなく、ミーア皇女伝のことである。
いくらミーアの頭脳が都合がよく物を忘れられるようにできているとはいえ、冬に迫った死期を忘れられるほどに都合よくはない。
ミーアとは対照的に、いつまでも元の厚みを取り戻さないミーア皇女伝。馬術大会における優勝の記事は更新されているのに……である。余談だが、ヴィクトリーランの際には、観客席を妖精のように飛び回った、などという脚色までついていた。
――アンヌは、わたくしのこと、なんてエリスに話しているのかしら？
などと首を傾げてしまうミーアである。
それはさておき……、ミーアは悩んでいた。
「ふむ……、これはやはり、みなの力を借りるしかないかしら……」
馬術大会で改めて、他人の力を頼ることの大切さを知ったミーアである。
「もちろん、皇女伝のことを直接言うわけにはいきませんけれど……。例えば、わたくしに暗殺計画があるとか、そういうことを言ってみたら、どうなるかしら？」
アベルなり、シオンなり、キースウッドなり……。

腕の立つ男子が絶えず自分にピッタリ張り付いていてくれたならば……、これは十分に防げる事態なのではないか？
そう思いついたミーアであったのだが……。その企みは早々に潰えることになった。
意を決して、翌日、三人に相談してみようと思っていたミーアなのだが、朝、確認した皇女伝には、相談した際の〝死に方〟が、しっかり更新されていた。
ミーアは……、護衛のためにとついていてくれたアベルの目を盗んで、セントノエル湖を出ているのだ。
「ぐぬぬ、こっ、この未来のわたくしは、なにを考えているんですのっ！」
頭を抱えつつ、絶叫するミーアである。
しかし、同時に薄気味悪さも覚えていた。
「これでは……、まるで、わたくしが何者かに操られて、自ら死にに行っているようではありませんか……」
蛇の誘惑を受け、ふらふらと外に出ていく自分……。うつろな顔をする自分自身が想像できてしまって、ミーアは思わず震える。
「それに、よくよく考えれば……聖夜祭の夜にだけ生き残ったとしても、別の時に計画が実施されてしまえば意味のないことですし……。というか、そもそもわたくしは、本当に暗殺されるんですの？」
仮に、自らの周りを多くの護衛で囲ませて、暗殺者を牽制したとして……。それを一生続けるわけにはいかない。それでは根本的な解決にはならない。
最低限、暗殺者が誰なのかわからなければ、できることは対症療法的にならざるを得ないわけで……。
そもそも、なにが起きたのか自体がよくわかっていないのが痛かった。
当事者であるミーアが殺されてしまっているために、情報がほとんどないのだ。皇女伝を読んでも読んでも、ただ、〝死んでしまう〟という結果〟のみがあるだけで。

「いえ、この場合は、わたくしが護衛の目を盗んで、自分から死にに行くような真似をしたこともわかりますわ。ということは、ふむ……、その日一日、わたくしをどこかの柱にでも縛り付けておくとか？　地下牢にでも閉じ込めておくとか……？　いや、それも先延ばしにすぎないから……。ふーむ……」

そんなことをぶつぶつつぶやきながら、ミーアが図書室の前を通り過ぎた時だった。

「あっ！　ミーアさま」

図書室から出てきたクロエが声をかけてきたのだ。

「あら、クロエ。読書ですの？」

「はい。秋は読書の季節って言いますし」

クロエは、にっこにこと微笑みながら、胸に抱いた本を見せた。

「うふふ、過ごしやすいですしね。本を読むにはよい季節ですわ」

と言いつつも、ミーアはちょっぴり沈む。

――もしも、冬に死んでしまったら、エリスの小説も最後まで読めなくなってしまうんですわね……。王子と竜はいったいどうなるのか……？

未だ完成を見ない、王子と竜の物語。

ミーアが地下牢で聞いていたあの話だけでも、最後まで読みたいと思っていたのだが……。

――まぁ、そもそもわたくしがあのお話を聞いたのって、今から三年以上後のことですし、その時点でまだ完結にならないわけですから、仕方ありませんけれど……。

物語の最後まで読むことができないのは、本読みとしては痛恨の極みである。

なんとか、読みたいものだが、などと考えているミーアであったが……、

「あら……？」

ふと気づく。

クロエの差し出した本、そのタイトルが「秘境のグルメ2」であ

ることに……。
――まぁ、クロエったら、読書と言いつつ、食欲に侵食されてますわね！　立派なわたくしの同士ですわ！
やはり、秋は収穫の季節。食べ物が美味しい季節なのだ。
「うふふ、ずいぶんと美味しそうな本を読んでおりますわね」
「そうなんです。これは、世界中の美味しい食べ物を書き記したものなんですけど、今回の第二弾では、季節の美味しい食べ物ということで……。あっ、ほら、これからの季節はキノコ鍋が美味しいって書いてありますね……」
「ほう……」
ふいに、ミーアの目が輝く。
「キノコ鍋……。それは実に魅力的ですわね。ぜひ読ませていただきたいですわ！」
キースウッドの受難の日々が、再び始まろうとしていた。

第三十話　ラフィーナの不安

「では、ラフィーナさま、こちらの警備計画書のチェックを生徒会でしていただけますか？」
「ええ、いつもありがとう。サンテリ」
ラフィーナの労いの言葉に頭を下げたのは初老の男だった。
彼、サンテリ・バンドラーは、このセントノエル島の警備を統括する熟練の護衛神官だった。二十五の時に、この島に赴任し、以来、三十五年、この島から出たことはない。
自らの仕事に誇りを持った職人、そんな風貌の男である。
そして実際のところ、彼の築き上げた強固な治安維持の仕組みは、この島に大陸一安全な地という栄光をもたらした。
サンテリ自身も幾度も、ヴェールガ公爵から勲章を授与されている。
そんな彼が提出した警備計画書を見て、ラフィーナはわずかに眉をひそめた。
――昨年と、ほとんど変わらない運用みたいね……。
「なにか、問題がございましたでしょうか？」
ラフィーナの様子を見つめていたサンテリが、恭しく口を開いた。
「ラフィーナさまの御身をお守りするため、また、ヴェールガの栄光を汚さぬため、最善の体制を整えたつもりですが……」
その言葉の通り、確かに警備計画は水も漏らさぬものになっていた。
もとより、この島では、入島時に厳しいチェックを設けている。
不審な者が島に入り込むことはほぼ不可能であるし、外部から毒物や凶器などの持ち込みもできない。
無論、泳いで渡ることも不可能ではないが、そちらにはそちらで、しっかりとした罠がはってある。

かの帝国最強の騎士ほどの実力と機転があれば入り込むことは可能であろうが、凡百の暗殺者には、まず不可能なこと。
この島の中は、文字通り外界と隔絶された楽園……、そのような認識がラフィーナの中にはあった。加えて、聖夜祭の当日に出される料理も、ほぼ完璧に管理されている。
生徒に供される料理は学園の奥深く、一般の者は決して立ち入れぬ場所で、調理担当の神官が作ることになっている。しかも、きちんと毒見も欠かすことはない。
普段はもちろん、聖夜祭当日は、どうあっても事件など起こりようはずもないと……、そう、信じていたのだ。ラフィーナは……、そう、かつての生徒会長をしていて余裕を失っていたラフィーナは……。
けれど、ミーアが生徒会長になったおかげで、ラフィーナにも少し余裕が出てきた。
だからこそ、気づいたことなのだが……。
――完全な警備体制があるとして……、ずっとそれを使い続けるのは危険ではないかしら。
仮に、その警備体制が完成された、完璧なものであったとして……。それに企みを阻まれた者は、次の機会には、その強固な警備があることを前提にして計画を練らないだろうか？
よく計算された警護の兵士の配置があるとして、何も知らぬ者であれば、なるほど、その兵士に捕まるだろう。
けれど、その者に仲間がいたとしたなら、次は「警護の兵士がよく計算された位置に配置されている」という前提のもと、それをかいくぐる形で手を打ってくるはずで……。
――思いも寄らぬ隙を突かれる……。もしかしたら、そういうこともあるかもしれない。
それは、漠然とした不安感で、曖昧な危機感で……、されど、どこか確信めいた切迫感だった。
なにかが、起きる気がする。そんな予感に突き動かされたラフィ

ーナは、
「サンテリ、この警備の計画だけど、本当にこれで大丈夫かしら？」
疑問を提示する。
固定化された思考ほど、危険なものはない。
安全であるという思い込みは、「もしかしたら危険かもしれない」という正常な懸念を無視させ、思考力を低下させる。
過信は禁物、そう言おうとしたのだが……。
「どういう意味でしょうか？　今まで、この段取りで失敗したことがないことは、ラフィーナさまもご存知かと思いますが……」
サンテリは、心外だ、という顔で言った。
「それはそうなのだけれど、ね……。どこかに見落としや、見直すべき点はないかしら？」
「ございません。我ら、この島の警備に遣わされた神官一同、粉骨砕身の覚悟で臨む所存です」
その上、サンテリは付け加えるようにして言った。
「もし、ご不満があれば、どうぞ、私を解任くださいますように」
やや憮然とした様子で、言ったのだ。
――うーん、困ったわね、これは……。
それは、ラフィーナにとって頭の痛い問題だった。
実際のところ、彼を抜きにして警備体制を構築し直すのはかなり大変なことだった。長年、この島の警備を担当してきた彼の識見は、真実大したものなのだ。逆にそれが思考硬直を招いている節もあるのだが、ともあれ、その知識は侮りがたく、なおかつ、非常に有益なものだった。
そんな彼を欠くことなど、できようはずもなく……。
――明確な問題とも言えないのが難しいところね。確かに、この警備計画はよくできているし、仮に彼を解任して、私自身が計画を立てたとしても下手をすると今のものより悪化してしまう危険性だってあるわね……。
手を加えて既存のものより悪くしてしまったのでは話にならない。

けれど、どうしても、このままではいけないような気がする。
――私が命令すれば、言葉通りに新しい警備計画を作ってくれるかもしれないけれど……。
それもまた、問題だ。
自発的にやる気をもってなされた仕事と、命令に不本意ながらも従ってなされた仕事とでは、やはり結果に雲泥の差が出る。
――むしろ、そういう心の間隙を突くのは蛇の得意とするところ、ですしね。
驚くほど巧みに、他人の心に入り込み、それを操るのが混沌の蛇。
サンテリとの関係がこじれれば、そこを突かれる可能性はとても高い。
ゆえに、ラフィーナがすべきことは、経験豊かなサンテリに自身の危機感を共有することであるのだが……。
――ああ、難しいわ。私自身、危機感が具体化できているわけではないのだから……。
警備体制のここに穴があるとわかっているならば、それを指摘して直してもらえばいい。けれど、ラフィーナの抱く危機感はそうではない。
それは、言うなれば、警備の穴を見つけるための心構えをせよ、ということ。
今のサンテリでは、恐らく自身の築いた警備の穴に気づけないだろうし、気づいても認めることができないかもしれない。
結果として、今年も例年と同じような警備体制で進んでいくのだろうけれど……。
――蛇の者たちが、なにもしてこないとは思えない。
どうしたものか、と頭を悩ませるラフィーナである。
サンテリが部屋を辞した後も、彼女は難しい顔でうんうん、唸っていた。
っと、ふいに、彼女の目に飛び込んできたものがあった。
それは、あの日……、生徒会選挙の日にミーア応援団がつけてい

た赤い布だった。
「ああ、ダメね、私……ふふ」
「？　どうかなさいましたか？　ラフィーナさま」
ちょうど部屋に入ってきたモニカに不思議そうな顔をされてしまい、ラフィーナは苦笑を返す。
「またしても、自分一人で背負い込もうとしていたわ。この件は生徒会で話し合うべき事柄、ならば相談しなくてはいけないわね」
ラフィーナは軽やかに立ち上がると、生徒会室に向かった。

第三十一話　ミーア姫、この世の真理に開眼す！

「え……？　キノコ……、鍋……？」
それを聞いた瞬間、キースウッドは耳を疑った。
突如降ってわいた危機に、まるで理解が追い付かない。
――なぜ、そんな話に？　いや、ついさっきまでは確かに聖夜祭の警備の話をしていたはず……。
珍しく、ラフィーナの口から出た愚痴のようなもの。それを聞いて、なるほど、注意が必要かもしれない、などと頷いていたはずだった。
――それが、なぜ、どうして？　どんな流れで、こんなことになった？
危機は、極めて唐突にやってきた。

その日、生徒会の会議にて話し合われたのは、聖夜祭の警備のことだった。
「この日は、外からの人の出入りも多くなるの。もちろん、警備には万全を期している、と言いたいのだけど……」
議題を持ってきたラフィーナは、そこで言葉を濁した。
それから、言いづらそうにしつつも、現在の状況を説明してくれた。
――なるほど、どこの国も大変そうだ。
キースウッドはシオンの後ろに控えたまま、小さくため息を吐いた。
いずこも同じ。ベテランであればあるほど、思考硬直に陥り、重大なミスを見落としがちになる。
慣れとは恐ろしいものである。
けれど、問題なのは、思考硬直に陥っている人物も、上手く扱わ

なければいけないという点だ。どのような人物であれ、上手く扱い、最大限に働かせなければならない。時に、上に立つ者には、そのような資質も求められるのだ。

――ラフィーナさまも大変だけど……、実際のところなにか手段はあるだろうか……？

そんなことを考えつつも、成り行きを見守っていたキースウッドの目の前で、生徒会長ミーアは朗らかに言ったのだ。

「ふむ……、では、キノコ狩りをするのはどうかしら？」

なにが、どう「では！」なのかがわからない。

話の因果関係がまるでわからないことだった。完全に理解を絶している……。

キースウッドは言葉を呑み込む以外にできなかった。

しかし、相手は帝国の叡智である。自らの主であるシオンが認め、キースウッド自身も幾度も、舌を巻いた相手である。

きっとなにか……、深い考えがあるのに違いない。そうに違いない。そうであってくれ……。

心の中で切実な祈りをささげつつも、それでもキースウッドの中で一抹の不安は拭いきれなかった。

――ミーア姫殿下は……、時々、キノコのことで暴走するからな……。

心配は、それである。

なぜか、キノコに異様な執念を燃やすミーアのこと。いったい、その頭の中でどのようなロジックが展開されて、キノコ狩りという結論に至ったのか……。

――まさか、美味しい物で相手の胃袋を掴めばいい、などと思っているわけではないのだろうけれど……。

自信満々の顔をするミーアに、不安いっぱいの視線を向けつつ、キースウッドは話の成り行きを見守っていた。

「それは……、えっとどういう意味、なのかしら？　ミーアさん」

ラフィーナも困惑した顔で首を傾げている。

その目の前で、ミーアはただただ、自信満々に頷いて見せる。
「ここは、わたくしに任せていただけないかしら……？　勝利のカギは、絶品キノコ鍋にあり、ですわ！」
――胃袋をつかんでやれば、言うことを聞かせることなど可能ですわ！
ミーアは、先日、クロエに借りて読んだ本のことを思い出していた。
「食欲とは、あらゆる人間にとって最も根源的な欲求であり、それゆえに、それさえ押さえてしまえば、その相手を支配することとて可能」
ミーアは、その一文にいたく感心した。
「この本には、人間の真実が書かれておりますわ！」
感動し、本を読み込んだミーアは、今や恋愛脳からグルメ脳へと進化していた！
そんなミーアが満を持して切り札として、今回提案したものこそが絶品キノコ鍋なのである。
――その護衛担当のサンテリさん、とかいう方も、きっとキノコ鍋でイチコロですわ！
さらに、帝国の叡智（グルメ）ミーアの狙いは二段構えである。
――そこで予行演習をした上で、聖夜祭の夜に生徒会で鍋パーティーを開催すれば……。
皇女伝によれば、ミーアは護衛をお願いしていた王子たちの目を盗んで外に出ているという。
それがどういうことなのか、ミーアは考えたのだ。
結果、一つの仮説に至る。
「……なにか、わたくしが外に出たくなるような……、そういうことが起きたとか？」
正直、あまり自信の持てる説ではなかった。ミーアは自分を知っている。一人で夜駆けに出るなんてこと、自分がやるとは思えない。

自分は注意深く、思慮深い人間なのだ、と……ミーアは自分を冷静に見られる目を持っていると思っていた。まぁ、あながち外れてもいないが……。

「仮に、湖のそばに商隊が来ていて、そこに世にも稀な美味しいお菓子があったとして……行くとは思えませんし……」

そうなのだ……。行くとは思えない。そんなことで、だまされるとはまったくもって思えない。

けれど……、クロエの本を読んだ時、ミーアは知ってしまったのだ。

この世界の真理……、すなわち……、

「食欲という根源的な欲求の前では、わたくしのように意志の強い者であっても、誘惑されてしまうかもしれませんわ……」

例えば、聖夜祭の前の日に、ものすごく美味しいお菓子を食べたとして……、それがもう一度、食べられると誘われたらどうだろうか？

それがとてもとても美味しかったら？　あのウサギ鍋より美味しいものだったらどうか？

ミーアは、そっとお腹を撫でる。今は、お腹は満ちている。

けれど、もしその時、ものすごーくお腹が減っていたら？

荒嵐を乗りこなした自分なら野盗や狼に襲われても逃げ切れると……、そんな甘いことを考えて外に出ないだろうか……？

「わたくしは、決して食いしん坊ではございませんけれど……、その自信はございませんわ。なにしろ、人の根源にかかわる問題ですから。きっとわたくしに限らず、多くの人がコロっといかれてしまうに違いありませんわ……。それを突いてきたとしたら、やはり蛇は侮れませんわ！」

では、その場合の解決策はなんだろうか？

ミーアは考える。考えた結果……、

「もし、わたくしが、自分でセントノエルの外に出たのだとしたら……外に出るより、楽しいことを学園内でやっていればいいのでは

ないかしら？　外に出るより美味しい物を学園の中に用意しておくとか……」

そして、ミーアは結論に至る。

「やはり、生徒会でキノコ鍋パーティーを開く以外に道はございませんわ！」

ここに、ミーアプレゼンツのキノコ鍋パ企画が、静かに動き出すのだった。

第三十二話　ミーア姫、正論っぽいフォローを入れてくる

「勝利のカギはキノコ鍋にあり、ですわ！」
ミーアの有無を言わさぬ説得力に、思わずその場の全員が流されそうになった時、
「ちょっ、ちょっとすみません」
すかさず、キースウッドが声を上げる。
自らの主、シオンが判断を誤りそうな時、止めるのが彼の仕事である。
仮に一時の不興を買ったとしても、声を上げるべき時がある！
今こそがその時だ！
そんな直感に背中を押され、キースウッドはミーアの前に敢然と立ち塞がる。
「キノコの中には毒があるものとないものとがあり、それを見分けるのはとても難しいはず。我々でやるには、いささか危険が高すぎるかと思いますが……」
「ふふん、前からキースウッドさんは、気にされておりましたわね。ですけど、問題ございませんわ。そのことはすでに解決しておりますわ」
「は……？　か、解決、ですか？　それはいったい……？」
その問いかけに、ミーアは意味深な笑みを浮かべた。
「だって、この島は神に祝福された島ではありませんの。毒のあるものは生えませんし、持ち込むこともできない。そうではなくって？」
「あっ……」
キースウッドは思わず、声を失った。
地上の楽園、大陸で一番安全な地、セントノエル島。
そこは神に祝福され、守られた地だ。

ノエリージュ湖の清らかな水により、この島には毒のある植物は生えず、毒を持つ生物も住まうことはない。
それはある種の常識といえるほど、人々の中に根付いた認識だった。
「いや、しかし……」
と、反論しかけたキースウッドに、ミーアは静かに微笑みかける。
「あなたの言いたいこともわかりますわ。万に一つも毒を持ったキノコがあったら大変だ、ということでしょう。その危惧は当然理解しておりますわ」
あくまでも穏やかな口調で、まるで幼子に言い聞かせるように、ミーアは言った。
……若干、ウザい。
「ならば、詳しい方の同行をお願いすればいいだけのこと。実はわたくし、つい最近そういう方と出会うことができましたの」
「キノコに詳しい方？　それは、いったい……？」
「帝国の四大公爵家が一角、イエロームーン公爵家のシュトリナさんが、キノコとかに詳しいらしいんですの」
「イエロームーン公爵のご令嬢が……？」
意外な名前を前に、キースウッドは考える。
「しかし、イエロームーン公爵家は、混沌の蛇との関係が疑われていたのでは？　信用できるのですか？」
そんな質問を投げかけられても、あくまでもミーアの表情は穏やかなままだった。
「そう……。疑惑がございますわね。わたくしは、シュトリナさんは無関係だと信じておりますけれど……、でも、それでは、もしも仮に彼女が蛇であったとしたら……、そんなあからさまなことをするかしら？」
「それは……」
なるほど、確かにそれは正論と言えるかもしれない。
恐らく、イエロームーン公爵は自身が疑われていることを知って

いるはず。その娘であるシュトリナにも疑惑の目が向いていることに気がついているはずで……。
――シュトリナ嬢を犠牲にして、生徒会メンバー全員の抹殺を狙うという可能性もあるかもしれないが……、疑われていることがわかっている以上、全員が同時にその鍋に口をつける可能性は低いか。
そして、最初に食べた者が倒れれば、残りの者は当然それを口にしない。
遅効性の毒というのもないではないが……、そもそも都合よくそんな毒キノコがこの島に生えているかどうか……。運の要素があまりにも強すぎるように、キースウッドには思えた。
「それに、生徒会の結束を強めるためには、共に仕事をするだけでは不足なのではないかと、わたくしは思っておりますの。親睦を深めるようなことをせずに来てしまったのは、わたくしの不徳の致すところ。聖夜祭という大きなイベントの前に、みなで楽しみながら、親睦を深められればと思っているのですけれど……」
「それは……そうかもしれませんが……」
……なぜだろう、帝国の叡智が正論っぽいフォローをいちいち挟んでくるのが、若干ウザく感じるキースウッドである。これには、危険に踏み込むための理論武装を、シオンから聞かされている時と同じようなウザさがあった。
それはさておき……、
「そして、ちょうど良いことに、シュトリナさんとベルがとても仲が良くて、キノコ狩りをするならぜひ同行したいと言ってくれておりますの」
それから、ミーアはラフィーナの方に目を向ける。
「ラフィーナさま、確かセントノエル島には、そうしたキノコ狩りを楽しめる森のような場所があったと思いますけれど……」
話を振られたラフィーナは、小さく首を傾げる。
「確かに、この島の東部には規模は小さいけれど森があるわ。キノコが生えているかはわからないけれど……」

と、わずかに不安げなラフィーナに、ミーアは、どうどうと手をひらひらさせた。
「大丈夫ですわ。シュトリナさんもおりますし……、それに、わたくし自身も少し本を読んで調べておりますのよ。ねぇ、クロエ」
「あ、はい。そうですね。先日からミーアさまは、キノコ鍋パーティーの実現に向けて、本を読んで準備を進めておられました」
――なるほど、つまり、今回の≪策謀≫は以前から企てられたものであると、そういうことか……。
キースウッドの頭で、微妙な翻訳がなされているのだが……。
それを知ってか知らずか、素知らぬ顔でミーアは言った。
「毒のあるものが生えない祝福の島、神に守られし安寧の島セントノエルで、シュトリナさんとわたくしという二人のベテランキノコガイドにリードされてのことです。万に一つも心配はございませんわ」
自信満々に胸を張る自称ベテランキノコガイドであるミーアを見て、キースウッドは……、なぜだろう……、逆に不安が大きく膨れ上がるのを感じていた。

第三十三話　楽しい楽しいレジャー計画

「地図、もらってきましたわよ。リーナさん」
ラフィーナから首尾よく地図をせしめたミーアは、早速、シュトリナの部屋を訪れた。
キノコ狩り計画の素案を作るためである。
「これは、ミーア姫殿下、ご機嫌麗しゅう」
ドアを開けてくれたのは、シュトリナの従者の初老の女性だった。
生真面目そうな表情を浮かべる顔、その瞳には、いささか鋭すぎる光が湛えられている。
仕事はできる代わりに、自分の仕事に頑なな女性……、そんな印象を受ける女性だった。
「こんにちは、えーっと、バルバラさん、だったかしら？」
首を傾げるミーアに、その女性、バルバラは深々と頭を下げる。
「私の名を覚えていただくなど、恐れ多きことながら……」
「あら、そんな大したことではございませんけれど……」
実のところ、ミーアはバルバラのようなタイプは、あまり得意ではない。
――この方、サボってるとルードヴィッヒぐらいガミガミ言ってきそうですわ！
ということで、危険を察知して、そそくさと部屋に入っていくミーアである。
部屋の中にはシュトリナと、勉強を教わっているミーアベル、さらに、リンシャの姿もあった。
「ご機嫌よう、リーナさん。いつもベルと仲良くしてくださってありがとう」
「いえ、そんな、お礼を言っていただくことじゃありません。ベルちゃんは、リーナの大切なお友だちですから」

そう言って、シュトリナはニコニコと可憐な笑みを浮かべた。
「えへへ、ありがとう、リーナちゃん」
それを見て、ベルも嬉しそうに笑った。
ミーアとしても、孫娘とお友だちとの仲が上手くいっているのを見ると、ついつい微笑ましくなってしまう。気分はすっかりお祖母ちゃんだ。
それから、軽くリンシャの方に視線を送る。と、リンシャは小さく頷き返してきた。
――ふむ、おかしなところはなし……、と。リンシャさんが目を光らせておいてくれるのは、心強い限りですわ。
ミーアはホッと一息吐いてから、気持ちを切り替える。
「あ、それで、お話しした例の生徒会のキノコ狩りのことなんですけど、地図をもらってきましたわ」
本題は、むしろこちらの方だ。
野草や薬草、キノコにまで造詣が深いシュトリナと、今度のキノコ狩りの打ち合わせをするために来たのだ。
「ああ、ありがとうございます。ミーアさま。それでは早速、ルートの計画を練りましょう」
ちなみに、シュトリナの部屋はミーアの部屋と同じ造りになっていた。
家具として勉強机とベッドが備え付けられているが、特別なものはない。飾り気のない部屋だった。
節約生活中のミーアの部屋と比べても、味気ない部屋だった。
「シュトリナさんは、あまりご実家から物を持ってこなかったんですのね」
「はい。うちは、四大公爵家といっても、歴史が長いだけの最弱ですから。そんなに贅沢するお金はないですから。こんな部屋にお招きしてしまい、申し訳ありません」
そう苦笑するシュトリナに、ミーアは若干気まずくなる。
「いえ、まぁ、わたくしの部屋もそんなに変わりませんわ。それよ

り、なにか困ってることはございますかしら？　わたくしもあまり自由に使えるお金はありませんけれど……」
「ありがとうございます。ですけど、リーナは大丈夫です。知りたいことは、図書館で調べればいいですし」
シュトリナはなんでもないことのように言って、それから少し考えた。
「床に地図を広げるのもどうかと思いますし……、ちょっとお行儀が悪いですけど」
小さく舌を出しながら、シュトリナはベッドの上に地図を広げる。
「この上でしませんか？」
「まぁ！　楽しそうですわね！」
なんだか、みんなで悪戯を計画するような、ちょっぴり楽しい気分になってしまうミーアである。
そういうのは大好きだ！
けれど、同時に少しだけ心配にもなってしまう。
――あのバルバラさん、なにも言わないかしら？
そちらの方をうかがうと、バルバラは入り口のところで、黙ってこちらを見つめていた。
――注意の一つもするかと思いましたけれど……、少し意外ですわね……。
首を傾げつつも、ミーアはルンルン気分でベッドに上った。

キノコ狩りをする森は、セントノエル島の東方に位置していた。
「行ったことはありませんでしたけど、森があるんですのね」
「それほど大きな森ではありませんが、結構、キノコが群生していて楽しめると思いますよ。入ってすぐのところでも十分に楽しめますし」
「それは良いことですわね！」
あまり歩き回らずにキノコ狩りができるのであれば言うことはない。

基本的にミーアは怠惰人(サボリヤー)なのである。ご存知のこととは思うが……。

「それと、森の奥の方になりますが、ヴェールガ茸(だけ)が群生しています」

「まぁ！　ヴェールガ茸……。ここにもありますのね。クロエの本で読みましたわ。鍋にぴったりの絶品だって」

「さすがはミーアさま。ご存知でしたか。とても深みのある味がする白いキノコなんですよ……でも」

と、そこでシュトリナは難しい顔をした。

「あら、どうかしましたの？」

「実はよく似た偽ヴェールガ茸というのもあって、こちらは毒があるんです」

「まぁ、毒が？」

「ただ、そこまで強い毒でもなくって、三日間ぐらいお腹を壊して、腹痛に苦しむだけで済むのですけど……、見分けるのは玄人でもとても難しいと言われます」

「ふむ……玄人……」

腕組みし、何事か考える顔をするミーアであったが……。

「なので、ヴェールガ茸は避けた方がいいと思います。だから……」

シュトリナは森の南から入って、入り口付近を回るコースを提案した。

「このコースなら特に危険ということはないと思いますが、あまり森の深くには入らない方がよいのではないかと思います」

「なるほど、そうですわね……」

ミーアは、ふむ、と鼻を鳴らした。

第三十四話　手作りのお守り

「ずいぶんお世話になってしまいましたわね」
打ち合わせが終わったのは、夕食前の時間だった。
「このお礼はいずれ、必ず」
そう言うミーアに、シュトリナはニコニコと可憐な笑みを浮かべた。
可憐な……そう見えるような笑みを。
「とんでもない。リーナの方こそ、生徒会のみなさんと一緒に、キノコ狩りをさせていただくなんて、とっても光栄なことです」
セントノエル学園生徒会。その権威は決して侮ってよいものでもない。しかも、そこに集うメンバーもまた大変なものだった。
サンクランド王国の王子に、ヴェールガ公国の聖女、その二人とお近づきになれるだけでも、一般の貴族にとっては非常に意味があること。
だからこそ、シュトリナは、ミーアにお礼を求めるなんてことはしない。
その方が〝自然なこと〟だから……。
「あら、それを言ったら、ベルだって同じですわ。まして、あなたには、キノコの安全性を確認していただくために同行してもらうのですから、お礼はきっちりさせていただきますわ」
ミーアは、そんなことを言っている。
――お人好しの姫殿下……。評判は本当みたい。
シュトリナは、花が咲くような笑みを浮かべて言った。
「ありがとうございます。ミーアさま」
っと、その時だった。
「ふふふ、ミーアお姉さま、お礼を用意してないなんて迂闊です。ボクはきちんと用意してきましたよ」

ベルが、とても得意げな顔で言った。
想定していなかった動きに、シュトリナは少しだけ戸惑う。
ベルは、そんなシュトリナの顔を覗き込むと、得意げに、
「はい、これです。リーナちゃんにお礼」
なにか……、小さな毛の塊のような物を差し出した。
よく見るとそれは、馬かなにかの形を模したぬいぐるみだった。
「えっと、ベルちゃん、これは……？」
「えへへ。馬龍先輩にこっそりと教わった馬のぬいぐるみです。動物の毛を使って作ったもので、騎馬王国のお守りなんだとか」
――馬のお守りね……。確か騎馬王国に伝わる伝統的なお守り……だったかな。
シュトリナは、そのお守りのことを知っていた。
かつて騎馬王国の者に見せてもらったことがあったのだ。
動物の毛を丁寧に編み込んだそれは、作るのがなかなかに大変で……、だから、慣れていないベルが作ったものは、とてもではないが馬には見えない。
犬にも見えるし、なにか得体のしれない不気味な動物にも見えた。
もらっても嬉しいものではない。
けれど、あまりに想定外過ぎるお礼に、シュトリナの心に微かなさざ波が立った。
「ありがとう、ベルちゃん。リーナ、とっても嬉しいわ」
シュトリナは小さく首を傾けて、いつも通りの笑みを浮かべようとする。感情がこもり過ぎず、かといって、作り笑いにも愛想笑いにも見えないような笑み。
花が咲くように可憐で、そして、誰からも好かれる笑み……。
「えへへ、喜んでもらえて嬉しいです。リーナちゃん。今日も勉強教えてくれて、ありがと」
能天気そうなベルの笑みとは対照的な、計算された笑みを、シュトリナは浮かべるのだった。

二人を見送ってから、シュトリナは、ベルからもらったお守りに視線を落とした。
しばしそれを見つめて、それから無造作に放り捨てた。
バルバラは、それを無言で拾い上げる。
「どう？　バルバラ、上手く誘導できたかしら？」
シュトリナの問いかけに、バルバラは生真面目な顔で頷いて見せた。
「はい、シュトリナさま。あのご様子ならば、恐らく森の奥へと足を踏み入れることはないかと……」
「そう、それなら当日はリーナも一緒に行くし、これで余計なものは見られずにすむかしら」
シュトリナは、くすくす笑う。可憐な花が、そよそよ風に吹かれるように愛らしく笑う。
その声が、不意に、少しだけ不安そうなものへと変わる。
「ねぇ、バルバラ、パパはリーナのこと、褒めてくれるかしら？」
「はい。お館（やかた）さまは、お嬢さまのことを高く評価しておられます。計画をきちんと達成すれば、必ずやお褒めの言葉をいただくことができるのではないかと……」
「そうよね。リーナはきちんとやり遂げるもの。だから、きっとパパは褒めてくれるに違いないわ。うふふ、今から楽しみね」
くるり、くるり、シュトリナは、ダンスをするかのように、部屋の中を回った。
そんなシュトリナを黙って見つめていたバルバラだったが、ふと思い出したように口を開いた。
「ところで、お嬢さま……」
バルバラは、先ほど拾った馬のお守（トローヤ）りを差し出しながら言った。
「こちらは、処分してしまってもよろしいでしょうか？」
「捨ててしまうということ？　うーん……」
可愛らしく首を傾げて、シュトリナは言った。
「それはもったいないんじゃないかしら？」

「は？　もったいない、でございますか？」
怪訝そうな顔をするバルバラに、シュトリナはあくまでも笑みを崩さない。
「お守りなんて、別に信じていないけど、あの子を通してミーアさまとお近づきになるには、十分に使える道具だと思うわ。だから、きちんととっておいて」
「……そうですか」
バルバラは、じっとシュトリナを見つめていたが、それからゆっくりと机の引き出しに馬（トローヤ）のお守りを入れた。

第三十五話　最古にして最弱という意味

ミーアがセントノエルで悪だくみをしている頃、ルードヴィッヒとディオンも動き出していた。イエロームーン家に対して、調べを進めるために。

後に、女帝ミーアの腹心として、親友同士として友好を深めることになる二人だが、こうして二人だけで行動するのは初めてのことだった。

ルードヴィッヒの執務室に来て早々、ディオンは言った。

「ところで、具体的にはどうするつもりなんだい？　ルードヴィッヒ殿。一人ひとり、関係者を殴り倒すというのなら協力するし、面倒だから、姫殿下に知らせずに処分してしまうというのであれば、気は進まないけど、協力はするよ」

まるでルードヴィッヒを試すように、悪戯っぽい笑みを浮かべるディオン。それに対して、ルードヴィッヒはあくまでも冷静に首を振る。

「それはミーアさまの御心を損なうことだろうな。もし、それをやるにしても最後の手段になるだろう」

あえて、その方法を否定せず、ルードヴィッヒは肩をすくめた。

「だが、まだ俺たちにはできることがあるはずだ」

ルードヴィッヒは考えをまとめるようにゆっくりした口調で言う。

「以前も言った通り、ガヌドス港湾国から戻ってからずっと、部下に監視はさせているんだ。公爵家の執事、メイドなどの召使い、イエロームーンの派閥の主要な貴族にも。だが……、今のところ目立った成果はない。監視への攻撃を含めて、イエロームーン家の側からのアプローチはないんだ。もっとも、水も漏らさぬ監視というのは当然不可能だろうから、なにか裏で行動はしているのかもしれないが……」

ルードヴィッヒは一瞬黙り込んでから、
「もしかすると、ガヌドス港湾国からの情報を受けて、動きを自重しているのかもしれないな」
「まぁ、そうだろうね。しかしそれでも、まったく外との連絡のやり取りがないわけではないんだろう？　その中に紛れ込ませているのかもしれない」
ディオンの疑問に、ルードヴィッヒは首肯して見せた。
「ああ、例えば、セントノエルに通っている娘への手紙は定期的に書いているらしい」
「セントノエル……、姫さんの学校か。まぁ、攻撃の対象としては妥当だね。で、その手紙にも怪しいところはなかったと？」
ちらり、と鋭い視線をルードヴィッヒに向けるディオン。
「おいおい、父から娘への思いのこもった手紙だぞ？　それを勝手に読むなんてことをやるはずが……」
「やるだろ？　当然、ルードヴィッヒ殿なら。やらなかったなら、とんだ無能者だ」
にやり、と笑うディオンに、ルードヴィッヒは苦笑する。
「まぁ、やったんだがね……。そして、これまた予想通りというか、怪しいところのない普通の文面だった。近況を訊ねたりであったりとか、持っている能力を活かして頑張れという奮励だったりとか……」
「無能者だとか言っておいてなんだけど、えげつないことするねぇ。父から娘への手紙を盗み見るとか……」
からかうような口調で言うディオンに、ルードヴィッヒも肩をすくめた。
「ミーアさまの安全のためだ。必死にもなるさ。だが、残念ながら収穫はなしだ。なんとかしてイエロームーン家の内情を探りたいところなんだが……」
腕組みし、小さく唸るルードヴィッヒ。そんな彼の様子を楽しそうに眺めていたディオンだったが……。

「ふん、しかし実際のところ、公爵家の一部のみが陰謀に加担してる、なんてことがあるのかね？」
唐突に、そんなことを言い出した。
「そういう大きな陰謀っていうのは、一族全体で関わるものじゃないかと僕は思うんだけどねぇ」
「そうだな……。俺は公爵一人だけが陰謀に加担していたというのも十分にあり得ると考えている」
メガネの位置を直しつつ、ルードヴィッヒは言った。
「ふーん。根拠は？」
「秘密というのは、知っている者が増えれば増えるほど外に漏れやすくなる。この世の一つの真理というやつだな」
「なるほど。しかし、イエロームーン公爵家に関しては小さな噂すら聞いたことがなかった。これは、ごくごく限られた者、場合によれば公爵一人だけが陰謀に加担していて、残りの血族の者たちはなにも知らない、善良な人々であることを示唆している……と、そんなところかい？」
「ああ。もっとも、よほど特別な家柄であるならば、話は別なんだが……ふむ……」
ルードヴィッヒはそう言ってから、再び黙り込んだ。
「どうかしたのかい？　ルードヴィッヒ殿」
「いや、ふと思ったんだ……。イエロームーン公爵家の果たしていた役割がなんだったのか、と」
「果たしていた役割？　というと？」
首を傾げるディオンに、ルードヴィッヒは冷静な口調で言った。
「例えば、レッドムーン公爵家は黒月省に強い影響を持っている。影響を持つということは、裏を返せば、その方面に強い貴族として、有事の際には力を発揮するように期待されているということだ」
「まぁ、そういうことだろうね」
ディオンは腕組みしつつ、頷いた。
「同じようにグリーンムーン公爵家は、外国との付き合いが深い。

外から入ってくる知識や物品の価値に早い内から気づき、その方面への影響力を強めてきた。教育や学問に対して、影響力を持ちすぎるのは俺としてはあまり好ましくは思わないが、その方面での役割を担ってきたといえる」
「なるほど。とすると、ブルームーン公爵は、他の力ある中央貴族たちのとりまとめといったところかい？」、
「そんなところだ。いずれにせよ、四大公爵家には、それぞれ果たすべき役割があった。だが……、それじゃあ、イエロームーン公爵家は？」
　ルードヴィッヒの問いかけに、ディオンはわずかに黙り込む。
「ふん、四大公爵最古にして最弱……ね。素直に考えるなら、最も古い血筋。建国以来、皇帝一族とともに労苦を共にし、血を分け合った家系だから、と考えることもできるけど……？」
「今の時代ならばともかく、初代皇帝陛下は、そんなに甘い考えはしなかったのではないか？　少なくとも友情を出世にからめるタイプとも思えない。あくまで想像だが……」
　自己の目的のために、国を造ってしまおうと考えるような人物である。
「そんな無駄を許容したとは思えない。であるならば、当然のことながら、あったはずなんだ。イエロームーン公爵家の果たすべき役割というのが……。あるいは、今現在も果たしている役割というのが……。もしかしたら、そこになにかヒントが隠されているのかもしれない」
「最古、ではないとするともう一方の方かい？　最弱にどんな意味があるのか、とかそういうことかい？」
　そう言ってから、ディオンは肩をすくめた。
「弱いことに意味があるとは思わないけど……」
「いや、そうでもない。最弱であるならば少なくとも下手に目立つことはない。ディオン殿のように強ければ、敵味方に知られてしまって、動きづらいということはあるだろう。同じことだ」

「なるほど……。それはそうかもしれないね」
「そうだ……。ようやくわかった。俺たちがすべきことは、知ることだ。イエロームーン公爵のこと、今だけではない。もっと昔から、この帝国において、彼らがどのような立ち位置にあったのか……。その先に、敵の正体を掴むヒントがあるのかもしれない。そして、ミーアさまが求める、一族の中で誰が蛇に関係していたのか、という情報も……」

かくて、当面の方針は決まった。
ルードヴィッヒとディオンは、帝国の歴史の闇へと再び足を踏み込み……、そして……ミーアはセントノエルのキノコの群生地に足を踏み込むのだった。

第三十六話　ミーアお祖母ちゃん、盛ってくる！

シュトリナの部屋を後にして、自室に戻ってからのこと。
お風呂に入り、ふわふわの寝間着に着替えて……、そうして訪れた安らぎの時間。
ミーアはふと思い出して、ベルの方を見た。
ベッドの上に座ったベルは、着替えたばかりのもこもこの寝間着の袖口に顔を押し付けて、えへへ、と幸せそうに笑っていた。
ベルは、このふわふわもこもこの寝間着が大好きらしく、いつも着替えるたびに顔を押し付けたり、匂いを嗅いだりしていた。
そんなベルの姿を見て、ミーアは思い出す。
――そう言えば、昔はわたくしも、あんな風に感動しておりましたわね……。
ふわふわな毛布と、満月羊（フルムーンシープ）の毛をふんだんに使ったモコモコの寝間着があれば、なんとも幸せな感動に包まれたものであるが……。
――若いって、素晴らしいですわ……。素直に感動できて……。
孫娘を見て、お祖母ちゃんは優しげな笑みを浮かべ……。
「お祖母ちゃんじゃありませんわ！　わたくしだってまだまだ若いですわ！」
お年寄り気分に侵食されそうになった自分を、なんとか鼓舞するミーア。
その声を聴いて、ベルがきょとりん、と首を傾げる。
「え？　なんですか、ミーアお姉さま？」
「いえ、なんでもありませんわ。それよりベル、最近なにか一人でやってると思ってましたけれど、リーナさんにあげたあれだったんですわね」
「あ、はい。そうなんです。馬龍先輩と仲良くなって教えてもらいました。えへへ、リーナちゃんは初めてできたボクのお友だちだか

ら、プレゼントできてよかったです」
そう言って、ベルは嬉しそうに笑った。
「そう。それはよかったですわね」
孫娘が健やかに友情を育んでいるのを見て、ついつい温かな眼差しを向けてしまうミーアお祖母ちゃんである。お祖母ちゃん成分の浸食が激しい今日この頃である。
「それにしてもあなた、案外、手先が……」
例の≪馬のお守り≫の出来を思い出し、ベルの手元に目をやる。全然気づかなかったが、彼女の人差し指には、白い布がまかれていた。どうやら、ケガでもしたらしい。
ミーアは見ないことにして、続ける。
「……手先が、その……器用なんですわね。意外でしたわ」
ちょっぴり評価を盛ってやるミーアである。
せっかく、手作りのお守りを友だちにプレゼントできて喜んでいるのだ。微妙な出来だった、などという事実は、この際、触れずともよいことである。お祖母ちゃんの思いやりというものである。
「ふっふっふ。そうですよ。ボク、こう見えても結構できる子なんですよ？」
そんなミーアに、ベルは偉そうに胸を張り、それから少しだけ懐かしそうに瞳を細めた。
「エリス母さまにしっかりと教えてもらいましたから。でも、なかなか教えてくれなかったから、大変だったんですよ。ボクは皇女なんだから、そんなことをやるべきじゃないって言うから……。だから、町の子どもはみんなそういうのやってるから、できないと不自然だって説得して」
「ベル……」
そんな風に論理を組み立てるなんて、この子も過酷な環境の中で懸命に考えながら生きていたんだなぁ、などとしみじみ思うミーアであったが……。
「えへへへ、ルードヴィッヒ先生がこう言えばいいって教えてくれた

通りに言っただけなんですけど……」
「……ベル」
自身と同じ匂いを濃厚に漂わせる孫娘に、ミーアは微妙な顔をした。
「そうして納得してからは、いろいろなことを教えてくれました。だんだんと帝国内の状況が悪くなってきてからは、特に熱心に、お料理もお裁縫も。ボクが一人でも生きていけるようにって……」
「そうでしたのね……」
ミーアは、ベルの生きてきた過酷な環境に思いを馳せる。
ベルの手先が器用なのは、そうなる必要があったから。
もしも、ベルが裁縫が得意ならば（まぁ、そこまで得意でもなさそうだったが……）、そうならざるを得ない環境に彼女がいたからなのだ。
地下牢に落とされて数年を過ごした自分と、隠れ潜む逃亡生活を余儀なくされたベル。
どちらが大変だったとは一概には言えないが、それでも、この子も苦労してきたんだとミーアがじんわり目元を熱くしていると……。
「ふっふっふ、家事だって一通りできますよ。だから、乙女力（おとめりょく）に関してはミーアお姉さまより、ボクの方が上だと思いますよー。ミーアお姉さま、料理とかしたことないんじゃないですか？」
ベルが渾身のドヤァ顔で言った。
「おっ……乙女力……？」
ミーアは、なにやら、得体のしれないものに胸を深々と貫かれた。
正直なところ、ベルの言っている乙女力なるものが、なにかはわからない……。
そもそもミーアは皇女である。高貴なる身分であり、人々から仕えられる立場だ。
料理なんかできなくてもいいし、家事やら裁縫やらができなくても、なんら恥じることはない。恥じることはないのだが……。
――乙女力……。

トゲのように刺さるのは、その言葉だった。
乙女力に劣る……そう言われてしまったことが、まるで、お前は乙女ではない！　と言われてしまっているような、そんな気になってしまって……。自分が本当にお祖母ちゃんになってしまったような気がして……。
――こっ、こんなことではいけませんわ！　アベルに見捨てられてしまうかもしれませんわ！　最近、この冬を生き残ることに必死でアピールできておりませんでしたし！
ミーア、ここにきて発奮する！
自分はまだまだ乙女！　乙女力とやらで、ベルに負けてなどいられない。
「で、でも、わたくしだってやる時はやりますわよ。この前だってサンドイッチ作りましたし？」
ミーア、懸命の反論を開始！
「え？　ミーアお姉さまが、ですか？」
ベルは、びっくりした顔でミーアを見つめる。
「ええ。楽なものでしたわ！」
さらにミーア……、ちょっぴり話を盛る。
「しかも、馬型の革新的で芸術的なサンドイッチでしたわ」
ミーア、さらに盛る！　盛る！！　盛る！！！
「うっ、馬型っ！？」
「そう。今にも走り出しそうな出来でしたわ。味もお見事なもので……」
ミーア、こうなっては後に引けないと、思いっきり盛り尽くすことを決意！　乙女力なるものが、ベルに負けていないと、自分自身にも言い聞かせる。
「宮廷料理にも負けないほどの味でしたわ。美味しく焼いた肉の香ばしさ、シャキシャキの野菜、ふわっふわのパンがそれらを包み込んで、とってもとっても美味しかったんですのよ」
「わぁ！　すごいすごい！　さすがミーアお姉さまです」

キラッキラと純粋無垢な憧れの瞳を向けてくるベル。
「ボクもミーアお祖母さまのお料理、食べてみたかったな……」
「うふふ、そうですわね……」
ベルの尊敬のまなざしに、気をよくしていたミーアだったのだが……。
「……ふむ、そうですわね。確かに、それならば、アベルにも……ふむ」
直後、なにかを思いついたような顔をした。
「ああ、これは、いいことを思いつきましたわ！」
明るい笑みを浮かべるミーアであった。

その“いいこと”……、苦労人の“あの人”に対してさらに毒を盛るような所業なのだが……。
当然、そんなことは、当の本人も知るよしのないことだった。

第三十七話　キースウッド、波状攻撃に晒される

大国サンクランドの王子、シオン・ソール・サンクランドの腹心……、キースウッドは優秀な青年である。
天才と謳われるシオンに負けない剣の腕を誇り、機転も効く。
礼儀作法も一流で、涼しげな笑顔に心を奪われる女性も数多い。
正しきことのためならば、いささか向こう見ずになる主をよく支え、よく守り……、どのような危機にも、持ち前の剣と冷静な判断力を持って乗り越えてきた。
その穏やかな笑みが崩れるような事態は滅多にない。
……いや、なかった、と言うべきか。
このセントノエルに来るまでは……。
――なぜ……、なぜだ……。どうして、こんなにも問題が次々に起きるんだ……？
キースウッドは、訪れた災厄に思わずクラッとした。
その災厄は、可憐な姫の姿をして、彼の前に現れた。
輝くような、上機嫌な笑みを浮かべながら、可憐な姫ことミーアは言った。
「また、あの時みたいなサンドイッチを、わたくし達で作ろうと思っておりますの。お手伝いをお願いできないかしら？」
「はぇ……？」
ヘンテコな声が、キースウッドの口から零れ落ちた。
……かつてないほどの危機が、キースウッドを襲っていた。

キノコ狩りが決まった数日後、彼はミーアに呼び出しを受けた。
生徒会室に来た彼に、開口一番、ミーアは言った。
サンドイッチが作りたいから、手伝え、と……。
一瞬、聞き間違いかと思った（あるいは、そう……思いたかった）

キースウッドは、改めてミーアの方を見つめた。
「え、えーと、どういうことでしょうか？」
「今度行くキノコ狩りで、ランチに食べるためのサンドイッチをわたくし達で作ろうと思っておりますの。だから、そのお手伝いをキースウッドさんにお願いしようと思って……」
キースウッドは頭痛をおさえるため、こめかみの辺りを押さえながら言った。
この話、なにかが間違っている！　だが、いったいどこが間違っているのだろうか……？
衝撃のあまり、ぐるぐる混乱しそうになる思考を懸命に整理しつつ、キースウッドは言った。
「あの……大変お手数ですが、詳しく説明していただいてもよろしいでしょうか。どこがおかしいのか、少しだけ考えたいと思いますので……」
「はて？　おかしいことなど、どこにもございませんけれど……。先日、森にキノコ狩りに行くことになりましたわよね？」
「ええ、まぁ、そうですね……不本意ながら……」
キースウッドはため息を吐く。あまり納得できないことながら、とりあえずキノコ狩りに行くのは間違いない。
「森の中をゆっくり散策するのでしたら、朝出かけて、午後戻ってくるぐらいの方がゆっくり出来て良いと思いますの」
「はい。妥当な計画だと思います」
ラフィーナからもらった地図を使って綿密に立てられた計画は、確かに見事だった。これならば、運動に慣れていないミーアやクロエなども、問題なく楽しめるはずだ。
「お昼は当然、森の中ですわ。調べたところ、ピクニックにちょうどいい野原が森の中にあるらしいんですの。だから、そこでランチタイムをしようかと……」
「なるほど、この場所ですね。野原でランチタイムというのも、親睦を深める意味ではよろしいのではないでしょうか」

悪くない計画。無理のない話だ。キースウッドは納得の頷きを返す。
「だから、わたくしがサンドイッチを作って持っていこう、と……」
「それだ！」
思わず、素が出てしまうキースウッド。
「それですよ、ミーア姫殿下」
「はて？　どれですの？」
「サンドイッチを用意したいというのは理解できましたが、それをなぜ、ミーア姫殿下が作らなければならないか、というお話です」
「いえ、わたくしではなく、アンヌやクロエやティオーナさん、リオラさんもですわよ」
……前回、キースウッドが指揮した令嬢たちである。
烏合の衆とは言わないが……、こう……なかなかのメンバーである。
あの時感じた頭痛を思い出し、再び頭がクラッとするキースウッド。
だというのに、キースウッドの苦労など「知ったこっちゃねぇ！」とばかりに、ミーアは、
「前回、初めてだったのにあんなに上手くできたんですもの。あの時の経験を活かせば、厨房の調理人にお願いするより、良いものが作れるに違いありませんわ！」
自信満々に言い放った。その、清々しいまでのドヤァッ顔に、ちょっぴりイラァッとするキースウッド。
「それに、なんと今回は、ラフィーナさまにも参加していただく予定ですわ！」
厳かに、神託を告げる聖女のような口調で、ミーアが言った。
朗報でもなんでもねぇよ！　と言いたいのをぐっと飲みこみ、キースウッドは大きく深呼吸。それから、改めて、新たな要素の考察に入る。
「ラフィーナさまが……？」

「ええ。お願いしておきましたわ。心強いですわよね」
――心強い……本当にそうだろうか？　なるほど……。聖女ラフィーナは知恵に優れ、ダンスなどの運動も得意という。器用な方のようだから、料理も嗜んでいる可能性は否定できない……か。
そう、その可能性を除外することはできない。できないが……！
――そんな砂浜で砂一粒を見つけ出すような可能性に賭けることなどできるはずがない！
キースウッドの理性が告げる。それはあまりにも危険な賭けであると……。
「そ、それは、どうでしょう？　みなさんお忙しいでしょうし。やはり、ここは厨房の専門家にお任せになった方が……。私も、なんだかんだで忙しいので、監督に行けないかも……」
自分が面倒見なければ、さすがにできないんじゃないかな……？
などと甘いことを考えていたキースウッドであったが……。
「まぁ、キースウッドさん、そんなにお忙しいんですの？　でしたら、無理しなくても大丈夫ですわ。今回は我々女子チームだけでも……」
「いえ、撤回します。いやホント、私がいない場所で勝手に行動とかしないでください！」
慌てて前言を翻す。
ミーアたちの暴走・迷走ぶりが、ありありと想像できてしまったからだ。
監視もせずに、ミーアたちだけで調理をさせるなど、あり得ぬ暴挙。
――だが、これは下手をすると、毒キノコ以前にシオンさまの危機なんじゃないか？
震え上がるキースウッド……。であったのだが、そこに助け舟を出す人物が現れた。
「話は聞かせてもらったよ、キースウッドくん」
その現れた意外な人物とは……。

第三十八話　熱き友情、芽生える！

「話は聞かせてもらったよ。キースウッドくん」
生徒会室の入口に立っていたのは、帝国四大公爵家の一角、ブルームーン公爵家の長子にして、生徒会書記補佐である少年……。
「サフィアス殿……？」
サフィアス・エトワ・ブルームーンが、爽やかな笑みを浮かべて立っていた。
意外な人物の登場に、キースウッドは首を傾げる。
サフィアスは、そんなキースウッドの肩にぽんと手を置いてから、ミーアの方を見た。
「あら、サフィアスさん、わたくしの計画になにか不備でもございまして？」
「はい。これは大変言いづらいことながら……」
サフィアスは深刻な顔をして、首を振る。
「ミーア姫殿下、その計画には足りないものがありますよ」
「まぁ！　わたくしの完璧な計画に、足りないもの？　それはいったいなんですの？」
驚きの声を上げるミーアの隣で、キースウッドは眩暈に襲われる。
――頼むから、もう余計なことは言い出さないでくれ……。
そんな彼の祈りをよそに、サフィアスは言った。
「簡単なこと、サプライズですよ。姫殿下」
「サプライズ……？」
想定外の言葉に、瞳を瞬かせるミーア。そんなミーアにサフィアスは得意げな顔で言った。
「そう。サプライズ。せっかくのキノコ狩りというスペシャルなイベントをするというのに、聞いたところによれば、そのサンドイッチ作りは、すでに経験済みのこととか。それでは、新鮮味に欠けま

す」
「新鮮味……」
「あえて誤解を恐れずに言うならば、ミーア殿下のお考えは、一度、紅茶を出し終えた茶葉のようなもの。いわば、出涸らしです」
「で、出涸らし……」
ミーアが、うぐぅ、っと唸る。
「なるほど、言われてみれば確かにそうですわ。あの剣術大会の時には、自分で作る場面ではないのに、手作りにしたからこそインパクトがあった。けれど、今度は、それは望めない……」
ミーアは、パンっと手を叩いた。
「言いたいことはわかりましたわ。つまり、今度はサンドイッチ以外の、もっと手のこんだ物を作れと、そういうことですわね！？」
「いえ、そうじゃありません」
サフィアスは、ちょっと慌てた様子で言った。
「前回ミーアさまたちが作ったというのなら、今度は我々、男子チームが作るのはどうか、と提案しているのですよ」
「まぁ、サフィアスさんたちが？　でも……」
ミーアは一瞬、渋る様子を見せたが……。
「ええ。もちろん、王子殿下たちにも協力していただくと思いますよ。ああ、キースウッドくん、王子殿下用のエプロンを用意してもらえるかい？」
「えっ、エプロンっ！？」
ミーアの声が、微妙に高くなった。

「……サフィアス殿、助かりました」
二人に説得されたミーアが部屋から出て行ってすぐにキースウッドは言った。
サフィアスは、そんな彼に肩をすくめておどけて見せた。
「なに、大したことではないさ。君の様子を見る限り……アレだろう？　ミーア姫殿下の料理の腕前は、ちょっとアヤしいんだろう？」

――ああ……これは、なんということだ……。
負け戦の中で、友軍が助けに来てくれた時のような感動を、キースウッドは味わっていた。しかもその相手が、自分があまり評価をしていなかった男だというのだから、感動も一入である。
危機感の共有……、まさか、それをこの生徒会の中でできるとは、思っていなかったのだ。
そう、ミーア・ルーナ・ティアムーンのカリスマに中てられた者たちは、誰もがみな、彼女に心酔し、疑うということを忘れてしまう。それは、かの聖女、ラフィーナですら例外ではない。
自らの主シオンや、アベル王子なども、ミーアへの好意から見誤っていることがある。
人間は一面的なものではない。すべてが完璧にこなせる者などいない。だというのに、ミーアにはなんでもできると、彼女が言い出したことであれば大丈夫だと、そんな無責任な肯定がいつの間にかできあがっている。
されど、ああ、されど違うのだ。
少なくとも料理という領域においては、皇女ミーアは信用に値しない。
そんな認識を共にする者、同志がこの生徒会の中に見出せようとは……。
「いや、実は俺も、その……ね……。許嫁が一時期、調理にはまったことがあってさ。大貴族のご令嬢なんだから、そんなもの、使用人に任せておけばいいと言ったんだが、どうしても自分で作りたい、と言って意地になってね。もう、だいぶ昔のことなんだが……いや、はは、酷かったよ。今でこそ笑い話だけどね」
そう言って、快活に笑うサフィアス。
「基本的に、俺は愛する女性が作ってきた料理は残すべきじゃないと思っているんだが……、あえて強く主張したいね。そいつは、〝料理〟に限るべきだ。消し炭や生焼け肉は、料理とは言えない」
「……サフィアス殿、そのぐらいで」

キースウッドは辺りに人がいないかきょろきょろ視線を動かしつつも、頷いた。
「ああ、そうだな。まぁ、それはともかく、その時に彼女を説得したのが、今のやり方というわけだ。女というものはだね、自分で料理を作ってみたいという欲求を持つこともあれば、男が料理をしているのを眺めたい、という欲求も持ち合わせているものなのさ」
「なるほど……勉強になります」
基本的に、キースウッドはモテる。けれど、あまり一人の女性と長く深く付き合うということはしたことがなかった。というか、シオンのそばにいると、忙しくてそれどころではないことが多かった。
ゆえに、許嫁である一人の女性と付き合い続け、相手の嫌な面を知ってもなお、愛していると公言できるサフィアスに、わずかばかり尊敬の念を抱いてしまった。
その上……、
「まぁ、そんなわけで、その時に少しばかり凝ってしまってね……。彼女の弟ともども、料理の腕前には少しばかり自信があるんだ。なにしろ、命がけだったからね……。下手なものを作ると、やっぱり自分が……などと言い出しかねない状況だったものだから……」
意外な特技を暴露するサフィアス。これで生徒会男子部は、料理ができないシオンとアベル、料理ができるキースウッドとサフィアスという二対二の状況になった。サフィアスの従者も、料理ができるというのであれば、援軍を頼むこともできるかもしれない。
キースウッドは、一つの心労から解放されたわけで……、思わず、ふぅう、っと大きな息を吐いてしまう。
「そういうことであれば、是非もありません。シオン殿下には私の方から話しておきます」
「うむ。お互い、協力してこの危機を乗り切ろうじゃないか」
そうして、サフィアスが差し出した手を、キースウッドは固く握りしめた。
ここに、奇妙な友情が成立した。

国を超えた二人の友情は、サフィアスが学園を卒業して帝国に帰ってからも続くものになるのだった。帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンが悪役としての役割を果たした珍しいエピソードといえるかもしれない。

第三十九話　サフィアスの悲鳴……

話はとんとん拍子に進んでいった。
キースウッドの手配により、シオンは一も二もなく快諾。アベルもまた楽しそうに、それを了承。かくて、ピクニックに持っていくサンドイッチは、生徒会男子チームによって作られることが決定した。
――う、うぐぐ……。せっかく、わたくしの乙女力（おとめりょく）をアピールする機会でしたのに。つい、乗せられてしまいましたわ。過去のわたくしを殴ってやりたい。
などと後悔の念に囚われつつも、その朝、ミーアは調理場を訪れた。
そこを貸し切って、生徒会男子の部の面々が、サンドイッチ作りをする予定なのだ。
「あら、ミーアさん。早いわね」
入ってすぐに、ラフィーナが声をかけてきた。ちなみに、すでに制服に着替えている。
キノコ狩りに行く場所はシュトリナいわく、森の中とは言っても浅いところまでだという。ハイキングのようなものだから制服で行けばいい、とのことで、その助言に従って、今日はみんな、制服で行くことになっていた。
「ご機嫌よう、ラフィーナさま。ラフィーナさまこそ、お早いですわね。まだ、キースウッドさんたちも来てないのに……」
「うふふ、私だって、みんながどんな物を作るのか気になるもの。それに、前回、私は参加できなかったから。寂しいでしょう？」
「あ、もしかして、ラフィーナさま、サンドイッチ作り、楽しみにしておりましたの？」
「もちろんよ。せっかく、ミーアさんたちと楽しくお料理できると

思ってたのに……」
ラフィーナは、しょんぼりと肩を落とす。
「あ、ああ、申し訳ありませんでした。ラフィーナさま。わたくしが、サフィアスさんの口車に乗ってしまったばっかりに……」
大慌てで、手をわたわたさせるミーア。それを見たラフィーナは、くすくす笑った。
「ふふ、冗談よ。ミーアさん。残念だったのは本当だけれど、別に怒ったりはしていないわよ？」
それを見て、ホッと安心するミーアであったが……。
「でも……、そう。サフィアスさんが……ね」
なぜだろう……、そうつぶやいた時のラフィーナの目は、あまり笑ってないように見えた。
なんだか、サフィアスをナニカに巻き込んでしまったような、そんな予感がしたが……。
深く考える前に、新たな人が入ってきたので、ミーアは思考を中断する。
そちらに目をやったミーアは、
「まぁ！」
思わず声を上げた。
そこにいたのは、四人の男子たちだった。
先頭に立っていたサフィアス……、はどうでもいいとして、主に他の三人にミーアは目を奪われた。
サフィアスの次にやってきたのはキースウッドだった。
いつも通りの黒い執事服の上から、白いエプロンを身に着けている。普段は、いかにも女性にモテそうな優男といった雰囲気の彼がエプロンをまとうことで、ちょっぴり家庭的に見えてしまうから不思議だ。
次にやってきたのはシオンだった。
水色を基調とした制服の上から、同じくエプロンを着ている。
普通、ブレザーの上にエプロンを羽織っていたら、少しは違和感

があるものだろうが……、シオンは完璧に……一分の隙もなく、それを着こなしていた。
どんな格好でも凛々しさを失わないシオンに、ミーアは思わず呆れてしまう。
――まったく、こいつはどんな服を着てても、憎らしいぐらいによく似合いますわね。ベルあたりが見たら、歓声を上げそうですわ。あの子が寝坊助でよかったですわ。
自分のことを棚に上げるミーアである。
そして、最後の一人……。
「やぁ、ミーア、君も見学に来てたのかい？」
軽やかな笑みを浮かべるアベル。
シオンと同じく、制服の上からエプロンを身に着けた彼を見て……、ミーア、思わず固まる。
そんなミーアを見て、アベルは一転、少しだけ不安そうな顔をしてから……、
「えーと、どこか、変だろうか？　こういう格好をするのは初めてだから、どこかおかしいところがあれば、教えてもらいたいんだが……」
わずかばかり、頬を赤らめた。
美少年の、いかにも恥ずかしげな顔を見たミーアは、ただ一言……。
「……い……、いい」
それっきり、言葉を失う。
「ミーア？」
怪訝そうな顔をするアベルに、ミーアは慌てて首を振った。
「だ、大丈夫。よく似合ってますわ……。あっ、でも……」
っと、ミーアはアベルのエプロンのひもが、背中のところでほどけているのを見つける。それを直してあげようと、彼の後ろに回ろうとして……、なにを思ったのか、正面から近づき、腕を背中に回して、抱きしめるようにして、直してあげた。

「はい。これで、完璧ですわ」
それから、上目遣いにアベルを見つめ、ニッコリ可愛らしい笑みを浮かべる。
……実にあざとい！　まったく小悪魔の名に恥じぬ所業である！
不意打ちには弱いミーアであるが、自分からのアプローチに関しては、さすがは大人のお姉さん、余裕があるのだ。
美少年の照れる姿をじっくり眺めていたいという、悪い大人のお姉さん丸出しなのである！
「あ、ありがとう、ミーア。頑張って美味しいものを作るよ」
そう言いながら、アベルははにかんだ。
それを見て、ミーアは思う。
――や、やっぱり、いい……。ああ、過去のわたくし、よくやりましたわ！
そんな感じで、いろいろ満喫してしまうミーアなのであった。

……ちなみに、どうでもいいと言ったサフィアスも、制服の上にエプロンを身につけている。
まぁ、ミーア的には、どうでもいいことではあるが……。
「あら、うふふ。サフィアスさんもエプロンお似合いですよ。あ、そう言えばミーアさんに聞いたんだけど、今日のお料理会を男の子でやろうって言いだしたの、サフィアスさんなんですってね。ふーん、まぁ、別に、大したことじゃないんだけど、そうなの。へー」
「ひ、ひいいいっ！」
などという、サフィアスの悲鳴が聞こえたような気がしたが、まぁ、どうでもいいのであった。

第四十話　キノコマイスター　ミーア、森に呼ばれる！

「ふわぁ！　すっ、すごい！　ミーアお姉さま、あの天秤王がエプロンを着てます！」
調理場に入って来て早々、ミーアベルが歓声を上げた。
瞳をキラキラ輝かせつつ、シオンに目を奪われている様子……。
相も変わらずミーハーなベルである。ミーハーベルである。
――まったく、ベルは仕方がありませんわ。我が孫ながら恥ずかしいですわ。
などと呆れるミーアであったが……、前の時間軸において、シオンを初めて見た時、
「まぁあ！　かのシオン王子の制服姿！　ああ、あれこそまさに至高！　素晴らしいですわ！」
などとはしゃいでいたものである。ミーハー・ルーナ・ティアムーンであったのである。
もちろんそんなこと、とっくに記憶の彼方へ！　なミーアである。
続いて、残りの女子たちも調理場にやってきた。クロエにティオーナ、リオラにリンシャまで……。
実になんとも、ミーハーな少女たちなのであった。

「では、本日のランチに食べるサンドイッチ作りを始めましょう」
ワイワイ、女子たちが騒いでいる中、男子チームは作業を開始する。
「私はいつも通りシオン殿下のサポート。サフィアス殿は申し訳ありませんが、アベル殿下と一緒に作業をしていただけますか？」
「構わないよ。それで、メニューはどうするつもりだい？　サンドイッチの中身は？」
サフィアスは腕組みしつつ、キースウッドが並べた食材に目をや

った。
「そうですね……。無難に、前回と同じように肉を焼いたものとホワイトソース。ああ、あとは、せっかくですから、今回はタマゴを焼いて挟みましょうか」
「そうだな。女性が多いだろうし、野菜を多めにしたものがあってもよいかもしれないな」
「なるほど。確かに、肉はボリュームがありすぎるかもしれませんね。では、野菜と卵焼きのものを一種類と、焼き肉のものを一種類。あとは、燻製肉の薄切りと野菜のものを一種類ということにいたしましょう」
キースウッドとサフィアスとのやり取りを見て、ミーアは思わず唸る。
――ふーむ、なかなかやりますわね……、サフィアスさん。あのキースウッドさんと対等に相談できるだなんて、大した乙女力ですわ！　これは、負けていられませんわ！
ミーアは、ふんっと鼻息を鳴らし、
「手が足りないのではないかしら？　ここで黙って見ているのもなんですし、なにかお手伝いを……」
などと言い出した！
しかし、そんな危険に対する対処は思いのほか早かった。
なにしろ、いつもはキースウッド一人でやっていることを、今回はサフィアスもサポートできるのだ。刹那のアイコンタクトの後、動いたのはサフィアスだった。
「いえいえ、それはあまりにも恐れ多きことにございます。どうぞ、そちらでご照覧くださいますように」
実に迅速な対応である。さらに！
「今回は、シオン殿下とアベル殿下の見せ場ですから。それを取らないであげてください」
諭すように、キースウッドが被せてくる。
「そっ、そうですの？　そういうことでしたら……まぁ……」

見事な連携に、完全に動きを封じられたミーアであった。
そんなミーアの目の前で、王子たちの料理が始まった。
「では、アベル殿下、我々はその野菜を切りましょうか。ああ、押さえる方の手は握りこぶしで、そうそう、そうすると指を切らずにすみます」
「ほう……」
ミーアは、思わず瞠目した。
サフィアスに手取り足取り教えられているアベル。それを見て、ミーアはニマニマ、頬を緩めてしまう。
――ふふふ、あの、アベルのちょっぴり不器用だけど一生懸命なところ、イイですわね！
などと、微笑ましく眺めていたのだが……、けれど……、しばしの後、ミーアは気づいてしまった。
野菜を切るアベルの手つき、それが、徐々にさまになってきて……。
――あ、あれ、わたくしより上手いのでは？
気づいてはいけないことに、ミーアは気づいてしまったのだ。
そして言うまでもなく手先が器用なシオンもまた、卒のない手際で、パン生地を作っていく。女子たちの視線はシオンにくぎ付けだ。
さらにミーアにとって誤算だったのは、サフィアスの料理上手ぶりだ。明らかに、ミーアを上回っている。
つまり、ミーアは……、というか、この場に集う名だたる女子たちのほとんどは……。
――生徒会男子部に……負けておりますわ！
恐るべき事実を前に、ミーアは愕然とした。
今回の課題は、乙女力なるものをアピールすることである。その点では、この状況は絶対的にまずかった。
「あっ、そ、そうですわ。でしたら形を凝るというのは……。やはり、料理とは目をも楽しませるもの。前回は馬の形でしたし、今回はキノコの形とか……」

などと提案を始めるミーアだったが……、今回もキースウッドらの反応は早かった。
「いえ、大丈夫です。ミーア姫殿下」
疾風のキースウッド。
「でも……」
「本当に大丈夫ですから」
鉄壁のサフィアス。
さらに……
「ああ、ミーア、心配してくれるのはありがたいんだが、もう少しだけボクたちにやらせてくれるかい？」
愛しのアベルにまでそう言われてしまえば、ミーアとしてはもう何も言えない。
その後も、ミーアは王子たちの腕前を大いに見せつけられて……、敗北感に打ちひしがれた。
――こっ、これは明らかに、わたくしより手際が良いですわ……。
超人なシオンならばともかく、努力の人であるアベルと比べても、明らかに劣る自らの手腕。
自分ではとても太刀打ちできない……。そう察したミーアは、なんとか自己の存在を誇示しようと、頭をひねり……ひねり、やがて……、一つの真理へと到達した……、してしまった……！
それは……。
――そうですわ。勘違いをしておりましたわ。わたくしは帝国の食道楽（グルメ）ではない。わたくしは帝国の叡智。乙女力などという言葉に乗せられるべきではなかったのですわ。わたくしがアピールすべきは溢れる知識量。そして、ベテランキノコガイドとしての手腕だったのですわ！
……その場合でも、結局、アピールしているのは食べ物のことなのでは……などとツッコミを入れてはいけない。
触れてはならぬことというのがこの世にはあるのだ。
「やってやりますわよ！　美味しいキノコ鍋のために！」

男子たちの乙女力に触発され、ミーアの中のナニカが燃え上がる。
その熱情に背中を押されるように、ミーアは自室へと戻った。
「アンヌ、着替えますわよ。こんな制服で森に入るなど、キノコマイスターの名に相応しくないですわ！」
「はい。わかりました。ミーアさま！」

まるで、なにかに誘われるかのように、ミーアの心は森の奥深くに誘われていくのだった。

第四十一話　怪奇！　キノコ皇女！

さて、ランチのサンドイッチ作りも無事に終わり、キノコ狩りの準備は整った。
生徒会のメンバーは各々準備を整えて、学園の校門のところに集合した。
残るは生徒会長、ミーアを待つのみというところで……。彼らは――――見たっ！
遠くから接近してくるシルエット……、その形は、まさしく……
……キノコだった！！
その小さな頭にかぶるのは、キノコの傘のような白い帽子だった。その体には、分厚い長そでの服と同じく厚みのあるズボン。足にはくのは、山を行く猟師がはくような、無骨なブーツだった。
「え……？」
愕然としたその声が、いったい誰のものであったのかは定かではない。定かではないが、誰が出したものであっても、不思議ではないだろう。
それほどに衝撃的な、ミーアの服装だったのだ。
「ご機嫌よう、みなさま。最高のキノコ狩り日和ですわね」
ニコニコ、上機嫌な笑みを浮かべるミーア。そんな彼女に、シュトリナが代表して口を開いた。
「あのミーアさま……、そ、その格好は……？」
「ああ、リーナさん」
ミーアはシュトリナの方に目を向け、その服が普通の制服であることに、ちょっぴり勝ち誇った笑みを浮かべる。
「実はね、リーナさん、わたくし、この夏、無人島で過ごすという貴重な経験をいたしましたの」
「え？　えっと、無人島、ですか？」

「そう、エメラルダさんと遊びに行ったのですわ。あれは……なかなか大変な経験でした。まぁ、それはいいですわ。それで、その時に学んだことですけれど、山とか森で肌を出しているのは、あまり賢明なことではございませんの」
ミーアは、まるで子どもを諭すかのような穏やかな笑みを浮かべる。
「森の中で肌を露出させていたら、虫に刺されるかもしれませんし、傷を負う可能性もないとは言えないでしょう？　ですから、森に入る時に長袖、長ズボンをはくことは、理にかなったことと言えますわ」
「で、でも、今日行くのは森の入口近くで……」
「入口といえど、森は森ですわ。油断は禁物。低い山だからと準備を怠り、油断して足を踏み入れれば思わぬことに足をすくわれるもの。しっかりとした備えは必要なのですわ」
……などと、正論めいたものを吐くミーアであるが……、そのいかにもベテランキノコガイドといった風貌のミーアに、何人かの者が心の中でツッコミを入れる。
「こいつ、絶対、森の奥まで入って行くつもりじゃねぇか！」っと。
そして、シュトリナもまた、そのことを察した一人だった。
彼女は、一瞬、すとん、っと表情を消したが……、すぐにまた、いつも通りの笑顔を取り戻した。
「そうですね。さすが、ミーアさま。準備は大事ですよね」
「ええ、その通りですわ。しっかり準備をして臨まなければ、キノコに失礼というものですわ」
まるで、キノコの化身の女神さまのごとく、神々しささえ感じさせる顔で、ミーアは言う。
そんなミーアを見て、シュトリナは迷った。
――ミーア姫殿下が、森の奥まで行くつもりなのは確実みたいだけど……、それは、リーナが話したヴェールガ茸を見に行きたいから？　それとも……あのことに気づいたから？

華やかな笑みを浮かべつつ、シュトリナは考える。
――いや……、それはないかな。やっぱり、リーナが余計なこと言ったから、好奇心を刺激されてしまったのかしら……。だとしたら、失敗したな。
これは警戒すべきもの、これは注意すべきものと特別に名前を挙げることは、そのものに注意を向けさせることでもある。意識の外に置いておいた方が、むしろ隠し通すことができるということも往々にしてあるわけで……。
――まぁ、一緒についていくんだし、ミーア姫殿下が森の奥に行きそうになった時に、さりげなく注意をそらすようにすればいいかな……。それに、あれがあるのは確か崖みたいになってるところの下だったから、普通に行っても見つからないはず……。
などと考えていたところで、
「えへへ、リーナちゃん、楽しみですね」
すぐそばで、ベルがにこにこと笑みを浮かべていた。ちなみに、ベルの方はシュトリナと同じく、普通の制服姿である。
「キノコ狩りって、ボク、したことなくって。リーナちゃんはどうですか？」
「んー、リーナも、こんな風にみんなでワイワイ行くのは初めてかな」
そうして、ふと、シュトリナはベルの鞄（かばん）に目をやった。
「あっ……、それ」
ふと気づく。ベルが鞄につけていたもの、それは、先日、シュトリナがプレゼントされた馬のお守り（トローヤ）だった。
「あ、えへへ。リーナちゃんと同じのを作ってみたんです。お揃いになるかなって」
「ああ、あのお守りね。リーナもつけてくれればよかったかな。汚したらいけないと思って、大切に机の中に入れてあるんだけど……」
「あはは、リーナちゃんは心配性ですね。どんなに大切にしてても汚れたりなくしたりするものですから、気にしないで使っても大丈

夫ですよ。ダメになっちゃったら、また、ボクが作ってあげますから」
にこにこ、無邪気な笑みを浮かべるベル。そんなベルを見ていると、なんだか少しだけ……。
――どうでもいい、そんなの……。
シュトリナは、首を振って、
「ありがとうね、ベルちゃん。じゃあ、今度から、つけるようにするね」
いつもの通り、花が咲くような可憐な笑みを浮かべる。綺麗な、とても綺麗な……笑みを浮かべるのだった。

第四十二話　キノコファースト！

学園を出て歩くことしばし。目的地である森に到着して早々に、一同は感嘆の息を吐いた。
眼前に広がったのは、美しい黄色に染まった森だったからだ。
木漏れ日の降り注ぐ黄色の道。鮮やかな明るさに包まれた森の黄色は、目を奪うような華やかさで、ミーアたちを迎えてくれた。
「不思議な森ですわね……」
思わずつぶやいたミーアに、すぐ後ろで、ラフィーナが微笑みを浮かべる。
「あら、ミーアさん、もしかして紅葉（こうよう）を見るのがはじめてかしら？」
「こうよう？　それは、この木の種類ですの？」
前の時間軸、森になどまるで興味がなかったミーアだが、摩訶不思議な木に、ついつい目を奪われそうになる。
「うふふ、紅葉というのは、秋になると木の葉の色が変わる現象のことよ。赤くなる種類もあるけれど、ここに植わった木は黄色く染まるの」
「まぁ、そんな不思議なものがあるんですのね……」
言いつつ、ミーアはちょっぴり妄想する。
――ふむ、この森であれば、学園からも近いですし……。今度、アベルと二人きりで来るというのも、悪くないですわね……。そこで、手を繋いで、ふむ……、悪くない！
などと、考えていたところで……。
「……黄色の森」
ふいに、ミーアの耳に声が聞こえる。
目を向けると、そこにいたのは、森を見つめるシュトリナだった。
いつでも華やかな笑みを浮かべている彼女だが、今は完全にその表情が消えていた。

「どうかなさいましたの？　リーナさん」
不思議に思い、声をかけてみるミーアであったが……。
「あ、いえ、なんでもありません。ただ、色合い的に、我がイエロームーン公爵家とご縁がありそうな木だなって思ってしまいました」
まるで言い訳するように言ってから、シュトリナは普段通りの笑みを浮かべる。
「ふふふ、そうですわね。わたくしもイエロームーン公爵家の関係者でしたら、黄色く染まる森に興味を抱かずにはいられなかったと思いますわ」
「わかっていただけて、嬉しいです。それでは行きましょうか」
そう言って、シュトリナは歩き出した。

森は、全体が美しい黄色に彩られていた。頭上だけでなく、落葉によって、足元の地面にも黄色い絨毯が広がっている。
「ふわぁ！　すごい！　すごいですね、ここ！」
ミーアベルがぴょんぴょん跳ねながら、森の中に駆け入って行く。
「あっ、ベルちゃん、気をつけて。この落葉は、踏むと滑るから」
まるで、お姉さんのように、シュトリナがその後を追い、さらにその後からリンシャが、やれやれ、と肩をすくめつつ追いかけていく。
「これが、紅葉というんですね。私も初めて見ました」
クロエが黄色い葉っぱを物珍しげに拾えば、
「本当、黄色い葉っぱなんて珍しいな……。あ、セロにお土産に押し花にして送ってあげようかな」
などと、ティオーナも葉っぱを拾う。
「ああ、森、懐かしい、です。こんなところがセントノエルにもあったなんて……」
ティオーナの後ろでは、リオラが上機嫌に鼻歌を歌っていた。
男子たちも、物珍しそうに、森の中を眺めていた。
「美しい場所ですね、ミーアさま」

ミーアの傍らで、アンヌが気持ちよさそうに瞳を細める。実に、和やかな空気が、一行の中に流れていた……のだが。
「楽しい一日になるといいですね」
そう話しかけられたミーアは、
「ええ、そうですわね……」
などと相槌を打ちつつも、その声は、どこか上の空だった。
ミーアは他のメンバーとは違い、鋭い目で周囲を見回していた。その視線の向かう先は、頭上の木の葉でも、足元を飾る落葉でもない。木の根元に生えているキノコのみだ！
どこまでも、キノコ至上主義（キノコファースト）なミーアである！
す、す、っと……。切れ味鋭い視線で、辺りを警戒していたミーアであったが……、不意に、何かを見つけたのか、無言で走り出した！
――あれは……間違いございませんわ、キノコっ！
獲物に向かう猛獣のごとく、キノコに駆け寄るキノコハンター・ミーア！　どこまでもキノコファーストなミーアである！
今のミーアの眼には、もはや、キノコしか入らない！　キノコ以外、何も目に入らないのだ！
だからっ！　当然、足元も目に入らなくって……つるんっ！　と、踏み出した足が滑った。
「はぇ？」
びゅんっと上がった足。それを追うようにして、黄色い落ち葉が舞い上がる。そうして、気づいた時にはミーアの体は宙に浮いていた。
「……はぇ？」
視界がものすごい勢いで回り……、体がものすごい勢いで後ろに倒れて行って……、ミーアは思わず、瞳をギュッと閉じて……。
「っと、危ない。気をつけて」
直後、そんな優しげな声とともに、ミーアは何者かに抱き留められた。

「……はぇ？」
間の抜けた声を出し、瞳を開けたミーア。その視界に映りこんだのは……、
「大丈夫かい？　ミーア」
ミーアの顔を覗き込むアベルの顔だった。
だが……、今日のミーアは、キノコハンターモードである。キノコファーストなのである！
だから、アベルに抱き留められようが、どうということはない。
そう！　今のミーアの眼には、キノコ以外のものが入らな……。
――ああ、アベル……、実に凛々しい顔ですわ……。先ほどのエプロン姿とのギャップが、実に……イイですわね！
……全然キノコファーストじゃなかった。
「ミーア、大丈夫か？　どこかケガでも……」
「あ、ああ、いいえ、大丈夫ですわ。全然、問題ございませんわ」
ミーアは慌てて、アベルから離れた。
「と、とんだ醜態を……」
っと、頬を赤くするミーアに、アベルは小さく首を振り、
「別に、醜態ということはないが……、ふふ」
それから、悪戯っぽい笑みを浮かべて、ミーアの髪に手を伸ばした。
「え……？　あ、え……？」
混乱するミーアの目の前で、アベルは、ミーアの髪についていた落葉を取って、
「ふふ、ミーアはどんな髪飾りをつけても似合うな」
そんなことを言ってから、行ってしまった。
後に残されたミーアは……。
「……はぇ？」
キノコのことが頭から飛びかける、エセキノコ至上主義者（キノコファースト）なミーアなのであった！

第四十二話　キノコファースト！（後書き）

活動報告更新いたしました。
２巻の特典情報と、応援イラストを掲載させていただいております。

第四十三話　老ルードヴィッヒの神学的推論

「ルードヴィッヒ先生、神さまは本当にいるんでしょうか？」
その日、やって来て早々にミーアベルが投げかけた質問に、ルードヴィッヒは首を傾げた。
「ふむ……突然、どうされたのですか？　ミーアベル殿下」
とりあえず、なんとか手に入れた茶葉を用意して紅茶を淹れつつ、話を聞いてみる。と……、
「実はここに来る途中で、先祖の叡智が手に入る≪神の壺≫というものが売ってたんです。値段がちょっぴり高かったけど、これを使えばミーアお祖母さまのお知恵が借りられるのではないかと思って……」
期待に瞳をキラキラさせつつも、そんなことを言うミーアベル。ルードヴィッヒは、彼女のチョロさが若干心配になりつつも、しばし黙考する。
答えを出すのは簡単なことだ。帝国は、中央正教会の築いた宗教圏の中にある。だから、そこに住まう者たちは素朴に、神がいることを信じている。
だから「いる」と言ってしまえば良いし、もし仮にミーアベルが、皇女に返り咲くことができた時のためにも、そう教えておいた方が良いはずだった。
けれど、とルードヴィッヒは思い直す。型通りの答えを出すのは簡単なことだが、それでは彼女のためにならない、と。
「思考をする」ことは貴重だ。ゆえに、ただ答えを与えるのではなく、ミーアベルに考えさせることを目的として、ルードヴィッヒは論理展開を組み立てる。
「そうですね……。私は神という存在はいると思っています」
そこまでは、ごく普通の見解だ。が、そこに根拠を付け加える。

「そうでなければ、説明がつかないことが世界にはたくさんありますから」
「例えばどんなことですか？」
きょとん、と首を傾げるミーアベルに椅子を勧めつつ、ルードヴィッヒは眼鏡の位置を直した。
「そうですね……。例えば、わかりやすいのは人間でしょうか。ミーアベル殿下や私のような」
「へ……？　ボクやルードヴィッヒ先生ですか？」
不思議そうに瞳を瞬かせるミーアベル。ルードヴィッヒは悪戯っぽい笑みを浮かべると、眼鏡をはずして、ミーアベルの前に置いた。
「この眼鏡、よくできているとは思いませんか？　なぜ、これで目がよりよく見えるようになるか、ミーアベル殿下は考えたことがありますか？」
ベルは、それを手に取り、レンズを覗いてみたりしながら、小さく首を振った。
「この眼鏡という道具は細かい原理はおいておくとして、大昔の賢者が知恵を絞り、人間の目の構造を考え、どのように見えているかを調べ、そして、ズレを調整するという〝意思〟を持って仕組みを考えたもの。これは、知恵を持つ者が、『こういうものを作ろう』という想いを持って生み出したものです。例えば、この眼鏡の材料である硝子や鉄を無造作に置いておいたからと言って、意思を持たぬ雨が削り、知恵を持たぬ風が形を整える、ということはないでしょう？」
ルードヴィッヒは眼鏡をかけなおして、続ける。
「では、この眼鏡を作り、使う、人間はどうでしょう？　多くの絡繰り細工や芸術品より、さらに繊細で完成された人間というものは……、いったいどのようにして作り出されたのだと、ミーアベル殿下は思いますか？　風や雨が土を削り、作り出したものであると思われますか？」
「いいえ、思いません」

そう言って、ミーアベルは小さく首を振った。
ルードヴィッヒは神、すなわち人間よりも力を持ち知恵を持ち、世界を設計した存在がいると、思考の末に確信していた。
その方法はわからないまでも、ルードヴィッヒは信じているのだ。人間、そして、この世界は少なくとも、知恵を持つものが「作ろうという意思」を持って作り出したものであると……。
そうでなければ説明がつかぬものが、この世界には多すぎるのだ。人間だけではなく、動物も植物も、虫も……。
誰かが綿密に設計し、作り出したと、そう考えざるを得ないと……彼は判断していた。
ふいに、かつて師に言われたことを思い出す。
『この世の事象すべてを、なにも考えることなく神と悪魔のせいにしてしまうことは、“人間を思考するもの”として設計した神の御心に背くことになる。それは神の御業を素晴らしいものとする信仰と矛盾する。されど、この世の事象すべてと、神と悪魔が無関係であるという方向性をもって思考することもまた、視野を狭め、我らが思考の自由を阻害することになる』
それ以来、ルードヴィッヒは、出来うる限りバランス感覚を持って物事を見られるように、自身を律してきたつもりだった。
できることならば、ミーアベルにも、そのように考える癖を身に着けてほしいと願う彼であったが……。
「では、やっぱり神の奇跡の壺も、本物ということですか！？」
ウキウキ顔で今にも飛び出して買いに行きそうなミーアベルを、ルードヴィッヒは慌てて止めた。
「落ち着いてください。ミーアベル殿下。神がいたとして、奇跡の壺などというものがあるかは別問題です」
「へ？　なぜですか？　ルードヴィッヒ先生」
再び、きょとん、と小首を傾げるミーアベル。
どこからどう聞いても怪しいだろう！　というツッコミを飲み込んで、ルードヴィッヒ、しばしの黙考。その後に再び口を開く。

「仮に世界を作ったのが神だとします。綿密に≪世界を律する理≫を、神が組み上げたとします。しかし、奇跡とは、その世界を律する理を覆すもののことではないですか？」
死んでしまった先祖の知恵は手に入らない。それは世界の理だ。壺の起こす奇跡とは、その理を覆すものである。
ミーアベルは小さく首を傾げてから、
「はい、そうです！」
などと……、わかっているのか微妙な、ちょっぴり元気のいい返事をした。
苦笑しつつ、ルードヴィッヒは続ける。
「自身が丁寧に作った理を覆すような真似を、そうそう神がなさるでしょうか？　私であれば、自分が大切に作ったルールをそう簡単に破ろうとは思いませんが……」
奇跡とは、滅多に起きないもの。もしそれが起こるとするならば、それこそ、世界全体が壊れるほどの危機が訪れた時ではないか？とルードヴィッヒは考える。適当に作った理であれば、簡単に破るのかもしれないが、この世界を律する理は、調べれば調べるほど完成している。
――しかし、そうなると、あながち今この時に奇跡が起きても不思議ではないような気もするな……。司教帝ラフィーナの暴挙、サンクランド、ティアムーンの危機。多くの人が死に、歴史が壊れてしまうかもしれないこんな時だからこそ、あの方の叡智を借りるなどという奇跡が、もしかしたら起こるかもしれないが……。
ルードヴィッヒは首を振って、その考えを頭の端に追いやる。それから、ミーアベルを見つめた。
「奇跡とは、必要があってこそ起きるもの。決して安直に手に入るものではございません。だからこそ、この世の理を大きく外れるような奇跡を謳う者が居た時には深い注意が必要です。都合よく神の名を騙り、こちらを騙そうとする者はいくらでもいるのですから……」

その日の勉強の途中、いつものように気持ちよさそうに居眠りするミーアベルを横目に、ルードヴィッヒは先ほどの会話を考えていた。
「すべての物事は論理づけることができる。そして、神の奇跡などというものは、容易に起きるものではない……。神の奇跡……そして、祝福された地もまたしかり、か……」
“神の祝福”によって、毒を持つ植物が一切存在しないセントノエル島。
厳戒な警備を敷き、外部から毒を持ち込むことも不可能なはずの学園内で起きた大量毒殺事件……。
大陸を揺るがした重大な事件に対しては、様々な憶測や推論が存在している。
警備の不備を突いて外から持ち込まれた説や、なんらかの条件下でしか毒性を発揮しない特殊な毒であった説など。いくつかの有力な説はあれど、未だ定説と呼べるほどのものは存在していなかった。
その後に訪れた大陸の動乱期のせいで、事件の記憶は薄れて、真相の解明は不可能と言われていた。
恐らく後の歴史家たちは、世紀の謎などと言って書き記すことだろう。が……、
「思い込みとは、恐ろしいもの。結局、そういうことなのだろうな……」
ルードヴィッヒ・ヒューイットには、そのやり方の見当がついていた。
それは、警備の隙を突くわけでもなく、なにか複雑な毒を使ったわけでもなく……。
もっともっとわかりやすいこと、ちょっとした思い込みを利用したトリック。
すなわち……、
「”神の祝福”によって、清浄なる水が流れるセントノエルには、

毒性の植物は育たない……。その前提が、そもそもの間違いだ……」
セントノエル島には神の祝福を受けるような、特別な伝承は存在していない。だから、セントノエル島が仮に祝福を受けていたとしたら、それは、〝祝福を受けた国である神聖ヴェールガ公国の一部だから〟という理由以外にはない。
だが、それでは祝福を受けた国、ヴェールガには毒草の類は存在しなかっただろうか？
それは否、である。偽ヴェールガ茸は、その名の通り、ヴェールガ公国内に広く存在する毒キノコだ。つまり、神が祝福した土地であったとしても、毒を持つものは厳然と存在するのだ。
だというのに、セントノエル島にだけ毒草の類が存在しないというのは、論理的矛盾だ。
「理屈で考えるならば……、セントノエルに毒草の類は生えないというのは、ウソということになる」
では、それがウソだとすると、それは果たしてどういうものだったのか？
害意のない迷信、特に意味のないウソという考え方はもちろんできる。
だが、積極的な目的を持ったものという可能性も十分にある。
≪神の壺≫の場合、その『目的』は高く売りつけるためだが……、では、セントノエル島の場合にはどうか？
「警備の目を誤魔化すため……というのは、有力な候補だろう……」
毒物を「持ち込むこと」ができなくとも、もともと、島に毒性の動植物が存在していたのでは何の意味もない。にもかかわらず、警備にあたっていた者たちは油断した。
外から持ち込ませなければいいのだと、そこに力のすべてを注ぎ、島の中のことを考えに入れていなかった。
「盲点は、その奇跡に対する信仰……」
大陸の動乱期にあって、ルードヴィッヒはその事件について調べていた。

結果、一つの奇妙な事実を発見した。
それは、セントノエル島に対するその風説が……意外にも、そこまで古いものでないということ。
いつの時点か、はっきりとしたことは言えない。けれど「セントノエルに毒草は生えない」という噂は、セントノエル学園が開校した当初には存在しないものだったのだ。
初期の生徒の中には、危険かもしれないので、不用意に島の植物に口をつけるな、との注意がなされていたという記録が残されている。
いつの時点からか発生した奇妙な迷信。もしも、それを流したのが、セントノエル島内に強力な毒草を見つけた者だったとしたら……？　〝些細なきっかけ〟で偶然にも足を踏み入れた場所で、強力な毒物を発見してしまった者だったとしたら……？
そして、その迷信が、警備の目を外から入ってくる毒物のみに向けるために、意図してバラまかれた噂であったとしたら……。
「その当時の警備責任者、サンテリ・バンドラーという男は、三十五年間、島の警備についていた。彼が赴任するより前から、その情報が流されていたとしたら……」
はたして、誰がその噂を流したのか……。
彼はすでに調べ、推論を立てていた。その当時、セントノエルに通っていた人物、そして、暗殺事件があった頃、偶然にも、年老いてから授かった娘が同じくセントノエルに通っていた、そんな人物のことを……。
「イエロームーン公爵……、最弱にして最古の貴族……。いったい何を考えていたのだろう……」
ルードヴィッヒは過去を見通さんとするかのごとく、瞳をそっと細める。けれど、すぐに疲れたため息を吐いた。
「もっとも、仮にわかったところで詮無きこと、か。あの方は逝ってしまわれたのだ。今さら、司教帝ラフィーナに真相を明かしたとて、彼女が止まることはないだろう。口惜しいことだ」

そんな苦いつぶやきを、ベルが聞くことはなかった。

第四十三話　老ルードヴィッヒの神学的推論（後書き）

本日、活動報告更新いたしました。

第四十四話　至福！　ミーア、ついにキノコを……採る！

さて……、アベルとちょっぴり……ほんのちょっぴーりだけイチャついた後にも、ミーアには幸福な時間が待ち受けていた。

「お、おお……」

改めて、先ほど見つけたキノコに歩み寄るミーア。

それに手を伸ばそうとして……ふと、不安を覚える。

どこかから邪魔が入らないかと……心配になったのだ。

レムノ王国の時には、猟師のムジクから横槍が入った。

無人島でも、なんやかやで、キースウッドが野草しか採らせてくれなかった。

帝国でも、料理長からキノコには手を出すな！　と止められた。

それが、ようやく……ようやくっ！

ミーアは震える手をキノコに伸ばす。と、キノコに触れる寸前、その手が止まる。それから、ミーアはシュトリナの方を振り返った。

以前に出会った、赤くてヤバイキノコ……火蜥蜴茸（サラマンドレイク）のことを思い出したのだ。

――あのキノコは、確か、触れただけで大変なことになったはず……。

確認するようにシュトリナを見つめる。と、シュトリナはミーアの手元を覗き込み……、そっと頷いた。

瞬間、ぱぁっ！　とミーアは笑みを浮かべた。

それから思い切って手を伸ばし、キノコに触れる。

――ああ……キノコとは、こんな手触りなんですのね……。ひんやり冷たくて、ちょっぴりザラザラしておりますわ。

感動に打ち震えつつも、ミーアはそのキノコを優しく摘み取った。

茶色くて、ごつごつ、岩のような見た目をしたキノコを……。

「おめでとうございます。ミーアさま。それは、茶岩茸（ちゃいわたけ）ですね」

「茶岩茸……。食べられるんですの？」
「少しエグみがありますけど、食べられないことはないと思いますよ」
その言葉を聞いて、ミーアの中にジンワリと感動が沸き上がる。
――ああ、わたくし……ついに自らの手で食べられるキノコを採りましたわ！
苦節一年と少し……、ようやく禁じられたキノコ狩りに興じることができたミーアは、大層ご満悦だった！
「さっ、じゃんじゃん採りますわよ！」
張り切るミーアは、一心不乱にキノコを刈り取っていく。
黄色い葉っぱに埋もれるようにして顔を出していた青いキノコを手に取る、と……。
「あっ、それは茶岩茸に近い種類で、青岩茸ですね。とても固いですが、じっくり煮込めば多少軟らかくなりますから、食べられないことはないと思います。毒もありません」
すかさずに、シュトリナが説明してくれる。頼りになるキノコガイドである。
「ふむ、なるほど。これが青岩茸……。本で読んだ覚えがありますわ」
などとつぶやきつつ、次のキノコへと向かう。
シュトリナのアドバイスのもと、選んだコースは絶妙だった。いろいろな場所に生えるキノコを見て、ミーアのテンションは天井知らずに上がっていった。
「あっ、こんなところにも……！」
次にミーアが見つけたのは、ミーアが被る帽子ほどもある巨大なキノコだ。
「あ、すごい！　ミーアさま。それは、鬼岩茸（きがんたけ）ですね。そんなに大きいのはなかなかないですよ。ちょっとだけ大味でエグみがありますけど、食べられなくはないです」
さらに、青い巨大なキノコに手を伸ばすミーア。すかさず、シュ

トリナがやってきて、
「それは青鬼岩茸（あおきがん）です。鬼岩茸の仲間で、やや苦いですが、頑張れば食べられますね」
などと解説してくれる。大変、優秀なキノコガイドっぷりである。
「うふふ、大戦果ですわ」
そうして思う存分キノコをむしり取って、幸せそうな笑みを浮かべるミーアであったが……ふと、そこで我に返る。
――あら……？　妙ですわね……。なんだか、わたくし、あまり活躍できていないような……？
思い返してみると、ただ好き勝手にキノコを採っていただけのような気がする……。帝国の叡智を披露しようと、せっかく気合を入れたというのに、まったくもっていいところを見せられていない。
その原因をミーアは、自分より先に解説を入れてしまうシュトリナに求めた。
――ふむ……、わたくしがキノコに多少詳しい森の熟練者（モリガール）とはいえ……、本職とは言いがたいですし、知識において負けてしまうのも無理からぬことですわね……。
……まぁ、シュトリナも別に、本職というわけでもないのだが……。
ともあれ、ミーアは自らの森の熟練者としてのプライドを守るため、シュトリナに言った。
「あの、リーナさん？　わたくしだけではなく、他の方のガイドもしてくださって構わないんですのよ？」
「はい、わかりました。ミーアさま」
ニコニコ、可憐な笑みを浮かべるシュトリナであったが、一向に離れてく様子はない。自分でキノコを採ろうともしない。
なぜか、ミーアにがっちりと張り付き、見張っているかのように、目を離さない。
もちろん帝国貴族の令嬢として、皇女のそばに付き従うという姿勢は、間違ってはいないのであろうが……、これではまるで、専門

家を伴って森に狩りに来た大貴族の子どもである。お子さまである。
ミーアの〝キノコ（キノガール）の熟練者〟としてのプライドは大いに傷ついた！
……いやまぁ、別にミーアはキノコの熟練者ではないのだが……。
さらに、一度冷めた頭で考えて、ミーアはあることに気が付いた。
――しかも、わたくしが採ったキノコって、エグかったり苦かったり大味だったり、なんだか、微妙なキノコばかりのような……？
よくよく考えると、シュトリナはずっと「食べられないことはない」と微妙な解説を入れていたような気がする！
――いえ、違いますわ。きっとこの辺りに生えているのが微妙なキノコばかりで……、場所が悪いだけですわ！
「リーナちゃん、このキノコ、どうでしょう？」
「あっ、ベルちゃん、すごい。それは鮫卵茸（キャビフ）ね。とっても美味しいキノコよ。お鍋に入れると、もう、ほっぺがとろけちゃうんだから」
――場所が悪いんですわっ！
ミーアお祖母ちゃんのプライドは大いに傷ついた！
――こうなったら、やはり、行かなければならないようですわね……。森の奥地……、絶品キノコの群生地に……！

第四十四話　至福！　ミーア、ついにキノコを……採る！（後書き）

本日、コミカライズの方も更新です。

第四十五話　ミーア姫は揺らがない　パート2

「ミーアさん、そろそろ、お昼にしない？」
そうラフィーナに声をかけられるまで、ミーアは一心不乱にキノコを採り続けていた。その鬼気迫る姿に、誰も声をかけられなかったのだ。
結果、アンヌに背負ってもらっていたカゴにはキノコが山のように入っていた。
そのうち、六割は『なんとか岩茸』という、ちょっぴりエグみの強いキノコである。二割は、苦みの強いキノコで、残りの一割が普通に食べられるものである。
微妙な戦果に、ミーアは渋い顔を見せた。ベテランキノコガイドとしては、納得のいかない戦果である。
「もう少しだけ……」
と言いかけるミーアに、ラフィーナは困ったような顔をした。
「企画を立てた者として成果を上げなければいけないという気持ちはわかるけど……、でも、ほら、アンヌさんが疲れてしまうわよ」
言われてミーアは、はたと気づく。
確かに、好き勝手にキノコを採るだけならまだしも、それを持たされているアンヌはたまったものではないだろう。
「言われてみればそうですわ……。アンヌに無理をさせてしまいましたわ」
ミーア、ちょっぴり反省する。
「ごめんなさい、アンヌ。疲れたでしょう？」
「なにをおっしゃいますか。ミーアさま、こんなの全然大したことないですよ」
朗らかに笑い、どんと胸を叩くアンヌ。それから一転、
「ですけど、私のことはともかくとして、ミーアさまは一度、休憩

を取られるのがよろしいと思います。無理は禁物ですから」
ミーアを気遣うような顔をする。
それを見て、ミーアは少しだけ感動する。
――アンヌはやっぱり忠義の人ですわね……。わたくしに文句一つ言わないなんて……。
感動して……、
――アンヌは森の素人……、わたくしのような森の熟練者ではないのに、こんなに無理をして……。
感動して……？
――この忠義に応えるためにも、精一杯、美味しいキノコ鍋を作らなければなりませんわ！
ブレないミーアの決意である。

そうしてミーアたちは、野原にやってきた。そこではすでにランチの準備ができていた。地面に敷かれた敷物には、みなが思い思いに座って楽しげに談笑している。
意外なことにミーアが口から出まかせで言ったこと、すなわち生徒会の結束を強めるという目論見は、意外なことに見事に成功していた……意外なことに！
共に料理を作ることで、結束を強めた男子チーム。特に、今までは微妙に距離があったサフィアスは、見事にその中に溶け込んでいた。
女子チームの方も、森の中の楽しい雰囲気ですっかり盛り上がっている。
「こういうのも悪くないですわね」
それを見たミーアも、なんだか楽しくなってきた。言うまでもないことではあるが、前の時間軸、こんな風に楽しく森でランチタイムを過ごしたことなど、一度もなかった。
「そうね。貴族も平民もなく、みんなで野原に座ってサンドイッチを食べる……。さすがはミーアさん、とっても素敵なランチタイム

だわ」
すぐそばでは、ラフィーナがなにやら感動した様子で微笑んでいた。
「ミーアお姉さま、こっち、こっちです」
そんな時、ベルの呼ぶ声が聞こえた。誘われるがままにミーアは敷物の上に腰を下ろした。
ちなみに隣にはアベル。反対側にはシオンが座っている。
両手にイケメン状態である。
我が世の春を謳歌するミーアである！
……もっとも、お忘れかもしれないが、その格好は微妙に残念なキノコルックである。
両側にイケメン王子を従えたキノコ姫ミーアなのである！
ちなみにちなみに、シオンの隣はベル、その隣がシュトリナになっている。
ベルはベルで、ちゃっかりご満悦であった。
「そちらの戦果はどうだったんだ？　ミーア。帝国の威信は保たれたかな？」
座るや否や、シオンが話しかけてくる。珍しく、おどけた様子のシオンを見て、ミーアは微笑ましい気持ちになった。
――うふふ、いかにシオンといえど、しょせんはまだまだ子ども。この程度ではしゃぐなんて、とんだお子さまですわ！
自身のことは棚上げにしつつも、ミーアは挑戦的な笑みを浮かべる。
「ふふふ、まぁ、少なくともサンクランドには負けませんわよ、シオン」
「そうかな？　あまり大口を叩かないほうがいいと思うが……」
そう言ってシオンが視線を向けた先……、そこにはかごいっぱいに入ったキノコの山があった。しかもミーアの記憶が正しければ、シュトリナが「美味しいキノコだ」と言っていたものばかりである。
ミーアはぐぬ、っと唸りつつ、自らのキノコの山を見た。ミーア

の記憶が正しければ、シュトリナが「食べられないことはない」と言っていたものばかりである。
「……勝負はまだ……、まだまだ、これからですわ」
絞り出すように、負け惜しみを言うミーア。それを見て、シオンは楽しげに笑って、
「ふふ、そうだな。しっかりと英気を養って、午後の時間に備えるとしよう」
余裕の態度で言った。
と、そんなやり取りをしているミーアの目の前に、すっと水の入ったグラスが差し出された。
「お疲れさま。ミーア。その格好では暑かったのではないかね？」
「まぁ、アベル、ありがとう。助かりますわ」
確かに、全身を覆う服は、少しばかり暑かった。汗をぬぐいつつ、アベルからもらった水を口にする。
冷たい水が喉を潤す感覚に、ミーアは、はふぅっと小さく息を吐いた。
――自分では意識してませんでしたけど、疲れてたみたいですわね。お昼はゆっくり休まないといけませんわ。
などと思いつつ、ミーアは改めて目の前に並べられた料理に目をやった。
――それはさておき……、ふむ、男子たちのお手並み拝見と行きますわよ。
まるで、親の仇でも見るかのように、ミーアは鋭い視線でサンドイッチを観察。
「では、さっそくいただきますわね」
そう言いつつ、サンドイッチを手に取った。
――ふむ、形はごく常識的なもの……。普通にパンの形ですわね……。独創性が足りませんわ。減点。
などと、偉そうに評しつつ、ミーアはパンをちぎって口に入れる。
「ふむ……、なかなか美味しいパン生地ですわ。このしっとりした

甘味が実に素敵ですわね……」
基本的に、お子さま味覚なミーアである。甘いものは無条件に美味しいものと認識してしまうのである。
「はは、おほめにあずかり光栄だな」
爽やかな笑みを浮かべたのは、シオンだった。
「……そういえば、パン生地を練ったのは、シオンでしたわね」
「さすがですね、ミーアお姉さま！」
歓声を上げるベルに、ミーアは冷めた目を向ける。
――まったく、ベルのミーハーぶりにも困ったものですわ。まぁ、確かに美味しいですけれど、でも、それはしょせんパンの味に過ぎませんわ。わたくしが食べているのは、サンドイッチ。そう、中身とパン生地の調和こそが大事。その完成度が問題ですわ！
などと……小生意気な評論家めいたことを思いつつ、今度は中身ごと、サンドイッチを口に入れる。
瞬間っ！　カッとミーアの瞳が見開かれた。
――う……、うまぁ！
しゃくり、という葉野菜の音、と同時に口の中に広がるのはコクのある卵焼きの味。まろやかな酸味を持つホワイトクリームと、塩気の効いた燻製肉の香ばしさが口の中に広がり……、
――な、なぜ、初めてでこんな味が出せますの？　ズルいですわ……。
「どうだろうか？　精一杯、頑張って作ったつもりだが……」
ふと顔を上げると、アベルが不安そうな顔で見つめていた。少し視線を動かせば、シオンも、キースウッドも、サフィアスも、ミーアの感想を待つかのように、ジッと待っていた。
それを見て、ミーアは、敗北を悟った。
そう、乙女力に勝った負けたとか……、そういうことはどうでも良かったのだ。
今日のこの日を素直に楽しめている彼らの勝ちは、ミーアの目には明らかで……。

だから……、
「……美味しい。とっても美味しいですわ」
ミーアは素直に感想を口にする。それを聞いて誇らしげに笑みを浮かべあう男子チーム。
そんな彼らがちょっぴりうらやましいミーアである。そして、
――美味しいものを作ってくれたみなさんのためにも、やはり、美味しいキノコ鍋を食べていただかなければなりませんわね。絶品キノコを探しに行く必要がございますわ！
少しもブレないミーアの決意なのである！

第四十六話　ミーアお祖母ちゃん、格好いいことを言う！

――というか、そうでしたわ、思い出してみれば、今回のキノコ狩りには、わたくしの命がかかっていたんでしたわね……。

もぐもぐサンドイッチを頬張りながら、ミーアはようやく思い出す。

サンドイッチによって栄養補給したことで、ようやくミーアの脳みそが活動を始めたのかもしれない。

そもそもの話、ミーアはなぜ、キノコ狩りをしようなどと言い出したのか？

美味しいキノコ鍋を食べるため？　いや、違う！

聖夜祭の夜、食べ物の誘惑を受けないためである。

生徒会で美味しい美味しい絶品キノコ鍋パーティーをして、それによって、混沌の蛇が用意した食べ物の誘惑から、身を守ろうという作戦なのだ。

極めて真面目な理由があるのである！　命がかかっているのである。

では、どうだろうか？　先ほどまでミーアが採ってきたキノコにそこまでの魅力があるだろうか？　蛇が絶品スイーツを用意した時、それを退けることができるだろうか？

エグかったり、苦かったりするキノコで……、ミーアの胃袋を掴むべく、敵が用意してくる食べ物の誘惑を退けるキノコ鍋を作れるだろうか？

残念ながら……答えは否である。

もっともっと美味しいキノコが必要なのだ。

そう、森の奥にあるあのキノコ……ヴェールガ茸がやはり必要なのだ。

問題は、どうやって森の奥に行くかであるが……。

――みなさんに提案しても却下されそうですわね。むしろ、監視が厳しくなる恐れもございますし、なんとかわたくしだけで行けないものかしら……。とすると……、なんとかしてみなさんの目を誤魔化す必要がございますわ。特に……。

ミーアはちらり、とベルの隣にいるシュトリナに目をやった。

――シュトリナさんが気を使って、わたくしに張り付いてくれてますし……。なんとかして、撒く必要がありますわね。ふむ、どうしたものか……。もっと美味しいキノコを採ってくるためにはどうすれば……。

「ミーアさん？」

「……そう、美味しいキノコが必要……もっと、もっと……」

などと、ぶつぶつつぶやきつつ、気づけばミーアは立ち上がっていた。なんの考えもなしに、ついうっかりと……。

「ミーアさん、どうかしたのかしら？」

そうラフィーナに声をかけられて、それで、ミーアは我に返った。

気づけば、立ち上がったミーアに、みなの視線が集まっていた。

「あ、ええ、ええっと？　わたくしは、その、ちょっと……」

あわあわと、言葉にならない声が口から出る。

――し、しまった。つい、気持ちが森の奥に行き過ぎてしまって……、体が勝手に！

ミーア、焦る。

焦り焦り、焦りに焦って……、結果、咄嗟に口をついて出たのは……、

「ちょっ、ちょっと、キノコ摘みに行って来ようと思いまして……」

そのまんま、何一つ偽ることのない本音が出てしまった。

大失態である！

――って！　そのまんまですわ！　森の奥に一人でキノコ摘みに行くとか、絶対に止められてしまいますわ！

ミーアの脳みそが食事によって活動を始めた、というのは、どうやら錯覚だったようだ。

ミーアの頭脳には、やはり美味しいサンドイッチではなく、甘いものが必要だったのだ。
――うう、駄目ですわ……。こっ、ここから挽回する方法がまったく思い浮かびませんわ……。
悲嘆に暮れかけるミーア。だったのだが……。
「キノコ摘みって……ああ」
ミーアの言葉を聞いて、その場にいた全員は、なにやら察したかのように頷いた。
それから、
「じゃあ、気を付けて」
と、微妙に気まずそうな顔で言ってくれた。
「あ……あら？」
意外な反応に、ミーアは首を傾げる。
唯一、アンヌだけがついて来ようとしたが、
「ああ、アンヌは休んでいて大丈夫ですわ」
ミーアは、慌てて言った。
――アンヌはわたくしとは違って、森の素人ですし。無理はさせられませんわ。
そう考えて、ミーアは安心させるように笑みを浮かべる。
「一人で大丈夫ですから」
そうして、ミーアはその場を後にするのだった。

ちなみに……、その場にいた者たちは、みな察したのだ。
ミーアが言っているのは、いわゆる用を足しに行く際の常套句「お花を摘みに行ってくる」を、キノコ狩りに合わせて、ちょっぴりシャレた言い回しにしたものだ、と……。
まさか、ランチの最中におもむろに立ち上がって、一人でキノコ狩りに行くなどと……、そんなことを言うわけがないだろうと……、そんな常識が、みなの判断を惑わせたのであった。

「ふふふ、上手くいきましたわ！」
ともあれ、上手く生徒会のメンバーを撒いたミーアは、鼻歌を歌いつつ、森の奥へずんずん進んでいく。
目指すは絶品キノコ、ヴェールガ茸の群生地である。
「それにしても、みなさん、快く送り出してくださいましたけど、どうしたのかしら？」
しきりに首を傾げるミーアであったが……、すぐにピンときた！
「いえ、そうですわね。別に驚く必要などありませんわ。わたくしは、森の熟練者。味はさておき、あれほどのキノコを集めたこのわたくしの手腕が、ようやく認められたということですわね！」
そう考えると、がぜんやる気が出てくるミーアである。
「ふむ、確か、地図によればあの野原から……」
などと、鼻息荒くつぶやきつつ、ミーアは木々をかき分けながら道なき道を進んでいく。
ほどなく、ミーアの行く手を遮るようにして、ちょっとした崖が姿を現した。
「崖……ですわね。ふーむ……、これは地図にはございませんでしたけれど……」
腕組みしつつ、ミーアは崖下に目をやる。けれど、その斜面にも黄色い木の葉が繁茂しているため、それがベールのようになっていて下までは見通せない。
「下が見えないのは問題ですわね。なんとかして崖を降りるべきか……、それとも、迂回して進むべきか……。この崖を下った場所に、キノコの群生地があるか、それとも、迂回した先にあるのか……」
見たところ、崖はそこまでの高さはなさそうだった。頑張れば降りられそうである。
しばし、黙考。その後、ミーアは己の直感を信じることにする。
「ずばり、迂回が正解ですわね！　このわたくしのベテランキノコガイドの勘が告げておりますわ！」
……別に、崖を下るのが大変そうだから、とか、そういう情

けない理由ではない。あくまでも、ミーアは自らの勘に従ったまでのことである。
「ふむ……それでは、崖に沿って左に進んでみようかしら……」
そうして、ミーアは崖を右手に見ながら歩き始めた……のだが、
「ミーアさまーっ！」
いくらも歩かない内に、そんな声が追いかけてきた。
「あら……あれは？」
立ち止まり振り返ると、そこには、小走りにやってくるシュトリナの姿があった。
見つかってしまっては仕方ない、とミーアは、彼女がやってくるのを待った。
やがて、すぐ目の前までやってきたシュトリナはいつもと変わらない、花のような笑みを浮かべて……、
「もう、ミーアさま、ダメじゃないですか。一人でこんなに森の奥に入ってしまったら……」
笑みを、浮かべて……
「……ねぇ、なにかあったらどうするおつもりだったんですか？　ミーアさま」
浮かべたまま……、かくん、と首を傾げる。人形みたいに唐突に。
その顔は、変わらない。笑みを浮かべたままだ。
その仕草だとて、子どもっぽい、愛らしい、あどけないもので……、そのはずで。
なのに……、なぜだろう？　ミーアに、ゾクッとした寒気が走った。
――あ、あら？　鳥肌？　どうしたのかしら……、わたくし、なんだか背筋が寒いような……。
「ねぇ、ミーアさま、どうするおつもりだったんですか？　なにか、あったら……」
上目遣いに見つめてくるシュトリナ。ミーアは反射的に一歩後ずさりそうになって……。

「ミーアお姉さま、リーナちゃん！」
っと、次の瞬間、シュトリナの背後から、ベルが走ってくるのが見えた。こちらに手を振りながら、嬉しそうにやってくる。
「もう、ベルちゃん……。待っててって言ったのに……」
それを見て、シュトリナがつぶやいた。と同時に、ミーアを襲っていた寒気が薄らいだように感じた。
――い、今のは、いったい……？
などと首を傾げるミーアだったが、すぐにその思考は断ち切られる。なぜなら、
「きゃあっ！」
走ってきていたベルが、突如、前方にすっ転んだからだ。一面を覆う黄色い葉、それに足を取られたのだ。
「あっ……」
誰かの口から、声が漏れる。
盛大に転んだベルから、ひゅーんっとなにかが、宙に投げ出されるのが見えた。
「あれは……？」
呆然とそれを眺めるミーアの目の前、ゆっくりと放物線を描いて飛ぶそれは……、ベルが精魂込めて作っていた小さな馬のお守り（トローヤ）だった。
馬のお守りはそのまま崖の方へと向かって飛んでいき、落ちるかと思われたが……、その直前、崖に斜めに生えている木の枝に、なんとか引っかかった。
「あ、ああ……、よかった」
息を詰めていたミーアは、思わず、ほう、っと息を吐いた。
それはどうやら、そばにいたシュトリナも同じようで、ほとんど同時に息を吐く音が聞こえた。
それから気を取り直したように、シュトリナはベルに言った。
「よかった。あれぐらいなら、取れそうね、ベルちゃん」
けれど、ベルは、木に引っかかったお守りを見て、少しだけ黙っ

てから、小さく首を振った。
「いえ、危ないです。失敗したら崖から落ちてしまいますから」
そう言って、ベルは笑みを浮かべた。
「別に、また作ればいいだけですから、大丈夫です。大切に握りしめていても、なくなってしまう時にはなくなってしまう。ただそれだけのことです」
そんなことを言って、でも……、ちょっとだけ寂しそうな顔をする。
それを見たミーアは、微妙な罪悪感にとらわれた……。
そもそもの話……、ミーアが無理をして一人で森の奥になど入らなければ、こんなことにはならなかったわけで……、小心者の良心が、ずきずき痛んだ。
それに、ミーアは知っている。ベルが頑張って、シュトリナとお揃いのものを作っていたということを。
なるほど、確かに、また作ればいいのかもしれない。けれど、、
――あれは、ベルが心を込めて作った唯一無二のもの。であるならば、そう簡単に諦めるべきではございませんわ。
幸いにして、お守りは、崖に斜めに生えた少し太い木に引っかかっている。
頑張れば、十分に取れそうに思えた。なにしろ、ミーアは森の熟練者なのである！
満を持して、ミーアはベルに言った。
「ベル、確かにその通りですわ。どれだけ大切にしていても、離さないように握りしめていても、無くなる時には無くなるもの。それは正しいですわ。でも……」
そうして、ミーアはお守りが引っかかっている木に手をかけた。木は、崖に斜めに伸びていて、上るのは、それほど難しくないように見えた。
「ミーアお姉さま……なにを？」
びっくりした様子で目を見開くベルに、ミーアは言った。

「それは、最初から諦めることの理由にはなりませんわ。それがなくならぬように、力を尽くして握りしめること、その努力を怠る言い訳にはならないのですわ！」
そう言い放って、ミーアは木の上に乗る。
――大丈夫ですわ。わたくしは森のベテラン。キノコのベテランは、木登りだって簡単にできてしまうはずですわ。
奇妙な自信を胸に、ミーアお祖母ちゃんは格好いい笑みを孫娘に見せて……、次の瞬間、
「ひゃあああああああっ！」
足を滑らせて、崖の下へと落ちていった。

第四十七話　最古にして最弱の忠臣

ルードヴィッヒは、自身の持つツテを最大限に活かして、情報収集にあたっていた。
同門の者たちに秘密裏に声をかけ、イエロームーン公爵に関する話を片っ端から拾い上げていったのだ。
「まずは、イエロームーン公爵家、並びに、その派閥が果たしてきた役割を調べなおしてみようと思ったのだが……、その結果、青月省にいる後輩が話したいことがあると言ってきたんだ」
「相変わらず、顔が広いな、ルードヴィッヒ殿は」
どこか呆れた様子のディオンにルードヴィッヒは笑みを返した。
「変わり者ばかりだが、こういう時には役に立つんだ」
待ち合わせ場所は帝都の一角。比較的大きな酒場の一室だった。
店に入って早々、
「どうもお久しぶりっすね、ルードヴィッヒ先輩」
人懐っこい笑みを浮かべて、一人の青年が声をかけてきた。
「相変わらず、上手く立ち回っているようだな」
昔と変わらぬ様子の後輩に苦笑いを浮かべつつ、ルードヴィッヒはそちらの席に向かった。
「先輩も相変わらず、面倒ごとに首を突っ込んでるみたいっすね。おや？　先輩の後ろにいるのは……、もしかして、噂の姫殿下の剣っすか……？」
ルードヴィッヒの後ろに立つディオンに目を向けて、青年は言った。
ディオンは小さく肩をすくめる。
「まぁ、いつまでかは保証しかねるけど、今のところはその認識で合ってるよ。ディオン・アライアだ」
そう言って、値踏みするように鋭い視線を青年に向ける。

「ははは、噂に違わぬ怖そうな人っすねー。ルードヴィッヒ先輩、よくこんな人と付き合ってますねー」
さらりと、ディオンの殺気を受け流してから、青年は手を差し出した。
「ジルベール・ブーケっす。気軽にジルと呼んでもらえると嬉しいっすね」
差し出された手を握りつつ、ディオンは興味深げにルードヴィッヒに目を向けた。
「ルードヴィッヒ殿のお仲間には、本当に興味深い人材がそろってるみたいだね」
「いやいや、俺なんか、しがない青月省の一文官に過ぎないっすよ」
ティアムーン帝国青月省。
帝国に五つある月省の中で、その部署が受け持つのは、帝都の行政にかかわるものだった。
一口に帝都の行政と言っても、その仕事は多岐にわたるわけだが……、その中には、帝国中央貴族との折衝というものも入っていた。ゆえに、帝国の門閥貴族の事情を詳しく聞きたければ、青月省の者に聞くのが一番というのは、よく知られたことだった。
「いやー、しっかし、大貴族、帝室嫌いなルードヴィッヒ先輩が、まさか、ミーア姫殿下に仕えることになるとは思わなかったっすね。いったいなにがあったんすか？」
「はは、お前も共に仕えてみればわかるさ。ミーア姫殿下は仕えがいがある方だ。師匠も今ではすっかり、ミーア姫殿下のために尽力されているしな」
「そうそう。それも意外だったんすよね。ルードヴィッヒ先輩だけでなく、あの頑固者の師匠まで心を許すなんて」
ルードヴィッヒの力強い啓蒙活動に、心を揺らされている様子のジルベールであった。
敏腕スポークスマン、ルードヴィッヒの活動に休日はないのである。

「んで、イエロームーン公爵家に関することでしたっけね」
注文した酒が来たところで、ジルベールは話を戻した。
「そうだ。なにか気になる情報があるということだったが……」
「いやー、気になるっていうかっすねー、ちょっとだけ先輩に忠告しようと思って来たしだいっす」
と、そこでいったん言葉を切って辺りを見回してから、彼はひそめた声で言った。
「そのディオン殿に護衛についてきてもらってるのは正解っすね。イエロームーン公爵を嗅ぎまわろうってんなら、最大限の警戒が必要っすよ」
「それほどなのか？　今までの経緯からそれなりの警戒は必要かと思っていたが……」
「……まぁ、先輩の〝それなり〟は俺らのする警戒と桁違いっすけど、それでも、一段階、警戒のレベルを上げることをお勧めするっす」
ジルベールは肩をすくめつつ首を振った。
「まったく、俺としてはあんな連中に喧嘩を売る先輩の気が知れないっすけど……。えーと、どこから話せばいいっすかね……、そもそも先輩、なぜ、イエロームーン公爵が最弱の貴族と呼ばれるようになったかご存知っすか？」
「もちろんだ。ゲオルギア公の謀反からだろう？」
今から二百年近く前、それはティアムーン帝国始まって以来の大規模な内乱となりえるかもしれなかった事件。
当時のイエロームーン公爵家の当主、ゲオルギア・エトワ・イエロームーン公爵は、いくつかの有力貴族とともに、帝室に反旗を翻したのだ。
その規模も勢いも、決して侮ることができるものではなく、帝国を二分する大きな内乱が起きることは確実とされていた。
けれど、その結末はいささか呆気なく、意外なものだった。
ゲオルギアは、その弟、ガルディエの手によって斃れ、反乱軍は

あえなく瓦解することになったのだ。
ゲオルギアをはじめ、協力した貴族たちは全員処刑され、その者たちの家の名声は地に落ちた。
さらに、本来、反乱を防いだ功績を称えられる立場の弟、ガルディエもまた、苦境に立たされる。
そもそもが問題を起こした公爵家。その問題を自家で解決しただけではないか、と揶揄する者が現れたのだ。
そして、それ以上に大きかったのは、ガルディエが陰謀に加担した家の者に対して、助命嘆願を行ったことだった。本来であれば、一族郎党皆殺しの憂き目にあっても仕方のない立場の者たちをかばい立てした彼に対する非難は小さくはなかった。
最終的に、兄の方は帝国に反旗を翻すほどに覇気に溢れる人物、弟の方は裏切り者の小心者、などという評価まで受けてしまう始末。
それでも、かばわれた家の者たちはガルディエに感謝し、イエロームーンの派閥に身を寄せることになる。
以来、イエロームーン派閥には抗争に敗れた敗北者や、中央貴族から疎外された辺土伯などが次々に訪れるようになる。
かくて、敗北者の集団、最古にして最弱のイエロームーン派閥の完成というわけであるが……。
「んじゃあ、その事件がすべて計算されたものであると考えると、どういうことが言えるっすかね？」
まるで、なぞなぞを出す子どものように、楽しげな口調でジルは言った。
「ただの謀反ではなく、それ以上の思惑があったとするならば……、か」
ルードヴィッヒはしばし腕組みして、考え込んでから……。
「もしかすると、虫寄せということか？」
その答えに、ジルベールはパチパチと拍手する。
「言いえて妙っすね、さすがは先輩。こいつはちょいと調べればわかるんすけど、イエロームーン派閥に属する貴族の中には、抗争に

敗れる前から、公爵が懇意にしていた者たち、というのもいるんっすよ。例えば、その当時、皇帝に迫る権勢を誇っていた、侯爵がいたんっすけど、後継ぎの息子が相次いで病死して……。貴族の社交界からもハブられたところを、たまたま仲が良かったイエロームーン公爵が仲間に入れてやったって話があるんっすけど……」

ジルは葡萄酒を一口すすってから、ニヤリと微笑む。

「この話、ちょっと臭わないっすか？」

「なるほど、侯爵の権勢を殺ぐために、その息子たちを暗殺したということか……。帝国にとって邪魔になる者たちに近づき、信用させた上で、その勢いを削る。侯爵自身ではなく、後継ぎを狙ったことに加えて、帝室から距離を置かれた存在であることで、大きな疑いをかけられることもない、か」

「そうやって考えると、イエロームーン公爵家が植物学、薬草学に詳しい家柄ってのも、少しばかり引っかかるところがあるんじゃないっすかね？」

「……園芸に造詣が深い、などという平和な話ならばいいんだが……。違うな。薬は毒にもなるということか」

「そう。毒による暗殺で、帝国にあだなす者を葬ってきた一族、それがイエロームーン公爵家であると、俺は考えてるっすよ」

ジルはさしたる感慨もなさそうに、そう言った。

最弱に堕ちたがゆえに、皇帝の手の者とは見られづらく、されど、派閥としては成立しているゆえに後ろ暗い願望を持つ者たちが集まってくる。

帝国にあだなす害虫を引き寄せる虫寄せの役割。

なるほど、それは帝国が〝普通の国〟であれば、重要な役割であっただろう。

けれど、ルードヴィッヒは初代皇帝の思惑を知っている。その上で考えると……、

「最弱であり、中央貴族から距離を置かれているがゆえに、反農思想に染まっていない新参者……、辺土伯らにも近づきやすく……必

要があれば暗殺も容易……。そういう仕組みということか……」
帝国が反農思想を広めるための、ある種の仕組みであったとするなら、イエロームーン公爵家の果たして来た役割は非常に大きい。それをこなしてきたがゆえに……、
「なるほど、最古にして最弱の忠臣か……」
「まぁ、気を付けた方がいいっすよ。暗殺はイエロームーンお得意のものっぽいっすから」
ジルベールはそう言うと、にやりと笑みを浮かべた。

第四十八話　黄色くて、白くて……そして……赤い

「う、うーん……」
小さく吐息を吐いて、ミーアはゆっくり瞳を開いた。
ぼやーっと霞む視界……、こしこしと両手で目元をこすり、こすり。
それから体を起こして、辺りを見回した。
「あら……、ここは……？」
そうして、ミーアは思わず絶句する。そこは、なんとも美しい場所だったのだ。
頭上には、繁茂した黄色い葉、その葉がひらり、はらりと落ちてくる。その先の地面の色は、まるで雪が降り積もったかのごとく真っ白で……。
「これは……、白い……キノコ？」
ミーアは、自らの周りを見て、小さく息を呑んだ。
そう、ミーアは、白いキノコが一面を覆った場所に寝転がっていたのだ。
体の下を見れば、まるでミーアを優しく受け止めるかのように、柔らかなキノコの絨毯が広がっている。
「ああ、そうでしたわ……。わたくし、崖から落ちて……このキノコたちがわたくしの体を受け止めてくれたのですわね」
ミーアは、ちょっぴり愛しげに、白いキノコを撫でた。それからふと右の手が握りしめているものに気が付いた。
それは、ベルが作った馬のお守り、トローヤだった。
「ふぅ、なんとか、無くさないでよかったですわ……。ここで落としでもしていたら、探すのが大変でしたわ」
それから、ミーアは恐る恐る立ち上がった。幸いケガはないらしく、どこにも痛みはなかった。

分厚いキノコスーツもまた、ミーアの体を守るのに一役買っていたようだった。
そう、ミーアは今まさに、キノコの加護厚き姫、キノコプリンセスとして覚醒しようとしていたのだ。
……キノコプリンセスってなんだろう？
「それにしても、ケガの功名とはまさにこのことですわね……。図らずも見つけてしまいましたわ……ヴェールガ茸」
ミーアは一面の白いキノコたちを見て、思わずニンマリと笑みを浮かべた。
「なんということですの……、これは、取り放題ではございませんの」
シュトリナは、群生地があると言っていたが、ここはまさにヴェールガ茸（仮）の群生地だった。
「ああ、素晴らしいですわ。早くみなさんをお呼びしないと……」
と、あたりを見回していたミーアは、ふと、あることに気が付いた。
「あら……？　あれは……」
白いキノコの絨毯には、よく見ると、点々と色が変わっている場所があった。
さながら、純白の雪原に零れ落ちた血の雫のように……、ぽつり、ぽつりと散った赤い色。不吉な赤色の正体……、かつて見たことがある、それは……。
「ミーアさまっ！」
「ミーアお姉さま！」
可愛らしい声とともに、ガサガサと、なにかが崖を降りて来る音がした。
「ああ、あなたたちも来てくれましたのね……」
やがて、現れたベルとシュトリナの姿を見て、それから、ミーアは視線を上に向けた。
――ふむ、この二人が来られるということは、高さ的には問題な

さそうですし、他の方も降りてくることはできそうですわね。キノコ狩りには問題ございませんわ。むしろ、問題は、ここにあるキノコですけど……。
っと、考え事をしていると、次の瞬間、ぼふっという音とともに、体に衝撃が走った！
「うひゃあっ！」
悲鳴を上げて尻もちをつくミーア。見ると、自らにタックルを決めてくれたベルの姿があった。
「うう、無事で、よかったです、ミーアお姉さま」
ぎゅううっと、ミーアに抱き着いてくるベル。
「もう、ベルは甘えん坊さんですわね……」
ミーアは、その頭を優しく撫でてから、
「ほら、ちゃんと、あなたの大切な物は取り戻しましたわよ」
ベルの小さな手に馬のお守りを返してやった。
「あ……これは……」
「あなたが頑張って作ってたお守りですわ。簡単にほどけないように、しっかりと結んでおきなさい。いつも取り戻せるとは限らないですわよ」
偉そうにお説教する口調で、ミーアは言った。
とても木登りに失敗して崖から落ちた人の言葉とは思えない、威厳に満ちた言葉だった。
「……ありがとうございます、ミーアお姉さま」
ベルは再びぎゅうっと、ミーアに抱き着いてきた。
「ふふふ……」
孫娘に懐かれて、満足げなミーアであった。
ひとしきりミーアに甘えて、それから改めて辺りを見回したベルは、歓声を上げた。
「それにしても、とっても綺麗な場所ですね、ミーアお姉さま」
走りだそうとしたベルをミーアは慌てて止める。
「こら、ベル。そんな風にキノコを踏み荒らしてはいけませんわ。

このキノコは美味しいということですから」
せっかく見つけたヴェールガ茸を踏みつぶされては大変と、ミーアは大慌てだ。
「はい、わかりました」
と、いったんは立ち止まったベルだが、すぐにでも走り出しそうな勢いで、辺りを見回している。と……、
「あ、リーナちゃん、あれ、あの赤いキノコはなんですか？　あれも美味しいキノコなんですか？」
ベルは、早速、白いキノコに隠れた赤いキノコを見つけたらしい。近くにいるシュトリナに尋ねた。
……自分に聞いてくれなかったことが、ちょっぴり悲しいミーアお祖母ちゃんである。だから……、
「さぁ、ちょっと忘れてしまったけれど、確か、美味しくないキノコだったんじゃないかな」
シュトリナの答えを聞いて……、にんまーりと笑みを浮かべた。
「まぁ！　リーナさん、あのキノコのことは、さすがにご存知なかったんですわね」
得意げに言ってから、ミーアはベルの方に顔を向けて、
「あれは、火蜥蜴茸という猛毒キノコですわ」
胸を張って言った。どやどやの、どっやどや顔で言い放った！
得意満面、言い放ってやった！
「ちなみに、触るだけでも危ないから……ベル……」
そろーっと、赤いキノコに近づこうとしていたベルの襟首を掴む。
「ダメですわよ。キノコは危ないのが多いんですから、わたくしたちのような熟練者の言うことを、きちんと聞かなければいけませんわ。ねぇ、リーナさん……、あら、リーナさん？」
返事がないのを不審に思い、シュトリナの方に目を向ける。っと、なぜだろう……、シュトリナはうつむいていた。その顔は、前髪に隠れ、表情はうかがい知れない。けれど……。
――あっ、あら？　変ですわね……さっきと同じで、なんだか寒

気が……。
ミーアの背筋に、なんとも言えない悪寒が走った。
けれど、それもすぐに消えてしまい、
「うふふ、ミーアさまは、本当にキノコのことにお詳しいんですね。リーナ、驚いちゃいました」
後に残るのは、すべてを塗りつぶすような、可憐なシュトリナの笑みだ。
その完璧な笑みが、なぜだろう、ミーアにはちょっぴり怖く感じられた。

第四十九話　天使と、キノコアクマの囁き……

「なんにしても、いったん戻った方がよさそうですわね」
いつまでもそこにいても仕方がない、とミーアは仲間たちのもとへと戻ることにした。
ミーアたちを探していた生徒会のメンバーは、三人が戻ると一様に安堵の表情を浮かべたものの、
「実は、森の中に毒キノコを見つけましたの」
そんなミーアの言葉に、すぐに眉をひそめた。
「それは、本当なの、ミーアさん……」
中でも、最も深刻そうな顔をしていたのはラフィーナだった。
このセントノエル島で起きることに対して、ヴェールガ公爵令嬢であるラフィーナには絶対的な責任がある。
生徒会長を降りた今でも、それは変わることがない。当然、この島の警備に関わるようなことに、無関心でいられるはずもない。
「ええ、間違いありませんわ。火蜥蜴茸という、とても毒性が強いキノコですわ。赤くて、とても綺麗なキノコで……」
「まっ、まさかと思いますが、ミーア姫殿下、それを持ち帰ってきたりはしていませんよね？」
慌てた様子で、キースウッドが口を挟んでくる。
「もちろんですわ。触っただけでも、酷い目に遭うという話でしたし……」
レムノ王国の猟師、ムジクにすごい勢いで止められたことを思い出す。
きっと素手で触っていたら、大変なことになるのだろう……。
大男との相性が比較的いいミーアである。忠告にも素直に耳を傾けるのである。
「あ……ああ、そうですよね。さすがに、ミーア姫殿下でも、そん

な危ないものを持ち帰ってくるなんてこと、ありませんよね」
思わず、といった様子で安堵のため息を吐くキースウッド。その様に、ミーアは微妙にムッとしつつ……、
「とっても綺麗なキノコですから、手袋があれば採ってきたところですけどね」
などと、軽めのジョークを飛ばすと……、
「ぜっ、絶対にやめてください！」
キースウッドが顔を青くして言った。
その反応を見てミーアは内心で「うふふ、ちょっぴり面白いかも……」などと悪い笑みを浮かべた。若い男をからかって遊ぶ、小悪魔ミーアである！
「ああ、思い出した。あれか……。確かに、あの時の猟師はそんな話をしていたが……」
ミーアの話を聞いていた、シオンが頷く。
「あの、そのキノコなら私も図鑑で見たことがあります。ものすごく強力な毒で食べたらもちろん、触っただけでも、そこから毒を吸い込んでしまって死んでしまうこともあるんだとか……」
クロエが横から補足してくれた。
「そう……、そんなキノコがこのセントノエルに……。この島は、毒をもつものは生えないはずなのに……」
うつむき、何事か考え込むラフィーナ。次に口を開いたのはキースウッドだった。
「だとしたら、みなで採ったキノコも危なくはないですか？　万が一ということもありますし……」
「大丈夫ですわ。そのために、リーナさんのチェックを入れていただいたわけですし。ねぇ、リーナさん？」
ミーアが話を振ると、シュトリナは小さく頷いた。
「そうですね。さっきまで採ったものは、似た種類の毒キノコはないはずですから、食べても大丈夫だと思います。でも、一応、厨房の、専門のスタッフにもチェックしていただいた方がいいと思いま

すけど」
「なるほど……。まぁ、専門家の方に見ていただけるなら……」
などというやり取りを見ながら、ミーアは、小さくため息を吐いた。
――ああ、せっかくヴェールガ茸を見つけましたのに……。これでは、採りに行くという感じにはなりませんわね。このまま、森から学園に帰る形になるでしょうし、森には当分、立ち入り禁止になるんじゃないかしら……。
それはとても残念なことだった。
せっかく、あんなにヴェールガ茸があったわけだし、絶品だというあのキノコを食べられないのは、とてもとても残念だった。
ふぅ、とため息を吐きつつ、ミーアは座ろうとして……、ふと気づいた……気づいて、しまった！
――あら……？　あらあら？　これ、は……？
自らの服にあった違和感。不自然に膨らんだポケットに、気づかぬ間に紛れ込んでいた異物、それは、崖から転がり落ちた時にたまたま紛れ込んでしまった白いキノコ……。
――これは……ヴェールガ茸……？　でも、いつの間に？
先ほどのことを思い出しつつ、ミーアは首を傾げる。
――あの崖から転がり落ちた時に、ポケットの中に紛れ込んだみたいですわね……。ふむ……、しかし、これを食べるのは、やはり危険ですわね……。
白いキノコスーツを着たミーアが耳元で囁く。
『そうですわ。リーナさんは言っておりましたわ。ヴェールガ茸には、よく似た毒キノコ、偽ヴェールガ茸というのがあると……。それに、この島にだって毒キノコが生えるということは、すでに、火蜥蜴（サラマンドレイク）茸によって、証明されてしまっておりますし。ここは危険は冒せませんわ』
しかし、これに赤いキノコスーツを着たキノコアクマミーアが反対する。

『何を言っておりますの？　せっかく見つけた絶品、ヴェールガ茸をみすみす捨てるだなんて、あり得ぬ愚行ですわ。それに、もしも、毒キノコである偽ヴェールガ茸であったとしても、少しお腹が痛くなるだけですわ』

それに、と、さらに畳みかけるようにささやくキノコアクマミーア。

『わたくしは、すでに名実ともにキノコ熟練者。なにしろ、知識に加えて、実際のキノコ狩りを経験し……あまつさえ、ヴェールガ茸を見事に見つけましたわ。そう、わたくしは、すでに、キノコプリンセスを自称してもよい程度には熟練者のはずですわ。そんなわたくしから見て、そのキノコ……どう見えるかしら？』

ミーアは改めて、その白いキノコを見つめた。じっと、その真贋を判別するかのように見つめて……。

「ふむ……これは、食べても大丈夫なやつですわ！」

ミーアの直感は早々に結論を下した。さらに、

「それに、こんな風にポケットに紛れ込むこと自体が奇跡のようなもの。これは、神がわたくしに、『やれ！』と言っているに違いありませんわ。であるならば、わたくしは天命に従うのみですわ！」

どこか遠くの方で、「奇跡はそう簡単に起こらないものですよ！」などというルードヴィッヒの声が聞こえたような気がしたが……。

今のミーアには届かない。

そうして、ミーアは何食わぬ顔で、森を後にするのだった。

第五十話　ミーア姫……投入する！　そして、食べる！

かくして……、ミーアの悲願であった、キノコパーティーが始まる。

セントノエル学園の食堂には、いくつかの個室が存在している。そこに、厨房で作ったものを運び込んで食事会を催すのだ。

生徒会のみならず、事前に予約をしておけば、誰でも使うことができるようになっている。

ミーアたちが採ってきたキノコは、厨房の方に運び込まれた。そこで、専門の職員のチェックを受けた上で、鍋に入れ、煮込まれるのだ。

厨房に入ると、そこには、セントノエルの警備責任者、サンテリの姿もあった。

生真面目かつ頑固そうな眼付きで、ミーアたちの方を見つめてきてから、彼は深々と頭を下げた。

「お疲れさまです、みなさま。キノコ狩りはお楽しみいただけましたでしょうか？」

「ええ、ふふ、もう、大満足ですわ」

一同を代表して、ミーアが言った。

「そうですか。それは、島を管理する者として、無上の喜びにございます。しかも、此度は、このわたくしめも、生徒会の鍋パーティーにご招待いただきまして……。このサンテリ、恐悦至極にございます」

「いえいえ、あなたのような方がいらっしゃるから、わたくしたちは安心してこの学園で生活できているわけですから労うのは当然のこと、今日は楽しんでいっていただけると嬉しいですわ」

などと、一通りサンテリとのやり取りを終えてから、ミーアはそそくさと厨房の中を移動する。できるだけさりげなく……。目立た

ないように……。
「あっ、お帰りなさい、ミーア姫殿下」
と、顔見知りの厨房職員のお姉さんが話しかけてきた。
「ただいま戻りましたわ。準備、お手間をかけますわね」
愛想よく料理人たちを労うミーア。
ちなみに、たびたび厨房を訪れるミーアは、すっかり料理人たちと顔見知りになっている。
来るたびに、ささやかなつまみ食いをやらかすミーアだったが……、意外にもその評判は悪くない。
それはひとえに、アンヌが常日頃から人脈作りに励んでいるが故のことだった。
基本的にミーアは、アンヌに対してのみ、お金をケチるつもりはなかった。だから、街で気晴らしができるように、定期的にお金を渡すようにしていた。
けれど、アンヌはそのお小遣いをもらうたびに、いつも街に出て、なにこれと買ってきては、学園の職員に贈っていたのだ。ミーアからの差し入れとして。
ゆえに、ミーアはすっかり、気遣いのできる皇女殿下として知られるようになっていた。
当の本人は知らないのだが、学園に勤める平民たちからも結構な人気者になりつつあるのである。
さて、優しい笑顔で迎えてくれる料理人たちに挨拶しつつ、ミーアは、キノコが山ほど入ったかごに歩み寄った。後ろからついてきたお姉さんが、キノコの山を見て苦笑いした。
「それにしても、ずいぶんとってきましたね。これを一度の鍋料理にしてしまうのは、ちょっと大変ですね。一度では無理ですかね。ミーア姫殿下の持ってこられたキノコは、少し下処理が大変ですし……」
「ああ、そうみたいですわね……、ところで、ちなみにですけど……、これはあくまでも知的好奇心に促されて聞くのですけど、ヴェ

ールガ茸を料理する時にはどうすればいいんですの？」
「え？　ヴェールガ茸も採ってきたんですか？」
お姉さんがびっくりした様子で声を上げた。
「いえ、もちろん採ってきておりませんわ。あくまでも、知的好奇心の故の質問だと……」
「あ、そうなんですね。んー、そうですねー」
お姉さんは少し考えてから、ちょっこりと首を傾げた。
「ヴェールガ茸は美味しいですから、ちょっと洗って、二つか三つに割って煮込んだらいいんじゃないでしょうか」
「ほう……。そんな簡単でいいんですのね……。それは朗報……。あ、失礼。手が汚れてしまっておりますわね……。どこぞで、手が洗えるかしら？」
ミーアはわざとらしく、ぽこん、と手を打った。実にしらじらしい態度であるが……。
「ああ、森の中に行ったんでしたら手を洗われた方がよろしいですね。どうぞ、こちらに……」
「ちなみに、わたくしの手は繊細ですから、きれいなお水じゃないとダメなのですけど、大丈夫かしら？　食材を洗えるぐらいにキレイじゃないとダメですわよ？」
「はい、大丈夫ですよ。いつも食材を洗っている水がございますから、それをお使いください」
「そう。助かりますわ」
ミーア、にっこにこと笑みを浮かべつつ、ポケットの中にすすす、っと手を突っ込む。
――ふむ、キレイに洗って、大きめに割って鍋に入れる……。簡単なようで、なかなかに難しいですわ。
ミーアは、手を洗うふりをして、手の中に隠したキノコを洗う。丁寧に、生で食べても大丈夫なぐらいに念入りに……。それはさながら、熟練の手品師のような巧みさだった。
普段は、それほど器用でもないミーアなのだが、キノコに関して

のみ、その器用さが跳ね上がっているかのようだった。やはり、キノコプリンセスとして覚醒しつつあるのかもしれない。
……キノコプリンセスってなんだろう……？
洗い終わると、ミーアはそのまま、ちらり、ちらり、視線を左右に走らせつつ、鍋に近づいていき……。もう一度、ちらりちらり……。こそこそ……。
――もっとも警戒すべきは、あのサンテリさんですわね……。あの方の目の動きを読みつつ、三……、二、一……、今っ！
刹那、ミーアは動く。その動き、まさに神速！
鍋の中に、四つに割ったキノコを投入。それから、素知らぬ顔で、そこから離れる。
ふしゅーふしゅーと、できもしない口笛を吹きながら……。
後に残るのは、なにかをやり遂げたような……得も言われぬ達成感だった。
そうして、いったん鍋から離れたミーアは、個室の方に移動する。そこでしばし談笑して後、タイミングを見計らって厨房に戻る。
最後の仕上げ作業に入るために……。
――もしも、先に見つかってしまったら、きっと食べるのを止められてしまいますわ。わたくしは、あのヴェールガ茸が本物だって知っておりますけど、きっと聞いていただけませんわね。なんとかするには、これしかございませんわ！
ミーアは、調理場にそそくさと忍び込むと、さっさと鍋に近づいた。
「あっ、ミーア姫殿下、ダメです。まだ調理中で……」
「うふふ、ただの味見ですわ。味見。一口だけ、一口だけですわ」
そう言って、ミーアはさっと鍋のふたを開けると、止められる前に真っ先に目についた白いキノコの欠片を素早く口に入れた。
もぐもぐ、こりこり……。
なんとも言えない歯応え、口に広がる瑞々しく芳しい香り……。
ミーアはうっとりと、頬をほころばせた。

「……ふむ、これは、なかなかのお味……。深みがあって、実になんとも……。ああ、やはり、とても美味し……！？」
異変は……、唐突に襲ってきた！
お腹に生まれた微妙な感覚、
ぐきゅるる……、という、なんともいやぁな音とともに、それがやってきた。
「いた……、あ、あら？　なっ、お、お腹が、ひっ、いっ、いたぁっ！？」
刺すような、お腹の痛みに、ミーアはその場にしゃがみこむ。
「ひ、ひぃ、こ、ここ、これは……、あ、ダメ、ですわ……」
と同時に、喉の奥、何かが競りあがってくるような、嫌な不快感があって……。
「う、うぷ……」
強烈な吐き気と腹痛に、ミーアの意識は遠くなっていくのだった。

第五十一話　ミーア姫、泣かせてしまう……

毒キノコを食べて昏倒したミーアは、その後、三日間の安静を言い渡された。

幸いすぐに嘔吐薬を処方されて、胃の中身をすべてひっくり返したので、毒の影響は最低限で抑えられた。

乙女的にはいかがなものか？　というあれやこれやがあったものの、ミーアはすぐに健康を回復した。

そのおかげで、今回の出来事は自分の不注意で起きたことだから、周りの者に累が及ばないように、ということもラフィーナに伝えることができた。そうでなければ、今頃は、混沌の蛇用に〝専門家〟たちを集めて、尋問部隊を編成、送り出している頃だっただろう。

まぁ、それはよいのだが……。

「んー、暇、暇、暇ですわー」

ベッドの上で、ミーアが退屈そうに言った。

なまじっか元気になってしまうと、横になり安静にしているのが苦痛になってくる。

まして、食事は味気ない病人食になってしまったために、ミーアの日常は一気に楽しげのない、灰色なものになってしまっていた。

まぁ、同情の余地などまったくなく、完全無欠で自業自得なわけだが……。

ということで、暇を紛らわすべく、ミーアはお抱え作家のエリスが送ってきた原稿を読み直そうと思ったのだが、あえなく、アンヌに見つかり取り上げられてしまった。

こうなってくると、ミーアとしてはなにもすることがなく、今まさに退屈に体が腐ってきそうになっていた。

「あ、そうですわ……。ねぇ、アンヌ、なにか、楽しい話をしていただけないかしら？」

そうして、ミーアは部屋の掃除をしていたアンヌに話しかけた。
唐突に楽しい話をしろというのは、なかなかの無茶振りである。けれど、ミーアは、このぐらいならば、甘えても大丈夫と思っていた。
忠臣アンヌは、このぐらいならば許してくれると……。
だから……、
「あ……あら？」
返事がいつまでもないことにミーアは一瞬戸惑う。それから、アンヌの方に目を向ける。と、アンヌは、一瞬だけミーアの方に目を向けてから、つい、と顔を背けてしまった。
「……え？」
明らかに様子がおかしい……。
そのことを敏感に感じ取ったミーアは、慌ててアンヌに言った。
「ちょっ、どうかしましたの？　アンヌ」
そう話しかけても、こちらを振り返らないアンヌ。どうやら、なにか怒ってるみたいたぞ？　と、ミーアは気づく。だが……、その理由がわからない。
「ど、どうなさいましたの？　わたくし、なにかあなたにしたかしら……？」
まったく心当たりがないものの、ミーアは慌てて、ベッドの上に起き上がり、正座する。
――どうしましょう、いったいなぜ……？
普通であれば、主君に対して従者が、こんな形で不満を露わにすることなどあり得ない。
確かにミーアとアンヌの関係は普通の主従ではない。ミーアはアンヌのことを大切な従者として大切に思っているし、この程度の無礼はなんとも思わない。
けれど、アンヌがミーアの恩情に甘えることも今まではなかったのだ。
しっかりと従者の礼を尽くしてきていたのだ。

そんなアンヌが、無視をした。怒って、ミーアの呼びかけに応えようとしないのだ。
これは、よほどのことだ、と、ミーアはオロオロするばかりである。
しばしの重たい沈黙……、その後……、アンヌは口を開き、
「ミーアさま……、また……、私を置いていきました」
ミーアと目を合わさないまま、絞り出すように言った。
「へ？　あ、ああ……それは……」
あなたが、疲れていそうだったから……、そう言い訳しようとしたミーアだったが……、アンヌの顔を見て、思わず息を呑んだ。
「森の奥で崖から落ちたって……、私は心臓が止まってしまうかと思いました」
アンヌがミーアの方に顔を向ける。その瞳は潤み、うっすらと涙が浮かんでいた。
「……アンヌ」
それを見て、再び慌てるミーア。思えば、こんな形でアンヌを泣かせてしまうことは、初めての経験で……、だから、どうすればいいのかわからなかったのだ。
「それに……、鍋もそうです……。ミーアさまには、きっと深い考えがあるんだって、私は信じてます。だから……、どうして毒キノコを採ってきて鍋に入れたのか、どうして、それをご自分で食べたのかは、聞きません……でも……」
と、そこで、アンヌの顔がくしゃり、と歪む……。
ぽろぽろ、ぽろぽろ、止めどなく流れる涙。
震える声で、アンヌは言った。
「もし……、もしも……、次に危ないことがある時には、私も絶対についていきます。どこまでだって、一緒に行きます。どんなに危ない場所にだって行きます。馬にだって乗れるようになりました。剣だって、必要ならば覚えます。だから……、だから、私を……、置いていかないでください」

深々と頭を下げるアンヌに、ミーアは、
「アンヌ……あなたは……」
一瞬、言葉に詰まる。鼻の奥がツーンとしてしまい、声が震えないように気を付けなければならなかったからだ。
少しの間、黙り込んでから……、ミーアは言った。
「あなたは……、本当にわたくしの腹心ですわ……アンヌ」
彼女の示した忠義に、ミーアの心は深く、深く、感動して……。
でも……、
「ええ……、あなたの気持ちはよくわかりましたわ。その忠義、わたくしの心の中にとどめておきますわ」
曖昧なことを口にして……、約束しなかった。
なぜならミーアは知っていたからだ。このままでは自分の命が、この冬までで終わることを……。
そして、その死に方は、アンヌを巻き込みかねないようなものであることを……。
――万が一、もしもわたくしが死んでしまうのであれば……、それにアンヌを巻き込むわけにはいきませんわ。
彼女の示してくれた忠義に、優しさに、そんな形で応えることはできないと……、ミーアは、心の中で首を振った。
――それに、ベルのこともございますわ……。
もしも、自分が死んでしまったら、誰に大切な孫娘を任せればいいというのか……。
ふいに、ミーアは未来の自分のことを思った。
毒殺されたという自分も、きっと娘や孫のことを託す相手がいたから、安心して死んでいくことができたのではないか、と。割と苦しい死に方だったとはいえ……。
――ま、まぁ、ともかく、別に危ない目に遭おうとしているわけじゃありませんし？　当日は寮の部屋に閉じこもっていればいいだけで、うん、大丈夫ですわ。きっと……。
そんなミーアの心情を知ってか知らずか、アンヌは涙で赤くなっ

た瞳で、じっとミーアを見つめていた。まるで、ミーアの胸の内を透かし見るかのように。
「ふふ、そんな目で見ないでくださいまし、アンヌ。わたくし、そうそう危険に突っ込んでいったりはいたしませんから」
はぐらかすように笑うミーアを見ても、アンヌは黙ったままだった。

……ちなみに、この〝ちょっぴりいい話風〟の主従の会話……、ミーアがノリノリで毒キノコを食べてしまったことにより、生まれたものなのだが……。
ツッコミを入れるような無粋な者は、この場にはいないのであった。

第五十二話　……とミーア。

三日が経ち、完全復調したミーアであったが……、再びお腹が痛くなるような出来事が待っていた。
ラフィーナからお茶会に誘われたのだ。
このタイミングでのお茶会である！　これはお茶会という名目の呼び出しなのだ、ということを、ミーアは瞬時に理解した。
しかもその場には、なんと島の警備責任者であるサンテリも同席するという。
「……これは、怒られますわ……。絶対、怒られてしまいますわ！」
選挙の際に見た、ラフィーナの赤く染まった瞳を思い出し、ミーアは震え上がった。
そうなのだ、最近はすっかり油断していたが……、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガは、基本的には怖い人なのである。
今回のように、自分勝手な振る舞いでみなに迷惑をかけて、怒られないはずがないのだ。にもかかわらず、やらかしてしまったのである。
一応、厨房の誰かが責任を問われるということは回避できたものの、それはあくまでも最低限。
咎められずにいられるはずもない。
「う、うっかり、獅子の尾を踏んでしまいましたわ……。うう、なんとか、言い訳を考えなければなりませんわ……。なんとか……」
などと、ぶつぶつつぶやきつつ、ミーアはお茶会の会場を訪れた。
奇しくもそこは、先日、鍋パーティーを開こうとしていた食堂の個室だった。
「失礼いたします、ラフィーナさま……」
部屋に入り、ミーアは少し身構える。
そこにはすでにラフィーナと元風鴉のモニカ、それに警備担当の

サンテリの姿が揃っていた。
ミーアが入るや否や、険しい顔をしたサンテリがジロリとにらんできた。
――ああ……、やはりこれは楽しい話ではありませんわね……。うぐぐ、またお腹が痛くなってまいりましたわ……。
思わずお腹を押さえたミーアを見て、ラフィーナが心配そうに眉根を寄せる。
「もしかして、まだ、お腹が痛むの？」
「あ、ええ、いえ、そんなことは……」
と、途中まで言いかけて、ミーアはふと思う……。
――あ、まだ調子が悪いとか言ったら同情されて、あまり怒られなかったかもしれませんわね。それとも逆に、なんでもなかったと言っておいた方が大した被害が出なかったということになりますから、そちらの方が怒られずにいられたかしら？　うう、難しい舵取りですわ。
加害者にして被害者のミーアの立場は実に微妙なのである。
わずかにうつむき、黙り込んだミーアに、ラフィーナは思いのほか優しい声で言った。
「無理せずに座って、ミーアさん。病み上がりに申し訳なかったわね。今日はお腹にいいお茶とお菓子にしたから、無理のないように食べてね」
「で、では……、お言葉に甘えて……」
ミーアは、とりあえず椅子に座って小さくため息……。それから、メイドのモニカが淹れてくれた、変わった香りの香草茶を口にする。
――ああ、とても……、落ち着きますわね……。
ほふぅ、っとため息を吐きつつも、ミーアは今日の方針を決める。
――ともかく、謝罪ですわ。今回のことは、どうにも言い逃れができぬこと。ならば、真摯に謝って謝って、謝り倒す。その中で、なんとか、切り抜ける手段を探すしかありませんわ。
かくして方針は定まった。ミーアは改めてラフィーナの方を見た。

「この度は、わたくしが勝手な行いをしてしまいまして……、なんとお詫びをすればいいか……」
それから深々と頭を下げる。
「……そうね。ミーアさん、あなたは勝手だったわ」
ミーアの謝罪を聞いて、ラフィーナは頷いた。けれど、すぐにその顔が悲しげに歪んだ。
「でも、それをさせてしまったのは、私たちの方。ごめんなさい、ミーアさん」
ともかく謝り倒してこの場を乗り切る算段だったミーアなので、この反応には、いささか虚を突かれる。
「きっとすごく悩んで、考えて、やったのよね？」
「え？　あ、ええ、まぁ……」
小さく頷きつつ、考える……。
――まぁ、確かに……。ラフィーナさまたちに見つかったら止められるから、こっそり入れて、こっそり一人で食べたわけですし……。そういう点では〝ラフィーナさまたちにさせられた〟という考え方もできますわね……。それに、あれが毒キノコかどうか、わたくし、結構悩みましたけれど……。それが、どうしたというのかしら？
ラフィーナがなにを言いたいのか、一瞬、考えてしまうミーアであったが、次の瞬間、ピンときた！
――ははぁん、なるほど！　読めましたわ。つまり、ラフィーナさまは、わたくしがみなさんに美味しいキノコ鍋を食べてもらうために独断専行した、そのことに対して責任を感じておられるのですわね？
確かに、みなに止められないとわかっていたら、きちんとシュトリナに鑑定をお願いしていただろうし、自分が先行して味見をすることもなかった。
ミーアは目の前に活路が開けたように感じた。細く曲がりくねり、頼りない道ではあったが……。

――行くしかありませんわ……。この細い道を、全力で駆け抜けるほか、ありませんわ！

ミーアは覚悟をして、重々しく頷いてから、

「とてもとても悩みましたわ」

まずは、安直にキノコ・毒キノコを判断したのではないことをアピール！　さらに！

「しっかりと、みなさまのことを考えて、やったつもりですわ」

みんなのことを考えてやりましたよー！　自分が食べたかったからじゃないですよー！！　とアピール！　アピール！！

そうして、情状酌量を狙っていくスタンスである。

実に姑息である！！

そうして、ちらりとラフィーナの顔を見たミーアは手応えを感じる。

――思っていたより、ラフィーナさまは怒ってなさそうですし、こっ、これはいけるんじゃないかしら！？

などと、ミーアが安堵しかけた、まさにその時……。

「まったく、面倒なことをしてくださいましたな。ミーア姫殿下」

厳しいサンテリの声が響いた。

見れば、サンテリが冷たい目でミーアをにらんでいた。

帝国内であれば、ミーアにこのような態度をとることは許されるものではないが……、残念ながらここはヴェールガ公国。聖女ラフィーナのお膝元なのだ。ミーアのわがままが通る場所ではない。

さらに言うならば、普通に考えて、ミーアの行いは咎められて当然、弁護の余地がないほどの大失態なのである。

批判は甘んじて受け入れるしかないミーアは、口をつぐんで、できるだけ反省している〝風〟の表情を作る。

「なるほど。恐ろしい毒キノコを見つけたのは姫殿下のお手柄。その毒キノコを把握していなかったのは、我々の落ち度でございましょう。されど、この度のあなたさまのお振舞いは、伝統あるセントノエル学園生徒会の名誉を著しく損なうものです。下手をすれば、

ヴェールガとティアムーン、双方の国家的問題にもなりかねぬ事態ですぞ？」
ミーア的には、ごもっともです、としか言えない状況である。恐らくルードヴィッヒ辺りも、同じようなお小言をぶつけてきたことだろう。
一部の人間以外には、今回の事件の情報は伏せられているとはいえ……、もしミーアの父に知られていたら大変なことになっていたのだ。
ちょっとした戦争が勃発していたであろうことは、疑いようがない。
だからこそ、ミーアは肩を落として、ただただその批判を甘んじて受け入れる構え……だったのだが……。
「このセントノエル島の治安の責任を負う者として、セントノエル学園の名誉を守る者として到底看過できるものでは……」
「黙りなさい。サンテリ」
意外な方向から飛んできた声。
見れば、ラフィーナが鋭い怒りを宿した瞳で、サンテリをにらんでいた。
「あなたにはわからないのですか？　ミーアさんのお考えが……」
「……へ？」
予想外の言葉に、ぽっかーんと口を開けるサンテリ……とミーア。
特に、ミーアの驚きは大きかった。
いったい全体、ラフィーナがなにを言い出したのかまるで理解できないミーアである。
「此度のミーア姫の行い……、それは聖人にも匹敵するもの。あなたには、それがわからないのですか？」
「……はぇ？」
想定外の流れに、ミーアはただただ、瞳を瞬かせるのみであった。

第五十二話　……とミーア。（後書き）

本日、活動報告更新しました。

第五十三話　キノコ食い聖人、ミーアの沙汰

「せっ、聖人ですと？　それは、いったい……？」
解せぬ、という顔をするサンテリ（……とミーア）にラフィーナは静かな口調で言った。
「サンテリ、あなたは本気でミーアさんが、利己的な目的のために、あんなことをしたのだと思うの？」
「そうではない、と……、ラフィーナさまはそうおっしゃるのですか？」
ラフィーナは重々しく頷いて、
「もちろん、違うわ。そうよね？　ミーアさん」
話を振られたミーアも重々しく頷く。
正直なところ、ラフィーナがなにを言っているのか、まったく理解できないミーアであったが、それはそれ……。波に逆らわず、長いものには抵抗なく巻かれていく、ミーアらしさが光る行動である。
ミーアの神妙さを装った顔を見て、満足げな笑みを浮かべるラフィーナ。
「そう。ミーアさんがそんな愚かで、自分勝手なことをするはずがない。悪ふざけや冗談でやったというのも違う。そもそも、おかしいとは思わない？　キノコ狩りに行った先で猛毒キノコを見つけたこと、そこから、わざわざ弱毒性の方のキノコを持ち帰り、誰にも知られずに、それを秘密裏に鍋に入れた上に、入れた本人が……、本人だけが、食べる？　こんな偶然があるかしら？　まるで、わざと自分が毒を食べようとして行動したみたいじゃない」
「それは、まぁ……、普通の行動とは思いませんが……」
ミーアの異様な行動はサンテリも認めるところである。
「ミーアさんの行動には、しっかりとした目的があったはずだわ」
確信に満ちた口調で、ラフィーナは断言する。

「もっ、目的……。それは……」
ミーアは、固唾を飲んでラフィーナの言葉を待った。今明かされる、〝自分自身〟の行動の裏に隠された驚愕の目的を知るために！
「その目的は……、聖夜祭の警備体制を改善すること……」
「なっ！？　それはどういう意味でしょうか？　我々の警備に不備が？」
憮然とした顔をするサンテリ。その態度からは、自己の仕事に対する揺らがぬ自負が感じられた。
「ない……、とは言えないのではないかしら？　ミーアさんは、毒を〝持ち込めないはず〟の島で、毒を混入させられないはずの場所で作った鍋に毒を入れ……、そして食べたのよ？」
「それは……」
サンテリは一瞬言いよどむも、すぐに首を振る。
「なるほど。確かに、この島の中に毒キノコが生えていたことを見つけたのはお手柄であったでしょう。我々の想定外のことではありました。しかし、たとえこの島で致死性の毒キノコを入手できたとして、それを聖夜祭の警備を破って入れられたとは思いません。状況が違うではないですか？」
サンテリの言を受けても、ラフィーナは厳しい表情を崩すことはなかった。
「そう……、確かに生徒の食べるもの、宴会にて供されるものに入れることは不可能かもしれない。今日以上に厳重な警備態勢が敷かれるでしょう。けれど……、それでは従者の方たちに出されるものに対してだったらどうかしら？」
ラフィーナは上目遣いに、サンテリを見つめる。
「私たち、生徒会の役員に今日ふるまわれたものと、従者たちに聖夜祭の日にふるまわれるもの、どちらの方が、厳重な監視の下で作られるかしら？」
暗殺が行われるのは、なにも聖夜祭の日に限ったことではない。普段のラフィーナたちに対する警備だとて、十分に厳重なものなの

だ。
だから、聖夜祭の日の従者たちへの警備、どちらが厳重かと問われれば前者としか答えようがないサンテリであるのだが……、
「従者……でございますか？」
怪訝そうな顔で、サンテリは言った。
「それは、確かに、従者の者たちに供されるものであれば、毒物を混入することも可能かもしれませんが……、その者たちに毒入りの料理を出すようなことを、下手人がいたしますでしょうか？」
「国の要人を殺害し、その国に混乱を引き起こすという目的なら、それをする意味はないでしょうね。けれど、我がセントノエル学園の評判に傷をつけるためだったら、どうかしら？」
それはサンテリ自身が言ったことだ。今回のような不祥事は、セントノエル学園生徒会、栄えあるその名誉に傷をつけることになる、と。
「もしも、これで各国の従者たちが、このセントノエルで殺されたとしたら？　混沌の蛇と戦うために、みなをまとめ上げる立場のヴェールガ公国が、そのような失態をしてしまったら団結に亀裂が入ってしまう……。そうは思わないかしら？」
ラフィーナは静かに瞳を閉じて言った。
「ミーアさんは、その危機を証明してくれたのよ。体を張ってね」
「まさか……。大帝国の姫君が、そのようなことをするはずが……」
サンテリは驚愕の表情で、ミーアの方を見つめる。突然、視線を向けられて、油断していたミーアは、一瞬混乱。手でも振っておこうかしら……、などと手を上げかけたところで……、ラフィーナの声が遮った。
「いいえ、ミーアさんならば、やるわ……。他の誰かが傷つくぐらいならば、自分が傷つくことを選ぶ。ミーアさんは、そういう人よ……」
そういう人ではないミーアとしては、「そ、そんなに持ち上げられても……」などと思わなくもなかったが……、当然、口にはでき

ない。
長いものには巻かれるのがミーアの基本戦術なのである。
ラフィーナがそう言うなら、そうなのだ！
「あなたもよく知っているでしょう、サンテリ。大切な友のために命を捨てる。これ以上に大きな愛はないと、中央正教会の聖典には、そのように書かれているわ。けれど、それを躊躇なく実践できる者が、果たしてどれだけいるかしら？　警備の不備、毒殺の危険性を明らかにするために、自ら毒キノコを食べる……。誰かのために……従者のために、平民のために……、それができる人がいるかしら？」
なんだか、自分に対する評価が危険な水域まで上昇しているのを感じないではないミーアだったが……、反論などしない。
ラフィーナがそう言うなら、そうなのだ！
――ミーアさんという方は、誰かのために毒キノコを進んで食べる、自己犠牲の人……。どこのミーアさんか知りませんけれど、ラフィーナさまが言うことに間違いなどございませんわ！
自分にそう言い聞かせるミーアである。
「実は、生徒会で相談していたの。聖夜祭の警備に不安がある、と。そうしたら、ミーアさんが、この件は任せるように言ってくれた、そして、あなたをあの鍋パーティーに呼ぶように進言してくれたの」
そっと胸に手を当てて、ラフィーナは、
「だから、今回の騒動はすべて私のせい……。もしも責められるべき人がいるとするなら、私よ」
静かな、穏やかな声で言うのだった。
――自己犠牲、か……。懐かしい、言葉だ。
ラフィーナの話を聞きながら、サンテリ・バンドラーは、ふと遠い昔のことを思い出していた。
彼は、もともとは公国の衛兵だった。
幼き日より、聖典を固く信仰していた彼は、将来は聖職者になる

ことを嘱望されていた。けれど、彼が選んだのは公国軍の衛兵という道だった。
聖典の教えである≪自己犠牲の精神≫が、自らの身を盾として貴人を守る衛兵と重なるように、彼には思えたからだ。
そうして、彼は衛兵となり、栄えあるセントノエル島の警備主任にまで上り詰めた。
この数十年、誠心誠意、自己の仕事に邁進してきたという自負はあった。けれど……、いつからだろう？　そこに、驕りの心が入ってきたのは……。
――神の教えに従って人々を守るために仕えてきたつもりだったが……、いつの間にか、自らの成してきた仕事を神としていたのか……。
まさか、年端もいかぬ少女に自己犠牲を強いてしまったのが、自分自身だったとは……。
どこか、悄然とした顔で、サンテリは、ミーアに頭を下げた。
「私が頑迷なばかりに、ミーア姫殿下に多大な苦痛を強いてしまったこと、謝罪のしようもございません」
それから、サンテリはラフィーナの方に顔を向け、やはり深々と頭を下げた。
「ラフィーナさま、私を、どうか警備から外していただきたく……。また、必要とあらばいかなる罰も受ける覚悟にございます」
「ダメよ、サンテリ。残念だけど、それは認められない」
サンテリの覚悟の言葉は、けれど、ラフィーナによってあっさりと却下された。
「なぜです……？　ミーア姫殿下に、毒キノコを食べることを強いてしまったのです。責任を取らなければ……」
「確かに身を引くことは潔い態度といえるでしょう。自らの行動に罪の意識をもってしまったのなら、罰を求めようという心情も理解はできます。けれど……、ミーアさんは、そんなことを望んでいないわ」

そうして、ラフィーナはミーアの方に顔を向けた。

「え？　ああ、ええ……。そうですわね……」

完全に置いてけぼり状態だったミーアは、急に話を振られてわずかに慌てる。

気分を落ち着けるために、目の前のお茶に手を伸ばして一口。

ほふぅっと息をこぼしつつ、考えをまとめる。

――まぁ、わたくしが勝手に毒キノコを食べてしまったせいで、この方を辞めさせるのは、後味が悪そうですし……。後で、もしも適当な考えで毒キノコを食べたことがバレたら……、それこそ大変なことになりますわ。

常に最悪な事態に備える。それこそが、小心者の戦略というものである。

自分勝手な理由で忠臣を解雇させられたと知ったら、ラフィーナはきっと怒るに違いない。

それは怖い！　想像しただけで、お腹が痛くなってくる。

――ここは、後でバレても大丈夫という形を作っておいたほうが、きっと心休まるというものですわね。同時に、あまり掘り返されないよう蓋をしてしまえれば、なおよいというもの。

となれば……。

素早く計算を整えて、ミーアは聖女のごとく穏やかな笑みを浮かべた。

「わたくしは、〝勝手に毒キノコを食べた〟という罪を、ラフィーナさまに許していただきました」

まず……、自らの勝手な行動を不問に付すことを〝既定事実〟としてしまう。それに加えて、

「わたくしは、別にそうだと思いませんが、ラフィーナさまは、わたくしに罪悪感を覚えておられるご様子。ですから、わたくしは、あえて、ここに宣言いたします。ラフィーナさまのわたくしに対する罪を許すことを」

ラフィーナが今回のことを気に病んで、おかしなことをしないように釘を刺す。この話は、これでおしまいにして蒸し返さないように！　という配慮である。
不都合な真実に、「それはもう終わったこと」という、蓋をしてしまおうというミーアの力業が光る。
そして、その仕上げとして……。
「わたくしも、ラフィーナさまも許されるのであれば、あなた一人に罪を背負わせることはフェアではないと考えますわ。だから、あなたもまた、許されるべきですわ」
サンテリのせいにしてこの場を乗り切れば、きっと後に禍根を残す。
責任を取らされた者には後々まで不満が残り続け、それに突き動かされて、なにかのきっかけで過去を掘り起こそうとするかもしれない。
それではまずいのだ。ミーアの理想は、みんなで有耶無耶にすることである。
仮に、掘り起こされても問題にはならないようにしつつ、掘り起こす気にもさせないようにする。
二重三重に蓋をして、それから、やりきった顔でミーアはサンテリの方を見た。
そして、ふと気づく。
サンテリの頑固そうな顔が、わずかばかり崩れていることに。それは、たとえて言うならば、そう……、固い雪が溶け、その下から柔らかな土が覗いているかのような……そんな印象だった。
もしかしたら、今ならば……。
ミーアは急遽、ここで付け足すことにする。
「ただ、一つだけ言わせていただけるならば……、わたくしは、あなたの仕事に敬意を払っておりますわ」
まず、ヨイショ。これが基本である。その上で、
「そして、これからも、その仕事に全身全霊をかけて邁進すること

を期待いたしますわ」
種を蒔く。
サンテリの仕事は、ミーアたちの命に直結する大切なものだ。だからより一層、熱心に励んでもらえるなら、それに越したことはない。
――今ならば、警備に手を抜くなと言っても素直に聞いてもらえそうな雰囲気ですし……、それにもしかしたら、サンテリさんの警備に気合が入ることで、わたくしの暗殺が防がれることだって……。
聖夜祭における、自らの死亡を防ぐべく、打てる布石はすべて打つ。
小心者の戦略である。
「ああ……なるほど。確かに……」
ミーアの言葉を聞いたサンテリは、一瞬、呆けた顔をした後、
「確かに、あなたは聖人の名に相応しい方だ。であれば、このサンテリ、そのお言葉を胸に刻み、職務に当たろうと思います」
ミーアの前に片膝をつき、誓いの言葉を述べたのであった。

サンテリ・バンドラーは、その生涯をセントノエル島の警護のために費やすことになった。
この老警備主任は、常々、若い者の意見を聞きたがり、決してそれを軽んじることがなかったという。
「私は、自分より知恵のある者がいることを知っている。経験を重ね、老年になった自分の思考が硬直しがちであることも知っている。だからこそ、経験が不足していようとも、柔軟な思考を持った若者の考えを真剣に聞かなければならない。あらゆる不測の事態に対処できるよう、あらゆることを検討し、常に視野を広くもたなければならない」
その老人の信条は、セントノエルの警備の礎となり、島の治安はより一層、強固なものとなっていくのであった。

第五十四話　シュトリナにはお友だちがいない

シュトリナ・エトワ・イエロームーンは、可憐な少女だった。
いつでも花が咲くような笑みと、鳥が歌うような声で、心が弾むような話をしてくれる。
たくさんの人に囲まれて、可愛がられる、愛らしい少女だ。
事実、社交界に顔を出せば、彼女の周りにはいつでも人がいた。
……でも、彼女には友だちはいなかった。なぜなら……、それは。

「まさか、ミーア姫殿下ご自身が、偽ヴェールガ茸を食べるなんて、予想外だったわ」
一日の終わりが近づく夜の時間。
それは、日の光を恐れる悪人が、悪だくみをする時間……。
シュトリナは、自室で髪を整えてもらっていた。
しゅ、しゅっとリズミカルに、髪をすく音が響いていた。
椅子に腰かけたシュトリナ、その長い髪を従者であるバルバラが丁寧に手入れをしていた。ベテランのメイドに相応しく、その手際は見事なものだった。
「まったく、最悪ね。まさか、火蜥蜴茸が見つかってしまうなんて……」
手鏡で、自らの髪が整えられていくのを見ながら、シュトリナは、ふと思う。
そういえば最近は、お風呂に入る回数が増えたな、と。
皇女ミーアに近づくため、入浴に適した薬草を探したり、ミーアの妹分であるベルと一緒に、お風呂に入ったり……。
そんなことをしていたせいか、シュトリナの髪は今まで見たことがないぐらいにキレイに輝いていた。
――まぁ、そんなのは、どうでもいいけど……。

シュトリナは、瞳を閉じて話を続ける。
「お父さまから、なにか連絡は？」
「最近は、皇女ミーアの手の者の監視が強化されているらしく、迂闊に連絡を取れないとのことです。手紙なども、恐らくは監視の対象でしょう」
「あら、失礼な人たちね。愛娘からお父さまへのお手紙も覗かれているなんて……」
もちろん、手紙に危険なことを書く際には、イエロームーン家に古くから伝わる暗号を用いて書くようにはしているが……。それでも油断はできない。
相手は、かの帝国の叡智の配下なのだから。
「お父さまが、その者たちを始末してくださるまで手紙でのやり取りは危ないかな。ああ、面倒くさい」
ため息をこぼすシュトリナ。そんな彼女に、バルバラの感情のない声が尋ねる。
「なぜ、あの場でミーア姫殿下を始末してしまわなかったのですか？」
「あの場で？　あの二人を、リーナ一人で殺せばよかったって、そう言うの？」
「シュトリナお嬢さまであれば、それも可能であったのではないかと……」
探るような上目遣いで見つめてくるバルバラに、シュトリナは笑みを浮かべた。
「殺すだけならもちろんできるわ。でも、あそこで殺してしまったら、捜索に来た者たちに火蜥蜴茸も見つかってしまうでしょう？それにリーナが疑われてしまうわ。それは、意味がないことでしょう？」
あの時、シュトリナにできたことは、ほとんどなかった。
生徒会のメンバーに火蜥蜴茸を見つけさせないこと、あるいは見つけたとしても、それが猛毒のキノコであると知られないこと……。

それ以外に、聖夜祭における毒殺テロを成功させる道はなかったのだ。
帝国の皇女、ミーアを殺してしまえば、その死は必ずや注目を集める。
仮に崖からの転落死を装ったところで、辺り一帯を調べられることは目に見えている。皇帝は愛娘、ミーアの死に怒り、悲しみ、公国に徹底した調査を要求するだろう。
その結果、シュトリナに疑いの目が向くかもしれない。
もし、そうなれば……、暗殺計画を実行することなど、できるはずもない。
「それでは意味がないって、リーナは思ったのだけど、間違っていたかしら？」
小首を傾げるシュトリナに、バルバラは無言で視線を送っていたが……。
「なるほど、ご賢明な判断であったかと……。さすがはシュトリナお嬢さま」
小さく頭を下げると、バルバラは、無言でシュトリナの後ろに回った。そうして、彼女の美しい髪を櫛で整えていく。
「しかし、やはり皇女ミーアは邪魔ですね……。このままでは、我々の計画の邪魔になることは確実でございます」
「そうね、なんとかしないといけないって、リーナも思ってるわ」
歌うような、朗らかな口調で、シュトリナは言った。
「おや……、お嬢さまもそうお思いですか？」
対して、バルバラは、わずかながら意外そうな顔をした。
「あら、当たり前でしょう？　帝国の立て直し、レムノ王国の革命阻止に続いて、今回のことですものね。計画をこれだけ潰されたんですもの。なんとかしなきゃって、誰でも思うわ」
「そうでしたか。それは好都合。であれば、聖夜祭の暗殺の標的を皇女ミーアに変える、ということにも、ご同意いただけますか？」
その言葉には、さすがのシュトリナも驚いた顔をした。

「簡単に言ってくれるわね。毒を手に入れる手段もなくなったし、いったいどうやって、ミーア姫殿下を手にかけろというの？」
肩越しに振り替えるシュトリナ。すると、バルバラが、抱きすくめるように、首筋に腕を回してきた。
「これを……お使いになればよろしいではないですか」
なにかをシュトリナの首に巻き付けた後、バルバラは身を離した。
あとに残されたもの、シュトリナの首にかかっていたもの……、それは、ベルがプレゼントしてくれた馬のお守りだった。
「あの少女は、皇女ミーアのお気に入りなのでしょう？　利用するつもりだと、お嬢さまも言っておられたではないですか？　それをつけたところを見せて、喜ばせて……甘い言葉で心を操ればいい。心を支配するは、我々、蛇の得意とするところ……そうではありませんか？」
「でも……」
なにかを言いかけたシュトリナだったが、まるで、それをかき消すように、バルバラが言った。
「今までだって……幾度もやってきたことでしょう？」
それを聞き、すとん、とシュトリナの顔から、表情が消える。
対照的に、バルバラはねっとりと笑みを浮かべた。
「大丈夫、上手くいきます。この、バルバラがついております」
まるで、蛇が笑うかのように……。

シュトリナ・エトワ・イエロームーンは、可憐な少女だった。
誰からも愛され、大切にされるはずの少女には、けれど、友だちが一人もいなかった。
なぜなら彼女が、お父さまに言われて親しくなる子は……彼女のお友だちは、みんな破滅していったから。
父親が死に、母親が死に、時にはお友だち自身が……。
でも、シュトリナは別に悲しいとは思わなかった。相手は自分と同じ貴族だ。友誼を結ぶのには、必ず裏があるし、贈り物には打算

がある。きっとそうだ。そうに違いない……。
だから……、いなくなったって気にしない。
悲しくもないし、つらくもない……。
お友だちが彼女の前からいなくなった時、その子からもらったプレゼントを捨ててしまうのが、いつしか、シュトリナの習慣になっていた。
――今までも幾度もやってきたこと……。また、捨ててしまえば、なんとも思わない。
そうしてシュトリナは、首にかけられた馬のお守りをギュッと握りしめるのだった。

第五十五話　死闘！　……死闘？

一方、ミーアが毒キノコでうんうん唸っている頃……。
ルードヴィッヒとディオンは馬車の中にいた。
ジルベールとの会合の後、イエロームーン公爵家の危険性を実感したルードヴィッヒはすぐさま行動を開始した。
情報収集と同時に分断工作を仕掛けるのだ。
それは巨大な集団に敵対する際の常套手段だった。その集団が大きければ大きいほど、一枚岩ではありえない。圧力をかけるにしろ、友好関係を築くにしろ、アプローチのしようはいくらでもある。
イエロームーン公爵家が、帝国に敵意を持つ者たちに対する誘因装置なのだとしたら……、そこに集うすべてを敵として扱うことは愚かなこと。
そうしてルードヴィッヒが一番に目を付けたのが、中央貴族から疎外されている辺土貴族たちだった。
味方がいないがゆえに、イエロームーン公爵家に身を寄せる者たちであれば、ほかに受け皿を作ってやれば、離反させることも可能なはず。
そして、辺土貴族に呼びかけるべく、ルードヴィッヒが協力を求めたのが、ルドルフォン辺土伯だった。
「日が落ちてしまったか……」
馬車の外を覗き見たルードヴィッヒは、小さくため息を吐いた。
目的地までの道のりは、そこまで険しくはないとはいえ、月明りを頼りに進むには危険が伴う。
夜営するのが普通という状況ではあったが……。
「少し速度を落としてそのまま進もう。今は時間が惜しい」
御者に指示を出すルードヴィッヒにディオンが頷いて見せた。
「ああ、そうだね……。そうした方がいい。ついでに言うと……」

それから、ディオンは、わずかに瞳を細めて……。
「速度も落とさない方がよさそうだけどね」
「どういう意味だ？」
ルードヴィッヒが眉をひそめた直後、遠くで荒々しい獣の咆哮が聞こえた。
「なんだ、今のは？」
思わず口にした疑問に答えるように、馬車の横に護衛の騎兵が馬を寄せてきた。
「どうした？」
鋭く端的なディオンの質問に、答える兵の声もまた短く、誤解のしようのないものだった。が……。
「どうやら、狼が襲ってきたようです」
ルードヴィッヒは思わず、耳を疑った。ついつい、聞き間違いではないか、と聞き返してしまう。
「狼？　こんなところでか？」
兵士は頷いてから、後方に火矢を放った。
綺麗な軌跡を残して飛んだ矢は、地面に刺さる一瞬、周囲のものを照らすように爆ぜた。
その瞬間、確かに見えた。
黒く巨大な狼の影……、その数は三つ。
「帝国内に人を襲う狼の群れがいるとは……、聞いたことがなかったが……」
怪訝そうにルードヴィッヒが眉をひそめた。
「……いや、ただの狼じゃなさそうだ。微かだが……、馬の足音が聞こえるよ」
ドアを開け、馬車から半身を乗り出したディオンは後方に目をすがめる。と、次の瞬間、流れるような動作で弓を構えた。きりきりと弦を引き絞り……放つ！
続けざまに三本。
夜闇を切り裂き矢が向かう先、狼たちの間、そこに、ギラリと、

鈍い光が瞬いた。
それが、月明かりを反射して輝く刃であることに、刹那の後に気が付いた。
再び、護衛の騎士が火矢を放つ。それが、空中で真っ二つに切り落とされた。
「黒い馬に乗った男……か？」
馬車の中から後方をうかがっていたルードヴィッヒが小さくつぶやく。
「へぇ、やるなぁ。この闇の中で、矢を弾くか……」
上機嫌に口笛を吹きながら、ディオンが笑った。
「敵は一人か？」
「たぶん。まぁ周りを操った狼に固めさせてるっぽいから、厳密には一人とも言えないけれど……」
「狼使い、ということか。変わっているな……。しかし……こちらが邪魔になっていよいよ暗殺者を送ってきたということか。一人で来るというのは、いささか不自然な気もするが」
首を傾げるルードヴィッヒに、ディオンは小さく肩をすくめた。
「別に不思議なことじゃない。僕でも十人程度なら、護衛を皆殺しにして邪魔者の首を切り落とせるからね。敵にも同じような実力者がいても、まぁ不思議はないさ」
それから彼は、馬車の周囲にいた三人の護衛兵に声をかける。いずれも、元ディオン隊に所属していた腕利きぞろいの兵士たちであったが……。
「お前たちは、ルードヴィッヒ殿を守りつつ、ルドルフォン辺土伯領に退避。伯に保護を求めろ。この御仁に、傷一つ、つけるんじゃないぞ」
「ディオン隊長は、どうされるので？」
「ははは、ここで楽しい楽しい足止めだよ。ああ、馬を一頭借りていこうか」
「お一人で、ですか？」

心配げに尋ねてくる兵に、ディオンは小さく首を振った。
「敵は手練れだ。正直、僕以外だと、厳しいよ」
馬車の隣を走っていた護衛騎士から馬を譲り受けると、ディオンは笑いながら言った。
「では、ルードヴィッヒ殿、しばしのお別れだ」
「貴殿のことだから、大丈夫だとは思うが……」
「無論さ。というか、本当のことを言うとね、楽しそうな相手だから、僕が相手をしてやろうというだけの話なんだよ」
ニヤリと皮肉げな笑みを浮かべて、ディオンは言った。
「だから、むしろ気を付けてもらいたいのは、ルードヴィッヒ殿の方でね。僕がいなくても討ち取られてくれたりしないでくれよ」
それから、ディオンは剣を引き抜き、意気揚々と馬首を返した。
すぐさま、疾走する三匹の狼が、ディオンに向かい一斉に飛び掛かってくるが……。
「すまないな、生憎と獣との戦いはさんざんやってきて飽きてるんでね」
その牙を難なくかいくぐり、ディオンが向かうはその陰。狼たちとディオンをぶつけ、自身は馬車の方に向かおうとしていた黒馬の暗殺者の方だった。
夜闇を身にまといし黒馬、その上に騎乗した男もまた、漆黒のローブを身にまとい、黒い覆面で顔を隠していた。
表情のうかがい知れぬ暗殺者に、ディオンは狙いを定めて、剣を一閃！
鉄の鎧ごと切り裂くような重たい斬撃！　敵は、それをかろうじて回避する。
自らの体の一部のように馬を駆る男に、ディオンは楽しそうに笑いかける。
「やぁ、いい腕だ。僕の剣をまともに受けなかったのは、特に賢明な判断だね」
笑いながら馬首を返す。と、暗殺者も、動きを合わせるように綺

麗に方向転換してくる。
一合、二合、三合、四合。
刃が交わされ、火花が散る。
打ち合ってみて、ディオンは……、すぐに自らの不利に気付いた。
――へぇ。驚いた。馬上では僕の方が不利か。力ではこちらが上だけど、速さと馬の扱いは完全に負けて……っ！
直後、唐突に暗殺者の剣が突き出された。
流れるような華麗さで放たれた刺突は、ディオンの脇腹を深々と貫き通し、背中から刃が飛び出した――ように見えたのだが……。
ニヤリ、と笑みを浮かべて、ディオンは言った。
「まぁ、なにも相手に有利な環境で戦ってやることはないよね」
よく見れば、刃はディオンの脇腹をかすめたのみ。むしろ、暗殺者の腕はがっちりとディオンの脇に固められていた。
「しばしお付き合いいただこうか？　なぁに、お互い軽装だし、まぁ、馬から落ちたぐらいでケガをするほどヤワでもないだろう？」
そうしてディオンは、真後ろに身を投げ出した。暗殺者の腕をこれ以上ないぐらいにがっちりと掴んだまま……、その体は大地へと落ちていき……。

もつれあうようにして落下した二人であったが、そのまま地面に叩きつけられるようなことはなかった。
空中で身を離して互いに着地。すぐさま、斬撃を交わして、一歩距離を取る。
「さ、それじゃあ、人間らしく、この大地の上で切り結ぼうじゃないか。互いに命尽きるまで、心行くまで殺しあおう」
ディオンは、もう片方の剣を抜き放ちながら、笑みを浮かべる。
「それで、暗殺者くん、名乗り上げは必要かい？」
直後、覆面の男が動く。
工夫のない正面からの突撃、繰り出された斬撃を刃で受け止めつつ、ディオンは上機嫌に口笛を吹く。

「背後に回らせた狼から目を逸らすために馬鹿正直に突撃してきた、か。よく考えられてるね」
後方から、ざくっざく、とすさまじい速度で迫ってくる狼たちの足音。
荒々しい息遣いを聞きつつ、ディオンは笑った。
「連携が取れた動きだ。どうやって獣を操っているのやら……」
直後、ディオンは目の前の相手に向かって前蹴りを放つ。その反動で後方に飛び、反転しつつ、剣を横薙ぎに一閃。
月明りを反射して閃く斬光、それは、獣である狼たちさえ怯ませる研ぎ澄まされた殺気。
立ちすくんだ狼たちを一瞥し、ディオンは小さく肩をすくめる。
「やれやれ、さすがは獣というべきか、それとも、しょせんは獣というべきかな。僕の間合いに入らなかったのはさすがだけど……、あのまま突っ込んでいれば、一匹は僕に食いつけていたかもしれないのにね。身の捨て所を知らぬ……、しょせんは獣だ」
ディオンは右の剣を肩に担ぎ、左の剣を、びゅんと振って見せた。
「まぁ、でも、もし捨て身できたら、すべて切り捨てられた可能性ももちろんあるわけだけど、ね……」
にらみつけると、狼たちが一歩引いた。
これにて、どちらが強者かの格付けは済んでしまう。獣にとって、その上下関係は大きな意味を持つ。
絶対的強者に意志の力で挑もうなどという無謀をやらかせるものは、人間以外にはいないのだ。
「さて、それじゃあ、続きをやろうか」
そうして、ディオンが視線を戻した……直後、男が不意に、後ろに引いた。
「あれ？」
一瞬、きょとんとしてしまうディオンだったが、豪速で走ってきた黒馬に男が飛び乗るのを見て、額を叩いた。
「ああ、しまった。馬のことを忘れてたな……狼を使って戦おうな

んてやつだから、馬にだって、そのぐらいの芸当をやらせるか」
ふと見れば、狼たちの姿もすでになかった。
「見事な引き際だな。まぁ、このぐらい時間を稼げば、ルードヴィッヒ殿も逃げきっているだろうけど。それにしても無口なやつだったな……。声ぐらいは聞いてやろうと思ったのに一言もしゃべらなかったか……。それに……」
ディオンは辺りを見回して、小さく肩をすくめた。
「さてさて僕の方の馬はどこに行ってしまったのやら……」

第五十五話　死闘！　……死闘？（後書き）

さて、ぼちぼちキノコ狩り編はひと段落。
運命の聖夜祭編が始まります。
ということで区切りも良いことですし、来週は月曜日にもう一話更新した後に小休止を入れさせていただき、また十二月から再開ということにさせていただきます。

第五十六話　愚か者で、弱虫な詐欺師の述懐

帝都近郊、中央貴族領地群の東に位置する場所。
イエロームーン公爵領、その領都の一角に、領主の館は建っていた。
帝国を代表する四大公爵家のものにしては、いささか小さめなれど、それでも、一般的な貴族とは比べるべくもない大きなお屋敷。
その中庭の、数多の花々に囲まれた庭園に、一人の男がたたずんでいた。
年の頃は五十代の半ばといったところだろうか。その体は年相応に丸みを帯びて、腹などは、ぽんにょり突き出ている。
どこかのＦＮＹ皇女がサボった末の姿を、思わず幻視してしまいそうになるＦＮＹ体型である。
きょときょとと、落ち着きなく動く小さな目、その下には色濃く隈ができていた。
「……しかし、それは……、だが、ぐむ……毒キノコ……」
ぶつぶつと何事かつぶやきつつ、その男、ローレンツ・エトワ・イエロームーン公爵は、庭園の中をウロウロと、落ち着きなく歩き回っていた。
ふいに、こつ、こつ、という固い足音が近づいてくる。
現れたのは老境の執事だった。姿勢正しく自らの主のそばまでやってきた執事は、恭しく頭を下げた。
「失礼いたします。お館さま」
生真面目な呼びかけに、主たる男……ローレンツは、ビクリと肩を緊張させる。けれど、すぐに相手の正体に気づき……。
「あ、ああ……ビセットか。驚いた。ついつい考え事にふけってしまっていた……」
バツの悪そうな笑みを浮かべるローレンツに、執事、ビセットは

厳格な表情を崩さない。
「それは、ご思索にふけっておいでのところ、申し訳ございません。急ぎでご報告したきことがあり参上いたしました……。失礼ですが、もしや、昨晩からずっと、ここに？」
「う、うん、まぁ、ね。なにせ、一大事だから、悠長に寝てなんかいられないよ」
　気弱そうに言って、ローレンツはふわぁ、っと欠伸をこぼした。
「では、眠気覚ましにお茶を淹れて参りましょう。報告は、その後で……」
「ああ、すまないな……、ビセット」
　そう言って踵を返す執事に、ローレンツは深々とため息をこぼすのだった。

「しかし、お館さま。少しはお眠りになりませんと……、お体に障ります」
　戻ってきて早々、ビセットは苦言を呈した。けれどローレンツは、それに苦笑いを返すばかりだ。
「あ、ああ、そうしたいのだけどね……。私は詐欺師だからね。それも、あまり優秀じゃない詐欺師だから、欲しいものを手に入れるには知恵を絞らないといけないんだ」
　目元をぐりぐりと拳で押しながら、ローレンツは言った。
「なにせ、聖夜祭までに時間がない。頭を使える時間は限られている……」
「実は、その聖夜祭のことでご報告がございます」
　執事の言葉に、ローレンツはビクッと肩を震わせた。
「どうした？　なにか、状況に変化が……」
「はい。実は、例の森にある毒キノコ……、火蜥蜴茸が、ミーア姫殿下によって発見されたとのことです」
「あー……」
　ローレンツは天を仰ぎ……、その後、気弱な笑みを浮かべた。

「まいったな……。そうか、帝国の叡智……。ミーア姫殿下とは、それほどなのか……」
笑うしかないと言った様子で、ローレンツは言った。
「やれやれ、本当にすごいな。ミーア姫殿下は……。私など、知恵を振り絞っても、ただただ、先延ばしにすることしかできなかったのに……。しかも、その尻拭いを娘にさせるなんて、最低なことまでやっているのに……。本当に、大したものだ……。それで、それ以降の情報は、まだ入ってきていないか？　バルバラは、どうするつもりなのだろう？」
「残念ながら、不明です。ミーア姫殿下の家臣団が、なかなかに優秀なようで。それに、帝国内の風鴉が一掃されてしまったことが痛手でした」
「あ、ああ、そうだった。あれも、ミーア姫殿下がやったことか。いや、すごいな、本当に」
首を振りつつこぼす、ローレンツのため息は深い。
「それと、どうやら、狼使いは、失敗したようにございます」
「連戦連敗じゃないか。まぁ、ミーア姫殿下の剣は優秀だという話だから、驚くには値しないだろうけど……。しかし、蛇ご自慢の“狼使い”が失敗するとは……。それはさぞや彼らも慌てているのだろうな」
「危うく討ち取られるところだったとかで……。どうやら、狼使いを一度呼び戻したいとのことですが……」
「そう……か」
おどおどと、視線を彷徨わせつつも、ホッと安堵の息を吐くローレンツ。だったが……。
「まぁ、その決定を我々がどうこうできるわけでもなし。きちんと協力して国外に出して……」
ふいに、その顔に真剣な色が宿る。
「呼び戻す……、方向としては……、セントノエル、ヴェールガを経由して……」

ぶつぶつとつぶやきだしたローレンツを、ビセットは黙って見つめていた。
そんな視線に気づいたのか、ローレンツは、再び、普段通りの気弱な笑みを浮かべた。
「しかし、いつも苦労をかけるね。君にも、そろそろ故郷が恋しいんじゃないかい？　本当なら、あの時に、彼らと一緒に帰ってもよかったんだけど……」
「あなた様から受けたご恩をお返しするまでは、帰ることはないでしょう。それに……」
ビセットは、わずかばかり、表情を緩めて言った。
「いえ、お館さまのもとで働けることを誇りに思っております」
「お世辞はいいよ。私は、弱虫で愚か者で、嘘つきだ。だから、ちっぽけなものを手に入れるためですら……、すべての知恵を傾けなければならないんだ」
ローレンツは、再び考え込んで……。しばらくしてから言った。
「私の頭では、とてもではないが情勢は読み切れない……。だが、セントノエルで事が起きるかもしれない。こちらも打てる手は打っておくとしようか……」

第五十六話　愚か者で、弱虫な詐欺師の述懐（後書き）

予告通り、ここまでで一区切りとします。
聖夜祭編は１２月の第一月曜日からスタート……予定です。
本日、夕方ぐらいに活動報告更新します。いろいろと情報解禁があるかと思われます。

第五十七話　ミーアの憂鬱（表）

秋も深まり、徐々に冬の足音が聞こえるような寒い一日。聖夜祭を一週間後に控えたある日のこと。

ミーアの部屋には、友人のラーニャ・タフリーフ・ペルージャンが訪れていた。

ペルージャン農業国では、毎年、聖夜祭に、自国の果物で作ったお菓子を提供している。各国の王侯貴族の子弟が集まるセントノエルである。クロエなど商会の関係者も多いため、目をつけてもらえれば、大きな商売に発展する可能性が高い。

そんなわけで、ペルージャンの姫君たちは気合を入れて、例年、新商品のお菓子を売り込んでいくのである。

この日、ラーニャは聖夜祭に出す予定のお菓子を持参して、ミーアの部屋に来ていた。ミーアに食べてもらって、アドバイスをもらうというのが表向きの理由であったが……、本当の目的は別にあった。

それは……。

「あの……、アンヌさん、少しよろしいですか？」

つつがなくお茶の時間が終わり、ミーアの部屋を出たところで、ふいにラーニャが立ち止まった。見送りに出てきたアンヌに、ひそめた声で尋ねる。

「はい、なんでしょうか？」

首を傾げるアンヌに、一瞬、躊躇した様子を見せたラーニャだったが、やがて意を決して口を開いた。

「ミーアさま、お元気がなさそうでしたけど、どうかされたんですか？」

実のところ、ラーニャがお菓子を持参してきたのも、ミーアの心配してのことだった。

最近、ミーアは元気がないのだ。
いつも沈んだ顔で、気付けば憂鬱そうにため息をこぼしている。
今日も、お菓子で元気になってもらおうと、選りすぐりのものを持ってきたラーニャであったが……。
「ミーアさまが、お菓子を残されるなんて初めてだったから……私、動揺してしまって……」
そう、先ほどミーアのお皿には、きわめて珍しいことにお菓子が残されていた。
いつも完食し、器用にも欠片も残さずに平らげていたミーアが……、である。
ちなみに、本日出されたのは、フルーツをふんだんに使ったパイだった。ミーアが残したのは、パイ生地の端っこの部分、ちょっぴり固くなってる部分である。甘くて柔らかい部分はちゃっかり食べているあたりは、さすがミーアである。
まぁ、それはさておき、最近、ミーアに食欲がなさそうだということは、すでに周囲の者たちも知るところとなっていた。
食堂でも必ず一口分程度は、いつでも残すようになってしまい、厨房のスタッフも心配していた。
「もしかして、毒キノコでお腹を壊した影響がまだ残ってるんじゃ？」
などと気を利かせて、消化に良い物を作ってくれたりもしたのだが、その追加の料理も、やっぱり一口分程度残してしまっていた。
パンの一欠けらも残さない主義のミーアにしては、これはとても珍しいことだった。
ちなみに、すでにお気づきのこととは思うが、通常の料理九割と、追加の料理を九割食しているので、食べている量としては増えているのだが……。
食べ物を残さないはずのミーアが残したというイメージが強すぎるため、その真実に気づく者は、残念ながら一人もいなかった。
「お心遣い、感謝いたします。ラーニャ姫殿下」

アンヌは深々と頭を下げて、それから、苦しげに顔を歪めた。
「ですが、私にもわからないのです。情けない話ですが……、ミーアさまが、なにかに悩んでおられることは確かだと思うのですが……、私にお話しくださらないんです」
「そう……ですか」
ラーニャは、心配そうにアンヌの顔を見つめていたが……。
「きっとなにか理由があるんだと思います。ミーアさまのことですから。だから、あまり気落ちしないでください。私の方でも、元気を出していただけるように、いろいろと考えてみますから」
そう言って去っていくラーニャに、アンヌは深々と頭を下げた。

部屋に戻ると、ミーアがぼんやり、窓の外を眺めていた。
はふぅ、と切なげなため息をこぼすミーアに、アンヌは悲痛な表情を浮かべる。
「ミーアさま……」
思い出すのは、ミーアが毒キノコを食べて倒れた時のことだ。
――あの時、ミーアさま、約束してくださらなかった……。死地に赴く時に、私の同行を許してはくださらなかった。
アンヌは、ちゃんとミーアの言葉を聞いていた。一言一句、聞き逃さないように聞いていて、そして、ミーアが、あえて言及を避けたことにも、きちんと気が付いていたのだ。
――もしかしたら……、近々、あの時みたいに危険なことが起こるのかもしれない。それで、ミーアさま、不安で……、でも、私のこと巻き込まないようにって、一人で抱えこんでおられるのかもしれない。
さらに、ここ最近、アンヌには気になることがあった。それは……。
――最近、ミーアさま、少しお肌が荒れてる気がする。もしかして……、なにか心配事があって、寝てないのではないかしら……？
そのことに気付いてから、何度か夜中に様子を見に行ったことが

あったが、その時にはぐっすり眠っているように見えた。でも……。
――ミーアさまのことだから、私に心配させないようにって、弱ってるところを見せないということだって考えられるわ。ミーアさま、そういうところあるから……。
……そうだっただろうか？　割と、アンヌには弱味を見せまくっているような、そんな気がしないではなかったが……。
それは、ともかく、アンヌはミーアのことを大変心配していたのだ。心から心配していたのだ。
だが……、ミーアが、本当に夜も眠れぬほどに悩みぬいていたのかというと……。
実はそんなことはなかったりするのである。

第五十八話　ミーアの憂鬱（裏）　～ミーア姫、背徳の限りを尽くすことを決意する！～

さて……、周囲にさんざん心配をかけているミーアなのだが……。実のところ元気がない……、というわけではないのだ。

「ふぅ……」

などと切なげなため息を吐いているが、決して！　元気がないわけではないのだ。

なぜなら、ふぅ、とため息を吐きつつ、その手はお腹のあたりをさすっているのである。

そう、つまりは食べすぎである！

もちろん、精神的にも平常でないと言えばないのだ。

なにしろ、死期が近づいてきているのだから当然、いつもと同じというわけにはいかなかったが……。それでも、いつまでもビクビクしていても始まらないと吹っ切れていた。

――そうですわ。死を回避するための備えは、おおむねすべて済んでおりますし……。

聖夜祭の夜、すなわちミーアが死ぬはずの時間には予定通り、生徒会のパーティーを予定に入れておいた。警備も強化してもらった。やれることはやったのだから、後はもう仕方ない。

切り替えが早いのがミーアの良いところなのだ。

ではなぜ、ミーアの様子がおかしいのかと言えば、理由はとても簡単で……。

――でも……、万が一、死んでしまった時のために、悔いを残さぬようにすることも大切ですわ。どうせ死んでしまうのですから……好き勝手に生きたっていいんじゃないかしら！？

そうしてミーアは聖夜祭の日まで、この生活を謳歌することに決めたのだ。

いわゆる「明日、世界が滅びるんだったら何やったっていいじゃ

ない！」理論である。
そうなのだ、ミーアは、刹那的に生きようと決めたのだ。
さて、そんなミーアが手始めにやり始めたこと、それが食事における贅沢である。
――美味しいところだけを食べて他を残す……。もったいないなどと言わずに、美味しいところだけ一口かじって残す……、それこそが究極の贅沢というものですわ！
お忘れかもしれないが、ミーアは一応は大帝国の姫君である。
長らく忘れていたが、贅沢の仕方はしっかりと知っているのだ。
――ふっふっふ、ああ、背徳の限りを尽くしてやりますわ！　やってやりますわよー！
そうしてミーアは、実際にそれをやってみたのだ。そう……やってはみたのだが……。
――やはり、これを残すのは……ちょっとだけもったいないような……？　も、もう少しだけ食べて残そうかしら……？　でも、これも十分に美味しいですし……、やっぱり残すのはもったいないような……。
などと、すっかり吝嗇家が肌に馴染んでしまったミーアである。
結果、料理の美味しいところだけつまみ食いするぐらいで、ちょうどいい量になるように注文した（ちょっぴり多めに注文した）のに、それをちょこっとだけ残して平らげた上に、心配されて特別メニューまで出してもらう始末……。
その食べた量は、お腹のＦＮＹがちょっぴり心配になるレベルであった。
さらに、肌荒れの原因もその乱れた食生活だったりする。
食生活のバランスが崩れてしまった結果、肌に如実に影響が出るようになってしまったのだ。
それはちょうど、贅沢に慣れない人が無理して美味しいものをたくさん食べてしまった結果、お腹を壊すことに似ている。
いつの間にかミーアは、贅沢ができない健康的な体になってしま

っていたのだ。
「食事は、やっぱりいつも通りが一番ですわ……」
そう結論付けたミーアである。
「しかし、あと背徳の限りを尽くすとすると、ほかには……」
そうして、ミーアは考える。
まず、教室に落書きをして回るなどというしょうもないアイデアが浮かぶが、すぐに却下する。
世界が滅びると思い込んで、実際には滅びなかった時の悲劇……。その危険性をミーアはしっかりと認識しているのだ。
教室を壊して回った際、もしも、皇女伝の通りにならなかったら、せっかく生き残れたとしても、ラフィーナに別の意味で殺されるだろう。
あまり無茶はできない。
「そもそも、それって楽しくなさそうですし……。うーむ……、悪いことして楽しいって意外と難しいことですわ」
悪を為すにも勇気がいるものなのだ。ミーアの小心者（チキンハート）の心臓では、悪行は楽しめないのである。
しばし迷った末、ミーアは、ポン、っと手を打った。
「あ、そうですわ。どうせ死んでしまうんでしたら、アベルといっぱいイチャイチャしたいですわね。馬に乗ってデートに行ったり、町を歩いたりしたいですわ！」
これは良いことを思いついた、と、ミーアはウキウキ、胸を弾ませる。
「そもそも、ここ最近のわたくしは生き残ることにばかり必死で、日々の生活に潤いがございませんでしたわ。もっと、アベルとイチャイチャしたり、キノコ狩りに行ったり、しておくべきでしたわ！
我ながら痛恨の失態、しっかりと取り戻さなければ……」
一瞬、そこでミーアは立ち止った。
「でも、アベルにも予定があるでしょうし……、連れまわしたりしたら迷惑かしら……」

しばし考え込む。けれど、
「いえ、気にする必要ございませんわ。だって、わたくしは、聖夜祭の夜に死んでしまうわけですし。好き放題にわがままやってやりますわ！」
ちょうどよい具合の「背徳を尽くす」行動を見つけて、ミーアはニンマリする。
「ふふふ、今のわたくしは無敵ですわよ！」
こうしてミーアは、刹那に生きるべく、アベルのもとへと向かったのだった。

第五十九話　帝国にて消えた男……刹那姫ミーア来襲す！

「ふぅ……」

廊下を歩きつつ、アベル・レムノは深いため息を吐いた。

聖夜祭を控えた学園内には活気が満ち溢れているのに、彼の気持ちは沈むばかりだった。

「いったい、どうしたんだろう、ミーアは……」

彼女の元気がないことは、当然アベルも気が付いていた。

ずっと、彼女に追いつきたいと思い、頑張ってきた。

彼女を守れる男になりたいと剣の腕を磨き、その叡智に近づきたいと勉学に励んできた。

けれど、どれだけ頑張ってもアベルには、ミーアがなにを悩んでいるのかが、まったくわからなかった。いや、それだけではなくって……。

「……悩んでいるのに、ミーアは一言もボクに相談をしてくれない」

そのことが、地味にショックであった。

確かに、ミーアは、しばしばその天才に任せて行動してしまう。先日、みなが肝を冷やした毒キノコ騒動しかり、である。天才であるがゆえに、周りへの説明を怠ってしまうことがあるのだ。

それはわかっていて……、あるいは相談してくれなくて寂しいと思っているのが、あくまでも自分がいじけているだけであって……、それは格好悪いことだとも理解できていて……。

それでも……悔しかったのだ。

そうして悶々とすること数日、アベルは意を決してシオンのもとを訪ねることにした。

「ボクでは見えないことも、シオンには見えているかもしれない」

アベルの中で、シオン・ソール・サンクランドは、未だに届きえない高い壁だ。いつかは乗り越えたいと思っているが、その差の大

きさに、いつも打ちのめされる相手である。
　正直、そんな彼に助言をもらうのは少しだけプライドが傷つくことではあったのだが……。今はそれ以上にミーアのことが心配だった。
　ということで、アベルはシオンの部屋を訪れたのだが……。
「おや、君は……」
「これはアベル殿下。ご機嫌麗しゅうございます」
　そこで意外な人物と鉢合わせすることになった。メイドのモニカである。
「やあ、モニカ。君か……」
　彼女が間諜としてレムノ王国に潜入していた時には、よく顔を合わせていたものだったが、このセントノエルに来てからは、あまり会う機会もなかった。
「元気そうでなによりだ」
「はい。ラフィーナさまには、よくしていただいております」
「そうか……。しかし、その君がどうしてシオンのところに？」
　その問いかけに答えたのはシオンだった。
「少し手伝ってもらいたいことがあったから、協力してもらっているんだよ」
　その言葉を裏付けるように、シオンの目の前、机の上に紙が乱雑に積み重ねられていた。
「それよりアベル、君の方こそどうしたんだ？　俺の部屋に来るなんて珍しいな」
「ああ、実は最近ミーアの元気がないようだから、なにか心当たりがないかと思ってね、相談に来たんだが……。でも、お邪魔なようだったら、時間を改めるよ」
「いや、構わない。一休みしようと思っていたところだ」
　シオンは、グッと体を伸ばして、大きく欠伸をした。
「そうかい？　しかし、お疲れのようだけど、いったいなにをしていたんだ？」

怪訝そうに眉をひそめるアベルに、シオンは一枚の紙を差し出した。
「ああ、実は……、これを調べていたんだ」
「うん？　これは……、イアソン、ルーカス、マックス、タナシス、ビセット……、なんなんだい、この名前は？」
見たことのない名前の羅列に、アベルは内心で首を傾げる。
「ミーアの元気がないことは、俺も気付いていた」
そう言って、シオンは肩をすくめた。
「だから、心配はしていたんだが、あいにくと彼女を元気づける方法が思い浮かばなかった。だから、俺は俺にできることをしようと思ったんだ」
「君にできること……？」
「そうだ。先日来、俺はずっと風鴉のことを調べなおしていたんだ。レムノ王国での失態を取り戻すため、名誉挽回のためになにができるか、と、ずっと考えながらね」
その言葉でアベルは、生徒会選挙の時にシオンが言っていたことを思い出した。
生徒会選挙に立候補するようにミーアに誘われた際、シオンは名誉挽回の機会は自分で作る、と言っていたのだ。
「その名前の羅列は、帝国内に潜伏していた風鴉の構成員が使っていた名前だ」
「風鴉の……？　帝国内から引き揚げてきた内の誰かが使っていた、ということかい？」
「いや、そうじゃない。帝国内で行方をくらませた構成員が使っていたものなんだ」
「行方をくらませた……」
その言葉に、ピンとくるものがあった。アベルはわずかに声を低くして言った。
「もしかして……、以前、蛇の情報をもたらしたと言っていた者のことかい？　確か帝国四大公爵家の一つが混沌の蛇と関与している

という情報を伝えてきたという……」
「ああ、さすがに勘がいいな。その通りだ」
シオンの言葉を補足するように、モニカが口を開いた。
「その方は、私の師でもあった方で……。帝国に対する諜報網の基礎を築いた人でした。現地の協力者たちをまとめ上げる、諜報責任者（スパイマスター）と呼ばれる立場の方で……」
「もしも、その男が生きていたら……。彼の持っている情報はきっとミーアのために役立てることができると、思ったんだがな……」
シオンは小さく首を振った。
「なかなか、上手くはいかないものだ」
「やはり、もう消されている可能性が高いということかい？」
「それもあるが、ここからでは調べられることにも限界がある。なにしろ、帝国内の風鴉は全員、本国に撤収してしまったからな。一応はモニカに、風鴉の緊急用の連絡法を試してもらっているのだが、今のところ反応はなしだ」
そう言って肩をすくめるシオンであったが、アベルは感心しつつ、それを見ていた。
――シオンは着実に自分がすべきことをして、ミーアの力になろうとしている。それなのに、ボクは、なにをやっているんだ……。
思わず、ため息を吐くアベルだったが、ふいに、その肩をシオンに叩かれる。
「しっかりしろよ、アベル。ミーアが元気がないというなら、元気づけるのは君の役目だぜ」
「ははは、できる自信はないが……。でも、そうだな、せいぜい頑張ってみるとしよう」
ミーアがなにを考えているか、理解することは難しい。その悩みを共有してくれることも、もしかしたらないのかもしれない。
けれど、ミーアを元気づけることぐらいはできるはず……。
「ボクはボクにできることを、か」

そんな、いたって真面目な話をする男子ズのところに、
「ああ、こんなところにおりましたの。アベル、ちょっとよろしいかしら？」
刹那を生きる女、ミーアが来襲した！

第六十話　太心者のミーアは踊る！

「ああ、探しましたわよ、アベル。シオンのところにおりましたのね」
なにげなくそんなことを口にするミーアであるが、よくよく考えればわかる通り、ここは男子寮である。そこまで厳密には決められていないものの、基本的には女子の立ち入りは禁止となっている。
少なくとも意中の男子を遊びに誘うために、ずんずん足を踏み入れていい場所ではない。
けれど、放蕩（ほうとう）ミーアはそんなことは気にしない。
なにしろ、今のミーアには怖いものなど……ちょっとしかない。
そうなのだ、小心者（チキンハート）ミーアは、ついに太心者（ポークハート）ミーアに成長したのだ。
……放っておくとＦＮＹになってしまわないか、若干心配ではあるが……。
「ミーア、男子寮に来るなんて、いったいどうしたんだい？」
驚いた顔をするアベルに、ミーアはちょっぴり悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「実は、少し付き合っていただきたいことがございまして、今、よろしいかしら？」
「え？　あ、ああ、えーと」
アベルはシオンの方に目を向ける。と、シオンは苦笑いを浮かべて、
「姫のご所望だ。謹（つつし）んで受けるのが紳士のマナーというものだろう」
小さく、アベルにウィンクする。
「話の途中ですまない。それじゃあ、ちょっと行ってくる」
そうして、躊躇いがちなアベルを首尾よく連れ出したミーア……、

であったのだが、
「それで、ボクはなににお付き合いすればいいんだろうか？」
首を傾げるアベルに、思わずミーアは言い淀む。
「うーん、そうですわね……」
ここに来て、まさかのノープランである！
街に繰り出してお菓子屋巡りがよろしいかしら？　などと思いかけたミーアであったが、寮から外に出ようとした際、冷たい風に吹きつけられて、すぐさま断念する。
――この寒さでは、外に出るのは少し気が引けますわね。
寒さが厳しい日にはベッドの中から出たくないミーアである。冬の寒さが厳しい街でデートするということは選択肢にない。欠片もない。
――とすると、どこか学内で……ん？
その時だった。ふいにミーアの耳がとらえた音。それは、弾むような楽しげな音楽だった。
ミーアは思わず吸い寄せられるようにして、音楽が聴こえた方向、大ホールへと向かう。

聖夜を祝う燭火ミサの後に開かれる盛大な宴会、そのための準備が進むホールでは、現在、飾りつけの作業が佳境を迎えていた。
どこか荘厳な雰囲気のする木の壁には、普段はしまい込まれている黄金細工の聖画が飾られていた。壁の天井付近には、華々しい赤い布が垂れ、賑やかな祝祭の空気を演出している。
そして、ホールの前方には巨大な楽器を抱えた楽団が、たたずんでいた。どうやら、当日のダンスパーティーの曲のリハーサルを行っているらしい。
それを見て、ミーアの脳裏に閃くものがあった。
「ダンス……、あ、そうですわ」
頭に浮かんだのは新入生歓迎ダンスパーティーの時の出来事だった。思い返してみれば、あの日以来、いろいろあってアベルとダン

スをすることができていない。
「うん、そうですわね。せっかくですし、聖夜祭の前に、アベルのダンスの腕前を見て差し上げますわ」
「え？　それはどういう……」
「申し訳ないですけど、ここ、少し借りますわね」
「ちょっ、ミーア！」
戸惑うアベルの手をしっかりと握りしめて、ミーアはホールの片隅、空いているスペースに向かった。
周りの者たちが驚くのをよそに、ミーアはアベルにそっと身を寄せる。
「さ、踊りましょう、アベル」
そうして、ミーアは、スカートの裾を華麗に掴んだ。
最初、呆気にとられた様子だったアベルだったが、やがて苦笑いを浮かべて、
「今日はやけに強引だね、ミーア」
その指摘に、ミーアは挑発するような笑みを浮かべる。
「あら、ご存知ありませんでしたの？　わたくし、もともとわがまま姫として知られておりますのよ？」
「そうなのかい？　ということは、いつもの調子が戻ってきたということか……。それなら、協力しない手はないな」
そう言うと、アベルもミーアに身を寄せる。そうして、二人は華麗にステップを踏み始めた。
周りで聖夜祭の準備が進む中、踊る二人……。一見すると、ロマンチックに見えなくもな……いや、ぶっちゃけ……邪魔である。邪魔者以外の何物でもない。こいつら、周りで必死に仕事してるのに空気読めよ！　という話である。
そんな無軌道な若者二人を前に、楽団の者たちは呆れ……ることはなく、むしろノッた！
もともとは、ノリのいい人たちなのである。しかも、彼らは新入生歓迎ダンスパーティーでも演奏を担当していた者たちだった。あ

の夜のミーアのダンスを知っていた彼らは、熱狂の夜を思い出し、即興で二人のダンスに合わせて曲を弾き始めた。
賑やかな、ノリの良い曲に、ミーアは上機嫌に笑い、
「あら……うふふ、二人だけで楽団を独占ですわね」
音楽に合わせて華麗に舞った。
そして、その超一流のダンスに、今日はアベルもついてきていた。
「まぁ、アベル、ダンスの腕が上達したのではなくって？」
「はは、それは光栄だ。実は披露する機会はなかったが、あの日以来、こちらも練習していたんだよ」
少しだけ得意げな顔をするアベルに、ミーアは勝気な笑みを返す。
「うふふ、それは感心ですわね。では、もう少し難しいステップをやってみますわよ」
そうして、ミーアは動きを激しくする。
アベルと呼吸を合わせて踊るのが楽しくって、夢中でステップを踏む。時に体を離し、次の瞬間には体を預け、クルリ、クルリ、とアベルの周りを、妖精のように舞い踊る。
時間を忘れてしまうような、楽しいひと時。
夢のような時間……。
ふいに……、
「ねぇ、ミーア、ボクは……、ボクでは不足だろうか？」
真面目な顔でアベルが言った。
「？　不足とは、どういう意味ですの？」
「君が、ここ数日、なにかを悩んでいる様子なのは知っていた。だから、心配していたんだ。ボクにもシオンにも、なにも言っていなかった。もしかして、誰にも言わずに一人で抱え込んでいるんじゃないかって……」
「アベル……」
思わず、感動に言葉を詰まらせるミーアに、アベルは真剣な顔で言った。
「ボクでは、君の悩みを分かち合うことはできないだろうか？　ボ

クはこの通り、凡庸な人間だからなにもできないかもしれないが、それでも君の負担が少しでも軽くなるなら、なんでもやるつもりだ」
優しく気遣う言葉に、ミーアは思わずクラッとする。胸の内をすべて打ち明けてしまいたくなってしまう。
けれど……、ミーアは、こみ上げた思いをすべて飲み込み、悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。
「では、そうですわね……。わたくしにダンスの腕前が追いついたなら、その時に、教えてあげますわ。わたくしの、大切な秘密を」

すべてを、打ち明けても解決にならないことは、すでにわかっていた。彼らに秘密を打ち明けたとしても、自分は彼らの目を盗んで、セントノエル島を出てしまうのだ。
そして、その場合の皇女伝は、言わなかった場合よりもはるかに悲惨だった。
ミーアを失い、自暴自棄になったアベルは悲惨な最期を迎える。シオンも同様に、サンクランドを傾かせてしまう。他の者たちも、同じようにショックで立ち直れなくなってしまうのだ。
ミーアの影響力がいかに強かったかを表すために書かれた記述、それを思い出すだけで、ミーアはなにも言えなくなってしまう。
――打ち明けてしまった方が、わたくしを守り切れなかったことへの後悔は強くなってしまう。それで、アベルまで不幸なことになってしまうなんて、わたくしも死にきれませんわ……。
いろいろな対策を講じては来ても、結局、死ぬことを受け入れつつある自分に、ミーアは嫌な気分になった。首を振り、ミーアはつぶやく。
「……今は余計なことを考えないで、ダンスを楽しむことにいたしましょう」

それは、とても充実した時だった。
なんだか久しぶりに、心から笑ったような気がした。

けれど、楽しくて楽しくて、今死んでしまっても構わないというぐらいに楽しかったはずなのに、ミーアの心の中に、わずかなしこりが残った。

――なんだか、やり残したことが、まだある気がいたしますわ。なにかしら……？

ミーアが、そのことに気づくのはもう少し後のことだった。

思いつく限りの悪行（つまみ食いとか、ベッドの上でお菓子を食べたりとか、朝から甘いものを食べたりとか……）をやり尽くしたミーアが、一つだけやり残したこと……。

そこに、聖夜祭を生き残るための最後のピースがあるということを、ミーアはまだ知らなかった。

第六十一話　皇女ミーアの旗のもと～結び合わされた友情～

その日、ルードヴィッヒは、ルドルフォン辺土伯の屋敷を訪れていた。

先日依頼した、辺土貴族への働きかけの状況を確認するためだった。

「これは、ルードヴィッヒ殿。壮健なようで、なによりだ」

ルードヴィッヒの訪問を受けて、ルドルフォン辺土伯は温厚な笑みを浮かべた。その笑みには親しみと、相手を気遣う心が見てとれた。

本来、平民であるルードヴィッヒと辺土伯との間には、明確な身分の差がある。

いかに、中央貴族から疎外された辺土貴族とはいえ、貴族は貴族。ルードヴィッヒが中央政府の官僚で、ミーアの信頼厚い人物であると言っても、そこには歴然とした差があるはずだった。

にもかかわらず、二人の間には奇妙な友情のようなものがあった。

それは身分の差や年齢の差を超越した感覚……。皇女ミーアの旗のもとに集いし同志の間にのみ存在する、強固な仲間意識だった。

固く握手をしてから、ルードヴィッヒは、来客用の椅子に腰かけた。

「この度は、面倒なお願いをしてしまい、申し訳ありません」

「なんの。大恩あるミーア姫殿下のためとあれば、こちらとしても全力を尽くさざるを得んさ」

「そう言っていただけると、ありがたいのですが……」

ルードヴィッヒによるイエロームーン派への分断工作、それはじわじわと一定の効果を上げ始めていた。ルドルフォン辺土伯の協力もあり、辺土貴族たちを切り離すことに成功しつつあるのだ。

そうして、ルドルフォン辺土伯のもとに集まった辺土貴族たちは、

今は派閥と呼べるようなものではないが……、後々は四大公爵家いずれの勢力にも属さない新たな勢力として、まとまればいいと考えるルードヴィッヒである。そうして、それを中核としてミーア個人の派閥、いわば皇女派を形成していければ……、などと皮算用さえしてしまう。

――まぁ、そちらに関しては追い追いでいいんだが、問題は……。

「ふむ、表情が優れないようだが、なにかあったのかな？」

眉をひそめるルドルフォンに、ルードヴィッヒは苦笑して見せた。

「実は、辺土貴族以外の切り崩しが、思いのほか難航しておりまして」

普通、大きな組織であればあるほど、一枚岩ではいられない。ましてイエロームーン派には、やむを得ない事情から身を寄せてきている貴族も多いはず。

そこまでの結束力があろうはずもない……はずなのだが……。

「まぁ、そりゃあね。裏切ったら殺されるとなれば、そう簡単にこちらに寝返ったりはしないんじゃないかな？」

横で聞いていたディオンが小さく肩をすくめる。けれど、ルードヴィッヒは首を振った。

「いや、そうとばかりも言えない。恐怖によって縛られた者は、その恐怖から逃れたいという潜在意識を持っているものだ。だから、その恐怖に対抗できる力を持った者から手を差し伸べられれば、その手を取る確率が高いはずなんだ」

ルードヴィッヒは、先日、手練れの暗殺者に狙われたということをさりげなく、噂話として拡散させていた。

ミーア姫殿下の臣下である自身が〝何者か〟によって強力な暗殺者をけしかけられたが、仲間のディオンの手により無事に守られたということを。

それはすなわち、イエロームーン派からの攻撃を受けたとしても、退けるだけの力があるのだ、ということの表明。

肝心な部分は伏せているものの、わかる者が聞けばわかるという

情報の流し方。
　イエロームーン派の貴族たちにも情報は当然のように届いているはずで……、にもかかわらず、離反者は現れなかった。
「ミーア姫殿下の寛容さと、その叡智については、しっかりと周知させている。門閥貴族などから見れば目障りな存在であるだろうが、派閥から離反したいと考える者にとっては格好の受け皿となれるはず……」
　そもそもの話、最近のミーアは、グリーンムーン公爵令嬢と友誼を厚くし、ブルームーン公爵令息を自らの生徒会に入れることで自陣営に取り込み、その上でレッドムーン公爵令嬢をも自らの近衛兵団に入れてしまったのだ。
　なるほど、彼らは公爵家の当主ではない。されど、四大公爵家のうち三家に関しては、少なくとも、ミーアに好意的であると解釈できる状態。
　加えて、少数ながら精兵の皇女専属近衛部隊もいる。
　ミーアは、少数精鋭の実働部隊を自由に動かすことができ、なおかつ、三大勢力の、積極的ではないながらも支持を取り付ける、帝国の中心人物となっている。
　その権勢は侮りがたいものがあるはずなのだ。
「にもかかわらず、まるで反応がないというのは、少し妙な気がする……」
　腕組みし、思わず考え込んだルードヴィッヒに、ルドルフォン辺土伯が一つ咳払い。それから、
「ところで、ルードヴィッヒ殿、例の、ミーア姫殿下の予言のことなのだが……」
　わずかばかり、低くした声で言った。
「どうやら、的中しそうだ」
　それを聞いたルードヴィッヒは、瞳を瞬かせた。
「やはり……、そちらにもその兆候が？」
　問いかけに、ルドルフォンは、一度、目の前のお茶をすすってか

ら深々と頷いた。
「我が領内の麦の実りが悪い。他の辺土貴族に話を聞いても、どこも同じらしい。今年から来年にかけての収穫物は確実に減る。無論、それが、どれぐらい続くかはわからぬが……」
先のことはわからない。けれど少なくともミーアは、今年の小麦の実りが悪くなるという予言を的中させている。そして、そのための備えも万全にするように、と、ルードヴィッヒらに厳命しているのだ。
ゆえに……、
「最悪の予想が当たらなければ、それに越したことはない。けれど、もしも当たった時に、それに備えていなかったとあっては叱責は免れないところ、ですね」
「ミーア姫殿下は我らを信頼し、その予言を託してくださった。そして『備えよ』と言ってくださったのだ。であるならば、その信頼に応えようではないか」
こうして、ルードヴィッヒは、いざ飢饉が起きて食料が不足した場合の供給について、その護衛について、その他を事細かに相談した後、ルドルフォン辺土伯の屋敷を辞した。
その足でミーア学園都市の進行具合を確認しに行ったルードヴィッヒのもとに、一通の報せが届いた。
その送り主は……。

第六十二話　ゴロゴロミーアの忘れ物

「うーん……、なんだか、やりつくした感はありますけれど……、まだ忘れてることがあるような気がいたしますわね……」

聖夜祭までは、残り二日。あまり日は残されていない。やれることは徐々に狭まってきていた。

そんな中、ミーアはベッドの上でゴロゴロしていた。刹那的に生きると決めたから……ではない。基本的にミーアは何もない状態ではゴロゴロしている生き物なのである。

そこに、シオンが訪ねてきた。

「ミーア、少し相談したいことがあるんだが、いいだろうか？」

ノックの音とともに聞こえてきたシオンの声。

「あら、シオンが女子寮に来るなんて、珍しいですわね……」

ミーアは、ごろんごろんとベッドの上を転がってから、しゅたっ！　と床に降り立った。それから、自らの格好を見下ろして……、若干しわしわした部屋着を眺めて……。

――ふむ、まぁ、シオンだから別に構いませんわね。

安定の乙女力を発揮する。

それから、ニコやかな笑みを浮かべて、シオンを出迎えた。

シオンはミーアの格好を見て、一瞬、驚いた様子を見せるも……、

「休んでいたのか……。これは、すまないことをしたな……」

申し訳なさそうに、頭を下げた。

どうやら、ミーアが寝起きだと勘違いしたらしい。まぁ、実際に先ほどまでベッドの上でゴロゴロ転がっていたのだから、そこまで間違ってはいないが。

「別に構いませんわ。あなたがここに来るなんて、よほどのことでしょうし。今はアンヌがおりませんから、お茶などはご用意できませんけれど……」

そうしてミーアは、シオンを部屋に招き入れた。
「それで？　相談とはなんですの？」
「ああ、実は君のところのルードヴィッヒ殿に、頼みたいことがあってな」
「まぁ、ルードヴィッヒに？　なにかしら？」
「単刀直入に言うと、以前話した帝国内で消えた風鴉の諜報員を探し出してもらいたいんだ」
「帝国内で消えた風鴉の諜報員……」
……はて？　そんな人いたかしら……？　などと内心で首を傾げるミーアである。
「さすがに、ミーアでも覚えていないか。帝国の四大公爵家にアプローチがあったという情報をもたらしてくれた人物なのだが……」
「……あ、あー。いましたわね、あの方ですわね！」
などと、いかにも覚えてますよ、というアピールをするミーアだったが……、実は覚えていない。ミーアは特に覚えておかなくていいことは忘れてしまえる、便利な脳みその持ち主なのだ。
「しかし、その方を探してどうすると？」
などと疑問に思うミーアなのだが、シオンの説明を聞いて納得する。
「なるほど……、確かに味方になっていただければ心強いですわね。さすがはシオンですわ」
「ふふ、前に言っただろう。名誉挽回の機会は自分で作るって……」
シオンは、にやりと悪戯っぽい笑みを浮かべて、それから肩をすくめた。
「などと格好つけてみたところで、こうしてミーアに手を借りなければならないのが情けないところだな……。正直、学園にいながらだとできることも限られてしまってね」
「あら、別にご自分を卑下する必要はございませんのに……。それで、具体的にはなにを調べればいいんですの？」
「ああ、これなんだが……」

シオンの渡してきた紙を見て、ミーアは眉をひそめる。
「はて、これは……？　マックス：商人、ビセット：執事、タナシス：地方文官……？」
「これは、その男が使っていた偽名と偽の身分だ」
「ほう……、なるほど。ちなみに人相書きのようなものはございませんの？」
「残念ながら。変装術もお手の物らしくてね」
「なるほど……。まぁ、そうでしょうね……」
頷きつつ、ミーアは紙を眺める。
――それにしても、さすがですわね、シオン。アベルから聞いていた通り、混沌の蛇と戦うために、きちんと戦略を練っているんですわね……。あ、そうですわ！
ふいの閃き。ミーアはポコンと手を叩いて言った。
「シオン、試みに聞いてみたいのですけれど、よろしいかしら？」
「うん？　なんだろう？　俺に答えられることだったら、いくらでも答えるが……」
首を傾げるシオンに、ミーアは満足げに頷いてから言った。
「仮に、あくまでも仮にの話なのですけど、あと二日で命が終わるとしたら、あなたはどんな行動をするかしら？」
唐突な、なんとも言い難い問いかけ。けれどシオンは腕組みをし、律義に考え込む。
「あと二日で、か……。あまり時間がないから、あまり多くはできないし、そうだな……。まずは、恩義のある者たちにお礼をして……」
小さく唸ってから、続ける。
「あとは、迷惑をかけた者たち、俺自身の未熟さ、頑なさから謝ることができていない者たちに、謝罪をすると思う」
「まぁ！　シオンにもそんな人がおりますの？」
驚いて声を上げるミーアに、シオンは苦笑を浮かべた。
「それは一人、二人はいるさ。もしも、普通に生きていく中で、誰

にも迷惑をかけず、誰にも謝る必要もないと思うのであれば、それは傲慢というものではないかな」
シオンは肩をすくめつつ言った。
――なるほど……、まぁ、確かにシオンならば、そうかもしれませんわね。
心の中で、うんうんと納得の頷きを見せるミーアは、
――もっとも、わたくしの場合はこいつと違って、迷惑かけた人なんかおりませんし、謝る必要なんかありませんけれど……。
なんとも、傲慢なことを考えていた！
「ふむ、でも……、まぁ、そうですわね……」
とそこで、ミーアはシオンに向かい姿勢を正すと、深々と頭を下げた。
「シオン、あなたにお礼を申し上げますわ」
「うん？　なんだ、急にどうしたんだ？」
「いえ、アベルから聞きましたわ。あなたがわたくしのことを心配して、せめて負担を軽くするために、といろいろ行動してくれているって。ご心配をおかけして、申し訳なかったですわ」
それを聞いたシオンは、苦り切った顔をした。
「アベルめ、余計なことを……」
それから、ため息を吐いて、シオンは言った。
「あー、勘違いしないでほしいんだが、俺はあくまでも名誉挽回のために行動しただけだ。自分のために……」
「ええ、わかっておりますわ。あなたは、あなたの勝手をやった。ですが、わたくしもお礼を言っておかないと、なんだかモヤモヤしそうだった。だから、こうして頭を下げた。それだけのことですわ」
それから、ミーアはニコリと笑みを浮かべた。
「わたくしは、わたくしのために、勝手をしているだけですから、どうかお気になさらずに」
そんなミーアを見たシオンは、しばし沈黙し……、それから、はぁ、と深いため息を吐いて……。

「ああ……。くそ、やっぱり、励ます役をアベルに譲るんじゃなかったかな……」
小さな声で、つぶやくのだった。

……シオンは知らない。
ミーアが、心の中で、
――こいつに借りを作るのは、なんだか落ち着きませんし。お礼を言うのも、頭下げるのもタダ。ならば、下げておくに越したことはありませんわ！
などと、ちょっぴりゲスなことを考えていることを。
そして……、彼が知らないことはもう一つあった。
それはこの時に彼が言った言葉が、ミーアの心に残り続けること。
お礼を言い忘れている者はいないが、謝っていない者は本当にいないだろうか？
今の時間軸ではいなくても、前の時間軸では……？
心に残り続けた問いかけは、さながら導の光のごとく、ミーアに一つの忘れ物の存在を気付かせる。それは……。

第六十三話　今度こそ、良いお友だちになるために

シオンを見送り、ルードヴィッヒへの書簡を手早く作ったミーアは、再びベッドの上にダイブした。

「ふぁ、疲れましたわ……」

手紙を一枚書くという重労働を終え、疲労困憊なミーアである。手足を投げ出し、ぐんにょり、枕に顔をうずめる。

「それにしても迷惑をかけた人間に謝る……なるほど、それは確かに心残りなく死を迎えるためには必要なことでしょうね……。けれど、そういう人は、わたくしにはおりませんわね」

前の時間軸ならばいざ知らず、ミーアはずっとやり直しの日々を過ごしてきたのだ。

クビにするはずだった料理長は、今でもしっかりと帝国の料理長を務めている。その忠勤に応えるよう、父に進言すらしている。

手遅れになるまで知らなかった新月地区にも、積極的に働きかけるようにした。死にかけていた町は、徐々に活気を取り戻しつつある。

前の時間軸でミーアがやらかした罪といえるようなものは、ことごとくやり直し、覆していた。

にもかかわらず……、なぜだろう、シオンの言葉が妙に心に引っかかる。

「まぁ……、気のせいですわね。それよりもわたくしの場合は、お礼を言っておく方の方が多そうですわね。アンヌとルードヴィッヒ、アベルとシオン、クロエにラフィーナさまに……それから……、ティオーナさんにも一応はお礼を……」

その時だった。ふいにミーアを違和感が襲った。

ミーアは大切なお友だちに、死を迎える前に、自然にお礼をしようと思った。

その中には、かつての仇敵であったシオンも入っていた。もはや彼に対してのわだかまりはほとんどない。キースウッドやリオラなどに対しても溝などは感じていないミーアである。

まぁ、ディオンは現在進行形で怖いから別として……、それ以外の周りの人間たちを、ミーアはおおむね素直にお友だちと呼ぶことができる。

けれど……、なぜだろう？　ティオーナだけは、ほんの少しだけ心に引っかかるものがあった。お友だちと呼ぶには溝があるような……、なにか、そう呼ぶのを邪魔するものがあるような……、そんな気がして。

その瞬間、ミーアの脳裏に甦る風景があった。

チリチリと痛む手のひら……。

呆然とした顔をする一人の少女の顔……。

自らの取り巻きが上げる罵声と……、

「貧乏貴族の娘がシオン王子と仲良くするなんて、身の程知らずも甚だしいですわ！」

口汚く罵る自らの声。

ずっと……ずっと忘れていたことを、ミーアは思い出した。

「ああ、そう……。そう、でしたわね……。謝らなければならないこと……、ありましたわね……。ティオーナさんにあの時のこと……、謝っておりませんでしたわ……」

ミーアは前の時間軸、シオン王子と仲良くしているティオーナを見つけて……、それが悔しくって……。シオン王子に無視されたのが寂しくって……。

自らの内に生まれた激情に促されて、ティオーナの頬を叩いたのだ。

思えばそれは、ミーアが唯一やり直すことができていない問題だった。

なぜなら、それは……。

「わたくしが、なにをするでもなく、なくなってしまったことだか

ら……」
歴史の流れの中で、なかったことになってしまった出来事。
それはただ一つ、やり直しによって清算できなかった「ミーアの罪」だった。
もちろん冷静に考えれば、ティオーナは自分を処刑した人物だ。
頬を張ったぐらいならば相殺されている……と、理屈では言えるかもしれない。
けれど、それは……理屈の問題ではないのだ。
ミーアは、あの日の出来事が自分の胸に引っかかっていることを、はっきりと自覚していた。
どんな理屈をつけようと気になるものは気になる。特に、死を間近に控えた時、残された時間で、できることが限られた今は……、意地を張るべき時ではなかった。
「思えば……、あれのせいでわたくしは、素直にティオーナさんとお友だちになれなかったような気がいたしますわ」
やり直すことによってその罪が消えるというのであれば、断頭台を回避した時点で、すでにティオーナへの恨みはないのだ。それに彼女はレムノ王国の時も選挙戦の時も、ミーアのためにいろいろやってくれたのだ……。
「気の置けないお友だちになっても不思議ではないはずなのに、どこか溝があるような気がしますわ。このモヤモヤをなんとかしないと、死んでも死にきれませんわね」
それは、ようやく見つけた答え。
もちろん、あの頃のティオーナに謝ることはもうできない。
それに、身に覚えのないことで謝られても、ティオーナは戸惑うだけだろう。
……しかし、そんなことは知ったこっちゃなかった。
なにしろ、ミーアは自分ファースト。しかも、今のミーアは刹那を生きる女なのである。
押しつけ上等である。

「もしも、あの時のことをきちんと清算しておいたら……。もしも聖夜祭の夜に、わたくしが死んでしまって、もう一度やり直しができたなら……、その時にはきっとティオーナさんと良いお友だちになれるはずですわ」
なんだか、すっきりした心持でミーアは頷いた。
「ふむ、善は急げ……ですわね」
翌日、ミーアはティオーナに会いに行くことにした。
お詫びの印の、豪華な菓子折りを携えて。……別に、自分が食べたかったわけでは……ない。

第六十四話　刻み込まれた後悔と……

ティアムーン帝国における革命戦争において、革命軍を率いた聖女ティオーナ・ルドルフォン。

そんな彼女が戦いの前線に立つことは一度もなかった。

無論、軍のトップにして、旗印である彼女が命を落とすことがないように、ということもあったが、単純にその剣の腕が平凡であったからというのも理由の一つだった。

けれど彼女は、自らの手を汚さずにいることを潔しとはしなかった。

みなの役に立ちたい。自分も共に戦いたい……。そう考えた彼女が出した答え。それこそが弓術だった。

弓の名手、ルールー族の娘、リオラ・ルールーの教えを受けた、ティオーナは、その才能を見事に開花させた。その腕前は、革命軍の中でもトップクラスを誇り、多くの敵兵が彼女の弓の前に命を落とすことになった。

そうして、革命戦争は終わった。

帝室は倒れ、皇帝は処刑。皇女ミーアの処刑も数日後に迫っている。

ようやく戦いが終わった……。だというのに、ティオーナは一日数百射の弓の練習を欠かすことがない。

まるでそれは“もう取り戻せない何かを取り戻さんとする”かのように……。

幾度も、幾度も、彼女は矢を放ち続けるのだった。

そうして、弓の練習を終えたティオーナのもとに、一人の男が訪ねてきた。

「ルードヴィッヒ・ヒューイット……。貴方が、シオン王子が言っておられた……、確か、ミーア姫殿下のもとで働いていた方でした

ね」
「面会に応じていただき、感謝いたします。ティオーナさま」
「大変な時に、大変な役割を与えられてしまいましたね。あなたの政治手腕は、シオン王子も高く評価されているようでしたよ。これからも、この帝国を立ち直らせるために協力していただけるといいんですけど。どうぞ」
そう言いつつ、ティオーナは、ルードヴィッヒにお茶を勧める。
それには手を付けず、ルードヴィッヒはまっすぐにティオーナを見つめた。
「本日、こちらに足を運ばせていただいたのは、お頼みしたいことがあったからです」
「……」
ティオーナは、あえてゆっくりとした動作でお茶を口に含んだ。
その香りを楽しむように、そっと瞳を細めて、
「頼み……ですか。シオン王子にお取次ぎする、などということでしたら、喜んでお請けしますけど……」
探るように、ルードヴィッヒを見つめる。
「ミーア姫殿下に、ぜひ会っていただきたい」
対して、ルードヴィッヒの切り返しは裏表のないものだった。
「なんのためにでしょうか？　今さらお会いして、お話することなどなにもないと思いますけど……」
硬い口調で、ティオーナは言った。そんな彼女に、ルードヴィッヒが言ったのは意外なことだった。
「セントノエルにいた頃、ミーアさまは、あなたの頬を叩いたことがあったそうですね」
「……？」
「ミーアさまはずっとあなたに、その日のことを謝りたいとおっしゃっておられました。その機会をいただければと……」
「……それは、えーっと、なんのことでしょうか？」
ティオーナは戸惑いから、思わず首を傾げていた。

そう……、セントノエル学園で、幾度となく嫌がらせを受けた彼女は、ミーアのへなちょこ張り手など記憶していなかった。そもそも痛いのが嫌いなミーアが自らの手で叩いたのだ。それこそ、その威力、頬を撫でるがごとく……。

やられた方としては、きょとんとするばかりで……、怒りよりも困惑の方が強かったのである。

ティオーナの予想外の反応に、呆気にとられた様子のルードヴィッヒだったが、一度、咳ばらいをして、

「どうか、ミーア姫殿下にお会いいただけないでしょうか？　そして、ミーアさまと、対話をしていただきたいのです。そうすれば……」

「なにも変わりませんよ」

断ち切るように、放たれた言葉。それから、ティオーナは、ルードヴィッヒを睨みつける。

「今さら謝られたところで詮無きこと。なにも、なに一つ変わることはない。お父さまは帰ってこない。帝室に、大貴族に踏みつけにされ、死んでいった民衆も、生き返りはしないのだから」

それから、ティオーナはもう一度、お茶に口をつける。

――ミーア・ルーナ・ティアムーンを許してはいけない……。

自分に言い聞かせるように、その身に刻み付けるように……、ティオーナは内心でつぶやく。

――会う必要もない。言葉を交わす必要もなければ、その人柄を知る必要もない。必要がないから、しない……。

ティオーナは怖かったのだ。

話をしてしまって、彼女の為人（ひととなり）を知ってしまって……それで、もしも情が出てしまったら……？　彼女のことを許したくなってしまったら……？

――それでは、お父さまが……、あまりにも救われない。

なるほど、確かに皇女ミーアは反省しているのかもしれない。話してみると案外良い人なのかもしれない。自らの過ちを正すことが

できる人なのかもしれない。
でも……、それで父は帰っては来ない。その無念を……晴らすことなどできない。
ゆえに、自分はミーアを許してはいけないのだ、と……。
ティオーナは自らの中で決めていた。
「私は、ミーア姫殿下のことを許しません」
決然と、頑なな口調でティオーナは言う。
「シオン王子に助命を進言することもしません……。ですが……」
そこで初めて、彼女は言い淀む。
「ですが……、あなたがシオン王子に面会なさるというのであれば……、それを邪魔立ても致しません」
それは慈悲か……？　否、そうではなかった。
それは、逃避だ。
ミーアという一人の人と向き合うことを、ティオーナは拒絶したのだ。
ミーアの生殺与奪に関わりたくはないと、自らの意思を、そこに向けたくないのだ、と。
自分の心が動かされないために……。
彼女を決して……、許してしまわないために……。

だから……。

ミーアの処刑が行われて、しばらくしてからのこと……。
ルドルフォン辺土伯の暗殺が皇帝の命によるものではなかったということがわかった時……。
ティオーナは後悔した。
「あの時……ミーア姫殿下とお話ししていたらよかった……のかな？」
冷静に考えれば、処刑は免れなかっただろう。ティオーナがなにをしたところで、ミーアを救うことはできなかっただろう。

けれど、それでも……。ミーアと最後まで、一言も会話をしなかったことが、ティオーナの中に後悔として残り続けた。
その後悔は、魂に刻み付けるようにつぶやいた「ミーアを許してはいけない」という言葉に、上書きされ……、ティオーナの心の内に深く刻み込まれて。

「……変な夢、見ちゃったな……」
聖夜祭を翌日に控えたその日、ティオーナは、セントノエル学園の弓練場にいた。
レムノ王国の事件で、自分の剣がまったく役に立たないことを痛感したティオーナは、悩んだ末、弓を習い始めることにした。
幸い、彼女の従者であるリオラは弓の熟練者である。その教えを受けたティオーナは、いち早く、生来の才能を開花させつつあった。
その日の練習を終え、汗を拭っているところに、とある人物が訪ねてきた。
「ティオーナさん、少し、よろしいかしら？」
「……へ？　ミーア、さま……？」
奇妙な夢と被るような状況。されど、やってきたのはミーアの従者ではなく、ミーア本人で……。
「少し、お話があるのですけど、この後、お時間ございますかしら？」
ミーアの問いかけに、ティオーナはただただ頷くことしかできなかった。

第六十五話　届いた言葉と、届かぬ願い……

「あの、申し訳ありません。ミーアさま。ちょうど今、弓の鍛練を行ってきたばかりなので、私、汗臭いかもしれません……。お、お茶会とかのお誘いでしたら、すぐに着替えてきますけど……」

「あら、それはタイミングが悪かったですわね……」

ミーアは、ティオーナの格好を見て、ふむ、と唸った。

確かに、ティオーナの髪は、ほんのり汗で湿っているように見えた。あれでずっといるのは、気分が悪いだろう……。

「ああ、そうですわ。でしたら、せっかくですし、一緒にお風呂に行きましょう」

「……へ？」

きょとん、と瞳を瞬かせるティオーナに、ミーアは笑みを浮かべる。

「ちょうど、クロエから面白い入浴薬をいただいたんでしたわ。なんでも、疲労が取れるのだとか。せっかくですし、試してみましょう」

ラーニャと同じく、心配してくれたクロエが持ってきた入浴薬。今日、試しておかなければ、使う機会がなくなってしまうかもしれない。

「うん、ちょうどよいですわね」

一人で納得の頷きをしつつ、ミーアは共同浴場へと向かった。

午後の早い時間だったからだろうか。共同浴場には人影がなかった。

これは好都合！　とばかりに、ミーアは入浴薬をお湯にぶちまける。

「みっ、ミーアさま、あの、よろしいんですか？　そんなに、勝手

なこと……」
「ふふふ、問題ございませんわ！」
ミーアは自信満々に頷く。なにしろ、今のミーアは刹那を生きているのだ。
無断でお風呂に入浴薬を入れることぐらいわけないこと……、などと思っていたミーアだったが……。直後、お湯からものすごい勢いで煙が噴き出した時には肝を冷やした。
真っ白な煙は、浴場いっぱいに広がり、近くにいるティオーナの姿さえ見えなくなってしまうほどだったのだ。
「みっ、ミーアさま？」
「……だっ、大丈夫……なはず、ですわ……。たぶん、恐らくは……」
鉄壁の自信がぐらんぐらーん、と揺らぐ。ミーアの太心は見る間にやせ細り、小心に逆戻りである。
さすがに、これはマズいんじゃないかしら……？　などと思い始めたところで、ようやく煙が薄くなってくる。
まだ、湯けむりにしては色が濃い気がするが、まぁ、このぐらいならば問題はあるまい。きっと大丈夫、うん大丈夫……。
などと、自分を落ち着けてから、ミーアは「ほふぅ」っと一つため息を吐いて、それからようやく気が付く。
「あら、この香りは、月蛍草（リュシオルーナ）の香りかしら……？」
「そうみたいですね。とてもいい香り……」
ティオーナも、うっとり心地よさそうな顔で言った。
それから二人は、手早く体を流して浴槽に向かった。
お湯に浸かり、再び、ほふぅっとため息を吐くミーア。
――ああ、クロエが、心が落ち着く香りだと言っておりましたけれど、確かにその通りですわね……。
少し前までは緊張して、ざわざわ波立っていたミーアの心も、今では静かな凪の様相を呈していた。
――これならば、自然にお話ができそうですわ。うふふ、クロエ

に感謝ですわね。
ぐぐぅっと両手、両脚を伸ばして、ミーアは、うーんっと唸った。
っと、
「うふふ、よかった……」
すぐ隣で、ティオーナが小さく笑い声を漏らした。
「あら？　どうかなさいましたの？」
首を傾げるミーアに、ティオーナは言った。
「ミーアさま、少しふっくらされたみたいで」
「……は？」
かちん、と固まるミーア。
少し前まで静かな凪状態だったミーアの心が、一瞬にして、ざわわ、ざわわと波立った！
けれど……、
「少し、心配していたんです。みんなで……。ミーアさまが最近、食欲がないみたいだとお聞きしてましたから」
「あ、ああ、そういうことですのね。わたくしのことを心配して……」
微妙に釈然としないながらも、ミーアは頷く。それから、自らの二の腕をふよふよとつまんでみる。
――別に、太っておりませんわよね？　前からこのぐらい、ふにょっとしておりましたし……、夏前ぐらいからこんなものだったような……あら？
「それで、あの……、お話って、なんでしょうか？」
と、何やら重大なことに気付いてしまいそうになったミーアだったが、ティオーナの声で我に返る。
「あ、ああ、そうでしたわね……」
ミーアは少しばかり姿勢を正して、それから、息を大きく吸って、吐いて……。
「わたくしには、あなたに謝らなければいけないことが、ございますの」

「え？」
唐突なミーアの言葉。ティオーナは、ただただ瞳を瞬かせる。
構わず、ミーアは続ける。
「わたくしは……、あなたに意地悪をしてしまいました……。あなたに、ひどいことをしてしまいましたの……」
浴場にミーアの声が、静かに響いた。

「なっ、なんのことですか？　私、そんなこと……。ミーアさまには、とてもよくしてもらっています。ミーアさまが私に意地悪なんて、するはずありません」
思わぬ事態に、慌てるティオーナ。
「ミーアさまが……そんなこと……」
「あら？　わたくしだって、意地悪の一つや二つ、いたしますわ。例えば、恋仲の男の子にちょっかいをかけられたりとか……」
「で、でも、私、アベル王子にちょっかいかけたりだなんて……」
その時だった。
ふいにティオーナの脳裏に、昨夜の夢の光景が思い浮かんだ。
自分に謝りたい、と言っていたミーア。それを突っぱね、後でとても後悔した自分自身……。
それは、ただの夢のはずで……。取るに足りない夢のはずで……。けれど、ティオーナの心には……確かに刻まれた思いがあった。
だから……。
「……私には、ミーアさまが、言ってることはよくわかりません。でも……もしも、ミーアさまに嫌なことをされたとして……、こうして謝ってもらったんだとしたら……、きっと……」
ミーアのことを許してはいけないと、思っている自分がいた。
許せないではなく……「許してはいけない」だ。
……それは、とても苦しいことだった。
――誰かを恨み続けることは……、なんて苦しいことなのだろう……？

ティオーナは、夢の続きを想像する。
ミーアを恨み続けた人生……、それがどれほど、彩りと輝きを失った日々であったかを。
その恨みが間違いであったと知った時……、どれほど、ミーアと話したいと願ったかを。
それから、ティオーナはミーアの顔を真っすぐに見つめた。
「きっと、ミーアさまのこと、許してると思います。その時の私は、きっと……」
ティオーナの言葉を聞いた時……、
「ああ……」
ミーアの顔から、すとん、と憑き物が落ちたように表情が消えた。そうして、次の瞬間、そこに浮かんだのは安堵の微笑みだった。
「ああ……、良かった……、これで、心残りはございませんわ」
けれど、つぶやいたその顔は、どこか、ティオーナを不安にさせるもので……。
胸の中、じりり、と焦燥感の炎がくすぶる。
「あの、ミーアさま……。私、もっとミーアさまと一緒にお話したいです」
それは、ティオーナの魂に刻み込まれた渇望。
あの夢の中では叶わなかった想い。
今ならば、叶えることができる願い。
ミーアはティオーナの言葉に、一瞬、呆けたような顔をしたが……、
「そう……。それなら……、そうですわね。聖夜祭が終わったら……、ゆっくりお話ししましょう」
「聖夜祭……？」
「そう。聖夜祭ですわ。それを無事に乗り切ることができたなら……、その時には、じっくりとお話しいたしましょう」
確かに生徒会のメンバーとしては、聖夜祭が終わるまで気持ちが落ち着かないということはわかる。

でも……。なぜだろう……、ティオーナの胸の内に、ざわざわと嫌な感覚が残る。
「それじゃあ、今日は、お付き合いいただいて感謝いたしますわ」
笑みを浮かべて、ミーアが浴槽から立ち上がった。ティオーナにはその姿が、なぜだかとても儚げに見えた。
まるで……、夜の終わりとともに、主役の座を追われる月のように……。
「あっ……」
けれど、その雰囲気はすぐに消えてしまった。
「あ、ミーアお姉さま。奇遇ですね」
「こんにちは、ミーアさま」
浴場に、ベルとシュトリナがやってきたからだ。
「あら、お二人とも、これからお風呂ですの？」
「そのつもりですけど……、なんだか、少しもくもくしてませんか？」
キョトンと首を傾げるベル。
「クロエにもらった入浴薬を使ってみましたの。たくさん煙みたいなのが出て、ちょっと楽しかったですわよ」
上機嫌に笑うミーアに、先ほどまでの儚さは微塵も感じられなくって……。

かくして、聖夜祭の日がやってくる。

第六十六話　聖夜祭当日　動き出した陰謀

【聖夜祭当日、八鐘の刻（ＡＭ：８：００）】

運命の一日の幕開けは、ごく静かなものだった。
朝、もぞもぞとベッドから起きだしたミーアは、アンヌを伴い、共同浴場へと向かった。
そこで寝汗を流し、顔を洗って、しゃきっとした顔になる。ミーアが朝からシャンとしているのは珍しいことである。
「ふむ……、こんなものかしら……？」
「ミーアさま、今日はずいぶんと気合が入っておられますね」
ちょっぴり驚いた顔のアンヌに、ミーアはそっと微笑んだ。
「そうですわね。まぁ、今日ぐらいは……」
それからミーアは朝食をとり、生徒会室へと向かった。
「あら、ミーアさん、ご機嫌よう」
部屋に入ると、すぐに、ラフィーナが声をかけてきた。
「ラフィーナさま？　はて……、今日はなにか生徒会の仕事がありましたかしら？」
警備体制のチェック、祝宴の準備の進捗、島への人の出入りのチェック体制などなど……、生徒会で目を通しておくべきものには、一通り目を通していた。
そもそも、当日に生徒会のメンバーがするべきことは、ほとんどないはずだが……。
「いえ、大丈夫よ。なにかあれば、集まっていただくことになると思うけれど……。ふふふ、あの日以来、サンテリが張り切ってくれているから、私たちのすることはないんじゃないかしら」
ラフィーナは笑みを浮かべて言った。
「これもミーアさんのおかげね」

「そんなことはございませんけれど……」
まったくである。ミーアは食欲に忠実に、毒キノコを食しただけなのだから。
「しかし、それではいったいなぜ、こんなところに？」
「少し、感慨に浸っていたの」
ラフィーナは、静かで穏やかな笑みを浮かべた。
「私が、ここの主ではなくなって、もう一年が経つんだなぁって……。うふふ、なんだか、少し不思議な感じがするわ」
それからラフィーナは、ちょこんと机の上にお尻を乗せた。ちょっぴりお行儀が悪いその仕草が、ラフィーナらしくなくって、ミーアは少し驚く。
「実はね、毎年、この日はここに来ていたの。身を清めて、聖衣に身を包む前に、気合を入れるためにね。ミーアさんは知らないかもしれないけど、結構、聖夜祭の儀式って、緊張するのよ」
「それは、心中お察しいたしますわ」
「でもね、今年は少し違うの。緊張はもちろんしているわ。だけど、その後で、みんなでパーティーをするって思うと、なんだか楽しくって……」
それからラフィーナは、無邪気な子どもっぽい笑みを浮かべて言った。
「それじゃあ、私は行くわね。今夜の鍋パーティー、楽しみにしているわ」
生徒会室を出て行くラフィーナを見送って、ミーアは小さくつぶやく。
「今夜……、そう、ですわね……」
いったいなにが起こるのか……、今はわからない。だけど、鍋パーティーがある。大切な仲間たちとの楽しい時間が待っている。それに、今夜の鍋にはキノコが入っているのだ。
絶品キノコ鍋なのだ！　絶品キノコ鍋なのだ！！　絶品キノコ鍋なのだっ！！！

――大丈夫。いかなる誘惑があったとしても、わたくしがセントノエル島を出るということは、ありえませんわ。
それから、ミーアも、生徒会室を後にした。

【聖夜祭当日　十の鐘の刻（ＡＭ１０：００）】

「あっ、ミーアさま！」
祝宴の会場である大ホールの前を通りかかった時のことだった。
ミーアは不意に、声をかけられた。
視線を向けると、そこにはラーニャ・タフリーフ・ペルージャンの姿があった。
「ああ、ラーニャさん。ご機嫌よう……」
愛想よく笑みを浮かべつつ、ラーニャのそばに行く。と、その目に飛び込んできたのは……
「まぁ！　とっても美味しそうですわね」
机の上に並べられたお菓子の類だった。ペルージャンの威信をかけた品ぞろえに、ミーアは思わず舌なめずりである。
先日の反省もあってか、食べ物の近くには、ヴェールガの衛視が監視役として、厳しい視線を向けているため、つまみ食いは難しそうだが……。
「ああ、とても美味しそうですわね……」
「ふふふ、ぜひ、食べに来てくださいね。ミーアさま、お待ちしておりますから」
ミーアは、そのお誘いに笑みを浮かべて、
「ふふふ、ラーニャさん、いつもありがとう。ペルージャンの食べ物には、いつもお世話になっていますわ。そうですわね……。できるだけ、来られるように努力いたしますわ」
曖昧な返事をするのみだった。なぜって？　なぜなら……。
――今夜はキノコ鍋の予定ですし……、お腹の隙間、あるかしら……？

などと、腹（具合の）算用をするミーアである。
なにしろ、今夜は絶品キノコ鍋なのだっ！！！！
不安にもなろうというものである。
それをジッと見つめていたラーニャは、ふいに机の上に置かれていたカップケーキを一つ手に取ると、スプーンとセットでミーアに渡した。
「ミーアさま、これ」
「あら？　これは……」
「味見用です。どうぞ」
「？　え、ええ、ありがとう？」
小首を傾げつつも、ミーアは、ラーニャが差し出したお菓子をパクリ、と口に入れた。
「むっ！　これはっ！」
「どうですか？」
「口の中でとろける旨味……、この濃厚な甘みは……、もしや、これは、甘露マロン？」
「はい。わが国で開発したマロンスイーツケーキです」
「ああ、やはり……、このこってりした甘みはマロンの甘味でしたのね。うふふ、ひさしぶりに食べましたけれど、とても美味しかったですわ」
ミーアは、カップをラーニャに返しながら言った。
……ちなみに、こう聞くと、一口味見をして返したように感じるかもしれないが、この間にミーアはカップの中のケーキをペロリと完食している。
スプーンを器用に使い、一かけらもカップには残っていない。食べ方がとても綺麗なミーアなのである。
「この調子ならば、ペルージャンは安泰ですわね。今夜の祝宴もきっと盛況だと思いますわよ」
そうして笑みを浮かべるミーアだったが……、ラーニャは笑わなかった。

ただ、じっとミーアを見つめてから、
「あの、美味しいもの、もっとたくさんありますよ。ミーアさま。私のところだけじゃなく、ほかのみなさんも、腕によりをかけた美味しいものを用意しています。だから……」
ラーニャは必死な口調で言った。
「絶対に食べに来てください。ミーアさまに元気になっていただきたくって、たくさん美味しいもの用意しましたから」
まるで、そう約束しないと、ミーアがどこかに行ってしまうと、思っているかのように……。
「ええ、わかりましたわ。そこまで言うのであれば……」
ミーアは、ちょっぴり、キノコ鍋を食べるのをセーブすることに決めた。
――それに、甘いものは別腹という有名な格言もございますし、大丈夫ですわね。

【聖夜祭当日　第二　四つ鐘の刻（ＰＭ：４：００）】

その後、一通り学園内を回った後、自室で、おとなしくしていると、不意にノックの音が聞こえてきた。
応対に出たアンヌであったが、すぐに困り顔で戻ってきた。
「ミーアさま、申し訳ありません。少し、席を外してもよろしいですか？」
「別に構いませんけれど、どうかいたしましたの？」
「それが……、今夜の祝宴のための手が足りないとかで、お手伝いをお願いされてしまいまして……」
「ああ、今日は特別の日ですし、そういうこともございますわね。ふむ……、そういうことでしたら、問題ありませんわ。我が帝国の威信にかけて、しっかりと手腕を振るってくるとよろしいですわ」
アンヌは、一瞬、不安そうな顔をして、
「はい、わかりました。でも、あの……ミーアさま」

それから、なにか、言いたげな様子でいたが……。
「んっ？　どうかなさいましたの？」
ミーアの問いかけに、小さく首を振った。
「いえ。なんでもありません。それじゃあ、行ってきますね、ミーアさま」
「ええ……。あ、そうですわ。それと、もしもどこかでベルを見たら、部屋に戻ってくるように言ってくださるかしら？　なんだか、今日は朝から見ていないような気がしますし……」
ベルはミーアの一つ下の学年だ。部屋を出たら、夜まで顔を合わさないことも、よくある。なのだけど……、なぜだろう。今日は、そのことが少しだけ引っかかる。
「ベルさまですか？」
アンヌは怪訝そうな顔をしていたが、すぐに頷く。
「わかりました。それでは、行ってまいります」
そうして、アンヌが出て行ったのを見送ると、ミーアは、ベルのベッドに、ちょこちょこと歩み寄った。
その下に隠してあるミーア皇女伝を取り出して、改めて中身をチェックしようというのだ。
――恐らく、記述は変わっていないと思いますけれど……、最後の最後にもう一度、皇女伝のチェックを……ん？
その時だった。
小さなノックの音が聞こえてきた。
「はて？　誰かしら？　アンヌが戻ってきた……、というわけではないでしょうけれど……」
首を傾げつつ、ミーアは、扉の方へと向かう。
無防備に、その扉を開けようとしたミーアだったが、ふと、その足元、扉の隙間から差し込まれた一枚の紙に、視線が向く。
そこに書かれていたのは……、
貴女の大切な妹君、ミーアベルさまの身柄は、我々が預かりました

ミーアベルさまの命が惜しくば、どうぞお一人で、指定の場所までお越しください。

そんな文章で始まる、脅迫状だった。

第六十七話　ミーアお祖母ちゃんの決死の覚悟

「あ、ああ……」
ミーアは、気の抜けたような声を漏らした。
「なるほど、そういうこと……でしたのね」
皇女伝の記述が、すべて、つながっていく。
「わたくしが夜駆けのために島を出るとは、こういう……」
脅迫状には、島から渡るために懐柔しておいた商人のこと、指定場所に行くための馬のことなど、入念な指示が書かれていた。
サンテリによる警備状況を事前に聞いていたミーアは知っている。
この島は入るのには難しくとも、出ていくのは比較的、容易なのだ。特に、いつもより人の出入りが激しい、この聖夜祭の時期にあっては、出る者の厳密なチェックまでは手が回らないのが現状。それゆえに……。
「島の中での暗殺は起きにくいでしょうけれど、島から呼び出されるのは容易ということですわね……」
無論、誘拐となれば簡単ではない。さすがに、それに手を貸す商人の出入りは許されていないだろう。だけど、それが姫君のわがままだったら……？
例えば、夜風に当たりたいから少し馬で駆けたいなどという……、他愛のないわがままだったとしたら……？
ノエリージュ湖の周辺は治安も安定しているし、危険な動物もあまりいない比較的安全な場所だ。そこを駆けるぐらいならば……、危険は少ないのでは？
そう思う者がいたとしても、不思議ではない。
それはまさに、ギリギリのライン。金貨と引き換えに冒せるリスクの境界線だ。
「陰謀に加担する者はいなくとも、セントノエルに通う大貴族の子

弟のわがままに付き合うぐらいならばやる者もいるかもしれませんわね……」
商人とはそういうもの。金の折り合いさえつけば、自身のリスクであっても売りに出す。
そして、その程度の覚悟で協力した者が、いざ自分のせいで暗殺が行われたと気づいたら……、恐らくは黙っているだろう。
だから皇女伝には、ミーアはわがままで外に出たと書かれていたのだ。口裏を合わせたのだろう。
ミーアは、一つ一つ島から出る流れを確認、検証していき、ため息を吐いた。
なるほど、これならばほとんどの者の注意を引くことなく、島から出ることも可能だ。
なんの障害も、ない。とすれば……。
「問われるのは、わたくしがベルの命を惜しむかどうかという、その一点」
ほかの言い訳はできない。実現不可能だ、などという言い訳は通用しない。
ベルを見捨てるか否か。ただそれだけである。
「バカバカしい。こんなの、行くわけがございませんわ」
ミーアはつぶやくように言った。
「これでは殺されに行くようなもの……、というか、実際に殺されに行くわけですし」
敵は皇女伝のことを知らない。
このまま行けば確定で殺されると、ミーアが知っていることを……知らない。
「行けば確実に殺されますし、しかも、皇女伝にベルのことが書かれていないのを見ると、どうせわたくしが行っても殺されてしまいますわ」
ミーアはやれやれ、と首を振りつつ、ドレスを脱いだ。
「そもそもわたくしが死んだら、ベルは存在しないことになってし

まうのではないかしら？　それなのに行くなんて、本当、愚かなことですわ。さっ、式典用の制服に着替えて……」
などと言いつつ、ミーアが手に取ったのは、乗馬用の、動きやすい服だった。
「……馬鹿げた話ですわ……」
ミーアは瞳を閉じる。
思い浮かぶのはベルの顔。この世界を夢のような世界だと、夢を見ているのだと、だから、いつ目覚めてしまってもよいように、精いっぱい楽しむのだと……、そう言って笑った、孫娘の顔だ。
そんなベルにミーアは言ったのだ。
『あなたの尊敬するお祖母さまが、決して夢を終わらせはしませんわ』
と。
「馬鹿げた話、犬死……、うぐぐ、けれど、ここで行かないとすこぶる気分が悪くなりそうですわね……」
それに……と、ミーアの脳裏に一抹の不安が過る。
もしも、これで自分が行かずに黙っていた場合、どうなるか？
生き残ることは確かにできるだろう。けれど……、その場合、暗殺者は依然として、この学園にいることになる。
つまり、いつ誰に殺されるかわからない状況だ。
加えて、敵が「ミーアがベルを見捨てたこと」を公表しないとは思えない。
そしてもし公表された場合、ミーアは周りからの信頼を失う。特に忠臣アンヌの失望は、きっと大きなものに違いない。
そうなった時、すぐに続けて暗殺されたならば、まだマシかもしれない。場合によっては、ずっといたたまれない思いを抱えたまま、生き続けなければならないのだから。
――それに……、アベルにだって顔向けできませんわね……、孫娘を見捨てたなんて。
一方、助けに行った場合はどうか？

もちろん、ミーアは殺される。さすがのミーアもこの状況でベルを助けて生き残れるなどとは思っていない。
けれど、そこには一つの希望がある。
そう……、殺されて、再び過去に戻るという可能性だ。
――あれが、そう何度も起こることとは思えませんけれど、もしもあと一回、それが起こるとするならば……。
ごくり、とミーアの喉が鳴る。
――行くという選択肢は十分に考えられますわ。敵の情報を得ることができますもの……。
ミーアが身一つで来たとなれば、敵は油断して姿を現すだろう。そうして情報を得た上で、死んで過去に遡行する。
ベルを助ける手段はそれしかないと、ミーアは確信していた。
要は、この誘拐劇が起きる前の時点で止めなければならないのだ。
「とすれば……、うう、やむをえませんわ」
着替え終わり、ミーアは静かに息を吐く。
「もう一度、死んで過去に戻る以外に、道は……ございませんわ」
ミーアは自分ファーストな人間だ。
だから、断頭台から逃れるために、国外に逃げる算段も付けていた。
けれど、断頭台の運命を回避したあの日……、ミーアの目標は微妙に変わった。
今のミーアの目標は自分が幸せになること……。そして、その目標を一点の曇りもなく達成するために、ミーアは思ったのだ。
自分だけではなく、自分の周りの人間も幸せであってほしい、と。
考えてみれば、それは、とてもとても贅沢な願いだ。自らのみならず、周りの人間の運命すら捻じ曲げてしまいかねない高慢な想いだ。
……そんなの、知ったこっちゃなかった！
ミーアは、贅沢で高慢でわがままなお姫さまなのだ。
「脅迫状には、一人で来いと書かれておりますわね。ということは

誰かに助力を求めるということはできませんわ……」
敵がどこで見ているかわからない状況。下手にミーアが護衛を伴って行ったら、ベルを殺されるだけでなく姿を現さないかもしれない。情報が得られないという事態は避けるべきだ。
「……でも、一人と一頭で行くことは……禁止されておりませんわね」
ミーアは、にやり、と悪戯っぽい笑みを浮かべて厩舎の方へと向かった。
考えようによってはこの秋、一番、時間を共にした相棒のもとへと。
「まぁ、死んでしまうのは確実なのかもしれませんけれど……、せいぜいあがいて見せますわ。ただで死んでやると思っていたら大間違いですわよ、混沌の蛇」
こうして、ミーアお祖母ちゃんは、孫娘を救い出すための戦場へと向かうのだった。

ミーアは知らない。その覚悟を決めた時、皇女伝の記述がどう変わったかを……。
その踏み出した一歩は、さながら小さな蝶の羽ばたきのごとく。されど、生み出された小さな風は、巡り巡って星の裏側に巨大な竜巻を起こす……。その無形の竜のとぐろに、今まさに巻き込まれんとしていることを、竜ならぬ蛇は知る由もなかった。

第六十八話　銀貨二枚分の忠誠

【聖夜祭当日　七つ鐘の刻（ＡＭ７：００）】

時間は少し遡る。
「おはようございます。ベルさま」
「あっ、リンシャさん、おはようございます」
聖夜祭、当日の朝、ベルは見るからに楽しそうな顔をしていた。
――まぁ、確かにね。聖夜祭の日にワクワクするのは、子どもなら仕方ない、か。
などと思いつつも、ついつい微笑ましくなってしまうリンシャである。
リンシャには妹はいないけれど、ベルを見ていると、なんだか妹ができたような気持ちになってしまうのだ。
――それにしても、この子、いったいミーアさまとどんな関係なんだろう？
ミーア曰くは、腹違いの妹とのことだったが……、それはさすがにどうなのだろうと思うリンシャである。
――でも、面影なんかはミーアさまに似てるし、遠縁の訳ありの子という感じなのかしら？
なんにしても手がかからない子なので、リンシャとしても大助かりである。着替えもお風呂も、高貴な者ならば従者にやらせて当然のことも、ベルは一人でこなせるのだ。
――それに、悪い子じゃないのよね。まぁ、あのお世話になった相手にお金を渡して回るのは、どうかと思うけど……。
あのやり方が、どうにもリンシャは好きになれなかった。
即物的な価値を持つお金で、お礼をするということ。
それは、相手の好意をその場で清算するということだ。

人は互いに好意を交換し、親切にしあうことで付き合いを深めていくもの。自分に良くしてくれた人には自分もまた良くすることで返せばいい。優しさには優しさを、愛には愛を返す。友人であれ、親子であれ、仲間であれ、良き主従であれ……そういうものではないかと、リンシャは思っているのだ。

けれど、お金を払ってしまえばどうか？

関係はそこで切れる。お金を払う者と、それに見合うだけの対価を差し出すもの。それだけの、ドライな関係ができあがるだけだ。それは、絆を育むことにはつながらないのではないか、とリンシャは考える。

けれど、それ以上にリンシャが気になるのは……、

――この子は、いつ自分がいなくなってもいいように、返せる時に恩を返そうとしているような気がする。いつ関係が切れても、相手に損をさせないような……、そんな付き合い方をしてるように見える。

それは、潔い生き方と言えるのかもしれない。今日会った人に明日も会えるかは、確かにわからない。だから、きちんとお礼できる時にお礼する。とてもフェアな生き方なのかもしれない。けれど、

――この子の場合には、なんだか諦めがある気がするのよね。いつ死んでもいい、と自分で思ってるような、そんなドライなところが……。

リンシャは、それが、少しだけ気に入らなかった。子どもは無邪気に明日を信じるものだ。少なくとも、このセントノエル島では、それが許されてしかるべきなのに……。

――まぁ、いいわ。私とお別れする時に、もしもお金を渡して来たらたたきかえして、お礼は言葉で言えって叱ってやるから。それでいいんだって、最後に教えてやるんだから。

などと、ついつい思ってしまうリンシャであった。

【聖夜祭当日　八つ鐘の刻（ＡＭ８：００）】

「おはよう、ベルちゃん」
食堂で、ベルが朝食をとっていた時だった。
いつの間に現れたのか、ベルの後ろにシュトリナ・エトワ・イエロームーンが立っていた。
その顔を見て、リンシャは少しだけ違和感を覚えた。
――いつも愛想良く笑ってるのに、なんだろう、今日は少し笑みが固いような……。
「？　どうかしましたか？　リーナちゃん。なんだか、元気がないような……」
どうやら、ベルも同じ疑問を感じたらしい。小首を傾げ、シュトリナを見つめる。
「そんなことないよ。それより、ほら見て、ベルちゃん」
そう言うと、シュトリナは首から下げたなにかをベルに見せた。
「聖夜祭だから、首から下げてみたの。どうかしら？」
それは以前、ベルが作った小さな馬（トローヤ）のお守りだった。
「あっ、つけてくれたんですね。うふふ、嬉しいです」
ニコニコ笑みを浮かべるベル。そんなベルにシュトリナは言った。
「それでね、このトローヤのお礼に、今日のお昼、少しお外を歩かない？」
「へ？　お外ですか？」
「うん。そう。この前、森でのピクニック楽しかったから。また一緒に出かけたら楽しいんじゃないかなって。どうせ燭火ミサまでなにもやることないしね」
「いいですけど、また森に行くんですか？　確か、入れないんじゃ……」
「ふふふ、毒キノコが生えているほうにはね。でも、入口近くの野原には入ることできるのよ。この前行ってきたんだ」
それから、シュトリナは可憐な笑みを浮かべる。
「ね、あの綺麗な野原に入れるのよ。とっても素敵でしょう？」
「んー、わかりました。行きましょう。えへへ、ちょっとだけ楽し

みです」
ベルも嬉しそうな笑みを浮かべる。
そのやり取りを見て……なぜだろう、リンシャは嫌な予感を覚えた。
いや、嫌な感触ならば、もしかしたら、以前から覚えていたのかもしれない。
なぜならリンシャは、シュトリナの口調に含まれる成分のことをよく知っていたから。
それは、彼女の兄、扇動者ランペールが誰かを騙そうとしている時の話し方に、微妙に似た口調だったから……。
無意識下の警鐘に従うように、リンシャは口を開いた。
「では、ベルさま。私も同行しますね」
牽制するようにシュトリナと、その従者バルバラを見る。すると、
「それは助かります。私は、お昼から少し用事があったので」
バルバラは、拍子抜けするほどあっさりとリンシャに言って、深々と頭を下げた。
「どうぞ、シュトリナお嬢さまのことを、よろしくお願いいたします」

【聖夜祭当日　第二　一つ鐘の刻（ＰＭ１：００）】

昼食後、ベルとシュトリナ、それに随伴のリンシャは連れ立って森にやってきていた。
彼女の言っていた通り、森の入り口に見張りが立っていることもなく、三人はなんの問題もなく野原まで来ることができた。
先日も来た野原だったが、すでに季節は冬。どちらかというと、その光景は寒々しい感じがした。
――人がいないから、そう感じるのもあるかもしれない。町の方は、今日のお祭りで大騒ぎだったし……。さすがに、お祭りだといっても、こんなところには誰も来ないだろうしね。

「んー、前来た時とは違って、ちょっと寂しいね」
シュトリナはあたりを見回して、小さくため息を吐く。
「残念。ねぇ、ベルちゃん、もっと森の奥に行ってみましょう？」
「え？　奥ですか？　でも、兵士の人に見つかったら怒られちゃうんじゃ？」
「平気よ、平気。別に悪いことしてるわけじゃないじゃない？」
そう言って、シュトリナはベルの手を引いた。戸惑っていた様子だったベルだが、やがては諦めたのか、笑みを浮かべて、シュトリナと一緒に走っていく。
二人の子どもの無邪気な姿に、リンシャは小さく安堵の息を吐く。
――子どもは、やっぱり、そういう顔してないとね。
などと思いつつ、リンシャは二人に声をかけた。
「ベルさま、シュトリナさま、あまり遠くまで行かない方が……あっ！」

……直後、ガツンっと重たい衝撃が、頭に走った。

同時に、膝から力が抜け、体が崩れ落ちる。
「……ぁっ……ぇ……」
悲鳴を上げる暇すらなく、リンシャの意識は、急速に闇に絡めとられていく。
「あっ！　リンシャさんっ！」
遠くの方で、ベルの声が聞こえる。
「……ベル、さま……逃げ……」
力を振り絞って出した声は、けれど、かすれるような声で……、だからベルには届かなくって……。
「リンシャさんを殺すことは許しません！」
次に聞こえた声は、すぐ近く……、頭のすぐ上から聞こえた。
鋭くも気高い声……、今までにリンシャが聞いたことがなかった、ベルの声だ。

そんなベルをあざ笑うような声が響く。老年を迎えた女性の声、この声は……。
「あはは、許さないなんて。まるで、本物のお姫さまのようですね。聞くと思いますか？　お姫さまの命令のように、あなたの言葉に従って、私がなにもせずに済ますとでも？」
くつくつ、と口の中で笑うような音。そうして、その声は続く。
「くだらないくだらない。そのようなことをして、我々になんの利点があるというのですか？」
ねっとりと、絡みついてくるかのような声。対するベルは、凛と澄み渡った声で言った。
「……もしも、リンシャさんを殺さずにいてくれたら……、大人しくついていきます。ボクをこの場で殺すことが目的ではないですよね？　あなたは、ボクをミーアお姉さまの人質にしようとしているのでは？」
「……あら？　見かけによらず頭がいいのね、ベルさまは」
「ここでリンシャさんを殺したら、ボクは死ぬ気で抵抗します。それとも、気絶させていきますか？　それはそれで大変だと思いますが……」
「ふふふ、ああ、本当に忌々しいぐらいに頭が働くのね。意外だったわ。確かにそう、当初の予定では、眠っていてもらう予定だったけれど……、あなたさまの協力があれば、楽に出られるでしょう」
しばしの沈黙……その後、
「いいでしょう。とどめは刺さずにおいてあげますよ。もっとも、結果的に死んでしまうこともあるかもしれませんが……。その傷では動くことはおろか、助けを呼ぶこともできないでしょうからね。無理に動けば余計に苦しむでしょうし、もしかしたら、とどめを刺してあげたほうが優しいのではないか、という気もしますけれど……。ああ、それにしても、その方も可哀想に。あなたさまに関わらなければ、こんなことにはならなかったのに……」
声はまるで、ベルを鞭打つかのように続いた。けれど、ひとまず

は取引は成功したらしい。
不意に、そばにベルがしゃがみ込むような気配がして……。
「……リンシャさん、今までお世話になりました」
そう言って、ベルはごそごそとリンシャの襟元に何かを入れた。
その感触……、冷たい、金属の感触を残すそれの正体が、リンシャにはすぐにわかった。
それは、二枚の銀貨だった。
「今のボクには……これぐらいしかお礼できないです。ごめんなさい。こんなことになってしまって、ごめんなさい。どうか、ご無事で」
そうして、足音が遠ざかるにつれて、リンシャの意識も遠くなっていき……。

「……ふざ……けるな」
どのぐらい、意識を失っていたのだろうか……。
リンシャは目を覚ました。
目を開けようとして、顔をしかめる。頭から流れ落ちた血で、上手く開けることができなかったのだ。
ズキズキと痛む頭。体もふらふら、自然に揺れて、すぐにその場に倒れてしまう。
起き上がろうとして何度も失敗し、歩き出そうとして何度も転ぶ。
なるほど、確かに動いた方が事態は悪化しそうだ。これなら倒れたまま、誰かが来るのを待った方がよいかもしれない。毒キノコの見張りをしている者の交代の際に見つけられる可能性は、きっとそこまで低くはないだろうから。
でも……、それでも……。
リンシャは前に進み始める。
ずるずると体を引きずるように。
よろよろと、木にもたれかかりながら。
その腹の内から湧き出す……怒りに突き動かされるように……。

「お礼……をしたいなら……もっと、別な、形にしろ……。銀貨でお礼？　こんなもの、が……、ほしくて、私は……あんたの、おもりを……、してた、んじゃない……」
ぐわん、ぐわん、と揺れる意識、なんとかそれを保つために懸命に怒る。
ベルに……、そしてそれ以上に、彼女を守り切れなかった自分自身に……。
「私、がついて、いながら……、こんな、ことに、なるなんて……」
ベルを守るつもりでいたのに、守られた。
こんな風に、銀貨でお返しをさせてしまったことに……、せざるを得ない状況を許してしまったことに、腹が立ってしょうがなかった。
けれどそこで、リンシャは皮肉げな笑みを浮かべる。
「はは、でも、そう……。銀貨二枚の、評価、か……。確かに、誘拐を許した、私、なのだから、これ、ぐらいで……、ちょうどいい、のかもね……」
ギリッと、歯を食いしばりながら、リンシャが足を止めることは、決してない。
それは、忠誠。彼女なりの、ベルへの想い。
「私の忠誠は銀貨二枚分……。なら……、銀貨二枚分に相応しい、働きを見せて、やる……だけ」
ずる、ずる、と這いずるようにして、リンシャは森の中を進んでいく。
セントノエル学園にいる、仲間たちに知らせを届けるために……。

第六十九話　愛馬とともに……

【聖夜祭当日　第二　四つ鐘の刻から半刻ほどたったころ（ＰＭ４：４０）】

脅迫状に書かれていた場所は、ノエリージュ湖の湖畔から、少し離れた場所にあった。

「草原地帯を抜けた先にある小さな廃村。いかにもな場所ですわね……」

セントノエルから離れた場所に呼び出して、邪魔が入らないようにするつもりなのだろうが……。

「地図を見た限りでは、それなりに離れておりますし……。やはり馬が必要ですわね」

秋の馬術大会の結果から、ミーアが馬に乗れることを見越しての計画なのだろう……。

一番目につかずにミーアを連れ去るにはどうすればいいか？　簡単だ。誘拐される本人に、自分から来てもらえばいい。

相手が普通のお姫さまの場合には馬車などを用意しなければならないため、露見の危険性が増えるが、その点、ミーアは馬に乗れる。

セントノエルから離れた場所であっても、呼び出すことは容易ということだ。

「当然、あちらで馬も用意してあるのでしょうけれど、なにも、そこまで思惑に乗ってやる必要もありませんわ」

セントノエル学園の厩舎を訪れたミーアは、真っすぐに荒嵐のつないである小屋に向かった。

「荒嵐、いるかしら？」

入ってすぐ、ミーアを見つけた荒嵐が、鼻をムグムグ動かした。

一瞬身構えるミーアだったが、幸い、荒嵐はくしゃみをすること

はなかった。
「あら、珍しいですわ……。また、くしゃみを吹っ掛けられるとばかり思っておりましたけれど……」
つぶやきつつ、荒嵐のそばに歩み寄ったミーアは、こっそりと、荒嵐に馬具を取り付けていく。いつでも自分一人で馬で逃げられるようにと、そのあたりのやり方はお手の物である。
自分一人で馬に乗る準備を整えられることも、馬龍あたりには高く評価されているわけだが、そんなこととは露知らぬミーアである。
「なんだ？　遠乗りにでも行くのかい？」という顔で、チラリと見つめてくる荒嵐。その目を、じっと見つめてから、ミーアは頭を下げた。
「荒嵐……、申し訳ないのですけれど……、あなたの力を借りたいんですの……。力をというか……、場合によっては命を……ですけれど」
もしも、自分が死んでしまった時、荒嵐が生きて帰れるかはわからない。案外、落馬した自分を放って、とっとと一人で逃げていく可能性は十分にあるが……。なんとなく、この馬は乗り手を見捨てることはないような、そんな義理堅いところがあるような……そんな気がしていた。
だからこそミーアは、荒嵐の首筋を撫でながら言う。言葉が通じているかはわからないけれど、丁寧に、丁寧に、言い聞かせる。
「ねぇ、荒嵐、今のわたくしは、ほかに頼れるものがございませんの。だから、特別にお願いいたしますわ……。わたくしと一緒に来てくれるかしら？」
そんな姫君の願いを受けた荒嵐は……ぶーふーぅ……と深い鼻息を吐き、にやり、と口角を上げる。
まるで、ミーアの言葉を理解しているかのように……。
俺がいれば、どんな罠からだって逃げてやるよ、と言っているかのように……。
「そう……。ふふ、頼もしいですわ、荒嵐。それと花陽、申し訳な

いですけれど、荒嵐を借りますわね」
その呼びかけに花陽は、静かな知性を感じさせる瞳を向けてくるのみだった。

荒嵐を引いたミーアは、港へと向かった。
それに振り返る者はいない。ただでさえ、祭りで人通りは多いのだ。当然、荷運び用の馬を引いた商人も少なくはない。
それでも、見つかったら大変とコソコソ移動するミーア。ちょっぴりアヤしい姿であった……。
ほどなくして、彼女は港へとたどり着いた。
指定された船は、すぐに見つかった。それほど大きな船ではないが……、荒嵐を乗せるだけならば十分な大きさがある。
「あなたが、島の外まで運んでくれる商人ですの？」
船の前に立っていた男にミーアは声をかけた。
中年の、いかにも商人でございます、という人の好さそうな笑みを浮かべた男だったが……、
「ええ、そうですが……、えーっと、その馬は？」
ミーアが連れてきた荒嵐を見て、わずかばかり、表情を曇らせる。
「もちろん、遠駆けのための馬ですわ。わたくしの愛馬ですわ」
そう言ってやると、商人は急に慌てだした。
「いや、困りますよ。姫殿下を外に連れ出すのだって、リスクがあるのに……。それに、馬は向こうで用意してるって話でしたよ？」
「あら、その方はきっと、わたくしが普通の馬に乗れると思っていたんですわね。けれど、乗馬って難しいでしょう？　わたくし、この自分の馬にしか乗れないんですのよ」
そう言って、ミーアは、荒嵐の方に目を向けた。
空気を読んだのか、荒嵐は静かに、お上品な馬の顔をしている。
「いや、でも、さすがに馬を運ぶのは……」
「できますわよね？　できないとは、言わせませんわよ？　なんでしたら、追加でお金を要求してもらっても構いませんわよ？　あな

たに話を持ってきた方に、金貨一袋でも要求してやるといいですわ」
さらりと敵への嫌がらせも欠かさない。他人の金貨袋で、交渉相手の頬を張り飛ばすスタイルである。
……鈍器を用いた脅迫とも言えるかもしれない。
「それとも、このわたくしに意見するおつもりかしら？　あなた、それ、どうなるかわかってやっているんですわよね？　ご存知かしら？　わたくし、ラフィーナさまとも懇意にさせていただいておりますのよ？」
さらに脅す。
目いっぱい、大帝国の姫君のわがままで殴りに行く。
そもそも陰謀に加担した商人に対して、発揮するような慈悲など持ち合わせてはいないミーアである。
「さぁ、どうなさいますの？　金貨を手に入れられないどころかラフィーナさまにチクられるのと、馬ごとわたくしを運ぶのと、どちらにいたしますの？」

かくして、ミーアは荒嵐とともにセントノエル島を後にした。
自らの、ちょっぴり怪しげな行動が見られていることに、気づくことなく……。

第七十話　はじまりの忠臣と新しき友と

聖夜祭の手伝いをお願いされたアンヌは、聖堂への荷物運びに勤しんでいた。

――早く終わらせてミーアさまのところに戻らなきゃ……。それにしても……、聖夜祭の当日に、こんなに仕事があるなんて……。

基本的に、アンヌはミーアの従者であり、ティアムーン帝国のメイドである。ヴェールガ公国の管轄であるセントノエル学園の仕事に駆り出されることは、あまりないことだった。

――今日は、聖夜祭だから、手が足りないのはわかるけど……。

ミーアたち、生徒会の手配は、アンヌの目から見て抜かりのないものだった。こんな風に緊急で呼び出されることに、アンヌは若干の違和感を覚えていた。しかも……、

「ああ、まったくついてないわね。なんで聖夜祭の当日にまで、こんなことしなきゃならないのかしらね。ね、あなた知ってる？　なんでも、聖堂に置いてあった燭台やら、なんやらが、誰かに壊されてて、それで、急遽、こうして運び込んでるらしいわよ」

一緒に作業に当たっているメイドにそんな話を聞いてしまうと、なおさら落ち着かない気分になってしまう。

――聖堂のものを壊すなんて……、そんな人が学校内にいるなんて……。

そう思うと、不意に、ミーアのことが心配になってしまう。

――ともかく、急いで運んでしまおう……。

そう、アンヌが足を速めた時だった。ふと、視線を向けた先に、アンヌは……、

「あれ？　あれは、ミーアさま？」

自らの主の姿を見つけた。

どこか思いつめたような顔で、寮から出たミーアは、そのまま、

厩舎の方へと向かって歩いていく。
「ミーアさま……、どうされたんだろう……？」
別に、アンヌはいつもミーアと一緒にいるわけではない。アンヌが仕事で手が離せない時には、学友と出かけていることも、ないわけではない。
セントノエル島は、それだけの安全が確保された場所なのだ。
それに、ミーアは大国の姫君には珍しく、自分だけで買い物ができる庶民派だ。アンヌに隠れて、一人でこっそりおやつを買いに行っていることを、アンヌはきちんと知っている。今のところ、お諫めするほどの頻度ではないので、見て見ぬふりをしているが。
それはともかく、だから、ミーアが一人で町に出かけたとしても、そこまで気にする必要はないのかもしれない。なにか、ちょっとした買い物がしたいから、一人で出かけただけなのかもしれない。
でも……、なんだか、気になる。
「それに、どうして、乗馬用のお召し物を……？」
確かに、ミーアが向かったのは厩舎の方だ。その意味では、不思議はないのだが……。
もうすぐ、聖夜祭の夕べに行われる燭火ミサが始まる時間だ。生徒は制服に着替えて、聖堂へ行くことになっている。それなのに、ミーアの行動は明らかにおかしかった。
「この時間から、遠駆けに行くわけもないし……」
聖堂に向かいつつ、アンヌの胸に嫌な予感が沸き上がる。
ついに、危険な場所にアンヌを連れて行くとは、約束してくれなかったミーア。
ミーアが自分を置いて一人で遠くに行ってしまいそうな……、そんな予感が頭を過ぎる。
「そんなこと……ない、よね……」
冷静に考えれば……、そんなことはない。そのはずだ。
だけど、ここ数日のミーアの雰囲気はどこかおかしかった。昨日も唐突にお礼を言ってきた。

聖夜祭の時には、日ごろ世話になっている人にお礼を言うのが慣習だ。だから、その行動も、おかしいことではないはず……なのに。
「ミーアさま……」
湧き上がる不安感は、見る間にアンヌの心を黒く染めていく。
小走りに聖堂に向かったアンヌは、そこに荷物を下ろすと、すぐに厩舎の方へと走り出した。
「ミーアさま……」
つぶやくように、口から出た声。それは、すぐに、
「ミーアさま、どこですか？　ミーアさまっ！」
悲痛な叫び声に変わった。

「すっかり遅くなってしまったわね」
その日の、弓の鍛練を終えたティオーナは、寮への道を急いでいた。
「このままだと燭火ミサに間に合わないかな。少し急ぎましょう」
「はい、わかった、です」
こくり、と頷いたリオラだったが、ふと立ち止まる。
「どうかしたの？　リオラ」
「声が……」
「え？」
「声が聞こえる、です」
そう言うと、リオラは、きょろきょろ、辺りを見回して、
「あっち、です」
走り出す。
「ちょっと、リオラ、どうしたの？」
リオラのただならぬ雰囲気を察して、ティオーナも続く。ほどなくして、二人は、学園の外に走り出ようとしているアンヌの姿を見つけた。
「アンヌさん？　こんなところでなにしてるんですか？」
「ティオーナさま！　リオラさん」

走り寄ってきたアンヌを見て、ティオーナは、緊張に身を固くする。
アンヌの頬が白く染まり、その瞳には、うっすらと涙が浮かんでいたからだ。
「ミーアさまを見かけませんでしたか？　こっちの方に来られたと思うんですけど……。馬を連れていると思うんですけど……」
その口調にも、まるで余裕がない。
それを見たティオーナの胸に、焦燥の火種が宿る。
ミーアと話しておけばよかったという夢の中での後悔……一度は鎮火したと思われていた思いが、再び燃え上がった。
焦ることはない、この聖夜祭が終わって……、そうしたらゆっくり話せばいいと……。
なんだったら、今夜の生徒会の鍋パーティーでゆっくり話せばいいのだと……。冷静な理性が告げている。
けれど、それを大いに上回る焦燥が、ティオーナを突き動かした。
「アンヌさん、私も一緒に探します。リオラ、あなたはラフィーナさま……はお忙しいかな。アベル王子かシオン王子、キースウッドさん、ともかく誰でもいいわ。手を借りられそうな人を呼んできて」
「わかった、です。ティオーナさま、気をつけて」
リオラは頷くと、素早く駆け出した。
それから、ティオーナは改めて、アンヌの方を振り返って、
「私たちも行きましょう。アンヌさん」
早足に歩き出した。
練習で使った矢筒と弓を外すことも忘れて……。

第七十一話　ミーア一旅行記

船を降りたミーアは、周囲の闇の深さに小さく震えた。
背後を振り返れば、松明の明かりに彩られたセントノエル島が見えた。今まで自分がいた、光に満ちた世界と比べて、ここはあまりにも暗かった。
それでも、月が出ているだけまだマシなのかもしれない。
目が慣れてくれば、あたりの様子も徐々に見えてくる。
「これならば、なんとか行けそうかしら……。ねぇ、あなた、ちょっとお聞きしたいのですけど、このバンドゥル村というのは、どちらにあるかしら？」
「バンドゥル村ですか？　それでしたら、ここから北の草原を抜けた先です。古い街道が残っていますけど、もう何年も前に廃村になった村で、なにもないですよ？　……ああ、でも、逢引には確かに最適な場所かもしれませんね」
そう言って商人はニヤニヤ笑った。どうやら、下世話な想像をしたようだ。なるほど、それで、従者を伴わなくとも不審には思われないのか、とミーアは思わず感心する。
わがまま姫が、身分の低い恋仲の男と会うために、従者も連れずにこっそりと島を抜け出す。恋に恋するわがまま姫……。そう見ようと思えば、確かに今の自分はそう見えるのだろう。
まぁ、それはそれで構わないが……。ミーアは改めて、男に示された方角を見た。
「街道を行けばいいのならば、迷わずに行けそうですわね」
「ご心配でしたら、そこにつないである馬を使ったらいいんじゃないですかね？　場所を覚えてるって言ってましたよ」
男が指し示す方向には、一頭の馬がつながれていた。
それは、ミーアから見ると、いささか力強さに欠ける馬だった。

荒嵐と比べると数段見劣りしてしまうレベルである。
ちなみに秋からのミーアは、荒嵐に花陽に夕兎に、と月兎馬を見続けたせいで、若干、馬審美眼が厳しくなっている。
馬マイスターになりつつあるミーアなのである。
「せっかくですけど、わたくしは、わたくしの馬で行きますわ」
ミーアは首を振りながら言う。
――ふん、悪い馬ではないのでしょうけれど、荒嵐の方が速そうですわ。恐らく、万に一つもわたくしに逃げられないように、馬で逃げても簡単に捕まえられるような、足の遅い馬にしたのでしょうが……、そうはいきませんわ。
ミーアは荒嵐の首筋を一度撫でてから、その背に乗った。「よっこいしょー」っという掛け声とともに。
……若干、お祖母ちゃん感あふれるアレな行動だったが……、なにか大きな動きをする時には掛け声は大事なのだ。下手をすると腰やら膝やらを痛めてしまうかもしれないし……。
決して、ミーアが運動不足で、若さを失っているなどということはないのである。ないったらないのである！
そんなミーアの様子を見て、商人は肩をすくめた。
「そうですか。それでは、気を付けて」
それから踵を返して、船の方へと戻っていく。島に渡っている仲間の商人を迎えに行くのか……。あるいは、今回のことに味を占めて、また生徒を島の外に運ぶ手助けをするのかもしれない……。
逢引のために島の外に出たがる生徒は、意外と多そうだし……。
――もしそうなら、愚かなことですわね。ラフィーナさまに見つかったら、お説教間違いなしですし……。人は、自分のまいた種の収穫を、自らしなければならないのですから……。
そうは思ったが、別に注意してやるつもりはない。そんな余裕はないし、所詮は自業自得というものである。
「では、行きますわよ、荒嵐」
「ぶひひん！」

荒嵐の野太いいななきが草原へと響き渡る。

商人の言っていた通り、少し行ったところに、北へと向かう街道があった。

地上を淡く照らす月明りを頼りに、ミーアは一路、廃村を目指した。

「街道といっても、今は、あまり使われていなさそうですわね……」

これから悪事をなそうとしている相手なのだから、当然、人気(ひとけ)のない場所を選ぶのだろうが……、それでも、ひとりぼっちで草原を行くのは、いささか心細いものがあった。

「うう……、この辺りは安全みたいに聞きましたけれど、本当かしら？　猛獣とかが出てたら、暗殺される前に、食べられてしまうなんてことも……ひぃぃ……」

前方に蹲(うずくま)る闇に、なにか、凶暴な獣が潜んでいそうで……、途端に恐ろしくなってくるミーアである。

自らの前で傲然と前を向く荒嵐の姿が、今は心強い。しっかりとした力強い歩調が、秋口からずっと合わせ続けたリズムが、ミーアの心をわずかばかり落ち着かせる。

「頼みますわよ、荒嵐。もしもなにか獣がいたら、さっさと逃げるんですのよ」

「ぶひひん」

いななきとともに、荒嵐が振り返る。任せとけよ！　と言っているようなその目に、ミーアはわずかに笑みを浮かべる。

「それにしても、あなたはずいぶんと幸せそうですわね。花陽とは、上手くやっておりますの？」

「ひっひーん」

「まあ、そうですの。でも、子どもには優しくしなくては駄目ですわよ？　あと、パパと呼ぶことを強要してはいけませんわ。嫌われますわよ？」

ミーアは……ついに心細さと恐怖に耐えかねて、馬と会話を始め

た！
騎馬王国の馬龍でさえ、できないスゴ技である！　そのうち、野蛮な人間に嫌気がさして馬の国に旅立ってしまわないか心配である。
まぁ、それはさておき……。
楽しく荒嵐との対話を楽しんでいるミーアの前を、さっと黒い影が横切った！
「ひっ！」
びくり、と跳ね上がるミーア。直後、荒嵐が走り出そうとするが、すぐさま、その前に影が立ちはだかる。
ぶるるるーふ……、と荒嵐が低い声でうなり声を上げた。
基本的に、好戦的で勇敢な荒嵐であったが、闇雲にとびかかるような真似はしない。なぜなら、二人の前に現れたのは……、
「おっ、オオカミ……？」
巨大なオオカミだった。
荒嵐と、ほとんど同じぐらいの巨体、体を覆う太い筋肉が力強く盛り上がっている。
走ることに特化した荒嵐とはまるで違う体の造り、それは、まさに獲物を狩り殺すための体つきだった。
剣呑な目つきに見つめられてミーアは思わず震え……たりはしなかった。
――あら？　妙ですわね、そんなに怖くないような……。これなら、ディオンさんに睨まれた方が全然怖いですわ。
……そうなのだ。自らを殺した張本人にして、帝国最強の騎士と、ちょいちょい顔を合わせるようになってからというもの、ミーアはすっかり、殺気やら、剣呑な視線やらに対して耐性ができてしまったのだ。
それだけではなく……。
――ふむ、そもそもこのオオカミ、別にわたくしたちを襲おうという気はなさそうですわ。
なんと、相手の殺気すら、ある程度見分けることができるように

なっていた。相手の殺気にはちょっとうるさい、殺気マイスターのミーアなのである！
まぁ、本人的にはあまり嬉しくないだろうが……。
オオカミは、ミーアの顔を一瞥すると、くるりと踵を返して歩き出した。
それは、まるで、ミーアたちを案内しようとしているかのようだった。
「もしや、このオオカミ、敵の手の者なんじゃ……？」
脳裏に浮かぶのは、皇女伝の記述だ。自身がオオカミにペロリとされてしまうという、アレである。
てっきり殺されて、そのまま死体を捨てられるだけかと思ったが、どうやら、敵はオオカミを使って死体を隠すことまでやろうとしたようである。
「まぁ、なんにせよ、すぐに襲ってくることはなさそうですし……。荒嵐、あのオオカミについて行ってみましょう」
ミーアの呼びかけに、荒嵐は、ぶひひん、といななきを返すのみだった。

第七十二話　シュトリナを信じる者（純）

聖ヴェールガ公国バンドゥル村。ベルが連れてこられたのは、夕焼けに染まる廃村だった。
建ち並ぶ朽ちかけた家々はベルの脳裏に、かつて自分がいた場所を思い出させた。
それは、幸せな夢の終わりを予感させるのに十分なものだった。
村の中央部には、少し開けた場所があった。どうやら村人が集会などをする時に使う広場らしい。
広場には覆面を付けた男が一人佇んでいた。そして、彼の足元には、付き従うようにオオカミが横になっていた。
――あれは……、大きい、犬？　でも、犬ってあんなに怖い顔してたかな……？
ベルが首を傾げていると……、
「ふふ、約束通り大人しくしていただいて感謝しますよ、ベルさま。おかげで、こうして無事に目的地に来ることができた」
後ろを歩いていたバルバラが、上機嫌な声で言った。その言葉に、ベルは森に残してきたリンシャのことを思い出す。
「リンシャさん、大丈夫だったかな……」
ぽつん、とつぶやくベル。それを聞きつけたバルバラが意外そうな顔をした。
「あら、心配ですか？　あの従者のことが？　もう二度と会えないのだから、関係ないのではありませんか？」
その問いかけに、ベルは小さく首を振った。
「いいえ、例え二度と会えなかったとしても心配なものは心配です。それは、人として当然のことではありませんか？」
自身に忠を果たしてくれた者に礼を尽くせと、ベルの師、ルードヴィッヒは言っていた。

それに……、
――ミーアお姉さまも、きっとそうしたはずです……。
淀みのないその答えに、バルバラは忌々しげに顔を歪めた。
「そうですか。ふふ、本当にあなたは、お姫さまみたいですね」
にっこりと笑みを浮かべて、バルバラはベルの頬に手を伸ばす。
どこか嗜虐的な光の浮かんだその瞳に、ベルは獲物を狙う蛇を連想する。
「気高くて、正しくて……、まったく忌々しい」
ドンッと、肩に衝撃が走る。バルバラに押されたのだ、と気付いた時には、ベルは尻もちをついていた。後ろ手に縛られていたため、バランスを上手くとることができなかったのだ。
「無様ですね。この世界の秩序の恩恵を受ける高貴なる方なのに、とっても無様。ああ、それとも、あなたは、偽物のお姫さまでしたか？」
意地の悪い笑みを浮かべたバルバラが近づいてくる。そのまま、ベルに向かって手を振り上げたところで……。
「やめなさい、バルバラ」
「あっ、リーナちゃん……」
まるでベルを守るように、シュトリナが一歩前に出た。真っすぐにバルバラを見上げて、睨み付ける。
「ベルちゃんに、乱暴なことしないで」
「あら？　シュトリナお嬢さま……」
怪訝そうな顔で、バルバラが首を傾げた。
「まだ、お友だちごっこを続けるおつもりですか？　というか……」
それから、口元を押さえる。吊り上がった口の端から、くつくつと、笑い声がこぼれる。
「まさか、続けることができるおつもりなのですか？　こんなことをしておいて……？」
その言葉に、シュトリナの肩がぴくんと跳ねた。
バルバラは、無表情の顔をシュトリナに寄せた。両の目を大きく

見開き……、化け物じみた顔でじっくりとシュトリナを見つめてから……。その耳元に口を寄せて……、
「まぁ、ミーア姫殿下が来るまでは時間があるでしょうから暇つぶしにはよろしいかもしれませんね。それに、お嬢さまは、お友だちでも殺せる立派な蛇だと、このバルバラは信じております。ですから、どんな遊びをしようと構いませんよ」
それから、わざとらしくパンっと手を打って、
「あ、そうだ。でしたら、私たちは席を外しましょう。二人きりにして差し上げますね」
「えっ……？」
「ミーア姫殿下をどうやって殺すか、相談してこなければなりませんし、シュトリナお嬢さまも、お友だちと積もるお話もあるでしょう？　なにしろ、これで最後なのですから。たっぷり仲良しのお友だちとお話しして、その後、お嬢さま直々に殺していただくことにいたしましょう。確か、直接、手を下されるのは初めてでしたでしょうし、とても良い記念になるでしょう」
「ぁっ……まっ……て」
立ち去ろうとするバルバラに、シュトリナが手を伸ばした。けれど、その手がなにかを掴むことはなかった。
バルバラはオオカミを連れた男の方に行き、二、三言葉を交わしてから向こうへ行ってしまった。
後には、ベルとシュトリナが残された。
まるで、捨てられた子犬のように、途方に暮れた顔をするシュトリナと、歩き去るバルバラを見て……。
――あの人……、とっても嫌なやつです。
ベルは、ぷくーっと頬を膨らませる。
――たぶん、こうした方がリーナちゃんの心が痛いから……、二人きりにしたんだ……。リーナちゃんをいじめるために……。
そのことがわかったから……ベルは、あえて普通の口調でシュトリナに言った。

「なんだか、ちょっぴり寒くなってきましたね」
それから、ベルは、広場の中央で焚かれた、焚火の方に歩み寄った。パチパチと爆ぜる焚火を見てから、シュトリナの方を振り返り、
「えへへ、聖夜祭の焚火、見たいと思ってたんですけど、予定が変わっちゃいましたね」
明るく笑って見せた。今までと変わらない、無邪気な笑みを。
そんなベルに、シュトリナは驚いたように瞳を見開いてから……、
「うん……、そう、ね……」
小さく頷いた。それから、彼女もまたいつもと変わらない可憐な笑みを浮かべて言った。
「ね、ベルちゃん、お茶でもいかがかしら？　お湯でも沸かしましょうか」
「あ、いいですね。えへへ、そういえばピクニックに来てたんでしたね」
しみじみと言いながら、ベルは空を見上げた。
「月が綺麗に出てる……。夜のピクニックも意外と楽しいかもしれません」
しばらく、夜空をぼかーんと眺めてから、ベルはシュトリナの方を見た。
「？　リーナちゃん……？」
いつの間にきたのか、シュトリナがすぐそばに立っていた。その手に、小ぶりの刃物を持って……。
「動かないでね、その手じゃ、お茶が飲めないでしょう？」
にっこりと笑みを浮かべるとシュトリナは、ベルの腕をきつく縛っていた縄を切り落とした。
「あはは、ありがとうございます。実は、ちょっぴり擦れて痛くなってたんです。さすがは、リーナちゃんですね」
腕をさすりながら笑うベルに、シュトリナは小さく頷いた。
「それはよかったわ。ねぇ、お湯が沸くまで、少しだけお話しましょう？」

シュトリナは、焚火の近くに腰を下ろすと、持っていた刃物をポイっと地面に投げ捨てた。
「リーナちゃん、そんなところにナイフを置いておいたら、危ないですよ」
注意するベルだったが……、シュトリナは一向に、それを拾おうとはしなかった。
仕方なくベルはそれを拾い、シュトリナに差し出そうとする。と……、
「ねぇ、ベルちゃん、リーナね、お友だちのベルちゃんにチャンスを上げようと思うの。そのナイフ、使ってもいいよ」
「……へ？」
ベルは、きょとんと瞳を瞬かせた。
「えっと……、これを使うって、なににですか？」
「そうね、例えば……」
シュトリナは妖艶な目つきで見つめると、ベルの手を両手で握った。そのまま、刃物を自分の首筋に向ける。
「リーナを人質にして、ここを逃げてみるとか……？」
かくん、っとお人形のように首を傾げるシュトリナに、ベルはびっくりした顔で固まる。
「あの、冗談ですか？」
「本気よ？　可能性は低いけれど、このまま手をこまねいてなにもしないよりは、いいんじゃない？　それとも、いっそそれでリーナのことを殺してしまうとか……。あなたの従者にひどいことをしちゃったしね。そのぐらいされても文句言えないわ……」
上目遣いにベルを見上げて、シュトリナは微笑む。
「どちらにせよ、このまま何もせずにいるよりは、いいんじゃないかしら？」
「んー……」
ベルは、自分の手の中の刃物とシュトリナとを見比べてから……、手を切らないように気を付けながら刃物の側をつかんだ。

それから持ち手側をシュトリナに向けて、それを返す。
「やめておきます」
「あら、どうして？　ベルちゃん、ミーアさまに言われてたじゃない？　大切なものを簡単に手放すなって。それなのに、そんなに簡単に諦めてしまってもいいの？　このままじゃあ、ベルちゃんは、ミーアさまが来ても来なくっても殺されてしまうのよ？」
低いとはいえ、それはベルが助かるための唯一の手段だった。それを捨ててしまうということは、完全に諦めてしまったことになりはしないか？　シュトリナは、そう問いかけているのだ。
けれど……、ベルは瞳を閉じたまま、小さく首を振る。
「別に諦めてはいません」
誤魔化しも、負け惜しみも、一切含まれていない、その言葉はどこまでも純粋な言葉だった。
ベルは、自分が未だに諦めていないことを知っていた。
大切なものを握ったまま決して放さないように……、手のひらをぎゅっと握りしめていることを……きちんと知っていた。
「それなら、どうしてその武器を取らないの？　リーナのこと人質にでもすれば、逃げ出すことだってできるかもしれないのに……」
「でも、それじゃあ、リーナちゃんのこと、取り戻せないと思います」
「え……？」
ベルの言葉を聞いて、シュトリナは固まった。
「取り戻すって……？」
きょとん、と首を傾げるシュトリナの、その瞳を見つめて、ベルは言った。
「ずっと考えてます。大切なものを握りしめて、放さないようにって……。リーナちゃんは、ボクのお友だちだから。どうしたら、取り戻せるのかって、ずっと考えてます……。でも、どうしても、その方法を思いつかないんです。えへへ、ボクあまり頭がよくないから、ミーアお姉さまみたいにうまくいかなくって」

ベルの言葉に、シュトリナから表情が消える。
「お友だち……？　ねぇ、ベルちゃん、状況が、わかってないの？　リーナは、あなたに近づくために、お友だちのふりをしただけよ？」
「いいえ、それはウソです」
「どうして？　なんで、そんなこと言いきれるの？」
ベルは、シュトリナを見つめたまま、その胸元に手を伸ばした。そこには……、
「だって、リーナちゃん、ボクがあげたお守り、まだ、つけてくれてるじゃないですか」
そう……、ベルがプレゼントした小さな馬のお守りが……、未だにつけられたままになっていたのだ。
「……これだけのことで？　ねぇ、ベルちゃん、こんなの、あなたを騙すための手段でしかないわ」
歪んだ、無理やりな笑みを浮かべるシュトリナ。だったが、無意識にか、その手はお守りを握りしめていた。まるで、大切なものを放さないようにしているかのように……。
「でも、それでもボクは嬉しかったから……」
ベルは、そんなシュトリナに言葉をかける。
彼女の心に届くように……、大切なものを取り戻そうとするかのように……。
「嬉しかったんです。リーナちゃんに、初めてのお友だちに……、ボクが作ったものをプレゼントできたことが。それをリーナちゃんが大切に持っていて、身に着けてくれたことが、すごく……、すごく嬉しかったんです。だから……」
ベルはシュトリナの手を、両手でふわり、と掴んで、
「放さないようにしっかりと握りしめることにしたんです。ボクの大切な、お友だちのこと……ボクは絶対に放しません」
その言葉に、シュトリナは一瞬、泣きそうな顔をした。けれど……、すぐにその表情も消える。

後に残るのは、いつもと同じ、誰からも好かれるような可憐な笑みだ。仮面のように、他者を遠ざける、完璧な笑みだ。
「ねぇ、ベルちゃん……、リーナはベルちゃんのこと殺そうとしてるのよ？　わかってる？　リーナはお友だちだって、殺せるわ。蛇としてあなたも、それに、ミーアさまのことだって……」
そんなシュトリナに、ベルは悪戯っぽい笑みを返す。
「えへへ、ではここで、お友だちのリーナちゃんにボクのとっておきの秘密、教えてあげますね」
わざとらしく声をひそめて、ベルは囁くように言った。
「実はボク……、殺されそうになったことがあるんです。というか、この夢が覚めたら、見ず知らずの怖いおじさんたちに、殺されることになってるんです」
「へ……？」
「だから、まぁいいかなって……。リーナちゃんに、武器を突き付けて生き残るよりも……、お友だちのリーナちゃんに殺される方が……、諦めないで、大切なものを握りしめたまま死んじゃう方がいいのかなって思います。それに……」
とここで、ベルは初めて困ったような顔をして……。
「たぶん、ミーアお祖母さまは、簡単に死んだりしないと思いますけど……。なにしろ、帝国の叡智ですから」
それから、どこか誇らしげな顔で胸を張るのだった。

第七十三話　シュトリナを信じる者（其）

オオカミの後についていくことしばし。
やがて、ミーアの目の前に不気味な廃村が姿を現した。
「ここが、バンドゥル村……？　ということは……」
朽ちた民家の向こう側、村の中央部に、赤々と火が燃えているのが見えた。
「焚火……、あそこにベルがいるんですのね……」
ミーアは、ほふぅっとため息を吐いてから、荒嵐から降りた。それから荒嵐の首筋を撫でつつ、
「荒嵐、いつでも逃げられるように準備をしていてちょうだいね」
もしも、その機会があったらですけど……と心の中で付け足す。
実際のところ、ベルを助け出して、二人で荒嵐に乗るヴィジョンが一向に見えないミーアである。
――まぁ、一番の目的は敵の正体を見極めることですし……。
「おや、いらっしゃいましたか。ミーア姫殿下」
ふいに、夜の底に響くような声が、ミーアの耳を打った。慌てて視線を向ける……と、そこに立っていたのは、
「ようこそ、お越しいただき、恐悦至極にございます……。おや、その馬はなんでしょうか？」
慇懃無礼に頭を下げるその女性、それは、ミーアの知る人物……。
「バルバラ……さん？　ということは……」
「ふふふ、どうぞ、こちらへ。ああ、お一人で、いらしてください」
「……オオカミに、わたくしの馬を食べさせるつもりではないでしょうね？」
「ご心配なく。そのオオカミは、馬は絶対に食べないよう、しつけられております」
ミーアは、不承不承といった様子で、荒嵐の手綱を放すと、

「行ってきますわね、荒嵐。なにかあったら、さっさと逃げて構いませんわよ」
そう指示してから、改めて焚火の方へと向かう。と
「あっ……」
そこに立っていたのは、後ろ手に縛られたベルと、オオカミを従えた覆面の男。そして……、
「そう……リーナさんが……」
ベルの隣、可憐な笑みを浮かべるシュトリナだった。
「ご機嫌よう、ミーア姫殿下。わざわざ遠いところまでご足労いただきまして」
スカートの裾をちょこん、と持ち上げ、シュトリナは頭を下げた。
「いえ、せっかくのお招きですし、無下に扱うわけにもいきませんわ」
応じつつも、ミーアの脳裏に、夏休み明けのルードヴィッヒとの会話が過ぎる。
――コロッと騙されてしまいましたわ……。イエロームーン公爵家は怪しいと、きちんと聞いておりましたのに……。失敗いたしましたわ……。
忸怩（じくじ）たる思いを抱えつつも、ミーアは未だ、シュトリナのことを悪く思えずにいた。
もしかしたら、なにか事情があるのではないか？　悪いやつらの言いなりにならなければならないような、そんな状況にあるのではないか？　と思ってしまうのだ。
――思えば、花陽が仔馬を産もうとしていた時も、リーナさんに手を借りたのでしたわ。あの時も、リーナさんがいなければ危なかったですし、一生懸命に手伝っておりましたわ。そんな方が……、このような悪事に手を染めるかしら？
諦め悪くそんなことを思ってしまうミーアである。
けれど、それ以上に思うことが……、
――というか、キノコ好きに悪い人間はいないはず……。である

ならば、なにかしらの事情があるに違いありませんわ！
これである！
キノコプリンセス、ミーアは確信しているのだ。
キノコ好きに悪いやつはいない、と……。キノコにあんなに詳しいシュトリナが悪いやつのはずがない、と。
ちなみに、バルバラはキノコ狩りの時にいなかったから関係ない。コイツは悪いやつに違いない、と確信しているミーアである。
――しかし、これは問題ですわ……。リーナさんは、はたして信用できるのか否か……。
もちろんなんらかの事情があってベルの誘拐に加担したのでも、それで罪なしとはならないだろう。だがそれは、やり直しの時には大きな意味を持つのだ。
もしかすると、シュトリナに関しては、味方に引き入れることができるのかもしれないのだから。
刹那の思考、その後、ミーアは方針を決める。
――ここは、最後までリーナさんを信じてみることにいたしましょう。
理由はとても単純だ。
――キノコ好きに悪い人はおりませんわ。絶対ですわ！
そう、それはミーアのキノコプリンセスとしての直感、いわゆるキノプリセンスというやつである。その直感に従い、ミーアは口を開く。
「リーナさん、あなたは……、なにか事情があって、こんなことをしているのですわね」
ミーアは断言する。
何があっても、最後までシュトリナを信じぬく。そう決心したミーアは、じっとシュトリナを見つめた。
……もしも、彼女が根っからの敵であったならば、もう、それはそれで仕方ない。どうせ、ここで死ぬのだから、どちらでも大差ないのだ。

ミーアの覚悟は茹でたキノコのように固かった！　――そんなに固くなかった！
「……え？」
ミーアの言葉に、シュトリナは、きょとんと瞳を瞬かせた。その表情が戸惑いに崩れる。
「……なんで？　どうして、そんなことをおっしゃるんですか？　ミーア姫殿下、どうして、あなたまでリーナのこと……？」
「知れたことですわ。リーナさんがそんなことするなんて、思えないからですわ。わたくしは、あなたのことを信じますわ」
キノコ好きに、悪いやつは、いない！
ミーアは胸に生えた茸信念に基づいて、堂々と言い放つ！
「ねぇ、リーナさん、お話しいただけないかしら？　あなたは、無理矢理にやらされているだけですわよね？　ベルのお友だちのあなたが、こんなことをするはずがございませんわ」
「ミーアお姉さま……」
ミーアの様子を見たベルが、ちょっとだけ嬉しそうな顔をした。
「そうです。リーナちゃんが、こんなことするなんて、ボクもおかしいって思ってました。リーナちゃんは、悪いやつに脅されてるに決まってます！」
そうして、ベルはバルバラの方を睨んだ。
鋭い視線を受けて、けれど、バルバラは落ち着き払った様子で肩をすくめた。
「なにも知らないとは、幸せなことですね……。うふふ、お嬢さまが今までなにをしてこられたのか……」
「やめて！　バルバラ」
顔を歪めたシュトリナに呆れたような視線を向けてから、バルバラは改めてミーアの方を見た。
「そもそも、そのようなことを聞いてどうしようというのですか？　ミーア姫殿下。あなたは、ここで死ぬというのに……」
死の宣告、と同時に、のっそりと、男の足元にいたオオカミが立

ち上がる。
それを見たミーアは、一瞬、息を呑み……心の中で三度唱える。
――ディオンさんよりは、マシ。ディオンさんよりはマシ。ディオンさんよりは……マシですわ！
そうすると、不思議と怖さが薄れるような気がした。
……とっておきのミーアのおまじないである。
まぶたの裏で、呆れて肩をすくめるディオンの顔が浮かんだような気がした。
それはさておき……。
――この程度の危機、ディオン・アライアに首を狙われるのに比べれば、恐るるに足りませんわ！
ミーアは、余裕の笑みを浮かべてバルバラの方を見た。
「あら、それはわかりませんわよ？　確かにわたくしはここで死ぬかもしれませんけれど……、それでは終わりませんわ」
過去に舞い戻り、絶対にこの企みをくじいてやる、とバルバラをにらみつける。
「……負け惜しみは見苦しいですよ？　ミーア姫殿下」
「さて、果たして負け惜しみかしら？」
負け惜しみである。少なくとも半分以上は。
なにしろ、実際にはもう一度、過去に戻れる保証はないのだ。
それでも胸を張って言い切れる程度の修羅場は、経験済みのミーアである。
「……ふん、時間稼ぎでもしている、のでしょうか……。いや、それとも……」
と、バルバラが逡巡した刹那……、ミーアの視界が真っ白に染まった！
それは、辺り一面に突如として発生した白い煙……。
「……はぇっ！？」
混乱に固まるミーアの鼻に、ほのかに香る匂い、それは月蛍草の……、入浴剤の香りで……。

直後、どすん、とぶつかってくるものがあった。
「うひゃあっ！」
悲鳴を上げるミーア。そのまま地面に押し倒される。
そうして、半ばタックルするみたいにぶつかってきた人物、それは……。
「ベルっ！？」
「ミーアお姉さまっ！？」
拘束を解かれたベルだった。

第七十四話　闇夜に燦然と輝くミーア姫！

その瞬間……。
大量の煙が発生する瞬間を、ベルは間近で見ていた。
それは、まさに突然の出来事だった。
バルバラの注意が逸れた瞬間に、シュトリナが焚火の近く……、お茶を入れようと沸かしていたお湯のところに近づき、そして、なにかを入れたのだ。
直後、もくもくとした白い煙が、爆発的に辺りに満ちた。
視界を塞がれて誰もが動けなくなっていたところで、突如、ベルの両腕を縛っていた縄が切られた。
「え……？」
驚いて、後ろを振り返ろうとしたベルだったが、その瞬間にトンっと背中を押されて、バランスを崩した。
そのまま、たたらを踏むように、ベルは前方につんのめって……。
その背を追って……、
「……さよなら、ベルちゃん。元気でね」
煙の中、声が聞こえた。
「……え？　リーナ、ちゃん？　あっ！」
思い切り、煙の中に突っ込んでしまったベルは、次の瞬間、誰かとぶつかった。
「うひゃあっ！」
ちょっぴりヘンテコな悲鳴を上げた人物、それは、自分を助けに来てくれた人で……。
「あっ……、ミーアお祖母さま……？」
「なっ？　ベル……！？　どうして……」
などと、呆気にとられたのは、一瞬のこと。

――好機到来ですわ！　逃げるのは、今しかございませんわ！
ミーアはすぐに動き出す。切り替えが早いところが、ミーアの良いところだ。
「荒嵐っ！」
指示する余裕などない。ただ、名前を呼んだだけだ。
けれど、そんなミーアの呼びかけにも荒嵐はきちっと反応した。
煙を突破して駆け寄ってきた荒嵐に、ミーアはひらりっと飛び乗ると、流れるようにベルを自分の前に乗せた！
……ミーアのイメージの中では。
実際には、よっこいしょーっと上に乗り、ものすごーく苦労して、ベルを引っ張り上げたわけだが……。まぁ、それでも、火事場の馬鹿力を発揮して、ミーアにしては十分に早かったのだが……。
「で、でも、まだリーナちゃんが……」
煙の方に目を向けるベルに、ミーアは言った。
「どちらにせよ、今のわたくしたちでは、助けることはできませんわ。でも……」
そこで言葉を切ってから、ミーアもまた煙の方に目を向ける。
「絶対に……、ええ、絶対に助け出してみせますわ。だから、今は、逃げますわよ！」
そうして、ミーアは荒嵐に指示を飛ばす。
「さぁっ！　逃げますわよ！　荒嵐！」
ミーアの人生最大の、命を懸けた逃亡劇、その幕が静かに開いた。

ミーアの号令で荒嵐は走り出した。いきなりの全力疾走である。
吹き飛ばされないようにミーアは、前方に乗るベルを抱きかかえるようにして、身を伏せた。
煙によって、若干、方向を見失っていたものの……、まぁ、大した問題ではない。なぜなら……、ミーアは秋に一つの奥義を習得しているのだ。
そう、背浮きの極意である。

荒嵐の走りに身を任せ、自らは、できるだけそれを邪魔しないこと。
要するに、荒嵐さえ逃げる方向を知っていれば……、ミーアはぽけーっとしてても、なんの問題もないわけである。
やがて、煙に覆われた地帯を抜ける。
背後を振り返れば、白く光る煙幕が、村全体を包み込むようにして広がっていた。
「あれは……、クロエの持ってきた入浴剤でしたのね……」
そう言えば、ティオーナとお風呂に行った時、後からシュトリナが入ってきたっけ、と思い出す。
――あの後、クロエから分けてもらっていた、ということかしら？　ならば、リーナさんは、こうなることを予想して、最初から助ける気でいたということに……？
一瞬、物思いにふけりそうになるミーアだったが、すぐに首を振る。
「今、考えても仕方のないことですわね。なにはともあれ、こうして窮地を脱することができましたし、みなさんの元へ戻った後で助けに行きましょう。あ、でも、島に戻るには船がいりますわね……。あの商人はもういないでしょうし……。それならば、明日の朝になるまで、夜闇に身を潜めるのがよろしいかしら。月が出ているとはいえ、この暗さですし、どこにでも隠れることができ……あら？」
と、ここで、ミーアは微妙な違和感に気づく。なんだか、あたりが微妙に明るいような……。
月明かりが強くなったのかしら？　などと空を見上げようとしたミーアは、直後に気づく。光っているのは、自分自身であるということにっ！
正確に言えば光っているのはミーアとベルのみ。荒嵐は別に光っていない。
ぼんやりとした淡い光が彼女たちの体を照らして、まるで、二人

が宙に浮いているようにすら見えた。馬に乗る二人の姿は、闇夜を飛び回る妖精のようで……。もしも、どこかの物書きに目撃されてしまっていたら、愉快なトンデモ皇女伝の材料にされてしまいそうだ。

それはともかく……。

「なっ、こっ、これは、いったい……？」

混乱するミーアであったが直後に原因に思い至る。

余談だが、ミーアには、いくつか脳細胞の働きが活発化するワードというのが存在している。甘い物やキノコ類がそれにあたるが、もう一つ……、ミーアが大好きなお風呂関連のワードに関しても、ミーアの頭脳はキラリと冴えわたる。

そして……、つい最近のお風呂関係のことと言えば……。そう。煙の出る入浴剤。そして、そのかぐわしい香りは……、月蛍草の香り……。

「……月蛍草……、月蛍……？　ものすごく光りそう！」

そう……ミーアは知る由もなかったが、その名前の由来……。それは、夜に輝く草であるということ……。

そして、その成分を含んだ入浴剤にもまた、同じような性質があって……。

明るいところでは表われない微妙に厄介な仕様に、ミーアは大いに慌てる。

「これ、暗いところを歩くのには便利でしょうけど、身を隠すのは無理なんじゃ……」

などと考えているところで……、ミーアは見た。

後方、白く輝く煙幕を突き破り……、自分と同じようにほのかに輝く三つのナニカが飛び出してきたことを。

その光が描くシルエット、それはどう見ても馬に乗った男と、巨大な二頭のオオカミにしか見えなくって……！

「ひっ、ひぃいいいっ！　来てますわ！　追っかけてきてますわよ！　荒嵐！」

ミーアに言われるまでもなく、荒嵐は速力をあげている。暴力的な加速に振り落とされないように、ミーアは必死にしがみつく。
そうして、ミーアは風になった！
風になったはず……なのに……。
後ろを振り返ったミーアは、悲鳴を上げた。
「ひぃいいいっ！　ち、近づいてますわよ、荒嵐。どんどん後ろから近づかれておりますわっ！」
荒嵐の速さを知るミーアには信じがたいことながら……、男の乗る馬がじわりじわりと近づいてきていた。さながら、白く透き通る亡霊の騎士のごとく……、男は見る間に距離を詰める。
それは、恐るべき速さだった。
一瞬、ミーアとベル、二人分の重さで荒嵐が遅れているのかとも思ったミーアだったが……、
「いえ、わたくしが、そんなに重いはずはございませんし……荒嵐なら余裕のはずですわ」
などと、すぐに考えを改める。
その証拠に、男が連れていたオオカミたちは、いささか遅れ始めている。荒嵐が遅いわけでは決してない。敵が、速すぎるのだ！
「はっ、はっ、速く！　荒嵐、もっと急いでくださいまし」
ミーアの声に、荒嵐は、ただ小さく鼻息をこぼすのみ。
それは、うるせえ、黙ってろ！　とでも言うかのような、ちょっぴりムッとした鼻息だった。
月夜の追走劇は、始まったばかりだった。

第七十四話　闇夜に燦然と輝くミーア姫！（後書き）

みなさま、今年も一年ありがとうございました！　よいお年を！

第七十五話　少女たちの想いの結実

――あれは、月兎馬……。騎馬王国からセントノエル学園に譲渡されたものか……。なかなか良い馬だ……が……。

前方を逃げる皇女ミーアとその馬を眺めながら、狼使いは冷静に考える。

先ほどの煙の影響だろうか、ぼんやりと明かりを放っているおかげで、ミーアの騎乗姿勢がよくわかった。

――皇女ミーアの乗り方も、悪くない。馬にすべてを委ねている……。

馬に乗り慣れていない少女を抱えての、皇女ミーアの騎乗もそれなりには、さまになっていた。高貴な身分の婦女子とは、とても思えないような乗りっぷりであるが……。

――だが、残念ながら……、我から逃れるには足りない。

狼使いは冷静に、自らの乗る愛馬に声をかける。

「……行くぞ。影雷」

その指示に応えるように、黒銀の毛並みを持つ馬、影雷は高くいなないた。

それを合図に、影雷の駆ける速度が上がる。従者である狼たちを置き去りにして、一気にミーアたちへと接近した狼使いは、片手で剣を抜き放った。

明々と輝く月光を反射して、刀身がギラリと輝きを放った！

「……その首、貰い受ける」

「ひぃいいいいいっ！」

悲鳴を上げるミーアまでの距離、およそ三馬身。

それに気づいたのか、ミーアの乗る馬が速度を上げ、再び距離を開ける。と同時に、ザカッと土を蹴りつけてきた。けれど……、

――なかなかに賢い馬のようだな。

狼使いはそれを避けるために、いったん左後方に移動、ミーアたちと距離を取る。そこから回り込むようにして、ミーアたちの馬に近づこうとして……、直後、前方に目をやる。
――むっ……あれは……？
闇の中に見えた、ぼんやりとした赤い光。それが弧を描くようにして、近づいてきて……。
「――っ！」
咄嗟に剣を振るう。瞬間、刃に何かが当たる感触とともに、周囲に炎が爆ぜた。
「火矢……？」
直後、
「ミーアさまっ！」
響き渡るは、少女の声。
狼使いは、前方、火矢が飛んできた方向に目を凝らす。わずかとはいえ、自身が光を放っているため、微妙に見づらかったが……、それでも彼の目は、そこに馬に乗る二つの人影をとらえた。
どうやら、一人が馬を操り、もう一人が弓を放ってきているらしい。
――なるほど、皇女ミーアを救援に来た従者、か……。

セントノエル島で、ミーアの行方を追っていたアンヌとティオーナは、すぐに、ミーアが島を出る船に乗ったという情報を手に入れた。
幸い、町行く人々も、商人たちもミーアのことをしっかりと覚えていたのだ。
馬を引き連れたセントノエル学園の生徒は印象的だったし、なにより、アンヌがコネ作りに尽力していたためである。必死な様子のアンヌに、協力してくれる町人は少なくはなく……、ほどなくしてアンヌたちはミーアが島を出たことを知る。
すぐさま、二人は自分たちも島を出ることを決意。アンヌが懇意

にしていた商人にお願いして、岸まで船を出してもらうことにした。
「……問題は、岸についた後どうするか、ですね」
ティオーナは湖の向こう側に広がる闇に向けて、厳しい視線を送った。
二人が得た情報は、ミーアが島を出るところまでである。
はたして、聞き込みによって、その後の情報を得ることができるだろうか？
「ちょっといいかい？　アンヌちゃん」
深刻な顔で相談する二人に、商人が話しかけてきた。
「本当なら、港に船をつけるところなんだが、島からセントノエル学園の生徒を出したとあったら、騒ぎになりそうなんでな。できれば、人のいないところで降ろしたいんだが……」
その言葉は、二人の絶望に拍車をかける。
自分たち同様、ミーアを連れ出した商人も同じように、人目につかないところにミーアを降ろしたのではないか？
だとするならば、ミーアを目撃した者など、一人もいないのではないか？
そんな時だった……。
二人が乗った船とすれ違うようにして、一隻の船がセントノエルに戻っていくのが見えた。
「ありゃ？　先客がいたか？」
商人の言葉に、二人は顔を見合わせた。
「もしかして……ミーアさまを運んだ船なんじゃ……？」
咄嗟に船体の後方まで走り、すれ違った船を見る。けれどさすがに水上で止めて、乗り移って事情を聴きだすわけにもいかない。いかないが……。
「すみません。あの船が来た方向に、船を泊めてください」
アンヌも、ティオーナも、もうわかっていた。ミーアがただならぬ事態に巻き込まれたのだということは。
だから、船から降りた場所にじっと留まっているようなことはな

いだろうと、頭ではわかっていた。
けれど、その希望にすがるしかなかった。
「ミーアさま……、どうか」
アンヌの切実な祈りは……、けれど届かない。
船が泊まった岸辺には、求める人の姿はなかったから……。
絶望に、目の前が真っ暗になりかける。それでも諦めずに、なんとか辺りを探すけれど……、商人からもらった松明が燃え尽きるころには、アンヌの瞳からは、ぽろぽろ、ぽろぽろと涙がこぼれ落ちていた。
「ミーアさま……、いったい、どこに……」
ぐずぐずと、鼻を鳴らすアンヌ。その時だ。
「アンヌさんっ！　あれ！」
ティオーナが声を上げた。涙に歪む視界、目元をぬぐったアンヌは、ティオーナが指さす方に目を向けて……。
「馬……？」
木につながれた馬を見つけた。
「どうして、こんなところに馬が……？」
刹那の逡巡、けれど、アンヌはすぐに決意する。
「ティオーナさま、私の後ろに乗ってください」
「え……？」
あの日……、レムノ王国に、アンヌは連れて行ってもらえなかった。
どんな時でもミーアの傍らにありたいと強く、強く願っていたのに、ついていくことができなかった。
馬に、乗ることができなかったから……。
あの日の悔しさを糧に、アンヌは努力した。
馬に乗れるようになるために。
今度こそ……、ミーアの傍らにあるために。
そんな彼女の目の前に、一頭の馬が現れた。
恐らくは、ミーアが危機に陥っているであろう、今この瞬間に目

の前に馬がいる。ならば、ほかにすることはない。
「ミーアさまは、いつでも、馬に乗る時は、馬に身を委ねていた。だから、私も……」
アンヌの、乗馬のお手本はミーアだ。
馬に、すべてを委ねてしまう奥義「背浮き乗馬」がアンヌの理想とする乗り方だ。
……何かが間違っているような気がしないではないが……。
ともかく、アンヌは決めたのだ。ミーアに、大切な主の行動に倣うことに。
「急いでください、ティオーナさま」
「ええ、わかりました」
ティオーナも覚悟を固めたのか、アンヌの後ろによじ登る。
それを確認し、アンヌは馬を走らせる。
行く先など知らない。けれど、馬の赴くままに……、その身を委ねたのだ。
その馬が、混沌の蛇が用意した……待ち合わせ場所にミーアを運ぶための馬だということも知らずに。

「アンヌさんっ！　あそこっ！」
アンヌの後ろで馬に揺られることしばし。ティオーナは、それを見つける。
前方に現れた淡い光……、一瞬、月の妖精かと見間違いそうになる、その幻想的な光が、こちらへと向かってくることに。
懸命に目を凝らせば、それが、馬に乗った人間であることがわかった。
そして、
「ひぃいいいいいっ！」
遠くに聞こえる少女の悲鳴。あれは……、あの声は！
「あれは、ミーアさま！」
アンヌがつぶやくので確信する。あれは、自分たちが探している

人物であるということ。
そして、同時に、
「襲われてるの？」
そのミーアの悲鳴が、余裕を失ったものであることにも。
――ミーアさまが、あんな風に情けない悲鳴を上げるなんて、ただごとではないわ！
ティオーナは確信する。今、ミーアはきっと命の危機にあるのだと。
……実際には、結構ミーアは情けない悲鳴や、ヘンテコな悲鳴を上げているのだが……、ティオーナのイメージの中では、常にキリっとして冷静沈着なミーアなのである。
「アンヌさん、ミーアさまを援護します」
そう言って、ティオーナは、背中につけた矢筒から矢を取り出す。
練習用の矢を、先端が燃えるように細工した火矢である。
新しくもらった松明を使って点火すると、赤々と炎が立ち上った。
――さすがは、リオラ。いい細工ね……。
心の中でつぶやいて、ティオーナは弓をつがえる。
レムノ王国での革命事件で、悔しい思いをしたのは、アンヌだけではなかった。
ティオーナもまた、心の奥に悔恨を抱えた一人だった。
「なにも、できなかった……」
せっかくミーアと同行したのに、なんの役にも立つことができなかった。
その後悔から、ティオーナは弓の練習を始めた。戦う力が欲しくて……否、ミーアの役に立てる力が欲しくて……。
ティオーナは目をすがめる。
前方に揺れる二つの光。
淡い光はどちらも同じものに見えて……、どちらが襲撃者で、どちらがミーアなのかがわからなかった。万が一にも、ミーアに矢を当てるわけにはいかない。

自然、弓を持つ手が緊張で震える。
――どっちがミーアさまなの？　私は……、きちんと弓を射ることができるの？
そんな時……、ふいに、片方の光が大きく横にそれた。そこから回り込むようにして、もう片方に近づこうとして……、それが見えた。
降り注ぐ月明り、地上に向かって伸びたその一筋が、一瞬だけキラリと強い光を発するのが……。
その光の中に刹那、見えたもの、その冷たく輝くものは……。
「今のは……、剣っ！」
それは、敵が構えた剣が月を反射した輝き。
――ミーアさまが、剣を持って戦うなんてこと、あり得ない！
それに、今なら少しミーア様から離れているわ！　この角度なら！
確信を込めてティオーナは、流れるような動作で火矢を放った。

それは、二人の少女の想いの結実。
アンヌだけでは、馬で駆けつけることができても何もできなかった。
ティオーナは乗馬も弓もできるけど、馬を操りながら、弓を放つことはできなかった。
ゆえに……、それは彼女たち、二人の努力の結実。
それが、今この瞬間、この時に、二人をミーアの絶体絶命の危機に間に合わせた。
火矢は赤い光となって、弧を描くようにして、敵に向かっていった。

第七十五話　少女たちの想いの結実（後書き）

あけおめです！

第七十六話　か細き運命の糸を繋いで

――未熟。その程度で、我に当てようなどと……。

最初の一本以外の火矢は、ことごとく頭上を通り過ぎて行った。狙いとしては大雑把すぎるし、なにより、軌道が見えやすい火矢にしていることが致命的と言えた。これでは、仮に命中する軌道で放ってきたとしても簡単に叩き落とすことができる。

火攻めにするならばともかく、わざわざ矢の軌道が見えやすいように火を灯すなど、愚の骨頂。

――万が一にも皇女ミーアに当たらないよう、わざと見えやすくしているのか……？

それでも、普通の賊が相手であれば牽制にはなったかもしれないが、帝国最強の騎士、ディオン・アライアの矢を叩き落した狼使いであれば、無視してしまっても何の問題もない。

――いや、いくら防げるとしても、こうも撃たれてはさすがに面倒か。そもそも、もし、皇女に当たったりしたら、どうするつもりだ？

熟練の戦士である狼使いだからこそ、打ち落とすことも可能なのだ。前を行くミーアには到底そんなことはできないだろう。

――今から首を落とす相手に、無用の心配か……。

そんなことを思いつつ、狼使いは馬の速度を上げた。

見る間にミーアの姿が近づいてくる。剣を振りかぶり、その細い首筋に刃を振り下ろそうとした、まさにその時……！

「合わせてっ！」

前方、弓の射手が声を張り上げる。

それを聞いた狼使いの脳裏に疑問が過ぎった。

合わせる？　なにを？

馬を操る前方の少女にかけた声だろうか？　だが、だとしたら、

なにをどう合わせるというのか？　あるいは、ミーア姫たちにかけた言葉だろうか？　だが、だとしても、なにをどう合わせるのか？
生じた違和感。直後、前方から、再び火矢が放たれる。
かすかな山なりを描く火矢の軌道。赤く光る矢は真っすぐに向かってくる。
距離が近づいたからか、狙いは正確だった。仕方なく、彼は剣でそれを落とそうとして……、その耳が異変を捉える。

矢が風を切る音。
その数は……二つ！

刹那、狼使いは、体を大きく倒した。その肩口を、まったく違う角度から飛んできた矢がかすめていく。
――ぐっ……鋭い。もう一人、射手がいたか……。
狼使いはようやく、相手の狙いに気が付いた。

「ちっ、外した、です」
暗い草原に立つ小さな人影。
狙撃手、リオラ・ルールーは悔しげに舌打ちする。
「次は当てる、です」
そうして、二本目の矢を番える。
ティオーナの命令で、助っ人を呼びに行ったはずの彼女がここにいることには、ちょっとした事情があった。
端的に言ってしまうと、彼女は……ティオーナが心配だったのだ。
アンヌからただならぬ気配を察知したリオラは、主君の身を案じて、自身に課せられた命令を最低限だけ果たすと、すぐにティオーナたちの後を追ったのだ。
そうして、彼女が港に到着したのとほぼ同時に、一隻の船が現れる。
それこそが小遣い稼ぎのために再び戻ってきた、例の、ミーア誘

拐に加担した商人だった。
「積み荷を積んでなければ、入島の審査も甘いし、ちょろっと学生を島の外に出してやるだけで金貨がもらえるなんて美味い商売だなぁ」
などと上機嫌だった彼なのだが……、すぐに自らの悪事の報いを刈り取る羽目になる。
アンヌたちに協力した町民たちの手によって捕まった商人が、袋叩きにされそうになっているところにタイミングよくリオラが到着し……。と、アンヌとティオーナよりスムーズに行動できたリオラは、野原の途中でついにアンヌたちに追いつくことができたのだ。
さらに、商人からある程度の事情を聞いたリオラは、不意の遭遇戦に備えて、簡易な火矢を作成。矢の先端を潰し、万が一ミーアに当たっても死なない程度のケガで済む矢を作っていた。
まぁ、当たったらめちゃくちゃ痛いだろうが、刺さらなければいいだろ！　の精神である。
ワイルドさが売りなリオラである。
その上で、彼女はティオーナに役割を与えたのだ。
替えの松明と火矢を渡して……、それを使って敵の目を引き付けることと牽制、そしてそれ以上に敵の周囲を照らして、リオラの狙いをつけやすくする、という役割を。
ティオーナの腕は悪くはないが、百に一つもミーアに矢を放ってしまっては大変なことになる。ゆえに、敵に致命傷を与えるような攻撃は自分が担おうというわけである。
まぁ、実際のところ、リオラであっても万に一つぐらいはミーアを射抜いてしまう可能性は否定できないところであるが……、それでも、ティオーナよりは低いわけで……。
「ミーア姫殿下、当たっちゃったらごめん、です……」
……ミーアの命は、割と風前の灯なのかもしれない。
「ひぃいいいっ！」

前方から次々と飛んでくる火矢を見て、ミーアは悲鳴を上げた。
「あぶっ、危ないですわ！　荒嵐、避けて！　ひぃいっ！　当たってしまいますわ！　ベル、しっかりと頭を下げているんですのよ！？」
実際には火矢はかなり離れたところを飛び去っているわけだが、ビュンビュン飛んでくる矢に、ミーアの小心者の心が悲鳴を上げ続けていた。
一方、ベルの方はずっとうつむいたままだった。
ミーアとは違い、以前にも似たような経験をしているベルは、この程度では動じないのだ。むしろ彼女の心配事は……、
「リーナちゃん……」
あの場に残してきた友人のことだった。
そればかりが気になってしまい、頭上を飛び交う矢も、追跡者も、
「ひぃいいいっ！　し、死んじゃいますわ！　これ、絶対死んじゃいますわっ！」
お祖母ちゃんの情けない悲鳴も、彼女の耳には届かないのだ。こうして、ベルの中の格好いいお祖母ちゃん像は守られるのだった。良かったね、ミーア。
さて、きゃあきゃあ悲鳴を上げていたミーアだったが、ようやく、この火矢が当たらなそうだぞ？　と気付いて、冷静さを取り戻した。そうして、改めて後ろを振り向いて……、驚愕する。
追跡者の乗った馬が、予想していたより後方にいたからだ。
「あら？　もしかして……、火矢にビビッて速度を落としたんですの？」
……リオラの狙撃の方にはまったく気づいていないミーアである。
「ふふん、火矢とこんなに離れていたら当たるはずありませんのに、情けないやつですわ！」
先ほどまでの自分の態度を忘れて、得意げに笑うミーア。都合の悪いことは、サクッと忘れられる便利な脳みそなのである。
――もしかして、これ、上手く逃げることができるんじゃないか

しら？
などと、油断しかけた瞬間だった。
ドンっと真横から衝撃が走った。
「あっ……」
「ひゃあああああっ！」
悲鳴とともに、ミーアとベルは草原に投げ出された。
ごろんごろん、と地面を転がりながら、ミーアは見た。
荒嵐に真横から体当たりを食らわせた巨大な影……、それがのっそりと、ミーアたちに近づいてくるのを……。
――あっ、ああ、オオカミのこと、すっかり忘れておりましたわ……。
狼使いと同様、ミーアたちもまた、火矢に気を取られて速度が落ちていたのだ。そこに、追いついてきたオオカミが不意打ちを食らわせてきた、と……。
それは、ただそれだけのこと……。そして……。
「覚悟してもらおう……」
オオカミの後ろから、馬を降りた狼使いが歩いてくるのが見えた。
――あ、ああ……やっぱり、わたくし、ここまでなんですのね……。
彼が振り上げた刃をぼんやり見ながら……、ミーアは思う。
――ま、まぁ、犯人はわかりましたし。今度は上手くできると思いますわ。もっとも、今度があれば……ですけれど……。
男がやってくるまで、残り五歩、四歩……。
やがて、ゆっくりと立ち止まった狼使いは、その剣を振り下ろした。
ミーアはギュッと目をつむり、どうか、あんまり痛くありませんように……！　などと心の中で祈りをささげた。のだが……。
痛みはおとずれることなく、代わりに聞こえてきたのは、甲高い金属の音のみで……。
「……悪いが、彼女は大切な人なんだ。ボクにとっても、皆に

とってもね……。だから……ミーアには指一本触れさせない」
リオラ・ルールーが果たした最低限……。
学園に戻った彼女が真っ先に見つけた助っ人こそが……。
「あっ、アベルっ！」
ミーアの感極まった声に、アベル・レムノはちょっぴり照れくさそうな顔をするのだった。

第七十七話　決戦の荒野にて

「ああ、アベル！　アベルが来てくれましたわっ！」
きゃーきゃー響く、ミーアの能天気な歓声をよそに……、アベルは男から目を離せなかった。
肌が粟立つ……。
緊張感に、手のひらにじっとりと汗が滲んできた。
目の前の男の隙のない構えと、全身から発せられる濃密な殺気……。それは、かのレムノ王国の豪傑、剛鉄槍レオナルド・バージルや帝国最強の騎士、ディオン・アライアにも匹敵するもののように、アベルには感じられた。
――この男、恐ろしいほどの実力者だ……。それに……、
男から注意を逸らさないようにしつつも、アベルは辺りを窺う。と、徐々に、距離を詰めてきているオオカミたちの姿が見えた。
――オオカミが厄介だな……。なんとかしなければ……、んっ？
っと、不意にミーアの後ろに、のっそりと荒嵐が歩み寄るのが見えた。ふんっと荒い鼻息を漏らしつつ、オオカミたちを睨みつける。
さらに、その隣にはアベルが乗ってきた花陽までもが、まるでミーアを守るように、身を寄せて来ていた。
――頼もしいけれど、さすがにオオカミと馬では……。
と思ったアベルだったが、不思議なことにオオカミたちは、馬を見ると、そこで足を止めてしまった。
「これは……、ああ、なるほど」
その様子を見て、アベルは納得する。
馬というのは、財産だ。
戦場を駆ける駿馬は、一頭で千金の価値を持つ。恐らく、敵のオオカミたちは、馬を襲わないようにしつけられているのだろう。
「ということは……、とりあえず、オオカミを気にする必要はない、

ということか。ミーア、荒嵐たちから離れるな」
「ええ、わかりましたわ！　……あ、あら？　荒嵐、なんだか、鼻がひくひくしてるような……、うひゃあっ！」
ぶぇえくしょんっと、荒嵐のくしゃみの音と、その直後、どさり、とミーアが転ぶ音が聞こえたが……、それに構っている余裕はアベルにはない。
改めて、彼は目の前の男に視線を戻した。
「よくしつけられているオオカミで助かったよ。あとは、お前を倒せばいいだけだ」
「アベル……、レムノ王国の、第二王子……か」
覆面の男は、意味ありげにつぶやいて、アベルを見た。
「おや、ボクを知っているのかい？　それは、光栄の至りだ」
目の前の男を睨みつけたまま、アベルは剣を上段に構える。
実のところ……、状況は、あまり好転はしていない。目の前には、帝国最強ディオン・アライアと同格の暗殺者がいて、襲ってはこないとはいえ、オオカミもそばで狙っている。
捨て身で時間稼ぎをすればよいという状況でもない。
敵を退けて、活路を切り開かなければならない状況なのだ。
――ボクに……できるだろうか？
一瞬だけ、腹の底から浮かび上がりそうになる不安……、それを、
「ふぅ……」
深呼吸とともに飲み下す。そして、
「行くぞ！」
しなければ、ならぬことはシンプルだ。ならば、ただ、それを為すのみ。
アベルは、大きく踏み込む。
地面をへこまさんばかりの踏み込み。と同時に、刃を振り下ろす。
鍛練に鍛練を重ねた、彼のもっとも信頼を置く、上段からの振り下ろし。
かすむ刀身は、ただ月明かりの反射による残光を置き去りに必殺

の斬撃となる。
それはまるで、月の雫が垂れたような美しき斬撃。
天才、シオン・ソール・サンクランドでさえ、反応できたかどうか疑わしい、見事な一撃……であったのだが……。
ガィン、と重たい音が響く。
刹那の後、月に照らし出されるは、鍔迫り合いをするアベルと男の姿だった。
――くっ、こうもやすやすと受け止められてしまうとは……。
渾身の一撃を止められて、悔しげに舌打ちするアベル。そんな彼に、覆面の男は冷たく言った。
「見事な一撃だが、我を討ち果たすには足りぬ」
直後、今度は男の斬撃が放たれた。
間一髪、アベルは剣の腹で受けるも、攻撃は終わらない。激しい嵐のような連撃に、アベルは防戦一方だった。
――くっ、やはり、強い。
攻撃を捌ききれずに、体に小さな傷が増えていく。月明かりに、鮮血の飛沫が飛び散った。
「くっ、まだまだっ！」
それでも、アベルが折れることはない。
自分が背にかばっているものがなんなのか、彼にはよくわかっていた。
こんなところで、彼女を失うわけにはいかない。
諦めるわけにはいかない！
胸に抱く信念は、固く、決して折れることはなく……、けれど……。
パキィイインっと、なにかが砕けるような不吉な音が聞こえた。
直後、アベルは、慌て気味に敵と距離をとる。そうして、自らの剣に目を向けて……、忌々しげに顔を歪めた。
「そのような剣で、我の相手をしようとは、愚かな……」
低く、嘲るような声で覆面の男が言った。

アベルが持っていた剣……、それは、訓練用の刃引きがされたものだった。強度的にも実戦に耐えうるものではなかったのだ。
セントノエル島において、武器の類には、極めて厳重な管理がなされている。取り出すための許可を得るには時間がかかるのだ。
だが、その時間はなかった。それでは間に合わなかったのだ。
リオラからミーアの異変を聞かされたアベルは、訓練用の剣を片手に、唯一、荒嵐に追いつける馬、花陽を連れて、救出に駆け付けたのだ。
拙速に拙速を極めたがゆえに、リオラもアベルも間に合い……、けれど、拙速であったがゆえに、狼使いを退けるには至らない。
未来を閉ざす固い扉は未だ開くことはなく……。それをこじ開けるにはもう一つの運命の糸を頼る必要があった。
もう一つの運命の糸――銀貨二枚分の忠誠は、この決戦の荒野に、セントノエル学園における最強の戦力を召喚するに至る。
それは……。
「アベルっ！　受け取れ！」
唐突に声が響いた。同時に、覆面の男から放たれた横薙ぎの斬撃。
アベルは真上に飛び上がることで、それを躱し、空中で思い切り手を伸ばした。
まるで吸い寄せられるように、その手に、一本の剣が収まる。
「恩に着るよ、シオン」
言いつつ、アベルは空中で抜刀する。
月明りを受けて黒く光るそれは、鍛え抜かれた鋼。
幾戦の敵を退けるために打ち出された戦刀（いくさたな）だ。
両手持ちにした剣を、アベルは全力で振り下ろした。
ガィンッと鈍い金属の音。
強力無比な一撃を剣で受けた男は、小さく呻いて後ろに下がる。
「腕が痺れたんじゃないか？　彼の一撃は重たいからな」
ゆっくりと歩み寄ってきたのは、涼しい笑みを浮かべる少年だった。

シオン・ソール・サンクランド。剣の天才は、静かに、優雅に、剣を抜き放つ。
それから、ふと、荒嵐のそばにいるミーアの姿を見る。それは酷い姿だった。
ぐっしょりと濡れた服、頬や髪には、黒々と泥が付着していた。
「我が仲間に無礼を働いた報いを受ける覚悟は……、できているのだろうな」
その瞳に、静かな怒りを燃やして、シオンは言った。
……ちなみに、ミーアがボロボロなのは、もちろん馬から落ちたこともあるのだが……、それ以上に、荒嵐にくしゃみをぶっかけられて、転んで、泥だらけになってしまったことが大きかったわけだが……。
そんなことは知る由もないシオンなのであった。

第七十八話　苦労人キースウッド氏、無茶ぶりされる！

――なかなかに、危ないところだったな。

シオンと共に駆け付けたキースウッドは、辺りの様子を眺めつつ思う。

身を寄せるミーアとベル。それを守るようにしてたたずむ二頭の馬。

そしてその周りを、敵の手の者だろうか、二匹のオオカミが隙を窺うようにして回っている。

――間一髪、間に合ったというところか。やれやれ……。

先ほどまでの綱渡りのような状況を思い出し、キースウッドは思わず安堵のため息をこぼした。

シオンの意向を受け、学園内の見回りをしていた彼は、学園の裏門近くで、血まみれのリンシャを見つける。

医務室に運び込まれる間際、彼女は、シュトリナとバルバラによって、ベルが誘拐されたことを伝えて、そのまま意識を失ってしまった。

危急の事態に、急ぎそのことをシオンに教え、ミーアたちのことを探すと、その関係者のほとんどが行方不明になっているという状況。しかも、ミーアの部屋には脅迫状が放り捨ててあるという有様である。

シオンのもとに戻り、すでに剣を用意していた彼と合流。すぐさま島を出る。

元より、リンシャの話から、かなりの緊急事態が起きていることはわかっていた。それゆえに、彼らの行動は、誰よりも迷いのないものとなった。

それでもなおギリギリであったことに、キースウッドは背中が寒くなる。

――ミーア姫殿下を失うというのは、計り知れない損失だ。間に合って良かった。
などと、思っていると……。
「キースウッド、オオカミは任せる。できれば排除して脱出路を開いてくれ」
シオンの命令に、キースウッドは思わず苦笑を浮かべた。
「うわー……、いつも通りのムチャぶりとはいえ……、このレベルはちょっとなかったかなぁ」
思わずぼやく。
なにしろ、敵は巨大なオオカミ二匹である。普通の者であれば怖気づいてしまうところだが……。
――もっとも、あちらはあちらで大変そうだしな。ここは俺が踏ん張るしかない、か。
キースウッドは、先ほどアベルの渾身の一撃が止められるのを冷静に見ていた。
アベルの一撃は、キースウッドでも侮りがたい威力を持っている。正面からまともに受ければ、刃がへし折れるだろうし、腕にダメージが残るはずだ。というか、そもそも反応できたこと自体が離れ業である。
にもかかわらず、それを易々と受け切った辺り、敵の実力は決して低くはない。
――シオン殿下も、あの覆面を倒すのは難しいと踏んだんだろうな。やれやれ……、仕方ない。早いところオオカミを排除して、脱出路を開くとするか。
オオカミと言えど、しょせんはただの獣。あちらの手練れを倒すよりは幾分かマシだろう、などと、思いつつ剣を抜いたところで……。
「うおっ！」
唐突に、噛みついてきたオオカミに、慌てて身を躱(かわ)す。と、キースウッドの動きを読んでいたかのように、避けた先に大口を開けた

オオカミがっ！
「くっ！」
避けきれない、という刹那の判断。キースウッドは回避も防御も捨てる。
狙うは首筋、真下から喉を貫く構え。
――噛まれた瞬間に、突き殺せば、ダメージは最小限のはず。この攻防でまず一匹仕留められるのは大きい。
半分捨て身の攻撃は、けれど、実現することはなかった。
オオカミはキースウッドの目を見て、直後、立ち止まって後方へと下がったのだ。
「なっ！？」
思わず、驚愕の声をあげてしまうキースウッド。
着地したオオカミがさらに、後方に、二度、三度と飛び退る。
その地面にザク、ザクと、矢が刺さっていく。
加えて、もう一匹の方にも派手に燃え盛る火矢が飛んでいくが、オオカミはそれを恐れるでもなく、冷静に、命中弾だけを避けていく。
――味方に射手がいるのか。それは助かるが……、しかし……。
矢の応酬にも怯むことなく、オオカミはキースウッドに注意を向けていた。その時点で、キースウッドは理解する。
――難なく矢を避けるのみならず、こちらの捨て身の意図を察して、下がった。ただのオオカミじゃない。相当、戦い方を仕込まれているな……。なるほど、それで、馬を襲わずにいたのか……。
その振る舞いは、まるで戦士のようだった。
剣を持った人間との戦い方を熟知しているかのような、その動き……。キースウッドは、認識を改めざるを得なかった。
すなわち、自分が相手にしているのは、ただの巨大なオオカミではない。
オオカミのごとき俊敏で、力も強い戦士である、と。
――これを退けるは、至難か……。それならば……。

身構えつつも、キースウッドはシオンに言った。
「シオン殿下、このオオカミ、ただのオオカミじゃないみたいなんで、倒し切るのは少し厳しそうです。時間稼ぎに切り替えてもいいでしょうか？」
「……そうか。わかった。確かに無理に脱出を図る必要はないな。では、一時、時を稼ぐとしようか」
シオンの返事を聞いて、キースウッドは内心で笑う。
――伝わってなによりだ、殿下。さて、あとは……上手く引っかかってくれればいいんだがな……。
っと、そこで、グルル、という唸り声が聞こえた。
「おっと、待たせてすまないな」
改めて、オオカミと向き直り、キースウッドは肩をすくめた。
「しかし、時間稼ぎだけでも命懸けだな……。やれやれ、ああ、お腹が痛くなってきた……」

彼らのやり取りを見て、歓声を上げたのは、ベルだった。
「ミーアお姉さま！　天秤王が助けにきてくれました！　すごいすごい！」
憧れのシオン・ソール・サンクランドが助けにきてくれたのだ。否応なしにテンションも上がるというものである。
「それに、アベルお祖父さまも！」
忘れずに、お祖父ちゃんの方にもフォローを入れるミーハーベル！
……アベルお祖父ちゃんは、泣いていい。
ともあれ、援軍の到来に、ベルは一気に元気になった。
「これなら……もしかしたら……」
シュトリナを助けに行けるかもしれない……、と、そう思ったからだ。
……ちなみに、ミーアとは違い、ベルの方は落馬で少しだけ泥がついているだけで、割と普通の格好をしていたりする。
荒嵐が、鼻をむぐむぐさせているのを見て、さっさか離れてい

たために、難を逃れたのだ。
ちゃっかり者のベルである。
「いけー！　天秤王！　ほら、ミーアお姉さまもご一緒に！」
拳を突き上げて応援する孫娘のキラキラ輝く姿を見て、
「がんばれー……お二人とも、ファイトですわよー……」
泥かぶり姫のミーアは、感情のこもらない声を上げるのだった。

第七十九話　ギリギリ満足できる終わり方

――う、うう、なぜ、こんなことに……。

毎度のこととはいえ、荒嵐のくしゃみをぶっかけられると、微妙にへこむミーアである。

――ま、まぁ、でも、荒嵐には助けられましたし……文句は言えませんわね。それに、よくよく考えたら……、アベルが助けに来てくれたんですもの。しっかりと応援しなければなりませんわね……。

ミーアは、傍らで拳を振り上げて応援するベルを見ながら、思う。

――でも……、できればまともな格好で応援したかったですわ……。うう、お姫さまを助けに来てくれた王子さまなんて、ものすごく盛り上がるシーンですのに……。うう、ぐしょぐしょですわ……。

などと、考えつつも、ミーアは気を取り直した。

――いいえ、いけませんわ。それでも、わたくしがこの場のヒロインであることには変わりはないはず。やはり、ここは、しゃんとしなければなりませんわ！

ミーアは、パンパン、っと頬を叩いてから、声を張り上げた。

「頑張ってくださいましー、お二人ともー！」

そんな……ミーアのヒロインっぽいような、そうでもないような応援を背に、アベルが仕掛ける。

「はぁあっ！」

得意の上段からの振り下ろし。一つ覚えの攻撃に、覆面の男は呆れた様子を見せる。

「愚か……」

つぶやきつつ、真横に身を避けようとする。

そう、どれほど威力があろうとも、幾度も太刀筋を見せられれば、対応することは容易い。相手が一流の戦士であれば、なおのことだ。

そして、そんなことはアベルにだってわかっている。にもかかわらず、それを放った理由は明らかだった。
それが、必殺の一撃になりうると知っていたからだ。
「愚か……か。それは、どちらかな？」
アベルは笑った。敵の油断を。
次の瞬間、覆面の男は目を見開いた。
「むっ……」
放たれた一撃、それは、明らかに先ほどよりも速く、強かった。
男の覆面の端が、切り裂かれて宙を舞う。
先ほどまでとは比べ物にならない、ありえざる威力。それは捨て身の一撃だった。
躱された後のことを一切考えぬ、全力全開の一撃だ。
避けられ、反撃を受ければ、当然アベルに対処する術はなく……。
ゆえに、おいそれと繰り出せるはずのない、強力な攻撃だったのだ。
にもかかわらず……、アベルはそれを放った。その理由は……、
「少し不用意じゃないか、アベル」
生まれた隙を潰すように、シオンが踏み込む。
その眼前、カウンターを狙っていたであろう覆面の男が、舌打ちを残して後退する。
それを見て、アベルはわずかに微笑んだ。
「君がいるからね……。シオン。全力でやらせてもらうさ」
その言葉には、仮に自分が隙を晒したとしても、シオンがフォローしてくれるだろうという信頼とは別に、もう一つ意味があった。
それは、もし仮に自分が倒れたとしても、シオンがいるから、ということ。
先ほどまでは、アベルが倒れることは、ミーアの死に直結する事態だった。けれど、今は違う。それならば、ここは無理をしてでも、後々、ミーアを危険に晒す可能性がある敵を倒しておこうと……、アベルはそう考えたのだ。
そんなアベルにシオンは、

「アベル……。もしも、自分の命を犠牲にしてでも敵を倒そう、などと考えているのだったら……、下がっていろ」
厳しい顔で言った。
「……あら？　変ですわね……」
協力して戦う二人の王子。
彼らが自分のために、命がけで戦ってくれているという事実に……、ミーアは、ちょっぴり悦に浸っていた。
――うふふ、なんかちょっと気持ちいいですわ……。
真剣な顔で戦うアベル。それだけでなく、あのシオンまでもが、自分のために戦ってくれているのである。
気分はすっかり、恋物語（ロマンス）のヒロインだ。
……命の危険が若干遠ざかったことにより、ミーアは、いつも通りの自分を取り戻しつつあった。端的に言って……、ちょっぴり調子に乗っていた。
けれど、そんないい気分も、長続きはしなかった。
「おかしいですわ……」
ふと違和感に気づき、ミーアは首を傾げる。そんな彼女の目の前では……、
「少し不用意じゃないか？　アベル」
「君がいるからね。シオン」
そんな麗しい友情の光景が展開されていた。
実に美しい王子同士の友情。それをぼんやり見つつ……、ミーアは思う。
――あら？　わたくし、この場面の主人公だったんじゃなかったかしら……？
彼ら二人は自分のために戦ってくれているはず……。にもかかわらず、なぜだろう、この胸にうずく、微妙な疎外感は……。
先ほどまで、お姫さまである自分を、運命の王子二人が助けに来てくれるという、情熱的なシーンだったはずが……、今、目の前で

展開されているのは熱い友情の物語だ。
ミーアの居場所なんか、どこにもなかった！
――そっ、そう言えば、前もこんなことがあったような……。ああ、そうでしたわ！　確か、あのサンドイッチを作った時ですわ！
ミーアの脳裏に、置いてけぼりにされた時の記憶が甦る。
これは、頑張ってもう一度、ヒロインの座に返り咲く必要がありますわ！　などと思いかけたミーアは、ふと自らの格好を思い出した。
荒嵐のくしゃみと、泥で、ボロボロに汚れた格好を……。
――ああ、ですわよね……。やっぱり、さすがに、こんな格好じゃあ、ヒロインとは呼べませんわ……。
ミーアは、自分の体を見下ろして、ものすごーく悲しげな顔をした。

「アベル……。もしも、自分の命を犠牲にしてでも敵を倒そう、などと考えているのだったら……、下がっていろ」
言って、シオンは敵の刃を押さえ込む。
鍔迫り合い状態に持ち込み、一気に、アベルから敵を遠ざけた。
「どういう意味だい？　それは……」
言いつつ、アベルは剣を構え直す。いつでも攻撃に参加できる構え。けれど、シオンはそれをさせない。
「目的を間違えるな。俺たちが今すべきことは、目の前の敵を倒すことじゃない。全員が生きて、セントノエルに帰還することだ」
「しかし、こいつは……」
「見てみろ、ミーアの顔を……」
言われて、アベルは初めて気が付く。
つい先ほどまで、応援の声を上げていたミーアが、静かになっていること。
うつむいて、今にも泣きだしそうなほどに、悲しそうな顔をしていることに……。

「彼女がなにに悲しんでいるかわかるか？　お前が自分の命を軽く見たことだ！」
その指摘は、アベルの胸に深く突き刺さる。
状況を利するために、誰かの命を犠牲にする……。ミーアは決してそんなことをする人間ではなかった。むしろ、彼女は、命が無駄に使われることを、なにより嫌う人間なのだ。
「ミーアがなにを喜ぶか、よくよく考えることだ。もし、自分の戦いが、彼女を悲しませるものでないと思ったら、共に轡を並べてくれ」
言うが早いか、シオンは覆面の男から離れる。かと思いきや、即座に攻撃に転ずる。
その意表を突く動き、踏み込みの鋭さに、覆面の男は一瞬怯むも、即座に反撃。
鋼が互いに削りあう音が、月夜に響いた。
――そうか……。ボクは、危うく、ミーアを悲しませるところだったのか……。
アベルはミーアの方に目をやった。すると、ミーアが少しだけ嬉しそうに微笑みを浮かべるのが見えた。
――怒りに囚われて、周りが見えなくなっていたな……。シオンには感謝しなければ、ね。
大きく息を吐き、アベルは声を上げる。
「アベル・レムノ、参る！」
……ちなみに、言うまでもないことながら、ミーアは斬撃マイスター……ではない。アベルがどんな気持ちで戦っているかなんか、わかるわけがない。そもそも、アベルの斬撃自体、見えてないことも多いのだが……。
そのことにツッコミを入れる者はこの場にはいなかった。
アベルとシオンの連携は、見事なものだった。
剣術の鍛練を共に行う者同士、互いの動きはよくわかっている。

けれど、それ以上に二人の剣は相性が良かった。
アベルの剣は豪胆で一本気。
その威力は侮りがたいものがあれど、融通の利かないところがある。
相手に合わせるつもりなどなく、ただ、その威力をもって、相手の戦術ごと打ち砕く。そんな単純な剣術だ。
それゆえに、敵に読まれやすいのは否定できないところではあるが……、けれど、それは、味方にとっても同じこと。
そして、剣の天才、シオン・ソール・サンクランドの剣は変幻自在。アベルの剣を補うように動くことなど、造作もないことだった。
一撃必殺のアベルが突き崩し、生まれた隙をシオンが突く。
その連撃は苛烈で、強力なものだった。
「むっ……」
狼使いも、それを認めないわけにはいかなかった。
無論、攻撃が当てられないわけではなかった。
狼使いと二人の王子との間には、それほどの実力差があった。二度、三度、刃を合わせるたび、狼使いの斬撃は、王子たちに傷を与えつつある。
……けれど、満身創痍ながらも、二人の王子の連携は崩れることはなかった。
このまま続ければ、二人を殺すことはできるだろうが、それには時間がかかる。
本当であれば、オオカミたちを呼び戻したいところだったが、肝心の二匹のオオカミたちは、シオンの従者の青年に足止めを受けていた。
「……潮時、か」
狼使いは、夜空を見上げる。
満天の星空に、夜明けの気配を嗅ぎ取った彼は、小さく舌打ちする。激戦の最中にあっても、彼は、先ほどのシオンと従者との会話を、しっかりと聞いていたのだ。

――時間稼ぎ、ということは、追手がかかっているのだろうな……。
それも当然のこと。なにしろ、帝国皇女への暗殺を企てたのだ。厳しい追手が差し向けられることは、想像に難くない。
であれば、ここで時間をかけ、捕まるわけにもいかない。
「……引くぞ」
オオカミたちに声をかける。と、それを聞いたアベルが、再び、斬撃を放ってくる。
ガイン、と、金属が軋む音を立てて、剣と剣が鍔迫り合う。
「おめおめと逃がすとでも？」
刃越しに問うてくるアベルを狼使いは鼻で笑った。
「……止めてみるか？　レムノ王国の第二王子。別に構わないが、その時は腕の一本は覚悟してもらおう」
その腹を思い切り蹴りつけ、距離を稼いでから、狼使いは踵を返した。
そのそばに、どこから現れたのか、彼の愛馬が身を寄せてくる。流れるようにその背に飛び乗った彼に、追撃をかけてくる者はいなかった。

追撃をかけなかった……というより、できなかった、という方が正しいだろうか。
アベルとシオンは、狼使いが騎乗し、去っていくのを見送ったところで、その場に座り込んでしまった。
「やれやれ……ようやく引いてくれたか……いてて……」
男が去っていったことで、シオンは一息吐いた。その拍子に傷が痛んだのか、軽く顔をしかめている。
「強敵だったな……。ディオン殿といい勝負なんじゃないかな？ ああ、ちなみに、援軍は本当に呼んでるのかい？」
同じように、傷に顔をしかめつつ、アベルが尋ねる。答えは半ば予想していたが……。

「当然、ブラフだ。そんな時間はなかったからな……。これから、セントノエルに戻って、すぐに追跡隊を組織しなくちゃならないな」
シオンは肩をすくめて言った。
「お二人とも、大丈夫ですの！？」
と、その時だ。
ミーアが遠くから走ってくるのが見えた。その後ろには、誘拐されたはずのベルと馬に乗ったアンヌとティオーナ、さらに、弓を背負って走ってくるリオラの姿もあった。
そんな少女たちを見ながら、二人は苦笑を浮かべる。
「ボロボロで、なに笑ってんですか、シオン殿下」
すぐそばで、同じく傷だらけのキースウッドが呆れ顔で言った。狼の牙でつけられたものか、その服はところどころ切り裂かれ、血が滲んでいる。酷いありさまだった。
でも……。
「いや、なに。これなら、我らが姫君に、ギリギリ満足いただける終わり方なんじゃないか、と思ってな。なぁ、アベル」
そうして、二人の王子たちは無邪気に笑うのだった。

第八十話　バルバラ、ミーアの狙いを看破する！（……看破する？）

狼使いが戻ってきたのは、空が白み始めた頃だった。
「失敗した。逃げられた」
帰還して早々、端的にそう報告する狼使いに、バルバラは深々とため息を吐いた。
「ああ、やれやれ……。やはり、そうなりましたか……」
それから、バルバラは、所在なげに立っていたシュトリナに歩み寄ると、その幼い頬を張った。
「あっ……」
パンッと乾いた音、バランスを崩し、倒れそうになったシュトリナの腕を掴んで、バルバラは引き寄せる。
「忌々しい……半端者が……」
さらにもう一度、頬を打とうとして……。
「あまり、のんびりとはしていられない。追手がかけられている」
「……追手？　それはかけられるでしょうが……。もしや、それは誰かが口に出しておりましたか？」
「いや……、時間稼ぎと言っていたのでな……」
「時間稼ぎ……。やつらがそう口に出していたというのならば、誘導の可能性が高い……。戦闘にしか能のない者の、愚かな判断ですね」
吐き捨てるように言って、バルバラはシュトリナの肩を押した。
その勢いでシュトリナは、こてんっとその場に尻もちをついてしまう。その、叩かれた方の頬は、痛々しく、赤い色に染まっていた。
「まったく、愚劣なことをしたものですね、シュトリナお嬢さま」
嘲るように見下ろすバルバラに、けれど、シュトリナは答えなかった。
「そう……。良かった……、ベルちゃん、無事に逃げられたんだ…

…」
ただ、小さな声でつぶやくのみだった。
「ああ、本当に愚劣……。お嬢さま、まんまと帝国の叡智の言に乗せられましたね」
「ほう、どういうことだ？」
口を挟んだのは、狼使いだった。そんな彼に、バルバラは呆れた様子で答える。
「わかりませんか？　皇女ミーアは……、お嬢さまの良心にプレッシャーをかけたのですよ」
「良心にプレッシャー？」
「ええ、そう。先ほど、皇女は言ったでしょう？　お嬢さまのことを信じると。けれど、この状況で、自分を罠にはめた者を誰が信じるものですか？　あれは、皇女の戦略。あの者は、無条件の信頼を与えることで、お嬢さまが良心の呵責に耐えられないようにしたのです。心の弱さを見抜いたのですよ、この無能者の……」
「違うわ……、バルバラ。あの方は、リーナを信じてくれた……。純粋に、リーナのことを、んぅっ！」
バルバラは、シュトリナの頬をぐっと鷲掴みにして、顔を近づけた。
なされるがままのシュトリナをじっとりと睨み付け、バルバラはため息を吐いた。
「やれやれ……どこかで、見切りをつけるべきでした。せっかく、私が蛇として鍛えて差し上げたのに。本物の蛇であれば、あのようなものは無視して当然。けれど、このお嬢さまのような半端者だと、影響を受けてしまうのでしょうね……嘆かわしい。嘆かわしい。ああ……そうか」
と、そこで、バルバラは、なにか思いついたかのように笑みを浮かべた。
「もしかすると、先ほどの煙……、やり方を教えてくれたのは、ミーア姫殿下ではありませんか？」

「……」
黙っているシュトリナを見て、バルバラは、やれやれと首を振った。
「ということは……、かの帝国の叡智は、自らを逃がしたという功績をもって此度のお嬢さまの罪を許し……、その恩をもってイエロームーン公爵家を自らの手中に収めようとしたのでしょう。お嬢さま同様、イエロームーン公爵も煮え切らない半端者。ミーア姫殿下の口車に簡単に乗せられてしまうでしょうね」
バルバラの言葉に、狼使いは目を細める。
「それで、その娘をどうするつもりだ？　殺してオオカミに食わせるか？　見せしめに死体を晒しても良いが……。どちらにしろ、裏切り者には死を与えねばなるまい」
剣に手をかける狼使いだったが、バルバラはゆっくりと首を振った。
「戦（いくさ）にしか能のないあなたではわからないでしょうけれど……、それは、あまり良い手ではありませんね」
「なぜだ？　見せしめに殺すのがよかろう。かの者たちに、衝撃を与えることができるだろうに……」
「あなた、先ほどのミーア姫の言葉を聞いておりましたか？　自分が死んでも、終わらない、そのようなことを言っていたのを……」
狼使いは、小さく首を傾げて、
「確かに言っていたが……あれは、ただの負け惜しみではないか？」
その問いかけに、バルバラは首を振る。
「まったく愚かな判断です。そんなわけがないでしょう？　ティアムーン帝国の革命の芽を摘み、レムノ王国の革命をも阻止した、かの帝国の叡智がそのようなことをするはずがありません」
自信満々に断言するバルバラ。
「では、どういう意味があったと？」
「賢き者は、死の使い方を知っているもの。そして、王の中には、時に、自らの死すらも、計略の内に含めてしまう者がいるのです。

恐らく、かの帝国の叡智は、自分が死を免れないと知って、それをも利用してなにかを為そうとしていたのでしょう。最も簡単に考えられるのは、自分を旗印として仲間の結束を強める、あるいは、反混沌の蛇への攻勢を強めることでしょうが……。いずれにせよ、皇女ミーアは、自分が死んでも、自分の意志は死なないと確信していたのです」

得意げに語ってから、バルバラはシュトリナの、か細い首に手をかけた。

「んっ、ぅ……」

その爪が幼い肌に食い込み、シュトリナはわずかばかり、顔を歪ませた。

「そして、自身の死さえ利用しようという者が、他者の死を使わないはずがない。このお嬢さまの死だとて、きっと有効に使うことでしょう……わかりませんか？　我々の手で殺してしまえば、その復讐心を利用されるのです」

バルバラは、シュトリナに顔を寄せて、まっすぐにその瞳を見つめた。

「イエロームーン公爵は、この娘を大層可愛がっておりますから、殺せば復讐心は相当のものになりましょう。帝国の叡智がそれを見逃すとも思いません。イエロームーン派を掌握するのに、これほど良い材料はございませんでしょう？」

「では、どうすると？　このまま連れていき、暗殺者として育てるとでも言うつもりか？」

怪訝そうな顔をする狼使いに、バルバラは呆れたようにため息を吐いた。

「無理でしょう。友人を殺すことすらできない者に暗殺者などとてもとても……。此度のように、肝心な時に仕損じるに決まっておりますよ」

そのまま、無造作にシュトリナを放してから、バルバラは言った。

「それでも、使いようによっては、まだ使えます。この娘を使い、

ミーア・ルーナ・ティアムーンとその仲間たちとの絆に、傷を穿つこともできましょう」
ニヤリと笑みを浮かべて、バルバラはシュトリナを見た。
「裏切り者には死を。それは当然のこととして、せいぜいその死を上手く使わなければなりません。まぁ、とりあえずは、追手がかかる前に逃れましょう。準備には時間をかけねばなりませんしね……」

けれど……、そのバルバラの思惑は早々に打ち砕かれることになる。
彼らの予想より遥かに早く、そして、極めて適切に手配されていた追手のために。
ヴェールガから北へ。サンクランド王国の辺境の地に逃れようとしていた彼らの前に、サンクランド王国の騎馬隊が立ちふさがった。
まるで彼らの逃走先を予想していたかのように配置されていた兵士に、彼らは追い詰められた。
実はそれは、セントノエルに戻ったミーアたちの手配によるものではなかった。
ミーアの右腕アンヌ……ではない方の腕……、すなわちミーアの左腕、ルードヴィッヒの手配によるものだった。
安全地帯への脱出を妨害されたバルバラは、楽しげに笑みを浮かべる。
「これで、我々を追い詰めたつもりですか……、ミーア・ルーナ・ティアムーン」
サンクランドの追手は優秀で、狼使い一人ならばともかく、足手まといの自分とシュトリナを連れていくことは不可能。そう判断したバルバラは、一つの決断をする。
「こうなった以上、仕方がない……か。かくなる上は……我が命を持ちて、蛇に仇なす者たちの絆に亀裂を生じさせて見せましょう」
こうして、狼使いと別れたバルバラとシュトリナが向かった先……。

それは、地の利があり、唯一脱出が可能であった場所。
イエロームーン公爵領だった。

バルバラは知らない。
その脱出が可能であった場所……その方向の包囲網が、あえて薄くしてあったということを……。
そして、ミーアは知らない。
自らの右腕だけでなく、左腕の方も、裏で非常に勤勉に仕事をしていたということを。

第八十一話　ミーア姫、至福（）のお風呂タイム

「ふー……」

セントノエル学園に戻ったミーアが最初にしたことは……もちろん、お風呂に入ることだった！

念のために言っておくと、別に、シュトリナのことを忘れたわけではない。追跡隊の依頼は、男子チームが担当している。ドロドロの格好を見た三人の紳士たちが、風呂にでも入って、ゆっくり休めと勧めてくれたのである。

まぁ、そもそもの話、部隊を編成したり、その指揮をとったりなどということは、ミーアにはできないわけで……、いても邪魔にしかならないわけで……。

そんなこんなでミーアとしては願ったり叶ったりだったので、後のことは彼らに任せて、さっさとお風呂に向かったのだ。

ちなみにベルも誘ったのだが、シュトリナのことが心配だからと、男子チームについて行ってしまった。今頃は、ラフィーナに相談に行っているころだろう。

ということで……、ミーアは一人でお風呂にやってきた。

浴場に入った途端、もわっと湯気が体を包み込む。

「ああ……、これは落ち着きますわ……あら？」

と、そこでミーアは気づく。

お風呂から漂う芳しき香り……、それは、

「姫君の紅頬（プリンセスローズ）の香り……ですわね。とてもいい香りですけれど……、はて？　どなたか、入浴薬を入れたのかしら？」

この時……、ミーアの頭は完全に油断していた。絶体絶命の危機を乗り切ったという気のゆるみが、ミーアの危機察知能力を完全に鈍らせていたのだ。

そう、ミーアは気づかなければいけなかったのだ。

姫君の紅頬、この花が植えられた花園のこと……。セントノエルの秘密の花園と、その主のことを……、今、その人に二人きりで会ってしまった場合、どんなことになるのかを……、ミーアは考えるべきだったのだ……。

けれど……、この時のミーアが思い出したのは別のことだった。

「入浴剤……、そういえば、以前、リーナさんが、持ってきてくれましたっけ……」

乗馬練習で疲れていた自分を気遣い、特製の入浴剤を用意してくれた、優しい少女のことをミーアは思う。

先ほどは、煙の出る入浴剤を使って絶体絶命の場面を助けてくれた。彼女には、恩義があるのだ。

「あれは……、バルバラさんが主犯、リーナさんが脅されて、でも、直前で裏切って助けてくれた……そういうことなのですわね」

ミーアはそう推理する。きっと、バルバラの行いを察知したシュトリナが、クロエから煙の出る入浴剤をもらっておいて、何かあった時のために準備していたのだ。

「彼女には恩義がありますわ。必ず、返さなければいけませんわ……。ベルのためにも助けなければなりませんわね」

孫娘の友だちは、なんとしても助けてあげたいところだった。

「頑張らねばなりませんわ……」

などとつぶやきつつ、ミーアは体を洗い始めた。

いつもであれば洗うのを手伝ってくれるアンヌが近くに控えているのだが、今は、部屋に着替えを取りに戻っているため、ミーアは一人きりだ。

しゃこしゃこ、と、泡立てた洗肌剤（ボディーソープ）を体に塗りたくっている時、ふいに、ミーアは気づく。

「……あら、妙ですわね……。二の腕が、少しフニフニしているような……」

先ほど、荒嵐が、敵の乗る馬にあっさりと追い付かれたことが脳裏を過ぎる。と同時に、ここしばらくの刹那的食生活が、頭の中を

通り過ぎていき……、
「……気のせいですわね、うん。わたくしがフニョッてるなんて、そんなこと、ありえませんわ。ありえないことですわ。とてもありえないことなのですわ！」
さして大切でもないことを三度もつぶやくミーアだったが……。
彼女は、気づくべきだったのだ……。
シュトリナとの思い出、荒嵐に乗っていた時のこと、刹那的食生活の記憶……その、次々と過去のことを思い出してしまうという現象がなんなのか……。
それは、あの、死ぬ直前に見てしまうというアレに、そっくりだということにミーアは気付かなければならなかったのだ。
すなわち……、ソレを見てしまうほど、自身に圧倒的な危機が迫っているということに……。
ふいに、がらがらがら……と浴場の扉が開く音がする。
ちょうどタイミングよく、髪につけた洗髪薬（シャンプー）を洗い流し終えたミーアは、ほふーっとため息を吐きつつ、そちらに目を向けた。
てっきり、アンヌが来たのだと思ったのだ……。完全な油断である。
予想に反して、ミーアの目に映った人物はアンヌではなかった。そこに立っていた意外な人物……、それは！
「あら、ミーアさん、ご機嫌よう……」
ニッコリと、穏やかな笑みを浮かべる少女……、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガだった！
「ああ、ラフィーナさま、ご機嫌よう」
しかしながら、その事実を目にしても、なお、ミーアは腑抜けていた。
――今まで儀式でお忙しかったんですのね。その後で、アベルたちが追跡隊の相談に行ったはずですし……、ヴェールガの公爵令嬢というのも大変ですわね……。
などと思いつつ、髪を洗い始めたラフィーナをしり目に、ミーア

は浴槽へと向かった。
入浴剤の素晴らしい香りに胸をワクワクときめかせながら、一気にお湯に体を沈める。
「おふぅ……」
微妙に、おっさん臭い息を吐きつつ、ミーアは浴槽の中でぐぐぅっと体を伸ばした。
――ああ……、すごく、気持ちいいですわ。硬くなった身体が解れて、なんとも言えない快感ですわ……。うふふ、やはりお風呂は最高ですわね！
たいそうご満悦なミーアに、不意に声がかけられる。
「どうかしら？　特別な入浴剤なのだけど、気に入っていただけたかしら？」
「ええ、素晴らしいですわ。これは、ラフィーナさまが？」
「そうよ。ふふ、それね、疲れてる時にはすごく効くのよ。体から疲れを取り去ってくれるの……」
その声を聞いた時……、なぜだろう？　ミーアの背筋に、急にゾクゾクという寒気が走った。
あっつーいお湯の中に浸かっているというのに……、なぜだろう。ぶるぶるっと震えてしまう。
――あら？　今のは……？
疑問に思う間もなく、ラフィーナの声が追いかけてくる。
「なんだか、今日は……ずいぶんお疲れみたいだから、特別に用意してもらったのよ……ミーアさん」
髪を洗い終えたのか、ラフィーナがゆっくりとミーアの方に顔を向けた。
「島の外で、いろいろと大変だったそうね……命がけの大冒険だったとか……」
そう言って……にっこぉりと笑みを浮かべるラフィーナに、ミーアは震え上がった。
――あ、あら？　も、もしかして……、ラフィーナさま、怒って

るんじゃ？
ミーアはようやく気付く。自身の絶対的に危機的状況……。
なんだか怒ってるラフィーナと、浴室で二人きりになってしまったという事実に！

第八十二話　蔓延する……味方にも

やがて……、体を洗い終わったラフィーナがゆらり、と立ち上がった。
ひた、ひた、と浴槽に歩み寄ってくるその姿は、さながら怒れる獅子のようだった！
――ひぃいいっ！　まっ、間違いありませんわ。ラフィーナさま、めちゃくちゃ怒ってますわ！
一気に、ミーアの脳みそが回転を始める。
一体なにゆえ、ラフィーナはこんなにも怒っているのか！？
刹那の思考、その後、ミーアははたと思い至る。
――そっ、そうでしたわ！　鍋パーティー！　ラフィーナさま、今日の鍋パーティーを楽しみにしておいででしたわ！
今夜、生徒会で企画されていた鍋パーティーのことを、ものすごく楽しげに話していたのをミーアは思い出した。
きっと、それがなくなってしまったから、ラフィーナは怒り心頭なのだろう……とミーアの推理は冴えわたる。
ぶっちゃけ、その責任は自分にはないんだけどなぁ、などと思わないでもなかったのだが、それはそれ……。
怒っている人間の前では、理屈を説いても無駄というものである。
――まぁ、鍋パーティーが潰れたのであれば、冷静さを失うほど怒っても仕方のないことですわ。あれは、とても美味しいものですし。ふむ、恐らくラフィーナさまはわたくしと同じ、隠れ食道楽なのですわ！
そうして、ミーアは、チラリとラフィーナの脇腹を盗み見た……！
「……っ！」
なんか、シュッとしていた！
――妙ですわ……。もしもラフィーナさまが食道楽（グルメ）であれば、わ

たくしと同じようにもっと……。
ミーアは、自らの脇腹をつまんでみてから、小さく首を振った。
世の理不尽を嘆くように、ほふぅと、ため息を一つ。それから思考を元に戻した。
――ああ、失敗いたしましたわ。わたくしは、こんなところでゆっくりお風呂になんか入っているべきではありませんでしたのに……。みなさんと一緒に、ラフィーナさまにお会いして、謝らなければいけなかったのですわ！
けれど、それも後の祭りというもの。しかも、この、二人きりの空間で顔を合わせてしまうという間の悪さである。
――いえ、違いますわ。間が悪いのではなく、待ち伏せを受けたのですわ。入浴剤を用意したと言ってましたし。つまり、わたくしは、ラフィーナさまの罠に、まんまと踏み込んでしまったと……ひっ！
その時、ちゃぽんっとお湯が揺れる音が聞こえた。
恐る恐るそちらに目を向けると、今まさに、ラフィーナが浴槽に体を沈めるところだった。
「ふぅ……。確かに、いい香り。なんだか落ち着くわね……心が」
小さく息を吐き、ぐぐぃっと体を伸ばすラフィーナ。
――そっ、それは、つまり、入浴剤で静めなければならないほど、ラフィーナさまの怒りが激しいということなのでは……。
ちゃぽちゃぽお湯を揺らしつつ、震え上がるミーアである。
「さ、さーて、では、わたくしは、そろそろ……」
そうして、ミーアは早々に逃げにかかる。後のことなどは知らない。ともかく、怒れるラフィーナと二人っきりという状態だけは避けなければ、という判断からである。が……、
「あら？　ミーアさん、まだ、いいじゃない？　もう少しゆっくり入りましょう？」
すぅっと伸びてきたラフィーナの手が、ミーアの手首をつかむ。
それから、ラフィーナはクスクス、笑いながら言った。

「お友だちと一緒に、楽しいお風呂なんだから、そんなに急ぐこともないんじゃないかしら？　それとも……」
っと、不意に、ラフィーナが体の向きを変える。真っ直ぐにミーアの方を向き、若干、上目遣い気味に、ミーアを見つめて……、
「それとも、ねぇ……ミーアさん、私は、ミーアさんのお友だちじゃなかったのかしら？」
そう尋ねてきたラフィーナは――、すでに笑っていなかった！
じっと見つめてくる瞳は……明らかに睨んでいる！
「い、いいえ、そ、そのようなことは、決してございませんわ。ラフィーナさまは大切なお友だちですわ」
慌ててミーアは浴槽に浸かりなおした。
だらーりだらりと背中から、いやぁな汗を垂らしながら……。
「そうなの？　てっきり私は、ミーアさんに見限られてしまったのかと思っていたのよ」
きょとん、と首を傾げるラフィーナに、ミーアは必死に主張する！
「そっ、そんなことといたしませんわ。ラフィーナさまは、わたくしの大切なお友だちですわ！」
「それなら……、どうして……、どうして、なにも言わずに、危険なところに行ってしまったの？」
その時、ミーアはふと気づいた。じっと見つめてくるラフィーナの瞳、その瞳が、薄っすらと潤んでいるということに……。
「え？　あの、ラフィーナ、さま……？」
「ミーアさんが言ったのよ？　一人でなんでも背負い込むなって……、それなのに……酷いわ。どれだけ心配したと思ってるの？」
そう言って、ラフィーナは声を震わせた。
……ミーアは混乱した！
一人で背負い込むな、なんて言ったかしら？　などと、思わず疑問に思ってしまう。
なにせ、上手くやってもらえるなら、全部、背負ってもらってサボっていたいミーアである。

けれど……、もちろん、そんなことは口に出したりはしない。
覚醒したミーアの危機察知感覚が告げている。ここは、余計なことを言ったらヤバい、と。
――と、とりあえず、話を合わせておくのが、よろしいですわね。心配していただいたのは事実のようですし……。
うんうん、と頷き、ミーアは口を開く。
「この度のこと、とても申し訳なく思っておりますわ。仕方のないこととはいえ……、ご心配をおかけして……」
そんなミーアをジッと見つめていたが……、やがて、小さく首を振った。
「わかっているわ。ミーアさんは悪くなかったって……。ベルさんを助けるために……、ミーアさんは一人で行かざるを得なかった。それはわかってるの……。でも、せめて、一言でも相談してほしかった……。ここ最近、あなたが悩んでいることはわかってた。それなのに、私はなにもできなかった。それが、私は悔しいの」
ラフィーナは、小さくため息を吐いて言った。
「ラフィーナさま……」
ミーアは、思わず感動してしまった。ラフィーナが自分のことをこんなにも心配してくれているのが嬉しかったから……。
「ベルさんにも少しだけど聞かせてもらったわ。不安だったでしょう？　自分に対して暗殺が企てられていることを知ってしまった時は……」
「ああ、そうですわ。わたくし、とても不安でしたわ……」
ここしばらくの悩みをわかってもらえた！　それがとても嬉しくて、ミーアの瞳がウルウル潤みだして……。けれど……、
「でも、誰にも言えなかったのよね。シュトリナさんを、取り戻すために」
「……ん？」
ちょっぴり雲行きが怪しくなってきたことに……、ミーアは気が付いた。

――取り戻すため？　はて……？　なんのことかしら？
首を傾げるミーアであったが、ラフィーナは止まらない。
「ここで、あの煙が出る入浴剤をばら撒くことで、シュトリナさんに機会を与えた。成功するかどうかじゃない。彼女に悔い改める機会だけでも与えようとした。それであえて、敵の暗殺計画に乗るような危険なことをしたのね？」
「……はぇ？」
なんのこっちゃ？　と首を傾げるミーアに、ラフィーナは寂しげな笑みを浮かべた。
「あなたの……、そのお人好しで、誰かを助けるためなら命を懸けようという姿勢はとても素敵だけど……、それでこそ私のお友だちだってわかってるけど……、でも、やっぱりなにも言わずに一人であなたを行かせてしまったことが悔しかった。相談されてもなにもできなかったと思うけど……それでも悔しかったの……」
そうして、ラフィーナは、そっと瞳を閉じて言った。
「だから……ね、これはただの愚痴なの。ごめんなさい、ミーアさん。あなたが無事で帰ってきてくれて、とても嬉しいわ」
「ラフィーナさま……」
ミーアは、そんなラフィーナを見て……、とりあえずホッとする。
――よかった！　ラフィーナさま、怒ってなかった！
「ミーアさん。私、頑張るわ。あなたの隣に並べるような、いつでも相談したくなるような、そんな人になれるように」
そうして、ラフィーナは笑みを浮かべた。
ミーアは……、なぜだろう、漠然とした不安が胸を過ぎった。
なんだか……、ものすごい誤解をされてるような……、自分に対する期待値がものすごいことになっているような、そんな気がするけれど、気のせいだろうか？
不安そうな顔をするミーアに、ラフィーナは大きく頷いて見せた。
「後のことは、私たちに任せて、今日はゆっくり休んでね。今、モニカさんが、動いてくれているから……、安心してちょうだい」

「え、ええ……では、お言葉に甘えさせていただきますわ」
ミーアは、そこで深く考えるのをやめた。
ともかく、危機は脱したのだ。
――まぁ、気にしても仕方がありませんわね。

お風呂から上がったミーアは、ポカポカの体のままベッドに入り、丸一日眠るのだった。
……寝すぎである。

キャラクター紹介3　ざっくりと……

○ミーアベル・ルーナ・ティアムーン（12）通称「ベル」
ミーアの孫娘。アンヌと妹のエリスによって育てられたミーアエリート。ミーアに対して絶大な尊敬の念を抱いている。ちゃっかり者。ミーアより一歳年下。
「ミーアお祖母さまは、素晴らしい方です！」

○サンテリ・バンドラー（60）
セントノエル島の警備主任。頑固な性格だったが……。

★ペルージャン農業国
○ラーニャ・タフリーフ・ペルージャン（15）
ペルージャン農業国の第三王女。ミーアのお友だち。ミーアにスイーツを献上し、FNYらせようと画策する悪女！　なお、順調にミーアは作戦にはまっている模様。

ミーアへの評価（前）「ミーア姫？　誰ですか……それ？　セントノエルに通ってた？　覚えてませんね。その方も私の名前なんて、覚えてないんじゃないですか？」

ミーアへの評価（後）「うふふ、今年の果物も良い出来ね。早速、ミーアさまにお持ちしないと！」

○アーシャ・タフリーフ・ペルージャン（19）
ペルージャン農業国の第二王女。植物学の習得。現在、ミーア学園の講師兼研究者として働いている。世界から飢餓をなくしたいと、寒さに強い小麦の研究中。

ミーアへの評価（前）「帝国の姫殿下が私のような卑賤な者になにか御用ですか？　食糧不足……あらあら、それは、うふふ、お可哀想に……」

ミーアへの評価（後）「世界から飢えた子どもをなくす……、その願いを思い出させてくれたあの方のために、しっかりと研究しよう」

★帝国四大公爵家

○サフィアス・エトワ・ブルームーン（１６）

帝国四大公爵家の一角、ブルームーン家の長男。こずるい性格だったが……。

許嫁がいて、ラブラブ。彼女にいいところを見せようと必死。意外にも料理ができる。

ミーアへの評価（前）「ミーア姫殿下？　んー、特に印象はないかな」

ミーアへの評価（後）「あの方のおかげで生徒会に入ることができた……。目をかけてくれたあの方のために、精一杯努めよう」

○ダリオ（１５）

サフィアスの従者の少年にして、サフィアスの婚約者の弟。脱力系男子。

○エメラルダ・エトワ・グリーンムーン（１６）

帝国四大公爵家の令嬢。ミーアのことが実は大好き。自称ミーアの親友な構ってちゃん。四大公爵家のお茶会「月光会」の発案者。発案した理由は……。

ミーアへの評価（前）「もちろん、ミーアさまは私の親友ですわ！」
ミーアへの評価（後）「私の大切な……、親友ですわ！」

○ニーナ（１８）
エメラルダの敏腕メイド。優秀だが、エメラルダお嬢さまに対して、ちょっぴり変わった見方をしている。イメージが大事！　いつも、エメラルダから、名前を呼んでもらえないが、だからこそいい！……らしい。

○シュトリナ・エトワ・イエロームーン（１２）
ミーアベルの親友。イエロームーン公爵家の令嬢。いつも可憐な笑みを浮かべているお人形さんのような愛らしい少女。
ミーアへの評価（前）「ミーア姫殿下？　殺した方がいいなら、殺すけれど……」
ミーアへの評価（後）「リーナのこと、信じてくれた。それに、ベルちゃんの大切な人だから……殺したくないな」

○ローレンツ・エトワ・イエロームーン（５４）
イエロームーン公爵。ぽっちゃり体形。植物に詳しい。昔はセントノエル学園に通っていた。

○ビセット（６４）
イエロームーン公爵家に仕える執事。ローレンツになにやら恩義を感じていそう……。
ちなみにこの名前、イエロームーンの執事以外にもどこかで見たような……。

○ルヴィ・エトワ・レッドムーン（16）
レッドムーン公爵家令嬢。軍務全般に詳しく、剣術、馬術ともに優秀。
元ディオン隊の副隊長、現皇女専属近衛部隊の隊長バノスに好意を抱いている。副長に就任して、ルンルン気分。

○バノス
元ディオン隊の副隊長にして、現在、皇女専属近衛部隊の隊長。巨漢。

★賢者ガルヴの一門

○ガルヴ　年齢不詳
ルードヴィッヒの師匠。放浪の賢者。フィールドワークが趣味。いろいろなことに興味を持ち、帝国各地を練り歩く。貴族や帝室のことは嫌っていたが……。

ミーアへの評価（前）「まったく、皇女だの貴族令嬢だのにはロクなやつがおらんな」
ミーアへの評価（後）「ミーア姫殿下こそ、真の叡智をお持ちの理想的な君主……。仕えるのに、これ以上のものなし……」

○バルタザル・ブラント
ルードヴィッヒの同門。伯爵家の出身。地方政治を担う赤月省の文官を務める。ミーアを女帝の地位につけるべく、ルードヴィッヒと共闘中。

ミーアへの評価（前）「ルードヴィッヒが仕えているというから、どれほどのものかと思ったが……。物好きだな、ルードヴィッヒも」

ミーアへの評価（後）「なるほど……。これほどのお方とは……。あの方に巡り会わせてくれたこと、ルードヴィッヒに感謝しなければならんな……」

○ジルベール・ブーケ　（ジル）
帝都の政務を担う青月省の役人。ルードヴィッヒの後輩。立ち回りが上手い世渡り上手。
「～っすね！」が口癖。

★蛇

○バルバラ（５５）
シュトリナの専属メイド。初老の女性。シュトリナの教育係でもある。王侯貴族に恨みがある様子……。ちょっぴり嗜虐的な性格。混沌の蛇の中では？？？の役割を果たす。

○狼使い→本名？？？？
混沌の蛇の凄腕の暗殺者。二匹のオオカミを相棒としている。剣術ではディオンに若干劣るものの、乗馬術及び、騎乗戦闘術においては、ディオンをもしのぐほどの実力を持つ。愛馬の名前は「影雷（えいらい）」。もちろん月兎馬。

★馬たち

○荒嵐（こうらん）
セントノエル学園の馬術クラブが飼育する月兎馬。荒々しい走りが得意。ミーアを見るとくしゃみを吹っかけて、からかおうとする。いいやつ。

○花陽（かよう）
同じく馬術クラブが飼育する月兎馬、雌。荒嵐と夫婦。女王の風格を持つ。

○夕兎（せきと）
レッドムーン家が飼育している最高の月兎馬。キザな性格。

キャラクター紹介3　ざっくりと……（後書き）

昔のことは忘れました……。

第八十三話　朝食会

「失礼します、ミーア姫殿下……」
遠くにノックの音、次いで自分を呼ぶ声を聞いて、ミーアはゆっくり目を覚ました。
「ん……ぅん？」
目をこすりこすりしつつ、辺りを見回す。
いつも通りの自身の部屋の光景に……、ミーアは違和感を覚えた。
――あら？　変ですわね……。いつもでしたら、アンヌが応対に出てくれますのに……。
そう思いつつ、体を起こしたところで、ミーアは見つけた。
自らのベッドの傍ら……、床に丸くなって眠るアンヌの姿を。
「まぁ……」
すやすや、と眠るアンヌに、ミーアはついつい微笑ましいものを感じる。
――昨夜は、助けに駆けつけてくれましたし……、きっと疲れたのですわね。
ちなみに、ミーアは勘違いしているが……、丸一日寝て、今は朝である。つまり、ミーアが襲われたのは、一昨日の深夜から昨日の明け方にかけてのことである。
失われた一日には、アンヌはもちろん、きちんと働いていたのだが……。
時空を飛び超える姫、ミーアは、そんなこと、知る由もないのである。
「それにしても……、いったいどうしたのかしら？」
いつもは、きちんとベッドで寝ているアンヌである。それなのに、こんな風にベッドの下の床で寝ているなんて……。
首を傾げるミーアだったが……、すぐに思い至る。

「もしかして……、また、わたくしが一人で、いなくなってしまうと思ったのかしら……」
だから着替えもせずに、こんな風にミーアの足元で寝ていたのではあるまいか……。
「ふむ……」
と、そこでミーアは考える。
基本的にミーアは、緊急の時のために、一人でなんでもできるようにしている。当然、ドレスに着替えるなどというのは、朝飯前なのだが……。
そして、いつもであればアンヌが疲れて寝ているのであれば、無理に起こしたりせずに、一人で着替えを済ませて、さっさと来客の応対に出てしまうところだが……。
――声をかけずに行ってしまったら、怒られてしまいそうですわね。
そう考え、アンヌの肩をゆする。
今日のところは気を利かせて、わがままを発揮することにしたミーアである。
そうして、寝ぼけ眼のアンヌに着替えを手伝ってもらったミーアは、ドアの前で待っていた人物を迎えた。
やってきたのは、ラフィーナの使いであるメイドのモニカだった。
「ラフィーナさまから、朝食会のお誘いです。もしもよろしければ……」
「あら……朝食会……」
ふと、ミーアはお腹をさする。
「ふむ……、ちょうどお腹が空いていたところですわ。でも、なんだか今朝はやけにお腹が空きますわね……」
くーっと、長き惰眠をむさぼったミーアに抗議するように、お腹の虫が鳴き声を上げた。
朝食会の会場は、セントノエル学園の秘密の花園だった。

「あら、来たわね、ミーアさん」
「ご機嫌よう、ラフィーナさま。お招きいただき、感謝いたしますわ」
ちょこん、とスカートの裾を持ち上げて、それから、ミーアは辺りを見回した。その場に集っていたのは、ミーアを助けに来てくれた面々、アベルとシオン、ティオーナにベル。それにキースウッドとリオラである。
それを見て、わずかばかりミーアは警戒する。
――このメンバーで、朝食会ということは、必然的に話す内容は決まっておりますわね。
などと思いはしたものの……、それも、食事が出てくるまでだった。
――ふむ、まぁ……なにはともあれ、腹ごしらえですわ。しかし、なぜでしょう、すごくお腹が空いてるんですのよね……。
早速、テーブルの上に並べられたパンに手を伸ばす。
温かなパンを真っ二つに割る。パリッと心地よい音、ふわりと湯気が立ち上り、香ばしい匂いが立ち上る。食欲を刺激する香りに、ミーアは思わず唾を飲み込む。
一口サイズにちぎったパンを口の中に放り込む、と、サクサクとした表面の内側、柔らかく焼けたパン生地が口の中に溶けていき……。
――ああ、良い腕ですわ。実にいい。さすがはセントノエル。ラフィーナさまの朝食会。パン一つで、これほどわたくしの心を感動させるとは……。
丸一日、なにも食べなかったため、普段より五倍は美味しく感じるミーアである。
それから、目の前にあった濃厚ハチミツジャムをパンにたっぷり塗りたくり始めるミーア。甘い甘ぁいパンを食べ、シャクシャクと新鮮なサラダを、さらに、とろりと濃厚な野菜と燻製肉のスープを一口。しめに甘いフルーツを口に入れたところで、ラフィーナが口

を開いた。
「さて……、それでは、本題に入りましょうか……。今日、みなさんに集まっていただいたのは、ほかでもない、聖夜祭の日の事件について、お話ししたかったから。モニカさん」
呼ばれて、モニカが一歩前に出る。
小さく頭を下げてから、彼女は言った。
「はじめに、リンシャさんですが、幸い、怪我は大したことなく。手当てをした翌日には普通に生活できるようになっています」
「あ、ボク、今朝お見舞いに行ってきました。元気そうで良かったです……」
ベルはにっこり笑みを浮かべて言ってから、小さくうつむいた。
「リンシャさんだけでも、無事で……良かった」
「ベル……」
そこでミーアは気が付いた。ベルの前に並べられた朝食が、一切手付かずのまま残されていることに……。
そっと自らのそばにあったハチミツの瓶を、ベルの前に差し出して、ミーアは言った。
「まだ、諦めるのは早いですわよ。リーナさんを助けられないと決まったわけではありませんわ。今は、食べて元気を出しなさい」
「ミーア、お姉さま……」
ベルは、ハッとした顔で、ミーアの方を見てから……。
「あの、すみません……。今朝、リンシャさんのところで、お見舞いのペルージャン産フルーツをたくさんいただいてきたので、ボク、お腹が一杯で……えへへ、ペルージャンベリーというものが、とても美味しかったです」
「……ベル」
ミーアは、目の前の孫娘との血のつながりをはっきりと認識してしまった。
――ふむ、やっぱり、朝は甘い食べ物ですわよね。

……どうやら、二人とも食欲の方には、なんの問題もなさそうだった。

第八十四話　ミーアパンデミック！～モニカ、恐ろしいことに気付く！～

「話を戻します。ミーア姫殿下に対し暗殺を謀った、シュトリナ・エトワ・イエロームーン、およびその従者バルバラと、オオカミを連れた暗殺者、その三名の足取りなのですが……、どうやら、サンクランド方面へと逃走を図ったようです。そこで、警戒に当たっていたサンクランドの騎兵隊と遭遇したとの情報が入っています」

「ほう。我が国にか……。しかし、警戒に当たっていたというのは、どういうことだ……」

怪訝そうな顔でつぶやくシオンに、モニカは小さく笑みを浮かべて見せた。

「実は、オオカミを連れた暗殺者についてですが、事前にルードヴィッヒ殿から連絡を受けていました」

――あら、ルードヴィッヒが？

と、そこで、ミーアは思い出す

――ああ　そう言えば、ルードヴィッヒから、報告を受けていたような……。帝国内で命を狙われたとかなんとか。

脳裏に、ルードヴィッヒの几帳面な文字が甦る。

確か、あの手紙には、オオカミを使う暗殺者のことも書いてあったはず……、などと今にして思うミーアである。

なにしろ、秋からのミーアは、聖夜祭の暗殺事件に気を取られていたため、細かなことにまで気を使ってはいられなかったのだ。

――ああ、失敗しましたわ。もし、敵がオオカミを使うと知っていたら、骨付き肉の一本も持っていきましたのに……。

ミーアの頭の中に、敵のオオカミを骨付き肉一つで翻弄する自身の姿が思い浮かんだ。

『ほら、いきますわよ！　ちゃんととってくるんですわよー！』

などと……、とても楽しい空想だった！

「さらに聖夜祭の前日、ルードヴィッヒ殿から緊急の連絡を受けたのです。そのオオカミを連れた暗殺者が、ヴェールガ公国を経由して、サンクランド王国の辺境地帯に向かう、と」
「ふむ……、そちらに関しては聞いておりませんわね。ルードヴィッヒには、イエロームーン公爵家と混沌の蛇とのかかわりを探らせておりましたから、その一環での行動であれば、特にわたくしがどうこう言うことでもありませんけれど……」
「そうでしたか。恐らく、緊急性の高いものだったからでしょう。我々に届いたものは、伝書鳥を用いた極めて簡易な文書でした。逃亡ルートと、兵の配置に関するもので……」
ティアムーン帝国とヴェールガ公国とは、そこまで離れてはいない。けれど、通常、ミーアがやるような、手紙を馬で運ばせるやり取りでは、数日単位で時間が必要になる。対して、伝書鳥などを用いた連絡であれば、短時間で情報のやり取りができるのだ。
だから、ミーアのところに報告が来ていないのも無理からぬこと……。そう、モニカは言いたいのだろう。
実際のところ、ミーアは、ルードヴィッヒの行動に制限をかけたことはない。
「良きイエスマンであれ」と自らに任じているミーアにとって、ルードヴィッヒは理想的な家臣である。意見を言うなど、とんでもない！　ミーアの返事は「イエス」か「いいね！」しかないのである。
――ああ、それにしても、いつも通り、ルードヴィッヒに任せておくと間違いがありませんわね。この安定感、さすがですわ。
ミーアは満足げな笑みを浮かべた。

――やっぱり、さすがね、ミーア姫殿下は……。
報告をしつつ、モニカは感心していた。
普通、頭のいい権力者であればあるほど、部下の行動をしっかりと把握しておきたいもの。ゆえに、部下の独断専行は嫌われるものなのだ。

にもかかわらず、ミーアの満足げな顔はどうだ。部下を信頼するのと同時に、もしも失敗があったとしても、自身が挽回できるという絶対の自信がなければできないことだ。
モニカは改めて、ミーアを見直しつつ、説明を続ける。
「ルードヴィッヒ殿からの連絡を受け、本国に連絡を取りました」
サンクランド王国の諜報機関「風鴉」は、レムノ王国での事件以来、表向きは活動していないことになっている。白鴉を切り離し、組織の再編の最中だということだが……、けれど、まぁ、それはそれ……。
必要最低限の者たちは当然動いているし、緊急の事態にも対処できるようになっていた。
モニカも、風鴉の者たちが受け取ってくれることを期待して、連絡を送ったのだが、動きは迅速だった。
詳しい事情を問うことなく、即応できる騎兵を動員してくれたのだ。
「ルードヴィッヒ殿の指示に従い待ち伏せをかけたのですが、作戦は成功。敵を罠にかけることができました」
「え？　それでは……！」
期待に満ちた目で、ベルが見つめてくる。けれど、モニカは小さく首を振った。
「残念ですが、捕縛には至っておりません。狼使いの方は包囲網をすり抜けて、どこかに姿をくらませ、イエロームーン公爵令嬢、および下手人のバルバラを乗せた馬車は、ヴェールガ方面に転進。その後、ティアムーン帝国、イエロームーン公爵領へと向かったようです」
「実家へ帰った、と……？　だが、そんな愚かなことをするだろうか？」
不思議そうな顔をするアベルに、モニカは笑みを浮かべた。
「ルードヴィッヒ殿の指示を元に誘導いたしました。完全な包囲を敷いてしまうと、かえって危険と、あえて、帝国への脱出路の包囲

を薄くしていました」
　モニカの言葉に、アベルは頷いた。
「そうか。確かに、あの男を死兵にしてしまうのは、避けたいところだな」
「はい。死兵、死を覚悟した兵は、恐ろしい力を発揮するもの……。その暗殺者が実力者であるならば、不用意に追い詰めるのは危険です。もっとも、警戒に当たっていた騎兵たちでは、追い詰めるまでいかなかったようですが……」
　それでも意味はあった。
　狼使い一人であれば、突破できる程度の包囲。それが、今回は功を奏したのだ。
　敵を分断し、その上で、取り戻したい人物……、シュトリナを手の届くところまで引き寄せることができたのだから。
　そこまで考えて……、モニカは恐ろしいことに気が付いた。
　――これ……、あの時と同じだ。レムノ王国の時と……。
　かつて、レムノ王国において、白鴉のグレアムのもとにいたモニカは、知っている。
　白鴉の企みの、そのことごとくを破壊し、いつの間にやら自分に都合の良い結果をかすめ取っていった、帝国の叡智のことを……。
　たとえば……、もしも、今回の暗殺未遂事件が起こらなかった場合、ルードヴィッヒの送ってきた指示は失敗だったことになる。帝国からやってきた暗殺者は、死兵になることなく、包囲網を楽々と突破して逃げたことだろう。
　けれど……、そうはならなかった。ミーアは望む結果を、きちんと手にしている。
　もしかして、ミーアは……、すべて計算していたのではないか……、とモニカは思わざるを得なかった。
　もちろん、冷静に考えれば、そんなことありえるはずがない。どうやれば、そんなことができるのか、モニカには見当もつかない。
　けれど、目の前にある事実を繋ぎ合わせれば……そうとしか思え

ないのもまた事実なのだ。
ここ最近、不安げにしていたミーア。その様子から、彼女は自身に対して暗殺計画が企てられていることを察知していた。
そして、共同浴場でのこと。シュトリナに、例の煙が出る入浴剤をさりげなく見せていたことから、彼女が容疑者に目星をつけていたこともわかる。また、容疑者がわかっていたにもかかわらず、彼らの計画を止めなかったのは、シュトリナのことを思ってのこと。
シュトリナに悔い改める機会を与え、取り戻さんと欲してのこと。
そして……、事実として、ミーアは帝国から遠くの地へと連れ去られようとしているシュトリナを帝国内の、手の届く位置にとどめた。
ミーアたちを助けるという、悔い改めの意思を確認したうえで、である。
『きっとミーアお姉さまは、リーナちゃんを助けるために行動していたに違いありません！』
自信満々に言っていたベルの言葉を、モニカは否定する気にはなれなかった。
――これが、すべて偶然と考えるのは、無理がある……。
それから、恐る恐るといった様子で、モニカはミーアの方を見た。
「……ミーア姫殿下、いったいどこまで、計算されていたのですか？」
その問いかけに、ミーアは答えることなく、ただ、ちょっぴり困ったような笑みを浮かべるのみだった。
――あとでラフィーナさまにも、お考えを聞いてみよう……。もしかしたら、私より、ミーアさまの行動を冷静に見られているかもしれないし。
……この後、ラフィーナに話を聞いたモニカはますます、ミーアに対しての畏怖を強固なものにしてしまうのだが……。
まぁ、どうでもいい話なのである。

第八十五話　ツッコミ無き世界

聖夜祭が終われば、セントノエル学園は冬休みに入る。
例年、ミーアは聖夜祭が終わって十日後に帝都へ帰還。その後、自身の生誕祭に出席するのが常となっていた。
けれど、今年は……、いつもより少しだけ早い帰還を果たすことになった。
やらなければならないことが……あったからだ。
セントノエルを出たミーア一行が向かったのは、帝都ルナティアではなく、ルドルフォン辺土伯領だった。
ヴェールガ公国の南部を通って帝国へと入るそのルートは、かつて帝国革命が起きた時に、サンクランドからの軍隊が侵攻したのと同じルートだった。そこから、隠密裏にイエロームーン公爵領を目指すのだ。
――自分が追い詰められた進軍ルートを逆に使ってやるというのは、痛快ですわね。
なにしろ、前の時間軸、ミーアたちをはめた混沌の蛇を、同じ進撃ルートを使って追い詰めてやろうというのだ。ミーアにとっては何とも気持ちのいい行軍だった。
もっとも、ミーアは軍事的なことはまるっきりわかっていないのだが……。
静海の森を迂回して一気に北上。さしたる問題もなく、馬車はイエロームーン公爵領の領都近くの村に到着した。
そこで、ルードヴィッヒ、並びに皇女専属近衛部隊と合流することになっているのだ。
村の入り口には、整列した皇女専属近衛隊と、ルードヴィッヒの姿があった。
「ミーアさま、ご無事のご帰還、心よりお喜びいたします」

馬車から降りると、ルードヴィッヒが片膝をついて出迎えてくれた。そのまま顔を上げようとしないルードヴィッヒに、ミーアは首を傾げる。
「ええ、今帰りましたけれど……、えーと、どうかなさいましたの？」
そう尋ねても、ルードヴィッヒはじっと下を向いたままだった。やがて、その口から重々しい言葉がこぼれる。
「この度の失態、申し開きもできません」
「はて……？　失態？」
「あの暗殺者がヴェールガを通るのを予測できておりながら、みすみすミーアさまを危険に晒すようなことに……」
肩を落とし、どこか消沈した様子のルードヴィッヒ……。それを見て、ミーアは瞳をまん丸くした。
――まぁ！　なんと！　あのルードヴィッヒが……、へこんでおりますわ！　珍しいこともあるものですわ。
思わず、マジマジと観察してしまう。
なにしろ前の時間軸で、さんざんお小言を聞かされてきたルードヴィッヒなのだ。しょんぼりしているのが、なんだか、新鮮に感じられてしまうミーアである。
――とはいえ、いつまでもこのままでいてもらっては困りますわ。これから先の大飢饉に、ルードヴィッヒの力はなくてはならないものなのですから……。
ミーアは、うむ、と一つ頷くと、ルードヴィッヒに優しく声をかけた。
「顔を上げてくださらないかしら、ルードヴィッヒ。別にあなたの責任ではございませんわ。不測の事態はいつだって起こるものですわ。こうして、わたくしは怪我一つせずに帰ってこられたのですから、問題ございませんわ」
「ですが……」
ミーアは、なお立ち上がろうとしないルードヴィッヒの腕を引い

て、優しく顔を上げさせる。
「残念ですけれど、四の五の言っている時間はございませんわ。早くリーナさんを救い出さなければ。馬車に乗って状況を教えてくださらないかしら？」
ルードヴィッヒはミーアの顔を見つめてから、小さく息を吐いた。
「挽回の機会を、こうして与えていただいたこと、感謝いたします」
再び頭を下げるルードヴィッヒに、ミーアは首を振った。
「挽回など無用なこと。さあ、急ぎますわよ」

馬車に乗り込んできたルードヴィッヒは、改めて乗っている者たちの顔を見た。
シオン王子とその従者のキースウッド、それにアベル王子とは面識がある。
それにもう一人……。
「お初にお目にかかります、ルードヴィッヒ・ヒューイット殿。お噂はミーア姫殿下より聞かせていただいています」
穏やかな笑みを浮かべるメイド……、モニカ・ブエンティアだった。
「はじめまして、モニカ嬢。此度のことでは、お世話になりました」
ルードヴィッヒも小さく笑みを浮かべて答える。
ひと通り馬車の中の者たちに挨拶をしてから、ルードヴィッヒは改めて表情を引き締める。
「さて、早速ですが、公爵令嬢シュトリナと、その従者のバルバラですが、すでに公爵邸に帰っています」
その言葉を聞いて、みなの顔に緊張が走った。
「ルードヴィッヒ殿、それは、未だに邸内にとどまっているということだろうか？」
アベルの問いかけに、無言で頷き、ルードヴィッヒは続ける。
「昨日、イエロームーン邸に到着したとの報告が入っています」
「罠を張って、我々を待っているということか……」

難しい顔をして、アベルが腕組みをした。
「てっきり、やぶれかぶれで挙兵でもするのかと思っていたが……」
バルバラがシュトリナを連れてイエロームーン公爵領に戻ってきた時点で、彼らにとれる選択肢は限られている。四大公爵家の一角、イエロームーン公爵の名を用いて大規模に挙兵して、帝国を内戦に追い込むこと、あるいは、一族郎党、どこか外国に落ちのび、姿をくらませること……。
「俺はむしろ、どこぞに姿を消すものだと思っていた。いかに四大公爵家と言えど、現状で帝国に反旗を翻したところで、何ができるとも思えないからな。大義名分もないのであれば、兵たちだとて納得はしないだろう。無益に兵をすり潰すよりは、身を隠し、再び謀略を練るほうが有意義ではないかと思っていたんだが……」
そこまで言って、シオンは黙り込んだ。
蛇は正体不明だからこそ、恐ろしい。どこに潜んでいるかわからないから恐ろしいわけだし、まとまっていないから、一人、二人を処理しても意味がないのも厄介なところだ。
けれど……、正体が割れてしまえば、その個人に関してはそれほどの脅威ではない。
それは、言うなれば害虫の大群のようなものだった。集団全部を駆逐することは難しいが、一匹一匹はそこまでの脅威ではないのだ。
「にもかかわらず、屋敷に引きこもって出てこないというところを見ると、いよいよ罠の可能性が高いが……」
実のところ、難しいのはミーアも同じことだった。
本来であれば、自身の命が狙われたことを父に伝え、帝国軍を動かしてもらえば、それですべて済むことではあるのだ。いかに罠を張っていようと、一軍をもって屋敷ごと攻撃を受ければひとたまりもない。
けれど、その場合、主導者のイエロームーン公爵家の一族は処刑され、バルバラもまた処刑を免れないだろう。それでは困るのだ。
――それでは、リーナさんを助けられない。

後ろの馬車に乗っているベルのことを思う。
ベルのためにも、シュトリナには、ぜひ無事でいてほしかった。
――それに、仮に軍を動かすとすれば、その動きに呼応して、イエロームーン公爵も挙兵するかもしれない。
そうなれば、もちろん勝利は変わらないだろうが、ミーア的には好ましくない未来が待っている。
公爵が死んで領地に混乱が起こったり、領民が死に、国土が戦火で焼かれれば、その分、後の戦いが厳しくなる。
後の戦い……すなわち、大飢饉との戦いである。
結局のところ、ミーアにとって、今回のことは前哨戦に過ぎないのだ。
大飢饉との戦いに、できるだけ有利な状況を整える、そのための一歩なのだ。
であるならば、少なくとも軍を大々的に動かすわけにはいかない。小規模な局地戦で済ませる必要があるのだ。
せいぜい、ミーアが自由に動かせるのは皇女専属近衛隊とディオンぐらいのもので……。
――まぁでも、ディオンさんがいれば、一軍を動かすも同じことですしね。あの方は、なんというか、ちょっとアレですし……。
などとミーアが遠い目をしていると……。
「ご安心ください。障害はすべてこちらで取り除きますので」
ルードヴィッヒが、静かな、けれど断固たる口調で言った。
「すでに、皇女専属近衛隊が、国内の蛇の構成員の捕縛のために動いています」
それを聞き、周囲の者たちは、みな一様に息を呑んだ。人々の間に隠れ潜む蛇をあぶりだすことがどれほど大変なことなのか……、わからぬ者は一人を除いていなかったためだ。
一体どうやったのか？　気にならぬ者もまたいなかった……一人を除いて。
そんな、全員の興味の視線を受けて、ミーア……、

「なるほど。それは心強いですわ」
まさかのスルー！　詳しく聞かず、ただ、労いの言葉のみをかける。
けれど、それに、口をさしはさむ者はいなかった。
詳しい手法を聞かれなかったことを、ルードヴィッヒは自身への信頼ととらえた。
ミーアが、ルードヴィッヒならできる！　と信頼して、こうせよと命じ、ルードヴィッヒはその信頼に応えるために、ただそれを為したというだけのこと。
ゆえに、あえて、ルードヴィッヒは細かく説明をすることはない。
あるいは、聞いていた者の中には、すでにミーアはすべてを把握しているのだと考えた者もいた。ルードヴィッヒには、すでにミーアからの綿密な指示が届いていた。だから、ミーアはあえて聞く必要がなかったのだ、と。
けれど、実際のところミーアは……、
――なぁんだ、案外、蛇を見つけるのは簡単みたいですわね。そう言えば、中央正教会の聖典を読み聞かせると姿を現すとか言ってましたし、ふふ、実はチョロイのかもしれませんわ。今度、わたくしもやってみようかしら？
などと、なんともナメ腐ったことを考えていたりしたのだが……。
それにツッコミを入れる者は、この場には一人もいなかった。

第八十五話　ツッコミ無き世界（後書き）

本日、コミックス発売です。

第八十六話　シュトリナの帰郷

時間は、少しだけ遡(さかのぼ)る。
シュトリナを連れたバルバラが、イエロームーン公爵邸へと辿り着いたのは夜も遅い時間だった。
中庭で思索にふけっていたローレンツは、突如の娘の帰還に、慌てて迎えに出た。
「一体、何があったんだい？　これは……」
館に入ってきたのはシュトリナとバルバラ、それに三人の男たちだった。
完全武装の男たちは、みな、特徴的な仮面で顔を覆っていた。目の部分に特徴的な蛇の模様の描かれた男たちに、彼は覚えがあった。
秩序の破壊者……混沌の蛇に心酔する者たち。そのためならば、命を懸けることさえ、いとわない者たち。
狼使いとは、また少し違った、暗く退廃的な空気をまとった男たちに、ローレンツは顔をしかめる。そんな者たちに囲まれる娘の姿を見て……、その表情は厳しさを増した。
悄然と立ち尽くすシュトリナ。その格好は、くたびれた制服姿だった。
強行軍だったからだろう、その体はわずかに薄汚れていたが……、大きな怪我はなさそうだった。にもかかわらず、ローレンツの目には、シュトリナが今にも擦り切れてしまいそうなほどに、ボロボロに見えた。
うつむき、顔を上げようともしない、その疲れ果てた姿を見て、思わず駆け寄ろうとするローレンツだったが……、直後に鼻先に剣を突き付けられて、立ちすくむ。
「なっ、なにを……」
「この娘は、愚かにも、我ら蛇を裏切ったのですよ、お館さま」

そうして、バルバラはシュトリナの背中を押した。抵抗することなく、まるで糸の切れた操り人形のように、シュトリナはその場にへたり込む。
「ほら、お嬢さま、お館さまに謝罪なさったらいかがですか？　お嬢さまの愚劣な行いのせいで、お館さまも大変に迷惑されていますよ？　どう責任を取るというのですか？」
その言葉に、シュトリナはピクリと肩を震わせた。それから、ローレンツの方を見上げる。
「申し訳ありません。リーナは……、くだらない友だちへの気持ちを優先してしまい、皇女ミーアを逃がすことに協力してしまいました」
ポロポロと、灰色の瞳から、涙が零れ落ちた。
「や、役立たずの娘で……申し訳ありません」
「リーナ……、立ちなさい。いったいなにが……」
っと、シュトリナの肩にぽんっと手を置いて、バルバラが言った。
「お嬢さまの気の迷いから、皇女ミーアの暗殺に失敗したのです」
「なっ、ミーア姫殿下の、暗殺っ！？」
驚愕に目をむくローレンツに、バルバラはため息を吐いた。
「愚かなことをしたものです。皇女ミーアに弓引く以上、決して目撃者を生かしておいてはならないというのに……、そんなこともわからずに、つまらない友情に気を取られて……。ああ、なんと愚か。蛇に従い、イエロームーン家の者として、ひと時の繁栄を享受すればよかったものを……」
いたぶるように、シュトリナの髪をいじるバルバラに、ローレンツが焦り気味に言った。
「そ、そうか。しかし、失敗したものは、仕方あるまい。では、急ぎ脱出の準備を……」
「はて……？　脱出、でございますか？」
小さく首を傾げるバルバラに、ローレンツが声を荒げる。
「当然だ。まさか、帝国を相手に戦端を開くなどとは言わないだろ

う？」
　その言葉に、バルバラは小さく首を振る。
「当たり前でございます。簡単に制圧されて終わりでしょう。勝負にもならないのでは？」
　精強な私兵団を誇るレッドムーン公爵家ですら、単独で帝国軍と戦うことはできないだろう。まして、イエロームーン派は烏合の衆。消極的に徒党を組んでいる者も少なくはないのだ。
　勝ち目のない戦（いくさ）に身を投じるとは、とても思えなかった。
「だったら……」
「しかし、逃げてどうします？　お館さま。あなたや、この、どうしようもないお嬢さま……」
　そう言って、バルバラはシュトリナの髪を掴んだ。乱暴に髪を引っ張られ、シュトリナが痛みにうめき声を上げる。
「……あっ、ぅ」
　ぎゅっと目を閉じるシュトリナに、バルバラが顔を寄せた。
「そもそも、逃げたところで、なんの役に立つとおっしゃるのです？　暗殺の技を仕込んで、もう一度、皇女ミーアの命を狙うとでもいうのですか？」
　乱暴にシュトリナを放して、それからバルバラは肩をすくめた。
「残念ながら、この小娘は蛇にはなれないでしょう。友情などとくだらない感情に心を奪われた半端者にはね」
「それならば、まっ、まさか、この館で迎え撃つつもりか？」
「さて……、はたして我らが刃は届くでしょうか？　最強の駒である狼使いを退けた皇女ミーアに？　少なくとも、この者たちには無理でしょう」
　バルバラは、自らが連れてきた者たちを見て首を振る。
「お館さまはお心当たりがありますか？　あの忌々しいディオン・アライアを退ける者に……」
「それは……」
「ねぇ？　望み薄でしょう？」

バルバラは、嫣然と微笑む。
「小さな虫は、獅子の腹の中にいてこそ、獅子を苦しめることができる。正面から立ち向かっても踏みつぶされて殺されるだけでしょう？」
ローレンツの方に顔を向けて、バルバラは続ける。
「あなたたちは、毒虫ではないですか。最古の忠臣イエロームーン。ならば、踏み潰されるなどと、無駄な死に方をすべきではありません。毒虫は毒虫らしく、せいぜい、派手に食い殺されましょう。そして、その毒をもち、あの叡智に汚点をつけてやれば良いのです。それでこそ、蛇の役に立てようというものですよ」
それから、バルバラは、優しい笑みを浮かべた。
「さぁ……では、準備をいたしましょう。お館さまも、お嬢さまも。かの帝国の叡智をお迎えするのです。きちんとした格好でお出迎えしなければ失礼にあたりますよ。せいぜい平和な、綺麗な格好でお迎えして、悩みを深くして差し上げましょう……あら？」
ふと、そこで、バルバラは首を傾げる。
「ところで、お館さま、ビセットはどこに行ったのでしょうか？」
「あ、ああ、ビセットには用事に出てもらっていて……」
「おやおや、ふふふ。ついに執事にも見捨てられてしまいましたか。お可哀想なお館さま。でも、ご安心ください。このバルバラは、そして蛇は、最期まで、あなたのおそばにおりますよ」

第八十七話　バルバラの罠

「到着いたしました。どうぞ、姫殿下」
ミーアたちを乗せた馬車は、ごく普通に領都≪フォレジョーヌ≫に入った。
領都に入る時に、番兵に止められるということはあったものの、それ以外には、なんの障害に遭うこともなく、一行は町の中心、イエロームーン公爵邸に辿り着いた。
「てっきり、なんらかの足止めに遭うものかと思っていたが、それすらもないとは……」
「不気味だな。ますます、罠を張っていそうな雰囲気だね」
などと、警戒を怠らない二人の王子たち。
それを見て、ミーアも少々不安になる。
――ふむ……、確かに、不穏な感じはいたしますわね……。しかし、不穏な場所に必ず現れる、あの方はいないのかしら？
きょときょとと、辺りを見回していると……、
「ディオン殿には、ほかの任務を担っていただいています」
ルードヴィッヒが言った。
「まぁ、そうなんですの……。ふむ……」
正直、ディオンなしで、イエロームーン公爵のもとを訪れるのは、いささか不安が残るところではあったが……。
「へへへ、まぁ、ディオン隊長がいないと不安ってのはわかりますがね。きっちりと俺らで守りますんで、信用してもらっていいですぜ」
合流した皇女専属近衛隊の隊長、バノスが、豪快な笑みを浮かべた。
「……そうでしたわね。ええ、頼りにさせていただきますわ」
ミーアは、小さく頷く。が、すぐに付け足すように言った。

「ですけれど、自分の命を粗末にしてはいけませんわよ。例えわたくしのためであっても、軽々に命を投げ出すようなことは、しないでいただきたいですわ」
言いながら、ミーアが思い出すのは、赤い髪の公爵令嬢のことだ。
――この方がわたくしのために死んでしまったりしたら、ルヴィさんがものすごく怒りそうですし……、それは避けたいところですわ。
「わかってますぜ。ミーア姫殿下の兵に、無駄に命を捨てようなんてやつは、一人だっていやしませんや」
そう言って笑うバノスだったが、ミーアは若干の不安を隠しきれずにいた。
――うーん、バノスさんって、いかにもわたくしの盾になって死んでしまいそうなんですのよね。こういう時、ディオンさんがいれば、一人で大暴れして平気な顔して帰って来てくれますのに。
ため息を吐きつつ、ミーアは公爵邸の方に目を向ける。と、タイミング良く、人が出てくるのが見えた。
「なっ……！」
思わず、ミーアは目を疑う。現れた人物、それは……。
「ようこそおいでくださいました。ミーア姫殿下。お館さまと、シュトリナお嬢さまがお待ちです」
慇懃無礼に頭を下げたのは、イエロームーン公爵家のメイド……、バルバラだった。
二人の王子たちが一斉に剣に手をかける。
「よくもぬけぬけと出てくることができたものだな」
叩き付けられた鋭い言葉を聞いても、バルバラは、特に気にした様子もなく微笑んでいた。
「王子殿下、もしもシュトリナお嬢さまを無事に帰してほしいのでしたら、どうぞ、ここから先は節度を守って行動していただけるように、お願いいたします」
「武器を捨てろ、とでも言うつもりか？」

シオンの鋭い視線を受けても、バルバラは落ち着いた様子で首を振った。
「まさか、王族の方にそのようなことは申しません。どうぞ、帯剣したまま、お入りください。剣を持つは王者の権利。自身の思うままに、反抗する者を斬り殺す、それが王族という者ではありませんか？」
馬鹿にするように笑うバルバラをシオンが静かに見つめ返す。
「王が剣を振るうは悪に対する時のみ。お前のような、な」
「おお、左様でございますか。さすがは、正義と公正を旨とするシオン殿下。であれば、ふふふ、私も悪人らしく申し上げましょうか？　その剣、おいそれとは抜かぬことです。シュトリナお嬢さまを無傷で取り戻したくばね」
ねっとりと絡みつくような視線をシオンに向け、そのまま、アベル、キースウッドを見つめてから、バルバラは言った。
「それでは、どうぞ、お入りください。くれぐれも、我がイエロームーン公爵家のお客さまに相応しく、節度を持った態度でいらっしゃいますように」
どこまでも丁寧に、けれど、その端々に嘲笑を滲ませながら、バルバラは踵を返した。
あっさりと屋敷へと迎え入れた敵に困惑しつつも、ミーアたちはその後を追った。

屋敷の中は、大貴族の屋敷に相応しくなく、質素な造りをしていた。広い廊下には誰のものかはわからない肖像画が無数に並べられている。
――なんだか、こう、地味なおじさんの絵が多いですわね……。実になんとも、パッとしない絵ですわ。
などと思っていると、ミーアの視線に気づいたのか、バルバラが口を開いた。
「歴代のイエロームーン家のご当主さまにございます。ティアムー

ン帝国を裏で支えた、呪われた血筋の者たちですよ」
「ほう、そうなんですのね……。なるほど」
ミーアはうむうむ、と頷きつつ、
――確かに、冷酷そうな方が多いですわ！
そんなことを思った。
……影響されやすいタイプなのである。
やがて、廊下を抜けた先に見えてきたのは、広い中庭だった。
豊かに植物が茂った庭園、その奥にいたのは……、
「あっ……あれは」
仮面を付けた三人の男たち、その前に膝をつき、首筋に刃を当てられた身なりのいい壮年の男……、それにもう一人、その隣に座り込んでいる少女は……。
「リーナちゃんっ！」
ベルが声を上げる。
っと、うつむいていた少女、シュトリナはゆっくりを顔を上げた。
ベルの方に顔を向け、可憐な笑みを浮かべる、と思われた瞬間、くしゃり、とその笑みが崩れる。
「……ベル、ちゃん」
今にも泣きだしそうな顔をするシュトリナ。そんな少女のもとに、ゆっくりと歩み寄ってから、バルバラは振り向いて言った。
「さて……、それでは始めましょうか。イエロームーン公爵家の断罪の時間を……」

第八十八話　恣意的断罪女帝ミーア、ここに降臨……しなかった

「断罪？　なにを言っておりますの？　そのお二人を、どうなさるおつもりですの？」
ミーアの問いかけに、バルバラは楽しそうに笑みを浮かべた。
「どうもいたしませんよ、ええ。私は」
「断罪とはね。盗人猛々しいとはこのことだな」
睨むアベルに、バルバラは小さく肩をすくめた。
「ええ、これが終わればご自由に、あなた方の裁きでもなんでも受けましょう。アベル王子。けれど、この場所は生憎と、この私めの裁きの場ではございません」
そう言って、バルバラは、シュトリナの後ろに立つと、ぽんとその肩に手を置いた。
「今、この場で裁かれるのは、この、呪われしイエロームーン家の者たちです」
「呪われし、イエロームーン家……」
ミーアは先ほど、目の当たりにした歴代の当主たちのことを思い出していた。
「すでにミーア姫殿下におかれましては、ご存知のことでしょうが、かのイエロームーン公爵家の者たちは、帝国内にて暗躍、無数の要人の暗殺を為し、数多の貴族の家を根絶やしにしてきたのです」
「それは……っ！　くっ……」
なにかを言おうとしたローレンツの首筋に、背後に立っていた男の刃が食い込む。その発言を封じ込めようとしたようだったが……、その言葉を引き継ぐように、代わりに口を開いたのは、ルードヴィッヒだった。
「それは、ティアムーン帝国の邪魔になる者たちを葬っただけのこと。国が国として成長していく過程では権力闘争を避けることがで

きない。であれば、イエロームーン公爵家のしてきたことは、褒められたことではないにしろ、裁かれることでもないのではないか？」
メガネの位置を直しつつ、ルードヴィッヒが指摘する。
――そう言えば、ルードヴィッヒからの手紙に、そんな疑惑が書いてありましたっけ……。
などと、ミーアが思っている間に、バルバラは困ったように微笑んだ。
「なるほど、国を建て上げるためであれば、その罪は許容されうるものかもしれませんが……、この父娘は蛇。混沌の蛇の意を受けて、いくつかの暗殺を行っておりますよ」
頬に手を当てて、バルバラは言った。
「例えばそう、広大な農地を持つ辺土貴族の当主を特製の毒で殺害、一家を離散させ、その土地をイエロームーン家のものとしたり……、あるいは、我ら蛇の狙いに気付いた貴族を毒で血祭りにあげたこともありました。ああ……」
と、そこで、バルバラは手を叩いた。
「そう言えば、お嬢さまが、お友だちを手にかけること、今回がはじめてのことではありませんでしたね」
それを聞き、シュトリナは灰色の瞳を見開いた。
「や、やめて、バルバラ」
立ち上がりかけてシュトリナを、けれど、近くにいた男が押さえつける。
それでも、それを振り払い、
「やめて、ベルちゃんには、言わないで」
悲痛な声を上げるシュトリナ。それを見たバルバラは、嗜虐的な笑みを浮かべて言った。
「人好きのするその笑顔で仲良くなって、その家族に取り入って、毒で殺したこともありました……。お友だち本人のお飲み物に入れたこともございましたっけ？」
「あっ……」

シュトリナは、へなへな、とその場に座り込み、両手で耳を塞いだ。
もう聞きたくない、というように、頭を小さく振る。
「ふふ、ご存知ですか？　イエロームーン公爵家は、たくさんの毒の知識をお持ちで。私めでは、とても太刀打ちできぬほどの毒の知識を、お館さまはお持ちなのですよ」
それから、バルバラは改めて、ミーアたちに向き直る。
「さぁ、公正で、正義を重んじる王侯貴族のみなさま方、ご覧ください。ここに裁かれるべき悪がおります。そして帝国の叡智、ミーア姫殿下……、さぁ、どうぞ、この悪をお裁きください」
「それは……」
「それとも、ミーア姫殿下、まさかと思いますが、この父娘を赦されるおつもりですか？」
こぼれんばかりの笑みを浮かべて、バルバラは言った。
「まぁ、それもいいでしょう。王族だとか帝室だとか、人の上に立たれる方には力がありますから。正しい訴えを握りつぶすことも簡単でしょう。けれど、いいのですか？　それで……ねぇ、シオン殿下？」
バルバラは、ミーアの後ろに立つシオンに目を向けた。
「王は公正たれ。サンクランド王国の家訓ではありませんか？　権力を持った者は、清く正しくなければならない。それなのに、ただ、皇女と親しかったから赦免されるなどという事態、あなたは見過ごすのですか？」
その物言いに、シオンはムッとした顔をする。構わず、バルバラは言った。
「聖女ラフィーナはどう思うでしょう？　かつて友を殺したこの娘を、友の家を潰すことに加担したこの娘を、友の親を殺すことに協力したこの娘を、無罪放免にすることを、かの聖女が良しとするでしょうか？」
それこそが、毒蛇、バルバラの猛毒だった。

シュトリナとローレンツを〝ミーア自身の手によって断罪させる〟こと。
あるいは、〝断罪しないという判断をさせる〟こと。
もし仮に、ミーアが二人に罪を問うた場合……、それは正義の行いと言えるだろう。
けれど……、あれほど仲良くしていたシュトリナを殺すようなことがあっては、ベルとの関係は悪化するだろうし、他の生徒会のメンバーも、ミーアに対して複雑な想いを抱くことだろう。
それはミーアの心に、必ずや傷を穿ち、仲間たちとの絆に亀裂を生じさせるはずだった。
では、イエロームーン家を許した場合はどうか？
正義と公正を重んじるシオンや、神の教えを説くラフィーナは……、このようなイエロームーン家を、裁かないことを潔しとはしない。ゆえに、裁かないという判断を下したミーアとの間に不和を生じるだろう。
あるいは、それは小さな傷かもしれない。取るに足りない些細なひずみにすぎないかもしれない。けれど……、それは、やはり明確な傷でひずみなのだ。
そして……蛇はその隙を見逃さない。
仮にバルバラがここで捕まったとしても、他の混沌の蛇の者がその傷を突き、えぐり、ミーアの仲間たちの絆を破壊するだろう。
それは、聖夜祭の毒殺テロによって、聖女ラフィーナを責め苛み、秩序を破壊する司教帝として、蛇の手先に仕立て上げたのと同じ流れを持った思考だ。殺して排除できないのであれば、その心を責めて、歪めてしまえばいい。秩序の破壊者として、自分たちの手先として利用できるかもしれない。
それは、気づかぬ内に体を蝕み、歪め、ついにはその者を死に至らしめる毒。
そんな狡猾な、一匹の老蛇を前にして、ミーアは……、
――先ほどから、リーナさんに対して、少し無礼が過ぎるのでは

ないかしら？
ちょっぴり腹を立てていた……。
シュトリナをいじめるバルバラに対して……。
そうなのだ、ミーアは……、目の前に倒れている者がいたら、放っておけないタチなのだ。
バルバラがなんと言おうと、ミーアの目に映るシュトリナの姿は、恐ろしい暗殺者ではなかった。弱々しく膝をつく、哀れな子どもだった。
ゆえに、ミーアは思う。
――たぶん、あのご様子ですと、リーナさんも好き好んで悪事を働いていたのではないはずですわ……。
なんと言っても、シュトリナとは同じキノコを採りに行った仲間。共に馬の出産に立ち会った仲。
いわば、茸馬（たけうま）の友なのである。
――リーナさん自身は、きっとそこまで悪い方ではないはず。バルバラさんに脅されてやったに違いありませんわ。これならば、目の前でいじめられていた子を助けただけ、とラフィーナさまを納得させることだってできるのではないかしら？
それは理屈としては、かなりの力業だったが……構うこたぁなかった。
なにしろ、今のミーアは完全無欠の部外者である。
若干、判断ミスしたとしても、一番悪いのはバルバラだし、いざとなればイエロームーン公爵もいる。責任なんかいくらでも押し付けられるのだ。なにせ、完全に部外者だからっ！
ふんすっ、と鼻息を荒くするミーアである。そう！　今のミーアは、恣意的断罪女帝（セルフィッシュジャッジメント）ミーアなのである！　他人事だから、好き勝手言えてしまうのである。
――ふふん、なにか言ってるみたいですけど、このわたくしが、蹴り飛ばしてやりますわ！
強気な断罪皇女ミーアが、今まさに、ここに降臨しかけた……そ

の時！
「お待ちいただきたい。ミーア姫殿下」
不意にローレンツ・エトワ・イエロームーンが口を開いた。
……そして、流れが、変わった！

第八十八話　恣意的断罪女帝ミーア、ここに降臨……しなかった（後書き）

竹馬（ちくば）の友
茸馬（たけうま）の友

第八十九話　黄色の詐欺師は小心者（チキンハート）

「おや、余計な口を挟まないでいただけますか？　お館さま」
そう言ってバルバラは、ローレンツの首筋に刃を突きつける。
「せっかく無傷でミーア姫殿下に裁きをいただこうというのに、邪魔をしないでいただきたいものです」
だからこそ、無駄な戦いをせずに、ここまでミーアたちを招き入れたのだ。
下手に乱戦になり、彼女の部下たちにローレンツが暗殺でもされたら意味がない。重傷を負った者にとどめを刺して楽にしてやるという形でも駄目だ。
無傷の、健康な状態にある彼らを、なにもなければこの先、何十年も普通に生き続けるであろう者たちを、ミーアの手で処罰させる。そのことに意味があるのだ。
「でも、まぁ、仕方ありませんか。しばし黙っていていただくためには、少々、血の気が多いようですので、抜いておいたほうがよいかもしれません」
そうして、バルバラは刃を振り下ろす。
「お父さまっ！」
シュトリナの悲鳴が響く中、凶刃は、ローレンツの肩に向かっていき……、途中で止まった。
「なっ！？」
驚愕に眼を見開くバルバラ。その傍らには、一人の初老の男が立っていた。黒い執事服をまとい、綺麗に整えられた口ひげが特徴の男、それは……。
「いけませんね、バルバラ。ローレンツさまに、無礼を働くなどと……」
「あらあら、ビセット。てっきり逃げたと思ってましたが、どこに

行っていたんですか？」
バルバラは、自らの腕を掴む初老の執事に、皮肉げな笑みを浮かべる。
「ビセット……？」
そのやり取りを眺めていたシオンが、つぶやくのが聞こえた。
「その名前……どこかで」
断罪の大鎌を振り上げていたミーアは……、おずおずと鎌を下す。
なんとなく、流れが変わったことを察したのだ。ミーアは空気が読める、できる女なのである。
「ローレンツさまのお言葉を遮るなど、礼を失することこの上ない。黙るのは、あなたのほうですよ、バルバラ」
バルバラの手から刃を奪い取ると、ビセットは静かに頭を下げる。
「遅くなり、申し訳ありません。ローレンツさま。害虫の駆除に、少々手間取っておりました」
それから彼は、自らの主を守るようにバルバラを、そして、三人の男たちを睨みつける。
その様子を見たバルバラは、小さくため息を吐いた。
「ふふん……まぁ、いいでしょう。ここで荒事を起こしても仕方のないこと。今さら言うべきことがあるとも思いませんが……、どうぞ、せいぜい見苦しい自己弁護をなさるがよろしいでしょう」
そう言って、一歩後ろへと下がる。
それを見て、ローレンツは、ホッと安堵の息を吐いた。
「そう。なら、遠慮なく言わせてもらおうか……。ミーア姫殿下……」
ローレンツは、ミーアの方を見つめた。
対してミーアは、急に話題が飛んできて、ワタワタした。
しかし、それはそれ。さすがにミーアも慣れたもので、すぐさま、なにが来ても良いように、心を整える。
「なにかしら、イエロームーン公爵」
ローレンツは、ミーアの目を真っ直ぐに見つめたまま……、とん

でもない劇薬を投入する。
「先ほど、バルバラが言ったことはすべて誤りでございます。私も、そして、我が娘シュトリナも、ただの一人の人間にも手をかけたこともございません」
「……はぇ？」
驚愕のカミングアウトに、その場の一同が静まり返る。そんな刹那の静寂を破ったのは、バルバラの嘲笑だった。
「なにを言い出すかと思えば……くだらない戯言を。いくらなんでも、その言い訳は無理筋ではありませんか？」
呆れた様子で言うバルバラ。これにはミーアも同意だった。
――それは、さすがに無理があるんじゃないかしら……？
と、思ったミーアは……けれど、そこで気付く！
彼女の忠臣ルードヴィッヒが……黙っている。
あの、前時間軸において、誰よりも鋭くミーアにツッコミを入れ、えぐりにえぐってきたあのクソメガネが……、黙っているのだ。
否、なんの疑問も抱いていないような穏やかな顔で、成り行きを見守ってさえいる！
――これは……、ふむ……。
ミーアは、開きかけた口を閉じて腕組みをする。様子見の構えを取りつつ、やってくる波に備える。
そんなミーアに一瞬だけ目をやったローレンツは、小さく息を吐き……、
「ご存知のように、我がイエロームーン公爵家は、ティアムーン帝国建国以来、この帝国の発展を邪魔する者たちを、陰で葬ることを務めとしてまいりました。初代皇帝陛下との盟約に従って……。けれど、この数十年、帝国は安定の時期を迎えておりました。その上、今代の皇帝陛下もまた、温和なお人柄。暗殺の依頼はただの一度もされてはおりませぬ……」
「ふむ……」
ミーアは小さく頷いた。

なるほど、ローレンツの言うことは、納得できた。
――温和かどうかは微妙なところですが、お父さまは、わたくしの好感度にしか興味がないような方。それに、確かにわたくしが知る限り、ここしばらくの帝国は戦乱とは無縁でしたわ。
その分、裏では貴族同士の権力闘争はあったのだろうが……。四大公爵家の一家が直々に動かざるを得ないような、国家の敵と呼べる者は存在しなかった。
「ふふふ、なお悪いではないですか。暇そうにしておりましたから、その分、蛇としてしっかり働いてもらいましたよ」
ローレンツの言葉を受けて、バルバラは勝ち誇ったように笑った。
「帝国を崩し、この地を呪われた地とするために、知恵ある者を葬り、蛇に背く者を葬っていった。帝国の剣として暗殺を担ったならば、その罪もあるいは赦されましょう。けれど、蛇の手先として働いた件は……」
「私は……小心者なのだよ。バルバラ。ミーア姫殿下とは違い……、勇気がないのさ。暗殺など、とてもとても、恐ろしくてね。ゆえに……だましたのさ、君たちをね」
「馬鹿馬鹿しい。愚劣な自己弁護もここに極まれりですね。そのようなことをしてなんの意味があります？」
首を振りながら、バルバラは言った。
「お館さまが臆病者というのは、私も否定はいたしません。だからこそ、蛇を裏切るような真似をするとは思えません。あるいは、今日のように、蛇に対抗する者たちがいるのであれば、蛇の言いなりにならぬ理由にはなりましょう。けれど今日の事態は、すべて帝国の叡智、皇女ミーアがいたからこそ生まれた状況。このような状況になることを予想して、暗殺の対象者を生かしておくなど、非合理なこと」
「らしくもない言いようだ。バルバラ、少し考えればわかることだろう。蛇に暗殺を命じられたということは、蛇にとって邪魔な存在であるということ」

ローレンツは強い口調で言い切る。
「それは裏を返すならば……、蛇と戦うのに有益な者たちと言えるだろう？　我が仲間として、共に蛇に反旗を翻してくれるかもしれない。将来のために、生かしておく意味は十分にあるだろう」
バルバラはローレンツを小馬鹿にしたように、笑った。
「それでもあり得ぬこと。あなたの周りの臣下はみな、我々の息のかかった者ばかり。近年、イエロームーンと協力関係にあった風鴉、いえ、白鴉の者たちも、ジェムに掌握されていた。お前が私たちに隠れて行動することなど不可能。たった一人で、そのような大仰なことをしたと？　標的を死んだように見せて、どこか安全な場所に逃がしたと？　無能者で半端者のあなたが、どうやって？」
鋭い揶揄に、ローレンツは力なく、肩をすくめた。
「ああその通りだ。あいにくと私には、力はないよ。君たちに逆らう力もなければ、娘を悲しませずにいることもできなかった。悔しいよ……」
そこで言葉を切って、それから、ローレンツは、穏やかな顔でバルバラを見つめた。
「しかし、君は見過ごしたね。彼……、ビセットのことを」
その時だった。ふと、思い出した、といった口調で、ルードヴィッヒが口を開いた。
「そう言えばシオン殿下……、お尋ねの件をお伝えするのをすっかりと忘れておりました」
「ん？　尋ねたこと、というと……」
「以前、ミーアさまを通してお聞きいただいた件です。イアソン、ルーカス、マックス、タナシス……そして、ビセット」
その名前の羅列を聞いた時、シオンは微かに瞳を見開いた。
「……まさか」
驚いた様子のシオンに、近くにいたモニカが頷いて見せる。
「そう……。あの方、ビセット殿は、かつて風鴉に属していた者……。帝国内に、サンクランドの諜報網を築いた伝説の人です」

その言葉に、ビセットは、少々困り顔で首を振った。
「誇張が過ぎる評価です。それに、ずいぶんと昔の話ですね」

第九十話　イエロームーン公爵は毒に詳しい

名前のない男、顔のない男、灰色の男……今、ビセットと名乗っている初老の執事。
彼との出会いはローレンツの、そして、イエロームーン家の運命を大きく変えるものだった。
幸運も味方した。
それまで幾度かあった蛇からの暗殺の指令……、そのことごとくをローレンツは、のらりくらりとかわしていた。
彼は知っていた。
蛇は……人の心の隙を突く。弱みを突く。傷を突く。
人の心を操るは、蛇の得意とするところ。
そして、彼の父は、祖父は、殺しに手を染めたことを、いつでも利用され続けた。
他のことはともかくとして、殺人だけは、どうやっても取り返しようがない。
一度でも、手を染めてしまえば簡単に蛇にからめ取られて、身動きが取れなくなる。
そのような連鎖に巻き込まれたくはなかったし、それ以前に、ローレンツは人を殺したくなかったのだ。
彼は痛いのも苦しいのも嫌な、小心（リトルハート）の持ち主だったのだ。
最初の一度をやってしまうと、もう後戻りはできない。
それを洞察していたローレンツは、言葉巧みに回避し続けた。
けれど、いよいよそれも難しくなった時……、蛇から下された命令こそが、ビセットの殺害だった。
その当時、混沌の蛇は、サンクランドの諜報部隊、風鴉の内部に、自分たちの手の者を潜り込ませることに成功していた。
そう、ジェムである。

そんな彼らにとって、実力者であるビセットは邪魔だったのだ。
仲間の裏切りにより窮地に陥っていたビセットを、ローレンツは、殺したと偽って助けたのだった。
以来、ビセットはずっと、執事としてローレンツに仕えている。
もともとが、凄腕の諜報員である。蛇とはいっても、しょせんは素人であるバルバラたちを欺くのは、容易いことだった。
そうして……、ローレンツは手に入れたのだ。
要人を秘密裏に国外へと逃がすルートと、有力な協力者を……。
「諜報において、現地の協力者は宝も同じ。ゆえに、その情報は仲間にだとて明かしてはならない……。それが、あの方の教えです。そして、事実、ビセットさんは、誰にも、帝国内での協力者の情報を明かしませんでした」
ミーアの後ろに控えた二人のメイド、その内の一人が補足する。
――あれが、元風鴉のモニカ嬢か……。
ローレンツは、自らの持つ情報と、その場にいる人間とを一致させつつ、頷いた。
「私一人でできることではなかった。暗殺の対象者を安全な国に運ぶことも、崖から馬車ごと落としたように見せかけることも、私には不可能だった。すべては、彼の力だよ」
「ありえない……、ありえないことです」
混乱した様子で、バルバラは首を振る。けれど、否定はできないだろう。
死体が出てこなければ、生きていたってわからない。
海外に人相書きを送ったりも、恐らくはしていないはずだ。なぜなら、その必要がなかったから。自分たちが騙されるだなんて……思ってもみなかったから。
「ふふふ、騙されるものですか……。そう、私は死体を実際に見ておりますよ。お館さま……、あなたの特製の毒で息絶えた者の死体を……」
「私の特製の毒か……。そういうこともあったな。なにしろ、私は

毒に詳しいからね……。バルバラ……、君が、太刀打ちできないほどに」
「あ……あ」
そこで、なにかに気が付いたのか、バルバラが目を見開いた。
そう……、それは、少し考えれば、わかることだった。
イエロームーン公爵は、植物に詳しい。薬に詳しく、毒にも詳しい。
それは、周知の事実だった。
けれど……、もしも殺すだけならば……、その知識はどこまで必要だろうか？
ありとあらゆる毒に通じることが……、暗殺者に必要なことなのだろうか？
……そう、答えは否なのだ。もしも、殺すだけでいいならば、いくつもの種類を知っておく必要はない。例えば、火蜥蜴苷（サラマンドレイク）のように、一発で相手を死に至らしめる毒を、数種類知っておけばいいだけではないか。
では……、なぜ、一瞬で死に至らしめる強力な毒を知りながら、弱い毒、いろいろな効果のある毒まで知識として知っておかなければならなかったのか？
それは、助けるため……。
毒を飲んだ者にどのような解毒剤を与えれば良いか知っておくため。あるいは、死んだように見せかけるための毒を……知っておくため。
「なぜ、毒が好きなのか、教えよう。君の知らない毒を使い、死んだように見せかけることができるからだ。ほかの殺し方と違って、毒は、君たちを騙すのにとても都合が良かったのさ」
詐欺師は……会心の笑みを浮かべた。
もちろん、彼の努力は無駄なことで終わる可能性もあった。
バルバラの言う通り、イエロームーン派だけでは戦えなかった。
狡猾な蛇のこと、皇帝になにか囁いて軍を動かすこともできただ

ろうし、秘密裏にローレンツたちを暗殺することだってできただろう。
だから、このカードは切ることができず、手の中で無駄に溶けていく可能性だって十分にあったのだ。けれど……、無駄にはならなかった。
――ミーア姫殿下がいる……。
先ほど、ローレンツは、じっとミーアのことを観察していた。
彼女が、噂通り信頼に足る人物なのか……。
そんな彼の目の前で、彼女は、怒っていた。
シュトリナを虐げるバルバラを、明確な怒りのこもった瞳で、じっと睨んでいたのだ。
積極的にしろ、消極的にしろ、自身の暗殺に関わった人間が、虐げられていたからと言って、怒る人間がどれほどいるだろうか？
いい気味だ、と笑うのが人というものではないか？
にもかかわらず、彼女は、しっかりと、シュトリナのために怒ってくれた。
――ミーア姫殿下は、シュトリナのことを信じると言ってくれたと聞いた。あるいは、あれで、すでに十分だったのかもしれない。ミーア姫殿下に全幅の信頼を置くには……。
そう判断したローレンツは、ようやく、自らの切り札をすべて明かすことにしたのだ。
それから、ローレンツはミーアの方に目を向けた。
「ミーア姫殿下……以上が私があなたにお伝えしたかったことです。どうか、ご裁定をお願いしたい」
事態の急変を前に、ミーアは……、
「……はぇ？」
ぽかーんと口を開けるのみだった。

第九十一話　画竜点睛、黄金の審判皇女ミーア、降臨す

「はぇ……？　んっ、んん、ふむふむ、なるほ、ど……？」
事態の急変を前にミーアは、なんとか表情を取り繕いつつも……、
――ひぃいいいいっ！
内心では悲鳴を上げていた。
それは、思わぬ方向から飛んできた流れ矢だった。
ローレンツの暴露、それがもたらすパラダイムシフトをミーアの嗅覚は正確に嗅ぎ取っていた。
そうなのだ、今やこの場所は、ローレンツたちに対する裁きの場から、変容しつつあったのだ。
問われているのは、ローレンツ、あるいはシュトリナの個人的な罪ではない。なぜなら、彼らは、直接、誰をも殺してはおらず、むしろ、蛇の手から要人を守ったのだ。
称賛されこそすれ、そこに処罰されるべき罪はない。
では、今、問われている罪はなにか……？　ローレンツが問うていることはなにか？
それは……、親の罪を子が負うべきなのか？　という問い。
言い換えるならば、彼が問題としているのは、彼らの親の罪、先祖の罪、呪われたイエロームーン公爵家という「一族」の罪である。
その咎（とが）を、子孫であるローレンツやシュトリナが負うべきかどうか？
ローレンツは、ミーアに問うているのだ。
そして……、もし仮に先祖の罪に話が及んでしまうと、困ったことになる人物がいる。
そう……、もちろんミーアである！
なにしろ、他でもないミーアのご先祖さまこそが、イエロームーンに罪を犯させた者であり、混沌の蛇に従うよう、段取りをつけた

人間だからだ。
イエロームーンが従犯ならば、初代皇帝は主犯である。
ローレンツやシュトリナが従犯の子孫ならば、ミーアは主犯の子孫なわけで……。
もはや、ミーアは無関係な第三者ではいられない。バリバリの関係者なのである。
断罪女帝とか、ルンルンで遊んでいる余裕はもうないのだ。
――かっ、関係ないところから高見の見物しているつもりが、なぜこんなことに？　ぐぬぬぅっ、それもこれも、すべてアホのご先祖さまのせいですわ！
初代皇帝にひとしきり文句をつぶやきつつも、ミーアは考える。考えざるを得なくなったのだ。
これでミーアは、意地でも彼らに重罪を科すことはできなくなった。なぜなら、ミーア自身もその責を負わされることになるからだ。
……というか、たぶんそんな迂闊なことをしたら、蛇が寄ってくる。
イエロームーンに下した罰をミーア自身も受けるべきではないか？　などと言って揺さぶりをかけてくるに違いない。厄介なことである。
となれば、彼らに厳罰を科すことはできない。まぁ、もともとそうするつもりもなかったので、それはいいのだが……。
むしろ、問題なのは逆の場合。すなわち、無罪放免とも言いづらい状況になってしまったことだ。
ぶっちゃけた話、ミーア自身は先祖の罪なんか「知るか！」という感じである。
親の罪とか言われても知ったこっちゃないと思っているし、シュトリナたちにもそう言ってやりたいところだが……、それを、そのまま言うわけにはいかなくなった。
なにせ、今となってはミーア自身も関係者。
無関係の相手に言うならばいざ知らず、自身の責任にも関係して

くるこの状況において、簡単に無罪とは言えないのだ。なぜなら、「ミーアは、自分が助かりたいから、そう言った」ととられかねないからだ。

……そして、たぶん、そんな迂闊なことをしたら、蛇が寄ってくる。

――そうに違いありませんわ！

先ほどのバルバラの意地悪そうな笑顔を思い出しながらミーアは確信していた。

さらに……ミーアは気づいていた。自身の後ろにいるシオンやキースウッド、モニカらは、熱心にミーアに視線を注いでいることに。

ここで、ミーアが安易に答えを出してしまったら、きっと文句が飛んでくるに違いない。

ゆえに迂闊なことは言えない。ミーアは〝誰が聞いても納得する妥当な落としどころ〟を、頭をひねって考え出さなければならないのだ。

――う、うぐぐ……。これは難問ですわ。難問ですわよ？

それでも、ミーアは考える。

シュトリナたちを助けるため……、それ以上に、なにより自分に累が及ばないために。

そうして、知恵熱で頭がクラクラし始めたところで……、ミーアはようやく口を開いた。

裁きの大鎌を持った断罪皇女ミーアの、再びの降臨である！

「ローレンツ・エトワ・イエロームーン公爵……、話はわかりましたわ」

そうして、ミーアは裁きの大鎌を振り上げる。振り上げた、その巨大な刃で……、

「なるほど、リーナさんも、イエロームーン公も、どちらもご自分の手を汚されたことはない、と……」

ちまちまと、ナニカを削り始める。

完成形である、みなが納得する妥協点を探りながら……、ちまち

ま、ちまちまと慎重に話を進める。その様は、さながら繊細な彫刻家のごとく。
「そのような戯言を、まさか本気で信じるおつもりですか？　ミーア姫殿下」
バルバラがガヤを入れてくるが、とりあえずスルーしておくミーア。
ここで、ローレンツが嘘を言う意味はあまりない。
一時、ミーアの目をごまかしたところで、破滅を先延ばしにするのみ。なんだったら、みなの心証を悪くして事態を悪化させるものでさえあるのだ。
ゆえに……、
「ルードヴィッヒ、念のためにビセットさんから情報をもらって、その国外に逃がした者たちに連絡を取ってみてくださいまし」
「はい、すでに使者が向かっております」
「そう。さすがに準備がよろしいですわね」
とりあえず、事の真偽は保留である。なので、そのことはとりあえず置いておくとして。
「もしも、手を汚していないというのであれば、リーナさん、そして、ローレンツ殿には、なんの罪もないと、わたくしは考えますわ」
そこに疑問を差しはさむ余地はない。問題はそこから先……すなわち、
「けれど、イエロームーン公には……、そしてイエロームーン家には、罪なしとは言えないのでしょう」
現に、かの家の工作により、没落した者たちがいるのだ。
被害を受けた者たちがいるのであれば、無罪放免とは言えない。だから……。
「ローレンツ殿には、イエロームーン公爵として、当主として償う責任があると考えますわ。ゆえに……」
ミーアは一度、そこで言葉を区切る。
そっと瞳を閉じて、自身のこれから言うべき言葉を吟味する。

それはさながら、完成間近の彫刻作品を見て出来栄えを確認する、彫刻家のようだった。
それから、改めてミーアは断罪の鎌を手に取った。
そうして、みなが納得する形を目指して、ちまちま、ちょこちょこ、彫りを再開する。
「あなたはその持てる力のすべてをもって、混沌の蛇の害を受けた者たちを救い、このイエロームーン家が被害を与えてしまった者たちに償うべきですわ」
したり顔で言うミーア……。
それはちょっと聞いた感じ、なにやら立派なことを言っているように聞こえる言葉だったが……。実のところ、ミーアが言ったのは「努力目標」に過ぎなかった。
そう、努力目標……。すなわち、ミーアは残したのだ。
「努力したけど、ここまでしか力が及びませんでした……」と言い訳する余地を。
これならば、初代皇帝のポカを責められても問題ない。できる限りのことはやったけど、力及ばずです！　と言い逃れることができる。
自身に飛び火した際に、できる限り被害を少なくする、ミーアの妙手である。
それに加えて……、
「そして、その償いは……しっかりとあなたの時代で終えなさい。娘であるリーナさんにまで、その咎を残すようなことがあってはいけませんわ。ええ、決して！」
きちんと、付け足しておく！　強調しておく！
万に一つも自分にまで累が及ばないように……。もしも、初代皇帝の罪が子孫にまで及ぶものであったとしても、それは親の代までとどめておくべきである、と。
娘にまで、その責任を負わせるなよ、と……。
ちまちま、ちまちまと、裁きの鎌で削り上げたミーアの自己保身

的妥協点は、今や、黄金のミーア像として、みなの前に、燦然とそびえ立っていた！

裁きの天秤を右の手に、知恵の象徴たるスイーツを左手に持ったミーア像に、ミーアは最後の仕上げをする。

画竜点睛、その瞳に、渾身の一削りを入れるべく、ミーアは口を開いた。

「今まで初代皇帝が……いいえ、わたくしのご先祖さまが、ご苦労をおかけしてしまいましたわ……。けれど、もはや古い盟約に縛られる時代ではございませんわ」

そうして、ミーアは、高々と宣言する。

「あなた方、イエロームーン公爵と結んでいた呪われた盟約は、わたくし、ミーア・ルーナ・ティアムーンが破棄いたしますわ！」

堂々たる宣言！　それから、ミーアはやり切った顔で息を吐いた。

これにより、今後、もしイエロームーン家が無茶なことをやったとしても、ミーアには何の関係もない。なにか暗殺にかかわったりしても、ミーアの知ったこっちゃないことである。

――ふぅ、これで一安心ですわ……。

そうして、安堵のため息を吐くミーアをローレンツは……、瞳を感動で潤ませながら見つめていた！

第九十二話　かくて、古き盟約は砕かれん

「バカな……馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な……。あり得ないことです、こんなこと、絶対にあり得ない。このような結末、あり得ていいはずがない……」

憎悪に歪んだ顔で、バルバラがつぶやく。地の底から響くような、おぞましい声で……。

それから、彼女は憎しみのこもった眼でミーアを見つめ、次に、ローレンツとシュトリナの方を睨みつけた。

「忌々しき帝国の叡智ミーア姫……、ふふふ、なるほど、見事な沙汰。後ろの王子たちにも不満はないようで……。ですけれど……」

不意に、その顔がくしゃっと笑みを浮かべた。

「そうそう思惑通りに事は運びませんよ。こうなれば、薄汚い裏切り者のイエロームーンの首を刎ねて、一矢でも報いて差し上げましょう」

バルバラの言葉に反応して、三人の男たちが動き出した。

位置的にミーアたちでは、どれだけ急いでも助けには入れない距離。唯一そばにいるのは、執事のビセットのみという状況。

荒事の気配が濃厚に匂い立つ。

……けれど、ミーアは心配していなかった。すでに、勝負は決しているからだ。すなわち……。

――ああ、やっぱり、不穏な空気にひかれて出てきましたわね……。悔しいですけれど、やはり、あの方がいると安心できますわね。

ミーアの瞳は、バルバラたちの後方より、こっそりと忍び寄る男の姿を捉えていた。

現れた男、帝国最強の騎士、ディオン・アライアは、にっこにこと、まるで悪戯を企む少年のような笑顔を浮かべつつ、三人の男たちを瞬時に殴り倒した。

それから、未だ気付いていないバルバラの背後に歩み寄ると、その肩口に、とん、と刃を置いた。
その光景を見たミーア、思い出す。
――ああ、あれ、怖いんですのよね。いつ首を落とされるかって……。
剣での肩ポンも、ギロチンの首ドンも、すでに経験済のミーアである。
ちょっぴりバルバラに同情すら覚えてしまう。まぁ、だからと言って、ディオンを止めたりはしないが……。
「……え？」
突然のことに、理解が間に合わないバルバラに、ディオンは笑顔で言った。
「あはは、ちょっと諦めが悪いな。この僕に、誰も対処できないって戦うという選択肢を捨ててたんだから、最後まで貫徹しておけば、彼らも痛い目に遭わずに済んだのに」
慌てた様子で、辺りを見回したバルバラは、すでに昏倒している仲間たちを見て、ギリッと歯を噛み締める。
「くっ、愚かな……。忌々しい……。ディオン・アライア、帝国の犬め」
「あはは、帝国最強の犬か。その二つ名も悪くないな。犬に首筋を噛み砕かれて死ぬといい」
などと言い出したので、ミーア、慌ててストップをかける。
「殺さないようにお願いいたしますわね。なにか、有益な情報を引き出せるかもしれませんし、ラフィーナさまに引き渡したいですわ」
「相変わらず甘いなぁ、我らが姫さんは」
などと肩をすくめつつ、ディオンはバルバラの腕を拘束する。
それをしり目に、ミーアの横を駆けていく者がいた。それは……、
「リーナちゃんっ！」
すべてが片付いたと見たか、ベルが一目散にシュトリナのもとに走り寄る。

ベルはそのままシュトリナに飛びつくと、思い切り抱きしめた。
「リーナちゃん！　リーナちゃんっ！」
ぎゅうぎゅうと、ベルに力いっぱい抱きしめられたシュトリナは、ポカンと虚空を眺めていた。
事態の急変についていけていないのか、まるでお人形さんのように、一切の表情もなく、ただただ呆然としていたシュトリナだったが……。
「……ベル、ちゃん？」
やがて、その灰色の瞳に、薄く涙の膜が現れて……。見る間に量を増していく涙は、宝石のような粒となり、やがて、ぽろぽろ、ぽろぽろと、その幼い頬を伝い落ちた。
「ベル……ちゃん……」
唇をぱくぱくと開閉させつつも、震える声が紡ぐのは、ただその名前のみ。
大切な親友の名前のみで……。
やがて、その言葉さえも形をなくし、後に残るのは、言葉にならない少女の嗚咽のみ。
「リーナちゃん……、大丈夫。ボクは、ここにいますから……、ずっといますから」
その友の背を、ベルは優しくさすってやるのだった。

「ああ……終わった……というのか？」
泣き崩れる娘の姿を見ても、ローレンツは立ち上がることができなかった。
自身の命を狙っていた刃もすでになく、その行動を阻害する者はなにもないというのに……、地面にへたり込み、立てなくなっていた。
実際のところ、本当の意味で、初代皇帝との盟約を断ち切ることができるのは現皇帝のみである。
ローレンツは、そのことをしっかりと理解していたし、恐らくミ

ーアもわかっているのだろう。
しかし、その上で彼女が、そう口に出したことに意味があるのだ。
――ミーア姫殿下のあのお言葉があれば、仮に暗殺の指令が来たとしても、突っぱねることができる。それに、皇帝陛下のミーア姫殿下への寵愛は厚い。だから、ミーア姫殿下が言ったことであれば、きっと耳を傾けていただけるはずだ。
それでも……、彼は、未だに安心できずにいた。
なにしろ、建国以来、ずっと彼らを縛り続けてきた鎖だ。
自身が生まれた瞬間から、背負うように義務付けられていた呪いなのだ。
それが、こうもあっさりと……、ただの一滴の血も流されずに終わったことが、とてもではないが信じられなくって……。
ただただローレンツは、現実味のない光景を眺めていることしかできなかった。
「呪われよ、イエロームーン。いつの日にか、お前たちの首元に、蛇が噛みつく日が来るでしょう」
不意に耳に届いた声……。バルバラの、負け惜しみのような呪いの文句を聞いた瞬間に……、ようやく、ローレンツの胸に実感が沸いてきた。
そうだ、自分たちは、ついに……、ついに。
「ああ……バルバラ……、混沌の蛇を体現する者よ。今、私は、万感の思いを込めて言うことができるよ」
それは……バルバラに向けて言っているようで、けれど、きっと彼女に放たれたものではなかった。
それは、彼ら一族をずっと縛り続けた混沌の蛇に対して……、あるいは、彼らに苦境を強いた初代皇帝に向けて……。
晴れやかな顔で、ローレンツは言った。
「ざまぁみろ、混沌の蛇」
高々と、朗らかに……。
「ざまぁみろ、くそったれの初代皇帝！」

放たれるは、イエロームーンの叫び。

かくて……、彼らを縛っていた古き盟約はここに打ち砕かれた。
帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーン。
初代皇帝の血を引く、若き皇女の手によって。

第九十三話　イエロームーン公爵との会談

なだれ込むようにして入ってきた皇女専属近衛隊（プリンセスガード）の者たちによって、イエロームーン公爵邸は制圧された。
といっても、内部にいた蛇の息のかかった者たちはディオンの手によって昏倒。人数自体もさほどおらず、恐らくは、玉砕を決めていたバルバラが、大部分を先に逃がしていたのだろう。
「蛇には蛇の論理がある……、そういうことかしら」
てっきり捨て駒にしてでも逃げると思っていたのだが、少し意外に感じるミーアである。
そうして混乱も収まった頃、ミーアはローレンツの部屋に招かれた。
「蛇に関連することとはいえ、帝国の内政に深くかかわることだ。我々はとりあえず遠慮しておこう」
シオンの言葉に、アベルも頷く。
「そうだね。シュトリナ嬢とベルくんのところにも、誰かがついていた方がいいだろうから、ボクたちは、そちらに行っているよ」
そうしてミーアは、シオンとアベル、キースウッド、それにモニカと別れる。
「ふむ……、では、一緒に行くのはアンヌとルードヴィッヒ、ディオンさんですわね」
頭脳担当のルードヴィッヒはともかく、ディオンに後ろに立たれるのはいささか不安なミーアである。かといって、護衛を連れて行かないわけにもいかず……。
ミーアとしては、せめてアンヌに精神的安定を委ねたいところであった。
と、ミーアの視線を受けたアンヌは……、
「お任せください、ミーアさま。私がついています」

ドンっと胸を叩くアンヌ。
どうやら、ミーアに連れて行ってもらうことが嬉しくて、張り切ってしまっているらしい。
それを見て、ミーアは苦笑しつつ、
「ええ、頼りにしておりますわ。ルードヴィッヒにディオンさんも……、お願いしますわね。アンヌが無茶をしそうになったら、きちんと止めてくださいませね」
「なっ！　ミーアさま、ひどい」
などと、アンヌとキャッキャしつつ、ミーアはローレンツの部屋に入った。
「ほう……」
入って早々に、ミーアは鼻をひくひくさせた。
鼻先をくすぐるのは、甘くて、香ばしい匂い。それは……。
――紅茶と、それに……焼き菓子……。それも、あのテーブルの上のものがそうですわね……。わたくしの目に狂いがなければ、あれは間違いなくペルージャン産のアップルを使ったタルトですわ……。
ミーアは、静かにローレンツの顔を見てつぶやく。
「……ふむ……この男……、できる！」
瞬間的にミーアは相手の力を見抜いたのだ！　そう、相手の……スイーツ力を……。
どうでもいい能力であった。
「お呼び立てしてしまい、申し訳ありません。ミーア姫殿下……。ですが、此度のことについて……、どうしても、お話ししなければと……」
立ち上がり、頭を深々と下げるローレンツに、ミーアは首を振る。
「形式ばった挨拶は不要。わたくしの方でも聞きたいことがありましたし、好都合でしたわ」
そう言いつつ、ミーアの瞳に映るのは、まだ、かすかに湯気の立つ焼き立てのタルトだ。

――あれは、焼き立てが美味しいんですのよね……。ああ、早く、食べたい。
ごくり、と喉を鳴らすミーア。
なにかに追い立てられるようにさっさと椅子に座り、それから笑みを浮かべて、ミーアは言った。
「ああ、それと、先に言っておきますけれど、リーナさんが、わたくしを罠にはめようとした件、それも不問と致しますわ。お父さまに知られると後々で面倒なことになるでしょうから、あなたも余計なことを言わないように。いいですわね？」
自身が命の危機に晒された、などと知られたらどんなことになるか……。容易に想像できてしまうミーアである。
それはそれは、面倒臭いことになるだろう。であれば早めに可能性を潰しておくに越したことはない。それよりなにより今は、タルトだ。タルトを体が欲している。
今日のミーアはただのキノコプリンセスではない。スイーツプリンセスキノコミーア……スイーツプリキノアなのだ！
あっさりと言い放ったミーアに、感動のまなざしを向けたローレンツは……、
「ありがたき幸せに、ございます……」
わずかに声を震わせながら言った。

さて、改めて、ローレンツとミーアは、テーブルを挟んで対面に座る。その目の前で、ビセットがタルトを切り分ける。
サクっと音を立てて、生地が切り分けられていく。
甘いバターの香り、そこに、アップルの鮮烈な匂いが加わり、湯気に乗って、ミーアの鼻先をくすぐる。
口の中にたまってきた唾を、ごっくんと飲み込み……、ミーアはタルトが切り分けられていくのをジッと凝視していた。
それはもう、目力だけで穴が開いてしまいそうなほどに熱心に熱心に……見つめる。

甘いものへの渇望から、その手は小さく震えていた。
それを見て、ミーアは苦笑する。
――思えば、急いでヴェールガから戻ってきたから、甘いものなんか全然食べておりませんでしたわね……。
しかも、先ほどは、予期せぬ頭脳労働を強いられたのである。
ミーアの中の甘いもの成分は今、枯渇の危機にあるのだ！　大変なことである。
ことり、と……、目の前にタルトの乗ったお皿が置かれる。それをミーアは、急いでパクリと頬張った。
サクッサクという歯ごたえを楽しみながら、口の中でモグモグする。と、舌の上に広がるのは、思わず頬がほころびそうになる、ふわふわした甘みだ。下手をすると少ししつこくなりそうな、その濃密な甘みを、最後に、アップルの酸味が洗い流していく。
一口食べただけで、至福の時を迎えたミーアは、
「んーっ！　やはり、ペルージャンの果物は最高ですわね！」
思わず、満面の笑みで口走った。
そんなミーアを見て、執事のビセットが驚いた顔をした。
「……あの、よろしかったのですか？　毒見もなさらずに、食べてしまって……。私が言うのもどうかと思いますが、ここは、つい先ほどまで敵地であったのでは？」
その問いに、ミーアはきょとん、と首を傾げた。
「はて？　なにを言っておりますの？　毒を入れるなどと……、そのようなことをして、どんな意味が？　こんなに美味しいタルトをつぶしてまで、することのようにも思えませんわね……」
そんなもったいないことするはずがない、と断言するミーアである。
……今のミーアは……、甘いもの欠乏症によって、いささか冷静さを欠いていた。
ぶっちゃけた話、ケーキ一個で城を売り払ってしまっても構わない気分なのである。

ケーキは城よりも重し、なのだ。重症である。
「しかし、驚きましたわ。あなたが、元風鴉の方だったなんて……。先ほどの、蛇を欺いた手腕、なかなかでしたわ」
美味しいタルトを食べられたことで、上機嫌なミーアである。
そんなミーアの称賛に、ビセットは穏やかな笑みを浮かべた。
「恐縮にございます。ミーア姫殿下……」
と、そこで、ルードヴィッヒが話しかけてきた。
「申し訳ありません。ミーア姫殿下。本来であれば、イエロームーン公爵から連絡を受けた時点で、お知らせするべきでした。しかし……」
「いえ、ルードヴィッヒ殿は、なにも悪くはありません。ミーア姫殿下。私がお願いしたのです。ミーア姫殿下のお人柄を見るために……。我が、イエロームーン家にとっては死活問題でしたから……。試すような真似をしてしまい、申し訳ありません」
深々と頭を下げるローレンツ。それに合わせるようにルードヴィッヒも頭を下げる。
「イエロームーン公はミーアさまの素のお人柄が見たいと、そのように願っておられました。自分たちの企みを知らないままに、ミーア姫殿下が味方をしてくれるかどうか、ということを知りたかったのです。ですから、イエロームーン公の信頼を得るために迂闊なことは言えなかったのです。なにしろ、ミーアさまは、一を聞いて十の情報を得、百の未来を読まれる方ですから」
「ふむ……まぁ、そういうことであれば仕方ありませんわ」
偉そうに頷くミーアである。褒められるのは嫌いではないのだ。
実際には、一を聞いて、〇、五ぐらいの情報を得て、甘いものが欲しくなるミーアであるから……、ぶっちゃけ聞かされてもなぁ……、というところでもあるのだが。
ともあれ……、
「しかし、もはや隠し立てする必要もなくなったはずですわ。改めて、ローレンツ・エトワ・イエロームーン公爵、話していただこう

かしら……」
聞きたいことは無数にある。
蛇のこと、イエロームーン公爵家のこと。帝国の裏で、今まで一体なにが起こってきたのか……。
「そうですね……。なにからお話ししましょうか……」
ローレンツは少しばかり考え込んでから、深々と頷いた。
「……では、我々、イエロームーン公爵家と初代皇帝陛下との盟約の話から……」

第九十四話　ティアムーン帝国というシステムとイエロームーンの役割

ローレンツは、改めてミーアの行動に驚愕を禁じえなかった。

――毒が入れられている可能性を……一切考慮に入れないのか……。

タルトをあっさりと口に入れ、満面の笑みで、美味しいというミーア。

確かに、この時点で、自分たちがミーアを害する可能性は限りなく低い。

この時点での、皇女ミーアとの敵対は、イエロームーン家の破滅を意味する。ローレンツだけでなく、シュトリナとて無事では済まない。

合理的に考えれば、それは自明の理であって……、だからこそ彼女はなんの疑いもなく食べたのだろうが……。

――いや、違うな……。

ローレンツの目は、見逃さなかった。

ミーアの手が、小さく震えていたことを。

それに、ずいぶんと熱心に、ビセットの手元を眺めていたことも。

――そうだ。頭の良い者であれば、毒を混入される可能性を考慮しないわけがない。確かに、可能性としては低いかもしれないが、それでも疑いを完全に捨て去ることなどできない。それができるのは能天気な愚か者だけだ……。

ミーアは、毒殺の可能性をきちんと頭に入れていた。その上で、毒が入っているかもしれないのに、あえて自分から先にタルトを食べたのだ。

恐怖を飲み込み、必要のために食べたのだ。

ローレンツを信頼しているということを、しっかりと表明するために。

――決して、蛮勇ではない。毒を食べるリスクと、我々イエロームーンの信頼を勝ち得ることとを天秤にかけて……、選んだのだ。しかも、その前には、あっさりと、シュトリナの大罪を水に流すと言ってくださっている……。ああ、この方は、なんという……。

ローレンツは、短く瞑目する。

まぶたの裏に、ふと、少年時代の恩師の顔が思い浮かんだ。

『なにかを為したいのなら知識を持ちなさい。例え、今は自分がなにを為したいのかわからなくとも、知識を身に着けることをやめてはいけません。なにかを為したいと思える日が来た時のために、弛まず知識を身に着け、そして、流れが来るのを待つの。いいわね』

目を開ける。と、目の前の、幼い皇女殿下に、その面影を見たような気がして……、ローレンツの中に、懐かしい気持ちがこみ上げてきた。

小さく息を吐き、それから彼は口を開いた。

「では、初代皇帝陛下と我らイエロームーン公爵家の盟約についての話から……」

そうして彼は語りだした。

長きに渡り、イエロームーン公爵家を縛り続けてきた呪いの話を。

「初代皇帝陛下と、我がイエロームーン公爵家の祖先は、もともと血縁関係にあったようです。そして二人は……、この世界に絶望していた。だから、世界を壊してしまおうと思った」

そのための反農思想。そのためのティアムーン帝国。

それは、世界を巻き込んだ巨大な復讐劇。

「その中でイエロームーン公爵家に与えられた役割は二つありました。一つは、すでに姫殿下もご存知かと思いますが、帝国並びに蛇にあだなす者を秘密裏に排除すること。そして……、もう一つは……、次の皇帝となること」

「次の皇帝……？　それはどういう……」

首を傾げるミーアに、ローレンツは肩をすくめた。

「文字通りの意味です。つまり、飢饉と革命によって、現帝室が倒れた際には、次なる王朝を継ぐように、と。そのように裏で工作し立ち回ること……。そして、次の皇帝あるいは国王となり、再び反農思想の浸透に努めるのが、イエロームーン公爵家に与えられた役目。再び革命がおこり、倒されるその日まで国を率いていくのが、我らの役目であり、褒美なのです」

三日月（ティア）を涙（ムーン）で染め上げる帝国というシステムは、自壊することを前提とした仕組みだ。

反農思想によって農地を潰し、飢餓によって革命を呼び込み、泥沼の内戦、殺りくによって大地全体を呪う。しかも、ただ一度それを行うわけではない。それを何度も繰り返すための仕組みだ。

だからこそ帝室の次に国を率いる者が賢明な王であってはならなかった。革命を起こす者はあくまでも単なる秩序の破壊者でなければならず、“次に来る新しい秩序のために、古い秩序を破壊する者”ではいけなかったのだ。

ゆえに……、

「ティアムーン帝室が斃（たお）れた後に、イエロームーンの王朝が……、その王朝が倒れた後には、さらに別の、秩序の破壊者が支配者として君臨する。そうして、幾度も血を流し、死を積み上げ、大地を穢（けが）していくのが、初代皇帝の作った仕組みです」

「ふむ……、しかし、いったいなぜ、そのようなことに関与し続けたんですの？」

ミーアが不思議そうな顔で言った。

「帝室が、未だに初代皇帝の志を継いでいるのであればともかく、わたくしは、そのような話を聞いたことはございませんでしたわ。お父さま……、皇帝陛下もご存知ないのではないかしら？」

「はい。帝室ではすでに、幾世代か前の時点で、初代皇帝陛下の遺志は忘れ去られておりました。けれど我らイエロームーン公爵家は、最初の盟約を希望として暗躍を続けたのです」

それは、初代皇帝がかけた呪いだった。

次なる皇帝を担う者は、四大公爵家の中で最も弱く、蔑まれるものでなければならない。その支配体制から恩恵をもらう者であれば、革命を起こし、その体制を破壊しようなどとは思わないから。
そうして、イエロームーン公爵家は、四大公爵家の中で、取るに足りないものとして扱われていき……、世代を経て、その扱いに対する憎悪は、屈辱は……やがて自分たちが支配者となる未来への強い渇望に変わっていった。
『弱く蔑まれる境遇は、いずれ来る繁栄のため。この帝国が滅びた時、自分たちの時代が来る！』
その思いにすがればすがるだけ、蛇への協力の姿勢は強固なものとなったのだ。
『自分たちの父も母も、祖父母も、先祖も……また、この境遇に耐えてきた。それは後に来る繁栄のため。次の皇帝になるため。今までの先祖の屈辱を無為にすることはできない』
それはまた、損切りができなかった、ということでもあった。
一族がここまで耐え忍んできたことを、自分の代で潰して良いものだろうか？
親から、教え込まれ、託された願いを……希望を……、自分の代で潰えさせることはできるものだろうか？
「それでも……、私のように荒事を好まない当主もいなかったわけではないと思います。けれど、そのような者たちも、蛇にからめとられていった。一度でも、手を血に染めてしまえば、蛇はそれを脅迫に使う。ただ一度の暗殺が自らを縛る枷となり、脅しの材料となる。そうして抗うことに疲れた者たちは〝やがて来るひと時の繁栄のみ〟を望みとして、蛇の傀儡となったのです」
だからこそ……、ローレンツは、暗殺に関与したくなかったのだ。
「なるほど……、そういうことでしたか……」
ミーアの隣で、ルードヴィッヒが頷いた。
「しかし、よく暗殺に関わらずにいられたものですね。私などでは、早々に心が折れてしまいそうです」

肩をすくめるルードヴィッヒにローレンツは穏やかにほほ笑んだ。
「ある方に励ましていただいたのだ。ルードヴィッヒ殿。その方は私に言ったのだ。もしも、なにかを為したいならば知識を持て、と。弛まずに、諦めずに知識をつけ、そして、流れが来るのを待て、と」
少年時代にかけられた言葉……。それを胸に、ローレンツは知識の研鑽を進めた。
そして……、流れは来たのだ。
「まぁ、そのような方がいたんですのね」
感心した様子で言うミーアに、ローレンツはそっと微笑む。
「はい。先代の皇妃さま……。あなたの、お祖母君にございます。ミーア姫殿下」
「まぁ、わたくしのお祖母さま……？　わたくしは、お会いしたことがありませんけれど……」
「面影が少しおありですよ。あの方も……、聡明な方でしたから」
「ほう……、わたくしのように聡明……」
ミーアは、ふむ、と頷いてから、神妙な顔で言った。
「それは、ぜひお会いしてみたかったですわね……」
……一切、聡明の否定はしない、ちょっぴりおこがましいミーアであった。

第九十五話　蛇とはなにか？

「さて……、少し話が逸れました。まだ、ご質問があるのではないですか？」
「……ああ、そうでしたわね」
ローレンツの様子に、ミーアは少しばかり姿勢を正した。
「混沌の蛇について……、あなたの知っていることを、すべて教えていただきたいですわ。蛇とは、どのような組織なのかとか……」
「組織……、ですか」
小さくつぶやき……、ローレンツは、わずかに考え込んだ。
「あら？　なにかおかしなことを言ったかしら？」
「そう、ですね……。混沌の蛇を組織と呼んでよいものか……、私には、判断いたしかねるところです……」
「ふむ、ということは、組織ではないということですの？」
首を傾げるミーアに、ローレンツは悩ましげに言った。
「そうですね……それは定義しだいだとは思うのですが……。少なくとも既存の邪教集団のように、まとまってはいないものだ、ということは、同意いただけるかと思います。各々が、各々の計画に従い、行動をしていく。時に協力することはあれど、そこに序列はなく、優劣もなく。ただ、それぞれが一つの方向性を持って動く……」
それから、ローレンツは一つ息を吐き、
「ですから、私は、混沌の蛇を一つの塊ではなく、一つの流れであると……、理解しています」
「流れ……？」
「はい。歴史の中に生まれた一つの流れ……、秩序を破壊し、世界を混沌に陥れる流れ……」
ミーアは、頭の中に川をイメージする。川を構成する水をいくら掬い取っても、流れを止めることはできない。もしも、バルバラや

ジェムが、水の一滴に過ぎないのだとすれば……、それは徒労に過ぎないのかもしれない。
「話が抽象的になりましたな。具体的な話をいたしますが……、混沌の蛇を構成する人々は主に四つの者たちに分類することができるでしょう」
そう言って、ローレンツは、大皿の上に、自らのそばに置かれていた焼き菓子を置く。上に小さな果実が乗った丸いクッキーだ。
――まぁ、あんなのありましたかしら？　タルトに夢中で気づきませんでしたわ。うう、美味しそう……。
真面目な話の連続に、早くも少し前に食べたタルトの糖分を使い果たしてしまったミーアである……って、んなわきゃあない！
それはさておき……、
「まず、私のように、脅されるなどして協力することになった、消極的協力者。次に、混沌の蛇を利用し、利を得ようとする者……、積極的協力者。例えば、初代皇帝陛下は私の見るところ、蛇の教義に共感したわけではない。蛇の教義を利用し、自らの目的を達しようとした、あるいは、蛇と自らの目的とが一致したから協力したか……。いずれにせよ、蛇に積極的に協力しようとする者がおります」
そうして、ローレンツは二つ目のクッキーを置いた。
「ふむ……」
腕組みしつつ、ミーアは頷いた。その視線の先にあったのは、ローレンツが置いたクッキーだ。
今度のものは、糸を編んで作ったメダルのような形をしたクッキーだった。
――なかなか、いい仕事してますわ……。イエロームーン公の家の菓子職人が作ったのかしら？
……ミーアの脳みそが甘いものを欲しているから、仕方のないことなのだ。そう、ミーアの脳みそが悪いのだ！
「さらに、蛇の教義に共感して主体的に行動する、いわゆる信者と呼ばれる者たちがおります。バルバラが連れてきた男たちは、恐ら

く信者たちでしょう」
ローレンツは三つ目のクッキーを置いた。今度のものは、全体に白い粉がかかった、まるで雪でデコレーションが施されたかのようなものだった。
見たことのないクッキーに、ミーアは興味津々だ！
――ああ、いけませんわ。話に集中しなければ……。えーっと、信者、そう、蛇の信者の話でしたわね？
「そして……」
と、ローレンツは、一度言葉を切り、最後のクッキーを手に取った。
それは、葉っぱの形をした、大きめのクッキーだった。
――まぁ……あのクッキー……、素晴らしいできですわ。見た目で楽しませ、舌をも楽しませるなんて、職人の鑑ですわね……。あ、そうですわ。馬型のクッキーとか、もしかして作れたりするのかしら？　あるいはキノコ型の……、ああ、そうですわ。キノコの下の部分はクッキーで作って、上の傘の部分はジャムかなにかでデコレーションをしたら……。
なにか、ロングヒットしてしまいそうな新しいお菓子のアイデアが生まれそうになったところで、ミーアはぶんぶん、っと首を振った。
――今は、混沌の蛇の話ですわ！　集中、集中……えーっと、蛇型のクッキーがどうなったんでしたっけ？
内心で、甘いものの誘惑との闘いを繰り広げるミーアをよそに、ローレンツは言った。
「蛇の教義、すなわち『地を這うモノの書』を教え広める者、蛇導士（じゃどうし）と呼ばれる者たちがおります」
ローレンツは、その葉っぱの形のクッキーをお皿に置いた。お皿の上に置かれた美味しそうな四個のクッキーにミーアが目を奪われていると……その目の前で……、ローレンツはクッキーをむんずっと掴み、ひょいひょいひょい、っと自分の口に入れてしまった。

むぐむぐっとクッキーを頬張り、美味しそうに笑みを浮かべるローレンツ。
じっくりと味わって食べてから、
「ふふふ、やはりクッキーは、チマチマ食べていてはいけません。こうして、一度に頬張ると、とても幸せな気持ちになれるのですよ」
満足げに言った。さすがは、ベテランＦＮＹリストである。
「……あぁっ」
悲しげな声を上げて、ミーアはしょんぼり肩を落として、黙り込んだ。
――うぅ、あれ、食べてみたかったですわ……。
「蛇導士……。それが、蛇の本体と考えてもよろしいのですか？」
ミーアが思索にふけっていると見たのか、隣からルードヴィッヒが言った。
「いや、そうではないな。ルードヴィッヒ殿。本体はあくまでも、人々の底に流れるもの、その人々を結び付けているものであると、私は考えている」
「それは……？」
「それこそが……、蛇の聖典……、地を這うモノの書だ」

第九十六話　……サクサク！

コトリ……。

ふいに、茫然自失状態のミーアの耳が、一つの音をとらえる。

それは、机の上にお皿が置かれる音。そちらに目を向けると……。

「あっ……」

先ほど、ローレンツが食べていたクッキーが山盛りになっていた！

どうやら、ビセットがタルトを食べ終えたミーアのお皿を下げ、代わりにクッキーを持ってきてくれたらしい。

――ふむ……、さすがは、敏腕執事！　できる男ですわ！

早速、クッキーに手を伸ばそうとしたミーアであったが……、ふと、ルードヴィッヒ、そして、ローレンツの視線が集まっていることを知覚する。ついでに、後ろからは、ディオンがニコニコしながら、ミーアに視線を注いでいる……。ニコニコしているはず……なのに、その目は……全然笑ってない！

――い、いけませんわ。ここは、ふざけて良い場面ではなさそうですわ。

ミーアは、ふぅ、っとため息を吐き、クッキーから視線を外した。

――そう……、クッキーは逃げませんわ。タイミングを見計らって食べればいいだけの話……。今は、その時ではありませんわ。

それからミーアは改めて、ローレンツとの会話を思い出す。サクサク……。

「……地を這うモノの書」

その名前には、聞き覚えがあった。

「ラフィーナさまが言ってましたわね。確かジェムという男が、写本を持ってたやつですわ……」

ミーア自身は実際に読んでいないものの、なんだか恐ろしげな本なのだなぁ、などと感じたことを、ミーアは思い出した。サクサク

……。
「はい、確かに写本ですが、あの者はそれを持っておりました」
「しかし……、それはいったいどんな書物なんですの？」
ミーアの問いかけに、けれど、ローレンツは首を振った。
「残念ながら、私も直接見たことはないのです。以前、ジェムが持っていた写本「国崩し」を唯一見ただけで……」
それから、ローレンツは苦笑いを浮かべた。
「どうも、バルバラは私のことをあまり信用していなかったようで。まぁ、実際、こうして裏切りを企んでいたわけなので、彼女の見立てに間違いはなかったわけですが……」
「そうなんですの……。それは残念ですわ……。しかし、人々を結び付けるとか、操るとか、まるで……魔法のようですわね。もしや、地を這うモノの書とは魔法の書なのかしら？」
そう言えばエリスの原稿に、そんなようなものが出てきたような……などと思い出すミーアである。サクサク……。
「魔法……でございますか……」
ローレンツは、きょとん、と首を傾げてから小さく笑った。
「あら、どうかなさいまして？」
「いえ、姫殿下の口から、魔法という言葉を聞くのは、いささか意外でしたので……」
それから、彼は表情を引き締めてから言った。
「しかし、なるほど、確かに魔法というのは言いえて妙かもしれません。それは魔法のように人々の心を変えてしまうもの。秩序を破壊する存在へと、その者の人生を変容させていく。その力は魔法と呼んでも差し支えないかもしれません。ああ、そんな顔をしないでくれ、ルードヴィッヒ殿」
と、そこで、ローレンツは、ルードヴィッヒの方を見て苦笑した。
「別に、私は魔法などという不可思議な力があると思ってはいないのだ。そんなものがなくとも、人の心を操ることは可能だと思うしね」

「まぁ、そのようなことができるというんですの？」
半信半疑といった様子で首を傾げるミーアに、ローレンツは笑った。
「そうですね……。例えば……、ミーア姫殿下は、本などは読まれるのでしょうか？」
「はて……？　本ですの？　まぁまぁ読むほうだと思いますけれど……」
ミーアは、ここ最近の読書遍歴を思い出した。サクサク……。
「最近ですと、友人が持っていた恋愛小説を楽しく読ませていただいておりますわ」
突如、自らの得意分野の話になったため、ミーアは少しばかり饒舌になる。
「特に、騎士と姫の恋愛が実に、こう……。湖のシーンがですわね、素晴らしくて……」
「ふふふ、なるほど。それでは……、その本を読んで、恋をしたいと思われましたか？」
「はて……恋ですの？　そうですわね……。確かに、ああいうものは素敵だと思いますけれど……」
ミーアは、妄想する。
アベルとともに湖の湖畔に行き……、夜、月が浮かぶ星空を見上げながら……。
イチャイチャと愛を語らいあう、ラブラブ空間を妄想して……。
――いい、いいですわ！　実にいい！
ミーアは、本に、大いに影響を受けていた！
「では、仮にの話ですが……、もしも、読んだ者にことごとく恋をしたいと思わせる……、そのような本があるとするならば、それは他者の心を動かす「魔法の書」ということになりはしませんか？」
「それは……」
思わず、ミーアは思わず考え込んでしまう。なるほど……、確かに、心を動かすだけであればそれは……普通の小説であっても問題

ないのかもしれない。サクサク……。
そう、恋愛に限らず、ミーアは知っているのだ。
あの絶望の地下牢において……、自分の心を少しだけ明るくしてくれた物語のことを。
エリスの書いた物語は、確かにミーアの心に影響を及ぼし、ただ絶望に暮れるだけだった日々を、ほんの少し変化させたのだ。
「しかしそれは、実際に現実を変える力などではないでしょう。魔法というのは、いささか、誇張のように思えますが……」
そんなルードヴィッヒの言葉に、ローレンツは穏やかな笑みを浮かべて、首を振った。
「ルードヴィッヒ殿、君は少し誤解しているな。いや、君だけではない。多くの知者は誤解しているのだ。我々の心と、現(うつつ)で起きる出来事は、君たち知者が考えるよりも遥かに関係が深いのだ」
そうして、ローレンツは瞳を閉じる。
「そも、世界を作るものとはなにか？　それは人だ。人が町を築き、国を築き、文化を築き、学問を築く……。では、人を支配するものは何か？　それは心だ。あるいは、その者の持つ価値観だし、世界観だし、信仰なのだ」
「つまり……、蛇の教典『地を這うモノの書』は、読む者の心に「秩序を破壊する欲求」を植え付ける……、そのような本だと、あなたはおっしゃるのか……」
ふと、そこで、ルードヴィッヒは首を傾げた。
「いや、しかし……、あのジェムという男が持っていた写本には、確か、国を滅ぼすための方法論が書かれていたのでは？」
ラフィーナの手によって回収された、教典の写本はいかに国を滅ぼすのか、という実践の書だった。
読者の心を洗脳する類の内容ではなかったのではないか？　と……、そんなルードヴィッヒの問いかけに、ローレンツは、深く首肯する。
「そう。あれに書かれていたのは実際的に、どのような行動をとれ

ば国という秩序を破壊できるのか……、その具体的な方法だった。だがね、ルードヴィッヒ殿、剣を差し出して憎き者を殺せと唆(そそのか)すのと、何も持たずに殺せと言うこと、どちらが誘惑として有効だろうか？」

ただ曖昧に国を滅ぼせと言われるのと、具体的な方法を提示して、このように国を滅ぼせと言われるのと、どちらが誘惑として有効だろうか。そんなものは……、考えるまでもない。

「そのようなものが……、あるのですのね。それで、それはいったいどこに？」

「蛇の教えを伝える者、蛇導士たちは、写本を常に持ち歩いていると聞きますが、それは、地を這うモノの書の一部でしかありません。また、高位の蛇導士たちは、その内容を一字一句記憶しているとも聞きますが……、その原本のありかははっきりとしたことが分かってはおりません」

その答えに、落胆するミーアであったが……。ローレンツは、重々しい口調で続ける。

「ただ、中央正教会に聖女ラフィーナさまがいるように、蛇たちにも、巫女姫と呼ばれる、蛇導士を取りまとめる者がいる、と聞いたことがあります」

「蛇の、巫女姫……？」

「ええ、そして恐らくは……、その人物が地を這うモノの書の本体を持っているのではないかと……」

ごくり……、と生唾を飲み込みながら、ミーアは……そっと近くのお皿に手を伸ばした。

今がタイミングだ！　と思ったのではない。我慢できなかったのだ。

そろそろ一枚ぐらい食べてもいいタイミングなはず……。

けれど……、その手はスカッと空振りする。

――あ、あら？　変ですわね、先ほどの美味しそうなクッキーは……？

と、視線を向けると……、
「ミーアさま……食べすぎです」
眉をひそめた顔のアンヌが、じっと見つめていた。
「タルトとクッキーを五枚……、お話ししながら、サクサク食べられていました」
「……はぇ？」
そんな馬鹿な……、と、ミーアは自らの口元を触った。
口の端に……クッキーの欠片がついていた！
――なっ、そっ、そんな、いつの間に……？
「これ以上、お食べになっては、太ってしまいます」
「でっ、でも……でも……」
無意識に食べてしまったせいで、まったく味わえなかったミーアである。
その顔が、ちょっぴり悲しそうな色を帯びる。っと、その目の前に、一枚のクッキーが差し出される。
「もう、ミーアさま……。最後の一枚ですよ」
困ったような笑みを浮かべるアンヌに、ミーアは満面の笑みを向ける。
「ああ、やっぱり、あなたは最高の腹心ですわ。アンヌ！」
……実にいつもの風景なのであった。

第九十七話　皇女ミーアの放蕩祭り１　～食いしん坊ですか？いいえ、矜持です～

イエロームーン邸での会合を終えて後、ミーアは、帝都ルナティアへの帰路を急いでいた。

パカラ、パカラっと馬車に揺られながら、ミーアは頬杖をついて、物憂げな顔をしていた。

「あっ、ミーアさま、ほら、ルナティアが見えてきましたよ」

久しぶりの帰郷とあって嬉しげなアンヌ。そんなアンヌに笑みを向けつつも、ミーアは、ローレンツとの会話を思い出していた。

――結局、核心部分までは、まだ遠いように思えますわね……。

ローレンツの口から出てきた蛇の巫女姫なる人物……。そして、その人物が持つという蛇の聖典、地を這うモノの書。

結局、得られた情報は、そういうものが〝ある〟というだけの話であって、いまいち状況は進展したとは言い難かった。

ローレンツがもっと深く蛇に傾倒していれば、より多くの情報が得られたかもしれないが、最初からあまり従順でなかった彼は、巫女姫に会ったこともないのだという。

「さて、蛇のことをなんとかできるのは、いつになることやら……」

「ミーアさま？」

ふと、気づくと、すぐ目の前にアンヌの顔があった。心配そうにミーアの顔を覗き込んでいる。

「あの、ミーアさま、どうかなさいましたか？」

「ああ……いいえ、なんでも……」

慌てて、誤魔化すような笑みを浮かべかけて……、そこで思い直す。

――そう言えばアンヌにもずいぶんと心配かけてしまいましたし……。ここは素直にお話しようかしら……。

アンヌに隠し事をするのは悪いような気がしたから、ミーアは自

らの心の内を話すことにした。
「イエロームーン公から、ずいぶんと大変なことを聞いてしまいましたわ……。結果、敵の大きさや得体の知れなさが際立つばかりで、ほとんど得るものがなかったな、と少し気落ちしてしまったんですの……」
「ミーアさま……」
アンヌは一瞬黙り込むが、すぐに首を振った。それから、ぐっと両手の拳を握りしめて……。
「胸を張ってください、ミーアさま。シュトリナさまは、救われました」
力強く、言った。
「ミーアさまがいなければ、シュトリナさまも、ローレンツさまも救われませんでした。だから、胸を張ってください。ミーアさまは胸を張るべきです」
その言葉に、ミーアは反射的に後ろを見た。彼女たちの馬車についてくる二台の馬車のことを。
その内、一台には、シュトリナとベルが乗っていた。
バルバラとのことですっかり消耗してしまったシュトリナ。そんな友人を励ますために、ベルが、帝都に同行することを提案したのだ。
――ふむ……、なるほど。言われてみれば確かにそうですわ。そこまで悲観するべきではないかもしれませんわね……。リーナさんを助け出せただけでも今回は良しとするべき。いいえ、むしろ、今回の目的はそれだったのですから、かえっておまけの情報まで得られたと考えるべきではないかしら……？
死んでいたかもしれない〝茸馬の友〟を助け出すことができたのだ。
その上、イエロームーン公爵を味方につけることができた。
彼が国外に脱出させていた、帝国貴族たちも、どうやら優秀な者たちのようだし、呼び戻すことができれば、きっと力になってくれ

ることだろう。
これからの、大飢饉の時代に、それはなんとも心強いことだった。
――それに、美味しいタルトやクッキーも食べられましたし……欲を言えば、もう一、二枚と言わず、五、六枚食べたかったですけど……。
なんだか、気持ちがスッと軽くなるミーアである。切り替えが早いところがミーアのいいところなのだ。
「そう、ですわね……。うん、悩んでいても仕方のないことかもしれませんわ」
ミーアは笑みを浮かべて、アンヌに言った。
「ありがとう、アンヌ。少しですけど、元気が出ましたわ」
「はい。ミーアさまが落ち込まれてるのは似合いません」
「あとは……、ラフィーナさまのところに送ったバルバラさんがなにか話してくれれば……。うふふ、毎日、お説教だなんて、さぞや嫌がることでしょう……あら？」
とそこで、帝都の街並みに目をやったミーアは気付いた。
大通りには、いくつもの出店が立ち並び、町はいつも以上に華やかさを増していた。
人の数も普段より多く、賑わいが帝都一帯を包んでいるかのようだった。
「ああ……、準備が進んでますわね」
ティアムーン帝国、年末の風物詩「皇女ミーアの生誕祭」
今年も、その準備は着々と進んでいた。
全五日の日程で行われるそのお祭りは、近隣国の貴族も招待される盛大なものだ。
ミーアもいろいろな貴族に挨拶回りをしなければならない。なにしろ、誕生日の主役なので、大忙しなのだ。
以前は……、ミーアはそれをちょっぴり疎ましいものだと思っていた。
いろいろな貴族のもとを訪れて、たくさんの歓迎を受ける……、

それを面倒に感じていたのだ。
けれど、今のミーアは知っている。それは、とっても贅沢なことであったのだと……。
たくさんの人に誕生日を祝ってもらって、お腹一杯美味しいものを食べるということ。
それは、とても幸せなことだったのだ。
毎日のように美味しいものを食べて、それを当たり前のことだと考えていた時には決して気付かなかったことなのだけど……。
そう、だから、ミーアがいつもたくさん食べるのは、決してミーアが食いしん坊だからではないのだ。食いしん坊だからでは決してないのだ。断じて食いしん坊だからなどではないのだ！
残すなんてことはできない、と、いつでも感謝してすべてを平らげるようにしているのである。
信念と矜持があるのだ！　……ＦＮＹリストとしての。
そんな残さず食べる主義のミーアにとって、自身の生誕祭は感謝して喜ぶべきものではあるのだが……、同時に少々悩ましいものでもあった。
なぜなら……。
――やっぱり、もったいなくはありますわね……。
ミーアは知っている。
誕生祭の時、ミーアがお呼ばれする先では、大量の余った食べ物が廃棄されているのだということを。
貴族というのは、見栄で生きるものだ。
そして、どれだけの食べ物を集め、無駄に捨てられるかというのは、その者の力と気前の良さを表すものだと考えられている。
この時期、帝国貴族たちは、みながみな、競って豪勢な宴会を催すのだ。皇女ミーアの誕生を祝うために、皇帝に、ミーアに、そして周囲の者たちに、精いっぱいのアピールをするのだ。
が……、
――そう言えば、この時に捨てた食べ物があればって、何度も思

うことになりましたわね……。
ミーアは、久しぶりに、前の時間軸のことを思い出した。

第九十八話　皇女ミーアの放蕩祭り2　～ミーアの悔恨～

それはミーアが革命軍の手に落ちる半年前の出来事だった。
その日、ミーアは閑散とした宮殿内を歩いていた。各部を眺めながら、ミーアは深々とため息を吐いた。
「あの美しかった白月宮殿が、このように活力を失ってしまうなんて……。考えたこともありませんでしたわ……」
彼女の後に付き従う者はただ一人。メガネの青年文官、ルードヴィッヒ・ヒューイットのみだった。
そのままバルコニーに出たミーアは、そこから帝都の街並みを見下ろしつつ、再び盛大にため息を吐いた。
「帝都も酷い状況ですわね……」
「未来が見えていないことが一番の問題です。大飢饉に疫病、ルールー族との内戦、各地の暴動……。あまりにも絶望が大きすぎて、明るい未来が見えない。みな生きる気力を失い、自暴自棄になっています」
ルードヴィッヒの言葉を聞きながら、ミーアは嘆きの独り言をこぼす。
「なんてことですの……。たった二年前のわたくしの誕生祭の時には、あんなにも食べ物が余っておりましたのに……。捨てるほどあった食べ物は、どこへ消えたというんですの……？」
今や、ミーア自身が食べるのに困るような状況である。腹ペコミーアなのである。
「食べ物が無限に湧き出す壺があるわけではない、と、気付くのが少し遅かったということでしょう」
ルードヴィッヒは呆れ交じりに首を振った。
その事実に気付いている貴族が、もっといれば……このようなことにはならなかったというのに……。

「うう、ぐぬぬ……。食べた物はともかく、よもや無駄に余らせて捨てるなどと……。あっ、あんなもったいないことを、みすみす許してしまうだなんて……。一生の不覚ですわ。ああ、今からでも、あの時に戻って、やめさせたいですわ」

ギリギリと歯ぎしりするミーアに、ルードヴィッヒは小さく肩をすくめた。

「それはどうでしょうか。先のことが分かっていれば、納得するかもしれませんが、誰も、このような飢饉が起きることを知らぬ場にあっては説得できたかどうか……」

「わたくしの命令ですわよ？　いったい、誰が逆らうことができまして？」

キッと睨み付けてくるミーアに、ルードヴィッヒは再び首を振った。

「ミーア姫殿下のご生誕を祝うために、最高の用意をせよ……と陛下から勅命が出ておりましたから。いかにミーア姫殿下といえど、分が悪いでしょう？」

と、そこまで言ってから、ルードヴィッヒはわずかに考え込む。

これは、あくまでも雑談。言ってしまえば無駄なＩＦのお話だ。

けれど、それを通して得られるものもあるかもしれない。正論をぶつけて、ミーアの意見を封殺するなど、詮無き事。それならば、この会話も有意義に使うべきだろう。

ということで……、しばしの沈黙の後、ルードヴィッヒは言った。

「そうですね……。相手の希望していることを真っ向から批判するのではなく、方向性を変えるという程度ならできるかもしれませんが……」

ちらり、とミーアの方を見ながら、彼は言った。

それは、ルードヴィッヒが課す教育の一環だった。

これから先、帝国を立て直そうと思った時、ミーアは幾度も交渉の場につかなければならないだろう。それも、かなり厳しい交渉の場に……。

本来、その手の交渉に姫が出張って行くようなことはあり得ない。どこぞの月省の文官か、宰相か、大物貴族か……。ともかくそれは、姫が為すべきことではない。

しかし、今は平時ではない。

もしも皇女が出て行くことで事態が打開できるのであれば、当然、そうしてもらう必要がある。

そしてミーアは……、なんだかんだ言いつつも、自身が交渉の場に足を運ぶことを厭わない。それ以上に、ミーアは……、一応はルードヴィッヒの言葉に耳を傾け、自分にできる範囲で努力しようとする。その姿勢だけは見せる。一応は……。

だからこそルードヴィッヒとしても、ついついミーアの成長を期待して、教育を施そう、などという気になってしまうのだ。

「ふむ……、なるほど。相手の希望の方向を変える……。それは具体的にはどうすれば……」

腕組みして考え込んでいる……ように見えるミーア。そんなミーアを横目に見つつ、ルードヴィッヒは思った。

――まぁ、あまり意味のある考察とも思えないが、こうして考える癖をつけることは、一応は意味があるだろう。いずれ、この窮地から帝国が立ち直った暁には、もっと頭を使う機会は増えていくだろうし……。

けれど……残念ながら、そんな時は訪れることはなかった。

ルードヴィッヒの配慮も、頭を悩ませたミーアの努力も……、すべては革命の火に焼かれ、断頭台の露と消えるのだから……。

でも……、それでも……。

その日の彼らの会話のすべてが無駄になることはなかった。

その記憶は、今日、馬車の中で黙考するミーアへと、きちんと受け継がれたのだから。

――ふーむ……、なるほど。確かに、その場に際してみて思いますけれど、節約しろとは言い難いですわ。お父さまを説得するのも

難しそう。でも……、みすみす食べ物が捨てられるのは避けたいところですわね。なんとかできないものか……。
ミーアは考える。
――余らせない一番の方法はわたくしが食べてしまうこと……。でも、正直、わたくしも、そんなにたくさんは食べられませんし……。ああ、小食の我が身が憎いですわ。
自称小食の姫殿下は必死に考える。考えて、考えて、甘いものが欲しくなってきて、考えて……。
「……相手の希望の方向性を少しだけ変える、か……。ふむ、それならば……」
やがて、一つの答えに至る。
「そうですわ……。気前よくお金を使いたいのでしたら、いっそ……」
と、タイミング良く馬車は、白月宮殿の前に着いた。
「ああ、着きましたわね」
つぶやきつつ、ミーアは後ろの馬車を再び見た。
シュトリナとベルが乗った馬車は、いったん、アンヌの実家の方に行ってもらっていた。
ベルを皇帝に見せるわけにはいかないからだ。
ミーアたちについてきたのは、もう一台の馬車の方。そこには、アベルとシオン、二人の王子が乗っているのだ。
――こうして、帝国までついてきてくださったわけですし、歓待するのが礼儀というもの。頑張らなければなりませんわね。
イエロームーン邸についてきてくれたばかりか、ミーアの誕生祭に出て祝ってくれるという二人を、しっかりと歓迎しなければ……、と。ミーアは気合を入れていた。
……そんなミーアだったから……、予想していなかったのだ。
油断があったのだ。
まさか帝都のど真ん中……、白月宮殿の前に、そんな罠が待って

いるだなんて……微塵も想像できなかったのだ。
迂闊だったとしか、言いようがないことだった。
それは、今まさにミーアを突き刺す刃となって、彼女の身に迫りつつあった。

次回、ミーア、白月宮殿にて、死す……！
……羞恥心に刺されて。

第九十九話　皇女ミーアの放蕩祭り３　～白銀のミーア、帝都にそびえ立つ～

「あら……？　あれは……」
白月宮殿においても、ミーアの誕生祭の準備は進んでいた。それはまぁ、いい。
城壁にはきらびやかに、飾り布が垂れており、そこには、でかでかとミーアの名前が書かれているのも、まぁ、いつものことといえばいつものことだ。
問題なのは……、その前。
白月宮殿と並ぶようにして立つ、白くて巨大な……、ミーア像だった！
「なっ……ぁっ！」
ミーアは、ひきつった顔で言葉を失う。
――なっ、なんですの？　あれは……いったい！
さらに、
「ほら、そこの部分をもう少し削らないと、ミーアの可愛さが出ないではないか。ああ、そちらは気をつけてな。その、丸みを帯びた、ちょっぴりふくよかなところが実にミーアらしく……」
その陣頭指揮をしているのは、他ならぬティアムーン帝国皇帝、マティアス・ルーナ・ティアムーンその人だった。
最前線にてアグレッシブに奮闘する父の姿を見て、ミーアはさらに息を呑んだ。
頬がカッと熱くなるのを感じつつ、いそいそと馬車を降りるミーア。後ろの馬車からは、アベルとシオンが降りるのが見えたが、今はともかく、目の前の問題を片づけるべく動く。
ずんずん、っと歩み寄るミーア。そんなミーアの気配を察したのか、マティアスは振り返り……、
「おお、戻ったか。ミーア！」

満面の笑みを浮かべて、駆け寄ってきた。
「ご機嫌麗しゅう。陛下。ただいま戻りましたわ」
スカートをちょこん、と持ち上げて頭を下げるミーア。とりあえず、挨拶をしておく。その完全無欠な挨拶に、しかし、マティアスはものすごーく不満げな声を上げる。
「むっ！　愛しの我が娘（マイスイート）よ。陛下などと他人行儀な。いつも通りパパと呼びなさい、パパと」
「ぱっ、普段からパパなんて呼んでおりませんわっ！　お父さま、いい加減なことを言わないでくださいまし！」
ミーアは頬を真っ赤にして、思わず悲鳴を上げる。
なにしろ今のミーアは、父親と二人きりではない。
彼女の後ろには、二人の王子が控えているのだ。
ミーアが恐る恐る後ろを振り返ると……、アベルがぽかんとした顔でミーアの方を見ていた。一方、シオンは、口元を押さえて笑うのをこらえている。
――ぐ、うう、くっ、屈辱ですわ。恥ずかしい！　こっ、このような辱めを受けるだなんて……。
などと思いつつも、ミーアは問いたださずにはいられなかった。
「それより、お父さま、これはいったい何なのですか……？」
震える声で、ミーアは言って、それから改めて、ソレを見上げた。
ソレ……もちろん、そびえ立つ純白のミーア像である。
「おお、これか。実はな、お前に喜んでもらいたくて用意していたのだ。雪像というらしい」
マティアスは誇らしげに像を見上げながら言った。
「過日、ベルマン子爵の訪問を受けてな。聞いたぞ？　なんでも、ミーア学園には木製のミーア像を設置する予定というではないか」
「聞いてませんわ！　初耳ですわ！」
ミーアは前にベルマンが、巨大黄金像を作りたいと言っていたのを思い出す。
てっきり諦めたものとばかり思っていたが……、まさか、諦めて

いなかったとは……。
「それを聞いて、ぜひ、帝都にも欲しいと思っていてな。そんな折に、この雪で作る像の噂を聞いてな……調べたのだ」
実にフットワークが軽い。やる時はやる皇帝なのである。
そんなことに力を入れなくってもいいのに、と思わなくもないミーアである。
「で、ですが、帝都には雪は降っていないはずですわ……」
未だに、疑問は解消されていない。ここまでの道のりで、雪を見た記憶はなかった。
なるほど、確かに雪が降ってもおかしくはない寒さではあるし、一度雪が降れば、しばらくは溶けないであろうことは想像できる。
けれど肝心の雪自体は、しばらく降っていないはずなのである。けれど……、その疑問を受けて、マティアスは、なぜだか、得意げな顔で言った。
「ミーアが懇意にしているギルデン辺土伯に頼んで、雪を運んでもらったのだ。帝国の北方では、すでに雪が降っていたからな。積極的に協力してくれたぞ」
ギルデン辺土伯……、ガヌドス港湾国からの帰り道に、ミーアが仲間に引き入れた辺土貴族である。
――ベルマンにギルデン……うぐぬぬ……、あ、あいつら、余計なことを……。ゆ、許しませんわ！
ギリギリギリと、内心で歯ぎしりしつつ、ミーアは改めて、その『ミーア雪像』を見上げた。
それは、妖精のような格好をしたミーアを象ったものだった……なんというか、こうして見ると実になんとも、出来が良かった！顔の造形や、髪の一本一本の作りこみなど、細かな部分にこだわりにこだわった芸術品のような逸品である。
――こんなの作れるのですわねー、芸術ってすごい……。
などと、ミーアが若干、現実逃避してしまったとしても、無理のない話だった。

しかも、ところどころが微妙に美化されていて、こう……ありていに言ってしまうと実物のミーアよりだいぶ美しくデフォルメされている。実物のミーアがギリギリ美少女だとすれば、その雪像は文句なしの美少女、かなり盛ってあるのだ。

さらにさらに、なんと言ってもでかい！己が存在を誇示するようにそびえ立つ巨大雪像は、白月宮殿の高さにも匹敵するほどの身長を持っていた。

これならば、ここにそれがあると知ってさえいれば、帝都のどこからでも、それを見ることができるのではないだろうか……。

さて……、少し想像していただきたい。ものすごく美しくデフォルメされた自分の像、そりゃーちょっと盛り過ぎと違いますか？

というほどに美しく脚色を施された雪像……、しかも、城ほどの大きさのある像が、目の前にそびえ立っているのである。

その制作の陣頭指揮に立っているのが、他ならぬ父親なのである。

どう思われるだろうか……？

お年頃のミーア的には、ぶっちゃけ、ものすごーく恥ずかしかった！

――こっ、こんなの、アベルたちに見られたら、死んでしまいますわ！

これを見た人間はきっと思うだろう。

帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、自己アピールが激しい、ちょっぴりイタいヤツなのかな？　と。しかも、その美しさを見た後で、現実のミーアを見たら、きっと生暖かい笑みを浮かべることだろう。

『あー、これがミーア姫か。まぁ、うん。えーっと、とても言いづらいけど、さすがにちょっと……盛りすぎじゃね？』

などと、思いながら……。

――こっ、こんなの二人には見せられませんわ。絶対絶対、見せられませんわ。

ミーアとしては、すぐさま踵を返して、王子二人の目を塞ぎたい

ところだが……、時すでに遅し。
二人の王子は、その見事な雪像を見上げて、びっくりした顔をしている。
嗚呼、いっそ空から星でも落ちてきて、世界が終わっちゃったりしないかしら？　などと現実逃避モードに入ってしまうミーアであった。
……羞恥心は姫を殺すのだ。
これ以上、それを見ていることは精神衛生上よろしくない、と早々に察したミーアは話を変えるべく、マティアスに話しかける。
「んっんん、それはさておき、お父さま……」
「久しぶりなんだから、パパと呼んでくれてもいいと思うのだがな……。どうだろう？」
「お・と・う・さ・ま！　真面目に話を聞いていただきたいですわ。えーっと」
ミーアは振り返り、後ろに立っていた二人の王子たちの方に体を向けて言った。
「わたくしの同級生のアベル王子と、シオン王子ですわ。わざわざ、わたくしの誕生祭に参加するために、同行してくださったんですの」
そうして、にこにこ笑うミーア。
「むっ……」
ミーアの様子を見て、マティアスは、わずかばかり表情を厳しくした。
「そうか……。我が娘の誕生日を祝うために……な」
それから、むっつりとした顔のまま二人の王子に歩み寄り、
「遠路はるばる、よく参られた。マティアス・ルーナ・ティアムーンである」
鋭い視線を向けた。
視線を受けて、アベルは足を引き、礼の姿勢をとる。
――これが……、ティアムーン帝国の皇帝陛下、ミーアの父君か

……。
その威風堂々とした態度に、アベルは小さく息を呑む。
戦士である自らの父とは、また違った雰囲気。
こちらを見定めようとするかのごとき、その鋭い視線に、自然と背筋が伸びる。
チラリとシオンの方を窺いそうになって、思わず、アベルは自分に呆れる。
――気後れするな！
挨拶の順番から行けば、レムノ王国はサンクランド王国の後……。それが順当というものだ。
大陸において、ティアムーンと並び立つ大国はサンクランド。レムノはだいぶ格が劣る。
しかも自分は第二王子。第一王子にして、王位継承権第一位のシオンよりも、格段に劣る存在で……。
――だが、それがどうした？
ミーアが信じると言ってくれたのだ。ならば、その気持ちに応えなければならない。
尻込みしている暇などないのだ。
「レムノ王国第二王子、アベル・レムノです。ミーア姫殿下とは、共に生徒会の任にあたらせていただいております。以後、お見知りおきを」
凛と顔を上げ、皇帝マティアスを見つめる。と、アベルに続くように、シオンも声を上げた。
「お初にお目にかかります、陛下。サンクランド王国第一王子、シオン・ソール・サンクランドでございます。彼と同じく、ミーア姫殿下とともに、セントノエル学園生徒会の任にあたらせていただいております」
二人の王子の挨拶を受け、マティアスは静かに腕組みをした。
――ふむ……、アベル・レムノ……。レムノ王国の第二王子か…

…。

マティアスは、じっくりとアベルを観察する。

――鋭い眼光、隙のない立ち姿……、騎士の趣のある少年だ。確か、レムノ王国は軍事力を強化しているとの報告があったな……。第一王子の方が剣の腕が立つという話だったが……、なかなかに凛々しい顔立ちだな。

次に、マティアスはシオンへと目を向ける。

――そして、こちらがサンクランドの第一王子。シオン・ソール・サンクランドか。華やかな容姿と隙のない姿勢。爽やかな印象を受ける少年だ。なるほど、これならば貴族の子女が放ってはおくまい。

頭の中の情報と照合していく。

そうなのだ、マティアスは近隣の有力貴族や王子たちの情報を、きちんと記憶しているのだ。

なんのためか？　決まっている。ミーアの婿探しのためだ！

――レムノ王国の第一王子は粗暴者との噂があったな。だが、見たところ、このアベルという少年には、その雰囲気はない。しかしミーアは優しい子。私のように、温厚な者を好きになるはずだ。昔は、私と結婚すると言っていたし……。

ふむ、と鼻を鳴らしつつ、マティアスはシオンの方を見た。

――ということは、ミーアの本命はこのシオン王子の方か。いや、だが、いかにも婦女子の人気が高そうな少年にミーアが飛びつくだろうか？　そんな軽薄なことをミーアがするか？　否、しない。なにしろ昔は、私と結婚すると言っていたし……。もっと堅実な男を好むはずだ。

ふむ、と再び頷き、マティアスは思った。

――よしんばこの二人のうちのどちらかが、ミーアと恋仲になるにしても、あと五年、いや、十年は男を磨き、ミーアに相応しい男になってもらわねばならんな……。ミーアと釣り合いが取れるようになるのは不可能ではあっても、せめて、その足元ぐらいまでは到達してもらわなければ……。

などと……実にしょーもないことを考えつつ、腕組みするマティアスに、ミーアが横から話しかけた。
「そうですわ。お父さま、わたくし、今年の誕生祭について、とっても素敵なことを思いついたんですの」

第百話　皇女ミーアの放蕩祭り４　～希望の灯・奇跡の思い出～

「して、素敵なこととは、なにかな？　ミーア」
そう言って、皇帝はなんとも柔らかな笑みを浮かべた。そんな父に、ミーアは若干ドヤァっとした笑みを浮かべながら言った。
「はい、実はわたくし……、この度の誕生祭、みなさんにお祝いしていただきたいと思っておりますの」
胸を張って、そんなことを言う。
「む？　それは当たり前のことではないか？」
不思議そうに首を傾げるマティアス。しかし、ミーアは首を振った。
「貴族だけではありませんわ。この帝国に住まう臣民すべてに、わたくしの誕生日をお祝いして、喜んで、楽しんでいただきたいんですの」
「それもまた当たり前のことだ。ミーアの誕生を祝わないなどと、そのような不敬なものは極刑に処すと命令をくだ……」
「そうではありませんわ。お父さま、それでは強制することになってしまう。わたくしがしたいのはそういうことではございませんわ」
ミーアは静かに首を振った。
「ほう、では、どうすると？」
「簡単ですわ。みなで……美味しいものを食べればよろしいんですわ」
そうして、ミーアはにっこにこと笑みを浮かべた。
「わたくしが求めるのは、みなでお腹一杯に食べること。民の、ただの一人でも空腹でいることは許さない。みな、食べて飲んで、楽しく過ごしていただきたいんですの」
その言葉を聞いて、マティアスは、少し驚いたような顔をした。
「毎年、気になっておりましたの。貴族のみなさんは、わたくしの

ためにたくさんのご馳走を用意してくださいますわ。けれど、とてもとても、わたくし一人では食べきれませんし。お客さま方も、そこまでは食べない。だから、たくさん余ってしまいますわ。でも、そんなの、わたくしちっとも嬉しくなんかありませんの。それよりは、臣民に喜んでもらった方がよほど嬉しいですわ」

そう語るミーアに、皇帝は、うるるっと感動の目を向けていた。

「わたくしは、わたくしのために食料を無駄に捨ててしまうより、みなに食べて、笑顔になってもらいたいですわ。その方がお祭りに相応しいって思うんですの」

「ああ、ミーア。我が娘は、なんと優しいことか……。よぅし！ミーアの気持ちはよくわかった。早速、各貴族に触れを出そう。領民を招き、そこで用意している食事をふるまうように、と。その町に、誰も空腹の者がいないように、広場に宴会の用意をせよ、と」

父の言葉を聞いたミーアは、心の中で快哉を叫んでいた。

――ふふ、上手くいきましたわ。考えてみれば簡単なこと……。無駄に捨ててしまわずに、民の者たちに〝食い溜め〟をしてもらえばいいのですわ。そうすれば、ちょっとぐらい食料の供給が滞ったところで、なんとかできるはず！

……んなわきゃあない。のではあるけれど、この場所に、読心術の心得がある者が一人もいないのが、不幸なことではあった。

――これは……。

ルードヴィッヒは……、目の前でミーアがやったことを、ある種の感動をもって眺めていた。

貴族たちの無駄遣いについては、ルードヴィッヒも気にはなっていたのだ。

誕生祭において、無駄に捨てられる大量の食料……。ミーアの予言の通り、来年の収穫は減少傾向にある。もしも、本当に飢饉が来るとするならば、食料を無駄にすることが許されてよいはずがない。

けれど……、それを止めるためにどうするのか……というアイデ

アはルードヴィッヒにはなかった。
実際的に、すでに、宴会のための料理の用意は始まっている。今から節約せよと言ったところで、食材を腐らせてしまい、結局は無駄になってしまうだろう。
それに、ミーアの誕生を祝うこの年末のお祭りは、皇帝が主導して行われるものだ。それに反することはミーア自身でも不可能に違いない。
また、お金を動かすという意味においても、誕生祭は無視できないものだった。各地から商人たちが集まる、この祭りを開く意味は小さくはないのだ。
だから、やむを得ないかと思っていた。
どちらにしろ毎年やっていることだ。無理に変えると混乱が起き、問題も大きいから、現状維持で仕方がないと諦めていたのだ。
それがどうだろう……。ミーアは、いとも簡単に解決策を提示する。
――無駄に捨てさせるよりは、それを民の腹に入れてしまおうとは……。
盛大に金を使い、気前のいいところを見せたい貴族たち……。その願望をしっかりと理解して、方向性を少しだけ変えてやるというミーアの手腕……。その見事さに、ルードヴィッヒはうならざるを得ない。
――なるほど、考えてみれば、節約するように言ったところで、貴族たちは、きっと自分のためにしかその食物を用いないだろう……。
ここで無駄を咎めたところで、その貯えが民のために使われるとは限らない。ならば、いっそ貴族には使わせてしまえば良いのだ。そして、それを無駄とすることなく、民のために使わせれば良い。
ミーア自身が「民が腹いっぱい食べることを望む」と言ったことで、貴族は、ミーアの希望を叶えるべく気前よく料理を用意し、民衆は、美味い料理をたらふく食べることができるというわけだ。

――言うなれば、それは次善の策。飢饉に向けて蓄えておくのが最善であることは変わりはないが……それが無理であればすぐさま次の打開策を打ち出す。相変わらず、ミーアさまの智慧の泉は枯れることを知らないな……。

感心しきりのルードヴィッヒである。実に、いつもの光景であった。

さて、かくして後の世に言う「皇女ミーアの放蕩」と呼ばれる誕生祭は始まった。

ミーア的には「無駄になるぐらいならみんなで食っちまおうぜ！」程度の、軽い思い付きでなされた提案だったが……それは、意外な効果を生み出した。

当初ミーアが考えたような“食い溜め”であるが……、もちろんそんなことはできない。当然のことである。

……でも、記憶は残った。

それは、とても楽しい記憶だった。

民衆にとって貴族とは税を搾り取っていくもの。目に見える形で、なにかをもらうなどということは、ほとんどないことだった。

されど、この時は違ったのだ。

皇女ミーアの名のもとに、帝国臣民はただの一人も漏れることなく宴会へと招かれたのだ。ミーアの誕生を祝うために。

食事と酒が無料でふるまわれた。そうして、彼らには一つの命令が下された。

今日を楽しむように。今日という日を喜び祝うように……と。

それは皇帝からの勅命だった。

当然、逆らうことなどできず、集まった者たちは、仕方なく微妙にひきつった笑みを浮かべて祭りを楽しんだ。

仲が悪い者もいたが、今日のところは仕方ない。文句の一つも言いたいのをこらえ、笑って、皇女の誕生を祝った。

その内、酒が回ってきたのか、一人の男が歌を歌い始めた。陽気

なリズムに誘われて、若者たちがダンスを始める。
雰囲気に乗せられた商人が、名を売るためもあって、酒をひと樽だけ供出した。それを見ていた別の商人がそれならばうちは、と、つまみを提供。人々も家に残っていた食べ物を見知らぬ人々にも振る舞い始めた。
そんな賑わいの中に、その日の主役、ミーアを乗せた馬車が通りかかったりした日には、祭りは大いに盛り上がった。
人々の間にあったわだかまりは……、無理矢理に浮かべた笑みの中に溶け、そうして偽物の笑顔は、いつしか本物の、楽しい笑顔へと変わっていった。

それは……不思議な時間だった。
ただの一度も帝国に訪れたことのなかった、奇跡のようなお祭りだった。
なによりそれは楽しい記憶だった。
町民も商人も富む者も富まざる者も、仲の良い者も悪い者も、老いも若きも男も女も、すべての者が一人の少女の誕生を祝ったのだ。
その日のこと、楽しかった記憶は人々の心に深く刻み込まれた。
そしてそれは、苦しい時に人々を照らす希望の灯となった。
皇女ミーアは貴族だけではなく、きちんと自分たちに目を向けてくれる人。
身分に関係なく、自らの宴へと招いてくれる気前のいい、優しい人。
だから、頑張ろうと。
今は苦しいかもしれない。けれど耐えれば、また、あの時の楽しい時間が帰ってくるかもしれない。
それを目指して頑張ろう、と。
皇女ミーアが用意してくれる楽しいひとときを、また、味わうために。
その後、何度か帝国を襲った危機の時にも、人々は士気を失うこ

とはなかった。
今を耐え、今年の終わり、またあの楽しい祭りを味わうために。
いつしかそれは、帝国の新たなる伝統行事となっていくのだが……。
それはまた別のお話なのであった。

第百一話　至高の色を身にまとい

ミーア誕生祭、その始まりの日に、白月宮殿では盛大な舞踏会が催される。

帝都ルナティアに集った大勢の貴族たちは、こぞって参加すべく、宮殿に集まってきた。

宮殿の入り口、城門で、初めに彼らを出迎えたものは巨大なミーア雪像だった。

「ほぉ、これが噂の……」

見上げるほどに壮大で、なおかつ細部までこだわりにこだわり抜いた芸術的一品。

その完成度の時点で、すでに人々の目を引くのに十分な出来ではあったが……。貴族たちが感心したのは、別の点だった。すなわち……、

「これほどのものを、雪で作るとは……さすがは陛下だ」

極めて完成度が高い彫刻を、暑くなれば溶けてしまう雪で作ろうという趣向……、これがたいそう貴族たちにはウケたのだ。

「なるほど……下手に黄金などで作っては野暮というもの。ちょっとしたことで崩れ、消えてしまうものに、これほど細工を施して労力をかけてる、ふふふ、儚くも切ない、何とも言えぬ風情がございますな」

「まさにまさに……」

儚く消えるもの、泡と消える夢に金をかけてこそ、真の金持ちというもの。

金を払った分の見返りを得るなど、ケチな商人のすることである。

「しかし……、このモデルとなっている姫殿下は、ずいぶんと野暮なことをおっしゃったとか……」

「さよう。民衆など捨て置けば良いのに。ずいぶんな入れ込みよう

とか」
今回の誕生祭のお触れもそうだが、それ以前のミーアの行動も、彼らの目には非常識な行動に映っていた。
貧民など放置すればよい。新月地区という住処を与えているのだから、わざわざ汚物に手を伸ばすがごとき行いをする必要はない。
それを、自分たちから寄付を募り、病院を建てるなど無駄もいいところ。
彼らの目には、そのように映っていたのだ。
「まぁ、未だ幼い娘なればこそでしょう。それに、帝国皇帝になるのは男児が慣例。将来的にはやはり、ブルームーン家のサフィアス殿が次期皇帝として有力かと……」
「いやいや、レッドムーン家にも男子は豊富。武門の家なれば、これからの帝国を率いていただくにも心強い」
などと言い合う彼らの頭には、初めからミーアが帝位を継ぐという選択肢はない。皇帝の血縁、四大公爵家のいずれかの男児が帝位を継ぐものと信じて疑わない。
古き慣習に縛られた彼らにとって、女帝の擁立など思いも寄らぬこと。皇女ミーアには、いずれ、どこぞの国にでも嫁いでもらえれば文句はない。その時までに尊き血筋の者としての常識を身に着けてもらえれば……、などと思っているのだ。
そんな風にして、こっそりよからぬ相談を繰り広げつつ、彼らは会場に足を踏み入れた。
「ほぅ……」
毎年のこととはいえ、そこに広がる光景に、彼らは思わず息を呑む。
会場の真ん中に置かれた巨大な円卓。そこに並べられた料理は、帝国の姫の誕生を祝うのに相応しく、贅を極めたものであった。
並ぶ料理は、すべて料理長が全身全霊をかけて作ったもの。精緻を極めたそれはまさに、食べる芸術品と呼んでも差し支えのないものばかりだった。

「さすがは、ミーア姫殿下の誕生晩餐会。毎回、この豪勢さには、ため息が漏れてしまいますな」
「そうですな……。いつもながら素晴らしい料理の数々……」
「先ほど食しましたが、いや、なかなか。料理長の腕の冴えといったところでしょう」
などと、笑いあう彼らは……知らない。
今年の晩餐会の料理が、どれほどの創意と工夫のなされたものであるのかを。
実は、今年の料理……、ミーアの強い要望を受けた料理長が、苦心の末、例年の五分の二程度の費用で調理しているのだ。
「わたくし、安い材料で美味しいものというのが、食べてみたいんですの」
そーんなミーアのかるーい感じのお願いを真面目に受け取り、料理長は頑張ったのだ。材料費を押さえつつ、貴族たちの舌を満足させる、それはまさに究極の一品と言える。
もっとも……それは中央貴族の舌がアテにならないという話でもあるのかもしれないが……。
ともあれ、料理長の一品に舌鼓を打ちつつ、彼らが談笑していると……、不意に、周辺の明かりが暗くなった。
「おお、どうしたというのだ？」
ざわめきが、波のように広がっていった次の瞬間……っ！
「ご機嫌よう、みなさま。本日は、わたくしの誕生日をお祝いするために、いらしていただいて感謝いたしますわ」
今宵の主役が登場した。
「お……おお、あれは……」
その姿に誰もが、目を奪われた。
会場の扉から現れた人物、ミーア・ルーナ・ティアムーンの、まばゆい姿に、みな度肝を抜かれていたのだ。
まるで、仄かな輝きを放っているかのよう――否！　事実として、ミーアは輝きを放っていたのだ！

淡く輝くは白金色の髪、ミーアが動くたび、サラリと流れては美しく煌く。ふっくら健康そうな頬も、細く華奢な首筋も、綺麗に浮き出た美しい鎖骨までもが、ことごとく、ぼんやりと光を放っている！

そう……それはあの日、ミーアの命を救ってくれたもの……、湯けむり入浴剤の効果だった。

今のミーアは、その身にまとう発光性の成分によって物理的に輝いているのだ。

「なんと美しい。輝くほどに美しいとはまさにこのこと……」

などとつぶやいている者がいるが、否である。輝くほどではなく、事実として輝いているのだ。

その上……、今日のミーアには……ほのかに大人の魅力があった！

なぜならば……、

「あの紫色のドレスの仕立ても、実に見事ではないか……」

貴族たちが驚いたのが、そのドレスの色合いだった。

高貴なる紫色のドレスを、今日のミーアは身に着けていたのだ。

普段から明るい色のドレスを着ることが多かったミーアである。昨年も、可愛らしくもどこか子どもっぽいドレスを身にまとっていた。

ゆえに、そのドレスのセレクトは、その場の貴族たちに、ある種の衝撃を与えた。

そうなのだ……。今日のミーアは、サラサラの髪とすべすべのお肌に加え、物理的な輝きと高貴な雰囲気までも身にまとった、まさに、文句のつけようがないお姫さまだったのである！

だが……、その美しさに息を呑んだのも一瞬のことだった。

貴族たちは、直後に考え始める。

ミーアが、高貴なる色である紫色のドレスを身にまとった意味を……。

至高の色である紫は皇帝の色。ゆえに皇女であるミーアが紫色のドレスを着たとしても不思議はない。不思議はないのだが……。

自らの誕生祭、大勢の貴族たちを目の前にして、至高の色をまとうこと……、その裏に、どうしても彼らは意味を感じてしまう。
それはすなわち……、自らが帝位を継がんとする、意志の表明なのではないか、と……。
そして、彼らのその予想を裏付けるように、さらなる衝撃が待ち構えているのだった。

……ちなみに、ドレスの色が紫色になったことは、ここ最近のミーアの食生活と無関係ではなかった。
そう、紫色は――収縮色！
世の中には膨張して見える色もあれば、収縮し、縮んで見える色もある。
それは、イエロームーン家での出来事以降、ちょっぴり食べ過ぎなミーアのために、アンヌが施したトリックアートなのだ。
「ミーアさま、実はクロエさまに聞いたことなのですが……なんでも、色の中には痩せて縮んで見える色というのがあるらしいですよ」
などというアンヌの話に、ミーアがホイホイ乗っかっただけの話なのだが……。
そんなトホホな真実に気づく者はただの一人もいなかった。

第百二話　いざ踏み出さん！　女帝への道を！

「……あの色のドレス……あの色の、意味は、まさか……」
ごくり……と生唾を飲み込む貴族。
いや、ただ単に、収縮色だからなのだが……。
「それ以外に考えられまい……。至高の色のドレスを、このような日にまとうなど……。つまり、ミーア姫殿下は……帝位を継ぐおつもりなのだ……」
緊張のにじんだ声で、別の貴族が言う。
いや、ただ単に、ミーアが食べすぎちゃったからなのだが……。
「長き帝国の慣習を覆すということか……。まさか、そのような野望を隠していたとは……」
いや、ただ単に、お腹の膨張（ＦＮＹ）を収縮色によって隠しているだけなのだが……。
貴族たちに広がった動揺、けれどそれが治まる前に、さらなる衝撃がミーアの口から発せられた。すなわち……、
「実は、本日、お集まりのみなさまにご紹介したい方がおりますの。どうぞ、お二人とも、こちらへ……」
そう言って、ミーアが手招きをする。と、それに応えるように、二人の少年がミーアの後ろに歩み寄った。
「あれは……？」
彼らの顔を知る者はそう多くはなかった。けれど、知っている者は思わず言葉を失った。なぜなら、そこにいたのは……。
「こちらはわたくしの学友の、アベル王子とシオン王子ですわ。アベル王子はレムノ王国の第二王子殿下で、シオン王子はサンクランド王国の第一王子殿下ですわ」
ミーアの紹介に、一瞬、会場が静まった。
「わたくしの誕生祭に出席するために、来てくださったんですの」

何でもないことのように言うミーアだったが……、発生した衝撃は決して小さなものではなかった。
確かに、ティアムーン帝国は大国だ。
その皇女の誕生祭なのだから、近隣諸国から客人が来ることも珍しいことではないし、ペルージャン農業国やガヌドス港湾国の王族が来たこともある。
が……、サンクランド王国ほどの大国から、王族が来たことはない。
しかも、第一王子のシオン王子と言えば、王位継承権一位の王族である。
それはすなわち、かのサンクランド王国が、皇女ミーアをそれほど高く評価しているということだ。
「まさか、サンクランドの王子が……」
「いや、もう一人の王子の方も軽視は出来んぞ」
レムノ王国といえば、ティアムーン、サンクランドには劣るとはいえ、小国とは言えない、侮りがたい国力を持つ国だ。
しかも、アベルはその第二王子だ。王位継承権一位のシオンとは違い、第二王子であれば……ミーアの婿になる資格は十分にある……。
至高の色を身にまとい、その上で二人の王子を紹介することが、いかにも意味深に思えてしまって……、貴族たちは戦慄を禁じえなかった。
しかし……、ああ、しかしなのだ……。
彼らを襲う最大の衝撃は直後にやってきたのだ。
貴族たちが、まだ、唖然と立ち尽くしている中、唐突に会場の扉が開いたのだ。
「遅れてしまい、申し訳ありませんでした。ミーアさま」
現れたのは、四大公爵家の一角、グリーンムーン公爵家の令嬢、エメラルダだった。
……まぁ、ぶっちゃけ、それはどうでも良かった。

エメラルダとミーアが仲良しであることは、この場に集う貴族たちならば、誰もが知っていることだったからだ。
問題はエメラルダのすぐ後ろに立っていた人物だった。
それは、清らかな笑みを浮かべる少女だった。
年の頃はミーアとさして変わらない。十代の半ばぐらいだろうか。
小川の清流のような涼しげな水色の髪、さらりと風に流れる髪の合間から覗くのは、透き通るように白い肌だった。
神々しいまでの美しさを持ったその少女のことを……、その場に集うみなは知っていた。
直接は見たことがない者も、肖像画で見たことがあったのだ……。
それは大陸に君臨する聖女……。すなわち、
「うふふ、ご機嫌ようミーアさん。お誕生日、おめでとう」
ヴェールガ公国の公爵令嬢、聖女ラフィーナ・オルカ・ヴェールガの登場が、会場の空気を再び変えた。
二人の王子の存在は決して無視しえないものではあった。されど文字通り、ラフィーナは格が違う。彼女を敵に回すということは、サンクランドはじめ、大陸の複数の国家を敵に回すということと同義である。
それほどの影響力を、貴族たちはラフィーナの背後に見ていた。
そして……そのラフィーナがミーアの誕生日を祝うために、わざわざ帝国まで足を運んだという事実……。
事態の急転についていけない貴族たちをしり目に、ラフィーナは軽やかな足取りでミーアのもとに向かった。
「らっ、ラフィーナさま？　なぜここに？」
「あら？　お友だちのお誕生日をお祝いするのは、当たり前のことでしょう？」
驚いた顔をするミーアに、ラフィーナはクスクス、悪戯っぽい笑みを浮かべながら言った。
「ふふふ、驚いてもらえたみたいでなによりよ、ミーアさん。こっそり来たかいがあったわ」

「まぁ、そんな……。遠いところをわざわざそのようなことのために……」
ミーアは、恐縮しきりの様子でラフィーナに言うが……、貴族たちは、その演技に歯噛みする思いを抱く。
白々しい。聖女ラフィーナが訪れることを知らぬはずがなかろうに、と。
仲睦まじく手を取り合うミーアとラフィーナ。その光景は、嫌でも帝国貴族たちに思い知らせることになった。
皇女ミーア・ルーナ・ティアムーン、現皇帝の娘が有している権勢の強大さを。
彼女が皇帝の寵愛を受けていることは知っていた。
ここ最近は民衆への慈善活動にも力を入れており、そのおかげか、民からの人気が高いことも、いささか気に入らないながらも認めるところではあった。
また、辺土貴族たちを厚く遇することで、中央貴族とは距離を置く彼らとの関係も、かなり良好だと聞いている。
けれど……、その権勢が国外にまで及ぶとは彼らも考えてはいなかったのだ。
帝国に並びうる大国、サンクランド王国の王子と、サンクランドほどではないにしても、侮りがたい国力を持ったレムノ王国の王子、二人の見目麗しき王子たちと笑みを交わし、大陸最大の権勢、ヴェールガの聖女ラフィーナ・オルカ・ヴェールガとも極めて親密な関係を築いている。
このような人物が、かつてこの帝国にいただろうか？　いるはずがない！
その圧倒的な権勢は、ミーアに反感を持っていた貴族たちを黙らせるのに十分だった。
……彼女を敵に回してはヤバイ……と多くの者たちは察した。
そもそもが、皇帝陛下自体、愛娘のこととなると、いろいろとヤバくなるのだ。その上、彼女の絶大な権力を目の当たりにした貴族

たちは大いに焦った。
そうして……、皇帝からの勅命に改めて思いが至った。
皇女ミーアは「民がすべて、自分の誕生日を喜び、楽しみ、祝うことを望む」と言ったのだという。であるならば……、それを全力で、かなえなければならないのではないか？
深々と、その想いを刻み込まれた貴族たちは、恐怖に背中を押されるようにして自らの領地に飛んで帰った。そうして……ひきつる笑みを浮かべつつ、民たちを自らの屋敷に招いたのだ。
……もはや、やけくそだった。
民衆を喜ばせなければ、皇女ミーアの癇気に触れるかもしれない。それだけは避けねば、と全力で忖度したのだ！
結果、民とともに酒を飲みかわし、同じ者を祝うために歌い……、などとやっているうちに、ちょっとだけ、気持ち良くなってきてしまった……。
「気前のいい領主さま」
などとおだてられれば悪い気はしない。それに、しょせんは、たった五日のことなのだ。
短い間だけ、民衆にいい顔を見せておけばいいのだ、と……、自らも楽しむことにした。それが、勅命だからと、そうしたのだ。
結果……、彼らの心にもまた、刻み込まれてしまったのだ。
領民との楽しい祭りの思い出が……。ただ、税を納めてくるだけの者たち、ただの他人だった者たちが、酒を飲み交わした顔見知りになってしまったのだ……。
それは、少なくはない影響を彼らに及ぼすことになるのだった。

一方で、それでもなお……、古き因習に従う者たちは存在した。
「困ったことになりましたな……。これは、サフィアス殿を焚きつけませんと……」
「いやいや、あれほどの布陣、普通の者では太刀打ちできますまい。ここは、レッドムーン公爵家に動いていただいて、牽制を……」

などと……、良からぬ相談をする彼らであったが……。彼らは知らないのだ。
四大公爵家の子女たちが、現在、どのようなことになっているのかを……。
すでに彼らが頼りとする四大公爵家にも、ミーアが適当にばらまいた種が芽吹き、しっかりと根を張りつつあるということを……。
そして、自分たちがする企みが、ミーアに筒抜けになるということも。

かくて……、ミーアは、女帝への道の第一歩を華々しく踏み出したのだ！
本人の与り知らぬところで……。

第百三話　忠臣、歓喜！（それぞれの視点）

晩餐会の会場へとミーアを送り出したルードヴィッヒは、湧き上がる感慨に胸を熱くしていた。

「ミーアさまがあの色を身にまとうとは……」

その意味するところを考えると思わず体に震えが走る。それは武者震い。

彼は、それを止めることができなかった。

「ついに……、ついにミーアさまは表明されたということか……。女帝として、このティアムーン帝国を統べるということを……」

それは、ルードヴィッヒの悲願だった。

あの日、ミーアから声をかけられてから……、彼は帝国内を懸命に駆けずり回った。

ミーアの求めは、帝国の財政問題の解決にとどまらなかった。

彼女は、帝国のすべてを立て直そうと考えていた。

だから、ルードヴィッヒはその力の及ぶ限り、全力で応えようとした。

その内に、彼はこう考えるようになっていた。

「ミーア姫殿下こそが、帝国を指導するに相応しき方……」

それがルードヴィッヒの出した結論だ。

合理的に考えて、それが帝国を導くのに最も良い方法だ。

冷静に、客観的に考えて、それが正しいはずで……。でも、

「帝国初の女帝ミーア陛下……か」

なぜだろう……、その言葉を口にする時、ルードヴィッヒの心は震えた。

思考を積み重ねる過程において……どうしても、そこに感情が絡んでしまうような気がした。

帝国初の女帝に就いたミーアと、それを傍らで補佐する自分。い

や、傍らでなくても構わない。彼女の手足となって働けることが、なんだか、とても素晴らしいことのように思えて……。
それは遠い昔……どこかで抱いた想い。
いつのことか、どこでのことか……、不思議なことに思い出すことはできなくって……。
あるいは、それは夢の中の出来事であったのかもしれないと……、そんなことさえ思ってしまって。
「たとえ夢でも構いはしないさ。女帝となられたあの方のおそばで働くことができる、これほど嬉しいことはないのだから……」
ルードヴィッヒは、自身がいささか感傷的になっていることを自覚して……、苦笑いを浮かべる。
「まだ、なにかを為したわけでもないというのに……」
頬をパンパンと叩いてから、彼は歩き出した。
「バルタザルと師匠に連絡を取ろう。それに、ジルにも……。ほかの連中にも協力を仰がねば……」
老賢者ガルヴのもとから輩出された少壮の官僚集団……、その力を結集させるべく、ルードヴィッヒは動き出した。自分と同じく、ミーアのもとに馳せ参ぜよと呼びかけるのだ。
すべては、そう……、紫――至高の色、をまとうミーアのために。

紫色のドレスに身を包んだミーアを送り出し、アンヌは満足げに頷く。
自らの研究の成果が、ミーアに使ってもらえることがなんとも誇らしかった。
――最近、ミーアさまはすごくご苦労されてたから、少しぐらい太ってしまっても仕方ないよね……。
自分では想像ができないほどの重圧の中に置かれたミーア。
そのせいで、甘いものを食べて発散したりするうちに、少しふっくら気味になってしまったミーア。
そんな主（あるじ）の役に立つために、アンヌは日夜研究を欠かさない。

今回、パーティー前にミーアに入ってもらったのは、先日、クロエからもらった入浴剤入りのお風呂だった。疲れが取れる効果があるとかで……、出てきたミーアはまさに輝きを放つかのように元気になっていた。

……まぁ、物理的に輝いていたわけだが……。

新しい情報はどん欲に……、学園の他国の貴族の従者からも積極的に情報収集を試みた。それに、セントノエルは何といっても、大陸の最先端を行く学園都市である。町に出れば、いろいろなものが手に入る。

アンヌは、ミーアのためになるものがないかどうか、時間がある時には積極的に街に出ていた。

ミーアの健康を保つための勉強も、その肌の質を保つための技も、その髪を綺麗に梳く技術も、研鑽に努めているのだ。

「ミーアさまのために、私にできることをするんだ……」

ミーアの美容を保つ、その一番の責任者という自負が、アンヌの中にはあった。

その彼女からしても、今日のミーアは合格点。

まさに、輝くような美しさを放っていた。

……まぁ、実際に、物理的に輝いていたわけだが……。

「うふふ、髪も上手く梳けたし、もう、あの時みたいに歯がゆい思いをしなくて済むな……あれ？　でも……、あれっていつのことだったっけ？」

アンヌは、小さく首を傾げた。

いつだったか……、自分はミーアに櫛をかけた。それはミーアにとって、とても大切な時だった。だけど、その時に上手くできなくって……。

「夢の中のこと……だったかな？」

いくら思い出そうとしても、そんな記憶は出てこない。

でも、ミーアの一大事に、自分が櫛をかけられないなんて絶対に嫌だった。

これから先、ミーアには婚礼の儀もあるだろうし、大勢の国民の前に出ることだってあるのだ。
そんな時、最善の姿でミーアを送り出すこと、それが自身の一番の仕事であると、アンヌはしっかり心得ていた。
不甲斐ないことはできない。だから、日々の努力を欠かすことはない。
「とりあえず……、ミーアさまが帰ってくるまでにすることは……」
アンヌは、ふーむ、と腕組みする。
「うん、あれだけお綺麗なんだもの。きっと、お二人の殿下とも、楽しい時間を過ごせるはずだわ。ということは……きっと、戻ってきたらお疲れだろうし……」
ミーアのダンスの腕前を知っているアンヌは、きっとミーアがたくさん踊ってくるのだろうな、と考えた。
となれば、寝る前に、汗を流して……と思っても不思議はないはずだ。
いつミーアが戻ってきても良いように、お風呂の準備をしようかな、などと思うアンヌであった。

すべては、そう……、紫――収縮の色、をまとうミーアのために。

百四話　器の大きいミーアさま

さて、アンヌの特殊メイクにより、上手いこと化けたミーアは、我が世の春を謳歌していた。

さる侯爵と挨拶を交わし、次にそのご令嬢に挨拶を。さらにそのお友だちに挨拶……。

「ミーアさま、このお料理、とても美味しいですよ」

などと勧められるままに、もぐもぐ。

一段落付き、今度はさる伯爵と挨拶を交わし、そのそばにいたペルージャン農業国の姫、ラーニャと談笑をして、

「あ、ミーアさま。実は、これ、ペルージャンで開発された新しいケーキで……」

などと勧められるままに、もぐもぐ。

それを食べている最中、挨拶にやってきた中央貴族に「タイミングが悪いですわ！」などと内心で舌打ちしつつ、ニコやかに対応。

そのままケーキを二切れ食べつくすと、さらに近場に美味しそうなキノコのソテーを発見して、もぐもぐ。もぐもぐ……。

ひとしきり、モグモグモグタイムを満喫したミーアに、歩み寄る者がいた。

「ミーア姫殿下、よろしければ、一曲お付き合いいただけるだろうか？」

かしこまった口調で言うのは、シオン・ソール・サンクランドだった。気付けば辺りには、穏やかな曲が流れ始めていて、談笑に飽きた者たちが、思い思いにダンスを始めていた。

「あら、シオン……。ダンスのお誘いですの？」

「ああ。君のお父上への挨拶では後れを取ったが、毎回、アベルに先陣を譲るのもシャクなんでね」

ふと見れば、アベルが少し離れたところで苦笑いを浮かべていた。

「ふむ……、殿方というのもなかなかに大変なものですわね……、うひゃっ！」
と、シオンが唐突にミーアの手を引いた。
「ず、ずいぶん強引ですわね、シオン」
どぎまぎしながらミーアは言った。基本的に、押しには滅法弱いミーアである。しかも、相手はイケメン中のイケメンのシオンなのだ。
冷静でいられるだけの余裕など……ない！
「はは、君は今日の主役だからね。あまり、俺で時間を取られるわけにもいかないだろう」
そうして、シオンは軽やかにダンスのステップを踏み出した。
シオンのイケメンオーラに当てられて、余裕を失っていたミーアであったが、それでも難なくついていく。
そう……、お忘れかもしれないが、ダンスだけは得意だったミーアなのである。今では、そこに、そこそこの乗馬技術と、危険な調理術というスキルも加わり、だいぶ、スキルが盛られたミーアなのである。ミーアだって成長しているのだ！
「あら、相変わらず、ダンスがお上手ですわね、シオン」
「そうかな？　君の方は、なんだか以前踊った時より迫力が減ったんじゃないか？」
悪戯っぽくウィンクするシオンに、ミーアは余裕の笑みを返した。
「あら？　あなたがついてこられるか心配だったから、手加減しただけですわ。本気でいきますわよ？」
言葉とは裏腹に、今日のミーアにはシオンに対する敵意はなかった。
そこにあるのは、ただ純粋に、ダンスを楽しみたいという思いのみ……。
そうなのだ、ミーアの中で、シオンに対する敵愾心は、もうほとんど残っていないのだ。
ゆえに、そのステップもパートナーであるシオンに合わせたもの

となり……、結果として、二人は非常に息があったダンスをすることができた。
それは、ミーアにとって、とても楽しい時間となった。
そして、もちろん、シオンにとっても。

……だからだろうか？
その後、ミーアのダンスパートナーをアベルに譲った際……、シオンの胸には、ほんの少しだけ名残惜しさが残ったのだった。

「ふぅ……」
踊り終えたシオンのもとには、多くの女性たちが寄ってきた。
彼の見事なダンスに見惚れたのはもちろんのことだが……、それ以上に、帝国貴族の令嬢にとって、大国サンクランドの王子というのはとても魅力的だ。上手く恋仲にでもなれば、ミーアとだって並び立つ権力を得ることができるかもしれないのだ。
普段であれば笑顔であしらうところなのだが……、なぜだろう、今日のシオンにはあまり余裕はなかった。
正直なところキースウッドに任せてしまいたいところなのだが……、ここに入れるのは王侯貴族のみ。頼りになる従者はいない。
――さて……少し面倒だな。どうしたものかな……。
近づいてくる者たちの笑顔の裏に、見え透いた打算を見てしまって、シオンは思わず辟易するが……、
「すみません。あの……」
っと……、その人垣をかき分けて歩み寄ってくる者がいた。
非難の声もなんのその、そこに現れたのは、シオンの見知った人物だった。
「んっ？　君は、ティオーナ……」
ティオーナ・ルドルフォン……。
帝国辺土伯の令嬢である彼女もまた、ミーアの晩餐会に招かれていたのだ。

「まぁ、田舎者がしゃしゃり出るなんて、生意気なっ！」
などという非難の声をあっさり無視して、ティオーナはシオンの手を取った。
「あの、シオン王子、一緒に来ていただけますか？　ラフィーナさまが、お呼びです！」
言うが早いか、ティオーナはシオンを連れて、会場の中を突き進んだ。そのまま、彼女は会場の外へと向かう。
「ティオーナ、ラフィーナさまが呼んでいるというなら、会場から出るのはまずいと思うが……」
苦笑いを浮かべるシオン。彼の視線の先には、会場の中心で帝国貴族に囲まれて談笑しているラフィーナの姿があった。
シオンの指摘に、ティオーナがハッとした顔をする。けれど、
「だが、そうだな。少し疲れたから外の空気でも吸いに行こうか」
その手を逆に引いて、シオンは前に出た。

二人が向かったのはバルコニーだった。
吹き付けてくる冷たい冬の風が、動いて暑くなった体に心地よかった。
辺りに人の姿はない。さすがに、姫殿下の誕生を祝う晩さん会を抜け出そうなどという不届き者はいないのだろう。
冷え切った空気を思い切り吸って、吐いてから、シオンは言った。
「しかし、すまなかったな、ティオーナ。助かったけれど、俺と一緒にいたら、君の立場が悪くなるんじゃないか？」
それを聞いて、ティオーナは、くすくすと小さな声で笑った。
「大丈夫です。最初から悪いですから」
卑下するわけでもなく、ごく自然にティオーナは言った。
「でも、ミーアさまのおかげで、それもだいぶ良くなりました。セントノエルで嫌がらせを受けることもありませんし、選挙のことがあってから、和解することができた人たちもたくさんいます」
ティオーナは自らの胸にそっと手を当てて、瞳を閉じた。大切な

記憶を思い出すかのように……。
「そうか……。それならいいんだけど……」
彼女の顔を見ながら、シオンはなんとなく思った。
――なるほど、彼女も俺と同じくミーアに救われたんだったな……。
「それよりも、シオン王子……、あの、こんなことをお聞きしたらいけないのかもしれませんけど……」
ティオーナは、一度、言葉を止めてから……、意を決した様子で言った。
「あの……いいんですか？」
「ん？　なにがだい？」
意味がわからず、首を傾げるシオン。
「ミーアさまのこと……。その……、先ほどダンスを見させていただきました。シオン王子、とっても楽しそうでした」
それから、ティオーナは少しだけ言い淀んでから……、
「シオン王子はミーアさまのこと……、好きなんじゃないかな、って思いました。それなのに簡単にアベル王子に、パートナーを譲ってしまって……」
その指摘に、きょとんと首を傾げたシオンは、苦笑いを浮かべた。
「あまりミーアを独占したら、アベルに文句を言われそうだったから譲ったまでだが……」
言葉の途中でシオンは気が付いた。自分が偽りを口にしていること。そしてティオーナが、真実を見極めるかのように、真っ直ぐに自分を見つめていることに。
――やれやれ……、誤魔化すのは誠実じゃないかな……。
ため息交じりに、首を振り、シオンは言った。
「君の言う通り、確かに俺はミーアに惹かれているかもしれない。でも、俺は失敗したんだ」
サンクランドの風鴉がしでかした失態。そして正義を標榜しつつ、自身が犯した罪……。その負い目が、今もシオンを縛り続けていた。

「今さら、俺に何かを言う資格があるとは思わない……。それに、俺はサンクランドの第一王子だ。仮にミーアに恋をする事があったとしてもそれが叶うことはない……」
「ミーアさまは、そんなの気にしないと思います」
まるでシオンの迷いを断ち切るかのように、きっぱりとした口調でティオーナは言った。
「ミーアさまは、その……すごく器の大きい方ですから、そんなのきっと気にしません……」
「そうだろうか？」
そう問いかけつつも、シオンは思っていた。
確かに、その通りなのだろうな、と……。
ティオーナは深々と頷いてから続けた。
「それに、きっと後悔します。話せる時に、しっかりと話をしておかないと……きっと」
ティオーナの言葉は、シオンには、後悔を知る者の言葉に聞こえた。
もしかしたら、ティオーナはかつて、話したいことを話さずに後悔してしまったことがあるのかもしれない。
「話せる時に話す、か……」
シオンは、初めて考え始める。
自分の気持ちについて……。
自分はミーアのことを、どう思っているのか……。

ちなみに……シオンが、ちょっとした決意を固めつつあるその頃……、ミーアは何をしていたかといえば……。
「ふむ……、このケーキも絶品ですわ。アベル、あなたも食べてみるとよろしいですわ！」
器の大きさを発揮して、モグモグモグタイムの三ラウンド目に突入していた。
ダンスで消費したエネルギーの補給をしつつも、「飢饉の間はぜ

いたくなもの食べられないだろうから、食べ溜めしておきましょう！」という、この精神性！
心もお腹も、器の大きいミーアなのであった。

第百五話　長く待ちわびていた時間

「ご機嫌よう、ミーアさん」
ミーアが「さすがに食べ過ぎたかしら……？」などとお腹をさすっていると、すぐそばで声が聞こえた。
顔を向けてみると、いつの間にやってきたのか、ラフィーナが立っていた。
「まぁ、ラフィーナさま」
ミーアは、慌てて椅子から立ち上がる。
最初の登場の時以来、挨拶回りが忙しくて、ゆっくり会話をする暇もなかった。
というか、ほったらかしてシオンやアベルとダンスを楽しんだり、ケーキをもぐもぐしたりしてしまっていたのだ！　いささか礼を失する態度だったかもしれない、と反省したミーアは、お客さまを歓迎する態度で、ラフィーナに笑顔を振りまく。
ラフィーナはミーアに勧められるままに、席に座ると、不意に声を落とした。
「……ところで、ミーアさん、私はミーアさんのお誕生日に呼ばれていなかったのだけど……来ても大丈夫だったのよね？」
そう言って、上目遣いに見つめてくる。
「……はぇ？」
口をぽっかーんと開けるミーアに向かい、ラフィーナは続ける。
「もしかしたら、ミーアさん、私に来てもらいたくなくって、それで誘わなかったんじゃないかって……。心配になってしまったのよ。呼ばれていなかったのは、私だけだったみたいだから……」
「あっ……」
すぅっと……、ミーアの背筋に冷たぁいものが……走った。
そうなのだ、生徒会のメンバーでこの場に呼ばれていないのは…

…、ラフィーナだけなのだ。
クロエはもともとが平民の出身なので仕方ないとはいえ、サフィアスもティオーナも、二人の王子も、誕生祭には呼ばれている。
貴族で呼ばれていないのは……ラフィーナだけだ。
ミーアは、ラフィーナだけを、自分の誕生祭に呼ばなかったのである！
これが、何を意味するか……。
例えばミーアが、ラフィーナとさほど仲が良くなければ問題はない。
そのような関係でラフィーナを呼ぶことは、彼女の権力を目当てとすることに繋がる。むしろ、それならば呼ばない方が、謙遜さがあって、ラフィーナには評価されることだろう。
だが……、幸か不幸か、ミーアはラフィーナとお友だちである。
では、お友だちを誕生パーティーに呼ばないというのは、どういうことを意味するのか……？
ダラダラと背中に汗を流しつつも、ミーアは震える声で言った。
「ら、ラフィーナさまは、ご多忙ですし、わざわざ来ていただくのは申し訳ないって思っただけですわ。決して、来てもらいたくないだなんて、全然思っておりませんわ。こうして来ていただけて、わたくし、かっ、感動しておりますのよ？」
……ちなみに、割と本音である。
ミーアは決してラフィーナに来てもらいたくないとは思っていなかったのだ。ただ、いろいろあって若干忘れていた節はないではないが……。
ラフィーナはじぃっとミーアの瞳を見つめてから、
「……でも、忘れてたりして……？」
ミーアは、ニッコニコの笑みを浮かべたまま、それを受け流す。
心の中で、悲鳴を上げつつ……。
――うう、や、ヤバいですわ！　ら、ラフィーナさまは、時々、人の心を読まれる方……意識してはいけませんわ。忘れてたなんて

ことありませんわ……。わたくしは、忘れてなどおりませんでしたわ！
自分で自分に言い聞かせ、それを信じ込む！
自分は、ラフィーナのことを、忘れてなんかいなかった！
ラフィーナが忙しいだろうから、誘わなかっただけなのだ！
――ワタクシ、ワスレテ、ナイ……。
っと、そこで、ラフィーナは表情を崩した。
「ふふふ、冗談よ、ミーアさん。もう、そんなに慌てなくっても大丈夫よ」
涼やかな笑みを浮かべるラフィーナ。だけどミーアには、なんとなーく、その目が笑っていないように見えてしまうのであった。
――うう、失敗しましたわ。これからは、毎年ラフィーナさまにお誘いを出しておかなければなりませんわ。それに……。
と、ミーアはそこで思い至る。
――ああ、そうですわね……。バルバラさんのこと、入れ違いになってしまったのでしょうし。説明は必要ですわね。
バルバラとともに、ヴェールガに送った書状（言い訳の塊）。そこには、初代皇帝の企みを、ミーアが継承しないことを正式に表明した旨を全力で記載してあったのだが……。
――あれをお読みでないということは……あのイエロームーン公爵にしたように、初代皇帝の責任を負わなくていいように、迅速にきっちりと宣言しておく必要もありますわね……。ならば、なにかしら、それに良い場所があればいいですわね……ふむ。
などと考えているうちに、その日のパーティーも終わりが近づいていった。
「ミーアさま……」
ふと顔を上げれば、そこにはエメラルダが立っていた。
「あら、エメラルダさん。今日は、わたくしのために、わざわざ来ていただいて感謝いたしますわ」
「いえ。親友のお誕生日をお祝いするのは当たり前のことですわ。

今日はこれで失礼いたしますけれど、我がグリーンムーン邸で行われるパーティーも楽しみにしていてくださいませね。ああ、シオン王子も、アベル王子も、それにラフィーナさまもよろしければ……」
などと、朗らかな笑みを浮かべるエメラルダ。
ミーアの誕生祭は五日間。その間ミーアは、帝都近郊の中央貴族領地群の街々をめぐることになっている。どの貴族の領地へ赴くかは定まっているわけではなく、毎年、各月省の意見を組み入れて、コースが決まるのだ。
その五日間が終わると、今度は四大公爵家のそれぞれが祝宴を開いてくれるので、それに参加しなければならない。
当然、エメラルダのグリーンムーン家でも祝宴が開かれることになっている。
――確か、グリーンムーン家は、領都ではなく、帝都にある別邸の方で祝宴を開くことになっていたかしら……？　ということは、しばらく帝都にいるんですのね……ふむ。
っと、ミーアはそこで、何かを思いついたようにパンッと手を打った。
「あ、そうですわ。ねぇ、エメラルダさん、あなたにお願いがございますの」
「あら？　なんでしょうか、ミーアさま」
お願いと言われたのが嬉しかったのか、エメラルダはニコニコと笑みを浮かべた。
そんな彼女にミーアは、ごく自然な口調で言った。
「この冬の間に、例の『約束』、果たしていただけるかしら？」
「約束……」
一瞬、首を傾げたエメラルダだったが、次の瞬間、ハッとした様子を見せた。
その頬は心なしか、緊張に強張っているように見えた。そんなエメラルダにミーアは優しく笑みを浮かべる。
「わたくしのために、お茶会を開いていただきたいんですの。甘く

て美味しいケーキを食べさせてくださる約束になっておりましたわよね？」
それは、あの日、無人島でなされた約束……否、それはもっと昔……。
「サフィアスさんとルヴィさん、それに、シュトリナさんもお呼びして、そこで、誓い合うんですの」
ミーアは、一度、言葉を切って、それから言った。
「この帝国のために力を尽くすと……。この帝国の民、すべてのために……」
その言葉に、エメラルダは瞳を見開いた。そうして、
月光会（クレール・リュンヌ）の発案者、エメラルダ・エトワ・グリーンムーンが、長く待ちわびていた瞬間が訪れようとしていた。
月と星々の会合が、ついにもたれようとしていた。

第百五話　長く待ちわびていた時間（後書き）

今週の投稿にて第三部は終了とします。
一週間のお休みを空けて、第四部開始……の予定です。

第百六話　月と星々のお茶会　前

月光会（クレール・ド・リュンヌ）。

それは、ティアムーン帝国四大公爵家と皇女ミーアのみに参加が許された特別なお茶会。

エメラルダの企画立案によって始まったお茶会は、すでにセントノエル学園内で幾度か開かれていたのだが……、ただの一度もすべてのメンバーが揃ったことはなかった。

イエロームーン公爵家の娘、シュトリナが入学するまで、イエロームーンの席が空席であったことはもちろんあるのだが、それはそれとして、全員がそれぞれに忙しい身である。

すべて出席しているのはエメラルダのみで、サフィアスもルヴィも予定が合わないことがしばしばだった。

けれど、その日……。

グリーンムーン邸の一室には、三人の星持ち公爵令嬢（エトワーリン）と一人の星持ち公爵令息（エトワーレ）がそろっていた。

広い一室、その中心に据えられた円卓の周りに四人は座り、思い思いに談笑を楽しんでいた。

「しかし、まさか月光会にこんな形で全員が揃うなんて思ってもみなかったよ。この忙しい時期に召集をかけるなんて……。オレはまたてっきり、君がおかしくなったものとばかり……」

「あら、ずいぶんと失敬ね、サフィアスさん。それではまるで、私が空気を読めないみたいじゃない？」

サフィアスの軽口に、不機嫌そうに言うエメラルダ。

「いやいや、今回ばかりは私も青月の貴公子に賛同するよ。まさかミーア姫殿下の誕生祭の二日目にお茶会だなんてね……ふむ、この紅茶、美味しいね。ペルージャン産の紅茶かい？」

二人の会話を涼しい顔で聞いていたルヴィが、目の前の紅茶に口

をつけて笑った。
「そのはずですわ。ラーニャ姫からの頂き物を、ミーアさまに分けていただいて……、あら？　なにかしら、そのお顔は……」
「いや、なに。君も変わったな、と思ってね。緑月の姫君。ずいぶんと丸くなった」
ルヴィの指摘に、エメラルダは、はて？　と首を傾げる。
「そうかしら？　そのようなこともないはずですけど……、でも、そうですわね。ミーアさまの親友に相応しくあろうとは考えておりますわ」
その素直な物言いに、ルヴィは、わずかばかり瞳を見開いてから、
「なるほどなるほど。この場に集う者はみな、ミーア姫殿下と触れ合い変えられてしまったということか……。ねぇ、君もそうなのかな？　黄月の姫君」
そうして、ルヴィが視線を向けた先、静かに座っていたのは、野に咲く花のような可憐な少女だった。ふわふわの髪を揺らして、少女、シュトリナは愛らしい笑みを浮かべる。
「ええ。みなさんと同じか、もしかしたら、それ以上じゃないかしら？」
シュトリナの言葉を聞いて、
「あら？　それは聞き捨てなりませんわ。私の方が軽いなどと……」
噛みつくエメラルダ。キッと、鋭い視線をシュトリナへと向ける。
さらに、
「私も、そう言われるのは少し不快だね。私だってミーア姫殿下には、返しきれないほどの恩義を感じているよ」
珍しいことに、ルヴィもムッとした顔をしていた。
友情、恋愛、それぞれ別のベクトルではあっても、ミーアから受けた恩義は、二人にとって非常に大きな意味を持っているのだ。
「おいおい、なにを張り合っているんだい？　もうすぐミーア姫殿下がいらっしゃるんだぞ？」
いがみ合う少女たちを見て、サフィアスは、やれやれと首を振っ

た。
正直、女子同士の言い争いに口を挟むなど野暮なことだと、彼自身は思っているのだが……。
――まぁ、これも経験というものか。これも将来の役に立つかもしれないしね。それに、あまり騒がしくしているのも問題だからなぁ。話をするのは、あの混沌の蛇という者たちのことだろうし……。
生徒会で何度か耳にした話……、サフィアス自身は未だに半信半疑ではあるのだが……。
――ラフィーナさまもシオン、アベルの両王子も一切疑う様子はなかった。ということは、たぶん、その存在自体は確実なのだろう……。
そして、今まで生徒会だけで対処していたのを、いよいよ四大公爵家の者たちにも明かし、共に戦おうと……、ミーアはそう表明するつもりなのだと……、サフィアスはそう思っていたのだ。
――であれば、我々が仲間割れをしているわけにもいかない。ここは一枚岩になって対処しなければ、下手をすれば帝国が傾く。
自分だけが、重大な危機に関する情報を持っているのだから自分がしっかりしなければ、と……サフィアスは、いつになく気合が入っていた。
「そうですわね……私としたことが……」
サフィアスにいさめられたエメラルダが神妙な顔で頷いた。
「ああ、そうだったね。私も、少しムキになった」
ルヴィも、気持ちを落ち着けるかのように紅茶に口をつける。
「リーナも、不用意な発言でした。ごめんなさい」
シュトリナが最後に頭を下げて、その場は収まった。
それを見て、サフィアスは満足げに頷く。
――おお！　オレもまとめるのが上手くなったな。生徒会でもまれているからだろうか。ふふふ、成長しているということだな！
などと、若干調子に乗ってしまうサフィアスであったが……実のところ、そういうことではなかった。なんのことはない。ミーアが

これから重大な話をすることを知っているのは、なにもサフィアスだけではなかったのだ。

エメラルダは知っている。

夏の無人島、そこで見つけた帝国の重大な秘密のことを。

ルヴィは知っている。

ミーアが数年にもわたる大規模な飢饉がやってくると予測していることを。そのために、皇女専属近衛部隊を、効率的に動けるように組織していることを。

そして、シュトリナは知っている。

自らの家を縛っていたもの。ミーアがそれを破棄してくれたことを。

みなが黙り込んだ刹那、部屋のドアが静かに開く。

「ご機嫌ようみなさま。この度は、お集まりいただき感謝いたしますわ。それでは早速、お茶会を始めましょうか」

入ってきたミーアは、ニッコリと微笑んで、言い放つのだった。

第百七話　月と星々のお茶会　後

「まず、初めに、みなさまに謝っておきたいことがございますの」
入ってきて早々に、ミーアは頭を下げた。
「本来、月光会には、四大公爵家の子弟とわたくし以外は参加できないことになっていると聞いておりましたが……。今回は、特別に二人の方の参加を認めていただきたいんですの」
そうして、ミーアは振り返って見せる。と、ミーアの後ろから一人の少女が姿を現した。
澄んだ水色の髪を揺らしながら、入ってきたその少女は……。
「おや……、あなたは、ラフィーナさま」
ルヴィが意外そうな声を上げる。一方で、その他のメンバーは特に驚いた様子を見せなかった。
「ご機嫌よう、みなさん。ふふ、セントノエルの外で、このように会合をするのは少し新鮮ですね」
涼やかな笑みを浮かべてラフィーナは言った。横で見ていたミーアは、ついついその笑みに底知れぬ凄みを見てしまう。
――ラフィーナさまに関しては、別に誰の許可を求める必要もなかった気がいたしますわね……。
いったい、どこの誰がラフィーナに、たてつくことができるだろう？　そのような蛮勇を持つ者など、ミーアは一人しか思い浮かばなかった。そんなことができるのは、帝国最強の騎士ぐらいなものである！
ということで、特に反対意見もなさそうなことに、ミーアは満足げに頷く。
なにしろ、ミーア的にはこの会の主目的は、ラフィーナへのパフォーマンスである。彼女が参加しないことはあり得ないことだった。
「それともう一人……、わたくしの大切な助言者、ルードヴィッヒ・

ヒューイットの参加も認めていただきたいんですの」
ここでミーアは言葉を切って、そっと瞳を閉じる。
相手がラフィーナであればまだしも、平民であるルードヴィッヒは本来この場には相応しくない。けれどミーアとしては、自分がやらかした際に彼の助言は必要不可欠なものだった。
この場に呼ばないわけにはいかない。
なので……、カッと瞳を見開いて、ミーアは力説する。言い訳を！
「ルードヴィッヒはわたくしの片腕、わたくしの知恵、そして、わたくしと心を同じくする者。もう一人のわたくしだと思っていただければ嬉しいですわ」
そう言って、ミーアはルードヴィッヒの方に目を向けた。
その視線を受け、ルードヴィッヒは、わずかにメガネの位置を直してから、深々と一同に頭を下げる。
「ルードヴィッヒ・ヒューイットにございます。ミーアさまの過分なご信頼にお応えできますよう、精一杯、努めさせていただきます」
――はて……？　なんだか、今日のルードヴィッヒはいつもより気合が入っているような……？　まぁ、別にいいですけど……。
それからミーアは、みなの顔を見た。またしても異議は出なかった。
――ふむ、誰かしらイチャモンをつけてきてもおかしくはないかと思いましたけれど、意外と素直ですわね。これなら、アベルとシオンもつれてきても問題なかったかしら……？
などと思いつつも、ミーアは言った。
「では、改めて、お茶会を始めますわ。エメラルダさん、お願いいたしますわね」
そう言って、ミーアは自らの前にケーキやお菓子が並ぶのを待った。
なんと！　今日は、ケーキが三種類も出てきた！
焼きリンゴのタルトと、甘月マロンのクリームをたっぷり使った山を模したケーキ、さらに、花の蜜がたっぷりかかったパンケーキ

である。
――ほう……、難しい話をする前に、まず甘い物を摂取しようということですわね。さすがは、エメラルダさん。できる女ですわ！
ミーアのテンションが９０、エメラルダへの信頼度が１００上がった！

「さて、それでは……本題に行きますわ」
一通りケーキをペロリしたところで、ミーアは静かに口を開いた。
っと、
「ミーアさま、お口に……」
などと、エメラルダが近づいてきて、口元をハンカチで拭いてくれた。
……堂に入ったお姉さんっぷりである。聖夜祭の際に、あまりミーアと遊べなかったのが、若干寂しかったらしい。
んっ、んん、などと喉を鳴らしてから、ミーアは改めて言った。
「では、本題に行きますわ……。といっても、ふむ……どこから話したものかしら……？」
ミーアがルードヴィッヒの方に目を向ける。
ルードヴィッヒは心得たとばかりに頷いてから、
「それでは、私の方から……。そうですね、やはり、順番に話をしていくのがよろしいでしょう。始まりは、レムノ王国の革命未遂事件から……」
そうして、彼は語り始めた。
レムノ王国の革命未遂事件と、その裏で暗躍していた者たちのこと。
サンクランド王国の諜報部隊、風鴉と白鴉、そして、潜り込んでいた蛇の存在……。
「混沌の蛇……、そのような者が……？」
「驚きましたわね……。レムノ王国の内乱に、そのような裏事情が……」

ルヴィとエメラルダが、狼狽した様子でつぶやきを漏らす。
「不幸中の幸いと言ってはなんですけれど、帝国内に張り巡らされていた、サンクランドの諜報網は一掃されておりますわ。白鴉だけでなく、風鴉のみなさんにもお帰りいただきましたの」
そう言って、ミーアは紅茶を一口。それから、
「次に、夏休みのことをお話しする必要がございますわね……」
ミーアはエメラルダの方に目を向けた。エメラルダはちょっぴり緊張した顔になり、小さく頷いた。
「実は、夏休みにミーア姫殿下と舟遊びに出かけましたの。あっ、シオン王子とアベル王子のお二人も同行されていたんですのよ」
……後半は若干自慢げな口調になっているエメラルダである。
「そして、その際に、無人島でとんでもないものを見つけてしまいましたの」
「とんでもないもの？」
怪訝そうな顔で首を傾げるルヴィ。ミーアは深々と頷いて、もったいぶった口調で言った。
「初代皇帝陛下が残した碑文。この帝国の興りと、混沌の蛇との関係性についてが書かれたものですわ」
そうして、ミーアは話す。
初代皇帝がいかなる思惑によって、このティアムーン帝国を築いたのか。この地を呪うために、帝国内に蔓延する「反農思想について」
……ちなみに、それらはすべて台本通りである。
お話ししたいことをルードヴィッヒにまとめてもらったものを暗記したのである。
パンケーキに覚えるべき文字を花の蜜で書いていき、覚えたらペロリとする、なぁんていうふざけた暗記法だったが、実に見事に暗記に成功してしまったため「暗記パンケーキ法」と命名したミーアである……どうでもいい。
「初代皇帝陛下が……」

「なるほど……。確かに、言われてみれば我々の中にも、農業に対する偏見は根付いているな。中央貴族の者たち、我がブルームーンの派閥の者たちにも、その傾向は確かにある。オレ自身、農民は農奴の末裔だなどと、見下してしまったこともある。恥ずべきことだったな……」

サフィアスが、苦々しげな口調で言った。

「そして、イエロームーン公爵家……。彼らは、初代皇帝陛下によって密命を受けていた……。そうですわね、リーナさん」

ミーアの視線を受けたシュトリナは、わずかばかり強張った顔で、小さく頷いた。

「我がイエロームーン公爵家は、初代皇帝陛下から特別に命令を受けていました……」

そうして、語られるのはイエロームーン公爵家の秘密……。

壮絶な歴史に、その場の誰もが言葉を失った。

その間、ミーアは、紅茶のお代わりを所望。ミルクたっぷりのそれに……、流れるような動作で砂糖を入れようとしたところで……。

「ミーアさま、僭越ながら、少しお控えいただきますよう……。アンヌ嬢から言われております」

横から、ひそめた声で、ルードヴィッヒが言った。

ぐむ、っとうなりつつ、ミーアは砂糖のビンから手を離した。

やがて、話し終えたシュトリナは小さく息を吐き、瞳を閉じた。それは、罪の告白を終え、刑の執行を待つ囚人のような……、悟りきった表情だった。

混沌の蛇とつながりのある毒を熟知した娘……。ミーアの暗殺さえ企んだ彼女に、みな困惑の視線を向けていたが……、

「誤解のないように言っておきますけれど、リーナさん自身に罪があるとは、わたくしは考えておりませんわ。初代皇帝に命じられてしたことですし……。イエロームーン家に罪なしとしてしまうと、納得できぬ者もいるでしょうから、そちらへの対処は現当主たるローレンツ殿に一任いたしましたけれど……、それは、リーナさんま

では及ぶべきではない、と考えておりますの。重ねて言いますが、この件はすでに終わったこと。蒸し返すような真似をしないでいただきたいですわ！」

……要するに、初代皇帝のやらかしを、これ以上つついてくれるなよ、ということである。

ちなみに、四大公爵家の者たちは、それぞれ皇帝の血縁であるがゆえに、初代皇帝の罪がミーアに及ぶと言い出すと、自分たち自身も墓穴を掘ることになりかねない。

唯一、怖いのはラフィーナだったが……、チラッとうかがってみた感じ、怒った様子はなかった。というか、むしろ、優しい笑みを浮かべてミーアを見つめていた！

……それはそれで、ちょっぴり怖くなってしまう小心者ミーアなのであった。

それから、気を取り直して、今度はルヴィに目を向ける。

「過去のことに目を向けるより、わたくしは、むしろこれから先のことに、力を合わせる必要を感じておりますの」

「これから先のこと……ですか？」

サフィアスが首を傾げる。

「ええ。ルヴィさんにはすでに動いてもらっているのですけれど……、みなさんにも言っておきますわ。これから先、数年間に渡り大規模な飢饉が大陸全土を襲いますわ」

断言するミーアに、サフィアスが驚いた様子で言った。

「そっ、そんなこと……、ミーア姫殿下は未来のことをも見通されるのですか？」

「すべてのこと……とは申しませんけれど、少なくとも農作物が軒並み不作になることは事実ですわ」

そうして、ミーアはルードヴィッヒの方に目を向けた。ルードヴィッヒは小さく頷き、

「すでに、来年の収穫はかなり減るであろうことが予想されます。今年は、冷夏であったために実りが悪いのです」

「そっ、そんな……」
震える声でつぶやいたのは、シュトリナだった。
混沌の蛇の企みを熟知している彼女だから、帝国を飢饉が襲った場合、どのようなことになるのか、よく理解できるのだろう。
「ミーアさま……、あの、それは間違いないのでしょうか？　もし、そんなことになったら……」
「ああ、リーナさん、心配には及びませんわ。そのための備えを、わたくしたちはしてきたのですから……。ですわよね、ルードヴィッヒ」
ミーアの視線を受けて、ルードヴィッヒは重々しく頷いた。
「はい。ミーアさまの命を受け、備蓄に努めてまいりました。仮に飢饉が起きたとしても……、十分に耐えしのぐことができるでしょう。遠方の地より小麦を買い付けてきてくれるフォークロード商会、ペルージャン農業国、ガヌドス港湾国、それぞれからの食糧輸送ルートが守られてさえいれば……、民を飢えさせることはありません」
「加えて、その供給が守られるよう、ルヴィさんに、皇女専属近衛部隊の運用計画を作っていただきましたの。食料が不足するなどと聞けば、不安に思った民が暴徒化し、馬車を襲うかもしれませんし。それに、混沌の蛇……彼らが混乱を生み出すべく破壊工作を行うかもしれませんから」
ミーアの視線を受け、ルヴィは頷いた。
「皇女専属近衛部隊と、いざという時には、我がレッドムーン公爵家の私兵団の一部を投入することも考えに入れて計画を作っている」
それを聞き、サフィアスが立ち上がった。
「そうか。ならば後でその計画、こちらにも回してくれ。我がブルームーン家でも手伝えることがあると思う」
「ああ、わかったよ。そのように手配しよう」
頷くルヴィ。さらに、その隣でエメラルダが腕組みする。
「それに、ガヌドス港湾国にも、きっちりと釘を刺しておく必要がありますわね。ああ、シュトリナさん、イエロームーン家からも使

者を送ってくださらない？　昔はガヌドスと交流があったんですわよね？」
エメラルダもそれに続き、シュトリナも了承の頷きを見せる。
誰も、ミーアの未来予想を疑う様子すら見せなかった。
ミーアが飢饉が来ると言うのであれば、そうなのだ、と……。その前提で動き出そうとしている。
しばらくその様子を見てから、ミーアはパンっと手を打った。
「さて……、それではそろそろ、一番大切なお話をいたしますわね……」

第百八話　かくて盟約は結ばれん

「一番大切なこと……それはなんですの？　ミーアさま」
みなが一斉にミーアの方に視線を向ける中、代表してエメラルダが声を上げた。
ミーアは気持ちを落ち着けるよう、そっと紅茶に口をつけ……。
――ううん、やっぱり、ミルクティーは甘くないと美味しさが半減してしまいますわね。
などと思いつつ……、一つ息を吐く。
それから、満を持して口を開いた。
そう、今日このような場所を設けた理由が、きちんとミーアにはあるのだ。
「知れたことですわ。エメラルダさん。わたくし、言いましたわよね？　お茶会を開いてもらいたいと。そこで、帝国に忠誠を誓い合うのだと」
遠き日の約束の言葉をそらんじる。その上で、
「では……、その忠誠を誓うべき帝国の姿とは……、いったいなにかしら？」
「それは……」
ミーアの言葉に、みなの顔に動揺が走った。なぜなら、いましがた語られたからだ。
この帝国は、肥沃なる三日月地帯を涙で染め上げるための帝国。
反農思想という呪われた思想を広め、内戦を勃発させ、多くの死と流された血とによって、この地を破滅させるためのものであると……。
そのようなものに、忠誠を誓うことなどできようか……？
ただ一人、エメラルダだけが、落ち着いた顔をしていた。彼女はすでに、あの島で、ミーアの考えの一端を聞かされていたからだ。

一同の顔を見回してから、ミーアはゆっくりと頷いて見せた。
「そうですわ。そのような帝国に忠誠を誓うなど、馬鹿げたことですわ」
ミーアは、吐き捨てるように言った。
なにせ、そのせいで断頭台まで追いやられたミーアである。
ルードヴィッヒのお小言に耐えて、なんとか立て直そうと頑張ってきたミーアであったから、帝国が傾いたおおもとの原因たる初代皇帝には恨み骨髄なのである。
「馬鹿げたことですわ。ほんっと、ふざけてますわよねっ！」
だんだん、っと地団駄踏みたくなるのを堪えつつ、ミーアは小さく息を吐く。
「ですから、わたくし決めましたの。そんな古い盟約は、もう破棄してしまおうと……」
言いながら、ミーアはチラリとラフィーナの方を見た。そう……、ミーアはこれを聞かせるために、ラフィーナを呼んだのだ。
初代皇帝との約束とか破棄しときますよー。だから、これから先どっかの貴族が、初代皇帝への忠誠から馬鹿なことをやったとしても、自分には関係ありませんよー、と……。アピールするために！
「イエロームーン公爵家だけではありませんわ。帝国貴族は、みな、この帝国に忠節を尽くすと、家督を継ぐときに盟約を結びますわよね。けれど、今ここに、それをすべて破棄いたしますわ。あなたたちは帝国に忠誠を誓う必要はもうございませんわ」
「へ……？　あの、ミーアさまそれは……」
混乱した様子で、瞳を瞬かせるサフィアスに、ミーアは静かに笑みを浮かべる。
「その上で、お願いしたいことがございますの。古き盟約を破棄した上で、わたくしと……、新しい盟約を結んでいただけないかしら？」
「新しい盟約……」
「そう。滅びのための……、古い三日月（ティア）を涙（ムーン）に染め上げる帝国とで

はありませんわ。みなの安寧と繁栄のための新しい帝国と盟約を結んでいただきたいんですの……」
一度言葉を切り、ミーアはそっと瞳を閉じて続ける。
「貴族のためだけではございませんわ。この地に住む臣民すべての繁栄のため、三日月（ティア）をすべての臣民（ムー）の歓喜の涙で染（ン）め上げる帝国ですわ。それに忠誠を誓っていただくこと、そしてその帝国のために力を尽くすこと……、それが、結んでいただきたい新たなる盟約ですわ」
それをこそ、ミーアは求めたかった。
その国が、国民の繁栄のために存在するというのは当たり前のことだ。されど、貴族の中には、国民の中に、一般民衆を入れていない者がいる。領民を踏みつけにしてでも、自らの繁栄を追求しようという人間がいる。
けれど……、それではダメなのだ。
そんなことをしたら、断頭台が猛スピードで駆け寄ってくることを、ミーアは痛いほど（……主に首が）よく知っているのだ。
だからこそ、今この場で明言したのだ。
帝国は〝臣民すべて〟の繁栄のために存在するのだ、と。
そうしなければ、滅亡にまっしぐらだからこそ、しっかりと明言しておいたのだ！
「もちろん、これは個人的な密約ということになりますわ。本来、こうしたものは、皇帝陛下と、現公爵家の当主たちとなされるもの。個々の貴族たちと結ぶべきものですわ。でも……」
と、そこまでだった。
突然、立ち上がったエメラルダが、ミーアのそばまで歩み寄ると、そこで膝をかがめた。
「ミーアさま……。私は……、エメラルダ・エトワ・グリーンムーンは、ミーア・ルーナ・ティアムーン姫殿下と、盟約を結ぶことを、ここに誓います」
彼女に続くようにして、シュトリナ、サフィアス、ルヴィが、ミ

ーアの足元に膝をかがめる。そうして、口々に、その盟約への同意を宣誓する。
「みなさん……」
と、そこで、パチパチと拍手の音が聞こえた。見ると、ラフィーナが穏やかな笑みを浮かべて拍手をしていた。
「ミーアさん、素晴らしかったわ……。星持ち公爵令嬢、星持ち公爵令息と、月の皇女との新しき盟約……。確かに、このラフィーナ・オルカ・ヴェールガが見届けたわ」
それから、ラフィーナは静かに自らの胸に手を当てる。その口が紡ぐのは祈りの言葉。
「願わくば……、今日、この場でなされた誓いを、永遠に我らの神が守られますように。この場のみなの絆が、神の祝福を得ることができますように」
聖女ラフィーナの清廉なる祈りの言葉によって、月光会は静かに幕引きとなった。

さて……、月光会を終え、自室に帰ってきたミーアは、そのままベッドにぴょーんっと転がった。
「ああ……疲れますわ。誕生祭もまだまだ半分以上残っておりますし……。やはり精神的な疲れが大きい気がいたしますわね」
などと言いつつ、お腹をさすっているミーア。
食べ過ぎて胃腸が疲れていることに気づかないのであった。
そこで、ふと、ミーアの目に飛び込んできたもの、それは、ベルから借りっぱなしになっていたミーア皇女伝だった。
「ああ……そう言えば、読み返そうと思ってベルから借りたんでしたっけ……」
よっこいしょーっと掛け声をかけ、ミーアは起き上がる。それから、皇女伝を手に取りつつ、はふぅっとため息を吐いた。
「ああ……完全に忘れておりましたけれど……。結局のところ……、わたくし、女帝にならないと、暗殺されてしまうんですわよね」

今日までの成果に、ミーアはそれなりに満足していた。
けれど……おおもとの問題は、残念ながら解決していないのも事実だった。
「うーむ、でも、帝国って、過去に一度も女帝っていないんですのよね……」
うぐぐぐ、っとうなりながら、ミーアは再びベッドに寝転がった。
「ともかく、名乗り出るタイミングが大事ですわ……。タイミングを誤れば、女帝など夢のまた夢ですし……。それに上手くやれば、女帝にならなくっても……良くなったりするかも……？　あー、なんとかサボる方法はないかしら……」
女帝にならなくってもいいって書いてないかしら……？　などと思いつつ、ミーアは皇女伝を開こうとして……。
「失礼いたします、ミーアさま」
その時だった。部屋のドアがノックされたのは……。
入ってきたのは、アンヌだった。
「ミーアさま、ルードヴィッヒさんが面会にいらっしゃっているのですが……」
「あら、ルードヴィッヒが？　なにかしら？」
アンヌの言葉を聞いて、ミーアは、ふむ、と考え込んだ。
――先ほどはなにも言っておりませんでしたけれど、なんの用かしら……？　あ、そうですわ。どうせならば、わたくしが女帝にならずに済む方法を、一緒に考えてもらうのはどうかしら？
サボることにかけては、努力を怠らないミーアである。
「構いませんわ。わたくしの方でも相談することがございましたの。入ってもらって」
そう言うと、ミーアはむっくりと起き上がり、隣の私室へと移った。
ベッドルームの隣には、普段、ミーアが生活をしている部屋がある。

いつでもお菓子の時間に移行できるように、部屋の中央には大きなテーブルが置かれているものの、基本的には、そこは、他人を入れる場所ではない。
けれど、極めてプライベートなこの場所は、秘密の会談を行うには適した場所でもあるのだ。
「突然、申し訳ありません。ミーアさま」
「いえ、構いませんわ。わたくしの方でも相談したいことがございましたの。でも、まずは、あなたのお話をうかがいますわ」
そう言いつつ、ミーアは、アンヌが用意してくれたお茶に口をつけた。
――ふむ、アンヌもなかなか、お紅茶の淹れ方が上手くなってきましたわね……。
などと感心していると、
「月光会でのこと、お見事でございました」
ルードヴィッヒが、真剣な顔で言った。
「あのような形で、四大公爵家をまとめ上げるとは思ってもおりませんでした」
「ふふふ、大したことではありませんわ。まぁ、四大公爵家がまとまっていた方が、これから先なにかとやりやすいでしょうし……」
ラフィーナへのアピールは別にしても、飢饉に際しての四大公爵家の働きを期待したいミーアである。そのためにも、危機の共有はやっておいて損のないことだった。
そして、ルードヴィッヒに褒められて悪い気はしないミーアである。のだが……。
「それに、高貴なる色をまとっての堂々たる立ち居振る舞い……、まことに見事にございました」
続く、ルードヴィッヒの感極まったような声に、違和感を覚える。
「……ん？　ああ、あのドレスですわね。ええ、アンヌが用意してくれて……」
言いつつも、ミーアは小さく首を傾げる。

――はて？　高貴なる色……？
「喜ばしく思います。ミーア姫殿下、我らの心とが一致していることが……」
「……はぇ？」
なんのことを言われているのかわからず、ミーアはパチクリ、瞳を瞬かせる。
――はて？　心が一致している……いったいなんのことですの？
困惑するミーアに、ルードヴィッヒは力強く頷いた。
「どうぞご安心ください。ミーアさまに、至尊の地位に就いていただきたいと、願っている者は、帝国には多いのです」
「……はぇ？」
ミーアの目を、しっかりと見つめたまま、ルードヴィッヒは熱意のこもった口調で言った。
「ミーア姫殿下を女帝の地位に押し上げるため、我ら一同、粉骨砕身の覚悟で働いていきたく思います。今、バルタザルにも手伝ってもらい、同門の者たちに声をかけております。それから、各月省の文官たちの中から、見どころのある者もリストアップしていて……」
「……はぇ？」
ミーアを女帝へと押し上げる、巨大な波が生まれようとしていた。

かくて、月と星々の新たなる盟約は結ばれ、歴史は新たなる流れを作り出す。
「はぇ……？」
未だに事態が飲み込めないミーアを、あっさりと飲み込んで、歴史の奔流はどこへ向かうのか……。
それを知る者はどこにもいなかった。

第三部　月と星々の新たなる盟約　完　第四部へと続く

第百八話　かくて盟約は結ばれん（後書き）

来週はお休みです。
三月九日から第四部スタートの予定です。
また、お会いできれば幸いです。

プロローグ　キノコ鍋から始まりて……

「お、おお……」

ぐつぐつと、踊る具材。ホロホロに溶けた野菜と、美味しそうに煮えた鶏肉。それらを漬す黄月トマトベースのスープと、鍋のど真ん中、顔をのぞかせる何種類かの……キノコ。

黒くて、ひらひらしたキノコ、小皿ほどの大きさの傘を持つ真っ白なキノコ、小さな房が複数集まったキノコ、キノコ、キノコ……っ！

それらは、香り高い高級キノコではなかった。どちらかというと、森の猟師などが好んで鍋に使うような、素朴なものばかりだった……。そして、ミーアは基本的にそのような、素朴な滋味に溢れるキノコが好みだった！

もちろん、キノコに貴賤なし。高級キノコにも高級キノコの味わいというものがあることは、ミーアも認めるところであった。けれど、やはり鍋には、鍋に合うキノコがあるのだ。

そして、ウサギ鍋以来、ミーアの頭の中では鍋料理は、究極に美味しいメニューの一つに数え上げられていた。

つまり、ミーアは素朴な滋味溢れるキノコを使った鍋が大好きなのだ。

ついでに言うと、生存術を極める過程で、山菜類にもすっかり詳しくなっているので、その味覚は、ちょっぴりお祖母ちゃん化しているのは、否めないところであった。

まぁ、それはさておき……。

「お……、おお、おおお……」

感動に震えるフォークを伸ばして、ミーアはキノコに突き刺した。

ふるふるん、と美味しそうに震えるのは真っ白なキノコ！　ヴェールガ茸と呼ばれるそれは、絶品のキノコとして、人々に知られて

いる。
それを、ミーアは目の前まで持ってくると……、一気に口の中に放り込んだ！
「あふ、おふう……」
アツアツのキノコを口の中で転がす。キノコのまとったスープが舌の上にジュっと溶け出し、幸福のハーモニーを奏でる。
程よく冷めてきたところで、ミーアはキノコに歯を立てた。
コリッ……、心地よく歯を受け止める弾力……、コリ、コリッと何とも言えない歯触りに、ミーアの胸が充実感に満たされる。
「ああ……すっ、素晴らしいですわ。これが……キノコ鍋……。実に素晴らしい！」
そうなのだ……、年が明けて早々のこと……、ミーアはついに、念願だったキノコ鍋パーティーを開催していた！
ちなみに場所はアンヌの実家ということで、ミーアの隣にはちゃっかりベルが腰かけて、同じように舌鼓を打っている。
本当は生徒会のメンバーでやれたら良かったのだが、残念ながらみな忙しい身である。シオン、アベル、ラフィーナは、すでにそれぞれの国に帰国していた。
「ああ、残念ですわ……。せっかくですし、聖夜祭の時にできなかったのを、やってしまいたかったのに……」
もちろん、キノコ鍋は美味しいのだが、それも囲むメンバーによってずいぶん変わるというもの。
けれど、まぁ、今日の会がつまらないと言っているわけではない。
そこにいたのは、アンヌの家族とミーアベル、さらに、頭の包帯がまだとれていないリンシャとティオーナ、さらに、たまたま帝都に来ていたクロエだった。
十分賑やかである。
小麦の取引の確認がてら、帝都を訪れたクロエの父、マルコ・フォークロード。彼が、ミーアのキノコ好きを耳にして、手土産にキノコ詰め合わせセットを持ってきたのが、今回のキノコパーティー

の発端だった。
「ああ、美味しい。美味しいですわ！　やはり、キノコは歯ごたえが大事ですわね！」
「そうですね、ミーアおば……お姉さま！」
ミーアと同じく、ほふほふと湯気を吐きつつ、鍋料理を楽しむベルである。
鍋を囲む者たちの、実になんとも幸せそうな顔を見て、ミーアは満足げに頷いた。
「やはり、キノコ鍋はこうでなければなりませんわね」
みんなでワイワイ、楽しく囲んでこそキノコ鍋というものである。
ミーアは笑みを浮かべて、クロエの方を見た。
「この度は、クロエのお父さまには、大変お世話になってしまいましたわ」
「いえ、そんな！」
ぶんぶん、と手を振るクロエにミーアは小さく首を振って見せた。
「クロエ、わたくしは、恩義を受けた方にはきちんとお返ししなければと思っておりますの。だから、あなたのお父さまにも、きちんとした形でお返しを……」
「それを言うなら、ミーアさま、私はミーアさまにたくさん恩義を受けていますから。父のお土産は、そのお礼ですから、お気になさらないでください」
クロエは小さく笑みを浮かべて言った。
「こうして、帝都で歓迎していただいて、大好きな本のこととかお話できました。それに……」
と、クロエの視線の先には、エリスの姿があった。
「ミーアさまのお抱え作家さんとも知り合うことができましたし、私、感動です」
「ふふふ、エリスとも本のお話したんですのね。楽しめたようでなによりですわ」
同じ本好きとして、クロエの気持ちがよくわかるミーアである。

なにしろ、エリスの小説のアイデアを聞いているだけで、とっても楽しいのだ。
まぁ、エリスが昔書いたという恋愛小説の中に「ハンカチを落として男子と出会う」というのを見つけてしまった時には、いささか複雑な気持ちになったものだが、それはそれ。
本好きにとって作家との出会いは、何物にも代えがたい価値を持っているのだ。
「そう……。でも、やはりそれはそれですわ。もしも、マルコ殿が困ったことがあったら、遠慮なく、わたくしに教えてちょうだい」
なにしろミーアとしては、フォークロード商会の持つ小麦の購入ルートは命綱なのだ。なにか問題があれば、早急に聞いておきたいところである。まぁ、それ以上に今日のお土産、キノコの詰め合わせセットに感動したというのが大きいのだが……。
多少のムチャならば聞いてやろう、という気持ちになってしまうミーアである。
「ミーアさま……。はい、わかりました」
クロエは、ちょっぴり感動した顔で頷いた。
……と、その時だった。
「あの、ミーアさま、実はご相談したいことがあるのですが……よろしいでしょうか？」
「あら、リンシャさん。ええ、構いませんわ……。でも、ふふ」
ミーアは、真面目な表情を浮かべるリンシャに笑みを返した。
「やっぱりあなたにかしこまった態度をとられるのは慣れませんわね」
「もう、からかわないでください、ミーアさま」
リンシャは呆れ顔で肩をすくめてから、
「……ベルさまのことで、少しご相談したいことがあるんです」
わずかながら、声を潜めて言った。

第一話　大丈夫……たぶん！

「うーん……、ちょっと食べすぎましたわね……」
ミーアは、お腹をポンポンと叩きながら、けっぷと息を吐いた。
――ふむ……、なんだか心なしか微妙に手触りが……。
いささか、お腹のお肉の付き具合が心配になってくるミーアである。
――まぁでも、クロエも言ってましたし……冬は動物が食べ物を蓄える時期だ、と。わたくしも同じことですわ。冬は多少……、ほんのちょっぴりだけ太ってそれから痩せていく。それだけのことですわ……。自然の摂理に従っているだけですわ……、たぶん。
きっと、春になれば自然とシュッとしてくるはず……、たぶん。
……などと、自分を納得させるミーアである。
気持ちを切り替えて、ミーアは後ろを振り返り、
「どうぞ、こちらにお入りになって」
リンシャを自室に招き入れた。
「失礼いたします……」
やや緊張した面持ちのリンシャは、おずおずと部屋に入ってきた。それから、きょろきょろ、興味深そうに室内を見回しては、うーむ、などと、難しい顔でうなっている。
「あら？　どうかなさいましたの？」
小首を傾げつつ、ミーアは部屋の中を見回した。
一見したところ、室内に変わったものはない。
――特に悪趣味なものはありませんし……。変わったものも……、キノコの苗床を飾ろうとしたのもアンヌに反対されてしまいましたし……うーむ、なにもありませんわよね？
ちなみに、変なものといえば、三日月大根（ムーンラディッシュ）の頭の部分が水につかった状態で、窓際に置いてあったりはする。以前、ミーアが本で調

べて「帝国の食糧難打開の切り札」として見出したものだった。
まぁ、それはさておき、室内をしばらく見て回ってから、リンシャは思わずといった様子で言った。
「いや……、本当に、皇女殿下……、なんですね」
「はて……？」
この人、何を言ってるのかしら……？　などと首を傾げるミーアだったが、ふと自らの格好を見て笑った。
「ああ……、確かにそうですわね。リンシャさんと会った時は、服も庶民の物を着ておりましたし、帝国の姫だなんて思えなくっても不思議はございませんわ」
案外、革命が起きた時も、庶民の服さえ着れば化けて逃げ切れるかも……、などと思ってしまうミーアである。
「いや、そういう問題でもないんですけど……」
なにか言いたげな様子のリンシャだったが、すぐに首を振り、それから深々と頭を下げた。
「この度は、お時間をいただき、感謝いたします」
「礼など無用のことですわ。むしろ、お礼を言いたいのはこちらの方」
ミーアは、リンシャの頭に巻かれた包帯に目を向け、わずかに顔をしかめる。
「ベルのせいで、ケガをさせてしまいました……。申し訳ないことをいたしましたわ」
深々と頭を下げて、ミーアは言った。
「わたくしにできることであれば、いくらでも償いは致しますわ」
「ああ……いえ、大丈夫ですよ。傷自体は深くもなかったし、頭だから血がいっぱい出たってだけで……」
リンシャは苦笑いを浮かべながら、首を振った。
「心配をかけてしまったみたいで、むしろ申し訳ないぐらいですから。これぐらいのケガで動けなくなるなんて、我ながら情けない」
「それならば、よろしいのですけど……」

そう言いつつ、ミーアは椅子に腰かける。向かい側にリンシャが座り、さらにアンヌが食後の紅茶を持ってきたところで、
「それで、相談したいことというのは、いったいなんですの？　まさか、ベルが留年しそうだとか、そういうことではありませんでしょう？」
「へ？　あ、ああ……。それは大丈夫です……たぶん」
「……たぶん？」
微妙な歯切れの悪さに、ミーアはちょっとした既視感を覚えてしまう。
「がっ、頑張ってますよ？　ベルさま。だから、きっと、大丈夫……だと思います……たぶん」
「……たぶん」
たぶん、これは大丈夫じゃないんだろうなぁ！　などと確信しつつも……、ミーアはとりあえずそれ以上は突っ込まないことにする。
リンシャが言うのだから、大丈夫なのだろう……たぶん。
春になると、シュッとしてくるだろう……たぶん。
どっちもなんだかんだで上手くいくのだろう……たぶん。
希望的観測に最大限すがりつつ、ミーアは話を先に進めることにした。
「では、いったい、どのようなお話かしら？」
その問いかけに、リンシャは紅茶の色を確かめるかのように、ティーカップを回し、それから、紅茶を飲んでから……、ため息を一つ。それから、決意のこもった瞳でミーアを見つめてから、
「ミーアベルさまの癖のことを、ミーアさまはご存知ですか？」
「癖……ですの？」
突然のことに、ミーアは瞳を瞬かせる。
「それは、いろいろと癖はあるかと思いますけれど……、いったいなんのことかしら……？」
「いろいろな人に、感謝の印として高額の金貨を渡すことです」
リンシャは、淡々と感情のこもらない口調で言った。

「まぁ！　高額の金貨を！？」
思ってもみなかったことに、ミーアは目をむいた。
「べっ、ベルにそんな癖が？」
「ああ、やっぱりご存知ではありませんでしたか……。ベルさまは、ミーアさまも、反対はしないだろう、と言っておられましたが……」
「はっ、初耳ですわ！」
それが、本当ならば大変である。
なにしろ『金貨の無駄遣いは、ギロチンの呼び子』という格言もあるぐらいである……。いや、そんな格言はない。
まぁ、それはそれとして、
「ベルが、本当にそんなことをしておりますの？」
「はい。ミーアさまから預けていただいている分から、何度か、そうしたことがありました」
確かにベルには、何かあった時のために、それなりの金額を預けておいたのだが……。
――まっ、まさか、浪費癖があるなんて思っておりませんでしたわ！　せっかく、わたくしが節約しておりますのに、ベルが無駄遣いしてたら意味ありませんわ。
それにしても、いったいなぜ、ベルはそんなことを……？　とミーアは不思議に思う。
ベルのいた未来では、金貨によって褒賞を与えることができるような状況ではなかったはずだし……、そもそもそんなやり方、誰も教えるはずがないと思うのだが……。
「ベルさまは、どうしても必要なことだと言っておられたのですが……」
困ったような顔をするリンシャにミーアは、うむむ……っとうなり声を上げた。
「どうしても必要……。ふーむ、これは……、一度、話をする必要がありますわね……」

第二話　ミーア姫、正論を吐いてしまう

リンシャから話を聞いた翌日、ミーアは早速、ベルから話を聞くことにした。

ベルを城に呼ぶわけにはいかないからアンヌの実家に行かなければならないなぁ……、などと考えていたミーアだったが、その日は、とても寒い日だった。

外を見ると、なんと、チラチラ雪が降っていたりもした！

それを見たミーアは……、

「ふむ……。いつまでもベルのことを隠しておくわけにはまいりませんし……。せっかくの機会ですから、お父さまに紹介するのはどうかしら……？」

ふと、そんなことを思った。

「まぁ、ラフィーナさまや、シオンに居場所を作ってもらうこともできるでしょうけど。それでも、帝国の中にいさせるのであれば、お父さまに認知しておいていただくべきですわね……。それで、わたくしの義理の妹とするか……。あるいは、リーナさんと仲良しならば、イエロームーン公爵家に……でも、あそこも、毒草とかが危ないかしら……。いっそ庶民として、アンヌの家に面倒を見ていただくということもありですわね……。ふーむ……、その辺りのこともその内、話し合う必要がありますわね」

などと、いろいろと考えた末のことである。

……別に、雪を見てしまって……、寒そうだなぁ、外に出るの嫌だなぁ……、などと思ったというわけではない。思ったわけではないが、まぁ……、ミーアは雪を見た時、庭を駆け回るタイプではなく、ベッドで丸くなるタイプであることは否定のできないところではある。

とまぁそれはさておき、そんなわけで、ミーアはアンヌにお願い

して、ベルを呼んできてもらったのだ。
「ふむ……、しかし、いったいベルは、どうしてそんなお金の無駄遣いをしているのかしら……？」
ベルは、ルードヴィッヒの教育を受け、アンヌやエリスに育てられたという。
「しかも、わたくしのことを、祖母として心から尊敬しているってお話でしたわ……。わたくしを尊敬しているというのならば、金貨を褒美として与えるというのは、いかにも不自然」
そのやり方はすべてを金で解決するというやり方に通じる。そして、常に金に頼ってばかりいると、必要な金額が天井知らずに上がっていってしまうことを、ミーアはよく知っている。
飢饉の際、食料を得るために、さんざん苦労してきたミーアなのである。
あるいは、ルードヴィッヒあたりならば、合理的な判断によってそういう方法を用いることもあるかもしれないが、ベルの教育上はあまり好まないのではないだろうか。
アンヌやエリスに至っては、そんなやり方をしたら怒りそうな気さえする。
つまり……、それは、誰かに教わったやり方ではなく、ベル自身が考えたやり方なのではないか。
……などと考えつつ、メイドに自分とベル、それにアンヌとリンシャの分の熱ーいお茶とお菓子の用意を指示。糖分の補給ルートをちゃっかりと用意する辺り、ミーアもだいぶ、戦術手腕が身についてきたといえるかもしれない。
今日もミーアのスイーツ戦線に異常はないのだ。
そうこうしている内に、ノックの音が聞こえた。
「失礼いたします。ミーアさま、ベルさまをお連れいたしました」
「ああ、来ましたわね……。どうぞ、お入りになって」
三人をさっさと自室に招き入れると、ミーアは愛想よく言った。
「ありがとう、アンヌ。ベルも、リンシャさんも寒かったでしょう

？　とりあえずお茶にいたしましょうか。お菓子を用意しておきましたわよ？」
そうして、三人をテーブルの周りへと誘う。
「わぁ！　美味しそうなケーキ！　ミーアお姉さま、ありがとうございます！」
歓声を上げるベルに、ミーアは優しい笑みを浮かべるのだった。

さて、甘いお菓子とお茶で、お腹を落ち着けたミーアは改めてベルの顔を見た。
「ところで、ベル、少し小耳にはさんだのですけれど……、あなた、市場で買い物をした時に、お礼と称して金貨を渡して……、お釣りを断ったとか？」
「ミーアさま、横から失礼いたします。私も、実はお礼と言って銀貨をいただきました」
そう言って、リンシャは、それを取り出した。
「先日、森で賊に殴り倒された時に、ベルさまにいただいたものです。今まで世話になったお礼だと……。これは、お返ししますね……。私はこのような形でお礼をいただきたくはありませんし、お給金はラフィーナさまから直接いただいておりますから」
リンシャはにっこり笑って、ベルに銀貨を返した。
ミーアは、そんなリンシャの顔を見て、
――ああ、リンシャさん、ちょっぴり怒ってるんですのね……。
などと、なんとなーく察する。
……ちょっと怖かったので、あえて突っ込まず、ミーアはベルの方に目を向けた。
「それで、これはどういうことですの？」
「あ、はい。そうなんです。えっと……」
ベルはアンヌとリンシャをチラッと見てから、ミーアの耳元に顔を寄せた。
「金貨を渡した方はボクがもっと子どもだった頃に、すごくお世話

になった方だったので、お礼をしておかなければって思いました。ボクにできる、一番のお礼が、金貨だったので、それでしました……」

「ベルがもっと子どもだった時……」

ミーアは腕組みしてつぶやく。

――なるほど……、つまりは帝国が内戦状態になった時に、ベルに良くしてくれたお店ということですわね……。

未来の世界においてベルは逃亡者であり、力のない子どもでもあった。誰かに優しくしてもらっても、ろくなお礼はできなかっただろう。

恩義を受けた際に、それを返したいと思うこと……、その気持ちはミーアにもよくわかるものだった。

アンヌになに一つ報いることなくギロチンにかけられたこと……、あの日の口惜しさを、未だにミーアは覚えている。

もしも、あの日……、アンヌにあげられるようなものを持っていたなら……、例えば金貨の一枚でも持っていたなら……なるほど、それを渡して恩義を返そうとしたかもしれない。

だから、決してベルに共感できないわけではない……ないのだが……。

「お金はみなに平等な価値を持ちます。自由に、その人の使いたいように使ってもらえますし、とてもわかりやすい。ボクにできる一番のお礼の形なんです」

「ベル……」

「それに、また会えるとも限りません。だから、その場その場できちんと受けた恩義を返そうってしてるんです」

ミーアは、そこでようやく知る。

ベルの深層意識に未だに根付いている焦燥感……。

その場、その場で恩義を返していくということ。それは、いつ自分がいなくなっても良いように、というベルなりの考えに基づくものなのだ。

ベルが生きてきたのは、「明日、お礼を言えばいい」と、気軽に思える世界ではなかった。
「あの時に、きちんと言っておけば……」という後悔をいくつも積み重ねる、そのような過酷な世界なのだ。
それを知ってしまったミーアは、うーむ……と思わずうなってしまう。
正直、説得する言葉が思い浮かばなかったのだ。なので、
「それでも……、わたくしは、すべてをお金で返そうというやり方には反対ですわ。お金がすべての人に等しく価値を持つ、なんでもお金で解決できるというのも誤りだと思いますわ」
ミーアにしては、至極まっとうなことを言ってしまった……極めて珍しいことである。
「そう……でしょうか？」
そしてそれを聞いたベルは、なんだか微妙に納得していない顔をするのだった。
それもまた当然の反応だっただろう。実感のこもらない借りてきた言葉では、人の心を動かすことなどできはしないのだから。
――うーん、これは困りましたわね……。
ミーアは甘いおやつをパクリと口に入れるが、生憎と都合の良い説得の言葉は思い浮かばなかった。

第三話　ミーアパパの純情

「それはそれとして、ベル……、今日はお父さまに挨拶してもらおうと思っていたんですけれど……」
とりあえず、ベルのことはいったん棚上げしておいてから、ミーアは次の話題に移る。
「へ？　ミーアおば……お姉さまの、お父さま……ですか？」
きょとりん、と首を傾げるベル。ミーアは重々しく頷いて、
「そう。現ティアムーン帝国皇帝、マティアス・ルーナ・ティアムーン陛下にですわ」
そう言っておきながら、ミーアは腕組みした。
――しかし……、よくよく考えると少し難しいかもしれませんわね……。
なにしろ、普段があんな感じでも、大帝国ティアムーンのトップである。
さすがに「自分の孫娘だから会って！」などと本当のことを言うわけにもいかないので……、そうすると、ベルはよくて一般民衆の娘。悪くすると不審者である。
「お父さまが暗殺者に命を狙われたなどという話はついぞ聞いたことがございませんから、きっとそれ相応に気を付けているはず。素性の明らかでない者と会うとは、あまり思えませんし……。さて、なんと言って誤魔化そうかしら……」
などと少々悩みつつ、ミーアは父の執務室を訪れた。
「失礼いたします。お父さま。少しよろしいでしょうか？」
「おお、ミーア！　どうかしたのか？」
基本的に、ミーアの父、すなわち皇帝というのは割と多忙な人だ。けれど、食事の少し前の時間は比較的、自身の執務室でゆっくりしていることが多い。

理由はとても簡単で、状況が許すならば、彼はミーアと共に食事をしようとするためだ。そのため、御前会議やら、各月省からの報告やらは、すべて食事前にきっちりと終わるようにスケジュールが組んである。
愛娘ミーアと一緒に会話を楽しみながらする食事を、彼は、なによりも楽しみにしているのである。
……ミーア的には時々、それがウザくはあるのだが……それはそれ。
とりあえず、部屋の外にベルを待たせた上で、ミーアは父の部屋に入った。
「珍しいではないか。ミーアが自分から来るとはな。今日は、一緒にランチをできるのか？」
ミーアの姿を見た皇帝は、なんとも嬉しそうに笑みを浮かべた。
「ええ、それはまぁ、そうなんですけれど……。実は、今日はお父さまに会っていただきたい子がおりまして……」
「ほう。私に会わせたい者か……。ふむ……、それはもしかすると、お前が連れてきたというお友だちのことかな？」
皇帝は柔らかな笑みを浮かべて、顎をさすった。
「聞いたところでは、お前に似た顔の少女だというではないか？ちょうど見てみたいと思っていたところだ」
「あら、お耳が早いですわね。さすがはお父さまですわ」
父の反応に、ミーアは素直に感心する。
――白月宮殿に入ってくる者に関しては、すべて把握しているということかしら……。ふむ、お父さまが情報を大切にされる方だとは思っておりませんでしたわ。案外、お父さまもやりますわね……。
前の時間軸……、城に訪れていた大切なお客さまのことを、まったく把握しておらず、ルードヴィッヒにめちゃくちゃ怒られたことがあるミーアである。
事前に必要な情報を得ておくことの大切さは、身をもって知っているのだ。

けれど……、
「ふふふ、当然だ。私がミーアの交友関係を調べていないと思ったのかね？　お前と同じクラスの者のみならず、馬術クラブの者も、生徒会に所属する者も、寮の隣室の者のことまで、すべて把握しているとも！」
胸を思いっきり張り、ドヤァ！　顔をする父に、ミーアは微妙に頬を引きつらせる。
「そ、そうですの。まぁ、いいですわ……。その子を紹介したいのですけれど……、ああ、ちなみに、お父さま……、突然ですけれど、隠し子などがいたりとか……、そういうことはありませんの？」
ふと思いついて聞いてみる。
もし、そういう覚えがあるんだったら〝そういうこと〟にできて楽ですのに……、などと安直なことを考え出すミーアである。
まぁ、貧民街で拾った少女でも、外国の貴族の娘でも、適当な身分を用意することはできるのだが、隠し子として認知させてしまったほうが、名実ともに妹として扱えて楽だなぁ、と思ったのである。が……、
「それは、絶対にあり得ぬことだ」
皇帝はきっぱりと首を振った。
「あら？　なぜですの？　わたくし、別に怒りませんわよ？　皇帝が世継ぎを気にするのは当然のことですし……。若かりし日にやんちゃしたとしても、わたくしは別に……」
「いや……そう言われてもなぁ……。私はお前の母以外に女を知らぬし……」
「……はぇ？」
口をぽっかーんと開けるミーアに、皇帝は、豪快な笑みを浮かべる。
「女遊びというものを覚える前に、お前の母に一目惚れしてしまったからな。わはは、思えばもう少し遊んでおけばよかったと思うよ」
――う、うーん……、これは……。お父さまの純情を聞かされた

わたくしは、どう反応すればいいのかしら……？
　ミーアが娘として、いささか複雑な気持ちを持て余している隙に、勝手に部屋を出て行った皇帝は……。
「ほぉ、君か。なるほど、確かにどこかミーアの面影があるな……。なに？　名前はミーアベル？　なんと！　名前まで似ているではないか。ふふふ、もしも、ミーアに子どもが生まれたら、案外、君のような感じなのかもしれないな」
　ミーアベルとすっかり打ち解けてしまった！
「ちょっ、お、お父さま、そんな気軽に！　いくらわたくしのお友だちとはいえ、そんな簡単に受け入れないでくださいまし」
　なんの疑問もなくミーアベルと打ち解けてしまう皇帝に、いささか不安になってしまうミーアである。なにしろ、混沌の蛇に限らず、ティアムーン帝国の皇帝を狙う暗殺者というのは決して少なくないはずなのだ。
　けれど……、
「なぁに、ミーアと見た目がそっくりな少女だというのならば、悪い人間のはずがないからな。私が信じる理由は、それだけで十分ではないか」
　さも当然、といった口調で皇帝は言った。
「じゅ、十分なんですの？」
「ああ、十分だ。何の問題もない。確かに人は外見では判断できぬものだが、ミーアに関しては違うからな。外見と内面、両方が揃わなければ、ミーアのような美しさは出てこないからな！」
　わはは、と笑う皇帝に、ミーアは……、
　――なんていうか、お父さますごいですわね……。
　はじめて畏怖を覚えた。
　――油断すると、わたくしの黄金像とか、本気で建て始めそうなのが恐ろしいところですけれど……。
　同時に、なんとも言えぬ危機感をも、覚えてしまうのであった。

第四話　食べ物の恨みは怖い

季節は巡る。
それはミーアがだらだら冬休みを過ごし終え、セントノエルに発つ、五日前の出来事だった。
ミーアは、いつもの通り自室でルードヴィッヒの説明を受けていた。
「先ごろバルタザルから連絡がありました。食糧の価格が高騰し始めております」
その報告を聞いた時……、ミーアは、持ち上げかけていた紅茶をいったんテーブルの上に戻した。
「ふむ……。やはり、来ましたわね……」
声が震えないように苦労する。
ついに、その時が来てしまったのだ。
飢饉の兆候……、昨年から見え隠れしていた不作の影響が、ついに現れ始めたのだ。
「今はまだ問題ありませんが、近い将来、民の中に餓える者が出始めるでしょう」
「ふむ……。で、対策は？」
ルードヴィッヒは、手にしていた羊皮紙の束をミーアの前に置いた。
「まずは、こちらをご覧ください」
それは、この二年間のルードヴィッヒの努力の結晶だった。
この二年間で準備した備蓄と、帝国の臣民を養うのに必要な分量の推計、現在、市場に流れている食糧の価格と、それがどの程度まで上がると、どこの住人が飢餓状態に陥るか、などのデータをまとめたものだ。
その数値は極めて細かいものだった。

ただ、貯めこんだ食料を配給すればいいというものではないのだ。それではとても足りない。そうではなく、外から輸入するもの、不作とはいえ帝国内で生産されるものなども当然、計算に入れなければならない。

その上で、現在、手元にある備蓄をどう取り崩していくのか……、その運用が問題だった。

「ふむ……」

ミーアは、羊皮紙を片手に顎を撫でつつ……、熟読してますよ！という風を装う。が……、実際のところ、細かい数字などは見ても全然わからなかった。

「なるほど……」

というか、そもそも〝なにがどうわからないのか〟すらわからないミーアである。

以前、ルードヴィッヒに怒られた状態である。

けれど、それも仕方のないことではあった。数字の羅列など、わからない人が見ても、ただの暗号にしか見えないもの。そして、ミーアは間違いなく〝数字を見てもわからない人〟なのだから。

ミーアは、分厚い資料をパラパラ眺めてから、降参とばかりにため息を吐き……、

「……よくわかりませんわね」

正直に言った。全面降伏である。

それは、言ってしまえば次善の策。あるいは、最悪よりはマシな選択肢だ。

ミーアはよく心得ているのだ。ルードヴィッヒなどの頭の良い相手と会話する際、わかっていないのに、わかってるふりをするのは最悪なことだ。

どこがわからないかもわからない状態、まったく理解できない状態で質問することも、ぐちぐち文句を言われるので、正直、やりたくはないのだが……、それでも、わからないことを放置するよりはマシなのである。

ミーアはそう判断して、正直にルードヴィッヒに伝える。と、
「申し訳ありません。情報が完璧でないのは承知の上です」
ルードヴィッヒは苦々しげな顔で頭を下げた。
「残念ながら、帝国各地の貴族については不確定の要素が多く……。現在どのぐらいの備蓄をしているかは、ある程度判明しているものの、その動きを予測するのは、極めて困難です」
けれど、とルードヴィッヒは続ける。
「民に被害が及ぶことに不確定な要素が絡むのは、望ましくありませんが……。それでも、恐らく、ある程度の余力を持って乗り切れるのではないかと予想できます」
「ふむ……、なるほど。それは朗報ですわね」
数値の意味は分からないが……、まぁ、ルードヴィッヒが大丈夫って言ってるので大丈夫なのだろう、とミーアは理解した。
その上で、ミーアはルードヴィッヒの方を見つめた。
「一つだけ、言っておきますわ、ルードヴィッヒ」
「は……、なんでしょうか？」
「このことで……、敵を作らないようにしなさい」
まるで、この世の真理を知る賢者のような、ものすごーく悟りきった顔でミーアは言った。
そう……、ミーアは知っている。食べ物の恨みは、根強くて重いのだ。
ミーアは、自身のことを慈悲深く温厚な姫であると思っている。どちらかと言うと、柔和で寛容な、思いやりに溢れた姫だと思っている。
……自己評価が若干甘めなミーアなのである。
それはさておき、そんなミーアであっても、食べ物の恨みには抗しがたいものがあるのだ。目の前でケーキを落とされれば激昂するし、それが最後の一つだと聞かされれば、思わず我を忘れてしまうことだってあるのだ。
だからこそ……、ミーアは思う。

この食糧の配給に関して、民の恨みを買うことは得策ではない、と。
「むしろ、それを使い、すべての者を味方とできればベストですわ……」
それこそが、ギロチンから遠ざかる道……。過去の反省を胸にミーアは言った。
「そのことを、どうか忘れないように、お願いいたしますわね」
「……はっ、かしこまりました。心に刻みます」
深々と頭を下げるルードヴィッヒに、ミーアは満足げに頷く。
「では、とりあえずは、セントノエルに戻っても大丈夫そうですわね」
「ええ。当面はミーアさまのお手を煩わせるようなことはございません。こちらが、皇女専属近衛部隊から届いた、セントノエルへの移動計画書になりますが……」
「ふむ……」
ミーアは、羊皮紙に目を落としてから、小さくうなり声を上げた。
――ルードヴィッヒは当面は大丈夫だと言っておりましたし、実際にはまだ飢饉は始まってもいないわけですけれど……、やっぱり不安になってしまいますわね。
食べるものがなくなるかもしれない……、その不安感は人間にとって極めて深刻なものだ。
貯めこんでおいた備蓄が、徐々に削られていくのを見るのも、非常に不安を覚えるもの。考えるだけで、お腹が痛くなってくるミーアである。……食べ過ぎのせいではない。断じて。
その不安の解消のために必要なことは、来年も今年と同じぐらい農作物が実ることへの信頼だ。
食べた分、明日、同じだけ手に入ると思えばこそ、今日、満足に食事ができるのだ。
――わたくしの心の平穏のためには、備蓄を取り崩すばかりではやはり心許ないですわ。無論、クロエのお父さまにも、ペルージャ

ンにも頑張っていただきたいところですけれど……。同時にもっと根本的な解決策を立てる必要がありますわ。わたくしの……。
「……心の平穏のために根本的な解決策を……」
「？　なにか、おっしゃいましたか？」
「ん？　いえ、なんでもありませんわ。そうですわね。途中で、少々寄り道をしたいから、少し計画を変えていただきましょう」
「寄り道、ですか？」
「ええ、ベルマン子爵領に……」
「ベルマン子爵領……ということは、学園都市に行かれるのですか？」
首を傾げるルードヴィッヒに、ミーアは小さく頷いた。
「ええ、そうですわ。アーシャさんに、少しお話がありますの」

第五話　女帝派の産声１　～ミーアの片腕、再び勝手に動き出す～

ミーアとの会合の翌日、ルードヴィッヒは、帝都の一角に建てられた古い家屋を訪れていた。

そこでは……、とある密会が行われていた。

ゆりゆらと揺れる炎の明かり、そこに照らし出されるのは、八人の男女の姿だった。テーブルを囲み、思い思いの場所で談笑する者たち。

その中には、ルードヴィッヒの協力者、バルタザルやジルベールの姿もあった。

そう……そこに集った者たちは、みな、ルードヴィッヒの同門。賢者ガルヴの弟子たちである。

ある者は緑月省にて外交に携わり、ある者は青月省にて帝都の行政を担う。ルードヴィッヒと同じ金月省に勤める者もいた。

変わり種だと、興味本位で中央貴族の家臣団に身を連ねている者もいる。

みなそれぞれに要職に就き、その手腕を振るっている者たちだ。

「しかし、驚いたな……。まさか、あの貴族たち全員が海外に落ち延びていたとは……。優秀な者たちだったから、てっきり目障りだと思われて消されたと思っていたよ」

まるで世間話のように語られるのは、先のイエロームーン公爵の工作だった。

それを聞いた別の青年は肩をすくめて首を振る。

「いやぁ、まさか呼び戻されるとは思わなかったよ。てっきり、帝国が傾くのが先かと思ってたけど……。その時には伝手として頼れると思ってたのに、残念残念」

皮肉げな笑みを浮かべる彼は、どうやらイエロームーン公爵の工作を知っていたらしい。知っていて……誰にも言わず、いつか何か

に使えないかと、密かに胸にしまい込んでいたのだ。
能力が高く、知恵も働く優秀な者たち。されど、その行いは、何者にも縛られることなく、いささか自由に過ぎた。
彼らは決して帝国に縛られることはない。優秀であるがゆえに、どの国に行っても活躍の場はある。
ゆえに、もしもこの国が腐っているとするならば彼らは簡単に見放すだろう。愚かな貴族どもに殉ずる必要などない、というのが師の教えだからだ。
――だが、ミーアさまを女帝とするためには、今以上に文官たちの力が必要になる。貴族たちの協力ももちろんだが……国を動かすためには役人の協力は必須だ。
ミーアが四大公爵家の子息をまとめ上げ、着々と貴族の味方を増やしている状況、自身の同門の者たちの協力を取りまとめるのは、ルードヴィッヒの是が否にもやらなければならないことだった。
「みな、集まってもらってすまなかったな……」
ルードヴィッヒの言葉に、その場のみなの視線が集まる。
「いやぁ、ルードヴィッヒ先輩。この時期に、先輩の呼びかけを無視するってのは、あり得ないんじゃないっすかね？」
代表してジルベールが口を開いた。悪戯っぽい笑みを浮かべて、彼は続ける。
「華々しく帝位を継ぐ表明をしたばかりでしょ？　先輩のごひいきの姫殿下が。そりゃあ、みんな来ますよ、興味を持たないわけがない」
「そうか……。それは好都合だ」
ルードヴィッヒは、その場のみなの顔を見回してから、メガネを軽く押し上げた。
「単刀直入に言おう。みなには、ミーア姫殿下に協力してもらいたいのだ」
「ほう、協力を……。だが、それだけの価値があるのかね？　その姫殿下に……。私はてっきりこの国の貴族どもも帝室も、無能者揃

いだと思っていたが……。ミーア姫殿下は例外であると？」
手前の男が、挑発的な視線を向けてくる。
「俺はそう思っているが……。ぜひ、みなには自分で判断してもらいたい」
そう言って、ルードヴィッヒが取り出したもの……それは、細かな数値が書かれた羊皮紙の束だった。
「それは……？」
「見てもらいたいものがあるのだ」
ルードヴィッヒは、一呼吸を入れて、全員の顔を見る。それから、おもむろに口を開いた。
「今年から、大規模な飢饉が起きる」
ここに来る前に、ルードヴィッヒは決めていた。協力を取り付けるために、目前に迫った危機を利用することを。
狙いは二つ。飢饉に対する際、彼らの協力を得ること、そして、その危機に対してミーアのとってきた姿勢を彼らに示すことで、彼らを仲間に引きずりこむことだ。
加えて言うならば、帝国が危機に瀕したからと言って、簡単に逃げられないように彼らをつなぎとめておく意味合いもある。
自由気ままな彼らだが、ガルヴに教わっていただけあって、その好奇心の強さも一入である。
そんな彼らが事前に飢饉の情報を提示されていたとしたら……、その飢饉が三年も続くものであると、予言されていたら……？
彼らが興味を抱かないはずがない。ことの顛末を見届けたいと思うはず……。
賢者ガルヴの弟子たちの性質を熟知したルードヴィッヒの策である。
「飢饉か……。確かに、その兆候はあるな。昨年の小麦の収穫高の減少、春先の農作物も軒並み不作だと聞くが……」
誰かのつぶやきに、バルタザルが口をはさむ。
「赤月省の公式の見解と言っても良いと思うが……、帝国辺土にお

ける収穫量が今年は減ることが予想される。昨年の夏以来、全体的に低い気温が関係しているようだ」
彼の発言を次いで、別の人間が口を開いた。
「緑月省としての見解だが、飢饉が起きる可能性は比較的高い。不作は帝国のみにあらず、周辺国からの輸入も高騰しつつある。まだ、許容範囲内ではあると思うが……」
食糧価格の高騰により、貧乏人が餓えていき、餓死者が出て、働ける人間が減り、次の年にはさらに収穫が減っていくという負の連鎖。
その兆候はすでに見え始めている。
「で？　それがどうしたというのだ？　この場にいる者の中で、その可能性に気付いていない者は一人もいまい？」
「ああ、そうだな。だがミーアさまは、この事態を二年前から予想しておられた。それに従って、俺は準備を進めてきたのだ」
「二年前から？　まさか……」
それを聞いた男は、慌てて羊皮紙の束をめくる。
「ミーアさまに従い、この二年間、財政の健全化と同時に食糧の備蓄に努めてきた。さらに、ミーアさまは農作物の不作が、帝国のみならず周辺国に及んだ場合も考えて、遠隔地より、小麦を輸送するルートも用意されている」
「フォークロード商会を使った、遠方からの小麦輸入……。しかも、価格を固定して……か」
「なるほど、平時から割高な金を支払っておくことで、いざ危機になった時には、逆に助けてもらうか……。なかなか悪くない発想だ……。これは商業組合などでも使える制度ではないか？」
集う者たちから、口々に賞賛の声が上がる。
「だが、この事態を予見するなどということが果たして可能なのか？　まさか、お前は姫殿下が予言者だとでもいうつもりか？　未来に起きることを予知することができると？」
一度、メガネの位置を直しつつ、ルードヴィッヒは考える。

確かに、ミーアは予知といっても過言ではないほど、未来を見通したように見えるが……、それが超自然的な力に基づくものであるとは彼は思っていなかった。
「俺には、ミーアさまのお考えのすべてがわかるわけではないが……、俺の予想では、今回のミーアさまの行動を可能としたのは、あくまでも頭脳労働だと思っている」
「頭脳労働……、観測と予測によって、正確に未来を予見するか。なるほど、思えば飢饉にも周期はある。歴史を学べば、大体いつ頃に飢饉が起きると予想することは可能か」
「それだけじゃない。恐らく、帝国の現状を正確に把握しているんだ。それで、飢饉にしろ、諸外国の輸入制限にしろ、戦乱にしろ、状況の激変があった際、帝国が陥る危機を察知していたということじゃないか？」
彼らは互いに頷きあいながら、ルードヴィッヒの方に目を向けた。
「なるほど。それで、この飢饉を機に、一気に民衆の支持を盤石なものにしようってことなんだな。餓えが広がっているところに颯爽と出ていき、食い物を配るか。その地の領主が食糧をケチっていれば、それを悪者として、民衆の支持を容易に取り付けることができる……。君主の作法としては正しいやり方だ」
それを聞いたルードヴィッヒは、けれど、小さく首を振った。
「いいや、そうじゃない。ミーアさまがなさろうとしているのは、もっと、大きなことだ」
そうして、ミーアの片腕と称される男は自信満々に笑うのだった。

第六話　女帝派の産声２　～ルードヴィッヒ語り倒す。ミーアの理、ミーアの統治を～

「それは、どういう意味だ？」
不審げな顔をする同輩に、ルードヴィッヒは言った。
「あの方は言われたのだ。この件で、敵を作るな、と……」
「敵を作るな？　それはいったい？」
疑問をつぶやく彼らの反応を見て、ルードヴィッヒは苦笑した。
――ああ、昔の俺を見るようだな……。きっと出会ったばかりの頃であったなら、俺もミーアさまの意を汲むことはできなかっただろうからな。
実のところ、ミーアのところに報告に行った時、ルードヴィッヒは一つの迷いを抱えていた。
それは備蓄を、いかにして配布していくかということだ。
幸いにして、食糧自体は順調に備蓄することができている。民衆を餓えさせないだけであれば、どうとでもできる余力があるのだ。
けれど、状況は変わった。
先日のミーアの「帝位継承の表明」によって、ルードヴィッヒは考えざるを得なくなったのだ。
すなわち、この飢饉をどのように「利用」するのか、ということを……。
最もシンプルに考えるのならば、ミーアが女帝になるのに邪魔になりそうな貴族の排除に使うべきだ。積極的な悪意を持つ者、ミーアの足を引っ張る無能者、それらを排除するのに、今回の飢饉は絶好の機会だ。
領民の心を領主から分断し、代わりにミーアが信頼を得る。効率的に敵対者を排除することは恐らく可能だろうし、それはミーアが女帝を目指す上でも有益なことだろう。
けれど……、それは、なんだか違うような気がしたのだ。ミーア

のやり方ではないような、そんな気がしたのだ。
そして、迷うルードヴィッヒの前に、ミーアは一つの方針を指示したのだ。
この件で敵を作るな……と。
そして、それをミーアが言ったタイミング、それは……。
「一つ問いたい。今、見てもらった資料に、なにか不足はあるだろうか？　みながしようと思うような分断工作に、これ以上の情報が必要か？　これを見たミーア姫殿下は言われたのだ。これではよくわからないと……、情報が不足していると……。では、それはなにか、わかる者はいるだろうか？」
問いを受けた者たちは互いに顔を見合わせて、困惑の様子を見せるばかり。そんな彼ら一人一人の顔を見回してから、ルードヴィッヒは言った。
「簡単なことだ。各貴族領の備蓄の数値がないことだ」
あの時、ルードヴィッヒが渡した羊皮紙に、素早く目を通したミーアは言ったのだ。
「よくわからない」と。
この場に集う少壮の文官たち――その誰もが「不足はない、これで十分だ」と言った資料に対して、かの帝国の叡智は言い放ったのだ。
「これではよくわからない、不足である」と。
その理由は、ルードヴィッヒにはよくわかった。そして、実にミーアらしいとも思った。
「それこそよくわからない話だ。貴族の備蓄は……、それはわかっていた方が確実だろうが、苦労して手に入れる情報でもあるまい」
疑問を口にする者がいた。
そして、それはある面で正しいことでもあった。
実のところ、貴族と領民とを分断しようとするならば、なにも貴族がどの程度、備蓄を貯めこんでいようが関係はないのだ。
どれだけの物資を持っていようと、その貴族が使わなければ良い

のだから。
大切なことは“助けてくれない貴族と、救いの手を迅速に伸べるミーア”という構図を示すこと。そのためには、その地の貴族の物資は重視すべき要素ではない。
なぜなら備蓄の量にかかわらず、心根の腐った貴族は、民衆など放っておくものだからだ。備蓄が有り余っていようとも、自身の安心のためには領民を切り捨てる、それが貴族というものだ。
だから、貴族の備蓄量は関係ない。多い少ないではなく、問われるのは、その貴族の性格なのだから。
確かにその者を処断して、備蓄をこちらで再利用するなどはできるかもしれないが、事前に使い込まれてしまうことも考えられる。それをあてにすることはできない。
だから、不確定な要素を取り込む必要はない。もし、ミーアが分断工作を念頭に置いているのなら、その情報は、あくまでも補完要素に過ぎないのだ。
だが、ミーアは言ったのだ。よくわからない、と。ルードヴィッヒが載せなかった情報は、必要な情報であるのだ、と。
では、それはどういうことだろうか？
ルードヴィッヒは、すでにその答えに辿り着いていた。
彼は知っているからだ。ベルマン子爵にミーアがなしたこと。あるいは、セントノエル学園にて……、ティオーナに狼藉を働いた貴族の子弟たちに、ミーアが何をしたのかを。
「なぜ、貴族の備蓄の情報が必要か……。簡単なことだ。ミーアさまは、貴族たちをも巻き込んで、この度の危機を乗り越えようとされているのだ」
「貴族たちを巻き込む？　どういう意味だ？」
「単純なことだ。持つべき者に出させる。貴族に貴族の義務を果たさせる。ただそれだけのことさ」
貴族は領民から税を集める。代わりに、領民を守る義務を負う。
それは侵略者に対してばかりではない。疫病や飢饉に対してもま

たしかり。それは領民が普通の生活を送れなければ労働力が落ち、税が滞って、貴族も生活が成り立たなくなるという実際的な側面を持つことではあるのだが……。
ともかく、貴族は領民に対して、一定の義務を負うものなのだ。
「恐らく、ミーアさまは、各貴族に自分たちの領民を守らせようとしている。まず、彼らが持っている備蓄を吐き出させ、そして、不足した分をミーアさまが補う……、そのように考えておられるのではないだろうか」
だからこそ、ミーアはあのタイミングで「敵を作るな」と言ったのだ。
貴族のことはさておき、民衆を餓えさせないためには十分な備蓄であると、ルードヴィッヒが言ったから……、その備蓄の使い方を指示するために言ったのだ。
「いや、そう上手くはいかないでしょう。貴族たちがそのように殊勝な判断をするとは思えない」
懐疑的な声に、ルードヴィッヒは首を振る。
「無論、圧力もかけるだろう。わかりやすく言えば、これまでミーアさまは、なにかにつけて民草に寛容な態度をとってこられた。新月地区に建てた病院しかり、先日の誕生祭しかりだ」
今にして思えば……あの誕生祭からして、すでに計画の一部であったのだ、とルードヴィッヒは感心する。
「そのような、民に好意的なミーアさまが……民を見捨て、自身の安寧のみを優先する貴族に好意的であるはずがない……。そのように貴族たちに圧力をかけ、同時に、天秤のもう片方の皿には『安心』を乗せるだろう。もしも民衆のために尽力し、その貯えが不足した際には、こちらが食糧を提供する、と。お前たちを餓えさせることはしないから、と」
民衆に直接、食糧を供給するのではない。その地を治める貴族を通じて、食糧を供給しようというのだ。
「そう考えれば、先日の誕生祭には、いくつもの意味があったのだ。

民と貴族とのつながりを強固にすることと、同時に、食糧を供給する予行演習という側面とが……」
あれで、貴族たちは具体的に知ったのだ。
領民の必要とする食糧がどの程度か……。自身の領民が、どの程度いるのかということも。
「中央政府が一括管理によって、各地の民衆に食糧を供給するのは手間だし、恐らく仕事が回らない。結果、食糧は滞り、餓死者が生まれる。だからこそ、すでにあるその地の統治の仕組みを利用しようとされているのだ」
一人の人間が、帝国全土を見ることはできない。いくらミーアといえども、そんなことは不可能、遠く離れた地の領民のことなど、いちいち気にしてはいられない。
ゆえに、その地に住まう貴族たちに自分たちの領民を見させようという、責任を果たさせようという、それは極めてシンプルな考え方だ。
「それに、貴族たちのメンツも保たれる。その地の貴族を無視して、ミーアさまが直接乗り込んでいって領民を助けたのでは、貴族たちは民衆に軽蔑され、敵視される」
分断工作の狙いは、まさにそれであるが……、
「ミーアさまは、そのように、貴族たちを敵に回されることを望まない。むしろ、これを機に貴族たちをも味方につけたいと、そう願っておられるのだ」
「馬鹿な……。それは……非合理だ」
「確かに、無能な統治者が失敗するのを待って、その者に代わって善政を敷く。それが合理的なやり方だろう。効率的で、あまり労力をかけずに済む……、そのような方法だろう」
そう、それは敵を排除するだけでない。使えない人材を排除するためにも有効な手段であった。ミーアが女帝となる上で能力の低い貴族もまた、邪魔者になる可能性が極めて高いのだ。
けれど……、ルードヴィッヒは小さく首を振る。

「効率的な統治を考えるならば、トップの首をすげかえるというのは合理的な考え方だ。だが……、それはミーアさまのやり方ではない。鈍らとなった、使えない剣は捨てて、新しく鋭い剣を買うのは、ミーアさまの好むところではないのだ。使えない刃を研ぎ直し、再び使えるようにする……、使えない者を排除するのではなく、使えるようにする。それが、それこそがミーア姫殿下のやり方なのだ」

あのベルマンを忠臣に変えたように……。

「だが、それでは各地の貴族の力が増大する。よからぬことを企む者がいるやもしれんぞ？」

ルードヴィッヒの言っていることは分断工作とは真逆のことだ。その地を善く治めよ、と、各地の貴族を力づけ、領民との仲を強固にすることだ。

力をつけた貴族は、そのままミーアに反旗を翻すかもしれない。その危惧は当然のことといえる。が……、それはすぐに別の者に打ち消される。

「いや、抜かりはないだろう。誰があのミーア姫殿下に逆らえるというのだ？　聖女ラフィーナ、サンクランドのシオン王子、レムノ王国のアベル王子と固い友誼を結ばれたあの方に……。今や帝国の最精鋭とも言うべき皇女専属近衛部隊をも従え、しかも、その副隊長には軍部に影響力を持つ、レッドムーン家の公爵令嬢が控えているのだぞ？　もとよりグリーンムーン家の公爵令嬢とは懇意にしていると聞くし、セントノエルの生徒会ではブルームーン家の長男を従えているというではないか？」

今やミーアは、ただの帝国皇女ではない。その権勢は、容易には逆らいえぬほどに、絶大なものとなっている。

仮に、帝国内で最大の領地を誇り、精強な私兵団と忠実な領民を持ちえたとして……、逆らおうなどとは誰も思わない。

その力は、昨年の誕生祭の時に、圧倒的に示されているのだ。

「まさか……そこまで読んで、あのドレスを身にまとったのか？あの時の演出すべてが……、貴族たちを従わせるために？」

驚愕に顔を引きつらせる者たちに、ルードヴィッヒは言った。
「恐らく、これこそがミーアさまの基本構想だ。だから、俺はその意志を汲んで、計画を実行に移していく予定だ。みなには、当面、各部署にて飢饉の対策への協力を求めたい。そして……、それをもって判断してもらいたいのだ。ミーアさまが、女帝に相応しい方かどうかを」
そうして、ルードヴィッヒは静かに頭を下げるのだった。

第七話　女帝派の産声３　～主従の心が重なる時！～

「それにしても、とんでもない方っすね……」
思わずといった様子で、ジルベールがため息を吐いた。それから苦笑しつつ、
「でもなんか、なんでも一人でできてしまいそうで、俺たちなんて必要ないって感じもするっすね」
その言葉に、ルードヴィッヒは首を振って見せた。
「いや、あの方は、きちんと社会というものを知っているよ」
「どういう意味っすか？」
「わからないか？　確かにミーアさまは大体のことは、お一人でできてしまうだろう。特に頭脳労働に関しては誰に頼ることもなくできてしまうだろう。が、それでは国は回っていかない。それをよくご存知だ」
それもまた、ルードヴィッヒが感心するところだった。
「正直、俺は自分でできることは自分でやってしまった方が楽だと思っている。自分より劣る人間に仕事を割り振るのは気を遣う。だが、それをしなければ、組織は動いていかないんだ」
「なるほど、それで先輩や俺たちに、仕事を振ってると？」
「それだけじゃないぞ？」
「ん？　どういうことっすか？」
瞳を瞬かせるジルベールにルードヴィッヒは言った。
「聞いていないか？　例の学園都市のことだ。ミーアさまは、国を動かしていく若者の育成にも興味がある。だから、セントノエルに帰る前に皇女の町（プリンセスタウン）に寄って行かれるそうだ。ご自分の、学園都市の様子を見るために」
横で話を聞いていた男が、口をはさんできた。
「ああ、それで思い出した。あの話は本当なのか？　ルードヴィッ

ヒ。師匠が、その学園の長になるというのは……」
「ああ、本当だ。すでに弟子の何人かも講師として呼んでいる。ミーアさまは、身分や金の有無にかかわらず、能力を持つ者には、それに相応しい教育を施されるおつもりらしい。つまりミーアさまは、我々のような存在を、学園というシステムのもとに生み出そうとされているということだ」
賢者ガルヴの師弟関係を、システム化しようとしている。それだけで、この場に集う者たちにとっては驚きだった。
ルードヴィッヒの言葉に、ジルベールは、ニヤリと好戦的な笑みを浮かべる。
「それは、うかうかしてられないっすね……。うちらの後輩が次々に現れるってわけだ」
「そうだ。能力は我々と同等の、そして恐らくは我々よりも忠誠心に厚い者たちが、だ」
帝国の叡智……巷にささやかれるそのあだ名が、決して誇張ではなかったことに、その場の誰もが言葉を失っていた。
「それで？　我々はどう名乗れば良いだろうな？」
生じた沈黙を破り、問うたのは、ここまで黙って話を聞いていたバルタザルだった。
「レムノ王国の革命軍みたいに、トレードカラーを決めてみますか？　紫の衣を着て表明したわけだから紫巾党みたいな……」
ジルの茶化すような言葉に、ルードヴィッヒはゆっくりと首を振った。
「ミーア姫殿下が自ら表明されたのだ。であれば、我々もまた、こう名乗らなければならないだろう……。女帝派、と」
「女帝派……」
ルードヴィッヒの告げた一言、それにより、その場の緊張感が一気に高まった。
「女帝派……、帝国初の女帝陛下か」
「ふふ、いいね。それは、実にやりがいがありそうだ」

こうして、ルードヴィッヒが組織した女帝派は、静かなる一歩を踏み出したのだった。

さて、帝都でルードヴィッヒが暗躍する中、ミーアはベルマン子爵領に向かって出発した。ベルマン子爵領から静海の森、ルドルフォン辺土伯領を経由して、ヴェールガ公国に向かう予定である。

帝都を発つ直前に「もう少しゆっくりしていけばいいのに……」とか「せめて、ベルちゃんは、もう少し……なんだったら、置いて行ってくれても……」などと……、ごねる父が若干ウザかったミーアである。

「というか、これ以上、ベルを置いておいたら、甘いものの食べ過ぎで太ってしまいますし……」

人は、他人のＦＮＹはよく見えるものなのである。

そんなわけで、予定通りベルを伴っての出発である。

「うーむ……、しかし、ベルマン子爵領までも結構遠いですわね……」

馬車に揺られつつミーアは改めて思った。帝国は広いのだ。

「これは、帝都から各地に食糧を運んでいくのも面倒ですわね……。それに、食糧がないという連絡が帝都に届くまでに、そもそもの時間がかかりそうですわ」

これでは、何食かご飯を抜くことになるかもしれない……それはつらいことだ。

「……お腹が減るのはつらいこと……、あまり待たせずに届けられればよろしいのですけれど……」

前の時間軸、兵士の慰労と視察の名目で、帝国各地を回らされたミーアは、その目で見ているのだ。飢餓による惨状、人々の怒り、憎悪……。

食べ物の怒りは恐ろしい。空腹は人から冷静さを奪うものなのだとミーアはよく知っているのだ。

ルードヴィッヒの実地教育の賜物（たまもの）である！

「ああ、それに、ルードヴィッヒのことですから、きっと、わたくしに、細かな報告を上げてくるに違いありませんわ。そうなると、わたくしの仕事が増えてしまいますわ。なんとかできないものかしら……？」

基本的にサボることに手を抜かないミーアである。

「よくよく考えるとルドルフォン辺土伯のように、自発的に動いてくれるほうが楽ですわね。あの方の領地から食糧を運んでいただいたほうが、隣接する土地などには素早く運べるはずですし……。ふむ……。ある程度、その土地の貴族たちに、食糧供給を手伝わせるのは、一つの手ですわね……。具体的にどうすればいいかはさておき、自分の領地のことを一番知っているのは、そこの貴族であるはず……。であれば、それを利用しない手はございませんわ……。というか、そもそも、わたくしだけ働いて、連中がサボってられるなんて許せるはずがございませんわ！　よし、その方向でルードヴィッヒに方策を立てていただくとして……」

今まさに奇跡的にも主と従、ミーアとルードヴィッヒの心は一つになったのだ！

……そうだろうか？

そのようなことを考えているうちに、ミーアの前に皇女の町が姿を現した。

皇女ミーアを支えるべく集う女帝派の者たち……彼らは、まだ知らない……。まとめ役の忠臣、ミーアの片腕ルードヴィッヒすら想像だにしていない。

皇女ミーアの次なる一手……。

ミーアが彼らの度肝を抜いてしまうのは、もう少し先のことだった。

第八話　ベルマンはミーアの信頼を手に入れた

ベルマン子爵領についたミーアは、盛大な歓待を受けた。
「ミーアさま、わざわざ我が領地に寄っていただけるとは……、大いなる喜びに、領民一同、歓喜の涙を流しております」
ミーアを出迎えたベルマンは、そう言って、いささかオーバーアクションでミーアを出迎えた。
そして、その彼の言葉には一切の誇張はなかった。
ミーアは、街に入ってから見たものを思い出して、いささか困惑していた。
――大歓迎過ぎて恐ろしかったですわ……。
町の住民は建物から出てきて、ミーアを出迎えるために道を埋め尽くしていた。
そして、ミーアの乗った馬車が通る道に花をまいた。花で埋め尽くされた道を行くミーア一行に、「帝国の叡智に栄光あれ！」と、住民たちの賛美が降り注ぐ。
誇張なしに、ミーアは非常に歓迎されていた！
そうなのだ……、冬の誕生祭以来、帝国内でのミーア人気は大いに高まっているのだ。
特に、このベルマン子爵領では「皇女の町」が領内にあることもあって、皇帝本人より、むしろミーアの方が、人気が高いほどだった。
驚くミーアであったが、傍らにいたベルは、したり顔で言った。
「ベルマン子爵領の皆さんは親皇女派として、帝国内戦の時にもボクのことを助けてくださいましたから」
「親皇女派……ふーむ……そうなんですのね。なんか、ちょっぴり気味が悪いですけれど……」
前時間軸の際、飢饉にあえぐ地域で、罵詈雑言を浴びせられたミ

ーアとしては、人々からの称賛を素直に受け止めきれない部分はあるのだが……。
「まぁ、この称賛の声を失わないようにしたいものですわね……」
そうして、その日は盛大な晩餐会をもって、大いにもてなされたミーアである。
食べきれないほどテーブルの上に並べられた料理を前にミーアは、思わず頬をほころばせる。けれど、すぐに首を振り……、
「ベルマン子爵、おもてなしに感謝いたしますわ。ありがたくいただかせていただきますわね……」
「もったいなきお言葉にございます」
上機嫌に笑みを浮かべるベルマン。そこに冷や水を浴びせるようなことは、あまりしない方が良いかもしれないなぁ、などと思うミーアであったが……、それでも言っておいた方が良いと判断。意を決して口を開く。
「けれど、これからは、あまり食糧を無駄遣いしないでいただきたいですわ」
「は……？」
ぽっかーん、と口を開けるベルマンに、ミーアはできる限り冷静に聞こえるような口調で続ける。
「これは、ここだけのこととして聞いていただきたいのですけれど、恐らく今年の夏頃から食糧の不足が各地で起こりますわ。その時に備えて節約に努めていただきたいんですの」
ミーアは正直なところ、ベルマンが素直に聞くとは思っていなかった。彼の性格を考えると、むしろ反発されそうでさえあるが……。
――それでも、言っておかないのは気分が悪いですし……。あ、でも……。
唖然とした顔をするベルマンにミーアは一つ付け加えておく。
「一応、このことを知っているのは一部の人間だから、あまり吹聴しないようにお願いいたしますわね」
念のために言っておかないと、どこでなにを言われるかわかった

ものではない。なにしろ、かつて土地の広さを求めて、ルドルフォン辺土伯に喧嘩を売った男である。
今回の情報も、もしかすると、なにかの自慢に使われてしまうかもしれない。それは、あまり好ましくはない。
「一部の人間のみ……一部の……」
「ええ、わたくしが選んだ人間だけが知っていることですわ。なにしろ、普通は先に起きることは誰にもわからないものですし。下手な人に話すと、変な目で見られるでしょう？」
ミーアはきっちりと釘を刺しておく。「下手にいろいろ言って回ったりすると、お前も変な目で見られるぞ！」「自分の胸にしまって、ただ節約に努めればいいんだぞ！」と。
――とりあえず、こう言っておけば、自慢の種に使われることはなさそうですわね。まぁ、信じて節約に努めるかどうかは、微妙ですけれど……。
などと、考え事をしていたものだから、ミーアはベルマンのつぶやきを聞き逃した。
「それは……、つまり私を信頼して話して下さったと……」
どこか震えるような声でつぶやかれた、その声を……。
「あ、それと、皇女の町のことをお願いいたしますわね……。子どもたちを餓えさせてはいけませんわよ」
そう言うと……なぜだろう、ベルマンは神妙な面持ちで頷いた。
「ああ……、それは無論でございます。ミーア姫殿下の町を危機に晒すようなことは、我が身に変えましても……」
そう豪語するベルマンにミーアは首を振った。
「そういうのはいりませんわ。もしもなにかございましたら、無理せずに、すぐにわたくしに教えるように。ルードヴィッヒはいつでも帝都におりますから、気にせずすぐに連絡すると良いですわ」
意気込みはありがたいのだが、早め早めに連絡をもらいたいミーアである。その方が対処が楽なことが世の中には多くあるのだ。無理をされて取り返しがつかないことになる、というのは絶対に避け

たいミーアである。
そう、話がわかっていないのに、わかったふりをしてはいけない。早め早めにわからないと伝えておくことが必要なのだ！
――しかし……、ここも帝都より、ルドルフォン辺土伯のところに助けを求めた方が手っ取り早そうですわね。でも、さすがに過去のしがらみからできないでしょうし……。難しいものですわ。
「あの……？」
「ああ、なんでもありませんわ。それでは、お食事をいただきますわね」
不必要に贅沢をされては困るが……それはそれ。目の前にご馳走を出されて、それを食べないほど、ミーアは“無欲の姫”ではいられない。
ミーアは“食欲（フニョプリ）の姫”なのである。
「それで、明日なのですが、予定通りに学園を視察しに行きますわ。学園長のガルヴさん、それに、講師のアーシャ姫にもお会いしたいですし……」
「心得ております。馬車と護衛の手配はできておりますので、今夜は当家でおくつろぎください」
それから、深々とベルマンは頭を下げた。
「私のことを信頼していただき、そのような秘密を教えてくださったこと……感謝いたします。ミーア姫殿下のお心に叶うことができますよう、努力いたします」
「ええ、期待しておりますわ」
などと軽ーく答えつつ、すでにミーアは聞いていない。
目の前の……たっぷりキノコが入ったシチューがとても美味しかったから！
――ふむ、シチューにキノコを入れるとは、なかなか見どころがありますわ！　やりますわね、ベルマン子爵！
ミーアのベルマンへの信頼度が１００上がった！
ミーアは“茸欲（キノプリ）の姫”なのであった。

第九話　ミーア姫、こみあげる！　～友情の証の像～

翌日、朝早くにミーアはベルマン子爵邸を後にした。
ちなみに、夜は早めに寝てしまうミーアの寝起きは悪くない。サボると決め込んで二度寝、三度寝を始めない限りにおいては……だが……。
馬車に乗り込み、護衛を引き連れ目指すは静海の森、その目前に建った皇女の町である。
馬車に揺られることしばし……、やがて、ミーアの目の前に広大な森が姿を現した。
「ああ、ここに来るのもずいぶんと久しぶりな気がしますわね……。すっかり景色が変わってしまって気付きませんでしたけれど……」
ミーアは若干の驚きが混じった声で、そうつぶやいた。
森の手前には、少し大きめの建物が建っていた。
大き目とは言っても、無論、セントノエルや白月宮殿には及ばない。それでも、一般的な貴族の屋敷程度の大きさはありそうだった。
そして、その周りには、広大な畑が広がっていた。まるで、畑の中を通って学園に向かっていくかのように……馬車道の両側に、広々と畑が広がっていたのだ。
「以前来た時には、ありませんでしたわね……。あれは、もしかして、実験用の畑かしら……？」
未だ寒さが残るこの時期にもかかわらず、畑には、一面に力強い緑が繁茂していた。
「雑草ではありませんわね……。きちんと規則正しく列になって手入れされている……。あの傍らの小屋は観察をするためのものかしら……。ああ、実に素晴らしいですわ」
なにしろ、この学園の最大の目的は寒さに強い小麦を生み出すことにあるのだ。

そのために、しっかりと状況が整ってきていることをふつふつと感じて、ミーアは大いに満足した。
と、その時だった。
「あれが、聖ミーア学園なのですね、ミーアお姉さま」
ふわぁっと、ミーアの傍らで歓声を上げるベル。その声で、ミーアは我に返る。
「聖ミーア学園……そんな名前でしたわね……」
未だに学園の名前に納得がいかないミーアであるが、すでに動き出してしまったものは仕方がない。
――まぁ、名前ぐらいは……甘受いたしますわ。
そうして、すっぱり諦めた……はずだったのだが……！

校舎に近づくと、そのそばに、いくつかの家が建ち並んでいるのが見えた。校舎を取り囲むようにして建てられたそちらは、まだまだ数も少なく、とても町と呼べるものではなかったが、特に問題はなかった。
最優先すべきは、小麦の研究なのだから。
やがて、学園の校舎の正面で馬車はとまった。
馬車を降りたミーアは、改めて校舎を見ようとして……、ふと違和感を覚えた。
校舎の手前に、おかしな小屋が建っていた……。
それは奇妙な建物だった。屋根があり、三方向を壁で囲んであるものの、一つの壁面は完全に開いており、人が住むには適さないような建物。まるで、雨風から中のナニカを守るために建てられた、ある種の祠のようなものに見えた。
そして、その祠に安置されているもの……、視界の外れに一瞬だけ映った、白っぽい像のようなナニカに……、ミーアは嫌ぁな予感を覚えた……。そこから感じられる禍々しい気配に、背筋に冷たい感触が走った。
嫌だなぁ、見たくないなぁ……、と思いつつ、ミーアは恐々、そ

ちらに目を向けて……。
「なっ！」
思わず絶句する。
そこに立っていたもの……、それは、虹色に輝く像だった。
大きさは、ミーアの背丈のおよそ二倍。見上げるほどに大きい！
それは、頭から角を生やした馬と、その首を撫でて朗らかに笑う少女の像。その少女の顔は、どことなくミーアに似ていて……。
――いえ、現実逃避はなにも生み出しませんわ！　あれは……間違いなく、わたくしの像ですわ！
誕生祭の時に、父から聞かされたことを、ミーアは思い出した。
――ベルマン子爵が像を建てようとしてるとか、言ってましたわね……。つまり、これがそうなんですわね……。
誕生祭の時の雪像は、温かくなれば溶けてなくなってしまうものだが……、これは違う。木の像が何年その形を保っているものかは知らないが、きっと長く長く残り続けるものだろう。
――ベルマン子爵はなにも言っておりませんでしたけれど……、もしかして、サプライズのつもりなのかしら？　こっ、こんなサプライズいりませんでしたのに！
ミーアの像は、森の妖精が着るような上下一体型の服を着ていた。なんだったら、背中から羽根まで生えていた。妖精のような……、というか、妖精そのものの姿だった！
――こっ、これは、さすがに幻想的に過ぎて恥ずかしくはないかしら？
歴史上、自身を神と同一視する権力者というのは割と多い。絶対的力を誇る神のような姿に、自身を描かせるというのは、傲慢ではあっても、理解できなくはない思考である。
……けれど、自身を可愛らしい妖精と同一視する権力者は……、あまりいないのではないだろうか？
なにせ、これは恥ずかしい……というかイタイ……。屈託なく、純粋無垢な笑みを浮かべる像が、その笑顔が実に可愛らしいものだ

ったから、恥ずかしさも一入である。
これは恥ずかしい！
これではまるで、ミーアが、美しい妖精の姿をした自分の像を作るように、と命じたようではないか！
「いかがでしょう、ミーア姫殿下。この像は、お気に召されましたかな？」
わなわなと震えるミーアの後ろから、穏やかな声がかけられた。
振り向くと、そこには、この聖ミーア学園の長、ガルヴが立っていた。
「ああ、賢者さま、ご機嫌よう」
ミーアはスカートの裾をちょこん、と持ち上げて、
「この学園へのご尽力に感謝を……」
深々と礼をする。
「とんでもございません。このような老骨に、やりがいのある勤めを与えていただけたこと、感謝に堪えません」
それから、ミーアは、横にいるベルを紹介して、再び、像を見上げた。
「しかし……、この像は……」
「ええ、ルールー族の者たちが造ったものです。ミーア姫殿下への忠誠を表すために……」
なるほど、確かに、その像は力作だった。造った者の熱意が、こう、見ているだけでもひしひしと伝わってくるほどだった！
「最初は、これの三倍の大きさで作ろうとしていたのです。けれど、止めました。ミーアさまは、自らを誇示するのがあまり好きではないから、巨大な像など好まない、と」
――ああ、良い助言ですわ！　実に適切な助言ですわ。さすがは賢者ガルヴ。
「だから、身の丈の二倍ぐらいまでにせよ、と……」
――ああ！　惜しい！　あと一歩ですのに！　なぜ、像を建てること自体に反対してくださらなかったんですの？

ミーアは心で悲鳴を上げる。
「また、ご本人の姿をそのまま像にするという意見もあったのですが、それよりは、ご本人かどうかわからない程度に脚色を入れて……、ついでに、ミーアさまがお好きだという幻想物語の要素を追加したら良いのではないか、と……」
――くぅ、この程度の脚色では、わたくしだって簡単にわかってしまいますわ。だって、この学園の名前、聖ミーア学園ですし……。っていうか、よく見たら、像の足元に「聖女ミーアと一角馬の戯れ」とか書いてありますわ！
せっかく、誰かわからないように脚色を入れたはずなのに、台無しである。
――これ、なんとか撤去していただけないかしら……？
虹色にキラッキラ輝きを放つ像、それは、まず間違いなく、一角馬の角のかんざしと同じで、この森の木を削って作ったものだろう。実に美しくて、なんとも素朴な美しさがあった。
ミーアの視線に気付いたのか、ガルヴが説明を加える。
「森の奥に生えているという、樹齢数百年の巨木を切り出して参りました。ルールー族にとっては神に与えられし最高の木材らしいのですが……、ミーアさまの像を建てるのならば喜んで供出したいと言ってくれたものです」
――ぐっ……、た、確かに、ルールー族は森の木を大切にしてましたわ。蹴りを入れただけで、射殺されそうになりましたっけ……。ただの木であれなのですから、樹齢数百年の巨木となれば……、こっ、好意が重いですわ。
「ルールー族が削ったものを、表面は帝国の最新技術で加工してございます。こちらはベルマン子爵の手配でして……。以前のわだかまりを乗り越え、ミーアさまへの忠誠で結び合わされた両者の、象徴のような像でございます」
――良い話ですわ！　もっ、ものすごく良い話ですわ！　心が温まってくる素晴らしいお話で、とても撤去してとか言えませんわ！

いち早くそのことを察したミーアは……、瞳を閉じて、ふぅっとため息を吐いて……。
「へー、そうなんですのね……」
感情を失った声で言った。
「それは、素晴らしいことですわ。わ、わたくしも、このような像のモデルにしていただいて、かっ、感動のあまり泣きそうですわ」
……こみあげてくる、なんらかの感情を抑えることができず、ミーアは震える声で言った。

第十話　ミーア姫殿下、子どもたちを激励する

さて……、自身の木の彫刻にすっかり消耗したミーアであったが、すぐに気を取り直して、校舎に足を踏み入れた。

校舎に入ってすぐのところ、ミーアを出迎えるかのように、子どもたちが並んでいた。

そして、最前列にはミーアの顔見知りの子どもたちが控えていた。

「あら、あなたたちは……」

「ひめでんか、おひさしぶりです！」

「まぁ、もしかしてワグルですの？　久しぶりですわね」

一番に声を上げたのは、ルールー族の族長の孫、ワグルだった。

綺麗に髪を切り揃え、学園の制服に身を包んでいるため、一瞬わからなかったミーアである。

「元気にしておりましたの？」

「はい、げんきです。おべんきょうは、ちょっとたいへんですけど……」

――ああ、そうですわよね、やっぱり……。

ミーアは深く同情する。勉強なんて、やらなくて済むならやらずに済ませたいものである。

と、そんなことを考えていたから……、その横にいる少女を見て、思わずミーアは頬を引きつらせそうになる。

「ミーアさま、約束していただいた通りに、勉強することができています。ありがとうございます」

かしこまった口調で言って頭を下げたのは、孤児院の秀才少女、セリアだった。

「あ、ああ……、ええ、頑張っているようでなによりですわ」

ミーアは、その顔を見て若干、冷や汗を流す。

「お前も道連れだこの野郎！」の精神でセリアを学園に入れ、な

おかつ、ガルヴの厳しい指導を受ける特別クラスに入れるように手配したことを、すっかり忘れていたのだ。
今のは、もしかして皮肉かしら？　などと首を傾げつつ、ミーアは誤魔化すように笑みを浮かべる。
「あの、大丈夫かしら？　辛いこととか、ありませんの？」
などと言いつつ、あのルードヴィッヒの師匠から死ぬほど勉強を教え込まれるなんて、辛くないはずありませんわよね……、申し訳ないことをしてしまいましたわ、と反省しきりのミーアである。
「もし、辛いことがありましたら、遠慮なくわたくしに言ってくださいませね。なんとかいたしますわ」
とりあえず、フォローを入れておく。
なにせ、他人にした嫌がらせの種を刈り取るのは自分自身である。あとで復讐されないように……、というか、復讐とかしづらいように！　精一杯、優しいところを見せておくミーアである。小心者の策謀家、ミーアの手腕が冴え渡る！
その言葉に、セリアの瞳に、薄っすらと涙が浮かぶ。
――ひぃっ！　なっ、泣くほどにつらいんですの？　それとも、涙ぐんでしまうほどにわたくしのことを恨んでいるとか！？
などと、慌てかけるミーアであったが……、
「ありがとうございます、ミーアさま。大丈夫です、先生にもとてもよくしていただけて……、こんな風に勉強ができるなんて、夢みたいです」
目尻に浮かんだ涙を指で拭ってから、セリアは笑みを浮かべた。
「そ、そう……なんですの？　まぁ、無理しないで言ってくださいませね」
それから、ミーアは、もう一人の少年に目を向けた。
「ご機嫌よう、久しぶりですわね、セロくん」
重要なキーマンに、ミーアは精一杯の媚びた笑みを浮かべる。
なにせ、彼のやる気次第で、新しい小麦が生まれるか否かが決まるのだ。せいぜい、ご機嫌をとっておかなければならない。

「ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下」
頭を下げるセロ。であったが、その顔には、わずかばかりに、いじけたような表情が浮かんでいた。
「あら？　どうかなさりましたの？」
「……いえ、なんでもありません」
そうは言うが、なんだか声が不機嫌そうだった。っとその時だった。不意にセリアが近づいてきて……、
「あの、ミーアさま……。セロさまは、私とワグルくんが、ミーアさまに呼び捨てにされてるのがうらやましいみたいで……」
「せっ、セリアさん。余計なこと言わないで！」
セロは大慌てで、セリアを止める。その頬はほのかに赤くなっていた！
――まぁ！　なんて可愛らしいんですのっ！？
それを見て、思わず少年にキュンとしてしまう、ミーア（22）である！　ダメな大人のお姉さんである！！
――なんか、アベルも昔、そんなこと言ってましたけど、男の子ってこういうものなんですのね！
ついつい微笑ましい気持ちになって、口から笑みがこぼれてしまう。
「うふふ、元気そうでなによりですわ、セロ」
それから、自然に呼び捨てにしてやる。と、セロは、一瞬ぽかーんとした顔をしてから、
「は、はい。ありがとうございます、ミーアさま！」
頬を真っ赤にして、言った。
可愛らしい反応に、ミーアはすっかり気を良くしてしまった。
――ふふふ、このぐらいでやる気を出してくれるなら安いものですわ。この子がしっかりしてくれないと、小麦ができあがりませんし、頑張っていただきたいですわ。
などと、心の中で非常に即物的なことを考えつつ、ミーアはその後ろの子どもたちに目を向けた。

「はて、その後ろの子どもたちは？」
そこにいたのは、十名ほどの子どもたちだった。
皆、ミーアに目を向けられると、緊張に顔をこわばらせていた。
「ほとんどが新月地区の神父殿からの紹介です。あとは、ルドルフォン辺土伯の紹介で、近隣の辺土伯の子どもも数人ですが……。まだ、施設が整っていないのと、例の反農思想のせいで、中央貴族の子弟は未だ一人もおりません」
そう説明してくれるガルヴに、ミーアはあっさり言った。
「ああ、無理に呼ぶ必要もございませんわね」
なにしろ、この学園の一番の目的は、セロ・ルドルフォンに寒さに強い小麦を作らせることにある。その邪魔をしそうな貴族の子弟など、無用の長物……。とは思ったものの……、ミーアはそこに付け足した。
「学園の名が高まれば、おのずと人は集まってくるものですわ」
それは、ガルヴに対するヨイショが半分、もう半分は……、学園に人が集まらないのは自分のせいじゃありませんよ！　という責任回避が目的だった！
学園が功績を上げれば人が集まる＝人が集まらないのは学園が功績を上げていないせい＝わたくしのせいじゃありませんわ！　である。
完璧な自己防衛のロジックにミーアが満足していると……、そこに一人の女性が歩み寄ってきた。
「ミーアさま、遠いところをようこそおいでくださいました」
「ああ、アーシャ姫、ご機嫌よう」
視線を向けたミーアは、アーシャの服を見て、少しばかり驚いた顔をする。
「こんな格好で申し訳ありません、ミーアさま」
アーシャは苦笑しつつ、自らの服をつまんだ。
彼女が着ていたのは、分厚くて安い布地の、まるで平民が着るような服だった。

「ペルージャンの農民が使っている作業服です。畑に行くのに、ドレスというわけにはいかないので……」
「まぁ、そうなんですのね……。ふむ、少し触ってもよろしいかしら？　なるほど、見た目はともかく良い布ですわね……。丈夫そうですし、今度、キノコ狩りに行く時には、これで……」
……研究に余念のないミーアであった。

第十話　ミーア姫殿下、子どもたちを激励する（後書き）

昨夜、活動報告更新しました。

第十一話　小心者の物量作戦

「しかし、短い期間で見事ですわね」
アーシャとセロを従えて、ミーアは学園の周囲に整えられた畑に出ていた。
ちゃっかり、用意してもらった作業服に着替えて、である。
――ふむ、少し、ゴワゴワしてるのが気にはなりますけれど、まぁ、こんなものかしら……。丈夫そうですし、このぐらいの方が森に入るのには良いかしら……。
着心地を確かめつつも、ミーアは畑に目をやる。
「もともと、ティアムーンの領土は農耕に適した土地でしたから、少し耕してあげたら、すぐに使えるようになりました。学園長ガルヴさまのお声がけで、ルールー族の方たちにもお手伝いいただけまして……」
「ああ……、それはありがたいお話ですわね……ふむ、なにかお礼を差し上げなければいけないかしら……」
首を傾げるミーアに、セロが微笑みつつ言った。
「大丈夫だと思います。ルールー族は、森の中での狩猟によって生計を立てていますが、最近では、ルドルフォン家の協力で、畑も利用しています。農耕にも興味があるようで、ワグルには期待を寄せているみたいなんです」
「なるほど……、まぁ、そういうことでしたら……」
聖ミーア学園は、地理的にルールー族の村に近い。彼らが協力的でいてくれることは、学園にとって重要な要素と言えるだろう。
一通り畑について説明を受けたミーアは、大いに満足した。
美しく整備された畑は広く、しっかりと手入れがされている。
「これだけあれば絶対大丈夫ですわ！　なんの問題もございませんわ！」と、固い確信を抱きつつ、ミーアはアーシャの方に顔を向

けた。
「それで、どうなのかしら？　寒さに強い小麦は……、なにか糸口が見つけられそうですの？」
その問いかけに、アーシャは、わずかばかり緊張した顔をする。
「まだなんとも言えません。昨年秋にいろいろと検討しつつ蒔いてみましたが……、結果がわかるのはもう少し先の収穫を待たなければ……。様々な文献を調べたりはしているのですが……」
「なるほど、まぁ、そうですわよね……」
小麦の場合、種植えから結果が出るまで時間がかかるのである。それは、ミーアもよくわかっていた。はずだったのだが……改めて指摘されて……。
――これ……、一回失敗すると……、ものすごく大変ですわ！
ミーアは、遅まきながらそのことに気付いた。
即座に、小心者の心が騒ぎ始める。先ほどまで万全だと思えていた畑が、微妙に狭いように見えてきた！
――一年に一度しか実験できないのであれば……、もっと広い畑で、いろいろ試す必要がございますわ。
この時、ミーアは、事態を正確に捉えていた！
一発勝負でやり直しが利かないということ……、それは言うなれば、セントノエルのテストと似ている。
――であれば、対処法も変わらないはずですわ。
大国ティアムーン帝国の姫たるミーアは、テストの際、範囲の丸暗記をもって対処する。
すなわち、物量作戦である。範囲をすべて覚えておけば、どこをテストに出されても答えられるという、完璧無比な戦略である！
――それは、小麦の開発についても、きっと同じことですわ。
ほぼ一発勝負のような状態ならば、その一発で、広範囲のことを実験しなければならない。
百のケーキの中から一の美味しいケーキを引くために、全部食べてしまえば良い！　それがミーアの物量作戦なのだ。

――しかし、そのためには、もっと広い土地が必要……これではとても足りませんわ。どこか協力を求められそうな場所を探さなければ……。ルドルフォン辺土伯にも協力をお願いして……。うーむ、中央貴族の連中は嫌がるでしょうし……、他に協力してくれそうな方は……あっ！

不意に、ミーアの脳裏に夏休みの出来事が思い浮かぶ。

夏休み、ガヌドス港湾国からの帰り道に、立ち寄った場所のこと……。

「そうですわ。あの方、ギルデン辺土伯にも協力を求めるのはいかがかしら……？」

ルドルフォン辺土伯領とは真逆の場所、帝国北部辺土にあるギルデン辺土伯領。中央貴族とは違い、彼ならば快く畑を貸してくれるのではないだろうか……。

「ミーアさま……？　どうかされましたか？」

ぶつぶつひとり言をつぶやくミーアに、アーシャが不審げな目を向けてくる。

「ああ、いえ……、小麦のことで協力していただけそうな方を知っていたので……帝国北方に、ギルデン辺土伯という方がいらっしゃるのですけど……」

もちろん、この学園の畑で数年間かけて実験すれば、作ることはできるかもしれないが……、一刻も早く、ミーアは、寒さに強い小麦が欲しかった。

なにしろ、そうしないと備蓄は目減りしていく一方だろうから。

――ルードヴィッヒは、大丈夫みたいなことを言っておりましたけれど……。

基本的に、ルードヴィッヒの言うことは信じているミーアであるが……、それでも、備蓄がジワジワ減っていくのは精神的にキツイものがある。なんというか、ギロチンの足音が徐々に近づいてくるようで……。

――絶対、お腹が痛くなる……自信をもって予言できますわ！

そんな自らの心の平穏のために、ミーアは寒さに強い小麦を求めていた。
だからこそ、いろいろと試せる広い畑が大事なのだ。
――といっても、実験というのは、なにをするものなのかわかりませんし、やはり直接、行っていただくのがいいですわね……。
うんうん、と頷き、ミーアは言った。
「良い畑があるんですの。一度、直接行ってみていただきたいですわ」

かくて、アーシャ・タフリーフ・ペルージャンと、セロ・ルドルフォンは見ることになる。
温暖な南の地とは違う、決して農耕に適した土地ではない北部寒冷地の農業の様子を……。

第１１，５　あの花はどうして……？（前書き）

今回は少し作中時間と外れた話……。ほんのちょっとだけ未来のお話になるので、一応番外編扱いです。時間が前後するのでわかりづらくなるかな、と念のためです。。。

第１１，５　あの花はどうして……？

セロ・ルドルフォンは、植物が好きな少年だった。
なぜ、この花は赤い色なのだろう？
どうして、種をまく時に綿毛のようになるのだろう？
この草はどうして、背が高くて、あの草はどうして背が低いのだろう？
周りにある草や、木や、花をぼんやりと眺めながら、物思いにふけるのが楽しくて仕方なかった。
本を読み、まだ見ぬ珍しい植物を知るのが楽しくて仕方なかった。
世界には、不思議な植物があふれていた。
朝に咲く花、夕に咲く花、自ら虫を捕まえる草に、お城のように巨大な木。
遠き異国の地にあるという不可思議な草花に、彼の好奇心は大いに刺激された。
セロの興味はそのうちに、本の知識から、自らの手で草木を育てることへと向かう。
なんてことはない。身近な場所にだって不思議は溢れている。同じ種類の花でも、その一つ一つに個性があって、セロはそれを見つけるのが好きだった。
庭に自分の好きな花を植え育てることは、いつしか彼の大切な趣味になっていった。
貴族の男として、立派に振る舞わなければならない。剣の腕を磨き、馬に乗り、人々を率いていけるような男にならなければならない。そのプレッシャーはとても大きいものではあったけれど、幸いなことに園芸というのは、貴族の趣味としてそう珍しいものではない。
それに、ルドルフォンの家は、農業にも関係が深い家。

だから、趣味として続ける分には何の問題もないだろう、と……そう思っていた。
そんな彼に、劇的な変化をもたらす出会いがあった。
かの帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンとの出会いが……。

がたごと、がたごと、馬車が揺れる。
帝国の辺土と呼ばれる場所は、おおむねどこも同じ。道の整備もままならない田舎だ。
セロとアーシャとを乗せた馬車が向かっているのは、帝国北方に位置するギルデン辺土伯領だった。
季節は初夏、小麦の収穫期を迎えた帝国では、じわりじわりと深刻な問題が顕在化しつつあった。
それは……。
「セロくん、ルドルフォン辺土伯領の収穫はどうだった？」
アーシャの問いかけに、セロは厳しい顔をした。
「良くないって聞いています。昨年よりも、むしろ悪化していると……」
「そう……。ペルージャンも同じよ」
アーシャは、空を見上げて瞳を細める。
「日の恵みが……、少なかったのが、たぶん原因でしょうね……」
「日の……」
つられるようにセロもまた、空を見上げる。
空に輝く日の光はいつもと変わらず力強く、温かく感じるのに……。
「寒さに強い麦……」
日の恵みが少ないということ、それは言い換えるならば気温が低いということだ。今年もまた、去年と同じように寒い年になるのであれば、収穫高は落ち込むだろう。
「ミーアさまは、これを予測して私たちに言っていたのですね……」

アーシャのつぶやきに、セロは小さく頷いて見せた。
聖ミーア学園では、様々な授業が行われている。セロは、特にアーシャに師事し、植物学を、そしてペルージャンの農業技術を学んでいた。
それは、帝国のものとは比べ物にならないほど進んだ、素晴らしいものだった。
長年の研鑽によって磨き抜かれた「品種改良」という技術、それにより生み出されたいくつかの種類の小麦。
様々な用途に合わせて、改良された小麦に、セロは心底驚かされた。
でも……、
「どれも駄目だった。ペルージャンの小麦の中に、寒さに強いものはありませんでした」
アーシャは、学園の周囲に作った実験用の畑を使い、いくつかの種類の小麦を植えて実験した。けれど、結果はどれもいまいちだった。
風に揺れる麦、その穂はほとんどがスカスカで、中身が空っぽだった。日の恵みが薄い年には、時折現れる症状だったが……、その数は昨年より増えているように感じられた。
遠目には、普段通りの畑の景色、けれど、そのほとんどが、いわば麦の死体のようなもの……。麦の死体が立ち並んで揺れる畑の光景がなんとも不気味に感じられた。
「でもそれは……仕方ないと思います。だって、そんな小麦、聞いたことないですから……」
セロは、アーシャを励ますように言った。
最近の天候不順を鑑みるに、寒さに強い小麦をミーアが必要としているのはわかる。
けれど必要だからと言って、すぐにそれが見つかるわけではない。いや、そもそも、そんなものが本当にあるのかもわからない。
死なない生物がいないように……、物を食べずに生きていられる

人間がいないように……、陸で生きられる魚がいないように……。
日の光の恵みが少なくても、問題なく実る小麦など……ないのかもしれないのだから。
それが、絶対的な世界の理であるかもしれないのだから。
まるで、暗闇の中を歩いているかのようだった。
導などなく、どこに向かえば良いのかもわからず、ただただ闇雲に迷い歩くのみ……。それは、どれだけ不安なことか……。
「寒さに強い小麦なんて、本当にあるんでしょうか……？」
つい、弱々しくつぶやいてしまうセロ。けれど、アーシャは穏やかな笑みを浮かべて答えた。
「セロくん、覚えておいて。解決すべき課題が見えているということは大きな導です」
「え……？」
「解決すべき課題を見出し、その課題に取り組む中で技術を磨き前進する。私たちペルージャンの民は、そうして、農業技術を高めてきました」
真面目な顔で、アーシャは続ける。
「私は……、諦めて歩みを止めてしまおうとしていた私は、ミーアさまによって、忘れていた夢を思い出した。世界中の誰もが飢えずに済むようにすること……その夢に向かっていくための一歩目として、ミーアさまは課題を与えてくださった。だから、これをクリアすることは、私の夢への第一歩。今度は、絶対に諦めません」
いつもは穏やかなアーシャの瞳に宿った強い光……、セロは思わず、見とれた。
それは道を探求する修道士のような不屈の光、あるいは、戦に赴く騎士のような覚悟の輝き。
「アーシャ先生……」
と、その時だった。道の両側に広大な畑が広がった。
「あれがギルデン辺土伯領……」
「ミーアさまのおっしゃられていた通り、広い畑がありますね。少

し見てきましょうか」
　言うが早いか馬車を止めて、畑に向かうアーシャ。セロは慌てて、その後を追う。
「状況はこちらも同じようね。育ちが悪いのか、全体的に小さいみたい」
　遠目に見て、アーシャはため息を吐いた。
「やっぱり、日の恵みが少ないから……」
　つぶやきつつ、セロは、何気なく近くの小麦に触れ……小さく首を傾げた。
「あれ？　これ……きちんと穂が育ってる……？　どうして……」

『この草は、どうして背が低いんだろう？』

　ふいに……、頭の中に声が響く。それは過去の自分が語り掛けてくる声。
　この小麦は、どうして背が低いんだろう？　どうして育ちが悪いはずなのに、普通に実っているのだろう？
「背が低いことに、寒さに強い秘密がある……？　いや……違う？」
　なおもじっと小麦の観察を続けるセロに、アーシャが歩み寄ってきた。
「どうかしましたか？　セロくん、その小麦がなにか？」
「アーシャ先生、これ……、帝国の小麦と……違う種類のような気がします」
「え……？」
　それは、一見するとただの生育不良の小麦だった。見た目的には、一般的な小麦とほとんど変わらず、きっと他のものがまともに育っていたら、気にもせずに無視されるようなものだ。
　けれど……、セロの目は、些細な違いをしっかりと捉えていた。
　これは、学園で植えたペルージャンの小麦とも、ルドルフォン辺土伯領のものとも違う。

確信があった。そして……、
「もしかして、ミーアさまは……、この小麦を見つけよと、おっしゃられていたんじゃないでしょうか？　僕たちを、寒い場所に行かせることで……」
寒さに強い小麦があるのは、寒い地域である……と。
花が赤いのは、その地で生きるのに赤い方が有利だから。
背が高い木は、日の恵みをたくさん受けるため。
生物は、その環境で生きるために、体の性質を微妙に変えていく。であれば……。
「ああ……そうか。そんな簡単なこと……。寒さに強い小麦を見つけたいなら、寒い地域で実る小麦を調べなければならなかったんだ……」
ペルージャンもルドルフォンも、どちらも農業に適した地。であればこそ、知らなかったのだ。寒さが厳しい土地に根付く種類の小麦を……。
そう推理して、セロは静かに震えた。
自分は……、ミーアの役に立てるかもしれない。
趣味でしかなかったもの、好奇心に任せて読みふけっていた本の知識……、姉以外のだれにも認めてもらえなかったものを用いて……。
「ああ……そうだ。あの方は……ミーアさまは、最初から僕のことを認めてくれていて……だから、それを活かす道を用意してくれたんだ……」
思えばミーアは、セロの育てた花を見て褒めてくれた。セロの力を見て、それを生かす道を示してくれた。
闇の中、導はすでに示されて……目の前には進むべき道が確かにある。
ならば……、ならば、やるべきことは決まっている。
「アーシャ先生……、この小麦をもらっていきましょう」
セロがそう言った時、その瞳には紛れもなく、アーシャ・タフリ

ーフ・ペルージャンと同じ強い光が宿っていた。

第十二話　ミーア姫、くつろぐ

さて、時間は少し遡る。

聖ミーア学園を後にしたミーアたち一行は、セントノエル学園に到着した。

旅の疲れを癒すべく、ミーアは勇んで大浴場へと向かった。ちなみに、アンヌは学園の者たちに帰還の挨拶をするということで、ここにはいない。

お風呂でのガールズトークが大好きなミーアとしては、ちょっぴり残念なことである。

「そう言えば、ベルはずいぶん、子どもたちと仲良くなったんですわね」

ミーアの問いかけに、後ろからついてきたベルは嬉しそうに頷いた。

「はい。子どもたち、とても可愛かったです。うふふ」

どうやら、お姉さん面できて、ちょっぴり嬉しかったらしい。

ニコニコ笑うベルに、ミーアは微笑ましい気持ちになる。

「それに、なんといってもあの伝説の！　聖ミーア学園に、行くことができたなんて、感動してしまいました」

「ああ……、まぁ、そう、ですわね……。きちんと、やるべきことをやってくれていたのは良かったですわね……」

正直、豪奢な建物と木像だけ建っていたりしたら……、平静を保っていられる自信はないミーアである。

「しかし、あの様子ではいつ目当ての小麦が手に入るか、わかりませんわね……。アーシャさんもセロも、頑張ってはいると思いますけれど……」

うーむ、とミーアは考え込む。

「これは……、クロエのお父さまとペルージャン農業国、双方と仲

良くしておかねばなりませんわね……」
ガヌドス港湾国も、まぁ関係あるといえばあるのだが……、あの国は、帝国がまともに機能している間には、きちんと動いてくれるだろう……たぶん。
「ふむ、クロエとラーニャさんによろしく言っておく必要がございますわね……」
などと思いつつ、脱衣所に入る。
「あら！　タイミングがいいですわ」
そこにいた人物を見て、ミーアは、顔を明るくした。
「これは、ラーニャさん、お久しぶりですわね」
「あっ、ミーアさま」
脱衣所に立っていた少女、ラーニャ・タフリーフ・ペルージャンは、ミーアの方を見て、目を丸くしていた。
「ラーニャさんも、お風呂に入りに来たんですの？」
首を傾げるミーアに、ラーニャは笑みを浮かべた。
「それももちろんあるのですが、実は、我がペルージャンで勧めている入浴法を試していただこうと思いまして。共同浴場をお借りすることにしたんです」
「ほう！」
基本的に、風呂好きなミーアである。お風呂でのんびりすることが、食事と寝ることと同じぐらいに好きなミーアなのである。
そのミーアにとって入浴環境の向上は、これはもう、人生の三大楽しみの一つにかかわることと言っても過言ではない。
「以前にクロエからいただいたものは、入れると煙が出るものでしたけれど、ペルージャンのものも同じ感じなのかしら？」
「煙……、はさすがに出ませんけれど、試してみてください」
ラーニャに促されて、ミーアはいそいそと服を脱ぎ、浴室へと進む。
そうして、入った瞬間、周囲に漂う湯気の中に、ミーアは敏感にその香りを嗅ぎ取った。それは……、

「あら……、これって……果物の香り……？」
首を傾げた直後、湯気の向こうに隠された浴槽の姿が見えてくる。
「まぁ、これ……。お風呂にいっぱい果物が浮かべられておりますわ！」
ぷかぷかとお湯に浮かぶのは、黄色い楕円形の果物だった。森での生存術を極めたミーアだが、その果物は見たことがなかった。
……というか、そもそもミーアは森で果物が簡単に見つかる、などという淡い希望は持たないようにしていた。森で食べられる果物が見つかることなど、奇跡以外の何物でもない。
その希望は、前の時間軸に捨ててきたのだ。
ということで、山菜やキノコの類、あとは魚などにミーアの雑学知識は寄っているのだ。もちろん、有名どころはきちんと押さえてはいる。一般的な貴族などよりはよほど詳しいといえるだろう。けれども、ほかのもののように、執拗に、網羅的に暗記はしていないのだ。
「あれは……」
「あれは、南星レモンと呼ばれる果物です。ペルージャンよりもさらに南の地域でとれる、とっても酸っぱい果物なんです」
ミーアの後について入ってきたラーニャは、ぷかぷかお湯に浮かぶ南星レモンを手に取ると、ミーアに差し出した。
「どうぞ、匂いを嗅いでみてください」
言われるがまま、ミーアはそれを鼻に近づける。と……、
「なるほど。鮮烈な香りですわ」
「この南星レモンは、お料理の風味付けにも使うことがありますが、こうしてお風呂のお湯に浮かべると、体の疲れが取れると言われているんです」
「まぁ！　それは、さっそく試さなくてはなりませんわね！」
ミーアはそそくさと洗い場に向かい、ザッと髪を洗い、シュババッと体を洗うと、さっさと浴槽へと向かう。
大国の姫とは思えないほどに、実に手慣れている……。風呂のベ

テランの風格さえ漂わせているミーアである。
それから、ミーアはお湯に体を沈める。熱めのお湯に思わず、「おふぅ」と、ちょっぴりアレな息を吐く……。
まるで、体の隅々までお湯が染みわたってくるかのように……、硬くなった筋肉がほぐれていくのを感じる……。
なにしろ外見は十代の少女であっても、ミーアの中身は二十歳を過ぎた大人の女性である。近頃ではすっかり肩も凝るようになっているし腰も……いや、二十歳過ぎでもそれはない。まだまだ若いはずである！
……単純に、ただの運動不足で体がなまっているだけであった……。
ともあれ、体が解きほぐされていく感触を、ミーアは大いに気に入った。
「気持ちいいですね、ミーアお姉さま！」
ミーアの隣にやってきたベルがニコニコ顔で、そんなことを言った。
「そうですわね。このように果物を浮かべるやり方があるなんて知りませんでしたわ」
ミーアは、お湯に浮かぶ南星レモンを手に取って、微笑みを浮かべる。
「それにしても意外でしたわ。ラーニャさん。ペルージャンの王族もお風呂が好きなんですのね。こんな風に研究しているだなんて……」
そう問うと、ベルに次いでお湯に入ってきたラーニャは、静かに首を振った。
「いえ、ペルージャンでは王族も貴族も、そこまでお湯に浸かりはしません。水浴びが主でしょうか」
それから、ラーニャは小さく笑みを浮かべた。その笑みは、なぜだろう……、ミーアには少しだけ寂しげに見えた。
「これは、他国に輸出するためのものです。国を豊かにするために

常に新しい作物を研究し、売り込む。それがペルージャン農業国のやり方ですから」

第十三話　ミーア姫、接待することを決意！

「ふぃー」
と、深いため息を吐き、ミーアは体をぐぐぅっと伸ばした。
ポカポカ、温かくなってくる体……、一度、水風呂で冷やしてから、再度、湯に浸かる！
一度、体を冷やし、リセットしてからの再度のテイスティングである。
ミーアはお風呂ソムリエなのである！
「これは……実に良いものですわ。良いものですわよ！　これ、きっと流行りますわ！」
お風呂ソムリエ、ミーアは、レモン風呂をそう評した。
「そうですね！　ミーアお姉さま、今度、リーナちゃんも一緒に誘いたいです」
ミーアの真似をしたベルが、水風呂から上がって、ミーアの隣に身を沈める。お湯をチャポチャポ揺らして、にっこにこと楽しそうな笑みを浮かべた。ミーアの風呂好きをすっかり受け継いでしまったベルである。
「別に構いませんけれど……でも、ベル……、ダメですわよ、あまりはしゃぎ過ぎたら。淑女として恥じらいをもって、お淑やかにしないといけませんわよ？」
偉そうに言うのは、つい先ほど、アレな声を出していた張本人、淑女の姫ミーア・ルーナ・ティアムーンである。
「はい。ボク、おば……お姉さまを見習って立派な淑女になれるように頑張ります！」
……ツッコミを入れる者は、そこにはいなかった……。実に平和である。
ともあれ、素直な孫娘を微笑ましく眺めていたミーアであったが…

…、
「……あら？」
そこで、ふと違和感に気付く。
――なんだか、ラーニャさん、少し元気がないような……。
視線を転じると、浴槽のふちに座り、お湯に足だけ浸からせているラーニャの姿が見えた。微妙に顔をうつむかせて、ちゃぽちゃぽ、と細い脚でお湯を波立てている。
お湯の熱さにのぼせてしまったのかしら……？　などと、軽く流しそうになったミーアであるが……、直後、その脳裏に警鐘が鳴り響いた。
――いえ……、やっぱり、様子が少しおかしい気がしますわ。
それは些細な違和感……されど、相手は他ならぬ、飢饉を乗り越えるのに必要な人脈、ラーニャ・タフリーフ・ペルージャンである。ここでの油断は命取り……、小心者の敏感すぎる危険察知センサーに促されて、ミーアは口を開いた。
「あの、ラーニャさん？」
「え？　あ、気に入っていただけたなら、良かったです」
ラーニャは、なにかを誤魔化すように笑って言った。
「それに、お風呂だけじゃなく、新しいお菓子もきちんと用意してきましたから、またその内に味見をお願いいたします。きっとお愉しみいただけると思いますので」
「まぁ！　ペルージャンの新しいお菓子ですの？　それは楽しみですわ！」
ミーアの脳裏に、ペルージャンの新作ケーキが、見たこともないクッキーが、想像すらできない絶品お菓子の妄想が駆け巡る。じゅるり、と口元のよだれをぬぐうミーアである。
「はい。自信作ですよ」
そうして、ラーニャは笑みを浮かべてから……、
「ところで、ミーアさま。アーシャ姉さまは、元気にしていますか？」

おずおずと、そんなことを聞いてきた。
「え……？　あ、ええ……、もちろんですわ。セントノエルに帰還する前にお会いしてきましたけれど、とても元気にされておりましたわ。畑の整備も終わって、小麦を植えての実験に入っておりましたわね。子どもたちからも、とても慕われている様子でしたわよ」
答えつつ……、ミーアはピンと来た！
――ははぁん、これは……読めましたわ。ラーニャさん、さては、お姉さんがティアムーンに行ってしまって、寂しいんですわね！　だから、元気がなかったんですわ。
ミーアは優しい笑みを浮かべて、ラーニャに言った。
「ふふ、仲がよろしいんですのね。お姉さまと」
「い、いえ……、そんなことは」
ラーニャは照れ臭そうに微笑んでいた。
「自慢の姉ですから、心配はしていないんですけど……。元気にしているか、気になってしまって……。帝国できちんと生活できているか、とか……。あ、手紙はもらっているんですけれど……」
「ふむ……そうですわね。ラーニャさん、この後、少しお時間ありますかしら？」
ミーアは腕組みしつつ、ラーニャに尋ねる。
「え？　あ、はい。大丈夫ですが……」
「そう。なら、わたくしの部屋で、お茶にしましょう。積もる話もございますし……」
正直なところ、ここでアーシャの様子を話した方が簡単ではある。
されど、相手はラーニャである。最重要人物の一人なのである。ならば、より丁寧な対応をするに越したことはない。
そう、ミーアは、ラーニャを接待することを決意したのだ。
お茶とお菓子で接待しつつ、姉、アーシャの様子を丁寧にお話することで、ご機嫌を取る！　そうして、ラーニャの心証を良くしておけば、ペルージャンとの関係も、決して悪いようにはなるまい。
そんな、外交的な思惑がミーアの腹の中に……、

「久しぶりに、ペルージャンのお菓子も食べたいですわ！　ペルージャンの新しいお菓子、ぜひ味見してみたいものですわ！」
……半分ぐらいはあった。
残りの半分は、もちろん、ただ美味しいお菓子をおねだりしたいだけだったが……。
そんなミーアに、ラーニャは、きょとん、と瞳を瞬かせてから、
「わかりました。それでは、ペルージャンのとっておきのお菓子をもっていきます」
笑顔で応じるのだった。

第十四話　ミーアの人生相談

お風呂から上がったラーニャは、急いでお菓子を準備して、ミーアの部屋に向かった。
持ってきたのは、ペルージャン産の果物を使った陽恵果実（ドライフルーツ）というお菓子だった。
父である国王から直々に「セントノエルで宣伝してくるように」と言われて、持たされたものだった。
「すべてはペルージャン農業国の繁栄のために」
父の言葉が脳裏を過ぎる。
それは幼き日よりラーニャが教え込まれていたことだった。
自国の農産物を大国に売り込み、国を豊かにすること。そのために生をささげること……。
それこそがペルージャンの姫の仕事。
そうしていつの日にか大国を見返してやるのだと……、そう教え込まれてきた。
けれど……。
――ミーアさまに、心を見透かされてしまったのかな……？
先ほど、自身を見つめていたミーアの顔を思い出す。
心の中を見透かすような、ミーアの澄んだ瞳……、優しく諭すような笑顔……。そして、その後に、ミーアはお茶会に誘ってきたのだ。
「やっぱり、ミーアさま、わかってたんだろうな。私が、落ち込んでること……」
小さくため息、その後、ラーニャはミーアの部屋に入った。
「お待ちしておりましたわ。ラーニャさん。ちょうどお茶の準備もできたところですし、早速、始めましょう」
ミーアは力の抜けた笑みを浮かべて、そんなことを言った。

まるで、ラーニャを元気づけるように、
「おお、これがペルージャンの新しいお菓子ですのね！」
底抜けに明るい声を上げる。ただ純粋にお菓子を楽しもう、と言うかのように。
「はい。果物を乾燥させて日持ちするようにしたものです。こうすると渋みも抜けて、とても美味しくなるんです」
「ほぅ、なるほど……」
ミーアはお皿の上に乗せられたものを見つめる。
「見た目は、なんだか、萎(しな)びた果物という感じですわね……。正直、あまり美味しそうではありませんけれど……」
「どうぞ。お試しください」
ラーニャの言葉に従い、ミーアはナイフとフォークを手に取ると、それを丁寧に切り分け、口へと運ぶ。
口に入れた瞬間、ミーアはなんとも言えない、幸せそうな笑みを浮かべた。
「ああ……とても甘いですわ。ねっとりとして……、濃密な甘みですわね」
「そのお菓子は甘みはもちろん、風味も大切にしています。香りもお楽しみいただけたと思いますが……」
「まさにそうですわ！　こんな風に乾燥させても風味が消えないんですわね！　なにか秘密がございますの？」
「そう、ですね。少なくともただ日に干しただけではありません。いろいろと複雑な作り方をしています」
「なるほど……」
ミーアは、感心しきりで、陽恵果実を見まわしてから、クスクス笑った。
「でも、ラーニャさんの説明もお見事ですわね。なんだか、聞いてるだけで美味しく感じてきてしまいますわ」
「ふふ、お楽しみいただけて良かったです」
そう言われると、ついつい嬉しくなってしまって、ラーニャは笑

った。
ミーアは、二回もお代わりし、ひとしきりお菓子を楽しんだ後、紅茶を一口。
それから、おもむろに言った。
「さて、それじゃあ、アーシャさんのお話をしましょうか……。実は、アーシャさんには講師だけでなく、重要なお仕事を任せておりますの」
「重要なお仕事……ですか？」
実のところ、アーシャからは詳しい仕事の内容を聞かされていなかった。
自分は、ミーアの命で仕事に関わっている。とても充実した毎日を送っているけれど、仕事の内容はたとえ家族であっても教えることはできない、と。
そう、書いて送ってきたのだ。
けれど、その命令を出したミーア当人から聞く分には問題あるまい……。
ラーニャは興味津々にミーアを見つめる。と、
「アーシャさんには冷害に強い……寒さに強い小麦の開発に従事していただいているんですの」
「寒さに強い小麦……？」
思わず、といった様子で、ラーニャはつぶやいた。
「確かに、今年の天候も心配だって、父が言っていましたけど……でも、そんなもの、あるんですか？」
ペルージャンの姫として育ったラーニャは、誰よりも知っている。日の恵みの少ない年の小麦の収穫は悲惨だ。穂がすかすかで実りがほとんどない。そういう年は諦めるしかないというのがペルージャン農業国の常識だった。
品種を改良する技術は持っている。より味の良いものを、より実りの多いものを……。そうした改良は常に行われてきた。
けれど、時折来る冷害に対して耐性を持つものというのは、今ま

でに研究されたことはなかった。想像すらしたことがなかった。
そんなラーニャに対して……、ミーアは力強く断言して見せる。
「ありますわ。それは……絶対に作り出すことができるものですわ」
まだ見ぬものを必ずあると言い切るミーア。その言葉を支えるのは、アーシャに対する絶対の信頼なのだろう。
――ミーアさまに、信用されているんだ……、アーシャ姉さま、すごい。
ラーニャは思わず感心する。
それに、もしも、日の恵みが少なくとも実りをつける麦があったなら、民は飢えずに済むだろう。それは、幼き日の姉が口癖のように語っていた夢にも通じることでもあった。
「……いいな」
思わず……口から零れ落ちる小さなつぶやき。
「ん？　どうかしましたの？」
瞳を瞬かせるミーアに、ラーニャは苦笑いを浮かべた。
「すみません。でも、アーシャ姉さまを見ていると、つい思ってしまうんです。私は……なにをしているんだろうって……。自分がやっていることが、無意味に思えてきてしまって……」
「あら、別にサボっているわけでもありませんでしょう。ラーニャさんは、こうしてお国の美味しいお菓子を各国に売り込んでいますし。いつもラーニャさんに紹介されると、ついつい買いたくなってしまいますわ。これだとて立派な仕事ではないかしら？」
「そう……なんですけど……」
ミーアに褒められても、ラーニャの気持ちは明るくはならなかった。
ペルージャンの民を豊かにすることに意義を感じないわけではない。けれど、最近の父のやり方は、なんだか、ペルージャンだけが豊かになれば良いと言っているように聞こえてしまって……。
ただ、大国を見返したいだけなのではないかと、思えてしまって……。

自分は、その手伝いをしているだけではないかと……そう思ってしまって。
民を、貧しい子どもたちを餓えさせないために行動している姉がしていることと比べて、それは、なんて……なんて……。
――小さく、意味のないことなんだろう……。私は、こんなことのためにこれから先も生きていくんだろうか……？
それは、ラーニャの内に初めて芽生えた、自らの生き方に対する疑問。
ミーアが大国の姫らしく、見返すのにちょうどよい嫌な人間だったら良かったのに、と、ラーニャは思うことがある。
姉が、父の言う通り、どこかの王族と結婚して、ペルージャンのためだけに人生をかけるような人間であれば良かったのに……、と、そんな嫌なことまで思ってしまう。
でも、実際にはそうではなくって……だからこそ、ラーニャは思ってしまう。
自分はミーアの属するティアムーン帝国を見返すために生を使うのだろうか？　と。
それは、姉の前で胸を張ることができる生き方なのだろうか？
と。
歯切れの悪いラーニャに、ミーアは、ふむ、とうなり声をあげる。
「それでは納得いかないのですわね……。でしたら……あ、そうですわ！　ラーニャさんは、アーシャさんの開発した小麦をいろいろな国に広めていくというのはどうかしら？」
「え……？」
突然の提案に、ラーニャは瞳をパチクリ、瞬かせた。
「ラーニャさんは、アーシャさんのお仕事に価値を見出している。でしたら、ラーニャさんは、その〝周りの人たちに宣伝する力〟を用いて、アーシャさんをお手伝いすれば良いのですわ」
ミーアは、さも良いことを思いついたといった感じで、手を叩いた。

「これは我ながらナイスアイデアですわ！」
「私が……アーシャ姉さまの、お手伝いを……」
呆然とつぶやいた直後、ラーニャは思った。
――やっぱりミーアさま、私の悩みを見抜いてて……、それでこんな提案をしてくれたの……？
それゆえに、お茶会にペルージャンのお菓子を所望した。ラーニャに説明させて、その話術を誉め、そして、それを使えばアーシャの手伝いができると……、そう訴えるために。
――もしかしたら、全然勘違いかもしれないけど……でも……。
ラーニャは、確かに、進むべき道を見つけたような気がした。
自分にできること、したいこと……。胸を張って、姉の前に出ることができる仕事……。
彼女は初めて、真剣に考え始めた。

ちなみに、もちろんと言うか……、当たり前の話だが、ミーアにそんなに深い考えはない。
――アーシャさんとセロくんが小麦の開発に成功したとして……、問題はそれを植える土地ですわ。
ミーアは小麦の値段を下げたい。そのためには小麦の全体の流通量を増やす必要がある。
寒さに強い小麦が開発できたとして、ルドルフォンやギルデンの土地では恐らく足りない。聖ミーア学園の周りの土地でも、まだ足りないだろう。それこそ全土で種蒔きができるのが理想。
けれど……、他の帝国貴族を説得するのは、正直、面倒くさいミーアである。
もちろん、帝国内での収穫量を増やすことは今後の課題ではあるが……、それはそれ。急ぎであれば、すぐに植えてくれそうなペルージャンや周辺の国にお願いしてしまった方が良いに決まっている。
「私が……、アーシャ姉さまの、お手伝いを……」
「ええ、とても意義深い仕事になると、そうは思いませんこと？」

満面の笑みで、ミーアは言った。
ミーアの狙いは、大陸全土に小麦を行き渡らせることである。
それさえできれば、必然的に帝国内に入ってくる小麦の価格も下がるわけで……、だからそれは言うなれば、自国内の小麦の価格を下げるため、他国の土地をお借りする行為なのである。
――ラーニャさんに協力していただければ、楽にできそうですわね！
美味しいお菓子も食べられて、なんともご満悦なミーアであった。

第十五話　あら？　実はわたくし、あの時に……？

「はて？　新入生への挨拶……ですの？」
春間近のセントノエル学園。
月餅桜（スイートムーンチェリー）の花の蕾もほころぶポカポカ陽気のある日……。ミーアは生徒会の会合に参加していた。
生徒会室には、いつものメンバーが顔を連ね、さまざまな議題について話し合いを行っていた。
そして、ただ今の議題は、入学式の式典についてのものだった。
「ですけど、新入生への歓迎の言葉は、ラフィーナさまがされるのでは……」
「もちろん私もするけど、それとは別にミーアさんに生徒会長として、一言もらいたいなって思ってるのよ」
ラフィーナは優しげな笑みを浮かべて言った。
「生徒会長のお仕事ですのね……。ふーむ、どうしたものかしら……」
「ふふふ、心配しないで。ミーアさんが思っていることを、素直に伝えればいいのよ」
などと優しげにラフィーナは言ってくれるのだが……んなわきゃあないのである。
――ああ……、これは、額面通りに受け取ったらダメなやつですわね……。
ミーアは早々に察する。適当に思ったことを言うなどできるはずがない。なにしろ、これは、ラフィーナに譲られた生徒会長としての職務なのだから……。当然、お気に入りのケーキの話をするわけにはいかない。
「まだ時間はあるから、ゆっくり考えてみて。後で、昨年の私の原稿も届けさせるから」

「わかりましたわ」
ミーアは渋々ながらも頷いた。さすがにラフィーナ直々の“お願い”を断るわけにはいかない。
――まぁ、それでも、今までの危機に比べれば大したことありませんわ……。命の危機があるわけでもありませんし……たぶん。
そう自分を慰めて、ミーアは頷いた。
「さて、それでは……楽しいお話はこのぐらいにして、少し真面目なお話をしましょうか」
ぱん、っと手を打ってから、ラフィーナは表情を引き締める。
「例の、蛇の手先……、バルバラさんから聞き出した情報についてのことなのだけど……」
――ああ、そういえば……そんなこともありましたわね。バルバラさんをラフィーナさまのところに送ったんでしたわ……。
完全に忘れていたミーアである。それに対して、
「ああ、実は気になっていたんです。それで、なにか、情報が得られたのですか？」
そう声を上げたアベル。シオンの方も興味津々といった様子で視線をラフィーナに向けた。
さすがに、二人の王子は覚えていたらしい。ミーアとは大違いである。
忘れていたことを誤魔化すように、ミーアはあの場にいなかった面々に事情を説明し始めた。自分も気にはなっていたんですよぅ？
ということを言葉の端々に匂わせつつの、実にあざとい説明であった。
「それで、捕らえたバルバラさんとその部下の男たちの身柄をラフィーナさまに送ったんですの。わたくしも気になっていたんですけれど……」
締めくくりで再びの強調。それから、ミーアは紅茶を一口。上手く誤魔化しきったとため息を吐く。
ミーアの後を継いで、ラフィーナが口を開いた。

「ミーアさんの誕生祭から帰って、すぐに彼女たちへの尋問を始めたわ。ああ、尋問といっても、別に手荒なことはしていないわ、もちろんね。少しミーアさんに無礼が過ぎるんじゃないかって思ったんだけど、乱暴なことをしたら、ミーアさんも嫌かなって思ったから……だから、あのジェムと同じことをさせてみたの」

にっこり穏やかな笑みを浮かべるラフィーナが、ちょっぴり怖いミーアである。

「それで情報を引き出してみたのだけれど……、あまり新しい情報は得られなかった。蛇の巫女姫と呼ばれる者が混沌の蛇を率いているとか、蛇の教えを広める蛇導士という者がいるとか……。ああ、あとは例の狼使いのこととか」

「狼使い……」

「ええ、例の狼使いと呼ばれる暗殺者は、巫女姫直属の暗殺者にして、最強の戦士なのだとか」

「最強の戦士！　そっ、そんなのに、命を狙われたんですのね、わたくし……」

冬の荒野を思い出し、ミーアは、ゾッとした。首筋に感じた刃の風を思い出すたびに、背筋に冷たいものが走る。

――わたくし、よく首が繋がっておりましたわね……。あら？　首、繋がってますわよね？　実は気付かないうちに死んでるとか、そういうこと、ございませんわよね？　みなさん、きちんとわたくしに話しかけておりますよね！？

などと割とどうでもいいことを考えているうちにも、ラフィーナの話は進んでいく。

「ところで、ミーアさんからのお手紙に書いてあったことで、私なりに推理してみたことがあるのだけど……」

いったん言葉を切って、ラフィーナはミーアに目を向けた。

「申し訳ないのだけど、ミーアさん、混沌の蛇の分類について、少し話していただけないかしら」

「え？　あ、ああ、あのイエロームーン公爵が言ってたことですわ

ね……えーと、たしか混沌の蛇は四つの種類の人々に分類することができる、とか言ってましたかしら？」
などと答えつつ……話しかけられて良かったー、と思ってしまうミーアである。どうやら、実は死んでいたということはないらしい。一安心である。
「蛇に消極的に協力する者と、利用するために積極的に協力する者、蛇の教義に共感した信者と、信者を教え導く蛇導士……でしたっけ？」
机に置かれた四つのクッキーを思い出しながら、ミーアは言った。
言葉だけでなく、美味しそうなクッキーと関連付けて記憶する、ミーア式記憶法である。
「ミーアさんのお手紙にはそう書かれていたわね。そして恐らく、男たちは信者なのではないか、と私は考えてるの」
なるほど、と、ミーアはバルバラや男たちの様子を思い出す。
「たしかに、あの男たちは邪教徒という感じがいたしましたわ。自分たちの命を顧みないような印象で……」
「それでね……、恐らくだけど、神聖典に反応するのは信者と、蛇導士なんじゃないかしら」
「ああ、そういうことか」
ラフィーナの言葉に、いち早く理解を示したのはシオンだった。
「神聖典を読んでも、反応する者とそうでない者とがいる、と、そういう話だったが、違いはそこにあるのか……」
「ええ。蛇の教えを真実として受け入れているか否か……。蛇を神としているか、利用すべき道具としているか……。蛇を仰ぐべき存在とする者にとっては、敵の教えである神聖典は唾棄すべきもの、受け入れざるものだった……だから、拒否反応を示した……そう考えたのだけど……」
と、そこで、微妙に歯切れ悪く、ラフィーナは言葉を切った。
「あら、どうかなさりまして？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、ラフィーナは続ける。

「あのバルバラさんだけは、少し様子が違った。どちらかというと、憎悪の方を強く感じた……。神だけでなく、私や、貴族全般への……」
「憎悪……？」
ミーアは、バルバラの顔を思い浮かべた。
「そういえば、あの方は、リーナさんにもつらく当たっていたと、ベルは言っておりましたわ。イエロームーン公爵に対しても、なんだか、ひどく憎んでいる様子でしたわ」
「蛇の教えに共感したから、貴族という権威、その権威が作る秩序を憎悪した、そのように考えることは、もちろんできるわ。でも……なんだか、違和感がある……」
ラフィーナの言葉に、一同に沈黙が広がる。
「しかし、わからないことだらけだな。やれやれ、いったい、蛇の巫女姫というのは、どんな人物なのだろうね……」
アベルの、つぶやくような声が、妙に耳に残った。

第十六話　持つ者には持つ者の……

――ふぅ、やれやれ……なかなか大変なことになりそうですわね……。

予想外の宿題を出されてしまったミーアは、生徒会室から出たところで、小さくため息を吐いた。

「ふふ、そんなに緊張しなくても大丈夫よ？」

成り行きで、一緒に女子寮まで向かうことになったラフィーナが、いつもどおりの涼やかな笑みを浮かべる。

「そうはいっても、なかなかに難題ですわ。こういうのは、あまり得意ではなくって……」

「大丈夫よ。ミーアさんなら。伝えたいことを素直に伝えれば、きっと大丈夫」

そう励ましてくれるラフィーナ。

でもなぁ……、と思いかけたミーアだったが……、ふいに笑ってしまう。

――この時期に、こんなことで悩めるなんて……、こんなことで、ラフィーナさまから励ましてもらえるなんて、とっても幸せなことかもしれませんわね。

セントノエル学園に戻ってきて、しばらく経った頃から、徐々にミーアは状況を楽観視し始めていた。

――なんだかんだで、ルードヴィッヒが大丈夫って言ってますし。しっかり備蓄も増やしましたし……。いつまでも心配してもいられませんわ。

唯一の不安要素といえば、セロが寒さに強い小麦を見つけることができるかどうかではあるが……。

――まぁ、それが上手くいかなかったとしても、なんとかなるんじゃないかしら？

そう。なんと言っても備蓄は十分にある。たっぷり溜め込んであるのだ。だから、きっと大丈夫！　と……。
かつての地獄が、ミーアを油断させたのだ。
ミーアは忘れていた。変化した状況には変化した状況の……落とし穴があるということを。
それは、唐突にミーアの前に訪れた。
「あら……？　あれは？」
ラフィーナと談笑しつつ廊下を歩いている時、ミーアはそれを見つけた。
廊下の一角にて……、新入生と思しき少女が、複数人の上級生に囲まれていたのだ。
上級生の一人が、少女の肩を押した。少女は、そのままへたりこみ、うつむいてしまっていた。
そんな彼女に、口々に罵りの言葉を吐く周囲の者たち。
ミーアは……ササっといじめているほうの生徒に目を留める。ラフィーナの前で無法を犯すとんでもない輩が、帝国の貴族ではないことを素早く確認して、ひとまず安堵。それから、意気揚々とその者たちのところへ歩み寄った。
「こらこら、いけませんわね。弱き者をいじめるようなことをしては……」
「なんだと？　余計な口を……あっ……」
攻撃的な言葉は、途中で止まった。
相手が、決して逆らってはいけない存在であると、すぐにわかったからだ。
「みっ、ミーア姫殿下、それに、ラフィーナさま！」
「いけませんわよ。新入生をいじめるだなんて、この学校の生徒に相応しくありませんわ」
「い、いえ、こいつは、我が国の平民で……、この高貴なるセントノエル学園に通えること自体が間違いといいますか……」
と、無駄な言い訳をする生徒に、静かにラフィーナが歩み寄った。

その顔には、とても穏やかで優しい笑みが浮かんでいた。
「ミーア生徒会長は、そういうことはお嫌いよ？　もちろん私もだけど……。どこの国の者であれ、このように、大勢で弱い者いじめをすることを許さないわ。ね、ミーアさん？」
「え、ええ、そうですわ」
有無を言わさないラフィーナの迫力に、一瞬、ビビッたミーアであったが、すぐに気を取り直す。
腕組みなどして、堂々たる態度で頷いた。
「国の別など関係のないこと。そのような非道を見過ごすことなどできませんわね」
そうして、ミーアはジロリとにらんだ。
大して迫力のある顔でもなかったのだが……いじめっ子たちは、いっそ哀れなほど震え上がった。
なにしろ、今のミーアはセントノエルの権力の頂点にして、大国の姫君である。しかも、その後ろには聖女ラフィーナが控えている。
このセントノエル学園に通うのであれば、絶対ににらまれてはいけない人間の筆頭なのである。
「まぁ、幸いなことに、過ちは正せば良いだけですわ。あなたたち、二度と彼女に無礼を働いてはいけませんわ。貴族ならば貴族らしく、誇り高く生きるべきですわ。弱者を虐げるなどという見苦しいことはしてはいけませんわ。その力をもって、むしろ、弱き者を助けるべきですわ」
それから、ふむ……、と頷いて……、
「そうですわね。あなたたち、この子と同国人なのでしたら、この子を守りなさい」
「……へっ？」
「この子が、今後いじめられていることがわかったら、あなたたちに関係があろうとなかろうと許しませんわ。陰でやろうとしても無駄なこと、わたくしの情報網を甘く見ないことですわ」
ミーアは、ふと、悪戯心を起こして、ラフィーナの真似をしてに

っこり微笑んで見せた。
すると……いじめっ子たちは、ひっと悲鳴を上げて、その場から逃げ出していってしまった。
――ふむ……、なるほど。笑顔も時には脅しに使えるということですわね……。
などと思いつつ、ミーアは尻餅をついている少女を助け起こした。
「あなた、大丈夫ですの？」
「あ、ああ、あの、ありがとうございます。わ、わわ、私なんかのことを、どうして……」
あたふたと慌てふためく少女に、ミーアは、くすり、と笑みを浮かべた。
「別に、わたくしは当たり前のことをしたまでのことですわ」
まぁ、ラフィーナの手前、助けないわけには絶対にいかなかったのだけど……、などと思った瞬間のことだった。
ふいに、ミーアの背筋に嫌な感覚が走った……。
それはある種の気付き。あるいは、ちょっとした思いつきだ。
ミーアは、ふと……思ってしまったのだ。
これから飢饉が来るけれど、その時に、今と同じように助けを求められたらどうしよう……と。
前の時間軸においては、そんなことを悩む必要はなかった。なぜなら、帝国は自国の民のことだけで精一杯だったからだ。
けれど……今は違う。
帝国には十分な備蓄がある。
それこそ、今年一年間をしのぐだけであれば、余るぐらいの食糧を、ミーアは溜め込んでいるのであって……。
それは、飢饉が今年一年では終わらない、大規模なものになることをミーアが知っているからなのだが……。
けれど、他の者たちは……知らないのだ。今年だけの問題と考えるかもしれなくって……。そんな彼らが、数年分の飢饉に耐えうる備蓄を貯め込んだ帝国をどのように見るか……。

否、もっと言うならば、ラフィーナやシオンには、どのように見えるだろうか。
シオンに話してあるし、ラフィーナにも話しておこうとは思っている。けれど、現時点でのそれはあくまでも予想に過ぎないのだ。その予想のために……あるいは未来の不安のために、助けを求めてきた者の手をはねのけるような……そのようなことをやらかした時には……、どのようなことになるのか……。
そして、誤算はもう一つあった。
生徒会長をやることで、ミーアは知らず知らずのうちに、いろいろな国の人間とコネを作ってしまっていた……。生徒会の仕事をするうちに、顔見知りが増えてしまっているし、その中には友人と呼べる者も少なからず存在している。
では……もし仮に、その顔見知りの誰かから助けを求められて……そして、助ける力を持っていたとしたら……？
――他の国が“あの時の帝国”のようになっていたとして……、備蓄を取り崩さずにいられることが、わたくしにできるのかしら……？
ミーアの悩みは思いのほか深刻だった。
数年分の飢饉に対する備えをしたがゆえに現れた、新たなる危機……。それは、完全に油断しきっていたミーアにとって想定外の事態だった。
かくて、ミーアは再び動き出す。入学式の挨拶に向けて……。

第十七話　パン・ケーキ宣言

さて、入学式の日がやってきた。
セントノエル学園の入学式は他の行事と同じように、儀式的な側面を持つものとなっている。
生徒でいっぱいになった大聖堂。ミーアは、その最前列に座り、そっと瞳を閉じる。
やがて、式が始まった。
神にささげる聖歌に続いて行われるのは「香の儀式」と呼ばれるものだった。
香の儀式は、新入生をこの学園の生徒として迎える際の重要な儀式だ。神にささげられし香油の、貴き香りを身にまとい、セントノエルの学生にふさわしく行動する、そのことを表すための儀式だと、ミーアは聞いている。
純白の衣装を身にまとったラフィーナが聖堂に入ってきた。上質な布で作られた衣装は艶やかな輝きを放ち、ラフィーナの透き通るような肌を彩っていた。その天使のような衣装に……、ミーアは、先日の聖ミーア学園で見た像を思い出して、ちょっぴり複雑な気分になった。
ラフィーナは司祭から灯（ともしび）を受け取ると、そのまま前方へと歩いていく。
その向かう先には、儀式卓の上に置かれた巨大な銀の盃があった。杯の中には、最上級の香油が入っている。ラフィーナは、ゆっくりと炎を近づけた。
ぼっ、と弾けるような音を立て、炎が灯される。と同時に、あたりに甘い香油の香りが広がった。
――ふむ……、どうでもいいですけれど、貴い香りというのは、甘い香りなんですのね……。なるほど、納得ですわ。

半分、スイーツ教に足を踏み入れかけているミーアは、思わず納得してしまう。将来的に、ラフィーナに異端審問を受けてしまわないか、いささか心配である。
まぁ、それはどうでもいいことだが……。
やがて、一連の儀式が終わった後に、いよいよミーアの出番がやってきた。
「それでは、生徒会長のミーアさんに挨拶をしていただきます」
ラフィーナに呼ばれたミーアは、小さく息を吐いてから、顔を上げた。
聖堂の前方、静かに燃える香油を背負い、ミーアはみなに視線を向けた。聖堂に詰めかけた一同を見渡して、再び深呼吸。
甘い空気を存分に吸い込んでから……、静かに口を開く。
「ご機嫌よう、みなさま。わたくしが、生徒会長を務める、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
心は、思いのほか落ち着いていた。
この日まで、考えて、考えて……ミーアは一つの結論に至っていた。
――帝国の備蓄を他国のために一切使わずにいるのは……恐らく不可能。
いろいろと言い訳を考えてはみたものの、すぐに諦めた。
仮に、備蓄の量を誤魔化したとして、上手くシオンやラフィーナを騙せたとしても、神出鬼没の蛇の目を欺くのはほぼ不可能。
それに……。
――後味、悪いですし……。
前の時間軸、幾度も口惜しい想いをしたミーアとしては、断られた相手の気持ちをついつい考えてしまうのだ。きっと、お断りした日には、夢見が悪いし、お腹が痛くなってしまうだろう。
――であるならば、むしろ……助けを出す前提で考えるのがよろしいですわ。
ということで……、ミーアは方針を変えた。すなわち……。

「わたくしが、みなさんに言っておきたいこと。それは……助け合いの精神ですわ！」
積極的に、周囲を巻き込んでいく！
「困った時はお互いさま。我ら、民の上に立つ者は、民が困窮している時には、国の別に関わらず助け合わねばなりませんわ」
物資を出さざるを得ないのであれば仕方ない。ならば、自国だけではすまさないぞ、と。どこかの国が助けを求めてきた時、お前らもきちんと出すもの出せよ！　と釘を刺しておく。
さらに、狙いはもう一つあった。それは……、出し損にならないようにすること。
「助けて、助けられて……そうした国同士の連帯が重要ですわ！」
ミーアは力説する。翻訳するならば、それは、仮に帝国が困ることがあったために、備蓄を供出したとして……、今度は帝国が飢饉の際にはきちんと助けるように、ということである。
困った時はお互いさま……、すなわち、お前が困った時には助けてやるから、代わりに自分が困った時には必ず助けろよ！　ということなのである。
自分が出さざるを得ないと察したミーアは、他人からもきちんと取り立てることにしたのだ。余力のあるやつは、隠してないできちんと出せ、と……。
そして、それをラフィーナの目の前で、そして、各国の王侯貴族の子弟の前で堂々と宣言しておく。それが大事である。
かつて、ミーアは知らずにいろいろとやらかしたことがあった。ゆえに、知らなかったとは言わせないために、きっちりはっきりと言っておく。
「みなには、ぜひ、そのようにあっていただきたいのですわ。そう……」
一度、言葉を切り、ミーアはみなの顔を見回して……。
「今日、食べるパンがなくて餓えた者がいるなら……、明日、あなたが楽しみに食べる予定だったケーキを出して一緒に食べなさい。

ケーキを惜しんで、困窮した者を放っておいてはいけませんわ」
明日、食べる予定だったケーキを全部くれてやれ、とは言わないミーアである。
だって、ケーキ食べたいし……。
自分が食べるケーキを減らし、一緒に食べること……。それがミーアのギリギリの妥協点。率先して、自分が行える、ギリギリのラインであった。ちなみに、イチゴが乗っていたら当然、自分の方に乗せるミーアである。そこは譲れない。
それから、ミーアは小さく息を吐いた。
「これから先……、大陸にはいろいろなことが起こるでしょう。さまざまな国で苦難の時代というものも経験するかもしれませんわ。けれど、我らはセントノエルでともに学びし者。この気高き香りをまといし仲間。ともにこの大陸に生きる者同士。どうか、国に帰ったとしても、忘れないでいただきたいですわ」
そうして、ミーアは祈るかのように、瞳を閉じた。
否……、ミーアは実際に祈っていた。
――ああ、どうか……セロくんとアーシャさん……、寒さに強い小麦作りを成功させてくださいませね……。うう、そうしないときっと備蓄が足りなくなってしまいますわ……。
と。

この日語られたミーアの言葉は、「パン・ケーキ宣言」と呼ばれ、後世に記録される言葉となった。
それは、類稀（たぐいまれ）なる言葉だった。
語られた瞬間は、まぎれもなく凡庸な言葉だった。
陳腐で古臭い、埃をかぶった綺麗事だった。
困った時はお互いさま？　互いに助け合いましょう？　そのような使い古された綺麗事をいったい誰が真に受けるというのだろうか。
その場で聞いていた者たちは、誰もが笑った。陳腐な言葉だと嘲笑った。

けれど……、その言葉は時間を経るごとに、少しずつ輝きを放つようになった。
なぜならそれを語った者、ミーア・ルーナ・ティアムーンがその言葉を体現するように、率先して振る舞ったからだ。
ティアムーン帝国からの食糧援助によって、救われた者たちが、少なからずいたからだ。
ミーアは、たしかに困った者の手を振り払うことはしなかった。誰一人として、見捨てることなく、困窮している国に物資を送った。そして……そんなミーアの後に続く者たちがあった。
はじめはミーアの友人たちが属する国から始まり、やがては、大陸全土を覆い尽くすほどに、その流れは大きなものとなった。
そして、それはある仕組みの礎となっていく。
ミーアの友人、クロエ・フォークロードが中心となって作り上げた、後の世に≪ミーアネット≫と呼ばれる仕組み――大陸から餓死を一掃したとまで言われる、国を超えた食糧の相互援助の、巨大な繋がり。
それを支える基本理念として……、決して揺らぐことなき黄金律として「パン・ケーキ宣言」は語り継がれていくことになるのだった。

……ちなみに、結局は入学式でも甘い物の話をしてしまったミーアなのだが、そのことにツッコミを入れる者は誰もいなかった。
めでたし、めでたし……。

第十八話　商人の理（ことわり）

ティアムーン帝国の南東……小国家群を抜けた先に巨大な港があった。

独立港湾都市「セントバレーヌ」は、神聖ヴェールガ公国が誇る平和の港だ。

かつて港の利権をめぐり、争いが絶えなかった近隣諸国に対して介入したヴェールガは、その土地を自国の領土として接収。その上で近隣国すべての商人に開放した。

さらには、複数の商会に声をかけ、商業組合を結成、その組合に港や町のインフラ整備などすべてを委託してしまう。ヴェールガが持つのは、「その土地を庇護する国が自国である」という名目のみ。実質的な利益に関しては、周辺国が共同で享受できる体制を敷いたのだ。

当初、周辺国からは不満が絶えなかった。どの国も利益の独占をもくろんでいたためだ。けれど、それらの国々も、港のもたらす恩恵を前に、やがては口をつぐむことになる。

商業が活発となることは、それだけで十分な祝福といえた。むしろ黄金を産み出す都市を抱え込めば、必ずや他国に狙われるだろうし、その防衛にも費用が掛かる。

であれば、むしろ、共同で利用できる港としておいた方が得であることは、明らかだった。

そうして生まれた平和の港は、今や大陸有数の商業の華やかなりし場所、商人の楽園として知られている。

その巨大港にて、マルコ・フォークロードは、自らの商会の持つ大型商船「金の福音号（オーロ・ヴェンジェーロ）」を見上げてため息を吐いた。

「まさか、このようなことになろうとはな……」

旅立つ船が向かう先は、遥か海の向こう側、豊かな小麦の収穫の

ある国である。
それは、ティアムーン帝国皇女との契約に基づいたものだった。
「恐ろしい方だ。姫殿下は、今日のような事態になることを、予期していたのだろうか……」
娘が友誼を結んだ姫、ミーア・ルーナ・ティアムーンの顔を思い出し、思わず苦笑いを浮かべる。
「まったく、クロエ……お前はなんという方と友誼を結んだのだ……」
「おお、これはフォークロード商会のマルコ殿」
ふいに声をかけられて、マルコは顔を上げる。と、いつの間にやら、目の前には一人の男が立っていた。
鼻の下、くるんと巻いた口髭と、でっぷりと丸く突き出した腹が特徴の男……、愛想の良い笑みを浮かべつつも、決して芯からは笑わないその男のことを、マルコはよく知っていた。
「これは、シャローク殿……。久しいな」
男の名はシャローク・コーンローグ。広く大陸の各国に商品を卸している大商人である。
取り扱う商品は多岐に渡る。食料をはじめ絹織物から武器に至るまで。儲けになりそうなものは、なんでも売る。
その徹底した姿勢が、マルコは得意ではなかった。
商人としてはその冷徹さが圧倒的に正しいことも、自身はその冷徹さを持ちえないことも……、彼にはよくわかっていたから……。
けれど……、すでにそれも過去のこと。なぜなら、マルコは出会ったのだ……。
商人としての正しさ以上に輝かしいものと……。
――不思議なものだな……、彼と顔を合わせるたびに劣等感を刺激されたものだが……。
苦笑しつつ、マルコは首を振った。
「ふふふ、わかりますぞ。笑いが止まらんでしょうな。貴殿が海外より小麦の輸送を始めた時には、なんと愚かなことを、と思ったも

のだが……。今や、その小麦、仕入れ値の三倍は堅い。どうですかな？　馬鹿にした連中を見返す気分は……」
口髭を撫でながら笑うシャロークに、マルコは肩をすくめて見せた。
「そう言っていただけるのは、ありがたいが、先ごろ輸入した分に関してはすでに値段が決まっておりましてな」
「ほう？　それは、もしや、かの帝国の叡智との契約のことですかな？」
シャロークは訳知り顔で言った。
「どこで、それを……？」
「はは、なぁに。耳を澄ませていれば、どこからでも噂話というのは聞こえてくるものでしてな」
商人にとって、情報は重要な武器だ。ゆえにマルコは、ミーアと交わした契約を、必要最低限の人間にしか話していなかったのだが……。
しばし、思案に暮れてから、マルコは諦めてため息を吐いた。
「まぁ、あえて隠し立てする必要もありますまい。そのとおり、ミーア姫殿下との契約によるものです」
「律儀にそれを守っていると？」
「無論。商人にとって契約は神聖不可侵なもの。まさか、破れとでも？」
「方法はいくらでもあるでしょうに。たとえば、帝国以外のもっと高く買ってくれる国で売りさばいて、帝国を後回しにするとか……」
マルコは、温厚な彼にしては珍しく、わずかばかりの怒りをもって問う。
「まさか、本気で言っていないでしょうね？」
「本気も本気。むしろそれこそが商人の業というものではないですかな？　より金が得られる方法があるのならば、あらゆる知恵を使い、契約の隙間をかいくぐる。契約を守れとは、その方が長く商売が続けられて、儲かるからということに過ぎない。昨年の不作によ

って生じた小麦の価格の高騰、それを生かさぬは商人の名折れ。大陸全土を焼き払う戦でさえ、商売の種とするのが、金に忠誠を誓いし我ら商人でしょうに」

得意げに言うシャローク。かつては彼に羨望さえ抱いていたマルコは、過去の自分を恥じる。自分は、今までなにを見ていたのか……と。

「やれやれ……、どうもあなたとは話が合わないようだ。シャローク殿。どうか、あなたの商売がうまくいくように祈っていますよ」

「まったく、そうありたいものですな」

踵を返すマルコに、シャロークは暗い笑みを浮かべるのだった。

第十九話　ミーアお祖母ちゃんは、教育熱心

さて、入学式にて、ミーアが高らかにパンとケーキに関する自説を開陳してから十日ほどたった日のこと。

ミーアは、図書室に訪れていた。

本国で小麦の研究に勤しむセロたちに、なにか有用な情報がないかを探すため……ではない。

ベルに勉強を教えるためである。

「今年の夏ごろはあまり余裕もないかもしれませんし、テストに備えてきっちりと勉強しておかなければなりませんわよ」

すでに、ベルの学力がアレなことが分かっているミーアは、心を鬼にして腕組みする。

「う、うう、ミーアお姉さまが、鬼になってしまいました。うぐぅ、まだ、テストまでは時間があるのに……」

「リンシャさんから、しっかりと聞いておりますわよ。最近、また、サボっているようではありませんの？」

「でも、ミーアお姉さま、このお勉強って、なにかの役に立ちますか？」

上目遣いに見つめてくるベルに、

「無論ですわ！」

ミーアは胸を張って言い放った。

「きちんと勉強していれば、そのうち、偉そうにガミガミ言ってくるクソメガネ……ではなくって……熱意溢れる臣下に目にもの見せて……ではなく、いいところを見せて驚かせることができますわ。なかなか気持ちいいものですわよ？」

ちょいちょい本音が漏れてしまうミーアであったが、幸いにもベルは気付いていなかった。

「うう、本当に役に立つかなぁ……」

ぶつぶつ言いつつも、机に向かうベル。教本を開き、自習を始めたベルを横目に、ミーアは持ってきた本を開く。それは、世界中の珍しいキノコ料理を集めた「キノコ百珍」という本だった。

著者は、有名な冒険家で「死なない毒キノコならば食べられる！」をモットーにしている人である。ヤバい……。

そうしてミーアは、そのヤバい本を開きつつも……、

――しかし、実際、どうしたものかしら……。

思わず考え込んでしまう。むろんキノコのことではない。ベルのことである。孫娘とキノコとでは、かろうじて孫娘に比重が傾く、常識人ミーアである。

――勉強嫌いなのもそうですし、ベルの浪費癖も結局のところ、この“いついなくなってしまうかもしれない”という投げやりな気持ちがあるのでしょうね……。

それは、同情の余地のあるものではあった。ミーアとてその気持ちがわからないではないのだが……。

――けれど、このまま無駄遣いを許すわけにはいきませんわ。ギロチンの足は……思いのほか速いのですから！

金貨一枚無駄に使うごとに、百歩ずつぐらいの速度で迫ってくる印象である。特に帝国のギロチンの足が速いことはミーアは身をもって知っている。なんとかして、ベルを納得させておく必要があるのだ。

――それに、いずれにせよ、ベルがこの世界で生きていくためにも教育は必要でしょうし。頑張らせないといけませんわ……。もっとも、お父さまにお願いしたら、それなりの爵位と領地をいただけて、楽に生きていけるような気もいたしますけれど……。

もちろん、そんなことを口に出したりはしない。ますます、ベルが勉強をしなくなってしまう。

自分がグータラするのも、他人がグータラすることにも寛容なミーアであるが、相手が孫娘だと、なんとなく黙っていられない。

――ベルの母親……わたくしの娘に悪いですしね……。

ミーアお祖母ちゃんは教育熱心なのだ。
「ミーアお姉さま、ここ、わかりません」
「あら、もう……、仕方ありませんわね。見せてごらんなさい」
ミーアは、ベルが差し出してきた本を受け取って……、
「……ふむ」
小さくうなる。それから、こめかみを指でコツコツたたきながら……、
「……ふぅむ」
懸命に、自らの脳みそを回転させる。
言うまでもないことながら、ミーアのテスト勉強は物量に頼ったものである。範囲内の情報をすべて頭に叩き込むスタイルである。
意外でもなんでもないことながら、そんなものいつまでも覚えてはいられないわけで……。テストが終わると、きれいさっぱり忘れることもしばしばである。
まして、今ベルがやっているのは『算術』という、ミーアが不得手なものである。
――アンヌ……、アンヌはどこにいるかしら？
無意識に、軍師アンヌの姿を探そうとしたミーアは……ふいに気付く。
ベルが、キラッキラした瞳で、見つめていることを。それはもう、期待にあふれた瞳で、じぃいっと見つめてくる。
「尊敬する帝国の叡智はどんな風にこの問題を解くんだろう！？」などというメッセージを如実に伝えてくる視線を、ミーアに向けてきているのだ。
「……ふむ」
ミーアは再びうなり、本に目を戻した。
さすがにこの状況でアンヌに解いてもらうことはできない。ミーアは気合を入れる。
――問題ありませんわ……。わたくしの、この、記憶力があれば……。

そう……、ミーアは決して忘れない。テスト前に暗記した無味乾燥な知識は忘れたとしても、自分が生き残るために必要な知識と……そして……、自らが受けた屈辱のことは！

――あの時、クソメガネに似たようなものを教わった気がいたしますわ！　算術は、取引に必要とかなんとか言われて……、それで、たしかあの時は……。

そう、ルードヴィッヒを見返すために覚えたことは、執念深く日記帳に書き連ねていたのだ。ゆえに……。

「ベル、覚えておくとよいですわ。この手の問題は、たいてい、そのそばに例題というものがあるのですわ。そして、それを応用して……」

すべてルードヴィッヒから教わったパクリである。教え方のパクリである。ミーアの暗記力が冴え渡る。

答えを直接言うのではなく、あえて自分で考えさせるという……、答えはちゃんとわかってるけど、あなたに考えさせるために、こうやってますよー、という、ルードヴィッヒのやり方のみを完コピして！

「他人に教わったことを、そのまま覚えても意味がありませんわ。やはり、自分で考えなければいけませんわ」

他人に教わったことを、そのままやって見せてから、偉そうにそんなことを言った。

「さすがは、ミーアお祖母さま。わかりました。考えてみます！」

素直に頷いたベルが、再び本に目を落としたのを確認してから、ミーアは一つため息、それから顔を上げる。と、ちょうど本棚の前にうつむきがちに立っていたクロエの姿が見えた。

「あら、クロエ、戻っておりましたの？」

近くまでフォークロード商会の荷馬車がやってきているとのことで、父に会うために島を出ていたクロエ。数日ぶりに会う友人に、ミーアは愛想よく話しかける。

「フォークロード卿……、いえ、お父さまはお元気でしたの？」

そう声をかけるものの、聞こえなかったのか、クロエはうつむいたままだった。
「クロエ……？」
立ち上がり、歩み寄りつつ再度話しかけてみる。と……、
「あっ……ミーアさま……」
ようやく気付いたのか、クロエが顔を上げる。その顔を見て、ミーアはわずかに眉をひそめた。
「クロエ……。どうかなさりましたの？」
ミーアは言った。友人の顔には、深い憂いの色が浮かんでいるように見えたから……。
「いえ……、なんでも、ありません……」
「なんでもないという顔ではありませんわ。なにを遠慮しておりますの？　あなたとわたくしとは、読み友ではございませんの。水臭いですわ」
ミーアはクロエの手を取ると、
「とりあえず、わたくしの部屋に行きましょう。なにか、お茶菓子はあったかしら……」
「あっ！　ミーアお姉さま、任せてください！　ボク、厨房まで行って準備をしてきます！」
弾むような声で言って、ベルが図書室を駆け出して行った。
機を見るに敏、実にちゃっかり者のベルなのであった。

第二十話　ひたり、ひたり……

ミーアは部屋にクロエを招き入れた。
部屋では、アンヌが雑巾を片手に掃除の真っ最中だった。
「アンヌ、掃除の途中で申し訳ありませんけど、これから、クロエとお茶会させていただきますわね。あなたも一息入れるとよろしいですわ」
「あ、はい。かしこまりました。では、すぐにお茶の準備を……」
「無用ですわ。今、ベルが食堂の方に行っていて……」
と、タイミングよく、ベルが部屋に入ってきた。
「お待たせしました。ミーアお姉さま」
その手に持ったトレイには、あまぁい匂いのするホットココアが入ったカップが載っていた。その数は……五つ！
「もう、お茶って言いましたのに……。ところでベル、わたくしとクロエとあなた、それに、アンヌとリンシャさんの分まで持ってきたんですのね？」
部屋には、アンヌのみで、リンシャは来ていないのだけど……、と首を傾げるミーア。そんなミーアに、ベルはにっこにこと笑みを浮かべて、
「もちろん、ボクのお替わりの分です」
堂々と胸を張っていった。
「……ベル」
ミーアは、ベルがトレイをテーブルに置くのを待って、ベルの二の腕をつまんでみた。幼い二の腕は、ＦＮＹっとした感触を返して……こなかった！？
「なっ……！？」
驚愕に呻きつつ、ミーアは自らの二の腕をつまむ。ベルより、明らかにＦＮＹっとしている！　こんな理不尽があっていいのだろう

か！
　もう一度、つまんでみよう！　やっぱり、ＦＮＹっとしてない！
「あ、あの、ミーアお姉さま？　なにか……？」
「はぇ？　あ、ああ、ええ、なんでもありませんわ。ところで、ベル……あなたなにか、体を動かすこととかやってますの？　わたくしの知らないところで……」
「へ？　うーん、ミーアお姉さまに教わったダンストレーニングぐらいでしょうか……」
「そう……。では、そうですわね、今度また一緒にやりましょうか。せっかくですし、あなたのトレーニング方法を見てみたいですわ」
「はい、わかりました」
　などと、かしましいやり取りをした後、ミーアは改めてクロエを見た。
「さて、それでは改めて、クロエ、いったいなにがございましたの？」
　クロエはまだ迷っているのか、ミーアの顔を見て、それから自分の手の中のカップに目を落とした。
「……」
　口を開こうとしないクロエにため息一つ。それから、ミーアは、自らの胸に手を当てて穏やかに微笑んだ。
「先ほども言ったけど、水臭いですわよ、クロエ。あなたは、わたくしの大切なお友だちですわ。あなたの元気がないと、わたくし、こんなに甘いココアだって美味しくいただけませんわ」
　後半の主張の真偽に関しては、若干の疑義がないではなかったが……、それはさておき、ミーアは続ける。
「ですから、もしもあなたがわたくしのことを、お友だちだと思っているのなら、ぜひ話してくださらないかしら？　必ず力になりますわ」
「み、ミーアさま……うう」
　ミーアを見つめていたクロエの顔が、次の瞬間、くしゃりと歪ん

だ。メガネの奥、可愛らしい瞳からは、ポロポロ、ポロポロと涙が零れ落ちた。
「ふむ……」
ミーアは、一つ頷くとハンカチを取り出して、クロエのところに歩み寄る。
「ほら、クロエ……、落ち着いて。涙をお拭きなさい」
そうして、ハンカチを差し出し、クロエの背中をさすってあげる。
その姿は、どこに出しても恥ずかしくない、実に聖女じみた姿で……。でも……、
「すみ、ません、ミーア、さま……。実は……、お父さんが、倒れて、しまってっ」
「……はぇ？」
しゃくりあげ、途切れ途切れのクロエの声を聞いた瞬間、ミーアの完璧な笑みが崩れた。
「なっ、おっ、はっ、くっ、クロエのお父さま……、フォークロード卿が、倒れた……？」
一瞬、ミーアはクラッとしかける。なにしろ、クロエの父、マルコ・フォークロードが率いるフォークロード商会は、今やティアムーン帝国の生命線と言ってもよいものである。備蓄が心もとなくなってしまった現状、もし、それが切れてしまえば、連鎖的にガヌドス港湾国あたりもなにか仕掛けてくるに違いなくって……。
ひたり……ひたり……。ミーアの耳は、なにかが近づいてくる音を敏感に察知した。
思わず振り返ったミーアは……、谷底から這い上がってくるギロチンの姿を幻視してしまい……、
――ひぃいいっ！　やっやや、ヤバイ、ヤバいですわ！
背筋に冷たい汗をびっしりかいたミーアは、一度、ホットココアを飲んで、小さくため息。気持ちを落ち着けてから、クロエに凛とした視線を向ける。
「詳しい話を聞かせていただけないかしら？」

クロエは、そんなミーアを見つめてから、こくり、と小さく頷いた。
「実は……、うちの商会に攻撃を仕掛けてきた商会があるんです」
そうして、クロエは話した。
フォークロード商会と取引のある商会のすべてに、ちょっかいをかけてきた者がいた。
シャロークというその大商人は、フォークロード商会に敵対し、その販路をことごとくつぶしていったのだという。
その結果、クロエの父、マルコは、状況打開のために働きすぎて、倒れてしまったのだ。
「ゆっ、許せませんわね……。クロエのお父さまに喧嘩を売るなどと……」
ふるふると、怒りに打ち震えるミーア。
なにせ、クロエのところのフォークロード商会は飢饉の際の生命線の一本だ。
特に、入学式でいろいろとぶち上げてしまったミーアである。小麦の備蓄が心もとない現状、フォークロード商会につぶれられては、一大事である。
――下手をすると、ギロチンにつながる状況ですのに、いったい、どこのどいつが、わたくしに喧嘩を売ってきましたの？
そう……、今や、フォークロード商会に喧嘩を売るということは、ミーア自身に喧嘩を売るに等しい行為なのだ。ミーアはクロエの方を見て、力強く頷いた。
「よく相談してくれましたわ、クロエ。大丈夫、わたくしに任せるとよろしいですわ」
「ミーアさま……」
「とりあえず……、ルードヴィッヒに相談してみるのがよろしいですわね……。商人のことは、わたくしにはよくわかりませんけれど、たしかルードヴィッヒは、商家の出身だったはず。きっと良いアイデアを出してくれますわ」

それから、ミーアは不気味な笑みを浮かべる。
「ふふふ、わたくしに喧嘩を売ったこと……後悔させてやりますわ！」

第二十一話　ルードヴィッヒの教育

クロエから相談を受けた翌日、ミーアは、即座にルードヴィッヒに連絡を取った。
「いろいろと忙しいでしょうけれど……、ルードヴィッヒにも来ていただいたほうが良いでしょうね」
緊急性が高い事案と判断、最も頼りになる知恵袋を呼び出す。
「ふむ……そういえば、ルードヴィッヒはベルの先生役もやっていたんでしたわね。どうせなら、算術の教育も一緒にお願いしてしまうのが良いのではないかしら。なにか上手い手を考えてくれそうですわ」
などと、考えつつ「ベルに教えを施してほしい」旨も書き加えて、書状を送る。
ミーアお祖母ちゃんは、教育熱心なのだ。
さらに自らもセントノエル島を出て、クロエから聞いたフォークロード商会の商隊がとどまっている街へと向かう。幸いにもと言ってよいかは微妙ながら、クロエの父、マルコはそこでしばらくの間、療養するらしい。
会いに行くなら今である。
「あの、ミーアお姉さま、ボクも一緒に行ってもいいでしょうか？」
島を出る際、ベルがそんなことを言い出した。
「あら、特に楽しいこともないと思いますけど……」
「ミーアお姉さまの勇姿をぜひ、目に焼き付けておきたいんです」
「勇姿を見せるようなこともないとは思いますけど……でもそうですわね……ふむ」
ミーアは腕組みしつつ、考え込む。
――算術といえば商人……。実際の商人を見たら、もしかしたら、勉強に身が入るかもしれませんわ！

ミーアお祖母ちゃんは、教育熱心なのだ。
「では、一緒に行きましょう」
そうして、一行は、フォークロード商会が駐留している街へと向かった。
「これは、ミーアさま……。わざわざいらしていただけるとは……」
突如、現れたミーアを見たクロエの父、マルコ・フォークロードは目を丸くして驚いた。
宿屋のベッドの上、慌てて起き上がろうとするマルコ。そんな彼を片手で制し、ミーアは優しげな笑みを浮かべた。
「ご無事なようでなによりですわ。お加減はいかがかしら？」
「娘から聞いたのですか？　申し訳ございません。大したことはないのです。ただ、疲れが出てしまっただけで……、姫殿下に足をお運びいただくようなことでは……」
「気にする必要はまったくございませんわ、マルコ殿。あなたは、我が帝国にとって重要な方。文字通り生命線ですわ」
ミーアは、それから、悪戯っぽい笑みを浮かべて付け加える。
「それに、あなたは、わたくしの大切な読み友、クロエのお父さまですわ。あなたの元気がないと、クロエと読書談義もできなくって、楽しくないんですの」
「ミーア姫殿下……」
マルコは、深々と頭を下げた。
「ご厚意に感謝いたします」
「わたくしで力になれることがございましたら、遠慮なく言っていただきたいですわ」
「ああ……その……、本当に大したことではないのです。あくまでも商売上のことですので……」
「でも、妨害を受けたとお聞きしましたわ。もしや、なにか暴力的な攻撃を受けたりとか……、たとえば、盗賊を雇って襲わせたり……」
「いえ、決してそのようなことはございません」

慌てた様子で首を振るマルコに、ミーアが首を傾げていると……。
「フォークロード卿、我が主、ミーア姫殿下は、聡明な方です。どうか、今、あなたの商会が置かれている状況をご説明ください」
部屋の入口から聞こえた声。ミーアが目を向けると、そこには頼りになる忠臣の姿があった。
「ああ、ルードヴィッヒ、来てくれたんですのね」
心強い援軍の到来に、ミーアは声を弾ませた。自分一人では、マルコから話を聞くことはできなさそうだと感じていたからだ。
「遅くなりました。ミーアさま」
ルードヴィッヒは深々と頭を下げてから、改めてマルコのほうに目を向けた。
「さて……、商売上のことは言いづらいということであれば、私のほうで推論をお話しさせていただきますので、どうかそのままお聞きください」
それから、ルードヴィッヒは、眼鏡を指で押し上げる。
「まず、ミーアさまの誤解を訂正させていただきたいのですが、商人同士の争いの場合、盗賊を雇うなどして、直接的に攻撃することはたしかにあります。けれど、それはそこまでよくあることではありません。特に相手が大きな商会の場合、ほとんどそんなことはしません」
「まぁ、そうなんですの？」
「はい。明確な悪事には、当然、制裁があるからです。法を犯せば国の介入を求めることができます。それに、規模の大きな商会であれば、自衛の手段を整えることもできましょう。それはリスクが高く、防ぐ手段もわかりやすい下策です」
「なるほど。そういうものですの……」
「商人には商人の攻撃の仕方があるのです。例えば、そうですね……、わかりやすいのは、過度な値下げで、競争を仕掛けてきた、とか……」
ルードヴィッヒはメガネを押し上げながら言った。それを見たマ

ルコは、苦々しげに顔をしかめた。
「へ……値下げ……？」
きょとん、と首を傾げたのはベルだった。それを見たルードヴィッヒは、おかしそうに笑って、
「そうか。ベルさまには、少し難しいかもしれませんね。うーん……」
少し考えてから、ルードヴィッヒは言った。
「そうですね。例えばベルさま、同じ味、同じ大きさの焼き菓子が片方は銅貨一枚、片方は銅貨二枚で売っていたとしたら、どちらを買いますか？」
「え？　えっと、銅貨一枚の方、でしょうか？」
「そうですね。客としては当然の心理です。値段が安いほうから買うというのは。だから、敵対する商人より安い値をつけて、自分のところの商品を売りつけることは、相手の商人の商売を邪魔する上での基本的なやり方です」
ルードヴィッヒの言うことは、ごくごく当たり前のことだった。そのぐらいはミーアにでもわかることである。
「そして、悪質な場合には、利益を度外視した安売りを仕掛けてくることがあります。極端なことを言えば、銀貨一枚で仕入れたものを銅貨一枚で売ったりとか」
「へ？　そんなことをして、なんの意味があるんですか？　損になってしまいますけれど……」
その答えに、ルードヴィッヒは厳しい顔で頷いた。
「意味は大いにございます。これをされた場合、大商人が資金力にものを言わせて、ライバルとなる商人をすべてつぶしてしまえば……市場を独占することができますから」
そのやり取りを横目に、ミーアはマルコが用意してくれたお茶菓子を食べていた。
――ふむ……、見たことがないお菓子ですけれど……、これはもしや、海の向こうのお菓子ではないかしら……。この黒いペースト

は、豆でできているんですのね……。なんともすっきりした甘さ……、これは、クリームと混ぜると美味しくなりそうな予感がいたしますわね。

スイーツ鑑定士ミーアの審味眼(しんみがん)が冴え渡る。

第二十二話　商人の敬意

「そして、市場を独占……すなわち、自分たちのところのみが販売をすることになれば、その値付けは思いのままになります。そこ以外では買えないのですから、いくらでも高い値段をつけることができるのです」
「なるほど！」
ベルがポンっと手を打った。できるだけ丁寧に説明しつつも、ルードヴィッヒはミーアの様子をうかがう。と、
「ふむ……」
ミーアは、お茶菓子を食べながら満足げに頷いていた。
どうやら、満足してもらえたらしい、とルードヴィッヒは息を吐く。
――この機会にベルさまへの教育をしようということか。
自分を呼び出した手紙には「ベルに教えを施してほしい」と書かれていた。実地で、ベルに商人との向き合い方を学ばせようと考えているのだろう、とルードヴィッヒは判断する。
「ただ、今回の場合は市場全体の独占ではなく、フォークロード商会に対する攻撃が目的なのでしょう。そして恐らく……、フォークロード商会の持っている販路を譲り受ける、と……そういうことではありませんか？」
ルードヴィッヒの問いかけに、マルコは諦めたように首を振り、
「かないませんね。本当に。そこまで、わかってしまうものですか？」
お手上げ、という様子で、肩をすくめる。対して、ルードヴィッヒは悪戯っぽい笑みを浮かべて首を振った。
「申し訳ありません。実は、今回の推理には、少しばかりトリックがありまして……」

それから、彼はミーアのほうに顔を向けた。
「シャローク・コーンローグから、連絡がありました。フォークロード商会との契約を打ち切り、自分たちと契約をしないか……と」
ルードヴィッヒは懐から書状を取り出して、ミーアに差し出す。
「詳しくは書いてありますが……、フォークロード商会よりも安価に大量に小麦を輸送すると、そのように書かれております」
それはすなわち、シャロークは、フォークロード商会には敵対するのであって、帝国に敵対するのではない、という表明だ。加えて先方が提示してきた条件は、かなりの好条件だった。フォークロードとの契約を反故にするのか、検討できるほどには……。
それだけに警戒が必要だった。
――甘い話には裏があるからな。それに、もともとはフォークロード商会との信頼関係を裏切れという申し出だ。恐らくミーアさまは退けられるだろう……。
その点でも、ルードヴィッヒは狡猾さを感じていた。
フォークロード商会のすべての商品に対して利益度外視の安売りを行い、商品が売れない状態を作り出す。そうすると、フォークロードとしては商売ができない状態に陥る。そんな彼らが、唯一、買い手が付きそうな「帝国に卸す予定の小麦」を売りに出すという誘惑に陥らないだろうか？
帝国との約束以上の値段で小麦を売り出せば、商会は助かるかもしれない。上手くごまかして売ることができるのではないか……？
そんな誘惑にかられ、もしも、フォークロード商会が契約を違えたら……？
先に裏切ったのはフォークロード商会ということになり、それは帝国が契約を打ち切る口実となりうるのだ。
――幸いにも、マルコ殿は契約を守られた。だから、ミーアさまも、彼の信義に応えられるはずだ。
そう確信すればこそ、ルードヴィッヒはマルコの前で情報を明かしたのだ。

「ほう……ん？　コーンローグ……？」
書類を手に取ったミーアは、小さく首を傾げる。
「……はて？　これは……」
何事か考え込む様子のミーアに、マルコが慌てた様子で立ち上がりかける。
「それは……姫殿下」
「ああ、大丈夫ですわ、フォークロード卿。わたくしは、お金のために、読み友を裏切ったりはいたしませんから。どうぞ、楽にしていてくださいまし」
ミーアは片手をあげ、静かな口調でそれを制する。
「それにしても……、そう、シャロークさんは、コーンローグという名前なんですのね……」
ミーアは、小さな声でつぶやく。
「お聞き覚えがありましたか？」
問いかけるルードヴィッヒに、ミーアは遠くを見つめながら言った。
「ええ、ええ……。よーく覚えておりますわよ……。商人王コーンローグ……。あの方と会うのは、もう少し先のことかと思っておりましたけれど……。そう、あちらから来ましたのね……ふふふ」
そうして、悪戯を企む子どものようにミーアは笑うのだった。
「ああ、それはそうとルードヴィッヒ、もしもフォークロード商会が嫌がらせを受けているのであれば、わたくしたちのほうでも、なにか助けて差し上げられないかしら？　そうですわね、フォークロード商会が抱え込んでいる商品を、帝国で買い取って差し上げるとか……」
実際のところ、シャローク・コーンローグは、別に帝国に攻撃を仕掛けてきたわけではない。あくまでもフォークロード商会との値下げ競争を仕掛けてきただけである。
だから、帝国としてできることは、せいぜい、フォークロード商会が抱え込んだもろもろの在庫を買い取るぐらいしかできないわけ

で……。
「そう……ですね」
ルードヴィッヒは考える。買い取りの是非を……ではなくて、ミーアの質問の意図をである。
彼の思考を助けるように、ミーアは続ける。
「それとも、お友だちのお父さまの商会だからといって、売れ残った商品を買い取ったりしたら、無駄遣いになってしまうかしら？　それよりも安い商品があるのに、高い値で買い取ったりしたら、怒られてしまうかしら？」
そうして、上目遣いにチラッとルードヴィッヒのほうをうかがってくる。
その様子を見て、ルードヴィッヒは自身の推測が正しかったことを知る。
――ああ、やはり、そういうことか。ミーア姫殿下は、どうするのかはすでに決めている。その上で、ベルさまに教えるために、このような質問をされているのか……。
ルードヴィッヒは心得たとばかりに頷いて、答える。
「問題ないでしょう。それよりも安い商品があったとしても、その値段が適正のものであれば、それを買うことは無駄ではないと考えます」
「それは、どういうことですか？　ルードヴィッヒ先生」
計算通り、ベルが食いついてくる。その反応に満足しつつ、ルードヴィッヒは言った。
「先生……などと呼んでいただかなくっても結構ですが……、そうですね……。なんでも安ければ良いというのは、誤りであると私は考えています。なぜならば、お金というのは、労働の対価……その労働の価値を図るものであると、思うからです」
「労働の、価値？」
ルードヴィッヒは深く頷いて続ける。
「商人が売る品物というのは、その裏に必ず作った人間がいる。農

作物ならば農民が、工芸品ならば職人が、料理ならば料理人が、それぞれの労働によって生み出している。そして、商品に値付けをするという行為は、その労働に対して値付けをしているのと同じことになるのです」

少し難しい話になってきたからか、ベルは眉間にしわを寄せていた。わからないながらも、懸命に考えようとしているベルに、ルードヴィッヒは優しい気持ちになる。

「商人は労働をする者たちに敬意をもって値付けをしなければならない。過度な安値で物を売ることは、労働の価値を貶める、敬意を失したことであると私は考えています」

言いながら、ルードヴィッヒは思わず苦笑した。自らの父が、かつて偉そうに言っていたことを思い出してしまったからだ。

――商人の努力でできる以上の値下げをしてはならない。相手の商人に対抗するために、過度な値下げをすることは、それを作った者に対して不誠実にあたる、か。よく言ったものだな……。

自身の父の言葉が、真理の一面を突いていたことを、改めて認めるルードヴィッヒである。

それから、ルードヴィッヒは、難しい顔をするベルに言った。

「それに、心理的ではない実際的な負の側面もあります。例えば、銀貨二枚で作ったクッキーを銀貨一枚で売っている商人がいるとします。銀貨一枚分の赤字を出していますが、客を呼び寄せるための工夫として、そういうことをする場合があるのです。けれど、もし一人がそんなことをしたら、ほかの商人はどうするでしょう？　客を呼び戻すために、自分のところも銀貨一枚で売ろうとしないでしょうか？」

その問いかけにベルは首を傾げつつ、

「はい、そうすると思います」

素直に、そう言った。

「けれど……、この最初に始めた商人以外の商人は、恐らく自分たちが損をするようなことはしないのです。ほかの商人がどのように

してクッキーの値段を下げるかといえば、それを作った労働者に努力を求めるのです。すなわち、クッキーは銀貨二枚では売れない。もっと安くして銀貨一枚で売れるようにせよ、と……。彼らは最初の商人に対抗するために、職人の労働の価値を低く見積もろうとするのです」

「なるほど……。つまり、職人に無茶をいう商人が悪人、ということでしょうか？」

「もちろんそれもそうですが、安易に安いものを買ってしまう客にも原因があると思います。救いがたいことは、労働をする人間というのは、すなわち、安さを求める客でもあるのです。労働をして賃金を得た人間は、その金で物を買う客になります。彼らは、安価な商品を求めることで、自らの労働の価値を貶めているのです」

ルードヴィッヒは、そこで言葉を切った。

「ゆえに、私は思います、適正な値付けをする商人と過度な安価で物を売る商人とがいた場合、前者の者のほうが信頼できるし、安易に安いものを求めるべきではないのだ、と。客が安さに価値を見出しているからこそ、商人も値下げをするのです。自分の労働は高く値付けし、他人の労働には安い値付けをする、そんな都合の良い話はないのだということを、買う側は認識しなければならないと、私は思います」

それから、ルードヴィッヒはミーアのほうを見た。

「だから、私としては、利用価値のない贅沢品や度を越して高値を付けている物以外は買っても良いと考えます。お金の循環を歪めてしまわないためにも……」

ミーアは、ルードヴィッヒの言葉に満足したように頷き、マルコ・フォークロードに視線を移した。

「そういうわけですから、フォークロード卿、あなたの商会が抱え込んでいる在庫、適正価格で買い取らせていただきますわ。帝国だけで難しければ、そうですわね、わたくしの友人たちにも協力を求めましょうか。売れ残っているからといって過度な値下げは不要。

互いに敬意を持った取引をお願いいたしますわね」
そう言ってミーアは、微笑みを浮かべるのだった。

第二十三話　食べ過ぎたるは、なお……

商人王シャローク・コーンローグ。
大陸を襲った大飢饉、多くの民を苦しめた災害を逆に好機として、莫大なる富を築き、やがては「王」を名乗るようになった男……。
ミーアは、その男にかつて会ったことがあった。
それは、前の時間軸。帝国が飢饉によってあえぎ、死に瀕していた時のこと。
ルードヴィッヒとともに助けを求めに行った先の一つが、この男のもとだった。
資金難から、すっかりグレードの下がった馬車の中。ガタゴト揺れる車内にて、ミーアはお尻をさすりながら、不満を口にする。
「もう少しマシな馬車はないのかしら？　もっと、こう、乗り心地の良いものは……」
「そのようなものを維持する金がどこにありますか？」
極めて的確なツッコミに、ミーアは、ぐむ、っと黙り込む。
「別に私の前では不機嫌な顔をして構いませんが、取引相手の前では愛想良くお願いいたします」
「わかってますわ。商人王コーンローグだったかしら？　ずいぶんと大仰な二つ名ですわね……」
「ええ。正直、あまり頼りたい人間ではありませんが……。借りを作ってしまうと、後で高くつきそうなので」
「あら、クソメ……じゃない。あなたがそんなことを言うなんて、よっぽどですわね」
「やれやれ……一国の姫たる者が、クソなどと言うものではありませんよ」
肩をすくめつつ、ルードヴィッヒは首を振った。それから、生真面目な顔をして、

「しかし、冗談ではなくお気をつけください。一代で大国に匹敵するほどの財を成した人物です。相当、癖がある人物のようですから」
「問題ありませんわ。なにしろ、わたくし、癖のある方とは付き合い慣れておりますから」
チラッとルードヴィッヒの方を見て、ミーアは笑みを浮かべた。
けれど、残念なことに……、この日の会談は無為なものとなった。
二人は……、相手にすらしてもらえなかったのだ。

辿り着いたのは、帝国の国境付近の村だった。
てっきり宿屋かどこかでの会合かと思いきや、指定されたのは、シャロークの保有する馬車の中だった。
その豪華さに、ミーアは思わず目をむいた。
それは、在りし日の白月宮殿のミーアの部屋と同じぐらいに、きらびやかで、豪華な馬車だったのだ。
「素晴らしい馬車ですわね、商人王、コーンローグ殿」
迎え入れられた車内にて、ミーアは馬車の持ち主たる男、シャローク・コーンローグに言った。
鼻の下にくるんと巻いた口髭、それを指で撫でつけながら、その男、シャロークは笑みを浮かべた。
「恐縮でございます。ミーア・ルーナ・ティアムーン殿下。帝国皇女たるあなたに認めていただけるとは、金をかけたかいがあったというもの」
「ええ、まさに、王が乗るに相応しい馬車であると思いますわ」
と、素直に口にしたミーアに、シャロークは皮肉げな笑みを浮かべた。
「姫殿下からすると、たかが商人風情が王を名乗るのは、いささか、不遜に感じますかな？　民も、軍も、国土も持たぬ私のような者が王を名乗るなど、おこがましいとお考えでしょうか？　商人王などと、大仰な名だと思いますかな？」
図星を突かれたミーアは一瞬言い淀む。それを見たシャロークは、

くつくつと口の中で笑い声をあげた。
「みなそうでございますよ。されど、私は王だ。あなた方、王侯貴族に決して引けを取らぬ王にございます」
そう言うと、シャロークは立ち上がり、傍らに置いてあった袋の中から、なにかを取り出した。
「これこそが、我が軍、兵にして城、利を生み出す田畑にて家畜。そして、私が信仰する神」
そうして無造作に、ミーアの足元にそれをばらまく。ジャリっと硬質な金属音を鳴らすそれは、黄金の輝きを放つ……、
「あら……それは……金貨？」
「そう、金ですよ。これこそが我らが力ある神。世界を支配する力です。わかりやすいでしょう？」
「え……ええ、まぁ、そうですわね……」
芝居がかったシャロークの動作に、ミーアは引きつった笑みを浮かべた。
対するシャロークは、構うことなく椅子に……否、自らの玉座に座り、そうして笑みを浮かべた。
「さて、それでは聞きましょうか。ミーア皇女殿下、我が国になにをお求めかな？」
「ええ……、こちらが求めているものは……」
と、ミーアはかたわらのルードヴィッヒに目配せする。それを受けて、ルードヴィッヒが口を開いた。
「我が国は食糧を必要としています。ぜひとも小麦を売っていただきたい」
「もちろん、お売りいたしますとも。お金さえいただければ……」
そうして、シャロークが差し出してきたのは一枚の羊皮紙だった。そこに書かれている小麦の値段を見たルードヴィッヒが、小さく呻き声をあげる。
横からそれを覗き込んだミーアは……、
「……なっ！」

思わず絶句する。
「ぐぬぬ……小麦がなぜ、こんなに高いんですの！？　暴利ですわ！」
ミーアの抗議もどこ吹く風、シャロークは穏やかな笑みを浮かべて言った。
「恐れながら、欲しい者がいるならば、値段は上がるもの。それがこの世の理にございますゆえ」
「でも、これはあまりに高い。高すぎますわ。城を建てようというのではないのですのよ？」
「城より小麦が求められているというだけでございます。なにしろ、城は食べられませんからな！」
わはは、と笑うと、シャロークはかたわらに置いてあったクッキーをバリバリと頬張る。ミーアの目が、一瞬、その美味しそうなクッキーに釘付けになる！
「ふふふ、お若い姫殿下にはわかりませぬかな。この世界は金が支配しているのです。金こそが力、金こそが神……。私は私の神に信仰をささげているのですよ。もっと我がもとに来たれ、と。だからほら、金さえいただければ、なんでもいたしますよ」
ぐぬっとうなり声をあげるミーアに代わり、ルードヴィッヒが口を開いた。
「必ず約束の金額をお支払いしよう。この苦境を乗り越えれば帝国は必ず立ち直る。だから、しばしお待ちいただければ……」
「空手形などいくらもらっても無益。復興の目途が立っているならばまだしも、帝国の財政が破綻していることはすでに存じ上げておりますよ。今日、私がお会いしたのは、あなた方、帝国からまだ絞りとれるものがあるかどうか、ということだが……」
シャロークは、それから、ミーアのほうに目を向けて、小さく肩をすくめた。
「あの馬車や、姫殿下の安物のドレスを見るに……、もはや帝国は末期の様子ですな。ああ、しかし、その髪飾りは一品ですな」

ふむ、とシャロークは笑みを浮かべた。
「クッキーひと箱と交換でしたら、応じますが……」
「ふざけないでいただきたい」
ミーアの心がクッキーひと箱に揺れるのを待たず、ルードヴィッヒが言った。
「民が飢えて、死にかけているのだ。民は働き手、国を支える力、社会の基盤となるものだ。商売人のあなたにとっても必要なものではないか？」
「ルードヴィッヒ殿と言ったか。ふふ、忠勤の士だな。そして善良だ。心底から、民を飢えから救おうとしている。恐らく貴殿は優秀でもあるのだろうが、商人としての資質はなさそうだな」
「どういう意味だ？」
「貴殿では聖人にはなれても、金持ちにはなれん、ということさ。他人の痛み苦しみも、その死すらも商機として見る視点、それこそが金の信徒には必要なのだ」
シャロークは、小さく肩をすくめた。
「帝国の民がいくら餓えようが知ったことではないのだよ、ルードヴィッヒ殿。貴殿も知っているだろう？　大陸の民すべてが餓死するわけではない。問題は、どうすれば一番、金が儲けられるのかということだ。民がいなくば商売は成り立たぬだろうから全滅などさせぬ。されど、儲けを度外視してすべての民を救うのは商売ではなく慈善だ」
「きっ、聞きましたわよ、今の発言！　ラフィーナさまが聞かれたら、さぞや不快に思われるでしょうね」
ミーアはここぞとばかりに声を上げる。が……。
「どうぞ、ご自由に。評判のよろしくない姫殿下と、後々の投資として慈善活動にきっちりと金を積んでいる篤志家のわたくしめの言葉、どちらが世に受け入れられるか、問うてみるも一興」
シャロークはミーアを馬鹿にしたように笑った。
「ぐっ、な、なんでもかんでもお金さえ払えば解決すると思ってい

たら、大間違いですわよ！」
「姫殿下、一応、ご忠告申し上げますが、その手の負け惜しみは、持たぬ者が言うと大変見苦しいものですよ」
いっそ優しげな、憐みのこもった瞳でミーアたちを見てから、シャロークは言った。
「さて、用件は以上でしょうか。でしたら、どうぞお引き取りを。こう見えても、忙しい身でしてな」
……まさに、門前払いだった。

――あの日の屈辱……忘れておりませんわよ……。いや、まぁ、忘れてましたけど……。甘いものを食べたら、すっかり思い出しましたわ。どうでもいいけど、この甘い豆のペースト、とても美味ですわ！
腹にふつふつと湧いてくる怒りを抑えるように、ミーアはお茶菓子を口に入れる。
ほわぁ、っと広がる甘味……、それがミーアに冷静さをもたらした。
――さて、これからどうするかですわね……。とりあえず、この甘い豆を売ってくれるようにフォークロード卿にお願いして……っと、そのためには、フォークロード商会を助けなければなりませんわね。そのためには、シャロークと戦う必要があるのかしら……？
ルードヴィッヒの話によれば、シャロークが敵視しているのは、あくまでもフォークロード商会である。帝国とはむしろ、取引を望んでいる様子である。となれば、こちらから攻撃するのは難しい。
――クロエが元気がないのも見ていられませんし……。それに、このまま黙っているのもシャクですわ。ならば……。
ミーアはルードヴィッヒのほうを見た。
「ルードヴィッヒ、もしもフォークロード商会が嫌がらせを受けているのであれば、わたくしたちのほうでも、なにか助けて差し上げられないかしら？　そうですわね、フォークロード商会が抱え込ん

でいる商品を帝国で買い取って差し上げるとか……」
敵は損をする覚悟で、フォークロード商会の商品が売れないようにしている。ならば、相手の目的である「フォークロードの商品が売れない」という状況を崩してやるのが良いだろう。
――ふふふ、これは、一石二鳥。フォークロード商会を助けると同時に、良い嫌がらせになりますわよ。あのヤロウ……、ではなくって……、あの方の悔しがる顔が目に浮かぶようですわ。うふふ。
けれど、問題は、それが無駄遣いといわれないかどうかだが……。
ミーアはルードヴィッヒの顔をうかがう。
「それとも、お友だちのお父さまの商会だからといって、売れ残った商品を買い取ったりしたら、無駄遣いになってしまうかしら？それよりも安い商品があるのに、高い値で買い取ったりしたら、怒られてしまうかしら？」
ミーアは、不安にドキドキしながら、ルードヴィッヒの答えを待つ。
さぁ、答えは？　可か？　不可か！？
緊張の一瞬、ミーアはごくり、と喉を鳴らして――それから口の中を甘味で潤そうと、新たなお茶菓子に手を伸ばした！
……食べ過ぎである。
「いえ、問題ないでしょう」
その返答に、ミーアは思わず安堵のあまり、お茶菓子に手を伸ばそうとして……、アンヌに止められた。
……食べ過ぎだったのである。
――ふむ……、何事にも適度が大事ということですわね。ルードヴィッヒが今、話してることと同じですわ。適正価格が大事、お菓子も適量が大事……。そういうことですわね。
……いや、適量ではなく、食べ過ぎである。
気を取り直して、ミーアは言った。
「まぁ、そういうわけですから、フォークロード卿、あなたの商会が抱え込んでいる在庫、適正価格で買い取らせていただきますわ。

帝国だけで難しければ、そうですわね、わたくしの友人たちにも協力を求めましょうか。売れ残っているからといって、過度な値下げは不要。互いに敬意を持った取引をお願いいたしますわね」
「いえ、ですが、ミーア姫殿下、そのようなことをしていただいては……」
「フォークロード卿、わたくしは、先ごろ、セントノエル学園の入学式で申しましたの。何事も助け合いが大事だと。あなたには、助けていただいておりますから、わたくしが動くのは当然のこと」
それから、ミーアは、少しだけ考えてから続ける。
「それにクロエのことも、ありますし……。だから、そうですわね……、もしもお礼だというならば、クロエをわたくしがお借りすることをお礼だと思っていただきたいですわ」
ミーアとしては、クロエは本当に大切な読み友なのだ。これからの学園生活でも良い関係を続けたいと思っているのである。
その期間、読み友としてクロエを借りたいと……ちょっぴりくさいセリフを吐いてしまうミーアなのであった。

さて……マルコは、後日、クロエから、入学式でのミーアの言葉を聞くことになった。
例の『パン・ケーキ宣言』である。
そうして、その後のミーアの行動を思い出し……、「クロエを借りたい」との言葉を、改めて考えて……マルコは理解する。してしまう。
ミーアの真意を！
入学式での宣言からうかがえる、大陸における食料相互援助の構想……、そのために力を貸せと……、クロエに協力してもらうと……。
ミーアはそう言っているのだ。
「これは……とんでもないことに巻き込まれたものだな……我が娘ながら」

思わず、つぶやいてしまうマルコであったが……、同時に、帝国の叡智とともに羽ばたくことになるであろう娘を誇らしくも思うのであった。

「となれば、その構想のために、私もお手伝いしないわけにはいくまいな……」

かくて、着々とミーアネットの布石は打たれていくのであった。

第二十四話　ささやかなる復讐～下ごしらえ～

「ところで、ミーアさま、このシャロークからの申し出は断るのは良いのですが、どのように処理いたしますか？」
「ん？　どのように？　どういうことかしら？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒが続ける。
「使者を送りますか？　それとも、直接、お会いになりますか？」
「ああ、そうですわね……」
ミーアは、しばし考えてから……、
「うふふ、あちらからの申し出ですし、どうせなら呼びつけてやりましょう」
言ってやりたいこともありますし……と、ミーアはにんまりほくそ笑む。
前の時間軸、わざわざ会いに行った自分に言ったことを、そっくり返してやろう、と思い至ったのだ。
ささやかなる復讐である！
「私も、そのほうがよろしいと思います。例の蛇と関係しているかもしれませんし……」
「蛇？　ああ……」
なるほど、言われてみればそうかもしれない、とミーアは小さく頷く。
たしかに、これは蛇の攻撃と考えられないこともない。けれど……。
「そうですわね、そのあたりも少々探りを入れてみる必要がありそうですわ」
そうは言いつつも……、実のところミーアは、あまりそのことを疑ってはいなかった。
理由ははっきりとはわからないが……、なんとなくあの男は、秩

序の破壊者というイメージには合わなかったからだ。
――あれは、どちらかというと金の亡者、いえ、信仰者という感じでしたわ。
ミーアの本能が告げていた。あれは、恐らく……蛇ではない、と。
「では、手配いたします。準備ができるまで、私もヴェールガに滞在することにしましょう」
「ええ、助かりますわ」
頷きつつ、ミーアは腕組みする。
「ふむ……、あの男の背後関係も一応はチェックしておく必要がありますわね……」
こうして、ミーアは動き出した。

シャロークは、ヴェールガの飛び地である港湾都市「セントバレーヌ」を拠点にしている商人ではあるが、ヴェールガの出身というわけではない。
セントバレーヌの西方にあるミラナダ王国という国が、彼の出身国だった。ミラナダは、ティアムーンはおろか、レムノ王国にすら及ばない小国であるが、国土に比して、非常に豊かな国だった。
その豊かさを支えるものこそ、セントバレーヌによってもたらされた、活発な商人の活動である。
それゆえ、ミラナダ王国において、商人の地位は比較的高い。
「嫌味の一つも言ってやるつもりですけれど、一応のコネを調べておく必要がありますわね」
もしも、シャロークがミラナダやその他、どこかの有力貴族とコネを持っているならば、後々で厄介なことになるかもしれない。
幸いにもミラナダ出身の者はセントノエルにもいるはずだから、一応は聞いておこうか、というミーアである。
「ふむ……、しかしミラナダ王国出身の者ならば、たしか以前にルードヴィッヒに聞いていたような……」
セントノエル学園に来る前、ミーアは築くべき人脈の下調べをし

たことがあった。
　その際、逃亡先として、いくつかの国をピックアップしたのだが、その中に、ミラナダ王国も入っていた。
　なんといっても港があるのは魅力。そこから海外に逃げてしまえば、帝国の革命の火も及ばないだろうと考えてのことだった。
　ちなみに、ミラナダの関係者を調べろと言われたルードヴィッヒは「姫殿下は港を欲しておられるのか……」などと忖度していたのだが、それはまた別の話だ。
「わたくしの記憶が確かならば……、貴族の子弟が数人通っていたはずですわ、たぶん……」
　などと考え事をしつつも辿り着いたのは上級生の教室。そこで、ミラナダ出身の者の所在を聞いてみたミーアは……、
「その三人でしたら、下級生の教室に行ったみたいですけど……」
　などという情報を頼りに、今度は下級生の教室へ。そこで……、
「あら……？　あなたたちは……」
　ミーアは見覚えのある者たちを見つけた。
「ひぃっ！」
　ミーアの顔を見て、ギョッと飛び上がる三人の男子生徒。そして、その三人に囲まれるようにして、居心地悪そうにしている少女が一人……。
　微妙に見覚えがある面々、その中でもミーアは少女に視線を向ける。
　深く沈んだ灰色の髪、おどおどとあたりを惑う瞳の色は、濃い緑色をしていた。なんというか、こう……ついつい頭を撫でたくなるような、小動物めいた可愛さのある少女だった。
　それから、ミーアはその周りの男子たちを見る。びくびく、おどおどとする少年たち、彼らは……。
「あなたたち、まさか、またいじめていた、わけではありませんよね？」
「いいえ！　滅相もございませんっ！」

そう、彼らは先日廊下で、ミーアから叱責を受けた少年たちと、いじめられていた少女だったのだ。
「ふむ、では、なにをしておりましたの？」
「みっ、ミーア生徒会長のご命令通り、彼女を守っておりました！」
言われて、ようやく思い出す。そういえば、そんなこと言ったんでしたっけ……などと。
それから、ミーアは少女のほうに目を向けた。
「あなた、本当にいじめられておりませんの？　えーっと……」
「タチアナです。ミーア生徒会長……、先日はありがとうございました。おかげさまで、あれ以来、こうして守っていただいております」
「それならば良かったですわ」
そう頷きつつも、こんな風に上級生の男子に囲まれてるのって、うっとうしそうですわね……、などと思ってしまうミーアである。
「と、ところで、ミーア生徒会長、今日はどのようなご用件で……？」
男子生徒の一人に話しかけられて、ミーアはポン、と手を打った。
「ああ、そうでした。忘れるところでしたわ。今日はお聞きしたいことがあってきましたの。あなた方、ミラナダ出身ですわよね？あなた方のお国の商人で、シャローク・コーンローグという男のこと、ご存知かしら？」
「シャローク・コーンローグ？　ああ、金の亡者シャロークですか……」
一人の男子が、嫌そうな顔をした。
おやおや、ずいぶんな言われようですわね……、などと思いつつも、ミーアは言った。
「だいぶ、いろいろとやって儲けているみたいですけれど、貴族にも相当なコネをお持ちなんでしょう？」
そうして、聞き取りをしたところ、どうやらシャロークは、それなりにコネを持ってはいるものの、ミーアが気にする必要がありそ

うな者はいないようだった。
良くも悪くも金の付き合いの者が多いらしく、帝国との仲を悪化させてでもシャロークの味方をしようという者は、あまりいないように感じた。
――サンクランドやヴェールガのお偉いさんとつながりが深いようだったら問題でしたけど、そういうこともなさそうですわね。これならば、ガツンと嫌味を言ってやるぐらいは大丈夫じゃないかしら？
ぐふふ、っと笑みを浮かべるミーアは、気付かなかった。
「シャローク・コーンローグさま……」
タチアナが、小さくそうつぶやいたことに……。

第二十四話　ささやかなる復讐～下ごしらえ～（後書き）

先日、廊下で助けた少女はモブだと言ったが……あれは嘘だ！

第二十五話　愚か者を嗤え

さて、ミーアが情報収集（一時間ぐらい）したり、おやつを食べて、ベッドの上でゴロゴロしたり（七日ほど）いろいろやっているうちに、ルードヴィッヒからの連絡が入った。

呼び出しに応えてシャロークがやってきたとのことで、ミーアは急遽、ルードヴィッヒが滞在している町に赴いた。

準備を事前に整えるため……、一日前に辿り着くようにして……。

そうして、待機していたルードヴィッヒとともに、ミーアは迎撃の準備を整える。

あの日の『復讐』をすべく、彼を迎え入れるための宿の一室を手配。そこで一日滞在することとする。

小さな町には高級宿などあろうはずもなく「姫殿下をお迎えするなんて、とても……」などと恐縮しきりの店主を説き伏せる。

「清潔で、普通の商いをしているのであれば、それで十分ですわ」

なにより、ミーアが重視したのは、その宿に風呂がついているか否かである。幸いにも、その宿には風呂があったため、ミーアはゆっくりと体を休めることができた。

そうして、しっかりと準備が整ったところで、シャロークはやってきた。

宿の一室、さして広くもない部屋に、ミーアはシャロークを招き入れた。

ミーアのかたわらにはルードヴィッヒ、反対側にはアンヌが、さらに、ミーアの勇姿を見ておきたいというベルも、部屋の片隅にたたずんでいる。

「これは、わざわざ遠いところをいらしていただいて感謝いたしますわ」

余裕の笑みを浮かべつつ、ミーアは言った。

それから優雅な動作で立ち上がり、スカートの裾をちょこん、と持ち上げ、
「はじめまして。帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
文句のつけようのない、堂々たる自己紹介を決める。
以前、シャロークのもとを訪れた時、彼は自分から立ち上がろうとしなかった。傲然と自らの玉座から動こうとはしなかったのだが……、ミーアは違う。
真の覇者とは、偉そうに見せる必要など、そもそもない。虚勢を張る必要などないのだ。むしろ、完全なる礼節の中にこそ、その香りは匂い立つのだと……。言外に言わんばかりの、堂々たる、落ち着き払った態度だった。
――ふふん、ああ、楽しみですわ。すっごーく、楽しみですわ！
否、落ち着いてなどいなかった。ミーアの心は、今、大変に昂っていたのだ。待ちきれないから、ついつい先走って自己紹介をやっちゃったのである！
それもこれも、すべては、シャロークに言ってやりたいことがあったためだ。
「これは、ご丁寧な挨拶痛み入ります。シャローク・コーンローグにございます。お目にかかれて光栄にございます。ミーア姫殿下」
膝をつくシャロークに向かい、ミーアは小さく頷いて、
「さ、どうぞ、そちらにお座りになって。とりあえず、お茶を楽しみましょう」
そうして、ミーアはお茶菓子を出すように指示。それは、ラーニャに用意してもらった、ペルージャンの最高級のクッキーだった。
前の時間軸、シャロークは一切、ミーアにお茶菓子を勧めたりはしなかったが、ミーアは違う。太っ腹なところを見せて、格の違いをアピールしておくのだ。決して、自分だけが食べていると、食べすぎだとアンヌに怒られるから……ではない。
「それにしましても、驚きましたな。まさか、帝国の皇女殿下がこのような……」

と、シャロークは部屋の中を見回して、それからミーアの髪に目をやった。
「それに……失礼ながら、そのかんざしは……」
「ああ、これですの？」
ミーアはにこやかな笑みを浮かべて、そのかんざしをとった。
「一角馬の角のかんざしですわ。帝国のとある森でとれる、美しい木のかんざしですの」
「ほう、木でございますか……」
わずかに、白けたような顔を見せるシャロークに、ミーアは嫣然と微笑んだ。
「ふふふ、おかしいかしら？　大帝国の姫であるこのわたくしが、木のかんざしを身に着けていることが……。それに、先ほど、なにか言いかけておりましたわね？　もしかすると、わたくしが、この宿に泊まっていることが、おかしいと……、そう言いたかったのではないかしら？」
シャロークは、わずかに目を見開いて言った。
「まことにその通りでございます。御身は、高貴なる姫にございますれば、このような小さな宿にお泊りでは名を落とすことになるかと……。これならば、馬車のほうがマシではありませんか？　失礼ながら、表にあった姫殿下の馬車は非常に豪奢で素晴らしい細工がしてありましたが……」
ミーアは、それを聞き、会心の笑みを浮かべる。
「だって、馬車にはお風呂がございませんので……」
「は……？」
首を傾げるシャロークにミーアは言った。
「この宿には最高のお風呂がありますのよ。そのお湯でたっぷり温まった後、湧き水でのどを潤すのは最高の贅沢ですわ」
ヴェールガ公国は豊富な水源を誇る水の国だ。その水は、飲むだけで美しくなれるなどという逸話があるほどに、清らかで、澄み渡っている。

「そも、その土地の最高のものを求めるのであれば、その土地に住む者に聞き、その土地に居をなす宿に泊まるのは、当たり前のことですわ」
そう、ミーアは知っている。
ティアムーンにはティアムーンの、ヴェールガにはヴェールガの、レムノにはレムノの……キノコが生えるのだということを。
どこに行っても、自分の知る、自国のキノコのみを最高の贅沢と思い込むのは、愚かなこと。その土地にはその土地の最高のキノコがある。
ゆえに、その地でとれる最高のキノコを求めることこそ、最高の贅沢なのだ。
すべては同じこと。その土地の宿を軽んじ、自身の豪奢な馬車に閉じこもるなど、狭量極まること。あらゆる価値を、自身の常識の物差しである「金」で測ることもまた、愚かなことだ、と言外に訴える。
「それに、このかんざしですけれど……、これは、わたくしのために、ある子どもが作ってくれたものですの。思いがこもった、わたくしのお気に入りですわ」
ミーアはすぅっと瞳を閉じて、
「ただ高いだけの髪飾りなど、わたくしには不要ですわ。わたくしは、物の価値を自分で決めることができる、そのような立場にいるものですのよ？」
傲然と言い放った。
「そう……ですか」
シャロークは少々気圧された様子で、
「さ、さすがは姫殿下。素晴らしきお考えにございます。それはそうと、例の、わたくしめの申し出、受けていただけるのでしょうか？」
「申し出……、ああ、あれですわね」
「はい。私としては最大限、良い条件を、と……」

「ええ、そうでしたわね。フォークロードの三分の一程度のお値段とか……」
「フォークロード商会のマルコの娘と、姫殿下はご友人とお聞きしておりますゆえ……、その友情のお値段と考えていただければ……」
「ほう……」
スゥっと瞳を細めるミーアに、シャロークは媚びるような笑みを浮かべる。
「取引のために、コネをふいにさせるのですから、このぐらいの値段をつけなければ、ご満足はいただけないでしょう？」
そんなシャロークに、ミーアもまた笑みを返す。
「なるほど、納得いたしましたわ。とても良い条件の契約ですわね。シャローク・コーンローグ殿。けれど……」
ミーアは、そこで言葉を切って、シャロークを睨む。
「今こそ、あの日、言ってやりたかった言葉を、あなたに言いますわ」
「は？　なんのことでしょうか？」
ぽかんと口を開けるシャロークに、ミーアは、
「なんでも金で解決できると思っていたら、大間違いですわよ？」
にやり、と会心の笑みを浮かべる。
「先ほども言いましたわ。金など、わたくしにとっては重要ではないのですわ。わたくしにとっては、お金よりも友情が大切。信頼が大切。忠義が、感謝が大切ですわ。それをお金で売り払うなんて、愚か者のすることですわ」
「なっ……」
その言葉に、わなわなと肩を震わせるシャローク。構わず、ミーアは続ける。
「世の中、なんでもお金で解決できるだなんて思っているのだとしたら、勘違いもいいところ。そんなことだから、物事の真の価値を見失うのですわ」
前の時間軸、言ってやりたかったことを言ってやって、ミーアは

ちょっぴりスッキリする。だから、
「愚かな……。しょせん、帝国の叡智とは、この程度か……」
シャロークの負け惜しみの言葉さえ、なんとも清々しい。
「僭越ながら、姫殿下、友情だの、信頼だの、そのような感傷にとらわれて損得を見誤るのは弱さに他なりませぬぞ？　金の合理を、感情で否定するなど……」
「無礼な。姫殿下に向かって……」
ルードヴィッヒが鋭い叱責を加えるが、ミーアはそれを片手で制する。
それから、
「シャローク殿、なんと言われてもわたくしの判断は変わりませんわ。わたくしはわたくしの力が及ぶ限り、フォークロード商会のことを助けますわ。マルコ殿は、わたくしを信頼し、契約を守ってくださりましたから、わたくしもまた、その信頼に応えなくてはなりませんわ。彼に敵対することは、わたくしに敵対することと、心得ておいていただきたいですわね」
ミーアは、すっきりした笑みを浮かべて言うのだった。

第二十六話　商人王シャローク・コーンローグの華麗なる人生

商人王、シャローク・コーンローグ。
大陸を襲いし大飢饉、それを商機として、一挙に食糧の流通網を掌握。複数の商会を吸収統合し、数多の独立商人たちをも手中に収めた彼は、やがて「商人王」を名乗るようになる。
その後の彼の人生もまた、富と栄華に溢れたものだった。
たしかに、彼には優れた商才があった。そして、金を司る強欲な神にも愛されていた。
富はさらに膨れ上がり、彼は未だかつて誰も到達したことのない場所にまで、上り詰めた。
これは混乱期の英傑、シャローク・コーンローグの華々しき人生の、終幕の物語。

シャローク・コーンローグは、とある取引に向かう途中に倒れた。長年の過食と運動不足とが原因だった。
命は長らえたが、体を動かすことも口を利くこともできなくなり、ただベッドの上で、流れゆく状況を見守ることしかできなくなった。
妻も子も、兄弟もなかった彼の財産は法に従い、すべて彼の使用人頭（しようにんがしら）が代理として治めるようになった。
彼の「神」は彼を助けてはくれなかった。それどころか、彼の使用人頭の手によって、じわじわと目減りしていった。
シャロークの商才は、彼の部下には引き継がれることはなかったのだ。
「愚か者がっ！」
幾度、叫びたいと願ったことだろう。
シャロークの目から見れば、明らかに誤った契約を迷うことなく締結する使用人頭。その愚劣さに、幾度、口出ししたいと思ったこ

とだろう。
けれど、そんな状態もほどなく終わる。
命の日が尽きようとしていた。
贅沢な調度品に溢れた王の部屋、民衆の一生分の稼ぎをもってしても手に入れることができない豪奢なベッドの上で。
この地上で最も富んだ王は、死んだ。
誰からも見送られることなく……否、誰から見送られることも拒否して。
ただ独りで、空しく、その生涯を終えた。

……そんな夢を見た。

「……ふん、くだらない夢を見たものだ」
揺れる馬車の中、シャロークは独り言ちる。
それは、商人として、望みうる最高の場所に立った自分の、最晩年の夢だった。
金を神とした男の末路の夢だ。
奇妙にリアリティのある夢は、苦い後悔で彩られていて……。
「あの小娘に会ったせいか。くだらんな……」
シャロークは、鼻で笑い飛ばす。
帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーン。かの帝国の叡智の言葉が頭の中に残っていた。
「金より大切なものか……」
友情、忠義、信頼、感謝……。皇女ミーアが言った金より価値を持つものたち。
「くだらぬ戯言、綺麗事にすぎん」
それらは、シャロークが切り捨ててきたもの。否、二束三文で売り払ってきたものだ。
友情など、金貨一枚で売れれば上等。
感謝など、されたところで一文の得にもならない。

金がすべてではない。金より大切なものがある……、それは、彼にとっては負け犬の常套句に過ぎなかった。のだが……。
「あの小娘め……」
ギリッと、奥歯を噛み締めて、シャロークはつぶやく。
かの帝国の叡智、紛れもなく富む者で、莫大な力を持つ権力者が、それを言ったのだ。
「金などよりよほど大切なものがある」と。
シャロークのこれまでの生き方を、すべて否定して見せたのだ。
その衝撃は、思いのほか大きかった。
「くだらないことを聞いてしまったから、つまらない夢を見てしまった。なにが帝国の叡智だ。まさか、あの程度の損得勘定ができぬとは思わなかった。あんなものを叡智などと祭り上げていては、帝国は長くはないな」
吐き捨てるように言って、彼は嘲りの笑みを浮かべようとして……失敗する。
彼の中の、なにかが告げていた。
あの夢は真実である、と。
遠い未来、あれとそう大差ない、温かみのない最期を自分は迎えるであろうと……。
けれど……、
「だからと言って、今さら生き方を変えられようはずもない」
人生の半ばも過ぎたころに、己がこれまでの生き方を否定することなど、できるはずがない。
金儲けのために多くのものを切り捨ててきたシャロークであったが、自身の「これまでの生き方」を損切りすることだけはできなかったのだ。
だからこそ……。
「金の価値を認めぬ、そのような生き方が許せるはずがない」
己の、価値観を揺るがす者、同じ商人でありながら、儲けを二の次にした商売をするフォークロードが許せなかった。そして、それ

以上に、
「金は力、金は神……。それよりも大切なものがあると抜かす……、あの小娘も……」
ミーア・ルーナ・ティアムーン。
シャロークの生き方を真っ向から否定して見せた、かの帝国の叡智を、認めることなどできなくって。
「……許せるはずがない」
天より与えられしシャロークの商才が告げていた。
この飢饉は、すぐに収まるようなものでは決してないということを。
それゆえ、フォークロードの持つ、海外からの小麦の輸送路は価千金の価値を持つし、もしも、流通する小麦の量を調整することができるならば、大きな儲けを生むことも不可能ではない。
少しぐらい餓えさせてやるぐらいが良い。なんだったら、餓死者が出たほうが、危機意識に火がつくかもしれない。
死への恐怖は人々の判断を惑わし、小麦一袋にとんでもない値が付くようになるだろう。彼にとって、大陸を小麦で満たし、値段の上昇を適正価格内で抑える、などという政策は、決して相いれないものであった。
食糧が増えた分、輸送費は高くなり、代わりに価格は落ち込むのだ。
そんな不合理なことを行おうとしているフォークロード商会も、皇女ミーアも、シャロークにとって嘲笑の対象でしかなかった。
……否定せずにはいられなかったのだ。
「ティアムーンの食糧自給率は低い。ペルージャン農業国への依存度が高かったはず。あそこの国王は、たしか……」
ミーアの知らぬ間に、次なる陰謀は動き出していた。

第二十七話　忠臣アンヌ、心を鬼（青）にする

ポカポカとした日差しが気持ちの良い一日。夏前の、小麦の収穫期を間近に控えた、春と夏との境目の時期。

ベッドでゴロゴロしているミーアを見たアンヌは……、ある不安を抱いていた。

それは昨年の夏……、エメラルダと舟遊びに行く直前のことだった。

ちょっぴり、太ってしまったミーアは、とても苦労することになったのだ。

――また、エメラルダさまにお誘いを受けるかもしれないし、今から少しずつ、運動をしておいたほうがいいかもしれないわ。

アンヌに言わせれば、別に、ミーアは太ってない。十分に美しいし、むしろ、少しぐらいふっくらしていたほうが、可愛らしいとすら思ってしまう。

……極めて危険な思考の持ち主といえるだろう。

しかしながら、個人の趣向はさておいて、ミーアが最近、運動不足なのはたしかである。

――料理長さんも、体に悪いって言ってたし……、やっぱり、ここは……。

意を決して、アンヌは話しかけた。

「ミーアさま、あの……」

「ん？　どうかしたんですの？　アンヌ」

ベッドの上をごろりんごろりん、と転がりながら、ミーアはアンヌのほうを見上げた。

人魚……に間違われることがある海の生き物のような動きだった。

……だらけ切っている！

普段から大きな取引とか、生徒会の仕事とか、秘密結社との闘い

とか……、大変な重荷を背負っているミーアだから、部屋にいる時はダラダラさせてあげたいと思うアンヌであるが……、ここは心を鬼にする。
まぁ、友だちのために悪役を引き受ける鬼ぐらいの鬼具合ではあるが……。
「ミーアさま、最近、ダンスのレッスンをされてないようですけれど……、アベル王子やシオン王子をお誘いして、ダンスのレッスンをするのはどうですか？」
基本的に、ミーアは運動が嫌いではない。嫌いではないのだが……、放っておくとすぐにゴロゴロを始め、ナニカをため込むモードに移行してしまうのだ。
それを改善するべく腹心として、できる限りミーアが気にしないような方向で忠言をしたのだけれど……、
「ダンス……ふーむ、そうですわね。ひさしぶりに、アベルを誘ってダンスというのも良いかもしれませんわね。そうですわ、どうせでしたら、生徒会を動員して立食ダンス&ケーキパーティーを催すというのは……」
ミーアがよからぬことを言い出したので、慌てて止める。ダンスをしたとしても、それ以上に甘いものを食べたら大変だ。
アンヌはきちんと心得ている。ミーアは、健啖家で誰よりも食を愛する人なのである。
「そ、それは、少し準備に時間がかかりそうですので……。あ、だったら、遠乗りはいかがでしょうか？」
とっさの機転で切り替えるアンヌ。その剛腕を振るう。
「ふむ、たしかに言われてみれば、最近、馬術部のほうに顔を出しておりませんでしたわね。荒嵐たちは元気かしら……。ひさしぶりに遠乗りというのは、たしかに悪くないですわね」
幸い誘導は上手くいって、ミーアも乗り気になっていた。流されやすいのがミーアの良いところなのである。
「あ、ミーアお姉さま、ボクも行っていいですか？」

話を聞いていたのか、ベルが手を挙げた。
「あの時の仔馬が元気か、会いに行きたいです」
「ああ、そういえば、ベルもあの時、あそこにいたんでしたわね……。ふむ、行きたいというのであれば構いませんけれど……」
と、そこで、ミーアは何事かを思いついたように、パチン、と手をたたいた。
「そうですわ！　どうせなら、リーナさんもお誘いしましょう」
「リーナちゃんも？」
「ええ、仲間はずれにしたら可哀そうですし……」
それから、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「それで、ベル、あなたと一緒に馬術部に入るというのはどうかしら？」
「え？　ボクが、馬術部に？」
「そうですわ。ほら、前にあの荒野で乗った時に結構上手でしたし、練習すればすぐに乗れるようになるのではないかしら……」
どうやら、ミーアがベルに馬術を習わせようとしているらしい、と察したアンヌは助け舟を出すことにする。
「ベルさま、私でも練習すれば乗れるようになりましたから、ベルさまならすぐに乗れるようになると思います」
ちなみに、もともと不器用だったアンヌの場合、乗れるようになるまでは、結構な努力を求められたのだが……、もちろん、そんなことは口にしない。
ミーアの健康のためには、仕方のない犠牲だと割り切る。
「やはり、姫であれば馬の一頭でも乗りこなしてこそ、ですわ。ベルもわたくしのように、格好いい姫殿下になりたいでしょう？」
……ツッコミを入れる者はいない。
「でも、ボクは……」
どこか浮かない顔をするベルに、ミーアは、ふむ、と頷いて……。
それからアンヌのほうをチラッと横目で見てから、そっとベルに耳打ちする。

「いつ元の場所に帰ってもおかしくはないし、それならば全部無駄と、あなたがそう考えていることも理解していますわ。でもね、ベル、もしも、元の場所に帰ったとしても、馬に乗る練習は、しておくに越したことはありませんわ。逃げるのに便利ですし……」

と、そこで、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべてウィンクする。

「それに、馬、可愛いですわよ？　リーナさんと一緒に乗るのも楽しいでしょうし、きっと良い時間になりますわ」

第二十八話　おひさしぶり！

――うふふ、さすがはアンヌ。良い着眼点を与えてくださいましたわね……。

シュトリナを誘い、厩舎に向かう途中で、ミーアは満足げに微笑んだ。

――なにか趣味を持たせれば、ベルだって、いついなくなってもいいなんて思わなくなるはずですわ……。楽しいことがあれば、死んでたまるかと思ってくれるはず……。これがなにかのきっかけになればよろしいんですけど……。

ベルの無駄遣いがどこに起因しているのか、だいたい察しているミーアとしては、この問題が簡単に解決しないことはわかっているが……、それでもなにもしないわけにもいかない。

そんなミーアにとって「ベルになにか趣味を持たせる」というのは良い着眼点のように思われた。

――ゆくゆくは、キノコ狩りのような雅（みやび）な趣味も身に付けさせたいですけれど、そちらは、わたくしも勉強中ですし。とりあえずは乗馬ですわね。馬も可愛いし、きっとベルも気に入ってくれますわ。

などと思いつつ、ミーアは、視線を転じる。

「ところで、リーナさんは馬に乗れるんですの？」

ベルの隣で、にこにこと可憐な笑みを浮かべていたシュトリナは、ミーアの問いかけに、きょとりん、と首を傾げた。

お人形さんのように愛らしい顔を見ていると、ついつい忘れがちになってしまいそうだが、シュトリナは、元「混沌の蛇」の関係者だ。陰謀に与するには、馬に乗れたほうが色々と都合がいいはず、もしかしたら乗れるのでは……？　と思ったミーアなのだが。

「いえ、リーナもはじめてです。だから楽しみで……。ふふふ、ベルちゃんと一緒に乗馬、とっても楽しみです」

「ふむ……」
ミーアは、腕組みしつつ考えこむ。
――二人が素人となると、わたくし一人で教えるのは難しいかしら……？　いくら、わたくしが馬術の名人とはいえ……。
背浮き乗馬の開祖たるミーアは、きちんと分をわきまえているのだ。
そうこうしているうちに厩舎へとたどり着く。と、そこで、ミーアは懐かしい顔を見つけた。
「あら……、あなたは……」
「よぉ、ひさしぶりだな。嬢ちゃん」
厩舎の中、馬の手入れをしていたのは豪快な笑みを浮かべた林馬（リン・マー）龍（ーロン）だった。
「ひさしぶりですわね、馬龍先輩。たしか、セントノエルは今年の春でご卒業されたのではなかったかしら？」
それ以降は騎馬王国に帰国したものとばかり思っていたのだが……。
「さては、馬たちが恋しくて戻ってきましたの？」
軽口を叩くミーアに、馬龍はニカッと笑みを返す。
「馬のほうは心配してないんだが、嬢ちゃんとアベルが上手くいってるか様子を見に来たのさ」
「あら？　お気遣いに感謝いたしますわ。おかげさまで、アベルとは仲良くさせていただいておりますわよ？」
「ははは、それはなによりだ。まぁ、冗談はさておき、実はラフィーナの嬢ちゃんに頼まれてな。馬たちの様子を見に時々来ることにしてるんだ。馬術部のことも気になってたしな」
「まぁ、そういうことですのね。ふふ、それにしても相変わらずですわね。お元気そうでなによりですわ」
ひとしきり馬龍と会話してから、ミーアは厩舎の中を見た。
「花陽も、元気にしてましたかしら？　なかなか来られなくって申し訳なかったですわね」

冬に世話になって以来、ゆっくり乗馬に勤しむことができていなかったミーアである。一瞬、忘れられてしまったかな？　などと思いはしたが、花陽は、ミーアを見つめると、挨拶するようにぶーふっと鼻を鳴らした。
「うふふ、ええ、ずいぶんとひさしぶりになってしまいましたわね。それに、あなたのほうも、ひさしぶりですわね！　えーっと……」
ミーアは、花陽の隣にいる仔馬に声をかけた。ミーアの声に、耳をひくひく動かす仔馬。優しくも気品のある顔には、花陽の面影があった。
「ああ、そいつの名前は銀月だ」
馬龍が後ろから教えてくれる。
「ほう、銀月……銀月……、シルバームーン！　おお、とても良い名前ですわね！」
なんだか、生涯に一頭の愛馬を見つけてしまったような気持ちになるミーアである。もう少し大きくなったら絶対に乗ってやろう！
と心に決める。
「うわぁ、すごい。もう、こんなにおっきくなったんですね」
「ほんと。あの時はすごくちっちゃかったのに……」
ベルとシュトリナが仔馬、銀月を見て歓声を上げる。銀月は二人のことを覚えていたのか、のっそり近づいてきて、鼻をひくひくさせている。
馬とじゃれる孫娘とその友だちの姿を微笑ましく眺めていたミーアであったが……、はて……？　と首を傾げた。
「それはそうと、荒嵐はいないんですのね？　もしかして、どなたかが遠乗りに行っておりますの？」
いつもミーアに不遜な視線を向けてくる、あの荒馬の姿がどこにもなかった。
もともと荒嵐のことが苦手だったミーアではあるのだが、あの夜、共に死線を潜り抜けたことで、親しみを覚えていた。
あのふてぶてしいまでに不遜な態度が、今ではどこか心強い。戦

友といっても良いほどには、信頼を寄せているのだ。
「ああ、今はアベルが乗っててな。っと、ちょうど帰ってきたみたいだぜ」
その言葉に、ミーアは後ろを振り返る。と……、
「やあ、ミーア。乗馬に来たのかい？」
爽やかな笑みを浮かべたアベルが、荒嵐の手綱を引いて近づいてくるところだった。
「ええ、そうなんですの。気持ち良く晴れた午後でしたので……って、それにしましても……」
ミーアは、アベルの姿を見て、小さく首を傾げた。
「ずいぶんと、泥んこですわね……」
よく見ると、アベルの頬には泥がついていた。凛々しい乗馬服にもところどころに泥はねが見て取れた。
ミーアの視線を受けて、アベルは、困ったような顔で笑みを浮かべた。
「暴れ馬の洗礼を受けてしまったよ」
「まぁ、そうなんですのね。でも、別に遠乗りをするのであれば、荒嵐でなくても良いのではなくって……？」
荒嵐は乗るのが難しい気性の荒い馬だ。わざわざ乗りづらい馬を選ばずとも、花陽やほかの乗りやすい馬に乗れば良いのではないか……、と思ったミーアである。
「荒嵐は乗りこなすのが難しい馬ですし、上手く乗れなくっても気落ちする必要はありませんわ」
「でも、君があんなに乗りこなせていたのに、ボクが乗れないのは格好悪いじゃないか……」
アベルは、ちょっとだけムキになった顔で言った。
「ボクだって乗りこなしてみせるよ。今はまだ難しいけれど、これから訓練して、必ず、こいつを乗りこなしてみせる」
そんなアベルを見たミーアは、思わず……、
――まぁ！　男の子の意地ってやつですわね。うふふ、可愛いで

すわ。
ニヤつきそうになる口元を押さえる。
最近では、すっかりたくましく、凛々しくなってきたアベル、そんな彼が見せた、「年下の男子の、ちょっぴり背伸びした感」に、ミーアは思わずクラッとする。
――こういう負けん気の強いところもいいんですのよね、アベルは……ん？
と、ミーアはそこで、ふと気付く。微妙な違和感。
――はて？　わたくし、なにか、忘れているような……。
なにか、忘れてはいけない、なにかがあったような……、なんだか、何かが足りないような、そんな感覚。
その瞬間だった！　ふしゅーっと首筋に、なにやら風を感じて……。
「あ……あら？　これは……、なにやら、懐かしい感触ですわね……。なんだったかし……ら？」
振り返ったミーアは、そこで見つけた！　鼻をむぐむぐさせている、荒嵐の姿をっ！
「あ、ああ、これ、荒嵐、あなたとも、ずいぶんと、ひさしぶ……うひゃあああああっ！」
ミーアの、ちょっぴり間の抜けた悲鳴をかき消すように、ぶえぇえくしょんっ！　という荒嵐の盛大なくしゃみの音が響いた。
ひさしぶりだったからだろうか……、それは、いつもより大きいくしゃみだった……。

第二十九話　幸せな妄想

ミーアは汚れを落とすために、いったん寮へと戻ることにする。
「では、また後で……」
などと、アベルと約束をし、厩舎を出た瞬間……、ミーアは走り出す。
はじめは小走りに、百歩ほど行ったところで全力疾走に切り替える。
びゅんっと風のように駆け抜けて、向かう先は共同浴場だ。
アンヌが替えの服を持ってきている間に、素早く、服を脱ぎ捨て、浴場へ。
備え付けられている石鹸をワッシャワシャと泡立てていると、遅れてアンヌが合流。携えてきたミーア愛用の馬シャンを使い、スピーディーかつ丁寧にミーアの髪を洗い始める。
そうしてテキパキと身支度を整えて、ミーアは馬場に向かった。
疾風のごとく駆け抜けたミーアは、目的地の手前で急ブレーキ。
それから、呼吸を整えるようにゆーっくりと歩いていき……、
「ご機嫌よう、アベル」
「やあ、ミーア。早かったね」
馬場の柵に腰かけていたアベルは、ミーアのことを見つけると、さっと道に降りた。
シュッと引き締まった体を覆うのは、真新しいシャツと黒いズボンという……、ちょっぴりラフな格好だった。
――ふむ……王子さまっぽくない格好もなかなか……。良いですわね……！
このギャップがいいのである！
髪を洗ったのだろうか、サラサラの黒髪が風にそよいでいた。ふわり、と鼻をくすぐる清潔な石鹸の香りに、ミーアはほわぁっと息

を吐いた。
――やっぱり、アベル、格好いいですわ……。
「ん？　ミーア、どうかしたのかい？」
ミーアの視線に気付いたのか、アベルがきょとんとした顔をする。
「あ、いえ、別に何でもありませんわ。それより、ほら、馬場のほうに行きましょう」
馬場では、すでにベルとシュトリナが馬龍に教えを受けていた。
「ふわぁ、馬って背が高いんですね。落ち着いて乗るとよくわかります」
「ははは、そうだぞ。この高さで草原を走ると気持ちいいんだ。もし騎馬王国に来ることがあったら、一緒に遠乗りに行くか？」
「はい、ボク行ってみたいです！」
などと、ベルが楽しそうにしているのが見えた。
「今日はあの二人も一緒なのだね」
「ええ。実は、わたくし自身が乗馬を楽しみたかったというのももちろんあるのですけど、それ以上にベルに乗馬を教えてあげようと思って……」
「そうか。ベルくんに、馬術を……」
腕組みするアベル。その視線の先では、馬龍に引かれて馬が歩き出していた。よろよろと、微妙に危ないバランスながらも、懸命に馬にしがみつくベル。そんな姿が、なんだかかつての自分を見るようで、ミーアはちょっぴり微笑ましく感じてしまう。
「なかなか、筋が良さそうだね」
「ええ、そうなんですの。先日の聖夜祭の時には、なかなか騎乗姿も様になっておりましたし、案外、簡単に乗りこなしてしまうのではないかと思いまして」
ベルに温かな目を向けるアベル。その隣で、見守るミーアの視線も、どこか優しかった。
「馬に乗れれば、いろいろとできて便利ですし……。ああ、もちろん、あのようなことに、もう二度と巻き込むつもりはございません

けれど……」
　それでも……、気を付けていても危機に巻き込んでしまうことは、この先もきっとあるだろうと思う。そんな時には、きっと乗馬の技術が役に立つはず……、などと、柄にもなく真面目なことを考えていたミーアであったが、ふと、自らの状況を見て思う。
　あっ、こういうのちょっといいかも……と。
好きな人と並んで、自分の孫娘が馬に乗る姿を見る……。落ちそうになるのをハラハラしながら見守りつつ、応援する。それは些細で、とてもありふれた……、でも、幸せな風景。
　こんな風に幸せな未来を想像したことは、なかったかもしれない。
　――思えば……、今まで悲惨な未来から逃れ続けることだけに必死になっておりましたけれど……。もしも、アベルと結婚したら、わたくしは……。
　どうなるのだろうか？　ふと思う。
　この、隣に立っている柔らかな、温かな雰囲気を持つ少年と……、もしも、結婚したら、どうなるのか……。
　ほわほわほわん、と無限に妄想が広がっていく。
　こんな風に穏やかな天気の日に、子どもを連れて遠乗りに行き、そこで、馬型のキノコサンドイッチをみんなで食べて、それで……。
「ん？　どうかしたのかい？」
　不思議そうに首を傾げるアベル。優しげな笑みを浮かべるアベルに、ミーアは、ほわぁ、っと息を漏らす。
「あ、え、えーと、なんでもありませんわ。うふふ、そ、それより、わたくしたちも馬に……」
　と、馬場のほうに目を向けたミーア。すると、ちょうどタイミングよくベルが馬から降りたところだった。よほど楽しかったのか、ぶんぶん手を振りながら、こちらに走ってくる。
　――うふふ、はしゃいでおりますわね、ベル。楽しんでいるようで良かったですわ……。
　などと、和やかな気持ちで眺めていたのだが……、その目の前で、

バランスを崩したベルが思いっきり転んだ。
「ベルっ！　ああ、もう、調子に乗るから」
慌てて、ミーアは駆け出した。
走り寄ると、ちょうど、シュトリナに助け起こされたベルが立ち上がるところだった。
「ちょっと、ベル？　大丈夫ですの？」
「はい、大丈夫です。えへへ、失敗しちゃいました」
ベルは困ったような顔で笑う。
「ふむ、まぁ、笑えるぐらいだったら大丈夫ですわね」
そう言いながら、視線を下げたミーアは……見てしまう。
ベルの幼い膝小僧、そこが、真っ赤な血に染まっていることを！
「べ、ベル……それ……」
その言葉が終わるのを待たず、小さな体がフラーっと倒れていく……。小さな……、ミーアの体が……。
「う、うーん……」
「ミーアっ！」
慌てたようなアベルの声を聴きながら、ミーアは意識を失った。
……血を見たショックで気絶してしまうミーアなのであった……。
ミーアは痛いのも、痛そうなのも嫌いなのだ。

第三十話　ミーア姫、自らのＦＮＹを悟る……

「う、うーん……」
目を覚ました時、ミーアは、清潔なベッドの上に寝かされていた。
「こ、ここは……、ああ、治療室ですわね……」
近隣諸国の貴族の子弟が集う場所、セントノエル学園には、優れた医療体制が整っている。そもそも、大陸の各国に、治療院という形で医療を広げたのが、ほかならぬ中央正教会である。その本拠地である聖ヴェールガ公国には、古くから医学の知識が集積されているのだ。
そんな最先端の医療を受けたおかげか、ミーアはすっきり気分よく起き上がる。
「ふむ……、さすがはセントノエル学園ですわ。素晴らしい治療ですわね」
……まぁ、そもそもミーアは血を見たショックで気を失っただけで、倒れかけた時にしっかりとアベルが受け止めたこともあって、ケガ一つなく……。なので、特に治療を受けたりはしていないのだが……。
「あ、気が付かれましたか、ミーア生徒会長」
と、ミーアの様子に気付いたのか、一人の少女が歩み寄ってきた。その顔を見て、ミーアは少しばかり驚いた声を上げる。
「ん？　あら、あなたは……えっと、タチアナさん……？　なぜ、このような場所に？」
首を傾げるミーアに、タチアナはちょっぴり困ったような笑みを浮かべて、
「えと、治療院を見学させていただいています……。実は、私の父親が医者をしていたので、設備に興味があって……」
「まぁ、お父さまはお医者さまだったんですのね……。なるほど…

…、あ、と、そうですわ！　それより、ベルは……」
慌ててあたりをキョロキョロ見回せば、
「あっ、ミーアおば……お姉さま、お目覚めですか？」
ベルが歩いてくるのが見えた。どうやら、隣の部屋にはアンヌやシュトリナもいたらしく、ベルの後からついてくる。
「えへへ、ミーアお姉さま、ボクもタチアナちゃんに、包帯を巻いてもらいました。とっても上手かったんですよ」
そう言って、ベルは自慢げに自らの膝を指さした。その幼い膝小僧には、丁寧に包帯が巻いてあった。
「それ、大丈夫なんですの？」
「あはは、ちょっと擦りむいただけですよ。もう、ミーアお姉さま、心配性ですね」
などと笑っているベルであるが……そんな風に包帯を使うんだったら、それは結構なケガなのではないかと思ってしまうミーアであった。
「血が出ていましたが、骨にも異常はありませんでしたし、傷もそこまで深くはありませんでした」
補足するように、タチアナが説明してくれる。その口調には、いつものおどおどした様子はなく……、むしろ堂々とした、自信にあふれたものだった。
「ふむ、さすがはお医者さまの子どもですわね。それは、すべて、お父さまに教わりましたの？」
首を傾げるミーアに、タチアナは一瞬黙ってから……、
「父は、私が五つの頃に亡くなりました。だから、教えてもらったことはほとんどありません。この知識は、私が自分で学んで身に付けたものです」
「まぁ、そうでしたの……それは、頑張りましたのね……」
頷くミーアに、タチアナは、意を決した様子で言った。
「ミーア生徒会長、お聞きいただきたいことがあります」
そうして、彼女は語りだした。

自分と、シャローク・コーンローグとの関係を……。

「私は、父のように医の道に携わりたくて、セントノエルに来ました。でも、私の家は、貧しくて……、本当はそれは叶わぬ夢のはずでした」

タチアナは胸に手を当てて、続ける。

「でも、シャロークさまの作った奨学金の制度で、勉強することができて……。セントノエルへの推薦もいただくことができたんです」

「まぁ、そうなんですのね！」

ミーアは、ちょっぴり驚いた。

――意外ですわね。あの金の亡者のような方が……。そんな、思いやりを示すなんて……。ああ、でも、自分の評判を維持するために慈善活動をするとか……、そんなこと言ってましたっけ。そういうことはよくあることではありますし……。

と思い直すも、まるで、心を読んだかのように、タチアナは首を振った。

「シャロークさまは、嫌われています。だから、みなさんは、シャロークさまのことを、悪く言います。どうせ、自分の評判を高めるためにやったことなんだって」

ズバリ、考えていたことを言い当てられて、ミーアは、ふむ、と鼻を鳴らす。

「でも、奨学金を作ったのは、あの方がもっと若くて、まだまだ商人として駆け出しの時だったんです」

「あら、それでは、相当無理をしてお金を出したんですのね」

「はい。いい商売をさせてもらっているから、自分が稼いだお金で恩返ししたいって。そうおっしゃられて……。そして、私のように救われた者も大勢おります。卒業した者の中には、シャロークさまのことを尊敬して、商人を目指している者もいるぐらいです」

――なるほど、これは……、いいことを聞きましたわ。うふふ……。

タチアナの話を聞き、ミーアは、心の中でニンマリとほくそ笑んだ。
今聞いたのは……、シャロークからすると恥ずかしい過去だ。
たとえるならばそれは、強面の海賊が愛猫に赤ちゃん言葉で話しかけているのを見られるようなものである。
これは恥ずかしい！
きっと現在のシャロークの価値観からすれば、若気の至り。思い出したくもない過去なのだろう。自分とは何の関係もない貧しい家の子どもたちのために、奨学金制度を設けるなんて、しかも、身銭を切り、自分自身も決して裕福とは言えないにもかかわらず、それをするなんて……。
これを思いやりと、優しさと……、感傷と言わずして、何と言おうか！
――あの男、わたくしに感傷だの弱さだの、いろいろ言っておりましたけど、ご自分だって、若かりし日に、ちゃあんとやらかしているのではありませんの！
生まれた時から金のために生きて、金のために死ぬ、みたいな冷徹超人めいた態度をとっていたシャロークであるが、ちゃんと甘さも感情もある、普通の男なのだ。
ミーアは、その弱みを握れたことに、満足げに頷いた。
――あの男、諦めが悪そうでしたし、きっとまた来るに決まってますわ。そうしたら、その時はこの弱みをつっついてやりますわ……うふふふ……。いい人なんですのね、って。うふふふ。
悪女ミーアは、胸の内で高笑いを上げる。
と、そんなミーアに、タチアナは言った。
「ミーアさま、お願いします。どうか、シャロークさまに、あまり酷いことをしないでください」
彼女の真摯なお願いに、ミーアの嗅覚が鋭く反応する。
――奨学金による恩……というのは、少し危険かもしれませんわ。
言ってしまえば、シャロークは、貧しいけれど能力のある者たち

に、私財を投じて知恵を得させているのだ。
そして、知識とは武器である。鋭い武器を携えた者たちが、シャロークに恩を感じている状況、その状況で、彼を悪し様に言うことは、危険な敵を作りかねない行為であると……、ミーアは遅まきながらに察した。
特に目の前のタチアナという少女は医の道を志しているという。けれど、シュトリナの例を見てもわかる通り、薬とは使い方によっては毒にもなるもの。そのような者を敵に回してしまった場合……。
ミーアの脳裏に、自身が毒殺されるとの記述が甦る。
――てっきりリーナさんの仕業かと思っておりましたけれど、ほかの者のしでかすことということも、十分に考えられますわ。
ここにきてミーアは、ようやく悟る。自らの慢心を……。
――完全に油断しておりましたわ。わたくしは、いついかなる時でも気を引き締めていなければいけませんのに。
昨年の夏前のことを、思わず思い出すミーアである。
運動をサボっていたばかりに、ちょっぴりだけなまっていた体。ＦＮＹっとして、水着が着づらいということがあった……。
……これは、あの時と同じだ。
――わたくしは、ＦＮＹっておりますわ……心が。慢心で、すっかりなまっておりましたわ……心が！
ということで、ミーアはしばしの熟考の後……、軌道修正に入る。
「ふーむ、それについては、シャロークさん次第ですわね……」
まず……、あくまでも責任は相手にあるのだとアピールする。
それは、嘘ではなかった。そもそもミーアとしては、シャロークと事を構えることは望まない。まぁ、今回つかんだネタでネチネチやったら面白いかもしれない、とちょっぴり悪戯心は芽生えたりするが、ミーアはそれに固執しない。
今は、大飢饉の前の大切な時期なのだ。大人しくしていてくれるならば、構っている余裕はないのだ。
けれど、同時に、あの男がそう簡単には引かないだろうな、とも

思っていた。
シャロークがフォークロード商会に、今後も介入を続けるのであれば、フォークロードを支援するという形で、抗争は続くだろう。
――ダラダラ続けるのはあまり得策ではない気もしますわね。あるいは、どうにかしてサクッと心を折ってしまえれば、解決するかもしれませんけれど……、あ、そうですわ！
と、そこでミーア、タチアナの顔を見て閃く。
「ふむ、そうですわね。あるいは、あなたが協力してくれれば、無用な争いは避けられるかもしれませんわ」
「え……？　私の、ですか？」
「ええ、そうですわ」
頷きつつ、ミーアは自らの思い付きに悪い笑みを浮かべる。
――今回のネタで叩くとして、もしもとぼけられた時に、この方を連れて行けば、効果的に、えぐれますわ！　現にこうして、あなたの奨学金に救われた方が、わたくしのお友だちにおりますわよ？
優しい優しいコーンローグさん、などと……、うふふ、笑い飛ばして精神的に追い詰めてやればいいんですわ。
シャロークが感傷という弱さで作り出した奨学金制度、その制度を使ってセントノエルに通う実例が今目の前にいるのだ。これを使わない手はない。
さらに、それはタチアナに責任の分散を図る妙手でもあった。
もしも、シャロークとの抗争が激しさを増した場合、ミーアが恨まれないように、と。あなたの責任でもあるんですよー、と。そう言えるための策略である。
――ふふふ、これだけ状況を整えてしまえば、シャロークさんにしても、これ以上の辱めを受けるより早めに矛を収めたほうが、最終的な傷は浅くて済むと気付くはずですわ。
戦において被害が広がるのは、戦力差が拮抗している場合だ。
初めから、圧倒的な戦力に差があれば、交渉次第では一度も剣を交えずに軍を撤退させることも可能。大帝国の姫らしく、開戦初期

の大兵力の投入という戦術体制を整える。
名将ミーアの戦術眼が冴え渡る。
――ただでさえ飢饉で忙しくなるわけですし、長引かせず、一気に叩き潰すのが得策！　まぁ、もうちょっかい出してこないかもしれませんけれど、備えておくに越したことはありませんわ。
そうして、準備しておいたミーアの切り札……、タチアナに協力してもらう機会は、思いのほか早く訪れた。
ペルージャンの王女、ラーニャから急報が入ったのだ。

第三十一話　心と体の反比例

「ミーアさま、ペルージャン農業国のラーニャさまから、お手紙です」
「あら？　ラーニャさんから？」
アンヌの言葉に、ミーアは小さく首を傾げた。
ラーニャ・タフリーフ・ペルージャンは、現在、母国であるペルージャン農業国に帰っている。ペルージャンの姫君は、毎年この時期には、収穫の陣頭指揮と、収穫感謝祭での巫女としての役割を果たすために、学園を離れなければならないのだ。
「ふむ……、演舞を見に行く件かしら……」
そして、ミーアは今年、その感謝祭で神にささげられる、ラーニャの演舞を見に行くことになっているのだ。
ちなみに、ミーアがこの感謝祭に招かれるのは初めてのことだった。
ラーニャとの友誼に加え、聖ミーア学園に、第二王女アーシャ姫を招いたこともあって、ミーアとペルージャンとの関係は深まっていた。
これから数年にわたる飢饉において、ペルージャンとの関係は極めて重要なものとなってくる。できれば国王にも謁見し、個人的な面識をもっておきたいところであった。
……とまぁ、それは表向きのこと。ミーアの目的の表層一割未満にも満たぬことである。では、残りの九割はなにかといえば……。
――うふふ、ペルージャンの料理、楽しみですわ！
これである。まぁ、お察しのこととは思うのだが……。
――食の聖地ペルージャン、しかも、収穫に感謝するお祭りですから、きっとものすごいご馳走が出ますわ……。言葉にできないぐら

い、美味しいはずですわ！
　めくるめく美食を想像するだけで、ミーアは、ゴクリと喉を鳴らしてしまう。
　ということで、いそいそと手紙を開いたミーアは、そこに書かれていた内容に仰天した。
　曰く、シャローク・コーンローグという商人が取引に来ており、なにやらよからぬことを企んでいる、とのことだったのだ。
「あ、あの方、また性懲りもなく！」
　ギリギリと歯ぎしりしつつも、ミーアは素早く検討する。
　この危機の大きさの程度を……。
　一見して、危険度は、そこまで大きくはないような気がする……。
　前時間軸とは違い、ペルージャン農業国とは、それなりのつながりを作っている。
　ラーニャ姫とは、こうして手紙を送ってきてもらえるほどの友情を築いているし、アーシャ姫を講師に迎えることで、そのコネはより一層強くなっていると言える。
　けれど……、
「ペルージャンへ行かねばなりませんわ。すぐに……」
　先日、ミーアは改めて実感したのだ。
　自分が……慢心によってＦＮＹっていると……。もちろん、心が、である。
　築いてきた人脈を過信して行動せずにいたら、きっと後悔することになる。
　ミーアのシェイクアップした心が告げているのだ。
　これを放置するのは極めて危険である、と……。
　杞憂であるならば、それでも良い。けれど、もしも危惧が実現した場合、それはすなわち帝国の危機になる。
「まぁ、物は考えようですわね。早く行けば、その分、ペルージャン料理をたくさん食べられますし……、ふむ、かえって都合が良いかもしれませんわ！」

心と体のシェイプアップは、時に反比例するものである。
「ミーアお姉さま、ボクも一緒に行ってもいいでしょうか？」
っと、いつの間にか、話を聞きつけたベルが、すぐそばに来ていた。キリッとした顔で、ミーアを見つめてくる。
「あら？　なぜですの？　ベル」
「あの、シャロークという商人の考え方に、少しだけ興味があります」
「ほう……。なるほど」
ミーアは、ふぅむ、と考え込む。
――正直なところ、あまりお近づきになるべき人ではないと思いますけれど……、でも、ベルが興味を持つとは珍しいですわ。それに、性格はさておき、あの方が商人として一流なのも事実……。であれば、ああいうやり手の商人とどのように渡り合っていくのか、わたくし直々にお手本を見せてあげることも意味があるかもしれませんわね……。
と、そこまで考えてから、ミーアはじっとベルの顔を見つめた。その真剣そのものの顔を見て、深々と頷き、
「てっきり、夏前のテストから逃げるために言っているのかと思いましたけど、どうやら、なにか真剣な理由があるみたいですわね？」
「え、あ、お、も、ももももちろんですよ、ミーアお祖母さま、あはは、いやだな、ボクがテストから逃げようとしてるだなんて、そりゃあ今年の夏はリーナちゃんと遊ぶために追試を受けないようにしたいなぁ、なんて、思わないわけでもありませんけど？　そのために、目前の問題から逃げるなど、帝国の叡智の血を引く姫の名折れですし、もちろん、ミーアお祖母さまからお勉強を教わっている身としては、その発露の機会としてテストのことは大切に考えており……」
……めちゃくちゃ早口になるベルである。
その、どうにもならなかったら逃げちゃえばいいじゃない？　という姿勢に、ミーアは一瞬、自分自身の姿を見てしまい、ちょっぴ

り複雑な気分になってしまう。
「まぁ、いいですわ。でも、テストからは逃げられないということだけは言っておきますわね」
とりあえず釘をさしつつも、
「あ、それと、タチアナさん……。彼女にも付き合っていただかなければなりませんわ！」
切り札の用意にも余念がない。
タチアナの勉強時間を奪って同行をお願いすることに、若干気が引けるミーアであったが、今回ばかりはそうもいっていられない。
「相手は、タチアナさんの大切な人みたいですし、その人物との戦いを最小限にとどめるためにお呼びするわけですから問題ありませんわよね……」
こうして、ミーアはベルとタチアナを伴い、セントノエルを出発した。
途中、ルードヴィッヒとも合流して、一行は一路、ペルージャン農業国へ。

第三十二話　タケノコの友

ペルージャン農業国――「我が国に農地以外の領土なし」と豪語するこの国には、まともな軍隊と呼べるものは存在していない。

王家を守る近衛兵は一応は存在しているものの、その規模は帝国軍はおろか、帝国の一貴族の私兵団にも劣るほど。しかもその構成員は、半農半兵どころか、八農二兵といった有様であり、ひとたび戦争が起これば、蹂躙されるほかない、軍事的な弱小国であった。

そんな国が滅ぼされることなく、侵略されることもなく、国としての体裁を保っていられるのは、この地に広く認識される中央正教会の影響力と、ティアムーン帝国への徹底した恭順のゆえだった。

中央正教会の広めた各国共通の道徳基盤は、安易な侵略戦争を許さず、後ろ盾となる帝国の武力は、実際的な軍事的抑止力として働いた。

かような地政学的な背景を持つペルージャン農業国ではあったが、そのことで彼らが肩を落とすことはなかった。

「我らは食によって、大陸に覇を唱えるのだ」

そんな大号令のもと、歴代の王族は、国を挙げて農業技術の向上に邁進した。軍事力を強化せずとも良い状況を逆手に取ったのだ。

品質の高い農作物をもって、様々な種類の農作物をもって、国を豊かにしようと民を鼓舞した。属国扱いなどできぬよう各国を見返してやろうと……そう努力して、努力して……。

されど……、その努力が報われることはなかった。

なぜなら、彼らの隣国は、後ろ盾は、農業を蔑視するティアムーン帝国であったからだ。

帝国こそが、ボトルネックだった。

帝国の属国であればこそペルージャンは守られるのに、その帝国は、ペルージャンの一番の強みである農業を評価しない。

まるで汚れ仕事でもあるかのように、見下しているのだ。
ペルージャン農業国とティアムーン帝国の間には、容易には越えることのできない溝が、たしかに存在していた。
「お初にお目にかかります。陛下。拝謁がかないましたこと、光栄至極にございます」
自らの前に膝をつく男、シャローク・コーンローグを前にして、ペルージャン国王は、苦笑いを浮かべた。
「国とは名ばかりの属国の王に、過分な礼は不要。名だたる大商人たるコーンローグ殿が、我が国に何用あっていらしたのかな？」
王は知っている。王侯貴族にとって、誇り、礼儀は命を懸ける価値を持つ。されど、商人にとってのそれは、商談を有利に進めるための手段でしかない。
「なるほど、さすがは聡明をもって知られる国王陛下。世辞では、お心を開くことはできませぬか」
「聡明とは異なことを。私など、田舎の小国の愚鈍者に過ぎぬ」
そう言いつつも、王は片手でシャロークに座るように指示を出す。
「そうですかな？　私の眼には、あなたさまが、大陸の覇者を殺しかねぬ武器を整え、研ぎ澄ませているように見えますが」
「ほう……武器とは？　ろくな軍隊も持たぬ我が国にどのような武器があると、そなたは申すのか？　まさか、我が国がひそかに軍備を増強しているとでも……？」
「お戯れを。軍事力など……、愚鈍なる帝国に任せればいい。平和の維持が必要ならば、ヴェールガにすがればよい。そのようなものよりももっと根源的に、人間を殺すものをあなた方はお持ちでしょう」
シャロークは口元に笑みをたたえて言った。
「そう、食……、にございますよ」
その言葉に、王はわずかばかり、警戒心を刺激される。
「なるほど……たしかに、我が国は農業に力を入れているが、それ

を武器とは穏やかではないな」
　笑い飛ばそうとするペルージャン国王を、けれど、シャロークは逃がさない。
「農業に力を入れる貴国であれば感じているでしょう。不作の兆候、飢饉の足音を。飢饉の時、最も価値を持つのは黄金、宝石ではない。食糧にございます」
　そうして、シャロークは、国王の目をじっと見つめる。
「歯がゆくはございませんか？　国王陛下、帝国の属国などと呼ばれることが。貴国は優れた農業技術を持っている。されど、帝国がある限り、いつまでたっても帝国のおまけのような扱いは変わりますまい」
　その言葉は、たしかに王の心をえぐった。
　それは長年、ペルージャンを縛り付けてきた呪いの鎖だったからだ。
「……それも為政者が変われば変わる。帝国のミーア姫殿下は、食に造詣が深い方と聞く。我がペルージャンにも、きっと良き影響を……」
「幼き皇女の慈悲にすがる、と？　それはまた、ずいぶんと消極的ではありませんか？」
　シャロークの言葉に、ぴくり、と王の肩が揺れる。
　王は知っている。
　ペルージャン農業国が積み上げてきた研鑽は本物だ。どれほどの民が、技術者が汗と涙を流してきたことか……。にもかかわらず、その努力の報われ方が……、一人の姫の慈悲にすがるものであるなどと……、そのように言われてしまうことが、口惜しくないはずがない。
　それが彼一人の思いであれば、あるいは呑み込めたかもしれない。娘たちに聞く限り、皇女ミーアは善性の人だ。
　今、帝国の中で権力を握りつつある彼女がもたらすものは、ペルージャンにとって、きっと良いものに違いないのだ。

……けれど、国王の目には、畑で汗する民の姿があった。それは今現在の民の姿ばかりではない。すでにこの世にはない、この農業国を支えてきた人々の姿だ。
彼らの積み上げてきたものが、このような形に結実して良いものか……。
誘惑者は耳元で甘く囁く。今や、農作物は武器になると。
帝国を殺しうる、強力な武器になりえるのだ、と。
ペルージャンの先人たちが積み上げてきたものが、自分たちを低く見た者たちを見返すための武器になりえるのだと……、その事実が、国王の心を揺さぶった。
「……具体的にはどうするつもりだ？　作物を売ることを渋りでもすれば、帝国側が黙ってはいまいが……」
「簡単なこと、値を吊り上げれば良いのです。それも不当ではなく、正当な範囲内、あるいは、正当を、ほんの一歩踏み出したぐらいに。兵を動かして圧力を加えようと、帝国が思わない程度、わずかばかり値を上げていってやればいいのです。それに慣れたころにまた、値を上げる。ところで、陛下は八本の足を持つ悪魔の魚を生きたままゆでるコツをご存知ですか？」
不意な問いかけに、国王は首を傾げる。
「簡単なこと。突然、熱い湯につけては逃げられますゆえ、徐々に火勢を強くしてゆけばよいのです。さすれば、気付いた時には、手遅れ。ゆでられております」
シャロークは、にやり、と笑みを浮かべる。
「そうして、その匙加減は、商人の得意とするところ。どうぞ、帝国との取引を私にお任せいただけないでしょうか？」
「……なるほど、よくわかった。が、即答はしかねるな……。感謝祭には出ていかれるのであろう？　シャローク殿」
「はい。しっかりと稼がせていただきますとも」
「では、この返事はまた、祭りが終わった時にでも……」

そうして、二人の会談は終わりを告げた。
こっそりと……、その話に耳を傾けている、お姫さまの存在には気付くことなく……。
さながら、地下茎のごとく……お姫さまがミーアとつながっていることなど、知る由もなく。

――どうしよう……。大変なことに……。
謁見の間の隣の部屋に身を潜めた、ラーニャは息を殺して成り行きを見守っていた。
そこは、幼き日より、姉たちと遊ぶのに使っていた部屋だった。
壁のわずかな隙間に耳をつければ、謁見の間の会話がよく聞こえるため、よくイタズラに使っていたのだ。小国ペルージャンならではのことである。
――お父さまが、あんな話を受けるとは思えないけど……。
そう思いつつも、ラーニャの心には一抹の不安が残った。
もしもかつての自分が、ミーアと出会う前の自分が……あんな申し出を受けたら、聞かないだろうか……？
思うのはそんなことだ。
――もしも、お父さまが話に乗ってしまったら……、大変なことになる。でも、こんなことをミーアさまに言っても大丈夫かな……？
父がするかもしれないことは、帝国に対する明確な裏切りだ。下手をすると、ミーアの怒りを買って、大変なことになるかもしれない。
一瞬の迷いの後、ラーニャはすぐに行動を起こす。一刻も早く、ミーアに知らせを出すために。
――ミーアさまなら、きっとなんとかしてくれるに決まってる！
ミーアへの信頼は、揺らぐことはなかった。

第三十三話　ミーア姫、果物狩りをエンジョイする

ティアムーン帝国の国境を越えて一日の場所にある、小さな村。
ミーア一行は、ラーニャと合流すべく、その村で待ち合わせを行った。
そして、そこは広く果物の栽培を行う村であった。
というか、広い果物畑の中に、ちょこちょこっと家が建っているような有様だった。畑の中に村がある感じである。収穫期を迎え、たわわに実った果実が、そよそよと風に揺れていた。
……ということでミーアは……、
「あら、これなんか食べごろではないかしら？」
果物狩りを楽しんでいた！
頭には、大きなつばの麦わら帽子を被り、農村で借りた収穫用の長袖長ズボンの服を着用して……、実に本格的なスタイルである。
「ああ、美味しそうですわね。まさに、食べる宝石……。香りがたまりませんわ」
スイーツソムリエ、ミーアは、もぎ取った果物に鼻を近づけて、そのかぐわしい香りを胸いっぱいに吸い込む。それから、その色合いをしげしげと見つめて、
「うん、太陽の恵みをよく受けていますわね。熟れていて……、少し熟れすぎという感じもしますけれど、そちらのほうが、えてして甘味というものは出てくるもの。これなどは、きっと、食べたらたまりませんわ」
ミーアたちの目の前にたわわに実っているのは、ルビワと呼ばれる果物だった。
赤い楕円形の、大きな種の周りに薄い果肉がついた果物である。皮をむいて、前歯でこそぎ落とすようにして食べるもので、甘味と酸味のバランスがとても良いフルーツである。

「あっ、タチアナちゃん、こっち！　こっちにもたくさんありますよ！」
少し離れたところで、ベルがタチアナを呼んでいた。ニッコニコと笑顔を弾けさせつつ、年下のタチアナを手招きする。
「ちょっ、ちょっと待ってください。ベル先輩。そんなに急ぐとまた転んでしまいますよ」
慌てて、タチアナがその後を追う。馬車の中で、すっかり打ち解けたベルとタチアナを見て、ミーアはにっこり笑みを浮かべた。
――ベルにシュトリナさん以外のお友だちができるというのは良いことですわ。
孫に新しいお友だちができたのが嬉しいミーアお祖母ちゃんである。
「さぁ、二人とも、一つも取り逃したらいけませんわよ！　食べごろのものをとれなかったらもったいないですわよ」
なにはともあれ、心からエンジョイしているミーアであった。
「ああ、贅沢ですわ。採れたての果物をその場で食すなど、贅沢の極みですわ！」
後で、休憩時間の時に食べさせてもらえるよう、すでにルードヴィッヒに話をつけてもらっている。ミーアに隙はない。
「楽しみですわ。実に楽しみですわ！」
休憩時間を心待ちにするミーアであった。
そもそも、果物狩りは、アンヌの発案によるものだった。
ペルージャンに少し早めに行かなければならなくなったミーア。難しい取引に臨むミーアが、重圧のあまり、甘いものを食べすぎてしまうことを危惧したアンヌは、少しでも運動してもらいたいと、この果物狩りを提案したのである。
もっとも、ミーアは採れたて果物をお腹いっぱい食べる気になっているので、忠臣の心ミーア知らずといった感じだろうか……。
さて、この果物狩りだが、実は意外な効果をもたらしていた。

それは、村の農民たちの、ミーアに対する感情である。ミーアたちを見つめるその目は、どこか親しみのこもったものになっていた。
理由はもちろん、収穫を手伝ってもらっているからだ。
ミーアはお姫さまである。ぶっちゃけた話、作業効率的には、あまりよろしくない。というか、むしろ邪魔をしている疑いすらある。労働力としての評価は低い。
されど……、その行為……、農民たちとともに働くという行為は極めて象徴的なものだった。
彼らにとって自分たちの姫とは、自分たちとともに額に汗して収穫する存在であり、自分たちの先頭に立って行動してくれる者だった。
そして……、ミーアは、それと同じことをした。
大帝国の姫が、自分たちの、農業国の姫と同じことをし、そして……。
「そろそろ休憩にしましょう。ミーア姫殿下、あの、よろしければ、もぎたての物を召し上がりますか？」
恐る恐るといった様子で、村長が言った。
これには事情があった。
ルビワは、美味しいけれど、少しばかり食べづらい果物なのだ。
その皮は薄く、ナイフで剥くのには適さない。必然、食べる当人が手でむかざるを得ないのだが、果汁が豊かなので、どうしても手がベタベタになってしまう。
しかも、その果肉は、大きな種の表面を薄く覆うのみ。そぎ落として皿の上に出すわけにもいかず、前歯でこそぎ落とすようにして食べなければならない。
正直、少し、行儀の悪い食べ方になってしまうのだ。
それを知らない帝国貴族からは、しばしば、食べづらい下品な果物、などと揶揄されることもあった。
だからこそ、ミーアがそれを食べてくれるか、心配していたのだが……。

それは杞憂だった。
「まぁ！　いよいよですわね！　楽しみにしておりましたわ」
などと満面の笑みを浮かべ、ミーアはルビワを手に取った。そうして、いそいそと皮をむき、躊躇うことなく、ルビワに噛みついた。前歯で果肉をこそげるようにして、しゃぶしゃぶ食べる。
その子どもっぽい仕草に、周囲には和やかなムードが広がる。
「あら？　みなさん、どうかなさいましたの？　食べ方が、どこか違っておりましたかしら？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、村長は、思わず優しい笑みを浮かべる。
「いやいや、合ってますよ。それが一番、ルビワを美味しく食べる食べ方です。ただ、帝国の貴族さまの中には、手が汚れるとか、食べ方が無様だとか言って食べてくださらない方もおられるので……」
「まぁ、もったいない。これは、こうして手を汚しながら食べるのが楽しいのでしょうに」
そう言いつつ、ミーアは手首についた果汁をペロリ、と舐める。
奇しくもそれは、幼き日のラーニャ姫と同じ仕草で……。
「なんだ、そうか。帝国の姫さまも、うちらの姫さまと変わらないんだな……」
そんな印象を強烈に刻み込んだ。
お高く留まった帝国の姫、という彼らの先入観は、完全に払拭され、後には親しみが残った。
帝国の姫君は、自分たちの姫さまの「大切なお友だち」になったのだ。
まぁ、ミーアは楽しくルビワ狩りをして、美味しくルビワを食べただけなのだが……。
ルードヴィッヒとアンヌは、その光景を少し離れた場所で見ていた。
「さすがはミーアさまだ。もう、村人たちの心をつかんでおられる。

てっきり同行しているベルさまやタチアナ嬢のためを思って、この果物狩りの話を受けられたのだと思ったが、まさかこのような効果をも見越してのことだったとは……」
感心した様子のルードヴィッヒだったが、ふと心配そうな顔をする。
「しかし、彼らの心を開くためとはいえ、ミーアさまの健康が気がかりだ。無理をされて食べ過ぎなければ良いのだが……」
そんなルードヴィッヒを安心させるように、アンヌが小さく首を振った。
「大丈夫です。たぶんあのルビワという果物は……、そこまでたくさんは食べられませんから」
まるで予言のようなアンヌの言葉……、ルードヴィッヒは半信半疑でミーアのほうを見る……と、
「あれは……」
たしかに三つ目の皮むきにかかっているミーアだが、若干、その勢いは鈍っているように見えた。あの調子では、四つ目は食べられないのではないだろうか……。
「私の弟妹もそうなのですが、食べるのに手間がかかる食べ物は、食べるための作業だけでお腹がいっぱいになってしまうものなんです」
村人から、皮がむきづらく、果肉の薄いルビワの話を聞いていたからこそ、アンヌは果物狩りを提案したのだ。
帝国の叡智の右腕が、帝国の叡智の胃袋に勝った瞬間であった。
「なるほどな、さすがはアンヌ嬢だ……」
感心した様子のルードヴィッヒに、アンヌはちょっとだけ得意げな顔をしてから、ミーアのもとに歩み寄る。
「ミーアさま、お口をお拭きいたします」
「あら、ありがとう。あなたも座ってお食べになればいいのに、美味しいですわよ？」
そうして、楽しいひと時を過ごしていると……。

「ミーアさま……、いったいなにを……」
「あら、ラーニャさん、来ましたのね」
ペルージャン農業国の王女、ラーニャ・タフリーフ・ペルージャンが姿を現した。

第三十四話　大器ミーア、ペルージャン料理を味わう

「そうですか……、村民たちとともに果物狩りを……」
「ええ、楽しませていただきましたわ」
満足げに笑みを浮かべるミーアであったが、
「みなさまのお邪魔になってしまわなかったかが、心配でしたけど……」
如才なく付け足しておく。今のミーアに隙はない。
そうして、ラーニャと合流したミーアたちは、村長の家で、休憩がてら昼食をとることにした。
「おお、これがペルージャン名物の、ターコースですわね」
待つことしばし、目の前に出てきたのは、やや黄色みがかった薄い生地で肉と野菜を包んだ、ペルージャンの伝統料理、ターコースだった。
「ふむ……、これは、薄いパンのような……クレープのような……？　この少しパサパサした感じは種を入れない儀式用のパンのようでもありますわね……」
分析しつつ、ミーアは生地の端っこを口に入れる。
ピリピリと香辛料の刺激、その辛味にあぶりだされるようにして、生地本来の甘みが舌の上に溶け出してくる。
「なるほど。独特の甘みと風味がありますわね……。さて、お味のほうは……」
中の具材がこぼれないように注意しつつ、しゃくり……、とかじる。瞬間、口に広がるのは、黄月トマトの酸味と、ぴりり、と舌を刺激する辛味だった。
レッドマスタードの舌を突くような辛みと、香辛料の鮮烈な香り。そこに、香ばしく焼いた肉の肉汁がジュワッと加わる。
さらに、シャキシャキとした葉物野菜がその辛みにわずかな苦み

を加え、なんとも複雑玄妙な味を演出している。
「おお、これは……なかなか新鮮な体験ですわ。うふふ、なるほど。ラーニャさんから聞いて以来、ずっと食べたいと思っておりましたけれど、確かに美味しいですわね」
……ちなみに、いささか意外なことながら、ミーアは辛い物も食すことができる。食べられるだけでなく、しっかりと楽しむことができるのだ。
それは、ひとえに、料理長の功績といえた。
若い時には、いろいろな味を体験するべきだという考えのもと、料理長はいろいろな味のするものを、ミーアに食べさせていた。
苦いもの、すっぱいものはもちろん、辛いものに関しても。
最初のうち、苦手な食べ物があったミーアであるが、今では苦みの強いものの味も楽しめるようになってきたし、煮物の素朴な味もいけるようになった。
……味覚がお祖母ちゃんっぽくなってきた、などと言ってはいけない。
そんなわけで、ミーアはすでに、辛いものだって楽しめるお口になっているのである。
甘くても辛くても塩辛くても苦くても酸っぱくても……、どんなものでも美味しく食べられてしまうわけで……、それはある点から考えると、非常に危険なことでもあるのだが……主に二の腕とか脇腹とかが……。
ともあれ、それは、相手の食文化を許容する寛容な姿勢ともいえる。
ミーアはとても器（胃の容量）が広いのだ。
「それにしても、この生地は変わっておりますわね。具材だけ見たらサンドイッチでも構わない感じがしますけれど、この生地のおかげで、まるっきり違う味に感じますわ」
「これは、玉月麦（フルムーコーン）という小麦の親戚のような穀物の粉を使って作っているんです」

「あら、小麦粉じゃないんですのね。どうりで……」
ミーアはそうつぶやきつつも、もう一度、生地を口に入れる。
「ふむ、やはり美味……。なるほど、小麦粉とは違う性質を持った粉だから、それに適した料理法がある。パンにするよりも、こちらのほうが素材を生かした食べ方だということかしら……」
土地には、その土地に適した楽しみ方がある。同じように、食材にはそれに適した食べ方がある。
キノコはどんな食べ方をしても美味しくなると、そう思い込むのは工夫の足りぬものがすること。各々のキノコの特徴を吟味し、それに適した料理法を考えるのが、料理の醍醐味というものだろう。
「これは、ペルージャンの豊かな農作物を真に知るためには、料理法まで勉強する必要がありそうですわ。そのためにはもっとたくさん食べなければ……」
不穏なことをつぶやくミーアであった。

一通りミーアが料理を堪能したところで、ラーニャがおもむろに頭を下げた。
「このたびは申し訳ありませんでした。ミーアさま、私の父のせいで、このような……」
「謝罪は不要ですわ。とりあえず、事情をお聞かせいただけないかしら？　ラーニャさん、いったいなにがございましたの？　手紙では、シャローク・コーンローグがちょっかいをかけてきたと書いてありましたけれど……」
そう言いつつ、ミーアはタチアナのほうをうかがう。タチアナは、苦しそうにうつむいていた。彼女の協力を取り付けるためには、できるだけ正確に事情がわかっていたほうがいいだろう。
ミーアはラーニャの説明を促す。
「実は、少し前、シャローク・コーンローグという商人が訪ねてきたんです。この時期は収穫感謝祭の時期ですから、商人の出入りは、普段よりも多くなります。新しい取引に発展するケースもあるので、

お父さまも丁寧に接待しているのですが……、シャロークも、その中の一人でした」
ラーニャが、その不穏な会話を聞いてしまったのは偶然のこと……では、実はなかった。
先日、ミーアに言われたこと……、姉の研究を広く大陸に告げ知らせるため、ラーニャもまた、人脈を求めていたのだ。
たしかにセントノエルには、各国の王侯貴族が集まっている。そこで、姉の発見を伝え知らせることは、なるほど、有効ではあるだろう。
けれど、それでは十分でないことを、ラーニャは知っていた。
貴族の中には、自領の農業に興味がない者もいるし、王族が農業技術に疎いなどという話もざらである。それに上手くいったとしても情報の伝達範囲は、その王族の国に限られる。
ミーアの提案をなすためには……、大陸全土に、冷害に強い小麦の知識を広めるためには、まったく違った種類の者たちに情報を流さなければならなかった。
ラーニャが目を付けたのは、国をまたいで交易する商人たちである。
その中でも、儲けに目がくらみ、情報の独占をしたがるような者たちではだめだ。それを広めることの意義を理解し、協力してくれるような者でなければならない。
そんなわけで、この祭りの期間中に、ペルージャンを訪れる商人たちにラーニャは目を配っていたのだ。そして、こっそりと、父との会談を盗み聞きしていたりもしたのだ。
……ラーニャのちょっぴりいたずらっ子な一面が光る行動である。
結果、彼女はティアムーンに害をなそうとする企みを耳にすることになったのだ。
「申し訳ありませんでした。ミーアさま、私の父のせいで……」
またしても謝ろうとするラーニャに、ミーアは首を振って見せた。
「いえ、むしろ、帝国のごたごたにペルージャンを巻き込んでしま

いましたわね。申し訳ありませんでしたわ。それに、ペルージャン国王の複雑なお気持ちも理解できますわ。帝国貴族の態度はあまりよろしくはありませんから……」

まぁ、そもそもの話、その状況を作ったのはミーア自身のご先祖さまなわけで、さらりと自然に帝国貴族の態度に責任誘導をするあたり、ミーアも手慣れたものである。

ともあれ、ミーアは小さくため息を吐き、

「やはり、ペルージャン国王と直接お話する必要がありますわね……」

覚悟を決めて言うのであった。

第三十五話　ケーキのお城⇔お城のケーキ

ラーニャと合流したミーアは、そのままペルージャンの王都に向かった。

途中、いくつかの村に立ち寄ったミーアは、そこでも収穫のお手伝い（果物狩り）を満喫した。ルビワの件で味を占めたミーアは、その都度、採れたて農作物を食し、大変に充実していた。

ちなみに、その都度、食べ過ぎにならないように、アンヌとルードヴィッヒが腐心していたのは、言うまでもない。

そうして、あと少しで王都というところで、ミーアは馬車の中から見える景色が変わってきたことに気が付いた。

豊かな緑色から、月影のごとき柔らかな黄金色へ。景色は色合いを変えていた。

「このあたりの小麦はまだまだ収穫が終わっておりませんのね」

首を傾げるミーアに、ラーニャは微笑みを浮かべる。

「はい。城の近くの土地は、六日かけて刈り取ることになっています。国中の十歳を超えた長子が集まって一斉に刈り取り、その後に感謝祭を執り行うのです」

ペルージャンの収穫感謝祭は、神に感謝をささげる祭りの側面と、人口調査の側面を持っている。毎年、各家庭の長子が都に集まり、出産状況などを報告するのだ。

そして、その中の選ばれた幾人かの者たちはこれから二年間、王の近衛兵としての務めを果たし、その後、自分たちの村に帰っていく。

そして村に帰った者たちは農業を営みつつ、自身の村の治安を守ることになるのだ。

「なるほど。国を挙げてのお祭りですわね……」

「あっ！　ミーアお姉さま、見えてきました！」

ベルの歓声につられて、ミーアは前方に目を移した。
「あれが……、ペルージャンの王都オーロアルデア。なるほど。黄金の天の農村とは、よく言ったものですわ」
かつて、この国を訪れた帝国貴族は「黄金の町など名前負けもいいところだ。ただの貧乏くさい属国の、取るに足りぬ町ではないか」などと吐き捨てたという。
けれど、ミーアは思う。その貴族も、きっとこの収穫の時期にここを訪れていれば、意見を変えたに違いない、と。
なぜなら、そこは、確かに黄金に飾られた広い村だったからだ。
豊かに実った麦畑が、規則正しい段々畑になっている。それは、さながら黄金の階段のようだった。そして、その頂上には四角い建物が建っていた。
――ふむ、珍しい形ですわね……。あの形、どこかで……。
「お城が気になりますか？」
ミーアの視線に気付いたのか、ラーニャが言った。
「ええ、変わった形をしておりますわね。なんだか、お城っぽくないですわ」
「ふふ、そうですね。私たち、ペルージャンの城は、戦うためのお城ではありませんから。城壁もありませんし、見張りが立つ塔もありません。壁は薄くて、木で作られています。だからでしょうか、民からは親しまれていて……。うふふ、お城を模した伝統的なケーキもあるんですよ」
――ああ！　そうですわ！　ケーキ！　あの色合い、いい感じに焼いたケーキにそっくりなんですわ！
それで親しみを感じたのか、とミーアは一人で納得する。
――それにしても、あのお城を模したケーキ……、どんなものなのかしら？　まさか、大きさは、あのサイズだったりするのかしら？
「ご興味がおありですか？」
「ええ、とても！」
ミーアは、ふんふん、と大きく頷いた。

――ああ、そうか。やはり、ミーアさまは、そこが気になるのか……。あの城に住まう王族の考えが……。

ミーアの反応は、ルードヴィッヒにとって、ある程度、予想の範囲内のものだった。

ルードヴィッヒは、無論、ペルージャンの城のことは知っていた。

その、戦のことをまったく計算に入れていないその構造は、極めて特異なものだった。

帝都ルナティアの白月宮殿は、美しさを重視した設計になっているが、それだとて、まったく戦城（いくさじろ）としての機能を持っていないわけではない。

城とは多かれ少なかれ、そういうものなのだ。

にもかかわらず、ペルージャンの城は、それをまるで度外視した造りになっている。それは、城というにはあまりにも無防備な建物だった。

威圧的な無骨さよりも、素朴さ……、あるいは、のんきささえ感じてしまうような城だった。その理由は……。

「おかしなお城でしょう？　きっと戦になれば、簡単に焼かれてしまうでしょう。でも、どちらにしろ戦になれば、田畑は焼かれてしまいますから。立派なお城だけ残っても何の意味もありません」

ラーニャはこともなげに言う。

そう、それこそが、国土の大部分を農地にするペルージャンの基本戦略だった。戦争における勝利条件自体が、他国とは異なっているのだ。

自国の領土が戦場になった時点で、ペルージャンの負けなのだ。ゆえに、彼らは通常の小国のように、後ろ盾となる国からの援軍が送られてくるのを待つような、遅滞戦闘でさえする気がない。

そもそも、戦争自体をするつもりがない。戦争自体を遠ざけるように立ち回ることこそが、彼らの戦略の基本線。そして、ひとたび戦が起きれば、仕方がないという割り切りが、そこにあった。

戦のための備えなどするだけ無駄。ならば、しなくてもよい。
無論、ティアムーン帝国の武力を背景にした威圧と、聖ヴェールガ公国の敷いた倫理観によって生まれる「戦争の起こしづらさ」は、戦略の根底に存在している。それを最大限に生かすように外交的に立ち回りもするだろう。
されど、そこに絶対の信頼を置くことなど、ルードヴィッヒには考えられなかった。
彼は、そこまで人間の理性を信じることができないのだ。
戦争が起きた時には諦める、というのは、大飢饉が起きた時には、いくら食料をため込んでいても足りなくなるのだから諦める、と言っているのと同じように、ルードヴィッヒには思えてならなかった。
ゆえに、彼自身も気になっていた。
ラーニャ姫が、どのような考えを持っているのかと……。
「そのように、諦めきれるものですか？　ひとたび戦争が起きればすべてを失う。だから、起きてしまったら素直に諦めると……そのように、割り切れるものなのですか？」
姫同士の会話に口を挟むのは気が引けたが……それでも彼は聞いていた。
その問いかけに、ラーニャは一瞬考えこんでから……、
「そういう諦めは確かにあると思います。けれど……、私は思うんです。あれを最初に建てた私のご先祖さまは、きっとあれに理想を見ていたんじゃないかって……」
「理想……ですか？」
「いつか、戦うためのお城なんか必要なくなる時代が来る……。食べるものがみんなに行き渡れば、きっと平和になって、猛々しいお城なんかいらなくなるんだって……、その時に、世界中のお城は、ああいう平和な形になるんじゃないかって……」
そう言って、ラーニャは照れ笑いを浮かべた。
「なんて……ごめんなさい。変なことを言ってしまって……。おかしかったですよね？」

それは、たしかに滑稽な話だ。
ルードヴィッヒから見れば幼い子どもの夢物語にしか見えないものだ。
けれど、彼は知っている。彼の主君であるミーアは決して、その夢を嗤うことはないと……。だから、ミーアの顔に浮かぶのは、
「おかしくなどありませんわ。とても素敵なことですわ」
穏やかな笑みだった。
――やはり、ミーアさまは、そうおっしゃるだろう……。
その夢が、その理想が、いかに現実離れしていたとしても、ミーアは決して、その努力を嗤うことはない。
そして、同時にルードヴィッヒは、こうも思うのだ。
もしかしたら、ミーアであれば……、そんな夢物語さえ、実現してしまうかもしれないと。
そんな畏怖すら覚えながら、ミーアのことを見ていたからだろうか……。
「うふふ、とっても素敵ですわ、お城のケーキ」
――お城のケーキではなく、ケーキの城だと思うが……。
ミーアのちょっとした言い間違いが微笑ましく感じてしまうルードヴィッヒであった。

……言い間違いだろうか？

第三十五話　ケーキのお城⇔お城のケーキ（後書き）

犯罪者の取り締まりはどうしてるの！？　というご指摘を受け、ちょっぴり加筆。

第三十六話　二人の姫は黄金の坂道を上る

「あら……？　あれは……」
王都へと続く道へと馬車は向っていた。段々畑の合間を通る坂道、その近くまで来た時、ミーアはふと気付いた。
道の両側に人々が立ち並んでいる。それは、まぁ別にいい。帝国の皇女をおもてなししようというペルージャン側の表明なのだろう。
仮にも帝国皇女のミーアだから、国民を挙げての歓迎程度で驚きはしない。
その程度ならば慣れているのだ。
けれど問題は坂道のほう……、黄金色に飾られた道のほうだった。
「はて……、王都に向かう道が段々畑と同じ色に……」
「あれは、小麦を道に敷いているんです」
ミーアの疑問に、かたわらのラーニャが答える。
「国賓が道を通る時には、都へと至る道を綺麗に掃除して、それから道を黄金に染めること、それこそが我がペルージャンのもてなしです」
「なっ！　それでは、あれは、すべて小麦なんですの？」
ミーアは慌てて、前方に目を移す。
「はい。最上の小麦こそが、我がペルージャンの宝。ゆえに、姫殿下をお迎えする道を、それで飾るのです」
――な、なんてもったいないことを！
ミーアは内心で悲鳴を上げる。けれど、同時にこうも思ってしまう。
ああ、実に、貴族が好みそうなもてなしだ、と……。
いかにもったいないことをするか、いかに無駄遣いをするか、そこにもてなしの心を求める者こそが貴族。自分のためにいかに無駄遣いをしたかで判断するのが、貴族というものなのだ。

だからこそミーアも、この歓迎を当然のこととして受け止めていたことだろう……前の時間軸の彼女であれば……。
されど、ミーアは、もう知ってしまったのだ。
食べ物がない時にする後悔の苦さ……。空腹の時に「あの時、無駄にした食べ物が今あればなぁ」と思う、むなしい気持ち。
あの空虚な後悔は、一度でも体験すれば十分だった。だから……。
「馬車を止めなさい」
ミーアは御者に馬車を止めさせる。それは、黄金の道の少し手前のことだった。
「ミーアさま、なにを？」
きょとん、と首を傾げるラーニャに、ミーアは小さく笑みを浮かべて、
「少し、行ってきますわ」
それだけ言って、馬車を降りてしまった。
突如、降りてきたミーアに、路肩の民衆は呆気にとられた様子だった。
ミーアは、そんな彼らに、朗らかな笑みを浮かべて言った。
「みなさま、わたくしはティアムーン帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
スカートの裾をちょこんと持ち上げ、ミーアは言った。
「この度は、このように素晴らしい歓迎を感謝いたします。みなさまの好意を、わたくしは嬉しく思いますわ。ありがたく受けさせていただきますわね」
それから、ミーアは静かに顔を上げ、王都へと伸びた黄金の道を見上げた。
「けれど、この美しい小麦を踏み潰してダメにしてしまうことは、わたくしの本意ではありません」
そう言うと、ミーアは静かに靴を脱いだ。
「小麦は食べてこそ真価を発揮するもの。ですから、どうぞ、わたくしが通った後で、この小麦、食べられるようにしてくださるかし

ら？　うーん、そうですわね、あのお城型のケーキを作るのなんか、最高のおもてなしだと思いますわ」
　そうして、躊躇なく裸足になると、黄金の道に足を踏み入れた。予想していたような硬さはなく、麦は優しくミーアの素足を受け止めてくれた。
「みっ、ミーアさま！」
「ああ、ラーニャさん、あなたも一緒に行きましょう。どうぞ、わたくしをエスコートしてくださいな。後の者は、馬車と一緒に道の麦が拾い上げられたら来なさい」
「は、はい。わかりました！」
　大慌てで、ラーニャも靴を脱ぐと、すぐにミーアの横に並んだ。
　そうして、二人の姫は歩き出した。

　皇女ミーアの態度に、民衆は驚嘆する。
　未だかつて、この黄金の道を、自らの足で歩いた貴族はいなかったからだ。
　ある者は、小国の卑屈なもてなしだと嗤った。
　ある者は、くだらぬもてなしだと見向きもしなかった。
　心ある貴族ですら、仕方がないと受け入れた。
　そうして、豪奢な馬車が、自分たちの小麦を踏み潰して汚すのを、農民たちは何とも言えない気持ちで見つめていた。
　誰も、自分の労苦の実りを踏みつけられて、気持ちの良いものなどいない。されど、国のためを思い仕方なく、道に最上の小麦を敷き詰めたのだ。
　けれど、この姫は、農民の労苦を馬車で踏みつけにすることを良しとせず、それどころか、靴さえ脱いで、その上でもてなしを受けると言った。
　彼らが飾った道を通らないこと、それはもてなしを拒絶することになる。だから、その上を馬車で、土足で、通ることはせず、生身の足をもって歩くことを自らの誠意としたのだ。

その上で彼女は所望する。
城を模したケーキが食べたい、と……。
ペルージャンの民が誇りとするところの小麦を使い、彼らの王族の宮である城を模したケーキを食べたいのだ、と。
自分たちの誇りに対する皇女ミーアの敬意を、彼らは確かに受け取った。
人々の口から、歓迎の声が迸る。それは、嘘偽りのない歓迎の言葉。自分たちの姫の友人に、自分たちの大切な客人に向けた、心からの歓迎。
その歓声の大合唱に包まれて、ミーアとラーニャは王都、黄金（オーロ）の天（・アルデア）の農村に入るのだった。

黄金の道を並んで歩く二人の姫君。
その気高き姿は、ティアムーンとペルージャンの関係に、新しい時代が来たことを感じさせるものだった。その姿を見ていた、とある農民の手により、この時の情景は一枚の絵になった。
絵のタイトルは「黄金の道を行く、二人の姫」
その荘厳な絵とともに、黄金の道を裸足で歩く二人の姫の逸話は、さまざまな脚色を加えられて、長く語り継がれることになるのだった。

第三十七話　帝国の叡智からは逃げられない

「あれが……帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーン、か……」
ペルージャン国王、ユハル・タフリーフ・ペルージャンは、黄金の坂道を登ってくるミーアの姿を見ていた。
大歓声に沸く民衆、その声に偽りがないことが、彼にはわかっていた。
今日、帝国の姫を迎えるために集まった民衆、嫌々ながら集まった彼らが、今では、心からの歓迎の意を示している。
「このような方法で、民の心をつかもうとは……。見事な知恵だ。帝国の叡智は貴族社会のくだらない慣習にとらわれずに実利をとる、か……」
人心掌握のために、商人のごとく王侯貴族の常識を簡単に切り捨てる……。その姿勢に、ユハルは忌々しさを覚えた。
「心の中では我らを見下しつつも、外面だけは我らに敬意を見せるか……。小賢しい娘だ……」
ユハルは知っている。
「誇りなど、実利の前では何の意味もない」と、そのように合理的に考えられる者が、貴族や王族の中にもいるということを。
きっと、皇女ミーアというのもその類の人間。誇りよりも利益を重んじることができる現実主義者（リアリスト）に違いないと、彼はそう判断した。
「しかし、ミーア姫はあの小麦のことを知っていたのだろうか……？」
普通、小麦には小さな棘があり、素肌に触れると痛みやかゆみを発するようになる。
ペルージャンの小麦は品種改良により、ほとんどそのようなことは起こらないようになっているが……、その小麦の習性をしっかりと見抜いた上で、安全を確信しての行動であれば、侮れない観察眼

と機転だった。
「あるいは、どちらでも良かった、か……」
ユハルは、思わずハッとする。
もし、あの小麦を踏んで足にケガをしたとすれば、それを理由になにか無茶な要求をするつもりだったのかもしれない。相手をもてなすために、ペルージャン側が配慮を欠くとも思えないが、配慮を欠いていたとしても構わない、と……そういうことであったのかもしれない。
「小麦の知識を持っていたか、ペルージャン側の配慮を計算したか、もしくは、棘があっても構わないと思っていたか……」
いずれにせよ、ミーアの行動が、あくまでも計算に基づいてなされたものなのだと、ユハルは判断した。
あるいは……、もしかすると彼はそう思いたかっただけなのかもしれない。
いつか見返してやるべき帝国の姫は、強大な相手でなければならなかったから……。
強大で冷酷な……敵でなければならなかった。油断すると自分たちを踏みつけにするような、あるいは、民を思いやるふりをしながらあっさりと切り捨てる……そのような者でなければならなかった。
決して思いやりを持った者であっては、ならなかったのだ。
だって、そうでなければ、危険を冒して戦うことができなくなるから……。
ユハルは自分の信じたいものを信じ、見たいものを見た。
都合のよい虚像を見てしまったのだ。
「しかし、この黄金の天の農村を訪れる、初めてのティアムーン帝国皇帝の関係者が、まさか、歩いてこの坂道を登ってくるとは……。わからぬものだな……」
その時だった……。彼の脳裏に微かな違和感が生まれる。
それは……ある種の揺らぎのようなもの。湖面に生じた波紋のごとく、彼の記憶が揺らいで、そして……。

「……いや、そうではないか。先代の皇妃さまがいらしたことがあったか……？　だが……、いや、あれは……夢のことだったろうか……？」
淡くはじける記憶の泡、それが夢か現か……。ユハルは、自身のあやふやな記憶に当惑し、それを誤魔化すようにゆっくりと首を振った。
「記憶の混濁か……。ふふ、年は取りたくないものだ……」
そうして、枯れた笑い声を上げた。

「ミーア皇女殿下、遠路をはるばるいらしていただきまして……」
ミーアが黄金の坂を上り切ったところで、ユハルはミーアの前に出た。
「お初にお目にかかります。ミーア殿下。ペルージャン国王、ユハル・タフリーフ・ペルージャンにございます」
そうして、彼は片膝をついた。
いかに相手が帝国皇女に対してとはいえ、仮にも一国の王のとるべき態度ではない。
けれど、ユハルもまた必要とあらば、誇りを捨てることができる者だった。属国の王の挨拶は、卑屈なぐらいでちょうどよい。特によからぬ企みを腹に秘めた今は、余計な詮索をされてはならない。
「これは、ご丁寧に、陛下。わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ。以後、お見知りおきを」
スカートの裾をちょこんと持ち上げて、ミーアは言った。
「娘たちがすっかりお世話になっておりますのに、ご挨拶にうかがうこともせずに、申し訳ありません。そのお詫びというわけではございませんが、今夜は歓迎の宴を用意しております。長旅でお疲れでなければよろしいのですが……」
「ああ、それは実に素晴らしい。何の問題もございませんわ。わたくし、どれだけ疲れていても、お腹がいっぱいでも、ペルージャンのお料理でしたら、食べられると思いますわ。この国のお料理は絶

品ですもの。楽しみにしておりますわね」
　満面の笑みで見え透いたお世辞を言って、それからミーアは、わざとらしく小首を傾げた。
「あ、そうですわ。それでしたら、一つお願いがございますの」
「お願い……、ですか。さて、それはどのような……」
「わたくしのための歓迎会には、ぜひ、シャローク・コーンローグ殿を同席させていただきたいのですわ」
「ほう……」
　不意打ちのように出てきたその名前に、ユハルは、ちらりとラーニャのほうを見た。自分と目を合わそうとしない娘に、ユハルは内心でため息を吐く。
　――ミーア姫に情報を流したか……。まさか、娘に裏切られようとはな……。
　などと思いつつも、表情一つ変えずにユハルは言った。
「ですが、かの者はただの商人。ミーア姫殿下の晩餐会には相応しくないでしょうに。いったい、なぜ、そのようなことを？」
　大国ティアムーン帝国の皇女を招いての晩餐会に、一介の商人を呼ぶのは不適切である、と言外に伝える。けれど、ミーアは朗らかな笑みをたたえた顔で言った。
「ええ、実は……」
　とそこで遅ればせながら、ミーアの乗っていた馬車が追い付いてきた。
　降りてきたのはミーアと同年代の二人の少女、それにメイドの少女と、眼鏡をかけた青年が一人である。
　ミーアは、そちらに目をやりながら言った。
「実は、わたくしのお友だちのタチアナさんが、なんでもシャローク殿に大変な恩があるらしくて。ぜひ、直接お会いして、お礼を言いたいということなんですの」
　ミーアの視線を受けて、一人の少女がぴくん、と緊張したように固まる。

――なるほど。すでに口実は用意してあるということか……。このぐらいは当然か……。
ユハルは、自分の娘より幼いミーアに一層の警戒心を持って当たることにする。
「うふふ、シャロークさんは、とても良い方みたいなので。わたくしもその時のお話とか聞いてみたいって思っているんですのよ？」
妖しげな笑みを浮かべるミーアに、ユハルは油断なく頷いた。
「そうでしたか……。それでは、そのように手配いたしましょう」
逃れることのできぬ帝国皇女の願いに、内心で舌打ちしながら……。

第三十八話　ミーアのネガキャン大作戦！

「うふふ、上手くいきましたわ。晩餐会にシャロークさんを引きずりこむことに成功いたしましたわよ」
ペルージャン国王の出迎えを受けた後、ミーアは城の一角に用意された部屋で休んでいた。
部屋の中には、アンヌ、ルードヴィッヒ、ベル、ラーニャ、そしてタチアナの姿があった。
みなを前にして、ミーアは上機嫌な笑みを浮かべた。
「しかし、ここから先はどうなさるおつもりですか？」
ルードヴィッヒは、眼鏡を押し上げつつ言った。
「帝国との取引をやめないように暗に脅すということはできるかと思いますが……」
「ふむ……、それをラーニャさんのいる前で口にするということは、本気ではありませんわね、ルードヴィッヒ」
「どうでしょうか？　あえてラーニャ姫にお聞かせすることで、脅そうとしているのかもしれません」
ミーアは、ちらりとラーニャの顔を窺う。幸いにも、ラーニャは落ち着いた顔をしていた。それを確認してから、ミーアはルードヴィッヒに言った。
「では、はっきりと言っておきますわ。過去はいざ知らず、わたくしはペルージャンを力をもって屈服させるつもりはありませんわ」
前の時間軸、帝国は失敗した。
『力』でもって押さえつけたのでは『力』を失った時に簡単に寝首をかかれる。しかも、相手は気付かれぬように、こっそりと帝国の『力』を削ろうとするに違いないのだ。
あるいは、帝国の『力』と拮抗する『力』をどこかの国から借りてくるということも考えられる。

そのやり方では、ミーアの小心者（チキンハート）の心はいつまでたっても安心できないのである。だからこそ……、
「ペルージャン農業国は『信頼』をもって説得する。これしかございませんわ」
ミーアへの『信頼』があったからこそ、ラーニャは連絡をくれた。帝国が、自らの力でどうにもならない状況に陥った時に助けてくれるのは、力で屈服させた相手ではない。
信頼関係をきちんと築いておいた国なのだ。
では、そのためにどうするか？
ミーアの立てた作戦はシンプルだ。ミーアはこう考えた。「相対的に敵の信頼を落としてやればいい」と。
悲しいことに……、帝国貴族のこれまでの歴史を見れば、ペルージャンと確固たる信頼関係を築くことは簡単ではない。
ラーニャやアーシャとは個人的に親しくしているつもりのミーアであるが、それを全国民のレベルにまで広げるのは、時間がかかるわけで……。
――まったく、ご先祖さまもやらかしてくれましたわ。農業に対する差別意識なんか、植え付けたりしなければこのようなことにはなりませんでしたのに！
ともかく、帝国貴族の意識改革にも、ペルージャンからの信頼を勝ち取るのも時間がかかるのだ。
ということで、ミーアは発想の逆転をした。
自分たちへの信頼感が上げられないのなら、シャロークへの信頼感を下げてやればいいじゃない？　と。
いわゆるネガキャンである。
ペルージャン国王の前で、シャローク・コーンローグの化けの皮を剥ぐのだ。
――“金のためなら容赦なく、徹底的になんでもやります”というあの態度……あれこそが、バケモノじみた得体の知れなさをあの男に付与しているもの。もしかしたら、彼ならばやってくれるかも

しれない、という期待感を生み出している要因ですわ。
だからこそ、彼が本当は、普通にいい人なのである、と……優しさも甘さも持ったただの人なのである、と見せつけてやるのだ。
そうして、ペルージャン国王が描いた妄想、シャロークに任せれば帝国を見返すことができるかも……などという甘い夢をぶち壊してやるのだ。
「ふふふ、目を覚まさせてやりますわ」
そのための切り札こそが……、
「そこで、タチアナさんの出番ということになりますわ」
シャロークの過去を知る者、タチアナだった。
実のところ、ミーアは、そこに一抹の不安を感じないではない。
なにしろ、タチアナはシャロークに恩のある者だ。その彼がミーアによって辱められることが、愉快であるはずもない。
――けれど、そのせいで証言を拒否されてはたまりませんわ。
だからこそ、ここで念を押しておく。ということで、
「言いましたわよね、タチアナさん。あの方次第、シャロークさん次第である、と……」
あいつが、なーんにもしなかったら、こんなことにはならなかったんですよー？　と。
まず、責任の所在をはっきりとさせておく。
自分は悪くない、とここに明示した上で、
「これはあの方のためでもありますわ」
だらだらと帝国に敵対することは、シャロークのためにならない。傷口をいたずらに広げるだけですよ、とシャローク側のメリットをも強調。
これにより、タチアナの心理的負担の軽減に努める。
なんとも狡(こす)い手である。
そんな狙いに気付かれぬうちに、ミーアはタチアナに言った。
「だから遠慮など無用。嘘を吐く必要もない。全力であいつの頬を張り飛ばしてやればいいですわ！」

かくして、方針は決まった。

「……ところで、ミーアさま、その……足や肌は大丈夫ですか？」
「……はて？　なんのことですの？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、ラーニャは少しだけ眉をひそめて言った。
「小麦に触れた部分に痛みや痒みはありませんか？」
「そういえば、なんだか、足が少し痛痒いような……」
「ああ、やっぱり……」
ラーニャは、ミーアの足元に跪き、
「ミーアさま、失礼いたします」
ミーアを座らせると、素早く靴を脱がせた。
「いいですか？　ミーアさま。小麦にはとても細いトゲがあって、それが刺さると痛みやかゆみを生じます。あの道に敷き詰められていた小麦は、ペルージャンで品種改良をしたものですから、滅多にないことですけど、種類によっては大変なことになりますから、不用意に、あのようなことをしてはダメですよ」
「まぁ！　そうでしたの……。どうりで、チクチクすると思いましたわ……」
ミーアの脳裏に、触るとヤバいことになる炎のようなキノコが思い浮かんだ。
「それはラーニャさんにも申し訳ないことをしてしまいましたわ……」
「私は慣れているので大丈夫です。でも、申し訳ありません。止める間もありませんでした」
「全然知りませんでしたわ。今度から気を付けますわね」
やはり、軽率な行動はとるべきではないな、と反省しきりのミーアであるが……。
「でも……、ミーアさまは、知っていてもやってしまうのではないですか？」

「……はぇ？」
「農民たちの誠意に応える方法があれしかなければ……、ミーアさまはそうなさるのではありませんか？」
「え、いえ……、そんなことは……」
と言いかけたミーアであったが……、周りを見て察する。
みーんな、たぶん、ラーニャと同じことを思ってるんだろうナァ、ということを……。
なので……。
「え、ええ、まぁ、そうですわね。必要でしたら、やってしまいますわ、たぶん……」
ついつい、流されるままにそんなことを言ってしまう……のだが……。
――あ、あら？　でも、これって、また同じような場面に出逢ってしまったら、わたくし、ちょっと痛かったりかゆかったりしても、我慢してやらなければならなくなるような……？
ふと、そんなイヤァな予感を覚えてしまうミーアであった。
ラーニャはミーアの足をしげしげと観察してから言った。
「少し手当をしたほうがいいかもしれませんね……」
「なにか、薬があるんですか？」
医者志望のタチアナが興味津々といった様子で尋ねると、ラーニャは小さく頷いた。
「王都の中にクロリオの池という場所があります。そこの水は、かぶれや、かゆみをおさえたり、少々の切り傷には効き目があるといわれています。汗を流すのにも使われる場所なので、旅の汗を流してくるのがよろしいかもしれません」

第三十九話　ミーア姫、タチアナに刺される（……精神的に）

「ここがクロリオの池……。なるほど、綺麗な場所ですわね」
ラーニャに案内されたそこは、人工的な池だった。
木造の城とは違い、石が敷き詰められていて、整備が行き届いている。
池の水は澄み渡り、そよそよと流れる水音は、聞いているだけで眠気を覚えるような、平和な音だった。
「他の者には入らないように言っておきましたから、こちらで汗をお流しください」
池は、四方を壁で覆われており、外からの目が届かないようになっていた。
「ふむ、まぁ、お風呂みたいなものですわね。屋根がないのは少し気になりますけれど……これならば、汗を流すことはできそうですわ」
そうしてミーアは、そそくさと靴を脱ぎ、着ていた服もチャチャっと脱ぎ捨てる。
傍らに控えていたアンヌに手伝ってもらい、水浴用の、上下一体の服に着替えたミーアは、
「ほら、ベルも汗を流しておきますわよ。タチアナさんも、今夜は晩餐会に出ていただくのですから、しっかりと体を洗っておいてくださいませね」
などと、いささか“できるお姉さん”ぶったことを言う。が……、ふと、ベルの足元を見た瞬間、ミーアの体が固まった。
「はい、わかりました、ミーアお姉さま！」
元気よく返事をしたベルは、服をすべて脱ぐと綺麗に畳んで置いていた。
その隣でお着換え中のタチアナもまた、畳んでいる。医の道を志

すものとして几帳面な性格なのか、ベルよりもさらに丁寧に畳んである。
「……」
一方のミーアの足元……、そこには、脱ぎ散らかされたドレスがあった。
ミーアは帝国皇女である。大国の姫である。
顎で使用人を使える立場で、だから、脱いだ服とか気にする必要は微塵もない。後でアンヌが整えておいてくれることに、疑いの余地はない。ないのだが……、ミーアは二人にバレないようにサッと服を整えた。
必要の有無ではない。二人よりもお姉さんであるというプライドが問われているのだ！「では、参りますわよ！」
最初から、自分も畳んでましたよー？　という風を装って、何食わぬ顔で、ミーアは池のほうへと向かった。
水面に、ちょこんとつま先をつけてみる……、と、水は思ったよりは、冷たくはなかった。けれど、歩いてちょっぴり熱くなった足を冷やしてくれて、なんとも心地よかった。
さらに、膝の辺りまで沈めてみると、先ほどまでのチリチリと感じていた足の裏の痛みが、嘘のようにスッと引いていった。
「ああ、なるほど。たしかに効きますわね……。これは、どうなっているのかしら……？」
「湧き水の中には傷に効くもの、疲れをとるものなど、いろいろな効能を持ったものがあると聞きます」
遅れてやってきたタチアナが説明してくれる。
「まぁ、そのようなものが……」
などと言いつつ、ミーアは自分の足の状況を確認する。
見た感じでは……よくわからなかった。
――まぁ、地下牢のあの石のゴツゴツした床で切ったりしたこともありましたし、このぐらいは大したことでもないのですけど……。
地下牢とギロチンによって鍛えられたミーアは、小麦程度では動

じないのである。
「ミーアさま……、大丈夫ですか？　私……」
アンヌが心配そうな顔で近づいてきたが……、
「あ、よろしければ、私が見ましょうか？」
そこで、タチアナが小さく手を挙げた。
「ああ、そういえば、医学の知識があるのでしたわね。そうですわね。でしたら、アンヌはベルのほうを見てもらえるかしら？　きちんと恥ずかしくないように、洗ってあげて」
「あ……、はい。わかり、ました」
アンヌは、一瞬息を呑んだように黙ってから、小さく頷いた。
――はて？　変ですわね……。
と、そこでミーアは気が付いた。なんとなくだが、アンヌに元気がないような……。
――ただ疲れているだけであればよろしいのですけれど……、これは池から上がったら確認しておく必要がありますわね。
夜にはシャロークとの対決が控えているのだ。後顧の憂いはとっとと断っておくべきだろう。
などと思いつつ、ミーアは足を引き上げた。
タチアナは、足の裏の様子を見てから、ミーアのふくらはぎを軽く揉んだ。眉間にかすかにしわを寄せ、難しい顔をする。
「あら？　もしかして、そんなところにまで腫れが？」
「いえ、旅の影響で、少しこっているのではないかと思いまして……」
と言いつつ、ふにふに、ふくらはぎを揉み解してくれる。
「まぁ、そんなこともできますのね。それにしてもいい気持ちですわ」
試しにミーアも、反対のふくらはぎを揉んでみる。……と、なんだか、前よりちょっぴりＦＮＹっとしたような気がしたが……、まぁ、たぶん、気のせいだろう。
そう気楽に考えていたのだが……。

「あの、ミーアさま……、このようなことを言っては、失礼に当たるとわかってはいるのですが……」
ふと顔を上げると、タチアナが真剣な顔で見つめていた。
もしや、小麦のトゲが思ったより大変なことになっていたのだろうか……？　などと若干心配になりつつ、ミーアは尋ねる。
「なにかしら？」
「この旅が始まってから、ずっとミーアさまのお食事を見させていただきましたが……、食べ過ぎだと思います」
「……はぇ？」
ぽかん、と口を開けるミーア。そんなミーアのふくらはぎを、ふにふに揉んでから、タチアナは、なにかを確認したように頷いて……。
――なっ、なにを確認したのですのっ！？
「甘いものを食べすぎると、お体に障ります。肥満は健康を害することにつながります」
「ひっ、肥満……ですの？」
「はい。今はまだそこまでではありませんが……。甘いものをたくさん食べると、太って、健康を害するのです」
まだ、そこまでではない……。
まだ……、ということは、いずれ、というのがあるということで……。
そこまでではない、というのは、ちょっとはそうであるということで……。
タチアナの容赦のない、衝撃的な言葉を、一言一言反芻しつつ……、ミーアは無言で、そばにいたベルの二の腕を掴んで、ふにょふにょした。
「ひゃんっ！　み、ミーアお姉さま、くすぐったいです」
孫娘の悲鳴のような笑い声を聞きながら、ミーアは自らの二の腕をふにょふにょしてみた。ＦＮＹ比べの結果……、
「……っ！」

自分のほうが……ＦＮＹっとしていた！
ここに来て、ミーアはついに認めざるを得なくなった。
自分は失敗した……。食べ過ぎたのだ！
「食べものには気を遣われたほうが良いと思います。大切なお体なのですから……」
そうして、タチアナは真面目な顔で言うのだった。
「ふ、ふふふ、ええ、そうですわね。あなたのその、物怖じせずに必要な注意ができるところは、とても素晴らしいと思いますわ。医師として、きっと必要になってくる資質だと思いますし……」
ミーアは、若干震える声で、そう言った。
「ぜ、ぜひ、その率直さを失わずにいていただきたいものですわ。ああ、もしも、あなたが、その、言葉を選ばない実直さで窮地に陥ったりした時にはわたくしを頼りなさい。必ず助けてあげますわ」
基本的にミーアは、助言をしっかりと聞くことができる人である。けれど、同時に「ミーアさま、ちょいＦＮＹだから気を付けたほうがいいですよ！」などという助言で傷つくのが自分だけだなんて、許せない！　と考える、ちょっぴりアレな人でもあるのだ。
ということで、ミーアはタチアナが気兼ねなく助言できるように、フォローを入れておくことにしたのである。
周りを積極的に巻き込んでいくスタイルである。
――きっとエメラルダさんあたりも、隠れＦＮＹですわよ。そうに決まってますわ！　ふふ、わたくしと同じ、屈辱に震えると良いですわ！
それから、ミーアは考える。
――ふむ……、とはいえ、ペルージャンのお野菜は新鮮なものですし、果物もとても体に良さそうな……みずみずしいものでしたわ。晩餐会までも時間がありますし、少しぐらいなら食べても大丈夫なんじゃないかしら……？　この国の王都に来て買い食いをしないなど、それこそ失礼な話ですし……。
などと悪だくみを始めるミーアだったのだが……。

第四十話　それぞれのランクアップ

さて、水浴びを終えたミーアは、そのまま部屋に戻ってきた。
遊びに行きたそうにしていたベルをタチアナに任せて、さらに引率をルードヴィッヒにお願いしておく。ついでに、食べ物のリサーチをお願いしておくのも忘れない。
――この国にいる間に食べるべきものと、持ち帰ることができるものとの見極めが大事ですわ。
先ほど、食べ過ぎを指摘されたミーアであったが、すでに切り替えていた。
ミーアは、正しい忠言にはしっかりと耳を傾けるほうである。なるほど、たしかにタチアナの指摘通り、この旅の間、自分は食べ過ぎていた。それは認めよう。健康を害するし、なにより、二の腕のフニフニ感はミーア自身気になるところではある。
それゆえに……、ミーアは考えた！　頑張ろう……、この旅が終わったら……と。
――旅というのは、特別なもの。それほど頻繁にあることではありませんし、ペルージャンでしか味わえないお菓子……ではなく、経験というのもあるはず。であれば、それをしないのはもったいないことですわ！
そうして、ミーアは割り切ることにした。
この旅の間は、目をつむろうじゃないか、と。
それは……「明日から頑張ればいいじゃない」という、サボる時の常套句を格上げしたような、なんともアレな決意ではあったが……。ともあれ、ミーアは決意を固めたのだ。
だが……、その前に……、
「アンヌ、少しよろしいかしら？」
「……はい？　なんですか？　ミーアさま」

水浴びにより、しっとり湿ったミーアの髪を梳きながら、アンヌは首を傾げる。
今はそうでもないが、先ほどは様子がおかしかったアンヌである。今のうちに話を聞いておこうと、ミーアは考えたのだ。同時に、心を開いて話してもらうには、もっと明るい状況が好ましいだろう、とも考える。……例えば、買い食いの最中とか。
ということで……、
「この後、晩餐会まで少し町に出て買い食いにでも……」
「いけません！　足のお怪我もあるのですから、時間までこのお部屋で休んでいてください」
「……はぇ？」
珍しく、強い口調で否定するアンヌに、ミーアは目を白黒させた。
「あっ……」
見ればアンヌも、驚愕の表情で固まっていた。どうやら、自分で言ってしまった言葉がショックだったらしい。小さく唇を震わせて、絞り出すように、
「もっ、申し訳ありませんっ！」
勢いよく頭を下げると、そのまま踵を返して、部屋を出ていこうとする。
「ちょっ、待ちなさい。アンヌ！」
ミーアは、慌ててその手を掴んだ。
「一人でどこへ行くつもりですの？」
「……っ！」
セントノエルや帝都ならばいざ知らず、ここは異国の地である。案内もなく飛び出したら、迷ってしまうだろう。目を見開いたアンヌに、ミーアは小さく微笑んで、
「うふふ、最近はしっかりしてきたと思いましたけれど、やっぱりアンヌはそそっかしいですわね」
それから、静かに瞳を閉じた。
「でも、まぁ、そうですわね。アンヌがそう言うならばここで休む

ことにいたしましょうか。髪の手入れを続けてくださらない？」
「はい……、申し訳、ありません」
再び、頭を下げるアンヌ。やっぱり、その声には元気がないように感じた。
「ねぇ、アンヌ、なにかありましたの？　なんだか、先ほどから元気がないように見えますけど……」
ミーアの指摘に、アンヌは一瞬息を呑んでから、ぽつり、ぽつりと話し始める。
「ミーアさまが、あの小麦の上を歩こうとされた時……、私は止めることができませんでした。その結果、ミーアさまのおみ足に……。しかも、そのことに全然気付かなくて……」
「ああ、あれは……。余計な心配をかけてしまって申し訳ないと、わたくしも大いに反省しておりますわ。今回は少し無茶が過ぎたと……」
「それだけじゃ、ないんです……」
アンヌは、声を震わせる。
「タチアナさんの言ってたこと……本当は、私がミーアさまにお伝えしなければならないことだったのに……。食べ過ぎだって……お止めしなくてはならなかったのに……私は……その勤めを果たすことができませんでした……」
うつむくアンヌの瞳に、じわりと涙の粒が膨らんだ。
「私が……もっとしっかりしないと……タチアナさんみたいに……、ミーアさまのお体に気を使って……」
「アンヌ……」
ミーアはアンヌの肩に、ポンと優しく手を置きつつ……。
――まっ、まま、まずいですわ。
内心で、焦りまくっていた！
――もしも、アンヌがタチアナさんに刺激されて、甘いものを一切許さない！　なんて言いだしたら、一大事ですわ！
無論、ミーアは都合の良い人間ばかりを自分の周りに置くことの

危うさを、よく知っている。
アンヌには忌憚ない意見を言ってもらいたいし、必要とあらば諌めてもらいたいとも思っている。
けれど、その上で、アンヌには、ちょっぴり甘くしてもらいたいミーアである。
必要とあらば、ミーアを恐れず注意をしてくれる、けれど……大抵の場合は、優しく甘やかしてくれる……そんなアンヌのままでいてもらいたいのだ！
なんとか、アンヌの思考の方向を変えなければ、と知恵を絞った末、ミーアは小さく笑みを浮かべた。ミーアが笑ってごまかす時によくやる笑い方である。
「アンヌ……、あなたの気持ち、わたくしはとても嬉しく思いますわ。その上で言っておきたいですわ」
ミーアは懸命に思考しつつ……、言った。
「アンヌ、あなたは……誰？」
「え？　私……私は……」
「あなたは、アンヌですわ。タチアナさんでも、ルードヴィッヒでもない。あなたはアンヌ、誰よりもわたくしが信用する、わたくしの大切な腹心ですわ」
アンヌはタチアナとは違う。だから……、別に甘いものを食べることに、そこまで厳しくする必要はないんだ、と、ミーアは力強く、切々と訴えかける。
「あなたには、あなたのまま、わたくしのそばにいていただきたいんですの。もちろん、アンヌが算術を頑張ったり、お料理の腕前を鍛えたり、馬に乗れるようになったり……、そうしたことを頑張るのは止めませんわ。けれど……、無理をして他の人になる必要はどこにもありませんわ」
「み、ミーアさま……」
アンヌは、瞳をパチパチと瞬かせた。その瞳からは、大きな粒になった涙がこぼれ落ちる。それを指で拭ってから、ミーアは言った。

「いいですわね、アンヌ。あなたは、ずっとあなたのままでいて。それこそがわたくしの願いですわ」
「はい……、はい！　ありがとう、ございます……」
声を震わせるアンヌに、ミーアは……、どうやら上手くいったようだ、と胸を撫でおろすのだった。

……けれど、話はそれで終わらなかった。
「ただいま戻りました。ミーア姫殿下」
ベルとタチアナを連れたルードヴィッヒが帰ってきたのは、空が赤く染まり始めたころだった。
「ああ、帰りましたのね。楽しかったかしら？」
ミーアの問いかけに、ベルが腕をぶんぶん振った。
「すごかったです、ミーアお姉さま！　ボク、あんなに美味しいもの、初めて食べました。もう、お腹いっぱいで」
「あら？　では、今夜の晩餐会は……」
「何言ってるんですか、ミーアお姉さま！　お夕食は別腹ですから！」
ミーア、反射的にベルの二の腕を掴んで、ふにふにする。
「きゃんっ！　み、ミーアお姉さま、くすぐったいです」
「これは……、腕をぶんぶん振ってるから、こうなのかしら……。なんか、納得いきませんわ……」
などというやり取りをしつつ、ミーアはルードヴィッヒに目をやった。
「それで、農作物の調査ははかどったかしら？」
「はい。さすがはペルージャンです。見たことのない作物がたくさんありました」
と、そこで、一度言葉を切って、ルードヴィッヒは苦い表情で続ける。
「それに……、初めて知ることもたくさんありました。やはり、師匠の言っていた通り、実際に見てみないとわからないことというの

は、たくさんありますね。俺は……まだまだです」
「あら？　どうかしましたの？」
「ミーア姫殿下、先ほどは申し訳ありませんでした。小麦のことを、私は知りませんでした」
そう言って項垂れるルードヴィッヒに、ミーアはちょっぴり驚いた視線を向けた。
「まぁ、アンヌに続いて、今度はあなたですの？」
「は……？」
「いえ、何でもありませんわ」
などと首を振りつつ、ミーアは……、ふむ、とうなった。
――まぁ、珍しくへこんでいるルードヴィッヒを見るのは、悪くはありませんけれど……。ともあれ、ルードヴィッヒにはこれからも活躍してもらわなければ困りますし……、それ以上に……。
ミーアはチラッとルードヴィッヒを見て、ほんのり危機感を覚える。
――これは……。ヤバイ臭いがしますわね。
本来、ルードヴィッヒは、知識の徒。優秀な文官ではあっても、その根っこの部分は、勉学を好む学者気質である。
まぁ、それ自体は特に気にする必要のないことであるのだが……。問題は、彼が教育熱心でもある、ということである。
そして、その熱心さが向かう先がどこなのか、ミーアはよく知っていた。
――先ほどの出来事は小麦の特性を知っていればできなかったこと。だから今後、わたくしがあのような無茶をしないように、しっかりといろいろ勉強してもらう、などと言い出されたらたまりませんわ！
切実な危機感に背中を押されて、ミーアは言った。
「ルードヴィッヒ、わたくしは思いますわ。この世のすべてを知ることは、人の身には到底できないことである、と」
「はい。ミーアさまですら、この世のすべてはご存知ないのだということは、私も知っております。だからこそ、私がミーアさまの足

りない部分を、私が補わなければならないということも……」
「ルードヴィッヒ、わたくしはたしかにあなたの知恵を求めましたわ。されど、あなたに全知の賢者になるように求めたことは一度もございませんわ。わたくしは、自分ができることは少ないということを知っている。だから、あなたにも全部ができるようになれなどとは言いませんし、すべてを知っているように求めようとも思わない」
ミーアはそれから、そっと胸に手を当てた。
「無論、あなたが、向学心のままに知識を得るのを、わたくしは止めはしませんわ。けれど……、わたくしは、自分でなんでも知り、なんでもできるようになろうとは思わない。わたくしは、自分の足りない部分は他人に頼るのが良いと思っておりますの。意味は、わかりますかしら？」
要するに……、ルードヴィッヒが頑張って勉強するのは、まぁ、別に知ったこっちゃないが、自分はそんなに勉強せずに、他人の頭を借りようと思う、と……。
そんな具合のことを、臆することなく豪語するミーアなのであった。

そのミーアの言葉に……ルードヴィッヒはハッとした。
今まで、考えてもいなかったことを指摘されたためだ。
自分は……ミーアのかたわらで、帝国のために働ければ、なんでもいいと思っていた。
下働きでも、肉体労働でも……、どのような仕事でも、ミーアの助けになれるならば構わないと思っていたし、現にそのように働いてきた。
それは、いわば万能の副官として、各地を働きまわる役割だ。けれど……、
――ミーアさまは、俺に求めるのは万能の副官ではない、と……。そう言っておられるのか？

ミーアが示唆したこと、それは、専門家たちの力を取りまとめる存在だった。
すなわち……、それは……。
――俺に人の上に立つ地位に就くことを望むと、そういうことか……。上の地位、例えば宰相か……。
ミーアを女帝にしようと画策するルードヴィッヒ。その意気に応えるために、ミーアは、ルードヴィッヒにもまた、覚悟を問うているのだ。
自分のように、足りない部分を他人に頼る存在になるつもりはあるか？　能力のある専門家たちを、帝国に数多いる能吏を率いるつもりはあるか？　と。
帝国宰相……。それは基本的に貴族の爵位を持つ者が就くものだ。
仮に、ミーアの後ろ盾があったとしても、平民のルードヴィッヒがなるのは、極めて厳しい。
さらに、彼が味方に引き入れた同門の者たちを、能力で納得させる必要がある。彼らの上に立つのであれば、相応の器を見せる必要があるのだ。
それは、ミーアの手足となって身を粉にして働く以上に大変なことだった。個人の能力とは別の、人を見る目と指導力、忍耐力が求められるのだ。
――ディオン殿には、上に行ってもらうと言ったのだ。俺自身もまた……覚悟を決めなければならない、か……。
後の名宰相、ルードヴィッヒ・ヒューイットが帝国宰相の地位を志したのは、実にこの時であった。
かくてミーアは、アンヌの「忠誠」とルードヴィッヒの「覚悟」、それに自身にかかっていた美食的良効果（グルメバフ）「空腹」をそれぞれワンランク引き上げることに成功したのだった。
――うう、結局、買い食いには行けませんでしたわ……。こ、こうなったら、歓迎晩餐会で後悔のないように、食べまくってやりますわ！

そんな決意を胸に……ミーアは、運命の晩餐会に臨むことになるのであった。

第四十話　それぞれのランクアップ（後書き）

ミーアにかけられていたバフ「空腹」が「超空腹」にアップした。

第四十一話　キノコ駆けつけ三杯

その日の夜、ミーアはペルージャン国王の晩餐会を訪れた。
ケーキのお城の一室に設けられた宴会の席、横長のテーブルの上に並べられたごちそうを見て、ミーアは思わずゴクリ、と喉を鳴らす。
中央に鎮座しているのは、新鮮な緑色を誇る野菜、その野菜の表面には、料理人の手によって、見事な花の彫刻がなされている。その周囲には、同じく大きな野菜を、今度は容器代わりに使った料理が置かれていた。中に入っているソースをつけて食べるのだろうか、容器の周りには、いい具合に焼いた野菜が置かれている。野菜からの香ばしい誘惑にミーアのお腹の虫が呼応する。
さらに、先日食べたターコースの生地の上に、キノコが乗せられているものがあって……。
――まぁ！　あれが、ペルージャンのキノコですわね。ああ、楽しみですわ……。どんな味がするのか……。
などという気持ちを、生唾と一緒に呑み込んで、ミーアは優雅に挨拶をする。
「陛下、この度はわたくしのために、このような素敵な晩餐会を開いてくださり感謝いたしますわ」
「いえ、心ばかりのものですので……。ご満足いただければよろしいが……」
「うふふ、ご謙遜を。これほどの絢爛豪華なお料理、見るだけで心が躍ろうというものですわ」
ただでさえ、買い食いに行けずに空腹怪獣（ハラペコモンスター）なミーアである。
そんなミーアの瞳には、並んだ料理がキラキラ輝いて見えた。
晩餐会にはペルージャン国王ユハルとその隣に王妃、さらにその隣にはラーニャとその弟王子の姿もあった。

弟王子は、ベルやタチアナよりもさらに幼く、恐らく十歳に満たないのではないだろうか。目の前の料理をジッと見つめたまま、今にもよだれをたらしそうな顔をしているのがなんとも微笑ましい。
――ふむ、あれがラーニャさんの弟さんとお母さまですわね……。やっぱりラーニャさんにちょっぴり似てますわね。
ミーアには、兄妹はいないし、母親はすでに亡くなっている。家族は皇帝である父親のみである。別にそのことで寂しいと思ったことはなかったが……、でも、家族が多いラーニャがほんのちょっぴり羨ましく感じてしまうミーアであった。
まぁ、それはさておき、料理である。ミーアは自分の席にそそくさと向かった。
ミーアの席は王妃とは反対側の、国王の隣の席だった。
その隣にミーアベルが、さらにその隣にはタチアナが並ぶ。
さらに、ミーアの後ろにはルードヴィッヒとアンヌの忠臣二人が控えていた。ミーア的には、ほぼ完璧な陣容である。
――さて、こちらの準備は万端ですけれど……、シャロークさんは、まだかしら？
恐らく、ラーニャの弟の隣がシャロークの席なのだろう。その空席を、睨みつけるようにして、ミーアが待っていると……、
「失礼いたします。遅くなって申し訳ございません」
やってきたシャロークに、ミーアは小さく会釈する。
「ご機嫌よう、シャロークさん。お久しぶりですわね。またお会いできるなんて、思っておりませんでしたわ」
「ミーア姫殿下……、この度は、このような席にお呼びいただき、光栄至極にございます」
シャローク・コーンローグは、さすがに歴戦の商人らしく、過去のいきさつなど微塵も感じさせない完璧な愛想笑いを顔に浮かべていた。
「しかし、私のような、しがない商人に、姫殿下がどのような……」
と、言いかけたシャロークを片手で制し、ミーアは言った。

「とりあえず、食事がしたいですわ。会を始めませんこと？」
今は、まず食事である。食事ファーストである。
シャロークを倒すのはいつでもできるが、料理を美味しく食べられる時間は限られる。料理人がせっかく温かくした料理が冷めてしまってはもったいない。
というか、ミーア的に、もうお腹が限界である。ということではあるのだが……。
「そちらの、ラーニャ姫の弟君もどうやら、お腹が減っているみたいですし……」
さすがに自分が食べたいから催促するのは格好が悪い。ということで、こっそり他人に押し付けるミーアである。
一方の話を振られた王子は、ちょっぴり恥ずかしそうな顔をした。と同時に、クーっとお腹の音が鳴るのが聞こえた。それで、一瞬緊張しかけた空気は一気に和やかなものへと変貌を遂げた。
「それもそうですな。それでは、会を始めるとしましょう」
ユハルは、厳かな口調で晩餐会の開始を告げた。

晩餐会が始まるや否や、ミーアはさっそく目の前の料理に手を伸ばした。
まず、手前、ターコースの黄色っぽい生地の上にキノコを載せて焼いたものに手を伸ばす。一口大に切られたそれを一気に口の中に放り込む。
パリィッと生地が弾ける音、コリッというキノコの舌触り、トロッとしたソースの感触、食感三重奏に、ミーアの舌がステップを踏む。
続いて手を伸ばすのは、キノコの串焼きだ。先ほどのキノコより大きめな、黒いキノコ。鼻を近づけてみると、なんとも言えない芳醇な香りがミーアの鼻をくすぐった。
パクリとかじると、前歯を心地よく受け止める弾力感の後、ぷつっと歯が食い込む心地よい感触がする。味付けは塩のみのようだっ

たが、むしろそれゆえに、淡白なキノコの、微かにして複雑な味を楽しむことができた。
さらにミーアは突き進む。今度はキノコを肉で挟んで焼いたものだった。
焼きたての肉からジワッと湧き出す肉汁と、キノコのシャク、コリッという食感、その見事さにミーアの口から思わず、
「素晴らしいお味ですわ……。シェフに最大限の賛辞を……」
などと、偉そうな感想が零れ落ちてしまったほどである。
気付けば、ミーアは欲望の赴くまま、キノコ、キノコ、キノコ、キノコ、と三種のキノコ料理をお腹の中に放り込んでいた。
俗にいう、駆け付けキノコ三杯というやつである。
キノコを食べることで、胃袋を膨らませ、食べれば食べるほど食欲がわいてくるというミーア第一の奥義である。
……まぁ、どうでもいい。
「ああ……素晴らしい。大変、美味ですわ。たまりませんわね！」
「まぁ、ミーア姫殿下は、とても美味しそうにお食事を召し上がるのですね」
王の隣に座った王妃が、優しげな笑みを浮かべていた。
「お料理が見事だからですわ。それに、このお野菜の新鮮なこと。キノコも絶品ですわ。このように、豊かな実りを生み出すペルージャンとは、ぜひこれからも変わらぬ友誼を結んでいきたいものですけれど……」
ミーアはチラリ、とシャロークのほうに目をやった。
シャロークは、ミーアの視線などどこ吹く風、とばかりに、料理を頬張っていた。
……そして、彼の前の皿に、肉料理ばかりが取り分けられているのを、タチアナが厳しい目で見つめていた。

第四十二話　トゲのように蝕むもの

「ユハル陛下、この度は、このように素敵な席を用意していただき、感謝いたしますわ」
ミーアはかつてないほどに絶好調で、勝負の時を迎えようとしていた。
お腹は満腹、戦意も上々。
その上、この場には頼りになる味方、ルードヴィッヒやアンヌが控えている。ラーニャもいざとなれば加勢してくれるはずだし、なにより、切り札のタチアナもいるのだ。
さらにさらに、空腹ミーアの食べっぷりを見て、王妃も弟王子も友好的な雰囲気。
――これは、どう転んでも負けませんわ！
まるで、十万の大軍で一万の敵を包囲殲滅しようとする、大将軍のように……、絶対の勝利の確信と余裕を持ちながら、ミーアはユハルのほうを見た。
「いえ、こうしてわざわざ収穫感謝祭に足をお運びいただいたのですから、当然のことにございます」
腰の低い王に、ミーアは笑みを返す。
「なにをおっしゃいますか？　我がティアムーンとペルージャンの仲、わたくしとラーニャさんの仲ですわ。アーシャさんにもお世話になっておりますし、来るのは当然のこと。これからも、固い信頼関係を築いていければよろしいのですけれど……」
なにげない言葉の中で、しっかりとペルージャンとティアムーンとのこれまでの信頼関係を強調。その上で、シャロークの信頼を揺らして、国王の気持ちに揺さぶりをかけるつもりであった。のだけれど……。
「信頼関係……ですか」

王は、なぜか苦笑を浮かべた。
その顔が……なぜだろう……、ミーアは少しだけ気になった。
けれど、だからと言って、そこで立ち止まるわけにはいかない。
「ええ、友好的な信頼関係ですわ。ですが、実は、先日、よからぬ噂を聞いて、わたくし、大変に憂慮しておりますの。なんでも、ティアムーン帝国に対しての小麦の価格を、飢饉に合わせて吊り上げようとされているとか……？」
「……さて、なんのことでしょうか？　私にはさっぱりと……。第一、飢饉が来るなどと、そのようなことは誰にもわからぬことではありませんか？」
ユハルは、見るからに驚いた、という顔で、そんなことを言う。
「とぼけるのは、やめにしましょう。ユハル陛下。ペルージャであれば、察しがつくのではなくって？　去年から、小麦の収穫量は減少傾向にある。これを機に、小麦の値段を吊り上げれば、なるほど、儲かりはするでしょうけれど、民は飢えることになりますわ。そちらの、シャロークさんの差し金かもしれませんけれど……、その方は……」
とても信用が置けない、ただのいい人ですわよ！　などと、続けようとしたミーアであったが……。
「ははは、なるほど。民を思うそのお心、お見事にございますな、ミーア姫殿下」
突然、笑い出したユハルに、ミーアはきょとん、と瞳を瞬かせた。
「民を思う、優しき慈愛の聖女のお姿、さすがでございます……。昨冬のあのやり方もお見事でしたな。我が娘の心も掴んだようですし、先ほどの小麦の道を行く演出も、あなたさまはどうやら、人の心を誘導する術をお持ちらしい。その御年にして、末恐ろしいことです」
ユハルは、静かな笑みを浮かべて、言った。
「民が飢えることのないように、と大義名分を掲げて、我が国を縛りに来ましたか？　そう言えば、私が、あなたの言葉に従うと？」

――ふむ……。
ミーアは、その言葉の中にあるトゲに気が付いた。
否、正確に言えば……、その前、信頼関係という言葉を口に出した瞬間から、それはあったのだ。それは鋭い剣のような敵意ではなかった。むしろ、注意していても気付かないほどの小さく細かいトゲ……。さながら、あの、小麦のトゲのようだった。
気付かず、無視して踏み抜けば、後で苦痛にのたうち回ることになる危険なトゲ……。決して油断して、無視しても良いものではない……。
そんな危険な兆候を敏感に察知して……、ミーアは……静かに手を伸ばす。目の前のテーブルの上にある、たわわなフルーツに！
甘いものを補充して、脳内を活性化させる作戦である。ミーアの常套手段である。
口に入れたペルージャンベリーの甘味と酸味に、ミーアの脳内が一気に覚醒する。
それからミーアは、ユハルとシャロークの顔を改めて観察する。そうして……、ふと思う。
もしかして……帝国への信頼感って想定以上に低いんじゃないかしら？　と……。
てっきり、シャロークなどという怪しげな商人と同程度はあるものだと思っていた。だからこそ、シャロークの信用度をほんのちょっぴり下げてやれば、帝国を裏切るようなことはないと……、そんな甘い想定でいたのだが……。
ミーアは、自らの油断に歯噛みする。
そう、戦は、そう甘いものではないのだ。
十万の兵を揃えていると思っていたが……その実、ミーアのもとにある兵は、大半がハリボテで……。敵とほぼ同数程度の戦力しかもっていなかった。戦力は拮抗していたのだ！
そして、そこまでの作戦を練らずに、ミーアはこの場に臨んでしまったのだ。

――なんたる失態！　これは、ヤバイですわ。
懸命に打開の方策を練るものの、
「帝国の都合を押し付けたいというのならば、どうぞ、武力を持ち出しなさい。そうすれば、我らは逆らうことなどできないのですから。信頼などと、民のためなどと、綺麗事を言う必要はどこにもございませんよ」
――ああ、それでは意味がないのですわ。力で押さえつけたのでは、力が落ちた時に裏切られてしまう。弱っている時に敵になるなど、最悪の展開……。ぐぬぬ、今までの帝国貴族の態度の悪さを甘く見てましたわ！
突如として劣勢に立たされたミーアは、心の中で帝国貴族に毒づく。それから、なんとか、態勢を立て直そうと模索するが……。
「それは違います。お父さま」
援軍は意外な方向からやってきた。
それは、会場の入り口の方から聞こえてきた女性の声で……。
「アーシャ？　帰っていたのか？」
ペルージャン第二王女、アーシャ・タフリーフ・ペルージャンが、そこに立っていた。

第四十三話　姉妹姫ＶＳユハル王

「ご無沙汰しております、お父さま」
現れた姉、アーシャの姿を見て、ラーニャは安堵のため息を吐いた。
姉をこの場に呼んだのは、ほかならぬラーニャだった。
当初、アーシャは今夏の帰国を見合わせる予定だった。
聖ミーア学園での講師としての仕事もあるし、なによりミーアから託された大切な仕事である、小麦の品種改良の研究もある。
収穫感謝祭はペルージャンの重要行事ではあるが、感謝の演舞はラーニャさえいればできることだ。
だから、アーシャからは帰らないとの連絡を受けていたのだが……。
――お父さまの様子がおかしかったから、念のためにお呼びしておいたけれど、正解だったわ。
「戻ってきたのか。息災のようでなによりだ」
アーシャの姿を見て、ユハルは意外そうな顔をした。
「帰ってくることはできぬと、報せが届いていたが……」
「どうしても、お父さまにお話ししたいことがあり、戻ってきました」
「そうか……」
チラリと父の視線が飛んでくるが、ラーニャは素知らぬ顔で、目の前のフルーツを口に入れた。
別に悪いことをしているつもりはまったくない。
――だって、ミーアさまに味方したほうが、絶対に上手くいくし……。
そのような確信が、ラーニャにはあった。
先ほどの会話が、彼女の頭に甦る。

ミーアは言ったのだ。
「信頼をもって説得する」と。
「力をもって屈服させるつもりはない」と。
目の前で、はっきりとそう言ってくれたのだ。
それからラーニャは、ミーアの後ろに立つ青年を見た。眼鏡をかけた鋭利な瞳を持つ青年、ミーアの腹心、ルードヴィッヒ……。
最初、彼の話を聞いた時、ラーニャは非常に驚いた。
ペルージャンを脅すなどということを言い出した時には、こんな奴、ミーアの臣下に相応しくない！　とすら思った。
けれど、今となっては彼の意図が、ラーニャにはよくわかった。
彼は、ミーアの真意をラーニャに聞かせるために、あんなことを言ったのだ。ラーニャの心に一片の疑いすらも生じぬように、ミーアに否定させて見せたのだ。
――ミーアさまに相応しい知性の持ち主……。あの眼鏡の奥の目には、きっと揺らがぬ真理が映っているんだろうな……。
そんな感慨にふけっている間にも、アーシャと父、ユハルの会話は続いていた。
「お父さま、私はミーアさまの学園で、子どもたちに農業を教えています」
「もちろん、聞いている」
「そうですか……。では、ミーアさまの命を受けて、寒さに強い小麦の研究をしていることは、ご存知ですか？」
「寒さに強い小麦……だと？」
ユハルの顔に驚愕が走る。それは、その場にいたペルージャンの者たち、さらに、シャロークも同様だった。
アーシャは深々と頷いてから、ミーアのほうを見た。
「申し訳ありません、ミーアさま。事後承諾になってしまいますが、私の研究のこと、父に話すことをお許しくださいますか？」
わざわざそう尋ねる姉を見て、ラーニャは反射的に思った。
――ああ、お姉さまは……、ルードヴィッヒさんと同じことをし

ようとしておられるんだ。
アーシャはすでにミーアの思惑を知っている。ミーアがなにを思って寒さに強い小麦を開発させるのか……。
その知識を、どうしようと考えているかということも。
寒さに耐性を持つ小麦……、そんなものがあれば、それは、冷害による飢饉が発生した時、極めて強力な武器になる。他国が不作にあえぐ中、自国では平常通りの収穫を得ることができるのだから。
それゆえ、本来であれば秘密としておくのが普通だ。このような場で、明かしてよい秘密では決してない。
少なくとも、ペルージャンの常識ではそうだ。
……にもかかわらず、
「はて？　別に構いませんけれど……」
そんな特大の暴露であったにも関わらず、ミーアは涼しい顔をしている。怒ったりすることは決してないのだ。
その、一見するとなにも考えていないようなミーアの顔を、ユハル王に見せつけた上で、アーシャは言った。
「私は寒さに強い小麦を、学園の生徒たちとともに研究しています。民を飢えから救うという、幼き日の夢を実現するために……。有意義な仕事だと思っています」
「愚かな……。寒さに強い小麦など、そんなものあるはずが……」
「あら？　寒さに強い小麦はございますわよ？　アーシャさんとセロくんが必ず見つけ出しますわ」
ミーアは、まるで、それを知っているかのように断言する。
ユハル以上に、アーシャのことを信じているようで……。その絶対的な信頼を目の当たりにして、ユハルは鼻白んだように黙り込んだ。
「だが、それすらも、しょせんは帝国の繁栄のためではないか。なるほど、寒さに強い小麦ができれば、民は生きるためにそれを買うだろう。民は小麦を得、寒さに強い小麦を持つ帝国は、その分、金を独占することができる……」

「ミーアさまは、その小麦の知識を、周囲の国々に分け与えようとされています」
父の言葉に、アーシャがすかさず反論した。
「おわかりいただけなかったでしょうか？　だから、このように、私が話しても、ミーアさまは何もおっしゃらないのです」
「お姉さまのおっしゃっていることは本当です」
そこで、ラーニャが立ち上がった。自分がミーアになにをしてもらったのか……、話すのは今しかないと思った。
「ミーアさまは、私にも道を示してくださいました。アーシャお姉さまが成功した暁には、その小麦の知識を大陸全土に広めればいいって……。悩む私に、進むべき道を、有意義な道を示してくださったんです」
誇りをもって進むべきその未来が、ラーニャには輝いて見えた。
帝国の叡智の照らしてくれた道は、まばゆいばかりに輝いているのだ。
「馬鹿な……。仮に、寒さに強い小麦ができたとして、その技術を簡単に他国に渡すわけがない。それほど重要な情報を簡単に他国に渡すなど……」
それは、農業によって豊かさを目指してきたユハルには受け入れがたい考え方であった。
農業の技術とは、ペルージャンにとっての宝であり、武器なのだ。それは、容易に他国に渡すことなどできない大切なもののはずで……。
「必要とあらば、ペルージャンに研究の成果を持ち帰っていただいても構いませんわ。アーシャさんはペルージャンの姫君ですし、ティアムーン帝国で良き発見があれば、自国の農業にも応用してみたいと考えるのは当然のことですわ」
ミーアは穏やかで、優しげでさえある笑みを浮かべていた。
「もしよろしければ、ペルージャンの土地もお借りして、そこでも寒さに強い小麦を育てたら良いのではないか、などとも考えており

ますのよ。共同で研究を進めれば、両国にとって、とても有意義なものとなるでしょう」
そこまで言われてしまえば、ユハルとしても認めざるを得なかった。
ミーアは本気で、民を飢えから救おうと考えている。それも、自国の民だけではない。周辺の国すべての民を、である。
――きっと、お父さまもわかってくださるはず……。
そう期待したラーニャであったが……、直後にその期待は裏切られる。
「そのような……、民を思う姫殿下が、なぜ、ペルージャンの境遇を黙って見過ごされるのか？　姫殿下は、今までのまま……、我らに奴隷のままでいるようにと、そうおっしゃるのか？」
まるで、血を吐き出すような、震える声で、ユハルは言った。

第四十四話　わたくしを信頼していただけるかしら？

ユハルの叫び……、それは、ルードヴィッヒにとって、痛みを覚える言葉だった。
ユハルの言うことは、ルードヴィッヒにはよくわかること……、帝国とペルージャンとの間には、たしかにフェアではない条約が結ばれていて……。
それはどうしようもないことでもあった。問題があるとわかってはいても、どうにもできない……、目をそらすしかない問題で……。
もっとも、それはあくまでも帝国側の理屈。ペルージャンの側には、彼らの主張があった。
「長年、帝国との条約により、我がペルージャンの小麦は不当に安く買い叩かれてきた。帝国がある限り、我が国は、永遠に農奴の国とのそしりを免れぬ。いかに口では綺麗事を言おうと、この現実は変わらん」
それは、どうにもならない現実だった。相手を納得させることなど不可能、まして信頼を勝ち取ることなど、絶対に不可能で……。
どうしようもない、仕方ない、と、諦めて目を逸らしてしまいそうなことで……。
けれどミーアは……、
「そう……。そのような条約が……」
たった一呼吸の逡巡の後に……、
「ならば、そのような条約、撤廃してしまうのがよろしいですわね」
こともなげに言った。
まったく、なんでもないことのように……、まるで、なにも考えていないかのように。
あるいは……、それが動かしがたい、絶対の真理であるかのように……。

ミーアは言い放ったのだ。
そんな条約、捨て去ってしまえ……と。
その言葉に、その場の何人かが固まる。
ユハル王、シャローク、そしてルードヴィッヒも……。
そんな中、いち早く立ち直ったのは、ほかならぬルードヴィッヒである。
「ミーアさま、それは……」
そんな彼の顔を見て、ミーアは納得の顔で頷いた。
「ああ、もちろん、わたくしにはそのような権限はございませんから、できることは、それを取りやめるように働きかけることだけですけれど……」
と、ミーアは、一言、ユハルに断りを入れてから、
「できるかしら？　ルードヴィッヒ」
ルードヴィッヒに視線を向けた。

――ここで、俺に振るのか！
突然のミーアの言葉に内心で悲鳴を上げるルードヴィッヒ。一瞬、素が出てしまいそうになるのを懸命に抑えつつ、それでも彼は考える。ミーアの言ったことの意味を。
自分には絶対に不可能であると思えることでも、ミーアが言っているのだ。
きっと意味があるに違いない。
まず、道義的な面から言えばミーアの主張は正しい。たしかに帝国とペルージャンとの間には、ペルージャンの国民を農奴扱いするような、不平等な条約が結ばれている。
非常に大まかに言うならば、それは、帝国の必要とする量の小麦を、割安の価格で売ることを中核にした条約だった。
毎年、価格の交渉は形だけ行われるものの、軍事力を背景に、ほとんど帝国の要求通りの値段で取引が行われている。シャロークは、ここに目をつけて、帝国の軍事介入を引き起こさない程度に価格を

釣り上げ、食糧不足に陥った帝国に様々な要求を呑ませようと画策していたのだろうが……。
ともかく、ペルージャン側としては、二束三文にもならない小麦のために、広大な土地を占拠されているのも同じ状況であった。
しかも、せっかく輸出した小麦を悪しざまに言われては腹も立つだろう。これを放置することは、少なくとも公正とは言えない状況だった。
また、ミーアの構想「ペルージャンと信頼関係を結ぶこと」に鑑みても、この条約が邪魔をしていることは間違いない。
その意味でも、それを撤廃してしまえ、というミーアの考え方はシンプルで、理にかなっている……。
――問題は実現性だが……。
なにしろ、ミーア自身も言っていた通り、ミーアにはそのような権限はない。
事は国と国との約束事にかかわる。いくらミーアが皇帝の寵愛を受けているとはいえ、皇女という立場に、そこまでの力はないし、わがままで通せることでもない。
そう……ミーアがただの姫ならば……。
言うまでもなく、ミーアの権勢は帝国内のみならず、大陸でも有数のものだ。
ヴェールガ公国の聖女ラフィーナ、サンクランド王国のシオン王子、レムノ王国のアベル王子……。
彼らは、ミーアが正しいことをしようとするならば、協力を惜しむことはないだろう。
それに加えて、帝国四大公爵家の子女たち……。こちらもミーアが頼めば否とは言うまい。
加えて今のミーアには国民の圧倒的支持もある。
そんな絶大なる後ろ盾を従えた、帝国の姫の「働きかけ」である。
ミーアに権限があろうがなかろうが関係ないのだ。その「働きかけ」は、担当の月省の長の言葉より、宰相の言葉より……場合によ

れば皇帝をすら凌駕するほどの力を持つのだ。
実現性は、決して低いとは言えない。
――なにより決定的なのが、それが、帝国の改革に必要だということだ……。
ルードヴィッヒは、戸惑いつつも認めざるを得なかった。
ミーアの言うことが、帝国をより良い方向に改革していく上で、絶対に必要であるということを。
なぜならペルージャンとのこの条約がある限り、帝国貴族は、自領の農地を増やそうとはしないだろうから。
どうせ、ペルージャンから安く小麦を仕入れることができる。その想いがある限り、帝国内の食糧自給率を上げることは困難だった。
ゆえに、帝国の農地を速やかに改革しようとするならば、ペルージャンへの依存を減らしていく必要があるのだ。
――明快な論理だ。実に……、あいつらが実に好みそうだ。
ルードヴィッヒの頭に浮かぶのは、自らの同門の者たち。先日、彼が声掛けし、協力を願った者たちの顔だった。
賢者ガルヴの弟子たちが、このミーアの考え方を理解し、その必要を示されたならば……、その行政処理能力のすべてをもって動き出すに違いない。
なにせ、自分の力を発揮する場を探してやまない連中だ。生き生きと張り切って、死力を尽くすに決まっている。
そして、それは……条約交渉の権限を持つ者にすら恐らく届きうるだろう。
――ゆえに、できるかできないかで言えば……できる。
それをする道義的「理由」があり、それをする合理的「必要」があり、それをする「力」さえある。
さらに……、ルードヴィッヒは、あることに思い至って、思わず感嘆のため息を漏らした。
――ああ、だからか……。だから、この「時」にミーアさまはこんなことを……。

ルードヴィッヒは知っている。大きな改革には、反対がつきものであるということを。
平穏な日常とは言ってしまえば、止まった状態だ。同じような毎日、同じような一年が続いていく、静寂と停止の時。
変わらない、止まっているということに民衆は、安心を覚えるのだ。
それを変えること、すなわち止まっているものを動かすことに対しては必ず反対が起こる。止まっているから安心できるのだ。変化した先が今より良いとは限らない。否、それが「良いこと」「正しいこと」であったとしても、反対の声は小さくはない。
人間は本質的には保守的で、変わることを恐れるからだ。
ゆえに、ルードヴィッヒには、本来ならば反対する理由があった。
ミーアのやろうとしていることは貴族のみならず、民の反感をも予想できることだったからだ……。
けれど……。ああ、けれどなのだ。
――今、この時に限って言えば……、その反対する理由は消失する。
平穏な日常に変化をもたらすことは難しい。されど変化というものは……ミーアが起こすまでもなく起きるものだ。
時代の流れは今まさに≪飢饉≫という形で、大陸の国々に否応なく変化を強いるところなのだから。だから、ミーアがやろうとしていることは……。
――ミーアさまはその激変に合わせて一挙に帝国の改革をするつもりなのだ。
飢饉によって、弱り、壊れた国を〝元の形〟に直すのではない。〝新たな形〟に作り替えようとしているのだ。
中途半端な改革ではダメなのだ。それでは途中で頓挫する。
そのことが今のルードヴィッヒにはわかっていた。いや、本当のことを言えばもともとわかっていたのだ。わかっていて、今まで見ないふりをしていた真理に、ミーアが光を当ててくれたのだ。

――飢饉により貴族も民も食糧自給に危機感を覚える……、その記憶が鮮烈なうちに、事を一気に進めてしまおうというのか……。
時代の流れすらも視野に入れた壮大なる構想に、ルードヴィッヒはめまいがする思いだった。
――だからこそ他人に頼れ、他人を使え、か……。確かに、このようなお考えを実施するには、俺一人では無理だ。
そう思いつつ、ルードヴィッヒは考えを整理しながら口を開いた。
「そうですね……。帝国内では現在、農地を増やすよう働きかけを行っています。農地が増えれば、必然的に、帝国が輸入する小麦の量も減るでしょうから、段階的に、ペルージャンとの条約を改定していくことは可能ではないかと考えます。帝国がペルージャンから輸入している小麦の量を減らしていくとか……」
ルードヴィッヒは慎重に、自らの考えを提示する。
それは、数年越しの改革になるだろう。
けれど、帝国への輸出量が減り、余った小麦を適正価格で他国に卸せるようになれば、ペルージャンに入っていくお金は増えるはず。状況は改善されていく。
あるいは、小麦以外のことに、その土地を使うこともできるかもしれないが……。
――いや、そのあたりの国内のことはペルージャンの民が考えることだろう。
その行き着く先の、最終的な形はわからない。
軍事力を持たぬペルージャン農業国であるから、安全保障の名目で、多少帝国に有利な形での取引は残るかもしれない。
そもそも改革自体も段階的に進めていくべきものであり、いきなりすべての不平等が解消されはしないだろうが……。
それでも……、それは希望の光になるだろう。
毎年、少しずつでも状況が改善していけば、ペルージャンの農民たちにとっては大きな希望となるのだ。停滞から希望への歩み……その歩みが遅くとも、進んでいくことに意味があるのだから。

そうして、ペルージャン農業国とティアムーン帝国とがウィンウィンの関係で結ばれる。それこそが、ミーアの思い描く両国の新しい形。

ルードヴィッヒの話を聞き終えても、まだ、ぽかんと口を開けているユハル王……。そんな彼に、落ち着き払ったミーアの声がかけられる。

「けれど……、それもすぐにというわけにはいきませんわ。最初に言った通り、これから数年間に及ぶ飢饉がやってきますの。帝国で農地を増やしたとしても、おそらく間に合わない規模の……」

そこで言葉を切って、ミーアはユハルを見つめた。

「だから、今ここでできるのは口約束に過ぎない。その上で……、わたくしを信じていただけるかしら？　わたくしを「信頼」していただけるかしら？　ユハル陛下」

ミーアは問うた。

自分を信頼するか？　と。

帝国と、一から信頼関係を結ぶつもりはあるか？　と。

第四十五話　大将軍ミーアの容赦ない残党狩り

――これは……、なんとかなったのかしら？
ユハル王の顔を見ながら、ミーアは、心の中でニンマリ笑う。
てっきり、シャロークをボコボコにしなければならないものと思って用意していたわけだが……、それをするまでもなく完勝できてしまいそうな勢いである。
――アーシャさんとラーニャさんの援軍が効きましたわね。うふふ、我ながら、わたくしの人徳が怖いですわ！
人徳の人、ミーアは徳が滲みだすようなニマニマ笑いを浮かべる。
ちなみに、言うまでもないことではあるのだが……、ミーアには深い考えなどない。もちろんない。
ルードヴィッヒが言っているようなことを考えているわけもなし。
ミーアの思考はいつだってシンプルだ。それはもう、シンプルにシンプルを掛け合わせたような、一に一を掛け合わせたような思考こそ、ミーアの真骨頂である。
ミーアが愚直に考えていたことは、ただ一つだった。
それは、ペルージャンとの信頼関係だ。
ペルージャンには豊富な農作物がある。だから、不作の年にも、ある程度の余力があるだろう。豊富な農作物を持つ隣国と仲良くしておけば、困った時に助けてもらえるに違いない。
そんなペルージャン農業国との関係を邪魔する条約が存在する。
ならば、どうするか？　ミーアならば、それをどうするか？
簡単なことだ。目的のために邪魔になるものならば排除するのみである。
その邪魔な石っころを蹴り飛ばしたら、どんなことになるのかとか、そういう難しいことはとりあえず置いておけばよい。
というか、難しい話はルードヴィッヒに任せてしまえばよいのだ。

ミーア的にはシンプルイズベストに、邪魔者は蹴り飛ばすのみなのである！

その結果、なんとなくではあるが、ペルージャン国王の態度が軟化してきたっぽい気がする。

これは、流れが来ているか？　などと、満足感を覚え始めるミーアであったが……。

「……ペルージャン国王、まさか契約書も交わさぬ口約束を、信用なさるつもりではありますまいな？」

水を差すかのような、シャロークの苛立たしげな声が聞こえた。

ユハルが驚愕したのと同様に、シャロークもまた驚愕を隠しえなかった。

そもそも、彼にとってはすべてが不意打ちのようなものだった。

皇女ミーアが予定より早くこの国にやってきたことも、こうして、晩餐会に招待されたことも……。

思えば、招待を受けた時点で、疑ってかかるべきだったのだ。けれど、彼は不審に思わなかった……。否、そう思いたくはなかったのだ。

自分の動きをすべてミーアが把握しており、なおかつ、ペルージャン国王の心を溶かす術を持っているなどと……。

そもそもが、そのような深刻な話に持っていく必要など、まったくなかったのだ。

今まで通りの付き合いをすると口約束をしておき、飢饉が起きた際には価格は上昇するものであるから、多少の値段交渉はさせてもらうことも付け加えておく。

その程度の軽いやり取りで、この場を乗り切れば良かったのだ。

にもかかわらず……、ペルージャン国王が乗ってしまったのは、ミーアが口にした言葉に原因があった。

「友好的な信頼関係」

……なんとも白々しい言葉ではないか。

ティアムーンとペルージャンの関係を知っている者であれば、決して言えないような言葉、帝室の姫が口にすれば、憎悪すら抱かれかねない偽善の言葉……。
あの一言は、確実にユハル王の逆鱗に触れるものだった。
本音など作り笑いの裏に隠して、適当にその場を乗り切る……、それこそがこの場での最善策。
心でたくらむ悪だくみを証明することは不可能。であればこそ、感づかれることなく、尻尾をつかませることもなく、無駄な話で時間を潰せば良かったのだ。
されど、皇女ミーアは逃がさない。
あえてユハル王の怒りを誘い、自らのフィールドに引きずり込んだ。そこを起点にして、あとはミーアの独壇場だった。
次々と到来する援軍に、シャロークは口を挟む余裕もなかった。
それは、ただの談笑で誤魔化そうとしていた者と、この場で勝負を決めに来た者との差だった。
そうしてミーアは、シャロークが拠り所にしていたもの、ペルージャンが抱く帝国への不信感をすべて払拭した上で言っているのだ。
自分を信頼するか？　と。
自分の言葉を信頼し、受け入れるか？　と。
「ユハル陛下……、よもや、そのような言葉を信じるわけではありますまい？」
そう言ってはみるが……、シャロークは自らの言葉に力がないことに気付いていた。
なぜなら、すでに、ユハル王が魅せられていたから。帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンの見せた、希望の光に……。
――最悪のタイミングで、最悪のことをやっていく……。なるほど、これが帝国の叡智か……。
「ああ、シャロークさん、わたくし、あなたにもお話がございましたの」
ふいに、ミーアがこちらを向いた。

「以前、わたくし、あなたに言いましたわよね？　お金がすべてではない、と……。それに対して、あなた、なんて言ったか覚えてますかしら？」
ミーアは、わざとらしく頬に指をあて、首を傾げて見せる。
「たしか、お金のためにならないことをやるのは甘いとか、そんなことを言ってたかしら？」
「さようです、ミーア姫殿下。商人とは金に信仰を捧げて生きる者。我が神はこの世すべてを支配する力である金です」
答えつつ、シャロークは自身が冷静さを欠いていることを自覚していた。そして、動揺の原因もわかっていた。
金がすべてではない、と言うミーアの言葉と体現する行動。それは、シャロークの今まで生きてきた道のすべてを否定するものであったから……。
……もしかしたら、間違っていたかもしれないと言う……微かな傷口をえぐる言葉だから。
自身が、ほかならぬユハル王と同じ状態にあることを自覚しつつも……、それを止めることができなかった。
「商人、いえ……、人はそのようにあるべきではありませんか？　人は働くもの。何のために働くのか？　それは金のためではありませんか……。ならば、効率的に金を儲けるために最善を尽くすことこそが、正しいのです」
自身の一生は金を儲けるためにあり、商人は持てるすべての知恵と力を使い、効率的に金を儲けるべきである。そうでなければならない。
だから……、寒さに強い小麦などという、金儲けの情報を、ただで教えて回るという暴挙が許されるはずがなくて……。
「そうかしら？　あなたも昔は、ずいぶんと……、あら？　どうかしましたの？」
ふいに、ミーアが眉を顰める。
なにが、どうかした、なのか……、一瞬わからずにいたシャロー

クであったが、直後、胸に強烈な痛みが走った。
「う……ぐぅ」
「シャロークさまっ！」
悲鳴にも似た少女の声が聞こえて……、直後、シャロークの意識は深い闇の中へと落ちていった。

第四十六話　ミーア姫、腕をブンブンする

シャローク・コーンローグが倒れた時、一番に動き出したのはタチアナだった。
崩れ落ちる巨体を受け止めようとして、受け止めきれずに、一緒に転倒。それでも頭だけは打たないようにしっかりガード。
それから、体の下から這い出すと気道を確保し……、最低限の処置を施す。
てきぱきと指示を出すタチアナを、ミーアは、ぽけーっと口を開けながら見つめていた。
せっかく、精神的にとどめを刺しにいったところを物理的に倒れられるとは、さすがのミーアも予想外だったのだ。
そうして、大の男四人がかりで運ばれていくシャロークの巨体を横目に、ミーアは、タチアナに話しかけた。
「シャロークさん、大丈夫なんですの？」
「あ、はい……。恐らく、ですが、一時的な発作ではないかと思います。呼吸も落ち着きましたし、少し横になっていれば……」
「あれは、なにかの病気なんですの？」
「病気……かどうかは、調べなければわかりません。ただ、同じような症状の話は聞いたことがあります。ある裕福な国の貴族さまが、あのような症状で亡くなったと……。その方は、美味しいものをたくさん食べて、一切、運動をせず部屋で生活していたそうです」
タチアナは難しい顔で、腕組みする。
「つまり、食べ過ぎと、運動の不足によって、あのような病にかかるということです」
タチアナの話を聞きながら、ミーアは自らのお腹をさすってみた。
――食べ過ぎと……、運動の、不足……っ！
「幸い、まだ間に合わないというほどではありませんが……、あの

……、申し訳ありません、ミーア姫殿下……、私、シャロークさまのことが気になるので、行ってきてもよろしいでしょうか？」
「はぇ？　あ、ええ……もちろんかまいませんわ。心配でしょうし……」
タチアナに話しかけられたミーアは、慌てて頷き……、もう一度、自らのお腹をさすってから……ふぅむ、と考える。
「シャロークさんが運び込まれた治療室は、どこにございますの？　ああ、お城の中の、少し離れた場所……ふむふむ、なるほど……それは好都合……。たしかに気にはなりますしね……」
ミーアは、うんうん、と頷いてから、
「ならばタチアナさん、わたくしも一緒に行きますわ」
「え？　なぜですか？　ミーアさま」
きょとんと首を傾げるタチアナ。その純粋な視線を受けて、ミーアは、ススススッとお腹を隠すように体の角度を変えてから……。
「なぜ……、えーと……、そうですわね」
……言えない。まさか、寝る前にちょっとでも運動しとかないと、ヤバイと思ったからなどと……。言えるはずがない。
ミーアにだってプライドというものがあるのだ。
かといって……お見舞いに行くというのもおかしな話だ。自分が行ったところで何ができるわけでもなし。そもそも敵同士なので、行ってやる義理もない。
むしろこの場で、ユハル王との会談を続けるのが普通ではあるが……。
ゆえに……、ミーアは難しい顔で考え込むことしばし……、やがて考えを開陳する。
「……シャロークさんが、弱っているからですわ」
そう、大将軍ミーアは知っている。戦で情けは無用。敵の弱った部分を徹底的に叩く必要があるのだ。
シャロークは今、弱っている。それゆえに、今こそ彼にとどめを刺し、二度と帝国に楯突くことがないようにする必要があるのだ。

断じて、運動のためではない。ミーアは、最後の戦いに赴くのだ！
と、まぁ、そんな具合に自分に言い聞かせつつ、ミーアはニッコリ笑みを浮かべた。
「ようやく、あなたの出番がやってきましたわよ、タチアナさん」
そう、シャロークにとどめを刺すための切り札、タチアナは、まさにこの時のために連れてきたのだ。
彼女の存在を示して、シャロークに言ってやるのだ。
「お前なんかが冷酷で合理的な商人を名乗るなどおこがましい。お前はしょせん、甘さも弱さも思いやりもある、普通の人間に過ぎないんだ」と。
そのためには、タチアナの協力が不可欠。
ゆえに、逃げられないようにミーアは釘を刺す。
「しっかりと、働いていただきますわよ、タチアナさん」
と、タチアナの目を見つめて……。

「ミーアさま……」
その言葉を聞いて、タチアナは納得する。
ミーアの、いくつかの言葉の意味が……、今こそ理解できたのだ。
――ミーアさまは、シャロークさまが弱っているのを見て……お見舞いに行かれるつもりなんだ！
と。
先ほどのやり取りを見る限り、ミーアとシャロークの仲は良くない。というか、敵同士といった感じである。
だからてっきり、ミーアは“自分を使って、シャロークを痛めつけようとしている”のだと、タチアナは思っていた。
けれど……違った。
――ミーアさまは、シャロークさまを、救われようとされているんだ！
すべての事象が、今まさに、タチアナの目の前でつながっていくかのようだった。

あのクロリオの池でのできごと……。ミーアは言った。
「率直さを失うな」と。
「物おじせずに注意せよ」と。
そして、もしもそのことで、タチアナが危機に陥る時には自分が助けてやるから、と勇気づけて、背中を押してくれたのだ。
ミーアの言葉は次々に甦ってきた。
ミーアは言っていた。「すべてはシャローク次第である」と。
それは、まさに、今この時のようなことを言っていたのだ。
知っていたのだ……、ミーアは。シャロークが、このままの食生活を続けていたら、体を害することを。
だから、タチアナを連れてきたのだ。健康を損なうような生活を諌めさせるために……。
――ううん、それだけじゃないかもしれない。もしかしたら……、ミーアさまは……。シャロークさまに思い出させようとしているのかもしれない……。
タチアナに不健康を諌めさせることでシャロークの命を救い、なおかつ過去に彼がなした素晴らしいことを思い出させようとした。
心と体、同時に健康に戻すために、ミーアは自分を連れてきたのではないか？
そんなことさえ思ってしまう。
――シャロークさま次第だと言いながら、できるだけ、シャロークさまが、破滅せずに済むようにする……、正しい道に戻れるようになさるなんて……。
それは医の道にも通じるのかもしれない、とタチアナは考える。
シャロークが節制をするかどうか、それはたしかにシャローク次第で、彼が長生きしようがしまいが、健康であろうがなかろうか、最終的にはシャロークの選択にかかっていて……。
「でも、働きかけることはできる」
なにもできないと、諦めてしまう必要はない。
聞く耳を持たない者に、それでも何度でも伝え続ける。そうすれ

ば、いつかはその言葉に耳を傾ける日が来るかもしれない。
真摯に受け止めるがゆえではない。ただやかましいがゆえに、その言葉を止めるために、話を聞いてくれることだってあるかもしれない。
――シャロークさま次第……、ミーアさまのお言葉は、冷たい言葉のように聞こえたけど……。
タチアナは、今、心底からミーアに感謝した。
この場に、自分を連れてきてくれたこと……、シャローク・コーンローグという恩人を救えるかどうかという……、この分水嶺に、自分を連れてきてくれたことに！
「ミーアさま、行きましょう」
そう言ってタチアナが見ると、なぜだろう……、ミーアは、なんだか、腕をぶんぶん回していた。
それは、ミーアの連れている少女、ベルの動きに似たものだった。

第四十七話　糸

深く、暗い闇の沼に、落ちていく、落ちていく。
閉ざされた視界、音のない世界……匂いもなく、味もなく、温もりすらも感じない世界。
――なるほど、これが死ぬということか……。
ここが、自分の人生の終着点……、これですべてが終わり……。
すべてが、今、断ち切られてしまう。明日のために立てていた計画も、売ろうとしていた商品もすべては無に帰する。そんな現実を唐突に突き付けられて……、シャロークは思いのほか動揺した。
あの夢で、たしかに自分の終わりを知っていたはずだった。いつかは、こんな日が来ることはわかっていた。されど、それは「いつか」であるはずだった。
こんなにも唐突に訪れるものであるとは、思っていなかった。
彼は……、冷徹な商人らしくもなく慌てた。
胸を覆う感情、それは形を成さぬ焦燥。
矜持にかけて、自身のこれまでの人生を否定することなどできぬと……、意地を張ってはみたものの、死のもたらす終焉は、たやすくそんな虚飾をはぎ取ってしまう。
後に残るのは、否定のしようのない後悔。
ああ、なるほど、自分は失敗して……、その失敗を認めることができずに、それを正す機会すらふいにした。
彼は失敗し……、頑なに最後まで失敗し続けた。
絶望の闇が、その身を蝕んでいく。
あの日の夢のように、醒めることは、もうない。濃密な暗い沼に沈み込もうとした、まさにその時……、ふいに、彼は見つけた。
目の前に見えた違和感……、闇を切り裂くようにして目の前に垂れたそれは、白く細い糸……、今にも切れてしまいそうな頼りない

糸に、されど彼は手を伸ばす……。
それがなにを意味するかはわからなかった。けれど、溺れる者が頼りなき藁にすがるように、闇に溺れた彼は懸命に手を伸ばし、伸ばして――そこで、目が覚めた。

「う、む……ここは……？」
視界が真っ白く染まり、直後に音が戻ってくる。
「お目覚めになられましたか、シャロークさま」
初めに聞こえたのは可憐な声……。そちらに目を向けると、一人の少女の姿が見えた。見覚えのある少女だった。
「お前は……、たしかミーア姫殿下とともに来ていた……」
「タチアナと申します。シャロークさまがお造りになった奨学金制度で、セントノエルに通うことができている者です」
「えっ、あっ、ちょっ……」
タチアナの言葉の直後、なにやら、珍妙な声が聞こえたような気がしたが……、シャロークは未だ、ぼんやりとした頭のまま、考える。
「奨学金……？　ああ……」
そういえば、そんなものもあったな、と思い出す。
それは、シャロークがまだ駆け出しの頃、初めて仕事で大成功した時に作ったものだった。
あの頃は、儲けた金を人のため、社会のために使おうなどと……、青臭いことを言っていたものだったが……。
――浅はかで、愚かで、世間の厳しさも、人の残酷さも知らぬ時にした、くだらぬ所業だな……。
そんなもの、金貨一枚の得にもなりはしない。シャロークは鼻で笑い飛ばす。
――くだらない感傷、なんの意味もないもの……。
ふと、そこで、彼の口元に皮肉気な笑みが浮かんだ。
「いや、それは私の人生も同じこと、か……」

自分の人生に、なんの価値も、意味もないことを突き付けられた今となっては、もはや、彼にはなにが正しいのかがわからなくなっていた。
「無事に目が覚めましたのね」
今度は別の声が聞こえる。視線を転じると、そこには……、
「どうやら、大丈夫そうで安心しましたわ」
皇女ミーアが立っているのが見えた。
「これは、ミーア姫殿下……、まさか、私めの見舞いに来ていただけたのですか？」
その問いにミーアは、一瞬、タチアナのほうを見た。なにかを確認するかのような、そんな顔をしていたが……すぐに首を振って、それから、小悪魔めいた、妖艶な笑みを浮かべた。
「いいえ、わたくしは、あなたにとどめを刺しに来ましたの」
「ほう、それは物騒な……。もしや、毒でも盛るつもりですかな？」
ベッドの上、起き上がろうとしたシャロークであったが、ミーアは片手をあげることで動きを制す。
「ああ、無理しない……ではなく、また倒れられたら面倒ですわ。そこに横になったままで結構ですわ」
以前のシャロークであれば……、それでも起き上がろうとはしただろう。
彼にとって、相手との向き合い方は交渉の基本である。立ち上がり見下ろすほうが効果的か、椅子に腰かけたまま高慢に対応するか、はたまた、膝をかがめ、平身低頭の姿勢をとるか。
されど……、シャロークは素直にミーアに従った。
先ほどの、死の気配が彼の中から、虚勢を張る理由を取り去ってしまっていたのだ。
「そうそう、素直なのは良いことですわ。それと、毒などと面倒なことをせずとも、あなたにとどめを刺すことはできますわ」
ミーアは、穏やかな笑みを浮かべながら言う。
「人は、自ら蒔いた種の実りを、必ず自分の手で刈り取らねばなら

ぬもの。あなたにとどめを刺すのは、ほかならぬ、あなた自身が蒔いたものですわ」
その言葉に、シャロークは一瞬、目を瞬かせて、それから苦笑いを浮かべた。
「ああ……。なるほど、それは……至言ですな」
改めて、シャロークは思う。
自身を絶望に陥れるもの、それが、毒などではないことを、彼は実感していた。
「そういう意味では、あなたはすでに死んでいるとさえ言えるのかもしれませんわね」
死が、あの絶対的な絶望であるというのなら……、出逢うのが今か、後かという違いでしかない。終焉の形は変わらない、だから、すでに死んでいる……。
ミーアの辛辣な言葉は、シャロークの胸を深く貫いた。
「慣れない種を蒔くものではないという話ですわ。失敗しましたわね、シャロークさん」
「どうやら、そのようですな……」
シャロークは小さく首を振った。
――私は、どこかで間違えたのだろう……。
行き着く場所が、あの絶望の暗闇であるというなら、たしかに自分は間違えたのだ。
しょせん、死すればみな、行く場所は同じ……。すべて、人は虚しさの内に無に帰するのみ……。
そのように豪語することが、今の彼にはできなかった。なぜなら……、目の前の少女、帝国の叡智が上り詰める場所が、あのような場所だとは、どうしても彼には思えなかったからだ。
――慣れない種か。あるいは、あの終焉に満足できる者というのもいるのかもしれないが、私はそこまで強くなかったということか……。だが……、ならばどうすれば良かったというのだ……？
らしくもなく物思いに耽るシャロークを、ミーアが……なぜだろ

う……、憐れむような瞳で見つめていた。

第四十八話　キノコ女帝ミーアのエール

実のところ……、ミーアは、すでにシャロークに攻撃する気はなくなっていた。
ここに来るまでには、どうやって心を折ってやろうかと考えを練っていたミーアであるのだが……、ぐったりと横たわるシャロークを見て、その気持ちはすっかり失せてしまった。
いかに敵で、悪徳商人とはいえ、弱っている人間を足蹴にできるほどの胆力はミーアにはない。
それに……、ふと思ってしまったのだ……。シャロークは……自分ではないか？　と。
そこに横たわる男は、節制せず、好き放題に食べ散らかした将来の自分ではないか……と。
――いや、さすがに、ここまではなりませんわ……。
心の中でツッコミを入れつつも、ついつい自分のお腹を触ってみるミーア。シャロークまでは、まだかなり猶予がありそうである。
ともあれ、ミーアの本能が叫ぶのだ。この男を責めるのは、ちょっぴり気が引ける……と。
――考えてみれば哀れな方ですわ。ただ、美味しいものをお腹一杯食べて、ダラダラしていただけなのに、こんなことになるなんて……世の中間違ってますわ！
憤るミーア。ミーアはシャロークのＦＮＹに同情と共感を覚えてしまっていたのだ！
だから、目を覚ますのを待って、おとなしく帰ろうと思っていたのだが……、タチアナが唐突に暴露を始めたので、驚いてしまった。
――ちょっ！　よろしいんですの！？　タチアナさんっ！
思わず、問いかけたくなるミーアであったが……、寸でのところで思いとどまる。

――被害を最小限にするため……、そうなんですのね？
ミーアは、タチアナの考えを察した。
やるべき時に思い切り叩いておかないと、ダラダラと被害は大きくなるのみ。
シャロークも同じこと。ここで回復してしまえば、また聞く耳を持たなくなってしまう。弱っている今だからこそ、徹底的に叩き、そうして、悪だくみから足を洗わせるのだ。
――悪だくみには加担せず、静かに養生してもらうことこそ彼のためになる……そのような判断なのですわね？　タチアナさん……。
ならば、とミーアは立ち上がる。
成り行きとはいえ、協力者としてついてきてくれたタチアナが、恩返しをしようというのだ。ここは、一肌脱いで、悪役を演じてやろうじゃないか！　と決意したのだ。
そうして、ミーアは口を三日月形にする。
エリスの物語に出てくる悪役の令嬢のような、わるーい笑みを浮かべて、ミーアは言った。
「慣れない種を蒔くものではないという話ですわ。失敗しましたわね、シャロークさん」
あれだけ悪ぶって、偉そうなことを言っておきながら、実は普通に優しいおじさんだったなどと……なんたる恥ずかしさかっ！
心を鬼にして、ミーアはシャロークを蹴る！　未来の自分だったかもしれない人物を論理のキックでビシバシ、ビシバシ！　蹴りつける！
――これもシャロークさんを救うためですわ！　ただの良いおじさんとして、余生を健康に過ごさせるためなのですわ！
そう、自分を励まして。
っと、シャロークがうっすら開いた目で見つめてきた。
「ミーア姫殿下……、一つ、お聞きしたいことがございます」
「……あら？　なにかしら？」
「ぜひ、聞かせて、いただきたい……」

シャロークは、その身を起こしつつ、言った。
「もしも、自分が、どうにもならぬところまで、道を間違えてしまったら……、そのことに否応なく気付かされてしまったら……あなたならどうするだろうか？」
その質問に、ミーアはきょっとーんと首を傾げた。
――いきなり、変なこと聞いてくる人ですわね……。話を変えてごまかそうということかしら……？　でも、逃がしませんわ。ここでしっかりと心をへし折って、ただの良いおじさんになっていただきますわ！
ミーアはフンス！　と鼻息を吐いてから、すぐに答えを出す。
「そんなの決まっておりますわ。間違ってしまったところまで戻って、そこから正しい道を探すしかありませんわ」
そう、ミーアは知っている……。キノコ狩りに訪れた森で、迷った時はどうするか？　ということを。
簡単だ。迷った場所まで、来た道を戻ればよい。
ここ最近のミーアの愛読書、さる冒険家の手によって書かれたグルメ本「キノコ百珍」にはそう書かれていた。
そもそも、道に迷った時には、どうにもならないところまで……などと言っている場合ではないのだ。道を進んできた労力を惜しんではいけない。戻らずに歩き回ればますます迷ってしまい、余計な体力を消耗するだけなのだから、戻る以外に方法はないのだ。
そして、ミーアは……、その真理を人生にも転用できると思っている。
そう、かつてミーアは、周囲の反対により、キノコ料理の研究を断念した。馬型キノコソテーや、キノコスイーツを極めるという果て無き探求の道は、入り口で閉ざされてしまったのだ。
……けれど、あれは、大きな誤りであったとミーアは思っている。
――やはり、わたくしは……キノコが好きですわ！
キノコ百珍を読んだことで、ミーアの中に一つの決意が固まった。
――必ずや、アベルに、生徒会のメンバーに、わたくしの渾身の

キノコフルコースを食べさせて差し上げますわ！
高貴なる紫色のキノコを握りしめ、ミーアは高らかに宣言する。
それは、キノコ皇女（プリンセス）ミーアが、キノコ女帝（エンプレス）への道を歩みだした歴史的瞬間であった！
まぁ、どうでもいい話である。
それはともかく……、
「間違ってしまう前、か……。なるほど、そのようなものがあるならば、どれだけ良かったか……」
などと、独り言をつぶやくシャロークに、ミーアは追い打ちをかける。
――ごまかそうったってそうはいきませんわよ！　質問には答えましたし、話を戻して、きちんととどめを刺させていただきますわ！
腕組みし、勝ち誇った笑みを浮かべてミーアは言った。
「あなたは認めるべきですわ。彼女……タチアナさんも、あなたの蒔いた種であると……」
“タチアナの存在は過去の自分のちょっとした過ち”などと言われないように、予防線を張りつつ、ミーアは指摘する。
「え……？」
「あなたを救ったのは、そちらのタチアナさんですわよ」
「い、いえ、そんな……」
話を振られ、タチアナは慌てた様子で首を振った。
「救ったなんてそんな……、あれは簡単に治療できるものではありませんから……。あっ、でも……」
と、言葉を切って、タチアナはシャロークを見つめた。
「甘いもの、脂っけの多いものを食べて、運動をせずにいると体を蝕まれます。太りすぎれば、心の臓に負担がかかり倒れますし、これからもっと酷いことになるかもしれません。ですから、食事にはもっと気を使われたほうが良いと思います」
呆然と、タチアナの言葉を聞いているシャロークに、ミーアは補足する。

「タチアナさんは、謙遜しておられますけど、実際、あなたが倒れた時には一番に飛びついて、頭を打たぬようにしていましたし、あなたを救ったのは間違いなく彼女だと、わたくしは思いますわ」
タチアナがぼかしそうになったことを、あえて明確にしておく。
シャロークを救ったのは、タチアナである、ときちんと明示した上で……、
「タチアナさんのお父上はお医者さまでしたけれど、彼女が幼い時に亡くなってしまいましたの。タチアナさんは、お父さまと同じ、医師の道を目指していた。けれど、お金がないから、それを諦めなければならなかった。ああ、なんという悲劇かしら……」
いささか芝居がかった、大げさな仕草で言葉を続ける。
「けれど、そんなタチアナさんを救うものがありましたの。それこそが、あなたが設立した奨学金ですわ、シャロークさん。あなたには、なんの得にもならない、奨学金ですわ！」
金のためにならないことはやらないとか、人の不幸さえ金儲けの手段とか……そんな風に悪ぶっている人間が、過去に自分がやった善行に救われる。
――これは恥ずかしいですわよ！　悪ぶってるやつが一番、やられたくないやつのはずですわ。
ミーアは、そこで、ぽんっとシャロークの肩に手を置いた。
「ねぇ、もうよろしいではありませんか？　シャロークさん。あなたは、お金がすべてで、お金こそが力で、神だとおっしゃってましたけれど、あなたを救ったのは、無駄遣いの結果だった。そろそろ認めるべきですわ、お金がすべてでは、決してないと……」
そうして、ミーアは慈愛に満ちた笑みを浮かべて、
「くだらない悪だくみで寿命をすり減らすなど愚かなことですわ。養生なさい。そのための手伝いは、タチアナさんがしてくださいますわ。しっかりとその助言に聞き従うこと、いいですわね？」
シャロークの心をへし折った上で、タチアナの恩返しへと導く。
そうして、すべてをやり切った顔で、ミーアはエールを送る。

――頑張って、せいぜい長生きするとよろしいですわ、シャロークさん。共に健康には気を付けていくことにしましょう。
自らのＦＮＹの先達へと……。

「ああ……ああ……そうか……」
シャロークは……、かすれる声でつぶやいた。
自分はたしかに間違えた。
されど……自分の人生のすべてが無駄であったわけではなかった。
いつか、どこかの未来で……、商人王と呼ばれた男が無価値だと切り捨てたものが……、決して耳を傾けようとしなかった弱き者たちの、救われた者たちの声が……、今、たしかにシャロークのもとへと届いた。
「そうか……、なんだ、こんなにも簡単なことであったか……」
道に迷ったならば、迷う前まで戻ればいい。
反省という名の自己嫌悪に疲れ、自分なんかこんなものだと諦めて……、いつしか迷っていることさえ見ないふりをした。
気付けば森の奥深く、迷い迷って……、今さら道は変えられぬと、冷笑するばかり。けれど、そんなシャロークにミーアは……こともなげに言うのだ。
戻ればいい、と……。
金がすべてであるというのは、誤りであるから、その呪縛にとらわれる前に、戻ればいいだけなのだ、と……。
彼の目に甦るのは、かつての風景。師匠のもとから独立し、行商を始めた頃の記憶だ。
遠い地の珍しい玩具に目を輝かせる子どもたち。
美しく、珍しい柄の布に楽しそうな声を上げる若い娘。
異国のキセルに上機嫌になる旦那衆。
商品を運び、人々に喜んでもらう、そんなことにかすかな誇らしさを、彼はたしかに覚えていたのだ。

初めて仕事で成功した時、なんだか、あまりにも嬉しくなりすぎて……、なんだか、いいことをしてみたくなったりして……。
だから、奨学金を設立するなどということにも手を出した。
あの時は、ずいぶんと仲間の商人たちに笑われたものだった。
――青臭い。けれど、純粋だった。純粋にこの仕事を楽しみ、誇りを持つことができていた。
いつからだろう……楽しみが、仕事そのものから金を儲けることに変わったのは……。
いつからだっただろう……、仕事を誇らず、金持ちであることを誇り出したのは……。
明確なきっかけがあったわけでは、たぶんない。
ただ、なにかのきっかけで、こうしたら客に喜んでもらえるかもしれない、が、こうしたらもっと儲かるかもしれないに入れ替わってしまった。
こうしたら、楽ができ、こうしたらもっと高く売れ……、そうして、仕事をすることの喜びが、金をたくさん儲ける喜びにとって代わられた……。
「シャロークさま……」
見れば、タチアナという少女が真っすぐにこちらを見つめていた。
「大丈夫です、今からなら、まだ、間に合います。一緒に頑張りましょう」
恐らくは、彼女が言う間に合うは体調的なものだろう。けれど、今のシャロークには、それが、自らの生き方についてのように思えてしまって……。
「そう……か。まだ、間に合うか……」
そうしてシャロークは、長い間、味わうことのなかった晴れ晴れとした気分になるのだった。

第四十九話　ペルージャンの夜

ミーアとの晩餐会を終えた、その日の夜のこと……。
ユハル王は王妃とともに、寝室にいた。
「先ほどは、あの商人が倒れてしまったので、曖昧になってしまいましたね……」
心配そうな顔をする王妃に、ユハルは首を振った。
「いや、恐らくミーア姫殿下は、我らに考えさせる時間を与えるつもりではないだろうか……」
ミーアには、あえてあの場面でシャロークを追う必要などなかった。
あの場で混乱がおさまった後、改めて、ユハルに聞いてくることもできたし、決断を迫ることで、圧力をかけることもできたはず。
にもかかわらず、ミーアはそれをしなかった。
「自分の申し出に絶対の自信があるということか……」
「いいえ、そうではないと思います、お父さま」
突然の声、と同時に二人の娘たちが姿を現した。
「アーシャ、ラーニャ……」
「失礼いたします」
二人の娘のふいの訪問に……されど、驚きはなかった。
なんとなくだが……話をしに来るような、そんな気がしていたのだ。
「お父さま、少しお時間、よろしいでしょうか？」
「そうだな……。私も、お前たちに話しておかなければいけないことがあったな……」
ユハルは、娘たちを部屋に招き入れると……、深々と頭を下げた。
「すまなかったな……。帝国との条約の件、お前たちには話していなかった」

ペルージャンとティアムーンとの間に結ばれた条約、それは、この国が始まった時に結ばれたものだった。
もともと、ペルージャン農業国は、肥沃なる三日月地帯にティアムーン帝国が興ったことに呼応して生まれた。
肥沃なる三日月地帯を占領した狩猟民族と、侵略され、農奴に貶められた農民たち。帝国の手を逃れた農民たちが、南方へと移り住み、作った国こそがペルージャン農業国だった。
いずれ、この地も帝国に併呑されるに違いないと考えたペルージャンの開祖は、先手を打ち、帝国にある取引を持ち掛ける。
この地を耕し、一定量の小麦を帝国のために作るから、自分たちの国の存続を認めてほしい、と……。
帝国の初代皇帝は、その願いを聞き入れた。
そこにどのような思惑があったのか、ユハルにはわからない。そんなことをせずとも、すぐに併呑して、農奴として使えばよかったはず……。
けれど、とにもかくにも、ペルージャンは独立を保障された。
以来、ペルージャン農業国は帝国に依存、隷属することで、国としての体面を保ち続けた。生かさず殺さず、帝国はペルージャンの農産物を低価格で搾取し続けたわけだが……。
それは、ペルージャンでは王族と、一部の者しか知らぬことであった。
なぜなら、もしも帝国に対する恨みが高まり、衝突が起きでもしたら、ペルージャンは終わるからだ。帝国がその気になれば、自分たちなど簡単に侵略されてしまう。
肥沃なる三日月地帯を追われた者たちの間では、特にその恐怖が強かった。
帝国に、侵略する口実を与えては、農奴に堕とされる。そうならないためには、帝国の怒りを買わぬように、なんとか、できる範囲でやっていくしかない。
歴代の王たちは、貧しさから脱却するための術を「帝国との条約

改正」にではなく、「自分たちの農業技術の向上」に求めた。
そうして、帝国との始まりの条約は秘されるようになった。毎年の帝国との価格交渉は王家と一部の者のみが担当し、大部分の国民にはその数字は明かされていなかった。
それは、二人の姫たちも、また同じだった。ユハルは、条約の内容を秘して、帝国のことをお得意さまと、娘たちに説明していたのだ。
産業にとって重要な相手であると……。
一面それは真実でもあって、小麦以外の農産物も帝国は大量に買い上げていた。条約に縛られない農産物に関しては価格も、それなりではあったのだ……だからこそ、帝国に対する民の心理は微妙なところがあった。
「お前たちは、いずれは他国に嫁ぐ身。そう考えて、余計なことは教えぬようにしていたのだが……」
ユハルの言葉に、アーシャが小さく首を振った。
「今は、そのことについては、なにも言いません。それで、どうなさるおつもりですか？」
「さて、どうしたものか……な」
たしかに帝国との条約がなくなれば、大部分の土地は使えるようになる。今ある小麦を帝国以外の国に卸すか、もっと金になりそうな作物を作るか、なにかしらの方針が必要だった。
「小麦の縛りがなくなる代わりに、今までより帝国軍に頼れなくもなるだろう。より富むことはできるだろうが、それを守るための軍備は整える必要が出てくるだろう」
さすがに帝国に匹敵する軍備とはいかないまでも、他の周辺国と伍する程度には、兵力が必要となる。それは、当たり前の考え方だ。だが……、
「なにか、言いたいことがあるか？」
ラーニャの顔に、かすかな不満を見て取って、ユハルは言った。
言った直後……、自身の言葉に、ユハルは驚いた。

娘に意見を聞こうなどと……今までの彼ならば思いもしなかったことである。
――私もまた、ミーア姫に影響を受けているということか……。
だが、同時に興味もあった。
あの帝国の叡智……、一国を、ただ一度の晩餐会でここまで揺るがしてしまう少女のそばにいた娘たちが、いったいどのような答えを出すのか……。
ラーニャのほうも、父親の変わりようにわずかに戸惑いを見せたが、すぐに首を振ってから言った。
「それは……、この“ケーキのお城”を建てた、先人たちの思いに反することになると思います」
ラーニャが言うのは、子どものような綺麗事だった。
いつか来るかもしれない戦なき世界と、戦を視野に入れぬ城のおとぎ話。
子どもしか信じることのできない、夢物語。
にもかかわらず、その言には、なんの迷いもなかった。
その理由が、今のユハルにはよくわかる。
帝国の叡智であれば、そんな現実離れした未来でさえ、成し遂げてしまうのではないかという期待感が、ラーニャにそれを言わせたのだ。
だが、もしも……、もしもラーニャが信じるとおり、本当にそのような世界が実現可能であるならば？
はたして、ペルージャンの民として、取るべき正しき姿勢はなにか？
「我らは、大地を耕し、人々に食の恵みを届ける者。その誇りを捨ててはならないのではないでしょうか」
その言葉より滲むは、ペルージャンへの誇り。
この地に国を構えて以来、ペルージャンの民がなしてきたことへの、圧倒的な自負。
ラーニャがまとうのは光だった。

それは、余光だ。
黄金の坂を、帝国の叡智と隣り合って上ったラーニャもまた、叡智の輝きを受けて、まばゆいばかりに光を放っているかのようだった。
それを見たユハルは驚きに目を見開いて……、次の瞬間、わずかばかり笑みを浮かべた。
――ああ……、大きくなったのだな……。
つぶやいてから、改めて思う。
ラーニャも、アーシャも、ペルージャンの姫として、立派に自分のなすべきことをしようとしている。
そのような中で、自分がすべきことはなにか……。
「お父さまは、ご存知ですか？　ミーアさまが、セントノエル学園の入学式で、どんなお話をされたのか……」
黙考するユハルに、ラーニャは言った。
ミーアが入学式の際に示したもの、パン・ケーキ宣言の話……。
「飢饉の時には互いの国で助け合う、か。ミーア姫殿下以外の者が言えば、正気を疑ってしまいそうなことだな……」
「私は、ミーアさまは、あらゆる意味で型破りな方だと思っております」
ラーニャに続き、アーシャが語りだした。
「あの方は自国の民のみならず、大陸の、他の国の民のことも、等しく大切に思っておられる。ミーアさまに講師へと誘われた時、私はお断りするつもりでした。にもかかわらず、お話を受けたのは、私が知ったからです。私が目指していたものは、ペルージャンの民が飢えないことではない。それでは不足なのだ、と……」
まっすぐに、こちらを見つめてくるアーシャに、ユハルは息を呑む。
中途半端な父への反発が隠しきれていなかった、かつての娘の姿はすでになく……。そこにあるのは、大きな役割を負った若き研究者の姿だった。

「あの日、ミーアさまに見せていただいた光……、パン・ケーキ宣言は、まさに、その続きにあるもののように感じます」
「パン・ケーキ宣言……、それに寒さに強い小麦と告げ知らせる者の必要……。我ら、農業の国、ペルージャンの解放……新しき歩みか……。なるほどな……、ミーア姫殿下が我らにお求めのものがようやくわかったような気がする。そして、お前たちがなにを言いたいのかもな……」
そうして、ユハルは快活に笑った。
それはいつもの卑屈な笑みではない。なんとも子どもっぽい笑みだった。
「なるほど、それは……面白い」
せっかく帝国から自由になれるというのに、ミーアの思惑に乗ってしまうことは、あまり意味がないことなのかもしれない……が、
「否、我らは自由になるのだ。ならば、過去の因縁に縛られるのもまた愚か。ならば……、ミーア姫殿下の考えに乗ってしまうのも、また一興……」
ユハル王は、久しく感じることのなかった心の高ぶりを覚えていた。
それは、幼き日に感じた悪戯をたくらむ子どものような気持ち。
「ならば、ミーア姫殿下には、やってもらいたいことができた……」
そんな父の様子に、ラーニャとアーシャは、瞳を瞬かせるのだった。

第五十話　ミーアに巻き込まれた人々

「ここが、ペルージャン農業国……」
ガタ、ゴトと揺れる馬車の中、クロエ・フォークロードは、一面に広がる畑を眺めていた。
「すごい。見渡す限り畑なんだ……」
「我が国土に畑以外の場所はなし、というのがこの国の国是だからね」
「こんな広大な畑、初めて……」
幼い頃より、マルコについて、いろいろな国を回っているクロエだったが、ペルージャンに連れてくるのは初めてだった。
ペルージャンはどちらかといえば、退屈な国だ。
マルコなどは、その農耕技術を見ているだけでも興味がわいてしまうが、子どもは暇を持て余すだろうと、連れてくることはなかったのだが……。
今回の旅への同行を、クロエは強硬に願った。
先日、過労によって倒れた父、マルコが、再び無理をしないように、見張ろうというわけだ。
「別に無理をしようとは思っていないのだが……」
そもそも今回は、顔つなぎのために感謝祭に行くだけである。もちろん、良い作物があれば買い付けることもするだろうが、どちらかといえば肩の力の抜けた旅だった。
しかし、まぁ、そんなことは思ったものの、マルコは娘の同行を止めなかった。
それは、自分を気遣ってくれる娘が可愛かったから……というわけではない。いずれ娘が巻き込まれるであろう巨大な流れ……、皇女ミーアの生み出す壮大な構想にかかわることになるのであれば、食糧の輸送ルートについて、頭に入れておいて損はないからだ。

――それに、いずれは我がフォークロード商会を任せるのであれば、いろいろなところで人脈を作っておくのが肝要。幸い、ペルージャンのユハル陛下は温厚な人物だ。平民のことを見下したりもしないし、きちんと話を聞いて下さるだろう……。クロエに紹介するには、ちょうど……。

「楽しみだなぁ。ラーニャさまの感謝祭の舞……」

「……うん？」

あまりにも自然に娘の口から出た名前……、一瞬聞き逃しそうになったマルコであったが……、

「今、なんと？」

「セントノエルで仲良くしていただいているラーニャさまが、お祭りで感謝の演舞をなさるの。見に行く約束をしたのよ」

クロエはニコニコと嬉しそうな笑みを浮かべていた。

当たり前のように、ペルージャンの第三王女と友だちであると語る娘に、マルコは思わず驚いてしまう。

なるほど、たしかにミーアやラフィーナ、生徒会の王子たちもそうだが、クロエの近くには、雲上人がたくさんいる。

それはもう、マルコでは会うことすら難しいような、王侯貴族がひしめき合っている。

だからまぁ、ペルージャンの姫君と、クロエが友だち関係を築いていること自体は、驚くに値しないのかもしれないが……。

むしろ、マルコが驚いたのは、クロエの交友関係の広さのほうだった。

恐らくはミーアを通して、親しくなったのだろうとは思う。けれど、きっかけがどうあれ、きちんと関係を築き、舞を見る約束までしたのだという。

これは、マルコにとって驚きだった。

クロエは引っ込み思案で、内気で……、いつでも自分の陰に隠れているような娘で……、セントノエルからたまに帰ってきた時も、それは変わらないと思っていたのだが。

――そうか、変わったんだな……クロエも。いや、大人になったということなのだろうか。
それもこれも、すべては、かの帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンの影響だろう。
――あの方は、クロエを、私が想像もできないような場所に連れて行ってくださるのかもしれない……。
子は、親を離れ、親を超えていくもの。わかってはいても、マルコの胸に、一抹の寂しさが過ぎる。
「お父さま、大丈夫ですか？　もしかして、具合が……？」
ふと視線を上げると、クロエが心配そうな顔で見つめていた。
「いや、なんでもないよ。大丈夫だ」
まさか、娘の成長に接してしまって、ちょっぴり寂しい……なぁんて言えるはずもないわけで……、ついつい言葉を濁してしまうマルコである。が、それが逆にクロエの不安を煽ったらしい。
「お父さま、商談などは控えめにしてください。もしも、必要があれば、私が……」
などと……なんとも頼もしいことを言ってくれるクロエに、またしてもマルコはウルっとしてしまう。
「お、お父さま……？」
「ああ、いや、なんでもないよ。そうだな……、私が休んでいるわけにはいかないが、お前にも商談の様子を見せておくことには意味があるだろう」
うんうん、と頷いてから、マルコは笑みを浮かべた。
「クロエ、学校は楽しそうだな」
「え？　あ、はい……。とても充実した時間を過ごすことができています」
「そうか……」
嬉しそうな笑みを浮かべるクロエに、
――私も、そろそろ隠居を考える時が来たのかもしれないな……。
……マルコは、甘く見ていた。

ミーアに近づいた者は、誰も巻き込まれずにはいられないということを、彼は知らなかったのだ。まさか、娘だけでなく自らもまた、その流れの中に巻き込まれつつあるなどとは、思ってもみなかったのだ。

ミーアが方々にばらまいた種が芽吹き……、一つの実りをなそうとしていた。

ペルージャンの夜が今、明けようとしていた。

第五十一話　ユハル王からの依頼

「……はて？　わたくしが、収穫感謝の舞を、ですの？」
突然のことに、ミーアはきょとん、と首を傾げる。
晩餐会の翌日、部屋に訪ねてきたラーニャは、開口一番に言った。
「ミーアさま、私たちと一緒に収穫感謝の舞をしていただけませんか？」
なんだか、真剣な顔でそう言うラーニャに、ミーアは思わず首を傾げた。
「でも、それは……、ペルージャンの姫にのみ許された行為ではなかったかしら？」
収穫の感謝を神にささげることは、民を率いて、収穫を指揮するペルージャンの姫がすべきこと。そのような話ではなかったか？
とミーアは首を傾げる。が……、
「通常の舞はそうなのですが、実は、「マレビトの舞」という客人をお招きしての舞というのがあるのです。貴き客人がいらっしゃる時にする特別な舞なのですが……」
「ふーむ……」
ミーアは腕組みして、小さくうなる。
――なるほど、確かに隣国の大国であるティアムーンの姫が来ているわけですから、貴き客人、ということになるのかしら……？
一応、そのことには納得できるのだが……、
「けれど、わたくしにできるかしら？　どのような舞かわかりませんし……」
「ミーアさまなら大丈夫です。以前、助言をいただいた舞踊のステップなので……」
「ああ、そんなこともありましたわね……」
ダンス（だけ）は得意なミーアは、かつてラーニャから相談を受

けたことがある。
毎年、感謝祭で収穫感謝の舞をしなければならないラーニャであったが、絶望的にリズム感がなかったのだ。
あの時は、大変でしたわ……などと思い出すミーアである。
「それに、ミーアさまには予定より早くいらしていただきましたから。練習する時間はたっぷりとあると思います」
祭りの本番は七日後なので、それまではゆっくり練習することができる。
「ふぅむ、まぁ、そういうことでしたら……」
ダンス（だけ）は得意なミーアは、振付などを覚えることに特に不安はない。
それに、タチアナからも運動をせよと言われている。
――祭りでも、きっとたくさん食べるのでしょうから、踊りの練習で消費しておくことが重要ですわ。
と、そこで、ミーアは思いつく。
「そうですわ。ねぇ、ラーニャさん、その舞の練習に、ベルも参加させてよろしいかしら？　本番に出せなどとは言いませんけれど……」
ミーアと同様、ペルージャンに来てから、いろいろと食べ過ぎのベルである。
運動させなければ、シャロークのようになってしまうかもしれない……。
「はい。構いません。えっと、ベルさんは、ミーアさまと縁（ゆかり）の方、ですよね？」
「ええ、ま……じゃない。妹ですわ」
一瞬、言いよどんだ様子のミーア、そして出てきた『妹』という単語。それで、すべてを察したかのように、ラーニャは頷いた。
「わかりました。ティアムーンの帝室につながりのある方でしたら、むしろ、本番に出ていただいても良いかもしれません。マレビトの舞は、古くは十名前後で舞っていたとも言われています。練習に参

加していただいて、もしも大丈夫そうでしたら……」
「……へ？　あの、ミーアお姉さま、ボクもですか？」
部屋の中央、柱と柱とに張られたハンモックに揺られていたベルが、驚いて飛び起きて……、
「きゃあっ」
そこから転がり落ちた……。
昨晩、シャロークの病室から戻ったミーアは、ハンモックにゆらゆら揺られて、気持ち良さそうに眠るベルの姿を見つけた。
「……もう、食べられません、ミーアお姉さま」
などと……実に満足げな笑みを浮かべていた。
ふと見ると、寝間着がめくれて、ちょこんと可愛らしいおへそが覗いていた。
「やれやれ……、大国の姫にあるまじき姿ですわね……」
ちなみに、ミーアの寝相は、それほど悪くはない。時折、間違ってアンヌのベッドに入って行ってしまうぐらいで（……怪談話などを聞いた際には）
それはともかく、まったく誰に似たのかしら……、などとつぶやきつつも、ミーアはベルの服を直してあげようとして……、気付いた。
その可愛らしいお腹が、ちょっぴり膨れていることに！
「……こんな美味しいもの、食べたこと、ありません。えへへ、いくらでも、食べられて、しまいます」
タイミングよく、ベルの寝言が聞こえてくる。
ああ、この子も、自分と同じ、忌まわしくも甘美なる呪いを受け継いでいるのだ、と、ミーアは悟ってしまう。
美味しい食べ物は無限に食べられてしまうという呪い……、将来、体を蝕まれる悪魔の呪いだ。
けれど、今のミーアは、その呪いを回避する術を知っている。
そう、運動だ！　規則正しい生活だ！
「ベルにも運動させなければなりませんわ……」

そんな使命感に燃えていたミーアにとって、ラーニャからの申し出は渡りに舟だった。
「ベル、美味しいものを食べた分、しっかりと運動しなければいけませんわよ。わたくしと一緒に、舞の練習をしなさい」
ミーアの言葉を受けて、ベルはぴょこんと起き上がる。それから良い姿勢で言った。
「はい、わかりました！　ミーアおば、お姉さまがそうおっしゃるんでしたら、ボク、練習、頑張ります」
とっても素直なベルである。
「あ、でも、もう本番までも時間がないので、ルードヴィッヒ先生との勉強の時間も削る必要が……」
「……それは、やっておきなさい。後で泣きを見ることになりますわよ？」
とってもちゃっかりさんなベルである。
「うう、ミーアお姉さま、やっぱり鬼です……」
途端に泣きまねをするベルに、ミーアは小さくため息を吐く。
――この子……、お父さまぐらいだったら、簡単に手玉に取ってしまいそうで、末恐ろしいですわ……。魔性の女というのは、こういうことを言うのかしら……？
ちょっぴり複雑な気持ちになってしまうミーアなのであった。

第五十一話　ユハル王からの依頼（後書き）

今週でペルージャン編ひと段落……まであと一歩という気もするのですが、
来週は遅れてきたゴールデンウィークということで一週間お休みといたします。
今週は金曜日まで投稿します。

第五十二話　ミーア姫、ダンスに打ち込む！

ラーニャから要請を受けて、ミーアは早速、収穫感謝の舞の練習を始めた。

ペルージャンの演舞は両手に鳴子と呼ばれる、木製の楽器をもって、それをカンカンと鳴らしつつ、リズムよく踊るというものだった。

そしてミーアは、教えられた舞をほぼ完璧に舞っていた。

その流れるような仕草は見とれるほどに美しく、まるで長年にわたってその演舞を舞ってきたかのようにスムーズだ。

言うまでもなくダンスは得意なミーアであるが、それだけではなく、努力の賜物でもあった。

なぜならば……、

「ミーアさまにしていただきたいのは、簡易化したものなので安心してください。正式なものは、すごく大変なので……」

そう言って気遣ってくれたラーニャに、ミーアは言ってしまったのだ。

「あら、わたくしでしたら大丈夫ですわよ？　正式なもので構いませんわ」

などと……。

……そう言わざるを得なかったのだ……。なぜなら、ミーアのすぐ後ろで、ベルが……。

「うふふ、ミーアおば……お姉さまのダンス、とっても楽しみです！」

なぁんて、ウキウキ顔で言うものだから……。

ミーアとしても孫の素直な尊敬が嬉しくないはずもなく、だからつい言ってしまったのだ。正式なほうで構わないと……。さらに、

「ふふん、わたくしの華麗なダンスをしっかりと目に焼き付けると

良いですわ！」
そんな調子の良いことまで言ってしまったのだ。言わなきゃいいのに……。
さて、堂々と宣言してしまった手前、まさか失敗するわけにもいかない。それで練習せずにいられるほどに、ミーアの心臓は丈夫ではない。ミーアは小心者の心臓の持ち主なのだ。
ということで……、本番の演舞で失敗する夢を見たりしてうなされつつも、ミーアは懸命に練習した。練習に練習を重ね、さらに練習する。
ミーアの勉強法は物量作戦だが、ミーアのダンス練習法もまた、物量が命なのだ。
ともかく量をこなすことで、動きを体に覚えこませるのだ。
そうして、すっかり舞踊をマスターしたミーアが、
「ああ、ベル、そこは違いますわ。そこはもっとこう、ふわっとした後に、ぶわわっと回って、ふっと休むのですわ……」
などと、天才的な教え方でベルの指導をしているところに、訪ねてくる者があった。
「お久しぶりです、ミーアさま」
「あら、クロエ、あなたも来てたんですのね……」
久しぶりに見る読み友の顔に、思わず笑みを浮かべるミーアであったが……、
「でも……タチアナさんと一緒に来るなんて、変わった組み合わせですわね」
小さく首を傾げた。
クロエと並ぶようにして現れたのは、タチアナだった。ここ数日は、ずっとシャロークの付き添いとして、そばにいたはずだったが……。
「お父さまにコーンローグさんが、話がしたいということでしたので……」
そう言って、クロエはうつむく。見るからに心配そうなクロエに、

ミーアは優しく微笑んだ。
「大丈夫ですわ。わたくしが、しっかり言っておきましたから！」
鼻息荒く、ミーアは胸を張った。
「ね、そうですわよね？　タチアナさん」
「はい。シャロークさまは、ミーアさまと話されて以来、すっかり変わられました」
そうなのだ、シャロークはあの日以来、すっかりと大人しくなってしまっていた。もちろん、体調の回復に努めているのもあるとは思うのだが、
――うふふ、わたくしがへし折ってやったのが効きましたわね。心を鬼にしたかいがありましたわ！
心をオニテングタケにしたミーアは、うんうん、と納得の頷きを見せる。
「それにね、そちらのタチアナさんが、お薬を飲ませておりますのよ？」
そう言って、ミーアは、悪い笑みを浮かべる。
――タチアナさんも、なかなかにやってくれますわね。シャロークさんを健康にするのみならず、それにかこつけて性格の矯正までするなんて……。うふふ、血液をサラサラにする薬などと……、なかなかのやり手ですわ！
血液がドロドロしていると、短気で怒りっぽくなるという流言（フェイクニュース）を固く信じて疑わないミーアである。
「だから、もう大丈夫ですわ。きっと、そんなに悪いことはしないはずですわ」
きっと、謝ろうというのではないかしら……、などと予想するミーアである。が……、ミーアは知る由もなかった。
そこで謝罪以上の……否、斜め上の会話が交わされようなどということは……。
「この度は大変な目に遭われましたな、シャローク殿」

シャローク・コーンローグの病室を訪れたマルコは、その様子を見て驚いた。
「ああ、フォークロード商会のマルコ殿。このような格好で失礼する」
苦笑いを浮かべるその顔は、少々やつれたようにも見えるが……、なにか憑き物が落ちたかのように、険の取れた様子だったからだ。
「予定していた商談も、すべてご破算になってしまったよ」
「その割には、機嫌が良さそうに見えるが……」
「いや、なに……。死にかけたこともあって、なんと言うか……、いろいろと考えましてな……」
それから、シャロークは、まっすぐにマルコのほうを見た。
「マルコ殿にも大変な迷惑をかけた。謝罪を受け入れてもらえるだろうか」
予想外の素直な謝罪に、マルコは面食らってしまう。
――これは本当に、人が変わってしまったようだな……。言ってはなんだが、かえって怪しんでしまいそうだ……。
苦笑いを浮かべつつも、マルコは肩をすくめた。
「あくまでも、商売上の競争、謝られるには及びませぬが……ミーア姫殿下に、なにか言われましたか？」
「そう……ですな。道を示された、と言いましょうか……。今のまま、金にのみ生きる生き方で死を迎えれば、きっと後悔するだろうと突きつけられてしまいましてな……。年甲斐もなく焦っておるのです。なにかをせねばならぬと……」
「なるほど……」
マルコの中を新鮮な驚きが駆け抜けた。
強引かつ金儲け一辺倒な手法で鳴らしたシャロークを、ここまで変えてしまうミーア・ルーナ・ティアムーンという存在を……。
――なるほど、クロエも変えられてしまうわけだ。いや、クロエだけでもなく、私もか……。
ミーアのパン・ケーキ宣言と、大陸全土を飢饉から救うという構

想（マルコが勝手にそう思ってるもの……）、そこに自分が協力できる部分もあるのではないか、と、いつしかマルコは思うようになっていたのだ。
商人としての自分のノウハウを、今こそ費やす時なのではないか……などと……。
「おや、どうかしましたかな？」
「いや、なに。そういうことでしたら……シャローク殿、ちょうどよい話がございます。ああ、これは、姫殿下から直接言われたことではなく、あくまでも私の勝手な予想なのですが、ミーアさまは……」
かくして、様々な思惑は結実し、ペルージャンの収穫祭が始まる。

第五十三話　夜明けの演舞

ペルージャンの収穫感謝祭は、夕方から夜にかけて行われる盛大な祭りだ。

王都、黄金の天の村（オーロ・アルデア）の中央に位置する広場に建てられし祭壇、そこにあらかじめ保管しておいた収穫の初穂の小麦を捧げて、祭りが始まる。

それは、祭事と宴とが一体化した、にぎやかなものだった。

そんな中……ミーアは……、

「ああ、本当にこのターコース、美味しいですわ。ピリ辛な味がこんなにキノコに合うなんて思ってもみませんでしたわ！　キノコはキノコだけで食べても美味しいですけれど、ほかの食材と合わせても味が引き立つ。奥が深いですわ」

感動に身を震わせる。

薄い生地に包まれたターコース、中身はシャキシャキの葉物野菜と赤みがかったピリ辛ソース、それにミーアの大好物のキノコ。

しっとりとした生地と野菜のしゃっきりした歯ごたえ、キノコのコリッとした食感三重奏に、ミーアの舌が踊りだす。

「ああ、美味しいですわ。ペルージャンの豊かな実りに感謝ですわね。帰ったらしばらくは食べられませんし、しっかりと記憶に刻み込まねばなりませんわね」

いっそ、毎年、遊びに来られないかしら……？　などと思っていたところで、ラーニャの従者の女性がやってきた。

「ミーア姫殿下、それでは、そろそろ……」

「ふむ……！　出番ですわね！　ベル、行きますわよ」

ミーアは堂々と立ち上がる。その体からは、気合がほとばしっていた。

美味しいキノコ料理を食べたミーアの気合は、大変に充実してい

たのだ。
――このような美味しいお料理を食べることができた。美味しいキノコを収穫させてくださった神と、料理を作ってくれたペルージャンのみなさんへの感謝と感動を表現せずにはいられませんわ！
いったん建物に入り、そこで、ミーアはマレビトの衣装を受け取った。
マレビトの衣装は一枚の布を体に巻き付けて帯で締めるというような、少し変わったものだった。下も裾の広いズボンのような、見たことのないものだった。
アンヌに手伝ってもらって早速着替える……が、
「えーと、これが、こうなって……あれ？」
などと、アンヌが戸惑いの声を上げている。
「慣れない衣装だから、苦戦するのはしかたありませんわ、アンヌ。気にせずゆっくりで構いませんわ」
「はい、申し訳ありません。ペルージャンの方にも手伝ってもらいますね……」
そう言ってアンヌは出て行った。
しばらくして、戻ってきたアンヌは、ラーニャの従者の手を借りて、きちんと着付けを仕上げていった。その顔に焦りはない。できないことに劣等感もなく、けれど、すべきことは一つ一つ確認しつつ、作業を進めていく。
あの日、タチアナのようにならなければ、と言った時の面影はもはやない。そこにあるのは、ひたむきに、焦ることなく技術を習得していく、いつものアンヌの姿だった。
やがて、出来上がりに満足したのか、うんうん、と大きく頷き、アンヌは言った。
「ミーアさま、準備ができました」
それを聞いて、ミーアは深呼吸して……、
「ありがとう、アンヌ。では、行ってきますわ」
笑みを浮かべた。

姫たちが裏へと下がり、舞の準備をしている時間、それは、祭りのクライマックス前の一呼吸。
開始直後、ごちそうと酒により盛り上がった宴に訪れた、一瞬の静寂の時だった。
「ユハル陛下……」
静かに酒杯を傾けていたユハルに、話しかけてくる者がいた。
「ああ、貴殿はたしか……ミーア姫殿下の」
「ティアムーン帝国、金月省所属のルードヴィッヒ・ヒューイットにございます。ユハル陛下。少し、お時間よろしいでしょうか？」
ルードヴィッヒはそう言って、膝をつく。
「非礼をお許しいただければ幸いにございますが……」
本来、国王であるユハルに一文官であるルードヴィッヒが不用意に話しかけることは、礼を失することではあったが……。
「今宵は祭り、宴の夜だ。王も民も揃って神に感謝をささげる日、王も民も、神の前ではただ人に過ぎぬ。自由にするがよい」
「感謝します、陛下」
そう言うと、ルードヴィッヒは、ユハルのすぐそばに腰を下ろした。それから、静かに口を開く。
「陛下、ミーア姫殿下に収穫感謝の舞をさせたのは、何故でしょうか？」
ふいの問いかけに、ユハルは特に機嫌を悪くするでもなく、驚くでもなく……。静かに盃を揺らしながら答える。
「いや、なに……。ただの気まぐれ。大した意味など……」
「もしや、顔見せ……、と、そういうことでは？」
鋭いルードヴィッヒの言葉に、ユハルは眉を上げた。
「ほう、さすがは、姫殿下の重臣。見抜かれてしまったかな？」
悪戯っぽい笑みを浮かべるユハルに、ルードヴィッヒは、重ねて問う。
「民にミーア姫殿下の印象を強烈に刻み込む……。その意味は……。

もしや、ペルージャンの今後に深くかかわることではありませんか？」
「ルードヴィッヒ殿は、セントノエル学園の入学式のこと、ご存知かな？」
質問には答えず、ユハルは逆に問うてきた。
例のパン・ケーキ宣言の話はルードヴィッヒも当然聞いていた。その上で、彼はミーアの立てているであろう構想を察知していた。
「あの宣言を形にするとしたら、考えられるのは……、国家を超えた、飢饉に対する組織の構築でしょうか」
「左様。そして、そのような組織には、本拠地となる場所が必要となるだろう。また、その取り組みには農業の知識と、すぐに輸送可能な食糧の備蓄が必要となる……。であれば……、我がペルージャンの地がそれに名乗りを上げてもよいのではないだろうか」
それこそが、ユハル王が思い描いたペルージャンの未来だった。
そして、同時に、それは……、
「我がペルージャンは、帝国自体と信頼関係を結ぼうとは思わぬ。されど、我らはミーア姫殿下ご本人に信頼し、その壮大なる構想に尽力する……。そのための布石として、民にミーア姫殿下の姿を覚えておいてもらいたかったのだ」
それこそが、ユハルが出した答え。ケーキのお城を建てた民が向かうべき未来。
だからこそ、ユハルは重要な演舞への参加を要請したのだ。
「そのお話、我らも大いに興味があります」
ふと、声のほうに視線を向ければ、そこには、二人の男の姿があった。
シャローク・コーンローグとマルコ・フォークロード。稀代の商人二人が、そこにいた。
「コーンローグ殿、お体のほうはもう？」
「なんの……。このような重要な時に、寝込んでいるわけにもいくまい」

と、その時だった。
カーン、カカーンっと……、ざわめきをかき消すように、甲高い木の音が聞こえてきた。
「おっと、これ以上、野暮な話をすることもあるまい……。続きは後ほど」
かくて、後にペルージャンの夜明けの演舞と呼ばれる、姫たちの舞が始まる。

第五十三話　夜明けの演舞（後書き）

昨日、活動報告更新しました。

第五十四話　ペルージャンの夜明け～ケーキのお城の行き着く場所～

カーン、カカーン！
静寂を切り裂いて……。
カーン、カカーン！
夜の空気を震わせて……。
カーン、カーン！　カカーン！
舞が始まる。

火の灯された祭壇、風に踊る炎に照らし出されるは、二人の姫君の姿……。
それは、アーシャとラーニャの姉妹姫の姿だった。
その顔を覆う、薄いベールをなびかせながら、二人は風に揺れる小麦のように、優雅に祭壇の周りを舞う。
ぎこちなさのない滑らかな動きに、その場に集う民は優しい微笑みを浮かべる。
「ラーニャさま、昨年は、もうちょっと……その、アレな感じだったけど……、ずいぶんとお上手になられた」
「本当だ、ご立派になられて……」
などと、我が子の成長を見守る親のような感想が口々にこぼれる。
くるり、くるり、祭壇を回るようにして、ペルージャンの姉妹姫の舞は続いた。
それは、いつもの年と変わりのない風景。懐かしくも、どこかホッとする、毎年の風物詩だった。
けれど、今年は、そこに変化があった。
カカーン、カカーン、カカーン！
聞き覚えのない木のリズム。それに呼応するように、闇の中から、カーン、カカーンっと音が響いた。

そちらに目をやった人々は、思わず息を呑んだ。
そこに立つ人物、その身にまとう衣装に人々の視線が集まった。
マレビトの衣装、それは、遠き東方の地より来たりし旅人がまとっていたものを模して作られたものだった。
布の色は、澄み渡る青空の色、長く垂れた袖には、金糸で小麦の柄が縫い込まれている。
煌びやかな帯には、芽吹きから実りに至る、果実の移ろいの刺繍がされていた。
そして……、それを身に着けたのは、白金色の髪が美しい姫君、ミーア・ルーナ・ティアムーンその人だった。
その後ろには、ミーアの従者、あるいは血縁のものだろうか？
同じ色の髪を輝かせる、愛らしい少女の姿があった。
二人は、呼吸を合わせ、音に合わせ……、ゆっくりと祭壇のほうまで歩み寄る。
「なるほど、今回は帝国のお客人がマレビトの舞を踊るのか……」
などと、のんびり見つめている彼らの目の前で――ミーアが躍動する！
祭壇の前までやってきたところで、リズムが変わる。
“静寂と穏やかさ”から一転、激しい落雷のようなリズムに。それは歓喜のリズムだった。
マレビトの舞は遥か昔、ペルージャンが興るよりもさらに前の、古代の伝承に由来するものだった。
かつて、この地に住まう農民たちは、枯れた土地に苦しんでいた。その時、やってきた旅人が、肥沃なる土地の存在を教え、導いたという。
その時の喜び、歓喜、感謝を表現するのがマレビトの舞なのである。
この激しいリズムはベルには難しく、必然的に中心となって舞うのはミーアだった。
優秀なダンススキルを誇るミーアが、気合十分に踊っている。

――来年も、どうか良き実りを。美味しいキノコをたっぷり、生えさせていただきたいですわ。あと、小麦。ケーキに必要ですし。ああ、それと果物ももちろん。甘いのをたっぷりと、収穫させていただきたいですわ。

などと考えていると、自然、舞にも気合が入ろうというものである。

さっと手を挙げる。そのしなやかな動きを追いかけるようにして、袖がふわりと踊り舞う。それを体に巻き付けるように、体を半回転。急停止して逆回転。

流れるような動から完璧な静、その立ち姿は指先すらも美しく、再びの動。緩やかな動き出しから、激しい炎のような動き。高く上げた足を、たーんっとつき、その場で小さくジャンプ。着地と同時に体を回し、両手の木をカカーンっと鳴らす！

激しくも、神々しさすら覚える完璧なる舞に、人々の心は一瞬で魅了されてしまう。

マレビトの舞が行われたことは、過去に何度かあった。されど……、されど、これほどまでに本気で、熱心に舞った者がいただろうか？

誰もが手を抜き、簡単に、お付き合いで終わらせようというところを、このミーア姫は、自分たちの姫と同様、否、場合によってはそれ以上に熱心に舞っている。

自分たちの収穫を祝うため、神聖なる演舞を、舞ってくれているのだ。

――キノコ、キノコ、美味しいキノコ。ケーキにフルーツ、ターコース。来年もできれば、みなで一緒に食べたいですわー。

……収穫祭に相応しい神聖（？）な願いを胸に躍るミーアである。

そんなミーアに近づいてくのが、ラーニャだった。

ミーアの舞に呼応するように、ラーニャの動きもまた激しい。時にミーアに近づき、時に離れ、まるでじゃれあう小鳥のように、二人は軽やかに舞い踊る。

笑みをかわしつつ楽しげに舞う二人の姫君に、人々は、あの日を思い出す。
あの日……、そう、黄金の坂を二人の姫が手を取り合って登ってきた日のことを。
帝国の姫が示した最大限の敬意と、ラーニャと共に並んで歩く、あの姿を……。
かくて、人々は熱狂する。
舞の見事さと収穫の喜び、そこに、あの日の歓喜が増し加わり、その熱狂は例年とは比べ物にならないものになった。
やがて、舞が終わっても、人々の歓喜の声は鳴りやむことがなかった。
そこに……、満を持してユハル王が歩み出た。
「今年の収穫の感謝を神に！」
「感謝を神に！」
祭壇を背に高らかに叫ぶ王。それに呼応して叫ぶ民。
「そして、誠心誠意、我らに向き合ってくださったミーア姫にも、感謝をしたいと思う」
ユハルは、やり切った顔でホッと一息吐いていたミーアに歩み寄った。
「見事な舞を、感謝する、ミーア姫殿下」
「ああ……いえ、上手く踊れていたなら、よかったですわ」
ミーアは、瞳を輝かせているベルを見て、ちょっぴり満足げな顔で頷く。
「ところでミーア姫殿下……、先日の問いの答えを今、この場でしたいのだが……よろしいか？」
そう言うと、ユハル王は再び民のほうに顔を向けた。
「みなに、頼みたいことがある。今日の光景を、覚えておいてもらいたいのだ。先日の黄金の坂での光景を、熱狂を、感動を、その心に、魂に刻んでもらいたいのだ」
ユハル王の、静かな声が響き渡る。

「みなは、見たはずだ。ここにおられるミーア姫殿下は、我らが知る帝国貴族とは違う。我らに真剣に向き合い……隷属ではなく、信頼の関係を求めてくださっているのだ」
おおおっ！　と人々の口から驚きの声がこぼれる。
帝国貴族から属国だ、農奴だと蔑まれた彼らにとって、対等な信頼関係という言葉は、重い。それが、例え口先だけのものであったとしても、帝国の姫の口から出ることには大きな意味があった。
そして、彼らは知っている。
目の前の姫、ミーアは……、その言葉を証明するかのように、先日来、ずっと行動してきたのだ、ということを。だからこそ、その言葉は決して口先だけのものではないのだ、ということを。
「ゆえに、私は……、ミーア姫殿下と信頼による縁を結びたいと願う。仮に帝国の貴族がなにを言おうとも、我らはミーア姫殿下を信頼する。姫殿下は決して我らの信頼を裏切らぬ方。ゆえに、我らもまた姫殿下の信頼を裏切ることはない。ここに集いし我が民よ、我が同胞よ、ここに誓いを立てよ。これから先、どれほど苦しい時があったとしても、我らとミーア姫殿下との信頼は決して揺らぐことはないと……」
おお……おおおっと、人々の口からこぼれる歓声。それは、さながら波のごとく広がり、やがては王都、黄金の天の村を揺るがした。

ペルージャンの夜明けと呼ばれるこの日は、後の歴史書に刻まれる重大な日となった。
この日こそが、ペルージャン農業国にとっての分岐点となったからだ。

ペルージャン農業国。
ティアムーン帝国の南方に位置するこの国は、長らく帝国の属国と見なされていた。

ろくな軍隊を持たず、軍事的な城を持たぬこの国は、他国から攻められれば単独で対処することは難しく……、それゆえに帝国に依存していた。
けれど、後の世を生きる人々にとって、ペルージャン農業国は、農奴の国などでは決してなかった。
そこは、敬意をもって語られる国だった。
ペルージャン農業国……そこは、飢饉に対する“国家を超えた相互救済の仕組み”通称ミーアネットの本部が置かれた場所であったからだ。
ミーアネットの始まりを、いつにするかは、専門家の間でも議論が分かれるところである。
正式な立ち上げを考えるならば、ペルージャンの夜明けより三年の後、夏が再び暑さを取り戻した時であるし、その原型となる相互支援の取り組みは、その前ということになる。
そして、専門家の中にはこの年、この収穫感謝祭こそが、まさにミーアネットの始まりであった、という説を唱える者がいた。
なぜならば、ミーアネットの中核を担う人物たちが、その本部が置かれる土地であるペルージャン農業国にて、一堂に会したのが、実にこの時だったからである。
ミーアネットの代表として手腕を振るったクロエ・フォークロード。
迅速な食糧運搬のため、商人たちの協力を取り付け、強固な輸送網を確立したマルコ・フォークロードとシャローク・コーンローグ。
農業知識の普及に尽力し、大陸に安定した生産体制を確立したラーニャ・タフリーフ・ペルージャン。
そして……、大陸の貧困国を中心に、医療体制の充実を図った聖白衣の女神、タチアナ。
帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンのパン・ケーキ宣言のもとに集った、ミーアの友人たちは、飢饉と疫病の根絶のために尽力した。

そして、ペルージャンの人々は、それに全面的に協力した。
ケーキのお城は、平和の使者たちの本拠地として長く使われることになるのであるが……。
それは、もう少し先の未来の出来事である。

ミーア皇女伝　ペルージャンの夜明けの章より抜粋

第五十五話　それがベルの生きる道

――ふぅ、昨夜は少し食べすぎたかしら……。
馬車に揺られつつ、ミーアは小さくため息を吐いた。
収穫感謝祭の二日後、ミーアは帰路についていた。
セントノエルまで帰ると、すぐに夏休みになってしまうため、直接、帝都ルナティアに帰る予定である。
ちなみに、シャローク・コーンローグとマルコ、クロエのフォークロードの親子は、ペルージャンで商談があるらしく、もうしばらく滞在するらしい。また、タチアナもシャロークに付き添うと言う。
――セントノエルには、クロエと一緒に帰ると言ってましたし、問題ありませんわね。
ペルージャンに残ったメンバーの間で、非常に壮大な歴史の流れが生み出されつつあることなど、知る由もないミーアである。
ともあれ、現在、馬車には、ルードヴィッヒ、アンヌとベルが乗るばかり。
ラーニャやクロエ、タチアナがいなくなってしまうと、すっかり静かになってしまって……。
「なんだか、ちょっと寂しくなりましたわね」
祭りの後のような、何とも言えない切なさを感じてしまうミーアである。
「にぎやかでしたものね、タチアナさんとの旅行は」
アンヌも、しんみりした様子で言った。
「そうですわね。とっても楽しかったですわ」
果物狩り、王都、黄金の天の都での日々、演舞の練習……、その一つ一つが夏の思い出として、キラキラ輝いているように感じられた。
「はい。大変、有意義な時間でした……」

ルードヴィッヒが、軽く眼鏡を押し上げながら言った。
「できれば、もう少しペルージャンに残りたいぐらいでしたが……」
珍しく、そんなことまで言っている。
――あら、ルードヴィッヒにしては珍しいですわね。夏の思い出とか、そういうのには興味がない方なのだと思ってましたけど……。
などと首を傾げつつも、ミーアはベルに目を向けた。
「そう言えば、ベルも良かったですわね。今年の夏は帝都で過ごすことができますし、リーナさんとも遊べますわよ」
昨年は、追試で涙目になっていたベルだが、今回はテストを受けに帰ることもなし。まぁ、夏休みが終わったら、地獄のテストが待っていると思うのだが、今を刹那的に生きるベルは、そんなの気にしないんじゃないかしら……などと思いつつ話しかけると……、
「あの……ミーアお姉さま、ボク、わかりました」
ベルは、神妙な顔で言った。
「わかった？　はて？　なにがですの？」
「お金でお礼をすることの危なさが、です」
そう言って、ベルは、まっすぐな視線をミーアに向けてきた。
「……ふむ」
ミーアは、一瞬、なんのことやら……と思ったが、もちろん、それを口に出すはずもなく。腕組みして、とりあえずベルの話を聞く体制に入る。
「シャロークさん、あの方は……、お金の魔力にとらわれて、なにより大切なものと考えて、道を踏み外してしまっていました。働くことの目的がお金になってしまいました」
「たしかに。労働と賃金の不均衡は、人々から働く意欲を奪う。過ぎたる大金を得てしまった者は、えてして、楽をしてたくさんのお金を儲けようと思うもの。少ない労働で多くの賃金を求めるようになります」
ルードヴィッヒが補足する。それを受けて、ベルは静かに頷いた。
「だから、安易に大金を渡したらいけない。それが結果的に相手を

不幸にするかもしれない、って、よくわかりました」
　それから、ベルは改めてミーアを見つめる。
「ミーアお姉さまは、ずっとずっと、大事なものはお金ではないんだって言ってきました。お金以上に大切なものがあるんだって、そうやって行動されてきました」
　そう言われ、ミーアは自らの行動を思い出す……。
　――なるほど、たしかに、お金がすべてじゃないって言ってきましたわ……、シャロークさんを見返すためですけど。
　いささか、孫娘には見せづらい動機であった。まぁ、正直にそれを口にするミーアではないが……。
「もしかして、自らの行動を通して、ボクに教えてくださろうとしていたのですか？　帝国の姫としての、在り方を」
　――はて……？　帝国の姫としての在り方……？
　内心で首を傾げっぱなしなミーアである。なんなら、肉体のほうもそれにつられて、若干、首が傾いていたが……、それをごまかすように、ミーアは首を動かして誤魔化した。
　それは……、まるで、深々と頷いているかのような動きだった！
「やっぱり……そうなんだ」
「ベルさま、僭越ながら、ミーアさまは、よくそのようなことをなされます。けれど、時折、そのお考えは二重、三重の深みを持っていることがあります。念のために、間違いがないかどうか、聞いたほうがよろしいかと思いますが……」
　ルードヴィッヒが、くいっと眼鏡を押し上げながら言った。帝国の叡智との長い付き合いを誇る、先達としての自負が溢れる……そのような口調だった。
「はい、わかりました。ルードヴィッヒ先生」
　ベルは、しれっと、迂闊にも先生呼びをした後に、ミーアに言った。
「ミーアお姉さまは、帝国の姫は、恩を受けた者に相応しく生きよと、そう教えておられるのですね」

ベルは胸に手を当てて、そっと瞳を閉じた。
「あの演舞、そして、帝国とペルージャンとの間に結ばれた条約の改定……、新しい関係の構築……、それはすべて、ペルージャンの民から恩を受けた者に相応しい行動だったと、ボクは思います。良くしてもらったことを忘れず、それに相応しく生きる……、ミーアお姉さまはそれを実践しておられました」
澄み切った瞳で、ベルが見つめてくる。
ミーアは、
「……ぇ？　あ、お？　あ、ええ、も、もちろんですわ、おほほ」
目を泳がせまくりながら、言った。
「……でも、そうですわね。結局のところ、それしかないのだと思いますわ。ベル、あなたは、受けた恩を返すべく、精一杯、生き抜くこと、それに相応しく生きること。そして、幸せになること……。それが、あなたに優しくしてくれた人たちの望むことなのではないかしら？」
難しいことはわからない。でも、ベルのことを見ていると、きっと未来のアンヌもルードヴィッヒも、エリスも、その他のベルに愛情をかけてくれた人たちも、それを望んでいるのではないかと、ミーアは思うのだ。
「まぁ、あなたが返せなかった恩は、わたくしが国を良くすることで返しておきますわ。あなたは、もう少し気楽にしていいと思いますわ」
優しく微笑むミーアに、ベルは……、
「はい、ミーアお姉さま！」
力の抜けた、なんとも無邪気な笑みを浮かべて頷くのだった。

第五十五話　それがベルの生きる道（後書き）

本日から再開します

第５５，５話　小麦秘話ヒストリー～幻の大飢饉～

歴史に「もし」は存在しない。
それでも、空想の翼を広げてしまうのが人間というものである。もしもあの偉人が未だに健在ならば、もしも、あの戦争の勝者が別の国だったら……。そんなたくさんの「もし」の一つに、学者たちを青ざめさせるものがある。
もし、あのタイミングで寒さに強い小麦が誕生しなかったら、どうなっていたか……？
空前絶後の大飢饉が、もしかしたら、大陸を襲っていたのではないか……？
現在、大陸で広く収穫されている小麦「ミーア五号」だが、その元となる原種の小麦が、アーシャ・タフリーフ・ペルージャンとセロ・ルドルフォンの二人によって発見されたのは、大陸を寒冷期が覆う、その初期であった。
帝国北方、ギルデン辺土伯領にて、その小麦を見つけた二人は、それを元にして品種改良に着手する。その結果、発見から二年後に「ミーア二号」が開発され、市場に出回ることになるのだが……、当初、その小麦は不評だった。

「あーあー、勘弁してもらいたいな。まったく、なんで小麦がこんなに高いんだ？」
帝都の市場にて……、一人の男が嘆きの声を上げた。
市場に並ぶ小麦の価格は、例年の１．５倍ほどだった。買えないほどではないにしても、文句の一つも言いたくなろうというものである。
「どうやら今年も不作だったらしいぞ。各地で不足の傾向にあるとかで、値段が上がることはあっても、当面下がることはないんだそ

うだ」
「やれやれ、たまらんなぁ……。おっ、なんだ、こっちの小麦は安いじゃないか」
ふと、男が目をとめた小麦袋、そこに書かれた値段は、例年の小麦の価格と変わらないものだった。
「ああ、そいつは政府から供給されてる小麦だよ」
「政府から……？」
怪訝な顔をする男に、商人は苦笑いを浮かべた。
「かなりの量が流通してるんだが……、質がね」
「いまいちなのか？」
「パンにすると、ちょっとね……。どうも粘り気がありすぎて……、焼くと固いし、味もね……」
商人の言葉に、男は呆れ顔を見せた。
「おいおい、何を考えてんだ、お偉いさんは。こんなもの市場に流して……」
不平屋の男は、いつも通り毒を吐こうとして……ふと、その小麦袋につけられた名前に目をやる。
「ミーア二号小麦……？　なんだい、こりゃ」
「ああ、その麦の名前らしい。なんでも、ミーア姫殿下の学園都市で造られた麦らしい」
「へぇ、ミーア姫殿下のね……」
不平屋の男の脳裏に、あの、気前の良い姫殿下の姿が思い浮かぶ。
あの冬の日、あの生誕祭で……。貴族たちによって供された食事。それをみなで腹一杯食べて、姫の誕生を祝いあった、楽しい思い出が瞼の裏に浮かんで……。
「そうか……。姫殿下が作った小麦なのか……」
ふっと、彼の頬が緩んだ。
「おや、どうかしたのかね？」
「いや、なんでもないよ……」
こんなことを言ってしまったら不敬罪になるだろう、と男は言葉

を呑み込んだ。
ちょっぴり使い勝手の悪いこの小麦が、なんだか、あの姫殿下の姿に被る、などということを、口にしては……。
気前が良くて、でも、少しだけ抜けているような……そんな風に見えてしまった、あの姫さまが作った小麦なんだと……、そう聞いてすごく納得してしまったなどということを、まさか口に出して言えるはずもない。
「まぁ、けど、そうだよな。よくよく考えると、食いものがなくって飢えるより全然いいな」
男はそう笑って、ミーア二号を買った。
人々の反応は、おおむね似たような形だった。
あの、ミーア姫殿下の名前が付いた小麦なのだから、と。親しみをもって、その小麦は受け入れられていったのだ。

そんな状況を一変させる出来事が起きたのは、ミーア二号が出回り始めてほどなくした頃だった。
一人の忠義の男が立ち上がったのだ。
「ミーア姫殿下の名を冠した小麦の出来が悪いなどと、到底看過できることではない」
そう声を上げたのは、帝国一の料理の腕を誇る男、宮廷料理長、ムスタ・ワッグマンだった。
美味しい料理が作れないのは小麦が悪いのではない。料理法が悪いのだ、という信念のもと、彼は調理法の確立に取り組んだ。
パンに使うのに適さないというのであれば、別のものを……。
柔軟に、既存の料理法のみならず、様々な調理法を試した彼は、ついに完成させる。
ミーア二号に最適な料理法を。
ミーア二号は、焼いてはいけない。茹でるのだ……。
出来上がった、白くてモチモチしたものを、意気揚々と料理長はミーアのもとに持っていった。

そうして、一口食べたミーアが、あっさり放った言葉に、料理長は度肝を抜かれる。
ミーアは、言ったのだ。
「……これ、あの甘い豆のペーストと合いそうですわね」
少し前、フォークロード商会に依頼して、取り寄せていた甘い豆……。それが合うのではないかという発想は、料理長にはないものだった。
急ぎ、それを試した料理長は、そこに、自らの料理の完成を見る！
こうして、料理長ｗｉｔｈミーアの考案した料理は、満月団子、またの名をミーア団子と呼ばれ、人々の間に広く浸透することになった。
白くもちもちの食感の団子に、あまーい黒豆のペーストをかけた、その絶妙な味は、子どもから大人まで大人気だった。
その状況に、帝国の民はみな、首を傾げたものだった。
「おかしい……。小麦の不作で飢えるはずが……なぜ、我々は美味しい新料理を味わっているのだろう……」
と。
ほどなくして、アーシャとセロの手による品種改良の小麦「ミーア三号」「ミーア四号」が市場に出回り始める。二号よりは、より従来の小麦に近い性質をもった後発のミーアシリーズであるが、それでもミーア二号は人々の間で根強い人気を博すことになるのだった。

「ギルデン辺土伯に協力を求めていたこと……、セロ・ルドルフォンとアーシャ姫を送り、寒さに強い小麦を発見し、品種改良を進めさせたこと……、フォークロード商会に依頼して取り寄せていた甘い豆……」
五年前に起きた出来事を、一つ一つ書き出しながら、ルードヴィッヒは深々とため息を吐いた。
平穏を享受する人々は知らない。この帝国がどれほどの危機的状

況にあったのかを……。
未然に防がれ、泡と消えた『幻の大飢饉』。
されど、ルードヴィッヒの目は、しっかりとそれを捉えていた。
「もしも……ミーアさまが行動されていなかったら……」
備蓄をしていなければ、遠方からの食糧輸送を確保していなければ、多くの餓死者が出ていたはず。
あるいは、食糧をめぐり周辺国との戦争に突入していたかもしれない。それは、双方の国力を疲弊させ、民をより苦しめることになったはず……。
「ミーアさまが、備蓄を取り崩してでも困窮する国を救うべきとおっしゃられた時には、お諫めするべきか、ずいぶん悩んだものだったが……」
結果として、ミーア二号小麦の出現により、食糧の不足は免れた。
小麦の品種改良に成功し、寒さに強い小麦を作ったと聞いた時、それがギルデン辺土伯の領地から発見されたと聞いた時、ルードヴィッヒは度肝を抜かれたものだった。彼の同輩たちも同じだった。
ミーアは帝国内のみならず、周辺国をも大飢饉から救ったのだ。
「大陸を悲劇で覆う大飢饉……、もしもミーアさまがおられなければ、それが起きていたかもしれない」
ルードヴィッヒは戦慄を禁じ得なかった。
歴史に「もし」はない。それでも、ルードヴィッヒは考えざるを得ない。
もし、この時代に、ミーア・ルーナ・ティアムーンという英才が現れなかったとしたら……、いったいどうなっていたのか？
歴史に「もし」はない。
だから、帝国に新しいスイーツが考案される以外の歴史は存在していない。
それでもなお、人は空想の翼を広げてしまうものなのだ。
もし、そうなっていたなら、どうなっていたか、と。

だが、いずれにせよ、幻の大飢饉を葬り去ったこの小麦が、長く歴史に刻まれることになるのは、間違いのないことのようであった。ミーア二号。それは帝国の叡智の名を冠した小麦だ。

帝国の叡智、すなわちそれは、帝国初の……。

第五十六話　それぞれの夏

帝都へと向かう馬車の途上、おもむろに、ルードヴィッヒが話し始めた。
「改めまして、この度のペルージャン平定の件、お見事でした、ミーアさま」
「ふむ……、まぁ、たいしたことではございませんわ。このぐらい、わたくしにかかれば……」
などと、胸を張るミーア。
まぁ……実際のところミーアがやったことは、果物狩りをして、裸足で坂を上って、踊って、お友だちのお父さんと仲良くなってきただけであるが……。
なんだかんだで、楽しい夏休みを満喫中のミーアである！
それはさておき……、
「女帝を目指すにあたり、やはり、他国の要人の支持は不可欠なものでしょう。そういう意味で、ペルージャンは小国とはいえ隣国で友好国。その王家の支持を取り付けたのは大きいと思われます」
神聖ヴェールガ公国を中心とした文化圏では、セントノエル学園に見られる通り、各国の関係が緊密である。
貴族同士の関係性は国内にとどまらない。ミーアがセントノエルで築きたかった人脈も、まさにそれである。
「女帝として、戴冠の日を迎えるまでに、他国の有力者とも続けて関係を築いていただければと思います」
「そうですわね。なにしろ、帝国初の女帝ということになりますから、人脈はとても大切ですわ」
できれば、避けたいところですけど……などと付け足すミーアである。
「はい。しかし、それはそれとして、ラフィーナさまとシオン王子

殿下を味方につけることができたのは、やはり大きいのではないかと思います。あの生誕祭で貴族たちに見せつけたのはお見事でした」
「うふふ、別に大したことはやっておりませんわ」
実際のところ、本当に大した政治工作をしていなかったわけだが……、それはともかく。
――あら、そう考えると、もしかして、わたくし……、もう女帝になれちゃったりするんじゃないかしら？　ラフィーナさまだけじゃなく、シオンの……未来のサンクランド国王の支持が得られるんですもの。これだけ状況が整っていれば、もしかしたら……。
ふと、そんなことを思ってしまうミーアである。
――ふむ、そう言えば、最近は皇女伝のこと読んでおりませんでしたわね。帰ったら、チェックしてみようかしら……。

かくしてミーア一行は帝都への帰還を果たすことになるのだった。

さて……、一方のセントノエル学園にて。
ラフィーナ・オルカ・ヴェールガは、自室にて客人を待っていた。
本を読みつつ、待つことしばし……、やがて一人の男がやってきた。
ノックの音も軽やかに、部屋に入ってきたのは精悍な容貌の青年だった。後ろで結んだ長い黒髪、その引き締まった体躯は、思わず見とれてしまいそうなほどに鍛えられていた。
ラフィーナは、そんな男……、林馬龍（リン・マーロン）に涼やかな笑みを向ける。
「どうも、お久しぶりね。馬龍さん」
「ああ、ラフィーナの嬢ちゃん、久しいな」
馬龍は、いつもと変わらず、堂々とした態度で片手を上げた。
「卒業したのに、馬の面倒をお願いしてしまって」
「いや、なに。俺自身も気になっていたことなんでね……。それに、騎馬王国は、定住地を持たないから、ヴェールガの近くにいる時に来る分には、さほど大変でもないさ」

勧められるままに、馬龍はラフィーナの正面に座る。そこには、騎馬王国で親しまれている夕紅茶が用意されていた。
熱いお茶を、躊躇なく一息で飲み込んでから、馬龍はラフィーナのほうを見た。
「で……、俺になにか用なのか？」
「あら？　遠路はるばるいらしていただいたお客さまにお茶をご馳走したいと思っただけですけど……」
「とぼけるなよ。多忙なラフィーナの嬢ちゃんは、俺なんかとお茶を楽しむなんて趣味はないだろう？」
「騎馬王国で最大の勢力を誇る林（リン）の一族の、次期族長候補、林馬龍殿との会合は、政治的に見ても意味があると思いますけれど……」
ラフィーナは、一度、そこで言葉を切り、
「私はともかく、馬龍さんは、少しお忙しいとお聞きしておりますから、本題に入りましょうか」
それから、静かに馬龍の顔を見つめる。
「昨年の冬、ミーアさんたちが命を狙われた件、ご存知かしら？」
「ミーア嬢ちゃんが？　いや、初耳だな」
馬龍はわずかばかり驚いた顔で言った。
「ついこの前、見た時には元気そうだったが……」
「なんとか、無事に事なきを得たのですけど……、その時に、ミーアさんたちの命を狙った者がいた……。その男は、月兎馬である荒嵐よりも速い馬を乗りこなし、巧みに剣を使い、そして……、二匹のオオカミを連れていた」
「荒嵐に匹敵するほどの馬と、それを乗りこなす狼使いの戦士……ねぇ」
馬龍は、腕組みする。いつも飄々とした顔をしていることの多い彼であったが、この時は、少しだけ厳しい表情を浮かべていた。
「ええ、もしかしたら、心当たりがおありなのではないかと思って……」
ラフィーナはそっと、自らの紅茶に口をつけてから、上目遣いに

見つめる。
「たしか、以前、お聞きしたことがあったと思うのだけど……。騎馬王国の失われた部族のこと……」
馬龍は、無言のまま、静かに頷いた。それから、考え込むように腕組みして……。
「去年の冬、か……。サンクランド近郊で暴れてる盗賊と、なにか関係があるかもしれないな……」

第五十七話　シオンの危機とミーアの考察

帝都に戻ったミーアは早速、ベルから借りた皇女伝を開いた。
……ほんの軽い気持ちで、のことだった。
ルードヴィッヒから、周辺国の王侯貴族の支持が大事と聞かされたミーアは、実は、完全に油断していた。なにせ、自分はラフィーナとシオンの二人と、比較的良好な関係を築いているのだ。
大陸の権力者でいえば、ほぼ最高の二人と仲良しなのである。あの二人が呼びかけてくれれば、それになびく者も多いことだろう。
これは、案外、女帝になるのは楽ちんなのではないか？　もしかして、もうすでに女帝になることになっていて、暗殺されない未来が書かれているんじゃないか？　などと……、そんなことまで考えてしまう始末で……。
同時に、そうは言いつつも、どうせ変わってないんだろうな、などとも思っていた。
どうせ大きな変化なんかないんだろうなぁー、なんて思いながら……。自分が暗殺される記述を見るの嫌だなぁ、怖いなぁ、なんて思いながら……、それでも頑張って開いたのだ。
恐る恐る薄目を開けて、ページを眺めた……結果……！
「なっ、なな、なんですのっ！　これはっ！？」
ミーアは見つけてしまった。
その衝撃的な記述……、シオン・ソール・サンクランドが、若くして死ぬ、という記述を。
「そんな……まさか……。シオンは、サンクランドの国王になるはずじゃないんですの？　天秤王だとかなんだとか、格好つけた名前で呼ばれることになるんじゃ……」
ミーアは急いで、その記述に目を通す。と、シオンはどうやら盗賊団との戦闘で命を落とすことになるらしい。

「まったく、なにをやっておりますの！　シオンは！　そんなの、兵士に任せておけばよろしいですのに……あっ！　しかも、これ、あと三十日ぐらいしかありませんわ！」
などと愚痴りつつも、実にシオンらしい行動だと、ミーアは思ってしまう。
なにしろ、正義感の塊のような少年である。悪さをしている盗賊団がいると耳にすれば、ほいほい出ていきかねない、そんな危うさがあるのだ。
それに、サンクランド自体にそうした雰囲気があることを、ミーアも聞いていた。
王族は民の模範たれ。戦場では常に先陣を切るべし……。
そのような「常識」のある国だからこそ、王族であっても城にこもっているわけにはいかない。
民が賊に虐げられていれば、王族や貴族自らが軍を率いて対応に当たらなければならない。そうしなければ「高貴な身分に相応しい正義」を疑われるのだ。
その点、レムノ王国にも近しい常識があった。
王は常に勇猛たれ。軍を率いない王族は王の資格なし。そのような常識に従い、かつてはアベルも反乱の鎮圧に軍を率いてきたのだ。
「あるいは……、その常識に則って、シオンの足元をすくってやろう、などという者がいたのかもしれませんわ」
そそのかして、シオンを賊の討伐に追いやった者がいるのかもしれない。
ミーアは腕組みしつつ、考え込む。
「ま、まぁ、別に？　シオンが死んじゃっても、わたくし、気にしませんし……？　あいつは、わたくしの首を落とした張本人でとっつきにくいやつですし……それに」
などと、ぶつぶつつぶやくも、長くは続かなかった。
「……やはり、あいつが死んでしまうのは、後味が悪そうですわ……」

ふいのことならばともかく、すでにミーアは未来を知っている。防げるかもしれないことなのに、なにも行動しないのはさすがに気が引ける。
「なんだかんだ言って、わたくしのことを助けにきてくれた恩もございますし……。それに、そうですわ。シオンの次の王位継承者がわたくしのことを支持するかは不透明ですわ。それに、ベルも、シオンのファンみたいですし……」
などと悩むことしばし、ミーアは決断を下す。
「やはり、なんとかする必要がございますわね」
これが、ただの事故ならば問題ない。シオンなりキースウッドに連絡して、派遣される兵を増やさせればいいし、シオンの周りをがっちり固めればいい。
「シオンが討伐に派遣されないようにするというのはさすがに無理かしら……」
サンクランド王国内のことに口出しはできないし、シオンの性格を考えれば、警告したとしても素直に聞いてくれるとは思えない。
「それに……、これが蛇の陰謀という可能性もありますわ……」
あのシオンが、ただの盗賊との戦いで命を落とすというのは、少しだけ考えづらかった。
「シオンの剣の腕前はたしかだったはずですわ。キースウッドさんもいるのに、ただの盗賊なんかに殺されるとは思えませんわ」
もしそれが、蛇の陰謀であるというならば、一筋縄ではいかないはず。
「本当であればディオンさんを派遣できればいいのですけど……。サンクランドにもプライドがあるでしょうね……」
帝国最強のディオン・アライアを派遣できれば、どのような罠が張られていても、軽々と喰い破ってくれるだろうけれど……、弱小国が相手ならばともかく、相手は帝国と同等の大国である。
帝国から護衛を派遣するなどと言ったところで、聞かれるとも思えない。

「しかし、サンクランドにも腕利きの兵はいるでしょうけれど、それをシオンの護衛につけていただくこともできませんし……」
帝国内のことであれば、ある程度はミーアの自由になるのだが、場所がサンクランドとなるとそうもいかない。
「未来の出来事がわかっている、と言えないのがもどかしいですわ。なんとかできないものかしら……」
今のままでは、せいぜい、気を付けろと注意するぐらいである。陰謀が企まれている可能性あり、などと言えば、あるいはなんとかできるかもしれないが……それだけでは少し心もとない。
逆に、それを利用して、陰謀の主を捕らえてやろう、などとシオンならば考えそうだ。
「ぐぬぬ……厄介ですわね……」
「失礼いたします。ミーアさま、エメラルダさまが、いらっしゃっておりますが……」
ふいにアンヌに呼びかけられて、ミーアは思考の沼から浮上する。
「あら……？　エメラルダさんが……ふむ」
それから、ミーアはお腹を軽くさすってみる。
「ふむ……、やはり、考え事をする時には甘いものが必要ですわね！」
エメラルダの持ってくるお土産に期待するところ大、なミーアなのであった。

第五十八話　エンプレス・ミーア号（大船）に乗った気分で……

「ミーアさまっ！　聞いてくださいましっ！」
部屋に入ってきて早々、エメラルダは声を上げた。
「まぁまぁ、どうしましたの？　エメラルダさん、そんなに慌てて……」
などと言いつつも、ミーアはチラリとエメラルダの手元を見た。
……お土産は、なかった！
見る見るうちに、しょんぼりしぼんでいくミーアであったが……、
「ミーアさま、エメラルダさまから、お土産の焼き菓子をいただいておりますので、すぐに準備いたします」
「まぁ！　そうでしたのね、いつも申し訳ありませんわね」
アンヌの言葉でシャキッと復活する。ミーアのテンションは甘いお菓子の有無にかかっているのだ。
「おほほ、ちゃんと持ってきてますわよ。もっとも、商人がお土産に、と持ってきたものなのですけど……」
ちょっぴり申し訳なさそうな顔をするエメラルダだったが……、ミーアは逆に感心する。
要するにエメラルダは、無駄遣いするなというミーアの言葉を守っているのだ。だからこそ、高級なお菓子を買ってきたりということはしなかったわけで……。
「さすがはエメラルダさんですわ……無駄遣いは慎むようにと言ってありましたものね」
ミーアにとって、甘いものに貴賤（きせん）なし。どのような経緯で入手したものかなど、論ずるに及ばず。
節約して手に入れたのであれば、むしろ評価の対象にすらなるというわけである。
さて、ミーアとエメラルダが椅子に座り、目の前のテーブルにお

茶菓子が並んだところで、
「聞いてくださいまし！　ミーアさま、お父さまったら、酷いんですのよ！」
　改めて、エメラルダが言った。
「まぁ、どうなさいましたの？　たしかエメラルダさんは、御父上と仲がよろしかったと思いますけれど……」
　などと、話半分に聞きつつ、ミーアの注意は、すでに焼き菓子のほうを向いていた。甘い砂糖の香りに、鼻をひくひくさせていると……、
「許せませんわ。お父さま、私に縁談するように、なんて言いますのよ！」
　エメラルダのそんな声が耳に入ってきた。
「縁談……、あら……、そうなんですのね。それは、めでたいことではありませんの」
　貴族の女性にとって、縁談は重大なものだ。
　エメラルダはまだセントノエルの学生ではあるのだが、年齢的に考えれば縁談話の一つや二つ来てもおかしくはないお年頃である。
「めでたくなんかありませんわ！　相手は、サンクランド王国の貴族だっていうんですのよ？」
「あら……サンクランド王国……」
　ミーアは、ぽつり、とつぶやいた。
「あっ、もちろん、私が嫁いで行くことになっても、ミーアさまとの約束は……」
　と、慌てた様子のエメラルダだったが、ミーアは、うつむいたまましみじみと言った。
「そう……、帝国ではないんですのね。寂しくなってしまいますわ」
　うつむいたまま……、というか、やや視線を下に向けて……焼き菓子に目を向けたまま、ミーアは言ったのだ。
　なにせ、ミーアはエメラルダが持ってくるお菓子とお茶会を楽しみにしているのだ。それに加えて、なんだかんだでエメラルダは気

兼ねなく会話ができる貴族令嬢、親戚のお姉ちゃんなのである。
サンクランドに嫁いでいくのであれば、今ほど頻繁にお茶会はできないだろうし……、ついつい寂しく思ってしまうミーアである。
「ミーアさま……」
ふと見ると、エメラルダが、なぜか、瞳をウルウルさせていた。
はて……？　などと首を傾げるミーアに、エメラルダは力強く言った！
「ええ、ええ、もちろん、こんな縁談断ってやるつもりでしたわ！　親友のミーアさまを置いて、外国に嫁ぐなど、とても考えられませんわ！」
拳をギュッと握りしめて、決意のこもった口調で言った！
「え？　や、そんな無理しなくても大丈夫ですけれど……」
「いいえ、決めましたわ。すぐにでもお断りの連絡を入れてやりますわ。サンクランドのお城でのパーティーにもお呼ばれしておりますけれど、それもきっぱりとお断りを……」
「ん？　今、なんとおっしゃいましたの……？」
ふと、聞き捨てならない単語を耳にして、ミーアはエメラルダへと視線を向ける。
「ええ、実は先方からお誘いを受けておりますの。嫁いできたら、王家ともお近づきになれるから、と……。その証として、サンクランド王家のパーティーに誘われましたの。でも、縁談を断るのであれば、別に……」
「あら？　それはもったいないですわ。せっかくのサンクランドでのパーティーなのですから、行ってきたらいいですわ」
ミーアの脳裏に、今、一つの考えが形を成そうとしていた。
「なんでしたら、わたくし、一緒に行って差し上げますわ」
シオンを助けるための最善手はなにか？
それは彼を護衛すること。ディオン・アライアをシオンのそばにいさせることである。
だが、もし仮に、一度の襲撃からシオンを守ったところで、はた

して、運命は変わるだろうか？
――たぶん、そうはなりませんわ……。
ミーアの直感が告げていた。
冬以来、すっかり大人しくなっていた『蛇』だが、そう簡単に活動を止めるなどとは思えないミーアである。
もしも、シオンの暗殺が、連中の仕業であるとするなら……。
――一度、防いだぐらいでは、その陰謀は止まりませんわ。きっと、また皇女伝に、形を変えたシオンの死が描き出されるのですわ。
そして、それを帝国の地で確認したところで、ミーアには手の打ちようがない。
ならば、どうするか？　答えは決まっている。
――わたくしが、サンクランドに赴くのが確実ですわ。護衛にディオンさんを引き連れて。それと……そうですわね。毒の専門家であるシュトリナさんも連れて行くのがよろしいかしら？　暗殺といえば毒ですし。それとあちらでの生活の時、近くで守ってくれる方がいると良いですわね。ティオーナさんとリオラさんにも声をかけて……。
普通に考えれば、突然に帝国皇女であるミーアがサンクランドに赴くのは難しい。護衛の問題もあるし、あちらとしてもいろいろと準備があるだろう。
先のペルージャンの場合には予定を少し早めただけで、もともと訪問することになっていたから、なんとかすることができたし、レムノ王国を訪れた時には、そもそも無茶を通したのだ。
けれど、今回の場合は、秘密裏に行って帰ってくるというわけにもいかない。シオンのそばに行くためには、身分を明かす必要があるだろう。
そこで、
――帝国皇女ではなく、四大公爵家の令嬢の一行として行くならば、実現できるのではないかしら？
なにしろ、エメラルダはティアムーン帝国の令嬢の中では、ミー

アに次ぐＶＩＰ、星持ち公爵令嬢である。
　そんなエメラルダが、もともと行く予定になっていたのだから、それなりの準備を整えていただろう。それをほんの少し強化してもらえれば良い。
　そう考えれば、実現は、そこまで難しくはないのではないか……などとミーアは思ったのだ。
　実際には、かなりの無茶が必要になるわけだが……、文官たちの悲鳴などミーアの耳には聞こえないのだ。
　そうして、ミーアの思考は徐々に皮算用へと向かっていく。
　――ふむ……、シオンを助けてやって、サンクランド王家に恩を売っておくこともできるかもしれませんわ。そうなれば、女帝になる時に役に立ちますわ！
　うむうむ、と腕組みしつつ頷くミーア。
「そういうわけですから、ぜひ、エメラルダさん、わたくしも同行を……はぇ？」
　と、そこで、ミーアは気付く。
　エメラルダが、再び瞳をウルウルさせていることに……。
「うう、ニーナ……、みっ、ミーアさまが、私のために、直接、断りに行ってくださるって……」
「はい。よかったですね、エメラルダお嬢さま」
　メイドのニーナがいつも通り、感情のこもらない声で言って、そっとエメラルダにハンカチを渡した。エメラルダは、それで目のふちを押さえてから、
「ありがとうございます、ミーアさま。私のために、わざわざ……」
　などと、大変、殊勝なことを言った。その喜びように若干罪悪感を刺激されたミーアは、
「え？　あ、ええ、もちろんですわ。エメラルダさんは、わたくしの親友ですもの。大船に乗った気分でいていただいても大丈夫ですわ！」
　豪語するのであった。

かくて、エメラルダとシオンの未来を乗せたエンプレスミーア号（大船）は船出した。

波乗り船長ミーアが嵐を上手く乗り越えられるか……、今の時点で知る者は一人もいなかった。

第五十九話　ルードヴィッヒ、察する

サンクランド行きを決意したミーアは、善は急げとばかりに行動を開始する。
まずはルードヴィッヒを呼んで、護衛などもろもろの手配をする。
「……わかりました。皇女専属近衛隊から、腕利きを編成いたします」
ミーアの突発的な思い付きには慣れっこのルードヴィッヒは、諦めのため息交じりにそう言った。
「よろしくお願いしますわね。ああ、それとディオンさんも護衛に連れていきたいのですけれど、大丈夫かしら？」
「ディオン殿を、ですか……」
ルードヴィッヒは、眼鏡を押し上げつつ、ミーアのほうを見た。
「なにか、そのような危険があると……」
「ああ、念のためですわ。もちろん、危険がないに越したことはありませんけれど、サンクランドに大軍を率いていくわけにもいかないでしょう？　ならば、少数で強力な護衛をお願いしたい、と、それだけの話ですわ」
まさか、シオンが殺されるのを止めに行く、などと素直に言うわけにもいかない。すでに冬に、相当無茶をしているのだ。ルードヴィッヒもかなり心配していたらしいし、いかにシオンを助けるためとはいえ、絶対に止められるに違いない。
ということで、ミーアは誤魔化しにかかったわけだが……、
「……なるほど」
ルードヴィッヒは、じっと……じぃぃぃっと……ミーアのことを見つめていたが、メガネの位置を直してから言った。
「では、今回は私も同行させていただきます」
「……へ？」

「急のことですし、不測の事態も起こるでしょう。それに、サンクランドの行政官とも話がしたいと思っておりました」
「え？　あ、いや、ルードヴィッヒ……」
「では、私は引き継ぎの仕事などございますので、いったん失礼いたします」
　言うが早いか、さっさとミーアの前を去っていくルードヴィッヒであった。
「ふむ、まぁ、ルードヴィッヒがいるとなにかと助かりますし……、構わないかしら……？」
　そもそもの話、ミーアが行ったところで陰謀を見抜けるはずもなし。せいぜいミーアは、ディオンという最強の駒をサンクランドへと送り込むための呼び水に過ぎないわけで……。
　となれば、当然、知恵働きができる人間の同行が必要となるわけで……。
　懸念されることとしては、これから、帝国内もいろいろゴタゴタがあるはずだが、その場にルードヴィッヒがいなくて大丈夫か……ということだが。
「それは、ルードヴィッヒならば上手く手配するでしょうし……ふぅむ」
　などとうなりつつ、ミーアはとりあえず作業を進めていく。
　次にしたのは、ルドルフォン辺土伯領に帰っているはずのティオーナに書簡を送ることだった。冬の時にも実感したが、ティオーナとリオラは戦闘面で、割と頼りになりそうである。
「女だけしか入れない場所というのもありますし、武力面でアンヌに頼るわけにもいきませんわ」
　そして、もう一人、いざという時のために連れていきたい人材……それは……。
「ふむ……。やはり、彼女もついてきていただくのが良いですわね。アンヌ、少し出かけたいので準備をお願いいたしますわ」
「はい。わかりました……けれど、どちらにお出かけですか？」

ちょっぴり心配そうな顔をするアンヌに、ミーアは微笑みかけた。
「大丈夫ですわ。帝都の中の、貴族街に出かけるだけですから」

シュトリナ・エトワ・イエロームーンは、現在、帝都ルナティアにある別邸に滞在していた。
ちなみに、なぜミーアがそれを知っているのか、と言えば、今朝、ベルと遊ぶためにシュトリナがやってきたからである。
ペルージャンからベルが帰ってくることを聞きつけたらしいシュトリナは、意気揚々、白月宮殿に現れて、ベルを別邸に招待したのだ。
「……一応、名目上はお勉強をするため、などと言っておりましたけれど……あれは絶対に遊ぶ気ですわ」
そもそも、厳しいお目付け役がいなければ、ベルが勉強するなどとは思えないミーアである。
「リンシャさんがお国に帰っている今、わたくしがしっかりしてやらなければなりませんわね」
そんなことを思いつつ、ミーアはイエロームーン公爵家の別邸を訪れた。
他の貴族の邸宅より、一回り大きな館。壁に這う蔦、庭を彩る植物たちに、ミーアは思わず目を奪われる。
――これ、もしかして、全部、毒だったりするのかしら……？
などと思いつつも、護衛を引き連れ屋敷内へ。案内されたのは、広い中庭だった。
よく手入れされた花が、控えめに彩る庭内、その一角に設えたテーブル席にシュトリナが座っていた。そして、そんな彼女の目の前でベルが……踊っていた！
「それで、ここを、こうして、楽器を鳴らして」
鳴子の代わりに手を、パンパン、と叩く。　どうやら、先日のペルージャンでの演舞を、シュトリナに見せているようだ……よう……なのだが……、

「それで、こうっ！」
くるくるりん、っと回って、もう一度、パンパンがパン、っと手を叩き……ドヤァっと胸を張るベル。
「って、全然違いますわ、ベル」
すかさず、ミーアのツッコミが飛んだ。
ベルの演舞はこう……なんというか、こう……なんなんだろう？
――どこが、とは言い難いけれど、全体的におかしなことになっておりますわ。というか、相変わらずすごいですわね、あの子……。間違ったダンスをあんなにも堂々と……。しかも、なにか偉業を成し遂げたかのような、あの表情……あの度胸は見習いたいところですわね……。
感心しつつも、ミーアはベルのほうへと歩み寄った。
「あっ、ミーアお姉さまもいらっしゃったんですね」
ミーアを見つけたベルは、ニコニコと笑みを浮かべた。
「こんにちは、ミーア姫殿下。ようこそ、我がイエロームーン邸へ」
シュトリナも、すっと立ち上がり、スカートをちょこん、と持ち上げた。
それから、野に咲く小さな花のような、可憐な笑みを浮かべた。
――相変わらず、お人形さんみたいに可愛いですわね、リーナさん……。
などと感心しつつも、ミーアは笑みを浮かべた。
「ご機嫌よう、リーナさん。イエロームーン公爵はご壮健かしら？」
「はい。お気遣いありがとうございます。おかげさまをもちまして……」
「そう。あ、でも、クッキーの食べ過ぎはほどほどにするように言っておいてくださいましね。知ってまして？　甘いものの食べ過ぎは寿命を縮めるんですのよ？」
早速、タチアナから得た情報を、なにか偉業を成し遂げたようなドヤァな顔で披露するミーアなのであった。

第六十話　ミーア姫、本当にすべきことを始める！

「それにしても、ベル、あまり適当なことをやってはいけませんわ」
「適当なこと……？」
きょとりん、と小首を傾げるベルに、ミーアは苦言を呈する。
「ペルージャンでやった演舞を見せていたのではなくって？」
「あ、はい。そうなんです。リーナちゃんが、どうしても見たいって言うから……」
そう言ってから、ベルはシュトリナのほうに顔を向ける。
「リーナが見せてって頼んだんです。ベルちゃんのダンス見たかったなぁ、って」
「それはいいんですけれど、ベル、ところどころ違っておりましたわよ？　やるならきちんと踊らなければいけませんわ」
などと言いつつ……、シュトリナの様子を観察して、ミーアは、ふむ、と鼻を鳴らす。
――リーナさん、ベルと一緒にペルージャンに行けなかったのが残念そうですわ。将を射るにはまず馬からと言いますし……。つまり、リーナさんを一緒に連れていきたければ、ベルを先に連れていけ、ですわ！
ミーアは、いち早く相手のウイークポイントを看破！　それからベルのほうに目を向ける。
「ベル、実は急な話なんですけど、エメラルダさんと一緒にサンクランド王国に行こうと思っておりますの」
「えっ？　サンクランド王国！？」
ベルがキラッキラと目を輝かせるのを見て、ミーアはにっこりと微笑んだ。
ミーアにとってベルを操ることは、そう難しいことではないのだ。なにしろ、ベルは……ミーハーベルなのだから！

――シオンの故郷であるサンクランドを訪れる機会を、ベルが逃すはずもありませんわ。
そんなミーアの予想通り、ベルは二つ返事で同行を了承する。
はたで様子を見ていたシュトリナは、しょんぼり肩を落とした。
「せっかく、ベルちゃんと遊べると思ってたのに……」
……やっぱり、遊ぶ気満々だったらしい。まぁ、今はそれはいいとして……。
「それなんですけど、せっかくですし、リーナさんにもぜひご同行いただけたら、と思っておりますの」
「え……？　リーナも……？」
ぱちぱちと瞳を瞬かせるシュトリナ。ミーアは優しげな笑みを浮かべたまま頷いた。
「ええ。もちろん、ほかに予定があ……」
「絶対行きます！　お誘いいただきありがとうございます、ミーアさま！」
シュトリナはそう言うと、深々と頭を下げた。
「リーナの心からの忠誠心をおささげ致します」
「……こんなことで心からの忠誠心をささげられても困ってしまいますけれど……でも、大丈夫ですの？　お父さまにおうかがいを立てなくても……」
「ふふ、大丈夫です。お父さま、リーナのこと大好きですから。このぐらいのわがままなら許してくれますから」
にっこり笑みを浮かべるシュトリナ。その、花のような笑みは……、花は花でも魔性の花、どこか妖艶な雰囲気を持ったものだった。
「あー、まぁ、リーナさんがそれでよろしいのなら、いいのですけど……。それと……」
と、ミーアは、そっとシュトリナに耳打ちする。
「できれば、暗殺によく使われる毒の解毒薬を、揃えて持っていくようにしていただけないかしら？」
「……解毒薬……？　毒薬ではなくってですか？」

眉を顰めるシュトリナに、ミーアは静かに首を振る。
「覚えておいていただきたいのですけれど、暗殺というのは、わたくしにとっては下策ですわ。ゆえに、わたくしが毒を用いて他人を害することは決してございませんし、それを許すつもりもありませんわ」
なにしろ、暗殺した人間に過去に戻ってやり直し、などと始められたら大変だ。
――わたくしは、温厚で寛容な性格ですからシオンやティオーナさんを害そうなどと、物騒なことを考えませんけれど、ほかの者がそうとは限りませんし……。
ゆえに、他人を殺すことで、やり直しをさせる危険を冒すことはしないし、もし、過去に戻ってやり直しを誰かがやった時のために、極力恨みも買わぬように立ち回るのがミーアの基本線である。
「それに、ベルのお友だちの手を汚させるようなことは、決していたしませんわ」
そう断言してやってから、ミーアは続ける。
「ただ、リーナさん……、今回は少しばかりの危惧を抱いておりますの」
「危惧……ですか？」
「ええ……。時期的にもそろそろあの蛇たちが動き出すやもしれませんし……、一応、念のために備えをしておきたいんですの。イエロームーン公爵家が持つ、その知恵をわたくしに貸していただけないかしら？」
そのミーアの言葉に、シュトリナはそっと背筋を伸ばした。
「はい、わかりました、ミーア姫殿下。リーナの持てる知識のすべて、我がイエロームーン家のすべての知恵をもって、ミーアさまのご期待に応えてご覧に入れます」
「ええ、よろしくお願いしますわね」
シュトリナの了承を得たことで、ミーアはあらかた必要な陣容を

整えた。
盗賊団を始め、武力的な事態に対する備えとしてディオンと皇女専属近衛隊を。
陰謀などの知略的な事態に対する備えとしてルードヴィッヒを。
毒を用いての暗殺に対する備えとしてシュトリナを。
あとは、医学的な人材としてタチアナを連れていければベストなのかもしれないが、今は遠くの地にいる彼女を呼び寄せるわけにもいかない。
「ふむ、このぐらいで満足するべきですわね。あと、わたくしがやるべきことは……」
そうしてミーアは、ようやく、自らが本当にしなければならないことを始める。
それは……、
「サンクランドの名物料理……。名産のキノコは……」
かくて、ミーアはグルメ旅行……もとい、シオン王子救出のためのサンクランド行きの準備を進めていくのだった。

さて、もろもろの根回しを終えたミーアだったが……、肝心なところへの根回しを忘れていたことを思い出すことになる。
それは……皇帝、マティアス・ルーナ・ティアムーンへの根回しである。
「サンクランドへ行くだと！？」
ミーアから話を聞いた皇帝は激怒した。
「せっかく……、ミーアと一緒の夏を過ごせると思っていたのに……。こうなれば、ミーアと一緒にサンクランド旅行に……」
「やめてくださいまし、お父さま。話が大きくなりすぎですわ！」
かくて、ミーアは出立の日まで父親の説得に、頭を悩ませることになるのだった。

第六十一話　たぶん……きっと……

――サンクランド行きを決めてから、ミーアさまの様子がおかしい。

ティアムーン帝国の大図書館にて、うんうんうなっているミーアを見つけたルードヴィッヒは、眉根を寄せる。

――やはり、此度のサンクランド行きには、なにか重要な理由があるということか……。

今回の話を聞いた時、ルードヴィッヒが予想したのは二つの理由だった。

一つはもちろん根回しだ。

サンクランドはティアムーンに匹敵するほどの大国である。ミーアが女帝を目指すというのであれば、シオンのみならず、広い根回しが必要となるだろう。

もう一つは、エメラルダの縁談である。

四大公爵家の一角、星持ち公爵令嬢のエメラルダは、ミーアにとって最大の味方だ。他の公爵家の令息、令嬢ともきちんと関係を築いているミーアであるのだが、恐らく最も信頼を置いているのが、エメラルダのはずだった。

帝国内の中央貴族を治める上で、四大公爵家の協力は必須のものである以上、彼女の存在は、ミーアにとって極めて重要なものといえる。

そんなエメラルダを国外に出そうとする者がいる。

――ミーアさまが女帝になることを阻もうとする、そんな力が働いているということか……。ミーアさまの派閥の力を、何者かが削ぎに来たと考えるべきだろうが……。

そう、そこまではルードヴィッヒも理解できる。

それを阻むため、ミーアがサンクランドに乗り込むというのも、

十分に頷ける行動だ。国内への牽制と、反女帝派と結びついたサンクランド王国内の勢力の見極め、さらにエメラルダに対する鼓舞、などの効果を狙ってのことだろう。
しかし……、
――ディオン殿を連れて行こうというのが気にかかる。
いざという時の備えが必要なことはルードヴィッヒにも理解できる。けれど、それならば、皇女専属近衛隊で十分足りるはずである。にもかかわらず、ディオン・アライアという圧倒的な武力を同伴させるというのは、どういうことなのか……。
「それほどの危機が待ち受けているということか……。こちらもそのつもりで準備を進めておくべきだな」
ぽつりとつぶやいてから、ルードヴィッヒはミーアのそばに歩み寄った。
「ミーア姫殿下……」
「あら、ルードヴィッヒ。調べものですの？」
「ええ、先日、痛感いたしました。ベルさまには、やはり、基礎的な教育が必要なようです」
今度のサンクランド行きにはベルも同行すると聞いたルードヴィッヒは、その間に、ベルにみっちりと教育を施そうと考えていた。
無論、本当はミーアの様子が心配で来たのだが、それを素直に言うこともない。
「ベルさまを見る限り、一応は師がいるようですが……。少々、力不足のようですね。教え方に甘さが見られます。厳しくするところは厳しく、緩めるところは緩める。そうしたメリハリが教育には必要なのです」
そう言うと、ミーアは、なんとも言えない複雑な顔をした。
「……そう。まぁ、ほどほどにお願いいたしますわね。くれぐれも、その……、心が折れないように……」
「心得ています。生徒の心を折ってしまうのは、教える者としては最低なことですから」

「いえ……あなたが、なのですけれど……」
「え……？」
首を傾げるルードヴィッヒに、ミーアはまたしても、なんとも言えない顔をして、
「まぁ、いいですわ。お願いいたしますわね」
「かしこまりました。ところで、ミーアさまも調べものですか？」
「あ、ええ、まぁ、そうですわね。せっかくですし、いろいろとサンクランドの状況を見て回りたいと思いまして。旅の計画を立てておりますの」
ミーアの目の前の机には、サンクランド王国の地図が広げられていた。
さらに、開きっぱなしになった本には、各地の産業や町の様子などの情報が書かれていた。
「なるほど、さすがはミーアさま」
思わず感心してしまうルードヴィッヒである。
今回のサンクランド旅行には、重要な目的がある。されど、その目的のみに囚われず、ついでにサンクランド内の各地の視察もしてしまおうというミーアの合理性に、ルードヴィッヒは感心した。
――食べ物は産業の基本的な部分だ。今後の帝国の発展には不可欠な要素、女帝として他国の事情を把握しておきたいと、きっとそういったことなのだろう。この貪欲さ、この合理性が帝国の叡智たるゆえんということか……。さすがだ、ミーアさま……。

――さすが……？　はて……？
ミーアは首を傾げつつ、手元の本……サンクランドのグルメ本に目を落とした。
各地の名産品や、各町の名物料理などがまとめられた本である。
正直、ルードヴィッヒに感心される要素は、あまりないように思うのだが……。
――まぁでも、たしかにわたくし、今は褒められても良いことを

やっておりますし、気分は悪くありませんわね……。
そうなのだ。ミーアは、現在、非常に真面目に頭を使っているのだ。
ミーアは考えた末、自分がエメラルダに同行することをサンクランドに伏せていた。エメラルダのお友だち枠で、サンクランド入りをするつもりなのだ。
それは、不確定な要素を排除するためであった。
未来予知的読み物の第一人者であるミーアは知っている。
自分の行動が予期せぬ影響を与え、未来は案外簡単に変わってしまうのだということを。
今回の場合も同じだ。シオンが、殺される場所や時間が変化してしまうかもしれない。
――例えば、わたくしが行くなどと言えば、恐らく学友であるシオンが迎えに来る可能性が高いですわ。
それにより、シオンは危険から遠ざかるかもしれない。けれど、そうはならないかもしれない。迎えに来るというのは絶対のことではないから、皇女伝の記述通りの場所で死ぬ可能性も当然残される。
逆に、ミーアの出迎えに来るがゆえに、別の危機に巻き込まれることだってあり得る。
ただの盗賊との抗争であるならまだしも、これがシオンの暗殺を企図したものであるとするなら、形を変えてシオンは危機に陥ることになるのだろう。
――それはとても厄介ですわ。それよりは、この記述の通りに物事が進んでいってもらえたほうが良いですわ。
ゆえにミーアは腐心していたのだ。シオンが死ぬ日に自分がそばにいるという状況を作り出すために。自分が……というよりは、ディオンが、であるが……。
――そのために、どこで寄り道をするのか……、それが問題ですわ！
それこそが、一番の悩みどころだった。

エメラルダが想定していた通りのルートで行ったのでは、シオンが殺される現場には行けない。さすがに、そこまでは都合よくはいかないのだ。

――美味しいお食事が食べられて、珍しいキノコでもあれば理想的。果物狩りやキノコ狩りができる環境ならば言うことなしなんですけれど……。

いずれにせよ、ミーアが寄り道してもおかしくない場所を選ぶ必要があった。そうしないと不自然だからだ。

何もない田舎町などに数日滞在、などするのは、いかにも不自然。その上、エメラルダが同行するとなれば、退屈したエメラルダが何をするかわからない。

――ふむ、サンクランドの名物料理は……ほう、川魚が美味しい……。なるほど、ということは、この川沿いの街を予定に入れて、それで……。

あくまでも、自然に、シオンを助けに行くためである。

別に、サンクランド旅行を楽しみ倒そうというわけではない。

あくまでも……真面目な理由なのだ。たぶん……。

「ほほう、この干しキノコ、サンクランド特産のものなんですのね。どこで買えるのかしら……」

……きっと。

第六十二話　御前会議

サンクランド王国の王城、ソルエクスード城の一室にて。
四角いテーブルを囲むようにして、七人の男たちが座っていた。
中心に座るのは、白銀の髪に鋭い瞳をした男、引き締まった長身を豪奢な服に包み込んだ、その男こそこの国の王、エイブラム・ソール・サンクランドであった。
宰相からの報告を受けたエイブラムは思わず、眉をひそめた。
「巧みに馬を駆る盗賊団……か」
「さようでございます、陛下。我が国の精兵を置き去りにするほどの乗馬技術、ただの盗賊とも思えませぬ。あるいは、かの騎馬王国の手の者ということも……」
「ほう……。シオン、お前はどう思う？」
王の視線を受け、シオン・ソール・サンクランドは背筋を伸ばした。
「はい。陛下……、私は……、軽々に判断すべきことではないと考えます」
「……理由は？」
「国同士の争いが起これば、多くの民が苦しむことになりましょう。騎馬王国の仕業と決めつけてしまうのは、時期尚早というもの。それに、理由もなく騎馬王国が、我が国を攻めるはずがない」
「ははは、シオン殿下は、まだお若いですな」
参加者の一人が、豪快な笑い声をあげる。
「すべての国が、我が栄光あふれるサンクランドのように賢明な判断ができるなどとは、思わぬことです」
サンクランドへの誇り、自分の仕える国王へのあふれるばかりの忠誠、それを隠そうともせずに男、ランプロン伯は言った。
「安直な領土拡大のために、大義なく他国を侵略する、そのような

愚か者も世の中にはいるのです」
「言葉が過ぎるぞ。ランプロン伯。貴公の言いようは、平時に乱を起こすもののように聞こえるな」
「おや、これは心外な……」
御前会議は政治の場、貴族同士の駆け引きの場。
シオンの好むところではなかった。
セントノエルを卒業するまでは、そこまで積極的に政に参加しようとは思っていなかった彼であったが、多くの出会いを経て、少しだけ考えを変えていた。
特に多大なる影響を受けたのは、言うまでもなく、自分と同い年ながら、国の改革にまい進する、かの帝国皇女の姿だった。
――今ごろ、ミーアたちは何をしているだろうな……？
瞼の裏に浮かぶのは、紫の衣を身にまとった、ミーアの凛々しい姿。
されど、耳に響くのは、別の少女の言葉だった。
――話せる時に話さなければ後悔する……か。
ティオーナ・ルドルフォンの切実な言葉が、耳の奥に木霊する。
ミーアに言いたい言葉があるのは、確かなこと。
――恐らく俺は、ミーアのことが……。でも、今の俺にそれを言う資格があるだろうか？
レムノ王国での失敗。胸に刻み込まれし苦い後悔と、自らの未熟が、シオンがその言葉を口にすることを許さない。
――汚名返上の機会は自分で作る……。そう思っていたのだがな……。
そんな風にシオンが物思いに耽っている間に、事態は動いていた。
一人の者の発言に、場が騒然とした。
「最近は、騎馬王国の部隊が国境付近で何やらやっているとの情報もあります。やはり無関係とは思えませぬな。民の苦しみを和らげるためにも、すぐさま、軍を国境に派遣するのが肝要かと……」
声を荒げ、興奮するのは、先ほどのランプロン伯だった。

彼は、サンクランドの伝統的保守層に当たる「領土拡大派」の貴族だった。
無能な王に統治されるより、栄光あるサンクランド国王に統治されたほうが人々の幸福になるだろう、というのが彼らの主張だ。
それは、あの白鴉のグレアムが持っていた考え方に他ならない。
そして、その思考から、必然的に、彼らは他国の主権を軽んじる傾向にあった。
シオンは静かにため息を吐き、それから、凛とした声を上げる。
「陛下、現段階では軍を動かすには及びません。私が直接、一隊を率いて対応に当たり、なにが起きているのかを見極めたく存じます」
様々な思惑が絡み合う会議。そして、清濁併せ呑むのが政治というもの。その渦中にあっては、迷い、悩むことは数多くある。されど、シオンは揺らぐことはない。
それは、彼の中にある正義という信念によるもの……、ではなかった。
あの日の苦さが、彼の正義の天秤の傾きを調整する。
――ミーアならば、どうするだろうか？
帝国の叡智という見本（大いなる勘違い）、彼女が正してくれた価値観に照らし合わせれば、おのずから答えは出るものだ。
「我ら王族に与えられし、不正を正す剣は鋭い。ゆえに、使いどころを誤れば、多くの民を苦しめることになります」
そう言って、シオンは自らの父を見つめる。
「シオン殿下御自らがご出陣とは、いささか危険ではありますまいか？」
慎重論が出る中、シオンは断固として首を振る。
「民の苦しみを放置するは、サンクランドの王家がよって立つ根拠を揺るがすことにもつながります。されど、新たな民の苦しみを生み出すような、短慮なことはするべきではない。真実を見極めるためにも、どうか、陛下、ご命令をいただきたく」
そうして、シオンは立ち上がると、父の足元に片膝をつき、頭を

垂れる。
国王は、そんなシオンを満足げに眺めてから、深々と頷いて見せた。
「そうか……。それならば、特別にお前に命じよう。シオン、兵を率いて盗賊の討伐に当たれ」
「はっ。必ずや、陛下のご期待にお応えしてご覧に入れます」
かくて、シオンが盗賊団の討伐部隊を率いることが決まったのだった。

「相変わらず、無茶が過ぎますよ。シオン殿下」
討伐隊の指揮に就くと聞いた時、キースウッドは、呆れたように首を振った。
「殿下になにかあったら、サンクランドがどうなるのか、とか、お考えにならないわけではないでしょうに……」
「そう言うな。キースウッド。これもまた、善き王になるための修行だよ」
涼やかな笑みを浮かべるシオンではあったが……、キースウッドとしては一抹の不安を拭えないでいた。
――最近のシオン殿下は、どこか焦っているように見えるんだよなぁ。
最近……というよりは、明確に冬以降のことだった。
ティアムーン帝国の帝都にて、皇女ミーアの生誕祭に参加して以降のこと……。
――あの日、なにかあったのか？　しかし、特に気になるようなことはなかったが……。
と、その時だった。
「兄上！」
出陣の準備をしていたシオンのもとに、駆け寄ってくる者がいた。
年の頃は、十代の初め、シオンとよく似た白銀の髪を背中のあたりまで伸ばした少年だった。その体は、鍛練により、引き締まった

体躯のシオンとは違い、華奢で儚い印象すら受けてしまう。
少年の名はエシャール・ソール・サンクランド。今年、十歳を迎えることになる、サンクランドの第二王子である。
「兄上、聞きました。自らが盗賊の討伐に出られるのですか？」
心配そうに瞳を瞬かせるエシャールに、シオンは安心させるように笑みを浮かべた。
「ああ。そうだ。まぁ、油断をするわけではないが、ともに行く者たちは、みな手練れだ。キースウッドもいるし、心配には及ばない」
「ですが、兄上……、もしも兄上になにかあれば……」
「ははは、ご心配めさるな。エシャール殿下。シオン殿下は、エシャール殿下ほどの時には、もう大人顔負けの剣を振るっておりましたからな」
なおも心配そうなエシャールに、老境の騎士が豪快な笑い声を上げた。
それに続くように、周りの騎士たちは口々にシオンを褒めたたえる。
「シオン殿下は剣の天才。盗賊団ごときに遅れをとったりはいたしませぬよ」
「エシャール殿下も、シオン殿下に剣を習えばわかりますぞ？　どうです？」
それを聞いて、エシャールは、少しひきつった笑みを浮かべていた。
――そういうのは、あまりよろしくないんだがな……。
はたで見ていたキースウッドは、苦いものを感じる。
エシャールが、兄へのぬぐい難い嫉妬、プレッシャーに苛まれていることに気付いていたからだ。
そして、二人の王子の不和は、派閥抗争を好む貴族たちにとっては、つけ入る隙となる。
――と言って、俺が声をかけるわけにもいかないんだけど……。
兄弟王子の間に生じた微かな亀裂……、それが大きくならないこ

とを祈るキースウッドであった。

第六十三話　ガールズトーク……ガールズトーク？

巡礼街道、それは、神聖ヴェールガ公国から大陸の各国へと伸びた幹線道だ。
古くから、すべての道はヴェールガへと通ずと言われているが、この巡礼街道は、まさにその言葉を表していた。
中央正教会により維持されているその道は、舗装がしっかりとしていて、人通りの多さに比例して道幅も広い。馬車がすれ違うことができるぐらいの余裕があった。
そんな道を、ミーアたち一行の馬車が進んでいく。ヴェールガを経由して、サンクランドへ。その途上で、ティオーナたちとも合流を果たした一行は馬車七台、その周りを護衛の騎兵が取り囲むという、なかなかの大所帯となっていた。
まぁ、それでも、一国の皇女一行と考えるならば、大規模すぎるとも言えないのだが。
「なかなか、お父さま、手ごわかったですわ」
馬車に揺られながら、ミーアは深々とため息を吐いた。
自分も一緒に行くと言って、まったく譲らない父親。ミーアが「パパだーいすき！（棒読み）」をすることで、どうにか納得させたわけだが……。
「説得するのに苦労しましたわ。本当に、頑固者で困ってしまいますわ」
精神的疲労でげっそりした顔をするミーアに、エメラルダは小さく首を振った。
「ふふ、そんなことありませんわ。陛下は、ミーアさまのことを、とても大切にされておりますわよ」
エメラルダは優しい笑みを浮かべて、それから、ミーアに負けず劣らずな深いため息を吐く。

「それに、そんなことを言ったら、お父さまのほうが頑固ですわ。私が、縁談は気が進まないと言っても全然聞く耳をもってくれませんのよ？　ミーアさまのおっしゃる通り、こうして、直接、お断りにきて正解でしたわ」

「まぁ、でも、それだけ良いお相手なのかもしれませんし……。同格の公爵家であれば、悪い相手とも言えませんわ。グリーンムーン公もエメラルダさんのことを思ってのことかもしれませんわよ」

などとエメラルダをたしなめつつ、ミーアは思っていた。

――グリーンムーン公は、もしかすると、エメラルダさんを家から遠ざけたいのではないかしら……？

実は、エメラルダの下には五歳違いの弟がいる……のだが、年の離れた姉に頭が上がらないどころか、結構な姉好き（シスコン）として育っているのだという。

シスコンというか、エメラルダを親分として慕う子分のような関係になっているとか……。

――まぁ、エメラルダさん、わがままですけど意外と面倒見は良いほうですから、わがままですけど、慕われてるのでしょうね……。わがままですけど……。

ともあれ、このままでは、次期グリーンムーン家を継ぐ者が、姉に頭の上がらない軟弱者に育ってしまうかもしれない。

ちなみに、その、エメラルダに頭の上がらない弟だが、一度、ミーアとの婚姻が検討されたことがある。

けれど、それが実現することはなかった。

「濃い血は濁り、不幸を呼ぶ」

それは、古より言い伝えられていることであった。それゆえ、ティアムーン帝国ではあまり近しい血族同士の婚姻を避ける傾向にあった。一応はエメラルダの弟とミーアでは、関係的にはギリギリで許容範囲ではあったのだが……、

「うちの弟とミーアさまとでは、釣り合いませんわ！」

エメラルダが頑として認めなかったのだ。

「ミーアさまは、帝国皇女なのですから、それに相応しいお相手を見つけて差し上げないといけませんわ。我が弟では少々……、いえ、まったく力不足ですわ！」
イケメンソムリエでもあるエメラルダは、身内にも大変厳しいのである。
まぁ、そんなわけで……、エメラルダが実家に残るようなことになっては大変だと、グリーンムーン公も思ったのではないか……、などと予想するミーアである。
「ちなみに、エメラルダさん、もしもお相手がものすごく見栄えの良い殿方だったら、どうしますの？」
「うーん、そうですわね。まぁ、私の親衛隊の一員に加えて差し上げるぐらいはいたしますけれど……。そもそも、この星持ち公爵令嬢（エトワーリ）の私に相応しい者などそうはいないと思いますわよ」
などと笑ってから、エメラルダは、パンっと手を打った。
「あ、そうですわ。どうせでしたら、私と婚儀を挙げたいのなら、王子でも連れてこいと言ってやる、というのはどうかしら？」
「あー、シオンはやめておいたほうが良いですわ。とても、エメラルダさんで相手ができるような者ではございませんし……」
想像しようにも、あのシオンとエメラルダが結婚するなどという光景が、まったくもって想像できないミーアである。
「性格的に言えば、シオンと釣り合いそうなのは……それこそラフィーナさまか、もしくは……」
ふと、ミーアは、後方の馬車に乗る一人の少女のことを思い出す。
かつて、ミーアを断頭台へと追いやった、元祖帝国の聖女、ティオーナ・ルドルフォンの顔を……。
――ふむ、そういえば、ティオーナさんとシオンは、わたくしが処刑された後、結ばれたのかしら……？
今まで気にしたことはなかったが……。前の時間軸、ミーアから見てもお似合いだった二人……。その二人がどんな運命を辿ったのか、なんとなく気になってしまうミーアである。

そんなミーアの視線を追ったエメラルダが、ちょっぴり不満そうな顔をする。
「それにしても、ティオーナさんまで同行させるとは、なにかお考えがあってのことですの？」
「……一応言っておきますけれど、ティオーナさんは、わたくしの友だちですわ。辺土貴族だなんだと、つまらないことを言い出したら……」
と、釘を刺しにかかるミーアに、エメラルダは訳知り顔で頷いた。
「ええ、もちろんわかっておりますわ。ミーアさまのお友だちは、私のお友だちですもの。ティオーナさんがいじめられておりましたら、私が助けて差し上げますわ」
と、そこで、エメラルダは一度、言葉を切り……、
「なにしろ、私は、ミーアさまの一番の親友ですもの。ミーアさまを悲しませるようなことはいたしませんわ！　なにしろ、私は一番の親友なのですから！」
「そ、そう……。それならば、いいのですけど……」
堂々と胸を張るエメラルダに、一抹の不安を感じるミーアであった。

第六十四話　熱狂的ファンの集い

「やれやれ、まいったな……」
ルードヴィッヒは、馬車の中から、外の景色を眺めた。
のどかな田舎道、空から降り注ぐ日の光は柔らかな朝の日差しから、力強い昼のものへと変わろうとしていた。
本来ならば、とっくに出発していなければならない時刻であるのだが、彼の乗る馬車が動き出す様子はなかった。
ふいに、馬車の扉を開け、ディオン・アライアが入ってきた。腰につけていた剣を外して、どっかりと、椅子に腰かける。
「まだ、修理に時間がかかりそうだ。やれやれ、こんな場所で足止めとはね……」
ミーアたち一行の馬車がトラブルに襲われたのは、今朝方、宿泊した村を出発してすぐのことだった。一台の馬車の車輪が壊れてしまったのだ。
その一台を後に残して先を進もうという話もないではなかったが、壊れたのがグリーンムーン家の高級な馬車であったことなどもあり、修理を終えてからの出発になったのだ。
幸い、あたりに遮蔽物はなく、接近してくる者があれば察知しやすい。待機場所としては、悪くないように思えた。
「それで、異常は？」
ルードヴィッヒの問いかけに、ディオンは小さく肩をすくめた。
「異常なしだよ。まぁ、皇女専属近衛隊もいるし、グリーンムーン家の護衛も頭数は揃ってる。それに、サンクランドのほうも、さすがは四大公爵家の令嬢を迎えようというのだから、それなりに準備はしてるみたいだ。単なる賊じゃ太刀打ちできないどころか、手を出そうとも思わないだろう」
それから、ディオンはそっと外の景色に目を細める。

「たぶん、姫さんもそのことはわかってるんじゃないかな？　警戒すべきは、野盗や賊じゃない。兵士が何人いたとしても、対処できない敵なんだって……」
　ルードヴィッヒは、無言で頷いてみせる。
「たしかに、例の狼使いが逃亡していったのは、方向的にはこちらのほうだったな」
　混沌の蛇の刺客、狼使い。ミーアを襲った男が、ルードヴィッヒが手配した追手を振り切って姿をくらましたのは、サンクランド近郊だった。
そして、それ以降、かの暗殺者は姿を見せていない。
「あいつが出てきたら、並みの護衛じゃ太刀打ちできないからね。十重二十重に囲んで、ようやく対処できるぐらいだし、あのオオカミも厄介だ。姫さんの懸念はよくわかるよ」
「そうか。ともかく、護衛のほうはよろしく頼む。これでミーアさまになにかあったら、みなに合わせる顔がない」
「例の女帝派とかいうお仲間のことかい？」
「ああ。そうだ、そういえば、ジル以外のメンバーは紹介してなかったかな。いずれ紹介したいと考えているのだが……」
　そうして、ルードヴィッヒは思い出した。
　帝都にて、彼は自らの仕事の引継ぎのため、何人かの女帝派のメンバーと会っていたのだ。

　その日、ルードヴィッヒは会合場所への道を急いでいた。そこは、帝都の一角。今は使われていない館の一室だった。
「よう、ルードヴィッヒ。ペルージャンへの旅は、上々だったようだな」
　部屋に入ると、一番にバルタザルが話しかけてきた。彼のほかに、ジルベールをはじめ、十人前後の者たちが集まっていた。
「ああ、バルタザルか。何を慌てているんだ？」
　応じつつ、ルードヴィッヒは小首を傾げた。基本的に、バルタザ

ルは冷静な男だ。滅多なことでは、このように声を荒げるようなことはないと思うのだが……。
「これが落ち着いていられるか！　ミーア姫殿下はペルージャンとの条約の改定を匂わせたというじゃないか」
「ああ。そうだ。ペルージャンとの間にある不平等条約を変えることを示唆された。それをもって、ペルージャンと新たな関係を築きたいと……、ペルージャンの信頼を得たいと、そうおっしゃったのだ……。無謀だと思うか？」
上目遣いに見つめてくるルードヴィッヒに、バルタザルは、なんとも言えない顔で肩をすくめた。
「そうは言わんが……、姫殿下の本気の熱意には、いささか気圧されるものがあるな」
「気圧されるなんてもんじゃないっすよ。詳しい話を……」
「まぁ待ちなさい。そう慌てるものではあるまい」
口々に、ルードヴィッヒに質問を投げかけようとする者たちを、静かな声が制する。
部屋の奥、穏やかな笑みを浮かべる老人……、賢者ガルヴの姿を見て、ルードヴィッヒは深々と頭を下げた。
「お久しぶりです。我が師」
「壮健そうでなによりじゃ、我が弟子、ルードヴィッヒよ」
「師匠も、お元気そうでなによりです」
そう言ってから、ルードヴィッヒは師の服装を興味深そうに見た。以前、森の中で見たのとは違い、今の彼は、高級官吏が着るような、仕立ての良い服を着ていたのだ。
「ん？　おお、これか。ふふ、さすがにあの格好では学園長の仕事は務まらぬのでな」
そうして、ガルヴは穏やかな笑みを浮かべた。
そのことに、ルードヴィッヒは安堵のため息を吐いた。
ガルヴは放浪の賢者。一所にとどまることを好まない性格であることから、いささか心配ではあったのだが、どうやら杞憂だったら

しい。
「ああ、そういえば、ペルージャンでは、アーシャ姫殿下にも助けられました。あの方も、師匠の教えを受けておられるのですか？」
同じく、ミーア学園で教鞭をとるアーシャの話を振ってみる。と……、
「はは、かの姫は、なかなかに聡明な方じゃ。わしなどに教えを請わずとも、しっかりとご自分の考えで、真実に行き着くことができるじゃろう」
「なるほど……」
「さて……それでは改めて聞かせてもらおうか。ミーア姫殿下、帝国の叡智がペルージャンで、どのように振る舞われたのか……」
そうして、部屋の奥へと招かれたルードヴィッヒは、椅子に座り、ワインで喉を湿らせて一呼吸。それから、ゆっくりと口を開いた。
「ミーアさまが初めにされたこと、それは、果物の収穫を手伝うことでした」
初めは、ミーアが満喫したルビワ狩りのエピソードからだ。
「なるほど。ともに、額に汗することで、民の信頼を得るか……。ペルージャンの姫君は、農民の先頭に立って農作業に勤しむと聞くが、かの国のやり方に倣ったということか」
「それだけではなく、その場で供されたルビワの実を食べられました」
それを聞き、一人の男が驚きの声を上げた。
「ルビワはたしかに良い味のする果物だが……、あれは果汁で手が汚れる。高貴な身分の令嬢には好まれない食べ物だが……」
ミーアのことがまだ理解できていない同輩に、先達として、ルードヴィッヒは優しく声をかける。
「ミーアさまは、そのようなことは気にされない方なのだ」
そう、ミーアはたしかに、甘い果物を食べるためならば、手が汚れることなど厭わない人間である。ルードヴィッヒはなにも間違ったことは言っていない。言っていないのだが……。

「労働のお礼の気持ちとして……、ともに額に汗した親愛の証として供されたものを素直に受け入れること……。ペルージャンのことを属国と見下している中央貴族の者たちには、とてもできないことだ……」
なぜだろう……、なにかが、ズレていく……。
「それから、黄金の坂のことがあった。みな聞き及んでいるだろうか？　ペルージャンが帝国貴族に対してするもてなしの話……。師匠はご存知かと思いますが……」
「ああ……王都へと続く坂道に収穫した小麦を敷き詰め、その上を馬車で通らせる愚かな風習じゃ。恐らく、帝国貴族のアホウが言い出したことなのじゃろうが。相手の誇りを折り、屈服させる、ただそれだけの意味しかない行為じゃな」
吐き捨てるように言ってから、ガルヴはルードヴィッヒのほうを見た。
「さりとて、それを無碍にもできまい。姫殿下はどのように応じられたのか？」
興味深げに視線を向けてくるガルヴ。ルードヴィッヒは、わずかばかり得意げに答えようとして……、
「あ、俺、わかったっす。馬車から降りて坂道を上ったんじゃないっすか？」
その前にジルベールが口をはさんだ。その答えに、周りの者たちも、納得の頷きを見せる。
「なるほど。それは妙案。たしかに、馬車が通ってはせっかくの小麦が台無しになるが、足で踏んでいくだけならば、そうはならない。相手の心遣いを無駄にせず、さりとて、プライドを傷つけすぎることもない、落としどころとしては最善策だ！」
少壮気鋭の能吏たちの出した答えに……、けれど、ルードヴィッヒは首を振り、
「惜しいが、それでは半分だ。ミーア姫殿下は……、靴を脱ぎ、裸足になって坂を上られたのだ」

「なんと！　裸足にっ！？」
「馬鹿なっ！　そのようなことを、皇女殿下がっ！？」
ミーアの熱狂的なファンたちは盛り上がり……、ルードヴィッヒの自慢話は続く。

第六十五話　帝国の叡智の深淵

「それから、収穫感謝祭は佳境を迎えるのだが……、そこでミーアさまは舞を披露されてな」
ルードヴィッヒは、静かに目を閉じて、あの時の光景を思い出す。
「あれは、なんとも素晴らしきものだった。まるで、ペルージャンとティアムーンとの、新しい関係を示しているかのような……。ミーアさまのダンスの技量が高いことはお聞きしていたが、まさか、あそこまでとは……」
ちょっぴり陶酔した口調で言うルードヴィッヒ。どうやら、少し前に飲んだワインで酔いが回ってきたらしい。
そんな、ちょっと素面じゃないルードヴィッヒに、ガルヴが深々と頷いて……
「舞には、心根が表れるとも言われる。人々の安寧を祈願するミーア殿下の想いが、舞を清らかに、美しくしたのだろう」
もっともらしいことを言った！
威厳のある師の言葉に、弟子たちは「なるほど……」と納得の頷きを見せる。
「はい。まさに、そのような舞でした」
そして、ルードヴィッヒは、その波に乗る。波乗りミーアの右腕の面目躍如である！
「そして、舞が終わった時にペルージャン国王、ユハル陛下が宣言された。ペルージャンは、ミーア姫殿下と信頼関係を結ぶと……」
「だが、それでは、良いところはペルージャン国王に持っていかれてしまったような……」
「いや、ミーアさまは、殊更に功を誇る必要を覚えなかったのだろう。それよりも、ペルージャンの信頼を重視なされたのだ」
あの時の静かなる興奮を思い出し、ルードヴィッヒは身震いする

思いがした。集った民の目に宿る希望の光……、歓喜の声……。それを見て、満足げな顔をするミーア。
あれは、生涯忘れえぬ光景であったと、ルードヴィッヒは改めて思う。
「けれど、ミーア姫殿下の狙いは、それだけではなかった」
「なんだと？　それはどういう意味だ？」
「これは、あくまでも俺の推理なのだが……」
状況証拠から組みあがる予想。
複数の国をまたがる食糧の相互援助という壮大な構想。
際限なく膨らんでいく妄想。
ルードヴィッヒの披露したメイスイリに、賢者ガルヴの弟子たちは……、少壮気鋭の能吏たちは……、無邪気な子どものように湧き上がる！
「なんと……、フォークロード商会だけでなく、かの大商人シャローク・コーンローグを巻き込んでとは……」
以前、シャロークと会ったことがある者は、かの金の亡者の変容に驚愕する。
とてもではないが、そのような慈善活動に尽力しようという人間には見えなかったのに……、と、しきりに首を傾げている。
「あらゆる者たちが、ミーアさまのパン・ケーキ宣言のもと、一つに固まっていった……、そのような印象だった」
だいぶ陶然とした口調でルードヴィッヒは言った。先ほどまで、なみなみと注がれていたワインは、すでに無くなっていた！
そんな、だいーぶシラフじゃないルードヴィッヒに、賢者ガルヴは深々と頷いて、
「ふむ。多くの人間の心を動かす言葉はたしかに存在する。ミーア姫殿下のお言葉には、力があるということだろう」
またしても、もっともらしいことを言った！
師の含蓄ある言葉に、弟子たちは納得の頷きを見せる。さらに、その中の一人が、

「ルードヴィッヒ……。その仕事、ぜひ、俺にも関わらせてもらいたい」
名乗り出る！
能力はあるが、それゆえに使いどころを見つけえぬ者たち。そんな彼らにとって、帝国の叡智の示した“未だ見たことのない組織のありよう”は、とても魅力的に見えたのだ。
「ああ、行ってくれるか。ことの経緯から、帝国から人材を出さないわけにはいかないと思っていたんだ」
他にも数名、興味を示した者がいたため、ルードヴィッヒは資料の提供を約束する。
「小麦の品種改良にも人材を割かねばならんだろうが……。その道に詳しい者は軒並み帝国に絶望して国外に行っていてな。呼び戻しておるんじゃが……、一番頼りになりそうなのは、今、海を越えていてな……」
苦い顔をするガルヴにルードヴィッヒは首を振る。
「できる限りのことをするしかないでしょう。ミーアさまの発想についていくのは、我々でも難しい」
その言葉には、多くの者が頷きを返すばかりだ。
「それにしても、恐るべき方だな。ミーア姫殿下は……。これほどの事態、人の身に予想できるものなのだろうか？」
「すべては計算の内っすか。恐ろしくすらあるっすね」
そんなことをつぶやくジルベールに、他の者が笑った。
「なんの。悲観することもあるまいよ。むしろ、すべてが何の計算もない偶然であったほうが恐怖だ」
「ふむ、言われてみるとそうっすね」
そうして、一転、和やかな笑顔が室内にあふれた。
……彼らが真実を知って、その笑顔が凍り付く日が来ないことを願うばかりである。
「とまぁ、そんな形で我々は備えを進めているわけだが……」

「着々と、勢力固めに励んでいるわけか」
「ああ。だが、時間は敵にとっても平等に進んでいる」
「なるほど……。万全の体制が築かれつつある中で、敵は切り崩しにきたというわけか。一番、崩しやすいところを」
「当然のやり方だな。貴族とは保守的な生き物だ。あの冬の日、ミーアさまが紫の衣を身にまとってから、それなりの時間がたった。反感を抱く者たちが動き出してもおかしくはないさ」
そう言って、ルードヴィッヒは眼鏡を押し上げる。
「ということは、令嬢のほうはともかく、グリーンムーン公爵本人は、姫さんが女帝になることに反対であると？」
「ミーアさまが帝位を継がれないのであれば、自分の子が皇帝になる目も出てくるからな。反対する理由はあっても、支持に回る理由はないが……、どうだろうな」
と、ここで、ルードヴィッヒは腕組みする。
「案外、娘に良い結婚相手をあてがってやっただけのつもりかもしれない。人の心はわからないものだ。何を考えているのか、得体が知れなく思えても、案外、くだらないことを考えている可能性だってあるさ」
帝国の叡智の深淵に届いてしまいそうなことを言いつつ、ルードヴィッヒは笑った。
「なんにしろ、我々がすべきことは、あらゆる敵対者からミーアさまを守ることだ。蛇にしろ、反女帝派にしろ、降りかかる火の粉はすべて払いのけなければ……ん？　どうかしたのか？」
突如、立ち上がったディオンにルードヴィッヒは眉を顰める。
「いや、なに……。何者かが近づいてきた音が聞こえたものでね」
それからディオンは、腰の剣に軽く手を置いて……、
「ともあれ、足音からすると大した相手じゃなさそうだ、やれやれだね」
肩をすくめながら、ディオンは馬車を出た。

第六十六話　バシャガイドミーア

「ふぅむ……」
馬車の中に、ミーアの唸り声が響く。
皇女伝の記述を思い出して、ミーアは憂鬱な気分に浸っていた。
「あら？　どうかされましたの？　ミーアさま」
ふと視線を上げると、そこには心配そうに、こちらを覗き込むエメラルダの顔があった。
その後ろでは、ティオーナやシュトリナ、ベルまでもが心配そうな顔で見つめている。
「ああ、いえ、なんでもありませんわ。昨夜は、あまり寝られなかったので、少し眠たいだけですわ。ふわぁ……」
言っていて、あくびがこぼれてしまう。
そうなのだ、昨晩はとても大変だったのだ。
グリーンムーン家の馬車を二台連結させ、そこに、ミーア、エメラルダ、ティオーナ、ベル、シュトリナの令嬢たちに、アンヌ、リオラ、ニーナの従者勢も集まって、夜通しのガールズトークで大いに盛り上がったのだ。
リオラの森にまつわる怪談や、ティオーナの、決して入ってはいけない廃村の話、シュトリナの、記憶にすら残せないぐらいの恐ろしい話……などなど。
もぐもぐお菓子を食べながら、興味深げに聞いているベルとは違い、ミーアは心底から震え上がった。こんな時に頼りになるアンヌは、残念ながら、ニーナと従者トークで盛り上がっていた。
ということで、ミーアが寝不足なのは、本当のことであった。
しかし、実のところミーアが気鬱になっているのは、そのせいではなかった。
――たしか、もう少し北上したところにある村の近くで、商隊を

襲っている盗賊団と戦闘になった、と書かれておりましたわ。それで、敵に討ち取られた、と。
旅は、ここまで順調に、計画通りに来ていたのだが……。
――この馬車の故障は予定外でしたわ。このまま予定通りのコースを進んでいたのでは、間に合わなくなりますわ。くっ、仕方ありませんわ。近くの町でお土産を買うのは諦めて……。
すっかり、バシャガイドさんのようになっているミーアである。
ともあれ、寄り道をしたのでは間に合わないから、と泣く泣くショッピングの予定を改めようと考えていた、まさにその時のことだった。
こん、こん……と。
馬車のドアがノックされたのだ。
「失礼いたします。ミーア姫殿下、よろしいでしょうか？」
現れたのはサンクランドの護衛隊の隊長だった。彼は、エメラルダを招待した貴族、ランプロン伯から派遣された兵士だった。
サンクランド王国の常備軍は大別すると二つに分けられる。
一つは軍全体の半分を担う王軍、もう一つは、各地の貴族の私兵団である。
今回、エメラルダのために派遣されてきたのは、ランプロン伯の私兵であるという。
深々と頭を下げる隊長に、ミーアはニッコニコと笑みを浮かべる。
「あら、隊長さん、警備お疲れさま。なにか御用かしら？」
優しい声をかけられた隊長は、少しだけ驚いた様子で目を瞬かせた。
はて？　と首を傾げるミーアは、無理やりエメラルダについてきたわがまま姫という設定を完全に失念していた。
『わたくし、エメラルダさんのお友だちの、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ！』
などと自己紹介した時の、今にも泣きそうな隊長の顔は、しばらくは忘れられないだろうな、と思っていたのだが……。必要のない

ことはコロッと忘れるミーアなのであった。
「実は、近くを商隊が通りかかったようなのですが……」
「ほう、商隊……ですの？」
「はい。王都に向かっている途中だそうで。いかがでしょう？　途中で買い物をする予定でしたが、ここで、商人から直接に、買い付けを行うというのは……。出発の準備には、まだ時間がかかるでしょうし……」
「なるほど……、それは悪くないですわね。ちょうど退屈していたことですし……」
ミーア的には、町で買う予定であった、サンクランド名物のお菓子や食べ物が買えるならば文句はない。
それに、サンクランドと言えば、銀細工品も有名だ。馬車の中で退屈していた令嬢たちも、楽しめるのではないだろうか。
――商人に扮した賊ということも、考えられなくはありませんけれど……。
その点に関しては、ミーアは心配していなかった。
なにしろ、護衛を担当しているのはディオン・アライアである。あの、ディオン・アライアである。笑いながら金属を両断できるあの恐ろしい男なのである！
彼の目の届くところで、凶刃をふるうことは、とてもではないが不可能だろう。
恐らく知らせに来たのがサンクランドの側の隊長であることを考えると、ディオンのほうは商人たちを見張っているのではないだろうか。
――それに、ルードヴィッヒも同行しておりますし……、万に一つも危険はないものと判断できますわね。
などと思いつつも、
「どうかしら、エメラルダさん？」
念のために、今回のメインゲストであるエメラルダに聞いてみる。
っと、

「いいですわね！　サンクランドの商品、気になりますわ！」
エメラルダも乗り気のようだった。
「ふむ、タイミング的にも、ちょうどいいかもしれませんわね」
などと、のんきにつぶやくミーアは……気付いていなかった。
シオン・ソール・サンクランドが死亡した時の記述のこと。
彼の命を奪う盗賊団……それが襲っていたものが、はたしてなんであったのかを……。

第六十七話　ミーア姫、キノコの目利きを始める！

「お目にかかることができ、光栄にございます。ミーア姫殿下」
縮こまった商人を前に、ミーアは、ちょこん、とスカートの裾を持ち上げ、
「これは、ご丁寧な挨拶、痛み入りますわ。巡礼商人殿」
にっこりと笑みを浮かべる。
巡礼商人――それは、巡礼街道を移動しつつ、商売を行う者たちの総称である。
彼らは巡礼街道を通り、様々な国をめぐっては商品を買い付け、別の地に売りに行く交易商だ。巡礼者に対しての旅の物資の売買もするため、各国で重んじられている。
「今は、どちらに向かっているところなのかしら？」
「はい。私どもは、王都を目指しております」
「あら？　あなたたちも王都に？　それは奇遇ですわね。わたくしたちもですわ」
ミーアの言葉に、男は苦笑いを浮かべた。
「縁があったのが、ミーア姫殿下ご一行であったことに、我ら一同、胸をなでおろしております」
「あら？　それはなぜですの？」
「実は、この辺りに盗賊団が現れるという情報を得まして。さりとて、進路を変えるのもなかなかに難しく……、盗賊団と遭遇してしまったらどうしようかと、頭を悩ませていたのです」
商隊は、馬車三台の、それほど大きな規模のものではなかった。
どうやら、三人の馬車持ちの行商人が、向かう方向が同じということで、行動を共にしているだけらしい。
当然、しっかりとした護衛を雇うだけのお金もない。
「サンクランドは治安が安定した国ではありますが、賊がまったく

出ない地というのはございませんので……」
「ふむ、なるほど……」
ミーアの脳裏に、シオンの命を奪う盗賊団の姿が浮かんだ。
――その噂になっている盗賊団が、シオンを殺すことになるのかしら……。
「あの、どうかなさいましたか？」
「はぇ？　あ、ええ、なんでもありませんわ。それよりも、これもなにかの縁というもの。よろしければ、あなたたちの売り物を少し見せていただけないかしら？」
「それはもちろんでございます。品質の良い商品を取り揃えておりますよ」
商人は愛想のよい笑顔を浮かべ、もみ手を始めるのだった。

「まぁ、ミーアさま！　この布、なかなか上質なものですわよ？」
「あら、そうですわね。手触りが、とてもよろしいですわ」
エメラルダの歓声に、ミーアは優雅な、皇女然とした笑みを浮かべた。
ミーアだってやろうと思えば、姫っぽく振る舞うことはできるのだ。なにしろ、ミーアは帝国の皇女。疑義を差しはさむ余地なく、正真正銘、お姫さまなのである！
“っぽく振る舞う”もなにも、そもそもがお姫さま。自然にしていれば、その風格は否が応でもにじみ出てくるはず……はずなのだが……。とても、不思議なことである。
――ふむ、みなさん楽しんでいるようですし、良かったですわ。
ティオーナやシュトリナ、ベルも、それぞれに商品を見て楽しんでいる。
貴族の令嬢に相応しい、華やかな光景をしり目に、ミーアは、とある場所で立ち止まった。
「まぁ、これは、紫偉茸（しいたけ）を干したものですわね。ここからだいぶ離れた場所が産地だったから、諦めていましたけれど、まさか、出会

えるとは思っておりませんでしたわ！」
　それは、サンクランドの東方でとれるキノコだった。乾燥させることで味に深みが生まれるというそのキノコは、高貴なる偉人が好んで食べたものとして知られている。
「あら、それにこちらのは、抹茸（まったけ）ですわね。煎じてお茶にすると、独特の甘みがあるという……」
　緑色のキノコに歓声を上げるミーア。
「おお、お詳しいですね。ミーア姫殿下」
「うふふ、それはもう。このぐらい当然ですわ」
　ミーアは、予習の成果を存分に披露していく。ドヤァ顔で、別のキノコに目をやり……、
「これは、旨芽慈茸（しめじだけ）ですわね。とっても美味しそう」
　アベルに食べさせてあげたいな、なぁんて思っていると……、商人はおかしそうに笑い声をあげた。
「ははは、惜しいですな。それは、紅旨芽慈茸（べにしめじだけ）という毒キノコです」
　ミーア、見事に毒キノコを引き当てる！　危うく食べさせられそうになったアベルは今ごろ、背筋に寒気を覚えているころかもしれない。
「どっ、毒キノコっ！？　なぜ、そのようなものを売っているんですの！？」
　悲鳴を上げるミーア、っと、その後ろからそっと近づいてきたシュトリナが説明してくれる。
「この毒キノコは、じっくりと煮込めば毒気が抜けます。珍味として、一部の地域では親しまれていると聞きます。それに、このキノコの陽毒（ようどく）は、陰毒（いんどく）と打ち消しあうので解毒剤にも用いられることがあります。もっとも、かなり強い毒なので、これを使って拮抗させなければならないような毒はあまりありませんが……」
「おお、そっちのお嬢さんも詳しいですな。たしかに、これを解毒剤として使うことは、今ではほとんどありますまい。昔は、狩猟に毒矢が使われておりましてな。誤って指にでも刺したり、口に入っ

てしまった、などという時には、これを使って治療したとのことですが」
シュトリナの言葉を、商人の男が補足する。
「わぁ、リーナちゃん、すごい！」
「ふふ、それほどでもないけど……」
などと言いつつも、ベルに手放しで褒められて、嬉しそうに笑みを浮かべるシュトリナである。
一方、ミーアは、
「ふーむ、そうなんですのね」
ドヤっていたのを邪魔されて気を悪く……する様子もなく、むしろ感心した顔で頷く。
そうなのだ……キノコ女帝ミーアにとって、キノコの知識を与え、自らを成長させてくれるものは貴重な師。尊敬をもって接するべき人物なのだ。
――さすがはリーナさん……、素晴らしい知識量ですわ。
腕組みしつつうなってから……、
「ならば……、買っていってもよろしいかしら……」
とんでもないことを言い出した！
――珍味などと聞いてしまえば、試してみない手はありませんわね。専門家のリーナさんがいれば、処理にも困らないはず……。
キノコ向学心の塊のミーアである。
それから、ミーアはシュトリナのほうを見て、
「リーナさん、処理をお願いできるかしら？」
美味しく仕上げてね、という思いを込めて、ミーアは、シュトリナを見つめた。
対して、シュトリナは、真剣そのものの顔で、こくりと頷き、
「……かしこまりました。ミーアさま」
商人からキノコを買うと、すぐにその場を去っていった。
新たなる珍味を手に入れたミーアは、ほくほく顔で、ほかの商品も見て回る。

すっかり、商人たちと仲良くなってしまったミーアは、ちょうど向かう先が同じだった商隊と、同行することにしたのだった。

第六十八話　叡智持つ策略家 〇 ミーア

――うふふ、ああ、とても上手くいきましたわ。

今回の旅行に際して、ミーアは珍しくしっかりとしたタイムスケジュールを組んでいた。いかにして、問題の日、問題の場所にディオンを送り込むのか、きっちりしっかり、計画を立てていたのだ。

そして、計画は思いのほか順調に実現しつつあった。馬車が壊れたこと以外には、ほぼ予定通りであるといって良い。

その馬車の遅れにしても、途中で町に立ち寄る予定を中止にし、商隊と同行することで、修正した。

計画の実現まで、あとわずかといったところだった。

――さて……最後の問題は、どうやってディオンさんをシオンたちのところに送るか……ですわね。偵察に行っていただくという名目で先行してもらうのが良いかしら……。

ミーアの目的は、シオンを、ディオン・アライアによって守らせることであって、自らが助けにいくことではない。断じてない！

当たり前である。いくらシオンを救うためとはいえ、まさか、ミーア自身が危険な場所に飛び込むわけがない。というか、行ったとしても役に立つとも思えない。

そう、ミーアはあくまでも影で動く存在。

――そうですわ。わたくしは策略家なのですわ。自分で手を下すことなく、この叡智によって事態を操るのですわ……。うふふ……。

などと……、今まさに、大きな大きな波の頂上にいるミーアは、完全に忘れていた。

人生とはままならぬものなのだ、と……。波の頂上に上ったからには、あとには落下が待っているものなのだ、と。

ミーアは、忘れていたのだ。そんなミーアの油断が招いたのか……、唐突に、ガクンっと馬車が揺れた。

……直後！
「盗賊だっ！　襲ってくるぞっ！」
前方から、声が聞こえた。
「……はぇ？」
事態は、あっさりと、策略家ミーアの支配を外れていった。

「盗賊かー……」
前方から回り込むようにして接近してくる者たちに、ディオンは静かに目を向ける。
「それにしては、よく訓練されてるなぁ……」
一糸乱れず隊列を組んで馬を駆る彼らは、帝国正規軍の騎兵に勝るとも劣らない練度を誇っているように見えた。
「鮮やかな包囲だ……」
「ディオン隊長！」
「もう、隊長じゃないよ」
そばに寄ってきた元の部下に、ディオンは苦笑いを浮かべた。
「それより、護衛の動きは？」
「商人たちの雇った護衛はお察しですね。グリーンムーン家の護衛も頼りない感じで。ああ、ランプロン伯の兵は、さすがに我々に匹敵するぐらいの練度じゃないかと」
「ふーん。なるほど。まぁ、普通の盗賊なら、それでことが足りるんだろうけど……」
あの盗賊、ちょーっと普通じゃないっぽいんだよね……などとつぶやいている間にも、盗賊たちの乗る馬は、こちらの脱出路をつぶすように動いていた。
「どうします？　我々で切り込みますか？」
「んー、バノスがいるんなら、それでもいいんだがなぁ。ちょっと被害がシャレにならないか……。ふーむ」
「おや？　珍しいですね。ディオン隊長が悩むだなんて……。てっきり単騎でも突っ込むのが隊長かと思ってましたが……」

怪訝そうな顔をする元部下に、ディオンは苦笑いを浮かべた。
「いや、なに……。姫さんが、なぜ、この僕を呼んだのかと思ってね……」
普通に考えれば、まさに、あの盗賊のような者たちに対しての備えであろうし、例の狼使いが襲ってきた時の対処だろう。
けれど……、
――うちの姫さんは、人死にを嫌うからなぁ。そのための備えとして僕を呼んだのだとしたら……。
脳裏に浮かぶのは、以前、レムノ王国の革命騒動を、被害を出さずに、解決へと導いたミーアの手腕だ。
「今回も同じようなことを期待されてるとしたら……、そして、例のあの男とあの盗賊たちにつながりがあるのだとしたら……？」
そうして、ディオンは、やれやれ、と首を振った。
「で、どうしますか？　なにか、俺らはいつでも行けますが」
「ああ、そうだねぇ。まぁ、剣を交えずして勝つというのが、どうやら最上の策だという話だからね。とりあえずは、試してみるさ……はっ！」
馬を駆り、ディオンが前方に進み出る。それに続いて来ようとする近衛たちに、声をかける。
「お前たちは、姫さんの守りを頼む。もしも、オオカミを連れた男がいたら、すぐに僕を呼べ。命を懸けろとは言わないよ。死んで時間を稼げ」
「ひゅー、さすが隊長！」
「相変わらずの鬼っぷりだ！」
部下たちの歓声を背に、ディオンは盗賊たちに一直線に向かっていく。
剣を抜き、馬上で構える。
「無駄な抵抗をするな！　荷物さえ渡せば、命は保証する」
そう言って、先頭にいた盗賊が弓を放った。
風切り音を鳴らしながら、迫りくる矢。

それをしっかりと見据えたディオンは、闘争の気配に、豪胆な笑みを浮かべて、
「ああ、命を張るのは久しぶりだ」
剣を真横に振るった。
ザンッと鋭い音を立て、真っ二つになった矢が地面に落ちる。
「勇敢なる盗賊の諸君！　命が惜しければ、もっと矢を放ったほうがいいぞ。この僕が、君たちの命を刈り取りに行かぬうちにね」
高々と放たれた挑発、それに応じたのは、数十にも及ぶ必殺の矢だった。

第六十九話　帝国の叡智の剣として

「うん、なかなかいい腕だ」
自らに向かってくる矢を見やりながらディオンはつぶやく。
山なりの曲線を描き、飛来する矢の、そのどれもが的である自身を外してはいないことに、ディオンは満足の笑みを浮かべる。
狙いがつけやすいよう、わざと一定の速度で馬を走らせてはいるのだが、それを差し引いてもなお、敵の腕はかなりのものだった。
地面はおろか、馬にまで向かっているものはなく……それゆえに……、
「防ぎやすくて助かるよ」
あえて躱すことなく、ディオンは正面から迎え撃つ。
神速の剣閃が、複雑な軌道を描いて走る。稲光のごとき光は、まるで、初めから予定されていたかのように、矢の軌道を正確に走り……。そのすべてを弾き飛ばした！
それは、まるで結界。
さながらディオンの前方に、風の壁でもあるかのように、放たれた矢のことごとくが軌道を変え、明後日の方向へと飛んでいく。
「しかし、馬上であるにもかかわらず、これほど正確に弓を射るとは……。我が帝国の騎兵でも無理だろうね」
馬上で的を射るのは、非常に難易度が高い芸当だ。
帝国における弓兵とは、しっかりと安定した足場で狙いをつける狙撃射手（スナイパー）か、あるいは、大集団によって、面で狙いをつける弓兵かのいずれかだ。
「馬の上から狙撃射手並の精度で撃ってくるとはね。やっぱり、ただの盗賊じゃなさそうだ……っと」
直後、ディオンは左手を上げる。首筋あたりに伸ばした手には、刹那の後に一本の矢が握られていた。

「時間差をつけての狙撃か。んっ……？」
矢の先端、ぬめりのある樹液のようなものを見て、ディオンは目を細めた。
「しかも毒矢、ね。かすっただけでも致命傷ということか。なるほど、並みの兵士なら死んでいただろうけど……。これでやりやすくなったかな？」
快活に笑うと、ディオンは盗賊たちのほうに目を向ける。それから、手に持った矢を、高々と真上に投げ、
「我が名は、ディオン・アライア。栄えある帝国の叡智、ミーア皇女殿下の剣である！　命一つ懸けることなく、安全圏から射殺せるとは思わないでもらおうか」
次の瞬間、落ちてきた矢を一閃、二閃、三閃。
四つに切り裂かれた矢を、わざとらしく見せつけてから、
「命のいらぬ者から、かかってくるといい。ああ、三人以上、同時に襲ってくるのをお勧めしておこうか。いらぬ命とはいえ、無駄遣いを見過ごすのは、心が痛むからね」
そう言ってから、ディオンはすかさず、盗賊たちを見据えて威圧する。
彼の名を聞いた盗賊たちに、かすかに広がる動揺の波。それをディオンは見逃さない。
――なるほど。僕の名前を知っているか……。やはり、狼使いとつながりがあるのか……。あるいは、僕の悪名は、ついにサンクランドまで広まったということかな？
ディオンが名乗りを上げた目的は二つあった。
一つは、盗賊団と狼使いとの間につながりがあるか確認すること。
もう一つは、その名を誇示することによる、恫喝だ。
――もしも、僕が狼使いだったら、ディオン・アライアには、なにがあっても手を出すな、と言うだろう。もちろん、ディオン・アライアに匹敵する剣の腕を持っているならば、別だが……。
もし、そうならば、自らの名前は、相手に撤退を促す武器となる

かもしれない。
「まともにぶつかり合っても、負けはしないだろうけどね」
一兵士としては、それでも良い。相手を打ち負かし、全滅させるか、あるいは、撤退に追い込めば、とりあえずの勝利と言えるだろう。
だが、兵を率いる立場からすると、それは最善手ではない。
なぜなら、兵は戦えば疲弊する。体力ならば回復するだろう。あるいは、治る怪我ならば良いかもしれない。されど、死ねば……、あるいは重傷を負い、二度と戦えなくなれば、軍は消耗するのだ。
鍛え、練度を高めた、手塩にかけた兵士たちが消耗する……。それは看過できぬ損害だ。ゆえに、軍にとっては、戦端が開かれてしまった時点で、最善ではない。
――戦わずして勝つ、ね。ああ、まったく……。この僕が将のようなことを考えなければならないとは……。
一兵士であれば……、ただ、己が剣腕をもって、敵をねじ伏せればよかった。
されど、帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンの剣としては、それでは不足なのだ。
「とまぁ、僕にできるのはここまでかな……。これでもかかってくる命知らずなら仕方ない。我が剣の錆になってもらおう」
未だ引かず、さりとて、一気に攻めてくることなく、緩やかに包囲網を形成する盗賊たち。ディオンには彼らの心情がなんとなく理解できた。
「馬車を守りつつ戦う相手なら、あるいは、たった一人の相手ならば、討ち取ってしまえるかもしれない。ここで、ディオン・アライアを討ち取ることができれば、ことを有利に運べるかもしれない……。そんなところかな。あるいは、後ろの馬車が乗せている人物に興味を持ったか……」
いずれにせよ、それは死に至る選択だ。
「狼使いがいれば、迷うことなく撤退の判断をしただろうけれど…

…、ああ、でも、あいつがいたら、今度は僕のほうが斬りかかってただろうな。そのほうが楽しいから」
さて、どうなるか、事態をもう少し見守ろうとしていたディオンだったが……、直後、事態が急変する。
「王国軍だ！」
悲鳴のような声、と同時に遠くに見える土埃。
軍馬の蹄が大地を削る音とともに、遠く、騎馬の一団が見える。
帝国最強の鬼神、ディオン・アライアと王国軍の双方を相手取るという無謀を、盗賊たちは選択しなかった。
直後、盗賊団の放つ殺気立った空気が減ずるのをディオンは感じる。と同時、賊の馬首が一斉に翻った。襲撃してきたのと同じ、一糸乱れぬ動きで、その場から逃げ去る盗賊団に、ディオンは、ほう、と感心の声を上げる。
「やはり見事だ。あれでは、追跡も叶わないだろうな……おや？」
「ディオン殿！」
視線を転じたディオンは、王国軍の先頭に、見慣れた少年の姿を見つける。
「シオン殿下直々に騎兵を率いるか。アベル王子といい、なかなかに勇ましいが……はてさて、これもミーア姫殿下の計画の内なのかな……」
小さな声で独り言ち、ディオンは剣を収めた。

第七十話　ミーア姫、ひどく寛容な気分になる……

「盗賊だ！　盗賊が襲ってきたぞっ！」
外から聞こえてきた声。それを聞いて、ミーアは、自らの失敗を悟った。
――ああ、失敗ですわ。当事者になってしまいましたわ。
それでも、落ち着いていたのは味方にディオン・アライアがいるからであり、敵にディオン・アライアがいないからだ。
帝国最強、否、大陸最恐のディオン・アライアが味方にいるのだ！　かつて、かの男に追われた、修羅場マイスターのミーアとしては、
――まぁ、盗賊程度の危機であれば、ね……。
ぐらいの危機感である。なんと、珍しく余裕があった！
――どうせ、シオンのことですから、盗賊ぐらいと油断して命を落としたのでしょうけれど、ふふふ、わたくしには油断はありませんわよ！　図らずも、わたくし自身が危機のど真ん中に突入するようなことになってしまいましたが、恐れるに足らずですわ！
そうなのだ。ミーアには自信があるのだ。
今回の旅行は、万全の備えをしてきたのだ。肝心なところで、ちょこっとだけ失敗したけれど、それ以外は上手くいっている。思いもよらぬショッピングで、滅多に手に入らない珍味だって手に入ったのだ。
この程度の盗賊、どうにかできないはずがない。
「ミーアさま……」
不意に、自分を呼ぶ声。情けない声に視線を向ければ、エメラルダが不安そうな顔をしていた。そばにいるニーナに半ば抱き着くような感じで、なんとも情けない様子である。
――ふぅ……、まったく。いくら怖いといってもメイドに抱き着

くなんて……。子どもみたいですわ。
それから、ミーアはアンヌのほうを見た。
アンヌもまた不安げな顔をしていたが、そこまで取り乱してはいなかった。
――ふむ、わたくしだったら、いくら怖くってもあんな風にアンヌに抱き着いたりはしませんわ。アンヌが怖がってる時には、仕方なく抱き着いて差し上げることもありますけれど……自分が怖いからと言って、あんな情けない姿をさらしたりは致しませんわね。まったく、エメラルダさんは怖がりですわね。
やれやれ、と首を振りつつも……、
「大丈夫ですわよ、エメラルダさん。この程度の盗賊、わたくしの近衛たちがいれば十分に蹴散らすことができますわ」
安心させるように微笑んで見せた。
――それにしても、これは、わたくしがいなかった場合には、どうなっていたのかしら？
巡礼街道を通っていた商人たちは、恐らくエメラルダたちの一行を追い抜いて行った先で盗賊団に襲われたのだろう。そこで戦闘が起き、シオンは命を落とす。
――いや、そもそも、エメラルダさんの旅行日程は、わたくしが調節したから、このようになっておりますけれど、実際には数日間のズレがあったはずですわ……。
ゆえに、このようにタイミングよく盗賊団と鉢合わせることはなかったはずである。
けれど、ルート的に言えば微妙に重なっているわけで……。
――気にはなりますわね。こんなでもエメラルダさんは、帝国の四大公爵の令嬢ですわ。いろいろと利用価値はありそうですし……。
そうなってくると、ミーアは考えざるを得ない。
――盗賊の討伐隊にシオンは無理矢理に参加させられたのかしら？　それともシオンが介入しなかった場合には、なにか別の事態が起きていたのかしら？　この盗賊団の騒動は、シオンを暗殺するた

めの陰謀だと思っておりましたけれど、あるいは、エメラルダさんを巻き込むためのなにかだった可能性もありますわね……。
皇女伝に書かれていたのは、シオンが死亡したという記述のみ。その裏に隠されたものを調べることは困難で……。
――いずれにせよ、一筋縄でいかないものを感じ……、はぇ？
突如、エメラルダが抱き着いてきた。
「ちょっ、エメラルダさん、どうしましたの？」
見れば、エメラルダは、目に涙を溜めつつも、懸命に虚勢を張っていた。
「み、ミーアさま。怖いんでしたら、無理しなくっても大丈夫ですわ！　い、いざとなれば、この星持ち公爵令嬢たる私が、この身に代えてでもお守りいたしますわ。私の兵たちも、きっと私のために命を懸けてくれるはず……。で、ですから、ご安心くださいませ」
どうやら、エメラルダ……、うつむいてぶつぶつ言っているミーアを見て、怯えていると思ったらしい。
「いえ、エメラルダさん、ですから、この程度はなにほどのこともないと……」
「ええ、ええ、わかっておりますわ。ミーアさま。ですけれど、怖いならば、怖いと言っていただいても、かっ、構いませんわ！　私がついておりま……ひぃっ！」
怯えつつも、燃え上がるお姉ちゃん魂を炸裂させるエメラルダ。それを見たミーアは、
――もしも、革命の時に、エメラルダさんと一緒に逃げたら、こんな感じだったのかしら？
などと、想像してしまうのであった。
あの時は、グリーンムーン家が国外に逃げてしまったため、エメラルダと逃避行、などということはなかったわけだが。あの不安しかなかった逃避行も、こんな風に慌てふためくエメラルダとなら、案外、気楽でいられたかもしれないな、なんて思ってしまって……。
――ふむ、まぁ、仕方ありませんわね。少々暑苦しいですけれど、

エメラルダさんも怖いのでしょうし、このぐらいのことは許してあげますわ。
ひどく寛容な気持ちになるミーアなのであった。非常に珍しいことである。

ちなみに、同じころティオーナとリオラが乗る武闘派令嬢たちの馬車では、二人が弓と矢の具合を確かめていた。
「リオラ、馬車の中から狙える？」
「問題ない、です。やれる、です」
自信満々頷いて、リオラは微笑みを浮かべた。
「そう。うん、私もなんとか当てるだけならできると思うから、いざとなったら……」
「胴体の真ん中を狙うといい、です。体は鎧で防がれるかもしれない、けど、遠くからでも当てやすいし、上手くいけば首を貫ける、です……」
剣呑な会話が繰り広げられる一方、さらにその一台前の馬車では……、
「ふわぁ！　もしかして、ディオン将軍の戦いぶりがみられるんでしょうか？」
「あれ？　ベルちゃん、あのディオンって人のこと知ってるの？」
きょとん、と不思議そうに首を傾げるシュトリナ。対して、ベルは嬉しそうに頷いて、
「はい。ボクの大恩人なんですよ」
「そうなの？　でも……、ううん。そっか、そうなんだ」
なにか、納得がいかないような顔をしていたシュトリナだったが、すぐに笑顔で首を振る。
事前に調べていた情報の真偽など、今の彼女にはなんの価値もない。
大切なお友だちが嬉しそうに、自分の過去のエピソードを語ってくれる！　そこにこそ、シュトリナは価値を置いているのだ。陰謀

よりも、お友だちとのお話が大事！
そう、今の彼女は立派な『貴族女子』なのだ。さらに……！
「ねぇ、ベルちゃんは、ああいう強そうな男の人のことが好きなの？」
「へ？　ボクですか？　うーん……、ボクはどちらかというと、強くて格好いい人がいいな……」
「へー。具体的にどんな人？　強くて格好いいというとアベル王子とか？」
「えへへへ、みんなにはナイショですよ？　ボク、てんび……じゃない。シオン王子みたいな人が好きで……」
……アベルお祖父ちゃんは泣いていい。

第七十一話　ミーアの信頼は揺らがない！

盗賊団襲来の声が響いてから、しばらくして……。
馬車が唐突に止まった。
息を呑み、身構えるエメラルダ。対して、ミーアはやっと終わったか、とため息を吐く。
――先ほど、ディオンさんが一人で行きましたし、問題ないとは思いますけれど……。ああ、でも、外の景色はあまり見たくありませんわね。きっと血の海ですわよ！
矢除けの防御板を下ろしてしまったため、それ以降、外で何が起きたのかはわからない。
けれど、ミーアのディオンに対する信頼は揺らぐことはない。
並みの盗賊団であれば、ディオン・アライアに対抗しえないということ。戦闘にすらならず、きっと一方的で凄惨な殺戮が繰り広げられるのだろうな、ということを……、ミーアはまったくもって、疑っていない。
ミーアのディオンに対する信頼は揺らぐことはないのだ！
やがて、馬車の扉がノックされた。
「失礼いたします、ミーア姫殿下」
続いて響くのは、ほかならぬディオンの声だった。
嫌だなぁ、見たくないなぁ、などと思いつつも、ミーアは、戸のそばにいたニーナのほうに目を向けた。エメラルダと同じく、少しだけ顔色の悪いニーナを安心させるように微笑んで、
「大丈夫。ディオンさんですわ。開けて差し上げて」
ニーナは一瞬の躊躇の後、馬車のドアを開ける。と、はたしてそこには、帝国最強の騎士、ディオン・アライアが立っていた。
再び、嫌だなぁ、見たくないなぁ、などと思いつつも、ミーアはディオンに視線を向ける。その鎧は、返り血で真っ赤に染まって…

……はいなかった。
――さすがですわ、ディオンさん。返り血を避けながら惨殺するなんて……相変わらずの恐ろしい手腕ですわ！
ミーアのディオンに対する信頼は、どこまでも揺らぐことはないのだ！！！
「ディオンさん、無事に終わりましたのね。外のさん……じゃない。被害は、どのような感じですの？」
きっと馬ごと斬り殺された死体とか、鎧ごと真っ二つの死体とか、怖いのがいっぱい転がってるんだろうなぁ、などと思っていたミーアは、うっかり「外の惨状……」などと言いかけて慌てる。
対するディオンは涼しい顔で、
「敵味方ともに死傷者なしです。サンクランド軍にタイミングよく介入してもらったおかげで、戦闘を避けることができましてね」
「サンクランド軍が介入……？　ま、まさか、盗賊の討伐はサンクランド軍に任せて、引いたなどというわけではないですわよね？」
それでは、何の意味もない、と大いに慌てるミーアだったが……。
「いや、生憎と、我々の目前で逃げて行ってしまったよ」
その声に、ハッと視線を転じる。っと、ディオンの後ろに、一人の少年が立っているのが見えた。それは……。
「ああ……、シオン……」
いつもと変わらない、涼やかな笑みを浮かべるシオンだった。
「よかった。あなた、無事なんですわね？」
確認のために、いそいそと馬車を降りてシオンのそばに歩み寄る。と……、
「ははは、なに、このぐらいの盗賊相手ならば、よくあることだしね」
なぁんて、気軽に言いやがった！　それはもう爽やかーな感じで言いやがったのだ！
ミーアはむぅっと頬を膨らませつつ、
「だとしても、駄目ですわよ、シオン。王子であるあなたが最前線

に出て戦うなどと……もしものことがあったら、どうするつもりでしたの？」
それを聞き、シオンの後ろ、キースウッドが深々と頷いていた。
良いこと言うなぁ！　とその顔に書いてあるかのようだった。
一方のシオンは、思わずといった感じで苦笑いを浮かべた。
「君にそれを言われるのは、少し複雑な感じがするな」
お前が言うな！　とツッコミを入れないだけ、実に紳士なシオンなのであった。
「しかし、ずいぶんとひさしぶりだね、ミーア。それに、エメラルダ嬢も」
シオンの浮かべる華やかな笑みに、エメラルダがホウッと息を吐いたのがわかった。
「まぁ！　これはシオン王子、このような場所でお会いできるなんて！」
緊張から一転、大好物のイケメンの出現にエメラルダのテンションはうなぎ上りだ。
――まったく、単純ですわね。先ほどまであんなに怯えていたのに……。
やれやれ、とミーアは首を振った。
――本当に困ったものですわ。高貴な血筋の令嬢が、そんな風にはしたない……。
などと呆れていると……、
「シオン王子！　おひさしぶりです！　お元気でしたか！？」
隣の馬車から、ベルが飛び出してきた。頬を紅潮させ、ニッコニコの笑みを浮かべる孫娘に、ミーアは……、思わず頭を抱える。
――ベル……。まったく、いったい誰に似たのかしら？
などと思っていると、ベルに次いで、シュトリナ、ティオーナ、リオラが降りてくる。
「ティオーナまで……いったい、サンクランドになにをしに来たんだい？」

名だたる令嬢たちの出現に少し驚いた様子で、シオンが言った。
「ええ、実は、こちらのエメラルダさんの付き添いできましたの。なんでも、サンクランドの、いずれかの公爵家のご長男と縁談の話があるとかで……」
「公爵家の長男……？」
シオンは小さく首を傾げた。
「それは妙な話だな……。公爵家の長男というと……、俺の知る限り、年頃の者はみな結婚していたように思うが……」
「まぁ、そうなんですの？」
エメラルダはびっくりした顔で首を傾げた。
「でも、たしかに将来的に公爵以上の地位に就く、有望株の相手だとお父さまは……」
「公爵以上の地位に、いずれ……？」
シオンは怪訝そうな顔で眉をひそめて、
「ちなみに、この話は、どなたが仕切っておられるのだろう？」
「ランプロン伯、と父からは聞いておりますけれど……」
微妙に歯切れが悪いエメラルダ。恐らくは、あまり詳しい話は聞かされていないのだろう。
特に不思議なことではない。貴族の結婚は国同士、家同士のつながりという要素が大きいもの。場合によっては、婚儀を上げる当日に相手と会うなどというケースもあるのだ。
しかしながら……、
――いくらなんでも、相手がどこの家の方とか、そういうことは聞いてると思ってましたけれど……。
ジトっとしたミーアの視線を受けて、エメラルダは言い訳するように言った。
「しょ、しょうがないではありませんの。お断りするつもりでいたのですから、相手のことなど、知らずとも問題ありませんし？　それに、ほら、ものすごく良いお相手でしたら、お断りするのがもったいなくなってしまうかもしれませんわ！」

どうやら、この縁談話を蹴る気満々だったエメラルダは、ろくに父から話を聞かなかったらしい。
「ちなみに、もしかしてそのランプロン伯というのは適当……、というか、あまり信頼できない方なんですの？」
「いや、そんなことはない。サンクランドでは古くから続く名家だ。伯自身もいささか独善的な人だが、名誉にかけて適当なことはしないと思うが……」
腕組みしつつ、シオンがうなった。
「まぁ、いい。とりあえず、護衛の必要はないようだし、俺はこのまま盗賊団を追って……」
「だっ、ダメですわ！　シオン、あなたには、わたくしたちを護衛して、王都まで行っていただきますわ！」
ミーアは慌てた。もしも、ここで別れた後、シオンが盗賊との戦闘に巻き込まれて死んでしまったら大変だ。なんのために、こうしてサンクランドまで来たのか、わからなくなってしまう。
多少、わがままでも、ここはシオンについてきてもらわなければならない。
「え？　いや、しかし……」
「ここは、あなたの国ではございませんの？　帝国からの客人であるわたくしが危険な目に遭っても構わないと言うんですの？」
その言い分に、シオンはきょとん、と瞳を瞬かせたが、
「そうか……。まぁ、そうだな、わかった。では、王都にあるランプロン伯邸まで、エスコートさせてもらうよ」
涼しげな笑みを浮かべるシオンに、今まで護衛を受け持っていた隊長は……、青くなっていた！
「しっ、シオン王子まで……」
そんな隊長に、少し離れたところから、同情の視線を送る者が一人。
シオンの忠実なる従者、キースウッドはその哀れなる護衛隊長に深く、共感を示すのだった。

第七十二話　恋の花は枯れて

初恋は実らない。
特に貴族同士、王族同士の恋が実ることは極稀なこと。
だからこれは、そんなありふれた、幾百の恋物語の一つ。
歴史の波に飲まれて枯れた恋のお話だ。

ティオーナ・ルドルフォンが、はじめてシオン・ソール・サンクランドと出会ったのは、彼女がセントノエルに来た日のことだった。
従者のリオラと一緒に、貴族の令嬢たちにからまれていた彼女を、颯爽と現れたシオンが助けてくれたのだ。手を差し伸べる彼にエスコートされて、セントノエル島を巡った彼女は……、心が救われるのを感じた。
新入生歓迎ダンスパーティーで、その後の学生生活で、幾度も助けてもらううちに、ティオーナがシオンに好意を抱いていったことは当然のことだったのだろう。
手を取り合うと心が躍った。
そのまっすぐな瞳を見つめるだけで頬が熱くなった。
それはたぶん……ティオーナの初恋だった。
素敵な笑みを浮かべる少年だった。
優しく、気高く、純粋な人だった。
なにより、王族として……、力を与えられた者として、正しくあることを自分に課して、そうあれるのだと信じている……、そんな姿に、ティオーナは憧れた。と同時に、自国の貴族たちを嫌悪した。
ラフィーナ・オルカ・ヴェールガとの付き合いも、その思考に影響を与えた。
正しくありたい。強くありたい。人の上に立つ貴族として……。
幼くも純粋な、そんな願いがティオーナの胸に芽生えつつあった

時、まるでその志を試すかのように大飢饉が大陸を襲った。
疫病の流行、財政破綻、民衆蜂起……革命。
父を暗殺されたティオーナは否応もなく、その波の中に投げ出された。
でも、怖いとは思わなかった。彼女には支えてくれる人たちがいたから……。
シオン・ソール・サンクランドは、ティオーナの怒りを共有し、帝国のために“正しいこと”を行ってくれた。
腐った帝室を倒し、大貴族たちを一掃した。
民のために、新しい帝国のために尽力してくれたのだ。
でも……、いつからだろう？
彼のことを遠く感じるようになったのは……。
傍らで見ていたティオーナは知っていた。
シオンの心に傷があるということ……。正義のためとはいえ、かつて学び舎を共にした皇女ミーアを処刑したのだ。傷にならないはずがない。
シオンは強いから、強くあろうとするから、臣下の前ではそんなところを見せない。あるいは、彼自身、その傷のことに気付いていなかったかもしれない。認めたくなかったのかもしれない。
でも、ティオーナは明確に、シオンが傷ついていることに気付いていた。
恐らく……それは、ティオーナがシオンのことが好きだったから。
ずっと見てきて、憧れてきた相手だったから……、気付くことができた。
「シオン王子の、支えになりたい……」
そんな気持ちが、ティオーナの心にはあった。
……だけど、ティオーナは踏み出すことができなかった。
シオンは大国の王子。自分とでは釣り合わない。それは厳然たる事実だった。革命の主導者として、ティアムーンの政権に関わるようになったとはいえ、自分とでは立場が違うのだ。

だけど……、それよりなにより、ティオーナの足を止めたもの……、それはシオンがミーアを殺したのは、ティオーナのためだったという事実だ。
父を皇帝一派によって暗殺されたティオーナ。その非道を正すため、シオンは剣を取り、命を懸けて戦ってくれたのだ。
それによって傷を負った彼に……、いったい、なにを言えば良いというのだろう？
自分のために傷ついた彼を、当事者である自分が癒す？
それは傷ついたシオンの心の隙を突く、卑怯な行いなのではないか？
自分の顔を見るたびに、シオンは幾度も、殺したミーアのことを思い出し、苦しむのではないか？
葛藤にがんじがらめにされて、ティオーナは一歩も動けなくなった。
ただ、恋慕の赴くままにシオンのもとに駆け寄れるほど、ティオーナは子どもではなかった。
革命後の忙しさも手伝って、ティオーナはすっかり考えることをやめていた。
そうして、サンクランドに帰国したシオンとはそれっきり疎遠になってしまった。
連絡は取りあってはいたけれど、そこには、かつてのような親密さはなくなっていた。
しばらくして、シオンが国内の貴族の娘と婚儀を結んだことを聞いた。その時ですら、ティオーナは悲しいとは思わなかった。
ただ……、胸を緩やかに締め付ける寂しさとともに、シオンと結ばれた女性が、彼の傷を癒すことができる人であることを、心から祈った。
それはミーアの死が歪めてしまった淡い恋心の、一つの結末だった。

「……あっ」
そうして……、ティオーナは目を覚ました。
目覚めに特有の、ぼんやりとした頭で、つい先ほどまで見ていた夢のことを考える。
忘れてはいけない夢だったような気がして……、その形が崩れる前に、懸命に、手を伸ばして掴もうとするけれど……。見る間に、それはあっさりと消え去り、後に残るのは、何とも言えないもやもやのみだった。
「……変な夢……」
ベッドの上、半身を起こして……、つぶやく。
細かいことは覚えていないのだけれど、それでも、それだけはわかる。
とても奇妙な夢で、ひどく大それた夢で……。でも……。
ティオーナは、そっと胸を押さえる。そこにかすかな焦燥と、消しえない切なさを見つけて、戸惑う。
せっかくの、安らかな昼寝（シエスタ）の時間だったのに……、気持ちはまったく休まっていなかった。
「慣れない場所で寝たから……かな」
ミーアたち一行がランプロン伯邸に来てから、三日が経っていた。
ドレスに着替え、来客用の部屋を出たところで、ちょうど、同じように部屋から出てきたミーアと鉢合わせになった。
「あっ、ミーアさま……」
夢の中、悪役として処刑された皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンは……、なぜだろう、口をアワアワさせながら、部屋から出てきた。

第七十三話　メイ探偵ミーア、犯人を、カンニングする

ランプロン伯邸について、ミーアはようやく一人になる時間が持てた。そこで、満を持して、ミーアは皇女伝を開いた。

「エメラルダさんと一緒にいると、どうしても、ゆっくりと読めませんでしたけど……」

問題の、シオン死亡の記事を目で追っていく。っと、ミーアの予想通り記述が変化していた。

「ふむ……、まぁ、そうですわよね。それはそうなんですけれど……問題はどう変わったか、ですわ」

盗賊団との戦闘に、シオンが巻き込まれることは回避できた。

それで問題は解決なのか……、はたまた。別の死がシオンに迫っているのか……。

続きを確認したミーアは、深くため息を吐く。

皇女伝には、新たにシオンが毒により暗殺されるという記述が示されていたからだ。

「ということは、やはり、最初の盗賊団というのも、シオンの暗殺をもくろんだものと見るべきですわね……。いや、まだ偶然の一致という線も捨てられないかしら……？」

ぶつぶつつぶやきつつ、読み進めてみる、と……、なんと、今度は犯人の名前まで書いてあった！

「ふっふっふ、やりましたわ！　これで一気に解決ですわ！」

快哉を叫んだのもつかの間……、ミーアは再び考え込んでしまった。なぜなら、そこに書かれていた犯人の名前は……、エシャール・ソール・サンクランド。すなわち、それは……、

「サンクランド第二王子、エシャール王子……。シオンの弟君ですわね。そんな人物がなぜ……？」

意外な人物の登場に、ミーアは頭を抱える。

基本的に、ティアムーンにとって重要な王侯貴族の名前は、覚えるようにしているミーアであるが、エシャールについては名前ぐらいしか知らなかった。
当然、彼がなにを思って暗殺などしたのか、わかるはずもない。
「それにしても困りましたわ……。相手がそこらの貴族ならばなんとかなりそうなものですけれど……、まさか第二王子殿下が犯人だなんて……」
これでは、最悪にして最後の手段、ディオンを差し向けて……などという暴力的な手段に出ることもできない。
「まぁ、やる気はありませんでしたけれど……。幸いにも、暗殺の日はエメラルダさんが招待されている、王宮のダンスパーティーの日ですわ。水際で防ぐことも不可能ではありませんわね……。ただ、その場合にも、犯人をなんとかしなければなりませんし……ふーむむむ……」
腕組みして考えているミーアの頭から、突如、もくもくもくっと煙が立ち上る。
いわゆる、知恵熱というやつである。
ミーアは、腕組みをしたまま、こてんっとベッドの上に倒れて、「だっ、ダメですわ！　なーんにも思い浮かびませんわ！　どうすれば、いいかしら……。ああ、甘いものが食べたいですわ！　やはり、考え事の際には、甘いものが必要ですわ！」
そうして、部屋を出ようとしたミーアは、ちょうど廊下を歩いてくる、自らの知恵袋の存在を見出したのだ！
「あっ、そうでしたわ！　こんな時のために、ルードヴィッヒを連れてきたのでしたわ！」
ミーアの特技、丸投げである。
なにしろ、今回のミーアは、万全の体制を整えて来ているのだ。
思考についてはルードヴィッヒ。武力の面ではディオン。毒の面ではシュトリナ。
これだけの陣容を揃えているのだ。利用せず、自分だけで考える

など、愚かなことである。
　ということで……、ミーアは早速、部屋の中にルードヴィッヒを連れ込んだ。

「エシャール王子、ですか……？」
　ミーアの部屋を訪れたルードヴィッヒは、部屋に入るや否やの質問に首を傾げた。
「そう、エシャール王子。シオンの弟君なのですけれど……、なにか噂を聞いているかしら？」
　問われたルードヴィッヒは、腕組みして黙り込んだ。
「申し訳ございません。正直なところ、特にこれと言って気になる情報はございません。必要であれば、少し調べてみようと思いますが……」
「そうですわね……、それならばお願いしようかしら……」
　けれど、それをする時間は残念ながら与えられなかった。なぜなら、次の瞬間、
「ミーアさま！　ミーアさまっ！」
　ドアを開け、血相を変えたエメラルダが入ってきたからだ。
「まぁ！　どうしましたの、エメラルダさん。そのように、青い顔をして……」
「きっ、きっ、聞いてくださいまし！　わっ、私の、こっ、婚約の相手が……相手が……」
　アワアワと、口を震わせるエメラルダに、ミーアはふぅーっと深いため息を吐いた。
「お相手がわかりましたのね？　で、どなたでしたの？」
「えっ、えっ、えっ……」
「落ち着いてくださいまし。そんな風に淑女が慌てなければいけないことなんて、この世の中にはありませんわよ……」
「わっ、私の婚約の相手が、エシャール王子だそうですわ！」
「……はぇ？」

きょとりん、と瞳を瞬かせるミーア。口をぽっかーんっと開け、ちょっぴり間抜け面を晒してしまっているのだが、今のルードヴィッヒには、それを気にする余裕はなかった。
なぜなら、彼は衝撃に打ちひしがれていたからだ。
この時、彼は遅まきながら、自らの主がなにを考えていたのか……、ようやく悟ることができたような気がした。
帝国四大公爵家の一角、グリーンムーン家のエメラルダと、サンクランド王国第二王子エシャール・ソール・サンクランドの婚姻。そして、それを取り持つ者が、サンクランドの伝統的保守思考の持ち主、ランプロン伯ということになれば……。
もし、それが成った際に出来上がる権力構図は……。
――ミーア姫殿下とシオン殿下のつながりに対抗する軸として、グリーンムーン公爵家とエシャール殿下という勢力が誕生することになる。
ミーアが掌握したはずの四大公爵家から、グリーンムーン家を引き抜き、それをもって反女帝派を糾合。さらに、グリーンムーン家には男児もいる。彼は、ミーアが帝位を継がなかった場合の、皇帝候補でもあるのだ。
さらに、サンクランド王国内においては、領土拡張に慎重なシオンに対抗して、エシャール王子のもとに、保守層の貴族たちを糾合するという構図でもある。
――なるほど。それで、エシャール殿下のことを調べろと、ミーアさまは言っておられたのか！
遅まきながらに気が付いて、ルードヴィッヒは歯噛みする。
――少し考えれば、わかりそうなものだ。サンクランドの国内情勢と勢力図を把握していれば……、この時期に星持ち公爵令嬢とサンクランド貴族との間の縁談話が持ち上がれば、その裏の狙いを推察することなど造作もないことだったのに。
忸怩たる想いを胸に、ルードヴィッヒは頭を下げた。
「申し訳ありません。ミーア姫殿下、私の思いが及ばず、このよう

な失態を……」
「はて……？　失態とはなんのことやらわかりませんけれど……」
ミーアは、きょとんと首を傾げる。まるで、本当に失態など存在しなかったかのように、心の底から不思議そうな顔をして。
ルードヴィッヒは、その思いやりに感じ入る。
――俺の菲才を責めることなく、俺が気に病むことのないように、とぼけてくれているのか……。
「働きに、より一層期待しておりますわよ、ルードヴィッヒ」
そうして、優しい笑みを浮かべるミーアに、ルードヴィッヒはただただ、頭を下げるのだった。

第七十四話　土俵際の姫ミーア、流れ矢を受ける

「わっ、私の婚約の相手が、エシャール王子だそうですわ！」
「……はぇ？」
突然のことに、ミーアは度肝を抜かれてしまった。
――なっ、なな、なにが？　いったいなにがどうなってるんですのっ！？
混乱に口をアワアワさせていると……、
「申し訳ありません。ミーア姫殿下、私の考えが及ばず、このような失態を……」
突如、ルードヴィッヒが頭を下げた。
はぇ？　などと、またしても間の抜けた声を出しそうになるも、ミーア、そこで踏みとどまる。土俵際、見事な踏ん張りである！
土俵際の粘りには定評がある、足腰の強いミーアなのである！
――あっ、これ、まずいやつですわ。ここで下手なことを言ったら、ルードヴィッヒがへこんで、使い物にならなくなるかもしれませんわ！
刹那の思考……、けれど、いくら考えても、ルードヴィッヒがなんの失態をしたのかがわからない。
なので……、
「はて……？　失態とはなんのことやらわかりませんけれど……」
素直に尋ねることにする。
放置は危険。なれば、状況を把握するのが急務である。ルードヴィッヒを前に、わからないことを、わかったかのように振舞うのは危険なのだ。
されど……、ルードヴィッヒは質問に答えようとせず、何事か感じ入ったように目を閉じ、頭を垂れるのみであった。
――なっ、なにが失態だったのか、言ってくれないとわかりませ

んわ。くっ、ただでさえ、エメラルダさんの婚約者のこととか、暗殺のこととかで頭がいっぱいですのに、ぐぬぬ……っ！
それでも、ミーアはなんとか、態勢の立て直しを図る。
「働きに、より一層期待しておりますわよ、ルードヴィッヒ」
なにか、失態があったのであれば、それは仕方がない。それで落ち込んでしまわぬよう、ちゃんと頭使ってサポートしてね！　という願いを込めて、ミーアはそう言った。
それから、ミーアは改めて、エメラルダのほうに目を向けた。
「では、エメラルダさん、詳しいお話を聞かせていただけないかしら？」
「え、ええ、わかりましたわ」
エメラルダは、静かに頷いて……。
「実は、今朝方、ランプロン伯に呼び出しを受けましたの」
「ああ、そう言えば、そうでしたわね」
恐らく、ランプロン伯は、ずっと、エメラルダと話がしたいと思っていたのだろう。
今でも思い出す。
シオンの護衛のもと、ランプロン伯邸に着いた時のこと。ミーアの身分を聞いたランプロン伯は、卒倒せんばかりに驚いていたのだ。
それを見て、ミーアは感づいた。
「ははぁん、これは、わたくしには聞かせたくない話があるのですわね。エメラルダさんに持ちかけたい悪だくみが……」
突然、帝国皇女が訪ねてきたら、大体、そんな反応になるんじゃ……？　などと思わないでもないが、ミーアにツッコミを入れる者はいない。
「例の縁談のことを相談したいと、そうおっしゃいますの。だから、はっきり言ってやりましたの。お断りだと。私との縁談をお望みなら、王子殿下でも連れてきなさいって。そうしたら……」
エメラルダの言葉を聞いたランプロンは、まさに、我が意を得たりと言った様子で頷いたという。その上で、

「もちろんです。ティアムーンの四大公爵家のご令嬢との婚儀ですからな。そこらの貴族では話にならぬでしょう。ですから、お相手は、エシャール王子殿下を、と考えています。すでに、エシャール王子殿下にも、国王陛下にも話を通してあります」
ドヤァ！　という顔で言ったのだ。
「まさか、本当に王子殿下が相手だなんて、思いもしてませんでしたわ」
そう言って、エメラルダは、頬を赤らめて体をもじもじさせた。
どうやら「王子さまとの結婚」という言葉に、彼女も憧れを持っていたらしい。いざ、それが現実化しそうになって、あたふたしてしまっているようなのだ。
……乙女なのである。
「なるほど……。シオンが王位を継げば、エシャール王子は大公ということになるのかしら……。公爵以上の地位をいずれは継ぐ者、と言えなくもありませんわね」
それどころか、もしもシオンになにかあった場合には、国王の地位に就くかもしれない人物である。
――皇女伝の記述を見る限り、自分の力でシオンをどうにかして、王位を狙ったということになるのかしら？　動機としてはわかりますけれど……、あるいは、もしかして、エシャール王子……、エメラルダさんと結婚するのが嫌だから、そんな暴挙に出たんじゃ？
ミーアの脳内に失礼極まりない推理が形成される。が、すぐに、それを否定。
――いや、さすがにあり得ませんわ。なにしろ、エメラルダさん、わたくしと血の繋がりがあるだけのことはあって、黙ってれば美人ですし。わがままですけれど、黙っていれば、そういうのはバレませんしね……わがままですけど。
「あの……、ミーアさま？」
「へ？」
ふと視線を上げると、エメラルダが上目遣いで見つめていた。

「私、どうすればいいのかしら……？」
自分より年下のミーアに相談してくるエメラルダである。
……小心者（チキン）乙女なのである。
「ふむ、気が進まないのであれば、お断りすればいいとは思いますけれど……」
「それは、なかなかに難しいのではないでしょうか……」
ルードヴィッヒが険しい顔をして首を振った。
「ちなみに、ミーアさま、皇帝陛下は、この件についてなにかおっしゃっておりましたか？」
「……はぇ？」
思わぬ流れ矢が飛んできた！

第七十四話　土俵際の姫ミーア、流れ矢を受ける（後書き）

本日、活動報告を更新しました

第七十五話　ＦＮＹ……？　Ｎｏ！　ＦＷＡ！

つい数日前、ミーアは思っていた。
「まぁ、相手の家柄まで聞いていないだなんて、エメラルダさん、迂闊ですわ。まったく、しょうがない人ですわね！」
などと……。
いかに、お断りする気満々であったとしても、それはそれ……。
さすがに、相手の家名を聞いていないだなんて、高貴な身分の令嬢として、あり得ない！　と、そう思っていた……のだが……。
ぶんぶん体を回しながらぶん投げたブーメランがものすごい勢いで、ミーアに返ってきた！
「お、お父さま、ですわね……」
そうなのだ、こう見えてもエメラルダは四大公爵家の令嬢なのだ。
縁談の影響も当然、小さくはない。ごくごくごく当たり前の話ながら、皇帝に話が通っている可能性は非常に高い。
逆に、皇帝に話が通っていなければいないで、きな臭さを覚えるべきところ。
つまり、縁談をお断りに行くというのであれば、当然、皇帝に探りを入れておくべき案件なのである。
にもかかわらず、ミーアはそれを怠った。否、より正確に言うならば「自分も一緒についていく！」と言い張る皇帝を説得するので、必死だったのだ！　そんな暇などなかったのだ。
が……、
――くっ、そ、それは言い訳にはなりませんわ。明らかに、わたくしのミスですわ。
と自覚しつつ、ミーアはなんと答えたものか、考える。
ルードヴィッヒに嘘は禁物。されど、正直に尋ねていませんでした！　などと答えられようはずもない。

しばしの沈黙の後、ミーアは……、
「そっ、そういう話を聞くことはできませんでしたわね……」
微妙な言い回しをする。
探りを入れなかったから、話を聞けなかったという意味と、探りを入れたけど聞けなかったという意味……どちらにもとれるような言い方である。
少なくとも、嘘は吐いていない！　そんな確信を胸に、ちらり、とルードヴィッヒのほうを窺うと……、
「ということは、陛下にも知らされていなかったか……、あるいは、陛下御自身がミーア姫殿下の帝位を望まれていない？　いや……、しかし、陛下はミーア姫殿下を溺愛されている。それはあり得ないか？　だが……、親の愛として、ミーアさまが女帝の茨道を行くことを望まないということも……」
ルードヴィッヒは、腕組みして、思案に暮れていた。
なんとか誤魔化せたことに、ほう、っとため息を吐くミーア……であったのだが、
「しかし、なぜ、断れないとおっしゃったんですの？　えーっと、ルードヴィッヒさん？」
口を開いたエメラルダに驚愕する！
――まぁ、エメラルダさん、ルードヴィッヒの名前を……。あら？　もしや、エメラルダさん、ルードヴィッヒも美青年認定なんですの？
イケメン好きのエメラルダである。基本的にわがままで知られる彼女であるのだが、ことイケメンに対しては、多少態度が良くなるのだ。
――まぁ……確かに見た目は良いとは思いますけれど、さすがに見境なし過ぎやしないかしら？
いささか呆れつつも、ミーアはルードヴィッヒのほうを見た。ルードヴィッヒは難しい顔をしたまま、
「星持ち公爵令嬢と第二王子殿下の婚姻となれば、これは、国家的

な縁談です。ティアムーンとサンクランドの外交的な繋がりを強めるという意味で、この縁談にはとても意味がある」
　エメラルダ個人の感情や、ミーアの派閥的な思惑ではどうにもできない問題である、とルードヴィッヒは言っていた。
「ミーアさまもおわかりなのではないですか？　相手が、この時点で情報を公開してきたこと、その一点を見てもわかります。今回の縁談はそう簡単に破談にはできない。だからこそ、ミーアさまは、エシャール王子殿下の情報を欲されていたのでは？」
　んなこたぁないのだが……、ミーアは神妙な顔で頷いた。
「……まぁ、そんなところですわ」
　ここは乗っておこう、という判断である。さざ波を敏感に察知して流されていく、今のミーアは大海を渡る勇壮なる海月に等しい。
　ルードヴィッヒは疑うことなく、海月ミーアの言葉を受け入れて、
「無論、この話を素直に受け入れることは、我々、女帝派にとって重大な危機になります。エメラルダさまがミーアさまの味方をしてくださるのと、してくださらないとでは、状況は大きく変わります。エメラルダさまであれば、完璧な信頼を寄せることもできるのですが……」
「当然ですわ。この私がミーアさまのことを裏切るなど、あり得ないお話ですわ！」
　胸に手を当てて、誇らしげに言うエメラルダ。以前までならば、疑わしく思えてしまったその言葉も、今はちょっぴり信用できそうな気がしてしまって……、ミーアは少しだけ戸惑う。
「もしも、婚姻するとしても、私もできる限り、弟やお父さまに働きかけるつもりですけれど……、それは確実とは言えませんわ」
「であるならば、とりあえず、縁談を回避する方向でなにか策を立てる必要があるでしょう。そのために、エシャール殿下の情報が必要と、ミーアさまはおっしゃった……と、私は考えておりますが……。もしや、もうすでに、その回避のための道筋が見えているのでは？」

「まぁ！　そうなんですのっ！？」
二人の期待に満ちた視線を受けて、ミーアは……、ミーアは……！
「え……ええ、まぁ、こう……フワッとは……」
……つい、ふわっと肯定してしまった。
二人の作り出した期待感の波に逆らうことは、海月ミーアにはできなかったのだ……。
「なるほど……。であるならば、私はエシャール殿下の情報をできうる限り集めてまいります。ミーアさまは、御心の赴くままに行動なさりますように」
ルードヴィッヒに尊敬と畏敬の念のこもった視線を、そして、エメラルダに信頼のこもった視線を向けられたミーアは、
「……ええ、よろしくお願いいたしますわね」
神妙な顔で頷いた。
そうして「ちょっと散歩に……」などと言って、部屋から出たところで……、
――どっ、ど、どうしましょう……？　フワッとどころか、なーんにも浮かびませんわ！　くっ、とっ、とりあえず、情報を整理するために、あ、甘いものが食べたいですわ……。
濃密な話し合いに、すっかり熱っぽくなってしまったミーアは、ふらふらと廊下を歩きだそうとしたところで……。
「あっ、ミーアさま……」
っと、声をかけられて、ミーアは顔を上げた。そこに立っていたのは、
「あら……、ティオーナさん？　起きたんですのね」
昼寝から起きてきたティオーナだった。
基本的にルドルフォン家は、朝早く起きて、作業する農民たちの間を回り、時に共に働き、その後、昼寝をするのが一日のスケジュールなのだという。
だから、セントノエルに通うようになってからも昼寝が欠かせないらしい。

ティオーナは笑みを浮かべて、
「ありがとうございます。たっぷり寝させていただきました」
「ふむ……、そうなんですの。あっ、そうですわ。これから、気分転換に街に出ようと思うんですけど、付き合ってくださらないかしら？」
ミーアはティオーナとリオラを誘い、街を散策することにした。
不足しがちな甘いものを得るために！

第七十六話　集う役者たち……

太陽に愛されし国サンクランド王国の王都「ソル・サリエンテ」は、遠くから見ると巨大な城のような外見をしている。
街全体を見下ろす高い位置にある王城、ソルエクスード城、戦城として建築された城を頂点に、その周囲に城下町が広がる。
その街もまた石造りの、堅牢かつ荘厳な造りをしている。
さらに、街並みを守るかのように、ぐるりと強固な城壁が聳(そび)え立ち、外敵の侵入を阻んでいる。
――これ……、もしティアムーンとサンクランドが戦争にでもなったら、攻めるのが大変そうですわね。レムノ王国と同盟関係が築けたとしても、ここを攻め落とすのは難しそうですわ。
軍事の素人であるミーアから見ても、ソル・サリエンテは、きわめて堅牢な都のように見えた。
――ふーむ、やはりシオンには長生きしていただかなければいけませんわね。友好関係を大切にしなければ……。
そんなことを考えながら、ふと、ミーアは隣を見た。
そこには、物珍しそうに辺りを見回すティオーナの姿があった。
綺麗に敷き詰められた石畳を、ティオーナと並んで歩いていると、ミーアは、なんだか不思議な気持ちになってしまう。
――まさか、ティオーナさんと一緒に、サンクランドの王都を歩くことになるとは思っておりませんでしたわ。しかも、あのシオンの命を守るために、わざわざ来るだなんて……。
あの、断頭台の日から考えると、まるで夢の中にいるみたいだった。
アンヌと仲良く話しているリオラを見て、その感慨は深くなる。
自らの命を狙っていたルールー族、その少女ともミーアは友好的な関係を築いているのだ。

――全然、想像できませんでしたわ。なんだか、ずいぶんと遠くに来てしまったみたい……。
などと思いつつ、ミーアは苦笑交じりに話しかけた。
「それにしても、大変な旅でしたわね。まさか、盗賊団に巻き込まれるなんて思ってもみませんでしたわ」
「はい、そうですね……」
「また巻き込んでしまいましたわね。申し訳なかったと思っておりますわ」
「いっ、いえ、そんな……っ！　ミーアさまのせいじゃありません」
そう言った後、ティオーナは静かに首を振った。
「それに、もしも、ミーアさまがあの盗賊たちのことを予想されていて……、それでも私を連れていくことを必要だとお考えだったのなら、私は喜んでお供いたします」
そのまっすぐな瞳に、ミーア……思わず罪悪感を刺激される。
「そっ、そうですの……うん、そうでしたわね。あなたとはお友だちになったのでしたわ。でしたら、わたくしも、お話できることはして、協力していただくようにしますわね。おほほ」
などと言いつつ、ミーアは思考を切り替える。
そうなのだ、そもそもミーアは考え事をするために外に出てきたのだ。
――それにしても、実際、難しいですわね。エシャール王子とエメラルダさんの婚姻を止めるのは……。
ティアムーンとサンクランド、両国の関係は、現在のところ良くも悪くもない。
いや、ミーアとシオンが親しいこともあり、その関係はどちらかといえば「良好」のほうに傾くだろう。
けれど、それは完璧なものではない。だからこそ、ティアムーンの四大公爵家の令嬢であるエメラルダとエシャール王子との縁談には意義があった。
ルードヴィッヒが言ったとおり国を利する縁談なのだ。

これを覆すのはなかなかに難しい。
――あ、そういえば、ティアムーンとサンクランドといえば……。前の時間軸で、シオンとティオーナさんが結ばれていたとしたら、ティアムーンは安泰でしたのでしょうけれど……。お互いの気持ちが通じ合っていて、政略的にも有効な婚儀ならば、なんの問題もなかったのでしょうね……。
ふと、そこで、ミーアは思い至る。
「ふむ……当人同士の気持ち、ですわね」
今回の問題の本質に……。
――正直な話、エメラルダさんは面食いですし、シオンの弟君ならば気に入る可能性は高いと思うのですわよね……。
今、エメラルダは十八歳、対してエシャール王子は十歳だ。八歳差というのは、少し年が離れているが、それでも王侯貴族の結婚ではない話ではない。
――まして、エメラルダさんは面食いですし、エシャール王子の将来性を見込んでオーケーする可能性は高いと思うのですわよね。なにせ、面食いですし……。
となると、ミーアとしては、派閥抗争のためにエメラルダの縁談を潰すのも気が引けるわけで、残る問題はなんといってもシオン暗殺の件である。
それさえなんとかなれば、正直、そこまで反対しなくってもいいんじゃないかしら？　とすら思ってしまうのだが……。
――シオンの暗殺を目論んだとすると、混沌の蛇が絡んでいるかもしれませんし、そうでなくても、どなたかを暗殺しようなどという方に、エメラルダさんを任せてしまうのもどうなのかしら……。
歩きながらだが、だいぶ問題が見えてきた。
「なるほど。要するに、わたくしは、相手がまともな方であれば、この縁談、別に問題ないと思っているわけですわね……」
「あら？　もしかして、ミーアさん？」
ふいに声をかけられ、視線を上げる。と、そこには意外な人物が

立っていた。
「らっ、ラフィーナさま？　まぁ、どういたしましたの？　こんなところに……。それに……」
次いで、ミーアは、ラフィーナの隣に立つ人物に、再び驚愕の声を上げる。
「アベルまで……。いったいお二人とも、ここで、なにをなさっているんですの？」

第七十七話　ウザ……かわ……？

ソル・サリエンテの表通りに、その品の良い宿屋はあった。一階が料理屋になっていて、食事だけの客もとっているらしい。
「ここ、私のお気に入りなのよ。お料理がとても美味しいから、ソル・サリエンテに来る時には、いつも寄るようにしているの」
笑顔を浮かべるラフィーナ。それを聞いて、嬉しそうに笑みを浮かべる壮年の男を見て、ミーアは……“できる男”の匂いを嗅ぎ取った！
「ほう……、それは楽しみですわね」
そうつぶやきつつ、メニューを見て……、
「ちなみに……、キノコ料理はどんなものがございまして？」
そのミーアの問いかけに、男の瞳に、一瞬、鋭い輝きが宿る。
「はい。本日は、ラフィーナさまがいらっしゃるということで、ヴェールガ茸のソテーをご用意しております」
「ほほう。あのヴェールガ茸ですの？　サンクランドで食べられるとは思ってもおりませんでしたわ」
「それに抹茸（まったけ）の土瓶蒸し。こちらは、東方の料理でして、抹茸の香りと甘みが溶け出した出汁が大変、美味な料理となっております」
「なんと！　キノコのうま味を凝縮したスープとは！　そのようなもの、聞いたこともございませんでしたわ！」
「さらにさらに……」
などと、ひとしきりキノコ料理談義を楽しんだ後に……、
「さて……」
ミーアは改めて、テーブルの向かいに座るラフィーナとアベルに目を移した。
「まさか、ここでお会いできるとは思っておりませんでしたわ。お二人とも、お元気そうでなによりですわ」

「うふふ、ミーアさんも元気そうでよかった。もしかして、ミーアさんも王室主催のダンスパーティーに招待されたの？」
小さく首を傾げるラフィーナに、ミーアは首を振った。
「いいえ、わたくしは、エメラルダさんの婚約相手のことで、お話ししにきましたの。サンクランドの方との縁談話が進んでいるということで……」
と話をしつつ、ミーアは違和感を覚える。
――ラフィーナさまが招待されたのは、エメラルダさんも誘われたというダンスパーティーのことでしょうけれど……はて？
情報を整理しつつ、ミーアはアベルのほうに目を向ける。
「もしかして、アベルもそのために来たんですの？」
ミーアの視線を受けて、アベルは肩をすくめる。
「ああ、実はそうなんだ。もっとも、ボクは兄の代理だけどね。それで、ちょうどラフィーナさまの一行と一緒になったんで、王都まで同行させてもらって……」
「それで、ラフィーナさまと、仲良く街歩きを楽しんでいたと……、そういうことなんですわね」
ミーアはジトーっとした目をアベルに向けた。
「なっ、ご、誤解だよ。ミーア、ボクは別にっ……」
アベルは、あたふたと手を振りつつ、大慌てで否定する。それを見たミーアは、思わず吹き出してしまう。
「うふふ、冗談ですわ。会えて嬉しいですわ、アベル」
……年下の男の子をからかってしまった、ミーアお姉さんなのである。
楽しそうに笑うミーアを見て、アベルは、むっとした顔をしたが……すぐに、ふいっと顔を背けてしまう。
「……そうか。冗談なのか。それは残念だ」
「ん？　残念、とはどういうことですの？」
「いや、なに。てっきり、ボクのことでやきもちを焼いてくれたのだと思って、嬉しくなってしまってね。だから、勝手に喜んで、そ

れが冗談だったと言われてしまったものだから、勝手に落ち込んでしまっただけだよ。気にしないでくれ」
そう言って、しょんぼり肩を落とすアベル。
それを見て、ミーアは大慌てだ。
「あ、アベル、えーと、じょ、冗談だと言ったのはその、そういう意味ではなく、いや、そもそも、やきもちを焼かれて嬉しかったって、そ、それって……」
っと、次の瞬間、アベルは顔を上げた。その顔に浮かぶのは、してやったり、という笑みだ。
「ははは、もちろん冗談だよ。ボクも会えて嬉しいよ、ミーア」
「なっ！」
ミーア、思わず絶句する。
「やられっぱなしも癪なのでね。反撃させてもらったよ」
……年下の男の子にからかわれてしまった、ミーアお姉さんなのである。
「ひっ、酷いですわ、酷いですわ！　アベル。意地悪ですわ！」
手をぶんぶんさせるミーアお姉さん。若干、ウザ……ではなく、ウザかわい……くもない、ウザうざい仕草ではあったが、それを見守る周囲の目は温かい。
微笑ましげな顔で、年下の妹を見守るかのようなラフィーナとアンヌ。あばたもえくぼなアベル、ティオーナやリオラも、珍しいミーアの子どもっぽい仕草に笑みを浮かべている。
とても優しい世界がそこに形成されていた。
……ミーアの中身が二十歳以上の大人のお姉さんであることを知る者は、幸いなことに一人もいなかったのだ。
さて、ひとしきりアベルとじゃれた後、ふいにミーアは思った。
――しかし、ラフィーナさまや、アベルまでダンスパーティーに呼ばれてるんですのね……。うん？　はて……、なぜ、わたくしは呼ばれてないのかしら……？
先ほども覚えた違和感、不都合な真実に気付きかけるミーア。な

んか、みんな招待されてるのに、なぜ、自分だけ呼ばれていないのだろう……、という疑問！

――不思議な話ですわ……。うーん、なぜかしら……？　わかりませんわ。

危うく前時間軸の、ダンス嫌いだと思われていたトラウマが甦ってきそうになるミーアであった。

第七十八話　恐るべき事実……（恐怖！）

「ところで、ミーアさん、縁談話というのは、なんのことかしら？　それに、ティオーナさんまで一緒にいるなんて、何事が起きたというの？」

アベルとのイチャイチャがひと段落したところで、ラフィーナが話を振ってきた。

「ええ、そうですわね」

ミーアは、一瞬、あたりを見回す。はたしてここで話しても大丈夫だろうか？　と。

それを察したのか、ラフィーナは優しい笑みを浮かべた。

「大丈夫よ、ミーアさん。ここのお店のご主人は、とっても口が堅いし、信用できる方よ」

その言葉に、ちょうど料理を運んできた主人が苦笑する。

「そう言っていただけますと、まことに恐縮です。本日はラフィーナさまがいらっしゃるとのことで、貸し切りとさせていただいております。私もお料理をお出ししたら、すぐに奥に下がらせていただきますので」

主人のほうも心得たもので、スムーズに対応してくれた。

「彼はね、実は、ヴェールガの間者なのよ？」

「……はぇ？」

声を潜めるラフィーナに、ミーアは思わず目を白黒させる。

なにしろ、諜報機関だとか、間者などというものは、公にしてはならないもの。

たしかにミーアたちは混沌の蛇と戦うための同盟を結んでいる。けれど、それとは別次元で国同士の外交というものは存在しているのだ。

いくらミーアが仲間とはいえ、そう簡単に口にしていいものでは

ないのではないか……？　などと心配になるが、直後、ラフィーナは悪戯が成功した子どものような笑みを浮かべた。
「うふふ、もちろん、間者は間者でも、国を探るための間者ではないの。彼はね、蛇と戦うための間者なのよ」
「ああ、なるほど、そういうことですのね……」
それで、ミーアは納得する。なるほど、蛇は神出鬼没。各国に、蛇に対しての諜報員を配置するというのは、理にかなったことのように思えた。
「ふむ、そういうことであれば……」
意を決すると、ミーアは話し始めた。
……一度、口を開くと、その舌は非常に滑らかに動いた。
なにせ、難しい話が絡んでいるとはいえ、結局のところ、それは男女の関係のお話。ミーアとて一応は女子であるのだから、その手の話に関心がないわけではなく……。怪談話などよりはよほど好物なわけで……。
エメラルダとサンクランドの第二王子エシャールとの間で交わされようとしている婚約のこと、ランプロン伯の手引きと、帝国の反女帝派の動向などを交え、ミーアは大変賢そうな口調で語ったのだ。
まぁ、九分九厘ルードヴィッヒの受け売りではあるが……。
そして、もちろん、エシャールがシオン暗殺を企んでいるという危険情報は伏せてである。
「なるほど、帝国内の反ミーアさん派とサンクランドの反シオン王子派が結託しようとしている、と、そういうことね」
ミーアの説明は、実際のところ、まぁまぁ欠けの多いものであったが、ラフィーナには、きちんとわかってもらえたらしい。
「あの、ラフィーナさま……、もしもご存知でしたら教えていただきたいのですけれど、ランプロン伯というのは、どういう方なんですの？」
「んー、そうね……」
ラフィーナは、ちょこん、と小首を傾げてから、

「典型的な、古いサンクランド貴族という印象かしら……。サンクランドの王室は、正義と公正を重んじる、というのはミーアさんも知っていることでしょう？」
「ええ、まぁ、痛いほど……」
なにせ、そのせいで頭を落とされたほどである。その痛みはギロチンの痛みなのだ。
ミーアにとって忘れようのないことである。
「けれど、サンクランドのそれは、なにも、サンクランド特有のものではない。そもそも、中央正教会の考え方自体が、それを提唱しているのだから」
貴族とは、神よりこの地を治めるように権威の剣を与えられた者。王とは、その貴族たちを率いて、その地の秩序を守るため、より強い権威の剣を与えられた者。
すべてはその地に住まう民が、安んじて生きられるようにするため。王侯貴族は与えられた剣に相応しく、自らを律し、正義と公正をもって悪を裁く者でなければならない。
それが、中央正教会の神聖典が規定する貴族像だ。この地の貴族はその文言を根拠として、各々の領地を治めているのだ。が……、
「それがしばしば都合よく解釈されることがある。貴族は民を治めるよう、神から剣を与えられている、権利を持つのだから、好き勝手に虐げて良いのだ、とか。悪逆な行いをする王もいて、それを正さなければいけないのは確かなこと。そして、時に、正しく民を統治できない領主を裁かなければいけない時もある」
同じ神により、その地を治めるように任じられた王であり、貴族である。神聖典を根拠にした王権である以上、神聖典に反する横暴が行われた場合には、他の王権を持つ者によって咎められる。
「……そして、サンクランドでは『他国の王族は軒並み腐っているので、善政を敷くサンクランド国王の統治に入ったほうが、民の幸せになる』という価値観が古くから浸透してきた。公正なる民の統治を実現するためには、正義の国王による統治を実現するのが近道

である、とね」
　そして、その理屈をさらに過激にしたものこそが白鴉だった。
「それは、しばしば他国を侵略する大義名分に使われたりするのだけど、ランプロン伯という人は、そうした覇権争い的な野心とは縁遠そうな人だった。むしろ、サンクランド貴族の信条を素朴に信じる人、という印象ね。正義と公正のため、という大義名分を心から信じている人だと思うわ」
「ああ……、それは少し、面倒くさそうな人ですわね」
　相手が覇権を狙う野心家であれば、妥協を求めることができるだろうけれど、素朴な信念の人である場合、自分の正義を疑わないため、説得は容易ではない。
「シオン王子は、レムノ王国事件の時に、サンクランドのやり方に疑問を感じたのでしょう。サンクランドが他国に出て行って、というやり方には少し慎重になっているけれど、ランプロン伯は、それを快くは思っていないでしょうね」
　――ふぅむ、なるほど。要するに、シオンのことが邪魔なわけですわね……。とすると、もしやこれは、エシャール王子の裏にいるのがランプロン伯だった、ということになるのかしら？　それとも、エシャール王子が野心によって行ったものだったのかしら？
　ミーアはうーむ、とうなりつつ腕組みする。
　――シオンとか、ラフィーナさまの評価を聞く限り、どうも、ランプロン伯は、王族の暗殺とか大それたことをしそうにない感じがするんですわよね……。せいぜい、多数派工作とか、そのぐらいで……。
　ミーアはなんとなーく、ランプロン伯から、柔軟性を欠いた無能感というか……、ポンコツ臭を嗅ぎ取っていた。
　――まぁ、蛇に利用されたということは考えられますけど……、ふーむ。
　ところで、ここに恐るべき事実が存在していた。

……この時、シオン暗殺事件について、最も進んだ考察を行っていたのは、なんと……、ほかならぬミーアであった。
ほかならぬミーアなのだった！！
それもそのはず、シオンの暗殺について感づいているのはミーアだけであり、当然、その考察を行えるのもミーアだけだからなのだが……。
当事者であるシオン……以上に、キースウッドがすべてを知ってしまったら、卒倒してしまいそうな事実であった。

第七十八話　恐るべき事実……（恐怖！）（後書き）

８月２０日（木）まで「ティアムーン帝国物語」の
第１回キャラクター投票」を開催中です。
結果は１０日１０日発売の５巻巻末で発表されます。
Ｇｉｌｓｅさん描き下ろしで第１位に輝いたキャラクターのポストカードをゲットできるキャンペーンも実施中なので宜しければ、ぜひチェックしてみてください。

今から誰がなるのかドキドキです。
あ、ちなみになぜミーア母がランキングに入っているかというと、コミックの番外編ＳＳに登場するからだったりします。コミックのほうももしよろしければ、チェックしてみてくださいませ。

第七十九話　二つの匂い

「ふむ……、ところで、ラフィーナさま……。ラフィーナさまもランプロン伯と同じ意見なんですの？　腐った貴族は排除しなければならない、と……」

ふと思いついて、ミーアは聞いてみた。

その問いかけに、ラフィーナは小さく首を傾げる。一度、口を開きかけてから、言葉を探るように、そっと瞳を逸らした。

「そう……ね。そう思っていた時もないことはないわ」

ラフィーナはうーんっと、うなってから、

「というか、未だに結構そう思っているのだけど……」

――そっ、そう思ってるんですのっ！？

ミーア、思わず自らの首を撫でる。

基本的にミーアは、ラフィーナのことを友だちだと思っている。というか、ようやく最近、思えるようになってきた。

だからまぁ、いきなり告発されて首を落とされたりはしないだろうなぁ……とは思ってる。でも……、

――うっかりってございますし……。わたくしがうっかり暴君になってしまった時に、もしも、ラフィーナさまの逆鱗に触れてしまったら……。

例えば、友だち同士だって、許せないことはあるはずだ。

ちょっとした悪戯ならば許せるのだろうけど、大切なものを壊してしまったり、食べようと思っていたケーキを台無しにされたりしたら、許せないことはあるはずで……。

ラフィーナの場合には、怒りのポイントが、貴族のわがままや横暴、怠惰、そのあたりにあるらしいことを、ミーアはすでに察していた。

そして……ミーアは知っているのだ。

自分が、ほんのちょっぴりわがままで、時々、少しだけ横暴になることもあって、わずかばかり怠惰なところもあるということを……。

だからこそ、ラフィーナの言葉に首の後ろが寒くなった……のだけれど……。

「でも……、ミーアさんとお友だちになってから、そして、ティオーナさんを見てから、少しだけ考えを変えたわ」

「え……？」

突然、話を振られて、ティオーナは驚いた顔をする。

「生徒会長選挙の時、ティオーナさんは、昔、自分に嫌がらせをした人たちのことを許したって聞いたわ。ミーアさんを応援するために手を取り合ったんだって」

「ああ、そういえばそんなこともございましたわね……」

あの時の、教室での出来事をミーアは思い出す。

――こっそりとラフィーナさまに勝てるように裏工作をするつもりでしたけれど、思えば、そんなことやらなくって良かったですわね。下手をすると、ラフィーナさまに愛想尽かされていたところですわ。

そんな想像をして、ミーアはゾッとした。

――あら、わたくし……、案外、危険なところを歩いてきたのですわね。

ラフィーナは、穏やかな笑みを浮かべたまま、続ける。

「ああ、なるほど、これがミーアさんが目指したものだったんだなぁ、って思ったの」

はて、なんのことかしら……？　と首を傾げるミーア。ラフィーナは懐かしげに瞳を細める。

「あの新入生歓迎ダンスパーティーの事件があった後、ミーアさんは、彼らを許してほしいとお願いに来たでしょう？　覚えてるかしら？」

「ええ、もちろんですわ」

そういえば、そんなことあったなー、なんて思いつつ、ミーアは堂々と頷いて見せる。もちろん覚えてましたよ？　といわんばかりの様子で……。

「あの時はね、すごいなって思うのが半分、後の半分は甘いんじゃないかなって思ってた。でも……、今は改めて思うわ。ミーアさんがしたことは、忍耐力を試されるけど、でも、その先に豊かな実りをもたらすものだったんだって……」

あの時、疑わしき者たちをセントノエルから追い出していたら、その後のいろいろな出来事は、すべてなかったのだ。追い出された者たちからは恨みを買い、その後の生徒会選挙で、ミーアの陣営は、そこまで力を得なかったはずだ。

「そんなミーアさんの姿を見てしまったから……、今は少しだけ考えるようにしているの」

「なにをですの？」

「ここで、切り捨てることが本当に正しいのか……。説得して、悔い改めてくれるならば、そのほうが良いのではないか、と……」

そんなラフィーナの言葉に、ミーアは、

――そう、それ！　それ大事ですわよ！　ラフィーナさま！！

思わず心の中で、ぐうっと拳を握りしめる。

もしも、ラフィーナが本当にそう考えているというのなら、ミーアが失敗しても、即ギロチンとか、即刻、異端審問にかけられるなどということはなくなる。

――わたくしも極稀にですけれど、やらかしてしまうことがございますし……稀にですけれど……。だから、ラフィーナさまが、そのような考え方をもってくれるなら、助かりますわ！

これで、少しなら、気を抜いても大丈夫かも……、などと、ミーアの中に良くない考えが、むくむくと鎌首をもたげる。

「それにね……、根拠はないことで、完全な勘なんだけど……、その厳しさは蛇に付け込まれる隙になる……、そんな気がするの」

「混沌の蛇に……」

ミーアが思い出すのは、ベルから聞いた未来のことだ。
司教帝となり、世界を恐怖に陥れたラフィーナの姿だ。
徹底的に敵を排除し、処刑する……その潔癖さは、仮に蛇に向けられるものであったとしても、蛇に利用される危険性を秘めている。
ミーアは、ラフィーナの言葉に、一定の正しさを認めた。
「でも、そうなの……ミーアさん、忙しいのね……」
ラフィーナは、さも残念そうな顔をする。
「はて、わたくしが忙しいとなにかございますの？」
「ええ。実はね、私がサンクランドに来たのは、ダンスパーティーのことだけが理由ではないの。先日、馬龍さんから聞いた騎馬王国のことを、国王陛下と話しに来たのよ」
「あら、騎馬王国のことを……」
「本当なら、ミーアさんにもお手伝いしてもらいたいのだけど、しなければいけないことがあるなら仕方ないわね」
――ふむ、これは……。
その時、ミーアの嗅覚が、二つの匂いをとらえた。
一つは……危機感。
ラフィーナ自らがサンクランドまで足を運んできたなんて……これは、ヤバイ話だぞ、と。聞かないほうがいいぞ、と。そんな圧倒的に危機な香りである！
ただでさえ、シオンの暗殺事件とエメラルダの縁談話という厄介ごとを抱える身だ。やむを得ずということならばともかく、根本的に、ミーアは面倒ごとにかかわりたくないのだ。
――ふむ、これは変に好奇心を出してはいけない場面。好奇心、姫を殺す、と言いますし……。
ミーアは素早く判断を下す。かかわらないのがベストである、と。
……まぁ、そうはいっても巻き込まれてしまうのが、ミーアの性分というものではあるのだが……。
それはさておき、もう一つ、ミーアの嗅覚がとらえたもの……それは！

「ちょうど、お料理もできたみたいだし、お話はここまでにして、お料理を楽しみましょう」
そう、なんとも食欲を刺激する、美味しそうな香りだった。
ミーアは、テーブルの上に置かれた素朴な土瓶に歓声を上げる。
「ほう！　これが、抹茸の土瓶蒸し？　ああ、これは……なんとも高貴な香りですわ……」

そうして、ラフィーナ推薦の料理に、存分に舌鼓を打った後、ミーアはあふれる満足感とともに、ランプロン伯邸に戻るのだった。
ちなみに……、エメラルダの縁談をどうするのか……、シオン暗殺の真相は、などなど……もろもろの答えは一切出てはいないのだが……。

第七十九話　苦労人と二人の令嬢

「ベルちゃん、良かったら、少し街を歩いてみない？」
ランプロン伯邸にて。ルードヴィッヒから与えられた課題を、ひーひー言いながら終わらせたベルに、シュトリナが言った。
ちなみに、客室は、この二人で使っている。
イエロームーン家からの使用人は一人もいなかった。護衛すらも連れてきてはいない。それは、イエロームーン家の没落を意味するものではなかった。
イエロームーン家から、人を送り込んだ場合、あらぬ疑いをかけられるのではないか、という危惧からだった。
ミーアならばまだしも、エメラルダやティオーナらからの信頼を得られないだろう、と、シュトリナの父、ローレンツは考えた。だからこそ、護衛の兵も従者もミーアの側に用意を依頼したのだ。
……ということで本来であれば、ミーアが用意したベテランのメイドがシュトリナの従者につけられるはずなのだが……。
「あ、大丈夫です。リーナのために、そのようなお気遣いは不要です、ミーアさま」
シュトリナはにっこり笑みを浮かべて、それを固辞した。
「どうぞ、最低限の護衛だけお付けください」
それは……かつて従者たるバルバラに、常に監視の目を向けられ続けるという悲しいトラウマから来た言葉……、などではなかった。断じてなかった。
それは、シュトリナの、この旅行にかける想いの強さゆえの言葉だったのだ！
なにせ、お友だちと泊りがけの旅行に行くことなど、初めてなのだ。
なんの気兼ねも打算もなく、お友だちと出かけることなど、今ま

でになかったのだ。
それゆえに……邪魔になりそうな要素はできるだけ排除する。
大変、気合が入っていたのだ！
ということで、ベルと遊ぶ気満々のシュトリナである。そんな彼女が、ベルの課題が終わったと聞いて、遊びに誘わないなどということがあり得るだろうか？
一方のベルのほうも、二つ返事でオーケーする。
なにせ、憧れの天秤王の都である。興味が沸かないはずもなし。
ということで、ベルとシュトリナは、にっこにこ顔で、ランプロン邸を出ようとした……のだが、それを見咎める者がいた！

華やかな二人の少女が屋敷から出ていこうとしているのを見かけた時、ランプロン伯邸の警備隊長、コネリー・コルドウェルは深々と疲れたため息をこぼした。ちなみに、伯の信頼厚い彼は、ミーアたちを迎えに行った護衛隊を率いた苦労人でもあった。
精神をすり減らすような気分を味わいつつ、ようやく、超ＶＩＰたちの護衛を終えた彼であったが……、館についてからも、引き続き、客人の面倒を見るように仰せつかってしまったのである。苦労が絶えない人である。
つい先ほども帝国皇女ミーアが、友人の貴族令嬢を伴って街に繰り出していくのを見かけて、大いに焦らされた。
しかも、自らの近衛二名のみを護衛に引き連れて出かけようとしていたのである。
およそ、大帝国の姫に相応しくない行動に、コネリーは大いに焦った。
王都の治安は決して悪くはなく、おそらく護衛を二名も伴っていれば、問題はないとは思うのだが……、相手はサンクランドと並ぶ大国の姫なのだ。
〜だろう、という希望的な憶測で済ますことのできる相手ではない。

ということで、急遽、彼はランプロン伯の私兵から、二名を護衛として派遣。絶対に邪魔をしないから、とミーアを説得し納得させたのだった。

「別に、かまいませんけれど。わたくしが連れてきた護衛だけでも……」

などと不思議そうな顔をしているミーアに、思わず、イラッとしそうになったコネリーである。

――少しは身分というものを考えていただきたいものだ……。

そうため息を吐いた矢先、今度は、こっそり遊びに出かけようとしている二人のご令嬢の姿を発見してしまったのである。

一人は、帝国四大公爵家の令嬢、シュトリナ・エトワ・イエロームーンである。

帝国における最高爵位である公爵家の令嬢だけでも卒倒しそうなのに、さらに、その連れが問題であった。

ミーアベルというあの少女が何者かは定かではない。ないが……。

――あのミーア姫殿下にそっくりな顔立ち、他の大貴族の令嬢たちにもまったく引け目を感じない、あの堂々とした態度。時にミーア姫殿下にすら気安げに話しかける、あの胆力……、どう考えてもただものではない！

むしろ、コネリーはあのミーアベルという少女のほうにこそ、不気味さを感じてしまう。彼女に何かあった場合、自分の首は飛ぶのではないだろうか……物理的に。

そう考えた瞬間、彼は動き出していた。果断即行の人だった。

「失礼いたします。イエロームーン公爵令嬢、それに、ミーアベルさま」

少女たちは、きょとん、とあどけない顔で振り返った。悪意のまったく感じられない顔ではあったが、二人の動向次第で首が飛ぶ身である。むしろ、その無邪気な顔が悪魔の顔に見えてきそうだった。

「いずこへ行かれるのですか？」

言外に、どこにも行くな、屋敷で大人しくしてろ、いや、いてく

ださいお願いします！　というメッセージを込めて言う。が……、
「はい。これから、サンクランドの街を見学させていただこうと思ってます」
ルンルンと体を弾ませながら、ミーアベルが言った。
不幸にも、苦労人の心は伝わらない。
――ああ、やはり……。そういうことか……。
キリキリと胃が痛むのを感じながら、コネリーは言った。
「かしこまりました。それでは、不肖、このわたくしが、お嬢さま方の護衛を務めさせていただきます」

第八十話　シュトリナの幸せ

館を出て早々に、コネリーは思った。
ああ！　ほんとについてきてよかったなぁ！　くそったれ！　と。
なぜなら、問題のご令嬢二人は……、自由に過ぎた！
「それで、どこに行かれるのですか？」
街の地理を頭に思い浮かべつつ尋ねる。と……、
「んー、特に決めてないですけど。ベルちゃん、どこか行きたいところはあるかしら？」
ちょこん、と首を傾げるシュトリナに、ベルは小さく首を振る。
「いえ、てんび……じゃない、シオン王子の育った街を見られるだけでボクは大満足ですから」
などと言いつつ、なんの躊躇もなくひょいひょい路地に入って行ってしまう。
狭くてちょっと薄暗い、ご令嬢ならばまず近づかないような場所にでも構わずに、である。
「ベルさま。失礼ですが、あまり、前にお出になりませんように」
と、懇願するように言うコネリーに、シュトリナが無邪気な顔で首を傾げた。
「あら？　王都なのに、治安に不安があるのですか？」
なんの悪気もない子どもの疑問。だからこそ、それは、コネリーの痛い部分を的確にえぐってきた。
苦笑しつつ、コネリーは言った。
「残念ながら、あまりご令嬢にはお勧めできない場所もございます。もちろん、城に近い一番街区に関しては問題ございませんが……」
あまり、怖がらせるものでもないと思いつつ、それでも注意しがてら話しておく。
「王都の一部は開放市場として、近隣の行商人に広く開放されてい

ます。そこには、時に氏素性のはっきりしない者も交じっています」
「まぁ、それは……、とても怖いですね」
そう言って、シュトリナは、そばにいたベルの手をギュッと握った。
可憐なご令嬢を怖がらせてしまったことに、罪悪感を刺激されたコネリーは慌てて首を振った。
「ああ、もちろん、きちんと王都に入る際には調べておりますので、滅多なことは起こりません。ですが、あまり縛りを厳しくしてしまっては、街から活気がなくなるものなのです」
コネリーのような立場の者からすると、都の中が全員、国王に忠誠を誓う善良な民衆で占められていることが理想である。
されど異分子をすべて排除し、怪しい者を王都に入れなければ、王都の活気が失われることも肌感覚で分かっていた。
雑然とした、ある種のいかがわしさの中にこそ、人々の活力ははぐくまれるものであると、コネリーは考えている。ゆえに、少々治安の悪い市場のようなものも、街に活力を与えるためには必要悪なのだ、と思うのだ。
「なるほど。そうしたものも国には必要なのですね……」
ベルが感心した様子で頷いていた。頷いて……、そして！
「ところで、その市場にも連れて行っていただけるんですか？」
無邪気な顔で、そんなことを言い出した！
危険性が伝わっていなかったことに、コネリーは頭を抱える。
――ぐぬ……、貴き身分の方というのは、どなたもこんな感じなのだろうか。そういえば、以前、エシャール殿下に頼まれて、市場にお連れしたこともあったが……。あの時も、途中でエシャール殿下がいなくなってしまって、肝を冷やしたものだったな……。
もともと、エシャール王子の剣術指南役として、付き合いがあったランプロン伯である。その家臣たるコネリーも、比較的、親しくさせてもらっていたのだが……、あの時はさすがに焦ったものだった。

昔から若干の無茶をすることで知られているシオンならばまだしも、大人しいと言われているエシャールの思いもよらない行動だったのだ。

――幸い、あの時は何事もなく保護することができた。陛下や伯にも黙っておくと言っていただけたので、なんとか首がつながったが……、もしもバレたら大変なことになるところだった。

……ということで、そんな経験は、二度と御免とばかりに、コネリーは首を振った。

「残念ですが、それは認めることができません。買い物ならば、王都名物のサン・セリーゼ通りでなさるのがよろしいでしょう」

有名商店が建ち並ぶ、華やかなサン・セリーゼは、王都に住む貴族令嬢御用達の商店街である。

入店にドレスコードすらある、それらの高級店ならば、彼女たちを満足させられるし、コネリーの内臓も平安でいられるだろう。

「よろしいですね？」

「え？　でも……」

ベルが、シュトリナのほうを横目に窺う。確認するようにもう一度、コネリーは声を強める。

「よろしいですね！」

その念押しを受けて、シュトリナは小さく頷いた。

――うふふ、お友だちと手をつないじゃった！

抜け目なく、ベルと手をつないだシュトリナは、ご満悦だった。なにしろ、こんな風に友だちと仲良く手をつないで出かけることなど、今までになかったことなのだ。セントノエル学園で、仲よさそうにしているクラスメイトたちに、シュトリナは強い憧れがあったのだ。

この旅行に誘ってくれたミーアに対する忠誠が１２０％アップしてしまうシュトリナである。

――それにしても……、周辺国の行商人、ね……。

シュトリナは、いつもと変わらない華やかな笑みを浮かべながら、コネリーの情報を吟味する。
――不特定多数の人間が集まる場所……いかにも蛇が混じっていそう。
混沌の蛇の本領は、一般の民衆に隠れ潜んで、破壊工作を行うことだ。狼使いのような、実働戦力もないわけではないが数はあまり多くない。
となれば、そのように、氏素性の定かではない者たちが集まる市場などは、絶好の隠れ蓑といえる。
――城壁の兵士の目を誤魔化すのなんか、そう難しいことではないし……。
「よろしいですね！」
っと、コネリーの声が聞こえる。
シュトリナは一瞬、なんのことを言われているのかわからなかったが……、無意識に聞き流していた会話を思い出す。
たしか、ショッピングの話をしていたはず……。
小さく頷き、シュトリナは言った。
「はい。サン・セリーゼ通りでのショッピング、楽しみだね、ベルちゃん」
その言葉に嘘はなかった。
お友だちの着る服を選んであげて、自分が着る服をお友だちに選んでもらう。
素敵な服が見つかるかどうかは、それほど重要ではない。一緒に笑いあったり、どうでも良いことで頭を悩ませたりする、そんな平和な時間が、シュトリナにはなにより貴重だった。
だから、ショッピングの場所がどこであっても、シュトリナはかまわないのだ。
「でも、あの、その開放市場って、珍しいキノコとか買えたりするんじゃないですか？」
その、ベルの唐突な言葉に、コネリーは首を傾げた。

「キノコ……ですか？」
「はい。ミーアお姉さま、すごくキノコが好きなので、珍しいキノコがあったら買って行ってあげたいなって思って……」
ベルの話に納得した様子で、コネリーは頷いた。
「なるほど。そういうことでしたら、館の厨房に話を通しておきましょう」

かくてディナーに一品、キノコ料理を確保することに成功したベル。大変、お祖母ちゃん孝行な子なのであった。

第八十一話　会食の誘い

さて、ミーアがランプロン伯邸に戻ったのは、夕刻を迎える頃だった。

部屋に戻ると早速、エメラルダとルードヴィッヒが訪ねてきた。

「すっかり、ラフィーナさまと話し込んでしまいましたわ」

そうつぶやくミーアに、ルードヴィッヒが驚愕の目を向けてきた。

「ラフィーナさまも、この地にいらしているのですか？」

「ええ。今度のパーティーに出席する予定みたいですわ。アベルも一緒に来ておりましたのよ？」

「なるほど、そうですか……ラフィーナさまと……」

メガネをキラリと光らせるルードヴィッヒ。その視線の鋭さに、ミーア、いささかたじろぐ。

――あっ、ヤバイですわ。エメラルダさんの縁談どうしようとか、シオンの暗殺をどうやって防ごうとか、ぜーんぜん考えないで、ラフィーナさまとの会食を楽しんでしまいましたわ！　言い訳しなければ……。

刹那の思考。ミーアは、軽い言い訳を差し挟む。

「あ、も、もちろん、情報収集してきましたわよ？」

一応、ランプロン伯の人物評を聞いたし、帝国にはない土瓶蒸しという調理法も情報を仕入れた。

――あの土瓶蒸しというのは、いいものでしたわ！　料理長に教えて研究してもらえば、帝国の食文化に貢献できるかもしれない。それは素晴らしいことである。

――そうですわ！　食事をしてきただけではございませんわ。わたくしは、ちゃーんとやるべきことをやってきましたわ！

などと自分を納得させつつも、ルードヴィッヒのほうに目を向ける……と、

「うっ……」
「なるほど……、さすがです、ミーアさま」
ルードヴィッヒは、澄んだ瞳に感心の色を乗せて、まっすぐに見つめてきた。
その一切の曇りのない純粋なる感心を前に、じわじわと罪悪感を刺激されてしまい……、ついつい目を逸らしてしまうミーア。その間にも話は進んでいく。
「事態の打開のためには、情報収集が大切であるというお考え、私も同意いたします。そこで……、急なことではありますが、今夜、サンクランド国王、エイブラム陛下との会食の場を用意いたしました」
「……はえ？」
事態の急変！　突然のサンクランド国王との面会の機会に、ミーアは、ぽっかーんと口を開けた。
いや、急にそんなこと言われても心の準備が……などと言い訳する間もなくルードヴィッヒは言った。
「此度の縁談のこと、サンクランドの国王陛下がどのようにお考えか、探りを入れることが必要と考えました」
実に正論、反論の余地など、ない！
「……なっ、なるほど。それで、あなたが手配してくださったんですわね？」
「キースウッド殿を通して、シオン殿下と連絡を取らせていただきました。エシャール王子のお相手であるエメラルダさま、それに、シオン王子のご学友として、ティオーナさまもご一緒できるということですが……」
「まぁ、ティオーナさんまで……ふむ」
ミーアは、エメラルダのほうに目を向けた。
「どっ、どうしましょう、ミーアさま……。私、心の準備が……」
エメラルダは、オロオロしていた。実に頼りない。
――ルードヴィッヒとアンヌがついてきてくれれば、安心なので

すけれど……、国王との会食となれば、従者は同席できないのでしょうね……。となれば、下手をするとエメラルダさんと二人で、国王陛下と対峙しなければならなくなりますわ。
それは、ミーアとしては避けたいところである。物量作戦信奉者のミーアとしては、味方はできるだけ多いほうがありがたい。
――まぁ、相手のリクエストですし、ティオーナさんを連れて行っても問題ないというのであれば、それに越したことはありませんわね。それにしても……。
「ま、まさか……こんなに急に、お会いすることになるなんて……」
狼狽えるばかりのエメラルダには、いささか意外なものを感じてしまう。
エメラルダは基本的にわがまま娘である。傍若無人で、相手が他国の王であれど、平気で無礼を働くことができる胆力を持っている。
少なくともミーアはそう思っている。固く信じている。
けれど、今のエメラルダは非常に不安そうだ。
――相手が他人ならばともかく、縁談相手の父親だと思うから、おろおろしてしまっているんですわ。もう、エメラルダさん、情けないですわ！
ミーアは、ふん、っと威勢よく鼻息を鳴らしてから、
「エメラルダさん。あなたは、栄えある我がティアムーンの四大公爵家の者ですわ。堂々と、大船に……、そう、あのエメラルドスター号に乗ったつもりでいればいいのですわ！」
「エメラルドスター号に……」
ことわざに、ミーアなりのアレンジを加えたせいで、ちょっぴり難破してしまいそうな感じがしないではなかったが……、
「ミーアさま……」
エメラルダは、感動に瞳をウルウル潤ませるのだった。
――とは言ったものの……。
エメラルダを送り出し、急ぎ、着替えるのをアンヌに手伝っても

らいながら、ミーアはため息を吐く。
――なかなか、骨が折れますわね。どうしたものかしら……。
と、その時だった。コンコン、とドアをノックする音が聞こえてきた。
「失礼します。ミーアお姉さま」
「ただいま戻りました、ミーアさま」
ドアを開け、入ってきたのは、ベルとシュトリナの二人だった。
「あら、あなたたちも遊びに出かけていたんですのね？」
などと言いつつも……、ミーアはすぐに思考の海に沈んでいく。
――シオンのお父さま、はたして、どんな人なのかしら……？
あのシオンの父親ですから、油断はなりませんわね……。上手いこと情報を引き出せればよろしいのですけれど……。
けれど……、やはり、それ以上に問題なのは、
「エシャール王子のことですわね……」
ぽつり、とこぼしたミーアに、シュトリナは驚愕の表情を浮かべた。
「すでに、ご存知でしたか……。さすがですね、ミーアさま」
何事か、感心した様子で頷いて、シュトリナは言った。
「それで、いかがいたしますか？」
ミーアは、はて、と首を傾げる。なにか話していたようだが……、さすがに聞いていなかったというのは感じが悪い。ということで……。
「え、あ、ええ……そうですわね。お任せいたしますわ」
まぁたぶん、ベルを連れて、なんとか市場に行くという話だろう……、とミーアは予想を立てる。そのうえで、
「好きに連れて行ってかまいませんわ。退屈してるみたいですから、遊んであげていただけると嬉しいですわ」
シュトリナの力が必要になるのは、もう少し先のこと。しかも、いざという時の備えという意味合いが強い。
それまでは、せいぜいベルと遊んで、楽しんでくれればいい、と

考えるミーアである。
対して、シュトリナは、真剣な顔で頷いて、
「わかりました。この身に換えましても……」
「え？　いや、そこまでしなくても大丈夫ですわよ？」
この子、どんだけ、ベルと遊ぶことに懸けてるのかしら？　などと、首をひねるミーアであった。

第八十一話　会食の誘い（後書き）

すみません。来週ですがお盆休みとさせていただきます。
休み……と言いつつ、引きこもって、滞ってる仕事を片付ける予定です。

第八十二話　シロップゼリーフィッシュ

「ここが、サンクランドの王城なんですね……ミーアさま」
アンヌが気圧されたように、そびえ立つ城壁を見上げていた。
それは、荘厳な石造りの城壁。あらゆる攻撃を跳ね返す重厚な壁は、しかし、それほどの幅はなかった。
ミーアの足でも、十分程度で端から端まで行くことができるだろう。
過度に大きい必要はないのだ。襲い来る敵を迎え撃てる、適切な大きささえあれば良い。
それは戦いのための建築、白月宮殿とは全く違った思考の元、建てられたものだった。
「ふむ、あれが、ソルエクシード城。わたくしも来るのははじめてですわ」
前の時間軸を含めて、ミーアがサンクランドに来たのは、これが初めてのことである。当然のことながら、サンクランドの王城、ソルエクシード城に来たこともない。
――遠くから見ても思いましたけれど、堂々たる威容ですわね。見ているとなんとも、誇らしい気持ちになってきそうですわ。
なるほど、これも、サンクランド貴族の考え方に影響を及ぼしているのかもしれない。すべての国の民を、この威光のもとに……、などと言い出したくなっても、おかしくないように、ミーアには見えた。
っと、そこで気付く。アンヌがまだ城を眺め続けていることに。
「あら、どうかしましたの？」
「いえ……、ミーアさまも初めて来られたんだって聞いて……なんだか、すごい経験をしてるなって思ってしまいました。ティアムーン帝国の白月宮殿で働けるだけでもすごいことなのに、セントノエ

ル学園にも、それに、ペルージャンのお城にも、ご一緒させていただきました。この上、サンクランドまで、だなんて……」
微笑むアンヌに、ミーアは深々と頷いた。
「そうですわね、普通に過ごしていれば、あまりないことなのかもしれませんわね……」
前の時間軸でのアンヌは、きっと生涯を帝都で過ごしたことだろう。あるいは、どこかに行くとしても、帝国からは出なかったのではないだろうか？
それが家族のもとを離れて、サンクランドにまで来ているのだから、珍しい経験には変わりないだろう……。
そこでふと、ミーアは心配になる。
「ねぇ、アンヌ、大丈夫かしら？」
「なにがですか？　ミーアさま」
不思議そうな顔をするアンヌに、ミーアは言った。
「家族としばらく会っていないでしょう？　セントノエルに行く時には、ついてきてほしいって、お願いいたしましたわね。でも、ヴェールガ以外の国については、そうしておりませんわ。当たり前のようについてきていただいてますけれど、もしも家が恋しくなったのなら……」
「そんなことは、絶対にありません」
アンヌは静かに、けれど力強く首を振った。
「ミーアさまと一緒にいろいろな場所に行くことは、私の誇りです。それにエリスにもお土産話がたくさんできて、大歓迎されてるんですよ？」
そうして、悪戯っぽい笑みを浮かべて、アンヌは続ける。
「だから、ご安心ください。私は、ミーアさまの行くところなら、どこへだって行きます。ダメだって言われてもついていきますから」
「アンヌ……。ふふ、そうでしたわね。では、これからもお世話になりますわね」
それから、ミーアは、ソルエクシード城を見上げて、

「さて、それでは行きますわよ！」
一つ気合を入れるとミーアは、エメラルダとティオーナを従えて、堂々と城の中に踏み入った……のだが……、ミーアが強気でいられたのも、国王を前にするまでのことだった。

「ご機嫌麗しゅう、エイブラム陛下。ティアムーン帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
広い謁見の間に通されたミーア一行はサンクランド国王、エイブラムとの面会を果たした。
スカートの裾をちょこんと持ち上げて、深々と頭を下げるミーア。
そこらの小国とは違い、サンクランドはティアムーンと同格。大国の国王が相手である以上、完璧な礼節を整えて臨まなければならない。
ともあれ、それは慣れたもの。ミーアは完全無欠な姫スマイルを浮かべて、挨拶を敢行した。
「遠いところを、ようこそ来られた。ティアムーンの皇女殿」
ミーアの礼を受けて、サンクランド国王、エイブラム・ソール・サンクランドは微笑みを浮かべた。
ミーアはその顔を見て、素早く分析する。
年の頃は……、恐らく、自らの父である皇帝と同年代だろう。見事な口髭と深みのある知性的な瞳を備えた男だった。
一見すると、優しげな笑みを浮かべているにも関わらず、ミーアは、自らが気圧されるのを感じた。
――こっ、これが……、サンクランド国王陛下……。お父さまとは、比べ物にならないほどの迫力ですわ……。
その体躯から発するは、清流のごとき清らかな空気、それに当てられて、ミーアは思わずクラァっとした。
なにしろ、ミーアは海月（くらげ）だ。しかも、砂糖水（シロップ）の中でしか生きられない希少種の、甘水海月（シロップゼリーフィッシュ）なのである。
清らかな水の中では、しんなりしてしまうのも無理のないことで

はあった。
――って、ぐんにょりしてる場合ではありませんわ！
ミーアは自分を励ましながら笑みを返した。イメージするのは、昼食を共にした友人、聖女ラフィーナの姿だ。
きっと、ラフィーナならば、この国王を前にしても平然としているだろう。そんなラフィーナの堂々たる態度を完コピしつつ、ミーアは言った。
「いつも、ご子息であらせられるシオン王子にはお世話になっておりますわ」
「いや、我が息子も、貴女の優れた知恵に良い影響を受けているようだ。だから、どのような人物なのか、気になっていたのだ。こうしてお会いする機会が得られたことを嬉しく思っている」
それから、エイブラム王は、ティオーナのほうに目を向ける。
「君がティオーナ・ルドルフォンか。セントノエルの生徒会では、息子が世話になっているな」
「もったいないお言葉でございます。陛下」
声をかけられると思っていなかったのか、ティオーナは驚いた顔をするも、すぐに、頭を下げる。
最後にエイブラムは、ミーアの隣に立つエメラルダに視線を止めた。
「そして……、そちらが、エメラルダ・エトワ・グリーンムーン嬢かな？」
「はっ、はひっ……」
ぴょんこっと飛び上がるエメラルダを見て、ミーアは、スーッと気持ちが冷静になるのを感じた。
――これは……、わたくしがなんとかしてあげないといけませんわね！
手のかかる姉貴分のため、一層の気合が入るミーアであった。

第八十三話　ミーアドリル

「おっ、おお、お初にお目にかかりますわ。エイブラム陛下」
カクカクした動作で、ぎこちなくスカートの裾を持ち上げるエメラルダ。その指先がプルプル震えて、スカートがフワフワ波打っている。
実に……、緊張している。その挙句……、
「私がグリーンムーン公爵家の長女、エメりゃ……」
……噛んだ。
くるーり、とミーアのほうに顔を向けるエメラルダ。ウルウル潤んだ瞳を向けられて、ミーアはため息混じりに首を振る。
――まったく、肝心な時に噛むだなんて、エメラルダさんも情けないことですわ。大事な場面で噛むなんてあり得ない話ですわ。もう、仕方ないですわね、ここは、わたくしが……。
ミーアは澄まし顔で、口を開く。
「陛下。彼女がわたくしの親戚、帝国四大公爵家の星持ち公爵令嬢。エメラルダ・エトワ・ぐりゅ……」
ミーアも噛んだっ！　が……っ！
「――んムーン、ですわ！」
強引に言い切った！　そうして、何事もなかったかのように微笑む！　堂々と、臆面もなく！
なにしろ、エメラルダとは、くぐってきた修羅場が違うのだ。
噛みビギナーなエメラルダとは違い、ミーアはベテラン。この程度のこと、軽々とやってのけるのである。
「突然の縁談話に緊張している友に代わり、紹介させていただきますわ。無礼をお許しいただけると嬉しいのですけれど……」
「ふふ、なに。今日は極めて私的な会食だ。そうかしこまらずとも良かろう」

小さく頷いてから、エイブラムはエメラルダのほうに目を向けた。
「グリーンムーン公爵令嬢も気を楽にしてほしい。今日はあくまでも顔合わせなのだから」
そうして、気さくな笑みを浮かべる。瞬間、その身を覆っていた攻撃的なまでの清廉な空気が薄らいだように、ミーアには思えた。
それはさながら、堅苦しい国王という着物を脱ぎ捨て、素の部分をほんの少し覗かせたような、そんな印象だった。
――あら、こんな顔もされるのですわね。ちょっぴり意外ですわ。若干、迫力が減った国王に、肩の力が抜けるミーア。一方、エメラルダは、
「は、はひ……。か、かしこまりました、ですわ……」
まだダメだった。なんともぎこちない返事にミーアはついつい、ハラハラしてしまう。
――ああ、もう、エメラルダさんも、意外と気が小さいですわね！　もっと堂々と！
「ふふふ、まぁ、良い。ここで話すこともあるまい。続きは会食をしながらにしようか」
そう言うと、エイブラム王は、そばにいた壮年の執事に目配せする。それを受けて、執事は一歩前に出て、きびきびとした動作で頭を下げる。
「ご案内いたします。どうぞ、こちらへ」
そうして案内されたのは、謁見の間からほど近い、王城の一室だった。
あまり広くはない。セントノエルの教室の半分ほど、せいぜいが十人も入れば、いっぱいになってしまいそうな広さの部屋だった。
中心に据えられた机は、珍しい円卓だった。
通常、会食の際、座る位置というのは、身分によってだいたい決まっているものである。けれど、このように円形の机では、どの位置に座ればいいのか、判断に困ってしまう。
さて、どうしたものか、と戸惑っていると……、

「みなさま、ようこそいらっしゃいましたね」
穏やかな、秋の日差しのような声が聞こえた。そちらに視線を向けると、柔らかな笑みを浮かべた、ふくよかな女性が立っていた。白銀の髪を持つ女性、その優しげな目を見つめていると、ミーアは、自分の緊張が解けていくのを感じる。
「はじめまして、ティアムーン帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
ミーアに続いて挨拶するエメラルダとティオーナ。それをニコニコ笑みを浮かべながら聞いていた王妃は、
「いつもシオンがお世話になっているわね」
春の日差しのような、ぽかぽか明るい声で言った。
そこに遅れて、エイブラム王がやってきた。その傍らにはシオンと、幼い少年の姿があった。綺麗に切り揃えた白銀色の髪、長めの前髪に隠れたちょっぴり気が弱そうな瞳で、ミーアたちのほうをチラチラと見つめている。
「シオンの紹介は不要だな……。ほら、お前も挨拶しなさい」
促された少年は一歩前に出て、優雅に礼をした。
「はじめまして、エシャール・ソール・サンクランドです」
そう言ってから、エシャールは、もじもじしつつ、ぎこちない笑みを浮かべた。
――あら、可愛らしい……。
その微笑みに、ミーアは思わずキュンとしかけて……。
――っと、いけませんわ。彼は、シオン暗殺の犯人……。油断は禁物ですわ！
ミーアはキッと目つきを鋭くする。そうして、エシャールをじいっと見つめて……。きょとん、と不思議そうに首を傾げるエシャールに、ついついキュンとする！
――まぁ、よく考えるとこんな可愛らしい子が自分で暗殺を企んだとも思えませんし。おおかた、この子をランプロン伯がそそのかし……。

「ああ、そうだ。ランプロンから報告があったのだが、ミーア姫は、キノコ料理が好物らしいな。今日は一品だけだが、用意させてもらった」
「ほう！　それは、楽しみですわ！」
ミーアは、ワクワク顔で頷いた。
――ふむ、ランプロン伯は、やはり無関係かもしれませんわ。シオンのことが気に入らないからと言って、犯人扱いしたら可哀想ですわね！
くるくる、せわしなく回るミーアの手首なのだった。

第八十四話　シュトリナの暇つぶし

「あら、あなたたちも遊びに出かけていたんですのね？」
ミーアの問いかけに、ベルはニコニコ笑みを浮かべながら頷いた。
「はい。面白そうな場所のことも聞いてきました。開放市場って言って……」
ベルが報告するのを横で聞きながら、シュトリナは考えていた。
手に入れた情報をどう活かすべきか……。
――周辺の商人に開放された市場……。恐らく素性が確かでない人間も多く出入りしていたはず。そして、そんな市場で……、エシャール王子が、一時的とはいえ行方不明になったことがある……。この情報は、かなり危険ね……。
ただ行方不明になったのならば、別に大したことはない。でも、もし……。エシャール王子に、混沌の蛇が接触を図っていたとしたら……。
その危惧を覚えたシュトリナは、とりあえず、どうするかをミーアに聞こうとしたのだ。
あらかたベルが話し終えて、その場を離れた時に、そっとミーアに耳打ちする。
「それで、ミーアさま。開放市場の件で、お話ししたいことが……」
「エシャール王子のことですわね……」
その、機先を制するかのようなつぶやきに、シュトリナは驚愕の表情を浮かべた。
――すでに、その情報をつかんでた？
たしかに王都入りしてから、すでに数日が経っている。ミーアがその情報を得ていてもおかしくはないかもしれないが……。
――すごい勢いで口止めされたけど、コネリーさんは、少し口が軽いのかしら？

あの、とても苦労していそうな兵士の顔を思い出し、ちょっぴり心配になってしまうシュトリナである。
今までは……、いつ誰を殺せと命令を受けるかわからなかったから、好意を覚えても、強いてそれを無視するようにしていた。
だが、ミーアは言った。自分はシュトリナに暗殺をさせるようなことはしない、と。
だから、シュトリナは自然に、親切にしてくれた人に親しみを覚え、心配できるようになった。特にコネリーは、ベルとの楽しい時間を作るのに協力してくれた人である。
好意を抱くなというほうが無理な話だった。
それはさておき……、
「それでいかがいたしますか？」
シュトリナは、当たり前のようにミーアに判断を仰ぐ。
もともと、シュトリナは、そうやって生きてきた。
バルバラがいた時には彼女の言うことに従ってきたし、父親の言うことに従って生きてきた。それがミーアに代わっただけ。なにも、することは変わらない。
それになにより、自分はもともと混沌の蛇だったのだ。ミーアを殺そうとさえしたのだ。
勝手な判断で行動するわけにもいかない。ただ、ミーアの命令に従うのみ……。と、そう考えていたのだが……。
「そうですわね。お任せいたしますわ」
ミーアは、ごくごくあっさりと言ったのだ。シュトリナの判断に任せると……。蛇につながるかもしれない情報を、シュトリナに預けると……ミーアはそう言っているのだ。
「わかりました。この身に換えましても……」
シュトリナは、感情の赴くままに、まっすぐにミーアを見つめる。信頼し、任せてくれたミーアに応えるために、気合を入れるシュトリナであった。

そうして……、シュトリナはこっそりランプロン伯の館を出た。コネリーから、館の警備状況は聞き出してある。
――コネリーさん、やっぱりちょっと口が軽すぎる気がするな……。うん、帰る前に注意してあげよう。
そんなことを思いつつ、路地を行く。昼間にベルと出かけた時、いろいろと街並みを見ておいて、だいたいのところは把握できていた。
ある程度、館から離れたところで、手持ちのランプに火を灯す。煌々と燃え盛る明かりが、夜の闇を切り裂いた。
「さて……、それじゃあ行こうかな」
向かう先は、もちろん、例の開放市場だ。
路地裏から路地裏へ。
夜の闇に沈む道を行く。
王都とはいえ、夜の人通りはほとんどない。夜警にだけ気を付け、城に近い一番街を抜ける。
城から離れるにつれ、空気が微妙に変わってくる。
それは、甘い香水のような匂い、あるいは、人を酔わせるための……強い酒の匂い。
貴族の令嬢とは無縁の、それは危険な夜の街の匂い……。
そして、その夜の匂いをまとって……、
「おやおや、これはこれは……、どこの貴族の娘さんだ？」
シュトリナの前に、男が現れた。ランプの明かりに照らされた不気味な顔は、頬に派手な傷の入った、いかにもガラの悪いものだった。ちらり、と後ろを見ると、いつの間にか、背後にも一人、男が立っている。
「へへへ、こんな場所に一人で来るなんて危ないぜ？　どうだい？　よかったらおじさんたちが守ってやるよ」
自分を観察するように、ねっとりとまとわりつくような視線を、シュトリナは感じる。
一目で貴族の娘と見抜いた観察眼といい、恐らくは……。

――身代金目当ての誘拐犯、もしくは人買いとかかな……。コネリーさんが言った通り、この辺りは少し治安が悪いみたい。
などと考えつつも、シュトリナは特に慌ててはいなかった。
基本的に、シュトリナに格闘術の心得はない。運動能力も、ごく普通の令嬢と変わらない。特殊な暗殺術の使い手……などということもない。
なので、本来であれば、これは怖がってしかるべき状況ではあるのだが……、そんな様子はまるでない。
そもそも、シュトリナは知っている。闇の中を行く時、非力な者は明かりをつけるべきではない、ということを。自身の視界を確保できたところで、戦えるわけでもなし。むしろ、それは危険なものを呼び寄せることにもつながるのだ。
だから、月明りで視界が確保できるのであれば、明かりはつけてはならない。
けれど、彼女は明かりをつけた。なぜか……？　それは、呼び寄せるため。
目の前の男たちのように、開放市場の事情を知っていそうな、案内人を欲したから。
そして……、危険な男たちを無力化する算段も付いていたから。
そう……、ミーアは言っていたのだ。
好きに連れて行って構わない。退屈してるみたいだから、遊ばせてあげて、と……。
そして、ご丁寧にも、今日のサンクランド国王との会食には……、あの男を連れて行っていない。
シュトリナに任せると言いながら、彼女が危険な目に遭わないように残していったのだ。
自身の持つ最強の剣を……。
シュトリナは、特に何もしてこなかった。彼に声をかけることすらしていない。
ただ、暇を持て余したあの男が、イエロームーン家の娘が怪しげ

な行動をしているのを放っておくとは思えなかったのだ。
――あの手合いはついてきてとお願いすると断るくせに、ついてくるなというと絶対についてくる。
そんな確信の下、シュトリナはここまでやってきたのだ。
わざとらしく明かりをつけて、万に一つも彼が見失うことのないように。
「そろそろ、現れてもいいんじゃないかしら。それとも、この程度の相手では、あなたを遊ばせてあげることにはならないのかしら？」
「あん？　なんだ、なに言ってやがる？」
「それとも、リーナみたいな可愛い女の子が、怖がって泣くのを見るのが趣味だとか？」
「だから、誰に向かって……ぐっ！？」
くぐもった声を上げ、直後に、男が昏倒する。
「やれやれ、上手いこと誘導されてしまったみたいで不快だね。一応言っておくと、君の涙はイエロームーン邸でも見たけれど、あまり気持ちの良いものではなかったな。どうせ泣かせるなら、ミーア姫殿下のほうが愉快そうだ。あの方は、慌てふためいてる姿が、とても面白いから」
闇の中、ゆっくりと現れたのは、シュトリナの予想通りの男……。
帝国最強の騎士、ディオン・アライアの姿だった。
「そして、ご指摘の通り、この程度の相手じゃあ、暇つぶしにもならないよ」
「そう。それなら、暇つぶしに少しおしゃべりしない？　あなたとは、ゆっくりお話したいと思っていたの」
シュトリナは、愛らしく首を傾げつつ、可憐な笑みを浮かべた。
「あなたとベルちゃん、ずいぶん親しげだけど、どういう関係なの？」

第八十四話　シュトリナの暇つぶし（後書き）

ということで、来週はお盆休みにします。
再開は、２４日……の予定です。

第八十五話　97%の澄み渡った心で

「時に、ミーア姫……。過日のレムノ王国でのこと、すまなかった。貴女にもずいぶんと迷惑をかけたと聞いている」
そうして、エイブラムは頭を下げる。対して、ミーアは静かに首を振った。
「頭をお上げください。エイブラム陛下。謝罪には及びませんわ。すでにレムノ王国との間で、その件については決着しているはず。それに、シオンからも謝罪を受けておりますわ。済んだ話を蒸し返しても詮無きことですわ」
「だが……」
「わたくし自身は特に迷惑もこうむっておりませんし、あの時にはずいぶんとシオン王子に助けていただきましたわ。謝罪は不要ですわ」
その潔い態度に、エイブラムは、感心した様子でため息を吐いた。
「なるほど、シオンに聞いていた通り、姫は器が大きいのだな」
などと、王妃ともども驚いた様子であったのだが……、無論、そんなはずはない。
器を云々するのであれば、器が広いのではなく、器が空っぽなのだ。つまり……空腹だから、食事が気になっているだけである。
そう、今のミーアはサンクランドの贖罪になど興味はない。サンクランド食材（主にキノコ）に興味があるのだ！
「では、難しい話はここまでとしよう。突然のことだったので、大したものは用意できなかったが、楽しんでいってもらいたい」
エイブラム王のそんな言葉で、晩餐会は始まった。けれど、始まって早々に、ミーアは、その言葉がただの謙遜であることを知った。
「素晴らしいお料理ですわ」
並べられていく料理に、思わず感嘆がこぼれるミーアである。

それは、白月宮殿で供される料理に勝るとも劣らない、絢爛豪華な料理だった。
きれいな焼き目のついた香ばしいサンクランドパン。時間がたつと固くなってしまうこのパンだが、焼き立てはパリパリで、ほのかに甘いことをミーアは知っている。
さらに、ミーアにとってのクライマックスは、早くも前菜の時に訪れた。なぜなら、
「前菜は、陽光トマトのゼリー寄せと、ソレイユキノコの塩焼きです」
説明の後、自らの前に置かれたお皿。上に載っていたのは、赤く熟したトマトを細かく切り、透明のゼリーに混ぜ込んだ、まるで宝石のように美しいゼリー寄せと、それにも増して美しく輝いて見える、ソレイユキノコだった。
ちょうど、ミーアの手のひらほどのサイズのキノコをスライスし、塩を振って焼いただけのもの……。ミーアはその調理法を、作り手の挑戦状と受け取る。
――下手な小細工はなし。最小限の調理で、素材の味を生かし切ろうというコンセプトですわね。
ミーアの瞳が光を帯びる。
まず、ワイングラスを手に取り、中に入っている水で口の中を湿らせて下準備。それから、おもむろにフォークを握ると、優雅な動作でソレイユキノコに突き刺した。
――素人さんは、このキノコを二つに切って口に入れるところですけれど、わたくしのようなベテランともなれば、食べ方は理解しておりますわ。
一口で食べるには若干大きく見えるサイズのキノコである。が……、ミーアの中に確信と信頼とがあった。
――ただ、キノコを焼くだけで勝負してくる、そのような料理人がサイズのことを考えていないはずがありませんわ。
つまり、ミーアは判断したのだ。

そのキノコが、自分の口に合った大きさに切られているということ。そして、一口で食べた時に、最も美味しく食べられるよう計算されているということを。
満を持してミーアはキノコを口に入れ……、感動に、目尻がかぁっと熱くなる。
かすかに感じる塩味、感じるか感じないか、極めて微妙な塩加減により、引き立つのは、キノコ本来の豊かな味だった。それはとても淡白で繊細な……、大地の恵みの味。
奥歯に噛み締めた時、ふんわりと歯を受け止める弾力、半ばまで歯を進めると、コリリッとなんとも心地よい音が鳴る。決して硬すぎず、柔らかすぎず、絶妙の弾力を保っているキノコ、その焼き加減にミーアは感動する。
ふわりと芳しい香りが鼻をくすぐり、舌の上には、ほのかな甘みを残して……その余韻がゆっくりと消えていく。消えていく。
目の前に、このキノコが育ってきた森の光景すら思い浮かべながら、ミーアは言った。
「素晴らしい……。素晴らしい仕事ですわ……」
キノコソムリエ・ミーアは、シェフへの称賛を惜しまないのだ。
ミーアの満足そうな顔を見て、エイブラム王が笑みを浮かべた。
「姫は食に対して、並々ならぬ関心があると聞いていたが、どうやら噂通りのようだな」
「うふふ、それほどでもございませんけれど、でも、食べるのは大好きですわ」
「やはりそうなのか。先ごろもペルージャンまで足を延ばしたと聞くが……」
「ええ。その通りですわ。飢饉の時のために、食糧の輸入先とは、しっかりと信頼関係を構築しておかなければならないと思いまして」
エイブラムの瞳が、わずかばかり鋭さを帯びる。
「以前にもシオンに聞いたのだが、ミーア姫は今日の食糧不足を予知していたとか。さらに、この不作が数年にわたって続き、大規模

な飢饉が起きると主張しているとか。それは、まことの話かな？」
「さて、先のことはどうなるものか、わかるはずもありませんわ。ですから、まことかどうかと問われても答えられませんけれど……。ただ、帝国では飢饉のための備えをしている。民を飢えさせることのないような体制を整えている、とだけお伝えしておきますわ」
「そうか……。実は、我が家臣の中には、貴国が領土の拡張を狙い、戦争をするために糧食をため込んでいるのではないか、と考える者もいてな」
「父上、そのようなことを申す者がいるのですか？」
シオンが怒りと困惑を隠しきれない様子で言った。対して、エイブラムは落ち着いた声で答える。
「常識的に考えれば、過去に一度も経験のない大飢饉が起こるというよりは、軍事行動の一環と考えるほうが理にかなっているだろう」
そうして、自分のほうに視線を向けてくるエイブラムに、ミーアは、
「あら、それはまた、ずいぶんとのんきな発想ですわ」
思わず、つぶやいた。
「ほう、のんき、と……そのように感じるか……」
意外そうな顔をするエイブラムであったが、あの地獄のような飢饉を知っているミーアからすると、その考え方はのんきという以外にないものだった。
あの時を知る者として、ミーアは断言する。
「のんきですわ。戦争などと……。平時であればいざ知らず、飢饉の時にそのような愚かなことに力を費やしている場合ではございませんわ」
ミーアに言わせれば、戦争などやっている暇はないのだ。
食料を奪うための戦を主張する者もいるかもしれないが、相手がただで食糧や領地を譲ってくれるわけもなし。戦争になれば、田畑は焼かれ、働き手は命を落とし、次の年の食糧事情はもっと悪くなるのだ。

――圧倒的な戦力をもって、自棄になった相手が自分たちの田畑に火を放つ前に勝負をつけられるというのでしたら、それも良いのかもしれませんけれど……。
ディオン・アライアを百人ぐらい集められれば、それも可能かもしれない、などと想像するミーアだが……。
――一人でも厄介なあの方が百人なんて、わたくしのほうが先に参ってしまいますわ。
結局のところ、戦争は飢饉への対策にはなりえないというのがミーアの出した結論だ。仮に一時しのぎになったとして、そんなものが長続きするはずもなし。
であれば、それを選ぶわけにはいかない。
「食糧に余裕があって、働き手に余裕があるのであれば、覇を唱えるのも良いでしょう。けれど、これから来る飢饉を前にしてはそのような余裕はない。戦により、土地を汚し、民の数を減らしている場合ではございませんわ」
それだけ言ってから、ふと、思いついたことがあって、ミーアは口を開いた。
「ああ、でも、それを口実にすることには意味があるやもしれませんわね」
「口実……というと？」
「言葉通りの意味ですわ、エイブラム陛下。帝国が侵略戦争を企んでいるかもしれないということを、大義名分にしてでも、食糧の備蓄を増やしておくことを進言いたしますわ」
「なるほど。ミーア姫は、それほどまでに、飢饉が起こることに確信を持っているというわけか」
エイブラムは納得した様子で頷いてから、
「だが、そうであれば、飢饉に際して今は多忙なはず。そのような時に、このサンクランドにお越しいただいたのには、なにか理由がおありかな？」
「ええ、それはもちろん……」

思いもよらずやってきたチャンスに、ミーアは一瞬考える。
エシャール王子はどのような人物か、シオン暗殺の裏に、どのような事情があったのか、探るためには、今は絶好の機会だ。
さすがに、事情をそのまま伝えることはできないが、幸い、今のミーアには大義名分がある。ミーアはシレっとした顔で、
「我が友、エメラルダの縁談の相手が気になったからですわ」
一切の罪悪感のない、澄み切った心で言った。
なにしろ、ミーアの言葉は嘘ではないのだ。全部が本当ではないというだけで。
少なくとも何割か……おおよそ二割ほどは、本気でエメラルダのことを心配しているのだから。
それゆえ、今のミーアの心はかつてないほどに澄み渡り、少なくとも海に浮かぶ海月ほどには透明なのだ。

第八十五話　９７％の澄み渡った心で（後書き）

本日から再開です。
そういえば、更新をお休みしている間に、コミックの二巻も発売されました。

第八十六話　友＝とも＝親友？

――あれが、兄上のご学友……。帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーン殿下……。

エシャールは、心の底から驚いていた。

皇女ミーアの、その、泰然自若とした態度に。

父の謝罪を平然と受け入れたばかりか、その後、ごくごく普通に食事に移ってしまった。

――それにしても、すごいな。父上を前にして、あんな風に食事ができるなんて。

エシャールは、サンクランドから出たことはない。ゆえに、彼の世界とはサンクランド国内に限られる。そして、自らの父である国王は、サンクランドで最高の権威を持つ者だ。

そんな父と会食する者たちには、いつでも少なからず緊張があった。ランプロン伯や、伝統を重んじる貴族たちの間では、緊張以上の畏怖があった。

実子であるエシャールでさえ、たまに父の放つ気配に緊張してしまうことがあった。

――それなのに平然と食事してる……。心から食事を楽しんでるみたいだ。

そのことが、まず驚きだったのだが……、その驚きは次の瞬間、さらに大きなものになった。

「実は、我が家臣の中には、貴国が領土の拡張を狙い、戦争をするために糧食をため込んでいるのではないか、と考える者もいてな」

父の、大国サンクランド国王の剣呑な探り……、わずかばかり鋭さを増したその声を、ミーアは、

「のんきですわ」

の一言で、切って捨てたのだ。

戦争だなんて、のんきな話、と。
小揺るぎもせず、ただただ確信に満ちた言葉で。
――帝国の叡智か……。ランプロン伯は、まぐれだの偶然だのと言って、風鴉の一件を苦々しげに言っていたけれど……。
エシャールは、父の顔を窺う。そこに浮かぶのは好意と好奇心の色。
――父上は、高く評価されているのだろうな……。
これが兄、シオンが共に学んでいる友人。選ばれた者である兄が、その知恵を認め、褒め称える人。
その智謀の片鱗を見たエシャールは、思わず顔を歪めた。
胸に湧き上がるのは、苦い劣等感。じくじくと身を浸す暗い感情を持て余して、エシャールは小さくため息を吐き……、それから、会食の席に腰掛ける別の少女に目を向ける。
――そして、こっちが、僕の許嫁になる人……。
エシャールの視線の先には、緊張に固まっている少女の姿があった。
『ティアムーン帝国の四大公爵家、星持ち公爵令嬢といえば、王子殿下のお相手として申し分のない身分でございます』
ランプロン伯は、胸を張って豪語していた。
たしかに身分としてはこの上ない。エシャールもシオンが王位を継いだ後は、公爵の爵位をもらうことになるだろう。爵位的には釣り合いが取れている。
『年齢は十八歳と、少しばかり年上ではございますが、それでも素晴らしい相手ではないかと……』
なるほど、身分ある者として、世継ぎを産むことは大切な責務。その点、八歳の年の差というのはマイナスの要因にはなるのだろうが……、それでも政略のためには、しばしばそうした縁談が組まれることもある。
王族の縁談とはそういうものだと、エシャールは教育され、納得もしていた。だから、相手がだいぶ年上のお姉さんであることには

特に思うところもないのだけど……。
おどおどと、慌てふためいた様子を見せるエメラルダ。緊張に身を縮こまらせる小心ぶりは、皇女ミーアと比べてしまうと、なんとも情けないものだった。
いや、さらに言うならば、その隣に座る少女、ティオーナ・ルドルフォンのほうが、まだしも堂々としているようにさえ見えてしまう。
帝国皇女はおろか、辺土伯の令嬢にすら後れを取る、その心の弱さに、エシャールは、なんとも言えない苦み走った思いを抱く。
――仮に、兄の縁談の相手であったなら……、あの人が選ばれるかな？
どうしても、そんなことを思ってしまう。兄の相手に選ばれるのは、きっと、あの皇女ミーアのような、知性と勇気に富んだ女性なのではないか、と……。
いけないことだとわかっていても、どうしても比べてしまう。
――やっぱり、兄上は……、すべてを与えられた人だ。僕では、とてもかなわない。
ふいに……、いつか言われた言葉が、頭をよぎる。
『なぁに、少し恥をかかせてやるだけですよ。完璧な人間には誰もついては来ないもの。これはシオン王子のためになることなのですよ』
耳元で囁かれた言葉が、するりとその心に忍び込んでくる。それは、まるで蛇のように。
『いらなければ、どうぞ、私と別れてからすぐにお捨てなさい。捨てることなどいくらでもできるでしょう？　それはただの薬。軽い腹痛を起こすだけの、無害な毒にございます。持っていたところで、噛みつかれも襲われもしません』
甘く、優しい声色で……。エシャールの心を魅了する。
「我が友、エメラルダの縁談の相手が気になったからですわ」
その時、凛とした声が響いた。声のほうに目を向けたエシャール

は、そこに輝く月を見た。
――あの人のことを友と呼ぶのか……。
おどおどと怯えるエメラルダの姿は、到底、帝国の叡智の友には相応しくないように思えた。にもかかわらず、ミーアは躊躇いもなく言った。
我が友の縁談の相手が気になるから見に来た、と。そのために、わざわざ足を運んだのだ、と。
エシャールの目に映るのは、選ばれた者の持つ余裕と、選ばれなかった敗者に対する哀れみ……。
ざりっと……、エシャールの心に異音が響く。
兄シオンと対をなすかのごとき、叡智の輝きを放つ少女。その光に照らし出されるのは、隠しようのない、エシャール自身の敗北感……。
『少し恥をかかせるだけです。そのほうがシオン王子のためになる』
甘い響きを持つ言葉が、いつまでも、彼の耳に響いて離れなかった。

――うう、も、もう駄目ですわ……。吐きそう……。
一方のエメラルダは、緊張の極致にあった。
サンクランド国王の雰囲気にあてられて、すっかり、その心は震えあがっていた。
食事など楽しんでいる余裕はない。自分がどこにいるのかさえ、見失ってしまいそうなほどの極限状態。黒い霧に包みこまれ、怖じ惑うがごとき心境に、今にも、倒れそうになっていた。
――ああ、もう、本当に、駄目かもしれませんわ……。
などと、弱音を吐きそうになった、まさにその時……、
「我が親友（とも）、エメラルダの縁談の相手が気になったからですわ」
その言葉が聞こえてきた。
思わず、エメラルダはハッとした。
「我が親友」と……、はっきりと、彼女の耳にはそう聞こえた。

――そうですわ。私は、ミーアさまのトモ……親友なのですわ！
その声に、目の前の霧が一斉に晴れたように感じた。
彼女は今まさに、自分が何者であるのかを思い出したのだ。
――背筋を伸ばしなさい、エメラルダ・エトワ・グリーンムーン。
私は、帝室を支える星持ち公爵の長女として、そして、それ以上にミーアさまの親友として、無様な姿を見せることはできませんわ。
そうして、背筋を伸ばしたエメラルダは、改めて自らの縁談相手、エシャール王子に目をやって……。
――あら、可愛らしいお顔。それにとっても賢そうですわ……。
まぁ、ボーっとして、照れてるのかしら。うふふ、とても可愛いですわ。でも、将来はきっとシオン王子に負けないぐらいイケメンになりますわ！　有望株ですわね！
……大変、調子が出てきた、面食いエメラルダなのであった。

第八十七話　面食いエメラルダと大食いミーアと

――ふぅむ、さて、どうしたものかしら？

ミーアは、改めて考える。

ここから先、どうやって、話を進めようかしら……と。

エシャールのことを探らなければいけないのは事実ではあるものの、さて、なにを聞いたものか……。まさか、シオンのことを恨んでいますか？　などと聞くわけにもいかないし、最近、どこぞで毒を仕入れまして？　などと聞けるはずもなし。

っと、ミーアが考え込んでいる隙に……、

「あら、エシャール殿下、もしかして、そのキノコ、お嫌いですの？」

ミーア陣営の一番槍、四大公爵家筆頭エメラルダが、静かに動き出した。

先ほどまで真っ青な顔をしていたエメラルダであったが、ようやく緊張から解放されたのか、いつも通りの顔色に戻っていた……、というか、むしろ、血色が良いようにすら見える。

――あら、エメラルダさん、ようやく調子が戻ってきましたわね。

それを見て、ミーアはわずかに安心する。

そもそもの話、エメラルダはミーアの味方である。グリーンムーン家が、サンクランド王家と結び、帝位を狙っているのではないか、ということについてもきちんと把握している。

その上でミーアの味方でいたいと表明してくれている人だ。

となれば、今はむしろ、彼女の裁量に任せるのも良いのではないだろうか。

わずかな逡巡の末、ミーアは決める。

ちょっぴり頼りないけれど、ここはエメラルダに任せて、今は目の前の食べ物を片付けることに集中しよう、と……。

さて、ミーアの中では頼りないお姉さん扱いのエメラルダなのであるが……、実のところ、対人スキルに関して言えば、そこまで低くはない。
高貴な身分として教育を受けている彼女は、それなりにウィットに富んだ会話術を身に着けていたし、ダンス技能もミーアには及ばないまでも、恥ずかしくないレベルを保っている。
加えて……、エメラルダにはもう一つの武器があった。
そう……年下の男子に対する圧倒的な〝慣れ〟である。
弟たちを従える彼女は、無意識のうちに、幼い男の子と親しくなる術を身に着けているのだ。
鍛え上げた美少年観察眼をフル活用し、エメラルダが見出した突破口。それこそが、エシャールのお皿の隅に、こっそりと手を付けずにおいてあるキノコだった。
――独特の風味があるキノコは、嫌いな子どもも結構おりますわよね。うちの弟も好き嫌いがいろいろございますし……。
ちなみに、ミーアは、それを見ても「もったいないですわ、わたくしが食べてあげますのに」などと思うだけだったのだが……、まぁ、それはさておき……。
嫌いな食べ物に対する共感、それを足掛かりに、今度は好きな食べ物の話へ。海のものが来ればエメラルダの独壇場である海水浴の話に繋げ、肉料理に行けば外国産の珍しい料理の話をする。
外交のグリーンムーン家は、知識の重要性を知っている。得られる知識に無駄なものなどなく、仮に役に立たない雑学であったとしても、相手との会話に取り込み、興味を引けるなら重畳。
相手にとっての既知と未知の知識を織り交ぜ、自らの会話を魅力的なものにする術を、エメラルダは習得しているのだ。
そうして、エメラルダは、エシャールを会話に巻き込もうとしたのだが……。
エシャールは、ちら、っとシオンのほうに視線をやってから、小

さく首を振る。
「……いえ、別に嫌ってはいません」
短く言って、パクリとそのキノコを食べた。
――あら……？　勘違いだったのかしら……。
エメラルダは首を傾げる。
好きな食べ物を最後まで取っておくというパターンも考えられなくはなかったが……。
――いえ、でも、うーん……。
先ほどのエシャールは明らかに気が進まない様子だったけど……、と不思議に思うエメラルダである。

ちなみに、余談ではあるが、ミーアの場合には、美味しいものは先に食べる。そうして、ほかのものもすべて食べ終わった後で、お代わりしようとする！
最初に食べて、締めに食べる。それこそが、ミーアのやり方なのだ……。
……ミーアはわがままなのだ、という余談であって、今はどうでもよろしい。

エシャールは、もぐもぐと口を動かすと、ほどなく、ゴクリと喉を鳴らして飲み込んだ。
その様子を見て、やっぱり、キノコはあまり好きじゃないらしい、とエメラルダは判断する。が……、
「では、なにか、好きな食べ物は……」
「農民が、精魂込めて作ってくれたもの、また、大地の恵みとして得られた食物に対して好き嫌いなんてありません。なんでも食べられます」
平然とそんなことを言う少年に、エメラルダはちょっぴり驚く。
貴族の子どもは、わがままに育てられる者が多い。それに、ほかのことはさておいても、食べ物の好き嫌いというのは、許容される

ケースが多いようにエメラルダは思っていた。
にもかかわらずの、エシャールの大人の答えに、エメラルダはちょっぴり驚いて、同時に……。
――うふふ、背伸びしておりますのね。この子……、やっぱり、ちょっと可愛いですわ。
年下の少年に、だんだんと興味がわいてきてしまったエメラルダお姉さんなのであった。

そして、それを見ていたミーアは……、
――ああ、エメラルダさん、本当に調子が出てきてしまいましたわね……。本題を忘れていないか心配ですわ。まったく、エメラルダさんの美男子好きにも困ったものですわ。本題を忘れて……まったくもう。あら、このお料理も美味しい……。
などと、目の前の料理に舌鼓を打つのであった。

第八十八話　ところで、お気付きだろうか？

さて、ところ変わって、夜の街。暗い路地裏にて。
ディオンが殴り倒した男に、シュトリナは聞き取りすることにする。ちなみにもう一人の男は、殴り倒されると同時に意識を失っているので、候補は一人きりだった。
特に縛っているわけでもないのだが、未だに尻餅をついたまま立ち上がれない男に、シュトリナはゆっくり歩み寄る。
「それじゃあ、早速だけど、お話を聞かせてもらおうかしら？」
顔を近づけて、ニッコリと可憐な笑みを浮かべる。それを見た、男は、ひぃっと息を呑んだ。それから、もう一人の、気を失っている男に恨みがましい目を向けた。
彼が起きていれば、尋問される確率は二分の一だったわけで……。
そんな彼に、ディオンは、朗らかな笑みを浮かべた。
「いや、幸運だったね、君。相方が気絶してくれて……」
「……へ？」
きょとん、と首を傾げる男。その彼の顔を覗き込んで、
「なにしろ、尋問相手が一人なら話ができなくならないように乱暴は控えるべきだけど……、二人いるんなら、一人を痛めつけて脅しても、問題ないじゃないか？」
耳元で、囁くように言った。
男が、ひぃっと肩を震わせるのを見て、シュトリナは笑みを崩さないまま言った。
「ディオン・アライア、少し殺気を抑えてくれない？　あまり脅かしすぎると、拷問……じゃなかった、尋問に差しさわりがあるわ」
実に可憐な、愛らしい少女の声。されど、男は、それにも震え上がる。
いったい、この少女は、なぜこんなにも平然としていられるのか

？　震えがくるほどの殺気を放つ男を横において、なぜ、こんなにも普通に笑っていられるのか……。
人は、不自然なものに恐怖を覚えるもの。彼が抱いた感覚は、真夜中の墓場で絶世の美女と出会ってしまった時に抱くものに近かった。
酒場であれば喜ばしい出会いも、墓場では恐怖になる。
惜しむらくは、その恐怖を最初から抱けなかったことだ。治安の悪い夜の街を、貴族の令嬢が歩いているなどという異常に気付いてさえいれば、こんなことにはならなかったのに……。
そんな後悔も後の祭り。シュトリナはニコニコと笑みを崩さず、歌うように話し出す。
「あなたは、人買いとか、誘拐を専門にしている悪い人でしょ？」
「い、いや、俺は……」
「うふふ、否定しなくってもいいわ。言い訳や嘘は時間の無駄。この場合、あなたが人買いの罪人かどうかは、それほど問題じゃないもの。まぁ、リーナになにをしようとしたかは少し気になるところだけど、うん、特別に今回は不問にしてあげる」
頬に指をあてるという、なんとも愛らしい仕草をしてから、
「それでね、今、あなたが気にしなければならないことは、あなたがリーナたちのために、どう役に立てるか、ってことだと思うんだけど、あなた、どう思う？」
そうして、シュトリナは笑みを消して……、上目遣いに男の顔を覗き込んだ。灰色の大きな瞳に見つめられ、男は息を呑んだ。
「そのことを、よく考えながら、質問に答えてね」
しばし、男を見つめてから、シュトリナは再び笑みを浮かべた。
ゆっくり、言い聞かせるようにして話し出す。
「以前、このあたりにエシャール王子が迷い込んだことがあると思うのだけど、その時に、エシャール王子と接触した人を探してるの。心当たり、ないかしら？」
「そっ、そんな話……」

「ふふ、リーナはとっても優しいから何度でも忠告してあげるのだけど、下手に聞いたことない、なんて言わないほうがいいと思うわ。自分が知らないなら、せめて知っている人を紹介するとかしないと……、あなたに優しくする理由がなくなっちゃうじゃない？」
「ひっ、ひぃいいいいっ！」
青ざめる男に優しい笑みを浮かべて、
「さ、それじゃあ、聞かせて。エシャール王子に接触した人間に、心当たりはあるかしら？」
シュトリナは楽しげに言うのだった。

「ふーん……、騎馬王国訛りの男ね……。まだ、潜伏しているかしら」
男への尋問を終えてから、シュトリナはつぶやいた。
「……もういないか……。でも、念のためにもう少し……」
「ところで、イエロームーン公爵令嬢、この連中はどうする？」
拘束した二人の男を見下ろしながら、ディオンは言った。
「んー、そうね。別にリーナは、この国の貴族じゃないから、王都の治安なんか知ったことじゃないけど、万に一つもベルちゃんが危ない目に遭わないように、お城の兵士に連絡を入れておきましょう」
っと、そこで、シュトリナはパンッと手を打った。
「あっ、それよりも、ベルちゃんとあなたの関係よ。ベルちゃんが言うには、かなり仲が良いみたいなお話だったけど……」
それを聞き、ディオンは首を傾げた。
「先ほども言っていたけど、まったく心当たりがないな。面識がないわけじゃないけど……」
それはシュトリナの持つ情報とも一致する答えだった。ディオン・アライアは、性格的に考えて、正体不明の少女ミーアベルのことを警戒こそすれ、簡単に気を許したりはしないだろう、と。
けれど……、そのような情報、今のシュトリナに意味はない。
友人の言ったことこそが唯一無二の真実。ゆえに、目の前のディ

オンがいかにそれらしいことを言ったところで、ベルの発言と食い違うものは偽りということになる。
だから、シュトリナの目には、目の前の帝国最強の騎士がなんとも疑わしい態度をとっているように見えて……。
「あら……、隠すの……。なにか、隠さざるを得ないような事情があるのかしら……。あ、まさか……」
っと、シュトリナはじっとりとした視線をディオンに向ける。
「まさかとは思うけど、ディオン・アライア、あなた、童女好きなのかしら？　それで、ベルちゃんのことを狙ってるから……」
「あはは、あいにくと二十歳未満の娘さん（フロイライン）は恋愛の対象外なんでね」
ディオンは、シュトリナのきわどい質問をさっくりと切り捨てる。
「鉄は鉄によって研がれ、人はその友によって研がれると言うが、どうせ切り結ぶならば、研がれた後の、鋼のような人格と切り結びたいと思うのさ。精錬される前の鈍らとでは、つまらないからね。その点、姫さんも、グリーンムーン家のお嬢さまも、君も変わりはないな。僕の恋愛対象になるには、大いに不足しているよ」
「恋愛の話をしているのだけど……」
「僕の中では、あまり差がないんだよ。恋愛も殺し合いもね」
「……あなた、お友だちいないでしょう、ディオン・アライア」
ちょっぴり呆れた顔をするシュトリナに、ディオンは肩をすくめて答える。
「うーん。多くはないが、君よりマシじゃないかな、イエロームーン公爵令嬢」
それを聞いた瞬間……、すとん、とシュトリナの表情が消える。
「……ベルちゃんが、いるから、別にいいもの」
うつむいたシュトリナは、少し拗ねたような口調で言った。
少女の傷に触れてしまったことを察したディオンは、バツが悪そうに頭をかいた。
「親友は一人でも良いだろうが、友だちは多いに越したことはない。

これからじっくりと増やしていけばいいさ。せっかく、家のくびきから解放されたんだから」
それから、横目でシュトリナのほうを窺う。と、シュトリナはポカンと口を開けていた。
「誤解していたわ、ディオン・アライア。あなたは、老若男女問わずに嬉々として斬り殺せる鬼神の類だと思っていたのに。きちんと人間らしい思いやりも発揮できるのね？」
ディオンは、小さく肩をすくめて、
「こういう役は、ガラじゃないんだけどね」
「あら、そんなことないと思うけど……。案外、教師なんかむいてるかもしれないわよ？」
からかうような口調で言うシュトリナ。ディオンはやれやれ、と首を振り、
「それは、御免被るな。とても退屈な人生になりそうだ」
「そうかしら？　ミーアさまのそばだったら、そこまで退屈はしないような気がするけど」
シュトリナの切り返しに、咄嗟に反応しかねて、顔をしかめるディオンなのであった。

ところで……お気付きだろうか？
ディオンが挙げた令嬢の中に、一人だけ、中身は二十歳を超えている人物がいたのだが……。

第八十九話　ペロリ……これは、まさか……毒！？

さて、ミーアは、メインディッシュの、サンクランド牛のフィレステーキに取りかかろうとしたところで、はたと気付く。

――あら？　わたくし、情報を聞き出すとか、なにもやってないんじゃないかしら？

と。

せっかくルードヴィッヒが作ってくれた情報収集の機会である。無駄にすることはない。

ミーアはメインディッシュのフィレステーキを半分ほど食したところで、視線を上げた。

口の中いっぱいに広がる豊かな肉汁、コクのあるソースの濃厚な香りをゆっくり楽しみつつも、ミーアは二割ほどの意識を、食事から周囲に移した。

――ふむ、エシャール王子からは、エメラルダさんが熱心に情報収集しておりますし。わたくしの側は、別方面から情報を引き出したほうが良さそうですわ。

シオン暗殺の裏事情も含めて、きっちりと必要な情報を引き出さんと、ミーアは決意し……、フィレステーキを食べ尽くした皿に残ったソースを、パンで掬い取った。

ソースは料理人の命、その料理人の技術のすべてを結集したものこそがソースなのだ。それゆえに、ミーアはそれを残すことはしない。それこそがミーアなりの礼儀なのだ。

まぁ、それはさておき……。ミーアは早速、シオンのほうに目を向けた。

「それにしても、シオン王子も人が悪いですわ。エシャール王子とエメラルダさんのこと、教えてくれてもよろしかったですのに」

ミーアの指摘に、シオンは困り顔で笑みを浮かべる。

「いや、実は俺も聞いたのはつい最近なんだ」
「ほう！　あなたも知らなかった……ですって！？」
重大な情報に行き着いてしまった！　とばかりにミーアは、カッと瞳を見開いて……！
――って、そりゃそうですわね。わたくしとシオンとの協力関係に対抗するための縁談ですし、知らされてなくっても当然ですわね……あら？　でも、その件に関するランプロン伯の狙いとか、そういうことには気付いているのかしら？　気付いているなら、それを承知で縁談を進めようとしているということになりますけれど……。
再びの長考（もぐもぐタイム）、その後、ミーアは思う。シオンが気付いていないはずがないだろう、と。
なぜなら“エシャール王子の縁談が隠されていた”からだ。
あのシオンが……、完璧超人のシオンがそのことを怪しまない？　ここまで露骨な政治工作に気付いていない？　そんなことがあり得るだろうか？
――それは、考えにくいですわね。とすると、わかっていて容認か、あるいは、容認せざるを得ない状況なのか……ですわね。ふむ……、エイブラム陛下は、どうなのかしら……。
思案しつつ、ミーアはエイブラムのほうに視線を向けた。
「それにしても、エシャール王子とエメラルダさんの縁談によって、王国と帝国の関係は、強化されますわね」
「ああ、貴国との友好関係は、我がサンクランドにとって喜ばしいことだ」
エイブラムは穏やかな笑みを浮かべて言った。
「それに、大陸にとってもおそらくは良いことだろう。もしも本当に大飢饉がやってくるとするなら、ミーア姫の言う通り、各国は手を取り合わなければならない。そうでなければ民のためにはなるまい」
「ふふ、信じていただけたのでしたら、嬉しいのですけど」
ミーアは、そう微笑んで……、直後に奇妙な違和感に襲われる。

――あら？　妙ですわ……。なんだか、お腹のあたりが、微妙に……。

唐突に襲ってきたもの……、それは端的に言ってしまうと腹痛で……。ハッと顔を上げ、口元についたソースをペロリと舐めて、ミーアは慄く。

――こっ、これは……、まさか……。毒！？

否……、ただの食べ過ぎである。

疑う余地もなく、ただの食べ過ぎである。

まごうことなき、ただの食べすぎなのである。

そう、ミーアが空腹だ、器が空っぽだというのは、ただの錯覚だったのだ。

そもそもミーアは、さほど器が大きくはないのだ。心理的にも物理的にも。

美味しいものならばいくら食べても満腹にならない、などと思っているミーアであるが、それはあくまでも主観に基づくもの。実際には、器の容量には限界量があるわけで……。

昼の、ラフィーナとの昼食会でもそれなりの量を食べていたミーアである。その上、こんなにもパクパクと、晩餐会の料理を食べてしまえば、お腹も痛くなろうというものである。

そして、遅まきながら“どうも調子に乗って食べ過ぎたようだぞ？”ということに気付いたミーアであるのだが……、そんな彼女の羞恥心は現実逃避を始めてしまったのだ。つまり、

「ちょっとした毒でお腹が痛くなったことにしたほうがいいなぁ、食べ過ぎでお腹が痛くなったなんて言いたくないなぁ……」

などと思ってしまって。

まぁ、しかし、腹痛というものは、えてして逃避を許さない現実感を持って迫ってくるものなので……。毒であろうが食べ過ぎであろうが、できることは決まっているわけで……。

――うぐぐ、会食の最中にお手洗いに行くなどもってのほかですけれど……、しっ、仕方ありませんわ。
意を決すると、ミーアはすっくと立ちあがる。
「失礼。わたくし、少々、席を外させていただきますわ」
優雅に礼をすると、そそくさと会場を出る。と、廊下で待機していたメイドの一人に声をかけ、目的の場所に案内してもらうのだった。

そうして、もろもろのことを終え、トイレから出てきたミーアに声をかける者がいた。
「ミーア姫殿下……」
立っていたのは黒髪の、美貌の青年……。シオンの従者、キースウッドだった。
「あら……？　キースウッドさん、どうかなさいましたの？」
首を傾げるミーアに、キースウッドは、真剣な顔で言った。
「いえ、実はミーアさまのお耳に入れておきたいことがございまして……。ところで、ルードヴィッヒ殿への連絡はうまくできましたか？」
――はて？　ルードヴィッヒに連絡……。
首を傾げかけるミーアであるが、すぐに察する。
どうやら、キースウッドは、ミーアがなにか閃き、すぐにルードヴィッヒを動かすため、その連絡を入れに会場を離れたのだと思っているらしい、ということを。
まさか、食べ過ぎの腹痛だ、などとは思っていないのだろう。
「ふふふ、まさか。そのようなことをするわけがありませんわ」
嘘を言ってしまうとバレそうな気がしたので、とりあえず意味深に笑っておくことにするミーア。それを聞いて、キースウッドは納得顔で頷く。
「なるほど。では、そういうことにしておきましょうか」
「それより、なんですの？　わたくしの耳に入れておきたい情報と

いうのは……」
「ああ……。そうでした。シオン殿下とエシャール殿下のことについて、お知らせしておかなければならないことがあるのです」
キースウッドは声を低めて、言うのだった。

第九十話　キースウッドのとっておきの情報

「これは、私の予想でしかないのですが……、ミーア姫殿下は、この度の縁談のことをシオン殿下がどう考えているのか、それが気になっておられるのではありませんか？」

「あら、よくわかりましたわね……」

キースウッドのその言葉に、ミーアは手応えを感じる。

彼はシオンの重臣。本心を打ち明けられる数少ない人物のはずだ。これは、貴重な情報が聞けるかもしれない……などと思いつつ……。

――シオンは友だちとか少なそうですしね。むしろ、キースウッドさんぐらいしか、素直に話ができる人がいないんじゃないかしら……。

ちょっぴり心配にもなってしまう、大変失礼なミーアである。

それはさておき……、

「シオンは、気付いているのですわよね？　この縁談の政治的意図に」

ミーアの問いかけに、キースウッドは静かに頷いた。

「はい。エシャール殿下とグリーンムーン公爵家のつながりを持って、シオン殿下とミーア姫殿下の連帯に対抗する。そのような、ランプロン伯らの思惑は、承知しております」

「ふむ……、では、シオンはこの縁談をどう考えておりますの？」

「直接、お聞きしたわけではありませんが、積極的に賛成ではないとは思います」

「まぁ、そうですわよね。シオンにとっても対抗勢力の強化なのですから……」

「ええ。しかし……、だからと言って反対を表明されることはないのではないかと思います」

「あら、それはなぜですの？」

首を傾げるミーアに、キースウッドは、気難しげな顔をする。
「複雑なのです。兄弟というものは……。ご存知と思いますが、シオン殿下は、とても優秀な方です。剣の腕はもちろんのことですが、その知恵においても、優雅さにおいても、勇敢さにおいても、公正さにおいても……。王の資質をすべてお持ちの完璧な方といえるでしょう」
そこまで言うか、とツッコミを入れたくなるミーアであるが……、すべて本当のことなので何も言えない。なるほど、たしかにシオンは善王になるべき資質をすべて兼ね備えた少年といえるだろう。
「そして、そんなシオン殿下と、比べられ続けてきたのが、エシャール殿下なのです」
それを聞き、心の中で「うわぁ」とため息を吐くミーアである。
――それは、なんとも可哀想なお話ですわね。ゾッとしてしまいますわ。あのシオンが兄だなんて……、恐ろしいお話ですわ！
試しに、ミーアはシオンが自分の兄だったらどうだったか……などと想像してみる。

『シオンお兄さま、よろしければお茶会になさいませんこと？』
『ああ、ミーア、今日も可愛いな。もちろん、付き合おう』
『それでね、シオンお兄さま。お勉強の、この部分がわからないのですけれど……』
『どれどれ、ああそこは……』

「……あら？　悪くない、かも……？」
優秀で、なによりイケメンな兄がいるというのは、あまり悪いことではないような気がしてきてしまうミーアである。エメラルダに負けず劣らず、ミーアもイケメンには弱いのだ。
――ああ、でも、わたくしの場合は姉で考えなければいけないのかもしれませんわ。ふむ、わたくしに優秀な姉がいる……、とするとどうなるか……。

再び、想像してみる。
外見的にはエメラルダのような、でも、大変に優秀な姉がいたとしたら……。

『ミーア、実は今度、貧民街に病院を建てようと思うのだけど、どう思う？』
『まぁ！　それは大変素晴らしいことですわ』
『それと、民衆のための学校も建てるのがいいんじゃないかしら。どう？』
『ええ。良い考えだと思いますわ。お姉さま！』

「……すごく、いい！」
ただ「イエス！」と言っているだけで問題が解決していく。ミーアの理想の姿がそこにあった！　優秀な兄、ないし姉を持つ妹を大変うらやましく思うミーアである。
――ふぅむ、そう考えると、シオンが兄というのも悪くないような気がいたしますけれど……。でもまぁ、エシャール王子は負けず嫌いなのかもしれませんし……。それに、まだまだ子ども。わたくしのような、大人の寛容さをまだ持ち合わせてないのかもしれませんわ。
自称器の大きいミーア姫なのである。若干、他称でもあるのが怖いところではあるが……。
「シオン殿下は、ずっとエシャール殿下を見てきたのです。自身と比べられて、傷ついていく弟の姿をずっと……」
「なるほど。持つ者の憂鬱……、というものですわね」
ミーアとしては理解しがたい感情だった。ともすれば高慢ともとれる感情ではあるが、当人にとっては、それなりに切実なのだろう。
「そして、そんな弟に縁談が来た。相手は、大国ティアムーンの公爵令嬢です。年の差はあるとはいえ、爵位としては申し分ない。サンクランドのためにもなる相手です。そんな縁談に反対できるでし

ょうか？」
「それは……たしかに複雑な話ですわ」
ミーアは、思わずため息を吐いた。
そんな事情があるのなら、たしかに、シオンはなにも言わないほうが良いだろう。
それが仮に善意の助言であったとしても、どう受け取られるか分かったものではない。
「お前に縁談などまだ早い」「お前のような者が俺より早く縁談がくるなんて生意気だ」「俺よりも劣ったお前には過ぎた相手だ」
そんな風に受け取られてしまうかもしれない。
劣等感は時に、妄想の罵詈雑言を生み出すもの。そのきっかけを作るようなことを、シオンがするとも思えない。
「それに、反対する理由も、自分たちの対抗勢力を強化しないため、ですしね……」
それはただの自己都合だ。そのために、弟に来た良縁を壊すことなど、シオンにはできないだろう。
「しかし、エイブラム陛下はどうお考えなのかしら？　ティアムーンとの関係の強化を単純に喜んでおられるとも思いませんけれど……」
「もちろん、そういうお気持ちもあるでしょう。それに、糧食の備蓄を増やす帝国に、侵略の嫌疑をかける者たちがおります。その者たちへの牽制の意味もあるでしょう」
「なるほど。帝国の大貴族、グリーンムーン家との縁談がなれば、そうそう帝国と開戦などということにはならないでしょうしね」
キースウッドは重々しく頷いてから、
「そして、ランプロン伯をはじめとした、保守派の貴族のそばにも、王族を置いておきたい……そういう意味合いもあるのだと思います」
「ふむむむ……」
ミーアは腕組みして考え込む。
「私のほうからお話しできるのは、このぐらいですね」

遠慮がちに言うキースウッドに、ミーアはニッコリと笑みを浮かべて……、
「ええ、助かりましたわ。ですけど、よろしかったんですの？　このように、王族の内情を、わたくしなどに話してしまって……」
っと、キースウッドは小さく肩をすくめた。
「王室の微妙な不和は、なんとか解消していただかなければ、と思っているのですが……、我々、臣下だけでは力不足なのです。そこで、できれば、帝国の叡智の力をお借りできないかな、と……」
「あら、それはずいぶんと虫のいい話ですわね。ちなみに、見返りにはなにか用意しているのかしら？」
悪戯っぽく笑みを浮かべるミーアに、キースウッドは苦笑して、
「それでは、とっておきの情報を一つ……。今日のデザートは自信作だと、料理長が言っておりましたよ」
「まぁ！　それは……」
ミーアはお腹をさすさすとさすってから、
「素晴らしいお話を聞かせていただきましたわ！」
急ぎ会食の会場へと戻るのだった。

第九十一話　ミーアベル、洗脳される　前編

「では、ベルさま、これが今夜の分の課題です」
そう言って羊皮紙を渡してくるルードヴィッヒに、ベルは小さく首を傾げた。なにか急いでいるような……、そんな印象を受けたからだ。
「あの、ルードヴィッヒ先生、どこかに行くんですか？」
可愛らしい問いかけに、ルードヴィッヒは苦笑をこぼした。
「先生はやめてください。しかし、そうですね。少し出かけてこようと思います」
と、そこで、ルードヴィッヒは首を傾げた。
「ところで、シュトリナさまは、どこに？」
「あ、はい。実は、リーナちゃんも出かけてしまいました。ボクだけお留守番なんです」
「そうなのですか……？　ふむ」
ルードヴィッヒは一瞬考える。
同行している皇女専属近衛隊の者たちは、ミーアについていった者以外、この屋敷にとどまっていた。となると……。
「ディオン殿の姿が見えなかったが、なるほど。それでか……」
などと頷いていると、ふいにベルが話しかけてきた。
「あの、ルードヴィッヒ先生、もしよろしければ、ボクも一緒に連れて行ってもらえませんか？」
「ああ、そうですね……」
うなりつつ、ルードヴィッヒは検討する。
ここに残していったからといって、はたして、目の前の少女が素直に課題をやるだろうか？
誰も見張る者のいないこの状況で残していって……やるだろうか？
……正直なところ、サボる可能性が、かなり高いように思われた。

それに、彼女はミーアが大切にしている少女である。
近衛隊員を数名残していくとはいえ、決して味方ではないランプロン伯の屋敷に置いていくことは少し心配だった。
――それに、ベルさまにはむしろ、実地で、いろいろな政治的駆け引きを見ていただいたほうが良いのかもしれない。
ルードヴィッヒは、ベルがミーアの異母姉妹だとは信じていない。けれど、ベルには、どこかミーアの面影があるようにも見える。
恐らくは遠縁の者というのは、嘘ではないのだろう。
――加えて、ミーアさまの絶対の信頼と、イエロームーン公爵令嬢をはじめ、セントノエルでの人脈。恐らくミーアさまは、将来的にこの少女にもなんらかの役割を与えようとされているはず……。
思考の末、ルードヴィッヒは確認するように言った。
「ベルさまは、ラフィーナさまとも面識があるのでしたね？」
「あ、はい。ある意味で、因縁の相手です！」
腰に手を当てて、そんなことを言うベルに、ルードヴィッヒは首を傾げた。
「……因縁、ですか？」
「あ、いえ。その、とても仲良くしています。でも、どうしてですか？」
慌てた様子のベルに、ルードヴィッヒは、ふむ、と鼻を鳴らす。
「簡単なことです。これから行くのはラフィーナさまのところですから」
そうして、ランプロン伯邸を出たルードヴィッヒは、まず、王城、ソルエスクード城へと向かった。
ミーアに付き添っているアンヌと合流するためだ。
幸い、事前に声をかけておいたため、アンヌは城門のそばで待っていた。
「すまない。待たせてしまったか？」
「いえ、それは大丈夫ですけど、いったいどうしたんですか？」
不思議そうな顔をするアンヌに続いて、ベルもきょとんと首を傾

げながら、
「そうです。ラフィーナさまに、なんのご用なんですか？」
「そうですね……。先ほど、ラフィーナさまのことを話題に出した時の、ミーアさまの表情が気になりました。なにか、まずいことを知られてしまったかのような……あのお顔が……」
ヴェールガの聖女、ラフィーナがこの国にいると聞いた時、ルードヴィッヒの頭にはある打開策が浮かんでいた。
ラフィーナの協力さえ得ることができれば、グリーンムーン公爵家とエシャール王子派という、反対勢力に対して揺さぶりをかけることができる。
――しかし、ミーアさまは、その選択をされなかった。なぜか……。
あの時のミーアの顔に、その答えがあるように、ルードヴィッヒには思えた。
ラフィーナがいるということを、ルードヴィッヒに知られることはまずいと思った。つまり、ラフィーナに協力を求めることは望ましくない、と……、ミーアは考えたのではないか。
だが、その理由がルードヴィッヒにはわからなかった。
ゆえに、そのことを確認しに行こうと考えたのだ。
話を聞いたアンヌは深々と頷いた。
「なるほど……。ミーアさま、お一人で抱え込んでしまうところがありますし……。確認したほうがいいと思います」
「はい、ルードヴィッヒ先生、質問があります」
と、そこで、ベルが手を挙げる。
ルードヴィッヒは思わず苦笑して、
「なんでしょうか、ベルさま」
どうやら、先生呼びに関しては、すでに諦めたらしい。
「ミーアお姉さまは、帝国の叡智。だからすべてのことを把握していて、必要なことはすべて指示していただけるのではないかと思うんですけど……」

不思議そうな顔をするベルに、ルードヴィッヒは、諭すような口調で答える。
「いいですか、よく覚えていてください、ベルさま。言われたことだけをやっていればいい、というのは怠慢だと、私は考えます。それはミーアさまの信頼をも裏切ることになるのです」
「信頼……？」
「そうです。ミーアさまが我々の同行を許されたということは、すなわち、そこに期待するものがあるということ。ベルさま、我々には思考することができる頭があります。それを使わずにいることは、怠慢であると私は考えます」
「……ミーアお姉さまに言われずとも」
ベルは、なにか思い至ったのか、小さく頷いた。
「それなら、わかります……。みんな、そうでした……。みんな……ボクのために……」
そのつぶやきの指す「みんな」が、誰のことなのかはわからなかったが……。
静かに顔を上げたベルに、ルードヴィッヒは、触れがたい高貴さを感じ取っていた。
まるで、人の上に立つ者のような……、その風格に、わずかに息を呑む。
「では、参りましょう」
そのベルの言葉に、ミーアに負けないぐらいの威厳を感じてしまうルードヴィッヒであった。

第九十二話　ミーアベル、洗脳される　後編

ラフィーナの泊まっている場所はわからなかった。
しかし、知っていそうな人間はアンヌが把握していた。例の昼食会で使った宿屋の主人である。
「おや、あなたは、ミーアさまの……？」
訪ねてきたアンヌを見て、店主は戸惑いを見せた。それから、ルードヴィッヒのほうに視線を向けて、少しばかり警戒した顔をする。
「はじめまして、私はミーアさまの家臣、ルードヴィッヒ・ヒューイットと申します。ラフィーナさまに急ぎの用があり、参上いたしました。お取次ぎいただけないでしょうか？」
アンヌから聞いていた情報では、目の前の男はヴェールガの間諜とのこと。見ず知らずのルードヴィッヒを素直に取り次いでくれるかは、微妙なところであったのだが……。
「そうですか。では、ご案内いたします」
店主はあっさりとした口調で言った。
「よろしいのですか？」
意外そうな顔をするルードヴィッヒに、店主は笑みを浮かべる。
「ミーア姫殿下の従者に無礼を働いたとあっては、私がラフィーナさまに叱られてしまいますので」
そうして、案内されたのは、なんと、宿の二階だった。
――王都のどこかの教会に泊まっているかと思ったが、手間が省けたな。
などと思いつつ、店主の後に続く。
店主は二階の一番奥の部屋のドアをノックした。すると、ほどなくして扉が開き、
「あら……？　これは珍しい顔合わせね」
柔らかな笑みを浮かべたラフィーナが現れた。それから、きょろ

きょろと辺りを見回して、
「ミーアさんはいないのね」
ちょっぴり残念そうに言うラフィーナ。ルードヴィッヒは苦笑しつつ、
「今夜は、サンクランド国王との晩餐会に行かれています」
「そう……。それは残念ね。どうぞ」
そうして招き入れられた部屋は、とても質素な造りの部屋だった。あるのは、ベッドと簡素な椅子のみ。清貧といえば聞こえはいいが、とても高位の身分の者が使う部屋には見えない。
「ごめんなさいね。少し狭いのだけど、三人ならなんとか入れるかしら？」
アンヌとベルはベッドに座らせ、自身は椅子に。ルードヴィッヒは店主から予備の椅子をもらうことで対応する。
部屋の中をきょろきょろ見ているベルに、ラフィーナは苦笑いを浮かべた。
「ヴェールガの聖女が過ごすには、少し質素に過ぎるかしら？」
「え？　あ、いえ……そんなこと、ありません」
慌てて首を振るベルであったが、考えていたことはまるわかりだった。すかさず、ルードヴィッヒがフォローを入れる。
「聖女に相応しい清貧な部屋ですね。ただ、教会にお泊りかと思っていたので、少し意外でしたが……」
「そうね。それでもいいのだけど……」
っと、ラフィーナは少しばかり顔を曇らせる。
「サンクランドは、ヴェールガに負けずに信仰に篤い国。それゆえに、毎回、肖像画の依頼を受けるのよ」
「肖像画、ですか……」
「よく売れるらしくてね……。その売り上げも貧しい人々の施しに使われるのだから、別に構わないのだけど……でも……でもね？少し想像してもらいたいのだけど……、背中に大きな翼が生えた肖像画とか、物々しい怪物を踏みつける戦士のような肖像画のモデル

になるのって、なかなかに心を削られるものなのよ？」
　そうして、ラフィーナは遠いどこかを見つめた。その顔には、ヴェールガの聖女に相応しくない、やさぐれた様子が見て取れた。
「ああ。だめね。ミーアさんの関係の方だから、ついつい愚痴を言ってしまったわ」
　そんな雰囲気をかき消すように、清らかな笑みを浮かべ、ラフィーナは言った。
「それで、なんのご用かしら？　こんな時間にわざわざ訪ねてくるということは、相応の理由があるのでしょう？」
「ええ……。実は、ラフィーナさまにご相談したきことがあります」
「相談……。さて、なにかしら？」
　不思議そうに首を傾げるラフィーナを見つめて、ルードヴィッヒは言った。
「今現在、ミーアさまを取り巻く状況のことを、どれぐらいお聞きでしょうか？」
「そうね……。エメラルダさんとエシャール王子の縁談の件で来たと言っていたわ」
　ラフィーナは昼に聞いたミーアの話を、一つずつ整理しながら話していく。それから、ふと、なにかを思いついたような顔をした。
「そういえば、ミーアさん……あの時、ランプロン伯や、サンクランド貴族の考え方について聞いたわ、それに、私はどう思うのかとも……」
　それを聞いて、ルードヴィッヒはうなる。
「ああ……やはり、ラフィーナさまに協力を得ることを考えておられたのか……」
　なぜ、そのようなことを聞いたのか？　ラフィーナが、古いサンクランド貴族の考え方に同意するかどうかを知りたがったのか……？
　それはミーアが、ラフィーナに協力を求めることを検討していたからだ。
　もしも、ラフィーナの考え方がサンクランドの保守派と近しいも

のであるならば、協力を求められないから。
「お友だちのミーアさんが相手なら喜んで協力するのに……。いえ、それゆえ、なのね……」
切なげにため息を吐くラフィーナを見て、ルードヴィッヒも頷いた。
そう、そういうことなのだ。友情を盾にして味方をしてもらうことはできるだろう。けれど、ミーアはそれを潔しとはしない。だから、はじめに無理なく協力を仰げるかどうか、探りを入れたのだ。
ミーアは、そういう心遣いができる人物であると、ルードヴィッヒは考えているのだ……、ルードヴィッヒの中では、そういうことになっているのだ。
「でも、私はランプロン伯とは必ずしも同じ考えではない、と、そう伝えたのだけど……、ああ、そうか……」
ラフィーナは、嘆くように言った。
「もしかして、私が、騎馬王国のことを話してしまったから……？
ミーアさんに協力を求めるぐらい、大変な状況にあるだなんて言ってしまったから……だから、ミーアさんは私に負担をかけないために言い出さなかったというの？」
その推測を裏付けるかのように、深々と頷く者がいた。
「たぶん、そういうことだと思います」
ミーアの忠臣アンヌである。確信に満ち満ちた口調で、アンヌは続ける。
「ミーアさまは、とても優しい方ですから。ラフィーナさまがお忙しそうにされているのであれば、助けを求めることはしないと思います。むしろ、できることなら、ラフィーナさまのお手伝いをしたいって……、そう思っておられたんじゃないでしょうか」
……んなこたぁない……のだが、それにツッコミを入れる人物は、その場にはいなかった。ツッコミ不在の中、彼らはひとしきりミーア礼賛トークで盛り上がる。
「ねぇ、ルードヴィッヒさん。教えてくれないかしら？　私はなに

をすればいい？　ミーアさんは私になにをしてもらいたいと思っていたの？」
「ああ、そうですね……。おそらくですが……」
そうして、ルードヴィッヒの口によって語られるミーアの深い深い考え……。感銘を受けるラフィーナ。アンヌも目をキラキラさせている！

そして、それを汚れなき眼で見つめている少女が一人……。
「ミーアお祖母さま……すごい！」
こうして、ベルの洗脳は、ますます進んでいくのだった。

第九十三話　もう一人のお姉ちゃん

さて、ミーアがキースウッドから大変有力な情報を仕入れているころのこと。

会食の会場は、和やかな空気に包まれていた。

「……そういえば、彼女はキースウッドと面識があるのだったか……。だとすると……」

などと、小さくつぶやく国王。それをなんとはなしに眺めていたのは、ティオーナ・ルドルフォンだった。

当初、王族の会食に招かれたということで、無礼がないようにと緊張していた彼女であったが、そこはそれ。

もともと中央貴族に見下されないために、宮廷マナーや学問、剣術に至るまで鍛練を重ねてきたティオーナである。

幼き日より身に着けた所作は、自然と彼女に、この場に相応しい気品を増し加えていた。

そうして、緊張が解けた彼女は……、実のところ、この場では極めて異質な存在と言えた。

直接、縁談に関係のあるエメラルダや、大きな影響を受けるミーアとは違い、ティオーナは別に関係者ではない。

ゆえに、彼女は独自の視点で、その会食の風景を見つめていた。

国王とミーアの対話、それを聞きつつも、彼女の視線はシオンのほうに向いていた。

――シオン王子は、エシャール殿下のことを大切に思ってるのね……。

その胸に抱く感情は……共感だった。

そう、この場にいるお姉ちゃんは、なにもエメラルダだけではない。ティオーナとてお姉ちゃん、弟を持つ身なのだ。しかも、彼女の弟、セロは、かつて自分に自信が持てない、ちょっぴり内気な少

年だった。エシャールと、とてもよく似ていた。
ゆえに、彼女はシオンに共感できた。
エメラルダの質問攻めにあっている弟を、さりげなくフォローするシオン。あくまでもさりげなく、繊細な弟の誇りを傷つけないように……、助けすぎず、放っておくこともせず、と、気遣いに苦慮するシオンを見て、思わず微笑ましくなってしまう。
――男の子って難しいからなぁ……。
などと思うのと同時に、いつもは完璧で非の打ちどころのない立ち回りをするシオンが苦労している姿を、失礼ながら可愛く感じてしまったりもする。
それよりなにより、先ほど、国王とミーアが対話している時のこと。それに聞き入るエシャールを横目に少しだけ嬉しそうにしているシオンに、ティオーナは強い共感を覚えた。
――きっと、ミーアさまから、なにか良い影響を受けてほしいって、思ってるんだろうな。
自分の父とミーアとの間で、有意義な話し合いが行われることは、シオンも予想していたのだろう。ゆえに、シオンは、その様子を弟に見せて、そこからいろいろなことを学び取ってもらいたいと思ったのではないか。
――セロもそうだったものね……。
あの日、ミーアと出会ったセロは変わった。
どこか自信なさげな顔をしていた弟は、いつの間にか、隣国の姫とともにミーアのために働く者になっていた。
姉として、ずっと弟を励まし続けてきたティオーナとしては、嬉しい反面、悔しさもあった。自分ができなかったことを、ほんの一瞬、顔を合わせただけでやってしまったミーアに、軽い嫉妬のようなものすら覚えてしまったのだが……。
――でも、失恋したセロを慰めるのは、やっぱり私の役目なんだろうな……。
おそらく、セロはミーアに恋をしている。そのことはティオーナ

もわかっていた。そして、その恋が実らないであろうことも……。
だから、どうやって慰めようか、今から考えているティオーナなのだが……。
まぁ、それはさておき、弟のことでいろいろ葛藤を抱える気持ちは、ティオーナにはよくわかるのだ。
シオンはきっと、自分自身と同じように、あるいはミーアが接したすべての人々と同じように、弟もまた、良い方向に成長してくれないか、と期待しているのだろう。
――思えば、みんなそうだものね。すごいな、ミーアさま。
みんながミーアと出会い、触れ合い変えられていく。それも良い方向に。
そして、それは、ティオーナ自身にも当てはまることだった。
昼間のラフィーナとの会食を思い出す。生徒会選挙の際、ティオーナは監禁事件の犯人の関係者たちを許した。許すことができた……。
それは、かつての彼女にはできなかったこと、ただ、中央貴族の者たちを見返すことだけを考えていた時の自分には、できないことだった。
――ミーアさまに出会って、みんなが変わっていくんだな……。
まるで、ミーアの周りから、どんどん世界が明るく、温かくなっていくようだった。
そこで、彼女は想像してしまう。もしも、ミーアと出会うことがなかったら、どうなっていただろう、と……。
中央貴族を見返すため……、必死になった日々。その先にあるのは、どんな未来だっただろう？
中央貴族の子弟たちを決して許さず、憤りと怒りを憎しみに変えた先には、いったい、どんな明日が待っていただろう？
瞬きの刹那、まぶたの裏に映る光景があった。
赤く染まった広場、虚しさを抱えた勝利、喪失と、くたびれた諦め……。

現実にはあり得ない光景は、おそらくは悪夢の中に見たもの。されど、それは、ただ夢と切り捨てるには、あまりにも現実感のある光景で……。

と、その時だった。

会場の扉が開き、いそいそとミーアが帰ってきた。

その顔には、席を離れるまでは見られなかった、軽やかな笑みが見て取れた。

――ミーアさま、すごくご機嫌みたい……。さっきまでものすごく難しい顔をしてたのに……。もしかして、もう、エメラルダさまの件、なんとかする算段がついたのかな？

おそらく、そうなのだろう、とティオーナは思う。

――すごいな、ミーアさま。もしかして、このままシオン王子の悩みでも簡単に解決してしまうんじゃないかな……。

会食が始まって以来、ずっと気になっていたシオンとエシャールの距離感。そこに付け入るようにして、政治的なアプローチをかけてくる貴族たち……。

ティオーナにとって、とても難しく感じられるそれらの問題だって、きっとミーアは簡単に解決してしまうのだろう。

――それで……いいのかな……？

頭をよぎるは、小さな疑問。すべてミーアにより、良い方向に変えられていくのだから、自分はなにもせずとも良い……と、そこに後悔はないのだろうか……？

『今ならば声が届くのに？　手を伸ばせば届くところにいるのに？』

知っているのに、知らない、誰かの声が遠くに聞こえる。

ティオーナは、なんとも言えないもやもや感を胸に宿したまま、デザートに手を付けた。

かくて、キースウッドの言葉通り、豪勢なデザートをもって、そ

の日の会食は終わる。
「こっ……これは……まさかっ！？」
などと……、デザートを見たミーアは言葉を失うほどの感動を覚えるのだが……。
まぁ、それは、どうでもいいお話なのである。

第九十四話　報告会

「ふぅ、食べましたわ……。あまりお腹一杯食べてしまっては体に悪いですし、ほどほどにしなければなりませんわね……。ふむ、サンクランドから帰ったら、気を付けるようにしましょう」
　要するに「サンクランドにいる間はお腹一杯食べることにしましょう」という類いのことをつぶやくミーア。
「ううむ……。お腹が一杯になったら、眠たくなってきてしまいましたわね……」
　シパシパし始めた目をこすりこすり、それから、ふわわっと大きなあくびを噛み殺しながら、ミーアは城を出る。城門のところで待っていたアンヌに手を挙げて見せた。
「ああ、お待たせいたしましたわね。アンヌ……あら？」
　っと、そこで、ミーアは首を傾げた。アンヌのそばに、意外な人物が立っていたのだ。
「……あら？　ルードヴィッヒとベルまで、どうなさいましたの？」
　アンヌの隣で待つ二人の姿を不思議そうに見つめるミーアだったが……。
「ええ……。そのことは後ほど。それより、急ぎランプロン伯邸に戻りましょう」
「それもそうですわね」
　もう、ベッドに入ればすぐにでも眠れてしまう、ねむねむミーアなのだが……、さすがにそういうわけにもいかない。
　ダンスパーティーの日は迫っている。今のうちに、得られた情報をまとめておかなければ……。
　そうして自分を励ましつつ、ランプロン伯邸についたミーアは、早速エメラルダの部屋を訪れた。
「まぁ！　ミーアさま、わざわざ訪ねてきてくださるなんて。今、

お紅茶を入れていただきますわ」
　ミーアは、淹れてもらった紅茶にミルクとたっぷりのお砂糖を入れて、一口。ほふぅっと、満足げな息を吐いてから、
「それで、エシャール王子はどんな印象でしたの？　エメラルダさん」
「そうですわね……」
　エメラルダは、うーむ、と腕組みしてから、
「今はまだまだ、といったところですけれど、見込みはありますわ。お顔は素晴らしいですわ。幼さが残ってる目元も、綺麗な鼻筋も、今はまだ可愛らしいという印象ですけれど、きっと将来はシオン王子やお父君のように凛々しくなるでしょう。それに、お話しした感じ、性格も悪くはございませんわ。少し内気な印象もありますけれど、それは、今後の成長次第で、なんとでもなりますわ」
　イケメンソムリエ、エメラルダは、そうして評価を下す。
「実に鍛えがいがありそうですわ！」
　……どうやら、エメラルダのお眼鏡にはかなったらしい。
「ただ、少し気がかりなのは優秀なお兄さまの存在かしら……。シオン王子のお話をする時には、少しだけ、翳が見えましたわね。それが、もしかするとあの方のお心を傷つける要因になっているのではないかと……」
　などと、エメラルダの分析は続いていく。
　ミーアは、それを聞き、思わず舌を巻く。
　彼女の言っていることが、キースウッドから聞いた情報と合致したからだ。
　――さすがはエメラルダさん。大した観察眼ですわ。ただ一度の会食で、相手のことをきっちりと見抜くだなんて……。やりますわね……。
　ともあれ、どうやらエメラルダは、エシャールのことが気に入ったらしい。
　――エメラルダさんが気に入ったというのならば、此度の縁談、

そう簡単に破談にするわけにもいきませんわね。
もしも、縁談を進める場合には、ミーアの対抗勢力である反女帝派を利してしまうことになるかもしれないが……。
「あの方の、お心の傷を癒してあげられればよろしいのですけど……」
エメラルダがなにか言っているが、構わずミーアは考察を進めていく。
――しかし、まぁ、グリーンムーン家では絶対的な暴君としてふるまっているエメラルダさんですし……。わたくしの対立候補、次期皇帝として名乗りを上げるのも、エメラルダさんに頭が上がらない弟たちということになりますわ。
そこまで考えて、ミーアは小さく頷く。
なんとかならないこともなさそうだぞ、と……。
「……まぁ、そこのところは、エメラルダさんに任せるしかありませんわね」
「はぇ……？」
なぜだか、ぽかーんと口を開けているエメラルダの肩を、ミーアはガッシと掴む。
「なにを間の抜けたお顔をしておりますの、エメラルダさん。あなたならばできますわ」
っていうか、今まで、さんざんわがままを通してきただろうに……、という思いを込めてミーアは言った。エメラルダがグリーンムーン家を牛耳ってさえいれば、当面は問題ないのだ。
そんなミーアの力強い声を受けて、エメラルダは……、
「ミーアさま……そんなに私のことを信用して……ええ、お任せくださいませ！」
大きく頷くのだった。

そうして、エメラルダの部屋を出てから、ミーアは腕組みする。
――まぁ、政治的なことはなんとかなりそうなのですけど……、

問題はシオンの暗殺の件ですわね。エシャール王子の中にある劣等感をなんとかしてあげないと、いつまでもシオンを狙い続けることになるでしょうし……。

うなりつつ、自らの客室へと向かう。

――しかし、これは難しいですわよ？　本当であれば、婚儀を結ぶエメラルダさんのお役目なのでしょうけれど、ああ見えて、エメラルダさん、殿方との付き合いなんか全然経験ないでしょうし……。

と、そこまで考えてから、ミーアは重大なことに気付いてしまう。

「あら？　もしかして、男性経験ではわたくしのほうが勝っているなんてこともあるんじゃないかしら？　なにせ、わたくし、何人かの殿方と遠乗りに行ったことがありますし、アベルとは何度もダンスをした仲。あのシオンとだってダンスをしたこともございますし……。ふむ、やはり、エシャール王子の心の問題をなんとかできるのは、男性経験が豊富な、このわたくししかないのでは……？」

などと、ぶつぶつつぶやきつつ、ミーアは部屋に戻ってきた。

部屋には、アンヌとベル、さらに、ルードヴィッヒが待っていた。

「ああ、すっかり待たせてしまいましたわね。しかし、いったい三人でどうしましたの？」

不思議そうに首を傾げるミーアに、ベルがキラキラした目を向けてきた。

「実は、ラフィーナさまにお会いしてきました」

「あら、ラフィーナさまに？」

「ええ。協力をお願いして参りました。彼らの狙いを逆用してやりましょう」

ルードヴィッヒがベルの後を引き継ぐ。

――はて……、彼らの狙い？　逆用？

ミーアは、くいーっと傾いていく頭を両手でがっしと掴んで、元の位置に戻す。

――あ、危なかったですわ……。なんのことかしら？　なぁんて、首を傾げてしまうところでしたわ！　眠たくって、どうも、頭の働

きが悪くなってるみたいですわね。
「ミーアさまは、ラフィーナさまの負担になりたくない、と思われたのかもしれませんが、我々の独断でさせていただきました」
「申し訳ありません。ミーアさま。私が、ラフィーナさまのもとにご案内いたしました。もしかしたら、ミーアさまのお心に背くことになってしまったかもしれないのですが……」
微妙に顔を曇らせているアンヌに、ミーアは笑みを浮かべた。
「いえ、気にする必要はありませんわ」
などと思いつつ、はて？　とミーアは首を傾げる。
――負担とはなんのことかしら……？　それに、ラフィーナさまに協力を求めるというのはいったい……？
ルードヴィッヒのほうに視線を向けると、なぜか、力強く頷かれてしまった。
まるで、この件はこれで大丈夫、と確信しているかのようだった。
――ふぅむ……なにやら、ルードヴィッヒには考えがありそうですわね。まぁ、この際ですし、協力者は一人でも多くほしいところでもある。となれば、ラフィーナさまにもなにかと協力いただいたほうが有利ではありますわね。
そこまで考えたところで、ミーアは思い出す。
――でも、ラフィーナさま、面倒ごとがあると言っておりましたわね……。ということは、わたくしも、そちらに手を貸さなければいけないかしら……。
この手のことはギブ&テイクが基本。ということは、ミーアもまた、ラフィーナの仕事を手伝う必要があるかもしれない。
――ラフィーナさまは、なんて言っていらしたかしら……。ええと、たしか、騎馬王国のことで、なんとか……、と。
その時だった。
ふいに、ベルが眉をひそめた。
「ところで、ミーアお姉さま、リーナちゃんが出かけたまま、まだ帰ってこないんですけど……、なにかご存知ですか？」

第九十四話　報告会（後書き）

明日は舞台の初日です！

第九十五話　シュトリナの帰還

「あら？　リーナさんが……？　夜に一人で出かけたんですの？」
ミーアは驚きの声を上げた。
なにしろシュトリナは、あのイエロームーン公爵家の一人娘である。あの、暗殺のエキスパート、ローレンツ・エトワ・イエロームーンが、目に入れても痛くないほどに可愛がっている、愛娘なのである！
もしも、なにかあったらヤバイ毒を盛られること、疑いようもない！
大慌てで立ち上がろうとするミーアであったが、
「ディオン殿の姿も見えませんから、おそらく、シュトリナさまと一緒に行ったのではないかと……」
「ああ、なるほど……。ディオンさんが一緒なんですのね。それならば、まぁ……」
ホッと安堵のミーアである。
なにしろ、あのディオン・アライアが一緒にいるのである。
あの、百人の敵を一人で斬り伏せ、千人の敵の包囲を崩し、万人の追手から鼻歌交じりに逃げてくるような男が、である。
ミーアの頭の中では、すでに、伝説の英雄扱いのディオンなのである。
むしろ心配なのは、シュトリナがディオンに影響されて、過激な思想に目覚めてしまわないか、ということぐらいだった。それはそれで、イエロームーン公爵から、刺客を送られてしまいそうな気がしないではないミーアであるが、ともあれ……。
「それならば、心配することはありませんわね」
「なるほど。たしかに、ディオン将軍が一緒にいらっしゃるなら安心です」

ベルも、納得した様子でニッコリした。っとその時、タイミングよく部屋のドアがノックされた。
「失礼いたします。ミーアさま、ただいま戻りました」
「あっ、リーナちゃん！」
入ってきたシュトリナを、ベルが嬉しげに出迎えた。
「あれ？　ベルちゃん、まだ起きてたの？」
シュトリナはびっくりした顔でベルのほうを見て、それから……、
「もしかして、今日の分のお勉強をサボってたから、こんな夜遅くまでやらされてたんじゃ……」
ジロリ、と剣呑な視線をルードヴィッヒに向ける。
そんな友人に、ベルは、ぷくーっと頬を膨らませて見せた。
「むぅ……、リーナちゃん、もしかしてボクのことを、なまけ者と思ってませんか？　リーナちゃんがいないと、一人で勉強もできないような……」
……事実、そうなのだが……。
「え、あ、そんなことないわ。ベルちゃんは、やる気になればできる子だってこと、リーナはちゃんと知っているもの」
大慌てで、手をぶんぶん振るシュトリナ。それから、不安そうにベルの顔を覗き込む……、と、突然、顔を上げるベル。その顔に浮かんでいたのは、悪戯っぽい笑みだった。
「えへへ、なーんちゃって……。冗談に決まってるじゃないですか、リーナちゃん」
などと、小さく舌を出す。
「なっ、ぁっ！　もう、ひどい！　ベルちゃんの意地悪！」
怒ったような、すねた顔をするシュトリナだったが、すぐにその顔にも無邪気な笑みが戻り、キャッキャッと笑顔を浮かべつつ、じゃれ始める。
ちなみにシュトリナが言ったのは「ベルは、やる気にならなければダメな子である」ということと、ほとんど同義の言葉であるのだが……。そのことにつっこむような、真の意地悪は、その場にはい

なかったのだ。
そんな優しい世界で、ひとしきりベルとじゃれあってから、改めて、シュトリナはミーアの前に歩み寄る。
その顔には、いつもと変わらない、花のような笑みが浮かんでいた。
――この切り替え、すごいですわね……。
感心するミーアの前で、シュトリナが報告を始める。
「今夜、開放市場を調べてまいりました。ディオン・アライア殿にも協力していただきました」
――はて？　解放市場？
と首を傾げそうになるも、我慢、我慢……。腕組みして考え込む……ふりをする。
「ふむ……解放市場にディオンさんと……。それで、なにかわかりましたかしら？」
「はい。端的に言ってしまうと、エシャール王子に接触した者がいるようです」
「ほう、エシャール王子に……」
ミーアは、ううむ、とうなり……、さぁて、これはまずいことになったぞ……、と内心でつぶやく。
正直、シュトリナがなんのことを言っているのか、まったくもってわからなかった。というか、開放市場ってなんのことだろう……？　と首をひねるレベルである。さりとて、それを口に出すわけにもいかず、しかし放置するのも危険そう。さて、どうやって聞き出したものか、と考え込んでいると……。
「あの、ミーアさま？」
ふいに、シュトリナが顔を覗き込んできた。
まさか、状況をなーんも理解できていないことがバレたか！？
などと焦るミーアであったが……、
「このお話、彼らに聞かせても問題ありませんか？」
シュトリナが視線を向ける先には、ルードヴィッヒやアンヌの姿

があった。
「ああ、ええ、もちろん、彼らは……」
と言いかけたところで、ミーア、起死回生の一手が閃く！
「彼らはわたくしの忠臣。なんらの隠し立てもする必要はございませんわ。むしろ、今の状況を説明してあげてくださらない？　いきなり解放……市場？　のことを話してもわからないでしょうし……」
ミーアの視線を受けて、ルードヴィッヒが重々しく頷く。
「お気遣い感謝いたします。できれば、我々としても情報を把握しておきたく思います」
ルードヴィッヒの言にシュトリナは小さく頷いた。
「わかりました。では、ミーアさま、ディオン・アライアもこの場に呼んでもかまいませんか？　彼にも、今夜あった出来事を話してもらいたく思います」
「ええ、ぜひ、お願いいたしますわ」
ミーアは小さく頷いて……、ふわぁ、っとあくびを噛み殺した。
すでに時刻は深夜を回り、日付が変わろうとしていた。

第九十六話　名探偵ミーア（へ）の挑戦状

ディオンがやってくるのを待って、改めてシュトリナは事情を説明した。

コネリーから得た情報、解放市場という治安の悪い場所のことと、そこでエシャール王子が一時的に行方不明になったということ。

「解放市場……なるほど。市場は、規制を緩くしたほうが活発化するもの。城から遠い場所であれば、多少の治安の悪化はやむを得ないということか」

感心した様子で頷くルードヴィッヒに、シュトリナは続ける。

「けれど、人の出入りが多い分、蛇が潜むのも容易になる。そのような場所で、第二王子が行方不明になった。怪しいと思ったリーナは調べに行くことにしたの。幸いにも、情報はすぐに出てきた。エシャール王子に接触を図った、怪しげな男の情報が……」

例の男たちから情報を得た後もシュトリナたちは、解放市場周辺を探って回った。

なるほど、コネリーの言う通り、治安はあまりよろしくない。おかげで、裏社会に通じていそうな輩には事欠かなかった。

ということで、シュトリナは、出会ったそばからディオンに捕まえてもらい、尋問していった。後ろから、剣で肩をポンポン叩くと、すぐに口を割ったらしい。

ちなみに、それを聞いたミーアは、

――ああ、さすがはディオンさん。ものすごーくガラが悪いですわ……。これでは、どちらが賊かわかったものではありませんわ……。

などと思ったりもしたものだが……。

まぁ、それはさておき……。

「そうして、尋問を続けていく中で、男が根城にしていたと思しき

場所の情報が手に入った。だから、リーナたちは、そこに向かったのだけど……」

シュトリナは静かに空を見上げる。

月はいつの間にか雲に隠され、夜は一層、闇を深めていた。

そんな、濃密な夜のベールに覆われた解放市場は、奇妙な静寂に満ちていた。

静寂には違いないのだろう。昼は市場を支配するであろう人の声も、金や商品が立てる音も、一切の音が聞こえないのだから。

されど……、一方で、シュトリナの感覚は矛盾するような騒々しさを感じ取ってもいた。

それは……、何者かが息を潜め、自分たちの監視をしているという……いわば多数の視線の立てる騒々しさ。

「ふーん。ここが解放市場」

シュトリナは、辺りを見回してから、つぶやいた。

「明るい時も、あまり来たくない場所ね」

ベルを連れてくるには、あまり良い場所じゃなさそうだし、かといって、一人で遊びに来ても楽しそうではない。

「遠巻きに結構な数が見てるな。また、何人か締め上げてみるかな……」

「いいえ。必要ないわ。どうせ、出てくる情報は同じでしょう」

シュトリナは、肩をすくめて首を振る。

怪しげな連中を何人か締め上げたところ、彼らの口からは、共通する情報が出てきた。

一つ、エシャール王子に接触を図ったのは、騎馬王国の訛りを持つ男であったこと。

一つ、その男が根城にしていたのは、解放市場のほど近くにある建物であること。

「ほかにも、いつ頃、この国に来たかは知らないし最近は見ない、というのもあったかしら」
ともかく、少し締め上げてやれば簡単に出てくるので、情報集めに苦労はしなかった。
でも……。
シュトリナは「んー」とうなった。
――絶対に罠だし、これ、たぶん、あちらが与えたい情報以外を探すのは大変なんだろうな……。
ため息をこぼしつつも、シュトリナは背後の気配に心強さを覚える。
帝国最強の騎士、ディオン・アライア。皇女ミーアの最強の剣は、どんな罠でも食い破ってしまいそうな、圧倒的な強者の雰囲気を持っていた。
であればこそ、シュトリナは一歩踏み込もうと思っていた。
あえて、敵の罠に……。

解放市場を抜けた先、問題の建物は建っていた。
まるで、タイミングを計ったかのごとく雲が晴れ、再びの月明りが、その外観を照らし出す。
それは、石造りの粗末な建物だった。
周りに建っているものと、そう大差ない作りだ。ドアは木製、両側の窓には木の板が張られていて、これでは月明りは期待できないだろう。
「ディオン・アライア、あなた、夜目は利くほう？」
「んー、普通かな。人並みだよ」
「そう……」
シュトリナは、帝国最強の言う「普通」とは、どの程度のものかを吟味して……。
――まぁ、この人なら、目が見えなくっても四、五人程度ならなんとかするでしょう。

などと判断する。
何度か顔を合わせる機会があった狼使いは、視覚を奪われていたとしても、十分に戦える戦士だった。ディオンが彼に劣るとも思えない。
「それならば……そうね。一応、外からじっくり調べて、それから、あの木の扉を破りましょう」
「中に入るのかい？　罠なのは明らかだと思うけど」
「なにかあったら、あなたが守ってくれるんでしょ？　帝国最強の騎士殿」
挑発するように笑うシュトリナに、ディオンは、やれやれ、と首を振った。
「まったく、姫さんといい……、帝国のお姫さま方は、蛮勇にすぎるな」
それを聞き流し、シュトリナは、音もなく建物に接近した。扉越しに中を窺う。が、中からは物音一つしない。
「ディオン・アライア、蛮勇と言われるのは少し心外ね。この広さならば、燃やされたとしても最悪、脱出はできるでしょうし、中に何人か潜んでいても貴方がなんとかしてくれるでしょう？　別に蛮勇でも何でもないわ」
そう言ってから、彼女は一歩後退。それから、ディオンに扉を指し示した。
ディオンは、一つため息を吐いてから、剣を一閃。鍵のかかった木の扉を真っ二つにする。
中は、予想していた通り、漆黒の闇に包まれていた。
「一応言っておくと、ここからは蛮勇は不要だよ、イエロームーン公爵令嬢。臆病に僕の後をついてくるぐらいじゃないと、命を落とすから、気を付けるようにね」
「ええ、そうね。なんなら手でも繋いだほうがいいかしら？」
おどけて見せつつも、素直にディオンの後ろにつくシュトリナ。
それを確認してから、ディオンはゆっくりとあたりを窺いつつ歩を

進めていく……。
「ふ、ん……敵の気配はなし……か」
つぶやき、ディオンは、小さくため息を吐いた。
「それで、どうしようか、イエロームーン公爵令嬢。中を調べるなら灯りを確保しないと……」
その時だ。ドサッとなにかが落ちる音、直後、ぶわぁっと、粉のようなものが舞い上がった。
「ちっ、毒か……？」
自らの口元を覆いつつ、シュトリナの頭に外套をかぶせる。と同時に、シュトリナを抱きかかえると、ディオンは強引に建物の外に飛び出した。
対してシュトリナは、
「……いいえ、たぶん違うわ。ディオン・アライア。小屋全体に充満させるなんてもったいないし……、それ以上に、そんな目立つことはたぶんしない」
誰に言うでもなく、つぶやく。
外に出ると同時に、剣を抜いて、ディオンは周囲を見回した。けれど、襲ってくる者の姿はなく……。それでも、しばらくは警戒を続けていたが……、
「やれやれ。毒じゃないのなら、これはただの嫌がらせかい？」
ディオンは剣を鞘に納めると、髪についた粉を払い落とした。
「いいえ、それも違うわ」
シュトリナは、ちょこんと背伸びして、ディオンの頭に手を伸ばす。それに気付いたディオンは、小さなお嬢さまの手が届くように身を屈めた。
そのかいあって、ご令嬢の手はディオンの髪の一房、そこについた粉をつまむことに成功する。
シュトリナは、指先についたその粉末をもてあそびながら、軽く鼻に近づけ、次に小さな舌先に、ピトッと付けた。
「おいっ！」

と、慌てるディオンをしり目に、すぐに、持っていた水筒で口をゆすぎ、
「大丈夫。ただの小麦だから。質の悪いね」
「小麦？　そんなものを部屋にまき散らして、いったいなにがやりたかったんだい？　まさか、偶然、落ちてきたわけではないんだろう？」
不審げに眉を顰めるディオンにシュトリナは言った。
「聞いたことがあるわ。こういう、室内に粉状のものをまき散らして、火をつけると……激しく燃え上がって周囲のものを吹き飛ばすんだって」
「それで僕たちを闇に葬ろうって？　ずいぶんと面倒な手段をとるな……。そんなことをせずとも、なにか手がありそうなものだが……」
呆れたように言うディオン。シュトリナは一瞬黙ってから言った。
「完璧な毒とは、どういうものかわかるかしら？　ディオン・アライア」
「さてね？　飲んだ瞬間に死んでしまう毒とかかな？」
静かに首を振って、シュトリナは続ける。
「リーナはこう考えるの。最善は、毒を使ったと気付かれないような毒。自然死に見せかけられるのがベストね。そこに殺人者の存在を匂わせず、ただ、その人間を排除できるのが一番。その次は、なんの毒を使ったかわからせることに意味を持たせること。例えば、特徴的な毒を使い、偽の犯人をでっちあげるとかね」
そうして、シュトリナは言った。
「おそらく、これはただの置き土産……。襲撃者を誘い出し、撃退する目的ならば麻痺毒なり、目つぶしなりを使って動きを奪えばいい。その後は尋問でも拷問でも好きにできるから。でも、これは、置き土産。自分の痕跡を追う者を、偽の痕跡によっておびき寄せて、消すための仕掛け」
「あえて、わかりやすい痕跡を残すことで、本物の痕跡を見えなく

した、ということかい？」
「もっとしっかり調べれば、本物の痕跡だって出てくるのでしょうけれど……。まずわかりやすい痕跡に食いついてしまうものじゃないかしら？　リーナたちみたいに急いでいたりしたら、特にね」
ディオンは腕組みしつつ、ふん、っと鼻を鳴らす。
「そうして、おびき寄せられた建物を、調べようとしたら吹き飛ばされる、ということか」
「そう。そして、そこに不審なことはない。後には倒壊した建物と、焦げた跡と、焼け焦げた小麦が残るのみ。毒が充満した部屋で人が死んでいるのと、どちらが注目を集めてしまうかしら……。この仕掛けはね、毒を使って殺したと気付かれないような毒。自然死、この場合では事故死に見せかけて殺すための仕掛けよ」
シュトリナは、建物のほうを見て言った。
「いずれにせよ、収穫はなし、かな。蛇と明確に繋がっているという証拠もないし、騎馬王国訛りというのも、こうなってくると本当かどうか……」
やれやれ、と肩をすくめるディオンに、シュトリナは花のような笑みを浮かべる。
「ふふふ、そう悲観することもないわ、ディオン・アライア。たぶん、この状況を作ったのは、蛇よ」
「なぜ、そんなことが言えるのかな？　イエロームーン公爵令嬢？」
ディオンの不審そうな視線を涼しげな笑顔で受け流し、シュトリナは言った。
「簡単なこと。あなた、小麦が建物を吹き飛ばすことがある、なんてこと知ってた？　それが罠に使えるだなんてこと、思いつくかしら？」
「ああ……なるほど」
「この罠はね、発動すれば建物の倒壊、ないし火災にしか見えないし、発動しなくても、ただ小麦が室内にまき散らされることにしかならない。でも、リーナのように知っている者が見れば、同じく知

っている者が作った巧妙な罠だとわかる。一般に知られていない秘匿された知識だからこそ証拠の隠滅に使えるけれど、知っている者が限られているのだから、それを使った者の正体も当然限られてくる」

と、そこまで言ってから、シュトリナは小さく首を傾げた。

「それとね、騎馬王国訛りの件も、偽りであったとしても無駄な情報ではないわ」

「それは、なぜかな？」

問いかけに、シュトリナは妖艶な笑みを浮かべて言った。

「だって、騎馬王国のせいにしたいのなら……、おのずと使う毒の種類も限られてくるでしょう？」

「以上が今夜あった出来事です。ディオン・アライア、ほかに付け足すことはあるかしら？」

「いや、特には。まぁ、強いて言うなら、イエロームーン家はあまり敵に回さないほうがよさそうだということを、ミーア姫殿下にご進言したいということぐらい、ですね」

肩をすくめるディオンに、ベルが笑みを浮かべる。

「大丈夫です、リーナちゃんが、敵になるはずありません」

「ベルちゃん……」

などというイチャイチャを尻目に、ミーアは、ふあむ、と息を吐き、

「リーナさん、騎馬王国やその周辺に出回っている毒に対する対処、お願いできますかしら？」

「はい。万事つつがなく」

シュトリナは、かしこまって、頭を下げた。

「しかし、また騎馬王国……。なんだか、最近よく聞きますわね……。ラフィーナさまも、その関係で来たと言っておられましたし……。これにはなにか意味があるのかしら……？」

そうしてミーアは、再び、ふあむ……、と息を吐いた。

これにて、ミーアのもとに情報は出そろった。
はたして、帝国の叡智ミーアは、この事件を無事に解決でき……。
「ふわぁむむ……、駄目ですわね……。眠い……、限界ですわ」
……はたして、帝国の叡智、眠りのミーアは、この事件を無事に解決できるのだろうか？

その結末を知る者は一人もいなかった。

第九十六話　名探偵ミーア（へ）の挑戦状（後書き）

みんな大好き、粉塵爆発！

第九十七話　公正・公平な正義の王さま

断罪王シオン・ソール・サンクランドは敵が多い人物だった。
数多の対立者たちは時に表立って、あるいは陰口として、口汚くシオンを罵り攻撃した。
そんな者たちであっても、ただ一つ否定できないことがあった。
それはシオンが極めて公正で、私情を一切挟まない裁きを行ったということだ。
彼らは、口々にこう言った。
「断罪王シオン陛下が公正であることは疑いようがない。なにしろ、彼は罪ありと見れば血の繋がった弟も処刑したし、兄弟同然に育ち、腹心と頼りにしてきた従者をも処刑して見せたのだから。まぁ、それがいいことだとは決して言わんがね」
と。

その日、王の執務室に一人の老貴族が訪れた。
来訪を告げる声に、シオンは静かに視線を上げる。と、そこに立っていたのは、昔なじみの顔だった。
「ランプロン伯か。久しいな」
シオンの静かな声に、ランプロン伯は、緊張にこわばった笑みを返した。
「お久しぶりでございます、陛下」
かつては、サンクランド保守派貴族の筆頭にして、エシャールの教育係をも務めたランプロン伯であるが、しばらく前に第一線を退いている。
その身に帯びた覇気に満ちた風格も鳴りを潜め、今は好々爺然とした穏やかな雰囲気があるのみ。そんな、半ば引退した貴族の訪問に、シオンは小さく首を傾げる。

「して、此度は、いかがした？　旧交を温めたいのはやまやまなのだが、例の反乱事件の後始末が残っていてな。あまりゆっくりともしていられないのだが……」
ちょうど十日ほど前、サンクランドの一部で反乱騒ぎがあった。シオンの苛烈な執政に反感を持つ貴族たちが、第二王子エシャールを旗印として、大規模な反乱を企図したのだ。
されど相手が悪かった。彼らが弓を引こうとしたのは、天才シオン・ソール・サンクランドだったのだ。
反乱の兆候を掴んだシオンは、即座に直属の軍を率いて、首謀者たちを一網打尽にしてしまったのだ。
現在、下手人は全員地下牢に閉じ込められている。そして、そこにはシオンの弟、エシャールの姿もあった。
「まさに、その件でお話がございます。陛下」
恭しく頭を下げてから、ランプロンはまっすぐにシオンの目を見つめる。
「エシャール殿下の処刑、どうかお考え直しくださいますように……。エシャール殿下も、きっとあの首謀者たちに翻意するように努められたはずです」
「どうかな……。以前から、エシャールには私に対する劣等感のようなものが見て取れた。反乱の首謀者たちに唆（そそのか）されて、私を倒す好機と考えたとしても不思議ではない」
「ですが……」
「いずれにせよ、国に無用な混乱を招き、民が血を流した。その報いは受けさせねばならぬ」
「血の繋がった弟君ですぞ？　それを……」
「たとえ弟であっても……いや、弟だからこそ処分を軽くするわけにはいかない」
断罪王は、その諫言を切って捨てる。
「ランプロン伯、貴公もそれがわからないのか？　サンクランド王の公正なる統治を主張し続けた貴公であっても、わからぬのか？

私は王なのだ」
絶大な権力を持つ者として、裁きに私情を交えるわけにはいかない。誰であれ、処刑に値する罪を犯した者にはその命をもって贖わせなければならない。
それこそが公正というものだ。
「さようでございますか……。仕方ありますまいな」
そうして、ランプロン伯はその場を後にした。

事件はその夜に起きた。
牢に捕らえられていたエシャールを数人の者たちが救出しようとしたのだ。
首謀者がランプロン伯であったことに、シオンは特別な感慨を抱くことはなかった。彼は幼少期のエシャールの養育係だ。その後もエシャールとは親しくしていたようであるし、情が沸くこともあるだろう。
情状酌量の余地があるだろうか……、と考えていたシオンであったが、続く報せには、さすがに驚きを隠せなかった。
犯人の中に、自らの頼りとする腹心、キースウッドの姿があったのだ。
夜が明けて翌日、シオンは収監されているキースウッドのもとを訪れた。
地下牢の中、土に汚れた友の姿を見た時、シオンは微かに顔をしかめた。唇を噛み締めたその顔は、ほんの一瞬、泣くのをこらえる時のような、そんな表情に見えたが……。次の瞬間には、すでに、厳格なものへと変わっていた。
「キースウッド、愚かなことをしたな」
かける言葉は穏やかで、けれど、どこまでも冷たい。
「ええ。そう……でしょうね。俺は、あなたを止められなかった」
疲れた笑みを浮かべたキースウッドは、口惜しさを誤魔化すように、おどけて肩をすくめた。

「残念だ……。お前には、いつまでも私の右腕として支えてもらいたいと思っていた。なぜ、このようなことをしたのだ……？」
「おわかりになりませんか？　それが……」
「わからんな。王の正しさは、この国のよって立つところだろう。エシャールは処刑されなければならない。そうしなければ、正義が保てない」
彼は正しくなければならなかった。公正なる正義の存在として。
「そうでなければ……」
彼の脳裏に、しみついて離れない光景があった。
それは、赤く染められた世界。
夕日に照らされた赤い断頭台。
人々の怨嗟の声。それをただ一身に受け、首を落とされた皇女の姿。
彼女の首を落としたのは他ならぬ自分だ。
彼女は死ななければならなかった。彼女を処刑することは正しかった。
その正しさが揺らがぬために、シオン自身は正しくあり続けなければならなかった。
シオンは小さく首を振った。
「シオン陛下、どうか、私の処刑に免じて、エシャール殿下のお命だけは……」
そう訴えるキースウッドに、シオンは眉をひそめた。
「なぜだ？　お前は別に、エシャールとそこまでの繋がりがあったわけではあるまいに」
「エシャール殿下を、実の弟を殺してしまったら、あなたは本当に……」
「キースウッド、私は「王」だ。このサンクランドを正しく治めなければならないんだ。だから、エシャールを処刑しないわけにはいかない。それに……」
わずかな沈黙、その後、シオンは言った。

「さらばだ。キースウッド。今まで私を支えてくれたこと、感謝する」

こうして、シオンは「理想の王」となった。

あらゆる感情を消し去り、ただ正しく、公正な判断のみを下し続ける、そのようなモノになった。人間性を喪失したかのような、その姿は人々から畏怖され、恐れられた。

彼は、生涯孤独だった。

人間には寄り添う者が必要だが王には必要ない。正義の王は、そのような者を持つことが許されない……そう、言わんばかりに。

それは、悲劇の種の発芽。その一つの形。

サンクランド王室の中に、その種が残り続ける限り、悲劇的な実りは形を変え、いずれは発芽するだろう。

そんな種を取り除くことができるのは……、我らがポンコツ姫一行のみ！

今、ミーアとその仲間たちが、サンクランド王家が内包する悲劇の種に挑む！

「……ふむ、なんだか、このドレス……、ちょっとだけお腹のところがきつくないかしら？　採寸を間違えたのではなくって……？」

……大丈夫だろうか？

「変ですわね。これ、つい先日、仕立て直したばかりですのに……ははぁん、わかりましたわ。この気候で、ちょっとだけ縮んだんですわね？　そういうことあるみたいですし……」

……本当に、大丈夫だろうか？

第九十八話　そのドレスの秘密……

ランプロン伯の客室にて……。

ミーアは、アンヌに手伝ってもらってパーティーの準備をしていた。

ちょっぴりきつめのドレスで、お腹がキュッとしたことで、ミーアの気持ちもキュッと引き締まった。瞳を閉じて、じっくりと確認する。

――昨日、ベッドの中でよくよく考えましたけれど、ちょっと状況が複雑ですわね。

ミーアはベッドの上で横になり、目を閉じてじっと考えたのだ。耳にした膨大な情報を、じっくり整理していたのだ……ちなみに人は寝ている時に、記憶を整理するものであるらしい。まぁ、だからどうした、ということもないのだが……。

さておき、そうして整理して、じっくり考えた結果、改めて思ったのは……、

――今回のこと、シオン自身に教えて、なんとかしてもらうのが手っ取り早いんですわよね。シオンとキースウッドさん、二人がいれば、そうそう毒なんか飲まされないでしょうし……。

ということだった。

現在、ミーアの手元には皇女伝だけでなく、シュトリナからの情報も届いている。エシャールに蛇が接触した可能性、毒を用いた暗殺計画。おそらく、あの二人のどちらも、その結論に行きつき、対処をするだろう。

だけど……、なぜだろう……、それは、ちょっぴり気が進まなかった。

――うーん、おかしいですわね。それが一番だってわかっているはずですのに、なんだか、それではダメな気がするんですのよね。

なぜかしら……？
「あの、ミーアさま……？」
アンヌの声を合図に顔を上げる。いつの間にか、準備は終わっていた。
「ふむ、完璧ですわ」
立ち上がり、鏡の前で、くるりん、と一回転。それから、満足げに一つ頷く。
ミーアが身にまとっていたのは、かつて、新入生ダンスパーティーに着て行ったシンプルドレスだった。
ちょっぴり成長したミーアに合わせて、仕立て直したドレス、さらに、今回は頭にリボン、首にワンポイントのネックレス、耳にも小さなイヤリングを付けた完全装備である。
最後に、シースルーの優雅なショールを巻いて……。
「ご苦労さま。いい仕事ですわね、アンヌ」
「ありがとうございます。ミーアさま」
恭しく頭を下げるアンヌに、ミーアは小さく微笑みを浮かべた。
「あなたもすっかり、立派なメイドですわね」
「はい。もう、パンだって焼けますし、馬にだって乗れます」
「ふふ、馬に乗るのは、メイドの仕事ではないような気もしますわね」
そうして、二人は、小さく笑いあう。
「あの……ミーアさま？」
それから、アンヌは少し気遣わしげな顔で言った。
「なにか、気になることがあるのではありませんか？」
「あら？　そう思いまして？」
「はい。先ほどから、沈んだ顔をされております。立派なメイドのアンヌにはわかります」
そうして、アンヌはおどけた顔をする。
「あら、うふふ、さすがはわたくしの専属メイドのアンヌですわ。すべてお見通しですわね」

「そうです。私はミーアさまの専属メイドで、なんでもお見通しなんです。だから、ミーアさまなら、きっと大丈夫だってこともお見通しです。それに、もしもなにかあっても、私たちがおそばにおります。だから、安心して、ミーアさまが正しいとお考えのことをなさってください」
グッと握りしめ、フンヌスっと鼻息を荒くして、アンヌは言った。
「いつだって、私はミーアさまの味方ですから！」
「アンヌ……」
自らの専属メイドの力強い激励に、ミーアは小さく微笑んだ。
「そうですわね……。わたくしも、頑張らないといけませんわね」
そんなミーアの顔を見て安堵したのか、アンヌは表情を緩めて、
「それでは、ミーアさま、私はベルさまとシュトリナさまのお手伝いをしてきますね」
「ええ。お願いいたしますわ。リーナさんはともかく、ベルはあまりドレスに慣れていないでしょうから」
「かしこまりました」
そうして、アンヌが出ていくのと入れ替わりに、エメラルダが入ってきた。
「ご機嫌よう、ミーアさま」
エメラルダは、大貴族に相応しい豪奢なドレスを優雅に着こなしていた。
緑を基調にした、フリルをふんだんに使ったドレス、ところどころに金糸を用いて、グリーンムーン家の家紋が刺繍されている。
ミーアは、その、しゅっと引き締まったお腹を見て……。
――ふむ、あれはコルセットですわね……。コルセットに違いありませんわ。コルセットであんなに締め付けてたらあまり美味しく食事ができないでしょうに……。お可哀想に……。
うんうん、と納得し、エメラルダを憐れんでいると……、
「あら、ミーアさま、そのドレス……」
エメラルダが、ミーアのドレスに目を留めた。

「ええ。これは、わたくしのお気に入りですわ」
このドレスを着ていると、楽しかった思い出が甦ってくるのだ。
――今日はアベルとダンスする機会もあるかしら……。うふふ、あの日の再来ですわね。
っと、ニヤニヤしていると……。
「もちろん存じておりますわよ。ミーアさまのお母さま……皇妃アデライードさまがお作りになったドレスですわね」
「……へ？」
ミーアは、首を傾げた。
「あの、それは、どういう……？」
「あら？　ご存知ありませんでしたの？　我がグリーンムーン家に出入りしている仕立屋がそんなようなことを言っておりましたわよ？　ミーアさまのお母さまが作られたものだから、仕立て直す時に緊張で手が震えたとか……」
「きっ、聞いておりませんでしたわ！」
「そうなんですの？　アデライードさまの故郷には、母から娘に手作りの服を送るという風習があるとか……、そんな話も聞きましたけれど……」
「そう……なんですの？」
呆然とつぶやいて、それからミーアはしみじみとドレスを撫でた。
「これを、お母さまが……ああ、そうか。それで、お父さまは、あんなに喜んでおられたんですのね……」
ミーアは、新入生ダンスパーティーのことを話した時のことを思い出した。
あの時、なぜだか、大喜びしていた父のことを……。
「なに、そのドレスを？」
父から、ぜひに！　と頼まれたミーアは、仕方なく新入生歓迎ダンスパーティーのことを話したのだが……。
「ええ。いいドレスで、わたくし、すっかり気に入ってしまいまし

たわ……あ、もちろん、最初はお父さまが用意してくれたドレスを着ようと思っておりましたのよ？　ですけど、事情があって汚れてしまったので、こちらに着替えましたの」
言い訳がましくそう言うが……、父はそんなこと気にしちゃいなかった。
「おお、そうか……そうか！」
それどころか、なぜかものすごーく喜んでいたのだ。
「ミーアが、あのドレスを……、そうか」
それこそ、とろけそうな満面の笑みを浮かべて、喜んでいた。
――てっきり自分の選んだドレスを着なかったから、不機嫌になるものだと思っておりましたけれど……、どうして、こんなに喜んでるのかしら？
などと、ミーアは首を傾げるばかりであった。
さらに、若干、身長が（身長が！）伸びてサイズが合わなくなったと言うと、すぐに仕立て直し、いつでも着られるようにしてくれたのだ。
さらにさらに！
「ふむ……しかし、このドレス、少しばかり露出が……。ああ、そうだ。それに合わせたショールを用意しよう。よし、すぐに手配しようではないか」
さらにさらに、さらに！
「せっかくなら、このドレスに合ったアクセサリーも用意させよう。値段に糸目はつけぬ。大陸で一番の……」
「いえいえ、お父さま、それはなりませんわ。無駄づか……じゃない。えーっと……、そう！　このドレスが目立たなくなってしまいますわ。ここは、控えめなアクセサリーを……、宝石とか、あんまり使ってないやつがいいですわね！」
「そうか？　だが……」
「とっ、ともかく！　アクセサリーはわたくしが選ぶので、お父さまは気にしないでくださいませ！」

「そうか……」
皇帝は、そう言ってから、なにやら、口をもごもごさせて……、
「ああ、ミーア、それでだな、その……、そのドレスは、な……」
「え？」
きょとりん、と小首を傾げるミーアに、父はゆっくりと首を振って、
「……いや、なんでもない。大事に着てやってくれ」
「……？　ええ、それはもちろんですわ」

なぁんて、やり取りを思い出してしまうミーアである。
「お父さまったら、言ってくれればいいのに……。恥ずかしかったのかしら？」
思わず呆れつつも、ミーアは、そっと目を閉じる。
母の記憶は、ミーアにはほとんどなかった。けれど、ドレスの優しい手触りは、なんとなく懐かしい感じがした。
「ありがとう……お母さま。これからも、わたくしを守ってね……」
つぶやいた瞬間、しょうがないなぁ、と困った顔で笑う母の顔が見えたような気がして……。なんだか、母にお尻を蹴っ飛ばされた気持ちになったミーアは、キリッとした顔で、
「では、参りましょうか。お母さまの前で、無様な真似はできませんわ」
気合いを新たにするのだった。

第九十八話　そのドレスの秘密……（後書き）

コミカライズのＳＳの評判が良かった。
とても嬉しかったので、ついつい書いてしまいましたのです……。
後悔はしていない……。

そして昨日、活動報告を更新しました。
びっくりするような画像があると思いますが、早合点しないようにお願いいたします。

第九十九話　ミーア姫、考える、考える……

さて、戦装束に着替えたミーアは、両手で頬をパンっと叩いて、気持ちを切り替える。

幸い、今回は使える戦力は多い。

エメラルダ、シュトリナ、ティオーナを率いて、さらに、ルードヴィッヒをも配する万全の体制を敷いた。協力者としてはラフィーナもいる。

精神安定要因として、アンヌにもそばに控えておいてもらうし、もちろん、ベルも一緒である。なにしろ、シオンのファンなので。

――やるべきことは、決まっておりますわ。

気合を入れつつ、ミーアは情報を整理する。

――まず、問題は二つ。一つは、エメラルダさんとエシャール王子の縁談が、わたくしの反対勢力を強めることになること。もう一つは、シオンの暗殺……、いや、違いますわね。

ミーアは静かに首を振る。

――反対勢力のことはルードヴィッヒが、なにか、考えがあるようなことを言っておりましたし、今すべきことではありませんわ。わたくしがすべきことは、シオンを暗殺から救うことですわ。今夜の事件を防ぐこと、それをなんとかしないことには始まりませんわ。

ミーアは、そう結論付ける。

――それに、反対勢力の件は、エメラルダさんにも頑張ってもらえるでしょうし。そして、シオンにも命を救ってやったことを教えてやって、それで頑張らせればいいですわ。

だからこそ、ミーアがすべきことは、シオンの毒殺を防ぐことなのだ。

――皇女伝によれば、シオンは毒殺される。そしてリーナさんの情報によれば、混沌の蛇から、なんらかの毒物がエシャール王子の

手に渡った可能性が高い……。
皇女伝の記述だけでは、年若い王子がどうやって毒を手に入れたのかはわからなかったが、こうして聞けば納得である。
――その解毒に関しても準備はできているらしいですけど……。
っと、横目でシュトリナのほうを窺うと、シュトリナは大きく一つ頷いて、
「お任せください。ミーアさま。例のものの手配はすでに済んでおります」
「はて……？　例のもの？」
「サンクランドへの途上で入手した干しキノコです」
「干しキノコ……」
「はい。騎馬王国の民の間では、長く狩猟に陰毒が用いられていました。だから、もしも、騎馬王国の仕業に見せかけるならば……リーナであればそれを使います。そして、その陰毒と拮抗し、効力を打ち消す解毒剤こそが、先日、入手した陽毒のキノコですけど……」
と、そこで、シュトリナは首を傾げた。
「もしかして、ご存知なかったですか？」
ぐむっと、ミーアは黙り込む。
ここで、知っていた！　と言うことは簡単だ。そのほうが、おそらくはシュトリナの信頼を繋ぎとめておくことができるはず……。けれど、
「ええ、残念ながら。毒にはそこまで詳しくはないんですの」
ミーア、ここは正直に言っておくことを選択する。
下手に知ったかぶりをすると、ろくなことにならない。特に、毒などの場合には、本当にシャレにならない。
ということで……、
「あのキノコを買ったのは本当に偶然のこと。幸運でしたわね」
素直に本当のことを言っておく。加えて、
「前にも言いましたけれど、今回は、毒が使われる可能性が非常に高いと、わたくし、見ておりますの。だから、頼りにしております

わよ？　リーナさん」
「……わかりました。ミーアさま、ご期待にお応えできるよう、頑張ります。でも……、覚えておいてください。解毒はとても難しいこと。完璧にできるとは思わないでください」
「あくまでも毒を飲まさないのが一番、というわけですわね……。ふむ……」
「ところで、シオン殿下ご本人には、伝えないのですか？」
シュトリナの問いかけに、ミーアは難しい顔をする。
「考えなくもないのですけど……」
実のところ、キースウッドには、エシャール王子に怪しい動きがあり、と知らせが行っている。ディオンに行ってもらっているのだ。
シュトリナたちが持ち帰ってきたのは、あくまでも状況証拠。そんなものをもとにして、他国の第二王子を暗殺犯扱いしたら、国際問題になってしまう。
けれど、だからと言って黙っているわけにもいかない。幸い、キースウッドは敏い男だ。おそらく、国家間のことも斟酌して立ち回ってくれるだろう。
それはシオンも同じではあるのだけど……、ミーアは気が進まなかったのだ。
そして、ミーアはなんとなくだけど、その理由がわかり始めていた。
このドレスが、ミーアに答えを教えてくれていた。
――シオンは、実の弟に殺されるんですわね……。
ミーアが心に引っかかっているのは、そのことだった。
もしも……、シオンが、エシャールのことを知って、弟の犯した罪に対して、正当な裁きを求めたとしたら、どうなるのか？
――もちろん、今のシオンは好き好んでそんなことはしないでしょう。けれど、ここ、サンクランドにおいては、どうかしら？
なんだかんだで、シオンとは長い付き合いである。彼が王に連なる者として、どのような信条を持ち、なにを大切にしているのか、

ミーアなりにふわっと理解しているつもりではある。
正義と公正を重んじるシオンではあるが、レムノ王国事件以降、少しだけ変わったように、ミーアは感じていた。
けれど……、それはあくまでサンクランドを離れた時のことである。
公正、公平な王の統治による正義を旨とするサンクランドである。当然、シオンを暗殺しようとしたエシャールの断罪を求める声は小さくはない。
――兄弟を殺せと言わざるを得ない状況というのは……、きっとシオンの傷になりますわ。
ミーアは、軽くストールを握った。ミーアには兄弟はいない。家族といえば、父である皇帝のみである。
そして、ミーアは別に「父親のことが大好きだ」などということはない。どちらかといえばウザい……。
けれど、妻が作ったドレスをミーアが着た時に、心から喜ぶところとかは、まぁ、嫌いではない。ウザいけど……。
先に断頭台送りになったと聞かされた時には、やはりショックだった。ウザいけど……。
それに……、ミーアには記憶はないけれど、母にだって、会えるものなら会ってみたいと思うし、そばにいてくれるなら、そうしてもらいたいと思っている。
家族とはそういうもので、かけがえのない、大切なもののはずで……、それはきっとシオンも変わらないんじゃないか、とミーアは思っている。
――シオンは完璧超人ですけれど、それでも家族を処刑しろと言わざるを得ないのは、やっぱり辛いんじゃないかしら？
母のドレスを着ているからだろうか。ミーアとしては、シオンとエシャールの仲がこじれるのが、今は少しだけ嫌だった。
ただの暗殺犯を排除するならば別に構わない。けれど、弟が暗殺犯の場合、そのことをシオンに知らせたほうが良いのか否か、ミー

アにはわからなかった。
――ともあれ、だからこそ他の貴族たちに勘付かれないのは絶対条件ですわ。
そうすれば、少なくともシオンが、正義のゆえに弟を殺せと言わざるを得ない状況は回避することができるだろう。
――ではもし、ほかの貴族の目がなくって、それゆえにシオンがエシャール王子を許したとしたら？　そのシオンの行動に対して、エシャール殿下は、どう思うかしら？
余計にこじれそうだなぁ……、などと思うミーアである。
キースウッドから聞いた情報を加味すれば……、きっとエシャールは、シオンから憐れみを受けたことで、一層の劣等感をこじらせるだろう。
そして、それは、ゆくゆくは蛇に突かれる要素になりそうで……。
「ただ、暗殺者を送り込んでくるよりたちが悪いですわ」
蛇が厄介なところは、正常な秩序を担っていた者を、自分たちの手先にしてくるところだ。
ただの暗殺者ならば排除したとしても心は痛まないが、暗殺者となった弟を排除すれば、きっと傷になる。
だからこそ、ミーアは慎重にならざるを得なかった。
「多分ですけれど……、今回の件を解決するためには、シオンの命を救うだけではダメな気がしますわ」
次の危機も皇女伝が教えてくれるとも限らない。であれば、問題はできるだけここで解決しておくべきだろう。
「リーナさんには、シオンのそばにいてもらうとして。あとは、エシャール殿下のそばにはエメラルダさん。ティオーナさんにもシオンのそばにいてもらおうかしら……」
パーティーの時の配置を考えるミーアは知らなかった。
……否、忘れていた。
一つの厄介ごとが襲ってくる時、ほかの厄介ごともまた、同時にやってくるのだということを。

それはさながら、喜び勇んで走り寄ってくる、ギロチンのごとくに……。

第百話　ミーアは、ボッチじゃなかったっ！

サンクランドの王城、ソルエスクード城。その大広間にて、ダンスパーティーは行われる。
豪華に飾り付けられた広い会場には、大勢の人々が集まっていた。
「ミーアさま、やはり、サンクランド貴族だけでなく他国の要人もいるようです」
会場内を見回したルードヴィッヒが素早く話しかけてくる。
「それは、たしかですの？」
「はい。バルタザルからもらった情報と合致する人物が何人か……」
「ふむ……まぁ、ラフィーナさまやアベルが呼ばれていた時点で、ただのパーティーではないとは思っておりましたけれど……」
そもそも、四大公爵家のエメラルダが呼ばれていること、王室主催のパーティーであることなどから考えても、かなりの規模になることは、容易に想像がつくのだが……。
――そもそも、このパーティーの趣旨自体が不明なんですのよね。
「ミーアさん、ご機嫌よう」
キョロキョロしていると、ふいに近づいてくる少女の姿が見えた。透き通るようなサラサラの髪、処女雪のように白い肌と、それを飾る透明感のある蒼いドレスが、彼女の山の清流のような清らかな雰囲気を、増し加えているようだった。
舞踏会用のドレスに身を包んだラフィーナ・オルカ・ヴェールガが、そこに立っていた。
「これは、ラフィーナさま、ご機嫌よう」
ドレスのスカートをちょこんと持ち上げ、それからミーアは完璧な礼をした。
「先日は昼食会、とても楽しかったですわ」
「ふふ、それはよかったわ。ミーアさんは、舌が肥えてるから、気

に入ってもらえるか、心配だったのだけど……」
そんな二人の会話を聞きつけた、周囲の貴族がザワつき始める。
「ねぇ、あのラフィーナさまと話している方って……」
「ああ、おそらく間違いないだろう。あれが帝国の……」
そんな、興味深げな視線を涼しい顔で受け流したミーアは、さらに、少し離れた位置にアベルの姿も見つける。
「あっ、アベル、こっちですわ！」
そうして、思いっきり背伸びして手を振ると、アベルはすぐに気付いて、近づいてきた。「やぁ、ミーア。今日は一段と美しいな……」
「まっ！　アベル、相変わらず口が上手いですわね！　でも、ふふ、嬉しいですわ」
などと、ミーアが目的を忘れて、アベルとイチャイチャを始めようとしたところで……。
「さて、みなさま、この度は、我がサンクランド主催の舞踏会にお越しいただき、感謝いたします」
タイミングよく、声が響く。
そちらに目を向けると、声を上げたのはランプロン伯だった。
――そういえば、今日の会を取り仕切っていたのは彼でしたわね……。
などと、ほげーっと見つめていると……、事態は急変した！
「実はみなさまに、とても嬉しいご報告がございます。これは近々、発表されることではございますが、我が国の第二王子エシャール殿下と、ティアムーン帝国の星持ち公爵令嬢エメラルダさまとの縁談が決定いたしました」
朗らかに、高らかに言うランプロン伯。それを聞き、拍手する人々。
突如、その渦中に投げ出されたエメラルダは、目を白黒させて言葉を失っている。
「なっ！」

一方、ミーアもまた驚愕する。けれど、その驚きは刹那の後、ちょっとした安堵に変わった！　なぜなら……、

――なるほど！　そういうことなのですわね。それで、ラフィーナさまやアベル、それに周りの国の貴族も呼ばれていると……。そして、わたくしが呼ばれなかったのは……、わたくしに邪魔されたくないからであって、決してわたくしの人気がないとか、仲間外れとか、ボッチとか、そういうわけではございませんのね？　ああ、良かった！

ミーアには、ようやく、ランプロン伯の狙いが読めたのだ。

彼が何をしているのか、それは半ば公式の、縁談の発表だった。

――つまりは、エメラルダさんを引っ込みがつかない状況に追い込むために、こんなことをしたわけですわね……。なるほど、なかなかに上手い手ですわね。グリーンムーン公爵家内では、絶対的な暴君として振る舞ってるエメラルダさんですけど、外に出ると案外、ヘタレなところがございますし。

自らのことは棚上げして、ミーアはそんなことを思う。

――おそらく、グリーンムーン家とも、話ができておりますのね。エメラルダさんははめられたということでしょうけれど……。

ミーアは、そこで考え込む。

――しかし……、これ自体は止める必要はないような気も……？

そもそも、エメラルダは今回の縁談が、そこまで気が進まないわけではなさそうだった。

――ちょっぴり寂しい気もしますけれど、エメラルダさんにサンクランド王室に入っていただいたほうが、シオンたち兄弟の仲を取り持つのは容易になるかもしれませんわ。

エシャール王子の問題は、今夜を乗り切ったとしても、残り続けるかもしれない。であれば、むしろ、一応は信用のおけるエメラルダにそばにいてもらったほうが……。

などと考えていると、突如、ミーアのすぐ隣で声が上がった。

「おめでとうございます。両国にとって、この縁談が良き絆となり

ますように、心からお祈りしています」
自らの胸にそっと手を当て、ラフィーナが声を上げた。その上で、
「私のお友だち、ミーア・ルーナ・ティアムーンも、今回の縁談を、きっと喜んでいることでしょう。ねぇ、ミーアさん」
ミーアに涼しげな笑みを向ける。
「……はぇ？」

ミーアは……察した。
ルードヴィッヒがラフィーナに依頼した反撃の一手……それが、今まさに打たれようとしているということ……。
そして自身がいつの間にか、最前線に立たされていたということに……。

第百一話　うんうん……うん？

刹那の思考停止。直後、ミーアの頭が回転し始める。
ラフィーナの澄んだ声を聴き……、周囲の者の視線は今、ランプロンからミーアたちへと移っていた。
――こっ、これは、いったい！？
ラフィーナがなにを言いたいのかはわからない。けれど、このまま黙っているわけにもいかない。
ミーアは一瞬の逡巡の後、決意を決める。
――乗っていくしかありませんわ。この波がどこに向かうかはわかりませんが……、背浮きをする限り、沈んで溺れることはないはず！
ミーアは小さく息を吐き、次の瞬間には華やかな微笑みを浮かべる。
「ええ、まことに喜ばしいことですわ。我が友であるエメラルダさんと、サンクランドの第二王子であるエシャール殿下とが婚儀を結ぶだなんて……。素敵なお相手を見て、エメラルダさんも喜んでいると思いますわ」
それは本音だった。それに、縁談によってエシャールが成長してくれれば、暗殺なんかしようと思わなくなるかもしれない。
とすれば……、この縁談は、ミーアにとっても望ましいもののはず。嘘は言っていない。
「そうね。お二人の未来に神の祝福があるように、私も祈っています」
ラフィーナの祝福の宣言に、会場の貴族たちが色めきだった。
ランプロン伯も、してやったりの笑みを浮かべている。そう、この場にラフィーナが呼ばれている理由が、まさにこれだった。
ヴェールガの聖女、ラフィーナに認められてしまったなら、もは

や、エメラルダがどれほど抗議したところで、この縁談は止められないから。サンクランド貴族のみならず、周辺国からお客を呼んでいるのも、それを目撃させるため。

既定事実を作ってしまうことこそが、このパーティーの目的だったのだ。

そうして、再びランプロンが話し始めようとした……まさにその時だった。

「サンクランド王国とティアムーン帝国……、大陸を代表する二か国の絆が深まるのは、本当に素晴らしいことだわ。それは、きっとミーアさん、あなたのしようとしていることを助けることにもなるでしょう」

はて……？　しようとしていること？　と首を傾げそうになるミーアであったが、さすがにすぐに気付く。

ミーアがしようとしていること、つまり大飢饉の際の食糧維持である。

なるほど、ミーアはたしかに、入学式の挨拶で、食糧を融通しあうことを訴えかけていた。

それをなすために、サンクランドと誼（よしみ）を結んでおくことは、悪いことではないだろう。

――シオンの性格を考えれば、食糧支援にノーとは言わないでしょうけれど、それでもエメラルダさんの婚姻関係があれば、より関係性の強化に繋がるはず……。そう考えると、今回の縁談もそこまで悪いことではないかもしれませんわね。どうせ、大飢饉が起きてしまえば権力闘争などやっている余裕はないですし……。

などと考えるミーアである。が……、そんな甘い話があるだろうか？

ルードヴィッヒとラフィーナとアンヌ……、過激なるミーアファン三人の描き出した構図が、そんな程度で収まるはずが、あるだろうか？　あり得るのだろうか……？

まぁ、言うまでもなく、そんなことはあり得ないのである。

「聞きましたよ、ミーアさん。ペルージャン農業国では、ずいぶんと活躍したって」
続くラフィーナの言葉。けれど、それに答えるのはミーアではなかった。
「おお、それはもしや、ティアムーン帝国が食糧の備蓄を増やしているという件ですかな？」
サンクランド貴族の一人が口をはさむ。すかさず、他の者が聞こえよがしに言った。
「それそれ。我らも気になっていたのです。ティアムーンが食糧を溜めこみ、侵略戦争を企んでいるのでは、と……心配する声がありましてな」
「あら、その件ならば、すでに陛下に……」
と、その時、ミーアは気付く。
音もなく自分に歩み寄ってきた者、自らの忠臣ルードヴィッヒのことに。
そうなのだ。今回のミーアはよく働く忠義の腕だけではない。きちんと思慮深い頭も持ってきているのだ！
……ルードヴィッヒがミーアの頭だとすると、ミーア自身はなにをしているのか……などと小さな疑問が生じるわけだが、まぁ、それはさておき……。
――うむ、そうですわね……。わたくしよりも、ルードヴィッヒのほうが上手く説明してくれるでしょう。
なにも、ミーア自らが弁解する必要はないのだ。下手なことを口走らないように気を遣うのは疲れるし、自らの知恵袋がそばにいるのだから使わない手はない。
「そうですわね。その件に関してはいろいろと誤解があることは知っておりますわ。ちょうどここに、わたくしの信頼の厚い家臣、ルードヴィッヒがおります。その件に関しては彼に説明していただきましょう」
ルードヴィッヒならば誤解の余地のない完璧な説明をしてくれる

だろう……と、そう期待してのことだったが……。ミーアのその期待に、ルードヴィッヒは完璧に応えた。
彼は……、誤解の余地のない答えを、その場で披露したのだ。

ミーアからの委託を受けたルードヴィッヒは一つ頷くと、
「ミーアさまが、ペルージャンに行かれた理由……それは」
クイッと眼鏡を押し上げて言った。
「飢饉の際に、国という垣根を超えた食糧の相互援助を実現すること」
ミーアは腕組みし、満足げに、うんうん、と頷く。
「そして、それを実現するための組織を、いくつかの商会の協力を得て作ること」
ミーアは、腕組みしたまま……うん？　と首を傾げる。
「協力を依頼する商会はフォークロード、そして、大商人コーンローグ」
その名に、周囲の貴族がどよめいた。
「あの、強欲なコーンローグの協力を取り付けたと？」
それだけならば、むしろ批難の対象となることだったかもしれない。シャローク・コーンローグの手法は時に強引で、多くの者たちの恨みを買うようなやり方だったからだ。けれど、
「いや、コーンローグだけではない。フォークロードも協力するとなると……」
フォークロード商会は、規模こそコーンローグに及ばないものの、まず良心的で堅実な商会といえた。周辺国からの評価も悪くはない。
「しかも、あの二つの商会は、最近、仲違いしていたはずだが……」
コーンローグが敵対的な行動をとっていたはず……、と彼らは首をひねるばかり。されど、もしもその両者がミーアに協力するとなると、おのずと一つの結論に至らざるを得ない。
すなわち、ミーアがその対立を収め、なおかつ、自らの協力者として取り込んでしまったということ……。

帝国の叡智を噂でしか知らなかった者たちは、慄然とした驚きに支配される。そんな彼らを完膚なきまでに叩きのめすように、ルードヴィッヒは止まらない。

「ミーアさまは、この大陸から飢餓をなくされるために、そのような組織を立ち上げることをお考えになられたのです。そのために、ペルージャン農業国に行かれた」

「ペルージャン……、帝国の属国の？」

首を傾げる者たちに、ルードヴィッヒは頷いた。

「そう。そのような批判があるのは事実。されど、その解消は楽ではない。なぜならば、ペルージャンは軍を持たぬ国。邪な考えを持つ国に侵略を受ければ、簡単に屈してしまう。ゆえに、ティアムーンの軍事力が必要であった。されど……、ミーアさまはそれをよしとしなかった」

ルードヴィッヒは、いつになく雄弁で、饒舌だった。朗々と自らの主の功績を語る、それがなんだか楽しくて仕方なかった。

湧き上がる誇りを胸に、ルードヴィッヒは高らかに言った。

「だからこそミーアさまは、ペルージャンが行くべき姿をお示しになられたのです。武器を取って戦うのではなく、敬意をもって戦う方法……。ペルージャンに、その組織の本拠地を置くことにより……、身を守る術をペルージャンに与えたのです」

食糧不足は、どこの国にでも起こるもの。その際に、助けてくれる国に誰が敵意を抱けるだろう？　そのような国に、邪なる者が攻め入った時、誰が助けずにいられるだろう？

「ミーアさまは、未だかつて誰も考えなかった飢餓と戦うための組織を、国を超えた組織を、ペルージャンに作ろうとされているのです」

ルードヴィッヒの声が止まったのに合わせるようにして、

「素晴らしいわ。ミーアさん……。あなたは私の誇るべきお友だち。いいえ、私にはもったいないぐらいだわ」

ラフィーナが声を上げた。

ミーアの功績に対して、ヴェールガの聖女ラフィーナが、太鼓判を押した形になったのだ。
それこそが、ルードヴィッヒの策。
端的に言ってしまえば、それは、サンクランドの『正義』に対する攻撃だった。
ペルージャンにおいて、ミーアが成したこと、これから、成そうとしていること……、出来上がる組織とは、なにか？
それは平和の組織。飢餓という人類共通の敵と戦う、『正義』の組織。
「国を超えた正義をミーアが成し遂げようとしている」と、ルードヴィッヒは言っている。
その正義は……「サンクランド国王の公正なる統治」に劣らない……否、むしろ勝る正義。
ランプロン伯をはじめとした、サンクランド貴族に対し、正義はサンクランドのほかにもあると提示し、その上で、ルードヴィッヒは問うたのだ。
この正義と対立するのか？　と。飢餓と戦うという否定のしようもない正義を成そうとするミーアに、敵対するつもりか？　と。
できるはずがない。
そして、それができない以上、グリーンムーン公爵令嬢と第二王子との婚姻は、むしろミーアに優位に働くのだ。サンクランドは正義の国。ゆえに、ミーアが成そうとする圧倒的な正義に、協力しないわけにはいかないから。
ルードヴィッヒはサンクランドが大切に抱えてきた価値観、正義をそのまま掠め取って見せたのだった。
「……はぇ？」
まぁそんなこと、当然、ミーアは承知していなかったわけだが……。

第百二話　懐かしき忠臣（クソメガネ）の面影

「素晴らしいわ。そこまで民のことを……、それも、帝国だけじゃない。この大陸に住まうすべての民のことを思っているだなんて……。きっと、サンクランドとの絆は、ミーアさんの成し遂げようとしていることの、助けとなることでしょう」

ルードヴィッヒの後を継いで、ラフィーナが朗らかに言った。

ノリノリだった！　気合が満ち満ちていた！

だって、悔しかったのだ。

今回、お友だちであるミーアから頼ってもらえなかったことが……。

ミーアに遠慮されたことが、とってもとっても悔しかったラフィーナである。

なので、ミーアのために非常に気合が入っていたのである。

「私も心から誇らしく思うわ。ミーアさん、あなたのなさったことは、誇るべきことだわ。ぜひ我がヴェールガの力も使っていただきたいわ」

そう言って、ラフィーナはミーアの手を取った。大絶賛である！

これには、サンクランド貴族も慌てる。

なにしろ、聖女ラフィーナにはコネは使えない（と世間一般では思われている。実際にはお友だちのために、一肌も二肌も脱いでしまいたいラフィーナであるが……それはさておき）。貴族の権威付けに使われることを、彼女は嫌悪しているからだ。

そんなラフィーナがミーアの偉業を認めたのだ。その意味は、彼らにとってとても大きい。それは聖女が、ミーアの正義を認めたことと同義であるからだ。

一方で……、

――はて……、これは……？

ミーアは困惑していた。
ルードヴィッヒやラフィーナの様子から見て、恐らくはこれが用意していた策なのだろう。せっかくその問題は先延ばしにして、エメラルダにちょっと頑張ってもらおうかなー、と思っていたミーアとしては大いに焦ってしまったわけだが……。
けれど、それもすぐに困惑に取って変わられる。
なぜって、だって……、その組織の話、今、関係なくない？　と思ってしまったからだ。
たしかに、サンクランド貴族の前で、ペルージャンに行ったことの事情を話す必要はあるわけだが……、それと、縁談による敵対勢力の強化と妨害に、なにか関係があるのだろうか？
――どうなっておりますの？　ルードヴィッヒはいったいなにを……？
と、そこで、ミーア、ようやくピンとくる。
――ははぁん、なるほど……。これは、つまり次善の策、ですわね？
要するに、ルードヴィッヒとしても、今回の縁談をなんとかすることはできなかったのだ。だからこそせめて、その組織のために使えそうな人材を発掘しようと、そう考えたのだ。
――サンクランドにも協力させ、組織に必要な人材も出させようと……そのような考えに違いありませんわ！
……いや、全然違うのだが……。
――そのために、ラフィーナさまにも協力を依頼したと……。
この場にはサンクランドだけでなく、他国の要人も来ている。そのような場で、ラフィーナのお墨付きがもらえたことは非常に大きい。これでは協力せざるを得ないではないか。
――それにしても、ルードヴィッヒ、裏でそんな組織を作っておりましたの……。
ふぅむむ、とうなってから、ミーアは思う。
――わたくしは、まったくあずかり知らぬことでしたけれど、国

を超えた食糧の相互援助を目的とした組織……、それがあれば、この先、帝国が飢饉に襲われたとしても助けてもらえるでしょうし……。食糧さえあれば、わたくしが断頭台に送られる可能性も低くなるはず……。ふむ……、最初は、とんでもないことを言い出したと思いましたけれど、これは、なかなか。

感心するミーアの前で、ルードヴィッヒは誇らしげに語る。

「便宜上、我々は、提唱者であるミーアさまのお名前をとって、ミーアネットと名付けております」

――そう、ルードヴィッヒ、裏でそんな悪だくみをしておりましたの……。

なんだ、ミーアネットって……。ふざけたネーミングに、思わず頭がクラッとする。

――とりあえず、組織の名前は変えさせるとして……。しかし、ただの負け戦とせずに、この場を最大限に利用する一手を打つのはさすがはルードヴィッヒですわ。

そもそも、負け戦とはいっても一時のこと。今は敵の思惑の通りに事が進んだとしても、エメラルダ次第では状況はどうなるかわからない。

――だからこそ、わたくしは先延ばしにしてしまおうと思ったのですけれど、ルードヴィッヒはこの状況をうまく利用しようとしたわけですわね。ふふふ、さすがは、あのクソメガネですわ。あの滅びかけの帝国の中でもあがいて、最善策を立て続けた男なだけありますわ。

絶望の帝国末期において、彼の指示のもと、国内を駆け回ったことを懐かしく思う。

断頭台へと転がり落ちていく中にあっても、ミーアはあがき続けた。そして、その傍らにいたのが、クソメガネだったのだ。

――ならば、此度はルードヴィッヒの策に乗って踊るのも一興。あの頃に比べれば、この程度の負け戦、どうということもありませんし、むしろ、懐かしいぐらいですわ。

気合も新たに、ミーアは一歩前に出た。
「どうもありがとう、ルードヴィッヒ。とてもわかりやすく話してくれましたわね」
それから、ミーアはラフィーナに微笑みかける。親密さをアピールするのが半分、後の半分は味方をしてくれたことへの感謝を込めて、である。
「ラフィーナさまにも、いずれお話しして協力していただかなければ、と思っておりましたけれど、こんなにあっさりと賛同していただけて、嬉しいですわ」
ほかならぬラフィーナが認めたことであることを強調したうえで、ミーアはサンクランドの貴族のほうに向き直った。
「我が臣下の言った通り、わたくしは、大陸に飢餓に対処する仕組みがあればいいと考えておりますわ。そして、ぜひ、各国には協力していただきたいと思っておりますの。無論、サンクランドの協力にも期待しておりますけれど……」
ルードヴィッヒの立てた基本方針、人材確保・協力者の確保のために全力を尽くす。
無論、有象無象に協力という名の介入を許せば、組織は混乱するかもしれない。されど、今回の場合、ミーアはそれを心配していない。
なぜならば……、そう、ラフィーナの存在があるから。
大陸のいくつもの国に影響を持つラフィーナである。しかも、サンクランドの王権は、中央正教会の神聖典を、強い根拠としたものなのだ。
場合によっては、ラフィーナの影響が最も大きい国と言ってしまっても過言ではないわけで……。
そんな国の貴族が、もしも下手な介入をしてきたら、どうするか……？
無論、ミーアはチクる。ラフィーナにチクって、お説教をしてもらうのだ！

もしそんなことになれば、その貴族のサンクランド内での立場は失墜する。それを恐れるならば、彼らに、下手な悪だくみなどできようはずもない。

――さすがはルードヴィッヒですわ。そのためのラフィーナさまの協力だったんですわね！

微妙にすれ違う主従。そんな二人の勘違いの流れに……、

「お待ちいただきたい！」

巻き込まれる者がいた！

第百三話　ミーア姫、ちょっぴり訛（なま）る

「それは、我らサンクランド貴族に、皇女殿下の下風に立てと言っているのですかな？　そのミーアネットという組織の指導者たるあなたの……」

騒然となる会場に、厳然たる声が響いた。

先ほどまで、司会の役割を担っていたランプロン伯である。

彼は横目に、自らの王の姿をうかがう。が、サンクランド王エイブラムが口を開く様子はなかった。

当然だろう。皇女ミーアが示したヴィジョンは民のためを思うもの、それは文句のつけようのない正義であったからだ。

だが、無論、ランプロンとしては、それを認めるわけにはいかない。

――もしも、ミーア姫があの臣下の言ったことを、本気で考えているのだとしたら……、我々は決して敵対できない。敵対することは、我らの依って立つ正義を否定することになる。

公正・公平な王の統治により民の安寧を守ること……、そのために正義たるサンクランド王の統治を広げること、それこそが彼らの主張の核だ。それ故に民の安寧を、と訴えるのであれば、ミーアに敵対するようなことは決してできないのだ。

――いや……、それ以上に……。

ランプロンの背筋に寒気が走った。彼は、ミーアの内に、さらなる危険を見出していた。

それは、皇女ミーアのありようが、サンクランド国王に匹敵する……否、それに勝る正義ではないか？　ということだ。

保守派の訴えの主眼は「サンクランド国王こそが最も正しく民を統治できる」というもの。ゆえに、他国の王侯貴族は、サンクランド国王に劣っていなければならない。

それなのに、もしも、皇女ミーアが、エイブラム王に匹敵するほどの善良で公正な統治者の資質を持っていたとしたら……？

ランプロンは、歯噛みしつつも懸命に打開策を探る。

――くっ、帝国の叡智などと……、ただの噂話に過ぎないと思っていたが……。

グリーンムーン公爵令嬢の友人だと言い張って乗り込んできた行動力、パーティーを逆手に取ったやり方、そしてなにより、完璧な綺麗事を実現してのける、その実行力……。

すべてにおいて、ランプロンの予想を大きく超えた行動だった。

それでもなお、彼はあがく。あがかないわけにはいかない。

なんとか、ミーアの言っていることにケチをつけてやろうと……粘ろうとして、

「はて……わたくしの下？　わたくしが組織の指導者……？　そんな、めん……の程知らずなこと、わたくしは申しませんわ」

ミーアは、おほほ、と笑みを浮かべて、

「組織の長になるべきは、わたくしでもなければ、ペルージャン国王でもない。無論、サンクランド国王でもないですし、ラフィーナさまでもない。それは、その道の専門家がやるべきですわ」

「つまり……」

「フォークロードかコーンローグ、どちらかからの推薦があった人物に担当していただくのがよろしいのではないかしら？」

ミーアの答えは簡潔で、合理的だった。

流通に通じた者、商人たちであれば、輸送ルートなどにも詳しい。どこの国にどの程度の食糧があるかという情報も持っている。そのような専門家が長となるべきであって、自分はするつもりはない、と、ミーアは言った。

「その栄誉を他の者に譲ると？　他国の平民にさえ、譲っても構わないと……そうおっしゃっているのですか？」

「わたくしは、こう思いますの、ランプロン伯。いつでも、どんな時でも美味しいものをお腹一杯食べられることは、とても幸せであ

ると。すべての人が明日食べるパンの心配をせずにいられるということは、どのような栄誉にも勝ることではなくって？」
文句のつけようのない完璧な答え。強いて言うならば、「身の程知らず」が若干、訛っていたぐらいだが……。
――それを突いたところで、無様なだけだ。見苦しい愚か者に我が身を堕とすだけだ。
奥歯を食いしばり、彼は顔を上げる。と……、そこには、慈愛に満ち溢れた笑みを浮かべる少女の姿があった。その着飾ったドレスは、さながら、彼女の清らかで純粋な心を表すかの如く、淡く輝いて見えた。
「飢えとは国を殺し、民を殺し、我ら帝室、王族、貴族を殺すもの。それは、我らすべての敵。であるならば、その件については、すべての者はともに手を取り合うことができるのではないかしら？」
それを聞いて、ランプロンは、ふいに力が抜けるのを感じた。
ミーアは後世に残るであろう偉業を成し遂げようとしているのみならず、その担い手として、敵対しようとした者にさえも手を差し伸べようとしているのだ。
もはや彼の中には一片たりとも、ミーアを敵とする理由が見つからなかった。戦力差に絶望したのではない。戦う理由を喪失させられたのだ。
そして、同時に理解する。
かつては、自分たちと同じく、「公正なるサンクランド王の統治による、民の幸福」を訴えていたシオンが考えを変えたのは、この帝国の叡智と出会ってしまったからである、と。
「もう良いだろう、ランプロン伯。みなも異存はあるまい」
そこで、ようやく口を開いたのは、エイブラムだった。彼は眩しそうに目を細めて、ミーアのほうを見てから、
「ミーア姫、貴女の深い智謀には感銘を受けた。我らもぜひ、貴女の描くヴィジョンに協力させていただこう」
それから、堂々たる笑みを浮かべ、エイブラムは言った。

「そして、改めて言わせてもらおう。どうか、我が息子、シオンの友として、末永い付き合いをお願いしたい」
「ええ、それはもちろん。ですが陛下、友として、などと他人行儀ですわ。エメラルダさんはわたくしの親族。エシャール殿下との縁談が成れば、我が帝室とサンクランド王室には、血の繋がりができるではありませんか」
それから、ミーアは改めてみなのほうに向き直る。
「そして、話が逸れてしまいましたわね、今日の主役はわたくしではなく、エシャール殿下と、我が友エメラルダさんでしたのに。わたくしは、お二人の縁談を心から祝福いたしますわ。どうか、それがつつがなく行われますように、お祈りしておりますわ」
そうして、ミーアは朗らかな笑みを浮かべるのだった。

第百四話　種火

――相変わらず、すごいな。ミーアは……。
シオンは、思わず感嘆のため息をこぼした。
――ランプロン伯はまだしも、父上とすら、まともにやりあうなんて……。
改めて、自分と彼女との差を実感する。
――帝国の叡智……か。
「やあ、シオン。しばらくだね」
その声に、シオンは思考の海から浮上する。顔を上げると、そこには旧知の友人の顔が見えた。
「ああ、アベルか。ふふ、学校で再会を喜ぶはずが、いろいろと上手くいかないものだな」
セントノエルの新学期はすでに始まっている。本来であれば、今頃、シオンはヴェールガ公国にいるはずだったのだが、今回はこのパーティーのために出発を遅らせたのだ。
王侯貴族が集まるセントノエルでは、この手のことは日常茶飯事だ。母国の重要行事などに参加する場合には、休学が許されているのだ。
「この手の行事は仕方がないさ。それに、生徒会の面々と、こうして母国で会えるのは、結構、新鮮なんじゃないか？」
肩をすくめるアベルに、シオンは苦笑する。
「たしかにな。もっとも、家族に紹介するというのは、いささか気恥ずかしいものがあったが……」
「兄上？　その方は……」
っと、近づいてきたエシャールが首を傾げる。
「ああ。覚えていないか？　お前が小さい時に一度会っていると思うが。レムノ王国の第二王子のアベル殿下だ。セントノエルでとも

に生徒会の務めを担っている……俺の友だ」
「君に友と呼んでもらえるとは光栄だな、シオン」
アベルは、少しばかり気恥ずかしそうな顔をしてから、改めてエシャールのほうを見た。
「やあ、エシャール殿下。アベル・レムノだ。この度の縁談、我がレムノ王国を代表してお祝いを申し上げたい」
「ありがとうございます、アベル殿下。突然のことで困惑していますが、サンクランドのため、励みたいと思っています」
その答えを聞いて、アベルは目を丸くした。
「はは。すごいな、エシャール殿下は。ボクが君ぐらいの年には、そこまでのことは考えられなかったよ」
そうして朗らかに笑うアベル。その顔には、卑屈さはまるで見られない。
セントノエルに入学したての頃には、どこか、投げやりな雰囲気が見え隠れしていたものだったが……。
――変わったな、アベルは。兄君に対する劣等感から解放されて、堂々としている。
剣の腕前のみならず、勇敢さや人柄も認めている友の姿を見て、シオンはふと思う。
この友人のように、弟もなれるだろうか？　と。
この出会いが、エシャールに良い影響を与えてほしいと思う。アベルとの出会いだけではない。ミーアや彼女の臣下、友人たち……。ミーアを取り巻くすべてが、きっと、エシャールには良い刺激になるだろうと思う。
エシャールも自分と同じように、凝り固まった価値観を壊してもらえたら……、その時は……。
「しかし、すごいな……ミーアは」
アベルの言葉に、シオンは我に返る。
「ああ……。まったくだな。いつも、彼女には驚かされるな」
素直に頷き、シオンはミーアのほうを見た。父と対等に渡り合う、

自分と同い年の少女のほうを。
「ミーアのあの構想は、大陸の歴史を変えるだろうな……」
それは、飢饉に対する対策という側面だけではない。人々の意識すら変えるものだ。
大陸には、広く中央正教会の価値観が敷かれている。それにより、国は違えども、なにが正しく、なにが間違っているかの、一定の基準は共有化できている。
もちろん細かな部分では違ってはいても、例えば「困っている人は助けなければならない」であったり「権威を与えられた貴族は、民の安寧を守らなければならない」などの、基本的な道徳観念は一致しているのだ。
……けれど、それはあくまでも建前だ。
遠き異国の地に住まう者たちが、本当に自分たちと同じなのか？
もしかしたら、悪逆な鬼が化けた者ではないのか？　という漠然とした不安は、常に人々の心に残っている。
会ったことがないから……、実際に話をすることなどないから……、どうしても、信頼できない部分があるのだ。
ゆえに、他国人は容易に未知の敵へと変貌する。
いかに、同じ神を信じ、同じ正義を持つ、同じ人間であると、声高らかに言ったところで、それをどんな時にでも信じるというのは、なかなかに難しいことなのだ。
しかし、もしもミーアの構想が実現したら……、世界は真の意味で変わるのかもしれない。
人や物の流れはより太く強固になり、国と国とではなく、人と人との繋がりが築かれるようになるかもしれない。遠き地に住まう者も、自分たちと同じ人であると、実体験として知る、そのような機会が増えるのだから。
「しかし、ミーアは逆の意味で身の程を知らないな」
「というと？」
「あのような組織のトップに相応しい者は帝国の叡智以外にはいな

いだろう」
シオンの指摘に、アベルは深々と納得の頷きを返した。
「ああ、そうだな。それは本当にそうだ。しかし……」
と、そこで、アベルが小さく笑った。
「どうかしたのか？」
「いや、なに。さすがにミーアも緊張したのか、先ほどはずいぶん訛っていたなと思ってね」
完璧な賢者としての仮面の裏から、ちょっぴり可愛らしい素顔が覗いたようで、たしかに先ほどの場面は微笑ましいもののように思えた。思えたのだが……。
「どうかな。あれは、わざとだったのかもしれないぞ？」
シオンはそう言って、肩をすくめた。
「どういう意味だい？」
首を傾げるアベルに答えたのは、意外にもエシャールだった。
「〝完璧な人間には誰もついては来ないもの〟……と、そういうことでしょうか？　兄上」
「ああ、そうだ。あるいはミーアであれば、わざと隙を見せることで相手の心をつかむ、ということもやってのけるのではないか、と思ってな」
その言葉に、エシャールは不思議そうに首を傾げた。
「そのようなこと、あり得るでしょうか？」
「彼女ならば、十分にあり得ることだ。そのぐらいの計算はやってのけるだろう」
それから、シオンはエシャールの目を見つめて言った。
「ミーアがあのような構想を立てているのであれば、お前とエメラルダ嬢の縁談は、きっと意義深いものになるだろう。サンクランドの王子として、立派に役目を果たすのだぞ」
期待を込めて、シオンは言った。
シオンは知っている。エシャールがもがいていること。サンクランドの王子として立派に振る舞えるように、努力を重ねているけれ

ど、兄である自分と比べて傷ついているということも。
――俺を目指すのではなく、エシャールにはエシャールのやり方があるのではないかな。俺と同じになる必要なんていないんだ。
資質は一人ずつ違うもの。シオンにできることとできないことがあるように、エシャールには、エシャールにしかできないことがある。
ミーアの構想が、それに気付くきっかけになったらいいと、シオンは思っていた。そして、ミーアの構想に二人で協力することができたら……。その役割の一部を、兄弟でともに担うことができたら、それは、どれだけ素晴らしいだろう。
そんな、純粋な願いを込めて、シオンは言った。
「俺も、ミーア姫と協力し、できる限りのことをしよう。サンクランドの王子として、ともに役目を果たそう」
「はい……。シオン兄さま」
エシャールは小さな声で言い、それからうつむいた。
その表情は、誰にも見えなかった。

第百五話　ＦＮＹの世界

突然のランプロン伯の介入。その言葉に、ミーアは、ポカーンっと首を傾げた。

「はて……わたくしの下？　わたくしが組織の指導者……？　そんな、めん……の程知らずなこと、わたくしは申しませんわ」

おほほ、っと笑みを浮かべつつ、ミーアは内心で冷や汗をかいていた。

――あっ、危うく『めんどくさい』、とか言いそうになってしまいましたわ……。い、いけませんわ、気合を入れなおしませんと。

新たに生まれた流れに注意しつつ、ミーアは思案する。

――身の程知らずというのは良い謙遜の言葉ではありますけれど、無責任のそしりを受ける可能性もありますわね……。

通常、この手のことは、言い出しっぺが責任を負うのが当然。ということは、組織の責任はミーアが負う必要があるかもしれない。しかし、それをやるのはあまりにも面倒……。なんとか自分がそれをしなくて良い理屈を考え、考え――閃いた！

「フォークロードかコーンローグ、どちらかの推薦があった人物に……」

そう言いながら、ミーアは思わずほくそ笑む。

――これは、我ながら妙案ですわ。万に一つも帝国から人を出せば文句が出るかもしれませんけれど、他国人、しかも専門家である商人の推薦を受けた人物であれば、納得感はあるはずですわ。なにか失敗したとしても、わたくしが責められることもございませんし……。

「その栄誉を他の者に譲ると？」

ミーアの言葉に、驚愕の表情を浮かべるランプロン伯。その言葉に、ミーアは、ぴくりと眉を動かした。

「栄誉……」
口の中で、その言葉を転がして、わずかばかり苦い気持ちになるミーアである。
ミーアは思っている。
“帝国皇女”というのは、それはそれは栄誉な立場であると。
世間的には、大国ティアムーンの皇帝の娘というのは、きっとこれ以上ないぐらいに栄光に溢れているものだろう。栄誉ある存在、それが自分であると、ミーアは思っている。
……でも、ミーアは知っている。
栄誉、栄光、高貴な立場……、そんなもの断頭台を回避するのに、なーんの役にも立たないのだと。ぶっちゃけ、そんなものよりは、足の速い馬のほうが逃げるのに役に立つぐらいだ。栄誉など、ニンジンケーキに入れて、荒嵐に食わせてしまえばいいのだ。
それでは、なにがミーアを断頭台から遠ざけるのか？
ミーアは、首を落とされることによって得た識見を、物わかりの悪い子どもを諭すような口調でランプロン伯に教えてあげる。
「わたくしは、こう思いますの、ランプロン伯。いつでも、どんな時でも美味しいものをお腹一杯食べられることは、とても幸せであると」
いつでも、美味しいものをお腹一杯食べられること……、それは、どのような栄誉にも勝る幸せだ。今日食べるケーキに事欠かず、明日食べるキノコ鍋の心配をせずにいられることは、とても幸せなことなのだ。
そして、美味しくケーキを食べるには大切なことがある。それは、周りの人もまた、お腹が満ちていること。城下に空腹にあえぐ人を見つけてしまったら、いかに甘いケーキでも美味しくは食べられない。
「すべての人が明日食べるパンの心配をせずにいられるということは、どのような栄誉にも勝ることではなくって？」
栄誉以上に、断頭台の回避に役立つことは、人々が満腹であるこ

となのだ。
明日食べる物の心配なく、今日お腹一杯食べること……、それこそが栄誉に勝るものだ。断頭台を遠ざけるものだ。
人は、満腹になるとどうなるだろうか？
答えは明白。眠くなるのだ。
夕食の後のベッド、その誘惑は実に甘美。ミーアも幾度となく、その誘惑に晒され、完敗を喫している。
そして、お腹一杯食べた後、すぐに眠るとどうなるか？
答えは、これも簡単……重くなるのだ。
牛のように、体も……、心も重くなるのだ。
そうして、細かなことはどうでもよくなる。明日もまたお腹一杯美味しいものを食べて、寝られるなら、まぁ、なんか、どうでもいいかなぁー、などと思ってしまうのだ。
自分がそうなのだから、きっとほかの人もそうに違いないと確信するミーアである。
そして、その世界は、たぶん断頭台からは最も遠い。
それこそが、ミーアの理想。すべての人が重くなる……それが理想なのだ！
ＦＮＹの世界こそが、ミーアの理想なのだ。
そうして、ミーアは笑みを浮かべる。できるだけ、友好に見えるような笑みを浮かべたうえで、言う！
「飢えとは国を殺し、民を殺し、我ら帝室、王族、貴族を殺すもの。それは、我らすべての敵。であるならば、その件については、すべての者はともに手を取り合うことができるのではないかしら？」
敵は飢えである。民衆にとっても、貴族にとっても、王族にとっても。
当然、サンクランドにとってもティアムーンにとっても……。
であれば……、敵の敵は味方である、とミーアは言外に訴える！
抜け目のない味方アピールにより、あわよくば、サンクランドの優秀な人材を、組織にゲットしようという魂胆である。

そして、その狙いが上手くいったことを、ミーアは確信する。なぜなら、
「ミーア姫、貴女の深い智謀には感銘を受けた。我らもぜひ、貴女の描くヴィジョンに協力させていただこう」
サンクランド国王、エイブラムのお墨付きをもらえたからだ。
それを聞き、ミーアは、若干ドヤァ顔になりつつも、その場に集う人々のほうに向きなおり、言った。
「そして、話が逸れてしまいましたわね、今日の主役はわたくしではなく、エシャール殿下と、我が友エメラルダさんでしたのに。わたくしは、お二人の縁談を心から祝福いたしますわ」
焦点をエメラルダへとシフトさせる。
ミーアは、対抗勢力の者たちにアピールしたのだ。
なるほど、たしかにエメラルダたちの縁談を阻止することは今はできない。だから、一時的な負け戦は認めよう。けれど、勝負はまだわからない。エメラルダの動向次第では、状況はどこにだって転がるのだぞ、と。勝負はこれから、エメラルダの双肩にかかっているのだぞ、この野郎！　と……、言ってやるのだ。
「どうか、それがつつがなく行われますように、お祈りしておりますわ」
やれるもんなら、やってみろ！　と、強がって見せたのだ。
そうして、ミーアは優雅に踵を返した。
向かう先は……、豪華な料理が並んでいるテーブルのほうだった。
――ああ、頭を使いすぎて糖分を使い果たしてしまいましたわ。ふらふらしますわ。
過剰な頭脳活動によって、すっかり体内の糖分を払底させてしまったミーアの体が、糖分を求めていた。
ミーアの理想「ＦＮＹの世界」は今まさに、グッと近づいたのだ。
……少なくともミーアには。

第百六話　魔性の乙女ミーアの熱い吐息

――食べ物……、美味しいケーキなどが望ましいですわね。どこかにあれば……。

ミーアは、きょろきょろと会場内を見回す。

あたりには、未だにミーアが生み出した衝撃の余波が残っていた。ランプロンの司会により、パーティーは会食とダンスの時間へと移ってはいるものの、どこかそわそわと落ち着きがなかった。ひそひそ話をする者、上の空の顔でダンスに興じる者、さまざまだ。

パーティー会場はおもに、ダンスをするためのエリアと食事や飲み物の乗ったテーブルエリアに分かれていた。どうやら、ワイングラスを片手に星を見るという趣向らしく、テーブルエリアはバルコニー寄りに作られていた。

ミーアはとりあえず、友人たちの姿を探そうと思っていたのだが……ふいに近づいてくる者の姿が目に入った。

「やあ、ミーア。お疲れさま」

それは、ワイングラスを両手に持ったアベルだった。

「あら、アベル。ありがとう、持ってきてくださったのね」

ミーアはグラスを受け取り、軽く口をつける。それは、リンゴをベースにした飲み物だった。ほのかに甘いリンゴの香り、さわやかな酸味を舌の上で転がしてから飲み込めば、冷たい感触が喉を潤してくれる。

ジンワリと脳内に糖分がしみ込んでくるのを感じて、ほふぅっとため息を吐いたミーアだったが……、ふと、グラスを見つめて考えてしまう。

――もしや、シオンへの毒も、こうして飲み物の中に混ぜられたりしたのかしら？

そうなのだ。今回のミーアのメインミッションは、シオンの暗殺

を防ぐこと。それは未だに続いているのだ。先ほどは、ルードヴィッヒの策に乗って上手く立ち回れたものの、それは、シオンの暗殺には関係のないこと。

――さて、どうしたものかしら……。

手近にあったマカロンを、さく、さくさく、と食べて糖分補給。そうしている最中にも周囲を観察。

テーブルエリアには無数の食べ物が用意されていた。もしも、あの中に毒を混入されたら、防ぐのはなかなかに難しい。できれば、今夜はシオンには何も食べず、飲まずにいてもらえれば一番いいのだが……。

「考え事かい？　ミーア」

ふと顔を上げると、アベルが少し心配げに見つめていた。ミーアはその顔を見て、なんとなく思う。

――しかし、こうして見ると、アベルって、すごくまつ毛が長いですわね。まっすぐで、澄んだ、すごく魅力的な目をしておりますわ。

……恋愛脳は平常運転なのだ。

そうして、ぽげーっと見惚れていると……。

「あー、ミーア。そんなに見つめられると、少し照れてしまうんだが……」

アベルは、若干、気まずげに、目を逸らした。

「あ、ええ、ごめんなさい。ええ、少し気がかりなことがございまして、ボーっとしておりましたわ」

あわわ、と言い訳しつつ、ミーアは思う。

――これは、困りましたわ。後で、ダンスを申し込まれたら、冷静でいられないかも……、あ、そうですわ。ダンス！

刹那、ミーアに天啓が閃く。

――シオンをダンスに誘って飲み物を飲む隙を与えないようにするのはどうかしら……？

いかにシオンがなんでもこなせるパーフェクト超人であるとはい

え、さすがにダンスをしながら、飲み物を飲むことなどできはしない。当然、食べ物だって無理だろう。
――まず、わたくしがダンスに誘ってやれば、シオンも断わりはしないはず。あとは、あの男のことですわ。パートナーには事欠かないはず。ダンスとダンスの合間に飲み物を取りに行ったりはするでしょうけれど、その時間を限定することができるはずですわ。となれば……。
ミーアはアベルのほうを見て、頭を下げる。
「ごめんなさい、アベル。今回はシオンの顔を立てるために、先にダンスをしてきてもよろしいかしら？」
ちょっぴり上目遣いになって尋ねる、と……。
「ん？　ああ、もちろんだよ。ダンスも外交の一環。シオンと仲が良いところを見せておくことは、君の対抗勢力の者たちにも牽制になるだろうしね」
アベルは柔らかな笑みを浮かべてそう言った。特になにも気にしていないというか、ごく当たり前のことのように、了承してくれた。
それにミーアは……、ちょっぴりモヤっとしてしまう。
――アベルったら、わたくしがシオンとダンスをするのに、なにも気にならないのかしら……？
私がほかの男の子とお話してるのに、ヤキモチを焼かないなんて、どういうこと！？　などという、めんどくさーい乙女心を燃やしてしまったミーアである。
モヤモヤ恋愛乙女なのである。
「アベルは、気になりませんの？　わたくしが、その……ほかの殿方とダンスをしても……」
と、そんなことまで聞いてしまう始末である。
対して、アベルは……実に真剣そのものの顔で、
「そうだね。気にならないと言ったら嘘になるかな……でも、ボクはもう、覚悟を決めたから。君に相応しい男になるって……」
その力強い視線に貫かれて、ミーアの胸がトックゥン！　と高鳴

った。
「アベル……」
「だから、君がもしほかの誰かに心を惹かれることがあったとしても、ボクはその相手に勝つよ。相手がたとえ、友人のシオンだって関係ない。必ず打ち勝って、そして君を振り向かせてみせるとも」
その堂々たる宣言に、ミーアは、ほわぁ、っと息を吐いた。かぁっと頭が熱くなり、ぽやーっとしてしまう。そんなミーアの背中を優しく押して、アベルは言った。
「だから、さぁ、気にせず行ってきてくれたまえ。シオンもたぶんミーアと踊ってからじゃないと、ほかの女性と踊れないと思うからね」
この場にいる高位の女性といえば、ミーアかラフィーナである。ラフィーナが一番手を務めることも考えられなくはないのだが、どうやら、遠慮しているらしい。
というわけで、シオンは貴族のご令嬢に囲まれつつ、笑顔で応対を続けていた。
たしかに、ミーアが行かなければ、始まらない雰囲気はあるが……。
「え……ええ。そうですわね」
大きく息を吸って、吐いて……、一度気持ちを落ち着けてから、ミーアは気分を切り替える。
――今は、シオンの暗殺阻止が一番大事。集中、集中ですわ！
そうして……ミーアを送り出した後、アベルは小さくため息を吐いて、
「……やれやれ、ボクもまだまだだな……」
思わずといった顔で苦笑いをする。ついつい、強がってしまったわけだが、実のところ、その内心はなかなかに複雑だった。
「ただダンスパートナーを譲っただけで、こんなにも動揺するとは……。自分に自信があれば、もっと余裕でいられるのかもしれない

が……。なかなかままならないものだ」
知らず知らずのうちに、純真な少年の気持ちを弄んでしまう、魔性の女ミーアなのであった。

第百七話　夢のようなダンス……そして

アベルのもとを後にしたミーアは、まっすぐにシオンのほうに向かった。
シオンの周りには、例のごとくご令嬢たちが人垣を作っていた。華やかな、色とりどりの花に囲まれたシオンを見て、ミーアは思わず苦笑する。
――まったく、あれをかき分けていくのだけでも一苦労ですわね。
などと、げんなりしていたのだが、幸いにもミーアの存在に気付くと、スゥッと引いて道を作った。それはまるで、二つに割れた海の中を歩く、古代の預言者のごとき姿だった。
シオンもこちらに顔を向け、それから笑みを浮かべた。
「やぁ、ミーア姫殿下」
「シオン殿下、よろしければ、一曲踊っていただけるかしら？」
ミーアは優雅な笑みを浮かべて言った。
「ああ、光栄だな、君のほうから誘いに来るなんて」
「あら、だって、あなたはこちらから誘わないと、こちらを振り向いてくださらないでしょう？」
「え？」
小さく首を傾げるシオン。からかうような笑みを浮かべて、ミーアは静かに手を伸ばした。
ミーアは知っている。ただ待っているだけでは相手は振り向いてはくれないということ。
待ち野伏は、有効な作戦ではないのだ！
スゥッと伸びた手を、シオンが優しく取った。そうして、優雅にダンス会場へとエスコートする。
――ふむ、相変わらず、憎らしいぐらいスマートですわね。
「では、姫。よろしくお願いします」

背筋を伸ばした後、自らの胸に手を当て、一礼するシオン。それを受け、ミーアはスカートの裾を軽く持ち上げ、
「ええ。シオン殿下。楽しみましょう」
っと、楽団の者たちが二人に気付いたのか、曲がフェードアウトしていき、しばしの間の後、ちょうど良いテンポのものになった。
「あら……？　これは……」
その曲は、ミーアも聞き覚えのあるものだった。ダンスの基礎を学ぶのに、よく使われる曲。要は、初心者向けの踊りやすい曲だ。
――ふむ、これは、気を遣われましたわね。帝国の姫と自国の王子とのダンスですし、万に一つも恥をかかせるようなことがあってはならないということかしら。
ミーアは視線を上げてシオンの顔を見る。と、シオンは困ったような顔で、苦笑いを浮かべた。
そう、最近では泳ぎに乗馬に料理に（……料理に？）、と、少々の浮気をしているミーアではあるものの、ダンスは得意中の得意中の得意。
どのような曲であっても、軽ーく踊りこなすことができるのだ。
「気遣いはありがたいですけれど、この際は無用であると、しっかり見せてあげる必要があると思いませんこと？　シオン」
「ふふふ、そうだな。それなら、帝国の姫殿下の名誉回復のために、一肌脱ぐとしようか」
そうして、二人は息を合わせて踊りだした。
サンクランドの王子とティアムーンの姫のダンスは、当初は好奇の視線に晒されていた。されど、それもすぐに、感嘆と羨望のまなざしにとって代わられる。
サンクランドの貴族たちは、シオンのダンス上手は知っていた。されど、その相手たるミーアの実力までは思いもよらなかった。
せめて腹いせに、ミーアのダンスを笑ってやろう、などと思っていた底意地の悪い者たちは、一様に口を閉ざした。
ずれることのない完璧なステップ、シオンの動きを読み、完璧に

合わせ、なおかつ、指先までも意識がいきわたったかのような美しいダンスに、思わずため息が漏れそうになる。
「あれが、帝国のミーア姫か……。なんと美しい」
やがて、曲が終わりかけたところで、ふいに、シオンは楽団の者たちに視線を送った。
それを受け、指揮者が一つ頷くと、指揮棒の動きを激しくする。
「あら？　これは……」
「一曲では君の名誉挽回とはいかないだろう。少し激しい曲もせっかくだから披露しておくというのはどうかな？」
「ふふ、別に構いませんわよ？　激しい曲でも静かな曲でもお付き合いいたしますわ」
ミーアは微笑みながら言った。
――ふふふ、むしろ好都合ですわ。この後、ほかのご令嬢とも協力して、シオンが食べ物を口にする隙を与えないようにすれば、今回のミッションはクリアですわ！
その後、数曲を踊った後、さすがに疲れたミーアは一休みすることにした。
すぐにほかの令嬢が誘いに来るだろう、と思っていたミーアであったのだが……。
「兄上、喉が渇いたのではありませんか？　どうぞ、これを……」
その間隙を突いてエシャールがちょこちょこ歩み寄ってきた。
――むっ！　怪しいですわ！
エシャールの動きに気付いたミーアは慌てて言った。
「あっ、し、シオン、もう一曲、どうかしら？　わたくし、少し踊り足りないですわ」
「ミーア？」
シオンはきょとんと首を傾げる。
「ああ、べつに構わないが、しかしアベルが……」
シオンはあたりを見回し、アベルの姿を探そうとしたようだったが……、ふいに、その顔に苦笑いが浮かぶ。

「いや、そうだな。譲ってばかりでは、なにも変わりはしないか」
それから、シオンはエシャールのほうに目を向けた。
「すまない。エシャール。それは踊り終わった後にもらうことにするよ」
「あ、でも、せっかく冷えていますから……」
そんなエシャールの手から、ふいにワイングラスを奪い取る者がいた。
「こら、エシャール。若い男女の邪魔をするものではないぞ」
そう言って、上機嫌な笑みを浮かべていたのは、エイブラム王だった。
「また新しくもらってくればいいだろう。これは、私がもらおう」
「……あっ」
止める間もなかった。
ミーアの見ている目の前で、エイブラム王は、そのワイングラスをあおった。
次の瞬間……、
「むっ……」
エイブラム王が小さくうめく。
その体がよろよろとよろめき、そうしてバルコニーのほうに向かっていき……、力なく、その手摺りにつかまろうとして……。失敗。そのまま外に落ちそうになる。
「陛下っ！」
直後に響くは少女の声。呆然と見つめることしかできないミーアの目の前を一人の少女が駆け抜けていった。

第百八話　暗転

「陛下っ！」
そんなエイブラムのもとに、一番に駆け寄ったのは、ティオーナだった。それは、単純に成り行きによるものだった。
ミーアの指示を受け、シオンのそばにできるだけついていようとしていたティオーナだったが、二人がダンスに行っている間は手持ち無沙汰だったのだ。
――どうしようかな……。生徒会のみんなは……。
と、あたりをキョロキョロしていると、
「おや、君は……」
突如、後ろから声を掛けられる。慌てて振り返ると、そこに立っていたのは、
「えっ、エイブラム陛下！」
シオンの父、エイブラムだったのだ。
ティオーナの様子を見たエイブラム王は、苦笑いを浮かべて首を振った。
「やれやれ、我が息子ながら、友人をほったらかしにしておくとは、まだまだだな」
それから、彼は周りの者たちに声をかける。
「しばし、息子の友人と話がしたい。お嬢さんが緊張してしまうだろうから、お前たちは、少し外しなさい」
エイブラム王の周りにいた、おそらくはサンクランドの高官たちであろう男たちが、深々と頭を下げると、離れていく。
そうして、改めて、エイブラムは笑みを浮かべた。その瞬間、彼のまとっていた、近づきがたい王者の気配が、薄らいだように思えた。
「さて、ルドルフォン辺土伯令嬢、だっただろうか？」

「はい。陛下。お声がけいただき、光栄です」
ティオーナはスカートの裾をちょこんと持ち上げる。
夕食会の際にはミーアもいたし、エメラルダもいた。けれど、今は一対一である。さすがに、緊張するのは否めないところであったが……。
「すまないな。私がもう少し若ければダンスに誘うところなのだが、今は妻子ある身。さすがに、我が子と同い年のご令嬢にダンスを申し込んでは、好色のそしりを受けてしまいそうだからね」
冗談めかした口調で、エイブラムが言うので、わずかに肩の力が抜けた。
「お気遣い、ありがとうございます。陛下。私は、貴族といっても、帝国の田舎貴族。ダンスもさほど得意ではありませんので」
「ルドルフォン辺土伯家は、たしか、帝国の南端が領地であっただろうか？」
「はい、その通りです。陛下。帝都からは遠い地でございます」
「そうか……。帝国では新参の地方貴族は中央貴族から蔑まれていると聞くが……」
「残念ながら、そのような傾向はたしかにございます。ですが……、ミーアさまは、その因習にとらわれない方です。私にも声をかけ、友としてくださいました。私が苦境にある時には、躊躇うことなく助けの手を伸ばしてくださいました」
ティオーナは、セントノエルに行ったばかりの時のことを話した。身分の高い貴族令嬢に絡まれていた時、ミーアが助けてくれたこと、新入生歓迎ダンスパーティーのこと。
「ミーアさまのおかげで、私は、中央貴族に対する恨みから解放されることができました。ミーアさまは、不正を許さない、正義を愛する方。ある意味で、シオン殿下と似ているのかもしれません」
そんなことはない！　のだが、ツッコミをする者もいないのが、恐ろしいところである。
「そうか。なるほど、あの二人は似ているか……」

エイブラムは、ダンスに興じる二人のほうを見て、かすかに目を細める。
「ならば、残念だが、シオンの恋が叶うことはないだろうな……」
「え……？　あの……どういう意味でしょうか？」
不思議そうに首を傾げるティオーナに、エイブラムはしばし考えるように黙ってから、
「たしかに、ミーア姫は素晴らしい人物だが、シオンは、それを支える者には甘んじていられないだろう。王としての資質、人々を率いていく素質、シオンにはおそらくそれがある。その資質はミーア姫には劣るかもしれないが……、眠らせるには大きすぎる資質だ。それゆえに影に甘んじることはシオンにはできん」
まるで、世界の真理に通じる賢者のごとく、エイブラムは言った。
「シオンは王としての才は十分に持っているが、王以外のなにかにはなれぬ。どれだけ頑張っても、仮に努力によってミーア姫の資質を上回ることができたとしても、その才がぶつかってしまうだろう」
そこまで言って、エイブラムは少し意外そうな顔をした。
「悲しそうな顔をするのだな……」
「それでは、シオン殿下が……可哀想です」
ティオーナ・ルドルフォンは、ずっと中央貴族を見返したいと願って努力を続けてきた少女だ。自分の存在を認めさせたいと願い続け、それをミーアによって叶えられた人だ。
そんな彼女からすると、シオンの努力が認められないというのは、いたたまれないことのように感じられて……。
けれど、エイブラムは穏やかな笑みを浮かべて言った。
「君は優しい娘のようだ……だが、そう気にすることもない。失恋の一つや二つ乗り越えて、男は成長していくものだからね」
と、その時だった。エイブラムがふいに表情を厳しくした。
「……あれは」
小さくつぶやいてから、彼は深いため息を吐いた。

そんなやり取りを経て、複雑な気持ちを抱えたままティオーナは、シオンとミーアがやってくるのを見ていた。そこにエシャール王子が飲み物を持って近づいていき、でも、もう一曲踊るから、とシオンが受け取らずに……。

代わりにそれを飲んだエイブラムが……、ゆっくりとバルコニーの手すりのほうに、ふらふらと歩いて行って……そして。

まるで、時の流れが緩やかになったかのような……そんな視界の中、ティオーナはかろうじて、エイブラムの異変に気付き、動き出していた。

「陛下っ！」

落ちそうになったエイブラムに、必死に手を伸ばす。その腰に抱き着くようにして支えるが、体格差が災いして、そのまま落ちそうになる。

「リオラっ！」

咄嗟に上げた声は、近くにいて動けずにいる誰かにかけたものではなく……一番の臣下への声！　直後、疾風をまとって駆け付けたのは、

「ティオーナさま！」

ティオーナの自慢の従者、リオラ・ルールーだった。

彼女はティオーナの反対側からエイブラムの服をつかみ、思い切り両足を踏ん張って、

「んぁっ！」

背筋をフルに使って一気にエイブラムの体を引き戻した！

けれど、それでは終わらなかった。

なんとか引き上げたエイブラムの顔は、一切の血の気を失い、まるで死人のように白く染まっていたのだ！

「動かさないでください！」

鋭い声。直後、ティオーナの視界に入ってきたのは、花のような可憐な空気をまとった少女、シュトリナだった。

第百九話　古の毒～偶然の出逢い～

みなの視線が、今まさにバルコニーから落ちそうになっているエイブラムたちに集まっている中、シュトリナは動き始めていた。
ミーアの意を受けて、エシャールのそばについていた彼女であったが、エイブラム王の行動は完全に想定外だった。
――まさか、エイブラム王があんな行動に出るなんて……。
そう……、それは想定外のことだった。
断じて、途中でトイレに行ったベルが、なかなか帰って来ないなぁ、などと一瞬の油断があったから……ではない。
油断がなかったとしても、突然のこと過ぎて、止めることはできなかっただろう……。
されど、国王の行動もまた、おかしいことではなかった。
彼はただ、長男が今飲めない飲み物を、次男から受け取っただけなのだ。
まさか、自らの次男が長男に毒を盛ろうなどと誰が予想できるだろう？　次男から、自分が受け取った飲み物に毒が含まれているなんて想像すらできなかっただろう。
だから、エイブラム王の行動はとても自然なことで……ゆえに、予想しておくべきことだったのだ。
「大丈夫、助かる……」
シュトリナは小さくつぶやく。
たしかに失態ではあった。けれど、挽回は十分可能。いや、むしろ、こういう時のためにミーアは準備を整えていたのだ。
――ここで役に立てないなら、連れてきてもらった甲斐がない。
今すべきことは……。
みなの視線から外れた場所、立ち尽くす少年に音もなく歩み寄る。
「エシャール殿下、時間がありませんから端的に答えてください。

どれぐらい飲ませましたか？」
「え……？」
顔色を失ったエシャールがビクリと肩を震わせる。
「殿下も、父殺しにはなりたくないでしょう？　どのぐらい飲ませましたか？　早く答えて！」
小さくも厳しい声。エシャールは、震える声で「一つまみ」とだけ答える。
一つまみ……。証言を頭の中で反芻しながら、シュトリナは王のもとへと歩み寄る。
異常に気付き、騒然となる人々をかき分けながら、ティオーナのそばに歩み寄る。と、そのまま、倒れた国王の脇にしゃがみこんだ。
「動かさないでください！」
厳しい声で指摘して、それからエイブラム王の顔を見る。その顔の半分は……、まるで、死の相のごとく、黒く染まっていた。
――間違いない。陰毒の症状……。それも、半月蝕（はんげっしょく）まで症状が進んでる。
陰毒、またの名を死月蝕（しげっしょく）の毒……。
服毒した際に、顔に現れる黒い影のような死相が、月蝕に似ていることから、その名で呼ばれている。
その効能は簡単に言ってしまえば、体の活力を低下させること。心の臓の働きを弱め、血の巡りを悪くし、全身を枯れ果てさせる優秀な毒……それが陰毒だ。
遥かな昔、幾人もの権力者の顔を黒色に染め、恐れられたこの毒であるのだが、されど、歴史の流れの中で人々の記憶からは忘れ去られていた。理由はとても簡単で、対処が比較的、容易であったからだ。
すなわち、陰毒とまったく反対の性質を持つ毒物、陽毒を適量飲ませればよいのだ。
陽毒、またの名を死紅炎（プロミネンス）の毒。これを飲むと、体の活力が異常に高まる。心の臓の動きは倍にも三倍にもなり、血の管が破れ、全身

から血が噴き出す。
それで死ぬことができればまだマシな方。下手をすると長く毒が体内にとどまり続け、数か月も苦しみ続けることになるのだ。
こちらも、けれど、対処は簡単で、同じように適量の陰毒を飲ませてやればよいのだ。
そのように、反対の毒さえ持っていれば対処が容易な毒……。それゆえに、万全の備えをした相手に対しては無力。暗殺には適さない。だから歴史の中に忘れ去られ……、そして、いつしか対処法もまた廃れてしまった毒……。それがこそ陰陽の毒だった。
――長く狩猟に使っていた騎馬王国でも、もうあまり使われてないと聞くけど……。
少なくともシュトリナは、陰毒を見たことがない。イエロームーン家にも、それは存在していない。同じく陽毒も知識として知っていただけ。今回、行きがけにあのキノコと出会わなければ、解毒はできなかった。
――互いに、対極の毒を用いる以外に対処のしようがない毒……。もしも、サンクランドに来る途上での出会いがなかったら……どうしようもなかったな……。
そう思いつつ、シュトリナは陽毒の入った小瓶を取り出した。
一つまみ……。エシャールは言っていた。そして、その証言と、国王の顔に現れた月蝕の死相は一致する。
――ということは、飲ませる量は……。
「こっ、これはっ！」
っとそうこうしている間にも、サンクランド貴族たちが集まり始めた。そうして、王の顔色を見るなり、言葉を失う。
「まさか、これは……陰毒……」
どうやら、何人かは知っていたらしい。
特徴がある毒だから、暗殺を恐れる立場の者たちは知っていても不思議ではない。
「医官を、だれか、医官を！」

悲鳴にも似た叫び声を聞きながら、シュトリナはティオーナのほうを見た。
「ティオーナさん、しっかり押さえておいてください」
言いながら、シュトリナは取り出した陽毒をワイングラスに入れようとする。陰毒一つまみに対して、投与する分量を正確に見極めようとして……。
「おい、お前なにをしている？」
「小娘が、国王陛下に無礼ではないかっ！」
のんきなことを言う彼らは、恐らく国王の状態がよくわかっていないのだろう。が、より正確に状況を把握している者たちが寄ってくると、それ以上に面倒。彼らから見れば、シュトリナはたしかに小娘で、外国の人間。毒で倒れた国王のそばにいてよい存在ではない。
けれど、シュトリナには確信があった。国王の命を救えるのは自分だけであると。
ゆえに、シュトリナは顔を巡らせる。
この場の者たちを黙らせることができる、誰よりも状況を理解できている人物のほうへと。

そして……。その強い視線を眼力姫（ハイパワーアイプリンセス）ミーアは敏感にとらえた。とらえてしまった……。
当初、突然の事態にアワアワするばかりだったミーアであるのだが、ティオーナがなんとか国王を助け上げ、しかも、毒のスペシャリストであるシュトリナが駆けつけてくれたところで、もう安心だー！　と一息吐いたところだったのだが……。
――え？　ここで、わたくしに振りますの？
突然、視線が飛んできて、再び慌てる。
――こっ、これは、下手なことは言えませんわ。なんとか、上手く受け流して……。
などと考え始めた、まさにその時……。

「ミーア……」
別方向からの視線を感じる。それはすぐ近く、ミーアの隣から送られてきていた。
見上げて、ミーアは驚く。
シオン・ソール・サンクランド、あの完全無欠の王子さまが……すがるような、なんとも不安げな視線を送ってきていたのだ。
それに気付いた瞬間……、ミーアは思わず頷いてしまっていた。
「大丈夫ですわ。シオン。大丈夫」
それから、周囲の者たちに目を向けて、堂々と言った。
「彼女は、我が帝国が誇る専門家ですわ。この場は任せていただきたいですわ」
そんなミーアの言葉を受けて、シオンも顔を上げる。自らの感情を落ち着けるように、大きく息を吐いてから……、
「みな、聞いての通りだ。彼女の邪魔をしないように。それと医官を早く呼ぶんだ」
先ほど見せた不安は、微塵も感じさせないようなきびきびとした口調でシオンが指示を飛ばす。
けれど、ミーアには見えていた。
シオンの握った拳が、小さく震えているのが。

第百十話　二人の怒れる令嬢たち……とそれを見てアワアワする一人の……

小瓶から粉末状の薬を出し、それを水に溶かしてから、シュトリナは躊躇なく国王の口に注ぎ込む。

国王の頭を、膝枕で支えるティオーナは、それを固唾を飲んで見守っていた。

王の口からかすかに零れ落ちた液体がドレスのスカートを汚すが、特に気にする様子もなく、ティオーナは国王の顔を見つめ続けた。

そんな治療の様子を見ていたミーアは……ふと、あることに気付く。

――あら……これって、よくよく考えると、もしも失敗したらわたくしのせいになるんじゃないかしら……？　リーナさんがしているのは、治療のはずですけれど、もしもエイブラム王が亡くなったりしたら、こちらが毒を盛ったと言いがかりをつけられるかもしれませんわ……。

そのことに感づいたミーアは、すっすっと視線を動かす。

そばにいる戦力は弓の達人、リオラと剣術の使えるティオーナ……。アベルも多分守ってくれるはず……、シオンもかばってはくれるだろうし……。

――いえ、だ、大丈夫ですわ。いざとなれば、ディオンさんがおりますし。あの方がいれば、たいていのことはなんとかなるはず……。

口の中で、ディオン・アライアが味方、ディオン・アライアが味方、ディオン・アライアが味方……と呪文のように三回唱え、ようやく、心の安定を取り戻したミーアは、改めてエイブラムのほうをうかがった。

「リーナさん、どんな感じですの？」

すると、シュトリナは、空のワイングラスを片手に立ち上がった。

「これで大丈夫……」
小さく頷いてから……、
「だと思います、たぶん……」
付け足してくる！
その、自信満々に断言できない姿勢に、ミーアは共感を覚える。
が、同時に、その言葉に、そこはかとなく不安を覚えてしまう。
「でも、できることはやりましたから……」
シュトリナの言葉の通り、遠目にも、国王の顔色が戻ってきたのが見えた。顔に見えていた黒い影も、薄れ、普通の顔色に変わってきている。
と、そこに、遅ればせながら、医官たちがやってきた。
その場に倒れた国王に、みな一様に慌てふためいた様子を見せている。その中の一人に歩み寄ると、シュトリナは、状況を説明。陰毒に対して、陽毒の投与による解毒を行ったことを細かく説明している。
やがて、引継ぎも終わり、戻ってきたシュトリナに、ミーアは笑みを浮かべた。
「お疲れさまでしたわね。リーナさん」
「はい、ミーアさま……。どうやら、ご期待に応えられたみたいです」
シュトリナは、いつもとは違い、ちょっぴりホッとした、力の抜けた笑みを浮かべた。
「と言っても、使われたのが陰毒であることは、わかりきっていましたから、気を付けるべきは量だけでしたけれど」
「あら、そうなんですの？」
「はい。陽毒のほうが多いと大変です。体の活力が上昇して、全身から血を吹いて死ぬことになります」
「まぁ、恐ろしい。全身から血を噴いて……ん？」
聞き覚えのある症状に、ミーアは、かっくーんと首を傾げた。
――その死に方、なんとなく、皇女伝で見たことがあるような…

…？
っと、その時だった。
「毒？　毒ですと？」
王の手当てをする医官から、状況を聞き出したのか、一人の貴族の青年が声を上げた。
「では、陛下は……、毒を盛られ、暗殺されかけたと、そのように申すのだな？」
彼の声に、会場内は騒然とする。
「何者かに毒を盛られた……」
その声に、ミーアはぴりり、と嫌なものを感じる。
――これは、考えるまでもありませんけれど……、犯人探しが始まりそうですわね。
もしかすると、自分の食べたものにも毒が盛られていたかもしれない。そんな不安が、一斉に会場内に広がる。
緊張感に支配された会場に、青年の声が響いた。
「しかし、ほかに毒を飲んだ者もいない様子、となれば、怪しいのは……」
これで、ワイングラスを渡したエシャールに容疑がかかったら、面倒なことになるな、と思っていたミーアであったが、事態は意外な方向へと進む。
「もしや、手当てをするふりをして、毒を盛ったのではあるまいな？」
男が指さしたのは、ミーアの隣にいる少女、シュトリナだった。
それを見て、ミーアは、すぐに彼の目的を察する。
――ああ、なるほど。つまり、彼がやりたいのは犯人捜しではなく、わたくしたちに対する攻撃ですわね。
もともとこの場は、ミーアとシオンの連携に対して攻撃を加えるためのものだった。
エイブラム王が倒れたことで、状況は錯綜してきているが、サンクランド保守派としては、攻撃の手を緩めるつもりはないのだろう。

「いや、かのご令嬢は治療をされた。それは事実だ」
落ち着いた声で反論したのは、意外なことに、ランプロン伯だった。
「貴公のように若い貴族は知らぬだろうが、陛下に使われたのは、陰毒という毒だ。服毒すれば、顔に特徴的な黒い影ができる。間違いなく彼女が近づく前に、陛下の顔には、その兆候があった。それは間違いのないことだ」
断言するランプロン伯。けれど、さらに、それに反対する声が別の方向から上がる。
「しかし、それにしても手際が良すぎる。もしや、帝国の叡智の自作自演で……などということはありますまいな？」
「それは……」
と、ランプロン伯が黙り込んだのは、無理からぬことだった。陰毒が古い毒であり、その解毒薬をこの場に持ち合わせることは不自然……。
それは、陰毒を知らぬ者にもわかることだったからだ。
「すぐに解毒できたことが、なによりの証拠ではありませんか。仮にどのような毒を飲まされたのかわかったとしても、偶然にもその解毒薬をここに持ってきているということがあるだろうか」
「そうだ。いかにも不自然！」
――あら、この流れは……。
ミーアは、慌てる。身の危険を感じたからではない。もっとまずい気配を感じ取ったためだ。大急ぎで、ミーアは……ラフィーナのほうを見た。
「ひぃっ！」
思わず、口の中で悲鳴を上げる。
先ほど、王が倒れた時には、それなりに驚愕し、されど、ある種の落ち着きをもって成り行きを眺めていたラフィーナ……。そのラフィーナが――怒っていた。
唇を噛み締めて、白い頬は朱に染まり、その瞳には赤々と怒りの

炎が燃え上がる。
――あっ、や、やばいですわ。ラフィーナさま、たっ、大変にご立腹ですわ！
そんな風に、ラフィーナが怒りを見せるのは、生徒会選挙の時以来だった。
最近、ミーアは実感していたのだが……どうもラフィーナは自分のことを友だちだと思ってくれているらしい。それも、割と大切なお友だちだと思ってくれているらしいのだ。
――つまり、今、あの貴族は、恐れ多くも聖女ラフィーナさまの、割と大切なお友だちにケチをつけようとしているのですわ！
それも、相当に無礼なやり方で、だ。
ミーアとしても腹が立たないではないのだが、ここで、弁解するには、犯人を明らかにする必要がある。けれど、公衆の面前で犯人がシオンの弟である、などと言えるだろうか……？　否、言えるはずがない。言ってしまったら大変なことになるだろうし、証拠もない。
なにより、小心者の心臓が望むのは、できーるだけ……、大事にしないこと。すでに、国王に毒が盛られるなどという、大変、胃が痛くなる事態になっているのである。これ以上の惨事は避けたいところだった。
――幸いにして、混沌の蛇がかかわっている状況、なれば、その責任をすべて連中の暗殺者に問うことは可能なはず。であれば、ここはできるだけ穏便に、わたくしたちにかかった疑いを晴らす必要がございますのに……。
さりとて、放っておくこともできない。これをきっかけに、シオンとラフィーナ、サンクランド王国とヴェールガ公国の関係が悪化などということになったら、それこそ、蛇が付け入る隙になるだろう。
――うう、これは、どう収めたものかしら……。
などとミーアが悩み始めた、まさにその時だった。

「控えなさい！　無礼者！」
その声は、予想外の方向から響いた。
まるで鞭のようにしなやかに、ぴしゃり、とその場の空気を叩いた声、みなの視線を一身に集めて、なお、凛然と立つは一人の少女。
豪奢な髪を怒りに逆立てて、サンクランド貴族をにらみつけたのは、
「我が親友、我が敬愛する姫殿下、ミーア・ルーナ・ティアムーンに対する、不遜なる言動は許しませんわよ！」
エメラルダ・エトワ・グリーンムーン。輝く星の称号を与えられし、帝国四大公爵家のご令嬢にして、第二王子の婚約者だった。
激昂して吠える、獅子のようなその姿に、サンクランド貴族たちは気圧された様子を見せた。
もとより、グリーンムーン家では、暴君として知られるエメラルダである。わがまま令嬢であり、わがままが許される立場の人間だ。
ゆえに、その怒りを黙って呑み込むような真似はしない。
その様子を、傍らで、エシャール王子が、ぽかーんっとした顔で見上げていた。
そうしてエメラルダによって生まれた一瞬の間隙に、二人目の令嬢が歩み出る。
四大公爵家が一角、イエロームーン家の令嬢……。あらぬ疑いをかけられ、名誉を傷つけられた少女、シュトリナだった。

第百十一話　シュトリナ、ついに帝国の叡智の深淵にたどり着く……たどり……着く？

「別に、不思議なことなど、なにもないですよ」
シュトリナは気後れするでもなく、気張るでもなく、いつも通り、可憐な少女の口調で言った。
手当てをした当人の言に、ミーアを貶めようとした男が口を開いた。
「なにを言う？　あんなにもあっさりと解毒薬を用意しておくなど、偶然にしてはできすぎではないか。それとも、かの帝国の叡智は未来を見通す目でも持っているというのか？」
「まさか。人の身にて、未来を見通すなど、到底できないことでしょう」
それは、たぶん帝国の叡智のやり方ではない。
シュトリナは知っている。
ミーアは、決して神などではない。すべてが計算通りに進むなんてことはあり得ないし、未来を見通す目を持っているだなんてこともあり得ない。
もしそうならば、きっともっと上手く立ち回り、毒を飲ませはしなかっただろう。けれど、いくらミーアの知恵が優れたものであったとしても、将来の出来事を知るなどということができるわけはないのだ。
では、なぜ、ミーアはこうも最善の手が打てるのか？　あの蛇とすら、渡り合うことができているのか？
それは、すべて“備えているから”に過ぎない。
ミーアは、どのような事態が起きても対処できるよう、徹底的な準備を欠かすことはない。そして、今回はその一環としてシュトリナを頼ったのだ。
シュトリナは、今回の旅でそのことをよく実感していた。

「本当は、あまり、はしたないことをしたくないんですけど……」
言葉とは裏腹に、シュトリナはスカートの裾を優雅に持ち上げる。
それは、完璧な淑女の礼。されど、少しばかりスカートの上げ方が大きかった。
おかげで、シュトリナの華奢な脚がわずかばかり露わになる。雪のように白い肌、幼い膝小僧のすぐ上の、ほっそりした太ももには、ドレスには似つかわしくない革のベルトが巻かれていた。
そして、そのベルトには、小指ほどの細さの小瓶が何本も収められていた。
「これは、麻痺毒の解毒剤。これは、毒を吐かせるための嘔吐薬……」
ことり、ことり、と、ベルトから引き抜いた小瓶をテーブルの上に置いていくシュトリナ。その数に、貴族たちは一様に言葉を失う。
「帝国皇女、ミーアさまは、我らにとって欠かすことのできない方。なにかあった時のために、万全の備えをするのは当たり前のこと。飲まされた毒に合致する解毒薬を偶然に持っていたわけではありませんよ。どんな毒が使われても良いように備えていただけです」
千の毒を操り、万の毒を識る、イエロームーン家の総力を尽くして厳選した解毒剤だ。
サンクランド周辺で手に入りやすい毒を念頭に準備を進めてきたつもりだった。けれど、陰毒と陽毒については、さすがの彼女でも思いが至らなかった。
――ミーアさまのすごいところは、出先で出会った解毒作用のあるキノコに興味を持ち、それをすぐに取り入れてしまったこと……。
事前準備のみならず、臨機応変さをも備えた判断力、それにシュトリナは目を見張ったものだった。
――でも、今はそんなことはどうでもいい。
すべての小瓶をテーブルの上に並べて、シュトリナは、ニッコリと可憐な笑みを浮かべて、
「大切な方をお守りするための、当たり前の備えだと思いますけど、

サンクランドではしないのですか？」
煽る！　煽る！！
っと、そこでシュトリナは気付いた。
――あれ……？　リーナ、ちょっと怒ってる？
せっかく気持ちよく国王の命を救ったのに……、自分の力を用いての初めての善行、そこにケチをつけられたのが、ちょっぴり腹が立ったのだろうな、とシュトリナは理解した。
あまり、煽らないほうがいいんだろうな……、と一瞬思わないでもなかったが、
「こんな風に、レディーに、はしたない真似をさせたんですから責任をとってくださいね」
ニッコリ笑いつつ、まぁ、いいか、とシュトリナは思い直す。
腹が立ったのは事実だし、ここは煽れるだけ煽っておこう……と、できるだけ彼らが責任を感じるような言葉を投げかける……。そもそもケチをつけてきたのが悪いのだ。
そんなシュトリナの言葉に応えたのは……、
「そうですわ。あなたたち、恥を知りなさい。シュトリナさんは当たり前のことをしただけですわ。それなのに、このような、乙女に、こんなはしたない真似をさせて辱めるなど……」
意外なことに、エメラルダだった。
「シュトリナさん、よくやってくれましたわ。星持ち公爵家、筆頭令嬢として褒めて差し上げますわ。それなのに、あんな……、乙女の秘密を暴くような、はしたない真似をさせるなんて……！」
なんだ、筆頭令嬢って、とか、乙女の秘密って、足に解毒薬巻いてたことなんだけど……。と思わないでもないシュトリナだったが、それ以上に看過できない問題があった。それは、
「いえ……あの、エメラルダさん、リーナはそこまで、はしたないことはしてない……」
さすがにそこまで、はしたない、はしたない、と連呼されると、複雑な気持ちになってくるシュトリナである。そもそも、毎年夏に

イケメン護衛と海水浴に行くほうが慎みがないのでは……？　などとついついツッコミを入れたくなってしまうが……。
「なにも言わなくていいですわ。リーナさん、辛かったですわね。あんな風にはしたない真似をして、辛くなかったはずがありませんわ」
そうして、エメラルダはグイグイっとシュトリナを抱きしめる。
「だ、だから、そんなに、はしたなくは……」
「言わなくていいですわっ！　あなたは、よくやりましたわ！」
――失敗。変なのを煽っちゃった……。
なんとも暑苦しいエメラルダに、シュトリナはちょっぴりげんなりして……でも、
「ミーアさまのご期待に立派に応えて見せましたわね。偉いですわ！」
不思議なことに、その言葉は、すっとシュトリナの心の中に溶けこんだ。
他の四大公爵家の者たちは、シュトリナにとっては暗殺の対象に過ぎなかった。いずれ、殺さなければならない相手。だから、どのような人物かは知っていても、交流を持つことはなかった。
――やっぱり、グリーンムーン公爵令嬢、エメラルダは単純な人。感情的でチョロい人だ……。簡単に煽ることができるし、心を操るのも多分簡単だ。
頭の中、事前に持っていた情報と、目の前の少女の暑苦しい行動は完全に一致していて。
――でも……、イヤじゃない……。
実際に触れたその単純さは温かで、その情の深さは、ちょっとだけ心地よいものだった。
――おかあ……、お姉さまがいたら、こういう感じなのかしら？
心の中で、微妙に気を遣うシュトリナ。未だにお祖母ちゃん呼びが治らない友だちとは大違いである！
まぁ、それはさておき……。

――今度から月光会、休まないようにしよう！
……シュトリナも、なんだかんだでチョロい人だった。

幼い少女を守るように抱きしめる麗しの令嬢。その姿は、糾弾者たちに冷や水を浴びせかけるのに十分だった。冷静に考えれば、今、糾弾しようとしている相手は、本来、自分たちが守るべきご令嬢であり、国王の命の恩人でもあるのだ。

しん、とした沈黙がその場を支配した、まさにその時……、

「陛下っ！」

悲鳴のような声が上がる。

よろめく体を臣下に支えられながら、エイブラム王が立ち上がった。苦痛をこらえるように、歯を食いしばりつつも、すっと背を伸ばして、彼はシュトリナのほうに歩み寄った。

「お嬢さん、命を助けてもらい、感謝する。我が国の者たちの数々の無礼、謝って済むとも思えぬが……」

「いえ、陛下。お気になさらずに。どうぞ、お体を休められますように」

柔らかな笑みを浮かべるシュトリナに、エイブラムは、苦しげな顔を少しだけ緩めてから、

「ランプロン伯。後のことは任せる。くれぐれもお客人に無礼がないようにせよ」

そう言い残して、会場を後にした。シオンとエシャールを伴って。

「ふぅ……、なんとか無事にすんだみたいだね」

後ろから、突然話しかけられ、ミーアは、びっくりして振り向いた。

と、ミーアのすぐ後ろ、腕を伸ばせば届く場所に、いつの間にやらアベルが立っていた。

その右手には、なぜかワインビンが握られていた。

注ぎ口を握りしめ、まるで剣のようにしている。

「あら、アベル……、どうしましたの、ビンなんか持って」
「ん？　ああ、いや、なに……。少し喉が渇いたと思ってね。どうかな？　ミーアも……」
「まぁ、アベル。わたくしを酔わせてどうするつもりですの？」
「え、あ、いや、これは、その……」
などと慌てるアベルを見て、ちょっぴり楽しむミーア。
――ジュースのビンと間違って持ってきたのかしら……。うふふ、あの状況で、わたくしが喉が渇くだろうと気を使ってくれたのでしょうけれど、ちょっぴりあわてんぼですわね。
などと微笑ましくなってしまう。
年下の男子をからかって楽しんでしまう、悪い大人のお姉さんである。
「冗談はさておくとして、無事におさまって、私も安堵していますよ」
見ると、アベルと同じくルードヴィッヒもまた、ワインビンを片手に握りしめていた。
「あら、少し意外な姿ですわね、ルードヴィッヒ」
こういった場面では、あまり酒を飲むようには見えないが……、と首を傾げるミーア。
ルードヴィッヒは、少しだけ心外そうな顔をして、
「私もやるべき時にはやりますよ……脱出路の確保ぐらい……」
などと、ぶつぶつ言っていたが……、後半のほうは、あまり耳に入っていないミーアである。
――あら、そうなんですのね。やるべき時にはやる……まぁ、サンクランド王室が用意したお酒なんて滅多に飲めるものではないでしょうし、気持ちはわからないではないですけど。
珍しいお菓子やキノコを求める気持ちと、そうは変わらないだろう。
ルードヴィッヒの意外な一面に、ちょっぴり共感しつつも、ミーアは首を傾げた。

「ところで、アンヌはどこにおりますの？」
「彼女には、念のため、近衛のもとに行ってもらいました。いざという時のために」
「いざという時……。なるほど、さすがに手際がいいですわね」
「しかし、シオンが黙っていたのは意外だったな……。てっきりあの者たちを諌めるかと思っていたが……、やはり、御父上が倒れたショックが大きかったのだろうか……」
「いえ、そうではないでしょう」
そう言って首を振ったのは、ルードヴィッヒだった。
「ええ、そう、ですわね……」
そして、ミーアもルードヴィッヒの意見に賛成だった。
――シオンは、おそらく弟が毒を入れた犯人であると気付いておりますわね。あの場で、それを公表することは、さすがに避けたかったのでしょうね。それでなくとも、自分が弟に殺されそうになった挙句、代わりに父上が毒を飲んでしまった。混乱は一入だったでしょうね……。
ミーアは、ううむ、っと唸った。
――しかし、エシャール王子、どうしたものかしら……。
エシャールが毒を盛ったことを、誤魔化す術はあるのだ。ぶっちゃけ、蛇に押し付けてしまえばいいのだ。責任を押し付けるのは、ミーアの常とう手段なのだ。
そもそも、毒を渡したのは蛇。ならば、エイブラムやシオンに納得してもらえれば、恐らく誤魔化すことは可能。
それに、ここがサンクランドである、ということも納得感を上乗せする。
なぜなら、彼らご自慢の諜報部隊「風鴉」が、ほかならぬ蛇によって浸食されていたのだから。
その事実を突きつけられれば、彼らは考えざるを得ないのだ。
風鴉のメンバーに、このような毒殺が可能かどうか、と。
そして……、ミーアは検討する。元風鴉の凄腕、イエロームーン

公爵家にいる執事に、それが可能かどうか、と。
――たぶん、できるんでしょうね……。
ミーアの判断は可能である、だ。そして、もしも風鴉に可能であるならば、それを侵食し、手玉に取った混沌の蛇にだって、当然、それはできるということになる。
犯人は毒を入れ、客に紛れて会場を去った。
そのように、彼らを納得させることは、ここがサンクランドであることを考慮すると、そう難しくはない。ないのだが……。
――問題は、エイブラム陛下とシオンがどう考えるか。それに、エシャール殿下自身の問題ですわね。うーん……うーむむむ……。
と、その時だった。腕組みして考え込むミーアに、一人の兵士が歩み寄ってきた。
「失礼いたします。ミーア姫殿下。陛下が話があると、お呼びです」
「……はて？」
ミーアの本当の戦いはここから始まるのだった。

第百十二話　ミーアベル、城の中をたん……見学する！

さて……、時間は少し巻き戻る。

「ふぅ、やれやれ……。とりあえず、今日が終われば落ち着くだろうか」

会場の外で、ランプロン伯の警備担当、コネリーはため息を吐いた。

帝国よりのお客人、グリーンムーン家のご令嬢を迎えてからこっち、彼は落ち着かない日々を過ごしていた。

なにしろ、帝国の星持ち公爵令嬢（エトワーリン）といえば、彼の主であるランプロン伯爵よりも、爵位的には上である。

それだけでも腹が痛くなってくるというのに、そのお友だちの存在が、コネリーをさらに追い詰めた。なにしろ、皇女殿下と、他の星持ち公爵令嬢までもが、同行していたのだ。

想定外もいいところだったのだが……。

「今日のダンスパーティーが終われば、グリーンムーン家令嬢も帝国に帰るだろうし、ほかの姫君たちもお帰りになるだろう」

そう考えると、安心するとともに、ちょっぴり寂しくもなってしまう。

「ふふふ、高貴なる姫君二人のお供で街を歩いたのも良い思い出か……」

などと上機嫌で、顔見知りの城の兵士などとお話ししつつ、ぶらぶらしていたのだが……。

そんな彼の視界を、不意に、とあるものが横切った。

正直なところ、知らぬふりを決め込みたかったし、早くも胃のあたりがキリキリしてきたものの……、コネリーは己が精神力を総動員して、そちらに視線を送った。

白金色にきらめく長い髪、それをひょこひょこ揺らしつつ、小走

りに廊下を行く生物……、ご令嬢に相応しい綺麗なドレスに身を包みつつも、その仕草には、どこか、悪戯っ子のような空気がまとわりついていた。
その少女に、コネリーは見覚えがあった。
――あれは……、ミーアさまの連れの少女……、確かミーアベルという名前だったか……。
いやぁ～な予感は増すばかりだった。
なんというか、こう、また、見たらまずいものを見てしまったような……、そんな予感がふつふつと湧いてきた。
できれば、見なかったことにしておきたいところではあるのだが……。
「だが……、放っておくわけにもいくまい……」
万が一、城の中で迷っているご令嬢を放っておいたとあっては、サンクランドの騎士の名折れである。女性や子どもには親切に、それこそ、正義の国の騎士にふさわしい行動である。
――私は、サンクランドのランプロン伯に仕える者。主の名声を汚すようなことはできん。
っと、三度、自分に言い聞かせ、自らを励ましてから、コネリーはミーアベルに歩み寄った。
「ベルさま……」
「あっ、コネリーさん」
声をかけると、ベルは、ぱぁっと笑みを浮かべて振り返った。その無邪気な笑みを見て、厄介者扱いしてしまったことに若干、罪悪感を刺激される。が……。
「このような、ところでなにを？　もしや、迷って会場に帰れないとか……？」
「いえ。実は、お城の中をちょっと、たんけ……んがく……そう、見学させていただいていたんですけど……」
こいつ、今、探検って言おうとしただろう！　っていうか、たんけんがく、だと、探検隠せてないぞ！　と、罪悪感は一瞬にして霧

散する。
無論、コネリーは大人なので、わざわざツッコミはしないわけだが……。
「そうでしたか。しかし、今は舞踏会の最中のはず。勝手にいなくなられては、みな心配するでしょう」
コネリーは自らを落ち着けるように眉間をぐぐいっと押す。
そうだ。よくよく考えれば、子どもとは冒険したがるものだ。こんなお城に入れたら、冒険したいのが当然……。自分もそうだったではないか……、などと思いつつも……。
――貴族のご令嬢も同じなのだろうか……。ううむ……。
ついつい、悩んでしまう。
「ともかく、会場のほうに戻りましょう」
「あ、その……、実は途中で、キースウッドさんとディオン将軍を見かけて……それで追いかけていたところだったんです」
その両名の名前を、コネリーは口の中でつぶやく。
ディオンというのは、皇女ミーアの護衛としてついてきた男だった。
コネリーは、決して自身を手練れだ、などとは思ったことはないが、そんな彼の目から見ても、あの男は格が違った。
――過日のエイブラム陛下は、剣の才にあふれた猛者であられたが、それでも、あの男には及ばないかもしれない。
サンクランドの騎士の中で、はたして、彼に並びうる者がいるかどうか……。
さらに、それに加えて……、
「キースウッド殿……ですか」
シオンの従者……、否、懐刀と呼ぶに相応しい青年キースウッド。
国王エイブラムの信頼も厚い、かの男とディオン・アライアとが、連れ立って城の中を歩いていた……。
別に、おかしなことはないはずなのに……、なぜだろう……、妙に気になった。

――思えば、このベルという少女も、帝国の叡智ミーア姫が連れてきたほどの少女だ。一緒にいた四大公爵家令嬢のシュトリナさまは、たいそう賢そうなご様子であったし、あるいは、ベルさまもキースウッド殿とディオン殿の雰囲気に、なにか気になるものを感じたのかもしれない。

まぁ、ソワソワしているベルを見ると、とてもそうは見えないわけだが……。

「ちなみに、お二人を見たのはどのあたりでしょうか？」

「えっと、あっちのほうです」

ひょこひょこと歩いていくベル。その背中を追いかけながら、コネリーは眉を顰める。

――エシャール殿下の私室があるほう……か。

なぜか、胸騒ぎは増すばかりだった。

第百十二話　ミーアベル、城の中をたん……見学する！（後書き）

本日、活動報告の更新をしました。

第百十三話　審判の時、敵味方……

サンクランド国王の私室へとミーアは呼ばれた。

同じく、エメラルダとシュトリナ、ラフィーナもだ。

――リーナさんは、解毒を担った関係者、エメラルダさんは、あのパーティーの主役。ラフィーナさまは、ヴェールガの聖女ですし、あの場にいれば呼ばざるを得ませんしね。

ルードヴィッヒとアンヌ、それにアベルは呼ばれていない。解毒が行われたとはいえ、王の状態を考えれば、必要最低限の人員に絞ったということなのだろう。

ちなみに、ティオーナに関しては、成り行きで、エイブラムに付き添って会場を出ていた。

――もしかしたら、汚れたドレスの着替えをもらっているかもしれませんわね……。まぁ、それはともかく、最悪はエシャール王子が毒を入れた主犯に断定されること……、そうなれば死罪は免れないでしょうし……。それだけは避けるべきですわね。

会場を出がけに、手近にあったクッキーをパクリ、ペロリ、として糖分摂取。

脳の働きを活性化させつつ、ミーアは方針を決める。

――基本方針は、混沌の蛇に徹底的に責任を押し付けること。もともと、毒を渡したのが蛇の関係者っぽいので、これは、少なくとも嘘ではありませんわ。だから、ラフィーナさまに知られても問題ないはず。

後でバレた時にも言い逃れできるように、きちんと逃げ道を用意しておくミーアである。

――そのうえで、敵味方の見極めが大切ですわね……。

先ほどのような場面であればともかく、今回は必ずしも、味方が味方にならないかもしれないのだ。

正直なところ、ミーア的には“なあなあ”で済ませてしまいたいところだ。
蛇が毒渡したのが悪いんだし、じゃあ、全部、蛇の正体不明の暗殺者に罪を押し付けちゃえばいいじゃない？　とできるのが一番楽だ。エシャールは利用されて、騙されただけ、ということにしましょうよ、ということで、同意してもらえればいい。のだけれど……、
――“じゃあ、そういうことで”の一言で片付いたら楽なのですけど、そうはいかないでしょうね。
仮にそのように処理しようとした場合、恐らくシオンは良い顔をしないだろう。エイブラムも同様に。さらには、ラフィーナも味方をしてはくれないような気がする。ティオーナはどうだろうか？
――確実に味方といえるのはエメラルダさんとシュトリナさんだけかしら……。
ミーアは、同じように呼ばれた、二人の星持ち公爵令嬢を流し見る。
シュトリナに関しては問題ないだろう。元蛇だけあって口は堅いし、余計なことは言わないだろう。
エメラルダにも絶対的な信頼がおける。
なにしろ、エメラルダは面食いだ。エシャールの不利になるようなことは言わないだろう……。それに、
――わたくしの不利になることも言わないでしょう。お友だちですしね……。
先ほど、怒りの声を上げてくれたことには、ちょっぴり感動したミーアである。大勢の前で、あれだけ堂々と宣言してくれたところを見ると、いざという時にも頼って大丈夫そうだった。
そのエメラルダは今もまだプリプリ怒っていた。
「まったく無礼な方たちでしたわ。あろうことか、ミーアさまや、リーナさんに疑いをかけるだなんて、あり得ぬ暴挙。絶対に許せませんわ！」
「あの方たちにとって、エイブラム陛下は、欠かすべからざる存在

……、そういうことなのではないかしら？」
エメラルダをなだめるように、そう言ったのは、ラフィーナだった。
「善悪の判断のすべてを王に委ねる。王は間違えないのだから、王に服従していれば間違いはなく……、ゆえに、自分で判断しなければならない場面では、途端に慌ててしまった。冷静さを欠いた結果、当初の目的であったミーアさんたちへの攻撃に固執した……。そんなところではないかしら？」
――なるほど。たしかに、あの時点でわたくしたちを責めたところで、かえって問題が大きくなりそうでしたし……。しかし、とりあえず、先ほどのことはお父さまの耳に入らないように気を付けておかなければいけませんわね。エメラルダさんには釘を刺しておかねば……。
などと考えていると……、
「……だからと言って許せるわけではないのだけれど……」
不穏なつぶやきが聞こえてきて……、ミーアはそちらに視線を向ける。っと、ラフィーナが……、ものすごい笑みを浮かべていた。
笑っているのに……、ミーアの背筋につめたぁいナニカが駆け抜けた。
――ひぃいっ！　ら、ラフィーナさまが、まだ怒ってますわ！　ものすごーく怒っておりますわ！　こっ、こちらにも釘を刺しておかねばなりませんわ！
ということで、面倒なことにならないうちに、ミーアは動き出す。
「ま、まぁ、あの方たちもエイブラム陛下がきちんと咎めてくださるでしょうし、サンクランドとの関係がこじれると蛇の付け入る隙にもなりますわ。そもそも、今回の毒物にしても、蛇の手によるもののようですし……」
全力で、共通の敵へと敵意を向けていく。
「混沌の蛇が……？」
ラフィーナは、その言葉にハッとした顔をする。

「ええ。どうやら、その疑いが強そうですわ。ねぇ、リーナさん」
話を振られたシュトリナは小さく頷き、ことの経緯を説明する。
「騎馬王国風の男が……。そう……」
考え込むラフィーナを横目に、ミーアはふーっ、とため息を吐く。
――とりあえず、これで、ラフィーナさまも慎重に考えてくださるはず。しかし、ルードヴィッヒがいないのが悔やまれますわね。彼の知恵を借りられないのは痛手ですわ。それに、アンヌ……。忠臣がいないのは、少し心細いですわね……。
頼りになる右腕と左腕が、かたわらに控えていないのが、なんとも不安だった。
――ほかの方たちの出方が見えませんし、エシャール王子自身、どのように動くのか読めませんけれど、ともかく、乗り切るしかありませんわ。
気合とともに、ミーアは部屋に入った。
入ってすぐ、ベッドの上に横たわるエイブラム王の姿が見えた。
老齢の医官が横に控えているものの、他の医官の姿もなく、どうやら、シュトリナの解毒は上手くいったらしい。
さらに、その傍らには王妃、それに、ドレスを着替えたティオーナの姿があった。
重たい空気にすっかり参っていたのだろう、ティオーナは、ミーアたちのほうに目を向けると、ホッと小さく息を吐いた。
それから、一礼すると、ミーアたちのほうに急ぎ足でやってきた。
それと入れ替わるようにしてシオンと、少し遅れてエシャールが国王のもとへと歩み寄った。
その後につき、さらに、ランプロン伯と、老境の男が向かう。おそらくは彼も、国の重鎮なのだろう。と思っていると自己紹介があった。
どうやら、宰相らしい。
ともあれ、これにて役者は揃ったのか、国王が重々しい口調で言った。

「わざわざ、足を運んでもらい、申し訳なかった」
声はかすれ、弱弱しかったが、それでも、その目に宿る輝きは依然として力強いものがあった。
「先ほどの無礼、改めて謝罪したい。イエロームーン公爵令嬢。我が命を救ってもらい、感謝する」
はじめに王の目が向いたのは、シュトリナのほうだった。
「いえ、ご無事でなによりでした。お加減はいかがですか？」
シュトリナは王の顔を見て、それから、近くに立つ医官へと視線を移した。
「迅速なる治療により、陰毒はほとんど無力化できているようです」
それから、医官は深々と頭を下げた。
「陛下をお救いいただき、感謝いたします」
それに続き王妃とシオン、エシャール、さらにランプロン伯と宰相が頭を下げる。
その礼を受けて、シュトリナは、珍しく戸惑ったような顔をした。他人から感謝されることに、慣れていないのだ。
それから、王は……一転して厳しい顔でエシャールのほうを見た。
「さて……エシャール、申し開きはあるか？」
その言葉に、エシャールの肩がぴくりと跳ねた。それから彼は震えを押し隠すように、ギュッと両手を握りしめて、
「申し訳ありません。父上……。なにも、弁解の言葉はございません。すべては、私の不明が招いたことです」
小さな声が、部屋の中に響いた。

第百十四話　突破口、ミーア姫、波を掴まえる

「申し訳、ありません。父上……」
エシャールは、もう一度言って、その場で膝をつき、頭を下げた。
「私が、兄上のグラスに毒を入れました。申し開きもございません」
「え……？」
ミーアの傍ら、エメラルダが驚愕の声を漏らした。
――ああ、そう言えば、エメラルダさんには教えておりませんでしたっけ……。
などとミーアが思っていると……、
「恐れながら陛下、発言を許可いただけるでしょうか？」
シュトリナが一歩前に出た。エイブラムが頷くのを待って、シュトリナは言った。
「仮にリーナが……、いえ、私がエシャール殿下に毒を渡した者であるならば、毒であるとは教えずに渡すでしょう。恐らくは、もっと軽い作用のある薬であると、そう偽って渡すのではないかと思います。エシャール殿下がご自分が入れたものを致死性の毒であると認識していたかどうか……」
「だが、害意を持って王位継承権一位の王子の飲み物に、得体のしれぬ毒を入れたということは変わらぬ。だからこそ、エシャールは、なにも言わないのではないか？」
「申し開きはございません」
エシャールは顔を上げようとはしなかった。ただ、震える声で答えるのみだ。
入れた本人が認めてくれなければどうにもならない。また、仮に「そうだ！」とエシャールが主張したとして、それは言い訳のように聞こえてしまうだろう。
――恐らくリーナさんの言っていることは正しいのでしょうけれ

ど……、それを証明するのは至難……ですわね。
ミーアは小さくため息を吐く。
「王に毒を盛るのは、サンクランドにおいては前代未聞のこと。しかし、他国の慣例では死罪にも相当することであろうな。相手が王であるならば……」
国王の重々しい問いかけに、頷いたのは宰相だった。
「さようにございます。陛下。恐れ多いことなれど……」
「あなた……」
蒼白な顔で詰め寄ろうとする王妃を、エイブラムは鋭い視線で制した。
彼のまとう空気には、どこか近寄りがたいものがあった。
かつて垣間見えた気さくさも、息子を気遣う温もりも、そこにはなかった。
そこにあるのは、厳しいまでの清らかさ……、純白の正義をまとう「王」の姿、そのものだった。
「仮に、ご子息であったとしても、処分を軽くすることは……」
おずおずと口を挟んだ宰相に、エイブラムは重々しく頷いて答える。
「むしろ、息子であるからこそ、厳格に裁かなければならないだろうな。血縁だからと言って罰を軽くしては、サンクランドの公正が揺らぐ」
――こっ、これは……、危険ですわ。
ミーアは、その流れに危険を感じていた。けれど、残念ながら口を挟む隙は一切無かった。
ここにきて、ミーアは気付いていた。
エイブラムは、たぶんミーアたちに話を聞くつもりはないのだ。
ただ、あの場に居合わせた者として、正しい沙汰が行われたことを確認させるために、呼んだのだ。
ミーアたちに求められるのは、エイブラムが正しい裁きをエシャールに与えたことを証明することであって、すでに状況は決してい

る。
エシャールへの厳罰は免れない……。
――波が……ありませんわ。
そもそも、ミーアは海の中に入ってすらいない。エイブラムの態度は、まさにそのようで、ミーアは完全なる傍観者、部外者に過ぎない。
そして、それは、ほかの者たちも同様だった。聖女ラフィーナですら、発言を求められてはいなかった。
部外者の一切の介入を許さないまま、公正な王の判断が下されようとしていた。
裁きの剣を与えられた者により、今まさに、断罪の一刀が振り下ろされんとしていた。
まさに、その時だった！
「そんなの、間違っています」
重たい空気を打ち破り、声が響いた。
かすかに震える声、されど、その瞳に強い意志を宿して、少女、ティオーナ・ルドルフォンは真っ直ぐにエイブラムを見つめていた。
「家族だから、余計に罰を重くするべきとか、より厳しく裁くべきとか、そんなのは、おかしい」
この雰囲気の中、あえて、他人事に踏み込めるティオーナに、ミーアは思わず感心してしまった。
――この空気の読まなさが、さすがティオーナさんですわ。
これは、第一にサンクランドの問題で、第二にエイブラム王の家族間の問題でもある。
ミーアはもちろん、ティオーナにとっては無関係な問題。他人事だ。
そこには、断絶があるのだ。
ミーアたちの意見など誰も求めていないし、なんだったら「口を出すな、黙って見てろ！」と言ってやりたくなる、そのような状況なのだ。

そんな、誰しもが口出しするのを憚(はばか)る状況……、だが、読まない。
ティオーナは空気を読まない。読めないのではなく、読まない。
あえて無視して、正しいと思ったことを躊躇なく口にする。
考えてみれば、それも当たり前のこと。彼女は前の時間軸、革命の聖女と呼ばれた人なのだ。既存の仕組みをぶっ壊そうなどと、少しでも空気を気にする者ならば決して思わないことだろう。
そして、ティオーナにあるのは蛮勇だけではなかった。
彼女は信じているのだ。
「家族は命を賭しても守るべき、大切なもののはずです」
ルドルフォン辺土伯は、農民のリーダーから貴族に成り上がった男だ。その娘たるティオーナにとって、領民とは家族に等しい存在だ。
そして、彼女は教えられてきた。貴族は民の安寧を守るもの。民、すなわち領民とは家族のこと。であれば、家族のほうをより厳しく裁くという考え方に納得はできなかった。
ティオーナにとって、家族は、自分を犠牲にしてでも守るべきものなのだ。
そんなティオーナの勇気は……、確かに穿った。ミーアたちの介入を拒む空気を、穿ち、一穴を生み出した。
そこに、ミーアは突破口を見出した。
小さな波が起ころうとしていた。ならば……乗るしかない。
わずかな波であっても、流される。それこそが、背浮きの極意。
ミーアは静かに息を吸ってから、口を開いた。
「その裁きには、不備がございますわ。エイブラム陛下」
「ほう、不備とは？」
エイブラムが鋭い視線を向けてくる。
ミーアは一瞬、たじろぐも……、
――だ、大丈夫ですわ。ディオン・アライアの殺気よりは幾分かはマシですわ。ちょびっとですけど……。
自分を励ましつつ言った。

「不備のある、あるいは、不当な判断、ということもできるかもしれませんわ」
「なっ……」
息を呑むような声を漏らしたのは、はたして誰であったのか。けれど、今は気にして立ち止まる時ではない。ミーアは、わずかに息を吸う時間、頭の中を整理する。
思い出すのは前時間軸のこと。
ティオーナ・ルドルフォン……、革命の指導者である彼女だが、ミーアの断頭台送りを決めたのは、実は彼女ではなかった。
前の時間軸においてミーアを裁いたのは、革命軍を率いたティオーナでもなければ、革命軍の者たちでもない。
他国の王子であるシオンだったのだ。
それはなぜか……。
理由はとても簡単で“直接的な恨みを持つ者たちによる私刑”としないためだ。
恨みの感情によって……、量刑を不当に重くしないためだ。
――国の内外に正しさを示さなければならない。シオンの配慮だったんでしょうね……。
まぁ、それでも死刑になってしまったわけだが、それはそれ……。
――ふふん、かつての敵の知恵ですけれど、今回は利用させてもらいますわ！
そうしてミーアは、かつての仇敵シオンが用いた論理の剣で武装して、「ほあー！」っと奇声を上げてエイブラムに斬りかかる！
「エイブラム陛下、あなたは被害者……。毒により不利益を被った者ではありませんか。であるならば、陛下は、毒を飲まされた恨みによって、不当に刑罰を重くしたのではないか……」
ミーアはぶつける。
家族だから、不当に罰を軽くしたのではないか？　という疑惑に、被害者だから、不当に罰を重くしたのではないか？　という疑惑を。
不当に罰を軽くする疑惑と、不当に罰を重くする疑惑とをぶつけ

て、相殺するのだ。そのうえで、
「……などと、口さがない人々は言うかもしれませんわ」
自分はそうは思わないけれどね？　という逃げ道までをも、忘れず、きちんと設けておく。
私が言ってるんじゃないよ？　誰か、そんなこと言うかもしれないって言ってるだけだよ？　と。
そうして、奪い取るのだ。エイブラムの手から正義の執行権を。
それを聞いたエイブラムは、静かに目を閉じた。
「なるほど……。ミーア姫の言い分には聞くべきところがあるようだ。だが、ならば、どのように沙汰を下すのが良いと言うのか？」
「簡単なことですわ。陛下、あなたには、立派なご子息がいらっしゃるではありませんか」
そうして、ミーアはシオンのほうを見た。
「シオン殿下が、判断されるのが筋ではないかと思いますわ」
そうして、ミーアは、シオンのほうに目を向けた。
もしかしたら……、シオン自身に弟を処断させることになり、その結果、彼の心は深い傷を負うかもしれない。
でも……、それでも、ミーアは見たのだ。
レムノ王国で打ちひしがれた彼の姿を。
セントノエルで、名誉挽回の機会は自分で用意すると言った、その決意を。
ゆえに、ミーアは信じることにしたのだ。友人のシオン・ソール・サンクランドのことを。
――頼みましたわよ、シオン！
期待を込めて、ミーアはシオンを見つめた。
――あとは、すべて任せましたわよ！
ぽーんっと全部を丸投げにしたのだ！

第百十五話　シュッシュッ！

「俺……が？」
まさかのミーアからのパスに、シオンは茫然とした。
――ミーア、いったいなにを……？
戸惑いつつも視線を向ける。と、ミーアは、自分を勇気づけるように、力強く微笑んでいた。
それで……、シオンは察する。
――なるほど、これが……名誉挽回の機会……か。
帝国に消えた風鴉の諜報員、ビセットを見つけたことで、それが為ったとは思っていなかった。けれど、まさかこのような状況が待っていようとは、思っていなかった。
レムノ王国での出来事が頭を過る。
『完璧に生きられる人間などいない。だからこそ、せめてやり直しの機会を与えてあげるべきですわ』
かつてミーアはこう言った。そして、実際に、シオンにやり直しの機会を与えてくれた。あのキックによって、シオンの胸に、失敗の記憶を刻み付けてくれたのだ。
――正義と公正……か。
それを保つことのなんと難しいことか……。深くため息を吐き、失敗の記憶を胸に……シオンはエイブラムのほうを見た。
「父上、この度のエシャールの沙汰、ぜひ、私にお任せください」
エイブラムはじっと無言で、シオンの目を見つめてから頷いた。
「……わかった。ならば、シオン、お前に任せよう」
その言葉を受け、シオンは静かに目を閉じ、息を吐く。
それから、ミーアたちのほうに目を向けた。
「事情が聞きたい。シュトリナ嬢、先ほど、毒がどこから渡ったものか、わかっているようなことを言っていたが……それはどういう

ことだろう？」

――ほう、シオン、まず他者から意見を聞こうというのですわね。

その姿勢に、ミーアはちょっぴり意外なものを感じる。問答無用に自分の意見を表明するのではない、慎重な姿勢である。

――ふむ、なかなか良い判断ですわ。

イエスマン志望の第一人者、ミーアはうむうむ、と偉そうに頷く。

「よろしいでしょうか？」

そう言って、シュトリナが視線を向けてきた。その意味を、ミーアは考え……、

――なるほど。この場に、蛇の手の者が潜んでいるかもしれない、ということですわね。

この場には仲間たちのほかに、エイブラム王、エシャール、王妃、ランプロン伯に宰相までいるのだ。

混沌の蛇のことを、どの程度まで話して良いのか、ミーアにも判断のつかぬ問題。

ゆえに、ミーアはシュトリナの視線を受けて、シュッとラフィーナのほうに目を向けた。

「そう……ね」

ラフィーナは一瞬、考えるようにして黙り込んでから……、

「例の風鴉の関連で説明してあげたらいいんじゃないかと思うけれど……」

なるほど、とミーアは手を叩く。

レムノ王国事件により、風鴉が半ば乗っ取られていたことを、サンクランドの王室は当然把握している。その時と同じ存在が今回の件にもかかわっているという説明の仕方ならば、仮にこの場に蛇がいたとしても問題はないだろう。さらに、

「でも、念のため……」

そう言うと、ラフィーナは静かに瞳を閉じる。

両手を胸の前で組み、歌うように聖句の一説を口ずさむ。

祝福あれ、祝福あれ。この地に神の栄光を。
剣帯びた王に、神の知恵を。
祝福あれ、祝福あれ。この地に神の栄光を。
公正なる裁きをもて、民を治め、かの地に平和を築け。

突如響いたヴェールガの聖女の清らかな声。その場にいる者たちはみな一様に驚愕の表情を浮かべたが、すぐにそっと瞳を閉じた。
やがて、それが終わると、ランプロンは穏やかな顔で言った。
「失礼、聖女殿、今のは……？」
「重要な判断は穏やかな心をもってするべきでしょう。神の前に心を静め、正しい判断ができるよう、祈りとして聖句を読み上げてみました」
静かに笑みを浮かべるラフィーナ。その目は、けれど、油断なく部屋の中の者たちの顔を観察していた。全員の顔をゆっくりと見まわしてから、
「たぶん、大丈夫じゃないかしら……。あまり、話しすぎないように気を付ければ……」
「なるほど……」
ミーアは、うむうむ、と頷き、シュッとシュトリナのほうを見た。
「……ということですわ」
「では、そのように……」
腕利き伝令兵ミーアは、滞りなく情報を伝達すると、静かに口を閉じる。余計なことは一切言わない。慎み深いのがミーアの良いところである。
……それはさておき、シュトリナは、一歩前に出て話し始めた。
「サンクランド王国の諜報部隊、風鴉に不穏分子が入り込んでいたことは、ご承知のことと思いますが、今回、エシャール殿下に毒物を渡したのは、その者の仲間だと考えられます」
「なっ……？」

突如として投入された、シュトリナの劇薬に、その場の者たちが言葉を失う。
「リーナ……いえ、私の調べたところですが、どうやら、騎馬王国の特徴を有した怪しげな者が、開放市場には出入りしていたらしく……、その者が下手人であると考えています。調査の途中、我々も狙われました」
「なんと、王都内で命を……？」
「騎馬王国ですと？」
それぞれに、驚きの声を上げるランプロンと宰相。一方、エイブラムは静かに目を閉じて、話を聞いていた。
「イエロームーン公爵令嬢、騎馬王国の者が下手人であるという話は、まことか？」
「正確には、その格好をした者です。これ見よがしに、その格好をして、街を出歩いているのは少し怪しいと思いますけれど……。少なくともそういう怪しい人間が解放市場に出入りしていたことは事実です」
「だが、いつだ？　いつ、エシャール殿下に毒物を……」
「それは、以前、エシャール殿下が解放市場に行かれた時でしょう。あっでも……」
シュトリナは、ちょっぴり早口で付け足した。
「かの者たちは、巧みにすり寄ってまいります。たとえば、そうですね……、毒物に手紙でもつけて、服の隙間にこっそり押し込むであるとか……。買い物の商品に紛れ込ませるであったりとか、手段は無数にありますから、特に王子が一人きりになる時間がなくても、接触してくると思います」
――あら、リーナさん、ちょっと慌ててますわね。どうかしたのかしら？
首を傾げるミーアである。
「かの者たちは、心を操る術に長けております。エシャール殿下の心の隙を突いて、シオン殿下に毒を入れるように仕向けるのも、容

易なことでしょう。そして、先ほども言った通り、渡したものをそもそも、毒と説明していない可能性もあります」
それだけ言って、シュトリナは下がろうとして……。
「あ、それと、僭越ながら付け加えるならば、その者たちはエシャール殿下が事を行い、処断されるところまでを、おそらく計算していると思います。その思惑に乗ることは、彼らを喜ばせることになるだろう……と、リーナは思います」
それから、シュトリナは、わずかに憐みのこもった目で、エシャールを見た。
――リーナさんは、エシャール殿下に過去の自分を見ているのかもしれませんわね。
ミーアは何となく思った。

シュトリナの話を、口を閉ざしたままじっと聞いていたシオンは、思案するように瞑目する。長い沈黙の後、彼はラフィーナのほうへと目を向けた。
「ラフィーナさまは、どのようにお考えでしょうか……？」
シオンは、聖女ラフィーナに意見を求める。
大陸にある数多の国家は、あまねく中央正教会の倫理的基盤を共有している。善悪の判断は、すべて神聖典を基準としている以上、ラフィーナに意見を尋ねるのは自然なことといえた。
「そう……ですね……」
それを受け、ラフィーナは涼やかな瞳を宙に彷徨わせた。ことの本質をじっくり吟味するように、黙ることしばし……。
「力を持つ者は、その力を正しく用いるべき。ゆえに、力を持つ者は持たざる者よりも、いっそう厳しく裁かれなければならない……。私はそう思っています」
静かな口調で、ラフィーナは言う。
聖女ラフィーナは権力者の横暴を許さない。力を持つ者は、神から任されたその権威に相応しく振る舞うべきである、という彼女の

立場は揺らぐことはない。
「されど、此度のことは権力を使った悪事ではなく、被害を受けられたのもお父君。であるならば、ただ人のありようとして考えるのがよろしいでしょう。古くより、我らが神の神聖典は、裁きの基本をこのように教えます。すなわち、腕を奪った者の腕を切り落とし、目を奪った者の目を抉り出せ……」
と、そこで言葉を止め、みなの顔を見回してから、厳かに……。
「けれど、それ以上の害を与えてはならない……と」
与えた損害と同じだけのものを取り立て、それ以上は求めてはならないという、それは戒めの警句。ラフィーナは静かにエイブラムに視線を向ける。
「だから、私が問うとすればただ一つ。エイブラム陛下は命を奪われたのか、ということかしら？」
エシャールに死罪を与えるということは、起きた事象という面にのみ目を向けるならば過剰である、とラフィーナは結論付ける。けれど……、
「もちろん、これは、あくまでも結果に過ぎない。それをもって罪がないとは言えないでしょうし、エイブラム陛下のおっしゃっていたことはもっとも。どのような心で毒を入れたのかも考慮するべきでしょうけれど、でも……」
と、ラフィーナは、ここまで言って自らの心に戸惑っていた。
かつての彼女であれば、此度のエシャールのありようは、断罪されてしかるべきもの、と考えていただろう。王家の者としてあるべき資質に欠ける者と……、恐らくは断じていたはずだった。
でも……、ラフィーナはそっと胸に手を当てて言った。
「エシャール殿下はまだ幼い。兄に対する複雑な思いがあるのは、人として当たり前のことかもしれません……。なれば、王族に相応しく自らを律する術を、これから身に着けていけばよいのではないか、とも思いますけれど……」
思い出すのは、セントノエル。ミーアが行った沙汰。

ミーアは帝国貴族たちにやり直しの機会を与え、成長を促し……それを与えられた者たちは見事に更生したのだ。
――きっと、今回だってミーアさんは、エシャール殿下のことも思っているでしょう。今なら、少しだけミーアさんの気持ちがわかるわ。
友の気持ちが理解できたということが、ラフィーナは少しだけ嬉しかった。
彼女は偽りのない本心から、エシャールにやり直しの機会が与えられればいいと感じていた。

ミーアは、シュトリナとラフィーナの話を聞きつつ、エイブラム王の顔をうかがっていた。その顔は、厳しい表情を浮かべたまま、変わることはない。
――ふむ、なかなか手ごわいですわ。お二人の話を聞いて、許しちゃってもいいと、てっきり言い出すかと思いましたけれど……。ていうか、わたくしだったら、もう、そのように判断を下しておりますけれど……、あと一押し……、なにか波があれば……。
と、その時だった。
扉をノックする音が……響いた。

第百十六話　ミーアベル問答。王とはなにか？

「失礼いたします。陛下、キースウッド殿が急ぎの用事ということで、ご案内してもよろしいでしょうか？」
部屋の外を守っていた近衛が、部屋に入ってきた。
王の許可を得て、中に入ってきたのはキースウッド、ディオン、それに、なぜか、額の汗をぬぐって緊張した面持ちをしているコネリー……を率いたベルだった。
「あら？　ベル、今までどこに……？」
「あ、ミーアお姉さま。ちょっとお城の中をぼうけ……んがくしていました！」
――ああ、冒険してましたのね。っていうか、全然、隠せてませんわね、ベル……。
ミーアは、孫娘の口下手に、やれやれ、と首を振った。
――上手く誤魔化せないと、いろいろと苦労すると思うのですけど……、その割にディオンさんあたりとも普通に付き合えてるのが解せませんわね……。
一歩間違えば首を飛ばしに来る男と、なぜ、そんなにも平然と付き合えるのか……首を傾げるばかりのミーアである。
ベルの様子に苦笑していたキースウッドだったが、エイブラムのほうに顔を向けて、膝をつく。
「ご無事でなによりです、陛下」
「ああ。ミーア姫と、お嬢さん方に救われた」
エイブラムは穏やかな笑みを浮かべて、ティオーナと、シュトリナに目を向けてから、
「して、キースウッド。急ぎのこととは？」
「はい。実は、ミーア姫殿下からの報を受け、エシャール殿下のお部屋を探らせていただきました。大変、失礼なことながら事が事で

したので……」
エイブラムは、しばし、瞑目したが……、
「申し訳ありません。今日、知らせを受けお伝えする時間もなく……」
「当然のことであろうな。この日に、エシャールが行動を起こしたことは不運であったというほかあるまい」
深々とため息を吐くエイブラムを横目に見つつ、ミーアはベルに話しかける。
「それで、なぜ、ベルがキースウッドさんたちと一緒にいるんですの？」
「あ、はい。実はですね……」
そうして、ベルは話し出す。お城を、ぼうけ……んがくした話を。

「こっちのほうです」
コネリーを伴ったベルは、ずんずんお城の中を進んでいく。
普通ならば、衛兵に呼び止められそうなものだが、普段から城に出入りがあり、顔が知られているコネリーがいることで、ほぼ顔パスになっているようだった。
これは……失敗しただろうか？　と思うコネリーではあったが、キースウッドたちの行動が気になるのは事実。仕方がないと自分を納得させつつ、ベルの背を追う。
「そういえば、コネリーさんはランプロン伯のところ、長いんですか？」
きょとりん、と首を傾げるベル。コネリーは小さくため息を吐いて言った。
「ああ……ええ、そうですね。私が若い頃から、お世話になっております。ふふ、しかし、あの頃は、まさか、王子殿下と親しくさせていただけるようになるとは思っておりませんでしたが……」
「あ、そうでした。そういえば、エシャール王子とも、お付き合いが長いんでしたね。ランプロン伯爵は、エシャール王子の養育係で

したっけ……」
ベルは、ふと、思いついたといった様子で言った。
「あの、一つお聞きしたいのですけど……」
「なんでしょうか？」
「王とは、なんでしょうか？」
突然の問いかけに、コネリーは、瞳を瞬かせる。
「王……、エイブラム陛下のことでしょうか？」
「えーと、そうではなくてですね……」
小さく首を傾げてから、ベルは言った。
「王や皇帝、人の上に立ち、統治するものに興味があって……。王子さまや王女さまでもいいんですけど、どういうものかなって……」
「ああ、なるほど……」
コネリーは小さく頷く。
恐らくこの少女は、ミーア姫やシオン王子と親しくするうちに、王族に興味を持ったのだろう。
そう判断はしたものの……、その問いかけは、なかなか難しい。
「そう……ですな。私にとって王というのは……、神の代行者、といった感じでしょうか」
「神の代行者？」
コネリーは深く頷いた。
「我ら大陸の民は神を信仰するもの。ゆえに、すべての人は神聖典に善悪の基準を置いております。されど、いつも神聖典にあてはめられるわけではない。難しい判断を求められる時があるのですが、そのような時に判断するのが王です。善悪の判断を下し、神の権能を代行するもの、その委託を受けたもの、それが王であると、私は思っております。それゆえ、絶対的な信頼を王に寄せるのです」
「それが、サンクランドの王の在り方……ですか？」
腕組みして頷いていたベルだったが……、直後、
「きゃっ！」
小さな悲鳴を上げた。驚き、そちらに視線を向けると、腕を掴ま

れたベルの姿があった。
「なにをする！」
咄嗟に助けに入ろうとしたコネリーだったが……、すぐに、彼女を捕まえている者に気付き自重する。なぜなら、そこに立っていたのは……、
「おやおや、誰がついてきてるのかと思ったら……君か」
ミーア姫の剣、ディオン・アライアと、そして、
「コネリー殿まで、いったいどうされたのです？」
怪訝そうな顔で首を傾げるキースウッドだったからだ。

第百十七話　ミーア姫、封じられる！

怪訝そうな顔をするキースウッドに、コネリーは小さくため息を吐きつつ言った。

「いや、実は、こちらのお嬢さまが、お城の中でお二人を見かけたとかで……」

見つかってしまっては仕方ない、と、コネリーは肩をすくめる。

もっとも、もともとそこまで隠れて尾行していたわけでもない。ただ少しばかり気になったから、ついてきただけなのだ。

――これ以上、ついていくことはできなくなったが、この少女を預けて、退散するとしようか。

これで、自分の役目は終わり……、と、そう思っていた……ちょっぴり油断していたコネリーであったが……。

「なるほど、そうでしたか……いや、逆にちょうどよかったかもしれない。我々だけで行っても後々で問題になっていたでしょう。ランプロン伯の警護担当のあなたに証言してもらえれば好都合です」

そうそう上手く逃げられるほど、彼の運命は甘くはないのだった。

「証言……？　なんのことでしょうか？」

首を傾げるコネリーに、キースウッドはあっさりと言った。

「実は、これから、エシャール殿下の部屋を、検めるところなのです」

「……はぇ？」

コネリーは、自分がとんでもない場面に出くわしてしまったことに、遅まきながら気が付いた。

「なっ、なにを言っているのです？　はっは、そのような冗談。ああいや、冗談にしても不敬。聡明なキースウッド殿らしくもない……」

笑って誤魔化そうとしたコネリーであったが……、すぐに思い知

ることになる。
キースウッドは本気だ、ということ。なにしろ、その目は一切笑っていない。
助けを求めるようにディオンを見ると、彼は薄っすら笑みを浮かべているが……怖い。
こいつぁ、笑いながら大軍に突撃できるヤバいやつに違いない、と勘付いたコネリーは、最後の最後、帝国の叡智ミーアの連れの少女に、希望を託した視線を向けた。
その少女、ベルは……、
「すごい……王子さまのお部屋に忍び込むなんて、冒険ですね！　さすが、天秤王の忠義の騎士、キースウッド！　それに、ディオン将軍まで、ふわぁ！」
目をキラッキラさせていた！
――ああ、ダメだ。これはもう、止めることはできなそうだ……。
どんよりと気落ちするコネリーに、キースウッドはきびきびした口調で言った。
「ベル嬢まで一緒に来るのは少し危険だが……仕方ない。時間がないので急ぎます。コネリー殿はベル嬢を守りつつ、ついてきてください。あと、これを……」
っと、キースウッドは、目元を隠す覆面を渡してきた。
「これは……」
「顔を見られぬよう、念のためです」
「……そういえば、何度か、覆面の二人組が小規模の盗賊団を潰したという話を耳にしたことがあるような……」
「……シオン殿下は正義感の強い方なので、苦労が絶えませんよ」
肩をすくめるキースウッドに、ちょっぴり同情してしまうコネリーであった。

見張りの位置を完璧に把握していたキースウッドの案内で、さしたる障害もなくエシャールの部屋まで辿り着いた。

最大の危機は、ベルが転んで「ふひゃっ！」と悲鳴を上げ、それを聞きつけた見張りがやってきた時だったが……。
駆け付けた見張りは、難なくキースウッドとディオンが連携して殴り倒した。
幸い命を奪うことはおろか、怪我さえさせぬように気を使えるほどの実力差が見張りとの間には存在した。
鮮やかに見張りの意識のみを刈り取ると、ディオンは、ベルのほうに目を向けた。
「え……えへへ」
照れたように、誤魔化すように笑うベルに、ディオンはため息を吐いた。
「やれやれ……。いつぞやの森での姫さんを思い出すな」
それから彼は、キースウッドのほうを見て……。
「しかし、やるな。シオン殿下も剣の才能の片鱗が見えたけど、君もなかなかだよ」
「それはどうも……」
「一度、手合わせをお願いしたいものだね。この国にいる間に」
「はは、遠慮しますよ。とても太刀打ちできそうもない」
笑って誤魔化しつつ、キースウッドは冷や汗をかいていた。
ディオン・アライア、その身から発する、圧倒的な強者の空気に、思わず気圧されてしまう。
太刀打ちできないどころか、剣を抜く前、敵として向かい合った時点ですでに逃げたくなりそうな、鬼神のごときその凄味に、キースウッドは……ミーアの料理のような恐怖を覚えていた。
――ミーア殿下を調理場に立たせてはいけないように、間違ってもキノコ料理を作らせてはいけないように……ディオン・アライアと戦場で対峙することは避けるべきだな。もしも帝国と戦争になりそうになったら、全力で止めよう……うん。
微妙に、胃が痛くなってくるキースウッドであった。

さて、エシャールの部屋に滑り込んだところで、コネリーは改めて言った。
「キースウッド殿、いくら貴殿といえどもこのようなことは……」
「許されるものじゃない。はい。百も承知です」
厳しい顔をするコネリーに、キースウッドは苦笑する。
「ただ、場合が場合です。納得していただく。サンクランド王家の危機なのです」
「王家の……？」
「どうやら、怪しげな人間が、第二王子殿下に毒を渡したらしい……という話があってね」
キースウッドの説明を引き継いで、ディオンが言った。
「なっ、どっ、毒ですと？」
「まぁ、あくまでも、噂なんだけどね」
それを聞いてコネリーは、小さく首を振った。
「な、ならば、やはりそのような礼を失することを容認するわけには……」
「だけど、だいぶ可能性は高そうな感じなんだよね。開放市場に出入りしていた男から渡されたって話なんだけど……」
その言葉に、思わずギョッとした顔をするコネリー。
「かっ、開放市場、ですか……」
声が震える。目が泳ぐ。隠し事のできない人である。
それを見たキースウッドが、はて？　と首を傾げた。
「どうかしましたか？　コネリー殿」
「いえ……その」
言い淀むコネリーの肩に、すかさずディオンが、ポンっと手を置いた。
「なにか、心当たりがあるのかい？　だったら、正直に話しておいたほうがいいと思うけど……」
「あーえー、その……」
微妙に目を逸らした先、小さく首を傾げるベルの姿が見えた。じ

っと、こちらを見つめている。その澄んだ瞳を見てしまったコネリーは、うぐぅっとうなり、
「実は……」
つい、本当のことを言ってしまうのだった。
純粋無垢な子どもの前で嘘が吐けるほどの胆力は、彼にはなかった。基本的に正直な、いい人なのである。
「以前に開放市場に行った際、エシャール殿下とはぐれたことがありまして……」
それを聞き、ディオンは吹き出した。
「あはは、正直に話しちゃうなんて人がいいなぁ。でも、ほかの人には言わないほうがいいよ。責任を問われることになるから」
「やはり、そうでしょうな。しかし……」
「いや、というか、黙っててくれ。うちの姫さんは、あまり誰かが処刑されたりとか、そういうのが好きじゃないお方なんでね。無駄な心労をかけたくない」
真面目な顔で言うディオンに、コネリーは静かに頷いた。
「しかし、それならば、なおさら、あなたには協力していただくべきでしょう。エシャール殿下を救うためでもあるのですから」
そのキースウッドの言葉に、コネリーはしばし黙り込み……、
「……そうですな。どうやら、私も協力せざるを得ないようだ」
やがて小さくため息を吐いた。そうして、あの時のことを思い出す。
「少なくとも、エシャール殿下は、なにかそれらしいものを持ってはおられませんでした。ということは、探すべきものは、あまり大きくはないもののように思います」

エシャールの部屋は、なかなかの広さだった。
もともとが戦城として作られたソルエクシード城であるがゆえに、一部屋の広さはそれほどではないものの、その部屋が三つ連なっていれば話は別だ。

一室は、多くの蔵書が納められた本棚のある部屋。書き物をする机なども置かれている。二つ目は、宗教画などが飾られた部屋だった。食器の類が置かれていることから、おそらくはアフタヌーンティーなどで使われている部屋だろう。

三つめは天蓋付きの巨大なベッドが置かれた部屋だった。

「これはまた……。この中から探すのは、なかなか大変そうだな……」

ざっと部屋を見たディオンは、ため息まじりにつぶやいた。

「それも、どんなものかもわからないうえに、肌身離さず持ち歩いてる可能性もあるんじゃあ、探しようがないと思うけど……」

肩をすくめるディオンに、キースウッドは首を振った。

「さすがに、今日のパーティーに持ち込むということはないのではないかと。晴れ舞台ですからね。しかし、もらってすぐに捨ててしまっているかもしれないから、見つからないことは当然あるかと思います。それはそれで……って、ベルさま、なにをなさっているんですか？」

床に這いつくばるようにして、ベッドの下を覗き込んでいるミーアベルに、キースウッドは、ちょっぴり呆れたような視線を向けた。

「前にリーナちゃんが言ってました。貴族の男の子は、ベッドの下とかに、見られたくないものを隠すものなんだって……」

振り返ったベルは、にっこり無邪気な笑みを浮かべる。

「えへへ、リーナちゃん、なんでも知ってるんですよ。なにも知らなくても、『あのこと、知ってるよ』って言うと、男の子は焦っていろいろなことを話してくれるとか。ほかにもいろいろ……」

コネリーは、脳裏にシュトリナという少女の姿を思い浮かべた。可憐ながらも、どこか、ちょっぴり妖しげな雰囲気を秘めた少女……。

――なるほど、さすがはミーア姫殿下が連れている少女だ。一筋縄ではいかないのだろうな……。

っと、立ち上がったベルは、考え事をするように腕組みをし、枕

の下に手を入れた……、瞬間、
「あっ……」
小さく声を上げ、引き抜いた腕。その手には、なにかが握られていた。
顔を近づけたキースウッドは、怪訝そうに眉をひそめた。
「小さな馬のお守り（トローヤ）ですか。なぜ、そんなものが、枕の下に……」
首を傾げるキースウッドに、ベルは、しかつめらしい顔で言った。
「ボクは作ったことがあるんですけど、このお腹の部分に芯を入れて、その上から編み込んでいくんです。それで、作った後、その芯を抜くと、ここにスペースができて……」
ベルは、お守りのお腹の部分をぐいっと開いてみせる。
「ほら、ここ、なにかを隠しておけるように作れるんです」
そうして、中から現れたもの……、それは、黒い粉がたっぷり入った小さな瓶だった。

「これが、エシャール殿下の部屋から見つかったものです」
それを見て、ミーアは思わずため息を漏らしかけた。
――キースウッドさんが、今日のパーティーより先にあれを見つけていれば、こんなことにはならなかったですわね……。
けれど、それは結果論と言うべきかもしれない。
今夜、毒が使われたからこそ、第二王子の部屋を探るなどという無礼が許容されるのだ。毒の情報が確定ならば別だが、それを証明するには、ミーアが未来のことが分かっていることを上手いこと説明しなければならないわけで……。
――まぁ、無理でしたわね。ここは暗殺を防げただけで良しとするべきでしょう。
そう考えていたミーアは、ベルたちがもたらした新情報は、別になんの影響を与えるものでもないと思っていた。
使われた毒が実際に見つかっただけなのだ、と。でも……。

「よろしいでしょうか？」
シュトリナが一歩前に出て、その小瓶を受け取った。それを軽く振ってから、
「なるほど。僭越ながら、これは、エシャール殿下に殺意がなかったことの傍証になるかもしれません」
シュトリナは言った。
「どういうことだろうか？」
怪訝そうな顔で尋ねるシオンに、シュトリナは一度頷いて、
「先ほど、リーナはエシャール殿下に聞きました。ワイングラスにどれほどの量を入れたのか？　と。そうしたら、エシャール殿下はお答えになりました。一つまみ……と」
シュトリナは、毒薬の入った瓶を光に透かすように、掲げ持って言った。
「これだけたくさんあるのに、一つまみしか入れなかった。毒を使うのであれば確実に死ぬように、もっと多く入れるのではないでしょうか？　相手を殺すためならば、少なすぎて死なない、などということがあってはなりません。パーティーの中で、直接、自分の手で渡すのです。バレる危険が高い以上、確実に殺したいはず。やり直すことを考えないのであれば、余らせる意味もない。でも、エシャール殿下は、これだけたくさんの毒薬があるのに、控えめに一つまみしか入れなかったのです」
ミーアは、それを聞いて「なるほど！」と思わず納得する。
それはちょうど、“砂糖がいっぱい入った小瓶”に似ている。
もしも、砂糖が半分しかなければ、なんだか、ちょっぴりもったいなくなってしまって……、紅茶に入れる量もおのずと減るものである。毒も同じように、最初からちょびっとしかなければ、使う量も一つまみになるのかもしれない。
けれど、溢れるほどあるならば、むしろ、多めに入れてしまうのが人間というもの。
少なく入れて渋い紅茶より、入れすぎて甘ぁぁあくなってしまっ

た紅茶のほうが良いのは、ミーアの中で自明の理なのである。
――溢れるほどあるのに、少しだけしか入れない……。その裏にある心理とは、つまり、多く入れすぎたらマズいというもの……。多すぎてバレないように、ということはあるのでしょうが、一つまみというのは、それでも少なすぎる……。ふむ、これは、意外と説得力はあるかもしれませんわね。
「これだけの量の薬があるなら、ネズミかなにかで試してみるでしょう。リーナならばそうします。そうして、薬の効果を確認するでしょう」
サラッと怖いことを言って、シュトリナは可憐な笑みを浮かべた。
「でも、たぶん、エシャール殿下はそれすらしていない。殿下の毒の入れ方は、明らかにバレても構わないというもの、衝動的なものでした。誰かを殺すための毒ならばバレないように入れるでしょうし、バレても構わないと思って毒を入れるなら、確実に相手を殺すでしょう。そういうものではないでしょうか？」
ひたすらに物騒なことを口にする、シュトリナの表情は、けれど、乙女のように穏やかだ。
唯一無二の真実を口にするような、確信に満ちた声で、シュトリナは告げる。
「だから、リーナは思います。たぶん、エシャール殿下は衝動的に入れてしまったのだと。しかも、毒だとは思っていなかったし、そもそも使うつもりがなかった。でも、手元にあったから、衝動的に入れてしまったのです」
その言葉には奇妙な説得力があった。当然だ。彼女は専門家。その心理も含めて、よく理解しているものだ。
そんなシュトリナにミーアは大きく頷いてみせた。なんだったら、拍手でもしてやりたいぐらいだった。
彼女により、エシャールの殺意に関しても、十分に疑いの余地が生まれたのだ。
――ふむ、良い感じですわ。ラフィーナさまと、リーナさんのお

話で、ますます罰を軽くするほうに流れができつつありますわ。これならば、シオンもきっと、処刑しろとは言わないんじゃないかしら！

後はシオンの判断を待つばかり、と、ミーアは、ふーぅっとため息を吐く。

……その時だった。

「ミーア……、君はどう思う？」

そんな声が飛んできた。

――ふむ、仕上げですわね。さぁ、ミーアさん、気の利いたことを言ってやるといいですわ。シオンのお尻を蹴っ飛ばして、さっさと沙汰を言い渡させてやるといいですわ。さぁ、さぁ、ミー……あら？

と、そこで、ミーアは気付く。

専門家二名のアドバイスの後、なぜだろう……、シオンは……、完全に傍観者面をしていた、ミーアに判断を仰いできたのだ、と！

「……はぇ？」

ぽかーんと口を開けそうになるミーアに、その場のみなの視線が集まった。

――え？　あ、お、ああ、えーっと、なんでしたっけ……。

ミーア、かひゅーっと息を吸い、なにか言おうと口を開けかけて……、その瞬間、喉に違和感を覚える。

かさかさした、なんとも言えない感じ……。声を出そうとしても、けふっとむせてしまう。

――あっ、こっ、これは、まさか……毒っ！？

……否、出がけにパクついたクッキーが水分を吸い取っていっただけである。

声を封じられたミーアに、最大の危機が迫っていた。

第百十八話　忠臣からの差し入れ

さて、ところ変わってダンスパーティーの会場。
一時、浮足立った客たちも一応の落ち着きを取り戻し……、されど、ソワソワ不安そうな顔を隠すことはできなかった。
そこに、息を切らしたアンヌが戻ってきた。
「ルードヴィッヒさん、ミーアさまは……？」
「ああ、お疲れさま……。なにかあったのかい？　ずいぶん時間がかかっていたようだが……」
ルードヴィッヒはアンヌの姿を見て、小さく首を傾げた。
すでに、アンヌに呼んできてもらった近衛は会場の入り口に待機している。なにかあれば、すぐに中に押し入ってこられるよう手配済みだが……、すでに会場内は落ち着きを取り戻している。サンクランドの兵も秩序だった警備を行っているため、そうそう出番があるとは思えなかった。
――会場の警備はランプロン伯の担当だろうか。さすがに、よく訓練してあるようだ。しかし……。
それより、気になっていたのは、アンヌのことだった。
近衛によれば、会場に向かえ、と伝えた後、アンヌは城外に走って行ってしまったという。いったいどうしたのか、と心配していたのだが……。
「あの……、ミーアさま、ダンスで喉が渇いたんじゃないかって思って……」
そう言って、アンヌは抱えてきた瓶を差し出してみせた。
「ラフィーナさまにゆかりのある宿屋さんに、ジュースをもらいに行っていました」
額に光る汗をぬぐいつつ、アンヌは笑みを浮かべた。
「えっと、パーティー会場のものも、大丈夫だとは思ったんですけ

ど……」
　そのアンヌの気持ちは、ルードヴィッヒにもよく理解できた。
　エイブラムの飲み物に毒が入れられていたのだ。もしかしたら、ほかの飲み物にも入れられているかもしれない。もしも、それを運悪くミーアが飲んだりしたら……。
　そんな危惧がわずかでもあるならば、と、アンヌはわざわざ城外にまで走っていったのだろう。
「君は本当に気が利くな、アンヌ嬢」
　ルードヴィッヒはその忠義に感心すると同時に、若干の羨望を込めて、アンヌに言った。
　彼女のしたそれは、自分には思い至らない配慮だったからだ。
　――ダンスが終わった直後の出来事だったから、喉が渇いているかもしれない。でも、パーティー会場のものを口に入れるのは避けるべき状況。それを考慮したうえで、ミーアさまの必要をきちんと理解して動ける。彼女は立派な補佐役だ……。
　会場を出がてら、ミーアが無防備に、パクリ、サクリ、とやっていたことは、見ていなかったルードヴィッヒである。まぁ、見ていたら、見ていたで、独自の解釈をつけてしまいそうではあるが……。
　ルードヴィッヒの言葉に、アンヌは照れたように笑って首を振った。
「ミーアさまに相応しいメイドになるには、まだまだです」
　それから、ジュースの瓶を見て……、
「お喜びいただければ良いのですけど……。私にできるのは、このぐらいのことしかありませんので……」
「いや、それで正しいのだと思う。我々ができる最善をもってお仕えすれば、きっとミーアさまの力になることはできる。ミーアさまは、我々がなしたことを、きちんと活かして計画の中に組み込んでくれる。そういうお方だ」
　ルードヴィッヒは、クイッとメガネを押し上げて言った。
「これからも、お互いにミーアさまを支えて、頑張ろう」

「ルードヴィッヒさん……、はい！　これからも、よろしくお願いします」
アンヌは笑みを浮かべて、頷いた。
そうして、忠臣同士、連帯を深めつつ……。
「それで、ミーアさまのもとへは、申し訳ないが、君だけで行ってもらえるだろうか？　私とアベル殿下とは、どうやら、ここを動けそうもない」
「それは、犯人を外に出さないため、とか、そういうことでしょうか？」
「もちろん、それもある……が」
ルードヴィッヒはあたりを見回してから言った。
「今は落ち着いているが……ここは、少し危険だ」
「というと？」
「君に近衛を呼んできてもらったことからもわかると思うが、いつまた先ほどのような恐慌状態になるかわからない。サンクランドの民にとって、エイブラム陛下は精神的支柱。今はサンクランドの貴族も衛兵も落ち着いてはいるが……。なにかあった時には、それを静められる者が必要だ」
それから、ルードヴィッヒはアベルのほうに目を向けた。
「できれば、アベル殿下にも安全な場所にいてもらいたいのだが……」
「それは無用な心配だな、ルードヴィッヒ殿」
アベルは苦笑いを浮かべて言った。
「少なくとも、君よりは荒事に慣れているつもりだし……、君だってミーアにとっては大切な臣下のはず。君だけがこの場に残るというのは道理に合わない。なにより、無用な争いごとで血が流れるのは、ミーアも望んではいないはず……」
肩をすくめつつ、アベルは言った。
「失礼ながら、帝国の平民である君より、レムノ王国の王子であるボクのほうが、声を届かせるには向いていると思うけど……」

そのおどけた様子に、ルードヴィッヒは苦笑して、
「と、まぁ、そういうわけで。ミーアさまのもとへは、アンヌ嬢一人で行ってもらえるだろうか」
「はい。わかりました」
アンヌは頷いて、会場を出ようとする。そこに、
「ああ、そうだ。一言だけ、お願いできるだろうか？」
現在、騒動の渦中にある主君のもとに馳せ参じることができないのが、わずかばかりシャクだったルードヴィッヒは、ミーアにメッセージを送ることにする。
「ミーアさまに、伝えてくれ。どうぞ、御心のままに、と。後のことは我々がなんとかしますから、と」
アンヌは、それを聞き、小さく頷いた。
「わかりました。必ず、ミーアさまにお伝えいたします」
そうして、アンヌはミーアたちのもとに向かった。
途中でキースウッドたちと合流できたのも幸いし、無事に王の部屋まで到着。
そうして、話が一段落するのを、じっと待っていたのだが……、しばらくして、ミーアが軽く咳き込むのを聞いて大慌てで部屋に入った。
「失礼いたします。ミーアさま」

第百十九話　ミーア姫、ついに復讐を決意してしまう！

――ま、まずいですわ……これは。

けほっ、けほ、と小さく咳き込みつつ、ミーアは動揺する。

まさかの、最後の最後に回ってきた出番。最重要の場面で、喉がカサカサするという最悪の事態。

――いや、これはむしろ好機かしら？　このまま咳き込んでおけば、いい具合に誤魔化せるかも……。

やっぱり波が来てますわ！　これは乗っていくしかありませんわ！　などと、悪い方向に押し流されそうになったミーアの耳が、不意に、ノックの音をとらえた。

そうして、入ってきたのは無二の忠臣……、アンヌの姿だった。

「失礼いたします。ミーアさま、ダンスの後すぐで喉が渇かれたのではないかと思い、お飲み物をもって来ました」

その言葉の通り、アンヌはジュースの入ったグラスを、お盆の上に載せていた。

「あ、ああ、アンヌ、素晴らしいタイミングでしたわ、けふっ」

ミーアは、それをいささか複雑な気持ちで見つめた。あれを飲んでしまったら、喉の調子は落ち着いてしまうだろう。そうしたら、いよいよ、難しい場面で話さなければならない。

エシャールをどうすればいいのか、答えは定まらない。

――ぐっ、ぐぬぬ、やはり逃げられませんでしたわ。こっ、こんなことなら、みなさんが話している間に考えをまとめておくべきでしたわ。

アンヌから受け取ったグラスを傾けつつ、できるだけゆっくりとジュースを飲む。

舌の上に広がるのは、酸味の効いた爽やかな甘味だ。鼻腔をくすぐる柑橘類の香りに、思わずうっとりしつつも、その味わいを楽し

む。
――これは、春先の森の奥に秘された、一輪の花にたまった朝露のような味……、さわやかな甘みはさながらキノコの……。
などと、ついつい、なんちゃってソムリエにまでなりかけたミーアであったが……、
――って！　現実逃避している場合ではありませんわ！
直後に、我に返る。
――ジュースの批評をしている場合ではありませんでしたわ。なんとか気の利いたことを言って、シオンとエイブラム陛下を納得させませんと……。
ふむむむ、と、眉間にしわを寄せる……その時だった。
「ミーアさま、ルードヴィッヒさんから伝言です」
アンヌが、真剣そのものの顔で、自分を見つめていることに気が付いた。
「あら……なにかしら？」
「はい。ミーアさまの御心のままになさってください、と。我々がなんとかしますから、とのことでした」
そう言ってから、アンヌはそっと、自らの胸に手を当てて続ける。
「ミーアさま、私も同じ考えです。ミーアさまがお望みのことをなさってください。私たちはいつだって、ミーアさまの味方でいますから」
「アンヌ……」
それに……クソメガネ……、とつぶやき、ミーアは目を閉じる。
思い出すのは、アンヌの最後の忠義……、そして、諦めることなく帝国を救おうとした忠臣の姿。
彼は、いつでも「なんとかするので」と言って、嫌な顔一つせず……。
――いや、嫌な顔はしてましたわね。ものすごーく嫌そうな顔をしてましたわ。うふふ、懐かしいですわ。
思わず笑ってしまう。

――彼とは、国内は駆け回ったものですわ。まぁ、ほとんどはわたくしが頑張ったとはいえ、クソメガネも頑張ってましたわね。わたくしが六なら、クソメガネは四ぐらいの割合でしたけど……。
実際には、ルードヴィッヒが八でミーアが二……、いや、若干、足を引っ張っていたので、一……。いや、ともかく、頑張ったのだ！
けれど……、その頑張りは報われることなく……。
ミーアとルードヴィッヒが蒔いた種は、残念ながら、ほとんど芽吹くことはなかったのだ。
――思い出したら……、なんだか腹が立ってきましたわ……。
ふつふつと、腹の底から湧き上がるのは怒り。なんともやるせない憤りだった。
そうして、ミーアは見出した。これは、復讐のチャンスではないか……、と。
――そうですわ……。こんな機会、滅多にございませんもの。ここは一つ復讐してやりますわ！　全力で復讐してやりますわよ！
やるべきことが見えたことで、ミーアはすっきり爽快な気分になる。
それからジュースをもう一口。喉の調子を万全にしておく。
「ありがとう。アンヌ、助かりましたわ」
グラスを返すと、ミーアは静かに振り返る。
そこには、ミーアの言葉を待つ、みなの姿があった。
ミーアは、ふんすっと怒りの炎を鼻から吐き出してから……、厳かに言った。
「人は、自らが蒔いた種は、自分で刈り取らねばならぬもの……」
それは、ミーアが身をもって知った教訓。決して揺らぐことのない真理だ。
「良い種であれ、悪しき種であれ、それは自らの手で刈り取らなければならない。そういうものではありませんか？　陛下」
確認をするように、エイブラムのほうを見つめる。
っと、エイブラムは知性の光を湛えた瞳で、見返してきた。

「そうだな。そういうものであろうな……」
エイブラムは正しさを認める。
それを確認したミーアの胸にあるのは……大いなる怒りだった。
だって、おかしいじゃないか……？
一度、蒔かれてしまった種は、もうどうしようもなくって。止めることなどできなくって……その破滅の実りは、どうしても自分の手で刈り取らなければならないなんて……。
どれだけ頑張っても、取り返せない……やり直せないだなんて……、
――そんなの、絶対に納得がいきませんわ！
それは、過去に、破滅の実りを回避しようとして、懸命にあがいた、ミーアの怒り。
そして今はその怒りを晴らすための復讐の好機。それを、ただエシャールの命さえ助かればいいだなんて、有耶無耶にすればいいだなんて、もったいないことだ。
ミーアはそっと瞳を閉じて続ける。
「確かに、その種の実りは自分の手で刈り取らなければならない……」
さながら、神託を告げる預言者のように厳かに。
「されど、それは今ではありませんわ」
力強く、断言する。
「どのような草花であれ、種を蒔けば、芽吹き、成長し、花をつけ、そうして実りを得られるまで、時間がございますわ、エシャール殿下もいつかは、自分で蒔いた種を刈り取らねばならぬ日が来る。されど、それまでには芽吹き、成長し、花をつける……そのような時間があるのではないかしら？」
ミーアが求めたものは「時間」だ。すなわち……、
「つまり、猶予を与えよ、と、そういうことかな？」
シオンの問いかけに、ミーアは、我が意を得たりと頷いた。
「その通りですわ。そして……」

そのうえで、なすべきこと……。時間、猶予を使いなすべきこと……。それは、

「そして……、もしも、その種が実る前に、別の種を……、良き種を、たくさんたくさん蒔くことができれば……、あるいは……」

ミーアは遠くを見つめながら言う。戻ることのできない過去に思いを馳せるかのように、今はもう会えない忠臣の姿を求めるかのように。

「あるいは……、罪過の種だって立ち枯れるかもしれませんわ」

祈るように……、かすかに震える声でミーアは言った。

それは、あの日のミーアが心の底から欲していたもの。

懐かしきクソ眼鏡と一緒に、求め続けたもの。

蒔かれてしまった滅びの種の刈り取りは自分でしなければならなくって……。それはわかっていて……、それでもなんとかしようと、帝国中を駆け回った。

滅亡へと至る種が芽吹かぬように、途中で枯れるように、必死にあがいた。

あの日、ミーアが心から欲して欲して……けれど与えられなかった結末。

それは挽回の機会。

あるいは、そんなものはないのかもしれない。

蒔いた種は、絶対に刈り取らねばならなくて、それが絶対の法則なのかもしれなくって。でも……。

――そんなもの、認めてなんかやりませんわ。ただ一度、失敗して、悪しき種を蒔いてしまったらおしまいだなんて……、やり直せないだなんて、わたくしは絶対に認めませんわ。そうでないことを、証明してやりますわ。そこの、エシャール殿下を使って！

ミーアは夢想する。

エシャールがこの罪を贖って余りあるほどの功績を立てて、サンクランドに凱旋する日を。

彼を処刑しなくて良かったと、みなが口々に認めるその日を……。

それは、ミーアが得られなかったあの日の続き……夢見た未来の一つ。
そうして、はじめてミーアは言ってやるのだ。
ざまぁみやがれ、と。
蒔いてしまった種を、枯らしてやったぞ、と……。
それが……それこそが、ミーアの復讐だった。
――わたくしには与えられなかった機会ですけれど……、わたくしは与えてやりますわ。全力で、与えてやりますわ！
その絶対の因果に、ミーアは全力で蹴りをくれてやろうとしていた。

「なるほど……、それが帝国の叡智の……君の考えか……」
そうつぶやいて、シオンは……穏やかな笑みを浮かべた。
「やっぱり、ミーア……君は……」
と、そこで言葉を止める。その続きの言葉がどのようなものであったのか……知る者はなく。
小さくため息を吐いてから、シオンはエシャールに顔を向けた。

第百二十話　シオンの決断1～エシャールへの審判～

「エシャール、お前に、裁きを言い渡す」
その声に、エシャールが顔を上げる。その顔を真っ直ぐに見据え、シオンは言った。
「お前がしたこと……、王に毒を盛ったということは決して許されることではない。しかし、イエロームーン公爵令嬢が証明してくれた。お前には殺意がなかったのではないか、と。毒であることも知らなかったのではないか、と。私は……、俺は、直接、お前の口から聞きたい。エシャール、それは本当なのか？」
突き刺すような、鋭い問いかけに、エシャールは……けれど、小さく首を振る。
「なにも……、私の口から言うことはございません」
彼は、ただ、口を閉ざす。
それは幼く……未熟な矜持。
この場で真実を言うことが“自身を救うため”の弁解となる。その状況が、彼の口を閉ざさせる。
エシャールは……裁かれたがっていたのだ。
公正を重んじる国の王子として、裁かれたいと願っていたのだ。裁かれることではじめて、自身がサンクランドの王子と認められるとさえ思っていた。
自分が助かるために、不変の正義に、サンクランドの清さに、汚点を残すようなことがあってはならないと……、そのような者はサンクランドの王子ではないと……そう考えていたのだ。
それは、確かにエシャールなりの矜持で……エゴだった。
シオンは、それを許さない。
「もし、本当にお前に毒を渡し、唆(そそのか)した者がいるのなら、お前がなにも言わぬことで、その者は逃亡することとなる。その結果、さら

に犠牲が出るかもしれない。それでも、お前は、その矜持を守るのか？　それは……王に連なる者の矜持とは言えない」
エシャールに投げかける言葉、それは、かつて失敗を突き付けられたシオン自身も向き合ってきた言葉だ。
レムノ王国において、彼は失敗した。
裁かれぬことこそが恥であるという状況に陥ったあの時、シオンは裁かれることを望んだ。
その場でアベルに剣で斬られていたほうが、きっと楽になるだろうと……、それこそが、正義を語った自分がとるべき相応しい責任だとシオンは思っていた。
されど、帝国の叡智ミーアはそれを良しとはせずに、その失敗を、恥を、心に刻んで生きろと、シオンの感慨を一蹴した。
そして、そのうえで、なすべきことを指し示したのだ。
今でもシオンには羞恥心がある。
自分には「正義」や「公正」を口にする資格はない。どの口で物を言えるのかと、恥じることばかりだ。
けれど、それでも彼はエシャールに言わねばならなかった。
ただ黙って、なにもせずにいることもまた、正義とは言えないことだから……。
口を閉ざし、なにもせずにいることは逃げること。
それでは、エシャールのためにならない。それは、ミーアの示してくれた道ではない。
なすべきことをなさねばならない。だが、正しきこと……、今なすべき正義とはなにか……？
王とはなにか……？
自身に問いかけつつ、シオンは言葉を紡ぐ。
「兄上……」
シオンの言葉を受けたエシャールは……、泣きそうな顔をした。
彼はそのまま顔を伏せてから……ぽつり、ぽつり、と話し始めた。
「まことでございます。信じていただけるかはわかりませんが……、

確かに私は、開放市場にて見知らぬ男からあの薬を渡されました。軽い腹痛を起こすものだと、教えられていました」
エシャールの声が震え、掠れる……。王子の仮面がはがれた、年端もいかぬ少年の顔で、彼は言った。
「迂闊なことだったと……今では思います。シオン兄さま……。ぼくは、あれの効果を確かめもせずに、シオン兄さまに飲ませようとしたのです……。自分でも……よくわからないんです。いったいなぜ、あのようなことをしてしまったのか……」
困惑するように、エシャールはつぶやいた。
「ぼくは……ずっと、シオン兄さまにかなわない自分に、口惜しい思いがありました。それが……おさえきれなくなって……。そんな時に、あの薬が目に入りました。あれは、ささやくんです。大丈夫だから飲ませてしまえ、と……。ちょっと痛い目を見せてやれば、すっきりすると……。ぼくは、その誘惑に負けました」
そうして、エシャールは頭を下げた。
「あとのお裁きは、すべてお任せいたします。サンクランドの正義を汚さぬように、公正なる裁きを……」
っと、それから、少しだけ悩む様子を見せた後……、
「それと、毒を渡してきた者は、騎馬王国の者のようでいて……どこか違う。そんな印象でした。格好だけ装ったという感じではありませんでしたが……ぼくの知る騎馬王国の者とは少し違うような……」
小さく首を傾げてから、エシャールは言った。
「どこがどうとは言えないのですが……」
「匂い……ではないかしら？」
不意に、横から声が聞こえた。見ると、ラフィーナが真剣な目で見つめていた。
「匂い、ですか？」
「ええ。騎馬王国の者たちは、馬に危険が及ばぬように、ある種の肉食獣を寄せ付けない、特別な香油を身にまとうもの、と聞いたこ

とがあるわ。気にしていなければ気付かないことだけど、もしかしたら、その男は、それをつけていなかったのかもしれない」
ラフィーナの言葉に、エシャールは首を傾げる。
「そう……。ええ、そうなのかも……しれません」
エシャールが小さく頷くのを見て、シオンが口を開いた。
「エシャール……、よく素直に話した」
その言葉に、エシャールが姿勢を正す。
「お前も言った通り、お前のしたことは、決して許されることではない。国に混乱をもたらす重罪、もしも父上が亡くなっていたら、極刑は免れなかったことだろう。助かったといっても、これをなにも罰せずにおくことは公正さを損なうことにつながる」
サンクランドの公正さは、純白の清さだ。
それは、一点のシミすらも許さない。ひたすらに白く、清く、それゆえ、罪悪をそのままにすることは許されない。裁きは必ず与えられなければならない。
「しかし、俺はラフィーナさまのお考えを聞き、さらにミーアの言葉を聞いた。それらすべてを聞いたうえで……、お前への罰に猶予を与えるという、ミーアの意見が正しいと考える」
それは、ミーアの意見に対する全面的な同意だった。
「猶予……しかし、シオン兄さま」
「あくまで猶予だ。罪を帳消しにするわけではない」
シオンは、そう断言したうえで、
「そして、その猶予が終わる時までは、エシャールがこの件にかかわったという情報は伏せる」
「しかし、それで、みなの納得が得られるでしょうか？」
不安そうな宰相にシオンは笑った。
「犯人は、風鴉を手玉に取った者の仲間だ。であれば、パーティー会場にひそかにまぎれ、毒を混ぜることも可能だろう」
シオンは、犯人を混沌の蛇と断定する。というより、そういうことにしてこの件を処理しようとしている。

そして、その件に関してはそれで押すしかない。
無関係の人間をスケープゴートとするような真似は、シオンにはできないからだ。
「だが……」
と、ここでシオンは難しい顔をした。
「このままエシャールをサンクランドにいさせるわけにはいかない。ゆえに、お前を国から出すこととする」
万が一、蛇が接触を図ってきた場合、サンクランドにいては「猶予」を維持することは難しい。厳正なる裁きを求める声が起これば、それに耳を傾けざるを得ないだろう。
また、国内で「功績を立てて罪を贖え」というのもなかなかに難しい。王子であるがゆえに、国内では、功績を立てることの難易度は高くはない。
だが、それではおそらくエシャールも納得しない。
シオンが求めるのは、エシャールの成長だ。そのためには、いっそのこと遠く離れた地に行かせたほうが良いのではないか、と彼は考えた。
無論、信用できる国があれば、ということは大前提だ。
下手をすれば、サンクランドの弱点にもなりえるエシャールを他国へと預けるのだ。相応の危険は当然に伴う。ヴェールガ公国のラフィーナのもとか、もしくは……。
「ならば、その役目、我がグリーンムーン家が受け持ちますわ」
そこで、意外な方向から声が上がった。
エメラルダ・エトワ・グリーンムーンは、ようやく自分の出番が来た、とばかりに胸を張った。
「いや、しかし……」
と、一瞬、言いよどむシオンに、エメラルダは勝ち誇ったような笑みを浮かべる。
「あら、シオン殿下。私はエシャール殿下の婚約者ですのよ？　その資格はあると思いますけれど……」

「いや。エメラルダ嬢、このようなことになった以上、此度の縁談の話は……」
と慌てた様子を見せるのは、今回の話を取りまとめたランプロンである。対して、エメラルダは笑みを浮かべたまま、首を振った。
「あら？　ランプロン伯、それは、私に恥をかけとおっしゃっているのかしら？　あれだけ、みなの前で大々的に発表をしておきながら、今さらなかったことになどできるはずもございませんでしょう？」
そう言われては、是非もない。もともと、サンクランドの過失で、エメラルダには迷惑をかけている以上、文句を言える筋合いでもない。
「幸い、我がグリーンムーン家は、外国とも伝手がございます。サンクランドの貴族にも、ランプロン伯爵さまのように、縁がございますわ」
エメラルダは、王妃のほうに顔を向けて、優しい笑みを浮かべる。
「ご家族のもとを訪れることも容易ですし、知見を広げるのにも良い環境ですわ」
「まぁ……、エメラルダさん」
感動した様子を見せる王妃を見て「エメラルダさん、なかなかやりますわね……」などと、ミーアがつぶやいていたりもしたのだが……。
それはさておき、シオンは夏の出来事を思い出していた。
グリーンムーン家の保有する船でガレリア海に出たこと……。あの経験は確かに貴重なものだった。世界を見て、視野が広がったほうがエシャールのためにもなるのかもしれない。
シオンは父と母に目線を送ってから、エメラルダのほうに顔を向けた。
「では……お願いしたい。弟のことを、よろしく頼む」
そうして、頭を下げるシオンを見て、ミーアは、ホッと安堵のた

め息を吐いていた。
――ふぅ、これでなんとかなりそうですわ。こちらとしても、エメラルダさんがイケメンの婚約者をゲットしたうえに、連れて帰れるとは願ったり叶ったりですし……。もっとも、帝国に来る名目は整えなければなりませんし、本当の事情をグリーンムーン公爵にはお伝えしなければいけないでしょうから、婚儀は難しいかもしれませんわね……。
それに……、とミーアはエシャールのほうへと目を向けた。
――エシャール殿下のシオンに対する気持ちも、解消されたわけではありませんし。むしろ、このような温情、ますます彼を追い詰めてしまいそうですわね……。
そうは思ったものの……、それでも……ミーアは思っていた。
問題はあらかた片付いたぞー！　と。
これでもう、自分の出番は終っわりだー！　と……。
油断していたのだ。完全に、油断しきっていたのだ。
けれど……、
「ああ、それともう一つ……。しておかなければならないことがあった……。アベル王子をここに連れてきてもらえるだろうか？」
不意にシオンが言った。
――はて？　どうしてアベルを呼んだのかしら？
首を傾げるミーアの目の前で、シオンが笑った。
「エシャール、お前に見せておきたいものがあるのだ」

第百二十話　シオンの決断1～エシャールへの審判～（後書き）

お察しのこととは思いますが、サンクランド編はもうすぐ（？）終わるのですが、第四部はもう少し……、いえ、まだ割と続きます。サンクランド編、ペルージャン編が想定外に延びまして……。二つで八十話ぐらいの予定でした……。おかしい。
なので、第四部はこれまでの章より長引きそうです。
気長にお付き合いいただけますと幸いです。

第百二十一話　シオンの決断２　～……はぇ？～

目の前で流れていく事態に、エシャールは、諦めに近いまなざしを向けていた。

――ああ……兄上は、やはり、僕を処刑にはしなかった。

帝国の叡智ミーアの仲間たちの言を受け、シオンの下した決断は、猶予を与えるという、考えられる限り、最大限の温情を持ったものだった。

完璧な兄の慈悲により、自らの命が長らえたこと……死の恐怖とは縁遠い少年には、その思いやりすら、みじめに感じられた。

――兄上は……、ご自分の命を狙った僕にすら、温情をかけるのか……。

その寛容さの前に、自身の狭隘な心が露になるようで、敗北感は募るばかり。

エシャールの体を縛る太い鎖は、容易に解けることはなく……、さながら呪いのように幼い魂を蝕み続けていた。

その時だった。

「失礼いたします。アベル王子にお越しいただきました」

そんな声が聞こえて、エシャールは顔を上げた。

部屋に入ってきたのは、兄の友人であるという、レムノ王国の第二王子、アベルだった。

かつて、一度会ったことがあるというアベルのことを、エシャールは思い出していた。

――たしか、兄上と剣術の手合わせをしていたことがあったかな……。こてんぱんに負けていたと思ったけど、それでも兄と友だちになるなんて……。いったい、どういう人なんだろう……。

などと、少しだけ彼に興味が沸いてくるエシャールである。

部屋に入ってきたアベルは、まず、エイブラムのほうを見て、ホ

ッと安堵の息を吐く。
「エイブラム陛下。ご無事でなによりです。先ほどは肝を冷やしましたよ」
「アベル王子、心配をおかけして申し訳ない。このような醜態を晒すこと、遺憾に思う」
「なにをおっしゃいますか。陛下は大陸にとって欠かすことのできぬ方。どうぞ、そのようなことはお気になさらず、ご静養ください」
それから、アベルはシオンのほうに目を向けて、
「ところで、ボクはなぜ、ここに呼ばれたんだろう？」
それは、エシャールも疑問だった。話の流れの中で、アベル王子を呼ぶ理由がなかったからだ。
「ああ。わざわざすまない。実は君に、折り入ってお願いしたいことがあるんだ」
シオンは、そう言って頭を下げる。
「ほう。なんだろう、ボクにできることならいいのだが……」
首を傾げるアベルにシオンは言った。
「君にしか頼めないことなんだ。実は、弟のエシャールが国を離れることになってね」
「……そうなのかい？」
アベルはエシャールのほうに、チラリと視線を向けて、かすかに目を細めた。
「それは、また、急なことだね」
「そうなんだ。それで、俺としては、一つ、贐（はなむけ）をやりたいと思ってな」
「ほう……、それは？」
不思議そうな顔をするアベル。それには、エシャールも同意するところだった。
いったい、兄はなにをしようというのか……。少し不安になりつつ、シオンの横顔を見つめる。っと、その視線に気付いたのか、シオンが振り向いた。

「エシャール、お前が、これから先、歩みを進めるのに、知っておいてもらいたいことがある。それを今から見せたいと思う」
それから、シオンはアベルに向き直り……、静かな口調で言った。
「アベル・レムノ、君に剣の手合わせを願いたい」
っと、その途中で言葉を切って、シオンは首を振った。
「手合わせ……、いや、違うな。俺と……、決闘してもらいたいんだ」
姿勢を正し、胸に手を当てて、シオンは続ける。
「アベル・レムノ、俺は君に決闘を申し込む。帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンを懸けて」
室内に、しん、と沈黙が広がる。それを、
「……はぇ？」
空気を読まずに破った、その間の抜けた声が誰のものかは定かではないが……。その気持ちは、エシャールにもよくわかった。
――兄上は、いったい、なにを考えているんだ！？
「それは、本気なのかい？」
シオンからの挑戦を受け、アベルは一瞬、驚いたように息を呑んでから……、
「君がそう言うからには、本気なんだろうね？　もしも、冗談で言っているなら許さないが……」
「冗談でこんなことは言わないさ」
あくまでも生真面目な顔で、シオンが答える。
「そうか……。その条件をボクに突きつけるのであれば……、ボクとしても全身全霊をかけて相手をせざるを得ないが……」
「もちろんだとも。楽しみだ。俺も、すべてをぶつけさせてもらう」
シオンは、彼らしくもない、獰猛な笑みを浮かべた。
「もう、遠慮するのはやめにしたんだ。アベル。俺も、自分の心に素直になることにするよ」
「そうか。それは、待った甲斐があったというものだ」
そうして、アベルもまた、笑みを浮かべた。

「あ、兄上……、これはどういうことなのですか？」
かろうじて、そう疑問を口にするエシャールに、シオンは微笑みを浮かべるのみ。
「言っただろう？　これは、お前への贐だ、と。しっかりと、その目に刻み込め」
それから、シオンは、ランプロン伯のほうに顔を向けた。
「会場でも事情を説明する必要があるだろう。俺が直接しよう。ランプロン伯は、先に行って状況を整えてきてもらいたい」
「御意に。殿下……。しかし、その……剣術の手合わせというのは……」
「説明の後にしよう。それでいいか？」
問いかけに、アベルは神妙な顔で頷いた。
「ああ、構わない。心の準備はいつでもできているからね」
そんな彼らのやり取りを見て、
「……はぇ？」
再び、そんな声が上がるが……。それが、誰のものかは、エシャールにはわからなかった。

第百二十一話　シオンの決断２　～……はぇ？～（後書き）

今週はミーアの登場が若干少ないかもしれません。
先週でエネルギーを使い果たして休養中です……。

※追記
あああ、誤解させてしまい申し訳ありません。
休養中なのはミーアです。作者元気です！ｗ

第百二十二話　シオンの決断３　～置いてけぼりの姫殿下～

シオンがアベルに勝負を挑んだ。
ミーアは……混乱した！
――え？　え、ええと、これは、どういう……。わたくしを懸けて勝負って……はぇ？
大混乱だった！
なにが、どうしていきなりそんな話になったのか、まったくもって理解が追い付かないミーアである。
――わたくしを懸けて、ということは、つまりシオンは、わたくしのことを……？
あまりにも突然のことで、ミーアがアワアワしているうちにも、状況は動き始めていた。
「それでは、会場を落ち着かせてまいります。どうか父上は、安静になさっていてください」
「任せたぞ、シオン。ああ……それと、ルドルフォン辺土伯令嬢は少しの間だけ残ってもらえるだろうか？」
「……はい。わかりました」
エイブラム王の声に、神妙な顔で頷くティオーナ。
ということで、ティオーナを残した一行は、シオンを先頭に会場へきびきび移動する。
一方、ミーアはあまりの混乱に目をぐるぐるさせる。
「あの、ミーアさま、大丈夫ですか？」
そんなミーアに、アンヌが心配そうに声をかけてきた。
「なっ、なにが起きているのか、まったく理解できませんわ」
「ははは、姫さんは男心がわかってないなぁ。そんなことを言ったら、シオン殿下が可哀想ですよ？」
肩をすくめつつ近づいてきたのは、ディオンだった。

「なにが起きてるかって、あんなにわかりやすい告白を受けているのに」
「そっ、そんなわけありませんわ。よりによって、シオンが、わたくしをだなんて……。きっとなにかを企んでるに違いありませんわ！」
などと言いつつも、頭がポーっとしてしまうミーアである。
そうこうしているうちに、一行は会場へと到着した。
「シオン殿下、エイブラム陛下のご容態は？」
「陛下はご無事なのですか？」
「いったい、誰がこんなことを？」
口々に話しかけてくるサンクランド貴族に目を向け、シオンは凛とした声で言った。
「静まれ。国王陛下は今、自室で休まれている。意識もあるし、普通に会話もできる。医官によれば、安静にしていれば、回復するだろうとのことだ」
それから、シオンはシュトリナのほうに向き直り、みなの前で頭を下げた。
「君のおかげだ。イエロームーン公爵令嬢。改めて、サンクランドを代表してお礼と……、そして、先ほどの非礼を詫びさせていただきたい」
シオンに続き、疑いをかけてきた貴族たちも謝罪の言葉を口にする。
「先ほどは、取り乱していた。なんとお詫びを言えば良いのか……」
「陛下の命を救っていただいたことに、心からの感謝を」
それを受けたシュトリナは、にっこり可憐な笑みを浮かべて、なにかを言おうとした……ようだったが、シュシュっとそばにベルがいることを確認すると、
「……いえ、あのような状況では混乱するのは人として当たり前のことですから」
無難な答えを返して一歩引いた。直後、

「リーナちゃん、すごい！　いったい、なにがあったんですか？」
唐突にベルに言われて……、シュトリナは、瞳をパチパチと瞬かせた後、
「えへへ……。本当に大したことしてないんだよ？」
などと無邪気に笑っていた。
まぁ、それはさておき……。
「それで、エイブラム陛下に毒を盛った下手人はいったい……」
「現在、調べているところだが……、どうも、怪しげな者が城にもぐりこみ、毒を投入したらしい」
「なっ、なんですと！？」
「情報によれば、その者は開放市場に出入りしていたらしく……。そうだな、あまり他国のお客人には聞かせたくはないことだが……、我が国の諜報部隊に紛れ込み悪さをした者たちの仲間のようなのだ」
「なっ……」
その言葉に、サンクランド貴族たちは一様に黙り込む。風鴉になにが起きたのかを知る彼らは、それだけで、暗殺者の実力を察したのだ。
一方、詳しい事情を知らない他国の者たちは、首を傾げていた。
「しかし、この城に忍び込むなど……そのようなことが可能なのですか？」
と、その時だった。
会場内に一人の兵士が走りこんできた。
「失礼いたします。殿下、実は……」
慌てた様子の兵士は、そのままシオンに耳打ちする。
シオンは、一瞬、驚いたように目を見開き……、次の瞬間、キースウッドのほうに目をやった。それから、
「ああ、なるほど……」
小さく納得の頷きを見せてから、みなのほうへと向き直った。
「今、連絡が入った。城の見張りが一名、賊に殴り倒されたらしい」
「なっ！」

何人かの貴族から、驚愕の声が上がる。
それは、サンクランド貴族ばかりではない。他国の者たちも、言葉を失っていた。
サンクランドの兵の練度は、決して低くはない。
国王の城を固める者たちは、王の人柄に惹かれて従軍した、忠義に厚い者たちばかり。日々の鍛練にも熱心に取り組む精兵揃いだ。
それが、命を奪われることなく、無力化された。
しかも、被害がそれだけということは、その他の兵は、賊の姿を見つけることすらできなかったのだ。
「賊の人数は四人。どのようにして城に入ったのか、見当もつかない。あるいは、この会場の関係者を装って入ったのかもしれないが……。いずれにせよ、これから調べていく必要があるだろう」
もっともらしいことを堂々と言うシオン。っと、そこで、
「それではまさか、辺境より公爵殿をどなたか、王都に呼び戻すのですか？」
わずかばかり困惑のこもった声が響いた。
サンクランド王国は、ティアムーン帝国とは異なるパワーバランスを持った国である。
それは、サンクランドの国是に由来した配置だった。
王の公正なる統治により、民の安寧を実現すること……その実現のために避けるべきことはなにか？
それは「公正なる統治」を求めて編入してきた地域で「不公正な統治」が行われることである。そうなってしまった時点で、サンクランドの正義は大きく揺らぐ。
結果、必然的に新しく加わった土地には信頼のおける、実力のある領主を派遣する必要があった。
それゆえ、サンクランド王国は、王都に近い地域に、王のサポートをする人員を、王都から離れた辺境部に王の外戚、あるいは、優秀な貴族が行くことが常となっていた。
そして、国の要である国王になにかがあった場合には、それらの

有力貴族を王都に呼び戻す必要が出てくる。が……。
「いや、それには及ばない。先ほども言ったが、陛下は数日も休まれれば、また普通に公務に戻ることができるだろう。大丈夫だ。復讐戦の指揮は、陛下御本人がとるのが筋というものだ。そうではないか？」
にやり、と悪戯っぽい笑みを浮かべるシオンに、周りのサンクランドの貴族たちが沸き立った。
「おお、それはまさに。殿下のおっしゃる通りにございます」
それを見て、招待客の間にも安堵の空気が広がる。
会場の空気が変わったのを確認したうえで、シオンは言った。
「さて、このようなことになってしまった以上、このまま舞踏会を続けるわけにもいかない。かといって、このままお帰りいただくのも申し訳ない。お詫びというのもおかしな話だが、一つ、最後に余興を披露して、今日の会をお開きにしたいと思う」
それから、シオンは彼の正面に立っていたアベルのもとに歩み寄った。
「実は、私の友が、今日ここにきている。レムノ王国のアベル王子だ」
みなにアベルの紹介をしてから、シオンは華やかな笑みを浮かべた。
「そこで余興に一つ、彼と剣術の立ち合いを披露しようと思うのだが……どうだろうか？」
それを聞いて、何人かの者は一瞬怪訝そうな顔をした。けれど、それもすぐに消え、理解の色が広がる。
本来、そのようなことを悠長にしている場合ではない。すべきことは山積しているし、いくら安静にしているとはいえ、王を放っておくわけにもいかないはず……。
けれど、ここで警戒している様子を見せでもしたら、そちらのほうが不安を煽ることになる。
エイブラムが健在であり、なおかつ、ゲストに対する気遣いをす

る余裕もある。そのようなところを見せたいのだ、と、人々は判断したのだ。
であるならば、年若い王子がとった態度としては、それは十分に合格といえるものだった。それに、シオンの様子を見るに、本当に、エイブラム王の容態も悪くはないのかもしれない。
ならば、未来の国王シオンの配慮を素直に楽しむのも良いだろう。
会場に集う誰もが、そのような判断をし、大いに盛り上がりを見せた。
一気に熱気を増した会場内に目をやり、アベルは、やれやれと首を振った。
「しかし、このような場で雌雄を決するだなんて、君は意外と目立ちたがり屋なのだね、シオン」
上着を脱ぎ、シャツの袖をまくり上げながら、アベルは苦笑いを浮かべる。
「なに。せっかくだから、俺の友人の強さを周りの者たちにも紹介してやろうと思ったまでのことだよ」
「それは……。ますます期待に応えないわけにはいかなくなったな……。無様に負けるわけにはいかないだろうね」
練習用の刃引きがされた剣を持ち、軽く振りつつ、会場の中心のスペースへと向かう。
そこは、ちょうどダンスができるように、広いスペースが確保されていた。
「ははは、最初から負けるつもりなんかないだろう」
快活に笑い、シオンは剣を構える。
「さて、それでは改めて、雌雄を決することとしようか。アベル、我が友よ」
かくて、決戦の幕は切って落とされる。
「……はぇ？」
ヒロインたる姫を、半ば置き去りにして……。

第百二十二話　シオンの決断３　～置いてけぼりの姫殿下～（後書き）

本日、活動報告を更新しました。

第百二十三話　シオンの決断４　～あの日の続きを～

――兄上は……、なにを見せようというんだろう……？
エシャールは、なにもわからないまま、シオンたちの行動を見守っていた。
この期に及んで、なぜ、剣の試合なのか？
そのようなものを見せて、どうしようというのか？
ただ、その天才ぶりが露わになるだけではないか？
それは、今さら見せびらかして確認させるまでもないこと。それは誰もが知っていることだから。
シオン・ソール・サンクランドは、剣の天才である、と。
しかも、相手はあのアベル王子。シオンとは比べるべくもない凡人のはず。
それを打ちのめすところを見せて、いったい、なにが贐（はなむけ）なのか……？
――まさか、僕の心を折ろうというわけでもないだろうし……。
王位継承権は自分のものだと誇示する、というのが一番わかりやすい動機だけど、そのようなことは、兄はしないような気がする。
――じゃあ、いったい、どういうことなのだろう？
疑問に首を傾げるエシャールの目の前で……、シオンとアベルが剣を構えて向かい合った。

「さて、それじゃあ始めようか」
堂々たる態度で剣を振り上げるアベル。その構えは変わることなく、揺らぐことなく……、いつもどおりの大上段だ。
「変わらないな、アベル。あの剣術大会の日から、ずっと……」
「これしかないものでね。ボクには、君のような才能も器用さもないから」

その答えに、シオンはちょっぴり渋い顔をする。
「どうかな……。才能のほうは知らないが、俺は最近、自分がそこまで器用じゃないんじゃないかと思い始めたよ。だから……」
そうして、シオンは剣を下げる。腕をだらりと下げ、刀身を大地と水平に構える下段構えにして……。
「俺も、あの時と同じ構えで相手をさせてもらおうか……」
「なるほど……。あの後、何度か剣を交えたこともあったが……今日が正式にあの日の続きということになりそうかな……」
「ここならば、雨の心配もない。邪魔するものはなにもない。心行くまでやるとしよう」
その言葉をきっかけに、アベルが表情を引き締める。
深く息を吸って……、ゆっくりと吐いて……。
「参る！」
気合の声とともに仕掛けたのはアベルだった。
その光景は、サンクランド貴族たちにとっては見慣れたものだった。
王子シオンの剣は、天賦の才による剣。
相手の攻撃をすべて受けきり、その実力を見極めたうえで隙を作って、崩す……。
それは、圧倒的強者の剣。
溢れる余裕をもって、相手を迎え撃つ王者の剣。
そんな普段の戦いの枠を外れることはない……と、ある種の油断をもって眺めていた彼らの、その油断を……、アベルは一撃で打ち抜いた。
それは、愚直な、なんの衒(てら)いもない突進。
剣の心得のない者たちは、それを未熟と嗤(わら)った。
若さゆえの気の逸(はや)り。あるいは、強者に対峙した凡人の焦りの発露であると。
けれど、ディオン・アライアは、それを見事と笑った。
「うん、なかなか……。迷いのない良い剣だ」

その言葉を証明するかのように、アベルは一足飛びに間合いを詰めると、鋭い踏み込みと同時に剣を振り下ろした。
基本に極めて忠実な一撃、それは流水のごとく洗練され……、されど、流れ落ちる瀑布（ばくふ）のごとく重たい一撃。
鳴り響く鋭い衝突音は、波紋のように会場に広がり、直後、訪れたのは静寂。
人々は息を呑み、そして察する。
これは……ただの余興じゃない、と。
「さすがだな……。さらに威力が上がってるじゃないか？」
幾度となく見てきたアベルの斬撃。それを真正面から受け止め、鍔迫り合いに持ち込んで、シオンはニヤリと笑みを浮かべる。
「なに、大したことじゃないさ。ただ、捨て身にならずとも、先日の暗殺者ぐらいは、一人で退けられるようになりたいと思ったまでのこと」
そう言って、アベルは剣の圧力を増した。このまま一気に、シオンを追い詰めにかかる。
が……、動かない。
それはさながら、城壁に鍔迫り合いを挑むがごとく……。巨壁のように一歩も動かぬシオンを前に、アベルは、体勢を立て直すべく後方に引く。引きながらも、抜け目なく一撃を放ち、シオンの追撃を防ぐことも忘れない。けれど……、
「迂闊だな、アベル。不用意な攻撃は命取りになる」
それは、シオンの計算の内だった。
彼は狙い澄ましていたかのように前進。踏み込むと同時に、繰り出されたアベルの剣に斬撃を叩きつけた。
「くっ！」
アベルが小さく呻き声を漏らす。
自身の振り下ろしに匹敵するであろう剛撃。正面から跳ね返された剣とわずかに腕に走る痺れ。
それで、アベルは悟った。

シオンが、正面から打ち合うことを望んでいると。
「なるほど……。ミーアを懸けて戦うんなら、このやり方が相応しいと君は判断したのかい？」
「正面から打ち合わなければ、納得がいかないだろう？　ミーアを奪い取られる身としてはな」
傲然と告げた時のシオンの目を見て……、アベルの背筋に寒気が走った。
それは、ひさしく忘れていた戦慄。
なぜ、このような当たり前のことを忘れていたのか？
共に鍛練を積むようになったためか？　幾度かの戦いで慢心があったのか？
対峙する相手、シオン・ソール・サンクランドが紛れもない天才であるという、動かしがたい事実を失念していたとは……。
「やれやれ……。これは死ぬ気で戦わないとダメだね……」
「互いに大切なものを懸けて戦うのだ。そうでなければ意味がないだろう」
その言葉に、アベルは表情を引き締める。
戦いは始まったばかりだった。

第百二十四話　シオンの決断５　～決着・重たい荷物～

剣を構え直すと、一転、アベルが攻めに転じる。得意の斬り下ろしを中心にした連続攻撃。けれど、それをシオンは受け流すことなく、剣で正面から受け止め、弾き返した。

衝撃に顔をしかめつつも、決して身を躱(かわ)そうとはしない。

アベルの猛攻をしのぎ、その隙を突くのではなく、それを上回る猛攻で圧倒する。

「くっ……」

腕に、足に、斬撃がかすめて、アベルが顔を歪める。が、歯を食いしばり、逆に一歩を踏み出した。

「まだまだっ！」

ここで引けば押し切られる。否、それ以上に……、強さの格付けが済んでしまう。

力押しですら勝てないなら、自身がシオンに勝ちの目はない。

そう思いを定めて、前に出る。

「なめるなっ！」

アベルの気迫を正面から受け止め、シオンもまた一歩を踏み出す。

引けぬ戦いは、シオンもまた同じ。正面から、アベルとぶつかることを決めた時点で、シオンは引くという選択を捨てていた。引くことはすなわち、敗北。

そう心に定め、決死の一歩を踏み出す。

それは、技術を凌駕した純粋な力と力のぶつかり合い。激しく衝突する二人の王子を見て、ディオンは喝采を送った。

「おー、若いなぁ。お二人とも。小手先の技術を捨てた力勝負とはね。しかし、さすがだなぁ。シオン王子は。純粋な力押しでもここまで強いとは。剣の天才というのは伊達じゃないね。まぁ、青臭いけど」

そうディオンが評するのを聞きながら、ミーアは違和感を覚えていた。
――今日のシオンは、少し様子が違いますわね。
アベルの愚直さを、堂々と真正面から迎え撃つシオン。
どのような状況にあっても、涼しげで、余裕に溢れる表情を浮かべていたものだが……。今日の彼は、感情任せに、がむしゃらに剣を振っているように見えた。
その理由を考えれば、考えるほど、ミーアは混乱の渦中にはまり込んでいった。
実は決闘が始まってしばらくした頃には、こんなではなかった。
ミーアは、それなりに、思考を回復させ、
――ははぁん、なるほど。つまりは、みなの前でわたくしにフラれて見せるつもりですわね？
などと、きちんと予想すらしていたのだ。
アベルに勝って、そのうえでミーアにフラれるところを見せる。それによって、エシャールを励ます。そんなつもりなのだ……、などと推測して……。
――って、そんなことになったら、この場のみなの前で、わたくしがお断りしなければならないですわ！　大変ですわ！
なぁんて、慌ててもいたのだ。
この場に集った人々の前で、シオンのお誘いを断るのは、なんとも胃が痛くなる事態で……。
――くっ！　サンクランドの城内で王子の求愛をお断りするのは、なかなかのプレッシャー。ぐぬぬ、シオンめ、また、わたくしに厄介な役を押し付けてくるつもりですわね！　やっぱり、シオンはシオンですわ！　ああ、もう、いっそのこと、アベルが勝ってくれたら楽でいいですのに。
などと考え、さて、シオンが勝った時にどう返事をしたものか……？　角の立たない言葉はなにか？　っと、ぐるぐる頭を悩ませていたのだが……。

それも、戦いを見守るうちに少しずつ変化していった。
そう……、ミーアは察したのだ。
どうもいつもとシオンの様子が違うぞ？　と……。
さらに、
「ミーア姫殿下、どうか、シオン殿下の剣を見守っていてください」
その声に振り返ると、すぐそばにキースウッドが立っていた。
「あんなふうに、感情を露わにするシオン殿下は初めて見ました。あれは、ミーア姫殿下のために、振るわれている剣です」
なぁんて、言われてしまったのだ！
シオンの一番の忠臣、キースウッドに言われてしまったら、もう間違いない。
シオンは、あいつは……。
――なにか大切なものを懸けて戦っている……。いえ、そうではなくって、シオンはわたくしを、アベルと奪い合っているのですわ……。
そう気付いた瞬間、ミーアは、もう、アベルがあっさり勝ってくれればいいとは思えなくなっていた。
もちろん、アベルには勝ってほしい。それは変わらない。でも……なんだかシオンにも……負けちまえ！　とは思えなくなっていて……。
――わっ、わたくし、おかしいですわ。なぜ、このように胸が騒ぐんですの……？
ミーアは戸惑っていた。これほど、胸が高鳴ったのは……、あの断頭台に向かう時以来である。
そう……、それは、未だかつてない事態、前代未聞の事態。
ミーアが……、あのミーアがっ！　正真正銘のヒロインとして扱われている極めて稀有な事態だったのだ！　戸惑うのも無理からぬことである。
――こっ、これは……わたくしは、どっ、どうすれば？　あ、アンヌ、アンヌはどこに……。ぐっ、ダメですわ！　そばにベルとリ

ーナさんが……。くぅ、こんな時に恋愛軍師に話が聞けないだなんてっ！
慣れない事態に混迷を極めるミーアの思考。そんな彼女を尻目に、戦いは続いていた。

一合、二合、三合。
剣が交わるごとに、二人の消耗が蓄積していく。
刃引きした練習用の剣とはいえ、打たれれば痛み、ダメージは積み重なっていく。
一歩も引かぬ猛撃の応酬は、二人の体力を確実に奪っていた。
そうして、互いの剣が折れ砕けるかと思われるほどの激戦の後、まるで息を合わせたかのように、二人は引いた。
「大したものだな。アベル……、本当に。失礼ながら、セントノエルに入学した当時を考えると、信じられないよ」
肩で息をしつつ、シオンは言った。
一方、アベルは手に握りしめた剣の状態を確認しつつ、そっと肩をすくめる。
「はは、ボク自身もそうさ。まさか、君とここまで打ち合えるようになるとはね。ボク一人では、絶対に来られなかった場所だよ、ここは」
「これも、ミーアのおかげか……」
「ああ、間違いなくね……」
「……そうか」
シオンは、かすかに瞑目してから、つぶやくように言った。
「やっぱり、俺は君がうらやましいよ。アベル」
口にして、シオンは初めて気付く。
――ああ、そうか……、俺は、アベルのことを、うらやましいと思っていたのか。
こんなことにすら気付かなかったなんて……、認められなかったなんて……。

――やはり、俺は……自分で思っているよりも、さらに不器用のようだな……。
剣を頭上高く振り上げるアベル。
どのような状況にあっても変わることない……それ以外のすべてを捨てたような剣。
その純粋さを、シオンはなによりうらやましいと思う。
――その一途さがあれば、あるいは……、俺もミーアに……。
思いを断ち切るように、シオンは剣を振るう。
「いくぞ、アベル！」
踏み出した刹那、脳裏を過るのは、父である王の顔、母である王妃の顔、弟、エシャールの顔、忠臣キースウッドの顔、ランプロン伯、宰相、様々な貴族たち、王家を頼る民の顔……そして。
――ああ……やっぱり、そうだよな……。
シオンは苦笑いして……、次の瞬間、アベルの斬撃がシオンの剣を弾き飛ばした。

決着の瞬間……。アベルの目は、ただ真っ直ぐに、シオンを見つめていた。
しかしシオンは……その目は……、どこか遠くを見ていた。
ただ一人の少女を思い続け、そのためだけに戦った者と、捨てきれなかった者……。
勝敗は、ここに決した。

弾き飛ばされた剣は、くるり、くるり、と宙を舞い……、硬い音を立てて床に落ちた。
その無機質な音は会場内を、衝撃の波紋となって駆け抜けた。
「……シオン兄さまが……負けた？」
呆然とつぶやきを漏らしたのは、エシャールだった。
それを横目で窺いつつ、シオンは膝をついていた。そんな彼の目の前に手が差し伸べられる。

「シオン……、君は」
手を差し伸べたアベルは、どこか苦しげな顔をしていた。それを真っ直ぐに見上げて、シオンは言った。
「“君は負けていない、まともに戦えば君が勝っていただろう”などと言って、この勝負を貶めるなよ、アベル」
アベルに、最後まで言うことを許さず、シオンは言った。
「俺は君と、大切なものを懸けて正面からぶつかり合い、そして敗れたんだ。そのことは、戦った相手である君にも否定はさせない……」
真剣な目でアベルの顔を見つめてから……、不意に、シオンは表情を緩めて、
「……ということにしておいてくれ」
小声で付け足す。
次の瞬間、焦った様子のエシャールが駆け寄ってくるのが見えた。
「兄上……」
「エシャール……。見ての通りさ。負けてしまったよ」
そう言ってシオンは、肩をすくめた。
「お前が考えているほどには、俺は完璧ではない。負けることだってある。こうして、大切なものを懸けた戦いであってもな」
「いえ、兄上、でも……」
もの言いたげなエシャールにシオンは首を振った。
「それに、お前は見たはずだ。アベルの剣が、俺の剣を凌駕するところを。彼は、確かに俺よりも弱かった。セントノエルに入学した時点では、俺は彼に負けるとは思っていなかった。それがたゆまぬ努力と鍛練により、俺を凌駕するところまできた。これが、お前への贋だ。エシャール。お前も、努力次第でどこまでだって、高みを目指すことができる。俺を目指す必要もない。お前はもっと高みを目指し、自らを鍛え上げればいいんだ。そのことを忘れずに、しっかりと励め」
「シオン兄さま……」

小さくつぶやきを漏らすエシャール。そんな弟を励ますように、あるいは茶化すようにシオンは笑みを浮かべた。
「もっとも、俺とておめおめと負けはしないがな。お前にも、そして、アベル、君にもだ」
視線を向けられたアベルは困ったような笑みを浮かべた。
「ああ、またやろう。次もボクが打ち勝ってみせるとも」
二人の王子が握手したのをきっかけに、会場内に拍手が響いた。
激戦を繰り広げた王子たちを、人々の称賛が包み込む。
そんな中、シオンは、ミーアのほうに向かい歩き始めた。

第百二十五話　あなたに相応しい方が、きっと……

「シオン……」
壮絶な勝負を終えたシオンが、こちらに歩いてきた。
ミーアは、ただただ呆然と、その姿を見つめることしかできなかった。
いったいなにを言ったものか……、慰めるべきか、あるいは、どういうつもりかと怒ればいいのか？　それとも……。
混乱に頭をグルグルさせるミーア。その目の前まで来ると、シオンは静かに頭を下げた。
「すまないな。ミーア。君のことを利用させてもらった」
「はて……利用……？」
シオンは、小声で囁くように言った。
「ああ。どうも、エシャールは、俺が君に思いを寄せていると誤解していたみたいだからね。エシャールへの贐のために……俺は負けなければならなかったというわけさ。けれど、大切なものを懸けているという体裁を整えなければ、手を抜いていると思われてしまいそうだったものでね」
それから、シオンは、してやったりと悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「なかなか、上手い演技だっただろう？」
「演技……？」
首を傾げるミーアに、シオンは肩をすくめる。
「君でさえ騙せたなら、上々だな。おかげで上手くいったみたいだ。うん、ありがとう」
それから、踵を返そうとするシオン。
その姿を見て、ミーアは……感付いた。シオンが無理をして、強がっているということに。
ミーアは、思わず、ぐむ……と唸る。

ここにきてようやくミーアは、自らのすべきことを悟ったのだ。
――わたくしがすべきこと……、それはシオンを……諭すことですわ！
ミーアは考える。
シオンが自分を好きだというのは……どうやら本当らしい。では、どういうことになるのか？
――きっと今までもさりげなくアピールしていたのですわね。デートに誘っても構わないぞ？　みたいな感じで……。
ミーアは、そう推理する。と、同時に思う。そのやり方は……上手くいかないですわよ、と。
なにせ、ミーアは体験しているのだ。
前の時間軸、ほかならぬシオンに向けてのアピールをして……完全にスルーされるという経験を……。
――恋愛軍師のアンヌも言っておりましたけれど、あのやり方では上手くいきませんわ。もっと直接的に、謙虚に、わかりやすくアピールしないと駄目ですわ！
にもかかわらずシオンは、どうやら“弟のために自身の恋を諦めた”という形で、その恋を終わらせようとしている。
それではダメなのだ。シオンの恋が実らなかったのは断じてそのせいではない！　きちんとアプローチしなかったからなのだ！
――いや、まぁ、わたくしにはアベルがおりますから、もともとダメだったでしょうけれど、それでもこのやり方を繰り返しては、実る恋も実らなくなりますわ。
これから、シオンに投げかけなければならない言葉、それは、かつて失敗を突き付けられたミーア自身も向き合ってきた言葉だ。
アンヌにより、間違いを指摘されたミーアは、今ではきちんと認識していた。
あの時、シオンに冷たい態度をとられたのは、自分自身の行動が原因であると……。
そのうえで、ミーアは言わなければならない。

そのように待っているだけでは相手は振り向いてくれないのだ、と。そのやり方は間違っていると、きちんと告白を受け止めて、フッてやらなければならないのだ。
そうしなければ、きっとまたシオンは間違えるに違いない。そんな風にフラれることを繰り返すうちに、シオンが歪んでしまったら……、その失恋に付け込んで蛇が暗躍するに違いない。
それはなんとしても避けたい！
――ならば、教えてあげなければなりませんわね……。恋愛の先達として！
そう、お忘れかもしれないが、ミーアは大人のお姉さん。恋に迷う若い少年に、きちんと道を諭してあげなければならないのだ。
……などと、実におこがましいことを考えるミーアである。
「シオン、お待ちなさい」
ミーアは、立ち去ろうとするシオンを呼び止める。
「シオン・ソール・サンクランド殿下……、そのように、言い訳をするものではございませんわ」
その言葉に、シオンはハッと驚いた顔で振り返る。
「言いたいことは、きちんと言いなさい。わたくしがそれを受け止めて、きちんと返事をして差し上げますわ！」
「これは……まいったな……」
ミーアの言葉に、シオンは一瞬、目を見開き、
「でも、そうだな……」
そっと静かに膝をつく。それからシオンは、ミーアを見上げて……。
「では、ミーア姫、お手をお借りしてもよろしいだろうか？」
優雅な口調で言った。
その言葉に誘われて、ミーアはそっと手を差し伸べた。その手を優しく、包み込むようにして、両手で捧げ持ってから……、シオンは、
「姫、無礼をお許しください」

そっと優しく、貴重な宝石に触れるように繊細に、ミーアの手の甲に唇をつけた。
「ミーア姫、俺はあなたのことをお慕いしている。あなたに惹かれているのだ。俺の気持ちに応えていただけるだろうか？」
「シオン……」
ぎこちない、不器用なシオンの告白。それを受けミーアは、大人のお姉さんの余裕を……余裕を……吹き飛ばされた！
「けっ、けふっ……」
小さくむせる。
絶世の美少年の、絶妙に慣れてない感じの告白が、ミーアのハートを直撃し、粉砕する！
――おっ、落ち着かなければなりませんわ。わたくしが、しなければならないのは、お断りすること。すっぱりと、かるーく、断ってやればよいだけですわ！
そうしてミーアは、ギンッとシオンのほうに目を向けて……見てしまう。
シオンの真剣な顔を……。
瞬間、ミーアの脳裏に、先ほどの戦いが甦る。
全身全霊をかけたあの戦い、彼らの剣が自分のために振るわれたと考えると……、ミーアは「断ってやればよい」などと、軽い気持ちで答えを返すことができなかった。
彼の本気には、本気で返さなければ……きっと寝覚めが悪いだろう、と……、小心者（チキンハート）の本能が告げていた。
ふぅ……、と小さく息を吐き、ミーアは自身の心の中を整理する。
それから、慎重に話し始めた。
「シオン、アベルとの戦い……、見事でしたわ。本当に……」
自然とこぼれ落ちたのは、決闘への称賛の言葉だった。
「……負けるつもりはなかったんだけどね」
苦い笑みを浮かべるシオンに、ミーアは首を振ってみせる。
「素晴らしい戦いでしたわ。シオン、あなたは……、とても……素

敵な人ですわ」
それは、ミーアの本心だった。
……本心だったのだ。
そう、この時――この決着の時に至って……、はじめてミーアは思っていた。
シオンが魅力的な少年だと……、心から実感していたのだ。
それを、素直に認めることができたのだ。
正面からアベルと戦う姿も、川に落ちた自分を助けてくれた時も、狼使いに立ち向かう姿も、間違いを犯しながらも、傷つきながらも前に進もうとするところも……。
前の時間軸では、その上辺の華麗さで覆い隠されていた彼の魅力的な姿が、ミーアの脳裏を過る。
そうして、ふと思ってしまった。
もしも……、もしも、なにかが違っていれば……、彼と恋に落ちることがあり得たのだろうか？
もしも前の時間軸……、ミーアが一歩踏み出していたら……？
大国の皇女として高慢に振る舞うことなく、もっと素直に関係を育んでいたら……そんな未来はあり得たのだろうか？
――考えても詮無きことですわね。今は、シオンの気持ちにしっかりと応えなきゃなりませんわ。
ミーアは、ふぅっと小さくため息を吐く。そうして、気持ちを静めてから……改めてシオンのほうを見つめて。
「あなたは素敵な人ですわ。だから、きっと……、あなたに相応しい方がいらっしゃいますわ」
それは、いつかのダンスパーティーでかけたのと同じ言葉だった。
でも……、
「わたくしなどよりも相応しい素敵な女性が……きっと……」
あの時とは違い、ミーアは心から言うことができた。
シオンに相応しい人が必ずいると、その出会いが必ずあると……シオンのことを思って……言うことができた。

それは、ミーアからシオンへの贐の言葉だった。
「そうか……」
ミーアの言葉にシオンは……わずかに寂しげな笑みを浮かべて、
「うん……。君の言葉だ。信じてみることにするよ」
そうして、静かに去っていった。

「シオン王子……」
そんなシオンを、心配そうな顔で追う者がいた。
それは……。

第百二十六話　王として、父として

時は、少しだけ巻き戻る。
王の部屋に一人残ったティオーナは、やや緊張した面持ちで、エイブラムを見つめていた。
「あの、陛下……」
「わざわざ残ってもらってすまなかった。改めてお礼が言いたいと思ったのだ」
エイブラムは静かに頭を下げて、言った。
「先ほどは、私を止めてくれて助かった。私だけでなく、エシャールの命も救ってもらったな。感謝する」
「いえ、そんな……。私は、たまたまそばにいただけですから」
わたわた、と手を振るティオーナ。
「そうか……。だが、信賞必罰は、公正の基本。なにかお礼にできることがあればよいのだが……」
「いえ、本当に、お礼だなんて……」
「なんでもよいぞ。物でなければ……そう。なにか、知りたいことでも、な……」
その言葉に、ぴくん、とティオーナの肩が跳ねる。
それを見て、エイブラムは穏やかな笑みを浮かべた。
「先ほど話の途中で、君がなにか物言いたげな顔をしていることが気になった。もしや、なにか私に質問があるのではないかと、そう思ったのだが……当たっていたかな？」
「……」
「ここには、誰もおらぬ。仮にティオーナ嬢が他言したとしても私が認めなければどうとでもなること。なにも遠慮せず、気になることを聞くとよい」
帝国の辺土伯の娘がなにを言おうと、エイブラムが否定すれば、

それで済むこと。言った言わないの水掛け論では、エイブラムは絶対的に有利。
そう考えれば、多少の都合の悪いことでも聞いてよいし、正直に答えるだろう、と、エイブラムは言っていた。
ならば……、ティオーナは改めて、エイブラムのほうを見つめる。
「では……、お言葉に甘えて……。エイブラム陛下、あの時、エシャール殿下が、なにかを飲み物に入れたことに気付かれていたのではありませんか？」
あの時、あの瞬間……、ティオーナはたしかに見たのだ。
エシャールのほうに、なぜだか、険しい視線を送るエイブラムの顔を。
その質問に対し、エイブラムは苦笑をこぼした。
「ああ、やはり、気付かれていたか……。そう、たしかに私はあの子が、シオンの飲み物になにかを入れたことには気が付いていた。まぁ、さすがに致死性の毒だとは思っていなかったが……。ちょっとした悪戯で入れたものだと思っていたのだ。そのようなことをするものではない、と叱るつもりだったのだが……」
「やっぱり、そうでしたか……。では、もしや、あそこから落ちそうになったのは、わざとだったのですか？」
「落ちて死ねば、毒か事故かはわかるまい。まぁ、顔に特徴の出やすい陰毒では、遅かれ早かれ気付かれてしまっただろうが……」
エイブラムは、息子をかばおうとしていた。
そのことが、ティオーナには嬉しく感じられて……だから。
「陛下は、本当にエシャール殿下を処刑されるおつもりだったのでしょうか？」
そのことが疑問だった。
我が子の裁きを平然と言い渡そうとするエイブラムと、あの時、自らの身を捨てて守ろうとした彼とが、どうしても一致しなかった。
「過失とはいえ、王に毒を盛った者は死罪を賜る。国の混乱を招く大罪、死罪をもって裁くことが正しい。それが当たり前のこと……。

そうではないかな？」
　それは、否定のしようがないこと。普通に考えれば、その判断を覆すことは難しい。
「恣意的に裁きを歪めては、王の正しさが揺らぐ。そして、王の正しさが揺らいでは、民が苦しむ」
　厳然たる口調で、そう言ってから、
「だが、それは相手が、『王』であればの話だ」
「王であれば……？　まさか」
　ティオーナは、その言葉でエイブラムの真意に気付く。
「退位なさるおつもりだったのですか？　シオン王子に、王位を譲ると……」
「より正確に言えば、退位していたことにするつもりだった。あの舞踏会の前に、シオンに王位を譲っていたことに、な。そうすれば、エシャールの罪は多少は軽くなるだろう。さらに、新王の即位による恩赦で死罪は免れよう」
「しかし、戴冠の儀は……、それが済まなければ、シオン殿下に王位を譲ることはできないのでは……」
　国内の貴族や、周辺の国々に新王の誕生を知らしめる戴冠の儀。通常であれば、その時をもって、王位は次の新王に移る。
　ゆえに、極秘裏に王位を譲ることはできないのではないか？
　ティオーナの問いかけに、エイブラムは首を振る。
「歴史を紐解けば、戴冠の儀は、それほど古くから行われていたことではない。王位を受けるために、唯一必要な儀は、中央正教会の司祭による“油注ぎの儀”のみ」
　大陸の国はすべて、王権の正当性を中央正教会の神聖典に置く。
　王は、神より、その地の統治を委ねられた者。ゆえに、王権を受け継ぐ者がなすべきことは、神よりその権威を受ける儀のみ。そして、神の祝福の象徴である香油を頭から浴び、その身に神の権威を帯びる、油注ぎの儀がそれにあたる。
　儀式としては、そこまで大規模な儀式でないため、過去の歴史の

中で、それが秘密裏に行われた例は少なくない。
「そして、その資格を持つ司祭以上の存在が、幸いにもあの場にいた」
「ラフィーナさま……」
中央正教会の聖女が、あの場にはいた。
ならば、舞踏会の前にすでにシオンに王位を継いでいたと、口裏を合わせることができれば、エシャールを救うことはできるかもしれない。
「エシャール殿下を救うために、王位を退こうとされていた……」
「どちらにしろ、王の正義を揺らすことなく、エシャールを死罪から救うためには、無理を通す必要があった。その責任を負うために、王位を退くぐらいのことをせねばならぬだろう」
静かにそう言ってから、エイブラムは穏やかに目を閉じた。
「それに……、エシャールを追い詰めてしまったことにも責任があるであろう。父親としてのな……」
「陛下……」
「王として正しくあることと、父として、我が子に愛情をかけること……それは時に両立しない。私は、あの時、エシャールのほうを選ぼうとしていた。それは、父親としての行いとしては正しくとも、王の正義を損なうもの。退位を決意するには、十分な理由だと思わないかね？」
それから、エイブラムは笑った。
「しかし、帝国の叡智は、私の考えを軽々と上回っていった。今回の騒動がなければ、私はエシャールの心に気付くこともなかっただろう。あの子は、いずれ同じことをして、兄殺しの大罪を犯してしまったかもしれない……。彼女は、考えうる中で最善の結末に導いてくれたな」
しみじみとした言葉に、ティオーナは頷いた。
「はい。ミーアさまは、そういう方です」
大切な友人が、エイブラム王に認められたことが、どこか誇らし

かった。
「引き留めてしまって悪かった。貴女の疑問に答えようと思ってのことだったが、すっかり愚痴を聞かせてしまったな」
「いえ……。お心遣い、ありがとうございます」
エイブラムは、柔らかな笑みを浮かべて、もう一度、頭を下げる。
「それに、ミーア姫だけではなく、私は君にも感謝している。家族のことをかばわないのは間違っていると、君が言ってくれたこと、嬉しかった。改めて礼を言う」

そうして、ティオーナは部屋を後にした。
廊下を早足で歩きながら、ティオーナは考えずにはいられなかった。
王の孤独を。
正しくあろうとすればするほど、エイブラム王は、人間らしい感情とは離れていかざるを得なくなった。そのように、彼女の目には映った。
そして、いずれシオンも……。
ティオーナが会場に辿り着いたのは、シオンとアベルの戦いが、佳境を迎えた頃だった。

第百二十七話　失恋の夜に

会場を去るシオン。その背を追いかけたのは、ティオーナ・ルドルフォンだった。

決闘の途中に会場に入った彼女は、シオンとアベルの壮絶な勝負を見た。

そして、それに敗れ会場から去るシオンを……彼女は追わずにはいられなかった。

アベルやミーア、エシャールはもちろん、忠臣のキースウッドでさえ声をかけるのがはばかられる状況であっても、ティオーナは迷わなかった。

話せる時に話さなければ、踏み出す時に、躊躇わずに踏み出さなければ……。そんな思いに背中を押されて、彼女は小走りにシオンを追った。

普通であれば呼び止められても仕方のないところ。実際、ティオーナは見張りの兵に呼び止められそうになった。けれど、幸運が味方した。先ほど、エイブラムが部屋に運び込まれた際、ティオーナが同行していたのを目撃していた兵がいたのだ。

そのおかげで、怪しまれないどころか、逆に感謝すらされ、さらにはシオンの居場所まで知ることができた。

そうして、導かれるようにして彼女がたどり着いたのは、城の監視塔だった。暗い中、硬い石の階段をゆっくり上っていく。と、不意に石の壁が途切れ、月明かりが零れ落ちた。

頂上に着いたのだ。

ティオーナはゆっくりと外に出る。と、シオンが屋上の淵の石壁にもたれかかるようにして、街を眺めているのが見えた。

「シオン殿下……」

「誰だ！？」

鋭い声、と同時に、シオンが振り返って……、
「ああ……。ティオーナ嬢か」
ホッと、肩の力を抜いた。
「どうかしたのかい？　こんなところに来るなんて……。道にでも迷ったのかな？」
優しい笑みを浮かべて、首を傾げるシオン。そんな彼を、ティオーナは真っ直ぐに見つめて……、
「どうして、あんな戦い方をなさったんですか？」
「ああ、先ほどの戦いを見ていたのか。はは、我ながら不甲斐ない戦いを……」
「わざと負けようとしたんですか？」
ぴくり、と肩を震わせて、それから、シオンは真面目な顔で首を振った。
「それはアベルに失礼だ。俺は全力で戦い、そして敗れた。それだけのことだ」
「でも、シオン殿下ならば、ほかの戦い方だってできたはずです。勝つためだけだったら、アベル殿下の力を封じるような、そんな戦い方だってできたはず。それなのに、どうして……」
「……先ほども思ったが、君は、案外……」
シオンは、そこで黙ってから、小さくため息を吐いた。
「単純な剣の腕前を競い合うだけならば、君の言うとおりだ。勝つ方法はないことはなかった。でも……それでは意味がなかった。俺にとってあれは、ただの勝負じゃなかったんだ。自分勝手な話で申し訳ないが……、俺は天秤にかけたんだ。ミーアへの気持ちと、王として俺が背負うものとを」
自嘲するように、苦笑いを浮かべて、シオンは言った。
「そして、俺はそれを捨てることができなかった」
それから、シオンは城下の街に目をやった。
「父も母も、エシャールも……、キースウッドやランプロン伯、我が王家に仕える者たち、あの街に住む民たちも……、俺は捨てるこ

とができなかった」
月明かりにぼんやりと浮かび上がる街、そこに住む数多の民の、その生活が、ティオーナには見えたような気がした。
「だから、アベルに負けた。彼は純粋だった。ミーアのためだけに戦っていたんだ。俺には無理だった。俺には、背負うものが多すぎた……」
もしも、あの場で、アベルに勝っていたとしたら？
エシャールは救われないだろう。それに、ミーアと結ばれるために、シオンは国を捨てなければならなかったかもしれない……。
だが、シオンはその道を選ばなかった。
彼は、次のサンクランドの王で、この地に住まう民の安寧を守る責任があった。
正義と公正をもって、この地を治める、その義務から逃れることを、彼は望まなかったのだ。
その姿に……、ティオーナは先ほどのエイブラム王に通ずる、悲しいほどの高潔さを見てしまって……、思わず、口を開こうとして……でも。
「と、そう思っていたんだがなぁ……」
そこで、シオンは、はぁああっと深々とため息を吐いた。
微妙に……流れが変わった。
「……ミーアは逃がしてくれなかったよ」
「え……？」
きょとん、と首を傾げるティオーナにシオンは、ずぅんと気落ちした顔で言った。
「俺が、国や責任のせいにするのを許さなかった。きちんと告白させて……、きちんと断ってくれた。たぶん、ミーアのことだから、その納得の仕方だと国を恨むようになるかもしれない、とか、いろいろ考えて、そうさせたのだと思う。けど……、やっぱり落ち込む……」
そんな、ちょっぴり情けないシオンを見て……、ティオーナは、

思わず……、
「……シオン殿下は、意外と……」
「ん？　なにかな？」
「……可愛い人なんですね」
「うぐっ……」
呻くシオンに、思わずティオーナは笑ってしまった。
いつだって完璧に見えたシオンが見せた弱々しい姿が、なんだか、可愛らしく感じてしまって……。
「笑うなんて酷いな……。一応、俺は失恋してへこんでいるんだけど……」
「ふふ、すみません。でも、ふふふ」
笑ってみて気が付いた。
ミーアがしたことの意味……。
ミーアは……、シオンを「王」ではなく「人」に引き戻した。
今、ティオーナの目の前にいるのは、失恋に沈む一人の少年だった。
――すごいなぁ。ミーアさま……。
心からそう思った。
ミーアは、王としての葛藤としがらみに絡め取られていたシオンを、恋敗れた少年に変えてしまったのだ。きっとシオンは一人の少年として失恋に傷つき、そして、そこからまた立ち直っていく。
王に連なる者としてではなく、普通の少年としてだ。
それをティオーナは、好ましいことのように感じた。なのに……。
「さて……。そういうわけだから、ティオーナ嬢、俺は少し一人で心を整理したい。すまないが、このあたりで帰ってもらえるだろうか？」
そう口にした時のシオンの顔はひどく大人びていた。
いや、大人びているというのとは、少し違うのかもしれない。
先ほどまでの少年の表情とは打って変わった、冷静で、近寄りがたい……、それは王の顔だった。

悩みを誰にも相談せず、弱音を吐くこともなく、ただ一人、自分の心を自分で捌く。
孤高なる王の姿が……、そこにあった。
――せっかく、ミーアさまが、取り戻してくださったのに……。
そう思った瞬間……、ティオーナは思わずシオンに歩み寄っていた。
彼のまとう、常人を寄せ付けない王の空気も、大国サンクランドの王子という肩書も……、ここから立ち去る数多の理由を完全に無視して……踏み越えて、ティオーナはシオンに手を伸ばす。
今、シオンは目の前にいる。
傷心の彼が、手を伸ばせば届く場所にいる。ならば手を伸ばそう。
この時、この場所にいることができたのだから、手を伸ばそう。
そう心に決めて、ティオーナは……、シオンに歩み寄り……、
「……ティオーナ？　え……？」
シオンの困惑の声。それも当然のことだった。
なぜなら、彼の頭を、ティオーナが抱きしめていたから。
両腕で、自分の胸に、ギュッとシオンの頭を抱く。それは幼子を抱きしめる母のように、あるいは……弟を慰める姉のように。
「これは……、なんのつもりだろう？」
慌てたような声。そこに含まれる、幼さを残した少年の声に、ティオーナはホッと安堵の息を吐く。
それから……、
「シオン殿下……、実は私の弟も、ミーアさまのことが好きなんです」
「うん……？」
怪訝そうな声を上げるシオンに、ティオーナは続ける。
「でも、きっとその恋は実らないんだろうなって、きっと傷つくんだろうなって……思っていて。だから、私、弟を慰める時、どうすればいいか、ずっと考えてたんです」
セロが失恋して、傷ついた時、どうやって励まそうか、ずっと考

えていた。けれど、励まし方はわからない。だって、ティオーナ自身、恋をした経験がないのだから。
考えて、考えて……、結局、出た答えがこれだった。
抱きしめて、ただ、そばに寄り添うこと。
セロが泣くならば、一緒に泣いてあげること……。それだけだった。
「だから、シオン殿下で試させてください」
「……子ども扱いされるのは、心外なんだが……」
「シオン殿下は、お誕生日はいつなんですか？」
「十日ほど前だ……」
その答えに、ティオーナは、くすくすと笑った。
「それなら、私のほうがお姉さんです。私は春でした。年下の男の子は、こういう時はお姉さんに甘えるものだと思いますよ」
「なんだ……それ」
呆れたような声が、聞こえてくる。
実際、ティオーナ自身もそう思う。なんだそれ？　と。
でも……、それでも、このままシオンを放っておくことはできなかった。
きっと、それをしてしまったら後悔する。そんな確信が、ティオーナの中にはあったのだ。
「それに、大丈夫です。シオン殿下。私は辺土伯の娘ですから……。変な噂になったとしても、誰も本気になんかしません」
「なんだ……それ」
シオンはもう一度、ぽつり、と、
「君は……案外、お節介な人だな、ティオーナ」
小さな声で、つぶやくのだった。
そんな二人の姿を見て、ふぅーっとため息を吐く男がいた。
――やれやれ……。どうやら、俺の出番はなさそうかな……。
キースウッドは、二人の様子を眺めて、かすかに微笑んだ。

――シオン殿下もこうして、弱音を吐ける友人ができたのはめでたいことだが……。しかしな……、ルドルフォン嬢は、ああ言っていたけれど、この場面を誰かに見せるわけにはいかないな……。塔の下で誰も入ってこないように止めておくか……。

苦労人の忠臣、キースウッドの夜は、まだ終わらない。

一方、その頃、ミーアは……。

「……うーむ……。なんだか、ホッとしたらお腹が減ってきてしまいましたわ。なにか、食べるものはないかしら……？　先ほどのクッキーはいずこに……」

お開きになった会場で、きょろきょろしていた。すると、

「夕食をあまり食べてなかったものね。どうかしら？　今から、私の部屋で軽くお食事というのは……。もちろん、お菓子もつけていただくけれど……」

「まぁ、ラフィーナさま、よろしいんですの？」

ミーアはパッと顔を輝かせる。

「先ほど、アンヌが差し入れてくれたジュースは、あの宿のものだったようですし、お礼を言わなければと思っておりましたのよ」

「うふふ、それはちょうどよかったわ。せっかくだから、ほかの方も呼ぶのはどうかしら。エメラルダさんは……難しいかもしれないけれど、シュトリナさんとベルさんも一緒にどうぞ。もちろんアンヌさんも。それに、ティオーナさんとも合流しましょうか」

ということで、ラフィーナの宿で二次会を行う運びとなったのであった。

ミーアたちの女子会の夜も、まだ終わらない。

第百二十七話　失恋の夜に（後書き）

あっ、ちなみに、妄想の余地を潰すようでアレなのですが、シオンとティオーナはこの後も、別にロマンチックなこともなーんにもなく、朝チュンを待つことなく、普通に帰ってきました。はい。
若者らしい健全なお付き合いで、キースウッドもニッコリです。あしからず。

第百二十八話　兄と弟の船出

サンクランド王国での事件から数日後。
エシャール王子の聖ミーア学園への留学が発表された。
表向きの理由は、ミーアネットへの協力の下準備のためである。
ミーアネットという国を超えた枠組み、その理念が「大陸中の民を飢餓から救うこと」であることを知ったエイブラム王は、この組織を重視。サンクランドも積極的に協力すべきとの方針を出した。
王は、ミーアネットへの協力を示すため、第二王子エシャールをティアムーン帝国に留学させ、ミーアネットの仕事に携わらせようと考えたのだという。
当初、その発表は、エシャールを引き立てようとしていた保守派貴族たちに困惑をもって受け入れられたが、王の決意は固く、覆すことはできなかった。
また、グリーンムーン公爵令嬢、エメラルダとの婚約は先延ばしされることとなり、そのことに不満の声も上がったが、ランプロン伯や宰相たちによって押さえ込まれた。
こうして、なにかに追われるように、エシャールはグリーンムーン家の馬車で帝国に向かうこととなった。
馬車の中、サンクランド王国を名残惜しそうに振り返るエシャール。そんな彼に、エメラルダは優しく話しかける。
「また、そのうち、すぐにでもサンクランドにお連れいたしますわ。一時は寂しいでしょうけれど、あまり思いつめる必要はありませんわ」
これぐらいの年齢の男の子であれば、さぞや、両親が恋しかろうと思ってのことであったが……、エシャールは、小さく首を振った。
「いえ……。御心配には及びません。サンクランドにも、帰りません。僕にはやることがありますから」

固い表情で、エシャールは言った。
「……僕は、償わなければならないですから……」
そうして、エシャールはひどく大人びた瞳で、見つめてきた。
「そのために、お世話になります。エメラルダさま」
それが、エメラルダには……ひどく痛ましいもののように見えてしまって……。
だから、
「違いますわ。エシャール殿下、そうではありませんわ」
はっきりとした口調で、否定して見せる。大きく首を振って、エシャールの言葉を否定する。
「殿下、あなたは……、すでに許されておりますわ」
「え……？」
きょとん、と首を傾げる幼き王子に、エメラルダは優しく微笑みかける。
「そんな風に思いつめずとも、あなたが裁かれることはすでにございませんわ。だって、そうでしょう？　誰があなたを処刑にできますか？　今から、あなたを連れ戻し、サンクランドの民の前で裁くなど……、そのようなこと、この私が許しませんわ。それ以上に、我が親友ミーアさまが、そんなことを許すはずがない」
言いつつ、エメラルダは思う。
そうなのだ……エシャールは実質もう、許されているのだ。
猶予を与えると言いつつも、彼が今後、大した功績を立てられなかったからと言って、過去の罪を問うことは、きっとないだろう。
そのような痛ましいことを、ミーアが許すはずがない。
あの日、あの部屋でエシャールに沙汰が下った時点で、すでに彼が裁かれることは、決してないのだ。
「でも……、でも、それでは、僕は……」
まるで、道を見失った迷子のように、エシャールが不安げに瞳を揺らす。そんな彼に、新たな道を示すように、エメラルダは言った。
「エシャール殿下、あなたは、裁かれない。だから、恐れ、惑い、

功績を立てることに焦るような、そのような生き方をすべきではありませんわ。あなたは……許された者として生きるべきです」
「許された、者……？」
「そうですわ。ミーアさまもそう、エイブラム陛下もシオン殿下も、もう、あなたのことを許している。シオン殿下は、あのように自らの身を賭して、あなたに贐を送ったではありませんの？　あれは、罪を犯し、裁きを待つ罪人に対してのものではありませんわ。あなたを許し、そのうえで、これからのあなたの歩みに期待してのことですわ。ならば、あなたは、許された者として、相応しく生きるべき……そうではありませんの？」
口に出していて、改めて思う。少し考えればわかることだったのだ。
ミーアが……、ただ過去の過ちを償うためだけに生きるだなんて、そんな残酷な人生を押し付けることがあるだろうか？　あの優しいミーアが、そんなことを許すはずがないのだ。
であるならば……、はたして、どう生きるべきか？
そして、エシャールを託された自分は、どのように彼を育てるべきか……？
エメラルダは、考えて、諭す。
「エシャール殿下、あなたはミーアさまに救われたのだと、その誇りを胸に生きるべきですわ」
「誇り……」
「ええ。そうですわ。罪悪感にうつむき、処刑を恐れ、こそこそと立ち回る……、そのような姑息な生き方は、ミーアさまに救われた者として相応しくありませんわ。もっとミーアさまを見習って堂々と、胸を張って生きるべきです。その先にこそ、真の功績が建てられる、私はそう思いますわ」
それでこそ、自身の夫に相応しい生き方である、と、エメラルダは考える。彼女の、夫に対する要求水準は、この上なく高いのだ。
「そして、あなたがそのように生きることを、私はもちろん、きっ

とミーアさまだって、応援しますわ。心から応援いたしますわ」
エシャールの両手をぎゅっと握って力説するエメラルダに、エシャールは、
「あ、あの……ありがとうございます……」
ちょっぴり照れ臭そうに、言うのだった。

離れ行く馬車を見送って後、シオンはエイブラムのもとを訪れた。
「失礼いたします。父上、お話があってまいりました」
「ああ、シオンか。どうかしたのか？」
毒の影響もすっかり抜けたエイブラムであったが、十日間は安静にするように、との医官の助言に従い、公務からは離れていた。
ゆったりと椅子に腰かけ、本を読んでいたエイブラムに、シオンは真っ直ぐに視線を向けて……、
「このたびのエシャールのことで、考えたことがありました。それを、ぜひ、父上にお聞きいただきたいのです」
エイブラムは、静かにシオンのほうに目を向けて……、そっと本を閉じた。
「聞こう」
その途端、シオンは気圧されそうになるのを感じる。
エイブラムの帯びた空気が、父から、王のものへと変化したのだ。
緊張を抑えるために、シオンは大きく息を吸って、吐いてから……、
「陛下……、私は……、人でありたいと思います」
静かに語りだした。
公正なる裁きをするために必要なこと。それは一切の私情を排すること。エシャールを弟としてではなく、ただ一人の罪人として裁くことが、あの時のシオンに求められることだったのだ。
かつてのシオンは、それを当然のことと思っていた。王としての責務だ。重たい王権をその身に負う者として、当然のことではないか、と、そう思っていたのだ。

でも、シオンは知った。自分が完璧とは程遠いこと。
正義と公正をなすのに、今の自分では、不足。ならば、どうするか？
ただ、正義の執行者として生きるべく、徹底的に情を捨てるのか……、それとも。
悩んだ末、シオンは一つの答えを出した。それは……、
「人は間違いを犯すものと……、そのことを知っている、人の王となりたいのです」
それこそが、シオンの答え。
「王ですら間違いを犯すと……それを認める王として、お前は国を治めるというのか……」
その言葉に、シオンは小さく頷く。
「人が人を治めるということは……、そういうことではありませんか？」
「そうか……。それが、お前の考える、サンクランドの形か……」
シオンの言葉に、エイブラムは深くため息を吐き、瞑目した。
やがて、その目が開き、真っ直ぐにシオンをとらえる。
「ならば、シオン。王の誤りを正す仕組みを作れ」
重々しい言葉が、シオンに投げかけられた。
「間違いを正す……仕組み？」
「そうだ。王が間違いを犯す人であるというなら、そういうものでありたいと願うなら、その間違いをただす仕組みによって、公正さが保たれなければならない」
「それは、どのようなものでしょうか……？」
その質問に、けれど、エイブラムの答えは厳しかった。
「さてな。それを考えるのはお前の仕事だろう。人として、大切な者たちに助言をもらいながら、考えていけばよかろう」
ハッと息を呑んでから、シオンは静かに頭を垂れる。
「よき友に恵まれたな。シオン」
その言葉に、シオンはゆっくりと頷き、

「ええ……かけがえのない仲間に……出会うことができました」
穏やかな笑みを浮かべるのだった。

その夜、エイブラムは、ささやかながら王妃と酒杯を傾けあう時を持った。
シオンの成長を祝い、そして、エシャールの旅路の無事を祈りながら。

第百二十八話　兄と弟の船出（後書き）

来週、少し番外編を挟んで、次の週は一週間のお休みとします。

番外編　女帝ミーアのトリックオアトリート

ティアムーン帝国の女帝、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、非常にユーモアと遊び心にあふれる人物であったと言われている。
これは、そんな彼女が仕掛けた、ある悪戯の物語。

ティアムーン帝国、白月宮殿での一幕。
帝国の若き女帝ミーアは、その日、一仕事を終えて、優雅に午後のティータイムを楽しんでいた。
料理長の特製野菜ケーキに、ウッキウキでフォークを突き刺そうとした……、まさにその時！　数人の中央貴族の男たちがやってきた。
いずれもブルームーン派に与する彼らは、過日、ミーアが言い出したことに異を唱えるために、やってきたのだ。挨拶もそこそこに、さっそく、彼らは話し始めた。
「先日の、ご判断、ぜひご再考いただきたい」
「はて……？　なんのことですの？」
「知れたこと。ルドルフォン辺土伯とベルマン子爵の件です」
「まぁ……、ベルマン子爵を伯爵にする件、これは妥当といってもよいでしょう」
「左様。彼は中央貴族に列せられる者ですし、皇女の町を領内に抱える者の爵位が低くては格好がつきますまい。聖ミーア学園の設立に尽力した者としても、伯爵が妥当であることは、否定するつもりはありません」
彼らはまず、ミーアを認める姿勢を見せた後に、丸め込もうとするように、軽薄な笑みを浮かべて、
「しかし、ルドルフォン辺土伯、かの者を伯爵とするのは、いかがなものか……」

などと言ってきやがった！
やれやれ、これはのんびりケーキを楽しんでもいられなそうだぞ……と思ったミーアは、ため息交じりにフォークを置……く前に一口パクリとして、それからフォークを置いた。
「もぐむぐ……。ふむ、けれど彼は自領の小麦を配り、多くの民を救いましたわ。彼のところの小麦がなければ、多くの犠牲が出ていたはず。それに彼の息子、セロ・ルドルフォンの功績はあなたたちも認めるところではなくって？」
そのミーアの言葉にも、貴族たちは難色を示す。
「それはもちろん、知っております。されど、それがすなわち伯爵にすることにはなりますまい」
「信賞必罰は国を治めるのに欠かすことはできぬもの。そうではありませんか？」
ミーアのそばに控える、ルードヴィッヒが口を出した。
そちらに、忌々しげな視線を送り、貴族の男は首を振った。
「ルードヴィッヒ殿は平民の出。こういった貴族の事情には、失礼ながら、あまり通じていないのでは？」
見下すような目でルードヴィッヒを見てから、彼らは嘲笑を浮かべる。
彼らがルードヴィッヒの言葉に反応したのは、彼の能力を認めているからではない。ルードヴィッヒがミーアのお気に入りだからだ。
ミーアの手前、無視してはミーアの心証が悪くなるという配慮だった。
実際のところ、つまらない抗議をしてきた時点で、ミーアの心証はだいぶ悪化しているし、美味しいケーキを食べるのを邪魔した時点で、万死に値する……ぐらいのことを思っているのだが、彼らは知る由もない。
「なるほど。つまり、あなたたちが言いたいのは、辺土貴族に中央貴族と同じ爵位を与えるのはまかりならん、と……そういうことですわね？」

「ご明察にございます。陛下」
かしこまって頭を下げてはいるが……、その態度は、どこか不遜に見えた。
――まぁ、ブルームーン派としては、サフィアスさんに皇帝になってもらいたかったんでしょうし、わたくしに好意的である理由はありませんわね。
甘いものが食べたいなぁ、などと思い始めたミーアに、
「陛下……いかがいたしましょうか？」
ルードヴィッヒの声が飛んできた。
「ふーむ……。あ、そうですわ！　良い考えがございますわ」
ミーアは、ニンマリと笑みを浮かべて言った。
「ならば、辺土伯を一文字変えてあげる……というのはどうかしら？」
そうして、ミーアは、指をふりふり、ふむむ、っと唸り……、考え込むような様子を見せてから、
「たとえば、そう。辺境！　辺境伯などというのはどうかしら？　こちらのほうが格好いいですし、ちょっぴりですけど、出世したように感じないかしら？」
ミーアのその言葉に反応したのは、すぐ隣にいたルードヴィッヒだけだった。
彼は、驚愕のあまり目を見開いたが、すぐにそれを隠すように、眼鏡を直しつつうつむいた。
「辺境伯……？　なるほど、たしかに頭に辺境とつければ、田舎者の感じは出ますが……。ですが、そんなことで誤魔化されるものでしょうか？」
「なにを言っておりますの？　こういうのは、形が大事なんではありませんの。辺土伯のままにしては信賞必罰に反する。されど、伯爵にはできない。ならば、このようにするしか、ないのではないかしら？」
そうして、ミーアは、ニヤリと悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「なるほど……。さすがは陛下。ご聡明でいらっしゃる」
そのようなことを言いつつ、彼らは部屋を出て行った。
それを笑顔で見送るミーアに、ルードヴィッヒが話しかけてくる。
「陛下……、辺境伯、というのは……」
「ふふふ、その様子ですと、あなたも知っておりましたのね」
ミーアは涼しい顔で微笑んでから言った。
「ええ。無論、あなたが考えている爵位で合ってますわ。まぁ、だいぶ前から使われなくなっているそうですし、そもそも外国の爵位だから、知らなくっても無理はないお話ですけれど……」
それはミーアの悪戯。あるいは文句を言ってきた連中に対する、ちょっとした意趣返しだった。
辺境伯、それは実在する爵位である。否、正確に言えば、かつて存在していた爵位だ。
それは、伯にして伯にあらず。時にその上、侯に列せられることもある爵位。
国境付近に領地を置く、国の盾。時に君主の血族、時に君主の最も信頼厚き者に与えられた爵位、それこそが辺境伯である。
そして、その爵位が存在していた国は、かの大国、サンクランド王国だった。
今では使われなくなった爵位ながら、未だに民草の間では、王に等しき尊敬をもって扱われる、それこそが辺境伯という爵位であった。
セントノエルの授業にて、そのことを学んでいたミーアは、会心の笑みを浮かべる。
「自分たちの抗議によって、かえって事態を悪化させてしまった……。彼らは立場がありませんね」
「ふふん、わたくしのケーキを邪魔した罰ですわ。ちょっとした悪戯ですわ」
そうして、ミーアはニッコリ笑って、ケーキを頬張るのだった。

さて……、ルドルフォン辺土伯が、辺境伯に任命されたという知らせは、中央貴族たちの間で、大きな衝撃となって走った。辺境伯を知らなかった不勉強な者たちも、それがサンクランドに存在した爵位だと聞き、さらに、候に等しきものであると聞いて、大いに焦った。

一方で、ミーアと近しい四大公爵家の者たち、サフィアス、エメラルダ、ルヴィ、シュトリナは、それぞれに苦笑いを浮かべて、その報を受け取った。

おおかた中央貴族のバカなのが、ミーアの怒りに触れたのだろう、と判断したのだ。もっとも、そのバカな貴族が自身のブルームーン派だと知ったサフィアスは、ちょっぴり青くなったりもしたのだが。

まぁ、ともあれ……、中央貴族が抱いた焦りも、長くは続かなかった。

「ま、まぁ、形だけのことだ。実際、帝国には辺境伯なる爵位はなかったわけだし、領地が増えるわけでもない。権勢が増すわけでもないのだから問題はあるまい」

そう自分たちを慰める中央貴族たちである。

けれど、そんな彼らに衝撃を与える事件が、しばらくして後に勃発する。

それは……、辺境伯令嬢ティオーナ・ルドルフォンとサンクランドの若き国王、シオン・ソール・サンクランドとの縁談である。

番外編　女帝ミーアのトリックオアトリート（後書き）

遅れてきたハロウィン……

番外編　その種は実らず

シオン・ソール・サンクランドが王位を継いだのは、彼がセントノエル学園を出てすぐのことだった。奇しくもその時期は、帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンが帝位を継いだ時期に重なる。

国家を超えた機関、ミーアネットと新種の小麦の広まりも相まって、人々は、新しい時代の到来を予感していた。

そんな折、サンクランド王国内を一つのニュースが駆け巡った。

それは、彼らの若き王、シオン・ソール・サンクランドの縁談の話である。

その日、王都の酒場は、その話題でもちきりだった。

「しかし、その相手のルドルフォン辺境伯家ってのは聞いたことがないな。辺境伯なんて懐かしい名前が出てくるってことは、どこか伝統国の出身の人なのか？」

「帝国の貴族令嬢だって聞くが……。ここだけの話、名ばかりの『辺境伯』だって噂だぜ」

あたりを見回してから、声を潜めて男が言った。

「そうなのか？」

「そりゃそうだろ。なにせ、帝国には辺境伯なんて爵位はなかったんだ。あるのは、辺土伯って、田舎貴族っていう蔑称だけさ」

そうして彼らの間に、自らの王を侮辱されたという怒りが沸き起こりかけた、まさにその時……。

「けどさ、このルドルフォン家って家名は聞いたことがあるな」

誰かのつぶやきが、流れを微妙に変える。

「そういわれてみれば……」

と、そこに、新たな男が加わる。

行商人を生業とする男は、彼らの話を耳にして、呆れたように言

った。
「なんだお前ら、知らないのか？　あの新種の小麦の発見者がセロ・ルドルフォンさまじゃないか」
「あっ……」
大陸の歴史にとっての大きな分水嶺。
寒さに強い小麦の量産化……、それをなした英雄、セロ・ルドルフォンとアーシャ・タフリーフ・ペルージャンの名は、市井の人々の間にまで広まっていた。
「なるほどな。つまりは、セロさまの小麦の功績によって、その父親が辺境伯に任じられたってことか」
納得のつぶやきをこぼす男に、けれど、行商人が首を振る。
「いや、それがそうとばかりも言えないようでな。そのルドルフォン辺境伯って人は、女帝派の最古参の貴族で、なんでも、女帝派をまとめ上げるのに尽力した人物だそうだよ」
女帝派――帝国の四大公爵家の派閥に対抗するため、女帝ミーアが求めた新勢力。皇女ミーアを頂点とした新興の者たちは、今や四大派閥と肩を並べる第五の勢力と認識されていた。情報が命の商人の間では有名な話ではあるが、さすがにサンクランドの一般民衆の中では、あまり知られていない話である。
感心の声を上げる者たちに気をよくしたのか、事情通の行商人は続ける。
「ちなみに、辺境伯領に隣接してるベルマン伯領には、女帝陛下の町『皇女の町』がある……ってのも、ちょいと意味深だよな」
「ん？　ってことは、その新種の小麦の開発に成功した、聖ミーア学園があるのも……」
「当然、そのベルマン伯爵領ってことになる」
ルドルフォン辺境伯とベルマン伯爵、いずれも女帝派の最古参として知られている人物である……、と訳知り顔で行商人は語る。
「ミーア陛下が帝位を継ぐのに尽力した女帝派ねぇ……。なるほど、功臣として、辺境伯の爵位を与えられたのか」

そうなってくると、ルドルフォン家への評価は、変わってくる。
女帝ミーアが、四大公爵家に拮抗させるべく、新たに星持ち公爵に匹敵する爵位として、特別な「辺境伯」という爵位を設けた……、などという推測が成立してしまうからだ。
そもそも「辺境伯」という名誉ある爵位を軽視されている田舎貴族に与えるだろうか？　そんなことは……あり得ない（……相手が普通の皇帝であれば……）
「帝国初の『辺境伯』の爵位を与えられた重臣……その家の令嬢がお相手か……」
しかも、弟は新種の小麦の発見者、英雄セロ・ルドルフォンである。そう考えると、相手としては……、それほど悪くないのでは？
という気がしてくる。
「だが、そのご令嬢自身はどんなお人柄なんだい？」
「いや、それがな。これはここだけの話、俺が庭の手入れをさせていただいてる貴族の旦那に聞いた話なんだが……」
横で聞いていた庭師の男が話に入ってきた。
「実は……前国王陛下の命を救った恩人だとか……」
「なんだと？　そんな話聞いたことないぞ」
「そりゃそうだろう。そんな国家の一大事、俺ら庶民にまで知らされるわけがない」
したり顔で肩をすくめる庭師の男に、酒場の酔っぱらいたちは、なるほど、もっともだ、と頷きあった。
「ってことは、だ。シオン陛下のお相手ってのは……」
彼らは、改めて考える。
王妃候補となっている、ティオーナ・ルドルフォンは、前王エイブラムの命の恩人で、大陸の恩人セロ・ルドルフォンの姉。さらに、その父は、ティアムーンの女帝ミーアの信頼に厚い、女帝派の重鎮で、特別に新しく作った爵位である『辺境伯』を与えられた唯一の者……？
彼らは思う。それは……、まぁ、そんなに悪くないのでは？

さらに、そこに聖女ラフィーナからの祝福の言葉が届くに及び、彼らは知る。
「このティオーナ・ルドルフォンという女性は、聖女ラフィーナとも旧知の人であったか」
と。
こうして、いくつかの情報によって脚色されたティオーナを、期待半分、不安半分で迎え入れた人々は、徐々に彼女の素朴な人柄に惹かれていく。
その、大貴族にはない親しみやすさに、彼らは夢を見出した。
平民の娘や貧乏貴族の娘が身分差を乗り越えて大国の王子と婚儀を結ぶ……、いつの時代も人気で、されど、現実では決してありえないような恋物語を実現したと、ティオーナに、夢と憧れを見るようになったのだ。
こうして……、ティオーナが多少の反発を受けつつも、人々に受け入れられたことは、さらに意外なところに影響を及ぼした。
帝国内の貴族のパワーバランスである。

ルドルフォン家に与えられた『辺境伯』の爵位を、名ばかりのもの、実質を持たぬものと考えていた中央貴族たちは驚愕する。
辺境伯とサンクランド王家との間に強い血の繋がりができてしまったためだ。
当初、帝国貴族の誰もが、その報を信じなかった。
いくら学友とはいえ、たかが辺土貴族の小娘が、大国サンクランドの若き王と婚姻など、あり得ないこと、と。
けれど、彼らの予想はすぐに覆された。
サンクランドの民は、ティオーナ・ルドルフォンに対し歓迎を示したのだ。
こうなると、焦ったのは帝国中央の貴族たちだった。
なにしろ、名ばかりの辺境伯に、サンクランド王家との強固な血の繋がりができてしまったのだ。

「これでは、あの辺境伯の爵位が力をもってしまうではないか！」
名ばかりの辺境伯が、サンクランドの王族との婚姻により、実を持ち始めた。
こうなると、中央貴族は焦る。
焦るのはもちろんだが……、もっと言ってしまうと、こう……なんというか……「いいなぁ……」と彼らは思ったのだ。
サンクランドの王族との血縁、それを彼らは羨ましがって、自分たち、中央貴族もその縁を欲したのだ。
もう、こうなったら、派閥の別はどうでもよい。ともかく、伝統ある中央貴族にも、その血縁が欲しい！　彼らをそんな欲望が駆り立てた。
そんな折、彼らはふと思い出す。
そういえば、なんだか訳ありという話だったが……王子はもう一人いるじゃないか。しかも、中央貴族の一角、四大公爵家で預かる、許嫁が……。
そうなると、俄然、中央貴族の鼻息は荒くなる。
どんな理由かは知らないが、放っておくのはもったいない。もしも、グリーンムーン家が婚約を破棄するならば、自分の家の娘とぜひ……などと、帝国内の有力貴族がこぞってグリーンムーン公爵家を訪れることとなった。

その日、グリーンムーン公爵家令嬢、エメラルダは父に呼び出しを受けた。縁談のことについて話がしたい、と言われたエメラルダは、辟易した顔で首を振った。
「ふぅ、やれやれ……またですの？　お父さま」
エシャール王子を連れ帰ってから、すでに五年の歳月が流れていた。
エメラルダは今年二十三。そろそろ適齢期……いや、むしろ遅いぐらいだろう。
それゆえ幾度となく縁談話が舞い込んできたものの、彼女はすべ

てお断りした。
なにしろ、自分にはエシャールがいるのだ。過去に犯した過ちがあるとはいえ、エシャールを連れ帰った日以来、エメラルダは心に決めていたのだ。
そして、そんなエメラルダの思いに応えるように、エシャールもまた成長していた。聖ミーア学園に在籍し、学長ガルヴの指導の下、優秀な成績を残している。
エメラルダは信じているのだ。エシャールが、大功を立てると。だからこそ、彼を裏切るような真似はしたくなかった。
――ここは、しっかりとお断りしておかなければなりませんわ！
鼻息荒く、エメラルダは、持ち込まれた縁談をお断りしようとして……。
「実はな、エメラルダ。お前とエシャール殿下との縁談を進めろ、との声が大きくてな……」
「……はぇ？」
口をポカンと開けるエメラルダに、父は、苦虫を噛み潰したような顔で言った。
「昨今の情勢を考えるとやむを得んだろう。みなに、エシャール殿下の事情を話すわけにもいかぬし……」
こんなことならば、早いところサンクランドに帰しておくのだった……などと、頭を抱えるグリーンムーン公爵。そんな父を横目に、エメラルダは首を傾げる。
「私が、エシャール殿下と……婚儀？　……はぇ？」
かくして、エシャールとエメラルダの婚儀は急ぎ進められた。
エシャール王子、十五歳、エメラルダ二十三歳の時のことである。

さて……、時は移ろいゆく。
それからさらに二十年の時が過ぎた、ある日のこと。
その日、サンクランドの王城に、エシャールの一家が帰郷した。
様々な行事を終えた後、シオンはひさしぶりに、弟、エシャール

と兄弟二人で酒杯を交わすことになった。
「こうして酒杯を交わすのは一年ぶりか」
「ええ。昨年の母上のお誕生日以来でしょうか。ご無沙汰しております。兄上」
穏やかな笑みを浮かべるエシャール。かつては、シオンの前に来る時には、ぎこちなさが残っていたが、ここ数年は、ごくごく自然な態度で会話をすることができるようになっていた。
「しかし、大したものだな。ミーアネットは」
葡萄酒を傾けつつの話題は、エシャールが携わるミーアネットのことだった。
「いまや、大陸の外、海の向こう側の国とも連携していると聞くが……」
「ええ。グリーンムーン公爵家の持つ人脈が生きました。協力する国が増えれば増えるだけ、救える人が増えていく。互いに食を融通しあい、交流することで、国家間の関係も少しずつ良くなる。意義深い組織だと思います」
それを語る時、エシャールはほんの少しだけ誇らしげだった。それは、自らの仕事に意義を感じる大人の顔だった。
すっかり成長した弟の顔を、まぶしく感じつつも、シオンは頷いた。
「それにお前も……、サンクランドの王族として、立派に務めを果たしているそうだな」
ミーアネットの交渉官として、様々な国との条約をまとめるエシャールの話は、シオンも聞いていた。その外交手腕は、ミーアネットにかかわる商人たちの中でも、かなうものはいないという。
兄から褒められて、エシャールは穏やかに微笑む。
「ありがとうございます。兄上に認めてもらえるのが、私は何より嬉しいです」
「しかしな、エシャール。先日、気になる噂を聞いたのだが……」
「噂、ですか？　それは、どのような……？」

眉を顰めるエシャールに、シオンは言った。
「クロエ嬢から、ミーアネットの代表の座を譲られた際に、それを固辞したとか……」
エシャールの元気そうな顔を見て、安堵を覚えたシオンだったが、一つだけ気になっていることがあった。
それはエシャールが、いろいろな重職の話を断り続けている、ということだった。
聖ミーア学園で鍛えられたエシャールは、シオンの目から見ても有能な人材だった。
おそらく、たいていの仕事は、十分以上にこなすことができるだろう。
にもかかわらず、エシャールはいつまでも、名誉ある重役に就こうとはしなかった。
シオンには、それが、過去のあの事件の罪悪感に囚われてのことに思えて仕方なかったのだ……。
「サンクランド王家に相応しい仕事だと思うし、クロエ嬢もお前の能力を買って申し出てくれたのだと思うが……、いったい、なぜ、断ったのだ？」
「いえ……その……えーと……」
シオンの問いかけに、エシャールはなんとも気まずそうな顔をした。
もごもごと、口の中で何かを言ってから、彼は、頬をかきつつ、小さな声で……。
「その……あまり忙しくすると、エメラルダさんが寂しがりますから……」
そんなことを言った！
ほんのり頬を赤くするエシャール。その顔を見て、シオンは……思わず噴き出した。
「そうか。ふふ、それは、たしかに正当な理由だ。仕事を断るのに、これ以上、正しい理由はないな。ははは」

そうして、シオンはようやく確信することができた。
かつてエシャールが蒔いてしまったあの種は、どうやら実ることなく枯れたらしい、と……。
それに、確信したことはもう一つ。
どうやら、エシャールたちの夫婦仲は良いらしい……。

かくて、サンクランド王家の兄弟の確執は枯れ果てた。
この結末が……、
――ふふん。辺土伯と辺境伯……一文字変えたぐらいなら、きっとあいつら、迂闊ですから気付きませんわよ。わたくしがケーキを食べるのを邪魔するからですわ。いい気味ですわ！
などという、ミーアのちょっとアレな思惑で口に出された言葉によるものだとは、誰も気付かないのであった。

第百二十九話　楽しい女子会～ミーア姫、使命感に燃える～

王城でのダンスパーティーの後、ミーア一行はラフィーナの宿に移動した。

そこで、二次会の女子会を行おうという趣向である。

食卓に着くと、さっそく出てきたのは、もくもくと湯気の上がるシチューだった。

濃厚なクリームシチューの中には、ざっくりと大きめに切ったパンが入っている。ほっくりと煮込まれた陽甘芋（ようかんいも）の黄金色、立ち上るほのかに甘い濃密な香りに、ミーアは思わずうっとりする。

スプーンですくい、口へと運ぶ。っと、芋はまるで糸がほぐれるようにして、さくり、ほろり、と舌の上で溶けていく。後に残るのは濃密な甘みと、果実のような香り。それをクリームシチューのコクのある味が包み込む。

ほふ、ほふ、と息を吐きながら、ミーアは見つける！

シチューの中に隠れるようにして顔を出す海藻のようなもの……。それは……っ！

「サンバピルツ……。もしや、これは……、あの伝説のキノコでは……？」

「ええ。食べた者は喜びのあまり舌が踊りだすというキノコです。サンクランドでは比較的、採れるものなので……」

「なんとっ！　それは素晴らしいですわ！」

では、早速、とミーアはそれを口に入れる。

ふる、ふるっと震えるキノコ。薄い形状をしているからか、それは舌の上を絶妙に踊る。その、なんともこそばゆいような、不思議な食感に、ミーアは思わず笑ってしまう。

噛み締めた瞬間、口の中に広がるのは、味わい深いキノコの滋味……。大地の恵みを凝縮したようなその味に、こってりとしたシチ

ューの味が合わさって……、実になんとも……。
「ほぁあ……。とても美味しいですわ」
たっぷりシチューを吸ったパンも、柔らかく煮られた陽光ニンジンも、そのすべてが、ミーアの心を満たしていく。
――ふむ、エメラルダさんがエシャール殿下と婚儀を結べば、自然とサンクランドとの関係が強化されるはず。となれば、このキノコが献上されることもあるはず……。しかし、キノコだけでなく、このシチューそのものが絶品ですわね！
そうして、お夜食のシチューに大変満足したミーアは……眠くなってきた。
お腹一杯になったら眠くなるのが人間というもの。ミーアは、どんな時にも人間らしさを失わない人なのだ。
「ふぁむ……、今からランプロン伯のところに帰るのも……、億劫ですわね」
あくびを噛み殺しつつ、そんなことをつぶやいていると……、なぜか、ラフィーナが目をキラッキラさせてから、なにやら深呼吸して……。それからキリッとした顔で、
「そうね。あまり夜遅くに女性が外を出歩くものではないわ。どうかしら？　今夜はここに泊って行ったら？」
「え……？　でも、よろしいんですの？」
眠気にぽやーっとした顔で、そう尋ねると……、
「もちろんよ。ここは宿屋。部屋もたくさんあるし。それに、蛇の手の者もどこに潜んでいるかわからないけれど、ここならば安全よ」
グッと拳を握りしめるラフィーナに
「ふぅあむ……。そう……ですわね。それじゃあ、そうさせていただこうかしら……？　リーナさんとベルも、それでよろしいかしら？」
などということがあり……、ミーアたちはラフィーナの宿に泊まることになった。
ちなみに、ミーア、ベル、シュトリナ、アンヌの四人が泊まるこ

とになったが……、なぜか、全員でラフィーナの部屋に泊まることになった。
そう、女子会は、パジャマパーティーに移行したのだ！
……ということで、それぞれ、ラフィーナから借りたパジャマに着替えた面々は、二つのベッドの上に丸くなって座った。ちなみに……。
「こうして、パジャマに着替えてしまえば、貴族も平民もないでしょう？」
というラフィーナの一言で、アンヌも普通に参加することになった。
ミーア的にはすぐにでも寝られる状態ではあったのだが……あのような熱い決闘を見せられた後、こうして乙女たちが一堂に会してしまったのだ。
であれば、もはや避けることはできないのである……恋バナを！
「先ほどのシオン王子、すっごく格好良かったです！」
開口一番、そう主張したのは、ベルだった！
「うふふ、ベルちゃん、シオン王子のこと、好きだものね」
おかしそうに笑うシュトリナに、ベルは深々と頷いた。
「はい！　もう、格好良すぎです。リーナちゃんもそう思いませんか？」
などと、話が広がっていくのを眠気眼で眺めていたミーアだったが……。
「アンヌおか……、さんは、どんな方が好みなんですか？」
ベルの発した質問に、興味を惹かれる。眠気が、薄らぐ。
アンヌに恋愛相談をすることもしばしばなミーアであるのだが、アンヌ自身の好みというのは、そういえば聞いていなかった。
ということで、興味津々にアンヌのほうに目を向けると……、
「いえ。私は結婚しません。ミーアさまのおそばにずっと仕えたいと思ってますから……。あっ、もちろん、ご迷惑でなければ、です

けど……」
　それから、不安そうな目で見つめてくるアンヌ。そんな忠臣に、ミーアは小さく首を傾げた。
「はて……？　迷惑なんてことは全然ありませんけれど……というか、そもそも、結婚してからも仕えてもらうつもりですわよ？　わたくしの専属メイドとして……、ああ、でも、わたくしの子どもが生まれたら乳母としてきていただくのが良いかしら……？　ともかく、夫を持ったからと言って、仕事を辞める必要なんか、まったくありませんわ」
　第一、アンヌが独り身で、自分は恋愛を謳歌するのは、いまいち気が引けてしまうミーアである。美味しいものは、みんなでシェアする。恋愛もみんなで楽しめるのが一番なのだ。
「ミーアさま……」
　アンヌは、一転、感動にウルウル瞳を潤ませていた。
「まぁ、そういうわけですから。もしも、アンヌが忙しくて恋する暇もないというのならば、わたくしがお相手を見繕わなければなりませんわ。さぁ、アンヌ、あなたの好みを聞かせていただきますわよ？」
　そうして楽しいガールズトークが続いていた……のだが。
「ところで、ラフィーナさまの好みはどんな方なんですか？」
　誰かの口からその質問が出た時に、ミーアは、かすかに姿勢を正した。
　なにしろ、あの、聖女ラフィーナの男性の好みである。興味を惹かれないわけがないではないのだが……、同時に、ミーアにはそんなことを自分から聞く勇気もなく……。
　――誰が言ったか知りませんけれど、大した勇気ですわね……。
　内心で、その蛮勇を称えつつも、ミーアはラフィーナを見守る。
っと……、
「私の好み……そうね……」
　ラフィーナは、頬に指をあて、ちょこん、と首を傾げる……。

「特には……いないかしら？」
「え？　でも、シオン王子とか、格好よくないですか？　それにキースウッドさんとか、とても素敵で……」
声を上げたベル。グイグイいく！
ベルの中にはもはや、司教帝に対する恐れは……たぶんない！
「んー、お二人とも素敵な人だけれど……」
ラフィーナは、ニッコニコと笑顔で、
「私の好みには合わないかもしれないわ」
ざっくり切り捨てた！
ミーアは、なんとなぁく、前時間軸で、笑顔で切り付けられたことを思い出した。
「えー、じゃあ、どういう人がいいんですか？」
自分が考えうる最高の人物を例に挙げたのに、いまいち反応が芳しくない。
それが不満なのか、ベルはぷっくーっと頬を膨らませて言った。
「んー、そうね……」
ラフィーナは、小さく首を傾げてから、もじもじと言った。
「強いて言うなら……お姫さま抱っことかしてくれる人……かしら？」
……突然、ラフィーナがおかしくなった。
ミーア、思わずラフィーナの顔を見て、咄嗟に、自分の飲み物を口の中に含む。
……酒精（アルコール）は……感じられない！
ミーアは、ラフィーナを、再びラフィーナの顔を凝視する。
俗にいう二度見である！
――ラフィーナさま……素面（しらふ）……ですわよね？
ラフィーナに変わった様子はない。
念のため、シュシュっとシュトリナのほうを見ると、シュトリナは、さりげなくラフィーナの飲み物の香りを確認！　それから、自分のジュースをチロッと小さな舌で舐めて……、大きく頷いた。

どうやら、本当にお酒ではないらしい。
――しかし……お、お姫さま抱っこ？　これはいかにも現実離れしているというか……、リアリティがないような……？
現実にいない、というのではない。そうではなくって、具体性に欠けるというか、ふわふわしているというか……。ラフィーナの理想の男性像がまるで見えてこない、そんな答えだった。
ミーアは、不意に危機感を抱いた。
シュシュっと視線を巡らせたミーアは、素早く、ベルに耳打ちする。
「……ちなみに、ベル、司教帝ラフィーナさまは、ご結婚は……」
っと、ベルは、きょとりん、と不思議そうな顔で首を傾げて……、
「そんな命知らずな人はいないと思いますけど……」
――ああ……。ですわよね、やっぱり……。
「あっ、でも！　ディオン将軍だったら、そのぐらいのことやれるかもしれません」
――そうでしょうけどね！
心の中で叫んでから、ミーアは改めて思った。
――これは、ラフィーナさま……、結婚相手に苦労しそうですわよ？
無論、ラフィーナはヴェールガ公爵令嬢である。父であるヴェールガ公爵は、きちんとした相手を連れてくるだろうし、それを真っ向から拒否はしないだろう。しないだろうが……。
――ラフィーナさまのお父さまも……、毎年、肖像画を描かせるぐらいの親ばかですわ。
普通程度の親ばかであれば……良い。が、毎年、肖像画を描かせ、あろうことか、それを周辺国に売るという暴挙。うちの娘は、これだけ可愛いんだぞ！　と声高に宣言するようなことをやらかす人である。
ミーアは、そこに、自らの父と似た匂いを感じる。
そして……。

――そういうお父さまであれば、ラフィーナさまが、少しでも気に入らない相手であれば、当然、無理にとは言わないはず。
そうして、ラフィーナの相手探しは難航し……傷ついたラフィーナは……司教帝に堕ちるかもしれない！
――それに、ラフィーナさまは、わたくしのことをお友達と思っていてくれているみたいですし……。ならば、その思いに応えたいですわ。
友として……、それ以上に恋愛の熟練者（エキスパート）として、ミーアは使命感に燃えた。
なんとしても、ラフィーナにぴったりの男性を紹介して、それで、ラフィーナに引き続き、丸いままでいてもらわなければならない。なんだったら、もっと幸せになって、もっとＦＮＹってもらってもなんら問題ない！
そのためには……！
「ラフィーナさま、我々は将来、世継ぎをもうけなければならぬ身。国を、民を、安んじるために、それは必要なことですわ。であれば、相手の殿方のことを、多少なりとも具体的に考えておく必要があるのではないかしら……？」
「……うーん、そう言われれば、たしかにそうね」
ミーアに言われて、さすがにラフィーナも真面目な顔をする。
それから、頬に手を当てて、
「とりあえず……尊敬できる殿方がいいかしら？」
「尊敬できる……？」
「ええ。無私で、誰かのためになにかをするのに躊躇がない人。子どもやお年寄り、弱い者たちに優しくて……でも、権力者の横暴には断固として戦える人。別に強くなくってもかまわない。でも、静かに、折れることなく抵抗できる……、そういう人ならば、他は特に問わないわ」
「ふむふむ……、なるほ……ど？」
不意に……、ミーアの脳裏に、一人の人物の姿が過る。

その者は、貧しい者に冷たい世間に、断固として、けれど、静かに立ち向かっていた。
貧しい子どもたちを守るため、身を粉にして働いていた。
劣悪な環境においても、まず子どもたちのことを考え、自分のことは後回しにする『無私』の人……。他人のために行動することに、躊躇いのない、弱い者たちにこの上なく優しい人……。
――新月地区の……神父さま！
ちょっぴり……、いや、だいぶ年上ではあるが……、中央正教会の関係者だ。
候補としてはあり得るのではないだろうか？
そう思いつつも、ミーアは重要なことを聞いておく。
「ちなみに、筋肉とかは……？」
「……え？　き、筋肉？」
怪訝そうな顔をするラフィーナに、ミーアはぶんぶんと手を振った。
――筋骨隆々の大男好きなルヴィさんは、例外でしたわ。普通は男性の好みに、筋肉量は聞かないものでしたわ！
うっかりヘンテコなことを聞いてしまったミーアであるが、ん、んんっ、と喉を鳴らして気分を切り替える。
「筋肉というか、身長ですわね。それに、体格。顔とかも重要ですし、剣術とか、勉学とか、爵位とか……」
「私個人としては、すべて不問ね」
「では、年齢は……？」
「立場上、あまり年上だと困るけれど、私自身は、それほど問わないわ」
年上すぎて世継ぎがもうけられない、というのであれば問題だが……、ということだろう。ミーアは、神父の顔を思い浮かべる。
――ふむ……、なんとかならないこともないのではないかしら？
「同じ信仰を持ち、私のことを愛してくれるならば……、どんな人でも……」

――完璧ですわ！　教会の神父さまで、ラフィーナさまのことも大好き！　これは、あの方を推薦するしか……。
「あっ、でも、一つだけ重要な条件があったわ」
と、そこで、ラフィーナは、パンっと手を打った。
「ほう、条件……、それは？」
尋ねるミーアに、ラフィーナは神妙な顔で言う。
「……私の肖像画を持ってないこと」
「あ、ああ……ですわよね」
……こうして、ミーアの頭の中で、神父さんが候補から消えていくのだった。

第百三十話　楽しい女子会2～ラフィーナ、乗馬を習うことを決意する！～

「ふぅ……、それじゃあ、そろそろ寝ましょうか」
日付が変わったころ……。
どうやら、ガールズトークに満足したらしいラフィーナの言葉をきっかけにして、パジャマパーティーはお開きになった。
さてようやく眠れるぞ、と、ベッドの上に寝転んだミーア。ちなみに、ベッドの数は三つ。
アンヌは、床に寝ると言い張ったが……、
「こうして、パジャマになってしまえば、貴族も平民もないわ。そうでしょう？」
と言う、ラフィーナに押し切られる形で、ベッドを三つくっつけて、みんなで眠ることになった。
――これ……なんだか、ベッドとベッドの間に落ちそうですわね。ふわぁ……。
などと大きなあくびをしていると……、
「あ、そういえば、ミーアさん……、もうエメラルダさんの婚約騒動は片が付いたのよね？」
不意にラフィーナが話しかけてきた。
「ふぁむ……ええ、まぁ……。そうですわね……」
反射的に認めてしまう、ねむねむミーアであったが、直後……、頭がさっと冷える。
たしか……ラフィーナは言っていなかっただろうか……？　サンクランドに、厄介ごとのために来た……と。
――あっ、これ、ヤバイやつかもしれませんわ……。
などと思うも、後の祭りである。
「そう……」
ラフィーナはなにやら、考え込むように黙ってから……、

「でも、そうね。ミーアさんもお忙しいでしょうから、これは覚えておいてくれるだけでいいわ。少し状況が変わったから、今すぐミーアさんの手を借りなければならない事態というのは、なさそうだし」
そう前置きしたうえで、ラフィーナは静かに話し始めた。
「実はね、馬龍さんに相談を受けていたの」
「先輩に、相談……？」
首を傾げるミーアに、ラフィーナは言った。
「そう。もう聞いていると思うけれど……ここ最近、サンクランド王国内で活動している騎馬盗賊団について……」
「ああ……、あの……」
覚えていないわけがない。そもそも、ミーアたちは、その連中に襲われたわけで……。
――ていうか、完全に忘れてましたけど……、そういえば、最初にシオンを暗殺する予定だったのは、あの連中でしたわね……。
「ええ。たしかに存じ上げておりますけれど……、その盗賊団がどうかしましたの？」
「サンクランド国内では、あれが騎馬王国の仕業であるとして、開戦もやむなし、という意見が高まりつつあった。でも、馬龍さんによるとね、あれは、騎馬王国の民の仕業ではないというの」
「なるほど。ということは、そのことをとりなすために、サンクランドまでわざわざ？」
「戦になれば、多くの民が犠牲になる。労を惜しむことはあり得ない」
ラフィーナは穏やかな口調でそう言ってから、続ける。
「でもね……、問題は、騎馬王国の民の仕業ではなくても……、騎馬王国とまったく関係のない話ではない、ということなの」
「どういうことですの？」
思わず、ラフィーナのほうに体を向ける……。と、タイミングを合わせたように、ラフィーナも、ミーアのほうに寝返りを打ってい

た。一つ離れたベッドの上、ラフィーナは真っ直ぐにミーアのほうを見つめて言った。
「聞いたことないかしら？　騎馬王国の、失われた一部族のこと……」
「失われた……？　はて……」
不思議そうに瞳を瞬かせるミーアに、ラフィーナは言った。
「昔ね、騎馬王国には十三の部族があったと言われているの。まぁ、これは私自身も聞いた話だし、当の騎馬王国の人々も直接知っている人はいないみたい。騎馬王国では、羊皮紙を用いて歴史を書き残すという文化もなかったから、口伝のおとぎ話のレベルになってしまうのだけど……、どうも、失われた「火」の部族というのがあったらしいの」
ちなみに、林馬龍は「林」の部族。騎馬王国には、ほかにも、「森」「木」「風」「山」「丘」などの部族が存在している。
が……、火の部族というのは、ミーアは聞いたことがなかった。
「そしてね、サンクランドを荒らしている盗賊団は、その失われた「火」の一族じゃないか、と……、騎馬王国ではそう考えているみたい」
「なるほど。自分たちではないけれど、かつて自分たちと同族であった者たちが下手人と……、そういうことですわね」
ふぅむ……、とミーアは唸った。
幸いにして、少しだけ眠気が飛んで、頭はすっきりしていた。
どうも、先ほどの恋話で、脳が活性化していたのが良かったらしい。実に恋愛脳なミーアなのである。
「それは、たしかに、サンクランドに誤解されても仕方ありませんわね」
「ええ……。なんなら、わざと誤解することだって、あるかもしれないわ……」
それを口実に、攻め込み、その地をサンクランドに併呑する……。
なるほど、サンクランドの強硬的な貴族の中には、この状況を嬉

々として利用しようとする者がいるかもしれない。
「たしかに、その通りですわね。では、ラフィーナさまは、それを抑えるために、サンクランドに来た、と？」
「ええ。それが一つ。もう一つは、ミーアさんを襲った暗殺者が、その一部族の人なんじゃないかって思ってね。だから、盗賊団の中にそれらしい人間がいなかったか、聞きにきたの」
「……狼使いが」
不意に、つぶやくような声。見ると、シュトリナが、少しだけ強張った顔をしていた。
顔色も、少しだけ悪いような気がする。そんなシュトリナを……、
「リーナちゃん……、大丈夫だから」
横にいたベルがギュッと抱きしめた。
「……うん、ありがと」
それで少し落ち着いたのか、シュトリナはコクリと小さく頷いた。
「そうですわ。あいつなんか、わたくしでも振り切れそうでしたし……。あ、そうですわ。みんなで乗馬を習うのはどうかしら？」
ふと、ミーアは思いつく。
実際のところ、あの時は、ギリギリ逃げ切れたという感じだったが……。
――ベルやリーナさんにも、いざという時のために、乗る練習をしておいてもらえば、わたくしが一緒に乗せてあげなくてもよいかもしれませんわ。そうなれば、その分、軽くなって、余裕をもって逃げられるはず……。
などと考えるミーアである。できるだけ生存率を上げるため、余念はないのだ。
「みんなで……？　え？　あの、ミーアさん……、もしかして、私も……かしら？」
「……ん？」
ふと見ると、なぜだろう……、ラフィーナが呆然とした顔をしていた。

「え？　あ、ええ、そうですわね。たしかに、ラフィーナさまも練習するのはよろしいのではないかしら？　遠乗りとか、気晴らしになりますし……」
「……遠乗り……」
小さくつぶやき……、ラフィーナは……、
「……お友だちから、遠乗りに……誘われた……？　私が……？」
などと、ぶつぶつ言っていたが……。
「ええ、ええ。わかったわ。ミーアさん。遠乗り、楽しみにしてるわね！」
なぜだか、めちゃくちゃ、気合が入った顔をするラフィーナであった。

ちなみに、次の日の朝……ミーアの姿はベッドの上になかった。

第百三十話　楽しい女子会2～ラフィーナ、乗馬を習うことを決意する！～（後書き）

ということで、来週は一週間お休みといたします。
再来週月曜日にまた……始められるといいなぁ……、と思っております。
では、また。

第百三十一話　サスペンスでホラーな目覚めとは程遠い、ミーアベルの目覚め

「ん……うん……？」

朝、柔らかな光を受けて、ベルは静かに目を覚ました。

「朝……？」

もにゅもにゅ、と口を動かしつつ、大きく伸びをしようとして……気付く。

なんだか、口の周りがちょっぴり濡れているような……。

それから、ベルは使っていた枕を見て……発見する。よだれの跡を！

『あなたは、あの方の血を引く者。その誇り高き名を抱いて生きなさい』

頭の中、懐かしい言葉が響いた気がした。

「エリス母さま、アンヌ母さま……」

育ての母である二人の女性たちから受け継いだもの、その誇りを胸にベルは……、シュシュッと枕を裏返した。

速やかに証拠隠滅をして、ふうっと一息。

それから、改めて隣を見る。と、ベルが起きたからだろうか。毛布がずり下がってしまったために、シュトリナが、寒そうにきゅっと体を丸めていた。

ベルは、そっとベッドから降りると、シュトリナに毛布を掛けなおした。

そうして……気付く。

「あれ？　ミーアお姉さまがいない……」

ベッドの真ん中近くにいたはずのミーアの姿が、どこにもなかった。

「朝のお散歩かな……？」

小さく首を傾げつつ、ベルはうーん、と唸った。

「サンクランドの朝の街をお散歩……うん。楽しいかもしれない」
帝室の姫として、他国の街を見学することは有意義だとかなんだとか……、適当な理屈を頭の中でこねつつ、ベルはさっさと着替えると、部屋を出て行った。
……ベルは気付かなかったのだ。
ベッドとベッドの合間……、その小さな隙間からかすかに聞こえる……、
「う……ううん」
という、悪夢にうなされるような声に。

宿を出た途端、早朝の爽やかな風が吹いてきた。少しだけ冷たい風に、ベルは目覚めの街の匂いを感じる。
「ううん……、気持ちいい」
大きく伸びをして、胸いっぱいに空気を吸うと……、古い記憶が甦ってきた。
新月地区に隠れ住んでいた時、ベルは、この時間が好きだった。
帝国の叡智が愛した町……新月地区。活気あふれるその町のあちこちが目覚め、動き出す……そんな時間は、いつだってベルの胸をワクワクとときめかせたのだ。
窓からこっそり外の景色を見ていると、アンヌ母さまが朝ごはんができたと呼びに来て、夜遅くまで執筆していたエリス母さまが、眠そうな目をこすりながら「おはよう」と優しく言ってくれて……。
そんな、大好きな時間を、つい思い出してしまって……。
「エリス母さま……アンヌ母さま……」
ちょっぴり、切なくなってしまったベルが、こしこし、と目元をこすっていると……、
「ん？　君は……」
誰かが声をかけてきた。
ぼんやりと滲んだ目を、そちらに向けて……、瞬間、ベルのセンチメンタルは消し飛んだ！

「てっ、天秤……、じゃない。シオン王子？　お、おはようございます」
「ああ、おはよう。ベル嬢。こんなところで、どうかしたのかな？」
サンクランド王国の王子、シオン・ソール・サンクランドとその従者キースウッドがそこに立っていた。
朝日を受けて、柔らかに輝く白銀の髪、優しげな光を湛える瞳に、ベルは、ふわぁ、っと見惚れてしまう。が……、すぐに正気に戻って、笑みを浮かべた。
「実は、少し町をたん……見学しようと思ってました」
そのベルの答えに、シオンは、面白そうに笑った。
「そうか。町を探検か。なるほど、たしかに。町があったら探検したくなるな」
明るい笑みを浮かべるシオンに、すまし顔のキースウッドが近づいて……、
「どうでしょう？　せっかくの機会ですし、シオン殿下が町を案内して差し上げては……」
キースウッドはそう言ってから、チラリ、とベルのほうを見た。それから、シオンに肩をすくめて見せる。
「町を探検した先輩として、いろいろ案内してあげるのもよろしいのではないですか？」
キースウッドの言葉に、シオンは、ふむと頷いた。
「なるほど。まぁ、どちらにしろ町を見て回ろうと思っていたし、それもいいかもしれないな」
そんなシオンに、ベルは思わず目を見開いた。
――てっ、天秤王と早朝デートっ！？　ふわぁ！　さすが、キースウッドさん！　気が利いてます！
などと、心の中で大絶賛するベルは知らない。
昨夜、臆することなく城の中を探検してのけた蛮勇の姫を、キースウッドが警戒していただけだということ。
『このお姫さんは、ミーア姫殿下以上に危険だぞ。ミーア姫殿下も

割と平気で危険に突っ込んでいかれる方だけど、この子の場合は、無意識のうちに危険に踏み込むタイプっぽいし……、きっと開放市場あたりの少し治安が悪いところにも平気で入っていくに違いない。一人にしたら危険だ！』

などと……最大級の警戒をしていることなど……まったくもって知らないベルである。

もしも、知っていたら、いくらベルでも、そう手放しには喜べな……。

――うふふ、キースウッドさんが何を考えてるのか知りませんけど、どうでもいいです。天秤王と、忠臣キースウッドとのデート！

うふふ、楽しみ！　ああ、楽しみです！

キースウッドの思惑など知ったこっちゃない、ウッキウキのベルであった。

一方、その頃ミーアは……、

「あ……あら？　ここは……？　変ですわね？　体が動かない……。それに、とても暗い……。こっ、これは、まさかっ？　わたくし、寝ている間に賊に誘拐されたのではっ！？」

ベッドに挟まって動けないという……、ちょっぴりサスペンスな目覚め方をしてしまい……、

「だっ、誰かおりませんの？　あ、アンヌ？　アンヌぅ……」

と……、ベッドの間からか細い声が聞こえてくるという……ちょっぴりホラーな目覚めを周りの人たちに提供してしまったのだが……。

幸いなことにベルはウッキウキお散歩中だったので、お祖母ちゃんの名誉は守られたのだった。よかったね！

第百三十一話　サスペンスでホラーな目覚めとは程遠い、ミーアベルの目覚め（後書き）

ミーアＰＣの起動には、今しばらくの時が必要なようです

第百三十二話　えぐるベル

「あの、シオン王子も、こうして街のお散歩とかされるんですね？」
「ああ。国にいる時はできるだけ街の様子を見るようにしてるんだ。民の生活の様子は、為政者として知っておくべきだと思ってね」
「心がけは立派なんですけどね。きちんと護衛の手配をしていただかないと、いい加減、こっちの体がもたないですよ」
やれやれ、と肩をすくめるキースウッドにシオンは悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「優秀な従者がいると、気軽に街に出られて助かるよ」
「勘弁してください」
そんな二人のやり取りを、たっぷり堪能していたベルだったが、ふと首を傾げる。
「なんだか、シオン王子……、今日は少し明るいですね」
「え？」
不意なことに、瞳を瞬かせるシオンに、ベルは言った。
「なんだか、すっきりした顔をしているような気がします」
「驚いた。君は……意外と鋭いんだな……」
それから、彼はベルの顔をまじまじと見て頷いた。
「そういえば、君はミーアの血族だったな……。ふむ……」
シオンは腕組みし、少し考えてから、
「こんなことを聞いても良いものか迷うが……、君は、ミーアに所縁の娘だと聞いている。それは、本当のことなのか？　君は帝室の血を継ぐ者かな？」
その問いかけに、ベルはスッと背筋を伸ばす。
それは、彼女の根底をなすもの……、彼女の誇りにかかわる問いかけだったから。
「はい。シオン殿下。ボクは帝室の姫、ミーア・ルーナ・ティアム

ーンと血の繋がりを持つ者、ミーアベル・ルーナ・ティアムーンです」
その堂々たる名乗り上げに、シオンはかすかに瞠目した。普段の緩い雰囲気とはかけ離れた、それは紛れもない王者の風格。
それを認めた彼は、
「そうか……。それならば、話してあげるのも君のためなのかもしれないな……」
小さくため息を吐いてから、続ける。
「昨夜のこと、大体はミーアから聞いていると思うが……、弟のエシャールは大きな失敗をした。そして、その原因は俺だった。彼は、ずっと兄のようになれないことに悩んでいた。剣の腕や、立ち居振る舞い、いろいろなことが追い付けないと、自分で思い込んでいたんだ」
「そんな……そんなこと……、当たり前のことです」
ベルは、かつて恩師、ルードヴィッヒから受けた教えを思い出していた。
『ベルさま……。あなたは、これから先の人生において常に、帝国の叡智ミーアさまと比較されるでしょう。人はきっと、あなたに帝国の叡智たることを望み、あるいは私や、あなたの育ての親であるアンヌ、エリスの両名も、あなたにミーアさまとしての振る舞いを期待してしまうかもしれません』
ルードヴィッヒの言ったそれは……、ある意味で幸せな未来像だった。
皇女ミーアベルが再び、帝室の姫に返り咲き、帝国が彼女のもとで再建された、そんな未来の話だからだ。
それは、か細い未来の先にある、最も幸せな葛藤の話だった。
『ですが、あなたがミーアさまになる必要はありません。あなたはあなたです。ベルさま。あなたはミーアさまにはなれない。あなたはミーアベルさまだからです』
自分を戒めるようにルードヴィッヒは言った。

『だから……、まぁ、お勉強の最中に眠たくなってしまうのは、仕方のないことなのかもしれません……』
……教育者ルードヴィッヒの心が折れそうになっていた！
『まぁ、ともかく、ベルさまは、ベルさまにできる範囲で勉強を頑張るのが良いのだと思います』
その教えは、ベルの中に深く根差すものになっていた。
自分は帝国の叡智ミーアの名を傷つけないように生きなければならない。でも、自分がミーアのように振る舞う必要はない。
その、ルードヴィッヒの言葉からすると、エシャールの生き方は、間違っていると、言わざるを得なかった。
「エシャール殿下は、エシャール殿下なのに……」
「ああ……俺もそう思うよ。いつかそのことに気付いてくれるんじゃないかとも思っていたんだ。でも、その結果、最悪を招いてしまったんだ。でも……」
と、そこで、シオンは遠くを見つめた。
「普通ならば、死罪が与えられても仕方ないところだった。けれど、ミーアは死罪で終わらせることをよしとしなかった。やり直しの機会を……、立ち直る機会を弟に与えたんだ」
それを聞いたベルは、納得した、という感じで、ぽんっと手を打った。
「なるほど……。昨日の話は、そういうことだったのですね。あ！それじゃあ昨夜のパーティー会場で、ミーアお姉さまとお話されていたのは、それだったんですね！」
「……んっ？」
シオンが、きょとーん、と首を傾げるのを尻目に、ベルは、うんうん、と頷いた。
「おかしいと思ったんです。シオン王子の告白をお断りするだなんて、そんなの、絶対におかしいですし。ねぇ、キースウッドさん」
見ると、キースウッドは……困ったような笑みを浮かべて、
「ははは。ええ、まぁ。いろいろありますね。まぁ、ともかく……」

っと、なぜか、胸を押さえて呻いているシオンを横目に、キースウッドは言った。
「シオン殿下は、弟君にやり直しのチャンスが与えられたことが嬉しかったと……、そういうお話ですよね？」
「あ……ああ。うん、そういうことだ」
なぜだか、微妙にダメージを受けた顔で、シオンは言った。
「実はね、俺自身、過去に失敗したことがあったんだ」
「えっ？　シオン殿下が？」
信じられない！　とばかりに瞳を瞬かせるベルに、苦笑いのシオンである。
「誤った正義を振りかざし、危うく友の命を奪うところだった。でも……、その時にもやり直しの機会を与えてくれたのはミーアだった」
懐かしげに瞳を細めてから、シオンは言った。
「俺はね、あの時、彼女から受けた恩義を忘れないように生きている。王族として、命をもって償わなければならない時があると思っていた俺に、彼女は違う形の責任の取り方を見せてくれた。そして、そのやり直しの機会は、きっと等しくすべての人に与えられるべきだと、俺は思っているんだ」
シオンはそっと拳を握りしめる。
「君が帝室に連なる姫だというなら、よく覚えておくといい。ミーアというのは、そういう人だ。彼女は諦めが悪い人なんだ」
「簡単には諦めない……、それがミーアお姉さまのやり方……」
ベルはぽつり、とつぶやく。
そうして、振り返る。
思えば……あの、冬の荒野で命を狙われた時もそうだった。ミーアは決して、命を諦めようとはしなかった。
ミーアが諦めが悪いのは、もちろん、他人に対してということもあるのだろうけど、同時にそれは自分自身に対してのことでもあるのだろう。

――ミーアお祖母さまは、ペルージャンから帰ってから、言ってました。受けた恩に報いるべく精一杯生きろ、って。
諦め悪く生き抜いて、恩に報いろ……、そう言われているように感じた。
そうして、ベルは思い出す。
あの絶望の世界……。あの追い詰められた状況に、いつか帰る時が来たとしたら……、その時、自分はどう行動するだろうか？
――それはわからないけど、でも、いつか、あの場所に帰らなければいけないとしても、絶対に投げやりに生きるのはやめよう。
生きることを諦めないこと、そして命の重みを、その使いどころを……憧れの天秤王から学ぶベルであった。

一方、その頃、ベッドの隙間から救出されたミーアであったが……。
「はて……ベルがいない？」
アンヌの報告を受けて、ちょっぴり心配になるミーアである。
まさか、ベッドの隙間に落ちているんじゃ？　などと、慌てて確認していると……。
「宿屋のご主人に聞いたのだけど、どうやら、シオン王子と一緒にお散歩に行ったみたいよ」
続くラフィーナの言葉に、思わず納得の頷きを返す。
「ああ、なるほど。シオンと……」
それだけで、なんとなく事情を察してしまうミーアである。
――きっと、宿を出たところでシオンと会って、ついて行ってしまったんですわね……。
「リーナのことも誘ってくれれば良かったのに」
などと不満たっぷりに頬を膨らませるシュトリナに、ミーアは苦笑いで言った。
「きっと朝食までには帰ってきますわ。あの子も、わたくしに似て、よく食べるほうですし」

シオンが一緒だと聞いて、安心したからだろうか。ミーアのお腹がきゅうっと切なげな声を上げた。
――ふむ、先に朝食を食べて待っているのがいいんじゃないかしら？
などと、思っていると……、不意に、部屋のドアがノックされた。
「失礼いたします。ラフィーナさま、お客さまがおいでです」
「お客さま……？　どなたかしら？」
首を傾げる一同の前に現れたのは、
「やあ、おはよう。ミーア。お嬢さま方もご機嫌麗しゅう」
爽やかな笑みを浮かべるアベル・レムノだった。

第百三十三話　いざ、騎馬王国へ！

ミーアたちは、宿の食堂で朝食をとることになった。
ちなみに、訪ねてきたアベルと、シオンたちを従えて戻ってきたベルも一緒である。
朝食の時間までには帰ってくるだろう、と予想していたミーアであったが、まさか、パンが焼きあがったタイミングで帰ってくるとは思っていなかった。
我が孫ながら、その鼻の良さには脱帽のミーアである。
ところで、基本的にミーアは健啖家である。朝となく、昼となく、夜となく……。時間を選ばずよく食べる人である。
そして、そのことを、あらかじめラフィーナから聞かされていたからだろうか？　宿の朝食は、なかなかの量があった。
焼きたてのパンがモリモリ積まれたお皿を見て……、それから、脇に置かれたジャムの瓶を見て、ミーアは、うむ、と満足げに頷いた。
「ジャムも絶品だけど、バターが素晴らしいのよ」
ジャムにパンを（美味しそうなジャム〝に〟パン〝を〟）つけて食べようとしていたミーアに、ラフィーナが話しかける。
「ほう……、なるほど」
ミーアは一瞬、躊躇う。大変美味しそうなジャムを名残惜しそうに見て、それでも、隣に座るラフィーナのおススメに従い、パンにバターのみを塗る。
まだ、熱々のパンの上にバターを乗せると、じゅわあ、っと溶けて、なんとも言えない甘い匂いが立ち上った。
「おお……これは……」
期待に胸を膨らませながら、ミーアはパンをかじった。
カリッと気持ちの良い音を立てるパン。それを口に含んだ瞬間、

「ふむっ！」
濃厚な乳の香り、クリーミーに口の中に広がるのは、こってりとした甘みだった。
パリ、カリッとパンを噛み締めるたび、じゅ、じゅわ……っと口に広がるバターに、ミーアは思わず唸った。
「これは……お見事ですわ」
スルスルッとパンを一気飲みしてから、ミーアは宿屋の主人を振り返った。
「さすがですわね。ご主人。パンの焼き加減も素晴らしいですけれど、それ以上にバターですわ。これほどのバターがあるとは……」
「恐れ入ります。それは、羊の乳で作ったバターでございます」
「まぁ、羊の？」
「はい。騎馬王国から仕入れたものでして。彼らの羊の乳は非常に上質で、牛の乳よりも味が濃くなるのです」
「なんと……、それは知りませんでしたわ」
感心のため息を漏らしつつ、新たなパンを手に取ってバターをたっぷり塗る。それから、ミーアはアベルのほうに目を向けた。
「それで、アベル、朝早くにどうしましたの？」
「ああ。せっかくだから君たちと一緒に帰ろうと思ってね。といってもボクは途中までなんだけど」
「途中まで？　はて……。アベルもセントノエルに帰るのではありませんの？」
「実は、少し用があってね。馬龍先輩のところに行こうと思っているんだ」
「あら？　馬龍先輩のところ……騎馬王国ですわね？」
ミーアは小さく首を傾げる。カリッ、サク。
「そういえば、レムノ王国と騎馬王国とは、親交があるという話だったかしら？」
「そうなんだ。我が国では、軍事教練に力を入れているからね。軍馬の扱い方なんかの指導を受けるために、何人か指導員を派遣して

もらったりしているんだ。もっとも、馬を戦争の道具として扱うので、彼らもあまり気乗りしない様子ではあるんだけど……」
「ああ。なるほど。確かにそうでしょうね」
それは、ミーアにもなんとなく理解できることだった。カリッ、サクサク。
「それで、昔から馬龍先輩とは面識があったんだけど……。少し前に手紙をもらってね。相談したいことがあるから、と……」
「ふむ……なるほど」
ミーアは、唸りつつ、地図を頭に思い描いてみた。カリッ、ジュワ……。
騎馬王国には、国境という概念があまりない。
十二の部族によって構成されるかの国であるが、そのうち、十の部族は、それぞれの財産である羊を連れて、サンクランドの南方、ヴェールガ公国とレムノ王国とのちょうど境に広がる広大な草原地帯を、移動しながら生活している。なので、そのあたりが国土といえば国土なのだが……、その境目は極めて曖昧なのだ。
そして残る二つの部族は町守りと呼ばれ、サンクランド寄りの北都と、レムノ王国寄りの南都とに定住し、町を守っている。
数年に一度、どちらかの都で部族会議が行われ、草原の様子を鑑みながら、各部族の移動の計画が話し合われるのである。
ミーアの構想では、もしもサンクランドに攻められた際には、レムノ王国を味方につけ、挟撃することにしていたわけだが、両国の間にある騎馬王国の存在も、当然考慮に入れていた。
精強な騎馬部隊を誇る騎馬王国とは、ぜひとも友誼を結んでおきたいところだったのだが……。
――まぁ、今となってはそれも詮無きことですわね。今のところサンクランドが攻めてくる様子もありませんし。
ともあれ、アベルの話はよく分かった。
なるほど、たしかにセントノエルに帰るのであれば、途中で騎馬王国に立ち寄ることもできるだろう。

「ふむ……騎馬王国……」
と、そこで、ミーアは手の中のパンを見た。不思議なことに……、持っていたはずのパンが消えていた！
「……あら？」
きょっとーんと首を傾げるミーア。
――変ですわね。いったい、どこに……？
「失礼いたします。ミーアさま……」
っと、音もなく近づいてきたアンヌが、すっす、とミーアの口元をぬぐった。そこには……、パンの欠片がついていた！
「ふむ……」
次いで、ミーアは、テーブルの上に目をやった。ホカホカの焼き立てのパンに手を伸ばし……シュシュっと素早くバターを塗る。
それから、パリリッジュワワと味わって……、
――ふむ……。やはり美味しいですわ。せっかく騎馬王国に行くのであれば、このバターの話を仕入れるというのも、いいのではないかしら？
ルードヴィッヒを同行させて、帝国とも取引してもらえるように話をつけることができれば……、毎朝、この味に出会えるかも！
などと皮算用しつつ、ミーアはシオンのほうに目を向けた。
「エメラルダさんとティオーナさんとも打ち合わせておく必要がありますわね……。いや、エメラルダさんは、エシャール殿下のこともございますし、どこかに寄っていくのは無理かしら……あ、そういえば、シオン、ティオーナさんは、どうしましたの？　昨日は、王城に泊まると、キースウッドさんから連絡がありましたけれど……」
「実は、そのことでミーアに謝らなければならないことが起きてね」
「あら？　なんですの？」
「ティオーナ嬢なんだが、どうやら、体調を崩してしまったらしいんだ。軽い風邪だと思うんだが……。少し体が冷えたらしい」
「まぁ？　ティオーナさんが？　……はて？　でも、なぜ、シオン

が謝りますの？」
　ミーア、鋭く切り込んでいく。
「昨夜、女子会に誘おうと思って探したら、どこにもおりませんでしたけど、あなたのところにおりましたの？」
「ん？　ああ、まぁ……。父が、お礼がしたいと引き留めてしまってね」
「なるほど、そうだったんですのね」
　なんだか、ちょっぴり慌て気味のシオンに首を傾げるミーアである。
「まぁ、ともかくそのせいで風邪をひいてしまったらしくてね。これは、お礼とお詫びを兼ねて、もう少しゆっくりして、体を完全に治してからお帰りいただくのがいいんじゃないかと思ったんだ。ミーアたちに留まってもらうのも申し訳ないから、我が国の責任でセントノエルまで送り届けようと思うんだが……」
「ふむ……」
　ティオーナの体調が優れないということであれば、無理に騎馬王国に連れていくことはできない。かといって、アベルが馬龍に呼びだされたというのであれば、サンクランドでのんびりしているわけにもいかない。
　そもそも……、と、そこで、ミーアはベルのほうに視線を送った。
　のんきにパンを頬張っている孫娘……、ルードヴィッヒに一応の勉強を任せてはいるのだが……、サンクランドに来て以来、あまり勉強していないようにも見える。
　――ベルがテストで苦労するのは目に見えておりますわ。これ以上、サンクランドにいるのは避けるべきですわね。
　そうして、ミーアは小さく頷いた。
「では、よろしくお願いいたしますわ。くれぐれも、わたくしの大切なお友だちを丁重に扱ってくださいませね」
「ああ、心得ているよ」
　頷くシオン。それで、話が終わったと思ったのか、今度は横から

ラフィーナが話しかけてきた。
「騎馬王国に寄っていくのであれば、私もご一緒するわ」
「あら？　ラフィーナさまも？」
「エイブラム陛下と例の話をして、その報告をしないとと思っていたの。例の蛇の手の者のことと合わせて、できれば直接話がしたいわ」
「なるほど、それは大所帯になりそうですわね……。あ、それなら、せっかくですし、乗馬の練習をしながら帰りましょうか？」
ミーアは、ふと思いついた、という感じで、手を叩いた。
「え……？　それは、でも……」
途端に、ラフィーナが、ちょっぴり戸惑うような顔をした。その様子を見て、ミーアは、微笑ましい気持ちになる。
――ラフィーナさま、馬に乗るのが怖いんですのね。ふふふ、案外、可愛いところがありますわ。
ここは乗馬の先輩として安心させてやらねば、と、ミーアはどんと胸を叩いた。
「ふふふ、大丈夫ですわ。わたくしが、きっちりと教えて差し上げますわ」
「……うん。ミーアさんがそこまで言ってくれるなら……楽しみにしておくわ」
ラフィーナは、もじもじして……、それから、ちょっぴり恥ずかしそうにはにかんだ。

第百三十四話　蛇の巫女姫は踊る

それは、歴史の流れに忘れ去られた場所。
レムノ王国とヴェールガ公国の間に位置する峻厳なる山、その麓。
深き樹海の奥深くに、小さな廃城が建っていた。否、それは城と呼べるほど立派な代物ではなかった。それは古き民の手によって築かれた、石造りの遺跡。敗残者たちが逃れの地にて、再起をかけて築き、されど、ただの一度も戦に使われることのなかった儚き夢の残滓。
本来の持ち主たちも、歴史の中で死に絶え……主なき廃墟となっていた古城は、今や蛇の拠点の一つとなっていた。
その小さき城の中心、玉座の間で、一人の女性が踊っていた。年の頃は二十代の半ばといったところだろうか。艶やかな漆黒の髪を躍らせながら、一心不乱に舞い踊る。規則性に欠ける動き、どんなダンスにもないようなステップは、どこか不穏で、けれど、なんとも言えない美しさもあって……。そのアンバランスさが禍々しさを感じさせるものであった。
それは、まさに秩序の破壊者、混沌の蛇に相応しき舞であった……のだが……。
「なにをしている？」
部屋に入ってきた男、狼使いは、開口一番、怪訝そうな口調で言った。
「演舞よ。我らの邪神に捧げる演舞。どう？　それっぽいでしょう？」
女性は、なんの未練もなく舞を止め、つまらなそうに額に浮いた汗を拭う。
「邪神に仕える蛇の巫女姫らしさを考えて踊ってみたんだけど……どうだった？」

そうして、彼女……蛇の巫女姫は艶やかな笑みを浮かべた。
対して、狼使いは表情一つ動かさずに、
「我々が邪神に仕える使徒であるというのは、初耳だ」
「それは正確ではないわ。我々は邪神の使徒であり、使徒ではない。必要があれば邪神の使徒として秩序を破壊し、必要があれば無神論者として秩序を破壊する。何者にだってなりましょう。我らを虐げるくそったれな秩序を破壊できるならば、なににだってなれる。それが、我ら蛇の強みでしょう」
狼使いは知っている。
蛇の信者の何割かが、邪神の信奉者であること。されど、目の前の巫女姫は、決して邪神などというものを信じてはいないこと。
信じていないがゆえに、彼女は、信者の求める理想的な巫女として振る舞うことができるし、冷静なリーダーとして、効率的に秩序を破壊することができる。
彼女は、破滅思考を持った名演者なのだ。
「それで、なんの御用かしら？」
「火燻狼（カ・クンロウ）から知らせが届いた。こちらには戻らず、身を潜めると」
「あはは。ああ、それは心配ないでしょう。彼は、蛇導士ですもの。きっと行く先々で秩序を破壊し、蛇として立派に振る舞うでしょう」
蛇の巫女姫は、艶やかな笑みを浮かべる。
「しかし、今、単独で動くのは危険ではないか？　聖女ラフィーナ……、中央正教会の手の者により、囚われてしまう危険が高いように思うが……」
「水をすくうことで川の流れは変えることができない。それと同じこと。彼一人が失敗したところで、大した影響はないでしょうし、彼が成功すれば、他の者の失敗を補う流れの一部となりましょう。どちらでも、大した影響はないのです」
巫女姫はそう言ってから、とろけそうな笑みを浮かべる。
「でも、彼がサンクランドを出たということは、きちんと仕掛けをしたのでしょうね……。だとすると……、そうね……しばらくは待

ちましょうか。それで、少ししたら、エシャール王子が毒を持っていると新しく噂を流しましょうか。エシャール王子が毒を使ったことを隠蔽していたら、サンクランド王家の信用に傷をつけることができるし、もしもまだ使っていないのであれば、疑心暗鬼に陥れることができるかもしれない」

新しい悪戯を企むように気安げに、巫女姫は言った。

「危険ではないか？　あまりサンクランドに深入りしては……」

「心配はいりません。たとえ我らが滅せられても、蛇は死にませんから。燻狼や、ほかの蛇導士がいるもの。その時々に相応しき者が巫女として立ち、蛇を率いていくでしょう。いいえ、巫女姫など、そのようなもの、そもそもいなくても構わないのです。必要であれば、巫女が立ち、姫が立ち、王が立つ。蛇とはそういうものでしょう？」

「悲願を見届けなくても構わないと？」

尋ねる狼使いに、巫女姫は困ったような笑みを浮かべた。

「殿方は、勲（いさお）しとしてのわかりやすい結果を求めるものですものね。あなたの気持ちは理解できるけれど……、私にはどうでもいいこと。だって、いずれすべてが壊れてしまうことは、決まっているのだから」

それは、熱の感じられない口調だった。

淡々と……、ただ事実を告げるような乾いた口調で、巫女姫は言う。

「蛇の強さを、あなたはなんだと思う？」

「さあな……。人の心を操るという言葉か？」

「それは不正解だし、正確でもないわ」

静かな……まるで真実を見通すような、澄んだ瞳で彼女は狼使いを見つめる。

「蛇の強みは殺せないこと……。排除することができないこと。今日でなければ明日、明日でなければ明後日。悠久の時の中で世界を蝕み、破壊する。この世界に「人」という存在が居続ける限り、蛇

が消えることはない。そうなっているの。だから、我らが負けることはない」
胸の前で手を組み合わせ、そっと瞳を閉じる。
「たとえ、帝国の叡智だとしても、それは叶えることのできないこと」
それから、巫女姫は、悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「それこそ、あなたたちの大切な馬だけの世界になったら、蛇も消えるのだけどね。蛇は、永久に変わることのできない人に対する呪いだから」
そこで、ふと思いついたというように、巫女姫は小首を傾げた。
「ああ、そういえば、あなたの妹君は、また略奪に出かけたのかしら？」
「食料が不足しては部族の者が飢えてしまうからな。サンクランド国境付近で動いているらしいが……」
「そう。今度こちらにも顔を出すように言っておいてちょうだい。また一緒にお茶が飲みたいから」
彼女は、まるでお姫さまのような、上品な笑みを浮かべるのだった。

第百三十五話　Ｋｎｉｇｈｔ　ｏｆ　ＫＩＮＯＫＯ

ラフィーナとエイブラムとの会談は、意外なほどすんなり終わり（なぜだろう……？）二日後にはミーア一行はサンクランドを旅立つことになった。

帰還の準備はルードヴィッヒとラフィーナの従者によって整えられた。

帝国の馬車三台とヴェールガの馬車一台の前で、ミーアはルードヴィッヒから報告を受けていた。

「帰りは、馬車四台と、その周囲を護衛で固める形をとります。また護衛の兵ですが、皇女専属近衛隊を中心に組織しています」

「……はて？」

それを聞いて、ミーアは小さく首を傾げた。

ヴェールガ公国は大規模な軍事力を持たないことを、己に課した国である。ゆえにラフィーナが連れている護衛は最低限の人数だ。

聖女の身を守るのは、基本的には訪れる国の兵であったり、ヴェールガの依頼を受けた近隣の義勇兵であったりするのが通例となっている。

今回の場合は、ミーアの皇女専属近衛隊がその役割を担うことになっている。

だから、ヴェールガの側の護衛が少ないのは良いのだが……、

「レムノ王国の護衛はどうなっておりますの？」

行きがけは、グリーンムーン家の私兵と皇女専属近衛隊、さらに、招待者であるサンクランドのランプロン伯の兵という混成部隊だったため、その調整に頭を悩ませていたルードヴィッヒである。

今回も、ヴェールガはともかく、アベルが連れてきたであろうレムノ王国の護衛兵との調整が大変だろう、と渋い顔をしていたはずなのだが……。

「それが、レムノ王国の護衛兵は、一名だけです」
ルードヴィッヒの答えに、ミーアが、ピクリと眉を動かした。
「わずか一名、ですの……？」
「はい。どうも、アベル王子と同行したのがその者だけだということです。挨拶のために来ておりますが……」
「ええ。わかりましたわ。会いましょう」
頷きつつも、ミーアはちょっぴり心配になる。
そして、その心配は、アベルの唯一の護衛兵を前にして、一層強いものとなった。
「お忙しいところを、お目通りいただきまして、恐悦至極にございます。ミーア姫殿下。吾輩はアベル殿下の護衛を担当しております、騎士ギミマフィアスと申します」
膝をつき、深々と頭を下げるのは、老境の兵士だった。彼、ただ一人だった。
それを見て、ミーアは、ますます不安になる。
――護衛が一人で……しかも、こんなご老体だなんて、もしかして、アベル、国で冷遇されてるのかしら……？
などと思いつつ、ミーアはスカートを、ちょこんと持ち上げて笑みを浮かべる。不安感などおくびにも出さない、完全無欠な皇女スマイルである。
「ご機嫌よう、ギミマフィアス卿。帝国皇女ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
完璧な挨拶をして……、顔を上げて……直後、唐突にミーアは気付いた。
ギミマフィアスの格好に。
――ほう……、これは……。
思わず、瞠目する。
老兵が身に着けていたもの、それは、全身を覆う金属の鎧だった。
わずかに丸みを帯びた金属の鎧、その表面に走る無数の傷は、老兵が数多の戦場を潜り抜けた歴戦の騎士であることの証。

さらに、注目すべきは、その老兵の顔である。
恐ろしく重いであろう、その金属鎧を付けた彼は、されど、涼しい顔で笑っていた。その動きにも鈍重なところはなく、老いを感じさせないほどキビキビしていた。
見る者が見れば、一目で、彼が只者ではないことを見て取れたことだろう。
……が、まぁ、当然のことながら、ミーアは〝見る者〟ではない。ミーアの目はどちらかというと節穴で、やや婉曲的な言い方をするならガラス玉、誇張した美しい言い回しをするならば青い宝石である。
つまり、それなりにキレイな見た目ではあるのだが、相手の武力を見抜くような能力はないわけであって……。
だから、ミーアが見ていたのは、そこではない。
「その兜、素敵ですわね。ギミマフィアス卿、よろしければ、ここで、兜を被ってみていただけるかしら？」
小脇に抱えるようにして兜を持っていたギミマフィアスに、ミーアはリクエストしてみる。
「ははは、吾輩の戦装束をお褒め頂き、恐縮至極にございます。しからば……」
そうして兜を被った彼の、その全身鎧姿を見て、ミーアの持っていた予想は確信へと変わった。すなわち！
――ふむ、この鎧、キノコみたいですわ！
……これである。
丸みを帯び、いい感じに膨らんだ兜、同じく柔らかな曲線を描く鎧を見た時に、ミーアのキノコ審美眼（ハイパワーアイ）は見出だしていたのだ。そこに隠れる、キノコのシルエットを。
――ふふん、わたくしでなければ気付きませんでしたわね。
偉そうに頷くミーアである。
――聞いたことがありますわ。騎士というのは、戦場で相手を威圧するためであったり、その身に人智の及ばない力を帯びるために、

力ある幻獣などを模した意匠を凝らすことがあると……。
ミーアは、目の前の男の、その鋼鉄のキノコのような鎧を見て思う。
――ギミマフィアス卿は、キノコを模した鎧を身にまとっている。いわば、キノコから力を受けた、キノコナイトといったところですわね。これはとても頼もしいですわ。
時に鋭い猛毒によって敵を打ち倒し、時にしなやかな柔軟さによって、敵の攻撃を受け流す。
キノコとは、ミーアにとって強さの象徴でもあるのだ。
そうして、ミーアは、深々と頷き……、
「なるほど。素晴らしい鎧ですわ。頼りになりそうな方で安心いたしましたわ」
そのつぶやきを聞いて、ギミマフィアスだけでなく、アベルまでもが、驚きに目を見張った。
「さすがだね。ミーア……。彼は、長らく我が王家の者たちの剣術指南役をしてくれていてね。兄上はもちろん、ボクも幼い頃から、ずいぶんとしごかれたものだよ」
苦笑いをしつつ、アベルは言った。
「まぁ、そうなんですのね」
指南役ということは、やはり、相当に強いに違いない。
――ふむ、さすがはキノコナイト。鎧選びのセンスに強さが滲み出ているみたいですわね。
っとミーアがそんなことを考えている間に、キノコナイト、もとい、ギミマフィアスは、ディオンのほうに目をやると、歓声を上げた。
「おお、おお！　貴公が、かの剛鉄槍を圧倒したというディオン・アライア殿か」
そうして、どしどしとディオンに走り寄っていき、少し離れた場所で立ち止まる。
「ほほうー、なるほど……。噂に違わぬ恐ろしい御仁のようだ」

顎に手を当てつつ、ディオンを頭から下まで眺め回す。
「いや……そちらこそ。まさか、あなたがまだご存命とは思いませんでしたよ。レムノの剣聖ギミマフィアス卿」
朗らかな笑みを浮かべるディオンだったが……、その眼は、老兵の力を見定めるかのように、一切笑っていなかった。
「それで、護衛の手はずはどうしようか、ギミマフィアス卿」
「なぁに、かの剛鉄槍を打ち倒すほどの武勇を誇る方であれば、なにも問題はありません。万事、ディオン殿の指揮に従いましょうぞ」
ひょこひょこと手を振る老兵を見送ってから、ミーアはディオンのほうを見た。
「お知り合いですの？」
「面識はないけれど、有名人ですよ。レムノ王国軍の基本的な剣術を組み立てた人。達人とか剣聖とか、大層なあだ名は知ってましたがね……」
ディオンは苦笑いして肩をすくめた。
「姫さんも、どうやら実力に気付いてたようですが、なかなかどうして、名前負けはしていないらしい。惜しむらくは全盛期に立ち合えなかったことですが……、まぁ、ともあれ、護衛のほうは心配ないんじゃないでしょうかね。うちの近衛隊の連中に稽古をつけてもらいたいぐらいですよ」
「ほう。やはり、強者なんですのね……」
立ち去るキノコナイトを見て、ミーアは自らの直感が正しいことを知った。
やはり、キノコは、強い！

第百三十五話　Ｋｎｉｇｈｔ　ｏｆ　ＫＩＮＯＫＯ（後書き）

ミーア父と被るので、ギミマティアスをギミマフィアスに変更

第百三十六話　ミーア姫、ベテランらしい貫録を見せる！

サンクランド王都、ソル・サリエンテを出て、三日目の昼。
馬車を降り、晴れ渡った空を眺めながら、ミーアはうーん、っと伸びをした。
「ああ、実に良い天気ですわ。気持ちいいですわね」
草原を吹き抜ける秋風は爽やかで、思わずミーアは笑みを浮かべてしまう。
「これは絶好の乗馬日和ですわ」
っと、
「あ、あの、ミーアさん？」
声のほうに視線を向けると……、
「本当に、その、するの？」
ラフィーナが、ちょっぴり上目遣いで見つめていた。
今の彼女は、ドレスを着ていなかった。上は、乗馬用のシャツ、下は動きやすい、フィットしたズボンという、ラフィーナにしてはとても珍しい格好をしていた。
慣れないからだろうか、ちょっぴり恥ずかしげにもじもじしているラフィーナを見て……、
「ふむ……」
そのシュッとしたズボンを見て……、それから、自らの乗馬用の格好を見る。主に、ベルトを見て……、いつもより、一つ緩めたサイズを使用中という事実に……、ミーアは打ちのめされた。
――大変に不可思議な現象ですわ。いったいなぜ、こんなにもベルトがきついのか。まったく理解できませんわ。もしかして、サンクランドの気候のせいかしら？
などと、不都合な真実から目を背けつつも、ミーアは気合を入れる。

ともかく……運動しよう、体を動かそう、と。
「もちろんやりますわ。最高の乗馬日和ですわよ、ラフィーナさま」
にっこりと笑みを浮かべるミーアに、ラフィーナは遠慮がちに言った。
「でも……、ミーアさん、アベル王子と遠乗りがしたいのではないかしら？　やっぱり、私がお邪魔したら悪いんじゃないかしら？」
――アベルと遠乗り……ふむ。
それは……、実に甘い誘惑であった。たしかに、ミーアはアベルと遠乗りしたかったし、どうせなら、思う存分イチャイチャしたかった。
まぁ、ミーアお姉さんのイチャイチャは大抵、イチャ……ぐらいで終わってしまうわけだが、それはそれ……。
アベルと甘い時間を過ごせるのであれば、そうしたい、というのは本音だった。が……、ミーアは、その想いを断ち切るように静かに首を振った。
これからの乗馬は楽しむためのものではないのだ。
ミーアにとってこれからの時間は極めてストイックなもの。すなわち、自身のコンディションを整えるためのものである。
なんのコンディションか？　もちろん、騎馬王国の美味しいものを食べるためである。あんなにも美味しいバターがある国である。きっと、ほかにも山ほど美味しいものがあることだろう。
それなのに、このままお腹がきつい状態で騎馬王国に行ったとしても、きっと、罪悪感により、楽しめないに違いない。
これは、いうなれば、パンの飲みすぎによるＦＮＹ（ふにいか）日酔いを治すための必要な運動なのだ。アベルと一緒に騎馬王国の美味しいものを楽しむための、準備なのだ。
――それに、ラフィーナさまとの約束もありますわ。
女子会のパジャマパーティーの際の約束を、ミーアは覚えている。
その時の、ラフィーナのちょっぴり嬉しそうな顔も……。
――思えば……、ラフィーナさまになにかプレゼントをして喜ん

でもらうのって、初めてじゃないかしら？
前の時間軸、幾度となくプレゼントを持って行っては、お近づきになることに失敗していたミーアである。
それが、まさか一緒に遠乗りをする日がこようとは……。しかも、あんなにも喜んでもらえるとは……。
思わず達成感すら覚えてしまうミーアである。
「ラフィーナさまと約束しましたし。それに遠乗りはみなで行かないと、面白くありませんでしょう？　今のままでは、ラフィーナさまにはお留守番を頼むことになってしまいますもの」
そんなミーアの言葉に、ラフィーナは、
「そう……」
小さく頷きつつも、まだ、微妙に遠慮がちな顔をしていた。そんなラフィーナを見て、ミーアはピンときた。
――ははぁん、ラフィーナさま、さては、馬に乗るのが怖いんですのね。ま、たしかに背が高いので、怖いといえば怖いですけれど……。
そう思うと、なんだか微笑ましく感じてしまうミーアである。
「この馬でしたら、大人しいですし、はじめて乗るには良いのではないかと思います。いささか、大人し過ぎるのが玉に瑕ではありますが……」
近衛兵によって、一頭の馬が連れてこられた。
どこか眠たげな目、穏やかな……、というか、どちらかというと、ヌボォっとした馬だった。
ミーアはその馬を見て……なぜか、親近感を覚える。
――他人とは思えない顔をしておりますわね。うん、いい馬なんじゃないかしら！
それから、ラフィーナのほうを見て、笑みを浮かべる。
「大丈夫ですわ。ほら、この馬、どこかの暴れ馬と違って、くしゃみを吹っかけてきませんし、素直そうですわよ」
「え……ええ、そうね」

頷くラフィーナは、やっぱり、ちょっぴり遠慮がちだった。
――ふむ、ラフィーナさまも案外、臆病なところがございますわね。ふふふ、わたくしが初めて乗った時など、余裕綽綽でしたのに。
ここは、自分がリードしてあげないといけない、と思い、ミーアは「いよぉっこいしょーっ！」と颯爽と馬に飛び乗った！
ミーアが颯爽と飛び乗れるほど、ヌボォッ！　とした馬だったのだ……。
「さ、ラフィーナさま、どうぞ、わたくしの前にお乗りくださいましし」
そうして、ラフィーナの手を引いた。
近衛兵にも手伝ってもらい、なんとか馬にまたがったラフィーナに、ミーアは実に偉そうに言う。
「ラフィーナさま、しっかり掴まってないと駄目ですわよ？　知り合いや仲の良い従者を発見したとしても、決して両手を放して振ったりしてはいけませんわよ。バランスを崩して落っこちたりしたら大変ですわ」
……まぁ、それはさておき。
「大丈夫ですわ。ちゃんと掴まっていれば、滅多なことでは落ちませんわ」
乗馬が怖くて、黙りがちになっているであろうラフィーナに、優しく声をかけてあげるミーアである。目の錯覚か、その体からはベテランらしい貫禄のような雰囲気が発散されていた。
……ミーアは気付かなかった。想像すらしなかった。
まさか、ラフィーナがいきなりのお友だちとの遠乗り体験に、緊張して委縮しているなんて……。
そうして、ドキドキ乗馬体験が始まるのだった。

そうそう、そう言えばミーアが、気付いていないことがもう一つあった。
遠く、丘の向こうで響く馬の駆ける音……。自分たちに接近しつ

つある、不穏な騎馬の集団……。それを、ミーアの危機察知能力が捉えることは、残念ながらできなかった。

……いろいろな意味で、ドキドキな乗馬体験は、こうして始まるのだった。

第百三十七話　ミーア＋馬ミーア＝？？？

「うわぁ……」
馬の背で、ラフィーナが歓声を上げた。
「意外と高いのね、ミーアさん。それに、不思議な景色……。学園の星見の塔から見下ろすのとも少し違う、なんとも言えない高さね」
前に乗るラフィーナが振り返り、嬉しそうに笑みを浮かべる。それを見たミーアは首を傾げる。
――妙ですわね、なぜ、こんなに余裕があるんですの？
予想よりまったく落ち着いているラフィーナに首を傾げるばかりのミーアである。
以前に自分が乗った時は、もっと余裕がなかったのに……。
怖がるラフィーナに乗馬の素晴らしさをドヤ顔で語りつつ、ビシバシ乗り方を教え込もう、というミーアのストイックな乗馬計画は早くも瓦解しかけていた。
――ふむ、どうしたものかしら……？　計画の立て直しが必要ですわ。ここはやはり……。
「やあ、二人ともやっているね」
と、そこで、爽やかな声が響いた。そちらに目を向けると、そこには、アベルが立っていた。乗馬用の服に着替えたアベルに、ミーアは思わず、ほわぁ、っとため息を吐く。
――ここに出てきたということは、一緒に、乗馬を楽しもうということかしら……？　アベルと遠乗り……。
ミーアは、アベルのキリっとした格好を見て……、
――うんっ！　楽しみですわ！
ストイックな乗馬計画は粉みじんに吹き飛んだ。
「もしかして、お手伝いに来てくれたんですの？」
「まあね。ミーア一人でも大丈夫だとは思ったんだけど、ボクも少

し体を動かしたくってね」
　それからアベルは、ラフィーナのほうに目を向けて小さく首を傾げた。
「失礼ながら、ラフィーナさまは、馬に乗るのははじめてですか？」
「ええ。移動はもっぱら馬車だから……」
「なるほど。それならば、お姫さま方の馬を引く栄誉に与らせてもらおうかな」
　アベルはそう言って、ミーアのほうに目を向けた。
「そういうことで構わないだろうか？」
「なんだか、アベルにそんなことをしてもらうのは申し訳ない気がしますけど……」
「ははは。気にすることないさ。ボクもミーアのそばにいたいからね」
　爽やかにウインクするアベルに、ほわぁっとため息を吐くミーアである。

　そうして、のんびりとした乗馬体験が始まった。
　ぱから、ぱこら、とのどかな足音を立てながら、常足で馬が歩く。
　近衛兵の言っていた通り、この馬の気質は穏やからしい。揺れもほとんど気にならないし、暴れる様子もまるでなかった。
　――ふむ、実に従順ですわ。これならば、ラフィーナさまも怖がらずに楽しんでくれるんじゃないかしら？
　などと思っていたミーアであったが……。
「ねぇ、ミーアさん。ミーアさんが馬を走らせる時は、どんな感じで走らせているの？」
　キラッキラした瞳で、ラフィーナが聞いてきた。なんだか、こう……、はじめておもちゃをもらった子どもみたいに、ものすごーく楽しそうだった。
　ちなみに……、基本的にミーアはお調子者である。なので、自分がしたことが相手に喜んでもらえたと思うと、ついつい張り切って

しまうところがあり……。
「そうですわね……普段は……、ふむ」
ミーアは、彼女たちを守るためにかたわらに控えていた近衛兵に尋ねてみる。
「ねぇ、この先は、ずっと平原が続いているのかしら？　いきなり崖になっていたりは？」
「このまま、平らな地形が続いているようですね。崖などの危険な地形はないそうですよ」
「そう……。それなら、ラフィーナさま、少し、馬を走らせてみましょうか？」
「え……でも」
一瞬、躊躇う様子を見せたラフィーナに、ミーアは笑みを浮かべた。
「馬の醍醐味はやはり走らせた時ですわ。馬と一体になり、まるで風のような気分が味わえるのは乗馬ならではですわ。ぜひ、ラフィーナさまにも体験していただきたいですわ」
それから、ミーアはアベルに目を向けた。
すると、アベルもまた、肩をすくめて、
「わかった。すぐに馬を用意して追いかけるよ」
「決まりですわね！　それなら、行きますよ」
「ちょっ、ミーア姫殿下、そんないきなり……」
慌てる近衛兵に悪戯っぽい笑みを向け、
「平気ですわ。そんな遠くに行きませんから。さ、ラフィーナさま、参りましょうか」
高らかに、そう言った。
この時……、ミーアは、完全に調子に乗っていた。
馬術大会の優勝と、狼使いから逃げ切ったことが、彼女の気を大きくしていたのだ。
そうして、ミーアは馬に指示を出した。
自らの足元に落とし穴が開いていることにも気付かずに……。

ミーアの指示に従って、馬が駆ける。ぐんぐんっと速さが上がるにつれて、吹き付ける風が強くなった。
「わぁっ……」
清らかな髪を風に躍らせながら、ラフィーナが歓声を上げる。それを聞いて、ミーアもご満悦である。
「ふふふ。このぐらいで満足してもらっては困りますわ。まだまだ、速くなりますわよ？　はいよー！　シルバームーン！」
ついついご機嫌な声をあげてしまうミーアである。
……ちなみに、ミーアの乗る馬の名はシルバームーンではない。
そうして、草原を駆け回ることしばし。気付いた時には、二人は馬車からかなり離れた場所まできていた。遠くに、馬車が豆粒ぐらいの大きさに見える。
――ふむ、このあたりで、一度引き返したほうがいいかしら……？
そう思い、馬を止め、元来た方向へと馬首を翻した、まさにその時だった。
「あら……、ミーアさん、あれはなにかしら？」
ラフィーナが小さく声を上げた。
「あれ……？　はて……」
ミーアは、ラフィーナが指差すほうに目を向けて……、しばし、黙って考えて……、直後、青くなった！
平原の雑草を蹴り上げ、荒々しい声を上げつつ、馬車のほうへと突っ込んでいく一団。それに、ミーアは見覚えがあった！
「あれは、まさか、騎馬盗賊団っ！？」
行きがけに遭遇した盗賊団が、再び襲ってきたのだ！
「ミーアさん……」
不安そうに振り返るラフィーナを落ち着けるように、ゆっくりと頷き、
「だっ、大丈夫ですわ。馬車にはディオンさんもおりますし、皇女専属近衛隊は腕利き揃い。あの程度の盗賊団、すぐに追い返して御

覧にいれますわ」
一瞬、盗賊団を見て慌てかけたミーアであったが、すぐに平静を取り戻す。
なにしろ、馬車にはあのディオン・アライアがいるのだ。
行きがけも大丈夫だったし、きっと今回も……などと思っていたミーアであるのだが……、すぐに自らの失態に気付かされる。馬車へと向かっていた盗賊団は、突如、足を止め……こちらに向かってきたのだ！
――あっ、ヤバいですわ……。見つかってますわ！
変に刺激しなきゃ大丈夫だろう、と思っていたミーアだったから、これには慌てる。
半ばパニックになりつつ、ミーアは馬首を翻した。盗賊から遠ざかる、その方向は……、馬車から離れていく方向でもあった。
「くっ、ラフィーナさま、しっかりつかまっていてくださいまし！」
言いつつ、ミーアは、馬に指示を送る。
――大丈夫ですわ。逃げ切れますわ！
ミーアは、ある程度の自信を持っていた。
なにしろ、自分はセントノエルの馬術大会でルヴィに勝ったのだ。その上、あの狼使いからだって逃げ切ったのだ。
ならば、凡百の盗賊程度、振り切るのは容易なはず。なにより、ミーアの心のよりどころは……。
――にっ、逃げ続けていれば、いずれディオンさんが来てくれますわ。あの男なら、あの程度の盗賊団、一人でだって退けることができますわ！　そして、追われているとはいえ、まだまだこれだけ離れてますし、逃げ続けるだけならば造作もないことのはず！
などと確信を持っているミーアだったが、一つだけ失念していることがあった。
それは……、荒嵐は……、ミーアが思っている以上に良い馬だということだ！
「いけ！　敵を振り切って味方のところまで戻りますわよ。はいよ

ー！」
勇ましく馬に指示を出す。そうすれば、いつだって馬は応えてくれて……いつだってミーアは風になれるのだ。
疾風のように、敵を振り切って逃げることができる……、そう確信を持っていたミーアだったが……。
「……あら？」
ふと、首を傾げる。
いつまでたっても……風になれない？　馬の速さが、まるで上がらないのだ！
――へっ、変ですわ。ぜんっぜん速くないですわ！
見る間に、後方の盗賊団が迫ってくる。みな顔に覆面をし、その表情がうかがい知れないのが、なんとも不気味だった。
――な、なぜ、こんなに遅いんですの、この馬……。
ミーアはラフィーナの肩越しに馬の顔を覗き込んで……、驚愕する！
――はっ、覇気がまるでありませんわっ！
ぼんやーりと前を見つめる目、緩んだ口元、ぬぼぉう、とした顔に、緊張感はまるでなく。さながら、葉っぱを数えて暇つぶしをしているミーアのような顔をしていたのだ！
そう、ミーアの乗馬術「背浮きの極意」は、馬が優秀であることが大前提。馬が百の力を持つ時、ミーアがマイナス五十の乗馬をしてその足を引っ張ってはいけないからと、自分を完全に消すのが、その本質だ。
されど、この馬は、馬版ミーアのようなこの馬は……、もともとの力があまりない。やる気のないミーアが二人集まったところで、なにも生まれないように、この馬には背浮きの極意は使えない。
ミーアは知らぬ間に、自分自身が頑張らざるを得ない状況に追い込まれていたのだ。
「くっ、くぅっ、しっ、仕方ありませんわ」
それから、ミーアは前に乗るラフィーナに声をかける。

「ラフィーナさま……」
身を低くし、馬の首にしがみつくような体勢で乗っていたラフィーナは、ピクリと肩を震わせた。そんなラフィーナに静かな声で、ミーアは言った。
「決して手を放しませんように、しっかりと掴まっていてくださいましね」
決然と言う。
――今、ラフィーナさまに落ちられたら、大変なことですわ！
ミーアは、それを想像して震える。
この状況で自分だけが助かろうものならば、下手をするとミーアが助かるためにラフィーナを蹴落としたと疑いをかけられるかもしれない。だらりだらぁり、とミーアの背中に冷や汗が伝う。
それに、ミーアの脳裏には、先ほどの嬉しそうなラフィーナの顔が思い浮かんでいた。
それを思い出すたびに、小心者の心臓が震えた。
――くぅっ、前のように無価値なものを見るような目をしていてくれれば、わたくしのきわめて繊細な良心も、少しは痛まずに済みますのに。
自分が助かるためならば、他者を切り捨てることもやむなしという暴君の資質は、ミーアには圧倒的に欠けているものなのだ。
となれば……、ミーアはなにがなんでもラフィーナとともに助からなければならない。
だから、ベテランであるミーアが、全力でラフィーナが落っこちないようにかばってやらなければならないところなのだが……。
――今は余裕がありませんわ。こちらもいっぱいいっぱいですもの。
この馬をなんとかやる気にさせつつ、きちんと逃走経路を確保しなければ……。
助けが来るまで逃げ切ることは不可能。であれば、なんとかして、自力で馬車まで戻らなければならない。

ということで、ラフィーナにも、しっかりと落ちないように馬にしがみついていてもらわなければならないのだ。
「無事に、みなのもとへと帰りますわよ！」
「ミーアさん……」
ラフィーナの声は、かすかに震えていた。

第百三十八話　どうしよう……どうしよう……♡

「無事に、みなのもとへと帰りますわよ！」
「ミーアさん……」
ラフィーナは、唇を噛みしめて震える声を懸命に抑える。
――どうしよう……、どうしよう……。
先ほどから、ラフィーナは、頭の中で、そればかりを繰り返していた。
後ろから追いかけてくる盗賊団……。
必死に馬を駆り逃げようとしているミーア。それを見つめながら、ラフィーナは、心の底から困惑していた。

――どうしよう……すごく……楽しい！

シュシュっと確認するまでもなく……別に、酒気に当てられたわけではない。
そうなのだ、ラフィーナはこんな状況だというのに……、湧き上がる胸のワクワクを抑えられないでいたのだ。
だって……、こんなこと初めてだったから……。
レムノ王国の時もそう。先日の荒野での一件もそうだ。
ラフィーナだけが置いてけぼりだった。
特に聖夜祭の事件は、ラフィーナをしたたかに打ちのめした。
アベルもシオンも、キースウッドも……ティオーナもリオラもアンヌも……みんながみんな、ミーアを助けることに協力し、命がけで戦ったのだ。
ラフィーナのお友だちのミーアを助けるために、ミーアとともに、みんなで戦ったのだ。
でも……そのみんなの中に、ラフィーナの居場所はなかった。

彼女だけが……仲間外れだった。
もちろん、立場があることはわかっている。自分はヴェールガ公爵令嬢、軽々に命を危険にさらしていいはずがない。
だけど……、悔しかったのだ。
一人だけ、お友だちのためになにもできなかったことが……。みんなと一緒に戦えなかったことが……自分だけが置いてけぼりを食ったことが……、寂しかったのだ。
それが、どうだろう？
サンクランドにきて、ミーアがエシャールを救う現場に居合わせた。隣で助言をして、ミーアと一緒に少年の命を救うことができた。
そして、今度はミーアと一緒に盗賊から逃げている。
初乗馬体験がグレードアップして、お友だちと一緒に命の危機に立ち向かう、という経験になってしまった。
この目まぐるしい状況変化が、ラフィーナを混乱させ……ときめかせているのだ！
――なんで、こんな危険な状況なのに、私……、こんなに楽しいの？
戸惑いつつも、ラフィーナは首を振る。
――ううん、駄目……。こんなことで喜んでいるなんて……。ミーアさんは、私のために護衛から離れた場所に馬を進めてしまったのだし。いうなれば、この状況は、私が生み出してしまったといっても過言ではないわけで……。
などと、理屈ではわかっているのだが……それでも胸のドキドキは止まらない。
信じあうお友だちと一緒に命の危機にある、大切なお友だちと力を合わせて、危険から脱しなければいけない……、その状況は、ラフィーナがずっと憧れていたものだったから。
しかも、そのお友だちは信頼がおける、誇らしい人なのだ。
先ほどラフィーナは、一瞬だけミーアを疑った。ミーアがラフィーナを落として馬を軽くする……、あるいは、自らが犠牲になって

ラフィーナを助けようとする……、そう思ったのだ。
けれど……、違った。
ミーアが選んだのは、二人で生き残ること。二人で無事に帰ることだった。
これほど信頼を置くに足る人がいるだろうか？
そんな友とともに危機に臨めることが、ラフィーナはやっぱり嬉しくって仕方なかった。
「ああ……」
その時、不意にミーアの絶望的なため息が聞こえた。
ハッと顔を上げたラフィーナは……、見た。
目の前、新たな馬の一団が現れたことに……。
――いけない、挟み撃ちにされる！
そう思った刹那、ラフィーナは急いで辺りに視線を走らせる。その視界の外れに、濃い緑色が映った。
それは、木々が立ち並ぶ小さな森だった。
「ミーアさん！　あっち、あの森っ！」
その声に応えて、ミーアが馬首を翻す。
「さすがですわ、ラフィーナさま！」
馬が大きく方向を変え、森に向かって一直線に走る。
ラフィーナの見たところ、この馬では、普通に走っていては逃げられない。馬の地力では盗賊団のほうが上だし、こちらは二人乗りだ。明らかに不利である。
けれど、あのような木が林立した場所であれば、どうか？
ミーアの卓越した乗馬術をもってすれば、障害物を利用して逃げ切ることは可能なのではないか？
……致命的な誤解がどこかに存在するのだが……あいにくと乗馬初体験のラフィーナから見ると、ミーアの乗馬術はものすごーーく高度なものに見えてしまったのだった。不幸な誤解である。
――でも、森まで逃げ切れるかしら……？
不安になりつつ、ラフィーナは後ろを振り返る。っと、そこでは

不思議なことが起こっていた。
「あら……どうして……？」
追いかけてくる盗賊団の勢いが見る間に弱まっていった。
どうやら、先ほどの別の一団とぶつかったらしい。
――連携に不安がある？　それとも、もしかして、あれは盗賊団の別動隊ではなかったということかしら……？
首を傾げていると、ミーアが舌打ちするのが聞こえた。
「くっ、しつこいのがいますわ！　いい加減に、諦めればよろしいのに！」
そのミーアの視線を追うと、たしかに、一騎の盗賊がまだなお追いすがってきていた。
ほかの盗賊団の者たちに比べると、少々、小柄に見えるが……、その分、馬の足は、敵のほうが遥かに速い。
「――っ！　森に入りますわ！　ラフィーナさま、頭を下げていてくださいまし」
ミーアの声。直後、バササっと馬が枝葉をかき分けて森に突入した。
緑の葉のカーテンを抜けると、すぐに細い獣道に出た。
木と木の間を縫うようにして、ミーアは馬を走らせていく。
ラフィーナは、馬の背に身を伏せながら、後ろを振り返る。と、敵の馬が猛然と追いかけてきているのが見えた。
「ぐっ、ぬぬ、振り切れそうにありませんわね。こうなれば、森の中を大きく回って、味方に合流を……」
ミーアがつぶやいた、まさにその時だった。不意に、敵の馬が姿を消した。
「あら……？」
ラフィーナは森の緑の中に、懸命に目を凝らす。けれど、盗賊の姿は一向に見えなかった。
どうやら、ミーアもそれに気付いたのか、馬の速度を落として、振り返った。

「……追ってきてない……？」
怪訝そうにつぶやいて……、
「これは、なんとか逃げ切ったんじゃないかしら！　……ふぎゃっ！」
直後、ミーアの悲鳴が上がった。
「ミーアさんっ！？」
ラフィーナはびっくりして、ミーアのほうに目を向ける。っと、見えた！　ミーアが……、枝に頭をぶつけて……ゆっくーり後ろに倒れていくのが。
慌てて、その体を押さえて、苦労しつつも、地面に降ろす。
ふぅ、っと思わず安堵の息を漏らしたところで……、その耳に絶望的な音が聞こえてきた。
馬の……、それも複数の馬の……、足音が。
――ああ、ダメ……。盗賊団が……。
ラフィーナは、ミーアを茂みに押し込むと、毅然とした態度で立ち上がる。
もはや、隠れる時間もない。せいぜいできるのは時間稼ぎ程度……。
――ミーアさんが見つからなければいいのだけど……。
やがて……、姿を現した一頭の白馬、そこに乗っていたのは……。
「おや……、嬢ちゃんたち、こんなとこでなにやってんだ？」
怪訝そうな顔で首を傾げる、林馬龍だった。

第百三十九話　始まる！　馬式人生相談！

「こんなところで、会うなんて奇遇だな」
馬龍は、豪快な笑みを浮かべつつ馬から降りる……「いよーっこいしょー！」などとは、もちろん言わずに、颯爽たる仕草で、である。
「もしかして、さっきの盗賊団に襲われてたのは嬢ちゃんたちだったのかい？」
そうして、何気ない足取りで近づいてくる馬龍。ラフィーナは、いつもと同じ聖女の笑みを浮かべ、完璧なる礼を取ろうとして……、
「あ……れ？」
失敗。目の前が白く染まって、一瞬、馬龍の顔が見えなくなる。ふらーっと体が傾いていくのを感じて……。
「おっと……」
直後、すぐそばで声。再び視線を上げれば、そこには、白く霞んだ馬龍の顔があった。
それで気付く。どうやら、倒れかかったのを馬龍に抱き留められたらしい、ということを。
「……あれ？」
窮地を脱したのに、なんだかまだ胸がドキドキしてるわ……、などと思っている間に、ラフィーナは木に寄り掛かるようにして座らされていた。
「気を付けてくれよ？　ラフィーナの嬢ちゃんは、大切な身の上だろう？」
「え……ええ。ありがと……う。あっ！」
慌てて立ち上がろうとして、再び、こてんっと尻もちをつく。
「おいおい、あんまり急に動いたら……」
「それより、ミーアさんが、そこの、藪の中に……」

大慌てで言うラフィーナに、馬龍は頷いてみせた。
「ああ、そうか。こっちはミーア嬢ちゃんだったのか」
馬龍はのしのしと藪のほうへと行くと、そのままミーアを引っ張り出した。
「盗賊から逃げる途中で、枝に頭をぶつけて……」
「ん？　まさか、落馬したのか？」
途端に馬龍の顔が厳しいものへと変わるが、
「いえ、そこの枝に頭をぶつけて、それで……、意識を失ってしまったの。だから、私が降ろして……」
「枝……、ああ、あれか」
馬龍はその木を見上げ、軽くジャンプして枝を掴んだ。枝は、馬龍の体重で、ぐにゃあ！　っと曲がった……。どうやら、弾力がある枝のようだ。
それから馬龍は、横たえたミーアの額と頭の様子を調べる。
「ミーアさん、大丈夫かしら……？　頭をぶつけて、酷いケガとかしてたら……」
ラフィーナが泣きそうな顔で、ミーアの顔を覗き込む。っと、その時だった。
「う……ううん……キノコ……バター……美味しい」
などという、寝言が聞こえてきて……、同時にミーアの口元がふにゃっと緩んだ。
ラフィーナと馬龍は互いに顔を見合わせて……、
「……まぁ、大丈夫だろう。傷もないようだし、枝に頭をぶつけても落馬しなかったってことは、そこまで勢いがついていなかったか……、枝の強度がそこまでなかったか……。いずれにせよ、驚いて気を失っただけだと思うが……しかし……」
っと、そこで、不意に馬龍は真面目な顔をした。
「馬に乗ってる時に余所見をしたら危ないと、教えといたはずなんだがなぁ。それに護衛も連れずに盗賊団に襲われるとは……。おおかたラフィーナ嬢ちゃんを喜ばせようとして、調子に乗ったんだろ

う。まったく、叱ってやらなきゃいかんなぁ」
「あっ、待ってください。ミーアさんは悪くないわ。私が、乗馬がしたいなんて言ったのが悪いの」
それを聞いて、馬龍は、疑うように目を細めた。
「そうか？　ミーア嬢ちゃんも意外とお調子者なところがあるからな。きちんと叱るべきところは叱ってやったほうが当人のためにもなるぞ」
「いいえ！　ミーアさんは私のためにいろいろしてくれただけ。ミーアさんは、なにも悪くありません」
ラフィーナは、まるでミーアをかばうように、馬龍を睨んだ。
「ふーん……、なんだか……いつもと感じが違うな」
馬龍は興味深そうにラフィーナの顔を見つめた。
「え……？」
虚を突かれたように、ラフィーナが瞳を瞬かせた。
「いつもとというか、昔とというか……。あんたはもっと冷静に、いつでも笑ってる印象だったが……」
言われて、ラフィーナは自覚した。
たしかに、今、自分はむきになっていたということ……。冷静さを失って、感情的になっていたということ……。
「でもな、馬に乗る時には注意が必要なんだ。そうじゃないと危ない。油断してると痛い目を見る。だから、俺が叱らないのなら、嬢ちゃんのほうから言っておいてくれ。大事な友だちだって言うならな」
そう諭されてラフィーナは、こくりと頷いた。ものすごーく神妙な顔で……。
――ミーアさんのためにも、きちんと注意しないと……。
という、固いかたーい！　信念を胸に。
こうして、ミーアを叱る人間が馬龍から、ラフィーナにグレードアップした！
「う……うぅん……？」

などと、タイミングよくミーアが眉間にしわを寄せ、うめき声を上げたが……、まぁ、それはさておき。
「しかし、まぁ、あんたは、そのぐらいのほうがいいな」
馬龍は、そこで表情を和らげた。優しい笑みを浮かべる馬龍に、ラフィーナは怪訝そうな顔をする。
「どういう意味かしら？」
「言葉のままの意味さ。友を守るために怒ること、理屈が通ってなくっても、友をかばおうとすること、そいつは自然な感情だ。あんたは、少しそいつを抑えすぎてるような感じがしたが、無理に抑えすぎる必要もないんじゃないかと思ったのさ」
「……そんなことは……ないけど」
ラフィーナは、ちょっぴり、頬を膨らませた。
なぜ、そうでなかったのか？　それはただ単純に、ラフィーナに友だちがいなかったからだ。こんな風にして、心の動くままに守りたいと思える、そんな人がいなかったから。
その時、不意にラフィーナの心に恐れが生まれた。
それは、先ほど感じた高揚に似た小さな罪悪感。
友とともに危機に立ち向かうこと、絶対的な危険に対して、喜びを覚えてしまったこと……、そのことを、どこか背徳的に感じてしまう自分がいて……。
――ヴェールガ公爵令嬢として……これではいけないんじゃないかしら？　もっと冷静に大局を見ないと……。
「ちょうど、目の前にいたら、馬に乗りたくなるのと似たようなものだな」
一瞬、悩みの淵に落ちかけたラフィーナだったが、突如、耳に入ってきた馬龍の言葉に正気に戻った。
なんか、よくわからないけど、馬の話をしていた！
「……えっと？」
ちょっと話についていけなくって、ラフィーナはきょとん、と首を傾げた。

けれど、そんなラフィーナに気付かず、馬龍は続ける。
「馬はいいぞ！　俺たち人間のあるがままを受け入れてくれる。それに、馬とともに大地を駆けていると、人間の小さな悩みや葛藤なんかどうでもよくなってくるんだ。きっと馬が俺たちの悩みを気遣ってくれるからなんだろうな。そして、ミーア嬢ちゃんはそれがわかってるんだ。馬の気持ちがわかってるんだな。だからこそラフィーナ嬢ちゃんを、乗馬に誘ったんだろう」
「……ええ、そう……ですね」
曖昧に頷いてから、ラフィーナは話を変えることにした。
「ところで、馬龍さんは、例の盗賊団を捕縛しに？」
「ああ。この近辺にはちょうど、俺たち林族が来てたからな。盗賊団の情報を聞いて、ちょうどいいから、とっ捕まえてやろうと思ってきたんだが……。相手が相手だからな。なかなか苦戦してるよ」
馬龍は笑って、それから自らの馬のほうに目をやった。
「もっとも、なんの収穫もなかったというわけじゃないんだがね」
それで、ラフィーナは気が付いた。馬龍の白馬の背に乗せられているものに……。

第百四十話　盗賊の少女とミーアの予感

「う……うぅん……？」

どこか遠く、話し声が聞こえた気がして、ミーアはゆっくりと目を覚ます。

なんだか、怖い夢を見たような……？

ラフィーナにものすごく怖い顔でお説教される、そんな夢を見たような気がする。

――恐ろしい夢でしたわ。キノコのバター炒めを味わう夢でしたのに、食べ過ぎたからってあんなに怒られるとは……。まぁ、でも、しょせんは夢ですわね……。

悪夢を振り払うように頭を軽く振りつつ、ミーアは起き上がろうとして……、

「あら……ここは……？　痛っ」

直後、痛みに顔をしかめる。痛みが走ったのは、頭――ではなく、体のほうだった。なんだか、チクチク、細かい針で刺されてるような……。

見ると、服のところどころに小枝が刺さっていた。その光景にミーアの記憶が急に蘇ってきた。

――そっ、そうでしたわ。わたくし、頭を枝にぶつけて……。それで、馬から落ち――っ！？

危ういところで、ミーアは声を飲み込んだ。

自分たちを追っていた盗賊が、すぐ近くまで来ているかもしれない。うっかり声でも出して見つかったら大変だ。

息を殺し、目だけ動かして辺りを窺う。っと、どうやら、そこは森の中の、少し開けた場所のようだった。

――どこかに隠れている状態……というわけでは、どうやらなさそうですわね……。

てっきり馬から落ちて、ラフィーナとともにどこかに隠れている状態かと思ったのだが……。
――特に隠れている、という感じでもなさそうですし、そもそもラフィーナさまがいませんわ。
もしや、ラフィーナが自分を見捨てて一人で逃げた？　などと想像するも、すぐに否定する。
――それだけはなさそうですわね。ラフィーナさまが一番嫌いそうなことですわ。むしろ、わたくしを森の中に隠して一人で助けを呼びに行ったとか、あるいは、自分が囮になった、なんてことがありそうですわ。ううむ、判断が難しいですわ……。
すぐに起きて助けを求めに行くべきか？　あるいは、ここでもうしばらく身を潜めているべきか……？
今後を左右する究極の選択を前に、ミーアが目をぐるぐるさせつつ考えていると……、
「ああ、お目覚めかな？」
唐突に、男の声が聞こえた。
――くっ、万事休すですわ。これから寝たふりをするのは、不可能ですわ……。
観念して、ミーアが体を起こそうとすると……。
「あっ、ミーアさん、まだ、動かないほうがいいんじゃないかしら？」
「あら……？　ラフィーナさま？」
声のほうに目をやれば、ラフィーナが歩み寄ってくるのが見えた。ミーアの額に載っていた布をとり、新しく濡れた布を載せてくれた。
ひんやり冷えた布は、ミーアの知恵熱をじんわり冷やしてくれた。
「ああ……気持ちいいですわ」
などとぽやーっとつぶやいていると……、
「ダメだろう？　嬢ちゃん、乗馬中によそ見したら……」
もう一度、先ほどの男の声。けれど、ミーアはその声に聞き覚えがあることに気付いた。

「あら……？　もしかして、馬龍先輩？　なぜ、こんなところに……？」
「ははは、それはこっちのセリフだな」
視線を向けた先では、馬龍が豪快な笑みを浮かべていた。
それは、そう……。きわめて不自然なほどに……、まるで……なにかを誤魔化すかのように、ミーアには見えて……。
――はっ！　も、もしや、先ほど追いかけてきたのは馬龍先輩だった……？
めいたんていミーアの天才的頭脳が、今まさに、恐るべき真実に到達しようとして――っ！
――って、そんなわけありませんわ。もしも、馬龍先輩だったら、森に入る前に追いつかれておりますし。それに、先ほどの盗賊はもっと小柄だった気がしますわ。
そうして改めて見ると、馬龍の笑顔はいつもと変わらない、普通の笑顔だった。
――さて、これはどういう状況かしら……？　なぜ、馬龍先輩がこんなところに？
ふむ……と一つ唸ってから、腕組みするミーア。黙考すること数秒、その後、ラフィーナのほうに目を向けた。
……別に推理するのが面倒になったというわけではない。知っている人間に聞いたほうが早いという、帝国の叡智の合理的判断に基づく行動だ。
ミーアの視線を受けて、ラフィーナは小さく頷いた。
「実は先ほど逃げる時、正面から来たのは盗賊団ではなかったみたいなの。騎馬王国の戦士だったのよ。そして、それを率いていたのが、馬龍さんだったの」
「最近、サンクランドの国境付近の村を襲う騎馬盗賊団の報告が入ってな。一族の勇士を率いて見回りをしてたんだが……、嬢ちゃんたちのおかげで、ようやく捕らえることができたよ」
そうして、馬龍は、そばの木へと視線を移した。

その視線を追っていく、と、そこには、一人の少女が、木にもたれかかるようにして座っていた。どうやら、後ろ手に縛られているらしく、少女の両腕は背中に回されていた。
年の頃はミーアと同じか、少し年上だろうか？
頭に巻いた赤いターバン、その下から黒く美しい髪が覗いていた。
特徴的なのは、その瞳だろうか？　紫色の瞳に宿る鋭い光は、獲物を狙うルール族の狩人を髣髴とさせる。そして、その目は真っ直ぐに馬龍を睨んでいた。
「その子が……盗賊団の一味ですの？」
「ああ、そうだ。嬢ちゃんたちを追いかけてた盗賊だ」
そうして、馬龍は、ほんの少しだけ表情を引き締めて、
「そして……俺たち騎馬王国の民の、遠い同胞だ」
静かな声で言った。
「同胞……？　それは、いったい」
「冗談を言うな。林族の戦士。我らと同胞だなどと、どの口が言うか？」
その時、ずっと黙り込んでいた盗賊の少女が、初めて口を開いた。
憎悪のこもった目で馬龍を睨みつけた少女は、さらに、言葉を続けようと口を開き……。
「きゅうっ……」
なんとも切なげな音に、言葉が途切れる。
咄嗟に自らのお腹を押さえたミーアだったが、すぐに自分ではないことを悟り、盗賊の少女のほうに目を向けて……、気まずそうに瞳を逸らす少女を見て……。
――あ、なんか、この子とは仲良くなれそうな気がしますわ……。
そんな確信を持ってしまうのだった。

第百四十一話　ミーアの帰還～ミーア姫、野望を抱く～

ミーアとラフィーナは、無事に馬車まで戻ってきた。
ちなみに、馬龍が率いる林族の戦士の護衛付きで、だ。
十騎あまりの騎馬を率いて凱旋したミーアは……なんというか……大変、気分が良かった！
――なるほど、イケメンの護衛を従えて移動したがるエメラルダさんの気持ちがちょっぴりわかりますわ。まぁ、わたくしの場合は、こう……ずらーっと大男を従えてみたいですわね。ああ、そして、やはり鎧はアレですわね、あのキノコのような鎧を着ていただいて……。
密かに、壮大なる野望を胸に抱くミーアであった。
「ミーアさま！」
馬車の前では、すでに連絡を受けていたアンヌたちが待っていた。
ミーアの姿を見つけるや否や、アンヌが駆け寄ってきた。
「ご無事ですか？　お怪我はありませんか？」
見るからに心配そうな顔で、自らを見つめてくるアンヌ。
今回、アンヌは、ミーアとラフィーナに遠慮して、乗馬には参加しなかった。ベルとシュトリナと一緒にいてくれたわけだが……、もしかしたら、危険な時にそばにいられなかったことを気にしているのかもしれない……。
そう察したミーアは、アンヌを安心させるように頷いて、
「ありがとう。大丈夫、なにも問題ありませんわ」
ちなみに、枝にぶつけた頭には、傷一つついていなかった。
ミーアの栄光輝く帝国（ダイヤモンドヘッド）の叡智は、この程度では傷一つつかないのだ。
そう、ミーアの味わい深い帝国（マッシュルームヘッド）の叡智（ドライシイタケ）は、干しキノコのごとき硬さを誇っているのだ。

「別に馬から落ちたりもしませんでしたし、なんの問題もありませんでしたわ。ねぇ、ラフィーナさま？」
そうして、ミーアはラフィーナのほうに目をやった。ラフィーナは……、
「え、ええ。そうね」
ちょっぴり慌てた様子で頷いた。
その胸中は……「なるほど、帝国の叡智の虚像はこうやって作られるのね……」という呆れで満たされて……はいなかった！　むしろ「アンヌさんに不要な心配をさせないための心遣い、さすがだわ、ミーアさん！」という尊敬の念でいっぱいだった！
帝国の叡智の虚像はこうやって作られるのである。
まぁ、それはさておき……。
「それで、被害はどんな感じですの？」
ミーアは、アンヌに続いて近づいてきたルードヴィッヒとディオンのほうに目を向けた。
それを受けて、ディオンは小さく肩をすくめる。
「皇女専属近衛隊との戦闘はなし。騎馬王国の騎兵のみなさんとちょっとした小競り合いがあったぐらいじゃないですかね」
「なるほど……小競り合い……」
ミーアは納得の頷きを見せる。
同胞だと言っていたので、おそらくは、あまり被害を出さないように立ち回ったのだろう。あるいは、馬龍から指示が出ていたのかもしれないが……。
――相手も略奪が目的の盗賊団。無理して戦闘しようとは思わなかったのでしょうね。
以前、襲われた時も、そう言えばサンクランドの兵団が来るとすぐに引いていたな、と思い出すミーアである。あの潔さがなければ、今回も大変な被害が出ていただろう。主に盗賊団の側に。
――なにしろ、ディオンさんがおりますものね……。勝利が確定しているのは構わないのですけれど、少し抑えてもらわないと、わ

たくしの心の安定に影響が出そうですわ。
敵の屍山血河の中で勝鬨をあげられるほどのメンタリティはミーアにはないのだ。むしろ、その字面を見ただけで、ちょっぴり背筋が寒くなってしまうミーアなのである。
「ところで、ミーアさま、そちらの男性とお嬢さんは何者ですか？」
ルードヴィッヒは、ミーアの後ろ、馬龍に連れられている少女のほうに目を向けた。
「ああ、彼女は盗賊団の一員ですわ。それと、紹介したことはなかったと思いますけれど、こちらの男性がわたくしが馬術部でお世話になっている……」
「林馬龍だ。よろしく頼む」
「ああ……これはご丁寧に。私はルードヴィッヒ・ヒューイットです。いつもミーアさまがお世話になっております」
ルードヴィッヒは静かな笑みを浮かべた後に、
「あなたがミーアさまに教えてくださった馬術で、ミーアさまは命を救われた。感謝してもしきれません」
深々と頭を下げるルードヴィッヒだった。
一方、ディオンは、というと……、
「ふーん、盗賊団の一員の少女、ねぇ……」
盗賊少女を観察していた。
それに気付いた少女は、ぷいっと顔を背けるが……、
「もう、ディオンさん、あまり脅かさないようにしてくださいませね。あなたの殺気は心にくるものがあるんですから……」
というミーアの言葉に、ぴくんっと肩を震わせる。
「ディオン……まさか、ディオン・アライア……？」
瞳を見開き、ディオンを凝視する少女。その頬から、すぅうっと血の気が引く。
「おや？　僕のことをご存知なのかな？」
首を傾げてニッコリ笑みを浮かべるディオンに、少女は、ひぃっと小さな悲鳴を上げ、心持ち、馬龍の後ろに隠れた。

「ディオンさん……」
「……笑いかけただけなんですがね」
「あなたの笑顔は攻撃的に過ぎますわ」
かつて、笑顔のディオンに意識を刈り取られたこともあれば、首を刈り取られたこともあるミーアは、ふぅっとため息を吐いた。
「ともかく、彼女から少し事情を聴こうと思っておりますの」
「なるほど……。そういうことならば、どうか私にお任せを……」
っと生真面目な顔で言うルードヴィッヒに、ミーアは嫣然たる笑みを浮かべて、
「ふふふ、あなたの手を煩わせる必要はございませんわ。わたくしが直々に話を聞き出してまいりますわ」
その答えに、ディオンが面白そうに目を瞬かせた。
「へぇ、姫さんが、ねぇ……。御自ら拷問をなさると？」
ちらり、と盗賊少女のほうに目を向けると……、少女は、ひぃぃぃっと小さな悲鳴を上げた。
ミーアは「やっぱり、この子とは気が合いそうだぞ？」と確信を持ってしまう。
「嬢ちゃん、さっきも言ったが、こいつらは……」
と口を開いた馬龍に、ミーアは安心させるように笑みを浮かべる。
「大丈夫ですわ。拷問などと、そのような野蛮なこと……、する必要などどこにもございませんわ」
小さく首を振った。それから、アンヌのほうに目を向けた。
「アンヌ……、わたくしのとっておきを用意してもらえるかしら。サンクランドで仕入れたやつですわ」
「あ、はい。わかりました」
アンヌは一瞬、迷いを見せるも、すぐに頷き、馬車のほうへと走っていった。
それから、ミーアは盗賊少女に目を向ける。
「これから、楽しい楽しいお茶会ですわよ。楽しみにしていてくださいましね」

ニッコリ笑みを浮かべるのだった。

第百四十二話　甘いクッキーとミーアと盗賊少女

皇女ミーアの命により、急遽、馬車の近くの平原に、即席のテーブルと椅子が用意された。そして、テーブルの上には、ミーアがサンクランドで仕入れた色とりどりのクッキーが並べられている。

さらに、ティーカップには淹れたての紅茶が注がれていく。

町から離れたこのような場所で、熱々のお茶を飲める贅沢に、ミーアはむふーっと満足げなため息を吐く。

――どこでも、お茶と美味しいお菓子が楽しめる……。これほどの幸せがほかにありましょうか……？　いいえ、ありませんわ！

そう、時々、忘れそうになってしまうこともあるが、ミーアは大帝国のお姫さまなのだ。

よーっこいしょー、っと馬に乗ろうとも、するするパンを飲むことに至上の喜びを覚えようとも、ミーアは贅沢が許される高貴なる身分なのである。

だから、旅の途中で、このようにちょっとしたお茶会を開くことだって、できるのである。

至上の幸せ（ミーア比）を、噛みしめて、思わず感動してしまうミーアである。

テーブルにはほかに、馬龍、ラフィーナ、アベル、ベルとシュトリナ……それに、

「……なんのつもり？」

ジッとミーアを睨みつける、盗賊の少女の姿があった。

後ろ手に縛られた少女に、ミーアはニッコリ微笑みかけて、

「どなたか、その方の縄を解いてくださらないかしら？」

「それはっ……！」

近くにいた近衛兵が驚愕の声を上げるが……、

「心配ありませんわ。ねぇ、あなたも逃げませんわよね？」

問いかけるミーアに、盗賊の少女は馬鹿にしたような笑みを浮かべて、
「ふふふ、噂通り甘いな。帝国の叡智。我の拘束を解くとは……」
「あ、一応言っておきますけれど、下手なことをしないほうがいいですわよ。あまり詳しくは言いませんが、そこにいる方、ディオンさんと言って、ちょっぴり危険な人ですわよ？　あなたも馬に乗るのはお得意のようですけど、どこまでだって追いかけてきて、一瞬で首を刈ってしまいますわ」
ミーアの言葉を聞いた盗賊少女は、ディオンにチラリと目をやって、こくりと喉を鳴らす。それから、小さく咳払いして、
「……もちろん、無駄な抵抗はしない。我は誇り高き民。誇り高き戦士だ。囚われの身となったからには、無様な真似は見せない。だからと言って、譲歩もしない。仲間のことはもちろん、お前たちには我の名前すら、教えてやるつもりはない！」
キリッとした顔で言った。
――ああ、やっぱり、この人、仲良くできる人ですわ。
などと、察するミーアである。
「まぁ、そういうわけですわ。なにかあっても、ディオンさんが近くに控えてますし、問題ありませんわ」
ミーアの後ろに立つディオンは、やれやれ、と首を振った。
「さて……、それじゃあ改めて、お茶会を始めましょうか」
そう話しかけると、盗賊の少女は、プイっと顔を背けた。
「騎馬王国の関係者から、施しは受けない」
「あら？　わたくし、別に騎馬王国の関係者ではありませんわよ？　ねぇ、ルードヴィッヒ」
「はい。少なくとも、我が国と騎馬王国とには、直接的な関わりはありません。軍事的な同盟関係もありませんし、商品の流通などもありません」
淡々と言うルードヴィッヒ。それに満足そうに頷いて、ミーアは盗賊少女に目を向けた。

「馬龍先輩は馬術部の先輩というだけで、ティアムーンの姫であるわたくしが騎馬王国の関係者というのは大きな誤りですわ」
「そ……、そうなのか？　だが……ど、どうせ、お、美味しいお菓子を食べたいならば情報を出せ、とか。卑劣なことを言うのだろう……？」
チラチラッとミーアのクッキーに目をやり、ギリギリと歯ぎしりする盗賊少女。そんな彼女に、ミーアは、おかしそうに笑ってみせた。
「あら、そんなこと言いませんわ。どうぞ、難しいお話の前に美味しいクッキーを一緒に食べましょう」
「……え？　ほ、ほんとに？　でも……」
思わず、といった様子で、見つめてくる少女。ミーアはニッコリ微笑み返して頷いた。
「もちろんですわ。ほら、このクッキーとーってもあまーくて、美味しいんですわよ？」
「あ……、甘い？　とっても……？」
つぶやく少女のほうにお皿を押しやりつつ……、ミーアは内心でほくそ笑んだ。
――ふっ、ちょろいもんですわ。
そう……、ミーアは知っているのだ。
食べ物の恨みは深く、重い。が……、翻って、食べ物の恩も実は、それなりに重いのだ。
空腹の時に食べ物を恵んでもらったら……、その恩は容易には消せない。どうしても、その恩のある相手に対しては、頼みを断りづらくなるものなのだ。
もし、ミーアが尋問を受ける立場だったら……。
「これを食べたいなら、秘密を話せ！」
などと言われれば、少し抵抗してやろうと思うが、
「まぁ、これを食べなさい。美味しいでしょう？　ところで、これをご馳走してあげた私に、秘密を少しだけ教えていただけませんか

？」

と言われたら……きっと、あまり抵抗を感じずに話してしまうだろう。

だから、食べ物を脅しに使ってはいけない。食べ物は、むしろ恩を売りつけるために使うべきなのだ。

ゆえに、ミーアはこのクッキーに直接的な見返りを求めない。ただただ、クッキーを一緒に食べて楽しめればいいと思っている。

そうして、仲良くなってしまえば……、後はこちらのもの。

同じクッキーを食べ、同じ紅茶を飲んだ者として、秘密を聞き出すことなど、造作もないことであると、ミーアは確信しているのだ。

ミーアの甘い認識では、そうなっているのだ。

まぁ、でも、実際のところ、そうそう世の中は甘くはないものなのだが……。甘くないのだが……！

「それで、えーっと、なんとお呼びすればよろしいかしら？」

ミーアの問いかけに、少女はクッキーをパクリ、サクリとやってから……、

「……慧馬（エマ）」

つぶやくように言って……それからすぐに、

「火（カ）・慧馬（エマ）……。我が名は火慧馬だ。慧馬でいい。恩を受けたからな……。名前ぐらいは、教えてやる」

ムスッとした顔でつぶやく少女、慧馬に、ミーアは満足げに頷いて……。

――ふむ！　御しやすし！　ですわ！

そうそう世の中は甘くはない……が、少女のほうは、たいそう甘い性格のようだった。

第百四十三話　うーん！　もう一枚！

「火……ということは、やっぱり、失われた火族の末裔か？」
慧馬の名に反応を示す馬龍……だったが、当の本人である慧馬は、つーんっと顔を背けるのみだった。
「ええと、慧馬さん？　あなたは、騎馬王国の失われた一族？　の火族の方なんですの？」
仕方なく、ミーアが聞いてやると、
「ああ、そうだ。我は、騎馬王国第一の部族、火族が長、火（カ・セイマ）星馬の末裔だ」
ドヤァっと胸を張る慧馬。それから、さらにクッキーをドヤァっと頬張る。
「だが、その誇り高き火の一族が、なんで、盗賊なんぞやってるんだ？」
「それは……っ！」
再びの馬龍の問いかけに、一瞬、答えそうになった慧馬。だったが、すぐに言葉を飲み込み、プイッと顔を背けた。
ちらり、と馬龍に視線を向けられたミーアは、
――ふむ、これは……なかなか面倒くさいですわね。そして、このクッキー、なかなか美味しいですわ。
食べかけていたクッキーをサクリサクサクっと飲み込んで……。じんわーり、と舌に広がる濃厚なクリーミーな甘み……、コクのあるミルクの香りに、思わず、ううん、っと満足げな声をこぼしてから……。うーん！　もう一枚！　サクリサクサク……。うーんっ！
などと、無限ループに入りそうになり……、背中に向けられた、ディオンの生暖かい視線にハッと気付いて咳払い。それから、
「……なぜ、あなたのような誇り高き方が、盗賊などに身をやつしているのです？」

「我々を盗賊などという、恥知らずな集団と一緒にしないでもらおう。我々は、必要に駆られて仕方なくやっているのだ」
待ってました！　とばかりに、慧馬が言った。
……そんなに、言い返したかったなら、意地なんか張らなければいいのに……などと思いつつ、ミーアはもう一つクッキーに手を伸ば……そうとしたのだが……。
「ミーアさま、食べすぎです。もう、十枚は食べてます」
アンヌが、険しい顔でお皿を取り上げた。
「ああ……」
「もとはといえば、今回の乗馬は、サンクランドでの食べすぎが原因だったはずです。もう危ない目に合わないためにも、少しお控えください」
「うう……」
いつになく厳しいアンヌ。その顔を見て、ミーアは、ぐっと我慢する。
――今日は、アンヌにも心配かけてしまいましたし……。くぅ、仕方ありませんわ。
忠臣の熱い、アツーイ心遣いに心の中で涙を流しつつ、ミーアは、慧馬のほうに視線を戻した。
「今年は例年にない凶作で、食糧が不足してしまったのだ。このまま飢えるに任せていれば、幼子や老人たちが死んでしまう。だから、我が戦える者たちを率いて、食べ物を得るために行ったのだ。そこらの悪党と一緒にしないでもらおう」
慧馬は悪びれる様子もなく、堂々と胸を張った。
「……エイブラム陛下との会談で聞いたのだけど、騎馬盗賊団の中には、村人に乱暴を働かずに、もちろん家や田畑を焼きもせず、ただ、食料のみを奪い取っていった者たちがいるそうよ」
ラフィーナが難しい顔で言った。それに頷いて、慧馬は続ける。
「我らは戦士。ゆえに、戦う意思を持たぬ者たちを殺めたりはしない。田畑を焼くなどもってのほか。食べ物が取れなくなってしまう

ではないか」
ふふん、っと鼻を鳴らし慧馬は腕組みする。
「座して死を待つことを潔いとは思わない。我々は命を賭して、戦い、奪い取ることを選んだ。それだけだ」
「それだけっつってもなぁ……」
馬龍がなんとも言えない顔で、ガシガシ、頭をかいた。
どんな理由があれ、略奪は略奪。村人に暴力をふるうようなことがなかったとしても、それが悪事であることには違いない。違いないのだが……。
「ふむ……、なるほど」
一方で、ミーアは納得の頷きを返していた。
なるほど、食べるものがなく、戦う力があったら、そういう選択をとることだって、十分にあり得るだろう、と……、帝国の姫たるミーアは思うのだ。
事実、帝国の末期において、他国を侵略し、食糧を奪うことは検討されたことがあった。
けれど、様々な事情から、それが実行されることは結局なかった……。
当初、派兵が検討された際、行先はペルージャン農業国だった。けれど、軍を持たぬ無抵抗の国に攻め込むことは、ヴェールガ公国をはじめとした諸国の不興を買う。そこまでする価値があるのかどうか……、と一部の文官が苦言を呈した。
……その頃には、まだ余裕があったのだ。
ガヌドス港湾国も、グリーンムーン家に代わる新しい担当者が上手くすれば食糧の供給を再開するはず。そうして、ある程度の兵站が確保できてから行動するのでも問題ないだろう。むしろ、そうしている間に、ペルージャンが悔い改めて、食糧供給が回復するかも……？
そんな甘い幻想にとらわれているうちに、内戦が激しくなり、軍が組織的な行動をとれなくなってしまったのだ。

今までだってずっと上手くできていたのだから、また元に戻るに違いない。今の危機さえ乗り越えれば……、と。その変化を一時期のものと考え、軽視して、対策を怠った。

その結果、軍事的な選択肢をとることができなくなってしまったのだ。

――今にして思うと、完全に蛇の手の上で踊らされておりますわね。蛇に手はないでしょうけれど……。

などと、蛇手的ならぬ蛇足的なことを考えてしまうミーアである。

さておき、どうせ、ヴェールガやサンクランドとの関係が悪化するならば、動かせるうちに軍を動かしておくべきだったのだ。国内の紛争で疲弊しきってしまう前に、動かしておくべきだったのだが……。

――ああ、でも、レッドムーン家も、派兵には反対の立場だったはず……。ルヴィさんも味方ではありませんでしたし……、となると、軍を動かしてどうにかするのも難しかったのかしら……？

つくづく帝国は、どうにもならない状況にあったのだと思わされるミーアである。

――しかし……ことはなかなかに複雑ですわ。

改めて、火族の問題を考えつつミーアは、ラフィーナ、アベル、そして、馬龍へと視線を移動させる。

状況が理解できているのか、三人とも非常に難しい顔をしている。

――これは火の一族がどこの国の民か……、それによって責任の所在が変わってきますわ……。

火の一族はもともとは騎馬王国の一部族だった。けれど、はるか昔に、その関係は断絶している。むしろ敵対的であると言って良い。となれば、騎馬王国の責任といえるかどうか……。

では、サンクランド、レムノ、ヴェールガの民かといえば、恐らくそんなことはない。

火の一族……彼らは、どの国にも属さない独立した民なのだ。

仮に、彼らがどこかの国に属しているのであれば、責任の所在は

明白だ。彼ら自身にも罪はあろうが、彼らを飢えさせた統治者にも罪があるといえる。
あるいは、彼らが小国であると見做すならば、火の一族そのものに罪を問うことになる。
けれど、彼らが「国」としての責任が取れるかといえば、おそらく、それも難しく……。
――さて、どのように問題を解決するのやら……、まぁ、わたくしには関係ありませんけれど。
そうして、ミーアは気楽に、紅茶を一口飲んだ。
そう……、今回に関して言えばミーアは、もう文句なく、完全無欠の部外者である。
完全な外野である。面倒なことに頭を悩ます立場にないのだ。
ゆっくりお茶も楽しめようというものである。
――まぁ、あとは馬龍先輩がなんとかするでしょう。わたくしは、とっとと、羊バターの情報を収集して、帰るとしましょう。
などと油断していたのだが……。
お茶会が終わった時、馬龍が、静かに近づいてくるのが見えた。
「ミーア嬢ちゃん、ちょっといいか？」
「あら？　馬龍先輩、どうかなさいましたの？」
いつになく真剣な顔をしている馬龍に、首を傾げるミーアだったが……。
「すまないが、嬢ちゃん、慧馬と一緒にうちの族長に会ってもらえないか？」
その申し出には、わずかばかり眉をひそめた。
「林族の族長さんに、ですの？」
「ああ、あの様子じゃあ、あいつ、族長と話なんかしねえだろうが……、これはちょっと放っておけない問題みたいだからな」
そう言う馬龍だったが……、正直なところ……、ミーア的には大変気が進まないことだった。
ミーアとしては、羊バターさえ手に入れてしまえば、騎馬王国に

行くメリットはあまりないわけで……。さて、どうやって断ろうかしら……？　と思っていたところで、
「ところで、嬢ちゃん、甘いものは好きか？」
不意に、ミーアの耳をくすぐる、悪魔の囁きが聞こえてきた。
「もしも来てくれたら、お礼に、甘くてすごく旨い、とっておきのミルクをご馳走しようと思うんだが……。バターもチーズも新鮮なのがあってな、もしも来てくれたらお礼にご馳走するぜ」
「ほう……詳しく」

……まぁ、アベルが呼び出されてるのも気になるし……、などと胸の内で言い訳しつつ。
まぁまぁ！　騎馬王国の美味しいミルクがわたくしを呼んでいるみたいですわ！　などと……、腹の内で、グルメ妄想をたくましくするミーアなのであった。

第百四十三話　うーん！　もう一枚！（後書き）

ミーアは将来の骨太な改革のために、カルシウムを求めて、いざ騎馬王国へ！

第百四十四話　帝国最強と剣聖茸騎士（前書き）

ギミマティアス→ギミマフィアス　に変更。ミーアの父マティアスと名前が被るので……。

皇帝陛下の名前を忘れてたわけじゃないよ！

第百四十四話　帝国最強と剣聖茸騎士

ミーアは馬龍と相談することしばし、すぐさま、騎馬王国行きを決めてしまった。

剛毅果断なその姿勢に、ルードヴィッヒは改めて感銘を受けつつ、その決定に従って粛々と準備を進めた。

もともと、短い時間ながら立ち寄る予定ではあったのだが、これは少し長引くかもしれない。

「いやはや、次は騎馬王国に行く羽目になるとはね。さて、うちの姫さんは、どう落としどころを見つけるつもりなのかね？」

呆れた様子で肩をすくめるディオンに、ルードヴィッヒは苦笑した。

「どうだろうな。あの方は、あまり我々にお心を明かしてくださらないからな。ただ……、たしかに、騎馬王国が不安定になるのは我が帝国にとって、いや、ミーアさまの構想にとって、あまり良いことではない」

ミーアの壮大なる構想ミーアネット。その実現のために、騎馬王国は重要な位置にあった。ヴェールガとサンクランド、さらには、レムノとの間に位置するこの国は、言ってしまえば、大きな緩衝地帯といえた。

国境の概念がおおらかな彼らが支配することで、草原地帯には一定の平和と治安が確保されているといっても過言ではなかった。レムノ王国にしろ、サンクランド王国にしろ、騎馬王国に接する地域に住む人々にとっては、彼らは近しい隣人である。

また、草原を移動しながら暮らす彼らにとって、大規模な侵攻ならばともかく、軽度の国境侵犯など取るに足らないもの。自分たちの飼う動物たちが勝手に国を越えて行ってしまうことだってある。だから、お互い様だし、むしろ草原は草原。どこかに線が引かれて

いるわけでもなし。
細かく国と国とを分かつ線引きは、あまり重要なものとは考えないのだ。
これで、もしも彼らがいなければ、レムノ王国とサンクランド王国との間には少なからぬ鍔迫り合いが起きていたはずだ。軍事力を伸ばしつつある国が隣国であったなら、きっとサンクランドは放ってはおかなかっただろう。
一方で、レムノ王国としても、サンクランドの力を削ぎたいところ。なにかにつけて、ちょっかいをかけたであろうことは、想像に難くない。
ところが、この騎馬王国が間に入ることで、そうしたことは、ほとんど起きていなかった。彼らの頭を飛び越えて戦端を開くことはあり得ないし、彼らの騎馬戦力は決して侮れるものではなかったからだ。
「騎馬王国の不安定化は場合によっては、大陸全体の安定を崩すことになるかもしれない。彼らの力が衰えれば、サンクランド、ヴェールガ、レムノを結ぶ巡礼街道の治安も悪化するだろうし、そうなれば商隊の維持にも支障をきたす。それは混沌の蛇の喜びそうな状況じゃないか？」
「もしも、姫さんが国家間の食糧供給を円滑に行おうと思っているなら、放置することはできないか。まぁ、姫さんならそうだろうけど、さて、どうするつもりなのやら……」
それから、何事か思いついたのか、ディオンは悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「あるいは、騎馬王国の美味しいものを食べることしか、考えていなかったりしてね……」
「ははは。まぁ、当初の目的は羊のバターだったからな。ミーアさまのことだから、そのついでに、今回のトラブルも解決してしまおうなどと思っているかもしれないな」
ディオンの冗談に軽口を返すルードヴィッヒ。そうして、二人の

男たちは、笑みを交し合う。それは、かつて帝国の中央貴族たちに使われていたころには決して浮かべえなかった、朗らかな笑みだった。

さて、ルードヴィッヒと別れた後、ディオンが向かったのは、盗賊の少女、慧馬を閉じ込めている馬車だった。

彼女は今、皇女専属近衛隊二名の監視下に置かれていた。

「異常はないか？」

「これは……、ディオン隊長……いや、ディオン殿」

「ははは。まぁ、どっちでもいいんだけどね。それで、変わりはないかな？」

「はい。特に逃げるそぶりもなく、眠っているようです」

「へぇ。それはなかなか、肝が太いな」

感心した様子で頷いてから、不意にディオンは視線を転じた。

ガシャリ、ガシャリ、と重たい金属音を立てて近づいてくる者がいたからだ。

現れたのは、レムノ王国唯一の護衛騎士、ギミマフィアスだった。

彼は、ディオンのほうに顔を向けると、軽く手を挙げながらやってきた。

「精が出ますな。ディオン・アライア殿」

「ギミマフィアス殿。このような場所に、なにか？」

今回の旅は、ティアムーン帝国の兵が中心になって護衛の人員を分担している。そして、ギミマフィアスもその警備計画の中に組み込まれてはいたが……。年齢のこともあって、できるだけ、アベルのそばに配置してあった。

ギミマフィアスは、頭をひたひた、と叩きながら、

「いや、なに。万に一つも賊に逃げられてはいけないと思いましてな。どれ、吾輩も一つ監視に名乗り出ようではないか、と参上仕った次第。それに、貴殿も姫殿下の護衛でお忙しいのではないか、と」

「お気遣いには及ばないさ。姫殿下の周りは、近衛隊が固めてるし

ね。それに、貴国の王子殿下もそばについていてくれている」
現在、ミーアと一緒にいるのは、ラフィーナやアベル、さらに、シュトリナなどだ。
いわば要人が一か所に集まっている形である。自然、近衛の兵力も、そちらに集中しているし、騎馬王国の者たちも、彼らのところを重点的に守るだろう。
であれば……、むしろ危険なのは、こちらのほうだとディオンの直感が告げていた。
今、命を狙われそうなのは、慧馬という盗賊の少女のほうだ、と。
「ギミマフィアス殿も、アベル殿下の護衛で忙しかろう。ここは、僕に任せて、アベル殿下の守りに回っていただけないだろうか」
「なるほど……、そうですな。であれば、ここは帝国最強の騎士殿にお任せすることにいたしましょう」
ギミマフィアスは、深々と頷いて、
「しかし、貴国のミーア姫殿下は、ずいぶんと変わった方ですな。まさか、いきなり盗賊とテーブルを囲もうとは……」
「あはは。うん、それは、どうも否定の余地はなさそうだね」
答えつつも、ディオンはじっくりと観察していた。ギミマフィアスの一挙手一投足に視線を送り、内心で舌を巻く。
――驚いたな。さすがはレムノの剣聖。不意打ちで斬り殺すヴィジョンが浮かんでこないな。どう斬りかかっても捌かれてしまいそうだ。
普通に戦ったら、金属の鎧に刃を当てることも難儀しそうだ、と、ディオンの直感が告げていた。もしも、戦うことにでもなったらさぞかし……楽しそうだ！
そんな彼の内心を知ってか知らずか、ギミマフィアスは、特に気負った様子もなく、
「それでは、この場のことは任せましたぞ、ディオン殿」
深々と頭を下げて去っていった。

第百四十五話　歩み寄る（既視・危機）感

馬龍率いる林族（リン）の戦士たちの先導のもと草原を進むこと一日半。がたん、ごとん、と馬車に揺られつつ、ミーアは、ぼんやーり、眠たげな目で外を眺めていた。

空は晴れ渡り、なんとも気持ちの良い陽気。絶好の乗馬日和だというのに、ミーアは、馬車の外に出ることを禁じられていた。

先日の、ちょっとしたやんちゃが仇となっていたのだ。

――気晴らしに馬を走らせたら気持ちよさそうですのに、残念ですわ。

などと憂鬱な気分に浸っていたミーアだったのだが、突如として目の前に広がった風景に、思わず歓声を上げた。

「ああ……これは……、なかなかに壮観な風景ですわね」

一面に広がるのは、爽やかな緑色の絨毯だった。風がその上を通り過ぎるたび、さわさわ、そよそよと、葉の揺れる音が聞こえてくる。

その葉をのんびり食んでいるのは、白い毛並みの動物……、もっこもこの毛並みの羊だった。大変平和で、牧歌的な光景にミーアは思わず笑みを浮かべる。

「あれが、騎馬王国の羊……。実においし……、じゃない。素晴らしいですわ」

丸々と羊毛で膨らんだ羊に、ミーアは思わず舌なめずりだ。ミーアの目には、あの白い塊は、生クリームの塊に見えているのだ！

「すごい可愛いですね、ミーアお姉さま！　あ、ほら、リーナちゃん、あそこに子羊がいますよ」

「ホントだ。リーナ、羊を見たのはじめてよ」

ニコニコしながら、シュトリナが言った。

「へー、そうなんですね。物知りのリーナちゃんでも見たことない

ものってあるんですね」
　完全に観光気分の年少組二名。それを尻目に、ミーアは熱心に羊の観察を続けていた。
「ふむ……、これだけたくさんいるんですし、いっそのこと、一匹か二匹もらって帰りたいですわね……。おや？」
その時だった。ミーアの目が一匹の羊をとらえた。
「まぁ……、あの羊、色が違いますわね。なんだか、ちょっと黄金に輝いているような……」
　穏やかな日の光を浴びて、かすかに黄金色に輝く羊。それは他のものより一回り大きな、実に立派な羊だった。
　っと、ミーアの声を聴いたのか、馬車に、馬龍の乗る馬が近づいてきた。
「ははは、さすがはミーア嬢ちゃん。見る目があるな。あれは醍醐羊（サルピルシープ）と言ってな、極上のミルクを出すんだ」
「極上の……？」
　ゴクリ……、と喉を鳴らして、ミーアが唸った。
「なるほど。普通の羊ではないんですのね……。ズバリそれが、騎馬王国産のバターが美味しい秘密……ですわね？」
　問いかけたミーアに、されど、馬龍は怪訝そうに眉をひそめた。
「いや、他国に卸してるのは、普通の羊のもんだな。醍醐羊は、あまり数がいないから、取れるミルクの量も少ないんだ」
「……なん……ですって？」
　驚愕のあまり、ミーアが目を見開いた。
「あのバターが……普通？」
　脳裏に、あのラフィーナの宿で食べた、美味しい美味しいバターの味が甦る。舌の上にジュジュワッと広がる羊乳のコク。濃縮されたミルクの甘い風味、カリッカリに焼いたパンの香ばしさにまろやかさを加える、あの極上な芳香……。
　あの素晴らしいバターが、まさか、普通のバターであったとは！
　ミーアは仰天し、次の瞬間、ちらり、と馬龍をうかがった。

「ちなみに、まさか、その醍醐羊のミルクをいただくことができたりは……？」
「ああ。ここまでついてきてもらったお礼だ。たっぷり、ご馳走させてもらおう」
力強くも頼もしい馬龍の言葉に、ミーアの笑みが弾けた。
「ふふふ、やはり、騎馬王国についてきて正解でしたわ！」
と、その時だった。
ミーアは前方から近づいてくる騎馬の一団を見つけた。
もしや、盗賊団が慧馬を助けに来たのか？　などと身構えるミーアだったが、馬龍たちが慌てる様子はなかった。むしろ、気安げな様子で手を挙げている。
「ああ、心配しなくていい。林族の戦士たちだ。どうやら、迎えに来てくれたみたいだな」
馬車から少し離れた場所で一団が止まった。その先頭の馬に乗っていた、恐らく一団を率いていたと思しき人物と、馬龍が挨拶しあうのを尻目に、ミーアは、獲物を狙う目つきで、羊たちを眺めていた。
「ふむ、あの大きさ……、やはり、一匹ぐらいならば馬車に乗せて連れて帰れそうですわね。いや、でも、やはり番いでいただくのがベストかしら？　ふむ、ここは、ルードヴィッヒにお願いして交渉を……」
などと、ぶつぶつつぶやきつつ、馬車から身を乗り出していると……、不意に、首元に、ふしゅーっと、風が当たるのを感じた。
「あら……？」
そちらに目を向けたミーアは、いつの間にやら近づいてきていた、一頭の馬に気が付いた。どこからやってきたのだろうか？　その馬はミーアのことを興味津々、といった様子で見つめていた。
その、馬の顔に、ミーアは微妙な既視感を覚える。
「……はて？　なんでしょう？　なんだか、見覚えがある馬のような……」

既視感と……、危機感を！
その馬の、鼻の穴がヒクヒクっとするのを見て、ミーアはようやく既視感の正体に気付いた。
「ああ、そうですわ！　この馬、ちょっと意地悪そうな目元とかが荒嵐にそっく……うひゃあっ！」

ぶぇええくしょん！

クシャミの轟音を聞きながら、ミーアは、
――なんか、ちょっぴり懐かしいですわね。荒嵐、元気かしら？
などと、ちょっぴり遠い目をするのであった。

第百四十六話　狼と少女

林族の駐留地に着いて早々に、ミーアたちは、近くの川に水浴びに行くことになった。
馬にくしゃみを吹っ掛けられたミーアへの気遣いである。
「こちらです、ミーア姫殿下」
案内してくれたのは、護衛も兼ねた林族の女性戦士、二名だった。腰に佩いた曲刀も凛々しい彼女たちであったが、帝国の姫ミーアを前に緊張を隠せない様子だった。
「ここは、一日の作業を終えた女たちが、水浴びに使う場所で……」
などと、連れてきてくれたのは森の中に流れる穏やかな川だった。川幅はそれなりにあるものの、深さはそれほどでもなく……。手ですくった水はいささか冷たかったものの、日差しのある時間であれば、むしろ心地よいぐらいだった。
「素敵な場所ですわね。うふふ、感謝いたしますわ。さすがに馬にくしゃみをかけられたままでは、落ち着きませんでしたし……」
「いえ。申し訳ありませんでした。我々の馬が……、これで許してもらえるとは思えませんが……」
「ふふ、全然気にしておりませんわ。慣れておりますもの。それに、騎馬王国ではああいったことも日常茶飯事なのでしょう？」
実になんとも度量の深い笑みを浮かべるミーア。それに対して、
「え……？　あ……えーと、あ、はい。そうです。私も割とよくくしゃみをかけられます」
微妙にひきつった笑みを浮かべる騎馬王国の女性であった。
若干、それが気にならなくはなかったが、すぐに「まぁ、いいですわ」と思い直す。
なにしろ、ミーアは馬龍との約束を忘れてはいなかったから。
――極上ミルクが後で味わえるとなれば……。それにバターも…

…きっと素晴らしい出会いがわたくしを待っておりますわ！
それを思えば、自然に笑みもこぼれようというものである。
ちなみに、水浴びに同行したのはアンヌとラフィーナとラフィーナの従者の女性。それと、もう一人……。
「良き場所だ。戦いの汗を流すのにはちょうどいい」
なぜか、偉そうに腕組みする慧馬だった。
「我は、騎馬王国の者に捕らわれるなどという屈辱に甘んじたりはしない。我は、帝国の叡智、我が友ミーア姫の説得に応じ、捕囚の身に甘んじて、大人しく同行しているのだ。であれば、水浴びにも同行するが当然のこと……」
などと……ぶつくさ言っていたが、どうやら、ミーアがいないところでディオンと一緒にいるのが怖いらしい。
馬車に乗せられて運ばれている時にも、見張りがディオンだったので、たいそう恐ろしかったらしく……馬車から降りると、すぐにミーアのそばにやってきていた。
まぁ、ディオンが怖いのは、ミーアもしっかりと理解しているので、同情して連れてきたのだが……問題は……、
「……気軽にミーアさんをお友だち扱いするだなんて……」
なーんてことをつぶやいていたラフィーナのほうだった。ぷっくーっと頬を膨らますラフィーナを見て、
「あ、あの、ラフィーナさまもよろしければご一緒にどうかしら？ひさしぶりに、お友だち同士で、水浴びというのは……」
慌てて誘うミーアである。
気遣いの人、ミーアの配慮が冴え渡る。こうして、ミーアの女帝としての気配りと、人心掌握術に磨きがかけられていくのだ。
女帝としての修行なのである。

さて、そんなこんなでチャチャッと水浴着に着替えたミーアは、さっさと川辺に向かった。
ちょうどよい具合の岩に腰を下ろすと、騎馬王国の女性が恐々と

いった様子で近づいてきた。
「あの、申し訳ありません。ミーア姫殿下。私たちが洗髪に使っているものは、これなのですが……」
そう言って彼女が差し出してきたのは……、なんと、いつもミーアが使っている洗髪薬だった！
それを見たミーアは、思わず微笑みを浮かべる。
――ほう！　騎馬王国にも浸透しているなんて……。さすがはアベル、良い品を知っておりますわね。
などと、思っていたものだから、
「失礼かもしれませんが、でも、これ、とってもいい品で、だから、えっと……」
そんな言葉に、思わず首を傾げた。
「あら？　失礼だなんて、そんなことまったくありませんわ。上等な品ですし、わたくしも愛用しておりますわよ？」
「え……？」
驚愕の表情を浮かべる彼女に、ミーアは微笑みかける。
「ありがとう。これならば、なんの文句もございませんわ」
それから、ミーアはアンヌのほうを見た。アンヌは、心得た、と深々と頷き、それから、思い切り腕まくりして気合十分、漲らせながら、ミーアの髪を洗い始めた。
「ミーアさま、少しだけ、御髪が痛んでいるようです」
「ああ、最近はこうしてゆっくり、あなたにお手入れしていただくことがありませんでしたものね」
それから、ミーアはアンヌのほうを見て微笑んだ。
「いつもありがとう、アンヌ。頼りにしておりますわ」
「もったいないお言葉です。ミーアさま」
などと、アンヌとイチャイチャしてから……、
「さて……では、そろそろ……」
などと、ミーアが立ち上がる。多少冷たいが、川の水に浸かろうというのだ。

その時だった。突如、背後の茂みが、がさ、がささ、っと揺れた！
すわ覗き魔か？　はたまた、自身の命を狙う不届き者か？　と警戒する面々であったが……現れたのは、予想だにしないものだった。
鬱蒼とした茂みをかき分けて、現れたもの、最初に見えたのは黒い鼻先だった。それが、辺りを確認するようにヒクついた後……、のっそりと姿を現したのは……、
「狼っ！？　こんなところにっ！？」
騎馬王国の女性が、小さく悲鳴を上げる。
彼らの目の前に現れたのは、一匹の黒い狼だった。
曲刀を引き抜き構える戦士たち。けれど、すぐにその顔に焦りの色が浮かぶ。
なぜなら、最初の一匹に続き、二匹目、三匹目が現れたからだ。
「お客人、お逃げください。ここは、我々が……」
ミーアたちを背中にかばいながら、臨戦態勢に入る彼女たちだったが……。
「……必要ない」
答えたのはお客人……ではない慧馬だった。彼女は勇ましく笑みを浮かべた。
「あの程度の狼……物の数ではない」
そうして、彼女は指をくわえると、ひぃいいいんっと指笛を鳴らした。
「来い！」
っと鋭い叫び声をあげる。がさ、がささ、っと遠くのほうから、大地を踏みしめる音が近づいてきて……、ソレが現れた。
さながら黒い疾風のごとく、狼たちの背後に現れたもの……、それは、漆黒の毛並みを持つ巨大な狼だった！
「なっ、あれ……は……」
騎馬王国の者たちは、言葉を失った。
それはミーアも同じだった。なぜなら、ミーアは、見覚えがあったからだ。

――あの狼は……、以前、襲われたのと同じやつなんじゃ……。
かつて、狼使いが連れていた狼に、その狼はそっくりで……。
背筋に、つめたぁい汗を流すミーアをしり目に、巨大な狼は、先にいた三匹の狼たちを睨みつける。瞬間、ぴょーんっと飛び上がる狼たち。直後、尻尾を垂らして、蜘蛛の子を散らすように逃げ去っていく。
その背中に、野太い吠え声を投げかけてから、巨大な狼は、ミーアたちのほうを見た。
「ふふん、我が火の一族の戦狼（いくさおおかみ）の相手は、ただの野生の狼には重かろう」
そうして、慧馬は嬉しそうに狼の首筋を撫でた。
「まさか、その狼を使って逃げようというんじゃ……」
震える声で問う騎馬王国の戦士に、慧馬はニヤリと攻撃的な笑みを浮かべた。
「そのつもりがあれば、とっくにやっている。それに、残念ながらディオン・アライアを倒すことはできないだろう」
それから、慧馬は堂々と胸を張り、
「なにより、我は戦士だ。一度、捕らえられた以上、見苦しい真似はしない」
キリッとした顔で、そんなことを言うのだった。

第百四十七話　羊飼う者の末裔

「おお……これは……」
ミーアは、恐る恐る慧馬に歩み寄る。
わーしわしわしっと首筋を撫でられて気持ちよさそうにしている狼を間近で観察するためだ。そう、間近で見るために接近したのだ！
……あと二十歩ぐらいのところまで！
接近したのだ……ミーアなりに。
まぁ、この程度離れたぐらいで、狼がその気になったら、ミーアなどペロリなわけだが……そこはそれ。勇気を振り絞って近づいたミーアは、改めて狼を観察する。ミーアの視力は割といいほうなのだ。
――ふむ……すごい懐いてますわね。前も思いましたけど、狼ってこんな風に手懐けられるものなのかしら？
首を傾げつつ見つめていると……、
「ん？　なんだ、興味があるのか？」
慧馬は、ミーアの視線に気付いたのか、わずかに表情を和らげる。
「その子……襲ってきたりしないんですの？」
「ああ。こいつは我の家族なのだ。幼き日より我が育てた」
それから、慧馬は、狼に言った。
「ここの者たちはお前を恐れる。身を隠していろ」
慧馬の言葉に、ウーフゥと鼻を鳴らして答えてから、狼は森の中に去っていった。
「なるほど。大したものですわね。狼というのは、あんなにも言うことを聞くものなんですのね……。んっ？」
その時、ふとミーアは気が付いた。騎馬王国の女性たちの表情が、微妙に強張っていることに……。
――あら？　なにかしら……？　なんだか、やけに表情が硬いよ

うな……？　まだ先ほどの狼たちを警戒しているのかしら？
彼女たちは、けれど、狼が去っていったほうを見てはいなかった。二人が警戒の視線を向けているのは慧馬のほうで……。
そのことを、ミーアが不審に思ったところで、
「そろそろ、上がりましょう。また、狼たちが戻ってくるかもしれませんから」
護衛の女性たちが言った。
「え？　ああ、そうですわね」
小首を傾げつつも、ミーアは川から上がり、着替えを始めた。

その後は特に何事もなく、森を抜け、林族の集落に帰ることができた。
「しかし、改めて見ると、壮観な光景ですわね」
ミーアの視線の先、草原には無数の幕屋が建てられていた。横から見ると四角、上から見ると円形の白い幕屋。それを見て、ミーアは思う。
「まるで、チーズのようですわね。チーズの幕屋ですわ」
ペルージャンにはケーキのお城があり、騎馬王国にはチーズの幕屋がある……。
ミーアの頭の中の外国は、とても美味しそうなのだ！
そんなチーズの幕屋だが、その規模は村……否、やや大きめの町ほどもあった。無論、帝都の規模には及ばないものの、これだけの人数が移動しながら生活していると思うと、なんとも感銘を受けてしまうミーアである。
けれど、それ以上に驚くのが、彼らの保有する家畜の数だった。
無数に建てられた幕屋群、そこから少し離れた場所には、簡易な木の柵が作られていた。その中に、馬に乗った者たちに追い立てられた羊たちが、ちょこちょこと入っていく。まんまるモコモコの羊が群れを成して動くのは、まるで空に浮かぶ雲のようだった。
その夥(おびただ)しい、まさに雲霞のごとき数を前にしてミーアは……。

――これは、数えがいがありそうですわ。動いてますし、全部数えるのに二、三日はかかりますわね。退屈しのぎにはもってこいですわ。
たくさんのものを見ると、ついつい暇つぶしに数を数えたくなってしまうのは、ミーアの悲しいサガであった。
さらに、家畜は羊だけではなかった。
ほかの柵には立派な角をもつダイオウヤギの姿もあった。こちらの数も極めて多い。
ヤギからもミルクがとれるのかしら？　とか、どんな味がするのかしら？　などとミーアはドキドキ、ワクワク、ときめきを止められなかった。
「それにしても、馬に羊に、ヤギまで……。騎馬王国の方たちは、動物とともに生きておりますのね」
ティアムーン帝国にも家畜はいるが、動物の群れとともに、移動しながら生活をしている、という者はあまり聞かない。
まして、一族単位、国単位でそのような生活をしているなどというのは、もはやミーアには想像できない世界である。
それは、どうやらラフィーナも同じだったらしく……。
「こんな生き方もあるんだって……そう思わされるわね。彼らは、神聖典にある、羊飼いの一族、その末裔だと聞くわ」
「なるほど。そうなんですのね」
神聖典に描かれる羊飼いというのは、なかなかに重要な役割を持つ人々だ。
彼らは、神が地上に顕現した際、一番にそこに駆け付け、生贄をささげて祀ったことから、大いなる祝福を受けた者たちと書かれている。
騎馬王国では、さらに、羊飼いであった彼らの始祖が、神の使いの女性と婚儀を結び、自分たちの国が生まれた、として、神聖典に自分たちの建国の伝承を関連付けて教えている。神の使いである女性が馬に乗っていたところから、騎馬王国の馬を重視する伝統は始

まっていた。
「そして……、そんな羊飼いたちの天敵が狼よ」
不意に、ラフィーナの口調が真剣みを帯びた。
「え……？」
聞き返そうとしたミーアは、けれど、その機会を失う。
「ミーアさま、林族の族長殿がお待ちです」
やってきたルードヴィッヒは、一礼すると、そう告げた。
「ええ、わかりましたわ。行きましょう」
ミーアは、軽く慧馬のほうに視線を送った。
慧馬は、むっつり黙り込んだまま、小さく頷いた。

第百四十八話　約束……

さて、ミーアたちが水浴びに行っている間、ベルとシュトリナは、集落の中の見学をさせてもらっていた。それは、“ぼうけんがく”でも“たんけんがく”でもなく……、強いて言うならば“たいけんがく”だった。

すなわち……、

「うわぁ、すごい。可愛いですね！」

もこもこした子羊を抱き上げ、思わず歓声を上げるベル。腕の中のちょうどよい温もりが、なんとも言えずに心地よかった。

「すごい。毛がふわふわしてます」

笑みを浮かべながら、頭を撫でる。っと、子羊は耳をぴくぴくと動かして、小さな鳴き声を上げる。

「ふわぁ……」

あまりの可愛さに、ベルは、とろけそうな笑みを浮かべた。

「それはまだ生まれたてだな」

「ふふふ、そうなんですね。すごく、可愛い！」

それからベルはシュトリナに目を向けた。

「ほら、リーナちゃんも、可愛いですよ？」

そう呼びかけると……、

「ええ……そうね」

シュトリナは、なぜだろう、なんだかやたらと離れたところにいた。

「リーナちゃん？」

「うん、大丈夫だよ？　ベルちゃん、リーナは見てるだけで……」

ニコニコっと花が揺れるような、可憐な笑みを浮かべるシュトリナに、ベルは違和感を覚える。

「ひょっとして……リーナちゃん、子羊のこと、怖かったりして…

…？」
「そっ、そんなことないわ。うん、そんなのぜんぜん平気。そんな、子羊が怖いなんてこと、あり得ないわ！　ただ……」
と、そこで、シュトリナは、ちょっぴり複雑そうな顔をした。
「ただ……そんな小さいのにリーナが触ったら、死んじゃうんじゃないかって思っただけ……」
「リーナちゃん……」
その言葉に、ベルは表情を曇らせる。
ほとんどの動物にとって、生まれて間もない赤ん坊というのは、力なき存在だ。ベルの抱く子羊も小さくて、か細くて……。だから、ちょっとでも力を入れすぎると、壊れてしまうんじゃないかって……。そんな気持ちになってしまうのは、ベルにも理解できることだった。
まして、幼き日から、毒についての扱いを教え込まれてきたシュトリナである。もしかして、自分の手に毒が染みついてはしないか？　それが、子羊に回って、殺してしまうのではないか……？　と、そう不安になったとしても、不思議はないのかもしれない。
それに気付いたベルは、優しい笑みを浮かべる。
「大丈夫です、リーナちゃん。リーナちゃんが毒を使うことなんて、もう二度とありません。ミーアお姉さまが、そんなこと、絶対にさせませんから」
それから、ベルは、シュトリナに歩み寄り、手を伸ばす。躊躇うように宙をさ迷っていたシュトリナの手をしっかりと握りしめて……。
「リーナちゃんのこの手は、優しいことをするためにあるんです。だから、この子を抱いても、大丈夫」
シュトリナの目を見つめて、ベルは言った。その真っ直ぐな視線に、シュトリナは、一瞬、困惑したような顔をして……、それから、意を決したように唇をきゅっと噛みしめて、こわごわと手を伸ばす。
ベルが差し出した子羊を胸に抱き……、そのもこもこの毛を撫で

る。一撫でするごとに、強張っていた顔が、ほころんできて……。
「……ふわふわ。それに、すごくかわい……！」
直後、ぺろぉり、と、子羊から伸びた舌が……、シュトリナの頬を舐めた。
「きゃっ……」
ミーアには上げられないような、なんとも可愛らしい悲鳴を上げるシュトリナ。それを見て、ベルは思わず吹き出した。
「も、もう、ベルちゃん……笑うなんてひどい」
そんなベルに、頬を膨らませるシュトリナであったが、すぐに自分も笑ってしまった。
「えへへ。なんだか……、楽しいですね、リーナちゃん」
つぶやきながら、ベルは周りを見回した。
のんびりと柵の中で身を寄せ合う羊、ゆったりと落ち着いた足取りで歩く馬の群れ……。
新月地区に身を潜め、日の光からすら身を隠さねばならなかった、暗く沈んだ毎日からは想像もできない世界が、そこに広がっていて……。
「ボク、ここ、好きです」
にっこり笑みを浮かべるベル。それに応えるように、シュトリナも笑みを浮かべる。それは、華やかでも可憐でもない、ただひたすらに純粋な、喜びを湛えた笑みで……。
「うん、リーナも……なんだかすごく幸せ。ね、ベルちゃん、またいつか……大人になったら来ましょう。一緒に、騎馬王国に。約束！」
楽しそうに、弾む声で、そんなことを言った。
「約束……」
ベルは……、一瞬、言葉を飲み込んだ。
約束……、また一緒に来る約束、また会う約束……。
幾度となく交わされるその約束が、ベルは苦手だった。
だって、それは、何度も破られたから……。

また会おうと言ってベルを送り出した人は死んでしまって……、
いつか行こうと言った場所に立てたのは、ベル一人だったから……。
いつ夢が終わってしまうかわからない。ならば、そんな約束をすべきじゃないと……、ベルはそう思っていたから。
でも……、
「うん。約束……」
ベルは、小さく頷いた。
それは、少なくはない勇気を振り絞ってのもの。もしかしたら、叶わないかもしれないけど……でも……、
「約束です。リーナちゃん。絶対にもう一度、来ましょう」
ベルは、決意を込めてそう言って、それから無邪気な笑みを浮かべるのだった。
「シュトリナさま、ベルさま、ミーアさまがお帰りになられました」
近衛が呼びに来たのをきっかけに、ベルは立ち上がった。
……この日の約束を二人が忘れることはなかった。

第百四十九話　ミーア姫、ついに馬シャンの真相にたどり着く！

「こちらです。ミーア姫殿下」
騎馬王国の者に案内されたのは、少し大きめの幕屋だった。
全体に艶やかな色の糸によって刺繍が施された布地は、明らかに、ほかの幕屋とは一線を画しているように見えた。
「ふむ……。素晴らしい。良い仕事ですわね」
ミーアは思わず感心しつつ、腕組みする。
「これは、白い馬の刺繍かしら？」
そう言いつつ、ミーアは後ろに立つ馬龍のほうを見た。が……、
「あら？　馬龍先輩？」
「ん？　ああ。そいつは騎馬王国の建国伝承を刺繍にしたものだな」
なにか、考え事でもしていたのか、その反応は鈍かった。
――ふむ……。馬龍先輩のこの反応、珍しいですわね……。もしや……！？
とそこで、ミーアはある可能性に気が付いた。それは……。
――馬龍先輩のお父さま……、実は怖い人なんじゃあ？
なにしろ、相手は騎馬王国の最大部族、林族の長である。相応の威厳と迫力を備えた人物に違いない……。
――そういえば、馬龍先輩、ディオンさんのことを見てもそれほど怯えてませんでしたわ！
かのディオン・アライアを前にして、震え上がらないものなどいない。常識である。
盗賊などという荒事をやってのける慧馬ですら、あの怯えようなのである。
――これは……相当なものを覚悟していかなければなりませんわね。
などと思いつつもミーアは逃げることはない。

そうなのだ、彼女の小心者（リトルチキンハート）の心も、いろいろな経験を経て成長した……、というわけではない。もちろん、違う。
なにせ、今回の彼女は傍観者！　完全なる部外者で無関係なのだ。
もし仮に相手が、なーんの関係もないミーアにまで牙を剥くようなヤバイ人であった場合……、その時にはミーアには心強い友人がついている。
ミーアのお友だちラフィーナは、そんな傍若無人に黙っている人ではない。
さながら獅子の威を借る子猫のごとく、穏やかな心のままミーアは幕屋に入った……のだが……。
「ああ、これは帝国の皇女殿下。遠いところをようこそおいでくださった。それに聖女殿も……、我が騎馬王国のために、わざわざご足労頂き申し訳ない」
静かな声でミーアたちを迎えたのは、予想外の風貌の人物だった。
なんというか、こう……。
――ずいぶんと優男ですわね。特に殺気も感じませんし、見上げるほどの巨躯でもなし。
拍子抜けするミーアを尻目に、男は穏やかな笑みを浮かべたまま、頭を下げる。その動作に合わせて、腰のあたりまで伸ばした黒髪がサラリと揺れた。美しく艶やかな髪に思わず、ミーアは見とれそうになる。
「お初にお目にかかる。林族の族長、林（リン）馬優（マーユン）だ」
その涼しげなその声は、一流の歌うたいのごとく……聞き惚れてしまいそうなほどに優雅なものだった。
「ご機嫌よう。わたくしはミーア・ルーナ・ティアムーン。帝国の皇女ですわ」
「おひさしぶりですね。馬優さま」
ミーアに続き、ラフィーナが親しげに声をかける。
聖女として様々な土地に赴かなければならないラフィーナである。おそらく、馬優とも顔見知りなのだろう。

ラフィーナと短い挨拶を交わした後、馬優は改めて、ミーアのほうに目を向けた。
「我が子、馬龍の求めに応じ、わざわざいらしていただいたこと、感謝いたします」
「たいしたことではございませんわ。馬龍先輩にはお世話になっておりますし。それに、もともと、貴国のバター……食材に興味がありまして……。立ち寄る予定でしたのよ？」
「さて……バターですか。失礼ながら、ご多忙な帝国の姫君が、わざわざそのためだけにいらっしゃるつもりであったと？　たかがバターのために？」
怪訝そうな顔をする馬優。それから、彼は、じっとミーアの目を見つめてきた。
深い知性をうかがわせる黒い瞳、真っ直ぐな視線を前にして、ミーアは……。
――これは……試されてますわね。
鋭く察する。眼力姫ミーアは、他人の眼力に敏感なのだ。
では、いったいなにを試されているのか？
――簡単なことですわ。騎馬王国のバターは、ただのバターではない……。とっても美味しいバター、特別なバターであると知っているか……、それを試されてるんですわ！　直接足を運ぶ価値のあるものだと、それがわかっているのか、試していますのね。この方、なかなか、できる！
ミーアは、侮りがたい相手を前に気を引き締めつつも、優雅な笑みを浮かべた。
「ええ……。騎馬王国のバターは大変美味しい。そのようなバターを生み出す騎馬王国もまた、特別な、そして大切な国と言えるでしょう。足を運ぶ価値は十分にあるのではないかしら？」
「……なるほど。噂に違わず聡明な方のようだ」
しばし、ミーアを見つめていた馬優は、深々と頷いた。
再び揺れる髪……その手入れの行き届いた髪に、ミーアの目が留

まる。
傾城の美女……、そんな言葉が東国にはあると聞くが、まさに、その言葉を思わせるような美しい髪だった。そして、ミーアは、その髪に……ちょっぴり親しみを覚えた！
「あの、ところで、つかぬことをお聞きしますが、馬優殿……。もしや、あなた、馬の模様が目印の洗髪薬を使っているのではないかしら？」
「おや。よくわかりましたね」
驚愕に目を見開いた馬優に、ミーアはちょっぴりドヤァ顔で、
「それは、もちろん……」
と、ここで、ミーア、気付く。後ろに立つアベルのこと……。
――あなたにもらったものを愛用してますわよ！　などと、わざわざ目の前で言うのは、いささか奥ゆかしさに欠けるかしら？
わざとらしくアベルの前で言うことを避けるため、ミーアはそっと、馬優に身を寄せてから、
「実は、わたくしも愛用しておりますの。とても良い洗髪薬ですわよね」
そう、声を潜めて馬優に言ってやる。と、またしても、馬優は驚いた顔をして、
「……なるほど。あなたは……、物事の表面にとらわれず、真理を見抜く目の持ち主のようだ」
それから、感心した様子で頷いた。
――はて？　真理を見抜く目……？
などと首を傾げかけたミーアであったが……、
――なるほど。たしかに、持っているかもしれませんわね。真理を見抜く目を……。
内心で深々と頷いた。謙遜したりはしない。なぜなら、ミーアは、馬優と話すことで、ついに馬シャンの真実に到達してしまったからである！
前々から疑問ではあったのだ。なぜ、容器に馬の絵が描かれてい

るのか？　洗髪薬に、その絵は合っていないのではないか？　と。
けれど、ようやく合点がいった。ミーアは深い納得感に満足しつつ……思う。
つまり、要するに、その理由は……！
――なるほど。騎馬王国の方たちが愛用しているものだから……。だから、彼らが喜ぶような絵をつけたわけですわね？
これである！　お客さんが喜ぶ絵をつける。なるほど、実に戦略的、とミーアは大いに感心した。
――中身とはかけ離れたものであったとしても、商品をたくさん売るためには、有効な手と言えるかもしれませんわね……ん？　ということは、もしやラフィーナさまの肖像画を付けた洗髪薬を売り出したら、ラフィーナさまのファンの方たちにすごく売れるんじゃ……？　ここは、帝国の財政改善のためにお願いして……。
などと、よからぬことを考えかけたところで……。
「洗髪薬といえば、聖女殿、以前、お父君から聖女殿の肖像画付きの洗髪薬を売り出す計画があると聞いていたが、あれは、どうなりましたか？」
「……さて、なんのことかしら？　私は、そんなもの知らないけれど、ふふふ」
ラフィーナは、山の清流のように澄んだ、澄み渡った……生き物が一匹もいない小川のような笑みを浮かべた。その笑みのままミーアのほうを見て、きょとりん、と可愛らしく首を傾げる。
「あら、どうかしたのかしら？　ミーアさん……。少し顔色が悪いみたいだけど……」
そのステキな獅子の笑みを前に子猫ミーアは……、
「イイエ？　ナンデモアリマセンワ」
尻尾を力なく体の下に収納しつつ、ぎこちない笑みを浮かべた。
かくして、和やかな雰囲気のまま、その会談は始まったのだった。

第百五十話　ベテラン伝令兵とホットミルク

「それで、君が、火の一族の……」
馬優の視線を受けて、慧馬は、顔をツーンっと背けた。
「あ、ああ。そうか。そうでしたわね。えーっと、慧馬さん……。彼女の名前は火　慧馬さんといいまして、騎馬王国の方と口を利きたくないのだと……そういうことでいいかしら？」
ミーアの問いかけに、慧馬は、うんむっと頷き、
「騎馬王国の者とは、死んでも口を利かない」
と、言った直後、不意に彼女は辺りを見回す。幕屋に招き入れられているのは、ミーアとラフィーナ、それにアベルとシュトリナ、ベルのみで……、慧馬が怖がるような人間は外で控えているのだが……。
しばし、考えた後、
「……騎馬王国の者とは、積極的には口を利きたくないな、と思っている」
――だいぶ、妥協しましたわね！
見えないディオンの殺気に怯えているらしい。そんな彼女を見て、ミーアは、面倒くせぇですわ……などと心の中で盛大にため息をついて……はいなかった！
そう、ミーアは思い出していたのだ。
自分が何者であるのかを……。
ミーア・ルーナ・ティアムーンとは何者か？　そう、伝令兵である。しかも、腕利きだ！
ミーアほどの腕利きともなれば、わざわざ戦場から勝利の報告を持ち帰るために、死ぬほどの長距離を走る、などということも必要ない。
その場で、シュシュっと視線を動かせばいい。するべきことは、

ただそれだけなのだ。
これほど楽な仕事があるだろうか？　これほど楽な仕事で、美味しいものにありつける、それで文句を言うなどということが許されるだろうか？
否、許されるわけがない。
――後で、美味しい美味しいミルクを頂けるわけですし、ここはきちんと働いているアピールが必要ですわね。ふむ、頑張りますわよ！
貴重なミルクを報酬でもらえることになっているのだ。だというのに、なにもせずに、あるいは手を抜いた仕事でそれをもらうなど……、ミーアの小心者の心臓が許さないのだ。
気まずさを感じずに、心から美味しく極上ミルクを味わうために、気合の入るミーアである。
まぁ、それはさておき……。
「理由は、説明するまでもないはずだ。お前たちがなにをしたのか、考えればわかるはず……」
と、そこまで言った慧馬は、ミーアのほうを見て、
「そうは、思わないか？　ミーア姫」
などと聞いてきた。
ミーアは、ふむ、っと頷いて、
「お話をしない正当な理由があるのではないか？　と言っておりますわ」
特に必要ないかもしれないが、なんとなく要約を加えてみた。
仕事をしている感を出すために、演出に余念のないミーアである。
「なるほど。だが、それは見解の違いというものだな。我々としては、君たちは、自分から国を出て行ったものだと思っている」
「なっ……」
っと、なにか言いたそうな顔をした慧馬だったが、すぐに黙り、ギリギリと歯ぎしりしつつ、ミーアのほうを見る。
――うーん……やっぱり、ちょっと面倒くさいですわね……。

ミーア、早くも挫折しかける。ミーアのやる気は、今や風前の灯だ！

そのやる気の炎が消えかけた……まさにその時……、

「失礼いたします。族長、お客さまにお飲み物をお持ちしました」

幕屋に、何人かの女性が入ってきて、ミーアたちの前に、陶器のカップを置いていった。

「ほう……これは……」

ほかほか、と湯気を立てる陶器の入れ物。その中に入った白い液体に、ミーアの小さな鼻がひくひくと動く。

「搾りたての羊の乳を温めたものだ。私が言うのもなんですが、搾りたてのものは極上です。どうぞ、味わってみてください」

馬優に勧められるがまま、ミーアは容器を手に取った。ふーふー、っと息を吹きかけ、冷ましてから、軽く一口。

カッと口の中に熱さが走るも、我慢。直後、舌の上に味の花が開いた。

「おお……、これは」

それは、実に心地よい甘み。一瞬、ハチミツのように濃密で、けれど、喉を通り抜けた瞬間に、スゥっととけて消える。潔いまでに、その後味はさわやか。

今まで味わったことのない極上の旨味に、ミーアは思わず、ほふぅっとため息。それから、もう一口。

「なるほど……、これが騎馬王国のミルクの味。実に濃厚……。かつ、コクのある風味……。舌の上で転がすと、仄かに甘みも感じますわ……」

そうして、ミーアは、そっと胸に手をやった。

「ああ……。まさか、ミルクにここまで心を動かされる日がこようとは……思ってもみませんでしたわ。素晴らしい……」

その感動（カロリー）がミーアの脳に活力を与える。

ゆっくりと動き出したミーアの脳は、このまま、二人に言い争いをさせることの不毛を悟り……。

「ところで、いったい火の一族との間になにがあったのか、お聞きしてもよろしいかしら？」
提案する。そもそも、なぜ、慧馬はここまで騎馬王国を嫌っているのか……。
それがわかれば、この面倒くさい状況を解消できるのではないか？　と。
「なるほど。そうですね。このような形であれ、巻き込んでしまったわけですし……お話ししておくのが礼儀というものでしょう……ああ、そうだ」
と、そこで、馬優が笑みを浮かべた。
「どうでしょう？　せっかくだから……、弦楽器（リュート）の調べに合わせて、聞いていただくという趣向は……」
「待て。親父殿。別に、そこで楽器を出す必要は……」
なぜか、渋い顔をした馬龍が止めようとするが……、
「なにを言っているんだ。ただ説明するのではつまらないだろう？　こうしてここに、林族一の歌うたいがいるのだから、おもてなしの意味でも聞いていただこうじゃないか」
馬優は、にこにこ明るい笑みを浮かべ、近くに置いてあった丸い弦楽器を手に取った。
「これは、我ら騎馬王国、十三部族の始まりの物語」
そうして、馬優は語りだした。
ポロロン、ポロロン、という切なげな弦楽器の音に合わせて。

第百五十一話　騎馬王国の歴史歌～ごくり……ごくり～

『それは、昔。遥か昔、我らが国の始まりの物語。
この地に住まう若き羊飼いの男、光龍（コウロン）は、ある日、神の使いたる女を、妻として迎えん』
馬優は、ポロン、ポロン、と弦を鳴らしながら歌う。
「歴史歌だ。俺たち騎馬王国の民は、文書の形で記録を残す文化がなかったから、こうして歌にして、一族の歴史を伝え残しているんだ」
馬龍の説明を聞きながら、ミーアは思い出す。
――ふむ。このあたりの話は以前、聞いたことがありますわ。この、光龍さんと結ばれたという神の使いが馬を連れていたことから、“騎馬”王国の歴史が始まった、とか、そんな話じゃなかったかしら？
もともと羊飼いであったものが、騎馬民族として変容したのは実にこの時であった……と、以前、馬龍から聞いたことがあったなぁ、と思い出す。
ミルクを飲みつつ、ミーアがウモーっと記憶を反芻している間に、歌は進んでいく。
『光龍より生まれし子ら、その数は十三。それが、我ら騎馬王国、十三部族の偉大なる父祖とならん。第一の子、風龍（フウロン）。林のごとき深き洞察と、風のごとく何物にもとらわれぬ思考で一族を導かん。第二の子……』
『林』のごとき深き洞察……、それが、おそらく林族の父祖であることは、察せられた。さらに、
『第三の子、星馬（せいま）は賢き知恵持つ子。草原を焦がす忌まわしき火さえ使いこなし、一族に繁栄をもたらさん』
――火すらも使いこなし……。火　星馬と言っていましたし、そ

れでは、これが火の一族の父祖。第三子でしたのね……。
どうやら、子どもたちには、それぞれ、その気質を表す言葉が充てられており、それが後の氏族の名となっていくらしい。
『やがて、光龍の命は尽きぬ。その齢、三百と六十。かの者、その愛する妻の眠る墓所に葬られん。かくて騎馬王国十三部族の新しき時代が始まらん』
光龍が生んだ十三人の子どもたちも、それぞれ、二百歳を超え、孫、ひ孫はおろか、その下の世代をも治める一族の族長となっていった。
「しかし、数百歳とは……、昔の人はずいぶんと長生きですのね」
「神聖典によれば、はじまりの人は千年にも及ぶ時を生きたと書かれているわ。当時と今の時の数え方が同じかどうか、議論の対象にはなっているみたいだけど……」
ラフィーナの囁く声に頷き返し、ミーアは馬優のほうに目を移した。
歌はいよいよ佳境に入り、問題の、火の一族との確執の部分に入っていた。
『第一の子、林の風龍は、かく言わん。我ら兄弟、ともに手を取り合いて、この祝福の地に住み続けん。この地にこそ、我らが幸福、満ち足りん、と。兄弟たち、みな賛同せり』
平原で平和に暮らしていた騎馬王国の民。それはそうだろう。すべてが血の繋がった兄弟、外からの血ももちろん入ってはいるだろうが、元をたどればすべてが、一人の父と母へと繋がる。
ゆえに、いさかいは起ころうとも、それは深刻なものにまでは発展しない。
そう思われたのだが……。
べん、っと絃を叩くように弾き始める馬優。空気が震え、緊張感が高まる。
ミーアは物言わぬまま……、注ぎ足してもらったミルクをこくり、と飲んだ。甘くて、とても美味しかった！

『されど、ただ一人、それに否を申す者、現れぬ。火の星馬、第一の子、風龍に申さん。我は、より高みを目指すことを欲すと。燃え立つ火は、風を超え、星に手を伸ばすことを欲すと。邪なるものに囚われし、かの者、さらに続けん。我らが敵、狼を従える術を我は学ばん。狼を従え、その力をもちて、この地に覇を唱えん、と』

――ふむ……、狼を従える術……。なにやら、きな臭いものがありますわね……。こう……、うちのアホなご先祖さまに近いものがあるような気がしますわ……。

ミーアは聞いていて、なんとなぁく嫌な予感がした。

「地を這うモノの書に『国崩し』があったように、狼を従えるやり方が書かれていても不思議ではない……。そんな気がするわね」

どうやら、ラフィーナも同じことを思ったのか、ミーアのほうに目を向けて、真剣な顔で言った。

「リーナが一緒にいる時、狼使いがそういうものを読んでいたことはなかったけれど……、あっても不思議ではないと思います。あの狼たちは、とても賢いから戦いにも使えるでしょうけど……、神としてあがめさせるにも、良い存在かもしれません」

シュトリナが、生真面目な顔で頷く。

中央正教会によって敷かれた統一された秩序、それを破壊するために、中央正教会とは別の神を創作し、その神を信仰させることによって、秩序を破壊しようとする発想。

通常であれば、それは、新たな秩序の形成でしかない。邪神を信仰する者には、その邪神の教えという……仮に歪んではいても新たな秩序が存在するからだ。

けれど、秩序を破壊するため、偽物の神を作ったのであれば、話は変わってくる。

そこには確固たる神学は存在しない。もともとが偽物として作られているのだから、信者の数が集まったところで、種明かし、とばかりに、その偽物性を明かしてやれば良いのだ。

自分たちが中央正教会を離れ、すがった新しい教えがまったく無

価値の創作物であると知った時……、はたして人はどのような混沌に落とし込まれるものか……？
それは、狼を戦に使うよりも、はるかに忌まわしい発想法だった。
そして、実にリアリティのある想像だった。
こくり……、と誰かが喉を鳴らす音が聞こえた。
緊張のあまりベルが……あのベルまでもが！　生唾を飲み込んだのだ。
ベルだけではない。誰もが、その危険性に気付き、強張った顔をしていた。

ごくり……、ごくり、と、再び誰かが喉を鳴らす音が聞こえた。
……ミーアが……、ほかならぬミーアが！　お替りをもらうべく、残っていたホットミルクを飲みほした音だった……。

第百五十一話　騎馬王国の歴史歌～ごくり……ごくり～（後書き）

ちょっぴり小話。
ちなみに聖書に登場する人類最初の人、アダムの寿命は９００歳ちょっと。彼から大洪水で有名なノアまでは軒並み超長寿ですが、ノア以降は寿命がググッと短くなります。
そのことからノアの大洪水で降ってくるまでは、地球の大気圏には水の層があって、紫外線やら有害な宇宙線を防いでいたから長命だったとする説があったりします。
天地創造の際に「大空の下にある水と大空の上にある水」とを神が分けた、という記述が出てくるため、そんな解釈が生まれたわけですね。
そんなことを思い浮かべつつ、書いております。

第百五十二話　ミーア姫、怒りの介入！

「さて、もう少し聞いていただきたいところだけど、此度はこのぐらいで構わないだろうか。ここから先は各部族の歴史になっていくからね」

そう言って、馬優は、弦楽器を脇に置いた。

それから……、一つ深呼吸をして……彼は、

「それで……どうだったかな？　俺の歌は……？」

にこやかに感想を求めてきた！

けれど、返ってきたのは沈黙だった。

かすかに感じた混沌の蛇のきな臭い残り香に困惑する一同と、かすかに感じる絶品のミルクの芳しい残り香を満喫するミーア。

どちらも口を開くのを躊躇っていると……、

「ふむ……。親父殿がお客人に歌を聴かせたがるのを困ったものだと思っていたが、時には役に立つものだな」

「……いや、息子よ。お前には聞いてない」

息子のつれない態度に、ちょっぴり寂しげな馬優。そんな彼を励ますように、ベルが口を開いた。

「騎馬王国の歴史を知ることができて、とても楽しかったです！　歴史のお勉強はこんな風に、歌にして聞かせてもらえると眠くならなくっていいなと思いました。弦楽器の音色も歌声も、とっても綺麗でした！」

それは……まぁ、若干、アレな感じのする感想ではあったのだが……、

「そうか。それは良かった！　なんなら、今度、時間のある時にでもまた聞きにくるといい」

ニッコニコと、笑みを浮かべた馬優が上機嫌に言った。嬉しかったらしい。

一方、そんなベルを見ていたシュトリナは、
「……歌……。そっか……。作詞作曲の習い事をしたいとお父さまにお願いすれば……うん」
などと、なにやらブツブツつぶやいていたが……。まぁ、それはさておき、
「助かりましたわ。馬優殿。おかげさまで、わかりやすく騎馬王国の事情を理解することができましたわ」
無難に感想を述べてから、ミーアは改めて聞いた歌について振り返る。
それは、天敵である狼を掌中におさめ、覇を唱えんと訴えた野心家の物語。
血のつながった兄弟たちからの賛同を得られず、失意のうちに、父祖の地を去った男、火の星馬。はたして、彼と彼の一族はその後、どのような運命を辿ったのか……。
っと、ミーアが腕組みして考え込んでいると……、
「ずいぶんと都合よくまとめられた歌だ。卑怯者の騎馬王国には相応しいな」
慧馬が吐き捨てるように言った。
「ほう。ならば、火の一族では、どう伝えられているのかな？」
穏やかな笑みを浮かべ、慧馬のほうを見る馬優。それは、反抗期の娘を前にした父親のような、ちょっぴり困った様子だった。
「決まっている。騎馬王国に残った者たちは、みな、今あるもののみに拘泥する臆病者たちと伝えられている。変化を恐れる怠惰な者たちだと」
慧馬は馬優を睨みつけ、それから、馬龍にも鋭い視線を送る。
「結果がすべてを語っているではないか。今の騎馬王国を見るがいい。未だなにも変わることができず、狼から、今持っている財を守ることに精一杯ではないか。サンクランドはおろか、レムノ王国にまで遅れを取る始末だ」
その言葉に、レムノ王国の王子たるアベルは、思わずといった様

子で苦笑した。
「あの時、狼の力を手中におさめていれば、それをもって大陸に覇を唱えることだってできたはず。サンクランドに劣らない国にだってなれていたはずなのに、禁忌だなんだと変化を恐れ、戦うことを恐れ、力を恐れ……、それゆえの今の立場ではないか！」
と、そこで、ハッとした顔で、慧馬はミーアのほうを見て、
「そう思うだろう？　ミーア姫」
話を振ってきた。が、馬優はミーアが口を開くのを待たずして言った。
「君は、狼を率いて、レムノやサンクランドと戦端を開けばよかったとでもいうつもりかい？」
「我らは、誇り高き戦士の末裔だ。財である羊を、家族を、戦い守ってきたのだ。必要があれば力を振るう。仲間のため、一族のために力を振るうのは当然のこと。まして、狼の力は強力だ。戦い慣れているお前たちだってわかるはずだ。狼の力を得ることができるというのならば、それを拒む理由はなかった。お前たち、騎馬王国の民は、戦を恐れ、力を恐れ、変化を恐れた。それは臆病者のすることだ」
「変わることは、必ずしも良いことではない。悪しき方向に向かおうとした時、立ち止まることもまた大切だ」
穏やかな声で言う馬優を、慧馬は鼻で笑い飛ばした。
「ふん、林のごとく動かず、風に吹かれて揺れるばかり。愚鈍な風龍の末裔に相応しい言葉だな」
「力を持つことが正しいとは限らない。現に、力をもって食糧を奪おうとした君は、こうして我々の手に落ちている。大きな力を使う術は学べても、それを使ってなにをなすかまでは考えられない。その愚かさで大きな力を持つのは破滅を招くだけだろう。火の使い方を知ったことで増長し、星に手を伸ばした、浅慮なる星馬の末裔よ」
キッと馬優を睨みつけ、慧馬が口を開こうとした……、まさにその時だった。

「やれやれ……、そのような詮なきことを、いつまで議論しているつもりかしら？」
不意に、そんな声が聞こえてきた。
「なんだと！？」
思わず声を荒げる慧馬は、直後に、見た！
ミーアが……、盗賊として現れた彼女に、クッキーを分け与えた、温和な、帝国の叡智が……、怒りに震える姿を。
「そのように……実りのない議論をいつまですれば気が済むのかしら……、と問うているのですわ」
ミーアは、慧馬の顔を見つめ、馬優の顔を見つめてから……言った。
「すでに終わってしまったことを、遥か昔に過ぎ去った出来事を、あなたたちが言い争ってなにになるというのですの？」
小さく首を振りながら……、
「それは、すでに終わった出来事ではありませんの？」
呆れた様子で、ミーアは言うのだった。

第百五十二話　ミーア姫、怒りの介入！（後書き）

ミーアの真意はいかに？

第百五十三話　ミーア姫、舌打ちする

――この話の流れ……、いささか危険ですわね。

ミーアは、慧馬と馬優の間で交わされる会話の危険性を敏感に察知していた。

そうなのだ。彼らの間で交わされていた会話は、ミーアにとって甚だ不都合な……実によろしくない会話だったのだ。

――ご先祖さま同士の兄弟喧嘩の影響が現代にまで波及する……、そのような事実を認めてはいけませんわ。

過去のご先祖のやらかしに対し、現在の人間が責任を取らなければならない状況……、それは、あるものを彷彿とさせた。

そう……ほかならぬミーアのご先祖さまである、初代皇帝である。

しかも、慧馬のご先祖さまである星馬は、蛇の誘惑を受けて「狼を使いだしたらどうか？」などと言い出した疑いさえある。状況としては、蛇にそそのかされて、ティアムーン帝国を作ってしまった初代皇帝と似ている。

もちろん、実際にどうだったかはわからないが、それは大した問題ではない。

――初代皇帝を想起させるというだけで、問題ですわ。

ミーアとしては、初代皇帝のことは、なかったことにしたい過去なのだ。闇に葬りたい歴史……できれば日の目を見ず、このまま埋めてしまいたいものなのだ。

というか、イエロームーン家でのことで、そうしたはずだったのだが……。

――まったく、我がご先祖さまながら、面倒なことをしてくれたものですわ……。

愚痴りつつも、ミーアは懸命に頭を働かせる。今のミーアの脳みそはミルクによって活性化していた。ぎゅんぎゅんと思考力を回転

させた結果、素早く考えをまとめ、ミーアは頷く。
――ともかく、必要なことは「今」に目を向けることですわ！
過去の問題から目を逸らさせ、現在の問題に話を移す必要があった。それも「過去のご先祖さまのやらかしには定評がある、帝国皇女ミーア姫殿下のお考えは？」などと話を振られる前にである。
そうして、ミーアは静かに口を開き……介入を開始する！
「やれやれ……、そのような詮なきことを、いつまで議論しているつもりかしら？」
あえて、馬鹿にするような口調で言う。過去の出来事を振り返るなんて、馬鹿なことですよ？　その議論を広げていっても、何の意味もない、馬鹿らしいですよ？　と、言外に感情を乗せる。
怒って振り返った慧馬を、ミーアはキッと見返して、
「そのように……実りのない議論をいつまですれば気が済むのかしら……、と問うているのですわ」
長く議論を続けるほど、自分のところに累が及ぶ危険性がある。ならば、すぐに議論を打ち切るべきだ！　と心を込めて言う。ついでにアホなご先祖さまへの怒りも乗せておく。
「すでに終わってしまったことを、遥か昔に過ぎ去った出来事を、あなたたちが言い争ってなにになるというのですの？」
それは、すでに終わったことなのだと……だから言い争ってもなんの意味もないのだと、ミーアは、強調する。すでに終わったことなのだと、強調に強調を重ねて強調する！
その上で、実りのある「今」すべき話を、提示してやる。
そう、論点のすり替えである。すなわち……、
「慧馬さん、火の一族は、食糧難に陥っているということではなかったかしら？」
目下のところ、一番の問題はそれだ。
そのことさえ解決すれば、慧馬は略奪行為をしないわけだし、他国と騎馬王国の間をギクシャクさせることもない。
であれば、とりあえず、難しーい過去の問題は置いておいて……、

対症療法的に今の問題の解決を優先させたらどうか？　それこそが、真に意味あることのはず、とミーアは訴えていく！

馬龍がどういうつもりで自身の父親と慧馬とを引き合わせたのか、なんてことは知ったこっちゃなかった。ともかく、触れられたくない問題から目を逸らすことこそが肝要。

ミーアは拳をググっと握りしめて訴える！

「今まさに、空腹で苦しんでいる子どもがいる。力なき老人がいる。だというのに、このように時間を浪費してよいはずがありませんわ」

心から、そう思う。

空腹とは、急げる限り急いで解決すべき問題なのだ。お腹が空いているということが、どれほどつらいことか、ミーアはよく知っている。それを一番に解決すべきである、というのは誰も反対しえないことだろう。

それに、腹が減っていてはイライラして、まとまるものもまとまらなくなるものなのだ。

話し合いは、たっぷり食事を食べてからすべきなのだ。

しっかりと美味しいキノコ鍋をつついた後、お腹も心も満ち足りた状態になれば、人は眠くなる。少なくともミーアは眠くなる。

そして、眠いから難しい話とか、過去のしがらみとか、どうでもよくなってしまうものなのだ。

あまり頭を働かせたくないから、こだわりを捨てて、最も効率的な思考法をするものなのである。

これこそが、ミーアの外交戦術『相手を満腹にし、眠たくして、牛にしてしまうと、たいていのことは許してもらえる』の計、略して牛許（ぎゅうほ）戦術である。

……ごく一部の人間にしか効果はないのだが、ごく一部の人間には深々と突き刺さる戦術である。

具体的には、ミーアとかベルとか慧馬とかにはよく刺さるなの戦術である。

「親父殿……、ミーア嬢ちゃんの言うとおりだ。もう、いいんじゃ

ないか？」
　じっと黙って聞いていた馬龍がここで声を上げた。
「いい、とは、どういう意味かな？　馬龍」
「いつまでも過去に囚われ続けるのは愚かなこと……。もう、そのしがらみから抜け出してもいいんじゃないか、ってことだよ」
　馬龍が乗ってきた！
　まさか、彼が乗ってくるとは思っていなかったミーアであるのだが……、この程度の想定外で立ち止まりはしない。むしろ、馬龍の作った流れにさらに乗る！　ミーアの、海月のように柔軟な思考力は、何物にもとらわれず、流れていくのだ！
「食糧難は不幸なこと。餓え乾く民がいるのは、上に立つ者として心を痛めるべき事態ですわ……。されど、それをきっかけとして、別れた民が、また再び助け合えるというのならば、それは悪いことばかりは言えないのではないかしら？」
　いずれにせよ、火の一族の食糧はどこかから捻出しなければならない。
　なぜならミーアは知っている。飢饉は、疫病の温床となること。そして、疫病には国境が存在しないということ……。
　ゆえに、火の一族を飢饉から救うのは、既定路線と言える。とはいえ、帝国から送ろうにも、彼らがどこにいるのかわからない現状、輸送費などが気にかかる。もしも騎馬王国で面倒を見てもらえるのであれば、それに越したことはない。
　ここは、騎馬王国が火の一族を助けるという形に持っていけるのがベスト！
　ということで、俄然、波乗りに気合を入れるミーアである。
「俺はずっと思っていたんだ。火の一族のこと……。もしも、血が絶えることなく、繋がっていたならば、その時には和解の道を探るべきなんじゃないかってな……。今がその機会なんじゃないのか？」
　――おお、さすがは馬龍先輩ですわ！　これは想定外に上手くいきそうですわ！

などと、心の中で快哉を上げるミーアなのだが……。
「そちらがどう言おうと構わないが、我らが易々とそれを受け入れるとは思わないことだ」
まるで、冷や水を浴びせるような声。
むっすーっとした顔で、そんなことを言う慧馬に、ミーアは、ちぃっ！　と心の中で舌打ち一つ。
それから、改めて慧馬を説得すべく……理屈を組み立て始めた！

第百五十三話　ミーア姫、舌打ちする（後書き）

一年間が早かったです……。
来年もよろしくお願いいたします。

第百五十四話　他愛もない……

慧馬を上手く言いくるめる手段はないものか……。
刹那の黙考の末、帝国の叡智が導き出した答えは！
「慧馬さん……、わたくしがあげたクッキー、美味しかったですわよね？」
これである。
ミーアは、的確に相手の弱点を見抜いていたのだ。
――ふふん、慧馬さんは、クッキーで口を塞げば何も言えなくなるタイプと見ましたわ。うふふ、ベルと同じですわね。実に他愛もないことですわ。ああ、このミルク、とても美味しい。ほんとに、これ一杯で頑張ってみようという気になりますわね。
などと、実になんとも他愛もないミーアである。
「あれを、また、食べたいとは思いませんの？　あの、濃厚な甘みが素敵な、サクサクの、美味しい、美味しいクッキーを……」
そう問いかけると、慧馬の喉がこくり、と鳴った。唇の端に、ちょっぴりよだれが見えたことに、ミーアは手応えを感じる。あと一押し！
「あの、美味しいクッキーを、みなで食べたいとは思いませんの？」
ミーアは、誕生祭のことを思い出しながら、言った。
美味しいものを、みんなで楽しく食べること……、それはなによりも幸せな時間である。その幸福感は、ちょっとした意地など簡単に溶かしてしまうはず……。
ミーアは確信をもって言った。
「あれを、みなで楽しく食べる道が今、目の前にありますのよ？」
「あ、あのぐらいのクッキー……、我々、略奪隊がなんとかすれば……」
「なんとか、なりますの？　なんとかなったとしても、いつまで、

それを続けるつもりですの？　慧馬さん、あなたが誇り高き勇士であることは理解しましたわ。ご先祖のことを尊敬していることも感じましたわ。けれど……、安易に武力に頼ることは賢明だとは思いませんわ」

武力による略奪が選択の一つであることはミーアも認めるところではあった。けれど、より楽に食糧を得る手段があるというのなら、そちらを選ぶべきではないか？

より早く、民の腹を満たすことができるのならば、そちらのほうが良いのではないか？　と、ミーアは訴えかける。さらに、

「鍛えた兵を失うことは、その国にとっての損失になる。君の一族でも、それは変わらないんじゃないか？」

横から、アベルが援軍を出してくれた。

金剛歩兵団を持つ、レムノ王国は知っている。

優秀な兵士とは、そう簡単にすり減らしてよいものではないのだ。その育成には金がかかる。文字通り、黄金の価値を持つ兵士というのが存在するのだ。

そして、火の一族の精兵にとっても、それは、例外ではない。

「略奪がいつも、いつまでも上手くいくとは限らない。サンクランドの守備兵は優秀だし、我がレムノ王国も同様。仮にヴェールガ公国の村を襲ったとするなら、それこそ、他のいくつもの国を敵に回すことになる。それは、あまり得策ではない」

アベルの言葉に、慧馬は言葉を飲み込んだ。

「平和裏に問題を解決できる。一族の者を危険に晒さずに、食糧のことを解決できるかもしれない。とするならば、それを選ぶことが正しい選択なんじゃないかしら？」

――見事なものだな……、帝国のミーア姫は。

馬優は、火族の少女の説得にかかるミーアを見て、思わず舌を巻いていた。

もともと、息子である馬龍から、ある程度のひととなりを聞いて

はいたのだ。
馬への造詣が深く、真理を見通す目を持っている……。
馬のことを、ただの家畜ではなく、戦争の道具でもなく、自らを自由へと解き放ってくれるものと称した、と……。そう聞かされた時には、新鮮な驚きを覚えたものだった。
なぜなら、それは馬優の父が、よく口にしていた言葉だったからだ。
だから、実のところ会うのを楽しみにしていたのだが……。
――この時期に、騎馬王国に来ること自体が不自然。バターのために、わざわざ姫が足を運ぶなど、それこそ、あり得ぬことだ。
あくまでも、バターのためと言い張るのは、騎馬王国の主権を尊重してのことだろうか。
火の一族の問題は騎馬王国が解決すべきこと。そこに口を出しすぎれば、誇りを傷つけることになるから、と、配慮して、そう言ったに違いない。
さらに、ミーアの気取らないところも、馬優を驚かせた。
――まさか、馬用の洗髪薬を愛用しているとは……。
たしかに、馬の毛は人よりも繊細。ゆえに、より質の良い洗髪薬が使われている。そのことを知っている者は自分用に使うこともある。
けれど、馬を人と同程度に大切にする騎馬王国ならばいざ知らず、他国の、それも姫が、まさか、馬用のものを使うとは……。
――表面上のことにとらわれず、中身の質という真理を見抜く。なにものにもとらわれぬ自由な思考、それこそが、帝国の叡智か。
その帝国の叡智、今まさに、甘い菓子によって火族の少女を篭絡し、その勢いそのままに馬優に問いかけてきた。
「馬優殿。騎馬王国としては、この問題をどう解決するおつもりですの？」
「どう……とは？」
聞き返してはみたものの、馬優自身、よくわかっていた。

火の一族のことは、騎馬王国がずっと解決せずに放置してきた問題だ。
おそらくティアムーン帝国は、その気になれば簡単に、火の一族を受け入れることができる。ミーアの一声で、すべてを解決に導くことができるのだろう。
だが……、彼女はそれでよしとはしないのだ。
血の繋がった、祖先を同じくする者をこのまま見捨ててもいいのか？
過去の誤りに縛られて、今の判断をも誤ってもいいのか？
少しだけ、困った笑みを浮かべるミーア。その、澄み渡った瞳が、そう問いかけているように感じた。

第百五十四話　他愛もない……（後書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いいたします。

第百五十五話　ミーア姫、〇〇〇を飲んで状況を見守る！

「……あのクッキーを里のみんなで……。ぐ、う、だが……。うぐぐ……」

などと、両手で頭を抱えつつ、悶えている慧馬。

その様子を見て、ミーアは勝利を確信する。

――ふふん、これは、オチるのも時間の問題ですわね。

どうやらこちらは大丈夫そうだ、と、今度は馬龍たちのほうに目を向ける。

そこには、息子の言葉に静かに耳を傾ける馬優の姿があった。じっと、その真意を測るようにして、馬龍を見つめるその顔に、ミーアは見覚えがあった。

――よく、クソメガネがああいう顔してましたっけ……。

自分では最善の答えがわかってはいるものの、あえてそれを口に出さず、ミーアが考えるのを待って……。それで、ミーアが頑張って頑張って考え出した意見に、容赦のないダメ出しをする。

それはクソメガネ・ルードヴィッヒの常套手段だった。

――あの時はずいぶん腹が立ちましたけれど……、あれはわたくしの成長を促してのものだったのでしょうね。うん、あの時は腹が立ちましたけど、今となってはありがたい……。いいえ、違いますわね。ありがたいはありがたいけれど、やっぱり腹が立つことに変わりはありませんわ！

とりあえず、頭の中のクソメガネに、二、三発ヘナチョコキックをお見舞いしてから、改めてミーアは思った。

――ともあれ、あの様子ですと、馬優さんは、別に火の一族を助けることに反対ではありませんわね。

過去のルードヴィッヒと重ねて、そんなことを思う。

若者の成長を促すため、あえて悪役を買って出たり、反対意見を

言わせることで考えを整理させたり、あるいは、当人の意思を確認しようとしたり……。そんな狙いを持った言動。
馬優の態度からは、なにかを諭すような、大人の余裕が感じられた。
これならば、放っておいても上手く問題が片付くのではないだろうか。
――あと、残る問題は蛇の関係者ですわね……。あの狼使い、おそらくは慧馬さんの知り合いでもあるのでしょうけど……。聞いたところで素直に話してくれるかしら……？
ミーア、じっと慧馬の顔を観察した後……、
――ふむ、案外、簡単に話してくれそうですわ！　クッキー十枚ぐらい積めば、なんだかんだで話してくれそうですわ！
そう結論付けた！　同類に対するミーアの観察眼は、比較的鋭いのだ。
ともあれ、それを聞くタイミングは、少なくとも今ではないだろう。さて、どうやって話を振ろうかしら……、などとミーアが考えている間にも、話は進んでいく。
「そうだな。火の一族を助けるのに、私のほうで異存はない」
そう、穏やかな顔で頷く馬優であったが、
「とはいえ、過去のしがらみというのは、そう簡単には整理できないもの。和解するのは、そう簡単ではない。そうだよね、慧馬嬢？」
「ん？　あ、お、うむ……。そうだ。もちろんだ、当然だ。我はクッキーなどに釣られたりはしない」
キリッとした顔で慧馬が言った。それを見て、ミーアはちょっぴり微笑ましい気持ちになった。
――うふふ、慧馬さん、自己認識に甘さがございますわね。ご自分が食べ物にものすごく弱いことに気付いていないだなんて。まだまだですわ。まぁ、人は自分に対する評価が甘くなるものですし、仕方ありませんわね。
同類に対するミーアの観察眼は、比較的鋭いのだ！

「こちらとしても狼を使うが如き呪われたやり方は看過できない。きっと火の一族の処遇については意見が割れることだろう……が、問題の緊急性を考えると、のんびりしているわけにもいかない。そこで慧馬嬢には火族の場所まで案内してもらいたい。我が林族から、早急に食糧を送り、当面はそれでしのいでもらおう。その間に、私が族長たちを集めて話をつけよう」

その言葉に、慧馬は目をむいた。

「馬鹿な。我らが隠れ里の場所をお前たちに教えろというのか？　そんなことできるはずがないではないか」

――ああ、なるほど。それは確かに警戒しますわよね。慧馬さんの中では騎馬王国は仇敵のはずですし……。ふむ……。馬優さんは、どうするつもりかしら……？

ミーアが固唾……ではなく、お替りホットミルクを飲んで見守っていると……。

「わかっている。だから、どこか途中の地点まで食糧を運んで……」

「馬優殿、少しよろしいかしら？」

馬優の提案の言葉を遮って、声を上げる者がいた。

涼やかな微笑みを浮かべる少女、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガが、静かに手を挙げた。

「馬優殿、少しよろしいかしら？」

ラフィーナは、そっと馬優に視線を送り、それから周りを見回してから、静かに口を開いた。

「此度の件、いろいろな過去があったとはいえ、無辜の民が苦しんでいることには、心が痛みます。我らヴェールガ公国としても、これを黙って見過ごすわけにはまいりません」

凛とした声で、告げる。

それは聖女の言葉。倫理観に則った、文句のつけようのない気遣いの言葉。

「どうでしょうか？　その食糧を運ぶという件、私にも協力させて

いただけないかしら？」
「協力……、というと？」
「そうですね、具体的に言えば食糧を輸送する者たちに、同行したく思っております」
ラフィーナは静かに微笑んで、そう提案した。
実のところ……、この時点でヴェールガ公国が貢献できることは、あまりない。
本国に連絡し、食糧を送ろうにも時間がかかる……。
この場合、最も迅速に食糧を送る方法は、林族の者たちの手によって火一族の隠れ里に運ぶか、あるいは馬優が提案しようとしていた、途中の地点まで運び、そこからは慧馬たち自身が運ぶか、のどちらかだ。
そして、自分たちの里の場所を知られたくないと慧馬が考えている以上、馬優の提案が最も現実的といえるのだが……。
その馬優の提案をあえて遮り、ラフィーナは提案する。
自身の同行……という形の協力を。すなわち、
「私の見ている前で、火の一族を害する……、そのような信義に反することは、しないでしょう？」
つまり、騎馬王国と火一族という当事者だけでなく、ヴェールガ公国が見届け人として関わろうというのである。第三者の目が入ることで、騎馬王国の者たちが非道を行う可能性を排除できると、ラフィーナは言うのだ。だが……。
「茶番だな。騎馬王国とヴェールガ、いや、その馬優という男とお前とが口裏を合わせれば、どうとでもなるだろうが……」
鼻で笑う慧馬に、ラフィーナもまた涼しげな笑みを返す。
「それをすれば、ヴェールガの聖女の名は……、そして、我ら神聖ヴェールガ公国の名は地に堕ちるでしょう。その失態を利用する術を、あなたはご存知なのではないかしら？」
探るように、上目遣いになりながら、ラフィーナは言った。それを見た慧馬は、実に嫌そうな顔をして……。

「我は、そんなやり方は知らない。でも、なるほど……、知っていそうな者なら心当たりがあるな」
苦々しげにそうつぶやいてから、慧馬は黙り込んでしまった。
そんな慧馬を観察しつつ、ラフィーナは首を傾げていた。
――やっぱり、慧馬さん自身は蛇ではないのかしら？　でも、確実に、蛇の関係者ではあるはずよね……。
ラフィーナの提案は、もちろん、純粋なる善意によるものではなかった。
その目的は混沌の蛇に対する調べを進めるためである。せっかく掴みかけた蛇の尻尾をみすみす放すようなことがあってはならない。
さらに……、
「私の護衛として、私の管轄下で林族の方たちには動いてもらうことを要請いたします」
必然的に、そういう話になる。
聖女ラフィーナの護衛は、ヴェールガ本国ではなく、それぞれの国の依頼を受けた兵たちが行う……。その慣習に従えば、林族の戦士たちが、ラフィーナの護衛を務めることになる。
今回の問題、騎馬王国の介入なくして解決することは難しいとラフィーナは考えていた。
遅かれ早かれ、双方は顔を合わせ、互いに交渉する必要がある。けれど、慧馬の様子を見る限り、不測の事態が起こる可能性は低くはない。
そんな時、双方とは立場を異にする自分がその場にいることで、争いを止めることができるかもしれない。
――もしも、混沌の蛇に巻き込まれただけの人がいたとしたら……、それは被害者ということになる。さらなる争いによって、そういう方たちが傷つくのは避けたいし……。それに、蛇がなにか邪魔をしてきた時のために、誰かが行く必要はあるわ。
などと思っていたところで、
「ラフィーナさま……。ぜひ、ボク……いえ、私も同行させていた

だきたい」
横合いからアベル・レムノが名乗りを上げた。

第百五十五話　ミーア姫、〇〇〇を飲んで状況を見守る！（後書き）

カルシウムは大事ですよね？

第百五十六話　わがままで小心者なお姫さまの選択

――え？　え？　アベル……ど、どういうことですの？

突然のアベルの発言に、ミーアは大いに戸惑った。

『さぁて、これにて一件落着ですわ。あとは、例の醍醐羊の究極に美味しいミルクをいただいて、あわよくば、馬優さんと乳製品の取引の話を取り付けて、帰るだけですわね！』

などと油断の極致にいたミーアだったから、アベルの行動は想定外もいいところだったのだ。

いったいなぜ、と訝しむミーアであったが、直後に気付く。

アベルが、どこか、思いつめたような顔をしているということに。

――そういえば、わたくしが水浴びから戻ってきてから、少し元気がなかったような気がしますわね。もともと、馬龍先輩となにか話があるということでしたけれど、なにか言われたのかしら……。気になりますわね。ふむ……。

「それでは、ラフィーナさま、それにアベル殿下も少し打ち合わせをしましょう。それに、馬龍も、部族の中から誰を連れていくか選別を進めてくれ。明日には出てもらうぞ」

「おい、待て。我はまだ、この話を引き受けるとは……」

などと、慧馬はもそもそ言っているが……、恐らくはあのまま流されていくことだろう。

――そもそも慧馬さん、直接には話をしないみたいに言ってましたけど、今ではごく普通に話してますし……。実にチョロい……。うん……、きっとこのまま丸め込まれてしまいますわね。

となれば、ミーアはここでお役御免だった。

歓迎の宴の準備が整うまでの時間、のんびりしていて良いと言われたミーアは、ベルとシュトリナとともに幕屋を後にした。

――ふむ……まぁ、気にはなりますけれど……、わたくしには関

係のないことですし……。
　アベルの様子が微妙に気になり、後ろ髪引かれる思いではあったものの、もはやあの場所にはミーアの役割はなく。というか、むしろ、これ以上あの場に居座ったら、面倒なことに巻き込まれそうな感がふつふつとしていたわけで……。
「気になりますけれど、仕方ありませんわ。ここは気持ちを切り替えて、のんびり過ごしましょうか」
　ということで「さぁて、とりあえず、羊でも数えるかー」などと、ボケーっと過ごそうとしていたミーアだったのだが……。
「羊が一匹、羊が二匹……」
　ボケーっと数え始めてはみたものの……、
「千二百三……。ああ、もう、駄目ですわ……！　アベルのことが気になりすぎて、まったくもって集中できませんわ！」
　……本当にそうだろうか？
　ともあれ、羊を数えるモードから復旧したミーアは、大きく一つ伸びをする。
　直後……、なにやら、首筋に生暖かい空気を感じる。
「……んっ？」
　不思議に思い振り返ったミーア。その視界に、大きな鼻先が映り込んだ！　むぐむぐ、っと動き、今まさに、くしゃみをしそうになっていたのは、例の荒嵐もどきの馬で……。
　――ああ……、この馬って、やっぱり荒嵐の血族なのかしら？　よく似てま……ふひゃああ！
　逃げようとした直後、ぶえええっくしょい！　という轟音。咄嗟に身構えるミーアであったが……不思議なことに、風も粘り気のある液体も……、特にミーアにかかることはなかった。
「……はぇ？」
　恐る恐る顔を上げたミーアは、見た！
　自身と荒嵐もどきとの間にのっそりと立つ一頭の馬の姿を。それは、ミーアを乗せて盗賊から逃げた（……逃げた？）あの馬だった。

あの、油断しきったミーアのような、ぽげーっとした馬だったのだ。
「あら……あなたは、近衛隊の……もしや、あなた、わたくしを守ってくれましたの？」
熟練の護衛騎士よろしく、凛々しくその身を呈して姫を守った馬だったが、相変わらずその表情はぽけーっとしたままだった。
のっそりと荒嵐もどきのほうに顔を向け……、見つめあうことしばし……、ぶふぅっとため息を吐いて荒嵐もどきが去っていくのを見送ってから、ぽげーっとミーアのほうに顔を向けた。
「あなた……ずいぶんと落ち着いておりますのね」
話しかけると、馬は、ぽけーっとした瞳でミーアを見つめてから、ぶぅふっと鼻を鳴らした。それから、のっそりと歩いて行ってしまった。
向かう先は、食事中の林族の馬たちの方向だった。もそもそと草をはむ馬たちに交じり、自身のお腹も満たそうということなのだろう。
「はて……。近衛隊の馬って、どこかにつながれているものではないのかしら……。あんな風に、林族の馬に交じって……、ふふ、実に自由な奴ですわ……。面白いですわね」
ひとしきり笑って、それから、のんびりとその馬を見つめているうちに、ミーアはふと気が付いた。
「ああ、そうか。そうですわ……。わたくしは、なにを悩んでいたのかしら……？」
ミーアは、唐突に思い出したのだ。自分の、本質というものを。
「そうでしたわね。わたくしは、別に帝国の叡智などではなかった……わたくしは、帝国のわがまま姫でしたわ……。別に、正当な理由など必要ありませんでしたわ。気になるから一緒に行く。それだけでいいはずですわ」
アベルのちょっぴり気落ちした顔が気になった。彼に元気を出してほしかった。

それに、慧馬の一族が、本当に救われるのかどうかが、やっぱり少し気になった。
もしも上手くいかなかったら、きっと気分が良くないだろうな、と、ミーアの小心者の心が告げていた。
それならば、行きたいならば……、行けばいい。
行きたいと言えばいいのだ。そこに、正当な理由なんか必要ないのだ。
なぜなら、ミーアは本質的に、自分ファーストなわがまま姫なのだ。
そして、同時に……。
「しかし……、ディオンさんもおりますし、ただ行きたいでは厳しいですわね。となれば、それなりの理由を考える必要があるはず……。ふむ……、とすると……」
ちょっぴり小心者のお姫さまでもあるのだった。
こうして、ミーアは、自身が動く理由をどのようにルードヴィッヒらにプレゼンするか、うんうん、頭を悩ませつつも、幕屋へと取って返した。
とりあえず、自分もついていく、ということを表明しておくためだ。
「やはり、林族の戦士たちを我が隠れ里に入れることは……」
「しかし、それでは、ラフィーナさまの護衛が……」
などと、未だに揉めている様子の彼らは、突如、入ってきたミーアに驚きの目を向ける。
そんな一同の視線を一身に受けつつも、ミーアは傲然と言い放った。
「みなさん、わたくしも火一族の隠れ里に同行させていただきますわ。よろしいかしら？」
帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンの一声によって、方針は決した。

ラフィーナの護衛は、ここまでの道のりと同様に皇女専属近衛隊が務め、林族の者たちは、食糧の輸送という最低限の人数に絞る。

ミーアが無言のうちに示した妥協案に、異を唱える者は一人もいなかった。

第百五十七話　帝国の叡智の家臣に相応しく

「ああ……、お前が姫さんが言っていた狼か……」

一方、その頃……。

ディオン・アライアは林族の集落を離れて、一人、森の中にいた。

ミーアたちからの報告を受けて、件の戦狼を探しにやってきたわけだが……、思いのほかあっさりと見つかってしまい、ディオンはいささか拍子抜けしていた。

薄暗い森の中、丸くなり寝そべっていた戦狼は、耳をピンと立て、ディオンのほうを見た。その目に剣呑な光を湛え、鼻の頭にしわを寄せる。

口の端に覗いた鋭い牙に苦笑しつつ、ディオンは肩をすくめた。

「おいおい、やる気かな？　お前の兄弟は、僕に挑む愚を悟るぐらいには賢かったんだけどね」

そう言いつつ、腰の剣に手をかける。

しばしの睨みあい、その後、戦狼の体から力が抜けた。

「ふーん。襲ってこないのか。やっぱり、ただの狼とは違って賢いみたいだね……。しかし、あの時に見た狼ともまた違うか。やれやれ、世の中には頭のいい狼がこんなにいるものなのか」

顎を撫でつつ、ため息一つ。

「ともあれ……、狼使いとあの少女が関係しているというのはどうやら間違いないみたいだね……。さて……、姫さんはどうするつもりなのやら……ん？」

不意に、ディオンは腰の剣に手を伸ばした。

――なんだ？　今……一瞬だけ……見られていたような……。

周囲に視線をやるも、異変はなく。かすかに感じた気配もすぐに消えてしまっていた。

警戒を解かぬまま、周囲と狼とを交互に見やってから、ディオン

は静かにため息を吐いた。
「やれやれ……きな臭いね。どうも」

「ああ、ディオン殿、ちょうどよいところに」
集落に戻って早々に、ルードヴィッヒがやってきた。
「さて、どうかしたのかい？　なにか厄介ごとでも？」
「ああ。実は少々予定が変わった。帝国に帰るのがもう少し先になりそうなんだ」
そうして、ルードヴィッヒから事情を聴いたディオンは、
「火の一族の隠れ里……ねぇ」
思わず、といった様子で天を仰いだ。
「なるほど。お人好しのうちの姫さんなら、躊躇いなく首を突っ込みそうな案件だ」
「それは否定できないが……。しかし、お人好しとばかりも言えないさ。前にも言ったが、ミーアさまの構想の実現には、騎馬王国の安定が必要だ」
ルードヴィッヒは苦笑いを浮かべて、それから、真面目な顔で続ける。
「それに、今後のことを考えれば騎馬王国と仲を深めておくのは悪いことじゃない。相手が万全な状態の時に頭を下げて交渉を求めるのと、弱っている時に手を差し伸べるのと、どちらが相手との仲を深めるのが容易か、考えるまでもなくわかることだからね」
「手を差し伸べるに良き時か……なるほどね」
それから、ディオンは、やれやれ、と肩をすくめた。
「まぁ、あの狼使いとまた戦えるというのなら、僕としては願ったりではあるんだけどね……」
どこか歯切れの悪いディオンの言葉に、ルードヴィッヒが首を傾げた。
「なにか、気がかりなことが……？」
「いくつかね。そうだな、今、具体的に思いつくのは二つ。一つは

混沌の蛇の思惑。あの、慧馬という少女は、十中八九、蛇の関係者だろう？」
「そうだろうな。ミーアさまは、まだ断定はしておられないようだったが……。狼を使うような技術が、そうそうあるわけもなし……。例の暗殺者の関係者とみるのが自然だろうな」
もしそうだとするならば、彼女の存在自体が罠という可能性もある。あの慧馬という少女が嘘を言っているとも思えないが、持ってきた情報の真偽のほどは定かではない。
「そして、もう一つはレムノ王国の動向だろうか？」
先回りするようにして出されたルードヴィッヒの問いかけに、ディオンは笑みを浮かべた。
「まぁ、気付いてるよね、君なら。あの国は自国の騎馬部隊の教練のため、騎馬王国とも関係が深い。帝国が騎馬王国と接近するのを望まないだろう。なんらかの介入をしてくるのは、当然予想しておくべきだ」
ディオンは腕組みして、続ける。
「まぁ、アベル殿下に関してはほぼ心配していない。剣を交えるまでもなく、あれは、腹芸ができる手合いじゃないだろう。なにか隠しているような気はするけれど、とりあえず、放っておいても大丈夫のはず。少なくとも、姫さんに危害を加えるようなことはないだろうさ。けど……」
と、そこで言葉を切って、ディオンはそっとあたりを視線でうかがって、声を潜めた。
「どちらかというと気になるのは、レムノの剣聖殿のほうかな」
「ギミマフィアス殿か……。あの御仁がなにか……」
「食えない爺さんだと思うよ。当人の性格はともかく、なまじっか腕が立つから、もしもレムノ国王からよからぬ命令を受けていた場合……厄介なことになりそうだ」
ディオン・アライアは、自身のことを模範的な騎士であるとは考えていない。どちらかといえば不良騎士、不平屋の趣が強いと思っ

ている。
　そんな自分であったとしても、基本的に仕える主君の命には従うことにしている。まして、相手はレムノの剣聖と呼ばれる男。長年、レムノ王家に仕え、王族への剣術指南をこなし、その剣技の基礎を作り上げてきた忠臣である。
　主君の命令は、忠実無比に執行するだろう。
「なるほど。レムノ国王は……、たしかに、無条件に信用できる人物ではないな……」
「まぁ、それでも、僕がつきっきりで相手をしていいのであれば、どうにでもできるのだけどねぇ」
　ディオンの言わんとすることを察したのか、ルードヴィッヒが頷く。
「そうか。それこそ、狼使いが現れた場合には厄介なことになる、と？」
　思惑の異なる三人の実力者が一堂に会した時に生じる混沌、その先にどのような未来が待ち受けているかは未知数で……。
「まぁ、さすがに直接、姫さんの命を狙ったりはしないだろうけど、一応気を付けたほうがいいと思ってね。姫さんの言いようじゃないけど、注意していて何も起きなければ臆病を笑えばいい。注意もせず何か起きた時に後悔するよりはずっとマシだからね」
「それもそうだ。たしかにそれこそが、ミーアさまの家臣に相応しいありようだな。わかった。ギミマフィアス殿の動き、それにアベル王子の、レムノ王国の動向には注意しておこう」
　ルードヴィッヒは深々と頷いた。

第百五十七話　帝国の叡智の家臣に相応しく（後書き）

明日はちょっぴり番外編

番外編　司教帝ラフィーナの城　（前書き）

箸休め的な番外編です。

番外編　司教帝ラフィーナの城

ヴェールガ公爵令嬢であったラフィーナが「司教帝」を名乗るようになって、最初にしたことは遷都であった。
彼女は居城をヴェールガ公都から、ある場所へと移したのだ。
ある場所……司教帝が住まう場所……。
それは、かつて大陸随一の学園都市が栄えた島……、セントノエル島だった。
友を持たず、家族も今はなく……、復讐の炎ですら、もはやその胸には残ってはいない。そんな壊れかけの彼女が、かろうじて正気を保っていられたのは、懐かしくもほろ苦い思い出の城にこもっていたからだった。
その日、彼女は執務室で報告を受けていた。
そこは、かつて彼女が生徒会長と呼ばれていた時期、最も多くの時間を過ごしていた場所……生徒会室を改装した部屋だった。
「それで、首尾はいかがかしら？　蛇の者たちは、きちんと排除できた？」
お気に入りの、姫君の紅頬（プリンセスローズ）を使った紅茶を飲みつつ、司教帝は問うた。
「はっ。我が聖瓶軍の支配地域内では順調に、混沌の蛇のあぶり出しが行われております。住民たちに呼びかけたところ、次々に訴えが上がってきておりまして、現在、その真偽を調べているところで……」
「あら？　それでは時間がかかってしまうでしょう。訴えられた者たちはすべて処刑してしまってもいいのではないかしら？」
「は……？　いえ、ですが……」
「火のないところに煙は立たないでしょう？　それに、蛇は疫病のようなもの。一人逃せば、その病は途端に十人、二十人と増えてい

く。ねぇ、あなた、腐ったリンゴを食べないためにはどうすればいいか知っていて？」
不意に、ラフィーナは清らかな笑みを浮かべた。
「簡単なこと。腐っているものは捨てて、腐っているかもしれないものも、すべて捨ててしまえばいいの。疑いがあるものの中に、腐ってない、食べられるものかもしれない、などという目を向ける必要はないわ。必要なのは、疑いのあるものの中から食べられるものを見つけることではない。決して腐ったものを口に入れないこと。わかるかしら？」
それは、混沌の蛇に対して、彼女が掲げた基本方針だった。
混沌の蛇は殺し、その疑いがある者も根絶やしにする。その苛烈なやりかたに、サンクランドの天秤王シオンなどは、諫言を送ってきているようだが、ラフィーナは一向に気にしてはいないようだった。
「それで、騎馬王国のほうはどうなっているかしら？」
「はっ。ほとんどの部族が我が聖瓶軍に恭順の姿勢を示しております。また、林族ですが、どうも、サンクランドのシオン王子に頼ったようで……」
今や、騎馬王国の部族は半数にまで減っていた。
最大部族、林族は族長である馬優亡き後、その息子、馬龍に従ってサンクランドに身を寄せていた。
「そう……。馬龍さんとシオン陛下が……」
かつて親しくしていた者たち。懐かしき思い出に、わずかばかりラフィーナが小さく首を傾げた。
別に感慨はなかった。
感傷に浸るには、彼女が失ったものはあまりにも大きかったから。
その胸に空いた空洞は、些細な感情など容易に飲み込んでしまって……、だから、ラフィーナがそれを感知することはなかった。
「敵にするには面倒な相手ね……」
ただ、それだけつぶやき、悩ましげなため息を吐くのみだった。

「それと、騎馬王国の国境付近で見つかった例の隠れ里ですが、生存者を保護したとの報告を受けております」
「生存者……？　捕虜……ということかしら？　混沌の蛇をかばう者たちは、皆殺しにせよと命じておいたはずだけれど……」
すぅ、っと、冷たい視線に射られて、報告者たる兵はびくり、と体を震わせる。
「は、はい。もちろん、混沌の蛇、ならびに、蛇をかばった者たちは皆殺しにし、村も焼き払ったようなのですが……、その者は廃墟の城の牢に囚われておりましたので……」
「囚われていた？」
「はい。聞けば高貴なる身分の方。混沌の蛇に囚われて久しいとのことでしたのでお連れしたのですが……」
「そう。それは、大変な目に遭われたのですね。お可哀そうに……」
そうして司教帝は一転、憐れむように、顔を歪めた。
なぜなら、彼女は……司教帝ラフィーナは、聖女だからだ。
悲惨な目に遭った相手に共感し、相手の傷を憐れむことができる、慈愛の聖女だからだ。
混沌の蛇に監禁され、酷い目に遭った女性……それは、聖女の憐れみを受けるに足る資格を持つ者である。
あの日、あの聖夜祭の夜の大量毒殺事件によってひび割れた心は、その後のミーアの死によって完全に壊れ、砕けてしまったけれど……。それでもラフィーナは聖女だった。
倒れ伏す哀れなる者に慈悲をかけ、自らが汚れることも厭わず、地に膝をつき抱き起す……無私なる聖女。優しさの人であった。
その、苛烈なる粛清者の顔と、弱者を憐れむ聖女の顔、そのどこか壊れたアンバランスさが、奇妙な魅力を増し加え、彼女のカリスマ性を、世界を飲み込むほど強大なものにさせていた。
「どうぞお連れして。丁重にお願いね」
報告者たる兵は一礼して、きびきびと部屋を後にする。
その胸に、畏怖にも似た忠誠を抱きながら。

やがて、入ってきたのは細身の女性だった。黒く美しかったであろう片鱗を見せる髪には、囚われていた時の恐怖からだろうか、ところどころ白髪が混じっていた。
女性は、司教帝の前に膝をつき、深々と頭を下げる。
「この度は、お救いいただき、感謝の言葉もございません。司教帝猊下」
「たいしたことではありません。どうぞ、頭をお上げください。それで、あなたはいったい……」
「お初にお目にかかります。司教帝猊下……」
その女性は、悄然とした顔に、ほんのわずかばかりの笑みを浮かべて、ラフィーナを見つめて……言った。
「ヴァレンティナ・レムノと申します……」
その笑みは……、なぜだろう、ラフィーナの目には一瞬、蛇のような狡猾なものに見えて……けれど、それもすぐに溶けて消える。
後に残るは、どこか可憐で儚げな……、傷ついた女性の笑みだった。

番外編　司教帝ラフィーナの城　（後書き）

本日、活動報告も更新いたします。

第百五十八話　ミーア姫、ＴＰＮをわきまえる

結局、火一族への救援部隊は翌日、出発することが決定した。
林族の者たちが輸送を担い、ラフィーナの護衛はミーアの皇女専属近衛隊が担う。
輸送・護衛をすべて林族で担う場合と比べ、かかわる人数を三分の一以下にすることで、慧馬を納得させたのだった。
――だから、最初から自分も行くと言わなかったのね……。
交渉を終えたミーアを見て、ラフィーナは感心していた。
不思議に思っていたのだ。ミーアがなにも言い出さず、すべてを騎馬王国に任せるような態度をとったことも。
ラフィーナの行動に同調せず、自分には関係ないこととして幕屋を後にしたことにも。
なるほど、たしかにミーアには直接関係のない案件ではあったが……。ミーアが困っている民を見捨てるようなことをするだろうか？
それ以上に、まがりなりにも、友と慕ってくる慧馬を放っておくものだろうか？　と。
自分に問いかけ、絶対に！　そんなことは！！　あり得ない！！！　と思っていたラフィーナだったが……。
――一度、自分があの場を去ることで、私の護衛を騎馬王国の者たちが務めるという、高い条件を提示して、その後で護衛は帝国兵で担うと条件を下げる。そうして、慧馬さんにわかりやすい妥協点を提示した……。さすがだわ……。
などと、感心しきりのラフィーナである。
一方、林馬龍もまた、ミーアの言動に驚かされることになった。
それは……、
「すまなかったな。話し合いが長引いちまって……」

そう頭を下げると、ミーアは愛想よく微笑んでぺらぺらと手を振った。
「大したことはございませんわ。大切な話し合いが無事に終わったようでなによりですわ」
「ああ。嬢ちゃんのおかげで助かった。お礼に、とびきり美味しい醍醐羊のミルクを御馳走するぜ」
っと、馬龍が走っていこうとしたところで、ミーアがそれを止める。
「いいえ。それには及びませんわ」
「えっ……？」
立ち止まり、思わず首を傾げる馬龍である。
たしかに、貴族の中には、ミルクの味になど興味を示さない者もいるが、ミーアの場合には違う。ここに来る途中に、心から楽しみにしていたのをきちんと見ているのだ。
余談だが、馬龍はミーアのそういうところも気に入っている。着飾らず、美味しいものを美味しいといい、心から楽しめる。その自然体は、とても好ましいものと思っていた。
そんなミーアが、なぜ……？
戸惑う様子の馬龍に、ミーアは穏やかな笑みを浮かべて言った。
「それはまた後日、必ずいただきますわ……。そうですわね、この件がすべて終わってから……」
加えて、ミーアは言った。
「ああ、それと宴会のお料理も、わたくしは少なめでも構いませんわ。もちろん、ここまで付き添ってくれた兵士たちやわたくしの家臣たちには、たっぷりと食べさせてあげてほしいのですけど……」
「嬢ちゃん……」
馬龍は思わず、息を吐き……大いに感動した！
おそらく、ミーアは火の一族の境遇に同情したのだ。それゆえに、ここで宴会の食事を食べることを、よしとはしなかった。
空腹に苦しんでいる者がいるのに、その仲間である慧馬の目の前

で、自分が腹いっぱい御馳走を食べる……。それが許せなかった。ミーアは、きちんと時と所と場合（ＴＰＯ）をわきまえているのだろう。
さらに、
「断食、ということかしら……。それは、火の一族の問題が解決するように、という願いを込めての……」
ラフィーナが言った。
中央正教会では、神に強く願い求める時、食事を断ち、その時間をも神に願いをささげる時とする「断食」という習慣がある。
なるほど、その視点はなかった、と、馬龍がミーアのほうに目を向けると、ミーアは、ちょっぴり慌てた様子で首を振った。
「い、いいえ、そこまでのものではありませんわ。本当に。もちろん、お食事はいただきますもの。ただ、量を減らそうというだけの話で……」
その慌てた様子に、馬龍は思わず吹き出しそうになる。
たぶんミーアは照れ臭かったのだろう。
本気で慧馬を心配し、その一族のために尽力する、そのために断食すらして、必勝の思いを新たにする……、そんな姿を見られることが、気恥ずかしかったのだ。
だからこそ、こんなにも慌てているのだ。
そして、その気持ちは、どうやら慧馬にも伝わったらしい。
「我が一族のために、かたじけない……。ならば、我も食べることは控えよう」
「いえ、それは駄目ですわ！　えーっと、そう。食べなければ、力が入りませんし、自分の勤めも果たせなくなってしまいますわ。きちんと食べて明日からの旅路に影響がないようにする。それも大切なことですわ」
そう言われては、慧馬としても反論できないだろう。
――自分も少しは食べる、と言っているのはそのためか。たしかに、旅の途中に断食なんぞするものじゃない。倒れちまったら元も

子もないしな。つまりは、嬢ちゃんは、自分にできるギリギリのところをきちんと見定めているってことか。つくづく大したやつだ。
馬龍は満足げに頷き、そして思う。
――嬢ちゃんがこの様子なら、たぶん、アベルのやつも大丈夫だろう。
と。

……さて、その場にいる彼らは、誰一人、気付いていなかった。
ミーアが……、微妙にお腹をさすっていることに……！
もうお分かりだろう。なぜ、ミーアが醍醐羊のミルクのみならず、宴会の食事をも控えようとしたのか。
そう、飲み過ぎである！
話し合いの最中からずぅぅっとホットミルクをカパカパ飲んでいたせいで、ミーアのお腹はすでにタプタプなのだ。
帝国の食道楽姫、ミーアは美味しいものを口にする時のコンディションを気にする人である。特に、はじめて口にする超美味なものであれば、なおのことである。
――絶品ミルクというならば今日飲むべきではありませんわ。それに、なんだかんだでお腹一杯。宴の食べ物もそこまでは食べられない感じがしますわ。くぅ、失敗しましたわ。こんなことなら、もっとミルクを自重していれば……。美味しいからスルスル飲んでしまいましたわ。
そうなのだ。食道楽ミーアにとって、美味しいバターもパンもケーキも、そして、ミルクもすべて飲み物なのだ！
……まぁ、ほとんどの人にとってミルクは普通に飲み物ではあるが……。それはともかく。
――せっかくのお料理が食べられないのはもったいないことですけど、こんなにお腹がたぷんたぷんしていては、仕方ありませんわ。
そう、ミーアは、自らのお腹のタプン（ＴＰＮ）をわきまえているのだ。

「それならば、ヨーグルトにしましょうか？　滋養があって、美容にも良いと言われております。ハチミツをかけて食べると、とても美味しいですよ」
話を聞いていた林族の女性の言葉に、ミーアはにっこり微笑んで、
「ありがとう。お気遣いに感謝いたしますわ」
それから……、改めて言った。
「それでは、御馳走はまたいずれ……。すべてが片付いた時に。みなで一緒に……」
心からの決意を込めた、それは宣言。
今度こそは、最高のコンディションで美味しい騎馬王国料理に向き合おうという、固い固い決意を込めた宣言なのであった。

ちなみに……、この後、食べたヨーグルトはとても、とぉっても美味しくって、大満足なミーアであった。

第百五十九話　ミーア姫、動き出す

翌日、ミーアたち一行は林族の集落を後にした。ミーアたちご令嬢たちとアベルはそれぞれ馬車に分乗し、その周りを皇女専属近衛隊の面々が固める。さらに、その後ろに林族の者たちを率いた馬龍が続く。

さて昼過ぎに、休憩のために立ち寄った場所で……、

「そろそろかしら……」

頃合いを見計らい、ミーアは静かに動き出した。

ミーアには、達成すべき目的があったのだ。それは……、

「アベル、ちょっといいかしら？」

「ん？　なにか用かい？」

突然、話しかけられたアベルは、きょとん、と首を傾げる。

「ちょっと遠乗りに行きませんこと？」

ミーアはそっと空を仰ぎつつ言った。見上げた先は一面の青。輝く日の光にかすかに目をすがめつつ、ミーアは微笑んだ。

「ほら、こんなに良い天気ですし。きっと気持ちいいですわよ？」

もちろん、ミーアはただ遠乗りがしたかったわけではない。

昨夜、ホットミルクを飲みすぎたので、その腹ごなしをしようなどというのももちろん違う。言うまでもないことではあるが……。

そうではなく、アベルにゆっくり話を聞きたかったのだ。いったい、馬龍からなにを言われたのか？　なぜ、元気がないのか……。

「いや、しかし……」

と気が進まない様子のアベルの先手を打って、ミーアは自らの護衛に話を振る。

「ねぇ、ディオンさん、ちょっと遠乗りに行きたいんですけど、よろしいかしら？」

「遠乗りですか？」

それを聞いた、ディオンは、なんとも呆れた顔をする。
「先日もそれで痛い目を見たと思うんですけどね……」
肩をすくめるディオンであったが、すぐにミーアの顔を見て表情を引き締める。
「それは、どうしても行かなければならないんですか？」
「ええ。大切なことですの」
ミーアは、しっかりとディオンの顔を見つめ返して言う。負けないように、気をしっかり持つ。
基本的に、ディオン・アライアと話をする時には、しっかり目を見て、視線を外さないことが大事なのだ。
目を逸らした瞬間に襲ってくる可能性が高いので、もしも森の中でディオンと出会った時には、視線を外さずゆっくりと後ずさって逃げよう……などと心に決めているミーアなのであった。
まぁ、それはさておき、
「やれやれ、わかりました。それじゃあ、少し離れたところで僕が護衛を……」
「ああ、それならば、問題ないぞ。我が戦狼が周囲の警戒を行っているからな」
なぜだか、ドヤ顔でそう言ってきたのは、慧馬だった。
林族の集落に着くまでは盗賊扱いだった慧馬ではあるのだが、今は、火の一族のところへの案内として、すでに拘束は解かれている。
「それ、逆に信用できないと思うけどね？」
そんな慧馬に、ディオンがチラリと鋭い視線を送った。が、慧馬は……それを見ない。視線を向けない。
ミーアとは違い、視線を合わさないことで、ディオンをやり過ごそうとしている慧馬であった。なるほど、そんな手もあるのか、と思わず感心するミーアである。
慧馬は気分を落ち着けるように、ほふぅっとため息を吐いてから、改めてミーアの目を見つめてきた。
「……我は感謝しているのだ。ミーア姫。我が一族にしてくれたこ

との恩を、少しでも返せればと思ったんだが……」
「ふむ、そうですわね。そういうことであれば、まぁ……」
これまで見てきた慧馬の性格からすれば、恐らくは大丈夫だろう。ここでミーアたちを狼に襲わせても、彼女にはあまり得はないだろうし、それに、アベルがいれば大丈夫だろう、という安心感もあった。
「ということで、どうかしら？　アベル」
「……わかった。それじゃあ、僭越ながら、お付き合いするよ」
そんなわけで、ミーアは早速、遠乗りに使う馬を見て回り、
「ふーむ、そうですわね。ああ、この子がいいですわね」
一頭の馬へと近づいた。それは、もうお馴染みとなった馬版ミーアだった。
のんびり、もそもそと草を食む馬に、ミーアは笑顔で近づいた。
「この子、なかなかの紳士なんですのよね。わたくしを身を呈して守ったあたり、なかなか見所がございますわ。素晴らしい」
ひとしきり褒めた後、ミーアは馬にブラシをかけている近衛兵、ゴルカに言った。
「この子、名前はなんて言いますの？」
ゴルカは、皇女専属近衛隊の中では古参の兵だった。
もともと近衛隊に所属していた彼は剣の腕はそれほどではないものの、馬の飼育の才を持っていた。それをルードヴィッヒに見出され、今では、皇女専属近衛隊の馬を管理する責任者になっていた。
「お褒めいただきありがとうございます。姫殿下。この馬は東風（とうふう）といいます」
「とうふう？　なるほど、変わった名前ですわね。由来はなんなんですの？」
「東から吹く風のごとく、軽やかに駆ける馬になるように……。そのような願いを込めてつけられたのだと記憶していますが……」
「なるほど、実に風流な名前ですわね」
うむうむ、と頷きつつ、ミーアは東風の顔を見た。

……相変わらず、ぬぼぉっとしていた。こう、なんというか、風流とか、そういうのはまるでわからなそうに見えたのだが……、
「うむ。この堂々とした落ち着きが気に入りましたわ。この子にしますわ。ねぇ、ゴルカさん、この馬で遠乗りに行きたいのですけど、大丈夫かしら？」
「ああ。それはよろしいですね。こいつなら、きっとのんびり遠乗りができますよ」
名前を呼ばれたことに対して、ゴルカは特に驚きはしなかった。
皇女ミーアは、皇女専属近衛隊の名をすべて覚えている。それは、隊に所属する兵の間では有名な話だからだ。それゆえ、驚きはしないのだが……、心地よくはあるもので……。
「少しお待ちください。今、鞍を付けますから」
気持ちよく乗ってもらおうと、鞍をつける手つきも自然と丁寧になる。やがて、完璧な仕事を終えたゴルカは、ミーアに深々と一礼する。
「楽しんできてください」
「ええ。ありがとう」
そうして、ミーアは、アベルとともに草原に駆け出した。

……ちなみにその後を少し離れて、護衛としてディオンと慧馬が、野次馬としてベルとリーナとラフィーナが、さりげなくついていくわけだが……。
まったく気付かないミーアであった。

第百六十話　間違いなくミーアである

一面に広がるのは、爽やかな草原の光景だった。

さわわ、さわわ、と穏やかな風が、金色にも近い緑色の中を駆け抜ける。遠く、どこまでも遠く続く草原が、まるで湖面のように波立っていく。

風は絶えず草原に波紋を作り、さわやかな緑の匂いを運んでくる。

はるか彼方に見える小高い壁は、美しい緑と青空とを隔てる境界線。無限に広がる空は胸のすくように深い青、そこにちらり、ほらり、と白い雲が浮かんでいる。

そんな草原の中を、馬が一頭、のんびりと歩いていく。

馬に乗るのは年若き少年と少女だった。後ろに座った少女は、穏やかな日差しに、青く澄んだ瞳を細める。

風に吹かれて踊る髪、それを片手で押さえて、少女は朗らかな笑みを浮かべた。

……誤解がないように言っておくと、深窓のご令嬢の描写ではない。ミーアの描写である。

その証拠に……

「うふふ、あの空に浮かぶ雲、まるで羊みたいですわね。一匹、二匹……」

などとつぶやいている。間違いなくミーアである。ミーア以外の何物でもない！　ＦＮＹ！（ＱＥＤ！）

まぁ、それはさておき。

馬版ミーア改め「東風」に乗ったミーアとアベルは、のんびり草原を進んでいた。

ちなみに、前に乗るのがアベル。その後ろで、あたかもヒロインのような表情を浮かべているのがミーアである。一瞬前まで、雲羊を数えていた人と同じなどとは、とても信じられなかった。

切り替えの早いのがミーアの良いところである。
――それにしても、ふふ、思い出してしまいますわね。初めて馬に乗った時のこと……。あの時はものすごくいい雰囲気でしたわね。乗馬に不慣れなわたくしを、アベルが優しくサポートしてくれて……。馬の上で見つめあって、愛を語らいあったりして……。
……ミーアの記憶の中で、若干の改竄が行われていた。
まぁ、それはともかく……。
――それにしても、アベル……なんだかまた背中が大きくなった気がしますわね。
ミーアはまじまじとアベルの背中を眺める。
最初に乗った時には、まだ、少年のような線の細さがあったが……、今、こうして見つめる背中は引き締まり、姫を守る、勇敢なる騎士の風格が見て取れた。
――このまま、どこか遠くへ行ってしまうのも、悪くないかもしれませんわね。うふふ、愛の逃避行ですわ。
なにから逃げるのかは定かでないが……。そういうものにあこがれるお年頃なのである。そう、ミーアは十五歳の乙女なのだ。純粋な乙女なのだ。乙女……乙女……？　乙女なのだ！
――ふむ、前に乗るのも安心感がありますけれど、やっぱり、守られて乗ることができる、この乗り方が好きですわね。うふふ、満足ですわ。
などとひとしきり恋愛欲求を満たした後、満を持して、ミーアはアベルに声をかけた。
「ねぇ、アベル……、いったいなにがございましたの？」
「なにって？」
振り返ることなく、アベルが言った。心なしか、その声が固いように、ミーアには感じられた。
馬龍と話をした後、明らかにどこか様子がおかしいアベル。今日だって、ミーアが話しかけるまではどこか上の空で、口数も少なかった。

アベルは紳士だ。遠乗りに行けば自分から声をかけてきてくれて、決して、ミーアを飽きさせることがない。
気遣いができる人なのだ。でも……、今日はそんな普段の彼は鳴りを潜めている。
とても……気になった。
「とぼけないでくださいまし。昨日から、あなた、少し様子が変ですわ」
「そうかい？　そんなつもりはないんだが……」
軽く、振り返ったアベルに、ミーアは重々しく頷いた。
「わたくしから見れば一目瞭然ですわ」
そう言ってやると、アベルははじめて笑みを見せた。
「やれやれ……。君には隠し事はできないな……」
それから、小さくため息を吐いてから言った。
「実は、馬龍先輩が教えてくれたんだ……。狼を連れた男と、ボクの姉とが一緒に目撃された、と」
「狼を連れた男……それって……」
「詳しいことはわからないみたいなんだ。馬龍先輩自身も聞いた話らしくって……。そもそも見たのは他の部族の人間らしくってね……」
「そうなんですの……。それは、心配ですわね。アベルのお姉さまというと、クラリッサ王女殿下ですの？」
レムノ王国の王族の名前を頭に思い浮かべつつ問う。と、アベルは小さく首を振った。
「いや……、そうじゃない。一緒にいたのは、ヴァレンティナ姉さまだ」
「あら？　でも、そのヴァレンティナ殿下というのはたしか……」
首を傾げるミーアに、アベルは小さく頷いた。
「ああ。ヴァレンティナ姉さまは死んだ。五年前に死んだはずだった。でも……」
と、そこでアベルが言葉を切って続ける。

「死体は見つからなかったんだ」
「え……？」
「崖から落ちたんだ。馬車の残骸が、後日見つかって……、姉さまたちは全員落ちて死んだと。そう判断されたらしい。死体は、食い荒らされたんだろうって……あたりを狼がうろついていたらしいから……」
吐き出すようにそう言って……、それから、アベルは振り返ってミーアを見つめた。
「死んだはずの姉が……、ヴァレンティナ姉さまが、狼を連れた男と歩いていた……。その真偽を確かめるために、ボクは騎馬王国に来たんだ」
その、泣きそうな瞳を見て、ミーアは……、なぜか、胸がキュッとしてしまう。
なにか言わなければと思い、焦って、考えて……。結局、口を出たのは、ごく当たり前の言葉で……、それは。
「……良かったですわね」
「え……？」
その言葉に、きょとん、と、虚を突かれたような顔をするアベル。ゆっくりと言い聞かせるように、ミーアは続ける。
「死んだと思っていたお姉さまが生きていたこと……、良かったですわね」
口に出してみて、思う。
そう……それはきっといいことだ。
「それは、喜ぶべきことですわ。アベル、あなたは、喜ぶべきですわ」
もし、仮に、アベルの姉が蛇の関係者であったとしても……生きてさえいれば、話すことができる。触れ合って、もしかしたら、正気に戻すことだってできるかもしれない。
それは、死んでしまっていたら、どうしようもできないことだったから。

「喜ぶべきことですわ」
ミーアは、繰り返して言った。
「そう、か……。ボクは、喜んでいい、のか……」
しばしの沈黙の後、アベルの口から、ポツリ、と言葉が零れ落ちた。
「そうですわ。もっと嬉しそうになさいまし」
それを、堂々と肯定して、ミーアは言った。そして、
「そういうことでしたら、意地でもお会いして、ご挨拶しなければなりませんわね。あなたの姉君に」
この機会に未来の小姑を味方につけてやりますわ！　っと鼻息を荒くするミーアであった。

第百六十一話　レムノ王国にて……

時間は、少しばかり遡る。

突然だが、レムノ王国の王城の一角には、王族専用の鍛練場がある。

軍事に力を入れるこの国では、王族にも相応の強さが求められる。ゆえに、王家の男たちは、そこで、日夜、己が剣の腕を磨くのである。

その鍛練場で、レムノ王国第一王子、ゲイン・レムノは一心不乱に剣を振っていた。

頭上高く振り上げた剣に、渾身の力を込めて振り下ろす、それは、レムノ王国流剣術の第一の構え。最も基礎的な構え。

剣を振り上げ、踏み込み、振り下ろす。

風のように速く、水を斬るほどに鋭く、岩を打ち砕くほどに力強く……。

ただただ、その一撃を洗練された動作へと高めていく。

それは、弟であるアベルがしたのと、同じ方向の努力だった。

そんな彼に声をかける者がいた。

「ほう。精が出ますな、ゲイン殿下」

「ギミマフィアスか」

ゲインは動きを止め、鍛練場の入り口に立つ老境の男に視線を向ける。

「アベルのお守りで出かけると聞いたが……」

「はい。明後日には出立いたしますので、そのご挨拶にと寄ったまでのこと」

「ふん……」

ゲインは剣をぽいっと投げ捨てて、肩をすくめた。

「やれやれ。生意気な弟を叩きのめすことばかり考えていたら、ついつい熱中してしまったらしいな」
それから、袖口でグイっと顔を拭う。かなりの時間、剣を振り続けていたのか、額には玉のような汗が浮かんでいた。
「なるほど。目的意識は大事ですからな。ご兄弟で互いを高めあえるならば結構なことでございますな」
心を清らかに、強い意志を持って剣を振るえ……などという綺麗事が、ギミマフィアスの口から出ることはない。
剣とは、相手を打ち倒すための技術。そこに必要なのは体を鍛え、最適な動きにて剣を振るうことのみ。
その鍛練のモチベーションがどれほど卑しいものであっても、彼は否定しない。それが強さに繋がるならば文句はないのだ。
もっとも、今はそれだけが理由ではないのだが……。
ギミマフィアスは、まるでゲインの心の内を見透かすように、穏やかな目で見つめていた。それが居心地悪かったのか、ゲインは落ちていた剣を拾い、ギミマフィアスのほうへと放る。
「ひさしぶりに、稽古をつけていただけるだろうか。剣術指南役のギミマフィアス卿」
慇懃無礼にそういうゲインに、
「ほう。稽古の成果をご披露いただけるとは、恐悦至極にございます。ゲイン殿下」
豪快な笑みを浮かべ、ギミマフィアスが構える。
「お相手仕りましょうぞ」
その言葉を待たず、ゲインは踏み込んでいた。
上段からの振り下ろし。アベルの必殺の一撃と同じ斬撃だった。
轟音を立てて向かってくる一撃を、ギミマフィアスは冷静に受け止める。
「ふむ、なかなか。悪くない一撃ですぞ」
そのまま押し返して、改めて、剣を構える。
「不意打ちからの躊躇のない一撃、並みの相手であれば、一刀のも

とに葬ることができましょう」
ゲインは、それには答えず、再度、踏み込み。一撃を放つ。が、これもまた、ギミマフィアスには届かない。
「……難なく止めるな」
「ははは、剣術指南役ですので」
豪快に笑うギミマフィアスに、ゲインは顔をしかめた。
「悪くない一撃、と言ったが……アベルと比べてどうか……などと、貴様に聞いたところで詮無きことなのだろうな」
「ほう。吾輩が、アベル殿下の実力を見誤ると？」
「俺が鍛練に駆られるよう、評価を偽るぐらいは平気でする。貴様はそういう男だろう？」
「やや、それは心外な。吾輩は、ただ、忠実に剣術指南の任を全うしようとしてのことでございます。しかし、愚直なまでの振り下ろしですな」
「まさか、弟に負けるなどとは思っていなかったからな。余計に腹が立つのだろう、さ！」
下げた刀身を、今度は勢いよく振り上げる。それを、体を反らすだけで躱して、ギミマフィアスは、納得の頷きを見せる。
「なるほどなるほど。確かに、吾輩の見立てでも純粋な才でいえば、ゲイン殿下が負ける道理はなし。アベル殿下の努力が報われたということなのでしょうな。見違えるほどになりましたからな、アベル殿下の剣は」
そう笑ったギミマフィアスに、ゲインは不機嫌そうに鼻を鳴らした。
「まさか、貴様の口からそんな言葉を聞こうなどとは思わなかったぞ。ギミマフィアス」
「ん？　どういうことでしょう？」
「努力が報われる……、くだらない戯言だ」
吐き捨てるように言うゲインに、ギミマフィアスが眉をひそめた。
「おや、なにかご機嫌を損なうことがございましたか？」

「……ただ、不快なことを思い出しただけだ。誰よりも努力をし、不条理に抗おうとした挙句、呆気なく死んだ、馬鹿な女のことを」
剣を振るう。今度は、愚直な振り下ろしではない。中段構えからからめとるような、奸智の剣、本来の彼の剣だ。
「姉に、剣を教えていたお前は、知っているだろう。姉は鍛練を欠かすことはなかった。誰よりも必死に剣術を身に着け、この城の誰にも負けぬ技を身に着けていた。それだけではない。勉学も、姫としての礼節も、あらゆる面で、姉は人並み外れた努力をした。だが、姉は死んだ。なすべきこと、自らに課したことを何一つなせぬまま、ただ呆気なく命を落とした。虚しく、意味のない一生だった」
踏み込んで一撃、さらにもう一歩踏み込み。かと思えば、引き。変則的な動きで、ギミマフィアスの構えを崩そうとする。が、剣聖と呼ばれる男にとって、それは児戯にも等しき動きだ。
繰り出された斬撃のすべてを捌き切られた時、ゲインの顔には、自嘲するような笑みが浮かんでいた。
「努力が報われるなどと、下らぬ戯言だ。もしそうならば姉が……報われないなどということは、あり得なかったはずだ」
そうして、ゲインは剣をぽいっと放り捨てた。
「くだらん鍛練だった。汗をかいてしまったではないか」
不服そうに鼻を鳴らし、その場を後にするゲイン。
その背中を見送って、ギミマフィアスは顎を撫でた。
「なるほど……。ゲイン殿下は未だに姉君の亡霊に縛られているご様子で……」

第百六十二話　野次馬たち

「ところで、ディオン・アライア。護衛は我の戦狼が担うと言ったはずだが、なぜ、貴様も一緒についてくるのだ？」
眉をひそめて尋ねる慧馬に、ディオンは苦笑いを浮かべた。
「んー、僕はミーア姫殿下の剣なんでね」
「どういう意味だ？」
「姫さんは、君を無条件に信用することで、君からの信頼を勝ち得た。まぁ、そのやり方は見事だと思うよ。ただ、それは姫さんのやり方だし、姫さんの仕事だ。僕には僕の果たすべき役割があり、やり方がある。そういうことさ……ああ」
っと、そこでディオンはニッコリ笑みを浮かべた。
「ちょうど、あそこにいる君の狼と同じさ」
その指さすほう、草がかすかに揺れているのが見えた。目を凝らすと、黒い狼の毛並みが見えて……見え……て？
慧馬は、ゆっくりとディオンの顔を見て、ん？　と首を傾げるディオンに一言……。
「……こっわ！」
微妙に引いた。
「ディオン・アライア、もう一つ聞きたい。いったいなぜ、我の戦狼の場所がわかったのだ？」
自分ですら、まだ見つけてなかったのに……。
そう言外に主張する慧馬に、ディオンは不思議そうに首を傾げて……。
「え？　んー、普通わかるでしょ？　そうだな、感覚的には匂いで察した、というのが一番近いかな？」
「……こっわ！！」
慧馬、本格的に引いた。

「その鼻の利き方……さては、貴様、あれか？　夜になると狼に変身するという伝説の狼男（ウルフマン）なんじゃ……」
「慧馬さん、ディオン・アライアについて、細かいことを気にしないほうがいいですよ」
　取り乱す慧馬に声をかけたのは、シュトリナだった。まるで、対ディオン・アライアの熟練者のような態度で、諭すように、
「ディオン・アライアの戦闘技能は理不尽そのもの……。考えるだけ無駄というものです。もしも戦いになったとしたら、無駄な抵抗を諦めて降参したほうがまだいくばくか、生存率が上がるというものです」
「なるほど……勉強になる」
　神妙な顔で頷く慧馬に、ディオンは思わず苦笑いだ。
「んー、なかなか辛らつだね、イエロームーン公爵令嬢」
　っと、シュトリナに次いでベルが口を開いた。
「そうです。ディオン将軍は、半端ないので、こっそり隠れてる狼を見つけ出すぐらい簡単です！　万の敵兵だって単騎で切り伏せることができるんですから」
　どどぉんっと胸を張るベル。対するディオンは、うーん、と頬をかく。
「将軍ではないんだけどね……そして、さすがに万は無理だ」
　とか言うディオンだったが、慧馬は思わずにはいられなかった。
『……万じゃなくて、千ならいけるの？』などと……。
　一瞬、頭に浮かびかけた怖い想像を脇に追いやってから、慧馬は令嬢たちのほうに目を向けた。
「それはそうと、お前たちは、なぜついてきたのだ？　護衛ならば、我とディオン・アライアがいれば事足りると思うのだが……」
　なんとなく理由が察せるベル、たぶんベルと一緒にいるのが楽しいんだろうなぁ、とまるわかりなシュトリナから、ラフィーナへ。慧馬の視線は移っていく。
　それを受け、ラフィーナは一つ頷き、清らかな笑みを浮かべて…

…、満を持して口を開く。否……開こうとした……のだが……。
「気になるからに決まってます！　なんといってもミーアお……、姉さまの恋愛光景が見られるんですから。帝国の叡智の恋愛がどんなものなのか、気にならないはずありません！」
身も蓋もないことを言うベル！　好奇心に促されるままに来ました！　と清々しいまでに正直に言い、さらに……。
「そうですよね、ラフィーナさま」
振ってくる！　それはもう、遠慮も容赦も一切ない、強烈なパスであった。

「え……あ、ぅ」
話を振られたラフィーナは思わず言葉に詰まった。
誤魔化すことは簡単だ。なにか言いつくろおうと思えば、いくらでも理由は考え付く。
が、問題は……偽りを口にできないことだ。
なにしろ、ラフィーナは聖女だ。あからさまな偽りを口にするわけにはいかない。なにか、極めて婉曲的な言い方をするにしろ、それが完全な偽りであってはならない立場。
ゆえに、答えは慎重さを必要とした。慧馬がなにやら言い出したあたりから、話の流れを読んでいたラフィーナは、しっかりと答えを検討し始めていたのだ。
お友だちが遠乗りすると危険だと思ったから……？　事実だけど、でも、敵の刺客に狙われたなら、自分にできることはない。
アベルと二人きりにするのが心配だった？　いや、アベルが紳士であることは知っているし、そんなことを言ったら、二人に失礼。心配なのは本当だけど、使えない。
そうして、偽りではないにしろ、微妙に使えない答えを端からカットしていく。
ラフィーナは懸命に、頭脳を働かせた。
その気になれば、大陸を席巻する軍を作り上げ、抵抗勢力を完膚

なきまでに圧殺する、完璧な策謀を組み立てることができる……、
その頭脳が、野次馬の言い訳をひねり出すためにフル稼働し、ようやく導き出した答えを口に出そうとした……まさにその時の、ベルの介入であった。
しかも、厄介だったのは質問の形だ。
ベルの質問は、自分はそうだけど、ラフィーナはどうなの？　という問いかけではない。そうですよね？　と、問うているのだ。つまり、それに対する答えは、そうか、そうじゃないか……イエス・ノーの形なのである。
逃げ場は……ない！
悪意のない、キラキラした瞳で見つめてくるベル……。
言い逃れは……できない！
ラフィーナは、らしくもなく懊悩した末に……、そっと口を開き……開き……、
「ええ！　そうですけど？」
開き直った！
堂々と胸を張り、
「お友だちの恋模様が気になっただけですけど、なにか？」
キリリっとした表情で言い放った。
そうして覚悟を決めて、どーにでもなれぇ！　と思って心の内を吐露したわけだが……、彼女の言葉を否定する者は……、その場には一人もいなかった。
「うむ、我も友の恋模様は気になる。お前の気持ちはよくわかるぞ、聖女ラフィーナ」
「やっぱり、ラフィーナさまもそうなのですね」
などと、みなの同意の声が追いかけてくるのが……ちょっぴり意外で……、でも、ちょっぴり嬉しくもあり……。
何も言えずに固まっていると……、ちょうど、そこに、
「あら、みなさん、なにをしておりますの？　こんなところで……」
話題の中心であるミーアが戻ってきた。

前に乗るアベルともども、なんとなく晴れやかな表情をしていた。

第百六十三話　ミーア音頭で踊りだせ！

さて、以降は特に何事もなく（ラフィーナは、馬車の中で開かれる連夜のパジャマパーティーにウッキウキが止まらない様子ではあったものの……）、一行は、火の一族の隠れ里があるという森のそばまでやってきた。鬱蒼と葉の茂った木々、その緑は深く、黒にも近い色をしていた。

森の手前で一団が止まる。

馬車を降りた慧馬が、小走りに森のほうに向かっていく。

「こっちだ。わかりづらいが、ここに道があって……」

その後について、護衛を引き連れたミーアもついていく。

立場上、別にミーアがついていく必要はまるでなかったが……、ミーアは自分を止めることができなかった。

森が呼んでいたから。否、森に潜むキノコが……呼んでいたからだ！

――新しい森に来たら、どんなキノコが生えているか下見したくなるのが専門家というものですわ。キノコマイスターの血が騒いでしまうのは当然のことですわね……。

うむうむ、と偉そうに頷くミーアであったが……、

「しかし、森の中に隠れ住んでいるのは、騎馬王国の者たちに見つからないためかしら？」

そう尋ねると、慧馬は一つ頷いた。

「たぶん、最初はそうだった。だが、我の知る限り、そこまでしっかりと隠れていたわけでもない。騎馬王国には十二の部族がいるからな。こっそりと草原に出て、馬に草を食べさせたり、いずれかの部族の人間であると名乗って他国と交易を行ってもいたのだ」

「なるほど……」

まぁ、そうだろうな、と納得のミーアである。

大昔の、ご先祖さま同士の対立なんか、実際に今を生きる者たちにとっては、大きな問題でもなくって。だから、もしも火の一族の者たちを見つけたとしても、そこで大きな争いは起こらなかっただろう、と思うのだ。

慧馬の言葉を証明するかのように、彼女が示した道は巧妙に隠されてはいたものの、それなりの幅を誇っていた。馬車のままでも入っていけそうなぐらいには道幅がある。

それは、つまり、そこを通るものが頻繁にいたということ。彼女らが森の奥にひっそりと引きこもっていたのではないということの証明だった。

そうして、慧馬の案内で、再び馬車が進みだした。曲がりくねった薄暗い道を進むこと半時ほど。突如として、道が開け……そして、火の一族の集落が見えてきた。

そこは、素朴な村だった。

木で作られた小屋がぽつり、ぽつり、と建ち並び、囲いの中には馬たちの姿も見えた。

――ふむ……、前に見たルールー族の村に似てますわね。大きな違いはやはり馬ですわね。

馬たちは、見慣れない馬車が気になったのか、こちらを観察していた。澄んだ瞳でじっと見つめてくるもの、耳をぴくぴく動かして警戒しているもの、鼻をひくひくさせて、くしゃみをかけようとしているもの、さまざまだった。

……どうやら、荒嵐の親戚筋は、こちらにもいるらしい。

まぁ、それはともかく……。

「妙ですわね。人の気配が一切ございませんわ」

村はしん、と静まり返っていた。ただ、馬の立てる息遣いが聞こえるのみで、人が立てる生活音はまるで聞こえなかった。

「おーい！　みんな、戻ったぞ。どこにいるんだ？」

心配そうな顔で、慧馬が声を上げる。その直後！

「慧馬さまっ！？　無事だったの？」

一人の若い女性が、建物の陰から駆け寄ってきた。それに続いて、ぞろぞろと人が湧き出してきた。
「ああ。みんな、心配かけた……」
笑顔を返す慧馬。見る間に取り囲まれる慧馬を見て、ミーアは感心した様子でうなった。
「ふぅむ……、慧馬さんもなかなか人気者ですわね」

「慧馬さま、大丈夫でしたか？」
「悪い男に騙されたんじゃないかって心配していたんですよ？　なにも盗られたりしてませんか？」
「前にも言ったけど、美味しいものをくれる人が、みんないい人とは限らないんだからね。慧馬さまは、たんじゅ……んすいすぎるところがあるから」

……みなから、慧馬がとても大切にされていることが偲ばれる会話であった。
慧馬の周りに集まっているのは、若い女性がほとんどで、あとは老人と子どもがちらほら見えるのみだった。
「……妙ですね。人口に比して若い男が少なすぎる気がしますが……」
怪訝そうにつぶやくルードヴィッヒに、ミーアは頷いた。
「ふむ……そうですわね。もしかすると、例の慧馬さんが率いていた略奪隊は、出かけているのではないかしら？」
「……なるほど、そうかもしれません」
ルードヴィッヒは頷いたものの、何やら考えこむようにして腕組みした。
そうこうしている間にも、慧馬は遅れて現れた、ひときわ年老いた老婆のもとに駆け寄っていた。そして、今まで起きたことを、細大漏らさず話し始めた。
「なんと……。林族の者たちが……」

「そんな、まさか……」
「今さら、奴らの手を借りるなんて……」
などと、騒然とする一同。一方で、馬龍たち、林族の者たちも警戒心を露わにしていた。その原因こそ、慧馬が連れていた戦狼だった。
「あれが、火の一族の狼……」
まるで火の一族の者たちを守るように、横たわる一匹の狼。先ほど、慧馬が村に入るのと同時に茂みから、のっそり姿を現したのだ。
ついてきているとは思っていたものの、実際にその姿を目の当たりにすると、さすがの馬龍であっても圧倒されている様子だった。
そうして、生まれた睨み合いの時間……双方の部族を緊張感が支配する中、ミーアは……。
――ふむ、お腹が減りましたわね……。そろそろお夕食の時間ですわ……。
一人、お腹をさすっていた。
基本的に、ミーアの立ち位置はあくまでも協力者である。食糧を供出したのが林族である以上、あくまでも助けの手を伸べたのは彼らなのだ。だから、火の一族と林族の話し合いにミーアが口を差し挟むことはできなくって……。話し合いが始まってくれないことには、なにもできなくって……。
「ミーアさま、馬車にお戻りになって、お休みになられてはいかがでしょうか。話は長引くでしょうし、物資の積み下ろしにも時間がかかります。みなさまだけで、先にお食事を食べられては……」
と、気遣ってくれた近衛に、ミーアは静かに首を振った。
「いいえ。それはできませんわ」
なぜなら……、それは高慢に当たることだから。
腹を空かせた民がいるのに、自分たちだけが先に食事をしてしまうことは、恨みを買うことだったから。
なるほど、たしかに現状、この場における最大戦力は皇女専属近衛隊である。力にものを言わせれば、この場のすべてを支配するこ

とが可能だろうし、ある程度の勝手だって許されるだろう。
だが……しかしなのだ。
――ここで高慢な態度をとることは禁物ですわ。力による高慢は、力によって覆ってしまいますもの……。
ミーアは考えていた。
もしも、この場に火の一族の主力部隊が帰ってきた場合、力関係がひっくり返る危険性は十分に考えられる、と。
ディオン・アライア以上の強者がいるとは、さすがに考えづらいが、それでも可能性はゼロではない。そうして、もしもパワーバランスが変わってしまった場合には、高慢な態度をとった報いを取らされる危険性がとても高い。
だから、ミーアは一手も二手も先を読む。
力関係がひっくり返った時に備えて、謙虚に、謙遜に。仮に火の一族の主力が帰ってきて、それでもこちらの力が上であるならば、それはそれで構わないではないか。
――人は自らが蒔いた種の刈り取りを自分でしなければならないもの。となれば、腹ペコの人間たちを放っておいて、自分たちはご馳走をお腹一杯食べるだなんてこと、許されるわけがありませんわ！　それに、そんなことしても、あまり美味しくもなさそうですし……。
ということで……。
――ここは、先に食べることを控えるべきですわ。さらに言うならば、きちんと働いている風を装うことこそが肝要ですわ！
運んできた食糧はあくまでも林族のもの。それを食べさせてもらうのだから、当然、サボってなどいられない。きちんと働いて食べる資格を獲得する必要があった。
だからこそ……、
「ふむ、火の一族のみなさんと馬龍さんたちで話すこともあるでしょうから、わたくしたちは、先に物資の運び出しを行うのはどうかしら？　当然、わたくしもお手伝いいたしますわよ？」

こんなことを言い出したのだ。
「いえ、姫殿下は、どうぞ、馬車に戻ってお休みください。ラフィーナさまもおられますし……」
と近衛が慌てて言うが……。
「いいえ。わたくしが何もせずにいることは許されぬことですわ。空腹の民のために、ぜひとも働かせていただきたいですわ」
空腹の時の人間は、総じて心が狭い。後でイチャモンをつけられたらたまらない。
――謙虚に、謙虚に……。働いている風を装うのが大事！
気合を入れて、ミーアは荷物に手をかけた。手をかけ……ちょっぴり重かったので、別の荷物に取り換えるのだった。

さて……、ミーアが動き出したことで、物事は一気に動き出した。
まさか、主（あるじ）が働いているのに、自分たちが働かぬわけにはいかない、と皇女専属近衛隊の面々が動き出す。さらに、ラフィーナやベル、シュトリナにアベルもミーアの後に続いた。
そうなってしまえば、火の一族、林の一族の者たちも四の五の言ってはいられない。大人たちが働き始めたのを見て、子どもたちまでもがお手伝いを始める。
もともとは自分たちの部族の問題。他国の姫が額に汗して働いているのに、自分たちが働かないのはあり得ない。
多少の気まずさを呑み込んで、別たれていた二つの部族の者たちは動き出した。
そうして……、そこには、ぎこちないながらも共同作業の空気が生まれた。
共に、一つの目標に向かって、額に汗すること……。そして、その目標が……。
「さぁ、みなさん、美味しいお食事が待っておりますわよ。張り切ってまいりますわよ！」
先頭に立って音頭をとる、皇女ミーアによって明言される。

共に食事にありつくため、宴席につくため。
それは、とてもとても楽しい時間……、そう、それは祭りの前準備なのだ。

第百六十四話　ミーアは言う。「食事は熱いうちに食せ！」と

――ふぅー、なかなか疲れましたわ……。ああ、お腹が減りましたわ……。

ミーアは、広場に敷かれた敷物の上に座り、深いため息を吐く。

「お疲れさまです。ミーアさま。今、すぐに食べるものをもらってきますね」

「ああ、ありがとう。アンヌ。お願いいたしますわ」

などと、アンヌを送り出し、再びため息。

空腹すぎて、もはや、動く力はミーアには残されていなかった。

もともと、ちょっぴり空腹状態なところでたっぷり働いたせいで、ミーアはすっかり厚みを失っていた。ＦＮＹ消滅の危機なのであった。

――ふふふ、ともあれ……、目の前に食べ物がある時の空腹は、必ずしも悪とは言い切れませんわ。

そう、それこそが最高の調味料。ミーアは、これから食べる食事への期待感を高めに高めていた。

「お待たせいたしました。ミーアさま。すごく美味しそうですよ、これ」

「ごくろうさま。おお、本当に美味しそうですわね！」

言うが早いか、アンヌが持ってきてくれたものを、むんずっと掴んだ！

パリパリの大きな香草にくるまれた物……、それは小麦にヨーグルトを混ぜて焼いた、平たいパンのような食べ物だった。

ヨーナンという名前らしい。

カリカリに焼いたヨーナンには細く切った何枚かの燻製肉が挟んである。ジュジュワっと肉汁があふれる燻製肉に、ミーアはゴクリ、と喉を鳴らし……。

――では、さっそく……。
あんぐーりっと大口を開け、ヨーナンにかじりつこうとした……
まさにその時！
「ミーア姫、少しいいか？」
タイミング悪く慧馬がやってきた。しかも、なにやら、一族の重鎮っぽい老婆を連れてきている！
「ティアムーン帝国皇女殿下、此度のこと、誠に感謝の言葉もありませぬ」
などと、頭を下げる老婆。そのまま、自己紹介をする流れに、ミーアは内心で、軽く舌打ちする。空腹の時の人間は総じて心が狭いのだ。
――ふむ……とりあえず、難しいお話は食べた後でしたいですわね。
自己紹介というのは厄介だ。一度、名前を聞いてしまえば、覚えていないのは失礼に当たる。そして、過去の経験上、慧馬の連れてきた老婆が、おそらく名前を覚えなければいけない類の人物であると、ミーアの直感が告げていた。
けれど……、ミーアは今、食べたいのだ。とにかく食べたいのだ！
いろいろお手伝いをしていた時から、すでにお腹が切ない鳴き声を上げていたのだ。だから、今はともかく話などせずに、食事に集中したい気分なのだ。
もちろん、相手の気持ちもわかる。
今、食べようとしてるでしょ！　こんな時に話しかけてくるんじゃないですわ！　と思わないでもなかったが、そこはそれ。自己紹介が遅れることもまた、礼を失することになるわけで。
しかも、その順番も重要だ。誰から自己紹介をして回るか……。順番的にはラフィーナかミーアなのだが、やはりここは、先ほど一番目立っていたミーアに最初に挨拶するのは当然の流れといえるだろう。
だから気持ちはわかる。わかるが……、やっぱり思う。今じゃな

いだろう！　と。
　そんなミーアの不満が、ついうっかり口からポロリしてしまった！　つまり……、
「やめにしませんこと？　そういう、どうでもいい話は……」
　言ってしまった！　どうでもいいとか、言ってしまった！
　頭を使いたくないあまりに、ものすごくストレートに言ってしまった。
　――あ、やばいですわ。つい本音が……！
　刹那、ミーアの脳が一瞬だけ覚醒する。体に残っていた最後の糖分を燃焼させ、瞬時に回転数をトップスピードまで上げた帝国の叡智が導き出した言葉……それは、
「まず、食べてからにいたしましょう。難しいお話は。あなたたちもお腹が減っていると思いますし……」
　あくまでも「あなたたちのためですよ！」というていで言った後！
「それに、わたくしだって働いたからお腹が減ってしまいましたわ。早く食べないと、このまま気を失ってしまいそうですわ」
　ちょっぴりの本音を付け足す！
　――嘘を吐く時のコツは、ちょっぴり本当のことを混ぜること、と言いますし、これで上手く誤魔化せるのではないかしら？
　そうして、誤魔化すように微笑んで、
「だから難しい話は食べてから。ほら、せっかく熱々で用意した食べ物が冷めてしまってはもったいないですわ」
　それもまた本当のことだった。ミーアは食べたいのだ。アツアツのお料理を。
　それを聞いた老婆は、一瞬、目を見開いて……。
「ふふふ、なるほど。言われてみればまことその通り。ほら、慧馬、お前もとりあえずいただきましょう。子どもたちも、姫殿下が食べ始めなければ、落ち着いて食べられないだろう」
　老婆に言われた慧馬は、一瞬、ミーアのほうを見て、
「重ね重ね……お気遣いに感謝する」

「お礼には及びませんわ。わたくしが、美味しい状態で食べたかった。ただ、それだけのことですわ」
ニッコリ笑みを浮かべてから、きちんとアピールも忘れない。
「今日はたくさん働きましたから、わたくし、たっぷり食べる権利があると思いますの」
自分はきちんと働いた上で食べているのだ、と。なにもせずに、高慢さを発揮して食べているのではないので、そこんとこ、よろしく！　と十分にアピールしたうえで……。
「では、改めて……」
ミーアは、あんぐーり、と口を開ける。
両手でしっかりとつかんだヨーナンの端に噛り付く……。
パリリ、ッと口の中で軽快な音。直後、舌の上に、絡んだのはねっとりしたチーズだった。焼いたチーズの香ばしさ、舌の上で踊るまろやかな酸味。そこに肉汁のアツアツの旨味が交じり合う。
それは熱い旨味の三重奏。
「ほふほふ……」
ミーアは熱そうに息を吐きつつも、にっこり笑みを浮かべる。
「ああ……素晴らしい。実に素晴らしいお味ですわ」
そこで、ふと気付く。
みんなが、ぽかんと自分を見つめているということに。
「あら？　みなさん、どうしましたの？　早く食べないと、冷めてしまいますわよ」
ミーアの豪快な食べっぷりに、思わず見惚れていた面々も、そこでようやく動き出す。
そうして始まるのは、ただただ楽しい宴の時間。その楽しさは、火族と林族の中にあったわだかまりをじんわりと溶かしていくのに足る熱を持っていた。
宴会皇女ことミーアの名捌きが、月のごとく光り輝いた夜であった。

第百六十五話　悪だくみ

そこは、歴史に忘れ去られた場所。
蛇の巫女姫が拠点として滞在している廃城。
その一室、かつての王が使っていた謁見の間で、蛇の巫女姫が本を読んでいた。
それは、彼女たちの聖典……「地を這うモノの書」であった。
「……また、それを読んでいるのか」
狼使いは部屋に入ってきて早々に、呆れた口調で言った。
「もう、何度も読んだだろうに。よく飽きぬものだ」
「飽きるはずがないわよ」
本を愛おしげに撫でてから、巫女姫は言った。
「本当に、これを書いたものは、人間というものを知り抜いているわね。悪意という目を通して人間の本質を見事に記している。読み直すたびに新しい発見があるから、なかなかやめられなくって」
そのまま、本に目を落としたまま、巫女姫は言った。
「それで、なにか用かしら？」
「知らせが入った。サンクランドで、燻狼（クンロウ）が仕込んだ火種は、大火には至らなかったらしい。シオン王子は健在。エイブラム王は一時体調を崩したとの噂もあるが、今は変わらず公務をこなしている。第二王子エシャールは、サンクランドを出て、婚約者となったグリーンムーン公爵令嬢の家に預けられるらしいが……」
「なるほど。総じて、なにかは起きたけれど、大火事にはならなかった、と。それは残念」
こともなげにそう言って、本のページをめくる。そんな巫女姫に狼使いは眉をひそめた。
「あまり残念がってはいないようだが……？」
「うーん、そんなことはないけれど、でも、そうね。まぁ、どっち

でもあまり変わらないでしょう。シオン王子やエイブラム王が死ねば死んだで、その混乱に乗じる術はあるし、生き残ったなら生き残ったで、別のやり方がある。簡単に思いつくものだと、そうね。傷心のエシャール王子に近づく方法を考えるとか。国を出されたということは、たぶん、エシャール王子はなにか失態を起こしたのでしょうし、その心の内には付け入る隙ができるのではないかしら？」

「それはどうだろうな……」

狼使いは表情を動かさずに言った。

「どうやら、帝国の叡智の介入があったらしい」

それを聞いた巫女姫は、初めて本から顔を上げた。ぽかん、と口を開け、そして、次の瞬間、

「それはすごいわ」

パチパチと拍手を始める。

「燻狼さんは、蛇導師としては優秀な人よ。その仕込みを嗅ぎつけた……。それは、本当にすごいわ。どうやったのかしら？　なんでこのタイミングでサンクランドに来て、どうやって燻狼さんの企みを破ったのか……」

そうして、物思いにふけりかける巫女姫に、狼使いは続けて言った。

「それともう一つ、悪い知らせだ。火の一族の隠れ里に、林族からの救援が届いた。どうやら、慧馬が敵の手に落ちたらしい」

「ああ……、それは実に妹さんらしい……。あなたとは似ても似つかない口の軽さね」

くすくす、と笑って、巫女姫は頷いた。

「残念だわ。そのうち一緒にお茶を楽しみたかったのに、どうやら、その機会はなさそうね」

やれやれ、と肩をすくめる巫女姫に、狼使いは告げる。

「救援には、お待ちかねのアベル・レムノも同行しているらしい」

巫女姫、ヴァレンティナ・レムノの顔に、心からの笑みが浮かんだのは、まさにこの時だった。

「あはは、上手く釣れたわね。アベルは林馬龍と仲が良いと聞いていたとおり。そう、一緒に来るとは想定外だったけど、まぁ、問題ないかしら？」
ヴァレンティナの目撃情報は、無論、意図的に流されたものだった。
あの日、ミーア暗殺が企てられた夜から、この日の計画は立てられていた。
ミーア・ルーナ・ティアムーンとアベル・レムノとの関係性が表面上のものではなく、命を懸けるほどのものであることが、判明してから。
バルバラの行動と、それに対するミーアの反応。それらをつぶさに検証した結果、ヴァレンティナが出した、一つの策略。それこそが……。
「あの子が死ねば、帝国の叡智を歪ませることができる」
すなわち、アベル・レムノの暗殺だった。
巫女姫の言葉を聞き、わずかに、狼使いが顔をしかめる。
「心は痛まぬか？　実の弟の命を奪うというのは」
その問いに、ヴァレンティナはかすかに首を傾げて……、
「あたりまえでしょう？　もちろん、痛む。痛まないと思ったの？
とても悲しいわ。あの子は優しくて、うちの国の中ではまともだったもの。なんであの子と仲良くなるのって、ミーア姫に文句を言いたいぐらいだわ。あの子がこんなところで、命を落とすなんて、とても理不尽。こんなに悲しいことってないわ」
冗談で言っているのでは、たぶんないのだろう。彼女は、たぶん、真剣に悲しみを感じている。そのうえで、
「でも、まぁ……、それも些細な事。歴史の流れから見れば、人の感情なんて大したことのないものでしょう」
そう言った時、彼女の瞳は遠くを見つめていた。
「個人の感情、個人の命、町や村の滅亡、国の勃興であったとしても、歴史の大河からすれば些細なこと。私がどう感じるかなんて、

大した問題ではない」
「蛇は、心を支配することで、世界の歴史を左右する。そうではなかったのか？」
「もちろんそうよ。私が悲しいのはどうでもいいけど、ミーア姫を絶望させることは、歴史を左右する大きなこと。バルバラさんは実に慧眼だった。大陸の、次世代の権力者たち、その中心にいる彼女の心を歪めることは、とても意味があること」
「ならば、どうだ？　いっそのこと、ミーア姫の命を狙うというのは……」
「どういう意味でしょう？」
不思議そうに首を傾げるヴァレンティナに、狼使いは言った。
「どうやら、ミーア姫も林族の救援隊と同行しているらしい。彼女だけでなく聖女ラフィーナ、裏切り者のイエロームーン公爵令嬢や、ミーア姫の妹と呼ばれている少女もだ。面倒なことをせず、かの姫君の命を奪ってしまえば良いのではないか。そうすれば、実の弟に手をかける必要もなし」
重々しく、そう言う狼使いに、巫女姫は愛らしい笑みを浮かべた。
「ふふふ、優しいのですね。けれど、それをするためには、あなたがあのディオン・アライアに勝たなければならないと思うけど……」
巫女姫はそう言ってから……。
「でも……そう。その状況の変化は歓迎すべきものかもしれない。できることが増えるし、なにか考えてみることにしましょうか」
そうして、再び、本に目を落とすのだった。

第百六十六話　おねえさんのことを聞くために

さて、翌日のこと。
馬車の中で一夜を明かしたミーアは、ふわぁ、っと欠伸をしつつ、のっそりと起き上がる。
「ふむ……」
一つ伸びをしてから、ミーアは軽くお腹をさすった。
「不思議ですわ。なんだか、ヨーグルトを食べ始めて以来、ちょっぴり調子がいい感じがしますわね」
なぁんて独り言をこっそり聞いていたアンヌが、シュシュっと動き出し、ルードヴィッヒと馬龍に相談したうえで、帝国でも新鮮なヨーグルトを食べられるよう手配したのは、また別の話である。
ミーアの片腕が、勝手に動いて、ミーアの体に良い食べ物を集めてくるのは、比較的よくある出来事であった。
ミーアの美容と健康には余念がない俊敏腕（しゅんびんわん）のアンヌである。
まぁ、それはさておき……。
気分爽快な目覚めをしたミーアのもとに、慧馬が訪ねてきた。
「ミーア姫、起きているか？」
「あら、慧馬さん。ご機嫌よう」
にっこり微笑みつつ、出迎えたミーアに、
「長老が挨拶をしたいから、こちらにお訪ねしてもいいか、と言ってる」
「あら……？　ここに来るんですの……？」
なるほど、ミーアの側から挨拶に来いと言うのは、当然礼を失することになる。それゆえ、自分たちのほうから挨拶に行きたい、ということなのだろうが……。
「ふぅむ……。それでしたら、わたくしのほうからお訪ねいたしますわ」

ミーアはあっさりと言う。
ミーアの乗る馬車は、皇女を乗せるためのものだけあって、きわめて快適。お客人を迎えるにも問題ない造りをしているが……少々狭い。
一対一で会うならばともかく、ラフィーナや馬龍、アベルも含めると、とてもではないが手狭だ。
――最初に挨拶をするのがわたくしということなのでしょうけれど……。
正直、それは避けたい。なにしろ、問題は山積しているのだ。
火の一族の食糧問題、騎馬王国との関係改善、それに混沌の蛇のことも聞きださなければならない。それを一人で聞き出すのは……大変そうだ。
――お義姉(ねえ)さんのことを聞くためには、アベルも一緒にいてほしいですし……ふむ。
……ということで、ミーアは提案する。
「そうですわね。では、ラフィーナさまと馬龍先輩にも声をかけて、こちらから行かせていただきますわ」
「む……。聖女ラフィーナはともかく……林族のあいつか……。まぁ、仕方ないか……」
慧馬はしぶしぶ、といった様子ながら、頷いた。
さすがに、食料を恵んでもらった以上、無下にできるはずもない。そう……図らずも火の一族の者たちは、葛藤する機会を奪われたのだ。
因縁のある騎馬王国の民に助けてもらうのはどうなのか？　とか、林族の者たちを村に入れるのはどうなのか？　とか、まったく関係のないラフィーナやミーアたちを迎え入れてしまうのはどうなのか？　などなど、悩む余地を一切奪われたのだ。
ミーアが動き出してしまったので、それにつられてついつい動いてしまったのだ。
そして……、一族の中でも、特にわだかまりのない子どもたちが

お客人たちに懐いてしまった。あとは、なし崩しである。
ともに働き、ともに同じものを食べる。互いに労をねぎらいあえば、そこには笑顔だって生まれる。緊張感は薄れ……、「絶対に話なんかしない！」などと、突っぱねづらい雰囲気が醸成される。
――まぁ、話してみてなにが決まるかは定かではありませんけれど、そこから頑張るのは騎馬王国の方。馬龍先輩の役目ですわね……。とはいえ、警戒を怠るのも愚か。わたくしも知恵袋に同伴していただくのが良いですわね。
とまぁ、そんな調子で、ミーアは、ラフィーナ、馬龍、アベル、さらにルードヴィッヒとアンヌを連れて長老の小屋を訪れた。
困った時に、シュシュっと視線を振る先は多いに越したことはない。そんな判断である。
リスクと責任は分散が大事。ミーアのモットーである。
小屋に入ると、そこには昨夜、挨拶に来た老婆と慧馬、それにもう一人若い女性が待っていた。
老婆は、ジロリ、とミーアたちのほうに目を向ける。眉間に刻み込まれた深い皺、きゅっと結ばれた唇と鋭い視線。険しい表情をしている老婆を見て、ミーアは、ふむ、とうなって……。
――この方、こうして見ると気難しげに見えますけれど……。
それから、昨夜のことを思い出す。
宴会の最中、実に美味しそうに食べていたこと。ミーアと同じものを食べた老婆は、はふほふ言いながら、実に実に！　美味そうに食べていたのを、ミーアは見逃さなかった。
さらに、一族の者たちが、空腹から解放されたのを見てご機嫌になってしまった老婆は、酒が入ったこともあってか、陽気に踊っていた。踊っていた！
それを思い出し、ミーアは確信する。
――ふむ、この方、実はお茶目な人に違いありませんわ。
などというミーアの内心とは裏腹に、老婆が深々と頭を下げる。
「私は、火族の長老、火　狼花（ロウファ）と申します。現在、族長が留守にし

ているため、族長の妹慧馬、と、私が代表してご挨拶をさせていただきます。ミーア姫殿下、聖女ラフィーナさま、わざわざご足労いただき、感謝いたします」

老婆は、それから、鋭い視線を馬龍へとむける。

「それに、林族の者たちにも助けられた。改めて感謝を伝えたい」

そうして、再び頭を下げる長老、狼花。それに次いで、慧馬と若い女性も頭を下げる。若い女性のほうは、どうやら狼花の世話係らしい。

ミーアたちは、それぞれ、自己紹介を終えると、話はすぐに本題へと移っていった。

第百六十七話　頑張り、悟って、諦めた

「此度のこと、かえすがえすも感謝しかない。我らの一族を助けていただき感謝する。が、しかし、なぜ、このようなことを？」
重たい口調で、狼花が言った。
「それは聞くまでもないことだ。もともと火の一族と林の一族とは、同じ父母から生れ出た同胞（はらから）。困ってる時に助けるのは当たり前のこと……」
と、馬龍が答えたのに対して、狼花は薄く笑って首を振る。
「馬鹿にしないでもらおうか。林族の若者よ。なんの報いもなく助けてもらえる……そのように甘い話があるなどとは、さすがに思ってはいない。我らは……そこまでは甘くはないぞ」
硬い表情で言う狼花。その岩のような重厚な雰囲気に、ミーアは思わず気圧され……はしなかった。やっぱりしなかった。
なにしろ、昨夜、満面の笑みで食べていた人である。はふほふ言いながら、一緒に食べてたのをちゃーんと目撃していたのである！
――昨日の宴会がなかったら、まったくイメージが違っていましたわね。第一印象って大事ですわ。ふむ……わたくしも気を付けねば……あら？
その時……不意にミーアの脳裏に、昨夜の出来事が過ぎる。
『やめにしませんこと？　そういう、どうでもいい話は……』
などと、ちょっぴり突き放すように言ってしまったのだった。
――やはり、あれは……あまり良くなかったかもしれませんわ。
上手く誤魔化せたとは思うし、たしかに相手は笑って、気にしない風ではあったのだが。
――しかし、相手はご老人。わたくしのような、若造の無礼を笑って流せるだけの度量を持っているかもしれませんわ。となれば、笑ってはいても、マイナスの印象を抱かれてしまった可能性は否定

できませんわ。
ミーアは、ふとルードヴィッヒのほうに目を向ける。っと、ルードヴィッヒは真剣な目でこちらを見つめていた。瞬間、ミーアの背筋がゾゾゾっと冷える。
思わず想像してしまう。
もし仮に、昨夜の自分をクソメガネが見ていたとしたら……。
――き、きっとものすごい勢いでお説教をされたに違いありませんわ。いいえ、今のルードヴィッヒであっても、昨日のはきっとお小言を食らうはず……。
お腹が空いていたとはいえ、少々やらかしたかもしれないぞぅ、っとミーアは改めて実感する。
今、必要なことは相手の信頼を勝ち取ること。そうして、混沌の蛇のことを聞き出すことである。けれど、昨夜のやらかしで、スタート地点がマイナスになってしまった可能性が濃厚である。痛恨のミスといえるかもしれない。
――これは……なんとしても、挽回しなければなりませんわね。良い印象を抱かれるよう、頑張らねば。
こうして、ミーアは、本日の自身のスタンスを決める。
中立より、ほんのちょっぴり、火の一族寄りの立ち位置。そうして、相手の信頼を勝ち取る。
ダンス名人のミーアにとっては、微妙なバランス取りはお手の物なのだ。
ということで……。
「慧馬は、友情による支援と言っておりますが、それを信じ込むほどに初心だと思われるのは、いささか心外というもの。そちらにおられるミーア姫殿下、それに、聖女ラフィーナさまについても同じこと。なにか、我らを助けることで得ようとしているものがある……。そうではありませんかな？」
「あら、そんなことはありませんわ。慧馬さんとお友だちなのは事実。そして、お友だちを助けるのは当たり前のことですわ！」

慧馬とお友だちアピールをする。熱烈にアピールする！　次いで、「馬龍先輩とて同じこと。同胞が困っている時に手を差し伸べるのは当たり前のことではありませんの？」

馬龍が頷くのを確認する。

これにより、火の一族が、無償で支援を受けることの確約とする。きちんと役に立って見せる。

そうして、ミーアはラフィーナにも目をやる。

友のため、あるいは血族のために、労力を惜しまないこと。それは紛れもない善行であり、ゆえに、ラフィーナもニッコリの、完璧な答えのはず……、と、それを確認しようとしたミーアであったが、直後に首を傾げる。

なぜだろう……ラフィーナは、ちょっぴり不機嫌そうな顔をしていた。

――あ、あら？　おかしいですわ……。別にまずいことは何も……。

さらに、ミーアは気付く。ラフィーナだけではない。狼花もまた、あまり納得していないような顔をしていた。

――なっ、なぜですの？　これは……、こんな美味しい話ですのに、どうして喜んでいないんですの？　こっ、これはいったい……？

ミーア、思わず混乱する。想定とは違う周囲の反応に、危機感を大いに刺激される。

――もしかして……ですけれど、やっぱり昨日のアレ……、結構、ダメだったのかしら？

たしかに、無礼な態度ではあったと思うが……ということは、初手でもっと謝罪色を強くしなければならなかった？

などとアワアワし始めるミーアに、不意に話しかける者があった。

「失礼いたします。ミーアさま、少しよろしいでしょうか？」

静かな、落ち着いた声……。けれど、ミーアはその声に肝を冷やす。

ちらり、と視線を向けると、そこには……、キラリと眼鏡を輝か

せるルードヴィッヒの姿があった。その顔を見て……ミーアは悟る。
――あ、ああ……、これ、前の時間軸でよくあったやつですわ……。る、ルードヴィッヒがフォローしなければならないほどのミスを、わたくしが犯してしまったということですわね……。
これは後でお説教、確定かしら……？　いやだなぁ、いやだなぁ、と思うが、こればかりは仕方ない。それに、下手に粘って、より取り返しがつかない事態を招くのは、さらなる悪手である。
ルードヴィッヒが任せろ、と言い出した時には、素直に全部投げてしまうのがよいのだ。
諦めと悟りの境地に至ったミーアは、ちょっぴり脱力しつつ、
「……では、ルードヴィッヒ、お願いいたしますわ」
ポーンっとルードヴィッヒに丸投げした。
それを受け、ルードヴィッヒは一つ頷いてから、軽く眼鏡を直した。
「では……、ミーアさまに代わって、僭越ながら私のほうから……」

第百六十八話　ルードヴィッヒ、考察する

「自分の為すべきことを認識するのは大切なことだ」
その場所で、組織で、人間関係の中で自分の役割をしっかりと認識し、持てる力のすべてをもって為すべきことを行う。
それが叶った時、人は、疲労感にも増した達成感を得るものであると、ルードヴィッヒは、そう考えていた。
そして、帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンの臣下というのは、それを見出すのがなかなかに難しい立場だと、常々彼は感じていた。
なにしろミーアという人は、その知恵においては言うに及ばず、道義的な面においても、まず、非難のしようのない人物である。知恵者であり人格者でもあるという、ある種の完璧な超人である彼女のもとにあっては、下手をすると自分などいてもいなくても同じということになりかねないわけで。
知恵が足りぬなら、適切な助言をすればいい。道義的間違いを犯すなら、臆せず諫言を呈して正せばいい。
だが、道義的には文句のつけようもなく、極めて合理的な判断を下す者に、果たしてどのような助言ができるだろう？
ミーアのもとで働くようになってから、ルードヴィッヒは、いつでも「自分に求められる役割はなにか？」と考えるのが癖になっていた。
そんな彼にとって、先ほど、ミーアが視線を送ってきた意味を察することは、容易なことだった。
そして、今、自分がなにを求められているのかを察することも。
――なるほど。このメンバーであれば、たしかに俺が言わなければならないだろう、ミーアさまの代理として。
ルードヴィッヒは納得し、軽くメガネの位置を直した。為すべき

こととのために、自身の力を尽くせることは幸せなことだと、改めて噛みしめる。
さて、ミーアが求めていることはなにか？　それは、端的に言えば「客観的なメリットの提示」である。
言い方を変えるならば、火の一族の族長、狼花を「納得させるための理屈」ということになるだろうか。
善意や情によって差し出された助けの手を取るのは、勇気がいることだ。それは相手の気まぐれで、いつ引っ込められてしまうかわからない、なんの保証もないものだからだ。
しかも、それは悪意を含ませやすいものでもある。少しでも知恵の働く者であれば知っていることだ。上手い話には裏がある、ただより高いものはない。
自分にとって都合がよすぎる話には、警戒してあたるべき、と考えるのは当然のことだった。
――だからこそ、支援する側の合理的利点を説けとおっしゃっているのだ。
狼花に気付かせることが必要だった。仮に狼花が気付いていても、こちらがその利点を認識していることを知らせることも必要だった。
もちろんミーア自身も、その利点を把握しているだろう。場合によってはルードヴィッヒ以上に正確に推察しているだろう。
されど、ミーアがそれを口にするのはまずいのだ。なぜなら、ミーアと慧馬を繋ぐものは、利害の一致ではなく「友情」だからだ。
昨夜のことを、ルードヴィッヒは思い出す。
「やめにしませんこと？　そういう、どうでもいい話は……」
ミーアは、はっきりとそう言ったのだ。
では「どうでもいい話」とはなにか？
火の一族の重鎮の自己紹介のことだろうか？　否、そうではないだろう。そんな無礼なことをする人ではないし、もしそんなことを言うようならば、諌めなければならないところだ。
自身がミーアにお説教する場面を思い浮かべ、ルードヴィッヒは

少しだけ不思議な気持ちになる。
そんなことは絶対にあり得ないはずなのに、どこか懐かしさを感じてしまって……、思わず苦笑い。
それから、改めて思う。
――ミーアさまがなにを「どうでもいい」と言ったのか……、それは、狼花殿がしようとしている「話の内容」ではなく「自己紹介をしなければならないという常識」あるいは礼節だ。
ミーアは、大国の姫として受ける過剰な礼節を、どうでもいいと言ったのだ。
この場に来たのは、そのような礼を受けるためではない、と。慧馬という友人のために、友情のゆえに来ただけだから、姫に対するような礼節など不要と……。
そのようなことを言いたかったのではなかったか？
――ミーアさまは、一人の友として、この問題に関わることを望んでおられる。
ルードヴィッヒはそう認識する。
であれば、ミーアが利害を口にすることはできない。それは、友情という繋がりを濁らせる。ミーアは、それを望まないということだろう。
利害関係の一致は、納得しやすい反面、壊れやすくもある。利害の不一致、合理的判断によって、簡単に状況は覆ってしまうからだ。
けれど、感情による判断はしばしば理を超える。
保証がない反面、なんの利益がなくとも助けをもらえることがある、それこそが友情という繋がりなのだ。
だからこそ、ミーアは慧馬との繋がりをその形にしておきたかったのだろう。
――いや、その考え方もまた理に偏りすぎているな。ただ単にミーアさまの個人的資質からくる判断かもしれない。
自身の主の少々お人よしの面を思い出し、それを好ましく感じている自分を認識して、ルードヴィッヒは再び苦笑を浮かべる。

――それはともかく、同じことが馬龍殿、ラフィーナさまにも言えるだろうな。
馬龍は同胞の情、ラフィーナは信仰のゆえ。それぞれに助ける理由はあれど、そこに利害を絡めることで、濁りが生じてしまう。
それゆえに、火の一族を助ける利点を、客観的に説明する者が必要となる。
――つまりは、それこそが俺に求められている役割、ということか。
ルードヴィッヒは自身の果たすべきことをきちんと意識しつつ、そっと声を上げる。
「ミーアさま、よろしいでしょうか？」
ミーアは、一瞬、考えるように黙り込んでから、
「ええ……。それでは、お願いいたしますわ」
すべて任せた、というように深々と頷いた。
それが、全幅の信頼のように感じられて、少しだけ嬉しくなってしまう。
――うぬぼれが過ぎる、かな……。
気持ちを切り替えるように、メガネの位置を直しつつ、ルードヴィッヒは息を吐いた。
そうして、改めて、その場のみなに視線を注ぐのだった。

第百六十九話　……ないている

「改めて、失礼いたします。狼花殿。私はミーア姫殿下の家臣、ルードヴィッヒ・ヒューイットと申します。我が主（あるじ）ミーアさまに代わり、発言させていただきます」

静かに、ルードヴィッヒが話し始める。

それを横目に、ミーアは小さくため息を吐く。

――ああ、お説教ですわね。これは、間違いありませんわ。くぅ、油断がありましたわ。断頭台にかけられた直後であれば、あのように不用意なことは言いませんでしたわ。気が緩んでおりますのね……。気を付けなければ……、ああ、でも、お説教は嫌ですわ。ううむ、それはそうと、今日のお昼の食事はなにかしら……？

ミーアが、若干の反省の後に、潔く現実逃避を始める間にも、ルードヴィッヒの話は進んでいく。

「火の一族を助けることは、なにも情によるものだけではありません。食糧不足によって行われたあなたがたの略奪行為、これは、この地の治安を悪化させるものです。それを取り締まるのは一苦労でしょうし、騎馬王国とサンクランドの国家間にも亀裂が入りかねない。かといってやめろと説得するのも意味がないし、仮に略奪をやめたとして、ここに飢饉が発生し、疫病が流行るかもしれない」

一つ一つ丁寧に、淡々と、ルードヴィッヒが説明していく。

「私はあなたたちになんの情もないが、あなたたちに食糧を支援し、食糧を得る術を与えることはとても理にかなったことだと考えています」

そう結んだルードヴィッヒの言葉を引き継ぎ、馬龍が口を開いた。

「もう、いいだろう？　長老、狼花殿。我らはともに、始祖、光龍に連なる者。同じ血族ではないか。過去のいきさつがあり別れはしたが、その血の繋がりは否定できない。別れていたものが、また一

つになる。今こそが好機なんじゃないのか？」
語られる言葉、それは、凍り付いた時を動かすに足る熱量を十分に持っている……たしかにそう思えて……でも……。
「だが……、戦狼のことはどうなる？」
その問いかけは、ひどく冷たく、再び空気を凍てつかせた。
「それは……」
言い淀んだのは、馬龍だ。そして、ルードヴィッヒの顔にも、苦いものが混じる。
それは、容易には解決しえない問題であったから。この場でどうすることもできぬ、一番の問題点であったから。
「それこそが、我ら火の一族が、主ら十二部族の者たちとともにいられぬ理由よ。林の若者よ。お前たちは、我ら一族の狼を使いこなす術を否定した。嫌悪し、捨てさせようとした。それは、今でも変わらないのではないか？」
「そうだ。お前たちが先に拒んだのだ。我々ではない。そのせいで、我らがどれほどの苦境に立たされたか……。それとも、今さら妥協をするというのか？」
狼花の隣に座る、従者の女性も続く。その顔に浮かぶのは、紛れもない怒りの色だった。
ただ一人、慧馬は……慧馬だけは、黙り込んでいた。黙って、ただ静かにうつむいていた。
そして、投げかけられた言葉に、馬龍は答えられなかった。有力部族とはいえ、しょせんは十二の部族のうちの一つにすぎず、しかも、彼は族長の息子というだけのものだ。
なんの権限もない以上、ここで軽はずみなことは言えない。
そうなってしまうと、自然、その場の空気は硬直せざるを得なくって……。重たい沈黙が、再び訪れようとした……まさにその時だった。
「……ああ、馬がないておりますわね」
ポツリ、とミーアがつぶやいた一言。

それは、まるで、水面に投げ入れた大きな石のようで……、広がった巨大な波紋がその場の空気を大きく震わせた。
「馬が……泣く……？」
そのつぶやきが、はたして誰のものであったのか……定かではない。されど、しばしの忘我から抜け出し、最初に口を開いたのは、長老、狼花だった。
「それは……つまり、我々が仲違いをすることで、馬たちを悲しませていると……そのようにおっしゃっているのか？」
その重々しい問いかけに、ミーアは……、少しばかり緊張したのか、
「……はぇ……い」
ちょっぴり、ヘンテコな声で答えた。

……そう、おわかりのこととは思うが……緊張の話し合いの最中にも……ミーアの現実逃避は続いていたのだ。なにしろ、ミーアのルードヴィッヒへの信頼は厚い。
彼が出張ってきた以上、自分の役割は終わったものと、ミーアが確信したとしても仕方のないことであった。
ということで、今日のお昼、夜のお食事、キノコが食べたい、この森にはどんなキノコが……などと、全力で逃避をしていたミーア。ではあったのだが……。
――ああ、いけませんわ。真面目に話を聞いておきませんと……。
しばらくして思い直す。そうなのだ、ミーアは、反省することにかけては、それなりに定評のある皇女殿下なのである。現実逃避の少し前、油断が過ぎると反省したばかりではないか。
――ここは気持ちを切り替えるために、なにか……数えて、精神統一するのがいいですわね……。えーと。
食欲という煩悩を振り払うべく、数えの極意（カウンティング）を始めようとするミーアであったが……、残念ながら手頃の数えられるものもなく……。その時だった！　ミーアは見つけた。否、聞きつけた。それこそが！

「……ああ、馬が鳴いておりますわね」
遠くに聞こえる馬の嘶きであった！
――ちょうどいいですわ。とりあえず、馬の鳴き声を数えて精神統一をいたしましょうか。
ランダムに聞こえてくる馬の鳴き声を数えることは、精神を集中させるのにちょうどよいのではないか？　などと思っていた矢先、ミーアは感じ取る！
自身に注がれる、狼花の、その従者の女性の、慧馬の、馬龍の……、その場にいるみなの視線を。
その意味がまるで、わからなかったミーアは……、
「それは……つまり、我々が仲違いをすることで、馬たちを悲しませていると……そのようにおっしゃっているのか？」
その問いかけに……、
「……はぇ？」
と首を傾げそうになるのを、なんとか、踏みとどまる。崖っぷち、気合の踏ん張りである。そして、
「い」
一文字付け足した！　ミーア史に残る、全身全霊の軌道修正である！
そんなミーアをじっと見つめていた狼花は、ふいに、肩の力を抜いて……。
「なるほど……その通りやも、しれませんな」
苦笑いを浮かべた。

ミーアによって投げかけられた、たった一言によって起こった状況の激変……。
衝撃のあまり、ルードヴィッヒは、ただただ目を見開くばかりだった。
刹那の忘我の後、すべてがミーアの手の内であったことに気付いて……思わずうめいてしまう。

――なんということだ……、ミーアさまは初めから見抜いていたのだ。この件の、勘所を……。

火の一族に届きうるただ一つのもの。彼らが自分たちの一族の誇りたる狼を持ち出してきた時、唯一、彼らの心を揺らしうるもの。それはなにか？

馬しかないではないか……。彼らもまた、騎馬王国に連なる者であり、馬とは、神から与えられた至高の財産で、愛する家族なのだ。

それゆえに、馬を使うのは当たり前のこと。

そして、それゆえに、ミーアは合理的な説明をすべてルードヴィッヒに任せたのだ。

なぜなら「馬が泣いている」というセリフは、決して合理主義者が言ってはならないことだったからだ。そのような、感情に頼った言葉を合理主義者が口にすればどうなるか？

恐らく自分たちの説得のために馬を利用していると思われるに違いない。合理主義者は馬が泣くなどとは決して思わないが、相手を説得するために使えるならば使うのだろう、と。白けた目を向けられるに違いない。

「馬が泣いている」というセリフを言う者はあくまでも「感情の人」であり「感性の人」でなければならない。動物が泣くことを、本気で信じることができる人間でなければならないのだ。

――ゆえに……、ゆえにこそ！　ミーアさまは、友情によって手を貸すという立ち位置を堅持しなければならなかったのだ。こちらの合理的な利点をしっかりと理解させた上で……感情的な壁をも一気に突き崩す……。あのような的確な一言を叩きつけるとは……なんという……。

戦慄すら覚えるミーアのやり方に、ルードヴィッヒはただただ感動し……。

――これは、あいつらに良い土産話ができたな。ふふ、もしかしたら、うらやましがられるかもしれないな……。

帝国で暗躍する女帝派の者たちの顔を思い浮かべるのであった。

第百七十話　火の一族の事情

「長老……」
狼花の突然の言葉に、慧馬が目を丸くしていた。従者の女性も思わず、といった様子で腰を上げかけた。
そんな二人に、狼花は、あくまでも落ち着き払った声で言った。
「意地を張っても、どうにもなるまい。我らの状況は、我ら自身ではいかんともしがたいところに来ている。ならば私は、この、友のために来たという方々に助けを求めたいと思う。理をわきまえていながら、あえて、それを自分で口にせず……説得するのではなく私が心を開くのを座して待とうとした、ミーア姫殿下に……」
そうして、狼花はミーアに目を向けた。
その優しくも穏やかな視線を受けて、ミーアは……。
――この様子ならば、ルードヴィッヒからのお説教はないかもしれませんわ！
ふぅうっと安堵の吐息を吐いた。
結果良ければすべてよし、で納得してくれるほど、ルードヴィッヒは単純な男ではないのだが、それでも、結果さえあれば、それをよりどころに反論もできようというもの。
絶望に、突如差し込んだ希望の光、それを喜びつつ、ミーアは耳を傾ける。
ここでの油断は禁物だ。狼花の話をしっかり聞き、問題を解決させてこそ、結果良ければ、と言えるようになるのだから。
「みなさまに聞いてもらいたい。我らが、いかにしてこのような窮状に陥ったのかを……」
そうして、狼花は話し出した。
「我ら火の一族と騎馬王国十二部族との間にあったことは、ご存知かな？」

「そうですわね。狼を使役する術を学び、それゆえに、騎馬王国から出された一族である、と、そのように聞かされておりますわ」
ミーアの言葉に頷きを返し、狼花は続ける。
「火族の族長、星馬は、ある時、狼を統べる術を知る一人の人物を連れてきたと言われております。巫女姫と呼ばれるその人物は、一冊の書物を携えていた」
「一冊の本……」
ラフィーナのつぶやき。ミーアも、あの本のことを思い浮かべずにはいられなかった。
「地を這うモノの書……」
「それが正しき名だと知ったのは、ずっと後のこと。私が物心ついてから、このかた、ただ『蛇の書』と呼んでおりました。表紙に書かれた蛇が印象的な本でしたのでな」
「失礼ですけれど、狼花さまは、その本を読んだことは？」
ラフィーナの問いかけに、狼花は首を振った。
「あの本を巫女姫が手放すことはありませんでした。それに、もしも手に取る機会があったとしても、我らは文字が読めません。我が騎馬王国はもともと文字を持たぬ部族ですからな」
言われて、ミーアは思い出した。
騎馬王国は文字にして書き残す文化がない。ゆえに、歴史歌により、一族の歴史を後世に伝えている。
林族の族長の話を思い出し……ミーアはふと首を傾げる。
「ん？　ということは、もしやこの歴史語りも歌で伝えられたものなのでは？」
「あ、ああ……たしかにその通りですが、その歌は……」
などと、ちょっぴり気まずそうにする狼花……シャイなのだろうか？
「一杯飲んでいないと、ほれ、気持ちよく歌えませんでな」
陽気なおばあちゃんだった！
ミーアは昨夜の狼花の様子を思い出し、納得する。きっとほろ酔

い気分で気持ちよく歌いたい人なのだろう。それはさておき。
「巫女姫は、何度か世代交代されていたが、常に、その本とともにありました。そして、いつでも、族長さまとともにあり、狼を操る術を与え続けた」
「なるほど。火の一族の全員が狼を使えるわけではない。族長だけが使えるものであったと……、あら？　では、慧馬さんは？」
と、目を向けると、
「我は……その、少し興味があって……。いや、我が兄になにかあったら大変と思い、その術を絶やさぬようこっそりと聞いていただけのこと。うむ、別に小さな戦狼の子が可愛かったからだとか、そういうことではない」
そうして、慧馬は偉そうに胸を張る。
ミーアはそれに、生暖かい目を向けつつ……。
――ふむ、しかし、やはり蛇の巫女姫が関わっておりましたわね。それに地を這うモノの書まで出てくるとは……。これは、かなり敵の深部に迫っているのではないかしら……。
「族長さまと巫女姫さまは、時折、連れ立って村から出かけることがあった。その際には一人か二人、若者を連れて出て……若者のほうがしばらく帰ってこないということもあった。なにをしているのか、幼き頃は疑問であったが、その若者が美味しいお土産を携えてくることもあって、きっと良いことをしているのだと思っていた」
それ、絶対に、外に出てヤバイことやってますわ！　などと思うミーアだったが、とりあえず黙っていた。ミーアは空気を読める人なのだ。
「そんな我が一族に変化が起こったのは五年前のこと……。巫女姫とともに出かけた当代の族長、火　馬駆（マク）が一人の若い娘を連れてきたのだ。傷を負い、意識を失っていた娘は、目覚めた時にこう名乗った」
狼花は、みなの顔を見渡してから、最後にアベルのところで視線を止めて、厳かな口調で言った。

「ヴァレンティナ・レムノ……。レムノ王国の第一王女である、と」
その名を聞いた瞬間、アベルがぴくり、と肩を揺らした。

第百七十一話　族長、狼花の依頼

「ヴァレンティナ・レムノさん……、それって……」
さすがのラフィーナも少し驚いた顔で、アベルのほうを見た。アベルは……唇を噛み締めたまま、黙っていた。
「なるほど。それなら、あいつらが見かけたって言ってたのは、間違ってなかったってことか」
馬龍のつぶやきをよそに、狼花は、驚くべきことを言った。
「その後、巫女姫は、ほどなくして亡くなられたよ」
「蛇の巫女姫が、死んだ……？」
「ああ……。なにしろ、私よりもさらに年をとっていたから。それに、安堵なされたのだろうな……後継者ができたことで」
「……後継者」
嫌な予感に、背筋がぞわぞわするのを感じる。その予想が、決して外れていなかったことが、すぐに判明する。
「先代の巫女姫さまは、ヴァレンティナ・レムノにすべてを託して逝かれたのだ。蛇の書も、なにもかもを、な」
「それは……、それは、なにかの間違いではありませんか？」
かすれるような声で言うアベルに、狼花はゆっくりと首を振ってみせた。
「残念ながら、それが事実。彼女は、はじめ蛇の書を読むことを躊躇っていた。されど、巫女姫さまの勧めによってだんだんとそれにのめりこむようになり……、気が付けば日がな一日、それを読みふけるようになった。そうして、ある日、ヴァレンティナ姫は宣言する。自らが巫女姫となるということを」
淡々と告げられるその言葉は、一切の感情が込められることはなく……それゆえに、それが揺らぎようのない真実であることを主張しているかのようだった。

「我々はそれを受け入れた。巫女姫の代替わりは今までも何度もあったこと。今回のそれも、今までと別段変わらぬことである、とそう思っていたのだが……」
狼花は、そこでそっと瞑目し……、
「二年前のことだった。族長の馬駆は、突如、巫女姫を連れて、この村を出て行った」
驚愕の事実を口にする。
「そして、村の大部分の男たちは、族長を追って、村から出ていった」
「まぁ、それでは、男性の姿があまり見られないのはそういう事情だったのですわね」
てっきり、略奪隊が出かけているだけだと思っていたミーアには朗報である。それは、すなわち、
――大戦力が戻ってきて、力関係が逆転する、という事態にはならなそうですわね。ディオンさんによる大虐殺などもどうやら回避できそうですし。良いことですわ。
うむうむ、と頷いてから、ミーアは慧馬のほうに目を向けた。
「族長が不在だから、その妹たる慧馬さんが略奪隊を率いていたのですわね」
「無論だ。我は族長の妹、戦狼を使うこともできる。我が率いずして誰がみなを率いることができるだろうか」
キリリッとした顔で胸を張る慧馬。
「ん？　ということは、先日の略奪隊は……」
「私たち、村の女の中で戦える者と、残った数少ない男たちで組織したものです」
従者の女性が言う。
「なるほど。そういうことだったんですのね。どうりであっさり引いたと思いましたわ。じゃあ、別に捕まってもどうということはなかったんですのね。まぁ、率いてるのが慧馬さんですし……あら……？　じゃあ行きがけの盗賊団も慧馬さんたちだったんですのね？」

シオンの暗殺にかかわった盗賊団を思い出すミーアである。あちらも、慧馬たちであったなら、実際には暗殺なんか行われなかったかも……？　などと首を傾げるミーアだったが……。
「なんのことだ？」
怪訝そうに眉を顰める慧馬。
「ほら。サンクランドとヴェールガを繋ぐ巡礼街道沿いで、わたくしたちを襲ってきたじゃありませんの？　それで、ディオンさんに脅しつけられて逃げていったと聞いておりますけれど……」
と尋ねると、慧馬は苦り切った顔で言った。
「常識で考えてもらいたい。ミーア姫。あのディオン・アライアがいるとわかっている、そのような一行を我が襲うことがあるだろうか？」
その重たい問いかけに、ミーアは、深々と頷いた。
「ああ、なるほど。慧馬さんの言葉には、揺るぎようのない真理がありますわね……。ということは、あの時に遭遇したのが、族長さんと一緒に出て行った方たちなんですのね」
たしかに、ディオンが護衛を務める集団に喧嘩なんか売るはずもなし。ミーアは深々と頷きかけ……不意に違和感を覚える。
――ディオンさんのことを知っているということは、慧馬さんはもしかして、ここから出て行った火の一族の方たちとも交流を保っているということかしら？　ふむ……。
腕組みし、考え込んでいたミーアは、慧馬の悔しそうな声に、思わず顔を上げた。
「兄上は、巫女姫に騙されている。口車に乗せられて、我が一族を破滅へと追いやろうとしているんだ」
――騙されている……。なるほど、蛇は心を操る術に長けていると聞きますし、可能性は十分に考えられますかしら……。いや、でも……。
ミーアは、そこで再び考え込んでしまう。
そもそもなぜ、族長の火　馬駆は、この村を出て行ったのだろう

か？
　今までの巫女姫と族長の行動は、ミーアにはなんとなくわかっていた。要は、この火の一族の中で、使えそうな手駒を選定し、訓練して、他国に送り込んでいたのだろう。
　思えば、サンクランドでエシャール王子に毒を渡した人物も、騎馬王国の民のような恰好をしていたと聞く。それは、まさに、そのような人物だったのではないか。
　しかし、もしそうならば今までやってきたように、これからも、細々とそれを続けていけば良かったのではないか？　それこそが、本来の蛇のやり方なのではないか？
　――いったい、なにを考えて、そのようなことを……。
「ミーア姫殿下、ヴェールガの聖女ラフィーナさま、それに……、林族の馬龍殿……」
　ふと見れば、狼花が深々と頭を下げていた。
「どうか、みなさまにお願いしたい。我らから奪われた者たち、去っていった者たちを取り戻してはいただけないだろうか？」

第百七十二話　あまぁいケーキも、みんなで食べればＦＮＹらない、の精神で

――これは、なかなかに大変なことになりましたわ。
頭を下げる狼花を見て、ミーアは小さくうなった。
混沌の蛇の巫女姫、アベルの姉、ヴァレンティナ・レムノのこと。
巫女姫とともに、村を出て行った族長、慧馬の兄、火　馬駆と、それを追って出て行った一族の男たち。
火の一族と騎馬王国十二部族との和解と、火の一族の食糧事情の改善。
山積みの問題だが、放り出すわけにはいかない。
友人を名乗る慧馬のこともあるが、それ以上にアベルが関係者である以上、問題を放置することもできず……。
さらに！
「無論、我々が村々に対して略奪を行ったことは、必要にかられてしたこととはいえ、罪は罪。力を持つ者が奪うのは当然の権利……などという主張は、あなた方に力を借りようというのであれば、通らぬ道理。このうえは、私の首をもって一族の責任をとりたく……。どうか、若者たちには責が及ばぬように……」
などと、狼花が言い出したから、ミーアは大いに慌てた。
――ご先祖がやらかしたことが原因で困窮し、それを改善すべく略奪を行った、その咎によってお祖母ちゃんが首を落とされる……。実に嫌な構図ですわ。なんだか、昔のわたくしを思い出してしまいますわね。まぁ……わたくしはお祖母ちゃんではありませんけど……。
などと思いつつ、ミーアは口を開いた。
「狼花殿、状況はよくわかりましたわ。わたくしも頼られたからには全力で力をお貸しする所存。まず、早まったことはしないようにお願いいたしますわね」

言いつつ、ミーアは周囲に視線を振る。誰かしら、頼れそうな人間を探してみるが……いなかった！

まず、馬龍……。普段は頼りになる先輩ではあるが、混沌の蛇のことを知らない。ゆえに、恐らく狼花の言っていることが、あまり理解できていないだろう。

次に、ラフィーナ。蛇の専門家たるラフィーナだったが……、今回の話し合いにおいては、なんとなく不機嫌。と思っていたが、それもつい先ほどまでのこと。今はなんだか、ちょっぴりしょんぼりしていた！

――普段のラフィーナさまならともかく、今のラフィーナさまは、なんだか様子が変ですわ。

そう思いつつ、ミーアは視線を横へ。

慧馬や狼花、また、その従者の女性は、今、発言する立場にはないだろう。となれば、残すは頼りの忠臣、アンヌとルードヴィッヒということになるが……。

――アンヌは頼りになりますが、明らかに畑違い。残すはルードヴィッヒですけど……うーん。

ミーアは思わず考えてしまう。

ルードヴィッヒは確かに頼りになるし、きっと良い問題の解決策を提示してくれるとは思うのだけど……、問題はルードヴィッヒがミーアの臣下である、ということだった。

つまり、ルードヴィッヒの意見は、すなわちミーアの意見であり、帝国の意見である。

彼がなにかしらの策を提案した時、もしもそれを実行するとして……、ミーアがノータッチで済むことは、ほぼないだろう。下手をすると、旗振りをしなければならないかも……。

できれば、それは避けたいミーアである。

自分一人が背負い込まなければならないような状況には、絶対にしたくはないのだ。

――くぅっ、ルードヴィッヒに投げるにしても、事前にある程度、

相談したいところですわ。
そうして、ミーアは……考える。考え、考え、考えて……。
――ふむ、とりあえず、わたくしが直接なにもしなくていい問題がありますわね。まずは、そちらを解決していただいて、その間に、ルードヴィッヒと話し合うのはどうかしら？　ラフィーナさまも巻き込みたいですし……。
ともかく、できるだけ自分が考えなくてはならない問題を減らしていく所存のミーアである。
大きなケーキを一人で食べたらＦＮＹってしまう。だからこそ、切り分けて、みんなに配る！　難しい問題もまた、しかり、なのだ。
あまぁいケーキもみんなで食べればＦＮＹらない！　の精神で、ミーアは問題の切り分けを図る。
ということで……。
「狼花殿、責任の取り方は置いておくとしても……まず、していただきたいことがございますわ」
「それは……？」
「無論、決まっておりますわ。馬龍先輩たち、十二部族の方々との和解ですわ」
その件に関して言えば、自分にできることは皆無であるとミーアは考えていた。
それをすべきは目の前の狼花、あるいは慧馬であり、馬龍や馬優をはじめとする騎馬王国の人々である。ついでに言うと、火の一族が迷惑をかけたサンクランドとの交渉も、もしも、火の一族が騎馬王国に復帰できたのなら、サンクランドと騎馬王国との間でやってもらうのが良いかもしれない。
――火の一族が困窮したのは、同族たる十二部族が放置したため。ということは、彼らが食糧を求めて略奪を行ったのは、十二部族全体の罪とも言える……みたいに言えば、馬優さんあたりは、動いてくれるかもしれませんわ。
ともかく、山積みの問題をほかにぶん投げていきたい。

ミーアは、自分がかかわる問題を、できる限り減らしていくスタイルなのである！

――その間に、ルードヴィッヒと、混沌の蛇の専門家でもあるラフィーナさまに、巫女姫に対するアプローチを考えていただくのがよろしいですわね。しかし、改めて、なぜ、族長さんは、この村を出て行ったのかしら？　狼を使う術を教えないとか、使えなくするとか、そんなことを言われて脅されたのかし……ら？　はて……。

ミーアは、ここで重大なことに気付く。

――狼を使う人物……、なんだか、覚えがあるような……？　あ……、狼使い！

そこで、ようやく、ミーアは思い至る。

狼を連れ、乗馬に長けた暗殺者、狼使い……。彼こそが、火の一族の族長、火　馬駆ではないのか？　族長以外にその技術が使えないというのであれば、その可能性は非常に高いのではないか？

ミーアが、脳内で名推理を組み立てていると……、

「和解……ですか」

狼花がつぶやき、ちらりと馬龍のほうに目を向けた。

「そうですわ。巫女姫のところにいる者たちを取り返してもらいたいのでしたら、みなさまだって頑張らないといけませんわ」

ミーアは偉そうに頷く。

まかり間違っても、自分だけが働かざるを得ないような状況にしてなるもんか！　という確固たる信念が、その言葉には込められている。

「つまり……我々の和解が、出て行った者たちを取り戻すために必要であると？」

そう問われて……、ミーアは考える。

それから、チラリと視線を向けるのは、ラフィーナのほうだった。

――ふむ……実際問題、混沌の蛇の専門家はラフィーナさまですわ。だから、巫女姫についていった人たちを連れ戻す際にはラフィーナさまの知識が必要となるはず……。

それこそ、なにかしらの洗脳を受けて彼らが出て行ったのだとすると、ミーアにどうこうすることは不可能である。ラフィーナの力が必要となるのだが……。

――なぜか知りませんけれど、ラフィーナさま、いまいち慧馬さんのことになると、不機嫌になることが多いですし……。あまりやる気を出してくれない可能性もございますわ。とすれば……。

ミーアは、ラフィーナのモチベーションを上げるべく一計を案じる。

「彼らが帰ってくるために必要か否か……。そういう問題ではないのではないかしら？　同じ血族が相争うなんて、とっても悲しいこと。それに、それは神聖典の教えにも逆らうこと。ね、そうですわよね？」

そう、ラフィーナに話を振る。

ちなみに、ミーア、神聖典にそんな教えがあるかどうかは、把握していない。ただ、ラフィーナが兄弟仲が悪くても、全然いいですよ！　など教える姿が想像できなかったので、とりあえず言っているだけである。そして、

「え？　あ、ええ。そうね。両親を敬い、兄弟、家族を大切にすることは、神の教えの基本と言えるでしょう」

なにやら、物思いにふけっていたラフィーナが、少し慌てた様子で顔を上げたのを見て、

「だから、和解は必要なこと。馬龍先輩の言っていた通りですわ。この機に、騎馬王国十二部族との絆を回復し、そして……、出て行った者たちの帰る場所を作ってあげるべきですわ」

もっともらしいことを言う。

そうすることで、火の一族の者たちが、神聖典に忠実であろうと努力する姿を見せ、巫女姫からの回帰をアピールさせるのだ。

和解しようと努力している姿を見せて、ラフィーナのやる気に火をつけようというのである。

――きっとラフィーナさまだって、善良に生きようとしている方

々を見捨てたりはしないはずですわ。
「なるほど……。たしかに、彼の者たちが帰ってきた時に、宴の一つも開けないというのも情けない。それに、帰ってきたくなるような場所を用意するというのは、道理でございましょうな」
それから、狼花は、馬龍とラフィーナに順番に頭を下げた。
「それでは、お二方にお願いしたい。十二部族と、我が一族の間を取り持つ、そのお力添えをいただけましょうか？」
「ああ。もちろんだ」
力強く頷く馬龍。それに次いで、ラフィーナは無言で頷いた。
その、ちょっとだけ元気がない様子に、ミーアは首を傾げた。

――なるほど。相変わらず、素晴らしい。
一連のミーアの捌きを見て、ルードヴィッヒは改めて感心していた。
彼の見たところミーアは、要するに、火の一族の出て行った者たちを説得する環境を整えようとしているのだ。
仮に、火の一族が騎馬王国十二部族と和解したなら、どうなるだろうか？
火の一族の戦士たちが戦う理由はなにか？　なにをもって、蛇の巫女姫は、彼らを扇動しているのか？
それは、十二部族への反感であり、歴史的な対立だ。
加えて、食糧不足や貧しさなど、窮状を打開するためでもあっただろう。
ミーアが攻めようとしているのは、まさに、その二つだ。
――狼花殿たちが先に和解してしまえば、彼らが戦う理由は間違いなく薄くなる。食糧の不足が改善され、貧しさが打開されれば……、戦おうという気にはならないかもしれない。ミーアさまは、問題の根源を見抜いて、そこを攻めようとしている。蛇の巫女姫がしたのと同様、ミーアさまも心を攻めようとしているのだろう。
まぁ、実際のところ、ミーアはラフィーナのやる気を出すために、

その心に働きかけようとしているわけで……、その点ではそんなに間違っていないような、そうでもないような……。

微妙にズレたことを考えつつ、ルードヴィッヒは、忠誠を新たにするのだった。

第百七十三話　ベル、村をただけんがくする

一方、その頃、ミーアベルとシュトリナは、火の一族の集落を見学していた。
探検でも冒険でもなく、ごく普通に見学である。
といっても、そこまで変わったものがあるわけでもなく、二人の足は自然、群れを成している馬たちのほうへと向かっていった。
「うふふ、この前、馬に乗ったの、楽しかったですね。リーナちゃん」
ふと、先日の乗馬体験を思い出し、ニッコリ笑顔のベルである。
シュトリナも、嬉しそうな笑みを浮かべて、
「うん。すごく楽しかった。またベルちゃんと一緒に、遠乗りに行きたいな」
「そうですね。ここの問題が解決したら、またみんなでいきましょう」
と、一転、ベルは表情を暗くする。
「それにしても、ミーアお姉さまたち、大丈夫でしょうか。話し合い、上手くいっていればいいんですけど」
「ベルちゃん、心配？」
そう問われて、ベルは小さく首を傾げた。
「んー……、ミーアお姉さまがいて、ルードヴィッヒ先生がいて、ディオン将軍がいる。リーナちゃんもいるし、アベルおじ……王子も。だから大丈夫、と思ってますけど……」
なぜだろう……、ベルは、いつになく奇妙な胸騒ぎを覚えていた。
なにか良くないことが起こるような……そんな、嫌な予感がして……その時だった。不意に馬が、鳴き声を上げた。
「え……？」
「今のは……」

「行ってみましょう」
鳴き声を上げた馬は。すぐに見つかった。
それは、白い毛並みが美しい、一頭の仔馬だった。
そのそばには、火の一族の女性がかがみこみ、仔馬の前足を見ていた。
「あ……、あそこ、足が、腫れてます」
その仔馬の前足は、傷が化膿したのだろうか、かすかに膨らんでいた。
「ホントだ。折れてはないみたいだけど……」
二人の声を聞いて、仔馬の手当てをしていた女性が立ち上がった。
「傷口が膿んでしまったみたいなの。困ったわね……。すぐに薬草を取りに行きたいんだけど……」
と、年配の女性はため息を吐いた。
「手が足りなくって、なかなかすべての馬に目が行き届かないのよ。こんなことではだめなのに、馬たちに迷惑をかけてしまっているわ」
寂しげにつぶやく彼女に、ベルは、なんとかしてあげたくなって……、そばにいるシュトリナのほうを見た。それを受け、シュトリナは小さく頷くと、
「少しいいですか？」
女性に断りを入れてから、仔馬に近づいた。
そうしてシュトリナは、真っ白のハンカチを取り出し、薬瓶の中のペースト状のものを含ませる。
「それは？」
少し驚いた顔をする女性に、
「体に入った毒を浄化して、痛みをとるための薬草をすりつぶしたものです」
説明しながら、馬の足にそれを近づけようとして……、そこで、ベルが一歩仔馬に歩み寄った。
「大丈夫だよ、大丈夫。リーナちゃんに任せていれば、大丈夫だから」

そうして、仔馬の首筋を優しく撫でた。仔馬はシュトリナのほうに目を向けてから、すぐにベルのほうに顔を向け直し、そっと目を閉じた。
それを見てから、シュトリナは仔馬の足にハンカチを素早く押し当てる。
ひときわ高い鳴き声を上げる馬だったが、暴れることはなかった。
布が外れないようにしっかりと結び付けてから、シュトリナは女性のほうを見た。
「これ、少ないですけど、お薬です。二、三日塗り込めば大丈夫だと思います」
そう言って、薬瓶を手渡した。
女性は、きょとん、と目を瞬かせていたが、
「ありがとう。助かったわ」
優しい笑みを浮かべてくれた。
シュトリナは……、ちょっぴり気まずそうに頭を下げると、さっさとその場を離れてしまった。
「リーナちゃん」
追いかけてきたベルは、シュトリナの顔を見て、楽しそうに笑った。
「ふふふ。リーナちゃん、いいことしたんだから、照れなくってもいいと思いますけど」
「べ、別に、照れてなんか……」
などとブツブツ、何事か言っているシュトリナである。基本的に、まだまだ、いいことをしてお礼を言われるのには慣れないシュトリナであった。
「でも、ハンカチ、だめになっちゃいましたね」
ちょっぴり困り顔をするベルに、シュトリナはしたり顔で言った。
「心配しないで。まだ、何枚もあるから。ほら……」
そうして、ハンカチの束を取り出して見せる。
「わ。すごい！　でも、どうして、何枚も持ってるんですか？　リ

ーナちゃん」
目をまん丸くするベルに、シュトリナはにっこにこで答える。
「もちろん、ベルちゃんがケガしてもいつでも手当できるように、たくさん持ってるのよ」
「……え？」
「リーナ、お友達の性格はちゃーんと知ってるんだから。ベルちゃん、冒険とか探検とか好きでしょう？　ふふふ、安心して。ベルちゃんがケガをしてピンチの時にも助けてあげるんだから」
そうして、可憐な花のような笑みを浮かべるシュトリナである。
「えへへ、ありがとうございます。リーナちゃん」
ベルも、そう微笑もうとして……、ふと、胸に疼きを覚える。
それは、ベルの中に生じた、小さな罪悪感。
自分は、お友だち――たった一人の親友に大きな秘密を持っている。
それはもしかしたら、自分がこの世界のことを、いつか去る夢の世界だと思っていたからではないだろうか。それは、屈託のない笑顔で、自分をお友だちと言ってくれるシュトリナに対して、とても不誠実なことをしているような、そんな気がしてしまって……。
――リーナちゃんの気持ちに、応えられてない。
それが、なんだか、すごく嫌だったから……。
ベルは、そっと顔を上げる。
もしも、この世界でずっと生きていくのなら……、自分の秘密を打ち明けることが、第一歩になるのかもしれないと思ったから。
――この世界に責任を持つということ……。
今までは、ただのお客さんのつもりだったのだ。いずれ去ることになる世界。いつかなくなってしまう夢。だからこそ、楽しいだけでいいし、いつでもいなくなれるよう、できるだけ繋がりを作らないようにしてきた。そのはずだったんだけど……。
それじゃあ、ダメだと思ったのだ。
尊敬する祖母、ミーアのように自分も精一杯生きて、決して簡単

にはあきらめずにしがみつこうと、決めたのだ。
それは、つまり、繋がりを作るということ……、この世界に責任を持つということなんだって……そう、思った。だから、
「ねぇ、リーナちゃん」
ベルは、ちょっとだけ勇気を出して、一歩を踏み出した。
「どうかしたの？　ベルちゃん」
「お話したいことがあるんです……」
声を潜めて、ベルが言った。
「とっても大事なこと……ボクの秘密をお話ししたくって……。帝国に戻ったら、聞いてくれますか？」
「ベルちゃんの、秘密……」
シュトリナは眉をひそめていたが……、
「うん。わかった。それじゃあ、帝国に戻ったら……」
と、その時だった。
「アベルっ！　ちょっと、お待ちになって！」
ミーアの、少し慌てたような声が辺りに響き渡った。

第百七十四話　炸裂せよ、自分ファースト！（前書き）

活動報告にも載せましたが、来週一週間、お休みにいたします。

第百七十四話　炸裂せよ、自分ファースト！

かくて、会談は終わった。
とりあえず当面は、騎馬王国十二部族と火の一族との関係修復に焦点を当てて行動していくということで、話はまとまった。
林族の伝令が族長、馬優に連絡を取りに行くとのことで、あと数日はこの地にとどまることになりそうだった。
「ううんっ……」
外に出たミーアは伸びをしつつ、うなり声をあげた。背筋をぐぐいっと伸ばすと、ポキポキっと体が鳴った。
長時間に及ぶ話し合いで、体がすっかり固まってしまっていたからだ。
別に、運動不足で体がなまっているわけではない。
「おぅふ……」
などと、ちょっぴりアレな吐息が口からもれたりするが……、決してなまっているわけではないのだ。
「さて……、それにしても、これはなかなかに難題ですわね。どうしたものか……」
とりあえず、ルードヴィッヒも一緒に話を聞いていたので、今回は特に説明をする必要もないだろう。馬龍には、混沌の蛇のことを説明しなければならないだろうが、その辺りはラフィーナに任せるとして……。
――あとはリーナさんには少し話しておいたほうがいいかもしれませんわね。蛇の事情には詳しいでしょうし。
などと考えている時だった。その視界の端を、アベルが横切って行った。
「あら？　アベル……？」
どこか悲痛な表情で、まっすぐに馬のほうへと向かっていくアベ

ル。その横顔を見て、ミーアの胸に警鐘が鳴り響いた。
アベルは周囲に視線をやってから、自らの従者に声をかけた。
「ギミマフィアス、来てくれ」
「アベル殿下。どうかされましたかな？」
呼びかけに応じ、ギミマフィアスが近づいてくる。
「出立する。すぐに準備を」
「アベル、ちょっと、お待ちになって。どこに行こうと言うんですの？」
慌てて、ミーアが話しかけると、アベルは厳しい顔で見つめてきた。
「ミーア、すまないが、ここでお別れだ。ボクとギミマフィアスは、ヴァレンティナ姉さまのところに行こうと思う」
「ちょっ、アベル。そんな、心配になるのはわかりますけれど、二人だけで行こうだなんて、そんな……」
唐突に、アベルは笑った。自嘲するような、無理やりな笑みを顔に張り付けて……、
「はは……、心配？　違うよ、ミーア。そうじゃない」
静かに首を振ってから、アベルは続ける。
「姉上が、もしも、混沌の蛇に囚われているのだったら、ボクは君の言うことに従うよ。それが一番、助けられる可能性があるって思えるからね。でも……」
ギリッと、歯を食いしばって、アベルが目を逸らした。
「でも、違った。ヴァレンティナ姉さまは……巫女姫になっていた。ただ、影響を受けて、その構成員になったというのでもない。姉さまは、混沌の蛇のトップに立っていたんだ。許せると思うかい？　姉さまは、君を殺そうとしたんだぞ？」
そう言われ、ミーアも気付く。
聖夜祭の日。命を狙ってきた、狼を連れた男……。
――あれが火馬駆だったとしたら、確かに、ヴァレンティナお義姉さまが関係している可能性は大いにありますわね……。いや、で

も、あれはバルバラさんの独断だったような気もしますけれど……。
「君が、火の一族と騎馬王国十二部族との和解を優先したいというのはわかった。たぶん、それが一番正しいやり方なのだろうし、血も流れずに済む方法なんだろう。でも……、ボクは悠長に、それを待っていることはできない。姉さまのしたことは、ボクがけじめをつける。このボクの手で姉さまを……」
歯を食いしばり、吐き出すようにして、アベルは言った。その顔は、言葉から溢れる激怒とは裏腹に、とても悲しげで……。
「アベル……」
それを見たミーアは……思わず、感動してしまった。
アベルが怒っているのは、ほかならぬ自分のためだったからだ。
もちろん、それだけではないだろう。巫女姫の手による犠牲を思ってのことであるだろうと思うけど……、それでも、不謹慎ながら、こう……少しだけ嬉しくなってしまって……。
自分のために、真剣に怒ってくれたその気持ちが嬉しくって、だから……だからこそ、
「アベル、あなたに、お姉さまを殺させはしませんわ」
言葉は自然に、こぼれ落ちた。
アベルの顔が苦悩で歪むのが嫌だった。こんな風に悲しそうに、怒っているのが、見ていられなかった。
なにより、ここで彼を行かせてしまったら、二度と、会えないような……そんな気がしたから。
かつて見た……、血まみれの日記帳のにじんだ文字が目の前を過ぎる。
今ならばわかる。あれは、あの時は、確かに自分は泣いたのだろう、とミーアはわかった。自分を助けに来てくれたアベルが討ち死にしたと知って、きっと泣いたに違いない、と。
そして、そんな気持ちは絶対に味わいたくないと思った。だから……、
「あなたが一人で行って、一人でケリをつけて、一人で傷つくこと

……そんなことは絶対に許しませんわ」
そうしてミーアは、後ろからアベルをギュッと抱きしめた。逃がさないというように思いっきりホールドする。
あれだけ、たくましくなったと思った少年の体が……、なぜだろう、今は、出会ったばかりの時のように、幼く、頼りなく思えた。
「わたくしのほうが上手くできるとか、できないとか……、自分の手でけじめをつけるとか、そういうことは全部捨てて……、ただ、わたくしのためだけに、行かないで」
ミーアは、自分ファーストな姫だ。今のアベルにかけられる言葉なんか、ほとんどないと知っている。たぶん、今の彼には口先だけの言葉は通じない。
だからこそ、ただ自分の精一杯をぶつけるのみ。
精一杯の自分ファーストを押し付けるのみ。それこそが、ミーアにできる唯一のこと。
すべての理屈を飲み込んで、ただ「自分のためだけに行かないでほしい」と、その願いだけを込めて、
「ミーア姫殿下……。あまり、アベル殿下を困らせないでいただけますかな？」
声をかけていたのは、傍らで聞いていたギミマフィアスだった。レムノの剣聖の声は、静かで、穏やかで、されど高波のような圧迫感を持っていて……。
けれど、その迫力にミーアが飲み込まれる前に、別の声が響いた。それは、
「ははは、そいつは、いささか無粋ってもんでしょう。ギミマフィアス殿」
帝国最強の騎士、ディオン・アライアが、まるでミーアたちを守るようにギミマフィアスの前に立った。それから、彼はアベルに目を向け、
「アベル殿下。それは殿下の負けでしょうね。姫さんのために怒って行こうとしてたんだから、当の姫さんに行くなと願われたら、行

くわけにはいかないんじゃないですか？　それに、前に言いましたよね。うちの姫さんを泣かすなって。このお人は、殿下が行ってしまったら、一人で馬に乗って後を追っていくような性格……ってことはご存じでしょう？　それでも行くおつもりで？」
「それは……」
言い淀むアベルに、ディオンは苦笑する。
「ここは、堪えてもらえませんか？」
「ディオン殿……。しかし……」
「ここは、少し落ち着くのがよろしいのではないでしょうか？」
そこで、さらなる乱入者がいた。すまし顔で声を上げたのは、シュトリナ・エトワ・イエロームーンだった。
「アベル殿下は冷静さを失われているご様子。お茶でも飲んで、一息入れましょう。あちらにお茶の席を用意しましたので……」
シュトリナの、その可憐な花のような笑みに、ミーアは、不意にナニカを感じ取り……、すすっとさりげなく近づいて……、
「リーナさん、もしやと思いますけれど……お茶になにも入れておりませんわよね？　眠くなる薬とか、体がしびれる薬とか……」
尋ねると、シュトリナは……、ちょっぴり傷ついた顔をした。
「ひどい……。もちろん。途中で大丈夫そうだなと思ったので、気持ちを落ち着けるためのものに変えました。だから、ミーアさまも飲んでも大丈夫ですよ」
「そう。それは疑ってしまって、申し訳ありま……？　変えた？」
「うふふ……」
笑みを浮かべるシュトリナ。ミーアは、まぁ、あまり突っ込まないほうがいいだろう、と思い直して、アベルのほうを見た。
「……まぁ、ともあれ、大丈夫ですわ。アベル。わたくしが必ず、あなたのお姉さまを取り戻してみせますわ」
そんな一同のやり取りを、ギミマフィアスは黙って見ていた。
ディオンから横やりを入れられた形となった彼は、ただ静かに、アベルの様子を見つめていたのだ。

アベルの姉を取り戻す……、その選択の重さを、その言葉の意味を……、ミーアが実感するのはもう少し先のことになる。そして、それは……。

第百七十四話　炸裂せよ、自分ファースト！（後書き）

ずっと内緒にしていましたが、このお話は異世界恋愛タグなのです……。

歴史歌　第百七十五篇　異国より来たりし、天馬の姫

『異国より来たりし、天馬の姫』
それは、騎馬王国では知らぬ者がいない歴史歌。
一族の和解と再生、大いなる祝福を歌った、喜びの歌である。

始祖光龍から生まれ出た十三人の子どもたち、それぞれが家長となり、族長となった時、その間に大きな亀裂が生じん。
歴史は流れ、幾年か。時の流れの中で失われた火の一族は、その血はまさに絶えんとす。
そんな折、一人の客人が騎馬王国を訪れん。その客人、正体は、大陸に名を馳せる大国の姫君なり。
月明りと見まごうばかりに輝く白金色の髪、白く透き通るような肌、知性の輝きを放つ瞳は、この世の真理を見抜き通さん。その口は、愛馬と言葉を交わしあい、その耳は、空を統べる天馬の声すらも聞き取りし。
この地を訪れた天馬の姫、十三部族のありさまを見て、心を震わせて問わん。
「馬が泣いている。馬を悲しませ、お前たちはなにをせりや？」。
怒りに震えし天馬の姫は『風を従えし天馬』にまたがり、その手を持ちて騎馬王国の者を打ち負かさん。
それをもちて、彼らの心にあった、過去のわだかまりを完全に払拭せり。

かくて、彼女は、別れていた心を繋ぎ留めん。
かくて、十二部族と、別れた一族との間に、再び絆を結び合わさりや。
かくて、光龍の子どもたち、再び一つにまとまりて、ともに栄光

の一族の歩みを再開せん。

後の世に「さすがに誇張が過ぎるのではないか？」と言われることになる伝説的歴史歌。歴史家からは正確性を欠くと批評されつつも……、ほかのどの歌よりも騎馬王国の民から愛され、慕われている、高い人気を誇る歴史歌。

その壮大なる序曲の、静かなる前奏が始まろうとしていた。

火の一族との歴史的な会談を終えて、数日後。

林族の馬優から、報せが届いた。

「族長会議か……。そうなるだろうなぁ」

伝令の話を聞いた馬龍は、深々とため息を吐いた。それから彼は、ミーアやラフィーナたち関係者を集めて相談することにした。

「親父殿から連絡だ。火の一族の代表者を連れて、族長会議に来いとさ」

「なるほど。やはりそうなったのですわね。ふむ……、では、こうするのはいかがかしら？」

馬龍の話は、ミーアｆｅａｔ．ルードヴィッヒの完全な予想のうちにあった。ゆえに、ミーアは完全無欠な準備の下、自らの考え（純度９０％以上ルードヴィッヒ産）を開陳する。

すなわち、火の一族と十二部族を和解させ、火の一族の女性たちを保護。それを材料に、族長、馬駆一味と巫女姫との間を分断する、という策略である。

敵の戦う動機を攻めるという、その計画に、馬龍は感心した様子で頷いた。

「さすがだな。嬢ちゃん。あの段階で、そこまで考えてたのか？」

「ふふふ、まぁ、わたくしの家臣は優秀ですから」

ミーアは、微笑みつつ、そんなことを言う。

決して自分が考えていたとは言わない。ボロが出るかもしれないし……。

小心者のミーアは、手柄も、誉れもいらない代わりに、リスクをも負いたくないのだ。
「騎馬王国十二部族と火の一族だけで会談をさせるのは、あまり良い手とは思えないわね。もしも、十二部族に扮した蛇の手の者がいたとしたら大変だもの……」
ラフィーナが発言する。たしかに、騎馬王国の民に扮した暗殺者の手で狼花および慧馬が殺されたりしたら……、和解への道は閉ざされてしまいかねない。
そうなれば、この計画は呆気なく瓦解する。
「林族の中にも、火の一族と付き合うことをよしとしない連中がいるだろうしな。長老連中のなかには、狼を使う術を危険視してる向きもある。できれば、また護衛をお願いしたいが……」
「今回のわたくしは、ラフィーナさまの護衛ですわ。いずこなりとも、おともいたしますとも」
アベルとともに、ヴァレンティナを取り戻すことを約束した以上、このまま帝国に帰るという選択は、すでにない。であるならば、ここに留まるより、馬龍とともに移動したほうが良いだろう、とミーアは考える。
「この村にも、多少の戦力は置いていくべきだろうな……。聞いた話じゃあ、その蛇って連中はたちが悪そうだ」
かくして、方針は決する。
火の一族の集落には、皇女専属近衛隊の精鋭を五名、さらに、林の一族から呼び寄せた戦士たち十名前後を配備する。もっとも、巫女姫の手の者が火の一族の男たちであるならば、村の女たちに危害を加えるということは、考えづらいところであった。
むしろ、危険なのは、族長会談に臨む慧馬と狼花のほうである。
が……、
「まぁ、ディオンさんと、皇女専属近衛隊がいれば大丈夫じゃないかしら？　ギミマフィアスさんも、結構強いということでしたし……」

狼使いとディオンであれば、ディオンのほうが強いらしいし、敵に火族の戦士たちが加わったとしても、なんとかできる……はずである。

どちらにせよ、できるだけの手配はした。ミーアが考案したのではなく、ルードヴィッヒが考えてくれたものに、ミーアが了承（いいね！）を与えたものである以上、これ以上は考えられない。

これで、敵が何かを仕掛けてきても大丈夫なはず……とは思うのだが、なにやら、一抹の不安は消せないミーアである。

「まぁ、なんにしてもアベルもお姉さんのことが気になっているでしょうし、早いところ、騎馬王国のことをなんとかしないといけませんわね……」

気合を新たに、一行は旅立った。目的地は騎馬王国の「南都」である。

第百七十六話　それぞれの馬観１

族長会議が開かれる地、騎馬王国の南都は、火の一族の隠れ里から馬で二日、と比較的近い距離にあった。
普段なら、馬車の中でうつらうつらしつつ、のんびり向かうところだが、今回のミーアは、あえて馬に乗って向かうことにした。
それは、馬龍の発案によるものだった。
「騎馬王国の民は、外国のお姫さまは馬なんか乗らないもんだと思ってるからな。上手く馬を乗りこなしているだけで、だいぶ評価が上がると思うぜ」
「そうですわね。まぁ、たくさん食べるために、少し運動しておくのもよいのではないかしら？」
などと思ったミーアは、二つ返事でオーケーした。
なにしろ、十二部族の族長が集まる族長会議。きっと美味しいおつまみが出るに違いないと確信するミーアである。ご馳走をゲットするためには、好感度は稼いでおくに越したことはないだろう。
そんなミーアの護衛を請け負ったのが、慧馬だった。火の一族のために、いろいろと尽力しているミーアへのお礼だということだったのだが……。
――ふぅむ、しかし慧馬さん、やっぱり少し元気がないように思えますわね。
隣に並んだ馬に乗る慧馬に、ミーアはチラリと視線を送った。
火の一族の村を出て以来、なぜだか、あまり元気がない様子の慧馬。
否、よくよく考えてみると、狼花と会談した時から、少し沈んでいるようにも見える。
――ラフィーナさまといい、なにか悪いものでも食べたのかしら？　しかし、それにしては、わたくしがなんともないというのも妙

な話ですわ。わたくしの胃腸は極めて繊細でデリケートなはずですのに……。
アンヌが仕入れてきたヨーグルトで今日も非常にお腹の調子が良いミーアであった。
……まぁ、それはさておき、このまま慧馬の元気がないのも気分が滅入る。
ということでミーアは、なにか、慧馬が元気になりそうな話題を振ってみることにする。
当然、話題は……、
「ところで、慧馬さん……その馬、とても見事な馬ですわね」
ミーアは、慧馬を乗せた黒毛の馬を見て言った。それはお世辞ではなく、完全なる本音だった。
荒嵐にも負けない引き締まったしなやかな体。力強く大地を蹴る足と、まっすぐに前を見据える澄んだ瞳。その艶やかな黒毛は、この馬がどれほど大切にされているかを表しているようだった。特徴的なのは、その白い鼻先だろうか。夜闇のような黒毛の中にあって、そこだけ光が浮き上がっているように見える。
「もしや、それは月兎馬ですの？」
そう問うと、慧馬はにやりと笑みを浮かべた。
「さすがはミーア姫。馬を見る目も確かなのだな。これは、我が火一族の宝馬（たからうま）だ。兄、馬駆の愛馬、影雷とは兄弟馬で、名を蛍雷（けいらい）という。騎馬王国の伝統的な月兎馬の純血種で、遡ると始祖、光龍の時代まで辿ることができる。この馬の血統を歌った歴史歌もあって……」
と、明るい声で話し出すのを見て、ミーアは少しだけ笑みを浮かべる。
――ふむ、元気が出たみたいでなによりですわ。やはり、慧馬さんはこうでなくっては、こちらまで調子がおかしくなってしまいますし……。
などと満足していると、

「……聞かないのか？」
「え？」
不意に、慧馬が真剣な顔で見つめてきた。
「聞くって、なにを？」
「この馬を売って金にしないのかって。食べ物に換えないのかって、聞かないのか？」
優しく蛍雷の首筋を撫でながら、慧馬は言った。
「我ら光龍の末裔にとって、馬は友。馬は家族。だが、一族の存亡の危機でもある。そんな中で、立派な馬を持ち続けることは、ぜいたくでわがままなんじゃないか、と、言われたことがあるのだ。だが……我は……」
苦しそうに、唇を歪めて言う慧馬に、
「あら？　そんなことないのではないかしら？」
ミーアは、あっけらかんとした口調で言った。
「というか、馬を売ってしまうなど、あり得ないことですわ」
それは、ミーアにとって自明のことだった。
なるほど。確かに、馬を売り、食べ物を得れば、一時的に破滅を免れることができるだろう。だが……、それはあくまでも一時のこと。その場しのぎだ。
馬を売って手に入れた金は尽き、手に入れた食べ物はお腹の中におさまってしまうのだ。
お腹がいっぱいになり、動くのが億劫になったところで、破滅が襲い掛かってきたらどうするというのか？　馬がなければ逃げられないではないか！
それゆえに、ミーアは思う。
馬という脱出手段は、いつもいつでも、最後の最後まで手元に残しておくべきなのだ、と。
ゆえに、ミーアは言う。
「馬は、どこよりも遠い場所へと、わたくしたちを運んでくれるもの。手放すなんてもってのほか。死ぬ時は馬と一緒、ぐらいのこと

を思っておいたほうが良いのではないかしら？」
それは、最後まで逃げることを諦めないというミーアの固い信念！　揺らぐことのない部分である。
それを聞いた慧馬は、ぽかーん、と口を開けていたが……、やがて、小さく吹き出した。
「ふふふ、そうだな。まったく正しい。驚いた、ミーア姫は、騎馬王国の民などより、よほど馬のことがよくわかっているな」
ひとしきり、おかしそうに笑ってから、慧馬は首を振った。
「さすがは、我が友と見込んだ者だ」
「あら？　そう言っていただけてなによりですわ」
さて、なにが評価されたのか、よくはわからなかったけど……。
――まぁ、慧馬さんに元気が出てきたのならば、それに越したことはございませんわね。
などと思うミーアなのであった。

そんな二人の心のうちを知ってか知らずか、ミーアを乗せた東風が、ふわああむ、っとあくびをした。
実になんとも平和な光景だった。

第百七十七話　それぞれの馬観２　～山族の父娘の場合～

「むふふ……ふふふ」
狭い室内に、野太い男の声が響いた。
「ああ……なんと素晴らしい。この美しい栗色の毛……、この引き締まったお尻……ああ、実に、たまらん！」
すらりとした美しい脚をペタペタ撫でながら、男はニヤニヤ～と溢れんばかりの笑みを浮かべる。
「ああ……なんと愛しい。お前こそ我が娘。我が愛娘だ」
そうして、男は、目の前に立つ義理の娘のシュッとした鼻先に口づけする。と、長いまつ毛の奥、澄んだ瞳が、まっすぐに男に向けられた。潤んだ美しい、まるで宝石のような瞳に、男は、おふーっと満足の吐息をこぼす。
「ああ、なんと美しい。美しいなぁ。待っていろよ、もうすぐまた、新しいお友だちを連れてきてあげるからね。くふふふ」
「父上……大変におキモい……ですの……」
不意のツッコミに男――山富馬（さんふうま）は素早く振り返る。と……、シラーっと冷たい目を向ける、実の娘が立っていた……。
厩舎の入り口のところに立って、やれやれ、というように首を振っていた！
「なにを言うか？　馬の鑑賞は雅なる趣味。見よ、この完璧な毛並み。シュッとしたボディラインと、長い脚。月兎馬の中でも彼女ほど美しいものはいない。これに見惚れるのは、人として当然のことではないか！」
そうして富馬は、眼前に立つ義理の娘こと栗毛の馬を指さし、抗議の声を上げる。が……、
「父上……非常に、おキモい、ですの……」
娘の態度は変わらなかった。むしろ、より呆れの色を濃くしてい

た。
だが……それも仕方のないことなのかもしれない。
すっかり外国にかぶれた娘は、今やヴェールガ公国のドレスに身を包み、背中まで伸ばした髪にはミラナダ王国のリボンがついている。十代の半ばという、年頃の娘である。オシャレをしたいのは、当たり前のことではあるのだが。
――昔は、馬に乗って草原を駆け回っていたものだが……。
富馬は、なんとも寂しく感じてしまう。
――今となっては十日に七日ほど馬を乗り回すだけになってしまった。ああ、嘆かわしいことだ。
……割と乗っていた！
「いいか？　娘よ。我らは騎馬民族である。馬の数により、権勢を誇るべきだ。外国から良いものを取り入れること、それ自体は賢明な判断ではあるが、大事なところを取り違えてはいかんぞ？　馬がすべて、馬こそ命なのだ！」
騎馬王国十二部族の一角、山の一族。
最大勢力である林族に次ぐ規模を誇るこの一族は「南都」を守る、町守の一族である。積極的に他国とも交流を図り、いろいろな文化を取り込む、開明的で豊かな一族としても知られる。
レムノ王国の軍部とも近しい関係を持ち、騎乗指導のために、何人もの乗り手を派遣してもいた。
そんな事情もあり、伝統的で、しばしば保守的な傾向が目立つ騎馬王国にあっては、比較的、他国の文化を取り入れる一族であった。
そして、その族長である、山　富馬は、生粋の馬好き、通称ウマニアとして有名だった。
「父上は誤解しております、ですの？　私は、別に馬が嫌いではありません、ですの？」
外国っぽい言い回しが、いまいちしっくりこないのか、首を傾げる娘である。ともあれ、確かに、実際問題、町守である山の一族においては、馬に乗る頻度はそこまで多くないわけで……。十日に七

日、馬に乗って遊んでいるという娘は、ウマニアの族長に相応しい馬好きであるわけなのだが。
「ただ、私は、父上のように、馬を閉じ込めて愛でることが好きではないだけですの。あ、今の「ですの」はいい感じ……ですの」
満足げに頷く娘に、富馬は、やれやれ、と首を振った。
「まったく、なにを言っているのだ……。俺の馬を継ぐのはお前以外いないというのに。まぁ、いいさ。我が宝がもっと充実していけば、お前にもわかる日が来るだろう。ふふふ、ここに火の一族の宝馬が加われば、我が宝も、さらに充実しようというもの。ああ、実に楽しみだなぁ。むふふ」
ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべていた富馬だったが、ふと思い出したかのように、娘のほうに顔を向けた。
「して、何事が起きた？」
「ああ。ええ、そうでしたの。林族の馬優族長から、使いの者が来ましたの」
「ほう。お人好しの馬優が？　なにを言ってきた？」
「父上がご執心の様子だった、火の一族のことについて……」
「なにっ！？」
ギクッと肩を震わせる富馬。それを見て、娘はため息を吐いた。
「なにか、またよからぬことをしていたんですの？」
「そそ、そんなことはないぞ？　俺はあくまでも、良い馬は持つべき者が持つものであるという考え方から……」
じっとーっと娘に見つめられ、富馬は続ける。
「そっ、それに、悪いことはしていないぞ？　ただ、金と食い物の代わりに馬を差し出せと言ったまでのこと」
それを聞き、娘が、ああ、っと天を仰ぐ。
「同族から馬を買う？　それは実に族長会議で問題になりそうですの。というか、先に、火の一族が困ってた時に、羊を高値で買っていたのは、そのためだったんですの？」
羊やヤギは、重要な食糧源である。普通に飼っていれば子を産み、

数も増えていく。持ち続けていれば、増えていく財産といえる。
けれど、一時の困窮からそれを手放してしまえば、後に残るはただの金。使えば消えるのみの、金なのだ。
「食べ物がなくなって、困ったら馬を売るだろうと思ったんですの？」
娘に詰め寄られ、富馬は、目を白黒させる。
「いや、その……な？　馬好きなら、わかるだろう？」
そんな父の様子に、娘ははぁあ、っとふかーいため息を吐いて、
「これは……、族長会議で締め上げられそうですの」
呆れたように首を振るのだった。

第百七十七話　それぞれの馬観２　～山族の父娘の場合～（後書き）

ということで、来週一週間はお休みといたします。
また、２２日に再開できたら……いいなぁ、と思います。

百七十八話　真ミーアの馬観～ミーア姫、不心得者に馬についての悟りを授けん～

騎馬王国の南都は、簡易ながらも城壁を持つ、れっきとした町である。

十二部族のどの部族であれ優劣を認めず、等しい立場として並立することを旨とする、その特殊な国の成り立ちから「王都」という呼び方はしていないが……、それでもその規模は小国の王都と呼んでも差し支えないほどのものであった。

ミーアたち一行は、その南都の周辺に広がる草原で休憩を挟んでいた。

さすがに長時間の乗馬に、ミーアはたっぷり疲労して、すっかり元気がなくな……

「ふむ……。いい運動をしましたわ。心なしか、少しシュッとしてきたのではないかしら？」

……ってはいなかった！

むしろ、満足そうに、二の腕をＦＮＹっとしたりしている。

「……あら？　妙ですわね。あまり変わってないような……」

ミーア、しばし悩んで……それから考えるのをやめる。あまり気にしないほうが心の健康のためにはよいだろうと、ミーアの本能が告げていたためだ。

「それにしても、ものすごい数の馬ですわね……」

草原には、たくさんの馬たちが群れをなし、のんびーりと草を食んでいた。

ついつい端から数えたくなるのを我慢しつつ、ミーアは腕組みする。

「さすがは騎馬王国ですわね。馬がたくさんですわ。あの群れは、野生の馬かしら……。見事なものですわね」

などとつぶやいていると、

「わはははは。あれは雑種ですよ」
突然の笑い声。そちらに目を向けると、壮年の男が歩いてきていた。その隣には馬龍の姿もあった。ということは、騎馬王国の人間だろうか。
――ふむ、髪は馬龍先輩と同じ黒ですし、騎馬王国の民の特徴はございますけれど……。それにしては、服の感じがちょっと違いますわね。まるで、わたくしたちと同じような服ですわ……。
ともあれ、相手は初対面。ここは、自己紹介の一つでもしたほうがいいだろうか……、などと思っていると……。
「はははは。帝国の叡智の名は、我らの一族にも漏れ聞こえてくるというのに、いささか不見識。良い馬を見たことがないとみえる」
いきなりの喧嘩腰だった！
「富馬殿、それは……」
と、しかめっ面で嗜めようとする馬龍。けれど、それを待たずしてミーアは口を開いた。
「あら、それは心外というものですわ。わたくしは、ヴェールガ公国の学園で、月兎馬にも乗らせていただいたことがございますのよ？」
あの荒嵐と築いてきた日々を、ミーアが忘れたことはない。それに、花陽や夕兎もそうだ。男の言葉は荒嵐たちをはじめ、ミーアが乗ってきた多くの馬たちに対する侮辱である。それには、さすがに黙っていられないミーアである。
こういう時に怒れない騎手をどの馬が助けてくれようか？　どの馬が、ともにギロチンから逃げてくれるというのだろうか？
ことは、馬のモチベーションにかかわる問題なのである！
「ヴェールガの学園で？　騎馬王国の民ではない姫君が月兎馬に乗った？　ああ……、そういえば以前、ヴェールガ公国へと馬を贈った一族があったと聞くが……。きっと月兎馬といっても、いくつかの血の混じりあった雑種。純血を保った我が一族の馬たちとは比べ物になりますまい。駄馬に変わりはないでしょう」

その口調に、ミーアは割とムッとする。けれど、すぐになにかに気が付いたのか、小さく息を吐いて首を振った。
――わたくしとしたことが……。いけませんわね。無知による無礼に目くじらを立てるのは、詮無きことですわ。
目の前の男の言いようも、モノを知らぬが故の言葉。そう、男は知らないのだ。馬にまつわる真実というものを。
ならばむしろ、正し、諭すことこそが知る者の務め。
ミーアは余裕溢れる笑みを浮かべて、男を見つめた。
「ふふふ、それは、浅はか……浅慮というもの。道理をわきまえぬ者の言葉ですわ」
「なっ！？」
ミーアの言葉が意外だったのか、口をポカンと開ける男に、ミーアは穏やかな口調で続ける。
「どんな馬でも馬は馬。我らを遠くまで運んでくれる、偉大なるものですわ」
そう……ミーアは知っている。馬は……とってもイイモノなのだ。
どんな馬であれ、いれば乗って逃げることができる。もしいなければ、なにかあった時に自分の足で逃げなければならないではないか！　それは、疲れるではないか！
さらに言えば、どんな馬であっても、少なくとも自分よりは速いことをミーアは知っている。
もしも、ミーアに負ける馬がいたとするならば、それは馬ではない。馬に化けたクラゲかなにかなのだ。
だから、ミーアはどのような馬に対しても敬意を失うことはない。
仮に、ミーアに無上の忠誠をささげる近衛がいたとして……、ミーアを背負って隣の国まで歩いていくことが可能だろうか？
考えるまでもなく、できるわけがない。
帝国最強の騎士、ディオン・アライアであったとしても、そんなことは不可能……。
――いや、そういえばディオンさんは、わたくしを抱えて、森か

ら脱出したことがございましたっけ……。とすれば、もしやわたくしを小脇に抱えて国境を越えることも可能かもしれませんわ。わたくしも、実は意外と軽いですし……。

……とまぁ冗談はさておき、ともかく、ミーアにとって馬とは、どんな個性を持っていたとしても、敬意を払うべき存在なのだ。

けれど、それに気付けたのは、ひとえに前の時間軸での経験があったから。

だからこそ、ミーアは物知らぬ男に……、山族の族長、富馬に諭すように言うのだ。

「馬は馬。馬に貴賤などないのですわ」

「ほほほ、これはこれは。富馬殿。一本取られましたな」

そこに新たなる闖入者が現れた。

声のほうに視線を向けると、一人の老人が歩いてくるのが見えた。穏やかな笑みを浮かべた老人は、ミーアの前までやってくると、深々と頭を下げた。

「遠路はるばるようこそいらした。ミーア・ルーナ・ティアムーン姫殿下。わしは今回の族長会議を取り仕切らせていただく、風光馬と申すものじゃ」

「これは、ご丁寧に。ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」

乗馬用のズボンをちょっこりと持ち上げるミーアに、老人は満面の笑みで答えた。

「ほっほっほ、しかし、姫殿下はさすが帝国の叡智と呼ばれるだけはある。実に深いご高察……。感服いたしましたぞ。もしや、あれが姫殿下の馬でございますかな？」

老人の指さす先には、ここまでミーアを運んできた馬、東風の姿があった。

「ええ。そうですわね」

「なるほど。先ほどのお言葉を証明するに相応しき馬ですな。どうでしょう？　よろしければ、この老人に、南都までのエスコートを務めさせてはいただけませぬか？　懐かしき我らが同胞とも、轡を

並べられれば、無上の喜びなのですがな……」
「そうですわね。別に構いませんけれど……」
ミーアは小さく首を傾げつつも、人の好さそうな老人の笑みを見つめた。
その様子を見て、馬龍が苦々しい顔をしていることに、ミーアが気付くことはなかった。

百七十八話　真ミーアの馬観～ミーア姫、不心得者に馬についての悟りを授けん～（後書き）

再開します。

第百七十九話　ミーアの入城　壮大なる伏線……？

騎馬王国の南都は、この日、静かなる緊張感に包まれていた。
臨時に開かれる族長会議、そこに、失われし一族である火の一族の者を招こうというのだから、緊張が生まれるのは必然ともいえた。
しかも、である。
「どうやら、聖女さまや、帝国のお姫さまもいらっしゃるらしいぞ？」
「帝国のお姫さま？　なんでそんな人が？」
「なんでも、火の一族の娘と友人らしい」
などという噂が流れていたものだから、普段とは違った空気が流れていてもおかしくはないだろう。
ちなみに、その情報を流したのは林族の族長、馬優だったりする。
ミーアを馬に乗せて入城させることもそうなのだが、すべては演出の一環である。
長く失われていた者たち、火の一族の者たちが騎馬王国に復帰する……、そんな特別なことが起きてもおかしくはない、という雰囲気を作り、追い風としようというのだ。

さて、そうして、人々の注目を集めつつ入ってきた一団。その先頭を行くのは、十二部族の族長の中で最年長である、風族の族長、光馬だった。
風族は、今でも始祖、光龍より続く伝統を固く守り続けている、遊牧民の中の遊牧民として知られている。一切の定住を嫌い、大平原を文字通り自由に行き来する。平時は春風のように穏やか、されど軽んじるものあれば、吹雪のごとくしたたかに逆撃を加える、まさに、風の一族といえた。
そんな光馬にエスコートされるように入ってきた少女に、人々は

首を傾げた。
少女は、見慣れぬ異国の装いをしていた。いや、まぁ、厳密にいえば見慣れないとも言い切れない。南都の住民のほとんどは、レムノ王国の民を見慣れており、その中には貴族も含まれる。
だから、まったく見たことがない、という感じではない。
けれどそれゆえに、彼らは驚きを隠せなかった。
だって、彼らは知っている。
貴族のご令嬢は、あまり馬に乗ったりはしない。
彼らと付き合いがあるレムノ王国やヴェールガ公国においては、そうした常識がまかり通っている。貴族のご令嬢は、むしろ馬の臭いを嫌ったり、乗馬を野蛮なことと考える節がある。
ところが、どうだろう？
あの帝国の姫は馬車ではなく、馬に乗っている。それだけで、彼らがミーアに親しみを覚えたことは想像に難くなかった。
けれど……その興奮は、彼女が乗る馬を見た時、やや盛り下がってしまう。

それは、彼らが最良とする月兎馬ではなかった。その足は月兎馬のように、長くしなやかではなかった。どちらかといえば、短く、太く、たくましい印象だった。
その毛は、月兎馬よりももっと長く、もっさりした印象が強い。
その目は、ぼんやりと眠たげで、疾く駆ける馬というよりは、のんびりと草原に寝そべっているほうが似合いそうな馬だった。
騎馬王国の民にとって、族長の格というのは、乗る馬によって決まる。
その判断基準から言えば、ミーアは、決して敬意を払うべき相手ではなかった。
無論、相手は騎馬王国の姫ではない。どのような馬に乗っていようと、普通は気にしないところである。されど、ミーアがあえて馬に乗って入城するという演出をしてしまったがゆえに、その場に集

う者たちは誤解してしまった。
彼女が自分たちと同じ価値観に生きる者であると……。
されど、そんな彼らの関心はすぐに別のものに移った。それは、ミーアの斜め後ろを行く火の一族の族長の妹、慧馬……の乗る馬！
「見事な馬だ……」
その馬を見ただけで、彼らは慧馬が自分たちの血族であることを、確信した。
始祖、光龍より受け継ぎし駿馬。その血を守り、絶やすことなく今日まで来たことは、彼女の乗る馬、蛍雷を見ればわかった。
その見事な毛艶、美しく引き締まった筋肉、澄んだ瞳と、しゅっと鼻筋の通った気品のある顔。この馬がどれほど大切に育てられたか……。この馬の乗り手が、どれだけ馬を愛しているのかが、手に取るようにわかったのだ。
なるほど……、彼女は確かに自分たちの遠縁。始祖を同じくする者だ……。
失われていた者、自分たちの兄弟……。その帰還がなにをもたらすのか、人々がそんなことを気にしている一方で……ミーアは、といえば……。
――ああ、よかったですわ。注目がそれていく。
ちょっぴりホッとしていた！
そうなのだ、ミーアは、「乗馬で入城したらいんじゃね？」なぁんていう口車と馬に乗せられてしまったわけだが……。
前を行く光馬老を見て、ふと気付いてしまったのだ。
自分の、つたない乗馬術を披露するのは……、どうなのだろう？
と。
ミーアは、確かに自分が、かなり馬に乗れるほうだと思っている。セントノエルに通う令嬢たちの中でも、帝国内を見渡しても、ミーアほど馬に乗れる令嬢はほとんどいないだろう。
けれども、ここは騎馬王国。
老いも若きも男も女も、馬に乗る国なのである。そのことが、エ

スコートを買って出た光馬を見ることで、まじまじと実感できてしまったのだ。
――こんなおじいちゃんまで軽々と馬に乗るような国においては、わたくしの乗馬技術など児戯も同じ。くぅっ……、調子に乗っていたのが、恥ずかしい限りですわ。
一度、気付いてしまえば、それが気になって仕方なくって……。余計に体が硬くなってしまう悪循環。
自らが醜態をさらしている自覚があったミーアとしては、視線が逸れるのは、願ったり叶ったりだったのだ。

かくて、様々な思惑を背負いつつ、ミーアたちは南都への入城を果たす。
この入城が、帝国の叡智の壮大なる伏線であったのだ、と後々思い知らされることに……、人々は未だ気付いていなかった。

第百八十話　帝国の叡智の問いかけ

深いため息が室内に響いた。
そこは林族の族長のために用意された部屋。
いささか落ち着かぬ異国の絨毯の上、どっかりと腰を下ろした父に、馬龍は、先ほどの出来事を報告していた。
「なるほど、やはり、光馬老は、火の一族の復帰に反対か……」
心なしか疲れた顔をする父、馬優。馬龍自身も、自らの不甲斐なさに歯噛みする。
「してやられたぜ。こっちの策略を完全に逆手に取られたんだからな……」
南都入城。彼らは二つの狙いをもって、その場面を画期的なものにしようとしていた。
一つは、火の一族が戻ってきてもおかしくないような……特別なことが起こりそうな、そんな雰囲気を作り出すこと。
そして、もう一つは、ミーアの発言権を得ることである。
聖女ラフィーナとは違い、ミーアは、ただの外国の姫である。帝国がいかに大国であるとはいえ、族長会議で発言権を与える理由にはならない。
されど、ミーアの叡智の助力を得られないのは、あまりにも痛い。そのため、他の族長からもミーアが一目置かれるよう一計を案じたわけだが……。
「乗馬しての入城。それにより、彼女が普通の姫ではないとわからせたかったのだが……、裏目だったか」
風　光馬は馬優の目論見を読み、そのうえで、それを潰しに来た。
「程度の低い馬に乗る者の言葉になど聞くべき点はない」
おそらく、もしも、族長会議にミーアが介入したら彼は主張するだろう。

だからこそ、当初の計画では南都に入る前に、別の馬に乗り換えてもらい、それで入城しようとしていたのだが……。
「富馬殿があんなところで介入してこなければ、こんなことにはならなかったってのに……」
「タイミングが悪かった。いや、くせ者の光馬老のことだ。わざとその場面で姿を現したのか……」
富馬とのやり取りがなければ、あるいは、ミーアに乗り換えさせることも可能だったかもしれない。林族が誇る月兎馬に乗ってもらい、それで入城することができたはずなのだ。そうなっていれば、胸を張って族長会議にも参加して、発言してもらえたのだが……。
けれど……、それはかなわなかった。なぜなら、ミーアが富馬の口を封じたあの言葉は紛れもなく正論だったからだ。
馬は馬。馬に貴賤なく、すべての馬に敬意を払うべき。
馬龍は、あれを聞いた時、衝撃を受けてしまった。それは騎馬王国の民が忘れてはならない大切な真理だったからだ。
だからこそ、ミーアが自らの馬に乗って入城することを止められなかった。ミーアを月兎馬に乗せることは、馬に貴賤なしと言った、彼女の言葉を否定することになるからだ。
「しかし、帝国の叡智は意外と純粋だな……。帝国の知恵者というからには、もっと清濁併せ飲むような人物かと思ったが……。いや、あの年頃の娘であれば、それも無理からぬことか」
父は、悔しそうにつぶやいてから首を振った。それを見て、馬龍は、胸の中に引っ掛かりを覚える。
「いかんな、どうも……。張り切りすぎて策を弄しすぎたらしい。我ながら……気持ちが逸っているようだな」
「ミーア嬢ちゃんが純粋だってのは俺も同意するけど……。でもな、親父殿、俺は嬢ちゃんほど、馬のことを知っている人間は会ったことがないと思ってるぜ」
馬龍は今でも思い出すことがあった。ミーアが言った馬の真理。それは、ミーアが厩舎に現れた時のことだ。

てっきり、くしゃみを吹っ掛けられた文句を言いに来たと思っていたのに……。ミーアは言ったのだ。
馬はどこまでも、遠くへ連れて行ってくれるもの、と……。
確信に満ちた声で……それを信じきり、なんの疑いも抱いていない顔で……言ったのだ。
「なぁ、親父殿、俺は思うんだ……。あの嬢ちゃんの言葉をさ、どんな理由であれ否定しちまったら、俺たちは、騎馬王国を名乗っていられないんじゃないか？」
この上なく正しいミーアの言葉、それを否定してまで通さなければならない価値とはなにか？　どの馬が優れていて、どの馬が優れていないなどと評すること……、それ自体が高慢ではないのか……？
「馬に貴賤なし……」
突きつけられた言葉は鋭く……、向き合った者は悩まずにはいられない。
馬の価値を勝手に測る自分自身は、何者であるのか、と……。
「そうだ……、と胸を張って言えない自分がもどかしいな」
答える父の顔も、どこか苦み走ったものだった。その顔に浮かぶのは、罪悪感と自嘲が混ざり合った複雑な表情だった……。整理のつけようのない感情を無理やり笑みに変え、馬優は肩をすくめた。
「族長というのも、因果なものだ……」
どこか疲れた様子の父を見て、馬龍は苦い顔をする。
自らを幾重にも縛り付けるしがらみを感じて、暗澹たる気持ちになる馬龍であった。馬に乗っている時は、あんなに自由なのに……。その手を、足を、見えない鎖が縛り付けてきて、気持ちが悪かった。
気を取り直すように首を振り、父、馬優が言った。
「それで、ミーア姫は、どうしているんだ？」
「光馬殿に誘われて夕食を食いに行ってるよ。ラフィーナ嬢ちゃんも一緒のはずだ」
「そうか……」

……この時の二人は知る由もなかった。
騎馬王国の常識も、しがらみも価値観も……そのすべてを飲み込んでなお余りある、さながら地母神……否、水母神のような、帝国の叡智の圧倒的な器量を……。
大口を開けた大水母（おおくらげ）ミーアが、騎馬王国を飲み込もうと間近に迫っていた……。

第百八十一話　続・馬式人生相談（前書き）

最後にミーアを出しておけばオチになるとか、安易に思っていません。誤解です。

第百八十一話　続・馬式人生相談

「気分悪いな……くそ」
馬龍は、外に出て一言、吐き捨て、それから思いきり息を吸い込んだ。
胸の奥に渦巻く黒いもやを吐き出そうとするかのように、息を吸って、吐いてを繰り返す。
吹き付ける夜風は冷たく澄み渡っていた。
その冷たさが心地よくて、馬龍は目を閉じ、しばし、その場にたたずんでいた。
そうして、目を開けた時……、ふと、その視界にぼんやりと立ち尽くすラフィーナの姿が映りこんだ。
「ん？　あれは、ラフィーナ嬢ちゃんか……？」
その姿に微妙に、違和感を覚える。
ぼんやりとした顔で、うつむいているラフィーナ。その横顔は、ひどく儚げに見えた。放っておいたら、どこかに溶けて消えてしまいそうなほどに……。
「ラフィーナ嬢ちゃん……、どうかしたのか？」
話しかけた瞬間、びくっと怯えたように細い肩が震えた。けれど、馬龍のほうを見て、すぐにホッとした顔をする。
「ああ……馬龍さん……」
その様子を見て、馬龍は気付いた。どうやら、ラフィーナは護衛を連れていないらしい。南都の中にいるとはいえ、自身の立場をよくわきまえているラフィーナらしからぬ行動だった。
いや、それを言うならば、ここに来るまでも、ずっとラフィーナらしからぬ行動が多かったような気がする。
どこか元気がなかったし、物思いにふけっていることが多かったように思えるのだ。

「確か、ミーア嬢ちゃんと一緒に食事に行ってたんじゃなかったか？」
「ええ……。少し、気分が悪かったものだから、夜風に当たりに……」
「護衛も連れずにか？」
「それは……」
言い淀み、再びうつむいてしまうラフィーナ。
――普段であれば、もっともらしい理由の一つや二つ、簡単に思いつきそうなものだが……。らしくねぇな。放ってもおけないだろうな……。やれやれ……。
面倒だな、と頭をかいてから……馬龍は、ふっと苦笑いを浮かべる。
――いや、らしくないのは俺も一緒か……。
普段の自分であれば、きっと面倒くさがらずに、強引にでも事情を聞き出そうとしただろう。放っておくなどということは、頭の片隅にも浮かばなかっただろうから。
「やれやれ……、うじうじ悩むなんて。本当にらしくないな。よし」
頬をパンパンと叩いた馬龍は自分らしいことをすることにした。すなわち……、
「嬢ちゃん、ちょっと馬に乗ろうぜ！　付き合ってくれ」
そう言って、ニカッと笑みを浮かべた！
「……へ？」
小さく首を傾げるラフィーナに、馬龍は言った。
「俺もいろいろあってむしゃくしゃしてたんだ。一緒に、少し馬を走らせてこようぜ」
そう言って、馬龍は指笛を鳴らす。っと、彼の愛馬がどこからともなく、駆けてきた。
「いえ、でも……あの……」
などと、戸惑いを見せるラフィーナを、馬龍は、ため息交じりに抱き上げる。

「きゃっ！」
「ちょっとごめんよ」
背中に片手を添え、もう片方の手を膝の裏に入れる……いわゆるお姫さま抱っこというやつである！
「あっ、え……え？」
戸惑ったように馬龍を見つめ、口をパクパクさせるラフィーナ。そんな彼女を、ひょーいっと馬の背の前に乗せ、馬龍はその後ろに乗る。
護衛？　そんなの関係ない、関係ない。
馬に乗ってる限りにおいて、馬龍は自由で、どんなしがらみにも捕らわれないのだ。
「しっかりつかまってろよ」
横座りで前に乗るラフィーナが、しっかりと自分の服を掴むのを確認してから、馬龍は馬に指示を送る。
その夜の秘密の乗馬は、こうして始まったのだった。

淡く輝く月。満天にきらめく星々。そこを一頭の馬が進んでいく。
夜の町に、ぱかり、ぱこり、と、のんきな馬の足音が響いていた。
「どうだい？　馬はなかなかいいだろう？　ちょっとは気分が晴れたんじゃないか？」
「え……は、はい、ええ……うん」
なにやら、微妙な声を上げているラフィーナ。見れば、じっとうつむいたまま、かっちーんと固まっていた。
「ははは、別に、そんなに固くならなくっても大丈夫だ。落ちそうになったら、ちゃんと支えてやるから」
そう言って笑うと、ラフィーナは……、むぅっとした顔で睨んでくる。
「べっ、別に怖いわけじゃ……」
……と抗議の声を上げるも、すぐに、諦めたように、ふぅっとため息を吐いた。

静けさの中で輝く星々が、ラフィーナの心を開いたのだろうか……。あるいは、馬龍の常識はずれの行動で、なんだか、もうどうでもよくなってしまったからだろうか……。

ラフィーナはぽつり、ぽつり、と話し出した。

「私……自分が信じられなくて……」

「うん……？」

「私は騎馬王国の問題を解決するために来ました。ヴェールガの聖女として……。それなのに、私は、ミーアさんが、慧馬さんのことをお友だちだって言ったことに囚われて……嫉妬して……」

ラフィーナは、小さくうつむいた。

「ヴェールガの娘として……そんなことに気を取られている場合じゃない。こんなのではやっぱりダメだ……。ミーアさんとお友だちになってしまったから、こんなにも気持ちが揺さぶられるんだって、そんなことを考えた時、思ったんです。それなら、ミーアさんとお友だちであることを、やめなければいけないんじゃないかって……こんな風に悩んでいること自体が聖女らしくない。そう思っているのに……わかっているのに、ミーアさんとお友だちをやめたいって思えなくて……、そんなの考えたくもなくって……」

と言った時、ふいに、ラフィーナが言葉に詰まった。その瞳には、かすかに涙が浮かんでいた。

混乱するように瞳を揺らすラフィーナは、迷いなく決断を下す統治者の顔をしていなかった。多くの民から慕われる聖女の顔でもなかった。

「……どうしよう、私……どうすればいいのか、わからない」

小さなつぶやき。葛藤に震える声は、友人関係で思い悩み、途方に暮れる普通の少女のもので……。

「いいんじゃないか？　そのほうが人間らしいさ。友を思い、その友にとって一番大切な存在でいたいって考えるのは、人として自然なことだろう。好きな人間と、ずっと友だちでいたいって思うのもな」

などと言うものの、ラフィーナはうつむいたままだった。
「うーん、そうだな……」
うなりつつ、馬龍は考える。やがて「らしくない言葉」で励ますより、ここは、自分の言葉で話すべきだろう、との結論に至り。ゆえに！
「馬に乗る人間の中には、酷い人間もいてな」
「……へ？」
突如始まった馬談議に、ラフィーナは目を白黒させる。それに構わず、馬龍は続ける。
「正直、馬が可哀想だって思うことがあるよ。人間がいなければ、もっと馬だって幸せなんじゃないかって、な……。でもさ、たぶん、そうじゃないんだろうな」
「どういう……意味ですか？」
「この地は神が形作り、そこに生きる人も動物も神が創造した。そして、我ら騎馬王国には、神の使いにより馬が与えられた。それは、人は馬を飼うものとして造られ、馬は人を乗せるものとして創造されたってことだ。だから、馬にとっての幸福というのは、人とともに生きる先にある。馬の幸せを願うなら、野に放てばいいんじゃない。俺たちが良き馬のパートナーになれるように、考えなきゃならないってことだ。それと同じことさ」
「……え、えと？　うーん？」
ラフィーナが、明敏な彼女にしては珍しく、きょっとーんと首を傾げていた。
どこか幼くあどけないその顔がおかしくて、馬龍は笑った。
「つまりな、神が、人を導く「人」として聖女というものを置いたんだろう。それなら、聖女とは「人」であるべきだと思うのさ。馬を従えるように人が造られているのと同じだ。嬢ちゃんは人として、人のままで、人らしく、聖女であり続けるべきなんだ。友のことで悩まなくなったり、判断の邪魔だからって友だちを切り捨てる。そんなのは人じゃないんだと俺は思う」

そう言って馬龍は空を見上げた。
「だから、ラフィーナ嬢ちゃんは、それでいい。そのほうがいいんじゃないか？　ちゃんといろいろ悩んで、悲しんで、いい友だちと笑いあう。聖女だろうが民草であろうが、それでいいんじゃないかな」
それから、馬龍はからかうように笑みを浮かべた。
「少なくとも、俺は、そのほうが好きだがね」
「えっ、ぁっ……」
なぜか、目を見開いたラフィーナ。馬龍はその目尻に浮いた涙を、人差し指で拭って……。
「ははは、友だちのことで悩んで泣いちまうぐらいのほうが、年相応で可愛いと思うぞ」
「なっ、こっ、子ども扱い、しないでください」
むぅっと睨みつけてくるラフィーナ。その頬は、ほんのり赤く染まっていた。
――顔色を変えるぐらい怒らせちまったか……。やれやれ、難しいな。
馬龍は苦笑いを浮かべて、肩をすくめてから、
「まぁ、なんにしてもミーア嬢ちゃんは、そういうこと、あんまり気にしないと思うぜ。ラフィーナ嬢ちゃんの悩みごとだって、ちゃんと飲み込んでくれるだろう」
馬龍は小さく首を振った。
「なにしろ、ミーア嬢ちゃんは、馬の心がわかる人だからなぁ。自由気ままま、融通無碍、どんなものにも縛られない心がある。本当に、うらやましい限りだよ」

ちなみに、その頃、ミーアはといえば……。
「ふむ……。このバニツィアというお料理は、なかなかですわね。見た目はパンですのに、サクサクとしたパイ生地の中にチーズが練りこんでありますわ。上にのってるお野菜との相性も抜群で……。

ほう、塩漬けのお肉をのせて食べるのが伝統……？　ふむ、しかし、これは逆に甘いヨーグルトも合うのではないかしら？　いろいろ試してみましょう」

自由を満喫していた！

自由気まま、融通無碍、伝統の食べ方に新たなる概念を付加して、新しい食べ方を見つけ出していく食の開拓者。

それこそが、ミーアなのだった。

第百八十一話　続・馬式人生相談（後書き）

自然を保護するとは人間が一切その環境に干渉しないことか？
それとも人間が自らを自然の一部と認識し、自らの役割を果たすことか？
みたいなことを考えつつ、書いております。
馬龍は後者が正しいと考えたようですね……。

第百八十二話　ミーアの怖い夢

その日、ミーアは夢を見た。
それは前時間軸の夢……などではなく、純粋な悪夢だった。
「あら？　ここはいったい……」
気付けばミーアは、見知らぬ廃城の廊下に立っていた。暗い廊下は闇に沈み、手元の灯では到底、照らし出すこともできない。
「はて……これはどういうことかしら？　わたくしは、このようなところでなにを？」
“ここはどこ、わたくしはミーア”状態でキョロキョロしていたミーアの鼻に、不意に、とても良い匂いが漂ってきた。なんだか、とっても……。
「ああ、実に美味しそうな匂いですわね。ふむ……行ってみようかしら？」
どちらにしろ、どこかへ向かわなければならないとするならば、美味しそうな匂いがするほうに行ったほうが良いに違いない。
ミーアは、そう信じて、匂いのするほうへと向かっていく。
やがて、現れたのは巨大なパーティーホールだった。
長い机の上には、ほかほか、湯気を立てたお料理の山、山、山。
それは、昨日の宴会を髣髴とさせる素晴らしいお料理で……。
「ん？　昨日の宴会……はて？　わたくしは、なにを？」
「あら？　なんて、品のないお顔かしら？　美味しいお料理があれば、すぐに飛びつくだなんて、なんと意地汚い」
突如として、突き刺すような声が響いた。目を向けた先、そこには、一人の女性が立っていた。
年の頃は、二十代の前半といったところだろうか。グイっと吊り上がった目と、意地悪そうに歪んだ唇、闇に溶け込むような漆黒の髪。

それよりなにより特徴的なのは、その体に巻き付いた毒々しい大蛇だった。
実に……こう、悪趣味な服装だった。
けれど、その特徴的な格好に、ミーアはとある人物を思い浮かべた。
蛇……、蛇を体に巻き付けた女性……すなわちっ！
「蛇の巫女姫……もっ、もしや、あなたが、ヴァレンティナお義姉さまですの！？」
ミーアの問いかけに、女性は、実に嫌らしげに口角を上げた。
「姉の顔もわからないだなんて、ずいぶんと無礼ね。それでアベルと結婚しようだなんて、百年ぐらい早いのではないかしら」
実に底意地の悪そうな顔で、ジロリとミーアを睨みつける。
「それに、そんなにＦＮＹって。昨夜は、ずいぶんと食べていたみたいね」
そう言って長い指で、ミーアの二の腕をぐいいっとつまんだ！
「なっ？　で、でも、騎馬王国の食べ物は、体に良いと聞いておりますわ。それに、そうと信じて食べれば、ＦＮＹることはないという話をどこかで聞いたことが……」
「迷信ね。迷信極まるわ！　そんなので帝国の叡智だなんて、笑ってしまうわね！」
……ごもっともな話ではある。なんの反論もできないミーアである。
ミーアとて薄々は気付いていたのだ。そんな上手い話があるわけはない、と。
「それに、物には限度があるでしょう。信じて食べれば太らないというのが正しいとして……あれでは明らかに食べすぎでしょう」
夢は……、しばしば見る者の願望を反映するものである。
ミーアは、疑いつつも信じていたかったのだ。
心から信じて食べれば、ＦＮＹらないと……、信じて、いたかったのだ。

それゆえに、そこに限定をかけた。つまり、ものすごくたくさん食べたらダメだけど、たくさん食べるだけなら信じて食べれば大丈夫なのだ、と……。

条件付けを、無意識にしたのであった。諦め悪く妥協点を探る、ミーアらしい夢といえた。

「それでは、体が重くなって軽やかなダンスのステップを踏むこともままならないでしょう？」

その言葉と同時に、ズンッと体が重くなる。確かにこんなに重たければ、ダンスなんかできそうになくって……。

「で、で、でも……」

「やはり、アベルのお相手として、あなたは相応しくありません。失格です！」

ずん、っと再びの衝撃。そして、ミーアは、悲鳴を上げながら、どこかに落ちていき、落ちていき……。

「おふっ……」

と、そこで目を覚ました。

「なっ、あ、ゆ、夢……ですの？」

ぼんやりとかすむ目をこすりこすり、あたりを見回す。っと、いつの間にやら、自分のお腹の上に、ベルの頭が乗っていて……。

「ふむ……。なるほど、ベルが乗っていたから、体がこんなにも重たく感じたと……」

ミーアはため息を吐きながら、自らの上に乗るベルをどける。頭の下に枕を差し込んでやると……、ベルはにっこり笑みを浮かべて……。

「ミーア、お姉さま……。うふふ、ボク、もう食べられません」

幸せな寝言も、今のミーアの耳には、ちょっぴり痛い。

「先ほどの夢は、食べ過ぎてしまったことによる罪悪感が見せた夢といったところかしら？」

もしくは、なにかの天啓であったのだろうか？

ミーアは、思わず考え、自らの行いを顧みる。

「サンクランドでの出会いが衝撃的だったから、ついつい食べ過ぎている感は否めないところ。さすがは、蛇の巫女姫ですわ。こちらが痛いところを的確に突いてくる。実に嫌味なやつでしたわ……」
敵は蛇である。こんな見え見えの弱点を放置することは、得策ではないだろう。
「これは、運動しなければ、なりませんわね……」
アベルの姉、ヴァレンティナ・レムノとの対決は近づいている。
こちらの弱点を晒さないためにも、アベルとの仲を認めてもらうためにも、シュッとしなければ……。
「なにか、考えなければなりませんわね……。ふむ」
そうして、腕組みするミーアであった。

第百八十三話　一歩も引けぬ戦い

すっ、すっと、髪の上を櫛が流れていく。
鏡の中、自らの髪を丁寧に梳いてくれているアンヌに、ミーアは微笑みかける。
「ずいぶん、手際が良くなりましたわね。アンヌ」
「ありがとうございます。ミーアさま」
まるでベテランメイドのようにすまし顔で頷くアンヌ。ふと、鏡越しに目が合うと、二人は同時に吹き出した。
「でも、ミーアさまの御髪は、ブラシがかけやすくて、いつも助かっています」
「ああ、あの馬印の洗髪薬が良いのですわね。うふふ」
上機嫌に笑って、ミーアは、ふとお腹をさすった。
「ふぅむ……」
つい先ほどまで胃もたれをしていたように感じていたのだが……、どうやら、気のせいだったらしい。ミーアの元気なお腹は、早くも空腹を訴え始めていた。
よく食べて、よく寝る。ミーアは健康優良児なのだ。
――はて、朝ごはんはまだかしら……？
ミーアがお腹をさすり、さすり、していると、アンヌが、心配そうに顔を覗き込んできた。
「大丈夫ですか？　ミーアさま。やっぱり昨夜の宴会でお止めするのが遅かったでしょうか？」
「ああ。いいえ、ちょうどよかったと思いますわ。やはり、出されたものを残さず食べるのが礼儀ですし。その分、少々食べすぎたきらいはありますけれど……ふふふ、これも仕事のうちですもの」
「でも、そんなことを続けていたら、ミーアさまのお体が……」
「その分は運動によって補えばよいだけのこと。辛いところですけ

れど、いつもあるわけではありませんし、そういう時もあるという話ですわ。あ、そうですわ。よろしければ、後で、運動に付き合っていただけますかしら？」
いけしゃあしゃあと、もっともらしいことを言うミーアに、感動した様子のアンヌはグッと拳を握り締めて、
「もちろんです。お手伝いいたします」
気合の入った声で答えるのだった。

ミーアたちは、林族の馬龍とともに朝食の席に着くことになった。
目の前に出されたのは、騎馬王国伝統のスープだった。ぴりりとした香辛料の香りがなんとも美味しそうなスープには、白い小麦の生地で具材を包んだもの「白月包」が浮かんでいる。
――このお料理の中身は、確か羊肉とお野菜……それにキノコでしたわね……。ふふふ、騎馬王国のキノコがどんなものなのか、たっぷり味わってやりますわ！
騎馬王国に来るに際して、下調べを欠かさないミーアである。っと、
「よぅ。嬢ちゃん。昨日は、どうだった？」
馬龍が声をかけてきた。
「ああ……、馬龍先輩。ご機嫌よう。ええ、そうですわね」
ミーアは昨晩の風族の宴を思い出しつつ、ふぅうっとため息を吐いた。
「事前に研究してきたのに、見事にしてやられた、という感じでしたわ」
サンクランドで、騎馬王国の食材と出会った時、それがとても美味しいものだとはわかっていた。けれど……。
――侮っていたということかしら……。まさか、あそこまで油断して好き放題食べてしまうとは……。それで、蛇の巫女姫に醜態を見せる羽目になっては、目も当てられませんわ。
「そうか。やっぱり、嬢ちゃん、事前にいろいろ調べてきていたの

か。さすがだな」
「もちろんですわ。事前情報は大事ですもの」
いかにミーアとて、騎馬王国のすべてを食べ尽くすことは不可能。ならば、なにとなにを食べるのか、なには絶対に食べておかなければならないかを調べることは大事なことだった。
「ともあれ、してやられましたわ。ここは挽回できるよう、今から考えておかなければなりませんわね……」
「……挽回できるのか？」
その問いかけに、ミーアは力強く頷く。
「無論ですわ」
ミーアには覚悟があった。
なにしろ、アベルの姉と対面するのだ。その前にシュッとすることぐらい朝飯前。
などと考え、すぐに首を振る。
否、そうではないのだ。そもそも簡単かどうかは、この際、問題ではないのだ。
問題は、やるか、やらないか、である。
一歩も引けぬ戦いが、そこにあるのだ。
――やはり、大事なのは運動ですわ。この騎馬王国で、美味しいお料理を前に食べないということは、ほぼ不可能。
ミーアは己を知っている。
なるほど、確かに食べる量を制限すれば、ある程度はシュッとするだろうが……、この騎馬王国において、そんなことができるわけがない。無理だとわかっているならば、その可能性は考慮すべきではない。
ならば、ミーアにできることはただ一つ。運動である。
――アンヌにもお願いしておきましたけれど、やはり効率的な運動が肝要。問題は、どのように運動するのか、ということですけど……。ううむ、難しいところですわ。
「そうか……。さすがはミーア嬢ちゃんだな。まだ、諦めてはいな

いってことか」
「無論ですわ。引くことのできない局面というのは、ございますもの」
アベルの姉との対決は避けがたい。であれば、やるしかないのだ。
そんな、気合の入ったミーアの目をまっすぐに見つめて……馬龍は大きく頷いた。
「わかった。俺も……できる限りのことをするつもりだが、嬢ちゃんは嬢ちゃんの判断で好きにやってくれ。うちの親父殿もある程度は合わせられると思うぜ」
「？　はて……？　まぁ、協力してくださるというのならば、ありがたいことですけれど……」
それから、ミーアは思わず苦笑いする。
「しかし、馬龍先輩は、相変わらず面倒見が良いですわね」
アベルの姉と出会う前に、シュッとしたいと思っているミーア。その手伝いを、こんなにも真摯な顔で手伝うと言ってくれる馬龍。
さすがにそれは、面倒見が良すぎるだろう、と苦笑いのミーアである。
一方、ミーアの指摘に、なにやら、おかしな顔をする馬龍である。
「そいつは否定できないとこだが、俺以上にお人好しの嬢ちゃんに言われると、ちょっと微妙だな」
小さなつぶやきは、けれど、ミーアの耳には届かなかった。
――でも、そうですわね。まずは、族長会議で火の一族とを仲良くさせないといけませんわね。運動はその後……。今は気にしないのが良いですわ。うん……。
かくて、運命の族長会議が始まる。
最後の十二部族会議と言われる、伝説の会議が……。

第百八十四話　ミーアベルの復讐、始まる……かもしれない？

「やれやれ、さすがだな。ミーア嬢ちゃんは……」
朝食を取り終えた馬龍は、自らの馬に餌をやるべく、外に出た。
「事前に調べてきたから、挽回も可能ってか……。まったく、本当に大したもんだ」
父、馬優もそうだが、しっかりと物事を考えて、準備をする人間のことを、馬龍は尊敬していた。
――でも、よくよく考えれば、そうだよな。混沌の蛇だったか……。
先日、聞かされた謎の集団。どうやら火の一族に関係するらしい、その邪教徒たちを相手に、ミーアやラフィーナたちは戦っていたという。セントノエルにいた頃、馬龍は、そんなことに、まったく気付きもしなかった。
――ミーア嬢ちゃんなんか、なにも考えずに馬に乗ってるように見えたが……いや、時々、切羽詰まったように乗ってることがあったな。あれは、そういうことだったのか……。
餌をあげて、ブラッシングも終えてから、馬龍は、ふと首を傾げた。
「ん……？」
後ろから気配を感じて、振り返ると……なにかもの言いたげな顔で立ち尽くすラフィーナの姿があったのだ。
「ああ、ラフィーナ嬢ちゃんか。おはよう。よく寝られたか？」
そうして、笑みを浮かべる馬龍。ラフィーナは……チラリ、と目を向けた……、かと思うと、すぐに、目を逸らしてしまった。なにか気になるのか、片手で美しい髪をいじったりしつつ、おどおどしている。
「お、おはようございます。馬龍さん」

小さな声でそう言うも……なんだか様子がおかしかった。
――まだ悩んでるのか、それとも……。
と、少し心配になった馬龍は、おもむろにラフィーナの額に手を当てた。
「ひやっ！」
小さく悲鳴を上げ、飛び上がるラフィーナ。
「ふむ……ちょっと熱があるか？　もしかして、昨日の夜、冷えちまったかな？」
「いえ、そんなことは……。熱もないので、ご心配なく……」
一歩、二歩と後ろに下がってから、上ずった声で言うラフィーナ。首を傾げつつ、馬龍は、まぁ、いいか、と納得する。
「まぁ、昨日のがうまく気分転換になりゃよかったんだが。それはそうと、今日は、よろしく頼むぜ、ラフィーナ嬢ちゃん。今日の族長会議、ミーア嬢ちゃんは、なかなか身動きが取れないだろうからな」
「え……？　それは、なぜかしら……」
首を傾げるラフィーナに、馬龍は昨日の入城の意味を教える。
「なるほど……。昨日のやり取りにそのような失敗があったのね……」
それを聞いたらラフィーナは、ようやくいつも通り、落ち着いた表情に戻った。
「ミーア嬢ちゃんは挽回できるって言ってたが、俺らは俺らで行動しなきゃならないだろうな。と言っても俺自身が族長の息子って立場なんでな。まだまだ、できることは限られてるんだが……」
族長会議は、基本、十二部族の族長たちによって行われる話し合いである。
今回は成り行き上、関係の深い馬龍も参加できることにはなっているが、どれほど、発言に耳を傾けてもらえるか、甚だ不安なところであった。
「その点、ヴェールガの聖女の言葉には重みがあるからな。無視は

されないだろう。すまないが、よろしく頼む」
深々と頭を下げる馬龍に、ラフィーナは、涼やかな笑みを浮かべて頷く。
「ええ。もちろんよ。騎馬王国の悲しい因縁を解くことに、私も全力を尽くす所存です。私にできる限りのことをしましょう。ところで、それはそうと……」
と、ここで、一転。ラフィーナはちょっぴり、困った、情けない顔で言った。
「あの……、昨日のことなのですけど、できれば、誰にも言わないでほしいのですけど」
「ん？　ああ、それは構わないが……」
その答えに、ぱぁあっと顔を輝かせるラフィーナ……だったのだが……、
「あ、けど、あの嬢ちゃんにはもう話しちまったな」
続く言葉に、かっちーんと固まる。
「だっ、だ、誰に？　誰にですか？」
「ほら、ミーア嬢ちゃんと一緒にいるあの子だよ。ベルっていう……」
ふらっと、ラフィーナの体が傾いだ。その口からは、声にならない悲鳴が零れ落ちた。
長き時を超えて……今、司教帝ラフィーナへのミーアベルの復讐が始まろうとしていた……のかもしれないが、まぁ、どうでもいい話なのであった。

南都の中央部には、割と大きな建物が建っている。その名も「グレートホースキャッスル」
山族の長、富馬が建てた、まぁまぁの大きさの屋敷である。
建築様式はレムノ王国の影響を強く受けたものとなっていて、だから、戦城としての機能もそれなりに持っているらしい……が。
いかんせん、その名前が……。

「ぐ、グレート……ホースキャッスル……」
その、なんともアレなネーミングに、ミーアは思わずクラッとする。
せめて、騎馬王国風の名前にしておけばいいのに、なんだか、無理をして外国っぽい名前を付けたのが、ものすごーく感じられて……。なんとも居たたまれない気持ちになってしまう。
……ちなみに、乗馬に「シルバームーン」とか名付けたり、孫娘に「ミーアベル」とか名付けたりと、ミーアのネーミングセンスもなかなかアレなところがないではないが……、そんなことは、ポーイッと記憶の彼方に放り投げているミーアである。
そうして、館の門を潜り抜けたミーアは、直後に見つける。
自分たちを見下ろす、巨大な馬……の像を。
「ほう。これは見事な造形……。いい仕事してますわ。わたくしの馬パンの完成度を上げるのに、大いに役に立ちそうな……」
近づいて、像を観察していたミーアは、ふと見つける。
その馬像についたタイトル……。
「我が愛娘『落露（らくろ）』に捧ぐ。ふむ、馬の名前は騎馬王国っぽいですけれど……、愛娘……」
ミーアは、改めて馬の像を見上げて、うむむ、っとうなる。
――どうでもいいですけど、お父さまといい、権力者というのは、どうして自分の娘の像を建てたがるのかしら……。もっと、こう、有意義なお金の使い方があるでしょうに……。
そんな風に、ミーアが、人の世の権力者の愚かさを嘆いていると……。
「ようこそいらっしゃいました、ですの」
背後から声をかけられる。
振り返ると、そこには、一人の少女が立っていた。
年の頃はミーアと同じぐらい。騎馬王国の民の特徴である黒い髪を異国の可愛らしいリボンでまとめた少女は、スカートの裾をちょこんと持ち上げ、

「山族族長、富馬の娘、小驪（シャオレイ）と申します、ですの」
ぎこちない笑みを浮かべる。
「これはご親切に。わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーン。ティアムーン帝国の姫ですわ」
対するミーアは、完全無欠なお姫さま然とした態度で返す。
それを見た小驪は、
「……本物の、お姫さまですの」
ポカーン、とした顔でミーアを見つめていたが、すぐに首を振って、踵を返した。
「あ、ええと、みなさまのご案内をするように、と父から、言いつけられております、ですの。どうぞ、こちらへ」

第百八十五話　帝国の叡智の駆け引き

小驪の案内で、族長たちの集まる大部屋に通されたミーア。
てっきり、建物の作りから巨大な円卓でもしつらえてあるのかと思ったのだが、族長たちはみな、床に敷かれた絨毯の上に座っていた。
――ふむ、これが騎馬王国の族長たち……。
一人一人の顔をできるだけ覚えなければ……などと思っていたミーアは、すぐに風光馬の姿を見つけた。部屋の一番奥、堂々と座る光馬。
――ここは、挨拶しておくべきかしら……？
様々な経験上、ミーアは知っている。人脈と礼節は、困った時に自分を助けてくれる、一つの拠り所である、と。
無論、それにすべてを託すのは愚かなこととはいえ、ないよりはあったほうが良い。
今回の話し合いを上手く進めるために、年長の光馬の力が借りられるのであればありがたい。
――ふむ……。どうやら、みなさん、わたくしにはあまり興味がないようですわね。望ましいことですけれど……どうしようかしら……。
今ここで、光馬に声をかけたら、とても目立ちそうだ。せっかくの、目立たずにのんびりしていられる立場をみすみす手放してよいものか。わずかな逡巡、その後、ミーアはすぐに決断する。
――ふむ、やはり少々目立ってしまいますけれど、ここは、ご挨拶をしておくのが良いでしょうね。
ということで、ミーアは早速口を開いた。
「ご機嫌よう、光馬殿。昨日はお世話になりましたわね」
「ほっほ、これは、姫殿下。ワシのほうこそ、昨日は、なかなかに

楽しい時間でしたぞ。特に、あのバニツィアに甘い果物をのせるのは、なかなかの良いアイデアでしたな」
「うふふ。わたくしも、あんなに合うなんて予想外でしたわ。とても楽しい時間でしたし、また、そのうちにご一緒できれば嬉しいですわ。今度は、帝国にいらしていただきたいですわね。たっぷりご馳走いたしますわよ」
「わはは。そうですか。では期待しておくとしますかな」
と、そこで光馬は笑みを消して、じっとミーアを見つめてくる。
「しかし、今日は、わざわざご足労いただき、申し訳ないことで。しかも問題は我ら騎馬王国の血族間のこと。我ら自身が解決せねばならぬ問題ゆえ、大して、発言していただくこともないというのに……」
そんなことを言う光馬に、ミーアは……ちょっぴり感動していた！
――ああ、わたくし、今回は部外者扱いされてますわ。しかも、光馬さん、なんだか、すごくやる気がある感じですし……。わたくしがいなくっても、他のみなさんでなんとかしてもらえる……。これほど幸せなことはございませんわ……。
自分たちのことは、自分たちで解決するから、ミーアの手を煩わさないようにする、と言ってくれた光馬に、ミーアは感謝の念を禁じ得なかった。
そもそも、ミーアの構想は、自分がかかわらなくて良い問題から解決してもらい、その間に、巫女姫のことをなんとかする方法を考えることだったのだ。ゆえに、もしも、手を下さなくてもよいのであれば、それに越したことはない。
ともあれ、問題はアベルの姉のこと、そして、理由はよくわからないが、自身を友と呼ぶ慧馬にもかかわることである。万が一“騎馬王国の中では解決したこと”などにされたら、厄介だし、後味もとても悪いだろう。
――族長連中の中に蛇の関係者がいないとも限りませんし。しっかりと状況をコントロールすることが大事ですわね。そのためには

……。
と、ミーアが目をやるのは慧馬のほう……。
「いえ。少しでもわたくしにできることがあるならば、力を尽くしたいと思っておりますわ。友のためですもの。このぐらい、何ともありませんわ」
まず、これはお友だちに関わることである以上、あまりいい加減なことをしたら、黙っておかないぞ、と釘を刺す。さらに、ミーアが目を向けるのはラフィーナのほうで……。
「それに、わたくしのもう一人の友であるラフィーナさまも、今回のことは大変憂慮されているご様子ですし。ラフィーナさまが、この件をより良い解決に導こうとされているのでしたら、わたくしが力を貸さないわけにはいきませんわ」
あくまでも、自分は手伝うだけ、とさりげなく訴えつつも、ラフィーナがこの件に介入してきていることを強調しておく。
聖女ラフィーナの前で、非道なことを行えばどのようなことになるのか、知り尽くしているミーアである。それに、ラフィーナがいれば、仮に蛇の手の者がいたとしても、容易には手出しできないはず。
ここは、ラフィーナに頑張ってもらわなければならない、ということで、発破をかけたわけだが……。
ミーアに話しかけられたラフィーナは、ほわぁっと笑みを浮かべてから……、すぐに、キリッとしたすまし顔に戻って、
「ありがとう。ミーアさん。私も全力で、この諍いを収めるつもりよ」
気合の入った声で言った。
その瞳が、若干、感動に潤んでいたことに、気付く者はいなかった。
そして、感動している者は、もう一人いた。
一連のやり取りを見ていた馬優である。

――なんという鮮やかさだ。あれが、帝国の叡智ということか……。

昨日の入城の失敗で、完全にその存在感を消されていたはずだった。それが、どうだ。他の族長たちの視線は、すべてミーアのほうに吸い寄せられていた。

――風族の宴会に招かれたと聞いた時には、光馬殿がなにか企んでいるのだとばかり思っていたが……。

十二部族族長の最年長にして、今回の会議の仕切りをする人物、風光馬。

その彼に招かれて、宴会に参加したこと、さらにそれを強調することで、ミーアは、無理矢理に族長たちに思い出させた。

そもそもミーアが、光馬のエスコートによって、この南都に入城したということを！

――自らの発言力を削ぐための行動を、逆用して、再び発言権の復活を狙うとは……、なんという……。

極めて緻密、かつ苛烈な戦略的会話を前に、馬優は言葉を発することができなかった。

自身も、それなりには策を弄するほうだと考えていた馬優であったが、目の前のやり取りと比べれば児戯にも等しい、とまざまざと思わされてしまったのだ。

――なるほど。これが帝国の叡智。すぐにでも挽回は可能であればこそ、あの日、光馬との入城を受けたのだろう。

底の知れないミーアの器量に、戦慄を隠せない馬優だった。

第百八十六話　渦潮ミーア、降臨す

「はじめに、このような機会を設けていただいたことを感謝する。私は火族の長老、火狼花と申します。そして、この娘は火族族長の妹、慧馬と申します」

ゆっくりと立ち上がり、口を開く狼花。眼光鋭く族長たちを見つめてから、静かに頭を下げる。

その迫力は族長たちの耳目を引くのに十分なものであったが……それよりなにより、一同の視線を集めたのは、族長の妹と紹介された慧馬のほうだった。

なんといっても入城時、あの見事な馬を乗りこなしていた少女である。

歴戦の戦士のごとくキリリっと引き締まった表情、凛とした立ち居振る舞いに、ほぅ、っと感嘆の息が漏れる。

これは油断ならぬ相手、並々ならぬ俊英に違いない、と……各々の顔に緊張が走る。

持ち馬こそが最大の評価基準という、騎馬王国の病理が見え隠れする一面と言えるだろう。

その後、一通りの自己紹介が済んだところで、最後に、ラフィーナが静かに口を開いた。

「ヴェールガ公国公爵令嬢、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガと申します。幾人かの族長の方とはお会いしたことがあったかしら……」

小さく首を傾げて、涼やかな笑みを浮かべる。

それから、静かに瞳を閉じて、ラフィーナは神聖典の一説を唱える。

“神、地上に降り立ちし時、羊を飼う人々、勇みてそれを迎えん”

「我らの神を一番に迎え、もって大いなる祝福を受けた羊飼い、その末裔たるみなさまの、会議に参加できることは望外の喜びです。どうか、神の祝福と大いなる導きとが、この会議にありますように」
厳かな祈りは、その場の者たちの心に清らかな風を吹かせた。
そうして、族長会議は静かに始まった。
口を開いたのは、仕切り役である光馬であった。
「さて。今回の会議を招集したのは林族の長、馬優殿であったか。まずは、この会議の趣旨を説明していただこうか。何の故あって、我らはこの場に集められたのか……。何を求めてのことなのかをご説明いただきたいのだが、いかがだろう、馬優殿」
「ははは、光馬老に「殿」と呼ばれるのは、いささか面映ゆいな」
話を振られた馬優はおどけた様子で笑ってから、ゆるりと立ち上がる。それから、長い袖を、音を鳴らして直してから、静かにみなに視線を送る。
「さて、親愛なる族長のみなさま方、この度は呼びかけに応じていただき感謝する。また、このような素晴らしき時を共にすることができること、歓喜に堪えない」
歌うように朗々と、舞台役者のような見事な声で語り掛ける。
「ほう、素晴らしき時とな？」
光馬の問いかけに、馬優は深々と頷く。
「そうです。我らは、失っていた兄弟を再び見つけることができた。過去のいきさつから別たれていた血族が、今再び会い見えんとするこの時、きっと我らの父祖もお喜びのことでしょう」
その訴えかけに、何人かの族長が素直に感銘を受けたように頷いていた。
感動した様子で目を潤ませている者までいる。騎馬王国の民は、基本的には善良で素直な人たちなのである。
「なるほど。つまりは馬優殿は、その感動を分かち合いたいがために、我らを呼び集めたと、そういうことでよろしいかな？」
「無論、それだけではありませぬ。聞けば、火の一族は不作により、

困窮の中にあるらしい。その結果、盗賊にまで身を堕とす者もいたとか。これを放置するは、我が国の恥。我らの父祖、光龍に顔向けできぬことでしょう？」
「ほう。つまり、困窮する火の一族を支援する、その助けが欲しいとそういうことじゃな？」
光馬はパンッと手を打ち、微笑んだ。
「そういうことならば話は早い。血を分け合った一族が困っているのだ。食べ物なぞいくらでも支援しようではないか。それに、他国との折衝も必要だろう。盗賊の被害を受けた国には使者を送り、しっかりと補償をせねばなるまい」
光馬の言葉に、今度はすべての族長たちが頷いた。
過去にどのようないきさつがあったとはいえ、同胞を助けるのは理の当然。論ずるまでもないこと。それは、騎馬王国の良識だ。
基本的には、善人で素直な人たちなのである。
だが……、そこで、あえて、馬優は一歩踏み込む。
「いえ、光馬老。話は、それで終わりませぬ。私は、騎馬王国の未来について論じあうために、みなさまに集まっていただいたのだ」
その言葉を受け、光馬はスゥっと目を細めた。構わず、馬優は続ける。
「火の一族が困窮したことは不幸なこと。されど、同時に私には天啓に思えたのだ。ぜひ各族長のみなさまには考えてもらいたい。火の一族を、別たれていた我らの兄弟を、今一度、我らのもとへ迎え入れることを」
その一言で、その場の空気が一気に凍り付いた。
「それは、つまり林族に火の一族を迎え入れたいと、そういうことか？　それとも、火の一族を他の十二部族に分散して迎え入れたいという……」
「そうではない、ということは、おわかりではないですか？　光馬老ならば……」
それから、馬優は族長たちの顔を見回してから言った。

「私はこう考えている。今こそ、再び、十二部族が十三部族へと戻る時ではないか、と……。他の族長のみなも、きっと私と同じ立場ならば、同じことを考えたのではないか？　私のように、火の一族を最初に見つけたのならば……」
「それはどうだろうな。実際、その立場に立ってみないとわからんが。どうも、馬優殿は、火の一族に対する妥協が過ぎるように思えるな。貴殿は、歴史歌の名手だったはず。過去の、我らが別れたいきさつをすべて忘れてしまったのかね？」
その指摘は、光馬に次ぐ年長の族長からなされた。他の族長たちも、どこか困惑した様子で馬優を見つめていた。
助けを出すのは当然のこと。されど、別れた一族を再び国に加えるか……、その大きな変化がなにをもたらすのか、不安に思わぬ者はなく……。
と、その時だった。狼花がそっと手を挙げてから、口を開いた。
「いや、馬優殿には申し訳ないが、実は、林族が最初ではないのです。すでに付き合いのある族長殿がおりましてな。山族の富馬殿には、以前も世話になっているのです」
唐突に話を振られ、富馬がビクンと肩を震わせた。
「おや、なんと、そうなのですか？」
馬優は、少し驚いた様子で言った。それから、残念そうに首を振る。
「なんだ、富馬殿、言ってくだされば良かったものを」
ちょっぴり青い顔をする富馬に目を向けてから、馬優は狼花に尋ねた。
「それでは、火の一族は山族と付き合いがあったと……？」
「ああ、いや、それは……」
となにか言いかけた富馬を遮るように、狼花は言った。
「ええ。我らが困窮している時に、富馬殿から申し出があったのです。我らの家畜を買い取ってやろう、と。はじめは羊、次はヤギ、果ては馬まで……」

そこで、一つ目の大きな流れが起こった。
「……どういうこと、かな？　富馬殿……？」
ひときわ大柄な族長が、野太い声で言った。
ちなみに、先ほどの馬優の口上に感動して、瞳をウルウルさせていた男であった。単純で激情家で、大変、人情深い男として知られている。
「い、いや、そのぅ……」
他の族長からも白い眼を向けられて、もごもごと口ごもる富馬である。
長く別れていた火の一族の者は知らないことであったが、血族の困窮を無償で助けることは、古の時代、十二部族で共有された、ある種の掟であった。
その行為は、自らの利を追求するべきものではない。取引ではないし、商売でもない。
相手が立ち直れるように手を差し伸べるための行為、完全なる慈善の行為なのだ。
にもかかわらず、富馬は、困窮した火の一族の家畜を買ったという。
家畜は財産、もっと言えば生活に必要不可欠なもの。それを失えば、一時の金を得られたとしても、その後、さらなる困窮が待っているのは必定。
それがわかっていながら、家畜を買うということ……それは、掟に反する許されざる行為なのだ。
場の空気は一気に、富馬を責めるもの、そして、火の一族への同情へと変わっていた。
それは、馬優の計算通りのものだった。
火の一族に一方的な温情を与え、隷従を求める……そのような形で彼らを迎え入れることを馬優は望まない。そのバランスをとるための措置であった。
されど、できかけた流れを打ち消すような、重たい一言が響く。

「だが……狼のことはどうするのだ？」
声の主、光馬は静かな眼光で、狼花を、そしてその隣にいる慧馬を見つめた。
「狼を捨てるというのならばわかる。あれは我らが別れた原因だからな。それを捨てようというのならば、喜んで火の一族を迎え入れよう。だが……」
思案するように沈黙してから、光馬はつづけた。
「林の一族に吸収するのであれば、林の一族の掟に従う必要がある。同様に風には風の、山には山の掟がある。おのずと狼は捨てることになろう。されど、火の一族を火の一族のまま受け入れるということは、火の一族の掟をも、我らは受け入れなければならぬということになる。であれば、狼を使うという、そのしきたりもまた受け入れなければならぬ。そうではないか？」
「そっ、そう。まさに、その通り。いや、さすがは光馬殿。私も火の一族は我らの仲間と認められないと思ったから、羊を買っただけであって……あれ？」
などと、富馬が何か言っていたが……、だぁれも聞いちゃいなかった。
睨みあう光馬と馬優によって生まれた膠着。それを打破するのは、そのどちらかであると誰もが確信していたからだ。固唾を呑んで状況を見守る族長たち。
されど、次の流れはまったく別の場所で生まれようとしていた。極めて強力で、すべてを飲み込む渦潮のような流れが。ある穏やかな声をきっかけに生まれようとしていた……。

さて、族長たちの話をじっと聞いていたミーアは、ひとまず安堵していた。
――ふむ、さすがは身内のことですわね。きちんと解決できそうですわ。
ミーアの見たところ、彼らがもめているのは火の一族を、どのよ

うに救うかという、その方法について。馬優の主張の通り、騎馬王国に復帰できれば一番良いが、最低でも食糧の支援は取り付けられそうな状況。
誰一人、見捨ててしまえ、などと言い出さないのは、実に良いことである。
――落としどころを探るのは、やはり当人たちにしかできないことでしょうし、この調子ならば、わたくしが口を出す必要はどこにもございませんわね。よし……。
そうして、ミーアは腕組みすると、すぅっと静かに瞳を閉じる。
なにかを数えて、暇つぶしをするような真似は、今日はしない。時間の無駄である。
今日のミーアは本気モードなのだ。
本気で向き合おうというのだ……自らの、ＦＮＹと。
――この会議が終わったら、いよいよ、お義姉さまと対峙しなければなりませんし……。時間は予想よりありませんわ。どうするのが効果的かしら……？　真面目に考えませんと……。
問題は、どのようにして効率的な運動をするかということ。
ミーアは自分が、決して運動が嫌いなわけではないと知ってはいたが、それでも、食べた量動けというのは、なかなかに大変なことである。
――長続きするやり方を考えなければ、なりませんわね。とすると……。
ミーアは、そこで静かに頷いて、そっと目を開けて、
「そうですわね。馬に乗るのが良いのではないかしら……」
なにしろ、ここは騎馬王国。
ならば馬に乗るのは当然の流れといえた。
――毎日じっくり乗れば、良い運動になるでしょうし、アベルと一緒に乗れば楽しいですわ。長続きしますし、少しぐらい食べ過ぎても大丈夫なんじゃないかしら？
などと、自らの思い付きにニヤニヤしていたミーアは、直後に気

付いた。
自分に突き刺さる、族長たちの視線に。
「それは……どういう意味ですかな？　ミーア姫殿下」
光馬すら、飄々とした普段の態度を崩し、いささか震える声で尋ねてくる。
「……はぇ？」
ミーアはポカーンとしつつも、敏感に察していた。
流れが、再び変わりつつあること。
自分が流れを変えてしまったということを……。
されど、そんなミーアでも気付いていないことがあった。それは、自身が生み出してしまった流れが、族長たちのすべてを飲み込む巨大な渦潮であったことで……。

第百八十七話　勘違いしておりますわよ？

「馬に乗るのがよいのではないかしら……」
そのミーアの言葉に、馬龍は頭を殴りつけられたかのような衝撃を受けた。
そしてそれは、彼だけではなかった。他の族長たち、各々の部族をおさめ、沈着さや勇敢さ、相応の知恵を求められる族長たち、その誰もが言葉を失っていた。
その中で、一番早く復活した光馬が……、
「……それは、もしや……いや」
なにかを否定するように首を振る。けれど、
「この場面で、馬に乗るって言ったら一つしかないでしょう。“馬合わせ”だ」
馬龍は断言してみせた。
馬合わせ――それは騎馬王国の古の審判法だ。
それは簡単に言ってしまうと、馬に乗り、先に目的地に着いたほうを正しいとする、極めてシンプルな判定法であった。「馬の脚の速さによって、我らに神意を示したまえ」と神に伺いを立てるわけである。
冷静に考えればそれは、馬に乗るのが上手い者、もしくは良い馬を持っている者に大変有利な方法ではあるのだが……。ともあれ、剣と腕力をもって自分の言い分を通そうという方法よりは、幾分か平和な、なんとも騎馬王国らしいやり方ではあるのだ。
しかしながら、そんな馬合わせも、近年ではめっきり行われなくなってしまっていた。
それゆえ普通であれば、異国の姫が提案するとは思わないのだが……、馬龍はちゃんと聞いていたのだ。
「そういえばミーア嬢ちゃん、言ってたな……。騎馬王国のことを

事前に調べてきたって……」
　そう、ミーアは事前に騎馬王国のいろいろなことを、綿密に調べてきた、と言ったのだ。
　……実際にはそこまでは言っていないのだが、馬龍の中では、情報がカチッとはまってしまったのだから、仕方ない。
　彼の頭の中では、ミーアは、騎馬王国の歴史をものすごーく調べてきて、今回の騒動を解決するすべをきちんと考えていた、ということになってしまったのだ。
「なるほど……。馬合わせは伝統的なやり方。もしも、これにより火の一族を迎え入れるべき、との結果が出てしまえば、必然、みなも受け入れざるを得ない。狼を使う術を持ったまま、彼らを受け入れること、それを誰もが納得するにはこのぐらいする必要はありましょうな」
　ゆっくりと、顎をさすりながら、光馬は言った。
「すなわち、山族の長、富馬と、火の族長の妹、慧馬とで馬合わせをせよ、と姫はそう言っておられるのじゃな？」
「……は？　いやいや、なぜ、我々がそのようなことを……？」
　突然、話を振られて、大慌ての富馬。そんな彼に冷たい視線を向けてから、光馬は言った。
「火の一族は、狼を使うゆえに騎馬王国の一員にあらず。故に羊を買った。そう言ったのは、うぬであろう？　ならば、火の一族の帰順を一番に反対すべきは、うぬではないかな？」
「なっ……それは……ぐむ……」
　今ならばまだグレーゾーン。けれど和解により、火の一族が正式に帰ってきてしまえば、火の一族に対する非道が、より際立つ形になってしまうかもしれない。原則的に法や掟は時間に逆行して適用されないものであるが、それでもイメージが悪いのは否定できないところ。
　っと、反論を封じた光馬は、静かにミーアのほうを見つめた。
「さて、ミーア姫殿下、騎馬王国についてよくお調べになってきた

とのことだったが……、馬合わせで負けたほうがどのような目に遭うかは、当然ご存知であろうな？」
――はて？
などと首を傾げそうになるミーアであったが、我慢して、じっと光馬を見つめる。っと、ミーアの返事を待たずに、光馬は、確認するように言った。
「敗者は、求められれば自らの乗った馬を、勝者に譲らなければならない……。その決まりも含めてのご提案なのでしょうな？」
――はぇ？
一瞬、なにを言われたのか分からず、小首を傾げるミーア。そんなミーアに光馬は容赦なく、あるいは、誤解の余地なく、言った。
「つまり……、もしも、火の一族の娘が負ければ、あの馬は、そこの富馬のものになるかもしれない。いや、あれほど見事な馬ですからな。絶対にそうなるでしょう。富馬もその危険を承知で自身の馬を出すのです。それに見合った報酬を求めるのは、みなも納得するでしょう。それを承知の上で、提案しておられるのでしょうな？」
――あ、これ、勝手にオーケーしたらまずいやつですわ！
ミーア、即座に悟り、撤退を決断。今ならばまだ間に合うと、口を開こうとして……。
「無論だ。ことを勝負で決することができるというのであれば是非もなし。喜んでお受けしよう」
その前に、慧馬が答えてしまった。ものすごーく堂々と胸を張って……。
――くぅ、遅かったですわ！　慧馬さん、余計なことを！
思わず頭を抱えたくなるミーアである。
この状況、一見すると、活路が開けたように見えなくもない。ないのだが……。
――負けても、食糧支援は受けられるのでしょうけれど……、慧馬さんは愛馬を失う。その上、火の一族は騎馬王国の一員と認められることはなくなる。あるいは狼を捨てて、どこかの一族に受け入

れてもらう方法もあるのでしょうけれど……いずれにせよ、リスクが大きすぎますわ！
しかも、ミーアの頭には、先日、慧馬に追いかけられた時の記憶が残っていた。
あの時は、確かに慧馬に追い詰められたが……、ではもし、乗っているのが荒嵐だったらどうだっただろう？　もしかしたら、追いつかれなかったのではないか？
――条件さえよければ、わたくしでも逃げ切れたかもしれないですわ。少なくとも慧馬さんは、狼使いや馬龍先輩に比べれば、幾分、劣る気がしますわ。
慧馬ならば絶対に勝てるというのならばともかく、イチかバチかの賭けをするのは、小心者の戦略には相応しくない。それよりは……、むしろ……。
直後、刹那の閃き！
ミーアは自らの直感に従って、口を開いた。
「いいえ……、光馬殿、一つ勘違いしておりますわよ？」
「ほう。勘違い……？　それはなんのことですかな？」
「決まっておりますわ。慧馬さんが馬合わせに出るということですわ」
「どういう意味だ？　ミーア姫」
これには、光馬ではなく、慧馬が怪訝そうな顔をした。それに静かに微笑みかけて、ミーアは自らの胸に手を当てて言う。
「出るのは、慧馬さんではない。このわたくしですわ！」
その言葉に、その場は再び騒然とした。

第百八十八話　ミーアの思惑～天馬の姫の参戦～

一か八か、勝利すればハイリターンが得られるが、負ければハイリスクを負わなければならない……、そのやり方はミーアの好むところではない。

といって、慧馬が勝負を受けてしまった時点で、もはや、事態を止めることは不可能。ならば、どうするのが最善か……。

そうして瞬時の思考の末に、ミーアは決める。

自身が……馬合わせに出ることを。

堂々と、自信満々に言ったミーアには確固たる勝算があった。

その考えの中核となっているのは「別に負けてもいいじゃない？」の精神である。

いかにミーアとて、騎馬王国の者と乗馬で競って勝てると思うほど、無謀ではない。

――一年間ぐらい本気で乗馬に取り組めばともかく、今のわたくしには、いささか厳しいでしょう。

……だいぶ無謀なことを考えているが、ともかく、勝てるとは思っていないミーアである。であれば、ミーアが狙うのはなにか？

それは「最も良い条件で負けること」である。

――幸い、食糧支援自体は確約されておりますわ。光馬さんなどは、それが当然といったご様子。であれば、ここはそれで満足すべき。馬優さんには申し訳ありませんけれど、火の一族の帰還に関しては、時間に解決していただくしかありませんわ。

ミーアが負けた場合、あと問題になるのは、ミーアが乗った馬を富馬にとられることだが、実はそれについてはそこまで心配していなかった。なぜなら、光馬は言っていた。

〝相手が求めれば〟馬を譲らなければならない、と。

――どうやら、東風のことを馬鹿にしているようですし。これで、

よこせと言うのは、腹いせ以外の何物でもありませんわ。
それは……いかにも外聞が悪いことである。
火の一族に対しての行いにより、富馬の立場は悪い。馬合わせで勝利したことにより、潔白を証明するのは良い。勝負の正当な対価といえるだろう。されど、それに加えて相手の馬を奪うというのはいかがなものか？　それも、相手の馬が欲しいから奪うのではない。相手への嫌がらせのために奪おうというのだ。
それが、他の族長の目にどう映るだろうか……？
――それに、わたくしが騎馬王国の民ではなく他国の姫であることも、この際は有利に働くはずですわ。
いかにミーアが馬に乗れるといっても、それは、騎馬王国外の、それも姫にしては乗れるという程度である。生まれた時からずっと馬に乗っているような騎馬王国の人間と比べれば、勝負にならないのはあまりにも明白！　だからこそいいのだ！
光馬は言った。「持ち馬を失う〝危機〟に見合った見返りを求めるのが当然である」と。
けれど、ミーアが相手であれば……そこに危機はない。
――ふふふ、むしろ、わたくしとの勝負で危機を覚えるようであれば、騎馬王国の一員と名乗るのをやめなければならないはずですわ。
そんな〝絶対に勝って当然〟という勝負で勝って、しかも腹いせ代わりに自身が評価していない相手の馬を奪い取る？
それは紛れもない醜態！　実になんとも見苦しい行為である！
――そして、仮にそれで奪い取ったとして……東風を粗末に扱えるはずもなし、ですわ。
仮にも騎馬王国。そこに生きる人々の、馬愛に絶対の信頼を置くミーアである。が、今回はそれに、〝馬合わせの勝負で腹いせに奪ったもの〟であり〝他国の姫の持ち馬だったもの〟という条件が加わる。
それを粗末に扱えるものだろうか？

答えは否だろう。むしろ富馬は、他の族長たちの手前、東風が絶対に怪我や病気をしないように手厚く世話をしなければならなくなるのだ。

――これはむしろ富馬さんのところに行ったほうが、軍馬を続けるより楽な馬生を送ることができるのではないかしら？

そのように負けることを前提に思考を組み立て、その上で……ミーアはその場のすべての人間に訴える。

「わたくしは、思いますの。狼を使うこと、それはそこまで悪いことなのかしら？」

どうせ負けるだろうけど、せっかく注目が集まっているのだから、と自らの主張を展開しておく。

「みなさまのお話を聞いていて、ずっと思っておりましたわ。確かにかつて……、火の一族を放逐した際には、不安があったでしょう。突然、狼を飼うだなんて言われてもどうなるかわかりませんもの。部族を率いる者の判断としては妥当であると思いますわ」

ミーアでもそう判断するだろう。小心者としては、とても理解がしやすい思考ではある。けれど、ミーアは静かに首を振る。

「その当時の人々の判断としては理解できる。でも、未だにその判断に縛られるのは、賢明なこととは言えませんわ。だって火の一族は、富馬さんに売ってしまうまでは、しっかりと羊を飼っていましたし、馬だって慧馬さんの乗っていたのは、とても立派なものだったでしょう。それって、立派に騎馬王国の民としての生活ではありませんの？　狼を飼うことに、なんの問題があるというのか、わたくしにはわかりませんわ」

狼を飼ってもなにも問題ないと、火の一族は、証明しているではないか。これでもまだ嫌うというのは、ミーアには、食わず嫌いに思えたのだ。

――黄月トマトなんかまずいと思い込んで、料理長が作ってくれたシチューを食べなかった。あの頃のわたくしと同じですわ。

ミーアの脳裏を過ぎるのは、あの日の苦い思い出だ。

その後悔を知る者として、ミーアはどうしても見過ごすことができなかった。ゆえに、言っておかなければならないのだ。
「それが、みなさんのこだわりであるというのであれば仕方ありませんけれど、わたくしにはきっと、みなさんの気持ちはわからないのでしょうけれど……。でも、それでも……それは後生大事にしなければならないものなのか、今一度、考えるべきではないかしら？
せっかく火の一族の方たちと再会して、直接、話すことができるのですから、しっかりと慧馬さんや狼花さんを見て、考えるべきですわ。そうしないと、大切なものを見逃してしまうかもしれませんわよ？」
黄月トマトのシチューはミーアの好物の一つとなった。
その味も、料理長の思いやりも「嫌いなもの」という思い込みに囚われたままだったら、味わえなかったものだ。
自分と同じ轍を踏ませたくないから、ミーアは訴えかけるのだ。
そして、その真に迫った演説は、確かに、族長たちの心に刺さった。
誰もが言葉を失う中で、ただ一人、口を開いたのは、光馬だった。
「……なるほど。その訴えかけが正しいかどうかは、馬合わせで明らかになるでしょうな」
「どうかしら？　それは、神に問いかけるまでもなく明らかなことかもしれませんわよ？」
自身が負ける可能性が極めて高い以上、ミーアとしてはそう言わざるを得ないわけで……。
「いずれにせよ、この度の再会が、騎馬王国にとってよきものとなること、わたくしは祈っておりますわ」
「そうですな……。是非に、そのように願いたいものです」
深々と頷き、光馬は、山族の長、富馬に目を向けた。
「しかし、富馬殿も、これは負けられませんな。騎馬王国に恥じぬよう最高の自慢の馬を用意しなければなりませんな」
「え……？　あ、いや、しかし、そのぅ、ああ、そう。そのような

大人げないことをすることはできますまい。馬合わせの申し出を受けるのはまだしも、我らが最高の馬を用意してはミーア姫に勝ち目がない。姫は、馬に貴賤なしと言っておられましたから、きっとご自分の、あの馬に乗られるのでしょう？　ならば、我らも、それに合わせて……」

気が進まない様子の富馬である。

それも当然のことである。なにしろ勝った時のメリットがなさすぎる。最高の馬など出すはずもなく……。けれど、

「なにを言う？　神聖なる馬合わせに、最高の馬を用意するのは当然のこと。騎馬王国十二部族の族長なれば、その名に相応しい馬を用意するのが道理というもの」

光馬の言葉を聞き、他の族長も同意する。

いかに大国ティアムーンの姫とはいえ、多少は馬に乗れるとはいえ……、騎馬王国の者が負けるわけにはいかない。絶対に勝てる最高の馬を用意するのは当然だった。

同時に、それは懲らしめでもあるのだ。

なにしろ、彼は同族の困窮を助けることなく、足元を見て羊を買ったのだ。そのような不心得者は罰を受けるべき、と、族長たちは考えたのだ。

だからこそ、富馬が手を抜くことは許さない。しっかりと、馬合わせに大切な馬を出すようにくぎを刺すのだ。そして、

「とはいえ、確かに騎馬王国の民ではない姫に、族長が対するのはさすがに大人げない。そなたには、姫と同年代の娘がいたはず。騎手をその娘とすれば良いのではないか？」

馬は最高のものを用意し、ハンデは乗り手でつけよ、と光馬は言っていた。

「小驪ですか？　いや……しかし」

ぶつくさなにかを言い返そうとしていた富馬であったが、結局は、それに頷かざるを得なかった。

火の一族に対し、暴挙を働いた以上、彼に選べる道はほとんどな

いのだ。

こうして、後に天馬の姫と呼ばれるミーア・ルーナ・ティアムーンの、馬合わせの儀への参加が決まったのだった。

第百八十八話　ミーアの思惑～天馬の姫の参戦～（後書き）

本日、活動報告更新しました。

第百八十九話　悪意の視線

さて、族長会議でミーアが大暴れしている間、ルードヴィッヒらは南都の町中を回っていた。
メンバーはルードヴィッヒとディオン、アベルと護衛のギミマフィアス、さらにベルとシュトリナも同行している。
「本当によろしいのですか？　アベル殿下」
問うてくるギミマフィアスに、アベルは静かに首を振った。
「そうだね。気持ちとしては、すぐに行きたいのはやまやまだが……」
歯切れ悪く言ってから、アベルは肩をすくめた。
「単身乗り込んで討ち死にしよう、なんて情熱的なことは、さすがに考えてないよ。まぁ、ミーアが囚われているというのであれば考えないでもないけどね」
冗談めかして微笑むアベルである。それから、表情を引き締めて、
「多分、今は命を危険に晒す時じゃない。命の懸け時はほかにあると思うよ」
「なるほど。戦うにも時がある、ということですか。ご立派になられましたな……」
「いや、そうでもないさ。ただ、まぁ、今はできることをやろうと思ってるだけだ」
そう言って、改めて視線を巡らせるアベルである。
彼らが街に繰り出したのは、なにも物見遊山のためではなかった。蛇の手の者がどこかに紛れ込んでいないか調べるために、街を練り歩いているのだ。
蛇の巫女姫により放たれた蛇導士たち。恐らくサンクランドでエシャール王子に近づいたという騎馬王国民風の男というのも、そのうちの一人だろう、と、そのような疑いを持ったルードヴィッヒた

ちは、警戒を強めていた。
この南都には、騎馬王国の民のみならず、レムノ王国の商人も出入りしている。どちらかというと閉鎖的な他の部族とは違い、他国人の出入りも多い。
ゆえに、怪しげな人間が隠れ潜んでいたとしても不思議ではない。
まして族長会議に合わせて、随伴の者たちも大勢訪れている。それに紛れてミーアの命が狙われる可能性は否定しきれないところだった。
「ともあれ、これだけの中から探し出すのは、なかなかに大変だ。ルードヴィッヒ殿、なにか策はあるだろうか？」
アベルの問いかけに、ルードヴィッヒは、軽くメガネの位置を直した。
「そう……ですね。あまり画期的な考えではなくて恐縮ですが、ミーアさまに近づく可能性が高い人物を中心に探りを入れるのが良いのではないかと考えます」
それから、ルードヴィッヒは考えをまとめるように、ゆっくりと話し出す。
「正直、手勢も時間もない。だから基本は、ミーアさまのそばについてその身をお守りする以外にないでしょう」
幸いにして、と言って良いかはわからないが、サンクランドの白鴉などとは違い、蛇導士は、徒党を組んで行動をするのは、そこまで得意ではないのだろう。
直接的な襲撃などに対しては皇女専属近衛隊で対処は可能と考えられた。
「一番に警戒すべきは、やはり毒でしょう。こちらは毒見などによって対処する必要がありますが……」
準備期間を長くとれたならばともかく、ミーアが族長会議に出ることを決めたのはごく最近のこと。もしも、ミーアに対する暗殺が企てられたとして、準備をする期間はあまりにも短い。
「恐らく、毒見をかわすような、特別な仕掛けをするのは難しいの

ではないかと考えます」
どこか歯切れの悪いルードヴィッヒの言葉を聞いて、アベルもまた苦い顔をする。
ルードヴィッヒはこう言っているが、実際には決して万全の備えではない。蛇という存在の、なんと見つけにくく、その攻撃の防ぎにくいことか……。
それでも、できることをやっていくしかない。
「ほかにミーアさまに近づく方法が……」
「商人に扮して、ということだね」
アベルはそう言って目を上げる。視線の先には、南都最大の市場が賑わっていた。
「ミーアさまは、異国の食糧に興味がございます。民を飢えさせるのが、ともかくお嫌いな方ですから。きっと、この地の商人たちとも関係を築こうとなさると思います」
「それは蛇も知るところ、か。となれば、この市場の中に潜んでいる可能性が高い、と」
「あくまでも可能性です。もしかしたら、この南都にはいないかもしれないし、いるとしても、どこかほかのところに潜んでいるかもしれない。しかし、残念ながらできることは限られている」
「その中で、できることをやるしかない。とりあえず、見慣れない商人がいないかどうか、尋ねて回るしかないかな」
などと、深刻な話をするルードヴィッヒたちである。一方で……。
「あ、ほら。リーナちゃん。馬のお守り（トローヤ）がありますよ？」
近くの露店にたったか走っていくベル。にぎやかな市場の空気に、なんともご満悦であった。
「待って。ベルちゃん……」
それを追いかけようとしたシュトリナだったが……、ふと立ち止まり辺りを見回した。

「あれ？　どうかしたんですか？　リーナちゃん」
「うん、なんだか、誰かに見られてるような気がしたから……」
そう言いつつ、なぜか、腕をさするシュトリナに、ベルは首を傾げた。
「貴族のご令嬢が珍しいから、とかでしょうか……？」
「うーん……。確かに帝国貴族はあまり騎馬王国とは縁がないかもしれないけど……」
感じた視線は、ねっとりと絡みつくような、ちょっぴり気持ちの悪いものだったから、少しだけ気にはなったけれど……。
「まぁ……いいか」
どこか、釈然としない思いを抱きつつ、シュトリナはベルの後を追った。

第百九十話　心一つに……ならず！

族長会議を終えたミーアは、
――うふふ、今回のわたくし、ちょっと冴えてましたわ。これは、あのクソメガネあたりでも聡明と言ってくれるのではないかしら？
などと上機嫌に慢心しつつ、建物の外でルードヴィッヒらと合流。そのまま、林族が滞在している建物まで戻った。
そこで、ルードヴィッヒをはじめ、主だったメンバーに族長会議の結果を話す。
「馬合わせの儀、ですか……。それにミーアさまが参加されると……」
話を聞いたルードヴィッヒが眉間にしわを寄せる。
「ええ。なんでも、二日にわたる長距離競馬みたいですわね」
馬合わせは、南都をスタート地点、星草の岩と呼ばれる場所をゴール地点とする競馬らしい。
「なるほど……。山族の騎手に勝てるかは不透明。であれば最も良い条件で負けることを選択するのが道理とそういうわけですか……。いや、しかし……」
ミーアが思惑を説明する前に、完璧にその思考を読んでみせたルードヴィッヒだったが、なぜだろう……その言葉の終わり方は微妙な否定形だった。
それが、なんとなく気になるミーアであったが……。問いただす前に、ルードヴィッヒはため息を吐いた。
「しかしいずれにせよ、護衛が必要ですね。すぐに皇女専属近衛隊の準備をさせましょう」
そう言って、ルードヴィッヒはそばにいた随伴の近衛隊員に目を向ける。が、
「そこまで厳重なものは必要なさそうですわ。騎馬王国のほうで、

護衛をつけてくれるみたいですし。まぁ、護衛というか、審判というかはわかりませんけれど……」
それから、ミーアは先ほどの出来事を思い出す。
族長会議が終わった直後、大柄な族長がおもむろに近づき話しかけてきたのだ。
「ミーア姫殿下。貴女の提案と勇気、騎馬王国への厚意に感謝を。馬合わせの際には、うちの一族の者がしっかり護衛する。山族の連中がもしもなにかしやがってもちゃんと守ってやるからな」
「あら？　そうなんですの？」
ミーアが首を傾げると、その族長は丁寧に教えてくれた。
曰く、馬合わせの儀というのは騎馬王国の者たちにとって極めて神聖で厳格なものらしい。
ゆえに不正が行われないように、一部族だけでなく三つの部族から二人ずつ監視員を出して、常時、随伴させるのだという。
今回は、当事者である林族、山族は除外。残る十部族のうち、九部族を三組に分けて監視を行うらしい。
また、残りの一部族、すなわち騎馬王国のもう一つの都市、北都の守り手である水族は古来より儀式を取り扱う神官の一族であるという。彼らのみ審判役として、常に随伴し、公正さを確保することになっているらしい。
また、水族はどうやら、ヴェールガとの関係も深いらしく、ラフィーナも水族の族長とは親しげに話しをしていた。
「常に監視と守り役として八人の騎馬がついてくるということですわね」
それも、並みの八人ではない。馬合わせの監視官となるは、騎馬王国の誉れ。ゆえに、各部族は選りすぐりの乗り手と馬を出してくる。
不正の入り込む余地はどこにもない……が、それは同時にミーアの勝ちの目もほぼ消えたと言える。
なにしろ、まともにやってもミーアが勝てる可能性なんかほぼな

いわけで、だからまぁ、不正なく勝負したら当然負けるのも当たり前で。
――まぁ、もともと負ける予定ですし、問題ありませんわね。むしろ、暗殺者の危険性が減って良かったと思うべきですわ。
何事も割り切りは大事である。
「では、護衛するとしても、かなり遠くからということになりますか」
「ええ。それは可能でしょう。夜は野営しなければなりませんから、その際には護衛や補給も認められているみたいですし。でもあまり近づくと不正を疑われてしまいそうですし、下手なことはしないほうが良いかもしれませんわね。それに、鎧を付けた兵士を乗せた馬では、わたくしたちに追いつけないかもしれませんし」
冗談めかしてそう言うと、そばで聞いていた皇女専属近衛隊の兵は生真面目な顔で頷いた。
「なるほど。それもそうですね。ミーアさまの勝利にケチをつけさせるわけにはいきません」
「……うん？」
その言葉にも、微妙な違和感を覚えるミーアであったが……。
「それは……避けられないことなんですか？」
不意に聞こえた声が、その違和感をかき消した。ふと見れば、アンヌが怖い顔で見つめていた。
「え？　あ、ええ。そうですわね。今からお断りするのは、少し難しそうですけど……」
その迫力に、ミーアは気圧されつつもなんとか頷く。と、
「わかりました。それでは……万全の用意をさせていただきます」
硬い表情で言って、アンヌはその場から出て行った。
はて……？　万全の用意ってなにかしら？　などと首を傾げるミーアをよそに、ルードヴィッヒらも検討を開始する。
「ミーアさまになにかあったら一大事だ。護衛の手も足りないだろうから、馬優殿にも相談して、兵の配置をしなければ……。ディオ

ン殿」
こうして、ミーア一行は動き出した。
けれど、ミーアは気付いていなかった。
「最善の敗北のために……！」っとミーアと心一つにしている者は、その中には一人もいないということに。

さて、ルードヴィッヒらとの打ち合わせを終えたミーアは、外に出てほぅっと一息吐く。
「話し合いの連続で少し疲れましたわね……。ふむ」
軽くお腹をさする。気付けば昼食の時間が近づいてきていた。
「まぁ、馬に乗って運動するわけですし、今日は前祝いに少し豪勢にいっても……」
「ミーア姫！」
と、そこで、話しかけてくる者がいた。
「あら、慧馬さん、どうしましたの、そんなに血相を変えて……」
「どうした、ではない。なぜ、あんな無茶なことを？　馬にならば、我が……」
と、語気荒く言う慧馬に、ミーアは優しく微笑んでみせた。
「焦る必要はありませんわ。慧馬さん」
慧馬の二の腕をポンッと叩き……きゅっと引き締まったしなやかな筋肉に思わず瞠目する！
「ん？　ミーア姫、どうかしたのか？」
不審そうに見つめてくる慧馬に、ミーアは慌てて首を振る。
「あ、焦る必要はありませんわ。まだ日数もあることですし……大丈夫、大丈夫」
なんとなく、自分に言い聞かせてしまうミーアである。
それはさておき……そう、焦る必要はないのだ。ここは一か八かの勝負に出る場面ではない。火の一族の和解はもっとじっくりと進めればいい。狼のことだって、時間さえかければきちんと理解してもらえる。

今は、食糧の支援だけ取り付けられれば十分。それが確保できている以上……、
「もう、勝負はついているのですから、なんの心配もいりませんわ」
そう、すでに勝利条件はクリアしている。あとはケガのないように、馬合わせを乗り切ればいいだけのこと。
「勝つ算段がある、ということか……。だが、馬合わせは、コース次第では、たとえ二日間でも体重が落ちてしまうほど過酷と聞いた。そのようなものに出させるわけには……」
「ほう……それは。ならば、なおのことわたくしが出ないわけにはいきませんわ！」
ミーアは、決然とした顔で首を振った。そして、満足げに腕組みする。
――すごいですわ……馬合わせ。二日でもシュッとできるだなんて……。きっちり運動もできて、一石二鳥とはまさにこのこと。
改めて、ミーアは自らの判断の正しさに満足する。
アベルの姉との対決、それを前にミーアを悩ませていた問題が一気に解決するかのようだった。それはまさに光明！
それに、過酷といっても革命期の地獄を知るミーアである。
馬合わせ、なにするものぞ！　と、がぜん鼻息荒くなるミーアであった。
まぁ、常識的に言って……二日で痩せ細るほど過酷なコースを、他国の姫に走らせるはずもなく……もっと簡単な、子どもでも行けるぐらいのコースが選ばれるのが当然なのだが……。そこはそれ……。
これで、蛇の巫女姫にだって負けることはない。とニッコリのミーアである。
「うふふ、勝利は確実ですわ……」
などとつぶやくミーアであったのだが……。
「それは聞き捨てならない……ですの」
不意に聞こえた声に振り返れば、そこには剣呑な目つきをした小

驪が立っていた。
「あら？　小驪さん。この度はよろしくお願いいたしますわね」
笑みを浮かべるミーアを無視して、小驪は真っ直ぐに慧馬の前に行き、深々と頭を下げる。
「慧馬殿。この度は、私の父が申し訳なかった、ですの」
それを受けた慧馬は、しかし、硬い表情のまま首を振る。
「いや、それは騎馬王国の価値観だ。我らは羊を売り、金を手にした。そこに不正はなかった。だから、謝っていただく必要はない」
それは考えてみれば当然のこと。十二部族は、各部族でずっと助け合ってきた。互いに助け合うことを当然のことと認識しているのだろう。
対して、火の一族は、その助け合いの輪に入っていなかった。
彼らは自分たちの一族のみで、他と対等の関係を築こうとしてきたのだ。
そんな彼らにとって、山族との間の出来事はあくまでも正式な取引だった。山族の側に、何かしらの思惑があり、そのせいで自分たちが窮状に陥ったとしても、それを見抜けなかったのは自分たちの失態に他ならない。
だからこそ、謝られる筋合いではない。
一方的な温情を受けることが当然とは決して思わないし、それを認めることは己が一族の誇りを傷つけることに同じ……。
両者を隔てる深い断絶を感じ、やはり、無理に和解を導いても亀裂が走るだけではないか……などとミーアが自身の選択の正しさに満足していると……。
「しかし、ミーア姫……」
いつの間にやら、小驪がこちらを睨んでいた。
「はて、なにかしら、小驪さん……」
「覚悟してもらいたい、ですの。私への侮辱……勝負を始めるまでもなく勝っているなどという私と、落露に対する侮辱、許しがたい、ですの」

「え？　ああ……、いえ、あれは、そういう意味では……」
「目にもの見せてやる、ですの」
ミーアの釈明を聞かず、小驪は踵を返すと、振り返ることなく去っていった。

第百九十一話　帝国のウマニア、語り倒す！

――ううむ、これは少々まずいことになってきたかもしれませんわ。

すっかり小驪を怒らせてしまったことで、ミーアは若干の不安を覚えていた。

――あんなに怒っていたら、腹いせ代わりに東風が欲しい、などと言い出すかもしれませんわ。うう、失敗しましたわ。最初から勝っているなどと、余計なことを口にしなければ……。

後悔するも後の祭りである。

ここは、万が一のことも考えておかなければ、と、ミーアは、皇女専属近衛隊の馬の世話を一手に担う男、ゴルカのところに向かった。

林族が滞在している建物のすぐそば、厩舎にいたゴルカに、ミーアは恐る恐る声をかける。

「ゴルカさん、少しよろしいかしら？」

「ああ、これは、ミーア姫殿下……なにか？」

笑顔で出迎えてくれたゴルカであったが、ミーアの様子を見てわずかに首を傾げる。

ああ、言いづらいなぁ、言いづらいなぁ、と思いつつも、ミーアは意を決して口を開く。

「実は、騎馬王国の乗り手と乗馬勝負をすることになってしまいましたの」

それから、ミーアは、族長会議での一幕を慎重に説明した。

そのうえで、これが仕方のないことなんだと、貴重な犠牲なのだと、ぐっと拳を握りしめ、力を込めて訴えた後……。

「ただ、わたくしのミスで、東風がとられてしまうかもしれない……そんな危険に晒してしまうことになったのは、申し訳なかったと

思っておりますわ。あなたが丁寧に世話をしてくれている馬ですのに……」
しょんぼりうつむいて見せてから、ちらり、と、上目遣いにゴルカのほうを探る。と、予想に違わず、ゴルカは苦い顔をしていた。
――ああ、やっぱり怒りますわよね……。当然ですわ。
ミーア、ここで思案する。
相手は、自身が頼りにする皇女専属部隊の一員。しかも、馬の世話を一手に見ている重要人物である。いざという時に機嫌を損ねられると面倒なことになるかもしれない。
ここは、重ねて謝っておいたほうがいいかしら？　と、ミーアが思った……まさにその時だった。
「ミーア姫殿下の決定です。そのことについて、私からはなにも文句はありません」
ゴルカはムスッとした顔で言った。怒りを隠せない様子だったが、まぁ、仕方ないな、とミーアは思った。思ったのだが……。
「それに、こいつは軍馬です。いついかなる時に命を落とすかもしれない、そういう境遇の馬です。ミーア姫殿下のために体を張るのも当たり前のこと。それについては納得できます。でも……こいつが騎馬王国の馬に負けると最初から思ってることだけは、納得がいきません」
この辺りから……微妙に話がおかしくなってきた。
――はて……？　これは、ゴルカさん、何に怒っているのかしら？
首を傾げるミーアの目の前で、ゴルカはググっと拳を握りしめて言った。
「それはもちろん、騎馬王国の月兎馬はいい馬ですよ。私だって知ってます。あれは実に見事な駿馬だ。見栄えもいい。間違いなく名馬と言って一番に想像するのは月兎馬だ。でもね、うちの東風だって……帝国の馬だって負けちゃいませんよ」
そう言って、ゴルカは、目の前でのんびーりと草を食んでいる東風の太ももを軽く叩いた。

「我らが帝国の“テールトルテュエ種”が騎馬王国の馬にかなわないって、そう思い込んでいらっしゃるんだとしたら、姫殿下にしては珍しい不見識だと言わざるを得ません」
そうして、帝国の隠れウマニア、ゴルカは熱い口調で語り出した！　帝国の馬事情を！

そもそも、ミーアが忘れている事実があったのだ。
東風とはなにか？　なんであったのか？
そう、東風は“軍馬”である。ただのボーっとしている馬ではない。帝国騎兵が乗るための、れっきとした戦闘馬なのである。
ところで、レムノ王国に戦闘教義（ドクトリン）があるように、ティアムーン帝国にもおぼろげながら戦闘教義は存在している。
といっても、帝国のそれはあまりにも基本的過ぎて、あまり言及されないような代物ではあるのだが。
帝国の戦闘教義、ずばりそれは「敵に倍する兵を揃え、物資を揃え、大軍でもって押しつぶす」というもの。軍事の基本原則にして、王道を行く、その理こそが帝国軍の基礎にある思想である。
そして、帝国軍のすべては、その教義に基づき選定されていた。
さて……そんな帝国軍が軍馬に求めたのは、なんであっただろうか？
相手より多く兵を揃えることをモットーとする帝国軍が馬に求めたこと……それは、一頭の馬が二頭の働きをすること……ではなかった。
帝国軍は名馬を求めない。一の騎兵に二の騎兵の働きを求めるようなことはしない。なぜなら、敵より大軍を揃えることが、帝国軍の方針だからだ。
それゆえ、彼らが馬に求めるのは“きちんと一の働きをすること”だった。
どのような環境下にあっても、どのような戦況にあったとしても、期待された働きを淡々とこなすこと。期待以上の働きは求めない代

わりに、一定の働きはきちんとこなすこと、それをこそ、帝国は求めたのだ。
そして、その求めに応じて選ばれた馬こそが、テールトルテュエ種と呼ばれる馬である。
圧倒的なタフさと、どのような環境においても安定的な働きを見せる献身さ……、さらに、どのような状況においても冷静さを失わない図太さには定評がある、帝国軍が誇るワークホースである。
そして東風はごく標準的な、まごうことなき、テールトルテュエ種であった。テールトルテュエ種のど真ん中を行く馬と言っても、過言ではないだろう。
どのような時にも決して動じず、ただ黙々と仕事をこなす、いささか図太過ぎるのが玉に瑕な、堅牢なる騎士馬なのだ。

などというアツーイ話を、微に入り細を穿つ勢いで聞かされたミーアは……嫌な予感を覚えた。
――そういえば、先ほども……。
思い出されるのは、先ほど、ルードヴィッヒとの会合の際、そばにいた近衛の言葉。
ミーアが負けるなどと、微塵も疑っていない、あの口調だった。
ルードヴィッヒが言葉の最後につけた「いや、しかし……」だった。
そうなのだ。彼らは自分たちの誇る軍馬が、そしてなにより、自分たちが大いに誇りとする帝国の叡智が負けるなどとは、まったくもって思っていないのだ！
いや、それどころではない。
ミーアは、ふと視界の外れで、自らを護衛する近衛兵に目をやった。二人の兵士はやっぱり、どこか興奮した様子で会話をしていた。漏れ聞こえる話では、どうやら馬の話をしているらしい！
――こっ、これは……。この熱は……。
ここにきて、ミーアは自らの失敗を悟った。

見たところ、近衛兵たちは、みんな、馬の競争が大好きっぽいのだ。彼らの血を沸かせるなにかが、きっとそこにはあるのだ。
にもかかわらず、である。皇女専属近衛隊、忠義に厚い彼らの前で自分が無様に負けることがなにを意味するのか……？
それは彼らの士気をくじき、万が一、狼使いらと戦闘になった際には圧倒的な危機を呼び込むことに繋がりかねないわけで……。
――ぐ、ぬぬ……。こ、これは、計算外ですわ！　計算外極まりますわ。
ぐるぐる思考を始めたミーアの横では、未だにウマニア、ゴルカの馬談義が続いていた。
そんな光景を、東風がほげーっと眺めているのだった。
……実に平和な光景だった。

第百九十二話　小さな背信、アンヌの想い

馬合わせは五日後に行われる予定だった。
決定がなされた後、各族長たちは急ぎ、自分たちの部族に早馬を走らせ、部族一番の乗り手と馬とをコース上に配置するのだという。
その間、ミーアもまた準備に明け暮れていた。
なにしろ、馬に乗る時間は二日間とはいえ、一応の長旅だ。準備はしっかりとしなければならない。
随伴する騎馬はいるものの、彼らの手は借りることはできない。基本的には馬に乗っている間は自分のことは自分でする。トラブルでも起きない限り、助けてはもらえないのだ。
それはミーアとしても望むところで、むしろ……。
――なにかあった時の予行演習になるかもしれませんわね。みなに止められて、長距離の乗馬はやったことありませんでしたし、ちょうどいいですわ。
もしも、なにかのうっかりミスで、革命が起きてしまった場合、一人でも馬に乗って逃げられるように、きちんと事前訓練を積んでおきたいと思っていたのだ。
「南都から、星草の岩までのコースなのですが、ここの水場を中継地としていくことになります」
などと、地図を広げるのは林族の馬優だった。かつて、随伴の騎手になったこともある馬優は、馬合わせに詳しいらしい。
地図によれば、馬合わせのコースは、南都をスタートして、一路、西へ。中継地点の水場を経由して、今度は東へ。そうして、スタート地点の南都から北へ少し進んだ場所がゴールとなっている。
「今回のコースは水場も何か所かあるため、それほど過酷なものにはならないでしょう」
「なるほど。それでは、このいくつかある水場のどれかを野営地と

するのがよろしいですわね」
「そうですね。確認されていない小川などもあるかもしれませんが……」
「わざわざ水場の場所がわかっているのならば、それをする意味はない、と……ふむ」
頷きつつも、ミーアは考える。
――なるほど、馬もわたくしたち同様、生き物ですし。食べることも飲むことも必要なのは道理。ということは、乗って逃げようとする際には、どこで水や食べ物が補給できるかを考えておく必要がありますわね。まぁ、草原であれば草は食べ放題なのかもしれませんけれど……。逆にある程度、馬の食糧なんかを持っていけば、重量的に馬の足は遅くなりそうですけれど、代わりに過酷な土地にも行くことができるということかしら。そのほうが追ってきづらいという可能性もありますわね……。いくつか逃走ルートにも変化がつけられそうですわ。
などと、ますます分厚くなるミーアの逃亡計画である。それが使われる日が実際に来るかどうかは、未知数だが……。
「しかし、やはり、実際にやってみないとわからないことというのはありますわね。これだけでも、良い経験ですわ」
とまぁ、そんな感じで自身を奮い立たせてみるものの……不安は拭い去ることもできず、
――やはり、なにかしら勝利する術が必要でしょうね。しかし、ぐぬぬ……。
そんなことをごちゃごちゃ考えるミーアであった。
そんな折、筆頭の問題が起きた。それは、馬に乗るための騎乗服の試着をしている時のことだった。
「アンヌ、さすがに、これは……どうかしら？」
ミーアは自らの服を見下ろしてから、小さく首を傾げつつ、後ろに立つアンヌに問う。
「よくお似合いですよ、ミーアさま」

ニッコリ笑みを浮かべるアンヌ。自らの忠臣の言葉を疑ったことのないミーアであるが、今の言葉にはさすがに疑念を抱かざるを得なかった。
なぜなら、今のミーアは……なんというか、こう……モコモコしていた。
別に食べ過ぎたわけではない！　それは大きな誤解である。
そうではなくて、その身にまとう服が、モコモコと分厚いものだったのだ。
それは、騎馬王国で使われる服だった。表面に羊の毛をふんだんに用いたそれは、毛の油分によって水をはじく雨具にも、防寒具にもなるという優れものだった……のだが。
「朝夕は確かに肌寒いですけれど、さすがに、これは少し暑いのではないかしら？　それに、あまり重たいと東風も大変……」
「いえ、ゴルカさんに聞いてきました。軍馬なので、普段の重たい鎧に比べればなんともないということでした」
素早くこたえるアンヌである。
なるほど、東風は軍馬である。普段は、ミーアよりも重い（はずの）近衛兵を乗せているのだ。ミーアが着て動ける程度の厚着なのだし、この程度ではビクともしないであろうことは、わかっているのだが……。
「でも……」
勝利を狙うのであれば、やはり、できるだけ軽いほうが有利なのではないか？
疑問を抱くミーアに、アンヌは、悩ましげな顔をしてから……。
「それに……、そう……。汗をかいて運動すると痩せるという話を聞いたことがありまして……」
「まぁ！　それは本当ですの？」
ミーア……あっさりと食いつく！　対して、アンヌは少しだけ気まずそうに目を逸らした。
「そのような話を聞いたことがある気がします。その、噂ですが…

…」
「なるほど。噂……」
ミーアは静かに腕組みする。信憑性のほどは定かではないが……しかし、検討の余地はありそうな噂である。
「ふむ……。確かに、干して水分を抜いたキノコのほうがシュッとしている感じもしますし……」
さらに、もともと、馬合わせはゴール後にシュッとするという噂もある。そこに、厚着をして、汗をかくという噂を重ねればどうなるか……。
ますますアベルの姉、ヴァレンティナに会う準備に万全を期することができるのではないか？
――そうですわ。確かに、馬合わせに勝てればより良いのでしょうけれど、目的を見失ってはいけませんわ。キノコとウサギを追っては、結局、どちらも手に入らずに、空鍋を炊くことになる、と言いますし……。
すべきことを一つに絞るべきではないか？
優先順位をはっきりするべきではないか？
つまるところ、アンヌが言いたいのは、そういうことなのだろう。つまり、このモコモコ服は、そのためのコーディネートなのだ。
「アンヌ……」
ミーアは、忠臣の諫言に耳を傾ける度量を持った人である。だから、自らの目を覚ましてくれた忠臣に、優しい笑みを浮かべて、
「わかりましたわ。アンヌ、あなたのお心遣い、しかと受け止めますわ」
アンヌのおかげで、達成すべき目標の優先順位が定まった。勝利条件を確定させることができたのだ。
ゆえに、ミーアは確信を持って言った。
「これで勝てますわ」
「ミーアさま……」
答えるアンヌの声は、かすかに震えていた。

アンヌには恐怖があった。それは、騎馬王国にやってくる途中でのこと。
火の一族との接触の時のことだった。
ラフィーナと一緒に馬に乗っていたミーアが落馬したと聞いた時、もしもミーアがいなくなってしまったら、と考えた時……アンヌの心は震えた。
そんなアンヌだったから、今回の馬合わせにも、本当は反対だった。
ミーアが危険な目に遭うのを極力避けたいと思う。けれど、ミーアが必要だと判断した以上、それに反対することはできない。ならば、自分にできることはなにか？
そうして考えた末の答えが、この、モコモコスーツだった。
雨具であり、防寒具でもあるこの服には、もう一つ、有用な使い方があった。
それは、馬から落ちた時、衝撃を和らげ怪我を防ぐ、騎馬王国の子どもが馬に乗り始めた時に身に着ける定番の服だった。
ミーアが万に一つの事態に襲われても大丈夫なように、と馬龍に相談した結果、手に入れた服である。
もちろん、アンヌは気付いていた。その厚着が、決して、勝負を有利にするものではない、と。軽いほうが馬は速く走れる。当たり前の話である。
にもかかわらず、アンヌは自らのわがままを通した。それは、ミーアの身を案じてのことではあったのだが……それでも、勝利を目指すミーアにとっては背信行為に他ならない。
罰せられても仕方のないこと、退けられても当然の進言。
……されど、ミーアはそれを笑って受け入れてくれた。
そればかりか、そのうえで、
「これで勝てますわ」
アンヌの勝手な想いをすべて飲み込み、そのうえで、アンヌの不

安を拭い去るように、勝利を宣言してくれたのだ。
「ミーアさま……」
唇を噛みしめるアンヌに、ミーアは自信に溢れる笑みを見せるのだった。

第百九十三話　重装騎兵ミーア、出陣す！

馬合わせの儀の当日……、
南都には、多くの騎馬王国の民が集まってきていた。
さすがに、十二部族すべての人間とまではいかないまでも、近隣の部族の、かなり多くの人々が集結していた。
馬合わせという神事（おまつり）に、みなの血は沸き立っていた。
そんな人々の前に、先に現れたのは山族の騎手、小驪だった。
そして、うら若き乙女の乗る、その馬は、山族の長、富馬が所有する中で最高の馬。義理の娘とまで呼んでいる馬……落露だった。
はじめに目につくのは、その見事に整えられた馬鬣（ばりょう）だった。話に聞く猛獣、獅子のごとき堂々たるたてがみは、艶やかに輝きを放っていた。
まっすぐに前を見る瞳には、どこか女王のような気品があり、この馬の健康状態をうかがわせた。すんっと通った鼻筋、引き締まった首筋から前足にかけてのしなやかなラインは、騎馬王国の人々が知る理想的な駿馬のもの、力強く大地を踏みしめる後ろ足は、彼らの知識にある理想すらも凌駕する力強さを感じさせた。
堂々たる女王の馬……落露。
朝露の落ちる一瞬、朝明けの日を輝かせる、その儚くも鮮烈なる光を、その名に持つ馬。
一日中見ていてもこの、決して飽きが来ない美しい馬に、人々は感嘆の息をこぼす。
「あれが山族の落露……」
「さすがは月兎馬の中の月兎馬と言われる馬だな」
「ああ、富馬殿が自慢するのもわかるな。本当に見事だな」
称賛の声は、馬のみならず、それに乗る騎手にも向けられた。
すっと伸びた背筋、まるで馬を自分の手足のように操り、人々の

前を歩いていく小驪。
その身に帯びたのは、薄手の乗馬服だった。レムノ王国で仕入れた、上等の布を使って作ったそれは、騎馬王国の人々が見慣れない、煌めきを放っていた。
「見事な乗りこなしだな。馬といい騎手といい、実に素晴らしい」
そのように、感心していた人々は……直後に、驚愕に固まる。遅れて現れたミーアたちに……別の意味で目を奪われたからだ。
「……あれは、えーっと……」
思わず、言葉に詰まる。
なにしろ、ミーアは……騎馬王国の子どもが着る、初心者用のモコモコ服を着ていたからだ！
そんな着ぶくれスーツに身を包んだミーアは、無表情に馬にまたがっていた。まるで、魂がどこか遠くの世界にいるように、その瞳はただただ前方の、草原のみを映していた。
そして若干、重装備な姫を乗せた馬もまた、ちょっぴり不格好に見えた。
確かに、毛艶は悪くない。
月毛と呼ばれる、月光のような色味の毛は、落露には劣るものの、まず健康的な艶を放っていた。この馬が大切に飼われていることに疑いの余地はない。澄んだ目も、ずんぐりしていながら、引き締まった体も、きちんと手入れをされていることが窺える。
されど、それでも相手が悪いだろうと誰しもが思った。
まして、それに乗る者があのなりでは……。
「随分と懐かしい格好、ですの。ミーア姫、今日はこれから、雨か雪でも降る、ですの？」
ゆっくりと近づいてきた小驪は、ミーアの服装を見て、それから、空を見上げた。
青く澄み渡った空を見て、肩をすくめながら、
「それとも、それを着ていないと、怖くて馬にも乗れない、ですの？」

煽るように、小馬鹿にするように、口元にニヤリと嘲笑を浮かべる。
対して、ミーアは……無言。無言である！
その顔には、怒りも、羞恥も、強がりの笑みさえも浮かぶことはなく……。その瞳はただ、ひたすらに真っ直ぐに前を見つめるのみ。
そう、ミーアには、すでに周りの声は聞こえていなかった。
今のミーアは一心に精神の集中を図っていたのだ。
帝国の馬マニアこと、ゴルカとの会話や、自らの忠臣たちの大きな期待、心配、様々なもので心が落ち着かなくなったミーアは、アンヌによって原点に立ち返ることができた。
それは、なにか……？　そう、それは……。
――楽しく馬に乗りシュッとすること、これこそが、大事ですわ！
これである！　これこそが、ミーアが馬合わせに臨む原点なのである……いや、これだっただろうか？
疑問の余地はないではなかったが、ともかく、ミーアの実現すべき目的はそこだった。
「楽しく……馬に乗り……」
ぶつぶつつぶやきつつ、目的を自分に言い聞かす。
――さすがはアンヌですわ。実に頼りになりますわ。
目標を明確化したうえで、耳寄り情報をも届けてくれた。
できるだけ汗をかくこと……少々暑いが、この程度の努力であれば……。
「この程度ならば、軽いもの……」
などと、ぶつぶつつぶやくミーアである。
そして、そのうえで……まぁ、無理のない範囲であれば……勝利を目指すのも悪くはないのかな、とも思っている。
なにしろ東風は、皇女専属近衛隊のゴルカが自信を持って推す、帝国軍の馬なのだ。
ならば、ミーアが何を考えていようと、勝てることもあるかもしれない。

――わたくしが、帝国軍の馬を信じてあげずして、誰が信じるというのかしら？
近衛隊はいざという時、自分を守ってくれる忠義の騎士。だからこそ、その名誉を自分は全力で擁護する。
同じように……近衛隊の馬もまた、信頼しようと思うミーアである。
「あなたならば、勝てますわ。東風」
そうして、首筋を撫でるミーア。それから、ふと顔を上げれば……、
「ふふふ、それは馬も大変ですの。まぁ、せいぜい頑張ればいい、ですの」
なんだか、ものすごーく気合が入った顔をする小驪がいた。
「あら、小驪さん。今日はよろしくお願いいたしますわ。お互いにベストを尽くしましょう」
そう微笑むミーアを、小驪は、苦々しげに睨んで離れて行ってしまった。
そして、東風は、いつも通りに涼しい顔をして、それを見送っていた。

スタート地点に立つ男が、大きな旗を手に取った。高々と上げられた深紅の旗、それが一度、くるり、と回され……、
「神意を、走りによりて示せ！　馬合わせの儀、始めっ！」
まるで、落星のごとく、赤き旗が振り降ろされて……。
馬合わせの儀が始まった。

第百九十四話　駄馬と賢姫⇔賢馬と駄姫

開始の合図と同時、飛び出したのは落露だった。
勇ましい嘶きが響くのと同時に、大地を蹴って走り出す。
一歩、その身が動き出し、二歩でその身は風となる。
紛れもない駿馬の走り。
月兎馬の中の月兎馬という評に恥じぬ、圧倒的なスタートダッシュだった。
人々の口からこぼれる歓声を気持ちよく聞きながら、小驪は、上機嫌に対戦相手であるミーアのほうを見ようとして……愕然とする！

「ミーア姫が、いない……ですの？」
よくよく見れば、ミーアたちは遥か後方、スタート地点からあまり離れていない位置をのんびり走っていた。まるでピクニックにでも行くかのような、軽やかな走りでのんびーりと……。
それを見た小驪は――小さく舌打ちする！
「くっ、なかなかやる……。これは侮れない、ですの」
悔しそうにうめきながら、視線を前方に転じた。

小驪が馬上で舌打ちしている頃、その父、富馬もまた悔しげに顔を歪めていた。
実にゆったりとスタートを切ったミーアと、その馬とを見送る。
「おのれ……。こちらの挑発に乗ってこないとは……なんと生意気な……」
皇女ミーアの堂々たる走りは、富馬と小驪の作戦が失敗したことを物語っていた。
そう……勝負はすでに、走り出す前から始まっていた。小驪は、わざとミーアを煽り、挑発していたのだ！

歴代の馬合わせに参加したことがある者は知っている。馬合わせで重要なことは、最初に速度を上げすぎないことであると。

二日にも及ぶ長距離レースにおいて、スタート付近で付いた差というのは、ほとんど気にする必要のないものである。ずっと馬を全力疾走させ続けられるわけもなく、どこかではスピードを落とさざるを得ない以上、開始直後に飛び出すのは、ただの見栄といっても過言ではない。

加えて馬合わせは、最後の最後に最大の難関が待っている。

それはゴール地点、星草の岩までの、だらだら続く上り坂だった。

基本的に平坦な草原地帯において、唯一と言ってもよい高い丘、そのてっぺんこそが、馬合わせのゴールなのだ。

つまり馬合わせは、最後の最後まで馬の体力を残しておくのが肝要。はじめのうちは、むしろ抑え気味に入ったほうが良いのだ。

にもかかわらず、小驪は飛び出した。

それは、乗馬に不慣れであろうミーアを自滅へと誘うための作戦だった。小驪の後を追いかけさせ、序盤で馬の体力をすべて削り取ろうという作戦だったのだ。また、最初から圧倒的な馬の差を見せつけて、相手のやる気をへし折ってしまおうという魂胆もあったのだが……。

「まさか、乗ってこないとは……」

普通であれば、対戦相手が先に行ったら追いかけたくなるもの。開始直後のスピード勝負を受けて立ちたくなるものである。あれだけ挑発されればなおのことだ。

にもかかわらず、ミーアはそれを無視した。

相手がどんどん先に進んでいっても気にせず、むしろ、あえてゆったりとしたペースでのスタートを決めていた。

「なるほど。口ばかりではないということか。あの落ち着きは見事……。帝国の叡智などと呼ばれているようだが、確かに賢姫には違いないらしいな。だが、いかに乗り手が優れていようとも、あの駄馬ではな……」

馬合わせは、当然、馬の力に左右されるもの。
「落露に匹敵する馬を連れてくれれば……。それこそあの火の一族の馬を連れてくれれば結果はまた違ったかもしれんが……ふん、馬に貴賤はないなどという綺麗事もろとも、踏み潰してくれる」
吐き捨てるように言って、去り行くミーアの姿を睨みつけるのだった。

さて……、そのように理想的なスタートを切った賢き姫こと、ミーア・ルーナ・ティアムーンであるのだが……あえて指摘するまでもなく、そこまでのことを考えてもいなかった。当たり前のことなのだが……。
ミーアはいつも通り、馬にその身を委ねるのみ。だから、むしろ、このゆったりとしたスタートを決めたのは、駄馬こと東風のほうだった。
そう、軍馬である東風は知っている。
この先になにがあるのかわからない以上、無駄に体力を使うことは避けるべきであること。堅実な体力温存策をとったのは、ほかならぬ東風自身だったのだ。
とまぁ、そんなわけで、現状は、賢馬の背に乗る駄姫状態なミーアなのだが、もちろん、それに気付く者はいなかった。
――ふぅむ、予想通りのゆったりとした走りですわね。荒嵐だったらこうはいきませんわ。まぁ、わたくしは楽でいいのですけど……。
ぱっかぱっこと揺られていたミーアは、ふと思った。
――しかし、あまり楽をしては、運動としていまいちかもしれませんわ。ここは、あえて、少しハードな運動をする必要があるのではないかしら？
思い立ったらすぐ行動。
ミーアは、東風の背を軽くポンポンっと叩いた。
「東風、少し速度を上げますわよ」

東風は耳をピクリ、と動かすと、わずかばかりの沈黙の後、走る速度を上げた。
「おっ、そろそろ追いかけるか。さすがに良い勘をしておられる」
突然の声。ふと見れば、ミーアの隣に並ぶようにして、一頭の馬が近づいてきた。それに乗っていたのは、族長会議でミーアに声をかけてきた、大柄な族長だった。
「あなたは……」
「ははは。お初に、ではないが、改めて名乗らせてもらうとするか。我が名は木族の族長、木（モク）剛馬（ゴウマ）。木族の族長を張らせてもらっている」
「これは、ご丁寧に。ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ。族長自らが随伴してくださるとは、心強いですわ」
笑みを浮かべるミーアに、剛馬は感心した様子で頷いた。
「しかし、それにしてもよく小驪の挑発に乗らなかったものですな。馬合わせの鉄則をよく心得ていると見える。いや、見事見事」
上機嫌に笑う剛馬にミーアは静かに首を振ってみせた。
「いえ。わたくしは、ただ、この馬の思うがままに身を任せているだけのことですわ」
自分ならば当然だ、などとドヤッたりはしないミーアである。
なにしろ、相手は騎馬王国の族長。いわば専門家である。下手なことを言っては簡単に見透かされてしまうだろう。
しかも、少なからず自分に好意的な反応を示してくれている人である。ここで下手に実力者のふりをしてボロを出しては、せっかく味方になってくれるかもしれない人の機嫌を損ねることになるだろう。
ここは謙虚に、正直に……。
――そう、この東風のように、わたくしは生きたい。
そんなことを思うミーアであった。

第百九十五話　ミーア姫、心を揺らしてしまう！

「馬に身を委ねる、か……」
異国の姫の口から出た言葉、その響きは剛馬の心に、奇妙な郷愁を湧きあがらせた。
はたして、その言葉を聞いて心が揺れない騎馬王国の者がいるだろうか。
……いや、いない！
なにしろそれは幼き日に、馬に乗り始めたばかりの子が、最初に言われる言葉だったからだ。
剛馬も周りの随伴の者たちも例外ではない。
そんな基本中の基本の言葉を、ミーアは、心から信じ切った顔で堂々と言った。
「だって、少なくとも走ることについてはわたくしより、この東風のほうが詳しいはずですもの。どうすれば勝てるのかということも、きっとこの子のほうが知っているに違いありませんわ」
とても賢そうな顔で、そんなことまで言うミーアである。
「なるほどな。族長会議からこの馬合わせという状況を作りだした姫殿下であれば、その発言にも重みが出るというもの。そうか、ミーア姫殿下は、我らに負けず劣らず、馬を信頼しているのですな」
その、子どものような純粋さは、彼女の着るビギナー用の服にも通ずるものがあるような気がした。
なるほど、その服は、馬に乗り始めた頃に誰かから渡されたものなのだろう。ミーアはその時の気持ちを忘れないよう、この大事な勝負にそれを着てきたのだ……と、納得しそうになった瞬間……不意に違和感を覚える。
それはそう、ちょっとした疑問だった。
馬にすべてを任せているというのなら……、なぜ、今、加速の指

示を出したのか？
あれは、まぎれもなくミーア自身の意思によるもの。そして、同時にあれはタイミングとしても極めて正しいものだった。今から加速すればほどなくして、小驪たちを視界に収めることができるはず。いかに落露が良い馬でもあのまま走り続けることなどできはしないのだから。
――そうだ。考えればすぐにわかることだ。ミーア姫が、山族の乗り手に先行を許したのは、馬の意思はもちろんだが、ミーア姫自身の思惑もあったということなのだ……。では、その思惑は……。
剛馬は、思わずうなる。
おそらくミーアは、馬合わせのコースを地図で確認していただろう。いや、確実に確認しているはずだ。が、実際に走ってみるのは初めてだろう。となれば、あえて相手に先に行かせて様子を見るという判断をしたとしても、決して不思議ではなく……。
――いや、むしろ、この知者であるならば、きっとそうするに違いない。だからこそ、先行は許しても、できるだけ見える範囲内には収めておきたかったのだ。見失っては、様子見にならないしな。
剛馬は、そう結論付ける。
つまりミーアは序盤、相手の挑発を受け流しつつ、まんまと自分の計画通りに事を運んできたのだ。
――なるほど。族長会議を導いたミーア姫だ。そのぐらいのことを考えていてもおかしくはないか……。
しかし、そうなってくると、どうしても気になることが、剛馬にはあった。そして、それを聞かずにいられる剛馬ではなかった。
「ところで、ミーア姫殿下、その格好はなにか意味があるのですかな？」
そう、ミーアの着込んだ初心者の服がどうにも気になった。それははたして、初志を忘れないようにという、精神的な理由だけなのだろうか。
「ああ、これは……。ふふ、わたくしの大切な忠臣が着ていくよう

に、と用意してくれたものなんですの」
ミーアは笑みを浮かべて言った。
「馬合わせに出るには、ぜひこの服でと。まぁ、東風、この馬も軍馬ですし、この程度の重さならば問題ないということでしたわ」
「なるほど……？　ふむ……」
剛馬は、難しい顔をして考え込んだ。
さて、このお姫さまの言葉は、素直に信じてよいものか……。
先ほどの例に倣えば、これも、忠臣が用意してくれたものであるのと同時に、ミーア自身の思惑も絡んでいるはずで……。では、それはいったいなんなのか？
見れば、ミーアは、何の邪気も感じられない顔で、きょとんと首を傾げていた。
見るからに、なーんにも考えていなさそうなその顔の裏で、はたしてどのような思考を進めているものか……。
ミーアの底なし沼にすっかりはまり込んでしまった剛馬だった。

さて、一方のミーアは、暇つぶしに世間話をしつつも、やるべきことはきちんとやっていた。
それは、速度が上がり、上下動が激しくなった東風の動きに合わせること……。膝を柔軟に使い、ひたすらに東風のリズムに合わせる。
荒嵐とは違い、とても素直な足の運び方だった。それに合わせることなど、ダンスの達人たるミーアにとっては容易なこと。ただひたすらに東風の奏でる綺麗な四拍子に、その身を委ねていく。
東風が気持ちよく走れるように、上手にバランスをとる。このあたりの気遣いは、ダンスパートナーへの気遣いに通ずるものがあったが……、異国の姫の意外な乗馬上手に、随伴の騎手たちは一様に驚きを見せていた。
しばらくの運動の後、体がじわじわと温まってきて、だからこそ草原を吹き抜ける爽やかな風が心地よかった。

今年の夏は、あまり暑くならなかったから、風は少し涼しいぐらいだ。穏やかな風からは草原の、豊かな緑の匂いが感じられて、実になんとも爽快な気分になる。
「ああ……。やはり、馬はいいですわ。うふふ」
こんなに気持ちよく運動できるのであれば、もっと積極的に乗っておけば良かった、などとついつい思ってしまう。
「さぁ、行きますわよ！　東風！」
などと気合の雄たけびを上げたところで――見えた！
深い緑の絨毯の先、ポツリと浮かび上がるいくつかの影。
目を凝らせば、それが先行した小驪たちだとわかって……。
「ふふふ、追いつきましたわよ、小驪さん。逃がしませんわ」
そうして、ミーアは目覚めてしまう！　先に行った者たちに追いつく、快感というものを。
「後ろから追いかけられるのはハラハラしてしまいますけれど、こうして、後ろから追い立てるのは、割と楽しいかもしれませんわ」
などと、ぶつぶつ独り言をこぼしつつ、ミーアは小驪たちを追いかけるのだった。

第百九十六話　ミーアの提案、小驪、鋭く洞察してしまう！

小驪たちの後ろ姿をとらえたところで「ここだ！」と直感し、一気に加速。距離を詰めるのは……東風だった。

相手のすぐ後ろについていったほうが、有利と考えたようだった。

一方、ミーアはと言えば、無邪気に追いついたことに喜びつつ、小驪に声をかける。

「やっと追いつけましたわね。小驪さん」

ニッコニコと嬉しそうな笑みを浮かべるミーアに、小驪は、ムスーッとした顔で言った。

「ミーア姫、ずいぶんと楽しそうにしている、ですの。そういえば、出発前にも、そんなことを言ってたな、ですの。楽しく馬に乗るとかなんとか……」

「……楽しそう？」

楽しそう……楽しそう……っ！

その言葉に「ここだ！」と直感し、一気に思考を加速。小驪との距離を詰めるべく動き出したのはミーアだった。

相手の言葉を巧みに取り込み、状況を有利に持っていくべく、ミーアは口を開く。

「まさにその通りですわ。小驪さん。わたくしは、楽しく馬合わせができればと思っておりますの」

ミーア、渾身のアピールである。

決して、敵対するものではありませんよ！　と。仲良く、和気あいあいとしましょうよ！　と……ミーアが訴えかけたいのは、それである。

そうして、勝ち負けが決まればノーサイド。恨みっこなしで互いに健闘を称えあいましょう、と言いたいのだ！

そのような共通認識があればこそ、負けても安心と言えるのであ

る。
「二人で仲良く途中まで行って、それで、最後の最後で勝負をすればいいですわ。そう思いませんこと？」
ミーアは、そう提案する。
なにも二日間もしんどい勝負をすることないじゃない？
最後だけ、ちょこっと本気で馬を走らせればいいじゃない？
途中までは仲良く楽しい遠乗りでいいじゃない！
ニッコリ友好の笑みを浮かべつつ、力強く訴えかける。
馬を速く走らせると、いろいろ大変だし疲れるから、のんびり行こうよと主張するのだ。
ちなみに、今のミーアに、馬を速く走らせてハードに運動しようという考えは、すでにない。
そうなのだ！　ミーアはすでに最初の目的である「いい運動をする」というのを達成したつもりになっているのだ！
――今夜は親睦を深めるために、一緒に美味しいものをたっぷり食べるというのはどうかしら？
などと、そんなことまで思う始末である。
――やはり、共に食事をすることこそ、分かり合うための第一歩ですし……。
同じパンを分け合ってこそ、分かり合うことができる。それは、ミーアが大切にしたい信念の一つである。
「それで、どうかしら？　小驪さん」
ちょっぴり媚びるような笑みを浮かべて、ミーアは言った。

「最後の最後で勝負を……？」
小驪は、ミーアの口から出た言葉を吟味する。
それは、途中の勝負所での駆け引きの一切を否定する提案だった。
乗馬に慣れていないであろうミーアの提案としては、なるほど、とても妥当なものだった。
今回の馬合わせのコースは、最も簡単なコースが選ばれている。

けれど、それでも難所がないわけではない。ゴール前の坂はもちろんだが、それ以前にも勝負所が何か所かある。
そして、それらの場所は、乗馬技術が問われる場所。そこで勝負を仕掛けられては不利とミーアは考えたのだろう。
だから、それらの場所でも仲良く一緒に行きましょう、と誘いをかけているのだ。
だが、同時にそれは小驪にとっても検討に値する提案だった。なぜなら、落露は紛れもない駿馬だ。速力勝負であれば、それも、ゴール付近の短い距離であれば負けはしない。絶対にだ。
見たところ、ミーアの馬は、どちらかというと体力勝負の馬のはず。本来、ミーアは最後の坂の前に、勝負を仕掛けなければならないはずだった。
にもかかわらず、ミーアは終盤の速力勝負を挑んできたのだ。それをどう考えるべきか……？
――よほど、馬の速さに自信がある……っ！？　まさか……だから、スタートでは、私に先行させたということ、ですの？
自らの馬の速さを隠すために、あえてゆったりしたスタートを切ったということだろうか？　最後の最後、速さ比べに引きずり込むために……。
――大した自信、ですの。この落露に勝てると、本気で思っているんですの？
小驪はミーアの顔を見る。ミーアは……きょとーんっと、不思議そうに首を傾げていた。
不安そうな様子は微塵も感じられなかった。
――私のことナメてる、ですの。ものすごーく馬鹿にしてる、ですの。
腹の底からふつふつと怒りが沸き上がる。が……同時に冷静な部分が告げる。
相手は帝国の叡智……油断は禁物である、と。
聞けば、レムノ王国で起きた、例の革命未遂事件を解決したのは、

このミーア姫であるという。ならば、何の根拠もなく、最後の勝負を挑んできたりはしないだろう。
勝てるという確証が、おそらくはあるのだ。
裏を返せばそれは、途中途中での勝負を挑まれたくないということでもある。
――そういえば、この位置……。
唐突に小驪は気付く。
ミーアの位置取り。小驪よりやや後方に走らせるというこれは……？
――私に先行させて、様子見をしよう、ということ、ですの？
そこで、小驪の背筋に冷たい戦慄が駆け巡った。
最後の最後で勝負をすること、途中途中での勝負を放棄すること、それは、地の利を手放すことだった。
もしもミーアの話に乗れば、馬合わせ、この草原を知る者としての地の利を手放すことに繋がるのだ！
危うく思考を絡めとられそうになっていたことに驚愕しつつも、小驪は、辺りを見回し……、あるものを見つけた。
それは勝負所の一つである場所で……。
「ついてきたいなら、そうするといい、ですの。もっとも、ついてこられるものならだけど……ですの！」
言うが早いか、小驪は落露の馬首を翻した。

第百九十七話　ミーア、キャッキャウフフの水かけ遊びを楽しむ

落露の急な方向転換、急加速に即座に反応するは東風。
速度を上げ、落露の尻尾を追いかける。
一方のミーアは、その動きに「うひゃっ！」と情けない悲鳴を上げた。
ちなみに……ミーアの魂は急なことで大慌てだったものの、肉体のほうは無意識にバランスをとっているため、周りからは、慌てている演技に見えてしまっているのだが……まぁ、それはさておき。
落露が向かっていった先は、わずかに下り坂になっていた。そこを、吹き下ろす風のごとく落露が駆け下る。ぐんぐんと差が開いていき、落露の姿が遠くなる。
「くっ、まぁ、そうなりますわよね。やはり、途中までは仲良くのんびり行こうというのは、虫がいい話でしたわ」
つぶやくミーアであったが、それでも、なんとか小驪に追いすがる。と、すぐに見えてきたのは川原だった。
非常に浅く、幅が広い川。穏やかな流れの中に駆け入った落露は、水しぶきをあげながら、その中を駆け抜ける。
それを追って、東風も川原に足を踏み入れた。
「なるほど。落露、素晴らしい速さですわね。さすがは、月兎馬で……ぶわっ！」
直後、ばっしゃーんっと、落露が跳ね上げた水しぶきが、ミーアの顔を直撃する。
前方、小驪が振り返り、ちょっぴり勝ち誇った顔をする。が……それはいささか性急な反応だった。
なぜなら、ミーアは……その程度ではびくともしないからだ！
それもそのはず、ミーアは、あの無人島ですでに泳ぎをマスターしているのだ。下弦の海月などという異名を持つミーアは水陸両用

の姫。この程度の水をかけられたところでなんともないのだ。
いや……むしろ……、
「うふふ。少し暑かったぐらいですし、ちょうどいいですわね」
髪をふわっと揺らしつつ、気持ちよさそうに微笑んですらいた！
そうなのだ。モコモコスーツで、いささか体温が上がっていたものだから、水浴びが非常に気持ちよかったのだ。
さらに、それだけで終わらなかった。冷えてクリアになったミーアの脳みそが、キリリッと冴え渡る！
――ふむ、これは、使えるかもしれませんわ！
一瞬の閃き。ミーアは今の川原での決闘を、水の掛け合い遊びにしてしまおうと思いつく。
激しい競争を〝楽しい遊び〟に演出してしまおうというプランである。当初の、途中までは仲良く遠乗りしましょう、というプランを、ミーアはまだ諦めていないのだ。
となれば、やられっぱなしでは楽しい水の掛け合いにはならないので……。
「東風、小驪さんたちの前に。せっかくですから、お返ししてあげましょう」
水の掛け合いで、一方的に相手をやっつけたのではつまらない。水をかけ、かけられてこそ、楽しい遊びになるのだ！
ミーアの意を受け、東風が加速する。一気に落露の前に出た東風はそのまま、後ろ足で水を思いきり跳ね上げる。
「きゃあっ！」
小驪の可愛らしい悲鳴を聞きながら、ミーアは上機嫌に笑った。
「ふふふ、お返しですわ！　小驪さん」
鼻歌交じりに言いながらも、ミーアはふと思う。
――しかし……この『前に出て水を引っかけてくるやり方』は荒嵐を思い出しますわね。もしや、血の繋がりがあったりするのかしら……？　それとも、月兎馬の中には、そういう態度が悪い奴が多いとか……。

などと思っていると、東風がわずかばかりコースを変える。
見れば再び、落露が前方に出て、水をかけてこようとしていた。
「あら？　もしかして、わたくしが水をかぶるのを気にしてくれたのかしら？」
問いかけるも、東風は、耳をぴくり、と後ろに向けるだけで、答えることはなかった。
「うふふ。さすがは近衛の馬ですわね。じゃじゃ馬姫の扱いをよく心得ておりますわ」
ミーアの笑い声に、どこか誇らしげにぶるるっと鼻を鳴らす東風だった。

「くぅ、やられた、ですの……」
前髪から水滴を滴らせつつ、小驪が悔しそうに歯噛みする。
頭から水をぶっかけられれば、相手の冷静さを奪えると思っていたのに、結果はどうだ？
ミーアはまったく動じないどころか、あろうことか……。
「お返しですわ。小驪さん！」
などと、楽しげに、勝ち誇ったように笑いながら、反撃に転じてきたのだ。
まさか、反撃を受けるなどとは思っていなかった小驪だったから、これには動揺してしまった。ついつい、無様な悲鳴まで上げてしまったのだ。
――ナメていたのは、私のほうだった、ですの……。
ここにきて、ようやく小驪は気付いた。
帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、普通のお姫さまではない、ということに！
レムノ王国との交流を通して、小驪は、他国の貴族令嬢とも面識があった。
そんな彼女が知る令嬢の中には顔に水がかかることを怖がったり、嫌がったりする者が多かった。だから、急に顔に水をかけられれば

動揺したり、怒ったり。少なからず冷静さを失う、そのはずだったのに……。
――まったく動揺せずに反撃してくるなんて想定外もいいところ、ですの。
完全なる計算外、されど、それ以上に、小驪が驚いたのは、簡単に抜かれ、前に出られてしまったことだった。
落露と東風の力の差は歴然のはずだった。にもかかわらず、あっさりと前に出られた。そのショックはことのほか大きかった。
馬の脚力に差があるにもかかわらず、抜かれたとすれば、それは自分の乗馬技術が劣っていることの証明にほかならない。
乗りづらい川原を選び、勝負を挑んでおきながら後れを取る。この屈辱はとても大きくて……。
「ぐっ、まだまだ。勝負は始まったばかり、ですの。次こそ、目にもの見せてやる、ですの」
悔しげに、うめくようにつぶやく小驪だった。

後になって、小驪は思う。
この時点ですでに自分は、帝国の叡智の術中にはまっていたと。完全に冷静さを失っていたのだと……。
冷たい焦燥は、気付かぬうちに小驪の体にまとわりつき、じわじわとその身を蝕みつつあった……。

第百九十八話　ミーアの黒〇パン

空も赤く染まりつつある夕刻。夜の足音が聞こえてくる時間帯になって、ようやく、ミーアは予定していた野営地へと辿り着いた。

そこは行程の、ちょうど半ばぐらいの位置にある水場だった。

明日は、この水場を経由して、ぐるりと回るようにして、南都の北方にあるゴール地点へと向かうことになるのだ。

「ふむ、予定通り順調に来ておりますわね」

先発していた皇女専属近衛隊の者たちとも無事合流。したのは良いのだが、馬合わせの最中は、助言などをもらわないよう、最低限の接触しかできないルールらしく……。

仮設の幕屋を建ててもらい、お料理が出来上がるのを黙って見ているしかできないミーアである。

本来であれば、お料理を用意してくれているアンヌと楽しく会話をするところなのに、それも最低限しかかなわず。

「ミーアさま、頑張ってください。とっておきのお料理を用意しますから」

ぐらいなもので。

ちなみにアンヌが用意してくれた料理は、グリーンムーン家のメイド、ニーナからもらった香辛料が入っている特別製の鍋料理だった。帝都に戻った折には料理長からも手ほどきを受けるアンヌは、すでにかつてのアンヌではない。

具材を切って煮込む鍋料理ならば、問題なく作れるようになっているのだ。成長しているのだ！

まぁ、料理が美味しそうなのはめでたいことなのだが、やっぱり、こうして一人で黙っているのは、ミーアとしては、ちょっぴり寂しくて……。

だが……今に限っては、それは悪いことばかりではなかった。

なぜなら、ミーアの野営地点のすぐそばに、同じく野営の準備を進める小驪の姿があったからだ！

「これはチャンスですわ。小驪さんも、今は一人でいるはずですし……一緒に食事をいただいて、互いの健闘を称え合えば、自然と仲も深まるはず」

周りに仲間がたくさんいる状態であれば、当然、楽しい会話は望めない。けれど、幸か不幸か、今は互いに、一人きり。周囲との会話を禁じられた状態だ。

一緒に食事をするのを妨げるものはない！

「仲を深めておいたほうが、負けた時に都合がよいというのは、未だに変わらぬこと。ならば、ここはともに鍋を囲み、親睦を深めるべきですわ！」

うんうん、っと頷くと、ミーアはさっそうと小驪のもとに向かった。

一方の小驪は、といえば――ちょっぴり打ちひしがれていた。

彼女の予定としては、もう一つ先の水場で野営する予定だったのだ。

それが、ミーアの策に乗せられて、無駄に勝負を仕掛けてしまったせいで、計画通りにいかなかったのだ。

ついてくるミーアになど構わず、そのまま進んでいれば、もっと先に行って、すでに勝負が確定するぐらいの差がついていたかもしれないのに……。

「落露、ごめんなさい、ですの。私がもっとしっかりしていれば」

しょんぼり、肩を落としつつ、小驪は落露の首筋を優しく撫でた。

「明日は必ず圧倒的な差をつけて勝つ、ですの」

などと気合を入れる小驪に……話しかけてくる者がいた！　それは彼女の乗馬である名馬、落露……ではなくて……。

「小驪さん、少しよろしいかしら？」

対戦相手のミーアだった。しかも、こう……なんというか、イラ

ァッとするぐらい能天気な顔で話しかけてきたっ！
「なんか用か……ですの」
ムスーッとした顔で振り返る、と、
「うーん……前から思ってましたけど、小驪さん、なんでも『ですの』をつければ、令嬢っぽい言葉遣いになるって誤解しておりませんこと？」
「むっ……」
小驪は、むぅっと顔をしかめた。
なにしろそれは、知り合いの貴族のご令嬢に教わった言葉遣いだったからだ。
そのご令嬢は、小驪の言葉遣いを田舎臭いとさんざん指摘した後、なんでも語尾に「ですの」をつければいいと、笑いながら言っていたのだ。
なんとなく、からかわれているのではないか？　と思わないでもない小驪だったが、それでも、一応は信用して、言葉遣いを心掛けるようになったのだった。それなのに……。
黙り込んだ小驪に、ミーアは、んー、っとうなりつつ……、
「お知りになりたいのでしたら、わたくしが教えて差し上げますけど、でも……別に小驪さんは、普通の言葉遣いでもいいのではないかしら？」
「え……？」
「ほら。食べ物もそうじゃありませんこと？　その土地には、その土地に適した食べ物と料理法がある。たとえば、帝国に素晴らしいキノコがあったとして、騎馬王国のキノコも全部それになればいい、とはわたくしは思いませんわ。それに、騎馬王国に生えたキノコを帝国の料理法で調理しようとも思わない。それでは、つまらないですもの」
わかりやすくなるように、だろうか。わざわざ、たとえ話を用いて、ミーアは言った。
「言葉もたぶん、それと同じことですわ。小驪さんが貴族令嬢らし

い言葉に憧れるのは自由ですけれど、わたくしは騎馬王国の言葉訛りも素敵だと思いますわ。特に歴史歌などは、騎馬王国の訛りのほうが素敵に聞こえると思いますけれど……」
その意外な言葉に、小驪は一瞬、呆気にとられたような顔をしたが……、すぐに顔を背けて言った。
「そっ、そんなことより、なんの用、ですの？」
「ああ。そうでしたわ。一緒にお食事をどうかと思いまして……」
「ふん。対戦相手と一緒に食事など……」
「あら？　残念ですわ。せっかく、わたくしのとっておきを披露しようと思っておりましたのに」
ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。
「とっておき……？」
きょっとーんと首を傾げる小驪の前で、ミーアはおもむろに、あるものを取り出してみせた。
それは……端的に言えば、携帯用の黒パンだった。とても固いため、スープに入れてほぐしながら食べるような代物である。
まぁ、それは別にいいのだが……、問題は、その形状だった。
「そっ、それは……？」
「ふっふっふ、これは、わたくしが考案した馬形の黒パン。黒馬パンですわ！」
「……ほう！」
小驪、食いつく！
ミーアの持つ黒パンを、じっくりと見つめ、そのパンの形状を確認した瞬間、おおっ！　と歓声が口から洩れる。
「これは……確かに馬の形……。いやしかし、これは……」
なんという……なんという……っ！　天才かっ！
小驪は、帝国の叡智の、恐ろしいまでのセンスに愕然とする。
まさか、パンを馬の形にするなんて……そんな素敵なことを、今まで思いつかなかっただなんて……っ！
悔しさから、ついつい負け惜しみを言いたくなってしまって……。

「こっ、これは、なかなかのでき……ですの。けれど、甘いですの。ミーア姫」
カッと目を見開き、小驪が言った。
「あら？　甘いとは……？」
首を傾げるミーアに、小驪は手に持った馬パンを突き付けて、
「確かに、パンを馬の形にするというのは良いアイデアですの。とても秀逸、奇抜、帝国の叡智の名に恥じぬ閃きといっても過言ではない、天才的な発想ですの。しかし……馬であれば、こう、耳の部分が……」
くいっくいっと指で形を作る小驪。
「ふむ……！」
それを熱心に頷きつつ、聞いているミーア。

こうして、二人は馬の造形について、熱心に議論を戦わせる。
……なんか、ちょぴっとだけ、友情が深まったみたいだった！

第百九十九話　ミーア姫、篭絡に失敗する……失敗する？

見事に馬パンで釣り上げた小驪を逃さぬよう、ミーアは一緒に食事をすることを提案。

すぐに小驪の手を引いて、近衛兵が用意した帝国鍋のほうへと誘う。

携帯用の馬形黒パンはとても固い。だから、スープなどに浸して食べるのが常だ。

帝国鍋の中で、ゆらゆら、スープに浸かりながら揺れている馬パンを見て、小驪は、ほわぁ、っと可愛らしい歓声を上げる。が、すぐに、顔を引き締める。

「ふ、ふん……。まぁまぁ、ですの。でも、鍋の中身が少し足りない、ですの」

それから、小驪は、自分の仮設幕屋に取って返すと、すぐに何かを持って帰ってきた。

「あら、それは……」

「チーズ、ですの。鍋に入れるとトロトロに溶けて、最高ですの」

「ほぅ……」

「それに、干し肉もありますの。これを刻んで入れると、チーズと絡んで実に濃厚なうま味が出ますの」

「ほうっ！」

小驪は手慣れた動作で、チーズの表面を削って、鍋の中に投入。干し肉も入れて、帝国鍋に絶妙な彩を添える。

すぐに香り立つのは、まろやかで、なんとも食欲をそそるチーズの香り、そのトローリとしたチーズの衣を身にまとい、美味しそうな干し肉がぷかぷか顔を出していた。

「おお……これは、素晴らしい！　さすがは騎馬王国の食材ですわ。では、早速一口……」

ぐつぐつ煮立った鍋、小驪が提供してくれた干し肉を自らの取り皿に移して、ミーアはさっそく一口。
「ほふぅっ！」
口から、熱々の湯気がこぼれる。
とろりとしたチーズは、とっても熱かったから、やけどをしないように、と、ほふ、ほふっと息を吸う。
それがよかったのだろうか、口の中に濃厚な、チーズの風味が一気に広がった。まろやかな風味、さわやかな酸味、そこに干し肉の塩気の強い香ばしさが混ざる三重奏。
カリリッと固い干し肉を噛み締めれば、ジュジュワッと染み込んだスープが口の中に広がる。
「お、おお……これは、素晴らしい……」
後は……言葉はいらなかった。
ミーアと小驪は夢中で、食事に向かった。
お腹が減っていたからだろうか……。その味は、とても……とてーも！　美味しくて、たまらなく美味しくって……っ！
気付けば、鍋が空になっていた！
時間が飛んだような錯覚すら覚えてしまうミーアである。実に恐ろしいことである。
「ああ……なんだか、夢中で食べてしまいましたわ。うふふ、すっかりお腹いっぱいになってしまいましたわ。なかなか楽しかったですわよ、小驪さん」
上機嫌に言うと、不意に、小驪がプイっと顔を背けた。それから、
「なっ、馴れ合うつもりはないですの。ミーア姫は敵だ、ですの」
キッと睨んでくる小驪。対して、ミーアは、笑顔で受け止める。
そうして笑って誤魔化しつつ、反論を準備する！
「それは、違うのではないかしら？」
「なにが違う、ですの？　仲良く馬を並べて走らせるのが馬合わせだとでも？　それは、馬合わせに対する侮辱ですの」
「いえ、そうではありませんわ」

ゆっくりと首を振りつつも、ミーアは、ここぞとばかりに持論を展開しにかかる！
「なるほど、馬合わせは互いの主張をぶつけ合うもの。それゆえに、本気でぶつかり合うことはわかりますわ。けれど……」
まず、相手の意見を自分がきっちりわかってますよぅ、というアピールだ。その上で、
「けれど、真剣勝負は、あくまでも馬合わせの中でのこと」
まず、戦いの終わりがいつなのか、を明確にしておく。〝馬合わせが終わった時〟それが戦いの終了地点。つまり、戦いはそこまでにしましょうという線引きをする。
そして勝負が終わればノーサイド。仲良くしましょうよ、とアピールするのだ。さらに、
「勝負自体も相手への敬意をきちんと持って争うべきですわ」
馬合わせの間も、あまり乱暴なことをせずに、フェアプレイでいきましょうよ、と付け加える。これにより、不必要な禍根を残さぬよう、配慮も欠かさない。
ミーアの心遣いがキラリと光った瞬間である！
「意見を争わせるのは馬合わせの中でのみ……。その後は示された結果に従って協力せよ……」
「え……？」
唐突に小驪が言った言葉に、ミーアは瞳を瞬かせる。
「我ら騎馬王国の父祖、光龍の教えですの。ミーア姫が言いたいのは、これですの？」
「そう。まさにそれですわ！」
ミーアは我が意を得たり！　という様子で頷く。が、もちろんそこまで深い考えがあるわけではない。もちろんである。
けれど、生まれた流れを逃すミーアではない。ここは乗っていく！　一切の躊躇なく！
「馬合わせは相手を殺すための戦争ではない。あくまでも協力し合うための、物事の決め方ですわ。だから、我々は敵ではない。憎し

みや私情にとらわれることなく、終わった後は互いに健闘を称えあうべきではありませんの？」
グッと拳を握りしめ、ミーアは力説する。
「ミーア姫……」
小驪は、ほんの一瞬、感銘を受けたような顔をしたが……すぐに顔をプイっと背けた。
「そんなのは綺麗事ですの。信じられるわけない、ですの」
「そう。それは、残念ですわ」
ミーア、ちょっぴりため息を吐く。
――これは、なかなかに難敵。ふぅむ、ここは……。
一転、ミーアは作戦の転換を図る。それはミーアの得意技である……、
「ですけれど、わたくしは、あなたと落露の走りを称えますわ」
全力ヨイショである。
ミーアにはかつて、幾度も、このヨイショで危機を乗り切ってきた実績がある（……少なくともミーアの中ではそうなっている！）
今回も、そこに活路を見出すべく、ペラペラしゃべりだした。小驪のおかげで夕食が大変美味しくなったこともあり、その舌の動きは実に滑らかだった。
「今日の落露の走りは、月兎馬の中の月兎馬の名に恥じぬ見事な走り。実に天晴でしたわ。わたくしも、帝国の姫として良い馬は知っているつもりでしたけれど、そのいずれにも劣らぬ素晴らしい馬ですわね。それに、あなたも……。あなたが、立派に戦ったということは、ほかの誰が見ていなくとも、わたくしがきちんと見ておりましたわ」
自分だけは、あなたのこと評価しますよぅ！　とミーアは力強く訴えかける。
こんなことを言われたら「お前の馬をよこせ」とは言いだしづらいだろう、という雰囲気を懸命に演出しているのだ。実にあざとい！
「そ、そんな見え透いたお世辞、聞きたくない、ですの」

などと言いつつ、小驪が立ち上がった。
「こっ、これ以上、馴れ合うつもりは、本当にない、ですの。明日は覚悟するがいいですの！」
そう言って、ミーアの前から去っていく小驪。その背中を見送りながら、ミーアは小さくため息を吐いた。
「ふぅむ、これは失敗したかしら……」
それからミーアは立ち上がり、そっと空を見上げた。
「さて……明日はどうしたものかしら……」
ミーアの不安を表すかのように、輝く月は、薄っすら雲に覆われつつあった。

第二百話　幸せな夢の終わりのように……

馬合わせの一日目の夜。南都では、ひっそりと一つの事件が起きていた。

「ん……ぅん？」

それは、深夜のこと。

シュトリナは廊下のほうから聞こえてきた音に、目を覚ました。

コツ、コツ……と床を踏む、それは、ひそめた足音だった。

瞬間的に蛇の暗殺者を疑うシュトリナだったが、足音は部屋の前を素通りする。

方向からすると、どうやら、建物の外に向かっているらしい。

建物の部屋割りを思い出し……それから事前にチェックしておいた護衛の配置を頭に思い描きながら、シュトリナは首を傾げた。

――よくよく考えれば、護衛の目を誤魔化せるような暗殺者がリーナに足音を気付かれることはないかな。

それから、彼女は隣のベッドで寝ていたベルのほうを見る。毛布をベッドから落として、ちょっぴりはしたない格好になっているベルに苦笑い。そーっと毛布を掛け直してあげる。

それから、こっそり扉を開けて、廊下に顔を出す。っと、歩いていく少女の後ろ姿が目に飛び込んできた。

「あれは……」

長い黒髪を揺らしながら歩く少女、ピンと伸びた背筋が凛々しい彼女の正体は――火慧馬だった。

――慧馬さん、こんな時間に、どこに……？

きょろきょろと辺りを窺いつつ、建物の外へと向かっていく慧馬。胸騒ぎを覚えたシュトリナは、寝間着の上から上掛けを羽織ると、こっそり部屋を抜け出した。

野生の勘だろうか。慧馬の行く先には護衛の姿はない。重鎮であ

るミーアが馬合わせに出ているため、戦力を分散させなければならなかったのと、もともと外からの侵入を警戒するための配置だからだろうか。
外に出るのは、案外、簡単にできてしまうのだ。
――ルードヴィッヒさんも、ミーアさまの護衛の手配で手が回らなかったんだろうな……。ディオン・アライアがいれば、気付いて止めるだろうけど、ミーアさまについて行ってるし。
そんなことを思いつつシュトリナは、静かに慧馬の後を追う。難なく建物を出た慧馬は、どうやら厩舎のほうに向かっているようだった。
「……もしかして、慧馬さん、一人で出ていこうとしてる？　ん？」
と、その時だった。慧馬の前から、何人かの人影がやってきた。
「あら？　慧馬さん？　こんな時間にどうかしたの？」
月明りの下、涼しげな髪を揺らして現れたのは、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガだった。
「聖女ラフィーナ……。こんなところでなにを？」
慧馬の怪訝そうな声に、ラフィーナは穏やかな笑みを浮かべる。
「ミーアさんの勝ちを祈っていたのよ」
ふと見れば、彼女の後ろには護衛としてだろうか。林馬龍の姿まであった。
「……ラフィーナさま、こんな夜中に馬龍先輩と一緒にいたら、あらぬ誤解を招きそうだけど……。まぁ、ヴェールガの従者の人も一緒みたいだから、平気かな？」
小さく首を傾げつつ、シュトリナは状況を見守ることにした。
「それで、質問を返すようだけど、あなたは何をしているの？　慧馬さん」
「それは……その、そう。遠乗りに……」
「こんな時間に、一人で……？」
疑わしそうに上目遣いで見つめるラフィーナに、
「いや、夜の遠乗りはなかなかいいものなんだぞ？　それはラフィ

ーナ嬢ちゃんもこの前……」
「馬龍さん……」
ゾクリ、と……なぜだろう、シュトリナの背筋に鳥肌が立った。
涼しげな笑顔を浮かべたまま、馬龍のほうを振り返るラフィーナ。
その背中に、シュトリナは、なんとも言えない威圧感を覚えてしまって……。
どうやら、それで、馬龍にも通じ……
「ああ。そうだった。秘密だったな。ははは」
てなかった！
――秘密って言っちゃったら、まずいんじゃないかな……。
などと心の中でツッコミを入れるシュトリナと、
「馬龍さんっ！」
悲鳴を上げるラフィーナ。先ほどの威圧感はどこへやら、それはどこか気恥ずかしさにまみれた、少女のような声だった。
どうやら、なにかあったらしいが……それはさておき。
ラフィーナは、小さく咳ばらいをする。
「慧馬さん、もしかして、あなた、一人で出ていこうとしているのではないかしら？」
その静かな問いかけ。慧馬はギュッと拳を握りしめた。
「ミーア姫が我らのために体を張って頑張ってくれていることはわかっている。だからこそ我がなにもしないわけにはいかないではないか」
ゆっくりと顔を上げ、慧馬は続ける。
「……族長会議のやり取りを見て……いやそれ以前からずっと考えていたことなのだ。火の一族は……我と兄上がいなければ、すんなりと騎馬王国に受け入れてもらえるのではないか……とな。問題になっているのは、狼を使う術なのだ。だが、あれは誰もが使えるものではない。族長である兄と我のみが使えるものなのだ。であれば……」
「慧馬さんが狼を連れて、火の一族から出ていけば、それですべて

の片が付く、と？」
　ラフィーナの問いかけは、ほとんど感情のこもらない、平坦なものだった。それに気付いているのかいないのか、慧馬は構わず続ける。
「火の一族のみなは優しい。だから、我を追い出そうとはしないし、守ろうとしてくれる。でも、それに甘えることはできない。我が出ていくのが一番確実な方法だ」
「おい、それは……」
　口を挟もうとした馬龍を片手で制して、ラフィーナは小さく首を振った。
「そう。残念だわ。慧馬さん。あなたは、ミーアさんの良いお友だちだと思っていたのよ？」
　ラフィーナはため息を吐いて……それから、上目遣いに慧馬を睨みつけた。
「本当の真友（おともだち）なら……ミーアさんの勝ちを決して疑ったりはしないんじゃないかしら？　少なくとも私は信じてるわ。ミーアさんの真友として」
　ラフィーナの中で、ミーアの扱いが結構スゴイことになっているわけだが……、それを指摘する者は、ここにはいなかった。
「勝ち負けの問題ではない。ミーア姫の肩に我らの命運をかけること、要らぬ重荷を負わせること自体が……」
「お友だちに迷惑をかけたくない、ですか？」
　慧馬の言葉を遮って、ラフィーナが言った。唇を噛みしめる慧馬に、厳しい口調でラフィーナは続ける。
「でもそれは、あなたの気持ちを楽にしたいだけ。それはただの逃げです。ミーアさんにも、あなたを守ろうとしている火の一族のみなさんに対しても、失礼です」
「……しかし」
「大丈夫。ミーアさんは、絶対に負けませんから。あなたが、ミーアさんを友と呼ぶのなら、あなたは信じるべきです。そして、迷惑

をかけたと思うなら、今度はあなたがミーアさんを助けられればいい。助け合ってこその友ではないですか？」
少しも揺らがない、芯の通った声でラフィーナは言うのだった。
「よかった。ラフィーナさまが、上手くまとめてくれそう……」
やり取りを見て、ホッと安堵のため息を吐くシュトリナである。正直、ラフィーナが出てこなければ、きっと、自分には説得できなかっただろうから。
シュトリナは、慧馬の判断が正しいと思っていた。
なにしろ、慧馬と狼がいなくなれば、火の一族は文句なく、騎馬王国に帰還することができるのだ。
ミーアがこれ以上、無理をする必要もなくなるのだ。
だから、むしろ、シュトリナとしては慧馬の背中を押してやる必要があって……。
それが合理的な考え方というもので……でも、
「そっか。リーナは、慧馬さんを引き留めてもいいんだ……」
なぜなら、ミーアがいるのだから。
ミーアがしようとしていることのためには、それこそが正しいことで……。だから、シュトリナは、優しい判断をしてもいいのだ。
そんな、優しく温かな世界にいられるのが、とても嬉しくって……だからだろうか？
……背後から近づいてくる存在に気付くのが、致命的に遅れてしまった。
突如、がばっと抱きすくめるようにして押さえつけられる。
「――んぅっ！？」
同時に、口と鼻に布が押し当てられた。
甘ったるく危険な匂いを認識すると同時に、シュトリナはその正体に気付く。

――あ、これ、ダメなやつだ……。
慌てて、手足をバタつかせるも、すぐに体が痺れて、力が入らなくなる。
「んっ……んんぅ……」
抵抗むなしく、かくん、っと膝が折れる。フワッと、まるで酔っ払ったような感覚。意識がふわふわと、あいまいに揺れて……。
――ベル、ちゃん。
その声は、音をなすこともなく……。
「いやはや、まさか、こんなところで裏切り者を見つけられるとはねぇ。やれやれ、俺は、ガキの扱いは苦手なんだが……」
ぼんやりとした思考に、その声が忍び込んでくる。まるで狡猾な毒蛇のように。
「まぁ、巫女姫さまは人を使うのがたいそうお得意な方だから、きっと裏切り者も、毛の一筋すら無駄にせずにお使いになるだろうて。せいぜい損なわぬよう丁重に運ぶとしよう」
薄れゆく意識の中、そんな言葉を聞きながら、シュトリナは闇の中へと沈んでいく。
それはまるで、幸せな夢の終わりのように……。

第二百話　幸せな夢の終わりのように……（後書き）

ミーアがいないのでシリアスです。

第二百一話　ミーアの叡智の高度な計算に基づいて

天馬――それは天を舞う、翼をもった馬である。
大空を自由に飛び回るその馬は、まさに天空の支配者といっても過言ではない、伝説上の生物である。
ところで……その天馬、実のところ、帝国と騎馬王国とでは意味合いが若干異なっている。
『寒馬の訪れ日』という表現がある。それは、騎馬王国における冬季の始まりの日だ。
騎馬王国では、冬は馬の形をしてやってくる。冬だけではない。春も、夏、秋もそうだ。季節は馬の姿をとって、草原地帯に現れ、駆け抜けるものなのだ。
では『天馬』はどうだろう？
これも同じことなのだ。騎馬王国では、天の事象もまた、馬の姿で認識される。
天空の支配者とは、すなわち『天の事象の支配者』なのだ。
雷鳴は天馬の嘶き、風は天馬の羽ばたき、雨は天馬の流す涙だ。

馬合わせの二日目は、天馬が機嫌を損ねたような天気だった。
空を覆う一面の漆黒の雲原。そこを駆け抜ける天馬（らいめい）の嘶きが遠くに響き、激しい羽ばたきによって生じた風が、下界の草原に吹き荒れていた。
「なんだか、嫌な天気ですわね。今にも雨が降ってきそうですわ」
風に踊る髪を片手で押さえつつ、ミーアは空を見上げた。
そして、ミーアの悪い予感はすぐに当たることになった。
野営地を出発して早々に、黒雲からポツリ、ポツリ、と雨が落ち始めた。幸いにして、天馬の機嫌はまだ、そこまで悪くはないらしく、雨粒は大きくはない。せいぜいが小雨といったところだ。

あくまでも今のところは、であるが……。
「ああ、やはり降りだしましたのね。やれやれ……」
愚痴りつつ、ミーアはモコモコスーツのフードを被る。
雨具としても機能するモコモコスーツのおかげで、雨にも強いミーアである。この程度の雨、なんでもないのだ。
「ふむ、少し肌寒いぐらいですし、これは、アンヌに感謝ですわね……」
雨で濡れたところに吹き付けてくる風は冷たい。一気に秋を通り越して、冬になってしまったようにすら感じる。
「そう言えば……この年は、寒い年でしたわね……。すっかり忘れていましたわ」
そんなことをつぶやきつつも、ミーアは前方に目をやった。
雨にけぶる景色。油断をすると、見失ってしまいそうだったから……。
「東風、少し急ぎましょう。もう少し落露との距離を詰めますわよ」
ミーアの声に、ブルルーフっと鼻を鳴らし、東風が足を速める。
水で湿った草原を走りつつも、ミーアは小さくうなる。
「それにしても、小驪さん、風邪などひかなければ良いのですけれど……」
そんなミーアの言葉に応えるように、びょうっという冷たい風、それに続いて、くっちゅん、という小驪の可愛らしいくしゃみの声が響いた。
「小驪さん、大丈夫ですの？」
見えてきた背中に声をかける。っと、小驪はキリッとした顔で振り返り……
「馴れ合いはしない、ですの。今は馬合わせの最中ですの」
っと言ったは良いのだが……、直後に、寒そうに鼻をすすっていた。何度かこすったからか、鼻の頭は赤くなっていた。
「ですけど……、とても寒そうですわ」
「こっこ、このぐらい、草原で生きる騎馬王国の者なら、なっ、な

んでもない、ですの」
そうは言うものの、その唇はちょっぴり青くなっていた。
「そうなんですのね。でも……」
と、ミーアは周りの随伴の騎馬に目をやった。
昨夜のうちに、剛馬たちから引き継いだ騎馬王国の者たちは、みな、ミーアの視線に首を振った。
「我々が手を貸すわけにはいきません。ミーア姫は、馬合わせの最初からその服を持ち込んでいますから、ここで雨具を渡したら不公平になってしまいます」
「そう……。あ、そういうことでしたら、どこかで雨宿りをして、焚火でもしましょうか。それで雨がやんでから……」
「ふ、ふふ、そっ、そんな口車には乗らない、ですの。ミーア姫は、その馬を休ませたいから、そんなことを言っておりますの。ずっとそんな重たい服を、着てきたのだから、その馬は疲れてるはず、ですの！」
小驪は、ミーアのほうを見てから、勝気な笑みを浮かべた。
「これ以上、私の誇りを傷つけないでほしい、ですの。ミーア姫、これは馬合わせ。これは、すべてをかけた勝負。全力で競い合わなければいけない、ですの」
歯を食いしばりながら言う小驪。
そうまで言われては、ミーアとしてもなにも言えない。言えないが……。
――これは、ますます真剣勝負じみてきておりますわ。少し場を和ませておく必要があるのではないかしら……。
ミーアとしては、ピリピリしたムードは好まないのだ。負けた時に敵としてではなく、ともに馬合わせを乗り切った者として、ある種の仲間として扱ってもらいたいからだ。
そのほうが好待遇を望めるに違いないし。
――ふむ、ということは……。
考えることしばし……。やがて、ミーアは一つの結論に至る。

――ここは、甘いものがよろしいですわね！
……別に、自分が食べたいから、ではない。昨日の夜のお鍋はたいそう美味しかったが、デザートが足りなかったな……などと思ったからでは決してないのである。ないのである！
そうではなく、甘いものを一緒に食べれば、決闘などという雰囲気にはならないだろうという、緻密な計算に基づく結論である。
ミーアの叡智（いぶくろ）が出した、高度な計算（しょくよく）に基づく結論なのである。
そうして、ミーアは随伴する水族の騎手の女性に声をかけた。
「ちょっとよろしいかしら。わたくし、なにか甘いものが欲しいですわ」
「……は？」
唐突なミーアの発言に、女性はきょとりん、と首を傾げる。
「いえ。ミーア姫、ですから、先ほど申し上げたように馬合わせの最中に我々がそのように、ミーア姫にだけ手を貸すことは不公平に……」
「ならば、小驪さんにも出して差し上げれば、何の問題もございませんわ」
あっさりと言って、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「あなたはご存知ないかもしれませんけれど、わたくし、わがまま姫として有名ですのよ？　この程度、わがままのうちにも入りませんから、覚悟しておくことですわ」

さて、ミーアの言葉を聞いた騎馬王国の女性は、一瞬、考える。
なぜミーアがこのようなことを言い出したのか……。話の流れから考えるに、おそらくミーアは小驪に同情していたはずで。では、ミーアが求める“甘いもの”とは……。
彼女はすぐに思い至った。
騎馬王国には、乳粕酒（アールッェ）という飲み物がある。
それは、馬乳酒を作る過程で出る残り滓を使って作る、甘いホットミルクのような飲み物だった。温めて飲めば、体の芯までポカポ

カしてくる、風邪知らずの飲み物なのだ。
――そうか。ミーア姫は凍える対戦相手に暖を取らせようとしているのか……。しかも、自らのわがままを押し通す、という形で……。
理解した瞬間、彼女は感銘を受けた。戦う相手をすら気遣う、帝国の叡智の慈愛に。
「なるほど。異国の姫君の心遣(わがまま)いには答えないわけにはいきませんね」
そうして、彼女の指示のもと、すぐに伝令が駆けていき、中継地点に熱々の乳粕酒が用意されることになるのだった。
このことは、後の時代に騎馬王国のことわざ「敵に熱い乳粕酒(アールツェ)を送る」の語源となるのだが。
まぁ、それはともかく、馬合わせは、いよいよ佳境へと突入していくのだった。

第二百二話　小驪の矜持

薄暗い平原を行くミーアたち一行。そんな彼女らの目の前に、ぼんやりと焚火の火が映り込む。

「あれは……」

などと怪訝そうな顔をしていた小驪だったが、なにかに気付いたのか、ミーアのほうを振り返る。が、ミーアは素知らぬ顔で、馬を前に出し、焚火のほうに向かう。

焚火を無視して進もうとした小驪も、周りの騎馬に促され、仕方なしにミーアの後を追った。

馬を降りると、早々に湯気の立つ容器を渡される。中には乳白色の液体が入っていて、そこからは、なんともあまぁい香りが……。

――ああ、素晴らしいですわ……。理想的な飲み物ですわ。

早速、ミーアは容器を両手で持つと、ふーふー、息を吹きかける。熱い湯気が頬に当たる度、氷が解けるように、肌のこわばりが消えていくような気がした。

そうして、はふほふと一口……。

舌の上を転がるのは、熱々の、とろみがある液体だった。卵を溶かしたスープにも似た食感、けれど舌に感じるのはハチミツのような濃厚な甘みだった。

喉を通り、腹へと落ちていく熱は、じんわり、ぽっぽと体を温めてくれて……。ミーアは「おふぅっ！」と、ため息を吐いた。

――なるほど。ただ甘いものを用意するだけではなく、体が温まるものを用意してくれたわけですわね。素晴らしい気遣いですわ。さすがは騎馬王国の方たちですわ。

「ミーア姫……」

ふと見れば小驪は、湯気を立てる容器を両手で握りつつ、ミーアに不満げな視線を向けていた。

ミーアはとぼけた様子で、
「誤解があるといけないので言っておきますけれど、これはあくまでも、わたくしが飲みたいから頼んだだけのことですわ。あなたにも飲まさないと、わたくしもいただけないから小驪さんにも同じものを用意してもらっただけのことですわ」
しれっと言ってのける。
そんなミーアの顔をまじまじと睨んでから……ついに、小驪は吹き出した。
「ミーア姫、あなたは、ほんっとーーーに！　お人よし、ですの」
「あら、ですから、それは……」
「わかっている、ですの。あなたのその行動は、すべて自分の言葉に重みを持たせるためのもの。馬合わせは互いに刃を突きつけあう戦（いくさ）ではない。方針が定まった後は、互いに協力をするためのもの。だから、悔いなく、後腐れないように配慮した」
それから、小驪は自らの手を見つめて、握り、開きを繰り返す。
「このまま体が冷えたままで馬に乗り続けたら危ない。手がかじかめば手綱を掴むことも難しく、落馬の危険もある。怪我をしたら、気持ちよく馬合わせで決着がつかない」
小驪は、確信に満ちたドヤァ！　な顔で言い放つ。
「そんなところ、ですの？」
「……ええ、まぁ、そんなところですわ」
もちろん、そんな意図はないのだが……まぁ、そのままにしておいたほうが、雰囲気がよくなりそうなので、そういうことにしておく。臨機応変の海月、ミーアは波に逆らうことの愚を知っている。
それから小驪は、一口、乳粕酒を飲んで……。
「ふふ、甘くて、とても美味しいですの」
小さくため息。その後、なにやら吹っ切れたような顔をミーアに向けて、
「ミーア姫、馬合わせは大切な儀式ですの。だから、手加減はしないですの」

一転、キリッと凛々しい顔で言った。そうして、
「だから、私は、全力で馬合わせに臨むために、ここで少し火で体を温めてから行こうと思う、ですの。このまま馬に乗り続けるのはやっぱり危ないですの」
「あら、それならわたくしも……」
「ミーア姫は先に行くといい、ですの」
「へ……？　いえ、でも……」
「私は勝つために、それが最善だと考えるからそうする、ですの。ミーア姫も勝つために最善のことをしてもらいたいですの」
それから、勝気な笑みを浮かべる。
「心配しなくっても、落露は名馬中の名馬。すぐに追いついてみせるですの。必ず、最後の坂道の前までに追いついて見せるから、覚悟するといい、ですの」
その口ぶりに、ミーアは察する。
――なるほど、借りは作らない、と、そういうことですのね……。
そう、これは、きっと小驪なりの、後腐れのないやり方なのだ。
小驪の矜持を認めたミーアは、一つ頷くと、
「わかりましたわ。では、楽しみにお待ちしておりますわね。お先に失礼いたしますわ」
そうして、よっこーいしょっ！　と東風に飛び乗ると、そのまま駆け出した。
――ふむ、まぁなんにせよ、小驪さんとも仲良くなれましたし。これならば、負けても問題ないはず。これで心置きなく負けられますわね……。
東風の心地よいリズムに合わせて、ニッコニコ顔で進むこと、しばし……。
――ん？　負ける？
ふとそこで、ミーアは気付いた。唐突に……気付いてしまった。
後ろを見る。
小驪は追ってこない。差がぐんぐん開いていく。

――あら……、これってもしや、チャンスでは？
ここにきてミーアはようやく、思い至る。自分が勝利する、その輝かしい可能性に。
脳裏に照らし出されるのは、従者たちの顔。自身の勝利を疑わず、信じ切った顔で応援してくれた彼らの顔だ。
勝ちの目が見えているこの状況、もしもここで不甲斐ないことをしては、後々の禍根になりかねなくって……。
「こっ、これは……行くしかありませんわよ。東風！」
自らを押し上げる大波を感じ、ミーアの声にも気合がみなぎる。
手綱をしっかりと握りしめ、東風の首筋を撫でる。っと、それに応えるように、東風が嘶いて……！
そしてっ！

――いつもと変わらない速度で走っていった！

マイペースをいつでも維持する東風なのであった。

第二百三話　某族長プロデュースのトンデモ説、浸透す

小驪と別れてから、ミーアはひたすらにゴールを目指していた。一度も振り返ることなく、ただ前だけを凛と見つめたまま……。

雨は依然として降り続いていた。いや、それは、もはや雨ではなく、半ば凍ったみぞれのようになっていた。けれど、ミーアのまとう防寒着は、その程度の寒さをものともしなかった。

さて、休憩場所にて、交代した随伴の騎手たちもまた同じように防寒着を着ていた。その中に、前日の護衛を担当した木剛馬の姿もあった。

「まさか、このために、あの服を着ていたとは、な……」

感慨深げにつぶやきつつ、剛馬は、疑問に感じていたことを思い出していた。

なぜ、重みがある防寒具を着てきたのか。その答えがこれだった。あれを着ていれば、ある程度、冷たい雨の中でも問題なく進むことができる。

だが、問題は昨日の時点でこんな天気になるなんてこと、誰も予想していなかったことだ。

この時期に急に天候が崩れ、こんなにも冷え込むなんてことを、いったい誰が予想できただろうか？

「なるほど、ミーア姫殿下は、天馬のご機嫌うかがいが上手いらしいな」

隣を走る、別の部族の者が軽口をたたくが、それに、剛馬は静かに首を振った。

確かに、今の状況はミーアが完全に天候の崩れを読み切って利用したように見える。だが、本当にそうなのだろうか？

勝ち目のない馬合わせの最中に、偶然天候が崩れ、偶然、それを読み切って利用する？　そんな偶然が重なることが、果たしてあり

得るのか。むしろ、これは……。
「まるで、これは天馬に天候を悪化させたようだ」
天の万象を司る馬に命令を下す。そんなトンデモなことを、あろうことか、木族の族長が口にしてしまったものだから、始末に悪かった。
その、トンデモ説は、すぐに周りの騎馬王国の騎手たちに伝わり……浸透した！
彼らの中で、その推測は、こう……ストンと腑に落ちてしまったのだ。
「天馬を従える姫……」
そのように、ちょっとアレなことをつぶやきつつ、彼らは茫然とミーアに視線を向けた。

さて、そんなある種の畏怖の視線を受けているミーアなのだが……、まったく気付いていなかった。
タッタカタ、タッタカタ、という東風の足運びに、ひたすらに合わせることにのみ集中する。
「ふむ、まぁ、悪いペースではない、ですわね。うん……」
などと、自分に言い聞かせつつ、ミーアはひたすら無心に前を見つめていた。
正直、途中までは、
「ねぇ、東風、もしも勝ったら美味しい野菜ケーキなど用意いたしますけれど、どうかしら……？」
なぁんて東風を懐柔しようとしていたミーアだったわけだが、それはもう諦めた。（ちなみに、馬に声をかける姿を見た騎馬王国の者たちは、馬合わせの一番辛いときに、馬を労おうとしているのはさすがだなぁ！　などと大変感心していたのだが、まぁ、どうでもいい……）
そう、ミーアは知っているのだ。無理なものは無理、と。
それは今までさんざん、思い知らされてきたことなのだ。どれだ

け強く命じたとしても、ないものはないのだ。
帝国皇女の権威を以て、強い言葉で命じたところで、わがままを言ったところで、無理なものは無理なのだ。食料もお金も、ないものはない。
そして、足の速さだってまたしかり、である。速く走れと言われても、無理なものは無理なのだ。
「そもそも、わたくしは、走ることに関しては素人。ならば、わたくしにできるのは東風を信じることのみ、ですわ」
そうして、ミーアは東風に身を委ねる。自身にできるのは、ただ、海月のように静かな心で、乗ることのみなのだ。
「それに、急に慣れないことをやっても失敗するだけ。焦るべきではありませんでしたわね」
革命が起きた時、急いで逃げたいからと言って、突然馬に乗れと言われても無理である。
だからこそ、事前に馬に乗れるようにしたのだし、こうして遠乗りの訓練も行っているわけで。咄嗟の時にできることとは、幾度も練習を重ね、体に身に着けたことのみなのだ。
「それと同じこと……。勝ちの目が見えたからと言って、焦りは禁物。今までと同じように、東風に任せますわ」
そうして、いくつかの水場で休憩を挟みつつ、進む。進む。進む。暇なので、東風の歩数をカウントしつつ、進む、進む、進む。
どれぐらい時間がたっただろうか。ふと、空からの日の光を感じて、ミーアは空を見上げた。
いつの間にか雨はやみ、暗雲は千切れ、ところどころから覗く青空からは、温かな日差しが差し込んでいた。
そして、その光に照らし出されるようにしてそびえ立つ丘が見えた。
「あの丘は……もしかして」
「そうです。あの丘の頂上の岩がゴールです」
そばにいた騎手が説明してくれる。

「ああ、ようやく、たどり着いたんですわね。長かったですわ」
「ミーア姫っ！」
と、その時だった！
遠く背後から響く鋭い声が、ミーアの耳に届いた。
「来ましたわね……小驪さん」
ミーアは後ろを振り返る。っと、猛然とこちらに近づいてくる小驪と落露の姿があった。
跳ね上がった泥で顔を汚しつつ、ニヤリと勝気な笑みを浮かべる小驪。どこか吹っ切れた様子の小驪を見て、ミーアもちょっぴり闘争心に火がついて……。
「わたくしも負けませんわ！」
そう言い放ち、それから、ちょっぴり水を吸って重くなった上着を、バサッと脱ぎ棄てる。
そうして身軽になったミーアは、
「行きますわよ！　東風」
実に格好よく、東風に声をかける。
……とはいえ、まぁ、正直なところあまり期待してはいなかったのだ。
相変わらず、東風はマイペースを維持している。落露が本気で走ったら、到底逃げ切れないだろうなぁ、と、そう思っていて……。
直後、東風は嘶き、そして――その身が加速する！
「……はぇ？」
ぐんっと荷重がかかり、一瞬、後ろに吹き飛びそうになったミーアは、慌てて、足を踏ん張り、体勢を保とうとする。
「なっ、ちょっ、きゅ、急に？」
などと言いつつも、前傾姿勢になる。
最後の戦い、坂の攻防が始まった！

第二百四話　勇ましき姫の雄叫びに、観衆は熱狂し

ざか、ざかっと、大地を蹴りつけ……。
びゅびゅうっと、風の壁を割りながら……。
わぁわぁ、っという観衆の熱狂の渦の中を、ひたすらに進む。進む。
吹き付ける風圧の強さに目を細めながら、ミーアは懸命に前方を見据える。
ゴール地点である星草の岩、そこへと至る坂道は、曲がりくねった過酷な道。
馬合わせの最終盤に訪れた過酷な坂道に、迷うことなく、東風は向かっていく。
ぐん、ぐぐんっ。体にかかる加速に、手綱から外れた手が天を掴むように高々と掲げられた。
「ふひゃあああっ！」
っと、ミーアの上げた気合の雄叫びに、坂道の両脇に詰めかけた観衆が、うぉおおお！　と地鳴りのような声援を送る。
……雄叫びというか、実際には、落ちそうになって上げたただの悲鳴なのだが……。
ともかく、勇猛果敢に馬を駆り、坂道を駆け上がるミーアに、人々の興奮は高まる一方だった。
なにしろ、これは、まごうことなき番狂わせ。
誰がどう考えても、先に来るのは落露でなければおかしかったわけで……。それが、蓋を開けてみれば、やってきたのは異国の姫君だった。しかも、荒天の中、荒れた道を走破して、想定外の速さでゴール地点までやってきたのだ。
そんな姫君が、ラストスパートに合わせて、雄叫びを上げたのだ。
盛り上がらないわけがない！

しかも、である。
その後方からは猛然と、対抗馬が追いかけてきているのだ。
盛り上がらない、わけがないっ！
そんな濃密な声援の中を、東風は一心不乱に駆け抜ける。
ゴール地点が見えたこと、背中の重りが若干軽くなったことなどをきっかけに、まるで解き放たれたように、ぐんぐん、ぐんぐん加速していく。
大地を蹴る音が徐々に速くなっていき、ミーアは、懸命にその動きに合わせていた。
「くっ、と、東風、急にやる気になりましたわね」
駿馬、荒嵐を知るミーアにとってもその加速は驚異的だった。
なにしろ、坂道である。にもかかわらず、速度がほとんど落ちていないのだ。
力強く跳ね上がる脚、躍動するしなやかな首筋を見ていると、心強さすら覚えてしまうミーアであった。
「まぁ、いいですわ。あなたの速さにも慣れてきましたし、このままいきますわよ！　東風」
その声かけに、東風が再度、嘶いた。

けれど、そんなミーアの後ろから、ざか、ざかっと足音が近づいてくる。
雨上がりのぬかるみ、泥をはね上げつつ、落露がやってくる。
坂の入り口、その差はおよそ五馬身ほどだ。
「ようやく追いついた、ですの」
鼻の頭を泥で汚した小驪が、ミーアに笑みを浮かべた。
出発前は見惚れるほどだった、美しい仕立ての騎乗服も、ちょっぴりお嬢さま然としたすまし顔も今は鳴りを潜め、そこにいたのは、一人の馬好きな子どもだった。
ただただ、馬に乗って、速く走って、勝負して……それが楽しくて仕方ない、純粋な馬バカの姿が、そこにあったのだ。

「さぁ、勝負ですの！」
ぐいっと、頬についた泥をぬぐって、小驪が言った。
その無邪気で、楽しげな笑みにミーアは勝利を確信する。
勝利――そう、すなわち、最高の条件で負けること。それこそが、ミーアの当初のプランだ。
そして、それが達成された今となっては、ミーアは気楽になれた。
これで気楽に――勝負に挑むことができる。
「負けませんわよ！　小驪さん」
ミーアとて、別に負けるのが好きというわけではない。
たまには、純粋な勝負に興じてみるのも悪くはない、と気合が入る。
「さぁ、勝利して、美味しいキノコ鍋をいっぱい食べて、甘い乳粕酒で祝杯をあげますわよ！」
ちなみに、大切なもう一つの目標であった、運動をしてシュッとするほうに関しては、ぽーんっと記憶の彼方へと放り投げているミーアであった。
ＦＮＹからは簡単には逃げきれないのである。
まぁ、それはともかく……。
落露の接近を察知したのか、東風の耳がピクリ、と動いた。
けれど、その目はただひたすらに前のみを見据えていた。
雨で湿った坂道である。よそ見をするなど論外。堅実に、着実に、ゴールを目指すのみ。それが東風の走りなのである。
こうして二頭の馬は坂道に突入する。
上り坂に入ってなお、東風の脚は力強さを失ってはいなかった。
さすがに、ペースが落ちた落露に対して、東風はほとんど速度を落とさない。体にかかる重さなど、一切感じさせず、まるで飛んでいるかのように、登坂をこなしていく。
それゆえ、駿馬たる落露との差は少しずつしか縮まらなかった。
その差は、およそ四馬身。
これこそがテールトルテュエ種の力。

雨上がりのぬかるみも、大きな石が転がる山道も、上りも下りも、どのような荒れ地であったとしても……！
踏み越え、かまわず駆け抜ける強靭な脚。
苦境に歯を食いしばる――ことすらせず、いつもと変わらぬ走りで応えるタフネス。
帝国が誇るワークホースの名をいかんなく発揮する東風であった。

決して、落露に抜かれることなく、ミーアはついに最後の直線へと辿り着く。
天に伸びる急坂、その頂上にあるゴールを見上げる。
まるで、馬合わせの勝者を祝福するかのように、空には大きな虹がかかっていた。

第二百五話　決着

最後の直線に入ったのはミーアが先だった。が、それを追ってすぐさま落露の姿が現れる。
その差はさらに、じり、じりっと縮まっていく。
――さすがに、速い。それ以上にものすごーく粘り強いですわ！
ミーアが自分の足で走っていたのであれば、坂道を登り始めたところで、ギブアップしているところである。
ふーふーと、落露の熱い息遣いを間近に感じつつ、ミーアはぐぬぬ、っと呻く。
負けても良い状況。とはいえ、後ろからじりじりと追いつめられるのは、あまり気分がよろしくなかった。
さらに、落露は、それでは止まらなかった。一度、距離をとり、大きく膨らむようにして前に出る。ほぼ、真横に並ばれた！
「くっ！　まだですわ。まだ負けませんわ。あと少しですもの！」
ミーアは、東風を叱咤激励しようと口を開き、
「東風ぅううぅうひゃあああ！」
そのタイミングで、東風が加速！　再び、雄叫びめいた悲鳴を上げてしまう。
気迫のこもったミーアの絶叫、それを見た人々はさらに熱狂する。
なにしろ、絶妙のタイミングだったのだ。
それは、勝負の瀬戸際。馬の競争に目の肥えた騎馬王国の者たちから見ても、そこは一つの分水嶺だった。
長い距離を走り、ようやく追いつき、追い抜こうという、そのタイミングでの加速である。それは、相手の心を折りに行く加速なのだ。
「この勝負所で、吠えるミーア姫の姿の、なんと勇ましきことか……。やはり、只者ではなかったか……」

などと、剛馬あたりがつぶやいていたとしても、なんの不思議はなかった。
「まだ、ですのっ！　落露！」
ミーアに対抗するように、小驪も叫ぶ。それに応えて、落露が加速。懸命に東風の後ろに追いすがる。
「絶対に、絶対にっ！　負けない、ですのっ！」
小驪の熱い気持ちに背中を押されるようにして、ぐぐんっと落露の体が前に出る。再びじりじりと距離を詰め、ついにはその鼻先が東風の前に出る。
負けじと、東風、足を速める。
抜きつ、抜かれつの鍔迫り合い。
実力は拮抗。気迫は伯仲。
このような一歩も譲らぬ勝負の場では、しばしば、小さな小さな要因にて、勝負が決することがある。
そして、異変は静かにやってきた。
それは風。坂の上から吹き降ろすような風。朝からずっと吹いていた寒風が、向きを変え、ミーアたちに向かって正面から吹いてきたのだ。
まるで、天に挑まんとする挑戦者を叩き落そうとするような、意地悪な風。その一陣の大風に、真っ向からぶつかるは、低く、地を滑るように坂を上る、もう一つの風だった。
東の風の名を持つ馬は、向かい風に負けることなく、猛然と坂を突き進んでいく。
春を運ぶ春風のごとく、その走りは力強く、のびやかで……。
重さを感じさせぬ走りは、背に翼持つ天馬のごとく、軽やかだった。
顔に当たる強風に、思わず顔を伏せるミーア。
「東風、任せましたわよ！　突き進みなさい！」
ミーアの指示に応え、ひときわ大きく東風が嘶いて……。勢いそのまま、ゴールへと飛び込んだ！

刹那の静寂……直後の大歓声！

反射的に顔を上げた時……、横には落露と小驪の姿はなくって。

慌てて、後ろを振り向けば、遅れて入ってくる小驪たちの姿が見えて……。

「ああ……私、負けた……ですの？」

脱力した、茫然とした顔でつぶやく小驪が見えて、思わずホッと胸を撫でおろしそうになった――次の瞬間だったっ！

「あ……」

びゅうっと強く吹き付けてくる風。それに押されるようにして小驪の体が後ろに傾(かし)いだ。

「え……？」

それは、すべてが終わった瞬間に生じた、ほんのわずかな心の隙。

吹き付ける冷たい風、二日間の行程によって、その身は、小驪自身が思っている以上に消耗していたようで……。

「小驪さんっ！」

慌ててミーアが伸ばした手。けれど、当然のごとく小驪に届くことはなく……。

風に吹き飛ばされるようにして、後ろ倒しになった小驪の体は、頭から地面へと落ちていき……そうになって！　その時だった！

「我が友、ミーア姫の勝利に、ケチはつけさせない」

凛々しい声の直後、灰色の影が駆け寄った。小驪の襟首をくわえると、そのまま、強引に着地を決めたもの、それは……一匹の大きな狼だった。

地面に尻もちをついた小驪は、目をまん丸くして、目の前の獣を見つめた。

「あ……あ、お、おお、かみ……？」

その顔が見る間に青く染まっていく。騎馬王国の者たちが慌てて、小驪に駆け寄ろうとするが……。

「い……今の、私を、助けてくれた……ですの？」
小驪は、震えながらも狼を、そして、歩み寄ってくる少女、火慧馬のほうを見た。
「対戦相手のお前が怪我でもすれば、ミーア姫が素直に勝利を喜べなくなるからな。友として、見過ごすことができなかったのだ」
「そう……ですの。あの、慧馬さん、この狼、撫でても平気、ですの？」
「ああ。噛みついたりはしない……、はずだ」
「……そう……ですの。ん？　はずっ！？」
驚いて飛び上がる小驪に、慧馬は明るく笑いかけた。
「ははは。冗談だ。我の命令がなければ噛みついたりはしない」
「……冗談が冗談になってないですの」
小驪は、はぁ、っと疲れたようなため息を吐き、それから、狼の首筋を撫でた。
「助けてくれて、ありがとう、ですの」
そのお礼に、狼は、どこか他人事のように顔を背けると、ふわぁあ、っとあくびを返すのみだった。

かくて、馬合わせの帰趨は決した。帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンの吹かせた東風が、騎馬王国になにをもたらすのか。
知る者はまだ、一人もいなかった。

第二百五話　決着（後書き）

昨夜、活動報告を更新しました。
特典情報が載っております。ご興味のある方はチェックしてみてください。

第二百六話　妄想の天馬に乗って！（前書き）

ちなみに、馬合わせのコースは、

〇ゴール

〇野営地点チェックポイント

〇スタート地点

こんな感じでチェックポイント経由型のコースを想像していただけると……。

スタートからゴールまで直行したら先回りできるよ！　ということで一つ……。

第二百六話　妄想の天馬に乗って！

「ああ……よかった。一時はどうなることかと思ったが……」
慧馬に助け起こされる愛娘、小驪を見て、山　富馬は深々と安堵の息を吐いた。
「いやいや、大変な馬合わせになりましたな。富馬殿」
のんびりとした口調で話しかけてきたのは、馬合わせの結末を見守っていた、族長最年長の光馬だった。
「まさか、このような結果になろうとは。雨に、寒風。想定外のことが多い馬合わせであった」
「そう……ですな」
何事か考え込む様子の富馬に代わって、答えたのは、剛馬だった。
「あの雨がなければ、ミーア姫は勝てなかっただろう。それほどに落露は優れた馬だった。だが、結果はこうなった……」
随伴の騎手として、間近で勝負を見守った彼は、訳知り顔で開陳する……自らの、推測を！
「この勝利は、すべて、ミーア姫が積み上げてきた、細かな計算に基づくものだろう。初日、慣れない川原での勝負に誘導したことが、すべての始まりだった」
普通に平地を走られては圧倒的に不利。しかし、川原ならば、騎乗者の腕は問われるものの、箱入りの落露よりは、帝国の馬のほうが有利だった。
「小驪は地の利は自分にあると思っていたようだが、違ったのだ。あの時のミーア姫は、ひどく楽しそうな顔をしていたよ。まるで、自分の企みが上手くいった子どものような、無邪気な顔をな」
馬の競争は駆け引きだ。相手の力をいかに封じ、自分の馬の力をいかに引き出すか。その読みあいである。そして、自らの狙いが上手くいった時の楽しさを知らぬ者は騎馬王国にはいない。

「そして、川原での勝負で一杯食わされたせいで、小驪は冷静さを失った。結果的に、ミーア姫の、帝国の馬の特性を見誤って挑発に乗ったのだ。あの馬は速い馬ではないが、強い馬だった。たぶん、自身の群れが襲われた時、あの馬は、おそらく生き残るだろう。逃げ足が一番早くなくともしぶとく生き抜く、そんな図太さが感じられたからな。ああいう馬は、走る場所を選ばない」

東風に関する分析を、訳知り顔で語った後、剛馬は難しい顔で言った。

「だが、それでも差は埋まらなかっただろうが、二日目の、あの雨がなければな……」

雨により騎手である小驪の体は冷え切ってしまった。馬に乗り続けることが不可能なほどに。対して、ミーア姫はきちんと備えていた。

馬自体の特性もあったのだろう。帝国の馬の走りは、寒さにもまるで変わらなかった。

「そして、ミーア姫は一貫して無茶な走らせ方をしなかった。あの馬の特性を理解して、知り尽くしたうえで、最後の坂まで体力を温存させた」

……そうだっただろうか？

「雨でぬかるんだ坂道は余計に体力を使う。それを見越したうえで、馬を励ましながら堅実に進ませたんだ」

……そうだっただろうか？

「一方で、落露は差を詰めるべく、無理をした。体力が削られて、最後の最後で走りに伸びを欠くことになったんだ。落露が万全の状態であれば、こうはならなかっただろう」

あるいは、この最後の坂道がぬかるんでいなければ、普通に走りやすい道であれば……。

あるいは、初日に無茶な攻めを行わず、落露の体力を温存しておけば……。

あるいは、雨に濡れ、焚火に当たる時間がなければ……。

いくつもの仮定。その一つでも実現していれば勝敗は違っていたのだろう。
二日間の馬合わせ、積み重なる不利な要素のすべてが、落露から走る力を奪っていたのだ。
それとは、反対に、東風は二日間、この最後の最後に至るまでずっと自分のペースを守り続けた。どのような事態にも対処できるよう、常に体力を温存した。
その結果が、馬合わせの勝敗に直結したのだ。
「なるほど。ミーア姫は、この天候まですべて見越してあの馬を選んだということか。天馬と言葉を交わすとの噂もあるが、あながち嘘ではないということか」
感心した様子の馬優に、
「あるいは、天馬を説得して天気を変えるぐらいのことはできるかもしれぬぞ」
大真面目な顔で、少々アレなことを言いだす剛馬。それに……、
「異国より来たりし、天馬の姫。我らに調和をもたらさん……」
最も分別を持つはずの最年長、風族の族長、光馬が乗る！
実にもっともらしい発言に、驚いた様子で問いかけるのは馬優だった。
「そのような言い伝えがあるのですか？」
「いいや、過去にはない。が、百年後にはそうしたものができているかもしれぬな」
穏やかな笑みを浮かべる光馬である。実に……実に！　楽しそうである。
「まぁ、いずれにせよ、雨という想定外も含めて、ミーア姫が言いたかったことなのだろうて」
「ん？　どういう意味でしょう？　光馬老」
不思議そうに首を傾げた剛馬に、光馬はあくまでも静かな表情で答える。
「わからぬか。姫は、我ら騎馬王国の民が陥った高慢さを非難され

ているのだ。馬に貴賤はなし。姫が言ったという、その言葉を証明するような結果ではないか」
光馬は、まるでまぶしいものを見つめるように瞳を細めて、遠く、ミーア姫の乗る馬を見た。
「我らは月兎馬をはじめとする駿馬を貴いものと考える。されど、本来、馬はすべて天から授かりし宝なのだ。それに優劣をつけようなど、おこがましいことではないか」
「馬に貴賤はなし……か」
難しい顔で、呆然とつぶやく富馬に、光馬は語り掛ける。
「月兎馬には月兎馬の強さがあり、帝国の馬には帝国の馬の強さがある。それは、異なる特性であり、そこに優劣などない。ある状況においては、帝国の馬のほうが優れた結果を出すのだと、ミーア姫殿下は言っておられるのではないかな。我らが、我らの価値基準で、馬の優劣を論じるなど高慢なことと、そう言っているのではないか……そして」
と、そこで彼はそっと目を閉じて……。
「そして……狼を使う火の一族を受け入れられぬという我らの狭量さをも、おそらくは指摘したかったのであろうよ」
深々とため息を吐いた。
「光馬老、それは……」
「狼を使う者たちと、同じ道は歩めぬと……それは、そこまで絶対的なことであろうか？　我らの持つ価値観は、しきたりは……、血のつながりを、兄弟を、否定するほどに強固なものであろうか？」
老人の自問自答は静かで、されど、鋭い。
「ミーア姫は、馬合わせの結果を以てのみ、我らを説得しようとしているのではない、と、そういうことでしょうか？」
馬優の問いかけに、頷いて見せたのは、ミーアの走りを誰よりも間近で見た剛馬だった。
「なるほど。確かにな。あれだけ馬を熟知したミーア姫だ。もしも勝つだけが目的ならば、ここまで苦労して勝負をする必要がなかっ

た。それを、あえて悪路に強く頑丈な、帝国の馬を選び、その馬が活躍するような走りをしたのだろう」
ミーアの走りを誰よりも間近で見ていたはずの剛馬は証言した。
「あれは紛れもなく馬を知り尽くした賢者の走りだった」
誰よりも間近で見ていたはずなのに……断言した！
「しかしそれは雨が降らなければ、そもそも、その思惑は成り立たないではないか」
極めて常識的な異を唱える馬優にも、自信満々に首を振って見せる。
「だから、言っただろう。天馬に雨を降らせたのだと」
「天馬に……」
ミーア＝天馬姫説が、にわかに真実味を帯びつつあった！　大変なことである！
「天馬を従える姫……天馬の姫か」
思い出されるのは、あの最後の坂の勝負だ。
まるで天馬に乗ったかのように、ぐんぐん上ってくるミーアと馬の姿。あれは、まさに天馬に乗る姫の姿で……。
「天馬を従える……異国の姫、か。なるほど、そうなのかもしれない」
こうして、冷静な知者……であるはずの馬優までもが……楽しい妄想に乗ってしまった！
かくて、騎馬王国の名だたる族長たちは、無邪気に妄想の天馬に乗って飛翔するのだった。

第二百七話　待望の人脈

さて……無事に馬合わせを終え、地上に降り立ったミーアに、歩み寄る者がいた。
「ミーア姫、見事な馬合わせでしたな」
それは山族の長、山　富馬だった。
「ああ……。富馬殿」
素直な賛辞に、いささか当惑したような顔で、瞳を瞬かせるミーア。それも無理のないことだろう、と富馬は苦笑する。
彼自身、まさか、こんなに晴れやかな気持ちになるとは思ってもみなかったのだ。
――落露を手放すなど、死んでもごめんだと思っていたが……。
静かに目を閉じると、浮かんでくる光景があった。
それは、楽しげな娘たちの姿だ。
はじめは、落露の毛並みが泥で汚れることを不快に思っていたのだ。せっかく綺麗に手入れして、大切に育てているのに、あんな走り方をして、と、怒りすら覚えたのだ。
だが……小驪が楽しそうに落露に乗る様子を見て、生き生きと野を駆ける落露を見て――富馬の胸に、ある感情が生まれていた。それは……。
――俺も、馬に乗りたい！　今すぐに！
これである！
……いや、もちろん、当たり前のことながら、実の娘である小驪が幸せそうに馬に乗るのも、小驪を乗せて楽しそうに走り回る真(ぎり)の娘、落露の姿も、心にグッとくるものはあったのだ。あったの

だが……それ以上に胸にこみあげてきたのは、騎馬王国の民としての感情だった。
自分も、馬に乗って、あんな風に熱い勝負がしたい。
いったい、いつから自分は、馬に乗って走る楽しさを忘れていたのだろうか？
足が速かろうが、遅かろうが、そんなことは、本当はどうでもよかったのだ。
ただ無心に馬に乗って走る。どんな馬でも構わない。それだけで胸は高まり、楽しさがこみ上げる。そんな当たり前のことを、忘れていたなんて……。
――俺もあのように、血が沸くような、限界ぎりぎりの勝負がしてみたいものだ。
ミーアと小驪の、純粋な勝負が富馬の胸に甦らせた感情。
それは、幼き日に覚えた衝動。
馬とともに、いつまでも、どこまでも遠くへ。
馬とともに、鳥よりも、風よりも疾く駆けたい、と。
今すぐにでも馬に乗りたいという衝動を抑えながら、富馬はミーアに深々と頭を下げる。それは、素直なお礼。
久しく忘れていた、人生の喜びを思い出させてくれた恩人への、心からのお礼。そして、
「悔しいが、駿馬である落露に相応しいのは、ミーア姫殿下のようだ。潔く、落露を譲ろう」
どこかスッキリした気持ちで、富馬は言った。

――ああ、例の取り決めですわね。
殊勝な態度で話しかけてきた富馬に、目を白黒させるミーアであったが……すぐに、その意図を察する。
――ははぁん、なるほど。富馬さんも、わたくしと同じことを考えておりますわね。
馬合わせが終わればノーサイド。恨みっこなしにするのが、後々

のため。
富馬はそう訴えて、落露を手放さなくて良いようにしたいのだろうと、ミーアは敏感に察していた。
人は、心に一つの眼鏡を持っている。その、価値観という名の眼鏡を通して、相手を見るのだ。
――まぁ、でも、確かにそうですわね。ここで落露をもらったとしても、後々に禍根を残しそうですし。ここは恩を売るために遠慮をしておくのがベストですわ。
素早く計算してから、ミーアは穏やかな笑みを浮かべる。
「ええ。その取り決めについてはもちろん知っていますわ。求められれば、譲らなければならない。されど、対戦相手であるわたくしが求めなければ……」
「それは……我が落露がいらないということ……ですかな？」
不意に、声が低くなる。
見れば、一転、富馬がギロリと睨んでいた。
――ああ、これ、面倒くさいやつですわ！
もらったらもらったで恨まれるし、断ったら断ったで恨まれる。八方ふさがりな状況に、ミーアは頭を抱える。
そもそも、別に落露は欲しくないミーアである。逃げるならば、荒嵐を借りてくればよい。それに、東風も頼りになることが証明されたわけで……。恨みを買ってまで落露をもらう必要などどこにもないのだ。
俺様系の馬か、頼りになるお兄さんタイプの馬のほうが、どちらかというとミーアの好みに合うのだ！
――落露はなんというか、お嬢さまで、少し頼りない感じもしますし。
なにも考えずに乗っていたら、きちんと逃げてくれないような、そんな予感がするのである。
でも、ここで断ることは、馬の価値を認めないことに繋がってしまって、それはそれで相手の機嫌を損ねるという……きわめて面倒

な状況だった。
――困りましたわね。馬に乗らないので興味がない、などと言うこともできませんし。こうして、わたくしが騎馬王国の方々にも劣らぬ優れた乗り手であると証明してしまった以上は……。
若干調子に乗る、海月式乗馬術の開祖ミーアである。
なんとか、相手のプライドを傷つけずにお断りする方法はないものか……ミーアは思案する。
――つまり、要は「本当はもらいたい」という気持ちを表明しつつも、固辞する必要があるわけですわね。うーむ……それなら……。
刹那の思考。その後、ミーアは口を開く。
「落露が素晴らしい馬であることは疑いようもない。それは、ともに馬合わせを戦ったわたくしが、一番わかっておりますわ」
まずヨイショ。これが基本。そのうえで、
「しかし、その素晴らしさは、小驪さんが乗ってこそのもの。そうではなくって？」
付け加える。もらわなくても良い理由を。
落露は素晴らしい馬。けれど、それは“人馬一体の素晴らしさ”であると。
すなわち、その素晴らしさはミーアの手元に来た時点で半減してしまうのだと……訴えるミーアである。
巧みに、ヨイショに、馬をもらわなくて済む理由を上手く絡めていく。
それに対して、富馬は……驚愕に目を見開いていた！
「なっ……！　そっ、それでは、小驪もろとも、自分に差し出せと言うのか！」
とんでもないことを言い出した！　そして、それに静かに頷くのは……小驪だった。
「父上……。私も、ミーア姫と腕を競い合った身。敗残の身には何を言う資格もない、ですの。ミーア姫が求めるのであれば、私は潔くこの身を……」

「違いますわ！　わたくしは、帝国の姫。そのような、人買いのようなことを言うはずがございませんわ！」
光の速さで否定するミーアである。なんだったら、光の速さを超えて、若干、遡行気味に反論を繰り出す、時の超越者ミーアである。
――何てこと言い出すんだ、こいつらっ！
それから、ミーアはアワアワとあたりを見回した。
聖女ラフィーナに、自分が人買い同然の発言をしている、などと思われるのは、絶対避けたいところであった。
そんな発言をしたが最後、ギロチンが徒党を組んで襲ってくるに違いないのである。
……けれど、不思議なことに、ラフィーナの姿は、どこにも見えなかった。それどころか、なぜか、ルードヴィッヒやアンヌ、ベルの姿も見当たらない。
――はて、なにかあったのかしら？
首を傾げつつ、とりあえず、目の前の問題を処理しようと、ミーアは気持ちを切り替える。
「そうではありませんわ。富馬殿。わたくしは、小驪さんと落露との絆に感銘を受けましたの。そして、わたくしもまた、東風との間に絆を築いている、その絆というのがどういうものであるかは、みなさまほどではないにしろ、わかっているつもりですわ」
ミーアの発言に、感慨深げに頷いている一団があった。
それは、馬合わせ二日目に、ミーアに随伴した者たち。
ミーアが「東風、もうちょっと速く走ってくれないかなぁ、ケーキとかご褒美あげるって言ったら速くならないかなぁ」などと思いつつ、必死に話しかけている姿を見て、感動してしまった人たちである。
「ご謙遜ですな。ミーア姫。我々は姫が、疲れた馬をどのように労っておられたか、しっかりと見ておりました。ミーア姫と、あの馬との間にある強い絆を否定する者はおりますまい」
「……ええ。そう言っていただけると嬉しいですわ」

一瞬、なんのことを言ってるのかしら？　と思わないでもないミーアだったが、とりあえず、頷いておく。そして、咳ばらいを一つして、

「えーと、そう。ともかく、その絆はとても貴重なもの。人と馬とは別ちがたいものですし、愛馬との絆は誰であれ、引き裂くべきではない。そう思っておりますの。だから……」

ミーアはここで、周りの者たちを見る。

いつの間にか、ミーアの周りには、その言葉に耳を傾ける騎馬王国の者たちの姿があった。彼らはみな、好意的な、優しい、馬のような瞳でミーアを見つめていた。

今ならば……なんだか、なにを言っても聞いてもらえるような気がする！

ミーアは一歩踏み込む。

「わたくしが求めるのは、絆を引き裂くことではなく、新たに絆を作ることですわ」

そうして、ミーアは小驪のほうに目を向けて、

「わたくしが困った時に助けてくれるような、素敵な、お友だちを求めておりますの」

ミーアが求めるのは同盟関係とは少し違う。利害の一致によって成り立つ、国と国との関係、その必要性は理解できるものの……正直、頭を使うのは面倒なのだ。

そのあたりのことはルードヴィッヒに任せておきたいところである。

ミーアが求めるのは、もう少し都合がいいもの。複雑な利害を度外視した友情である。

よくよく考えれば、騎馬王国の南都は実に良い立地である。帝国でなにかあった際、脱出の途中で立ち寄るには非常に良い場所なのだ。

――騎馬王国の方は頼りになりそうですし、ここはなんとしても、友情関係を築いておきたいところですわ。

そうして、ミーアは小驪のほうを見た。
「だから、小驪さん……もしよろしければ、わたくしのお友だちになってくれないかしら？」
ミーアの視線を受けた小驪は、ほわぁ……っと吐息を吐いてから、無言で頷くのだった。

かくて、ミーアは待望の人脈を得たのだった。
国民すべてが腕利きの騎兵といえる騎馬王国に……。
騎馬王国の南東、レムノ王国に対して影響を行使できる人脈を……。

第二百八話　ミーア姫、念を押す。そして……

さて、山族とのことを片付け終えたミーアは、改めて、風光馬のほうへと向かった。

彼がたたずむ星草の岩のそばには、ちょうど他の部族の族長たちも集まっていた。

好都合である。

――負ける覚悟だったから、どうやって話を進めるか、まったく考えておりませんでしたけど、せっかく勝った以上はきちんと念を押しておかなければなりませんわね。

ミーアは鼻息荒く族長たちのところへと歩み寄った。その途中、ふと、自身に注がれる周囲の視線に気が付く。なんだか、みんな……キラキラした目で見つめていた！

――ふむ、まぁ、わたくしは一応、馬合わせの勝利者ですし、注目を集めるのも当然ですわね。

などと、ちょっぴり悦に浸るミーアだったが、すぐに、気を引き締める。

――デザートのケーキを食べ終えるまでが会食と言いますし。最後まで油断は禁物ですわ。

謙虚に。謙遜に、慎ましく……。

ここで、実力で勝ったから自分の言うことを聞け、などと敵を作ることを言ってはいけない。勝利は心地よいものであったが、ここで美酒に酔うようなことがあってはならない。

「さて、族長の方々、そして、馬合わせを見守ってくださったみなさま」

まず族長たちに、そして、周りで見守るすべての人々に聞こえるように、ミーアは呼びかける。

「馬合わせでは天が味方してくれて、わたくしが勝つことができま

した。いえ、天だけではなく、途中途中で、様々なことが味方してくれましたの。決して、わたくしたちの実力で勝ったとは、わたくしは思っていませんわ。小驪さんと落露は、最高の乗り手、最高の駿馬でしたわ。どうか、彼女たちにも賞賛の拍手をいただきたいですわ」

きちんと小驪たちを持ち上げておいて……。

「そのうえで、馬合わせによって、結果が出たのもまた事実。このうえは、みなさまの偉大なる始祖、光龍殿の言葉で語らせていただきますわ。『意見を争わせるのは馬合わせの中でのみ……。その後は示された結果に従って協力せよ』と」

火の一族を受け入れることは、すでに決定しましたよ、と確認しつつ、そこに、ちゃっかり小驪から聞いた話も盛り込む。彼らの大切な始祖の言葉で念を押す！

借りることのできる威は、なんの威でも借りる。他人の威で語るのはミーアの常套手段である。

「わたくしは確信しておりますわ。同じ始祖を持つ騎馬王国十二部族のみなさんと火の一族の方々とは、きっとまた手を取り合うことができるはずだ、と」

それから、ミーアは一度言葉を切って、静かに思案する。

――馬合わせの結果と始祖の権威……これだけで、彼らの説得は可能かしら？

しばし考え……結論を出す。まだ足りない！　と。

思いつくのは「実際にやってみたら、無理でした！」という類の言い訳だ。そんな言い訳を、革命期に何度か耳にした記憶があるし、ミーア自身も割と言ったことがある。

であれば……！

ミーアは静かに目を開け、付け加える。

「むろん、苦労はありましょう。忍耐を必要とすることもあるはずですわ。それは、今から見えていること。予想ができること。されど、いつかは……」

呼吸を整えて、胸に手を当ててミーアは言う。
「いつかはまた、一つの民として歩みだせると、わたくしはそう信じておりますわ。だからこそ、みなさまにお願いしたいのは、不断の努力。決して諦めず積み上げていくことですわ」
やってみて、ダメだった……で終わらないように、とミーアは言う！
馬合わせでこういう結果が出たんだし、始祖もそれに従えって言ってんだから、できなくっても、簡単に諦めるな。きちんと努力しろよ、最後まで！　とミーアは念を押しているのだ！
「そうして、再び、十三部族となった騎馬王国と、我がティアムーン帝国とで、より良い関係が築ければいいと、わたくしは思っておりますわ」
騎馬王国は特殊な国だ。
国王と呼ばれるものはなく、いるのは、十二人の族長である。だから、一人の族長と仲良くなればいいわけではない。
ここで、すべての部族の族長が集まっている間に、友好関係を築いておけば、後々楽になるだろう、と、精一杯アピールしておく！
「小驪さんだけではない。すべての部族の方々と、わたくしは友誼を結びたく願っておりますわ」
朗らかに高らかにそう結ぶ。
――決まりましたわ！　完璧ですわ！
などと、自己満足に浸っていると、ちょうど、遠くからルードヴィッヒが走ってくるのが見えた。
――ふふふ。今回は上手くできたはず。仮に今走ってきているのがクソメガネであっても、文句をつけられることはあり得ませんわ。
などと確信を抱いていたミーアだったが、ルードヴィッヒの厳しい表情を見て、すぐに不安になる。
――あ、あら？　わたくし、もしや、なにか間違えたのでは……？
などと、おどおどと視線を惑わせていると……。
「ミーア姫殿下……申し訳ありません」

開口一番、ルードヴィッヒは頭を下げた。
「え、えーと、なにかありましたの？」
「昨夜、シュトリナさまが行方不明になりました」
「……はぇ？」
突然のことに、ミーアは口をぽっかーんっと開ける。
「なっ、え？　それは、いったい、どういう……」
などと混乱するミーアだったが、続く言葉で頭が冷える。
「見張りを担当していた皇女専属近衛兵（プリンセスガード）から、この件が終わり次第責任を取りたいと……」
とんでもない言葉に、危機意識が刺激される。
「わかっておりますわね？　ルードヴィッヒ。そのようなことは不要。もしも自らが失敗したと思うのであれば、功績をもって贖うようにと伝えなさい」
皇女専属近衛隊は、ミーアの命綱である。一人減るごとに、その綱がやせ細っていく恐怖に、ミーアのリトルハートが耐えられるはずもない。
「ともかく急ぎ、見つけ出す必要がありますわ。騎馬王国の方々にも協力していただきましょう」
そう言って、ミーアは、新しくできた友だちのほうに目を向けるのだった。

第二百九話　巫女姫とシュトリナ

深い森の奥。忘れ去られた廃城、蛇の拠点にて。
蛇の巫女姫、ヴァレンティナ・レムノのもとに、その日、珍しい客人が訪ねてきた。
ちょうど、テーブルでお茶を楽しんでいたヴァレンティナはやってきた男、火燻狼（かくんろう）に優しげな笑みを浮かべた。
「お久しぶりね。燻狼。まさか帰ってきてくれるとは思ってなかったから、驚いたわ」
「おや、巫女姫さま、それは、あんまりな言いよう。ここは、あなたの家、いつでも帰ってきていいのだと、そう温かく送り出してくれたあなたは、どこへ行かれてしまったのです？」
「ふふふ。相変わらず、愉快な記憶違いね。燻狼。あなたを送り出したのは、火の一族の里でしょうに……。もちろん歓迎はしますよ……だけど」
と、ヴァレンティナは、その目を燻狼の隣へと移す。
「駄目よ？　女の子にそんなひどいことをしたら……」
視線の先、そこには、椅子に座らされた一人の少女の姿があった。愛らしい蜂蜜色の髪の少女、帝国四大公爵家が一つ、イエロームーン家の令嬢、シュトリナ・エトワ・イエロームーンは、華奢な両腕を、後ろ手に縛られて、身動きを封じられた。もぞもぞと、居心地悪そうに身をよじるシュトリナ。その口から声が出ることはなかった。
口には痛々しくさるぐつわが噛まされ、その目には目隠しが巻かれていたからだ。
「そんな風にいじめたら可哀そうよ」
咎めるように言うヴァレンティナに、燻狼は、実に嫌そうな顔をした。

「やめてくれませんかねぇ。ジェムやバルバラと一緒にされたらかなわない。あの二人なら、腹いせに乱暴に扱うんでしょうが、俺は別に、意地悪でやってるわけじゃないですよ？　舌でも噛まれたら、面倒だと思ったんでね」
「その心配はないでしょう。その子は、自分が死んだら、ミーア姫殿下が困ったことになるって、ちゃんとわきまえているでしょう」
　そう言われ、燻狼は怪訝そうに首を傾げる。
「そうですかね？　でも、このお嬢ちゃん、食う物も食べないし、水も無理やり飲まさないとダメだったぐらいですぜ？　てっきり世を儚んで死のうとしてるものとばかり……」
　その言葉を証明するかのように、シュトリナの寝巻の襟首には、わずかにシミができていた。
「まだまだ、人の心の把握が甘いわね。それは、あなたに毒を盛られると思ったからではないかしら？　おおかた、彼女の意識を奪うのに怪しげな薬でも使ったのでしょう」
　呆れた様子でため息を吐いて、ヴァレンティナは静かに立ち上がる。その拍子に、長い黒髪が、しゃなり、と美しく揺れた。
　そのまま彼女は椅子に座らされたシュトリナのそばに立つと、かがみこみ、丁寧な手つきで、口に噛ませてあった布紐を外す。
　苦しかったのか、ぷは、っと小さく息を吐くシュトリナ。
次いで目隠しを外すと、長く目を塞がれていたからだろうか。まぶしそうに、目を細めた後、シュトリナはあたりを見回しつつ、眉間にしわを寄せた。
「ここ……は？」
　けほ、っと、せき込んでから、かすれた声で言う。
「ここはね、混沌の蛇の拠点の一つ。レムノ王国からあまり離れていない場所にある、森の奥深く。廃城を利用しているの」
　すらすらと、歌うように言ってから、巫女姫ヴァレンティナは、華やかな笑みを浮かべる。
「そして、私はヴァレンティナ。ヴァレンティナ・レムノ。蛇の巫

女姫のヴァレンティナよ」
「……ぇ？」
ぼんやりと話を聞いていたシュトリナだったが、直後、その言葉の意味を理解したのか、瞳を大きく見開いた。
「あーあ……。せっかく、目隠ししてきたのに、そんなに話しちまったら、生かして帰せないでしょうに」
こともなげに肩をすくめる燻狼に、ヴァレンティナは首を振った。
「だから、ご令嬢を脅かすようなことを言ってはだめよ。燻狼。せっかくあなたが生かして捕らえてきたのだから、もちろん無駄に殺すようなことはしないわよ」
っと、優しい口調でそう言ってから、ヴァレンティナはシュトリナのほうを見つめた。
「ちゃんと生きたまま、有効に使わせてもらうわ。いいことを思いついたから……あら？」
そこで、ヴァレンティナは何かに気付いたのか、シュトリナの細い首筋に指を伝わせた。びくん、っと震えるシュトリナの、首にかかった細い紐……それを指先に引っ掛けるようにしてつまみ上げる。
「あら……これは」
「あっ……」
シュトリナの小さな声。無視して、するする、と紐を引いていくと、その襟首から現れたものは……。
小さな馬のお守り（トローヤ）だった。
「ふふふ、まぁまぁ。蛇を裏切ったとは思えないぐらい可愛らしい趣味ね」
ぷつん……と紐を引きちぎり、ヴァレンティナは、手の中の馬のお守りをもてあそぶ。
「あ、だめ。返して……ください」
慌てた様子で言うシュトリナに、ヴァレンティナは楽しそうに笑いかける。
「ふふふ、だーめ」

まるで、子どもをからかうような気安い口調で、馬のお守りを揺らしてから、
「これは、貴女の心の支えになりそうだから、返さない。だって、たぶんこれがあると、あなたの心を……へし折れないでしょう？」
上目遣いにシュトリナを見つめる。その目つきは、冷たい蛇のようだった。
けれど、それもすぐに変わる。その目はすぐに悪戯っ子のような、無邪気なものへと変わって。
「ふふふ、なぁんてね。冗談よ。これを返さないのはね、これを送って、あの子を呼び出そうと思ってるから」
「あの子……？」
「決まってるでしょう。帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンを、よ」
それから、ヴァレンティナは、馬のお守りを、燻狼に渡してから、
「準備が整うまでは、あなたには、ここにいてもらうことになるわ。あ、そういえば、あなた一人で着替えたり、身の回りのこと、できるかしら？　粗野な方でよければ、誰か身の回りの世話につけることもできるけれど……」
そう言って、ヴァレンティナは燻狼のほうに目を向ける。それに気付いて、シュトリナはブンブンと慌てた様子で首を振った。
その、かすかに青ざめて、怯え切ったような顔を見つめてから、ヴァレンティナは、シュトリナの頬に手を伸ばした。
そっと労わるように、彼女の頬を手のひらで撫でて……、
「怯えた顔もとっても可愛らしいけれど……ふふふ。でも、それ、半分は演技、よね？」
真正面から、シュトリナの目を覗き込む。
「さっき、目隠しをされて猿ぐつわを噛まされていた時にも、私たちの会話にきちんと耳を傾けていた。どうやって情報を引き出して、自分に有利な状況を作ろうか、きちんと考えてたでしょう？　おお

かた、今も監視をつけられずに済む、とかそういったことを考えているのじゃないかしら？　怯えた態度で油断を誘おうとしているのよね？」
　瞬間、すとんっとシュトリナの表情が消えた。けれど、すぐに、その顔は笑顔に変わる。愛らしい、野に咲く花のように可憐な笑みだった。
「なんでもお見通しなんですね。巫女姫さま。人の心を読めるという噂は本当なんですか？　それに、お名前からすると、レムノ王国の王族の方……それとも、そうリーナに思わせたいのかしら？」
　上目遣いに、探るように見つめてくる。
「あらあら、さすがは、かのイエロームーン家の星持ち公爵令嬢。心が強いのね」
　ヴァレンティナは、ぱちぱちと拍手をしながら笑った。
「そうね。名を偽っているならば、あなたにとっては好都合でしょう。それは、あなたに偽りの情報をミーア姫のところに持って帰らせよう、ということになるでしょうし。でも、残念。私は正真正銘、レムノ王国の第一王女、ヴァレンティナ・レムノよ」
「それをリーナに明かすことに、なにか意味があるのですか？」
　きょとりん、と可愛らしく首を傾げるシュトリナ。
「それを教えてあげてもいいけれど……。そうね。せっかくゆっくり話をするなら、お茶会をしましょうか。慧馬さんとしようと思っていたのだけど、あなたとも一度じっくりとお話ししたいと思っていたのよ」
　ヴァレンティナは、いたずらっぽくウインクして、
「ここには、粗野な人しかいないから、お茶飲み相手に飢えてるのよ。もしも、付き合ってくれたら、なんでも教えてあげるわよ」
「ふふふ、わかりました。まさか、巫女姫さまにお誘いいただけるなんて、すごく光栄です」
　そうして、シュトリナは可憐な笑みを浮かべる。完璧な、誰からも愛される少女の笑み。そんなシュトリナに、ヴァレンティナは、

満面の笑みのまま顔を寄せて、その小さな耳元で……囁く。
「でもね、その前に……」
シュトリナの体が、かすかに緊張に強張るのが分かった。それを確認してから、ヴァレンティナはからかうように、ゆっくりとした口調で言った。
「お風呂に入るのが先ね。あなた、少し汗臭いわよ？」
「なっ……！？」
思わぬ指摘に、シュトリナの顔が、ひくっとひきつる。直後、その頬が、ほのかに赤く染まる。それは羞恥と怒りに彩られた、むき出しの少女の感情。
シュトリナの〝作ったような可憐な笑み〟の奥にある素の心に届きうる足がかり。
まるで蛇のように、音もなく、ヴァレンティナは、そこに踏み込む。
「そんなのではお友だちにも嫌われてしまうわよ？」
その指摘に、けれど、シュトリナは堂々と首を振った。
「そんなことない。ベルちゃんはこんなぐらいで、リーナのこと嫌いになったりは……あ……」
顔を上げ、ヴァレンティナを睨みつけるシュトリナ。けれど、直後に、その顔に焦りの色が広がる。なぜなら、
「ふふふ、そう。ベルちゃんていうの。そのお友だち、とっても大切な子なのね？　もしかして、あの馬のお守りを作ったのもその子なのかしら？」
「……っ！」
シュトリナは、唇を噛み、黙る。ヴァレンティナと目を合わさないように、そっとうつむいた。
「あはは。愛らしいほどに賢明ね。これ以上、情報を漏らさないように黙るのは、正しい。本当は、全然突かれても痛くないって態度が取れればなおよかったけど、それでも合格点ね」
笑いながら、ヴァレンティナは、再びシュトリナの目を覗き込む。

「もっとも……蛇の巫女姫は、心を読めるかもしれないけど……？」
「……」
黙り込み、逃げるかのように目をギュッと閉じるシュトリナ。しばし、彼女を観察したヴァレンティナは、ゆっくりと立ち上がる。
「そう、そんなにそのお友だちが大切なのね。なるほど。あなたは蛇にはなれないわね。大切なものを後生大事に抱えていては、蛇にはなれないから」
それから、ヴァレンティナは、歌うように言った。
「ああ、お茶会。とても楽しみ。たくさんお話をしましょうね」

第二百十話　息を吸うように流される

シュトリナが行方不明になったことをルードヴィッヒが知ったのは、ミーアがゴールする直前のことだった。

ルードヴィッヒとディオン、さらに数名の皇女専属近衛隊員は、ミーアから少し離れて同行していた。

直接的に、馬合わせの助けはできないものの、なにかあった時には、すぐに駆け付けられる位置にて護衛を続けていたのだ。

そうして、二日間の旅程を終え、ホッと安堵しつつ、坂を上っていくミーアを見送ったのだが……そんな彼のもとに、急報が舞い込んできたのだ。

昨晩、イエロームーン公爵令嬢が、南都の宿泊地から姿を消した、と。

現在、聖女ラフィーナの指揮のもと、林族の者たちの手を借りて、辺り一帯の捜索が行われているものの手掛かりはなし。至急、戻られたし。

報せを受けた瞬間に、ルードヴィッヒは思わず舌打ちした。

――俺の判断ミスだ……。狙ってくるのであれば、ミーアさまのほうだと思っていた。

蛇は現在、火の一族の戦士を手中におさめている。その中には狼使いのような強者もいる。だからこそ、馬合わせの最中であっても、ミーアが襲われることを警戒していたのだが……。

「敵を大きく見誤ったか。思えば、馬合わせや、それにミーアさまが出馬されることが決まったのは、ここ数日来のこと。いかに蛇といえど、馬合わせに参加しているミーアさまを狙うのは困難……」

自身の責任を痛感し、歯噛みするルードヴィッヒであったが……。

「いやぁ、間違ってはないと思うけどね」

と、そこで、声をかけてきたのは、ディオン・アライアだった。

彼は苦笑いをしつつ、小さく肩をすくめる。
「すべてに備えることはできない以上、姫さんの護衛を優先するのは臣下として当然のこと。それに、南都の守りも薄いというほどじゃない。もしも、敵がイエロームーン公爵令嬢を誘拐したとするなら、敵のほうが上手だったというだけさ。今のところはね」
それから、彼は、わずかばかり眼光を鋭くする。
「今はやるべきことをやるしかない。とりあえず、姫さんには悪いが、ゴールしたらすぐに南都へと戻って、陣頭指揮を執ってもらわないとね」
次にありそうなのは、混乱に乗じてミーアの命を狙ってくること。だから、戦力を分散させるような愚は避けるべきだ。ミーアのそばに戦力を維持しつつ、その戦力をシュトリナの捜索へと充てる必要がある。
それになにより、帝国の叡智を捜索に用いないわけにもいかない。
「そうだな……。それが最善か」
頷き、眼鏡を直しつつ、ルードヴィッヒはミーアのもとへと向かった。
今は、責任をうんぬんする時でもない。すべてが終わった後、改めて、ミーアの沙汰を待つことにしよう、と、気持ちを切り替える。
彼のもとには、警備を担当していた者たちからの辞職の申し出も届いていたが、それもすべてが終わってからのこと。
静かに、彼は今後のことを思案し始めた。

そうして、騎馬王国の族長たちの協力も得て、あたり一帯の大規模な捜索が行われたが、シュトリナの行方はようとして知れなかった。
山族の富馬から提供された部屋にて。報告を受けたミーアは心配そうに眉根を寄せた。
「人買いに攫われたということは、ないかしら？　リーナさん、わたくしの血族なだけあって、可愛らしい見た目をしてますし……」

「街の外でと言うならともかく、街の中ではどうですかね……。南都を見た感じじゃあ、治安は悪くはないように見えますし。というか、そもそも、あの食えないお嬢ちゃんが、ただの人買い程度に攫われるとも思わないんですが……」
そう主張するのはディオンであった。
「……ふむ」
彼の見立てにミーアは思わずうなる。
確かに、シュトリナが一般的な悪党に大人しく攫われる姿は想像できない。
「むしろ、悪人を毒か何かで始末するほうが、あり得そうですわね。とすると……やはり」
「蛇の手の者に捕らえられたと考えるべきかと」
沈着冷静なルードヴィッヒの言葉に、ミーアは思わずため息を吐いた。
「やはりそうなりますわね。となると……」
ミーアは腕組みして考え始める。
幸い、ミーアの叡智の源は、すぐ目の前にあった。ミーアの前のテーブルには馬龍が用意してくれた、醍醐羊のホットミルクがあったのだ！
待望の、美味しい美味しい秘伝のミルクである！
生クリームのようなまろやかな舌触り、こってり濃厚なミルクの香りと、ほのかに感じる甘みが、とても素敵な飲み物である。
これで砂糖が一切入っていないという事実に、ミーアは驚いてしまう。
そんな美味なる飲み物をこくり、と一口飲んで、ほふぅっとため息を一つ。
それから、味の分析を始め……たりはもちろんしない。もちろんである。
さすがにこの緊急事態に、そんなことをしている場合でないことは、ミーアにもわかっているのだ。

ということで、養分をしっかり補給した後、それを燃焼させるように頭をひねる。
――あ、そうですわ。狼は鼻が良いと聞きますし。もしかしたら……。
そうして、ミーアは、ぽつりとつぶやいた。
「慧馬さんにお願いするのが良いのではないかしら？」
それを聞いたルードヴィッヒが、ハッとした顔をする！
「なるほど……。確かに、慧馬殿は族長の妹。彼らの居場所を知っている可能性はあります」
それを聞いたミーアも、ハッとした顔をする！
その発想は……なかったっ！
いや、厳密に言えば、そんなことを考えたこともないではないのだが、その記憶は、例の記憶の彼方にほったらかしになっていたのだ。
「それに、火の一族には貸しがある状況です。協力を得ることも可能かもしれませんが……。はたして、慧馬嬢がどう反応するか……」
そこで、ルードヴィッヒは難しい顔をする。
幸い騎馬王国による、火の一族の受け入れは順調に進んでいる。今は、族長会議に火族の長老、狼花を交えて話し合いを続けていた。
ミーアには大きな恩がある状況と言えるだろうから、断られはしないだろう。
だが……慧馬に、兄の居場所を聞くことは、もろ刃の剣でもあった。
なにしろそれは、恩に着せて、実の兄を売れと言っているのと同義であるからだ。
はたして、そんなことを言って慧馬が気分を害さないものか……。
などというところまで想像し、ミーア、ちょっぴり慌てる。
なにせ、そんなつもりは、もちろん、ミーアにはなかったわけで……。
「え？　あ、いえ……。わたくしは……」

計算外の事態にワタワタと否定しようとするミーアだったが……。
「しかし、今はそれしかないのかもしれません」
「ですわよね……」
ルードヴィッヒに「それしかない！」と断言されてしまい、ミーアは厳かに自らの主張を取り下げる！
あのルードヴィッヒがそれしかないと言うのならば、そうなのだ。
「わかっていただけてなによりですわ。では、早速、慧馬さんにお願いしてみましょう」
息を吸うように流される、海月のごとき柔軟さを誇るミーアの思考であった。

第二百十一話　ダレかの薫陶を受けて

「ミーア姫、我に用事とはなんだろうか？」
やってきた慧馬は、室内の面々を見て、わずかばかり緊張した様子だった。
そこにいたのは、ミーアとアンヌとルードヴィッヒ、それに、ディオン・アライアだったからだ！
にっこり笑みを浮かべるディオンのほうに、まったく視線を向けず、ぎくしゃくとミーアのほうに向かってくる慧馬である。
そんな慧馬を、自然にテーブルのほうに誘導し……、それからミーアは無言でクッキーを勧める。駆け付け三枚。これがミーア式接待術の基本だ。
甘いものを勧められて敵対的になる人はいないからだ（……ミーアの中では）
そうして、十分に相手の心を懐柔したうえで。
「実はお願いしたいことがございますの」
ミーアは、慧馬の目を見つめて、おもむろに切り出した。
「単刀直入に言いますけれど、あなたのお兄さんと、巫女姫さまの居場所をわたくしたちに教えていただきたいのですわ」
「……それはどういう意味だ？」
眉根を寄せる慧馬に、ミーアはゆっくりと続ける。
「シュトリナさんが行方不明になっていることは、ご存知ですわよね？」
「ああ、無論だ。我らも仲間を呼んで、捜索に加わろうと思っていたところだ。ミーア姫には、とても世話になったからな」
腕組みしつつ、頷く慧馬。
「それで、シュトリナさんを連れ去った者として、わたくしたちは、蛇の巫女姫のことを疑っておりますの」

ぴくり、と慧馬の肩が震えた。
一瞬「兄を愚弄するな！」と怒り出すのではないか、と不安になるミーアだったが……、幸いなことに、慧馬は落ち着いていた。
「なるほど……。だから、我に巫女姫と兄の居場所を聞こうということか……」
瞳を閉じて、じっと何事か考え込むように黙る。
それから、息を大きく吸って……吐いて。
「ミーア姫……。よくぞ、我を頼ってくれた」
感動に、打ち震える声で言った！
その反応に若干面食らうも、とりあえず、気を悪くした風もない慧馬に、ミーアも一安心……だったはず、なのだが……。
「これで、決心がついた。我は、兄と決別しよう」
「……はぇ？」
唐突な慧馬の宣言に、ミーアは思わず不意を突かれる。
――兄と、決別……？　はて……？
きょとーんと首を傾げつつ、ミーアは言った。
「いえ、えーっと、そのようなことは、わたくしは……」
「兄とミーア姫が相容れることはないだろう。どちらかにつくということであれば、我は、友であるミーア姫につく」
……誰の薫陶を受けたものかは、まったく定かではないが、慧馬の宣言は、たいそう重たいものだった。
そのパワフルな宣言の余波を受け、ミーアは思わずクラッとする。
なるほど、確かに、ミーアは頼れる友人を求めている。
いざという時に助けてくれる人脈はとても貴重なもの。だから、自分の味方をしてくれるという相手に対しては、ありがたいと思うはず……なのだが、それはそれとして、この発言は少々……重い。
――肉親と釣り合うだけのなにかを、わたくしが返せるとは思いませんし……。
ミーアは難しい顔で、ぐむっとうなる。
「ちなみに、慧馬さん、ご両親とか、お兄さん以外の肉親の方は…

…」
「蛍雷と羽透(はすき)だけだ」
「蛍雷……は、あの馬ですわね。羽透というのは……」
「我の戦狼の名前だ」
「なるほど……」
つまりは、兄一人、妹一人の二人兄妹だということだ！
――た、たった一人の肉親ではありませんの……。これは、あまりにも重いですわ……。
同じクッキーを分け合えば、みーんな友だち！　みたいなノリの慧馬はいったい、どこに行ってしまったのか……。なぜ、こんな重たい決意を固めているのか、ミーアはしきりに首をひねる。
それから、気持ちを切り替えて、やわらかくて、とぉっても優しい笑みを浮かべる。
「それは……いけませんわ。そのようなことを軽々と口に出すものではありませんわ」
「いや、しかし……」
「お兄さまは、あなたにとって大切な方のはず。であれば、そう簡単に諦めるべきではありませんわ」
反論を許さぬ口調で、ミーアは言った。
「そう簡単に決別するだなんて……言うべきではない。けれど、同じように、わたくしたちにとって、リーナさんは大切な方。だから、どうしても助け出したいと、そう考えていますわ」
そうして、ミーアはグッと手を握る。
「協力してほしい。けれど、あなたがお兄さんと決裂するのを見たくない……。わたくしの、このわがままに、応えていただけるかしら？」
こう……なんというか、ほどほどで良いのだ。ほどほどで。
今回に関しては、情報さえもらえればそれで良い。そもそも、シュトリナが本当に誘拐されたのかどうかはわからないわけだし……。
「そうか……。わかった。短絡的にならぬよう、肝に銘じておこう」

慧馬は、神妙な面持ちでそう頷いてから、
「貴女と友誼を結べたこと、我は誇りに思う」
どこか、感動した口調で、そんなことを言った。

そうして、救出作戦が話し合われていた、まさにその時のことだった。
ノックの音と同時に、見張りに立っていた近衛が入ってきた。
「失礼いたします。ミーアさま……このようなものが届けられたのですが……」
応対に出たルードヴィッヒは、直後、表情を変え、急ぎミーアのもとに戻ってきた。
その手には、小さな小箱があった。
「ミーアさま、これを……」
「……？　はて、なにかしら？」
首を傾げるミーアだったが、中身を確認して、すぐに顔色を変える。
「すまないけれど、ベルを呼んできていただけるかしら？」
やがて、やってきたベルに、ミーアは、中身を黙って差し出した。
それを見た瞬間、ベルは悲痛な声を上げた。
「これっ！　リーナちゃんの……」
ベルの小さな手に乗せられたもの……それはベル自身の手で作られ、シュトリナにプレゼントされたもの。
シュトリナがどんな時にも手放さない、彼女の宝物。
小さな馬のお守りだった。

第二百十二話　導なき決意

混沌の蛇からの要求を受けて、急遽、ミーアは仲間たちを集めた。アンヌやルードヴィッヒ、ディオン、それにベル。さらに、ラフィーナ、アベルとその従者ギミマフィアス。慧馬と馬龍の姿もあった。

主要なメンバーが集まったところで、ミーアからの委託を受けたルードヴィッヒが話し始めた。

「混沌の蛇から脅迫状が届きました。要求自体は、それほど驚くことではありません。シュトリナさまの命が惜しくば、ご足労願いたい、と……。まぁ、そういったものです」

ルードヴィッヒは、それから、何事か考え込むように腕組みする。

「一つ気になることは、ミーアさま一人で来るように、とは書いていないことですが……」

その言葉に、眉をひそめたのはラフィーナだった。

「それは、確かに妙な話ですね……。普通、この手の脅迫状は、護衛も連れずに一人で来い、というものだと思うけど……」

「恐らく、その条件では脅迫が成立しないと思ったのではないでしょうか。シュトリナさまは、確かに四大公爵家の星持ち公爵令嬢ですが、帝国皇女たるミーアさまと比べれば、当然、どちらが上かは明らか。もちろん、ミーアさまご自身は、命に代えてでもシュトリナさまを助けたいと願っておられるでしょうが、我々、家臣としては、そのようなことは当然許容できないですから」

「なるほど。ミーアさんを……確実に呼ぼうと思うのならば、護衛を込みで呼ぶ必要があるということね。ちなみに、ダメだと書かれていないからと言って、千人の軍勢を引き連れて行く、というのもやはりだめなのでしょうね」

ラフィーナの問いかけに、ルードヴィッヒは頷く。

「そうですね。そのあたりは忖度をしろ、ということではないかと思います。シュトリナさまの生殺与奪の権利を敵が持っているのは確かですから。常識的な護衛は認めるが、それを逸脱する場合には容赦なく殺す、と。判断するのが相手である以上、あまり無茶はできないと思います。言うまでもないことですが、シュトリナさまが殺害された場合、我々の被るダメージも無視できないものになるでしょう」

ミーアとシュトリナ。どちらが存在として重たいかは明らかではあるが、それはあくまで相対的なものに過ぎない。

シュトリナを失い、イエロームーン家との仲がこじれるようなことになれば、それはそれで蛇にとっては好ましい事態になるだろう。

「ちなみに、その常識的な護衛の範囲内に、ディオン殿は入るのだろうか？」

そのアベルの問いかけは半ば冗談めかしてはいたものの、慧馬などは、真剣な顔で首を振っていた。常識的な範囲には入らない、と無言の内に強硬に主張する慧馬である。

ルードヴィッヒは苦笑いを浮かべつつ、口を開く。

「ディオン殿の剣の腕は、確かに常識的な範疇をこえるものでしょうが、しかし、この場合、ディオン殿が護衛につくことは、相手もきちんと予想しているでしょう。逆に言えば、ディオン殿を随伴していたとしても、ミーアさまをおびき寄せたいと考えている。そうすれば、なにか有効な手が打てると、そう考えているんではないかと思います」

ルードヴィッヒの言に、当のディオンが頷いて答える。

「僕もルードヴィッヒ殿の考えに賛成だ。多分、こちらの出方はきちんと読まれているだろう。加えて言うなら、なにも、その相手の思惑に乗る必要もないかと思いますがね」

そう言って、ディオンは、ミーアに意地の悪い笑みを浮かべて見せた。

「あえて言いますが、ルードヴィッヒ殿の言うところの、忠実なる

家臣の一人としては、姫さんに危険を冒していただくことには反対ですね。僕一人を送り込んでいただければ、上手くやれると思いますがね」
「上手く……殺る……？」
ミーアは、頭の中でディオン語の翻訳を行う。行って……ちょっぴり青くなる。
「念のために、確認しますわ。ディオンさん。あなたお一人でも確実にシュトリナさんを助け出せると……あなたはそうおっしゃっているんですの？」
「……その辺りも含めて上手くやりますよ。臨機応変にね」
微妙に言葉を濁すディオンに、ミーアはピンとくる。
――もしも、シュトリナさんが殺されて、イエロームーン家との仲がこじれたら、それも殺る気ですわね！
それは、正直、ミーアとしては望ましくない未来である。
そもそも、蛇の巫女姫はアベルの姉だ。ディオンが突撃していって、殺られてしまったら、目も当てられない。
それに、なんといっても、シュトリナはベルの大切なお友だちなのだ。
ミーア的にも頼りになる友人というカテゴリーに入れているわけで。失えばたいそう、後味の悪いことになるだろう。
――ディオンさん一人に任せるということはできませんわね。
そうは思いつつ、でもなぁ、と同時に思ってしまう。
確かに、危険は極めて大きいのだ。ルードヴィッヒやディオンの考察したように、きっと相手は、ディオンが護衛についている前提で策を練っている。
帝国最強のディオン・アライアにどうやって敵対するつもりかは定かでないが……。
――ああ、でも、狼がいるんでしたわね……。狼使い、いえ、慧馬さんのお兄さんもいるわけですし、やはり危険ですわ。
ということで、行きたくないはない。すごく行きたくない！

ふんむむ……っと難しい顔でうなっていると……、
「ミーアは、どうしたいんだい？」
不意に優しい声が聞こえてきた。
「え……？」
きょとりん、っと首を傾げるミーアに、穏やかな笑みを浮かべたまま、アベルが話しかけてきた。
「君がしたいことをすればいい。ボクは全力でそれをささえるから。もし、君が望むならボクが、シュトリナ嬢を助けに行くことだって辞さないよ」
「アベル殿下……それは」
思わずといった様子で口を開くギミマフィアスに、アベルは小さく肩をすくめた。
「ボクは、この前、ヴァレンティナ姉さまではなく、ミーアを選んだんだ。そう決めた。ならば、今さら命を惜しむような真似はしないさ」
彼の言葉は、その剣術と等しく潔かった。
前だけを見て、踏み出す……その決意が、彼の言葉にはあった。
「まぁ、アベル……」
その宣言に、ミーアは、手を引かれるような気がした。目を閉じて、そっとアベルのリードに身を委ねてもいいような、そんな気持ちにすらなってしまう。
それは、ほのかな恋心……かもしれないし、ただ単にミーアの本性たるイエスマンが姿を露わにしただけであったのかもしれない。
そうして、傾きかけた判断の天秤に、さらに重りを加える者がいた。それはっ！
「よく言った。アベル・レムノ。我も同じ気持ちだ！」
火慧馬が、どん、と、力強く胸を叩く。
「我もいざとなれば、兄と刺し違えてでも、ミーア姫の恩義に応えるつもりだ」
「え、慧馬さん……」

相変わらず、ちょっぴり重たい宣言をする慧馬。そして、慧馬に負けじと、声を上げる者がいた！　それはっ！
「もちろん、私も……お友だちのために、えーと、いろいろ捨てる覚悟はできてるわ。ええと、命とかっ！」
対抗意識を発揮するラフィーナに、ミーアは若干、笑顔をひきつらせる。
「……えーと、ラフィーナさまには、できれば残って、騎馬王国のことをまとめていただければ……」
現在、ラフィーナは族長会議に参加し、火の一族のことがどう決着するのか、見届け人をしている。この場を離れるわけにはいかないだろう。
「え？　でも……」
「それに、わたくしとラフィーナさまが一網打尽にされてしまっては、それこそ蛇の思うつぼですわ。後に残るシオンだけでなんとかしろというのは、さすがに酷というものですわ」
これでラフィーナを巻き込むと騒動が大きくなりすぎる……と、ミーアは何とかいさめつつ……。
「けれど、アベルの、慧馬さんの、そして、ラフィーナさまのお気持ちは、とても嬉しいですわ。これで覚悟は決まりましたわ」
元より、ミーアにとれる選択肢は少ない。ここでシュトリナを見捨てたりすれば、敵はそれを大々的に喧伝するはずで……そうなれば、ミーアが窮地に陥るのは火を見るよりも明らかなことだった。だから……。
「やはり、ここはわたくしが行かねば始まりませんわね。ルードヴィッヒ、準備をお願いいたしますわ」
かくて、方針は決する。
ミーアは、ルードヴィッヒ、ディオンなど精鋭を伴って蛇の巫女姫と対峙することを決意したのだ。
……ただ、一つだけ気がかりなことがあった。

ミーアは、シュトリナが行方不明になってから、一度、皇女伝を読んでみた。
けれど、皇女伝にはこの出来事は、まったく書かれていなかった。
無論、アベルの姉が事件に関わっているなどということを、公の書物に書き残しておくことはできないわけで……だから、決しておかしくはないことなのだが……。
なぜだろう、導の役割を果たさない皇女伝にミーアは、漠然とした不安を抱かずにはいられなかった。

第二百十三話　攻防

蛇の拠点の廃城にて。巫女姫、ヴァレンティナとの会談を終えたシュトリナは、浴場へと案内されていた。
そもそも廃城の中に、風呂があること自体、驚きであったが……。
「蛇の巫女姫なのだから、そのぐらいは用意する、ということなのかな……」
そう納得しつつ服を脱ぎ、中に足を踏み入れる。
正直、敵地で一人で風呂に入ることに抵抗がないわけでもなかったが……。
「まぁ、殺そうと思えばいつでも殺せたんだろうし……」
開き直ることにする。
脳裏に浮かぶのは、友人のベルの顔。そして、帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンの顔だった。
どこか似た雰囲気がある二人。彼女たちであれば、きっと状況はどうあれ、お風呂に入ってもいいと言われれば、それを満喫しただろうと思ったのだ。
――報告によれば、ミーアさまは、レムノ王国の革命軍に捕らえられた時にもお風呂に入ってたと聞いたけど……。
小さな裸足が踏みしめる床は、ゴツゴツして、微妙に痛い。
セントノエルなどと比べ、作りが荒い印象だった。
「これ、お城の城壁と同じ材質の石？　ということは、この城を建てた時から、この浴場はあったってことかな……？」
ここまで歩いてくるまでに見た城は、戦用の武骨な作りだったのに、なぜ、お風呂なんか……などという疑問は、もうもうたる湯気によって、すぐに氷解する。
てっきり、どこかで沸かしたお湯を運んできているのだと思ったのだが……どうやら温泉が湧きだしているらしい。

「浴場が必要だから作ったというより、お湯が沸き出る地域だったから、せっかくだから浴場を作ったということか……。でも、お湯が沸き得る場所というと、どのあたりだろう？　レムノ王国の近くと言っていたけど……」

などと、頭の中で地図を思い描きながら、浴場の中を確認。

中は、セントノエルほど広くはないものの、それでも四、五人程度ならば余裕で入れそうだった。お湯のあふれる浴槽もかなり広い。

洗い場には、小さな小瓶が三本置かれていた。表面には、文字が刻まれている。高級品だ！

文字を確認してから、シュトリナは、洗髪薬の瓶を手に取った。

そして中身を……心持ち多めに手の上に出す！

……別に、先ほど巫女姫から失礼なことを言われたからではない。乙女に汗臭いだなんて、大変、無礼なことを言ったやつに、目にもの見せてやろうだなんて、全然思っていない。腹いせに全部使いきってやろうなどと心の狭いことを考えているなんて、大きな誤解である。

そうではなく……確かめたかったのだ。

「うん、なかなかの高品質……」

手のひらの上で確かめるかのように、じっくり観察。

やや粘度を持った液体からは、爽やかな花の香りがした。

指先につけ、腕の上に伸ばしてみる、と、とてもよく伸びて、程よく泡立つ。

かなり上質な油が使われていることがうかがわれた。

「ということは、どこかの貴族階級と繋がりがあるか……。もしも、レムノ王国の王女という話が本当ならば、レムノ王国の貴族？　それとも、どこかの行商人と繋がりがある？　貴族もしくは行商人自身が蛇ということもあり得るのかな……」

サンクランドで、エシャール王子に接近したのは、騎馬王国風の格好をした行商人だったと聞く。

「リーナを誘拐した男がそれっぽいけど、どうだろう……」

考えごとをしつつ、丁寧に髪を洗い始める。モコモコと泡立つ洗髪薬を存分に味わってから、一度お湯で洗い流し、再度、丁寧に丁寧に洗う。

……もちろん、汗臭いと言われたからではない。気になんかしていない。

ただ、まぁ……また不意を突かれるようなことは避けたいので、できるだけ身ぎれいにしておこうと思うシュトリナである。

ベルに嫌われるからとか、そんなことは決して思っていないのである。本当である。

そうして髪を洗い、今度は、たっぷり洗身薬（ボディソープ）を使って身を清めてから、浴槽へ。

お湯は無色透明だった。指先で温度を確かめ、手ですくってから、匂いを確認。

「火山の近く……という感じではないかな」

さすがのシュトリナでも、よほど特徴的でない限り、匂いや味だけでは成分の分析はできない。

場所の詮索を諦め、お湯に入る。

浴槽は、体を思いきり伸ばしても大丈夫なぐらいには広い。

ううん、っと体を思いきり伸ばしてから、深くため息。

それから、ふくらはぎ、太もも、と足をもみほぐしておく。縛られたまま運ばれてきたせいで、体が固まっていた。今のうちにほぐして、何があっても対応できるようにしておかなければならない。

もちろん、一人で脱出などはできない。シュトリナは自分の体力が並みの令嬢ぐらいであることをよく知っている。それでも準備を怠ることはない。

「絶対にベルちゃんが、ミーアさまが助けに来てくれるはず……」

一通り、マッサージを終えたところで、彼女はお腹に手を当てて、さする。

「……二日半、ううん、三日ってところかな」

シュトリナがなにも食べなかったのには理由があった。もちろん、

毒を飲まされるのを警戒していたのもあるが、それ以上に、空腹の具合で時間経過を図っていたのだ。
食べ物を与えられる間隔によって、体内時計を狂わされることを嫌ったのだ。
くぅうっと切なげに鳴るお腹をさすりつつ、シュトリナは小さく首を振る。
「これを指摘されたら、また動揺していたかもしれないな……」
お腹を鳴らすなんて、はしたない！　などと言われたら、心が揺れたかもしれない。
巫女姫は、心を読み、心を揺らして操る。
どんな隙をも見せるべきではない。
「きっとベルちゃんや、ミーアさまなら、こんなことで動揺なんかしない」
ミーアならば、むしろ、なにか食べさせろと要求するかもしれない。
あの胆力がうらやましい、と、ついつい思ってしまうシュトリナである。
「独り言が多くなっているのは、たぶん心が弱くなっているからだ……」
お湯を顔にバシャバシャかけて、気持ちを切り替える。
そうして、シュトリナはたっぷりお湯につかり、しばらく湯船に腰かけて体を冷まし、もう一度、お湯につかる。
言うまでもなく、巫女姫に対する嫌がらせである。
思いっ切り！　長風呂をして、待たせてやろうという小さな復讐なのである。
乙女に、汗臭いとか失礼なことを言ってはいけないのだ。
それから、脱衣所へ戻る。
と、先ほどまで着ていた服がなくなっていて、少しだけ慌てる。
よく見れば、すぐそばに、真新しいドレスが置かれていた。
「驚かさないでほしいな……」

別に、風呂上がりに着替えを用意するのは、ホストとしては当然のこと。にもかかわらず、なんだか、一瞬焦ってしまったのが、手玉に取られたようで腹立たしい。
ややサイズが大きいドレスは、恐らく巫女姫のものなのだろう。
あまり着るのは気が進まないものの、寝間着でいるよりはマシか、と割り切る。
そうして、ちょうど着替え終わったところで、迎えに現れた人物を見て……シュトリナは一瞬、息を呑んだ。
「ひさしぶりだな。シュトリナ・エトワ・イエロームーン」
因縁の相手、狼使いが、そこに立っていた。

狼使いに連れられて、シュトリナは再び、巫女姫のところを訪れた。
シュトリナの姿を見た巫女姫、ヴァレンティナは、嫣然とした笑みを浮かべた。
「お風呂、気持ちよかったかしら？　ずいぶんと長かったわね」
「ええ。とてもいいお風呂でした。すっかり旅の汗を流させていただきました」
シュトリナは、気取ったしぐさで、スカートの裾をちょこん、と持ち上げる。
「ふふふ、よく似合ってるわよ。さ、どうぞ」
そうして、ヴァレンティナは、テーブルのほうへとシュトリナを誘う。テーブルの上には、湯気の立つカップと、お茶菓子が並べられていた。
「ちょうど、お茶を淹れたところだから、さっそくいただくとしましょうか」
勧められるまま、椅子に座ったシュトリナは、場を支配すべく、先制の一撃を放とうとする。が……。
「お茶の前に一つ、いいでしょうか？　巫女姫さま」
「そんな他人行儀にならないで。ヴァレンティナと呼んでいただき

たいわ。リーナさん」
親しげに呼ばれ、ぞわり、とシュトリナの胸が疼いた。
「シュトリナとお呼びください。その名は、親しい方のみの呼び方ですから」
愛称を、巫女姫に呼ばれただけなのだ。にもかかわらず、これほど心が揺れたことに、シュトリナは小さく舌打ちする。
「うふふ、それならば、やはり親しみを込めてリーナさんとお呼びするわ。だって、あなたは、元蛇、私たちの仲間だったのだから」
相手が、言葉によって心を揺さぶってくることは覚悟していた。けれど、それでもなお、巫女姫の言葉は、シュトリナの心をじわり、じわりと責め苛む。
このままペースを握られるのは避けたいと、シュトリナはあえて無視して、攻撃を繰り出す。
「質問があるのですが、いいでしょうか？」
「もちろん。約束ですものね。なんでも聞いて」
涼しい顔で微笑むヴァレンティナに、シュトリナは思い切り……踏み込む！
「では、混沌の蛇をつぶすためには、どうすればいいですか？」
その質問に、ヴァレンティナは目をまん丸く見開いた。
「あら。ふふふ、なかなか厳しいところを聞いてくれるわね」
「なにを聞いてもいいって、言っていただけたので」
すまし顔でお茶をするシュトリナ。そんな彼女に、ヴァレンティナは首を振った。
「残念ながら、その質問には答えることはできないわ。ああ、別に意地悪してるんじゃないのよ。ただ、私自身にもわからないことは答えられないでしょう？」
「わからないんですか？　巫女姫なのに」
挑発するように、上目遣いに見つめるシュトリナ。そんな彼女に、ヴァレンティナはあくまでも笑みを返す。
「ええ。なにしろ巫女姫なんて、言葉だけのものだもの」

肩をすくめて、ヴァレンティナは続ける。
「巫女姫とはなにか……？　蛇の教典『地を這うものの書』には、どこにも記載がない。巫女を立てよとも、統率せよとも書かれていない。だから、私はこう考える。蛇の巫女姫とは、火の一族の族長が、その権力を維持するために作り出した仮初の権威である、とね」
「仮初の権威……」
「ただまぁ、良いアイデアではあったのでしょう。巫女姫は、火の一族を母体として、多くの蛇導士を産み出したわけだしね」
そう言って、ヴァレンティナは、目の前のクッキーを美味しそうに口に入れた。

第二百十三話　攻防（後書き）

前に、断食（夜は食事できる式のではなく、本当に水以外、体内に入れないやつ）をした人に話を聞きましたが、食べないでいると、ある瞬間から空腹が辛くなくなるんだそうです。曰く体外からエネルギーを補給していたのが、体内の蓄えを使うように体が切り替わると辛くなくなるとか。
医学的に正しいかは知りませんが、そういうもんかぁ、と思ったりしました。
で、シュトリナもそんな具合で時間を測ってましたというお話でした。

第二百十四話　孫娘の成長とミーアの感慨

さて、みなが準備のために出て行った後、部屋に残ったのはベルだった。
話し合いの中、ずっと黙り込み、物思いにふけっていたベル。その表情は、暗いものだった。
「リーナさんのこと、心配ですわね……」
ミーアの声に、ベルは黙って頷いた。
「大丈夫ですわ。ベル。あなたのお友だちは必ず助け出して見せますわ」
そう言ってやると、ベルは……何事か言おうとするように口を開け……閉じて……。それから大きく息を吸ってから、話し始めた。
「ミーアお姉さま、ボク、さっきからずっと考えていました」
「はて……？　なにをですの？」
「ボクが、ミーアお姉さまの身代わりになればいいんじゃないかって……」
「ん？」
「ボクがミーアお姉さまの代わりに、行けばいいんじゃないかって思ったんです。ほら、髪を切れば、あまり知らない人は、きっと見分けがつかないはずですから」
「なるほど……」
影武者というやつか……とミーアは頷きかけ……、
「それは、あまり意味がありませんわね……」
すぐに首を振った。
――ていうか、そんなことしたら、リーナさんに殺されますわ……確実に。
殺気をみなぎらせたシュトリナに迫られる自身の姿を想像し、ミーアはぶるぶると背筋を震わせる。

例えば、ベルがディオンぐらい強くて、蛇の攻撃を一切受け付けないというなら、化ける意味はあるだろう。あるいは、ミーアが同じぐらい強くて、別動隊を指揮するとか、一騎当千の強さを発揮して一人でシュトリナを助け出すとか……。まぁ、そんなことができるのであれば、確かに意味はあるかもしれないが。

現状で、ベルがミーアに化けたとしても、意味はあまりない。

ミーアの安全が一時的に確保されるというだけ。だが、この場合、仮に生き残ったとしても、ミーアが窮地に陥るのは明らかで……。

「というか、ベル、あなたは、自分を低く見積もりすぎなのではないかしら？　あなたがいなくなれば、リーナさんも、リンシャさんも、みなも、もちろんわたくしだって悲しいですわ。そのことを忘れないでいただきたいですわ」

そう言ってやると、ベルは大きく頷いて、

「はい。それは、知ってます。ミーアお姉さま。でも、ボクは思うんです。お友だちのためなら……大切な人たちのためなら、命を惜しんだらいけないって……」

ベルは、困ったような笑みを浮かべる。

「ミーアお姉さま、帝国の叡智なのに、知らないんですか？　ボク、この世界が大好きなんですよ？　アンヌ母さまも、エリス母さまもいて、ルードヴィッヒ先生やディオン将軍がいて、アベルお祖父さまも、それに……リーナちゃん……。優しい人たちに囲まれた、温かい世界……。ボクはミーアお姉さまが作るこの世界のことが大好きなんですよ？」

そうして、ベルはニッコリ微笑んだ。

「だから、ずっとここで生きていきたいって思ってます。この夢が終わってほしくないって……。でも、だからって、卑怯なことをして生き残ろうとは思いません。ボクは、帝国の叡智の血を引く者ですから」

強い決意の輝きを宿した瞳に、ミーアは思わず息を呑む。

「お祖母さまの栄光に恥じることはしません。ミーアお姉さまのそ

ばにいられるように、誇り高く生きたいと思ってるんです。そのためにできることはないかって、いつでも考えてます」
「そう……」
ミーアは、ベルの告白に、少しだけ気圧される。それから、感慨深げにベルを見つめた。
きっともう、ベルは金貨でお礼をしようとは思わないだろう。自分がいつ消えてもいいように、という生き方は、きっとしないだろう。ミーアは思った。
ベルは、きちんと、ここで……この世界で、誇り高く生きていくことを考えている。それがわかって……ちょっぴり嬉しくなるミーアである。
「そういえば、ベルが来てからずいぶんと経ちますわね」
ミーアは、ふとつぶやき、あの日のことを思い出した。
「そう……あの時は……」
図書室で見つけた、奇妙な本。そこに書かれていた輝かしい未来を、ミーアは拒否したのだった。アベルが、国を追われるという未来を拒否して、より幸せな未来を求めたのだ。
「ふむ、思えば……あの未来を受け入れていたら、もう少し楽ができたような気がしますけれど……」
その後にやってきたのが、ベルだった。結果的に、ミーアは、より多くの味方を得た。エメラルダや他の星持ち公爵令嬢、令息とも知己を得た。
アベルの姉と対峙することにもなり、もしかしたら、これから彼の家族の問題にも首を突っ込まなければならない。
「大変ですけれど、よくよく考えるとわたくしの願い通りになっているわけですわね。そういう意味では、あなたは本当に導であったのかもしれませんわね」
「え？　ええと、ミーアお姉さま？」
「ふふふ。大丈夫ですわ。ベル。なんとかなりますわ。ミーアお祖母さまが、なんとかしてあげますわ。リーナさんのことも、蛇のこ

とも。前に言ったでしょう？　あなたの夢は、わたくしが終わらせないと」

そうして、ミーアは力強く笑うのだった。

翌日、ミーアたち、「シュトリナ救出部隊」は、南都を後にした。

第二百十五話　ミーア姫、巧みに（相）槌を振るう

さて、慧馬の案内で、敵の拠点へ向かう途中、ミーアたちは火の一族の隠れ里に立ち寄った。慧馬によれば巫女姫が現在、拠点として使っている廃城は、里よりもさらに南下した先、ヴェールガとレムノの間に横たわる、深い森の中にあるという。

火の一族の隠れ里はちょうど進路の途中であり、休憩をとるには適した場所ではあったのだが……。それ以上に、ルードヴィッヒからの進言が大きかった。

「ぜひ、火の一族のみなさんに、協力していただくべきでしょう」

ルードヴィッヒの言にミーアは粛々と従う。

彼の言を一瞬たりとも疑ったりはしない。

シュトリナのことが心配で、一刻も早く助けに向かいたい！　というベルをなだめたり、いきり立つ皇女専属近衛隊を止めることこそが、自らの仕事であると心得ているのだ。

「ルードヴィッヒの言うことに間違いはありませんわ。わたくしは、彼のことを信じておりますわ」

などと、すまし顔で言うのみだ。ミーアは、イエスと言うべき相手をきちんと心得た賢いイエスマンなのだ。

里につくや否や、ミーアたちを、明るい笑みを浮かべた村人たちが迎えた。

すでに、騎馬王国との話し合いが上手くいっていることは知らされていた。林族からの援助もすでに行き届き、村は緊張から解放され、一時の平和が訪れていた。

「ふむ、良かったですわね」

馬車の中から村人たちの様子を見て、わずかばかり表情を和らげるミーアであった。

「ミーアさま、今後のことを、少しご相談させていただいてもよろしいでしょうか？」
そんなミーアに、ルードヴィッヒが難しい顔で話しかけてきた。
「ええ。構いませんわ。早めに対策を練っておかなければなりませんものね」
ミーアとしても、これからどう行動するか、わかっていたほうが安堵できるので、この申し出には大賛成だった。
現状、シュトリナをどうやって救い出すのか、その策は定まっていない。当面は相手の言う通りにするしかないとは思っていたのだが……。
そんなミーアに、ルードヴィッヒは静かに告げた。
「慧馬嬢、そして、火の一族の女性たちには今回の騎馬王国との和解を手土産に、火の一族の戦士たちに帰順を呼び掛けていただきましょう」
眼鏡の位置を直しつつ、ルードヴィッヒは続ける。
「当初の予定通り、敵の戦力を削る。それが最善の一手と、私は考えます」
「ふむ……」
ミーアは、うなり声をあげ……ルードヴィッヒの隣に座る男、ディオンに視線を移した。
幸いなことに、というべきだろうか。この場にルードヴィッヒとディオンが揃っている以上、自分がなにか口をさしはさむのは控えるべきである、とミーアの常識が告げていた。
――下手なことは言えませんわね。ここは、当面、彼らの言葉に耳を傾けるべきですわ。
自らの分を知る賢人、ミーアは、一言も発することなく、ただ黙って、意味深に頷いて見せた。ルードヴィッヒは頷き返して、
「おわかりかと思いますが、巫女姫にそれを防ぐ手立てはないはずです」
「なるほど、確かにな。火の一族の戦士たちにとって、巫女姫と敵

対する我々は敵。だが、火の一族の女たちは、そうではない、か」
ディオンの問いかけに、ルードヴィッヒは静かに頷く。
「いくら巫女姫であっても、火の一族の戦士に『火の一族の女性たちを殺せ』とは言えない。そして、彼女たちが騎馬王国との和解を告げれば、火の一族の男たちも聞かないわけにはいかない」
そうして、火の一族の戦士たちを、巫女姫から切り離すことができれば……巫女姫の周りには、ほとんど手勢がいなくなる。
「以前よりわかっていたことですが、蛇の手勢はそれほど多くない。というより、多くの手勢を持たないことこそ、蛇の強みではないかと私は考えています」
陰謀による秩序への攻撃こそ、蛇のやり方。直接的な軍を持つことは稀で、現在、巫女姫の周囲を固めているのは、利害が一致した戦士たちだ。その戦士たちにしても、現状は、族長に従っているだけであり、巫女姫に対しての忠誠はそれほどではないのではないか、というのが、ルードヴィッヒの考えだった。
「慧馬嬢にお聞きしたところによれば、蛇の理念に賛同した者たちは、みな村を出ていったと聞きます。蛇の教えを広めるために世界に出て行ったと……。サンクランドのエシャール殿下に接近したのも恐らくは……」
蛇の教えを説く蛇導士。蛇の理念に賛同した者がなるのはそれであり、巫女姫の護衛とは違う。蛇への情熱は、巫女姫を守るためではなく、蛇の教えを広めるためにこそ使うべき、ということだろう。
「ふむ……ふむむ」
ルードヴィッヒの言に頷き、ミーアは続きを促す。顎に手をやり、いかにも何かを考えてますよぅ、というアピールも欠かすことがない。
人が気持ちよく話すためには、聞き役の適切な相槌が大切なのだ。
今のミーアは一流の相槌打ちであった。
「ともかく『なにがなんでも巫女姫に従う』という者以外を分離させるのが良策と考えます。敵の数はできるだけ減らしておくべきで

しょう」
それを聞き終えたミーアは、黙ったまま、ディオンのほうにも目を向ける。
「僕も同意見ですがね。まぁ、火の一族の女性たちを人質にするようで気は引けますが……」
「ふむ……」
もっともらしくうなり、ミーアは……シュシュっとルードヴィッヒに視線を戻した。そこんところ、どうなの？　という疑問を視線に乗せて。
「人質という側面があるのは事実ですが……。恐らくは問題ないかと思います」
断言するルードヴィッヒに、ミーアは頷きを一つ返し、
「では、火の一族に協力を依頼しましょう。慧馬さんに、集めてもらいましょうか」
ルードヴィッヒがそう言うのだから、そうなのだ。
ミーアの、忠臣に対する信頼は厚い。

そうして、集まってきた村の者たちに、ルードヴィッヒは事情を説明し……その上でお願いをする。
「みなさんには、ぜひ、火の一族の方たちに、戻ってくるよう説得していただきたいのです」
その言葉に慧馬が返事をする……前に、村の女性たちが答える。
「もちろん、協力します。男衆を巫女姫のところから連れ戻すためですから」
火の一族の女たちは、まったく反対しなかった。
もともとは、戦士たちを取り戻してほしい、というのは彼女たちのお願いだったからだ。
その状況を整えたうえで、協力を求められれば当然ノーとは言わない。
人質の側面があろうがなかろうが、利用されていようがなかろう

が、関係ない。
そこにあるのは、美しい利害の一致だった。
――なるほど。協力の最良の形は、自分が利益を独占することにあらず。互いに利益を得る形を作ること。それを作るために、クソ眼鏡はずいぶんと苦労してましたものね。
帝国末期、ルードヴィッヒは食料を得るために苦慮していた。相手にとっての利益を提示することが、すでに帝国では難しかったからだ。
結局のところ切れたのは空手形のみで、それだってまともに受け入れてくれる者はほとんどいなかった。
――今回の協力要請は、彼女たちとの利害が一致している。だから、すんなりと受け入れてもらえる、と、そういうことですわね。
おそらくは、出て行った男たちを連れ戻そうという働きかけは、今までにも行われていたのだろう。けれど、それが実を結ぶことはなかった。村に戻ってどうなるというのか？　そう言いたくなるような状況が、火の一族全体を覆っていたからだ。
けれど、状況は変わった。
騎馬王国と再び、ともに歩むのであれば、村に戻ることは魅力的な選択肢になるだろう。
感情的に納得いかないという者もいるかもしれないが、その説得の役割は、女たちが担ってくれるだろう。
「ふむ……。これで、とりあえずは、敵の戦力を大幅に削ることができる、ということですわね」
「はい。ミーアさまが、馬合わせを提案された時には、どうなることかと思いましたが……。さすがですね。ミーアさま。これで、大規模な武力衝突は回避できるように思います」
素直な称賛の言葉ではあったが……ミーアは、なにやら嫌な予感がしていた。
「このまま、大人しく分断できればいいのですけど……。いや、それはそれで、気味が悪いかもしれませんわね」

相手は、蛇の巫女姫である。
油断せずに、ことを進めなければ、と気持ちを切り替えつつ……、
ミーアは目の前に置かれていたクッキーを口に放り込むのだった。

第二百十五話　ミーア姫、巧みに（相）槌を振るう（後書き）

今週はミーアの出番が少なめです。

第二百十六話　蛇とはなにか？

ヴァレンティナとのお茶会は、翌日も持たれた。
前日のお茶会ではすっかりペースを握られてしまったシュトリナだったが、この日は一転、攻勢に出る。
「潰す方法がわからないというなら教えてください。混沌の蛇とはなにか……」
上目遣いに見つめつつ、そっと紅茶を口にする。毒……の味はしない。
さすがに、ここから毒を使ってどうこうということはしないだろうと、ある程度、確信を持っているシュトリナであった。
「あら、知ってどうするの？」
口元に笑みを浮かべるヴァレンティナに、シュトリナは勝気な笑みで答える。
「決まっているでしょう。潰す方法を考えるんです。相手の正体がわかってさえいれば、対処することは可能ですから」
その言葉に、まるで、困った子どもに向けるような目を向けて、ヴァレンティナは答える。
「貴女のお得意の毒のように、かしら？　ずいぶんとお詳しいのでしょう？　大切なお友だちを殺せるほどに」
「ええ。大切な人たちを守れるほどには……」
その答えに、ヴァレンティナはわずかばかりに驚いた様子だった。
「あら、それはもうあなたの傷ではないのね。ふふふ、まぁいいわ。知りたいならば、教えてあげましょう」
気を取り直した様子で紅茶に口を付け……。
「でも、あなたのお父さまも知っていることよ？」
「え……？」
きょとん、と瞳を瞬かせるシュトリナに、巫女姫は満面の笑みを

向ける。
「ローレンツ・エトワ・イエロームーン公爵、彼は、混沌の蛇がなにかを知っていた、と言っているの」
「え？　うそ……。だって、お父さまは、なにも……」
混乱した様子で、瞳を揺らすシュトリナに、ヴァレンティナはからかうような口調で、
「あらあら？　もしかして、教えてもらったこと、なかったのかしら？」
からかうように笑ってから、一転、すぐに優しい笑みを浮かべる。
「ふふふ。可愛らしい。よっぽどお父さまのこと大好きなのね？」
「なっ……！　そんなこと……は……」
シュトリナは、頬が熱くなるのを感じる。またしても翻弄されていると、思わず唇を噛みしめる。ペースをつかむつもりが、場を支配するのは、またしても巫女姫だ。
悔しくて、うつむくシュトリナに、思いのほか柔らかな声がかけられる。
「ふふ、別に、照れることはないわ。それはとても素敵なことじゃない。とても、うらやましいわ」
その声に、含まれる微妙な温かさに、シュトリナはさらに混乱する。それは、まるで、本気で……うらやましいと思っているような……口調に聞こえたから。
「うらやましい？　そんな適当なことを……」
「あら？　本当よ？　あなたの持っているものは、私が持っていないものだもの。うらやましいと感じても、なんの不思議もないと思うけど……」
ヴァレンティナは、自嘲するように笑って肩をすくめた。
「なにしろ、私は、父か、あるいは父に近しい者に殺されそうになったんだもの」
「え……？」
唐突な告白に、ギョッとするシュトリナだったが、ヴァレンティ

ナはすぐに首を振った。
「まぁ、私のことはどうでもいいわね。話を戻しましょうか。別にからかおうとしたのでも、偽りを言ったのでもないわ。ローレンツ・エトワ・イエロームーン卿は、確かに、混沌の蛇が何であるのか知っている。少なくとも、バルバラさんは、そう思っていた。ふふ」
と、そこで、ヴァレンティナは笑った。
「そんな嫌そうな顔はしないであげて。ずいぶんと意地悪をされたと思うけれど、あの人にはあの人の事情があった。貴族を恨むに足る理由があったのだから――なぁんてことを聞くと、たぶんあなたは考えるでしょうね。巫女姫のお姉さんは、混乱させようとしている。蛇にも蛇になるだけの事情がある、なんて知ったら、同情もするでしょうし、感情が揺れてしまうから……」
仮に、そんなことをまったく思っていなかったとしても、一度、そう意識してしまったら、もう記憶から消すことはできない。
きっと、こうして話をしていること自体、こちらの心を掌握するためにやっている……そうは思っても、シュトリナは耳を塞ぐことはできなかった。
「さて、それはさておき、ローレンツ卿が混沌の蛇の正体に気付いたとしても、別に不思議なことではない、と私は思うの」
ヴァレンティナは意味深に笑って、静かに告げる。
「だって、最弱のイエロームーンとは、まさに、蛇の理屈に基づいて作り出された存在だから」
「それは……どういう意味ですか？」
かすれるようなつぶやきを聞き流し、ヴァレンティナは言った。
「では、なぜ、ローレンツ卿は教えなかったのか？　あなたにも、ミーア・ルーナ・ティアムーンにも、ね。その答えは、とても簡単。それを知らせてしまうと、きっとあなたたちは絶望してしまうから。倒せるだなんて言っていたけれど、そんなことは不可能だって……ローレンツ卿はちゃんと知っていたのよ」
雄弁に語る巫女姫を尻目に、シュトリナは目の前の紅茶を飲んだ。

腹が立つほどに美味しい紅茶をじっくり味わい、それから思い出す。
そうだ、ミーアはいつだって、紅茶と甘いお菓子をたしなむ余裕を失わなかった。あの、まるで何も考えていないかのような、能天気な顔を脳裏に浮かべつつ、シュトリナは改めて、ヴァレンティナと対峙する。
「お父さまがそう判断したとして、その判断が正しいとは限りません。だから、ぜひ教えてもらいたいです。そろそろ教えてもらえませんか？　本当に教えるつもりがあるのなら……」
あえて、呆れた顔を作って、シュトリナは言った。
「それとも、やっぱり教えてくれないつもり……」
「混沌の蛇とは、邪教徒にして、邪教徒にあらず。捨てられた一族にして、捨てられた一族にあらず。没落した貴族にして、没落した貴族にあらず。国に排斥された王女にして、王女にあらず……」
そらんじるように、そっと瞳を閉じて、ヴァレンティナは言った。
それから、
「しかして、その実態は、その本体はなにか……？」
じらすように、優雅な仕草でティーカップに口を付けた。
唇を、華やかなハーブティーで湿らせてから……静かに告げる。
「混沌の蛇、それはね、ある特定の集団に感染する思想（ミーム）よ」

第二百十七話　地を這うモノの書

「感染する思想……？」
きょとん、と首を傾げるシュトリナに、ヴァレンティナはことさらゆっくりとした口調で告げる。
「そう。蛇は、弱者から弱者、敗者から敗者へと感染し、その認識を歪める言葉。弱き者の倫理を破壊し、常識を書き換えて、秩序の破壊者へと変質させる」
その口調は、決して高揚に彩られたものではなかった。
どちらかと言えば冷静で、まるで学者の声のように、ひどく平坦な声だった。
「弱者に寄生した蛇は、そっとその耳元で唆すの。そんな秩序は破壊してしまえばいい。お前を踏みつけ、搾取するための仕組みじゃないか。破壊するのになんの躊躇いがいるだろう？」
響くは蛇の声。歌うように美しく、恋人に囁くように艶めかしく。
「勝者の定めた法など無視しろ。敗者を踏みつけにして安穏と暮らす民のことなど気にするな。そんな風に誘惑するの」
くすくすと、楽しそうに笑って、ヴァレンティナは続ける。
「普通ならば、貧者であれ、敗者であれ、弱者であれ、倫理によって縛られているわ。何も持たぬ者であっても、仲良く町を歩く親子を不幸のどん底に陥れようなんて思わないし、思えない。相手が商人であれ、貴族であれ、変わらない。人には『良心』があるから。でも、蛇はその良心を殺す」
グッと握りしめられるのは、美しい手。細く長い、姫君の手に、シュトリナは鮮血の幻を見る。
「そのうえで、武器を渡すの」
机の上に置かれた蛇の聖典、蠢く蛇の描かれたソレの、表面を優しく撫でて……ヴァレンティナは続ける。

「地を這うものの書には、さまざまな方法論が書かれている。国を崩す方法、王族を殺す方法、他人の心を操る方法。それは、数多、蛇に心を委ねた者たちの知恵の結晶。悪意の塊よ」
シュトリナの脳裏に、自身の家のことが思い浮かぶ。
イエロームーン家。蛇の理屈により作られた最弱の公爵家。その家で、連綿と受け継がれ、研鑽を重ねられてきた、毒の技術。もしかしたら、それもまた、書き入れられるべきものだったのかもしれない。
「で、でも……その理屈はおかしい」
かろうじて、シュトリナは反論する。
「弱者が強者を打ち倒したら、それで蛇は消えるはず。だって、せっかく戦いに勝ったのなら、弱者は勝者として支配体制を整えたいと思うから。≪自分に都合の悪い秩序≫を破壊した弱者は、≪自分に都合が良い新たな秩序≫を作り、それを維持しようとするはず」
それは、古い秩序を破壊し、新しい秩序を作り出すことに過ぎない。秩序のすべてを破壊するという、混沌の蛇のロジックは成立しないはず……。
シュトリナの疑問に、ヴァレンティナは優しく頷いて答える。それから、お皿の上に、二つのクッキーを置いた。
「例えば、そうね。弱者である私が革命軍を率いて、レムノ王政府を一掃したとしましょうか。この赤いベリーが乗ったほうが私。青いベリーが乗ったほうが、王政府」
そうして、彼女は、赤いベリーのクッキーを上に動かす。
「私は新しい権力者として、新しい統治を始めましょう。けれど、そこにも弱者はいるでしょう？」
彼女は、長い指先で、青いベリーのクッキーを指し示した。
「王政府の敗残者たち。蛇は弱者から弱者へと感染する。弱者から弱者の心へと移り住む。そうして、敗残者という弱者は蛇になる」
それから彼女は青いベリーのクッキーを口の中に放り込んだ。
美味しそうにそれを咀嚼して、唇についた欠片を、ペロリと舌で

舐める。
「では、こういうのはどうかしら？　敗者はすべて処刑するの。そうすると、さて、どうなるかしら？」
彼女は、赤いベリーのクッキーを、二つに割った。
「でもね、弱者はなくならない。革命軍の中にだって序列はあり、踏みつけにされる弱者はいる。権力争いに敗れた敗者が生まれ、蛇はそこにすり寄るの」
赤いベリーのクッキーを二つ、机の上に並べる。
強者と弱者、勝者と敗者。支配する者とされる者。
「あるいは王政府の敗残者と、革命軍の中の弱者が手を結ぶこともあるかもしれない。それに、王政府時代の弱者のすべてが勝者たる革命軍に入れるわけもなし。結局、弱者はなくならない。蛇は、そこにつけ込み、感染する」
赤いベリーのクッキーも口の中に入れてから、ヴァレンティナは頬杖をついてシュトリナを見つめた。
「強者と弱者、勝者と敗者を生み出してしまう、人間の欠陥に感染し、寄生する思想、それこそが混沌の蛇の本体。だから、死なないし、潰せないし、なくなることがない。人が人である限り。人が弱者と敗者を生み出し続ける限り」
ヴァレンティナの言葉には力があった。有無を言わさぬ強い力が、確かにその言葉には宿っていたのだ。
それは、さながら、神託のごとく。
「ローレンツ卿は、その拭い取り難い性質をしっかりと理解して諦めたの。人である蛇導士ならば、処刑できるでしょうし、本ならば焼けばいい。でも、一度頭に入ってきた思想を消し去ることはできない」
そっと瞳を閉じ、祈りをささげるように、厳かな口調で、ヴァレンティナは続ける。
「あるいは、生贄をささげるような、自らの体を傷つけるような、邪教の教えならば廃れるでしょう。だって、そんなの野蛮だし、痛

いし、嫌なことでしょう？　だから、簡単に捨てられ、歴史の中に忘れ去られる。でもね、蛇は優しいの。蛇は、親しい友のように、不満を持った弱者の背中を、そっと優しく押してくれるの。武器を渡して励ましてくれるの。そんな教えは決してなくなりはしない。強者が弱者を踏みつけにし、勝者と敗者を生み出し続ける限りね」

そうして、ヴァレンティナは、ソレを手に取った。

表紙に蛇の絵が描かれた、古めかしく分厚い本。

「だから、我ら、蛇の教典は『地を這うモノの書』と呼ばれる」

清らかに、神託を告げる巫女の声で。

「地を這う者、地を這う“弱者”のための書、とね」

「あ……」

その瞬間、ヴァレンティナの手の中、本の表紙に描かれた蛇の絵が、艶めかしく蠢いたように、シュトリナには見えた。

第二百十八話　ルードヴィッヒの悩み

翌日、早々にミーアたち一行に先んじて、火の一族の者たちが村を後にすることになった。

驚いたことに、彼らは一族全員で向かうという。子どもも老人も、女性たちもすべてである。

「巫女姫のもとにいるのは、大切な一族の男衆だ。我らの全員で取り戻すのは当然のこと」

力強く頷き、慧馬はミーアに手を振った。

「ここまでの温情に、心から感謝する。ミーア姫の期待には必ず応えよう」

慧馬に呼応するように、女性たちが力強く頷いた。なんとも心強い様子だった。

そうして、出発する火の一族の者たちを見送って……ミーアは不安そうにつぶやいた。

「さて……上手くいけばよろしいのですけれど……」

「大丈夫ですよ、ミーアさま。きっと慧馬さんなら、上手くやってくれます」

励ますように、明るい声で言うのは、専属メイドのアンヌだった。が、その顔にも隠しようのない不安の色が見て取れた。

そんな二人を見ていて、ルードヴィッヒは思う。

――恐らく、ミーア姫殿下とアンヌ嬢では、不安に思っているところが違うのだろうな……。

ミーアが心配しているのは、恐らく慧馬たちによる説得ではない。それより先の駆け引きについてなのだと、ルードヴィッヒはきちんと把握していた……把握していた？

――そうだな……。恐らく今回はアンヌ嬢も同行するつもりだろうし、ここは状況を正しく把握しておいてもらうべきだろうな。

すでにルードヴィッヒは心得ている。ミーアの精神的な支柱、その一本は間違いなく、このアンヌであると。
今回のミーアは人質となっているシュトリナのことのみならず、姉と敵対することになるアベルへのフォローもしなければならない以上、その負担はかなり大きい。心の支えはどうしても必要になってくる。アンヌを連れて行かないということはあり得ない。
危険はあるが、ここは来てもらうべきだ、というのが彼の判断である。
大きく一つ頷いて、ルードヴィッヒは口を開いた。
「恐らく、ですが……彼女たちの成功率はそこまで低くないように思います。あるいは、巫女姫は邪魔をしないかもしれませんし……」
「え……？　そうなんですか？」
目を瞬かせるアンヌ。対して、ミーアは、
「ふむ……」
泰然自若とした態度で、相槌を打つのみだった。実に堂々たる、王者の気品すら感じさせる見事な相槌であった。
それから、説明は任せた、とばかりに、ルードヴィッヒにチラリと視線を送る。心得たとばかりに頷いて、ルードヴィッヒは説明を始める。
「まず、先日も言いましたが、火の一族の戦士たちは、全員が巫女姫に心酔しているのではない、と私は考えています。呼びかけによってこちらに帰順する者もかなりの数いるのではないかと」
仮に帰順する人数が少なかったとしても、戦力が減るならば、最低限それでも良い。
あるいは、敵の目的が『ミーアを自身のもとへと呼び寄せること』であるならば、むしろ敵としては、最低限の兵力のみを残すことをするのではないか、とさえルードヴィッヒは考えているのだ。
それは、護衛を禁じなかったことと表裏一体の考え方である。敵としては、護衛を付けた状態であっても、ミーアに来てもらいたかったのだ。同様に『ミーアが、敵の数が多いから行かない』という

状況も嫌うはずなのだ。
逆に言えば、敵兵の数を理由に、こちらが行くことを拒否しても構わない。
それで巫女姫を怒らせて、シュトリナが害される可能性もあるが……その時には自らの命を以て償おうと考えるルードヴィッヒである。
ここで、ミーアを失う愚はなんとしても避けるべきであると……彼の思考は、常にその基本の上に立っている。
「もしも、現状、火の一族の戦士の中に、巫女姫に心酔した者がいたとして、その最も有効な使い方は、廃城で命を賭して戦わせることではない。かといって不意打ちにより、ミーアさまを仕留めることも難しい。ディオン殿がそばにいる限り、それはかなわぬこと」
狼使いに手一杯になっている隙に、ということも考えられなくはないが、確実性がなさすぎる。千載一遇のこの状況の使い方としては下策だ。
事前に慧馬からは、どの程度の弓の名手がいるか教わっているものの、護衛の手をくぐり、ミーアを射殺せるほどに突出した者はいないようだった。仮にルールー族ほどの腕前の弓兵がいるのであれば別なのだが……。
「とすれば、敵にとっての上策は、戦士たちの中に、蛇の息のかかった者を紛れ込ませること。これは確かに厄介。けれど、間違えたくないことは、今回の行動の目的は、ひとえにシュトリナさまを救い出す、その際の不確定要素を排除することにある、ということです」
ルードヴィッヒはミーアのほうに目を向ける。ミーアは……、
「ふむ……！」
っと、威風堂々とした相槌を返してくれた。
「もしかすると、火の一族の戦士たちの一部には、すでに蛇に転向した者たちもいるかもしれない。今回の策はその者たちを火の一族の中に引き入れることになるかもしれない。そして、その者たちに

よって、蛇の蠢動を再び招くかもしれない」
むしろ、蛇の戦略としては、そちらのほうがしっくりくる。直接的な戦闘や、戦場における不意を突いての暗殺などは、蛇のやり方ではないような気が、ルードヴィッヒにはするのだ。
敵にされると最も厄介なこと、を指摘したうえで、ルードヴィッヒは断言する。
「しかし、今回の救出作戦においては、その者たちは無力。仮にそのような者たちがいたとして、問題になるのは今より先のこと。処理は先に回しても構わない。要は、蛇の拠点にいる蛇の手の者を極力減らすこと、それこそが目的です」
実動の戦力としての兵士を巫女姫のそばから遠ざけること。それこそが狙いだ。
だからこそ、シュトリナの救出と、火の一族の戦士たちの離反工作を同時に行う必要があるのだ。
「そうだろうな……」
ルードヴィッヒの言に頷いたのは、ディオンだった。
「まぁ、狼花殿もここに向かっているということだし、巫女姫の息のかかった者が混ざっているか否かの判断は任せても大丈夫だろう。というか、それは僕たちが面倒を見ることじゃない。火の一族の問題だ」
ディオンが肩をすくめて言った。
「長期的なことは、今は考える必要はない。今考えるべきは、当面、戦場の舞台になるであろう、蛇の廃城だ。火の一族の戦士たちをその場から排除できるなら重畳。戦士たちの離反を邪魔するなら、それはそれで敵の狙いも推察することができるし、戻ってきた戦士の数が足りないということであれば、どこかで待ち伏せをしているってことになるだろう。ある程度、隠れ潜んでいる人数がわかっていれば、それも有益な情報だ」
ディオンの思考はシンプルだ。彼の視野が捉えるのは、当面の戦場のみ。そこで何が起こるのか、今考えるべきはそれであると、彼

は主張しているのだ。
　そして、当面の戦場から敵戦力を引きはがすことができるのであれば、後のことは別にして、シュトリナの救出のためには有益なのだ。
　ディオンの発言に、ミーアが頷くのを確認してから、ルードヴィッヒは言った。
「これは、あくまでも私見ですが……そして、ミーアさまも薄々、感じておられることかもしれませんが……蛇の巫女姫はかなり話が通じる人間だと私は考えています」
　これには、さすがに、アンヌが驚いた様子を見せた。
「話が通じる、って、どういうことですか？」
「言い方を変えるならば、合意の形成がしやすいということ、だろうか。つまり……、敵はミーアさまを拠点に呼び寄せたい。だから、我々が行くのを邪魔するような要素の排除には協力してもらえるんじゃないかと思ってね」
　ミーアを自分のもとに呼び寄せる、という目的だけに目を留めれば、火の一族の戦士たちはむしろ邪魔になる。なぜなら、もしも不測の小競り合いでも起ころうものならば、ミーアは即脱出してしまうからだ。
「火の一族の戦士を拠点から遠ざけることで得られるメリット、手元に置いておくことで得られる選択肢の幅というメリット、それを天秤にかけた時、恐らく巫女姫は躊躇なく、戦士たちを手放す……。そんな感触があるんだ」
　そうでないならば、それでも良い。敵が、戦士たちを使って拠点の防御を固めるのならば、それに対応した手を打つだけだし、その場合には、やはり、火の一族の者たちによる懐柔策は効果的な手段だ。
　敵の心を揺らすことに、大いに役立つだろう。
　――ミーアさまが馬合わせに出るとおっしゃられた時には、どうなることかと思ったが……騎馬王国と火の一族を短期間で和解させ

てしまおうというあの策は、蛇にとって有効な打撃となったわけか。
改めて、ルードヴィッヒは舌を巻く。
シュトリナの誘拐を計算に入れていたとは思わないが、それにしたって、ミーアのしたことは、巫女姫にとって、かなりの嫌がらせになったことだろう。
「問題は……敵の物分かりが良かった場合、本命の策がなにか、ということですが……」
もし、拠点を守る戦士たちを手放してまで……手元の戦力のほとんどを手放してまでミーアを呼び寄せたいのだとしたら……？
そうまでして、やりたいことはなんだろうか？　それが、まるでわからなかった。
「そうしてでも、姫さんを呼び寄せる意味がある。相応の策を立てているということだろうな」
ディオンの指摘の通りだった。そして、恐らくミーアが気になっているのもその点だろう。
「いずれにせよ、ミーアさまの周囲はきちんと固めさせていただきましょう」
敵の出方がわからない以上は仕方ない。ともかく、ミーアの警護を完璧にし、どのような状況の変化にも柔軟に対応できるようにすること。それこそが、ルードヴィッヒにできる唯一のことだった。
連れていける近衛の数は限られている上に、そもそも使える手勢がこちらも少ない。皇女専属近衛隊員は腕利きなれど、城に潜入するような技術はなく。唯一、それができそうなのはディオンではあるが、彼の姿がミーアのそばになければ敵の警戒を生むだろう。
レムノ王国の騎士、ギミマフィアスにも、あるいは可能かもしれないが、彼に救出を頼んだ時、それを実行してもらえる確証はどこにもない。
ならば、少数の最精鋭によって、ミーアの周りを固める以外に手はない。
それは、待ちの一手。防御を固め、敵の戦術をすべて受けきる姿

勢。そうして、敵の手が尽きた一瞬の間隙をついて救い出す。
敵の手に人質がある以上、ある程度は敵の思惑に乗る。その上でそれを食い破り、生じるであろう一瞬の隙を突く。それしかない。
――正直、人質を取られている以上、イニシアチブは敵にある。天才ならぬ我が身では、敵の戦力を削るのがせいぜい……。あとは、なんとしてもミーアさまにだけは生き残っていただくことを最優先にするしかない。
最善は、シュトリナを無事なまま助け出すことだが……それがかなわぬ際には、きちんとイエロームーン公爵に、見捨てたわけではないと言い訳できる形を作っておく。
それがルードヴィッヒの思い描く、最も可能性の高い未来予想図だった。
けれど、同時にこうも思うのだ。
ミーアの考える最低限は恐らくシュトリナが無事であること……。であるならば、いったいどうやってそれを実現するべきか……。
答えの出せない問いに、頭を悩ませるルードヴィッヒであった。

第二百十九話　油断大敵　～ミーア姫、少々昂ぶる～

「ううん、ちょっぴり疲れましたわね……」

午後からのルードヴィッヒらとの話し合いを終えた頃には、辺りはすでに暗くなりかけていた、

ミーアは、宿泊地として借り受けた族長の家に戻ってきた。今は、慧馬が一人で使っているという家は、他の村人のものと比べて、大きなつくりになっていた。

慧馬は、あれで、さっぱりした性格だから、部屋の中にも物は少なく、きちんと整理されていて……だからだろうか、わずかに物寂しさを感じてしまう。

ベルとアンヌが、水浴びのため少し席を外している今となってはなおのこと、そう思ってしまって……。

「ここに一人は、少し寂しいですわね。もともとは、お兄さまと二人で暮らしていたのだとすれば、余計に……」

ミーアは思わず、ため息を吐いた。

「狼使い、火馬駆（カ・マク）。上手いこと連れ戻すことができればよろしいのですけど……うーん。慧馬さんの話にも耳を傾けなかったら、どう説得したものかしら？」

狼使いごと戦士たちを連れ戻すことができれば、残るは巫女姫ヴァレンティナのみ。ほかに護衛が数人いたとしても恐るるに足らず、である。そうなれば楽なのになぁ、などと思いつつ、なにげなく辺りを見回していたミーアは、ふと見つけてしまう。

壁に誇らしげにかかっている……でっかい、狼の毛皮の外套を！

「ふむ……これは……、あの子たちの親か、祖先の毛皮、かしら……？」

珍しい毛皮を見つけてしまったミーアは、思わずモフモフっと撫でてみて……、

「ほう、これは……」
その極上の手触りに、うなる。優しく手を受け止める、モッコモコの感触がなんとも……なんとも、気持ちよくって！
余談だが、ミーアは帝国の姫なのである。嘘のような本当の話である。
だから、基本的にミーア自身は節制に努めてはいるものの、身の回りには高級なものが割と溢れている。そして、高級なものというのは、えてして、もこもこ、ふわふわしているものなのである。絨毯や毛布など、もこもこ肌触りの良いものが多く……そして、それに慣れているミーアは、手触りの良い、モコフワが割と好きだったりする。
「ふむ……」
ミーアは、辺りをキョロキョロ見回しつつ、
「これは、慧馬さんの家宝かもしれませんわね。おいそれとは触れない……とはいえ？　まぁ、別に注意もされておりませんし？　ちょっと包まるぐらいならば、怒られませんわよね……うん」
などとつぶやきつつ、いそいそと外套を手に取った。
「ふふふ、これは……。なかなかの着心地。それに、なんだか、狼になったような気分になって、ちょっぴり面白いですわ」
これで寝たら、さぞかしいい気持ちで眠れるだろうなぁ……、などとミーアが床に横になりかけた、まさにその時だった。
こん、こん……と。小屋の扉をノックする音が、響いた……。
「あら？　早かったですわね、アンヌ」
この格好で出たら、びっくりするかな？　などと、お茶目ないたずら心を発揮しつつ、ミーアは、無警戒にドアを開けた。
大きな油断が……あったのだ。
小屋の周りには護衛の兵士たちがいること……それを率いているのが帝国最強のディオン・アライアと、帝国の叡智の知恵袋、ルードヴィッヒ・ヒューイットという、最強の布陣だったこと。
それらに加え、目まぐるしく移り変わる状況に、ミーアの頭は、

すっかり疲労していたのだ。
危険などないと、勝手に思い込んでいたのだ。
そして……実はその認識は、ある意味では正しく……ある意味では間違っていた！
「やぁ。ミーア、夜分にすまな……い？」
戸口に立っていたのは、アベルだった。
彼は、狼の毛皮をモッフモフ着込んで、ニッコニコ顔で迎えに出てきたミーアに、きょとんと首を傾げた。
「ええと……」
「あっ、ああ、アベル？　ど、どうしましたの？　こんな時間に！？」
想定外の訪問に、思わず声が上ずるミーアであったが、直後、シュシュっと自らの格好を確認。毛皮のモフモフにご満悦な自身の、ちょっぴり恥ずかしい姿を発見する！
見られてはいけない姿の自分が、そこにはいた。
「もしかして、寒いのかな？」
「ちっ、違いますわ！　出来心、じゃない。ええと、そう。狼使いの狼の鼻を誤魔化すために使えないかな、と思っただけのことですわ。別に、毛皮に包まれてのんびり寝たら気持ちいいだろうな、とか、そんなこと、全然思ってませんわ！」
「そうなのか……」
アベルは、ちょっぴり困ったような顔で笑みを浮かべてから、
「ああ、でも、夜は少し冷えるからちょうどよかったかもしれないな。ミーア、これから少し付き合ってもらえるだろうか？」
「え……と？」
「少し話がしたいと思ったんだけど……」
「ええ……。それは、構いませんけれど……。どうかしましたの？」
不思議そうに首を傾げるミーアに、アベルは、悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「大した理由はないんだ。ただ、今夜は月が綺麗だから。少し、見

ながら話がしたいと思っただけだよ」
「あら？　そうなんですの？」
それは、つまり、デートのお誘いというものではないだろうか……？
気付いたミーアは……少々、昂ぶった！
「ふふふ、月を見ながらのお散歩、素敵ですわね！　とても素晴らしいですわ！」
「まぁ、護衛付きだから、甘い言葉を囁いたりはできないだろうけどね」
冗談めかして、肩をすくめるアベルに、ミーアは……。
「ふむ……」
何事か、考えるように腕組みした。

第二百二十話　はじめての共同作業

「でしたら……、あ、そうですわ！」
ミーアは、パンっと手を叩いた。
「どうかしら？　ここの、屋根の上でお月見としゃれこむというのは……」
言いながら、脳裏に甦るのは、いつか聞いた景色。
灰色の地下牢で、見た鮮やかな光景。
『貧しい王子と黄金の竜』のワンシーンだった。
旅先の粗末な山小屋、その屋根の上に寝っ転がって、王子は満天の星空を眺めるのだ。
――とっても素敵だったから、一度、やってみたいと思っていたのですわ。
今にして思えば、あれは、エリスの“憧れ”だったのではないだろうか。
病弱なエリスは、きっと屋根の上に登って星を見る弟たちのことを、うらやましく思っていて……それで、その憧れを物語の中に書いたのではなかっただろうか。
そして、その憧れは、地下牢から出ることができなかったミーアにも伝染した。
――ふむ、これはぜひこの機会にやっておきましょう。
ミーアはうむうむ、っと頷いて、アベルに言った。
「どうかしら？」
アベルはミーアの提案をポカンとした顔で聞いていたが、すぐに吹き出した。
「ははは。屋根の上か。ミーアは意外とやんちゃなところがあるな」
そうして、二人は、屋根の上に出た。
幸い、小屋の二階の窓から出れば、すぐに屋根に出ることができ

た……のだが。
「おお、意外と高い。これは……なかなか怖いですわね」
恐る恐る、軋む屋根の上を進む。そんなミーアの手を、アベルは優しく引いて、エスコートした。
「アベルは、意外と慣れてますのね」
「ああ。昔、兄とね。厩舎の屋上に上って怒られたことがあるんだ」
「お兄さま……というと、あの……」
思い出されるのは、アベルの兄、ゲインの歪んだ笑みだったが……。
「意外かな？　ボクが小さい頃は、今より少しだけ尖っていなかったんだ。一緒に遊んだことだってあったんだよ」
「そう、なんですのね……」
意外といえば意外だったが……しかし、よくよく考えると、小さい子どもの頃というのは、そういうものなのかもしれない。
ミーアには兄弟がいたことがないから、その辺りの感覚はなかなかわからないけれど……。
――なにか、きっかけがあって、あんな風に歪んでしまったんですのね。お可哀想に……。
などと思いつつ、しばらく進んだところで、アベルはごろんと横になった。
「ああ、こうすると星がよく見える。さすがはミーアだね」
「それはなによりですわ……」
もにゅもにゅと言いつつ、ミーアはちょっぴり緊張しながら、アベルの隣に横になった。
そうして……、
「ふわぁ……」
思わず、口から息が漏れた。
視界いっぱいに広がったのは、満天に輝く星空だった。全能者の叡智をもって配されたような、星々の煌めき。あまりにも美しいその光景は、見ているだけで、胸がいっぱいになってくるような……

そんな錯覚すら覚えてしまうもので……。
――ああ、そうだ。そうでしたわ……。エリスの本を読んだ時……わたくしは、こんな景色を想像したのでしたわ。
それは、王子と竜が、並んで見た星空。地下牢のミーアが頭に思い描き、憧れた光景そのものだった。
「アベル、お誘いいただいて、感謝いたしますわ」
思わず、といった様子で、ミーアはつぶやく。
「ははは、気に入ってもらえたなら良かったよ。ボクは、好きな女の子には出し惜しみをしないことにしてるんだ」
快活な笑みを浮かべるアベル。それを横目に、ミーアは再び、夜空に目を向けた。
「本当に美しい星空ですわね。月も、とても綺麗……。今夜は満月ですわね……」
そうして、ミーアが、ほげーっと夜空を見上げていると……。不意に小さな声が聞こえた。
「不安……ではないのかい？」
「え……？」
アベルのほうを見る……っと、思わぬ近さに彼の顔が見えて、ミーアは小さく息を呑んだ。
「明日、蛇の巫女姫のところに行くのに、ミーアは落ち着いているな、と思ってね……」
「あ、ああ……まぁ、そうですわね。うーん……」
わずかに目を逸らしつつ、ミーアは考える。
不安は……実をいうとそこまでではなかった。
なにしろ、今回のミーアには知恵袋と最強の剣が同行しているのだ。いかな罠を敵が準備していようと、あの二人がいれば大抵のことはなんとかなりそうだった。
――アンヌもいるから、お義姉さまにお会いする準備も万端ですし……。唯一、心配なのはリーナさんですけど……。
シュトリナがひどい目に遭っていないか、それだけが心配と言え

ば心配だったが。
――まぁ、リーナさんも、あれでなかなかタフっぽいですし……。人質としての価値があるうちは、大丈夫なのではないかしら……。
それから、ミーアはアベルを観察する。
――ふむ、どうやらアベルは、不安を覚えているようですわね。
それも、わからなくもない。
こうして、仲間たちとともに混沌の蛇のもとへと向かうのは、レムノ王国、イエロームーン公爵邸と続き、三度目のことだった。
けれど、思えば前の時にはシオンやキースウッド、ティオーナにリオラもいた。
――アベルはなんだかんだでシオンのことを信頼しておりましたし、仲が良かったから、不安に思うのは当然ですわね。あの、荒野で狼使いと戦う姿は実に息が合っておりましたし……。
今、ミーアの近くにいるのは、古くからの忠臣、ルードヴィッヒとアンヌにディオンを加えた、帝国の者たち。それに、アベルとその従者ギミマフィアスだった。
――いわば、帝国とレムノ王国の連合部隊といったところかしら……。しかし……ふむ。
ミーアは、極めて重大なことに気付く！　気付いてしまう！
それは……、
――帝国の家臣をわたくしの腕、レムノ王国の従者をアベルの腕とみなすならば……これは、わたくしとアベルの初めての共同作業と言えるのではないかしら？
実にしょーもないことだった！
いや……ほんとーにしょーもない恋愛脳だったっ！
――ふふふ、そういうことでしたら、絶対に成功させなければなりませんわね。リーナさんを無事に救い出し、誰も不幸にしないように。ヴァレンティナお義姉さまも無事に連れ戻さなければ……。初めての共同作業を、不幸で終わらせることなんて、できませんわ。
などと、斜め上の方向に気合を入れるミーアだったが……。

「ミーア……？」
「え……？」
ふと見ると、アベルが気遣わしげな顔で見つめていた。
「やっぱり君も明日のことを不安に思って……いや、違うかな……？」
アベルは、言葉を切って、じっとミーアの顔を見つめてきた。しばしの後、苦笑いを浮かべて。
「もしかして……あまり関係ないことを、考えていたのではないかな？」
「へ？　あ、ええ。よくわかりましたわね」
おずおずと頷くと、アベルは嬉しそうに微笑んだ。
「ふふふ。当たってよかった。最近、少しだけだけど、君の考えてることがわかるようになってきたんだ」
それから、アベルは真面目な顔で言った。
「君に、きちんと言っておかなければ、と思っていたんだ」
アベルは、体を起こして、真っ直ぐにミーアを見つめる。
「……はぇ？」
ぽっかーん、っと口を開けるミーアに、アベルは静かに告げる。
「ミーア……ボクは……」
月明りを背にした彼の顔は、ほのかに赤く染まっていた。真剣にこちらを見つめるその目で……精一杯の勇気を振り絞る、彼の心がわかってしまって……。
息を呑むミーアの目の前で、アベルは言った。
「ミーア姫……。ボクは、君のことを愛している。世界中の、誰よりも……。この想いは、誰にも負けるつもりはない」
唐突な告白に、ミーアの頭が一瞬で沸騰する。
「きゅっ、きゅ、急ですわね！　アベル……そっ、そんな、唐突に……。シオンと言い、殿方というのは、こういうものなんですの？」
すわモテ期の到来か！？　などと、一瞬浮つきかけるミーアだったが、すぐに、アベルの顔を見て冷静になる。

彼が、どちらかというと、暗い顔をしていたからだ。
「急に感じたのなら、すまない。焦ってしまってね……。もう……それを言う資格がなくなってしまうかもしれない、と……そう思ったものだから」
それから、アベルは、寂しそうに視線を逸らした。
「……い、いやですわ。アベル。なんだか、どこか遠くへ行ってしまうみたいに……」
「ボクはどこにも行かないよ。だけど……ボクが君のフィアンセになることは、無理になってしまうかもしれない」
「どっ、どういうこと、ですの？」
「姉のこと……、馬龍先輩にお願いして、レムノ本国に報せを送った。返事はまだ戻ってきていないから、これからボクは、ボク自身の意志で君についていく。だけど、もしかしたら、それが原因で、父の不興を買い、ボクは王子の地位を追われるかもしれない」
「まぁ……！　さすがにそんなことは……」
言いかけて、思い出す。
アベルは、確か、父である王との関係がこじれて、国を追い出されて……。それを助けるために、ミーアたちが乗り込んでいった、と……。消えてしまった歴史書には書かれていたような気がして……。
ミーアは、そこで気付いた。
アベルは、自分に想いを告げてくれた。だけど、だから、どうしたい、ということは言わなかった。結婚してくれでもなく、恋人になってほしいでもなく……。
ただ、自らの好意を伝えるにとどめていた。
それは……自身が王子でなくなったなら、ミーアとの結婚は望めないと、彼が思っているから。それでもなお、ミーアと同行したいと願っているからで……。
「仮に、そうであったとしても、気にする必要はございませんわ。あなたは、あなたでしょう？」

そう言うものの、アベルの表情は冴えなかった。
「もちろん、君は人の上辺だけを見ない。地位にも固執しない人だとは知っている。でも、姉が……ヴァレンティナ姉さまがシュトリナ嬢に酷いことをしていたら、ボクは君に顔向けできなくなる。もしそんなことになったら、どうして、君に愛を告げるなんてことができるだろう……？」
「アベル……」
ミーアは、思わず息を呑んだ。彼が何を思い悩んでいたのかがわかって……、それで、思わず笑ってしまう。優しく、笑みを浮かべて……。
「アベル……あなたは、バカですわ」
言ってやるのだ……。
「仮に、あなたが、資格がないと言い張ったとしても……わたくしが、それを許容するとでも思っておりますの？」
そうだ、ミーアは知っている。
自分が、世界中の誰よりも自分ファーストであることを。
アベルがどう思おうが、関係ないのだ。
「もしも、あなたが逃げ出したとしても、国に引きこもっても無駄ですわ。わたくしのほうから、あなたの国に行って、連れ戻して差し上げますわ。あなたのお姉さまもそう。もしも、必要であるならば、強引にでも蛇のもとから連れ帰ってやりますわ」
シュトリナだけでない。アベルの姉も必ず連れ戻してやる。絶対にそうしてやる。
気合を新たに、ミーアは、起き上がり……そしてっ！　見つけるっ！
「ふむふむ……。なるほど」
「べっ、ベルさま、いけません。お邪魔をしては……」
屋根の上に正座をして、じっくりやり取りを見守るベルと、連れ戻そうとする、アンヌの姿をっ！
「ベルっ！　あ、あなた、いつから見てたんですのっ！？」

「はい。ミーアお祖母さまと、アベルお祖父さまが、屋根の上を歩いているのを見つけて、急ぎ、駆け付けました！」
「ほとんど最初からですわね……。ああ、まぁ、そんなことだろうと思っておりましたけれど……」
諦めのため息を吐くミーアをよそに、ベルは上機嫌に笑っていた。
「とても、良い記念になりました。ミーアお祖母さまと、アベルお祖父さまが……こんな風に愛を深めていたなんて……」
などと、感動した様子のベルに、横からアベルが声をかけた。
「そうだ。前から聞きたかったのだが、君は時々、ミーアのことをお祖母さまと呼んでいるね。それはいったい、どういう意味なんだい？　それに、ボクのこともお祖父さまとか……」
「えへへ、それは秘密です。もしかしたら、そのうち、わかる日が来るかもしれませんけど」
ベルは、いたずらっ子の顔で笑う。それを見て、不思議そうに首を傾げるアベル。その、きょとんとした顔が面白くて、ミーアも笑った。
「そうですわね。いつか、わかりますわ」
「君まで、そう言うのか……」
ちょっぴり不満げなアベルを見て、また笑う。
それは、なんだか……無性に楽しい夜だった。巫女姫との対決を前にして、もっと緊張していなければならないはずなのに……そうとわかっていても、楽しくて仕方なかった。

この夜の思い出は、ミーアの記憶に刻まれて、消えることはなかった。
それは、はじめてアベルに告白された夜の記憶。
そして……それは。

第二百二十一話　蛇の悪意

その日も、相変わらず、巫女姫ヴァレンティナは、シュトリナとのお茶会を楽しんでいた。
「そう言えば、あなたは、武芸を嗜まれたりはしないのかしら？　たしか帝国のレッドムーン公爵令嬢は、剣の腕前もなかなかのもの、と聞いているけれど……」
「いえ。リーナは……そんなに重たいものは振れませんから」
「ふふふ、毒ビンより重たいものは持ったことないかしら？」
ニッコリ笑みを浮かべるヴァレンティナに対して、シュトリナの返事はそっけない。
「仮に鍛えたとしても、リーナでは、そこのお強い護衛の方にかなうとも思いませんから」
チラリ、とシュトリナが視線を向けたのは、ヴァレンティナの隣に控えた狼使いのほうだった。
「あら、そんなことはないわよ。たぶん、あなたたちイエロームーン家は、力がなくても相手を殺す方法として、毒の知識を身につけたのでしょう？　同じことよ。剣術もね」
上品に笑い、彼女は紅茶に口を付ける。
「強さで言えば、もちろん、私は彼にはかなわない。力が違うものね。でも、それでも彼を切り殺すことはできるわ。だって……」
ヴァレンティナは、テーブルの上に置いてあったフォークを手に取り、自らの指先をつついてみせた。
「人は鋼よりも弱い。どれだけ強い人であっても刃物で切り付ければ肌を切り裂くことができる。首とか、腕とか、切り裂けば死ぬ場所を切れば、殺すことができる。ミーア姫自慢のディオン・アライアだってね。もちろん、工夫は必要。力で及ばないのは確かなのだから、刃を交えないようにとか、相手が力を入れづらいように微妙

に間合いを外すとか。でも、それって練習次第でなんとでもなることだしね。剣の腕前が強いの弱いのなんて、馬鹿馬鹿しい話よ。というか、そもそもそれ以前に、遠くから弓で射殺してしまえばいいだけだものね」

まるで、剣術をくだらないもののように、彼女は嘲笑う。

「そう。ヴァレンティナさまはずいぶんと、お強いのでしょうね。もしかして、護衛の者たちをすべて帰してしまったのも、そのためですか？」

シュトリナは、がらんとした廊下のほうに目をやった。今日の昼前、やってきた火の一族の女性たち。彼女たちの呼びかけで、城を守っていた兵士のほとんどは姿を消してしまった。

「まぁ、まずいと言えばまずいのだけど。それは私ではなくって、ミーア姫の問題よ？　あちらがとっても美味しそうなエサで火の一族の方たちを誘うものだから、彼らの心をすっかり奪われてしまったのよ。なかなかやるわね」

それから、ヴァレンティナは、狼使い、火馬駆のほうに目を向けた。

「彼が族長権限とかなんとかで命じても、たぶんダメだったでしょうね。まぁ、そもそも命じることもしないでしょうけど……そもそも、この状況は、あなたが望んだものですものね？　馬駆」

問われた馬駆は、表情一つ変えずに、ヴァレンティナに目を向ける。

「なんのことを言っているのか、わからないが……」

「恋に狂った族長が、巫女姫と駆け落ちまがいに部族を捨てる。族長を失った一族は、族長の勝手に憤りつつも、騎馬王国に助けを求めやすくなる。族長に対する義理もなくなるだろうしね……。問題は妹の慧馬さんが狼を使う術を継承していたことだけど、まぁ、そのぐらいならば克服できる。場合によっては、慧馬さんも一緒に連れて行ってしまっても構わない……とか、考えていたのはそんなところかしら？」

その言葉に、狼使いは答えない。無言でヴァレンティナを見つめるのみだった。
そんな彼を見て、ヴァレンティナは苦笑いを浮かべる。その顔が……なぜだろう、シュトリナには、出来の悪い弟に向けるような、親愛のこもったもののように見えた。
「馬駆、あなた、ちょっと下手くそよ？」
「そうか……」
「そうよ。あなたのような人が、恋に心を焦がすだなんて誰も思いもしないでしょうに……。結果、一族の戦士たちの大部分が付いてきてしまって……。せめて、私に恋の言葉でも囁くとか、そういう姿を見せておけばよかったのに、本当に下手くそ……」
「……そうか」
狼使いは小さく頷いてから、
「我はむしろ、君が拒否すると思っていたが。ヴァレンティナ。まとまった戦力を保持するなど、今までの蛇のやり方にはそぐわないのではないか？」
「うん、そう。その認識はとても正しい。さっさと姿を消した燻狼さんは、正しく蛇のやり方をしてるわ。蛇は人々の中に潜んでこそ力を発揮する。でもね……ほら、私は巫女姫だから、少しほかの蛇とは違うの」
「巫女姫は、火の一族族長の権勢を明らかにするために作られた仮初のもの……そう言ってたと思いましたけど……」
シュトリナの言葉に、巫女姫は、うんうん、と頷く。
「よく覚えていたわね。偉いわ。リーナちゃん」
親しげに名前を呼ばれて、シュトリナは顔が歪むのを抑えきれなかった。
何度かのお茶会で、ヴァレンティナには、すっかり弱い部分を把握されてしまったような……そんな嫌な実感があった。
そんなこと、一切気にしない、満面の笑みでヴァレンティナは続ける。

「でも、それは認識が少しだけ甘いわ。仮初といえど、権威は権威。ハリボテみたいなものだけど、外から見れば、少しすごそうに見えない？　絶対に倒さなきゃいけない相手だとか、命に代えてでも討たなければならない敵だとか……。直接、顔を合わせて話を聞かなければならない相手である、とか……。錯覚してしまうでしょう？」
「それは……」
確かに、その通りだった。ミーアたちは、まさに、ヴァレンティナを蛇の中核とみなし、倒すべき重大な敵と考えている節があった。
「ずっと考えていたのよ。巫女姫という権威の使い道を……。正直、この虚名は邪魔よ。身をひそめるにはね。かといってただで捨てるにはもったいない。じゃあどうするか？　現状、私たちにとって一番の邪魔者は、帝国のミーア姫。だったら、彼女を呼び出すのに使えないかってね」
「だから、ここに留まると？　護衛を失っても？」
「勘違いしているようだけど、別に私は火の一族の戦士の武力をあてにはしてないのよ。まずい、と言ったのは、すんなり彼らを帰したら、彼らを必要としない企みがあるのだと露見してしまうから。その程度のまずさよ」
お茶を飲み終わったのだろうか、ヴァレンティナは立ち上がると、新しいティーポットを持ってきて、自分のものと、シュトリナのカップへと注ぐ。
「ミーア姫がここに来やすいように、戦士たちを排除したい……と、そう言うならば仕方ない。邪魔をする素振りぐらいは見せても良かったのかもしれないけれど……あまりやると、馬駆に嫌われてしまうから」
くすくすと笑って、ヴァレンティナは言った。
「どうして……リーナに、いちいちそんなこと話すんですか？」
シュトリナは上目づかいに、ヴァレンティナを睨む。自分に、これからの策略のことなど話して、いったい何の意味があるのか、彼女にはわからなかったのだ。

「さぁ、なぜかしら……。その紅茶を飲み終わったら、教えてあげるわ。ほら、冷めないうちにもう一杯飲んで。ちょうど美味しい温度にしてあるから。とっても美味しいわよ？」
華やかな笑みを浮かべるヴァレンティナ。
弄ばれている……そんな苦い実感とともに、シュトリナは紅茶を口に含み……、
「あっ……れ？」
カップが、手の中から零れ落ちた。
目の前が、ぐにゃり、と歪む。
油断があったのだ。予想すら、していなかったのだ……。
まさか、この段階で……毒を入れられるなんて……。
「ベル……ちゃん……」
ぐらり、と椅子から転げ落ち、床に倒れこむシュトリナ。
「やっぱり、私は毒よりも、剣のほうが得意ね。少ないと、効き目が出るまでに時間がかかって仕方ないわ」
「いいのか？　生きたまま使うと言っていたと思ったが……」
「もちろん、死なないようにはするつもりですけど、間に合うかどうかはミーア姫次第かしら。解毒剤を飲ませれば嘘のように、普通に目を覚ます。だけれど、遅れれば永遠に眠り続けて、いずれ死んでしまう。解毒薬はすでに渡してあるけれど、間に合うかどうかは、神のみぞ知るというところでしょうね」
「蛇の巫女姫が神の名を出すか……」
「間に合わなければ、彼女たちは神を呪うでしょう。間に合えば間に合うで……たぶん神を呪うことになる。神を呪い、世を憎悪する者、すなわち……蛇とならん、よ」
わずかに口角を釣り上げてから、ヴァレンティナは言った。
「んー、そうね。とりあえず、リーナちゃんには着替えてもらおうかしら……。そうね、もっと粗末なボロボロの服……そうだ。生贄に着せる服が有ったから、それを着せて……あの悪趣味な邪教の礼拝堂の祭壇に縛り付けるというのはどうかしら……。演出は大事だ

し、せいぜい〝ヒドイことされたんじゃないか〟って思わせるような格好をしてもらいましょうか……」
頭上で交わされる悪意のたくらみ。されど、シュトリナは抵抗することができなくって……。
「だがな、連れてきてすぐであれば、若干やつれていたが、こう毎日、きちんと食べていると血色もよくなって、いまいち説得力に欠けるのではないか？」
「ふふふ、本当ね。もっと繊細な子かと思ったけど、さすがはイエロームーン家。ある程度、割り切ってからは、まったく遠慮なく食べてたし、ぐっすり寝てたし、なかなかの胆力ね」
頭上で交わされる極めて失礼な会話。公爵令嬢として断固抗議したいシュトリナであったが、それすらもかなわずに。
「まぁ、その辺りは毒でも顔色が悪くなるし、なんとかなるでしょう。きちんと演出してあげるわ。思わず〝彼女〟が助けに駆け寄ってしまうように、ね」
薄れゆく意識の中、ヴァレンティナの声が降ってくる。
「もちろん格好だけよ？　これ以上、傷つけたりなんかしないわ。だって……あなたは……」
その声を聞きながら、シュトリナの意識は深い闇の中へと落ちていくのだった。

第二百二十二話　キノコなき不吉な森

翌日、ミーアたち一行は、先行した慧馬たちを追って村を後にした。

いったん森を出る……ことなく、むしろ、森の奥へ、奥へと進んでいく。

火の一族の村は、森の深い場所にあると思っていたのだが、実際には、まだまだ、入り口付近にあったのだということがよくわかる。

そこは、薄暗い灰色の森だった。

頭上高く生い茂った葉が日の光を遮り、薄い闇のベールがたなびいているような場所。陰気な空気は、かすかに湿り気を帯び、肌にまとわりついてくるかのようだった。

歩く度、ざりり、ばき、っと足の下で枯れ葉が音を立てる。それが、敵にこちらの位置を知らせているようで、なんとなくドキドキしてしまう。

時折、意地悪にも足を引っかけようとする木の根っこを、きっちりと踏み越えながら、ずんずん進む。

――ふむ、やはり逃げるというのは、簡単なことではありませんわね。わたくしも、森にはすっかり詳しくなったつもりでおりましたけれど、これはなかなかの重労働。まして敵の手から逃げながらでしたら、もっと大変なのでしょうし……。

額の汗を拭いながら、ミーアは小さく息を吐いた。

「大丈夫かい？　ミーア」

前を歩くアベルが心配そうに、気遣ってくれる。足元が悪いところは、優しく手を取り、エスコートを欠かすこともない。実に紳士な王子さまなのである。

「ええ、ありがとう、大丈夫ですわ……」

返事をしつつ、ミーアはつついっと視線を外す。

昨夜の出来事が、頭に甦ってきて……こう……、ナニカあまぁい感情が、こみあげてきてしまうのだ！
実に、なんとも……恋愛脳である！
ミーアは、パンパンッと自分の頬を叩き、それから、キリリっと表情を改める。
「大丈夫ですわ。アベル。わたくしは、いたって普通。それに、なにも心配もしておりませんわ」
それは、本当のことだった。
途中で襲われることを警戒しながらの旅程だったが、ミーアにはなんの不安もない。
なにしろ、前衛を守るのが、帝国最強の騎士だったからだ。
まぁ、馬に乗っていくと、弓で狙われそうだったため、徒歩で移動することになったのは、いささか大変ではあるものの……。
「ふむ……森の中を痕跡を残さぬように移動するのは、どうすればいいのかしら？」
などと、隣を行くルードヴィッヒに尋ねつつ、“いざという時”の知識をどん欲に吸収する良い機会と考える。ポジティブシンキングなミーアなのであった。
「それにしても、こんな森の奥深くに、城があるというのは驚きですわね」
ミーアは思わず、感心した様子でつぶやいた。
どのような規模の城かはわからないが、こんな森の奥深くに、城を築くなんて並大抵のことではないだろう……などと思っていると……。
「ここは巡礼街道からも外れますし、森を切り開かなければ、来る必要のない場所でもあります。隠れ潜み、戦いの備えをするには良い地なのかもしれません」
ルードヴィッヒが眼鏡を直しながら言った。ちなみに、彼の額にもかすかに汗が光っていた。さすがの少壮の文官と言っても、こうした肉体作業はつらいらしい。

「ヴェールガとの国境沿いでもありますからね。レムノ王国としても手を出しづらい土地と言えるでしょう。まぁ、空白地帯といったところですかね」
ルードヴィッヒの言を認めつつも、ディオンは皮肉げな笑みを浮かべた。
「もっとも、なにかしらの野心を抱いたレムノ王国が、こっそり築いた砦だった……なんて話もあるかもしれませんがね」
「さて。長くレムノ王国に仕える身なれど、かような話は耳にしたことがありませんな」
シレッと答えるのは、キノコ鎧の騎士、ギミマフィアスだった。
ちなみに隊列は、最前列にディオン、ギミマフィアス。その後ろを皇女専属近衛が二人。さらにその後ろをアベルとミーア、ルードヴィッヒとアンヌ、それにベルが続く。その後ろにも皇女専属近衛隊員が五人、ついてきていた。
ちなみに、どこから襲われても即応できるように、近衛たちは、大きな盾を抱えている。
――見事な大盾ですわね。この盾を周りに並べて上も閉じれば、ちょっとした砦ができるのではないかしら……？　とすれば、もっと大きな盾でもいいですわね。持ち運ぶのに、もっと大きな兵がいると良いかもしれませんわ……。レムノ王国の金剛歩兵団を何人か勧誘したいところですけれど……ふうむ……。
などと、軍事的考察を始めるミーアをよそに、一行は森の奥へ、奥へと進んでいく。
「しかし、道は本当にこれで大丈夫なんですかね？」
そう言って、ディオンが視線を送る先にいたもの……彼らを案内していたのは……慧馬の狼、羽透（はすき）だった！
羽透は、熱いからなのか、舌を出して、はっはと息を吐いていた。
こちらを振り返ると、『俺に任せとけよぅ！』と言うように、ワウフッ！　と吠えた。心強い……はずなのに、なぜだろう、一抹の不安が拭えないミーアである。

賢い狼のはずなのだが……名前を聞いてから、なんだか、こう……なぜだろう……？

――一抹の不安と言えば、この森もそうですわ。

村を出て、すぐのことである。

ミーアは、なんとも嫌な感覚を、この森から受けていた。理由は特に思い当たらない。ただ、なんとなく……としか言いようがないのだが……。

「この森……なんだか、とても不気味ですわ……」

自らが感じた、得体の知れぬ不気味さに、ミーアは戸惑う。

なんだろう……なにかが引っかかる。この森は……なにかが……おかしい。

不安に駆られたミーアは、きょろきょろと辺りを見回して……。ようやくその違和感の原因に気付く。

そうなのだ、森ならば当然あるはずのものが……この森にはなかったのだ。それは、森に住む生き物の気配……などではなく。

「この森……キノコが、ありませんわ！」

……どこか遠くで、ぎゃーぎゃー！　という鳥の鳴き声が聞こえる。

わさわさ、ウサギが藪を揺らし、萌えいずる木々は雄弁に葉を揺らしている。

生命の躍動に溢れた森の中、ミーアの嘆きの声が、悲しげに響くのだった。

第二百二十二話　キノコなき不吉な森（後書き）

本日午前中に、活動報告を更新しました。
ちょっとネタバレが入りますが、今後の更新についてです。
また、本日１９時頃に八巻について活動報告を更新する予定です。

第二百二十三話　蛇の城へ

キノコなき森を歩くこと半日。その間、ずっとキノコを探し続けたミーアであったが、結局、食べられそうなキノコを発見することはできなかった。キノコめいたものは、いくつか見つけたが「あれは、毒キノコですわ！」と……ミーアの直感が告げていた。

それが本当に毒キノコかどうかは、神のみぞ知るというところであるが、極めて、どうでもよい話である。

ともあれ、キノコなき森に、ミーアは思わず……、

「実に不吉ですわ……」

などと、つぶやいてしまう。そんなミーアに、周りの者たちも自然と緊張感を高めていった。

なにしろ、あの、帝国の叡智が「不吉」と口にしているのである。緊張するなというほうが難しい。そうして進んできたミーアたちの前に、その城は忽然と姿を現した。

「あれは……」

それは、あるはずのキノコがないという違和感とは、真逆の違和感。森には全く相応しくない異物が、ごく自然にそこにあるという違和感。

太い木々を押しのけるようにして、そこにそびえ立っていたのは、石造りの武骨な城だった。

崩れかけてはいるものの、こちらを見下ろすようにそびえ立つ塔（ベルクフリート）。周りを取り囲む城壁もまた、それなりに高く、ところどころに補修の跡が見られた。

「なかなか立派な城ですな。籠城を決め込まれたら、厄介なことになるところでしたな」

ギミマフィアスは、城を見上げながら、豪快な笑い声をあげて……、

「ルードヴィッヒ殿の策、お見事。もしも、城を守る兵を離反させることができたとすれば、その知恵働き、一軍にも匹敵するもの。いや、まことに見事」
「お褒めいただき光栄ですが……すべてはミーアさまのご準備されたこと。騎馬王国と火の一族との和解がなってこその策ですので」
「ははは、そうでしたな。なるほど、さすがは帝国の叡智。我がレムノ王国の革命勢力を言葉一つで解体して見せたというのは、どうやら事実のようですな」
しきりに感心した様子のギミマフィアスに、ミーアは小さく笑みを浮かべる。
キノコナイトに褒められるのは、ちょっぴり嬉しいミーアなのである。
「しかし……執念が感じられる城ですね」
眼鏡を直しつつ、目をすがめるルードヴィッヒに、ミーアは思わずつぶやき返す。
「執念……」
言われてみれば、なるほど、その城は、執念の塊ともいえる代物であったかもしれない。
例えば、城壁。あの石は、一体、どこから切り出してきたものだろうか？
どれだけの距離を運び、どれほどの労力をかけて積み上げ、作りだしたのか？
どんな想いで……この城を建てたのだろうか？
そんなことを思うと、なるほど、確かにそれは、強烈な執念が感じられるもので……でも、同時にミーアは、こうも思ってしまうのだ。
――でも、蛇の手による建物という感じは、あまりしませんわね……。
思い出すのは、あの夏の日。
同じように、人々の記憶から忘れ去られた、無人島の地下にたた

ずむ歪な神殿。ぼんやりと青く輝く、冒涜的な建築物と比較すると、それは、極めて普通の形をしていた。
あの、人ならざる意志の介入を疑いたくなるような、異形の建築と、目の前の城とは明らかに違う。これは、あくまでも人の執念の生み出した成果物に過ぎず……ゆえに、そこにあるのは不吉さではなく……。静寂に匂い立つのは、敗残者たちの、もの悲しい残り香のみで……。
――けれど、いずれにせよ、あまり趣味が良いとは言えないお城ですわね。あまり長居していたい場所ではありませんけれど……あそこにリーナさんがいるのかしら？
「ミーア姫っ！　無事に着いたか！」
突然の声、直後、走り出したのは、道案内役の羽透だった。尻尾を振りつつ、狼の向かっていった先、城門のところには慧馬が座っていた。
ミーアたちを見つけた彼女は、立ち上がり、小走りで近づいてきた。
「慧馬さん、首尾は？」
「上手くいった。ミーア姫のおかげだ。我が一族の戦士たちは、他の者たちとともに今、村に向かって帰っている。この城にいるのは、巫女姫と……我が兄、火馬駆だけだ」
軽く唇を噛みしめて、慧馬が言った。
「兄の説得はならなかった……。我の言葉は、兄には届かなかった……。けれど、おかしいのだ。兄は一切邪魔をしなかった。おかげで、男衆は全員、こちらの手に取り戻すことができた」
慧馬の話に、ルードヴィッヒが頷く。
「実際には、火の一族以外の蛇の手の者がいるでしょうから安心はできませんが、これでかなり、敵の選択は狭められたはずです」
っと、その言葉に、慧馬は静かに頷く。
「男衆に聞いた話だが……どうやら、本当に蛇の手勢は中にいないらしい。一人、巫女姫に忠実だった燻狼という男がいたんだが、彼

はすでにここを後にしているらしい」
「では、本当に、ここにいるのは巫女姫と、狼使いだけですのね……」
ミーアのつぶやきに頷いてから、慧馬は一枚の紙を取り出した。
「これを、渡すように、と言われた」
慧馬から受け取った手紙、それを一読し、ミーアは眉をひそめた。
「どうぞ、相応の護衛を連れて、礼拝堂までお越しください……ねぇ」
横から手紙を見た時、ディオンは、深いため息を吐いた。
「相応の……まぁ、最初から分かっていたことではあれど、こちらの戦力もちゃんと削ってから来ないと、シュトリナ嬢ちゃんの命はない、と、そういう類の脅し、だろうな」
「やはり、少数精鋭で城に入るしかない、ということでしょうね……」
ため息を吐くルードヴィッヒ。そこに、
「ボクは絶対についていきます！」
「今度こそ、ミーアさまのおそばにいさせてください」
ベルとアンヌが、威勢の良い声を上げる。
「いや、しかし……」
「あまり悩んでいる時間はないと思う。もう一つ、兄からの伝言だが……シュトリナ嬢に毒を飲ませたから、早く来たほうがいいと……」

これにより、同行者は即座に決まる。
アベルとディオンとギミマフィアス、ルードヴィッヒとアンヌとベル。それに、慧馬と近衛兵一名を伴い、ミーアは城へと足を踏み入れた。

第二百二十三話　蛇の城へ（後書き）

昨夜、活動報告更新しました。
８巻の予約開始のお知らせですね。
７巻の応援イラストなども一緒に……ミーアとラーニャがとても可愛いです！

第二百二十四話　失礼な親近感

本来、固く閉ざされているはずの城門は開け放たれていた。
一行は、ディオンとギミマフィアスを先頭にして、城内へ。
幸い、どこかから矢を射かけられるということはなかった。
「罠でも仕掛けられているかもしれませんから、不用意に辺りに手を触れないようにお願いしますよ」
ディオンの言葉に、神妙に頷くミーア。
ちなみに、不用意に触るなと言われると、ついつい触りたくなる……などという悪癖を、ミーアは持ち合わせてはいない。むしろ、おっかなびっくり、手を引っ込めて足元に細心の注意を払う。
踏み込んだ床が沈んで、なにがしかの罠が発動したりしないか？
頭上から断頭台の刃が降ってこないか？　そんな感じで、警戒心を最大レベルまで高めつつ、進む。
そして、もちろん！
「ベル、わかっていると思いますけれど、不用意になにかに触れてはいけませんわよ？」
好奇心旺盛な孫娘への注意も怠らない。祖母の鑑と言えるだろう。
城門を潜り抜けると、前方に先ほど見た塔と居館（パラス）が並んでいるのが見えた。そして右側手前に、問題の礼拝堂と思しき建物が見えた。
あくまでも思しき、である。なぜなら、その屋根に掲げられているのは、聖なる象徴ではなく、羽を広げた不気味な怪物の像だったからだ。
建物全体の形も、中央正教会のものとは微妙に形が違っている。
入口のところでは、こちらを威嚇するように、二匹の怪物像が睨みつけていた。
「これは、邪神の使いの悪魔というものかしら？」
その辺りのことは、さほど詳しくないミーアである。ここにラフ

ィーナがいてくれれば、いろいろと詳しい解説が聞けるかもしれないが……。
「どうやら、そのようですね。この建物は、邪神を崇拝していた一派が建てた城ということになるでしょう」
ルードヴィッヒの言に頷き、ディオンは改めて礼拝堂を見た。
「さて……それじゃあ、囚われの姫を助けに行くとしましょうか」
小さくつぶやき、ディオンがギミマフィアスのほうに目を向けた。
「それで、どちらが先陣を切りましょうかね？」
「ふふふ。老兵を気遣っていただき、かたじけない」
ギミマフィアスは、静かに剣を引き抜き、両手で握りしめ……。
「では、僭越ながら、吾輩が一番槍の名誉に預からせていただきまする。いざっ！」
剛剣一閃！　礼拝堂の扉を跡形もなく吹き飛ばした。
もうもうと、舞い上がる埃を切り裂き、一同は中に足を踏み入れた。
建物は、縦長の作りだった。
礼拝堂の前方には、半ば崩れかけた邪神の像が室内を見下ろしていた。
まったく手入れがされず、ボロボロの像を見るに、やはり蛇は邪神を信仰することはないらしい。
不気味な像は、それだけではなかった。礼拝堂の両側、揺れる松明に照らされるのは、礼拝堂を取り囲むようにして立ち並ぶ、無数の像だった。
像の不気味な視線は、礼拝堂の中央、やや前方に集まっていた。
そして、その視線の先……大きな食卓のようになっているところに、一人の少女が横たわっているのが見えた。
「あれは……」
目を凝らす、と、徐々にその姿がはっきりしてくる。
間違いない。それは、攫われたシュトリナだった。
囚人が着せられるような貫頭衣に身を包んだシュトリナ。両手両

足を大の字に広げ、太い縄で縛り付けられたその姿は、実に痛々しく見えて……。
「リーナちゃんっ！」
ベルの悲痛な声が響く。
けれど、それが聞こえなかったはずはないのに……シュトリナはピクリとも動かなかった。そのことに、青くなりかけるミーア、であったのだが……。
「う……んぅ……」
直後、かすかに呻きつつ、シュトリナが身じろぎする。縛られているため、動きは制限されているものの、とりあえず、彼女が生きていることにミーアはホッと胸を撫でおろした。
「……酷い」
シュトリナの悲惨な格好に、ベルが口元を覆う。そして、そのベルの感想にミーアも概ね賛成であった。あったのだが……直後、ミーアは気付く。
冷静にシュトリナの顔を見て……二の腕を見てっ！
――ふむ……毒を飲まされたということでしたから、顔色は優れませんけれど、そこまで頬がこけたという感じでもありませんし、いえ、むしろ……。
……ミーアは特に理由もないが、いや、本当に特に理由はないのだが……シュトリナに少々の親近感を覚えた。失礼な話である！
――そう言えば、リーナさんのお父さまのローレンツ卿は恰幅の良い方でしたし……。牢屋に入れられていたとなれば、運動不足になるのは必定。ならば、この件が終わった後で、ゆっくり乗馬にでもお誘いしてみましょうか。
そうして、静かに気合を入れる。絶対に、無事にシュトリナを助けなければならない。
そのためには、まず、毒を飲まされたという彼女の手当てをしなければならないのだが……。十中八九、その前に敵が仕掛けてくるはず。

敵は、ここに、自分たちを呼び寄せた。それで、いったい、何をするつもりなのか？
疑問に首を傾げかけた刹那、
「ようこそ。ミーア・ルーナ・ティアムーン姫殿下。歓迎しますよ」
礼拝堂の中に、声が響いた。
声は奇妙に室内に反響し、どこから聞こえるのかが、よくわからなかった。
「さぁ、早く、毒によって眠りについた、哀れな姫君を、助けたらいかが？」
まるで、自身を探すミーアたちを嘲笑うかのように、声は、歌うように響いた。
それは、まるで邪神への賛美の歌のように、美しく、不吉な声音に、ミーアには聞こえた。

第二百二十五話　もう一人の王子

レムノ王国の王城フェデスクード城の一角。王家の男たちが剣の腕を鍛える鍛錬場で、ゲイン・レムノは一心不乱に剣をふるっていた。

ゲインを取り囲むようにして立てられたのは、太い木の枝を束ねて作った、模擬用の人形だった。真剣を使い、次々と標的を切り倒していく。一見すると力任せ、されど、見るものが見れば気付く。その剣筋は意外なほどに、素直で、洗練されていた。

ここ最近の彼は、人を相手にした鍛練をやめていた。

剣の師であるギミマフィアスの不在というのも大きな理由であったが、それ以上に、王子におもねる相手は、自身の剣を弱める要因になると気付いたからだ。

「雑魚をどれだけ叩き伏せたところで、意味がない」

そうと気付いてからは、ただただ、一人で剣を振り続けるようになった。

そんな彼の目に映る幻の敵、それは、弟であるアベル……ではなかった。それよりも背が高く、細身の……。

「はぁっ！」

雑念を振り払うように、横薙ぎ。

最後の標的を真っ二つにし、刃を鞘に収めたところで、彼は大きく息を吐いた。

気付けば、その額には大粒の汗が浮かんでいた。それを袖で拭いながら、ゲインは廊下へと出る。っと、ちょうどそこを通りかかったメイドの少女を見つける。まだ年若い、働き始めて間もないメイドだった。

「おい、そこのお前、水を持ってこい」

ゲインの声に、少女はビクッと背を震わせた。

「……はっ、はい。ただいま」
一瞬、困ったような顔をした少女だったが、すぐに踵を返そうとする。
その様子に、ゲインはかすかに眉を顰める。
この城のメイドたちは、ゲインの言葉を恐れ、即座に従う。にもかかわらず、一瞬とはいえ、迷った様子を見せた彼女に、不審を覚えたのだ。見れば、彼女は折りたたまれた植物紙を、大切そうに握っていた。
「待て。それは、なんだ？」
「あ、その……これは、国王陛下に、と……」
「冗談を言うな。そのように薄汚れた親書があるものか」
ゲインは鼻で笑い飛ばすと、少女を睨みつける。
「ひっ、う、嘘は申しておりません。ただ……その」
「埒が明かんな。よこせ」
言うが早いか、彼はメイドの手から植物紙を奪い取る。その速さに、メイドは抵抗することもできなかった。それどころか、
「あっ……」
殴られるとでも思ったのか、メイドは目を閉じ、ビクッと体を震わせていた。後ずさろうとした瞬間、足元が滑り、後ろに倒れそうになる。
ため息混じりに、ゲインはその腕を取り、支えてやる。瞬間、
『ダメでしょう？　ゲイン、女の子を怖がらせたら……』
頭の中に響くのは、自分を諫めるような女性の声。子ども扱いするような声音が不快で、ゲインは舌打ちする。
「なにをしている？　水だ。これは俺のほうで父上に渡しておく」
「ひっ、で、でも……」
「咎められたら、俺に殴られて取られたとでも言っておけ。それで文句を言う者もいなかろう」
それだけ言うと、ゲインは素早く植物紙に目を通した。
「なんだ……？　ギミマフィアスからか……そういえば奴は、アベ

ルの護衛で国外に出ているんだったか。サンクランドでダンスパーティーか。くだらんな」
鼻で笑い飛ばす。
刹那、再び脳裏に、声が響いたような気がした。
『ことさらに、相手を見下してみせるのは、負けるのが怖いから？　弟に負けたのが、そんなに悔しかったの？』
からかうような笑い声に……彼は思わず苦い笑みを浮かべる。
「やれやれ、あの女なら、確実にそう言うだろうな……」
アベルに負けて以来、なぜか、思い出すことが多くなった姉。第一王女ヴァレンティナ・レムノ。
『いいこと？　ゲイン、もしも威張りたいと思うなら……まぁ、威張ること自体もあまり褒められたことではないけど……せめて、力を示すこと。なんの力も優れたところも見せず、ただ、出自であったり、長男であったり、男であったり……そういうことを理由に偉そうにするのは、とても醜悪なことよ』
そう説教を垂れてきた姉に、憎らしい姉に……ゲインは、ついに剣で勝つことはできなかった。
『卑怯な剣を使うな……。しっかりと正面から打ち合え！』
そう抗議したら、
『あら、戦場でもそんなことを言うつもりなのかしら？　どうして、敵がまともに剣を交えてくれると思う？　相手を倒し、生き残ったほうが勝ち。あなたが王として立つ戦場はそういう場所だと思うけれど？』
シレッとそんな戯言を返してきた。
あの時の、涼しげな笑顔は、未だに彼の目に焼き付いて離れない。
あの、一切の斬撃を避け、いなし、鋭く放たれる反撃……。あの流れるような美しい剣。彼が倒したいと心から願った相手は、一度も勝ちを譲ることなく、彼の前から消えた。
「戦場において、王族は死んではならない。そんな偉そうなことを言いながら、戦場に立つことなく死んだあなたは敗者ではないか」

この国を変えるのだと、大言を吐いていた姉は、ある日、唐突に命を落としたのだ。
「ちっ、くだらないことを思い出したものだな」
やれやれ、と首を振り、彼はギミマフィアスからの報告を読み進めていく。そして……。
「……っ！」
見慣れた名前を、見つけてしまう……。
「ヴァレンティナ……姉さま」
父に、王に反抗し、大貴族たちの反感を買ってでも、国を変えようとした姉。
死んだはずの姉の名前が、そこには確かに書かれていた。
あの姉が、実は生きていて……悪事に加担していたと……、確かにそこには書かれていた。
「なにをしているのだ、姉上……」
思わずつぶやき、彼は驚く。
自身の心が、思いのほか揺れているということに……。
自分に勝ち続けた姉がくだらない悪事に加担している……それが、なにより許せなかった。
「なにをしているのだ……俺も……。くそ……」
彼は剣を握りしめたまま、厩舎のほうに足を向けた。
かくて役者は揃い、物語の舞台は再び蛇の居城へ。

第二百二十六話　導の少女　～ベルの決意～

――ともかく、リーナさんのところに行かなければなりませんわね。えーっと、周りに気を付けて、罠を踏まないように……、こう一歩目の重さが生じる前に二歩目を踏み出す、みたいな、水の上を歩く感じで行けば……。

などとミーアが考えていた……次の瞬間！

ぶわ、っと、突如、上方から落ちてくる漆黒の影。その手には、ギラリと光を放つ、剣が握られていて……。

着地と同時に、影は、一足飛びにミーアに迫る。

か細い首筋に迫る一筋の斬光！　それに……ミーアはまったく気付くこともなく、当然、反応などできるはずもなくっ！

がいんっと重たい金属音。直後、

「おっと……そう簡単にはやらせるとでも？」

響いたディオンの声が想定外に近くて、ミーアは驚き……固まる。

なにやら、視界の端のほうに金属の輝きが見えるような気がして……ああ、これは、きっと今しがた、首を切られそうになったんだろうなぁ、と察したミーアは、あえてそちらに視線を向けなかった。

なぜって？　もちろん、怖いからである！

ギシギシと、金属がこすれる怖い音が耳元で聞こえていたが、あえて見ない。

それは、言ってしまえば幽霊と同じようなものだ。

いると思うから怖いのだ。あんなものは思い込み。いないし、見えないし、聞こえないと思っていれば、怖くなくなる。暗殺者の刃も同じである……。そうだろうか？

「動じぬか。さすがは帝国の叡智、といったところか……」

感心した様子の狼使いに、ディオンが獰猛な笑みを浮かべる。

「自分の持つ自慢の剣を信じているということさ。おっと」

直後の風切り音。ディオンは、片手でもう一本の剣を抜き、無造作に空中を薙いだ。
ぽとり、と音を立て、落ちたのは一本の矢だった。
「あらあら、偉そうにリーナさんに話をしたのに、これでは形無しね」
呆れた様子の声が響く。矢が再び飛んでくることはなかったが……。
「ギミマフィアス殿、狼がいるはずだ。貴殿は王子と、ついでにうちの姫さんを護衛していてくれ」
剣を抜き、加勢に来ようとしていたギミマフィアスに、ディオンが言う。
「ほほう。狼。それはそれは……」
「ただの狼じゃない。かなり手ごわいはずだ。用心してくれ、ギミマフィアス」
アベルもまた、鋭く警告を発し、剣を抜く。
「さて、不意打ちには失敗したようだが、これからどうするつもりかな？　蛇の巫女姫さん？」
鍔迫り合いのまま、挑発するような口調で、ディオンが言う。けれど、巫女姫の声に、焦りはなく……、まるで歌うように彼女は言った。
「ところで、リーナさんのことは放っておいてもいいのかしら？　早くしないと間に合わなくなってしまうのではないかしら？　せっかく、サービスで解毒薬を渡してあげているのに」
――解毒薬……？　はて、なんのことかしら……？
と、首を傾げた刹那、重ねるようにして、声が響く。
「もちろん、持ってきているわよね？　リーナさんの大切なもの……。小さな馬のお守りを……。さぁ、早く〝お友だち〟を助けてあげなさいな」
「あっ……」
瞬間、ミーアの脳裏に、鋭い警鐘が鳴る。

素早く視線を巡らしたその時、走り出すベルの背中が見えて……。
「ベルっ！　待ちなさい！」
制止するも、彼女が止まることはなかった。

――待ってて！　リーナちゃん！
そうして、ベルは走り出した。静かな決意を胸に秘めて……。
彼女は、決して考えなしで走り出したのではなかった。むしろ、この時、最も状況を理解できていたのは、奇しくもベルだったのだ。
「お友だちを助けなさい」と、自分をおびき寄せるような敵の言葉。
どうして、シュトリナが動けないように縛ってあるのか？
どうして、毒を飲ませたはずなのに、動けなくさせる必要があったのか？
どうして、帝国最強のディオン・アライアがいるのに、あえて『弓』を撃ってきたのか……？
これは、罠。極めて悪辣な、蛇の罠。
シュトリナを助けに行かなければ、シュトリナは毒で死ぬ。
シュトリナを助けに行けば、助けに行った者は、やはり死ぬ。
そして、解毒薬を持って助けに行く人間が、敵の意にそぐわぬ者であったなら、シュトリナは矢で射られて、死ぬ。
これは、そういう罠。シュトリナを助けるために、誰の命を差し出すのかという罠。
敵の第一の目標がミーアであることは明白だ。だから、敵にとって助けに来る人間は、ミーアであることがベスト。けれど、ベルは知らされてしまっている。
巫女姫は妥協する、ということを。
護衛を連れてきてもいい、と事前に伝えることで、知らされてしまっている。
敵はいともたやすく妥協する。
ミーアとシュトリナの命では釣り合わない。だから、妥協する。
では、誰ならば、シュトリナと釣り合う？

敵は、きちんと指名してきていたのだ。
小さな馬のお守りを持つ者……持っている可能性が高いシュトリナの『お友だち』。
巫女姫は、朗らかに呼びかける。
『さぁ、お友だちを助けてあげなさい』と。
ベルに突き付けられたのは残酷な選択肢。
自分の命か、友だちの命かという二者択一。
いつ死んでも良いとは、ベルは、もう思わない。
簡単に諦めない。諦め悪く、この世界にしがみつこうと思っていた。
だって、ベルはこの世界が好きだから。
この世界を心の底から愛おしく思っているから……。
……でも、それでも……ベルは選ぶ。シュトリナを、助けることを。
その小さな胸には、決して消えない思いがあったから。
あの世界……ベルがいたあの未来は、たぶん、もうないのだろう。
ミーアが、悲劇を回避するために奮闘してきたことで、たぶん、あの世界は消えてしまったのだろう。そんな漠然とした予感がベルの中にはあった。
でも、それでも……決して消えない言葉があったのだ。
消えない想いの炎があったのだ。
帝国の叡智の血を継ぐ最後の姫として、その誇りを胸に抱いて生きるということ……。
その名に恥じぬ生き方をするということ……。
友の命が消えようとしているのに、友が苦しんでいるのに、自らの命を惜しむ。それは、帝国の叡智の血を継ぐ者に、相応しい姿ではない。
「リーナちゃんを、助ける……」
自身の命を軽んじるのではない。
だけど、重たい命を投げうってでも、なお、守りたい想いがあった

から。
ベルは、躊躇いなく真っ直ぐにシュトリナに駆け寄る。そのそばに近づき、呼びかける。
「リーナちゃん！」
苦しそうな、青白い頬をしたシュトリナ。その白い唇を無理やりに開けさせると、ベルは小さな馬のお守りの、お腹の部分を開く。
不自然に硬くなっていた、そこには、小さな瓶が入っていた。中身を取り出すと、シュトリナの口に、一気に流し込む。
「ん……く……ぅ」
途端、シュトリナの眉間に、苦しげな皺が寄る。直後、けほ、けほっと、シュトリナが小さくせき込んだ。
涙の滲んだその瞳が、うっすらと開き、そして……。
「ベル……ちゃん？」
かすれる声で、シュトリナが言った。
「リーナちゃん……よかった……」
ベルが、小さく息を吐いた刹那……鋭い風切り音が響き……そして……。

第二百二十七話　導の少女2～帝都の空に月は輝き～（前書き）

※注）今日とっても切ない話です。

第二百二十七話　導の少女2～帝都の空に月は輝き～

甲高く鋭い風切り音は、狙いを違えることなく……ベルの首筋を貫いた。
「あっ……」
ぐらり、とベルの体がバランスを崩した。そのまま、よろよろ、とシュトリナのそばに、ベルは倒れこんだ。
再度の風切り音。とどめの一矢は、けれど、ベルの体をとらえることはなかった。
間に立ち塞がるように割り込んだ少年、アベルの右腕に突き刺さったからだ。
「ぐっ……」
バランスを崩しつつ、その場に踏みとどまり、アベルは姉を睨みつける。
「姉上、なぜ……。なぜ、このようなことをっ！」
血を吐くような叫び声。その向かう先には、
「ああ、失敗。でもいいわ。目的は達したから」
弓を片手に持つ、ヴァレンティナの姿があった。その横合いからギミマフィアスが斬りこんだ。
「ああ、おひさしぶりね、師匠。相変わらずの、すごい太刀筋ね」
瞬時に弓を捨て、剣を抜くヴァレンティナ。間一髪でギミマフィアスの一撃を受け流す。
そのまま、ギミマフィアスと切り結びながら、ヴァレンティナは外に出る。
その後を追って、狼使い、さらに、アベルも礼拝堂の外に行く。
目まぐるしく展開する光景。ミーアは、ただ、それを呆然と見守ることしかできなかったが……。
「あっ、でぃ、ディオンさん、行って！」

駆け寄ってきたディオンが、硬い表情で言う。
「……行くのは構いませんがね。アベル王子殿下をお守りすればよろしいので？　それとも、ギミマフィアス殿と協力して巫女姫を討ち取りますか？　確かに、狼使いはいい腕をしているから、ご老体には厳しいでしょうが……」
「……誰も死なせないようにして」
「姫さん、それは……アベル王子とギミマフィアス殿ですか？　そこに狼使いを加えてもいいかもしれないが……まさか、あの女も含めてじゃないんでしょう？」
ディオンは、苦々しい顔で問う。
「そいつは、お人よしが過ぎるってもんじゃ……」
「お願い。ディオンさん」
その声は、小さく震えていた。
ディオンは、ミーアの顔を見ると、小さくため息を吐き、
「やれやれ……。納得はいかないが……まぁ、レムノの剣聖と剣を交える機会も、そうそうないか」
肩をすくめると、ディオンは礼拝堂を出て行った。
実際のところ、ミーアには特に深い考えがあったわけではなかった。
ただ、時間が欲しかった。頭を整理する時間が……。
今は……なにも考えられないと、わかっていたから。
「ベル……」
とぼとぼと歩み寄った先に彼女が倒れていた。
首に矢を受けた孫娘、ミーアベルが、床に倒れていた。
追撃の矢は受けなかった。けれど、最初の一矢で十分に致命傷であることは、見ただけですぐに分かった。
「ベル……ちゃん……。や……やだ。やだっ！」
ルードヴィッヒの手で拘束を解かれたシュトリナが、がむしゃらに這って、友だちのところへと向かった。力なく横たわる体に、抱きすがると、その手が、赤く染まっていく。

世界が、赤い色で塗りつぶされていく。
それは、いつかミーアが見た風景。
……赤い、燃えるような赤が、視界を埋め尽くしていた。
呪われた邪悪な礼拝堂、その生贄の台は、少女の鮮血で染まっていた。
荒れた床に倒れ伏し、ティアムーン帝国最後の皇女、ミーアベル・ルーナ・ティアムーンは、けれど……穏やかに笑みを浮かべていた。
幸せが、その心を満たしていた。
聞こえるのは優しい人たちの声、声、声。
ルードヴィッヒ先生がいた。アンヌお母さまがいた。
お友だちのリーナと、そして、尊敬するミーアお祖母さまがいた。
ずっと聞いていたいと思った、一緒にいたいと思っていた人たちの、温かい声。
夢のような最期の光景が、そこにあった。
だから、もう痛みはなかった。怖くもなかった。
息苦しさも消え……そして、世界は、いつしか黄金に染まっていた。

「ベル、ちゃん……？」
呆然とつぶやいたのは、シュトリナだった。
その手のひら、べったりとついた血が、突如として金色に輝きだしたからだ。輝きは血からベルの体へと移り、その全身を明々と輝きで満たした。
その、黄金の輝きに……ミーアは見覚えがあった。
――これは、ベルが現れた時と同じ……？
言葉もなく、ミーアはただ、その光景を見つめる。
「ごめんなさい。リーナちゃん。お別れの時が、来てしまったみたいです」
ベルの声が聞こえる。先ほどまで声も上げられなかったはずだったのに、その声はやけにはっきりと聞こえて。

それが逆に、その時が来たことをはっきりと感じさせた。
「ベルちゃん……うそ。やだ、そんなの……やだ！」
涙に濡れた声で、ベルに縋りつく、シュトリナ。その瞳からは、ぽろぽろ、ぽろぽろと、とめどなく、涙が零れ落ちていく。
ベルは、困ったように笑って、シュトリナの目元を指で拭ってから、
「ごめんなさい。リーナちゃん。いろいろ約束、守れなさそうです。えっと、ボクの秘密は、ミーアお姉さまに聞いてください。聞けばきっとわかるから。大丈夫。またきっと会えるから……。絶対にまた……。だから、大丈夫……」
安心させるように言って、それから、ベルはミーアのほうに目を向ける。
「ミーアお姉さま、今まで、ありがとうございました。こんなことになってしまって……ごめんなさい」
そっと頭を下げて、
「リンシャさんにも、お礼を言っておいてください。それに、エリス母さまにも、ミーアお姉さまのお父さまにも、シオン王子にもキースウッドさんにも……」
「ベル……」
その輝きが、さらに強さを増していく。気付けば、ベルの体は、端のほうから徐々に、光の粒子に変わっていって。なぜだろう、ミーアには、その姿がジワリと滲んで見えて……。
そんなミーアに目を向けて、ベルは少しだけ悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「ミーアお祖母さま……サボらないで、ちゃんとボクのお母さまのこと、産んでくださいね。アベルお祖父さまと仲良くしないと、駄目ですよ？　ボクの、お母さまは八人の子どもたちの中の……」
直後、パッと……。光が小さく瞬いて……。
ベルの姿は散って消えた。
嘘のように、なんの痕跡も残すことなく……消えてしまって。

それは、まるで夢の終わりのように……。
幸せな夢の終わりのように……。
ただ、小さな馬のお守りだけが、ぽつんと、その場に残っていて……。

それは、まどろみの中、ベルが見た光景。
瞬(まばた)きを一つ。
そこは、破壊され、瓦礫で埋もれた帝都。
空一面を覆うのは、憎悪の暗雲。渦巻く復讐の連鎖が、大空を黒く染め上げた世界。
そこは、蛇の世界。破壊と混沌の世界。
その光景を見て、ベルは思う。
――やっぱり……あれは夢だったのかな……。そうだよね……。
あんなふうに優しい世界があるはずなんかないんだ。あれは、夢。
ボクが誇りを失わなかったから、死ぬ前に、神さまが見せてくれた夢だったんだ……。
諦めと失意に、ベルが、そっと瞳を閉ざそうとした、その刹那……、どこかで声が聞こえた。
懐かしい、あの声が……。

「あなたの夢は、わたくしが終わらせませんわ」
それは、ベルがずっと胸に抱き続けていた誇り。
帝国の叡智の、尊敬する祖母の……敬愛するミーアお姉さまの声で……。

瞬きを、もう一つ。
刹那、世界は一変する。
空をかけるは、波紋のような衝撃。

巨大な波に流されて、見る間に憎悪の黒雲が散っていく。
覆いつくす闇が一掃された空に、燦然と輝くは月。
夜の闇を切り裂いて、その存在を誇示する力強き輝きは、世界のことごとくを黄金の色に燃え上がらせる。
崩れ去る瓦礫の帝都。すべては黄金の輝きと化し、その姿を変えていく。
それは、まるで夢のように。
辛かったこの世界すらもまた夢であったかのように。

瞬きを、再び一つ。
そうしてベルが見た風景……それは。

第二百二十八話　導の少女3～ミーアのすべきこと～

「ベル……一番、肝心なところを言わずに、行ってしまいましたわね……」
ぽつり、とミーアはつぶやく。その声は小さく震えていた。
「これでは、全員産むしかないではないですの……八人は、さすがに多いですわ」
そうして、脳裏を過ぎるのは、かつて何気なく考えた推論だった。
歴史を改変した際、なぜ、ベルと皇女伝とに違いが出たのか？
それは文字は変えやすく、記憶は変えづらかったから。
あの日記帳が消え、ベルが消えずにいたのも、そのためで……。
つまりは改変の影響を受けやすいものと受けにくいものがあるということ。
命持つ者は、歴史を変えた時の影響を受けづらい。そうだとすればベルが消えてしまったということは、つまり……。
ミーアは、静かに瞳を閉じる。
まぶたの裏に、あの、孫娘の能天気な笑みを思い浮かべて……。
不意に、外から剣戟の音が聞こえてくる。
「ああ、そうですわね……まだ。わたくしにはやらなければならないことが、ありますわね」
ベルがいなくなってしまったから……。なおのことやらなければならないことができてしまった。
ミーアは、目元をぐいっと拭い、立ち上がる。
今、自分がすべきことはなにか……？
不思議と、ミーアには、それがわかっていた。
ベルが指し示してくれた答えが、見えていた。それは、まるで導のように……。
そう、ミーアは未だに恐れている。敵が死に、自分と同じように

過去に戻ってやり直しの機会を得てしまうことを。
そしてそれゆえに……希望をも持っている。
ベルが……自分と同じように過去に戻ってやり直しの機会を得ること。その可能性があるのではないか、と。
――なんと言っても、ベルはわたくしの孫ですし。それに、致命傷となったのは同じ首。まして、あんな意味深な消え方をした以上、可能性はとても高いのではないかしら……？
とすると、問題は、どの程度、過去に戻るかということである。
数日前ならば、それでも良い。要領のよいベルのことだから、きっと上手いことやるだろう。けれどもし……もしも、自分と同じように八年前に舞い戻ったのだとしたら？
ベルにとっての八年前、それは言うまでもなく未来のことで……。
――内戦で、めちゃくちゃになった帝都で目覚めるなんて、それはあまりにも可哀想ですわ。
ここでヴァレンティナに死なれては、きっとアベルとの仲がぎくしゃくする。そうなったら、もしかしたら、ベルは生まれてこないかもしれないし、生まれてくるにしても、きっと未来の帝国にもよくない影響を及ぼすだろう。
それでは困る。それはとても寝覚めの悪いことだ。
ベルには、今よりもさらに発展した状態の帝都で、優しい人たちに囲まれて目覚めてほしい。
ベルが次に目覚める場所を幸せな夢の続きにすること……それこそがミーアのすべきことであり、導だった。
――ああ、ベルは本当にわたくしにとっての導になったのですわね……。
静かに息を吐いてから、ミーアはルードヴィッヒのほうに目を向けた。
「ルードヴィッヒ、リーナさんのこと、お願いいたしますわね」
ミーア以上に状況がわからず、呆然としている従者たちに一声かけて、それから礼拝堂を走り出た。

外では、複雑な戦闘が展開されていた。
膝をつき、動けずにいるのは、ヴァレンティナだった。その手にはすでに剣はなく、服が血に染まっている。
レムノの剣聖ギミマフィアスと打ち合ったためか、傷は深そうに見えた。
そんなヴァレンティナに追撃をかけるべく、ギミマフィアスが突撃する。けれど、その前に、帝国最強、ディオン・アライアが立ち塞がる。
「邪魔をしないでもらおうか」
ギミマフィアスは、叫び、一閃！　上段から神速の一撃を放つ。
それは、アベルの振り下ろしをさらに重く、速くした一撃。ディオンは、それを……あえて正面から打ち返す。
剛と剛。一歩も引かぬ斬撃の激突。
打ち合わされた剣から火花がパッと散り、二人の騎士を彩る。
鍔迫り合いの剣越しに、ギミマフィアスは静かに問う。
「……なぜ、止める？　吾輩と貴殿の目的は一致している、敵は同じだと思うが」
敵意の滲みだした、低い声。対するディオンは、普段と変わらぬ飄々とした声で答える。
「奇妙な会話だね、これは。普通は、かつての主君だとか弟子だとかに情があって、それをかばおうとするのを、僕が攻め立てる流れだと思うけど。いいのかい？　あちらの巫女姫さんとやらは、君が仕える国王の娘、君が剣を教えた弟子なんだろう？」
「御心配には及ばぬ。吾輩は、レムノの剣。レムノの騎士。我が剣は国王陛下にささげしもの。なれば、その命を全うすることこそが騎士たる者の誉れ。我が国に害をなす者は我が身の全力を持ちて排除する」
「ははは、気が合うね。僕もそう思う。ならば、もう問いの言葉は不要だろう。互いに、主君の命を全うするのみさ」
一度離れ、今度はディオンが踏み込む。

「正直、納得はいかないが、我が姫君は誰の命も落とさずに終えることをお望みなのでね。めんど……いや、難儀なことではあるんだが……仕方ない。たまにはいいさ」
「わはは、面倒くさいとは……。勤勉な帝国の叡智の臣下に相応しからぬ言葉だ！」
地を這うように下から、一撃、二撃、三撃。それぞれ異なる軌道の斬撃を放つも、ギミマフィアスは、そのすべてを受け流してみせた。
「ははは。姫さんのことをよく知らないようだから、言っといてあげるけど、勤勉という言葉は姫さんには一番似合わない言葉だよ。後で楽をするために全力で頑張るってタイプだ。っと！」
ディオンは鋭く突きを放ち、ギミマフィアスの肩口を打って体勢を崩す。と同時に、真後ろに飛び、もう一人の手練れ、火馬駆に斬りつける。
「むっ……」
その斬撃を受け流しつつ、馬駆は眉をひそめた。
「そちらも勝手に逃げたりしないでもらおうか。こっちは、犠牲が出て気が立ってるものでね。いくら姫さんの命令と言えど……うっかり間違いは起きるかもしれない」
苛烈な斬撃を放つディオンは笑ってはいたが……明らかに、その目には冷たい殺意が宿っていた。
ミーアの命令と、巫女姫への殺意、際どいバランスの中にあって、その剣技は冴えわたっていた。
「ディオンさんっ！　アベルっ！」
ミーアの声に、全員の視線が集まる。
「ミーア、ダメだ。来るな」
制止するアベルだったが、それで止まるわけにはいかない。なぜなら、アベルが、隙を伺い、ヴァレンティナに斬りこもうとしていたからだ。
「アベル、わたくしのことが心配ならば、わたくしのそばで守って

くださらないかしら？」
すまし顔で言ってから、ミーアはディオンに目を向けた。
「ディオンさん、よく、状況を止めてくださいましたわね」
「骨が折れましたがね。それで、どうするんです？　レムノの剣聖とともに敵を討てと命じてもらうのが一番楽でいいんですがね」
「残念ですけれど、生け捕りにしていただきたいですわ。ヴァレンティナ王女も、慧馬さんのお兄さまも」
ミーアの答えによどみはなかった。ミーアにはしなければならないことがあったからだ。
「さて、困りましたな。吾輩としては、ヴァレンティナさまが、生きてあなたがたの手に落ちることは避けたいところなのですが……」
ギミマフィアスの声が低くなる。
「かくなる上は、我が主命を守るため、捨て身で行かせていただく」
「無茶はするものじゃないと思うけどね、ご老体」
ディオンはチラリ、と馬駆のほうをうかがってから、片方の剣を鞘に収め、両手持ちに変える。
ピリピリと、肌を刺すような緊張感が高まっていき……そして、
「ギミマフィアス、剣をおさめろ」
状況は、再度、変化する。
不機嫌そうに眉根を寄せて、レムノ王国第一王子、ゲイン・レムノがゆっくりと、そこに歩いてきた。
「これは、ゲイン殿下……。ご機嫌麗しゅう。なぜ、このような場所に？」
「なに、父に怪しげな密書が届いたようなのでな。調べに来たまでのこと」
彼は、懐から植物紙を取り出すと、そこに放り捨てた。
「ああ……それは失敗でしたな。もっと報せには慎重を期するべきでした。本来ならば、もっと早くに行動すべきでしたが、護衛と暗殺の兼任というのは、さすがに老体には無茶が過ぎましたな」
「暗殺……。では、やはり……以前、姉上を殺すように動いたのも

父か」
「それについては、吾輩の知るところではありませぬ。ただ一つ言えることは、国王陛下は、この手の謀略に、そこまで慣れてはいないということでしょうか」
「それは、だから姉の暗殺が失敗したと言いたいのか、それとも、姉の暗殺などそもそも企まないと言いたいのか」
「そこはご想像にお任せいたしまする」
慇懃無礼に頭を下げるギミマフィアスに、ゲインは小さくため息を吐き、
「しかし、我が国の近隣にこのような場所があったとはな。寡聞にして聞いたことがなかったが……」
「古い邪神を崇拝する者たちが建てたお城みたいよ？　信者自体はとうの昔に死に絶えたみたいだけど、ヴェールガとの国境沿いにある拠点だから、なにかに使えないかって、先代の国王陛下がこっそりと直したらしいわよ？」
気軽な口調で口を挟んだのは、ヴァレンティナ・レムノだった。からかうような口調で言って、視線を巡らせる。
「そういうことよね？　我が師、ギミマフィアス？」
「姉上……」
苦々しげに睨み付け、ゲインは言った。
「お元気そうですね」
「あら？　嫌味かしら？　師匠にやられて、満身創痍なのだけど」
「相変わらず、口が減らぬことで……。せいぜい、戻って父に嫌がらせをしてやると良い」
それから、ゲインはギミマフィアスに視線を戻した。
「なにをしている？　ギミマフィアス、剣をおさめろと言ったぞ」
「残念ながら、殿下、吾輩は、お父上である陛下より命令を受けておりますゆえ」
その答えに、ゲインの頬がぴくり、と震える。
「ほう。この俺の命令が聞けぬか……」

それから、彼は、剣を抜く。
「では、俺を斬り殺してでも、その命令に従うか？」
「なるほど。それは厄介。まぁ、そうなれば、殿下の意識のみを刈り取って、目的を果たすのみ」
「そうか……。それはちょうどいい」
ゲインは静かに剣を構えた。
「腕試しをしたいと思っていたのだ。一つ稽古をつけてもらおうか。レムノの剣聖」

第二百二十九話　導の少女４～決戦の塔へ～

「あらあら、ふふふ。弟たちが守ってくれるなんて。それならば、私は今のうちに引こうかしら？」
よろり、と立ち上がると、ヴァレンティナは馬駆のほうに目を向けた。
「馬駆、後のことをお願いしていいかしら？」
「なにをするつもりだ？」
眉をひそめる馬駆に、ヴァレンティナは楽しそうな笑みを浮かべる。
「ちょっとした仕上げよ」
歌うように言って、ヴァレンティナは踵を返す。
「逃がしませんわ！　行きますわよ。アベル！」
ここで、彼女に逃げられるわけにはいかない。ミーアは、ヴァレンティナの後を追うべく、走り出す。
「しかし……」
躊躇うように、兄のほうに目を向けるアベル。そんな視線に気付いたのか、ゲインは皮肉げな笑みを浮かべて言った。
「行け。アベル、姉上を止めろ」
「兄上、ですが……」
「その腕では、ギミマフィアスの一撃で、剣を飛ばされる。それで終わりだ。それに……」
ゲインは、剣を構えたまま、ギミマフィアスのほうを見た。
「第二王子と王命ならば、王命のほうが重かろうが、第一王子と王命とならば、お前の中ではどちらが重いかな？」
「……」
無言を返すギミマフィアスに、ゲインは笑みを浮かべる。
「そういうことだ。せいぜい、師に稽古をつけてもらうとするさ。

だから、行け。必ず生け捕りにして戻ってこい。このような無様を曝したのだ。存分に、嘲笑ってやらなければ気が済まん」
「兄上……。わかりました。それでは、お気をつけて」
そうして、アベルはミーアとともに走り出した。
「行かせぬ」
そんな二人の前に火馬駆が立ち塞がろうとするが……。
「おいおい、見くびられたものだね。帝国最強を自認する者としては、プライドが傷つくよ」
横合いから、ディオンが斬りかかる。
「くっ……」
「兄上！　もう、剣をおさめてください！」
いつの間に来たのか、慧馬が悲痛な声を上げた。
「あのディオン・アライアが相手ですよ？　あのディオン・アライアなんですよ！！　殺されてしまいます！」
「いや、殺すな、と姫さんから命令されてるんだけどね……」
苦笑いを浮かべてから、ディオンは馬駆を見た。
「馬上じゃないなら、万に一つも勝ちがないと思うけど、それでもやるかい？　どうやら、君の妹君も、うちの姫さんの友となったようだから、僕としては、怪我する前に剣をおさめてもらえると楽なんだけど……」
「あり得ぬ話だ。貴様を殺し、レムノの剣聖を殺し、ゲイン・レムノを殺して、巫女姫のところに向かう。我の成すべきことは、なにひとつ変わらぬ」
やれやれ、と首を振り、ディオンは肩をすくめた。
「それはなにより。ならば、存分に殺しあおうか」
激戦の音を背に、ミーアたちが向かったのは、眼前にそびえ立つ塔のほうだった。
「ふむ……罠があるかもしれませんわね。慎重に……」
「ミーア、その……彼女は？」

遠慮がちに問われ、ミーアの足が止まる。
「ええ……。お別れを、してきましたわ」
アベルのほうを振り返ることなく、ただ淡々とミーアは言った。
「そうか……」
固い声でそう答え、アベルは深く息を吐き……。
「あ、そう言えば……あなたも肩に矢傷を受けてましたわね」
ミーアは、アベルの腕を見る。と、矢は半ばから折られており、そこに布が巻かれていた。
「ごめんなさい。気付きませんでしたわ。それ、大丈夫ですの？」
手を伸ばそうとしたミーアだったが、その手が止まる。
アベルの、悲壮な声が聞こえたから……。
「……仇はボクが討とう。兄上には申し訳ないけど、ヴァレンティナ姉さまはボクの手で……」
「それでは、ダメですわ」
そこではじめて、ミーアはアベルの顔を見た。泣き出しそうな顔をするアベルに断固たる口調で言ってやる。
「ヴァレンティナお義姉さまは、連れ戻さなければなりませんわ」
「ミーア、しかし……」
「絶対に生きたまま、連れ戻さなければならない。その理由が、ありますの」
ミーアは言った。
珍しいことに、今は……、今だけは、ミーアは、自分がしなければならないことがわかっていた。
ベルが、そう示してくれたから。
「約束していただきたいんですの、アベル。必ず、ヴァレンティナさんを生きたまま連れ帰ると」
アベルはギリッと歯を食いしばってから、静かに頷いた。
そうして、二人は、塔の頂上に至る。
「追い詰めましたわよ。ヴァレンティナお義姉さま」

青空の下、ヴァレンティナは、静かに佇んでいた。体を壁に預け、苦しげな顔をしていた彼女だったが、ミーアたちに気付くと、すぐに、姿勢を正した。
「ああ、やっと来た。待ちくたびれたわ」
「それは、お待たせしてしまって申し訳ありませんでしたわね。改めて、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
スカートの裾をそっと持ち上げてから、ミーアは静かにヴァレンティナを睨む。
「これはご丁寧に。帝国の叡智。私は、ヴァレンティナ・レムノ。レムノ王国の第一王女で、そこのアベルの姉よ」
傾国の美姫のごとき嫣然たる笑みを浮かべて、ヴァレンティナは言った。
その身は、血に汚れてはいたものの、そのせいで却って凄絶な美しさが際立って見えた。
「ヴァレンティナ姉さま……。なぜです？　なぜ、このような酷いことをされるのですか？」
黙っていることができなかったのか……アベルが言った。その血を吐くような問いに、ヴァレンティナは肩をすくめた。
「きっかけは、まぁ、父さまの側近に殺されかけたこと、かしら？　少しずつ、レムノ王国を改革しようとしていた最中だったから、それなりにはショックだったのよ」
そうして、彼女は、困ったような笑みを浮かべる。
「レムノ王国は間違ってる。人は、何者として生まれたかではなく、何者になったのか、で評価されるべきだ！　とか、考えていたわ。矛盾するようだけど、王家に生まれた者として、男女差や身分の差によらない、能力による国家運営の形に改革していけたらいい、なんて青臭い信念を持ってはいたのだけど……見事にポッキリ折られてしまった」
「だからって……」
抗議するようなアベルの声を、ひらひら手を振って遮って、

「ああ、いいのいいのよ。アベル。私もそう思う。だからって、こんなことをするのはおかしい。間違っている。ええ、私もそう思う。完全に同意する。だから、私の挫折というのはただのきっかけに過ぎなかったのよ、たぶんね」

それから、ヴァレンティナは、なにかを探るように、手を服の上にさまよわせて……。

「ああ、教典は燻狼さんにあげてしまったんだったわね。まぁ、いいでしょう」

まるで諭すような、ゆったりとした口調で、ヴァレンティナは話を続ける。

「私個人の事情なんか、結局のところ些細なこと。私がこうなったのは、不条理を押し付けてくるお父さまたちのためでもなければ、敗北したという感覚のためでもない。どれだけ必死に頑張ったとしても、仮にレムノ王国に変革を起こし、理想的な国家を作ったとしても、そんなもの百年と経たずに混沌の蛇に呑まれてしまうという現実に直面したからよ」

熱に浮かされた様子で、ヴァレンティナは言った。

「蛇の誘惑は強力よ。敗北した身には切実に迫ってくる。その力を実感してしまって、地を這うモノの書を読んでみて……。先代の巫女姫さまから、大陸の繰り返される歴史を教えてもらって……なんだか、必死に頑張ってきたのが馬鹿馬鹿しくなってしまってね。どれだけ頑張っても、人は、人の性質ゆえに、決して蛇の呪縛を逃れることができない。どうせ、蛇の作り出す歴史の流れに呑まれるだけなのだとしたら……逆らう意味なんかない。むしろ、その流れに身を任せてみようかなって、そう思ったのよ」

饒舌に、まるで詐欺師のような口調で、ヴァレンティナの声が響いた。

キャラクター紹介４　メモぐらいですが……（前書き）

キャラ紹介リクエストがあったので、ざっくりと……ざっくりと……。

キャラクター紹介４　メモぐらいですが……

火　馬駆（カ・マク）（２８）
通称、狼使い。混沌の蛇に与する凄腕の暗殺者。狼を従える術を持つ。
火の一族の族長でもある。

ヴァレンティナ・レムノ（２４）
混沌の蛇の巫女姫。死んだと思われていたアベルの姉。レムノ王国の第一王女。
剣、弓などに長じ、頭もよい。ややヤンデレ気味。

火　燻狼（カ・クンロウ）（３８）
蛇導士。エシャールに毒を渡した男。毒物に通じるが、火の一族出身なだけあって乗馬技術も一流。
族長の血族というわけではない。

火　慧馬（カ・エマ）（１６）
馬駆の妹。「同じ食卓を囲めば友だち！」というシンプルなメンタリティ。情に厚い。
乗馬技術に優れる。

羽透
慧馬の連れている狼。割と人懐っこい。まるでハスキーのよう。

火　狼花（カ・ロンファ）（７５）
火族の長老。可愛いおばあちゃん。

ギミマフィアス（５９）
全身金属鎧の騎士。アベルの護衛として同行する。
レムノ王家の剣術指南役でもある。レムノの剣聖の異名を持ち、とても強い。全盛期はディオンと並ぶ程度の腕前。
通称、キノコナイト。

林馬優（リンマーユウ）（４４）
ミーアの乗馬部の先輩である林馬龍の父。歴史歌の歌い手。すぐに歌いたがる。

山富馬（サンフウマ）（５０）
騎馬王国の南都を守る山族の長。
名馬マニア。

山小驪（サンシャオレイ）（１６）
富馬の娘。他国の貴族にかぶれているが、馬は好き。ですの、口調。
乗馬技術は低くないが、ミーアに負けたりするお茶目なところがある。

風光馬（フウ・コウマ）（８０）
騎馬王国の中で、最も伝統を重んじる風族の長。騎馬王国の族長の中で最年長。
飄々とした老人。

※年齢は変わる可能性も……。

キャラクター紹介４　メモぐらいですが……（後書き）

そして、来週かその次の週で、第四部終了となります。

第二百三十話　見せつけよ。揺るぎない自分ファーストを

「さてと、そういうわけだから……せっかくの機会だし、ミーア姫の命ももらっておこうかしら？」
ニヤリと微笑んで、ヴァレンティナは剣を抜き、大上段に構える。
「そんなこと、させるとお思いですか？　姉上」
呼応するようにアベルも剣を構えるが、ヴァレンティナはいたって落ち着いた様子で首を傾げた。
「あらあら、優しいアベル。ずいぶんと勇ましい顔をするようになったみたいだけれど、まさか、私に剣で勝てるつもりかしら？　その腕で？」
「姉上こそ、ギミマフィアスと戦っておきながら、無事で済んでいるわけがないでしょう」
「どうかしら？　それじゃあ、ひとつ試してみましょうか！」
ヴァレンティナが、すさまじい速度で間合いを詰める。
真っ直ぐな踏み込み、それはアベルの一撃に勝るとも劣らない直線的な一撃で……ミーアは、それに違和感を覚えた。
あの、蛇の巫女姫が真っ直ぐに突撃してくる？　そんなことがあり得るのだろうか？　だとしたら、その目的は？
「まさか……」
思い付き、走り出す。直後、状況は激変する。
両者の剣が、激しくぶつかる。その衝撃に、アベルは顔をしかめるも……歯を食いしばり、その場に踏みとどまる。
一方のヴァレンティナの体は勢いを殺しきれず、よろめいた。
アベルの言葉は正しかった。ギミマフィアスと戦った彼女の体は、すでに限界を迎えていたのだ。
……そのまま塔の端に飛ばされた彼女は……。
「あっ！」

踏みとどまろうとするも、失敗。そのまま、宙に投げ出されて……。
「ああ、強くなったのね、アベル。ふふ。それにしても、これはとても理想的……」
どこか恍惚とした表情で、その運命を受け入れたようだった。
そんなヴァレンティナの様子が……ミーアは、なんだか、すごくムカついた。だから！
「勝手に死ぬだなんて、許すはずがございませんわ！」
ミーアは、懸命に腕を伸ばし、ヴァレンティナを掴まえた！
ぐんっと両腕に重さがかかる。けれど、決して離したりはしない。ダンスで、乗馬で鍛えた筋力をフル稼働。なんとか、体を支える。
その様子に、ヴァレンティナは意外そうに眉をひそめた。
「私を助けようとするなんて、不思議なことをするのね。理解できないわ」
「あら、それはお互いさまですわ。お義姉さま。わたくしにも、あなたの行動が理解できませんわ。このような場所で死ぬことに、なんの意味がありますの？」
歯を食いしばりながら、ミーアは尋ねる。対して、ヴァレンティナは、
「ふふふ。帝国の叡智なのに、それはずいぶんと可愛らしい質問ね。そんなの決まってるでしょう？　あなたの大切な、優しいアベルに傷を残すためよ」
歌うように、軽やかな口調で言った。
「生い先短い老人に殺されたところで、あまり意味はないけれど、優しい我が弟に殺されたなら……、確実に心の傷をつけられるでしょう？　それは、次の蛇が動く助けとなる」
「それだけのために……？」
「もちろん、それだけではないわ。私が死ねば、きっとリーナさんも堕ちるでしょう」
華やかな笑みを浮かべて、ヴァレンティナは続ける。

「お友だちを殺した恨みは、当然、私へと向くでしょう。それじゃあ、私が死んでしまったら？　あるいは仮に狩るべき蛇が、すべていなくなったら、どうなるかしら？　それで、復讐の心というのは、癒えるものかしら？」
小さく首を振って、ヴァレンティナは続ける。
「そんなことはないのよ。それで大切なものが返ってくるわけではないのだから。怒りは決して消えはしない。そうして、消えない恨みは、今度は神へと向かう。どうして、あの時に守ってくれなかったのか？　という具合にね。ほら、蛇は簡単に甦る」
まるで、なにかにとり憑かれたように、あるいは、酒に酔ってでもいるかのように、ふわふわとした声で、ヴァレンティナは言った。
「それを見越して、私を助けようとしているのだとしたらご慧眼だけど、それはそれで、リーナさんとの仲がこじれるでしょうね。なぜ、お友だちの命を奪った相手を、身を挺して助けたりしたのか、と……。かといって、今、手を離せばアベルとの仲がこじれる。困ったことになったわね」
それから、どこか晴れやかな、すっきりとした顔で、ヴァレンティナは言った。
「だからまぁ、どちらにしても同じことだけど、そうね……世界のためには、私のような者は死なせたほうがいいのではないかしら？　なにしろ、私の頭の中には、地を這うモノの書が一字一句、記憶されているのだから。なかなかに厄介でしょう？」
自分の命のことだというのに、ごくごく他人事のように言った。
対して、ミーアは……ミーアは……。
「世界のことなど、知ったことではありませんわ。ヴァレンティナお義姉さま」
静かに、断固たる口調で言い放つ。揺るぎない言葉で、言い放つ！
「あなたを死なせたりなんか、絶対にしませんわ……絶対ですわ」
……そう、ミーアは変わらない。
世界のことなど知らない。どうせ蛇に呑み込まれるとか、そんな

の知ったことではない。
ミーアが気にしているのはただ一つのことだ。それは……。
――ベルが産まれてきた時、わたくしとアベルの夫婦仲が悪いなどという事態は避けたいところですわ。
温かな、優しい家庭にベルを迎えたい。そのためには、ベルの親となる子どもたちにも、アベルとのラブラブっぷりを見せて、範を示さなければならない。
だからミーアは貫くのだ。揺るぎない自分ファーストを。
アベルとのラブラブな夫婦生活を築くために！
そして、ベルの幸せな夢を終わらせないために！！
あの約束を守ることこそが、ミーアの未来への導だからだ！！！
「理解できないでしょう？　巫女姫、ヴァレンティナお義姉さま。あなたに理解できないことなんて、世界にいくらだってあるんですのよ？　蛇の思惑に縛られないものなんて、いくらだってありますのよ。ざまぁみろですわ！」
声を震わせて、ミーアは叫ぶ。
「……泣きながら、そんなことを言っても、あまり説得力がないと思うけど……」
どこか呆れた様子のヴァレンティナを無視して、ミーアは懸命にヴァレンティナを引き上げようとする。っと、そこに、横から別の腕が伸びてきた。
赤い血に染まったその腕の主は……。
「アベルっ！」
ふと見れば、アベルがそばまで来ていた。
彼は無言で、歯を食いしばって、ヴァレンティナを引っ張り上げた。

第二百三十話　見せつけよ。揺るぎない自分ファーストを（後書き）

キリが良いので、第四部は今週、金曜日で終了にします。
また、今週は水曜日も投稿する予定です。
それと、金曜日は二本投稿するかと思います。
あと五話＋αで終了ですね。それでは。

第二百三十一話　静かに侵食する、ツッコミなき世界……

ヴァレンティナを塔の上に引き上げたところで、ミーアとアベルは、その場にへたり込んだ。ヴァレンティナのほうも、もはや抵抗する気力はないのか、その場に倒れたまま、起き上がろうとしなかった。

が、そのままの姿勢で、彼女は疲れた笑みを浮かべた。

「アベル、あなたも私を助けようというの？　相変わらず優しい子ね。それではゲインに勝てないでしょうに」

挑発するような声をかけるヴァレンティナ。そんな彼女に、ミーアは勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「なにも知りませんのね。アベルはすでに、あのお義兄さまに勝っていますわ」

それを聞き、ヴァレンティナは少しだけ驚いた様子で首を振った。

「あら、そうなの。それは意外ね……。あなたは、てっきり、女の子に優しいだけのつまらない男に育つと思っていたのだけど……」

そんな姉に、アベルは、ただ一言、告げるのみ。

「ミーアが、いてくれましたから……」

それから、彼はミーアのほうを見た。その視線に、どこかすまなそうな色を見つけて、ミーアは首を振った。

「アベル、あなたが気に病む必要など、どこにもございませんわ。わたくしは、ただ、わたくしの勝手で……そう、わたくしの気分が悪いから助けただけのこと。あなたのせいではありませんわ」

そんなミーアに視線を向けて、初めて、ヴァレンティナの顔に苛立ちのような表情が浮かぶ。

「帝国の叡智、ミーア姫、あなたは……なに？」

苛立ちと……、困惑……。素の表情を隠すことなくヴァレンティナは言った。

「あなたのありようは、なんだか、逸脱しているように見える。この世界の、歴史の流れから逸脱した……異質な者のように見える。あなたはなに？」
「わたくしは……」
ミーアは少し考える。それから、わずかな決意を込めて告げる。
「ミーア・ルーナ・ティアムーン。帝国初の女帝になる者ですわ」
その答えに、ヴァレンティナは……かすかな嘲笑を浮かべる。
「そう、普通ね……とても普通」
失望を露わに、つまらなそうにつぶやいて、ヴァレンティナは言った。
「帝国を統治するというのなら、覚えておくといいでしょう。蛇のロジック。イエロームーン公ローレンツを絶望させ、リーナさんの中に私が植え付けたものを」
そうして、ヴァレンティナが口にした蛇の理屈……それを聞いてミーアは思う。
――ああ、それは、実に面倒くさそうですわ……。
蛇のロジックとは、統治する者にとって極めて厄介な思想だった。
それは、統治者がサボり、怠け、民を踏みつけにした時に発芽するもの。統治者に対しての戒めのようなものだったから……。
ただまぁ、面倒ではあるのだが……。
「それを防ぐことは、難しいことではないのではないかしら？　弱き者、敗者にも食べ物を与えれば良いのですわ」
それは、ミーアがなしてきたこと。
その日、その日の安定と幸福、それさえ失わぬ限り、人が蛇に魅入られることはないわけで……。
「民をお腹いっぱいにすればいい。人は腹が満ちれば、動きたくなくなるものですもの」
ミーアの物言いに、ヴァレンティナはおかしそうに笑った。
「面白いことを言うわね。ふふふ、確かにそう。食べ物が行き渡っているところで、革命の火を灯すことは難しい。食の不足は死の恐

怖を喚起し、容易に民の心を不安にする。それは、たしかに蛇が付け入る隙ではあるわね」
ヴァレンティナは、それから、小さく首を振る。
「けれど、それすらも、永久には続かないでしょう。人は愚かな者。あなたが賢明な判断をしたとして、あなたの後に、暗愚な指導者が現れないとも限らない。その時、眠っていた蛇は目を覚まし、あなたたちがせっかく築いた国を、やすやすと呑み込むことでしょう」
世界は、いずれ蛇に呑み込まれる。最後の最後には、蛇の理屈が勝利する。
ヴァレンティナの主張に、しかし、ミーアは笑い返す。
「別に、永遠にわたくしが勝ち続ける必要などありませんわ。わたくしは孫たちが安心して暮らせる程度の繁栄があれば、それで十分。そこから先の世界がどうなるかは、もはや、わたくしの知るところではありませんわ」
蛇と同じく、ミーアにも確固たる思想がある。
揺らぐことのない自分ファーストが、常にミーアの胸にはあるのだ。
自分が死んでしまった後のことまでは、正直、面倒を見切れない。ベルの暮らす世が良いものであるように……ぐらいは思うが、ベルの子や、孫の世代に関してはもはや、ミーアの知ったことではないのだ。
彼らもまた、自ら蒔いた種を刈り取るだけのこと。
ミーアとしては、自身が学んだそれを、しっかりと後世に伝えるぐらいしか、できることはないわけで……。
――わたくしの子孫が、わたくしと同じように注意深く、賢く、慈悲深く。帝国を治め、他国との良好な関係を築いていけば、安寧の時は長く続くはずですわ。わたくしのように、知恵ある者が……極めて優れた帝国の叡智が未来にも生まれれば、きっと……。
ツッコミなき世界の浸食が、静かに始まっていた。
「だから、わたくしは、今をあがくだけですわ」

「そう。まぁ、それもいいでしょう。どうせどちらでも同じこと。けれど、少しだけ、あなたに興が乗ったわ。私はあなたがどうなるのか、じっくり見させてもらいましょう」
そうして、ヴァレンティナは笑った。
「ミーアさま！」
次の瞬間、塔に皇女専属近衛隊の面々がなだれ込んできて……。
こうして、巫女姫ヴァレンティナは、拘束された。

第二百三十二話　戦いの終焉

塔の下での戦闘も佳境を迎えていた。
「そんなものか？　火馬駆」
「ぐっ……」
ディオンの重たい斬撃を、馬駆は間一髪のところで受け止めるも、勢いに押されて二歩、三歩と後退する。
対するディオンは、追撃をしない。あえて、馬駆が体勢を立て直すのを待っている。
「やれやれ。気合を入れてやってみれば拍子抜けだな。その程度か」
戦いが始まって以来、ディオンはずっと、馬駆だけでなく、ゲインとギミマフィアスの戦いをも視野に入れながら戦っている。
いざという時には、いつでも止めに入れるよう、常に意識しつつ、ある程度の余裕をもって決戦に挑んでいたのだ。
もっとも……心配する必要はあまりなさそうだったが……。
「どうした？　ギミマフィアス、これでは、稽古にもならんぞ」
挑発するように言うゲインであったが、その剣筋は、言葉とは裏腹に堅実なものだった。
上段からの振り下ろしを基本とした攻撃的な剣技。それは、以前見たアベルのものと似ていたが……。
――アベル王子のような我武者羅さはない分、安定している。聞いていたよりも、やるな。あの王子殿下。実力差があるから、あえて攻勢に出て、受け身に回らないようにしている。
ギミマフィアスに主導権を握らせれば、すぐにでも無力化される。それがわかっているからだろう。ゲインは徹底して、攻めに回り、決して主導権を渡さない。
決して捌ききれないような猛攻ではないものの、余裕をもって反撃ができるほど弱くもない。

さすがのギミマフィアスもやりづらそうだった。
――斬り捨てて良いものならばそうするのだろうが、相手は王位継承権一位の王子。まさか、反撃して殺すわけにもいかないか。怪我をさせないようにあれを無力化するのは、確かに手を焼きそうだけど……まぁ、寄る年波には勝てないってところかな。僕も、あのぐらいの年齢になったら、さすがに剣の腕は鈍るだろうし……。
などと、無駄なことを考えている間に、馬駆は動いていた。
ゆらり、ゆらりと揺れるような不規則な動きで接近するや、一閃。鋭い斬撃を放ってくる。
自らの首筋に迫る軌道に、ディオンは剣をねじ込むと、そのまま、敵の刃の上に自らの刃を滑らせて接近。馬駆の間合いに踏み込む。
「そろそろ実力差を悟って、諦めたらいいと思うが……」
「このっ！」
怒声を上げ、馬駆もまた踏み込む。互いに接近したことで、両者、相手の間合いのさらに内。超至近距離で、鍔迫り合いの状況が生まれる。
「わからないな。火の一族の戦士たちは投降した。そして、蛇の手の者たちは、この地を離れたんだろう？　隠れ潜み、暗躍することこそが蛇の基本戦術ならば、君がこんなところで戦う理由なんかないんじゃない？」
ディオンは刃越しに馬駆の目を覗きこむ。
「まさか、本気で巫女姫に惚れてる、なんてこともないんだろう？」
対して馬駆は……思わずと言った様子で、苦笑いを浮かべた。と同時に、ディオンを蹴りつけ、反動を使って大きく後ろに下がる。
「惚れる、か。どうかな……」
彼は自らの手の内の剣の状態を確認してから、小さく首を振った。
「国に捨てられて心を折られ、蛇に憑かれた哀れな王女だ。一人ぐらい殉じてやる者がいなければ、哀れに過ぎるとは思わんか？」
「ふん。それが、狼を使わずに一人で戦う理由かい？　君個人の矜持での戦いに巻き込みたくないから、という……」

「我の個人的な感情に、狼たちを突き合わすわけにはいかぬゆえ」
馬駆が抱く気持ちが好意なのか、純然たる忠誠心であるのかは、ディオンにはわからなかった。ただ、滅びゆく主(あるじ)に殉じようという、その気持ちにはどこか共感できるものがあって……でも、なぜだろう……？　ヴァレンティナが殺した少女のことが、先ほどから、脳裏に浮かんで離れなかった。
理由はまったくわからないが、彼女が討たれたということが、主であるミーアを討たれたのと同じように感じてしまって、なんだか無性に腹が立ち……。
「そうか……。まぁ、君の言い分はよくわかった。その気持ちはわからないでもないが――あいにくと君たちが何を考えているかなんて知ったことじゃあない」
ディオンは静かに剣を構えて、馬駆を睨みつける。
「あのお嬢ちゃんを殺しておいて……理想に殉じて綺麗に死のうなどと、虫の良いことは思わないことだ」
静かなディオンの声。そこには確かな感情があった。
それは怒り。
狼の矜持を軽々と踏みにじり、屈服させる、圧倒的なまでの強者の怒り。
刹那の踏み込みと同時に振るわれるのは、帝国最強が放つ至高の一撃。
それは、凄腕の戦士である馬駆にすら、反応を許さない絶対的な一撃。
それでも辛うじて……まさに間一髪で、馬駆は剣を上げ、刃で受け止める……受け止めた、はずだった。が、直後に響いたのは、硬質な物の割れる乾いた音。
ディオンの剛撃は、やすやすと馬駆の刃をへし折った。
「なっ……」
そのまま、流れるような動きでディオンは第二撃を繰り出す。
返す刃……の横腹で、馬駆の右肩を横に薙ぐ。

「ぐっぅっ……！」
真横に吹き飛ばされる馬駆。受け身を取り、起き上がろうとするも、その右腕に力はなく……。
「兄上！」
悲痛な声を上げて、駆け寄ってきたのは慧馬だった。それを横目に、ディオンは肩をすくめてみせた。
「昔、鋼鉄の槍の穂先を失ったどこかの猛者が、こん棒として使えば問題ない、みたいなことを言ってたが、確かにそうだね。剣とはいえど鉄の塊。刃のない部分とはいえ、殴りつければ骨も折れるか」
剣を鞘に収めながら、ディオンは言った。
「その腕ではしばらく剣は持てないだろう。無駄な抵抗はやめて、投降することだね。ああ……でも、そうだな」
ふと思いついたように、手を叩くと、ディオンは言った。
「もしも、君が自ら命を絶とうとするなら、僕が直々に巫女姫の首を斬り落とすことにしよう。君たちのお得意な人質というやつだね」
「それは、帝国の叡智に相応しからぬやり方だな」
「あくまでも、僕が個人的にすることだよ。それと、追加しておこうか。君の狼たちと馬もだ。誇り高き忠実なる戦士に殉じさせてあげるよ。君が綺麗に死ぬるだなんて、思わないことだ」
それから、ディオンは、静かな笑みを浮かべた。
「ひぃっ！」
なぜだか、兄の隣にいた慧馬のほうが、びくん、っと体をすくませていたが、それはさておき。
ディオンの言葉を聞いた馬駆は、静かに、そこに倒れこんだ。
ディオン・アライアの渾身の一撃は、馬駆のみならず、ギミマフィアスの心をも打った。
「……見事」
自身には、すでに振るえぬ圧倒的な一撃。
目の当たりにした老人の胸に過るのは刹那の憧憬。

生じた間隙は一瞬、されど……、
「どこを見ている！」
ゲイン・レムノは、その一瞬を見逃さなかった。
レムノの剣聖との戦いに、よそ見をする余裕などあろうはずもなく、必然的に彼の集中力は高まっていたというのは、もちろんある。けれど、それ以上に……弟に負けて以来、研鑽を続けた彼の執念が、その一撃を導いた。
踏み込み、と同時に狙うのは腕。
もとより金属鎧を切り裂くだけの技量も力もないことは、ゲイン自身がよくわかっている。
ゆえに、腕に全力の一撃を加え、剣を持つ力を奪う。
放たれた斬撃は、幾度となく繰り返したもの。それは寸分たがわぬ正確さで、老人の腕を打ち据え、その手から剣を叩き落とした。
「ぐむ……」
呻きつつ、一歩後ろに退くギミマフィアス。
そのまま剣を突き付けて、ゲインは顔をしかめる。
「よもや、卑怯とは言うまいな？　戦いの最中によそ見をした貴様が悪いのだ、我が師よ」
「いえ、見事にございます。ゲイン殿下。我がレムノ王国の明るい未来を見せつけられたような気がいたします」
「どうだかな……」
小さくつぶやき、ゲインは剣をおさめた。

……かくして、ここに蛇の拠点での戦いは終わった。
蛇の蒔いた悪意が、どのような形に決するのか、今の時点でわかる者は一人もいなかった。

「ふぅ……。やっと終わりましたわね……」
ミーアたちが塔から降りてくると、戦闘は、すでに終わっていた。
ゲインと戦っていたはずのギミマフィアスも剣をおさめ、ゲイン

のそばに控えていた。
　そうして、すべてが終わった光景を眺めながら、ミーアは静かにつぶやいた。
「今回は、少し大変でしたわね。さすがに疲れましたわ……」
　深々とため息を吐く。それから小さくパンッと手を叩き……。
「やはり、これは甘いものが必要ですわね。帰ったら、みんなでお茶会をしましょう。ラーニャさんにお願いして、あまぁい物を食べきれないぐらい用意するのですわ」
　セントノエルでの至福の時に、ミーアは想いを馳せる。美味しいケーキにキノコ鍋、とても楽しみだ。
「食べ過ぎてもいいように運動もしなければなりませんわね。ひさしぶりにダンスもしたいですわ。ベルにもダンスをしっかり教えてあげないといけませんし。どうも、あの子は、いい加減なところがありますから、しっかりと教えこまなければなりませんわ」
「ミーア……」
「アベルも、ダンスのパートナー役で手伝ってもらえるかしら？ああ、それと勉強も。あの子、すぐサボりますから、何か甘いもので釣るのがいいかしら……。それに……それに……」
　ぐにゃり……と、なぜだか、目の前が歪んだ。まるで、水の中に潜ったみたいに……。
「ベル……教えてあげたいこと……たくさん、ありましたのに……一緒に食べたいもの、もっとたくさん……たくさん……」
　瞳にたまった熱い涙は、あっさりと決壊し、ミーアの頬を伝い落ちる。
　ぽろり、ぽろり、と地面に落ちる涙は、止まることはなく……。
「どうして……ベル……うぅ」
　次の瞬間……ミーアは抱きしめられていた。
　左腕一本の不器用な抱擁。けれど、すがるように、ミーアはその少年の胸に顔をうずめる。
　そうして、ミーアは、アベルの胸で泣いた。

人目をはばからず、ただただ、幼い子どものように泣いた。
それを咎める者は、ただの一人もいなかった。

その後のことは、すべてルードヴィッヒがしてくれた。
憔悴した様子のミーアを見た彼は、ミーアの世話をアンヌに任せ、テキパキと物事を処理していった。
ヴァレンティナの身柄は、ヴェールガ公国が預かることになった。
レムノ王国側は不本意だったろうけれど、各国にまたがる破壊工作にかかわっていたとなれば、強くは出られない。
一方で、火族の族長、火馬駆については、別の処分が待っていた……。

その日、連行されてきた彼に、ヴェールガ公爵令嬢、ラフィーナは重々しい口調で言った。
「火馬駆さん、単刀直入に言うわ。あなたには、蛇導士の討伐を担っていただきます」
「我に……か？」
「そう。仲間だったのだから、足取りを追うことは難しくないでしょう？　あなたには仲間を狩っていただきます。ああ、もちろん、殺す必要はない。というか、殺さないで、捕縛して戻りなさい。あなたはこれから、誰をも殺すことを禁じます」
「ずいぶんと甘いことだな。聖女ラフィーナ。我が裏切ることは考えぬのか？」
「ええ。あなたが裏切れば巫女姫……ヴァレンティナさんを処刑しますから」
「人質、ということか……。ディオン・アライアのようだな。帝国の叡智の入れ知恵だとするなら、ずいぶんと相応しからぬやり方だと思うが」
馬駆の揶揄に、けれど、ラフィーナは首を傾げる。
「それはどうかしら？　これが誰を納得させるための処置なのか、

考えられないあなたではないと思うのだけど……。狼使い、あなたはそんなに愚鈍な人ではないでしょう？」
　いつになく、ラフィーナの声は冷たい。
「私は甘い処分だと感じたけれど、仕方ないわ。ミーアさんの進言だし、それに、確かに有効でもある。あなたのような優秀な追跡者を使うことができれば、将来に残す禍根をできる限り排除することができる。それに、あなたやヴァレンティナさんを殺さない理由にもなる」
「自らと、自らの主君の罪を、自らの手で贖え、ということか……」
「いいえ、違うわ。人は自分の罪を自分では贖えない。人の罪は、人には贖えぬもの。それができるのは神のみ。神の前に悔い改める心がなければ、そこに赦しは与えられない」
　聖女の言葉はどこまでも清く、容赦がなかった。
「だから、あなたにできるのは、ただの時間稼ぎ。主君が悔い改める機会を、できるだけ増やすための悪あがき。それすらも、私には温情が過ぎるように思えるけれど……」
「そうだな。我もそう思う。素直に、その温情に感謝しよう」
　馬駆は、静かに頭を下げる。
　それを見つめたまま、ラフィーナは重々しい声で言った。
「定期的に連絡をよこしなさい。それと、ヴェールガからの監視も付けますが、さすがに我が国にはあなたや、帝国のディオンさんのような腕利きはいない。だから監視者もあなたの責任で守りなさい。忠実なる蛇の剣士よ」
　それに、無言のまま首肯して、馬駆はラフィーナの前を出て行った。

第二百三十三話　自分ファースト探求

そうして、月日は巡り……。半年後。
セントノエル学園には再びの春が訪れていた。
「それでは、ミーアさま、私は、学園の方と少し打ち合わせをしてまいります」
「ええ、お願いいたしますわね。新入生歓迎舞踏会には、学園の職員の協力が不可欠ですし」
笑顔で挨拶を交わし、アンヌと別れたミーアは、一人で図書室を訪れていた。
もうすぐやってくる、生徒会選挙の公約作りをするためだ。
「ふぅむ、毎年のことですけど、公約作りはなかなか大変ですわね。そろそろラフィーナさまに生徒会長の座を返上したいところですけど……」
つぶやきつつも、思い出すのは、生徒会長に立候補した時のことだった。
「ふふふ、思えば、ベルがいなければ、わたくしが生徒会長をすることもなかったのですわね」
ラフィーナの求めに応じて、生徒会には入ったかもしれないが……会長の座を巡って、ラフィーナと選挙戦を戦うことになるとは思ってもみなかった。
「思い返せば、いろいろなことがありましたわね……あの子が来てから。ふふふ、ベルがいなければ、こうはならなかったでしょうね……」
生徒会長の件だけではない。四大公爵家の面々との関係も、今とは全く違ったものになっていたに違いない。
「サフィアスさんなんか、もしかしたら、政敵になっていたかもしれませんし、本当にわからないものですわ」

今でこそ、頼りになるサフィアスであったが、出会ってすぐは見栄ばかり張りたがる、どうしようもない少年だった。あの生徒会長選挙がなければ、彼との関係がどうなっていたのか、想像もできなかった。
「それに、イエロームーン公爵家。あの家との仲も、もっと別のものになっていたはずでしょうし……リーナさんも……」
と、そこで、ミーアは最近の悩みの種のことを思い出した。
「……リーナさん、表面上は平静を装っていますけれど、無理してますわよね、やっぱり」
ベルがいなくなって、一週間ほど、シュトリナは魂が抜けたようだった。
声をかけても、表情一つ動かすことなく、まともに会話をすることもできなかった。
けれど、ミーアやエメラルダらの働きかけにより、一か月もすると徐々に元気を取り戻していった。今では、可憐な笑顔を浮かべることもあるし、お茶会にも参加する。その振る舞いは、一見すると、かつてのままだ。
だけど……その顔に心からの、無邪気な笑みが浮かぶことはなかった。
表面上は平静を取り繕ってはいるが、無理をしているのが見え見えで、ミーアも、周りのみんなも心配していた。
「ベルのことを、きちんとお話できればいいのですけど……」
ベルの秘密のことを、シュトリナにだけは話しておこうと思っていたミーアであったが、シュトリナは頑としてそれを聞いてはくれなかった。
「ベルちゃんから聞くって、約束しましたから……」
その一点張りだった。
「大丈夫です。ベルちゃんは死んだんじゃありません。よくわからないけど、ベルちゃんはきっと、天使みたいなものなんだって、思うことにしておきます。今は一度、天に帰っているけど、必ずまた

戻ってくるんだって……。その時になったら、きっと全部話してくれるんだって、思ってますから……」
なんだか、泣きそうな顔で、そんなことを言われてしまったので、もう、なにも言えなかった。
「リーナさんのことはなんとかしないといけませんけど……。なかなか大変ですわね。やはり時間が必要かしら……」
それに、ルードヴィッヒたちにも説明はまだしていない。こちらは、いずれ説明する、で納得してもらってはいるものの、さて、なんと説明したものやら……。
「リーナさんの天使説で押し切るというのもありでしょうけれど……いずれにせよ、悩みの種は尽きませんわね……ふわぁ」
そんなことをつぶやきつつ、とろん、と眠たげに、ミーアは瞳を瞬かせた。
「しかし……少し眠いですわね……。最近、夢見が悪いせいかしら……」
アンヌと二人だけの部屋。それが、なんだか広く感じられて……ちょっぴり寂しくもあり……。そのせいか、最近のミーアは、少しだけ寝つきが悪くなってしまったのだ。
「不思議なものですわね。以前まではむしろ手狭に感じておりましたのに……。ふふふ、にぎやかな子でしたものね……」
今でもふと、部屋の中でベルの姿を探している時があった。
お祖母さま、と呼ぶ声が聞こえるような、そんな気がしてしまって……。
「あの子のためにも頑張らないといけませんけれど……ふわぁ……」
っと、大きなあくびをもう一つ。
「ふむ、ダメですわね。眠たくって。やはり眠い時には寝るしかありませんわね」
ミーアは、図書室の机に顔を伏せて、そっと瞳を閉じる。
「それにしても、やっぱり、なにか導が欲しいですわね。考えるヒントでもあればよいのですけど……どこかに、落ちてないものかし

ら……？　あの本棚の辺りに、また皇女伝か、日記でも挟まっていれば……。ああ、未来の歴史書とかでもいいのですけど……」
なんとなく、そんなことを考えた時……ふと視界のはずれ、奥の本棚に黄金の光が散ったように見えた。
「ベル……？」
顔を上げ、そちらに目を向けたミーアであったが……。錯覚だったのか、光はすぐに見えなくなった。
小さく首を振り、ミーアは苦笑いする。
「なんて、ね。ふふふ、感傷的になってますわね。頑張らないといけませんわね。あの子の、誇れる祖母になるために」
ミーアの子や、孫が暮らす世界を少しでも良くするため。
ベルが目覚める世界を、優しい世界にするために。
ベルが笑って目覚めることができる世界、その世界こそが、ミーア自身が幸せを享受できる世界だと思うから。
こうして、ミーアの『自分ファースト探究の旅』は続いていく。
「しかし……。頑張るにしても、やっぱりなにか導が欲しいところですわね。もしくは、なにか、甘いものが……」
諦め悪くつぶやきつつ、時にサボりつつも、続いていく。
ミーア以外の何者かになることなく、どこまでもミーアらしく、彼女は歩み続ける。
その歩みの行き着く先がどこに繋がるのか、彼女と、彼女の帝国とがどこに向かうのか……。
帝国の叡智という月の導く明日が、どのような世界となるのか……。
知る者はまだ、誰もいなかった。

エピローグ　幸せな夢の続き

瞬きを、一つ……二つ、三つ……。
かすむ視界。
まぶたをこすりつつ、彼女は静かに目を覚ます。
帝国皇女、ミーアベル・ルーナ・ティアムーンは、ふわぁ、っとあくびを一つして、それから辺りを見回した。
――あれ？　ここ……どこだろう？
見えてきたのは、広く豪奢な部屋。
ミーアベルは、その部屋に置かれた大きなベッドの上に横になっていた。
ふかふかで、ふわふわなベッドの毛布にくるまり……うーん、もうひと眠り……。
などと倒れこみそうになったところで……唐突に、思い出す。
古びた蛇の廃城、邪悪な礼拝堂で、自分は、矢で射られて……っ！
「っ！　くっ、首、首っ！？」
っと、慌てて、ペタペタ自分の首を触るけれど、どこにも矢なんか刺さっていなくって……。
「あ……あれ？　えーっと……」
そうして、改めて辺りを見て……ミーアベルは気付いた。そこがどこであるのか……。
「ここは、白月宮殿。ミーアお祖母さまの、お部屋……？」
小さい頃から、困ったことがあると、こっそり隠れる、そこはミーアベルの一番の隠れ場所。ここに逃げ込めば、いつでも、優しいお祖母さまが助けてくれるから。
「そうだ。ボクは、ミーアベル・ルーナ・ティアムーン。帝国の皇女で、栄えある帝国の叡智の孫娘……」
彼女には、しっかりとした記憶があった。帝国の姫として、白月

宮殿で、大切な人たちに囲まれて育った記憶が。
ここは帝都。ティアムーン帝国一の都。だから、廃墟と化した帝都の記憶なんかあるはずなくって、そこの貧民街での生活の記憶なんか、あるはずなくって……。
だから……。
「夢……だったのかな？　でも、それにしては……」
「まぁ、ベル。あなた、やっぱりここにいましたのね……」
ふと見れば、部屋の入り口に、一人の女性が立っていた。
すっと伸びた背筋、長く美しい髪、老いてなお燦然と輝く帝都の月、帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンが、ミーアベルの大好きなお祖母ちゃんが……そこに立っていた。
「ルードヴィッヒが探しておりましたわよ？　お勉強の途中で逃げ出すなんて、ダメですわよ。勉強は物量が命ですわ。全部、暗記してしまえば、どうということも……」
「あ、ミーアお祖母さま……ボク……」
っと、その声を聴いて、ミーアはきょとん、と首を傾げた。
「ボク……？」
「あっ……」
ミーアベルは慌てて口元を押さえる。
「あ、あれ……ボク？　変ですね。あはは、なんだか、夢の中に引っ張られてしまって。『私』ですよね」
頭の中にある記憶と、夢の記憶。
不思議なことに、どちらもミーアベルには本当のように感じられて……どちらも……愛おしく感じられてしまって……。
「あのね、ミーアお祖母さま、とっても不思議で、楽しい夢を見たんです。ミーアお祖母さまの若い時に、行って、そこで大冒険する夢。セントノエル学園で生活して、若い日のミーアお姉さまや、アベルお祖父さま、それに、天秤王シオンや、忠臣キースウッドさん、アンヌお母さま、エリスお母さま、ルードヴィッヒ先生……それに、それに……リーナちゃん……！」

興奮した様子で言ってから、ミーアベルは、楽しそうに笑った。
「とっても、素敵な夢でした。うふふ、本当に楽しい夢で……ボク、ずっとあそこにいたいって思ってて……。変ですよね、夢のことなのに……」
それから、ミーアベルは、自分の首元を撫でた。
「ボク、首に矢を受けて死んじゃったんですよ。お姫さまなのに、そんな危ないところに行くなんて、やっぱり変です。変な夢……」
と、その時だった。ミーアベルは気付いた。自分の首筋に引っかかる、紐の感触。そして、胸のあたりに感じるゴワゴワとした、毛の塊のようなもの……。
紐を引き、襟元から引っ張り出したそれは……古びた、小さな馬のお守り（トローヤ）で……。
「……これ……は……」
目の前に鮮やかに甦ってくる風景があった。
それを受け取って、とても嬉しそうに微笑む親友の顔が、目の前を過って……。
顔を上げた時、彼女は気付いた。
祖母が、とても穏やかな笑みを浮かべて見つめていることに……。
感慨深げに、目じりに皺を寄せてミーアは言った。
「そう……。あの日のあなたは、今日に繋がっていたのですわね……」
それから、祖母はミーアベルの隣に、そっと座った。
「ミーアお祖母さま……ボク……」
と、そこで、ミーアは、ベルの頭をギュッと抱きしめる。
お祖母さまに抱きしめられたことは何度もあったけれど……なぜだろう、ベルには、それが、ひどく懐かしいことのように感じられて……。
「おかえりなさい、ベル。あなたとの約束を守れていればいいのだけど……」
「約束……？」

「ええ。約束。遠い日の約束……。この世界は……あなたの夢の続きになることはできているかしら？　わたくしは、あなたの夢を終わらせずに、いられたかしら？」
「あっ……」
思い出す。
まぶたの裏に浮かぶ風景。
若き日の祖母の顔。
胸を張り、「あなたの夢は、わたくしが終わらせはしませんわ」と力強く、宣言してくれた。約束してくれた、あの時の声……。
「ミーア、お姉さま……」
「ゆっくり話しましょう。あの後、なにがあったのか。そして、これからのことも……。たくさん話したいことがありますわ……。だけど」
と、そこで、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「それは、みなを呼んでからにいたしましょうか。きっとみんなもあなたと話したいはずですもの」

かくて、祖母から孫へ……優しい時間は受け継がれていく。
それは、ベルが見た幸せな夢の続き。
断頭台の姫ミーアが蒔き、大切に育んできた豊かな実りの形だった。

エピローグ　幸せな夢の続き（後書き）

これにて、ティアムーン帝国物語、第四部は終了となります。当初の予定だとこのエンディングです。ちょっぴり切ない綺麗なエンドとなりました。

そして、次の話は、諸事情により続くことになった第五部への導入となります。

前に活動報告でお知らせしたとおり、「ティアムーンに切ないエンドなんかいらねぇ！　ご都合でもいいから砂糖を吐くぐらいのハッピーエンドがいい」という方、女子高生になったミーアに興味がある方はどうぞお進みください。

でも、切なく綺麗なティアムーン帝国物語で終わりたい方は、もしかしたら、第四部までにしたほうが良いかもしれません。シリアスさんは、四部後半に燃え尽きました。

第五部から始まるものは、砂糖を吐くハッピーエンドを目指す旅路なので。

それでも構わない方は、覚悟して続きをどうぞ。

真エピローグ　ふっ、増えてる！？（前書き）

シリアスは前話で燃え尽きました。
最後の輝きだったのです。
それでも良いのでしたら続きをどうぞ。

真エピローグ　ふっ、増えてる！？

「……ん……ぁ。ふああ、寝すぎましたわね……」
いつの間に寝ていたのだろうか……。ミーアは図書室の机に突っ伏していた。
ふぁわわ……っと大きなあくびを一つ。そして、ミーアは異変に気付いた。
なんだろう……？　辺りが、少しばかり明るいような……？
寝すぎて、辺りが夕闇に包まれていたということならばわかる。
でも、逆に明るいというのは、いったいどういうことなのか？
ぼんやーりと辺りを見回したミーアは……瞬時に覚醒する。
その光源、その黄金の光が、本棚の一角から放たれていることに気付いて……。
「なっ、あっ、あれは……まさか！」
震える声でつぶやきつつ、恐る恐る、ミーアはそこへと向かう。
期待などはしない。
そんな奇跡、そうそう起こるはずがない。
けれど……こうも言える。二度ある奇跡は、三度ある。
ミーアはうとうとする前のことを思い出した。
状況は似ている！　あの時と……酷似していた。
ミーアはあの時、導を求めて、結果としてベルが現れた。
今、またミーアは求めていた。
導と……そして、シュトリナを立ち直らせるきっかけを。
その答えとして与えられるのは、“彼女”以外に考えられなくって……。
でも、そんなことが、本当に起こるだろうか？
信じたいという気持ちと、期待して裏切られるのが怖いという気持ち……二つの感情の間で揺れるミーアの複雑な心境……などは一

切慮ることなく、黄金の光はあっさりと人の形をとろうとしていた。
懐かしい、あの……少女の姿を。
腰の辺りまで伸びた白金色の髪、好奇心に輝くクリクリとした碧眼と、どこかミーアに似た顔……。
呆然と、ミーアが見つめる前、光の中から現れたベルは、辺りをキョロキョロ見回して……。
「あっ！　ミーアお祖母さまっ！」
ミーアのほうを見て、ニコニコと輝くような笑みを浮かべる。
「お久しぶりです。ミーアお祖母さま……いえ、ミーアお姉さま」
それから、ドレスのスカートの裾をちょこん、と持ち上げる。その仕草に、どことなく、姫の気品のようなものを感じてしまって……ミーアは驚愕に、口をあんぐり開ける。
「ベル……、あなた、本当にベルなんですの？　元気なんですの？」
あまりにも突然のことに、ミーアは混乱してしまう。
前の時には、ベルは、壊滅した帝都からやってきたはずだ。自身の命を狙う追手から逃げている途中だったと聞かされていたが……。
どうやら、目の前のベルは、そこまで、酷い状況にはないらしい。着ている服は、しっかりとした仕立てのものだし、なにより、その所作には、帝国皇女の気品が感じられた。
「おかげさまで。ミーアお姉さまが頑張ってくれたおかげで、帝国は安定しています。ボクもお母さまたちと、とても幸せに暮らしています」
ニッコリと笑みを浮かべて、ベルは言った。
「ミーアお姉さまが、約束を守ってくれましたから。ボクの夢を終わらせないって……頑張って、くださいましたから」
その言葉に、ミーアは、ほうっとため息を吐いた。
「そう。それならば、良かったですけれど……では、どうしてここに？」
「あ、はい。それはえっと、ルードヴィッヒ先生によるとミーアお祖母さまのせいで……。あ、悪い意味ではないんですけど……」

「わたくしのせい？　ルードヴィッヒがそう言ったんですの？　それはいったい……うん？」
っと、ミーアは、そこで違和感を覚える。
それはベルに……ではなく、その後ろの空間に対してのものだった。
ベルが出てきた黄金の光は、消えることなく未だに輝きを放ち続けていた。
目を凝らす、っとなにやら、その光から謎の影が……蠢きだしてきて……っ！
「ひぃっ！」
思わず息を呑んだミーア。その視線の先に現れたのは――幼い少女だった。
まだ、十歳には満たないだろう。その少女は、ミーアの顔を見て、きょとりんと首を傾げた。
東方の国の伝統人形のような、丸いシルエットを描く短い髪。真っ直ぐに切りそろえられた前髪、その色は、ミーアと同じ白金色だった。長いまつ毛に飾られたその瞳も、ミーアやベルと同じ青い色、その顔の雰囲気もどこか、ベルに似ているように見えて……。
「……っ！？　ふっ、増えてるっ！？」
ミーア、思わずツッコミを入れる！　大変珍しいことであるが、気持ちはわからないでもなかった。
なにしろ、ベルが現れるのは、まだ予想の範囲内と言えるのだが……、さすがにもう一人、別の子がついてくるのは想定外だった。
「ベル、その子は……、いったい……」
あまりに唐突な展開に、瞳をぐるぐるさせつつ混乱するミーアだったが、すぐにぽこんっと手を打った。
「ははあん……もしかすると、あれですのね？　つまりは、やっぱりまた未来でなにかあって、その子は……ベルの妹とか？　あるいは、親戚とか、ともかく、トラブルから逃れて来た子ですわね？」
ミーアとて、だてにこの半年間、頑張ってきていない。ベルがい

なくなって以来、ミーアは頑張って、その叡智（仮称）を酷使してきたのだ。スイーツを燃料に、フル稼働させてきたのだ。
目の前の状況から、何が起きたのか、推論を立てることなど造作もないことなのである。
そうして、ミーアは推論を展開する。
「そのトラブルの原因が、今の時代にあって、だからそれをなんとかするために、こうしてやってきたとか？　当たってますかしら？」
どうだ！　と言わんばかりに胸を張り、推理を告げるミーア。対して、ベルは……。
「この子は……」
とても真面目な顔で、ミーアを見つめて……、それから傍らに立つ少女のほうに目を向けて……。
「この子、は……」
こくん、と喉を鳴らし……そしてっ！
「……えーと、誰なんでしょうか？」
きょっとーんと首を傾げてみせた。
「……はぇ？」
かくて、孫と祖母の物語は再び動き出す。

Ｔｏ　ｂｅ　コンティニュー「第五部　皇女の休日」

真エピローグ　ふっ、増えてる！？（後書き）

泉に落としたベルが、綺麗なベルになって戻ってきて、
さらにもう一人小さいのがついてきました……という。
……えー、ということで、シリアスは前話で燃え尽きました。

第五部は、一週間、間を開けてのスタートにする予定です。それでは！

プロローグ　せんさい（）な姫の怖い夢

さて……、ミーアの前に、再びベルが現れる日。その少し前の出来事……。

ミーアは……走っていた！

「はっ……、はっ、はっ……」

荒れた地面を蹴って、懸命に走る。

その身を守る者はなく、付き従うメイドの姿もなく。

ただ一人、ミーアは逃亡を続けていた。

振り返れば、後ろから剣を持った男たちが追いかけてきていた。

「もう逃げられんぞ！　観念しろ！」

「子どもの仇だ！」

そう言われたからといって、足を止めるわけにもいかない。

懸命に、懸命に、前に向かって走っていく。

息が切れる。

胸が、足が痛い。

森の木の枝でついた擦り傷が、じくりじくりと痛みを訴えていた。

そんな逃走劇が、長く続くはずもなく……やがて、足が止まり……後ろから激しい足音が響いてきて……。

「覚悟しろっ！」

「ひぃやあああっ！」

悲鳴とともに、ミーアは、ベッドの上ではね起きた。

優雅な、お昼寝には程遠い目覚めだった。

「ミーアさま！　どうかなさいましたか？」

驚いた顔で歩み寄ってくるアンヌに、ミーアは、ほうっと安堵の息を吐いた。

「ああ……アンヌ……」

そのまま脱力。柔らかいベッドに倒れこみつつ、つぶやく。
「ですわよね……。夢、ですわよね……」
「夢……あっ……」
ミーアのつぶやきを聞いて、アンヌは口もとを押さえる。
「もしかして、あの蛇の居城でのことを夢で……？」
などと、顔を曇らせるアンヌに、ミーアは小さく首を振った。
「ああ、いえ……そうではありませんわ」
慌てて否定するミーア、であるのだが……アンヌの顔が晴れることはなかった。ミーアに向ける視線は、依然として心配そうなものだった。
――うーん、これは困りましたわね……。
ミーアは、思わず考え込んでしまう。説明するのは難しい。なぜなら、今しがた見た悪夢は混沌の蛇のことではない。革命期の夢なのだから。
――しかし、実に不可思議ですわね。なぜ、また、革命軍に捕まる夢を見るようになってしまったのか……。
あの時の、蛇の居城でのことを悪夢で見るならばわからないではない。確かに、ミーアにとって、あの出来事はショックではあったのだ。何日間か、食事が美味しくなくなったぐらいには……。
けれど、それも今は昔のこと。
元よりベルの正体を知っているミーアである。食欲をなくしているようじゃ、後に生まれてくるベルに悪影響があるかもしれない。
『むしろ、ベルの分までたくさん食べてあげなければいけませんわ！』
などと言いつつ、ケーキを二倍食べようとしたりして……。さすがに、アンヌから諫言を呈されてしまったりして……。
主君の不興を買うことを恐れず、勇気をもって忠言する、忠臣の鑑アンヌである。
まぁ、そんなこんなでミーアの悪だくみは潰されたわけだが、ともかく、ミーアは、ベルのことでそれなりにショックを受けてはい

たのだ。悪夢の一つや二つ、見ても不思議ではないかもしれない。
けれど、最近見る悪夢は……違うのだ。もうだいぶ遠いことになっているはずの、革命の頃の悪夢を、また、見るようになっているのだ。
しかも、記憶にはない、別の帝国崩壊の悪夢まで見る始末。
これは、一体どういうことなのか……。
「やっぱり、革命の時期が近付いているからかしら……？」
前の時間軸においては、すでに、帝国の落日は始まっている時期だった。
ミーアは今度の冬で十六歳になる。とすれば、革命軍の手に落ちるまで、あと二年もないわけで……。
「ナーバスになってるのかしら……。わたくしも繊細な心の持ち主ですし……。気を紛らわすために、なにか甘いものでも食べたほうがいいんじゃないかしら……健康のためにも」
小心者（せんさいなこころのもちぬし）たるミーアは、自身の心のケアの仕方をよく知っているのだ。
そうして、元気よくベッドから起き上がったミーアは、食堂へと向かった。

「あら……？」
食堂に入ってすぐ、ミーアは見知った人物を見つけた。
帝国四大公爵家の一角、イエロームーン家の令嬢、シュトリナ・エトワ・イエロームーンが、ぼんやりと一人で佇んでいた。
どこか寂しげなその顔……。その顔……の口元にクリームを見つけて、ミーアは目を見開いた。
さらに、よく見れば、シュトリナの目の前には、ケーキのお皿が三皿、重ねられている！
――悲しさを紛らわすためには、甘いものを食べる……。これは確かな方法ですけれど……、同時にそれは両刃の剣ですわ。食べ過ぎれば、どうなるのか……。

ミーアはそっとシュトリナのそばに近づき、その二の腕を摘まんだ！

「ひゃんっ！　なっ、み、ミーアさま……？」

突然のことに、ぴょこんっと飛び上がるシュトリナと驚愕に固まるミーア。それからミーアは、自らの二の腕を摘まみつつ、しきりに首を傾げる。

「おかしいですわ……どうなっているのかしら……？　まさか、構造が違うとでもいうのかしら？」

などとつぶやきつつ、ミーアは改めてシュトリナの顔を見つめる。

「あの……？」

不思議そうな顔をするシュトリナ。頬についたままのクリームとケーキ皿を見比べて、ミーアは小さくため息を吐く。

――これは……やっぱり重症ですわね……。

ベルの喪失によるショックで、ＦＮＹ（やみ）堕ちしそうになっているシュトリナである。

あの意味深な消え方が、ギリギリのところでシュトリナを踏みとどまらせている、とも言えるかもしれないが……。

――いずれにせよ、このまま健康を害するようなことになれば、生まれてくるあの子に顔向けできませんわ。ここは、なんとかしなければ……。

けれど、話はそう簡単ではなかった。

乗馬もダンス練習も、シュトリナを誘えそうな運動には、常にベルの姿がチラついてしまう。かといって、他に誘えそうな運動も思い浮かばない。

――エメラルダさんに声をかけて泳ぐというのも、今の時期では寒いですし……。夏に海水浴に誘うというのは良いとしても、その前になにか……、あ、そうですわ！

ぽんっと手を叩き、ミーアは言った。

「リーナさん……、後で選挙の公約作りをしようと思いますの。よろしかったら、お手伝いしていただけないかしら？」

体を動かせないならば頭を使って、しっかりエネルギーを消費する。これが、ミーア式健康法だ。甘いものを食べても、頭さえ働かせていればいいのだ。どれだけ食べてもいいのだ。

……うん、いいのだ！

それに、つらいことがあった時には、なにか気を紛らわすことをしたほうが良い。忙しくしていれば、その内に時間が解決してくれることだってあるだろう。

ミーアの言葉に、あまり気が進まなそうな様子ではあったが……、シュトリナは小さく頷いた。

「はい……。わかりました。図書室に行けばいいですか？」

「そう急がなくっても大丈夫ですわ。わたくしも、少し甘いものをいただいてから行きますから。そうですわね……、目覚まし代わりにお風呂にでも浸かってから来てくれればいいですわ」

言いつつ、ミーアはシュトリナの口元についていたクリームを、ハンカチでそっと拭った。

「あっ……すみません……ミーアさま」

シュトリナは、わずかに恥ずかしそうに頬を染める。

「ふふふ、リーナさんらしくないですわね。そんなことでは、エメラルダさんに会った時に、お小言をもらってしまいますわよ」

そんなやり取りの後、ミーアは、あまぁいお菓子をパクリゴクリした後で、図書室へと移動したのだが……。

第一話　再会

さて、そうして……図書館でベルとの感動の再会を果たしたミーアは……。

「……はぇ？」

ミーア、思わず、おかしな声を上げていた。

一方のベルは、自らのかたわらに立つ少女を見て、しきりに首を傾げていた。

「ボクについてきてしまったんでしょうか？　でも、そんなことあるって聞いてないですし……見たこともない子ですね……。誰なんでしょう？」

対して少女のほうは、辺りをキョロキョロと見回してはいるものの、その表情はほとんど動いていなかった。

「ふぅむ……」

ミーアは、そんな二人の様子を見つつ、小さく唸り声をあげて……。

「まぁ、いいですわ。とりあえず……」

と、気を取り直して笑みを浮かべる。

「また会えて嬉しいですわ。ベル」

大切なことは、それだ。

しばらくは会えないと思っていたベルが、目の前にいる。それだけで十分。

まぁ、なんだかよくわからない子どもがついてきているが、その程度は些細なことなのだ。

「元気にしているようでなによりですわ。それに、その服を見る限り、帝室も安泰の様子ですわね」

ベルが身に着けていたのは、上質なドレスだった。見ると、その表面はすべすべで、キラキラ輝いて見える。

「あ、はい。これは、ミーアお祖母さまの生誕二十五周年に仕立て人組合が作った素材で。『帝国の叡智の美肌（ビューティフルミーアスキン）』と呼ばれる布を使っています」
「……そ、そう」
ミーア、微妙にひきつった笑みを浮かべつつ、自らの腕とドレスのすべすべ具合を見比べる。
――ふむ……まぁ、あのぐらい輝いていないことも……なくはないかしら？　うん、まぁ、アンヌがお手入れしてくれていますし……。しかし、未来の帝国は大丈夫なのかしら……？　なんだか、その一事を取っただけでも、不安が募りますけれど。
そのネーミング、止める者はいなかったのか？　などと悩みつつ、まぁ、それはさておき……。
「まぁ、ともかく、どこかでゆっくり話を聞く必要がございますわね」
「帝国の叡智の美肌についてですか？」
「……いえ、そうではなく。あなたが再びここに来た事情とか、その子のことを本当に知らないか、とかですわ。どこかでゆっくりと……」
「失礼します」
その時だった！
図書室のドアが開く音。と同時に、入り口のほうから、可憐な少女の声が聞こえた。
「あっ、まずいですわ……」
その声の主の正体を悟り、ミーアは慌てる。なぜなら……“彼女”がこの場に現れたら、ゆっくり話を聞いている余裕なんて、なくなってしまうだろうからだ。
でも、同時に……。
――まぁ、止めるのも野暮というものですわね。
などとも思ってしまい、ついつい、動き出すのが遅れる。
その間にも“彼女”、シュトリナ・エトワ・イエロームーンは図

書室の奥へとシュシュッと歩いてきていた。
「あ、ここにいらしたんですね。ミーアさま、生徒会選挙の準備のお手伝いに参りま……」
すまし顔で入ってきたシュトリナ……。だったが、その声は途中で止まる。
なにか、事前に用意してきたのか、その手に羊皮紙の束を持っていたのだが……それがバサバサと音を立てて落ちた。
「あ……」
その姿を見て、ベルのほうも固まる。けれど、すぐに気まずそうな笑みを浮かべて、
「リーナちゃん……えっと、た、ただいま……その……あの時は心配かけて……」
などと、もにょもにょ言い訳めいたことを言っているが……シュトリナは無言でそこに立ち尽くしていた。
刹那！　一歩、その足が前に出る。
二歩……まるで堤防が決壊するように、三歩、四歩、五歩！
シュトリナは走り出すと、勢いそのままベルの腰の辺りにガシッと抱き着き、
「……きゃあっ！」
そのまま床に押し倒した。
それから、ガッチリと両手でベルの顔を押さえて、じっくり観察。次に、その首筋を指先で、恐る恐る撫でた。
「ひゃっ、り、リーナちゃん！　リーナちゃんっ！　やっ、やめてっ！　あははっ！　くっ、くすぐったいです！」
ベルが、手足をバタつかせつつ、あられもない悲鳴を上げるが、シュトリナは撫でるのをやめなかった。それから……、
「かすり傷、一つない……」
ぽつん、とどこか沈んだ声でつぶやく。それからシュトリナはベルの顔を見た。
「あなたは……ベルちゃんの偽物？　蛇がそっくりな子を送り込ん

で、リーナの心を攻撃しようとしてるの？　それとも、リーナ……ベルちゃんに会いたすぎて幻でも見てるの？」
「リーナちゃん……」
戸惑いを露わにするシュトリナに、ベルは、困ったように笑ってから、
「えっと、信じてもらえるかはわからないけど、偽物でも幻でもありません。ボクは……リーナちゃんのお友だちのベルです。戻ってきたんです」
そう言って、ベルは胸元から、なにかを取り出した。
「あっ……」
それは、古びた「小さな馬のお守り」で……。
それを見た瞬間だった。不意に……シュトリナの口から、小さな声が漏れた。
「んっ……ぅっ」
唇を噛みしめ、懸命に嗚咽をこらえるシュトリナ。けれど……抑えようのない歓喜の声は、容易に、少女の自制心を崩壊させた。
長いまつ毛が、ふるふるっと震える。見る間に、その愛らしい瞳にジワリと大粒の涙が浮かび上がった。涙はすぐに量を増し、目尻から、柔らかな頬を伝い、床へと落ちていく。
ぽろり、ぽろり、と……それが止まることはない。
「ただいま、リーナちゃん……きゃっ」
シュトリナは、無言でベルの首筋にギュッと抱きついた。
「ベルちゃん……ベルちゃんっ！　わぁあああんっ！」
母親に泣きつく幼子のように、シュトリナはベルに抱きすがった。いつもの令嬢然とした仮面が剥がれ落ち、そこにいるのは年相応の一人の少女だった。
そんなシュトリナを抱きしめ、その頭を静かに撫でながら、ベルは優しい声で囁く。
「ごめんなさい。リーナちゃん……心配かけてしまって……」
そうして、シュトリナが落ち着くまで、ベルはその場から動こう

とはしなかった。

第二話　君の名は？

――ふむ……リーナさん、良かったですわ。
孫と、その友だちの再会を見つめる、お祖母ちゃんの視線は優しいものだった。
シュトリナのことで頭を痛めていたミーアであったが、やはり、友は強いということだろうか。
――これで、ベルの口から直接どういうことなのか聞くことができれば、リーナさんも立ち直ってくれるのではないかしら……？
しばしベルに抱き着いていたシュトリナだったが、ようやく落ち着いたのか、体を少し放した。
それから、真っ直ぐにベルのことを見つめて、
「ベルちゃん、なにがどうなってるの？　ベルちゃん、首を矢に射られて消えちゃったんじゃないの？　それとも、やっぱり、ベルちゃんは天使だったの？」
「……天使？」
きょとん、と小首を傾げ、ミーアのほうを見上げてくるベル。
「ああ、ええと、あなたの消え方がちょっとアレな感じだったから、リーナさんはそう考えているようですわ。天使が天に帰っていったのだと……」
「なるほど……」
ベルは少し黙り込み、それから、シュトリナに言った。
「えっと、リーナちゃん、前にした約束のこと覚えていますか？」
「約束……」
「はい。帝都に戻ったら、ボクのとっておきの秘密を教えてあげるって……」
「あっ……」
シュトリナは、目を見開いた。

切望しつつ、決して叶うことはないと思っていた大切な約束……それが今、叶おうとしていたから……。
「あの約束を今、果たします。実は、ボクは……え？」
ふと気付くと、シュトリナはベルの腕をひっつかみ、ぐいぐい引っ張っていた。
「あ、リーナさん……？」
「ミーアさま、無礼を承知でお願いします。ベルちゃんお借りします」
そう言って、深々と頭を下げると、シュトリナはさっさとベルを牽引して行ってしまう。
どうやら、ベルの秘密を聞くならば、二人きりで聞きたい、ということらしい。
「……お願いって……まだ、聞くとは一言も言っていないのですけど……」
思わず苦笑いのミーアである。
「もっとも、あのお願いには、さすがのわたくしも、ノーとは言えないですけど……」
シュトリナは、ミーアから『ベルの秘密』を聞くのを拒否した。
親友のことが気になっただろうに、我慢して、ベルとの約束を固く守ったのだ。
二人きりで、その約束の時を迎えたいと思うこと、それは自然な気持ちだろうし、シュトリナにはそうする資格があると、ミーアは思った。
シュトリナの一途な友情を邪魔するほど、ミーアは無粋ではない。
ミーアは粋な女なのである。
「しかし、困りましたわね。あの様子では、ベルは当分、解放してもらえないでしょうし、とすると……」
ミーアの関心は、自然、すぐそばに立つ謎の少女のほうに向かう。
「いったい、なにがどうなっているのか、説明してほしいのですけど……ふむ……」

改めて、正体不明の少女を観察する。
きょとん、とミーアに向ける顔に表情はなく、何を考えているのかよくわからなかった。
その瞳の色はベルと同じ青い色ではあるが、瞳の形はどちらかというとミーア自身に近いような感じがした。
――ふむ、切れ長の瞳はわたくしに似ておりますけれど……わたくしの血が強いということかしら……。でも……。
と、そこでミーアは違和感を覚える。
――この子……先ほどのベルとリーナさんのやり取りを見ていて、なんとも思わなかったのかしら？
二人の会話は、事情を知らない者からすると、意味がわからないものだっただろうけど、それでも、興味を持たずにはいられないものだったはず。
――矢で射られたとか、天使だとか、子どもならば気になる会話だったでしょうし、あのリーナさんの行動も好奇心を刺激するのに十分なものだったはず……。なのに、どうして、こんなに無関心を装っていられるのかしら？
よくしつけがされていると言えるのかもしれないが、ミーアとしてはむしろ、異常なものを感じてしまう。なんだか表情に乏しいその顔は、人形めいて見えてしまって、ちょっぴり不気味ささえ感じてしまって。
「ええと、とりあえず、あなた、お名前は？　わたくしは、ミーアというのですけれど」
少女を混乱させないために、とりあえず、フルネームは避けて名乗る。それからミーアは、少しだけ膝を曲げ、少女の目を覗き込んだ。っと、少女はミーアにチラっと目を向けてから、静かに視線を逸らした。
――あら？　名前を名乗らない……。ふむ。
瞬間、嫌な予感がした。むしろ、いやぁな予感しか、しなかった。
――これは、もしや……名乗りたくないほど、恥ずかしい名前な

のでは……？
基本的に未来の自分は信用しないミーアである。なにせ、ミーアベルのネーミングという、やらかしてしまった前科があるわけで……。
少女にどんな“ミーアネーム”がつけられたのか、戦々恐々としてしまうミーアである。
――もちろん、わたくしがつけたのではないかもしれませんけれど……ヘンテコな名前を付けてしまった可能性は低くはありませんわね。さて、どんな名前を付けたことやら……。
聞くのは怖いが、さりとて、名前を知らずにいるのはいろいろ面倒。それに、名前から得られる情報もあるだろう。
――さて、どうしたものかしら……？
その時だった。くぅっと小さな音が鳴った。とてもささやかで、可愛らしいお腹の虫の鳴き声が聞こえてきて……咄嗟に自らのお腹を押さえたのは、なんとミーアだった！　つい先ほど、お菓子を食べたのに、実におこがましい！
そうして、すぐにミーアは気付く。今のは自分じゃなくって……。
「あら……？　今のはあなたですの？」
少女の顔を覗き込む。っと、少女の顔に初めて表情らしいものが見えた。その頬が、ほんのり赤く染まっていたのだ。
「そう。あなた、お腹が空いておりますのね。でしたら、なにか美味しいものを食べながら、ゆっくりお話を聞くとしましょうか」
少女の、年相応な幼さが見れて、ほんの少しだけ安心するミーアであった。

第三話　約束の時～響くはシュトリナの……悲鳴？～

さて、シュトリナに連れ去られたベルは、そのままシュトリナの部屋に連れ込まれていた。
ベルをベッドの上に座らせると、シュトリナは椅子を持ってきて、その前に座る。膝と膝とを突き合わせ……ベルの目をじいっと見つめてから、シュトリナは、ほうっとため息を吐いた。
「本当に、ベルちゃんなんだ……」
「はい……。心配かけて、ごめんなさい。リーナちゃん」
深々と頭を下げて、ベルは言った。
「ううん。リーナこそ。あの時はごめんなさい。それと……」
シュトリナは、ギュッとベルの手を握りしめて言った。
「ありがとう。リーナのこと、助けてくれて……。ずっとお礼、言いたかったの……。でも、言えなくって……とっても、苦しくって……」
再び、じわり、と、シュトリナの目に涙が浮かぶ。
ひくっひく、っと肩を震わせるシュトリナが落ち着くまで、ベルは静かに待っていた。そうして、
「今こそ、約束を果たします。リーナちゃん」
ベルはしっかりとシュトリナの瞳を見つめて、言った。
「ボクはミーアベル……。ミーアベル・ルーナ・ティアムーンです」
「ルーナ……ティアムーン？　それって……」
怪訝そうな顔をするシュトリナに、ベルは真剣そのものの顔で首を振る。
「いいえ。ボクはミーアお姉さまの妹ではないんです。ボクは、ミーアお姉さまの、いいえ、ミーアお祖母さまの、孫娘なんです。ボクは未来から来ました」
「孫……、未来……？」

ベルは、自分のドレスの胸元から、再び、それを取り出した。
それは古びてはいるけれど、間違いなく、あの≪小さな馬のお守り≫で……。
シュトリナは、少し驚いた様子で瞳を見開いて……それから、立ち上がり、机の引き出しを開けた。そこには、二つの小さな馬のお守りが入っていて……。
「リーナちゃんが、ずっと保管してくれていたって聞きました。大切に、大切に、ボクが産まれたら渡そうって思ってたって……」
そこまで言って、ベルは心配そうに、上目遣いにシュトリナを見た。
「信じて、くれますか？」
対して、シュトリナは……心底、不思議そうに首を傾げた。
「どうして？　もちろん信じるよ。ベルちゃんがそう言うのなら、疑う理由なんかどこにもない。ベルちゃんが天使だって言っても驚かないし、信じる」
うんうん、っと頷いてから、シュトリナは続ける。
「むしろ、いろいろと釈然としなかったことが、納得できちゃった。そっか……ベルちゃんは、ミーアさまのお孫さんなのね……。じゃあ、もしかして未来では、リーナとベルちゃんは、おばあちゃんと孫娘みたいな関係になってたりするのかな？」
冗談めかした口調で言うと、ベルは困ったような顔で首を振った。
「いいえ……それが、違うんです。実は、リーナちゃんは……」
静かに、ベルは話し出した。あの日、ミーアのベッドで目覚めた、後のことを……。

「ゆっくり、話しましょう。あの後、なにがあったのか。これからのことも……。たくさん話したいことがありますわ」
優しい笑みを浮かべるミーアに、ベルは、一番気になっていたこ

とを尋ねた。
「あの、ミーアお姉さま、リーナちゃんは……？」
自らの親友のこと……。シュトリナが、今、どうなっているのかを……。
すると、ミーアは驚いた顔で、ベルを見つめたが……。
「ああ……そうでしたわね。まだ、記憶の整理が上手くできていないのですわね……」
それから、ふとベルから視線を外し……。
「リーナさんは……」
なにか、言いづらいことを言おうとするかのように、言いよどむ。
その様子を見てベルは……ひどく嫌な予感がした。
もしかして……シュトリナは、もう……。
その時だった。
「失礼します」
部屋のドアが開き、一人の“少女”が姿を現した。
「ミーア陛下、ベルちゃん、いますか？　今日はお茶のお約束があるのですけど……」
現れたのは、可憐な少女だった。
野に咲く花のように華やかな髪、それをふわふわ揺らしながら歩いてくる少女、それは……ベルの大切な、大切なお友だちで……。
「リーナ……ちゃん？」
つぶやき、直後に否定する。
いや、違う……。そんなはずがない。
だってシュトリナは、ミーアより一歳年下なのだから……。
対して、やってきた少女は、どう見ても十代の半ばに見える。その髪には艶やかな光があり、その肌にも若い張りが見えた。だから、シュトリナのはずはない。
では……シュトリナではないとしたら？　この、シュトリナにそっくりな少女の正体は……、いったい何者だというのか？
「リーナちゃんの娘さん、いいえ、お孫さん、ですか……？」

ベルの脳裏に、再び嫌な予感が過ぎる。
なぜ、自分は、シュトリナ自身ではなく、その孫と友誼を結んでいるのか？
なぜ、お茶の約束を……親友であるシュトリナ自身としていないのか？
そして、先ほどの祖母ミーアの、何とも言えない表情……。
「もしかして……リーナちゃんは……、リーナちゃんは……もう」
じわり、っとベルの視界が滲む。思わず鼻をするするベルに、ミーアは……。
「あー、ベル……。よく思い出してみるといいですわ。たぶん、あなたの記憶の中に答えがあると思いますわ。リーナさんが……どうなったのか」
やっぱり、なんとも言えない、複雑そうな顔で言うのだった。
その声に導かれるようにして、ベルは思い出そうとして……、記憶の小箱をひっくり返してみて……。
「……あ、あれ？」
再び、違和感に襲われる。
なぜだろう、自分の記憶の節目節目に、いつも目の前のシュトリナの姿があった。
五歳の誕生会の時、お茶会、社交界デビューにミーアお祖母さまの生誕祭などなど……。思い出に残っているイベントには、必ずといっていいほど、シュトリナが一緒にいて……。
まったく変わらぬ姿でベルを見守っていた。
「え……どういうこと、でしょうか？　ええと、リーナちゃん、なんですか……？」
混乱するベルに、シュトリナはきょとりん、と首を傾げた。
「あの、ミーアさま、ベルちゃん、どうかしたんですか？」
「ええ。実は、ようやく記憶が戻ってきたみたいなんですの。ほら、あの、蛇の城での時から……」
「あ……」

っと、シュトリナは両手で口を押さえながら……小さく声をこぼした。
それから、ベルに歩み寄ると、そっとその頭を胸に抱いた。
「おかえりなさい。ベルちゃん……。リーナ、ずっと待ってたのよ？」
「リーナちゃん……やっぱり、リーナちゃんなんですね……」
そこでようやく、ベルは確信を持つことができた。目の前の少女が、シュトリナ本人である、ということに。
となれば、疑問は当然……。
「でも、どうして、リーナちゃん、年を取ってないんですか？」
これである。
ベルが見た限り、シュトリナは十代の半ば。明らかに年齢が合わない気がするのだが……。
シュトリナは、そんなベルの反応を見て、おかしそうに笑って……。
「うふふ、ありがとう、ベルちゃん。でもね、リーナ、すっかりおばあちゃんになってるのよ？　ミーアさまと同じで孫だっているしね。ほら、ここ、見て。こんなに皺が……」
などと、手の甲を見せてくれるのだが……ぶっちゃけ、ベルにだって、その程度の皺ぐらいはあるわけで……。シュトリナの状態は明らかにおかしかった。
助けを求めるようにミーアのほうに目を向ける。っと、ミーアは、やれやれ、と呆れた様子で首を振った。
「イエロームーン家の総力を挙げたという話ですわ。イエロームーン家の薬草の知識をフル活用して、若さを保っているのだとか……。わたくしは魔法だとか魔女だとかは信じていないのですけど、リーナさんは、もしかしたら、魔女なんじゃないかって、ひそかに思っておりますのよ？」
呆れた様子でそう言うミーアに、シュトリナはニッコリと可憐な笑みを浮かべて。

「あら？　ミーア陛下、このぐらい大したことじゃありません。リーナは、ベルちゃんとお友だちでいるために、努力を積み重ねてきただけですから」
　それから、彼女はベルに目を向けた。
「ベルちゃん、リーナね、ベルちゃんのお友だちでいるために、頑張って、若さを保ってきたの。いろいろ忙しい時期もあったけど、子どもはもう成人してるし、家督も譲っちゃった。だから、これからは、心おきなくベルちゃんと一緒にいられるの」
「リーナちゃん……」
　その、なんともシュトリナらしい友情の形に、ベルは感動しそうになって……。
「あれ？　でも、リーナちゃんの、結婚した相手の方はいいんですか？」
「ふふふ、大丈夫。あの人は剣にしか興味がないような人だから。リーナの自由にさせてくれるわ。なんだったら、ベルちゃんと遊びに行く時、護衛としてついてきてくれるかもしれないわね」
　なぜだろう……結婚相手のことを口にした一瞬、ベルは、何とも言えない凄味を、シュトリナに見たような気がした。
　わずかばかり、シュトリナの結婚相手が心配になり……直後、思い出す。シュトリナのパートナーが誰であったのかを……。
　――ああ、あの人なら、心配する必要なんかないかもしれない。
　なにしろ、彼はベルが知る限り最も……。
「そんなわけだから、ベルちゃん。百歳ぐらいまで長生きしていいのよ？　だいたい、ベルちゃんとリーナは四十歳差ぐらいだから、リーナは百四十歳まで生きて、ずっとベルちゃんのお友だちでいてあげるから」
　そうして、シュトリナは悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「百歳と百四十歳のおばあちゃんだったら、年の差とか全然関係なく、いいお友だちって言えるでしょ？」
　そんなことを言うのだった。

「……というわけで、リーナちゃんとは、ええと、おばあちゃんと孫というよりは、普通のお友だちとして、お付き合いさせていただいています」
「なるほど。そういうことだったのね」
シュトリナは、神妙な顔で頷いた。
「うん……。確かに、ベルちゃんが未来から来たって知ったら……リーナならそうすると思う。なんか、自分のことだけど、すごく納得しちゃった……」
深々と頷いてから、シュトリナは言った。
「……ちなみに、ベルちゃん、リーナ、すごーく気になることがあるんだけど、それも教えてくれる？」
「はい。なんでしょうか？」
ニッコニコと笑みを浮かべるベルに、シュトリナは言った。
「リーナの結婚相手って誰なの？　ベルちゃんのお話を聞いてるとなんだか、すごく気になっちゃうというか、嫌な予感がするんだけど……」
「うーん、それは言えないんですけど……」
ベルは、ちょこんと首を傾げてから、
「あ、でも、安心してください。リーナちゃん、すっごくラブラブで、この前なんかも……」
直後、シュトリナの声にならない悲鳴が、部屋に響き渡るのだった。

第三話　約束の時～響くはシュトリナの……悲鳴？～（後書き）

訂正。

ミーア四十　ベル母　二十　ベル誕生……ぐらいですかね。

……ということで、シュトリナとベルは四十歳差ぐらいでした。

第四話　干したキノコよりも固い疑念……

ミーアは、謎の少女を連れて食堂を訪れた。
先ほど来てから、あまり時間が経っていなかったのもあって、食堂勤めの女性が驚いた顔で声をかけてきた。
「ミーアさま、まさかまた！　食べに来たのですか！？」
「はて？　そんなわけないではありませんの」
なにをバカなことを、とミーアは笑った。
さすがのミーアでも、ここからさらに甘い物を食べようとは思わない。ミーアの器はそこまで大きくはないのだ。むしろ小さいのだ。物理的にも心理的にも……。
さらに、アンヌは食堂のスタッフとも親しい。食べ過ぎは怒られてしまうだろう。
さらにさらに！　ミーアは先ほど、ベルが着ていたドレスも気になっていた。
――甘いものの食べすぎは、お肌の大敵、などとタチアナさんが言っておりましたし……。将来の帝国の産業のためにも、ここは自重しましょう。良い布にしなければいけませんしね。
自らの双肩に、将来の帝国の製品品質がかかっていることを自覚しつつ、ミーアは決断を下すのだ。重たい覚悟と自覚があるのだ！
ということで……。
「わたくしは、お茶をいただきに来ましたの。それより、この子になにか食べる物を……えーと、あなた、ランチはもう食べたのかしら？」
そう問うと、少女は緩やかに首を傾げつつ、ミーアを見上げてきた。
「……どうして？」
「まだでしたら、お食事を頼みますし、もう食べているのなら、ケ

ーキを……。あっ、でも、ダメですわよ？　ケーキが食べたいからって、もう食事は食べたとか嘘を吐いたら……お食事を食べずにケーキだけ食べていたら、立派な大人にはなれませんわよ？」
かつて自分が言われたことを、きちんと孫娘（？）に伝えようとするミーアである。立派なお祖母ちゃんなのである！
そんなミーアに、困惑した様子で、少女は言った。
「まだ、食べてない……けど……」
「あら。でしたら、そうですわね。わたくしのお勧めのフルコースを頼もうかしら……」
っと、ミーアの視線を受けた女性スタッフが、困り顔で頭を下げる。
「申し訳ありません。ミーアさま。実は、材料のほうが少々……」
「ああ……そう言えば、そうでしたわね」
言われて、思い出す。ここ数日、セントノエル島が非常事態に襲われているということを。
実は、三日前、季節外れの春の嵐がヴェールガ公国を襲ったのだ。
嵐自体はすでに通り過ぎているものの、なかなか規模が大きく、その後の強風の影響もあって、ノエリージュ湖の湖面は大いに荒れていた。結果、熟練の船乗りでも船を出すのを躊躇うような状況で、セントノエル島は現在、外部から孤立状態にあるのだ。
幸い、島には備蓄があるものの学園の食堂もその影響を免れることができず、注文できるメニューは、やや制限を受けていた。
「では、今できるものはなにかしら？」
「そうですね。今ですとヴェールガ茸のシチューしか……」
と、実にしょんぼりした顔をするスタッフの女性に、ミーアはむしろ笑みを浮かべる。
「うふふ、十分ですわ。むしろ、一週間同じものであっても、文句をつけようなんて思いませんわよ」
ヴェールガ茸のシチュー。それは、まさに至高の一品。
滑らかなクリームとキノコの甘美な歯ごたえがとっても素敵な逸

品である。ミーアが最期の晩餐で食べたいメニュー、ベスト１０ぐらいには入る、素晴らしい料理なのだ。
――きっとこの子も気に入るに違いありませんわ。
上機嫌に笑いつつ、少女に目を向ける。と、少女は未だに不思議そうに首を傾げていた。
「お食事、食べさせてくれるの？」
「ええ、もちろん、差し上げますわ。ああ、でも……」
っと、ミーアはそこで何事か思いついたのか、悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「名前を教えてくれたら、ですけど……」
冗談めかしてそう言ってみる。と、少女はしばし考えた末に、小さく頷き、
「パトリシア……」
ぽつり、とつぶやいた。それを聞き、ミーア……思わず目を見開く！
「あら！　まともなお名前ですわ！」
てっきり、おかしなミーアネームを聞かされるものと思っていただけに、拍子抜けである。
それから、ミーアは腕組みしつつ考える。
――なるほど、パトリシアということは、お祖母さまのお名前からとったのですわね。
パトリシア・ルーナ・ティアムーン。それは、ミーアの祖母。現皇帝の母の名前である。
「お会いしたことのないお祖母さまのお名前から付けるなんて……わたくしにしてはまともすぎますわね。実にセオリー通りですわ」
……未来の自分に対するミーアの信用は、とても低いのだ。
だから、ミーアは、そこで微妙な違和感を覚える。
「なんだか、セオリー通り過ぎやしないかしら？」
生まれてきた皇女に、過去の血族の名前を付けるのは、よくあることだが……はたして、自分が、こんなにまともなネーミングをす

るものだろうか？
ミーアには甚だ疑問だった。
――まぁ、わたくしがつけたわけではないのかもしれませんけれど……でも。
生じたのは、ちょっとした疑念。
――この子、本当にベルと一緒に来た子なのかしら？　わたくしの……孫娘なのかしら？
ベルは心当たりがないと言っていた。まぁ、ベルは意外とうっかりなところがあるから、彼女が知らないということは、それほど不思議ではないと思ったのだが……。
――それでも、なんだか引っかかりますわね。これは、注意が必要ですわ。
ミーアの疑念は、数多の危機を乗り越えてきた自らの直感に対する自信と、将来の自分への不信に裏打ちされた強固なものだった。ミーアは、やや警戒心を高めつつ、少女、パトリシアを見つめて……その時だった。
ミーアの鼻が、ひくひくっと動いた。
「ああ……美味しそうな香りがしてきましたわね」
目を向ければ、食堂のスタッフたちが、テーブルにシチューを運んでくるのが見えた。
「まぁ、難しい話は後回し。まずは、きちんと食事をしなくてはいけませんわね。ヴェールガ茸のシチューは絶品ですわよ？」
ドヤァ顔で料理を説明するミーア。であったが、ふと見ると、少女が浮かない顔をしていた。
「あら？　どうかなさいましたの？」
首を傾げるミーアに、パトリシアは気まずそうに……。フォークでシチューをかき分け……。
「これ……嫌い」
彼女の行動を見たミーアは……、
「なっ、ぁっ！？」

思わず、仰け反る。
なぜなら、彼女がフォークで脇に避けたもの、それは……まさしく、そのシチューの主役である……、
「きっ、キノコが……嫌い……ですって……？」
ズガガガーンッ！　っと衝撃を受けたミーアは、わなわな、と唇を震わせる。
――そっ、そんなことが、あり得るかしら？　わたくしの子孫が、キノコが嫌いだなんて、そんなことが……本当に？
普通であれば、あり得るかもしれない。
食事の好き嫌いは個性というものだ。だから、ミーアの子孫がキノコが嫌いでもおかしくはない。おかしくはないが……。
――妙ですわね。やっぱり……。
ミーアの……キノコ女帝としての勘が告げていた。
――名前の件といい、とても怪しい……。
そう、ミーアは知っている。自分が、孫に好物をお勧めせずにいられる性格ではないということを。
ミーアはシェアの人なのだ。楽しい物語を他人と共有したい類いの人だし、美味しいものはみんなで食べたい人なのだ。
そんなミーアの孫娘が、キノコ嫌いなんてことがあり得るだろうか？
――料理長がキノコを料理したならば、それはもう絶品。口に入れたら、好きにならざるを得ないはず。ということは、キノコ嫌いということは、すなわち、食わず嫌いというわけで……。
ミーアは、確信のこもった顔で頷く。
「それは、あり得ないことですわ……。いいえ、そもそも、わたくしと血の繋がりがあるというのに、キノコが嫌いだなんてことが、あり得ぬこと。ということは、この子は……もしやっ！」
怪しい！　怪しすぎるっ！
ミーアの抱いた疑念が、鉄よりも、鍛えた鋼よりも……干したキノコよりも硬い確信へと変わりかけた次の瞬間っ！

「……あっ！」
ミーアの目の前、パトリシアがシチューを一口食べた。
さすがに、出されたものを食べないのは悪いと思ったのだろうか。
恐る恐ると言った様子で一口目を食べたパトリシアであったが、すぐに、
「おいしい……」
その口から、小さなつぶやきがこぼれおちた。
ほんのりと、幼い頬を朱に染めて、笑みを浮かべた彼女は、
「これ、すごくおいしい。このキノコも、すごく……」
ニコニコしながら、ミーアに言った。
「ですわよね！　わかっていただけて嬉しいですわ！」
それを聞いてミーアもニッコニコだ！
固まりかけた疑惑と確信は、お湯で戻された乾燥キノコのようにしんなり、柔らかくなってしまった。
まぁ、ミーアの確信など、しょせんそんなものなのだった……。

第五話　蛇の影

パトリシアは、無言でキノコシチューを食べていた。
それを見て、ミーアは、満足そうに頷いて、
――ふぅむ……、なかなか良い食べっぷりですわね。なんだか、見てるこっちまでお腹が減ってきてしまいましたわ。
ミーア、自らのお腹をさすりさすり……それから、周りに目線を送る。っと、それに気付いた食堂のスタッフが、素早くお茶を持ってくるのが見えた。
「どうぞ。ミーアさま。特製のミルクティーです」
「まぁ、ありがとう。ついでに、わたくしにも何かお茶菓子……」
「材料のほうが……それにアンヌさんに怒られてしまいますので……」
ズバッと言うスタッフに、ミーア、ぐむっと唸る。
ちなみに、この女性スタッフは、ミーアと顔馴染みでアンヌとも関係が深い。ミーアの行動は筒抜けになっているのだ。
アンヌが敷いた見事なミーアシフトと言えるだろう。こうして、彼女らの不断の努力によってミーアの健康は守られているのだ。
――仕方ありませんわね……。しかし……この子、この様子ですとやはり、キノコは食べたことがなかったみたいですわね。食わず嫌いだったということでしょうけれど……。
やはり、気になったので、聞いてみることにする。
「ねぇ、あなた、どうして、キノコが嫌いだなんて、言ってましたの？」
そう尋ねると、パトリシアは、下を向いたまま、
「キノコは……食べるとお腹が痛くなるから……」
小声で答える。その答えに、ミーアは……ひどく共感した。
――ああ、わかりますわ！　毒キノコを間違って食べると、確か

にお腹が痛くなるもの。なるほど、誤って毒キノコを食べたことが心の傷になって……。
などと、ちょっぴり微笑ましい気持ちになるミーアである。
その時、ミーアは見つける。パトリシアのぷっくりした頬に、シチューがついているのを！
「あら……」
だから、ミーアは優しい笑みを浮かべ、ハンカチで拭いてあげる。とっても優しいミーアお祖母さまなのである。対して、パトリシアの反応は、少しおかしなものだった。
「あっ、ごっ、ごめん、なさい……」
ビクッと体を震わせ、いかにも怯えた様子である。それに、ミーアはなんとなく違和感を覚える。
「別に謝る必要などありませんわ。まぁ、淑女として、お顔に付けるような食べ方はしないほうがいいとは思いますけど、美味しいキノコの前では人は冷静ではいられませんもの」
そう言ってやるのだが……なぜだろう、パトリシアはひどく驚いた様子でミーアを見つめてきた。それから、恐る恐ると言った様子で口を開き……。
「あの……どうして、こんなに美味しいものを、くれるの？」
「どうしてって……。どうせ食べるなら美味しいほうがいいでしょう？　それは、貴族だろうが、帝室の姫だろうが変わらないことだと思いますけれど……」
せっかく食べるなら、美味しいもののほうがいい、そんな絶対不変の真理を語るミーアであったのだが……。
「……なるほど」
パトリシアは、何事か納得した様子で、こくん、と可愛らしく頷いた。
「……つまり、ティアムーンの皇帝をだらくさせるには、美食をきわめさせるのも一つの手段と……」
「ふふ、まぁ、そういうこと……うん？」

キノコ料理を褒められて上機嫌に笑っていたミーアだったが、その笑顔が途中で固まる。
――ティアムーンの皇帝を堕落させる……？　はて……？
「美食もお金のムダづかいに、つなげられるって、地を這うモノの書にも書いてあった」
その口から飛び出した驚愕の単語に、ミーアは目を見開いた。
――ちっ、ちち、地を這うモノの書っ！　こっ、この子っ！　やっぱり蛇の関係者っ！？
思わずのけぞりそうになるミーアだったが、ギリギリのところで踏みとどまる。
ぐるんぐるん、混乱しそうになる頭を懸命に整理しつつ、愛想笑いを浮かべる。
――こ、これは、わたくしが帝国皇女だと気付かれるとまずいですわね。先ほど名乗った時に気付かないとは割とニブい子なのかもしれませんけれど……それでも油断は禁物。急いで、状況を把握する必要がございますわ！　とりあえず、ベルと合流しつつ……。
ミーア、ゴクリ……と、紅茶を飲み、気持ちを落ち着ける。
「あの……ということは、やっぱり、ミーアさんはクラウジウス家の、先生なの？　ですか？」
――クラウジウス家……？　はて……その名前どこかで……。でも……。
ミーア、思わず首を傾げる。
忘れがちな事実ではあるのだが、こう見えて、ミーアは帝国皇女である。ルードヴィッヒの教育の成果か、現在の帝国内にある貴族の名はおおむね頭に入っていたりするのだ。意外なことながら……。
けれど、不思議なことにクラウジウス家の名は聞き覚えはあるものの、なぜか、はっきりとは思い出せなかった。どこか頭の片隅に引っかかる、そんな名前で……。
――ううん、なんだったかしら……？
「あの……？」

ふと見ると、パトリシアが不審げな目を向けていた。
「あ、ああ、ええ、と、そうですわね」
さて、なんと答えたものか……。
どうやら、彼女は、ミーアのことを蛇の教育係と思っているらしい。その誤解を生かさない手はないが、さりとて、先ほど本名を名乗ってしまった手前、いつバレるかわからない。
どう答えるのが最善か……。このパトリシアという少女に……パトリシア……？
――あっ、そうですわ！　パトリシア、これですわっ！
ミーア、思いつく！　起死回生の、アイデアを。
「そう。わたくしは、クラウジウス家の教育係。あなたに、しっかりと教育をしますわ。わたくしのことは、帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンとして扱うと良いですわ」
「帝国皇女……？　え？　でも……」
怪訝そうな顔をするパトリシアに、ミーアは微笑みかける。
「そういう訓練ですわ。訓練」
そう……これは訓練。目の前の少女が、ミーアの祖母に名を借りて、ミーアの血族に扮しているように……ミーアもまた自身の名を偽装であることにしたのだ。
――先ほど、うっかりミーアと名乗ってしまいましたけれど、これで上手く誤魔化せるのではないかしら？
そう言いつつ、ミーアは首をひねる。
――それにしても、これはいったいどういうことかしら？　この子が蛇の送り込んできた者として、その目的は？　そもそも、この子、ベルと同じ未来からやってきたのかしら？　蛇が時間移動に介入してきた？　そもそも、ベルはどうやってここに来たのかしら？
頭からモクモク湯気を吹き出しつつも、ベルと合流するために、ミーアはパトリシアを連れて食堂を出るのだった。

第六話　天邪鬼な忠臣

セントノエル学園女子寮、二階の、階段から数えて三つ目の部屋。
他の生徒の部屋と変わらぬ造りのその部屋が、学園の支配者の住まう場所であるということは、女子寮に住む者ならば誰しもが心得ていることだ。
すなわち、そこそが、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガの部屋なのである。
そのドアの前に立つ少女……リンシャは小さく息を吐く。
――未だに、ここに来るのは慣れないな……。
そんなことを思いながら、そっとドアをノックする。
「失礼いたします。ラフィーナさま」
「あら、リンシャさん。どうぞ。入って」
許可を得て、ドアを開ける。と、出迎えに出てきたラフィーナは、ちょっぴり疲れた顔をしていた。目の下には、うっすらとくまができている。
――それも無理ないか、な……。
リンシャは、ここ数日間の目の回るような忙しさを思い出し、小さくため息を吐いた。
神聖ヴェールガ公国を襲った春の嵐、その対応のため、ラフィーナは寝る間を惜しんで働いていた。
痛かったのは、ラフィーナの補佐をしてくれていたモニカが、島から出ていたタイミングで嵐が来てしまったことだった。
毎年、この時期は少し天候が不安定になるとはいえ、今年のような嵐は滅多にあることではなく……イレギュラーな事態に、島の警備を司るサンテリらも手一杯になっていた。
――生徒会長はミーアさまが担っているとはいえ、島の細々したことはやっぱりヴェールガ国がする必要があるんだろうから、大変

なんだろうな。
そんなことを思っていると……、
「ごめんなさいね、こき使ってしまって。毎年こうではないのだけど……」
すまなそうに言うラフィーナに、リンシャは思わず苦笑いを浮かべる。
「どうかしら？　もう、学園での仕事には、慣れたかしら？」
疲れを誤魔化すように笑みを浮かべて、ラフィーナが言った。
「はい。おかげさまで」
短く答えるリンシャに、ラフィーナは気遣うような顔で、
「無理を……。いえ、なんでもないわ」
なにかを言いかけて、すぐに首を振る。
それを見たリンシャは、なるほど、ラフィーナは確かに高慢な貴族ではない、と改めて思わされた。
“無理をしていないか？”
この問いは、相手を気遣う言葉のようでいて、時に残酷さを帯びる。
傷ついた人にそう問いかけることで、却って相手を追い詰めてしまうことだってある。
なぜなら、無理をしてないわけがないからだ。
傷つき、それでも前を向いて生きていくしかない人は、無理をして平静を装うしかない。そんな人には「無理をしてるか？」などと、当たり前のことを聞くべきではないのだ。
だから、ラフィーナは言葉を途中で止めたのだ。
だけど……。
「別に無理はしていません。こうして学園で学ぶこともできていますし。御心配には及びません」
リンシャは勝気な笑みを浮かべて言った。
――だって、自分は、別に傷ついてなどいないのだから。

それは、突然のことだった。
レムノ王国に帰郷し、元の革命派の仲間たちに挨拶をし、ついでに、第三国にいる兄ランベールの様子を見て（ちなみに、ランベールは、あの後、中央正教会が運営する学校で教師をしていた。文学の教師らしいが……楽しそうに仕事をしていた）それから、セントノエルに帰ってきた。
――あの子、私がいない間に、ちゃんと勉強していたかしら？やってるわけないわね。やれやれ、また口うるさく言ってやらないと……。
そんなことを思いながら戻ってきたリンシャにミーアは言った。
「ごめんなさい。リンシャさん。ベルのことなのですけど……」
そうして、告げられた事実。
あの子が……消えてしまったということ。
消えた……そんな風に、婉曲的に言うけれど、リンシャはそれで悟れないほど、鈍くはなかった。
つまり、あの子は……ベルは、死んでしまったのだ。
自分になにも言わずに、あっさりと、死んでしまったのだ。
それがわかって、リンシャは……ひどく腹が立った。
別に悲しくはなかった。
まったく悲しくもなんともなかったけど、でも、「せっかく助けてやったのに、勝手に死ぬなんて……」と思ったら、悔しくて涙が出た。
悲しくもないし、傷ついてもいないけれど、ただ悔しかった。
……涙の理由は、それだけだ。
「あの、それでね、リンシャさん。セントノエルに残るつもりはあるかしら？」
「……どういう、意味ですか？」
つい、低い声が出てしまったのは、腹立たしさに声が震えるのを堪えるためだ。
「あなたは、ベルにとっても良くしてくれた。そんな方を、こちら

の勝手で解雇するのも気が引けますし、セントノエルでの学びは、あなたの役に立つと思いますの。だから、ラフィーナさまに相談させていただいたところ、セントノエルでラフィーナさまのお手伝いをしながら、学びを続けるという道をご提案いただきましたの」
「ラフィーナさまの、お手伝い？」
「そうですわ。あなたも覚えているでしょう、バルバラさんのこと、ジェムという男のこと」
忘れるはずもない。一人は自分を殴り倒した女であり、もう一人は、自分の兄を惑わした道化師のような男だ。
「あのような者たちが、わたくしたちの周りには潜んでおりますの。だから、リンシャさんのように信頼がおける方というのは、とても貴重なのですわ」
ミーアは、そう言うけれど、それは紛れもない心遣いだった。
レムノ王国革命派の首謀者の妹……。その肩書きは、リンシャ自身も自覚する通り、とても重い。これから先、レムノ王国で暮らすのは、息苦しいことだろう。かといって、他国で生きられるほど、なにかの才能に恵まれているわけでもない。
セントノエルで学び、ラフィーナの従者として働けば、将来的には、正式にラフィーナの従者になる道もあるかもしれない。あるいは、セントノエルで得た知識を用いて商売を始めることもできるだろう。
それに、ここで断るのは、自分の中に消しようのない感傷があることを認めるような気がして……あの子の死に傷ついていることを認めるような気がしてしまって……。
だから、リンシャはその申し出を受けた。
「ありがとうございます。とても助かります」
それは、自分の利に繋がることだから。断ることはおかしなことだから。
別に自分は、あの子の死に、傷つきもしてなければ、悲しんでもいないのだから。

そうして、ラフィーナのもとで働くようになって……リンシャはちょっぴり暇になった。
ベルも面倒がかからない子ではあったけど、それ以上に、仕事の量は減った。
それは、リンシャにしっかりと勉強をしてもらおうという、ラフィーナやミーアの心遣いの結果ではあったのだが、むしろ、リンシャとしては手持無沙汰に感じられた。
ぽっかりと……胸のどこかに穴が開いているみたいな……そんな感じがした。
だからここ数日の、嵐の対応に追われている時間は、どちらかというと、リンシャにとってはありがたい時間だった。
「それで、どうかしたかしら？」
一瞬、物思いにふけりかけた時、ラフィーナの問いかける声が聞こえた。
「あ、ええと、モニカさんから連絡です。バルバラが、牢を逃げ出した、と……」
その驚くべき情報に、ぴくんっと、ラフィーナの肩が揺れる。
「……それは、誰かの手引きによるものかしら？」
そっと腕組みして、ラフィーナがつぶやく。
「報告書にはなにも……ただ、十日前のことのようです。嵐のせいで、連絡が遅れたとか……」
「そう……」
ラフィーナは静かにため息を吐いてから、
「巫女姫……ヴァレンティナ姫と接触を図るかもしれないわね。警備を強化する必要があるかしら……」
小さく首を振るのだった。
報告を終えたリンシャは自室へと向かって歩き始めた。
「明日は、算術があったかな……。商売をするなら、必須だから頑

張らなくちゃね」
そう言えば、あの子は算術が嫌いだったな……などと思い出し、ついつい苦笑してしまう。
「まぁ、あの勉強嫌いに算術を教えなくって良くなっただけ、楽になったかな」
別に寂しいとは思わない。ただ、まぁ、ちょっとだけ張り合いがなくなったな、とは思うけれど……。
「ああ、久しぶりに思い出したら、なんか、やっぱりムカついてくるな……」
元貴族のご令嬢らしくない言葉が、ついつい口からこぼれてしまう。
でも、それも仕方ないこと。
銀貨でお礼なんかするな、と言ってやったのに、結局は、ベルのおかげでセントノエルで勉強を続けることができるようになったのだ。それが、あの子の置き土産のように感じられて、お礼のように感じられて……。それが、無性に腹が立って……。
「我ながら、なにに怒ってるんだろう？　関係ないのに」
大した付き合いじゃないのだ。ベルとは、一年ちょっとの付き合いで。
ただ、ミーアから願われたから、従者として付き合っていただけのこと。自分の忠誠心なんか、せいぜい、銀貨数枚分に過ぎない……取るに足りないもので……。
そうして、ふと顔を上げた時……リンシャは息を呑んだ。
目の前、ちょうどドアが開くのが見えて……そこがイエロームーン公爵家のご令嬢の部屋だということは知っていて……。
だから、そこからあの子の友だちのシュトリナが出てきても、別に不思議はなくって……。ただ、友だちが消えて以来、あまり笑わなくなった彼女が、やけに楽しそうにしているのがなんだか、ちょっとだけ気になって……。
なにげなく、そちらを見ていたら……そうしたら見えたから。

あの、懐かしい少女が出てくるのが……見えたから！
「あ……あ……」
声が、震える。
でも、別に嬉しくなんかない。
自然と、足が走り出す。
でも、こいつと再会したことなんか、なんとも思っていない。
だから、そう……、これはきっとムカついただけ。
「あっ、り、リンシャ母さま……、じゃない、リンシャさん！　ひゃあっ！？」
勝手にいなくなっておきながら、能天気な声で、あっけらかんとそんなことを言うから……ただ腹が立っただけ。
だから、腹いせ代わりに、リンシャはベルに飛びついて、
「あんた、ほんっとに、ふっざけんじゃないわよ！　なに勝手にいなくなってんのよ！　私がどれだけ心配したとっ！　どれだけっ、どれだけっ……！」
言葉に詰まる。
目の前が滲む。
涙が溢れる。
構うものか、とリンシャは、ずっと胸に溜まっていたモヤモヤをベルにぶつけてやるのだった。

第七話　にじみでる、ヒロインの……貫禄？

さて食堂を後にしたミーアがやってきたのは、女子寮のシュトリナの部屋だった。

――まぁ、連れ込まれるとしたら、ここしかありませんわよね。でも……。

部屋のドアを前にして、ミーアはいささか躊躇いを覚える。

今頃、中では熱い友情の語らい合いが続いているのだろうと思うと、ついつい気後れしてしまうというか……。

――いいところを邪魔したとか言われて、リーナさんに怖い目に遭わされそうな気もしますわね。

さすがに毒は盛られないだろうが、ベルを失った時のシュトリナの傷心ぶりを思い出すと、怖くもあり、邪魔をするのが申し訳なくもあり……。

さりとて、のんびりしている時間もない。

ミーアは傍らに立つ少女、パトリシアを見て……お人形のように表情を動かさず、ただ小さく首を傾げる彼女を見て、ふむ、と唸る。

――この子が、蛇の関係者だというのであれば、必ずや何かしらの陰謀が動いているはず。この子自身は、そこまで脅威度が高くはなさそうですけれど、油断は禁物ですわ。

小さな火花をきっかけに国全体を燃やそうとするのが蛇のやり方だ。無害であったり、些細なことのようであったとしても、油断は禁物。ゆえに、ミーアは、はふぅっと深く息を吸い、それから、意を決してドアを叩くっ！　が……！

「あら？　いませんわね」

反応はなかった。念のため、ドアに耳を近づけて中の様子を探るも、中からは一切の音が聞こえてこない。

「てっきり、部屋で事情を話しているものとばかり思いましたけれ

ど、どこかへ出かけたということかしら……？」
ミーア、刹那の推理タイムを経て……。
「なるほど……。町に出ていてもおかしくはありませんわね。親友との再会の後では、町に買い食いに出かけたくなるのが人情というもの。それに、買い食いに行くのに、セントノエル島ほど、適した場所はありませんし……」
そうして、ミーアは、食堂でケーキを食べていたシュトリナの顔を思い出す。
シュトリナもまた、ミーアと同じ、ティアムーン帝室の血を引く者。なれば、物証は十分。
「ならば、探しに行く必要がありますわね」
幸い、ミーアはセントノエル島の買い食いスポットを熟知している。
帝国の叡智の情報網はダテではないのだ。
「あの、ミーア先生、どこに行くのでしょうか？」
「町に出ますわ。セントノエル島の町を歩く機会は、貴重なのではないかしら？」
「セントノエル……？　ヴェールガ公国の島？」
「そうですわ。ええと、蛇にとっても良い学びの機会になるでしょう？」
ミーアの問いかけに、パトリシアは素直に頷いた。

女子寮を出た途端、びょうっと強烈な風が吹きつけてきた。
「きゃっ！」
っと、可愛らしい悲鳴が響くっ！
そうなのだ、高等部に上がったミーアは一味違うのだ。
可愛らしいヒロインとして、可憐なお姫様としてのたしなみというものを身に着けたのだ！　いきなり強風に吹かれれば、悲鳴だって可愛く上げられる――上げられる？
「あら？　大丈夫ですの？　パトリシア」

……と思ったら、ミーア、けろっとした顔で、隣のパトリシアに声をかけた。
なんと、悲鳴を上げたのはミーアではなく、パトリシアのほうだった！
ちなみにミーアは、風に吹かれた瞬間「おお、すごい風ですわ！」などと堂々たる態度を崩さなかったのだ。なんなら、その顔は余裕たっぷりに微笑んですらいて……。
乗馬を嗜むようになって以来、風とお友だちになったミーアなのだが……強風にあおられても慌てなくなったせいか、奇妙な貫禄が出てきて、ヒロイン力が下がったという噂があるとかないとか……。
まぁ、それはどうでもいいとして……。
「この風では、まだしばらくは湖に船を出せないんじゃないかしら？」
ふと、そんな心配をしてしまう。
これから向かう町のほうにも、その影響は出ていた。いくつかの店は、商品が届かずに店を閉じてしまっているし、開いていたとしてもメニューが限定されていたりするのだ。
ミーアは、セントノエル島のスイーツ店の状況をすべて把握しているのだ。
帝国の叡智のスイーツ情報網は、ダテではないのだ！
「まぁ、さすがに食べ物がなくなることはないでしょうけれど……。いざという時には、森の中のキノコを食べればいいわけですし……」
あの大飢饉を経験したミーアである。いざとなれば森のキノコで三食我慢するぐらいのこと、わけないのである。
いや、むしろ……。
――ヴェールガ茸の塩焼きとか美味しいんじゃないかしら？　それをみんなで食べるというのは、ちょっぴり楽しそうですわ。
そんな風に、ワクワクしてしまったりもして……。歴戦のミーアの胃袋は、この程度のトラブル、美味しいイベントごとに変えてしまうのだ。

「まぁ、この嵐であれば外部から人が来られないわけですし……普段より安全なはず。急ぎでもありますし……」
などとつぶやきつつ、ミーアはずんずん、町中を歩いていく。
力強く、油断に背中を押されながら、ずんずん、ずんずん、進んでいく。
その行く先に懐かしき敵が待ち受けていることなど、今のミーアは知る由もないのだった。

第八話　呪われしクラウジウス家

「ふぅむ、ここでもなかったですわね……」
ミーアは心当たりの店を三軒ほど回ってみたが、シュトリナたちの姿は影も形もなかった。
「これは、もしかすると、まだ女子寮にいるという可能性もあるかしら……？　幸運の青いキノコは、身近なところに生えていると言いますし……。ふむ、困りましたわね」
「ミーア先生、あの……、あの」
ふと見ると、パトリシアがキョロキョロ辺りを見回しながら、瞳をキラキラさせていた。
「あのお店は……」
「ああ。裁縫店ですわね。大陸の最先端のデザインが揃っているということですけれど……」
「あんなにキラキラしたお店、見たことない」
「あら？　あなた、帝都は見たことがありませんの？」
ミーアは思わず首を傾げる。
なるほど、セントノエルは確かに大陸の流行発信地ではある。けれど、帝都にだって、このぐらいのお店はある。それほど驚くこともないのでは？　と思ったのだが……。
「はい。ずっとクラウジウス領の領都で暮らしてたから……」
それを聞いて、ミーアは鼻を鳴らす。
――ふふん、語るに落ちましたわね。わたくしの孫に化けようというのに、ルナティアに来たことがないなどと……。いや、でも、この子がベルと同じところから来たとは限りませんわね。そもそも、この子、あの光の中から現れたというだけで、時間移動をしたのではないということも考えられるかしら？　ということは、わたくしの孫に扮しているわけでもない？　ふぅむ……。

そもそもの話、ベルみたいなケースが何度もあってはたまらない。
あるいは、もしかすると、偶然にもタイミングが合ってしまっただけで、この子は、ベルとはまったく関係ないのかも？　などと、考えてしまうミーアである。
――やはりヒントは、クラウジウス家ですわね。気になりますわね。クラウジウス家。絶対にどこかで聞いたことがありますのに思い出せませんわ。ぐむむ……。
前時間軸において、ルードヴィッヒにお説教されて以来、ミーアは努めて必要な名前は覚えるようにしてきた。そもそも、それより以前から帝国皇女として、帝国内の貴族の名前は、それなりに覚えてきたはずだったのだ。それなりには……最低限は……一応……うん……。
にもかかわらず、である！　なぜか、クラウジウス家に対する印象がまったくなかった。
――外国の貴族ということも考えられますけれど……なんだか違う気がしますわね。ふぅむむ……。
考えた末、ミーアは、疑問を解消すべく動く。方法はとても簡単。
「ええと、パトリシア、クラウジウス伯は……」
そう……『爵位』を確定させるのだ。
家名だけでなく、爵位も合わされば、思い出せるかもしれない。そんな希望を胸に動き出したミーアだったのだが……。
「……伯？　あの、クラウジウス家は、侯爵だけど……」
返ってきた答えは、意外なものだった。
「侯爵……？」
ミーアは思わず首を傾げる。なにしろ、侯爵家と言えば上位貴族だ。さすがのミーアでも覚えていないはずはない……きっと！　たぶん……おそらく……うん。
にもかかわらず、覚えていないということは……。
「やはり帝国貴族ではない……？　いえ、でも確かに聞き覚えが……あっ……」

その瞬間だった。ミーアの脳裏に閃くものがあった。
――あ……ああ、そうですわ！　クラウジウス侯爵家！　聞き覚えがあるはずですわ！
思い出してみれば、覚えがあって当然のこと。なぜなら、クラウジウス侯爵家というのは……。
――パトリシアお祖母さまのご実家……。お祖父さまとご結婚なさる前の家名ではございませんの！
思わず、頭を抱えそうになるミーアである。まさか、自身に縁の家名を忘れているとは……。
なるほど、それは確かに失態ではあった。けれど、同情の余地もないではなかった。
なぜなら、ミーアは、クラウジウス家の者と会ったことがないからだ。クラウジウス侯爵家は、ミーアが産まれる前に、すでにお取り潰しになっていたのだから。
さらに、ミーアには、その名を記憶に残したくない事情があったのだ。それは……。
――ああ、そうでしたわね。呪われたクラウジウス侯爵家……懐かしいですわ。
『呪われたクラウジウス』
それは、ミーアが子ども時代に、何度か聞かされてトラウマになった、怪談話に登場する一族なのだ。しかもその怪談、血筋の者に恐ろしい怪物が訪ねてくる系の、タチの悪い呪いの怪談なのだ。
一応、念のため……誤解のないように言っておくと、ミーアは別に、呪いだとか幽霊だとかは怖くはない。全然怖くはない。だから、その手の話が出た時、耳を塞いでいたとか、そんなこともない。できるだけ聞かないように、記憶に残らないようにしていたなんてこともない。本当だ！
……とまぁ、そんなわけで、ミーアの中で、祖母の実家であるクラウジウス家というのは、記憶に残しておきたくない家の名前なのだった。

――ということは、この子はお祖母さまの名前をもらったわたくしの孫、ではなく、お祖母さま自身だと言いたいわけですわね……。敵ながら、よく研究しているということかしら……？　はて？

と、そこで、ミーアは再び違和感を覚える。

なんだろう……なにか重大なことが見えてきそうな……そんな予感があって……。

――もしも、偽装するとして、そんな面倒なことをするかしら？

違和感は、疑問の形をしていた。

――そんな回りくどい解釈をするよりは、もっと、簡単な答えがあるのではないかしら？

ミーアが、推理に没頭しようとした……まさにその時だった！

「あら、ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下」

唐突に、ミーアに声をかけてくる者がいた。

――はて、誰かしら？

反射的に顔を上げたミーアは気付く。

考え事をしていたからだろうか。いつの間にやら、人通りのない裏路地に入っていたこと。

そして、そんな裏路地に一人の女性が立っているということ。そして、それは……。

「……はぇ？」

思わず、間の抜けた声を上げてしまった。

なぜなら、そこに立っていたのは……、

「うふふ、このような場所でお会いできるとは……。幸運を神に感謝したいぐらいですね」

ねっとりと絡みつくような……蛇のような笑みを浮かべる女性、バルバラだったからだ。

第九話　涙目三日月蹴り（ティアムーンサルトキック）炸裂……せず

「ばっ、ばば、バルバラさん……なぜここに？」
確か、こいつは、ヴェールガに囚われていたはず……っ！　と、ミーアは驚愕に声を震わせる。対して、バルバラは勝ち誇ったような顔で答えた。
「ええ、多少の苦労はありましたが、この程度の風ならば船で渡ってこられましたよ。腕の良い船乗りに心当たりがあったもので。それに、逆に、こういう時のほうが警備というのは緩むもの。『こんな天気の日には島にやってこられないだろう？』『まさか、このタイミングで脱獄なんかしないだろう？』そうした認識は油断を生むもの。むしろ、それを成すに相応しくないタイミングというのが、最適のタイミングであることは多いのです」
「なっ、なるほど……」
ミーア、思わず、唸ってしまう。
――これは、勉強になりますわ。今度、地下牢に入れられた時には試してみよう。
心のメモ帳にしっかりと記録するミーアである。どんな時にも革命されマインドを忘れない、地下牢系皇女の鑑である。
「っと、そうではありませんわ。わたくしが問いたいのは、なにをしにここに来たのか、ということですわ」
「これは異なことを……。帝国の叡智らしからぬ不見識。言うまでもないことでしょう？　もちろん、我が想いを遂げるためですよ」
そう言い、バルバラはわずかに視線を転じる。
その視線を追い、ミーアはようやく気付く。
バルバラの右手が捕まえている子どもの存在に。
腕を後ろ手にひねり上げられて、顔を苦悶に歪めた少女、それは、つい先ほどまでミーアのそばにいたはずのパトリシアで……。さら

に、バルバラの手にはキラリと光る刃物があって……。
「ふふふ、あなたとシュトリナお嬢さまにはとっても痛い目を見ていただかないと、私の心は穏やかではいられないのです。ついでに聖女ラフィーナもこの手にかけられれば上々。できることなら、この大陸に巣食う貴族のクズどもを、根こそぎ一掃できれば言うことはないのですが……」
どこか陶然とした顔で、バルバラは言った。
「まぁ、そうした大それたことは、他の者たちに任せましょうか。とりあえずはあなたですよ、帝国の叡智。さぁ、私とともに来ていただきましょうか。ミーア姫殿下」
そうして、パトリシアの首筋に刃を突き付ける。
「ちょっ、正気ですの？　その子は蛇ですのよ！？　あなた、仲間を殺そうというんですの？」
「はて？　この子が？　仲間？」
バルバラは首を傾げ、ニッコリと笑みを浮かべた。
「なるほど。それはとても良い言い訳ですが……。はたして、それで、貴女さまのお仲間が納得してくれるでしょうか？　帝国の叡智たる者が幼い子どもを見捨てる？　しかも、その子どもが蛇の一味だから、殺されても仕方ないという言い分で？」
――くっ！　そうでしたわね、蛇は、そういうろくでもない連中でしたわ。
ミーア、思わず舌打ちする。
仮に、あの子が蛇であったとしても、目的を達成するためには容赦なく切り捨てる。ミーアが無視して見捨てたりすれば、その事実を用いて仲間たちとの間に亀裂を作り出す。
決してあの子が蛇であったことなど、認めないだろう。
「さて、ご理解いただけたなら、大人しくついてきていただきましょうか？」
勝利を確信した顔で、バルバラが言う。
――くう、ダメですわ。ここは言うとおりにするしか……。

と、そこでミーアは思う。
――いえ……まだですわ。手がないわけではありませんわ……。わたくしには、対シオン用に鍛え上げた……ハイキックがありますわ！
ミーアは、頭の中で、バルバラの手の中の刃物を蹴り上げる自分の姿を思い描く。
妄想の中のミーアは、スカートを跳ね上げ、綺麗に弧を描くキックを放っていた。バルバラの手の中の刃物が、ぐるんぐるん回りながら、宙に舞っている姿を見たミーアは、自信を深める。
――そうですわ。思えば……あの蛇の刺客、ジェムを倒したのだって、わたくしのこの足でしたわ！　相手が狼使いやディオンさんだったならまだしも、バルバラさん相手ならば……。
「早くしていただけませんか？　そうでないと……」
「あぅっ！」
腕をひねり上げられ、パトリシアが悲鳴を上げた。目をギュッと閉じて、唇を噛みしめる。
「ああ、いけませんわ。淑女が子どもに乱暴を働くものではありませんわ」
ミーアは、ひどく落ちついた声で言った。その落ちつきは、さながら、武術を習得した達人のもののようだった。
それからミーアは、堂々と、バルバラのほうに近づいていき……。間合いを計りながら、近づいていき！
「さ、どこに行くつもりなのかしら？」
あと、五歩……四歩、三、二……今っ！
瞬間、ミーアが仕掛ける。
「ふひゃぁあああああっ！」
勇ましい雄叫びと同時、ミーアは思い切り足を振り上げた。
乗馬とダンスで鍛え上げた、ミーアの力強い脚は、鞭のようにしなりながら、三日月のような軌道を描き、見事に、見事に――空を切った！
さらに、びょうっと強風が吹く。重心が後ろに傾いたミーアの体

は、もろに、その風を受けて、勢いよく後ろに倒れて……。
「ふひゃあああああっ！」
勇ましい悲鳴を上げるミーアの体のすぐ上を、なにかがものすごい勢いで通り過ぎていく。それは、ギラリと鋭い光を放つ刃……。その軌道は、ついさっきまでミーアの体があったところだった。
直後、とすん、とお尻から着地したミーアは、
「ふぎゃんっ！」
涙目になりつつ、いててて、っとお尻をさすり、さすり……一秒、二秒……三秒の後、背中につめたぁい汗が、ぶわわわっと吹き出した！
一瞬前の状況が理解できてしまったためだ。
――あ、ああ、あっぶなぁっ！　あっぶなぁあっ！　今、避けてなかったら、あ、あ、あぶなぁああっ！
口をアワアワさせるミーアに、バルバラは小さく首を傾げた。
「あら、外れましたか」
「あ、あ、あなた、今、大人しくついて来いって……」
「それはそうでしょう？　正直に、大人しく死んでくださいと言ったら、死んでくださるのですか？」
「ふむ……まぁ、そう言われれば……って、そうではありませんわっ！」
一瞬、納得しかけたミーアであったが、すぐにブンブンッと首を振る。
――こ、こ、これは、まずいですわ！
味方を失っているからだろうか。バルバラはひどく短絡的で、攻撃的で、それゆえに脅威だった。
からめ手ではなく、直接的な暴力で来られた場合、ミーアはまったくの無力だからだ。
達人の落ち着きとか錯覚だった！　相手の武器を蹴り上げる？
そんなのできるわけがない！
「ふふ、まぁいいでしょう。どの道、その体勢では次は避けられな

いでしょうし……。一瞬、命を長らえたところで、なにほどのこともなし」
そうして、ナイフを振り上げるバルバラ。その顔は勝利の確信に歪んでいた。
けれど……それは、大きな間違いだった。
ミーアの上げた雄叫びは、作り出した時間は、確実に届いていたのだ。
「では、大人しく死んでくださいね。ミーア姫殿下」
ギラリと輝くは、刃の輝き。
「ひぃいいいっ！」
振り下ろされる冷たい殺意に、ミーアは、なすすべもなく目を閉じる。がっ！
「ミーアっ！」
直後に聞こえた声に、ミーアは慌てて目を開け……見開く！
「あっ、アベルっ！」
自身の前に現れた、力強い背中に、ミーアは思わず黄色い声を上げるのだった。

第九話　涙目三日月蹴り（ティアムーンサルトキック）炸裂……せず（後書き）

暴漢の持つナイフを蹴り上げる妄想って、しますよね？
で、実際に試してみて……気づくのです。思ったより、足上がらないな、と……。
子ども時代から体がかたい作者です。

第十話　どこにでもありふれた不幸

「アベル・レムノ。間の悪いことで！」
忌々しげに、バルバラが舌打ちする。
短絡的で暴力的な行動に出たことが、完全に裏目に出ていた。
バルバラもまた、純粋な戦闘能力的には決して高くはないのだ。なにしろ、偶然とはいえ、ミーアに避けられてしまう程度なのだから、その実力は推して知るべしといったところだ。
対するアベルは、火馬駆などの強敵と戦い、そして剣の天才シオンと研鑽を経てきている。その実力は、すでに凡百の騎士の域にはない。
そう、仮にその手に剣がなかったとしても……。
セントノエル島にて、剣を持つには許可がいる。王侯貴族の子弟であったとしても、それは変わらない。ゆえに、アベルの手に剣はなく、されどそれは、今の彼には些細なことでもあった。
「徒・留・封、その手に剣を持たぬ『徒手』であろうと、あえて敵の眼前に『留まり』て、その手の刃を『封じ』ることこそレムノ流剣術の神髄なり、か。なるほど、ギミマフィアスもよく言ったものだ」
つぶやきの直後、硬質な音が響く。それは、バルバラの手から落ちたナイフが地面に落ちる音だった。
「剣を持つから騎士なのではなく、ただ背に大切なものを守り戦うのが騎士である……ようやく少しわかった気がするな」
彼女の腕を制したまま、アベルは鋭い眼光でバルバラを睨み付ける。
「ボクの大切な人に手を出さないでもらおうか、バルバラ嬢」
「これはこれは、アベル王子殿下。ご機嫌麗しゅう」
バルバラは、一瞬、頬をひきつらせるも、すぐにいつもと変わら

ない笑みを浮かべた。
「私の得物だけを落とすとは、相変わらずお優しいことでございますね」
「必要があれば、この腕をへし折る程度のことはするつもりだ。必要がないからそうしていないだけなのだがね」
アベルはチラリとバルバラが抱えた少女のほうに目を向けて、
「その子を解放しなければ、そうする必要が出てくるかもしれないが……」
「おや、できますか？　女性の腕を折るなどと野蛮なことが……、あなたに？　お優しいアベル王子」
バルバラの揺さぶりを、アベルは涼しい笑みで聞き流す。
「ボクの心を揺らそうというのなら、無駄だ。姉が、蛇の巫女姫であったという以上の事実を突きつけることが、貴方にできるとでも言うのか？」
そこにあったのは、かつての、線の細い少年王子の姿ではない。その背にかけがえのない者を守る、一人の騎士の姿だった。
揺らがない、真っ直ぐな敵意を前に、バルバラはギリッと歯を食いしばる。それから、人質として抱え込んでいたパトリシアのほうに目を向けて……やがて、諦めた様子で、拘束を解いた。
あまりの急展開に、パトリシアは呆然とした顔をしていたが、すぐに正気に戻ったのか、走ってミーアに近づき、そのまま抱きついてきた。
「ああ、怖かったですわね。でも、もう大丈夫ですわ」
優しくパトリシアの髪を撫でてやるミーア。それを確認してから、アベルはバルバラの腕を放した。
「殺さなくても良いのですか？　アベル王子。私は諦めませんよ。どれほど聖女ラフィーナが教えを説こうと、どれほど時間が感情を風化させようとも……」
血走った眼で、バルバラは意地の悪い笑みを浮かべる。
「私は、この命が続く限り、この地に巣食う貴族どもを根絶やしに

する。ただ、それだけのことでございます」
その顔を憎悪に歪め、バルバラは高々と宣言した。
根深く、底知れぬ憎悪に、ミーアは思わず背筋が寒くなる。
「バルバラさん、なぜ……。貴女は、どうしてそんなにも、貴族を憎むんですの？」
そう尋ねた瞬間、バルバラの顔から、すとんと表情が抜けた。
「別に、大した理由ではありませんよ。ただ、愛する我が子を、バカな貴族の手で殺されたというだけのことでございます」
そうして、バルバラが語ったのは、ある女の物語。
その女は貴族のメイドとして雇われていた。働き者だった女は、ある時、当主のお手付きとなり、その子を身ごもってしまう。
そのことを知った当主の妻は激怒し、その女を屋敷から追い出した。職と居場所を失った女は、町で働き口を見つけ、子どもと二人で生きていくことを決意する。
小さくても幸せな日々。けれど、それも長くは続かない。
ある日、女のもとに、貴族の使者が訪れて、その子どもをさらうようにして連れて行ってしまう。当主が急死し、後継者は病弱。ゆえに念のための備えとして、当主の血を引く者を欲したのだという。
女は子どもの行く末を案じつつも、貴族の家で大切に育てられるなら、と、それを喜んだ。喜んで、いたのに……。
その数年後、女のもとに息子が死んだとの報せが届いた。

そうして、語り終えたバルバラは、乾いた笑みを浮かべた。
「ね？　ありふれた話でしょう？　聞き飽きた、どこにでも転がっている話でしょう？」
くすくす、と口の中で笑いながら、バルバラは言う。
「物語を嗜まれるミーア姫殿下には、いささか以上に退屈な、つまらないお話であったでしょう？　だから、どうぞ、お耳汚しの話など、忘れてしまってくださいませ。覚えておく価値のない、平民のたわごとでございますゆえ。平民を踏みつけにしてこそ貴族であり

王であり、皇帝である。そうでございましょう？」
それは……彼女の言う通り、どこにでもある、とてもありふれたお話だった。
世界中のどこにでも、貴族の横暴は転がっている。
だから、ミーアは、バルバラが特別に不幸な女性だとは思わなかった。特別に同情すべき人であるとも、思わない。
でも……。
「かわいそう……」
ぽつり、と、パトリシアがつぶやくのが聞こえた。
それに、ミーアも素直に同意する。
同情などほしくはないだろうけれど。実際、そんな程度の不幸はどこにだって転がっているだろうけれど。
でも、だからと言って、バルバラが同情されない理由には、ならないから。
彼女のしたことは悪ではあるのだけど、でも、彼女の経験したことは、確かに同情されてしかるべきことであって……。
どこにでもあるありふれた不幸であったとしても、当事者であるバルバラが悲しみ、苦しんだということは、容易に想像できてしまったから。
――この方の怒りは、当事者の貴族のみならず、そのような行いを許した国そのものに、そして、それがありふれたことと聞き流される、貴族社会そのものに対してのことなのですわね。
ミーアと同じことを思ったのだろう。アベルが苦々しげな顔で言った。
「それは……申し訳なかったと思う。そのような横暴が平然と許されるのは、ボクたち上に立つ者の責任だ。ボクの力の及ぶ限り、今後は、そんなことが起こらないように、公正が保たれるように、良い社会にしていくことを誓おう」
アベルの言葉に、バルバラは、とても楽しそうに笑い声をあげた。
「あはは。善政を敷くことを約束されると？　それは、レムノ王国

でのことですか？　それとも、セントノエルを出た者にはすべて、それを徹底し、平民が踏みつけられることがなくなるとでも？　なるほどなるほど、それは結構なことでございます。大変、ご立派なことでございます、アベル殿下。どうぞ、善政を敷き、将来の禍根を一掃なさるがよろしいでしょう。私はただ、変わらぬ過去の復讐のために、あなた方が敷く善政をすべて壊してみせましょう。必ず、必ず、必ず。この命が尽き果てるまで……」

バルバラがブレることは決してない。

なぜならば、彼女を破壊へと駆り立てるものは、もう、どうにもならない過去であるからだ。

けれど、彼女を殺すことのできないミーアとしては、できることは少ない。せいぜい、厳重に捕らえておくようにラフィーナに進言するぐらいだったが……。

――それで、本当に良いのかしら？

そう思うものの、特に何ができるとも思えずに……。

やがて、騒ぎを聞きつけた、島の警護兵がやってきて、バルバラは捕まることになった。

連行されていく彼女の背を見て、

「……かわいそう」

もう一度、ぽつりとパトリシアがつぶやく。

その瞬間だった。

ふいに……ミーアは眩暈にも似た感覚を覚えた。

目の前の景色が一瞬、ふわりと歪んだような……奇妙な感覚。

――はて？　今のは……。

その異変は一瞬で消えたものの、なんだか、ミーアの中に、奇妙な違和感だけが残されることになった。

第十一話　皇女ミーアの帝王教育

バルバラが連行されるのを見送って、ミーアは女子寮へと戻ることにした。
おそらく、この騒動を聞いて心配するであろう、アンヌを慮ってのことだった。
――ラフィーナさまに報告する必要もあるでしょうし。
バルバラのことはラフィーナに報告しておくべきだろう、とミーアは思っていた。情状酌量の余地をそこに見出すかどうかはラフィーナ次第ではあるが、少なくとも先ほど聞いたことはラフィーナに伝えておかなければならないように感じられた。
――それに、この子もショックが大きかったはずですわ。
ミーアは、かたわらに立つパトリシアを見て思う。
お人形のように、表情が乏しい顔には、隠しようのない不安の色がにじみ出ていた。つい先ほどまで、刃を突き付けられていたのだ。幼心に、恐ろしい状況だっただろう。
――やはりこれは、町の散策はいったん中止にしたほうがよさそうですわね。
そんなミーアに、アベルが声をかけてきた。
「まだ、危険が潜んでるかもしれないな。女子寮まで送ろう」
「まぁ、ですけれど、なにか予定があったんじゃ……？」
心配そうに尋ねるとアベルは……、
「ははは、君以上に優先すべき予定なんかないさ」
軽やかに笑って、そんなことを言った！
「まっ！」
ミーアのテンションは、高波に乗る海月のように天に上った！
つい先ほどまで、ちょっぴりビターな気分になっていたのだが、ミーアは切り替えが早いのだ。

「それじゃあ、行こうか」
優しげな笑みを浮かべて手を差し出すアベルに、ミーアは、ほわぁっと頬を赤く染めつつ、そっと右手を委ねる。
もう、気分はすっかり物語のヒロインだ。
それから、ふと気付き、もう片方の手でパトリシアの手を握る。
「あっ……」
びっくりした顔で見上げてくるパトリシアに、ミーアは安心させるように笑みを浮かべる。
「ほら、行きますわよ。パトリシア。今度は怖い人に捕まったらダメですわよ？」

「ミーアさま！」
女子寮の入り口までくると、アンヌが慌てた様子で駆け寄ってきた。やはりすでにバルバラのことは、耳に入っていたらしい。心配そうなアンヌを安心させるように、ミーアは穏やかな笑みを浮かべて、手をあげる。
堂々たる、ヒロインの貫禄である。
「お怪我はありませんか？　ミーアさま！？　私、びっくりしてしまって……」
「大丈夫ですわ、アンヌ。なんとアベルが助けに来てくれましたのよ？　とっても格好良かったんですわよ？」
つい先ほど、命の危険に晒されたとは思えないほど、ご機嫌のミーアである。
女子寮までの短い道のりが、ミーアの恋愛脳をいたく刺激したためだ。
アベルとパトリシアと手を繋いだまま、町を歩く。そこに生まれたあまぁい空気というか、ちょっとした幸せ空間が、とっても居心地がよくって……。
ミーアはすっかりご機嫌になってしまったのだ。
――うふふ、楽しかったですわ。なんだか、久しぶりにすごく幸

せでしたわね。
なぁんて、恋にうつつを抜かしていると……。
「ご無事でよかった……」
アンヌは、見るからに安堵したという顔で、深々とため息。それから、ふとミーアのかたわらにいる少女に目を向けた。
「あの、それで、ミーアさま、この方は……」
「ああ、ええと……」
ミーアは、パトリシアに目を向けて言った。
「パトリシア、彼女はアンヌですわ。わたくしの専属メイドをしていただいておりますの」
ミーアの紹介を受けて、アンヌが静かに頭を下げる。
「はじめまして、アンヌ・リトシュタインです」
それは、完璧な礼節を保ったものだった。対して、パトリシアは無言で見つめていた。
「あら？　パトリシア、きちんと挨拶しないとだめですわよ？」
ミーアが、その肩をつつくと、パトリシアはきょとりん、と首を傾げて、
「どうして？　ミーア先生、どうしてメイドに自分から名乗らなければいけないんですか？」
心底不思議そうに言った。
“身分の低い平民に、挨拶をする必要などなし”
なるほど、それは帝国貴族には、当たり前にありそうな考え方で……。
――でも、あまり良い考え方ではありませんわね。
ミーアは小さく首を振ってから、口を開く。
「そうしなければならない理由はいろいろとございますわ。例えば、使用人から好感を抱かれていたほうが良い仕事をしてくれるでしょう。それに、使用人の心を把握しておくことは、貴族の令嬢にとって当然のこと。それができていないことは、恥ずかしいことですわ」
なんだか、いつになく賢そうなことを言うミーアである。

パトリシアの言った「ミーア先生」という単語が……純然たる敬意が……ミーアをちょっぴり、その気にさせていた。
――うふふ、先生、なんだかちょっぴり気分がいいですわね。
なぁんて、若干調子に乗りながら、ミーアはパトリシアを真っ直ぐに見つめる。
「けれど、なにより大切なことは、彼女はわたくしの忠臣にして、わたくしの右腕であるということですわ」
ミーアは力強く断言する。その上で、
「だから、あなたも、わたくしに敬意を払うというのであれば、このアンヌにもまた、敬意を払いなさい」
キリリッとした顔で言う。実になんとも、貫禄溢れるミーア先生である。
そんなミーアに促され、パトリシアはコクンッと小さく頷いて、
「私は、パトリシア。パトリシア・クラウジウス。以後、お見知りおきを、アンヌさん」
スカートの裾をちょこん、と持ち上げて、頭を下げた。
それを見て、満足げに頷くと、ミーアは、アンヌのほうに視線を向ける。
「アンヌ、申し訳ないのだけど、この子をお風呂に入れてもらえるかしら？」
「はい……！　かしこまりました、ミーアさま」
なんだか、いつになく気合の入った顔で背筋を伸ばすアンヌであった。

そうして、アンヌとパトリシアの背中を見送りつつ、ミーアは小さくため息を吐いた。
――さて、やるべきことが山積みですわ。とりあえず、状況を把握しないといけませんわね。ベルが戻っているといいのですけど……。
いろいろなことが起きすぎた。とりあえず、今しておくべきこと

を頭の中でまとめつつ、ミーアは自室へと向かった。

第十二話　ベル、語る

「ううむ、ベルからしっかりと話を聞かないと……」
頭をモクモクさせつつ、なんとかすべきことを整理しながら自室へと戻るミーア。
ドアを開け、部屋に入るや否や、そのままぽーんっ！　とベッドの上にダイブした！
「ふわぁむ……少し疲れましたわね。ここは、横になって待つことにいたしましょうか……ふわぁ」
ここ最近の悪夢のせいで、すっかり寝不足（……ミーア的には）なミーアである。大きなあくびを、一つ、二つして。
「まぁ……あの子はラフィーナさまに預ければ悪いようにはならないでしょう。うん、それがいいですわ。バルバラさんのことも含めて、後でラフィーナさまのところに……ふにゅ」
そんな風にベッドの上で、うとうとし始めた。
そうして……ミーアは夢を見た。
そこは、イエロームーン公爵の館。
なぜだか、やたらと愛想のいいローレンツと、シュトリナと一緒にケーキを食べようとしている場面だった。
目の前に置かれたのは巨大で、クリームたっぷり！　上には色とりどりのマカロンが乗った実に見事なケーキだ！
「おお、おおお！　これが、イエロームーン公爵家、秘伝のケーキ……。とても美味しそうですわ！」
そうして、満面の笑みでケーキにかぶりついたミーアは、直後、気付く。
ケーキを持ってきたメイド、それが、ニッコリと良い笑みを浮かべるバルバラだということにっ！
「ぐむっ！？」

瞬間、目の前がぐるんぐるん、と回り、床に倒れたミーアは……意識を失い……。

「ふひゃあああああっ！」

悲鳴とともに飛び起きた。

「くぅ、い、いやな夢ですわ。これは、バルバラさんと出会ってしまったからかしら？」

汗をじっとりとかいてしまったミーアは、思わず、ほーふぅと息を吐く。

「ううむ、汗をかいてしまいましたわね。早いところ、ベルから報告を聞いて、わたくしもお風呂に行かなければ……」

と、思っていたところで、ちょうどベルが部屋に入ってきた。

「うう……よ、ようやく、解放してもらいました……」

ベルは、なんだか、ちょっぴり疲れた顔をしていた。

「ああ、やっと帰ってきましたのね。ベル、今までどこに？」

「り、リーナちゃんの後、リンシャ母さまに捕まってしまって……部屋の中で根掘り葉掘りと……。つ、疲れました……」

ぐったりとミーアの隣にやってきて、そのままベッドに倒れるベル。顔をベッドに押し付けたまま、動かなくなってしあった孫娘にミーアは、

「……ベル、当然、わたくしにも同じ説明をしてくれるんですわよね？」

じとーっとした目を向けた。

「あ……やっぱり、聞きたいですか？」

くぐもった声で言ってから、顔だけ横に向けるベル。

「ええ。できれば、すぐにでも。いったい何があったのか、なぜ、あなたがまた、ここに来ることになったのか……」

ベルは、ううむ、っと唸って……。

「ええと、そうですね……やはり説明しておかなければいけませんね」

それから、ベッドの上に正座すると、とても生真面目な顔で話し始めた。
「これはボクの考えではなく、ルードヴィッヒ先生のお考えなのですが……」
と、そこで、ミーアは気になったことを指摘する。
「話の腰を折ってしまって申し訳ないんですけど、ルードヴィッヒはあなたの秘密のこと、知っているんですの？」
シュトリナだけならばまだしも、ベルはリンシャにまで自分の秘密を話したらしい。
いくらベルの口が軽いというか、自分の孫娘にしては、やたらと油断しがちな能天気で、割と適当なことが多いとしても……そうそう簡単にあの秘密を話していいと思っているとは考えづらい。いくらベルであっても……。
「……あの、ミーアお姉さま、今、なんだか失礼なこと、考えてませんでしたか？」
ちょっぴり頬を膨らませるベルに、ミーアはおほほっと笑いを返した。
「いいえまったくぜんぜん。そのような事実はまるでございませんわ本当ですわ」
早口に言って、誤魔化すようにペラペラと手を振ってから、
「まぁ、ともかく、その辺りのことはどうなっておりますの？」
「うう、いまいち納得いきませんが、納得したことにします。ええと、そうですね。そこからですよね」
ベルは、うんうん、と腕組みしながら、
「実は、ボクが過去に来るということは、ミーアお姉さまの仲間のみなさんは、みんな知っているんです。つまり、ボクがいた未来はこのボク、『ミーアベルが未来から過去に来たことが周知されていること』が前提となっている世界なんです」
「……うぅん？　はて……？」
と首を傾げるミーアに、ベルは指を振り振り、偉そうに説明を続

ける。
「だから、未来の世界で、ボクの秘密を知っている人がたくさんいて、その人たちには、今のボクが秘密を話してもいいということになってるんです。なぜなら、ボクのいた世界では、〝そういうこと〟になっているからです」
「ええと、つまりベルの世界で、過去のベルから秘密を聞いたことがある人には、今、ベルが教えても未来は変わらないと、そういうことですわね？」
「むしろ、教えないとちょっぴり未来が変わってしまうかもしれません」
そうして、深々と頷くベルに、ミーアは、懸命に頭を働かせる。
ベルが言っているのは要するに、自分が来た未来というのは、自分が過去に行きいろいろと行動することを前提とした未来であるということだ。
――な、なんだか、ぐるぐる回っているような感じがしますけれど……うん、まぁ、そういうことにしておいて……。
なにがどうなって、そうなるのかはよくわからないが、とりあえず、そういうことにしておく。それが大事なのだ。
「そして、それは、ボクがある年齢に達したら過去に飛ばされるということが、あらかじめ認識されて、準備された世界でもあります」
「ああ、そうなんですのね。では、未来でなにかトラブルがあったから、過去に逃げてきたということではありませんのね？」
そう問うと、ベルは苦笑いを浮かべた。
「そうなんです。残念ながら。そんな便利な方法があるなら、ボクもあの弓で射られる前に行きたいですけど……。あれ、すごく怖かったんですよ？」
ベルは首をさすりながら苦笑いだ。ミーアもついつい想像してしまい、鳥肌を立ててしまう。首に矢が刺さったまま、しばらく意識があるというのは、なんとも恐ろしい経験だろう。
痛いのが嫌いなミーアとしては想像しただけで寒気がする。

「あ、そういえば、ミーアお姉さま。未来の世界で『わたくしたちは、どうやら首に呪いでもかけられたみたいですわ』とか言ってましたけど、あれは、どういう意味だったのですか？」
小首を傾げるベルを見て、ミーアは、さらに一つの事実を察する。
――なるほど……。わたくしが、断頭台から復活したというあたりの話は、特に聞かされていないようですわね。
「ミーアお姉さま？」
きょとんと不思議そうな顔をしているベルに、ミーアは小さく首を振って見せた。
「なんでもありませんわ。きっと夢の話かなにかでしょう。ふわぁ、今も、なんだか、変な夢を見たところで……」
「夢……？」
その時、だった。
ベルの顔が、不意に真剣さを帯びた。
「どのような夢でしょうか？　お姉さま」
「え？　ああ、大した夢ではございませんわ。ただ、わたくしが軽く毒殺されかかる夢で……」
言った瞬間、グイっとベルが肩を掴んできた。
「大事なことです。ミーアお姉さま、その変な夢の話、聞かせてください」

第十三話　フロリストミーアのキノコチャレンジ！

ベルの圧力に屈して、ミーアは、つい先ほどの夢を語る羽目になった。

時折入るベルの質問にも答えつつ……。

――変ですわね。わたくしがベルから話を聞く場面だったはずなのですけど……。

などと、不満を抱きつつも、律義に話を進めていく。

「とまぁ、そんな感じなのですけど……いったい、その夢がなんだと言うのですの？」

「なるほど……」

ベルは何事か考え込むように腕組みしてから、おもむろに口を開いた。

「これは、ルードヴィッヒ先生の言っていたことなのですが、夢というのは、消えた時間線（せかい）の記憶なのだそうです。もちろん、すべての夢ではなく、ただの夢も混じっているようなのですが、時折、他の時間線の記憶が……」

「……はぇ？」

いきなり始まった、ちょっぴりアレな話に、ミーア、思わず目をまん丸くする。

それを見たベルは……、

「ああ。さすがにミーアお姉さまでも突然すぎて困りますよね。ええと、そうですね……」

うーん、っと唸ってから、きょろきょろと部屋の中を見回した。

「あの、ミーアお姉さま、つかぬ事をお聞きしますが、弦楽器など嗜（たしな）まれたりは……？」

「いいえ、あいにくと」

「ですよね……。では……あっ！　そうです。それじゃあ、ミーア

お姉さま、これから一緒にお風呂にいきませんか？」
ぽんっと手を打って、そんなことを言い出した。

セントノエル学園女子寮の大浴場は、ミーアのお馴染みのスポットである。
ミーアはお風呂が好きなのだ。どれぐらい好きかと言えば、キノコやケーキに並ぶぐらい、と言えば、お察しいただけるだろうか。
「あら？　もしかすると、キノコをお風呂に浮かべたら最高なのではないかしら！？」
などと思い付き、やってみようとしたところ、ラフィーナに割と本気（ガチ）めに怒られる、ということがあったが……ともかく、気持ちいいお風呂に入るためにはトライ＆エラーを欠かさない、風呂のスペシャリスト、フロリストミーアなのである。
脱衣所に入ると、ちょうどお風呂から戻ってきたアンヌとパトリシアの姿があった。
椅子にちょこんと座り、丁寧に髪を拭いてもらっているパトリシア。使用人にお風呂の手伝いをしてもらうのは、貴族の令嬢としては当然のことだが……。
その澄ました表情とは裏腹に、小さな手が落ちつかなげに、もじもじしているのを、ミーアは見つけた。
――ふむ……貴族の令嬢らしく振る舞っておりますけど、ちょっぴり落ちつかない感じが現れておりますわね。やはり、蛇がなりすましているのですわね。
「あっ、ミーアさま……っ！」
っと、ミーアたちのほうに目を向けたアンヌが、ぽかーん、っと口を開けた。
その視線の先、立っていたのはベルだった。
――ああ、そうでしたわね。そういえば、アンヌはまだベルのことを教えておりませんでしたわ。
ミーア、思わず頭を抱える。

「えー、ええと、アンヌ。ベルのことは後で説明しますけど、まぁ、いろいろあって帰ってきたんですの」
「かっ、帰って……？　で、でも……」
アンヌは一瞬、首を傾げかけたものの、すぐにぶんぶんっと首を振り、
「いえ。わかりました。ミーアさまが、そうおっしゃるなら……。あっ！　でも、シュトリナさまには……」
「ええ。リーナさんにはすでにお話ししておりますわ。それとリンシャさんにも挨拶は済ませてきた……のですわよね？」
「はい。アンヌかあさ……、じゃない。アンヌさん、また、よろしくお願いします」
ぺこりんっと頭を下げるベルに、アンヌは優しい笑みを浮かべて、
「こちらこそ、よろしくお願いします。ベルさま。またお会いできてとても嬉しいです」
静かに頭を下げた。
――ふぅ、納得してもらえたみたいでよかったですわ。しかし、ベルのあの時のことを知っている方には、早めにお知らせしておかないといけませんわね……。
と、なにげなく、パトリシアに目をやったところで、
「あら、あなた、それは……」
ふと、ミーアはそれを見つける。
パトリシアの細い首筋、綺麗に浮かび上がった鎖骨の下あたりに見えた小さな痣……白い肌に浮かび上がるその三日月型の痣は……。
――パトリシアお祖母さまにも同じ位置に三日月型の痣があったと聞きますけど……こんなところまで同じにするとは、なかなかに芸が細かいですわね。
思わず唸りつつ、ミーアは尋ねる。
「その痣、痛くありませんでしたの？」
わざと痣を付けたというなら、なんだか、痛そうなことをされたんだろうなぁ、と顔をしかめるミーアだったが、パトリシアはきょ

とん、と首を傾げてから、
「平気。生まれた時からあるから」
「ふむ……」
ミーアはじっとパトリシアを見つめる。
――ということは、生まれつき、そこに痣がある子どもを探してきたか、はたまた、この子が嘘を言っているのか。あるいは……。
「ミーアお姉さま？」
ふと見ると、服を脱ぎ、準備万端整ったベルの姿があった。実に早い。
「ああ。今、行きますわ。それじゃあ、アンヌ、すまないのだけど、その子のこと、もう少しだけ面倒を見ていてもらえるかしら？」
「はい。かしこまりました」

アンヌと別れ、ミーアは手早く服を脱ぐと、大浴場へ。
ささっと髪を洗い、体を洗って汗を流す。
バルバラの襲撃といい、その後の夢といい、嫌な汗だったからだろう。お湯でざばーっと洗い流すと、すっきり爽快。頭の中がクリーンになる。
それから、浴槽のお湯に浸かり、おーふっと滋味深い吐息を漏らす。ぬるま湯もいいが、肌がピリピリするぐらい熱い湯も良い。お湯に香草が浮かんでいても良いが、綺麗に澄み渡ったお湯もまた良い。
要するに、どんな風呂にでも楽しみ方を見出すミーアなのであった。
――ふふふ、しかし、難しい話はお風呂でしたいなんて、ベルも血は争えませんわね。
などと思いつつ、ベルのほうに目を向ける。
遅れて、ベルもやってくる。浴槽に手を入れて、あつっと可愛らしい悲鳴を上げる。
滋味深い吐息をこぼすには、まだまだ若さが邪魔をするベルであ

る。ミーアのようにはいかないのだ。
ベルは、何度かお湯を体にかけてから、浴槽のふちに座り、足だけをお湯につけた。
「それで、ベル、ここで何を……？」
「ああ、はい。ええと、浴槽の底の、石と石の繋ぎ目にある線が見えますか？」
「ええ、見えますけれど……」
セントノエル学園の浴槽は、貴重な白理石（はくりせき）を敷き詰めて作った豪勢なものだ。その接合部には、ベルが言う通り整然としたラインが見える。
「あの一本を歴史の流れと考えてください」
「……はて、意味がよく……」
っと、ミーアの言葉を遮って、ベルが立ち上がる。
「そして、ボクがミーアお姉さまだとお考えください」
言うが早いか、ベルは、ぴょんこっとお湯に飛び込んだ。
とぷん、っとお湯がはね、生まれた波紋によって、浴槽の底の線が揺らぐ。
ぷはっと小さく息を吐き、ベルがお湯から顔を出した。
「見てましたか？　ミーアお姉さま。つまり、こういうことなんです」
ぷはっとお湯から顔を出したベルに、ミーアは思わず顔をしかめる。
「……知りませんわよ。ベル。そんなはしたないことをしてラフィーナさまに怒られても」
「えへへ、大丈夫です。必要なことだから、このぐらいは許してもらえます。ボク、とっても仲良しなんですよ、ラフィーナおばさまと」
「ラフィーナ……おばさま？」
ミーア、ベルの無邪気な笑顔に戦慄を覚える。
まぁ、ベルが、ラフィーナと仲良くしているのは良いことなのだ

ろうが……。
「……知りませんわよ？　ベル、ラフィーナさまが司教帝になっちゃっても」
なんだか、未来のヤバいルートをベルが開いてしまわないか、心配になってしまうミーアである。そんなミーアのことなど気にせずに、ベルは指を振り振り、続ける。
「ルードヴィッヒ先生曰く、なのですが……」

第十四話　宰相ルードヴィッヒの時間揺らぎ論１　天が遣わした救世主ミーア

宰相ルードヴィッヒは、長く女帝ミーアに仕えた重臣中の重臣である。

ミーアの右腕として、それこそ、八面六臂の活躍を果たした彼であったが、ベルが産まれる頃には、徐々に仕事も減り、時間に余裕ができてきた。

それほどに、女帝ミーアを頂点とした集団の改革が劇的で強固であったのだ。

すでに、ティアムーン帝国は、ルードヴィッヒが忙しくせずとも問題なく動く、そのような体制が築かれていたのだ。

そうして、やや暇になり、ちょっぴーり寂しげなルードヴィッヒは、ある日、ミーアから呼び出しを受ける。そこで、こんなお願いをされることになった。

「ミーアベルが過去に行った仕組みを、調べてはいただけないかしら？」

……なかなかに、無茶なお願いだった。

「ミーアさまにわからぬことが私にわかるとは思いませんが……」

そう苦笑いをするルードヴィッヒに、ミーアはあくまでも真剣な顔で言った。

「お願いいたしますわ、ルードヴィッヒ。いずれ過去へと赴かなければならないあの子に、少しでも必要な情報を教えておきたいの」

その真摯な願いに、ルードヴィッヒは姿勢を正す。

「かしこまりました。しかし、先にお断りしておきますが、出せるとしても、あくまでも仮説未満の個人的な推論です。ベルさまに起きたことは、あまりに異常。過去にも例を見ないことであるでしょうし、恐らくは人知の及ぶところではないのでしょうから……」

そのように断りを入れてから、ルードヴィッヒは早速、考察に入

った。
初めにしたのは、過去の文献を漁ることだった。
そのように不可思議な出来事が、本当に過去に起きていないか？
それに類する伝承はないか？　そうした時間に関して研究した文献はないか？
今や、帝国一の研究機関となった、聖ミーア学園へと赴き、調べを進めていく。
いずれ、ベルに記憶が戻ることはわかっていた。
二度目に出現したベルは、一度目に過去にやってきた時の記憶を持っていたからだ。だから、記憶が戻った後のベルに話を聞くのが、原因の解明には一番だろう。
しかし、それではっきりとしたことがわかるとは限らない。
それに、ベルの記憶が戻ってから過去に飛ばされるまで、どれほどの時間があるかもわからない。だからこそ、事前にやれることはしっかりとやっておく。
そうして、調べて、調べて……でも、成果はなし。
「ということは、やはりあれはベルさまだけに起きた奇跡と考えるべきか」
そう結論付けたところで、ベルの記憶が戻ったとの報告が入る。
早速、ベルからの聞き取りをしたルードヴィッヒは、思わず唸ってしまった。
「帝国崩壊の未来……消えた未来から……そうだ……。恐らくは、そこにヒントがある。ミーアベル姫殿下は過去に二回行っている。けれど、最初に過去に来た姫殿下は、今の姫殿下ではない。別の未来からやってきて、そして、あの廃城で命を落とされた……。そして、その彼女がやってきた別の未来というのも、ミーアさまが善政を敷くことで消えている」
ルードヴィッヒは何気なく、線を引く。それは破滅の未来へと至る線と、今現在の繁栄した帝国へと至る線だ。
そして、片方の線から、矢印を過去へと引き、そこでバツをつけ

る。
「ミーアベル姫殿下が過去で命を落とされて、それにより、この破滅の線は完全に消えたのだろうが……待てよ？」
ふいに、ルードヴィッヒの脳裏に、ある風景が甦ってくる。
それは、帝都の中央広場に建てられた断頭台の光景。
シオン王子の前に、罪人となったミーアの助命を願いに行った……そんな記憶の断片。
ただの夢だと切り捨てた、不吉な夢だと忘れようとした……記憶？
「まさか、夢とは……消えた時間軸の記憶なのではないか？」
そう気付くと、見えてくるものがあった。
「消えた時間軸での、自分の記憶は、残り続けて、夢という形で統合される？」
ふと、自身の部屋にある弦楽器（リュート）が目に入る。それは、騎馬王国、林族の長よりプレゼントされたもの。
今でも時折、弾いてみるそれを、ルードヴィッヒは手に取った。
そうして、その弦の一本を指で引っ張って……弾く。
弦は上下に揺れ、何本もの線があるように錯覚を起こさせる。
「時間の線というのも……これなのではないか？」
揺れ、揺らぎ、何本もに並列して存在し、いずれは一本に収束する。一つの方向へと収束していく。
「いや、だが……それはそれとして、これではベル姫殿下が過去に行く理由にはならない。それに、この時間線の揺らぎというのも、いったいなぜ起きたのか、これがわからない」
ベルが過去へと飛んだこと、それにより、時間線に揺らぎが起きたということも考えられなくはなかったが……。
「それでは、帝国崩壊の記憶の説明がつかない。これは、ベルさまが来るよりももっと前の揺らぎのはずだ」
夢の秘密に気付いてから、ルードヴィッヒはできる限り、夢を日記に記すようになった。毎日の日記とともに、夢をも記録しておく。これにより、もし仮に、『今いる世界』が揺らぎと収束の結果、『

夢』と化してしまっても良いように、どちらの記録も取っておくのだ。
その内、彼は自分の中に強烈に刻まれた記憶があることを思い出していく。
それは、かつて皇女であったミーアと、傾きかけた帝国を救うため、懸命に走り回った記憶。その中にいるミーアは実にポンコツで、どうしようもない皇女なのだが……。
「記憶の混濁か……。なにかの記憶とまじりあっているのだろうな。我ながら、もう若くないな。ははは」
などと苦笑いのルードヴィッヒである。
……それはともかく、彼はこの記憶も、ただの夢ではなく、消えた時間線の記憶であると考える。
「となれば……揺らぎの発生地点、時間線の分岐の時期が、ベルさまの出現と合わない。ならば逆に、この『揺らぎ』こそが、ベルさまが過去へと飛ばされる原因なのではないか？」
そうしてルードヴィッヒは、ヒントを求めて過去の状況を調べ始めた。
己の師であるガルヴが残した当時の大陸の情勢、そこへと至るまでの各国の歴史の流れ。そういったものを詳しく、事細かに調べていった結果……ルードヴィッヒは、ある一つの違和感を覚えるようになった。
それは……。
「ミーアさまのように、偉大な、優れた人物が、歴史のこの時点に現れることはあり得ないのではないか？」
という違和感だった。
同時に彼は、こうも思う。
「もしや、ミーアさまは、本当に天が遣わした救世主なのではあるまいか？」
などと……。

お湯に浸かりながら、ベルの話を、のんびーりと聞いていたミーアは、ちょっぴりのぼせてきたので、一度、浴槽から上がり、冷たい水を頭にかけて……。
「ルードヴィッヒ……かなりキテますわね……」
思わずつぶやいてしまう。
「なんだか、こう……今よりだいぶ……。それとも、これが年を取るということなのかしら？」
などと、寂しく感じてしまったりもして……。
この時、ミーアは完全に侮っていた。
帝国の叡智の頭脳、ルードヴィッヒ・ヒューイット。彼の頭がひねり出した妄想とも言える推論、その進む先がどこに行きつくのか……。
まさか、それが自身の真実をかすめることになろうとは、考えてもいなかったのだ。
かくて、祖母と孫との語らいあいは続く。

第十四話　宰相ルードヴィッヒの時間揺らぎ論１　天が遣わした救世主ミーア（後書き）

ＳＦのような話です。

ような、なので、ＳＦではありません。整合性とかアレです、はい。

第十五話　宰相ルードヴィッヒの時間揺らぎ論２　因果からの逸脱（前書き）

今日は面倒くさい話です。

第十五話　宰相ルードヴィッヒの時間揺らぎ論2　因果からの逸脱

水をかぶり、少々頭を冷やしたミーアは、浴槽のふちに腰かけて、尋ねる。

「それで、ベル、あなたが飛び込んだことと、わたくしとがどういう関係がございますの？」

「はい。ええと、話を戻すと……」

ベルは、ちょっぴり汗の浮いた顔をお湯で洗ってから、話を再開する。

未来の、老境を迎えたルードヴィッヒが辿り着いた、時間にまつわる推論の話を。

「ミーアさまは、天が遣わした救世主なのではないか？」

その思いは、ルードヴィッヒがミーアと出会った当初から、抱いていたものだった。

最初は、単なる直感に過ぎないものだった。けれど、それは今、ルードヴィッヒの中で、合理的な確信に変わりつつあった……変わってしまいつつあった！

「歴史の流れとは、因果の繋がりだ」

確認するように、ルードヴィッヒは言う。

例えば国は、ある日、突然に滅びたりはしない。そこに至るまでの原因があり、結果としての滅びがある。

例えば、王は、ある日突然に堕落したりはしない。必ず、堕落へと至る要因があり、結果として堕落し、腐敗した政治を行うようになるのだ。

何事にも原因があり結果がある。そして、生み出された『結果』は、次の結果の『原因』となる。因果は連綿と連なって、一つの流れを生み出す。

それが歴史。
それは、大地の実りにも似ている。蒔いた種から出る実りは決まっていて、その実からできる種も決まっていて……途中で多少の変化はあれど、大きな流れは変わらない。
麦を蒔けば、実るのは麦だ。そして、その実りを大地に蒔けば、やはり収穫されるものは麦なのだ。
人の一生も、国の未来も、すべてはそれまでの因果に縛られ、ある程度の方向が決まっているものなのだ。
けれど……。
「ミーアさまが、ミーアさまのようなお考えの人が……この時期の帝国に生まれるはずがない」
帝国の叡智が、この時の帝国に生まれるというのは、考えづらいことだった。
そもそも、教育的に言って、それはあり得ないことだ。
彼女は、あの時点でいくつだったか？　自身の前に現れた時には、確か齢十一であったはず。そのような子どもが、帝国の運命を左右するような改革を始める？　あり得ない。
「いや、仮にミーアさまが不世出の天才であったとしても……その後の歩みはこのようにはならなかったはずだ」
仮に、天才的な知恵を持つ皇女が生まれ出たとして……この帝室で、ミーアのような倫理観が育まれるものだろうか？　知恵があったとしても、それが良い方向に用いられるとは限らない。それは、ガルヴも言っていたことだ。
邪悪なことにだとて、知恵は用いることができる。そして、当時の帝国の姫であれば、その知恵は当然、良い方向には用いられないはずで……。
「だが、ミーアさまは……違っていた。慈愛の心をもって、知恵を用いていたではないか」
貧民街、新月地区での出来事が、鮮やかに目の前に甦る。
なんの躊躇もなく薄汚れた子どもに歩み寄った彼女は、それを抱

き起こしてみせたのだ。
あのような慈悲の心が、ティアムーンの帝室で育まれるとは到底思えない。彼女の教育を担う者たちの中にも、残念ながら、彼女に『人の道』を教える者はいなかったはずだ。
セントノエルに行った後ならばともかく、あの時の帝室にミーアのような皇女が出現することは、歴史の因果から言ってあり得ない。
「ミーアさまのような、真の叡智の持ち主が、帝国の歴史上のこの位置に唐突に出現する？　あり得ないことだ。ミーアさまは、歴史の因果から逸脱している」
そのような確信に至る、もう一つの理由があった。それは、彼女がもたらした変化だ。
その当時の各国の状況とその後に起こりかけた大飢饉のこと。かつて想像した、幻の大飢饉のこと……。
調べれば調べるほど、ルードヴィッヒは思う。
世界は確かに、この時、滅びへと向かっていた、と。
「だが……ここで流れが変わっている……」
明らかにミーアの周辺から、世界の、歴史の流れが切り替わっている。
その影響はさながら波のように、大陸の各国へと広がっていく。
歴史の因果から切り離された流れが、ミーアから生み出されている。そのようにルードヴィッヒの目には映った。
「かつて、かの混沌の蛇の巫女姫、ヴァレンティナ・レムノは、ミーアさまを称して、逸脱した存在と言ったというが……なるほど、それは、言い得て妙だ」
確かに、ミーアは逸脱した存在。そして、歴史の因果から逸脱しているがゆえに……。
「時間線を揺らすほどの衝撃を起こした」
因果から外れた彼女の行動が歴史に影響を及ぼし、その流れすら変えてしまった。
「ミーアさまは……天が、帝国に遣わした救世主なのだ」

その声は、確固たる信念に裏打ちされたものとなっていた。

「……ということなんです」

ベルはドヤァッという顔で、言った。

話を黙って聞いていたミーアは……浴槽に浸かって、ホカホカ温まっているはずのミーアは……ちょっぴり背中に冷たいものを感じていた。

なぜなら、ルードヴィッヒの話が、ミーアには、ひどく実感できてしまったからだ。

彼の言う『因果からの逸脱』それは、すなわち……。

――それって、わたくしが、断頭台にかけられる記憶を持っているからなんじゃ……？

ミーアの行動の原因は、消えてしまった断頭台の未来に由来するもの。それゆえ、そこまでの歴史の流れからは、確かに逸脱したものに見えたのだろうが……。

――ルードヴィッヒもあの世界の記憶を持っていたのだとしたら、バレてしまうところでしたわね……わたくしが本当は、ちょっとだけアレなところがあるって……バレてしまうところでしたわ。危ないですわ！

とりあえず、自らの真実がバレていないことに、ホッとため息のミーアである。まぁ、実際に、彼女のポンコツぶりがバレていないかは、微妙なところであるのだが……。

「それはそれとして、では肝心な、あなたがこの世界にやってきた理由はなんなんですの？」

「はい。それはですね……」

ベルは、記憶を整理するように小首を傾げてから、話し始めた。

それは、ベルが過去へと飛ばされる、少し前の出来事だった。

その日、ベルとルードヴィッヒは、白月宮殿の中庭にある池のそばで話をしていた。

「ルードヴィッヒ先生、ボクはどうして、過去の世界に行ったのでしょうか？」
その問いかけに対して、ルードヴィッヒはしばし黙ってから……。
「そう、ですね。ここから先は推測とも呼べないものなのですが……」
ルードヴィッヒは、一瞬黙ってから、池の中にある石を取り上げた。
「この石をミーアさまとしましょう」
「その石が……？」
不思議そうに首を傾げるベルに、ルードヴィッヒは頷いてみせて、
「とても重く、大きな石です。水面に投げ込めば、ほら、この通り」
ルードヴィッヒはそう言うと、石を池に向かって投げた。
静かな水面に波紋が広がっていき、水底が揺らぐ。
「あれが、ミーアさまのなされたことです。因果によって決まっていた時間線に揺らぎをもたらした。そして、波にご注目ください」
ルードヴィッヒが指さす先、反対側に到達した波が、戻ってくるのが見えた。
「ミーアさまが起こした波、それが時間線の果てまで行きつき、跳ね返ってきた。その波によって、ベルさまが過去へと流されたのではないか？　というのが、一応の私の推測です」
そこまで言って、ルードヴィッヒは眉間に皺を寄せる。
「ただし、これはあくまでも私個人の考え。しかも、私自身、いまいちしっくりきていない部分もございます。だから、どうか、あまり、真に受けないようにお願いいたします」
「……ってルードヴィッヒ先生、言ってました。ルードヴィッヒ先生にしては、ちょっとだけ歯切れが悪いように感じたんですけど……」
「なるほど……。だから、ベルがやってきたのは、わたくしのせい、と……」

浴槽のふちに座り、ぽちゃぽちゃお湯を揺らしながら、ミーアは唸った。
時間線に与えた影響、それが波のように未来へと広がっていき、どこかで跳ね返ってきて……その波に押されるようにしてベルがこちらの世界にやってきた……なるほど、それは、納得がいかなくもない理屈で……。
「いえ、そもそも、このような理解不能な状況を説明しようというのが無茶なこと。それなりに納得のいく推論を考え出しただけでも大したものですわね」
感心しつつ、しかし……とミーアはベルの顔を見た。
――弦楽器がないからお風呂に、というのはまぁいいとして、あの偉そうにやった説明は全部ルードヴィッヒの説明をパクったというわけですわね……。丸パクをして、あんなふうに恥ずかしげもなく、偉そうな顔ができるなんて大した胆力ですわ。
ん？　と首を傾げるベルに、ミーアは思わずため息を吐いた。
――まったく、誰に似たのかしら……？
ふと、視線を落とすと、お湯にはミーアの顔が映っていた。
まぁ、だからどうしたということではないのだが……。
「あ、でも、ルードヴィッヒ先生は、自分の説より、むしろラフィーナおばさまの説のほうがしっくりくるって言って……」
「ベル……ちょっと」
ミーア、手を上げて、ベルを制する。
「なんでしょうか？　ミーアおば、お姉さま」
「いいですこと？　ベル。わたくしを、ミーアお祖母さまと言い間違うのは、まぁいいですわ。それに、アンヌやエリスを母さま、というのは、まぁ当人たちも嬉しいかもしれませんし、良いとしましょう。けれど……」
ここで、ミーアは一度言葉を切り、
「ラフィーナおばさま……これはダメですわ。なんというか、仮にあなたやラフィーナさまがよくっても、わたくしの寿命が縮んでし

まいますわ」
「そうなんですか？　でも……」
「ラフィーナさま……。いいですわね？　ベル、ここにいる間だけでなく、未来に帰ったとしても、きちんとラフィーナさまと呼ぶようにしなさい。いいですわね？」
念を押すミーアに、ベルは小さく頷いた。
「わかりました。それでええと、ラフィーナさまの説なのですが……」
「ああ、そうでしたわね。何と言っておりますの？」
「はい。ラフィーナ……さまは、自信満々にこう言っていました」
ベルはグイッと胸を張り、
「神が、ミーアお祖母さまの偉業をボクに見せるために、過去に飛ばしたんだって……」
ベルはキラキラした瞳で言った。
「ミーアお祖母さまのような素晴らしい人は、世界で一人しかいない。まさに選ばれた人だから、その手腕を直接、ボクが学ぶために、過去に飛ばしたんじゃないか、って、そう言うんです。ルードヴィッヒ先生も納得の顔でした」
「あ、ああ、なるほど……」
ミーアは頷く。
その説は、なるほど、確かに分かりやすかった。
意志と力を持った存在が、目的をもってミーアを時間移動をさせた、と。
それは、どのようにしてこの現象が起きたのか？　という見方ではない。
なんのために、その現象が起きたのか？　という考え方だった。
「ということは、ベルが過去に飛ばされたのは自然現象ではなく、意味のあることというわけですわね。しかし……ではあの子は……」
「あの子……？　ああ、あの時の？」
ミーアは頷き、続ける。

「なにか、蛇が姑息なことをしようとしてきたのだと思いましたけれど、ベルと同じような光をまとって現れたところが気になりますわ。あの光が時間を移動する時に生じるものだとするならば、彼女もまた、時を超えたどこかからやってきたと考えるべきではないかしら？　それに、夢を見たタイミングも……」

あつぅい風呂の中という地形補正が、スキル≪お風呂大好き≫持ちのミーアの知恵を１２０％底上げしていた！

お風呂探偵ミーアの推理が冴え渡る。

「あの夢が、もしも、ルードヴィッヒが言う“揺らぎ”によって生まれたものだとするならば、“揺らぎ”は、あの瞬間にも起きたと考えるべきかしら？　ラフィーナさまにパトリシアを預けようと思ったことで……？」

パトリシアの扱い方によって、今が揺らぐ……。そのことに、ミーアは戦慄し、同時に自らの内にあった違和感を解消するに至る。

蛇が、時間移動の秘密を知り、ミーアの祖母に似た少女を送り込んでくる？　そんな面倒なことをするはずがないではないか。

――やっぱりあの子は、パトリシアお祖母さまご本人と考えておくべきですわね。

ルードヴィッヒの説明では、過去から未来へやってくることの説明はされていないものの、そう考えておいたほうがよさそうな気がした。

「あ、ルードヴィッヒ先生は、こんなことも言ってました。もしかすると、揺らぎによって生じた別の時間線というのは、今も同時に存在しているんじゃないか、って」

「どういう意味ですの？」

「ボクもよくはわからないんですけど、どの方向に歴史が収束していくか、それは時間線の濃い薄いが関係するんじゃないかって。時間線ごとに濃さがあって、いずれは濃いほうに収束していき、歴史の形が確定する。そして、薄いほうは夢に変わってしまうんじゃないかって。だから、なにかの行動で夢の側が濃くなってしまうと…

…」
「夢と、現実とが入れ替わる可能性もあるということですの？」
「あるかもしれないし、ないかもしれない。仮にそうだとしても、ボクたちは気付かないんだろうって、言ってました」
それを聞いたミーアは、思わず、ひぃいっ！　と悲鳴を上げるのだった。

第十五話　宰相ルードヴィッヒの時間揺らぎ論２　因果からの逸脱（後書き）

スキル≪お風呂大好き≫
ミーア固有のスキル。
『お湯』の中にいる時に、知能が１２０％アップ。
お湯に対する熱耐性　強
どんなお風呂でもポジティブになるため、いろいろなステータスに＋補正！

……ジョークです。念のため。

第十六話　襲来っ！

セントノエル学園女子寮の廊下を、少女が歩いていく。
軽やかな足取り、ほのかに吹いた風にしっとりと湿った髪がかすかに揺れる。お風呂ですっかり汚れを落としたからだろうか、艶やかな髪は、揺れるたびにほのかに輝いて見えた。
すべすべとした頬は、ほんのりと朱色に染まり、ちょっぴり色っぽく……どこか視点の定まらない、ぽやっとした瞳は、少女に浮世離れした魅力を付け加えているかのようだった。
小さく愛らしい唇を薄く開き、ふぅっと悩ましげなため息を吐いた少女、それは――なんとミーアであった！
そうなのだ、これはミーアの描写なのである。
頭から、モクモク湯気を出しつつ、うんうん悩ましげな唸り声をあげる、ミーアの描写なのである。
大陸を代表する作家、エリス・リトシュタイン女史のミーア女帝伝風の、ピリリと誇張の効いた描写でミーアを書くと、このようになるのである。
これが、後の世の叙述トリックのもとになったとかならなかったとかいう噂があるが、それはともかく……。まぁ、そんな湯上りヒロインの風格を身にまとったミーアは、今まさに思考に没頭していた。
「あの子は、やはりパトリシアお祖母さまと考えるべきなのでしょうね」
「でも……そんなこと、ルードヴィッヒ先生は一言も……。本当にそんなこと、あり得るんでしょうか？」
首を傾げるベルに、ミーアは指を振り振り、偉そうに言う。
「いいですこと、ベル。あなたも、皇女ならばよく覚えておくとよいですわ。パトリシアがお祖母さまであると考えて、実際には違っ

た場合と、パトリシアお祖母さまだと思っていなくて、実際にはお祖母さまであった場合……。想定と実際とが違った場合、どちらの被害が大きいのか考えるのがとても大切ですわ」

先ほどパトリシアに「ミーア先生」と呼ばれたからだろうか。すっかり先生モードになったミーアは、滔々と小心者の哲学（チキンハートフィロソフィー）を語る。

「最悪に備えていて、最悪が来ない。それならば、自身の臆病を笑うことができるでしょう。けれど、備えなく最悪が訪れた時にはとても笑えないものですわ」

飢饉に備えて、食材が余ったら、祭りを開いてみんなで食っちまおうぜ！　というのがミーアの基本戦略である。それをきっちり孫娘に叩き込む。

「なるほど……最悪に備える……」

「そうですわ。食の備えあれば憂胃（うれい）なしとも言いますし……まぁ、もっとも転んだ先にキノコということわざもございますから、実際には臨機応変さが求められますけれど……」

それから、腕組みしつつ続ける。

「しかし、それよりなにより、蛇の教育を受けた子どもと出会ったのであれば、みすみす何もせずに他者に預けるだけというのも寝覚めが悪いですわ。気分よく美味しい食事を食べるためにも、ここは、わたくしがきっちりと先生として教育を施してあげて……」

などと鼻息荒く語るミーア。「ミーア先生」と呼ばれるのが、思いのほか気持ちよかったミーアなのであった。

「それが、ミーアお祖母さまのやり方……」

ベルは感心した様子でつぶやく。

「ええ。そうですわ。大事なのはきちんと備えることと、物量ですわ。だから、ラフィーナさまへの説明も、行き当たりばったりでなどということは言いませんわ。なんと説明するか、きちんと“言い訳”を考えてから行きますわよ。あなたのことも含めて、考えることがたくさんありますし……」

っと、そこでベルが「はいっ！」と元気よく手を挙げた。

「ミーアお祖母さま、質問があります」
「あら、なにかしら？　なにを聞いていただいても構いませんわよ？」
上機嫌で笑うミーアに、ベルは、生真面目な顔で言った。
「準備が整う前に相手が襲来してきたら、どうなるんでしょう？」
「……はぇ？」
ベルが指さす先、ミーアの部屋の前には、ちょうど今来たと思しき、ラフィーナが立っていた。ベルのほうを見て、ポカン、と口を開けたラフィーナだったが、すぐにミーアに視線を戻した。
――ぐぬ……こ、これは困りましたわ。どう説明したものかしら？　ベルのことは、まぁ、最悪、ベルに自分で説明させるとしても、パトリシアのことをどう説明したものかしら？　蛇の教育を受けているだけに、下手に説明すれば、わたくしにも危険が及びそうな気がしますわね。うぬぬ……。
フロリスト・ミーアの頭から、再び湯けむりがモクモク吹き出しそうになったところで……。
「ミーアさん……ごめんなさい」
ラフィーナが深々と頭を下げた。

ミーアはとりあえず、ラフィーナの部屋へと移動することにする。
「ミーアお姉さま、ボクは……」
「ああ、そうですわね……」
刹那の黙考。
先ほどの話を聞く限り、ベルは、未来の世界でルードヴィッヒから、きちんと教えを受けているらしい。その意味を理解しているのかはわからないが、少なくとも、きちんと記憶するぐらいには、真面目に話を聞いてきたようだ。
ゆえに、連れていけば、それなりに役に立つ……かもしれないが……。
「いいえ、ベルはアンヌと一緒に、パトリシアの面倒を見ていても

らえるかしら？」
ミーア、決断する。
正直なところ、ベルに自分自身のことを説明させたほうが楽だと思わないでもないのだが……。
――あるいは、上手く説明するかもしれませんけれど……この子は、なにかやらかす気がいたしますわ。こう、具体的には……説明してる最中に『ラフィーナおばさま』とか口走ったり……。
それよりは、むしろ、自分がまとめて説明したほうが確実だろう、とミーアは判断する。
幸い、なんだか、ラフィーナは、すまなそうな顔をしている。多少のことならば、押し切れるだろう、との計算もあった。
――すべきことの整理をする必要がありますわね……。まず、ベルのことの説明と、もう一度、学園に通えるようにお願いして。それ以上に難しいのはパトリシアの説明ですわね。わたくしの祖母であると、素直に話すべきか……。ううむ……。甘い物が欲しいですわ。明らかに、甘くて美味しいものが不足しておりますわ。湖の状態がおさまったら、必ず、あまぁい物を食べてやりますわ！　絶対ですわ！
などと息巻くミーアが、ちょっぴり嬉しい誤算と直面するのは、もう少し後のことであった。

第十七話　ミーアとラフィーナ、甘い会話をする

――むっ！　この香りはっ！

ラフィーナの部屋へと入った瞬間、ミーアの鼻がひくひくっと動いた。

優秀なるミーアの嗅覚が捉えたのは、芳しい紅茶の香りと、そこに混じった仄かに甘い香り……。

――この香りはクッキーかなにか……焼き菓子ですわね！？

などと、キョロキョロすれば、テーブルの上にはすでにお茶とお菓子の準備がしてあった。

「ようこそ、ミーア姫殿下」

準備を進めていたのは、ラフィーナのメイドとして、セントノエルで働きながら学業に勤しむリンシャだった。

いつもは、ちょっぴり仏頂面が多いリンシャだったが、今日はなんだか、上機嫌にニコニコしていて……でも。

「……あれ？　あの、ベルさまは？」

「ああ、ベルなら部屋で留守番にしましたわ」

そう聞いた途端、しょんぼりと、肩を落とした。

ミーアはテーブルの上に山のように積まれたクッキーと用意された紅茶の数を見て取って察する。

――ああ、なるほど。リンシャさん、張り切ってたんですわね。

どうやら、ベルが帰ってきたのが嬉しくって、ついつい奮発してしまったらしい。ミーアは苦笑いしつつ、

「リンシャさん、申し訳ないけれど、わたくしの部屋にベルとアンヌ、それに幼い女の子がいるので、このクッキーを少し持って行っていただけるかしら？」

「え？　でも……」

と、咄嗟にラフィーナのほうに顔を向けるリンシャ。ラフィーナ

はそんなリンシャに微笑ましげに目をやって、
「構わないわ。私も、ミーアさんと二人でお話ししたいと思っていたから。持っていってあげて」
そっと頷きながら言った。その反応が恥ずかしかったのか、リンシャは、わずかに頬を赤く染めて……。それから、手早くクッキーを取り分けると、パタパタ部屋を出ていってしまった。
――ふぅむ、しかし……リンシャさんが養育係をしてくれているなら、ベルも大丈夫と思っておりましたけれど……割と甘やかされているかもしれませんわね。あの感じではきっと、甘々に甘やかされて……ほぅ！
考え事をしつつ、目の前のクッキーを口に放り込んだ時……ミーアは思わず唸り声をあげた。
――このコク……控え目な甘味の中に隠されたまろやかな、豊かな味わい……。
噛み砕いたサクサクとした生地を舌の上で転がす。っと、口の中に広がったのは、素晴らしき風味。極上のミルクからしか生まれないその風味に、ミーアは記憶を刺激される。
それは、そう……あの懐かしき騎馬王国の草原の風景。草の上をのんびーりと歩く、美味しそうな羊と牛！
カッと瞳を見開いて、ミーアはラフィーナを見つめる。
「んっ？　どうかしたのかしら？　ミーアさん……」
視線の意味がわからないのか、小首を傾げるラフィーナに、ミーアは笑みを浮かべた。
「なるほど。ラフィーナさまも、なかなか……。隅に置けませんわね……」
「すっ、隅に……置けない？」
ぴくんっとラフィーナが震えるのを、ミーアは見逃さなかった。
――嵐の影響でほしいものが手に入りにくいこの状況でも、まだ、こんなに美味しい物を残しておくなんて、大した備蓄魂（びちくだましい）ですわ。
と、感心しきりのミーアである。

ミーアは備蓄信奉者である。だから、自室にはそれなりにスイーツの蓄えがある。嵐のせいでジワジワと目減りしてきているが、それでも全く甘い物がなくなってしまうことはないのだ。
そんなミーアだから、このタイミングでこれほど高品質のクッキーを出してきたラフィーナに、深い共感を覚えてしまった。
――さては、ラフィーナさまも、相当お好きなのですわね……甘い物が。
先達のＦＮＹリストとして、ついついラフィーナの二の腕をフニフニしたくなるが……さすがにそれは自重しておく。
なんとなく、キノコ風呂の比ではない勢いで怒られそうだし……。
「それにしても、実に濃厚なミルクの味。これは、間違いありませんわ。騎馬王国のミルクを使っておりますわね？」
馬龍が極上と言っていた、醍醐羊のミルクを使っているに違いない。
「ふふふ、さすがですわね、ラフィーナさま。手が早いですわね」
ミーアの中にあるスイーツ好きの血が、ラフィーナを好敵手と認める。
甘いお菓子のヒントと出会えば、すぐにそれを仕入れようというその気高い甘味精神には、ミーアも感服を禁じ得ない。
「なっ……ぁっ！」
今度は、なぜだか、口をパクパクさせるラフィーナ。そんな彼女を尻目に、ミーアは、腕組みしつつ、うんうん、っと頷く。
――着々と騎馬王国と交易を進めているんですわね。その結果が、この美味しいミルクを生み出す羊……。これもきっと騎馬王国からの贈り物なのでしょうし、帝国も負けてはいられませんわ。もっと積極的に、騎馬王国との交流を深めていかなければ……。
と、そこでミーアは気付いた。なぜだろう、ラフィーナは顔を赤く染めていた。その瞳もちょっぴり涙目になっている。
「ちっ、ちち、違うのよ？　ミーアさん、誤解しないで。馬龍さんとはあくまでも、一緒に遠乗りに行ったりしてるだけだし？　そ、

それも、もとはと言えばミーアさんと一緒に馬に乗りたくって習い始めただけで……」
「あら？　そうなんですのね。馬龍先輩に乗馬を習っている……。なるほど……」
ミーアは、まるで言い訳するように、恥ずかしそうに早口になるラフィーナに、温かな目を向けた。
――甘い物を心おきなく食べるために、乗馬に勤しんでいるわけですわね。ふふふ、それを誤魔化すために言い訳をするなんて、ラフィーナさまもなかなか可愛らしいところがございますわ。
ＦＮＹリストの先達として、ミーアは貫禄の笑みを浮かべて、
「気持ちはよくわかりますわ。ラフィーナさま。わたくしも同じですから、そんなに言い訳しなくても平気ですわ。いいですわよね、遠乗り。とても素敵」
「だから！　違うって……言ってるのに。うう……」
ぎゅうっとスカートの裾を握りしめ、恨みがましい目で見つめてくるお友だちが、今日はなんだか可愛く感じてしまうミーアである。
「あの、ちなみに……ミーアさんは、その……アベル王子と遠乗りに行く際には、どんな風にしているの？」
乗馬の先達として、ミーアはちょっぴり偉そうに胸を張り……、
「ふぅむ、そうですわね。ランチを持っていくことが多いですわ。行った先で、ピクニックなどをするととても気持ち良いですし。そう、特に、わたくしが考案した馬パンが、アベルには大変に好評で……」
などと、少々、アレなアドバイスをしてしまうのだが……。
……後日のこと……。ミーアの言葉を真に受けたラフィーナが、馬パンでサンドイッチを作り、持っていった結果……馬龍のハートを深々と射抜いてしまうことになるのだが……。
まぁ、それは別の話なのであった。

第十八話　ミーア姫、モクモク……せず！

さて、しばしの楽しい会話に興じた後、ラフィーナは、そっと瞳を閉じ、気持ちを落ち着けるように紅茶を一すすり。

それから、改めてミーアのほうを見つめてきて……。

「ミーアさん、改めて、バルバラさんのこと、本当にごめんなさい」

深々と頭を下げた。

「彼女の脱走を許したのみならず、このセントノエルにまで侵入されるなんて……。弁明の言葉もないわ」

「……ふぁ、あ……ええ。まぁ」

急にやってきた真面目な会話に、ミーアは一瞬、答えに窮する。

……というか、声を出すのに微妙に失敗する。

なぜなら、ミーアは三枚目のクッキーを噛まずに、じっくり舌の上で溶かして、味と香りを楽しんでいたからだ！　嵐がやってきて数日、甘い物に飢えていたミーアにとって、そのクッキーは美味しすぎた。

ついつい真面目な会話の最中であっても、テイスティングしたくなるのは、仕方のないことだろう。

誤魔化すように笑って、ミーアは言った。

「別に気にする必要はありませんわ。ラフィーナさま。相手は混沌の蛇。完璧に防ぐのは難しいのでしょうし。それに、バルバラさんにはバルバラさんの事情があるみたいでしたし……あの執念があれば、こちらの予想もしないような無茶な方法だってとれるでしょう」

「……ええ、アベル王子から聞いたわ」

そう答えるラフィーナの顔は、沈んだままだった。

「彼女を蛇にしてしまったのは、貴族の横暴だった。そして、それを放置したのは、その国の王族で、同じく国を治める立場の自分たちにも責任があることだって……」

中央正教会の教え。
王とは国を支配する者にあらず。その地を治め、民の平穏を守る義務を神から委託された者なり、と。
それゆえに、他の王が暴虐に走り、民を虐げし時には、それを諫めるもまた、王の責務。であれば、バルバラのような女性を放置したのは、自分たちの責任でもある、と。
アベルが言うのは、どこまでも、中央正教会の原理に則った考え方ではあったが……。
「そうですの、アベルが……」
ミーアは、ふと、先ほどのアベルの顔を思い出す。
バルバラの話を聞いた後のこと……。アベルは、やけに甘い言葉を言ってはいなかったか？　無理をして、明るく振る舞ってはいなかっただろうか？
――あれは、わたくしを気遣ってということもあるのでしょうけれど、彼の中でも消化しきれない感情があったからではないかしら……。
ミーアにしても、あれで救われた感じがしたのだ。
あのまま、バルバラの話の持つ暗さにあてられていたら、ショックを受けたパトリシアを気遣う余裕もなかっただろう。
――アベルは繊細な人ですし、変に気にしなければいいのですけど……。
王の責務と真面目に向き合いすぎて、自分を責めすぎなければいいな、と……ついつい心配になりつつ、ミーアはラフィーナのほうに目を向けた。
「バルバラさんのことは不幸なことでしたわ。できれば、彼女には寛大な処置をとっていただきたいのですけど……」
「ええ。考慮するわ。ただ、逃げ出すたびにこのような騒動を起こしたり、要人を危険に晒すようなことは、止めなければならないわ」
ラフィーナは、静かに、けれど、はっきりとした口調で言った。
それから……そっと目を逸らして、

「それでも……できれば彼女にも立ち直ってもらいたいわね。彼女のような人を処刑することは、蛇に対する敗北に他ならないのだから」
「蛇に対する敗北……」
つぶやくミーアに、静かに頷き、ラフィーナは言った。
「地を這うモノの書は、傷つき、慰めを受けるべき人を、〝裁かれる者〟へと変えてしまう、恐ろしい書物よ。蛇にそそのかされ、罪を犯した者を、王は裁かなければならない。けれど、蛇になるのは弱く、傷ついた人たち。王は罪人を裁くのと同時に、弱者を虐げる者とみなされる」
「なるほど。それは、次の蛇を育む土壌となりうる……。確かに、とても厄介なものですわね」
そして、その厄介な蛇の教育を自らの祖母が受けていたかもしれない……。
実に頭の痛い問題であった。
さて……なんと説明したものか……。ミーアの頭が再びモクモクなる……ことはなかった。つい今しがた食べたクッキーが、ミーアの脳に糖分を届け、糖分という潤滑油を得たミーアの脳は、ぎゅんぎゅん音を立てて回り始めていた！
そうして、いささか知能が上がったミーアは、不意に気付く。
この話の流れは……好都合なのではないか？　と。
――これは……パトリシアのことを切り出すのは、今しかないんじゃないかしら？
流れに乗ることこそ、ミーアの真骨頂。いつの間にか生まれた、自身の背中を押すような流れにミーアは身を委ねる。
「ラフィーナさま、一つよろしいでしょうか？」
「なにかしら？」
小さく首を傾げるラフィーナに、ミーアは意を決して言った。
「お聞きかもしれませんけれど……わたくしが連れていた少女のことですわ」

「ええ。聞いているわ。バルバラさんは、その子のことを蛇だと言っていて。ミーアさんが蛇の子を連れていた、なんて、吹聴していたみたいだけど……。安い分断工作。私たちとミーアさんを仲たがいさせようという狙いかしら……？」
「いえ。実は、そうではありませんの」
ミーアは、実になんとも重々しい口調で言う。
「実は、あの子は本当に、蛇の教育を受けた子どもなんですの」

第十九話　かくて選挙公約、完成す！

「なっ……！？」
ラフィーナが目を見開くのをよそに、ミーアは当面の作戦を定める。
まず……パトリシアが祖母であることは、秘密にしておく。
ここから時間移動の件を説明しては、ラフィーナが混乱するだけだろう。パトリシアが祖母であることは、確定しているわけではないし……。それ以上に、バルバラの件で生み出された流れが、そのエネルギーが分散してしまうような気がしたのだ。
ゆえに、問題点を一つに絞り、そこを全力で押す。
パトリシアは、蛇の教育を受けた可哀想な子。その線で押していく！　その一点を押していく！
ミーアが大好きな物量を、集中的に一点に投入するのだ。
尖らせること茸のごとく……名軍師ミーアは、ついに相手の防御の薄いところに戦力を集中させることを覚えたのである。
……まぁ、それはともかく、後でベルにも黙っているように言わなければ、と思うミーアである。まぁ、もうすでにアンヌあたりにペラペラやっているかもしれないが、それはもう仕方ないことなのだ。
ともかく今は、論点を一つに絞り込む！
「あの子は蛇の教育を受け、ゆくゆくは蛇の教えを説く者として、あるいは、その工作員としてどこかの貴族のもとに送り込まれる……そのような立場の子なんですの」
「そっ、そんな子をどうしてミーアさんが……」
ラフィーナの不安げな顔に、ミーアは優しく微笑みかけて、
「それは無論……わたくしが教え、導くためですわ」
ミーアは、あえて、ラフィーナの前で宣言する。

それは一見すると、自らを引くに引けない状況に追いやる、いわば背水の陣の構えに見えなくもないが……違うのだ。
正直なところ、ミーアは面倒なことがそれほど好きではない。
楽ができる場面では楽をしたいし、楽ができそうにない場面でもできるだけ楽をしたい。サボりたい！　むしろ、今回もサボらせてほしい、ぜひ！
という人ではあるのだが……そんなミーアであっても今回のことは、自分が関わらざるを得ないことを、きちんと悟っていた。さすがのミーアでもそのぐらいはわかる。
そうなのだ、もしも、パトリシアが祖母であった場合、ミーアはどうにかしなければならないわけで……それだけは面倒でも避けようがないこと。
すでにミーアは最初から背水の陣に追いやられているのだ。
ならば……、なにもせずとも背水の陣に追いやられるだけだというのならば、あえて、自分からそこに飛び込もうと……。その状況を最大限生かし、バルバラが作り出した流れを最大限生かそうと、そういう腹である。
それこそが、一番楽をする道なのだと……。ミーアの直感が告げているのだ。
「ミーアさん……あなたは……」
ラフィーナは震えるような声で言った。
「あなたは、聖ミーア学園でやったことを、ここでもやろうというのね？」
「……うん？」
ミーア、意味が分からず、ちょっぴり首を傾げる。
が、幸い、ラフィーナは見ていなかったらしく、特に気にした様子もなく続ける。
「聞いているわ。ミーアさん、聖ミーア学園では、孤児たちに教育を施しているそうね。その協力を、貧民街の教会にお願いしたとか……」

「ああ……ええ……まぁ、そのようなこともありましたわね」
ミーアは、少々遠い目をする。
その孤児を受け入れるという大変慈悲深い帝国の叡智のプロジェクトは、今年で三年目を迎えていた。
その一期生であるセリアは、賢者ガルヴやその弟子の下で、優秀さを発揮しているという。彼女に続けと、孤児院からは優秀な生徒たちが次々と学園都市に送られてきているらしい。
――新月地区の神父さまが頑張ってると聞きましたけれど……ああ、そういえば、あの方は、ラフィーナさまの熱烈なファンでしたわね……。となれば、ミーア学園のことも報告が届いているということかしら……？
首を傾げている間にも、ラフィーナの話は続く。
「ミーアさんは、このセントノエル学園でも、同じことをしようというのね……」
「……はぇ？」
きょとん、と瞳を瞬くミーア。けれど、考えに耽る様子のラフィーナは、それには気付いていなかった。あごに手を当て、さながら名探偵のような姿勢で、ラフィーナは続ける。
「いえ、そうじゃないか。ミーアさんが考えているのは、もっと深いこと……。蛇の温床となるのは見捨てられ、踏みつけにされた弱者……。孤児たちというのは、まさにその条件に当てはまるし、その中にはもしかしたら、ミーアさんが連れてきた子と同じような、蛇の影響をすでに受けている子どもがいるかもしれない……」
ラフィーナは、そっと紅茶のカップを掴み、飲み干して……それから改めて、ミーアに視線を向けた。
「もしかして、ミーアさん、それが次の生徒会長選挙の時の公約かしら……？」
――はぇ？
再び、ちょっぴりアレな声を上げてしまいそうになるも、かろうじて、心の中でだけにとどめておく。心の中で『はぇ？』の盛大な

反響を聞きながらも、ミーアは表情を取り繕い、
「……ええ、まぁ、そんな感じですわ」
深々と頷く。
すでに、流れに身を投じてしまったミーアである。今から、その流れに逆らうのは不可能だし、なにより疲れるだろう。
それが、仮に、自身の意図とは違う流れであっても、望まぬ流れであったとしても、とりあえずは乗る。そうして、途中で他の、もっと楽そうな流れが来たら、そちらに乗り換える。
それこそが、海月戦術の基本だ。
……まぁ、たいていの場合、流れを乗り換えるなんて器用なことはできずに……、そのまま嵐に巻き込まれ、沈まぬように苦労する羽目になるわけだが……。
それはともかく、ミーアはもう一度言う。
「このセントノエルで、次の蛇になりそうな子どもたちを積極的に受け入れ、教育を施す、これこそが、わたくしの欲するところですわ」
「なるほど……。この学園に通う者たちも、いずれは自国に戻り、国を治めるようになる。その者たちに、孤児たちと触れ合う機会を作る。そうして、蛇を生み出す土壌そのものを変えてしまおうというのね。素晴らしいわ、ミーアさん」
ラフィーナは、感動に瞳をキラキラさせながら、ひっしとミーアの手を掴んだ。
「ぜひ、私にも協力させていただきたいわ」
かくして、セントノエル学園に、新しく孤児たちを受け入れる特別初等科が設けられることになった。それは、今まで教会が担っていた役割、貧しい子どもたちへの教育を、各国にて制度化していく一つの契機になるのだが……。
無論、そんなことは知る由もないミーアなのであった。

第二十話　令嬢トークは終わらない

――ふむ、上手く片付きそうでなによりですわ。
ミーアは、心地よい満足とともに、お皿の上に残った最後の二枚のクッキーを眺める。
――お話も上手くまとまりましたし、クッキーもあれが最後の二枚。どちらも、もめずに済みそうですわね。
あれが一枚しか残っていなかったら一大事だった……などと、ペロリと唇を舐めたところで……。
「そういえば、ミーアさん、私、すっかり誤解してしまっていたわ」
ふと、ラフィーナが言った。
「はて……？　なんのことかしら？」
首を傾げつつも、ミーアの意識は、すでにクッキーに持っていかれている。
なにしろ、最後の一枚である。
これから先、ずっと食べられないわけではないにしても、しばしの別れであることは変わらない事実。
しっかりと味を、この舌に刻んでおこうと、集中してクッキーをパクリ、サクリ、としていたのである。
「誤解していたわ。ベルさんのこと……。私ね、ミーアさんたちの様子を見て、てっきり、ベルさんが死んでしまったんじゃないかって、思ってたのよ。だって、ミーアさんたち、すごく落ち込んでいたから」
「ラフィーナさま……」
そう言えば、とミーアは思い出す。
あの、蛇の廃城から戻ってきてから、ラフィーナはどことなく優しかった気がする。リンシャのことを親身になって考えてくれたし、生徒会でも何かにつけてフォローしてくれていた。ミーアのテスト

の点が若干アレな感じになっていても、優しく見守ってくれていた。
――気遣っていただいてたのですわね。
改めて、そのことに気付くミーアである。そして……。
――ならば、ベルのことは適当に誤魔化したりせず、きちんと説明しなければなりませんわ。ラフィーナさまだけではなく、アベルにもシオンたちにも、ちゃんと説明しておかなければなりませんわね。
でもまぁ、個別に説明するのは面倒なので、一度に説明したいなぁ、などと思うミーアである。効率的に、省エネに生きたいミーアなのである。
さぁて、どういう手順でしようかなぁ……などと思案に暮れている間も、ラフィーナの話は続いていた。
「それに、ヴァレンティナさんも、そんなようなことを言ってたわ。ミーアさんのそばにいた子を射殺(いころ)した。親友の大切な者を奪った私を生かしておいていいのか？　って、私を挑発するのよ。とっても困ってしまったわ」
頬に手を当てつつ、ため息を吐くラフィーナ。その目が、まるっきり笑っていないことに気付いて、ミーアはわずかに震え上がる。
「ラフィーナさまにまでそんなことを……。それは、こわ……ざかしいですわね。さすがは蛇ですわ」
思わず、ラフィーナを挑発するだなんて「怖いもの知らずですわね！」などと言いそうになるミーアであったが、慌てて言い直す。それから、クッキーにむせた風を装って、ケホケホせきこんでみせる。
ついでに、目の前の紅茶を一すすり。口の中をすすぎ、頭をクリーンにする。
大切なのは、危険度の高さを計ることだ。
しばし、心を落ち着けて、考えて……。
――まぁ、パトリシアのほうが解決すれば、ベルのことはそこまで心配しなくってもいいんじゃないかしら？
そう結論を出すミーアである。

なにしろ、ベルは未来から来たことを何人かに話したという、そういう未来からやってきたのだ。要するに、必要とあれば、ベルは自身の秘密を話すことができるのである。というか、その必要がある人に事実を告げた未来からやってきたわけで……。

――今回は、わたくしがなにかしなければ、ラフィーナさまが司教帝になっちゃうということもないのでしょうし……。帝国も安泰みたいですし……。

危険度的に高そうな案件を片づけたことで、やや力を抜くミーアである。

それは、端的に言ってしまうと、油断に他ならないものであったのだが……。

そして、ミーアが油断した時には、たいてい恐ろしいことに巻き込まれるわけで……。恐ろしいモノを、呼び寄せてしまうわけで……。

「てっきり、ヴァレンティナさんに騙されてしまうところだったわ」

苦笑いを浮かべるラフィーナに、ミーアはおずおずと言った。

「あの、ラフィーナさま、実は、そうではありませんの」

「え……？　どういう意味かしら？」

「ええと、後でアベルやみんなにも説明しようと思っているのですけど……。ベルには少しだけ事情がございまして。ヴァレンティナさんに首を射抜かれたことも、あの時に命を落としたことも、本当のことなんですの」

「命を……落とした？　まさか……じゃあ、ミーアさんと一緒にいたように見えたベルさんは……幽霊？」

目を見開き、震える声で言ったラフィーナに、ミーアは思わず笑った。

「ほほほ、ラフィーナさま。そんなわけがありませんわ。そんな、幽霊だなどと、そんなもの、この世界にいるはずもありませんわ。ほほほ」

おかしそうに笑うミーア。であったが……なぜだろう、ラフィー

ナはまるで笑わない。
「ああ……そうか。ミーアさんには、見えないのだったわね……」
「はぇ……？」
その時、ミーアは唐突に気付いた。気付いて……しまった。
ラフィーナの視線が、どこか定まらないものになっていること……。否、定まらないというよりは、どこか遠くに焦点が合っているような……。ミーア自身よりやや後ろの……なにもないはずの空間を見つめているような……。
それは、そう……あの、“猫がなにもない空間を見つめてじっとしている”ような、あるいは“犬が誰もいないはずの場所に向かって吠える”ような……、人間には見えていないナニカを自身のペットが見ているのだと、飼い主に確信させてしまうような、そんな行動に似ていて……。
「ら、らら、ラフィーナさま……？　なっ、なにか、わたくしの後ろに、ありますの？」
「ふふふ、ミーアさん、この世界には、知らないほうが幸せなことって、あるのよ？　ふふふ……」
ややうつむき気味に、不気味な笑みを浮かべるラフィーナに、ミーアが、ひぃぃっと震え上がった、次の瞬間っ！
「なぁんてね」
ラフィーナが顔を上げた。その顔には、悪戯っぽい笑みが浮かんでいて……。
「……はぇ？」
思わず、間の抜けた声を上げてしまうミーアであったが、
「らっ、ラフィーナさま、酷いですわ！　そんな風に、わ、わたくしを脅かすなんて」
「ふふふ、さっきからかわれたお返しよ。だって、すごく恥ずかしかったんだから」
くすくすと笑うラフィーナに、ミーアはぷくぅっと頬を膨らませるが……すぐに吹き出してしまう。

恋愛話に怪談話、年頃の、普通の令嬢が交わす賑やかな会話の風景が、そこにはあった。
「そう。事情があるのね。よくわかったわ。アベル王子のお姉さんにも関係することだし、一度、生徒会で集まって、そこでお話を聞きましょう。それで大丈夫かしら？」
ラフィーナの提案に小さく頷くミーア……だったが……。
「それはそうと、ミーアさんは、怖い話が苦手なのね。では、こんな話は知っているかしら？」
「で、ですから、ラフィーナさまっ！」
にぎやかな令嬢トーク（怪談話）は、もう少し続きそうだった。

第二十一話　ミーア姫、いわれなき誹謗中傷を受ける！

ラフィーナとの打ち合わせの結果、生徒会の会合が翌日に持たれることになった。

そこで、ベルのことについての説明と、特別初等部のことを相談することになったのだ。

なにしろ、それは、ただの弱者救済というわけではない。それは『混沌の蛇』を生み出す土壌に対する働きかけだ。上手くいけば、あの破壊者たちを生み出す連鎖を食い止めることができるかもしれないのだ。

生徒会の関係者には、しっかりと協力してもらう必要がある。他の生徒たちが賛成するような雰囲気を作れるよう、動いてもらわなければならないのだ。

途中、スイーツ談義に、ホラー談義に、とキャッキャひぃい！な楽しい雑談を交えつつも、しっかりと決めることは決める。

緩急のついた会談はミーアの成長の証だろうか？　それともラフィーナがミーア色に染まりつつある証か？

「いずれにせよ、蛇に対する対策という点を前面に押し出していけば、事情がわかってる方たちは反対しないでしょうし、パトリシアの面倒を見ることの言い訳もできる……。ふむ、いろいろと想定外のこともございましたけれど、まぁ、上手くいったのではないかしら？」

うんうん、と頷きつつ、ふと思う。

安直にパトリシアをラフィーナに預けた場合、なぜ、現在に揺らぎが生まれたのか……？　と。

「今のラフィーナさまであれば、そう悪いことにはならなかったでしょうに……妙ですわね。もしや、わたくしがしなければいけないことが……なにかあるということかしら？」

まだ、頭に糖分が残っているおかげか、ミーアの頭脳はいつになく仕事をしているようだった。
そうして、思案に暮れつつも、ミーアは自室へと戻ってきた。
「あ、ミーアおば……、お姉さま、お帰りなさい」
扉を開けると、明るい笑みを浮かべたベルが、出迎えてくれた。
「ええ、ただいま帰りましたわ……って、ちょっと狭いですわね……」
部屋のテーブルの周りには、ベルとリンシャ、アンヌとパトリシア、それにシュトリナの姿もあった。
「リーナさんも呼んであげたんですわね」
「ええ。私がお声をかけて差し上げました。せっかくですから……」
リンシャは上機嫌に言った。
「ふふふ、ありがとう、リンシャさん。こんな楽しい会に呼んでくれて」
いつも通りの可憐な笑み……ではなく、無邪気な年相応な笑みを浮かべるシュトリナ。どうやら、本気で呼んでもらったことを喜んでいるらしい。
意外なことに、というべきか、リンシャとシュトリナの仲は悪くない。
それはベルという共通項があるから。あるいは……ベルを喪失した痛みを共有した経験から……、だろうか。
ベルがいなくなって、落ち込むシュトリナを一番心配していたのは、ほかならぬリンシャだった。そんなリンシャを、ミーアは当初、イエロームーン家のメイドに推薦しようと思っていた。
シュトリナ付きのメイドにしてやれば、シュトリナを立ち直らせるのを手伝ってもらえるかもしれない、と思ってのことだったが……。
リンシャは首を振りながら、言ったものだった。
「……ミーアさま、お忘れかもしれないですけど、私は、シュトリナさまのところのメイドに頭をかち割られたんですよ？　それも、

シュトリナさまにおびき寄せられて……。そんな方に仕えると思いますか？」
どこかあきれ顔で、肩をすくめつつ、リンシャは続ける。
「それに、あの子の……ベルさまとのかかわりが深かった人間が近くにいたら、いつまでたっても思い出してしまいますから。それはつらいと思います」
それは、シュトリナのことを思いやると同時に、自分自身のことを語る言葉でもあったのかもしれなかった。
ともかく、ベルのことを悲しみ、心から寂しがっていた二人だったから、ベルが帰ってきた時の喜びもまた、共有できたのだろう。
っと、シュトリナが立ち上がり、そばまで歩いてきて……マジマジとミーアの顔を見つめた。
「……ど、どうかなさいましたの？　リーナさん」
「いえ……。まさか、ミーアさまがお友だちのお祖母さまだなんて、思ってもいなかったので。つい……」
わずかに声を潜めたのは、アンヌやパトリシアがいたためだろう。シュトリナはものすごく真面目な顔でミーアを見つめてから、
「その……お体に異常はありませんか？　ミーアさま、しっかりと丈夫なお世継ぎを産めますよう、滋養強壮のつくものを……」
などと、たいそう真剣な口調で言うのだった。
「ええ……リーナさん、お心遣いだけ頂戴しておきますわ」
ミーア、若干引きつった笑みを浮かべつつ、それを受け流し、それから、改めてベルのほうに目を向けた。
「ところで、ベル。ラフィーナさまと相談してきましたけれど、生徒会でベルのお帰りなさいの会をすることになりましたわ。そこで、あなたの事情を話してもらおうと思っているのですけど、それで大丈夫かしら？」
大丈夫……その言葉に込められた意味を吟味するように、ベルは一度、口の中でつぶやいてから……。
「はい。わかりました。大丈夫です、予定通りだと思います」

予定通り、すなわち、ベルの秘密は生徒会内で共有されるということ……。会合の中で明かされるということ。
確認せずに決めてしまったので、いささか心配していたミーアだったから、ベルの返事には安堵の吐息を吐く。
「よかった。そうなんですのね。あ、それと、パトリシアのことなのですけど……詳しいことは省きますけれど、パトリシア、あなたにはこのセントノエルで、特別初等部に通っていただくことになりますわ」
っと、それに反応したのは、パトリシア本人ではなく、ベルのほうだった。
「……特別、初等部……ですか？」
ベルは、どこか混乱した様子で首を傾げた。
「……妙ですね。セントノエルにそんなのがあるって、聞いたことありませんけど……」
むぅうっと眉間に皺を寄せてから、ベルは一冊の、分厚い手帳のようなものを取り出した。
「あら……？　それは？」
「はい。ルードヴィッヒ先生の日記帳です」
「まぁ、ルードヴィッヒの……」
途端に、興味津々に前のめりになるミーアである。いったい、あのクソメガネがどんな日記を書くのか、気になってしかたなかった。のだが……、ベルの口から出たのは、単なる好奇心を上回る驚きの事実だった。
「しかも、揺らぎによって夢と現実が入れ替わった時のためにって、夢の記憶も現在の記憶もぜーんぶ書き記してあるんだとか……」
「ほう！　……ということは？」
「前の皇女伝の時にも、記述が書き換わっていましたが、今回は、夢と現実、どちらも記録してありますから、より正確に歴史の動きを観測できるんじゃないかって、ルードヴィッヒ先生、言ってました」

なぜだか、ドヤァッと胸を張るベル。対して、ミーアも思わず感嘆の声を上げてしまう。
「なんと！　そんな便利なものがあるのでしたら、ぜひ、わたくしも読ませ……あら？」
目をらんらんと輝かせるミーアにベルは……、なぜだろう、日記帳を胸に抱えて、一歩引いた。
「どうしましたの？　ベル、ほら、わたくしにも、早く……」
「ええと、こういうものを見せると、もしかするとミーアお姉さまがサボって油断してしまうかもしれないって言われてますから……」
「まっ！　誰がそんなことを？　許せませんわね、そのような誹謗中傷をどこのどなたが……」
「はい、その……未来のミーアお祖母さまが……」
「なっ……！」
ミーアが未来の自分を信用していないように、未来のミーアもまた、過去の自分を信用していなかった。
変わらぬ自らの姿勢に、ミーアは思わず感銘を受けてしまう。
――そう、人とは悲しいほどに変われない生き物なのですわね……。
などと、心の中でつぶやいている間にも、ベルは手帳をササッと確認。
「……やっぱり、書いてませんね。うーん……」
「まぁ、パトリシアが現れなければ、そういう話にはならなかったでしょうから、おかしくはないと思いますけれど……」
ふと目を向けると、パトリシアは黙ってミーアたちのやり取りを見つめていた。
気にはなっているのだろうけれど、その口からは一切、言葉が発せられることはなかった。
一瞬、そのことに違和感を抱くミーアであったが……その答えをすぐに見出した。
パトリシアの、小さくも可愛らしい唇、そこについたクッキーの

破片を！

――なるほど。美味しいクッキーでしたしね。テイスティングに夢中になるのは、よくわかりますわ。口の中のクッキーの風味を逃さないために、できるだけ口を開けたくないというのは、よくわかりますわ。

心なしか満足げな顔でクッキーを味わうパトリシアに、ミーアは、確かな血の繋がりを、感じずにはいられなかった。

第二十二話　一味違うミーア姫

「……さて、と」

楽しいお茶会は夕食前にはお開きになった。

その後、食事をとり、もろもろの就寝準備を終えた頃には、パトリシアはすでに、うとうとしていた。ベッドに入るよう促すと、すぐに、くーくーと可愛らしい寝息が聞こえてきた。

慣れない場所にいきなり連れてこられたので、疲れたのだろう。

静かに目を閉じ眠る姿は、年相応の幼子のように見えた。

――起きている時にはお人形みたい、と思いましたけれど……あれはもしかしたら、この子なりの仮面だったりするのかしら？

表情を読み取られないように、あえて意識的に無表情を作る。蛇が教えそうなことだった。

ミーアは、それから、隣のベッドに目をやった。そちらにはベルが、スースー寝息を立てていた。どうやら、ベルも、シュトリナとリンシャの相手で疲れてしまったらしい。

そんな二人を見て、ミーアもつられるように、ふわわむ、っとあくびをする。けれど、まだ眠るわけにはいかない。なぜなら……。

「アンヌには、きちんとベルのことを話しておかなければなりませんわね……」

アンヌとエリス、それにルードヴィッヒ。

少なくともその三人には、ミーア自身の口から、ベルのことを話しておきたかった。そうしなければいけないんじゃないかと思うのだ。

――孫娘が世話になったわけですし……わたくしの口からお礼を伝えておかなければいけませんわ。それと、ルードヴィッヒには知恵を借りなければなりませんし……。

『時間線の揺らぎ理論』という仮説を組み立てたルードヴィッヒ

である。祖母であるパトリシアのことを合わせて説明すれば、より正確な理論を組み立ててくれるかもしれない。
――たぶん、ベルがいた歴史では、そのお願いをするのはもっと先のことだったのでしょうけれど……。
すでに、ベルの知る歴史からも微妙に事情は変わってしまっている。パトリシアの出現により、流れが変化したことは明らかで。だからこそ、使える者は何でも使い、より正確な情報を把握しておくべきだろう。
というか、より頭の良い人に全貌を把握してもらっておいて、危機を回避する必要があるのではないか？　と考えるミーアである。
まぁ、それはさておき……。
「アンヌ、ちょっと、ここに座ってくださらない？」
そう言って、ミーアはポンポンっとベッドを叩いた。
「はい……。なんでしょうか？」
不思議そうに首を傾げるアンヌに、ミーアは極めて真面目な顔で言った。
「ベルのことを、お話しなければなりませんわ」
そうして、チラリとベッドで眠るベルを見る。穏やかな……というか、ちょっぴり緩んだ寝顔の孫娘である。皇女たるもの、そんな隙だらけの顔を見せるもんじゃありませんわ……などとつぶやきつつも、ミーアはアンヌに目を向ける。
「アンヌ、信じてもらえるかはわかりませんけれど……ベルは、わたくしの孫娘なんですの」
ミーアは、アンヌの目を真っ直ぐに見つめながら言った。
「……へ？」
きょとん、と瞳を瞬かせてから、アンヌは慌てた様子で言った。
「え、えっと……それは、どういう意味なんでしょうか？」
「そのままの意味ですわ。あの子はわたくしの孫娘。どうやって過去に来たかと言われると、なかなかわたくしにも説明しがたいのですけれど、それでも紛れもなく、わたくしの大切な孫娘なんですの」

そうして、ミーアは話し出す。ベルの秘密、アンヌに受けた恩の話を……。
「あの子は、前に来た時には、恐ろしい世界からやってきましたの。帝国が滅んでしまう、恐ろしい未来ですわ。わたくしも、ベルの母も死んでしまって、誰も味方がいない、そのような中であなたとあなたの妹のエリスは忠義を尽くし、あの子の母親代わりをしてくれた」
思えば……とミーアは改めて感慨にふけってしまう。
祖母、孫ともにアンヌには返しきれない恩義があるのだなぁ、などと思う。
地下牢で見せてくれた忠義と、ベルに与えてくれた愛情……。アンヌには本当に返しきれない恩ができてしまった。
そんな思いを胸に、ミーアは静かに頭を下げる。
「アンヌ、改めて言いますわね……。ベルがお世話になりました。あなたとエリスに、あの子は返しきれない恩がございますわ。もちろん、それは、わたくし自身もですけど……。本当に、本当に感謝いたしますわ」
ミーアの話を黙って聞いていたアンヌは、小さく息を吐いた。
「それで、その、今のベルさまは……」
「ええ。あの時、矢で射られたベルは、それをきっかけに未来に帰った。そこは、わたくしたちが変化させた別の未来。だから、大丈夫ですわ。だってあの子、とっても元気ですもの」
未来がどのようになったのか、詳しく聞くことはできていない。それに、もしかしたら、ベルは教えてくれないかもしれない。
でも、ベルの顔を見ていればわかる。ベルが、こちらの世界にいた時と同じぐらいには、幸せなのだろうな、ということが。
「わかりました。ミーアさま。あ、えっと、もちろんわからないこともありますけど、でも、大切なことは、伝わりましたから」
それから、アンヌは胸に手を当てて、
「私とエリスがミーアさまの……ベルさまのお役に立てたなら、よ

かったです」
いつもと変わらない、穏やかで優しい笑みを浮かべるのだった。
「では、ミーアさま、私は床で寝られるよう準備を……」
話も一段落したところで、アンヌが立ち上がろうとした。そんなアンヌの手を掴み、ミーアは静かに首を振る。
「ああ、アンヌ。今日はわたくしのベッドで寝ると良いですわ」
「え……？　そんな、ミーアさま……」
戸惑うアンヌに、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「たまにはよろしいではありませんの？　あなたはわたくしの腹心なのですし、床で寝かせるなんてこと、絶対できませんわ」
「でも……」
「いいから。ほら、寝ますわよ」
「きゃっ、ちょ、ミーアさま！」
ぐいぐい、っとアンヌの手を引き、ベッドに引き込むミーアであった。

そうなのだ。高等部に上がったミーアは一味違うのである。
大恩あるアンヌを床に寝かせて、風邪でもひかれたら一大事。身分の差など関係ない。ぜひともアンヌにはきちんとベッドの上で寝てもらわなければ、と使命感に燃えるミーアである。
今夜はどうしても一緒に寝てもらわなければ、と……切迫感に背中を押されるミーアである。
ちなみに……言うまでもないことではあるが、ミーアは、別にラフィーナとの会合で、ちょっぴり怖い話を聞かされたから、アンヌをベッドに誘ったわけではない。断じて違うということだけは、ミーアの名誉のために明記しておきたい。
別に夜、一人で寝るのが怖いから、とか、そんなことは本当にない。断じてない！
高等部に上がったミーアは一味違うのである！

第二十二話　一味違うミーア姫（後書き）

活動報告更新しました。舞台の初日に行ってきたということで。

第二十三話　ハイパワーアイプリンセス、再び

さて、夜は明けて翌日。
ミーアは、普段と同じく授業に出ていた。
パトリシアは、アンヌとベル、それにシュトリナに任せていた。
ちなみに、ベルはセントノエルへの転入の手続きが済んでいないから、まだ授業に出られない。それは、まぁ仕方ないのだが……シュトリナのほうは今朝がた「体調が悪いから授業を休む」と言って、ミーアの部屋に遊びに来たのだ……遊びに来たのだ！
笑顔で悪びれることもなくそんなことを言うシュトリナに、ミーアは苦笑しつつも、
「まぁ、昨日の今日ですし、ベルと一緒にいたいのはよくわかりますわ」
などと、大変寛容な気持ちになる。
これまでのシュトリナの落ち込みようを考えれば、授業の一日や二日、ズル休みすることがなんだと言うのか。
孫娘とその友だちを見つめる、お祖母ちゃんの瞳はとても優しいのだ。
そんなわけで、ごくごく真面目に授業に出ていたミーア……なのだが、本日は、朝から、トロン、と眠たげな目をしていた。
「ふわぁむ……」
あくびを飲み込み、涙目になりつつ、ミーアは睡魔との死闘を繰り広げていた。
――ううむ……やけに眠いですわ。昨日はよく眠れなかったからかしら？
アンヌにベルのことを話した関係で、いつもより半刻も遅く眠りについたミーアである。大変な寝不足なのである。
――しかし、寝るわけにはいきませんわ。わたくしは『ミーア先

生』。その呼び名に恥じぬように、勉学に励まなければなりませんわ。

眠気に負けぬよう気合を入れて、ギンッと目を開けておく「血走(ハイ)った瞳の姫(パワーアイプリンセス)」ミーアである。授業の内容は耳から耳へと抜けて行っていたが、そんなのは気にしない。

ともかく、目を開けておくことこそが肝要！　すべての精神力を瞳に込める眼力姫ミーアなのである。

さて……その日の授業がすべて終わり、ミーアが、のびのびーっと体を伸ばしていたところに、

「ミーア。今日は生徒会の会合があると聞いたのだが……」

アベルが話しかけてきた。

「準備ができているなら、一緒に生徒会室までどうかな？　今朝からアンヌ嬢もいないようだから、エスコートしようかと思うのだが」

「まぁ、ふふふ。そうですわね、では、お願いしようかしら」

ミーアは笑いつつ、差し出された手を取って……それから、チラリ、とアベルの顔を見た。

ここ最近のことだが、ミーアはアベルの顔をよく観察するようになっていた。ちょぴっと血走った眼で、じっとアベルを見つめる、「観察眼姫(ハイパワアイプリンセス)」ミーアである。

それは、少年から青年に移り変わる美少年の姿を、しっかりとその目に焼き付けるため……ではない。もちろんない……！

確かにミーアの中には、そういった邪念が皆無とは言わないが、あくまでも、それはほんの少しのこと。せいぜい三割強といったところなのである。

そして、それ以外の理由は、もちろんアベルのことが心配だったからだ。

最近、アベルは無理をしているんじゃないか？　ミーアの脳裏に、そんな心配があった。

あの、蛇の廃城でのこと。彼は実の姉、ヴァレンティナが蛇であったことを知った。それも、巫女姫という、蛇を統括する立場だっ

たのだ。
その事実が、彼をどれだけ傷つけたのか、ミーアにはよくわかっていた。
――アベルはわたくしと同じで繊細で……とても優しい方ですわ。あのことでなにも思わなかったわけがありませんわ。
さらに、ヴァレンティナはベルの命を奪った。
ミーアが妹と公言していたベルをヴァレンティナが殺したこと……そのことをアベルが気に病まないわけがない。
そして、そんなミーアの心配は当たることになった。
あの日の姉の償いをするかのように、アベルは無理をするようになった。
周りに気を使い、より一層、剣の鍛練に励み、立派な王族として振る舞おうと、必要以上に頑張るようになった。
自己研鑽自体は素晴らしいものかもしれないが、その度を越した態度が、ミーアには少しだけ心配で……だからこそ、ミーアはアベルのことを、以前よりしっかりと見るようになったのだ。
――アベル、笑ってはいますけれど、少し疲れた顔をしてるみたいに見えますわね。心なしか目の下に薄っすらと……。うう、心配ですわ。また、元気になって、あの笑顔を見せてくれるようになってくれればいいんですけれど……。
そのためにも、今日のベルの帰還の報告会は大切だと思っていた。
――ベルが生きているということがわかれば、少しは気持ちが軽くなるはずですわ。
「ところで、今日はなんの会合なのかな？　時期的に言えば、生徒会選挙の関係だろうか？」
「ああ。そうですわね。それもありますわ。少しみなさんにお願いしたいことがありまして……」
「お願いしたいこと……？　それは、昨日の事件と関係あるのかい？」
「そうですわね。まぁ、無関係とも言い難いのですけれど……とこ

ろでアベル、その後、どうですの？　ヴァレンティナお義姉さまは……」
「ああ……うん」
その問いかけに、アベルは、少しだけ顔を曇らせる。
アベルは、時間を見つけてヴァレンティナの幽閉されているところに通っていた。
そこは、セントノエルにほど近い場所。ヴェールガ公国内にある、とある塔の一角だった。
表向き、修道院ということになっているその建物は、蛇の巫女姫を幽閉しておくための、特別な建物だった。そこに住む修道女たちは、みな、蛇に対する術を学んだ者たちだ。
本来、そこに囚われた者と会うことは許可されないのだが……。ヴァレンティナの場合、他国の王族であることに加え、ラフィーナの口添えもあって、アベルたちには特別に面会を許されている。
だから、アベルは時間を見つけては、会いに行くことを繰り返していたのだが……。
「相変わらず、だね。兄上も折を見つけては通っているようだけど……」
「あら……。ゲインお義兄さまもですの？」
それは、少し意外なことではあったが……。
「兄上もいろいろと思うところはあるみたいなんだが……」
「そう……なんですのね。ふむ……もしかしたら、今日、これからの会合が、お義姉さまのことに役に立つかもしれませんわね」
そんなことを話しつつ、二人は生徒会室にやってきた。

第二十四話　帝国のえーちの考えた、最強の生徒会！

「ご機嫌よう、みなさん」
生徒会室に入ると、すでにメンバーは揃っていた。
「ああ、来たか。ミーア」
立ち上がり、ミーアを迎えたのは、副会長のシオンだった。高等部に上がった彼は、すっかり背が伸び、ミーアを見下ろすほどになっていた。
その爽やかで精悍な顔つきは、相変わらず女子生徒の人気を集めているようだったが……。未だに、彼のハートを射止める者はいなかった。
「昨日は大変だったみたいだな。怪我がなくてなによりだ」
「ええ。アベルが来てくれましたから」
ミーアの言を受けて、アベルは真面目腐った顔で頷き、
「君との鍛練のおかげもあって、無事に助けることができたよ」
「それはよかった。しかし、互いに剣術の鍛練に手は抜けないな。大切な者を守るために」
などと、握手をする二人の王子。アツイ男の友情を眺めやりつつも、ミーアは他の生徒会メンバーに目を移した。
テーブルにつき、四人の少女たちが談笑していた。
副会長のラフィーナ、その隣には会計のクロエと書記のティオーナが並んでいる。
そこまでは以前までと同じメンバーだが、後の一人は……。
「お疲れさまです。ミーアさま」
「ああ、ラーニャさん。ご機嫌よう。ふむ……今日のお茶菓子はペルージャン産のものかしら？」
「はい。今日は、カッティーラを持ってきました」
朗らかな笑みを浮かべるのは、ラーニャ・タフリーフ・ペルージ

ャン。農業国の第三王女である。
卒業したサフィアスの代わりに書記補として、ミーアが指名したのはラーニャであった。
その人選は一部の者たちから『皇女ミーアのお友だち生徒会』などと揶揄されているらしく……、それをもとにミーアを批判しようという者がセントノエルにも帝国内部にもいるらしいのだが……ミーアは一顧だにしなかった。
自信があったのだ。これこそが、ミーアの考える最強の生徒会である、と。これ以上の陣容は、ミーアとしては考えられなかった。
その理由はとても簡単で……大飢饉がやってきたからだ。
いや、より正確に言うならば、大飢饉へと繋がりうる時期がやってきたというべきだろうか。昨年の収穫は、その前年に比較して恐ろしいほどに減っていた。そもそもその前の年より徐々に収穫高が減ってきているから、状況は極めて深刻だ。
下手な手を打てば餓死者が続出し、一挙に大飢饉の悲劇を招きかねないこの状況。数年間に渡る農作物の不作という時期にあって、農業国の姫たるラーニャの話を聞かないことはあり得ない。
周りを専門家で固めてこそ、自らはイエスマンでいられる。その信念のもと、ミーアは今回の生徒会メンバーを選んだのだ。
農作物の事情がよくわかっているラーニャと、帝国貴族の中で大きな農業地帯を保有するルドルフォン辺土伯令嬢のティオーナがいる。さらに流通の事情通である、商人の娘クロエもいる。この三人は、今後の情勢の中で最重要の役員といえるだろう。
そして、同じ理由から、ミーアもまた会長の地位から降りられずにいた。
今こそ、パン・ケーキ宣言の真価が問われる時。
そのような状況にあって、ミーアが生徒会長を外れるわけにはいかなかったのだ。
だからこそ、ラフィーナは、生徒会長選に出ることを辞退し、ミーアへの推薦を表明している。生徒会長選挙に立候補するのは誰で

も可能ではあるが、空気を読まずにミーアに盾突く者は一人もいなかった。
では、ミーアは公約を出す必要がないのだろうか？
対立候補なし、争うこともなく、すんなりと生徒会長になっても良いものだろうか？
答えは否である。
選挙が行われないからこそ、ミーアは証明しなければならないのだ。
自身が生徒会長に相応しいと。選挙をするまでもなく相応しいのだと……証明しなければならないのだ。
――なんだか条件が選挙をするとき以上に厳しいような気がしますけれど……。
などと思わなくもないミーアであるが、ともかく、ここしばらくのミーアは選挙公約作りに勤しんでいた。それはこの場に集うみなが知っていることだった。なので、
「それで、ミーア、今日の用向きはなにかな？　今度の生徒会長選挙のことか？」
シオンはそう首を傾げた後、
「それとも、例の蛇の……？」
わずかばかり眉をひそめた。
シオンは、あの巫女姫との最終決戦の場にいなかった。それゆえにどこか煮え切らない思いを抱えている様子だった。それは、彼の従者キースウッドも、ティオーナとリオラも同様だった。
一方で、蛇、という言葉を聞いた時、ラーニャも顔をしかめていた。
すでにラーニャには、蛇のことを知らせている。帝国の反農思想に蛇が関係していると知って、ラーニャはたいそう憤っていたものだった。
――農業国の姫として、肥沃なる三日月地帯を汚すという思想は、理解できないのでしょうね。

そんなラーニャを眺めながら、ミーアは小さくため息を吐く。
ちなみに、ラーニャの怒りが初代皇帝でなく、混沌の蛇へと向いているのは、ミーアの巧みな誘導によるものだった。とりあえず、ヤバそうなことは蛇に責任を押し付ける方針のミーアである。
まぁ、実際、無関係じゃないので、それはいいとして……。
「そうですわね。とりあえず、どちらでもあると言えるのですけれど……その前に、みなさんにご挨拶したい者がおりますの……」
と、そこでタイミングよく、ドアがノックされた。
「ああ。来ましたわね。どうぞ、入って」
その声に応えるようにドアが開き、そして、
「失礼いたします」
響いた声に、ひときわ驚いた様子だったのは言うまでもなくアベルだった。

第二十五話　ミーア議長、もぐもぐと会議を取り仕切る

部屋に入ってきたベルは、みなの顔を見て、深々と頭を下げた。
「ベルさま、お久しぶりです！」
笑顔でベルに歩み寄ったのは、ティオーナとリオラだった。サンクランド旅行の際にすっかり仲良くなった彼女たちに、ベルは輝くような笑みを浮かべる。
「お久しぶりです。ティオーナおば……、ティオーナさま。リオラさん」
さらに、
「ご無沙汰しています。ベルさま」
次に声をかけたのはラーニャだった。彼女とは、一緒にダンスレッスンをした仲である。ベルは親しげな笑みを浮かべて、その手を取る。
「お久しぶりです。ラーニャさま。ダンス、練習してますか？」
「ああ、ええと、時々……かな？」
「ふふふ、ボクもです。ついうっかり」
そうして二人は、悪戯がバレた子どもみたいに笑いあう。
ベルを中心にして生まれた温かな空間に、ミーアは思わず、微笑ましい気持ちを抱いてしまう。
その光景が、未来でベルがどのように扱われているのか、表しているように見えたから。
――そうか。この続きにあるのが、ベルの生きる未来なんですわね……。
そうして、ちょっとした満足感に浸っていたミーアだが、ふと気付く。
未だにアベルが、言葉を失い、立ち尽くしていることに。
――ああ、そうでしたわね。アベルは、混乱しても仕方ないです

わね。早く、説明させなければ……。
ベルのほうを見て、声をかけようとしたところで、
「君は……何者だ？」
鋭い声が、温かな空気を切り裂いた。
誰何したのはシオンだった。いつもは涼やかな色を湛える瞳に浮かぶのは、疑惑の色だった。
「アベルから聞いている。君は、蛇に殺されたはずだ……」
その言葉に周りの者たちは、一様に驚きの表情を浮かべる。対照的に、シオンが浮かべるのは驚きではなく、現実的な警戒の色だった。
それも仕方ないことかもしれない。なにしろ、殺されたはずの人物が目の前に現れたのだ。怪しく思わないはずがない。
そして、そういうよからぬ陰謀を好むモノのことを、ミーアたちはよく知っている。
「もしも、君がベル嬢の偽物で、悪辣な蛇の策謀の一部なのだとしたら……我が友、アベルとミーアを愚弄するその行い、とても許せるものではないが……」
静かなる怒りを露わにするシオンを制したのは、じっと黙ってベルを見つめていたアベルだった。
「……シオン。間違いない。彼女は、ベル嬢だ」
「アベル……？」
怪訝そうに眉をひそめたシオンに、アベルは口元に疲れた笑みを浮かべた。
「いや、大丈夫。ボクは正気だ……。いや、まぁ断言はできないけれど、少なくとも、自分の正気を疑える程度には、まだ冷静だと思う」
ため息を吐き、それから、ベルのほうに改めて視線を向ける。
「一瞬、姉の罪を軽くするために、彼女が生きていたと思い込もうとしているのだと思った。その感情が強すぎて、ボクの目を曇らせているんじゃないかと疑った。でも……」

アベルは静かに、ベルのほうに歩み寄った。
「ボクにはわかる。彼女は、ボクたちの知っているベル嬢だ」
確信のこもったアベルの言葉に、ベルは嬉しそうに頷いた。
「さすがは、アベルお祖父さま。わかっていただけて、嬉しいです」
ニコニコと笑うベルに、アベルは小さく首を傾げた。
「えっと、お祖父さま……？　それは、いったいどういう意味かな？」
ベルは一度、ミーアのほうに目を向ける。ミーアは深々と頷いて、
「とりあえず、みなさん、一度、テーブルへ。続きはお茶をいただきながら話しましょう。少し難しい話になりますし」
それから、ミーアは、そっとテーブルの上。お皿の上に置かれた黄金色の焼き菓子へと視線を注ぐ。
――難しいお話ですし、美味しいお菓子が必要ですわ。
ごくり、と喉を鳴らしつつテーブルにつき、それから小さく咳払い。その後、
「さ、ベル。改めて名乗りなさい。それが皇女としての礼儀というものですわ」
ベルは、その言葉を吟味するように、小さく目を閉じ、そして口を開いた。
「ボク……いえ、私はミーアベル。ミーアベル・ルーナ・ティアムーン。栄光ある帝国の叡智、ミーアお祖母さまの孫娘です」
堂々たる名乗り。帝室の姫に相応しい、堂々たる気品あふれる態度で静かに目を開ける。長いまつ毛の奥、知性の光を湛えた瞳が、その場に集う一同を見つめた。
彼女の放つそれは、紛れもなく姫の気品。皇女の空気。
それが――次の瞬間……呆気なく霧散するっ！
どうだぁっ！　っとばかりに調子に乗った笑みを浮かべ、胸をむんっと張った瞬間に！
渾身のドヤァ！　顔を披露したベルは、みなの反応の鈍さに、すぐに不安そうな顔になる。

「あ……あれ？」
キョトキョトと周りを見回して……。
「あ、ええと、つまりですね……。ボクは、未来の世界からやってきたんです」
今度は、ちょっぴり困った顔で言った。
――ふぅむ、名乗りの時には風格がございましたのに、いまいち長続きしませんわね。ベルも……。
などと思いつつ、ミーアはもぐもぐ、カッティーラを味わう。あまぁい砂糖の味、生地の表面に固まったカリッカリの砂糖の感触が、なんとも美味しくって……。味覚に走った甘美なる刺激が、ミーアの脳みそを覚醒へと誘いつつあった。
「未来の世界……？　ミーアの孫娘、だって……？」
はじめに冷静さを取り戻したのは、アベルだった。
「そう言われれば確かに、ミーアの面影があるような気がするが……。そうか。そう考えると、ミーアの反応も……」
ベルの顔を見つめたまま、感慨深げにつぶやくアベル。だったが、
「そうか。君はミーアとアベルの孫娘だったのか。もしかすると、その名前は、ミーアとアベルとを合わせたものなのかな？」
シオンの言葉に、んっ？　と顔を上げる。
「どういうことだい？」
「いや、彼女の名前だよ。ミーアベルというのは、ミーアとアベルを合わせたものなのでは、と、ふと思ってな」
苦笑いを浮かべるシオン。刹那、ピンと来たのか、アベルは深々と頷いた。
「なるほど……言われてみれば……」
っと、彼らの視線を受け、ミーアはわずかに狼狽える。
自らの、ちょっぴりアレなネーミングセンスが、みなの前でバレてしまいそうになっているからだ。が……。
「ふふふ、君のご両親は、ミーアとアベルのことを素直に慕っていたのだな」

そう笑ったシオンに、ベルはニッコリ笑みを浮かべる。
「はい。ボクのお母さま、ミーアお祖母さまと、アベルお祖父さまのことが大好きでした」
「と、ともかく、ですわ。この子は、わたくしの孫娘。未来からやってきた孫娘なんですの」
ミーアは慌てて割り込んだ。これ以上、余計なことを言われないように、と。
――しかし、これ、よくよく考えると、信じてもらえなかったら、説明のしようがないですわね……。
などと思うミーアだったが、みなは、特に疑う様子を見せなかった。むしろ、
「そうなんですね、私、全然わかりませんでした。確かに言われてみればミーアさまに似ておられますね」
気付けなかったことを恥じるようなクロエと、
「ペルージャンで縁の方だとは聞いてましたけど……そういうことだったなんて。気付けませんでした」
どこか悔しそうなラーニャである。他の者たちも大体同じような反応を見せていた。
「では、前の時に矢で射られた君は……？」
「ええと、詳しい説明は難しいので省きますが、前に来たボクというのは、ボクがいる未来とは別の未来から来たボクで、確かに、蛇の廃城で死にました。でも、その時のボクの魂は、ミーアお姉さまがこれから築く予定の未来に飛ばされて、そこで、今のボクと統合された感じ……でしょうか」
日記の文章は書き換わる。命を持たぬ物質も歴史の因果から逃れることはできず、それゆえ、それが存在していた未来が消えた時点で消えていく。
だから、ベルも命を失った時、その体は物と化し、彼女がいた未来世界の消失に合わせて消えてしまったのだ。
ただ唯一、消えることのないのが魂。あるいは、それに刻み込ま

れた記憶だった。
揺らぎによっていくつかに分かたれた魂は、いずれ最も濃い時間線の魂へと収束していく。そして、その時に行われる記憶の継承こそが夢……。
なぁんて、説明を始めようとしたベルを、ミーアは慌てて止める。
時間線の『揺らぎ』などという話が出始めた時点で、さすがに、ついていけずに戸惑う者たちが多かったから、それを気遣って……ではない。
戸惑う者たちに、ミーアが質問を受けるのを避けるためだ。
どうも、生徒会の一部の者たちは、とりあえずミーアに聞けばなんでも教えてもらえると思っている節があるようなのだが……ミーアとてベルが何を言っているのか完全には理解していない。
なんだったら、今話を聞いている者たち以上に理解できていないかもしれない。
ということで……。
「まぁ、難しい話は良いですわ。ともかく、ベルはわたくしの孫娘であり、ここでの生活の記憶をすべて持っている。あの時のベルとだいたい同一人物である。そういうことでよろしいですわね？」
聞かれても答えられる事実だけ告げる。
それ以上のことは、どうでもいいことだと、聞いても仕方のないことだと質問の範囲を制限したのだ！
生徒会長ミーアの、議長としての手腕が冴え渡る！
……よく見ると、ミーアの目の前に置かれていたお皿の上に置かれていたカッティーラはすでに消えていた。
英気十分、糖分を補給したミーアの、議長としての手腕が冴え渡る！

第二十六話　モリベル

「なるほど。確かに、これ以上、世界の仕組みを知っても、あまり意味があることではないかもしれないわ」
黙って聞いていたラフィーナが、そこで口を開いた。
「どういうことですか？　ラフィーナさま」
不思議そうに首を傾げるクロエに、ラフィーナは優しい笑みを向ける。
「簡単なことよ。秘されたことには、秘されるだけの意味がある。神秘という言葉があるけれど、それを解き明かすのは、それほど良いこととは思えないもの。だって、それは神によって秘されたことでしょう？　人には、知らぬほうが良いことだってある」
紅茶のカップを片手にとり、一口。それから、ラフィーナは続ける。
「我らの神は、人が平穏に生きるのに必要な知識を与えたもうた。この地を治める道徳、倫理のすべては、神聖典に書かれているの。なぜ、人を殺してはいけないのか？　それは、神がそれを禁じるから。なぜ、他人の物を盗んではいけないのか？　それは、そのように神聖典に書かれているから」
すべての人に共有された動かぬルールがある。それに照らし合わせればこそ、貴族も民も納得するのだ。
「神からいただいた神聖典により、私たちは、そのように諭せるし、その秩序を根拠にして悪事を咎め、裁くことができる。神聖典という、誰もが認める権威ある書に、それが明文化されている意味は、そこにある。そして、それは人が平和に暮らすために必要な知恵だからこそ、人に明かされている」
それから、ラフィーナは少しだけ表情を硬くする。
「逆に言えば……人の分を超えた知識、人を歪め、悪へと走らせる

知識というのもあるのではないかしら？　例えば、人をだます方法とか、国を崩す方法とか、ね。その最たるものが、恐らくは『地を這うものの書』でしょう」
　どうやって国を崩すのか、わからなければ、普通でいられたものを……そのやり方を知ってしまったがゆえに、革命に走る者がいる。
　救われるべき弱者を、悪へと変えてしまう知識、それこそが地を這うものの書の誘惑。それは確かに、知るべきではない知識と言えるだろう。
「だから、分を超えたことを話さないほうがいい。ミーアさんが言っているのは、そういうことではないかしら？」
　涼やかなラフィーナの瞳が、ミーアのほうを見る。
　聞かれたら困るから、聞かれても困らないことに議論の範囲を絞る……などという、ちょっぴりアレなたくらみに、極めて壮大な解説をつけられてしまったミーアは、実に神妙な顔で頷いて。
「……ええ、まぁ、そんな感じですわ」
　いけしゃあしゃあと言ってのけた！
「なるほど。確かに、その通りかもしれませんね。未来のこととかわかってしまったら、私なんか、サボってしまうかもしれません」
　ちょっぴり冗談めかして笑ったのは、滅多なことではサボらなそうなティオーナであった。そんな主の発言に、うんうん、っと元気よく頷くリオラ。
「私も、そう、思う、です。どこに獲物がいるかわかったら、探すの、面倒なくていい」
　無邪気な彼女の発言に、その場のみなが明るい笑みを浮かべた。
　にぎやかな生徒会の雰囲気に、微笑ましげな表情を浮かべて、ラフィーナは言った。
「そうね。神秘や、未来の知識などというものを知っていて、なお、謙虚に、有益に使えるのは……それこそミーアさんぐらいじゃないかしら？」
　それは……聖女ラフィーナの判断力を、女帝ミーアの判断力が上

回った決定的な瞬間であった。
帝国の叡智、女帝ミーアは自身の怠惰を知り抜いているのだ！
「ん？　待てよ？　ということは、もしかすると、ミーアが大飢饉が起きると言って備蓄を進めていたのは、その未来の知識によるものなのか……？」
と、小首を傾げるシオンだったが、すぐさまクロエが反論する。
「いいえ。ミーアさまが食糧の備蓄を始めたのは、ベルさまが現れる前ではないかと思いますが……」
「はい、もちろんです。ボクが来るより前に、ミーアお祖母さまは備蓄を始めています」
静かに手を当て、厳かな口調でベルが言った。
「むしろ、いろいろな未来のことを教えることは、良くないことであると、諌められてしまいました。過去のミーアお祖母さま自身にもあまり教えないように、と言われています。だからこそ、ミーアお祖母さまは、帝国の叡智と呼ばれているんだと、ボクは思いました」
モリモリ盛る。盛りに盛るベルである。モリベルである。
「そう。やはり、ミーアさんでもそう考えるのね。自分自身をも厳しく諌めるだなんて、さすがね……」
ラフィーナは、感心した様子でつぶやく。
「ということは、ベル嬢からこれから先に起きることを教えてもらうのはなしにしたほうがいい、ということか。だけど、いいのかな？　アベルとミーアとのことは……」
「あ、はい。大丈夫です。それは教えても大丈夫な情報なので」
憧れの人、シオンの言葉に、嬉しそうに頷いてから、ベルは説明を続ける。
てっきり、未来ですでに明かされている情報が云々、という話をするのかと思えば……。
「ボクのお母さんが産まれなくなってしまうと困るので……ボクが」
とんだちゃっかり者だった！

けれど、そのことにツッコミを入れる者はなく……。みなの顔に浮かぶのは優しい理解の色だった。もともとの性格に加え、ミーアの孫娘という地位を得たベルは、名実ともにみなに愛され、可愛がられる立ち位置を獲得していた。

とんだちゃっかり者である！

ベルの持つ能天気な雰囲気で、一気にその場が和やかなものへと変わっていく。

これで、アベルの元気が、少しでもでればいいのに……っと、ミーアが視線を転じると……、アベルは変わらずに硬い表情をしていた。

「そうか……。では、やはり、姉上が殺したということには、変わりがないのだな」

「アベル……？」

心配になって声をかけるミーアだが、安心させるようにアベルは頷いてみせて……。

「ベル嬢、少しいいだろうか？」

アベルは、思いのほか真剣な顔で、ベルに声をかけた。対して、ベルは、

「うふふ、アベルお祖父さま、くすぐったいです。呼び捨てでいいですよ」

無邪気な笑みを浮かべる。それに気勢を削がれたのか、アベルは虚を突かれたような顔をして、

「ああ、そうか……。うん、わかった。それならば、ベル、一つお願いがあるんだが、後で少し付き合ってもらえないだろうか？」

「はて？　お願い、ですか？」

きょとん、と首を傾げるベルに、アベルは言った。

「ああ。ボクの姉……ヴァレンティナのことだ」

「あら……お義姉さまの？」

それは聞き捨てならん、とミーアがしゃしゃり出てこようとするが……。

「ああ、別に大したことじゃないんだ。ただ、ボクもミーアに倣おうと思ってね」
「はて、わたくしに……？」
「前に君がシオンにやったことさ。わからずやの姉を蹴り上げてやろうと思うんだけど、ボクがそれをするのはどうかと思うから、孫娘に代わってもらおうというわけさ」
そうして、アベルは悪戯っぽい笑みを浮かべた。
その顔を見て、ミーアは、ふっと心が軽くなったように感じた。
その笑みは、実に数か月ぶりに見る、少年らしい幼い笑みだったからだ。

第二十七話　流れ矢に射抜かれる……キースウッド

「アベル、いったい何を……？」
「いや、それは後にしよう。今は先にミーアの話を聞くよ。彼女の正体や帰還の報告が、今日の会議の主旨じゃないんだろう？」
そう言われてしまえば、重ねて聞くわけにもいかず。気にはなりつつも、ミーアは本題に移ることにする。
「アベルの言う通り、ベルのことは、今日の本題ではありませんわ。実は、ラフィーナさまにご相談させていただいたのですけれど、セントノエル学園に特別初等部を作ろうという話になりましたの」
「特別初等部……？　それは、いったい……？」
聞きなれない言葉に首を傾げるシオン。ミーアは、さて、なんと説明したものか……とラフィーナのほうを見ると……ラフィーナはちょっぴり嬉しそうに頷いた。どうやら、ミーアから説明をお願いされた、と勘違いしたらしい。
頼られたのが、ちょっぴり嬉しかったらしい、ラフィーナである。
「では、私のほうから説明するわね。中央正教会が各国に設けている孤児院、そこで、貧しい子どもたちに教育を施していることは、みなさん、ご存知かしら？」
その問いかけに、生徒会の役員たちは各々頷いて答えた。
中央正教会は、救いに関する知の独占を固く禁じている。
富む者であれ、貧しき者であれ、神の救いには等しく預かることができるよう、そんな願いのもと、神父たちが行ったのは、識字教育だった。
要は、あらゆる人が神聖典を自力で読むことができることを目的に教育を施してきたわけだが……。
「それは、確かに必要なことで、価値のあることだった。それは決して変わらないわ。でも……」

そこで、ラフィーナは、静かに首を振った。
「それで十分なのだと、私たちは勘違いしてしまった。十分なはずがないのに。もしも、それで十分だと満足してしまったら、それは、貧しさを理由に、親がないことを理由に勉学を諦めさせることになる。それだけで満足しろと、踏みつけにしたことになる」
その言葉に、アベルも、シオンも苦しげな顔をする。
「そんな弱き者たちに、蛇は近づき、仲間に引き入れる……。そして、悪を成した者たちを、私たちは裁かなければならない。それは、次の蛇を生み出す要因となる。無限に繋がるその鎖を断ち切る術を、ミーアさんは、私に教えてくれた……そうよね？」
ミーアのほうを見て、ラフィーナは続ける。
「聞いたわ、ミーアさん。孤児院で勉学を頑張っていたセリアさんという女の子を自分の学園に、招待してあげたそうね」
一瞬の沈黙の後……ミーアは神妙な顔で頷いた。
「……ええ。そんなことがありましたわね。うん」
自分だけが苦労するのはシャクだから巻き込んだだけ、などと言う不都合な真実は、記憶の彼方に放り投げてしまうミーアである。
「それを聞いた時、私は思ったの。そうか、そんな方法があったんだって」
「なるほど。蛇を生み出す温床を潰す。その温床すらも味方にしてしまい、将来の禍根の芽を摘み取ろうと、そういうことか……。それは確かに効果的な方法なのかもしれないな」
鋭い表情で頷くシオンと、力強く頷くラフィーナ。みなに納得の表情が広がっていくのを横目に、ミーアは考える。
――まぁ、この調子ならば、生徒会の方たちを説得するのは、そう難しくもないでしょうけど、問題はやっぱり、ここにいない方たちですわね。さて、どう説得したものか……。
そんなことを考えつつ、ミーアはフォークを伸ばそうとして……
愕然とする！
つい先ほどまで、目の前にあったカッティーラ。それが……完全

に消えていた！
――まっ、まさか……っ！
慌てて、お腹をさすったミーアは、思わず頭を抱える。
――ああ、やってしまいましたわ。またしても……。甘い物を食べ過ぎてはいけないと、昨日もアンヌに言われておりましたのに……。タチアナさんにも、怒られてしまいますわ。
無意識に食べているとは、恐ろしい現象だ……などと思った時、唐突に……ミーアの脳裏に閃くものがあった！
――ああ……そうか。そういう……ことでしたのね。
耳に甦るのは、低く穏やかな声。料理長の、声だった。
「お食事を食べずに、お菓子だけを食べてはいけません」
自身を諌める声、その言葉の意味が、ようやくわかった。
なぜ、お菓子を食べ過ぎるな！　ではなく、食事を食べてから……なのか？
それは……。
「お菓子の食べ過ぎを防ぐためには、お菓子を食べさせなければいいというわけではない……。空腹であれば、たとえ禁じられたとしても、お菓子に手が伸びてしまうものですものね」
だからこそ、料理長は言ったのだ。食事を食べずに、お菓子を食べたらいけない、と。
「お菓子の食べ過ぎを防ぐためには、体に良い食事を食べさせ、満腹にさせてしまえばいい。そうすれば、そうたくさんは、お菓子は食べられない」
じんわーりと頭の中にしみこんでいく納得感に満足しつつ、顔を上げたミーアは……。
「……はぇ？」
思わず、瞳を瞬いた。
なぜなら、みなが、目を丸くしてミーアのほうを見ていたからだ。
「ミーアさん……」

いち早く、冷静さを取り戻したラフィーナは……直後に、愛のない自身を恥じた。
――やっぱり、ダメね……私……。
ラフィーナの目に映っていたのは、あくまでも、蛇に対する効果的な手段だ。
蛇の教育を受けた者に対する再教育、蛇から遠ざけて、悪しき者にならぬよう、悪から遠ざからせる。そのための、効果的で、効率的で、合理的な手段と、ラフィーナは考えていたのだ。
けれど……ああ、けれどなのだ。
それは、決して、ミーアの欲するところではない。
ミーアにとって蛇への対策よりも、もっと重視すべきことが、ほかにあるのだ。
国を担う優秀な人材を育てること？　未来を担う子どもたちに、忠誠心を植え付けること？
否、そうではない、とミーアは言う。それは、ただの結果に過ぎないのであると……。
彼女は言うのだ。
「良い食物で、子どもの腹を満たせ」と。
それこそが、大切なことだ、と。
彼女の目が捉えるのは、あくまでも、子どもたちのこと。
子どもたちをどう扱うか、そのことだけだった。
それは慈愛に満ちた視点。ラフィーナは、その視点が、自分には欠けていることを自覚する。と同時に、思わず嬉しくもなってしまう。
ミーアと友だちになれたことが、今は、とても嬉しい。
彼女の持つ優しさを、学び、自分もまた、持ちたいと思う。
「子どもを悪の道に染めないためには、悪から遠ざけるのではなく、良いもので満たせ……と、そういうことなのね……ミーアさん」
かすかに震える声でつぶやくラフィーナに、ミーアは……。
「はぇい……」

なんだか、気の抜けたような返事をするのみだった。

この時のミーアの言葉は、後に一つの格言を産むことになった。

「あなたの子どもの皿から、悪しき食べ物を取り除け。されど、その子を空腹でいさせてはいけない。ゆえに、その皿に良き食べ物を山のように盛り、子の腹を満たせ」

というこれは、法秩序の大切さを教えた「少年少女よ、法志(ほうし)を抱け」と並んで、教育者ミーアのポピュラーな格言として広まっている。

(……ちなみに、そちらの格言は、子どもたちをキノコ狩りに連れて行った際に言った言葉として知られている)

ともあれ、生徒会のメンバーの了解を取り付けたミーアは、無事、特別初等部の設立へとこぎつけることになるのだった……。

――変わらないな、ミーア姫殿下は……。

一方で、一連の流れを見ていたキースウッドは、ミーアの言葉に納得感を覚えていた。

――国の別に関わらず、その人間が持っている才を開花させることなく枯れる……それを、ミーア姫殿下は許せないんだ。

彼女の示した指針、それは剣術大会の際にキースウッドが見出したミーアの本質をなぞるものだった。

――思えば、ミーア姫殿下ほど、子どもの教育に向いている方もおられないかもしれないな。

などと、ミーアに感銘を受けるキースウッドであったのだが……。

「あ、そうだわ。ところで、キースウッドさん」

不意に、ラフィーナの明るい声が、耳に届いた。

「はい。なんでしょうか？」

主であるシオンではなく、自身に声がかかったことに、彼は危機感を覚えるべきだった。

けれど悲しいことに、この時の彼は、ミーアの言葉に感動し、注

意力が若干、散漫になっていた。
そんな彼の油断、それはさながら、堅牢な鎧に開いた隙間……そこに、容赦なく、ラフィーナの刃が滑り込む！
「馬型のサンドイッチというのを、ミーアさんにお勧めされたのだけど……」
「……はぇ？」
思わず、口からおかしな声が出てしまうキースウッド。そんな彼にラフィーナの追撃が迫る！
「聞いたわよ？　キースウッドさんに手伝ってもらったって。ものすごく、お料理が上手なんだって、ミーアさん、とっても褒めてたわ」
思わず、ミーアに、ちょっぴり殺気のこもった視線を向けてしまう、と、ミーアは……「しっかり、評価しておきましたわ！」などと、力強く頷いてみせた！
――まぁ、そうなんですがね？　普通は額に汗したことを評価してもらったら、嬉しいんですけどね！？　くそったれ！
ぐぬぬ、っと葛藤にあえぐキースウッドに、ラフィーナは、聖女の笑みを浮かべて言った。
「今度、その作り方を伝授してもらいたいの。できれば、お手伝いも……。お願いできるかしら？」
聖女の笑みが……どこか邪悪な笑みに見えるキースウッドである。
さらに、
「ええ、構いませんよ。しっかり頼むぞ、キースウッド」
シオンも快諾してしまう。その爽やかな笑みに、思わず、殺意にも似たナニカを抱きそうになるキースウッドである。
――ぐぅ、し、仕方ないとはいえ……これは……。
かつて、一人で二匹の狼を相手にした時と同様の死地……圧倒的なプレッシャーに思わず腹をさすりながら、キースウッドはうぐぐっと唸る。
――ああ……ちくしょう！　サフィアス殿……うらやましいなぁ！

今はここにいない友を思う、キースウッドであった。

第二十八話　悪い孫娘、祖母に恋愛のコツを語る

セントノエル学園、特別初等部構想――生徒会長ミーア肝入りの、その政策は、あまり好意的には受け入れられなかった。

ラフィーナや生徒会メンバーら、一部の生徒を除き、多くの者が示したのは戸惑い。そして、それを大きく上回る反感だった。

「まぁ、そうですわよね……。やはり……」

なにしろ、セントノエルに通うのは、各国の次代を担う“高貴なる身分の者たち”だ。

いきなり、同じ学び舎に孤児を受け入れると言われても、すんなりとは受け入れられないだろう。

にもかかわらず、ミーアは生徒会長への再選を果たした。

もちろん、ラフィーナが出馬を辞退したことが大きな要因としてあったが、同時に、ミーアの公約に表立って反対する者が現れなかったことも関係していた。

そう、特別初等部構想に反対の声を上げる者は、ただの一人もいなかった。ミーアの公約は、静かな反感を持って、受け止められたのだ。

――誰も反対の声を上げない。それが、逆に恐ろしいところですわね。絶対に、心の中で反対している方もいるでしょうし、頓挫させたい方もたくさんいるんでしょう……。

そんな彼らが黙っているのは、一つにはミーアの持つ絶大な権力が怖いから。

そして、もう一つは、特別初等部構想が道義的に“正しい”ものだったからだ。

各国の孤児たちに、より良い教育を施すこと。それは、紛れもない慈悲であり、道徳的に全く正しいこと。ゆえに、それは何者の反論も許さないある種の正論……ではあるのだが。

――総じて、そういうものほど反対者からは嫌われるもの。きっとちょっとしたことでも揚げ足を取ろうという者がいるはずですわ。
絶対な力で押さえつけた意見は、その力関係が崩れた時、容易に吹き上がる。
そして、正論によって押さえつけた意見は、その“正しさ”が揺らいだ時、止めどもなく湧き上がるもの。
正直、ミーアとしては今の状態は決して望ましいものではないが……。
――こうなってしまった以上、仕方ありませんわ。ここは、文句のつけようのないように、完璧に事を進めていくしかありませんわ。今日は午後から、特別初等部の講師と打ち合わせがありますけれど、しっかりやらないといけませんわね。うう、しかし……いろいろ考えると、お、お腹が……。うう……。
あまりの、プレッシャーに、お腹がきゅうっと痛くなり……痛くなり……痛く？
「むっ……この匂いは！」
不意に、ミーアの鼻先に、美味しそうな香りが漂ってきた。それは、チーズの焦げた香ばしい匂い。そう、ミーアは、今、食堂にいるのだ！
お腹が痛いとか思ったけど、勘違いだった！　ただ、空腹を錯覚していただけだったのだ！
ちなみに、ミーアの隣には、ちょこんと行儀よくパトリシアが座っていた。
こちらは、ミーアのようにしまりのない顔をしたりはしない。その顔は、ただひたすらに、お人形のように、無機質な表情を浮かべていた。もっとも、その手は、ミーアと同じようにお腹をさすっていたりするのだが……、まぁ、それはさておき。
「五種のキノコグラタンでございます」
空腹のため、お腹をさすっていたミーアの目の前に、ホッカホカの湯気を立てるグラタン皿が置かれた。

「おお、待っておりましたわ！」
パンッと手を打って、ミーアは漂う香りに心を委ねる。
チーズの焦げた香ばしい匂いに、ミーアのお腹がクゥっと元気よく鳴った。
「今日は朝からこれが食べたくって、お勉強に身が入らなかったんですのよ？」
そう悪戯っぽい笑みを浮かべると、食堂のスタッフは深々とお辞儀をした。
「ありがとうございます。最高の賛辞として、シェフに伝えさせていただきます」
そうして、食堂のスタッフが行ってしまうのを待って、ミーアはアンヌに声をかけた。
「ああ、アンヌ、申し訳ないですけど、パティのこと、気を付けてあげてちょうだい。容器がとっても熱くなっておりますから、やけどがないように」
「わかりました。ミーアさま」
その場に控えていたアンヌは、ふん、っと気合を入れて、両手にスプーンを持った。それから、パティ、ことパトリシアのグラタン皿から、もっと小さな小皿に、中身を小分けにしていく。
びよーんっと伸びたチーズを見ていると、再びミーアのお腹がクゥっと鳴った。
――あのとろーりしたチーズを、キノコに絡めて食べると、たまらなく美味しいんですわよね。
などと、思いつつ、ミーアは自らのグラタンをやっつけにかかる。
フォークで刺した大ぶりのキノコ。平べったく切ったそれに、たーっぷりのチーズと、クリームソースを絡めていく。ふーふーと息を吹きかけるも、我慢できずに、ぱくりん、っと一口。
「あふほふ……」
熱い。口の中に広がる熱。舌に絡みつくチーズに涙目になりつつも、ほふほふ、と息を吸う。瞬間、チーズの、まろやかな風味が鼻

を駆け抜けていく。
コリリっと……。噛みしめるたび、心地よい音を立てるキノコ。クリームソースに彩られた淡い味わいに舌鼓を打ちつつ、次なるキノコへ。
――歯ごたえの違う五種のキノコ……このセレクトがこのお料理の肝ですわね。しかも、キノコそれぞれの特性に合わせて切り方を変えている……。このシェフ、なかなかできますわ！
異なるキノコの立てる心地よい五重奏に身を委ねることしばし……気付けばグラタン皿の中身は、見る間に減っていく。
「素晴らしい。さすがは、大陸最高峰のセントノエル学園。堪能いたしましたわ」
……別に、料理が大陸最高峰というわけではないのだが、そんな細かいことをいちいちツッコむ者は、ここにはいなかった。
そうして、一心不乱にグラタンを食べて、ホッと一息。
口の中に残る濃密な味の余韻に浸っていたところで……ミーアはふと気付く。
パトリシアが……グラタンを残しているということにっ！
「あら、パティ、お腹いっぱいなんですの？」
まぁ、体が小さいし仕方ないかな？　と思うミーアだったが……。パトリシアは小さく首を振って答える。
「いいえ、ミーアお姉さま。まだ、食べられます。デザートにケーキが食べたいです」
「ふむ。ケーキは同意いたしますが、それならば、きちんと食事を食べなければいけませんわ。残さず、最後まで食べなければ……」
と、パトリシアは、不思議そうに首を傾げた。
「なぜです？　ミーアお姉さま。高貴な血筋の者は、最後まで食べずに必ず残し、美味しいところだけを食べなさい、と言われています」
その答えを聞き、ミーアは思わず、クラァッとする。
――おお……それは、実になんとも、帝国貴族っぽいですわ。

クラウジウス侯爵家で育てられたというパトリシアである。その感覚が、貴族的なのは仕方ない話ではあるのだが……。
――ああ、その考え方が、帝国を滅ぼすことになるのですわね……あら？
ミーア、そこで、ふと気付く。
――そうですわ。この子は、蛇の教えを受けた者。帝国を滅ぼし、混沌へと落とすことこそが、蛇の目的のはず。であれば、このいかにも帝国貴族、という思想を教え直すことこそが、すべきことなのではないかしら。
「ミーアお姉さま？」
首を傾げるパトリシアに、ミーアは腕組みして考え込むことしばし……。やがて、一つの答えにたどり着く！　それは……。
「なるほど。それは……高貴なる女性の価値観として正しいと思いますわ。けれど……皇帝の心を掴むには、どうかしら？」
「……どういう意味でしょう？」
「あなたは、皇帝に近づき、妻として、彼を堕落させなければならない。そうですわね？」
真剣な顔で見つめるミーアに、パトリシアは小さく頷く。
「では、他の令嬢に埋もれるような、普通の行動をしていてはいけませんわ。むしろ、綺麗に、意地汚く食べ尽くしてやればいいのですわ。そうすれば、皇帝の印象にだって残るに違いありませんわ！」
恋愛軍師ミーアは、ずががががーん！　っと効果音を背負って言った。
「……っ！」
一瞬の沈黙の後、パトリシアは、深い、ふかーい！　納得の顔をして、
「なるほど……とても勉強になります！」
尊敬のまなざしを向けてきた。
――ああ、すごく、チョロいですわ、お祖母さま……。
それを見て、ミーアは、してやったりな顔をする。

祖母を騙す、悪い孫娘ミーアなのであった。

第二十九話　ミーアがそう言うのなら……

さて、ミーアが食堂で舌鼓を打っている頃、生徒会室では、シオンとティオーナが、午後の会合の準備をしていた。

セントノエル学園は、もともと中等部以上の教育を施すための機関である。

それよりさらに下の初等教育となると、新しく講師を用意する必要があるため、今日はその候補者との顔合わせをする予定なのだ。

神聖ヴェールガ公国から届いた教師の情報に目を通し終えて、シオンは小さくつぶやいた。

「特別初等部構想、か……」

「シオン王子は、どう思われますか？」

隣で書類をまとめていたティオーナが、顔を上げて言った。

「大したものだ、と思う。ミーアの掲げた政策は的確で、しかも、重層的だ」

「重層的、ですか？」

怪訝そうな顔をするティオーナ。対照的に、納得の頷きをみせたのはキースウッドだった。

「重層的……か。なるほど、言い得て妙ですね」

彼は、基本的にシオンの従者として、王族や貴族同士の会話には入らないようにしている。けれど、ここ、生徒会は別だった。

なにしろ、生徒会長のミーアは、周囲に話を振るのが大好きな人なのだ。いろいろな者たちから意見を聞くことを大切にする、それは、良い統治者の資質だ。

だから、キースウッドのミーアに対する評価は実に高い。

馬型サンドイッチなどという、いささか以上に面倒な仕事を押し付けられたとしても……それを、よりにもよって大陸が誇る聖女ラフィーナに伝授しなければならないとしても、その評価は変わらな

い。恨みになんか全然思ってない……本当だ！
さておき、
「えっと、それはどういう意味でしょうか……？」
首を傾げるティオーナに、シオンは自らの考えをまとめながら、言った。
「その狙いというか、効果というか……利点が複数あるということさ」
「確かに、その通り、です。ミーアさま、ルールー族の村を救う時に、皇女の町を建てた。それが学園都市になり、小麦の開発をするようになった、です。全部、繋がってる」
ティオーナの従者、リオラ・ルールーの同意を聞きながら、シオンは、目の前の書類の余ったスペースにペンを走らせる。
「特別初等部を作る一番の理由は、次なる蛇を生み出さないための予防だ。けれど、今この時に特別初等部を作る理由はもう一つある。大飢饉への備えだ」
「大飢饉への……？」
「特別初等部への入学対象となる子ども……孤児や貧民街の子どもたちというのは、飢饉になった際に一番に見捨てられる者たちだ。ミーアは、食糧不足の懸念が高まりつつあるこの時期に、あえて、その子どもたちを気に掛ける姿勢を見せようとしているんだ。それは、各国の王族、貴族たちへの強いメッセージになる」
少なくとも、サンクランドの貴族たちに対しては、かなり強い影響を及ぼすだろう、とシオンは考えていた。
ミーアの助言を入れて、備蓄を進めていたサンクランドは、帝国ほど潤沢ではないにしろ、それなりの量の食糧を確保することに成功していた。
にもかかわらず、不安の声を上げる貴族たちは一定数いる。
正義と公正を旨とするサンクランドであっても、孤児たちを見捨てるという判断をする者が現れるかもしれない。
平時であれば人徳者として振る舞える者であっても、有事の際に

は冷酷な本性を表してしまうもの。それが人の弱さというものだと、シオンは思っているが……。
「ミーアはその引き締めをしようとしたのだろう。彼女はいつだって、大陸を大飢饉が襲うということを心配していたから」
「国内の貴族の中には、『大飢饉などオーバーだ。そんなもの起こるはずがない』なんて声を上げる者も多いようですけどね」
肩をすくめるキースウッドに、シオンは深刻な顔で頷く。
「お前の思っている通りだな。キースウッド。それは実に蒙昧な考え方だ」
不安に駆られて、食糧をケチるのも問題なら、そんなことは起こらないと楽観視して、備蓄を怠るのもまた問題だ。
目の前の状況を理解しようとせず、大した危機ではないと豪語する。それもまた愚かなことだった。
「そもそも、この大飢饉、最大の肝は、その存在を民に知られないことだろうに……」
そう言いながらも、シオンは思っていた。
自分は、もしかしたら、今、初めてミーアと同じ視座に立つことができているのではないか、と。
「民に知られてはいけない……。それは、どういうことでしょうか？」
再びのティオーナの疑問。どう答えようか考えをまとめつつ、シオンは少しだけ戸惑う。
彼女に説明することで、頭の中が整理されていくことを実感したから。そして、それが少し楽しいと感じている自分を見つけて。
「そう、だね……。この大規模な不作の問題点は二つある。一つは言うまでもなく食糧の不足。もう一つは、その不足で生まれる民の混乱だ。食糧の不足だけであれば、なんとか耐えきれるかもしれない。それこそ、民が兵のように、規律正しく整然と動いてくれるならば、この事態は乗り越えることができるだろう。しかし、もしも不安と恐怖に駆られ、暴動が起これば、もはや収拾がつかなくなる」

流通網は乱れ、その結果、さらに食糧は不足する。価格の高騰により、貧者は餓死し、体力を失った者を病が襲う。こうして生まれた負の連鎖を止めるのは、容易なことではない。
「そうしないためには、一番大切なことは、食糧を不足させないために備蓄をしておくこと。食糧を入手する術を確保しておくこと。そして、民を不安にさせないことだ」
「ああ。そうか……民を不安にさせないためには、食糧が不足しているということを、知られてはならない。そういうことですね？」
シオンは首肯しつつ、続ける。
「同時に大事なのは、仮に食糧が不足しても、王が必ず助けてくれると、民から信頼されていることだろうが、しかし、すごいな……。ミーアは……」
ここまで言ったところで、シオンは思わずといった様子でつぶやいた。
「ミーアさまは、そのすべてをしっかりと整えてきたのですね」
ティオーナは、明るい声で、シオンに同意する。
民からの信頼を得るため、自らの誕生祭を活用した。
食糧が不足しないよう、民に食糧不足を感じさせないよう、第一の臣下であるルードヴィッヒに準備させた。
備蓄に努め、遠き異国より小麦を輸入するための手立てをも整えた。
「それどころか、国家間の緊張が高まらないように、パン・ケーキ宣言をして、その上で、ペルージャンにて、フォークロード、コーンローグ、両商会を掌握した……か。本当に、この大飢饉に備えて、行動してきたように思えるな……」
それを聞いて、ふと、キースウッドが首を傾げた。
「しかし、実際のところ、どうなんでしょうね？」
「なんのことだ？」
「例の、ベルさまがミーア姫殿下のお孫さんだという話です」
その問いかけに、シオンは腕組みしてから、

「そうだな。にわかには信じがたいが……別に疑う必要もないように思うな」
「というと？」
「つまり、ミーアがそう思っておいてほしいと言うなら……そう思っておけば問題ないだろう、ということさ。ミーアは悪を成すために偽りを口にすることはないと思うから。そうだな、例えば、パッと考えつくものだと、周りが自分に頼りすぎないようにするため、とかそんな理由じゃないかな？　未来の知識を得ていたから、まともな判断をできたというのと、なにも情報がないのに、未来に対する正確な予測が立てられたというのとでは、違うだろう？」
「確かにそうですね。ミーアさまが万能だと思ってしまったら、頼りすぎてしまうかもしれません。ミーアさまは常々、自分一人でするんじゃなくって、仕事を他の人に割り振ることを大切にされていましたから」
　ティオーナが納得の頷きをみせる。そんな彼女に、シオンは真剣な顔で続ける。
「だから、まぁ、ミーアが偽りを言ってるなら、それを信じておいても問題ない。それに……もしかしたら、本当のことを言っているかもしれない。あれは、こちらを騙そうとするには、あまりにも突拍子がなさすぎる嘘だったから」
「吐くならば、もっとマシな嘘にしろ、というやつですか？」
　キースウッドの問いに、シオンは肩をすくめた。
「言い方は悪いが、まぁ、そういうことだ。以前はベル嬢のことを妹のようなもの、と言っていたが、今回もそう説明されたほうがよほど納得できただろう」
「なるほど。矢を受けたけれど、奇跡的に生きていたというほうが、まだ無理がないですね。アベル王子が目撃したことというのも、ベルさまが、光の中に消えたというだけですし……」
　狼使いに襲われた時にも、ミーアとベルは光っていた。あの時と同じだと言われれば、そのほうが容易に納得できただろうし、それ

を思いつかないミーアでもないだろう。
「にもかかわらず、よりあり得そうもない説明をするというのは、なにか意図があるか、あるいは、本当に真実を告げているのか……ですか」
キースウッドのつぶやきに、シオンは苦笑いで首を振った。
「理屈ではそうさ。ただ、俺としては別の判断をしたいと思ってる」
「別の判断というと？」
「友を信じる。それだけさ。俺はアベルの直感を信じる。それに、ミーアのことも。疑わない理由は、それで十分じゃないかな？」
それから、彼は、ティオーナのほうを見つめて、言った。
「ティオーナも、そう思うだろう？」
「はい。私も信じたいと思います。ミーアさまが、そう言うのですから……」
と、そこにタイミングよく、話題の中心人物、ミーアが入ってきた。
「あら、みなさん、なんのお話をしておりますの？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、みなは優しい笑みを浮かべるのだった。

第三十話　権威主義者ミーア！

「お待たせしてしまい、申し訳ありません」
生徒会室に入ると、みなの視線がミーア……の隣に立つ少女へと向かう。
「その子が、例の……？」
代表するように口を開いたのはシオンだった。ミーアは静かに頷いて。
「ええ、そうですわ。パティ、ご挨拶を。こちらは、シオン王子ですわ」
「シオン、王子……？」
きょとん、と首を傾げるパティに、シオンが優しく微笑みかける。
「初めまして。お嬢さん。俺は、シオン・ソール・サンクランド。サンクランド王国の第一王子だ」
「サンクランド……？　でも、サンクランドの王子の名前は……」
「パティ。そういうことだと思っておけばいいですわ」
そう言って、ミーアは軽くウィンクする。
「なるほど、はい、わかりました」
表情は一切変わらないまでも、心得ました！　と元気よく頷き、パトリシアはシオンに頭を下げた。
「パトリシア・クラウジウスです。以後、お見知りおきを」
彼女の堂々たる名乗りを眺めながら、ミーアはふと思う。
――しかし、この子、シオンを見てもまったく態度が変わりませんわね。
老いも若きも、あらゆる世代の女性陣を魅了するのがシオン・ソール・サンクランドである。かつてはミーアでさえも、その爽やかな笑顔に目を奪われたものである。
――それなのに、まったく見惚れもしないし、緊張もしないだな

んて……。さすがはお祖母さまということかしら？　それとも、蛇の教育の根深さを嘆くべきかしら？　あるいは、恋愛にうつつを抜かす余裕がない事情があるとか……？

などと考察しているうちに、ラーニャ、クロエが順番にやってきた。

そして、最後にやってきたのは、ラフィーナと、もう一人。

「みなさん、揃ってるかしら？」

涼しげな笑みを浮かべるラフィーナ。その隣に立つ男に目をやりつつ、ミーアは気合を入れる。

――今はアベルがいないんですし、わたくしがしっかり頑張らねばなりませんわね。

そう……アベルは今、セントノエル島にはいない。ベルを伴って、姉に会いに行っているのだ。

いつもかたわらで支えてくれる彼の不在を心細く思いつつも、それを吹き飛ばすように、ミーアは気合を入れて、口を開く。

「ラフィーナさま、その方が？」

視線を向ける先、立っていたのは、すらりと背の高い優男だった。

年の頃は二十代後半、あるいは、三十に届くだろうか？

端整な顔には、知的な眼鏡がかけられていて、レンズの奥の瞳は、穏やかな笑みを浮かべている。

シオンやアベルには劣るものの、これまた甘いマスクの男であった。面食いのエメラルダ辺りであれば、自身の家の執事などにスカウトしたかもしれないが……。さすがにミーアは、そんな容姿など、歯牙にもかけない。

むしろ、ミーアが注目していたのは、別のものだった。それは……。

「お初にお目にかかります。ユリウスと申します」

ユリウスは、一歩足を引き、胸に手を当てて頭を下げる。

それは、帝国貴族の伝統的な礼だった。

「まぁ、これは、ご丁寧に。生徒会長をしております、ミーア・ル

ーナ・ティアムーンですわ」
ミーアはスカートの裾をちょこん、と持ち上げて礼を返す。他の者が、それぞれに挨拶を交わしたところで、
「それにしても、驚きましたわ。あなた、帝国のご出身なのね？どこの家の方かしら？」
尋ねると、ユリウスは恥ずかしそうに頭をかいて、
「申し訳ありません。実は、没落した貴族の出身なので、今は家名を名乗らないことにしているのです。オベラート子爵家という名前に聞き覚えはございますか？」
「オベラート子爵家……ええ……まぁ……どこかで聞き覚えがある気がしますわ。詳しくは存じ上げませんけれど……」
などと愛想笑いを浮かべるミーア。実際のところ、まるで聞き覚えはなかったのだが、まぁ、それはさておき……。
「いずれにせよ、頼りになりそうな方で安心いたしましたわ」
ミーアの一言に、ユリウスは、小さく目を見開いた。
「頼りになりそう……ですか？」
怪訝そうな顔をするユリウスは、小さく首を傾げた。
「栄光ある子爵位をいただき、先代の陛下より金銭を援助いただいたにも関わらず、それをすべて食いつぶし、頼りの爵位までをも失った無能者の家でございますが……」
「ふふ、なにをおっしゃいますやら……。爵位を失ったと言いますけれど、あなたが家を継ぐ時に、どうにもならなくなっていた、などということもあるでしょう」
ミーアはふと思い出す。
破滅を回避するために、忠臣ルードヴィッヒと駆け抜けた日々のこと。
いろいろな場所に行き、手を尽くしたけれど、すでに、あの時点では手遅れで……。
――ご先祖の負の遺産が巡ってくる不幸というのは、往々にしてあるものですわ。それに……。

ミーアは、ユリウスの顔を見つめる。大切なのは、そこではないとばかりに……。ミーアはただ一点を見つめ続ける。
「そもそも、爵位は世襲のもの。信用する根拠にはなり得ませんわ。あるいは、あなたが自身の才覚を持ってそれを得たというのであれば、それをもって信用することに理があるのかもしれませんけれど……」
名のある貴族の家名をもって近づいてきた挙句に、無能を曝す愚か者など、ミーアはいくらでも知っている。あの当時の帝国で、爵位に相応しい働きをしたものなど、皆無だったのだ。
そもそも筆頭格である四大公爵家でさえ、あの当時はまったく信用ならなかったのだ。平民のルードヴィッヒのほうがよほど役に立ったのだから、爵位などなんの判断基準にもならない。
「むしろ、家が潰れ、なんの後ろ盾もない外国に流れ着き、そこで、学問を身につけて名を成す。その実績にこそ、信頼がおける。そうではないかしら？」
ユリウスの実績を評価するミーアである。そして、それ以上に信頼するのは……。
「なるほど……。それが帝国の叡智の考え、ですか……」
感銘を受けた様子のユリウスに、ラフィーナが嬉しそうに笑みを浮かべた。
「ふふふ、驚いたでしょう？　ミーアさんは、爵位であるとか、既存の権威をあまり重視しない、柔軟な人なのよ」
その声を聞きながら、ミーアはユリウスの顔をジッと観察していた。その端整な顔……にかけられた……眼鏡のことを！
――ふむ、あの眼鏡、なんだかルードヴィッヒ感がありますわね。であれば、この方、きっとできる方に違いありませんわ。間違いありませんわ！
貴族の爵位は重視しないが、眼鏡にはガッチリと囚われている、眼鏡主義者のミーアなのであった。

第三十話　権威主義者ミーア！（後書き）

そういえば、以前よりバルバラさん年の割に若過ぎ説があったため、少し設定を変えました。
バルバラ（５５歳）ということにしておいていただけますと幸いです。
本文中に年齢を出してないし、初老と言っていたので、キャラ説明だけ直せば大丈夫なはず……たぶん。
ということで、よろしくお願いいたします。

第三十一話　復讐者たち（ハイキッカーズ）集結す

セントノエル学園をぐるりと囲むノエリージュ湖。
少し前まで荒れに荒れていた湖面は、今では穏やかな波音を立てていた。
その湖を左手に見ながら、一台の馬車が走っていく。
それは『蛇の巫女姫ヴァレンティナ・レムノに復讐し隊』通称ハイキッカーズの面々が乗った馬車であった。
メンバーは自らの孫娘を殺されたレムノ王国の王子アベルと、殺された張本人たる孫娘ミーアベル。それに、直接的ではないとはいえ、頭をかち割られたリンシャ……と、誘拐されてネチネチ嫌がらせを受けたシュトリナである……シュトリナである！！
ちょこん、と馬車の中、かしこまって座るシュトリナ。その顔には、いつもと変わらない可憐な笑みが浮かべられていた。
ベルがヴァレンティナにお礼参りをすると聞いたシュトリナは、ぜひ、自分も同行したいと、力強く言ったのだ。とてもいい笑顔で言ったのだ！
最初は、ひさしぶりのシュトリナとの旅行が嬉しかったベルではあったが、あんまりに良い笑顔だったもので、ちょっぴり心配になってしまった。
ということで、馬車の中で一応確認しておくことにする。
「リーナちゃん、一応聞きたいのですけど、リーナちゃんも復讐するつもりなんですか？」
そう聞くと、シュトリナは笑みを崩さないまま、
「もちろんよ。だって、リーナ、いろいろと嫌なことされたし、言いたいことたくさんあるんだから」
「リーナちゃん……確認したいんですけど、言うだけ、ですか？」
「もちろんよ。乱暴なことなんかしない……」

「本当の、本当に……？」
そうして、ベルはジッとシュトリナの目を見つめる。見つめる……。っと、シュトリナがシュシュッと目を逸らしたのを見て、ベルは小さくため息を吐いた。
「リーナちゃん、お話しておきたいことがあります」
それから、キリリッと、とても真剣な顔でベルは言った。
「ボクの知っている、未来の世界のリーナちゃんは、とても優しい方……優しい？」
と、そこで、ベルは首を傾げる。
「いや、意外とお勉強をサボったりすると、怖い時もあるような……。ダンスの時も……。ま、まぁ、でも、ともかく、リーナちゃんは、だいたい優しい方なんです」
微妙に歯切れ悪く言って、ベルはシュトリナの手をギュッと握りしめる。
「そしてリーナちゃん、言ってました。自分がこんな風に笑っていられるのは、暗殺とか後ろ暗いことにかかわってこなかったからだって。ミーアお祖母さまが、そんな世界を作ってくれたからだって……。ボクはそんなリーナちゃんのことが大好きで……。リーナちゃんと一緒にいる時が大好きなんです。だから、絶対に短気なことをしないでください」
「ベルちゃん……」
いつになく、真剣な声で言うベル。そんなベルを見てシュトリナは深々と頷きつつ、
「もちろん……リーナ、ベルちゃんが悲しむようなことしないよ。うん。そんなこと考えもしなかった」
「本当ですか……？」
「本当。そんなこと、考えなかったもん……ちょっとしか……」
またしても、微妙に目を泳がせながら、シュトリナは言った。こう……若干、気まずそうに。
そんな彼女を逃がさないように、ベルは一歩踏み込む。その気合

の踏み込みは、さながら、彼女の祖父、アベルのごとく！
「もしも、リーナちゃんがボクのために復讐しよう、なんて思うんだったら、そんなことする必要ありません。そして、もしも、リーナちゃんが、自分の気が済まないから復讐すると言うなら、ボクからのお願いです。やめてください」
シュトリナが復讐する理由を力ずくで奪い取ってから、ベルはふわりと笑った。
「せっかく、ミーアお祖母さまが、イエロームーン家が、暗殺にかかわらなくっていいようにしてくれたんですから、それを大切にしてください。リーナちゃんは、もう、誰も傷つけなくってもいいんですから」
「ベルちゃん……」
シュトリナは、感動した様子で瞳を瞬かせてから、
「あ、でも、それじゃあ、ちょっとお腹が痛くなって、十日ぐらい食事が喉を通らなくなるぐらいの……」
「……ダメです」
「じゃあ、三日ぐらい。三日ぐらいお腹が痛くなるお薬なら……」
「まぁ、そのぐらいなら……」
「いや、それもやめてくれ」
話を聞いていたアベルが、思わずと言った様子で止めに入る。それから、
「シュトリナ嬢、こうしてゆっくりと話す機会がなかったが、改めて、謝りたい」
とても真面目な顔で頭を下げた。
「我が姉、ヴァレンティナが迷惑をかけた。ボクで償えることがあれば、なんでも言ってもらいたいのだが……」
「あ、いえ……」
シュトリナは、ちょっぴり慌てた顔をする。けれど、すぐにいつもの可憐な笑みを……いや、どちらかというと、悪戯を思いついた子どものような、ちょっぴり小悪魔めいた笑みを浮かべて、

「……そうですね。それなら、アベル王子、一つ約束をしてください」
「なんだろうか？」
「ミーアさまと、どうぞ仲良くなさってください。温かで、幸せな家庭をお築きください」
「……うん？」
はて、なんのことだろう？　と首を傾げるアベルに、シュトリナは続ける。
「大切なお友だちの家庭の問題なので、少し気になって。間違っても、他の女の人と浮気なんてしないでくださいね」
からかう気満々の笑みを浮かべるシュトリナ。であったが、彼女に答えたのはアベルではなく、その孫娘のほうだった。
「大丈夫ですよ、リーナちゃん。アベルお祖父さまと言えば、ミーアお祖母さまに、ラブラブと評判で。浮気なんて考えられません。もう、見てるこっちが恥ずかしくなるぐらいで」
「なっ！？」
アベルは、思わず絶句する。
そうなのだ……。今までは、姉をなんとかすることだけ気になっていて、まともに考えてはいなかったが……よく考えると、目の前の少女、ベルは、自分とミーアとが結ばれることの証のような存在なわけで……。
そうして、ベルは無邪気な笑みを、シュトリナに向けて。
「リーナちゃんのところに負けず劣らずのラブラブっぷりなんですよ？」
ニッコニコとまるで悪意のない笑みを浮かべたまま、
「こっちも見てるボクのほうが恥ずかしくなるぐらいで……」
「なっ！？　べ、ベルちゃんっ！？」
直後、飛んできた流れ矢に貫かれ、シュトリナが、けふっ！　とむせる。
ベルが無差別に放つ矢は、的確にアベルとシュトリナを貫いた。

その矢は、恋の天使が放つ矢のごとく、二人にとある感情を植え付ける。それは淡い恋……などではなく、同じ被害者であるという強固な共感だった！

それは、サフィアスとキースウッドの間に芽生えたものに似た感情でもあった。ミーアの血筋が取り持つ縁とでも言えるだろうか。

ちなみに、もう一人の同乗者リンシャはといえば、自分のほうに矢が飛んでこないよう、できる限り、存在感を消していたのだった。

かくて、賑やかな復讐者（ハイキッカーズ）たちは一路、ヴァレンティナの幽閉された塔に向かっていくのだった。

第三十二話　ミーア式教育論「五つのキノコグラタンの教え」

「ところで、ラフィーナさま、特別初等部の教員は、ユリウスさんお一人ですの？」
「ユリウスさんに統括してもらって、学園の他の講師陣で対応する予定よ。ただ、最初は、それほど人数は割けないと思う」
ミーアは、ふぅむ、と唸り声を上げる。
――まぁ……ぶっちゃけ、パティさえ上手く教育できれば良いわけですし……そこまでの規模は必要ないんじゃないかしら？
ミーアはパトリシアのほうを見て、ふむ、ともう一度唸る。
「ああ、その子は、もしや、特別初等部の生徒候補ですか？」
「ん？　ああ、そうですわね。パティ、ユリウス先生にご挨拶をなさい」
ミーアの言葉に従い、ちょこん、と立ち上がったパティが挨拶する。
「はい。これからよろしくお願いします」
ユリウスは丁寧に言ってから、優しそうな笑みを浮かべる。
「なるほど。しっかりと教育を受けたお子さんですね。まぁ、セントノエルに通わせようというのですから、それも当然のことでしょうか」
それから、ユリウスは、ふと気が付いたと言った様子で、
「ちなみに、孤児院から送られてくる子どもたちも、やはり、相応の礼儀を身に着けた能力の高い子どもたち、という理解でもよろしいですか？」
そうして、ラフィーナのほうに目を向けた。ラフィーナは、小さく首を傾げてから……ミーアのほうに目を向けた！
生徒会長へのラフィーナの気遣い、それを受けたミーアは意味深に大きく一度頷き……シュシュっとシオンのほうに目を向けた！

そのまま流すのではなく、一度受けて考えたふりをしてからの絶妙なパス。生徒会長三年目にもなると、蓄積してきた経験値が違うのである！

さて、無言で話を振られたシオンは、

「そうだな。こういうのは前例に倣うのが無難なのだろう。ミーア学園では同じようなことをしていると聞くし、基本的にはそれに倣えばいいんじゃないかな？」

「孤児院のほうで選抜して、優秀な子どもを送ってもらうということね……」

そうつぶやいたラフィーナは、少しだけ難しい顔をしていた。

――なにか、気に入らないところがあるのかしら……？

などと思いつつ、ミーアも考えてみることにする。

なにしろ、この場でミーアだけは考えるべきことが違う。ミーアが考えるべきは、どうするのがパトリシアの教育に良いのか、ということだ。

チラリ、と視線を向ける先、お行儀よく座るパトリシアの姿があった。礼儀はなっている。けれど……。一つ懸念があった。

――パティの頭の良さがどのぐらいなのかが問題ですわね……。

自身の祖母、パトリシアが勉学に練達した人であった……などという話は、寡聞にして、聞いたことがない。

であれば、恐らく彼女の学力は並。ないし、それより下だろう。

――もしそうなった場合、お祖母さまに、強力な劣等感を植え付けることになりそうですわ。

ミーアがイメージする優秀な平民といえば、ルードヴィッヒである。

では、例えばの話、周りがルードヴィッヒばかりの学び舎で勉強がしたいか？　と問われると、答えは否である。大いに否である。

――周りがクソメガネばかりで、しかも、毎日、バカにするような視線に晒されでもしたら、とてもではないですけど、心がもちませんわ！

今のルードヴィッヒであるならばともかく、かつてのガミガミ言ってくるルードヴィッヒが周りにたくさんいたら……と考えると、背筋に冷たいものが流れるミーアである。
パトリシアも表情にこそ出さないものの、その辺りの感性は恐らく普通だろう。となれば、下手をすると、性格が歪んでしまって、蛇に付け入る隙を与えてしまうかもしれない。
それは避けたいところだ。
ゆえに……。ミーアは静かに口を開く。まるでこの世の真理を悟った賢者のような口調で、話し始める。
「特別初等部に入学させるのは……普通の子どもたちでいいのではないかしら？　勉強のできる、できないで区別されるのも、それはそれで辛いもの。もちろん、勉強したくないという者を無理に連れてくる必要はありませんけれど、最初から勉強ができる優秀な子に絞る必要はないのではないかしら？」
言っていて、ミーアは若干、不安になる。
なにしろ、ここにいるのは、みな勉強ができる者たちばかりだ。そんな彼らにこの気持ちがわかってもらえるかどうか……。
――まぁ、わたくし自身、勉強はできるほうですし、あくまでもベルとかを見ていて気持ちを想像しているだけですけど……。
などと、おこがましいことを考えていると、賛意を示す者がいた。
ほかならぬ、教師候補のユリウスである。
「なるほど……。わかります。ある著名な教育者の言葉で、こんなものがあります。子は麦のようなもの。育ててみなければ、それがどんな麦かはわからない。実りを迎えてみて、初めてそれが良い麦か、毒麦かがわかる、と。子どもの可能性を論じる言葉ですね」
子どもの時点での能力は、判断の基準にはならない。教育を施した結果を見てみないことには、どれほど優秀な人材になるのかは判断ができない。
それが教育の姿勢である……。ユリウスが言っているのは、そういうことだった。

「ああ、そのとおりですわ。でも……」
ミーアはそれを聞き、少しの納得と、同時に少しの危惧を覚えて、付け加えることにする。
「わたくしとしては、こう付け加えたいですわね。人は麦ではない。ゆえに、生まれながらの毒麦はない、と」
きっちりと、強調しておく！
なにしろ、ミーアはパトリシアを教育しなければならない立場である。では、もしも、今の言葉を蛇に置き換えたらどうなるだろう？　育ててみなければ蛇になるかはわからないから、育ててみよう、とはならないはずである。
むしろ、危険な芽は早めに摘むべき、などという結論になりそうではないか！
「子どもたちがどのような実りをつけるかは、わたくし達の教育次第、そうではないかしら？」
というか、そうでなければ困るので、そういうことにしといてね？　と、眼力（アイコンタクト）で伝えておく眼力姫ミーアである。
それから、再び辺りを確認すると……っ！？　みなの顔には深い納得の色が見えた！
「なるほどな。ミーアの言うことに一理ありそうだ」
「そうですね。現時点での学力は、あまり考慮に入れないほうがよさそうな気がします」
頷くシオンと、考え深げにつぶやくティオーナ。他の面々も、なんだか、ミーアに尊敬の目を向けているようで……。
――おっ、これは……もしや、いいことを言ってしまったのではないかしら？
すっかり良い気分になるミーアである。
――うふふ、やはり、お昼が美味しいと、わたくしの頭は冴え渡りますわね。あの五種のキノコグラタン、とても美味しかったですしね。あの歯ごたえといい、チーズの焦げ具合といい、実にお見事な味で……。ああ、思い出しただけでも口の中に幸福感が広がって

いきますわ。
などと……ついつい余計なことを考えている間にも、話し合いは進んでいて……。
「ミーアさん……ミーアさん、どうかしたのかしら？」
「はぇ……？」
ふと我に返ると……ラフィーナが不思議そうな顔をしていた。
――あっ、まずいですわ……。
不意を突かれたミーアは、若干焦る。さすがに、食べ物のことを考えてボーっとしていた……などと素直に応えられるはずもなく……。
なんと誤魔化そうかなぁ、とミーア、しばしの黙考……その後、とりあえず、褒めておくことにする。セントノエルの学食を褒められれば、ラフィーナだとて悪い気持ちはしないだろう、と……。
「ラフィーナさま、お昼はもうお食べになりましたかしら？」
「いえ、まだだけど……」
「それならば、五種のキノコグラタンがとてもおススメですわ」
「ああ。ふふふ、あれね。あれは、ミーアさんのためにお願いして用意してもらったものよ？　キノコは体にもいいっていうから」
「まぁ、そうでしたのね？　ありがとうございます。とても楽しめましたわ」
そう言ってから、ミーアは、うっとりとした顔で続ける。
「あの五種類の歯ごたえが違うキノコを使ったのは、実にお見事。弾力に合わせて、それぞれの厚さを調節して、一番美味しい形を模索しているのも、素晴らしかったですわ」
それから、ふと、ミーアは言った。
「そう、あのキノコが子どもたち、料理をするのがわたくしたち……教育とはそういう感じではないかしら？」
「キノコを……料理？」
ガタッと……音を立ててキースウッドが立ち上がったが……理由がよくわからないので、放っておいて。ミーアは話を続ける。

「子どもたちはそれぞれに違いがある。生まれ持った才には違いがあり、だから、成長した姿ももちろん違う。けれど、食べられるキノコには変わりはない。それを適した形に整えて美味しく食べられるようにしてあげることこそが、大切なのではないかしら？」

そう言って、ミーアは、内心でほくそ笑む。

――これは、上手くまとまりましたわ！　会議の途中で、食べ物のことを考えていたのを上手いこと誤魔化せましたし。そのうえ、学力が未知数のパトリシアを見捨てさせない言い訳にもなった。これは、まさに、ウサギを追う者、キノコをも得る、ではないかしら？

……ちなみに、一つの行動で二つのメリットを得るというミーア格言の一つである。

第三十三話　共感と嘆きと希望的観測

――あ……焦った……。ミーアさまの、たとえ話か……。

ミーアが大満足で笑っているのを尻目に、キースウッドは、何気ない風を装って、椅子に腰を下ろし……ふぅうっと深いため息を吐く。

――さすがに、キノコ料理を作りたい、などと言い出されたらお手上げだったな。

ただでさえ、ラフィーナという強大な敵を相手取らなければならないのだ。そのうえ「キノコ料理が作ってみたい」などと言うミーアが出現しては……もはや降参するしかない。

狼二匹を相手に戦えと言われて、さらにそこにディオン・アライアが敵として出現したような……そんな絶望感に一瞬襲われたキースウッドであった。

――まぁ、しかし……よくよく考えてみれば、そうそう悪いことばかり起こるはずもない。そうだ、ラフィーナさまに教える件だって、実際には、それほど絶望的状況ではないのかもしれないな。俺としたことが、いささか冷静さを欠いて、過度に絶望視しているだけなんじゃないか？　ラフィーナさまが、ミーアさまたちより料理ができるという希望だってあるわけだし……。

サンドウィッチのことをお願いされた後のことだ。ラフィーナから直々に呼び出しを受けたキースウッドは、そこで、こんなことを言われた。

「パンを馬の形にしたサンドイッチなんて、挟むのが難しそう」

と……。

その一言に、キースウッドは希望を見出した。すなわち、ラフィーナはサンドイッチを作ったことがあるに違いない、と。

だって、作ったことがなければ、挟むのが難しいだなんて、思う

はずがない。だから、彼女は経験者だ。そうに違いない……そうであってほしいなぁ！　などと……淡く儚い希望を持ってしまったのだ。

――だから、ふたを開けてみれば、ミーアさまたちを相手取るより遥かに楽だということもあり得るな。うん、あり得る！

……基本的に、キースウッドは現実主義者である。

戦いに慣れた狼を相手取った時も、決して勝てるなどと楽観視しなかった。むしろ、自分にできるギリギリを見極め、最善の立ち回りをした。そういう男である。

希望的観測に身を委ねる愚は、重々承知している。にもかかわらず……、この問題に関しては希望的観測にすがりがちなキースウッドである。

今回の場合、そうしたほうが心の平和を保てるだろうと、彼の本能が告げているのだ。

――しかし、まぁ、そんなことより、ミーア姫殿下は変わらないな。

気を紛らわすようにつぶやいて、彼はミーアに視線を戻した。

ミーアの言葉、特別初等部の生徒の選考基準のこと。

――国の別を問わず……才の多寡を問わず……その才が生かされないことを許さない。これは、あの剣術大会の時、アベル王子に向けたものと同じだ……。

差別なく、区別なく、その者を一人の人として見る。その者の可能性を見る。そのうえで、それが開花しないのは許さないという姿勢。

それは、聖ミーア学園でも見られたものではあったが、ここ、セントノエルではさらに研ぎ澄まされているようにも思えた。

――才を評価して取り立ててくれる王は善王だ。その王にアピールするように自らを高める生き方、努力に報いてくれる王の下で生きるのは、ある意味で幸せな生き方と言えるだろう。どれだけ努力しても、評価されないよりは、よほど幸せなことで……だけど、そ

れは同時に、才を失った時に寵愛を失うのではないか？　という不安に苛まれる生き方でもある。
幼き日にエイブラム王に拾われ、シオンと兄弟のようにして育てられたキースウッドには、その気持ちはよく理解できた。
王や王妃の人柄はよくわかっている。尊敬し、敬愛し、信頼している。
けれど、もしも無能を曝したら捨てられるのではないか、という不安は、本能レベルで、彼の心に刻み込まれていた。
だからこそ、自らの剣の才を、弛むことなく鍛えて、伸ばし続けたのだ。
――そのおかげでサボらずにいられたと考えることもできるが……ミーア姫殿下は違うのだろうな……。
それが、今の五つのキノコグラタンのたとえ話だろう。
ミーアは別に、天才を求めてはいない。才の大きさは問題ではない。
ほどほどの才であったとしても、その才が生かされる道を探してあげること……。それこそが国の上に立つ者の務めであると、彼女は言っていたからだ。
民をキノコとするならば、その味を見極めて、料理するのが統治者である自身の務めであると……。
その良さ、悪さを理解し、ただ、その者の最善の生き方を模索し、用意してやること。それがミーアの出した答え。
――捨てられるかも、という危機感により才を伸ばす者はいるだろう。だが、ミーア姫殿下はその逆。恩を与え、その恩に報いよ、と奮起を促すのだ。その者が生きる場所を用意し、そこで最大限、自分の力を尽くせ、というのだろう。
先に大恩を与え、お前にできる最善の忠義で返せ、という……その姿勢に、キースウッドは、思わず感嘆のため息をこぼした。
――なるほど、この人は善王の器を持っている。いや、普通の善王ではない……。

その、あまりの器の大きさに、キースウッドは心から感心して……同時に、ついつい、こうも思ってしまう。
――その才の一部でも、料理のほうに割いてくだされば な……。
いや、まぁ、完璧な人間がいない以上、仕方のないことであるのはわかっているのだが、ああ、でもなぁ……。
ラフィーナとの料理教室を想像し、思わず、キースウッドは天を仰ぐのだった。

……キースウッドは知らなかった。
ミーアのように、周りを頼れば……案外、助けてくれる人というのはいるもので……。
ラフィーナのメイドのモニカが……まぁまぁ、それなりに料理ができるということを、キースウッドが知るのは、もう少し後のことであった。

第三十四話　眠れぬミーア（ミーア比）の悩み事

その後もいくつか議題を片づけて、その日の会議は終わった。
心地よい疲労感をお風呂のお湯で洗い流し、美味しい夕食とデザートで舌とお腹を満たしてから、ミーアはベッドに倒れこむ。
「ふわぁむ……なかなか、有意義な会議でしたわ。ユリウスさんも頼りになりそうな方で良かったですし」
優しげな……〝眼鏡をかけた〟顔を思い出す。
――あの眼鏡、実に安心感がありますわ。あれならば、パティのことを任せてしまっても……。
などと、安堵して、そっと目を閉じて……。
――本当に、そうかしら……？
ふと、嫌な予感がして、ミーアは目を開けた。
――確かに、頼りになりそうな方ではありましたけれど、あの方は蛇のことを知らない。そして、そもそもわたくしがすべきことは、パティにより良い教育を行うことではない。パティを蛇の教えから救い出すことですわ……。であれば、任せっぱなしにできるはずもなし……。
ミーアは、ふむむ、と唸ってしまう。
――それに、よくよく考えてみれば、あの方はもともと『帝国貴族』でしたわね。
嫌なことまで、思い出してしまう。
帝国貴族……それは、ミーアにとって不信の証である。
前の時間軸において、ミーアは、信頼のおける帝国貴族というものにほとんど会ったことがない。
帝国貴族という響きには、眼鏡の権威に拮抗しうる不信感を持っているミーアである。
――凋落したと言っておりましたけれど、油断は禁物。一応、調

べておくに越したことはないですわね……あ。そうですわ。
とそこで、ミーアは良いことを思いついた。そうして、隣のベッドで眠るパトリシアに声をかけた。
「パティ、まだ、起きておりますの？」
「……ふぁい？　なにか、御用でしょうか？　ミーアお姉さま」
目元をこすりこすり、パトリシアが上半身を起こした。
「ちょっと聞きたいことがあるのですけれど……」
ちなみに、現在、アンヌは就寝準備に行っている。深夜にミーアが起きた時、もしも喉が渇いていて食堂に行くことがないように（別に、暗い中を食堂に行くぐらい、ミーア的には何でもないのだが……全然怖くなどないのだが……）水を汲んでおいたり、食堂のスタッフなどに挨拶にいったり、専属メイドは寝る前まで忙しいのだ。
ともかく、そんなわけで、今は部屋の中にはミーアとパトリシアしかいない。多少、キワドイ話をしても大丈夫だとは思うが……。
「ふむ、念のためですわ。パティ、わたくしのベッドに来なさい。そこで、少しお話しましょう」
「……はい、わかりました」
わずかの間、その後、パトリシアがミーアのベッドに移動してくる。
「それで、お話とはなんですか？」
淡い月明りに照らされたその顔には、いささか困惑の色が見て取れた。
「ええ。今日の午後の会議のことを少しお話しておこうと思ったのですわ。あなた、もしや、オベラート子爵という名に心当たりがあったりはしないかしら？」
今は凋落したとはいえ、パトリシアの時代にはそうではなかったはず。となれば、噂ぐらいは聞いたことがあるのでは？　という予想は、見事に的中し……。
「はい。聞いたこと、あります」
こくり、と頷くパトリシアに、ミーアは思わずほくそ笑む。

――ほほう。これは好都合ですわ。どんな家か聞いておきましょう。
などと、ニンマリしていると……。
「それはテスト、ですか？」
「はて、テスト……？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、パトリシアは抑揚のない声で言った。
「オベラート子爵は、好色な人。美しい女が弱点で、誘惑し操るのは簡単です。黒い髪が特に好みらしく、身分の低い女に子を孕ませることもしばしばで、跡取りに問題が……」
「ちょちょちょっと、パティ！　そ、そこまでですわ」
幼い子どもの口から、子を孕ませる、などという言葉が出てきたので、若干、狼狽えてしまうミーアである。
「そっ、そんなことを、誰から聞きましたの？」
「？　先生です」
「せ、先生……？　ああ、クラウジウス家の教育係ですわね」
などとつぶやきつつ……ミーアは改めて、蛇の恐ろしさを思う。
――心を操るのは蛇の得意とするところ……。そう聞いておりましたけれど、帝国貴族の性格をきちんと調べておりますのね。これはなかなかに厄介な……。
帝国を意のままに操るため、人を意のままに操るため。蛇の用意周到さには、相変わらず驚かされるミーアである。
――しかし……イエロームーン家は、蛇そのものというよりは、初代皇帝の怨讐（おんしゅう）に縛られた人たちでしたけれど、クラウジウス家の場合は、より蛇の影響を強く受けた家柄だったということかしら……。まぁ、基本的に蛇というのは、統一された組織というわけでもないですし、そういうことがあってもおかしくはないと思いますけれど……。
「正解ですか？　ミーア先生」
ふと見ると、パティがジッと見つめていた。

上目遣いに見つめてくる瞳、そこに底知れぬ暗い色を見て、ミーアはかすかに背筋を震わせる。
「え、ええ。大丈夫ですわ。合ってましたわ。さすがですわね、パティ」
「そう……。良かったです」
っと、パティは静かにため息を吐いた。途端に、わずかに崩れた表情、そこに浮かぶのは、安堵だった。それから、パトリシアは再び、見つめてきて、
「お話は、それだけでしょうか？　もう、戻っても？」
「ええ。構いませんわ。良い夢を」
そう言ってやると、パトリシアは、ニコリともせずに頭を下げて、
「良い夢を。ミーアお姉さま」
立ち上がり、律儀に、寝間着の裾をちょこんと持ち上げてから、自らのベッドに戻っていった。
その後ろ姿を眺めながら、ミーアは思わず考えてしまう。
――ふぅむ、この先、パティのこと、どう扱ったものかしら……？　それに、オベラート子爵家のユリウスさん……。やっぱり彼に任せきりにはできなさそうですわ。ううう、またしても悩み事が増えてしまいましたわ！
などと、今日もまた眠れぬ夜を迎えてしまうミーアであった。
……ちなみに、しばらくして部屋に帰ってきたアンヌが発見したのは、ぐっすりと意識を失い、ベッドから落ちかけているミーアの姿であった！

第三十五話　ミーア姫、密告される！

天牢塔（てんろうとう）――それは、ヴェールガ公国南方にひっそりと建てられた白い塔だ。

滑らかな手触りが特徴の白流花石（しらるか）を積み上げて作ったその塔は、極めて美しく、荘厳な監獄だった。

「ふわぁ……」

巨大な塔を見上げて、ベルはぽかーんと口を開けた。

「すごい……。ミーアお祖母さまの像とどっちが大きいだろう……？」

などと……ものすごーく！　不穏なことをつぶやいていたが、あいにくと、ミーアがそれを聞くことはなかった。かくして、ミーアの心の平穏は守られたのである。

……そうだろうか？

「なるほど。ここから脱出するのは、難しそうね」

一方で、冷静に塔を観察していたのは、シュトリナだった。塔の表面を細い指先で撫でて……それから、改めて頂上を見上げる。

「すごく高いし、掴まる場所もない。外からじゃあ狼使いでも、さすがに登れないだろうし……。ここを登れるとしたら、ディオン・アライアぐらいかな……あっ……」

そうつぶやいたシュトリナは、直後に、ハッとした顔をした。無意識につぶやいてしまった名前……それを聞かれてはしないか、と恐る恐るベルのほうを見る。っと、ニマニマ、笑ってるベルがいた！

「うふふ、やっぱり、リーナちゃん……」

「なっ、ちが、もう！　ベルちゃん！」

ポカポカと手を振り回して向かってくるシュトリナを、笑顔で迎え撃つベル。

キャッキャとイチャつく令嬢たち。

そんな彼女たちを尻目に、リンシャは、ふん、っと鼻を鳴らした。
「逆に命を絶つのは簡単そうですけど」
「ああ、そうだね。ボクも最初は心配していたんだけどね……。飛び降りられるような窓がそもそもほとんどない上に、窓にも鉄格子が入ってるんだ」
リンシャの懸念に応えるように、アベルが指さした。その先には、確かに鉄格子がしっかりとはめられた窓があって……。
「あら、そうなんですね。てっきり、収監している人間が飛び降りるのを待つ施設なのかと思った」
そうして皮肉っぽい笑みを浮かべるリンシャである。没落した貴族令嬢にして、革命に走った兄を持つリンシャである。その視線は、極めてドライなものだった。
「なるほど。死罪にできない厄介な囚人が、自ら命を絶つのを待つための場所か。それは、あまりいい趣味の場所とは言えないな」
苦笑いを浮かべつつ、アベルは肩をすくめた。
「まぁ、実際のところ、ヴァレンティナ姉さまは、ラフィーナさまの手にも余る存在なんだろうけどね」
そんなことを話しつつ、一行は塔の入口へ。
そこで待っていたのは、
「おひさしぶりです。アベルさま」
「やあ、モニカ。元気にしていたかい？」
「はい。少々忙しくて、学園のほうには帰れていませんが……」
元風鴉にして、ラフィーナのメイドを務める女性、モニカ。
彼女は、巫女姫ヴァレンティナの捕縛以来、もろもろの後片づけや調整のために、国内を走り回っているらしい。今日は、アベル一行の面倒を見るため、この塔にて待機していてくれたのだ。
「相手は蛇の巫女姫ですから、万一のことがあってはならない、とラフィーナさまから同行するように仰せつかっております」
モニカは、静かに頭を下げると、そのまま、四人を塔の中へと誘った。

頑丈な入り口の扉を抜け、監視の兵の間を通り過ぎた先、延々と続く階段が見えた。
「こ……これを登るの？」
辟易した顔をするリンシャに、ベルが笑みを浮かべた。
「リンシャか……、さん、運動は今の内からしておかないと、腰とか膝とか、痛くなっちゃいますよ？　最近、よく体の節々が痛くなるって、嘆いてましたから」
「お、恐ろしいことを言うのはやめてください。ベルさま」
無邪気なベルに突き刺され、うぐぅ、っと胸元を押さえるリンシャだったが、すぐに、ふん、っと気合を入れて、階段を登り始めた。

長い階段を登る。一段、一段と、巫女姫が近付いてくるにつれて……シュトリナは、緊張に顔を強張らせた。
あの、蛇の廃城でのことを思い出す。
大切なもの……大切なお友だちを奪われた……あの時の恐怖が甦ってきて、思わず、手に力が入って……。その時だった。
「リーナちゃん……」
ふと横を見ると、ベルが真剣な顔で見つめていた。
「……なに？　ベルちゃん」
ベルは、とてもとても……生真面目な口調で、言った。
「ヴァレンティナ、さんを、ボクは何と呼べばいいんでしょうか？」
「……ん？　えっと……」
「大伯母さま？　でしょうか……。ヴァレンティナ大伯母さま、とか？　いえ、それとも……」
その、いつもと変わらないのんきな様子に、シュトリナは思わず吹き出してしまった。それと同時に、肩に力が入りすぎていたことを自覚する。
そうだ。あの時、奪われたと思ったものはすぐそばにいる。自分の隣で微笑んでくれている。だから、なにも恐れることはない。
「うん、ありがとう。ベルちゃん……」

「？　別に、お礼を言われるようなことはなにも……」
と、首を傾げるベル。その手をさっと取って、シュトリナは笑った。
「一緒に、巫女姫を蹴り上げてやりましょう」
「ふふふ、そうですね。ミーアお祖母さま直伝のキックをお見舞いしてあげましょう」
それから、ベルは朗らかな顔で、
「あ、そうだ。リーナちゃん、知ってますか？　嫌な男の子は、こう、足と足の間を蹴り上げてやるといいみたいですよ？」
ぶん、ぶん、と足を振りながら、微笑むベル。一方、突如、はしたないことを言い出したベルに、かっちーんと固まるシュトリナである。
「えっと……。ベルちゃん、それ誰から聞いたの？」
「へ？　もちろん、ミーアお祖母さまですけど……」
「……そっか。うん、わかった。ミーアさまには、しっかりと言っておかないとね……。ね、リンシャさん」
「ええ……そうですね。たぶん、レムノ王国での経験譚なんでしょうけど……変なことを教えないように、しっかりと言っておいたほうが……よさそうですね」
ものすごく生真面目な顔で頷くリンシャである。
こうして、ミーアお祖母さまに、リンシャとシュトリナから教育的指導が入ることが決定するのだった。
そんな賑やかなやり取りを交わしつつ、階段を登ることしばし。一行の目の前に重たい木の扉が現れた。
「準備はいいかな？」
振り返り、アベルが問う。リンシャが、ベルが頷き、最後にシュトリナが頷く。一呼吸の後、アベルは扉を開けた。
「失礼します。ヴァレンティナお姉さま」
「あら……アベル。また、来たのね」
中から聞こえてきたヴァレンティナの声には、ほんの少しの呆れ

が含まれていた。
「ふふふ、三日前まで、ゲインが来ていたのよ？　あなたたち、いい加減に姉離れしないと……ゲインはどうせモテないからいいとしても、あなたは意中の女の子に逃げられてしまうわよ？」

かくて、一行は、再び巫女姫と対峙することになった。
その復讐の帰結が、どこに行き着くのか、今の時点で知る者は一人もいなかった。

番外編　ミーア姫、飛び火する（前書き）

今日はミーアはプチ夏休みなのです。

番外編　ミーア姫、飛び火する

「誰もがミーア・ルーナ・ティアムーンのように振る舞えるわけではない」

「不幸なことに、うちの領主さまは、ミーア姫殿下ではないのだ」

それは自国の貴族の不甲斐なさを嘆く、諦観の定型句として知られる言葉である。

その言葉を最初に言ったのは、中央正教会の聖人『皮肉屋のヨルゴス』であったと、歴史書は伝えている。けれど、彼がその発言をするに至る、きっかけとなる出来事が語られることは少ない。

これは、歴史の裏に隠された、とある姉弟と神父のお話である。

ガヌドス港湾国の、狭い路地を二人の子どもが走っていた。

生ごみが腐ったような、ねっとりとした臭い。肌にまとわりつく、悪意の空気を振りはらうように懸命に手足を動かしながら、前を行く姉が声を上げた。

「急げ、キリル！　急がねぇと捕まっちまうぞ！」

ボロボロの服に身を包んだ年端もいかない少女だ。ボサボサ伸ばした前髪から、子どもには似つかわしくない、ギラついた瞳が覗いている。

「ま、まって、ヤナおねぇちゃん」

その後を追って走るのは幼い男の子だった。少女と同じ、ボロボロの服を着ていた。

姉のほうは十歳に届くかどうか、弟のほうはそれよりさらに幼い。まだまだ、親の庇護を受けなければならない、年頃の姉弟だった。

そんな幼い姉弟を追いかけて、大柄な男が走ってくる。

「待ちやがれ、ガキども！」
怒気を秘めた低い声、ゴワゴワの髭を生やしたその顔は、実になんとも悪党面で……こんな男に怒鳴りつけられでもしたら、多くの子どもはトラウマになってしまいそうだった。
……ちなみに、いかにも物騒な雰囲気を発するこの男だが……漁師である。この道二十年のベテランで、とても腕の良いまっとうな職人である。
さて、そんな漁師と姉弟との追走劇だが、その幕切れは呆気ないものだった。
「ひゃんっ！」
弟のキリルが、道に足を取られて、転んでしまったのだ。
「キリルっ！　くそっ……きゃあっ！」
慌てて戻ってきた姉……ヤナだったが、直後、その腕に走った痛みに悲鳴を上げる。
「捕まえたぞ、ガキが」
ひねり上げられるは細い腕、幼いその手に握られていた魚が地面に転がり落ちる。
「よくも、俺らの採った魚を……」
「ヤナねえちゃんを放せ！」
漁師の太い腰に、キリルがタックルする。けれど……残念ながら、海で鍛えられた大男に、幼い少年の攻撃が届くはずもなく。
漁師は怒りに任せて、キリルを蹴り飛ばした。
「やっ、やめろ！　キリルに乱暴するな！」
バタバタと手足を動かすヤナを漁師は鼻で笑い飛ばす。
「はん！　盗人のガキが、生意気な口を利いてんじゃねぇ！」
直後、漁師が腕を振り上げる。大きな握りこぶしを見て、ヤナは思わず目を閉じる。
が……助けは意外な方向から現れた。
「我らの神は、子どもを愛し慈しむ神だ。その神の家の前で子どもを殴るというのは、いささか恐れを知らぬ行為ではないかね？」

突如響いた静かな声。恐る恐る目を開けたヤナは、そこに、いかにも不機嫌そうな顔をした男が立っているのを見た。ひょろりと背の高い、細身の体を覆うのは黒い神父の服だった。

神父は、そのままゴミ箱のほうに向かうと、キリルを助け出してから、改めて漁師に顔を向ける。

「これは失礼しました、神父さま。まさか、こんな掃きだめみたいな裏道に教会があるとは知らなかったもので……」

へへへ、とへつらうように笑う漁師に、神父はため息混じりに肩をすくめる。

「なに、私のような皮肉屋は、貴族からは好かれんのでね。それに、道徳心が必要なのは、どちらかといえば掃きだめのほうだろう……。まぁ、その点、高貴なる身分の方々も、心の中は掃きだめというのが多いらしいが……」

さらりと暴言を吐いてから、両手を後ろで組んで、神父はヤナを見た。

「それで、この子たちは何をしたのかね？」

「こいつの面を見てわからねぇのかい？　神父さん。こいつは、盗人の子どもさ」

そうして、漁師は乱暴にヤナの前髪を持ち上げた。乱暴に髪を引っ張られ、ヤナは痛みに歯を食いしばる。露わになる額……そこに、あるものがなにか、ヤナはよくわかっていた。

弟と自分に入れられた消えない証、自身のルーツを現す、それは「目」の形の入れ墨。

それを見た神父は、不機嫌そうに眉をひそめる。

「三つ目の入れ墨。なるほど、海賊の子というわけか……」

かつて、港湾国近辺に住まう海の民がいた。討伐され、散り散りにされた彼らは、今でこそただの海賊扱いではあったが、もともとは一つの民族であった。

そんな彼らが育んだ独自の文化の中に、一族の印として、額に目の入れ墨を彫る、というものがあった。それは、親が子に刻む、絆

の証。されど、一族が滅ぼされた今となっては、それは、海賊の子という蔑みの証に過ぎない。
「だが、それはこの子の罪ではあるまい」
その指摘に、漁師は呆れたように首を振る。
「盗人の子は盗人ってことさ。俺らがとってきた魚を盗みやがったんだ」
その言葉に、神父の目がチラリ、とヤナの足元を見た。そこには、干した魚が二匹、転がっていた。
「なるほど。その魚、いくらかね？」
「おいおい、やめとけよ、神父さん。盗人を助けたって、また同じことをするだけだぜ？」
「そう思うなら、次からお仕置きは、私の目が届かないところでやってもらおうか。子どもが暴力に晒されているのを目の前に、神父が、見て見ぬふりなどできるはずがないだろうに」
実に面倒くさそうにため息を吐いて、神父が硬貨を漁師に渡す。
「難儀なもんだねぇ。神に仕えるってのも」
「なに、大したことじゃない。私は、魚が好物なものでね」
神父は、魚を拾い上げてから、ジロリと漁師を睨んだ。
「それで、その子たちを放してもらえるのかね？」

漁師の手から逃れると、ヤナはすぐにキリルのところに走った。きょとん、とした顔で自身を見上げてくる弟に、ヤナはとりあえず安堵のため息を吐く。
「よかった。怪我はないようだな……」
「おい、小僧ども」
ふと見ると、神父が睨んでいた。
思わずムッとして、ヤナは言い返す。
「余計なことしやがって……。それに、小僧じゃない」
そう言ってやると、神父は、変わらず不機嫌そうな口調で、
「貴婦人扱いしてもらいたいなら、身なりと、その乱暴な口調をな

んとかすることだ。それより……」
と、彼は、さらに不機嫌そうな顔で、自身の持つ魚を見て……。
「この魚は私が買い取ったわけだが……どう責任を取るつもりかね？」
「どういう意味だよ？」
首を傾げるヤナに、神父は眉をひそめて、
「私は、魚が大嫌いでね。とてもではないが、こんな生臭いものを食べられない。といって、神に仕える身が、食べ物を粗末にするわけにもいかない。お前たちに、責任を取って食べてもらうことにするから、逃げるんじゃないぞ」
それだけ言い残すと、神父はさっさと、古びた教会堂の中に入って行ってしまった。
その後を追って、しぶしぶ教会の中に入ったヤナは、その日は、教会で過ごすことになった。
焼いた魚を食べ、水浴びをさせられ、着替えさせられて、それから、粗末ながらベッドを与えられる。
「これが、孤児院ってやつか……」
教会には自分たち以外にも身寄りのない子どもたちがいた。
自分自身の子どもでもないのに、こうして衣食を与えて、養ってくれる。なんの得にもならない慈善事業……、そんなものをヤナは信用していなかった。
大人は信用できない。同じ子どもだって、信用なんかできない……そう思っていて、だから……。
翌日、渋面の神父から、出ていくように言われても特に傷つきはしなかった。
いつものことだ。落胆なんかしない。しないけれど……嫌味の一つも言いたくはなる。
「てっきり、ここに閉じ込められるもんだと思ってたよ。ここは、孤児院ってとこだろ？」
ふてくされたように言うヤナを、神父は鼻で笑い飛ばした。

「ここに置いてもらえると思っていたか？　残念だが、ここでは無理だ」
「……あたしたちが、三つ目だからか？」
「そうだな。その認識は正しい」
にべもなく言われても、ヤナに失望はなかった。
教会に来れば助かる。孤児院で、食事にありつけて、安心して寝られる……。そんな甘い話があるわけがない。
むしろ、売り飛ばされなくてよかったと安堵すべきだ。
酷い目に遭わされることなく、殴られることなく……。食事を食べられて、泊めてもらえただけ幸運だったのだ。
――やっぱり、大人なんか信用できない……。大丈夫、頼ったりなんかしないから、裏切られることもない。
神父は、一枚の羊皮紙をヤナに差し出した。
「お前たちには、ヴェールガ公国に行ってもらう」
「ヴェールガ公国？」
首を傾げるヤナに、神父は心底面倒くさそうな顔で首を振る。
「ああ。そこにある学校に入れるための子どもを送れと連絡があってな。だが、うちの孤児院には、この辺りにルーツを持つ者が多い。孤児院を出た後も、この近くで生きていくほうが都合がいいだろう」
「そこにちょうどよく、あたしたちが来たってわけか」
「そうだな。お前たちは、逆に、この地では生きにくかろうよ」
「あたしたちが、どうして都合よく、あんたの言いなりになるって思うんだ？」
そう言って睨みつける。と、神父はきょとんと首を傾げて、
「まぁ、好きにすればいいさ。ただし、次に、漁師に捕まった時には、都合よく助けが入るとは思わないことだ」
突き放すような冷たい言葉……。ヤナは、悔しさにただ唇を噛みしめる。
それでも、神父の言葉に従ったのは、彼の言葉に正しさを見出したからだ。

確かに、この国で弟と生きていくことは難しく……。だから、もしも、神父が国から出る手助けをしてくれるなら、いっそ『利用してやろう』と……。そう思ったからだった。
「わかった……。あんたの言うとおりにしてやる」
そう頷いたヤナに、神父は、一言。
「そうか……」
と、返すのみだった。

ただ一人で、弟を守らなければならない状況。
もしも警戒心を解いて、裏切られでもしたら、自分だけでなく、弟も終わってしまう境遇だったから……。心を固く固く閉ざしたヤナは、気付くことができなかった。
この神父が、恐ろしく口下手で、子どもの扱いが、とんでもなく下手くそであるということ。
そんな彼が、できる限りの優しさを自分たちに示してくれていたことも……。
それに彼女が気付いたのは、セントノエルでの生活が始まって、しばらくしてからのことで……。

後日、セントノエルから神父に一通の手紙が届く。
不機嫌そうな神父ことヨルゴスへの手紙……そこに何が書かれていたのかは、定かではない。
ただ、その手紙を読んだ時、彼の顔には、いつもの皮肉げなものとは違う、穏やかな笑みが浮かんでいたという。

番外編　ミーア姫、飛び火する（後書き）

キャラが増えてきましたが、基本的にこの姉ヤナと弟キリルと初等部教師のユリウスだけ覚えておけば大丈夫です。あとパトリシア（パティ）

ヨルゴス……？　漁師？　うん、忘れても平気です。

近々、キャラ紹介も更新しよう。うん……。

第三十六話　ミーアの違和感と遠き助言者

帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンの寝覚めは悪くない。早寝早起き、毎日リズムよく生活する。それは、ミーアの怠惰を許さない、忠義のメイドアンヌの働きかけの賜物と言える。

そんなわけで、ふわああむっと、あくびとともに目覚めたミーアは、ベッドの上でのびのびーっと体を伸ばす。

そして、そこで最初の選択肢が訪れる。

このまま着替えるのか、あるいは朝風呂としゃれこむのか、である。

「ふむ……そうですわね」

ペタペタと服を触り、それから、腹をさすって空腹具合を確認！

我慢できないほどの空腹ではない。急いで着替えて食堂に行く必要はなし！　となれば……。

「特に寝汗をかいているわけではありませんけれど……。今日は特別な日ですし」

などとつぶやいていると、アンヌが部屋に戻ってきた。

「あ、ミーアさま、おはようございます」

「おはよう、アンヌ。良い朝ですわね」

上機嫌に笑ってから、ミーアは言った。

「これから、浴場に向かいますわ。準備をお願いできるかしら？」

その問いかけに、アンヌは堂々と頷き、

「はい。すでに」

すちゃっと、ミーアの着替えセットを掲げる。ふわふわのタオルと着替え、ミーアお気に入りの洗髪薬に、体を洗うための石鹸。さらには、お肌に塗るための香油を入れたカバンである。

「あら、準備がいいですわね」

「今日は特別な日ですから、身を清めてから迎えたいのではないか

と思いまして」
以心伝心、自分の気持ちを完全に理解していてくれる忠義人に満足げに頷くミーア。それから、まだ、ベッドで寝ているパトリシアを見て……。
「それでは、もう少ししたらパティを起こして、それから、朝風呂としゃれこみましょう」
そう、今日は特別な日。
今日は、特別初等部の生徒たちをセントノエル学園に迎える、大切な日なのだ。

生徒会での会議から早十五日。
聖女ラフィーナの号令は、早馬によって大陸各国に届けられた。
けれど、内容が内容だけに、反応は鈍かった。
貧しい民草の子どもや孤児たちに、高度な教育を施そうという考えには賛成できても、場所がセントノエル学園と聞くと、どうしても気後れしてしまうもの。
結果として、特別初等部の最初の生徒は六人ということになった。
「パティを含めて七人であれば、まぁ、ちょうどよいかもしれませんわね……」
「おはようございます、ミーアお姉さま」
っと、ミーアとアンヌの会話が聞こえたのか、パトリシアが起き出してきた。
眠たげに目元をこしこしこすりながら、ふわぁっとあくびをする。
「おはよう、パティ。寝汗を流しにいきますわよ。準備なさい」
「はい。わかりました」
こくり、と素直に頷いて、パトリシアが手際よく自分の着替えを用意し始める。それを見て、ミーアは、ふーむ、と唸ってしまう。
――なんか、この子、違和感があるのですわよね……。
首をひねりつつも、ミーアは、パトリシアを伴って大浴場へと向

かう。
パトリシアに関して、疑問に思うことはいくつかあった。例えば、入浴がそうだ。
パトリシアは一人で服を脱ぎ、自分で体を洗うことができる。
最初こそ、アンヌの手を借りてはいたものの、今では自分一人でこなすことができている。唯一、できないのは髪を洗うことである。
アンヌがそっと動き出そうとするのを、ミーアは右手で制し、
「大丈夫ですわ、アンヌ。ここは、わたくしが……」
そう言うと、ミーアは上機嫌に洗髪薬を手のひらに出した。お気に入りの、馬印（うまじるし）の洗髪薬を！
それを、しゃこしゃこと泡立ててから、パトリシアの髪につけて洗い始める。
ギュッと目を閉じ、体を固まらせるパトリシア。動きがないから、実に洗いやすい。
「うふふ、なんだか、馬の毛を洗っている感覚ですわね」
それは、馬術部での経験が生きたとも言えるが……ミーアが馬シャンの秘密に迫りつつある、ということでもあるのかもしれない！
ともあれ、パトリシアの髪を洗いつつ、ミーアはやっぱり思う。
――ううむ、やっぱりなんか変な気がしますわ。
パトリシアから感じる違和感。それは、ある種の『慣れ』と言ってもよいものだった。
服を脱ぎ、体を洗うこと。大貴族の令嬢であれば、これを自分ですることは珍しい。たいていは召使の手を借りてするからだ。
過去の経験上、ミーアは自分でいろいろできたほうがいいと思っているから、大体のことは自分一人でできるようにしているが、普通はこうはいかない。
にもかかわらず、パトリシアは、ごくごく普通にそれをする。貧民街で育ったベルのように、それをいとも簡単にして、戸惑う様子もない。
……ただ、最初の内、

「貴族の令嬢がこういったことをするのは変なのでは？」
と怪訝な顔をしていたが。
その反応もまた、考えてみるとおかしい。生まれながらの貴族のご令嬢は、なにが“それらしいのか”なんて考えたりしない。自然に、その振る舞いが身についているものである。
――となると、パティは生まれながらの貴族の令嬢ではないのではないかしら？
よくよく考えれば、ミーアは祖母のことを良く知らない。会ったこともないし、クラウジウス家という実家とも、一切交流はなかった。
だから、パトリシアの出自や、家庭環境がいまいち把握できずにいた。
――お父さまからも聞いたことありませんし、これは、ルードヴィッヒに調べてもらうのがいいかしら？
「ところで、ミーアお姉さま。今日、朝風呂に入るのは、特別初等部の他の生徒を迎える準備なのですか？」
湯船に浸かり、ほひゅーっと息を吐いていると、隣でパトリシアが尋ねてきた。
「ええ、そうですわ。しっかり身綺麗にしてお出迎えするのが、礼儀というものでしょう？」
「でも、初等部の学生は平民のはず。貴族の令嬢である私が、そんな風に迎えるのは変なことでは？　そもそも、民に混じって勉学に励む必要がありますか？」
かすかに首を傾けるパトリシアに、ミーアは笑みを浮かべて、
「もちろんですわ。相手が誰であれ、身分に相応しい姿で出迎えるのが高貴なる者の在り方。それに民を知ることは、皇帝の妻となるには必要なことですわ」
「でも、私には、不要だと思いますが……」
怪訝そうな顔をするパトリシアに、ミーアは優しい笑みを浮かべておく。

「パティ、これも蛇になるためですわ。民草の気持ちを知ることは、とても大切なことなのですわよ……ね？　蛇として」
それを聞くと、パトリシアは、
「わかりました」
かくん、と素直に頷いた。
――ふぅむ、相変わらずこの子、蛇のことを話に出すと、すごく素直になりますわね。便利な感じもしますけれど、このままというのはさすがに良くないですわね。
それも、ミーアの悩みどころだった。
いつ“自分が蛇ではないこと”を、パトリシアに打ち明けたものか……。
――蛇の教育を受けていると思わせて、こっそりとまともな教育を施すという作戦は、今のところは上手くいってますけれど……。
このまま、だまし続けるわけにもいかない。タイミングを見て、本当のことを話す必要があるだろうが……。
――心配なのは、蛇になるためって言ったら、割となんでも納得しちゃうことなんですのよね……。
なんだかよくわからないが、パトリシアはかなり蛇になりたいらしい。その理由をきちんと把握しておかないと、足元をすくわれそうな気がする……。ミーアの直感が告げていた。
――あれ以降、変な夢は見てませんけれど、油断は大敵ですわ。ともかく、慎重に、すべきことをしていきませんと……。
はぁ……などと悩ましげなため息を吐くミーア。それから、ふと思う。
――ああ、それにしても、アベル。まだ帰ってこないのかしら……。最近、遠乗りにも行けておりませんし、心が沈みますわね……。
ちなみに、この時のミーアに、最も適切な助言ができたであろう人物はシュトリナだった。
もしも彼女に、パトリシアの状態のことを聞いたならば、こう教

えてくれただろう。すなわち……。
「パトリシアは蛇に脅されて、言うことを聞かざるを得ない状況にあるのではないか？」　と。
ヴァレンティナのもとを訪れているシュトリナ・エトワ・イエロームーンが、再びセントノエルに戻ってくるまでには、もうしばらくの時間が必要だった。

第三十七話　飴になりたい、ミーア姫

さて、アンヌの奮闘により、麗しの生徒会長に化けたミーアと、身綺麗になったパトリシアは、朝食を食べ終えて、生徒会室へと向かった。

そこで、子どもたちを迎えるのだ。

他の生徒会メンバーと合流し、待つことしばし。やがて、老齢の修道女に付き添われて、六人の子どもたちがやってきた。

こわごわと、緊張も露わに、辺りを見回す子どもたち。そんな彼らを見ながら、ミーアは、事前にもらっていた資料を、頭の中で反芻する。

――ふむ、確か事前にもらった資料だと、パティと同じく十歳の男の子が二人、女の子が一人。その女の子の弟が七歳。八歳の女の子が二人……だったかしら？

年長の十歳児がパティを合わせて四人、年少の七、八歳の子が三人。ちなみに名前のほうも、きちんと覚えている。

あなた、誰でしたっけ？　と言ってしまった時に、相手の心証をどれだけ害するか、身に染みてわかっているミーアである。

ともあれ、顔のほうはわからないので、誰が誰かなぁ？　などと思いながら、全員の顔を見渡してから、

「はじめまして。みなさん。わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーン。この学園の生徒会長をさせていただいております、ティアムーン帝国の皇女ですわ」

堂々と胸を張り……、

「どうぞ、よろしくお願いいたしますわね」

完璧な皇女スマイルを浮かべる。完璧！　完璧である！

男子たちは、思わず頬を染め、女の子たちも、ふわぁっと思わず見とれている。

外面はとっても良いミーアである。
なにしろ、笑みを浮かべる、言葉をかける、この辺りは無料である。無料で相手の好感度を稼げるというのなら、やらないのはもったいないではないか。
もちろん、ミーアとて統治者の心得を知らぬわけではない。
『民に侮られるのは、民に嫌われるより悪いことである』と。
愛され慕われるより、恐れられたほうが良い。それは、帝国に古くから伝わる統治論である。
だが……同時にミーアは知っている。それの行き着く先がどこであるか……。
その教えを順守した自分たちがどんな目に遭ったのか……。
――恐れられる、それは、自身に力があるうちは有効でも、力が弱まった時に致命的な状況を呼び込む両刃の剣ですわ。
いついかなる時でも自身の権勢を維持できるとは思えないミーアである。没落を知るミーアは、いつでも備えを怠らない。
――要はバランスが大事ですわ。甘い物ばかり食べていては体に悪いけれど、口に苦い良薬ばかりでは、人生に彩りがなくなってしまう。バランスよく、何でも食べるのが大事ですわ。
目の前に並べられた皿を、満月のごとく円を描き、ぐーるぐーる、とバランスよく食べる。これこそが、ミーアが見出したバランスの良い食事法である！
俗にいう≪満月食べ≫は、帝国の叡智ミーアが生み出したというのは、とても有名なことである。
まぁ、それはともかく。
目の前にいる子どもたち、彼らは、蛇の予備軍。つまりは、貴族や王族に不信感を持ち、不満を持ち、諦めを持っている貧しい子どもたちだ。いわば「恐れ」の供給が過多な子どもたちなのである。
ならば……バランスを取り、ミーアは慕われる態度をとる！
――わたくしは、常に力を誇示して恐れられるより、力を失った時に助けてもらえる親しさをこそ、求めたいですわ！

恐れられるのは、周りの貴族連中に任せておく。その連中を従えておけば、自然と恐れの部分を満たすことは可能！　ミーア個人は愛されて慕われる、それこそが理想！

これが、ミーア式統治論である。

ちなみに、貴族連中を従えるにあたっては、ルードヴィッヒら女帝派の面々の活躍が不可欠であったりするのであるが……。

ともかく、ミーアは、精一杯愛想を振りまいた挨拶の後、子どもたちの顔を見ながら、

「それじゃあ、とりあえず、お互いに自己紹介をしましょうか……」

と、そこでミーアは気付く。

手前の二人の子どもたちが、顔が見えないほど前髪を伸ばしているということに。

「ふむ、それにしても、あなたたち、前髪が少し長いですわね。前が見えづらいと授業に支障がありそうですし、切ったほうが……」

と言いつつ、近場の少女に手を伸ばした。

「あっ！　さっ、触るな！」

次の瞬間、少女が、ばっとミーアの手をはたいた。

「あっ……」

反射的に手を引っ込めるミーア。

「あなたっ！　なんてことをっ！」

血相を変えた修道女が慌てた様子で、少女に近づいてきて、その腕をつかむ。

「ああ、いえ。別にこのぐらいなんでもありませんわ。あまり乱暴なことを……」

「いえ、姫さまに、このような無礼が許されませんわ！」

どうやら、この修道女はセントノエルに慣れていないらしい。その顔には満面の恐れと緊張が窺えた。

「粗相をした者には、罰が必要です」

「そんな大げさな……」

「いいえ。悪いことをした子どもに罰を与え、しつけるのは、その

子自身のためでもあります。ぜひ、罰をお与えください！」
真面目な顔で言う修道女に、ミーアは、ウーム、と唸る。
「罰……そうですわね……」
それから、ミーアは少女のほうを見た。悔しげに唇を噛みしめる少女と、姉のほうを心配そうに見つめている弟。
――これは……厳しい罰を与えようものなら、確実に蛇に突っつかれるパターンですわ。お尻を蹴っ飛ばす、などという厳しい罰は与えるべきではありませんし……あっ、そうですわ。
そこで、ミーアは思いつく。
「ふむ、ではそうですわね。わたくしの手をはらった罰として、あなたには、この特別初等部のクラス長をしていただきますわ」
学校に生徒会長がいるように、寮に寮長がいるように、特別初等部にも、子どもたちをまとめる立場の人間が必要だろう。
そして、この年頃の子どもたちのリーダーを決めるのであれば、年長者にやらせるのが理の当然というもの。七歳、八歳の子にリーダーをさせるのは無理があるだろう。
――その場合、男の子たちが選ばれる可能性は、ないではないでしょうけれど……。パティはわたくしと縁の者と思われているのだから、選ばれる可能性は高いはず……。
蛇の予備軍を潰すために、教育を施そうとしているのに、蛇の教育を受けたパトリシアを代表に選出する？　そんなことは、あり得ない！
というわけで……先手先手で行動するミーアであった。が……。
「は……？　正気かよ……」
ミーアの言葉に少女は、唇を釣り上げて、子どもには似つかわしくない笑みを浮かべた。まるでミーアを馬鹿にするような……歪んだ大人のような笑みを浮かべて。
「これが、あんたには見えないってのか？」
そうして、少女は自らの前髪を持ち上げる。それで、みなの前に、その額が露わになる。

少女の幼い額には、黒い墨で瞳の刺青がされていた。
「あら？　そんな風になっておりますのね。でも……それがなにか？」
珍しい刺青に小首を傾げるミーアであったが……、
「ガヌドス港湾国では知らないやつはいないよ。これは、ヴァイサリアンの民……いや、海賊の印さ」
「海賊……？」
「そうさ。あたしと弟は海賊の子だ。あんたは、海賊の子であるあたしに、この特別クラスの長をさせようってのか？」
そうして、自嘲の笑みを浮かべる少女に、ミーアは小さく首を振った。
「……その考え方、わたくしは好きではありませんわ。親の罪が子に伝播する、先祖の罪が子孫にまで被せられるなどと……」
それは、ミーアが何度も否定してきた考え方だ。
なにしろ、その考え方……突き詰めれば、初代皇帝の罪をミーアが贖わなければならなくなるわけで……それは、なんとしても避けたいミーアである。
ゆえに、ミーアは、その少女の目をしっかりと見つめて言ってやる。
「親が誰であれ関係ありませんわ。あなたはあなた。そうでしょう？」
言いながら、気付く。
これは、ミーアの自己弁護のみならず、パトリシアへのメッセージにもなるかもしれない。
パトリシアは、親が蛇だから、蛇になりたいと考えているのかもしれない。親が蛇だから、お前も蛇にならなければならない、と教え込まれているのかもしれないではないか。
それこそが、彼女が頑なに蛇になりたがる原因ならば、それを今はっきりと否定しておくべきであって……ゆえに！
「あなた自身が、賊となり悪を為したいと言っているのであれば、

それを咎め、改めさせる必要はあると思いますけれど……。あなたの血筋がなんであるかは、わたくしにとってなんの意味もないことですわ」
　それから、ミーアは一歩下がり、
「今一度、言いましょう。あなたが、特別初等部の長を務めなさい。それをもって、わたくしへの無礼の罰といたしますわ」
　ミーアの言葉を、少女は……ポカンとした顔で聞いていた。

第三十八話　ベルロンパ

ヴァレンティナ・レムノが閉じ込められている部屋は、質素な部屋だった。
家具と言えばベッドと、小さな机のみ。そして、机の上には無造作に神聖典が置かれていた。
「まったく悪趣味よね。蛇の巫女姫に、神聖典を一冊だけ渡して閉じ込めるなんて」
ヴァレンティナは楽しそうに笑って、神聖典を手に取った。
「退屈したら読めってことなのかしら？　ふふふ、聖女ラフィーナと地を這うモノの書で同じことをしたら、どんな風になるのか、試してみたいわ」
ぽーいっと神聖典を投げ捨てて、ヴァレンティナはベッドに腰を下ろした。
「せめて、紙とペンがあれば、地を這うモノの書の複製に勤しむのだけど……。ということで、時間を持て余していたから歓迎するわ。アベル。今日は何をしにきたの？」
そんなヴァレンティナを部屋に入ってすぐのところで、アベルは見ていた。
「お元気そうでなによりです、姉上。今日は、会ってほしい人がいたので、お連れしました」
そうして、アベルは一歩、部屋の中に入る。その後ろから現れたのは……。
「あら、嬉しいわ。リーナさん。あなたが自分から会いに来てくれるなんて、思ってなかった」
ヴァレンティナは、軽やかな笑い声をあげた。
「あなたには、もう一度、会ってお話したいと思ってたのよ？　本当なら、お茶を淹れて歓迎するところなのだけど、今は囚われの身。

なんのおもてなしもできないことを許してほしいわ」
対して、シュトリナは、華やかな笑みを浮かべて首を振る。
「ご機嫌よう、巫女姫ヴァレンティナさま。せっかくですけれど、おもてなしは結構です。なにが入っているか、わかりませんから」
「あら……ずいぶんと、良い顔で笑うのね、リーナさん？」
怪訝そうに眉をひそめて、ヴァレンティナは言った。
「私は、あなたの大切なものを奪ったつもりでいたのだけど……誤解だったのかしら？　てっきりあの子は、あなたの無二の親友とみていたのだけど……あっ、もしかして、そんなに大切ではなかったとか？」
煽るように、えぐるように、シュトリナの心を責め立てるヴァレンティナの言葉。けれど、シュトリナは、それに眉一つ動かさない。
「あ、それとも、死んでしまったあの子……ええと、ベルちゃんだったかしら？」
その名前が、ヴァレンティナの口から出た、その一瞬だけ、シュトリナの肩がピクリと震える。それを見て満足そうに、ヴァレンティナは笑う。相手の感情を逆撫でするよう、計算されつくされた嘲笑を浮かべて……。
「あのベルちゃんが、天国に行ってしまったベルちゃんが復讐を望まない。リーナちゃんの手を汚すことを望まないで幸せになってほしいって……そう思ってるから、復讐をやめたのかしら？　うふふ、素晴らしいわ、美しい友情ね」
そんな風に笑っていた、その顔が……次の瞬間、カチンと固まる。なぜなら……、
「わっ、すごい。さすがは巫女姫。完全に当たってます。よくわかりましたね！」
「……は？」
シュトリナの後ろから現れた少女に……その口が、ぽかんと開く。
その……自分が殺したはずの少女、ベルの姿を前に……。
そんなヴァレンティナの動揺になど、まるで構わずに、ベルは、

いっそ能天気と言ってしまいそうなぐらい自然な態度で、ちょこんとスカートを持ち上げて。
「はじめまして。ヴァレンティナ大伯母さま。ミーアベルと申します。以後、お見知り置きを」
堂々たる、名乗りを上げる。
「……どういうこと？　あなたは、あの時、確かに……」
余裕のない声で問うヴァレンティナに、ベルはニッコリ笑みを浮かべる。
「ああ。あれ、すっごくビックリしました」
首筋をペタペタ撫でながら、ベルが言う。そんなベルの手を握って、シュトリナが言う。
「ベルちゃんは生きてる。だから、あなたに復讐する必要はない。それだけのこと……。リーナは、あなたの口車に乗って、毒を盛ったりなんかしない」
キリッとした顔で胸を張るシュトリナに、ベルが「あれっ！？」と、なにやら言いたげな顔をしていたが……すぐに気を取り直したように首を振って、
「はい。そのとおりです。リーナちゃんは、優しい？　ので、誰かに毒を盛ったりなんか、しません。たぶん……！」
自信満々に言い切って、ベルはビシッとヴァレンティナを指さした。
「残念ですが、あなたの狙い通りになんかなりません」
この先の歴史を知り尽くした賢者のごとく、その言葉は力強い。
対するヴァレンティナは、小さく肩をすくめる。聞き分けのない子どもに向けるような苦笑いを浮かべて、
「ああ……そう。まぁ、それでも同じことよ？　あなたが生きていても、リーナさんが蛇に堕ちなかったとしても。だって、蛇は死なないもの。人が人である限り、人が強者と弱者を作り続ける限り、混沌の蛇は何度でも甦るのだから」
「うーん、まぁ……確かに死なないのかもしれませんけれど……」

ベルはきょとんと首を傾げてから、
「眠らせ続ければいいだけのことですから」
ニッコリ、笑みを浮かべた。
「起き上がってきたら、後ろから頭をガツンと殴ったりとか。相手が男の子だったら、こう、下からキックを……」
「ベルちゃん……」
「ベルさま……」
後ろから声をかけてくるシュトリナとリンシャ。ベルは、ぐむっと口を閉じ、
「ええと、ともかく、蛇が死なないなら、蛇が起きないような状況を整えればいいだけです。この世界を、壊したりしたらもったいないって思えるような、そんな世界にすればいい。それだけです」
「あはは、子どもね。そんな夢みたいな話が実現すると信じているの？　そんなもの、今まで一度も実現したことがないのに」
「信じていますよ。だって、幸せな夢の続きの世界を作ってくれた人のことを、ボクは知っていますから。ボクたちは、それを守っていけばいいだけなのですから」
ベルの言葉は揺らがない。
ヴァレンティナの言葉は蛇の言葉。相手の心の隙を突き、揺らし、不安を生み出し自信を奪う、計算の言葉。
けれど、ベルは小動もしない。
なぜなら、彼女は、夢みたいな世界からやってきたから。
ミーアが築いた世界は、確かに、蛇の出現を抑えることを知っていたから。
「ボクは、あなたが地を這うものの書から、どんなことを読み取ったのか知りません。でも、それは、世界が始まった時から永久に変わらない不変のルールでもなければ、誰しもが従わざるを得ない絶対的な支配でもない」
特に気負うでもなく、静かな口調で、ベルは続ける。
「ミーアお祖母さま、言ってました。統治者が油断したら民が不満

を持つのは当たり前のこと。それを放置すれば破滅がやってくるのは当然のことで、それは絶対の法則なんだって。だからこそ、統治者はいつでも民を、踏みつけにされる弱者を見ていなければならないって」

「なるほど。確かに、一人の優れた指導者がいれば、その人物が生きている間は平和が来るかもしれない。だけど、それとて一時的なもの。どれだけ苦労して作ったとしても、それが永遠には続かない」

「そうですね。でも、それは結局、その時代を生きる人たちが、ちゃんと責任を持って頑張るしかないことなんじゃないでしょうか。前の世代から受け継いだ大切なものを壊さないように、油断なく、子の世代、孫の世代が、次なる世代に受け継いでいく。そうするしか、ないんじゃないでしょうか？」

ベルはそう言ってから、ニッコリ笑みを浮かべた。その輝くような、まぶしい笑みを見て、ヴァレンティナは、ポツリ、と……。

「……あなた、なに？」

つぶやいた。それは、ベルに言った言葉というよりは、自分自身に対する問いかけのようで……。

「あなたも、ミーア・ルーナ・ティアムーンも、なんなの？　あなたたちは変だわ。この世界から逸脱してる」

「してませんよ？　そう思ったのだとしたら、あなたの世界に対する理解が間違っていただけ。この世界には酷いこともたくさんあるけど、それでも、壊したらもったいない、優しくて、温かくて、かけがえのないものだってあるんです」

堂々と胸を張り、ベルは言い放つ。ヴァレンティナを蹴り飛ばす一言を……。

その堂々たる態度を前に、ヴァレンティナは……ただ、沈黙を守るのみだった。

第三十八話　ベルロンパ（後書き）

本日、活動報告更新しました。
キャラ紹介も新しいのを出しました。

キャラ紹介追記（第五部）

パトリシア・クラウジウス（１０）
ミーアの祖母　（……らしい）。愛称はパティ。
クラウジウス侯爵家の令嬢という話だが……。
蛇の教育を受けた蛇エリート、ということになっている。蛇になるためだから、というとすんなり言うことを聞いてくれる。
無表情でなにを考えているのかよくわからない。三日月形の痣がある。

ユリウス・オベラート（２０代後半から３０代半ばぐらい）
眼鏡をかけた穏やかな男。特別初等部の専任講師。
凋落したオベラート子爵家の人間。
父親のオベラート子爵は、女たらしとして有名。特に黒髪の女性が好みらしく、ユリウスも黒髪であることから、彼の母も黒髪だと予想される。

ヤナ（１０）
額に瞳の刺青をした少女。海賊と揶揄される部族の娘。
荒っぽい言葉を使う。やや人間不信。
特別初等部に入る。

キリル（７）
ヤナの弟。姉同様、額に刺青がある。可愛い。
特別初等部に入る。

ヨルゴス
中央正教会の聖人になる予定。皮肉屋（ツンデレ）の異名で知られる。

実は優しくしているのに、生来の口下手と態度のせいで気付かれない。
ヤナから元気にしてるという手紙をもらって、喜んだりした。

第三十九話　帝国の叡智、強大な権威を金で買わんとす！

ユリウスと修道女に学園内の案内を任せて、ミーアたちは打ち合わせをすることにした。

「ふぅむ、あの人数であれば、ユリウスさんお一人でも、講師については足りそうですわね」

学業に関しては、ユリウスに任せても大丈夫だろう。

彼は、さすがに秀才らしく、文学も算術も問題なくいけるらしい。あのぐらいの子どもたちに基礎的な教養を教えるのには、彼一人で事足りるだろう。

なので、問題は、倫理・道徳的なこと。蛇に染まらないようにするための教育だった。

「ふむ、そちらに関してはラフィーナさま、お願いできるかしら？」

それは、疑問の形をとってはいるものの、実際には「そっちは全部任せましたわ！」というミーアの力強いメッセージを含んだ言葉だった。

……そして、ミーアは、当然、その要請が受け入れられるものと思っていた。

だって、相手は聖女ラフィーナである。相手を教え諭すことなど朝飯前のはず。ゆえに、それは、あくまでも確認のもののはずで……。

そんなミーアの言葉に、ラフィーナは当然のごとく頷き……頷……かない！？

「……え？　私が、するの？」

などと、むしろ、困惑した様子を見せている。

――あ、あら？　妙ですわ。この反応、想定外ですわ……。

などと首を傾げるミーアに、ラフィーナはちょっぴり困り顔で、

「ミーアさんのお願いには、できるだけ答えたいと思っているのだ

けど……でも、先日のミーアさんの教育論を聞いた後だと、少し荷が重いわ。てっきり、ミーアさん自身が教鞭をとるものとばかり思っていたから……」
「……はぇ？　え、えーと、先日のこととは……」
「ほら。五種のキノコグラタンのことを例に挙げて、教えてくれたじゃない。子どもたちをどう扱うのが正解か……。私、あの言葉にとっても感激してしまって……」
などと言われて、ようやく思い出す。
――ああ、そういえば、確かにあの時、ちょっぴり上手く言えたなって、自分でも思いましたけれど……。
それから、ミーアは慌てて、各メンバーの顔を見る……、と！
――ひっ、ひぃい！　なんか、みんな、わたくしがやるのが当たり前みたいな顔してますわ！
てっきり、正義と公正の権化たるシオンがしゃしゃり出てくるかと思っていたのに、なんだか、ぜんっぜん、そんな様子もない！
「え、あ、で、でも、ここはラフィーナさまか、シオンとかがいいんじゃないかしら？　ねぇ、シオン、あなたなら、サンクランドの正義と公正を彼らに存分に教えてあげられるんじゃ……」
なので、仕方なく話を振ってみると、シオンは……。
「弟の面倒一つ見られなかった俺が子どもたちの教育にかかわる？　それはおこがましいにもほどがあるというものだろう」
いつになく、やさぐれた感じで言いやがった！
――ぐ、ぐぬぬ、こいつ、まだエシャール王子のこと、気にしてましたのね。確かに、あれは、シオンにもかなーりの責任があることとはいえ……。
生徒会の二大巨頭、ラフィーナとシオンが断ったことで、必然的に、他のメンバーにも頼めなくなってしまう。明らかに、断られるビジョンしか浮かばないし。
ということで……。
「で、では……不肖、このわたくしが、子どもたちへの倫理面での

教育をいたしますわ」
涙を呑んで、厄介ごとを引き受けるミーアであった。
「ああ……これは、大変なことですわ……」
部屋に戻ったミーアは、ベッドに寝転がり、うががーっとゴロゴロする。
やがて、ひとしきり暴れた後で、ミーアは気持ちを切り替える。
――まぁ……、でも、よくよく考えると、これはかえって好都合と思うべきかしら……。
そもそも、特別初等部の一番の目的は、パトリシアを教育することにある。そして、それを知るのはミーアのみ。ならば、他の者に任せるわけにはいかない。
より確実性を取るのであれば、ミーア自身が教師をするのが一番よいのだ。
――それに、これはいい予行演習になるかもしれませんしね……。
ミーアは、さらに、自身の子どものことにも思いを馳せる。
どうやら、これから八人産まなければならないらしいが、その八人、産んだら放っておいてよいものでもない。きちんと教育しなければならないのだ。だが……。
――養育係が、きちんと機能するか、甚だ不安が残りますわ。
アンヌに関しては、恐らく問題ないだろうと思っている。ミーア同様、時に甘く、時に厳しく、きっとしつけてくれるに相違ない。ベルを見ていても、それは確信できる。
だが……他はどうか？
ミーアの子どもの教育を担ってくれるであろう筆頭のルードヴィッヒだが……ベルの話を聞く限りでは、いささか甘い。
それはもう、かつてのクソメガネを知り、さんざん涙目にされてきたミーアとしては、まったくもって納得いかないことではあるのだが……。
――ベルの前では、大変な好々爺面をしているルードヴィッヒが、

わたくしの子どもたちに甘い顔をしないなどとは、到底思えぬこと。同様にリンシャさんも、少し怪しいですわ。
ベルの様子を見るに、リンシャも養育係としては、ちょっぴり甘いところがあるらしい。彼女には厳しくしつけてくれることを期待していただけに、ミーアとしては意外なところであった。
――それに、リーナさん……。あの方に関してはベルの親と仲良くなるために、むしろ、積極的に甘やかしそうな雰囲気さえございますわ。
もともと、シュトリナには頼む予定はなかったが……仮に頼んだとして、上手く務められるとは思えず……。こうして考えていくと、どうも、ミーアは程よい教育係を見つけられそうにない。となると、時々は、自分の目で子どもを見て、しっかりと大切なことを教えていく必要があるわけで……。
――嫌な男の子の黙らせ方とか、知っていると便利なことをきちんと継承してあげたいですわね。こう、どうやって蹴ればいいかとか……レムノ王国での経験を生かして……こう。
まぁ、それはさておき……。そのような明るい未来のためにも、今回のことは何かの役には立つかもしれない。であれば……。
「こうなってしまった以上、積極的に生かすべきですわね。ふむ……」
それから、ミーアは、アンヌのほうに目をやり、手際よく準備を進めていく。
その第一歩は……。
「アンヌ、申し訳ないのですけど、今から言うものを町で買ってきてくれないかしら？」
「はい。わかりました。なにを手に入れればいいのでしょうか？」
首を傾げるアンヌに、ミーアは、胸を張って堂々と言い放つ。
「度の入っていない眼鏡ですわ！」
ミーアが欲したもの……それは、権威と知恵の象徴たる眼鏡だった！

それを聞いて、アンヌは、一瞬、怪訝そうな顔をしたものの、
「わかりました。探してまいります」
すぐに頷いて、部屋を出ていくのだった。

第四十話　低きに流れ、パンを食べ……

さて……一体、どんなことをすればよいのか……。
どんなことをパティに教えればいいのか……。
眼鏡をかけたことで、すっかりやる気になったミーアは昨夜一晩、たっぷり寝ながら考え、早起きして朝風呂へ。そこでジッと目を閉じて考え、時々、ざんぶ！　とお湯の中に潜りながら、考え、考えて……。
「まっ、まったく、思いつきませんわ！」
そう頭を抱えたのは、午前の授業が終わった昼食前の時間だった。
ちなみに、子どもたちにミーアが教えるのは、午後からの時間である。午前中は基礎的な勉学をユリウスが教え、午後の時間にミーアが道徳・倫理的な心得を教えることになっているのだが……。
そもそもの話、別に道徳的に潔白でもなければ、倫理的な正しさを持っているわけでもなく。なんらかの哲学に通じているわけでもないミーアである。
ハリボテの叡智をいかに絞ったところで、良い考えが浮かぶはずもなし！
「こっ、子どもたちに何を教えればいいのか……。これは、もしかしたら、今までで一番のピンチなのでは……？」
かといって、情けない姿を晒すわけにもいかない。パトリシアに蛇の教育係と名乗っているのだ。
「ミーア先生の授業、楽しみにしてます」
などと、ニコリともせずに……言っていたパトリシアの顔を思い出す。
あの期待を裏切るのはマズい。今後の発言権にかかわってくる。
「ぐ、ぐぬぬ。わっ、わたくしが教えられそうなのは、紋章学とダンス、あと乗馬……」

なんとか、子どもに教えられそうなものを指折り上げていき……。
「くっ、手持ちのカードが少なすぎますわ」
そもそも、それ、教える意味あるか？　などとも思ってしまう。なにしろ、しなければいけないのは、彼らを蛇にしないことなのだ。ただの勉学ではないところに、なんとも言えない難しさがあった。
こうして悩んでいる間にも、特別初等部の授業時間が迫ってくる。
「なっ、なにか、クロエに本を用意していただいて、それを読み込んで教えるとか……？」
でも、それって……とっても面倒。難しい本なんか読みたくない……というか間に合わない！
そうして、久しぶりに頭をモクモクさせつつ、悩み悩み、悩みぬいた末……ミーアはっ！
「そうですわ！　わたくしは、遊びに連れていくことにしましょう！」
低きに流れていった！
そう……仮に波がなくとも水は流れを作るものなのだ。高いところから、低いところへ。
そうして、ミーアは流される。低いほう、低いほうへと。
「ああ……そうでしたわ。そもそも難しい勉強はユリウスさんがしてくださるはず。とすればわたくしが教えるべきは、そうしたことではないはずですわ」
何事もバランスが大事なのだ。
口に苦い良薬ばかりでは、人生は彩りのないものになる。良薬をユリウスが担うなら、ミーアがすべきは……口に甘いお菓子の役割。
不意に、ミーアは視界が開けたような気がした。
「ああ……そうですわ。そうでしたわ……。わたくしは、なにを考え違いをしていたのかしら。わたくしは、甘いお菓子を担当しようと、昨日思ったばかりでしたのに」
厳しくするのは自分じゃない。自分は、甘やかすほうを担当する。
それこそが、ミーア式統治法……甘海（シロップゼリーフィッシュ）を泳ぐ海月式教育法なので

ある。
「そうですわ。要するに、蛇にならないようにするには、この世界が壊したくなくなるぐらい、良いものだと思わせてあげればいい。であれば、わたくしの時間は、子どもたちに一杯楽しい経験をさせてあげるのが良いですわ！　とりあえず、馬にでも乗せて……いえ、むしろキノコ……」
そうして、ミーアは、晴れ晴れした気持ちで、食堂に行き――目撃してしまう。
特別初等部の子どもたちが、食堂のはずれに固まって、硬い表情で座っていること。そして、それを見下ろすように、三人の男子生徒が仁王立ちしていることを。
「おい、どうして僕たちより、お前たちのほうに、先に食事が届くんだ？　孤児のくせに、生意気な……」
――ほほう、生徒会の決定に表立って文句を言う、気骨ある子がいるとは意外ですわ。この子たち、ラフィーナさまに盾突いているということがわかっているのかしら？
前の時間軸のミーアですら思いもよらぬ暴挙。このセントノエルでそのようなことをすれば、どんな目に遭うか……あの生徒たちには想像がつかないらしい。
けれど、それも仕方のないことなのかもしれない。見たところ、彼らは新入生。この春からセントノエルにやってきた、幼い男の子たちだ。
血気にはやり、民を見下す。実に貴族らしい物言いは微笑ましいほどで……。
「私たちのほうが先に注文したからじゃないでしょうか？」
特に気負う様子もなく、パトリシアが言った。チラリと男子生徒たちを見上げ、いつものように、なんの表情も浮かべない顔で……。
そんなパトリシアの様子に、ますます男子生徒は憤る。
「なんだと？　お前、俺たちに口答えするのか！？　帝国貴族の俺たちに」

その言葉に……ミーアの背中に、さぁあ！　っと鳥肌が立った。
――てて、帝国貴族！？　それはマズいですわ。
どっかの適当な国の貴族ならばいざ知らず、帝国貴族であれば、その非道の責任を問われるのは、最終的にはミーアである。なにしろ、ミーアは帝国皇女。帝国のトップなのである。
――くぅ、サフィアスさんやエメラルダさん、ルヴィさんがいなくなったから、抑えが効かなくなってるのかしら……。想定外ですわ。
ミーアの意を尊重し、裏で帝国貴族の取りまとめをしていた三人。そんな彼らがいなくなった影響だった。残った四大公爵家の子弟はシュトリナのみ。
シュトリナの能力は別にして、最弱のイエロームーンの家名は、他の四大公爵家よりも影響力が低いわけで……。
――今後が思いやられますわ……。
などと思いつつ、やや慌てて歩み寄ろうとしたところで……。
「やっ、やめてください。あたしらは、ただ食事がしたいだけで……」
一人の少女が立ち上がった。長い前髪に隠れ気味の顔、彼女の名は……。
――あら、あの子……ヤナさんですわね。本当なら一番に突っかかっていきそうですのに、リーダー役だからって諌める側に回ってくれてますのね。
ちょっぴり意外に思いつつ、ミーアはずんずん歩み寄っていき、そして……。
「ご機嫌よう、みなさん。これは何の騒ぎかしら？」
優雅に笑みを浮かべつつ、言ってやる。
余計なことしやがって、この野郎……などという、ちょっぴりアレな本音は胸の内にしまいつつ、ニコニコ笑みを絶やさない。
「あっ、ミーアお姉さま」
ミーアのほうを見て、パトリシアが声を上げる。それにつられて、

下を向き、ジッと固まっていた子どもたちが視線を上げた。
「あ、あなたは、ミーア姫殿下……」
パトリシアたちを睨みつけていた少年たちも、びっくりした様子で飛び上がった。当然だ。彼らの格はミーアはおろか、四大公爵家にも劣るもののはず。
であれば、ミーアに盾突くことなどできようはずもなし。
ミーアは、ふん、っと偉そうに鼻を鳴らしつつ、腕組みしながら少年たちを眺める。
そんなミーアに、リーダー格の少年が言った。
「ちょうどよかった。お考えをお聞きしたかったのです。なぜ、姫殿下はこのような無駄なことをなさるのですか？　金を持つ商人の子ならば、平民であっても通わせる意味はありましょう。金は力、才覚持つ者の証です。我らのために役に立つ者もおりましょう。ですが……」
彼は、一転、表情を歪めて子どもたちを見る。
「こいつらは食うのにも困る貧乏人の子。あるいは、罪人の子まで混じっているというではありませんか？」
馬鹿にするように、見下すように、ヤナを見てから、少年は続ける。
「なぜ、このような者たちを？　食事のマナーすらわきまえぬ者たちばかりではないですか？　なぜ、こんな薄汚い連中を我々と同じ学び舎に入れるのですか？」
その発言を聞きながら、ミーアは内心で冷や汗をかいていた。
――ああ、そんな大きな声で、ラフィーナさまが嫌いそうなことを……。
この食堂で、そんなことを大声で言っては、絶対にラフィーナの耳に入ることだろう。そうなれば、きっとラフィーナのご機嫌を損ねるに違いない。シオンにしても、聞いたらきっと眉をひそめるに違いない。これはよくない。
実になんとも帝国貴族らしい少年の言いように、ミーアは頭痛を

感じつつ、
「なにゆえ、と問いますのね……」
さぁて、なんと答えたものだろう、と思案する。
彼らに理解させるのは、なかなか難しそうだ。非を認めさせ、子どもたちへの謝罪を引き出し、それをもって、ラフィーナの機嫌を鎮めることは、どうやらできそうにない。
かといって、なんだか、気が立っている様子の彼らを権力で押さえつけるのは、後々の禍根となりそうだ。そもそも、特別初等部の構想自体、正論と権力によって無理に通したのだ。
ここでさらに力づくというのも、少々危険……とミーアの直感が告げていた。
――というか、もう少し落ち着いてからでないと、まともに話ができなそうですわね……。どうしたものか……。
思案に暮れるミーアは……低きに流れていく。
低き、すなわち……より原始的な欲求、すなわち……食欲へと。
ミーアの鼻が捉えたもの、それは、焼き立てのパンが放つ芳ばしい匂いであった。あれにハチミツをたっぷりつけて食べたら、たいそう美味しいに違いない。
――こんなに美味しそうなものを目の前にして言い争いなど、なんて不毛な……いえ、そうではありませんわね。
その時だった。ミーア、不意に閃く！
そもそも、彼らはなぜこんなにも腹を立てているのか？　気が立っているのか？
理由はとても簡単。ヒントはすでに出ていた。
彼ら自身が言っていたではないか。
『なぜ、こいつらが先に食べているのか？』と。
――ははぁん、なるほど。この子たち、お腹が空いて気が立っているのですわね。ならば、その解消が先決……。
腹が減れば、人はイライラするもの。であれば、まずは満腹になり、機嫌がよくなったところで、なにか適当に言いくるめるのがよ

かろう、とミーアは判断する。
「なるほど。よくわかりましたわ。ならば、あなたたち、ここに一緒に座りなさい」
「……は？」
きょとんとする貴族の子弟たちに、ミーアはニッコリ笑みを浮かべて。
「あなたたちは、特別初等部の子どもたちが、自分たちより先に食べることに腹を立てている。ならば、先に食べず、一緒に食べれば何の問題もないはずですわ。ああ、それと、食事のマナーも気になっているのですわね？　ならば、あなたたちで教えて差し上げれば、なんの問題もありませんわね」
そうして、ミーアは、ヤナとパトリシアの間に、席を作らせる。
「もちろん、わたくしも一緒に食べますわ。構いませんわよね？」
黙って他人が食べているのを見守れるほど、ミーアは人間ができていない。午前いっぱい考え事をしていたミーアの脳みそが、食を欲していた。
今、テーブルの上に用意されたパンなど、すべて平らげられそうな気分なのだ。
帝国の最高位、ミーアがともに食べよ、と言う。帝国貴族に属する者に、その言葉を無視することはできない。
少年たちは、戸惑いながらも、各々、特別初等部の子どもたちの間に席を作り、座る。
「さ、とりあえず、食事ですわ。お腹が満ちたら、存分に語り合いましょうか。この子たちをこの学園に入学させた意味を」
そう言いつつ、ミーアは思っていた。
――たぶん、騒ぎを聞きつけたラフィーナさまが来るはず。そこでまず、帝国貴族の子弟と特別初等部の子どもたちが仲良く食べてる姿をアピールして、粗相を帳消しにしてもらう。その後で、特別初等部の意義を『混沌の蛇』に関する部分だけ上手くボカシて語ってもらえば良いですわ。ふふふ、我ながら、完璧ですわ。

ニンマリ、内心でほくそ笑みつつ、ミーアは、目の前の柔らかいパンに手を伸ばすのだった。

第四十一話　敵意には敵意を、信頼には……（前書き）

来週ですが、遅めの夏休みとしたいと思います。
３０日の週に再開します。
特典ＳＳを頑張って書かねば……。

第四十一話　敵意には敵意を、信頼には……

ふかふかのベッドで眠る弟、キリル。その、安心しきった顔を見て、ヤナは思わず苦笑いだ。

「簡単に油断しすぎだぞ。キリル」

柔らかな髪を撫でながら、つぶやく。洗い立ての髪はサラサラで、なんとも手触りがいい。

ガヌドスにいた頃には、風呂など入ったことはなかった。水浴び自体はしていたけれど、こんな風に上等な洗髪薬を使ったこともなく……。

ヤナは自分自身の髪を軽く触って……そこから漂う良い香りに、かすかに笑みを浮かべてしまって……。誤魔化すようにつぶやく。

「ま、油断するのはよくないけど、疲れたから仕方ないよな。今日の午後の授業おかしかったし……」

あの、おかしな昼食会……自分たちに絡んできた貴族たちと並んで食事を食べるという、わけのわからない食事会の後、午後の授業は、さらにおかしなものだった。

「健全な精神は、自然の中で育まれるもの。健全な心はキノコに宿るとも言われますわ。ちょうどこのセントノエル島には、良いキノコの狩場がございますし、午後はみなでキノコ狩りに行くことにしましょう」

ミーア姫の号令のもと、ヤナたちは、セントノエル島の森へと連れ出されたのだ。まったくもって意味がわからない。

午前の授業はわかりやすかった。

講師のユリウス先生は言っていた。文字を習えば、神聖典が読めるようになる。そうすれば、どのように生きればいいのかを学ぶことができる。

なにが人の道で、どうすると人の道を外れてしまうのか……正し

さとはなにか？　悪とは、罪とはなにか？
それが理解できれば、犯罪に手を染めにくくなる。それは、統治者にとっては、支配しやすい優良な民だ。
そんな理屈は、よくわかった。
誰かに勉強を教わったことがなかったヤナではあっても、それはとても分かりやすい話で……。
だからこそ、午後の授業のおかしさが際立っていた。
みんなで連れ立って、キノコ狩りをさせられる意味はまるっきりわからなかった。
「自分たちで食べる分は自分たちで採ってこいってことなのか？　でも……」
あれは、労働ではなかった。どちらかと言えば、遊びだ。
キリルや年少組の女の子二人などは、とっても楽しそうに走り回っていた。
生きるために、必死に食糧を得ようとしていた、あのころとは大違いだった。ヤナは、キリルのあんなに楽しそうな顔を見たのは、初めてかもしれない。
「あの人、いったいなんなんだろう……」
自然、口をついたのは、そんな疑問だった。
それは、昨日からヤナの胸にある疑問でもあった。
帝国皇女ミーア・ルーナ・ティアムーン。帝国の叡智と名高い姫殿下。
彼女のことが、ヤナには理解できなかった。
昼食の時のことを、ヤナは思い出す。
あの貴族の少年の言いようには腹が立ったけど、同時にヤナは、その中に理を見つけてしまう。自分たちなんか、なんの役にも立たない。むしろ、治安を悪化させる害悪に過ぎない。たぶん、あの漁師はそう思っているし、ガヌドス港湾国の貴族たちも、そう思っているに違いなくって……。
まして、ヤナは海賊の子だ。ずっと蔑まれ、厄介者扱いされてき

た。
いっそ死んでしまえば面倒がない、と陰口を叩かれ、自分でもそうかも、と思わないでもなかったが……。自分に悪意を向けてくる人間の思い通りにしてやるのがシャクだったから、懸命に生きてきた。ヤナが生きる理由は、それだけだった。
――なのに……ミーア姫殿下は、あたしを特別初等部のリーダーにした。あたしを、信じてくれた……。
そう考えて……ヤナは戸惑う。
どうして、そんなに簡単に信じられるんだろう、と。
自分のことなんか、なにも知らないはずなのに、と。
唯一の家族であるキリル以外、ヤナは信じたことはなかった。信じて裏切られたら、自分も弟も終わってしまうのだから、それは当たり前のことで。
だからこそ、無条件に信じてくれたミーアのことが、まったくわからなくって……。
その時だった。こんこん、っとノックの音が響いた。
「誰だろ……？」
一瞬の警戒……けれど、すぐに苦笑いを浮かべる。
なにしろ、ここはセントノエル学園だ。特別初等部の生徒は、ミーア姫の縁者だというパトリシアを除いて、学園の聖堂の隣にある建物に住むことになった。学園敷地内の中に、彼らは住んでいるのだ。
そこは世界で一番安全な場所。警戒する必要など、なにもないだろう。
ため息混じりにドアを開ける、と、立っていたのは、特別初等部の男子生徒。名前は、確か……。
「ああ、ええと、カロンだっけ？」
ヴェールガ公国の孤児院から来たという、ヤナと同い年の少年だった。
おさまりの悪い髪と、ちょっぴり鋭い目つきが特徴的。いかにも

やんちゃそうな印象を受ける少年である。
「どうかした？」
キリルを起こさないように、廊下に出る。と、カロンは辺りをキョロキョロ見回してから、
「なぁ、ちょっと出られるか？」
「出る？　どこに？」
首を傾げるヤナに、カロンは白けた顔をした。
「どこにって、決まってるだろ？　なにか金目のものがないか探しに行くんだ」
「金目の物？」
「なんだよ、海賊の子どもだとか言ってたから、もっと抜け目ないやつだと思ってた。てっきり、もういろいろと目星をつけてると思ったのに」
「どういう意味だよ、それ……」
知らず、ヤナの声が低くなる。
「貴族なんて気まぐれなんだってことさ。こんな風に優しくしておいて、明日にはすぐに切り捨てるんだ。犬や猫と同じさ。だから、いつ切り捨てられてもいいように、金目の物を盗んでおこうって……ね」
ニヤリと笑みを浮かべるカロンに、ヤナは……。
「やめろよ、そんなの……」
思わず言っていた。
「え……？」
それを聞き、目を丸くするカロン。一方のヤナも、自分の言葉に驚いていた。
――あたしは、なにを言っているんだ……？　こいつの言うことは、すごくもっともなことで……。
と、冷静な部分が告げているが、それでも……口が勝手に動く。
「ここは……違うよ……。あんたや、あたしたちが今までいたところとは違う。少なくとも、あのミーア姫殿下という人は……信じて

いいんじゃないかって、あたしは思ってる」
「なんだよ、もしかして、リーダーに選んでもらえたのが嬉しかったのか？　あんなので信じてもいいって、どんだけ抜けてんだよ？
よくそんなので生きてこられたな」
カロンの言葉は、不思議と、ヤナの胸に響かない。
それは今までヤナが持ち続けてきた価値観に合致する言葉なのに……、今はなんだか、とても腹立たしい言葉に聞こえて……。
「別に、なんでもいい。ともかく、勝手なことはあたしが許さない」
吐き捨てた言葉に、カロンがキッと目つきを鋭くする。
「おい、どうでもいいけど、リーダー面すんなよ」
ドンっと肩を押してくるカロン。
なるほど、カロンは確かに、孤児院でそれなりに大変な目に遭ってきたのだろう。暴力と威圧により、その場を制する方法を心得ていた。
……だが、孤児院にすら頼らず、二人きりで生きてきたヤナのほうが……荒くれの漁師の目を盗み、裏路地で生きてきたヤナのほうが……修羅場の経験値ははるかに多い。
彼女は逆にカロンの襟首をつかみ、締め上げる。
「いって……」
「何度でも言う。勝手なことはするな。もしも、勝手なことしたら、絶対に許さない」
「くそ、放せよ」
苦しそうに言うカロンだったが、ヤナは手を放さなかった。
「ダメだ。約束しろ。絶対に、そんなことしないって……」
……その時だった。
「なにかありましたか？」
不意に、静かな声が、聞こえてきた。
「あっ、ユリウス先生……」
視線を向けると、静かな笑みを浮かべるユリウスが、そこに立っていた。

慌ててカロンを放すヤナに、ユリウスはわずかばかり厳しい顔を向ける。
「ヤナさん、どんな理由があろうとも、暴力を振るってはいけないよ。暴力に頼ってしまった時、君は正しさを失うんだ」
それは、この世の真理を語るかのごとく、揺らがない声。厳然たる口調。だが、それがすぐに崩れる。
「と言いたいところだが……、それは合理的じゃないな。時に、暴力が必要になることも、世界にはある。カロン君が、なにか悪いことをして、締め上げられても仕方ない状態にあったのかもしれないな」
などと、ぶつぶつ言いながら、今度はカロンのほうに目を向ける。
「いったいなにがあったのか教えてくれないかな？　告解を聞く神父ほどではないが、口は堅いつもりだよ」
その声には、どこか、人を安心させるような温かさがあったが……さすがに素直に言うわけにもいかない。
顔を見合わせて、口をつぐんだヤナとカロンを見て、ユリウスは小さくため息を吐き、
「まぁいい。いろいろ事情はあるのだろうけど、仲良くしなさい。せっかくセントノエルで学ぶことになった、学び舎を共にする仲間なんだから。喧嘩なんかしてもつまらないだろう」
穏やかな声で言ってから、ユリウスは去っていった。

第四十二話　ボーイズトーク、白熱する！

さて、アベルたち一行がセントノエルに戻ってきたのは、初等部の生徒が揃って、さらに七日が経った頃だった。
本来はもう少し早く帰る予定だったのだが……。
「うふふ、楽しかったね。ベルちゃん」
「はい。とっても。うふふ、また行きたいですね、街歩き」
ヴェールガ公国名産の、巡礼用の麦藁帽を被った二人のご令嬢がニコニコ笑みを交わしている。さらに、その後ろに澄まし顔で立つリンシャも……お揃いの帽子を被っている！
そんな楽しそうな乙女たちに、アベルは思わず苦笑いを浮かべる。
良い旅だった……。そう思う。
姉、ヴァレンティナの反応は、予想外のものだった。
これまで何度、会いに行っても冷笑的な表情を浮かべるばかりで、一度として、自分の言葉が届いているようには思えなかったのに……。ベルを見た時の、あの呆然とした顔、あの時、確かに姉は意表を突かれた。
そして、生じた隙を縫って、確かに、ベルの言葉は、姉の心に届いた。
――これにより、姉上がどのように変わっていくのかはわからないが……。それでもいい。なにも変わらないよりは、変わっていったほうが……。
もちろん、すぐにどうこうなるものだとも思っていない。時間が必要であろうことはわかっていた。だから、アベルは気長に構えていた。
――あるいは、より悪い方向に変化してしまうかもしれないが……。
姉が自ら命を絶つ……そんな危惧がないわけではなかった。だが、それはそれで仕方のないことなのかもしれない。

――ヴァレンティナ姉さまは、許されないことをした。ミーアの言いようではないが、蒔いた種は自分で刈り取らなければならない。それが良いものであれ、悪いものであれ……。

だから……アベルはただ祈るのみだ。

姉が短慮を起こさないように。そして、ベルとの再会が、良い変化を与えるように。

それから、セントノエル学園に改めて目を向けて……。

「ミーアは元気かな……」

アベルは小さくつぶやいた。

しばらく会っていなかったからだろう。今すぐにでも、彼女の顔が見たかった。

そんな願いが叶ったのか、学園に入ってすぐに、彼は愛しい人の姿を見つけた。

思わず嬉しくなって、声をかけようとして……。だけど……。

「ミーア……」

名を呼ぶ声は、尻すぼみに消えていく。

なぜなら、ミーアが走っていったから。とても真剣な顔で……。そして、その向かう先に立っていたのは、穏やかな笑みを浮かべる眼鏡の男で……。

思わず、息を呑む。

見覚えのない男は、親しげにミーアに頭を下げ、二人は足取り軽く行ってしまう。アベルは、それを見送ることしかできなくって……。

「いや……なにを考えているんだ、ボクは……」

そこで、彼は我に返る。

不安に立ち止まり、口をつぐんでいては、かつての自分となんら変わりはない。

諦めに身を委ねることはもうやめた。こういう時に、前に出ないでどうすると言うのか。

アベルは顔を上げて歩き出す。そして、真っ直ぐにミーアの後を

追い……追い……かけはしなかった！
アベルが向かったのは、シオンのところだった。
直接、ミーアのところに行く勇気は……まだなかった！
「ああ、アベル。帰ったのか」
男子寮の部屋にいたシオンは、爽やかな笑みを浮かべて友の帰還を歓迎する。が、すぐに首を傾げた。
「どうかしたのか？　顔色が優れないようだが……もしや、姉君になにか？」
「いや、姉は元気だったよ。まぁ、元気というのも妙な話だが……ともかく変わりなかった」
アベルはため息混じりに言った。
「でも、ベルを見て、少し思うところがあるようだったよ。彼女を連れて行って良かった」
「そうか。まぁ、それならばいいんだが……。その割には、浮かない顔をしているな。なにかあったのか？」
心配そうに眉根を寄せるシオンに、アベルは小さく首を振る。
「そんなこともないんだけどね。ただ、その……帰ってきてすぐにミーアを見かけてね」
そうして、つい先ほど見かけた光景のことを話してみる。と、それを聞いたシオンは……思わずといった様子で吹き出した。
「ははは。それならば心配はいらないさ。その眼鏡の男は、特別初等部のユリウス殿だ」
「特別初等部の？」
「そうなんだ。実は、特別初等部のほうで問題が起きたから、我ら生徒会で火消しに走ってるところなんだよ。実際、ここ数日、かなり忙しくってね」
「ああ……なるほど。そう言うことだったか……」
安堵のため息を吐いたアベルだったが……。
「しかし、アベル。あまり、ミーアを放っておくのも良くないぞ」
一転、真面目な顔で、シオンが指摘してくる。

「いや、そんなことは……」
と、首を振ろうとするも、シオンの追撃は、彼の剣術のように鋭かった。
「そもそも、そんな風に不安になるのは、自分自身の中にそんな気持ちがあるからじゃないか？」
「ぐっ……」
思わず、アベルは言葉を呑み込んだ。それが……図星だったからだ。
姉のことで忙しくしていることもあって、前よりミーアのそばにいる時間は減っていた。それに、少し前までのミーアは、ベルを失ったことで元気がなくなっていた。だから、そばにいて支えなければ、と強く思っていたのだが……。
ベルが帰ってきたことで、その思いが少しだけ薄らいだことも事実で……。
「ミーアに寂しい思いをさせている、ないがしろにしているという気持ちが、自分の中にあるからじゃないのか？」
そう言われると……返す言葉もないアベルである。
「確かに、そうかもしれない……」
さすがは、シオンだ、相変わらず鋭いな……などと考えているアベルであったが……。言うまでもないことながら、シオンには今まで恋人なるものがいたことは……ない！
けれど、そんな様子は一切なく、シオンは堂々たる口調でアドバイスする。
「ミーアもここ最近忙しかったからな。デートにでも誘ってやるのがいいんじゃないか？」
「デートか……。言われてみれば、確かに最近、遠乗りにも行っていないし、誘ってみるか……」
っと、腕組みしつつ考え込むアベルに、シオンは重々しく頷いて……。
「それがいい。それで彼女の良いところを十個、順位づけて（ラン

キングで）言ってあげるといい」
……おかしなことを言い出した！？
「順位づけて？」
聞きなれない言葉に、アベルが首を傾げる。っと、シオンは少し得意げな顔で……。
「実は先日、恋愛小説というものを読んだんだ。ああ言ったものは、初めて読んだのだが、なかなか興味深かったよ。それでそこに載っていたやり方なんだが……」
心なしか、得意げな顔で話し始めるシオン。ちなみに、その人生初の恋愛小説とやらだが……ミーアからティオーナへ、ティオーナからシオンへと渡った、ミーアのお抱え作家が書いたものである……。
お抱え作家が、想像力と妄想力をフルに使って書き上げた、お砂糖十倍増しのあまぁい逸品である！
「女性と付き合う時には、演出が大事だと、前にキースウッドに聞いたことがあるんだが、なるほど、こういうことか、と膝を打ったよ。なぁ、そうだっただろう、キースウッド？」
「え？　あ、ええ。そうですね」
どこか上の空で、キースウッドが頷いた。
実際のところ、彼が教えたのは、サプライズでプレゼントを渡す、と言った程度の演出であって、相手の好きなところを十個ランキング形式で発表しろ、などというトンデモなレベルのものではないのだが……。その間違いを正す余裕は、キースウッドにはなかった。
なぜなら、彼は彼で大変だったからだ。聖女ラフィーナに馬サンドイッチを教えるという大役を担う日が、間近に迫っていたのだ。なので、
「演出は大事ですよ。アベル王子。女性は、そう言うのが大好きですから」
などと、適当なことを言ってしまっても、仕方のないことなのだ！
「そうか……。なるほど、参考になるな。助かるよ、シオン」

生真面目な顔で頷くアベル。前時間軸ならばいざ知らず、剣術に恋に愚直な彼は、親友の助言をありがたーく胸に刻んでしまって……。

「ははは。なに、君とミーアの仲がこじれたら、俺も困るからな」

爽やかな笑みを交わす二人の王子。

……とんでもないことが起ころうとしていた！

一方、ミーアはと言うと……。

第四十三話　低きに流れたその先に……

ミーアは、いつになく絶好調だった。
気持ちよく、自らの背中を押す流れに身を委ね、すいすい、ぷかぷか、気持ちよーく浮いていた。ご満悦な様子で鼻歌など歌ってしまうほど、上機嫌だったのだ。
いつものように、自らを押し上げる波がないと悟るや否や、低きに流れることにより、流れに乗る、などと言う離れ業をやってのけたミーアである。
さらに、その流れは、徐々に徐々に速く、力強くなっているように感じられた。
その兆候は、初日、キノコ狩りを終えたところで現れていた。
午後の時間いっぱいを使ってキノコ狩りを満喫したミーア。るんるんで、キノコを食堂に運び込みつつ、
「ふぅむ、なかなかいい感じで採れましたわ。うふふ、すっかり、わたくしが楽しんでしまいましたわね……あら？　これ……もしやラフィーナさまに、怒られないかしら？」
などと、若干、不安になったりしていたのだが……ちょうどそこへ。
「ミーアさん……」
「ひっ……！」
タイミングよく、ラフィーナが出現した！
朗らかな笑みを浮かべ、つかつかと歩み寄ってきたラフィーナに、ミーア、若干ビビる。けれど……ラフィーナはそのまま、ひっしとミーアの手を握りしめた。
「あっ、ら、ラフィーナさま、わたくし、まだ手を洗っていないので、汚れてしまいますわ」
などと言うのも聞き流し、ラフィーナはジッと、ミーアの目を見

つめて……。
「聞いたわ。ミーアさん、お昼のこと……」
感動に、瞳をウルウルさせつつ言ったのだ。
「……はぇ？」
「貴族の子弟と、孤児の子どもたちを一緒のテーブルに座らせて、一緒にランチを食べさせたこと、テーブルマナーを貴族の子弟たちに教えさせたこと……噂になっているわ」
そうしてラフィーナは、ニコニコと微笑んだ。裏表のない、年相応の、普通の少女のような笑みだった。
「さすがね、ミーアさん。素晴らしいわ。セントノエルに通う生徒たちは、特別初等部の子どもたちを扱いかねている。よく知りもしないのに蔑み、疎外しようとしている。その解消のためには、お互いに知り合うことが必要。だから、一緒に食事をするのは理想的よ。ぜひ、続けていっていただきたいわ」
それを聞き、ミーアは悟る。
――ふむ、どうやら、キノコ狩りではめを外し過ぎたことへのおとがめはなさそうですわ。それに、帝国貴族の子弟へのおとがめもなし。ふふふ、狙い通り……。
心の中でにんまーりと、してやったりの笑みを浮かべたミーアは、さらに、ここで天啓を得る。
「あ、そうですわ。どうせならば、あの昼食会をラフィーナさまの名で恒例のものにしてしまうのはいかがかしら？」
「？　どういう意味かしら？」
きょとん、と首を傾げるラフィーナに、ミーアは、にんまーり、と……朗らかな顔で続ける。
「学院の生徒たちと特別初等部の子どもたちとの昼食会を恒例化してしまったらどうか、という話ですわ。特別初等部の子たちだけで固まって座っていては、いつまでたっても学園の異物のままですし、ここは少し強引にラフィーナさまのお名前で、昼食会を強制にいたしますの。そうですわね、生徒会のメンバーも巻き込んで、生徒会

と特別初等部の食卓に、他の学生も招く形にするというのはいかがかしら？」
　生徒会、特にラフィーナやシオンのネームヴァリューをエサに、他の学生たちを引き寄せる作戦である。さらに、生徒会の他のメンバー、ティオーナやラーニャは、自国の農民たちとの関係が深い。特別初等部の生徒たちに対しても、特に抵抗はないはず。
　さらにさらにクロエに関しては、話題がない時には、豊富な本の知識を用いて、話題を作ってもらえばよい。
「題して、聖女の昼食会ですわ」
「それは……とても良い考えだと思うけれど……一つだけ気になることがあるわ。ミーアさんの功績を私が奪い取ってしまうのは……ちょっと……。それに生徒会を動員するのであれば、生徒会長のミーアさんの名前でするのがいいのではないかしら？」
　ラフィーナは、困り顔でそんなことを言う。けれど、ミーアは静かに首を振る。
　ミーアにとって、それは当然の判断だった。なにしろ、ミーアの思考の基本線は、栄光を独占することではない。リスクを分散することだ。
　貴族子弟と子どもたちとの食事会がいかに素晴らしいものであったとしても、一定のリスクはある。そして、なにか問題が生じた時、その責任を問われるのは、発案者のミーアなのである。
　であれば、ミーアとしてはむしろ、その責任を誰かに押し付け……ではなく、分かち合いたいのだ。
　ゆえに、これはラフィーナの名によってしなければならない。責任の一端を、ラフィーナにも一緒に背負ってもらいたいのだ。ぜひ！
「……ここはぜひともラフィーナさまのお名前で」
　そのミーアの言葉に、ラフィーナは神妙な顔で頷いて、
「そう……つまり、ミーアさんは、このことをも大陸に広めたいと言うのね。セントノエル学園生徒会長でも、ティアムーン帝国皇女でもなく……ヴェールガの聖女の意向として……今回の交流食事会

のようなことを推奨すると……そう表明すべきだ、と、ミーアさんは言っているのね？」
確認するように言った。
――うん……？
一瞬、ラフィーナの言っている意味がわからなかったミーアであるが、まぁ、ラフィーナがやってくれるならば問題あるまい、と頷いておく。
生徒会長としての呼びかけであれば、学校の中に留まる。帝国皇女としての呼びかけであれば、帝国内の貴族にとどまる。
けれど……聖女ラフィーナの名でその呼びかけをすれば、どのようなことになるのか……。その影響力にまで、考えが及んでいないミーアであったが……。
ラフィーナは、小さくため息を吐き、感銘を受けた様子でつぶやいた。
「さすがはミーアさん……。私は、まだまだね……。これで聖女だなんて……おこがましいわ」
「あら？　そんなことありませんわ。ラフィーナさまは頑張っておりますわ。わたくし、きちんと存じ上げておりますわ」
この時のミーアは……冴えに冴えていた。ミーアを押し流す流れは強く、ゆえに、海月ミーアはスイスイと勢いよく流れていく。
一瞬、沈んだ顔をする友だちにきちんと気付いたミーアは、すかさず励ましの言葉をかけたわけだが……この時の言葉選びは絶妙だった。
ラフィーナが「いい人」と言い切ってしまうのはまずい。事実でなかった場合、それはあまりにも見え透いたおべんちゃらになるし、事実であったとしても、今のラフィーナの心理状態によっては受け入れがたい言葉にもなるだろう。
「ミーアさんにいい人と思われてる。もっと、いい人にならなきゃ！」
などと自分を追い詰める結果になったら最悪だ。

ゆえに、ミーアは言ったのだ。「頑張っている……」と。
これならば、問題ない。なにしろ、ラフィーナが頑張っているのは事実だし、自分が頑張ってないと言う人は、あまりいない。
たぶん、あのベルにそう言ったところで、否定しないだろう。あのベルだって、自分は頑張っていると思っているはずで、だから、ラフィーナも、たぶん否定しないはずだ。
ラフィーナが落ち込んだ様子を見せたのは、頑張っても結果が出なかったためだ。そんな相手に、とりあえず、努力を認める言葉をかけ、その上で……。
「わたくし、きちんと存じ上げておりますわ」
万が一の保険も忘れない。
もしかしたら、本当は頑張ってないかもしれないけど、私の目には頑張ってるように見えてるよ、私だけは知っているよ……と、ミーアは言うのだ。
そうして、その評価を〝個人の感じ方レベル〟に限定してしまう。これにより、嘘やお世辞と受け取られる可能性を潰しにかかる。それは個人の感性だから……ミーアの目にそう映ったことを否定することは、ミーア自身にしかできないのだ。
そんな計算し尽くされた言葉にラフィーナは、一瞬、言葉を失い……、
「ありがとう……」
ぽつり、とつぶやくように言った。
それから、くるり、と後ろを向いて、
「すぐにミーアさんの提案通りにするわ。聖女の昼食会、特別初等部の子たちと一緒に食事をすること、全校生徒に推奨するわ」
そう言うと、そのまま歩いて行ってしまった。
さて、そんなこんなで、特別初等部の動き出しは、実に見事に成功していた。
当初、初等部の子どもたちを蔑視していた貴族の子弟たちだった

が、今はわずかばかり、その態度を軟化させていた。
ラフィーナの呼びかけに馳せ参じた生徒たちは数多く。競うようにして、特別初等部の子どもたちとともに食事をするようになった。
瞳をキラキラさせつつ、ラフィーナのほうに目を向ける帝国貴族の子弟たちを見て、ミーアは、ちょっぴり釈然としないものを感じたが……。
――なんだか、わたくしの時と、ずいぶん、態度が違うような……ふむ……まぁ、気のせいですわね！
深くは考えないようにして……。
「さすがです。ミーアお姉さま」
「うん？　ええと、なんのことですの？　パティ」
「この昼食会のことです。貴族と平民は、食卓をともにしないもの。ましてや孤児となど……。ミーアお姉さまは、そんな秩序を破壊し、混沌を生み出そうと言うのですね」
などと、パティとも相変わらず不穏な会話が続いていたが……まぁ、それも、とりあえずは置いておいて。
ともかくミーアは絶好調だったのだ。
授業のほうも順調だった。ユリウスの授業進行は適切で、一部の子どもと、見学にやってきたミーアが眠そうにしている以外は、しっかりと授業が執り行われていた。
子どもたちにとって、とても良い学びの場となっていた。
……そう、絶好調だったのだ。ミーアは流れに、激流に乗っていたのだ。間違いなく……。
ただ……残念なことに、ミーアは気付いていなかったのだ。
それが、楽しい波乗りではなく、激流下りであったことに。
激流の先にはたいてい、どでかい滝が待っているもので……。
「ミーアさん、少しいいかしら？」
その日、廊下を歩いていたミーアは、ラフィーナに話しかけられた。
上機嫌な顔で首を傾げたミーアは耳打ちされた瞬間……思わず、

口をぽっかーん、と開けた。
「……はぇ？　ぎ、銀の祭具が盗まれた！？」
かくて、ミーアの目の前に巨大な滝が姿を現したのだった！

第四十四話　三つの目の意味

いそいそと生徒会室にやってきたミーア。部屋の中にいたのは、ラフィーナとユリウスだった。
「ああ、ユリウスさんもいらしていたんですのね」
「ええ。私は、特別初等部の講師ですから」
軽く眼鏡を押し上げて、ユリウスが言う。キラリと光ったレンズに、ちょっぴり心強さを感じつつ、ミーアはラフィーナに目を向ける。
「しかし、いったい、どういうことですの？」
「先ほどお話しした通りよ。倉庫にしまってあった銀の祭具が盗まれていることが、わかったの」
その言葉に、ユリウスは眉をひそめる。
「ん？　ということは、子どもたちが犯人と決まったわけではないということでしょうか？　てっきり、私が呼ばれたので、犯人は初等部の子どもかと思っていたのですが……」
困惑した様子で尋ねるユリウスに、けれど、ラフィーナの表情は冴えない。
「そのとおりよ。初等部の子どもたちだとは決まっていない。でも……」
彼女が何を言いたいのか、ミーアは察した。
何しろ、ミーアは、あることないこと言われ慣れている“風評被害の第一人者”である。……まぁ、実際にはミーアの場合には、あることあることないこと、ぐらいではあったのだが。
ともあれ、この手のことは実際にやったかどうかは問題ではないのだ。今までは起こらなかったような事件が、特別初等部が始まってすぐに起きた。その事実をもって、攻撃の材料とすることは、十分に可能なのだ。

「特別初等部の子どもたちを、良く思っていない連中にとっては、ちょうどよいスキャンダルですわね……」
それから、ふと思いつき、ミーアは口を開く。
「あの、盗まれた銀の祭具というのは……」
ラフィーナは頬に手を当てて、微笑んだ。
「安心して。別に替えが利かないものではないわ。普通のものよ。もっとも、だからこそ、疑われてしまうかもしれないわね。祭具が唯一無二の価値を持つものであったなら、どこぞの貴族の子弟が欲しがったということもあるかもしれないけれど……どこにでもある普通のものならば、欲しがる理由はないから」
――なるほど。目先のお金に釣られて盗みを働きかねない者が犯人……。初等部の子どもたちが、すごく疑われそうな状況ですわ！
ミーアは、面倒なことが起きた、と思わずため息を吐く。
「そんな……。あの子たちが、犯人のはずはありません。みな、素直な子たちです」
ユリウスは、憤慨した様子で声を荒げる。
「ほかに、そういったことをしそうな者はいないのですか？　銀食器を狙う者は、なにも金銭が目的の者ばかりではないでしょう？」
「金銭以外が目的……」
「例えば、特別初等部のことが気に入らない者が、あの子たちに罪を被せようとしているとか、あるいは……そう。儀式自体を攻撃する目的だったとか」
――ああ、そう。その可能性がありますわね……。儀式を邪魔しようとする蛇が関与している……って！　もしも、この件にパティが関わっていたりしたら、さらに厄介ですわ！
ミーア、思わずクラッとする。なにしろ、その場合はラフィーナの儀式を邪魔するために盗んだということになるわけで、それは、ラフィーナに対する明確な敵対行為である。
そして、そんなパティを連れてきたのは、ほかならぬミーアである……。ミーアなのである！

――こっ、これ、すっごくまずいんじゃ……。
たらーりたらり、と背中に汗をかきながらも、ミーアは引きつった笑みを浮かべる。
「儀式自体を邪魔する者、ね」
一方で、ラフィーナはなにか考えこむようにうつむいてから、
「ともかく、できるだけ騒ぎが大きくならないように、対策を考える必要がありそうね。シオン王子にも協力してもらうとして……。ユリウスさん、申し訳ないけれど、子どもたちのこと、よろしくお願いするわね」
「はい」
深々と頭を下げ、それから顔を上げたユリウスは少しだけ微笑んで……。
「失礼ながら……安心いたしました。てっきり、特別初等部を閉じると言われてしまうかと思っておりました。それでは、子どもたちが可哀想ですから」
「あの子たちがやったと決まったわけではない。それはあり得ないことよ。安心して」
優しげな笑みを浮かべるラフィーナに、もう一度、頭を下げてから、ユリウスは部屋を出ていった。

「儀式を邪魔したい者……ね」
悩ましげに、もう一度つぶやいてから、ラフィーナはミーアに目を向けた。
「ミーアさんには、言っておかなければならなかったわね」
その強い視線に、ミーアはドキッとする。
「はぇ、えっと……？　なっ、なんのことでしょう？」
パティのことを疑われていたらどうしよう？　などと……、イヤだなぁ、聞きたくないなぁ、なんて思っていたミーアだったが、ラフィーナの口から出たのは意外な言葉だった。
「バルバラさんのこと……彼女は、まだ、この島にいるの」

「……はぇ？」
一瞬、なんのことだったか、と首を傾げかけるミーアだったが、そう言えば、脱走してきたバルバラに、この島で襲われたんだっけ……などと思い出し、
「あら、元居た施設に戻されたものとばかり思っておりましたけれど……」
「実は扱いがまだ決まらないのよ。彼女は確かに蛇で、その思想にかなり染まっているけれど、その過去に同情の余地がないわけではない。だから、あまり過酷な場所に閉じこめておくこともできないだろう、と……」
「なるほ、ど……？　ん？　では、もしや、ラフィーナさまはバルバラさんが今回の盗みの犯人だとでも言いますの？」
バルバラは、確かに儀式の邪魔をしそうな人間には違いないが……。
「調べた感じではそうではないと思っている。けれど、一方で、混乱を起こすタイミングの的確さからは、蛇の関与を疑いたくもなる状況ね」
特別初等部は、蛇の温床に対する一手。それに対する的確な嫌がらせは、確かに、蛇の仕業に見えなくもない。
「しかし、蛇……本当に厄介な連中ですわ」
思わずと言った様子でため息を吐くミーアに、ラフィーナは、わずかに声を落として、
「ところで、ミーアさん。三つの目の意味は、ご存知かしら？」
唐突に、そんなことを言った。
「三つの目……？　というと、ヤナさんたちの刺青のことかしら？あの子たちの部族に由来するものとしか聞いておりませんでしたけど……」
きょとりん、と首を傾げるミーアであったが、続くラフィーナの話に、思わず眉をひそめる。
「あれは『真実を見通す目』という意味。古い邪教に共通する概念

なの」
そう言って、ラフィーナは、自らの額を指先で指し示しながら、
「神が作り、非常に良いと評価した『人』では不足がある。ゆえに、神の不足を補うために、真実を見通すための、三つ目の瞳が人間には必要だ、と。それは、ある種の神への冒涜の表明なのよ」
「あの子たち、ヤナとキリルの刺青にも、その意味があると？」
「どうかしら？　未だにその意味を持っているかはわからないけれど……少なくとも、そういった意味が、かつてはあったのよ。そして、あの子たちは、ガヌドス港湾国からやってきた」
そう言うと、ラフィーナは、羊皮紙の束を机の上に置いた。
「それは……？」
「調査の途中経過よ。ミーアさんが見つけた、地下神殿のね」
「地下神殿……？　ああ、あの……」
夏休み、エメラルダとの旅行で見つけてしまった例の神殿。初代皇帝の悪事と、混沌の蛇との関係を示す碑文……。すっかり忘れていた、あの光景を思い出し、ミーアは思わず苦い顔をする。
あの地下神殿があった無人島は、どこにあったか……？　そして、初代皇帝が出会ったという、混沌の蛇とは、何者であったのか？
「……まさか」
ラフィーナは静かに頷いた。
「報告書に、海洋の少数部族、ヴァイサリアンのことが書いてあったわ。混沌の蛇のルーツかもしれない、その候補の一つとしてね」
「では。まさか、ラフィーナさまは、あの子たちの先祖が混沌の蛇に関係しているというだけで、あの子たちを罪に定めようとしているのでは……」
ミーア……ちょぴっと震える。
なにしろ、ミーアは初代皇帝の子孫……のみならず、のみならず！　なのである。
ごくごく直近のご先祖、すなわち、祖母パトリシアが混沌の蛇教育を受けていたことが、つい先ごろ判明してしまったのだ。

もしも、遠い先祖が混沌の蛇の源流かもしれない、なぁんて理由であの姉弟が罪アリ！　とされてしまうならば、自分もまた、裁きの対象を免れないわけで……。

そんなミーアに、ラフィーナは驚いた顔をした。

「まさか、違うわ、ミーアさん。私が言いたいのは、そういうことじゃないの」

ブンブン、っと首を振ってから、ラフィーナは続ける。

「ただ、思ったのよ。あの子たちも、混沌の蛇の被害者なのかもしれないなって……だとしたら……守ってあげなければならないわ。なんとしても……」

真剣な顔で、子どもたちを守らんと決意を固めるラフィーナに、ほうっと安堵のため息を吐くミーアであった。

第四十五話　パティの友だち、パティの過去

「ふーむ、ルーツ……。ううむ……」
ラフィーナから聞いた話は、しばらくミーアの頭から離れることはなかった。
腕組みをし、考え事をするミーアの足は、自然とある場所に向かって歩いていった。
ある場所……すなわち……食堂であるっ！
難しい話を聞いて、すっかりお腹が減ってしまったミーアなのであった。やはり、夕食前に難しい話を聞くもんじゃないな、と思いつつ、ズンズン食堂に向かっていく……っと。
「あら？　パティ……それに、ヤナとキリルまで……」
ちょうど、食堂の入り口まで来たところだった。そこに見知った顔を見つける。
「あっ……ミーアお姉さま」
ミーアに気付いて、パティが声をあげる。つられて、姉弟もミーアのほうを見た。
これは、珍しい顔合わせ……と思いつつ、ミーアは三人のほうへと歩み寄る。
自然、ミーアの視線はヤナとキリルのほうに向いた。ミーアから指摘を受けたからかはわからないが、二人は、ちょっぴり前髪を短く切っていた。そのおかげで、二人の顔がよく見えた。
姉のヤナは、気が強そうな鋭い瞳と、美しい鼻筋が特徴的な少女だった。将来は、きっと顔立ちのはっきりとした美しい女性になるに違いない。対して、キリルのほうは、ちょっぴり気弱そうな顔をしていた。ミーアのほうに向けてくる丸い目は、おどおどとしていて、どこか落ち着きがない。
そして、姉弟の額には、揃って『瞳』の刺青がしてあるのだ。

――混沌の蛇のルーツ……。ヴァイサリアン族……。
「あの……？」
ジッと見つめてしまったからだろう。怪訝そうな顔をするヤナに、ミーアは優しく微笑みかける。
「これから三人でお食事ですの？」
「はい。今夜は、一緒に食べようって約束しました」
かくん、っと頷くパティに、キリルが嬉しそうに頷いた。
「赤月豆（ムーンビーンズ）をパティお姉ちゃんに食べてもらうの」
ニコニコ笑みを浮かべるキリルの頭を……なんと、パティが撫でていた！　その慣れた手つきに、ミーアは、おや？　と不思議に思う。
「好き嫌いなんか贅沢だって言ってるのに……パティが甘やかすから……」
困り顔でつぶやくヤナに、ミーアはさらに首を傾げた。
「あら……、パティ？」
「あっ、えっと、ちがくて。パトリシア、さま？　です」
「ふふふ、別に呼び捨てで構いませんわ。ねぇ、パティ？」
ミーアの問いかけに、無言で、コクリ、と頷くパティ。それから、ヤナの顔を見つめて、
「うん、大丈夫。今まで通りで……あなたたちは友だち、だから」
小さな声で、けれど、しっかりと断言するパティに、ミーアは思わず微笑んでしまう。
――ふむ、お友だちができたのですわね。良い傾向ですわ。
蛇に縛られた家、イエロームーン家のシュトリナを救い出したのは、友だちであるベルだった。パティも同様に、友だちとの繋がりが、大きな助けになるように思えた。
さて……夕食を堪能した後、二人と別れて部屋に戻ったところで、ミーアはパティに微笑みかける。
「それにしても、よかったですわね、いいお友だちができて」

そう微笑みかけると、パティはコクリと頷いて……、
「はい……あ、いえ……。友だちじゃありません」
「うん？」
不思議な反応を示すパティに、ミーアは首を傾げる。が……。
「蛇に友だちは必要ない。邪魔になるだけ、だから、友だちじゃありません」
「そう……」
ミーアは、思わず唸ってしまう。
――やっぱり、なんだか違和感がありますわね。この子……本当に蛇になりたいと思っているのかしら？
今のミーアの頭は比較的よく回転していた。なぜなら、夕食のデザートが美味しかったからだ。とても美味しいデザートだったのだ。特にクリームの上に載っているムーンチェリーが絶品で……まぁ、それはともかく。
「パティ、あなたは……」
「あの、それよりミーアお姉さま……。大切な宝が盗まれた、と聞きました」
「ああ。あなたも聞いたのですのね」
「はい。銀の大皿がなくなったと……」
「そのようですわね。うーむ……」
一転、ミーアは難しい顔をする。それを見て、パティは、ちょっぴり不安げな顔で……。
「まさか、特別初等部が解散……ということには？」
「そんなことはさせませんわ。大丈夫ですわ……。でも……うふふ」
っと、そこでミーアは笑みを浮かべる。
「それにしても、パティはよほど大切なんですわね。お友だちのことが……」
ミーアの言葉に、けれど、パティは、びくんっと体を震わせて……。
「そんなこと、ない……です」

慌てた様子で首を振ってから、まるで言い訳するように……、
「特別初等部は……混沌の蛇の役に立ちます。秩序を壊し、混沌を生み出す助けになると思います」
「ああ……そうですわね。確かに、そうかもしれませんわ」
必死に、特別初等部の存続を訴えるパティに、ミーアはそっと頷いて、
「それならば、きちんと続けられるよう、頑張らなければなりませんわね」
ミーアは静かに、つぶやいた。

その日の夜のことだった。
ミーアは不気味な声で目を覚ました。
うう、ううう、っと苦しげな声……。とても苦しくて、悲しくて……恐ろしい……まるで幽霊のような声！
ミーアは……聞こえなかったふりをした。
この手の者に反応してはいけないのだ。聞こえない、怖い声なんかぜんっぜん聞こえない！　聞こえない！
自分に言い聞かすが……。
「ミーアさま……、ミーアさま」
ゆさ、ゆさ、と体を揺すられ、ミーアは仕方なく体を起こす。っと、心配そうな顔をするアンヌが見えた。
「アンヌ……どうかしましたの？」
「その、パティさまが……」
「パティが？」
ミーアは起き上がり、パティのベッドへ。
「……うなされておりますわね」
小さく囁き、パティの顔を覗き込む。っと、
「んっ……、ぅ……ハンネス……」
眉根を寄せて、ギュッと毛布を抱きしめるパティ。その口からこぼれた名前に、ミーアは小さく首を傾げた。

「……？　ハンネス？　はて？」
聞き覚えのない名前だった。
少なくとも、特別初等部の子どもの名前ではないはずだ。
「どういうことかしら……？」
この年頃の子どもが夢に見るとしたら、一番は両親のことだろう。けれど、普通は、親を名前で呼びはしない。あるいは、友だちの名前、使用人の名前という可能性も考えられるが……。
――そう言えば、先ほどのキリルに対する態度……。もしかしてパティには、弟がいたんじゃないかしら……？
パティが、ヤナ、キリルと仲良くなったことも、その考えを補強する。
――ヤナとパティは性格が全然違うように思いますけれど、同じ姉という共通項が二人を歩み寄らせたのかもしれませんわ。
ミーアの頭の回転は、相変わらず悪くなかった。寝る前にこっそり食べたクッキーが美味しかったのだ。ちなみに、きちんとその後、口もゆすいだ。どうでもいいことだが……。
――しかし、お祖母さまの弟といえば、わたくしの縁戚。もしかすると、お祖母さまのご実家のご当主であったかもしれませんわ。さすがに、わたくしが知らないはずはないわけですし……。妙ですわね。
怖いから、呪われたクラウジウス家の情報を完全にシャットアウトしていたことなど、もはや覚えてもいないミーアなのであった。

第四十六話　メイタンテイ・ミーア、謎がすべて解けた気分になる

翌日から、メイタンテイ・ミーアは、助手のアンヌとともに早速動き出した。

なにしろ、昨夜、ヤナたち姉弟とパティの関係が判明したのだ。もしもこれで、あの姉弟を処断、などということになったら、パティが蛇になることが確定してしまいそうである。

ついてくるアンヌもまた、鼻息が荒い。

子どもたちに対する同情はもちろん、ミーアの始めた特別初等部構想の危機である。ここで奮起しなければ、メイドが廃る、とばかりに、気合十分の顔でミーアについていく。

「ミーアさま、どちらに向かわれますか？」

「そうですわね……うーむ、どうしたものかしら……」

腕組みしつつ、ミーアが唸る。

――なんとか、誤魔化したいところですけれど、セントノエルで起きた事件を適当に誤魔化すのは危険……。うぐぐぐ、なんとかしなければ……。

「ミーア姫殿下っ！」

っと、そこに声をかけてくる者がいた。

振り返ると、そこに立っていたのは、例の帝国貴族の子弟たち……のリーダー格の少年だった。

「あら、あなたは……、確か、チェスクッティ子爵のご子息のクレメンスさん、でしたわね」

ミーア、ニッコリと笑みを浮かべてやる。

後々、面倒を起こしそうな生徒には「お前の名前はきちんと把握しているぞ！」と釘を刺していくスタイルのミーア……であるのだが……。

「ミーア姫殿下が……僕の名前を……」

なぜか、クレメンス少年、感動した様子で、目をウルウルさせていた。が、すぐに、ハッとした顔で首を振り、
「そんなことより、姫殿下、その……噂を聞いたのですが、あいつらが大切な祭具を盗んだって……」
――あら、なかなかに耳が早いですわね……。
ミーア、内心で舌打ちする。一部にだけしか知られていないのなら、それほどの騒ぎにはならなかっただろうに、いったい、誰がペラペラとしゃべって回っているのやら……。
――それとも、特別初等部に関連付けた悪い噂というのは、広がりやすいということかしら……？
頭痛を堪えつつ、ミーアはクレメンス少年に視線を戻した。彼もてっきり苦情を言いに来たものだとばかり思っていたのだが……、
「本当に、その……あいつらがしたんでしょうか？」
彼は、どこか悔しげな顔で言った。
「なんとも言えませんわね。疑わしく思うのは仕方ないのかもしれませんけれど、仮に盗んだとして、どこに隠しておくのか。それに、このセントノエル島で売れると考えているとは思えませんし。というか、銀の祭具なんてヴェールガ国内でも売れないんじゃないかしら？」
仮にお金のために盗んだとして、祭具なんて、そうそう簡単に売れるものでも無いだろう。となると、あの子たちが怪しいとは一概に言えないわけで……。
そんなミーアの言葉を聞いて、少年は、一瞬、ホッとした顔をして、でも、すぐに首を振り、
「……ま、まぁ、下賤な民草のすることなんか、信用なんてできませんけど……」
その、なんとも言えない物言いに、思わず、ミーアは微笑んでしまう。
クレメンスは、バツが悪そうな顔で一礼すると、その場を去っていった。

「……しかし、直接的にあの子たちと触れ合っていた生徒はまだしも、ただ単に『貧民の子』と言うレッテルで考えている生徒たちは、問題ですわね。なんとかしなければなりませんわね」
ミーアのそんな不安は不幸にも的中した。

翌日から、生徒会には苦情が相次ぎ、シオンをはじめとしたメンバーは対応に追われるようになってしまった。
一方で、ミーアは打開の手立てを探していた。
ヒントになりそうな人物を見つけて、ミーアはその後を追いかけた。それは……。
「ユリウスさん、少しよろしいかしら？」
「ああ、ミーア姫殿下……。なにか？」
怪訝そうに首を傾げるユリウスに、ミーアは生真面目な顔で話しかける。
「少しお話がございますの。よろしいかしら？」
「はい。では……そうですね、部屋で話しましょう」
ユリウスはチラリ、とミーアの後ろに目をやった。おそらくは、ミーアと部屋で二人きりになるような状況を避けたのだろう。実に気が利く男である。
そうして、ユリウスの後について、ミーアとアンヌは、彼の部屋にやってきた。
特別初等部の教師用にしつらえた部屋、大きな机の上には雑多に分厚い本が置かれていた。
「あら、これは、授業に使う本かしら？　ずいぶんと熱心に準備されておりますのね」
「ええ。教育に手は抜けません。それに、みんないい子たちですから」
ユリウスに勧められるまま、椅子に座る。と、それを待って、ユリウスが話し始めた。
「それで、お話というのは、例の盗難の件でしょうか？」

「ええ。その通りですわ。子どもたちの様子はいかがかしら？」
そう問うと、ユリウスは、心配そうな顔で頷いて、
「みんな混乱している様子です。心配はいらないと言っているのですが……。しかし、正直なところ、ミーアさまは、どうお考えでしょうか？　あの子たちがやったのではないと、私は思っておりますが……」
「ええ、もちろん、わたくしも信じておりますわ。けれど、みながそうではない。だから、納得させなければならないと思いますの。そのために、ぜひ、あなたのご意見を聞きたいと思ったのですけど……」
その言葉に、ユリウスは、困惑した様子で瞳を瞬かせた。
「ミーア姫殿下は……やはり噂に違わず、変わった方なのですね」
「噂……はて、それは、どのような……？」
「ああ、いえ、申し訳ありません。決して悪い意味では……。ただ、高貴なる身分の方々は、大抵、民を下賤なものとお考えですから。てっきり、あの子どもたちを犯人扱いするものとばかり……」
「民が下賤……ああ、そのように見下すのは、とても馬鹿げたことですわ」
それこそが、断頭台へと至る道なのだ。民は決して下賤でもなければ、弱くもない。いつまでも踏みつけにすることなどできない。それをミーアは痛いほどよく知っていた。具体的には、こう、首の辺りが痛いほどに。
「そんなミーア姫殿下ならば、おわかりいただけると思いますが……、あの子たちは決して盗むようなことはしない。であれば、それよりは、ほかに誰か疑わしい者がいるのではございませんか？　ラフィーナさまのご様子を見ていると、そのように感じられたのですが……」
「疑わしい人物……。まぁ、そうですわね」
確かに……疑わしい人物筆頭のバルバラは、今まさにこの島にいる。彼女が島にいるタイミングで、このような事件が起きる。それ

は、はたして偶然だろうか？
「要は、犯人がわかればいい。あの子たち以外の犯人がいればいい。だから……場合によっては、罪を被ってもらう、ということも必要かもしれませんね」
眼鏡を光らせるユリウスに、ミーアは、ゴクリ、と生唾を飲み込む。
「それは……つまり、生贄を出す、ということですわね」
深々とユリウスは頷き、
「察するに、ラフィーナさまのご様子だと、今お考えの人物は、もともと疑われるに足る罪を犯していたように感じます。であれば……今回の盗みの罪を加えたところで、どうということもないでしょう？」
確かに……蛇に罪を擦り付けてしまえ、というのは、ミーアも思わないでもない。ないが、しかし……。
「あの子たちを守ることが大切です。そのための手段の一つとして検討しておくのが良いのではないかと思いますが……」
子どもたちのため……そう言われてしまうと、ミーアとしても反対しづらい。それしか手がないのなら、仕方ないのかもしれないが……。バルバラの境遇を知ってしまったミーアとしては、あまり酷いことをしたくはない。
ラフィーナとて、それは同じことだろう。
「その〝心当たりの人物〟というのがどこに閉じこめられているのか、本当に、盗むことができないのか、調べておいてはいかがでしょうか？　場所さえお聞きできれば、私が……」
「ああ、いえ、それには及びませんわ。ラフィーナさまにお任せしましょう」
さすがに、バルバラに他の者を会わせるわけにはいかないだろうが……。
――手段を選べる状況ではない、ということなのでしょうけれど……。

ミーアの悩みは深かった。

ユリウスの部屋を後にしたミーアは、考え事をしつつ、聖堂へと向かった。

「こう、コロッと犯人が見つかればいいのですけれど……」

などと、しょーもないことをつぶやきつつ、聖堂へと入る。

セントノエル学園の聖堂は普段から、生徒たちには開かれた場所だった。

荘厳なる聖堂で時に祈り、時に心を静め、自身の行いを振り返ることは、中央正教会が勧めるところだった。

けれど、その日、そこには普通の学生は一人もいなかった。代わりにいたのは……、

「ああ、ミーアさん」

純白の聖衣に身を包んだラフィーナと、その従者たちの姿だった。どうやら、なにか儀式を執り行っていたらしい。

「あら、ラフィーナさま、これはいったい……？」

「盗まれた聖具の取り換え作業をしているところよ」

そう言って、ラフィーナは木の箱から、それを取り出した。

それは、白い輝きを放つ、銀の大皿だった。

「ああ、それがそうなんですのね。パンを載せておくためのものかしら？」

「ええ。他にもいろいろと用途はあるのだけど、実のところ、聖餐に使っているというだけで、実際には普通の銀のお皿なのよ。聖具と言ってもね」

ラフィーナが小さく肩をすくめた。

「こうして、取り換えが利くものだから、騒ぐことはない、と言いたいところだけど……」

困り顔でため息を吐くラフィーナ。ミーアは微笑み返しつつ、

「そうですわね……。しかし、これはまさしく大皿ですわね……。とっても大きい……んっ？」

ふと、ミーアは違和感を覚えた。確か……最初、ラフィーナは言っていなかっただろうか？　銀の祭具が盗まれた、と……。

けれど、ミーアは、その実物を見て、ああ確かに『祭具』だ、とは思わなかった。確かに、『銀の大皿』だと思った。

それは、なにゆえか……？　少し前に、銀の大皿だと聞いていたからだ。

「なるほど、確かに、これは、大皿ですわね……。でも、わたくしはそうは言わなかったし、ラフィーナさまも、たぶん言っていなかったはず……。では、なぜ……パティは、大皿と言っていたのか……」

盗まれたものが大皿だとなぜ知っていたか？　それは、すなわち……。

ミーアは……すぅっと青くなった。

――まっ、まさか……パティが盗んだから……ということでは？

いえ、でも……。

その時だった。聖堂に入ってくる者がいた。それは……。

「失礼いたします。ああ、ミーア、ここにいたのか」

「まぁ、アベル。帰ってきたんですのね！」

ミーアはパァッと明るい笑みを浮かべるのだった。

第四十七話　ミーア姫、出陣！　乗馬デートに……

アベルに駆け寄ったミーア……であったが、すぐに不安になってしまう。
久しぶりに会ったアベルが……なぜか、怖いぐらいに真面目な顔をしていたためだ。
「どっ、どうしましたの？　アベル、なんだか、お顔が少し怖いですわよ……？」
「え、ああ、いや、なに……。別に大したことではないんだが……」
アベルは、顔を両手でパンパンッと叩いてから、笑みを浮かべた。
「実は、君を乗馬デートに誘おうと思ってね」
「……はぇ？」
突然のことに、ミーア、きょっとーんと首を傾げる。
「もちろん、時間があれば、なのだが……」
「うぇ、あ、もちろん、ございますわ。ええ、というか、作りますわ、時間ぐらい」
それから、ミーアはチラリとラフィーナのほうを見る。っと、ラフィーナは苦笑いしつつ、お腹のところで両手をギュッと握りしめ「がんばって！」と口の動きだけで伝えてくれた。
ミーアは、こくり、とそれに頷き……、
「それでは、準備もございますし、そうですわね。半刻……いえ、一刻後に厩舎で待ち合わせ、ということでいかがかしら？」
「わかった。楽しみにしているよ」
そうして、アベルと別れたミーアは、廊下をツカツカと歩き……。
小走りになり……。
全力疾走になる！
走りつつ、自分のドレスに鼻を近づけてクンクン……。
――汗臭くはないですけれど……念のためですわ！

ミーアは、凛とした顔で、
「アンヌ、急ぎ、湯浴みをしますわよ！　それと、乗馬用の服の準備をお願いいたしますわ！」
専属メイドに指示を飛ばす。その様は、さながら戦を前に動き出す大将軍のごとく。
「かしこまりました！」
応！　っと気合の入った声で答えるのは、将軍の最も信頼する軍師、アンヌであった。
そして、彼女はその信頼に完璧な形で応えてみせた。
ミーアをお湯に浸け、きゅっきゅと磨き上げ、その後、乗馬服を身に着けさせるその手際、さながら古強者のごとく……。
迅速を極めつつも、丁寧かつ繊細なその手腕に、ミーアは思わず瞠目する。
――ああ、あの、ケーキを宙に飛ばしていたアンヌは、もう、ここにはいないのですわね……。
などと感慨に浸っていたところで、アンヌは言った。
「ご準備が終わりました、ミーアさま」
「ありがとう、アンヌ。助かりましたわ」
ふぁっさ！　と洗い立ての、サラサラの髪を風に躍らせつつ、ミーアは颯爽と歩き出す。
「それでは、参りますわよ、いざ、厩舎へ！」
こうして、ミーアの決戦（デート）は静かに幕を上げるのだった。

――ふむ、思えば、こうして厩舎に来るのは久しぶりな気がしますわ。
最近はすっかり忙しくって、馬に乗っている余裕もなく……馬たちともご無沙汰になっていたミーアである。
――腹いせに、くしゃみでも吹っ掛けられないといいのですけれど……。
などと警戒しつつやってきたミーアは、そこで首を傾げた。

「あら、荒嵐がいない……。いったい、誰が……？」
馬龍が卒業して以降、荒れ馬である荒嵐に乗りたがる人は、めっきり減ってしまっていた。なにしろ気分屋の荒嵐である。乗りこなすことは、大陸有数の騎手を自任する（自任する！）ミーアであっても、並大抵のことではない。
御するだけでも一苦労、楽しい乗馬など到底望むべくもない馬なのである。
ゆえに……荒嵐は、てっきり寂しい思いをしているのでは？　と思っていたミーアであったのだが……。
「おや、ミーア姫。これから、遠乗りか？」
不意に声。振り向くと、そこには、荒嵐を引いて歩いてくる少女の姿が……。それは、
「あら、慧馬さん。セントノエルに来ていたんですのね。乗馬に行っておりましたの？」
騎馬王国への復帰を果たした火の一族、その族長の妹である火慧馬だった。
彼女は荒嵐の首筋を撫でながら、
「せっかくだから、聖女ラフィーナに頼んで乗らせてもらったのだ。なかなか良い馬だ。足の逞しさ、筋肉の付き方と言い、申し分ない。さすがは、ミーア姫の愛馬だな。我が愛馬、蛍雷にも負けぬ見事な馬だ。ふふふ、なかなか乗るのには苦労したが、堪能させてもらった」
賛辞の言葉に、荒嵐は、誇らしげに、ぶーふっと鼻を鳴らした。
ひくひくする鼻を見て、思わず身構えるミーアだったが……荒嵐は「なにやってんだ？」と怪訝そうな顔で見つめてくるばかり。
「ん？　どうかしたのか？」
不思議そうな顔をする慧馬に「なにしてるんでしょうね？」などと、首を傾げてみせる荒嵐。実に利口そうな顔をしていやがる！
――むっ！　なにやら、わたくしに対する時と態度が違うような気がしますわ！

微妙に釈然としない気持ちになるミーアであったが……気持ちを落ち着けるべく、ぶーふっと一息。それから、改めて慧馬に向き直る。
「ところで、今日は、どうなさいましたの？」
「ああ、実は先日、兄から連絡が入ってな。その報告と、それから、林族の馬龍から聖女ラフィーナへの文も預かっている」
「あら、馬龍先輩から、ラフィーナさまに？　なにかしら……？」
「わからないが、まぁ、そこまで緊急のことではなさそうだったな。気にしなくっても良いのではないか……？」
などとつぶやきつつ、ふと、なにかを思い出したかのように、きょときょと、と辺りを見回し始める慧馬。
「……ところで、あの男は、いないだろうな？」
「あの男……？　ああ、ディオンさんですのね？　ええ、彼には帝国で仕事をしていただいておりますわ」
「そうか……。いや、しかし……あの男は狼以上に神出鬼没。油断は禁物だ」
一瞬、ホッと息を吐いた慧馬だったが、すぐに首を振り……。
「恐ろしいモノが来る前に我は行こう。聖女ラフィーナが待っているだろうしな……。ミーア姫も、乗馬を楽しむといい」
そう言って、いそいそと去っていった。
「ふむ、未だにディオンさんのことが怖いんですのね。まぁ、気持ちはよくわかりますけれど……慣れればそれほどでも……いや、やっぱり怖いものは怖いですわね……」
「すまない。待たせたかな？」
とそこに、ちょうどタイミングよくアベルがやってきた。そちらに目を向け、ミーアはニッコリ笑みを浮かべる。
「いいえ、わたくしも今来たところですわ」
「それならば良いのだが……。ああ、それはともかく……」
んっ、んん、っと喉を鳴らしてから、アベルは言った。
「その服、とてもよく似合っているね。乗馬服を新調したんだね」

「うふふ、ありがとう。嬉しいですわ」
少しばかり体が大きくなった（横に＝ＦＮＹではない。縦に、である。身長的にである。成長である。断じてＦＮＹではない！）ミーアは、つい先日、乗馬用の服を新調したばかりである。ちなみに……。
『ふむ、せっかくですし、少しきらびやかなものを……』
などと不穏なことをつぶやくミーアを、アンヌが全力で止めた結果、決まったデザインであった。
ミーアの乗馬技術が非常に優れたものであることを疑わないアンヌではあるのだが……同時に、ミーアがよく馬から落っこちることをも知ってもいる。
ゆえに、騎馬王国でミーアが身に着けたような服を着てくれるのが、理想と言えば理想。ということで、できるだけ機能性が高く、落ちた時にダメージが少なそうなものをチョイスし、そのうえで……。
「ミーアさま、その時々に相応しい格好というものがあると、私は思います。いかに美しい水着であっても、乗馬の時に着ていたら笑われてしまいます。いかに良い乗馬服であっても、ダンスパーティーに着ていけば白い目で見られます。そして、いかに美しい服であろうと、乗馬の邪魔になるような飾りが付いたものは……」
頭にルードヴィッヒを思い浮かべ、説得するアンヌ。その言葉を聞き、アンヌの顔に幻の眼鏡を見て取ったミーアは、
「なるほど……確かに、そうでしたわ。この服は、いざという時に馬に乗って逃げる際にも身に着けるもの。であれば、もっと機能的なものを……」
コロッと幻想の権威に負けて、アンヌの進言を受け入れたのだった。
――アベルも気に入ってくれたみたいですし、うふふ、さすがは恋愛軍師アンヌですわ。

心の中で、忠義のメイドに称賛を送りつつ、ミーアはアベルのほうを見た。
「それで、今日は、どちらに参りますの？　やはり、ノエリージュ湖の湖畔がよろしいかしら？」
「そうだな……。いや、今日は森のほうに行ってみるのはどうだろうか？」
アベルに言われ、ミーアは、うふふ、っと笑った。
「いいですわね。緑が芽吹いていて、とっても気持ちいいと思いますわ」
上機嫌に、歌うような口調で、ミーアは言うのだった。

第四十八話　ミーア姫、あまりのツラさに……ニヤニヤしながら耐え忍ぶ！

「うふふ、実に爽やか。風が、すごく気持ちいいですわ」
空を見上げ、ミーアは穏やかな笑みを浮かべた。青く澄み渡る空、白い雲は陽の光に淡く輝き、穏やかな温もりが地上へと降り注ぐ。
初夏の暑さに、時折そよぐ風が実になんとも心地よい。
ぱから、ぱこら、と平和な足音を立てる二頭の馬。アベルが乗るのは花陽、そして、ミーアは……なんと、荒嵐の子、銀月に乗っていた。思わず、はいよー！　などと叫びそうになったミーアである。
……ちなみに、荒嵐は、ミーアの顔を見て、ものすごーくやる気のなさそうなため息を吐いていた。
「まぁ、よほど慧馬さんに走らされて、疲れておりますのね」
などと言うミーアが、最近、ちょっぴり食べ過ぎな己を省みることはなかった。大丈夫だろうか……？　夏はどんどん迫っているのだが……。
さて、銀月に初めて乗ったミーアは、その足取りに思わず笑みを浮かべた。
――あら、この子もなかなかやんちゃですわね。ふふふ、しっかりと荒嵐の血を引いていそうですわ。
品の良い花陽とは違い、力強く、溢れるような力が、その背中から伝わってきた。
――なかなか良い馬ですわ。うふふ、持って帰りたいぐらいですわね。
などと上機嫌に笑いつつ、ミーアは少し前を行くアベルを追いかける。
やがて、見えてきたのは森だ。秋には黄色く染まる森も、今は生命力に溢れる緑一色に満ち満ちていた。
木漏れ日が照らす道に馬を並べれば、自然、二人の間には穏やか

な空気が流れる。
「いい天気で良かったですわ。先日までの荒れた空が嘘みたいですわね」
微笑むミーアに、アベルは、
「ん？　ああ、うん。そう、だね……」
なにやら、微妙に上の空。どうも、考え事でもしていた様子だったが……それで、ミーアはちょっぴり不安になってしまう。
なにしろ、アベルは、真っ直ぐな人だ。
今までのデートでは、いつでもミーアのことを気遣ってくれていたし、こんな風にボーっとすることはなかったのに……。
――アベル、どうかしたのかしら……？
思えば、先ほどからアベルの様子がおかしい気がする。なんだか、妙に表情が硬いというか……緊張しているというか……。
――お義姉さまのことで、なにかあったのかと思いましたけれど……そういう感じでもございませんし……。いったいなにが……？
ミーアは、ジィっとアベルを見つめて……見つめて……見つけるっ！
アベルのすこぅし赤く染まった頬、真っ直ぐ前を見つめているようで、ちら、ちらっと、時折、こちらを窺う瞳の動きっ！
そうして、観察眼姫（ハイパワーアイリンセス）ミーアは、看破する！
――あら、アベル、もしかして、デートが照れくさいのかしら？
いえ、でも、それも妙ですわ。デートならば今までに何度かしたことがございますし……。となると……。
そうして、ミーアの恋愛脳がぎゅんぎゅん唸りを上げる！　唸りを上げて……っ！
――馬に乗る王子さまと二人きりで乗馬デート……。人気（ひとけ）のない森の中で……王子さまは緊張した雰囲気……ふむ。このシチュエーション……どこかで……ハッ！？
やがて、ミーアは、真相にたどり着く！
――こっ、これは、エリスの恋愛小説で見たシチュエーションに

そっくりですわ！　っということは、も、もしや、この後……。
さらに、ミーアのひねり出した真相は……。
――結婚を申し込まれてしまうのですわねっ！？
……ちょっとした飛躍を遂げた！
さらにさらに！　飛躍した思考は空を飛び、月へと届かんばかりに上昇していく！
――だ、だから、あんなに緊張していたんですのね……。いえ、しかし、そんな急に……。こっ、困りますわ。わたくし、急に言われても……。
などと、ぐにぐに、身をよじっていたミーアは……。
「ミーア、君に伝えたいことがあるんだ……」
馬を止め、こちらを振り向いたアベルに、思わず、ぴょんこっと飛び上がった。
その動きに「なんだよぅ？」とばかりに、銀月が振り返るが……そんなこと、気にしている余裕などなく。
――あ、ああ、アベル、まさか……こっ、ここで？
緊張にかっちーんと固まるミーア。そんなミーアに、アベルは……アベルは……。
「ミーアの良いところを十個、ランキング形式で発表してみようと思う」
なんか、おかしなことを言い出した！
「……はぇ？」
別の意味で、かっちーんっと固まったミーアに、アベルは優しい笑みを浮かべた。
「実は、ミーアが最近大変だったと聞いてね。元気もないみたいだったから、少しシオンと相談したんだ。それで、アドバイスをもらって……」
「ほう……シオンにアドバイスを……」
ミーアの脳裏に、爽やかな笑みを浮かべるシオンの顔が思い浮かんだ。

――そういえば、ティオーナさんから、エリスの原稿を回してもらったって言ってましたっけ……。そして、確かにそんな話もございましたわね。恋人の良い出しをする、みたいなシーンが……なるほど、なるほ……ど。

ぐんにょーり、と一気に脱力するミーア。その姿は、さながら、浜辺に打ち上げられた海月のごとく、実に良い感じにしんなりしてしまう。

それは、銀月が「おっ？　走りやすくなったぞ」と足取りが軽くなってしまうぐらいの、理想的な『海月乗り』の姿勢だった。

けれど……次の瞬間、ミーアは思い知ることになる。

『あっ、これ……ヤバいですわ』と。

そうなのだ、ミーアは油断していたのだ。

まさか、気になる男の子に褒められまくることが、こんなにも、気恥ずかしいことだなんてっ！

「では……発表していく。ミーアの良いところ、第十位。食べる姿が美しい」

「あら……アベル、意外にマニアックな……」

食べる姿とは……そんなところ褒められても……っと苦笑いのミーア。対して、アベルは真面目な顔で言った。

「いや、ボクは、大貴族が料理の美味しいところだけ食べて、大部分を捨てているのを見たことがある。あれは、とても醜い。料理人にも、農民にも敬意を欠く姿に見えたんだ。だけど、ミーアは残さず綺麗に食べ、その料理を心から楽しんでいた。その姿は、とても美しいと思ったんだ」

などと、大変、誠実な答えを返されてしまい、ミーアの体が強張る。

そんなところまで見られていたのか、という気恥ずかしさ。同時に……臆面もなく美しいなどと褒められたことにより……。

――はぇ？

戸惑い、そして顔がジワリ、と熱くなってくる。

けれど、そんなミーアに気付かず、アベルの言葉は続く。
「ミーアの良いところ、九位、とても努力家で、根性がある」
ごふっと……ご令嬢らしからぬ呻き声を上げるミーア。まぁ、大体ミーアの上げる声は、ご令嬢らしからぬものがほとんどなので、いつものことと言えばいつものことなのだが……それはさておき。
「勉強や乗馬に水泳。なんだかんだで頑張って、できるようにしてしまう。その姿は、尊敬に値するし、ボクも見習いたいと思っている」
そうして、真っ直ぐに見つめられて、ミーアは、けふっと咳き込む。アベルの澄んだ瞳、凛とした顔を直視できずに、ミーアは、けふけふっとさらに咳き込む。
――こっ、これは……ヤバい。ヤバいですわ……。
実際、なかなかの破壊力だった。
そしてさらに厳しいのは、アベルの言っていることが、あながち間違っていないことだった。
これが例えば、ダンスをしてると空を飛ぶとか、天馬を駆る姿が美しいとか、そんな誤解に基づいた評価であるならば……まだ耐えられる。
けれど、努力家だ、などと褒められた日には、大変である。
『この人は、本当のわたくしを見てくれている。わたくしの頑張りを見てくれてる！』
などとついつい思ってしまい、頬がますます熱くなっていく。
そして……ランキングはまだ九位なのだ！　あと、まだ八個も発表に耐えなければならない。
こっ、これは、ツラい！　ツラいですわ！　などと頬を押さえつつ、口元がニヤニヤしてしまうミーアである。
……まぁ、それも仕方のない話。ここまで真っ直ぐ、かつ真摯な態度で褒められた経験は、一度もなかったのだから。一度たりともなかったのだから！
頭がポヤーンとしてくる中、アベルの声は続く。

「第八位、立ち向かうべき状況、引けない状況にあっては勇敢なところ。でも、これに関しては少し心配だ。できれば、あまり危険なことはしてほしくないと思うのだが……それが無理ならば、せめて、ボクを一緒に連れて行ってほしい。必ず、君のことを守るから」

「アベル……」

そうして、続いていくアベルの言葉。彼の目から見た自分自身の姿……。

アベルが、少なからず本当の自分を見てくれていたこと……。それに気付いた時……ふと、ミーアは思った。

――あら？　これ……今回の問題にも使えることなんじゃないかしら？　本質を見る……。本質を……大切に……。

目の前に微かに見えた灯、それを手放さぬよう、ミーアは懸命に頭を働かせ始める。

すでにギュンギュン回っていた恋愛脳だったから、回転数を上げるのは容易なことだった。

ミーアの様子に気付いたのか、アベルは、ちょっぴり苦笑いをしつつ、言葉を止めた。

そうして、ミーアが思考の中から戻ってくるのを、ただじっと見守ってくれるのだった。

第四十八話　ミーア姫、あまりのツラさに……ニヤニヤしながら耐え忍ぶ！（後書き）

実は、今日、ワクチン一回目です。
なので数日間コメントに返信がなければ、お察しください。
副作用、怖いなぁ……。
むしろ、注射針……怖いなぁ。

第四十九話　パトリシアは考察する

ところ変わって、特別初等部の教室。

「そういうわけで、今はラフィーナさまや、ミーア姫殿下が対応策を考えてくださっています。ですから、どうぞ、安心して。落ち着きをもって行動してください」

教壇から降り、集められた生徒たち一人一人の顔を見つめながら……ユリウスは言った。

「くれぐれも短気を起こしてはいけません。それは、君たちを助けてくれる人たちの立場を悪くするものだ。君たちがすべきことは、変わらずに勉強を続けること。何事もなかったように、静かにね。そうして身に着けたことは、将来きっと役に立つはずだ」

優しく気遣うような言葉……。

パトリシア――パティは静かに、彼の話を聞いていた。聞きながら、ジッと観察していた。

――ユリウス先生、どうして、私たちに、盗んだかどうか聞かないんだろう……？

疑問に感じたのは、そのことだった。

事件が起きてから彼は、一度たりとも、それを尋ねなかった。

――普通ならば、犯人に名乗り出ろと訴えかけるはず……。なのに、この人は、そんなこと、一度も言わなかった。

眼鏡の奥の優しげな瞳……そこに時折、悲しさを帯びた光が現れることに、パティは気付いていた。

――私たちのことを信じているから？　それとも同情……？　だとしたら、とっても……迂闊。

思いやり、優しさ、同情……そんな感情、付け入る隙以外の何物でもない。

それは、蛇の視点。相手の弱い部分を見つけ出し、そこを突き、

操らんとする視点。
パティは、蛇の目をもって、人を見ていた。
教え込まれたとおりに……。
やがて話が終わり、ユリウスが教室から出て行く。それを見計らっていたかのように……。
「おい、カロン……」
静かに、押し殺した声が響いた。
「本当に、お前がやったんじゃないんだな？」
ヤナが、鋭い視線を少年に突き刺した。
「ちげえって言ってんだろ？」
不貞腐れた顔で言う少年。それを眺めながら、パティは考えていた。
――たぶん、嘘は言ってない。あの男の子は、信じるのが怖かっただけ……。
ヤナに盗みを持ち掛けてきたという少年の心理を、パティはそう分析していた。
降って湧いた幸せ、それを信じて裏切られるのが怖かった。だから、裏切られてもいいように準備をしようと思ったし、自分と同じ境遇のヤナも、本当は信じていないんだ、と思い込みたかった。
そのほうが、安心できるから。自分の知っている価値観に重なるから。
――だから、本当には盗んでない。盗むとしても、もっとバレないようなものを盗むだろうし。
孤児として、貧民街で暮らしたことがある人間ならば知っている。銀の大皿なんか盗んだって、お金にするのはとっても大変だ。まして、貴族が使うような銀の大皿を盗むだなんて、バカげている。
そんなもの、薄汚い子どもが持って行ったら、絶対に盗みを疑われるし、大人に奪い取られてしまうのがオチだ。
――それを知らないのは、貧民街で暮らしたことのない者だけ。貴族とか……。あるいは、最初から、売ることが目的ではない、と

か……。
いずれにせよ、たぶん、カロンは犯人じゃない、とパティは判断する。
「くそ、せっかく……飯の心配をしなくて済むようになると思ったのに……」
ギリッと悔しそうに歯噛みするヤナ。だったが、その表情が、ふと和らぐ。彼女の手を、弟のキリルが、気遣うように掴んでいたからだ。
それから、ヤナは教室の生徒たちに目をやった。
不安げな、年少の少女たち。そして、ヤナと同い年の子たちもまた、泣きそうな顔をしている。
「しっ、心配はいらない。ミーア姫殿下は、すごく優しい方なんだ。ユリウス先生も言ってたとおり、信じて待っていれば……」
その言葉は、尻すぼみに消えていく。信じることとは一番縁遠い子どもたちに、その言葉を受け入れさせることが、どれほど困難か……ヤナは知っているのだろう。
パティはその光景を黙って眺めていた。
弟を守るために、必死なヤナ。どうやら、リーダー気質らしく、他の仲間たちのことまで気にかける苦労性の友人に、パティは静かにため息を吐いた。
――あんな風にたくさんのものを抱えていたら、その内、全部、手放さなきゃいけなくなる。私は……そんなことしない。
そっと目を閉じると、浮かんでくる顔があった。
生気の感じられない、やせた顔……。弟の……ハンネスの顔。
――あの子を救うためには、蛇の知識がいる。そのために……私は蛇にならなければならないから。
それこそが、パティの行動原理。唯一の肉親を救うために、彼女は蛇の知識に縋ることを選んでいた。
……正直なところ、パティは蛇が好きではない。
蛇の理想のためには、目の前のこの姉と弟のような者たちが、大

勢、犠牲になる。
それに、きっと、この子たちと友だちになったなんて言ったら、この子たちを人質に、やりたくもないことをやらされるに決まっている。
あるいは、目の前で殺して、絶望を刻みつけようとでもするだろうか？
いずれにせよ、そんなもの、好きになれるはずがない。
――蛇は、弱者の絶望に根を張る。その毒から逃れることはできない……。
教師役の女の声が、頭の中で響いていた。耳を塞いでも決して消えない、ねっとりとした声。パティの心を縛り付ける声。
今までにパティが教えを受けた蛇の教師は三人。いずれも、陰気で、絡みつくような声をした者たちばかりだった。
だけど……今度の蛇の教師は、少しだけ変わっていた。
――ミーア先生……あの人、なんなんだろ？
帝国皇女を騙り、それを演じようとするあの人のことが、パティはあまり嫌いではなかった。
――ここに来てから、わからないことばかり。それとも、私を試そうとしているのかな？
いずれにせよ、パティがやるべきことは決まっていた。
蛇の教えに従順に、決して逆らわずに……。
――ハンネスを救うためだから。
唯一の肉親である弟を、病から助けるために……。

第五十話　火の粉の内に……

アベルとのデートで心の栄養をたっぷり摂ったミーアは、学園に戻ってきた。

大切に気遣ってくれるようなアベルの言葉は、まるで、甘いあまーいお砂糖のごとく、ミーアの心でじんわり溶けて、ぽっぽとその体を温かくする。

「うふふ……久しぶりのデート、最高でしたわ。それに、これからのヒントもいただけましたし、さすがはアベルですわ」

などとホクホクしていたミーアであったが……、廊下で出くわした光景に、思わず目を疑った。

例のクレメンス少年たちと、ヤナ、キリル、パティが並んで話していたのだ。

しかも、ただ話しているのではない。クレメンスと、その取り巻きと思しき二人の男子の前に立たされるようにして、ヤナたちが立ち尽くしていた。いや、先頭にいたヤナは、頭を下げさせられていた！

――あいつ、またイジメてますの！？

フンヌ、っと憤怒の息を吐きだし、歩き出したミーアであったが……会話が聞こえそうになったところで、思わず立ち止まり……慌てて、近場の空き教室に入る。

そうして、耳を済ませれば……。

「あの……ありがとう、ございます。助けてもらって……」

ヤナの、困惑したような声。対するクレメンスの声も、微妙に歯切れが悪く……。

「いや、僕は、別に……」

などと、チラリとヤナのほうを見て……その前髪の下に覗く顔を見て、微妙に気まずそうに目を逸らした。

こっそり覗き見しつつ、ミーアは小首を傾げる。
――はて、これは……？
「というか……だ。お前たちがきちんとしていないと、ミーア姫殿下にご迷惑がかかるんだぞ。もっとしゃんとしろ。お前たちが受けた非難は、ミーア姫殿下への非難になるんだ。だから、不当な評価を受けた時にはきちんと抗議しろ。それでも、なにか言ってくるやつがいれば、それは、我ら帝国貴族への宣戦布告だ。僕たちだって、黙ってはいない」
――あら……もしかすると、クレメンス君は、ヤナたちを助けたということかしら？
会話を聞いていると、どうもそのようである。
要するに「銀の祭具を盗みやがって」とヤナたちをイジメた生徒から、クレメンスらが守ってやったのだ。
――というか、彼が言ってるのは、きちんと抗議をして、ダメそうなら自分たちが助けてやる、というのを極めて婉曲的に言っているのかしら……？
脳内で、クレメンス語を解読したミーアは、ふっと笑みを浮かべ、シュシュっとその場を後にする。
――ふぅむ、弱き民をかばおうとするあの姿勢、あれは……ラフィーナさまには良いアピールになりますわね。
うんうん、良いことだ、と頷いてから、ミーアはふと顔をしかめる。
――けれど……逆に、危険性もはらんでおりますわね。
なにしろ、ミーアの見たところ、パティへの疑いは濃厚だ。もしも、これで、パティが犯人でしたということが判明してしまったら、特別初等部をかばっている面々は立場を失うことになる。
恥をかかせやがって、と、その怒りは燃え上がるだろう。
――それに、ラフィーナさまや生徒会だって、非難を浴びることになりますわ。そして、下手をすると、怒りがわたくしへと向くこともあるはず……。

今でこそ、ずいぶん柔らかくなってきたラフィーナであるが、もしも、彼女が怒ったりしたら、やっぱり怖いに違いない。
獅子は、一見すると可愛く見えるもの。けれど、その口の中には、鋭い牙を持っている。
――これは……やはり、早いうちに手を打つ必要がございますわね。
先手先手の行動がいかに大切か、ミーアは身に染みてよくわかっている。
革命を起こさせないためには、その火が火の粉レベルの時に消してしまうこと。もっと言えば、火が付く前に水をぶっかけて周りを湿らせることが大事である。
海月の化身ミーアは、水分とお友だちなのである。
――ヒントはありますわ。大丈夫、大丈夫。
自分に言い聞かせるように、ミーアは要点をまとめていく。
――まず、パティが実際にやらかしたという前提で考えるなら、バルバラさんや蛇に責任を押し付けると言うのは得策ではありませんわ。
なにしろ、ミーアが連れてきた少女が犯人なのだ。いくら特別初等部を守るためとはいえ、ラフィーナはきっと眉をひそめることだろう。シオンあたりは、さらに厳しい目を向けてくるはずだ。
――そもそも、パティ自身が蛇の教育を受けた者なわけですし、その罪を他の蛇に被せるというのは理屈が通りませんわ。いずれにせよ、罪のない人間に罪を着せることは、蛇に突っつかれる恰好の材料になりそうですわね。
貴族、王族の高慢さは、蛇に晒すべきではないウイークポイントだ。だから、ユリウスの案は使えない。
かといって、真犯人を明らかにして特別初等部の疑惑を解くことも不可能。
ならば、どうするか……。
――真犯人は明かさず、特別初等部に向いている攻撃の矛先を逸

らす。さらには、仮にパティがやらかしたと明らかになっても問題ない、という状態を作り出す。それが大事ですわ。
特別初等部の者たちが犯人じゃない、と断言するのは危険だ。それで真犯人がパティだとバレてしまったら、ミーアは「自分が連れてきた子が犯人だということを隠すために、特別初等部が無実であると主張したんだ！」と責められかねない。
それはぜひ避けたい。ということで……。
「やはり……全校集会で説明する必要がございますわね！」
覚悟を決めると、ミーアはラフィーナのところへ急いだ。

第五十一話　私、これが無事に終わったら……ダレカのナニカのフラグが立つ時

その日の夜のことだった。
突然、訪ねてきたミーアを部屋に迎え入れたラフィーナは、思わぬ相談に考え込んでしまった。
「全校集会で、ミーアさんのお考えを述べる……。真犯人が見つかれば、すべての疑いは晴れると思うけれど……それでは意味がない、とミーアさんは言うのね？」
確認するように問うと、ミーアは神妙な顔で深々と頷く。
「ええ……まぁ、そうですわね……。できれば、今回は……その、あの子たちの中に犯人がいる、と……そんな前提で生徒たちに納得してもらえないか、と思っておりますの」
紅茶に口をつけかけたラフィーナは、一瞬、動きを止める。
それから、上目遣いにミーアを見つめる。ミーアは、慌てた様子で、わたわたと手を動かしつつ……。
「あっ、いえ、もちろん、わたくしは子どもたちのことを信じておりますわ。だけど……」
「ええ。いいの、ミーアさん。あなたの言いたいことはよくわかっているから」
ラフィーナは、改めて紅茶に口をつけ、ふぅっと小さくため息を吐く。
ミーア・ルーナ・ティアムーン、帝国の叡智と呼ばれる友人が言わんとするところ、それをラフィーナは正確に理解していた（……しているつもりだった）。
特別初等部構想は、蛇に対する攻めの一手だ。孤児や貧民街の子どもたちというのは、蛇の温床になりやすい、弱い者たちだ。飢餓や国の危機が起きた時、最初に切り捨てられる可能性が高い存在だ。
ミーアはそんな彼らに勉強させ、その境遇を抜け出す術を与えよ

うとしている。
混沌の蛇の感染する思想が『誰からも顧みられず、希望を失った弱者』に作用するというのであれば、その弱者に希望を与え、蛇の毒を無効化する。
苦境にある者たちに、秩序を破壊する蛇の毒に代わる、希望と言う名の薬を与えようとしているのだ。
そして、それは当然、セントノエルだけでやれば良いというものではない。
大陸中の、虐げられた子どもたちに手を差し伸べていかなければ、意味がないわけで……。
「ミーアさんの考えを実現するために、清廉潔白な子どもたちだけ集めるというのも無理な話……。いいえ、今いる子たちだって、過去に一度たりとも犯罪に手を染めていないなんて、決して言えないでしょうね」
貧民街で育ってきた子どもたちにとって、犯罪は生活に密着したものだ。食べ物がないならば、盗むしかない。そうしなければ死んでしまうという過酷な状況。
生き残るために仕方なく、悪事に加担した者は、当然いるだろう。
仮に、今回の盗難に関与していなかったとして、子どもたちにそんな過去があれば、やはり、特別初等部を攻撃する材料になってしまう。
ミーアたちの考えに反対の人間は、どんなことだって利用するに違いない。
――きっとミーアさんは、そのことをなんとかしたいんだわ。今いる彼らだけじゃない。将来、迎え入れるであろう子どもたちのことをも考えて……。
ラフィーナは静かに頷き、
「そのために、全校集会で話がしたいと……そういうことなのね」
「ええ。みなの前で、ぜひお話ししたいことがございますの」
セントノエルは、大陸の次世代を担う王侯貴族の子弟が集う場所。

その使い方を、ミーアはしっかりと知っている。ここで学んだことは、きっと生徒たち一人ひとりの心に根差し、それを持ち帰った卒業生たちが国を変え、世界をよりよくしていってくれる。
ミーア（……ラフィーナの中の）は、それを信じているのだ。
そのことが頼もしく、また、今までほとんどその力を使ってこなかった、自分が不甲斐なくもあり……。
「セントノエル学園の混乱を蛇がみすみす見逃すとも思えない。今の蛇にどれだけの力が残っているのかはわからないけれど、手が打てるならば早めに打っておきたいわ」
それから、ラフィーナはミーアに微笑みかける。
「ミーアさんが必要だと言うのなら、私は協力を惜しまないつもりよ。だけど……いったい、どうするつもりなの？」
その問いかけに、ミーアは意味深に微笑んで、
「大丈夫ですわ、ラフィーナさま。わたくしが必ずや……」
自信満々に、頷いてみせるのだった。

さて、ミーアが出て行ってから、ラフィーナは、島の警備の責任者、サンテリを呼んだ。
「いかがなさいましたか？　ラフィーナさま」
「例の、お願いしておいた件なのだけど、あまり急がなくっても良くなりそうなの」
「では……」
「ええ。みなの前で、犯人を吊るし上げるようなことは、しなくても済みそうよ」
「そうですか。それはなによりでした」
頭を下げて立ち去ろうとするサンテリに、ラフィーナは一言付け加える。
「ああ、もちろん、犯人を捜すことだけは継続でお願いね。それほど急がなくってもいいけれど……」
ユリウスの、あの優しげな笑みを思い浮かべながら、ラフィーナ

はつぶやく。
「ミーアさんのおかげで、あまり後味が悪いことにはならなそうだけど……困ったわね。どう処理したものかしら……」
悩ましげにため息。っと、その目が机の上に置かれた一通の手紙に留まる。
つい先ごろ、慧馬の手によって届けられた手紙、そこに書かれていたのは……、馬龍からの乗馬デートのお誘いだった！
「今回のことが無事に片付いたら、また、遠乗りに行きたいわね。うん、ミーアさんを誘って行ってみようかしら。あ、そうだわ……あの、例の馬型のサンドイッチを作ってみましょうか。ミーアさんや、ほかの方たちも誘って。子どもたちも誘ったらいいかもしれないわね……」
遠い目で、つぶやく。
「この件が無事に終わったら……そう、無事に終わったら……」
いささか、不穏なことを。
ラフィーナのちょっぴり不穏なつぶやきで、ダレカのナニカのフラグが立ってしまったような……そんな感じがしないではなかったが……。
ダレのナニのフラグなのかは、神のみぞ知るところであった。

第五十二話　揺らがぬ権威をその身に帯びて～我、クソメガネなり！～

ラフィーナとの会談の翌々日、聖堂にて、全校集会が開かれることになった。

生徒たちの前に出るのは、ミーアとラフィーナ。さらに、前方に特別初等部の子どもたちの席が設けられ、中等部以上の学生たちと向き合うようにして座っている。

詰めかけた学生たちに目をやれば、シオンやアベルをはじめとした、生徒会役員たちの姿が見えた。彼らは、学生たちに交じり座ってもらうようにしていた。

かつて、ミーアの選挙を支えた生徒たち、シオンが掌握するサンクランド貴族の者たちなどにも協力してもらい、会場の空気をミーアの有利にするのだ。

――不測の事態の際には対処してもらうようにしておりますし……これで問題はございませんわね。

まぁ、若干、問題と言えば、ベルが寝坊して遅刻していることと、シュトリナが付き添って、この場にはいないことは、問題かもしれないが……。

――うん、些細な問題ですわね。リーナさんのお薬が必要になるようなこともないでしょうし、大丈夫、大丈夫。

などと頷いている間に、ラフィーナの声が響いた。

「それでは、全校集会を始めます。今日は、銀の祭具が盗まれた件について、みなさんにお話ししたいことがあり、この集会を開きました。この件について、生徒会長、ミーア・ルーナ・ティアムーン姫殿下から、お話があります。どうか、みなさん、しっかりと聞いてくださいね」

ニッコリ、ラフィーナが清らかな笑みを浮かべる。その笑みに……なぜだろう？　ミーアはちょっぴーり、圧力のようなものを感じ

てしまうが……。
ラフィーナは、ミーアのそばまでくると、軽くウインクしてみせた。
――ああ、ええ、そうですわね。ラフィーナさまが、きちんと、話がしやすいよう、場を整えてくださいましたし……。ここからは、わたくしの出番ですわ。
ミーアはそっと立ち上がり、す、っす、と制服の皺を直す。
それから、スチャッと取り出したるもの……それは……そう！　権威の象徴、すなわち、ダテ眼鏡である！
ミーアはそっと眼鏡を覗き込み、呪文を唱えるようにして、三度……。
「……わたくしは、クソメガネ……わたくしはクソメガネ……、わたくしは……クソメガネ？」
小さな声でつぶやき……、次の瞬間、カッと目を見開き、
「そうですわ！　わたくしこそが、クソメガネですわ！」
自分がクソメガネことルードヴィッヒになったような……そんな気分になった瞬間……、そのイメージを固定するように、シュシュっと眼鏡をかける。
そうして、ミーアは、帝国の知恵袋の精神をその身に帯びる。
――おお、なんだか、ルードヴィッヒの知恵を得られたような気がいたしますわ。ふむ、試しに算術の問題を……。
なんだか、頭が良くなった気がして、午前中の授業で苦戦した算術の問題を、頭の中で解こうとして……。解こうと……して。
――いえ、今はそんなことをやっている場合ではありませんわ。
はたと、大切なことに気付く。
そう、今すべきは算術ではない。もっと大切なことがあるのだ。
決して、やっぱり難しいものは難しかったですわ！　などと悟ったり、あら？　やっぱりあんまり頭良くなってない？　などと感じたからではない。
いざ解いてみたら、想定以上に難しかっただとか、難しくてもさ

っき習ったばかりのところが解けないとかどうなの？　と思ってしまったということは全然、断じてない！　ないのである！

帝国の叡智は、事の軽重を間違えない……ただ、それだけのことなのだ。

それから改めて、ふんむす！　っと気合いの鼻息を吐いてから、ミーアは、壇上へと立った。

「ご機嫌よう、みなさん。本日はお集まりいただき、感謝いたしますわ」

ゆっくりと、生徒たちの顔を眺めていく。

その場に集う生徒たちの顔に、敵意は見られない。不信の色も、今のところはない。

――こちらがなにを言うかの様子見か、あるいは、困惑といったところかしら……？

彼らの雰囲気を見てとって、ミーアはなんとなくだが、悟った。

彼らは、たぶん本気で特別初等部を潰そう、とは思っていないのだ。

その主張を通すために、なにか努力をしようとか、具体的な行動をしよう、などと思っている者は、ほとんどいないだろう。

もちろん、ミーアたちがしていることに対する反発はあるだろう。不満、拒否感もあるのだろうが……。

――ただそれは、せいぜい口に出すぐらい。友人同士で、互いに囁きあうぐらい……なのですわね。

それは小さな悪意だ。自分の心に負担がかからない程度の悪意、あるいは、ちょっとした鬱憤を晴らそうという、軽い気持ち。

されど……その空気も高じていけば、子どもたちに対する攻撃を誘発する。あいつらは悪い奴らだから、殴ってもいいだろう、そんな雰囲気を醸成しかねない。

気軽に不満を囁きあう感覚で、暴力が振るわれるようになってしまうかもしれない。

――そして、攻撃された子どもたちが反撃でもしたら、もう、取

り返しがつかないことになりますわ。それを避けるためにも……さらには、パティが犯人だと、バレた時のためにも、頑張らなければ！
変な正義感を発揮されないように、しっかりと事前に釘を刺す。そのための理屈を、今、彼らに提示し、押し付ける！
深々と息を吸って、吐いて……。それから、ミーアは、ついっと特別初等部の子どもたちのほうに視線を向けてから……。
「わたくしは、この子たちのことを信じますわ。この子たちの純粋さを、優しさを、善良さを、信じておりますわ」
堂々たる宣言により……ミーアの言葉は始まった。

第五十三話　帝国の叡智ミーア、教育を語りだす！

ミーアの言葉が響いた瞬間、会場は、しんと静まり返る。
詰めかけた生徒たちの顔に浮かんだのは、隠しようのない感銘の色――などではもちろんなく困惑と反感。あるいは嘲笑。
だが、それは当然のことだった。なにしろ、ミーアが言ったのは願望、あるいはミーア自身のスタンスである。
子どもたちがやっていないという証拠があるわけでもなく、信じるに足る根拠というわけでもない。
あくまでも、それは「ミーアが信じる」という表明に過ぎず……ゆえに、
「そんなことを言われても信じられるわけがない」
「下賤な民の子が盗みをしたって考えるのが、当然じゃない」
どこかから、こそこそとした声が聞こえてくる。
……帝国貴族の関係者じゃなければいいなぁ、などと思いつつ、ミーアは静かに、叡智の象徴たる眼鏡をくいっと持ち上げる。
慌てることはない。なぜなら、そんな反応は、すべて予想通りだったからだ。
ミーアは、改めて言う。
「わたくしは、この子たちの善良なる本質を信じておりますわ。彼らや、すべての子どもたちが持つ善良さを信じておりますわ。だからきっと、この子たちの中に、盗難の犯人はいないと考えますわ」
自身の確固たる信頼を表明する。その言葉に、ヤナやキリルを始め、何人かが居心地悪そうな顔をしたが、あえて、それを見ないふりをして、ミーアは言う。
「わたくしは、この子たちの善良なる本質を信じておりますわ。この子たちと食事を共にし、直接、会話したみなさんは知っているはずですわ。この子たちは、とてもいい子たちですわ」

子ども達にマナーを教えた者たち……そのことを聖女ラフィーナに褒められて、とっても良い思い出になっている者たちが、うんうん、と頷く。彼らの中で、特別初等部の子どもたちは、言うことを素直に聞くいい子たちということになっているのだ！

「だから、わたくしはこの子たちの善良なる本質を、信じておりますわ。けれど……」

繰り返し、されど、ここからが勝負と、ミーアは一度言葉を切って、みなの顔を見まわしてから、

「けれど……善良なる者が罪を犯す、そのようなことが時に起こりうるのもまた事実……。ゆえに、わたくしは考えますわ。もしも、『善良なる子どもたち』が悪事を働いたとしたら……その罪の責は、誰が問われるべきか、と……」

言いながら、ミーアはパティの顔を見つめる。

――パティのこの前の様子を思い出すと、ヤナとキリルの姉弟に危害が加わるような、悪事を働くとも思えませんわね。

しばらく悩んだ結果、ミーアが出した結論が、それだった。

確かに、パティは「銀の大皿」と言っていて、あの発言は怪しかったが……でも！

――たまたま、銀の祭具のイメージが大皿であることだって、ないとは言えませんわ。うっかり、頭に思い浮かんだイメージを、そのまま口に出してしまうことだって、あるはずですわ。

思っていたことと違う言葉が、口からポロッと出てしまう、目の前の光景に言葉が引っ張られることは、ないことではない。

パティの中で、銀の祭具のイメージが銀の大皿で、だから、ついそう言ってしまって……。それがたまたま現実と一致してしまったことだって、考えられるではないか。

――そのような薄弱な根拠によって疑念の目を向けてしまったら……信頼関係の修復は困難。パティを蛇から救い出すことが不可能になってしまいますわ。

逆に、本当にパティが犯人であった場合、それはそれで構わない。

心から信じると表明するミーアに対し、パティの心には罪悪感が生じることだろう。そして、その罪悪感は、ミーアが一言『許してあげますわ』というだけで好意へと転ずる。楽をして、パティの好感度と信頼を得ることができるのだ。これは美味しい。

――ゆえに、わたくしのスタンスはあくまでも子どもたちを信じること。そのために“信じて裏切られた際のダメージを減らすこと”が大事ですわ。

目標を明確化したミーアは、そこに向け、論理を鋭く尖らせる。その様は、さながら槍のごとく、あるいは尖ったキノコのごとく。

「もちろん、罪を犯した当人は責任を負うべきですわ。けれど……わたくしたち、セントノエルに通う者は、それで終わったと思うべきではない。善良な者たちが罪を犯さざるを得なくさせてしまった、そのような状況を放置した、国の上に立つ者たちもまた、その責任を問われるべきではないかしら？」

ミーアは、そうして、特別初等部の子どもたち、一人一人の顔を見つめる。それから、彼らのほうに歩いていき、手前にいたヤナの頭に静かに手を置いた。

「例えば……ここにいるヤナが、弟の空腹を癒すために食べ物を盗んだとしたら……わたくしは、この子に、その罪を犯させた親を責めますわ。そして、その親を苦境に追い込んだ国の統治者をも責めますわ」

言いつつ、ミーアは確認するように、心の中で思い浮かべる。

……この子は、ガヌドス港湾国出身……っと。

「あるいは、将来への不安から、なにかお金になりそうなものを盗んだのだとしたら、その不安を生んだ、領主を責めますわ」

隣の席に座るキリルに、そして、その隣のカロンに目をやる。

――この子はヤナの弟で、こっちのカロン少年はヴェールガ公国の孤児院から送られてきてますけれど、別の国で保護された子ども……。

そう、当然のごとく、ミーアは把握している。子どもたちの出身

国を。
そして、この子たちの中に、帝国出身の者はいない。一人たりとも、いない！
ゆえに、帝国が、ミーアが責められるいわれはないのだ！
絶対的な安全圏から、ミーアはペラペラと朗らかに話し続ける。
「わたくしは、悪事を嫌いますわ。盗みを嫌いますわ。されど、もしもこの善良な子たちが悪事を働いたのであれば……この子たちを嫌い、憎むことはいたしませんわ。それは、してはいけないことだと、悪いことだと教えるだけ……わたくしの怒りは、盗むという悪事そのものに、そして、この子たちに悪事を働かせる状況を作ったものに向けたいと思っておりますわ」
それからミーアは改めて、その場に集う生徒たち、一人一人の顔を見つめる。
「民を善良たらしめるのは統治者の務め。民を下賤と嗤うのは、己が統治のやり方を貶める所業。わたくしは、我が国の民を飢えさせることも、それで不満を言う民を蔑むこともいたしませんわ」
ミーアの、その言葉には説得力があった。自らの誕生祭において、その範を示していたからだ。
皇女ミーアの放蕩祭り、あれこそがまさに、今のミーアの言葉を正確に表すものだった。
「わたくしたち、セントノエルに通う者は、そのような視座に立たなければいけないのではないかしら？」
堂々とそう言い放ち……ミーアはニッコリとほくそ笑む。
ミーアの主張、それはすなわち“責任の所在をズラす”こと……。
“子どもたち自身の罪”を“子どもに罪を犯させた者の罪”とする。すなわち彼らの出身国の貴族に、その責任を問おうという論理。
そう、ミーアは、特別初等部の子どもたちの責任を問うて、石を投げようとする者たち自身に、その責任の石を投げ返したのだ！
この学園に通う王侯貴族の子弟たちは、ミーアからこう問われているのだ。

「この子たちも悪いかもしれないけど……お前の親も悪くね？」と。
この問いに、堂々と「我が国は違う！」と言い張れる者はあまりいない。
そのうえで、ミーアは自らの心の内を、一切の偽りを交えず……されど“若干の解釈”を加えて開示する。
やはり、人の心に一番響くのは本音だ。だからこそ、ミーアは熱意を込めて、こう主張する！
「わたくしは、この子たちが悪いことをしても責めはしませんわ。過去に悪事を働いたことがあっても同様に責めはしませんわ。反省を促し、二度とそれをしてはいけない、と教え、そして……自らを省みるだけですわ。善良な者たちに、罪を犯させていないか、と」
胸に手を当て、ミーアは言った。
そう、ミーアは常に自らに問いかけている。
民を革命に走らせていないか？　彼らが断頭台を作るよう、煽ってはいないか！？　と。
自らが断頭台を呼び寄せていないかを常に自問自答する、それこそがミーアのスタイル。
それを、彼らにもわかるよう翻訳して、熱意を込めて語る。
「この学校を卒業する者たち、そのほとんどは、将来、国を支える者たちのはず。であれば、考えるべきですわ。民を善良に保つためには、統治する者の不断の努力と忍耐が必要であると。そして、子どもを教え導かぬのは親の罪、民を教え導かぬのは、我ら、統治する者の罪であると」
そこまで言って、ミーアは、ふぅっと額の汗をぬぐう。その一瞬の沈黙に合わせて、ぱちぱち、と……小さな拍手が響く。
ミーアの言葉に、賛意を表したのは聖女ラフィーナだった。
これにより、ミーアの見解は一個人のものではなく、ラフィーナの支持を得た『セントノエル学園の見解』になった。
無論、これは演出である。事前にミーアがお願いしておいたものだ。そのうえでミーアは、ラフィーナの威をきっちりと借りたうえ

で、
「このセントノエルにいる間に、みなさんは、それを学び、そして国に帰ってから後は、ここでの経験を生かしていただきたいですわ。盗難を憎み、正義を愛する心を持ったみなさんが、その心を使って国を治めることに期待いたしますわ。近い将来、みなさんが国を治める頃には、下賤（げせん）なる民などという者がいなくなることを、願っておりますわ」
最後にミーアが付け加えたこと――それは、この場に集う者たちの責任を未来へと移す言葉だった。
すなわち……ミーアはこう言っているのだ。
「あなたたちの親には責任があると思うけど、あなたたち自身には、今のところ責任はないと思うよ！　あなたたちが負うべき責任は将来、国に帰ってからのものだよ」と。
誰でも「お前が悪い！」と指摘されれば気分は悪いもの。頑なにだってなるだろう。
けれど、親はできてないかもしれないけど、あなたならそれを是正できるよ、と言われれば悪い気はしない。
また、自身の親に誇りを持つ者にとっては、そもそもうちの親はできてるから関係ない話だし、となる。ミーアの言葉が刺さるのは、うちの親って孤児とか貧民とか、あんまり大事にしてないかも？　という者だけなわけで……。
次の瞬間、その場のあちらこちらから拍手の音が響く。
無論、それもまた演出だ。
生徒会のメンバーや、ミーアの息のかかった者たちの手による拍手を火付け役として、見る間に、拍手の音は聖堂内を駆け巡った。
それを見て、ミーアは静かに安堵のため息を吐くのだった。
かくして、後に大陸の教育理念の基礎に据えられる、その宣言は結ばれた。

我が子を愛するは、その行いによらず。ただ、その本質の存在によってせよ。
その行いが悪であれば、その非を教えよ。
そして、悪をなさせた環境と、教える責を負う自分自身を省みよ……と……。

後にこの時のミーアの言葉は『金至三訣(きんしさんけつ)』と呼ばれるようになる。
それは、子を黄金に至らしめる言葉として、さながら菌糸のごとく、各国で様々な形の教育改革を生じさせることになるのだが……。
それは、また、別の話なのであった。

第五十三話　帝国の叡智ミーア、教育を語りだす！（後書き）

その昔、宣教師さんに聞いた話。

「子どもが悪いことをしたからといって〝そういうことをするあなたのことが嫌い〟と言うのは良くないです。〝あなたのことは愛しているけど、あなたのするその行為は嫌いです〟というべきです」

とのこと。

子どもの行為と子どもの存在自体という、そんな切り分けがなされているのだなぁ、と感じた次第です。罪を憎んで人を憎まずに近い考え方なのかもしれませんが、アメリカの親はそういう考え方が多いそうです。今でもそうなのかはわかりませんが。

第五十四話　ベルは、だまされない！

「ベルちゃん、早く。もう、全校集会始まっちゃってるよ」
シュトリナに急かされて、ベルは走っていた。
「ごめんなさい。リーナちゃん。すっかり寝過ごしてしまいました」
昨夜は、シュトリナの部屋に泊まったベルである。積もる話は尽きることなく、すっかり夜更かしをしてしまったのだ。
――ついつい楽しくって、話し込んじゃった。反省しないと……。
などと思っているベルであったが……。実のところ、そこまでの焦りはない。
なにしろ、それは祖母ミーアの手配による全校集会なのだ。
――ミーアお祖母さまの準備に抜かりはないはずだし、今日は、特に、なにかをしろとは言われてないから。
だからと言って、寝坊したり、行事に遅れたりするのは皇女にあるまじきこと。
「うん、気を付けよう。やっぱり皇女たるもの、夜は早めに寝ないと」
祖母ミーアは、夜が早い人だった。それに倣い、自分もしっかりと寝るようにしよう、と心に決めるベルである。
っと……その時だった。彼女の目に、ある人物の姿が映った。
「……あれ？　あれは……」
眼鏡をかけた、優しげな顔が印象的な男、それは……。
「リーナちゃん、あれって……ユリウス先生……でしょうか？」
特別初等部の講師、ユリウスが、学園の裏手に向かって歩いていく姿だった。
まぁ、別にそれは不思議ではない。彼は学生ではないのだから、全校集会に参加する必要はないのだ。
教師としてなにか、別の仕事を与えられている可能性もあるわけ

だし……。
ただ……なにかが気になった。なんとも言えない違和感が、あった。
そして、ベルが覚えた違和感を正確に言葉にしてくれる者がいた。シュトリナはユリウスの姿を見て、小さく首を傾げる。
「……変ね。どうして、聖堂にいないんだろう？　ユリウス先生、あの性格なら、どうなるか、気にならないはずないのに」
そうだ……。彼は“子ども想いの優しい先生”だったはずだ。少なくとも、紹介されて以降、ベルの目には、そう映っていた。
ヴァレンティナのところに行って、帰ってきてからだから、そう長い時間ではなかったが……それでもベルの胸に残る印象は根強い。
それなのに、子どもたちの未来が懸かっている全校集会に出ない？
ミーアが、あの子どもたちをどう扱うのか気にならない？
それは、まったく彼のイメージに合わないことだった。
「ユリウス先生、いったいなにしてるんでしょう？」
首を傾げるベルに、シュトリナが抑えた声で言った。
「……ねぇ、ベルちゃん、もしも、どこかから宝物を盗まなきゃいけないことになったら、どうする？」
「え？　うーん、そうですね……」
突然の問いかけに、ベルは、ふむっと唸ってから、
「こっそり、誰にもバレないように城壁を乗り越えて忍び込んで……それから、見張りの目にもとまらぬ早業で……」
シュシュっと腕を動かして見せると、
「ふふふ、そうね。ディオン・アライア……や狼使いとか、人間離れした連中なら、そのぐらいのことをやってのけそう」
口元に手を当てて、くすくすと笑うシュトリナ。その可憐な笑みが、次の瞬間には、妖艶な笑みへと変わる。
「でも、リーナやベルちゃんみたいに普通の女の子じゃ無理だよね。だからね、もしも、リーナだったら、どこか近くに火をつけると思

う」
「……へ？　火？」
言葉を失うベルに、シュトリナは続ける。
「それでね、みんなが火を消すのに必死になっている隙に盗んじゃうの。盗まれたものなんか忘れちゃうぐらい大きな火事を起こせば、みんなの目を誤魔化せる。もしかしたら、逃げるまで、気付かれないかもって……そう思わない？」
「それって……」
歩き去るユリウスに、鋭い視線を向けるシュトリナ。その意味を、ベルは正確に理解する。
「なるほど……ふぅむ……」
ベルもまた、ユリウスの背中を見つめる。あの、穏やかそうな、ちょっぴり困ったような顔を思い出し……その顔でキラリと輝く眼鏡を思い出して……っ！
「……そう言われてみると、あの人……とっても怪しい！」
ベルは、言った。びしぃっと音がしそうな口調で断言する。
「なんだか、すごく怪しく見えてきました！」
ベルは、眼鏡の権威に惑わされたりはしなかった。とても冷静にユリウスのことを観察し、彼が怪しいと看破した。
眼鏡をかけているからといって、無条件に信じたりなんかしないのだ！　意外にも……。
それはなぜか……？　ミーアより、見る目があるからか？
否、そうではない。
理由はもっと単純なこと。
すなわち……ベルに勉強を教える時、ルードヴィッヒは、眼鏡をかけていなかったからだ！
……そうなのだ……見えづらいのだ。教科書の小さい字は……。見えづらいから、眼鏡を外してベルの授業を行っていたのだ。
だからこそ、ベルの中では、勉強を教える時のルードヴィッヒに眼鏡のイメージは皆無。

ベルは眼鏡に権威を感じない。
そんな、眼鏡の呪縛から自由なベルは……。
「怪しい……。ちょっと追いかけてみましょうか」
そうして、二人の少女たちは頷きあって、走り出すのだった。

第五十五話　帝国の叡智ミーアのイケナイ妄想

発言を終えて、ミーアは、そっと眼鏡を外す。
ふぅ、っと一息吐き一礼。それから優雅に踵を返し席に着いた。
入れ違いにラフィーナが壇上に立ち、その後のことをまとめてくれている。
「今、ミーアさんが言ったとおり、私たち生徒会は、特別初等部の子どもたちを擁護する。彼らは盗難に関わっていないと完全に信じているけど、もしも仮に、悪に手を染めていたとしても……私たちは彼らを許します。もちろん、今後、そういったことには関わらないよう教え、また、関わらなくてもいいように状況を整えて、ね」
心地よい疲れと、胸を満たす達成感に浸りながら、ミーアはボンヤーリと、ラフィーナの話を聞いていた。
「お疲れさまです。ミーアさま」
そっと、傍らにアンヌが近付いてきて、コップを渡してくれた。冷たいヴェールガアップルジュース、爽やかな酸味と心地よい甘味が口の中に広がり、ミーアは、ほふーうっとため息を吐く。
「ありがとう、アンヌ。たっぷり話したから、喉が渇いてましたの。さすが、気が利きますわね」
「お褒めいただき、ありがとうございます。それと……あの、お見事な演説でした。ミーアさま。私、感動してしまいました」
「あら、ありがとう。他のみんなも、そうならばよろしいのですけれど……」
そう言って、ミーアは改めて、会場へと視線を移した。
雰囲気は、ミーアの見たところ悪くはなかった。どうやら彼女の言葉は好意的に受け入れられているようだった。
次に、特別初等部の子どもたちのほうを見ると……なんと、ヤナが泣いていた。

おそらく、気を張っていたのだろう。幼い弟と二人きりで生きてきた彼女にとって、今回の裁定がどのような意味を持つのかは想像に難くない。そして、その緊張の糸が切れてしまったのだろう。

いつもは強気な目をしているヤナだが、その瞳からは、ぽろぽろ、ぽろぽろと涙が流れ落ち、それを懸命に両手で拭っていた。

そして、そんな姉を弟キリルが心配そうに見つめている。

……それが、会場の雰囲気を、ミーアにとって有利なものにしていた。

身綺麗にすれば、割と可愛い少女であるヤナ。そして、その弟で、こちらも可愛らしい顔立ちをしているキリル。

後ろ盾を持たない中、懸命に頑張ってきた姉と、その姉を頑張って励まそうとしている健気な弟に……同情と庇護欲を掻き立てられない者はいない。

さらに、釣られるように他の子どもたちも泣き出していた。けれど、彼らは、決して声を出さなかった。その泣き声を、唇を噛みしめて堪えていた。

それは踏みつけにされた弱き者たちの姿だった。

泣き声を上げ、少しでも煩わしいと思われれば殴られる。だから目立たないように、できるだけ、恐ろしいモノに見つからないように、と身を縮こまらせる。

過酷な環境で身についてしまった習性、そんな彼らの姿は、貧民街に足を踏み入れたことがないであろう貴族の子どもたちの目には、とても哀れに映った。

薄汚れた塊でしかなかったものが、はじめて、自分たちと同じ人として、自分より弱く小さい子どもとして……彼らの目に映った。

ゆえに、もはや彼らを責めようという空気は霧散してしまっていた。

一方でミーアもまた、子どもたちの涙を見て思うところがあった。

感慨深げに唸ってから、ミーアは……、

――ふぅむ……わたくしの話に感動しましたのね。人を泣かす力

があるというのは、言葉に力がある証拠……。
などと満足し……、さらに、
――わたくし、やっぱり詩歌の才能があるのではないかしら？
ちょっぴり調子に乗った！
――大勢の者たちを感動させる物語を書く、あるいは、詩を書く才能……。自分では気付きませんでしたけれど……そうですわね。今度、エリスに協力していただいて……。
などと、うっかりポエマーへの道を開いてしまいそうなミーアである。
――ともあれ、このまま収まってくれれば、御の字ですけれど……。そのためには、やっぱり犯人が名乗りでないとダメですわね。
ミーアは、子どもたちが過去に罪を犯したとしても、それを仕方のないこととした。それは、彼らが住む地域の領主の責任によるところも多いと言及した。セントノエルに来たばかりの彼らの精神も、おそらくはそれまでの経験が影響を及ぼしているのだと訴えた。
……だが、それはあくまでもすでに犯した罪に対してのこと。その罪を認め、名乗り出ることというのは、また別の次元の話だった。
全校集会が終わった後、犯人が名乗り出なかった場合には……やはり、非難の火は消えないだろう。
「下賤なる民の子は、ミーア姫殿下のありがたいお心を受けてもなお、罪を認めようとしない！」などと、一部の者たちは言い出しかねないからだ。
――もしも、子どもたちが犯人の場合には、名乗り出て、銀の祭具を差し出してくれないといけませんけれど……。パティが犯人の場合には、なにも言ってこなさそうですわね。ほかの子が犯人の場合には、きちんと名乗り出てくれそうですけど……。まぁ、犯人が名乗り出ても、彼らの前に名前を明かすということはしなくてよさそうですし。ただ、犯人は見つかったとだけ言えば、その後はみんなが勝手に想像してくれるかもしれませんわね。
そこで、ミーアは改めて安堵の息を吐いた。

――なんにしても、わたくしがすべきことは終わりましたわね。はぁ、今日は疲れましたわ。いっぱい頭を使いましたし。

そうして、ミーアは……なんだか自分で自分を褒めてあげたい気分になってきた。

――これは、ご褒美に、とびきりあまぁいケーキを用意して、それをお腹いっぱい食べてしまってもいいのではないかしら？　今までは甘いものはできるだけ我慢していましたけれど……こう、クリームいっぱいの美味しいやつをお腹いっぱい、食べてしまっても構わないのではないかしら？　今日はとっても頑張りましたし……自分に優しくしてもいいのではないかしら？

などと、イケナイ妄想にふけっていた時だった。

壇上から降りたラフィーナに、静かにモニカが歩み寄った。しばし会話をしてから、ラフィーナはミーアに歩み寄り……。

「ミーアさん……。犯人が動いたわ」

「……はぇ？」

ミーアの「ご褒美に甘い物をたくさん食べる妄想」は、こうして、泡のように弾けて消えるのだった。

第五十五話　帝国の叡智ミーアのイケナイ妄想（後書き）

今週はスピーチを頑張ったミーアの出番がやや少なめかも……。

第五十六話　やじうｍ……ｅい探偵ベル、尾行する！

ベルとシュトリナの尾行が始まった。
スタスタと急ぎ足で廊下を歩くユリウス。その後ろを、音もなく二人の少女がつけていく。廊下に人通りはない。ゆえに見つからぬよう、ある程度の距離を開けての尾行になった。
「ベルちゃん、こっち」
声を押し殺したシュトリナの指示。それに従って、ベルはとっとこ小走りに進む。
――なんだか、リーナちゃん、すごく慣れてる……。
足音を消し、シュシュっと物陰から物陰へ移動するシュトリナに、ベルは尊敬の目を向けていた。
――さっき普通の女の子だったら城壁とか乗り越えられなさそうとか言ってたけど、でも、リーナちゃんなら、もしかしたらできちゃうかも……？
あるいは、その途中で手を滑らして落っこちてしまって、それを、夫となるアノ人に受け止めてもらって……。それで、頬を赤くしながら見つめあったりなんかして……。
などと、ちょっぴり妄想して、ニマニマしているベル。そんなベルにシュトリナはキョトンとした顔で首を傾げた。
「どうかしたの？　ベルちゃん。何か、楽しいことでもあった？」
「え？　あ、ううん。なんでもありません。それにしても、ユリウス先生、どこに行くつもりなんでしょうね？」
あはは、と笑って誤魔化して、ベルはユリウスへと視線を戻した。彼が向かうほう、教室棟を抜けた先には人気（ひとけ）のない廊下が続く。
そういえば、この先には行ったことないな、とベルは思い出す。
以前、この世界に来たばかりの時、学園内にしばらく潜伏していたベルであるのだが、基本的に食べ物がある食堂を中心に移動して

いたため、こちらには来たことがなかったのだ。
「……あんまり人もいないし、まさか、本当に火をつけるつもりだったりは……」
「ああ、それは大丈夫。この先には特に燃え広がるようなものもないし、一応、よく燃えそうなところは、ラフィーナさまに話して対処してもらってるから」
ニコニコ、得意げな顔で言うシュトリナ。ベルとは違い、すでにこの先もチェック済のようだった。すでに、燃えやすいところも、きちんと隅々までケアしてあるらしい。
「さすがはリーナちゃん」
などと言いつつ、それを調べてなにをするつもりだったんだろう……？　などと、わずかばかり疑問を覚えるベルであった。
「あれ……？」
けれど、次の瞬間には、その興味は別のものへと移る。
祖母の『馬好きの血』を継いだベルの胸には、荒々しい『野次馬』が棲んでいるのだ！
その血に促されるままに、ベルは視線を転じ……首を傾げる。
「あれ？　ユリウス先生が、いない……？」
彼の後を追い、二人が入っていったのは古いホールだった。新入生歓迎ダンスパーティーが開かれたホールよりは、一回り小さくて、若干、ほこり臭い。
今は物置代わりに使われているのか、古びた聖餐卓や、壊れた机などが乱雑に置かれている。
――どこかに、隠れてるっていうことは……？
などと思いはしたものの、隠れられそうな場所はあまりない。物置とはいえ室内は整理されていて、物陰といえるような場所は二、三箇所。そこもすぐに確認できてしまって、ユリウスの不在がはっきりする。
「ねぇ、ベルちゃん、ここ、怪しくない？」
その時だった。眉間にしわを寄せたシュトリナが、ある一点を指

さした。
そこは壁。ラフィーナの巨大な肖像画が飾られた、壁だった。
「うわぁ、大きいですね！」
肖像画を見上げて、ベルは思わず、ぽかーんっと口を開けた。
ほとんどラフィーナの身長の倍はありそうな、巨大な肖像画だった。
「……こんなに立派なラフィーナさまの肖像画を、わざわざこんな物置みたいなところにかけてあるなんて、すごく怪しい」
むむむ、っと唸って主張するシュトリナだったが、ベルには別の見解があった。
――ラフィーナおばさま、自分の肖像画が好きじゃないからなぁ。いつも、ものすごーく憂鬱そうに、自分の肖像画にサインしてたっけ……などと思い出すベルである。
しかも、そこに飾ってあったのは実にド派手な肖像画だった。背中の白い翼を広げて（ラフィーナの背中に翼が生えているのはデフォである）宙を舞うラフィーナ。その周囲には輝く宝石のような星空が散らばり、彼女を美しく彩っていた。
輝く星座は、聖女にかしずく従者のごとく、ラフィーナの足を飾り、その長い髪を美しい三日月が彩っていた。
ただ一点、どこか遠くを眺める瞳は、いまいち生気というか、やる気がなく……。実に巧みに、モデルと描き手の心理の温度差を表した絵であった。
――この脚色は、さすがに少しきついかも……。表には出しておきたくないかもしれない。
お調子者のベルですら、そう思うのだ。こんな風に、倉庫代わりの部屋にポツンとかけてあっても、不思議はないような気がするのだが……。
そうこうしている間にも、シュトリナは肖像画の周りを見回して、怪しいところを探していた……。が、やがてなにを思ったのか、やにわにその額縁を両手でつかみ、ガコッと外してしまった。

「あぶないっ！」
よろよろっとバランスを崩しそうになっているシュトリナ。ベルは慌てて手伝いに走る。そうして、えっちらおっちら、二人で肖像画を外すと……そこから現れたのは……。
「あっ！　すごい！」
思わず、ベルは目を真ん丸にする。
肖像画に隠されていた壁の部分には四角い穴が開いていて、その先には狭い階段が続いていた。
「隠し階段ね。額がズレた跡があったから、なにかと思ったんだけど……」
どうやら、シュトリナも半信半疑で外したらしい。その顔には驚きの色が見て取れた。
「ユリウス先生は、この先でしょうか？」
上のほうを覗いてみるが、階段はらせん状に登っていて、上のほうまでは見通せなかった。
「ほかに隠れられそうな場所はありませんし……とりあえず、入ってみようか？　セントノエルにそこまで危険な場所があるとも思えないですし」
そう言うと、ベルはゆっくりと壁の穴を潜り抜けた。
「あっ、待って。ベルちゃん。リーナが先に行くから」
後からシュトリナが追いかけてきて、横に並ぶ。
「あれ？　リーナちゃん、あの肖像画はもとに戻さないんですか？」
ふと振り返り、ベルが首を傾げた。
「うん……。一応、なにか起きた時のためにね。あのままにしたら、誰か気が付いてくれるかもしれないし。でも……」
っと、そこで、シュトリナは可憐な笑みを浮かべた。
「多分、大丈夫だと思うけど……。見張りがいなかったから」
「え……？」
「ううん、なんでも。さ、行きましょう」
そうして、二人は階段を登り始めた。

「でも、ここってなんなんでしょう？　学校にこんなところがあるなんて……」
　きょろきょろ、あたりを見回しながら、ベルが言う。と、シュトリナは小さく頷いて、
「気付いてた？　ベルちゃん。入り口のところ、開いてたけど鉄格子付きの扉があったの……。あ、ほら、そこの窓にも……」
　シュトリナが指さす先、明り取りの窓が口を開けていた。そこには、頑丈そうな鉄格子が嵌められている。
「もしかすると、ここって、誰かを閉じ込めておくための場所なんじゃないかな」
「閉じこめて……あっ、あれ……」
　やがて二人の目に、重厚そうな扉が飛び込んできた。中を監視するためだろうか？　鉄格子の付いた小窓が付いた扉だった。
　部屋の中はまだ見えないが……中からは人の気配がする。
「やっぱり、誰かが閉じ込められてる……？　あっ！？」
　扉に歩み寄ろうとしたベルは、突如、物陰から現れた影に腕を掴まれ、そのまま、後ろ手に拘束されてしまう。
「ベルちゃんっ！？」
　驚いた顔でシュトリナが駆け寄ろうとするが、その足が止まる。その視線は、ベルの後方に縫い留められていた。
「やれやれ、ラフィーナさまの手の者かと思いましたが、あなたたちでしたか……」
　しっかりとベルの腕を掴まえた男。優しげな笑みを浮かべたその男は……。
「ユリウス先生……どうして」
　ベルの問いかけに、ユリウスは困り顔で肩をすくめた。
「それは……」
「あらあら、ずいぶんと騒がしいですね……」
　突然の声……それは、ベルたちが覗こうとした部屋から聞こえてきた。

次の瞬間、扉の上のほうに開いた小窓にピタリ……と、女の顔が張り付いた。
その目が、ぎょろり、ぎょろり、と周りを見回して……。シュトリナを確認したところで、歓喜の色を浮かべる。
「おや、これは、シュトリナお嬢さま。ご無沙汰しております」
閉じ込められていた女……バルバラがニコリと歪んだ笑みを浮かべて、そこに佇んでいた。

第五十七話　ベルはとても潔い

「あ……ぁっ……」
バルバラを見た瞬間、シュトリナは雷に打たれたように体を硬直させる。
ぱくぱく、と口を開け閉めするが、そこから言葉が発せられることはなかった……。
「あら、そんな風に大口を開けてはしたない。ふふふ、もっと近くでお顔を見せてください」
小窓から、にゅっと腕が出た。
それを見て、反射的に一歩、二歩と下がるシュトリナ。
「おやおや、髪が少し傷んでいますね。ろくなメイドをつけていないのでは？　ああ、それとも、新しいメイドはつけていないとか？　他人に髪をいじられると私を思い出して怖いから、その髪もご自分で手入れをしているのではありませんか？」
ねっとりとした笑みを浮かべるバルバラに、シュトリナは真っ青な顔で、さらに後ろに下がろうとして……。
「リーナちゃんは、将来、ボクの髪を手入れしてくれる時のために、練習してくれてるんですよ？」
静かな、けれど、力強い声が響いた。
「リーナちゃん、階段、気を付けてくださいね。落ちたらケガしちゃうかもしれません」
その声に、シュトリナはハッとした顔をする。それから、ゆっくりと振り返ると……いつの間にか、階段の際までやってきていた。これ以上、下がると、ベルの言うとおり落ちてしまっていただろう。
相手の心の傷をえぐり、誘導する。それが蛇の手口……。口車に乗せられて、危うく階段から落ちそうになったことに、シュトリナは悔しげに歯を食いしばる。

「あら？　ふふふ、そちらにも懐かしい顔がございますね」
一方、バルバラは、ぎょろりとベルに目を向けて、不愉快そうに顔を歪めた。
「やれやれ、巫女姫が殺したなどと聞いておりましたけれど、生きているではないですか。まぁ、あれも元王女。そこまで期待をするべきでもなかったのでしょうね……。あなたと同じですよ、シュトリナお嬢さま」
「リーナちゃんは、ボクの友だちです。我が友を愚弄することは許しません」
強い声で言うベルに、バルバラは若干あきれ顔で……。
「許さない、でございますか？　以前も思いましたが……あなたは少し危機感というものを持ったほうがいいのでは？　ご自分が囚われの身であることを理解しているの……？」
「……へ？　あ……」
と、ベルもそこで思い出す。
自身の腕をガッチリ固めて、動けなくしている者の存在のこと……。背後に立つユリウスのことを。
一瞬、これは、もしや……アレを使う時なのではないか？　という思いが頭に浮かぶ。あの、嫌な男の子をやっちまえ……とミーアお祖母さまから教わった、アノ、禁断の技を……っ！
――今が、その時かもしれない！
ベルは、ふんっと、勇ましく鼻息を吐き……。
――あれ、でも、これ、どうやって蹴るんだろう……？
大きな疑問にぶち当たる。
後ろから腕をひねられた状態から、必殺のキックを放てるものなのだろうか……。
しばし黙考、いくつかの未来を想像し……結論はすぐに出る。
――無理っぽいかな……？
ベルは早々に諦める。自力での脱出は無理である、と。
潔い姿勢には定評のあるベルである。特に、その潔さは勉学の分

野で発揮され、しばしば、宰相ルードヴィッヒの悩みの種になったりしたのだが……まぁ、それはともかく。
ベルは、改めて、ユリウスを見上げる。
「ユリウス先生、あなたが銀の祭具を盗んだ犯人だったんですか？」
とりあえず、ユリウスがなにか行動に移らないよう、会話で繋ぐ。
時間稼ぎは大事なことだ。入り口の肖像画を外してきたことで、異変が起きていることに誰かが気付くかもしれないし。それに、先ほどから一切声を出さずに、わざと存在感を消しているらしいシュトリナが何か手を打ってくれるかもしれないし。それに……。
――ミーアお祖母さまが、ボクたちの不在をおかしく思わないはずがない！　きっと気付いて、なにか手を打ってくれるはずです。
……ベルたちが遅れてるけど、まぁいいかー！　と、ミーアが思っているなどとは、夢にも思わないベルである。現実は残酷なのだ。
ともあれ、圧倒的に周りに味方が多いこの状況。時間さえ稼げば、状況が好転する可能性は大いにある。
ということで……自身で無茶をすることもない、と、すっぱり諦めるベルであった。
割り切りは、とても大事なこと。
算術が苦手なら、やらなくていいじゃない？　嫌なら、ちょっとぐらいサボってもいいじゃない？　別の得意なことを伸ばせばいいじゃない？　例えば、乗馬とか、利き甘味（スイーツ）とか……そういうのを伸ばせばいいじゃない。
そう主張したいベルである！
……まぁ、実際にそれをやったら、怒られるだろうから、口には出さないが。
さて、ベルに問いかけられた瞬間、ユリウスはぴくん、と体を硬直させる。
しばし、呆然とバルバラのほうを見つめていたが……。
「ああ……ええ。ええ、そうですね。私の部屋に隠してありますから、探せばすぐに見つかると思いますよ」

あっさりと自白する。
「それは、バルバラさんを助けるためですか？」
「んー、それは、どうでしょう……」
今度は、微妙な返事だ。
「この島から、彼女を連れ出すのは、とても難しいことだと思いますよ。少なくとも、私には、その方法は思いつかないですね」
ユリウスは苦笑いを浮かべる。
「正直、荒事も得意じゃないし……できることといえば、このぐらいで……」
「あはは。そこのあなた、なかなか見どころがありますよ」
彼の言葉を聞いて、バルバラは楽しそうに笑った。
「そう。同じ蛇だからといって助けるなど無駄なこと。我々が考えるべきは、いかにして、相手にダメージを与えるか。さぁ、その小娘を殺しなさい。そうすれば、皇女ミーアと、そこのシュトリナお嬢さまに深刻なダメージを与えられる。効果的に彼女たちを歪められるでしょう」
バルバラは歪んだ笑みを浮かべて言う。けれど、
「そんなことはしませんよ」
ユリウスは、どこか悲しそうな顔で首を振る。
「もう……私の希望は叶いましたから」
「は……？　何を言っているのですか？　あなたは……」
バルバラが怪訝そうな顔をした、直後のことだった。
「そこまでにしていただきましょうか」
厳粛な声。同時に、やってきたのは、数名の男たちだった。
その先頭に立っていたのは、ラフィーナの忠臣たる初老の男で……。
「サンテリ・バンドラー殿。確か、島の警備を担当されている方でしたね」
「この島を訪れた際に、ご挨拶させていただきましたな、ユリウス殿」

「見張りを立てなかったのも、あなたが？」
「ラフィーナさまの指示です。下手に暴れられて生徒に被害が及ばぬように。ここにおびき寄せて捕らえたほうがよい、と。計算外にお二方が巻き込まれてしまいましたが……」
サンテリの視線を受けて、ユリウスは、ベルを解放する。
「なにをしているのです？　人質を放すなどと……」
バルバラの焦ったような声が聞こえたが、それには答えず、ユリウスはサンテリのほうを見た。
「愚かなことをしましたな」
厳しい顔をするサンテリにユリウスは肩をすくめてみせた。
「手にしているすべてを失ってでも成し遂げたいことというのが、人にはあるのではないですか？　感謝しますよ。見張りを立てずにいてくれたこと……ここまで入ることを許してくれたことを……」
それからユリウスは、改めてバルバラのほうに目を向けて、深々と頭を下げた。

第五十八話　おこがましい！

「ゆっ、ユリウス先生が……？　そんな」
全校集会が終わってすぐに、ミーアはラフィーナから呼び出しを受けた。それは、生徒会の他のメンバーも同じだった。
そうして、生徒会室に入って早々に告げられた事実。それは、祭具を盗んだのがユリウスであったということだった。
「でも、どうしてユリウス先生がそのようなこと……」
思わず、つぶやくミーアである。同時にミーアの頭に思い浮かんだこと……それは……。
――ユリウス先生は……確か、帝国出身だったはずですわ……！
事の責任を、帝国に遠い位置に押しやったはずなのに……気付けばすぐそばに、責任の二文字が迫ってきていた。
さすがに子どもたちと同じ理屈は適用されないだろうが……それでも、ずぅんっと暗い顔をするミーアである。
「ショックなのは、わかるわ。私もとてもショックだった」
沈んだミーアの表情を見て、ラフィーナも悲しそうな顔をする。
「でも……」
っと、言葉を続けようとしたところで、ノックの音が聞こえた。
「続きは、本人を交えてしましょうか」
扉が開き、入ってきたのはユリウスと……ベルとシュトリナだった。
「あら？　どうして二人が一緒に……？」
首を傾げるミーアに、ふふん！　と得意げな顔をするベル。さも「ボクが捕まえました！」みたいな顔をするベルである……実におこがましい！
そして、無論のことながら、ミーアは、ベルが捕まえたなどという可能性を考えない。

帝国の叡智は騙されない。シュトリナならばともかく、ベルが捕まえた？　あり得ない！
一方で、ユリウスのほうは、といえば、こちらも、いつもと変わらない穏やかな顔をしていた。それは、状況にそぐわない表情、まるで、お茶会に呼ばれでもしたかのような、落ち着いた表情だった。
「ユリウスさん、お聞きしたいことがあってきていただいたの。少しいいかしら？」
ラフィーナの問いかけにも、ユリウスは表情を崩すことはない。
「さて……。今さら、私に聞くことなどないと思いますが……」
諦めているのか、慌てるでもなく、悔しがるでもなく……。あくまでも落ち着いた声で、彼は言った。が……。
「あなたが銀の大皿を盗んだことは、すでにわかっているわ。あなたの部屋から出てきたし、おそらく、あなたも否定はしないのでしょう？」
「ええ……。盗まれた物が見つかってしまったのであれば、私としても見苦しく言い逃れをするような真似は……」
「もしかして、わざとではないかしら？」
ラフィーナは、彼の顔を覗き込むようにして、言った。
「わざと……？　なにがでしょうか？」
「あなたが盗んだという証拠が見つかるようにしていたこと……。あなたが犯人だと、私たちに示すために、わざとわかりやすくしていたんじゃないかしら？」
「ははは。わざとそんなことをする意味がどこに？」
おかしげに笑うユリウスだったが……ラフィーナは取り合わずに、真面目な顔をしていた。
「意味はあるわ。子どもたちを守るため。あなたの経歴のすべてが、嘘だとは思えないから」
そう言って、ラフィーナは羊皮紙の束を彼の前に置いた。
「あなたが、子どもたちを大切にし、孤児たちに教育することを熱心に考えていたことがよくわかる」

「……ははは。よくできた経歴でしょう？　蛇に用意してもらいました。ヴェールガ公国の目を欺くなんて、やっぱり我ら蛇のほうが上手……」
「もっと軽いものを盗んでもよかったのに、わざと重たい銀の大皿を選んだ。子どもが盗むのに、あの大皿は明らかに不自然。それをわからせるために、あえて、あれを選んだ。そうでなければ、ミーアさんだって、あんなふうに堂々と子どもたちを信じるとは言えなかった」
――んっ？
一瞬、なにか誤解が混じったような気がしないでもなかったが……グッと飲み込み、ミーアは、うんうん！　と頷いておいた。
さも「わたくし、すべてわかっておりましたわ！」という顔で……実におこがましい！
「自らの希望を叶えるために、できるだけ子どもたちに被害が及ばないようにした。そうではなくって？」
蛇ならば、子どもたちに疑いがかかるようにして、もっと事態をかき回してもおかしくはなかった。生徒会と学生たちの間を分断するよう立ち回り、秩序を破壊することだってできたはずだった。
だが、彼はそうしなかった……。ただ、わずかにできた隙を突くように、バルバラのもとに向かっただけだった。
そのやり方は、拙く……蛇の綿密さとも、悪質さからも程遠い。
「人が良いですね。聖女ラフィーナ……。あなたも、ミーア姫殿下も実に人がいい。こんなことなら、ここまであからさまにする必要はなかったかな……」
ユリウスは、小さく肩をすくめて、ミーアのほうを見た。
「……あなたたちが特別なのかな？　それとも、私が知っている連中がたまたまクズばかりだった。そういうことなのだろうか？」
ユリウスは小さく首を振ってから、
「私は蛇……。世の秩序を憎み、あなたたちとは相いれぬ存在……。そういうことに、しておいてはいただけませんか？」

「そうして、バルバラさんと同じ場所に収監される……それが望みかしら？」
ラフィーナは、一度、言葉を切ってから、ユリウスの目を見つめる。
「ユリウスさん、あなたのことを調べさせていただいたわ。あなたは、バルバラさんの子ども……よね？」
ラフィーナの問いかけに、ミーアは、ぽっかーんと口を開けた。
――はぇ？　なっ、なにを言っているのかしら？　ラフィーナさま……。バルバラさんの子どもはすでに亡くなっているはずでは……？
頭の中を？？？で埋めるミーアを尻目に、ラフィーナの話は続く。
「そして、あなたの復讐は……すでに終わっている。家を没落させること。子爵家を堕とすことで、すでに、あなたの復讐は終わっていた。そして、残りの人生をあなたは……不幸な子どもたちのために使おうとした。自分と似た境遇の子どもたちのために使おうと思った……。そうではないかしら？」
「なるほど、すべてお見通しということですか」
ユリウスは苦笑いを浮かべて、首を振った。
「未練がましい男と……笑ってくださっても結構なのですがね……」
深い、深いため息とともに、彼は言った。
「別に一緒に収監されようだとか、処刑されたいだとか、そこまでは考えていなかったんです。ただ……一目会いたかった。そのチャンスが今だけしかないのだと、そう思ったら……立ち止まることができなかった。それだけなのです」
そうして、彼は話し出す。彼の身に、なにが起きたのか、を。

第五十九話　ユリウスの過去

「ご指摘のとおり、あそこに閉じこめられている女性は、私の母です」

その言葉に、ミーアは目を白黒させる。

――どういうことかしら……？　バルバラさんは、やっぱり嘘を吐いていた？

うーむむ、っと唸るミーア。先ほどの全校集会で酷使された頭からは、早くもモクモクと煙が上がりつつあった。っと、その時だった。

「みなさん、あの……とりあえず、甘い物でも食べて少し落ち着きませんか？」

ラーニャとアンヌが、マカロンを載せたお皿を持ってきてくれた。

――おお、ご褒美がやってきましたわ！

ミーアは笑みを弾けさせる。

それは、一般的なお茶菓子に用いられる、普通のマカロンだった。

ミーアが妄想をたくましくして、思い描いたような、超豪華ケーキとは程遠いものではあったが……、甘い物に貴賤なし！

豪華なケーキであれ、一枚のクッキーであれ、甘い物はミーアを幸せにする。地下牢で、甘い物の魔法によって救われたミーアは、そのありがたみをよく知っているのだ。

……甘い物ならばなんでもいいのね？　などと言ってはいけない……いけない！

ともあれ、口の中を幸せでいっぱいにしながら、ミーアは考える。

――それにしても、ユリウスさんがバルバラさんの子ども……。まぁ、バルバラさんのことですから嘘を吐いていたとしても、不思議はございませんわ。

なにしろバルバラは、ミーアが知るところ実に蛇らしい思考の持

ち主だ。自分の目的のためならば、嘘を吐くことだって厭わないだろう。
それは、まぁ、そうなのだが……。
――けれど、なんだか、引っかかりますわ。あの時のバルバラさんの表情……。
ミーアとアベルに過去を語ったあの時の顔……。あれが嘘だとはとても思えなくって……。
――ということは、バルバラさんが騙されていた？　でも……うーん……。
それも、なんだかあり得ないことのように、ミーアには思えたのだ。
あのバルバラが騙される？　そんなことが、はたしてあり得るだろうか？
うんうん考えつつ、さくさくマカロンを食べ進めていくミーア。
その横で、ユリウスの話はゆっくりと進んでいく。
「みなさんにとっては意外なことかもしれませんが、あの人は……母は普通の人でした。貧しい中で、幼い私に愛情を注ぎ、育ててくれた」
彼の口から語られるのは、蛇に堕ちる前のバルバラの姿。貴族の子どもを身ごもった召使の女性が、追い出された先でも懸命に生活を営もうとした、そんな風景だった。
「転機が訪れたのは、私が七歳になった時でした。オベラート子爵家の跡取りたる一人息子が死んだことで、私に声がかかった。半ば強引に連れ去られるようにして、私は子爵家に引き取られました。必ず当主になって迎えに行くと、母とは約束して。でも……子爵家についてすぐに、母が死んだと教えられました。流行りの病にかかったのだ、と……」
――ふむ、母子それぞれに、互いが死んだと伝えて諦めさせた、というわけですわね。なかなか悪辣ですけれど、貴族の家がいかにもやりそうなことですわね。ふーむ……。

ユリウスを跡継ぎとして迎える際、最も邪魔なのはバルバラの存在だ。そこの関係を断っておきたいという考えはわかるが……引っかかることがないではなかった。

あの、バルバラともあろうものが、その程度の嘘に騙されたりするものだろうか？

――貴族の家に潜入して探るなんてこと、あの方ならば朝飯前という気がしますけれど……。ああ、でも、そもそもユリウスさんが死んだと聞かされるまでのバルバラさんは蛇ではないのでしたわね。あの方がいつの時点で蛇と接触があったのかもわかりませんし、一般民衆に貴族の家の内情を探ることは難しいかもしれませんわね。

そう納得しかけたところで、ミーアの耳にユリウスの言葉が届いた。

「まぁ、私のほうは本当に死にかけたのですが……危ういところを先代の皇妃さまに救われました。我がオベラート子爵家は、父があちこちの女性に手を出した関係で、貯蓄は底をつき、家は傾きかけていました。折悪しく、農作物の不作の時期がやってきて……。はは、まったく貴族なのに情けない限りですが、餓死しかけましたよ」

――先代の皇妃さま……パティのこと、ですわよね……？

それは、なんとなく気になる符合だった。確かに、金回りに困った貴族の家を帝室が救うということは、ないことではないのだが……。

あの日、バルバラと対峙した時、パティは言っていた。

「可哀想だ」と。

あの時の顔が、脳裏を過ぎった。

「そうして……体調が回復し、成長した私は、栄光あるオベラート子爵家を潰してやることにしたのです」

自らの復讐を語る彼の目には、暗い光が灯る……ことはなかった。

そこにあるのは、あくまでも穏やかで、知的な光だ。それは、すでにすべきことを終えた者の目だった。

「年老いてなにもできなくなった父の目の前で栄光ある子爵家の名

を地に堕とす……。造作もないことでした。もとより帝室の助けがなければ自然に傾いていた家ですから。金遣いを荒くするだけで、すぐに破綻した。そして、一度は助けてくれた皇妃さまも、今度は助けてはくれませんでした」

それは、浪費をやめないオベラート家に呆れたから……とも考えられるが……。

――ユリウスさんの命にかかわる時だけ助けた、ようにも見えますわね。

ミーアの中に、一つの推論ができあがりつつあった。

それは、すなわち……。

――パティが、こちらの世界で抱いた感情を持ったまま、過去に戻り、過去を変えた……。そういうことではないかしら？

かつて、断頭台から過去に戻ったミーアと同じことを、パティもやったのではないか、とミーアは考えたのだ。だとしたら……それは。

自らの思考を整理するように、ミーアは目の前のマカロンに手を伸ばす。それを舌の上に乗せ、じんわりと溶かして、テイスティングする。

――ふむ、砂糖の甘味、このフレーバーは……。

などと、いったんお菓子で気を落ちつける。

一方でユリウスの話は佳境を迎えていた。

「そうして、子爵家を潰し、私の復讐は終わりました。母をはじめとした多くの女性を遊び半分に弄んだ父は、失意のうちに病死して。オベラート子爵家の名は地に堕ちた。正直なところ、復讐というのは、あまり気分のいいものではありませんでしたが……それでも一つの決着にはなった」

「復讐を終え、国外に渡ったあなたは、子どもたちのために生きようと決めたのね？」

ラフィーナの問いかけに、ユリウスは苦笑で答える。

「貧しい子どもたちのため、などと聖人じみた考えはありませんで

した。というか、むしろ未練がましく、情けない話なのです。私は、ついつい、母と過ごした町並みに似た場所を求めてしまった。二度と会えぬ母の面影を――あの時、子爵家に行かなければ迎えたかもしれない、母とともにある日々の光景を、貧民街に求めてしまったのです」

子爵家の跡取りとして、いきなり貴族の家に引き取られたユリウスに、愛情を注ぐ者はいなかった。だから、彼の心の中で、母親の姿はいつまでも上書きされることなく残り続けた。

「人間というのは欲深い者。“母とともにある日々”であるならば、それが貧しさの内で死ぬという結末でも構わない、それは幸せなことなのだと、最初のうちは思っていたのですが……。つい、私は見てしまいたくなったのです。母とともに貧しさに囚われていた子どもが、まっとうな幸せを手にする未来を。しっかりと生きる術を得て、母を連れて貧しさから脱出する光景を。自分が迎えたかった光景を、彼らの姿を通して見たいと、思ったのです」

そうして、彼は、子どもたちへの教育を志すようになった。

けれど……そんな熱意を持った彼の前に、蛇は密かに忍び寄ってきた。

第六十話　マカロン探偵ミーアのミルクな推理

ミーアは、五つ目のマカロンを口に放り込む。
アンヌに怒られないよう、そのペースは緩やかなものだった。
ミーアだって少しは成長するのだ。口の中で、じっくりと、舌の上でじんわり味わえば、甘味というのは長持ちするもの。だから、少ないお菓子でできるだけ甘味を長く楽しむことを、最近のミーアはモットーとしているのだ。
それはともかく、ユリウスの話は続く。
「この島に来る少し前のことです。一人の男が接触を図ってきました。彼は、私に言いました。お前の母親は生きている。セントノエル島に幽閉されている……、と」
そんなユリウスの独白を聞きつつ、ミーアは口の中に、微かな不快を覚えた。
――口の中の水分がマカロンに持って行かれておりますわね。下手に声を発すると、咳き込んでしまいそうですわ……。
舌の上でマカロンを転がして、甘みを楽しんでいたツケが、ついに回ってきてしまったのだ！
っと、そんなミーアの異変に気付いていたのか、タイミングよく、アンヌがコップを置いてくれた。
なみなみと注がれた白い液体、それは、甘い香りを放つホットミルクだった。
マカロンには牛乳。味と栄養とを考えた、アンヌの見事なチョイスである。
「ありがとう」
瞳で語りかけつつ、ミーアはコップに口をつけて思う。
美味しい。風味からすると、今朝絞ったものだろう。新鮮そのもののミルクで口の中を満たしつつ……けれど、ついつい思い出して

しまうのは贅沢なことで……。
「騎馬王国の……」
うっかり口に出しかけて、慌てて言葉を呑み込み……そうして、改めて思う。
――騎馬王国の、あの美味しいミルクが懐かしいですわね。また、心行くまで飲んでみたいものですわね。
なぁんて、満足していると……。
「騎馬王国……っ！　そうか。くそ、気が付かなかった。ユリウス殿、もしかすると、あなたに近づいた男というのは、騎馬王国風の格好をしてはいなかったか？」
鋭く舌打ちしつつ、シオンが声を上げる。かつて弟を罠にはめた存在、あの男がまた関与しているのか、と、勢い込んで尋ねると、
「ええ。仰るとおり、騎馬王国の訛りを持つ男でした……。彼の言うことは、胡散臭いと思いましたし、恐らく彼が私を利用しようとしていることはわかっていました。けれど……私は、事情を聞かずにはいられませんでした」
結果、彼が知ったのはバルバラの悪行。王族、大貴族への非礼。
「男は言いました。これだけのことをしてしまったら、母は確実に処刑されるだろう、と。そして私ならば、母を助けることができる。その手助けをしてやっても良い、と……」
それは、まさしく蛇の囁きだった。相手の欲求を巧みに読み取り、都合の良いように誘導する、蛇の所業だった。
――なるほど。蛇は、すでにバルバラさんの息子が生きていることを知っていた。けれど、それを話してしまうと彼女は、息子を取り返すことだけに生きる者になる。蛇ではなくなってしまう。だからこそ、情報を隠した、ということですわね。理屈は通りそうですけれど……。
それでもなお、ミーアの頭には微妙に引っかかるものがあった。やはり、パティの存在が、どうしても気になるのだ。
「酷い……」

ユリウスの話を聞いて、眉をしかめるティオーナと、その傍らでふんふん、っと怒ったように鼻を鳴らすリオラ。他の生徒会メンバーも、みな不快げな顔をしている。
ミルクで口の中をスッキリさせたミーアも、周りをチラリと確認して不快げな顔をしておく。
和を乱すことを嫌うミーアは、周りの空気に合わせる術を持っているのだ。
「それにしても、さすがだな。ミーア。よく、その男が例の男だと気付いたな」
シオンの言に、当然とばかりに頷いたのはミーア……ではなく、その隣に佇んでいたラフィーナだった。
「ミーアさんなら、造作もないことよ。ユリウスさんが、セントノエルに来るまでどこにいたのか、そして、サンクランドを出た例の男が、どこに向かったのか。それに、このやり方……。いくつかの推理を重ねれば、おのずと答えは見えてくる」
そうして、ラフィーナは友人の叡智を誇らしげに語る。
「ミーアさんならば、このぐらいの推理、簡単に組み立ててしまうわよ」
そのラフィーナの言葉を、否定する者は一人もいない。
「ミーアお祖母さま、すごい……」
ベルまでが、瞳をキラッキラさせている！
対するミーアはすまし顔で、
「いくらなんでも、それは……買いかぶりが過ぎるというものですわ。おほほ」
などと笑って誤魔化しつつ、
「ええと、それで、あなたはバルバラさんを助けるために、この島に来たんですわね？」
問いかけに、けれど、ユリウスは疲れた顔で首を振る。
「母がしたことは許されないことですから、最初から助け出そうなどとは思いませんでした。あの人は、処刑されて当然のことをした、

と私は思っておりました。だから……私が求めたのは、もっと些細なことでした」
そうして、ユリウスは笑った。
「未練がましい男と思われても仕方のないことですが……ただ、一目会いたいと思った……。私の望みは、それだけだったのです」
「ただ、会いたい……」
その言葉に頷いたのは、ベルだった。
かつて親を失い、育ての親であるアンヌとエリス、忠臣ルードヴィッヒとディオンを見送ったベルは、その渇望を知っている人だ。
普段の能天気さは、鳴りを潜め、とても真剣な顔で、ベルは聞いていた。
「私にとって、子どもたちに教えることは、やりがいのあることでした。世界を幸せに変える、その手助けをしているのだという手応えが確かにありました。私の周りにいた幾人かの方からの信用も、私にとっては貴重なものでした。その想いに応えたいとも思っていました。けれど……幼き日の執着とは……母への愛慕とは、恐ろしいものです。死んだと思っていた母に会える。否、今を逃せば、本当に二度と会えなくなってしまう。そう思ったら、止まることができなかった」
これまでの話しぶりを聞いていて、ミーアは思った。
このユリウスという男は、理性的な男だ、と。
彼のかける眼鏡が、そのイメージに多少影響している感がなくもなかったが、ともかく、ミーアはそう思ったのだ。
そんな理性的で、自分を治める術をきちんと心得ている、そんな男ですら、蛇は操ってしまう。彼の、唯一捨てきれぬ執着。母への想いをえぐり、利用したのだ。
男は、いくつになっても母親に憧れる……などと言う次元の話ではなかった。
ユリウスの目の前に示されたそれは、母と会話できる、文字通り最後のチャンスだったのだ。

「私は、母の復讐のため、子爵家を潰し、父を惨めな死へと追いやった。これにより、私の復讐は叶いましたが、逆に思ったのです。私は、母の復讐を奪ってしまったのかもしれない、と。私が子爵家を潰してしまったから、母は復讐の相手を失い、暴走した。今なお、その怒りに囚われて、死の瞬間まで、解放されることはないのかもしれない」

そこでユリウスはラフィーナを……、次いでミーアを見た。

「それは、あまりにも悲しいことではありませんか？　母が処刑されるのは仕方なきこと。だがせめて……今なおその心が復讐に囚われたままであったなら、解放してあげたかった。ただ、それだけが、私の望みなのです」

眼鏡の奥、いつも穏やかな光を湛えていた瞳が、今は少しだけ鋭さを増していた。

「ラフィーナさま、ミーア姫殿下、お人柄を見込んでお願いします。母と話させてください。その後、いかようにも処罰を受けますから、どうか……」

頭を下げるユリウスを眺めながら、ミーアは思っていた。

――ふぅむ……。まぁ、蛇にありがちな話だと思いますけど……これは上手くするとバルバラさんを無害化させられるんじゃないかしら……。それに……。

ミーアが思い出したのは、パティのことだった。

――あの時、あの子はバルバラさんを可哀想だと言っておりましたわ。もしも、わたくしたちがバルバラさんを助けたら、案外すんなりと蛇からの転向を促すことができるのではないかしら？

いずれにせよ、その再会をパティに見せてあげようと思うミーアであったが……。

第六十話　マカロン探偵ミーアのミルクな推理（後書き）

本日、ワクチン二回目です。コメント返しできるかしら……などとドキドキしつつ。
また、一週間前に次の週の原稿を書いているため、今週は大丈夫なのですが、副作用が酷いと来週の投稿が急きょお休みになるかもしれません。
ご了承いただけますと幸いです。

第六十一話　乾燥したものには若干劣るものの……

いったんユリウスを下げてから、ラフィーナは悩ましげな顔をした。

「困ったことになったわね。どうしたものかしら……」

憂いに満ちた吐息を、ふぅっとこぼして……。

「とりあえず……彼をバルバラさんに会わせる、ということに反対の方はいるかしら？」

はっきりと、そう言った。

その大変慈悲深い言葉に、ミーアは腕組みしつつ頷いた。

――そう、ラフィーナさま、そういうの、とっても大事ですわ！

偉そうに、まるで「聖女ラフィーナを育てたのは、このわたくしですわ！」と言わんばかりの顔で頷くミーア。実におこがましい！

と言いたいところではあるのだが……実際のところ、確かに今のラフィーナを形作る要素に、ミーアのアレやコレやの行動が深く深く関係しているため、強くはツッコめないのが、とってーも口惜しいところではある。

「それは、とても良いお考えだと思います」

ラフィーナの言葉に、一番に賛同の声を上げたのはティオーナだった。

「やっぱり、家族に会えないのはとてもつらいことですし、ぜひ、そうすべきだと思います」

ルドルフォン家は、家族仲が良い。領地の農民も家族扱いであり、総じて「家族」に対する思いが、ティオーナの中では強いものだろう。

「そうだな。俺も、それには賛成だ」

続くのはシオンだった。彼もまた、弟と会えない境遇にある。ユリウスの気持ちが理解できるのだろう。後ろで、キースウッドが少

しばかり心配そうにシオンを見つめている。その視線がふとラフィーナのほうに向き……微妙に憂いを帯びたように感じられた。
――あら、キースウッドさん、もしかして……ラフィーナさまに気があるのでは？
などと……本人の目の前で口走れば、本気で殺意を向けられかねないことを妄想していると、ふいにラフィーナが目を向けてきた。
「ミーアさんは、どうかしら？　なにか、良い考えがあれば聞きたいのだけど……」
「ふむ、そうですわね……」
ミーアは、再び腕組みして、わずかに黙り込んでから……。
「できれば、パティの同行を、認めてもらいたいと思っているのですけど……」
先ほど思いついたことを口にしてみる。
バルバラとユリウスのことをきちんと聞かせることは、パティをまともに育てることにきっと役に立つ……はずだ。たぶん。
「パトリシアさんを……？」
ラフィーナは不思議そうに首を傾げた。頬に手を当てて、考えることしばし……。
「あっ……。それはもしかすると、子どもたちに、ユリウスさんの事情を聞かせたいと、そういうことかしら？」
ラフィーナの問いかけに、ミーアは「うんっ？」と思うも、とりあえず黙って微笑んでおく。
意味深な笑いの使い方を学んだミーアである。相手の出方を見る時、なにか考えている風に笑うのは、割と有効な手段なのだ。
「あの、どういうことでしょうか？」
クロエが代わりに質問の声を上げてくれた。ラフィーナは一度頷いて、考えをまとめるように軽く首を傾げながら……。
「私はユリウスさんの行動には、同情すべき点があると思っているわ。だけど、子どもたちが誹謗中傷を受けたこともまた事実。配慮をしたと言っても、あの子たちは不当な疑いの目を向けられて、被

害を受けた。少なくともあの子たちは、ユリウスさんの行動で迷惑を被っている。そうでしょう？」
ラフィーナの問いかけに、クロエはこくりと頷いた。
「だから、ミーアさんは、ユリウスさんに謝罪の機会を与えたいと、そう考えているのではないかしら？　そして、そのために、彼の境遇を子どもたちにも教えたいと……。彼がなぜ、それをしたかったのか、その気持ちを教えたいと、そう思っているのではないかしら？」
それから、ラフィーナは悲しげな目をした。
「ユリウスさんは、お母さまに会いたいがために、子どもたちを危険に晒した。けれど、子どもたちを思っていたということにも、おそらく嘘はないはずだもの。人はいろいろな面を持ち合わせているもの。ただ、悪いだけの人なんていない、と……私は最近強く思うようになったわ」
それを聞いて、ミーアは……不覚にも感動した！
――ああ、ラフィーナさまが、とても、とってーも優しいですわ。慈愛に溢れておりますわ。
ミーアの目には、今のラフィーナは優しい獅子に見えた。
ちょっとぐらい尻尾を踏んでも許してくれそうな……穏やかな笑みを浮かべる……獅子に見えた！
ここまで来るのに長かったなぁ、と……しみじみと色々なものがこみ上げてくるミーアである。
――しかし、それはさておき……なるほど。そうすれば、ユリウスさんを追放するということにはならないかもしれませんわ。
それまでは、ユリウスをセントノエルから追放することは避けられないだろうと思っていたミーアである。けれど、もしも子どもたちにきちんと事情を説明するならば、いささか状況が変わる。
なにしろ、子どもたちには、先ほどの全校集会で、たとえ過去に悪いことをしていたとしても許しますよ、と言ってしまったからだ。
せっかく、子どもたちの心に安心を植え付けたというのに、もし

もユリウスに厳しい罰を与えてしまったら、微妙に首尾一貫しない印象を与えるに違いない。
そして、どこかから新しく講師を連れてくるよりは、ユリウスに続投してもらったほうが、面倒がなさそうだ、とミーアの直感が告げている。
新たに呼んだ講師が、より一層、危険な蛇である可能性は否定できない。無論、ラフィーナの側も警戒はするだろうが、完璧に、とはなかなかいかないものだろう。
そして、それよりなにより、ミーアは……信じたいと思ったのだ。
ユリウスの言葉を……それ以上に、彼がかける眼鏡を……！
――ガミガミうるさかったですけど、クソメガネはいいやつでしたわ。だから、きっとユリウスさんも……。
そんな信念を固く持つミーアなのである。
眼鏡への信用はとても固いのだ。乾燥したキノコには若干劣るものの、生のキノコよりは確実に固いのだ！

第六十二話　大浴場での語らい

さて、生徒会室での会合が終わった時……ミーアは疲労困憊状態にあった。

全校集会から続いて、ユリウスの処遇についての話し合い。

ミーアの体力は地味に削られていたのだ。

なんと、夕食を食べる気力が微妙に湧かないほど、ミーアのやる気は減退していた！　大変なことである！

……ちなみに、別に話し合いをしながら、マカロンを食べ過ぎてお腹が苦しい、などということではない。それは、まったくの誤解である。

「ふむ……お夕食の前に、腹ごなしにお風呂に行こうかしら……？」

「はい。それがいいのではないでしょうか。お風呂でリラックスされるとよろしいかと思います」

仕事が終わり、お風呂にするか、夕食にするか？　と聞かれることは、ミーアにとって最高に難しい二者択一ではあるのだが、この日は、比較的スムーズに決まる。

こうしてアンヌを伴い、ミーアは大浴場へと向かった。

脱衣所の扉を開けると、そこには、見知った二人の姿があった。

「あら、ヤナさん。パティ、二人もこれからお風呂なんですのね」

話しかけると、ヤナはぴくんっと肩を揺らす。それから小さな声で、

「……はい」

と返事をして、服を脱ぎ始めた。

その様子に、ミーアは小さく首を傾げた。

――妙ですわね。なんだか、思いつめたような顔をしておりますけれど……。それに、なんだか、わたくしを待っていたような……？

パティのほうに視線を向けるものの、こちらは、いつもと変わら

ぬ顔だ。
――パティの表情から心の内を読み取るのは大変ですわね。
だからこそ、珍しく感情らしい感情を見せた、バルバラのことに関わらせるのには意味があるのだが。
――ユリウスさんとバルバラさんの再会で、なにか良い影響があればよいのですけど。
考え事をしつつ、風呂場へ。手早く髪と体を洗い、さっさと浴槽に身を沈める。
「おーふぅ……」
熱い湯が、じんわりと固まった体を柔らかくしてくれる。じゅわわっと伝わる熱分が、体の血行をよくしていき、ぽっぽと頬が熱くなる。
「ああ……やはり、セントノエルのお風呂は最高ですわね。素晴らしいですわ」
頭を浴槽の縁に預け、目にタオルを載せて……「あー」などと、実に、おっさ……いや、まぁ、その……若干、ご令嬢らしからぬ声を出して、お風呂を満喫していると……
「あ……あの……」
「ん？」
タオルを取り、顔を上げると、ヤナがすぐそばまで来ていた。髪を洗い、頭の上でまとめているので、その額にある目の形の刺青が露わになっていた。
――海洋民族ヴァイサリアン……。こうしてみると、この刺青はとても目立ちますわね。これが、海賊の証として使われていたと、みなが知っていたとしたら、さぞや生きづらいことでしょうね。
血行が良くなったミーアは割と回転が良くなった頭で、そんなことを考える。それから、もの言いたげな顔をするヤナに話しかけた。
「どうかしましたの？」
問い返されたヤナは再び肩を震わせて、それから、おずおずと口を開いた。

「実は……その……カロンが、何日か前に、あたしに、盗みをしないかって……言ってきて……」
ぽつりぽつり、と話し始める。
「まぁ、そのようなことがございましたのね」
驚いてみせつつも、ミーアはヤナを見つめる。
体の両脇に垂れた腕、小さな拳はギュッと何かを堪えるかのように、小さく震えていた。
――それで、大浴場で待っていたんですのね。わたくしと話しても、目立たないような場所で……。
ヤナのしていることは、仲間から見ると告げ口だ。余計なことを言いやがって、と非難される行為だった。あまり、好き好んでしたいことではなかったのだろう。
もちろん世の中には、喜んで告げ口する人間というのがいる。そして、前の時間軸でずいぶんと痛い目に遭わされたミーアは、その手の人間があまり好きではない。
けれど、ミーアの見たところヤナは告げ口を喜ぶようなタイプではないように見えた。痛みをこらえるように握りしめられた手がその証拠だ。
にもかかわらず、彼女がこうして話しに来たのは……。
――おそらく、先ほどの全校集会の言葉を受けて……ということですわね。
ミーアは、そう結論付ける。先ほどのミーアの言葉に対して、ヤナは、カロンに対する疑惑を黙っていることが不誠実だと思ったのだろう。
だから、すべてを話すために、ミーアを大浴場で待ち伏せていたのだ。ミーアの部屋に行ったりしたら、カロンに疑いをもたれる。が、男女別の大浴場であれば、こうして話をしても露見しづらいから。
――なるほど、この子……なかなか、機転が利きますわ。ベルと似た空気を感じますわね。

などと感心していると、ヤナは勢いよく頭を下げた。
「申し訳ありません。あたし、今まで、黙ってて……。せっかく、クラスのリーダーを任せてもらったのに……こんなっ」
「ああ、ヤナさん……。あなたが、そんな風に頭を下げる必要はございませんわ」
そっと、華奢な肩を優しく押して、体を起こしてあげる。それから、ミーアは言った。
「それに、わたくしは思いますわ。彼は、絶対にやっておりませんわ。わたくしは信じておりますわ」
というか、すでに犯人はわかっているのだが……もちろん、余計なことは言わないミーアである。
「でも……」
「先ほどの全校集会で言った、あれがすべて。もしも、彼が盗んでいたとしても、わたくしは許しますわ。もちろん、二度としてはいけないと注意はするでしょうけれど……」
そう微笑みつつ、ミーアは、そこで思いつく。
――あ、そうですわ。せっかくですし……。
なぁんて悪い笑みを浮かべながら、ミーアは言葉を続ける。風呂好きミーアは、風呂に入ると悪知恵が働くようになるのだ。
「ねぇ、ヤナさん、わたくしは思いますの。許すことって……とっても大事じゃないか、と」
ミーアは思う。
人というのは、存外、周りの空気に流されるものなのだ、と。
出来上がった流れにわざわざ反抗しようなどという強い意志を持つ者は、滅多にいない。波乗りを極めた海月、ミーアはよく知っているのだ。
そして、その流れというのは、一人があげた声で容易に作られるものなのだ。
ミーアがヤナに期待するのは、その最初の一人になることで……でも。

「だけど……許せないやつだって、いる……」
固い声が響く。目を向ければ、ヤナがギリッと、悔しげに歯を食いしばっていた。その幼い額では、消せない海賊の証、刺青の目が真っ直ぐにミーアを見つめていた。
きっと、今までいろいろと辛い思いをしてきたんだろうな……などと思いつつも、ミーアは、うんむっと唸ってから……。
「人は、自分が蒔いた種を、必ず自分で刈り取らなければならぬもの……ですわ」
「え……？」
きょとん、と首を傾げるヤナに、ミーアは諭すように続ける。
「報いというのは、大体において与えられるもの。わたくしたちの目の前で悪いことをすれば、わたくしたち上に立つ者、貴族や王族が裁き罰を与える。そして、わたくしたちの目の届かないところで行われた悪には、神が裁きを与える……。それが神聖典の教えですわ……たぶん」
うろ覚えの部分がないではないが、ミーアは大陸の共通認識を確認する。そのうえで、
「だから、あなたが怒りに囚われて、時間を浪費する必要はありませんわ、ヤナ。その腹を立てている時間は、キリルに優しくしてあげるのに使うべきですわ」
許すことは大事だと、復讐を手放すことは大事だと……強調しておく！　しっかりと強調しておく！
そのうえで、
「まぁ、それでも、どうしてもムカつく時は、そうですわね。相手が嫌な男の子とかだったら、こう、思いっきり蹴り上げて……」
「ミーアさま……」
見ると、アンヌが浴槽のところに歩いてきていた。咎めるようにミーアを見つめるアンヌ。さらには、アンヌに髪を洗ってもらっていたらしいパティが、そのそばで、ジッとミーアを見つめていた。
「んっ、んん、ともかく、ですわね。許すことは大事ですわね。ど

うか、わたくしたちを、信じてくださいませ」
「ミーアさま……はい。わかりました。」
ヤナは、その目に確かな信頼の光を宿して、小さく頷いた。
……海洋民族ヴァイサリアン。その名が、意外な重みをもって、ミーアに迫ってくるのはもう少し先のことであった。

第六十三話　ベル、ぶんぶんする

「こんな場所がセントノエルにあるとは思いませんでしたわ」
ミーアは少し古びたホールの、壁に開いた穴を見て、ううむ、と唸った。
「ところで、入り口のところは、いつもあんな風に入口が開いたままの状態なんですの？」
問いつつ、ラフィーナの顔を見る。と……ラフィーナはついっと視線を逸らし、
「……ええ。いつもは、その……入口に絵が飾ってあるのよ」
「はい。お見事なしょ……絵でしたよ。ラフィーナお……さま」
なにやら、微妙に言葉に詰まりつつ、ベルが言った。
「あら、絵がかかっておりましたのね。この穴を隠すぐらいですから、結構大きい絵ですわね」
「はい……！」
と答えたのは、またしてもベルだった。それから、彼女はシュシュっとラフィーナのほうを確認してから、
「とっても素敵な天使の絵でした」
ドヤァな顔で言った。
――ははぁん、今のは、ラフィーナさまにおべっかを使ったんですのね？
などと察したミーアは、
「まぁ、そうなんですのね。それは、ぜひ見て……」
みたい……と自らもラフィーナのご機嫌取りに走ろうとした。けれど、ラフィーナはニッコリ笑みを浮かべて、
「あまりできの良くない絵なのよ。ねぇ、ベルさん。そうよね？」
有無を言わさぬ口調で、言い切った！
その清らかな笑みに、ミーアは、言い知れぬ迫力を感じてしまう。

――これは……かつて、わたくしに『誰でしたっけ？』などと聞いてきた時の笑みに似ておりますわ。
これは、あまり触れないほうがいい話題だぞう、っと直感に促されるままに、ミーアは口を閉ざす……が。
「あ……はい。よく考えると、大した絵じゃありませんでした。ええと、あ、そうだ！」
ぽこんっと手を叩き、ベルが言った。
「とっても恥ずかしい絵でした！」
「うぐぅ……」
なにやら、ベルの一言がどこかに刺さったのか、ラフィーナが胸を押さえて崩れ落ちそうになっていた。
ミーアは、そこに、大人しい獅子の尻尾を、むんずと掴んでブンブン振っている孫娘の姿を幻視する。
――ベル……、この子にしゃべらせておいて、本当に大丈夫かしら？　というか、恥ずかしい絵って……いったい、どんな絵だったんですの？
絵の内容が気になるも、ミーアはあえて掘り下げない。
好奇心は姫を殺すのだ。迂闊に触れないほうが良いものというのが、この世界にはあるのだ。地を這うモノの書とか、そういう類のものが……。
まぁ、それはともかく……。
「ふ、普段は、ここに見張りを立てているのだけど、あの日は、監視を付けずにおいたの。ユリウスさんがどんな行動に出るか、読めなかったから」
若干、涙目になりつつも、ラフィーナは話を変えた。
「なるほど。下手に暴れられては学生たちに被害が及ぶかもしれない。それよりは、この中に誘い込んで、そこで捕まえてしまおうと、そういうことだったのですね」
当の本人であるユリウスは、涼しい顔で頷いていた。
「私に、母の居場所を教えたのもそのためですね。最初から怪しい

と疑っていて、おびき寄せようとした」
「蛇の言いようではないけれど、偽りに真実を混ぜたほうが相手を騙せるもの。さらに、真実のみを話して、相手を罠にはめられるなら、それに越したことはないわ。私たちだって、頭を使うのよ」
「なるほど。お見それしました」
そう、ユリウスが微笑んだところで、
「おやおや、これは……ずいぶんと大所帯でいらっしゃったのですね？」
暗い声が、部屋に響き渡った。
壁の穴から現れたのは、サンテリと警備兵、それに腕を縛られたバルバラだった。
「お懐かしい顔がありますね……ふふふ。おや、そちらの子どもたちは……？」
バルバラの異様な雰囲気に、初等部の子どもたちが息を呑むのがわかった。パティですら、怯えるように、身じろぎしたのを、ミーアは見逃さなかった。
――ふぅむ、しかし、バルバラさん……閉じこめられてる間に、また、闇の気配が濃くなっておりますわね。なんだか、くろーい靄を発散してるように見えますわ。
などと思いつつ、ミーアは子どもたちを守るように前に出る。
「この子たちは見学ですわ」
「はて、見学……？　私めを、晒し物にしようとでも？」
怪訝そうな顔をするバルバラに、ミーアはあくまでも首を振る。
「あくまでも、見ているだけですわ。この子たちにも無関係のことではありませんから。けれど、本命は、そちらの方ですわ」
そうして、ミーアが指し示すほう、立っていたのはユリウスだった。
「ああ……そう、その男にはぜひ聞きたいと思っていたのです」
バルバラは不機嫌そうに鼻を鳴らす。
「あなたは、いったいなんなのです？　なんのために、こんな場所

に来たの？　蛇の動きにしては、まったく中途半端なことを……」
「お久しぶりです……。母上」
バルバラの言葉を遮り、ユリウスが言った。
「……あなた、いったいなにを言っているのです？」
警戒するように、目を眇めるバルバラの目の前で、ユリウスは名乗った。
「私は、没落したオベラート子爵家のユリウス・オベラート。オベラート子爵と、あなたの子どもです」
バルバラは、かくん、っと首を傾げた。
それから、じぃっとユリウスのほうを見つめる。ほかのものなどなにも目に入らない、という様子で。
見つめることしばし、彼女は、静かに首を振った。
「あり得ないこと。あなたたちは、この期に及んで私を嘲笑おうというのですか？　ははは、さすがは王侯貴族のみなさま方。実に趣味が悪い。そうでなくては……」
バルバラは頬を引きつらせ、歪んだ笑みを浮かべる。
「それとも、私が、息子の死を確認しないとお思いですか？　この私が？　そうであるならば、いささか、私を見くびりすぎでございます。確かに、我が子ユリウスは、子爵家で餓死した。当主の放蕩に巻き込まれて、死んだのです」
それから、バルバラは、ミーアに、そして、シュトリナに指を突き付ける。
「帝室は、大貴族は、助けてくれなかった。食うに困った子爵家を放置したのでございます。そして、息子は死んだ。私は、死体だって確認しているのです。それとも、あなた方は、あれが『夢』だったとでも言うおつもりですか？」
その……瞬間だった。
夢、という言葉を口にした時、バルバラの体が小さく硬直した。
「夢……？　馬鹿な、あれは……でも……」
彼女のつぶやきに、ミーアは、そっとパティのほうに目をやった。

いつもと変わらぬ無表情、されど、真っ直ぐに……パティはバルバラのほうを見つめていた。

第六十四話　帝国の叡智の裁き（表）

「馬鹿な、私の息子は死んだ。それを私が調べないはずがない。あれが、夢であったなどとは、決して思えない。夢……、あり得ない」
前髪をグシャリと握りしめ、バルバラはぶつぶつつぶやいていた。
そんな彼女の姿を、シュトリナは、微かな困惑を持って見つめていた。
バルバラの事情は、彼女も聞いていた。
過去の貴族の横暴がバルバラを傷つけ、暴走させたのだ、と。
けれど、こうして実際に目にするまでは信じられなかったのだ。
シュトリナにとって、バルバラはいつでも恐怖の対象であったのだ。得体の知れぬ蛇という存在、その体現者こそがバルバラであり、一時は逆らうことなど考えもしなかった、絶対的な悪だった。
その彼女の、暗い心が――息子を奪われるという、あまりにもわかりやすくて、とても人間的な感情から来ている……シュトリナでさえ想像できてしまう悲しみによって形作られている。そのことが、シュトリナには信じられなくって……。
今にも、バルバラが余裕の笑みを浮かべて、恐ろしいことをするのではないかって……そう思って。なのに……。
「茶番……ああ、なんたる茶番。なるほど、これは、私を陥れるための罠……なのですね？　そうでしょう？」
ラフィーナのほうを見て、バルバラは言った。奇妙なことに、その声には、すがるような、助けを求めるような、そんな響きがあった。手酷い裏切りに遭ったかのような、そんな響きがあった。
弱々しいその姿に、シュトリナはひたすらに困惑する。
「母上……」
その時だった。ユリウスが、そっと手を伸ばし、バルバラの手を取った。びくんっと震えるバルバラだったが、手を振り払うことは

しなかった。
「遅くなってしまい、申し訳ありません。あの日の約束のとおりに、ともいきません。私は、子爵家の当主にはなれませんでしたから」
ユリウスは、それでも、バルバラの顔を見つめて言う。
「それでも……私は……僕は……あなたと……母さまと、再びお会いできて、とても嬉しい」
そう言うユリウスの目には、薄っすらと涙が浮く。その、歓喜に染まる顔を、もはや、バルバラは否定することができなかった。
「ああ……これは、なんて……」
口からこぼれ落ちた声……それが微かに震える。
「では、私は、なんのために……」
その先に続く言葉を想像して……シュトリナは背筋に寒気を感じる。
シュトリナの目に映るのは、一人の弱い人間の姿。それは、自分が辿ったかもしれない人生の末路だ。
子を奪われ、蛇という力にすがった。すがらざるを得なかった彼女は、最後に、その蛇からも見捨てられたのだ。
シュトリナの目には、バルバラの体から蛇が離れていく様子が、確かに見えていた。人の人生を弄び、その後はあっさり離れていく、そんな姿。
後に残されたのは傷つき途方に暮れる年老いた女のみ。
それは、蛇にすべてを尽くした先にあるのは、空しい人生の結実だ。
バルバラは罪を犯した。
ユリウスの言ったとおりだ。
彼女は、自分では決して担いきれない罪を犯した。その罪は、必ず裁かれなければならない。それは変わらない。
不幸な境遇を加味して処刑は免れたとしても、彼女はこの先、生涯、解放されることはない。囚人として苦役に服さなければならない。囚われの罪人として、その生涯を終えるのだ。

それは、なんて……悲しいことなのだろう、と……。
こんなことならば、蛇の勝利を高らかに賛美している時に、処刑してしまったほうが、彼女のためであったのではないか、と……そんなことさえ思ってしまって……。そこに……。
「あなたは、蛇から解放されましたわ。バルバラさん。あなたは、すでに蛇ではない」
ミーアが厳しい顔で告げたこと……それは。
「ゆえに、あなたは……これからの生き方を変えなければなりませんわ」
少しだけ、意外な言葉だった。
罪を償え、でも、刑に服せ、でもなく……生き方を変えよ、と……。
その言葉はシュトリナの中で、すとんと腑に落ちた。
バルバラから蛇が離れたことを、その目で見たシュトリナには、その言葉がこう聞こえた。
「今までは蛇とともに滅びるものであったけれど、すでにあなたは蛇ではない。であれば、あなたは、今後はあなた自身の人生を生きなければ、ならない」と。
そのうえで……。
「バルバラさん、あなたは、ユリウスさんと暮らしなさい。もちろん、あなたは囚人ですから、ユリウスさんの通いということになるのかもしれませんけれど……」
静かで、穏やかな声で、ミーアは続ける。
その意味するところを、シュトリナは、鋭く洞察する。
罪には罰が与えられなければならないのと同様に……傷にもまた癒しが与えられなければならない。
息子を失い傷ついて罪を犯した人には、裁きとともに癒しが与えられるべきなのだ。
だから、ミーアは言っているのだ。
「ユリウスさんと、ともに暮らしなさい」

と。
そうして、ミーアは何事か考えた様子だったが……。やがては小さく頷き……。
「ふむ……そうですわね。ユリウスさんの手伝いを、あなたの苦役とするのが良いのではないかしら……？　無論、子どもたちに変なことを吹き込まぬよう、監視はつけるべきであると思いますけれど……残された人生は、ユリウスさんの言うことを聞いて、その手伝いをして過ごすこと。それが、あなたのすべきことですわ」
「私を、許そうというのですか？　帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーン」
前髪の下から、バルバラが、鋭い視線を向ける。けれど、ミーアは、チラリとラフィーナのほうに視線をやってから、小さく首を振る。
「許すなどと……。あり得ないことですわ。あなたは許されぬことをした。あなたは囚われ、その生涯を囚人として終える。あなたは、あなたの蒔いた種を刈り取らねばならない」
ミーアの言葉は、どこまでも重い。そこには、一切の妥協はなかった。
「あるいは、あなたに恨みを持つ者が、その裁きに納得がいかなければあなたを見つけて殺すでしょう。仮に平穏な死を迎えられたとしても、天で神があなたを裁くでしょう。あなたの罪は消えない。でも……」
と、そこで、ミーアは言葉を切った。そうして、バルバラに向けるのは優しい笑みで……。
「“その時”までには、わずかなりとも時間があるでしょう。ならば、やがてその命が終わる日までに、できることはあるのではないかしら？」
シュトリナは目を見開いた。
ミーアの言わんとしていることの意味を、今まさに悟ったからだ。
ミーアは、言っているのだ。

残された時間で、お前の人生に「意味」を持たせろ、と。
自らの手ですべてを捨て、破壊し、それでも構わないと生きたバルバラ。その人生にはなんの意味もなく、価値もなく、実りもなく。
その終わりにあるのは刑に服す囚人としての時間のみ。復讐され、嘲笑の中を殺される、あるいは、復讐の刃を恐れ、やがて来る神の裁きを恐れるのみ。
彼女に与えられるのは、そんな空しい終わり方であったはずだ。
けれど、否、とミーアは言う。
それでも、その人生に意味はあったのだ、と……。
蛇は死なない。人が人である限り、やがてはどこかで甦り、再び動き出す。永久に不滅の存在。
されど、後に繋がる流れというのは、なにも蛇だけではないのだ。
人の営みだとて、未来に繋がるれっきとした流れだ。
ユリウスという人を世に生んだ。そして、彼によって育てられた子どもたちは、確かに、この世界に影響を与えていく。
バルバラに残された命の時間がどれほどかは定かではない。でも、それでもミーアは、その流れに加われ、とバルバラに言う。
その人生には確かに意味があったのだと、そう誇らしく死んでいけるように……と。
ミーアは、バルバラを見つめて、もう一度言った。
「あなたは、すでに蛇ではない。ならば、罪人として裁きを受け入れ、ユリウスさんの母として、彼の良き行いを手伝うこと。それが、これからあなたがなすべきことですわ」
その言葉に、バルバラは、静かに瞳を瞬かせた。

第六十五話　帝国の叡智の裁き（表……面張力）

「それでも……僕は……母さまと、再びお会いできて、とても嬉しい」

「ああ……これは、なんて……」

感動的な親子の再会に、ミーアは思わず、瞳をウルウルさせていた。

――ああ、よかったですわ。これは実に素晴らしい。

うんうん、っと満足げに頷いてから、ふと、ミーアはパティのほうを見る。

パティはジッと、二人の再会を見つめていた。

――うふふ、パティもこれなら納得してくれるんじゃないかしら？　見事なハッピーエンドですし……。

などと思っていたミーアであるのだが……その敏感な嗅覚が違和感を嗅ぎ取る。見つめているパティの視線……そこに、かすかに心配そうな色を見つける。

――はて？　なにか、心配することがあるかしら……？

辺りを窺うと、そのそばにいたシュトリナも、なにやら、不安そうな顔でバルバラのほうを見ている。

パティならばともかく、シュトリナまで、となると、さすがにミーアも不安になってくる。

ミーア、しばしの黙考。その後、一つの答えに至る。

――ああ、そうですわ。わたくしとしたことが、これは少々詰めが甘かったですわね。きっちりと確認しておく作業を失念しておりましたわ。

それは、ミーア自身もよくやらかすことなのだが……。「これって、結局、どういうこと？」　とわからなくなってしまうことは往々にして起こり得ることだ。

目の前で起きていることの意味を、きちんとその場で確認しておかなければ、後々で問題になってしまうことは多い。互いの認識というのはしばしばズレるもの。
相手がミーアとは違うものを状況から読み取っている可能性だってある。
ゆえに……。
――ここは、あえて、ユリウスさんが生きていた、というのがどういうことなのか、しっかりと言葉にして、バルバラさんにわからせおく必要がありますわ。
ミーアは、静かに頷いてから、キリリッとしかつめらしい顔をした。
「バルバラさん、あなたは蛇から解放された。あなたは、すでに蛇ではない」
そう、まずはそれを確認しておかなければならない。
バルバラはすでに、蛇になる理由がなくなっている。蛇として活動する理由はどこにもないのだ。
だからこそ、ミーアは言いたい！　心から、訴えたいのだ。
「もう、蛇じゃないんだから、大人しくしてましょうね……」
と。
そのことを、きっちりとわかっておいてもらわなければならないのだ。
「あなたは、生き方を変えなければなりませんわ」
これも、あえて口に出して、確認しておく。
あなたは、もう蛇ではありませんね？　では、これからは、蛇として生きるんじゃなくって、生き方を変えなきゃダメですよね？と……バルバラにきっちりわからせるのだ。
さらに、抜け目なく言っておく！
「バルバラさん、あなたは、ユリウスさんと暮らしなさい」
これにより、バルバラはユリウスの顔を見るたびに、自分はもう蛇ではないことを、嫌でも確認することになるのである。

さらにさらに！　ミーアの配慮は続く。
――人は暇だと、ろくなことを考えないものですわ。生真面目なわたくしですら、授業中に、グッとくる、アベル宛の恋文の文面を完成させよう、などと益体もないことを試してしまったわけですし。
ちなみにバレずには済んだものの、後で文面を読み返し……もしも、これ教師に見つかってたら……などと青くなったミーアである。
――ともかく、なにもやらせずにおくのは危険ですわ。バルバラさんが悪だくみをする隙がないように、なにか、役割を与えるべきですわね。
そうして、ミーアは言ったのだ。
「ユリウスさんの手伝いを苦役としなさい」
すなわち、残された人生を、ユリウスの監督のもとで生きよ！
と。
――ユリウスさんは、一時期、悪に染まったとはいえ、信頼できる方。あの眼鏡がその証明ですわ。
ミーアの眼鏡に対する信頼は揺らぐことはない。
他に、なにか確認し忘れていることはないか？　と考えていると、不意にバルバラが口を開いた。
「私を、許そうというのですか？」
――許す……はて？
ミーアは首を傾げて……それから、ハッとした顔でラフィーナのほうを見た。
――これは……もしや、刑罰が軽すぎたかしら？　確かにユリウスさんの手伝い、子どもの世話というのは、普通の囚人に与えられる仕事としては軽いものかもしれませんし……。バルバラさんはリーナさんの世話をしていたのですから、慣れてるし、ちょうどいいと思ったのですけど……。
それに、離れ離れになっていた子どもと一緒に生活してもいいよ、というのも、少々、甘い裁きだろう。以前、ティオーナ監禁事件の際、ラフィーナから「優しいわね！」などと笑顔で言われた時のこ

とを思い出し、ミーア、震える。
さらに、バルバラに一番恨みがあるのは、なんといっても、シュトリナである。
この場で、ミーアが勝手に「許す！」などと、言えるはずもない。
試しに、そちらを見てみると……なんと、シュトリナはバルバラのほうをジッと見つめて震えているではないか！
――ひぃい、い、怒りに震えておりますのね。これは、危険ですわ！
ということで、ミーアは自身の言葉に軌道修正をかけることにする。すなわち、
「許すなどと……。あり得ないことですわ！」
許すなど、とんでもない！　きちんと罰を受けてもらいますよ！
と強調しておく。
「あなたに恨みを持つ者が復讐し、天で神があなたを裁くでしょう。あなたの罪は消えない」
仮に、自分が与える罰が軽くっても、ちゃんと罰が下るよ。大丈夫よ？　と予防線を張りつつ……。
「その時までには、わずかなりとも時間があるでしょう」
厳しく言いすぎると、今度はバルバラが自棄になって暴走するかもしれない、と思い、できるだけ優しい顔をして、バランスを取っておく。すなわち、
「神様とか、復讐者とかに弁解できるように、良いことする時間はあるよね？」と言い足しておくのだ。「自分はこんないいことしてるから、許してね！」と言えるよう、きちんと行動しておきなさいね？　というのだ。
そうしておいて……、
「あなたは、すでに蛇ではない！」
もう一度、確認する。
繰り返し確認することは、とても大切なことなのだ。そのうえで、
「罪人として裁きを受け入れ、ユリウスさんの母として、彼の良き

行いを手伝うこと」
罪人として殊勝に生きなさい。でも、そう生きることは、亡くしたはずの息子と生きられる、とても良い時間でもありますよぅ！と。
バルバラを納得させるために言って締めに、
「それが、これからあなたがなすべきことですわ！」
断言するのがとても大事だ。
人というのは、断言されると「あれ？　そうかも？」と思ってしまうもの。
流れが来たら、その流れに流されていくものなのだ。
水の流れというものを、海月ミーアはよく知っているのだ。
かくてミーアは、うっかりさんな孫娘ベルに見せつける。
各方面に対する気遣いの極致――将来的に自身が危険に接する面積をできるだけ小さくしようとする……そのために手を尽くす、いわば表面張力的な戦術を。
水の心というものを、海月ミーアをよく知っているのだ。

ミーアの言葉を黙って聞いていたバルバラは……返事をしなかった。けれど、その顔から、険が消えているのを見て、ミーアはホッと安堵して……、安堵しかけて……。
「私を……セントノエル島に渡らせたのは、巫女姫とは違う流れの蛇。額に、瞳の刺青を入れた男」
「……はぇ？」
突如、出現した新たな波に、あっという間に呑まれていくのだった。

第六十六話　追走劇

月の明るい夜だった。
満天の星空をのんびり眺めながら、火燻狼は馬に揺られていた。
「さぁて、バルバラの息子は上手いことやってのけたかね……？」
遥か後方、今はもう見えなくなったノエリージュ湖を思い出しながら、つぶやく。
「まぁ、上手くいっていようがいなかろうが、俺には関係ないが……」
基本的に、燻狼は、事が起こる時に現場にはいないようにしている。彼が去った後に事件が起きるのであり、その頃には仕掛け人たる彼は、すでに別の場所にいるのが理想。
サンクランドでも、巫女姫の居城でも、それは変わることがない。
成功・失敗を見届けず、その結果にもこだわらないことで決して当事者にならない。それこそが彼のスタンスなのだ。
「しかし、せっかく逃がしてやったのに、まさかセントノエルに行くとは。あの女も焼きが回ったもんだ」
もともと、バルバラは騎馬王国に由来する蛇ではない。帝国に古くから根差す蛇を源流としている。さらに地理的に、より西側、ガヌドス近辺の蛇とも薄っすらと繋がりがあったため、重宝してきたのだが。
「まぁ、いいがね。別に、繋がりがあろうがなかろうが……」
蛇は、基本的に個人主義者だ。短い期間協力することはあっても、そこに情が生まれることはなく。
「各々が秩序の破壊を志し、歴史の流れを変えていく。それが蛇の本道なり、か。さぁて、次はどこへ向かおうかね……ん？」
と、そこで、燻狼は口を閉ざした。
耳元に手をやり、風の音を聞く。

穏やかな夜風に乗って、なにかが近づいてくる音が聞こえて……。
それは馬のかける音で……。
直後、燻狼は舌打ちする。
鋭く馬を駆り、街道を走り出す。が、ほどなくして……その足を緩める。
――これは逃げきれそうもないかね……。
諦め混じりにため息を吐き、それからゆっくりと振り返る。
「おお、これはこれは、狼使い。我らが族長殿」
その視線の先、漆黒の馬に乗る、スラリと背の高い男の姿があった。馬の両脇には二匹の狼が控える。
――臭いを辿られたら逃げようがないかね……。やれやれ。
「ひさしいな、燻狼。今までどこでなにをしていた？」
「不肖、この燻狼、この世をよりよくするために、善行に身をやつしておりました。北で孤児院に寄付を寄せ、南で町のくず拾い」
よよよ、と泣き真似をしてみせて、燻狼はバカにするように舌を出す。
「教えるはずがなかろうよ。たとえ親、兄弟、あるいは、お前の大切な巫女姫であろうと、我が手の内を晒すことはない。それが蛇というものさ」
「聞くだけ愚か、というものか」
「なぁに、気に病むことはない。お前が剣の腕しかない愚か者であることは、俺もよくよく知っているさ」
「そうか……。ならばここは、我の得意ごとの話をしようか」
そう言って、馬駆はスラリと剣を抜いた。
「おいおい、狼使い。族長殿よ、まさか、この俺を殺すつもりかね？」
「安心しろ。殺しはしない。それは禁じられているからな。我はただ、己が役割を果たすのみ」
「やめてくれませんかねぇ、実戦は苦手なんだ」
言いつつ、燻狼も剣を抜いた。わずかに曲線を描く刀身が、月明

りを受けてギラリと輝く。
視界の中、二匹の狼が左右から包囲するように近づいてくる。
「俺ごときに三対一とは……。族長殿も容赦がない」
右に、左に、と視線をやって、燻狼は、剣を両手持ちにした。
「むっ？」
馬駆が警戒に足を止めた、瞬間、燻狼は動いた。
「ほいっと」
剣の柄の部分をひねる。パキッと何かが割れる音がして、ジワリ、と持ち手の部分から液体が染み出してきた。
それは、彼が握りこんでいた粉状の薬と混じり合い……。パァッと強烈な光が生まれた！
狼の弱々しい悲鳴と、馬駆の微かな呻き声。
それを背中に聞きながら、燻狼は馬首を翻す。
「さぁて、どれぐらい足止めできるものやら……」
投げやりにつぶやきつつ、馬を駆る。
さすがは、騎馬王国出身なだけはあり、その手綱さばきは見事なもの。足を止めた馬駆たちを置いて、ぐんぐんと荒野を駆けていく。
されど……彼にとって不運だったのは、今宵が月夜であったこと。
そして……。
「逃がさぬ……」
追手が火の一族一の、馬の乗り手であったことだった。
振り返れば、後方より、じり、じりと馬駆の馬が近づいてきた。
――やれやれ、さすがに速いな。しかも、あの狼たちには俺の臭いが知られているし。こいつはいよいよ逃げ切れないかね。
っと、その時だ。燻狼の耳が、ある音を捉えた。
それは、ごうごうと音を立てる、川の音だ。
「ああ、ようやくか……」
見えたのは、太い川だった。
キラキラと月明りを反射する水面、水しぶきを上げ、轟きを響かせる荒れた川だ。流れが速く、馬に乗ったままではとても渡れそう

もない。
川は、燻狼から見て右の、やや下ったところを流れていた。
そして、その川に、まるで枯れ葉のように漂う一艘の船が見えた。船は真っ直ぐに川を下っている。並行するように、川を見下ろしながら、燻狼は馬の首筋を撫でた。
「さぁて、お前とはここでお別れだ。せいぜい、幸せに暮らせよ」
そう言うと燻狼は、手綱と鐙……馬と人とを結びつける馬具を一太刀で切り捨てた。
そうして、彼自身は、馬の背を蹴って川のほうに跳躍する。
刹那の浮遊感、美しい月夜をぼんやりと眺めつつ、落ちていき、落ちていき……次の瞬間、お尻を硬い木に、したたかに打ち付ける。
「あたたた……」
「おいおい、大丈夫かい？　あんたが『巫女姫』のところの蛇導師の生き残りか？」
見上げると、長髪の男が、こちらを見ていた。額に青いバンダナを巻いた、鋭い目をした男だった。
「そう言うそちらさんは、バルバラをセントノエルに送り届けた、西の蛇かね？」
「ふん、どうやら、間違いはないようだ……っと？」
不意に、男が目を上げる。と、
つられて燻狼も視線を上へ。すると、月明りを背に受け、漆黒をまとった男が降ってきた。
「逃がさぬ、と言ったはずだ」
見事に、船に着地を決めた男、火馬駆はすかさず剣を抜き……。
「おいおい、他人の船で勝手が過ぎるんじゃない？」
突然の声、直後、がいぃん、っと重たい金属の音を立て、火花が散った。
一足飛びで馬駆にとびかかったのは、バンダナの男だった。鋭い横薙ぎを、剣を立てて受け止めた馬駆だったが、足場の舟がぐらつき、バランスを崩した。

「しゃあっ！」
追い打ちをかけるように、バンダナの男が蹴りを放った。鋭く突き出す蹴りは、馬駆の胴体の中心を射抜き……、その体を舟から叩き落した。
その一部始終を、燻狼は、落とされぬよう必死に舟に掴まりながら見ていた。
「やーれやれ。あれが、巫女姫の最強戦力か」
軽く腕を振りつつ、バンダナの男は軽い笑みを浮かべる。
「ま、こうして船の上なら恐れるに足りんと言ったところかな」
「それは、どうでしょうかねぇ……っと！」
びゅうっと飛ばされてきた青い布に手を伸ばし、燻狼は苦笑した。
それは、馬駆の斬撃によって斬り落とされた、男のバンダナだった。
「なるほど、なかなかやるなぁ」
男は、川の中に消えた馬駆を睨みながら、獰猛な笑みを浮かべた。
――族長も化け物だが、この男も負けずに化け物じみてるねぇ。
やれやれ、とため息を吐きながら、燻狼は言った。
「ところで、これからどこに向かうので？」
「さぁてね。たまには、故郷に顔を出そうかと思っていたところだよ」
そう言って、男は笑った。月明りに照らされたその顔、前髪の間から覗く額には、目の形の刺青がくっきりと彫り込まれていた。

第六十七話　ダレカの誤算

バルバラは、サンテリに引き立てられて、その場から去って行った。

――ぐぬぬ……最後にとんでもない情報を置いて行ってくれましたわね……。

それは、新たなる蛇の情報……。その蛇が、ヤナたちに所縁（ゆかり）の民族、ヴァイサリアンであるということ。

バルバラのことが片付いた瞬間に現れた大きな問題を前に、頭がモクモクしそうになるミーアであったが……。

――いえ、違いますわね。今は少なくとも一つの問題が片付いたことを喜ぶべきですわ。そして、目の前の問題をきちんと解決させることこそが肝要。新しいものは、また改めて考えれば良いですわ。

明日のことは明日の自分に任せよう！　と割り切って、ミーアは改めて現状を整理する。

とりあえず、バルバラのことはこれで問題ないだろう。今後のことは、ラフィーナの沙汰を待つことになるが、恐らく、それほど酷いことにはならないだろう。

――優しい獅子になったラフィーナさまであれば、そんなに酷い判断はしないと思いますわ。あのベルが許されてるぐらいですし、大丈夫に違いありませんわ。あとは……。

そうしてミーアが視線を向ける先、一人残ったユリウスの姿があった。彼には、まだ、するべきことがあるのだ。

ユリウスは、ゆっくりと歩いて子どもたちの前に出る。そうして……。

「本当に、申し訳なかった」

静かに頭を下げた。それから、彼は語りだした。

彼自身の罪を……。

先ほどの女性が自分の生き別れの母親であること。
彼女が罪を犯し、このセントノエルに捕らえられていたということ。
母と会うために、自分が銀の大皿を盗んだということ。
一切の言い訳もなく、ただ淡々と事実を告げていくユリウス。そして、
「私は、君たちに嫌疑がかかった時、疑いを晴らすことができたのに、それをしなかった。その結果、君たちの身を危険に晒すことになった。これは言い訳のしようもなく、私の罪だ。本当に申し訳なかった」
そのユリウスの言葉に、子どもたちは呆気にとられた様子だった。
それも仕方のないことかもしれない。なにしろ、いろいろなことがありすぎたのだ。
事情を理解するだけでも、一苦労だろう。
ミーアにとって誤算だったのは、ヤナのことだった。
彼女もまた、黙ってユリウスのことを見つめるばかりになっていた。
――ああ、これは……予想外ですわ。
ミーアは、ぐむっと唸った。
先日の大浴場で、きちんとヤナに言い含めていたつもりになっていたが……。
――新たな蛇がヴァイサリアンの関係者だっていう話の影響力が大きすぎたみたいですわね。
自分たちと同じ、額に目の刺青を持った男が暗躍している。その情報は、ヤナにとって少なからずショッキングなものだったのだろう。
――こうなれば、ここはなにか、わたくしが……。
キリリと凛々しい顔で、一歩踏み出そうとしたミーアであったが……、すぐに立ち止まり、頭からボフンッと煙を出す。
――だ、ダメですわ！　なにも思い浮かびませんわ！

バルバラの話をまとめるのに、すでに甘い物を使い果たしてしまったミーアは、菓子欠状態になってしまったのだ。
そうして生まれた沈黙、どのように流れるか、全く読めない状況の中で、声を上げたのは……。
「でも……ユリウス先生は、お母さんに会うためにやったんでしょ？」
ヤナの弟、年少組のキリルだった。
お兄さん、お姉さんたちがなにも言えずにいる中、キリルは、一生懸命に言葉を紡いでいく。
「ボクは……、ボクだったら、もしも、お母さんに会えるなら同じことやっちゃうと思う。それに、お姉ちゃんとはなればなれになっちゃって……それでもしも、もう一回、会えるんだって言われたら、わるいことだって、やっちゃうと思う」
「キリル……」
思わぬタイミングで口を開いた弟を、ヤナはビックリした顔で見つめていた。
「だから……ユリウス先生は、わるくないと思う」
その声は、尻すぼみに消えて行って……。けれど、確かに、子どもたちの心には届いたらしかった。
「うん……。俺もユリウス先生は悪くないと思う」
「私も……」
カロンが口火を切り、他の生徒たちが後に続く。
ユリウスは、子どもたちの反応を見て目を丸くしていた。何かを言おうと口を開くも、そこから言葉が紡がれることなく……。ただただ、黙って、彼らの言葉を受け止めていた。
一方で、ミーアは、自分が間違っていたことを悟った。
許すの許さないの……そういうことを言う必要はなかった。ヤナを誘導する必要など、なかったのだ。
この子たちは、きちんとユリウスの気持ちがわかる。だって、彼の抱えた母親を慕う気持ちは、この子たちの中にもあることだから。

年長の男の子たちは意地を張るかもしれないけれど、キリルは、その気持ちを偽らなかった。お母さんに会う方法があるならば、なんだってやる。もう一度、会えるなら……と。

――うふふ、ヤナに気を使って、お姉ちゃんにも、と付け足すところが、可愛いですわ。

幼いキリルの気遣いに、ちょっぴり母性をくすぐられる、ミーア（25）お姉さんである。

そうして、子どもたちが口々に声をかける中、満を持して口を開いたのは……。

「あたしは……、まだ、ユリウス先生に教わりたい」

クラスの長である、ヤナだった。

その洞察は、非常に鋭かった。ヤナは、仮にユリウスが許されたとしても、彼がこのままセントノエルに留まることは許されないと察していた。

そして、その話が出る前に先手を打ったのだ。

――やっぱり、あの子、とっても鋭いですわ……。

ミーアは思わず瞠目し、そのやり取りを見守ることにする。

「あたしは……あたしたちの気持ちをきちんと理解してくれる、ユリウス先生がいい。きちんとあたしたちの話を聞いてくれる、自分に悪いことがあったらちゃんと謝ってくれる、ユリウス先生がいい……」

それから、彼女はラフィーナのほうに向かって頭を下げた。

「ラフィーナさま、ユリウス先生を、特別初等部の先生から変えないでください」

「うーん、そうね……」

と、そこで、ラフィーナは難しい顔をした。

――あら、妙ですわね。てっきり、すぐに了承の返事をするかと思いましたけど……。

ミーアは首を傾げる。が、考えてみれば、それも当たり前かもしれない。彼は彼で、盗みを働いたのだ。情状酌量の余地はあるとは

いえ、このまま、というわけにはいかないはずで……。
しばし考えていたラフィーナだが、その顔がパァッと輝いた。
「あっ、そうだわ。それなら、こういうのはどうかしら？」
悪戯っぽい笑みを浮かべて、ラフィーナが言った。
「このまま元通り、というのもなかなか難しいと思うの。だからね……」
にっこり上機嫌な笑みを浮かべると、ラフィーナは……。
「子どもたちと一緒にお料理会を開くというのはどうかしら？」
恐ろしいことを……言い出した！
「……はぇ？」
流れ矢を受けて、思わず出たその声が、誰のものであったのかは定かではなかった。

第六十七話　ダレカの誤算（後書き）

今週、来週は軽い遊び回になるかな、と思います。たぶん。

第六十八話　戦力分析……負け確定、か？

キースウッドは、剣術に優れた青年として知られている。
その才は天賦のものであったが、それに驕ることなく研鑽を続け、剣の天才シオンにも劣らぬ腕前を誇っている。
それだけでなく、やがて王となるシオンのため、戦術論・戦略論をも習得し、通常の従者とは一線を画す能力を誇っている。
戦えと言われれば鬼神のごとき武力を持って、兵を率いよと言われれば、歴戦の名将のごとく。そう振る舞えるように、自らを磨いてきたのだ。
そんな彼の、優れた戦略眼が告げている。
「こいつぁ、負け戦だぁ」などと……。
敗因はよくわかっている。
戦災孤児であったキースウッドにとって、特別初等部の子どもたちのことは、他人事ではなかった。また、ユリウスの理想も、彼にはとても共感できるものだった。
彼のような人物が世界には必要だし、冷遇されるべきではないと思った。
だから、ヤナがラフィーナにお願いした時点で……不覚にも少しだけ感動してしまったのだ。
……それが、油断を生んだ。
ラフィーナが、なんだか、ソワソワ嬉しそうにしている時点で、察するべきだったのだ。
こいつぁ、やべぇことになりそうだぞ……と。
「負け戦か……って、いやいやいや……負け戦の一言で片づけてはいられないんだって……」
うろうろと廊下を歩きつつ、キースウッドは考えていた。
「戦には、数が必要だ……。死闘を乗り切るためには、戦力となる

者が必要なんだ」
彼の軍事的常識が告げている。戦力が……人手が必要である、と。
今でも思い出すたびに、背筋に戦慄が駆け抜ける。
ミーアの作り出した巨大な馬パンは、未だに、彼の夢に登場することがあるのだ。
あの巨大な生焼けのパンを、もしもシオンが食べていたら、などと想像するだけで……キースウッドの胃がキリキリ痛む。
あれは、本当に恐ろしい戦いだった。
その後、得られた心強い味方、サフィアスも今はこの地にはいない。
「つくづくサフィアス殿がいないことが悔やまれる。今頃、元気にしているだろうか？」
ふと、夜空に目を向ければ、明るい星が瞬いて見えた。キースウッドにはそれが、帝国の地にあるサフィアスのように見えた。
……重症である！
とりあえず、首を振って頭をスッキリさせる。まずは、情報の整理が必要だ。
「やはり、敵はミーア姫殿下とクロエ嬢……このお二人には徹底した警戒が必要だ」
なにせ、目を離すとなにをしでかすかわからない。ミーアはキノコ、クロエは珍味の隠し味。なにかよからぬことをしないか、監視の必要が常にあった。
「ミーア姫殿下の孫娘だというミーアベルさまは……まぁ、問題はないかな」
無論、戦力としてカウントはできないが、まぁ、ミーアやクロエのように、変なものを混入する可能性は低そうだ、とキースウッドは考える。
「彼女は、特別初等部の子どもと同じ枠でいいだろう。きちんと指示を与えれば、なんとか、働いてくれそうだ。それと、イエローム　ーン公爵令嬢、あの方は……毒の調合とか上手いそうだから、料理

も得意……か？」
しばし考えて後、キースウッドは結論付ける。
「そうだな！　料理と調合、そう違いはないな！　うん！」
キースウッドは混乱していた！
純軍事的に考えれば、この手の希望的観測は、極めて危険なものなのだが……。
ともあれ、シュトリナは、見事、ティオーナと同じ枠に分類されたのだった。つまり、使いようによっては使える枠である。
「新加入のラーニャ姫殿下はどう考えるべきか……」
ペルージャン農業国の姫、ラーニャは、あと十日もすれば、収穫感謝祭のため、国に帰らなければならない。彼女が戦力になるならば、その前に料理会を開くべきだ。食と農作物に造詣の深い姫であるが、はたして、料理の腕前はいかばかりか……。
「確認したいところだが……ペルージャンは、大飢饉によって存在感を増している。それに、ミーア姫殿下肝いりの組織も、あの地に置かれるという。当然、ラーニャ姫もそれにかかわるようだし、決して侮るべきではない」
つまり、なにが言いたいかと言えば、「ラーニャ姫って、料理できますか？」などと気軽に聞くことはできないのだ。しっかりと気を遣う必要がある。
「そして、ラフィーナさま……。あの方の料理の腕は、どうなんだ？」
よく儀式に出てくる時などは、パンを手で割っている。少なくとも、パンを割るぐらいはできるはずだが……。
「うん……まぁ、変なものを入れるとか、そういうことはなさそうだし。いい意味で、こちらの言うとおりに動いてくれそうだ。大丈夫だろう」
そう判断しかけて、不意に……彼の脳裏に嫌な予感が残る。
「いや……、だが、ラフィーナさまは、ミーアさまに妙に甘いところがある。ミーアさまの言うことを素直に聞いて、変なものを混入

する恐れはあるか。具体的には、キノコとか……」
　となると、微妙に信用がおけなさそうだった。
「アベル王子とシオンさまは、言われたことをきちんとやってくれそうだし、そこまで変なことはしないだろう。あとは、ティオーナ嬢……も大丈夫だろう。うん、三人で野菜でも切ってもらうとして。あとは、従者のお嬢さん方か……」
　前回のお料理教室の時にも、さんざん苦労したんだよなぁ！　と、キースウッドは頭を抱える。
　ミーアのメイド、アンヌは、以前より料理ができるようになったとか、ならないとか聞く。ティオーナのメイドのリオラは相変わらずだが、それでも少しは常識が付いただろう。オーブンで焼けと言われれば、オーブンで焼いてくれる……はずだ……たぶん……きっと。
「ラーニャ姫のところは、どうだ？　ペルージャンの従者が、もしかすると、超料理上手という可能性はある。期待が持てそうだ。あとは、ベルさまの従者であるリンシャ嬢、彼女は、使えそうか……？」
　今回、苦しいのは、生徒会の面々だけではないということだった。特別初等部の子どもたちの面倒も見なければならないのだ。
「料理経験者として現場指揮官として動けそうなのは、俺と、リンシャ嬢、ラーニャ姫の従者……だけか？　だけだというのか？」
　腕組みしながら、ぶつぶつ廊下を歩くキースウッド。彼が、もう一人の強力な戦友、モニカの存在に気付くまでは、もう少し時間が必要だった。

第六十九話　キースウッド、心強い味方を得る！

「今日は、スープがいいかな」
人気のない夜の調理場に、一人の女性の姿があった。
ラフィーナのメイド、モニカである。
風鴉を離れて、ラフィーナのメイドとなって以来、聖女の夜食を作ることは彼女の大切な仕事となっていた。
ラフィーナの仕事は激務だ。
生徒会長をミーアに譲ったラフィーナであったが、依然として多忙だった。
ヴェールガの聖女の仕事は、儀式を執り行うことだけにあらず。時に学生の前で、神聖典の解き明かしをし、時に他国の重鎮と密談を行う。
先年のサンクランドと騎馬王国との緊張関係の緩和をしたことも その一環だが、大陸の平和と安定を維持するために、彼女の肩には重たい責任が常に圧し掛かる。
さらには、蛇のこともある。
その精神的重圧は、想像を絶するものだった。
そんなラフィーナだから、忙しくて食事をとれないことがある。その時に、夜食を用意するのが、モニカの仕事だった。
だが……、無論、何でもよいというわけではない。体によく、それでいて、美味しいものを。そうして、少しでも心と体を癒してほしい、というのが彼女の願いなのだ。
手早く野菜を切り、じっくりコトコト煮込むことしばし……良い匂いがしてきたところで……不意に、人の気配を感じる。
「誰っ！？」
鋭い声、と同時に、モニカは近くにあった野菜用のナイフを手に取っていた。逆手に持ち、いつでも対応できるよう、突如、出現し

た謎の気配に注意を向ける。
喉が渇いたから水を飲みに来た生徒……などと言う可能性も考えないではなかったが、気配を半ば消しているのを怪しく感じたのだ。が……。
「申し訳ない。脅かすつもりはなかったんだけどね」
「あなたは……キースウッド殿」
苦笑を浮かべつつ現れたのは、シオン・ソール・サンクランドの無二の忠臣、キースウッドだった。どうやら、彼のほうでも警戒していたらしい。
「このような時間に、食堂に来るとは……なにかありましたか？」
「いや、それはこちらのセリフですよ……モニカ嬢」
っと、キースウッドの目が、火にかけられた鍋に釘付けになる。
「モニカ嬢、それは？」
「……お野菜のスープですが」
「野菜の、スープ……！？」
ずががーん！　っと衝撃を受けているキースウッドを見て、モニカは首を傾げる。
そんなに驚くようなことだろうか？　と。
「こんなことを言うのは心苦しいのだが……もしよければ、一口そのスープをいただけないでしょうか？」
「……えっ……と？　お腹が減ってるの？」
想定外のことを言われ、思わず素になってしまうモニカである。まぁ、夜中に食堂に来ている時点で、そうかな、とは思っていたが……。
「ああ、いや、そういうことじゃないんですが。なんといえばいいか……」
珍しく、慌てた様子のキースウッドに苦笑いを浮かべ、
「では、ラフィーナさまに、お持ちする前の毒見ということで」
モニカは、鍋からカップに、スープを移す。
ホカホカと湯気を立てるそれを、キースウッドは恐る恐るすすり

……、

「す、すごい……！　すごく、まともな味だ！」

「ええと……今、喧嘩を売られてる？」

またしても、素が出てしまうモニカである。

「ああ、失礼しました。そういうことではなく、とても美味しかったので、少し驚いてしまったというか……」

っと、ここでキースウッドは、やおら真剣な顔になり……。

「いや、この際だから、素直にお願いするのがいいでしょう。モニカ嬢、折り入ってお話ししたいことがあります。この後、お時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

大真面目な顔でそんなことを言うキースウッドに、モニカは神妙な顔で見つめ返し……。

「もしかして、口説こうとしてますか？」

「いえ、そういうことでもなくって……」

などと、大慌てで否定するキースウッド。

まるで、唐突に死地に現れた援軍に縋るような必死さに、モニカは思わず吹き出して。

「冗談ですよ、キースウッド殿。でも、ラフィーナさまの従者の中には、殿方に慣れていない方が大勢います。そのような方たちを誤解させるようなことは、言わないほうが賢明かと」

「なっ、なるほど……。それは確かに」

生真面目な顔で頷くキースウッド。それを微笑ましく思いつつ、モニカはスープに目をやった。

「そうですね。ラフィーナさまにスープを持って行った後でしたら、少し時間が取れますから、しばし、ここで待っていていただけますか？」

モニカの問いかけに、一も二もなく頷く、キースウッドだった。

さて……。

ラフィーナの部屋を辞したモニカは「いったい何事だろう？」な

どと首を傾げつつ、調理場に戻ってきた。
律儀に待っていたキースウッドは、さながら、救いの女神を見つめてくるような様子で、待っていた。
事情を聞いたモニカは、苦笑いを浮かべつつも……。
――ラフィーナさまが発起人ならば、失敗は許されない。それに、成功させてラフィーナさまも楽しむことができるようにしてあげるべきね。
少しだけ、気合を入れる。
「特別初等部の子どもたちが一緒だと人数が多いですね。グループに分けて一グループに一人、しっかりと教えられる人を付けてあげるのがいいんじゃないでしょうか？」
「なるほど……各個撃破、ということですか」
眉間に皺を寄せ、うむむ、っと唸るキースウッドに……。
「……キースウッド殿、言葉選びに気を遣う余裕を失ってますよ」
ものすごぅく冷静にツッコミを入れるモニカである。それから、ほんの少し首を傾げて……。
「もしかすると、キースウッド殿は、権謀術数の類は、あまり得意ではないのでは？」
「ははは、いずれはできればと思っているんですが……」
「恥じることではありません。サンクランドの騎士は、正々堂々、正義の刃にて敵を討つことを、一番に考えるべきでしょう。けれど……」
それから、モニカは静かに考え込んだ。
この後、キースウッドは知ることとなる。
風鴉の手練手管。相手の心を巧みに操る、諜報戦の神髄を。

第六十九話　キースウッド、心強い味方を得る！（後書き）

諜報戦を制すもの、料理を制す。

第七十話　ミーア姫、甘い罠の前に完全敗北する

翌日の午後……。就学時間も終わった平和な時間。
ミーア的に言えば、おやつを食べ終わり、若干、おねむになる、そんな時間……。
「ふぅむむ……」
セントノエル学園女子寮、ミーアの部屋にて。
ベッドの上にごろりんと寝転がる――ことなく、ミーアは唸っていた。
大真面目に机の前に座り、腕組みをして、うむむむ……などと、難しい顔で唸っている。
ミーアは真剣に考え込んでいたのだ。ちなみに、なにを考え込んでいたかというと……。
「ラフィーナさまの発案ですし……特別初等部の子どもたちのためにもユリウスさんのためにも、失敗はできませんわ」
例の、仲直りお料理会についてのことである。
確かに、あの場でユリウスの処遇は、ほとんど決まったと言ってよいだろう。お料理会のことは、直接的には関係ないだろうが……それはそれ……。
もしも、みんなで馬パンを作り、それがしょんぼりな出来だったらどうだろうか？
「仲直り自体が、微妙なことになってしまいそうですわ。それは避けたいですし……」
せっかく、ラフィーナが良い形で事件を閉じようというのだ。ならば、今度のサンドイッチ作りの会は、大成功させなければならない。なにより、ミーア考案の馬パンを作ったにもかかわらず、失敗するというのは、ミーア的にもあまり気持ちの良いことでもないので。

「ここは、前回のようにわたくしがアイデアを出してあげる必要があるんじゃないかしら？」
キースウッド一人の肩には重かろうと、完全なる善意で悪だくみを始めてしまうミーアである。
完全なるありがた迷惑である！
「やはり、形状は立体にして……立派な羽を……。羽……あ、そうですわ。ここは、あのキノコで翼の質感を大事にして……となると、キノコを集めるところから始めて……」
手近にあったノートにサンドイッチの設計図をサラサラーっと書き始めるミーア。そこへ……。
「失礼します。ミーアさま……」
「あら？　クロエ、どうかしましたの？」
ドアを開け、現れたのはクロエだった。
その手に一冊の本を持ち、現れたクロエは、真剣な顔でミーアを見つめた。
「はて、その本は？」
「はい。今度のサンドイッチ作りのために、下調べをしようと思いまして……」
などと答える生真面目なクロエに、ミーアは思わず笑みをこぼす。
「ふふふ、さすがはクロエ。わたくしと同じことを考えておりましたわね」
頼りになる読み友の発言に、満足げに頷いて、それからクロエの持つ本に目を留めるミーア。
「それで、その本は？」
「最近、流行ってるお料理をまとめた本だそうです。モニカさんにいただきました」
「あら？　モニカさんから？」
思わぬ名前に小さく首を傾げるミーアだったが、ぽんっと手を打った。
「なるほど。あの方はもともと、諜報組織の方でしたわね。ラフィ

ーナさまの命を受けて、情報収集をしたと、そういうことかしら」
うむうむ、と納得の頷きをみせるミーアである。
「このお借りした本に、なにかサンドイッチに使えるアイデアがあるかもしれない、と思って読み込んできたんですけど……」
そう言って、クロエは机の上で本を広げる。
「ほう。なにか、いいものがございましたの？」
「そうですね。いろいろと参考になりました。例えば、このフルーツとクリームのサンドイッチというのが……」
それを聞いた瞬間、ミーアはカッと目を見開いた。
「まぁ！　そんなものがございますの？　というか、それはパンなんですの？　ケーキではなく？」
慌てて本を覗き込む。っと、驚いたことに、そこには、クリームを挟んだパンの絵が描かれていた！
それは、丸く作ったパンに切れ目を入れて、そこにフルーツと白いクリームを挟んだものだった。
同じようなもので、腸詰肉（ソーセージ）を挟んだものは食べたことがあるが……パンにここまで甘い物を挟むという発想はミーアの中にはなかった。
「ああ……でも、そうですわね。よく考えれば、ジャムやハチミツだってつけるわけですし、生クリームやフルーツを挟んでも……、不思議はありませんわ！」
「私も、こんな食べ物があるだなんて全然知らなかったです。商人の娘として恥ずかしいです。これは、著名な料理人が開発したみたいなんですけど、すごく甘くて美味しいみたいですよ。子どもたちも甘いのが好きなんじゃないかって、モニカさんも言ってて……」
「ああ、それは真理ですわね。甘い物が嫌いな子どもなんかいませんわ。きっと、パティも好きなはず……。であれば、このサンドイッチは、いいですわね。うん、実にいいですわ」
ミーアの脳内を、甘い、あまぁいサンドイッチが埋め尽くしていく。

「特に、この紅月イチゴと生クリームのサンドイッチが……」
「生クリームに紅月イチゴ！？　それでは、サンドイッチではなく、ほとんどショートケーキではありませんの！？　そんなサンドイッチが許されるというんですの？」
ふるふるっと震える手で、クロエから本を受け取ると、ミーアは一心不乱に読みふける。
「よさそうなものに、モニカさんが印をつけてくれたみたいですね」
「なんと……。さすがは元風鴉……。情報の整理は、お手のものですわね」
などと、朗らかな笑みを浮かべるミーア……であったのだが……。
彼女は気付くことができなかったのだ。
それがすべて、キースウッドＦｅａｔ．モニカによる、諜報工作であるなどと……想像すらしなかったのだ。
かくて、キノコ女帝ミーアは、甘い罠にからめとられた。それは、帝国の叡智が諜報戦に完全敗北した、珍しい例と言えるだろう。

第七十一話　常識人ベル、挙手する！

決戦の日は、週の始まりの日だった。
中央正教会において、七日間の始まりの日は安息の聖日と呼ばれている。
この日は、聖日の礼拝（ミサ）の日であり、仕事も学校も休みとなる日。日々の職務から解放され、心を平安にする、まさに安息の日……のはずだったのだが。
礼拝を終え、聖堂から出て来る者の中に一人、心に平安のない者がいた。
ほかならぬ苦労人、キースウッドである。
「大丈夫……やるべきことはやってきた。事前に準備は終えたはず……。なんの問題もない、はず……」
ぶつぶつと……自分に言い聞かせるようにつぶやいて、それからキースウッドは思い出す。
今回、協力してくれたモニカが与えてくれた助言のこと。
「いくら準備しても不安になってしまって……」
などと、弱気なことを言うキースウッドに、モニカは、労わるような、困ったような笑みを浮かべて……。
「キースウッド殿……」
ぽむぽむ、っと優しく肩を叩き……、
「……どうにもならなくても、やり遂げなければならない時って、ありますよね？」
「まぁ、ありますけどねっ！」
具体的には、手練れの狼二頭と戦わなければならない時とかね！
てっきり「世の中、いくら準備してもどうにもならない時があるから、気楽に」みたいなアドバイスが来るかと思いきや、それを踏まえたうえで「どうにもならん時もなんとかしなければならない時

がある。諦めろ！」と来た。全然、優しくなかった！
これは助言か？　励まされているのか？　などと、首を傾げざるを得なかったキースウッドである。
モニカ・ブエンティア。風鴉で訓練され、レムノ王国で酷い扱いを受け、ラフィーナの下で働く彼女は……、どうやら、想像以上にしたたかに鍛えられてしまったらしかった。
助言をくれた時の、神妙なモニカの顔を思い出し……、
「いや、でも……やっぱりあれは助言ではないよな」
思わず苦笑するキースウッドだった。

さて、午前中に聖日の礼拝を終えたセントノエルの学生たちは、昼食前には自由時間になってしまう。この日は授業もなく、行事もない。
そのまま寮の食堂で昼食をとるもよし。町に繰り出すもよし。各々、週に一度の休日を満喫するために動き出すわけだが……。
特別初等部と生徒会の面々は、生徒会室に集められていた。
集合した後、彼らが向かったのは調理場の裏手だった。そこでは、一足先に来ていたユリウスがクリーム作りに勤しんでいた。
一般的にケーキなどに用いられるクリーム。それは、搾りたての生乳を分離して取り出すものだった。その分離の際に用いられるものが「女王海月の粉（じょおうくらげ）」と呼ばれる分離剤だ。
極めて吸水性の高いその粉は、水分を吸いながら、生乳の下のほうに溜まる。一方で、比重の軽いクリームは上のほうに集まってくる。これを、練振（れんしん）分離法という。
生乳の分離自体は、自然に放置していても起きる現象であるが、この女王海月の粉の発見により、飛躍的にその分離技術は進んだという。
けれど、技術が進んだと言っても、労働自体はゼロにはならないわけで……。
水分を吸う、その魔法の粉が綺麗に混ざらなければ、当然、分離

は不完全になる。水分が多く残れば、クリームの泡立ちが悪くなり、味もまた落ちる。さらに、水分を吸った瞬間から、女王海月の粉は粘度を持つため、かき混ぜるのも一苦労だ。

そのため、巨大な桶をかき混ぜるユリウスの額には、汗が光っていた。

けれど、ユリウスは手を止めることはなかった。懸命に、両腕で持った大きなヘラを動かし続ける。

それは、彼に与えられた償いの機会だった。子どもたちの今日の思い出を、楽しいものとするために。

「やぁ。みなさん。もう少し時間がかかりそうですが、パンが焼きあがる頃には、クリームをお届けできると思います」

ふぅっと一息吐いて、ユリウスが笑みを浮かべる。

「ユリウス先生、ぼくも手伝います」

キリルがそんなことを言うが、ユリウスはゆっくりと首を振り、

「君たちには、別に仕事があります。ここは私に任せてください」

きっぱりと言うのだった。

そうして、頑張るユリウス先生の姿を子どもたちに見せた後、一行は、調理場へと戻ってきた。

そこで、改めて、今日のお料理会についての話をするのだ。

「今回、みなさんに作っていただこうと思っているのは、クリームと紅月イチゴのサンドイッチです」

厳かな口調で、キースウッドは言った。

それこそが、彼とモニカが立てた作戦。すなわち『誘導』である。比較的、危険が低そうなメニューにミーアたちを誘導するのだ。

クリームと紅月イチゴのサンドイッチならば、大きな問題は起こらない……はずだ。まさか、そこに悲惨なアレンジを加えようなどとは思わない……はずなのだ。

――あのフルーツサンドイッチの記事を、ミーア姫殿下にも読んでいただいている。クロエ嬢も、すでに頭は、フルーツサンドイッ

チ一色になっているはずだ。
最も危険な二人を誘導すべく、情報戦は始まっていた。
相手が喜んで罠に踏み込むようにすることこそ、上策というもの。意図的に、魅力的な情報を流すことで、二人の意識を誘導してやるのだ。
「そう……。ええ、確かに、とっても美味しそうだけど……」
っと、話を聞いていたラフィーナの顔が不意に曇った。
「でも……馬型のサンドイッチというのは……」
「ラフィーナさま……」
そんなラフィーナに、すかさず、モニカが歩み寄り……。
「キースウッド殿に作り方を教えていただきました。それに、そちらは後ほど、ミーアさまと相談しながら作ればよろしいかと……」
などと、抜かりはない。
「ミーアさんと相談しながら……二人で……うん。そうね、子どもたちと一緒だと、わからない部分もあるかもしれないわ」
お友だちと二人でのお料理会を想像し、ニッコリのラフィーナである。
一方のキースウッドは、後日の憂いに、若干お腹をさすりつつも、今は、目の前のことを片づけようと気持ちを切り替える。
「そういうわけで、今日は準備を整えておきました。作業は分担して進めます。シオン殿下、アベル殿下、ティオーナさまとリオラ嬢、特別初等部の……」
っと、手早くグループ分けしていく。
シオン班は、フルーツの準備。紅月イチゴのヘタを取ったり、切ったり、そうした簡単な作業だ。切ることについては、こだわりがあるらしいティオーナや、刃物の扱いに慣れているシオン。リオラも、まぁ、森で生きてきたわけだから、大丈夫だろう、と判断する。
アベルに関しては、変なことはしないだろうという信頼はあるものの、ミーアと同じ班の場合、ミーアが暴走しそうだった。ゆえに、こちらのグループに入れてある。

子どもに刃物は危険かもしれないが、ヘタを取るだけならば、手でできる。問題ないだろう。考え抜かれた布陣である。
「次に、出来上がってきたクリームを泡立てて、砂糖を混ぜ合わせる作業を、ミーアベル姫殿下、イエロームーン公爵令嬢、それに、特別初等部のカロンくん。あとは、指導員としてリンシャ嬢」
上手く、問題が起こらないようにメンバーを割り振っていく。
シュトリナは、調合に慣れているということだったので、クリーム作りには、最適だろう。恐らく……。きっと。それに、ベルもお友だちの言うことならば、素直に聞くだろう。
あとは、特別初等部の中でも、ちょっぴりやんちゃそうなカロンはこのグループへ。リンシャは、わんぱくな男の子の相手も慣れているということで全面的に信頼しておく。
「そして、最後に、パンを焼くのがラフィーナさま、ミーア姫殿下、ラーニャ姫殿下、クロエ嬢。サポートとしてアンヌ嬢。指導係は、ラーニャ姫殿下の従者の……」
そうして、戦力を割り振っていく。大丈夫、大丈夫、と自分に言い聞かせながら。
「俺とモニカ嬢は全体を見回して、問題がないかどうかチェックします。なにかあったら、すぐに知らせて……ん？」
っと、その時だった。
勢いよく手を挙げる者がいたのだ。それは、ほかならぬ要注意人物、ミーア・ルーナ・ティアムーンだった。
「なんでしょうか？　ミーアさま」
「少しパンを焼く者の人数が多いのではないかしら？　わたくし慣れておりますし、なんでしたら、キースウッドさんを手伝って全体の監督をしても……」
「いえ。大丈夫ですから。ミーアさまには、ぜひ、普通の形のパンを焼く、そのお手伝いをいただければと思っています。分業が大事ですから、分業が……」
パン焼きは、すでに経験済のミーアである。アンヌやラーニャ姫

もいるし、なんとしても、そこにミーアを封印しておきたいキースウッドである。
「むぅ……まぁ、そこまで言うのでしたら……」
などと、なんとか説得に応じてくれたミーアに、ふぅっとため息を吐いて……。それから彼は辺りを見回して。もう一人、手を挙げている人物を見つけた。
「ええと、なんでしょうか？　ベルさま」
名前を呼ばれて、なぜか嬉しそうに頬を赤らめたベルは、はいっ、と気持ちの良い声を上げた後……。おずおずと言い出した。
「あの、甘い物ばかりだと、体に悪いんじゃないでしょうか？」
「……はぇ？」
それは極めて意外な方向からの、強烈な正論だった。

第七十一話　常識人ベル、挙手する！（後書き）

今週まで遊び回です。キースウッドに頑張ってもらいます。
活動報告更新します。

第七十二話　決戦・伏兵・援軍！

伏兵は……意外なところから現れた。
「甘い物ばかりだと、体に悪いんじゃないでしょうか？」
ドヤァな顔で極めて正しいことを口にしたのは、ミーアの孫娘、ミーアベルだった。
「なっ！」
驚愕に、キースウッドが言葉を失った間隙をついて、ベルはペラペラしゃべりだした。
「お昼ご飯を食べずに、デザートだけ食べたらダメだって、言われたことがあります。子どもたちのためにも、きちんと普通のサンドイッチも用意したほうがいいんじゃないでしょうか？」
正論だ！　文句のつけようのない正論だった！
断罪王シオンも真っ青な完全無欠な正論を前に、キースウッドはたじろいだ。
一方、孫娘の正論を耳にしたミーアの……その胸の内に宿る教育者魂に火がついた！　ついちゃった！
「ふむ……確かに、言われてみれば、タチアナさんにそんなようなことを言われましたわね」
記憶力には大変、定評のある帝国の叡智である。腕組みをしつつ、ミーアは考え込んだ。
「ああ、いえ、ミーア姫殿下？　あまり、予定にないことは……」
「いえ。子どもたちの健康のことを考えると、きちんとした食事をさせてあげるべきですわ。甘い物で口がおごってしまえば、体に良い食べ物を食べたくなくなるのが人の情というもの」
経験者の発言は、実に力強く……。
「それに、甘い物ばかりでは、飽きてしまうかもしれませんわ……ここは、当初の構想通り、馬パンも並行するのが良いのではないか

しら」
っと、ここで、ミーアはぽこんっと手を叩き、
「あ、そうですわ。体にいいということであれば、いっそのこと、キノコを入れてみるとか！？」
恐ろしいことを言い出した！
「ちょうど、新しい馬パン用に、キノコを混ぜる構想を練っておりましたの。ほら、天馬のように、翼があって……」
などと、おもむろに設計図を広げようとするミーアを、慌てて止めるキースウッド。
「いえいえ、ミーア姫……それはさすがに。ほ、ほら、今から採りに行くのはさすがに……」
「あら、大丈夫ですわ、キースウッドさん」
ミーアはキースウッドを気遣うように、優しい笑みを浮かべる。
「キノコのエキスパートであるわたくしであれば、サクッと行って採ってこられますわ。こう、サクサクッと……」
サクサクッと行って毒キノコを採ってくる気満々のミーアだった！
突然の、毒キノコ女帝の暴走に、キースウッドは慌てふためく。
「いや、ミーア姫殿下にはぜひパン焼きを……ですね」
などと言うキースウッドに、ミーアは、いっそ朗らかにすら見える笑みを浮かべて、
「大丈夫ですわ。パン焼き班には、ペルージャンの方もおりますし。あなたは、知らないかもしれませんけど、ペルージャンの方にかかれば、パン焼きなど造作もないことですわ」
知ってるよ！　むしろ、だからこそ、あなたのところを担当させてるんですよ！　などと言いたいのを懸命に堪えるキースウッドに、追い打ちをかけるように、ミーアは悪戯っぽいウインクを見せる。
「ほら、分業ですわ、分業。何事も手分けして行うことが大事なんですわよ？」
先ほど、自分自身が言った言葉を返されてしまい思わず、歯をギリギリさせてしまうキースウッドである。

「実は、最初からキノコを使ったパンが作れないか、と考えておりましたの。フルーツサンドに浮気しましたけれど、ここは、初志貫徹。馬パンを立体に進化させた、天馬パンを……」
おお、もう……などと、キースウッドが崩れ落ちかけたところで……援軍は意外なところから現れた！
「失礼いたします。ラフィーナさま」
「あら？　サンテリ……。どうかしたの……？　それは……」
声のほうに視線を向ければ、サンテリを筆頭に、数名の従者が入ってくるところだった。そして、彼らの抱えた籠の中には……。
「おっ……おぉ……」
ミーアが、そんな感嘆のため息を漏らしてしまうほどの量の……キノコ、キノコ、キノコ、キノコ、キノコが山のように積んであったのだ。
ヴェールガ茸を始め、複数の種類のキノコが集まっている。
「こんなこともあろうかと、準備をしてありました。今、森で採れそうな旬のものは取り揃えております。もちろん、毒キノコはありません」
心強いその言葉に、キースウッドは、思わず、グッと感動する。
ふと視線を転じれば、モニカが小さく頷くのが見えた。
どうやら、サンテリに声をかけておいたのも彼女らしい。
キースウッドには油断があった。モニカの鮮やかな誘導の手腕にすっかり感動してしまったキースウッドは、そこで思考停止に陥ってしまっていたのだ。
あるいは、これでなんの心配もない、と思い込みたかったのかもしれない。
けれど、モニカのほうは、さらに不測の事態に備えていたのだ。先にキノコを出してしまったのでは、ミーアは否が応でもキノコパンを主張していたことだろう。だから、ミーアが自分で言い出すまでは、隠していたのだ。
いわば、これは次善の策。クリームイチゴサンドで終わっていれば、それが最善であったが、それが叶わぬとあれば、事前に危険を

潰していく。
――これが、風鴉の手腕……。
感心すると同時に、彼の脳裏に、一つの言葉が思い浮かんだ。
かつて、サンクランドの伝説的な名将はこう言ったという。
戦において、現地の者たちの協力は、非常に心強い力となる……。
「これがサンクランド兵法、地の章『現地の協力者の大切さ』ということか……」
思わぬところで、戦術論の教科書の実践を経験するキースウッドである。
彼の戦術家としての手腕は、こうして磨かれていくのだった。

第七十三話　キースウッド、奮戦す！

サンテリらの援護を受けたキースウッドたちであったが、大幅に計画の変更を迫られることになった。
クリームイチゴサンドに加え、馬パンｗｉｔｈキノコも作らなければならなくなったのだ。
急遽、グループを再編成。
クリーム作り班の中から、シュトリナとベルを分け、モニカの指導の下、キノコサンド用のホワイトソース作成班をねん出する。
また、パンの形を普通の形から、泣く泣く馬型に変更。フルーツ馬サンドと、キノコ馬サンドの二種類を作ることとする。
馬型にするのはキノコパンのほうだけでいいんじゃ？　と提案するも、ミーアに押し切られたキースウッドである。さらに、
「ふぅむ、羽に使えそうなキノコはありませんわね？　もっと、こう……幅広のひらひらしたキノコがあれば……」
「ミーア姫殿下……。この場にあるキノコでは不足ということですか？　姫殿下の、キノコへの愛は、その程度であるというのですか？」
ミーアが作らんとしている恐ろしい激流に、敢然と立ち塞がるキースウッド。なんとか、これ以上の状況の悪化を防ぐべく、その場に踏みとどまる。
「この場にあるキノコを最大限活用して、最善の形を作る。それこそが、キノコへの愛ではありませんか！？」
キノコへの愛ってなんだよ……？　と内心で首を傾げつつ、キースウッドは切々と訴える。
「……むっ？」
その力説に、思わず眉根を寄せるミーア。
「ミーアさん、私のために張り切ってくれるのは、とても嬉しいけ

れど。今日は子どもたちとユリウスさんの仲直りのための会だから。想いのこもった新しい馬型パンの作り方は、また後日、直接教えてもらいたいわ」
ラフィーナからも、援護が入る。
……援護というか……後日に問題を先送りするだけのような気がしないではなかったが、すべてを飲み込み、キースウッドは大きく頷いてみせた。
「ぜひ、この場にあるものを使って、最善の形を整えていただきたいのです」
そう言ってやると……ミーアは、
「ふむ。そうですわね……。わたくしとしたことが、いささか、高慢になっていたようですわ。小さなキノコに忠実でないものが、より大きなキノコに忠実になれるはずもなし。謙虚さが大事ですわね」
などと、納得の表情を浮かべる。そんなミーアを眺めつつ、ふとキースウッドは思う。
――この人、本当に、帝国の叡智なんだろうか……？
などと！　彼の勘が限りなく、帝国の叡智の真実に近づいてしまった、まさにその瞬間っ！
「おっと……」
「あっ、ごめんなさい」
特別初等部の少女にぶつかりそうになる。少女はぺこり、と頭を下げるも、その顔には、楽しそうな笑みが輝いていた。
そのまま、トコトコ走っていく少女の背中に、
「あまり、走らないように。気を付けて」
と声をかけつつも、キースウッドは改めて思う。
――あの子たちの笑顔は、そもそもは、ミーア姫殿下が作ったものだったか……。
特別初等部の子どもたちと近い境遇にあったキースウッドには、その笑顔はとてもまぶしいものだった。
今の子だけじゃない。各調理台にいる子どもたちは、不器用にイ

チゴのヘタを取る子も、キノコの石づきを取ってばらす子も、パンをこねるのを手伝う子も、クリームを泡立てる子も、ミーアの新たなる馬パン設計図にワクワク顔の子も……みんな楽しそうな笑顔を浮かべていた。鼻先に小麦粉を付けたり、イチゴの果汁で服にシミを作ってしまったり、失敗もするけれど……そこには、年相応の無邪気さがあった。

弱く、虐げられ、人を信じることすら難しかった彼らに、こんな風に純粋な笑みを浮かべさせる……。それを叡智と言わずして、なんと言うというのか。

――ミーア姫殿下は、料理の際に若干、興奮してポンコツなことを言いだすだけで、基本的には帝国の叡智なのだ。料理の腕前が若干ポンコツだからといって、彼女の功績すべてを疑ってしまうのは、いかにも公平さを欠くことだったな。

キースウッドの反省は、彼の内に芽生えかけた疑念を洗い流すのに、十分なものだった。

さらに……。

「リーナちゃん、このキノコサンドイッチのソースに隠し味とか、必要じゃないでしょうか？」

「んー、料理にはそういうの必要だって、リーナも確かに聞いたことあるわ。それなら、そこの赤い香辛料を入れるのは……」

「これですね？　量はどのぐらい？」

「んー、あんまりちょびっとだとわからないだろうから、きちんと味が出るように多めに入れたほうがいいんじゃないかな？」

などと言う、恐ろしい会話が聞こえてきたので、キースウッドの意識は自然、そちらに向けられた。

慌てて、踵を返そうとしたキースウッドの視線の先、モニカがゆっくりと歩いていくのが見えた。

「シュトリナさま、少しご教示いただきたいのですが……。相手に毒を盛る際、大量に盛って、相手に気付かれる……。そのようなことをするでしょうか？」

きょとん、と首を傾げたシュトリナは、神妙な顔で首を振る。
「いいえ、そんなことはしないけど……」
「そうですよね。毒を隠した状態で相手に飲ませることが肝要だから。ところで“隠し”味とは、読んで字のごとく隠した味であると思いますが、量は、それで適切でしょうか？」
そう言われ……シュトリナは、腕組みして考え込み……。
「なるほど……。隠し味は、相手に気付かれてはいけない。大量に調味料を入れることは下策、と？」
その言に、モニカは、コクリ、と無言で頷く。
シュトリナも、納得した様子で笑みを浮かべると、
「ねぇ、ベルちゃん。その赤い粉だけど、そんなにたくさんは入れないほうがいいと思うの。その半分、ううん、四分の一ぐらいでいいかも。あんまり少なすぎて効果がなくっても失敗だと思うけど……」
――四分の一。ああ、うん。まぁ、そのぐらいなら……うん。あり……なのか？　ま、まぁ、イチゴサンドイッチはかなり甘くなる予定だし。それで、帳消しになる……かな？　だっ、大丈夫、なはず……はずっ！
辛い物にいくら砂糖をかけても辛さは和らがない、みたいな話をどこかで聞いたことがあったような気がするが……あえて、忘れたふりをして、キースウッドは調理台を回って行く。
かくて、従者たちの不断の努力のもと、料理会は進んでいくのだった。

第七十四話　戦いは終わり……そして

「おおー！」
幾度もの苦難を乗り越え、ようやく、歓喜の時は訪れた。
テーブルの上に並んだ料理を見て、一同から歓声が上がる！
お皿の上に並べられたもの、それは、見事な馬の形をしたサンドイッチだった。
もしかして、馬の全身じゃなく、顔だけのほうが挟みやすいんじゃね？　と途中で気付いたキースウッド指導の下、元祖馬パンと馬顔パンの二種類が、そこに並んでいる。
ちなみに、馬顔パンの成形はミーアとアンヌの手に委ねられた。
「なにもすることがないと、人間はロクなことを考えない」という真理に基づき、ミーアが余計なことを考えないように、役割を振ったのだ。
そのせいで、馬顔フルーツパンのほうは「生クリームを表面に塗って、白馬にするのはどうかしら？」などと言う、ミーアのロクでもない発案によって、大変、甘い仕様になっているのだが……いいのだ！　すんごく食べづらいし、手がクリームでベトベトになってしまうのだが……食べられればいいのだ！
そうして作ったパンに、キノコ&ホワイトソースと、イチゴ&クリームを挟み、完成したものが、目の前に並んでいた。
若干、クリームがはみ出していたり、ズレていたり、キノコがチョロチョロ顔を出していたり、表面に分厚くクリームが塗ってあったりして食べにくそうだが、ともかく完成したのだ。
万感の思いをもってサンドイッチを眺めるキースウッド。そのそばに音もなくやってきて、
「ようやく完成しましたわね」
などと……まるで、同労者のような口調で、つぶやくミーアに…

…。
わたくしがやり遂げてやりましたわ！　みたいな万感の思いのこもっていそうな表情を浮かべるミーアに――若干、イラァッとするキースウッドではあるが……。今は、いい。いいのだ。
無事に、食べられるものができたのであれば、贅沢は言わないのだ。
「ええ……。お疲れさまでした。ミーアさま」
若干、疲れた声で返事をして、下がろうとしたキースウッドだったが……。
「あら？　どこへ行きますの？　キースウッドさん」
「え？」
「これから、作った全員で食べますのよ？　ほら、早く席についてくださいまし」
当たり前のような口調でそう言うと、ミーアはみなに指示を出していった。
「あの、本当によろしいのでしょうか？」
不安そうな顔をするペルージャンの従者の女性。そんな彼女に、アンヌが笑みを浮かべて頷く。
「ええ。ミーアさまは、そして、そのお仲間の方々は、そういう方々ですから」
アンヌの言葉の正しさに、キースウッドは内心で頷く。
――そうだな……。この身分を越えた食卓は、間違いなくミーア姫殿下の影響によるものだ。
王族も貴族も従者も、孤児たちも……共に一つのテーブルを囲む。その寛容な空気は、今日の和解の席にピッタリなもののように感じられた。
――さすがは、ミーア姫殿下というところか……。
感心しつつ、キースウッドは席に着いた。
一方でラフィーナもまた感心しつつ、その光景を眺めていた。

当初は、この会の始まりに、なにか言わなければならないと思っていた。
ミーアに任せても良いが、ここはやはり、この会を発案した自分の出番だろう、と、少しだけ意気込んでもいたのだ。
けれど、そんな気持ちは、子どもたちの様子を見て霧散してしまった。
――ここで、難しい話をするのは興ざめというものね……。
子どもたちの顔には、もはやわだかまりはない。否、それどころではない、というのが正しいのかもしれない。
甘いクリームと果実を挟んだ馬サンドは本当に絶品で。
口の中でとろけるあまぁいクリームも、心地よい酸味を伴ったイチゴも、それを受け止めるどっしりとしたパン生地も……。そして、それを自分たちで作ったという達成感も……。
あまりにも、あまりにも、美味しくて……。
許すだとか許さないだとか、そんなことどうでもいい。口を利く暇などないし、みんなで美味しいものが食べられればそれでいい！
とばかりに頬張る子どもたち……とミーアであった。
「ああ、実に甘い。やはり表面にクリームを塗ったのは正解……。ああ、でも、ダメですわよ？　きちんと体にいいキノコサンドも食べなければ……。こっちも美味しいんですから、ほら、パティ、こっちのサンドイッチも食べるんですわよ？」
などと、偉そうに世話を焼きつつ、忙しくフルーツサンドを食べるミーア。
その微笑ましい光景に、思わず優しい気持ちになってしまって……、それからラフィーナは、そっと自らの手の内にあるフルーツサンドを見た。
一口かじり、それから指についたクリームを、ちょっぴりはしたなく、子どものような仕草で舐める。溢れるような甘味に、思わずため息を吐き……。
「復讐に走るは楽なこと、されど、それは苦味を伴って終結するも

の。和解するは難きこと、されど、それは甘味を伴って未来へと繋がるもの。この甘い馬パンは、この場に相応しいものだわ。さすがはミーアさんね……」

満足そうにつぶやきつつも、ラフィーナは想像する。

――これを、馬龍さんとの遠乗りの時に作るとして……形が崩れてしまわないか心配ね。そこのところをもう少し、キースウッドさんに聞かないといけないかしら……？

キースウッドの戦いは続く……のかもしれない。

さて、その日の夜のこと……。

シオンの部屋を抜け出したキースウッドは、学園の中庭に出ていた。

夜空を見上げつつ、軽く杯を傾ける。まぁ、実際のところ、酔ってしまうわけにはいかないので、中身は陽光リンゴのジュースなのだが……。

「やれやれ、大変なことになると思ったが……ふたを開けてみれば、だったな……」

子どもたちの無邪気な顔を思い出し、キースウッドは思わず笑みを浮かべてしまう。

胸の内に宿るものは、なんとも言えない充実感だった。

「……あるいは、すべてはミーア姫殿下の手のひらの上、だったのだろうか？」

そんなことをつぶやいてしまう。

セントノエルでの生活は、子どもたちにとっては夢のような生活だ。されど、降って湧いた幸せというものを、人は簡単には受け入れられない。それに、今まであの子たちが、幾度も裏切られてきたであろうことは想像に難くない。

信じて裏切られるよりは、最初から信じない。自分は幸福になんかなれないと、諦めることで、かろうじて自分の心を守る。そんな境遇の子どもたちをセントノエルに馴染ませるのは大変だ。

かく言うキースウッドも、エイブラム王に引き取られると決まった時には、簡単には信じられなかった。心を開いたのは、いつのことだったのだろうか……？　などと、ついつい思ってしまう。
「ミーア姫殿下は、子どもたちの境遇をしっかりと把握しておられて……、それで、このような流れを作り出した……そんなことがあり得るだろうか？」
破滅へと繋がりかねないユリウスの行動も、ミーアの作り出した流れにより、いつの間にやら、彼と子どもたちとの絆を深めるきっかけへと変わってしまっていた。
いったい、この流れのどこまでが、ミーアの計算に基づくものなのか……？　すべてが計算の内とは思えないが、さりとて、すべてが偶然とも思えず……。
考えようとしたキースウッドだったが、小さくため息。首を振る。
「まぁ、なんにせよ、過ぎ去ってみればいい思い出……」
などと、いい感じの結論に至りそうになり……、ハッと我に返る。
「いやいやいや、実際に大変な状況だったわけだが……あれ、あのまま放っておいたら、絶対キノコ狩りに行くパターンだっただろ。っていうか、馬パンも今なら等身大のが作れるんじゃないか？　とかつぶやいてたし、実際、かなり危険だったんじゃ……？」
心を守るべく、記憶の底に封印していた危機的状況を思い出し……、キースウッド、思わず震える。
「ああ、こちらでしたか。キースウッド殿」
その時だった。声を掛けられ、視線を向けると……。
「おや、モニカ嬢……」
やってきたのは、本日の功労者、モニカだった。
どうやら、彼女も一息吐こうと思ったのか、その手には、キースウッドと同じく、陶製のカップがあった。
「今日はお世話になりました」
立ち上がり、恭しく頭を下げる。妙齢のご令嬢には礼儀正しく。常の冷静さを取り戻した彼は、座っていたベンチにハンカチを敷い

て、そこに誘う。
「あら、ありがとうございます」
モニカは素直に、そこに座ってから、
「今日は、良い仕事をしましたね。子どもたちが幸せそうで良かった。こんなに気持ちがいい諜報活動をしたのは、はじめてです」
ニコリと嬉しそうに微笑んだ。それから背もたれによりかかったまま、夜空を見上げる。
「情報により敵の足を止め、力を弱め、仲間割れを誘って排除する……。戦局を有利に進めるべく、情報を操作する。それが風鴉のやり方でした。けれど……ミーアさまのやり方は、敵を排除して止めるのではなく、敵を味方に変え、みなの幸せへと繋げていくもの。今回は、ミーアさまのやり方を真似てみたのですが、上手くいきました。あの方は、素晴らしい方です」
「ええ。しかし、あなたにもとても助けられました。あなたが味方で良かった」
それから、キースウッドは、盃を空に掲げ、
「心強く、可憐なお嬢さま（レディー）に」
気障っぽく笑みを浮かべるキースウッドに、モニカは、ふふ、っと笑みを浮かべ、
「あれ？　もしかして、口説こうとしてる？」
いつかと同じ、冗談めかした口調で言った。対して、キースウッドは……、
「そうですね……」
ニヤリと笑ってから……。
「それも悪くないかも、しれませんね」
優雅な動作で膝をつく。
「その内、ダンスにでもお誘いしますよ、お嬢さん」
「……え？」
ポカン、と口を開けるモニカ。不意を突かれた彼女の頬は、次の瞬間、ほのかに色づいてみえた。

冷静になったキースウッドは、からかわれっぱなしではない。
優秀な戦術家というものは、必ずや態勢を立て直し、反撃するものなのだ。

さて……そのような、ちょっぴりロマンチックな光景が展開される一方で。
ベッドの上で眠るミーアは……。
「うぅん……、もう食べられませんわ……」
等身大の天馬型のクリーム&フルーツサンドイッチを食べる夢を楽しむのだった。

翌朝、起きて早々に、夢の中で得た着想を、ノートに書き込むミーアの姿があった。
「等身大の天馬パンをフルーツクリームサンドイッチに……。これは、素晴らしいアイデアですわ！」
キースウッドの戦いに、終わりはないのだった……。

第七十四話　戦いは終わり……そして（後書き）

ということで、来週はお休みとなります。
その次の週、１１月１日から再開します。

プロローグ　休暇の終わり～ミーア姫、ついに優位性（チート）を失う……失う？～

夏休みを目前に控えたある日のこと。
ミーアの部屋で、ベルが上機嫌に鼻歌を歌っていた。
目の前のお茶菓子をパクリと食べてから、ベルはニッコニコ顔で言った。
「剣術大会が、あんなにも迫力があるものだとは思いませんでした」
拳をグッと振り上げ、体を弾ませるベル。やんちゃ坊主のような仕草からは、帝国の姫の気品は一切感じられなかった。微塵も、感じられなかった！
「ああ、やはり、シオン王子は格好いいです。それに、お祖父さまもなかなか……。うふふ、こんな素晴らしいものが見られるなんて、過去に戻って来られて良かったです」
今年の剣術大会の決勝は、シオン対アベルの戦いになった。
サンクランドでの復讐戦とばかりに、シオンの剣が冴え、激闘の末に膝をついたのはアベルのほうだった。
「格好良かったなぁ。シオン王子。あのお見事な剣さばき、最高でしたね」
憧れの天秤王シオンと、祖父アベルとの一騎打ちを見られたベルは、心の底からの満足感に浸っていた。
そんなベルに、ミーアは小さくため息を吐き、
「ところで、ベル。もうすぐ試験ですけれど、お勉強は進んでおりますの？」
「え……？」
ミーアの問いかけに、ベルはかっくーんと首を傾げて……、もう一度。
「えっ……！？」
二度見した！

「いや、そんなことはじめて聞きました！　みたいな顔をされましても……。知ってますわよね？　夏休み前の試験のこと……。以前は、そのせいで、セントノエルに居残りになったわけですし」
「もっ、もちろん知ってますよ？　知ってますけど……あれ？　だって、ボクは、休暇のつもりで過去に行けばいいって言われて……。だから、その前にみっちりお勉強をさせられて……あ、あれ？」
解せぬ……という顔で、しきりに首を傾げるベルに、ミーアは苦笑いを浮かべる。
「みっちりお勉強させられたなら、別に問題ないじゃありませんの？」
「ミーアお姉さま……、そのような口車に、ボクが乗せられるとお思いですか？　そのような、卑怯な誤魔化しを見抜いてこそ、帝国の叡智の孫娘と言えるのではないでしょうか？」
キリリッとした顔で言うベルである。ミーアは、はぁ、っとため息を吐き……。
「いいえ。テストできちんと良い点をとってこそ、帝国の叡智の孫娘を名乗ることができるのですわ！　いいですこと、ベル！」
そこでミーアは静かな視線をベルに向け、胸に手を当てて……息を吸って、吐いてから！
「あなたの休日は、終わりましたわ！」
厳かに告げる！
「今日、たった今！　終わりましたわ！」
悲痛なる宣告を受け、ベルは稲妻に打たれたように、かくんっとその場に崩れ落ちた……。
そのまま泣き崩れるかと思われた、瞬間、ハッと顔を上げる。
「今……聞こえました。エリス母さまのお声が……」
それからベルは、そっと胸を押さえて……。
「ああ……そうでした。ボクは帝国の叡智の血を継ぐ者……ミーアベル・ルーナ・ティアムーン。ここのところすっかり忘れかけていましたが、ボクはこの誇りを胸に、雄々しく戦わなければならない

のですね……」
切り替えの早さは祖母譲りのベルである。
そんな感じで、勉強頑張ろう！　などと拳を振り上げるベルだったが……それにツッコミを入れる余裕は、残念ながらミーアにはなかった。
なにしろ、今回のテストはミーアも危ないのだから。
そう、ミーアは今年で十六歳。前時間軸においては、すでに、学業などと悠長なことを言っていられなかった時期。セントノエルにはもう、通えていなかった時期なのだ。
すなわち、ミーアはついに、ついに！　前時間軸でのアドバンテージを使い果たしてしまったのだ！
もう、かつてのように、前時間軸で勉強した知識をもとにテストで無双するなどということはできない。クラスメイトにドヤァ顔でお勉強を教えることもできないわけで……わけで？
……いや、そうだっただろうか？
本当に、ミーアは前時間軸の勉強を生かして……この時代で楽をしていただろうか？　クラスで一番の成績を楽々とって、テスト結果で無双していただろうか？
否……、答えは断じて否である。
そもそも、ミーアには、勉強におけるアドバンテージなどというものは、存在しない。セントノエルに入学して以来、ミーアには、前世の学術的優位性（チート）などというものは、一切存在していないのだ！
……まぁ、つまり、なにが言いたいのかと言えば、今回もいつもと同程度に、テスト勉強で苦労するよ、ということで……。
ベルをどうこうしている余裕はないのだ。いつものことなのだ。
「ぐぅ……特に今回は悪い点は取れませんわ。初等部の子どもたちにも示しがつきませんし……。しかし……さすがは、高等部ですわ。暗記範囲が多い。ふむ……これは、逆に、暗記パンケーキをたくさん食べるチャンスなのでは……？　というか、そう考えないと、やっていけませんわ。うぅ……」

などと涙目になりつつ、食堂で勉強しようと教科書を抱え上げるミーア……であったのだが。
「……ミーア先生、特別初等部で試験前の特別勉強をするのですが、行ってきてもいい？」
そうパティに聞かれて唐突に閃く！　悪魔の閃きが……。
「ふむ……特別初等部。そういえば、ユリウスさんのお勉強の教え方は、とってもお上手でしたわね」
優しげなユリウスの顔が思い浮かぶ。彼ならば、幼い子どもにするように優しく教えてくれるだろうし、場合によっては、ズルいことも教えてくれるかもしれない。こう、楽に暗記する奥義などを……。
「ふむ……さりげなく、特別初等部の子どもたちと並んでテスト勉強してたら……うっかりわたくしにも教えてくれるかもしれませんわね。ふむ、せっかくですし、ベルも誘って……」
その思い付きは、ミーアにはとても素敵なものに思えたから……。
翌日、ミーアは、上機嫌にお願いに行くのだった。

ちなみに「特別初等部の子どもたちに交じって勉強したい！」というミーアに、当初は驚かされたユリウスであったが、すぐにその意図を察する。
――なるほど。ミーアさまは率先してご自分の姿を、子どもたちに見せようというのか。ご自分であっても試験前には勉強しているのだ、と。
帝国の姫にして、生徒会長であるミーアでさえ、試験の前には苦労しているということを見せれば、子どもたちもサボりづらい。
むしろ、自分たちもしっかり勉強しなければ、という気になるではないか。
――そういうことならば、手を抜くことはせず、厳しく見て差し上げるのが肝要か。
ユリウスは眼鏡の位置をスゥっと直すと、わずかに瞳を鋭くし…

…。
「わかりました。ミーア姫殿下。それでは、みっちりお勉強を見させていただきます」
「ええ……。お願いします……けど……あら？　なんだか、ユリウスさん、目つきが怖いですわね……。なんか、クソメガネじみた迫力が……妙ですわね……」
などと戸惑いの声を出すミーアを尻目に、試験の準備は進んでいき……。
今回も無事に、試験を乗り切り、ぐったりするミーアとベルなのであった。
こうして、無事に夏休みを迎えることができると思われたのだが……。
そこで新たな問題が起きた。それは……。

第一話　しんなり、しゃっきり、ミーア姫

さて、試験期間という荒波を乗り越え、しんなりしていた海月ミーアは、突如、ラフィーナから呼び出しを受けた。
「はて……なにかございましたかしら？」
途端にしゃっきりするミーアである。
最近はすっかりお友だちになり、穏やかなる獅子になりつつあるラフィーナであるが、油断は禁物である。
そう、基本的にミーアは信じない。ラフィーナのことを……ではない。そうではなく……。
「わたくしって、時々、気付かずにやらかしてしまうことがありますし、油断は禁物ですわ」
自分自身の行いを信じないのだ！
その小心者の心は、常に注意深く、わたくしってば、知らず知らずのうちに、またなにかやらかしてしまったかしら？　という視点を忘れない。
これこそが、帝国の叡智の真骨頂なのである。
そうして、起き上がったミーアは、アンヌに手伝ってもらい、制服に着替えた後、
急ぎ、生徒会室へと向かう。
先ほどまでのしんなりしていたミーアの姿はそこにはない。水で戻した乾燥キノコのごとく、しゃっきりした顔で、ミーアは生徒会室の扉を開いた。
室内には、先に来ていたラフィーナが待っていた。そして、そのそばには、ヤナとキリルの姉弟の姿もあった。
「ご機嫌よう、ラフィーナさま」
「ああ、ミーアさん。ご機嫌よう」
穏やかな笑みを浮かべるラフィーナ。ミーアは素早く観察。どう

やら、ラフィーナが怒ってはいなさそうだぞぅ、っと判断。
少しだけ、肩の力を抜いて、ミーアは子どもたちのほうに目を向けた。
「ヤナ、キリルもご機嫌よう。テストはどうだったかしら？」
「はい。上手くできました」
堂々と胸を張るヤナと、
「え、えと……たぶん……」
ちょっぴり自信なさげなキリル。
対照的な姉弟に、思わず微笑ましい気持ちになりつつ、ミーアはラフィーナに目を向けた。
「それで、ラフィーナさま、本日のご用向きはなんですの？」
「そう、そのことなのだけど……もうすぐ夏休みになるでしょう？特別初等部の子どもたちをどうしようかと思っているの」
言われて、ミーアも合点する。
「ああ、そうですわね。確かに、考えておりませんでしたわ」
セントノエルに通う一般の学生たちのほとんどは、夏休みに母国へと帰還する。収穫感謝祭で演舞を担うラーニャなどはもちろんのこと、それ以外の生徒たちもほとんどが親元に帰ってしまう。
試験でよほど悪い点を取ったとか、そういうことでない限りセントノエルに残ることはないのだが……（ちなみに、テストの結果が悪くて居残りになった者は過去に、そう何人もいなかったらしいが……そのうちの一人がベルである。セントノエル学園の歴史に名を刻んだベルである）
「まぁ、基本的には一般の生徒たちと同じように、親元、つまりはそれぞれの孤児院に帰って、ここでのことを報告してもらうのがいいかと思っているわ」
子どもたちの口から、特別初等部のことを聞くことができれば、来年以降も子どもたちを送りやすくなるだろう。徐々にその働きが広がっていけば、蛇の温床となりうる場所を潰すことができるようになるわけで……。

「でも、この二人については、そうはいかないでしょう？」
そう言ってから、ラフィーナはヤナとキリルとに目を移した。
「孤児院には、短い間しかいなかったと聞いているから、報告に帰ること自体に意味はないと思うの。そのうえ……」
「そうですわね。ガヌドスにある孤児院というのならば、なおのこと、帰らせるのはよろしくありませんわね」
ヴァイサリアン族に対して、差別的な価値観を持つガヌドス港湾国である。そんなところに帰るよりは、このセントノエル島に残ったほうが良いに違いない。が……。
「ふぅむ……」
ミーア……ここで考える。頭に浮かぶのは、幼き祖母、パトリシアのことである。
――パティは、この二人に対して心を開いてるみたいなんですのよね。
当人は否定しているが、あれは、間違いなくお友だちになっているだろう。そして、見たところ、パトリシアには今まで、友だちらしい友だちがいなかったように感じられる。
――同じく、蛇の教えを受けていたリーナさんも似たような感じでしたし、可能性はありますわ。であれば、この二人は、案外、キーパーソンとなりうるのではないかしら？
パトリシアを蛇から解放するためには、彼女の心を開くことが必要となる。そして、そのためには、この二人にはぜひついてきてもらいたいところである。であれば！
ん、んん、っとミーアは咳払いする。
「どうかしら？　ヤナとキリルのお二人は、わたくしと一緒に帝国に行くというのは……」
「え……？」
ヤナがきょとん、と瞳を瞬かせた。けれど、すぐに、ワタワタと手を振って。
「あ、いえ……。別に、あたしたちは、ここにいられれば十分で…

…お気遣いいただかなくとも……」
「ふむ……」
ヤナの言っていることは、ミーアにも十分にわかることだった。
セントノエル学園は、地上の楽園だ。
ここにいれば、食事に困ることもないし、住む場所に困ることもない。服だってもらえる。
それに、これから夏がやってくるのだから、湖のほとりなどは、とても過ごしやすいだろう。
……が、ミーア的には、ぜひついてきてほしいので、やや強引に説得することにする。
「ヤナ……わたくしは、あなたに、できれば広い世界を見てもらいたいんですの」
「広い……世界？」
「そうですわ。あなたたちは、ガヌドス港湾国にいた。あそこは、あなたたちにとって、さぞ暮らしづらい場所だったでしょう」
額に彫り込まれた刺青、そのせいで、彼女たちは迫害を受けたのだ。
「でも、それはガヌドス港湾国という狭い世界でのこと。この大陸には、あなたたちを虐げる者ばかりじゃない。優しくしてくれる人だっている。そのことも、このセントノエルで学んだのではないかしら？」
ミーアは、そっとヤナを、そして、キリルを見つめる。視線を受けたキリルは、ソワソワした様子で、小さく頷いた。
「この大陸は、世界はとても広いのですわ。海を越えた地にだって国はある。だから、暮らしづらい場所にしがみつく必要はない。嫌ならば、どこへなりとも逃げてしまっても構わない、と、わたくしは思っておりますの」
これは、完全なるミーアの本音だった。
そう、どこへなりとも逃げてしまっても構わないのだ。馬に乗って遠くへ。断頭台が追いかけてこない場所へ、逃げてしまったって

構わないのだ！
そして、そのためには、いろいろな土地のこと、国のことを知らなければならない。
どこに美味しい食べ物があるのか、知っておかなければ、逃げるにしても行先が決まらないではないか。
ミーアはグッと拳を握りしめ、確信を込めて言う。
「だから、いろいろな国を知っておくと良いですわ。いざとなったら、逃げだすために。あなたたちは、すでに、ガヌドスを知り、ヴェールガを知った。であれば、次はティアムーン。さらには、ペルージャンやサンクランド、レムノ……。大陸にはたくさんの国があるし、その中にはあなたたちが暮らしやすい国だってきっとあるのですわ」
それから、ミーアは、ポンっとヤナの頭に手を置いて、
「それに、パティも……。あなたたちと離れるのは寂しがると思いますし。ついてきてくれると、わたくしも嬉しいのですけど……」
パティのためにもついてきて！　とすこーしばかりの本音を混ぜる。これが相手を説得する時のポイントなのだ。
ヤナは、パチパチと瞳を瞬かせて、それから、わずかばかり迷った様子を見せたが……。
「お姉ちゃん、ぼく、ミーアさまの国に行ってみたい」
キリルの言葉を聞いて、小さく頷いた。
「わかりました。あの……よろしくお願いします」
「うふふ、決まりですわね」
満足げな笑みを浮かべて頷くミーアであった。

第二話　賑やかな旅の予感

「ふむ、ヤナとキリルを連れ帰るのは良いですけど……問題は二人を、どこに泊めるか、ですわね……」
生徒会室から出てきたミーアは、ふぅむっと唸った。
「まぁ、お城でも構わないのですけど……あるいは、またアンヌのご家庭に預かっていただくのもいいかもしれませんわね。ああいう温かいご家庭に触れるのがよろしいかもしれませんわ。パティも、いきなりお父さまに会わせるわけにはいきませんし、準備が必要ですわ」
などと考え事をしつつ、廊下を歩いていた時だった。
「ああ、ミーア、ちょうどよいところで会った」
その声に振り返る。っと、後ろからアベルが歩み寄ってくるのが見えた。
「あら、アベル、どうしましたの？」
瞬間、ミーアの顔に可愛らしい笑みが浮かんだ。特に意識してのものではないのだが……、ここ最近、ミーアは、アベルと話していると自然と微笑みを浮かべている自分に気付いていた。
なんだか、こう、胸の奥がポッポと温かくなって、ついつい笑みがこぼれてしまうのだが……。
――それにしても、アベル。また、少したくましくなったかしら？　背もずいぶん大きくなりましたし、顔つきも凛々しくて……。
「うん？　どうかしたかね？」
ふわり、と柔らかな笑みを浮かべるアベル。一瞬前まで見えた凛々しい顔とのギャップに、ミーアの胸がトクゥンッと高鳴る。
「い、いえ、なんでもありませんわ。それより、なにかございましたの？」
「ああ。実は、お願いがあってきたんだ。ボクも帝国に同行しても

いいだろうか？」
その突然の申し出に、ミーアはきょとんと首を傾げる。
「それは別に構いませんけど……急ですわね。どうかなさいましたの？」
っと、その時だった。ミーアの脳が……比類なき恋愛叡智が……答えをはじき出した！
――アベル……まっ、まさか、お父さまに挨拶に行くんじゃあ？
結婚前に殿方が、相手の親に挨拶に行く……。それは、エリスの書いた恋愛小説には頻繁に出現するイベントである。
王侯貴族の社会において、結婚とは極めて政治的色合いの強いものである。見合いから婚儀に至るまで、担当の者が話を固めていることがほとんどであり「娘さんを自分にください」などと言うやり取りをする余地などない。
見合いの席で顔を合わせた時点で、娘さんをいただくことは決定済み。親も了承済みなわけで……。
だが、とミーアは気付く。
――アベルは、勇敢な人ですわ。こうと決めたら一歩も引かない根性もありますわ。わたくしを奪い取るために、お父さまに直談判する、などと言う可能性は十分にあり得ることではありませんの……？
そうと気付いてしまうと、俄然、ミーアの呼吸が荒くなる。
かひゅーほひゅーっといささか落ち着かない呼吸をしつつ、胸元を押さえて深呼吸。それから、ミーアは改めて尋ねる。
「え、ええと、アベル、なんのために帝国に？」
「そうだね……。詳しい話は彼女のほうからしてもらおうか」
そう言って、アベルは視線を転じる。それで、ミーアも気が付いた。
一瞬前まで、アベルのことしか目に入っていなかったが……よくよく見ると、アベルの後ろに、一人の少女が立っていたのだ。堂々と腕組みし、仁王立ちするその少女の名は……。

「あら、慧馬さん……」
いつの間に……という言葉を、ミーアは慌てて呑み込む。
慧馬の顔が、かつてないほどに険しいものだったからだ。
「え、ええと、どうかなさいましたの？」
「実は、兄が敵に後れを取ったらしい」
衝撃の言葉に、ミーアは思わず目を見開いた。
「お兄さまって、あの狼使いが……ですの？」
混沌の蛇の最強戦力、狼使い。かのディオン・アライアですら認めるほどの実力者である。にわかには信じがたい事態であるが……。
「川に落とされて負傷した。しばらく動けないらしい」
「そして、突き落とした男が、巧みな船乗りだった、ということなんだが……」
後を継いだアベルは、ここで、意味深にミーアを見つめてくる。
それで、ミーアもピンとくる。
「船乗り……もしや……バルバラさんをセントノエル島に渡らせた男ですの？」
「わからない。でも、そうかもしれない。そして……例のサンクランドで暗躍した蛇の男を乗せて、帝国のほうに去ったとのことだ」
「まぁ、帝国に……」
「厳密に言えば、川を舟で下って行った先が、帝国の方向だということなのだが……警戒するに越したことはないからね」
「ああ、なるほど。つまり、わたくしのことが心配だから、一緒に来てくださるということですのね」
ミーアは、気が抜けるの半分、安堵半分のため息を吐き……嬉しさに笑みを浮かべた。
「ありがとう。アベル、嬉しいですわ」
「お礼には及ばない。ボクが後悔したくないから、ついていきたいだけなんだ。大切な人が、危険な目に遭っている時になにもしてあげられない……。それは一番、苦しいことだから」
シレッと大切な人、などと言われてしまい、ミーア、ほぁあ、っ

と声にならない悲鳴を上げる。
――やっ、やっぱり、アベルって天然なところがありますわね。平然と、大切な人だなどと……うっ、嬉しいですけど、照れてしまいますわ。
頬を押さえ、グニグニと体をねじっていると……。
「アベル王子だけではない。我も同行させてもらう。不甲斐ない兄に代わり、我が、火燻狼追跡の任に当たることになったのでな」
やれやれ、っと首を振る慧馬。
「そういうわけだから、よろしく頼む」
「あら、それはまた……大所帯になりそうですわね。まぁ、なんにせよ、アベルと慧馬さんが同行するのは嬉しいですわ。うふふ、楽しい旅になりそうですわね」

かくて、帝国行きのメンバーが決まる。
ミーアたち帝国勢に加え、アベル、慧馬、それにヤナとキリルも。
賑やかな旅の予感に、ミーアはウキウキと笑みを浮かべるのだった。

第二話　賑やかな旅の予感（後書き）

そういえば、昨日からティアムーン原作のＴＶＣＭが流れ始めました。毎週水曜日の某アニメの枠ですね（作品名を出して良いのかわからないので伏せますが……）。
アニメじゃないけど、ちょっぴり動いてしゃべるミーアが見えたりします。アニメじゃないけど。
動画サイトの出版社ページなんかでも見られると思いますので、よろしければ……。

第三話　どっちが正しいのかな？

パカラ、ポコラ。
ティアムーン帝国へと続く、穏やかな道。
パカラ、ポコラ。
ゆっくりと響く、平和な足音。
パカラ、ポコラ。
ほのかな風、柔らかな日差しを受けて、馬上のミーアは瞳を細めた。
「うふふ、最高の乗馬日和ですわね」
そうつぶやくミーアの目の前にはパティが乗っていた。その隣には同じく二人乗りの馬が並んで歩いていた。乗っているのはヤナとキリル。徒歩で手綱を引くのはアベルだった。
それは、ちょっとした乗馬体験会だった。
帝国とヴェールガとを繋ぐ道は比較的、安全な道として知られている。それこそ、子どもが馬に乗って行き来できるぐらいには、穏やかな道だ。
ということで、せっかくだから、子どもたちに乗馬体験をさせてあげようということになったのだ。
それは、実に、なんとも平和な光景だった。
見上げる空は青々と晴れ渡り、雲一つない。
輝く太陽の日差しは、どこか柔らかで優しくて……。でも、だからこそ、今年の小麦の収穫を不安にさせた。
「やはり、今年も不作なのでしょうね……」
不意に、ミーアが顔を曇らせる。
少なくとも、ラーニャから聞いた話では、今年も去年とそう変わらない収穫になりそうだとのことだった。
「備蓄の取り崩しはすでに始まっておりますし……、フォークロー

ド商会の海外買い付けと並行すれば、国内はなんとか乗り切れそうですけれど……。備蓄を使い切ってしまった他国からの援助要請が届けば、到底、足りないでしょうね……これは、セロくんたちの成果に期待するしかありませんわね……」

などと、考え事をしている時だった。ふと、ミーアは気付いた。

パティが、ヤナとキリルのほうにジッと視線を送っていることに……。

「どうかなさいましたの？　パティ」

話しかけると、パティはハッとした顔をして、それから、ゆるゆると首を振った。

「いいえ。なんでも、ありません。それより、ミーアお姉さま、これは、なんの意味があるのでしょうか？」

「これとは、馬に乗ることですの？」

「はい……」

コクリ、と頷きつつ、パティがジッと見つめてくる。

「意味……。ふぅむ、そうですわね」

ミーア、しばし黙考し、それらしい答えを考える。

――楽しく運動するため、というのはダメでしょうし……ここは変にひねらずに教えてあげるのがいいかもしれませんわね。

ミーアの目的は、パティを蛇の教育から解放すること。そのために、今は自分のことを蛇の教育係だと思っておいてもらったほうが都合が良い。

蛇から脱却させるためにまっとうな教育を施したいが、話を聞いてもらうためには蛇として振る舞っておいたほうが良い。

そこには、矛盾があり、いつかそれは解消されるべきものではあるのだが、今回はそこまでも悩まなくても大丈夫そうだった。

なぜなら、蛇にとって大切なことと、ミーアにとっての大切なことに、重なる部分があったからだ。

ミーアは静かに笑みを浮かべつつ、

「……疾く逃げるためですわ。蛇には逃げ足も大事でしょう？」

逃げることの大切さ、それは、蛇とミーアに共通することだった。
逃げるのは、大事なことだ。いついかなる時でも逃げる手段を用意し、必要とあらば躊躇うことなく逃げる。そうしてしまって構わない、と強調しておきたいミーアである。
なにしろ、パティになにかあったら、ミーアの存在に関わるのだ。できれば、危うきに近づかないでもらいたいし、必要があれば、迷わず逃げてもらいたいミーアである。
「でも……」
っと、パティがなにか言おうとした時だった。
「その子、はじめて乗ったにしては、様になっているな」
その声に、視線を向けると、ちょうど、アベルが馬を寄せてきたところだった。
「そうですわね。うふふ、こうしていると、はじめて、あなたと一緒に乗った時のことを思い出しますわ」
それから、ミーアは、彼の引く馬に乗るヤナとキリルの姉弟に目をやった。
二人は、楽しそうに笑みを浮かべている。
――アベルが気遣ってあげているから、すごく楽しめてるみたいですわね。やっぱり、アベルは優しい方ですわ。ああ、なんだか、こうしていると将来、アベルと夫婦となった時のことを、ついつい思い浮かべてしまいますわね。うふふ、うふふふ。
自分が子どもを一人乗せ、アベルが二人の子どもを乗せた馬を引く。そうして、アベルと、子どもたちとみんなで笑いあう……。そんな幸せな未来を想像してしまう。
今日も絶好調な恋愛妄想脳姫（スーパースイーツプリンセス）ミーアなのである。
「ん？　どうかしたかね？」
不思議そうな顔で見つめてくるアベル。その優しげな目に、思わずポーッとしてしまいそうになって、
「お、おほほ、いいえ、何でもありませんわ」
誤魔化しの笑みを浮かべつつ、ミーアは視線を逸らした。

「そっ、それにしても、素晴らしい乗り心地ですわ。さすがは大陸最高峰の月兎馬、蛍雷ですわね」
目の前の馬の首筋を撫でる。素晴らしい毛艶にため息をこぼしながら、
「お礼を言いますわ。慧馬さん」
そうして、ミーアは前方に視線を移す。っと、そこには東風に乗った慧馬の姿があった。
ミーアの言葉に、耳をぴくりんっ！　と動かした慧馬は、すすすーっと馬を後退させ、ミーアの横に並ぶと……。
「ふっふっふ、そうであろう？　我が愛馬、蛍雷はなかなかのものだろう？」
ドヤァ顔で、胸を張る慧馬。
そうなのだ、ミーアは今、火族の誇る名馬、蛍雷に乗っているのだ。
軽やかな足取り。乗り手の気分を盛り上げるような、心地よいリズム。
何頭もの馬に乗り、馬を知り尽くしているウマイスター、ミーアはうむうむ、と頷く。
「素晴らしいですわ。慧馬さんが自慢するだけのことはありますわね」
良き馬には、決して称賛を惜しまないミーアである。
なにせ、馬は最後の最後に頼るべきもの。とっておきの切り札である。
どれだけ気を付けていても、人は失敗し、容易に断頭台に送られるもの。ミーアは常に、自らの行いに対する疑念を忘れない。どれだけ注意していても、失敗する時は失敗するものなのだ。
であれば、ミーアとしては、常に馬という命綱を維持しておきたいのだ。そんな命綱である馬に対して、ミーアはいつだって敬意を忘れない。
「感謝いたしますわ、慧馬さん。こうして、愛馬に乗ることを許し

ていただいて」
「なに、ミーア姫は我が友だ。友には、自慢の愛馬に乗ってもらいたいと思うもの……。お礼を言われる筋合いでは……む？」
と、その時だ。慧馬が顔を上げた。
すがめた目が見つめるのは前方。道を走ってくる一匹の狼の姿だった。
「どうした、羽透？」
やってきた戦狼、羽透は、慧馬のほうを見上げてくぅん、っと鼻を鳴らす。
「……なにか、来たようだね」
アベルの言葉に、ミーアも視線を前方へと向ける。っと、こちらに向かってくる一団があった。
二十騎前後の騎馬でやってくる一団、先頭の騎士が持つ旗の文様……それは、
「あれは……帝国の旗ですわね。」
首を傾げるミーアの目の前で、前方の集団は道を開ける。騎士たちは馬を降り、膝をつき、臣下の礼をとった。
その間を、にこやかに手を振りつつ、悠々と進んでいくミーア。
そうなのだ、ミーアはこう見えても、帝国の皇女なのだ。こう見えても……。
この騎士たちが忠誠を誓うべき人物こそ、ミーアなのだ。
ゆえに、それはミーアにとっては当たり前の光景で……でも。
「え……？」
ミーアの前方に座るパティにとってはそうではない。ヤナやキリルも、まるで自分たちにかしずくような兵士たちに戸惑っている様子だったが、パティの驚きは、その比ではなかっただろう。
なにしろ、彼女は、ミーアのことを本物の帝国皇女だとは思っていないのだから。
――ああ、これは、失敗だったかもしれませんわね。さて、なんと説明したものか……。あら？

そんなことを思っている時だった。ふと見覚えのある青年騎士の姿が目に入ってきた。
いかにも金のかかっていそうな金属の鎧、兜を外した頭には白金色の髪が豪奢に輝く。その顔に、ミーアは幼き日の記憶を刺激される。
――懐かしい顔ですわね。いつ以来かしら……？　あれは、お母さまのお墓に行って以来ですから……。
騎士は顔をあげ、ミーアのほうに視線を送ってきた。親しげに瞳を細めてミーアの顔を見て、それからいささか情熱的な視線を、ミーアの少し下のほうに向ける。ミーアよりも、下のほうに……。
「むっ……」
小さなつぶやきとともに、足を速めるアベル。騎士の視線から遮るように、ミーアとの間に入り、その騎士を静かに睨みつける。
「ああ、アベル。別に平気ですわ。だって、彼はわたくしの母の……」
「ふむ、あの男……蛍雷に興味があるようだな。ずいぶんと、熱烈な視線を送ってきていたようだが……」
小さなつぶやきとともに、馬を後退させる慧馬。騎士の視線から遮るように、蛍雷との間に入り、その騎士を静かに睨みつける。
「……？」
そんなアベルと慧馬を見て、それから、なにか聞きたげな顔でミーアを見上げてくるパティであった。

第四話　右腕に託して1

帝国騎士の一団とすれ違い、ほどなくして一行は帝都ルナティアに到着した。
本来、帝国の姫の帰還は、国を挙げての一大行事……ではあるものの、さすがに、セントノエルに通うようになってからは、できるだけ簡素に済ますようにしている。
なにしろ、お金がかかるわけで……。毎年、夏と冬、二度の帰還の度に、盛大なパレードなどやっていては、国庫が簡単に払底する。特に冬などは誕生祭の時期とも近いため、大きな負担となる。
ミーアからしてみれば、お出迎えを豪勢にしてもらった結果、断頭台が近づいてくるわけで……。言ってしまえば、ギロちんの行列に出迎えられているような気分だったのだ。
ということで、帝都に入る少し前、簡素な馬車に乗り換えて、こっそり、バレないように、帰ってきたミーアである。
かつて、商人の一行に扮してレムノ王国への潜入すらやってのけたミーアである。帝都に、こっそり帰ってくることなど、わけないのだ。
「ここが……帝都？」
馬車の中、あたりをキョロキョロと見回すパティに、ミーアは、ニッコリ笑みを浮かべる。
「ええ。そうですわ。パティはまだ帝都に来たことはなかったのかしら？」
「はい。ずっとクラウジウス領にいましたから……」
「そうなんですのね。では、軽くわたくしが案内して差し上げますわ。この夏の間には、いろいろと回る機会もあるでしょうし……あ、こちらの賑わっている地域が新月地区ですわね」
ルードヴィッヒの施策により、今の新月地区は帝都の他の場所に

負けないぐらいの活況を見せている。いや、むしろそこは、新たな成長地域として、他の地域以上の熱量を持った場所になりつつあった。
今も、商人の乗った馬車だろうか、数台の馬車が入っていくのが見えた。
町行く人の顔も明るく、生気に溢れている。
そして、そこは、ミーアの支持基盤の一つでもあった。
「新月地区……？」
きょとん、と首を傾げるパティ。それを見て、ミーアはハタと気付く。
――あ、そうですわ。パティの時代には、もしや、新月地区ってなかったのでは？
ミーアは帝都の歴史を知らない。新月地区ができた由来も、そこが貧民街となった由来も。
この町が、どのような歴史を辿り、どのように形成されてきたのか、まるで知らなかったのだ。
――くぅ、ぬかりましたわ。なるほど、こういう時のために、歴史を学ぶことが必要なんですのね。
改めて勉強の大切さを実感するミーアである。もっとも、“こういう時”というのは、あまりあることではないと思うのだが……まぁ、歴史を学ぶことは大切なので、結果オーライといったところか。
そうして、なにか誤魔化す言葉を……と思っていた時だった。
「すごいね、パティお姉ちゃん。ここが帝都なんだね」
嬉しそうに、キリルがパティに話しかけた。
パティは……ほんのわずかばかり、その顔に笑みを浮かべる。
「うん。私もはじめてきた」
それから、パティはヤナのほうに目を向けて……。
「ガヌドス港湾国も、こんな感じだったの？」
「いや、ガヌドス港湾国は、もっとずっと小さかった。すごい、帝都って、こんなに大きいんだ」

ヤナは呆気にとられたように外の光景を眺めていたが……。
「ミーアさまの言った通りだ。世界は広いんだ」
ポツリと、小さな声でつぶやいた。
一方で、パティの疑惑の目を逸らせたことで、ホッと安堵するミーアである。
――やはり、ヤナたちを連れてきて正解でしたわね……。
そんなこんなで、町を進むことしばし。
「あっ、見えてきましたわよ？」
やがて、一行の前に、一軒の家が見えてくる。
その家の前には、壮年の夫婦と、子どもたち、アンヌの家族が並んで待っていた。
先に降りて、両親に話をするアンヌ。続いてミーアが降り、一通り挨拶を済ませたところで、今度は、子どもたちのほうに振り返った。
「あなたたちには、しばらくここに泊まってもらいますわ。ここは、わたくしの信頼するアンヌのご実家ですの」

すでに、アンヌとの打ち合わせは済んでいた。
セントノエルを出る前のことである。
「アンヌ、あなたには、とりあえずいったん、ご実家のほうに行っていただきたいですわ」
「お気遣いいただきありがとうございます。ミーアさま、でも……」
と、言葉を続けようとするアンヌを片手で制し、
「誤解させてしまったのなら、申し訳ないのですけど、これはあなたのために言っていることではありませんの。むしろ、お願いですわ」
「お願い……？」
「そうですわ。あなたの実家でパティの面倒を少しの間、見ておいていただきたいんですの」
パチパチと目を瞬かせるアンヌに、ミーアは静かに頷いた。

「ここだけの話ですけど、パティは極めて重要な子なんですの。正体のほうは、まだ確信が持てないので詳しくは言えないのですけど……もしかしたら、ベルに近い存在なのかも、と思っておりますわ」
「ベルさまに……ということは、パティさまも、ミーアさまのご関係の……？」
「そうかもしれない。だからこそ、わたくしは、蛇から解放したいと強く思っておりますの。でも、パティに話を聞いてもらうためには、蛇として振る舞うほうが都合が良い。この辺りの事情がわかっている者に、パティのそばにいていただきたいんですの」
それはミーアの本音だった。
パティのことはまだ、わからないことが多い。けれど、先日見た悪夢がパティに由来するものであれば……そして、あの悪夢が、ただの夢でないとするなら……。
――か、考えるだけでも、恐ろしいことですわ。
一切夢に見ないということは、未だにその歴史を辿る可能性が残っているか、もしくは、まったく存在しない歴史か、ということだ。
例えば、ミーアが天馬に乗って空を駆ける、などと言う夢は、記憶の欠片として出現することはない。あり得ないことだからだ。
つまり、記憶の欠片として夢で見た世界というのは“あり得る可能性が高いけど、潰えた世界”ということになる。潰えたこと自体は喜ばしいが、問題は“あり得る可能性が高い”というほう。あり得る可能性が高いということは、それに類似した可能性はまだ残っているかもしれないからだ。
クッキーで毒殺される可能性が消えても、キノコ鍋で毒殺される可能性が残っているかもしれないのだ。
――あの、イエロームーン家が敵に回る可能性……。確かに、パティはイエロームーン公爵と面識がある、みたいな話を聞いた記憶がありますし。恐ろしいですわ。パティの扱いは慎重にすべきですわね。
腕組みしつつ、ミーアは続ける。

「もちろん、お父さまに話して、すぐに白月宮殿に移れるようにしますけれど……。それまでの間、あなたのお家で面倒を見ていただきたいんですの」
ミーアの言葉に、アンヌは、静かに頷いた。
「わかりました。このアンヌ、命に代えましても、必ず……」
「……ああ、いえ、そこまででなくっても平気ですわよ？　もう少し気楽でも……」
鼻息荒く言うアンヌに、若干慌てて止めるミーアであった。

そうして、打ち合わせ通りにパティとヤナ、キリルの三人をアンヌの家に預ける。
パティは文句を言うかと思っていたが、意外にもすんなりとそれを受け入れた。
――ベルはともかく、パティは平民の家に泊まることに抵抗があるかと思いましたけど……。
首を傾げつつ、ミーアは白月宮殿へと向かう。
――さぁて、お父さまをどうやって言いくるめたものかしら……？
などと、頭を悩ませながら……。

第五話　ミーアパパのうろ覚え

「ただいま戻りましたわ。お父さま」
ところ変わって、白月宮殿、謁見の間。
アンヌの家を出たミーア一行は、そのまま白月宮殿へと向かった。
同行者は、アベルとミーアベル、シュトリナ、慧馬。それに従者としてリンシャもついてきている。
そうして、一同は、皇帝マティアスの前に出ることになった。
マティアスは、ミーアの挨拶を受けて、うむ……と威厳たっぷりに頷いた後、
「よくぞ戻った。マイスイートミーア！」
そんなことを言った！　口から娘愛が溢れ出していた！
「ちょっ、お父さま……」
慌てるミーアの抗議を華麗にスルーし、マティアスは視線を転じる。その先にいたのは……ベルだった！
「さて、ベル嬢も久しぶりだな。息災であったか？」
皇帝公認のミーアの妹分、ベルは、嬉しそうに頷いて。
「お言葉、痛み入ります。陛下」
なにやら、しかつめらしい顔を作り、ものすごーく賢そうなことを言った。
それを聞き、マティアスは、ふふふ、っと笑い、
「そうかしこまることもあるまい。ミーアはそなたのことを妹として扱っていると聞く。ならば、私にとっても娘のようなもの。気軽に、パパと呼んでも……」
「お父さま……。内外にいろいろな誤解を招くようなことは慎んでいただきたいですわ」
などとお小言を言いつつも、ミーアは決意する。
――もしも、ベルがわたくしの孫娘、つまり、お父さまにとって

はひ孫になるのかしら……？　ともかく、それに気付かれたら、大変なことになりますわ！　絶対にベッタベタに可愛がるに違いありませんわ。あら？　でも、その場合、わたくしへのベタベタが少し減って、むしろ、助かるのでは……？

などと、ミーアが思案に暮れている間にも、話は進んでいく。

次にマティアスが目を向けたのは、アベルのほうだった。

「そして、よくぞ、参られた。レムノ王国の王子よ。歓迎しよう」

そう言って、マティアスは……ギロリとアベルに視線を送る。それは「まだ、お前なんぞに娘はやらんぞ……」という強い主張のこもった視線で……。それを受けたアベルは、そっと頭を下げ、

「ありがたきお言葉にございます。陛下」

静かに言うのだった。

さて、挨拶が終わった後、アベルは、白月宮殿に残ることになった。ベルとなぜかシュトリナも、宮殿内の部屋で過ごすことになった。イエロームーン公爵家は、帝都に別邸を持っているが、もちろん、そこに帰るような真似はしない。

夏休みをお友だちとエンジョイする気満々のシュトリナなのである。

それはさておき、その夜のこと。

ミーアは久しぶりに、父との食事をとることになった。

久方ぶりの料理長のディナーに舌鼓を打った後、ミーアはパティのことを話すことにする。

「ところで、お父さま、パトリシアお祖母さまのことなんですけど……」

「うん？」

パティのことを相談する前に、先に聞いておきたいことがあった。それは、ほかならぬ、祖母、パトリシアのこと。

「お祖母さまって、いったい、どんな方だったんですの？」

「珍しいな。ミーアが母上のことを聞きたがるとは……。呪われた

クラウジウス家の出身だが、いいのかな？」
「うぐ……」
ミーア、思わず、呻く。
そう、幼い頃のミーアは、そのせいで、祖母の話をほとんど聞かなかったのだ。
「ふふふ、まぁ、母上は、呪われた、などと言う言葉が全く似合わぬほど、私には優しい人だった。幼い頃の私は、ずいぶんと甘やかされて育ったと、今にして思うよ」
思わぬことを聞かされて、ミーアは瞳をパチパチさせる。
――パティ……。息子に甘いって……。
思わず、パティの無表情を思い出し、小さく首を傾げる。
――あまり、イメージに合わないような……。
「それにしても、ふふ。久しぶりに、思い出してしまった。甘やかされて育てられた私は、ずいぶんと、母上に反発したものだったよ。あの当時、私は母が決めた結婚相手――つまり、お前の母アデラのことだ、ですら気に入らんでな。まだ会ってもいないのに、絶対にこの相手とは結婚しないと言っていたものだが……」
「まぁ、お父さまが？　信じられませんわね」
母にベタ惚れの父の姿しか知らないミーアは、ついつい驚いてしまう。
「母が決めたという一事が我慢できなんでな。それまでも、外での女遊びを厳しく諫められていてな。それもあって、ずいぶんと反発したものだが……。あの時は、母にしては珍しくずいぶん慌てていたな……。いや、我関せずといった様子だっただろうか？　いつも冷たい母だったが……いや、あれは夢か？」
ふとここで、父は首を傾げた。
「だが、そもそも、アデラを探してきたのは、私だったか……？　いや……」
眉間に皺を寄せたマティアスだったが、ふと苦笑いをし、
「いかんな。どうも、年のせいか記憶が曖昧だ。ともあれ、私は連

れられてやってきたアデラを見て、一目惚れしてしまったというわけだ」
　照れくさそうに頬をかきながら、マティアスは言った。
「あの時は、心の底から母に感謝した」
「アデライード母さまを、見つけてきてくれたことに、ですの？」
「それもあるが、女遊びを厳しく戒めてくれたことにも、だ。おかげで、私は最愛の人を唯一の人とすることができた。私にとって、アデラ以上の者もいなければ、アデラ以下の者もいない。彼女がただ一人、私の愛を注ぐべき女性、我が愛を独占した女性なのだ」
　それから、マティアスは優しげな笑みを浮かべる。
「唯一の例外は我が娘ミーア、お前だが……。お前とアデラが溺れていたら、私は迷いながらもアデラを助けるであろう」
　堂々とそう宣告する男、皇帝マティアス・ルーナ・ティアムーン。妻への愛に溢れるこの男は、大変、純情一途な性格をしていた。
　そんな彼が、けれど、そこで顔をしかめる。
「だが……同時に複雑な気持ちもあったのだ。ずっと反発していたが、結局は、母の言うことがすべて正しかった。そう思うと、気恥ずかしいというか、素直になれなんでな。どこかぎくしゃくしたまま、謝ることもできず、母は逝ってしまった。それが今では、少しだけ心残りなのだ」
　そんな父の後悔を聞きながらも、ミーアは思わず考えてしまう。
　――記憶が曖昧……。これは要するに、パティの存在によって、過去自体が揺らいでいる、ということなのではないかしら？
　さらに、疑問はもう一つあった。
　――パティは、蛇から解放されたのかしら？
　少なくとも、父が言っていた、息子に甘いというのは、蛇の印象からは縁遠い気がするが……。
「ふむ、ちなみに、お祖父さまという方は、どんな方でしたの？」
「父か……。父上は、そうだな……。どちらかと言えば陰気な性格だったが……。それでも母上のことを心から愛し、大事にしていた

ようだ」
　それから、父は何かを思い出したのか、ふふ、っと小さく笑みを浮かべ、
「実はな、ここだけの話、父から聞いたことがある。若い時の父は、この世を儚み、いつ死んでもおかしくなかったそうだが……。母に会い、心を救われたのだそうだ」
「いつ死んでも……」
「ははは。我が父ながら、相当であろう？　だが、まぁ、私が一途なのも、その血によるものかもしれんな」
　そうして豪快に笑う父を横目に、ミーアは、じっと考える。
　先代皇帝の姿は紛れもなく、初代皇帝が望んだ、ティアムーン帝国皇帝の姿だ。
　――つまり、初代皇帝から続いてきた呪いを断ち切った者が、お祖母さま……パティだった、ということになりますわね。
　初代皇帝の思惑を考えるのならば、ティアムーン帝国の皇帝は、世界を憎み、滅ぼすような性格が好ましい。まさにその性格だった先代皇帝の心を、パティは救い、子どもにもその絶望を継承させなかったのだ。
　――ということは、わたくしのこれからの行動次第では、パティを蛇から解放することができる、と考えるべきかしら……。ふむ……。
　難しい顔をして唸るミーアであった。

第六話　芽吹き（前書き）

今日は、久しぶりにあの男が登場です！

第六話　芽吹き

「しかし、ミーア、急にどうしたというのだ？　母上のことを聞きたがるなど、珍しいな」
不思議そうな顔をする父に、ミーア、少々、慌てつつ、
「ああ、ええっと……。そう！　実は、お父さまに紹介したい子がおりますの」
唐突にやってきたチャンスを掴むため、動き出す。
さて、どうやってパティの話を出したものか、と悩んでいたミーアだから、この機会を逃したりはしない。波が来れば乗っていくのがミーアのスタイルなのだ。
摂取した養分を頼りに脳みそをぎゅんぎゅん言わせながら、ミーアは考えをまとめていく。
「ベルと同じで、わたくしと少し似た顔の子なのですけど」
まず、父にとってのアピールポイントから話を始める。
「ほう！　それはいいな。また、お前の妹姫が増えるということか」
冗談めかして笑う父に合わせて微笑みつつ、
「ええ。ですけど、その子の名前が、パトリシアって言うんですの」
「パトリシア……。母上と同じ名か」
「そうですわ。わたくしに似ていて、名前がパトリシアでしょう？もしかすると、お父さまが、お祖母さまの面影を思い出してしまうかもしれない、と思いまして」
ミーア、ここで、軽く印象操作を狙っていく。
万が一、父が、パティの正体に気付きそうになった時、納得できそうな理由を事前に提示しておくのだ。
「ははは。私はそう単純ではないぞ？」
どうやら、マティアスは、ミーアが冗談を言っていると思ったようだったが、それでも構わないのだ。もしも、パティに母の面影を

見つけてしまった時に、そう言えば、あんなこと言ってたなぁ、と思い出してもらうだけで意味がある。
人は、疑問に対して、ちょうどよい解答が用意されていくと納得して、それ以上は考えないものなのだ。
――ふむ、これで、パティを白月宮殿に連れてくることができるようになりましたわ。一安心ですわね。
心地よい満足の内に、その日の晩餐会は終わりを迎えた。

さて、旅の疲れもあってか、ぐっすりたっぷり眠った翌日のこと……。
ミーアの部屋を一人の男が訪ねてきた。
「ご無事のご帰還、心よりお喜び申し上げます、ミーア姫殿下」
膝を付き、頭を垂れる青年文官……。
その眼鏡に……否、それをかける当人に、ミーアが絶対の信頼を置く男。ルードヴィッヒ・ヒューイットである。
「ああ、ルードヴィッヒ。ずいぶんと久しぶりな気がいたしますわ」
優しく微笑みかけるも、すぐにミーアは首を傾げた。
「それにしましても、ずいぶんとかしこまった態度をとりますわね。なにかございましたの？」
常になく硬い態度をとるルードヴィッヒに、ミーアはクスクスと笑い声をあげる。
「実は……ミーア学園のアーシャ姫殿下より連絡が入りました」
「はて、アーシャ姫殿下から……？」
なにかしら？　などと首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒは顔を上げ、ゴクリ、と喉を鳴らしてから、
「セロ・ルドルフォンさまと共同で、寒さに強い小麦を、見つけたと……」
その報せを聞いた時、さすがのルードヴィッヒも思わず、近くの椅子に座り込んだ。一緒にいたバルタザルもまた、腰を抜かしていたほどだった。

それほど、その情報は驚くべきものだったのだ。しかも……。
「それも……発見場所は、ギルデン辺土伯領で、だったとのことです」
それを知った時、ルードヴィッヒの脳裏をいろいろな光景が駆け巡っていた。
夏、港湾国から戻る途中のこと。唐突に、ギルデン辺土伯領に寄りたいと言い出したミーアの顔。
あの時の行動が、まさか、このような形で結実するとは、さすがのルードヴィッヒでもわからなかった。
セントノエルにいたミーアは知る由もなかったが……ここしばらく、ルードヴィッヒらは忙しく働いていた。帝国内に混乱を生まぬため、繊細な調整をしつつ、備蓄を流していく作業。フォークロード商会やペルージャンとの折衝をしつつ、時折、来る他国からの救援要請にも応じて……。
「本当に大丈夫なのか？　ルードヴィッヒ……」
目の前には、じわじわと量を減らしていく食糧備蓄。聡明を以て知られるルードヴィッヒの仲間たちの中からも、ミーアの方針が正しいのか、懸念する声も出始めていた。
ルードヴィッヒ自身は、ミーアの考えの正しさを信じていた。食糧を巡って、他国と戦争にでもなれば、それこそ被害は甚大なものとなる。畑が焼かれでもしたら元も子もない。
だから、救援要請に応えて、備蓄を放出することは正しいはずで……でも、不安がないと言えばウソになる。
そんなタイミングでの新たなる要素。寒さに強い小麦の発見である。
もちろん、未だ発見に至っただけだ。それだけで、すべての状況を打開するほどではない。ないが……、
『寒さに強い小麦が作られた』という情報自体の価値は、計り知れない。
寒さに強い小麦が手に入る……そう考えるならば、人々は安堵す

る。
　来年もまた、不作が続くのではないか？　飢饉が起こるのではないか？　そのような不安を払しょくするだけの力を、その情報は持っていた。
「しかも、ギルデン辺土伯領を上げて、その小麦の栽培に力を入れたため、種籾はそれなりの量を用意できたとか……」
　セロとアーシャは、徹底的にギルデン辺土伯領の小麦畑を調べた。辺土伯の協力も得て、寒さに強い種類の小麦を探し、種籾を作り、それを既存の小麦に替えて、すべて蒔いた。
　とりあえず、増やせるだけ増やそうという行動。それは、翌年以降も寒さが続くから、既存の小麦では育たないという確信に基づいた行動。
　ミーアの未来予測を完全に信頼しての行動だった。
　ギルデン辺土伯、セロ・ルドルフォン、アーシャ・タフリーフ・ペルージャン。
　自らの主が目を付け、集めてきた人材が、力をいかんなく発揮して、絶対的危機を乗り越える……すべてが繋がっていく光景に、ルードヴィッヒは思わず慄く。
　そんな偉業を成し遂げつつも、涼しい顔で首を傾げているミーアを見れば、なおさらだった。
「ふふふ、セロ君たちは、期待通りに力を発揮しているようですわね」
　ニッコニコと微笑んでから、ミーアは言った。
「ところで、ルードヴィッヒ。あなたに相談したいことがございましたの。できれば、ゆっくりとお話がしたいのですけど……」
　そうして、ミーアは意味深な笑みを浮かべるのだった。

第七話　右腕に託して2　パティの秘密

さて、時間は少し遡る。
ミーアと別れた後、アンヌの家では、ちょっとした事件が起きていた。

「こちらへどうぞ」
眼鏡の少女、エリスの案内に素直に従い、パティたちは家の中へと入った。
そこは、貴族の屋敷――それこそクラウジウス家の屋敷とは比べ物にならないほどに小さくって……比べ物にならないほどに温かくて、居心地のいい家だった。
――別に、普通だ……。大したこと、ない。
パティは心の中で、自分に言い聞かせるようにつぶやく。
――普通の家。平民の、つまらない家だ。
小さくため息を吐き、揺れそうになる心を、パティは押さえつける。

パトリシア・クラウジウス。彼女は生まれながらにして貴族ではなかった。
平民の少女として……母と弟と日々を過ごしていた彼女が、貴族の家名たる「クラウジウス」の名を得たのは七歳の時のこと……。母が亡くなって間もなくのことだった。
自分の身に、帝国の門閥貴族、クラウジウス侯爵の血が流れているということ、その跡取りとして、弟ともども引き取られることになること……。
その決定に、あらがう術は、幼い彼女にはなかった。
まして、弟が病に倒れ、それを治す術をクラウジウス家が持って

いるとなれば、なおのこと、ほかに選択肢などなく……。
かくて、パトリシアはクラウジウス家の娘となった。
その境遇はユリウスと似ていたが、パトリシアを取り巻く環境は、それより遥かに過酷だった。
彼女に求められたこと……それは、蛇の手練手管を身に着けて、婚儀を結んだ相手を、絶望に追い込むことだった。
初代皇帝が求めた理想的な皇帝像。この世を憎み、滅ぼさんと、大陸全土に呪いを振りまく存在……。帝室が、その姿を忘れた時、思い出させるのが、クラウジウス家に与えられた使命。絶対の存在理由だった。
皇妃として皇帝を絶望させ、この世界を呪わせる。そのために生涯を用いることが、パトリシアに求められたことだった。
だから、貴族令嬢としてのマナーとともに、蛇の考え方を徹底的に教え込まれた。
それは……人としての、まともな生き方ではない。
拒絶して当然のもの。逃げ出して当然のものだった。
けれど、パトリシアは逃げなかった。
この世に残されたただ一人の肉親である弟の……、母から「守ってあげて」と……、そうお願いされた弟の……命を助けるには、それしかなかったから。
平然と人を騙す術を学び、人を、生き物を殺す術を学び……表情一つ変えず、それをこなすことを求められたパトリシアは、その内、笑わなくなった。
怒らず、泣かず……ただ蛇の教えに忠実に生きるようになった。
すべては弟、ハンネスを助けるため。
蛇だけが知るという秘法をもって、ハンネスの、不治の病を癒すため。
その心が気付かぬように……自分が辛い思いをしていると気付かぬように、懸命に心を凍り付かせて……。
――大丈夫、このぐらいで揺れない。ハンネスのため、だから…

…。
そっと服の襟元を掴みつつ、家の奥へ。
通されたのは食卓だった。
「さぁ、お腹が空いたでしょう？　こんなものしかないけど、たっぷり食べてね」
そうして、出てきた料理に……、パティは目を見開いた。
それは、帝国で古くから親しまれている伝統的な料理で……。
大好きなお母さんが、いつも作ってくれた、懐かしい……幸せな料理で……。
だから、
「かあさん……」
パティは失敗する。そのつぶやきを、呑み込むことに……。

――ああ、お母さんの料理、久しぶりだな。
アンヌは、ニッコリ笑みを浮かべながら、そのお料理を見た。
それは、すりつぶした芋を潰して丸めた芋団子を、削り干し肉のスープに浮かべた、モローセと呼ばれる料理だ。じっくり煮込んだ干し肉の旨味と、さっくりほろほろの芋団子が素敵な帝国の伝統料理。
アンヌの母親の得意料理でもある。
――これ、しっかりスープを吸った干し肉がとっても美味しいんだよね……。
この料理なら、子どもたちも気に入ってくれるのではないか、と思い、ヤナたちのほうに目を向ける……っと、キリルが嬉しそうに、芋団子を頬張っているのが見えた。その隣でヤナが、少し緊張しながら、スプーンを持っている。
そんな幼い子どもたちを、アンヌの弟妹たちがかいがいしく面倒を見てあげている。
ヤンチャだったジョンが、お兄さんぶって、キリルに「こうすると美味しくなるんだよ」なんて教えてあげていたり、しっかり者の

エミリアがヤナに話しかけてあげたりしている。
――みんな子どもだったのに、大きくなったんだなぁ……。
なんて思いつつ、隣に目を移したアンヌは……思わずギョッとしてしまう。
ヤナとキリルも、それに気付いて動きを止めていた。
パティが……、いつでも決して表情を動かさなかったパティが……泣いていたから。
大きく見開いた瞳から、ポロポロ、ポロポロと、大粒の涙が止めどなく、幼い頬を伝い落ちる。
「え？　あ、え？　パティさま……？　どうしたんですか？　ま、まずかったとか、嫌いなものでも……」
っと、大慌てで、ハンカチで頬を拭うも、パティは小さく首を振って……。
「……会いたい。かあさんに……。会いたい……」
途切れ途切れの声で紡がれる願い。されど、それを叶えることはアンヌにはできなくって……。でも！
「失礼します……」
小さな声で、そう断ってから、アンヌはパティを抱きしめた。
きっと、ミーアがここにいたならば、こうするに違いないと信じて……。
ミーアの腕ならば、このように動くと確信して……。
パティは抵抗することなく、されるがままになっていたが……すぐに、アンヌの服をギュッと握りしめる。その口から、押し殺したような泣き声がこぼれ落ちた。
ふと見ると、母が、静かに頷いていた。
それで、正解とばかりに背中を押してくれる母に、口の動きだけでお礼を言って、アンヌは静かに、パティの背中をさするのだった。

第八話　混じる、不純物……

「相談したいこと……ですか。それはもしや、先日、お手紙でお知らせいただいた摩訶不思議な出来事について、でしょうか？」

そう言ってルードヴィッヒは、静かに眼鏡の位置を直した。

ミーアはすでにベルのことを、ルードヴィッヒに知らせていた。

ベルによれば、未来のルードヴィッヒはベルの正体を知っているとのことだった。ならば、教えることには何の躊躇もないミーアである。

むしろ今は、パティという不確定要素が存在する。ルードヴィッヒに相談しないというオプションは、ミーアには存在しない。

ベルによれば、未来にいた誰も……パティのことは言っていなかったという。

それが「未来からやってきたベルは、パティのことを知らなかった」という状況を作るため……すなわち“彼らが辿る歴史と同じ状況を作るため”なのか、あるいは、本当に「未来にやってきたパティ」という存在が、彼らの辿る時間軸には存在しなかったからなのか……。

その辺りのことが定かでない以上、ルードヴィッヒに相談するのが最善の策……。

などと小難しいことを考えた末の結論……なわけもなく。そう、そんなこと、微塵も考えずに……！

――情報を秘して、わたくし一人が苦労をするなどと言う理不尽があっていいはずもありませんし。未来ではベルの時間移動を結構な数の方が知ってるとも聞きますし。教えて悪い理由はありませんわね。うん、わたくしの知恵袋を使わない手はありませんわ。

などという結論に至ったミーアなのであった。

さて、そんなミーアではあるのだが……、さすがにパトリシアの

ことは、まだ知らせていなかった。
なにしろ、パトリシアの存在はミーアにとって、究極のウイークポイントである。
もしも、蛇に誘拐でもされたら、ミーアの存在自体が消えてしまうかもしれないわけで……。せっかくこれまで頑張ってきたことが、水泡に帰しかねない。それは、なんとしても避けたいところである。
――パティについては、ベル以上に情報の扱いを慎重にしなければなりませんわ。
腕組みしつつ、ミーアは考えをまとめていく。
「ベルのことはもちろんございますけれど、それだけではありませんの。正直に言ってしまうと、事態が複雑すぎて、わたくしとしてもどう考えればいいのか、迷っているところですわ。だから、あなたにも考えを聞きたいんですの」
「ミーアさまでも……ですか？」
ゴクリ、と喉を鳴らすルードヴィッヒ。眼鏡の奥、その瞳に困惑の色が広がる。
「ええ。わたくしでも……。そして、場合によっては、未来のあなたですらも、予測できない事態が起きているんですの」
ミーアは、それから静かに腕組みした。
ベルに聞いた限りにおいて、未来のルードヴィッヒもまた、パティのことを口にしてはいなかったという。わざと秘していたと考えられなくもないが……。
――それならば別に構いませんわ。未来のルードヴィッヒが『秘するべき』と考えたうえでしたのであれば、それは、ルードヴィッヒの計算の内にあることですもの。
問題は、パティがイレギュラーな存在であった時なのだ。
ルードヴィッヒの計算外の出来事が起きていた時、それに備えていなかった、などと言うのは最悪な展開だ。
「あれは、断頭台かな？」というものが見えた時……断頭台だと思って備えて、断頭台ではなかった場合は笑って済ませることができ

るだろう。けれど、断頭台ではないと思って油断して、実際には断頭台だった場合には、笑うに笑えない。
なにかよくわからない怪しげなものを見たら、とりあえず断頭台だと思っとけ！　というのは、よく知られたミーア格言の一つだ。
常に最悪に備えて振る舞うことこそが、小心者の戦略（チキンハートストラテジー）なのだ。
「だからこそ、あなたの知恵をお借りしたいと思っておりますの。わたくしが知る最高の知者であるあなたの知恵を、ぜひわたくしのために使っていただきたいんですの。頼りにしておりますわよ、ルードヴィッヒ」
そうして微笑むミーアに、ルードヴィッヒは、何事か考えていたようだったが……。
「申し訳ありません。ミーア姫殿下。そういうことでしたら、その件に関しては、日を改めてお聞きするということでも構わないでしょうか？」
静かに、硬い表情で言った。
「え？　ああ、まぁ、あなたがそう言うのであれば……」
意外なルードヴィッヒの反応に、はて、どうしたのだろう？　と首を傾げるミーアであるが……。
二日後、再びやってきたルードヴィッヒに、思わず納得の笑みを浮かべてしまう。その後ろにいる男の姿を見て、なるほど、と思う。
参上したルードヴィッヒは、穏やかな顔で言った。
「ミーアさまのお話が極めて難解なご様子でしたから……。助力を請うこととしました。ベルさまの時代とは違い、今は大陸最高の頭脳の力を借りることができますから」
そうして、ルードヴィッヒは自らの後ろに立つ男に目を向けた。
ベルの時間移動について、ある一定の仮説を立てた、宰相ルードヴィッヒ。その知恵をもしのぐかもしれぬ人物……。
それこそが、ルードヴィッヒの師である賢者……。
「お久しぶりですわね。ガルヴさん」
ミーアの笑みに、聖ミーア学園の長、ガルヴことガルヴァヌス・

アルミノスは、静かに頭を垂れるのだった。
かくて、ミーアのもとに、この時代最高の頭脳が集う。
帝国の叡智の知恵袋ルードヴィッヒと賢者ガルヴ。そして、帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーン……ミーア・ルーナ・ティアムーンっ！？
……微妙な不純物の混じった最高の頭脳集団が今、時間移動の謎に挑もうとしていた！

第九話　因と果と……

「ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下」
やってきたガルヴは、ミーアの前で深々と頭を垂れた。
「なにやら、興味深いお話を聞けるとか……」
「ええ。そうですわね。興味深いかどうかはわかりませんけれど……おとぎ話の中でも聞いたことがないものではあると思いますわね。あ、今、ベルを呼びますわ」
辺りを見回し、ミーアは、自らの右腕がそばにいないことに気付く。
「ふむ、そろそろ、アンヌもご実家でゆっくりした頃でしょうし、パティともども呼ぶことにいたしましょうか。それと、ヤナとキリルも一緒に呼んで……」
などと思いつつ、そば仕えの者に声をかける。ミーアの意を受けた年配のメイドは、すぐに、シュトリナと遊んでいるベルのところに向かった。
遊んでいる！　ベルのところに向かった。
……テストから解放されて、すっかり休暇モードのベルである。皇女の休日再び！　なのである。
「失礼します。ミーアお姉さま」
しばらくして入ってきたベルを見て、ルードヴィッヒは小さく呻いた。
「これは……ミーアさまのお言葉を疑っていたわけではありませんが……」
ベルに歩み寄り、ジッと見つめてから、ルードヴィッヒは言った。
「失礼を承知でお願い申し上げます。ベルさま、首を確認させていただいても……？」
「え？　あ、はい。どうぞ」

そう言うと、ベルは髪をかき上げ、首を軽く傾けた。華奢な首筋、そのきめ細やかな肌には矢傷はおろか、かすり傷一つなく……。
「なるほど。確かに、傷一つありませんね。ありがとうございます」
近くでジッと観察したルードヴィッヒは、一歩後退。
深々と頭を下げた後、難しい顔で腕組みする。
「あの時のあれは、確かに致命傷でした。そして、ベルさまは光となって消えた。やはり、これは、なんらかの奇跡的な力が働いたようにしか思えないか……」
などと眉間に皺を寄せるルードヴィッヒ。その肩を、ぽむん、っとガルヴが叩いた。
「ふっふっふ、ルードヴィッヒよ。まだ若いな。こうしてよくよく御顔を拝見すれば、その面差しだけで、はっきりとわかるではないか」
それから、ガルヴは、穏やかな笑みを浮かべて、ベルを見つめて……。
「間違いなく、この方は、ミーア姫殿下の血筋のお方じゃ」
断言する！
そう、その賢者の目は真実を決して見過ごすことはない。
どのような状況にあっても、必ずや真実を見つけ出す。
賢者ガルヴの慧眼は、ダテではないのだ！
……いや、そうだっただろうか？　以前、森で……いや、まぁ、それはともかく……。
「して、いったい、どのような状況なのか、詳しくお聞きしたいのですが……」
ガルヴの言葉を受け、確認するような視線を向けてくるベル。そんな孫娘にミーアは一つ頷いた。
正直なところ、ミーアも時間移動の理屈を理解できているわけではなかったので、ぽーいっと丸投げしたいと思っていたところだったのだ。
さて、ミーアの華麗なる委託を受けたベルは、こほん、っと咳ば

らいをしてから、腕組みをし、若干胸を張って語りだした。
「そもそも、時間移動とは……」
その口調に、ミーアは、ハッとする。ベルの顔に、立派な眼鏡を幻視して……。
――ふむ、これは……。ルードヴィッヒの話を……そのまま話しておりますわね。口調までそっくりに真似しておりますわ。なるほど、ベル、やりますわね！
かつての自分の姿をベルに見て、思わず、微笑んでしまうミーアである。
――わたくしにも匹敵する記憶力はさすがと言うべきかしら……。ふぅむ、なのに、どうして、お勉強ができないのか……。
暗記式テスト攻略法の大家、ミーアは首を傾げるばかりだった。
さて、ベルの話を一通り聞いたガルヴは、ふぅむ、っと唸り声を上げた。
「なるほどのぅ……。それが未来のルードヴィッヒの考察ということか……」
腕組みして、髭を撫でながら、
「なかなか、よく考えられているではないか」
「ありがとうございます……というのも、いささか妙な感じですね」
対するルードヴィッヒは苦笑していた。
「それに、今、それを聞いてしまうのも、どうなのか……」
ベルの時間にいるルードヴィッヒも、未来から来たベルに時間移動理論を聞かされていたのだろうか？　だとすると、はたして、それを最初に提唱したのは誰であったのか……。
などと、興味は尽きないところであれど……。
「しかし、残念ながら、私の考え方にパトリシアさまのことは入っていないようですが……」
苦笑いを浮かべるルードヴィッヒ。けれど、ガルヴは、小さく首を振った。
「そうでもあるまい。我が弟子よ。お前の理論で、パトリシアさま

の移動も説明がついてしまうではないか」
　ガルヴはそう言うと、自らの紅茶に砂糖を入れた。生じた波紋を見ながら、彼は静かに続ける。
「ミーアさまが、水面に投げ込まれた石ならば、生じた波はどちらへ向かうか。ミーアさまが、歴史という弦を爪弾く指としたら、弦の震えは、その指の触れるところのみか……」
　自問自答するようにつぶやいて、ガルヴは静かに首を振った。
「いや、そうではあるまいよ。波紋は石を中心にして円状に進む。もしも歴史という流れが、始まりと終わりの二点を結ぶ線であるというするなら、その影響は両側へと進んでいく。ミーアさまの行動は過去にすらも影響を及ぼすほど大きなものであったということじゃな」
　まるで、この世の真理を語るかのようなその言葉に、ミーアは、瞠目しつつ……森の賢者ガルヴを……否、森のおじいちゃんガルヴを見つめる。
　こっ、このおじいちゃん、大丈夫か！？　などと、心配になりつつ、ジィっと観察する。
　どうやら、同じような疑問をルードヴィッヒも抱いたらしい。深刻そうな顔で、彼は口を開いた。
「すでに決した出来事である過去にすら影響を及ぼすことがあると？　しかし、そのようなことが本当に起こるのでしょうか？」
　それは、遠回しに「師匠、正気ですか！？」という懸念を表明するものに、ミーアには聞こえた。のだが……。
「普通はないじゃろうな。だが、ミーアさまが、時間の流れを逸脱した特別な存在であるというのであれば、そう言うこともあるのかもしれぬ……」
　そう言って、ガルヴは言った。
「過去に影響を及ぼせぬというのは、あくまでも、因果の流れの中にいる者のみに適用される決まり事のはず。であれば、一度、時間の流れから逸脱すれば、その影響力は、波紋のごとく過去と未来へ

と及んでも不思議はないのではないか？　言うなれば、波紋の原因となったミーアさまを因とし、過去と未来に『果』を生じさせることになったのじゃな」

時間の流れからの逸脱……。

再び現れた単語、その言葉に心当たりがありすぎるミーアはなにも言えなくなってしまう。なにしろ、ミーアは断頭台にかけられた経験を持っている。その時の日記帳をも持っていたのだ。

――わたくしが、時間の流れから逸脱した、というのには十分すぎる要素ですわ。

「あるいは、そうじゃな。こういう言い方をすることもできるやもしれぬ。ミーアさまの、逸脱した偉業を歴史の流れの中に受け止めるためには、過去が変わる必要があった、と」

その言葉に、ルードヴィッヒはハッと顔を上げた。

「つまり……ミーアさまという偉大な方が存在するために、過去に、その下準備が必要である、と？」

問いかけに、重々しく頷いて、ガルヴは言った。

「なにごとも、因果というものがある。種を蒔かない場所には草木は実らない。やせこけた土地に、良き作物は実らない」

「ミーアさまという極上の花が咲き誇るためには、土地を耕し、種を蒔く者が必要であると？」

「しかり。ミーアさまという、極めて巨大な『果』があるゆえに、それに見合った『因』の要素が必要であった。それが、パトリシアさまであった……。そう考えるのが自然ではないか？」

そんな馬鹿な……などと笑おうとしたミーアだったが、その笑みが凍り付く。

なぜなら、すでに、ミーアはその痕跡に触れていたからだ。

――イエロームーン公爵ローレンツさんは、言ってましたわ。お祖母さまの言葉に支えられたと……。

それは、ミーアが断頭台の運命から逃れようと行動していた時には、見られない現象だった。ただ断頭台の運命から逃れるだけなら

ば、未来への影響力しかなかった。けれど、その範囲が広がって行った時、『果』が大きくなり過ぎたがゆえに、因の側にも影響を及ぼした。

――そう考えるなら『因』であるパティを『果』であるわたくしのもとに送り込んで、直接、影響を与えるって、確かに一番手っ取り早いのでしょうけど……。

ふと、そこでミーアは一つの重大なことに気付いた。

――あら……でも、これって、もしかして……わたくしがきちんとパティを育てないと、大変なことになる、ということでは……。

瞬間、ぞわわっと、ミーアの背中に寒気が走った。

以前、パティをラフィーナに任せちゃったらいいんじゃない？と思った時に見た夢を、思い出したからだ。

イエロームーン家に謀殺される夢……。あれがもし、因であるパティの育成を失敗したことによって生じたものであるとするなら……。

――わっ、わたくしは、パティがそれなりの『因』となれるよう、ある状態まで教育しなければいけない、ということなのでは……？

それは、余計なことをしなければ大丈夫などと言う消極的な態度とは、一線を画す状況だった。

かくてミーアは「今」を守るため、積極的にパティに教育を施さなければならなくなってしまったのだった……。

第十話　ベル……油断する！

唐突に匂い立った危険の香りに、ミーアはゴクリ、と喉を鳴らす。
ミーアの直感が厳かに告げていた。これは極めて危険な状況であると。
一方で、ベルもまた、ゴクリゴクリ、と喉を鳴らしていた。
こちらは、説明を終えて「ふぅ、一仕事終えたぞう」などと、紅茶をゴクリの、お茶菓子をゴクリである。
今日のお茶菓子は、ガルヴに合わせて、ちょっぴり甘さ控えめの、渋めのチョイスとなっていたが……ベルは、まったく気にしない。
普段から、シュトリナやミーア、アンヌにルードヴィッヒなど、年長者を相手にお茶を嗜むことが多いため、しぶーいお菓子の楽しみ方をも知っているベルである。
そうして、ベルがお茶とお茶菓子に舌鼓を打ち……ああ、リーナちゃんや、ミーアお祖母さま、お元気かな……？　このお茶菓子、美味しいな！　などと完全に油断していたところで……。
「しかし……そうなってくると、別の疑問も生まれますね」
ルードヴィッヒの声が響く。
「別の疑問……？　というと？」
深刻そうな顔をするミーアを横目に、優雅（＝のんき）にお茶の香りを楽しんでいたベルだったから……。
「無論、ベルさまのことです」
「はぇっ……？」
突如として飛んできた流れ矢に見事に刺し貫かれた。かふっと息を吐きつつ、ベルは慌てた様子で……。
「え？　え……えっと？　ボク……ですか？　えっと、なんのことでしょうか？」
パチパチと瞳を瞬かせて戸惑う彼女にルードヴィッヒは静かに頷

き……。
「もし仮に、パトリシアさまの時間移動に『理由』があるのなら……ベルさまもまた、なにか理由があって飛ばされてきたのではないか、ということです」
もしも、ミーアが歴史という湖面に投げ込まれた石のようなものであり、ベルがここにやってきたのは、その余波を受けてのものであったなら……。ベルがこの時代に来たことに、意味はない。
されど、もしも、パティのように……。ミーアという『果』が『因』であるパティを引き寄せたというのなら、ミーアという『因』が何らかの理由で、ベルという『果』を引き寄せた可能性もあって……。
「パトリシアさまだけ、因果を理由に時間移動したというのも理屈に合わぬ話。とすれば、パトリシアさま同様に、ベルさまにもなにか、成し遂げるべきことがあると考えるのが道理というもの……」
「え？　いえ、ボクは、その……えっと、み、ミーアお祖母さまの政治手腕を学ぶためとか……なんとか……」
ルードヴィッヒは、自らの顎をさすりながら、小さく唸る。
「確かに、ミーアさまの手腕を身近で見ることは、統治者にとって得難い経験となるでしょうが……」
「そうじゃな。確かにミーアさまのお姿を、すぐ間近で見られるのは、将来の統治者として極めて重要。そのために過去にきたというのであれば、一定の説得力がありそうじゃが……」
などと、ガルヴまでもが言い出した！
「いや、さすがに、その程度のことで時間移動なんかされたら、たまりませんわ」
誰もツッコミを入れず、ただ一人、ミーアのみがツッコミを入れるという異常事態である！　が……。
「まぁ、そういうこと、でしょうな。あるいは、ベルさまの言う通りなのかもしれませんが……もしも違った場合には取り返しがつかなくなる。ならば、やはり、ベルさまがやってきた特別な理由があ

ると考えておくべきでしょうな」
そんなガルヴの言葉を聞いて、う、うううう、っと呻くベル。
本格的に休日が終わってしまいそうなことにショックを受けた様子のベル。がっくりと落ちた肩に、ミーアは、ぽむんっと手を置いた。
「ベル……。人間、諦めが重要ですわよ」
「うう……やっぱり、終わってしまったのですね……ボクのお休み……」
そうして、ベルは切なげなため息を吐いた。のだけど……。
「わかりました。ボクもなにか、すべきことがあるんじゃないかって、考えてみます。それで、手っ取り早く片付ければ……」
切り替えの早さは、ミーア譲りなベルであった。
「まぁ、いずれにせよ、我々の考えが合っているという保証もございませんが……」
「いえ、ガルヴさんとルードヴィッヒ、お二人の考え以上のものはないと、わたくしも思いますわ」
ミーアは、そう断言する。
「おそらく、このことは、なにが正解か答えを出すのが困難なことのはず。であれば、わたくしは選ばなければならない。なにを信じるのか、どの考えに従って行動していくのか……。わたくしは、信頼する忠臣と、我が帝国が誇る最高の頭脳が導き出した考えを採用いたしますわ」
自分を信じるか？　それともルードヴィッヒを信じるか？　と問われれば、迷うことなくルードヴィッヒを選ぶミーアである。
まして、今回は彼の師であるガルヴの助力もあったのだ。信じない理由はどこにもない。
――となると、パティの存在は極めて重要ですわ。
ミーアは大きく頷いてから、ルードヴィッヒに目を向けた。
「ルードヴィッヒ、申し訳ありませんけれど、秘密裏にクラウジウス家の情報を集めていただきたいですわ」

「クラウジウス……パトリシアさまのご実家ですね」
「ええ。パティが蛇に傾倒する理由を、なんとしても知る必要がありますわ。それに、やはり、パティを早急にここに連れてくる必要がございますわね」
ミーアの行動は迅速を極めた。
即座に、アンヌの家へと使いの者を走らせつつ、パティの受け入れ準備を始める。
「ふむ……パティ一人だと目立ってしまいますし、ここはヤナとキリルと、三人一組ぐらいの扱いがベスト。ともかく、目立たないようにしなければ……」
本当であれば、ヤナたちは、アンヌの家のほうが落ち着くのだろうけれど、この際は仕方ない。
「料理長のスイーツ三昧で埋め合わせするとして……。あとは、なんといっても、パティのこれからのこと、ですわね……。ふぅむ……」
それからミーアは、腕組みして考える。
――こうなっては仕方ありませんわ。わたくしが直々にパティの教育を手掛けなければ……。
鼻息荒く、パティを待ち構えるミーアであった。

第十一話　ミーア、悪役の令嬢っぽい笑みを浮かべる

「ふぅ、良かったですわ」
やってきた馬車を見て、ミーアは、複雑な気持ちになった。
無事に着いてくれたのは良かったが……はたして、これからパティのことをどうすべきか……。
――教育するのであれば、とりあえず、パティの正体が知られることは避けるべきですわね。そのうえで、しっかりと蛇から引き離すようにしなければならないわけで……。なかなかに難しいですわ。
内心で頭を抱えつつも、優しい笑みを浮かべて、ミーアは子どもたちを出迎えた。
「さ、よく来ましたわね。どうぞ、中に入ってくださいまし」
宮殿を見て、思わずポカーンっと口を開けるヤナとキリル。それに対して、パティは、若干、うつむき加減で……なんだか、いつもよりさらに元気がないように見えた。
――あら、パティ、どうかしたのかしら……？
首を傾げつつ、城の中へ。向かうのは、謁見の間だった。
白月宮殿に滞在させるとなると、どうしても、父の承諾を得る必要がある。
――まぁ、お父さまは意外と鈍いところがあるから、パティの正体には気付かないと思いますけれど……。一応は注意が必要ですわね。
などと、考え事をしていた時だった。
「失礼いたします。ミーアさま、実は……」
ふと見ると、歩み寄ってきた忠臣アンヌが、小声で話しかけてきた。
「ああ、アンヌ。お疲れさま。子どもたちが世話になりましたわね」
「精一杯、務めさせていただきました」

アンヌは、そっと笑みを浮かべ、それから……。
「ミーアさま……パティさまについて、お話ししておきたいことがあります」
そうして、アンヌが話してくれた情報に、ミーアは思わず瞠目した。
「泣いた……？　あの、パティが……、ですの？」
「はい。その……理由はわからないのですが、でも……」
と、アンヌが表情を曇らせて……。
「パティさまは、やっぱり、蛇になるのがお辛いのだと思います。だから、できるだけ早く、私たちが蛇ではないと教えて差しあげたいのですが……」
アンヌの顔には、早くパティに、蛇として振る舞う必要がないと伝えたいと……、そう書いてあった。
「ふむ……。そう、ですわね……」
対して、ミーアは、思わず考え込んでしまう。
アンヌの話を聞く限り、自分たちが蛇の一員ではない、と言ってしまっても良いような気がするが……。
――いえ、それはやはり危険ですわね。もしも、やめるにやめられない事情がパティにあるとするなら、わたくしたちの話を一切聞いてくれなくなるかもしれませんし……。これは迷いどころですわ。
と、その時だった。
「……申し訳ありません。ミーア先生。あの家で取り乱しました」
静かに歩み寄ってきたパティが、ミーアの前で深々と頭を下げた。
「頭を上げなさい、パティ……」
突然のことに動揺しつつも、ミーアは、ふぅっと一つ深呼吸。考えをまとめながら口を開く。
「いいですこと？　パティ。心を揺らすことは、悪いことではありませんわ。わたくしには、あなたが、なにを気にしているのか、わかりませんわ」
「どういうこと……でしょうか？」

直後、パティが鋭い視線を返してきた。ミーアの心の内を窺うように、ジィッと見つめてくる。
「蛇は……心を揺らしてはならない。私は、そう教えられてきた。それを試すために、あのような家に送り込んだのではないのですか？」
パティの言葉に、ぐぬ、っと唸るミーアである。
――なるほど。なかなかにロクでもないことを言いますわね。さすがは蛇ですわ。
確かに、あらゆる秩序を破壊しようなどと、トンデモないことを企む連中だ。いちいち、感情に囚われていては、やっていられないのかもしれないが……。
ミーアは、しばし黙考。言い訳を組み立てていく。
ちなみに、今日のミーアはダテではない。
父にパティの正体がバレそうになった時、きちんと誤魔化せるよう、料理長の野菜スイーツを食べて、強化済なのだ！
「そうですわね。確かに、心を揺らさず、いつでも冷静に行動できるならば……間違いも起こらないでしょう。けれど実際には、そう上手くはいかないものですわ。ゆえに、大切なのは、それを知ることですわ」
「……知る？　なにを、ですか？」
「知れたこと。人とは心が揺れる者である、ということですわ」
いつでも万全の状態でいられるわけではない。心を揺らさずに行動できれば、それはベストなのだろうが、いつもいつでも冷静でいられるはずがないのだ。
ならば大事なのは、それを知り、万全でない状態であっても動きが取れるよう、準備をすることなのだ。
そう、ミーアはよく知っている。
本来であれば、波などは起こらないほうが良い。ぷかぷか、平和な海をのんびり浮かぶことこそが、ミーアの理想。ミーアは静かな海の海月になりたいのだ。

されど、海とは波が来るもの。時に嵐となり、大波に襲われる場所なのだ。
であれば、どうするか？
波が起こらぬよう努力するのか？　嵐が来ないように祈るか？
答えは否である。そんな無駄に疲れることを、ミーアはしないのである。そうではなくって……。
――波が起こることを前提として、それに備える。波が起こるのならば、上手く波に乗ってしまえばいいだけのこと。その準備を整えておけばいいのですわ。
偉そうに腕組みしながら、ミーアは自らの経験を語る！
「心が揺れるのは、仕方のないこと。ならば、それを前提として備えればいい。たとえ心が揺れたとしても“なにをすべきか見失わないようにすること”こそが肝要ですわ。どれほど感情が高ぶっても、あなたがしたいことを見失わないようにすればいいのですわ」
そう言いつつ、ミーアは自らが組み立てた理屈に満足する。なぜなら……。
「ああ、それと、一応言っておきますけれど、あなたが“今すべきこと”は、秩序を破壊し、混沌を作ることではありませんわよ。いずれは蛇として、そうしたことを目標に据える時が来るかもしれませんけれど、今のあなたがすべきことは“学ぶこと”ですわ。わたくしから、いろいろなことを学ぶ。それを第一として考えなさい」
そうなのだ……“感情に左右されずにすべきこと”、その“すべきこと”を入れ替えてしまえば、良き方向に導くことも容易となるのだ。一見すれば、蛇の教えのように見えて、非常に簡単に、まっとうな教えに切り替えられるのである。
――ふふふ、我ながら、実に冴えておりますわ。あとは……。
ミーアは、仕上げとばかりに、パティを見つめる。
「だから、あなたは、ここにいる間は、気軽に、子どものように振る舞っても構いませんわよ」
「え……？　え、ど、どう、して……？」

戸惑うように、瞳を瞬かせるパティに、
「無論、決まっておりますわ」
ミーアは、クロエの物語に登場する悪役のセリフを思い浮かべて言う。
「あなたがあまり無理をして壊れると、蛇にとっては損失ですの。だから、難しいことは考えずに、気軽にしているといいですわ。無理は禁物。すべては、蛇のためですわ。うふふ」
そうして、全力で悪そうな笑みを浮かべてやる。
イメージするのは、これまたクロエの物語に登場する、悪役の貴族令嬢のような笑み。
そんな、ミーアのちょっぴりぎこちない、悪そうな笑みを見て、パティは、ごくり、と喉を鳴らすのだった！
こうして、ミーアは盗み取る。蛇の腹の奥深くに呑み込まれた、パティの心を……。
「おお、ミーア。ここにいたのか……。おや、その子、は……？」
その時だった。
不意に、背後から声が聞こえた。それは……。

第十二話　お姉ちゃんの次に好きです！

「ミーア、その子は……」
――くっ、なぜ、ここにお父さまが……？
ミーアは、聞こえてきた声に一瞬固まる。
ぎくしゃくと振り返った先に立っていたのは、ミーアの父、皇帝マティアスだった。
――これは、下手に隠し立てするのは得策ではないですわね。そもそも最初から、紹介するつもりではあったわけですし……当初の予定通り、さりげなく……。名馬を隠すならば騎馬王国。子どもを隠すならば、子どもたちの中ですわ！
そうして、ミーアは一転、柔らかな笑みを浮かべた。
「あら、お父さまご機嫌よう。ちょうどよかったですわ。この子が、お話ししていたパトリシアですわ」
できるだけ早口にならないように言ってから、ミーアはパティの肩に手を置いて。
「それと、こちらの女の子がヤナ。その弟のキリルですわ」
すかさず、残り二人の子どもたちを紹介する。
「三人ともセントノエル学園で始まった特別初等部の生徒たちですの。わたくしも時折、教鞭をとっておりますわ」
「ほほう、なるほど。ミーアの教えを受けた子どもたち、か……」
皇帝マティアスは、興味深そうに子どもたちに視線を注いだ。
それを受け、キリルがビクンっと肩を震わせた。小さな手が、キュッと姉のスカートを掴む。一方で、ヤナのほうも、緊張に頬を強張らせていた。
貧民街で大人とも渡り合ってきた彼女であるが、さすがに相手が一国の統治者となると、勝手が違うのだろう。
セントノエルでは、まだ実感が湧かなかったのかもしれないが、

こうして、壮麗巨大な白月宮殿の中にあっては、嫌でも、その絶対的な権力を理解せざるを得なかったのだ。
目の前の男の力の凄まじさ……そして、その男を父と慕うミーアの権力というものを。
そんな中、ミーアは、父の視線から子どもたちを守るように、一歩前に出て。
「もう、お父さま。そんな怖い目で睨んだら、子どもたちが怖がってしまいますわ」
腕組みしつつ、呆れた顔で言う。
ミーアとしては、父よりもラフィーナなどのほうがよっぽど恐ろしいように思えるのだが……。最近は、すっかり優しくなったとはいえ、獅子は獅子。父とは物が違うように思えて仕方ないのだが……。
――まぁ、怖いものは人それぞれですしね……。
「むぅ、別に怖がらせているつもりはないのだがな……」
マティアスは、唇を尖らせてもごもご言ってから、ふと、パティに目を移し……。
「しかし……そうか。そなたが、パトリシアと言うのか……」
ジッとその顔を見つめてから、ふふっと笑みを浮かべた。
「なるほど。さすがはミーアだ。確かに私は、名前に印象を引かれているようだ。油断していると、母上に似ている、などと言い出してしまいそうだな」
マティアスは、そこで膝を付き、パティと目線の高さを合わせた。それから、そっと手を伸ばし、パティの頬に触れ……。
「しかし、この髪……それに、この感情の底が見えぬ美しい瞳……。こうしてじっくり見ると、母上の面影があるように見えて来るな。奇妙な気分だ」
「そ、それは、お父さまが単純だという良い証左ですわ。わたくしの言ったとおりではありませんの！」
ミーアは少々慌てつつ言った。

――ううむ、意外と鋭いですわね……。お父さま……。普通、自分の母親が幼少の姿で現れても気付かないと思いますけれど……。
意外と鋭い父の感性に感心半分のミーアであったが……残りの半分で……。
――しかし、お父さま……。年端もいかぬパティに母の面影を見てしまうだなんて、本人だから仕方ないとはいえ、こう……ちょっぴり……アレですわね。
なんとも複雑な気持ちになってしまうミーアなのであった。
「……そうか。そうだな……我ながら、実に単純なことであった」
苦笑いを浮かべつつ、マティアスは立ち上がる。それから、改めてヤナとキリルに目をやった。
「ふむ……そちらが姉のヤナで、弟のキリルであったか……」
その声を受け、ピンっと背筋を伸ばす二人。マティアスは姉のヤナの前……を素通りし、キリルの前に立った。
「時に、キリル……。そなた、我が娘ミーアのことを、どう思うか？」
「……え？」
キリルは、びっくりした顔で瞳を瞬かせてから、
「え、えっと……とっても、お優しくて、お美しい方だと思います」
模範解答を口にした！
――ふむ……。ヤナも割と頭がいい子かと思いましたけど、キリルも幼いながらに、なかなか……。お父さまの喜びそうなことをスルスルと言うとは、実に空気が読める子ですわ。
そんなミーアの評価を裏付けるように、
「ほう！　なかなか、見る目があるな！」
マティアスは上機嫌に笑っていた！　それから、急に真面目な顔になり、
「では……そなたは、ミーアのことが好きか？」
ジィっとキリルの顔を見つめる。キリルは、かすかに首を傾げてから、

「はい。ミーアさまのこと、大好きです。お姉ちゃんの次に好きです！」
「ほう……」
マティアスは腕組みをし、険しい顔でキリルを見つめてから……。
「なるほど、な……。姉の、次にミーアのことが好き……と。ふふふ、偉い！　実に偉い子だ！」
にっこーっと笑みを浮かべた。
「我が娘ミーアを好くとは、実に見どころがある。しかも、姉の次、というのが気に入った。誰よりもミーアのことが好きだ、などと言い出したら、警戒してしまうところだったぞ！　……なぁ、アベル王子？」
ジロリ、と視線を向けた先。いつの間にやら、ミーアと合流しようとして、近づいて来ていたアベルは……。
「あ、ははは……」
思わずと言った様子で、苦笑いを浮かべるのだった。

第十三話　労働、労働、ケーキ……ケーキ、ケーキ、野菜ケーキ！

さて、無事に子どもたちを白月宮殿に迎え入れたミーアは、自室で一息吐いていた。

「とりあえず、パティのことは、クラウジウス家の調べがつくまで、なんとも言えませんわね」

どうも、マティアスに聞いた限りでは、クラウジウス家の断絶は、謎に包まれた出来事であったらしい。

「形としては、跡取りに恵まれなかった、ということになるが……。いろいろと事情が錯綜しておってな」

マティアスは、そう眉間に皺を寄せた。

「始まりは、侯爵邸の焼失事件だったのだ。クラウジウス侯爵領内にあった館が燃え落ちてな。はじめは、野盗の襲撃か、他の貴族との抗争か、暗殺か……などといろいろな噂が飛び交ったが、調べていくと、侯爵家が莫大な借金を抱えていたことが判明したのだ」

肩をすくめつつ、マティアスは続ける。

「目ぼしい美術品などもすべて処分されていたが、さて、それは借金の返済に充てられたのか、それとも……」

「当主が借金から逃れるために、目ぼしい財産を持ち出して失踪したか、ですわね……なるほど。それは、外聞がよろしくはないですわね」

こう見えて、ミーアは帝国の姫なので、貴族心理に関してはそれなり以上に鼻が利くのである。

「クラウジウス家は、栄えある帝国侯爵家。そしてそれ以上に、我が母の実家でもある。事件が起きた頃は、すでに母上は亡くなられていたが……、捨て置くこともできまい。幸い、クラウジウス侯爵には跡取りもなく、裏から裏へと葬り去ってしまっても誰も困らない。ということで、青月省に命じて火消しに走ったというわけだ」

「なるほど。それでも断片的に漏れ聞こえる情報から、人々が妄想を膨らませて、呪われた家などという話になったのですわね」
聞いた時には呆れたミーアであったが、疑念は拭えなかった。
――暗殺という疑いは、莫大な借金と美術品の処分で簡単に捨て去られておりますけれど……実際のところはどうなのかしら？
つい最近、同じような工作をしたミーアには、その状況は実に怪しく見えた。
そう、人は“もっともらしい理由がわかると、それ以上は疑ってかからないもの”なのだ。
――これはやはり、もっと突っ込んで調べてもらう必要がありますわね。
そうは思うものの、調査はなかなかに大変そうだった。
まず、使える手勢があまり多くはない。
先代皇妃パトリシアの時間転移……という情報はトップシークレットだ。もちろん、時間転移のことは伏せるものの、それでも「なぜクラウジウス家のことを調べるのか？」などと疑問を持たれては大変だ。
迂闊に、木枠の穴に首を突っ込んでみたら、実は断頭台でした！
などと言うサプライズイベントは避けたいところだ。
ちょっとした街角で待ち構えているのが断頭台というもの。ゆえに、調査には、信頼のおける人間のみを当てる必要があった。
さらに、文字の記録があまり信用できないことも問題だった。
――あの血まみれの日記帳のように、文字が書き換わる可能性がありますわ。
通常であれば、文献に当たればいいところを、確実を期するためには、人々の記憶に頼らざるを得ないわけで……。これもなかなかに大変な作業になるだろう。
そして、それよりなにより、なんと言っても、クラウジウス家は蛇の息がかかった家である。調査には慎重の上に慎重を期する必要があるのだ。

「とりあえず、ルードヴィッヒは、ジルベールさんに調査してもらうと言ってましたけれど……。少し心配ですわ。まぁ、ルードヴィッヒが大丈夫と言っていたから、大丈夫なのでしょうけれど……」
いずれにせよ、そちらに関しては当面ミーアにできることはない。なにしろ、帝国の叡智は、あまり、調べ物の役には立たない類いの叡智なのだ。
では、なんの役に立つ類いの叡智なのかというと、いささか答えに窮してしまうところなのだが……ともかく、少なくとも調べ物の役には絶対に立たないことは、疑いようのない事実であった。
ということで、ミーアは当面、別の問題を片付けようとしていた。
「とりあえず、パティの教育。それに、もろもろの報告にも目を通しておく必要がございますかしら……」
ルードヴィッヒから届けられた書類を手に取って、さらさらっと目を通していく。
細かいことは、すべてルードヴィッヒに一任しているものの、それでも、きちんと状況を把握している……ふりだけは、しておかなければならない。
「お前のことを見ているぞ！」というポーズは、人の心を引き締めるものなのだ。
人は、誰かが見ていなければサボるもの。ミーアは経験上よく知っている。
人は、基本的にサボるもの――サボるものなのだ！
だからこそ、きちんと見ているよ、とアピールするのは大切なことなのだ。そして、そのうえで……。
「ご褒美にケーキがあると知っていればこそ、頑張れる側面がございますわ。テスト前などは特にそう。だから、適度にケーキを与える。これが秘訣ですわ」
気を張り詰め続けてもいけないのだ。適度にご褒美と休憩を与えるのが大事だ。
頑張るためにはケーキが必要なのだ。労働、労働、ケーキ、この

ぐらいの配分が大事なのである。
「ふむ、しかし、ケーキばかりでは怒られてしまいますわね。ケーキばかり続けないで、きちんと野菜ケーキも混ぜなければ。ケーキ、ケーキ、野菜ケーキ……。適度に、野菜ケーキを混ぜる、この配分が大事ですわ」
労働とケーキの致命的な置換現象が起きていたが、それに気付くミーアではない。
とにもかくにも、そんなことを考えつつ、ミーアは書類に目を通し、滞りなく組織が動いていることを、ざっくりと……ふわっと把握する。
「各地の治安は若干悪化、と……。しかし、今のところ輸送部隊が襲われるようなことはないみたいですわね。皇女専属近衛隊とレッドムーン家の私兵の混成部隊とで、きちんと護衛ができているようですわ」
前の時間軸では、各地の略奪隊に、それはもう痛い目に遭わされたミーアである。
その辺りのことは早いうちから、ルヴィとバノスとに言い含めてあったのだが、見事に、護衛隊が機能しているらしい。
「うふふ、やっぱり、ルヴィさんを仲間に引き入れたのは正解でしたわね」
そう満足の笑みを浮かべている、まさに、その時だった。
「失礼いたします。ミーアさま、あの、ルヴィさまがいらっしゃっておりますが……」
アンヌの声に、ミーアはそっと顔を上げる。
「あら……ルヴィさんが……？」
すぐに、頭を真面目モードに切り替える。
皇女専属近衛隊の副隊長を務めるルヴィ・エトワ・レッドムーンは、目下のところ、最重要人物だ。いや、まぁ、四大公爵家の子弟というのは、誰も最重要な人間ではあるのだが……。その中でも、現状、ルヴィの重要度は群を抜いている。

そんなルヴィが訪ねてきたとあれば、姿勢を正すのは当たり前のこと。
「働きを労ってあげる必要もございますわね。ええ。もちろん、会いますわ。入っていただいて」
けれど、やってきたルヴィを見て、ミーアは唖然としてしまう。
「う……ぐぅ……み、ミーアさまぁ」
常の凛とした顔とは打って変わり、涙でグズグズの顔をするルヴィ。そのあまりの変化に、ミーアは言葉を失った。
「……まぁ、どうされましたの？　あなたらしくもない」
尋ねつつも、新たなトラブルの到来を予感するミーアであった。

第十四話　千客万来１　涙目ルヴィの恋愛相談

とりあえず、ルヴィを椅子に座らせて、アンヌにお茶とお菓子の用意をお願いする。

心得た！　とばかりに頷き、飛んでいくアンヌ。その背を見送ってから、ミーアは改めてルヴィの顔を見た。

真っ赤になった鼻をグズグズと鳴らす少女。いつもの冷静で飄々とした姿が見る影もない。

ルヴィがこんな反応をするような状況がはたしてどんなものなのか……想像した瞬間、ミーアの背筋が冷たくなる。

「まっ、まさか、バノスさんに、何事かございましたの？」

皇女専属近衛隊の長、バノスは、ルヴィの想い人だ。熟練の兵で、剣の腕については、ディオンには及ばないまでも十分に一流。そのうえ、その人柄の良さはミーアも評価するところである。

ディオンとは違ったタイプの得難い人材……。そんな優しき巨漢に何事か起きたのか！？　と、不安になるミーアだったが……。ルヴィの口から出たのは、思わぬ言葉だった。

「う、うう……実は、私に、えっ、縁談の話が、来て……」

「あら……縁談……」

ミーアは、思わず、まぁ、と声を上げた。

――なるほど、確かに、ルヴィさんは、お年頃。エメラルダさんにも来るぐらいですから、来てもおかしくはありませんわね。サフィアスさんも、許嫁がおりますし。

あの二人に縁談の話が来るぐらいなのだ。あの二人！　でもなんとかなるのだから、当然、ルヴィにだって来るに違いないと頷くミーアである。が……。

「そんなの、適当に難癖をつけてお断りしてしまえばいいのですわ。あなたらしくもない」

なにを悩んでいるのやら……と、ミーアは、小さく首を傾げる。
「今は、わたくしに与えられた使命が大事とか、黒月省内で出世したいから、当面、結婚する気はないとか、なんとか適当に……」
即興ですら、すらすらと言い訳が思い浮かぶ。お断りすることなど容易いこと、と考えるミーアであったのだが……ルヴィは、ゆるゆると首を振った。
「そっ、それは、やりました。でも……ダメだった。私の出世にも役に立つし、それに……ミーアさまから与えられた使命を全うするためにも、役に立つ相手だからって、言われて……うぅ……」
それから、ウルウルと潤んだ瞳でミーアを見つめて、ルヴィは言った。
「縁談の相手は、ヒルデブラントという名の騎士で……コティヤール侯爵家の次男だからって……」
その名を聞いて、ミーアは思わず目をむいた。
「ヒルデブラント！　なんと……！　あのヒルデブラントですの？」
ヒルデブラント・コティヤール。その男は、ミーアの母、アデライードの実家であるコティヤール侯爵家の次男。すなわち、ミーアの従兄弟である。
そして……。
「ああ、なるほど。それで、あんなところにいましたのね……。なぜ、帝都の近くにいるのかと思っておりましたけれど……」
そう……帰還の途中に、ミーアに熱烈な視線を投げかけてきた男こそが、ヒルデブラントだったのだ。
「ふむ、そういうことですのね。でしたら、確かに事態は複雑ですわね」
大貴族のご令嬢にとって、結婚と政略は切っても切り離せないものだ。
昨年の秋、エメラルダにもたらされたエシャールとの縁談がそうであったように、ルヴィの縁談にも、しっかりと政略が絡んでいる。
では、はたして、この縁談が意味するものはなにか？　そして、

レッドムーン公爵家はどのような思惑を持って、この縁談を企図したのか？

――この狙いは……ずばり、わたくしとの関係強化ですわね。

帝室自体との、ではなく、ミーア個人とのというところが、実に悩ましいところだった。

コティヤール侯爵家は別に皇帝の血を引く家というわけではない。現皇帝マティアスの亡き妻の実家であるというだけであり、血の繋がりから言えば、ミーアとしか関係がないのだ。

貴族の家同士の繋がりを、血の繋がりのみで語ることはできないし、皇帝の亡き妻の実家と縁を結ぶことに意味が全くないとは言えないが……少なくとも、名門たるレッドムーン公爵家が欲するコネかどうかは微妙なところだ。

そもそも血筋でいえば、レッドムーン公爵家のほうが皇帝に近いわけで……にもかかわらず、コティヤール侯爵家と姻戚関係になることの意味はなにか？

言わずもがな、ミーア個人との関係を強化することだ。

それはすなわち、ミーアの権勢を認め、ミーアが帝位を継ぐことを支持するという表明ですらあるのかもしれない。ルヴィの父、マンサーナ・エトワ・レッドムーン公爵は、ミーアの陣営に与することを、正式に表明しようというのだ。

「なるほど……。ルヴィさんのお父さまとは、確かに良い関係を築けておりましたけれど……この縁談は、わたくしへの好意を表すものなのでしょうね。しかし、我が従兄弟が縁談の相手とは、なかなかに面倒な状況ですわね……」

敵対行動であれば、突っぱねればいい。けれど、善意での行動で、なおかつ大きなメリットがあるとなると事は簡単ではない。

まさか「ルヴィはバノスのことが好きだから！」などと言って断るわけにもいかない。

平民の、一兵士に恋をするなど、名門レッドムーン家のご令嬢には許されないことであって……。それを理由に、メリットのある縁

談を拒絶することなどできないはずで……。
だからなのだろう。ルヴィが、ここまで追い詰められているのは。
普段、飄々としている彼女が、こんな風に情けない顔を晒すほどに追い詰められて……追い詰められて？
っと、ミーアの脳裏に、乗馬大会の時の記憶が甦る。
今と同じ感じで、泣いていたルヴィの顔を思い出し……。
――ああ、そうでしたわね。この人、案外、恋愛が絡むと乙女になってしまうのでしたわ。
であれば、この反応も不思議ではないのかもしれないが……。ともあれ、放置は危険だ。
――恋に恋する者の邪魔をするのは、無警戒に荒嵐に近づくよりも危険なことですもの。それに……。
「う、うう、ミーアさま……」
実になんとも情けない顔で見つめてくるルヴィ。それを見ていると、なんとかしてあげたくなるミーアである。
――確かに、レッドムーン公の好意はありがたいですけれど、それでルヴィさんの機嫌を損なっては意味がありませんわ。よし！
ということで、とりあえずルヴィの味方をすることに、ミーアは方針を定める。
それにミーアとて乙女だ。ルヴィの気持ちは十分にわかっている。
「大丈夫ですわ。ルヴィさん。そんなに泣かないでも、なんとかしますから」
と、そこで、タイミングよくアンヌが戻ってきた。
紅茶の良き香りに交じってやってきた、野菜ケーキの香りをミーアは見逃さない。
「とりあえず、お茶でも飲んで落ち着きましょう。それにケーキ！料理長が腕によりをかけて作ってくれたみたいですわよ？」
とりあえず、美味しい物でも食べて、頭をスッキリさせなければ……などと思うミーアなのであった。

第十五話　千客万来２　恋の仲介天使ミーア、出撃す！

さて、紅茶とお菓子で、ちょっぴり元気を取り戻したルヴィ（やはり、甘い物は偉大ですわ！　などと感心するミーアである）を送り出したミーアであったのだが……。

扉が閉まった瞬間、ほふーぅ、と長い長いため息を吐いた。

「これは、なかなかに、難解な問題ですわ」

今回の縁談話、ただ潰せばいいという類のものではない。

レッドムーン公マンサーナは、ミーアに味方するために、この縁談を進めたのだ。それをないがしろにしては、レッドムーン家との仲がこじれてしまう。

着地点を見出すのは容易なことではない。けれど、それ以上に問題なのは……。

「そもそも……バノスさん自身の気持ちもございますし……」

これである。

今回のことは、自身の従兄弟も関係しているから、介入することもやぶさかではないミーアである。されど、それはあくまでも問題の先延ばしに過ぎない。

「いずれにせよ、レッドムーン公爵家の令嬢として、ルヴィさんは、どなたかかと結婚しなければならないわけで……」

その時に、ルヴィはどうするつもりなのか？

身分違いを理由に、バノスとの婚姻を反対された、などと言うことであれば、ミーアとしても助力は惜しまないだろう。けれど、問題は、バノスの気持ちの問題だった。

「ルヴィさんの片思いだったら、あまりごり押しするのもよくありませんわね。ふーむ……」

大貴族の平民に対する横暴を応援することは、ミーアにはできない。せっかく最近、猫っぽくなってきた獅子ラフィーナを、再び目

覚めさせることになってしまうかもしれない。
「それに、バノスさんの士気が下がるのも問題ですわ」
皇女専属近衛隊の隊長として精力的に働いてもらっているところである。その士気を削ぐようなことはしたくない。であれば……。
「できれば、両想いになってもらいたいところ……。そうなれば、わたくしとしても、協力を惜しんだりは致しませんけれど……ぐぅ、だ、ダメですわ！　バノスさんが、ルヴィさんに惚れるビジョンがまるで浮かびませんわ！」
ミーア、思わず頭を抱える。
「しかし、まぁ、とりあえず、今回の縁談話ですわね。なんとかしてあげないと……」
どうしようかなぁ……などと、頭をモクモクさせ始めようとした、まさにその時だった。
「失礼いたします。ミーアさま……。あの、バノス隊長がお見えになりました」
部屋に入ってきたアンヌの口から、意外な名前が飛び出した。
「あら……珍しいですわね。バノスさんが来るだなんて……」
ふぅむっと一つ鼻を鳴らし、ミーアは考える。
――ルヴィさんが訪ねてきたタイミングで、バノスさんもやってくるとは……。これは、偶然のことなのかしら？　それとも……。
刹那の黙考。その後……まぁ、考えても仕方ないか！　と結論を得る。
「とりあえず、食糧輸送団の護衛のことも労いたいですし、いいですわ。お通しして」
そうして、部屋に迎え入れることになったのだが……。

「失礼いたします」
入ってきて早々に、バノスは膝を付き、
「ご無事のご帰還に、心より喜びを申し上げます」
実に、なんとも、かしこまったことを言った。

「あら、あなたもルードヴィッヒのようなことを言いますのね。バノス隊長」
ミーアは、くすくすと笑い声をあげて、
「堅苦しい挨拶は不要に願いたいですわ。そんなにかしこまっていては、肩が凝ってしまいますわよ？　それでは、いざという時に動けない。それは、わたくしの護衛にあるまじきことではありませんこと？」
「やれやれ、変わりませんな。姫殿下」
顔を上げた時、その顔には、なんとも言えない苦笑いが浮かんでいた。
「こちらとしては、ここ数か月、姫殿下の予言が当たりに当たって、慄くばかりなんですがね」
「あら、別に、だからといって、なにも怯える必要はありませんわ。あなたたちは、わたくしの言葉を信じ、そのための備えを進めてきていた。そして、だからこそ、スムーズに動けている。わたくし、あなたたちの働きを評価しておりますのよ？　皇女専属近衛隊は、よくやってくれておりますわね」
上機嫌に笑ってから、ミーアは首を傾げた。
「それで、今日来たのは、そのことですの？」
「ああ。いえ、そうじゃないんですが……」
それから、バノスはガシガシと頭をかいた。
「実は、副隊長の……ルヴィお嬢さまのことなんですが……」
「あら？　ルヴィさんが、どうかなさいましたの？　よく働いてくれていると思っておりましたけれど」
そう言うと、一転、バノスは頬を緩めた。
「よくやってくれてますぜ。貴族の嬢ちゃんかと思いきや、どうしてどうして。根性出してくれてます。ただ……どうも最近、元気がないのが気になりましてね……」
――まぁ！　これは……っ！
バノスの言葉に、ミーア、思わず瞠目する。

「副隊長として、彼女に力を発揮してもらわないと、この先、少々困っちまいそうでしてね……」
などと言うものの、ミーアの恋愛審美眼は、彼の表情をつぶさに観察していた！
――これは……ただ、同じ仕事をしている者を心配しているようにも見えますけれど……。いや……でも……可能性が、ないわけではないのかしら？
それは糸のように、か細い可能性。けれど、ミーアはそこに光を見た気がした。
――というか、嫌いな人には、そういうこと……思わないですわよね？　であれば、もしや……可能性がないこともないということかしら？
小さな可能性であれ、そこに道があるならば、進むしかないではないか？
なにより、ミーアは見てみたかった。身分の違い、年齢の違いを超えたご令嬢と一兵士の純愛物語を！
恋愛小説愛好家たるミーアの、恋愛脳が唸りを上げる！
――だとすると、ここは、一肌脱がずにはいられませんわね。
俄然、ミーアは鼻息を荒くする。
「ええ。そういうことでしたら、わたくしが何とかいたしますわ」
「後のことは任せろ！」とばかりに、胸をドンと叩いて請け負うと、ミーアは早速動き出す。
「まず、必要なのは、ヒルデブラントをなんとかすることですわね！」
恋の仲介天使ミーアは、そうして静かに動き出すのであった。

第十六話　変わる人々と、変わらなければいけないミーアと

「恐らく、ヒルデブラントは、領内に帰還したか……。いえ、帝都にある別邸のほうにいるはずですわね」

レッドムーン公爵家に挨拶に来て、そのまま帰還などということはしないはずだ。次男坊とはいえ、貴族家の人間は多忙だ。まぁ、ミーアを見てると、そうは思えないかもしれないが……多忙なものなのだ。うん。

もしかしたら、皇帝への拝謁もあるかもしれないし、叔母……すなわち皇妃アデライードの墓参りもするかもしれない。そのためには、少なくとも十日かそこらは、滞在しているはず。

「であれば、動くのは早いに越したことはありませんわ」

思い立ってからのミーアの行動は早かった。

アンヌに着替えを手伝ってもらった後、ササッと護衛の手配をするため、皇女専属近衛隊の詰め所へと出向く。

本来、ルードヴィッヒか、あるいは隊長のバノス、副隊長のルヴィ辺りを呼び出してするべきところだが……。今は時間が惜しい。

幸い、皇女専属近衛隊の詰め所は、宮殿のほど近くにある。問題はないだろう。

途中でアベルとも合流。護衛を買って出てくれた彼と、ウキウキ弾みながら町を歩いて……。

「ほら、アベル。あそこのお店は帝都で一番の……はっ！」

危うく目的を忘れそうになって反省。

足早に詰め所へと向かう。

辿り着いた詰め所は、活気で溢れていた。

現在の皇女専属近衛隊には、主に三つの勢力が存在していた。

もともと近衛隊に所属していた兵士とディオン・アライアの隊に

所属していた兵士。
　そして、もう一つの勢力が、レッドムーン公マンサーナが手配した、ルヴィのそば仕えの女性兵士たちである。その数は二十名。精鋭揃いだとのことだったが……。
「これは、ミーア姫殿下。ご機嫌麗しゅう」
　その女性兵士が、話しかけてきた。凛とした空気をまとった、きびきびした女性である。
「ご機嫌よう。ええと、あなたは、レッドムーン公爵家の方かしら？」
「はい。レッドムーン公爵家より派遣されましたセリスと申します。本日は……ああ、もしかして、騎馬王国のご友人の方をお探しなのでは？」
「はて……？　騎馬王国の友人？」
　なぜ、そんな話に？　などと首を傾げるミーアを、その女性兵士は、厩舎に案内した。そこにいたのは……。
「あら、慧馬さん、こんなところにいましたのね」
　呼ばれて振り返った慧馬は、嬉しそうな顔で近づいてきた。
「おお、ミーア姫。どこかに出かけるのか？」
　ちなみに、今日の慧馬は、騎馬王国の民族衣装ではなく、帝国製のドレスを身に着けている。馬に乗る勇ましい姿しか知らなかったが、こうして見ると、どこかの貴族のご令嬢のように見える。
「ん？　どうかしたのか？」
「いえ。その服、とっても似合ってますわ」
「ああ。これか……」
　慧馬は、スカートを軽く摘まんで、ふわふわ揺らした。
「ん、んんっ！」
　ふと見ると、目のやり場に困ったのか、アベルがそっぽを向いて咳ばらいをしていた。
「慧馬さん、レディがそういうことをするものではございませんわ」
「ああ、すまない。しかし、ふふ、似合うと言ってもらってすまな

いが、こういう服は、小驪のほうが好きだと思う。せっかくだから、あいつも、その内、呼んでやってくれ」
あの日……馬合わせの日に、慧馬と小驪は友誼を結んだらしい。
馬好き同士、通じるものがあったのだろう。
「しかし……良き馬がそろっているな。さすがは、ミーア姫の護衛部隊だな」
慧馬は、厩舎の馬たちを眺めながら言った。
「あら？　騎馬王国の月兎馬を知るあなたから見ても、そう見えますの？」
首を傾げるミーアに、慧馬は苦笑いを浮かべる。
「そうだな。以前までならば、馬鹿にしていたかもしれない。我も小驪と同じで騎馬王国の民の常識に従っていた……。駿馬こそが良き馬と決めつけていただろう。だが、あの日の馬合わせを見て、目が覚めた。あれは、良き馬合わせだった。我も血が騒いだ」
ギュッと拳を握りしめ、
「あの最後の坂を上るところは、今でも、目に浮かぶ。東風も、ここにいる馬たちも良き馬だ」
それから、慧馬は小さく笑みを浮かべた。
「小驪も我も、他の族長たちも、ミーア姫と出会って変えられた……。兄上も、あるいは……」
「ああ、そう言えば、聞いておりませんでしたけど、お兄さまは、今、どうしているんですの？」
怪我をしたということは聞いていたが、詳しいことは聞いていなかったミーアである。
火馬駆は、蛇導士を追跡する優秀な追手だ。あまり怪我が大きくなければいいのだが……。
「怪我が癒えるまでは、今までのような働きはできないだろう。まったく、我が兄ながら情けない限りだ」
ぷりぷりと怒る慧馬だったが、やがて、肩をすくめてみせた。
「まぁ、しかし、むしろ、兄上にはちょうどいいのではないかと思

っている」
「ふむ……まぁ、そうですわね。たまには休むことも必要でしょうし……」
と言うミーアに、慧馬は首を振った。
「いや、そういう意味ではないのだ。兄上は、蛇導士を追うことはもちろんだが……それより先にすべきことがあるからな」
「はて……先にすべきこと？」
「ああ。蛇の巫女姫……ヴァレンティナと話をすることだ」
「ああ、そうか、姉さまと……」
黙って聞いていたアベルは、慧馬の言葉に驚きを見せるも、すぐに納得の頷きを返した。
「なるほど……そうかもしれないな……」
「聖女ラフィーナも賛同してくれたらしい」
「あら、そうなんですのね。ラフィーナさまが……。ですけど、それは危険ではありませんこと？　妹の慧馬さんに言うのもなんですけれど、狼使い、馬駆さんはかなりの剛の者ですし、巫女姫と会わせたりしたら、なにをするか……」
「我もそう思わなくもなかったのだが……聖女ラフィーナに言われたよ。ディオン・アライアがいるのは、なにも帝国だけではない、と……」
ブルルッと肩を震わせて、慧馬は首を振った。
「恐ろしいことだ……。あのような男がいろいろな場所にいるとは……」
ブルルッと肩を震わせて、ミーアも答えた。
「ええ、もっともですわ。実に恐ろしいお話ですわ……けれど」
っと、ミーアは心の平静を保つようにして、言葉を加える。
「まぁ、でも、それは言葉の綾というものではないかしら。ディオン隊長のような方が、そこら中にいたら、大変ですもの」
うんうん、っと二人で頷きあい、それから、慧馬は続ける。
「まぁ、なんにしても、これは良い機会だ。巫女姫と話すことがで

きるというのであれば、それに越したことはない。そろそろ、兄上も向き合うべきなのだ。向き合って、そして……兄上もまた変わらなければならないと、我は思う。逃げることは許されない」
「そう……。まぁ、そうですわね」
慧馬が変わったように、小驪が変わったように……あるいは、ヴァレンティナも、馬駆も、変わることができるのだろうか？
願わくは、それが良い方向であればいいと、祈らずにはいられないミーアであった。
「ところで慧馬さんは、こんなところでどうかなさいましたの？」
「ああ。そうなんだ、実は、ここに蛍雷を預けているのだが、少し運動不足になりそうなのでな。羽透と遠駆けに行こうと思っていたのだ。もしよければ、ミーア姫もどうだ？　アベル王子も一緒ならばちょうどよい。また軽く競争でもしてみるというのは……」
「そうしたいのはやまやまなのですけど、実はこれから出かけるところがございますの」
そうして事情を説明すると……。
「そうか。よし、そういうことならば無論、我も同行するぞ」
慧馬は、明るい笑みを浮かべた。
「どうだ？　ミーア姫。あまり、体を鈍らせるのも良くない。馬に乗っていくというのは」
「ふむ……そうですわね」
ミーアはペロリ、と口の周りを舐めた。舌先に感じたのは、先ほど食べた野菜ケーキの甘味……。
――甘い物を食べたわけですし、運動もしておいたほうがいいですわね。
自らも変わらなければならないところがあるのではないか？
悔い改めるべき点があるのではないか？
……などと、湧き上がる切実な想いに押されるようにして、ミーアは静かに頷いた。

第十七話　ミーア姫、訪問する

厩舎を離れたところで、
「これは、ミーアさま、ようこそおいでくださいました」
少し焦った様子でルヴィが出てきた。どうやら、門衛をしていたセリスという女性に呼ばれたらしい。
ルヴィは、ちょぴーっとバツが悪そうな顔で、ミーアに耳打ちする。
「先ほどは失礼しました。どうも私は……自分の恋の話になると、取り乱してしまって……。ミーアさまのように、いつでも落ち着いていられたらいいのですが……」
しゅんと肩を落とすルヴィに、ミーアは優しい笑みを浮かべた。
「別に気にする必要はありませんわ。わたくしのように、いつでも泰然自若としているためには、修羅場をくぐる必要がございますわ」
修羅場をくぐっていることは、否定のしようもない事実ではあるのだが……泰然自若に関しては若干の疑問の余地がないではないミーアである。
「ところで、皇女専属近衛隊（プリンセスガード）になにか御用ですか？」
「ええ。ここ最近の働きを労いに。それに、働きぶりを少々見学させていただこうと思っておりますわ」
ミーアは、それから悪戯っぽい笑みを浮かべて……。
「あとは、ついでにヒルデブラントに会いに行くので、その護衛の手配を、と思いまして」
「え……？　ひ、ヒルデブラント殿に、ですか……？」
ギョッと顔を引きつらせるルヴィに、ミーアは静かに頷いた。
「ええ。話を聞くつもりですわ。あなたの悩みを解決するためには、いろいろと考えなければならないようですし」
そんなこんなで、建物に入ったところで、ミーアは目を丸くする。

「ミーア姫殿下、ようこそおいでくださいました」
「ミーア姫殿下に敬礼！」
建物内にいた近衛兵たちが、みな整列し、姿勢を正して廊下の両側に並んでいたからだ。
「あら、仕事の手を止めさせてしまって、申し訳ないですわね」
穏やかな、優しい笑みを浮かべるミーア。彼らは忠勤の士。ルードヴィッヒの報告書を流し読みした限りでは、本当によく働いてくれている。
笑顔どころか、特別給金を与えてもいいのではないか？　ぐらいに考えているミーアである。
そのまま、ミーアは近くの部屋に立ち寄った。せっかくだから、見学しようというのだ。
突然のミーアの訪問に、兵士たちは慌てた様子で、道を開ける。
部屋の中央、大きな机。その上に置かれた玩具の駒のようなものを見て、ミーアは首を傾げる。
「これは、なにをしておりますの？」
「はっ！　これは、兵の連携の確認をしております。この駒が馬車。そして、こちらの小さな駒が我々で……」
聞かれた兵士がしゃんと背筋を伸ばして答える。
「なるほど……。馬車の台数や兵の人数により、動き方が異なるのですわね」
ちなみに、この戦術シミュレーションは、ルードヴィッヒの兄弟弟子によって提案されたものである。頭脳派集団であるガルヴの弟子たちにより、皇女専属近衛隊の練度は、かなり底上げされていた。
「こちらの板はなにかしら？」
「これは、隊をいくつかに分けて、ローテーションを組んでおります。この一番上の金の枠がついているのが、栄えあるミーア姫殿下の護衛担当でして……」
「なるほど。そんなことまで……。これはなかなかに大変ですわね」
「幸い、ルードヴィッヒ殿の手配で、文官が派遣されてきています。

そちらの方にすべて担っていただいておりますので……」
などと、やり取りをしながら、興味深げに詰め所の中を見て回って後、ミーアは廊下の端まで歩いたところで、振り返った。
「いつもご苦労さま。みなさんの働きに、わたくし、敬意を払いますわ。今は大変な時ですけれど……頼りにさせていただきますわね」
それから、静かに頭を下げると、ミーア一行はルヴィの執務室に入って行った。
接客用の椅子に座ってから、ミーアは少しだけ唸る。
――ふぅむ……。しかし……少し硬い表情をしている者が多いですわね。なんだか、生真面目な方が多い気がしますわ。労働量はただでさえ増えておりますし、適度に休みを取ってもらえるといいのですけど……。あるいは、憂さ晴らしができるような何か……やはり、ここは、甘い物が必要かしら……？
そんなことを思いつつ、ミーアは、腕組みするのだった。

さて……ルヴィの部屋に消えたミーアを見送ったところで、兵たちは思わず、と言った様子で肩の力を抜いた。
「緊張したな……」
「ああ。緊張と言うか……感動した」
近衛兵たちは、口々に、そんなことを言う。
ミーアを訪問したバノスと同様、彼らもまた、ミーアの叡智っぷりを肌で感じている者たちだった。
一般の民は知らない。今、この国の裏でなにが起きているのかを。
あるいは、直接的に危機に接した者たちの中には、気付いている者がいるかもしれないが、多くの帝国の民は知らないのだ。
この帝国が、大陸が、大きな危機に接していたことを。
そして、その危機を回避した者こそが、ほかならぬ、自分たちの皇女殿下であるということを。
けれど、ここにいる兵たちは、それが、どれほどのことであったのかを、すべて知っているわけで……。

「なんでも、ミーア姫殿下がこの危機を予測したのは、齢十二の時。新月地区を訪れた折であったとか……。いやまぁ、さすがに、これは嘘なんじゃないかと思うんだが……」
ある者がこう言えば、
「権威付けのための嘘だろうと関係ないさ。ミーア姫殿下の命令で食糧が蓄えられ、遠き異国から輸入し、そして、民の間で不足した時には惜しげもなくそれを分け与えているのだ。その事実が変わることはない」
「ああ、まさに、その通りだ」
最後には、こう頷きあうのだった。
彼らの親類縁者の中にも、ミーアの備蓄に救われた者は、決して少なくない。
ミーアの意向で、その功績が表に出ることはないが……それでも、彼らの心に芽生えているのは、なんとも言えない誇らしさだった。
「ミーア姫殿下の名を汚さぬよう、我らは振る舞わなければならぬ」
自らが、皇女専属近衛隊であるという、燦然と輝く誇りを胸に抱きながら、今日も彼らは仕事に励むのだった。

第十八話　ミーア姫……踏んでしまう！

皇女専属近衛隊の一隊に護衛されたミーア一行は、コティヤール侯爵家の別邸に向かった。

ちなみに全員、馬に乗って、である。

随伴者は、当初の予定通り慧馬とアベルである。

「そういえば、来るのははじめてですわね」

帝都の一角。貴族の館が立ち並ぶ地域に建つコティヤールの館を見て、ミーアは思わずつぶやいた。

基本的に、ミーアとコティヤール侯爵家との関係性は悪くはない。

コティヤール領は、織物の盛んな地。服飾業も発達しているため、幼き日のミーアはよく遊びに行き、いろいろと買い込んでいたのだ。可愛い姪っ子――というよりは、わがままな皇女という雰囲気が勝るミーアではあったが、伯父である侯爵もよく面倒を見てくれて、たびたび、素敵なドレスをプレゼントしてくれた。

いささかお高い手触りの良い布で、ぬいぐるみを作ってもらったりしたのは、良い思い出だ。

しかし、親しい親戚づきあいをしていたか、と言われると、実はそんなことはない。

ミーアにとっては、あくまでもコティヤールの織物が目的なのであって、特に仲の良い親戚がいたわけでもないわけで。必然的に、帝都の別邸に来るようなことはなかったのだ。

そんなわけで、ミーアがコティヤールの別邸に来たのは今日がはじめてということになるのだが……。

門衛とやり取りをした皇女専属近衛隊の兵が小走りに戻ってきて……。

「申し上げます。まもなく、ヒルデブラント・コティヤール殿がお迎えに参上されるとのこと。門をくぐったところで、少々、お待ち

いただきたいとのことです」
ふと、見ると門衛は、馬に乗ってやってきたミーアに驚愕している様子だった。
――ふふふ、どうやら、馬に乗るわたくしの、堂々たるたたずまいに驚いているようですわね。
皇女ミーアは馬を嗜む。その話はかなり有名なことではあったが、実際に目にすると驚く者も多い。特に、姫君のお遊びと侮っている者たちは、ミーアの本格的な乗馬姿に度肝を抜かれるらしい。
なにしろ、ミーアにとって乗馬はお遊びなどではない。命綱の一本であり、しかも、その太さはかなり太い。
故にこそ、ミーアは馬を愛し、敬意を払うことを欠かさないのだ。
それはさておき、門衛の見とれるような視線を、ちょっぴり心地よく感じつつ……。心持ちドヤァっとした笑みを浮かべながら、ミーアは言った。
「そういうことでしたら、しばし、門の内側で待たせていただきましょうか」
そう言うと、ミーアは、馬を前進させた。それに合わせて、ミーアを守るように、二騎の騎馬が前に出る。右にアベル、左に慧馬を従えての堂々たる入門である。
「しかし、ずいぶんと立派な前庭ですわね」
門をくぐりぬけたところで一行は馬から降りた。
目の前には広い広い前庭が広がっていた。見渡す限りの美しい緑。手入れのされた木々と芝、そして、ところどころに何に使うのか、木製の柵のようなものが並べられている。
「あれは、騎馬を止めるための仕掛けだろうか？」
「そうですわね。なにかしら……」
ミーアが柵に近づこうとして、歩き出そうとした……まさにその時だった！　ミーアの背筋に、戦慄が走った！
踏み出した足……。生じた音と、いやぁな感触……。ミーアには覚えがあった。

あれは、割と昔……。確か、セントノエルの浜辺に向かおうとした時に……。
恐る恐る、っと足を上げると……靴の底には……泥のような……その……ちょっぴり気になるナニカがついていた！
「なっ……こっ、これは、まさか……」
ふるふる、と震えるミーアだったが、近づいてきた慧馬が事も無げに……。
「ああ、馬糞だな」
聞きたくない言葉を言った！
そう……それは、乗馬部でさんざんに見慣れた、馬糞だったのだ！
「ぐ、ぐぬぬ、よりにもよって、なぜ、庭にこのようなものが……」
「別に、気にする必要はないぞ。ミーア姫。馬は聖なる生き物。だから、それは、別に汚くはない。畑に植えれば、植物を強くする、むしろ、恵みの産物と言えるだろう！」
快活な笑みを浮かべる慧馬だったが、ミーアはそんな気にはならなかった。
馬を愛し、敬意を払うミーアであるが、だからといって、馬糞までは愛せないのである。
――うう、なぜ、このようなことに……。
当然のように、テンションだって下がる。
しかも、今日履いていた靴は、ミーアにとって特別なものだった。ルヴィと乗馬対決をした時にも、狼使いから逃げ切った時にも、常にミーアとともにあった靴。
最近、サイズがちょっぴり合わなくなってきたし、少し傷も増えてきたけど、なんか、ちょっと変えるのは気が進まないな、なぁんて思っていた、愛着のある一品なのだ。
――うう、わたくしの、思い出の品が……。
「ミーア、もしよければ、新しい靴をプレゼントしようと思うんだが……」
などというアベルの気遣わしげな声も、ミーアの落ち込んだテン

ションを回復するのには至らず……至らず？
「まぁ！　アベルからプレゼントなんて、嬉しいですわ！」
ぱぁ、っと笑顔を輝かせ、ミーアは歓声を上げた！
よくよく考えれば、愛着とか、特にありませんでしたわ！　とばかりに、上機嫌に鼻歌を歌うミーア。
――ふむ。これは確かに、恵みの産物。むしろ、馬糞を踏んでラッキーだったかもしれませんわ！　やはり、馬はわたくしの味方ですわ。
なぁんてことまで思ってしまう恋愛脳モードなミーアであった。
さらにさらに！
――ふむ、これはもしや、天の配剤かもしれませんわ。天がわたくしに、馬を使うと良いことがあると、教えているに違いないですわ！
こぉんなことまで考えてしまう上機嫌っぷりである。単純恋愛乙女なミーアなのであった。
「しかし、庭に落ちているということは、この庭で、馬を走らせているということか……」
アベルは腕組みしながら、庭を見回す。
「そうだろうな。我の見たところ、あの木の柵は、馬に飛び越えさせるための仕掛けのように見える。万が一、足が引っかかっても怪我をしないように、簡単に倒れるようになっているだろう？」
慧馬の指摘に、アベルは、ぽんっと手を叩いた。
「なるほど。確かに、あれでは騎兵は防げない。馬の訓練用のものだとすれば納得できるな」
と、その時だった。
「はいよー、シルバーアロー！」
などという威勢の良い声とともに、一頭の馬が駆けてくるのが見えた。馬は、こちらに真っ直ぐ向かってくることはせず、途中の木の柵をぴょん、ぴょん、っとジャンプで飛び越え、駆け回る。
まるで見せつけるように馬を乗りこなし、やってきた男……。そ

れは、まさに、ミーアが会おうとしてきた人物で……。
「やあ、ミーア姫。ご機嫌麗しゅう」
颯爽と馬から降りたヒルデブラントは、ミーアの前で華麗な一礼を見せるのだった。

第十九話　対面、好青年

ヒルデブラント・コティヤール。
その青年に対してミーアは、特に良い感情も悪い感情も抱いていなかった。
前の時間軸、コティヤール家が帝室を裏切ることはなかった。
では、ヒルデブラントが最後まで帝室の味方をして、共に戦い共に死んだ忠義の人かと言うと、そんなこともない。
彼は、大飢饉に際して勃発した自領の内乱で、あっさりと命を落としてしまうからだ。
反乱を鎮めるのは貴族の役目。その戦いで命を落としたと聞いた時は、もちろんショックを受けたミーアであるのだが……。けれど、その後に続くさらなる衝撃の連続に、従兄弟の常識的な死の記憶は、簡単に薄れて行ってしまい……。
また、ヒルデブラント自身とも、子どもの頃に何度か顔を合わせたことがあるかなぁ？　というぐらいの付き合いだったわけで……青年になった彼が、どんな人間になっているのかは、まったく知らなかった。
――ともかく、情報が必要ですわ。その過程で縁談を妨害するためのヒントが見つかれば上々ですわ。
なにしろ、政略的には旨味しかない以上、そちらの方面から破談に持ち込むことは難しい。
レッドムーン公マンサーナは、現在のところミーアを支持し、好意的な反応を示してはくれているが、それは、ミーアがなにをしても支持するということではない。
礼を失すれば機嫌を損なうことだってあるだろうし、ミーアの行動いかんによっては、敵対勢力につくことだって考えられる。
多大なメリットのある事柄を、なんの理由もなく妨害したとあっ

ては、無能を疑われるかもしれない。
それを思えば、政略的な事にケチをつけるのは難しそうだった。むしろ、ヒルデブラントに……こう、なにか性格上の問題があるとか、不足があるとか……ケチをつけるポイントを探し出すほうが、まだマシなようにも感じるが……。
――ううむ……それはそれで難しいですわね。ヒルデブラントの恨みを買うことはできれば避けたいところ……。
今回、難しいのは、関係者が全員味方であるという点だった。敵なればこそ、思いっきり蹴り飛ばせもするわけで。ヒルデブラントは身内、ルヴィは盟友、マンサーナは支援者、このような状況ではうかつにキックもできない。
各方面に気配りをしなければならず、実に頭が痛いところであるが……。
――しかし、ルヴィさんのためにも、頑張りますわよ。
今日のミーアは気合が入っていた。障害が多いほうが、恋は盛り上がるものなのだ。
燃え上がる恋愛魂を、荒い鼻息とともに吐き出してから、ミーアは、応接室の椅子に腰かけた。
……ちなみに、ミーアは靴を履き替えている。
帝国の叡智の右腕アンヌは、常に準備を怠らない。帝国皇女の専属メイドたるもの、いついかなる時にも、主の身なりを整えられるよう、心掛けているのだ。
部屋に通されたのはミーアとアンヌ、それに慧馬とアベルだった。
ミーアたち三人が席に着いたところで、改めて、ヒルデブラントが言った。
「さて。改めまして、コティヤール家へようこそ。歓迎いたします。ミーア姫殿下」
「ご機嫌よう、ヒルデブラント殿。ずいぶんとお久しぶり……と言うのも妙な感じがしますわね。先日、すれ違っておりますし」
などと微笑みつつ、ミーアは、アベルと慧馬を紹介する。

「おお、レムノ王国の王子殿下でしたか。これは、失礼を……」
深々と頭を下げるヒルデブラント。それから、一転、親しげな笑みを浮かべて、
「時に、レムノ王国といえば、武門の国。やはり、アベル殿下もかなり、剣を使われるのですか？」
「ええ。それなりには……」
初対面の印象に引きずられているのか、硬い表情で返したアベルであったが、それを一切気にした様子もなく、ヒルデブラントは朗らかな笑みを浮かべた。
「それは興味深い。私も帝国軍に属する身。もし機会があれば、レムノの剣を見てみたく思いますが……」
「ええ……それはもちろん……」
まるで敵意のない笑みに、毒気を抜かれたような顔で頷くアベルである。
ヒルデブラントは続けて慧馬に目を向けた。
「ところで、そちらの慧馬嬢は、お名前の響きから、騎馬王国の方とお見受けしますが……」
「いかにも。我は、騎馬王国、火の一族の族長代理。火慧馬だ。この度は、我が友ミーア姫の護衛として、はせ参じた」
「ほほう、やはりそうでしたか。であれば、もしや、先日、ミーア姫殿下がお乗りになられていた馬というのは……」
「ああ。我の愛馬だ。名を蛍雷という」
慧馬の答えを聞いて、ヒルデブラントは、嬉しそうな笑みを浮かべた。
「やっぱりそうでしたか。いやぁ、実に素晴らしい馬でした。騎馬王国にはあのような馬がたくさんいるんでしょうか？」
「そうだな。各部族ごとに、一族を代表する馬を持っているものだからな。まぁ、我が蛍雷は月兎馬の中の月兎馬。並びうるものがそこまで多くいるとも思わないが……」
心なしか、慧馬はちょっぴり得意げに胸を張った。

「実は、私も乗馬に力を入れているのです。騎士たるもの、馬との絆を育むのは必須のことですし。庭でも乗馬の訓練ができるようにしているのですよ。ぜひ、手ほどきを願いたいものです」
そんなことを言いつつ、ヒルデブラントは爽やかな笑みを浮かべる。
それを見てミーア、思わず唸る。
――なっ、なんだか、隙がない好青年ぶりですわね。最悪、ヒルデブラントの人柄に問題を見つけてやれば、などと思っておりましたけれど……。なかなか難しそうですわ。
かつてない強敵を前に、恋愛脳天使ミーアの戦いは続く。

第十九話　対面、好青年（後書き）

そういえば、ＣＤドラマの試し聴きができるようになっているみたいです。
興味のある方はぜひ。

第二十話　自分ファーストの帰還と馬糞の天啓

ヒルデブラント・コティヤールについて、ミーアが記憶していることは、ほとんどない。

けれど、たった一つだけ、ミーアの脳裏に残っている記憶があった。

それは、そう……。まだ、ミーアが幼い頃のことだった。

コティヤール侯爵家を訪問したミーアは、たまたまヒルデブラントと顔を合わせた。

その日、遊びに来たミーアをおもてなしするために、伯父であるコティヤール候が用意したものは、大変、美味な特製のケーキだった。その際、ヒルデブラントも同席して、一緒に食べることになったわけだが……。

ふっわふわの、真っ白なケーキを口にした瞬間……五つ年上の、コティヤール少年は、叫んだのだ。

「なんだ！？　このケーキ美味しすぎるっ！」

そして、言い放ったのだ！

「決めたっ！　僕、大人になったらケーキになるっ！」

と。

……それを聞いたミーアは思ったものだった。

「あ、こいつ、ちょっぴりお馬鹿……というか、チョロいやつですわ」

などと。

まぁ、だからと言って、人物的に好きだ嫌いだ、ということもないのだが。ただ漠然と御しやすい奴、という認識を持ったミーアである。

だからこそ、ミーアは困惑していた。

この目の前の好青年を、どうしたものか……と。

――こいつ……実になんともいいやつですわ。
快活な笑みを浮かべるヒルデブラントに、ミーアの笑みが引きつった。
その当時の裏表のない単純さはそのままに、貴族の常識とわきまえとを身につけた……結果として出来上がったものは、非の打ちどころのない好青年である。
――これは、困りましたわね……。ヒルデブラント……すっかり良い人になっておりますわ。これ、もしかして……ルヴィさんにとって、ものすごーく良い縁談なのではないかしら？
政略的にもパートナーとしても、文句のつけようのない相手。
そうだ、あのレッドムーン公ほどの男が、大切な娘のパートナーに選ぶような人物なのだ。ミーア程度が、ちょっとつつけば出て来るような問題があるはずもなく……。
「それはそれとして、ミーア姫殿下にも改めてお礼を申し上げたく思っていたのです。この度は、良き縁談をありがとうございます」
うむむ、っと考え込むミーアの前で、ヒルデブラントは頭を下げた。
「この度、コティヤール侯爵家とレッドムーン公爵家との間に、縁を結んでくださったのは、ミーア姫殿下だとお聞きしました」
「ああ……いえ、わたくしはなにもしておりませんけれど……でも、大丈夫なんですの？」
「はて？　大丈夫とは？」
「知れたことですわ。ルヴィさんは、上昇志向の方。黒月省の上を目指すと言っておられましたけど……、あなたはそれでよろしいんですの？」
基本的に、ティアムーン帝国の貴族の貴婦人というものは、軍務に関わろうなどと、物騒なことは言わないものだ。そのことに、不満はないのか？　と問いかけるミーアであるが……。
「ははは。豪儀なご婦人ですよね。だが、それでこそレッドムーン公爵令嬢ではありませんか？」

なんでもないことのように笑って、ヒルデブラントは言った。
「先ほど、乗馬に力を入れていると申しましたが、私は、馬に乗る女性を美しく感じます。黒月省の上を目指すというルヴィ嬢の勇ましさにも、特に不快は感じませんし、できうる限りの応援をするつもりです。それに、マンサーナ殿は、名馬を求める私に、夕兎を譲るとまで言ってくださった。娘をよろしく頼む、と……そのお気持ちに応えたくもありますので」
そうして、実に模範的な回答を返してくるヒルデブラント。
――かっ、完璧ですわ。この縁談……なにも止める理由がございませんわ！
政略的にも、ヒルデブラントの人柄的にも心情的にも、どーこにも文句のつけようがない。
――ヒルデブラントも乗り気みたいですし……。これでは、どうにもできませんわ。
ミーアは目の前に、高い高い壁を見る。見上げるほどに高い、その壁を乗り越えることは、とても困難で……否、乗り越えるべき理由すら薄くて。
思わず膝を屈してしまいそうになるミーアである。
――ルヴィさんが恋心を諦めさえすれば、すべて上手くいってしまいそうですわね……。
改めて思う。いっそルヴィがバノスに告白してフラれてしまえば、万事上手くいくのだ。
失意のルヴィを励ますヒルデブラント。その構図は、実にしっくりくるし……。
いや、そもそもの話、貴族令嬢が平民の、それも年上の男に恋慕するなど、それ自体がただのわがままなのだ……。ルヴィの恋心は、貴族の常識とはかけ離れたこと。諦めて当然のことで……でも、だけど。
――ふむ、それではやっぱり、面白くないですわね……。
そこまで考えたうえで、ミーアは改めて、原点へと回帰する。

ミーアの原点、すなわち……自分ファーストへと。
結局のところ、ミーアは見たくないのだ。ルヴィが、貴族の常識などと言うつまらないもののために恋を諦めるところを。
ミーアが見たいのは、万難を排した情熱的な恋愛劇なのだ。
――それでこそ、心燃え上がる恋愛劇。それに、やっぱり、わたくしはハッピーエンドが好きですわ。加えて言うなら、わたくしのせいで恋を諦めた者が身内にいるという状況は、心安らかではいられないでしょうし……。
自分ファースト的にも、小心者の心臓的にも、ミーアはルヴィの味方をする必要があるのだ。
――だいたい、情熱的なルヴィさんに常識的なヒルデブラントでは……。
ミーアは、ふと思う。
「……はたして、相応しいと言えるのかしら？」
貴族として極めて常識的で、非の打ちどころのないヒルデブラント。
一方、貴族としての常識をかなぐり捨てても恋心を貫きたいルヴィ。
この二人が結婚することが相応しいこととは思えなかった。二人の価値観が違いすぎるからだ。
情熱の不均等は、不幸を招き……そして。
――わたくしを利するために組まれた縁談が不幸に終わる。もしそんなことになれば、わたくしのせいで、二人が不幸になった、と思われるのではありませんの？
それは、実になんとも嫌な事態である。できるだけ、誰からも恨みを買わず、ダラダラとベッドの上で過ごしたいミーアである。
みんなが自分を好いてくれて、時折、お菓子を持って遊びに来るのがミーアの理想。
できれば、誰とも敵対したくはないのだが……、さて、どうしたものか？　とミーアは首を傾げる。

状況は、淀んだ水たまりのようなもの。今のミーアにはどうにもできそうもなくって……。
そんなミーアがすがるもの……それは、先ほど得た天啓。
――馬……。そうですわ。先ほど思いついた馬を利用して……。
そう、馬を使えという閃き。すなわち、馬糞の天啓である！
「それは……どういう意味でしょうか？」
不意の声。顔を上げると、ヒルデブラントがこちらを見つめていた。
完全無欠な好青年然としていたヒルデブラントの瞳に浮かぶ感情。
それは、微かな怒り。
「私では……かの月兎馬に相応しくないと……？」
「馬……」
思わぬところに登場したキーワード。身を委ねるように、ミーアは頷き……。
「ええ、まぁ……」
次の瞬間、淀んでいた水に、小さな流れが生まれるのを感じた。

第二十一話　ケーキを野菜ケーキにすり替えよ！

「私が、月兎馬に相応しくないと……？」
確認するように、再びの問いかけ。
分厚く着込んだ貴族の常識、その合間からチラリと覗いた顔を、ミーアは見逃さない。
――ああ、これこれ。この顔、懐かしいですわ。なるほど、確かに、ヒルデブラントはこんなやつでしたわね。
ケーキに感動し、ケーキ職人になる……ではなく、ケーキそのものになろうとする……。一途かつ単純明快な男。それこそが、ヒルデブラント・コティヤールという人であった。
そんな彼が今、情熱を傾けるもの……それこそが「馬」だという。
――この情報、なにかに使えそうですわね。
そんな確信に基づいて、ミーアは再び頷いた。
頷きつつ……考え始める。
恋愛脳（スイーツ）が唸りを上げる！
――ヒルデブラントの想いの向かう先は夕兎。良き馬……馬……。馬っ！？
ミーアはカッと目を見開いた。
――そうですわ。ケーキの食べ過ぎを防ぐには、ケーキの代わりの野菜ケーキを用意すること……。想いの方向をケーキから、野菜ケーキへと逸らすことですわ！
甘味脳（スイーツ）が唸りを上げる！！
――ヒルデブラントの想いが『夕兎』、すなわちケーキに向かっているというのなら、その方向をずらして野菜ケーキ……すなわち、代替品へと移せばいい。馬の場合には、それができるのではないかしら？
実のところ、代替品を用意するということは、一度検討したこと

ではあったのだ。
それは、つい先ほど。アンヌに手伝ってもらい、靴を履き替えた時のこと。
「時に、アンヌ……。一つ聞きたいのですけれど、もしも、あなたが誰かの縁談を破談させるとしたら、どんな手を使いますの？」
「破談ですか。うーん……」
アンヌは小さく首を傾げてから……。
「あまりミーアさまに相応しいやり方ではないと思うのですが、殿方に、魅力的な女性をけしかける……とかでしょうか？」
「ああ……ありましたわね。そんなお話が……」
それは先日、アンヌときゃあきゃあ言いながら読んだ恋愛小説のエピソードである。
悪役の少女が意中のイケメン王子を手に入れるべく立てた作戦。イケメン王子と恋仲の主人公に、王子の代替となる男をあてがって、仲を引き裂こうという試みだ。
ちなみに、それを仕掛けた悪役のご令嬢は、最終話で断頭台にかけられたりする。
その顛末を読んだ時に、思わずゾォっとしたミーアである。が……。
――この作戦は、破滅を招きますわ。とても使えませんわね……。
そう確信した。縁談を破綻させるために、誰か適当な女性にヒルデブラントを誘惑させ、望んでもいない縁談へと追いやったら、どんなことになるのか？
一人の女性の人生を犠牲にする作戦など、ラフィーナやシオンが許すはずもなし。まるで、断頭台の刃が落ちる音が、高らかに響いてきそうな話ではないか！
馬糞は踏んでも、断頭台トラップは決して踏みたくないミーアである……いや、馬糞も踏みたくないが。
けれど、アンヌは首を振る。

「あのお話はすごく後味が悪い結末でしたけど……例えば、ヒルデブラントさまに恋している女性を探し出すことができれば……どうでしょうか？」
「ふむ、なるほど。その女性が魅力的な人物で、ヒルデブラントを誘惑してもらえば……ヒルデブラントの側から、ルヴィさんとの縁談を断るということがあるかもしれませんわね」
女性がヒルデブラントに好意を抱いているのであれば、話は別だ。そうなれば、みんな幸せ。ラフィーナもニッコリ、断頭台退散、であろう。
「けれど、それも、ヒルデブラントのことを好きな女性というのがいないことには話になりませんわね。上手く見つかればいいのですけど……」

などと、すぐには使えないかなぁ、と思っていたミーアなのだが……事が馬への情熱となれば話は別だ。
代替品の用意をすることは、恐らく可能なのではないだろうか？
無論、夕兎の代わりの月兎馬を用意しよう、というわけではない。そのように馬を扱うことは、騎馬王国の民にも、友である慧馬、小驪にも失礼。せっかく、いざという時に逃亡に協力してくれそうな彼らの機嫌を損なうのはよろしくない。
といって、慧馬や小驪を結婚相手の候補として紹介するのも、彼女たちを犠牲にする考え方だ。それも違う。そうではなく……。
――利用すべきは、ヒルデブラントの……乗馬への情熱ですわ！
それから、ミーアは静かに顔を上げた。
「ええ……そうですわね。ヒルデブラント。あなたの乗馬の腕前が月兎馬に相応しい物かどうか……大変、疑わしいところですわ」
やや煽り気味に言う。けれど、ヒルデブラントの顔に、怒りの色が浮かびそうになったところで、ミーアは小さく微笑んでみせた。
まるで、その怒りをいなすように……。
ヒルデブラントは、別に、敵ではないし、これは別に敵との戦い

ではない。
だからこそ、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべて、言う。
「なにしろ、月兎馬、夕兎は、どこに出しても恥ずかしくない名馬ですわ。あなた、実際にあの馬を見たことがございますの？　わたくしは、速駆けを競い合ったことがございますわよ？」
「なんと、そうなのですか？」
「ええ。セントノエルの乗馬大会でね。あれは、見事な馬ですわ。いかにレッドムーン家といえども、あれ以上の馬はいないでしょう。だからこそ、娘の縁談の相手に、ということにしたのでしょうけれど、あの馬に釣り合うとなると、なかなか大変なことですわよ？」
頬に手を当てて、ミーアは、はぁっとため息を吐いた。わざとらしく、演技めいた仕草で。
「きっと、マンサーナ殿も心配しているのではないかしら？　馬をプレゼントしたはいいけれど、はたして、しっかりと乗りこなしてくれるだろうか、とね。それに、わかっておりますわよね？　この縁談、あなたはわたくしの身内の者として扱われるわけですけれど……。あなたの失態は、わたくしの失態になりますのよ？」
「それは確かにその通りですが……。では、どうしろというのですか？」
怪訝そうな顔をするヒルデブラントに、ミーアは微笑みを浮かべた。
「簡単なこと。あなたの乗馬の腕前をマンサーナ殿に見せて差し上げればよろしいのですわ。夕兎を借りて、競争という形で、ね」
それで、ようやく、ヒルデブラントの顔に理解の色が広がる。
そう、彼はこう思ったのだ。
ミーアが言っているのは、半ば冗談。その提案の主旨は、つまり、縁談を祝うための余興の提案なのだ、と。
「なるほど。それは楽しそうだ。しかし、夕兎に太刀打ちできる馬がいなければ、意味がないのでは？」
その言に、ミーアはニンマリする。

そう、お題目に過ぎないとはいえ、夕兎に相応しい実力を持っていることを、競馬で証明するためには、良き対戦相手が必要となるわけで……。ゆえに……。
「そうですわね。では……慧馬さんにお願いするというのはどうかしら？」
突然、話を振られた慧馬は、きょとん、と首を傾げる。
「我がか？」
「ええ。慧馬さんと蛍雷……。あなたたち以外に夕兎に対抗できる者はおりませんわ」
そう言って、ミーアは静かに慧馬の肩に手を置いた。
「いや、しかし、それならば別にミーア姫が乗っても……」
などと言う慧馬だが……それでは不味いのだ。
――まぁ、実際のところ、ヒルデブラントよりもわたくしのほうが、上手く馬を乗りこなせるとは思いますけれど……。
ちょっぴり高慢なことを考えつつも、それではダメなのだ、と首を振る。
ヒルデブラントを蹴散らすのは、騎馬王国の者でなければならない。騎馬王国の民の、圧倒的な乗馬技術を……ヒルデブラントに魅せ付けなければ、意味がないのだ！　ゆえに、
「慧馬さん、運動不足だと言っていたではありませんの？　それに……いつまでも、帝国に負け続けていてよろしいのかしら？」
ミーアは、あえて、挑発的なことを言った。
「なに……？」
眉をひそめる慧馬に、畳みかけるように、ミーアは言った。
「わたくしは、復讐戦の機会を与えておりますのよ？　騎馬王国の令嬢たる小驪さんは、帝国の姫であるわたくしに負けた。そして、あなたは今、そのわたくしの従兄弟のヒルデブラントと勝負する機会を得ておりますのよ？　これは、小驪さんの友である慧馬さんが、帝国貴族に一矢報いる好機ではありませんの？」
「……むっ」

そう言われ、慧馬は押し黙る。けれど、すぐに、獰猛な笑みを浮かべた。
「なるほど。確かに、その通りであった。我としたことが、遠き異国の地で気が小さくなっていたらしい。復讐戦などと言われずとも、疾き馬と競い合うは、騎馬王国の民の誉れであったな」
そうして、慧馬が納得したのを確認してから、ミーアは改めてヒルデブラントに言った。
「ということで、どうかしら？」
話を振られたヒルデブラントは……。
「なるほど。それは、とても面白そうかもしれませんね」
ニヤリ、と勝気な笑みを浮かべた。

第二十二話　小麦と競馬

「ふむ、これは、上々の結果だったのではないかしら……？」
ヒルデブラントとの対談を終え、ミーアは、ほっくほく顔で白月宮殿に戻ってきた。
「あの単純なヒルデブラントですし、きっと、騎馬王国の乗馬技術に心を奪われるはずですわ」
もしそうなれば、騎馬王国の者を指導員に呼んで……などという、中途半端なことはしないだろう。彼は、美味しいケーキに出会った時にケーキになりたい男、ヒルデブラントなのだ。
当然、騎馬王国の素晴らしい技術を目の当たりにすれば……。
「騎馬王国の民になりたいと思うはずですわ」
もちろん、実際に彼が騎馬王国の民になるとは思わない。
――騎馬王国で、ヒルデブラントが魅力的な女性と出会えれば万事解決という感じはしますけれど、まぁ、実際には、その乗馬術を身に着けるために、数年間、留学をするような形になるかしら？
それは、ただの時間稼ぎかもしれないが……この際は、それでも構わない。
縁談を先延ばしにし、その間に、ルヴィとバノスの婚儀を進めてしまえば良いのだ。
「騎馬王国に行くのならば、その前にせめて婚約を……などと言う話になったら面倒ですけど……そこは、上手いこと言いくるめればいいだけのこと……。ふっふふふ、チョロいもんですわ」
そうして、ミーアは、わるーい笑みを浮かべる。
その顔を陰で見ていたパティが、ゴクリっと喉を鳴らしていたりしたのだが……もちろん、ミーアは気付いていないのだった。
そうして翌日、早速、ルードヴィッヒを呼んで相談したのだが…

…。
「この時期に……乗馬大会、ですか？」
顔を合わせて早々にそんなことを言い出したミーアに、ルードヴィッヒは怪訝そうな顔をした。
「失礼ですが、どの程度の規模のものを想定されておられますか？」
「そうですわね。大会というほど大げさなものではありませんわ。身内のお遊びみたいなもので……ただ……」
ミーア、ここで黙考する。
――形としては、レッドムーン公爵をお呼びしないといけませんし……当然、お父さまも見に来られるかしら？　となると、それなりに護衛は必要ですわね。ふむ……。
ミーア、小さく頷き、
「レッドムーン公爵、それに、恐らくはお父さまも観覧されると思いますわ」
「皇帝陛下まで……。そう、ですか……」
ルードヴィッヒの顔が真剣みを増した。
ミーア、その顔を見て……ちょっぴり、まずいかなぁ？　と思い始める。
――ふむ、仮にお父さまが、そうしたイベントごとに来られるとなると、警備は厳重にする必要がございますわ。目下のところ、わたくしが気軽に動かせる兵力は、皇女専属近衛隊のみ。けれど、彼らは、ここ最近、食糧輸送の護衛もしていただいておりますし……。これ以上、負担を増やすな、とルードヴィッヒに怒られてしまうかもしれませんわ。
かつての、クソメガネのお小言が脳裏を過ぎってしまうミーアである。なので、ちょっぴり慌てつつ、付け加える。
「もちろん、警備体制を整える必要がございますけれど、もしも、お父さまが参加される場合には、近衛隊を動員したらよろしいのではないかしら？」
それから、ミーアは、悪戯っぽい笑みを浮かべてみせて、

「皇女専属近衛隊のみなさんも、なにもせずというわけにはいかないでしょうけれど、ある程度、肩の力を抜いて……。ちょっとした息抜きぐらいに思ってもらえればいいのではないかしら？」
そう、あくまでも息抜きの提案。彼らの心の重圧を慮ってのことですよぅ、っとアピールを欠かさないミーアである。
「息抜き、ですか。休息については考慮しているつもりでしたが、なるほど。それは……盲点でした」
ルードヴィッヒは、わずかに目を見張りつつ、頷いた。
「わかりました。それでは、そのように取り計らいましょう」
眼鏡の位置を直しつつ、ルードヴィッヒは静かに言うのだった。

ミーアからの命令を受けて、ルードヴィッヒは動き出した。
乗馬の場所と警備の手配を終え、一息吐いたところで、タイミングよくディオンが訪ねてきた。
「ははは、なるほど。さすがは、姫さんだ。なかなか、簡にして要を得ているな」
ルードヴィッヒの話を聞いたディオンは笑みを浮かべる。
「しっかりと食べ、休息をとり、適度に肩の力を抜く。百人隊の連中は、その辺りのことは心得てるだろうが、実戦慣れしてない近衛やレッドムーン公の護衛なんかは、その辺りのことが下手かもしれない」
そんなディオンの様子を見て、ルードヴィッヒは穏やかな声で言った。
「食と楽……。その二つを与える者こそが良き統治者の指標である、と、我が師ガルヴは言った。さしずめ『小麦と競馬』と言ったところか。ミーア姫殿下が統治論を書いたら、一つの標語になりそうだ」
人は、ただ食べさせているだけでは健康たり得ない。ただ睡眠を確保するだけでも不足だ。
子どもは遊ぶもの。大人とてそれは同じ。人には娯楽という、楽しく、肩の力を抜く時間も必要なのだ。

今度、仲間たちに酒飲み話として聞かせてやろう、などとメモしておくルードヴィッヒである。それから、彼は眼鏡を指で押し上げて……。

「まぁ……もっとも、それだけではないのだろうな。帝国の、軍務に強いレッドムーン公と皇帝陛下をお招きする……。その意味は……」

「騎兵の強化……か。実際、国内の輸送部隊の護衛だけでも、なかなかの手間だが……このうえ国外まで視野に入れたら、手が足りない」

「ミーアさまには騎馬王国にも伝手がある。いずれ、あちらの力を頼ることになるとは思っていたが……。あるいは、今回のことはそのための下準備……なのかもしれないな」

「まぁ、いずれにせよ、僕は、姫さんのそばを離れないようにしておこうか。例の狼使いを退けたという敵も気にはなるしね」

かくて、忠臣たちの思惑と期待を載せて、乗馬大会の準備は進んでいくのだった。

第二十二話　小麦と競馬（後書き）

ドラマＣＤ試し聞き第二弾が公開されています。
ご興味のある方はぜひ。

第二十三話　ちょっぴり番外編、その頃、皇女専属近衛隊では……

「ふぅ、やれやれ……」

その日の夕方近く。皇女専属近衛隊の詰め所に、遠征に行っていた一部隊が戻ってきた。

皇女専属近衛隊は、現在、十人を一つの部隊にして活動していた。

食糧の輸送に際しては、その輸送量によって、一ないし二部隊の編成で護衛に当たっている。

現在、国内の治安は、そこまで悪化していない。ゆえに、精兵たる彼らが十人も集まれば、まず問題は起こらなかった。

精兵……そう、皇女専属近衛隊は、すでに精兵と呼んでも差し支えがないほど、練度を高めていた。

実戦慣れしていなかった近衛隊出身の者たちは、編入された旧ディオン隊によって鍛えられた。代わりに、旧ディオン隊の者たちは、近衛隊出身の者たちから礼節を教わり、皇女の軍としてのわきまえを備えるようになった。

最初は互いに少なからぬ反発があった両部隊だったが、バノスのとりなしと、なにより皇女ミーアの盾であるという誇りが、彼らの結束を強めた。

そこに加わったのが、レッドムーン公爵家から派遣された女性兵士たちだった。力に劣る彼女たちだが、それでも、その剣の技はみな素晴らしく、それ以上に弓の腕前が実に見事だった。どうやら、レッドムーン家では、弓の名手たるルールー族の者を教導者として迎え入れているらしい。

かくて、皇女専属近衛隊は、腕利きの弓兵をも揃えたバランスの良い部隊となっていた。

たとえ十人と言えど、そこらの盗賊にどうこうできる戦力では、決してなかった。

だからなのかはわからないが、輸送隊が襲われることは今まで一度もなく、今回も誰一人欠けることなく、帰還を果たしたのであった。

そんな部隊の一員たる年若き兵、エルンストは、厩舎に馬を戻したところで、ため息を吐いた。

帝都に帰るまでが遠征。帝国の叡智、ミーア姫の兵たる自覚を持つことを心掛けよ。

先輩兵士から言われた言葉を律儀に胸の中で反芻しながら、今回の遠征を振り返る。

「うん……今回もしっかりやれただろう」

護衛のみならず、相手方の貴族の私兵とのやり取り。道中に立ち寄った村での立ち居振る舞いなど、一つ一つ思い出しながら、満足げに頷く。

と、そこへ……。

「お疲れさま。なにか、問題は？」

話しかけてくる者がいた。凛と澄んだ声、そちらに視線を向けると、そこには、妙齢の女性の姿があった。

「ああ、これは、セリス殿」

彼女は、レッドムーン家から派遣された私兵たちのリーダー格の女性だった。

この皇女専属近衛隊への編入時期が近かったから、比較的よく話をする間柄だった。

生真面目な態度と、職務に対する真摯さに、エルンストは敬意と好感を持っていた。命を懸けた戦場の仕事だ。背中を預けるに値する、信用のおける相手というのは、それだけでも好意の対象になり得るのだ。

わずかに笑みを浮かべ、エルンストは姿勢を正した。

「特に問題はなかったよ。警戒のし過ぎじゃないか、なんて言っている者もいるぐらいだ」

それを聞き、セリスがわずかに顔をしかめる。
「あなたも同意見か？」
問われ、エルンストは静かに首を振る。
「いや。食糧が不足すれば治安は簡単に悪化する。食糧の輸送隊を襲おうという者たちも出て来るかもしれない」
そして、輸送隊が襲われれば、食糧の供給が滞り、新たな飢饉が起こり、治安はさらに悪くなっていく。
負の連鎖が始まる。
エルンストが肌で感じる現状は、決して楽観視できるものではなかった。
大きな岩が山の上から転がり始めれば、それが落ちるのを止めることは困難。ゆえにこそ、岩が転がる前から、しっかりと押さえておく必要があるのだ。
「警戒しすぎぐらいのほうが、労力が少なくて済む、ということはあるからなぁ……」
彼の言葉に、セリスは深々と頷き。
「私も同感だ。そして恐らく、ミーア姫殿下もそうなのでしょう」
それから、ふと難しい顔をして腕組みした。
「ただ、わからないことが一つあるのだ。実は、過日、ここにいらっしゃったのだが……」
「ここって……この詰め所にミーア姫殿下が？」
目を丸くして驚くエルンストに、セリスが頷いてみせた。
「それは、惜しいことをしたな……。俺が、ここに召集された理由をお聞きしたかったんだけど……。ところで、ミーア姫殿下はなにをしに？」
「視察と労いを兼ねて、と言ったところかな。あの方は、平民にも、とても温和な態度で接してくださる方だから」
訪問の時の様子を思い出すように穏やかな笑みを浮かべるセリスである。
「まぁ、それは良いのだが……その後で、あの方の右腕たるルード

ヴィッヒ殿がいらしてな。ミーア姫殿下の命により乗馬大会を開くと言い出されて……。警備の相談をされて行かれた」
「じょ、乗馬大会……？　それはまた……。確かに……。こんな時期にそんなことをなさろうというのは、理由がわからないな」
よりによって、この非常時に乗馬大会とは、暢気すぎるのではないか、と……エルンストは首を傾げる。
「いったい、何を考えておられるのか……」
などと、二人で顔を見合わせていると……。
「わからないか？」
話を聞いていたのか、厩舎で馬の世話をしていた男が話しかけてきた。
皇女専属近衛隊の馬の世話を担う馬番、ゴルカである。ちなみに、ミーアの騎馬王国行きにも同行した男である。
普段、無口で、気難しげな顔をしていることの多い彼であるが、今は、微かに笑みを浮かべていた。
「さっき、セリス殿が言っていた通りだ。ミーア姫殿下は、我々を労ってくださろうとしているのだ。あの方は、そういう方だ」
「労う？　しかし、仮に乗馬大会を開くとなれば、我々も警備に駆り出されるのでは？」
それでは労働量が増えるだけではないか？　と首を傾げるエルンストに、ゴルカは小さく首を振った。
「体を休めるばかりが休養ではないということだ。肉体の疲れに比して、心の疲れというのは、なかなか回復しないものだからな」
皇女専属近衛隊に派遣された文官は、非常に優秀な人物だった。
兵の疲労が増えれば、仕事上のミスも増えるということを、きちんと熟知していた。
それゆえ、休息をきちんと取れるように、無理のない予定を組んでいたのだが……。
けれど、帝国が依然として危機的状況に置かれていることに変わりはない。そのことを嫌というほど知る隊員たちには、心が休まる

余裕がない。
「ミーア姫殿下は、乗馬大会という娯楽を提供することによって、我々の心を回復させようとされているのだろう。特に、エルンスト、お前のように、いつでも肩に力を入れているような堅物のな」
ゴルカはエルンストの肩をポンっと叩き、
「お前は、騎馬王国には同行しなかったから知らないだろうが……姫殿下の馬合わせ、あれは、実にお見事な勝負だった。馬を愛する者の中で、あの光景に興奮しない者はいなかっただろうな」
そうして、ゴルカは懐かしげに瞳を細めて言った。
「今回の乗馬大会、おそらくミーア姫殿下ご自身も出られるのだろう。またあの騎乗が見られるのは楽しみで仕方ないな」
……知らず知らずのうちに、ミーアに対する期待が高まっているわけだが……。
まぁ、いつものことであった。

第二十三話　ちょっぴり番外編、その頃、皇女専属近衛隊では……（後書き）

書籍番外編のキャラもそれぞれの場所で頑張っております。

第二十四話　ミーア姫、エンターテイナーの精神に目覚めかける！

その日、ミーアは穏やかな朝食の時間を迎えていた。
料理長の料理に舌鼓を打ちつつ、パティたち三人の子どもたちｗｉｔｈベルに「好き嫌いはダメよ？」なーんて、滔々と言って聞かせる。偉そうにお説教して、ちょっぴり良い気分になって……実になんとも充実した朝の時間を過ごしていたのだが……。
自室に戻ったミーアをルードヴィッヒと、皇女専属近衛隊の馬番、ゴルカが訪ねてきた。
「あら？　ルードヴィッヒにゴルカさん、いったいどうしましたの？」
ルードヴィッヒはまだしも、さて、ゴルカはなんの用だろうか？
などと首を傾げつつ、紅茶の香りを楽しんでいると……。
恭しく頭を下げたゴルカが、こんなことを聞いてきた。
「ミーア姫殿下は、どの馬にお乗りになりますか？」
「はて、わたくし……ですの？」
ミーア、目をぱちくり。一瞬、状況が理解できずに戸惑う。
なぜ、自分が乗馬大会に出ることになっているのか？
そもそもの話、ミーアが考えていたのは、ヒルデブラントに騎馬王国の技術を見せつけること。だから、ヒルデブラントと慧馬を対決させさえすればいいわけで。ミーアが出馬するなどと言う話は、どこにもなかったはず。なのに、なぜ……。
しばしの検討。その後、ミーアはすぐに悟る。
「ああ……しかし、なるほど。確かに、わたくしが出ないわけにはいかないかもしれませんわね」
と。
理由はとても簡単だ。皇帝マティアスが参加するからだ。
あの父のことだ。きっと、乗馬大会を開くならば、ミーアの乗馬

を見たいと言うに違いない。正直、ミーア的に言えば、別に父に見に来てもらわずとも構わないのだが……。しかし、この帝都でそのような会を催すならば、そして、そこにミーアが関わっていると知られたなら……、きっと参加したいと言い出すに違いない。レッドムーン公爵を呼ばなければならないのであれば、なおのこと。なぜ、レッドムーン公だけが参加できるんだ、ずるい！　などとゴネかねないではないか。

となれば、ミーアも出場しないわけにはいかない。

――それによくよく考えれば、ヒルデブラントと慧馬さんの対決だけでは、面白くありませんわね……。

せっかく、レッドムーン公爵も呼ぶのだ。どうせならば、彼に楽しんでもらいたいと思うミーアである。

なにしろ、レッドムーン公マンサーナは、今回のことで素直にミーアへの支持を表明しようとしてくれた。いわば味方で支援者で恩人だ。その彼の想いを無視するようなことをしようというのだから……こう、なんとなく罪悪感を覚えてしまうミーアである。

だからこそ、せっかく来てもらうなら、きちんと楽しめるものを見てもらいたいと思うミーアなのであった。

「そうですわね。それならば……わたくしだけではなく、レッドムーン家の私兵と皇女専属近衛隊からも出場者を募るのはどうかしら？　さすがに公募というのは、警備の観点からできないでしょうけれど、良兵揃いのレッドムーン家ならば、良き乗り手も、きっといることでしょう」

腕組みしつつ言ってから、ミーアはポコンっと手を叩いた。

「あ、そうですわ！　どうせですから、東西の陣営に分けて、勝負するという形にしてはいかがかしら？」

「勝負ですか？」

「ええ。そうですわ」

そう言いながら、ミーアは思い出していた。

つい先日、明るみに出て潰えてしまった自らの悪だくみ。スイー

ツ十本勝負を……。
今年のペルージャンと帝国との親善パーティーは両国のお菓子を順々に出して、食べ比べるのはどうか……？　などと、考えていたミーアだったが……訪ねてきたタチアナに、うっかりそのメモを見られてしまい、頓挫してしまったのだ。
「ミーアさま……さすがに、こんなに食べては……お体に障りますから……」
などと、半ばマジなトーンで言われてしまったのだ。実になんとも、ロクでもない話であった！
まぁ、それはともかく……その計画を練っている時にミーアは思ったのだ。
「一品ずつ出していき、勝負していく……これは、なかなかに盛り上がりますわ」
などと……。
かつての計画を再利用する形で、ミーアは提案を続ける。
「応援する陣営を決めておけば盛り上がりますし……。勝負の種目もいろいろなものがあると楽しいかもしれませんわね。ただ速さを競うだけでなく……もっと乗馬の技術を見せられるものも入れて……」
そうして、ヒルデブラントの乗馬情熱を、より一層、燃え上がらせてやることが肝要だ。
「わたくしは、まぁ、最後のほうにチョロッと出られれば構いませんわ。レースである必要もないのではないかしら？」
できれば、馬に乗って登場するだけで済ませたいミーアである。なにしろ、レースって疲れるし……。それに、ミーアが負けてしまえば、父が黙っていないだろう。対戦相手を守るため、ミーアは目いっぱい父をなだめなければならない。
それは、とても疲れそうだ。
まぁ、相手が空気を読んでわざと負けてくれるかもしれないが、それはそれで微妙な気分になりそうだし……。

「なるほど。速駆け以外の種目も……。では、そうですね。日ごろの乗馬の訓練でやっているものの中で生かせるようなものがないか、検討してみます」
ルードヴィッヒは静かに一度頷いた。
一方で、ゴルカは、
「では、ミーアさまは、また東風にお乗りになるということでよろしいでしょうか？」
「ええ、ありがとう。お願いいたしますわ」
静かに頷きつつ、ふと、ミーアの脳裏に乗馬用の服のことが過ぎった。
服というか、靴のことが……。
例のアレを踏んでしまった靴は、洗って綺麗にしてあった。なので、なにも問題はないはずだったが……。
――アベルがプレゼントしてくれると言ってましたし、できれば、新しい綺麗な靴で臨みたいものですけど……。でも、わたくしのほうから催促するのも、はしたないかしら……ううん……。
そんな風に悩むミーアを……静かに見守っている者がいた。
ひそやかに、こっそりと……ミーアのために動き出した者、それは、勝手に動くと定評のあるミーアの片腕の専属メイドで……。

第二十五話　恋愛脳姫ミーア、熱弁をふるってしまう！

さて、ルードヴィッヒとゴルカが部屋を出て行ったところで、ミーアは、小さくため息を吐いた。

「さて……なんだか、面倒なことになってしまったようですけど……まぁ、馬に乗って出ればいいだけですし、そこまででもないか……あら？　そう言えば、アンヌの姿がありませんわね。どうかしたのかしら？」

これはもしかすると、お茶菓子の替えでも用意しに行ってくれたのかなぁ？　などと甘いことを考えるミーアである。

直後、コンコンッとノックの音。そうして入ってきたのは、

「ああ、ミーア姫殿下。こちらでしたか」

血相を変えたルヴィだった。

「あら、ルヴィさん。どうかなさいましたの？」

「いえ、実は、先ほどヒルデブラント殿が来て、父と話をしていかれたのですが……」

勢い込んで話し出すルヴィに、ミーアは思わず苦笑する。

「ああ、さすがに早いですわね。ヒルデブラント。もう、動き出しておりますのね」

「あの、これは……なにがどうなっているのでしょうか？」

困惑した様子のルヴィに、ミーアは穏やかに微笑みかける。

「心配はありませんわ。ええ。すべて計画通りですから」

自信満々に頷いて、それから少しばかり考え込む。

――ふむ……まぁ、確かにすべて計画通りですし、今回のことはなんとかして差し上げますけれど……毎回、わたくしを頼られるのも少し困りますわね。

ふと、そんなことも思ってしまう。

それは、ルヴィの成長を期待して……というわけではない。

もちろん、ミーアがサボっていたいから、ダラダラしていたいからである――かというと、実は、それも違う。
では、ミーアがなにを考えていたのか？　というと……。
――やはり、こちらで完全に道（ルート）を定めてしまうのは、面白くありませんわ。登場人物は、読者や作者の思わぬ方向に行ってくれなくては……。
そう、ミーアは……恋愛小説の良き読者さんなのだ！
ミーアは、帝国有数の大貴族の令嬢と平民の年の差恋愛劇を、心から楽しみにしているのだ。
――ルヴィさんがしたいことをお手伝いすることはやぶさかではありませんが、わたくしの思い通りに動かすのは、やっぱり違いますわ。今回の件は、ルヴィさんに、自発的に動いていただくための、良ききっかけになるやもしれませんわね。
うんうん、っと頷いてから、ミーアはちょっぴり真面目な顔を作る。
「ただ、そうですわね……。わたくしがしようとしていることは、あくまでも時間稼ぎに過ぎない、ということは、忘れないでいただきたいですわ」
「というと……？」
深刻そうな顔をするルヴィに、ミーアはできるだけ優しい口調で言う。
「知れたこと。あなたはレッドムーン公爵家の令嬢ですわ。このまま、永遠に縁談から逃げ続けるわけにはいかないでしょう？」
言われ、思わずハッとした顔をするルヴィである。
「さらに付け加えるならば、この度の縁談は、あなたにとってとても良いものですわ。今後、これ以上の相手はいない、と、そう考えてもいいぐらいにね。そのぐらいに、ヒルデブラントとの縁談は、条件がいいですわ」
人物評に少々の誇張を施してから、ミーアは静かにルヴィの目を見つめた。

「それを破談にするというのですから、あなたが大切に抱えている想いを、きちんと成就させなければ意味がないですわ」
グッと力強く拳を握りしめ、熱弁を振るう。
ミーアの恋愛脳は今まさに活性化しきっており……、その言葉には熱があった。
そんな熱い熱い演説の途中で、ミーア、ふと我に返る。
――あら？　これ、ちょっぴり言いすぎかも……。
などと……。
調子に乗って、乗りに乗って……全力全開でルヴィの背中を押してしまったミーアであるが……。さりとて今さら後悔しても仕方ない。こういうことは、自信満々で言い切るのが大事なのだ。ゆえに、ミーアは、あえてブレーキをかけず突き進む。
ルヴィの目をジッと見つめて……。
「あなたは、覚悟を決める必要がありますわ」
「覚悟……」
ぽかん、とした顔をしていたルヴィだったが、すぐに表情を引き締める。
「それは……あの時のような覚悟ですか？　あの、乗馬対決の時の……」
ゴクリ、と喉を鳴らすルヴィ。対してミーアは頬に手を当て、首を傾げ……。
「乗馬対決……ああ……ええ。まぁ……そうですわね。あんな感じですわ……」
なぁんて、一応頷きつつ……。
――あの時は、ルヴィさん、自分の大切なもの、剣を懸けて戦ったんでしたわね、確か……。
レッドムーン家で生まれ育ったルヴィにとって、剣は自らの命に等しいほどに大切なものだったはず。それを懸けた時と同じぐらいの覚悟で臨む、とルヴィは言っているのだ。
ミーアは静かに視線を落とし、ジッと自らの手のひらを見て、

――やはり、背中を押す力が強すぎたかしら……。
「ミーアさま……？」
「……ま、まぁ、いずれにせよ、ヒルデブラントのことは、わたくしに任せてもらっても構いませんわ。その代わり、あなたは、きちんと自分の恋を成就させるよう、歩みださなければいけませんわ」
それから、ミーアは表情を和らげ……。
「その……小さな一歩でも構いませんわよ？　無理して大きく踏み出す必要はありませんわ」
などと、微調整を入れておく。
気合入れすぎなくていいですよー、ぐらいのつもりで言ったのだが……。
ルヴィは、晴れやかな、凛とした顔でミーアを見つめて、
「ありがとうございます。ミーアさま。私、少し吹っ切れました」
どうやら、ナニカが吹っ切れてしまったらしい！
若干、不安を覚えつつも……これ以上引っ張ることなく、ミーアは実務的なことを詰めておくことにした。
「それで、後でルードヴィッヒから話が行くと思いますけど、ヒルデブラントと慧馬さんの勝負だけでなく、皇女専属近衛隊とレッドムーン公爵家の私兵団から、馬の乗り手を何人か出したいと考えているんですの。詳しいことはこちらに……」
言いつつ、取り出したのは一枚の書類……。つい先ほど、ルードヴィッヒに作ってもらった乗馬大会の計画書だった！
それを、さも自分が作りましたと言わんばかりの様子で手渡すミーアである。
「なるほど。それでしたら、むしろ立候補者を募ったほうが士気が上がるかもしれませんね。あとは、乗馬だけでなく、剣術や弓術、格闘術を交えた複合競技も良いかもしれません。戦場で必要となるのは乗馬術だけではありませんから……」
などとルヴィの考えに「いいね！」と頷くこと数度……。やがて、話が一段落し、ルヴィが退室したところで、今度は入れ替わりにア

ンヌが戻ってきた。
「あら？　アンヌ、今までどこに……あら？」
そこで、ミーアはかっくーんと首を傾げた。アンヌの後ろに控えていた人物を見て……。
「やあ、ミーア」
アンヌのすぐ後ろには、爽やかな笑みを浮かべる、アベルが立っていたのだった。

第二十六話　慧馬、くーきを読む

「ご機嫌よう、アベル。朝食はもうお済みになりまして？」
「ああ。少し前にね。ベル嬢たちが誘いに来て……」
と言ってから、アベルは苦笑いを浮かべた。
「いや、孫娘にお嬢さん付けはおかしいか。なかなか、呼び方が難しいな。まぁ、それは良いのだけど、それよりミーア。例のヒルデブラント殿と慧馬嬢との乗馬対決に、君も出ると聞いたんだが、本当なのかい？」
「ええ、そうなんですの。例のヒルデブラントと慧馬さんの速駆け勝負だけしていただくつもりでしたけど、なんだか話が大きくなってしまって……。わたくしも最後のほうに少しだけ出馬する予定ですわ」
「そうか。そういうことなら、急いで約束の乗馬用の靴をプレゼントしなければならないな」
朗らかに笑いながら、アベルは言った。それを聞いて、ミーアは、思わず、自らの忠臣アンヌのほうに目を向けた。
――あら、もしや、アンヌ……これを見越してアベルに教えましたのね？
っと、目で問いかけると……アンヌは素知らぬ顔で、目を逸らした。
まるで、私はなにも知りませんよー？　とでも言っているかのような顔で……。
――ふふふ、別のメイドがこんな顔をする時は、なにかよからぬことを企んでいる時ですけれど……。アンヌの場合には、よき企みを隠そうとする時ですわね。
“ありがとう”と口の動きだけで伝えてから、ミーアは改めてアベルのほうに目を向けた。

「しかし、レムノ王国の職人に頼もうと思っていたんだが、どうしたものか……」
アベルは、悩ましげな顔をしてから、
「帝国の、腕の良い職人がいれば、紹介してもらいたいのだが……」
「うーん……。そう、ですわね……」
ミーアは、小さく首を傾げる。
基本的に、ミーアは帝国皇女である……いや、まぁ、応用的に見ても帝国皇女であることは間違いないのだが、時折、確認しておかないと忘れられがちな事実なので、あえて、ここで強調しておきたい。
ミーアは、帝国の、皇女なのである！
ということで、ともかく、良いご身分なのだ、ミーアは。
だから、ドレスやら靴やらを、いちいち町に出て買いに行くなどということは、基本的にしない。城に職人や商人を呼びつけ、オーダーメイドで作らせるのだ。
しかし……。
――城に呼びつけた職人に作らせて、そのお金を払ってもらってプレゼントというのは、ちょっぴり面白くないですわね。
セントノエルにおいて、アンヌと一緒にお店を回った経験、さらに、コティヤール領で素敵な布を求めてショッピングをした思い出が、ミーアの脳裏を過ぎる。
お店の商品を見て回るのは、とっても楽しいのだ。
特に、ちょっぴり気になる男の子と一緒に、となれば、なおのことである。憧れシチュエーションなのである！
皇女の身分を隠し、街中を意中の殿方と歩く。広場でデートし、カフェでお茶をし、嘘を吐くと噛みつかれると噂の真実の聖女像の前で、キャッキャとするのは、ミーアの憧れシチュエーションなのである！！
ということで……ミーアは、アベルにおねだりすることにした。
「せっかくですし、デートがてら少し町を歩きたいですわね。アン

ヌ、申し訳ないのですけど、誰か、近衛隊の者にお願いしてきてもらえるかしら？」
　ニッコニコ顔で、ミーア即決。そうと決まれば、護衛の手配をお願いすべく、即行動。
「かしこまりました、ミーアさま！」
　一方で、アンヌの行動も迅速を極めた。デートと聞いて、俄然、鼻息が荒くなったアンヌである。疾風のごとく部屋から出て行ったアンヌを見送り……待つことしばし。
　やってきたのは、
「ミーア姫。聞いたぞ。これから、町に出るそうだな」
　火慧馬だった。
「あら？　慧馬さん、どうして……」
　不思議そうに首を傾げるミーアに、慧馬はしたり顔で言った。
「先ほど、アンヌが話しているのを立ち聞きしたのだ」
　堂々と胸を張り、立ち聞きを告白する慧馬。そんな彼女は、騎馬王国の衣服に身を包み、キリリと引き締まった表情をしていた。
「町には、あの燻狼や兄上の仇が潜んでいるかもしれない。ここは、ぜひ、我も護衛として共に……」
　などと、気合満々に言い出す慧馬だったが……。
「やぁ、聞きましたよ、ミーア姫殿下。お出かけだそうで」
　突如、聞こえた声にビクンっと飛び上がった。
「おや、これは、アベル王子も、お久しぶりです。それに、火の一族の慧馬嬢だったかな？」
　ニッコニコ顔で現れた男、それは帝国最強の騎士、ディオン・アライアだった。
「あら、ディオンさん。なにか御用かしら？」
　首を傾げるミーアに、ディオンは肩をすくめた。
「いえね。皇女専属近衛隊の連中が忙しそうにしていまして。そういうことなら、今回の護衛は僕が担当しようかな、と思いましてね……」

「あら、そうなんですのね……ふふふ、確かに、あなたが護衛に来てくれれば、怖いものなしですわね」
などと笑みを浮かべるミーアである。
かつては、ミーアにとって恐怖の対象であったディオンではあるのだが、幾度かの経験が、ミーアの見方を少しだけ変えていた。すなわち、
――よくよく考えれば、いかにディオンさんと言えど、なんの前兆もなく唐突に切りつけてくるような真似はしないはず。急には刃が降ってこない断頭台と同じですわ。大切なことは、その兆候を見逃さないこと。とりあえず、ディオンさんが『誰でもいいから切り倒したい気分』みたいな顔をしているのを見逃さないのが肝要ですわ。
ミーア、ジッとディオンの顔を見て……。
――うん、なんか、ご機嫌っぽいですし、今は大丈夫っぽいですわ。
そう判断する。ちなみに、その判断にはなんの根拠もない。
一方で慧馬はというと……突如、出現したディオン・アライアを前に、一切表情を変えないまま、すすすっと後退。
「……ああ、そうだった。よくよく考えれば、我は速駆けの準備をしなければならないのだった。うん、護衛は、ディオン・アライアがいれば問題ないだろう。うんうん」
ディオン・アライアの気配（くうき）を読んで、そそくさと退散していく慧馬であった。

第二十七話　皇女ミーアは〝普通〟を愛す

目立たないように、地味な服に着替えたミーアとアベルは早速、町へと繰り出した。
お付きの者はアンヌとディオンのみである。
「ふふふ、それにしても、帝都はいつでも変わりませんわね。賑やかで、活気があって」
道行く人々を眺めながら、ミーアは言った。
馬車から見る風景とは違って、こうして直接、町を歩くと、そこに吹く柔らかな風を感じることができた。
町には、その時々にいろいろな風が吹く。
祭りの熱気を乗せた風、人通りの少ない冬道の冷たく澄んだ風、革命期のピリピリと肌を刺すような風……。
今、帝都に吹く風は、どこか忙しなく、されど明るさを失わない風だった。
ミーアが慣れ親しんだ帝都の匂いだった。
そのことが、今のミーアには少しだけ嬉しい。
「おや、もしかして、ご不満ですか？　変わらないというより、代り映えがしない、と思って、それが気に入らないとか？」
からかうような……あるいは、試すような口調でそう尋ねてきたのはディオンだった。
その顔をジッと見てから、ミーアが答えようとした、その時だった。
不意に、ミーアの視界の端に、小さな子どもの手を引く女性の姿が見えた。
刹那、ミーアの脳裏に甦る光景があった。
ぐしゃり、と頭に何かがぶつかる音。

ねっとりと髪に絡みつく、腐った臭い。
驚き立ち止まったミーアの耳に突き刺さる、非難の声。
「お前らのせいで、私の子どもが死んだ。それは子どもに食べさせようとした卵だ！」
血走った眼で睨みつけてくる女性の顔。
そして……。

前の時間軸では、その事件以来、ミーアが帝都を歩くことはなくなった。
殺伐とした町を歩くことは、護衛を付けたとしても危険なことになってしまったからだ。
あの時の嫌な空気と比べ、馴染みある帝都の空気の、なんと優しく居心地のよいことか……。
――あの母親は、子どもを失わずに済んだかしら？　それならば良いのですけど……。
ふと思い出した人の無事を静かに祈りながら、ミーアはディオンに応える。
「いいえ。ディオンさん。この変わらない『普通』が、どれほどの労力によって支えられているものか、わたくしはよくわかっているつもりですわ」
ミーアが知る限り、今のところ、どこかで疫病が流行ったということは聞かない。食糧の不足も聞かれはするものの、その都度、備蓄を供給し、解消している。
飢饉は起きていないし、それに伴う内乱も起こったという報告はない。
それらはすべて、食糧の輸送に関わる人たちと、皇女専属近衛隊の奮闘によるものだと、ミーアはよくわかっていた。
――食糧不足が起きても、すぐに救援が駆け付けると、人々が信じている。それが大事でしたわね。
あのクソメガネ……、ルードヴィッヒが嘆いていた言葉を思い出

す。
「ミーア姫殿下のお仕事は、失墜した帝室への信頼を取り戻すことです」
彼はいつもミーアに、そう言い聞かせていた。
「というか、実際、ミーア姫殿下にできることは、そのぐらいですし……」
などと、思わずカチンとくる余計な一言と共に。
ぐぬっと唸りつつも、ミーアは反論を試みる。
「しっ、しかし、信頼を取り戻したところで、食糧が降って湧いてくるわけでもなし……。本当に意味があるんですの？」
「そうですね。少なくとも状況を悪化させる速度を緩めることはできるかと……」
ルードヴィッヒは肩をすくめつつ、続ける。
「もしも『待てば助けてもらえる』と思っているのなら、民は我慢しましょう。けれど、いつまで待っても救援が届かないと絶望すれば……自らの努力によって状況を打開しようとすることでしょう」
「自らの、努力？」
「そうです。貴族や商人を襲い、食糧を奪うことです。そうして起きた戦の火は、時に畑を焼き、輸送を混乱させ、さらなる被害を拡大させる……。それがさらに、食糧の不足を生み……」
「ますます状況が悪化する。負の連鎖ですわね……」
「なんとか、その連鎖を回避するために、帝室の信頼を回復させ、少しずつでも食糧の供給を復旧させる必要があるのです」
苦々しげな顔で言ったルードヴィッヒだったが……その努力は、実らなかった。
一度、崩れてしまった“普通”を回復するのは、かのクソメガネであっても容易なことではなかったのだ。
そんな苦い記憶が、ミーアに、心からの言葉を紡がせる。
「……わたくしは、この“普通”を誇らしく思いますわ。あの母親

が、当たり前に愛しい我が子と笑い合える普通を、わたくしはなにより貴重なものと思いますわ」
　ああして子どもと笑い合っている限り、あの母親が唐突に、腐った卵を投げつけてくることは、恐らくない。それは、いきなり断頭台の刃が降ってこないのと同様に、あるいは、いきなりディオン・アライアが斬りかかってこないのと同様に、である。
　この“普通”を維持することこそが、断頭台の道を開かぬコツなのだ、と深々と実感するミーアである。
「普通は貴重、か……」
　アベルは静かに、辺りを見回した。
「そうか。それが、ミーアが思い描く理想なのか……」
　しみじみとつぶやくアベルを、ミーアは不思議そうに見つめる。
「アベル、どうかなさいましたの？」
「いや、なんというか、ミーアらしいなと思ってしまっただけさ。ああ、やっぱりミーアはミーアだ」
「ええと、それはどういう意味ですの？」
　きょとんと首を傾げるミーア。であったが、まるでアベルに同意するように頷きあうディオンとアンヌの姿を見て、ますます怪訝そうな顔をするのだった。

第二十八話　新しい靴と不穏な気配

ミーアたちがやってきたのは新月地区だった。
かつての貧困地区、今では帝都一の賑わいを見せる地区の一角に、その巨大な建物は建っていた。通常の商店、五、六軒分はありそうな大きさの建物は、新月地区の中では、ひときわ目立っていた。
「ミーア、このお店は……？」
驚いた様子で建物を見上げるアベルに、悪戯っぽい笑みを浮かべて、ミーアは言った。
「わたくしの知人のお店ですわ。さ、中に入りましょうか」
躊躇うことなくズンズンと、ミーアは店内へと足を踏み入れた。
「これは、ミーア姫殿下。ご機嫌麗しゅう」
「お久しぶりですわね。店長さん」
出てきた男に、ミーアはニッコリ笑みを浮かべた。続けて……。
「オーナーのシャロークさんは、息災かしら？」
こう言った。
そう、この店は、かの大商人シャローク・コーンローグの帝都支店なのだ。
実を言えば、女性用の乗馬靴というのは、割とニッチな商品だった。なにしろ、基本的に帝国では、馬に乗る女性というのが少ない。騎馬王国ならいざ知らず、お客の数が、圧倒的に少ないため、ほとんどは職人に直接発注するオーダーメイドで。
既製品を取り揃えておくようなビジネスが成立しないのだ。
だから、ミーアの今回のショッピングは、いささか無謀な試みであった。
にも関わらずミーアがそれを断行したのは、この店があったからだった。
この店を開く際、シャロークは言っていたのだ。

「ミーアさまにごひいきにしていただくために、いろいろと品を取り揃えておきましょう。手に入りづらい乗馬用の装備なども準備しておきますので、ぜひ、いらした際にはお申しつけください。そして、周りのご令嬢にもぜひ一言宣伝してもらえれば……」

などと……。

シャロークがここに店を構えた理由は、もちろんミーアとの関係を良好に保つためであろうが……。それだけではなく、ミーアの絶大な人気をも計算に入れたものであったのだろう。

ミーアがひいきにしている店という評判は、売り上げに有利に働く。

ミーアへの恭順を誓ったシャロークであるが、そこはそれ。完全に商人の利を捨てたわけでは決してないのだ。

そしてミーアは、その抜け目のなさをこそ頼もしく思う。

――ふふん。それでこそ、シャローク・コーンローグというものですわ。

そうして、店長と雑談しがてら、ミーアはアベルを紹介する。

「今日はこちらのアベル王子が、わたくしに乗馬靴をプレゼントしてくださると言うので、来ましたの。良いものがあれば嬉しいのですけど……」

「はい。無論、取り揃えてございます。すぐにご準備いたしますので……」

そう言いつつ、素早く店内に下がっていく店長を見ながら、アベルは感心した様子で頷いた。

「しかし、ミーアは相変わらず、味方を作るのが上手いな。君の叡智にかかれば、大陸すべての王たちと人脈を築くことも可能なんじゃないかな？」

「ふふふ、それはさすがに買い被りというものですわ。シャロークさんとのことも、わたくしはただ、ペルージャンの美味しいご馳走を食べて、ダンスしただけですもの」

などと、華やかな笑みを浮かべるミーアであった。

さて、奥に入った店長は、三人の店員と共に戻ってきた。全員が山積みの箱を抱えている。そうして、ミーアたちの前で、箱から靴を取り出していった。
「まぁ、こんなにたくさん……」
目の前に並べられた乗馬靴に、ミーアは感心の声を上げた。その数は、五十は下らないだろう。しかも、デザインや色合いなどが微妙に違っていて、同じものが一つとなかった。
「ふぅむ、すごい数ですわね。しかも、これ全部、わたくしとサイズが合うんですの？」
「はい。シャロークさまの命により、ミーア姫殿下のサイズのものをいろいろと取り揃えてございます。微調整で合わせられます」
「おお、さすがは商人王ですわ……ふむ……」
腕組みするミーアに、アベルが苦笑して、
「せっかくだから、履かせてもらったらどうだろう？　乗馬の時には足首を使うから、できるだけその部分が動かしやすいほうがいいと思う」
「ああ。そうですわね。デザインだけではありませんものね……。ええと、アンヌ、いいかしら？」
「はい。かしこまりました」
恋愛脳補正により、いつもより1．5倍近く素早さを増したアンヌの手を借りて、ミーアは一つ一つブーツを試着していく。
履き心地を試し、さらに、足首をぐいぐいっと動かしてみる。
「ふむ、動かしやすさは問題ないですわ。アベル、これはどうかしら？」
「そうだね……。ううん……」
アベルは、腕組みしつつ、ミーアの格好を眺めて、一歩下がってから眺めて……。
「ああ、君の美しさをとてもよく生かしたデザインだと思う」
「まぁ！　お上手ですわね、アベル」

ミーア、一瞬でテンションが上がる。
声がウキウキとスキップを始める。
「では、こちらはどうかしら？」
靴を履き替え、タターンっと華麗にステップを踏むミーア。
「いいね。ダンスにも使えるんじゃないかな。君のステップがとっても素敵に見える」
「まっ！　アベル、とっても口が上手いですわ！　そんなに褒めてもなにも出ませんわよ？」
などと言いつつ、ニッコニコのミーアである。ウキウキ、ふわふわ、その体は弾んでいた。
「では、これはどうかしら？」
「はっはっは。なんだか、ミーアが履くと、どれも素晴らしい物に見えてしまって、判断に迷うな」
「んまっ！　アベルったら、ホントにお上手ですわね！」
実に、なんともラブラブバカップルな光景が展開していた。
そして……恐ろしいことに、それを止める者はなかった……！
店員も、アンヌも、優しい笑みを浮かべたまま、二人のラブラブっぷりを眺めていた！
「やれやれ……これは……ちょっと場違いな感じだな……」
ただ一人、苦笑いを浮かべたディオンは、そっと店の外へと向かった。
「あれ？　ディオンさん、どちらへ？」
アンヌの問いかけに肩をすくめてから、
「ああ……ちょっと胸やけ……じゃない。周りのことが気になるから、店の周囲を見回ってるよ。なにかあったら、呼んでくれ」
ディオンは店から出て行った。

さて、楽しい楽しいショッピングデートを終えて、ミーアは店から出てきた。
ほくほくと、その頬は赤く上気している。

「うふふ、感謝いたしますわ。アベル、とっても素敵な靴を選んでいただきましたわ」
無事に靴を買い、上機嫌に鼻歌を歌うミーア。それを見て、アベルも優しい笑みを浮かべる。
「それは良かった。気に入ってもらえれば幸いだ」
っと、その時だった。不意に、アベルがミーアを見つめる。っと、息つく間もなくミーアの肩を抱き寄せた！
「はぇ？　あ、え？　アベル？　なにを……？」
急なことに、口をパクパクさせパニックになるミーアだったが、構わず、アベルはそばにいたアンヌの腕も引いた。
「きゃっ……」
彼にしては乱暴な手つきで、主従を抱き寄せてから、アベルはディオンのほうに目を向けた。
「ディオン殿、今……」
周囲に鋭く視線を動かしながら、ディオンに尋ねる。
その様子を見たディオンは、感心した様子で頷いて……。
「ああ。気付かれましたか。なかなかやりますね、アベル殿下。大丈夫、矢などは飛んできそうもありませんよ」
涼しい顔で、ディオンが言った。
「確かに、先ほどまでこちらに殺気を向けてくる者たちがいたようですがね……。てっきり矢でも射かけて来るかと思ったが……、どうやらなにもせずに帰って行ったようですね」
それを聞き、アベルは驚愕に目を見開いた。
「本当ですか？　ディオン殿。それで、敵はどんな姿を？」
「さて……。そこまでは。恐らくですが、無理して、こちらを攻撃しようという意図もなかったんじゃないですかね。まともにやりあえば、僕にかなわないと知っているか、もしくは、なにか別の企みがあるのか……」
ディオンは、ふーん、っと鼻を鳴らし、
「まぁ、すでに気配も消えました。このまま、僕が白月宮殿までエ

スコートすれば問題ないと思いますよ」
　そうして、ディオンは威嚇するように、獰猛な視線を周囲に向けた。
「まぁ、仕掛けてくると言うなら、久しぶりに剣の時間を満喫するだけですよ。ははは」
　何気なくディオンの顔を見て、ミーアは……思わず、背筋に鳥肌が立つのを感じた。
　――ああ、慧馬さんを連れてこなくって良かったですわ。あんな顔見たら、眠れなくなってしまいそうですもの。
　などと、友のことを心配するミーアだった。

第二十九話　別に、見せびらかしたいわけじゃないんだけどね？

さて、部屋に戻ったミーアは、新しい乗馬靴を枕元に飾ってみた！
新品の革の香り、可愛らしいデザイン、なにより、アベルからのプレゼントということで……。その靴はミーアには輝いて見えた。
ベッドの脇に飾ったそれを見て、ムフフっと満足の笑みを浮かべる。
「ああ、素敵ですわ。とっても素敵。素晴らしい」
ベッドの上にぴょーんっと寝転がり、横になりながら、靴を眺めてニッコニコ。
鼻歌など歌いつつ、足をパタパタさせる。
「うふふ、アベルからのプレゼント。さすがはアベル。とっても良いセンスですわ」
真剣な顔で、プレゼント選びをしてくれるアベルを思い出すと、実に、なんとも、胸がポカポカしてしまうミーアなのである。
夕食前にニヤニヤ眺め、湯浴みの後もニヤニヤ眺め、寝る前もニヤニヤ、ニヤニヤしながら、その日は眠りについたミーアだった。
そんな不気味に笑うミーアを見かけて、パティがビクッとしていたが、まぁ、それはどうでもいいのだった。
そうして翌日、たっぷり靴を飾って楽しんだ後、ミーアはそれを手に取り、今度は履いてみた。
キュッと紐を結べば、靴はミーアの足をピッタリと包み込んでくれる。鞣した革のしなやかな感触は、実になんとも心地よかった。
「ふむ、やはり、履き心地も上々ですわ」
試しに、部屋の中を歩いてみたり、ジャンプしてみたり、ステップを踏んでみたりする。
靴は、長年履き慣れたもののように、ミーアの足に馴染んでいた。
「うふふ、いいですわ。ああ、とっても素敵。あ、そうですわ！」

そこで、ミーアはポコン、っと手を叩いた。
「よくよく考えれば、わたくしは、来る乗馬大会のために、練習をしておかなければいけませんでしたわね」
ミーアは、新しく買ってもらった服はすぐに着たいし、新しく買ってもらった傘は、早く差したいから、雨が降らないかなぁ、などと思う性格の人である。新しいフォークをプレゼントしてもらった時には、早くケーキが食べたいな、と思う……いや、ケーキは、フォークが古くても食べたいミーアなのである。
それはともかく、ミーアは、せっかくの乗馬靴をすぐにでも使って、馬に乗りたいと思ったのだ。
ミーアは大変に、単純な性格をしているのである。ということで……。
「どこかで馬に乗りたいですわね。良い場所は……」
むろん、帝都の外に遠駆けに出かけたい、などということは言わない。昨日は「殺気を向けて来る者が……」なぁんて、ディオンも言っていたし、遠出は避けるべきだろう。
それに、護衛に負担をかけるのは本望ではない。スッと行って、スッと帰ってくるのが理想だ。
となると、場所は……。
「コティヤール家の前庭ですわね……。あそこが最適ですわ」
皇女たるミーアが頼めば、否とは言うまい。それに、ヒルデブラントは生粋の馬好きである。同好の士に冷たい態度はとらないだろう。
「あとは、そうですわね……。せっかくですし、子どもたちも誘ってあげようかしら……」
良いことを思いついた、とばかりにミーアは笑った。
まぁ、言わずともわかることながら、あえて指摘するならば、別に見せびらかしたいわけではない。決してない。
ただ、子どもたちが退屈していないか、心配だっただけである。
お城にただいるだけでは退屈だろうなぁ、それなら、馬に乗って

る自分の姿を……具体的には真新しい靴を見てもらい、いいなぁ、羨ましいなぁ、なんて思ってもらえればいいかなぁ？　と思っただけで。
決して自慢しようとか、見せびらかそうなんて思ってはいないのだ。
純然たる気遣いである。まったくもって見せびらかしたかったわけではない。ないったらないのである！
というわけで、ミーアは早速、パティたちのところへと向かったのだが……。

パティとヤナ、キリルは、白月宮殿の大図書館（ライブラリー）にいた。
さらに、そこにはベルとシュトリナに加え、エリスまでが揃っていた。
「あら、エリスまでおりますのね？　いったいここでなにを？」
「あ、ミーアおば、お姉さま。実は、子どもたちが退屈してないか心配になって、それで、エリスか、さんに、いろいろな話をしてもらっていたところなんです」
ベルは嬉しそうに笑いながら言った。
「はて、いろいろな話……？」
「はい。ミーアお姉さまの、華麗なる逸話をいろいろと……」
「ふむ……逸話……？」
目を向けると、エリスが神妙な顔で頷き、
「ミーアさまの素晴らしい活躍を、細大漏らさずにお話しさせていただきました」
そんなエリスの言葉に、実に嫌ぁな予感がするミーアであったが……。
「それで、今、話していただいていたのは……」
ベルが、頬に人差し指を当てつつ首を傾げてから、
「要約すると、ミーアお姉さまのダンスは、とっても上手いっていう話でしょうか」

「あら、ダンス……まぁ、それでしたら」
ダンスの腕前には、それなりに自信を持っているミーアである。ダンスならば、多少オーバーに、大陸有数の腕前ぐらいに言われても、それほど困らないはず。
――なにしろ、本当のことですし。それだけならば、まぁ……。
と、納得するミーアである。
……心なしか、ヤナとキリルは、キラキラした目で……そして、パティは……相変わらず、感情の読み取れない顔をしていた。けれど、よく見ると、その細い喉が、一瞬、こくん、っと生唾を飲み込んだように動いた。
――ふむ、あの様子は、わたくしへの尊敬の念を新たにしていると思えば良いのかしら……。まぁ、マイナス感情ではないと思っておきましょうか。
「ところで、ミーアさま、なにかご用で来たのではないのですか？」
きょとん、と首を傾げるエリスに、ミーアは小さく笑みを浮かべた。
「ええ。そうでしたわ。これから馬に乗りに行こうと思うのですけど、子どもたちも一緒にどうかな、と思いまして……」

この時、ミーアは気付かなかった。
自らの祖母に、孫娘ミーアがダンスの達人であると知られることが、なにを意味しているのか……。
過去に戻ったパティがどのように行動するのか……今のミーアには想像すらできないことなのであった。

第三十話　知られざるダンスの秘密

時間は、少しだけ巻き戻る。
「ふぅむむ……」
その日、ベルは朝から唸っていた。
部屋のベッドの上、うつぶせに横たわり……眉間に皺を寄せつつ、悩ましげに唸る、唸る。
ルードヴィッヒから預かった日記を読みつつ、頭を抱える。
「やっぱり書いてない。どういうことなんだろう……」
「ベルちゃん、大丈夫？」
心配そうな顔をするのは、シュトリナだった。
ちなみに、きちんと個室を用意すると言われたシュトリナであったが……ちゃっかり、親友と同室に泊まることで話を付けてしまった。
イエロームーン家で培われた交渉力をいかんなく発揮するシュトリナである。
休暇を満喫するつもりだったベルとしても、お友だちとの相室は望むところであったが……、同時に少々の不安も感じていた。
――リーナちゃん、まだ、ボクが死んじゃったショックから脱してないのかな……？
ついつい、そんなことを思ってしまう。
なんだか朝起きた時、ちょっぴり心配そうに見つめられているし……。それに、今にして思うと、シュトリナがディオンと結ばれたことも、ベルは気にかかっていた。
――もしかして、二度とボクが殺されないようにって……守る力を欲したとか……？
そんなことすら思ってしまうベルである。
「ベルちゃん？」

きょとん、と首を傾げるシュトリナに、ベルは小さく微笑みを浮かべた。
「ううん、なんでもありません。ただ、ボクがここですべきことってなんだろうって、悩んでるだけです」
ベルは改めて、目下のところの問題点に思考を移す。
女帝ミーアの帝位を継ぐ者……それこそが、未来からやってきたベルに期待された役割だった。
女帝ミーアの施策、それを最も間近で、直接、余すところなく目の当たりにすること……。
それは、ベルの権威をなににも増して高めるものだった。
時間転移を経験する予定のベルは、女帝の地位を継ぐ者であると、誰もがみな思っていた。
だから、この過去の世界への転移は、言ってみれば留学のようなものだった。
ミーアのもとで、しっかりとその功績を眺めつつ、ちょっぴり遊ぶ休暇のようなもの……そんなつもりで、ベルはやってきたのだが……。
「ボクの時間遡行にも意味があるなんて、思ってもいませんでした……」
突然、指摘された事実。それに驚いたベルは急いでヒントを求めた。のだが……。
「ううん……ルードヴィッヒ先生の日記帳に書かれているかと思ったんですけど……」
ルードヴィッヒの日記帳、それは、極めて有効な世界の観測記だった。
ミーア皇女伝の記述が書き換わったことを知ったルードヴィッヒは、自らの日記帳の記載も容易に書き換わることを予測して、現実で起きた出来事だけでなく、夢で起きた出来事をも、すべて書いてまとめることにしたのだ。
これにより、日記を書いていた時間軸が消え、別の時間軸の流れ

が主流となった時にも、以前までの記述自体は夢の記録という形で残るのではないか？　と、そう考えたのだ。
だが……。
「ボクのことは、なぁんにも書いてません……。うーん、ルードヴィッヒ先生ならば、なにかヒントぐらいは書いていてくれるかと思ったのに……。うう、やっぱり、ルードヴィッヒ先生、厳しいです」
……ミーアが聞いたら「どこが厳しいんですの！？　大甘ですわっ！」などと、ぷりぷり怒り出しそうなことを口にしつつ、ベルは両手で頭を抱えた。
「うーん……。ボクがすべきこと……というと、やっぱり、パトリシア大お祖母さまのこと、でしょうか……。とりあえず、パトリシア大お祖母さま……、いいえ、パティと仲良くなることが先決かもしれません」
なにしろ、元の時代に戻ってしまえば、パティとは二度と会うことができないのだ。
パティと出会い、話ができるのは、ベルが過去に飛ばされ、同時にパティが未来に飛ばされてきた、この状況しかあり得なかったわけで……。
そこには、いかにも、なにかヒントがありそうな気がする。
ベルの、メイタンテイとしての勘が冴え渡る。
「よし、そうと決まれば……リーナちゃん。これから一緒に、子どもたちと遊びませんか？」
「ベルちゃんとみんなで遊ぶのは大歓迎だけど、なにをして遊ぶの？」
「ううん……そうですね」
ベルは、小さく首を傾げてから、
「ああ……今の時間なら、エリスか……さんが、大図書館でお仕事をしているはずです。いろいろお話を聞くのがいいかもしれません」
かつて、ベルにとっての一番の娯楽は、エリスの書いた物語を読むことだった。それは、今のベルにとっても変わらないことだった。

「早速、子どもたちを誘って行ってみましょう！」
ぴょーんっと起き上がると、ベルは、さっさか部屋を出た。

白月宮殿、大図書館。その一角に、皇女ミーアのお抱え作家、エリス・リトシュタインの仕事場があった。
「小説を書くのに調べ物をする必要があるでしょうし、せっかくですから、ここで仕事をすればいいですわ！」
などと言う、ミーアの一言で、あっさり確保されてしまったスペース。そこは、一人で仕事をするには、いささか広すぎる空間であった。
……実のところこれには、いざという時、リトシュタイン家の人々を連れて、お城に逃げ込めるようにとの、ミーアの配慮があったりする。
ミーアが帝都にいるならば、近衛兵に命じて、アンヌの家族を避難させることも可能だが、セントノエルにいたのでは間に合わない。だから、エリスに会いに来た、という名分で城に入れるように、状況を整えたのだ。
さて、そんな広い仕事場にて……。エリスは急な来客に驚いていた。
「ええと、ベルさま……これは？」
隊長ベルを筆頭に……実質は保護者シュトリナに率いられた三人の子どもたち。パティ、ヤナ、キリルは、初めて見る大図書館に目をまん丸くしていた。
「こんにちは、エリスか……さん。実は、子どもたちが退屈していそうだったので、なにか、お話を聞かせてあげようと思いまして……」
「お話、ですか。確かに、ここにはたくさん本がありますけど……」
っと、エリスは小さく首を傾げた。
白月宮殿の大図書館には、子どもが喜ぶような面白いお話は、ほとんどなかったからだ。けれど、ベルは小さく首を振ってから、

「エリスさんの書いた物語とか、それに、ミーアお姉さまの偉大なる功績のお話を聞かせてもらおうと思ったんです」
それを聞き、エリスの眼鏡が、きらーんっと光った。
「なるほど。ミーアさまの……。うん、それは、とてもいいことですね。そうですね。それでは、始めにミーアさまのダンスのお話をしましょうか」
エリスはそっと眼鏡の位置を直してから話し始める。
「ところで、みなさんは、ミーアさまがとってもとってもダンスがお上手だということは、ご存知ですか？」
「当然です！　ミーアお姉さまと言えば、やっぱりダンス。知ってますか？　ミーアお姉さまが本気で踊ると、宙を舞うと言われていて……」
ぺらぺらっと得意げに語るベル。その話を聞いて、おおー、と驚きの声を上げる子どもたち。キラキラ、目を輝かせるキリルとヤナ。さらには、パティまでもが、興味深そうにふんふん、っと頷いていた。
「うふふ。詳しいですね、ベルさん。それじゃあ、こんなお話はどうでしょうか？　これは、私の姉であるアンヌから聞いたお話なのですが……」
そうしてエリスは話し出す。
帝国の叡智ミーアにまつわる……伝説級の与太話を……。

ところで、ミーアのダンス上手は、別に生来のものではない。
もちろん、もともとそれなりの才覚はあっただろうが、それ以上に大きかったのはやはり日々の鍛練であった。
ミーアに課された練習は、一般的な貴族令嬢に比して、いささか厳しい物であった。けれど、ミーアはお姫さまにはダンステクが必要！　と言われれば「まぁ、そんなもんか……」と疑うことなく受け入れていた。
特に不満もなく、きびしーいレッスンを受け入れてきたわけだが

……。その厳しい、きびしーい！　レッスンが、はたして、誰の命令によるものだったのか……。
そして、誰のせいであったのか……？
ミーアは知る由もないのであった。

第三十話　知られざるダンスの秘密（後書き）

タイムパラドックスグルグル。
ダンス上手が先か、厳しい練習が先か……。

それはさておき、来週は少し投稿が変則的になります。
具体的には月曜日にはミーア不在の話になります。
年内最後の金曜日の投稿には、きちんとミーアが登場する……予定ですが。

第三十一話　馬番、ナニカを確信する！

「しかし、ベルが子どもたちの面倒を見てくれているとは思いませんでしたわ」
　ミーアは改めて、自らの孫娘ベルを眺めた。心なしか以前より、若干大人びて、お姉さんっぽくなったベル。それが、ちょっぴり心強いミーアである。
「それに、エリスにお話を聞きにきた、というのも、なかなか冴えてますわね。てっきり、あなたことだから、子どもたちを連れて白月宮殿の中を探検しよう、なぁんてやってるのかと思いましたわ。ふふふ、あなたも成長しますのね」
　っと、そんなミーアの言葉にベルは、大人のお姉さんっぽい笑みを浮かべて……。
「ふふふ、当然です。ミーアお姉さま。白月宮殿なんか、ボク、小さい頃に探検しつくしておりますから、今さら探検なんて……」
　ドヤドヤァっと胸を張るベルである。ミーアはそんなベルに、ため息混じりに肩をすくめて、
「ああ……やっぱり、あなたには、もっと厳しい教育が必要そうですわね。まぁ、それはともかく……。これからコティヤールのお屋敷に、乗馬の練習に行こうかと思いますけど、あなたたちはどうしますの？」
「はい！　しっかり勉強させていただきます。ミーアお姉さま！」
　スチャッと姿勢を正し、生真面目な顔をするベル。
　一瞬、はて？　なんの？　などと思いはしたものの……。まぁ、気分がいいから、別にいいか、と思い直す。
　こうして一行は、コティヤール侯爵家の屋敷へと向かった。
　ちなみに、本日の護衛もディオンと、それに、ゴルカら、皇女専属近衛隊の面々も数名、同行していた。

「東風がご入用とのことでしたから……」
などと言う馬番ゴルカである。
一方で、アベルは、今日は別行動だった。サフィアスら帝国貴族の青年たちと交流会があるらしい。
――アベルもいずれ、帝国に来てもらうわけですし。今の内から、しっかりとサフィアスさんとも仲良くしておいていただいたほうがよろしいですわね。うん……。
将来の国家運営すら視野に入れた帝国の策士、ミーアは腕組みしつつ頷く。
――それに、デートは時々するから楽しめるもの。たとえ楽しいことであっても、毎日やっていては、飽きてしまうのが世の常というものですわ。
いつでもデートを楽しみつくさんとする帝国のエンターテイナー、ミーアは、しかつめらしい顔でうんうん、と頷いた。
「ところで、ミーアお姉さま、その靴は……」
っと、その時だった。目ざとく、ベルがミーアの足元に目を向けた。
「あら、気付きましたのね？　うふふ、そうなんですの。実は、アベルがプレゼントしてくれたものなんですのよ？　どう？　素敵でしょう？」
「ああ、アベルおじ……王子が。はい。とってもよくお似合いですよ」
祖父母の仲良しっぷりに、ニコニコのベルであった。

さて、コティヤール邸についたミーアは、挨拶もそこそこに早速、乗馬服に着替えた。
そうして、屋敷から前庭に出ると、すでにミーアの第二の愛馬、東風が待っていた。
「うふふ、相変わらずですわね、東風」
鼻を寄せてくる東風を、優しく撫でる。っと、東風は高らかに嘶

きを返してきた。
「ほぉ、それがミーア姫殿下の馬ですか」
声が聞こえてきたほうを見ると、ヒルデブラントが馬に乗ってやってくるのが見えた。
「ふむ。典型的なテールトルテュエ種……。月兎馬ではないのですね」
「ええ。セントノエルには、乗り慣れた月兎馬がおりますけれど……。そういうあなたの馬は、どうなんですの？」
「ふっふっふ、我が愛馬、シルバーアローは、テールトルテュエといくつかの駿馬の血を引く混血種です。良い馬だが、しかし、かの月兎馬には、やはり、及びませんね。月兎馬はとても素晴らしい。ミーア姫殿下も、そう思いませんか？」
その問いかけに、ミーアは、しかし、首を振った。
「いいえ。わたくしは、すべての馬を貴重なものと思っておりますわ」
ミーアは、自分を乗せ、自分よりも速く走る存在を、すべからく尊敬しているのだ。
馬車であれ、船であれ、自身を危険から逃がしてくれるものに、貴賤などない。
そして、馬は最後の最後にミーアが頼るべき生命線。
どんな馬であれ、文句を言うはずもないのであった。
「なるほど。それが姫殿下の馬の見方ということですか……。ああ、ところで本日は、普通に馬を走らせるだけでしょうか？」
「といいますと？」
尋ねれば、ヒルデブラントはすまし顔で、馬を走らせる。彼の向かう先には、木で作った障害物が置いてあって……。
ぴょーんっと軽々、それを飛び越えて、ヒルデブラントは笑った。
「てっきりこの、特製の障害物に興味があったのかと思ったのですが……馬が好きならば、ね」
「あら、ヒルデブラント。あなた、わたくしを挑発しておりますの

？」
「いえいえ。ただ騎馬王国の民に勝利したというミーア姫殿下であれば、あのぐらいは軽いかと思っただけのこと」
はははは、と笑うヒルデブラントに、ミーアはニヤリと勝気な笑みを返して、
「いいでしょう。ここで引いては、わたくしの名が廃れますわ。いきますわよ、はいよー、東風！」
ミーアに応えるように、東風、再びの嘶き。それから、静かに走り出した。
眼前に、見る見る、木製の障害物が迫ってきた！
近くで見ると思ったよりも、高い。
――あら？　これを飛び越えるのって、結構……。
などと思っている間にも、東風はぐんぐん障害物に向かって加速していき、その目の前で、グッと思い切り地面を蹴った。
「はぇ……？」
一瞬、体が浮きかけて、ミーア、慌てて、両足に力を入れる。手綱を離さぬよう、ギュッと握りしめ……そして！
次の瞬間、着地を決めた東風、想像より大きな衝撃に、体をぐらんぐらんと揺らしつつ、ミーアは懸命に、姿勢の維持に努める。
そうして、東風が、勢いの余韻を殺しているところで……。
――こっ、ここ、こわぁ！
ミーア、思わず震えあがる。
背筋につめたぁい汗が流れ落ちていく。が……。
「わぁあっ！」
パチパチと、拍手をするヤナと、歓声を上げるキリルの姿が見えて……。びっくりした様子で目を見開くパティを見て……ちょっぴり気分が良くなって……。
「ふふふ、このぐらい、軽いですわ」
なぁんて、調子に乗って、片手を振ってみせたりなんかして……。
「ふっふっふ、なかなか、良い気分ですわ。それ、行きますわよ、

東風！」

そうしてミーアが障害物を飛び越える様を、静かに……ジッと見つめる者がいた。

……皇女専属近衛隊の馬番、ゴルカだった。

彼は、障害物を華麗なジャンプで飛び越えるミーアを見て……。

「おおっ！」

と、思わず歓声を上げる。それから、なにごとか納得した様子で、うんうん、っと頷いていた。

はたして、彼がなにを思ったのか……。

ミーアが障害物をぴょーんっと飛び越える姿を見て……ナニを確信してしまったのか……？

そんなことは知る由もないミーアなのであった。

第三十一話　馬番、ナニカを確信する！（後書き）

クリスマスおめでとうございます！

第三十二話　平和を噛う者と、アベルの覚悟

「ふぅ、やれやれ……」
帝都ルナティアの宿屋の一室に、深い深いため息の音が響いた。
ベッドの上にデーンっと倒れこんでから、蛇導師、火燻狼（カ・クンロウ）は、目の前のバンダナの男を睨みつける。
「あなた、正気ですかね？　かのディオン・アライアと一戦交えようだとか……」
そう尋ねれば、バンダナの男は不服そうな顔で言った。
「なんだよ？　別に驚くことはなかろうよ。追手である狼使いと刃を交え、敵の最強戦力たるディオン・アライアと刃を交える。浜辺の砂を波がさらうがごとく、当たり前のことだ」
「ああ、なんと、蛇らしくもない、単純明快な正攻法。これは、西の海蛇には、巫女姫さまの教えを施す必要がありそうだ。みっちりとね」
嘆くように首を振り、燻狼は言った。
「海の民は、ご存知ないですかね？　城攻めの鉄則。城や砦を攻める際には、まず、その城を陥落させる必要があるかどうか、よく考えてから始めよ、と」
「ついぞ、地を這うモノの書では見たことのない文言だ」
「一般常識の話なんですがね……」
呆れた様子の燻狼に、バンダナの男は鋭い視線を向けてくる。
「ミーア・ルーナ・ティアムーンは殺すべき標的なのだろう？　落とすべき城の最たるものだろうが……」
「仮に殺す必要があるとしても、なにも最も難易度が高いところから攻めなくってもいいってことです。難攻不落の城を攻めるなら、兵糧攻めなり、毒を使うなり、火を使うなり、いろいろやり方があるでしょうに。正面から攻め落とすというのは、我々、蛇のやり方

じゃあない」
やれやれ、これは、やりづらくて仕方ない……っと、燻狼はため息を吐いた。
「まぁ、いずれにせよ、ここは余計なことはせず大人しくしていましょうや。余計なことをして、帝国の古き蛇たちの邪魔をするのも悪いですし、あいにくと荒事は、好きじゃないんだ。俺は平和主義者なんでね」
「平和……ねぇ」
バンダナの男は、吐き捨てるように言って、首を振った。
「おやおや、そのご様子、平和はお嫌いで？」
まぁ、平和好きな蛇はいないか？　などとつぶやく燻狼に、男は皮肉げな笑みを浮かべた。
「俺の知る限り、その言葉は、現状維持をしたいだけの連中の常套句だからな。今、いい目を見てる連中には、そりゃあ、平和が望ましいだろうさ。自分が得をできる仕組みをぶっ壊すような暴力は嫌う。当然だ。だが、踏みつけにされる方の俺たちが、その言葉を口にするのは、滑稽に過ぎるってもんだろうさ？」
男は、そう言いながら、バンダナを外す。彼の額では、疎外の証、ヴァイサリアンの第三の目の刺青が、静かに虚空を見つめていた。
「なるほど。蛇らしくないと言ったのは取り消さないといけませんねぇ。あなたは、確かに、蛇だ。紛れもなく純粋な蛇だ」
地を這うモノの書は、弱者に戦う牙を与えるもの。
踏みつけにされた弱者に、自分たちを踏みつけにするような秩序を破壊せよと、囁く書。
そして、暴力は、最も根源的で、手っ取り早く混沌をもたらす手段だ。が……。
「まぁ、それでも、しばらくは大人しくしてるほうがいいと思いますがね」
「この俺という剣があってもか？」
「はっはっは、我らが巫女姫は狼使いという剣を持ち、ご自身も相

当に強いお方でしたが……。哀れ、帝国の叡智の前に潰えて消えましたゆえ」
よよよっと泣き真似をする燻狼に、バンダナの男は剣呑な目を向ける。
「だが、俺は、あの狼使いより強いと思うが？」
「船の上ではそうでしょうよ。けれど、あの男も馬の上では相当に強いお人でしたよ。だが、かのディオン・アライアは、まったく問題にしなかった。まぁ、あなたが死にたいって言うなら、止めないんですけどね」
と、そこで一度、言葉を切ってから、燻狼はニコリと、どこか人懐っこい笑みを浮かべた。
「あなた、馬駆よりもユーモアがわかる方だ。旅の道連れにはちょうどいいんですよ」
「……そいつはどうも。それじゃあ楽しい雑談代わりに聞いておこうか。巫女姫の蛇導師。邪魔をするなと言うが、帝国内の古き蛇は、なにを企んでいると考える？」
その問いかけに、燻狼は、小さく笑って首を傾げた。
「さてさて……。争乱屋のジェムが浸食したサンクランドの諜報網はすでになく、できることは限られているが……。まぁ、古き者たちには関係ないか。彼らは、我らが動き出すより遥か昔から、帝国にいた者たちですからね」
顎をさすりつつ、燻狼はぶつぶつとつぶやく。俺は帝国内の事情には、それほど詳しくはないのだが……などと前置きしてから、
「まぁ、狙うとすれば、皇女ミーアの仲間たちでしょうがね……。黄色の月は蛇を知る者。古き蛇についてもなにか知っているかもしれないから、狙うには適さない。赤い月はいろいろと突けそうだったが、皇女ミーアが介入している真っ最中。となれば……、懐かしきエシャール殿下を保護する緑の月か……あるいは青の月か。いずれにしても、狙えそうなところはいろいろとありそうなもの。彼らが、近いうちに仕掛けるというのであれば、それを見守るのが我々

の役どころじゃないですかね？」
「あくまでも黙って見ていると？」
「本当であれば、混沌をより広げるように努めるのがいいのかもしれませんがね。下手をすると共倒れ。我々の行動が、蛇足になりかねないですからねぇ。蛇は蛇らしく、余計なことはしないようにしましょうや」
「ふん。足の生えた蛇というのも、混沌とした生き物のように見えるけどな」
バンダナの男に言われ、燻狼は愉快そうに笑った。
「はっはっは、やはり、あなたは馬駆より楽しい方だ。ぜひ、もう少し旅の道連れに付き合ってもらいたいですね」

さて……宿屋でそんな会話がなされた翌日のこと。
そして、ミーアがコティヤール邸で、ぴょんぴょん障害物を飛び越えている頃……。
アベル・レムノは、ブルームーン公爵家の、帝都にある別邸を訪れていた。
サフィアスから、交流会に誘われたためだ。
セントノエル学園において、共に生徒会の仕事をした仲であるが、個人的に繋がりがあるわけではなかった。
――これを機に、仲を深めておくのは、ミーアのためにもなるだろう。
通された部屋で、アベルは、今日のホストに頭を下げた。
「今日はお招きいただき、感謝する。サフィアス殿」
「いやいや、お越しいただき恐縮ですよ。アベル王子。こうして、セントノエル学園の外で会うのは、初めてのことだったでしょうか？」
部屋にはサフィアスのほかに、彼と同年代の青年の姿が見えた。全部で五人。恐らくはブルームーン派の貴族の子弟たちだろう。
――ただ交流を深めればいいのか……それとも、サフィアス殿に

は他の思惑があるのか？
自らに向けられる、観察するような視線をアベルは涼しげな顔で受け止めた。
一人一人と握手をしつつ、アベルもまた、彼らを観察する。立ち居振る舞いは、完璧に礼節をわきまえたもの。ではあるが、隙が多い。握った手のひらも柔らかく、恐らく剣を握ったことがない者がほとんどではないだろうか。
――いや、油断は禁物だな。
アベルは気を引き締めつつ、案内された席に着いた。
「さぁ、それでは、アベル王子の歓迎会を始めようか」
サフィアスの声で、彼の仲間たちも、それぞれ席に着く。
ちなみに、昼間だから、供されるのは紅茶とお菓子だった。
見事な菓子を見て、アベルは、ふと、ミーアに持って帰ってあげたいな、などと思ってしまう。
「しかし、アベル王子、ずいぶんと久しぶりな気がしますね。セントノエルの生徒会の様子はどうですか？」
「変わりませんよ。相変わらず。みな、それぞれにミーアを支え、職務に邁進しています」
そう言うと、サフィアスは、どこか懐かしそうに瞳を細めた。
「ああ……。それは、ふふ、少しだけ羨ましいな。私はもうあそこには戻れないから……」
そうして、しばしサフィアスと旧交を温めつつも、アベルは場の観察を進める。
――サフィアス殿以外からは、あまり歓迎されていないようだな。まぁ、ブルームーン派の貴族たちは、サフィアス殿を皇帝に推したいのだろうから、ミーアと近しいボクに敵意を持つのは当然か……。しかし、昨日、街中で感じた殺意のような強さはないな……。どちらかというと……。
「アベル王子、よろしいでしょうか？」
突然、声をかけられた。ふと見れば、そこで小太りの青年が見つ

めていた。
――おや、彼は……。
アベルは、その青年に見覚えがあることに気が付いた。
――確か、選挙の時にミーアを応援していた……。
「こうして、直接、お話するのは初めてですが。ランジェス男爵家のウロス・ランジェスと申します。アベル王子殿下。どうぞ、お見知りおきを」
「これはご丁寧に。アベル・レムノです」
爽やかな笑みを浮かべるアベルを、ウロスは睨みつけるように見つめて……。
「アベル王子殿下は、ミーア姫殿下と恋仲とお聞きしましたが……」
その言葉に、一瞬、場の空気が固まる。
突然の踏み込み。されど、アベルは朗らかな笑みでそれを受け止める。
「恋仲……と言えるかはわからないが、懇意にさせていただいています」
「失礼ながら、レムノ王国は、我が帝国より国力に劣る国……、それでも、我が帝国の皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーン殿下とご自分とが釣り合うとお思いになっているのですか？」
その無礼な質問に、けれど、アベルは怒りはしなかった。
それが貶める目的で発せられたものだったら、怒りを感じたかもしれない。その無礼に相応の報いをくれてやることだって、やぶさかではなかった。
けれど、ウロスの意図は、恐らくそこにはない。
その質問の意図を静かに吟味してから、アベルは思う。
――なるほど、彼は……ミーアのことが心配なのか。
それから、ウロス以外の者たちの顔を見て、アベルは静かに納得する。
ここにいる者たちの警戒心。その理由。
確かに、ブルームーン派の貴族の中には、派閥工作としてミーア

に敵対しようとする者もいるのだろう。けれど、ミーアを慕い、好意を持つ者たちもいるのだ。
そして、今日、この場に集ってきている者たちは、恐らく、そのような者たち。
ミーアを支えようとするサフィアスと、想いを共にする者たちなのだ。
――サフィアス殿、しっかりと、ご自分の派閥の把握に努めておられるのだな……。
感心しつつも、アベルは気を引き締める。
なぜなら、目の前にいる者たちは単純な敵ではない。彼らは、いわば、ミーアを守り奉る騎士たちなのだ。
そして、彼らにとってミーアは、紛れもなくティアムーン帝国の姫なのだ。
輝かしい栄光、揺らがぬ誇りなのだ。
そんな、大切な姫君たるミーアの恋人となろうとする者がいる。
それも、帝国から遠く離れた、国力に劣るレムノ王国の……しかも第二王子が相手だという。
警戒されても仕方ないことだし、彼らを納得させるのは、ほかならぬアベルの責任なのだ。
――そうだ……。ボクは……ミーアに相応しい者にならなければならない。彼らを納得させられるような……。
静かな闘志を胸に、アベルはウロスに笑みを見せる。
「山を見れば、頂上に登ってみたくなる。星空を見上げれば、輝く月に手を伸ばしたくなる。それが、人というものでしょう？　ウロス殿」
アベルは静かに自らの手のひらを見つめてから、
「今のボクでは、到底、ミーアに相応しいとは言えないだろう。それは自分でもよくわかっている。けれど、ボクは、いつまでも今のボクに甘んじているつもりはない」
グッと拳を握りしめて言った。

「約束しよう。ウロス・ランジェス殿。ボクは必ず、帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンに相応しい男になってみせると……」
その答えに、満足げに頷いて、ウロスは言った。
「なるほど……。アベル王子のお覚悟、しかと見させていただきました。それでこそ、ミーアさまが選んだ方だ。アベル殿下。私も微力ながら、応援させていただきます」

かくて、サフィアス主催の交流会は、和やかなムードで進んでいくのだった。

第三十三話　ミーア姫、全力で波に乗りに行く

帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンの仕事は多岐にわたる。

現在、ミーアは『第二の執務室』で、大切な仕事の真っ最中だった。

第二の執務室……すなわち、白月宮殿『白夜の食堂』である。

――ここで仕事をしてると、お茶がスムーズに運ばれてきますし。時折、気を利かせたどなたかが、お茶菓子を持ってきてくれることもある……。実に良い環境ですわ！

などと、まことにロクでもないことを思いついたミーアは、時折フラッと出没しては、ちまちまと仕事をしていくのだった。

では……そんな場所でしている大切な仕事とは何か？　それは……。

「ミーアさま、今日の晩餐会のメニューをお持ちしました」

「ふむ、ご苦労さま」

そう。夕食メニューチェックである。ミーアにとって、それは、とてもとても大切な仕事なのである。

「ほう。黄月トマトのシチューと、三種のキノコの盛り合わせ……。ふむ、さすがは料理長、わかっておりますわね！」

厨房のスタッフから受け取った羊皮紙に目を通し……ミーアは偉そうに頷いた。

「子どもたちにはしっかりと、好き嫌いなく良いものを食べてもらいたいですし……このチョイスはなかなか良いですわ」

特にパティはミーアの祖母である。しっかり健康に育ってもらわなければ、ミーアの今に関わるわけで……。

「ああ、でも、これでは、キリルには少し足りないのではないかしら？　男の子はたくさん食べますし。それに、アベルもお肉が欲しいんじゃないかしら？」

「なるほど。肉料理を追加でございますね。かしこまりました」
「あとは、このデザートの量を倍に……」
「ミーアさま、甘い物はほどほどに、と、料理長から言付かっておりますので……」
厨房スタッフが困り顔を見せると、誤魔化すようにミーアは笑った。
「おほほ。嫌ですわね。もちろん冗談ですわ、冗談。そんな、デザートを増やせなどと、わたくしが本気で言うと思っておりますの？　おほほ」
なぁんてやり取りを終えたミーアであるが、息つく間もなく次の仕事がやってくる。それは、その仕事は、眼鏡をかけた忠臣の姿をしていた。
「失礼いたします。ミーアさま、今度の乗馬大会の種目なのですが……」
「ああ。ルードヴィッヒ。できましたのね。どれどれ……」
ルードヴィッヒから羊皮紙の束を受け取るミーア。
「ルヴィさまとバノス隊長、それに、馬番のゴルカの意見も取り入れて作りました」
「なるほど……。おお、やはり、ただ競争をするだけではないのですわね」
紙面にざっと目を通せば、途中途中でルードヴィッヒが補足を入れてくれた。
「一番から三番目、それに、メインの慧馬嬢とヒルデブラントさまの勝負は、純粋に速さを競うものにしました。もっとも、同じでは面白くないので、それぞれに距離を変えています。それと、四番、五番目のものは、途中で障害物を飛び越える競争にしています」
「なるほど。おお、この現代五種というのは、面白そうですわね」
「ええ。七番目は馬上弓術、八番目は馬上剣術。そして、九番目の、その現代五種については、兵の訓練を参考にした複合競技にさせていただきました。地上での剣術と馬上剣術、地上での弓術と馬上弓

術に乗馬術……。その総合点で競うというのは、私も聞いたことがありません」
「これは、アイデアを出してきたのはルヴィさんかしら？　ふふふ、さすがはレッドムーン家と言ったところですわね……。良い発想ですわ。ふむ……？」
っと、次の瞬間、ミーアの視線は、最後の種目に吸い寄せられる。
「はて……？　この……ホースダンス（仮）というのは、いったい……？」
「はい。何と書けば良いのか、競技の名前がなかったので便宜上ですが……」
ルードヴィッヒは真面目な顔で頷いてから、クイッと眼鏡の位置を直して……。
「馬番のゴルカから聞かせていただきました。昨日、コティヤール侯爵邸にて、ミーアさまが熱心に、障害物を飛ぶ訓練を積んでおられたと……」
「ええ……。まぁ、そんなこともありましたけれど……」
昨日のことを思い出すミーアである。そう言えば、調子に乗って、子どもたちの前で、片手放しで手を振ったりしてたなぁ、とか……。何回も障害物を飛んでは降りてを試したなぁ、とか……。
「このホースダンスというのは、そうした障害物を華麗に飛び越えつつ、人馬一体のダンスを披露するというもので。最後のミーアさまは、他者と競い合うのではなく、勝負に参加したすべての者たちを労うような、そのような競技がよろしいのではないか、とのことで、ご提案させていただきました」
なぁるほど……それは、確かに、乗馬大会の最後に相応しい競技だなぁ……などと他人事のように思うミーアだが……。あいにくと、それは他人事ではなく自分事である。ゆえに、無責任なことは言えない。
実際、馬にジャンプさせてみて、つくづく思ったのだが、あれはなかなかに大変だ。

いくつも障害物を連続で飛ばせるのは、それなりに訓練が必要だろうし、あの東風ですら、途中でジャンプを嫌がったこともあった。

ミーアは慌てて羊皮紙をめくっていき、ほどなく「ホースダンス（仮）」なるページを見つける。そこには、馬場を最大限に使い、各所に障害物を並べた一案が描かれていた。

「おお……こっ、これは……」

「ゴルカが上げてきた、あくまでも一案ですが。会場のどこにいても、ミーアさまの華麗なる乗馬が見られるように、と、障害物を配置させていただきました」

「そ、そうなんですのね……」

ミーア、若干、顔を引きつらせつつ……。

――これ、やるのかなり大変なんじゃ……。なっ、なんとか、いい感じでお断りすることはできるかしら……？

ミーアはすぐさま検討を始め……もしも、自分がこれをしなかった時のことを想像し……改めて、羊皮紙を眺めて……。

――ぐっ、こっ、この熱量はっ！

思わず圧倒される。羊皮紙の上からあふれ出る乗馬愛に……。

もしも、ミーアがこのホースダンス（仮）とやらをすれば、どれほど見事なものになるか……。そんな期待と情熱の滲み出る文面に、ミーアは思わずクラァッとする。

さらに厄介なのは、この競技がとてもよくできていることだ。つまり、最初からできないようなものではなく、ミーアが頑張ればギリギリでできそうなラインを攻めていることだった。

例えば城壁を馬で駆けあがれとか、馬で宙を飛べとか言われたら「んな無茶な……」と却下もできるだろう。けれど、このホースダンスは頑張れば、できそうなのだ。

そして、頑張ればできるものを提案されてしまっては、あとはミーア自身の頑張りにかかってくる。

すなわち、これをやらないということは、ミーアが頑張らないことを宣言することに等しい。

――かっ、仮にやらないと言ったら、これを書いたゴルカさんの士気と忠誠が下がること間違いありませんわ……。かといってみっともない乗馬姿を見せても、やはり忠誠は下がるわけで……。

ミーアの目の前に迫るは大波。頑張って乗れば、臣下からの忠誠心も大きく上がるが、サボって沈めば、ダメージは計り知れない。

――うう、お、おかしいですわ。今回、わたくしは、最後のほうにチョロッと出て楽をするはずでしたのに……。なぜ、このようなことに……。

すっかり夏休みを満喫するつもりになっていたミーアは、かつて、ベルに言った言葉が、自らに返ってきたことを悟った。

そう……ミーアの休日も、今日、終わったのだ。

たった今！　終わってしまったのだ！

ミーアは、うぐうう……と小さく唸ってから、言った。

「……ああ、これは、素晴らしい企画を立てていただきましたわ。気合を入れて取り組まなければ、いけませんわね……」

仕方ない。波に逆らうのは、結局、海月ミーアのやり方ではないのだ。

波が来てしまった以上、それに逆らわず、全力で乗るのが、最も楽をする方法なのだ。

こうして、ミーアの特訓が始まった。

第三十四話　ミーア姫、お友だちを語る

乗馬大会が開かれるのは、七日後だった。
それまでの期間、ミーアはできうる限りの練習を重ねていく。完全本気モードだ。
基本的に、後ろから断頭台が追いかけてきている時には、無類の集中力を見せるミーアである。
――もしも、なにかがあって馬で逃げなければいけないのならば、目の前に柵があるからといって、足を止めるわけにはいきませんわ。
そのための事前練習と思えば、ハードな練習もまったく苦にはならないのだ。
そうして、メキメキと「馬の邪魔にならない乗り方」を磨き上げていったミーアは、ついには、乗っている途中で手綱から手を離し、片手を振れるぐらいの余裕を見せるようになっていた。
余裕……あるいは、油断を……見せるようになっていた。
「うふふ、ああ、なんだか馬に乗るの、とっても楽しいですわ！」
そうして練習でたっぷり体を動かし、空腹を癒すためたっぷり食べて、お風呂でたっぷり汗を流して、たっぷり寝る。
ミーアは、未だかつてないほどに、健康極まる生活を送っていた。そのお肌は、健康そうにつやっつや輝きを増していた。
そんな、ミーアの練習には、大抵、誰かがお供としてついてきていた。
ベルとシュトリナのこともあれば、慧馬のこともあり。
本日は、ヤナたち、三人の子どもたちが一緒だった。
子どもたちは、特に小さな馬に乗るのが楽しいらしく、エンジョイしている様子がよくわかった。
そして、ミーアが練習している間、子どもたちの面倒は、アベルが見てくれていた。

優しく手綱を引き、子どもたちを遊ばせるアベル。その姿が、将来の、自分たちの家庭を見ているようで……。

――子どもの世話をするアベル……イイですわね！

などと、思わずグッと来てしまうミーアである。

……まぁ、それはさておき。

その日、乗馬訓練を終え、白月宮殿に帰ってきたミーアは、駆け付けひとっ風呂とばかりに入浴。その後、ホッカホカになった体を、食堂でのんびり冷やしていた。

「あー、お風呂上りには、冷たいジュースが沁みますわ～」

なぁんて言いつつ、ダーラダラしていると、不意にヤナが歩いてくるのが見えた。その髪が、しっとり湿っているのを見つけて、ミーアはニンマリ、笑みを浮かべた。

皇女ミーアの数少ない贅沢の一つが入浴であることは、宮殿内では周知の事実である。

セントノエルのようには、設備が整っていない帝国において、お湯を沸かして入るというのは、結構な手間。にもかかわらず、毎日、入浴したいなどというのは、紛れもない贅沢であった。

だから、といってはなんなのだが、ミーアは自分だけが入ったお湯をそのまま捨ててしまうのは、もったいないなぁ、と常々思っていたのだ。なにしろ、ミーアのお風呂は、アンヌが用意してくれた浴槽香草（バスハーブ）も浮かんでいる豪華仕様なのだ。一回一回お湯を入れ替えるのは、なんだか、すごくもったいない気がしてしまって……。

かと言って、アンヌに使わせるというのは、少しまずい。いかに専属のメイドとはいえ、そこまでの特別扱いは、却ってアンヌに対する風当たりが強くなる。

かといって、貴族令嬢、例えばシュトリナであったり、他国の王侯貴族であったりの場合には、当然、ミーアの残り湯でというわけにはいかない。それぞれにお湯を用意して、湯浴みできるように手配するのが当然だ。

そんなこんなで、長らく、皇女ミーアの残り湯の使い道は定まら

ないままになっていたのだが……、三人の子どもたちの存在は、ミーアのそんなもったいない欲求を解消してくれたのだ。
まぁ、そんなこんなで、今日も、ミーアの二番湯に預かった子どもたちである。
――乗馬の後、汗まみれなのは気持ち悪いですし、お湯を有効に使っているようですわね。
髪を拭きつつ、トコトコ歩いてくるヤナに、ミーアは声をかける。
「今、お風呂から出たところですの？」
「あ、ミーアさま！」
ぴょこん、っと飛び上がり、背筋を伸ばすヤナ。それから、小走りに近づいてきた。
手が届く位置まで近づいたところで、ミーアはヤナの髪に触れた。
「ふむ、洗髪薬と香油もしっかり使ってますわね？　うふふ、髪がとても綺麗ですわ」
指先で確かめるように毛先をいじってから、ミーアは優しく微笑んだ。
アンヌがミーア用に、と取り揃えてくれた入浴グッズを、ミーアは惜しむことなく、子どもたちにも使うよう、厳に言い含めてあった。
ケチケチはしない。祖母にも、そのお友だちにも、清潔かつ健康に過ごしてもらわなければ、ミーアが困るのだ。
――セントノエルに帰った時、この子がげっそりしていたら、ラフィーナさまに怒られてしまいますし……。
そういう意味では、この子は、ラフィーナを怒れる獅子にするか、親しみやすい猫にするかの良き指標なのかもしれない。
手厚くもてなそう！　っと気合が入るミーアである。
ミーアに髪を撫でられて、ヤナは、くすぐったそうに笑った。
「あら？　どうかしましたの？　ヤナ」
「……そんなこと、言われたことないですから」
ヤナは、ちょっぴり頬を赤く染めて言った。

「あら、そうなんですのね。それならば、覚悟しておいたほうがいいですわよ」
ミーアは悪戯っぽく笑ってから、
「あなたは、きっと美しい淑女になりますわ。ふふふ、これから、嫌というほど殿方に言われると思いますわよ」
そう言ってやると、ヤナは困り顔で見つめてくるのだった。
「まぁ、それはともかく、帝都はどうかしら？　キリルも退屈しておりませんこと？」
「あ、はい。ミーアさまにこのようにお気遣いいただいて……」
「ふふふ、そんなに堅苦しい言い方をしなくても構いませんわ。そう、退屈していないならばなによりですわ。ああ、そうそう」
っと、そこで、ミーアはパンッと手を叩いた。
「せっかくですし、聞いておきたいのですけど、最近、パティの様子はどうかしら？　あの子も楽しんでおりますの？　乗馬とか……」
そう聞くと、ヤナは一転、表情を曇らせる。
「あら、どうかしましたの？　なにか、気になることでも？」
「えっと……」
ヤナは、少しだけ考え込んでから……。
「馬に乗るのは、楽しんでると思います。でも……」
「でも？」
「弟に会えなくって寂しがってる、と思います。たった一人の家族なんだって言ってたから……」
「そう……」
ミーアは、腕組みして考え込んでしまう。
――ということは、クラウジウス家には、両親がいなかった、ということかしら？　では、パティの時代のクラウジウス家の当主は……うーむ……。
「あの、これからも、気を付けて、様子を見て、報告するようにします」
キリリ、っとした顔で背筋を伸ばすヤナに、ミーアは優しく笑み

を浮かべて、
「ええ。お願い……し……」
瞬間、嫌ぁな予感が背筋を走った。その『予感』はニッコリと微笑むラフィーナの顔をしていた。
――いっ、今のは……いったい……？　わたくしは、なにを危険だと思ったんですの？
刹那の思考。答えはすぐにわかる。
キーワードは「お友だち」だ。
自らの危機感に導かれるままに、ミーアは言葉を組み立てる。
「ヤナ、あなたのその気持ちはとても嬉しいですわ。けれど、わたくしはあなたに、打算でパティのそばにいてほしくはないんですの」
「え……？」
「わたくしのために、パティのことを気にかけてくれるのは嬉しいことですわ。けれど、お友だちであることを二の次にして……パティの心を探るために友だちであることを利用して欲しくはない。あなたには、本当の意味でパティの良きお友だちでいてもらいたいんですの」
ヴェールガの聖女ラフィーナにとって「お友だち」というのは、とても大切なものなのだ。
では、もし、その「お友だち」というものを利用して、ミーアが情報収集をしている……などということが知られたら、どうなるか……？
――いい気分はしませんわね。自分の大切な価値観を汚されたと思っても不思議ではありませんわ。
それはヤバイ。下手をすると、また「あなた誰でしたっけ？」などと、ラフィーナに言われてしまう可能性だってある。
いや、なまじっか友誼を結んでしまっている以上、さらにラフィーナを傷つけてしまうことだってある……。
――ただでさえ怖い獅子を、手負いにさせてしまうとか……危険極まりないですわっ！

それは怖いし、それ以前にあの笑顔をもう一度見せられるのは精神的にもきつい。
せっかくお友だちになったのだから、このまま仲良しのままでいてもらいたい。
このまま心優しいラフィーナさまのままでいてもらいたいと切に願うミーアである。
「もちろん、友としてパティのことを気遣っていただくのは構いませんわ。それが良きお友だちというものですもの。心配事があれば、遠慮なくわたくしに言ってくれればいいですわ。ただ、わたくしのためになろうとする……その気持ちが強くなりすぎれば、パティと友だちなのかなんなのか、わからなくなってしまうでしょう？」
それから、ミーアはヤナの頭を撫でた。
「ヤナ、あなたの気持ちは嬉しいですわ。だけど、別にわたくしの役に立とうだなんて、考えなくってもいいですわ。あなたがなんの役に立たなくたって、あなたやキリルのことを、わたくしは決して見捨てませんわ。だから安心して、普通のお友だちとして、パティと接してもらいたいんですの」
ミーアの言葉を聞いたヤナは……なんだか、泣きそうな顔をして、ぽつり、とつぶやく。
「ミーアさま……お友だちって……なんですか？」
「……え？」
「あたしは……友だちとか、いたことがないからわからない、です」
その言葉に、ミーアは思わずハッとする。
そうなのだ、ヤナはヴァイサリアン族……。海賊の末裔と後ろ指ささされる彼女には、友だちがいなくっても、当たり前のことで……。
「ああ、そう……でしたわね」
ミーアは自身の迂闊さに舌打ちしつつも、思わず考えてしまう。
――友だちとはなにか……。なかなか、難しいですわ。
されど、話の流れから考えて、適当なことは言えない。ヤナは真剣に質問しているのだ。ここではぐらかしては、パティに悪影響が

出るかもしれない。
　ミーアはしばし熟考……。自らのお友だちであるクロエを頭の中に思い浮かべて……。
「ふむ……そうですわね。わたくしの考えでは、お友だちとは……相手が大事にしているものを、否定したり馬鹿にしたりせずに、きちんと大切なものとして扱える関係……かしら？」
　ミーアとクロエは読書を通じて友だちになった。だが、本の好みが完全に一致しているわけではない。そんなのどこが面白いんだろう？　と思うようなものを、クロエが読んでいたこともあった。
　だが、ミーアは決してそれを否定しなかった。クロエもまた、ミーアの好きな本を否定しない。むしろ、自分では手に取らなかったものだ、と、積極的にそれを読み、結果、二人の好みの幅は広がっていったのだ。
「相手とお話しして、相手の大切なものを知って……。そうして、お互いが良い影響を与え合い、お互いの世界を広げあっていける、そんな関係が良いお友だちといえるのではないかしら……って、ちょっぴり難しいことを言ってしまいましたわね」
　照れ笑いを浮かべるミーアだったが、ヤナは真剣な顔で聞いていた。なんだったら、メモでも取りだしかねない勢いだった。
「そんな怖い顔をしなくっても平気ですわよ。今までいなかったとしても、これからたくさんお友だちを作っていけばいい。もっと気楽でいて大丈夫ですわ」
　そうして、ミーアはヤナの頭を撫でる。パティの良きお友だちとなる、そのモチベーションアップに繋がるよう精一杯、励ましてみせたのだった。

　ところで……ミーアは気付いていないことがあった。
　それは「お友だち」という価値を大切に扱い、頭を悩ませるぐらいに真剣に向き合うということ……。それは、ラフィーナが大事にしているものを、自分自身も大切に扱うということ……。

特に意識することなく、ラフィーナとも良いお友だちの関係を育んでいることに、まったく気付いていないミーアなのであった。

第三十四話　ミーア姫、お友だちを語る（後書き）

ということで、なんだかんだで、ラフィーナともしっかりお友だちをやっているミーアなのでした。

第三十五話　始まる、乗馬大会！

乗馬大会の当日、早朝のこと……。
「う……ううん……」
日が顔を出すまで、まだ、数刻といった時刻……。
薄暗い室内、ミーアは、ひぃいいいいいっ！　という悲鳴のような声で目を覚ました。
――今の声は、夢かしら……？
などと寝ぼけ眼で思った次の瞬間、再びの、ひぃいいいいっ！に、ミーアは心の中で、ひぃいいいいっ！　っと悲鳴を上げた。
――いっ、いっ、今の声は……なんですの？　なんですの！？
寝返りを打つふりをして、辺りを確認。広い部屋には、誰もいなかった！
ここがセントノエル学園であれば、すぐそばの隣のベッドではアンヌが寝ている。だが、今、この部屋にいるのはミーア一人である。一人である！
では……先ほどの悲鳴はどこから聞こえたのだろう？
誰もいないのに……誰が……声を？
などと思った次の瞬間、ひぃいいいいっ！　っと再びの悲鳴。
さらに、窓を塞ぐ木戸が、ガタガタガタッと揺すられ、ミーアは震え上がった！
チラと薄闇に視線をやってから、窓のほうに背を向けて――それから、おもむろに毛布をかぶる。
――あっ、アンヌがいるなら……怖がってないか心配だから助けに行くところですけど……今はわたくし一人ですし。うん、このまま寝てしまっても問題ありませんわね。決して怖いとか、そういうことではありませんけれど、わざわざベッドから出て原因を調べに行くとか、そんな必要ありませんし。

ぶつぶつつぶやきつつ、ギュッと目をつぶるミーアであったが……。音は一向に止むことはなかった。
――うっ、うう……これでは、眠ることができませんわ……っ！
などと、毛布の中で唸ることしばし……、気付けば辺りは明るくなっていた。
「……あら？　お、おかしいですわ。なぜ、こんなに一瞬で朝に……？　この奇妙な現象はいったい……？」
などと言いつつ、無意識に口元の涎の跡を拭うミーアである。どうやら、寝落ちしていただけだったらしい……。
「おはようございます。ミーアさま。お目覚めですか？」
ドアを開け、入ってきたアンヌの顔を見て、ミーアは思わず、ほうっと安堵のため息を吐く。
「ああ、アンヌ……。ご機嫌よう、良い朝ですわね」
「はい。ですが、昨晩は、すごい風でしたね。ミーアさま、お眠りになることができましたか？」
「風……ああ、あれは風でしたのね……。ええ。まぁ、きちんと眠れましたわ。うん」
ミーアがベッドから起き上がるのと同時に、アンヌが窓を塞ぐ木戸を開いた。すると、外からは、まぶしいばかりの日の光が降り注いでいた。
「おお、見事に晴れましたわね。ふふ、これは絶好の乗馬日和ですわ」
見上げれば、空は抜けるような青。のんびりと流れていく白い雲が、夏の日差しを反射して、キラキラと輝いていた。
穏やかな風が運んでくる朝の匂いを、思い切り胸に吸い込みながら、ミーアは大きく一つ伸びをする。
「さっ、それでは、参りますわよ」
気合を入れて向かう先は、言わずもがな……食堂だった。
さて、料理長の料理に舌鼓を打つルーチンワークを終え、気合充

実したところで、ミーアは早々と乗馬服に着替える。
それから、白月宮殿の厩舎へと向かった。
騎馬王国での一件から、ミーアの馬扱いになった東風は、皇女専属近衛隊の厩舎から、城の厩舎へと移されていた。
ミーアの顔を見ると、東風は、穏やかな声で嘶いた。
「ふふふ、今日はよろしくお願いしますわね、東風」
そうして、ミーアは東風の鼻先を撫でる。
荒嵐だったら、くしゃみを吹っ掛けられそうなところだが、紳士にして騎士である東風は、そんな無礼な真似はしない。無礼な真似はしないが……それはそれで、ちょっぴり寂しくも感じてしまうミーアである。
――ふふふ、不思議なものですわね。くしゃみをかけられたことを、懐かしい思い出のように感じるなんて……。また、セントノエルに戻ったら、たっぷり乗り回してやることにいたしましょうか。
そんなことを考えている時だった。
「おお、ミーア姫。馬の手入れに来たのか？」
元気の良い声。視線を向ければ、慧馬が笑みを浮かべて歩いてくるところだった。っと、その顔が急に曇り、辺りをキョトキョトと見回してから。
「ところで、護衛にディオン・アライアを連れていたりは……？」
などと、恐る恐る聞いてくる。
「心配はありませんわ。さすがに、お城の中でまでは、連れておりません。それより、慧馬さん、今日はよろしくお願いいたしますわね」
そっと頭を下げると、慧馬は偉そうに腕組みして、
「ふふふ、そういうことであれば、我ではなく、蛍雷に言っておいてもらおう」
慧馬は、静かに厩舎に目をやる。その言葉を聞いていたのか、蛍雷が、静かな瞳を、こちらに向けてきた。
鼻がひくひく、っとしたかと思うと、ぶふぅーっと深く息を吐く。

「蛍雷の調子も良さそうだ。ふふふ、天気もいいし、良き勝負ができそうだ」
慧馬は、そっと空に目を向けて言った。
「今度は、帝国には負けんぞ」
「ふっふっふ、それはどうかしら？」
慧馬の力強い言葉を、笑顔で煽ってから、ミーアは続ける。
「ヒルデブラントも、彼が乗る夕兎も、かなりの実力者。ゆめゆめ油断はせぬように、お願いしたいですわ」
かくて、ミーア主宰の乗馬大会が始まる。

第三十五話　始まる、乗馬大会！（後書き）

今年もありがとうございました。
また来年も、ミーアとともに駆け抜けたいと思います。
それでは、よいお年を！

第三十六話　平和の祭典、ミーアピック

平和の祭典　月女神（ミーア）の選（ピック）び

今や、世界的なイベントとして知られるようになったその乗馬大会だが、初めて開かれたのがティアムーン帝国であるということ、最初に企画したのが帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンであるということもまた、有名な話である。

あらゆる地上の闇を等しく照らす月女神（ミーア）によって選（ピック）ばれた、各国の乗馬自慢の者たちを集め、その技術力を競い合い、互いに健闘を讃え合うその大会は、国同士の友好関係を深めるものとして、人々に受け入れられてきた。

そんなミーアピックであるが、もちろん、批判的な見方をする者もいる。大会の規模が大きくなれば、その分、好ましく思わない者たちが出て来るのが世の常というもの。

帝国の叡智が始めたミーアピックであっても、それは例外ではなかった。

ある者たちは言う。

「なにが平和の祭典か。これは、各国の騎兵力を誇示するための場。軍事力を誇示し、他国を恫喝するための場に過ぎないではないか！」と。

確かに、ミーアピックの競技の中には、軍事教練をもとに作ったものも多い。なるほど、騎兵の技術を見せあう場、と強弁することはできるだろう。

その発言には一定の説得力があった。

けれど、帝国の叡智の信奉者たちは答える。

「そのようなことを言うのは、帝国の叡智が成したことを知らないからだ。彼女がどれほど大陸の平和に貢献したのか、お前は知らないのか？　口だけしか出さぬエセ平和主義者とは違い、女帝ミーア

は自身の生き方をもって、平和を作ることを実践したではないか」
この論説にもまた、大いなる説得力があった。
その当時から、すでに彼女の存在は「平和を生み出す聖母」として、大陸中に知れ渡っていたからだ。
そんな女帝ミーアが始めた大会が、軍事力を誇示するものであったなどと、言いがかりもいいところだ、と、彼らは主張しているのだ。

では、どちらが正しいのだろうか？
かつて、聖ミーア学園の生徒が、女帝ミーアに尋ねたことがあったという。
「ミーア陛下は、どのようなお心で、ミーアピックを始めたのですか？　騎馬隊を強化するために、良き馬の乗り手を探し出すためですか？　軍事力を誇示するためですか？　それとも、各国の兵たちの友好をはかり、平和を維持するためですか？」
その問いに女帝ミーアは、一瞬、驚いたように瞳を見開き、そうして、なんとも言えない苦笑を浮かべたという。
そして、ついに、質問に答えることはなかった。
なぜ、彼女は明言を避けたのか……。
数多の歴史家たちは、その苦笑に意味を見出そうと、考察を重ねてきた。
自身の善意が、そのように世間にとられてしまったのか、と思わず苦笑してしまったのだという者がいた。
自身の想いとあまりにもかけ離れた曲解に、悲しんで言葉を失ったのだ、と言う者もいた。
そんなこと、考えるまでもないことではないか、と子どもの無邪気さに苦笑したという説もあった。
いくつもの説が出たが、結局のところ、その真意は誰にもわからなかった。彼女は、答えを口にしてくれなかったからだ。
だが、こうは考えられないだろうか？

女帝ミーアは、あえて、答えを口にせず、その答えを後の世を生きる我々に委ねたのだ、と……。
それを平和の祭典とするか、それとも、各国の軍事力を誇示する場に貶めるのか……。
その解釈の責任は、後の世を生きる者たち、自分の子どもたちに委ねようと、帝国の叡智は、そう考えたのではないだろうか。
その答えを出すのはあなたたちだと……答えられる質問に、あえて正解を出してくれなかったのではなかったか。
それは、彼女の祈りだったかもしれない。
自分の子どもたちに、帝国の、大陸の子どもたちに、賢明で、光り輝く未来を築いてほしいという……。
あるいは、信頼でもあったかもしれない。
きっと、子どもたちは大丈夫だと……。自分たちが築いた平和を受け継ぎ、そこから、さらに前に進んでいってくれると……。
その信頼を受け取った我々は……では、どのように生きていくべきだろうか？
その答えは、ぜひ、君たち、一人一人に出してもらいたい。

聖ミーア学園　第二十代学園長の卒業生への祝辞より抜粋

……さて……卒業生への祝辞にも登場してしまう、世界的祭典、乗馬大会ミーアピックではあるのだが……ミーアが、なにを思って始めたのか、実際のところは……。

「おお……。これは、なかなか……」
ミーア発案の乗馬大会の会場は、帝都ルナティアの郊外にあった。
黒月省の管轄の練馬場は、普段は、だだっ広いだけの、なんの飾り気もない広場なのだが……今はすっかり様相を変えていた。
そこは、異様な熱気で溢れていた。
入ってすぐの場所、左右両側に分かれて陣を張る両軍。

西に陣取るは、帝国正規軍を凌駕するとも噂されるレッドムーン家の私兵団。巨大な赤い月の旗を振り、気勢を上げている。
対する東に陣取るは、皇女ミーアの身を守ることに身命を懸ける皇女専属近衛隊。紫色の巨大な旗を振りながら、負けじと声を張り上げる。
「むっ……あの旗は……」
「皇女専属近衛隊の旗でしょうか……」
傍らに控えていたルードヴィッヒは、穏やかな笑みを浮かべて言った。
「ミーアさまへの忠誠心を、形にするような旗が欲しいと、以前から申し出を受けておりました」
「なるほど……」
紫色の旗の表面には、妖精のような翼を生やしたミーアが三日月に腰かけているという、実になんともファンシーな刺繍が施してあったりするのだが……ミーアはよく見えなかったので、特には批評を口にしなかった。
「ミーアさま、どうぞ、あちらの席に」
そうして、ルードヴィッヒが指し示したのは、会場の奥。両陣営とは均等の位置にある席だった。
「あら、あれは……櫓かしら？」
「はい。レッドムーン家の協力で、即席の観覧席を作らせていただきました。全体の戦況を見通すために、高所から戦場全域を見渡す際に用いるものを利用しています」
それは、木材を組んで作った即席の櫓だった。
高さは、城の二階ぐらいだろうか。上のほうはバルコニーのようになっていて、そこに、席が並んでいた。
「すでに、レッドムーン公はいらっしゃっています。陛下も、じきに到着される予定です」
「ふむ、では、先に登っておきましょうか……」
ミーアに同行するのは、レムノ王国王子であるアベルと星持ち公

爵令嬢のシュトリナだった。
さすがに、素性を明らかにすることのできないベルは下の席で、アンヌと共に子どもたちの面倒を見てもらうことになっている。
階段を登ると、そこには、レッドムーン公マンサーナ、それに、ルヴィが待っていた。
「レッドムーン公、ご機嫌よう。この度は、わたくしの企画にご協力いただき、感謝いたしますわ」
ちょこん、とスカートを持ち上げて、ミーアは、お姫さまっぽい笑みを浮かべた。
そうなのだ……やる気になればミーアだって、お姫さまめいた顔はできるのだ。馬鹿にしたものではないのだ！
……いや、だが待ってほしい。よくよく考えてみると、ミーアは元からお姫さまなので、やる気にならなければお姫さま顔ができないというのは、実は、奇妙なことなのかもしれないが……。いや、だが、それは深く考えてはいけないことか。
今のミーアは、頑張ってお姫さまっぽい顔をしているし、それに成功している。その事実だけが大事なのだから、深く考えるのはよそう。
そうして、お姫さま面したミーアに、レッドムーン公マンサーナは上機嫌な笑みを浮かべた。
「いえ、このように楽しい場にご招待いただき、感謝いたします。ミーア姫殿下。恥ずかしながら、この熱気に、私自身の血もたぎるような思いがしていますよ。ははは」
どうやら、楽しんでもらえている様子に、安堵しかけるミーアであったが……。
想定外の事態は、突如として襲ってくるもの。
「失礼いたします。ミーアさま」
急転は、ミーアの従兄弟の姿をして、やってきた。

第三十六話　平和の祭典、ミーアピック（後書き）

あけおめです！
駅伝、楽しい！　お餅も美味しい！

追記
平和の祭典「ルーナティック」から「ミーアピック」に変更。
ミーアピッ”グ”ではないので念のため。

第三十七話　平和の祭典と平和じゃないミーア

「ご機嫌麗しゅう。ミーア姫殿下」
「あら、ヒルデブラント。ふふふ、なかなか、気合が入った格好をしておりますのね」
観覧席にやってきたヒルデブラント・コティヤールは、すでに乗馬しやすい服に着替えていた。キリリッと背筋を伸ばした彼は、快活な笑みをもって答える。
「今すぐにでも、競技に臨める心持ちでおります。なにしろ、従兄弟である私の失態は、ミーアさまの失態。無様な姿など見せられようはずもありますまい」
「ふむ、その意気や良し、ですわね」
気合が入った様子のヒルデブラントに、ミーアはニッコリと……ほくそ笑む。
――いい感じですわ。本気で戦ってこそ、負けた時の衝撃も大きいはず。慧馬さんに完膚なきまでに負ければ、俄然、騎馬王国への興味が生まれてきて、ふふふ……。計画通りですわ。
ミーアは、自らの計画が順調に進んでいっていることを疑わない。今回の出来事に関しては、本当に、すべてが順調に行っていると信じ切っていた。信じ切っていたがゆえに……わずかなほころびに、今まで気付かなかったのだ。
「そうですわよ？　あなたの失敗はわたくしの恥に……うん？」
生じたのは、刹那の違和感。
なにかが、ミーアの危機意識を刺激していた。
ゾクリ、と背筋を駆け上がった直感、それはまるで、波の頂上にいると思い込んでいたら、突如として後方に巨大な波が現われて……、ああ実は、自分は今まさに波に呑み込まれそうになっていたのだ、と気付いた瞬間のように……。

――よくよく考えると……ヒルデブラントは、わたくしの従兄弟ですわね？　だから、彼のミスは、わたくしの恥になる……。うん、間違ってはおりませんわ。おりませんけれど……あら？

そうして、ミーアは、思ってしまうのだ。

――ここで、ヒルデブラントが「婚約話を断って、勝手に騎馬王国に行く」などと言い出す無礼を働いたら……それって、わたくしへの印象の悪化を招くのでは……？

なにしろ、マンサーナは、ヒルデブラントとの縁談が、ミーアとの関係強化に繋がると考えている。そのぐらいには、ヒルデブラントのことを「ミーアの身内」と把握しているのだ。

そんなヒルデブラントが、勝手なことをして、騎馬王国に行ってしまったら……マンサーナは、気分を害さないだろうか？

そして、その気分を害させたのは「ミーアの身内」「ミーアの従兄弟」なのだ。

――あっ、こっ、これは、盲点でしたわ。くぅっ、これが一番、穏当に破談に導けると思っておりましたのに……。想定外ですわ！

知らず知らずのうちに油断していたことに、ミーアは歯噛みする。

けれど、それは、仕方のないことだったかもしれない。

なにしろ前の時間軸では、ヒルデブラントは早々に死んでしまい、ミーアはその死を悼んでいる余裕はなかった。そして、過去に舞い戻った、やり直しの時間軸。ミーアは彼と親戚づきあいをしている余裕はなかった。

要するに、ミーアの中で、彼に対する印象が薄すぎたのだ。

結果、ミーアはヒルデブラントを身内としてとらえきれていなかった。彼の失敗が自分の恥になると言いつつ、それを実感することができていなかったのだ。

――不覚ですわ……。これは、なんたる不覚……。

愕然としたミーアであるが……すぐに立ち直り、軌道修正を図る。

それは、今朝の、料理長のお料理がとっても美味しかったから。

乗馬大会だから、今日はサービスです、と言って出してくれたデ

ザートが……新しく輸入した甘い豆を使った料理が、大変に美味しかったから……。
その甘味をエネルギーにし、ミーアの脳が活動を開始する。
――やはり、基本はどちらにも得になること……。つまり、レッドムーン公にとっても、ヒルデブラントとの縁談がなくなったほうが得となるような状況を作り出す……それが無理だとしても、せめて「まぁ、いいか」と思うぐらいの状況を作り出すことが肝要。そうすれば、レッドムーン公の、わたくしに対する印象悪化も避けられるはず。となれば……。
ミーアはチラリと自らの皇女専属近衛隊のほうに目を向ける。
幸いなことに隊長であるバノスも、競技に参加する予定だ。しかも、例の五種競技に、である。
強兵好きなレッドムーン家の話は有名だ。アピールすることは十分可能ではないだろうか？
それから、ミーアは、ルヴィのほうに視線をやる。
シュトリナやアベルと挨拶を交わすルヴィであったが……あれからバノスとなにか進展があったという話は聞かない。ついぞ聞かないっ！　まったくもって、微塵も聞かないっ！！
――ルヴィさんも、意外と小心者ですわね。わたくしの親戚筋の方ですのに……。まぁ、エメラルダさんもサフィアスさんも、割と小心者ですし、わたくしとリーナさんだけが例外と言うことなのかもしれませんけど……。
なぁんて考えつつも、ミーアは小さくため息を吐いた。
――仕方ありませんわ。放っておくつもりでしたけれど、わたくしの方から、マンサーナさまに、バノスさんのことをプッシュして、後押しさせていただきますわ。
「ははは、ヒルデブラント殿が、いかに夕兎を乗りこなすのか、楽しみだ」
レッドムーン公マンサーナの言葉で、ミーアはハッと我に返る。
それから、やや慌て気味に、

「それはもちろんですけれど、わたくしの自慢の皇女専属近衛隊の者たちの雄姿も、ぜひ楽しんでいっていただけたら嬉しいですわ。隊長以下、精兵が集まっておりますのよ？」
「ほう。それはとても楽しみですね。我がレッドムーン家の軍と、どちらが上か……」
ニヤリ、と口元に笑みを浮かべ、マンサーナは言った。
「ふふふ、負けませんわよ、絶対に」
ミーアはマンサーナと、ヒルデブラントを交互に見ながら鼻息荒く言うのだった。

こうして、平和の祭典のきっかけとなるものが開催された日のミーアは、あまり平和な心境ではいられなかったのだった。

第三十八話　開会宣言

その後、遅れてやってきた父の「パパと呼びなさい」攻勢を華麗なるステップでスルーした後、ミーアには大役が回ってきた。

本日の乗馬大会、開始の挨拶である。

「では、初めにミーアさま、一言をお願いします」

ミーアたちの観覧席の前に集合した一同。レッドムーン公の私兵団と皇女専属近衛隊の面々を前に、ミーアは気合十分に鼻息を吐いた。

「ふむ……」

ぶっちゃけ、割と無茶振りではあったのだが……ミーアは動じない。すでに、この程度の状況に動揺するミーアではない。

席を立ちあがると、おもむろに観覧席の前方まで歩き、兵たちを見下ろす。

小さく息を吸って、吐いてから、

「ご機嫌よう、みなさん。今日は、わたくしのわがままにお付き合いいただき、感謝いたしますわ」

ニコやかに話し出す。

――とりあえず、皇女専属近衛隊の士気を上げる必要がありますわ。

なにしろ、彼らの活躍は、その隊長たるバノスの評価へと繋がる。すでに、十分に士気は上がっているように見えなくもなかったが、念には念を入れるべく、ミーアは静かに語りだす。

「特に、今回は、我が皇女専属近衛隊の相手として、レッドムーン公の騎士団にご参加いただけたことは、望外の喜びですわ」

ニッコリと笑みを向けつつ、ミーアは続ける。

「レッドムーン公爵家の軍は、帝国一の精兵揃いと聞いておりますわ。その評判に相応しい働きを期待しておりますわ」

息をするがごとく、極めてスムーズかつ自然なヨイショだった。
それはマンサーナのご機嫌取り……と言うことはもちろんあれど、むしろ、ミーアが意識したのは……。
――波が高ければ高いほど、それを乗り越えた者の力が認められるというものですわ。
強力なレッドムーン公の軍と互角の戦いをしたとあれば、否応なく皇女専属近衛隊の評判も上がる。当然、その隊長はどんな優秀な人間なんだ？　と興味も湧こうと言うもの。
――爵位の問題はありますけれど、まずは、マンサーナさまに気に入っていただく必要がありますわ。
ゆえに、ミーアは、レッドムーン公の私兵団を最初に持ち上げたうえで、皇女専属近衛隊へと視線を移す。
「そして、我が皇女専属近衛隊のみなさん……。わたくしのために、いつも働いていただき、感謝いたしますわ。特に、ここしばらくはとても忙しい任務にあたっていただいておりますわね。まず、心からお疲れさま、と言わせていただきたいですわ」
ミーアは穏やかな口調で言った。
その言葉に、嘘偽りはなかった。ミーアは、彼らの働きが断頭台を遠ざけるものであると知っている。ゆえに、心からの感謝の言葉を贈ったのだ。
それを聞き、何人かの兵の目に、感極まったかのような涙が浮かぶ。
女帝派の面々に決して劣らぬ、ミーアへの忠誠心を保持している皇女専属近衛隊であった。
「そのようにして、忙しくしているところ、このような会を開いてしまい、心苦しくはございますけれど……どうぞ、気楽に、お遊び気分で……などと言うわけにはまいりませんの」
ミーア、ここで、キッと表情を引き締める。
「あなたたちは、わたくしの誇る剣にして盾。未だ、その名においては、レッドムーン公の軍に劣るとしても、実力においては決して

劣るものではない、と、わたくしは信じておりますわ」
　それから、ミーアは観覧席のほうに目を向けて……。
「本日は、ここに、我が父たる皇帝陛下と、レッドムーン公爵にいらしていただいておりますわ。あなたたちの真の力を披露する絶好の機会。華々しい勝利を期待しておりますわ」
　そうして、ミーアは、一転、優しい笑みを浮かべて。
「さて、これで結びとしますけれど、これから対決するとはいえ、両陣営共に、栄えある我がティアムーン帝国の軍。味方同士でいがみ合うことなく、勝負が終われば互いの健闘を称え合うこと」
　今回の大会をきっかけに、レッドムーン公の軍と関係が悪化するのは、ミーアの望むところではない。いざという時には、両軍で協力して、自分たちを守ってもらいたいミーアである。
　ゆえに、あくまでも対抗心を燃やすのは、この競技の中でのこと、と明言しておく。
「そして、そのために、怪我はしないよう、無理せず競技に臨むこと、ぜひ、それを心掛けていただきたいですわ」
　誰かが血を流せば、禍根が残る……という側面はもちろんあるが、それ以上に、皇女専属近衛隊の者が怪我をすると、物資の輸送に支障が出るかもしれない。それもまた、ミーアの望むところではない。ゆえに、怪我するなよ、無理するなよ！　とも強調しておく。
　そうして、とどめに……。
「それでは、楽しみましょう」
　これは、楽しむためのものですよー、ということも、印象付けておく。
　発言を終えると、ミーアは優雅に踵を返し、自らの席に座る。
「それでは、両陣営、元の位置に。戻ったら、第一競技から順番に始めて行く。該当の者はコースに出るように。それと、審判は所定の位置に……」
　キビキビとしたルードヴィッヒの指示が飛ぶ中、席に戻ったミーアに皇帝が話しかけてきた。

「ミーアが出るのは、この最後のホースダンスという競技か？」
「ええ、そうですわ……。って、お父さま、ずいぶんと眠そうですわね」
「ふふふ、ミーアがこのような催し物に誘ってくれるとは……。嬉しすぎて、昨晩、眠れぬでな」
それを横で聞いていたマンサーナが穏やかな笑みを浮かべる。
「ああ、陛下もそうでしたか。私も、最近、ルヴィがそっけない態度をとるので、ちょっとしたことでも声をかけてもらえると、ついつい嬉しくなってしまうのです」
「ははは、そうかそうか。どこも同じようだな」
そのように、和気あいあいと笑い合う父親たちを、ミーアとルヴィ、さらにシュトリナまでもが、なんとも言えない表情で眺めているのだった。

第三十九話　意気上がる者たち……

正直な話……。皇女専属近衛隊内において、今回の乗馬大会は、若干の違和感をもって受け止められていた。

これまでの帝国の叡智の行動には、すべて確固たる理由が存在していた。

最近忙しくしている食糧の護衛などは最たるもので、自分たちの仕事に極めて重大な意義を感じていた。それゆえに、忙しくてもなんの問題もなかったわけだが……。

今回の乗馬大会は、それとはいささか趣が違っていた。

ある者たちは、労うために、肩の力を抜けるような、楽しめるようなイベントを用意してくれたのだ、と言っていたが……。

「まぁ、確かに、常に緊張感の高い任務ばかりでは息が詰まる。ここいらで、一息吐けるような、ちょっとしたレクリエーションを用意してくださろうという、そのお心が嬉しいではないか……」

そのぐらいの感覚でいたのだ。

競技に参加する者も、それは同様で……どちらかと言えば、ミーアが後半に言っていた、「怪我をせず楽しもうぜ！」という意識のほうが強かったのだ。が……。

「……みな、聞いたな。ミーア姫殿下のお言葉を」

「ああ……確かに……しかと聞いた」

皇女専属近衛隊の者たちは、自らの陣営に戻って来るや否や、小声で囁き合った。

「ミーアさまは、我々を、誇りと言われた。ご自分の、帝国の叡智の、剣にして、盾と……言ってくださった……」

その言葉に、誇らしくも胸を張るのは、元近衛隊の者たちだ。

忠義に厚い彼らにとって、ミーアの言葉は、なによりも誇らしいものだった。

対して、元ディオン隊の者たちの反応は違っていた。
「レッドムーン公の軍に勝てと、おっしゃるか。なるほど、さすがはミーア姫殿下。言うことが違う」
百戦錬磨のディオン隊の者たちにとっても、レッドムーン公の軍は、紛れもない精鋭部隊だ。剣や弓の腕のみならず、その乗馬技術も超一級品で……けれど、皇女ミーアは、そんな強敵に立ち向かい、勝てと言う。
あなたたちならば勝てるのだ、と……堂々と言う。
かのディオン・アライアに鍛えられし兵が……どこかの潰えた未来で、年老いた身なれど、聖女の軍に一泡吹かせた男たちが……、そのようなことを言われたら、どうなるのか……。
「さすがは、ミーア姫殿下。実に愉快なことをおっしゃる。ならば、その命令、達成しないわけにはいかないな……」
「当たり前だ。いちいち口にするまでもない」
ニヤリと獰猛な笑みを浮かべる男たち。その士気は、天井知らずに上がっていく。
「我らにこのような見せ場を用意してくださった。ミーアさまのお心遣いに応えるためにも、お前ら、気張れよ」
そんな檄を受けるのは、代表として選ばれた騎手たちだ。
「おうっ！　任せておけ」
仲間たちの声援を背に、騎手たちは自らの馬のもとに向かって走って行った。

一方でレッドムーン公の私兵団の方も、意気上がっていた。
なにしろ皇女専属近衛隊に、大切なルヴィお嬢さまを筆頭に、複数の女性兵を引き抜かれた彼らである。
いかに、皇女ミーアの近衛隊に……とは言え、微妙に納得のいかないモヤモヤを抱えていたのだ。
「これは、意趣返しの良い機会だ。さすがに、正面から戦を仕掛けるわけにもいかなかったところを……まさか、あちらの方から、こ

のような場を設けてくださるとは思わなんだ。ミーア姫殿下の前で、奴らに恥をかいてもらうとしよう」
「そうですな。先ほどの姫殿下の演説も、いささか聞き捨てなりませんでしたし。騎馬の扱いにて、我らを負かせとは……」
レッドムーン公爵家の兵たちは、自分たちの軍を誇りに思っている。ミーアが口にした帝国最強というお世辞を、彼らは、ごく自然に受け入れていた。
そう、自分たちこそが帝国の最精鋭。姫のそばにはべる近衛などに、負けるはずもなし。
にもかかわらず、先ほど、ミーアは言ったのだ。
皇女専属近衛隊に「勝て」と……。
そのせいで、彼らのプライドはいたく傷ついたのだ。
「我らは帝国臣民として、ミーア姫殿下を敬愛している。ゆえに……、姫殿下の不見識を放置してはおけぬ。このまま放置しては姫殿下の恥となろう。ここは、ご見識を改めていただくべく、一肌脱ごうではないか。なぁ、諸君？」
リーダー格の男の声に、おおうっ！　っと気合の声を返す面々である。

さて、意気上がる両陣営を遠目に見て、ミーアは、うんうん、っと満足げに頷いた。
――双方、共にやる気十分ですわね。あれだけ気合が入っているのですし、きっとレッドムーン公にもご満足いただけますわ。迫力が違いますもの……。
そうして、待つことしばし。
第一試合が始まる。最初は、単純な速さ勝負だ。
「ちなみに、レッドムーン家では、馬はどのように揃えておりますの？」
ふと気になって聞いてみると……。
「大部分は、テールトルテュエ種ですな。あとは、血を混ぜた種類

もおりますが……しかし、だいたいは、テールトルテュエ種で統一しております」
帝国が誇るワークホース、テールトルテュエ。速さは月兎馬に譲るものの。絶対的な安定性とタフネスには定評がある馬である。
「ほう、テールトルテュエ……東風と同じ種類ですわね……。となると、馬の差はほとんどなく、純粋に乗り手の技術が問われそうですわね」
なにやら、解説家めいた偉そうなことをつぶやいてから、ミーアは、ふん、っと腕組みするのだった。

第四十話　令嬢たちのアピール、直撃す！

乗馬大会の開幕を飾るのは、純粋なる速さの競い合いたる周回競争であった。

ちなみに、極めてどうでもいいことながら、乗馬大会の閉幕を彩るのは、華やかな姫の乗馬ダンス……ということになっている。ということで、かなりのレベルのものが披露されると、みなが相応の期待をしているわけなのだが……。大丈夫だろうか？

まぁ、それはともかく……。

「ふむ、これは、なかなかに見応えがありますわ」

ミーアは能天気に、白熱のレースに吐息を漏らした。

「荒嵐の時には、もっと地面が荒れておりましたけれど、こうして、きちんと整地された場所でのレースは純粋な速さ勝負になって、これはこれで迫力がございますわ」

思わず前のめりになって応援するミーアに、

「あの時は、してやられました」

苦笑いを浮かべるルヴィである。が、そこで、ふと思いついたように、首を傾げた。

「しかし、ミーアさま。もしもあの時、地面がまともな状態だったら、どのように私と勝負するおつもりだったのですか？」

「え？　それは……もちろん、秘密ですわ」

そう言って、意味深……っぽく見える笑みを浮かべるミーアである。

言うまでもないことだが、なにか良いアイデアがあるわけでもなく……っというか、そもそも、コースのぬかるみの件にしても、利用したのはミーアではなく、荒嵐のわけで……。ミーアには、作戦など最初からなかったわけで……。

なので、笑って誤魔化しつつ、話を変えにかかるミーアである。

「あっ、と……そうそう。伝え忘れるところでしたけれど、ルヴィさん。わたくし、今回の乗馬大会では、マンサーナさまに、バノスさんのことをアピールする予定ですわ」
「……はぇ？」
突然の不意打ちに、ぽっかーんっと口を開けるルヴィ。それは、ご令嬢にはあるまじき、ちょっぴりアレな表情だった――ちなみに、ミーアがよくするやつだが……。
「なっ、おっ、そ、え？」
「しっ、声が大きいですわ、ルヴィさん」
ミーアは、そっと、自らの唇に人差し指を当ててから、優しく笑みを浮かべる。
「いいですこと？　わたくしの狙いが上手くいけば、今回の婚約話は取りやめになるはずですわ。けれど、それは、あなたの縁談を先延ばしにするだけのこと。であるならば、今回はもう一手……攻めの手を打っておくべきですわ」
「そっ、それが、父にバノス隊長をアピールすること……なんですか？」
神妙な顔で問いかけるルヴィに、ミーアはこっくりと頷いて……。
「そうですわ。縁談の相手からヒルデブラントを外すだけではだめ。そこに、バノスさんをきちんと当てはめるように動かなければなりませんの」
極めて真剣な顔で諭す、諭す！　熱心にルヴィを諭すミーアなのである。
なにしろ「ヒルデブラントよりも有望な相手がいるかも？」と思ってもらわないことには、ミーアの印象が悪化することは避けられないわけで……。
軍事に明るいマンサーナとは、ぜひとも仲良くしておきたいミーアとしては真剣にならざるを得ないのだ。
「まずは、マンサーナさまにバノスさんをアピールする。きちんとその存在を認識し、できれば、なかなか見どころがある奴だ！　ぐ

らいのことは思ってもらわなければなりませんわ」
ミーアの力のこもった囁きにルヴィは、真剣な顔でうんうん、と頷き、
「それならば、問題ないかと……。なにしろ、バノス隊長は、とっても素敵な方……。見てもらえるだけでも、その魅力は伝わるはずです。特にあの筋肉が……ふふふ」
などと……まぁ、ご令嬢二人が若干アレな会話をする中で、競技は進んでいく。

「ふぅむ……。今までのところ、レッドムーン公の軍と五分と言ったところかしら」
前半の速力勝負は、ほぼ互角だった。
さすがに、安定力とタフネスが自慢のテールトルテュエ種である。どちらも大崩れしたりすることもなく、息の詰まるような接戦を繰り広げていた。
一本目の五周対決ではレッドムーン公の私兵が、二本目の三周対決では、皇女専属近衛隊が、三本目の一周対決では、僅差で皇女専属近衛隊が勝利をおさめていた。
「ほう、あの方は……トニさんと言ったかしら……。なかなかですわね」
接戦も物にして、ビクトリーランをする騎兵を眺めながら、ミーアはつぶやく。
ちなみに、当然と言うか、言うまでもないことながら……ミーアは本日の、皇女専属近衛隊の出場者のこと、その名前と顔とをすべて記憶している。
なにしろ、皇女専属近衛隊は、ミーアの剣にして盾。命を懸けて、革命の火からミーアを守ってくれる者たちなのだ。そんな彼らに「誰だったかしら？」などと言おうものならば、士気は下がってしまうだろう。うっかり盾を下げて「守り切れませんでした！」などという事態も起こり得るかもしれない。

そんな苦境に陥らぬためにも、ミーアは日夜、努力して、脳みそを酷使しているのである。そうして、その日に摂取した甘味をきちんと消費するようにしているのだ。だから、甘い物をちょっぴり食べ過ぎてしまうのは、脳を適切に使っている証拠なのだ……多分。

「しかし、これはやはりバノス隊長の薫陶が行き届いているということかしら……。ねぇ、ルヴィさん？」

チラリ、とルヴィに視線を送り、続けて、マンサーナのほうを窺うミーア。突然に話を振られたルヴィは、したり顔で。

「はい。その通りです。いつも、バノス隊長が熱の入った指導をしておられます。とても優秀な方で、特にその筋肉が素晴らしく……部下の者たちにも鍛練を施しております」

「まぁ、それは素晴らしいですわ。やはり分厚い筋肉があると安心感がございますし……」

などというミーアとルヴィの会話を、脇で聞いていたのはシュトリナだった。

小さく首を傾げたシュトリナだったが、直後、なにかを得心した顔で頷くと、

「そうですね。ミーアさまのところの大きな隊長さんは、とても頼りがいがある方ですね。あの熊のような体つき……、護衛として、リーナもとっても心強いと思います」

即座にノッてくる！　実に、勘が良いシュトリナである。

さて……そんな令嬢たちのバノスアピールを聞いて、興味を示したのは、レッドムーン公マンサーナ……ではなく、その隣で観戦していた皇帝陛下だった！

「ほう……。筋肉……。頼りがいのあるパパ……なるほど」

そのつぶやきを聞き、ミーア、震えあがる！

「あ、いえ……お父さま、その……お父さまは別に、鍛える必要は……」

脳裏に、熊のように大きくなった父が「パパと呼んでくれ」と迫ってくる姿が過る。

ミーアは慌てて父を諌めつつ、シュシュッとレッドムーン公マンサーナのほうを窺う。っと……。
「なにをやっとるか！　我がレッドムーン家の騎兵が、そう簡単に競り負けるでない！　最後まで諦めずに粘らんかっ！」
マンサーナ、聞いちゃいなかった！
拳をぐぐぅっと握りしめ、大きく声を張り上げる。
彼は普段、どちらかというと落ち着きがあるイメージの人なのだが……。馬は……人を熱狂させる、罪な生き物なのだ。
「しかし、なかなか、やりますな。ミーア姫殿下の兵士たちは……。ですが、戦の技術は、馬に乗るだけにあらず。まだまだ勝負はこれからですぞ」
ギラリ、と熱のこもった視線を向けてくるレッドムーン公マンサーナ。それを受けて、ミーアは、
「ふっふっふ。受けて立ちますわよ。なにしろ、我が皇女専属近衛隊の隊長は、とおっても優秀なんですから！　特に、こう……パパ呼びを強要しないところとか、高評価ですわね！」
……ややアピールの方向が迷走しかけるのだった。

第四十一話　令嬢たち、動き出す

さて、速駆け勝負三本と障害物レースが終わったところで、前半の競技は終了。いったん、小休止を入れようということになった。

「なるほど、あの障害物の飛び方はなかなかお見事……。勉強になりますわ」

ホースダンスに向けて、障害物を飛び越える練習を積んできたミーアである。同じような動きが多い障害物レースは、実に参考になる部分が多かった。

基本的に、騎馬王国民の乗馬技術も見知っているため、目が肥えているミーアであるが……そのミーアをも唸らせるだけの腕前を、兵士たちは披露していたのだ。

「特に、今の最後のジャンプはお見事でしたわね。流れるような動きでしたわ」

「ああ。とても見応えがあったね」

そうして、隣で観戦するアベルと笑みを交わし合い……

「ああ、実に幸せですわ……」

なぁんて、浸りかけるミーアだったが……不意に、そこで動きを止める。

――って、バノスさんのアピールをすっかり忘れてましたわ！

そう、ミーアが集中力（シリアスモード）を持続させ続けるには、アベルのそばは場所が悪かったのだ。

――というか、こうしていい勝負をして盛り上がるのは良いのですけど……マンサーナさまを感心させるという意味では……まったく足りてないですわ。

視線を移せば、マンサーナは、確かに競馬に見入っている様子だったが、特に皇女専属近衛隊に感心している様子はない。

つい先ほどまでルヴィとミーアで懸命に売り込みをしていたのだ

が（あの騎兵は、隊長が手ずから鍛えた人物で……とか、良い乗り手だけど、隊長には一歩及ばない、などと、割と露骨にアピールしているのだが……）、いまいち手応えがない。

競馬に夢中のマンサーナである。

――やはりバノスさん自身の腕前で、注目させるしかありませんわね。まぁ、もともとそのつもりでしたし……とすると、ここは少し気合を入れに行ったほうがよろしいかしら……。

っと、その時だった。

「ミーアさま、すみません。少し席を外します」

「あら、リーナさん、どちらへ？」

尋ねると、シュトリナは、実に可憐な笑みを浮かべて、ミーアに耳打ちする。

「少し子どもたちのことが気になるので、見に行こうかなと思いまして……」

子どもたち＝ベル、と頭の中で翻訳して、ミーアは、ふむ、っと頷いた。

――お父さまの手前、前半は一緒に観戦して……その後で、こっそりと抜け出して、お友だちと一緒に見ようということですわね。

星持ち公爵令嬢（エトワーリン）としての務めを果たしつつ、お友だちと遊ぶことを諦めない、その姿勢！

ミーアは、そこに、シュトリナの矜持を見た気がした。

……まぁ、それはともかく。

「それならば、わたくしも、一緒に行きますわ。着替えをしなければなりませんし……」

途中で、アンヌと合流し、さらにバノスを激励してこようと思い立つミーアである。が、それを聞いて、

「なにっ！？　もう行ってしまうのか？　もう少し、ここにいても良いのではないか？」

ごね始めたのは皇帝であった。

若干、ウザいですわ……などと感じるミーアであったが、それを

口にしたりはしない。
なにせ、今年の冬でミーアは十六歳。もう、立派なレディーなのだ。そのぐらい、大人の態度で、かるぅく流せるのだ。
……いや、だが、待ってほしい。
ミーアは、過去に戻った時にすでに二十歳……立派なレディーだったような気がしないでもないが……。
まぁ、そんな些細なことは置いておくとして、ミーアはシレッとした顔で、
「あら、お父さま。準備をしなければ、わたくし、ホースダンスに出られなくなってしまいますけれど、それでもよろしいのかしら？」
「ぐぬ……いや、だ、だが……それは、あまりに寂しい……ぐぬぬ……」
皇帝は、悔しげに唸ってから……。ぽんっと手を叩いた。
「おお、そう言えば、あの子たちが一緒に来ているのでなかったか？」
「あの子たち、とは……？　ええと、パティたちとベルでしたら、下におりますけれど……」
「なんと！　それならば是非もなし。子どもたちをここへと呼んでやると良い」
「いや……でも、よろしいんですの？　お父さま」
仮にも大国の皇帝である。
そんなに気安く素性の知れぬ者を呼んでも良いのか……？　と尋ねれば……。
「素性の知れぬことはあるまい。ミーアが後見人を務める子どもたちなのであろう？　であれば、それだけで十分だ」
「お父さま……」
父の言葉、そこから窺える自身への信頼にミーアは、不覚にも、ちょっぴり感動しかけて……。
「そもそも、ミーアに顔が似ているとなれば、それだけでなにも言うことがない！」

続く言葉に、ちょっぴりげんなりする。
――そうでしたわ。お父さまはベルの顔に、わたくしの面影があるからというだけで、甘やかす人でしたわ。
そのうえ今は、母の面影を持つ少女パティ（本人だが……）もいる。
ここに呼ぶことを躊躇う理由はなにもないのだろう。
「皇帝と子どもは高いところが好きというからな。きっと、ここに来たら喜ぶぞ」
などと無邪気に笑う父。
ミーアは、その横にいるもう一人の重鎮、レッドムーン公爵に目を向ける。が、彼のほうも穏やかな笑みを浮かべ、
「陛下が良いと言うものを、私がどうこう言うものではありませぬ。それに……やはり、馬はみなで楽しまなければっ！」
後半は、なんだか、前のめりになるウマニアである。
ウマニアってそこら中にいるんだなぁ、なんて感慨深く思うミーアであった。
ふむ、と鼻を鳴らしてから、今度はシュトリナに目を向ける。
もしかしたら、こういった緊張感のある場所ではなく、もっと気楽な場所でお友だちと観戦を楽しみたいのではないか、と危惧したのだが……。
「では、早速、不肖、このリーナが迎えに行ってきます」
などとすまし顔で言った。
――そうですわね。よくよく考えたら、リーナさんは、皇帝の前であろうと、緊張なんかしそうにありませんし……。
納得顔で頷いて、
「では、行ってまいりますわ。お父さま」
ミーアは静かに踵を返す。っと、その時だった。
「お待ちください。ミーアさま。私も、ご一緒いたします」
やおら、ルヴィが立ち上がり、キリリッとした顔で言った。
「おや、どうかしたのかね？　ルヴィ」

父の問いかけに、キビキビとした様子で振り返り、
「はい。副隊長として、出場する騎手たちを激励してこようと思いますので……」
「出場する騎手……」
それを聞いて、マンサーナは得心したように頷いて、
「なるほど。それは大切なことだ。行ってきなさい。『彼』によろしくな」
その『彼』というのが、バノスを指すのでないことは明らかだろう。
恐らく、マンサーナは、ルヴィが婚約者となる予定の青年、ヒルデブラントの応援に行くと思ったのだろう。
そのことを察したのか、ルヴィの顔がわずかに曇るも、
「わかりました。お父さまも、どうぞ、引き続き、お楽しみください。我が皇女専属近衛隊の雄姿を」
そうして、ルヴィは静かにその場を去って行った。

第四十二話　裏方の男たち

「周囲に異常はないか……？」
乗馬大会会場内、皇女専属近衛隊の陣営から少し離れた場所で、二人の男たちが会話していた。
一人は、いかにも目立つ巨体を誇る男。ほかならぬ、皇女専属近衛隊隊長のバノスである。
「はい。今のところは異常はございません。観覧席に近づく者もいないようですし、弓で狙えそうな箇所も、しっかりチェック済です」
問いかけに応えるは、同じく皇女専属近衛隊に所属する、オイゲンという名の騎士だった。
今日の乗馬大会は、基本的に、彼らの息抜きのために開催されたものだ。けれど、オイゲンをはじめとする一部の兵士たちは、今日も変わらず、ミーアの護衛をすることを主張した。
オイゲンは、剣の腕こそバノスに及ばないまでも、その忠誠心においては、右に並ぶ者のない男だった。
たとえ、皇女専属近衛隊が彼以外全滅したとしても、彼は一人で最後まで戦い抜くだろう……と、そう確信を抱かせる忠義の人だった。
ゆえに、バノスは彼に全幅の信頼を置いていた。
「近衛隊もよく警備してくれています」
さらに、元近衛隊ということも、都合が良かった。現在、会場の警備にあたっている者たちとのやり取りがスムーズにいくからだ。
これがバノスでは、ここまで上手くはいかなかっただろう。
「そうか。まぁ、皇帝陛下もご観覧あそばせているとあれば、連中も気が抜けないだろうしな。この警備の中で、ミーア姫殿下を狙うのは無理な話か……」
最後は、自分に言い聞かせるような口調でつぶやいてから、それ

を否定するようにバノスは首を振る。
「いや、やはり、油断は禁物だな。俺たちのほうでも必ず一隊は、ミーア姫殿下の護衛に回るようにしよう。それと、周りのご友人の方々もだ」
バノスの見立てでは、この場で最も命を狙われるのは、ほかならぬミーアだ。
彼の中で、皇女ミーアの重要性は、すでに星持ち公爵や皇帝を上回っている。この帝国が、まがりなりにも平和でいられるのは、すべて彼女のおかげだと、彼は確信しているのだ。
――思えば、最初に会った時にも、そうだったな……。
初めて出会ったのは、ルールー族との抗争の最中だった。
自分を守って領都まで戻れ、などと言い出した時には、なんてわがままな子どもだと呆れつつ、上手く撤退の口実を得た幸運を神に感謝したものだったが……。
――今から考えると、あれは、すべて計算の内だったんだな……。恐ろしい人だ。
そんな、帝国の屋台骨にして、自分たちの大恩人であるミーアの守りに力を入れるのは、バノスにとってごくごく当たり前のことだった。
――本来なら、皇帝陛下のほうも気にかけなけりゃならないところだろうが……そっちは近衛に任せちまおう。俺たちは、ミーア姫殿下を徹底的に守るべきだ。
帝国兵として一番に守るべきは皇帝であろうが……この際は、そのような原理原則は無視する。
――まぁ〝皇女専属〟近衛隊だからな。ミーア皇女殿下の護衛に専念しても問題ない……と主張することもできるだろう。皇帝陛下もミーア姫殿下のことを、たいそう大切にされている様子だし……。
「やあ、やってるな……」
突然の声。咄嗟に、剣に手をかけそうになったバノスは、相手を見て、ため息を吐いた。

「ああ、ディオン隊長。気配を消して近づかんでくださいよ……」
「ははは。てっきり気付かれないものと思ってたが、腕を上げたな、バノス」
軽く手を挙げるディオンだったが、すぐに苦笑いを浮かべて、
「だが、今の隊長は君だろう？」
「ははは。そうでしたな。いや、どうも癖が抜けませんな」
頭をぽりぽりとかいてから、バノスは言った。
「それで、隊長……ディオン殿も、ミーア姫殿下の護衛で？」
「ああ、そうだな。少し気になる敵が、帝国内にやってきたらしくてな……」
腕組みするディオンだったが、不意に、皇女専属近衛隊のほうに視線を向けて、目を細める。
「それはそうと、上手いこと部隊をまとめてるみたいだね」
「ははは。ディオン隊長が鍛えた百人隊ですからね。そりゃ、どこに行っても十分以上の戦果を挙げ……」
「半分は近衛隊だろう。それに、レッドムーン公の兵も混じっている。任務も、ただ戦えばいいというわけでもなく、あの、自由気ままな姫さんの護衛ときてる。いや、最近では輸送部隊の護衛もやっているんだったか……」
ディオンは、やれやれ、と肩をすくめて、
「実に面倒そうだ。僕ならごめん被るところだが……。実際、よくやってると思うよ。バノス隊長」
ニヤリ、と口元に笑みを浮かべた。
「ははは、あなたに認めてもらうというのは、ちっとばかし照れくさいもんがありますな。正直、実務的な部分はルヴィ嬢ちゃん……レッドムーン公爵令嬢が頑張ってくれてますし」
「そうなのかい？　副隊長にレッドムーン公の娘だなんて、やりづらくて仕方ないかと思っていたが……」
意外そうな顔をするディオンに、バノスは小さく肩をすくめた。
「同感ですな。いやぁ、嬉しい誤算でしたな。ははは」

っと、冗談めかした笑いを見せた後に、ふと、バノスは優しい顔になる。
「まぁ、実際、よくやってますよ、あのお嬢さまは。平民の俺の命令もよく聞いて、その意図をきっちりと酌んだ動きをしてくれる。助かってますよ」
その口ぶりに、ディオンは意外そうな顔をする。
「なるほど。君がああいった女性が好みだとは知らなかったな」
「ははは。そうですな。俺があと二十は若けりゃ、そんなおとぎ話を楽しめたかもしれませんな」
豪快に笑い飛ばすバノスに、ディオンも苦笑いを浮かべる。
「まぁ、そうだな。確かにおとぎ話だ。平民出身の騎士と大貴族のご令嬢の婚姻だなんて。あまりにも荒唐無稽すぎて赤面するが……」
ふと、思いついた様子で、彼は言った。
「だが、姫さんは、どうやらそういう話が好みらしいから、あまり馬鹿にしないほうがいい」
「そうなんですかい？」
眉をひそめるバノスに、ディオンは深々と頷き、
「なんといったかな……。友人のご令嬢とそういった本を読んでいるらしい。皇女専属近衛隊ならば、姫さんの暇つぶしに付き合うこともあるだろう。機会があれば聞いてみると良い」
などと噂をしていると、ちょうどタイミングを計ったかのように、ミーアが近づいてくるのが見えた。一緒に、ルヴィとシュトリナ、さらには慧馬の姿までである。
ディオンの姿を見て、おや？　と意外そうな顔をするミーア。っと、次の瞬間、かたわらにいた慧馬が、すすす、っと、音もなく、ミーアの背中に隠れた。
「ははは、慕われてますなぁ……ディオン殿」
「まったく、出会ったばかりの頃の姫さんを思い出して、実に懐かしい限りだよ」
対して、ディオンは苦笑いを浮かべるのだった。

第四十三話　やっぱり！

ミーアは、ルヴィ、シュトリナの両星持ち公爵令嬢（エトワーリン）を伴い、観覧席を降りた。

「ふぅむ、バノスさんのところに行く前に、アンヌと合流して着替えを済ませてしまうべきかしら……？　しかし、着替えてる途中でバノスさんの競技が始まってしまってもつまらないですし……どうしたものか……あら？」

などとつぶやいていると、ちょうど蛍雷にブラシをかけている慧馬の姿が見えた。

「ああ、ミーア姫か……」

ゆっくり振り返った慧馬は、実に、なんとも締まりのない顔をしていた。

「あら、どうかしましたの？　慧馬さん、なんだか、とっても楽しそうなお顔……」

「当たり前だろう？　こんなに楽しい日に、楽しそうにするなというほうが無理な話だ」

ウッキウキと嬉しそうに弾みながら、慧馬は言う。

「ああ、なんだか、久しぶりに胸が高鳴る。我の中にある血がたぎるようだ。思えば、我が一族の命運がかかった馬合わせの時に、我は勝負に臨むことができなかった……」

遠い目をして、慧馬は言う。

「あの時に、この胸に溜まったモヤモヤとした気持ち……今日、晴らさせてもらおう。ふっふっふ、今の我は何物をも恐れぬ！　我と蛍雷は、走りに飢えているぞ」

獰猛な雄叫びを上げる慧馬。実に頼もしい様子に、ミーアは、ふむ、と頷き……、

「どうやら、ヒルデブラントのほうは、どうにかなりそうですわね

……。あとは、バノスさんのほうか……」
っと、皇女専属近衛隊のほうに目を向けたところで、ミーアは目的の人物の姿を見つける。
「ああ……あそこにいますわね。バノスさん。ふふふ、遠くからでもすごく目立ちますわね」
「お？　帝国の馬の乗り手を見に行くのだな。では、我も共に行こう」
などと、ノリノリでついてきた慧馬だったが……バノスの隣に、ディオンの姿を見つけて、
「ひぃっ……！」
ぴょんこっと飛び上がると、すっすうっとミーアの後ろに下がる。相変わらず、ディオンのことが怖いらしい。
――まぁ、よくよく考えると、慧馬さんは、狼使いという凄腕のお兄さまがいるわけで……。そんな強さを知っているお兄さまを、遥かに上回る剣の使い手がいたら、怖がるのは仕方のないことかもしれませんわね。
ミーアは、慧馬を背中でかばってやりながら、ニッコリ笑みを浮かべる。
「ご機嫌よう、バノスさん。それに、ディオンさんも来てましたのね」
「ああ、姫さん……じゃなかった。ミーア姫殿下。酷いじゃないですか、こんなに面白そうな大会に誘ってくださらないなんて」
「ふふふ、剣術大会であれば、その腕を存分に振るっていただくところですけれど……いや、ディオンさんが出てしまったら、面白くないかしら？」
「そうですな。それは、あと五年ぐらい経ったら、開催してください。たぶん、姫さんの愛しの王子殿下が、良い感じに仕上がっていそうなんでね」
などと話しをしていると、不意に、ディオンがミーアの隣に視線を向けた。

その視線の先にいたのは、シュトリナだったのだが……。
「あっ、ぅっ、でぃ、ディオン・アライア……」
なぜだろう、シュトリナは、微妙に居心地が悪そうに身じろぎした。
――あら……、慧馬さんだけじゃなくリーナさんも、ディオンさんのこと、苦手なのかしら？　まぁ、よくよく考えてみれば、リーナさんは蛇の関係者……。一度は、ディオンさんと敵対した者としては、なかなか、恐怖が薄れないのかもしれませんけれど……。
ちょっぴり、心配になる。
できることならば、味方同士、仲良くしてもらいたいと思うミーアである。
「おや、イエロームーン公爵令嬢。ずいぶんとお久しぶりだ。騎馬王国以来、だったかな」
ディオンは、かしこまった礼を見せるが、シュトリナは、なぜだろう、微妙に頬が赤く染まっていた。
「リーナさん、どうかなさいましたの？」
「え？　あ……ええ。いえ、別に何も……」
それから、シュトリナは、んっ、んんっ、などと喉を鳴らしてから、いつもの可憐な笑みを浮かべる。
「ご機嫌よう、ディオン・アライア。相変わらず、物騒な殺気を放っているのね。可哀想に、騎馬王国のお姫さまが怯えてしまってるわ。そんな風に気遣いを欠いていると、女性に嫌われてしまうと思うけど」
チラリと慧馬を見ながら、シュトリナは言った。対して、
「ははは。また、そんな笑顔ができるようになってなによりだよ。イエロームーン公爵令嬢」
ディオンはニヤリと笑みを浮かべて返す。
「あら？　リーナの笑顔に興味があるの？　二十歳以下の女性には興味がないと聞いていたけど、もしかして、移り気にも宗旨替えしたとか？」

可憐な笑みに、ちょっぴりの、からかうような色を乗せて、シュトリナが言った。
対して、ディオンは……。
「もちろん、興味はないさ。だが、どちらかというと飽きの問題でね。妙齢の貴婦人の泣き顔ならば、見ていて飽きないのかもしれないが……」
シュトリナの顔を見て、やれやれ、と首を振り……。
「泣き虫な子どもの泣き顔は見飽きるし、鑑賞にも堪えないものでね。どうせなら、ミーア姫殿下のように、愉快な慌て顔を見せてくれると飽きなくていいんだけど……」
「なっぁ！」
思わず、ムッとした顔をするシュトリナである。
そんな二人のやり取りを見ながら、ミーアは満足げに頷いた。
――ふむ、仲が悪いわけではなさそうで、ホッとし……って、あら？　今、わたくし、ちょっぴり悪口言われた……？　いえ、でも、愉快というのは褒め言葉なのかしら？
思わぬ流れ矢に、ミーア、腕組みをして考え込んで……。
――うん、まぁでも、ディオンさんに不愉快と思われているよりは、愉快と思われていたほうがいいですわね。うんうん。
そう結論付ける。
なにしろミーアは、『ミーア焼き』なる庶民のお菓子を見かけても、美味しければ、まぁいいか！　と思える程度には器が大きいのだ。この程度、どうということもないのである。
さて、その間にも、二人の会話は続いていた。
反撃に転じるべく、シュトリナはしばし黙考。その後、なにか思いついたのか、ちょっぴり得意げな笑顔で、何かを言おうと息を吸って……。
「なるほど、これが、リーナちゃんの若かりし日の恋模様なんですね……」
直後、後ろから聞こえた声に、ひゃっ！　っと悲鳴を上げた。

「なっ、べっ、ベルちゃん？　どっ、どうして？　いつから？」
狼狽えた様子のシュトリナに、ベルは小さく胸を張り……。
「休憩になって、ミーアお姉さまたちが降りてきたのが見えたから、みんなで来たんです。けど……」
それから、とっても嬉しそうな顔で言った。
「よかった。ボク、安心しました。やっぱり、リーナちゃん、ディオン将軍と……」
「ちっ、違う。違うのよ、ベルちゃん。リーナは……ええと……」
慌ててなにか言おうとするシュトリナに、ベルはペラペラ手を振りながら、
「うふふ、いいんですよ。リーナちゃん。大丈夫。ボク、わかってますから……」
ぽむぽむとシュトリナの肩を叩きながら、ベルは優しい笑みを浮かべる。
そんなベルの顔を見て、シュトリナは声にならない悲鳴を上げるのだった。

第四十四話　恋愛大将軍ミーア、語る！

「ところで、バノスさん。今回は、あなたの腕前をぜひ見せていただきたいですわ」
ベルとシュトリナの微笑ましいやり取りを尻目に、ミーアは改めてバノスのほうに向き直った。
「よくよく考えてみれば、わたくし、あなたの乗馬の腕前を見たことがありませんでしたわ。ディオンさんの常識外れの無敵っぷりは何度も目にしておりますけれど……」
バノスは、ディオンを諌める役割。ミーアにとって重要な人物だった。けれど、その剣や乗馬の腕前、彼の本気を目にしたことはなかったはずだ。
「ははは。言われてみればそうでしたな。では、ミーア姫殿下のご期待に応えられるよう、せいぜい気張ってみますかな」
裏表のない豪快な笑みを浮かべるバノスを見て、ふと、ミーアは感慨にふける。
「思えば……あなたとも、ルールー族との抗争以来、ずいぶんと長いお付き合いになっておりますわね」
彼があの森で命を落とすはずだったことを思えば、感慨も一入（ひとしお）と言ったところだ。
「そうですな。あの時以来、栄光あふれる道を歩ませていただいております」
バノスはふと、真面目な顔になって言った。
「できますれば、今後も姫殿下の護衛という栄誉ある職務を全うしたく思っております。そのためにも、今日は良き機会……。どうぞ存分に、姫の騎士の技をご堪能いただければ幸いです」
「ふふふ、期待しておりますわ。バノス隊長」
っと、そこで……。

「バノス隊長……」
ミーアの隣、ジッと黙っていたルヴィが一歩前に出る。
「ご武運をお祈りしております。隊長の勝利を信じています」
胸の前で手を組み、まるで祈りをささげるようにルヴィは言った。
「ははは、信頼はありがたいが……。しかし、副隊長の前でも、それほど騎乗戦闘は披露していなかったんじゃないですかね？」
不思議そうな顔で首を傾げるバノスに、ルヴィは静かに首を振った。首を振って――なぜか、覚悟がキマった顔で！
「いえ。よく存じ上げております。だって、私は……あなたが……す」
――ちょちょちょっ！　る、ルヴィさん、まさか、このタイミング、告白するつもりですのっ！？
ミーア、突然のルヴィの凶行に慌てる。何の前触れもない告白は、さすがのミーアも想定外。けれど、今さら止められるわけもなく……。ミーアは、ただ、ゴクリ、と喉を鳴らすのみで……。
「す……す……」
ルヴィは口をあわわ、っとさせた後で……。
「素晴らしい馬の乗り手でなければ……あなたの部下たる私の名にも傷がつきますからっ！」
キリリッと表情を引き締めて、ルヴィは言った。
「なるほど。確かに今の俺はレッドムーン家のご令嬢を部下に持つ身。ははは、簡単に負けるわけには、確かにいきませんな」
豪快な笑い声をあげるバノスに、ルヴィは疲れたため息を吐き……それから、改めて表情を引き締める。
「隊長が競技に臨まれている間、ミーア姫殿下の護衛はきっちりと行います。どうぞ、安心して、競技に専念してください」
ミーアの、ただの応援とは違う……。それは、後顧の憂いを断つ言葉。バノスの背中を力強く押す言葉。隊長を支える副隊長の言葉で……彼と共に重責を担う者の言葉だった。
バノスは、ルヴィのエールに、少し驚いた様子で瞳を瞬かせたが、

「レッドムーン家出身の副隊長にまでそう言われたら、頑張らないわけにはいかなそうだ」
「はい。今の私は、皇女専属近衛隊副隊長のルヴィですから。どうぞ、心置きなくお勝ちください。バノス隊長」
それでは……などと言って踵を返すルヴィ。その肩は心なしか、ちょっぴり寂しげに下がっていて……。
――ふむ……これは……。
ミーア、新たに深刻な危機を見つける。
素早くルヴィに歩み寄り、そっと耳打ち。
「ルヴィさん……あなた、今、告白しに行きましたわよね？」
「うっ……」
ルヴィはビクッと肩を震わせて……。ミーアのほうを見つめて……なんとも情けない顔をする。
「……うう……。私は、こんなにも勇気がなかったのか、と……落ち込みます。ずっと、ずっと伝えたかったことなのに……いつでも伝えられるはずなのに、どうして言えないのか……」
などと切なげな乙女の顔で言うルヴィ……だったが、ミーアはその言葉の中に否定のしようのない誤謬（ごびゅう）を見出した！　それは……。
「なるほど……確かにルヴィさん、あなたには勇気がないかもしれませんわ。けれど、もしも、あなたが行動していたとしたら……それは、ただの勇気ではなく蛮勇……。無謀な行動に堕してしまっていたかもしれませんわ」
「え……？」
きょとん、と瞳を瞬かせるルヴィに、ミーアは……さながら、揺るがないこの世の真実を語るかのような口調で言った。
「あなたには……大切なものが欠けておりますわ、ルヴィさん」
「というと……？」
ルヴィ、キリリッと表情を引き締め、姿勢を正す。
そんなルヴィの前で、ミーアは実に偉そうに胸を張り……。
「知れたこと。タイミングですわ！」

まるで歴戦の名将のような口調で言った。
「たっ、タイミング……？」
衝撃を受けたように、ルヴィが仰け反る。そんなルヴィに、ミーアは優しい口調で続ける。
「ふむ、勝機、と言い換えても良いかもしれませんけれど……。いずれにせよ、いつでも想いを伝えられる、という認識は改めるべきですわ。種を蒔き、花が咲き、果実が実った時、初めて刈り入れというのは行うもの。種を蒔くべき時に蒔き、育てるべき時に育て、刈り入れる時に刈り入れる。あるいは戦（いくさ）もそういうものではないかしら？　攻めるべき時に攻め、守るべき時は守る」
恋愛大将軍ミーアは、腕組みをして頷く。
「すべてのことには、時がある。想いを伝えるのにも、時がありますわ。いつでも言えるなどと言うのは誤りですわ」
あのタイミングで告白に行くなど、どう考えてもあり得ない。
蓄積された、ミーアの……恋愛小説知識が、そう物語っていた！
あのタイミングだけは、ない！　と。
「いつでも言える、は誤り……」
ゴクリ、と喉を鳴らすルヴィに、ミーアは小さく首を振った。
「やれやれ……仕方ありませんわね。まさか、あなたが、ここまで恋愛に疎いとは思っておりませんでしたわ。その辺りのことも一緒に、教える必要がありそうですわね」
言うと、ミーアは、自らの忠実なるメイドを呼ぶ。
「アンヌ。これ、アンヌ……」
「はい。ミーアさま」
すちゃっと前に進み出たアンヌが、すまし顔で頭を下げる。
「すみませんけど、ルヴィさんにも、恋愛の基礎が学べる読み物を用意していただけないかしら？　そうですわね……エリスの書いた『姫殿下の大恋愛！』あたりがよろしいんじゃないかしら？」
「かしこまりました。では、近いうちに用意してお持ちいたします」
「テキストを読みながら進めていきましょう。大丈夫、恋愛など、

わたくしにかかれば、ウマ型のサンドイッチを作るより簡単にできますわ」

などと……。恋愛大将軍ミーアと、その軍師アンヌとにより、ルヴィの恋愛教育は進められることになるのだった……大丈夫だろうか？

第四十五話　帝国の叡智は乗馬を知り尽くしている

さて、ルヴィに偉そうな説教を垂れた後、ミーアは急いで仮設の幕屋へと急いだ。そこで乗馬服に着替えるためだ。

それは、ホースダンスに合わせて新調した、ちょっぴり派手目のものだった。

ふさふさの羽が付いた半月形の帽子、身にまとうのはレムノ王国の軍服にも似た青色を基調とした服だった。その上からまとう赤いマントは、かつて選挙で用いた自らのカラーだからか、はたまた、レッドムーン公爵への配慮か。

最後に、アベルに買ってもらった靴をきちんと履いて、姿見で確認。

「ふむ、いい感じですわ！」

っと、満足げに頷き、競技場へと戻る。

戻ってきたミーアの姿を確認したルードヴィッヒによって、競技の再開が告げられる。

次なる競技はチーム戦。四頭の馬をリレー形式に走らせ、伝令を届けさせるものだった。

最初の騎馬が一周、二番目が二周、三番目が三周と、徐々に長くなる距離を走り、命令書を渡していく。四番目の騎馬が最終走者となり、四周を駆け抜けることとなる。

ちなみに、コースの一周は千五百m（ムーンテール）であり、四周、六千mともなれば……ミーアが全力で走っても半日はかかりそうな距離になる。

いや、というか、そんな距離走ることは、ミーアには不可能なわけで……。

――あれだけの長距離を走り続けられる馬というのは、やはり素晴らしい存在ですわ。大切にしなければなりませんわね。うん……。

愛馬精神を新たにするミーアであった。天馬姫ミーアは、翼を持

たぬ凡百の馬をも愛でるのである。
――しかし、何番目に走るかで大変さが変わるとは。あれを見ていると、こう……ついつい、我が事のように思えてきてしまいますわね。
長きティアムーン帝国の歴史……。その中で、幾人の皇女が安穏とした人生を過ごしてきたことだろうか？
あと二代か三代前に生まれていれば、このような苦労をすることなく生きていられたはずなのに……などと考えると、悔しくもなろうというものである。
――ぐぬぬ、生まれる時代を間違えたのですわね。できれば、あの最初の馬に生まれたかったですわ。一番、距離が短くて楽な馬が良かった……。
そうすれば、このように苦労をすることもなく、悠々自適にベッドの上で過ごせたはず。手を叩けばケーキが出てきて、それで……。
「ミーアさま、どうかなさいましたか？」
ふと見れば、アンヌが心配そうな顔をしていた。それを見て、ミーアはハッと我に返る。
――ケーキが出てきて……そう、ですわね。わたくしが、もっと早くに生まれてきていれば、アンヌにケーキを放り投げられることもなかったですわね。
そうしてミーアは、思わず苦笑する。
――ああ、そうですわ……。この時代に生まれなければ、アンヌやルードヴィッヒと出会うこともなかったわけですし……もしかしたら、もっと苦労していた可能性だってありますわね。
それこそ、過去の時代には、しっかりと蛇もいるわけで……そんな時代に味方もなく生まれていたら、どんなことになっていたのか……。
――そう考えると、パティは苦労しますわね、きっと……。
ミーアとは違い、誰が信用できるか、パティはわからないのだから。

ふと見ると、ちょうどパティと目が合った。ミーアの視線の意味がわからないのか、きょとりん、と首を傾げている。
「あの、ミーアさま……？」
再びのアンヌの声。ミーアはそれに笑みを浮かべて、
「ええ。なんでもありませんわ。アンヌ。着替えを手伝ってくれてありがとう。わたくしは、果報者ですわね……」
信じるに足る忠臣を得ていることの、どれほど心強いことか……ミーアは改めて実感する。
――やっぱり、わたくし、この時代に生まれてきて正解でしたわ！
などと、ミーアが、馬の走る姿から人生を考察している間にも、レースは進んでいく。
第一走の馬から、第二走の馬へ。勝負はほぼ互角。
「ふむ……。この競技は、距離を変えてあるのが、面白さの肝と考えるべきかしら？」
ミーアのつぶやきに、答えたのは……。
「そのようですね。私も乗馬についてはあまり詳しくはないのですが……」
キラリ、と眼鏡を光らせるルードヴィッヒだった。
「距離の長さと、レースの展開を考慮しつつペース配分を決めていく。状況判断がとても大切な競技になるだろう、と、馬番のゴルカが言っていました。例えば終盤までは相手の後ろにつけて風よけに使ったり、差が開きすぎていれば、序盤から速度を上げて距離を詰めたり……戦略はいろいろ考えられるとか……」
「ほう。なるほど。状況判断……ふむ、確かにそれは、とても大切なことですわね」
ミーアは改めて思う。やはり、乗馬にも状況判断が大切なのだ。ゆえに、きちんと状況判断ができる『馬』に乗らなければいけない、と！
「……しかし、そうか。馬の能力だけではありませんわね。その要旨を、きちんと馬に伝えることも大切ですわ」

おかれた状況を馬にきちんと伝え、その情報をもとに、判断してもらわなければならないのだ。
誰に？　もちろん、馬にである！
だが、判断を馬に委ねるにしても、判断材料はきちんとわかりやすく伝える必要があるわけで……。
「馬との意思疎通が問われるわけですわね……。実に深い……。とても、考えられた競技ですわね」
そう、微笑むミーアである。

そんなミーアのつぶやきは……ルードヴィッヒにはこう聞こえた。
「騎手が馬の能力をきちんと把握し、正しく状況を判断してペースを配分する。その意図をきちんと馬に伝える能力も大切になっていく、とても深い競技だ」
などと……。
――ミーアさまは、やはり馬に対する造詣が深い方なのだな。そんなミーアさまに認めてもらえたのだから、競技を考案したゴルカも鼻が高いだろうな……。
後で彼にも、ちゃんと話してあげよう、と心に決めるルードヴィッヒなのであった。

第四十五話　帝国の叡智は乗馬を知り尽くしている（後書き）

来週ですが、遅れてきたお正月休みということで、一週間お休みにしようと思います。
次の巻の、書き下ろしを書かねば……。
では、そんなこんなでよろしくお願いします。

第四十六話　悲しい罪悪感

一方、ミーアと別れたベルと子どもたちは、シュトリナに連れられて観覧席に昇った。
やってきた子どもたちに、皇帝は実にこう……優しい笑みを浮かべた。
マンサーナもベル……ではなく、パティのほうを見て、興味深そうに瞳を細める。
「なるほど……。確かに、先代の皇妃さまの面影がありますな。それに、そちらの少女のほうは、どことなくミーア姫殿下に似ている……」
「ははは。そうだろうそうだろう。まぁ、実際にはミーアの可愛さには及ばないがな……」
上機嫌に笑う皇帝。促されるままに、ベルたち一行は席に着いた。
そんな中、ヤナは場違いな緊張感に体を硬くしていた。一度挨拶したとはいえ、帝国の皇帝と大貴族が座るような席である。緊張するなというのが無理な話だった。
一方で、キリルは席に座らず、前方の柵から身を乗り出してレースを眺めていた。
「すごい……」
高い位置から見る乗馬は、また一味違った迫力があった。
「こんなに馬がいるなんて、帝国ってすごい」
馬たちの白熱のレースを見て、歓声を上げるキリル。それを聞いたベルが、にんまーり、と笑みを浮かべ……語りだす。
「ふっふっふ、キリルくんに、いいことを教えてあげましょう。実は、騎馬王国っていう、みんなが馬に乗ってる国があるんですよ」
「騎馬王国……？」
小さく首を傾げるキリルに、ベルは大変偉そうな口調で語る。

「はい。それはもう、とっても素敵な国なんですよ？　広い広い草原が広がってて……。そこを馬たちが駆けまわる。住む人たちも馬と一緒に生きてて、ふふふ、ボクもたくさん乗りました。懐かしいなぁ」
　そうしてベルは首を巡らせる。遥か遠く、騎馬王国の景色に目を向けるように、そっと瞳を細めて……。
「こうしてると、あの草原の光景が見える気がします。あ、ほら、あっちに……」
「ベルちゃん……騎馬王国は、あっちかも……」
　シュトリナの控えめなツッコミを受けて、ベルは、何気ない風を装って顔の向きを変え……。
「……懐かしいなぁ！」
　いつでも適当マイペースなベルである。
　さて、ちょっぴりダメなベルお姉さんの発言にもかかわらず、キリルは、目をキラキラさせて言った。
「いつかぼくたちも行ってみたいね、ヤナお姉ちゃん」
　嬉しそうな弟の様子に、ヤナもちょっぴり頬を緩めて、それからキリルの頭を撫でて……。
「うん。いつか、そこで暮らすのもいいかもしれないな」
　自分で言ったその言葉……ヤナは、ふと不思議に感じる。
　――少し前までなら、考えられなかったな……。
　ガヌドス港湾国での、辛かった日々が頭を過る。
　食べ物を盗み、自分たちと同じ貧しい子どもたちと奪い合い、殴られて痛い思いをして……それでも必死に生きてきた。
　すべてはキリルを守るため、そして二人で生き残るためだった。
　けれど、今は……。
　――なにをしたい、どこで暮らしたい……そんなこと、考えてる……。
「お姉ちゃん……？」
　ふと我に返ると、キリルが心配そうな顔で見つめていた。安心さ

せるように、その頭を撫でてから、ヤナはパティに目を向けた。
パティは相変わらず、顔になんの表情も浮かべずに、競争を見守っていた。
けれど、ヤナには、なんとなく……その顔が後ろめたそうに見えた。
――そっか……。パティの弟は今……。
ヤナは思い出し、今の日々を楽しく感じる自分に罪悪感を覚えた。
それは恐らく、パティが抱いているのと同種の罪悪感だった。
それは……自分だけが、心置きなく幸せな日々の中で生きていることへの罪悪感。
――よくわからないけど、パティは弟と会えない。そして、弟はあまり幸せじゃないところにいる……。
それがわかっているのに、自分は幸せを満喫している……。そのことが、ヤナの心に棘のように刺さっていた。
『パティの良いお友だちになっていただきたいんですの……』
頭に響くのは、大恩人ミーアに言われた言葉だ。
今、友として、パティに言えることは何だろう……？
迷った末……ヤナは口を開いた。
「ねぇ、パティ……。パティの弟を連れて、あたしたちと一緒に行けないかな？」
「……え？」
パティが、きょとんと瞳を見開いた。
「騎馬王国、一緒に行けたら、きっとすごく楽しいと思うんだ。キリルも喜ぶし……。えっと、もちろん、あたしはパティのこと、よくわからない。パティの弟が今どうしてるかも知らない。でも、きっとミーアさまなら……なんとかしてくれる」
ヤナが言いたかったこと、それは、ミーアならばきっと助けてくれるということ。
それは、小さな希望。
ミーアに助けを求めればきっと助けてくれる……。今がどれだけ

絶望的でも、明日には、明後日には幸せが訪れる。
ヤナが、友だちに伝えたかったのは、そんな希望のことだった。
でも……。
「だからさ……全部、終わったら、一緒にあたしたちと……」
勇気を振り絞った言葉は、けれど、届かない。
パティは……黙ったまま小さく首を振った。
「……それは、できないの……。ごめんなさい」
返ってきたのは拒絶の言葉。
そして、ヤナは、理由を問うことができなかった。
なぜなら、パティのその顔は……なんだか、泣き出してしまいそうな、そんな顔に見えたからで……。

その様子を、ジッと見ている者がいた。
誰にも気付かれぬよう、こっそり二人の様子を観察していたのは、シュトリナだった。
パティの顔……彼女の心の動きを極めて正確に捉えたシュトリナは、そこに、かつての自分の姿を見た。
「やっぱり、あの子は……」

第四十七話　陛下、ナニカに気付く……

元ディオン隊副隊長バノス。彼は面倒見の良い男として知られている。

鬼神のごとき強さを誇るディオン隊長と、精兵なれど、常人の域を出ない兵たち。その間を取り持つのが彼の仕事だった。そして、その手腕には定評があった。

だが、一兵士としての実力を、ミーアはよく知らなかった。

もしかして、隊長としてはイマイチなのでは？　などと不安になったこともあったが……。

バノスの活躍は、そんなミーアの不安を払拭して余りあるものだった。

「おおっ！　お見事ですわ」

ミーアは、バノスの雄姿に思わず歓声を上げていた。

スッと伸びた背筋、天に向かって直立するその巨体は、さながら、大地に根差した巨木のごとく、どんと構えていてなんとも頼もしい。

そんな凛々しい立ち姿から放たれた矢は三本。

ひゅかっ！　と音が立つたびに、寸分たがわず、的を射落としていく。

しかも、一射目から二射目、三射目の放たれる間隔が早い。

ひゅか、ひゅか、ひゅかっと、リズムよく三度音が鳴り、的はあっという間に射抜かれていた。

名手ルールー族には及ばないだろうが、それでも、専門家たる弓兵に引けを取らない手際の良さである。

対戦相手もそれを見て焦ったのか、早さを優先するあまり狙いが散漫になる。一射、二射までは良かったが、三射目は的をわずかに外れる。

けれど、それで冷静さを取り戻したのだろう。一度大きく息を吐

き、改めて一射。線を引くように飛翔した矢は、的のど真ん中を射抜いた。
――さすがはレッドムーンの抱える兵士。冷静ですわ……。
うむうむ、と、しきりに感心するミーアであった。
続いて、馬上弓術だ。
バノスは、その巨体を軽々と愛馬に乗せるや、馬を加速させる。そして、的のそばを通り過ぎながら、射る、射る、射る！
「おおおっ！」
っと、ミーアが歓声を上げてしまうほど、それは見事な手際であった。
「すごいですわ！　よくあんな風に当たりますわね。しかも、馬を操りながら……」
褒めたたえるミーア。その隣では、ルヴィが、ふふーんっと胸を張っていた。心なしか、とっても偉そうな顔をしている。
「馬の上から弓を射るというのは、確かアンヌとティオーナさんも同じようなことやってましたわね？」
「はい。ですが、あの時は私が馬を、ティオーナさまが弓を、と分担していましたから」
などと、ぶんぶん手を振るアンヌに、ミーアはほんのり優しい笑みを浮かべて……。
「ふふふ、そのおかげで、わたくしは助かったのですから、謙遜することはありませんわ。それに、あなたはメイドですから、本来は、ああいった戦闘をする必要は全くないのですわよ？」
「でも、副隊長たる私は、多少はできたほうがいいのでしょうね……」
横で心配そうな顔をするルヴィである。先ほどの得意げな顔とは一転、実に何とも不安そうに、私にもできるだろうか？　などとつぶやいていた。
「まぁ、できるに越したことはないかもしれませんけれど……。あなたが前線で戦うようなことにはならないと思いますし……」

っと、チラリとフォローするミーア。そこに、
「ふっふっふ、まぁ、我はできるが……」
空気を読まずに、実に偉そうな顔で首を突っ込んできたのは慧馬だった。
ちなみに、今は、近くにディオンはいない。
ディオンとの距離に比例して、態度が大きくなる慧馬なのであった。
そんな騒がしい令嬢たちを置き去りに、競技は続いていく。
馬の速さを競う乗馬対決は、レッドムーン家の兵士の勝利。地上での剣術はバノスの勝利に終わり、最後に待つのは騎乗剣術だった。
「相手もなかなかの腕前のようですけれど、バノスさんには届きませんわね。ふふふ、さすがは、我が皇女専属近衛隊の隊長ですわ」
満足そうに笑うミーア。それから、ふと隣を見ると……少し前まで楽しそうにしていた慧馬が、ちょっぴり青い顔をしていた。
「あら、慧馬さん、どうかなさいましたの？」
その視線を追えば、ディオン……ではなく、バノスの姿があった。
「あら、慧馬さん。もしかして、バノスさんを怖がってるんですの？　大丈夫ですわよ？　ああ見えても、彼はディオンさんと比べて、ずっと常識的で、穏やかな方ですし」
「いや、別に怖がってはいないぞ？　ただ……な、あれを、片手で……片手間にあしらえるというディオン・アライアは常軌を逸した……とてつもなく恐ろしい存在なのではないか、と思ってしまって……」
ぶるるっと体を震わせる慧馬。ミーアはしばし考え込み……。
「……なるほど……言われてみれば……」
思わず頷いてしまう。
ちなみに、別にディオンが片手でバノスをあしらえる……などと言うことは、誰も言っていない……まぁ、できないとも断言できないわけだが……。
「って！　駄目ですわ、慧馬さん。そのように恐ろしい想像を膨ら

ませては、この後の乗馬に差し障りがありますわよ？」
そう言って、ミーアは、ぽん、っと慧馬の肩を叩いた。
「大丈夫ですわ。もしも、ディオンさんが、こう……狼とかその仲間を斬りたそうな顔をしている時には、わたくしが全力で止めて差し上げますわ」
「ミーア姫は、あのディオン・アライアが怖くないのか？」
慧馬の問いかけに、ミーアは余裕たっぷりの表情で……。
「もちろん怖くない、と言ったらウソになりますけれど……。でも、少なくとも、制止したぐらいで斬りかかられたりはしないはずですわ……たぶん」
ミーアの心を支える言葉があった。それは……。
――わたくしは、彼にとって『愉快』な人間。となれば、そう簡単には斬られはしないはず。人は、不愉快なものはちょっとしたきっかけで斬って捨てたくなるものですけど、愉快なものならば別ですわ。
それから、ミーアは、慧馬に笑いかけた。
「さぁ、もうすぐ、あなたの出番ですわよ？　その前に、バノスさんの雄姿を見て、盛り上がりましょう。今日は、馬たちの競演を楽しむ日なのですから」
「そうか……。そうであったな……」
慧馬は、ちょっぴり明るい顔で、ミーアに頷いて見せた。
そうして、ミーアと慧馬はバノスに応援の歓声を送るのだった。

さて……ところ変わって観覧席。
こちらでもご令嬢たちが盛り上がっていた。
「うわぁ、すごい！　すごいです。さすが、ミーアお姉さまの近衛隊長！」
ピョンピョン飛び跳ねるベルと、その真似をしてキャッキャと笑うキリル。
表情こそ変わらないものの、パティもまた、ジッと、競技の行方

を見守っていた。
それを、静かに見つめる者がいた……。
ティアムーン帝国、皇帝、マティアス・ルーナ・ティアムーンは、目をキラッキラさせるベルを見て……。ジッと視線を外さないパティを見て……。それから、下のほうで応援の声を上げるミーアを見て……。
その歓声の向かう場所、対戦相手と切り結ぶ巨漢の男、バノスを見て……。
「なるほど……」
重々しく頷いてから、小さな声でつぶやく。
「……筋肉、か。あの者に教えを請うのも……ふむ」
っと……。
瞬間、少し離れたところで応援しているミーアの背筋に、正体不明の悪寒が走ったのだが、ミーアがその原因に気付くことはなかった。

第四十八話　いよいよ、始まるメインレース

――ふむ、なにやら、寒気を感じましたけれど……。
ミーアは、キョロキョロと辺りを見回した後、観覧席のほうに目を向けた。そこでは、皇帝マティアスとレッドムーン公マンサーナが楽しげに談笑していた。
こう……肘を曲げて力こぶを作り、それを指さし、今度はバノスのほうを指さす。
恐らく、バノスの強靭な肉体と強兵ぶりを二人で称えているのだろう。
それは、ミーアとしては望むべき展開……のはずなのだが、なぜだろう。ミーアには、なんとも言えない嫌ぁな予感がまとわりついていた。
――いえ、まぁ、考えすぎですわね。うん。
結局、競技は、バノスの圧勝に終わった。馬上剣術においても無類の強さを発揮したバノスは、レッドムーン私兵団の代表を圧倒。見事、皇女専属近衛隊隊長の面目躍如となったわけだ。
「まさか、バノスさんがあれほど強いとは……これは、意外な誤算でしたわね」
「ふっふっふ、誤算などではありませんよ。ミーアさま」
見ると、ルヴィが得意げに鼻を膨らませていた。
「バノス隊長ならば、あのぐらい、簡単にやってのけます。片手でも楽勝だったはずです」
片手で馬を操りながら剣を振るのは不可能なのでは……などと思わなくもないミーアだったが、口に出すような野暮はしない。恋する乙女に水を差すなど無粋極まるではないか。
ニッコリ笑って、ミーアは言った。
「それは、とても心強いことですわ。まぁ、なんにせよ、レッドム

ーン公へのアピールは十分にできたはず……」
そうして、満足そうに頷きながら、
「後は、ヒルデブラントが上手いこと餌に釣られてくれれば、我が計略なれり、ですわ。慧馬さん、頼みましたわよ」
視線を転じた先、ちょうどタイミングよく、慧馬とヒルデブラントが登場した。
二人の乗った見事な月兎馬に、会場内の空気が変わる。
「おお、あれは……」
「あれがレッドムーン公が誇る月兎馬『夕兎』か……。実に見事な毛並みだ」
「いや、しかし、ミーア姫殿下のご友人の乗る馬も素晴らしい馬だぞ。あのしなやかな後ろ足を見ろ。実に美しい……」
ゴクリ、と喉を鳴らす、両陣営の兵士たち。
その様子を見てミーアは察する。
――なるほど、騎馬王国だけでなく、我が帝国にも結構な数の馬好きがいるみたいですわね……。ゴルカさんとか一部の方だけかと思ってましたけど……。
潜在的ウマニアの存在を発見するミーアである。
――ふむ……。これはもしや、ミーア学園で馬の研究を始めたら、興味を持つ方がいるのではないかしら？　それに、場合によっては、協力を申し出てくる貴族もいるやもしれませんわね……。
とかく学校経営にはお金がかかる。そして、若干、改善したとはいえ、未だに帝国の財政は厳しい。にもかかわらず、相変わらず無駄遣いをしやがる貴族はそれなりにいるわけで……。
――どうせお金を使いたいのなら、ミーア学園のために使わせるのがいいのですけど。その時には自分から喜んで出させるのが、さらによろしいですわ。ふむ……。
そこで、馬である。
馬の研究ならば、いろいろと役に立つし、将来的には、商売に繋がるかもしれない。

――馬を売るようなことは、騎馬王国の方々が好まないでしょうけれど……馬の怪我を治す方法の研究だとか、後は馬乳酒など、馬の乳を使った食べ物作りというのであれば……。それに、なにより良き馬を育てる技術であれば、むしろ興味を持つはず……。であれば……輸出も視野に……。

ミーアはニンマリと頷く。

「なるほど。いけるかもしれませんわね。騎馬隊の強化にも繋がるでしょうし、輸送にだって馬は必要。なにより、なにかあった時に逃げるのは馬……。いいですわね、馬の研究！」

「ミーアさま？　どうかされましたか？」

不思議そうな顔で尋ねてくるルードヴィッヒに、ミーアは小さく首を振った。

「いいえ。なんでもありませんわ。ええと、ちなみに、あの二人の勝負は、何周勝負なんですの？」

「一周です。月兎馬の速さが映える距離なのではないかということでしたので……」

「なるほど。純粋な速さ勝負ということですわね」

確かに、それは、月兎馬の勝負に相応しい。ミーアが、騎馬王国での馬合わせに勝てたのは、それが持久力勝負の長距離走だったからだ。山族の誇る月兎馬『落露』と純粋な速さ勝負をしていたら、きっとミーアは負けていただろう。

――東風は良い馬ですけど、向き不向きと言うものがございますものね……。

そして、月兎馬の真価が現われるのは、やはり、この短距離走だろう。

自慢の馬を披露するためだろう。慧馬とヒルデブラントは並んで、観覧席の前に行き、それから、両陣営の前をゆっくりと歩く。

ちなみに、二人はどちらの陣営にも属さない。いわば、特別ゲスト扱いである。

それゆえに、なんのしがらみもなく、両陣営の者たちは応援する

ことができた。
さて、二人が近づいてきたところで、ミーアは声を上げて応援する。
「慧馬さんっ！　頑張ってくださいまし！　ヒルデブラントもほどほどに！」
心からのエールを慧馬に、形ばかりのエールをヒルデブラントに送るミーア。
それに応えて、騎手二人は笑みを浮かべて手を振った。
――ふむ、あの顔……。慧馬さんもやる気がみなぎっておりますわ。これは、一安心ですわね。
ディオンを前に怯えていたのも今は昔。
勝負に集中する慧馬を見て、一安心のミーアであったが……。
彼女は気付いていなかった。すでに、危険な種が蒔かれていたということ……。
慧馬の走り、そこに含まれる兆候。それをミーアが感じ取ったのは、スタートの合図が鳴って、少ししてのことだった。

第四十九話　誤算……ミーア、慧馬の乗馬スキルを盛大に見誤る！

二頭の馬がスタート地点についた。

勝負の気配に昂ぶる馬もいる中、夕兎（せきと）と蛍雷（けいらい）の二頭は、いずれも落ち着き払った態度をとっていた。だが、その質は幾分異なるようだった。

貴公子然とした、どこかかしこまった態度の夕兎。それは、貴族の馬たる気品ある態度、周りに見せるためのものだった。

対して蛍雷は、ただ静かに、目の前のコースに意識を集中していた。それは、戦に集中する戦士の顔だった。

さすがは、火の一族が誇る最高の月兎馬、と言ったところだろうか。

実際に戦場に出たことがある馬とない馬との違いが、そこに現れているように、ミーアには感じられた。

――ふむ、恐らくいろいろな状況を走り慣れているのは蛍雷のほうでしょうけれど……しかし、夕兎とて、まっとうに走ればとても速い馬のはず。

ミーアの見たところ、走るコースに荒れはない。夕兎を動揺させるような、アクシデントのもとはない。つまりは、純粋な速さ勝負となるだろう……。

――わたくしが勝負した時には作戦が上手いことはまりましたけど……この状況ではなかなか難しい。慧馬さんは、どう考えているのかしら？

大丈夫だとは思いつつ、わずかばかり不安を感じるミーアである。

ちなみに作戦とは、無論『荒嵐』が考えた作戦、である。

馬が走り、馬が考える。そして、ミーアは頭を空っぽにして、ただただ走りやすいように馬に合わせることにのみ集中する。それこそが、理想的な役割分担と言えるだろう……そうだろうか？

徐々に高まりつつある緊張感、審判係の者が旗を上げ……。振り下ろし、叫ぶ。
「はじめっ！」
スタートの合図と同時に、二頭の馬が飛び出した。
先行したのは――慧馬の乗る蛍雷だった！
ぐんぐん、っと見る間に加速、夕兎を引き離しにかかる。夕兎も追いすがるが、その差は徐々に開いていき、第一コーナーを曲がった時、二頭の差は一馬身ほどになっていた。
夕兎が……完全に置いていかれたのだ！
「おおっ！　すごいですわ！」
そう快哉を上げるミーア。見守る観客からも盛大な歓声が飛んでいた。
――うふふ、これまでで最高の盛り上がりですわ。これだけ盛り上がれば、レッドムーン公にもご満足いただけるのではないかしら？
などと、大満足なミーアだったが、すぐにその笑顔が凍り付くことになった。
ぐんぐん、加速する蛍雷。
「おおっ！　頑張ってくださいまし、慧馬さんっ！」
ミーア、歓声を上げる。
ぐんぐん、ぐんぐん、加速する蛍雷。それはまるで、空を舞うがごとく……。
「しかし、素晴らしい速さですわね……」
ミーア、感嘆のつぶやきをこぼす。
ぐんぐん、ぐんぐん、ぐんぐん、加速する！
ミーア、ここでふと思う。
――あら、ちょっと加速しすぎじゃないかしら？
などと。
この時、ミーアが感じ取った危機感は「ペース配分を考えろ！」とか、そういった次元のことではなかった。
慧馬は騎馬王国の人。火の一族を代表する馬の乗り手だ。後半で

馬に息切れを起こさせるなどと言う無様なことはしないだろう。
また、後半息切れしそうな気配もない。生き生きと走る蛍雷は楽しげで、気持ちよさそうに走っていた。必死に追いすがる夕兎とヒルデブラントのほうが、むしろ苦しそうに見えてしまって……。
それほどまでに、慧馬と蛍雷の走りは圧巻だった。
圧倒的で、強くて、なによりも美しかった。
それは、ある種の極めた者たちの持つ美しさだった。
剣の達人、ディオン・アライアの剣術が人を魅了するほど美しいように。
あるいは、弓名人のルールー族の戦士たちの弓矢が、息を呑むほど美しいように。
慧馬と蛍雷の走りは、凄みのある美しさをまとっていた。
誰しもが見惚れるような、見事な走りだったのだ。
――あっ、これ、ヤバいですわ。
ミーアの直感が訴えていた。
てっきり慧馬は、小驪（シャオレイ）と同じぐらいの腕前だと誤解していた。
ヒルデブラントには余裕で勝ち、適度に魅了して、彼を騎馬王国へと誘ってくれる……その程度の腕前を期待していたのだ。だがっ！
――これはあまりにも……あまりにも圧倒的過ぎますわ！
第二コーナーを曲がった時、その差はじりじりと開いて三馬身になっていた。
一瞬、ヒルデブラントが最後の最後で追い上げて勝つことを狙っているのではないか？　と疑うミーアであったが……彼の顔を見て違うことを悟る。
焦り、懸命に夕兎に指示を出すヒルデブラント。だが、慧馬は……そもそも、蛍雷に指示を出していない。ただ、馬に身を任せ……否、まるで馬と心を通わせているかのように、人馬一体となってコースを駆け抜ける。
それは、それまでの、すべての競技がかすむほどの、凄味のある走りだった。

あれだけ場を盛り上げたバノスの競技すら、すでにみなの記憶からは消えているのではないだろうか……？

ミーアは、観覧席のほうを見上げ、マンサーナの顔を窺う。見たところ……慧馬の走りに釘付けになっているっ！　口をあんぐり開けて、無駄のない見事な走りを見守っている。

たぶん、先ほど大活躍を見せたバノスのことなど、とっくに記憶の彼方に投げ去っているだろう。

ちなみに、皇帝陛下のほうは両腕をいい感じに組んで、筋肉の具合を見ているようだった。こちらは、まだ、バノスの競技を覚えているみたいで何よりであるが……。

――いえ、お父さまのことは、どうでもいいんですわ。それより、レッドムーン公の頭からもバノスさんの印象が薄れてしまうのは望ましくありませんわ。くぅ、誤算でしたわ！

せっかくのバノスの奮戦も、こんな華麗な走りを見せられたら、忘れてしまうに違いない。

――小驪さんとは比べ物にならない騎乗ですわ。わたくしですら、太刀打ちできるかどうか……。

ゴクリ、と喉を鳴らすミーア……。

ナチュラルに小驪より自分のほうが乗馬上手だと確信しているミーアである。

なるほど、確かに、ミーアが馬合わせに勝ったという事実はある。

確かに、それだけを考えれば、ミーアの乗馬技術は小驪より上と言えるだろう……言えるかもしれない……のだが！

なぜだろう、微妙に納得がいかないような気がしてならない。不思議なことである。

まぁ、それはともかく……。

――うう、ヒルデブラントを魅了してくれるのは良いのですけど……やりすぎですわ。これでは他の方たちをも強力に魅了してしまいそうですわ。

ミーアは歯噛みしつつ、会場に目を向ける。

つい先ほどまで沸きに沸いていた会場は、打って変わって、しんと静まり返っていた。
思わず息を呑むほどに美しい、見惚れるような乗馬術。それは、帝国の天馬姫（）とは、一味も二味も違う、本物の乗馬上手の騎乗だった。
――ぐぅ、みなさんが、見惚れておりますわ。まさか慧馬さんがここまで魔性の女であったとは……。
ギリギリと歯ぎしりするミーアを尻目に、慧馬を乗せた蛍雷は第三コーナーを曲がった。
その差はさらに開いて四馬身。
懸命にヒルデブラントが鞭をしならせるが……夕兎の走りは伸びなかった。
対照的に、慧馬と蛍雷はますますリズムに乗る。軽やかな足運びに、観客が熱狂する。
っと、その時だった。
ミーアは、唐突に気付く。
――あ、あら？　っていうか、わたくし、この後で馬に乗らなければいけないんじゃ……え？　このものすっごーい空気の中を、わたくしが、乗るんですの……？
などと焦り始めるミーアであったが、さらにミーアに追い打ちをかける事態が間近に迫っていた。
それは……。

第五十話　ミーアの誤算～決死のホースダンスへ！

そうして、レースはなんの波乱もなく終わった。
――後半の逆転とか、追い上げとか、全然なかったですわね。
などと思うミーアであったが、そもそも、それを期待する者もいなければ、予想する者も、いなかったのではないだろうか。
それほど、圧倒的な走りだったのだ。
ゴールした直後、慧馬は観覧席の前へ。
馬を降り、皇帝とレッドムーン公に、華麗に一礼してから、ミーアのほうにやってきた。
「ふふふ、どうかな、ミーア姫。騎馬王国の力、帝国に示すことができただろうか？」
ドヤァッという顔で言う慧馬に、ミーアは朗らかな笑みを浮かべ……。
「素晴らしい走りでしたわ。慧馬さん。さすがは火の一族随一の馬の乗り手ですわね」
パチパチと拍手しつつも……。
――なんだったら、もうちょっと手を抜いてくれてもよろしかったんですけど……。
などと言いたいミーアであるが……、その言葉をぐっと呑みこむ。
騎馬王国の民にとって馬での勝負は神聖なことのはず。であれば、どんな勝負であれ、手を抜くことなど考えられないのだろう。
――まぁ、慧馬さんに文句を言うのは筋違い。ここは心からの称賛を送るべきですわね。ヒルデブラントも、慧馬さんの走りを堪能したでしょうし、絶対に騎馬王国に興味を持ったはずですわ。
あまり、多くを求めてもよくない。ここは当初の目的通り、ルヴィとヒルデブラントの縁談をなんとかすることを考えるべきだろう。
っとそこで、タイミングよく、ヒルデブラントがやってくるのが

見えた。
恐らくは慧馬の走りを褒め、互いに健闘を称え合うつもりなのだろう。あるいは、慧馬の愛馬、蛍雷を近くで見せてもらうつもりだろうか。
いずれにせよ、興味を持ってもらえたのは良いことだろう、と満足げに頷くミーア。
そばまでやってきたヒルデブラントは、真っ直ぐに慧馬を見つめ、笑みを浮かべた。
「いやぁ、慧馬嬢。貴女の乗馬術、実にお見事でした。このヒルデブラント、感服いたしました」
「そうか。我が友、蛍雷の力を示せたならば幸いだ」
慧馬、瞳を閉じたまま、ふっふーん、っと勝ち誇った顔で言う。
「ほう。馬を友と呼ぶ……。それが、騎馬王国の乗り手の考え方ということですか。そうでなければ、あの見事な騎乗はできないと……」
「そうだ。馬を使い捨ての道具のように扱えば、馬の力を十全出すことはできぬ。戦場において馬は一番信用するべき戦友なのだ」
腕組みし……慧馬は偉そうに頷く。それを聞くヒルデブラントは、実になんともキラッキラした目をしていた。
――ふむ、なかなか良い感じですわ。あとはレッドムーン公にバノスさんの活躍をどう思い出させるか……。
などと、思考に浸ろうとしたミーアだったが……そんな余裕はなかった。
なぜなら……ヒルデブラントが唐突に、その場で片膝を付いたからだ。
「……はぇ？」
その行動に、ミーアは、きょとんと瞳を瞬かせる。ヒルデブラントは慧馬を見上げながら、静かな声で言った。
「慧馬殿、貴女の乗馬術、ぜひとも私にご教示いただきたい。私の師となっていただけぬだろうか……？」

それを聞き、すぐにミーアは落ち着きを取り戻した。
――あ、ああ、まぁ、そうですわよね。単純なヒルデブラントならば、そんなこと言い出しそうですわ。
なにしろ、彼は、美味しいお菓子に出会った時、将来はお菓子になると言い出す男である。根が単純なのだ。
まぁなんにせよ、これは計画通りと言えるだろう。慧馬に直接師事したいと言っているようだが、そこはそれ。慧馬に教わる前に、まず騎馬王国でもっと基礎的なことを学べ、とかなんとか、適当な誘導をしてやれば、彼を帝国から遠ざけられるはず。
そこで、騎馬王国の乗馬上手な女性に興味を持ってくれれば、さらに御の字だ。さすがに慧馬と恋仲になったりはしないかもしれないが、騎馬王国には乗馬上手の女性が溢れている。誰かしらと恋に落ちてくれれば、ルヴィとの縁談もなかったことになるはず……。
――いえ、慧馬さんと婚儀を結んでくれれば、それはそれで良いかもしれませんわね。慧馬さんと親戚づきあいというのもちょっぴり楽しそうですし、騎馬王国にも人脈ができるのは好ましいこと……。ふふふ、まぁ、ヒルデブラントが慧馬さんの心を掴めるかはわかりませんけれど……。
いずれにせよ、それはじっくりと親しくなってからの話で……。などと、ミーアは、完全に油断していたのだ。ヒルデブラントの一本気な性格を……見誤っていたのだ。
そのまま、慧馬の片手を取ったヒルデブラントは、続けて言ったのだ。
「いや、そうではないな。誤魔化すのはやめにしよう。できれば、私の生涯の伴侶になってもらえないだろうか？」
「……はぇ？」
驚愕の声を上げたのは慧馬――ではなかった。ミーアである！
いきなりの展開にミーアは、瞳を瞬かせて……次の瞬間、急いで視線を転じる。向けた先は観覧席。自らの父の隣に座る男、帝国四大公爵の一人、マンサーナ・エトワ・レッドムーンで……。

その顔を見た瞬間、ミーアは思わず、ひぃいっ！　と悲鳴を上げそうになる。
マンサーナが……、大抵の場合、穏やかな笑みを浮かべた、あの男が……。
ギリギリギリ、っと歯ぎしりし、額に血管を浮かべていたからである。
『俺が、我慢に我慢を重ねて、可愛い娘をやろうとしてるっていうのに、てめえは、なに勝手なことしてやがんだ、この野郎！』
などと、公爵にはいささか相応しくない品のない言葉が、その顔に書かれているのが、確かにミーアには見えた。
まぁ、そもそもの話、紳士的に振る舞ってはいるが、レッドムーン公はもともと武闘派の人だ。そうじゃなきゃ、強力な私兵団とか作らないだろうし。
――なっ、なぜ、こんなことに……。
ミーアは、うぐぅ、っと思わずうめく。
すべては、慧馬の乗馬が、あまりにも見事だったせいだった。
慧馬が、あんなにも見事な乗馬をしなければ、ヒルデブラントが魅了され過ぎたあまり、唐突な告白をすることもなかっただろう。
慧馬が、あんなにも見事な乗馬をしなければ、マンサーナの脳裏には、バノスという優れた兵士のことが残っていただろう。それを橋頭保として、ルヴィのお相手候補まで話を進められたかもしれないのに。
すべては、あまりにも圧巻だった、慧馬の乗馬のせいなのだ。
「くぅ、かくなる上は、仕方ありませんわ。このままシレッと次の競技に移って、なんとか誤魔化すしか……」
要は、次の競技の乗り手が、慧馬以上に見事な乗馬術を披露すれば良いのだ。それで、場を盛り上げて、会場の空気を変えることができれば、その間に、レッドムーン公の気持ちも落ち着くかもしれない……。
なぁんて、希望的観測にすがろうとしたミーアは、そこで、思わ

ずつっこむ。
「って、次の競技って、わたくしのホースダンスでしたわっ！」
かくて、ミーアの決死のホースダンスが始まるっ！

第五十一話　ポニプリミーア！　出走す！

ともかく、急いだほうがいい。状況はひっ迫していた。
ミーアは東風のもとに小走りで向かう。
「ミーアさま……」
途中で歩み寄ってきたルードヴィッヒに、
「すぐにホースダンスをいたしますわ。障害物の設置を頼みますわね」
などと短い指示を飛ばしつつ、皇女専属近衛隊とレッドムーン公の私兵団のほうを窺う。
騒然とする兵たちに、ミーアは思わず、うぐぐ、と唸る。
「とっ、とんでもない雰囲気になっておりますわ！　ぐぬぬ……ヒルデブラント。もう少し、空気が読めるやつかと思っておりましたけど……」
幼き日、美味しいお菓子になりたかった男、ヒルデブラントの単純さは、時を経て、むしろ、磨きがかかっていたようであった。
「なんとも、自分の欲望に忠実な男ですわ。あの蛮勇が、もう少しルヴィさんにあったら、もっと……もっと？」
ミーア、そこで思い出す。
先ほど、唐突かつナチュラルに告白をやらかそうとしたルヴィの姿を思い出す。
「……まったく間違ったタイミングで告白していたこと、疑いようがありませんわね。ふむ、やはり、闇雲な勇気など百害あって一利なしですわ」
さて、待機状態だった東風はミーアを見ると、ふーぶ、っと小さく鼻を鳴らす。
どこか殺気すら帯びつつある空気とは裏腹に、まったくもって落ち着き払った様子だった。ぽげーっと、辺りを見回していた。

帝国が誇るワークホース、テールトルテュエは、どんな時でも落ち着いているのだ。
「ふむ、さすがは、東風。大した度胸ですわ」
東風の首筋を軽く撫でてから、ミーアは、すぐそばに控えるゴルカのほうを見た。
「準備は、もうできているかしら？」
見たところ、東風は手綱と鐙がつけられて、後は乗るばかりといった様子だが……。
「はい。いつでも……」
ゴルカは、重々しく頷いて、それから……。
「先ほどの二頭、確かにどちらもすごい月兎馬でしたが……うちの東風も負けてませんから。どうか、こいつの力をみなに見せつけてくださいますように」
気合の入った応援の声に、ふむ、っと大きく頷いて、それからミーアは、颯爽と……颯爽と？　「よいしょー」っと勇ましい掛け声とともに、東風に乗った。
「まぁ、正直、この状況を打開できるとは、到底思いませんけれど……ともかく、少しでも空気を変える必要がございますわ。頼みますわね、東風」
ミーアは、もう一度、東風の首筋を撫でると、
「はいよー！　シル……東風！」
汁豆腐（しるとうふ）！　なる未知の料理の名前を叫び、出走した。
コースにはまだ、障害物が設置されていなかった。ルードヴィッヒの指揮のもと、急ピッチで作業が進んではいるが、未だ、会場はできあがっていない。
が、それはミーアも承知の上だった。
今は、むしろ、その場の空気を変えるのが肝要。
できるだけみなの視線が集まるように、ゆっくりコース内を一回り。片手を大きく振りながら、みなの前を走る。なにせ、このまま始めてしまうと、誰も見ていない可能性がある。それでは意味がな

いし、単純に寂しくもある。
――やったところで、あまり、意味はないかもしれませんけれど……。
あの慧馬の完璧な乗馬の後である。しかも、ヒルデブラントのやらかしの後なのである。
――わたくしのホースダンスに興味がある方など、いるのかしら？
なぁんて、不安になるミーアだったが……。
「うおおっ！　ミーア！」
その歓声に、思わずミーアは驚いてしまう。
見ると、観覧席。いつの間にやら席を立った皇帝マティアス・ルーナ・ティアムーンが、両腕を振り上げて応援の声を上げていた。慧馬の走りなどなかったかのように、ただただ、ミーアの走りのみを楽しみにしていた男の姿が、そこにはあった。
さらに、そのそばでは、アベルとベル、シュトリナ、子どもたちも歓声を上げている。
――ふふふ、いつもは若干、ウザいぐらいのお父さまですけれど、こういう時にはありがたいですわね。
なにしろ、ああ見えて、この国のトップである。そんな皇帝が興味を持ち、応援する者に対し、下々の兵士たちが無反応でいることが許されるはずもなく……。
さらに言えば、ミーアは失念もしていた。自分が何者であるのか……。
しつこいぐらいに確認しないと、なぜか、みなが忘れてしまう事実ではあるのだが、ミーアは、なにを隠そう、この帝国の皇女である。お姫さまなのである。
そして、長い帝国の歴史上、乗馬を嗜んだ皇女というのは、ほとんどいない。絶対にいないかどうかは、歴史書を詳しく紐解かねばならないが、ともかくパッと思いつかないぐらいには、存在しないわけで……。
しかもミーアの乗馬術は、実のところそう悪くない。意外なこと

ではあるが。
一般的な貴族のご令嬢の趣味レベルはとうに超えているし、セントノエル内でも、割と上位の馬の乗り手と言える。
そう、いつの間にかミーアは、天馬姫（ペガサスプリンセス）は言いすぎでも、小馬姫（ポニープリンセス）ぐらいの腕前にはなっていたのである。
ポニプリミーアなのである……間違ってもプニプリではないので、念のため。
そうこうしている間に、コース上にいくつかの障害物が設置された。
それは、何度も練習したのとまったく同じ配置である。
「ふむ、完璧な仕事ですわね。ルードヴィッヒ……。では、行きましょうか。東風」
ミーアの声と、東風の甲高い嘶き。
そして……まるで、その声に応えるようにして風が吹き始めた。

第五十二話　ミーア姫はダンス上手！

大きく息を吐き、思い切り吸って……。
ミーアは東風に指示を出した。
「派手にやってやりますわよ、東風。蛍雷と慧馬さんに、負けないようにお願いいたしますわね」
ミーアの声に、東風は、ぶるるーふと鼻を鳴らして答える。ミーアが手綱をキュッと短く持った瞬間、東風が静かに駆けだした。
それほど急ぐ必要もない。ミーアは東風が作る心地よい三拍子に身を委ねつつ、会場に視線をやる。
――ふむ、どうやら、こちらに意識を誘導することには成功しているみたいですけど……。
問題はこの後……。きちんと、演技が終えられるかどうかだ。視線を集めたうえで、失敗して途中で演技が止まってしまう、など赤っ恥もいいところである。
アベルの前で、無様な真似は出来ぬ、と大いに気合が入るミーアである。
そうして、まず、向かった先は、レッドムーン公の私兵団のすぐ前に置かれた障害物だ。その数は二つ。連続ジャンプをすることになる。
不意に東風の足のペースが変わる。綺麗な四拍子。それに合わせ、ミーアは腕と膝を使いリズムを重ねる。
障害物は、こうして見ると、なかなかに高い。されど、ミーアの心に恐れはない。
――変に怖がると、それが馬に伝わってしまいますし……。そもそも馬が怪我をしないよう、簡単に倒れる軽い障害物なわけですし……。
実際にミーアも練習の時に持ち上げてみたが、ミーアでも持ち上

げられるほどに軽く、また、もろく作ってある。仮にミーアが頭からぶつかっても、怪我をするようなものではないわけで……。
ゆえに、ミーアはただただ、東風の動きにのみ集中する。
――集中ですわ。集中。どうせ、跳ぶのはわたくしではありませんし、ここは、東風に気持ちよく跳んでもらえるように、邪魔しないようにしなければなりませんわ。
歩調の変化に合わせ、体を揺らす。それはさながら、波間に漂う海月のごとく……自然に東風に身を委ねる。
近づく障害物を前に、ミーアはグッと鐙を踏み、体を前傾姿勢に。お尻が軽く浮いたところで、ぶわわっと東風の身体が飛んだ。
東風の重心と自身のそれを完全に一致させつつ着地。膝と腰を使って、衝撃を殺しつつ、次の障害物へ。
再びのジャンプ！
その二度のジャンプは意外なことに、お手本のように美しいものだった。意外なことに！
そうなのだ、昨今のミーアの乗馬の腕前は、かなりのレベルに到達しているのだ。
もはや、小馬姫などと、小馬鹿にすることなどできない。ミーアはすでに小馬姫を越えた乗り手、いわゆる、超・小馬姫と呼んでも過言ではない実力を持っているのだ。スーパーポニプリミーアなのである。
……スーパープニプニミーアではない。念のため。
そうして、二つ目の障害物を飛び越えたところで、驚くべき出来事が起きた。
ミーアが……あの、海月式馬術の権威たる、あのミーアが……なんと、
「東風、そこで、ぐるり、ですわ！」
自ら指示を出したのだ！　それは実に画期的な光景だった。
そうなのだ、乗馬に関して馬にすべてを委ねるミーアではあるのだが、ダンスに関しては話が変わってくる。なにしろ、ミーアの唯

一と言っても良い特技がダンスなのだ。
ミーアは、ダンスパートナーに心地よく躍らせる術はもちろん、自分たちのダンスを周りに魅せる術をも、フワッと感覚で理解しているのだ。
レッドムーン私兵団の者たちに、自らの愛馬を紹介するように、小さな円を描いて一回転。それから、ゆっくりと、彼らの目の前を悠々と横切っていく。
それを見て、レッドムーン私兵団の中からも、ほう！　っと感心したようなため息がこぼれる。
次に、ミーアと東風が向かったのは、皇女専属近衛隊のほうだった。
ミーアが近づくにつれて、うおおおっ！　と歓声のようなものが轟いた。皇女専属近衛隊の中でのミーアの人気は高いのだ。
「東風、そこで……」
ミーアが声をかけると、東風の耳がぴくぴくっと動いた。ミーアが手綱を再び短く持って身構えると、東風は、ぶひひぃんっ！　と高々と嘶き、前足を大きく上げた。
「おおおっ！」
っと、歓声を上げる皇女専属近衛隊の面々。それに片手を上げて応えながら、
「いきますわよ。はいよー！　とうふー！」
ミーアの声に応え、東風が再び加速。障害物の前で、高々とジャンプ。着地。ジャンプっ！
ふんぬっ！　と気合を入れつつ両脚と腰でバランスを取り、ミーアは美しい姿勢を維持する。
ダンスと名がつくもので、無様な真似はできない。
ミーアにだって、意地がないわけではないのだ。一応は。
無事に着地した東風にその場でもう一度、一回転させて、ミーアは手を挙げる。
「おおおっ！」

と、再びの歓声。
それを聞き、ミーアはようやく自身の誤解に気が付いた。
そうなのだ、ミーアは別に、自らの力で慧馬を上回る波を作り出す必要などなかったのだ。
――そうですわ。わたくしは……慧馬さんが作った波に上手く乗って、それなりにやり過ごせばよかったのですわ！
今の観客は、慧馬によってとても盛り上がりやすい状態にされているのだ。そんなチョロい観客を熱狂させることなど、わけもないこと！
「さて、仕上げですわ。東風。しっかり、レッドムーン公の視線を惹いて差し上げますわ」
馬首を翻し、目指すは、観覧席前に設置された障害物。
今までと同じように、真っ直ぐに向かって駈け出した。
そんなミーアたちの背中を押すように、風は……少しずつ、強さを増していた。

第五十三話　士爵（ナイト）

「さぁ、クライマックス、行きますわよ、東風」
ミーアの掛け声に、東風が再び、嘶(いなな)いて答える。
そのまま一気に加速して、障害物に向かって行く。
今度の障害物は先ほどより一つ増えて、三つ並べられている。けれど、ミーアが臆することはない。
「うおおおっ！　ミーア！　頑張れー！」
などと、父の声が聞こえて、いささか以上に恥ずかしいが……それも気にしないようにする。
――最後の盛り上がりに相応しい三連ジャンプ。ルードヴィッヒの指示か、はたまたゴルカさんのアイデアかはわかりませんけれど、最後を決めて大いに盛り上げますわよ！　それで、こう……なにか上手い具合に演説をして、なんとか誤魔化して切り抜けますわ！
そんな考えごとをしながら、ミーアは気持ちよーく一つ目の障害物を飛び越える。
なにも問題なく着地を華麗に決めつつ、二度目のジャンプ。びゅうっと勢いよく飛び上がる東風。息を合わせ、重心を合わせることに集中するミーアは、成功を確信する。
「次がラストですわ！」
実にスムーズに、流れる水のごとく……流される海月のごとく、二度目のジャンプを終え。最後の一回。
――さぁ、これが終われば後は……。
などと、ミーアは……先のことを考えてしまった。
それはしてはいけないこと……。致命的な油断となった。
三度目のジャンプ。障害物を飛び越えようと東風が飛び上がった……まさにその時だった！　びょうっと、ひときわ大きな風が吹き付けてきた。

「うひゃっ！？」
まるで、下から吹き上げるような風を受けた東風は、さながら天馬のごとく舞い上がる。
突然のことに、一瞬バランスを崩しかけたミーアであったが……。
「ふんぬっ！」
っと、いささかお姫さまらしからぬ鼻息を吐きつつ耐える！　手綱を掴み、鐙の上でバランスをとる。
そうして、ミーアは今までで最も長い浮遊感に、最後のジャンプの大成功を確信した。
――まさか、最後の最後で、この見事なジャンプとは！　うふふ、我ながら見事ですわ！
などと自画自賛するミーアは……けれど……この時……完全に油断していた。
だから……直後に響いた声を、てっきり称賛の歓声と聞き間違えていたのだ。
華麗に着地を決めたミーアが、満面の笑みで歓声に応えるため、手を挙げようとしたところで……！
「ミーア姫殿下っ！　危ないっ！」
前方、ルヴィが駆け寄ってくるのが見えて……。その後ろ、遅れてバノスが駆けつけてくるのが見えて……。
……はて？　なにかあったのかしら……？
なぁんて、のんきに振り返ったミーアは……直後に見たっ！
強い風に巻き上げられた障害物がびゅうっとこちらに向かって来ていることに！
「ミーアさま、こちらにっ！」
ルヴィが東風の手綱に手を伸ばすが……ダメだ。間に合わない！
横幅のある障害物はミーアのみならず、駆け寄ってきていたルヴィまでをも、巻き込みかねないもので……。
「ひっ、ひぃいいいっ！」
ひきつるような悲鳴を上げるミーアと、立ちすくむルヴィ。そこ

にっ！
「あぶねぇ！」
二人を守るように、堂々と立ちふさがったのはバノスの巨体だった。咄嗟にミーアとルヴィを守るように一歩前に出た彼は、グッと体躯に力を入る。
強烈な勢いで向かってきた障害物、臆することなく、バノスは、思い切り肩からぶち当たった！
「バノス隊長！」
ルヴィの悲鳴と重なるようにして、バキィッと、なにかが折れ砕けるような、恐ろしい音が辺りに響いて……っ！　ミーア、思わず目を閉じかける……が、直後、びょうっとものすごい速度で、障害物が飛んでいくのが見えて、うひぃっと悲鳴を上げる。
幸い、障害物は、ミーアと、ルヴィとを避けるように、真っ二つに割れた状態だったので助かったが……。
――あら？　今の、どうして、二つに割れていたんですの？
「お怪我はありませんかい？　ミーア姫殿下」
恐る恐る目を向けた先、バノスが小走りに近づいてきた。
「ばっ、バノスさん……。いえ、わたくしは大丈夫ですけど……あ、あなたのほうこそ、大丈夫なんですの？　今の、あの障害物に思い切りぶつかっておりましたけど……」
「ん？　ははは、なぁに。あのぐらい、ディオン隊長のしごきに比べたら、どうということもないですよ」
などと笑うバノスを見て、へなへなっと力なく座り込んだのは、ルヴィだった。
「あ……ああ、よ……よかった……」
吐き出すようにつぶやいてから、
「むっ、無茶しないでください！　バノス隊長！」
若干、震えるような声で抗議する。
「いや、まぁ、大したことじゃあ……」
頭をかきつつ、困り顔のバノスであったが、次の瞬間、さらに困

った事態に巻き込まれることになった。それは……。
「見事っ！　そなたの働き、この皇帝、マティアス・ルーナ・ティアムーンがしっかと見た！」
観覧席のほうから聞こえてきた大きな声だった。
見ると、皇帝が観覧席の前方まで歩み出て、ミーアたちを見下ろしていた。
彼は、感動に潤んだ瞳でバノスを見つめてから、
「よくぞ……よくぞ、我が娘、ミーアを守った。そなたの働き、まさに皇女の盾に相応しきものと言えよう！」
感極まった口調で言ってから、彼は、厳かなる口調で言った。
「今この場で、この者の働きに相応しく報いよう。我は、皇帝マティアスの名において、この者を士爵（ナイト）の地位につける」
「……はぇ？」
あまりにも……あまりにーも、突然の展開に、ミーアは瞳を瞬かせる。それは、他の者たちも同じだった。バノス本人はもちろん、周囲の近衛兵たちも、そして、ルヴィも驚愕のあまり、口をぽかーんっとしていた。
そんな中、いち早く立ち直った者は……なんと、ミーアだった！
前の時間軸と合わせて、父の無茶と思い付きに振り回されることには、慣れっこのミーアである。
冷静さを取り戻した彼女は、素早く、現状を分析する。
「士爵……」
小さくつぶやき、ミーアは小さく頷く。
士爵、ティアムーン帝国におけるそれは、領地を持たぬ爵位。一代限りの爵位であり、一部の貴族特権は認められているものの、その実、名誉以外に意味があるものではない。
一応は、貴族ですよ……と言える程度のもので、他の帝国貴族からも貴族の一員として扱ってもらえるぐらいのもの……。
この程度ならば、皇帝のわがままでも十分通してしまっても、特に問題はない。

また、今回の出来事は、インパクトも十分だった。
実際のところ、あの障害物、馬がぶつかっても怪我しないように、軽く、また、壊れやすく作ってあったわけで……見た目ほどにとんでもない破壊力があったわけではないのだが……しかし、事実はどうあれ、今、重要なのは、派手なことだった。
ものすごい勢いで飛んできた物から、身を挺してミーアを、そしてルヴィを守ったという功績……。
それは、強力な説得力を持っていた。
「それに、その男はミーアの皇女専属近衛隊の隊長だと言うではないか。であれば、爵位を持っていないのは不都合があるのではないか？」
それもまた、事実であった。
今は、まだ、ミーアは一皇女に過ぎない。けれど、ルードヴィッヒらの働きかけが実ってしまい、ミーアが女帝になった暁には……。女帝の手足たる、女帝専属近衛隊の隊長が平民というのは、いささか問題があるかもしれない。
名誉爵位とはいえ、貴族であれば、その辺りのこともバランスが取れるわけで……。
なぁんて難しい分析をミーアがしたかというと、もちろんそんなわけはない。
ミーアが考えたのは、ただ一つのことだけだ。すなわち……。
――平民の兵士が功績をあげたことで士爵となり……そして、星持ち公爵令嬢と結ばれる……。実にドラマチックですわっ！
これである。
恋愛小説脳ミーアは、ピンク色の脳細胞に促されるままに、深々と頷き、
「なるほど、それは、とても素晴らしいことですわ」
満足げに微笑むのだった。

第五十四話　カミカイヒ、直撃す

「ミーアさま！」
会場内が騒然とする中、アンヌが小走りにやってきた。
「あら、アンヌ。うふふ、どうでした？　わたくしの、ホースダンスは」
東風から降りたミーアは、ニッコリ微笑みつつ聞くが……。
「それよりも、お怪我は本当にありませんか？」
アンヌは心配そうな顔で、ミーアの身体を見て回った。
「ええ。なにも問題はございませんわ」
「そうですか……よかった。あ、こちらをどうぞ」
そう言ってアンヌが差し出してきたのは、月雫レモンティーの入った水筒だった。
「あら、ありがとう」
早速、水筒に口を付けたミーアは、口の中に広がった風味に、思わず、ほふぅっと息を吐く。
舌の上に感じる果実の酸味、紅茶の芳しい香りが、なんとも心地よい。喉を潤す感覚は、熱すぎず、冷たすぎず、ちょうど良かった。
「ふふふ、さすがアンヌですわ。とっても美味しい」
笑みを浮かべるミーア。アンヌは、嬉しそうに微笑み返してから、不意に黙り込み……。
「本当に、ご無事でホッとしました。あの……ところでミーアさま？　つかぬことをお聞きしますが……今回の風は、わざとではありませんよね？」
「はて……？　わざと……とは？」
きょっとーんと不思議そうに首を傾げるミーアに、アンヌはとても真剣な顔で言った。
「あの風はミーアさまが起こされたものだったとか、そんなことは

ありませんよね？　あるいは、あの風が吹くことを予想していた、とか……」
「……な、なぜ、そのような話に？」
一瞬、混乱してしまうミーアだったが……。
「ミーアさまは天を操る、と騎馬王国の人たちが言っていました」
「ああ……」
確かに、何人かの方たちは言いそうですわ！　などと納得しつつも、ミーアは思わず眉をひそめて……。
「そのような力、わたくしにはございませんわ。あの風も完全に想定外のことでしたもの」
きちんと否定しておく。なにしろ、アンヌの妹は、エリスである。あの、ミーア皇女伝をこの世に生みだしたエリスなのである。
こんな話を聞かれたら、どんなことになるか……想像するだけで寒気がするミーアである。
「本当に……？」
「ええ！　もちろんですわ。わたくしには、そのような力はございませんわ」
断言してやると、アンヌは、ホッと胸に手を当てて……。
「そう……ですか……良かった」
「はて？　良かったとは……どういうことですの？」
そう問いかければ、アンヌは、極めて真面目な顔で、
「もしも、わざとだったら文句を言っているところです。危ないことをして、心配かけないでください！　って……」
「まぁ、アンヌ。あのような風を起こす力を持つわたくしに諫言とは……なかなかに命知らずの蛮勇ですわね」
冗談めかして言うミーアに、アンヌは小さく首を振った。
「たとえミーアさまが天を操る魔法が使えたとしても、それを悪用しないって、私は信じてますから。私が怖いのは、ミーアさまがそれを使って、ご自分を危険な目に遭わすような、無茶をなさることだけです。だから、ミーアさまをお諫めすることを躊躇うことなん

か、あり得ません」
「アンヌ……」
忠臣の小動(ゆるぎ)もしない信頼に、思わず感動するミーアである。
「ミーア！」
アンヌに続いて、アベルがやってきた。走ってきたのか、その顔にはほんのり朱が差していた。
「あら、アベル。どうしましたの？　そんなに慌てて……」
「いや、その……」
アベルは、ミーアの顔を見て、一瞬、ホッと安堵の笑みを浮かべてから、
「怪我がないか心配だったから……。少し抜け出して様子を見に来たんだ」
「まぁ、あなたもですの？」
うふふ、っとおかしそうに笑ってから、ミーアは、その場でくるりん、っとターンして見せる。
「ほら、この通り、なにも問題ありませんわ。バノスさんが守ってくださいましたし……」
「そうか……。いや、見ていれば問題ない、とはわかっていたのだが……」
アベルは小さくため息を吐き、
「どうも、ダメだな……君のことになると、大丈夫だとわかっていても、冷静ではいられなくなる……」
自嘲するように笑った。
「まぁ！　アベル……」
ちょっぴり大人びてきたアベルが、ものすごーく真剣に自分のことを心配してくれている……そう考えただけで、頬がちょっぴり熱くなってくる。喉もカラカラに乾いてきて、上手く言葉が出ない。
実になんとも、恋する乙女なミーアなのであった。
さて、二人の会話が終わるのを待ち受けていたかのように、今度

はルードヴィッヒが近づいてきた。会の進行を委ねられている彼は、ごくごく真面目な口調で告げた。
「失礼いたします。ミーアさま、この後、閉会のご挨拶をしていただきたく思うのですが……」
「ああ。そうでしたわね」
それから、ミーアは空を見て……。
「風も強くなってきているようですし、早めに閉じなければなりませんわね」
観覧席のほうに向かおうとしてから、ふと、ミーアは思った。
――レッドムーン公の怒りは……鎮まったかしら……？
目を凝らしても、ここからではよく見えないが……つい先ほど、顔が赤くなるほど怒っていたマンサーナである。ミーア自身に対してではないとはいえ……今すぐに近くに行くのは、少々気が引けて……。
「……ふむ、そうですわね。では、今日の会に相応しく、馬に乗り、会場を走りながら終わりの挨拶をすることにいたしましょうか……」
っと、そこで、ミーアは良いことを思いつく。
――あ、そうですわ。レッドムーン公のご機嫌取りのために、最後の挨拶は、夕兎に乗りながらさせていただくというのはどうかしら……。
仕方がなかったとはいえ、レッドムーン家の良馬を、完膚なきまでに負かしてしまったのだ。少しフォローが必要かもしれない。
――それに、あの子も蛍雷に負けてへこんでいるかもしれませんし、ここは、名誉挽回のために目立つ機会を用意してあげて……。
「馬に……？　それは……先ほどのアクシデントで怪我などがなかったことを、みなに明らかにするため、でしょうか？」
「え？　ああ……ええ。まぁ……それもございますわね。うん」
アンヌとアベルが心配で駆け寄ってきたぐらいだ。他にも、心配に思っている者があるかもしれない。
腕組みしつつ、うんうん、っと頷くミーアに、唐突に、ルードヴ

ィッヒが頭を下げた。
「申し訳ありません。ミーアさま……。あの障害物を作らせた私のミスです」
「あら？　無理に責任を背負いこもうとするなんて、あなたらしくありませんわよ、ルードヴィッヒ」
ちょっぴりへこんだ様子のルードヴィッヒに、ミーアは穏やかに微笑みを向ける。
「あれは、誰のせいでもありませんわ」
きちんと言っておく。
もしも、ルードヴィッヒが、今回のことをきっかけに過剰に自重するようなことがあっては、いろいろなことに支障が出る。
彼には元気はつらつ、やる気を持って職務を全うしてもらわなければ困るのだ。
「このように、急に風が吹いてくることなんて、誰にも予想がつかなかった……わたくし自身にだって、予想がつきませんでしたわ」
自分にもわからなかったんだよぅ、ということを、抜け目なく付け足しておく。
ルードヴィッヒはそんなことないだろうなぁ、とは思うものの、万が一、アンヌのような疑いを持ったら大変だ。
あの風がミーアのせいだったり、ミーアに予想できるものであったりした場合、最悪、ミーアのせいで、ルードヴィッヒの落ち度を作ってしまいかねなかったわけで。
しっかりと否定しておく必要があったのだ。
「ミーアさまにも……おわかりにならなかったと……？」
「ええ。もちろんですわ」
そう言っても、ルードヴィッヒは、まだ難しい顔をしていた。
ゆえに、ダメ押しとばかりに、ミーアは言っておく。
「わたくしたち人間は……風がいつ吹くのか、まったくわからないもにょ……」
“わからないものではないかしら”と言おうとしたミーアであった

が……久しぶりに噛んだ。
アベルとのやり取りで緊張してしまい、口の中がカラカラになっていたのが原因だ。アンヌのレモンティーを飲むのが足りなかったのだ！
このまま「ではないかしら」と続けた場合「でゅえはにゃいかしら？」などと、ちょっぴり情けない姿を晒しそうな気がする。
ダメ押しの……決めるべき場面でのしくじりを避けたいミーアは、脳内で刹那の軌道修正。噛まなそうな箇所まで言葉を飛ばした。すなわち！
「……かしら？」
舌をあまり使わずに良いところまで一気にジャンプ！　幸い、そちらは噛まずに済んだが……。
――くぅ、肝心なところで噛むとは、我ながら不覚ですわ！
っと若干渋い顔をしつつ、誤魔化せたかなぁ？　などと、ルードヴィッヒの顔を見つめる。
ルードヴィッヒは、ミーアの言葉をジッと静かに聞いていたが……やがては、何事か感じ入った様子で頷いて……
「ミーアさまのお心、よく……わかりました」
短く言って、深々と頭を下げた。
どうやら、納得してくれたらしいルードヴィッヒに、安堵しつつ、ミーアは夕兎のほうに向かった。

「わたくしたち人間は……風がいつ吹くのか、本当にわからないもにょ……かしら？」
ルードヴィッヒは、投げかけられた言葉に、戦慄を覚えていた。
「本当にわからないものかしら？」
この問いかけは、ただの問いにあらず。それは、修辞表現が施された疑問形……すなわち、反語ではないだろうか？　とルードヴィッヒは考えたからだ。
「本当にわからないものかしら？」

その後には、きっとこのような言葉が続いたのではないだろうか。すなわち、
「本当にわからないものかしら？　否、そんなはずがありませんわ……」
っと。
なるほど、ミーアは確かに、今回のルードヴィッヒの失態を咎めない。ルードヴィッヒが風が吹くことを予想できなかったのは、仕方のないことだと思っているからだ。
されど……そのうえで、ミーアは問いかけてきたのだ。
“本当に、わからないものと思っているのか？”と。そして、
“いつまでも、このままでいいのか？”とも。
――そうだ……そもそも、最近の小麦の不作も、寒波のせいで引き起こされているもの。我ら人間は、明日の天気すら知ることはできない。不覚にもそう思っていた……。だが……。
ミーアは示したのではなかったか？
数年後の冷夏を。それに伴う小麦の不作と飢饉の発生を。
だからこそ、備えることができたのではなかったか？
――ミーアさまがいる間は良い。けれど、ミーアさま亡き後の帝国、未来の帝国を生きる者たちが、天の気まぐれに翻弄され、飢饉に苦しむようなことがないようにしろ、と……ミーアさまは言っておられるのではないか？
いつ風が吹くか、明日の天気はどうか？
それを完璧に予測することはできないにしても、限りなく精度を上げることはできるのではないか？
そのためにどうすれば良いか……。腕組みし、真剣な顔で考え込むルードヴィッヒであった。
さて……まぁ、これはまったくもって関係のない話ではあるのだが……。
この数年後、聖ミーア学園に二つの学科が新設されることとなっ

た。
一つはミーアが着想を得た馬の知識を学ぶ総合馬類研究学科。そしてもう一つは、気象を研究する学科である。
この二つの学科はそれぞれ、ミーアネットの輸送部門と、農業技術開発部門に、多大な貢献を果たしていくことになるのだが……。
まぁ、それは、完全なる余談なのであった。

第五十五話　後始末

ルードヴィッヒのもとを離れたミーアは、急ぎ夕兎が繋いである場所に急いだ。そこには、ちょうど、ルヴィの姿もあった。
「ああ、ちょうどよかった。ルヴィさん、少しよろしいかしら？」
「あ、ミーア姫殿下……。なにかありましたか？」
怪訝そうな顔をするルヴィに、ミーアは早速、お願いすることにする。
「実は、夕兎をお借りできないか、と思いまして」
「夕兎を、ですか？」
「ええ。これから、今日の会の締めの挨拶をしなければならないのですけど、夕兎に乗り、会場を移動しながらしようかと思った……のですけど……」
はて？　と、ミーアは首を傾げる。
ルヴィのかたわらにいた夕兎に、いつもの覇気がなかったからだ。
「あら、なんだか、すっかり元気を失っておりますわね……」
「ええ。セントノエルでの勝負の名誉挽回、と張り切っていた様子でしたから……」
ルヴィの横で、夕兎が、実に哀れげな顔で、ぶーふ、っとため息を吐いた。
「あら、別に気にする必要なんかございませんのに。夕兎だって十分良き馬ではありませんの」
そう言ってやっても、夕兎は、しょんぼーりと首を垂らしたままだった。
けれど……。
「そうだな。我と蛍雷には及ばぬまでも良き馬には変わりがない。というか、乗り手が逆であったなら、結果は違っていたかもしれぬぞ」

元気の良い声に振り返れば、慧馬がゆっくりと歩み寄ってくるところだった。
夕兎のそばまでやってきた慧馬は、軽く夕兎のお尻を叩いてから、
「うん。しなやかで良い体だ。よければ今度は我も乗らせてほしい。この馬は、良い馬だ」
夕兎は、まるで機嫌を直したように、ぶるるーふ、っと鼻を鳴らした。
どうやら、生粋のウマイスターである、騎馬王国の慧馬に認められたのが嬉しかったらしい。割と、現金な馬である。
「ところで慧馬さん、ヒルデブラントは？」
「ん？　ああ。あの男か……。ああいったことは初めてだったから、返事をするのに少し時間が必要だったが……」
などと言ってから、慧馬はキリリッとした顔で続ける。
「我は火の一族、族長代理だ。そして、同時に、火の一族の戦士でもある。当然、我を娶ろうという者は、我より乗馬に優れ、なおかつ我が兄並に腕が立つ、そのような者でなければならぬ。だから、修行して出直してこい、と言っておいた」
ドドォンっと胸を張る慧馬に、ミーアは、小さく首を傾げる。
「はて……。慧馬さんより乗馬が上手く、あの馬駆さん並に剣が強い……となると、ディオンさんのような方になると思うのですけど、それは大丈夫なのかしら……？」
頬に手を当てて心配そうに尋ねるミーアに、
「……はぇ？」
慧馬、思わず、きょっとーんと首を傾げる。
「いえ、まぁ、乗馬の腕前は慧馬さんのほうが上なのかもしれませんけれど……剣の腕がお兄さま並となると、なかなか限られてきますわよ？　ディオンさんを始めとした剣の鬼のような方たちになってしまうような気がしますけど……ああいった方が好みなんですの？」
それを聞いた慧馬は、途端に、顔を青くして……。

「けっ、剣の腕はそれほどじゃなくっても、いい、かな？　そう、乗馬！　うむ、やはり、馬に乗る腕前が、我を軽く凌駕するような男でなければ我の相手は務まらぬな……うんうん」
などと、慌てて言う慧馬である。
そんな奴はいねぇ！　と思わなくもないミーアであったが、まぁ、よしとしておく。
とりあえず、ヒルデブラントは、慧馬に振り向いてもらうためには、騎馬王国で修行する必要があるだろうし、そこで素敵な出会いがあれば、それはそれで良いからだ。
――これで、ヒルデブラントのことは片付きましたわ。後は……。
ミーアは静かに観客席を見上げながら、小さく深呼吸するのだった。

さて、ミーアが再び馬に乗って出てきたことで、周囲は再びザワつき始める。
だが、その、少し荒れた空気こそが重要だった。
――凪では波に乗りようがありませんわ。多少荒れているほうが、むしろ流れに乗るには良いのですわ。
そう、空気は荒れてはいたが……決して、荒れ過ぎてもいなかった。
その空気を抑えているものこそ、ミーアが乗った馬、夕兎であった。
駿馬勝負においては一歩後れを取った夕兎であったが、依然として、その全身から発する見事な気品は健在だった。
さらに、ミーアがレッドムーン公の馬に乗っているという事実は、両者の関係が良好であることを周囲に示すものでもあった。
ミーアは、皇女専属近衛隊とレッドムーン公の私兵団、さらに、皇帝らがいる観客席と等間隔の位置をゆっくり歩きながら、よく通る声を上げた。
「今日の乗馬大会は、いかがだったかしら？　日ごろのみなさまの

鬱憤を解消する、楽しい会になっていればよろしいのですけど……」
それから、ミーアは、両陣営に順番に視線を送る。
「さて、言うまでもないことですけど、今日の勝負は、あくまでも帝国兵同士の勝負。仲間同士が腕を競い合ったにすぎませんわ。ゆえに、勝負が終わった今は、互いの健闘を称え合いたく思いますわ」
そう言って、ミーアは、率先して拍手を始める。それを追い、両陣営の様々な場所から、パチパチ、と遠慮がちに拍手の音が響く。
ミーアは、それを確認してから、
「ふふふ、その反応は当たり前ですわね。勝負である以上、勝ちがあり、負けがある。わだかまりを完全に捨てて、というのはとても難しいことですわ。されど、あえてわたくしは言っておきますわ。今日の悔しさは今日味わえ、と……」
だから根に持つんじゃないぞ、と言いたいミーアである。
「そして、その楽しさと悔しさを存分に味わったなら……美味しいお食事を食べて、美味しいお酒を飲んで、寝て、明日にはきれいさっぱり忘れてしまうことですわ」
つまりは、今日の出来事は、すべて無礼講にしましょうよ、と言いたいミーアなのである。
……そしてついでに、ヒルデブラントのやらかしも、できれば、無礼講で済ましたいな！　と主張したい、ミーアなのである！
「勝負が終わった今となっては、いろいろな感情はあっても、すべてノーサイド。わたくしは、こう主張しておきますわ。だって、みなさんは、すべて、共に大陸に住まう民。みな同様に、我が愛すべき臣民ですもの」
こうして、ミーアは、両陣営の間に亀裂ができることを、あらかじめ防いでおく。
なにしろ、レッドムーン公の私兵団と皇女専属近衛隊は、どちらも、大切な戦力だ。いざという時には力を合わせて、守ってもらいたいわけで……。
だから、今日のことは、すべては無礼講。美味しいものを食べて、

忘れちまえ！　と高らかに言うのだ。

そして……ミーアのそんな言葉は、不思議と、両陣営の兵士たちの心に沁み込んでいった。

つい先ほどまでは、互いに白熱の応援を送り、時に悔しく、相手を憎らしくも思ったものだったが……気付けば、後に残ったのは、今日を楽しく過ごしたという思い出だったから。

それは、ひとえに順番の妙だった。

力を尽くした戦いがあり、みなが目を奪われるような、見事な月兎馬同士の競争があった。

勝負の満足感に浸った後、最後の締めは、勝ちも負けもつかない、ミーアのホースダンスだったのだ。

ちょっぴり微笑ましくも、見事なポニプリダンスに、兵士たちは思ったのだ。

「ああ、なんかいろいろあったけど、なんだかんだで楽しかったな……」と。

途中で、唐突な告白があったり、ミーアに危機が迫ったり、と、いろいろなアクシデントが起きたような気がするが、思い出せばすべては楽しかった、と……。

やがて、誰に促されたわけでもなく、両陣営の兵士たちは歩み寄り、握手をしては、互いの健闘を称え合った。

さらに、そこにタイミングよく、ルードヴィッヒが手配した酒樽が運ばれてきて、場は大盛り上がりとなった。

死力を尽くし、争い合った者たちが、勝負が終わった後には、互いに酒杯をぶつけ合う、これこそが、後の世で、ミーアピックが平和の祭典と言われる所以であった。

そうして、酒を飲み交わした者たちは共に誓い合うのだ。

またやろう、と。

この楽しくも、血が沸き立つような祭りを、またやりたい……。

だからそれまで壮健でいろ、と。

かくて、後顧の憂いを断って後、ミーアはレッドムーン公のほうへと馬首を向ける。
いよいよ、最後の仕上げの時が訪れようとしていた。

第五十六話　新しいことを、古きやり方で

そうして、ミーアは夕兎を促した。
向かう先は観覧席の前……。いよいよ、レッドムーン公に立ち向かう時が来たのだ。
「レッドムーン公、今日の会、お楽しみいただけましたかしら？」
観覧席を見上げながら、ミーアは言った。
「ああ……ミーア姫殿下。ええ……そうですね。馬同士の白熱の競争は、確かに血沸き、肉躍るものを感じました。その意味では、まぁ、楽しめましたな」
レッドムーン公マンサーナは、渋い顔で頷いた。ミーアは、その表情を見ながら……。
――やっぱり、今日のことはすべて忘れて……とはいかないようですわね。娘の結婚相手に、と思っていたヒルデブラントのあのやらかしですし……。お父さまだったら、むしろ、手打ちにしているぐらいだと思いますわ。
その意味では、マンサーナは、自制が効く人と言えるだろうが……ここは、なんとかしておかないと、ミーアとレッドムーン家との関係が悪化しかねない。それはまずい。
配慮が必要だろうと……ミーアは大きく頷いて……。
「それはなによりですわ。まぁ、途中に驚かされる告白などもございましたけれど……」
と言って、すかさずミーアはマンサーナの顔を見る。その頬が、一瞬、ひくんとひきつるのを見て、思わず逃げ出したくなるが……。生憎と、今、ミーアが乗るのは夕兎である。
背の上で動いたミーアに「なにか？」と首を傾げている。こそこそと逃げるのは、王者に相応しくない、とばかりに、そこに佇み、動こうとしない、実になんとも空気の読めない馬なのであった。

「ま、まぁ、その……若き想いというのは、抗い難いものですし」
仕方なく、ミーアは言葉を続ける。幸い、すでに作戦は立ててあった。
まず、今日のことはすっきり忘れましょうよ！　と押す。今日のいろいろなやらかしは、まぁ忘れて、誰にも責任問わないで行きましょうよ、となったらいいのになぁ、と切に思うミーアである。
……が、押し切れない場合には、別の論をもって、マンサーナの心を鎮めるつもりでいた。
キーワードは『若さ』だ。
「胸に抱いた熱情に抗いがたきは、若者のサガというものですわ」
そう、ミーアは、ヒルデブラントの無軌道な行いを、すべて、若さのせいにしようと企んでいた！　そのうえで……。
「されど、その若者の、抑えがたき熱情が、国の未来を切り開いていくことも、また、事実というものですわ」
『若さ』というのは、そんなに悪い物じゃないよね？　という方向に話をもっていこうとする。
それから、ミーアはマンサーナの顔をジッと観察する。彼の顔に怒りの色を見つけたら、即時撤退するつもりで……ギリギリまで踏み込む！
「だから、わたくしは我が従兄弟、ヒルデブラントの恋と熱情を応援したく思いますわ」
「なっ！」
マンサーナの顔に、驚愕の色が浮かぶ。が、ミーアはあえて言葉を続ける。
「彼のあの気持ちは、騎馬王国と帝国との間に新たな関係を生むものかもしれない。若き情熱は、どのような困難にもめげず、新しい道を切り開く……そのような力がありますわ」
そう断言してから、ミーア、さらに攻める！
「それだけでなく、わたくしは……ルヴィさんをも応援いたしますわ」

ここで、きちんと言っておくのだ。ルヴィの恋を自らが支持し、応援する、ということを……。
もちろん、はっきりと「ルヴィがバノスに恋をしていますよぅ！」なぁんて明言したりはしない。しないが……フワリと匂わせるのだ。
ルヴィもまた、現在、恋の真っ最中ですよ、と。そうして……。
――ヒルデブラントのやらかしは、まぁ、やらかしですけど、ルヴィさんも、あの縁談に乗り気じゃなかったですわよ？　だから、ヒルデブラントのアレな言動は、双方を利するものでしたわよ？　娘さんに嫌われなくって良かったですわね！
っと暗に主張しておくのだ。
あのヒルデブラントの行動は、むしろ、ルヴィにとって良いことなのですよぅ、となんなら、声を大にして訴えたいミーアなのである。
「ルヴィを応援……」
「ええ。彼女の若き情熱もまた、とても貴重なもの。古き慣習によって潰してしまってはいけないのではないかしら……」
大貴族に相応しい婚姻相手とか、そういうこだわりは、さておいて。ここはルヴィの恋心を応援してあげようよ、と、ミーアは伝えたいのである。
ルヴィの場合、バノスのことが好きすぎて、このまま下手な貴族とくっつけてしまうようなことがあれば、明らかに悪影響が出そうでもあるし、それに……。
「ルヴィさんは、いち早く行動をもってわたくしへの支持を表明してくださいましたわ」
四大公爵家の子女たちの中で、ルヴィの功績は大きい。皇女専属近衛隊を用いた、食糧輸送部隊の護衛計画の立案、その運用において、ルヴィの果たした役割は決して小さくないのだ。
「それに、ルヴィさんは、わたくしがしようとしている、新しいことにも賛同してくださいましたわ」
新しい盟約……。秘密裡に、星持ち公爵令嬢・令息と結んだ盟約

のことを公にはできない。されどルヴィは確かに、あの日、ミーアの協力者となったのだ。であれば、ミーアとしてはぜひ、協力してやりたいところだった。

――それに、平民から異例の出世を遂げた一兵士と大貴族の令嬢が結ばれる……というのは、とてもロマンチックですし……。ぜひ見てみたいですわ。

そんな、ちょっぴり自分の欲望にも素直なミーアなのである。

「ミーアさまが、なされようとしている新しいこと……。ルヴィが行動で支持を……」

マンサーナは考える。ミーアが言わんとしていることを……。帝国の叡智と謳われるミーアのことだ。きっと、その発言には意味があるはずだ、と。

――コティヤール家とレッドムーン家の縁談は、ミーアさまのお心に適わなかった……ということか。だが、それは、なぜか……？

一つは、もちろん、ミーアが言っていた通り、騎馬王国との関係だ。

――若さ、か……。

ヒルデブラント・コティヤールの馬への情熱は、帝国の中で満たされるものにあらず。名馬の一頭を与えたところで、その渇望は満たされない。否、それでは、彼の情熱を生かすことはできない。

――あふれ出る若き情熱を真に生かす環境は騎馬王国にあり、と……。ミーア姫殿下は、そのように見ているのだろう。姫殿下は、その者の持つ資質が、生かされぬまま枯れていくのを嫌う……そういう方なのだろう。

それは、皇女専属近衛隊にもよく表れている。馬番をしている者も、あの巨漢の隊長も、ミーアから与えられた役割を、生き生きとこなしているではないか。

――それこそが、帝国の叡智の本質ということか！

カッと目を見開き、そんな結論に到達するマンサーナ。

……ちなみに、奇しくもマンサーナが立てた推測は、どこかの国の苦労性の忠臣と重なっていた。今後、マンサーナが、胃痛に悩まされないか心配である。

それはさておき……。

――だが、ミーアさまが言わんとしていることは、それだけではあるまい。私はやり方を間違えたのだ。ミーアさまがなさろうとするのは『新しい』ことだ。しかし、その支持を表すのに、私は古いやり方をもってしようとしていた。それは適切ではないと……ミーアさまはおっしゃっているのではないだろうか。

思わず、マンサーナは深いため息を吐いた。

――なるほど……考えてみれば、大貴族同士の婚姻により、関係性を強化し、支持を表す、などと言うやり方は、実に古い。古色蒼然としたものであった。対して、ミーアさまがなさろうとしているのは、帝国初の女帝として、このティアムーン帝国に君臨するという、未だかつて誰もなさったことのないこと。この上なく新しきことに、古き仕方で支持を表すは確かに矛盾であったな。

考えてみれば、ルヴィに対する支援だとて、今回のやり方は古かったのかもしれない。

軍内部での栄達を支援するため、有望な青年貴族ヒルデブラントとの縁談により、後押ししようとしたのだから。

――あの子は……ルヴィは、ミーア姫殿下の皇女専属近衛隊内での働きにより……自らの力により、その道を切り開こうとしていたというのに……。そして、そのやり方をこそ、ミーアさまは、自らの陣営に相応しいと認められたというのに……。

であれば……ミーアへの支持を表明するためには、どうすれば良いのか？

――考えなければなるまい。はは、まったく、サボることができんな……。これがミーアさまを支持するということか……。

思わず、苦笑をこぼすマンサーナであった。

「なるほど……。よく、わかりました。コティヤール家との縁談の

件、少々、性急に過ぎたように思います。もう少し、ルヴィとも話し合ってみようと思います」
「ええ。それがよろしいですわ」
そんなマンサーナに、ミーアはニッコリ笑みを浮かべるのだった。

さて、マンサーナが、聖ミーア学園に総合馬類研究学科を開設するという報せを聞いたのは、この数か月後のことだった。
馬の研究という「新し」くも魅力的な研究に、彼はすぐさま支持を表明。
レッドムーン派の貴族や黒月省の協力も得て、馬類研究学科は順調なスタートを果たすのだった。

第五十七話　勝機……実らず！

その日の夜のことだった。
夕食後、突如、呼び出しを受けたルヴィは、父の書斎に向かっていた。
質実剛健、堅固な城のようなレッドムーン邸の廊下を歩くルヴィ。背筋を伸ばし、颯爽と歩くその姿はいかにも凛々しく、すれ違ったメイドたちが思わず、ため息をこぼすほど美しく見えた。のだが……。
父の書斎、扉の前に立ち、ルヴィは、小さくため息を吐き……。
「うう……ミーアさまの狙いが上手くいっていればいいのだけど……」
などと、気弱につぶやく。
「バノス隊長、私に力をください……」
なぁんてつぶやく彼女は、正真正銘、紛れもなく恋する乙女なのである。
それから、気を取り直すように深呼吸して……。
「失礼いたします。お呼びでしょうか、父上」
ゆっくりと扉を開き、部屋へと入る。
中に入ると、父はくつろいだ様子で椅子に座っていた。
「ああ、ルヴィ、来たか。疲れているところを呼び立ててすまなかったな」
「いえ、問題ありません。それよりも、なにかありましたか？」
促されるままに、ソファに腰かけようとしたルヴィだったが……。
「ヒルデブラント・コティヤールとの縁談のことだが、取りやめにすることとした」
突然の話に、ルヴィは一瞬、動きを止め……。
「そうですか」

平静を装いつつ、内心で、「やったぁー！」と快哉を叫ぶ。
まぁ、半ばはわかっていたことではある。大勢の前でやらかしたヒルデブラントを、今さら正式な縁談相手にはしづらいだろうし……。
だが、ルヴィはすぐに心を引き締める。
なにしろ、父、マンサーナは軍略に長けた人だ。縁談の話も、ルヴィに反論の機会を与えずに、奇襲によって了承させてしまったのだ。
今の、縁談取りやめの話も、ルヴィにとっては急な話。こちらが混乱から立ち直らぬ内に、なにか仕掛けてくるかもしれない。
そうして、すぐに冷静さを取り戻したルヴィは、とりあえず必要なことをしておく。それは……。
「父上、ヒルデブラント殿のことですが……あまり、罰などを与えませんように、お願いいたします。コティヤール家との仲も悪化しないよう、お取り計らいいただけると嬉しいのですが……」
「ほう？」
「あの方も、悪気があったわけではないでしょうし……。恋とは抗いがたい感情でしょうから」
後半は、いささか実感をこめて、ルヴィは言った。
「それに、ミーア姫殿下との関係性を悪くしては、本来の狙いとは逆。ここは、どうか、お怒りをお鎮めくださいますよう……」
「わかっている。正式に婚約をしていたわけでもなし。穏便に済ませるつもりであったが……しかし」
と、ここで、マンサーナは静かにルヴィを見つめた。
「あまり残念そうではないな。それに、怒ってもいないか……。やはり、ヒルデブラント・コティヤールは好みに合わなかったか？」
「へ？　ああ。いえ、好みに合わなかったということではなく……」
っと、慌てて手を振るルヴィだったが……不意に、ミーアの言葉が甦る。
『何事にも時期がある……』

――もしかすると、私の気持ちを父上に知っていただくのは……今かもしれない。
唐突に、ルヴィは思う。
ここで、自分に想い人がいることを伝えておけば、今後は縁談話を持ち掛けられることもなくなるかもしれない。
ここは先手を打ち、父の動きをけん制することこそが、戦理に適う行動なのではないか？
ルヴィの脳裏、軍配を持ったミニミーアが、行け！　行け！　と飛び跳ねていた。
大きく息を吸って、吐いて、もう一度吸って……ルヴィは、言葉を紡ごうと口を開き……。
「やはり、己が力を試したいか……」
父の、想定外の言葉に、ルヴィは思わず……
「……はぇ？」
力の抜けた声を出した。
「いや、みなまで言うな。きちんとわかっている。婚約者の力も、レッドムーン家の力も借りず……。ただ、己が力により、軍内部での栄達を果たすこと……。それこそが、お前の望みなのだろう？」
マンサーナは、どこか遠くを見つめるような目つきで、話を続ける。
「私は、どうやら、お前を助けるつもりで、余計なことをしてしまったらしいな。お前の才気も、覇気も知っているつもりではあったのだが……」
自嘲の笑みを浮かべて、父は首を振った。
「若さ……か。私は、すっかり忘れてしまっていた。己が力を頼りにどこまで行けるか……か。ふふふ……」
「あ、いえ、父上？　その、私は……」
なにやら誤解していそうな父に、ルヴィが話しかけようとした時だった。
「失礼いたします」

唐突に、ノックの音。現れたのは、レッドムーン家に長く仕えている執事だった。
「申し訳ありません。ルヴィお嬢さま、皇女専属近衛隊の方がいらっしゃいました。なんでも、トラブルが起きたとか……」
その言葉が遠慮がちなのは、ルヴィがレッドムーン家の令嬢だったからだろう。
星持ち公爵令嬢（エトワーリン）が、夜間の召集に応じる必要があるのか否か、それは微妙なところだった。が……。
「失礼いたします。父上、この話はまたいずれ……」
ルヴィは一瞬も躊躇うことなく立ち上がる。
自分は皇女専属近衛隊の副隊長だ。隊長バノスの補佐という大切な仕事があるのだ。
彼の信頼を裏切るようなことは、間違ってもできない。
急ぎ、支度のために、自室に戻るルヴィ。
ふと……あれ？　今、父に伝えるべきタイミングを逃したんじゃね？　という思いに駆られたりもするが……。
――いや、まぁ……、ここで父上に私の想いを告げても、その後でバノス隊長に想いを告げて断られたら悲惨なことになるし……。きっと父上も怒って、バノス隊長に危機を及ぼすかもしれないし……。それは本意ではないからな……。うん、そうだ！
などと、うだうだ考えた末に、ルヴィは、一つの結論に到達する。
「それに、ミーア姫殿下も蛮勇は良くないと言っていた。そうだ、忘れるところだった。やっぱり、父上は後回し。バノス隊長が先だな。うん」
こうして、恋する赤月の姫は、皇女専属近衛隊の詰め所へと急ぐのだった。

第五十八話　恋愛大将軍ミーアの号令！　全軍突撃！！！

「すごい風だな……」
屋敷を出た瞬間、吹き付けてきた強風に、ルヴィは顔をしかめた。
乗馬大会の途中から吹き出した風は、強さを増し、悲鳴のようなうなりを上げていた。
……今夜のミーアの睡眠時間が心配なところである。
「急ぎましょう。ルヴィお嬢さま」
やって来たセリスに一つ頷き、ルヴィは馬車に乗り込んだ。
「それで、いったいなにがあった？」
対面に座ったセリスは、眉をひそめて言った。
「実は、その……皇女専属近衛隊の馬が、何頭か逃走を……」
「……うん？」
ルヴィは、思わず眉をひそめた。
「この強風で厩舎の一部が壊れ、馬が逃走したとのこと。それを連れ戻すためにいくつかの部隊が動いているのですが……」
外は、すでに夜の闇の中だ。捕獲は、思いのほか苦戦しているらしい。
「今日は、ずいぶんと馬と縁がある日だな……」
ルヴィが苦笑を浮かべると、セリスが実に申し訳なさそうな顔で頭を下げた。
「申し訳ありません。本来は、お嬢さまのお耳に入れることでもないかとは思ったのですが、バノス隊長がかけられた招集ですし……」
「よく教えてくれた！」
ルヴィは思わず、セリスの手をガシッと両手で掴み……。一瞬後にハッとした顔をして……。
「んっ、んん。まぁ、なんだ。私は皇女専属近衛隊の副隊長。バノス隊長を補佐する立場なのだから、緊急時に招集を受けるのは当た

り前のことだ」
キリリッとした顔で言うルヴィである。
そうこうしているうちに、馬車は皇女専属近衛隊の詰め所に到着した。
建物の中は活気に満ち溢れていた。
どうやら、彼らは競馬大会の後、宴会に突入、その最中に馬が逃げたとの報告が入ったらしく……。詰め所内には、レッドムーン家の私兵も何人か混じっていた。
「ええと……状況はどうなっていますか？」
ルヴィは、急ぎ、バノスのそばに歩み寄った。
「ああ。副隊長。夜分に呼び立ててすみませんでしたな。実は、レッドムーン家の私兵団の連中も手伝ってくれるというもんで……人手があるのはありがたいが、ちょっと収拾がつかなくなっちまいましてね……」
「いえ……。それは問題ありませんが……」
ルヴィはいったん言葉を切って、むぅっと不満げな顔をする。
バノスは、いつも微妙な敬語を使うのだが……それが、自分との間の壁になっているような気がしていた。
副隊長なのだから、いっそのこと、タメ口とか、もう少し強い口調で接してくれてもいいのに……と思ってしまうルヴィである。
しかも、彼は士爵という、れっきとした貴族の仲間入りをしたのだ。
ならば、敬語など使わず、もっと親しげに話しかけてくれても良いのではないだろうか？　などとさえ、思ってしまう。ここは、しっかり言っておかねば……っとルヴィは勇気を振り絞る。
「バノス隊長、あなたは、今日、皇帝陛下直々に爵位を賜り、士爵となられました。そのことを、ご自覚ください」
「ん？　いや、ええと、それはどういう……」
「私は、星持ち公爵令嬢とはいえ、自分で爵位を持っているわけではありません。であれば、バノス隊長のほうが爵位的にも上になる

のです！　かしこまった敬語など使う必要はありません」
　んなわけにいくか！　と言うことを真顔で言うルヴィである。
　対して、バノスは微妙に気まずそうな顔をする。
「ああ……、いや、士爵の話は……」
「なにか、不満がおありなのですか？」
「いや、不満じゃないんですがね……。こいつらにさんざんからかわれましてね。貴族になったのだから、貴族のお綺麗なお嬢さまがたとも恋仲になれて羨ましいとかなんとか……」
　その言葉に、思わずドキッとする。バノスが、貴族令嬢との恋愛をどう思っているのか、気になったからだ。
　もしも、そんなのは考えられないと言われてしまったらへこんでしまうが、かといってそれを喜んでいるのだとすれば、ライバルが一気に増えてしまうかもしれない。
　ルヴィの中では、バノスは絶世のイケメンなのである。不安になっても仕方ないのである。
「おお、そうだ。うちらの隊長はお貴族さまになったんだ。もう、ほかの連中にデカい顔させないぞ！」
　バノスが爵位を得たことで、大いに盛り上がっている隊員たち。それに苦笑いを浮かべつつ、バノスは、隊長室にルヴィを誘った。
「あそこじゃ落ち着いて話ができませんからな。ああ、なにか、飲み物でも……」
　っと、椅子を進めるバノスに、ルヴィはもじもじしながら尋ねる。
「あ、あの、バノス隊長？　隊長は、その……ど、どうなのでしょうか？」
「は？　どう、とは？」
　きょとん、と首を傾げるバノスに、ルヴィは、勇気を振り絞り……。
「そ、その……貴族の令嬢との恋愛とか……」
「はぁ、いや、どうと言われましても……。そんなこと考えたこともありませんぜ。そんなの物語じゃあるまいし……ああ、そうか」

と、そこで、なにかを納得した様子で、バノスが小さく頷いた。
「そういえば、流行ってるってディオン殿が言ってたか。なるほど、確かに俺ならば、平民の兵士が士爵になって、貴族のご令嬢と恋愛……って筋書きはできるか……」
バノスはそうして、肩をすくめた。
「まぁ、いずれにせよ俺には縁遠いことですな。なにせ、そう言うのはもっと見栄えが良くなけりゃ、ダメでしょうしね。あいにくと副隊長殿の興味を惹けるようなことは、お話できなそうだ」
「そう……ですか」
バノスの答えに、ルヴィは安堵半分、落胆半分の、なんとも言えない顔をする。
「しかし、まぁ、なんですな。あなたから恋愛の話をせがまれることになるとは思いませんでしたな。こんなことを言ってしまうと、失礼に当たるかもしれませんが……大きくなられましたな」
「え？」
突然の言葉に、ルヴィは小さく瞬きして……。
「それは、どういう……？」
「ああ……いや。忘れているなら構わないんですがね、あなたとは昔、会ったことがあったから……」
バノスはそう言って、懐かしげな笑みを浮かべる。
「あの時のお嬢ちゃんが、立派なレディになって……。しかも、副隊長として共に仕事をすることになるとは……。ははは、なかなか、人生とは不思議なものですな」
ルヴィは、それで気が付いた。
バノスは、あの時のことを覚えているのだ、と……。覚えていてくれたのだ、と……。
それが嬉しくって……だからだろうか……？
――あれ……？　これって、今なんじゃ……？
不意に、閃いた！　自分の気持ちを告げるのは……今なのではないか！　と。

この話の流れ、あの時からずっと好きだったと、自然に言えるタイミングなんじゃないだろうか？　と。
――そうですよね？　ミーアさま？
胸の中、問いかければ、今こそ、全軍突撃ですわ！　などと軍配を振る、恋愛大将軍ミニミーアの姿が思い浮かんで……。
ルヴィは小さく頷き、息を吸って、吐いてから……。
「あの……バノス隊長」
「さて、と。それじゃあ、急いで馬を捕まえに行きますかな。妙齢のご令嬢を、あまり夜遅くまで働かせるわけにもいきませんし」
それから、バノスは鋭い目をルヴィに向け……。
「副隊長、地図を……」
「……はい。すぐに」
彼の真剣な視線に射られて、一瞬、クラッとしかけるルヴィだったが……急ぎ帝都の地図を用意しつつ、つぶやく。
「もう少し……このままでもいいのかな……」
などと……。

かくて、ルヴィの片思いは続く。
その決着がどのような形になるのか……それは恋愛大将軍ミーアにもわからぬことであった。

第五十九話　ミーア姫の優雅な朝

「ふわぁむ……」
さて、競馬大会の翌日のこと。ミーアは、少しだけ朝寝坊した。
ベッドの上で、体をぐぐぅっと伸ばす。
「ふぅむ……微妙に疲れが残ってますわね。ふわ、まだ、眠いですわ……」
あくびをムニュムニュしつつ、目元をこするミーアである。
「これは、昨日、ホースダンスで体力を使いすぎたせいかしら……？」
なぁんてつぶやくミーアであった。
ちなみに、あえて言うまでもないことではあるが……別に、ものすごい風の音がしてたから、怖くてあまり眠れなかった、などと言うことはない。あくまでも、運動のし過ぎが原因である。たぶん。
「おはようございます。ミーアさま。どうぞ」
アンヌが持ってきてくれた、ホットミルクを一口飲んで、ミーアは小さく息を吐く。
「ほぅ……やはり目覚めのホットミルクは美味しいですわね」
甘くまろやかな香り、こってりとした舌ざわり、コクのある味……。重厚なミルクの味わいが、ミーアの脳細胞を刺激して、目覚めさせていく。
ふむ！　と一つ頷いて、手早くドレスに着替えたミーアは、食欲に背中を押されるようにして食堂へと向かった。
「あっ！　ミーアさま、おはようございます」
食堂には、子どもたちの姿があった。元気よく立ち上がり、挨拶してきたのは、ヤナだった。それに倣ってキリルも、「おふぁよふごふぁいます」などと慌てて挨拶してくる。
「ふふ、キリル。別に、慌てる必要はありませんわよ。喉に詰まら

せてしまいますわ。ゆっくりお食べなさい」
それから、ミーアはパティへと目を向ける。
パティは、いつも通り、表情の薄い顔で小さく頭を下げた。
なぜだろう……その顔からは、昨日よりもさらに元気がなくなっているように見えた。
「あの、ミーアさま……」
すると、唐突にヤナが近づいてきて、ミーアに耳打ちする。
「えと、パティは、弟のことを放っておいて自分が楽しむことを心苦しく思ってるみたいです。だから、心配です……その、友だちとして」
最後の、友だちとして……のところで、わずかばかり恥ずかしげな顔をするヤナ。どうやら、自分から友だちと言うのが照れくさかったらしい。
それを微笑ましく思いつつも、ミーアはそっとヤナの頭を撫でた。
「そう、ありがとう。ヤナ……」
それから、ミーアはキリルに視線を向けた。
「キリルも、昨日は楽しめたかしら？」
「はい。すっごく、楽しかったです！」
ニコニコするキリルに、ミーアは満足げに頷きつつも考える。
――やはり、パティの弟は、なにか厳しい境遇にあるみたいですわね。なんとかしてあげたいけれど、過去のことですし……。それ以前に、いったい、パティがどのような状況にあったのかも、まだわかっておりませんし……今はまだどうにもできないですわね……。
パティの実家、クラウジウス家の調査報告は、まだ上がってきていない。なぜ、お取り潰しになったのかも、かつて、どのような家であったのかも……。今のミーアにはまるで分らないわけで……。
だから、ルードヴィッヒの報告待ちではあるのだが……。
――まぁ調べるようお願いしてから、まだ十日ぐらいしかたっていないですしね。報告が来るまでにはもう少し時間がかかるでしょうね。ふむ、ルヴィさんのことが上手く片付いたわけですし、わたく

しのほうでもなにか、できることがあるかしら……？
夏休み、のんびりダラダラしつつも……まぁ、ちょっとぐらいなら、腹ごなしに本を読んだり、父から情報を探り出したりしてもいいかな……？　なぁんて思うミーアなのであるが……。
そんなミーアの平穏は、早々に打ち砕かれることになる。それも、想定外の方向から……。
「たったた、大変です！　ミーアお祖母さまっ！」
ちょうど、ミーアがふんわりやわらかなパンに舌鼓を打っていたところに、孫娘、ベルが駆けこんできた。
「あら、ベル……。はしたないですわよ、そのように慌てて。それに、わたくしはお姉さまですわよ」
眉をひそめつつ、注意するミーア。
まったく、帝国皇女としての自覚が足りていないのではないかしら？　などと呆れつつも、ひょいっと、残っていたパンをもう一口、大きく開けた口に放り込む。
ちなみに、パンは、半分ぐらい残っていた。
ミーアはパンを小さくちぎって食べるのも好きだが、口の中一杯に頬張って、もごもご食べるのも大好きなのである。実になんとも、帝国皇女としての自覚が足りていない食べ方であった。
そんな風にして、優雅な朝食を嗜むミーアに、ベルは腕をブンブンさせながら言った。
「そっ、それどころじゃありません。ミーアお姉さま」
血相を変えている孫娘に、ミーアは、やれやれ、とあきれ顔で、それから、紅茶で口の中のパンをすべて流しこんでから……。
「なにがありましたの？　朝から、そのように慌てるようなことはなにも……」
「さっ、サフィアスさんが、謀反を起こされます！」
後の宰相ルードヴィッヒから預かった夢日記を手に、ベルが言った。
「ブルームーン派の貴族たちを率いて……ミーアお姉さまに反旗を

翻すって、こっ、ここに……」
日記帳を開いて言うベル。対して、ミーアは……。
「……はぇ？」
きょっとーんと首を傾げるのだった。

第六十話　ミーア姫、緊急会議を招集す

――さっささ、サフィアスさんが、む、謀反っ！？

ミーア、咄嗟に、目の前にあった紅茶を一気飲み。それから、気持ちを落ち着けるべく……はーふーうー、と息を吐き……。まず、周囲に視線を走らせる。どうやら、話を聞いていそうな者はいないが、念のため。

「もう、ダメですわよ、ベル。帝国を舞台にした小説だからといって、そのように誤解を招くような表現をしては……。サフィアスさんがモデルの、悪役サフィと、ブルームーン派がモデルのブールムーン派、ですわよね？」

気持ち大きめに言ってやる、と、幸いベルにも伝わったらしく……。

「あ、そうでした。すみません。ミーアお姉さま。小説のお話でした」

やや棒読み気味ながらも、応えてくれる。

なんとか、これで誤魔化せそうだぞ、と思いつつも、ミーア、素早く動く。

「それではベル……詳しい話が聞きたいから、わたくしの部屋に来てもらえるかしら……。ああ、それと、リーナさんを連れてきて……」

ベルに指示を飛ばしつつ、続けてミーアはアンヌのほうに目をやる。

「アンヌ、申し訳ありませんけど、ルードヴィッヒとアベルを連れてきていただけるかしら？」

現状、考えられる最高のメンバーを集めつつ、ミーアは、ぐむむ、っと唸る。

「ミーアさま？」

ふと見れば、ヤナが心配そうな顔で見つめていた。キリルもだ。
一方で、パティは、
「サフィアス……ブルームーン派……？」
などと、怪訝そうな顔をしている。
「大丈夫ですわ。ただの小説でネタに詰まったという話ですわ。ほら、先日、大図書館にいたエリスさんにお話を書いていただこうと思って、そのネタを話し合っていたんですの」
誤魔化すように、ミーアは優しい笑みを浮かべて、
「だから、なにも気にする必要などございませんわ。あなたたちは夏休みを楽しむとよろしいですわ。馬に乗るもよし、エリスに話を聞くのもよしですわよ。ああ、でも、お菓子はほどほどに。料理長の言うことを聞いていないと、大きくなれませんわよ？」
子どもたちの頭を撫でながら、ミーアは、改めて検討する。
――ともかく、事情を聞いて対策を練らなければなりませんわね……。
手早く朝食を口の中に片づけてから、ミーアはムグムグ言いながら、席を立った。

戻ると、ミーアの部屋には、すでに主だった面々が集まっていた。
「急に申し訳なかったですわね。みなさん。でも、緊急事態ですわ」
言ってからミーアは、ベルのほうへと視線を向けた。視線を受けたベルは、
「はい。実は、サフィアスさんが、謀反を起こすみたいで……」
などと、ストレートに言った。補足するように、ミーアは言った。
「ベルが未来から来たということは、もうお話ししてありますけど、その線からの情報ですわ。どうやら、サフィアスさんとブルームーン派が近い将来、謀反を企てる、ということみたいですわね」
視線で問うと、ベルが小さく頷いた。
「ふむ……。まぁ、とりあえず、サフィアスさんに探りを入れる必要があるかしら……。もっとも、もし本当であれば、素直に話すと

も思えませんけれど……」
「ミーアさま……」
その時だ。シュトリナが、普段と変わらぬ可憐な笑みを浮かべて……。
「実は、嘘がつけなくなるお薬があるのですが……」
不穏なことを言い出した！
「ほう……」
ミーア、しばし黙考……。
――それは、とても便利。情報を聞き出すには良いかもしれませんけれど……両刃の剣ですわね。サフィアスさんとの間に、修復不可能な溝を作ってしまいそうですわ。
サフィアスを疑い、怪しげな薬を飲ませたという事実は、蛇の連中にとっては恰好の料理材料になるだろう。
一つ頷いてから、ミーアは、シュトリナのほうを見た。
「ありがとう。リーナさん。だけど、それは最後の手段にしたいですわ」
ミーアの言に、特に不満を見せることなく、シュトリナは頷いた。
「そうですね。それがよろしいかと思います。薬を使うと、一週間は腑抜けになってしまうので、敵にバレる危険性がありますから……」
困ったような笑みを浮かべるシュトリナに、ミーア、思わず、眉をひそめて……。
「……ええと、リーナさん、今後は毒を使わなくてもいい、とわたくし言ったと思いますけれど……」
「命に危険がないものは、イエロームーン家では毒とは呼びませんので」
シレッとそんなことを言うシュトリナだった。まぁ、それはさておき。
「サフィアス殿が、そんなことをするとは思えないな」
次に口を開いたのは、アベルだった。

「ああ。そう言えば、アベルは先日、サフィアスさんに会ってきたのでしたわね」
「そうなんだ。あの時、話した感じは、そんな様子はまるで見えなかった。君に協力し、この帝国を盛り立てていこう、と自分の派閥の若い貴族たちとも話していたんだ。彼が裏切るとは、考えづらい」
苦しげな顔で言うアベルに、ルードヴィッヒも頷いた。
「私も同意見です。サフィアス殿に、この段階で、ミーアさまを裏切るメリットはないかと思います」
それから、眼鏡をくいっと押し上げて、ルードヴィッヒは言った。
「失礼ながら、その情報が間違っている、ということは……？」
「ふむ……」
ミーアは頷きつつ、唸る。
――はたして、間違いであったという可能性はあるかしら……？
ベルに目を向ける、と……。
「ルードヴィッヒ先生が嘘を書くことは、あり得ませんし、間違いを書くことは、もっとないと思います」
そう断言するベルである。
そして、それにはミーアも同意だった。
脚色過多の皇女伝や、ミーア自身の主観に基づく血染めの日記帳より、ルードヴィッヒの夢日記のほうが信用に足る、と……そう確信しているミーアなのである。
「ベル、それはたしかルードヴィッヒの日記だけでなく、夢の内容までも記録した日記帳、でしたわね？」
ミーアの問いかけに、ベルは静かに頷く。
「はい。そう言っていました」
夢とは、時間の揺らぎによって生じた無数の歴史の記憶……。それすらも網羅したルードヴィッヒの日記帳は極めて優秀な予言書と言えた。
皇女伝や血まみれの日記帳を見る限り、“未来を記した文字”というのは、容易に変化する。記憶や物質以上に、歴史改変の影響を

受けやすいのが「文字」というものだった。
　それゆえ、ルードヴィッヒは、揺らぎにより、文字が変化してもいいように……すなわち、今日『現実の出来事として書いた記述』が、揺らぎによって『夢の出来事』に変化した場合、なにが影響してそうなったのか確かめられるように、現実と夢とを併記しているのだ。
　極めて強力かつ、歴史の変化に対しても強度を誇るその記述を、けれど、ルードヴィッヒは心配していた。その影響力の強さを……不安視していたのだ。
『ベルが未来からやってくる』ことは、自分たちの歴史に織り込まれた事実だ。けれど、ベルが『ルードヴィッヒの日記を持っていた』という記憶は、ルードヴィッヒ自身にはなかったから。
　となれば、強力な未来予測へと繋がる、その日記帳が起点となり、新たな『揺らぎ』ができてしまうことは予想できた。
　ほとんど理想に近い世界を築いている、未来の世界の住人からすると、なるべく、過去を変えたくない。変わったとしても、その影響を最低限にしたいと考えるのは、仕方のないことなのかもしれない。
「ルードヴィッヒ先生は、これをボクに持たせることを最後まで迷っておられました。けれど、ボクを信用し、できるだけみなさんに見せない条件で、ボクに託してくれました」
　そうして、ベルはギュッと日記帳を胸に抱き、
「だから、みなさんに見せるわけにはいかないんですけど、でも、これは、信用できます」
　ベルは、凛々しい顔で言った。
　それは、帝国の叡智の血を継ぐ者に相応しい、実に堂々たる言葉だった。
　……ちなみに、なぜベルが『サフィアス謀反』の記述に気付いたかと言えば、ここ最近、毎日のように、日記帳を読み込んでいたためだ。毎日、しっかりと読み進めていたのだ！

ではなぜ、そんなことをしていたのか、と言えば、もちろん「過去に飛ばされた以上、自分にも役割がある」と言われたので、それを考えるヒントを得るため、頑張って日記帳を読み込んだのだ……というわけではない。もちろんない。

ベルは、それほど勤勉ではない。

また、日記帳を読み込み、“自身を日記帳の影響下”に置くことでサボろうとした……などということでもない。

「ルードヴィッヒ先生は、できるだけ、この日記帳の影響がないほうが、過去を変えずに済む、と考えていたみたいだし……ということは、ボクがこれを読み込んで、日記帳の影響を受けた状態になれば、ボクの行動自体が過去に対する悪影響になるから、ボクはなにもしなくてもいいってことになるかも！」

などという複雑な思考プロセスをたどったわけでは決してない。ミーアならば、やったかもしれないが、ベルはそこまで勤勉なサボり魔ではないのだ。

では、なぜ読み込んでいたかといえば、これはもう、実に単純なことなのだが……。純粋に好奇心ゆえである。

なにせ、あの宰相ルードヴィッヒが書き記した日記帳なのである。興味を惹かれないわけがないではないか！

探検学の徒であるベルは、自らの好奇心に従順な少女なのだった。

第六十一話　奴の弱点……

ベルの言葉を聞いてから、ミーアは改めて言った。
「どのような事情であれ……サフィアスさんが裏切る。これを基本として、動くことにいたしましょう」
ルードヴィッヒがよこした情報に間違いなし。
それは、前の時間軸の経験に基づく、ミーアの結論だった。
ミーアの決定に、最初に声を上げたのは慧馬だった。
「ということは……戦術の基本は機先を制すること。相手が裏切る前に、捕らえるか、殺してしまうかする、ということだな！」
などと、意気上がる慧馬である。が……ミーアは、それには賛同しかねた。
基本的に乱暴なことが、あまり好きではないミーアであるが、それ以上に……その……慧馬には、戦略的なことも政治的なことも、そこまで期待していないミーアである。
乗馬以外のことでは、慧馬に対して、微妙にイエスマンになりきれないミーアなのである。
人には向き不向きがあるし……。
そして、ミーアの判断の正しさは、帝国の叡智の知恵袋によって、証明された。
ルードヴィッヒが待ったをかけたのだ。
「いや、それは悪手だ。そもそも、まだ裏切っていない者を処罰した、などということになれば間違いなく、彼らの好餌になってしまう。あの、蛇たちの……」
それから、ルードヴィッヒは小さく唸る。
「第一、ミーアさまへの支持を表明しているサフィアス殿に、ミーアさま自身が危害を加えたりしたら、それこそ、ブルームーン派が蜂起するきっかけにもなりかねない」

「そうだね。ボクも反対だ。サフィアス殿は、本気でミーアに支持を表明している。信義に反することをすべきではないと思う。それに……個人的には、サフィアス殿を……友を信じたいと思う」
賛意を表したアベル。その真剣な顔に、ミーアは思わず、ドキッとする。
――ああ……友人のために必死になれるアベル……いいですわね！　実にいい！
などと、黄色い歓声を心の中で上げていると、それに応えたわけではないと思うが、黄月の姫君が口を開いた。
「でも、機先を制する、というのは大切なことだと、リーナは思います」
シュトリナは、頬に手を当てて、小さく首を傾げながら……。
「おそらく、蛇ならば、サフィアスさんが蜂起した時点で、どう転んでも攻撃を仕掛けてきて、ブルームーン派とミーアさまとの分断を図るはず。処罰したら処罰したで、正しく処罰しなかったなら、処罰しなかったで……責めてくる。今、サフィアスさんが蜂起するという情報を事前に掴んでいる、こちらにアドバンテージがある状態で動くことが大切だと、リーナは思います」
――ふむ、蛇の第一人者がそう言うのであれば、やはり、そうなのでしょうね……。とすると……。
ミーアは、ベルのほうに視線を向けて、
「ちなみに、ベル。サフィアスさんが謀反を、と言っておりましたけれど、具体的にはなにをいたしますの？」
「はい。ええと、食糧輸送部隊に対する攻撃と流通の混乱を引き起こします。それによって、ミーアお祖母さまの評判を落とそうという作戦だったみたいです。かなり、用意周到に計画されていたみたいで……」
「用意……周到……。ふぅむ……」
それは、なんとなくサフィアスには似合わないような言葉に思えたが……。

――いえ、そういえば、生徒会長選挙の時には、いろいろ暗躍しようと持ち掛けられましたっけ……。
そう考えると、きっちり準備し、根回しをする、というのはサフィアスの気質に合った行動かもしれない。
さて、それを防ぐためには、どうすべきか……。
ミーアは考える……ふりをして、他の者の意見を待つことにする。
「用意周到な準備ということは、思い付きで行動したわけではない。以前から計画を練っていたか、もしくは……」
難しい顔で腕組みするルードヴィッヒ。その言葉を継いで……。
「計画を練っていた者は他にいて、サフィアス殿がそれに乗ったということ……かな」
あくまでも、サフィアスを擁護する構えのアベルであった。
ミーアは、大きく頷き、
「わたくしはアベルの言葉を信じますわ。わたくしも、盟約を交わしたサフィアスさんが、裏切るとは思えませんもの。もちろん、リーナさんも、エメラルダさんも、ルヴィさんもですけど……」
それは、ミーアの個人的な感傷と言うわけでもなかった。
事実として、サフィアスが裏切るなどという未来は、今までには存在していなかったのだ。
――ベルの慌てようから考えるに、このような展開は、ベルの知る未来にはなかったはず……となれば、なにか、新しい要因が影響して、このような事態になった、ということですのね。気になりますわね……。
今朝のパンとバターが美味しかったから、ミーアの脳みその働きは悪くなかった。
難しい顔で、ミーアは唸る。
ベルの歴史と『現状』の大きな違いは、パティの存在であるが……。さて……、それがなにか関係あるのか……。
ミーアは考える。考え……考えて……。
考えることを諦める！

「まぁ、ともかく、行動しなければなりませんわ。サフィアスさんがどうして裏切るのかは知りませんけれど……。弱点ならばわかっておりますし、大きな問題はありませんわね」
そう言い切ったミーアに、みなの驚きの視線が集まる。
「ミーアさま、なにか、お考えが……？」
代表して尋ねてきたルードヴィッヒに、ミーアはニンマーリと笑みを浮かべて。
「ええ、もちろんですわ……奴の弱点は、重々承知しておりますもの。ふっふっふ……。あ、アンヌ。申し訳ありませんけど、お手紙を書く用意をしてくださらないかしら？」
「はい。かしこまりました。ミーアさま」

準備が整うと、ミーアは早速、手紙を書き始めた。
あて先は、シューベルト侯爵家の令嬢、レティーツィア。サフィアスの愛しの婚約者に向けてだった。

第六十一話　奴の弱点……（後書き）

キャラメモ

レティーツィア・シューベルト侯爵令嬢

サフィアスの婚約者の少女。サフィアスと同い年。

弟はサフィアスの従者をしていたダリオ。

第六十二話　キースウッド、自ら蒔いた種を刈り取る

さて、ミーアが帝都で遊んでいる頃、シオンとキースウッドはのんびりと、穏やかな夏休みを過ごしていた……ルドルフォン辺土伯領で……。

聖ミーア学園で勉学に励むエシャールを訪問するため。

また、エシャールを預かってもらっているグリーンムーン公爵家に挨拶をするため。

さらには、少し足を伸ばし、ペルージャン農業国に行くのもいい。ミーアが作ろうとしているという仕組みは、ぜひ見学をしておいたほうがいいだろう、と。

まぁ、いろいろ理由はあるのだが……。

――やっぱり、ティオーナ嬢に会いに来るためだろうなぁ……。

そう考えて、キースウッドは、ついつい、嬉しくなってしまう。

ティオーナと仲を深めるようになって、シオンは少しだけ肩の力が抜けるようになった。

――サンクランドの王子として、付き合う相手に慎重になるのはわかるが……。固く考えすぎなんだよな……、殿下は。

もう少しやんちゃをしてもいいのではないか、と常々思っていたキースウッドである。

だから、まぁやんちゃとは言い難いものの、シオンの不器用な恋愛を、弟の成長を見守る兄のような温かな気持ちで見守るキースウッドである。

「当人は、恋だなんて思ってないだろうけど……」

器用なシオンが、自らの恋心に対して見せる不器用さを、キースウッドは微笑ましく思ってしまって……ついつい、ニヤニヤしてしまうのだった。

「しかし……それにしても平和だな」

ルドルフォン邸の中庭、そよぐ風に揺れる花を見て、キースウッドは思わずつぶやく。
ここ最近は、忙しくて、花を愛でるような余裕もなかったから、こんな風にのんびりと、花壇を眺めながら歩いているのが、不思議だった。
「まぁ、いささか退屈過ぎるぐらいかもしれないけど……」
そぉんなことを、つぶやいてしまったので……運命の神が放っておいてくれるはずもなく……。
「ああ、こちらでしたか。キースウッド殿」
声を掛けられ、キースウッドは顔を上げた。
そこにいたのは、サンクランドから随伴している護衛騎士だった。
「なにか、ありましたか？」
「ええ。実は、キースウッド殿に報せが届いていると……」
「俺に……？　サンクランド本国からですか？」
眉をひそめるキースウッドだったが、騎士は小さく首を振り、
「いえ。ブルームーン公爵家のサフィアスさまからです」
「ああ、サフィアス殿か……」
サフィアス・エトワ・ブルームーン。
ひょんなことから友誼を結んだ青年の顔を思い出し、キースウッドは懐かしさに目を細める。
彼には、夏休みに入る前に手紙で、帝国に来ることは知らせていたが……。
「機会があれば、会いたいと思っていたが……。もしかして、時間を作ってくれたんだろうか」
星持ち公爵家といえば、帝国で最も高い爵位である。
いろいろ忙しいだろうに、もしも時間を作ってくれたのだとすると、申し訳ないことをしたな……。などと思っていたキースウッドではあるのだが、サフィアスから届いた手紙を開き――固まる。
文面は、簡潔を極めた。

『ミーアさまが、レティーツィアを料理会に誘ったらしい……』

「……はぇ？」

油断していたものだから、ヘンテコな声が出てしまった。

予想もしていなかった文字列……その字は混乱か、はたまた名状しがたい感情のゆえか……小さく震えていた。

これを書いた友、サフィアスの苦悩が察せられる。

「これは……いったい、なにが、どうして、こんなことに……？」

いや、事情などは知ったことではない。問題は、どうするかだ。

「どうするって……そんなの決まってるだろう？」

キースウッドは、やれやれと肩をすくめた。

――見ないふり……。そうだな。俺には、どうすることもできない。

サフィアス・エトワ・ブルームーン、彼は友ではあるが、他国の貴族だ。

忠誠をささげるべき相手ではないし、今の自分はシオンの護衛任務を全うする使命がある。エシャール殿下の様子を見て、国王に報告する必要だってある。

やるべきことは山積みなのだ！　退屈とか、全然してなかったのだ！

――なにかの都合で手紙が届かないなんてことは、よくあることだ。うん、よくあることだ。だから、これを読まなかったと言っても……問題ないな。うん！

っと、低きに流れていこうとしたキースウッドであったのだが……ふと心の中に引っかかるものを感じた。

「友の危機に駆け付ける……か」

それは帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンの友人たちであれば、誰でもが迷わずに行うことだった。どのような言い訳であっても、そこに差し挟むべきではないことだった。

それなのに自分は、何を迷っているというのか……。

それに、キースウッドの脳裏には、かつてミーアが言った言葉が響いていた。
「人は、自分で蒔いた種の刈り取りを自分でしなければならない」と。
もしも、ここでサフィアスを見捨てたら、その種を自分で刈り取ることになるかもしれないわけで……。
「なるほど……それはなんとも、ゾッとしない話だな」
苦笑しつつ、キースウッドは考える。
ならば、どうするか？　助けを求めてきた友にどのように応えるべきか……？
そんなのは、最初から決まっているじゃあないか！
静かに覚悟のキマッた表情で、顔を上げたキースウッドに、
「キースウッド、少しいいか？」
タイミングよくやってきたシオンが、話しかけてきた。
「ん？　どうかしたのか、キースウッド。そんな悲痛な顔をして。狼二頭を一人で食い止めた時だって、そんな顔をしてなかったぞ？」
心配そうに眉をひそめるシオンに、キースウッドは慌てて答える。
「ああ……いえ、なんでもありません。はは、ははは」
乾いた笑いを浮かべつつも、キースウッドは素早く思考する。
――もしも、シオンさまにご同行いただいた場合……最悪、ミーア姫殿下のアレな料理をシオンさまが口にする危険性がある……！
それは、なんとか避けたいキースウッドである。
――だから、サフィアス殿の助力に行くためには、シオンさまが、エシャール殿下と面会している時とか、上手いことタイミングを見計らわないと……。
などと、腹の中で素早く作戦を立てていると、
「まぁ、異常がなければいいんだが、実は予定が少し変わってな。ミーアから、ティオーナに招待状が届いたんだ」
「……ええと？」
「なんでも、サフィアス殿の婚約者のシューベルト侯爵令嬢と一緒

に、料理の会を開くらしい。できれば、ティオーナにも手伝ってほしいということで、せっかくだから、俺たちも……どうかしたか？

キースウッド」

うつむき、フルフルと肩を震わせるキースウッドに、怪訝な顔をするシオンだったが……。

「あ。ええ、いえ、なんでもありません。シオン殿下。ふふふ」

顔を上げたキースウッドは、とても……、とってーもすっきり爽やかな顔をしていた。

彼は思っていた。

――よーし！　これで気持ちよく行けるぞ。ああ、良かったなぁ、くそったれ！

と。

やはり、人は自らが蒔いた種を、自らで刈り取らなければならないのだと、キースウッドはミーアの言葉の正しさを認識する。

このスッキリした気持ちこそが、彼自らが蒔いた種の刈り取りなのだ。

もしも、サフィアスからの手紙を見ないふりをしていたら、きっと、今頃、罪悪感に沈んでいたはずだから。その罪悪感を抱えたまま、結局、厄介ごとには巻き込まれることになっていただろうから。

それよりは、全然マシだった。マシなはずだった……。

そうして、キースウッドは晴れやかな気持ちで笑った。

……そのスッキリ晴れやかな気持ちというのは、いわゆる死地を前にした人の諦めの境地とか……そう言った類の感情に似ているような気がしないでもなかったが……。

――ああ、良かったなぁ。本当に良かったなぁ！

ヤケクソ気味に胸の中で叫ぶキースウッドなのであった。

第六十二話　キースウッド、自ら蒔いた種を刈り取る（後書き）

友の危機に颯爽と参上するキースウッドというお話でした。

第六十三話　ミーア姫、思いつく！

さて、話は少しだけ遡る。
ベルの報せに肝を冷やしたミーアであったが、今回の件の勘所は、きちんと押さえていた。すなわち、
「サフィアスさんを制するには、婚約者であるレティーツィアさんを押さえればいいのですわ」
これである。
仮に、サフィアスが本気で謀反を企んでいたとして、それを止めるには、武器や説得などは一切いらない。ただ、一言、婚約者から「やめなさい」と言ってもらえば済むことである。
「それが最も、平和裏に事態を解決する方法ですわ」
相手の弱点を的確に見抜く……ここ最近はすっかり、恋愛大将軍の称号に相応しい活躍を見せている、ミーアの恋愛脳である。
「問題は、レティーツィアさんにどう働きかけるか、ですけど……」
手紙の文面を考えつつ、ミーアは唸る。
「シューベルト侯爵家には特に縁もないですし……。さて、なにをとっかかりといたしましょうか……」
腕組みし、ミーアは静かに目を閉じる。
椅子の背もたれに体を預け、足をプラプラさせつつ、頭を整理。
おつまみのクッキーをパクリ、サクリ、パクリ、サクリ、しつつ、考えていると……ふと、先ほどのことを思い出した。
あの、ヤナの、生真面目な顔を……。
――そういえば忘れておりましたけど、パティはパティでなんとかしなければなりませんわね。
蛇の呪縛に囚われているパティ。彼女の心をなんとかして救ってあげなければ、今いる世界が揺らぐ。下手をすると、今日までの努力がすべて夢で、地下牢で目覚めるかもしれない。

――いえ……さすがに、そんなことにはならないのでしょうけれど……いや、でも、可能性は否定できないのかしら……？

ルードヴィッヒが考えたとはいえ、時間転移理論はあくまでも一つの仮説にすぎない。であれば、楽観視せず、常に最悪に備えることこそが、小心者の戦略の基本。

せっかくここまで頑張って状況を整えてきたミーアとしては、ぜひ、現状は死守したいところである。

「となると、やはり、パティを楽しませて……世界を守りたいものと思わせなければいけませんわ。パティが罪悪感なく楽しめるようなにかを考えなければなりませんけれど……楽しければ楽しいほど、罪悪感を覚えるって……なかなか難しいですわ」

うーむむ、と腕組みしつつ、唸ったミーアであったが、やがて、小さく手を叩き、

「あ、そうですわ！　お料理ですわ！」

……ヤバイことを言い出した！

「思えば、セントノエル学園でやったサンドイッチ作りに関しては、パティも喜んでいたではありませんの。それに、料理教室ならば……作っている間だけ楽しいというものではありませんし。後で覚えた料理を振る舞ってあげることもできる……。そのように心の中で言い訳ができますわ！」

さらに、ミーアの頭の中、バラバラになっていた要素が一つの形をなしていく。

「それになにより、レティーツィアさんといえば、お料理会。うふふ、以前、みなで作った時はとっても楽しかったですし……。またやりたい、なんて言っていたんでしたっけ」

ほかのご令嬢たちと予定を合わせるのは難しいかもしれないが、今回は別に四大公爵家そろい踏みといかなくてもよいのではないだろうか？

「とりあえず、暇そうなリーナさんにもご協力願うとして、子どもたちも連れていくとして……。手頃な方もお誘いして、簡単な形で開けばいいですわ……レティーツィアさんとも、ますます親睦を深められますわね。そうして、いざという時にはサフィアスさんを止めてもらうよう言い含めておく……これですわ！」

実に厄介なことに、ミーアの考えた料理教室は、いくつかの点で理に適っていた。唯一の懸念は、まともに食べられるものが作れるかどうかなのだが……。

「アンヌもおりますし、問題ありませんわね。前回なんか、手のかかるエメラルダさんや、意外に不器用なルヴィさんもおりましたけど、今回はいないわけですし。子どもたちはセントノエルでも活躍しておりましたわ。楽勝ですわね！」

むしろ、エメラルダがいれば、一緒にニーナと言う強力な助っ人がついてきてくれたわけなのだが……。まぁ、それはともかく……。

「よし！　決まりましたわ。料理教室を開きましょう！」

さて、そうしてミーアが書いた文は、すぐに、帝都にあるシューベルト侯爵邸へと届けられた。

その日、ダリオ・シューベルトは、屋敷の中庭でのんびりと趣味の作曲に勤しんでいた。

ちなみにダリオは、サフィアスの卒業後、そのままセントノエルの学生になり、忙しい日々を過ごしている。

その反動からか、夏休みに入ってからは、こうして一人、趣味に没頭する日が多かったのだが……。

「さて……と、そろそろ昼食の時間かな……」

作業も一段落し、屋敷の中に入ろうとしたところで、彼は、いそいそと廊下を歩く、老境のメイドの姿を見つけた。

「あれ？　ゲルタ、どうかしたのかな？」

「ああ、これは、ダリオお坊ちゃま……」

ゲルタと呼ばれたメイドは、シューベルト侯爵家に仕えるベテラ

ンメイドだった。
もともとは、さる侯爵家に仕えていた彼女が、シューベルト家に来たのは今から十年ほど前のことだった。
普段から楚々とした立ち居振る舞いの彼女が、なにやら困惑した様子を見せたので、ダリオは思わず首を傾げた。
「なにかあったのか？」
「はい。実は、帝室からの使いの方がいらっしゃいまして、これをレティーツィアお嬢さまに、と……」
「姉さんに？　ふーん」
手紙を受け取ったダリオは、その差出人を見て眉をひそめた。
「これは、ミーア姫殿下の……姉さんに手紙、ね……」
ダリオの脳裏に、なにやら、やかましく警鐘が鳴り響いていた。
――これは、サフィアスさまにお知らせしておいたほうがいいんじゃないだろうか……？
かくて、ミーアの企みは、サフィアスの知るところとなるのだが……。
はたして、それがなにを意味するのか、今の時点では、まだ、誰も知らないのだった。

第六十四話　ミーア姫、採りを入れる

さて、レティーツィアに手紙を出してすぐに、ミーアはパティたちに話をしに行った。

「料理会……？」

怪訝そうな顔で首を傾げるパティに、ミーアは深々と頷く。

「そう、セントノエルでしたようなものですわ」

言ってから、すぐに、ミーアは付け加える。

「お料理の腕を磨くことは、とても意味があることですわ。食とは、わたくしたちに与えられた喜びの最たるものですもの。日々の食事を楽しめない人生は、つまらない……みたいなことが、神聖典に書いてあったはずですわ……確か」

ラフィーナがいないので、やや適当なことを口走るミーアである。が……。

「ともかく、誰かに美味しい料理を作ってあげたい時に、そのための腕前がないというのは不幸なこと。あなたも、いざ作ってあげる機会が得られた時に欲しても遅いですし。未来を予測して動くのが大切ですわ」

それから、ミーアは指を振り振り、偉そうに続ける。

「そう、わたくしも、初めてアベルに作ってあげた時には少し困りましたわ」

……少し？

「あの時のわたくしは、まだまだ未熟者で。アベルが喜ぶようなものを、一人では作ることができなかった。みなの助けが必要でしたわ」

微妙に“そんな私も今は……”みたいなニュアンスが感じられないでもない言い回しなのが、いささか気になるところではあるのだが……。

「相手を喜ばすために心を尽くすことは当然。されど、そのためには、スキルも必要ということですわ。いいですわね」
だから、弟に作ってあげる時のために、今から料理の腕を上げておくのが良いよ、と、主張したいミーアなのである。
……その主張は概ね間違ってはいない。いないが……こう、なんというか、ミーアが偉そうに言っていると、微妙に引っかかる者がいないではないような気がするが……それはさておき。
「あの、ミーアさま、あたしたちも一緒に行っていいんでしょうか？」
不安そうな顔をするヤナ。対照的にキリルは嬉しそうだった。先日のセントノエルでのことが楽しかったと見える。
「問題ありませんわ。あなたたちだって、貴重な戦力ですわ！」
優しい笑顔で、そう言ってあげるミーアである。
ちなみに、子どもたちに関して言えば……勝手にパンを馬の形にしたりしないので、どこかの誰かさんより戦力になるというのは、れっきとした事実であった。お世辞抜きの真実なのであった。
とまぁ、そんなこんなで、子どもたちにも事情を伝え……さらに翌日のこと。
ミーアは、サフィアスを白月宮殿に呼び寄せた。
――手は打ってありますけれど、一応、サフィアスさんに探りを入れることも必要ですわね。
そんなことを思ったためだ。
ちなみにベルによれば、ブルームーン家は、謀反の責任を取らされてお取り潰し。派閥は解体の憂き目に遭うという。
「うーん、変ですねぇ。ブルームーン公爵家と言えば、ミーアお祖母さまの治世を支える大切な存在ですし……」
などと、しきりに首を傾げるベルである。
実際、中央貴族の中には、ミーアが女帝になることに対して、反対の者が数多くいる。そんな不満分子を、ブルームーン家当主としてサフィアスが押さえてくれることは、ルードヴィッヒら女帝派も

期待していることだった。
「もちろん、謀反は起こらないと思っていますが、もしも、サフィアスさまが裏切るようなことになれば、我々としても立ち回り方を変える必要があるかもしれません」
あのルードヴィッヒすら、苦々しい顔をするような事態。されど、ミーアは涼しい顔を崩さない。なぜなら、すでに手は打ってある。
――レティーツィアさんを上手く丸め込めばどうということはございませんわ。
確固たる確信を胸に、ミーアはサフィアスがやってくるのを待っていた。
やがて……。
「ミーアさま。ご機嫌麗しゅう」
やって来たサフィアスは普段とまったく変わらぬ様子で、親しげな笑みを浮かべた。
そこに違和感などは、一切なく……否！　ミーアの鋭い観察眼は、サフィアスの顔に表れた微かな陰りを見出した。
それに、ミーアを見つめる目に、微妙な不安の色が見え隠れしている。
――あら、あの表情……なにか心配事でもあるのかしら……？
ふぅむ、謀反の兆候がまるでない、とは言いきれないということなのか……。ふむむ……。
自らの手紙が、彼の心配事の中心であることなど、夢にも思わぬミーアである。
ミーアは、ニッコリ笑みを浮かべて、
「ご機嫌よう、サフィアスさん。さ、どうぞ。今日は、せっかくですし空中庭園でお茶にしましょうか」
さりげなく、人気（ひとけ）のない場所へとサフィアスを誘うミーアである。
白月宮殿の屋上、少し張り出した場所にある空中庭園は、ミーアたち皇帝一族やその身の回りの世話をする者たち、そして、招かれた一部の客以外は、立ち入れない場所だった。

じっくりと探りを入れるには、もってこいの場所と言えるだろう。
――念のために、人払いをしたうえで、ルードヴィッヒはそばに控えさせておりますし……。準備は万端。まずは、話を聞くのが大切ですわね。
懸念点である、日記帳の記述の信ぴょう性について、できれば、はっきりさせておきたいミーアである。
そうして、気合とやる気に満ち溢れたミーアが、着いて早々に放った一言が……。
「ふむ、まずは……紅茶とケーキで心を満たしましょうか……」
いつでも揺らがぬ帝国の叡智の姿なのであった。

第六十五話　ドヤァッ！　イラァッ！

運ばれてきた紅茶。カップを持ち上げて、一口。
選び抜かれた茶葉の鮮烈な香り、濃厚なミルクのコク、ひとさじの砂糖の甘味。
それらが一体となって、ミーアの味蕾を刺激する。
「ふむ……」
さて、今日のお茶請けは……などと、テーブルの上に視線を落とそうとしたところで……。
「あの、ミーア姫殿下、それで、私に話というのは……」
サフィアスが戸惑うような顔で言った。
「ああ、失礼。少し物思いにふけってしまいましたわ」
危うくお茶菓子で本題を忘れかけるミーアである。いかんいかん、と思いつつ、急いで、お茶請けをパクリ。
ちなみに、今日のお茶請けは、王国梨（ラ・サンクランセ）をハチミツに浸けこんだものだった。ねっとりとした舌ざわり。歯で噛みしめれば、柔らかながらも、シュリッと、わずかに残る食感が心地よい。
――ふむ！　この梨のハチミツ漬け、いい仕事していますわ。さすがは料理長ですわね！
うんうん、っと満足するミーア。対してサフィアスは……黙って、お茶を嗜んでいた。
最初こそ、迂闊にも声をかけてしまったが、彼はミーアを知る者、食べ物を楽しんでいるミーアの邪魔をするのが危険であることを思い出したのだ。
そうして、ミーアは、お茶菓子を存分に満喫し、糖分を摂取したところで、何事もなかったかのように話し出した。
「ところで、サフィアスさん。アベルから聞きましたけれど、頑張ってくれているみたいですわね。派閥の若い方を集めて、いろいろ

なさっているとか……」
「ははは、まぁ、今は地固めといったところでしょうか。どうも我が父は、私に皇帝の座を、と考えているようで……。周りの有力貴族たちもその気になっている。それを止めるには、仲間が必要」
それから、サフィアスは、そっと頭を下げた。
「ミーアさまとの盟約に従い、尽力していく所存です」
「ええ。期待しておりますわ」
ミーアは柔らかに微笑みつつ、紅茶を一すすり。上目遣いにサフィアスを観察する。
――ふむ、今のところ、不自然な様子はなし。派閥のことに話を振ってみましたけれど、特に後ろ暗いところはなさそうですわね。
ミーアの知るところ、サフィアスは、あまり腹芸が得意なタイプではない。突かれたくないところを突かれれば、必ず顔に出るわけで……。
――しかし、サフィアスさん本人にその気がなくても、周りに強いられてという可能性は否定できないはず。わたくしのように硬い意思をもって行動できればよろしいのですけど、意外とサフィアスさんは、その時々の流れに流されていきそうですし……。
などと分析するのは、海月戦術の第一人者、ミーアである。
――どのような状況下であっても、跳ねのける不屈の精神力……。それをもっていただくためには、やはり、婚約者のレティーツィアさんの協力が不可欠のような気がしますわね。
っと、その時だった。不意に、サフィアスが表情を曇らせる。
先ほどからずっと観察していたミーアであったから、その変化にはすぐに気がついた。
「あら、どうかなさいましたの？　サフィアスさん」
「ああ……ええ。その……」
などと、言いづらそうにしていたサフィアスだったが、意を決した様子で口を開いた。
「レティーツィア……、シューベルト侯爵令嬢と、料理会を開くと

いう噂を耳にしましたが……本当でしょうか？」
その言葉に、ミーアは、スゥッと目を細めた。
――あら……サフィアスさん、なぜ、そのことを知っているのかしら……？
無論、それは、レティーツィアの弟、ダリオ経由でもたらされたものであるのだが……。自らの策を、事前に察知されていたということに、微妙に警戒心を上げるミーアである。
「ええ。その通りですわ。いつぞや、四大公爵家の令嬢たちを集めて、料理会を開きましたわよね？　あの時にまたやろうと、約束したのですわ。覚えていらっしゃらないかしら？」
覚えていないはずはないだろう……と言外に訴えるミーアである。
「あ……ああ。ええ……まぁ、覚えておりますが……その、ミーア姫殿下……。もしよろしければ、その……お茶会などに変えることは……？」
「あら？　なぜですの、サフィアスさん」
ミーアは、再び、疑わしげな目つきでサフィアスを見つめる。
ただのお茶会と、一緒に協力して作る料理会とでは、仲良くなる度合いが違う。やはり、一緒に料理したほうが仲良くなれるはずなのだ。それをしたくない、ということは……。
――わたくしと、レティーツィアさんとが仲良くなると……なにかまずいことがあるのかしら？
そんなミーアの視線を受けて、サフィアスは若干慌てた様子で……。
「その……まことに心苦しいことなれど、オレ……ではなくって、私の婚約者は、ご存知のように料理の腕前が心もとなく……。せっかくのミーアさま考案のイベントを台無しにしてしまうのではないかと……」
「あら、そんなこと……。なにも心配する必要はございませんわ」
ミーアは、サフィアスの心配を笑い飛ばしてみせた。
「誰しも、初めは上手くいかないものですわ。わたくしだとて、ま

だまだ未熟者、料理の腕は一人前とは言えませんわ」
そう言ってから、ミーアは優しい笑みを浮かべて……追い詰めにかかる。
「けれど、下手だからといって何もしなければ変わらない。下手だからこそ、料理会を開いて練習する。そうではないかしら？」
至極もっともな正論を吐いて、ドヤァッと笑みを浮かべるミーア。
その顔は見る人が見れば……実に、こう……イラァッ！　とする笑みなのであった。

第六十六話　銘：明日への希望……キノコ

サフィアスの愛しの婚約者、レティーツィアの実家であるシューベルト家は、歴史と伝統ある侯爵家である。
ブルームーン派に属する、門閥貴族らしい由緒ある貴族にして、他の貴族たちからも一目置かれる存在のこの一族は、同時に、古くより芸術に造詣の深い者たちとしても知られていた。
音楽家に絵描き、革細工職人、宝石職人などなど、お抱え芸術家を数多く抱えたシューベルト家では、代々の当主も、その手の趣味を持つ者が多くおり、その分野は様々。
ゆえに、帝都の郊外に建つその屋敷の前庭は、数代前の当主の手による彫刻が無数に飾られた、ちょっぴり変わった造りになっていた。
ミーアたち一行は、その奇怪な庭を通って、シューベルト邸へと向かっていた。
微妙に苔むした彫像を見て、ミーアは思わず眉をひそめた。
「ふぅむ……これは……なにかしら？」
白い石を削って作ったそれは、地面からうねうねと天に向かって伸びた……一見すると、こう……まるで……その……なんだこれ？
「波を石で表現しようとしたような、実になんとも、うねうねとしたフォルムですわね。いえ、この形……この丸みは……もしや、キノコ……？」
「それは、明日への希望を表現したオブジェです」
声を掛けられ、ミーアはハッと振り返る。っと、そこにいたのは……。
「ミーアさま。ようこそ、シューベルト家へおいでくださいました」
柔らかな、気品に溢れる笑みを浮かべた令嬢、本日のターゲット……レティーツィア・シューベルトだった。

揺れる長い髪、豪奢にウェーブのかかった髪の色は、目に焼き付くような深い青。その髪を、後ろでまとめた少女は、ミーアの前で深々と頭を下げた。
「ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下」
きびきびした仕草で挨拶する彼女に、ミーアは、スカートの裾をちょこん、と持ち上げて返礼する。
「ご機嫌よう、レティーツィアさん。お元気そうですわね」
ニッコリ微笑んでから、ミーアはもう一度、彫刻に目をやった。
「それにしても、明日への希望……これが。なるほ……ど？」
「うふふ、少し難解ですよね」
口元を手で押さえ、おかしそうに笑うレティーツィアに、ミーアは首を振った。
「いえ、わたくしには、なんとなくですけれど……わかりますわ」
腕組みしつつ、ミーアはそのオブジェを見て……。
――明日への希望、だから、キノコの形に似ているのですわね。ふふふ……。これを作った方とは気が合いそうですわ。
まぁ……なんというか、作品の受け止め方は人それぞれ……なのである。うん。
「しかし、お見事なお庭ですわね。彫刻と、庭に生えた木の融合……。とても不思議な空間ですわ」
ミーアは、庭全体をゆっくりと見回した。
キノコのオブジェ（銘：明日への希望）を始めとした、人間の身長よりも高いオブジェが無数に屹立する合間を縫って、木が生えた感じ……、あるいは、森の木の一部が、キノコのオブジェ（銘：明日への……略）に浸食された感じとでも言えばいいだろうか。
ともかく、なんとも不思議な庭だった。
唸りつつ、辺りを見回していたミーア。その視線が、ある一点で止まる。
「おや……あれは？」
その視線の向かう先、そこは……太い木の根元。そこに生えてい

たものは……！
「ねぇ、リーナさん。あれ、キノコではないかしら？」
「はい。そうですね。あれはトロキシ茸と呼ばれるキノコです」
なんと、本物のキノコまで生えていた！
「まぁ、やはり……。ふふふ、庭にキノコが生えているだなんて、とっても風流ですわ」
などと言いつつ、ミーアはそのキノコに歩み寄る。まるで、太った魚のように丸みを帯びたフォルム。丸い目と口のような斑点を身にまとったキノコは、実に……実に！
――ふむ、この、じんわりと滲み出るような茶色……。滋味あふれる色合いで、実に美味しそうですわ……！　薄く切ったものを二、三枚まとめてソースにつけて食べたい感じですわね。
この見た目ならば、毒は心配ないだろう！　とミーアのキノコ審美眼が訴えていた。
けれど、キノコの見極めは難しい。ミーアだって、そのことは痛いほどよくわかっている。ということで……。
ミーアはシュトリナに目を向けて尋ねる。
「ちなみに、リーナさん、毒はございますの？」
問われたシュトリナは、小さく首を傾げて……。
「毒……ですか」
頬に指を当て、うーん、っと唸ってから、
「いわゆる毒は……ない、と思います」
「ほう！　やはり、そうですわよね」
ミーアは、ひとしきりキノコを眺めてから、はほぅ、っとため息を吐く。いったい、このキノコ、どんな味がするのかしら？　などと物思いにふけることしばし……。その後、ハッとする！
レティーツィアを放置してしまったことを思い出したためだ。
今日の目的は、レティーツィアを味方につけること。キノコは後回しだ。
んっ、んん、などと咳払いしつつ、

「それはそうと、今日は、突然お願いしてしまって申し訳ありませんでしたけれど、よろしくお願いしますわね」
そうして、ミーアは愛想よく微笑みかける。
――愛妻家を味方につけるには、まず、妻を味方につけよ、ですわ。せいぜい、気に入られるように振る舞わなければなりませんわ。
なにやら、格言めいているような、そうでもないようなことを心の中でつぶやきつつ、ミーアはシューベルト侯爵家の前庭を眺めた。
「それにしても、本当に楽しい趣向のお家ですわね」
「もっと屋敷に近い場所で、彫刻を眺めながら庭でパーティーを開くこともあるんですよ。楽団に来ていただいたりもして」
「なるほど。さすがは、芸術のシューベルト家ですわね」
さりげないヨイショの心を忘れない、ミーアであった。
そんなミーアに、レティーツィアはおずおずと、言いづらそうな口調で言った。
「本当は私も……芸術の一環として、料理の腕を鍛えられればと思っているのですけど……なかなかサフィアスさまが許してくださらなくって……。高貴なる身分の令嬢がすることではないなどとおっしゃられて……」
「あら、そんなこと、全然ございませんのに。ルヴィさんやエメラルダさんだって、前回のお料理会には参加しておりますし。リーナさんだって、今日は一緒に来ておりますわ。それに、先日など、あのラフィーナさまも一緒にお料理会をしたんですのよ？」
そう言ってやると、レティーツィアは、口元を両手で覆って、まぁ！　と驚きの声を上げた。
「だから、世間的な外聞など、なぁんにも心配する必要はございませんわ。胸を張って料理をしてやればいいですわ」
心配するのは、外聞ではなく、料理の中身のほうなのだが……。
それを指摘する者はここにはいないのだ。悲しいことに……。
――今回は、レティーツィアさんを使って、サフィアスさんの胃袋をもガッチリ掴んでしまおうという策のためにも、彼女のやる気

を削ぐような要素は、なるべく消していく必要がございますわね。
サフィアスの胃袋をガッツリ殴りつけてしまわないか、とても心配な状況であった。
「失礼いたします。レティーツィアお嬢さま。サンクランドのシオン王子とルドルフォン辺土伯令嬢がおいでになりましたが……」
報告を受けた途端に、レティーツィアは、なんとも悩ましげな顔をした。それから、ミーアに困ったような笑みを向けて……。
「しっかりと歓迎の準備は済ませてありますけれど……やはり、サンクランドの王子殿下をお迎えするというのは、少し緊張してしまいますね。それに他の家のご令嬢に、羨ましがられてしまいそうです」
「そんなに緊張する必要はございませんわ。これはごく私的な集まりなわけですし。そもそも、あなただって、もう少しすれば、星持ち公爵家の一員になるのですから。引け目に感じることなどございませんわ」
ミーアは小さく首を振ってみせてから、
「さぁ、それよりも、合流して館に案内していただけないかしら？今日のメインは、お料理を作ることですし」
ミーアの言葉に、レティーツィアは頷いてみせるのだった。

第六十七話　令嬢たちの想い、重なる！

仲間の少女たちを引き連れて、ズンズン、館の中を進むミーア。その、ピッタリ半歩後を、スッと背筋を伸ばして歩くレティーツィア。それは、帝国貴族のご令嬢として、完璧な立ち居振る舞いであった。

レティーツィア・シューベルト……。

シューベルト侯爵令嬢の長女にして、ブルームーン家次期当主たるサフィアスの婚約者。

彼女は一言で言い表すならば『賢い女性』であった……。料理のこと以外はだが。

例えばレティーツィアは、今日の料理会にルドルフォン辺土伯の令嬢が参加することを、特になにも言わなかった。辺土伯の令嬢が、侯爵家を訪れることに、なにも不満を述べなかった。

それは、門閥貴族の令嬢としての価値観には相応しくないことだった。

辺土伯は下に見られて当然の田舎者。それが帝国の常識だからだ。

けれど、レティーツィアは、その常識を『不変』のものとも、『普遍』のものとも思わない。また、その常識に従って行動した時、他者からどのように見られるのかも、しっかりと理解していた。

それは、あまり美しく映らないだろうし、好ましくも見られないだろう、と知っていた。

また彼女は、ミーアのメイド、アンヌの出自についても、シュトリナの友人ベルの出自が不明であることにも、特になんとも思わない。余計なことも口にしない。

それをすることがミーアらの勘気に触れることであると察しているし、それがサフィアスの不利に働くことも知っているからだ。

彼女は、物事の道理をよくわきまえた人だった。

さらに、実務能力のほうもなかなかのものだった。
領地の経営を任せたら、そつなく回せる程度の知識と能力を誇っているし、仮に商家の娘に生まれたなら、水準以上に求められた役割を果たしたことだろう。
レティーツィアは、門閥貴族の令嬢には、極めて珍しい、とても賢い人なのである。

そして……なにより、サフィアスのことが好きだった。

とても、とってーも、大好きだった！
どのぐらい好きかと言えば、夢にサフィアスが出てきた次の日は、一日鼻歌を歌っちゃうぐらいには好きだった。
なんだったら、踊りながら、ミュージカル風に一日過ごしちゃうぐらいには大好きだった。
「サフィアスさまに美味しいものを食べてもらって喜んでもらおう！」「頑張っちゃうぞぅ！」という気持ちの前では、生来の賢さも、鋭い洞察力も、堅実な判断力も霧散してしまうぐらいに……サフィアスのことが大好きなのだ。心から大好きなのだ！
……サフィアスにとっては、大変、不幸な話であった。
まぁ、それはどうでもいいとして、ともかく、今日のレティーツィアは、とても気合が入っていたのだった。
そんな気合十分なレティーツィアだったが、ミーアたちが案内されたのは、調理場ではなかった。
「ミーア姫殿下、本当はすぐにでも、調理場にご案内したいのですが、まだサフィアスさまがいらっしゃっていません。申し訳ありませんが、しばし、こちらの部屋でお待ちいただけますか？」
「それは構いませんけれど……サフィアスさんも来るんですのね？」
「はい。どうしても自分もお手伝いしたいと……。火傷をしたり、指を切ったりしたら大変だからって……」
そのレティーツィアの言葉に、ミーアはかすかに目を細めた。

「そう……サフィアスさん、とても、レティーツィアさん想いなんですわね。ふふふ」
小さく笑みを浮かべつつ……。
――ふむ、わたくしとレティーツィアさんとを仲良くさせないため、ということかしら……。ということは、やはり、サフィアスさんにも疑わしきところがあるということか……。
などと、一瞬、考えかけるも、すぐにミーアは首を振る。
――そうでしたわね。今日は……そういうことは考えないようにしたんでしたわ。
そう……ミーアは、今日の料理会をするにあたり、一つのことを決めていた。それは……サフィアスを疑わないこと。
理由はいくつかある。
新しい盟約を結んだ彼のことを信じたくもあったし、疑った結果、彼が潔白だったら後味が悪いだろうなぁ、と思ったのもある。
疑いだせばキリがないということもあるし、疑ったところで、なにも真実は見えてこなさそうというのもあった。
疑念を混沌の蛇に突かれそう……などという至極まっとうなものもあった。
けれど、それ以上に……。
――アベルが信じると言ったのですから、わたくしも信じることにしますわ！
これである。
論理的な左脳で検討することを諦めたミーアは、左脳から恋愛脳へと、自らの思考をシフトしたのだ。
――それに、愛する人の言葉すら信頼できないのなら、わたくしはきっと将来、不信によって失敗しそうな気がしますわ……。
ゆえに、ミーアはサフィアスを疑わない。サフィアスを疑おうとする左脳に、いったん休眠を命じる。今のミーアは恋愛脳モードなのだ。
そんな恋愛脳（スイーツ）ミーアの今日のテーマは二つ。一つは打算なく『レ

ティーツィアと仲良くなる』こと。
レティーツィアと仲良くなっておけば、サフィアスが疑わしかろうがなんだろうが関係ない。彼はレティーツィアに逆らわないだろうから。
そして、もう一つは……。
――アベルに喜んでもらえるよう、美味しいお料理を作ること……。そのために、わたくしの腕を存分に振るうこと。これこそが、今日のわたくしのテーマですわ！
奇しくも……レティーツィアとミーアの想いは、きっちりと重なっていた。
……なんだか、事態が余計に悪くなったような気がしないではないのだが……気のせいだろうか。
ともかく、ミーアが拳をググイッと握りしめる一方……事態は動き始めていた。

ミーアが気合を入れている隙に、ベル隊長に率いられた年少組探検隊は部屋の中を探索し始めていた！
「レティーツィアさん、これは、なんでしょう？」
ベルが珍しげな顔で、壁に飾られた楽器を指さしながら首を傾げた。
「それは、我がシューベルト家の代々当主が使っていた楽器です」
そう言って、レティーツィアは、飾られていた弦楽器を手にとった。
「この弓でこうして……」
っと、試し弾きしてみれば、なんとももの悲しい音が辺りに響いた。
「おお……すごい。レティーツィアさん、とってもお上手なんですね」
珍しい楽器に釘付けのベルと、そのそばでニコニコしているシュトリナ。
一方で、パティたち三人の子どもたちは、そのまま、飾られてい

る楽器を順繰りに見学していた。
見たこともない変わった楽器に、幼い好奇心を隠せない様子のキリル。それを見て、ヤナばかりでなく、パティもまた、微笑ましげな顔をしていた。
……ベルなどよりも、よほどお姉さんな二人なのである。
そうして何気なく、飾られていた楽器に目をやったパティは……小さく首を傾げた。
見覚えのある楽器が、そこに飾られていたからだ。
「あれ……これって……」
思わず伸ばしたその手を……不意にグイっと掴まれて、パティは小さく息を呑む。
「申し訳ありません。それは、クラウジウス侯爵家より寄贈された、大変貴重な楽器なので……」
などと、張り付けたような笑みを向けてきたのは、老境のメイドだった。その顔を見たパティは思わず目を見開いて……。
「……ゲルタ……え？　どう、して……？」
それは小さな……小さなつぶやき。されど、パティは確かに感じる。
自らの腕を掴むメイドの力が、一瞬強まったことに……。
けれど、それもすぐに消え……。
「どうぞ、お触りになりませぬよう。大変、貴重なものですので」
そう言いおいて、一礼してから、メイドはその場を去っていった。
張り付けたような笑みを、一切、崩すことなく……。

第六十八話　サフィアスの信頼とダリオの奮闘……奮闘？

「ところで、シオン。キースウッドさんの姿が見当たりませんけれど、どうかなさいましたの？」
物思いにふけっていたミーアだったが、ふと我に返り、シオンのほうに目を向ける。
「ああ、キースウッドか……」
シオンは、思わずと言った様子で苦笑した。
「なんだか、用事があるとか言って、ここについてからすぐに行ってしまったよ。さて、なにをしているのやら……あるいは、当人的には気を使ったつもりなのかもしれないんだけどね……」
ティオーナと二人きりにするため、とか、そんなことを考えてるんだろうなぁ、などと、苦笑いを浮かべるシオンであったが……珍しいことに、その予想は外れていた。
そんなのんきな話ではないのだ。
キースウッドは今まさに、引くに引けない戦いに、望まんとしているところだったのだ。

シューベルト邸からほど近くの路上に、一台の馬車が留まっていた。
気配を消したキースウッドは、シュシュっとその中に滑り込む。
馬車の中で待っていたのは、旧知の戦友、サフィアスだった。
「やぁ、サフィアス殿。しばらく」
「ああ、来たか。キースウッド殿。ずいぶんとひさしぶりだ」
サフィアスは、穏やかな笑みを浮かべて、キースウッドを迎え入れる。が、すぐに、その顔が曇った。
「セントノエルでの料理（たたかい）会の傷も癒えていないこの時期に、このようなことになってしまい、申し訳ない」

突然の謝罪に、キースウッドは、思わず苦笑を浮かべる。
「いえ、間に合ってよかったですよ。なにしろ、ミーア姫殿下も、ティアムーン帝国も、我がサンクランドにとっては大切な存在。その危機に力を貸すのは当然のことですから」
それから、キースウッドは鋭い表情を浮かべる。
「それで……作戦は？」
「ああ、まずは、作戦の基本線だが『簡単な料理をさせること』だ。野菜を中心にした鍋料理にしようと思っている」
「刻んで入れるだけにする、と……？」
「そう。ダリオ……ええと、オレがセントノエルにいた時に、従者としてついてきていた少年を覚えているだろうか？」
「ええ、もちろん。シューベルト家のご令息だとか？」
「そうなんだ。レティーツィアの弟でね。その彼が、シューベルト家のベテランメイドと相談して、提案してくれたらしい。野菜を刻むことで、それなりに料理をしたつもりになれるし、変な調味料なんかを入れなければ失敗はしない、とお墨付きをもらったらしい。自分が毒見をして不味いようだったら、少し味を足してくれるとまで言っているとか……」
「なるほど。それは……犠牲になってもらうようで、申し訳ないですが……」
苦い顔をするキースウッドに、サフィアスは頷いてみせた。
「わかっている。だからこそ、できるだけ被害を減らしたい。そこで……もう一つ策があるんだ」
「ほう。というと？」
サフィアスは意味深に頷いてから、声をひそめて……。
「できるだけ、時間稼ぎをしようと思っているんだ。それで、待っている間に、ミーアさまには、存分にお菓子を食べてもらう」
「ふむ、なるほど……。考えましたね。人は、自分が満腹だと、料理をする気力も削られる。余計なアレンジをしようという気持ちが薄れるかもしれない……」

サフィアスは腕組みしつつ、頷いた。
「ミーア姫殿下は、食べるのが大好きな方。料理を作り出す前に、お茶菓子を出されれば、それを食べずにはいられないはずだ。その辺りのことも、ダリオに任せている。彼は、オレが行くまでの間、ミーアさまにたっぷりお菓子を食べさせてくれるはずだ」
「しかし、そんなに何もかも任せて大丈夫なのですか？」
不安そうなキースウッドに、サフィアスは笑みをみせた。
「ダリオはああ見えて、シューベルト侯爵家の跡取りだ。上手いこと立ち回ってくれること、疑いようもないさ」
それから、ふと、サフィアスは優しい笑みを浮かべた。
「それに、彼はああ見えて器用な人でね。セントノエルではオレの従者として、しっかりと働いてくれたんだ。ゆくゆくは、義弟として……オレの片腕として、ブルームーン派を取りまとめることを手伝ってくれればいいと思っているんだ」
まるで、明るい未来に想いを馳せるかのように、サフィアスは言うのだった。

……そんな、サフィアスからの若干、重ための期待を受けたダリオは、奮闘していた……彼なりに。
まず、ダリオは、サフィアスの作戦通り、お菓子を食べさせるための行動を開始する。
「姉さん、サフィアスさまが来るまでの間、みなさんにはお茶か、軽めの昼食を食べていただくのはどうだろう？　ちょうど、サンクランドビーフのヒレ肉があるから、それを焼いて……」
後半に、これで満腹になっちまえ、という本音が見え隠れしていたが……。まぁ、それはさておき。
そんな弟の進言を、レティーツィアは……。
「ふふふ、もう、なにを言っているの、ダリオ。お料理はお腹が空いていないと、やる気がなくなってしまうでしょう」
切って捨てた！

作戦は、見破られていたのだ！
レティーツィアは、料理以外のことに関してはとても、賢い人なのである！
「それより、サフィアスさま、遅いわ。もうすぐ来るのでしょうし、先に準備だけでも始めていてもいいんじゃないかしら？」
なぁんて、やる気満々な姉に、ダリオは慌てて言った。
「あー、ダメだよ。姉さん。ちゃんとサフィアスさまを待ってないと……下手なことすると、サフィアスさまに嫌われてしまうと思うけどな……」
そうして、さりげなくキラーワードを口にする。
サフィアスに嫌われる……これを言えば、大抵の場合、姉は、冷静さを取り戻すという、それは魔法の言葉。
「ダリオ。どうでもいいことだけど、サフィアスさまは、あなたの兄となる人。だから、今から親しみを込めて、お兄さまとでも呼んだほうが……。あの方もそれを望んでいるんじゃないかしら？」
サフィアスのことになると、若干、アホの子になる賢いレティーツィアである。
「うん、まぁ、それは追い追い」
ダリオ、これを軽くスルー。そして、
「ともかく、先に料理を始めるのはさすがにまずいんじゃないかな……。サフィアスさまもいつもみたいに、姉さんと一緒にするのを楽しみに……」
ダリオ、手慣れた様子で、姉の説得にかかる。のだが……計算外が一つだけ。それは……。
「いつも……なるほど。ダリオさんのおっしゃることもわからないではない……」
おもむろに、ミーアが一歩前に出る。うんうん、っと偉そうに頷いてから……。
「けれど、いつも同じでは、それはそれでつまらないのではないかしら？」

余計なことを言い出した！
「えーと……ミーア姫殿下。それはどういうことでしょうか？」
ダリオ、思わず「面倒くさいなぁ」なぁんて本音が顔に出かけるも、かろうじて我慢する。
「決まっておりますわ。恋とはサプライズ。つまり、サフィアスさんが来た時に、お見事な料理が出来上がっているというのも、それはそれで乙なものではないかしら？」
その言葉、そこから生まれる流れに、ダリオは思わず冷や汗をかいた。
あれ……？　これ、ヤバくね？　などと、適切に察するダリオである。
さらにさらに！　余計なことを言い出す者がいた。それは……。
「ああ、それはよろしいのではないでしょうか。予定している鍋料理ならば、材料を刻んで煮込むだけ。失敗のしようがありませんから」
いつも変わらぬ、張り付けたような綺麗な笑みを浮かべる老齢のメイド……ゲルタだった。
「いや、でも……」
ベテランのメイドにそう言われてしまい、ダリオは一瞬、言葉に詰まる。
確かに、彼女に言われて、鍋料理なら大丈夫、と、一度は納得した。けれど、ミーアという強力な要素を前にして、その自信は早くも揺らぎかけていたのだ。
けれど、ゲルタは……まるで囁くように言った。
「ふふふ、大丈夫ですよ。味見も私がして差し上げますから」
ダリオは……心がスゥっと軽くなるのを感じた。
そうなのだ、この老境のメイドは、さすがにベテランなだけあって、こちらがしてほしいことをいとも簡単にしてくれる人なのだ。
きっと彼女ならば、ちょちょっと味見して、かるーく調味料などを足して、味を調えることだってできるだろう。できるに違いない。

それに……そもそも、これ以上、反対し続けるのは、面倒くさい。
ということで……。
「まぁ、そういうことなら……」
次期、シューベルト侯爵家の跡取り息子、ダリオは、息を吸うように簡単に流されてしまうのだった。

第六十九話　歴史の裏的会合……蛇たちの悪だくみ

話は少し前に遡る。
ミーアからレティーツィアへの手紙が届けられた、その日の夜のこと。
舞台は帝都の一角にある屋敷。その一室に、その者たちは集まっていた。
それは、ある意味で歴史的な……あるいは、歴史の裏的な会合だった。
集まった者たちは三人。
一人は、騎馬王国、火の一族から生まれ落ちた蛇、火　燻狼（くんろう）。
一人は、海洋民族ヴァイサリアン族の生き残りの凄腕暗殺者。
そして、残る一人が……。
「これは、これは……。帝国の地に住まう古き蛇、ゲルタ……。お会いできて光栄です。我が先達よ。念のために聞きますが、尾行などはありませんかねぇ？」
老齢のメイド、ゲルタは、張り付けたような笑みをまったく動かさずに、燻狼のほうに目を向けた。
「尾行など許すとでも……？」
「ははは、これは失礼を。先達に対し、いささか失礼でしたねぇ……」
「まぁ、警戒するのはわかりますよ。お前たちの姫も、帝国の叡智の手に堕ちたというではありませんか？」
口元の笑みを崩さず……ただ、その瞳にのみ、突き刺すような鋭い光を湛えて、ゲルタは言った。
「だから、言ったのです。帝国内の陰謀がことごとく潰された時に、連中には注意したほうが良い、と……」
「いや、ははは。注意深く息を潜め、生き残ってきた先達の言葉に

は、説得力がありますねぇ」
顎をさすりながら、燻狼は続ける。
「しかし、そんなあなたたちにも、ついに、帝国の叡智の魔の手が迫っている、と……シューベルト侯爵令嬢の誘拐計画……早めてしまったのが運の尽きということですかねぇ」
燻狼は、おどけた様子で肩をすくめる。
「なるほど、ブルームーン公の長男は、たいそう婚約者にご執心……。その婚約者を人質に、帝国の叡智に謀反を起こさせる……。未だに各地の貴族を通して、食糧の供給を行っている帝国の叡智としては、これは打撃。ブルームーン派を許すわけにはいかなくなる……と。なるほど、なかなかに上策」
ぱちぱち、と手を叩きながら、燻狼は笑った。
彼としても、帝国の叡智ミーアをこのまま放置しておいていいとは思っていなかった。このまま、帝国が落ち着いてしまったのでは面白くない。それに、帝国の叡智の冴えは、帝国のみならず、今や、大陸全土にまで影響を及ぼしつつある。
ここらで、その勢いを削いでおくのが肝要というものだ。
「ブルームーン公爵家は、帝国の中央貴族をまとめる要石。味方につければ心強いが、敵に回せばすこぶる厄介。そうして、中央貴族たちを謀反に巻き込めば、帝国の叡智が立て直した、この帝国にも、すぐさま混沌を招き入れられる……。そうすれば……」
「……初代皇帝陛下の立てた策……肥沃なる三日月を涙で染める策が再び動き出す」
ゲルタは、低く静かな声で言う。
そう……初代皇帝の時代から連綿と続く破滅の計画は、未だ、完全に回避できてはいない。
帝国の食料自給率は依然として高くはないし、少しの混乱で飢饉は簡単に引き起こせる。
それは、なるほど……悪くはない策のように一見思えるが……。
――古きやり方への固執。さすがは帝国の古き蛇。初代皇帝陛下

の思惑からは自由になれませんかねぇ。
燻狼は冷静にその策を評する。
ともあれ……ミーアとサフィアスがしっかりと手を結んだ状態というのは、それはそれで面白くない。少なくとも四大公爵家とミーア姫との関係は、こじれさせておきたい、というのは、燻狼もまた納得できるところだった。
「しかし、ここで予定外のことが起きた……ということですかねぇ」
小馬鹿にするような燻狼の口調に、はじめて、ゲルタが不快げな顔をする。ギリッと歯を噛みしめながら、ゲルタは言った。
「……本当は、静かに息を潜めていても問題はなかった。今さら、クラウジウス家を調べられたところで、あそこには何もない。だから、我々がシューベルト侯爵家にいても、なんの問題もないはずだった」
帝国の叡智、ミーア姫が帝都にいるタイミングでレティーツィアの誘拐を行うのは下策だ。本来は、彼女が国外に出ているタイミングですべきことなのだ。
されど、クラウジウス家が、ミーアの手の者によって調べられていると聞いた時、ゲルタたちは焦ってしまった。もしかしたら、かの叡智が、自分たちの過去まで暴きだすかもしれない。だから……、レティーツィアの誘拐計画を実行に移そうとしたのだ。
その矢先の、今回の料理会である。
「どこで漏れたのかはわからないが……ミーア姫は、レティーツィア嬢の誘拐計画を、察知したと……」
このタイミングでの料理会の開催は明らかに不自然だった。なにしろ、誘拐計画を早めた途端に、報せが来たのだ。
ミーア姫が、こちらの動きを察知している可能性はとても高い。
「否、これでバレてないと考えるのは、むしろ、都合がよすぎるってもんでしょう。さすがは帝国の叡智、といったところでしょうかねぇ」
燻狼の言葉に、忌々しげに、ゲルタは舌打ちする。

「それで、実際、どうするおつもりで？　まさか、まだ、レティーツィア嬢を誘拐しようとは思っていないのでしょう？」
「成功……はしないでしょうね……。仮に誘拐が成功したとして、謀反がサフィアス・エトワ・ブルームーンの仕業とは、誰も考えないでしょう」
小さく首を振るゲルタに、我が意を得たり、と燻狼は頷いた。
「そう。誘拐計画は失敗するでしょう。ならば……別の手に出るというのはどうでしょうねぇ？」
そう言って燻狼は、懐から取り出した二つの小瓶を、机の上に置いた。
「それは……？」
「料理会と言えば、毒じゃないですかねぇ……」
「毒……？」
ゲルタはバカにしたように、燻狼に目をやった。
「帝国の叡智、ミーア姫の周りには、あの裏切り者のイエロームーンの娘がいるのです。その目を盗み、どうやって、帝国の叡智に飲ませろ、と？」
非難めいた言葉を受け、燻狼はニヤリと笑う。
「ははは、なぁに、簡単なことです。あんたが毒見を買って出ればいいんですよ。古の蛇よ。みなに率先してね。そうして、全員に毒を振る舞えばいい。だから、そうですねぇ、メニューは煮込みか、鍋料理なんかがいい」
「愚かな……。私が、毒を飲み、それに耐えよと？　強靭な精神力と信仰心さえあれば、毒にすら耐えられるだろう……などと、おかしな邪教のようなことは言わないでくださいね？」
「そんな無茶は言いませんよ。ただ、先に解毒薬を飲んでおけばいい。それだけの話でしょう」
そう言って、燻狼は片方の小瓶を指さした。
「こっちが解毒薬で、こっちが毒。二つを同時に飲めば、毒の効果は表れない。陳腐な手ですが、説得力はあるんじゃないですかねぇ。

後はあなたの演技力次第、ということで……」

そんな二人のやり取りを見ながら、額に目の刺青を入れた暗殺者は、くだらない、とばかりにため息を吐くのだった。

第七十話　盛り上がる……芸術談義！

「こちらが、調理場になっております」
レティーツィアの案内で、ミーアたちは厨房を訪れた。
さすがに侯爵家の厨房だけあって、その広さはなかなかのもの……否、むしろ、それは、下手をすると白月宮殿の厨房にも匹敵する、立派な厨房だった。
「ほう、これはなかなか……素晴らしい厨房ですわ！」
偉そうに腕組みしつつ、ミーアが唸る。その身にまとう雰囲気は……雰囲気だけは、一流料理人のものっぽく思えてしまうミーアである。
「おほめに預かり光栄です。ミーア姫殿下。実は、ここのデザインにも、少し私の意見を取り入れていただいているのです」
レティーツィアは、ちょっぴり恥ずかしげで、でも、少しばかり誇らしげな顔で言った。
「お料理をするなら、やはり、しっかりと設備が整った場所で、と思いまして。そのほうがいろいろと凝ったものができますし」
――そういう凝ったものじゃなくって、普通に簡単なものから作ってくれると、楽なんだけどなぁ……。
などと思いつつ、ダリオは改めて、本日の戦力の確認をする。
まず、意気投合する姉とミーア……は論外。できるだけ、この二人の暴走を抑えることが、今日の成功の必要条件といえるだろう。
その少し離れたところで、イエロームーン公爵令嬢とその友人であるベルという少女が楽しそうに話をしている。戦力になるかは微妙。
――大貴族のご令嬢なんか、あてにはできないし、もう一人のほうは……なんだか、やらかしそうな雰囲気があるんだよなぁ！
セントノエルにいたころから、何度かベルのことを見かけたこと

があるダリオだったが……その好奇心にキラッキラ輝く目が、今はなんだか、危ない気がする。
次に、ミーア姫のメイドとルドルフォン辺土伯令嬢が会話をしているのが見えた。
――確か、アンヌ嬢といったか。メイドなんだから一応、料理はできるだろう。ルドルフォン辺土伯令嬢は……どうかな。二人の王子殿下は、うーん……。
会話に興じるアベルとシオン。そんな二人を見ていて、ダリオは、小さく首を傾げる。
――不思議だ……。この二人の王子殿下のほうが、ミーア姫や姉さんなんかより、よほど料理ができそうに見える……。なぜだろう……？
そんなふうにして、ダリオは、なんとか、今日の料理会を無事に乗り切るべく、プランを練っていたのだ。流されつつも、なんとか、最善の結果を掴み取ろうとする。彼の隠された根性……というよりは、切実な自己防衛本能がそれをさせていた。
けれど、そんな彼の、はかなくも懸命な努力をよそに、ミーアたちの暴走は続いていた。
「この窯もとっても大きいですわね。セントノエルのものより大きいのではないかしら？」
「ふふふ、実はそれ、最新の技術を取り入れたパン焼き窯なんですよ。陶器の窯の技術を応用したもので、火力の調節ができて……」
「ほほう！　それは素晴らしいですわ。これだけ大きいと、等身大の馬型パンも焼けてしまえそうですわね」
かつて、キースウッドに却下された仔馬サイズのパンのリベンジができるかも！？　などと、ミーアが目を輝かせる。
「そう！　以前にお聞きして、とっても興味をもっていたんです。等身大の仔馬型のパン。とっても可愛らしくて、素敵！」
パンッと手を打ち、嬉しそうに笑うレティーツィア。
なんというか……、いわゆる芸術家肌の人と、とっても料理の話

が合うミーアなのである。
「ああ、やはり、わかってくれる人はくれるのですわね。あれは、形を作るのがとても大変で……。そう、うちのアンヌも細かな造形に協力してくれましたわ。耳の形などにこだわりをもって……」
などと言えば、レティーツィアは顎に手を当てて……難しい顔をしてから……。
「とてもよくわかります。馬は、耳の形がとても大切ですよね」
わかってしまったらしい。
なにかがズレているはずなのに、奇妙に一致した会話は、加速度を増していく！
「お友だちにクロエさんという方がいるのですけど、その方によると秘境の珍味には……」
「まぁ、そんなものが食べられるのですか？　けれど、色味としては、青というのはとても綺麗で面白いかも……。サフィアスさまにも合っているし……」
ツッコミを入れる者は……いなかった！
さらに、さらに！
「あ、でも、肉はやっぱり窯ではなく、熾火で焼いたほうが美味しくなる、です」
口を挟んできたのは、ルドルフォン家のメイド、リオラだった。
「ああ、リオラさんもいらしていたんですのね。心強いですわ……しかし、熾火のほうが美味しいというのは？」
「味が全然違う、です」
腕組みするリオラに、レティーツィアがポンっと手を打った。
「なるほど。その動物が生まれ育った場所の環境で焼いたほうが美味しいものができる、ということかしら？　調味料なども、肉が採れた森のものを使ったほうが味が馴染むとか、そういう……」
それを聞いたリオラは小さく首を傾げたが……、
「……たぶん、そんな感じ、です」
深々と頷いた。

――それ、絶対そんな感じじゃないだろう！　っていうか、熾火で焼くのと窯で焼くのとは、そもそも調理法が違うっていうか……そういう焼き加減の話なんじゃないのか！？

我慢できずに、胸の内だけでツッコミを入れるダリオである。

――いやぁ、っていうかサフィアスさま……これを俺一人で止めろって言うのは、ちょっと無茶振りが過ぎるよ……。早く来てくれないと……。

などと、早くも諦め半分のダリオである。

なまじっか料理の経験があるため、目の前で繰り広げられている会話のヤバさが、しっかりわかってしまう分、心が折れるのも早かった。それでも、なんとか、気を取り直し……。

「ええと……とりあえず、下ごしらえから始めるのがいいと思いますよ。姉さん」

頭をかきながら、そんな指示を出す。

――さすがに、野菜を切るだけだったら、変なことにはならないはずだし、シオン、アベルの両王子は刃物の扱いに慣れていそうだ。

そうして、味付けに関しては、言いつけを守りそうな子どもたちに任せて……。

「ふむ、鍋料理であれば……やはり、キノコかしら……」

などと言う、誰かさんのヤバそうな発言は、聞かなかったことにして、ダリオは遠い目をする。

――ああ、マジで早く来てくれないかな、サフィアス義兄さん……。いや、本当に。

援軍の到来を心待ちにするダリオであった。

第七十話　盛り上がる……芸術談義！（後書き）

お姉ちゃんに振り回される弟っていいよね！

第七十一話　誘拐

ミーアたちが、楽しいクッキングトークをしつつ、料理の準備をする合間、ヤナはパティのことを見ていた。

――なんだか、パティ、さっきから様子がおかしい気がする。

友人の様子の変化を、ヤナだけは敏感に気付いていたのだ。

――先ほどの部屋で、いろいろな楽器を見るまでは、いつもどおりだったのに……。あの、メイドさんと会ってから、なんだかすごく変……。

最初は注意されたから、しょげてるのかと思った。やんわりとであっても、先ほどのは、悪戯を怒られた形だ。気にしても不思議はないのかもしれない。

でも……、パティはあんなの気にするほど、ヤワではないとすぐに思い直す。

そうなのだ、こう見えてヤナの友人、パティはタフな性格をしているのだ。ちょっとやそっとの悪口など表情一つ動かさないだろうし、相手にしないだろう。

大人に怒られても、たぶん、気落ちしたりはしないはずだ。

でもだからこそ、ヤナは心配になった。なにやら、いつもよりさらに口数少なくなった友人を見て。

――また、自分だけが楽しんで弟に悪いと思ったとか……？　いや、そんな感じじゃないような……。

どちらかといえば、申し訳なさというよりは混乱している……そんな感じがした。でも、いったいなにに？

「……あの……少し、お手洗いに……」

おずおずと、パティが、近くに立っていた若いメイドに言った。

「あ、それなら、あたしも一緒に」

パティを一人にしてはいけない……。本能的にそう察したヤナは、

素早く声をあげ、次に弟に視線を向ける。
「お姉ちゃん？」
ついて来ようとするキリルを、ヤナは首を振って制して、
「すぐ戻ってくるから。キリルはここでミーアさまのお手伝いをしてて」
それから、ヤナは、探検隊隊長のベルのほうに目を向ける。ミーアは、いろいろと忙しそうだったので……。
幸い、その視線の意味はすぐに伝わったらしく、ベルは、
「はい。キリル君の面倒はこっちでみてるから、行ってきていいですよ」
と、自信満々の顔で言った。それから、
「じゃあ、キリル君は、ボクたちと一緒に野菜の皮むきをしましょうか。ボクが見本を見せてあげましょう」
などと、偉そうに言っている！　お姉ちゃんぶりたいお年頃なのである。
ヤナは「お願いします」と小さく頭を下げて、すぐにパティの後を追った。
すでに、パティは案内のメイドさんとともに、廊下を歩いていた。
「パティ、ちょっと待って。どうかしたの？　なんだか、さっきから様子が変だけど……」
そう声をかけると、パティは小さく首を振って……。
「ううん……なんでも、ない。たぶん、気のせいだから……」
「でも……っ！？」
っと、その時だった。突如、ヤナの口を、何者かの手が覆った。
「……んぅっ？　……っ！」
咄嗟に、噛みついて逃れようとしたヤナだったが……。
「おや、姫殿下のところにいるにしては、お行儀が悪い」
直後、首に細い腕が巻き付いてきて、締め上げた。ぐいっと体を持ち上げられて、ヤナがパタパタと足を暴れさせる。
「ぐっ……ぅっ」

昔、貧民街にいた時と変わらない、純然たる暴力。幼いヤナの体では、抵抗のしようがなかった。
目の前、パティもまた、後ろ手に腕を捕まえられていた。案内役の若いメイドが、無表情に、パティを見下ろしていた。
「声を出せば、この子の命を奪います」
ヤナの耳元で、メイドの声が囁く。苦しげに顔を歪めつつもヤナは思った。
そんなに小さな声じゃ、パティに聞こえるわけがない、と。
けれど、目の前でパティは……こちらに向かい、小さく口を動かす。声は、聞こえない。でも、ヤナを拘束する者から、小さく声が漏れた。
「驚いた……。唇を読むなんて……やはり、お前は蛇の教えを受けているのですね……しかし、私の名を知っていて、あの楽器に反応を示す……。クラウジウス家に所縁の者か……。そんな子どもがなぜ、帝国の叡智のそばにいるのか……取り込まれたのか、それとも蛇として動いているのか……」
囁くような声でつぶやいてから、ヤナを拘束する者……ゲルタは、若いメイドに目を向けた。
「その子どもは放していい。抵抗すればどんなことになるのか、よくわかっているでしょう」
それからゲルタは、グッとヤナを拘束する手の力を強める。息が苦しくなり、頭がぼーっとしてきて……。
「しかし、ヴァイサリアンの子どもとは……。つくづく帝国の叡智は、我らの秘密を暴くのが得意と見える。忌々しいことだが……それも今日までか……」
ゲルタは、ヤナの額を覗き込みながら言った。その暗い瞳を見て、けれど、ヤナは絶望したりはしなかった。むしろ、その胸にあったのは、深い安堵だった。
――キリルを置いてきて、良かった……。
自分たちを救ってくれた人のもとに、弟を置いてきたことだけが、

ヤナにとっての救いで……でも、同時に思うのだ。
――もしも……あの子を、信用できないところに置いてきていたら……それは、どんな気持ちだろう？
うつむき加減についてくる友人が、いったいどんな気持ちだったのか……薄れつつある意識の中、そちらのほうが気になってしまうヤナであった。

第七十二話　野菜もいける、ミーア姫！

さて、シューベルト邸の一角で、恐ろしい事件が起きている頃、調理場でも恐ろしいことが進行していた。
「では、ダリオ。準備をしてちょうだい」
姉の命を受け、ダリオは厨房の者たちに指示を送る。
「しかし、打ち合わせとは……」
料理人たちが顔を曇らせる。彼らも、レティーツィアの料理の腕前のほどは、痛いほどよく知っているわけで……。けれど、
「ああ……大丈夫だ。問題ない……。刻むべき野菜は、たくさんあるんだから……時間稼ぎはできるはず……大丈夫……大丈夫」
そんなダリオの様子を見て、彼らはさらに、顔を青くする。
ダリオが……まるで、自分自身に言い聞かせるような口調で言っていたからだ。
けれど、だからといって、命令に逆らえるはずもなし。動き出してしまったことは止められない。
すぐさま動き出した使用人たちの手によって、食材が運び込まれてきた。
机の上、一杯に乗せられた食材を見て、ミーアは思わず、おおっ！　と嬉しそうな声を上げた。
「これは……ずいぶんとたくさんのお野菜ですわね」
大きな机の端から端に至るまで、ゴロゴロと並べられた野菜の数々。試しに、その一つを手に取り、ミーアはニッコリ笑みを浮かべた。
「ああ、これは、実に美味しそうですわ……」
ちなみに「わたくし、甘い物と美味しいお肉以外は食べたくありませんわ！」なぁんて、わがままなことを、昔は言っていたミーアではあるのだが……、今のミーアは、野菜もいける！

なにせ、地下牢で食べさせられたアレやコレを経験しているミーアである。
しっかりと洗ってある新鮮なお野菜など、ご馳走以外の何物でもない。さらに……。
「ああ、あの帝国キャロット……なかなか良い色ですわ。あれは、バターとからめて甘くするととても美味しいんですわよね。それに、ケーキには最高で……」
料理長とラーニャによってしっかりと舌を鍛えられたミーアは、もはや、かつてのミーアにあらず。ミーアはすでに野菜の楽しみ方を知り尽くしている。
今のミーアは野菜もいける！
まぁ、もちろん、食べる分には、だが。
「ふふふ、ミーアさまは、とっても、お料理に造詣が深いのですね」
感心した様子のレティーツィアに、上機嫌に笑うミーア。
「ええ、まぁ、それほどでもございませんわ」
などと答えつつも、ひそかに胸の中では……。
――ふむ、レティーツィアさん、情熱はありますけれど、料理の腕前のほうは、やはり怪しいですわね。
珍しく、非常にまっとうなことを思っていた！　とても珍しいことである！
さらに、さらに！
――以前の料理会の時にも、サフィアスさんが付きっきりでいましたけれど……あれも、レティーツィアさんの腕前を知ってのことだったのではないかしら……。であるならば……もしや、彼が、今回の料理会について気が進まない様子だったのは、本当に、婚約者の腕前を危惧してのことだったとか……。
なんとミーアが……あの、ポンコツ迷探偵のミーアが……真実に極めて近い部分まで到達してしまうという異常事態が起きていた。
これは、最近、好調な恋愛脳がなせる奇跡か？　はたまた、ミーアの成長の証なのだろうか？

そうして、奇跡的に、極めて真実に近いところに到達した、ミーアの出した結論は……。結論は！

――ふっふっふ、これは、サフィアスさんの苦労を軽減させてあげるためにも、わたくしがきっちりと、お料理を教えてあげなければなりませんわね！　そうして、レティーツィアさんと親しくなり、サフィアスさんとの関係も強固なものにする。これですわ！

……真実に近いところまで行ったはずなのに……事態はより悪化していた。

――そのためには、美味しいお鍋料理が必要ですわ。お野菜の鍋は確かに美味しいですけれど、なにかもっと、ピリリとパンチの効いたものが必要ですわね……ナニカ……。

そんな時、不意に、ミーアの脳裏に思い浮かぶ言葉があった。

「明日への希望……。ああ、そうですわ……」

……ロクでもないことを思い出したミーアは、シュシュっと辺りに視線を走らせ、目的の人物を見つけて歩み寄る。

それは……。

「リーナさん、ちょっとよろしいかしら……？」

きょとりん、と不思議そうに首を傾げるシュトリナに、ミーアはそっと耳打ちする。

「例の……庭にあったキノコを採ってきていただけるかしら？　あの、丸い魚のような……テトロド茸だったかしら？」

「トロキシ茸のことでしょうか？」

「ああ。ええ、それですわ」

ミーアは深々と頷いてから、

「たしか、あれに毒はない、と言っておりましたわよね？」

確認するように問う。

ちなみに、ミーアの頭の中で、キノコは二種類に分類されている。

それは、毒があるものとないもの……ではない。食べられるか、食べられないか、である。

そして、食べられるならば、不味いということはあり得ない。不

味いキノコなどない。ミーアにとって自明の理であった。
まして、あれだけ美味しそうな見た目なのだ。毒がないのであれば、鍋に入れないというのはあり得ない。
――レティーツィアさんに、キノコ料理の神髄を教えて差し上げますわ。そうして、友情の絆を深めておけば……。ふふふ。
美味しいキノコ鍋を作った上に、レティーツィアとの仲も深まる。一石二鳥の策に、ミーアはにんまーりとほくそ笑む。
「確かに、命を落とすような毒はありませんけど、でも……」
っと、シュトリナはなにか言いたげな顔をしたが……次の瞬間、ピクッとその肩が震えた。
「レティーツィアお嬢さま、食材の準備も整いましたし、始められたらいかがでしょうか？」
いつの間に戻ってきたのだろう。老齢のメイド、ゲルタが音もなくレティーツィアに歩み寄ってきた。なにやら会話をする彼女たちを、シュトリナは黙って見つめていた。
「……なるほど。ミーアさまは、見抜かれて……」
なにかつぶやいてから、小さく頷いて、
「わかりました。すぐに行ってまいります」
そのまま、音もなく調理場を出て行った。
「ミーア姫殿下、もう、お料理を始めてしまってもよろしいでしょうか？」
レティーツィアに問われ、ミーアは小さく首を傾げる。
「ああ……そうですわね。ヤナとパティを待ちたいのですけれど……でも……」
パティを元気づけることは目的の一つ。されど、メインの目的はレティーツィアと仲良くなることである。
――レティーツィアさんの料理スキルを上達させて、サフィアスさんと仲良くなること……。これこそが主目的ですし、それに、わたくしの料理の腕前をアベルに披露したくもありますし……。
さらに、ミーアの視界に入ってきたのは、ティオーナの姿だった。

ルドルフォン家で、たくさんの野菜を刻みなれている彼女は、運び込まれた大量の食材を前に燃えていた。
真剣な顔でナイフを吟味しながら、料理の瞬間を今か今か、と待ちかねている。その目つきは、まるで、名剣を手にした騎士のごとく……。
……あれ？　料理ってそういうものだったっけ？　などと思わなくもないが、それはともかく……。
あまり待たせないほうがいいのかも、と思うミーアである。そこに追い打ちをかけるように、
「失礼いたします。ミーア姫殿下、実は、彼女たちは……」
今度は、ゲルタが話しかけてきた。
彼女によれば、子どもたちは、先ほどの部屋で楽器を弾かせてもらっているらしい。
「しばらくしたら、こちらにお連れするようにと、若い使用人が一緒におります」
「ふむ……まぁ、そう言うことでしたら……」
ミーアはレティーツィアのほうに目をやって、静かに頷いた。
「それでは、料理会を始めましょうか」

第七十二話　野菜もいける、ミーア姫！（後書き）

ケーキも肉も、野菜もパンも、なんでもこいのパーフェクトミーア

第七十三話　いつものミーア

さて、料理を始めようか、といったところで、ティオーナが近づいてきた。
「ミーアさま、改めまして、ご無沙汰しています。本日は、このような素敵な会にお招きいただきありがとうございます」
「あら、ティオーナさん。ご機嫌よう。お元気そうでなによりですわ。お父さまとセロくんは、お変わりはないかしら？」
そう尋ねると、ティオーナは嬉しそうに微笑んだ。
「ありがとうございます。父も、弟も元気にしています。セロは、ミーアさまの学校で学ぶのがとても楽しいみたいで……。アーシャ姫殿下にも、とてもよくしていただいているそうです」
と言ってから、ティオーナは、でも……と続ける。
「最近は、なんだか、すごく頼もしくなってしまって……。それが少しだけ寂しいんです」
「まぁ、ふふふ。ルドルフォン辺土伯令嬢にも、弟さんがいらっしゃるのね」
レティーツィアが気品のある笑みを浮かべて、会話に加わってきた。
「でも、羨ましい。うちの弟のダリオなんか、いつまでたっても頼りなくって……。あれでは、サフィアスさまの支えにはなれないんじゃないかしら……」
姉の視線を受けたダリオが、微妙に居心地悪そうに頬をかいた。
「いや、シューベルト侯爵令嬢。それは、弟の近くにいるから、そう感じるだけかもしれない。少し離れてみると、見えてくるものがあるかもしれないよ」
腕組みしつつ、そう言ったのは、シオンだった。
「そういうもの、なのでしょうか。シオン殿下」

怪訝そうな顔で首を傾げるレティーツィアに、シオンは肩をすくめて、
「ああ。もっとも、私もそれに気付くのが遅れてね……。ミーアのおかげで、なんとか、間に合ったという感じだったよ」
さて、そんな風に弟談議に花を咲かせつつ、ティオーナがミーアのほうを見た。
「それで、ミーアさま、私はどれを切ればいいでしょうか？」
ウッキウキの顔でティオーナが言う。
「ふーむ、そうですわね……」
ミーア、腕組みしつつ、考える……ふりをする。
まぁ、実際のところ、なにから調理を始めればいいかなんて、ミーアにわかるはずもないわけで……。
「では、とりあえず、端から順番に……」
などと、近くにあった玉月ネギ（ぎょくげつ）と公爵芋（コウシャクイモ）を手に取る。と……。
「僭越ながら、その玉月ネギは、早めに入れてしまうと溶けてなくなってしまいます。味としては問題ないのですが、食感を楽しむのであれば、できるだけ後のほうにされたほうがよろしいかと……」
ミーアの後ろから、ゲルタの静かな声が響いた。
「ですから、そちらの満月大根（フルムーンラディッシュ）などを先に切るのが良いのではないかと……」
「なるほど。では、ティオーナさんとシオン、申し訳ありませんけど、そちらの満月大根を、ええと……？」
「輪切りにするのがよろしいかと……」
「それにしてくださいまし」
てきぱきと指示を出しつつ、ミーアは、
――この、ゲルタさんという方……なかなかできますわね？
思わず瞠目する。
よくよく思い出してみれば、先ほどからの立ち居振る舞いなども品があって実に見事。
足音を立てずに部屋の中を歩き回る様子や、一つ一つ洗練された

仕草に、ミーアは、ふむ、と唸り声を上げる。
――的確な時に的確な指摘をし、正解へと導いていく。実に優秀。さすがは侯爵家のメイドといったところかしら。
まったくもって感心しきりのミーアである……。
ゲルタが怪しいとか……そんなこと、まるっきり考えてなかったのである！
まぁ、もちろんご存知のことと思うのだが……。
「では、シオン王子、これを一緒に……」
っと、ティオーナとシオンが並んで作業を始めた。
仲睦まじく野菜を切るティオーナとシオンを見て、ミーアは、実に微笑ましい気持ちになってしまう。
――ふふふ、以前までのわたくしであれば、あんな光景を見せつけられたら、怒ったのでしょうけど……。
前の時間軸、シオンのハートをゲットするべく、待ちの姿勢を貫いていたミーア。あの当時のミーアが見たら、きっと、嫉妬に怒り心頭だったはずで……。
そんなミーアにも、今は……。
「ミーア、ボクたちも作業を始めないか？」
アベルがニッコリ笑顔を見せる。
「うふふ、そうですわね」
それに、笑みを返しつつ、ミーアは幸せを噛みしめる。
――ああ、素敵ですわ。やはり、愛する殿方とお料理を作れることは、何よりの幸せ……。ふむ……。
っと、そこで、ミーア、冷静になる。
――っと、ダメですわね。アベルとイチャイチャしたいのはやまやまですけれど、今日はレティーツィアさんに、お料理を教えて差し上げるのがメインイベントでしたわ。サフィアスさんもいらっしゃらなくて、寂しそうにしていますし……。ここは、わたくしが気を使って……。
いささかおこがましいことを思いつつ、ミーアはレティーツィア

のほうを見た。
「レティーツィアさんも一緒に切りましょうか。やはり、お野菜は形が重要だと思いますの。この、イモを馬型に……」
「……僭越ながら、イモは煮崩れてしまうかと思いますので、あまり形を変えても意味がないかと……」
「ふむ……。やはり、見た目よりは、味付けがポイントでしたわね！」
こうして、ゲルタの手のひらの上、なんの抵抗もなくコロコロ転がされるミーア……。その姿はさながら、大海に漂う海月のごとき他愛のなさで……。
まぁ、つまり……その、なんというか……いつも通りのミーアなのであった。

第七十四話　……本当だ！

ミーアの密命を受け、シュトリナは早速動き出した。
こっそりと調理場を抜け出し、屋敷の中を誰の目にもつかぬように急いで歩いていく。
実のところシュトリナは、今回、この屋敷に来た事情をきちんと覚えていた。
サフィアスが謀反を企てること、そして、ミーアがそれを止めるために、ここにきていることを、きちんと覚えていた。
ただ、遊びに来ていたわけではないのだ。使命があるのだ。
それを忘れて、ベルと遊んでいたとか、そんなことは断じてないのである。
……本当だ！
ということで、足音一つ立てず、気配を消して、廊下を進んでいく。
まぁ、別に見つかったとしても、お手洗いに行くついでとかなんとか、言い訳はできるだろう。侯爵家の屋敷を勝手に歩く無礼は、星持ち公爵令嬢という立場と、可憐な少女の笑みで、なんとでも封殺はできるだろうが……。
――問題は、相手が蛇だった時。もしも、あのゲルタというメイドが蛇だったら、潜んでいるのが一人だけとは思えない。
シュトリナは改めて、先ほどゲルタが見せた、あの足さばきを思い出す。
あの時、あの瞬間、調理場に入ってきたゲルタの気配の消し方は……シュトリナには覚えのあるものだった。
そして、入ってきてすぐにレティーツィアに近づき、誘導しようとしていた。
――急いで料理を作らせようとしていた……それはなぜ……？

恐らく、彼女にとって不測の事態が起きたのだろう。だからこそ、あの瞬間、普通のメイドとしての演技を忘れた。うっかり、シュトリナの目の前で、普段通りの気配を消す動きをしてしまったのだ。

――サフィアス・エトワ・ブルームーンの謀反にあのメイドが関わっていることをミーアさまは疑っているのかもしれない。もしもそうなら、一人でここに潜んではいないだろう。他にも仲間がいる可能性がとても高いはず……。気をつけなきゃ。

まぁ、もちろん、言うまでもないことながら、シュトリナは最初から首尾一貫して警戒しているし、気をつけて行動している。まさか、ベルと遊ぶことに気を取られていたとか、一緒に出掛けられただけでウキウキ楽しくなっちゃって油断してたとか、そんなことは本当にないのである。

……本当だ！

とまぁ、そんなわけで、気配を消しつつも、いざ見つかったら迷っちゃいました、という風を装いつつ、シュトリナが向かったのは前庭だった。

あの、ちょっぴり意味のわからないオブジェクトの間を素早く移動していく。

不規則に立った彫像は、なんとなく不気味で、一人で歩いているとなんだか怖くなってしまった……ことだろう、ミーアならば。

ちなみに、合理主義者なシュトリナは、誰か刺客が潜んでたら、面倒だなぁ、ぐらいにしか思わなかったわけだが……。

そうして、辺りの気配に注意しつつ、シュトリナは目的の場所にたどり着いた。

『明日への希望』と題されたオブジェクト。等身大の、にょろにょろしたヘンテコな形の彫像、そこから少し離れた木の根元に、目的のモノ……キノコがあった。

「あれね……」

見つかるか不安だったからだろう、無事に目的の物を発見できたシュトリナは、ホッと一息吐いた。吐いてしまった……。それは…

…油断！

最近は、あまり気を張っていなかったから。蛇の一員としての役割から解放され、普通の（解毒剤で王様の命を救ったりとかしてはいたものの……）令嬢として生きてきた時間が、彼女の警戒心の感度を鈍らせていた。

結果、シュトリナは、それを察することができなかった。自分に近づく、影の存在に！

「わっ！」

「きゃっ！」

小さく悲鳴を上げるシュトリナ。一歩後ろに下がり、目つぶしのお薬を投げつけようとするも……影の正体を見て、すぐさま自重。それから、ふぅっとため息を吐き、胸に手を当てた。

「ああ……ベルちゃん」

そこに立っていたのは、ニッコニコと、悪戯っ子のような笑みを浮かべるベルだった。その後ろからは、キリルがぴょこん、と顔を出す。

「どうして、ここに？」

「はい。リーナちゃんがいつの間にかいなくなってたから、もしかして、この面白そうなお庭を探検してるんじゃないかなって思って」

そう言って笑うベルである。

思わず、安堵するシュトリナだったが、すぐに、眉をひそめて……。

「ベルちゃん、誰かに尾行とかされなかった？」

「え……？　尾行？」

きょとん、と首を傾げて……それから、ベルは後ろを振り向いた。

つられて、シュトリナも、一緒にいたキリルも屋敷のほうに目をやる。っと……いつの間にやら、そこには数人の人影が……人影が……いなかった！

どうやら、尾行はいなかったようである。一安心だ。

ちなみに、シュトリナの心配は、あながち的外れではなかった。

なるほど、確かに屋敷の中で、ミーア一行の誰かが勝手なことをすれば、ゲルタの警戒網に引っかかったことだろう。注意しつつここまでやって来たシュトリナならばともかく、無警戒にズンズン廊下を歩いてきたベル探検隊の二人では、呆気なく見つかって、捕縛されていたことだろう。

ただ、ベルにとって幸運だったのは、蛇の手の者の数が少なかったこと、そして、パティという少女の存在を、彼らが怪しんだことだった。

結果、蛇は、ベルとシュトリナという二人のご令嬢にまで、手が回らなかったのだ。

「でも……今、視線を感じたような……？」

一瞬、首を傾げたシュトリナだったが、すぐに首を振り、

「見つかってないならいいんだ。それじゃあ、早く戻ろう」

「リーナちゃんは、ここになにしに来ていたんですか？」

不思議そうに尋ねるベルに、シュトリナは笑顔で、それを見せた。それは……丸い魚のようなフォルムのキノコで……。

「これは、トロキシ茸。別名、フグワライ茸っていうの」

シュトリナは、キノコを見つめてから、

「リーナも一度だけ食べてみたことがあるんだけど……このキノコには、ちょっぴり変わった性質があってね……」

妖艶で、意味深な笑みを浮かべるのだった。

第七十五話　希望的観測に身を委ね……

シュトリナが、一瞬だけ感じ取った視線……。それは、錯覚ではなかった。

じっと……じぃぃっと……少女たちの動向を見張る男たちがいたのだ。

それは、オブジェクトの影に身を潜めた男たち……サフィアスとキースウッドだった。

木の根元に植わった得体の知れないキノコを採り、その場を後にした少女たち……。その後ろ姿を見送ってから……サフィアスは震える声で尋ねる。

「どう……思う？」

「……イエロームーン公爵令嬢は、毒や薬、キノコ類にも造詣が深く……、また、とても聡明なご令嬢である、と俺は信じていますよ。心から……」

キースウッドは、険しい顔で言った。

「ああ……そうとも。それは、知っている。彼女は、あの年にしては、非常に頭が切れるご令嬢だ。それは知っているとも。だが……」

サフィアスは苦い顔で言った。

「我らは、帝国貴族なのだ。そして、ミーア姫殿下に忠誠を誓った身でもある。それに……彼女はミーア姫殿下に救われたとも聞いている。そんな彼女が、ミーア姫殿下の言葉を拒絶できなかったとしても……不思議ではない」

頭痛を堪えるように、頭を押さえつつ、サフィアスは言う。

「例えば、ミーア姫殿下の言葉なのだから、きっと何か意味があるに違いない……などと言う理屈を信じる方向に、流されて行ってしまっても不思議ではない。多くの場合、その選択は正しいが……」

「料理に関してのミーア姫殿下は、信用ならない、と……？」

「反対の余地はないだろう？」
そう問えば、キースウッドは小さく肩をすくめて、
「確かに。しかし、これは、時間稼ぎが失敗したと見るべきか……。あるいは、時間稼ぎをしたがゆえに、時間的余裕を与えてしまい、かえって、余計なことを始めたとみるべきか……でしょうね」
「ああ、これは、困ったことになったな……。オレは急いでいくべきなのか、それとも、もうしばらく時間を置くべきか……」
もしも、レティーツィアたちが、サフィアスの到来を待って食事を始めようとしているのであれば、急いで行って到着した瞬間に、名状しがたいキノコ料理が出て来る危険性がある。だが、急いでいけば、まだ、料理の修正ができる可能性も残されているわけで……。
「ああ。そうだ。一つ、良いアイデアがある」
サフィアスはポン、と手を打った。
「と言いますと……？」
「なに……。簡単なことだ。こっそりと厨房に行き、様子を見てくればいい」
「しかし、館の入口には……」
遅刻してきたサフィアスを、使用人たちが待ち受けているに違いない。こう見えて、彼は、館のお嬢さまの婚約者にして、帝国四大公爵家の次期当主だ。出迎えが出てきて当然の身分なのである。が……。
サフィアスは片手を上げて、キースウッドを制した。
「ふふふ、ああ、わかっている。実はね、秘密の入口というのがあるんだ」
「ほう……秘密の……」
感心した様子で顎を撫でるキースウッドに、サフィアスは軽快な笑みを浮かべる。
「ところで、突然だが、この彫刻、明日への希望というタイトルがつけられていてね」
何気ない口調で言って、サフィアスは、にょろにょろと地面から

伸びた彫像に近づいた。
「正直、この奇妙なキノコみたいな彫像がどうして、明日への希望なのか、と謎だったんだが……」
そう言って、彼は彫像に手を伸ばす。にょろにょろの一本を手前に、別の物を右に、と、動かしていく。次の瞬間、ガコンと重たい音を立て、彫像が横にずれた。
「実は、ここが、館からの抜け穴になっているのさ」
「なるほど。襲撃にあった時に、明日に希望を繋ぐための脱出路、だから明日への希望と言うこと、か……」
「そういうことだな。ああ、でも、もともと脱出路として作られたものではなく、奇術の抜け道として作られたらしい、という話も聞いたが……」
「奇術、ですか……」
「そう。何代か前の当主がはまったらしい。一度姿を消して、どこか違う場所から姿を現わしたりとか。いずれにせよ、凝った造りの屋敷だよ」
苦笑いを浮かべつつ、サフィアスは、地下の道へと降りて行った。
中は、薄暗い、と言った感じだろうか。どうやら、外からは隠されているものの、明り取りの仕組みが施されているらしい。
「確かに、かなり凝った作りですね……。時に、サフィアス殿は、なぜ、この道をご存知で？」
キースウッドの問いに、サフィアスは若干慌てた様子で、
「いやぁ、まぁ、その、ね？　ああ、もちろん、いかがわしいことに使ったわけじゃないぞ？　ただ、その、愛しい人とこっそり夜空を見ながら、詩を読み交わしたい時とか、あるだろう？　屋敷の屋根にこっそり上って、月を見上げながら、膝枕されたい時とか、あるじゃないか！」
拳をグッと握りしめて力説するサフィアス。キースウッドは、苦笑した。
「シオン王子にも、そのぐらいの積極性があればいいのですが……

止まって」
　っと、唐突に、キースウッドが立ち止まり、口に人差し指を立てた。
「しっ……」
　それから、曲がり角から慎重に、通路の向こう側を覗いた。
　サフィアスも慎重に、キースウッドに続いて、覗いてみる。幸いというべきか、通路内は薄暗い。まったく見えなくはないが、隠れるには適している。
　目を凝らすと、通路の向こうを歩く人影が見えた。数は……四人。
　若いメイドと、男。それに、少女が二人。その内、一人は、男に抱えられて、ぐったりしていた。
　彼らが角を曲がるのを見送ってから、キースウッドがつぶやくようにして言った。
「今のは……？」
「シューベルト家のメイドと見慣れない男。それに、子どもたちに見えたが……しかし……どういうことだ？　どうなっている？」
　困惑した様子でつぶやくサフィアスに、キースウッドは一つ唸ってから、
「サフィアス殿は、ミーア姫殿下のところに向かったほうがいい」
　厳しい顔つきで言った。
「相手は、賊……。場合によれば、蛇の可能性もある。この先でどんな危険が待ち受けているか……」
　っと言いかけたキースウッドの言葉を遮って、
「いや……オレもついていこう」
　スチャッと一歩前に出るサフィアス。
「いや、しかし……」
「幼い子どもたちが連れ去られたのだぞ？　ここで黙っていては、レティーツィアに合わせる顔がないじゃないか」
　ニヤリ、と格好いい笑みを浮かべて、
「それにさっきも言ったが、オレは、この地下道のことをある程度

知っている。ここは、同行するべきだろう」
実に、心強いことを言うサフィアス。そんなサフィアスに、キースウッドは、ふっと笑みを浮かべて……。
「サフィアス殿……ちなみに、本音は……？」
問いかけに、サフィアスは、ふーっとため息を吐き、天を仰いだ。
「いやぁ、正直な話、ミーア姫殿下と愛しのレティーツィアが、あのキノコを使って作った鍋料理を食べる自信が、まったくない！」
言い切った！
いっそ清々しいほど堂々と、サフィアスは、言い切ったのだ！
そして、
「まぁ……時間稼ぎには失敗したが、ダリオは頼りになるやつだから、きっと料理会のほうはなんとかなるんじゃないかな……たぶん。きっと……」
「そう……ですね。まぁ、世の中には、そんな素敵な奇跡だって、あっていいと思いますよ。よくよく考えるとシオン殿下も聡明な方ですし、ギリギリで料理の危険性に目が覚めてくれるかも……」
まるで、祈るように、そう答えるキースウッドであった。
そうして、希望的観測に思いっきり身を委ねつつ、二人は、地下道に身を挺するのだった。

第七十五話　希望的観測に身を委ね……（後書き）

本当はすぐにでもシオンのもとに駆け付けたいキースウッドですが、目の前で子どもが連れ去られたら、さすがに仕方ないよね……うん。べ、別に、厨房に行きたくなかったとか、そんなこと全然ないんだからね！

第七十六話　人が罠にはまりやすい時

「しかし……よくよく考えると、これ、少しお野菜が多すぎないかしら……？」

机の上の野菜を半分ぐらい刻んだ（主にティオーナが……光速で……）ところで、ミーアは根本的な疑問に辿り着いた。

横長の机一杯の野菜、これをすべて刻んだとして、どれだけ大きな鍋に入れるつもりなのか……？

そんなミーアの疑問に答えるように、ダリオが一歩前に出た。

「それはもちろん、ミーア姫殿下に最高の物をお食べいただくためです」

たくさん、野菜を刻ませて、時間稼ぎをしようと思っている……などとは当然言わない。ダリオはできる男なのだ。

「たくさん集めた材料、その中でも上手く切れた物を料理に使う。そうして、作った最上の料理こそ、皇女殿下に献上するのに相応しいものになる、と……。そういうことです」

いかにも、と言った貴族らしい言葉。けれど、ミーアは、険しい顔で眉間を押さえた。

「そう……なるほど。そういうことでしたの」

ミーアは、そう言うと、そっと野菜切り用のナイフを置いた。

「？　ミーア姫殿下？」

不思議そうな顔をするダリオに、ミーアは静かに言った。

「ダリオさん、一つ、覚えておくとよろしいですわ。わたくし、食べ物を無駄にするようなことは、絶対に許しませんわ」

ミーアは静かに、厳然たる口調で言った。

「この帝国には悪しき風習がある。地を耕し、農産物を作る者たちに対する軽視。けれど、これは、悪しき考え方ですわ」

かつて、隣国ペルージャンで、小麦を道に敷き詰める、などとい

うもてなし方をされ、それで悦に入っている貴族がいたという。まったく、愚かしさの極みだと言わざるを得ない。
なるほど、今回のダリオの行動はそこまでひどくはないが、根っこの部分に同じような思想の流れを、ミーアは感じとっていた。
「食べ物を無駄にすることは許さない。けれど、これをすべてわたくしたちだけで食べきることは不可能というものでしょう。ですので、もう、切るのは十分なんではないかしら？」
不出来とはいえ……いささかヘタが混じってたり、皮がついていたりするものの、すでに、鍋に入れるのには十分な量の野菜の下ごしらえが済んでいた。
正論で武装したミーアの言葉は、非常に力強く……それゆえに、ダリオは慌てる。
「いや、しかし……でも」
「さすがは、ミーア姫殿下でございます」
言い淀んだダリオの隣で、ゲルタが感心した様子で手を叩いた。
「聖女ラフィーナさまにも劣らない、ご立派なお考え……。感服いたしました」
「ふふふ、まぁ、それほどでもございませんけれど……」
ふふん、と鼻を鳴らし、ミーアは胸を張った。そうして、ドヤァッと笑みを浮かべかけるも……すぐに思い直す。
――おっと、いけませんわね。わたくしとしたことが……。今日は、レティーツィアさんと仲良しになる日でしたわ。こんなことでいい気になっていてはいけない。
それから、バレないように一瞬で、表情を生真面目そうな物へと変化させるのだった。

さて、そんなふうに、瞬間的に表情を変化させたミーアを見て……ゲルタは思った。
――ふふふ、やはり。帝国の叡智といっても、まだまだ小娘。腹芸はあまりうまくないと見える。

褒められて喜んでいるふりをしていたものの、最後の最後でぼろが出た。
極めて真剣な表情をさらけ出した帝国の叡智に、ゲルタは、ニンマリと笑い顔を向ける。
――やはり、この娘は気付いている。シューベルト家に混沌の蛇の手の者が入り込んでいると……。ただ、確信がなかった。だから、探りに来たのだ。
ゲルタは、シュトリナが厨房を後にしたことに気付いていた。何気ないふうを装って、二人の子どもが出て行ったことも……。
――あれは、十中八九、この屋敷内を探るための者たち。裏切り者のイエロームーンは要注意だが、後の者たちは……。セントノエルの特別初等部に通っていると聞いたが……。
ゲルタは、ほぅ、っと息を吐いて……。
――我ら蛇と戦う人材を、セントノエルで育成し始めたということか……。つまり、あの子どもたちもまた、帝国の叡智の薫陶を受けた者たちということになる……。
ゲルタの中を雷が駆け抜ける！
彼女の頭の中では、シュトリナよりやや劣る諜報員が、四人もミーアの手の中に加わったことになっていた。しかも、一人など、まだ、十歳にも満たぬ幼子だ。
――恐ろしいことだ……。幸い、部屋を探られてもなにも出てはこないだろうが……。
燻狼からもらった毒も、解毒薬も、今、彼女が身に着けていた。当然のことながら、レティーツィアの誘拐計画書などもありはしないし、仲間二人は、この館の秘密の地下道に隠れている。
彼女を混沌の蛇と断定する証拠は、ない。
――とはいえ、敵は、かの帝国の叡智。油断はできない。やはり、この機に殺してしまうのが良いでしょう。
幸運なことに、シオン王子とアベル王子、さらにティオーナ・ルドルフォンもここにはいる。そして……サフィアスはいない。

犯人をサフィアスにし、帝国とサンクランド王国との関係を悪化させれば、再び世界を混迷へと陥れることは十分に可能。
であれば、今すべきことは……。
笑顔を作りつつ、ゲルタは辺りに視線を送る。
野菜を詰め込んだ鍋、その火加減を見ているのは、ダリオだった。恐らく、これには、姉や、ミーア姫が余計な手出しをしないよう見張っているという側面もあると思うのだが……。
ゲルタは、音もなくダリオに近づくと、そっと話しかける。
「ダリオお坊ちゃん、どうぞ、みなさまとのご歓談にご参加ください」
「いや、だが……」
「問題はございません。鍋は、私のほうで見ておきましょう」
それから、ゲルタは笑みを崩さず、続ける。
「それに、サンクランドのシオン殿下と仲を深めるのに良き機会ではございませんか。そういった役割を、サフィアスさまはご期待されているのではありませんか？」
シューベルト家の次期当主として、サンクランドとの誼は大切にしたほうがいいだろう、と暗に伝えて、誘導する。
ダリオは、しばし迷った末、ゆっくりと頷き、その場を後にした。
呆気なく自身の言動が信用されたことについて、ゲルタは特に何の感慨も抱かない。
信頼とは積み重ねるもの。十年、二十年の歳月をかけて勝ち取ってきた信頼は、自身の言葉に強力な説得力を増し加える。そのことを、ゲルタは、混沌の蛇の教えにより、知っていたからだ。
――さて、注意すべきはミーア姫とシオン王子。アベル・レムノも油断ならぬ人物だと聞いているが……。
その場にいるすべての者の視線が外れた……刹那！　ゲルタは調味料を入れるふりをして、毒の入った瓶を振るった。
その粒が、鍋の中に溶け込んでいく、まさにその時、シュトリナたち一行が戻ってきた。

――間一髪……でしたね。ふふふ……。あの小娘がいたら、気付かれていたかもしれません。
内心で会心の笑みを浮かべつつ、ゲルタは鍋をかき混ぜる。
それから、周りの者たちの目を逸らすように努める。
自分からも、鍋からも……。
――一番に注意すべきは、やはり、シュトリナ・エトワ・イエロームーンか。
毒の投入に関しては、完璧だった。視線を奪い、誰の目にも留まらぬようにできた。あとは、そう。最後の仕上げ……。毒見を私自身がすれば、帝国の叡智は、死ぬ。
それは、帝国に隠れ潜む混沌の蛇にとっては、悲願の時。
ゲルタは、笑みが溢れるのを押さえることができなかった。

……この時、ゲルタは一つの蛇の教えを忘れていた。
それは「人は、誰かを罠にはめようとしている時が、一番、罠にはまりやすい」という、極めて基本的なものだったのだ。
彼女は、知らない。ミーア・ルーナ・ティアムーン、今なにをしているかを……。

第七十七話　激突！　善意ＶＳ悪意！

ゲルタが、こっそりと毒を鍋に入れ、そこに誰も近づかぬよう、ひそかに見張っているその頃……帝国の叡智、ミーアがなにをしていたのか……？

シュトリナと合流したミーアは、しっかりとやっていたのだ。やらかしていたのだ！

「ミーアさま、採ってきました」

声を潜めるシュトリナとともに、いったん廊下に出たミーアは、そこで、例のキノコ、トロキシ茸を受け取った。

「おお、これは、実に見事な……」

マジマジとそれを眺めてから、ふと、調理場のほうに視線を戻す。っと、そこには、じっと鍋を見つめるゲルタの姿があった。

「ふぅむ……、あれは仕上がりが気になるのかしら……ジッと見つめてますわね……」

そういえば、以前、料理長がじっくり火加減を気にしなければ美味しい料理はできない、みたいなことを言っていた記憶がある。

――わたくしたちが美味しい物を食べられるように、頑張ってくださっておりますのね。

ミーア、思わず感動するも、すぐに眉間に皺を寄せる。

「しかし……困りましたわ。あれでは、キノコを投入するなど不可能ですわね。なにか、別の手が……。ふむ！」

手段はすぐに、思いついた。

「鍋に入れられないのであれば……椀に盛り付けるまでのこと、ですわ……！」

ミーアは、なにも料理に無知というわけでは決してなかった。

興味があって、いろいろと見ているのだ。見ては、いるのだ。一応は……。

結果、中途半端に料理の知識が増えて、余計に厄介さが増したという噂もあるが、それはさておき……。
ミーアは知っている。最初から器に香草のようなものを入れておき、そこに熱々スープを注ぐ、そのような調理法がある、ということを……。
今回のキノコに、それが応用できないだろうか？
帝国の叡智の臨機応変さが、縦横無尽に発揮されていく！
――基本を守るだけではなく、アレンジと応用、それこそが、料理の醍醐味ではないかしら？
キースウッドが耳にすれば、泡を吹いて卒倒するようなことを内心でつぶやきつつ、ミーアはシュトリナに目を向けた。
「リーナさん、このキノコ……先に容器に盛り付けておき、その上から野菜スープを注ぐというやり方でも、大丈夫かしら？」
それで、味が出るか少々不安だったミーアであるが……。シュトリナは小さく目を見開いて、
「なるほど……そんなやり方で……。もちろん、大丈夫だと思います。効果は、十分ではないかと……」
ごくり、と喉を鳴らしつつ、シュトリナは静かに頷く。
「ふむ、それならば良かったですわ」
さすがはキノコ。最後に加えるだけでも、十分にお味が出るらしい。
ミーアは、完全食材たるキノコの素晴らしさに感銘を受けつつも、出来上がりの味を想像し、ごくり、と喉を鳴らすのだった。
そうして、ミーアとシュトリナ、ベルとキリルが、丁寧に削ぎ切りにしたキノコをスープ用の食器に盛り付けたところで……。
「みなさま、鍋がちょうどよい加減になりました」
タイミングよく、ゲルタの声が聞こえてきた。
ミーアたちが鍋のそばまで行くと、
「それでは、僭越ながら、私が味見させていただきます」

ゲルタが恭しく頭を下げてみせた。
「はて、味見……？」
「はい。万が一の時のため、毒見もかねております。みなさまに、もしものことがないよう、細心の注意を払っておりますので……」
そう説明するゲルタに、ミーアは思わず唸った。
――なるほど……。ゲルタさん、こう見えて……意外とちゃっかりしておりますわね！
ミーアは、こう考えた。
要するにゲルタは、気になるのだ。この鍋の味が……。この絶品野菜鍋の味が、気になるから、自分も食べてみたくなったのだろう。
美食に対する興味は、ミーアも大いに共感するところである。ここは、気持ちよく味見してもらうのが良いだろうが……。
「では……失礼して……」
などと、ゲルタが、鍋の中身を小皿に取ろうとした時のことだった。
「ああ……、ゲルタさん、少しお待ちになって。それで毒見とは、それではいささか味気ないですわ」
ミーアは、彼女を止めると、用意しておいた椀を持ち、鍋に近づく。椀にはすでにキノコの切り身が盛り付けられている。
――この鍋の中身だけでは、まだまだ、未完成。キノコがなければ……。
ここまで、自分たちを率いて、無事に完成まで導いてくれたゲルタを、ミーアとしては最大限に労ってやりたい気分なのである。
そうして、美しく削ぎ切りにしたキノコ、トロキシ茸の上に、野菜汁を注いでいく。
しっかり、キノコが浸り、見えなくなるぐらいまでよそい……それから、ふと気になる。
「ふむ……」
容器の底にほうに張り付いたキノコ。その上に野菜がたくさん入った状態なのだが……。

――毒見と言いましたけれど、ガッツリ全部食べるわけではない……。とすると、もしかしたら、キノコを食べるところまでは……いかないのではないかしら？

せっかく美味しいキノコを入れたのに、食べられないのは可哀想。気遣いの人、ミーアは、そこで一工夫する。すなわち……。

――お汁と、キノコのみで勝負。お野菜はできるだけ入らないようにするのがよろしいですわね！

こうして……ミーア渾身の野菜汁……もとい、野菜ダシのキノコ汁は、完成してしまったのである。

それから、ミーアはニッコリと、満面の笑みを浮かべて、容器を差し出す。

両手で器を持ち、丁寧にゲルタに差し出して……。

「さぁ、どうぞ。味見をしてくださいまし」

朗らかに言うのだった。

第七十八話　奇術のように……

さて、パティたちが連れてこられたのは、地下の一室だった。
曲がりくねった地下道を抜け、いくつかの階段を上り下りした場所……。途中まで、道順を覚えようと思っていたパティだったが、早々に諦めた。
――たぶん、ヤナを見捨てても、逃げ切れない……。
そう確信できたことで、なんだか、ちょっとだけ心が軽くなった。
自分は死ぬわけにはいかないけど、でも、ヤナを見捨てたら生き残れるという状況じゃない。だから、ヤナを見捨てなくてもいい。
そう思えることが……今は救いに感じられた。
「さて、じゃあ、ここでゆっくり話を聞こうかしら……」
そこは、入口が鉄格子になった、地下牢のような部屋だった。部屋の入口付近で、男がヤナを乱暴に下ろす。その衝撃で目が覚めたらしい。
「ん……ううん……え？」
ヤナはぼんやりと部屋の中を見回して、ひっと息を呑んだ。
強気で、しっかり者のヤナを怯えさせるようなものが、そこには揃っていたからだ。
それは、例えば、壁際に置かれた棺桶のような物……その内側には鋭い棘がたくさんつけられていた。あるいは、壁から垂れ下がった武骨な鎖、その先端はいかにも両腕につけて吊るしてくださいとばかりに枷がつけられている。
他にも、先端がギザギザした鞭とか、先端に棘付き鉄球の付いたこん棒とか……なにやら、おどろおどろしい物が、そこには揃っていて……。
こんな部屋に連れてこられて、これから何をされるのか……などと想像すれば、ヤナの反応はとても自然なことのように思えた。

「あら、ふふふ……。この辺の道具が、気になります？」
道具を見つめるパティに気付いたのか、若いメイドは、まるで、楽しむような嗜虐的な笑みを浮かべる。ねっとりと、絡みつくような笑み……けれどパティには、その表情が、どこか作ったもののように見えた。
まるで、怖がらせることが目的なような……そうすることが、尋問の有利になるから、と、計算づくでしているような……そんな印象。思えば、ゲルタも、いつも作ったような、感情の窺えない笑みを浮かべていた。この若いメイドも同じかもしれない。
だからこそ、パティはあえて無表情を貫く。それが、状況を有利にすると信じて……。
反応を示さないパティを見て、若いメイドは、すぐに真顔に戻り、つまらなそうにつぶやく。
「やっぱり、蛇の教育を受けた子どもには、効果が薄いか。ゲルタさまがおっしゃっていたとおり、お前は蛇の教育を受けている……ん？　そっちの子どもには、効果がありましたか」
メイドは、青い顔で震えるヤナを見て、意地の悪い笑みを浮かべる。それから、あの棺桶のような道具に近づいていき……。
「これ、気になりますよね。このトゲトゲ。この赤いの……いったいなんだと思います？　さて、これは、何に使ったのでしょう……？」
メイドはニッコリ笑うと……バンッ！　と思い切り、そのトゲトゲに手を叩き付けた。
「ひぃっ！」
ヤナの引きつるような悲鳴。さすがのパティも驚愕のあまり、ビクンっと体を震わせる。
けれど、当のメイドは涼しい顔で……笑みすら浮かべて……。
「答えは、これ……」
そうして、メイドは手のひらを示す。その手には……傷一つついていなかった。

「これは、奇術の道具。ほら、刺さらないんですよ……。ここにある道具全部、奇術の道具。さっき通ってきた地下道もまたしかり……。驚きましたか？」
楚々とした様子でそう言うと、メイドは小さく首を傾げた。
「本当は、練習がてら、どこまで嘘で情報を吐かせられるか、というのをしようかと思っていましたが、あまり時間がないようですし……それに」
っと、彼女は妖しげな目付きでパティを見つめて……。
「蛇の教育を受けているという、あなたの正体は一刻も早く調べなければならない。ゲルタさまの名を知り、あのクラウジウスに反応をしていた……。いったい、あなたは何者なのか、とゲルタさまは、気にしておられますから……少し乱暴な手段を取らせてもらいますね」
それから、彼女は優しい笑みを浮かべる。
「ああ。大丈夫ですよ。痛いことはしません。それに怖いことも、辛いことも、なにもありません」
そうして、丸い飴玉のような物を取り出した。
「実は、嘘を吐けなくなるお薬というのがありまして……。七日程、腑抜けて正気に戻らなくなるのですが、まぁ、その頃にはすべて終わっていますから、ご安心くださいませ」
ニッコリと、子どもをあやすような口調で言うメイド。けれど、それに応えたのは、パティでも、ヤナでもなく……。
「ほう！　それは、怖いな」
突如、響く声。メイドたちが驚いた様子で視線を巡らせる。っと、鉄格子の向こう側……立っていたのは、
「まったく、飲まされるほうはたまったものじゃないだろうな」
肩をすくめて、苦笑いを浮かべるサフィアスだった……！
少し前にミーアたちから、そのお薬を飲まされそうになっていた張本人である！　飲まされなくって本当に良かったね！
「お前、サフィアス・エトワ・ブルームーン！」

若いメイドは身構えて、キッとサフィアスを睨む。対して、サファイスは、
「おいおい、礼儀がなってないな、メイド」
大貴族然とした、高圧的な言葉を思い切り叩きつけてから、ふっと嘲笑を浮かべる。
「まぁ、幼い子どもをかどわかすような者に、今さら礼儀をどうこう言うのも詮無きこと、か」
それから、彼は、メイドの後ろの男に視線を向けた。
「そちらの男は、察するに悪だくみのお仲間かな……。そういえば、どことなく、シューベルト家の御者に似ているような気がするが……もしや、彼に扮してなにか企んでいた、とか……？」
サフィアスの視線の先、痩せぎすの男がたじろぐように呻いた。
「いずれにせよ、お前たちは、レティーツィアにも、このシューベルト家にも相応しくない。排除させてもらおうか」
「はは。言うじゃないか。腰抜けのサフィアス。剣すらろくに振ったことのない貴族のお坊ちゃんが、悪だくみをするような男を相手に、どう立ち回るつもりだ？」
男は、サフィアスを嘲笑うかのような、笑みを浮かべる。それに合わせて、若いメイドも声を上げる。
「まさか、解雇だと宣告すれば、かしこまるとでも思ったの？　それとも、大貴族の血筋を誇れば、恐れ入るとでも思ったとか？」
メイドの後ろで、男がナイフを抜いた。ギラリと獰猛に輝く刃を前にして、けれど……腰抜けと罵られたサファイスはまるで慌てる様子がなかった。
「ははは、かしこまっていただく必要はないとも。悔しがってもらう必要はあるかもしれんがね……まんまと、囮に引っかかったことをね」
「なにっ！？」
直後、がたん、っと、鋼鉄の棺桶の、底が抜けた。そこから飛び出したのは影……。細くしなやかな影は、疾風のごとくナイフを持

った男に向かって行くと、足を高々と振り上げる。鞭のようにしなる長い右脚が、男の手からナイフを蹴り上げる。そのまま、影は一回転。左足で、驚愕に固まる男の、その胸板を蹴り飛ばした。
男が壁に叩きつけられるのを確認しつつ、その人影は右手を差し出した。瞬間、まるで奇術のように、そこにナイフが落ちてきて、見事にその手の中に納まった。
「刃に毒でも塗ってあったら面倒だ、と警戒したが……杞憂だったかな」
刃に軽く触れてから、キースウッドは肩をすくめて、皮肉っぽい笑みを浮かべる。
「なっ！？　ど、どこから……？」
慌てて後ずさるメイド。そんな彼女にサフィアスは、勝ち誇ったようなドヤァ顔で……。
「無論、隠し扉から、さ。先ほど、自分で言っていただろう、ここは、奇術の道具を保管しておく場所だとね」
洒落たウインクを見せるのだった。

第七十九話　惨劇、笑顔の弾ける料理会にて！

惨劇が――起きてしまった！

地下室にて、子どもたちを無事に保護したキースウッドとサフィアスは、急いで厨房へと向かった。サフィアスの案内で、階段を一気に駆け上がり、息を切らして駆け込んだ厨房で……すでに、事件は起きてしまっていた。

「なっ……こっ、これは……」

目の前に広がる光景に、思わず、キースウッドは息を呑む。

中央で立ち尽くしていたのは……。あわわ、っと顔を青くするミーアの姿だった。そして、その視線の先には、倒れて、ピクピクと震える、老齢のメイド、ゲルタの姿があって……。

「こっ、これは……いったい、なにが……」

なぁんて、わざとらしくつぶやきつつ、キースウッドは察していた。

ミーア姫殿下、ついにやっちまったか！　っと……。

さて……では、ミーアがなにをやっちまったのか、というと……まぁ、大体、予想はできているかもしれないが、念のため……。

時間は少し遡る。

「さぁ、どうぞ、味見をしてくださいまし」

朗らかな笑みを浮かべるミーアから椀を渡されて、ゲルタは……内心で舌打ちする。

――おのれ、帝国の叡智。仕掛けてきたな……。

いつも通りの、張り付けたような笑みの下で、彼女は懸命に思考する。

敵の狙いはなんなのか……？

すでに、解毒剤は飲んでいる。解毒剤といっても、それは、鍋に投入した毒と拮抗させるための、別の毒である。すぐに死んだりはしないが、早く鍋を食べたいのが人情というもの。

ゆえに、ゲルタは焦る。このタイミングで仕掛けてきた、帝国の叡智に……。

――いったい、なにを企んでいる……？

彼女は、ジッと椀……ではなく、ミーアの顔を見つめる。恐らく、椀に何かしらの仕掛けをしたのであろうが……なにか薬を混ぜられたというのなら、どの道、見たってわかりはしない。第一、見てわかるような危険な物を入れるはずがないではないか！

この限られた時間で見るべきは、むしろ、帝国の叡智。その表情や、仕草のほうだ。

ゲルタは蛇だ。

若き日より、クラウジウス家のメイドとして、混沌の蛇の教えに親しんできた。

蛇は心を操る者。相手の心を読み、欲望を読み、感情を読み解く術を会得している。

一番自信のある武器をもって、仇敵、帝国の叡智を打ち倒すのだ！

これは、まさに、ゲルタにとって一世一代の勝負の時といえた。

これまでの人生、数十年をかけて培ってきた……絶大なる自信を持つ読心術をフルに利用し、ミーアの心を読もうとする。

けれど……ああ、けれど！　ミーアからは、なにも読み取れない。

その表情からも、仕草からも、読み取れるのは、ただただ、協力してくれたメイドに対する素直な感謝の気持ちのみで……。

ゲルタが予想していたような、敵意も、怒りも、策略の欠片すらも、読み取ることができなくって。

――これは……どうなっている？　どうなっているのだ？

時間はない。解毒薬の毒が、彼女の身体に回りつつあった。

焦りから、混乱しかけたゲルタであったが……、不意に、思い出したことがあった。

それは、帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンとは何者であるのか、ということ……。

聖女ラフィーナと友誼を結び、貧民街の住人を慈しみ、病院を立て、孤児たちを学校に入れて勉強させる……。かつては、帝国の聖女、慈愛の聖女と言われた、この小娘の本質……それは……善性であるということ。

――ああ……なんだ、そういう……。

ゲルタは、思わず、笑いだしそうになり、それを抑えるのに苦労する。

目を見開き、唇を軽く噛みしめる。それは、見ようによっては、皇女手ずからの厚意を受けて感動しているように見えなくもなかったが……。

……その内心で、彼女は思っていた。

彼女は……苦労していたのだ。笑わないようにするために……。

――なんと、なんと他愛ない……！　帝国の叡智が、まさか、ここまで愚かだったとは……。

思わず、快哉を叫びたくなるゲルタである。

――恐らく、こいつは、裏切り者のイエロームーンから、報告を受けたのだろう。私の部屋から、なにも見つけることはできなかったと……。だから、帝国の叡智は信じることにしたのだ。この私を……シューベルト家に長年仕え、信頼を勝ち得てきた、この私を！

あるいは、もしかしたら、クラウジウス家に仕えていたメイドがどこか別の貴族に仕えているということだけしかわかっていなくて確信がなかったのかもしれない。

そもそもクラウジウス家の裏事情だって、そう簡単に調べられるようなものではない。よくよく考えれば、自分の足跡は、できる限り隠してきた。怪しまれるようなことは、何もないわけで……。

人を疑うのではなく、人を信じることに重きを置く善性。それこそが帝国の叡智の本質。だから、自分を信じることに決めたのだ、と……それを悟った瞬間、ゲルタは勝利を確信する。

今まで、数多の蛇たちが煮え湯を飲まされてきた敵。長きに渡り、積み上げられてきた帝国滅亡の企みを完膚なきまでに破壊しつくした、蛇の仇敵……。帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーン。

それが、他愛もなく笑みを浮かべ、親しげに食べ物を差し出してくる光景に、ゲルタは、スッと胸がすく思いだった。

――ふふふ、自分が毒を盛られたと気付いた時、この小娘はどんな顔をするのやら……。

それが、今から楽しみで仕方なかった。

思えば、ゲルタは、帝室に恨みがあったのだ。

それは、ミーアによって、計画を叩き潰されるよりも前のこと……彼女の祖母に対して、ゲルタは極めて強い恨みを持っていたのだ。

――せっかく、クラウジウスの家で養い、蛇として鍛え、皇帝を絶望の淵に堕とすよう教育したというのに……あの娘は、それに逆らったのだ。許せるはずがない……。いや……そうではなかったか……？

遠い昔の記憶は、ふわふわとして、どこか曖昧だった。けれど、自身の努力を踏みにじられたという気持ちだけは、彼女の中に残り続けたのだ。

そんな憎悪に想いを馳せつつ、ゲルタは、野菜汁を口に入れる。

次の瞬間、口の中を駆け抜けたのは、瑞々しい野菜の風味だった。畑の恵みを一杯に受けた味の濃い野菜、キャロットの甘味、満月大根の辛味、ピリリと味を引き締める香辛料も、実に良いアクセントになっている。

さらに、底のほうにあったもの……コリッと良い歯ごたえのそれは、キノコだろうか？

一瞬、そんなもの入れたっけ？　と思わなくもなかったが、たぶん、シューベルト家の使用人が気を利かせたのだろう。皇女ミーアはキノコが好きだというし、良い工夫である。

――しかし、ふふふ、面白いものだ。まさか、今になってクラウジウス家のことをこんなにも思い出すなんて……。あの子ども……。

そうだ、あの子どもがクラウジウス家のことを口にしたから……いや、それ以上に、あの子どもが、どこか、パトリシアに似ていたから……か。
ゲルタは、改めて、目の前のミーアを……パトリシアの孫娘を見た。
――私が、孫を毒で殺したと知ったら、あいつは、どんな顔をするだろう……。そう考えるだけで、ふふふ、ああ、いけないいけない。また、笑ってしまうところだった。微笑むのは良いが、大笑いしたらダメだ。怪しまれてしまう。しかし、この野菜汁、なかなか美味くできたものだ。死ぬ前に、こんな美味い物を食べて死ねるのならば幸せなことかもしれない。そう思うと、あはは、面白い。うふふ……。
そこで、ゲルタは――異変に気付いた。
なにが、そんなにも笑えるのだろう……？　この状況、そこまで笑えることだろうか？
と。
けれど、そんなことを不思議に思っている自分が、また、面白くって、さらに、ゲルタは苦しむことになる。
これは変だ……なにかが、おかしい……。
歯を食いしばり、目に涙をため、ひくひくっと肩を震わせながらも笑うのを堪える。
っと、不意に、ふにゃ、っと視界が歪んだ。
「げっ、ゲルタさん……？　大丈夫ですの？」
ミーアの心配そうな声。ぐにゃああん、っと歪んだその顔が、子どもが書いた似顔絵みたいな、ヘンテコな顔が、あまりにもおかしすぎて……ゲルタは、ついに吹き出した。
「あはははは、なっ、何ですか、その顔は……あはははは」
「なっ！？」
言われたミーアは、かっちーんと固まった。

――なっ、ひ、人の顔を見て笑うとは、なんたる無礼！　許せませんわっ！
などと、一瞬、キレかけるミーアであったが……。
「ミーアさま、怒る必要はありません。これは、あのキノコの効果です」
シュトリナに言われて、思わず、ミーアは目を剥いた。それから、改めて、笑い転げるゲルタを見て、もう一度、シュトリナのほうに目を向ける。
「ご存知なかったかもしれませんが、あのトロキシ茸は、食べると、笑いが止まらなくなり、さらに体が痺れて動けなくなります」
「え……？　なっ……」
ミーア……思わず、言葉を失う。
なぜって……、だってこれは……ヤバイ事態だからだ！
――や、やばいですわ。これって、わたくし、やってしまったのでは……？
他家のベテランメイドに、ヤバいキノコを食べさせた、わがまま姫。そんな、悪評が付きかねないほどの大事である。ミーアの背中にだらりだらり、と冷や汗が流れ落ちる。
だっ、だだ、だって、シュトリナが大丈夫って言ったじゃん！
っと、頭の中では言い訳の言葉がぐるんぐるん回っていて……だけど、同時に思う。実行犯は、自分だ、と。
それに、よくよく思い出せば、シュトリナは言っていたではないか。イエロームーン家では、死なない毒は毒とは呼ばない、と……。
つまり、シュトリナはこう思ったのではないか？
ミーアが下々の者を使って、怪しいキノコの効果実験をしようとしている……と。
ルードヴィッヒならば、確実に止めただろう。けれど、シュトリナは……、ミーアに恩がある。もともと、毒に親しんできたがゆえに、この程度の毒キノコならば食べさせても悪戯程度で済む、とか、どこかアレな倫理観を持っているのかもしれない。

ならば、自分は止めなくてもいいかも？　とか、そんなことを思ったのではないか？

――いいえ、いずれにせよ、それは後。問題は、わたくしが、こっそり投入した毒キノコで、シューベルト家のメイドを昏倒させてしまったことで……。

あわわ、っと青くなるミーア。その時だった。タイミング悪く、キースウッドたちが厨房に駆け込んできた。

「なっ、こっ、これはいったい……」

言葉を失う者たちに、ミーアは、慌てて言い訳しようとしたのだが……。

「こ、これは……おのれ。あははは。く、は、はかったな、帝国の叡智。うふふ、あはは」

「え……？」

きょとん、と首を傾げるミーアの前で、シュトリナがすまし顔で言った。

「笑いが止まらなくなるのと、体が痺れることに加え、このキノコにはもう一つ、効果がある。それを狙って、このキノコを使ったのですよね、ミーアさま……」

そう言いながら、シュトリナはゲルタのそばにしゃがみ込み、

「もう一つの効果……それは……嘘が吐けなくなること……あなたは、混沌の蛇、ですよね？」

「おのれ、イエロームーンの小娘。我ら蛇の裏切り者め！　あっははははー！」

ゲルタの、大変楽しそうな笑い声が厨房に響くのだった……。

第八十話　楽しい尋問タイム！　あはは！

「まさか……ゲルタが、賊だと言うのか……」
ゲルタの突然の告白に、サフィアスは顔を青くする。
一方で、レティーツィアやダリオ、それに周りのメイドたちは、なにが起きたのかわからず、困惑の表情を浮かべていた。
「……本当に、彼女が……？」
深刻そうな顔で問いかけるアベルに、シュトリナは深々と頷いた。
「間違いないでしょう」
そう言うと、シュトリナは、ゲルタの身体を探る。っと、ほどなくして、彼女の懐から、二つの小瓶が現われた。
「ああ、やはりありましたか……」
そう言うと、シュトリナはゲルタの目の前で瓶を振りながら、
「これは、毒と解毒薬ですか？」
問いかけに、ゲルタは笑いながら「そうだ、あはは！」と答える……なんだか、楽しい雰囲気の尋問だった。
「恐らく、解毒薬を先に飲んでおいて、後から毒を飲むことで、毒は入っていないと証明しようとしたのではないかと……」
腕組みしつつ、顎に手を当てながら、シュトリナは続ける。
「……しかし、このやり方……毒について詳しい者でないとできないやり方です。もしかすると……」
っと、そこで、シオンが血相を変えた。
「まさか、エシャールに毒を渡した者が関係している、ということか？」
シュトリナは、無言で頷くと、再び、ゲルタのそばにしゃがんだ。
「この小瓶をあなたに渡したのは……？」
「あはははは、くっ、だっ、誰が言うか……」
「蛇の仲間。騎馬王国の火の一族出身の男、ですよね？」

「くふふふ、そうだ。あはは、そのとおり」
実にスムーズな尋問である。そして、なんとも……楽しそうだった！
そんな光景を少し離れた場所で興味深げに見守っていたミーアは……ますます、あのキノコへの興味を深める。
「そういえば、地下でこの子たちを保護したのだが……」
っと、サフィアスが思い出したように言った。見れば、そこには、ヤナとパティの姿があった。
「はて……？　地下とは？」
小首を傾げるミーアに、キースウッドが手短に地下での出来事を説明する。
「まぁ、サフィアスさま、そんな危ないことを……っ！」
レティーツィアが顔を青くするも、サフィアスは笑って首を振った。
「なぁに、君や、ミーア姫殿下のお料理会と比べればこの程度の危険など……」
「サフィアス殿、本音が……」
キースウッドに、耳打ちされて、ハッとした顔をしてから、サフィアスは一度、咳払い。
「君や、ミーア姫殿下のお料理会を守ることと比べれば、この程度の危険など安い物さ。それに、帝国貴族として、幼い子どもたちが連れ去られるのを黙って見過ごせないし。なぁ、キースウッド殿」
「ええ。そのような、正義にもとるような行動、決してできません。当たり前です」
キリリッとした顔で頷きあう、二人の男たち……。そんな彼らを、ダリオが、シラーっとした目で見つめていたが……まぁ、それはともかく。
「パティ、それにヤナ、二人ともケガはありませんの？」
念のためにそう尋ねれば、二人とも一応は頷くものの、やはりショックだったのか、表情は冴えない。特に、パティはうつむいたま

ま、ミーアのほうを見ようとしなかった。
――ふぅむ、これは、よほど恐ろしい目に遭ったのかしら……？
なんとかしなければ、ますます、パティが心を閉ざしてしまいそうですわ。
深刻な顔をするミーアである。
「しかし、地下にいた賊といい、ゲルタといい、いったいなにを企んでいたというのだろう。ミーアさまが、こうして料理会にやってくることを見越して潜入した、というのは、少し違う気がするが……」
不思議そうにつぶやくサフィアスに、答えたのはシュトリナだった。
「恐らく、蛇は、レティーツィアさんを人質にして、サフィアスさんを謀反人に仕立て上げようとしたんじゃないかと思います」
「なっ！　お、オレを謀反人に……！？　レティーツィアを人質に、それは……」
口をパクパクさせるサフィアスだったが、やがて、愁いを帯びた顔で……。
「いや、そうか……確かに、レティーツィアが人質になっているとなれば……ミーアさまに反旗を翻すこともあるかもしれないな……。君は、オレにとって何よりも大切な存在だから……」
「……まぁ、サフィアスさま」
などと、まぁ、ラブラブな二人はさておき……。
シュトリナは、腕組みしたままつぶやく。
「……イエロームーン家でも、昔、そんな作戦が検討されていたことがあったし……。狙いどころとしては、ちょうどいいから間違いないと思います」
ちょうどいい、と評されて、サフィアスが、ヒクっと頬を引きつらせる。
「ああ……ええと、サフィアスさん個人の資質ではなく、おかれている立ち位置が、ですから、お気になさらず」

ニッコリと可憐な笑みを浮かべつつ、フォローを入れるシュトリナ。相変わらず、如才ない態度である。
「なるほど。サフィアスさんは、ブルームーン家の次期当主。そのような方とわたくしとが争えば、混乱は必至。蛇の考えそうなことですわね」
ミーアの改革に、最も反感を抱いているのは、やはり中央貴族の者たちだ。その一番のまとめ役たるブルームーン家とミーアの仲がこじれれば、帝国が二分されてしまうかもしれない。その混乱に乗じて、食料の供給が滞れば、飢饉が起こり、疫病が流行り……ギロチン！
ブルルッと背筋を震わせつつも、ミーアは思考を転じる。
恐ろしい想像ばかりしていては、体がもたない。楽しい想像も織り交ぜなければ……。ということで、先ほどから気になっていたことを、シュトリナに聞いてみることにする。
「ところで、リーナさん。……なんか、さっきから、ちょっぴり楽しそうですわね、あのキノコって飲ませると、こんな風になりますのね」
「ああ、詳しい効能までは、ご存知ありませんでしたか？」
不思議そうに首を傾げるシュトリナに、ミーアは重々しく頷く。
「ええ、まぁ……。わたくしも、何もかもを知っているというわけにはいかないので」
実際には、ほぼ何も知らないミーアなのであるが、それはともかく……。
「あのキノコ、トロキシ茸は、食べると、こんな風に笑いが止まらなくなります。しばらく笑い続けることになるのですが、それがとっても苦しくて、七日間ぐらい、魂が抜けたような状態になってしまうんです」
「ほほう……。それは、実に興味深いですわ」
ミーアが楽しそうに笑うのを、渋い顔で見つめるサフィアスとキースウッドであった。

第八十話　楽しい尋問タイム！　あはは！（後書き）

今日はワクチン三回目なのです。
なので熱で倒れた場合は、来週、更新がないかもしれません……。

第八十一話　気配りの人、ミーアの配慮！

「それで、蛇の仲間は、どこにおりますの？」
ミーアは改めてゲルタに問う。と、
「も、もう、この国には、うぐ、いない……あはは、残念だったな、帝国の叡智」
「本当かしら……？」
ミーア、かたわらのシュトリナに目を向けると、シュトリナは小さく頷き、
「今のゲルタさんが嘘を吐くことがとても難しいですから……」
「ふぅむ……」
腕組みするミーアに変わって、シオンが口を開いた。
「毒を残し、事が起きる頃には、自身はすでに遠くに逃げおおせている。このやり方は、エシャールの時と似ているな……。毒を渡した男の名と、特徴は？」
「ぐ、な、名前は、火燻狼（カ・クンロウ）。火の一族の、毒使い……。そ、それと、ふふふ、古き蛇、ヴァイサリアンの男も……あはは、一緒に、あっはははは」
「ヴァイサリアン族……？」
ミーアは、思わず、ヤナのほうに目を向けた。すると、ヤナが、まるで怯えた様子で体をすくめた。
「ああ……ごめんなさい、ヤナ。別に、あなたを責めているわけではありませんわ。わたくしとしたことが、うっかりしましたわ」
ミーアは安心させるように、ヤナの頭を撫でる。
「敵があなたと同じヴァイサリアン族の出だからといって、あなたにはなんの関係もないことですわ」
と、保証してやりつつ、
「火燻狼という方については、慧馬さんに聞いてみるのがいいかし

ら……そして、やはり、気になるのはヴァイサリアン族の男のほうですけど……」
「……バルバラが、セントノエルに渡った時に手引きした男と同一人物……と見るべき、かもしれないな」
難しい顔でつぶやくアベルに、ミーアは静かに頷いた。
「そうですわね……。しかし、考えることがまた山積みになってまいりましたわ」

やがて、皇女専属近衛隊の者たちの手で、ゲルタは連れていかれた。シューベルト邸の部屋で、尋問の続きをすることになったのだ。
「ミーアさま、念のために、リーナも一緒に行こうと思います」
命に別状はないとはいえ、一応は、毒キノコを食べたゲルタである。彼女からは、まだ聞きたいことがあるし、万が一、死んでしまったら『毒キノコから始まる蛇の逆転ストーリー』が始まってしまうかもしれなかったので、シュトリナがついていくのは、ありがたい話であった。ということで……。
「ああ。そうですわね……でしたら、ベル、申し訳ないけど、あなたもリーナさんに同行してもらえないかしら？」
「え……？　ボク、ですか？」
不思議そうに首を傾げるベルに、ミーアは重々しく頷く。
「リーナさんのそばで、あのキノコについてしっかり学んでくること。毒キノコの恐ろしさをしっかりと教わってくるとよろしいですわ。キノコは、素人が簡単に手を出すと痛い目を見る、とっても興味深いものですから……」
極めて、まっとうな識見を披露するミーアである。惜しむらくは、ミーアが自分のことを、『割とキノコの熟練者だ！』と認識している点であるが……。
「なるほど、わかりました」
ベルは、キリリと皇女っぽい、凛々しい顔で頷いて、
「行きましょう、リーナちゃん」

四大公爵家令嬢、シュトリナを率いて、調理場を出て行った。
スッと伸びた頼もしくも、頼りがいのある背中を見ていると、帝国の未来もこれで安泰であろうことが、確信できて……確信……、確信？　安泰……？　いや、そうでもないか。
まぁ、それはともかく……。
「しかし……今回は、ミーアにしては、珍しく攻撃的な手段をとったな。敵にとはいえ、あんな毒キノコを食べさせるとは……」
シオンが、意外そうな顔で言った。
「察するに、サフィアス殿が巻き込まれそうだと知って、怒りが抑えきれなかったのかな？　まぁ、実際、俺も、エシャールを陥れた者が関わっていると聞けば、同じように強硬な手段に出ていたかもしれないが……」
シオンの問いかけに、一瞬、ポカンと口を開けかけたミーアであったが……。
「……ええ、まぁ、大体、そんな感じですわ」
ミーアは、重々しく頷いてみせる。腕組みしつつ、いかにも、すべて狙ってやりました！　と言った様子で、うんうん、頷く！
っと、それを、シラーっとした顔で見つめているキースウッドと微妙に目が合った。
「あら、キースウッドさん、なにか……？」
「……いえ。まぁ、そういうことなのでしょう。ええ。そういうことにしておきましょうか」
なにか、こう……微妙に納得のいかない顔ながら、無理やりに同意するキースウッドである。一方で、
「ミーア姫殿下が……サフィアスさまのために怒りを……それで、あのようなキノコを……」
胸元で、両手をギュッと握って、レティーツィアが感動に目を潤ませていた。
サフィアスが大好きなレティーツィアは、サフィアスのことになると、時々、賢さがマイナス五十になってしまう人であった。ミー

アは、そんなレティーツィアの手をひっしと掴み……。
「ええ。実は……、今回、わたくしは、そのために、ここにやってきましたの」
熟練の波乗り士にして、どんな小さな流れにも乗る海月でもあるミーアは、生じた流れを見逃すことはない。
「実のところ、先日、わたくしのところに、サフィアスさんが謀反を起こすとの情報が入りましたの。もちろん、わたくしは、サフィアスさんのことを信じておりましたけれど……、しかし、なにか胸騒ぎがしましたの」
いけしゃあしゃあとそんなことを言うミーアである！　が……、今回は特に罪悪感はなかった。
なにしろ、レティーツィアと仲良くしようという段で、サフィアスに対する疑いは綺麗さっぱり消していたからだ。
サフィアスが完全に無罪だとわかる前から、信じていました、と言えるギリギリのタイミングだったわけだが……ともかく、ミーアは、サフィアスのことを信じていたという自負が、ミーアにはあったのだ。
ゆえに、堂々と胸を張って言った！
「サフィアスさんは、わたくしにとっても大切な人物ですし、もしもなにかあれば一大事と、こうしてやって来たのですわ。まさか、蛇がこのようなところに紛れ込んでいるとは思ってもみませんでしたけれど……」
「申し訳ありません。ミーアさま、我がシューベルト家のメイドが、このようなことを……」
頬を青くするレティーツィアにも、ミーアは朗らかな笑みを返す。
「謝罪は不要ですわ。彼らは、どんな場所にも隠れ潜んでいる、とっても恐ろしい存在ですから、あなたのせいではありませんわ」
「ですが……」
っと、空気が張りつめそうになった、その瞬間のことだった。
「お姉ちゃん……僕、お腹空いた……」

キリルが、ヤナに甘える声が聞こえてきた。それで一気に、その場の雰囲気が弛緩する。
「ああ。そうでしたわね。すっかり忘れておりましたわ」
ぽんっと手を叩き、ミーアは頷いた。
「確かに、まだお食事をしておりませんでしたわね……」
それから、ミーアは野菜鍋のほうを見た。
「みなで作ったお鍋はございますけれど……」
手元には解毒薬と毒がある……。解毒薬を入れれば、無害化できるのかもしれないが……。
「さすがに、毒の入った食べ物を、危険を冒して食べるなんてことはできませんわね。もったいないですけど、そこのお鍋の中身は破棄してしまいましょう……それで、新しいナニカ、を作るのがいいのではないかしら？」
ミーアが、ごくごく気軽な様子でトンデモないことを言い出した！
「よくよく考えれば、お料理会に、ベルやリーナさんとキリル、それにパティやヤナも参加していませんでしたし……キースウッドさんやサフィアスさんも、お料理会に参加したかったのではないかしら？」
気配りの人、ミーアは、周囲への配慮に余念がない。
「いやいやいや、ミーア姫殿下……。そ、そのぅ、そう、もう食材を使い切ってしまったのでは？」
慌てて、止めに入るサフィアス。であったが……。ミーアは、実になんとも愛らしい笑みを浮かべて、
「ふふふ、それならば、問題はありませんわ。ほら」
そうして、彼女が指し示した先、未だ、山盛りの野菜が残っており……。
「まだまだ、食材が余っておりますし。それに、お野菜というのは、それほど長持ちするものではありませんし。ここは、トラブルも解決したということで、改めてお料理を……」
「い、いや、しかし、さすがにこのようなことがあった後で、お料

理というのはいかがなものかと……」
キースウッドが横から援軍を出すも……。
「このようなことがあったから……ですわ」
一転、ミーアは真面目な顔をする。それから、近くにいたヤナの頭を撫でて……。
「ごめんなさいね、ヤナ。怖い思いをさせてしまいましたわ」
「い、いえ……あの、えっと……」
急に撫でられたことで、頬を赤くするヤナ。ミーアは優しい笑みを浮かべてから、
「子どもたちの今日の思い出を、こんなことで終わらせたくはありませんの。楽しいお料理会の記憶を、この子たちに用意してあげたいのですわ」
「ぐぬ……」
思わず、キースウッドは言葉を失う。
ミーアの吐いた正論に対して、反論する言葉を持たなかったのだ。
確かに、地下道で怖い思いをした子どもたちが、このまま今日を終えるのは可哀想なこと。それを放置するのは、シオンの従者に相応しくないことかもしれなくって……。
一方で、サフィアスも適切な反論を思いつけずにいた。
ふと見れば、愛するレティーツィアがやる気になってしまっている。
「地下室で頑張ったサフィアスさまのためにも……！」
などと気合の入ったつぶやきと共に、腕組みを始めている。そのうえ、子どもたちのためと言われてしまえば、強硬に反論するのは感じが悪いだろう。
そうして、苦し紛れに彼らが視線を向けた先、そこには最後の砦、ダリオが……ダリオが！　……いなかった！
「おや、ダリオは……」
「申し訳ありません。サフィアスさま、ダリオは、ゲルタのことがショックだったらしく、少し部屋で一人になりたいと……」

などと言うレティーツィアの声を聞いて、サフィアスは、なんとなく察する。
義弟よ……逃げたな！　っと。
「おのれ、逃げるとは、情けない……。義弟よ！」
なぁんて……ちょっぴり前の自身の行いなど、ぽーいっと記憶の彼方に投げ捨てたサフィアスであった。

第八十一話　気配りの人、ミーアの配慮！（後書き）

ちなみに、気になるクラウジウス家のことは、次回更新にて……。

第八十二話　蛇の呪いと消えた侯爵

さて……楽しい料理会が終わったところで、タイミングよくシュトリナから報告が入った。

ゲルタから聞き取りを行った結果、ゲルタと、同じくシューベルト家に仕えていた若いメイド、さらに、一緒にいた男の三人がレティーツィアの誘拐を企てていたことはほぼ確実らしい。

「それで、サフィアスさんに謀反を起こさせようとした、と……。酷い話ですわね」

ミーアは、つぶやきながら、サフィアスのほうを見た。サフィアスは、やっぱり、ショックだったからか、どこかぐったりしているように見えた。

そして、不思議なことに、そばにいたキースウッドもぐったりしていた！　なぜだろう？

はて……？　と首を傾げつつも、ミーアはシュトリナのほうに視線を戻した。

「さすがは、リーナさん。素晴らしい手際ですわ」

そう褒めれば、シュトリナはいつもと変わらぬ可憐な笑みを浮かべて。

「ありがとうございます。ベルちゃんの前だったので、ちょっぴり張り切ってしまいました」

そう言ってシュトリナは、なぜだろう……指をワキワキ動かしながら言った。

その後ろでは、ベルが……微妙に引いた顔をしていた！

「あら……いったい、どうやって……まさか！」

っと、ミーアもここで思い至った。

「あのキノコで、ただでさえ笑いやすくなっているゲルタさんを、さらにくすぐって尋問した、とか……？」

ごくり、と生唾を飲むミーア。周囲の者たちにも、騒然とした空気が流れかけるが、シュトリナはいかにも心外だという顔で首を振った。
「くすぐるだなんて……そんなはしたないこと、リーナはしません。ただ、くすぐられる、と思っただけでも、くすぐったくなってしまうのが人というものですから……。それを見せれば、簡単でした。うふふ」
ニッコニコしながら、指をワキワキするシュトリナ。
「リーナちゃん、すごく容赦なかったです……。未来でもすごくくすぐるのが上手いから、ボク、リーナちゃんが本気で怒るようなことはしないようにしてるんです」
本気で怒らない、ギリギリのところまでならば踏み込みそうな口調で言うベルである。まぁ、仲がよさそうでなによりだ。
「これで、今回の件に関しては、おおむね聞き出せたと思いますが、ミーアさまご自身でも、尋問なさいますか？」
「ふぅむ、そうですわね……」
正直、あまり尋問とか興味はなかったのだが……、あのキノコの効能については、少しばかり興味がある。
――あのキノコの味は気になりますし……。やはり、直接、話を聞いてみるのがいいかしら……。
などと思いつつ、ミーアは人選を始める。
下手にキノコのことを聞く、などと言い出せば、止められそうな気がするので、人選は慎重にしなければ……っと、あたりを見回したところで……。
「あの、ミーア、お姉さま」
不意に、ドレスを引っ張られた。見ると、パティが、真っ直ぐに見つめていて……。
「お願いがあります。ゲルタ……あの、メイドの聴取に立ち会わせてください」
「ふむ……？」

ミーアは、ちょっと驚いた顔でパティを見た。その、どこか思いつめたような表情に、小さく首を傾げる。
――パティがこんなことを言い出すなんて、珍しいですわね……。
それから、しばしの黙考。
パティの秘密は、まだ、誰にも言っていないことだった。なので、いざという時のことを考えて……。
「……そういうことでしたら、わたくしとパティで、話を聞くことにしましょうか……。リーナさん、彼女はまだ、しびれて動けないんですわよね？」
「嘘も吐けませんし、体も動きません。話を聞くには最適の状況だと思います」
シュトリナの言葉に頷いてから、ミーアは、視線を転じて言った。
「でしたら、アベルとシオン……それにサフィアスさんは、残り二人から話を聞いていただけるかしら？」
素早く役割を割り振ると、ミーアは厨房を後にした。

ゲルタが運び込まれたのは、シューベルト邸の一室だった。
念のために、と後ろ手に縛られて、椅子に座らせている老境のメイド、ゲルタ。心なしかぐったりして見えるのは、シュトリナのきびしーい尋問で消耗しているからだろうか。
彼女はミーアを見ると、顔に笑みを浮かべて言った。
「これは、これは、帝国の叡智……。敗残の身を嘲笑（わら）いにくるとは、趣味が悪い。あはは」
「……笑っているのは、あなた自身だと思いますけれど……」
ミーア、珍しく適切なツッコミを入れつつ、ゲルタの前に腰かける。それから、パティも隣に座るように促し……。
――さて、どう話をしたものかしら……？　というか、よくよく考えると、パティがなにを聞きたいのかも分かりませんし……。
っと、パティのほうを窺おうとしたところで……。
「しかし、まさか、クラウジウス家のことを、今さら調べられると

は思っていませんでしたよ……。察するに、あの女……皇妃パトリシアの差し金でしょうか……まったく、あの小娘、死んだ後でも我らの邪魔をするとは……」
その言葉に、思わずミーアは瞠目する。
「クラウジウス……それに、パティ……パトリシアお祖母さま……。あなた、お祖母さまをご存知なんですのね？」
言ってから、ふと気付く。
――あら？　ということは、もしかしてパティも、この方のことを……知っている？
素早くパティの顔を見るも、パティは相変わらずの無表情を貫いていた。
「白々しい。私がクラウジウス家に仕えていたことも、すでに調べているのでしょう？　下手な芝居など不用。驚いたフリなどしなくても構いません」
ゲルタは吐き捨てるように言ってから、
「すでにわかっていると思いますが、パトリシアを育てたのは、私と母です。けれど、蛇としての教育を、きっちりと施してやったというのに、あいつは裏切った。クラウジウス家に養ってもらいながら、なんという恩知らずな……」
「その、クラウジウス家とは一体、なんなんですの？」
ミーアは、以前から疑問に思っていたことを尋ねてみる。と、ゲルタは眉をひそめて。
「嘆かわしい。帝室の姫たる者がそんなことすら知らぬとは。初代皇帝陛下のお志を忘れてのこの体たらく、まったくもって、嘆かわしい」
やれやれ、と首を振る。
「このような事態のために、クラウジウス家はあったというのに……あの恩知らずの小娘のせいで……」
「ええと、ですから、このような事態……とは、どういうことですの？」

「説明するようなことでもありませんよ……。裏切り者のイエロームーンのことは、すでにご存知でしょう？　クラウジウス家もまた、あれと似たようなもの。初代皇帝陛下の立てた素晴らしい計画を実行するための家なのです。イエロームーン家は暗殺により、陛下の計画の実現のために尽力する。対して、クラウジウス家は、帝室の腐敗に対する安全装置」

「帝室の腐敗……？」

「あなたのような者のことを言うのですよ。ミーア・ルーナ・ティアムーン。帝国の叡智」

ゲルタはミーアを睨みつけながら言った。睨みつけ……てはいるのだが、口元はニヤニヤと笑っているものだから、余計に不気味だった。

「人は弱い者。破滅の志が薄れてしまうことがある。まして、国の頂点たる皇帝になってしまえば、今の生活に満足してしまうかもしれない……。そうならぬよう、時の皇帝を絶望させ、初代皇帝陛下の御心から離れないようにすることこそが、クラウジウス家の使命だった」

「パトリシアお祖母さまも、その教えを受けていた……？」

「そう……。パトリシア。あの裏切り者の小娘。貧しい妾の小娘が……。皇妃にまで仕立て上げてやったのに、蛇を裏切った。許されざる裏切りです。だから……」

っと、そこで、ゲルタはニヤリ、と口元に笑みを浮かべて、

「だから、報いを受けたんですよ。あの小娘の弟……ハンネス・クラウジウスは、蛇の呪いを受けた」

ハンネスの名が出た時、パティがピクンッと体を震わせた。

「蛇の呪い……それは一体なんですの……？」

ミーアもまた、声を震わせる。こちらは、単純に「呪い」という恐ろしげな単語にビビっちゃっただけだが……。まぁ、それはさておき。

「ハンネス・クラウジウスは、クラウジウス家の当主でした。皇妃

パトリシアを思いのまま操るための人質でしたが……けれど……あの男は、姉とは違い、見どころがあった。毎日、欠かさずに『地を這うモノの書』を読みふけり、関連した様々な書物をも読み漁っていたのです。あれは、まるで、蛇にとり憑かれたようだった」

ゲルタは、そこで、意味深に言葉を切って、

「そして、ある日、ハンネスは忽然と姿を消した。あの皇妃の行動に、怒った蛇によって呪い殺されたのか、はたまた、連れていかれたのか……。まぁ、逃げたにしても、蛇がなければ、生きてはいけぬ身。今頃は死んでいるでしょう。ふふふ、いずれにせよいい気味ですよ」

実に楽しげに笑うゲルタ。そんなゲルタに、おずおずと、パティが声をかける。

「ゲルタ……あなたは、本当にゲルタなの？」

困惑を顔いっぱいに浮かべるパティ、その顔を見て、ゲルタはかすかに目を細める。

「ああ……小娘……、その目。やはり、お前は似ていますね。あいつに、あの役立たずのパトリシアに……ふふふ、もしやお前はあの女の生まれ変わり？　それならば、呪われるがいい。お前も、帝国の叡智も、なにもかも……」

まるで、酔っ払っているかのような、気味の悪い抑揚で、ゲルタが笑い転げていた。

それを見たミーアは、なんともうすら寒いものが背筋に這い上がってくるのを感じずにはいられなかった。

さて、部屋を出たところで、ミーアはチラリ、とパティのほうを窺った。

パティは、黙ってうつむいていた。

「ええと……パティ？」

さすがに、これは、事情を説明する必要があるだろう、と察するミーアであるが、さて、なにを話したものか……どう誤魔化したも

のか……。
むぅうっと唸りつつ考えていると……。
「……弟に……ハンネスに会わせて……」
ぽつり、と小さなつぶやきが聞こえて……。次の瞬間、パティがばっと顔を上げた。
「ハンネスは……ハンネスはどこにいるの？　私、会いたい……。会いたい」
自分のドレスのスカートをギュッと掴んで、パティは言う。ポロポロ、ポロポロ、とその目からは涙がこぼれて……けれど……その顔は、やはり表情を失ったまま。まるで、表情を出すことを固く禁じられているかのように……。
否……ように、ではない。実際に、そうだったのだろう……。きっと、少女から表情を消し、表情すらも自身で使いこなし、相手を誘導するように、などと……蛇は教え込んだのだろう。
「パティ……」
そんな少女に、ミーアは、なにも言えなくて……。
「会いたい……」
かすれたパティの声を聞いていることしかできなかった。

第八十三話　ルードヴィッヒの戦力分析、そして……

「そうか。ミーアさまが、御自ら……」
シューベルト邸での事の顛末を聞いた時、ルードヴィッヒは思わず、と言った様子でため息を吐いた。
「シューベルト家に生息していたキノコの毒を用いて、下手人を撃退……。その後の聞き取りもスムーズに……。むぅ、さすがはミーアさまだ」
臨機応変、融通無碍。帝国の叡智の柔軟極まるやり方に、思わず瞠目するルードヴィッヒである。陽の光に照らされて、その眼鏡のレンズがキラリと白く光った。
「それにしても、まさか、シューベルト侯爵家に蛇が潜んでいたとは……」
サフィアスが謀反を起こす、と言われ、半信半疑だったルードヴィッヒであるが、それでも、調査を進めていた。
ブルームーン派の貴族の動向を探りつつ、謀反を起こすとしたら、誰の差し金であるのかを、詳しく検討していたのだが……。
「このタイミングで、あいつが帝都にいないのが悔やまれるな」
森の賢者ガルヴの兄弟弟子、ジルベール・ブーケ。通称ジル。
帝都の行政と中央貴族に詳しい後輩は、現在、クラウジウス家の調査のため、旧クラウジウス領に出向いていた。
彼であれば、ブルームーン派の動向に関しても、もっと楽に調べられたかもしれないのだが。
「やはり、人脈は大事だな。こちらの伝手ではどうしても時間がかかってしまう」
まだ、ブルームーン派の貴族すべての動向はつかめてはいない。けれど、ある程度、揃ってきた情報によれば、現在、サフィアスが謀反を起こしたとして、協力しそうな者は皆無だった。

「それはそうだろうな……」
ルードヴィッヒは、思わず、そうつぶやいてしまう。
現在、帝国の食料供給のキーマンは、紛れもなくミーアであった。
最大の食料供給地、ペルージャン農業国は、ミーアに全面的な支持を示している。同じく、小麦の供給地であるルドルフォン辺土伯、ギルデン辺土伯も同様だ。国外からの輸入も、ミーアの築いた人脈、フォークロード商会が担っているこの現状……。各地で、農作物の不作が起きる中、少しでも自領の食料状況がわかっている貴族ならば、ミーアを怒らせたら不味いことはわかるはず。
確かにボンクラ貴族の中には、自領の食料事情など意に介さない者もいる。サフィアスが帝位についたほうが都合がいいからと、謀反に協力する者もいるかもしれないが……そうした者たちに対して押さえとなるのが、ミーアの人脈だ。
すなわち、聖女ラフィーナの存在である。
権力志向者にとって、聖女ラフィーナというネームバリューは非常に大きな意味を持つ。
「皇帝陛下の意に反すること、ミーア皇女殿下に逆らうことはできても、ヴェールガの権威に逆らうことはできない。こう考えると、あらゆる意味で、今、ミーアさまに謀反を起こそうなどと言う者はいない。だが……」
ルードヴィッヒは、あえて、そこに付け加える。
「……それも、将来においては定かではない」
喉元過ぎれば熱さを忘れるのが人と言うものの本質。食料危機が終わってしばらくすれば、ミーアの影響力が弱まることも考えられる。
「そして、次の帝位が定まらぬ限り……ブルームーン家が抱える潜在的な危機は解消されない。つまるところ、サフィアス殿は、蛇の誘惑を受けやすい立場であり続けることになる。ミーアさまが、女帝になってしまわない限りは……」
ルードヴィッヒは、そこで改めて、想像を巡らせる。

「女帝ミーア陛下、か……」
その夢の実現性を、ルードヴィッヒは考える。
ミーアが女帝に着く際、無条件に味方になってくれそうな勢力はどの程度か。
現皇帝は、恐らく支持するだろう。というか、あの人は、たぶん、ミーアのやることに一切、反対はしないはずだ。
ルドルフォン辺土伯、ギルデン辺土伯も、恐らく心配ない。イエロームーン家、レッドムーン家の存在も大きい。
四大公爵家の内、二つが味方に付いているという状況はとても心強いものがある。が……。
「レッドムーン家は良いが、軍部のほうはどうか……。影響力が強いとは言っても、黒月省とレッドムーン家は一体ではない」
帝国軍の軍政改革はいずれ手掛けなければならないことだろうが、それが女帝の手によって行われることを、軍がどう思うのか……。
「頭の固い武官はいるだろうから、黒月省は微妙だ。逆に、ミーアさまの農地改革について好意的なのが赤月省だ。外交面に強い緑月省も、どちらかといえばミーアさまの味方だろうが、同じく外交に強いグリーンムーン家は微妙といえば微妙……」
ルードヴィッヒは、恐らく、現時点でもミーアは女帝になれるだろうと踏んでいる。けれど、同時に、今、それを表明すれば苦労も多いだろうというのが、苦しいところだった。
「ミーアさまを、帝国内の問題のみに縛り付けることは、大陸の損失になる……」
帝国内のことは、早急に盤石にしておきたいルードヴィッヒである。そのためには、もっと味方が必要だった。よりミーアのしようとすることを理解し、協力できるような有力な貴族が……。
「イエロームーン家によって、国外に脱出した貴族たち……彼らの力を借りられるかどうかが、大きな分岐点なのかもしれない」
と、その時だった。不意に、執務室の扉をノックする音が聞こえてきた。

「ルードヴィッヒ、いるかしら？」
「これは、ミーアさま……」
来客が、自らの主だと知って、彼は慌てて扉へと向かう。
ドアを開けると、そこには、わずかばかり思いつめたような顔をするミーアの姿があった。
「ミーアさま、どうかされましたか？」
不思議そうに首を傾げるルードヴィッヒに、ミーアは言った。
「実は、旧クラウジウス侯爵領に行きたいと思っているのですけど、その準備をしていただけないかしら？」
思いのほか真剣な顔をするミーアに、ルードヴィッヒは一瞬息を呑み、けれど、すぐに頷いた。

第八十四話　父と娘と……1

「ところで、ミーアさま、クラウジウス領へ行くことは、陛下はご存知なのでしょうか？」
その問いに、ミーアは、きょとりん、と首を傾げる。
「へ？　お父さまですの？　まだ言っておりませんけれど……。まぁ、大丈夫なのではないかしら？　お父さまならば、これぐらいは……」
などと軽ーく言うミーアに、珍しく、ルードヴィッヒが厳しい顔をする。。
「いえ。やはり、皇帝陛下には、きちんとお伝えしておくべきかと……。これが、ミーアさまの勝手な行動ととられれば、他の貴族に責める口実を与えることになるやもしれません」
「ふむ……まぁ、ルードヴィッヒがそういうのでしたら……」
ミーア、ここは素直に頷いておく。
なにしろ、旅に出るためのもろもろの手配をしてくれるのはルードヴィッヒである。それに、なんだかんだ言いつつも、ルードヴィッヒの言うとおりにしておけば間違いはないのだ。
ミーア・イエスマン・ルーナ・ティアムーンは、自分の考えに至らぬ点が多々あることを知り尽くしている。ゆえに、ほどほどのところで自分で思考することを放棄して、「いいね！」と言うことを心掛けているのだ。
信頼がおける部下に任せてしまったほうが間違いがない。これはミーアが深く悟るところであった。
ということで、その日の夜、ミーアは早速、父の部屋を訪れた。
「おお。ミーア！　我が愛しの娘よ。パパに何か用かな？　もしや、ベルとパティと一緒に、どこか遊びに行くとか、そんな愉快な話なんじゃ……？」

先日の、乗馬大会を見たのが、よほど楽しかったらしい。上機嫌に笑みを浮かべる父である。
いろいろお願いするには良い時のようだぞ？　と敏感に察したミーアは、挨拶もそこそこに本題に入る。
「お父さま、実は、わたくし、クラウジウス家に行こうと思っておりますの」
「なに？　クラウジウス家……？　それは、母上のご実家のか？」
びっくりした様子で、目を見開く父に、ミーアは重々しく頷く。
「ええ。少し、パトリシアお祖母さまについて興味がありまして……」
「だが、クラウジウス侯爵家は、すでに……」
怪訝そうな顔でつぶやく父を見つめて、ミーアは言った。
「ええ。後継ぎがおらずにお取り潰しになったとは聞いておりますけど……でも、別に館を壊したとか、そういうことではありませんのでしょう？」
「そうだな。確かに、館は、担当の者が管理している。だが、そうか……。ミーアがクラウジウス家に……」
皇帝、マティアス・ルーナ・ティアムーンは、どこか遠くを見るような、感慨深げな目つきで、虚空を眺めた後……。
「ところで、それは……彼……アベル王子も一緒に行くのかな……？」
突然の問いに、ミーア、目をぱちくり。
「……はぇ？　あ、ああ……ええ。まぁ、アベルも一緒だと思いますけど……」
せっかく、ティアムーンまでついてきてくれているのだ。ここで、アベルだけお留守番ということにはならないだろう。ついでに言えば、慧馬も同行することになるだろうか。
――慧馬さんは、火燻狼を追いかけたいかもしれませんから、確認が必要ですわね……。
などと考え事をしていると、おもむろに立ち上がった父が……。

「ふむ！　ならば、私も行こう」
トンデモないことを言い出した！
「……うん？」
ミーア、一瞬、聞こえた言葉が理解できずに首を傾げる。
「ええと、お父さま、今、なんと？」
「ん？　聞こえなかったのか？　お前たちと共に行こう、と言ったのだが……」
皇帝マティアスは、おもむろに席を立ち上がり、ぐっぐっと体をひねってから、
「実は、ここ最近、レッドムーン公とお前のところの隊長に付き合ってもらって、体を動かしていてな」
「はっ、初耳ですわ！」
バノスの指導により運動をする父……。思わずミーアは、筋骨隆々になった父を想像して……。
――ふむ！　意外といいですわね！
などと思ってしまうミーア。大男とミーアの相性はとても良いのだ。
「それでつくづく城の中に引きこもっていては、健康に悪いと実感していたところだ。たまには、旅にでも出なければな」
わはははは、と豪快な笑い声をあげる父に、ミーアは慌てて言った。
「いえ、お父さま……いえ、陛下。皇帝陛下が、そのように気軽に城を出るなど、できるはずがございませんわ。そもそも、陛下がいなければ、この国の政（まつりごと）は……政は？」
っと、ミーア、そこで言い淀む。
一瞬、「あれ？　お父さまがいなくっても、別に問題ないんじゃね？」と思ってしまい、言葉に詰まったのだ。それを知ってか知らずか、父は笑みを崩すことなく、
「はははは、なにを言うか。私がいようがいまいが、さして、政治に関係あるまい」
身もふたもないことを言い出した！

――いや、まぁ、そうかもしれませんけど……。
思わず、ぐぬ、っと唸るミーアである。
「というか、どちらかというと、今現在、政の中心人物はお前のほうではないかな、ミーア」
さらに、身もふたもないことを、言い出した！
――いや、そうであったら、困りますけど！
なぁんて、心の中で嘆きつつも、ミーア自身も実感していた。
――でも、実際のところ、それって、あんまり否定できないんですわよね……。
なにせ、ミーアは、あの革命から逃れるべく、いろいろなところで人脈を作ってきた。帝国が未だに滅びていないのは、紛れもなくミーア自身の功績と言えてしまうのだ。
――ルードヴィッヒらの手柄も、最終的にわたくしに帰せられるということになれば、確かにわたくしは、事の中心人物といえるかもしれませんわね。うぐぐ、実に、面倒くさいですわ。そんなことにならないように、きちんとルードヴィッヒのおかげであることを強調しておかないといけませんわね……。
まったく、断頭台から逃れるためとはいえ、ずいぶんと遠くへ来てしまったものだ……などと、柄にもなく感傷的になったところで……。
「……断頭台から逃れるため……。ああ、そういえば……」
不意に、ミーアの脳裏に甦ってくる光景があった。
それは、そう、今まさに帝国が、革命の戦火に呑み込まれようとしていた時の記憶で……。

第八十五話　父と娘と……2

「ふぅむ……。なんだか、日に日に、食事が貧しくなっていきますわね……」
それは、前の時間軸。白月宮殿での出来事。
その日、ミーアは、父である皇帝、マティアス・ルーナ・ティアムーンと夕食を食べていた。長いテーブル一杯に、絢爛豪華な皿が並べられたのも、今は昔……。ミーアの目の前には、小さなお皿と申し訳程度の食事が並ぶばかりになっていた。
食べるに困る庶民よりはマシだが、皇帝のディナーと呼ぶには、まるで物足りない、極めて質素な料理に……ミーアは寂しげなため息をこぼす。
「むぅ！　ミーアにそんな顔をさせるとはけしからん……。よし、今すぐ料理長をクビにするか」
柳眉を吊り上がらせ、そんなことを言う父に、
「ふぅむ、そうですわね」
ミーアは腕組みし、一瞬、検討するが……。
「いえ、それには及びませんわ」
寸でのところで止めておく。一応は、自制したのだ。
理由はとても簡単で、脳内に、若い眼鏡の文官の、ものすごーく不機嫌そうな顔が思い浮かんだからだ。
「まぁ、食材が足りない状況ですし、仕方ありませんわ」
その時のミーアは、帝国の食料事情を、フワッとは察していたのだ。あくまでも、フワッと、であるが……。
「そうか……。まぁ、ミーアがそういうのであれば……。ああ、そうだ！　良いことを思いついた」
とそこで、マティアスがパンッと手を叩いた。それから、彼はミーアのほうを見て、

「どうだ、ミーア。もう少し国が落ち着いたら、一緒に、どこぞに旅にでも行くか？　美味いものが食べたいならば、やはり、その地に出向いて食べるのが良いのではないか？」
彼は上機嫌に、鼻歌でも歌いだしそうな様子で続ける。
「そうだそうだ。考えてみれば、帝都に食材が集まらないのであれば、直接、出向いてやればいいのではないか。ペルージャン農業国や、ガヌドス港湾国に直接行けば……」
などと、嬉しそうに言う父に、ミーアは呆れた顔で首を振った。
「もう、なにを言っておりますやら……。お父さまは皇帝陛下なのですから、この帝都を動くわけにはいかないではありませんの？」
一瞬、父と共に旅に出ることを想像して、ミーアはブルルッと背中を震わせる。
それは、実になんとも面倒くさいことになりそうだったので、きちんとお断りしておいたのだ。
「お父さまは至高の皇帝陛下なのですから、わざわざ、食べ物を得るために旅に出るなど、バカげた話ですわよ。とんでもない話ですわ」
マティアスは、その言葉を聞いて、どこか寂しそうな眼をしてから……。
「やれやれ、まったく難儀なものだ。この国で一番偉い皇帝が希望を通せぬとは、なんと不自由なことだ。愛する娘と旅に行くこともできぬとは。いっそすべて投げ出して、逃げ出してしまいたいものだ……」
そんなことを言うのだった。

この時のやり取りをミーアが思い出したのは……地下牢に堕とされた後のこと。父が処刑されたことを聞かされた時だった……。
暗く絶望に沈む心、思い出したのは、あの時の父の、寂しげな顔だけで……。
その胸を占めるのは後悔で……。

――ああ、こんなことになるならば、あの時、冷たくしておかなければよかったですわ……。もっと優しく……旅にでもなんでも行けばよかった。あれが、最後だとわかっていれば、あんなことは言わなかったのに……。

その後悔は、深く、深く、ミーアの胸に刻み込まれたのだった。

「どうかしたのか？　ミーア……ぼーっとして……」

「はぇ？」

ふと見ると、心配そうな顔で、こちらを覗き込む、父、マティアスの顔があった。

「あ、ああ……ええ。いえ、なんでもありませんわ。お父さま」

慌てて取り繕うミーア。マティアスはしばし首を傾げていたが……。

「そうか。まあ、ともかくだ。もしも、私を連れて行かないというのであれば、当然、旅に行くことは許さな……」

「わかりましたわ。お父さま」

そう言ってやると、父は、きょとん、と瞳を瞬かせる。

「……はぇ？　あ、いや、しかし……」

予想していたよりあっさりと、ミーアが頷いたからだろうか。マティアスは、ポカーンっと口を開け……。

「いいのか？　アベル王子と二人で遊びに行きたいのでは……」

「まっ！　そんなこと、一言も言っておりませんわ。ただ、わたくしは、クラウジウス家に興味があっただけですわ」

腕組みしつつ、ミーアは言った。

「お父さまであれば、クラウジウス家のことも、ご存知でしょう？　道々、お話しを聞ければと思ったまでのこと。むしろ、来てくだされば嬉しいですわ」

それから、ミーアは、心の中でつぶやく。

――そうですわ。うん、お父さまならば、情報があるでしょうし。パティの弟……わたくしの大叔父にあたるハンネス・クラウジウス

のことも、もしかしたら、心当たりがあるかもしれない。だから、一緒に行くのも良いでしょう。
それから、ミーアは苦笑いを浮かべる。
「まぁ、手配するルードヴィッヒには申し訳ないですけれど、今回はお忍びの親子旅ということにいたしましょうか……」
かくて、ミーア一行ｗｉｔｈ陛下、のお忍び旅行が決定してしまうのだった。

第八十六話　ミーアの戦術、隠し事のないキレイな心

「さて……なんとか、無事にクラウジウス家に行く段取りは付けましたわね……あとは……」
部屋に戻ってきたミーアは、ベッドの上にポーンッと飛び乗ると、そのまま、ゴロゴロし始めた。サボるため……ではない。考えごとをするためである。
考えごと……そうなのだ。ミーアには考えるべきことがたくさんあるのだ。
実のところ、ミーアがクラウジウス領に行くことを決めたのは、深く考えてのことではなかった。ならば、なぜかといえば……。
「パティについうっかり言ってしまいましたけど……はたして、これで良かったのかどうか」
そうなのだ。あの時、泣きじゃくるパティに、ミーアは……おろおろして、つい言ってしまったのだ。
「わかりましたわ。そこまで言うのであれば……クラウジウス領に行きましょうか」
「……ぇ？」
瞳をパチパチと瞬かせるパティ。そんなパティにミーアは優しく微笑み、
「帰りたいのであれば、別に止めはしませんわ。わたくしは、あなたに意地悪をしようとしているわけではないのですから」
なぁんて、咄嗟に言ってしまったわけだが……。
「いえ、こうなってしまった以上、過去のことを悔やむのは詮無きこと。クラウジウス領に行った後のことをしっかりと考えておくべきですわ。お父さまが一緒に行くという想定外はありましたけれど、その辺りはルードヴィッヒに任せて大丈夫なはず……。っていうか、そもそも、お父さまに言っておけと進言してきたのはあいつなので

すから、責任は取ってもらいますわ」
　ぽーいっと責任を丸投げしつつ、ミーアは考える。
「それよりも問題は、行った後のパティの反応ですわね。はたして、未来のクラウジウス領を見てどう思うのか……。まさか、いきなり、あなたは未来にいると言ったところで信じるとも思いませんし……説明が難しいですわ」
　腕組みしつつ、ミーアは頭をモクモクさせる。
「そもそも、このわたくしですら、過去に戻ったことを理解するのには、しばらくの時間が必要でしたし……。信じていただくのも一苦労でしょうね……。もっとも、ゲルタさんのことがありますし、何とかならないこともないと思いますけど……」
　自分にとっての日記帳の存在を、老境のゲルタの姿に求めたいミーアである。自分が知っている時より、数十年年老いた知人を見たら、未来に来ていることも信じられるのではないか……？　となれば、むしろ……。
「問題はパティを……お祖母さまを、味方につけることですわ」
　そう、それこそが最も重要なことだった。
「パティはいずれ過去に戻る……。もしも、ここが未来であると知ってしまえば、未来の知識を持って過去に戻るということになりますわ。自分が未来の知識を知っているとわかったうえで、過去で行動できてしまう。となれば、もし、パティが蛇に取り込まれてしまった場合……」
　ミーアの背筋に、ぞぞぅっと寒気が走る。心なしか、すぐ後ろに断頭台が迫っているような気すらしてしまう。なんなら、刃が落ちる音すら聞こえてきそうな気がする！
「それは最悪のケースですわ！　どう考えても避けるべき……しかし、だからといって未来であることを秘したまま……絶望に心を飲み込まれたパティが、蛇に付け入られてしまう、それはそれで、よくないですわ」
　ゲルタは言っていた。皇妃パトリシアは、時の皇帝が、初代皇帝

の思惑から外れないようにするための存在であったと……。パティには、それに逆らえるぐらいの強い気持ちをもってもらいたい。そのためには、偽りのではなく、きっちりとした絆を育む必要がある……そんな気がするのだ。

「それに、ルードヴィッヒやガルヴさんの読み通り、パティがこの時代に来たことにも意味があるとするなら……曖昧にすべきではありませんわ。しっかりと向き合いませんと……」

そこまで考えた時、不意にミーアは思う。

「わたくしの正体も、そろそろ明かす時かもしれませんわね……」

パティはミーアのことを、蛇の関係者だと思っている。教育係だと思っている。

だから、素直に言うことを聞いているという面は確かにある。けれど、蛇から脱却させるためには、いつまでも、その誤解に頼っているわけにもいかないわけで……。

「そうですわ、今こそ誤解を正すべき時、本音で語り合うべきですわ」

それから、ミーアは、ふっと苦笑いを浮かべた。

「よくよく考えてみれば、今回のやり方はわたくしらしくありませんでしたわね。わたくしとしたことが……」

その胸に、微かな後悔が渦巻く。

「今までだってそうだったはずですわ。皇女という上辺の身分でも、見栄えでもない。まして勘違いなどによってではない！　本音と、隠しごとのない綺麗な心とによって、わたくしは、みなの信頼を勝ち取ってきたはずでしたわ！」

グッと拳を握りしめるミーア。

彼女の脳内では、若干の（……若干？）記憶の改竄が行われたような気がしないでもなかったが……、まぁ、いつものことなので構わないのであった。

「よし、そうであれば、基本方針は、わたくしの正体を明かすことですわ。蛇と敵対していることを明かし、そのうえで、パティを味

方につける。そのためのクラウジウス領訪問としなければいけませんわ」
目標を見据えつつ、ミーアは、ふぅむ、っと唸る。
「とりあえず、ルードヴィッヒにも、さらなる協力を求めることとが大切ですわ。あとは……ベル……はまぁ、おいておくとして、リーナさんには意見を求めたいですわね。それとアンヌも、パティとは良い関係を築いてくれておりますし……。ヤナとキリルは本人たち次第かしら？」
ある程度の方針が決まったところで、少しだけ安心したミーアは……。
「頭を使ったので少しお腹が空いてきましたわね……。ふむ、寝る前になにか、甘い物でもアンヌに用意していただこうかしら？」
いろいろな意味で気が緩んでしまうのであった。
かくて、物語はクラウジウス領へ。

第八十七話　大・親・友！

帝国貴族は、自領に本邸を、帝都ルナティアに別邸を持つのが普通のことである。

特に中央貴族、大貴族の者たちに、帝都に邸宅を持たぬ者はなく……当然の帰結として、四大公爵家の一角、グリーンムーン家の邸宅も帝都に存在している。

クラウジウス領に向かうというミーアたちと別れた後、シオンとティオーナは、グリーンムーン邸へと向かっていた。

シオンは、エシャールとの面会とグリーンムーン家への挨拶のため。そして、ティオーナは、その随伴者……ではなく、エメラルダから直々にお招きがあったためだ。

弟のセロとエシャールに交流が生まれたから、という理由はあれど、帝国中央貴族の選りすぐりたる四大公爵家の家を訪れるという非常事態。

さすがにティオーナも緊張を隠し切れずにいた。

――シオン殿下が一緒で良かった。いつもは、ミーアさまが一緒にいるけれど、こうして、一人でお会いしに行くと思うと、やっぱり……。

もともと、帝国中央貴族に対して、コンプレックスを抱いていたティオーナである。ミーアのおかげで、改善はされているが、まだまだ苦手意識は、完全には、払しょくできていないのだ。一緒に旅をしたエメラルダはまだしも、もしもその父親の公爵本人と出会ったりしたら、と思うと……緊張するなというのが無理な話だった。

そうして、表情を強張らせつつ、お屋敷の門をくぐったところで……。

「ご機嫌よう、シオン王子」

待ち構えていたご令嬢が声をかけてきた。

スカートの裾をちょこんと上げたのは、エメラルダ・エトワ・グリーンムーンだった。星持ち公爵令嬢に相応しい完璧な所作を披露したエメラルダは……。
「お元気そうでなによりですわ、お義兄さま」
ちょっぴり、照れ臭そうな顔で、そんなことを言った！　どこかの気の早いお姫さま（確かミーアとかなんとかいう名前の……）にそっくりである！
「あー、年上の令嬢にお兄さまと呼ばれるのは、なんだかおかしな気分だな……。というか、エメラルダ嬢はまだ、エシャールと縁談を上げていないんじゃなかっただろうか……」
困ったような顔で笑うシオンに、
「あら、今から練習をしているだけですわ、シオンお義兄さま」
シレッとした顔で言ってから、エメラルダは、ティオーナのほうを見た。
視線を受けたティオーナは、ぴくん、っと体を震わせるが……。
「ティオーナさんも、お久しぶりですわね。こうして、ミーアさまを介さずにお話しする機会は、今まであまりありませんでしたわね」
「はい……。本日は、私までお招きいただき、感謝いたします。エメラルダさま」
かしこまった口調で背筋を伸ばすティオーナ。そんなティオーナにエメラルダは、やれやれ、と首を振り、
「あら、別に緊張することもありませんわ。今日は、セントノエルで共に学んだ者が旧交を温める、そのような集まりと思っておりますのよ。それに……」
と、言葉を切ってから、エメラルダは真剣な顔をする。
「ミーアさまの目指す新しい国には、中央も辺土もない。そうでしょう？」
そっと胸に手を当てて、エメラルダは続ける。
「かつて、私は、辺土貴族を見下すことを当たり前だと思っていた。それが、門閥貴族としての伝統と矜持を守ることである、とも。け

れど……ミーアさまは、私に違う世界を示してくれた……。そして、古き帝国とは違う、新しい帝国のために力を貸してほしいと……私に手を差し伸べてくれた……」

大切な感情を握りしめるように、エメラルダは、胸元で拳をキュッと握って……。

「私はミーアさまの呼びかけに答えて、親友（とも）として……否！　大親友（とも！）として、あの方の理想とする国の実現のために尽力するつもりです。もしも、あなたが同じ志を持つというのであれば、それは私の、大切な仲間ということになるけれど、いかがかしら？

あなたは、ミーアさまの味方かしら？」

真っ直ぐな問いかけに、ティオーナは静かに頷く。

「はい……もちろんです。私は、ミーアさまのために全身全霊をもって尽力いたします。エメラルダさま」

「そう、よかった。それならば、私たちはきっと仲良くなれますわ」

そうして、エメラルダは穏やかな笑みを浮かべるのだった。

それから、彼女は二人を屋敷の中へと案内する。

「申し訳ございません。シオン殿下。実は本日は、父、グリーンムーン公は、ここにはおりませんの。サンクランドの王子殿下がいらっしゃるというのに、無礼なこととは百も承知しておりますけれど……」

と、そこで、エメラルダはチラリ、と舌を出す。

「正直、父が一緒にいたら、エシャール殿下とゆっくりお話しはできないかと思いまして……」

「いや、お気遣いに感謝する。エメラルダ嬢。いつも、弟のことでは、世話になっている」

「いえ、このぐらいしかできないのが、心苦しい限りですわ……」

エメラルダは小さく笑みを浮かべてから……誰に言うでもなくつぶやいた。

「しかし、本当に、そうですわね……。他の星持ちが動き出しているというのに、私だけがエシャール殿下と遊んでいるわけにはまい

りませんわ。ルヴィさんが軍部を、サフィアスさんが頭の固い中央(おじ)貴族(いさま)を押さえるというのであれば……わたくしがすることは、あまり残されておりませんけれど……」
エメラルダは、頬に手を当てて首を傾げる。
「とりあえず、聖ミーア学園への協力、それに……」
と、そこで、エメラルダの瞳が妖しげな光を宿す。
「そうね……。ガヌドス港湾国に、釘を刺すこと……ぐらいかしら？」
ニヤリ、と不敵な笑みを浮かべるエメラルダであった。

外交のグリーンムーン家、その長女エメラルダの蠢動が歴史にどのような影響を与えるのか、今の時点で知る者は誰もいない。

第八十八話　皇帝陛下、満喫する！

ポカポカと晴れ渡る空の下。一台の馬車が街道を進んでいく。やや大きめの馬車だ。一見すると、乗合馬車のようにも見えるその馬車に、まさか、この国の皇帝陛下とその娘とが乗っているなどということは、誰も思わないだろう。

馬車の中には、ミーアとマティアス、アンヌとベル、シュトリナとパティ、ヤナ、キリルまでが揃っていた。子どもたちを合わせると合計で八人だ。

二頭立ての大型馬車とはいえ、さすがに、手狭感は否めないわけで……。

普段は、豪華な馬車を広々と一人で使っている皇帝マティアスは、さぞ、ご機嫌斜めかと思いきや……。

「うふふ、あはは。ああ、ミーアと旅行など、いつぶりだろうか……。ああ、楽しいなぁ！」

上機嫌に笑っていた！　不満なんか、まるでなかった！

――まぁ、お父さまのことですし、別に心配はしておりませんでしたけど……。

ミーアは父の姿を見て、ふぅっと小さくため息を吐く。ちなみに、父の右隣りにはパティが、反対側にはベルが座っていたりする。

ミーアはその正面、向かい合わせの席だ。両隣を母とひ孫に、正面をミーアに挟まれて幸せそうに笑う父。その構図が、なんとなく面白くて、思わず笑ってしまうミーアである。

「あっ、おじ、陛下……。あそこ、見てください！　すごく綺麗な花が……」

ベルが、馬車の外を指さして、ぴょんぴょん跳ねる。それを見たマティアスは、

「こら、ベル。ダメだろう？」

途端に、ご機嫌を損ねたように眉をひそめると……。
「私のことはパパ、もしくは、お父さまと呼ぶように！」
一転、にっこりととろけそうな笑みを浮かべる。
「あっ、すみません。パパ！」
それに、ノリノリで答えるベルである。普段のノリの良さは健在だ。
ちなみに今回は、お忍び旅ということで、偽の身分（アンダーカバー）を演じるように決めていた。皇帝マティアスが商人で父親役。他の者たちは全員その子どもという設定だ。
たくさんの子どもたちに囲まれたマティアスは実にご満悦な様子である。
「シュトリナもそう呼んでくれて構わないぞ」
目を向けた先、シュトリナがニコニコと可憐な笑みを浮かべて、
「はい。お父さま。この旅の間はそう呼ばせていただく予定です」
華麗にスルーする！
「わはは。そうだな。下手にパパなどと呼ばれると、ローレンツに睨まれてしまいそうだしな」
マティアスは、まったく気にした様子もなく、今度は子どもたちに目を向けた。
「パティも、それに、お前たちもしっかりと呼ぶのだぞ？　どうだ、練習しておくか？　ほら、ミーアも一緒に……」
などと、ごくごく自然に、ミーアにも話を振ってくる。それを受けてミーアは……。
――まぁ、お父さまが楽しそうで何よりですわ。こうなると、やはり問題は……。
と、ごく自然に父の言葉をスルーしつつ、パティの様子を窺う。
パティはいつも通り、なんの表情も浮かばない顔でうつむいていた。
あの日、クラウジウス領に行くと決めてからも、パティの様子は、表向き変わらなかった。わずかにソワソワしているようにも見えな

くもないが、それも注意していないと気付かないぐらいだ。
――正直なところ、パティがなにを考えているのか、まるで読めませんわね。ここが未来で、わたくしが何者であるのか……明かすタイミングがとても難しいですわ。まぁ、すんなり信じてもらえなかったら面倒ですし、とりあえずはクラウジウス領についてからだとは思いますけど。
だが、だからといって、ミーアはなんの準備もせずに今日を迎えたわけではない。きちんと策を練ってきているのだ。
――わたくしが、蛇の敵対者であると明かしたうえで、パティを味方につける。そのためには甘い物で胃袋を掴む！　これですわ！
さながら、山に生えた大木……の根元に生えたキノコのごとく、それほどブレないミーアの基本戦術である。
自分がされて嬉しいことをしてあげれば、相手も喜んでくれるに違いない。まして、甘い物に心を掴まれぬ者などなし！
そんな確固たる信念に基づいて、ミーアは動き出す。
そっとアンヌのほうに視線を送ると、アンヌは、心得た！　とばかりに鼻息荒く頷いて、バスケットを持ち上げた。
「ねぇ、パティ、ちょっとお腹が空いたのではないかしら？」
「……え？」
きょとん、とした顔で、こちらを見つめてくるパティ。さらに、その隣で、興味津々にこちらを見ている父に、ミーアは微笑みかける。
「お父さまもお食べになりますわよね？　カッティーラ、作ってきたんですのよ？」
そうして、ミーアはアンヌから受け取ったバスケットを開いた。中から現れたのは、黄色いフワフワのケーキ、カッティーラ。ペルージャン農業国の伝統的なお菓子である。
――パティがカッティーラを気に入れば、ペルージャン農業国との関係も大切にしてくれるはず……。蛇とは言え、甘い物が美味しく感じることに変わりはない。であれば、最悪、パティが蛇に染ま

ってしまったとしても、ペルージャンとの関係維持には尽力してくれるかもしれませんわ！
などと計算していると……。
「おおっ！　なんと！　もしや、ミーアの手作りか！？」
ウッキウキの父の声が響いた。
「え、ええ。もちろんですわ」
ミーアが頷くと、マティアスはグッと拳を握りしめ、うおおっ！と歓声を上げた。
……ちなみに、このカッティーラ、白月宮殿の厨房で作ったため、料理長の監修がバッチリ入った代物である。安心安全な逸品である！　キノコとか混ぜ込む隙もなかった、ミーアにあるまじきクオリティなのである！
まぁ、形をキノコっぽくしてあるのは、キノコ女帝ミーアの最後の抵抗というべきか……？
「ほーら、甘くて美味しいですわよ？　パティ。ああ、ヤナとキリルも遠慮せずに食べるといいですわ」
などとミーアが子どもたちに勧めている間に、マティアスがひょいっと持ち上げて一口。
「むおお！　これは、以前食べた時より美味い！　素晴らしい！」
カッティーラを頬張って、無邪気な笑みを浮かべた。
「ああ……なんという幸せだ……。愛するミーアと旅をし、子どもたちに囲まれてミーアの手作りお菓子を食べるとは……」
などと、その目にじんわり涙すら浮かんでいたりする。その様子に満足しつつ、パティに目を向けたところで、ミーアは、おや？と首を傾げた。
パティは、カッティーラに手を付けようとしなかった。その様子をヤナが心配そうに見つめていた。
「パティ、ほら、これ、美味しいよ？」
ヤナは気づかわしげな口調でそんなことを言うが、パティは静かに首を振って……。

「……いらない。お腹、空いてない」
「でも……」
心配そうな顔で言いよどむヤナ。それを見て、ミーア……ふむ、と唸る。
――たぶん、いろいろ気になって食欲がないのでしょうけれど……。食べてくれないと胃袋が掴めませんわね……。困りましたわ……。
っと、その時だ。その様子を見ていたマティアスが眉をひそめる。
「パティよ、本当に食欲がないならば、それでも良い。このカッティーラはすべて私が食べよう。だが、しっかりと顔を上げて、友の顔を見るとよい」
「……え？」
パティは瞳を瞬かせてから、ヤナの顔を見つめた。
「無理をして食べる必要はないが、友の心配をないがしろにするのは、感心しないな」
それから、マティアスはパティの頭に手を置いた。
「我が母も言っていた。友とは……ええと？　なんだったかな……ああ、そう。そうだ、空腹の時のカッティーラのようなものだとか、なんとか言っていたような……。おや？　ということは、我が母もカッティーラのことが気に入っていたということかな」
なにやら、ためになるような、そうでもないようなことを口走りつつ、マティアスは笑った。
――ああ、この適当さ……実になんともお父さまですわ。
「そういえば、母上もペルージャン農業国に行ったことがあると言っていたな。カッティーラが絶品であったとも聞いた記憶があるぞ……そうか。ふふふ、このお菓子、我が帝室と深い関わりがあるようだな」
父のつぶやきを聞きつつ、パティに目をやるミーア。パティは、躊躇いつつも、カッティーラを口に入れ、ちょっぴり頬を緩めていた。

――なるほど……。ということは、パティもカッティーラのことを気に入るわけですわね。ふふふ、どうやらわたくしの作戦は成功のようですわね。
上機嫌に笑いつつ、ミーアは、馬車前方につけられた小窓を開ける。っと、
「おや、ミーア。どうかしたのかい？」
御者台に座ったアベルが、優しげな笑みを浮かべた。
「ごめんなさいね、アベル。御者台になんか座らせてしまって……」
すまなそうな顔をするミーアに、アベルは首を振った。
「いや、構わないよ。ボクとしてもここにいたほうが、異変を見つけやすいしね。それに、ディオン殿の動きは、やっぱり参考になるからね」
穏やかな笑みを浮かべるアベルに、ミーアは、ほわぁっとなりつつ……。
「ああ、ええと、それで、もしよろしければ、アベル、これを……」
「これは……？　キノコ……？」
「カッティーラですわ。わたくしとアンヌとで作りましたのよ？」
「へぇ。これをミーアが……」
それからミーアは、アベルの隣に座るルードヴィッヒのほうに目を向けて、
「ルードヴィッヒも食べてみるといいですわ。美味しいですわよ？」
ルードヴィッヒは、ちょっぴり驚いた様子で目を見開いてから……。
「お心遣い感謝いたします。心して、味わわせていただきます」
そっと頭を下げるのだった。

第八十八話　皇帝陛下、満喫する！（後書き）

そういえば、キノコって会話してるらしいですね！

第八十九話　その慧眼はすべてを見通す……見通す？

「ミーアさまがお作りになったカッティーラ、か……」

ルードヴィッヒは、それを受け取ると、しげしげと眺める。どことなくキノコの形っぽいそのカッティーラは、傘の部分が茶色、柄の部分が黄色をしていた。傘の部分には砂糖が散らしてあって、実になんとも甘そうだ。

じっくり観察してから、おもむろに一口。瞬間、舌に広がるのは濃密な甘味だった。程よくついた焼け目からは、芳ばしくも、まろやかな風味が香りたち、なかなかの美味であったが……。

ルードヴィッヒは思わず苦笑いを浮かべる。

――美味いが……俺にとっては甘すぎるな、これは……。

そう思った時だった。ふと、視界の外れに、馬車の中のアンヌの姿が入ってきた。ミーアの隣で嬉しそうにカッティーラを食べて笑う彼女を見て……彼は、ふと思う。

――ああ、良かったな……。ミーア姫殿下と一緒にカッティーラを食べられて……。

「ミーア姫殿下にカッティーラをお食べいただきたいのですが、なんとか手に入らないでしょうか？」

切実に、そう訴える彼女の顔が、まぶたの裏に映った。どこか思いつめたような顔で訴えるアンヌ……。疲れに陰ったその顔、あれは、いつのことだったか……。

一瞬考えてから、ルードヴィッヒは気付く。

それは、存在しない記憶の断片である、と……。

――そうだ。そんな出来事はなかった。俺は、こんな光景を見ていなかったはずだ……。だが、確かにあったという実感がある……。

これが、記憶の揺らぎ……。今見えたのが、途絶えた世界の記憶なのだろうか？
眉間に皺を寄せて、ルードヴィッヒは唸る。
――どんな世界のものかはわからないが……。あまり、愉快なものではなさそうだ……。
胸に残る感慨は苦く、二度と味わいたくないもののように思えた。だからこそ……。
――今のこの時を守らなければならない……。絶対に……。
静かに、ルードヴィッヒは決意する。
「ルードヴィッヒ殿、どうかされましたか？」
ふと視線を転じれば、アベルが不思議そうな顔で見つめていた。
「いえ……。ただ、なにか見落としている危機はないか、と検証していただけです」
ルードヴィッヒは今回のお忍び旅に際して、しっかりと備えをしていた。
皇女専属近衛隊の内、六つの部隊を護衛に当てていた。四つの部隊を道々に事前に伏せさせ、さらに、二つの部隊を馬車から少し離れた場所に随伴させている。
さらにさらに、その部隊とは別に、火慧馬と戦狼の羽透にも、警戒に当たってもらっている。目立たぬように行動するうえでは、最大限の兵力を動員していた。
ちなみに、やや手が足りなくなってしまった食料輸送の護衛については、レッドムーン公の私兵団に助力を願った。
先日の乗馬大会での人脈が、早速、生きてきた形である。
――展開を先読みしていたというよりは、皇女専属近衛隊の手が足りなくなった時の備えをしていたのだと思うが……。いずれにせよ、さすがだ。
そうして、万全の体制を整えたつもりだったが……不安はぬぐえない。
「ははは、まぁ、そんなに緊張しなくっても大丈夫だと思うがね」

馬車の横に馬を寄せ、一人の騎兵が話しかけてきた。誰あろう、帝国最強の騎士、ディオン・アライアである。くたびれた革製の鎧に身を包み、冴えない護衛のカモフラージュをしている彼は、特に緊張した様子もない笑みを浮かべた。
「なにしろ、外から見れば、警備の薄い貧乏貴族の馬車……。あるいは、ちょっとした財を成した商人のご一行程度にしか見えないからね。襲ってきたとしても盗賊ぐらいだろう。そのぐらいなら、ね……」
ディオンは腰の剣に軽く触れてから、
「それに、大丈夫だと判断したから、今回の旅を決めたのだろう？」
悪戯っぽい笑みを浮かべる。対して、ルードヴィッヒはあくまでも生真面目な顔で頷いて、
「そうだな。恐らくは問題ないとは思っているよ」
「理由をお聞きしても？」
ルードヴィッヒの隣で、アベルが真剣な顔で言った。その鋭い問いかけを受けて、ルードヴィッヒは眼鏡を軽く押し上げてから、
「そうですね……。混沌の蛇というのは、どこに潜んでいるかわからず、綿密に破壊を企てる。相手の心を読み、操り、支配する。極めて厄介な敵です。が……」
とそこで、言葉を切ってから、ルードヴィッヒは言った。
「彼らもまた、人間だということを忘れてはいけないと思います」
「というと……？」
「つまり、彼らはどこに潜んでいるかはわからないが、どこにでも潜んでいる、と考えるのは誤りではないかということです。当たり前の話ですが、彼らに見つからずに何かを為すことは、可能なのです」
それから、顎に手を当てて、ルードヴィッヒは続ける。
「蛇の基本的な構想というのは、組織を作ることにあらず……。彼らは既存の集団に入り込み、内部から腐らせ、自らの手駒に変えていく。それこそが蛇の構想。ゆえに、心から蛇に染まった者、蛇に

忠誠をささげるような者は、実はそこまで多くないのではないか、と、私は見ています。無論、その少数の中に、狼使いのような腕利きの暗殺者が混じっていますが……そのような者たちであれば、ディオン殿や、皇女専属近衛隊でも対処はできるでしょう」

その言葉を受け、ディオンが肩をすくめる。

「まぁ、どんな相手でも、とりあえず、姫さんが脱出するまでの時間稼ぎぐらいはできるつもりだよ」

「なるほど。確かに、個の力でディオン殿を打ち破るのは不可能。他の皇女専属近衛隊の兵士も精兵揃い……。暗殺者からミーアを守ることはできる、か……」

納得の頷きをみせるアベルである。

「そして……重要なことは、恐らく彼らは守りに弱い。攻め込まれた時にできるのは、暗殺か、姿をくらますかぐらいしかできない。彼らは正面切って戦うことが苦手なのです。今回の我々の動きを察知することはできるかもしれないが、それに対して手を打つことは、おそらく難しいはずです」

「なるほど、確かにそうだ。彼らは厄介ではあるが決して万能ではない。得手不得手がある。それを正しく認識すれば、蛇を無暗に恐れる必要はないということか……」

腕組みするアベルに、ルードヴィッヒは頷いてみせる。

「そうですね。彼らは警戒に値する敵ではありますが……だからといって、敵の姿を必要以上に大きくすることもない。敵にしろ、味方にしろ、相手の実力を正しく知ることがやはり肝要なのではないかと思います」

「ああ、それは真理だ。相手の実力を過剰に見積もれば、緊張で実力が出し切れないものだしね」

それから、アベルは笑った。

「しかし、ルードヴィッヒ殿の慧眼（けいがん）は、すべての相手の真の実力を測るものですね……。その観察眼から逃れるのはなかなか大変そうだ」

素直なアベルの称賛が、わずかばかり照れくさくて、ルードヴィッヒはおどけてみせた。
「もしかしたら、この眼鏡のおかげかもしれませんね。私が普通の者より、よくものが見えているとするならば……」
それから、指で、くいっと眼鏡の位置を直すのだった。

第九十話　領都クラウバルト

ルードヴィッヒの予想通り、というべきか……。いくつかの中継地点の村々でも、特に妨害に遭うこともなく。一行は無事、旧クラウジウス領、領都「クラウバルト」に着いた。

あまり高くもない城壁を抜けると、そこに広がったのは、古い城下町といった光景だった。

その規模こそ侯爵領に相応しい広さがありそうなものの、町行く人たちからは、どことなく垢ぬけない印象を受ける。

「ふぅむ……。ここがクラウジウス領ですのね……」

馬車の中から見たミーアは、思わず、といった様子で唸る。

「なんというか、平和な、普通の町ですわね……」

若干、拍子抜けした感がないではないミーアである。

なにしろ、今向かっているのは、呪われたクラウジウス家である。かつてミーアが、その怪談を聞いて「こわぁ！」っと思って以来、決して近づこうとしなかった土地なのである。

血の川が流れ、死体がルンルンと歩き回っていたとしても驚かないぐらいに覚悟していたミーアだけに、目の前の光景は実に意外だった。

――まぁ、いくら蛇とのかかわりが深そうなクラウジウス家とはいえ、いかにも怪しい町、ということにはならないでしょうけど……。

蛇の恐ろしいところは、非常に見つけづらいところにある。悪魔は、わかりやすく悪魔の顔をしていない。気安げな友人の顔をして歩み寄ってくるのだ。そして、それは蛇も同じこと。

ミーアは、ちょっぴり気持ちを引き締めつつ、パティのほうに目をやった。

「パティ、どこか、見覚えがある場所はあるかしら？」

パティは立ち上がり、トコトコとミーアのところまで歩み寄ってくると、ジッと外の風景を見つめる。やがて……。
「あのお店……見たことがあります。でも……」
と、しかつめらしい顔をして……。
「なんだか……古びてるような……」
っと、しきりと首を傾げている。
「ふむ……」
まぁ、そうでしょうね……という言葉を呑み込み、頷くのみにしておくミーア。すると、
「ミーアさま、このままクラウジウス邸へ向かうのでよろしいでしょうか？」
御者台のほうからルードヴィッヒが声をかけてきた。
「ああ、そうですわね……」
ミーア、一瞬の黙考。その後、
「それでよろしいかしら、お父さま」
父のほうを振り返る。
形の上では、父がこの場で最も発言権があるわけで。今回は、一応、それに配慮したミーアであるのだが……。
「今回の旅はミーアの計画したものだ。お前に任せよう……いや、だが、そうだな……」
っと、マティアスは顎を撫でながら……チラリとパティのほうに目をやり……。
「どうやら、パティはこの町に来たことがあるようだし、せっかくだから、町を回ってから行くのはどうかね？」
それから、マティアスは、ぐっぐっと体をひねってから。
「それに、馬車旅で、少々体がなまってしまった。少し歩きたいところだな……」
「なるほど、そうですわね……」
父の言葉を受け、ミーアは頷く。
――これは、たぶん、わたくしと一緒にいろいろ町を遊んで歩き

たいということなのでしょうけれど……。
と思いつつ、先ほどのパティへの視線を思い出す。
――もしや、パティに気を使ったのかしら……？　だとしたら、珍しいこともあるものですけれど……まぁ、でもいずれにせよ、これは好都合ですわ。ここが、未来の世界だとパティに認識させるためには役に立ちそうですし。
ミーアは御者台のほうに目を向けた。
「少し町を歩きたいですわ。ルードヴィッヒ。護衛の者たちに手配をお願いできるかしら？」
「かしこまりました」
特に反対することもなく頷くと、ルードヴィッヒは、馬車を大通りの入口にとめた。
馬車を降りたミーアのそばに、寄ってきたのはディオンだった。
「お嬢さま、それに、旦那さま。どうぞ、不用意なことはせず、我々の指示に従ってくださいますように。できれば、あまり離れずにいていただけると嬉しいのですが……」
そんなディオンの言葉に、マティアスはむっつりとした顔で頷き、「ふむ。護衛がそう言うのであれば、仕方ないな。ほら、ミーア、近う寄れ。それに、お前も遠慮なくパパと呼んでくれても……」
「ええ、わかっておりますわ。お父さま。みなもいいですわね？　勝手に動かず、言うことを聞くんですのよ？」
ミーアお姉さんの指示に従い、一行はそのまま、パティが「見覚えがある」と言った店に向かった。そこは、どうやら、服の仕立屋のようだった。
「あの……」
店の戸口に立つと、パティが中に声をかけた。
「はいはい。なにか、ご用ですか？　お嬢さま」
もみ手をしながら、愛想のよい老人が出てきた。
「？　あの、店主さんは……？」
「私がこの店の店主ですが……？　なにか？」

パティに目線を合わせるように、膝を曲げる老人。その顔をジッと見つめて……パティの顔色が変わる。
「やっぱり……どうなって……るの？」
ぽつり、とつぶやき、パティが店を走り出た。
「ちょっ、パティ。一人で行ったらっ！」
と、慌てて追いかけようとしたミーアを制して、ヤナが走り出した。
「お姉さまは、そこにいてください。ここは、あたしが……」
言うが早いか、見る間にその背が見えなくなる。
「ミーアさま、我々もいきましょう。おそらく、向かったのは……」
「ええ、そうですわね。できれば、もう少し寄り道して、クラウジウス領の名物でも……と思っておりましたけれど……」
キッと顔を上げて、ミーアは言った。
「向かうとしましょう。クラウジウス邸へ……」

第九十一話　ミーアエリートの芽吹き～讃えよ！　帝国の叡智～

「兄上！　ご無沙汰しております」
部屋から出てきたエシャールは、シオンに駆け寄ると、ピンと背筋を伸ばした。
生き生きとしたその笑みを見て、シオンは思わず、といった様子で胸を撫でおろす。
「エシャール、壮健そうでなによりだ」
「はい。兄上も、この度は、お忙しい中、わざわざいらしていただき、ありがとうございます。キースウッドもありがとう」
無邪気な笑みを浮かべ、部屋の中に案内するエシャール。
一つ頷き、シオンは部屋に入った。ティオーナとエメラルダは遠慮してくれたらしく、二人でお茶会に行ってしまったので、同行者はキースウッドのみだ。
勧められるまま椅子に腰かけたシオン。テーブルの上には、すでに紅茶の用意がしてあった。
おそらく、シオンたちがここに来るタイミングを計って、用意したものだろう。
――そういえば、グリーンムーン家には、やり手のメイドがいたんだったか……。
無人島での経験を共にした、ニーナというメイドの顔を懐かしく思い出しつつ、シオンは紅茶を一口する。サンクランドのものでも、ティアムーンのものでもない。あまり馴染みのない、されど、なんとも味わい深い風味だった。
「飲んだことのない味だな……」
「はい。グリーンムーン家は、外交に強い家柄と聞いています。いろいろな国とかかわりをもち、さまざまな取引をしているとか……。このお茶も海の向こうのものだそうですよ」

「そうか……。学ぶには良い環境のようだな」
「はい。良くしていただいています」
そう言って、エシャールはそっと視線を、カップに落とした。揺れる表面に映し見るのは、懐かしきサンクランドでの日々か、あるいは、自らが犯した罪か……。
それを飲み込むように一口、お茶を飲んでから、エシャールは顔を上げた。
「ところで……兄上が言っていた意味が、少しだけわかってきたような気がします」
「うん？」
「ミーア・ルーナ・ティアムーン皇女殿下のことです」
目をキラキラさせながら、エシャールは話し出した。聖ミーア学園で学んだことを……否！
「ミーア姫殿下は父上にも負けない、偉大な方です」
洗脳（すりこまれた）されたことを……。
「ははは、そうだろう？　俺などでは及びもつかないほど、彼女の功績はすさまじいものだ」
「そんなご謙遜……と言いたいところなのですが……今では、兄上の言が、あながち謙遜でもないと思えてしまう……。それほどまでに恐ろしい功績です。まさか、ミーア学園が、ルドルフォン家とベルマン子爵家とのいさかいをきっかけに作り出されたとは、知りませんでした」
そうして、エシャールは、語りだす。この帝国において、ミーアが成してきたこと。
「実は、ルールー族という少数部族出身の友だちができたのですが、ご存知ですか？」
「リオラ嬢の出身部族だな。それに、以前、新月地区の教会を訪ねた折にも聞いた覚えがあるが……」
「おそらく、その彼です。ルールー族族長の孫で、ミーアさまに命を救われた。それに、セロ……。ええと、ティオーナ嬢の弟君です

が、彼にもたくさんミーアさまのことを聞きました。あとは、セリア。とても優秀な女の子だけど、ミーアさまに見出されなければ、学識を得ることはできなかった子……。他にもたくさんの人と出会いました」

こうして、エシャールは熱のこもった口調で話し続けた。ミーアの輝かしき功績を。

その中には、シオンが知らないものも混じっていたので、話は大いに盛り上がった。

……ちなみに、若干尾ひれがついたものも散見されたが、それを疑うこともなく……。

「ああ、そういえば、セントノエルでも似たようなことがあったんだ。ミーアが……」

などと、シオンも負けじと語りだす。最近あった特別初等部のこと、今はもう遠き昔になったレムノ王国事件のこと……あの時、ミーアがかけてくれた言葉についてなどなど……。

サンクランドの二人の王子たちによる、熱い、あっつーい、ミーア礼賛の言葉の応酬。

心の底からミーアの功績を褒めたたえる二人を止める者はなく……、良識派のキースウッドですら……。

『うん……これだけのことをしているのだから、料理がちょっとぐらいやんちゃでも許されるべきなのだろうな……。いや、むしろ、あのパンを馬型にしたのも、今から考えるとすごく画期的で、スバラシイことだったんじゃないだろうか……？　いや、いやいや、そんなことは……でも』

なぁんて、騙されてしまう始末！　極めて、ヤバい状況が展開されていた！

「実は、エメラルダさまとも、よく寝る前にお話しするのですが、エメラルダさまでもご存知ないこともたくさんあって……。それで、ついつい盛り上がってしまうんです」

「なるほどな……ん？　寝る前……？」

エシャールの話を微笑ましい気持ちで聞いていたシオンだったが、ふと、気になる単語があったので、首を傾げる。っと、
「あ、はい。えーと……その、サンクランドを離れて寂しいだろうと、寝るまでお話をしてくれるんです。あ、もちろん、ミーア学園の学期の間は、皇女の町（プリンセスタウン）に滞在していましたから、お休みの間だけですけど……、寝るまでずっと頭を撫でてくれることもあって……」
などと、頬を赤くして、恥ずかしそうに言うエシャール。そんな弟の姿を見たシオンは、少しだけ微笑ましい気持ちになる。
『サンクランドを離れて、少し肩の力が抜けたか……。気の置けない友人たちと、優しく気遣ってくれる年上の人たちに囲まれて……このまま健やかに育っていってくれればな……』
などと思う一方で、別の見方をする人物がいた。それは……。
『エシャール殿下……年上の女性に優しくされる味を覚えてしまったか……これは、少し心配だぞ……』
自身の経験に照らし合わせて、割とまっとうな心配をするのはキースウッドであった。
けれど……そんな彼ですら、真の危険に気付くことはできていなかったのだ。
はたして、聖ミーア学園という帝国の叡智のフェイクニュースが飛び交う学園に通い、エメラルダというミーアマニアから、夜な夜なミーアの功績を、あることないこと吹き込まれるというこの環境が……純粋な少年の心にどのような影響を及ぼすものか……。
沈着冷静なキースウッドですら、その危険性に気付くことはできなかったのだ！

……まぁもっとも、セントノエル学園にしても、実質的なトップが結構なミーアマニアなわけで……しかも、サンクランド国王や王妃の心にもバッチリ帝国の叡智の虚像が刻まれてしまっているので……実際のところ、あーんまり変化はないのかもしれないが……。

第九十二話　イエスマン戦術の展開と応用〜恋愛編〜

領都クラウバルトの中心地である大通り……そこから、かつての領主の館、旧クラウジウス邸へと向かう道すがら……。ミーアは、町の雰囲気が微妙に変わってきたのを敏感に察する。

――なんだか……町全体が暗くなってきた……ような……？

辺りをキョロキョロ見回して、ミーアはすぐにその理由に気付く。

――ああ、木が……。空を塞いでおりますのね……。

さながら、森の中に来てしまったかのように、木の数が増えてくる。それに、立ち並ぶ建物にもツタが這い、なにやら……不気味な雰囲気になってきた！

――呪われた、クラウジウス家……。

ゴクリ、と喉を鳴らすミーアに、

「おおー、懐かしいな……。この道は変わらぬなぁ」

父、マティアスが陽気に話しかけてきた。

「幼き日は、この道を通るのが嫌で、すっかり足が遠のいてしまったものだが……」

「あら、お父さまもですの？」

まさか自らの父に……この父に！　薄暗い雰囲気で憂鬱になるなんて繊細なところがあったとは、と瞠目するミーアであったが……。

「無論だとも。なにしろ、ここの坂は長いからなぁ……。階段もいまいち上りづらいし……やれやれ、なぜ、こんな作りにしたのか……」

父の言葉に、ミーア、はたと薄暗い道を見た……見上げた！

薄暗い道は、まるで山道のように、長く、ながぁく！　続いていた！

「こっ、これは……」

「まぁ、もっとも、なまった体にはちょうど良いかもしれないがな。

わははは」
能天気な父の笑い声をよそに、ミーアはげんなりと館のほうを見上げた。
「ああ、馬が……ほしいですわ……。馬は、どこまでも遠く……高いところにわたくしたちを運んでくれるものですもの……」
林馬龍が聞いたら惚れ直してしまいそうな名ゼリフをつぶやきつつ、ミーアはため息を吐いた。
――まぁ、たっぷり運動すれば、その分、ケーキも食べられますし……。今日の夕食を豪華にするためと思えば我慢できるはずですわ。物は考えようですわね！
それから、ミーアはアンヌのほうに目をやった。
――アンヌ、この坂を上りますから、今日の夕食は、あまぁいケーキをつけてもいいですわよね？
という意味を込めて、ミーアは言う。
「これは、よい運動になりそうですわね」
ミーアの言葉に、アンヌはニッコリ微笑んで言った。
「はい。馬車の中で甘いカッティーラを食べましたから、その分ですね」
――あら？　妙ですわね……。微妙に計算が合わないような……？　この坂を上るのは、今夜食べるケーキの分なのでは……？　あら……？
ミーアとアンヌとで、計算に若干のズレが生まれているような気がしないでもなかったが、まぁ、難しい数学の問題ではよくあるお話なのである。
そうして、ミーアが、ひぃー、ひぃー！　言いながら坂を上っていると、坂道を元気よく駆け上っていく父、マティアスとベルの姿が見えた。
「あはは、競争ですよ。ほら、リーナちゃんも。キリル君も行きますよ？」
なぁんて、元気のいい声を上げるベル。その後ろからはキリルも

楽しそうに走っていく。
「ああ……すごく、元気ですわね……。あれが、若さというものなのかしら……？」
っと、先頭を元気よく走っていくマティアスのことはスルーしつつ、ミーアはふと後ろを見た。すると……。
「ふぅ……」
か細く息を吐き、シュトリナが額の汗を拭っていた。
不意に吹いてきた風に、蜂蜜色の髪がフワリと揺れて、キラキラと輝きを放った。
……その光景に、思わずミーア、見惚れる。
視線に気付いたのか、シュトリナは、健気そうな笑みを浮かべて、
「この坂は、なかなか疲れますね。ミーアさま」
などと、愛らしい声で言った。
――ふむ、妙ですわ……。なぜかしら……？　わたくしと同じようにバテているはずですのに……リーナさんは、なぜ、こんなにも可憐に見えるのかしら……？
それは、もちろん「ひぃーひぃー！」とか、「いよーっこいしょー！」とか……疲れても変な声を上げないからなのだが……。
なにやら、こう……ヒロイン力というか、令嬢力というか乙女力というか……負けてはいけないもので致命的に負けてしまったような……そんな気がしてならないミーアであった。
けれど……。
「大丈夫かい？　ミーア？」
「え？　あ、ああ……アベル」
視線を転じると、アベルが心配そうに見つめていた。
「ええ……大丈夫ですわ。大丈夫」
「そうか。でも、無理はしないでほしい。もしも、倒れそうだったら、ボクが支えるから」
「まぁ！　アベル……」
ミーア、ほわぁッとした顔で、頬を赤らめる。それは遠くから目

を細めて見れば、割と可愛らしく見えなくもない……ギリギリヒロインの範疇に入るんじゃないかな？　と思わせるような顔だった！
自らがヒロインの魅力に欠けていても、周りにヒロイン力を見出してくれる人を配置することによって、ヒロインとして君臨する。
自らは、反応を返すだけでいい状況を作り出したミーアである。
イエスマンたるを自らに課したミーアの応用力が恋愛面において光り輝いた場面と言えるだろう。
まぁ、それはともかく……。
「さぁ、もう少しだから頑張ろう」
そうして、アベルに元気づけられつつ、ミーアは坂を上る。上る。上る！
無心で足を動かし続け、再び、ひぃーひぃー！　言い出しそうになったところで、唐突に、その館が見えてきた。
坂の頂上、見下ろすようにして建っていた、その建物が……。
「おお、これが、クラウジウス邸……ですのね？」
零れたつぶやきは小さな問い。だが、誰かの答えを聞くまでもなく、ミーアの胸の内には奇妙な確信があった。
間違いなく、ここがクラウジウスの館。呪われし、クラウジウスの館である、と。
赤い夕陽を背負い、そびえ立つ館。それは一見すると、一般的な帝国建築の館に見える。
だが……なにかがおかしい。どこか、ちぐはぐな印象を受ける。
例えばそれは、屋根の形。帝国建築であれば、綺麗な三角形を描くべきところが、奇妙な丸みを帯びたものになっていたり……。あるいは、窓。異様に小さな窓ばかりかと思えば、突如、バランスの悪い大きなステンドグラスがついていたり……。
柱に関しても、なにが、とは言えないがなんとなく気持ちが悪い気がする。
ところどころに見える小さな違和感……微妙に調和を崩した建築物は、胸の内に微かな不安感を喚起する。それはまるで、異形の城

が、帝国建築の皮を被って隠れているような……、その隠しきれない禍々しさが溢れ出してでもいるかのような……。
父、マティアスは、あの険しい坂を上るのが憂鬱だったと言っていたが、ミーアはその言葉が半分嘘であったのではないか、と考える。
――このお屋敷……なんだか、あんまり入りたくないですわね。本当に、呪いがかけられていそうな感じがしますわ。
ミーアは、ゴクリ、と喉を鳴らしながら、そのお屋敷を見上げるのだった。

第九十三話　探検家ソウル、昂る！

ふと見ると、先に行ったマティアスやベルたちも、屋敷の前に佇んでいた。どうやらミーアと同じく、屋敷に目を奪われているようだった。

さらに、庭の一角では、パティが立ち尽くしているのが見えた。そして、その視線の先には大きな木が風に揺れていた。

そっとミーアが歩み寄ると、パティの消え入りそうな、小さな声が聞こえてきた。

「ここ……、ハンネスと種を植えたの……」

ヤナに言ったのだろうか。パティは目の前の木を指さして、悄然とした様子で続ける。

「三十年で大きな木になるんだって、あの子が言って……だから、木が大きくなるまで生きてようって、約束して……でも……」

パティの目の前には、その大きな木があるのだ。

「……どうなってるのか、わからない……。わからない」

パティは、そう言うと、顔を覆ってその場にへたり込んでしまった。パティのかたわらで、ヤナが、その背中をさすってあげていた。

「少し休ませてあげたほうがいいですわね……。ええと、アンヌ、いいかしら？」

声をかけるとアンヌが真剣な顔で頷き、パティのそばに行く。さらに、

「リーナも行きます」

シュトリナがそう言ってくれたので、ミーアはそっと耳打ちする。

「リーナさん、前も言ったと思いますけれど、パティは蛇の教育を受けた者。そして、クラウジウス家は、蛇と極めて近しい家ですわ。だから……」

「……わかりました。念のために、気をつけておきます」

「ああ……。ええと、それもそうなのですけど……できれば、蛇から抜け出した者として、助言をいただけると嬉しいですわ」
「え……？」
パチクリ、と瞳を瞬かせるシュトリナ。そんなシュトリナの目を見つめて、ミーアは言った。
「あの子を……パティを、蛇から救い出したい。あの子がもしも、また、蛇の教えの中に戻らなければいけないとしても、そこで耐え抜く力をつけてあげたい……。それが、わたくしの望みですの」
ミーアの言葉をシュトリナは、静かな表情で聞いていたが……。
「わかりました……。リーナになにができるかわかりませんが、できる限りのことをします」
そうして、シュトリナは、パティたちのほうに歩いて行った。それを見送ってから、改めてミーアは屋敷のほうに目を向けた。
「しかし、ここ、誰か住んでおりますの？」
「いえ、管理は青月省の管轄になっていて、管理人が坂の下にある家から通っている、と聞いております。いつでも、新しく領地を継ぐ者が入れるように、と準備してあるようですが……」
「ああ……なるほど」
それで、ミーアは納得する。屋敷から感じられる空虚な気配……。生気のない、まるで死人のような雰囲気は、人が住んでいない住居特有のものだった。
屋敷自体が死んでいるような……なぁんて不吉なことを考えてしまい、ぶるる、っとミーアが体を震わせたところで……。
「それで、ミーアさま。今夜は、こちらにお泊りになられるということで、構いませんか？」
「……はぇ？」
ルードヴィッヒの問いかけに、ミーアは思わず、ぽっかーんと口を開ける。
てっきり、宿屋に泊まることになると考えていたミーアだったから、これには完全に不意を突かれた。けれど、言われてみれば当然

のことで、クラウジウス邸に行く、と命令を受ければ、ルードヴィッヒも当然、この屋敷を調べると思っているはず……。であれば、この屋敷に滞在するのが効率的なわけで……。
「すでに、ジルベール・ブーケに手配して、準備は済ませてあります。後ほど、彼からも報告が入ると思いますが……」
などと、ルードヴィッヒの話は進んでいく。ミーアは大慌てで、軌道修正を図る。
――こっ、こんなところに泊まるとか、冗談ではありませんわ！
というか、そもそも、パティに屋敷を見せることが目的だったのだ。すでに、パティは、ここが未来であるという証拠を突き付けられている。目的は、すでに達成されているのだ！
となれば……。
「ええ。わたくしとしては、この幽霊屋敷……じゃない。クラウジウス邸に泊まるのもやぶさかではございませんわ。けれど、残念ながら、今回の旅での最高権威者はわたくしではなく、お父さま。であれば、まずご意見を窺わなければなりませんわ。お、お父さまぁ？」
そうして、ミーアは、とことこと父のもとに走り寄る、と……。なぜだろう、父は、ちょっぴりワクワクした顔をしていた。
「おお、ようやく来たか。ミーア。実はな、ベルが、あの屋敷を探検したいと言っていてな」
「なっ！？」
ミーア、思わず、ベルのほうに目をやる。っと、ベルはキリルと二人で、元気よく拳を突き上げるところだった。探検家ベルは、血沸き、肉躍っていたのだ！
そして……。
「私も久しぶりに来たら、すっかり懐かしくなってしまったよ。今夜はゆっくり、屋敷に泊まれると思うと、ワクワクしてきてな！」
懐かしさになど、まるで浸っていない、ウッキウキ顔で、マティアスが言った。

――ああ、これ、絶対、ベルが一緒に探検しよう、とか誘ったやつですわ……。
基本的に、ベルはマティアスのお気に入りなのだ。
「それに……パティもなにやら、この屋敷に所縁がありそうな様子だし、な……」
ふと見上げると、マティアスは、どこか感慨深げな目をしていた。
――ふむ、お父さま……。ベルのことといい、パティのことといい、もしかして、薄々、察しているのではないかしら……？
などと、一瞬、思いかけるミーアであったが。
「ほら、パパ、早く行きますよ！」
「ははは。ベル、待ちなさい。そんなにはしゃぐと転ぶぞ。キリルも足元には気をつけなさい」
「……パパって呼んでもらったのが嬉しかっただけっぽいですわ」
呆れつつも、ミーアは、改めてクラウジウス邸を見た。
「では、ルードヴィッヒ、お父さまもああ言っていることですし、今夜はここに泊まりますわよ。ただし……、警備は厳重に！　幽霊も通さないぐらいに厳重に、ですわ！」
「かしこまりました。ミーアさま」
真剣な顔で言うミーアに、ルードヴィッヒは静かに頭を下げるのだった。

第九十四話　ミーア姫、助言してみる

こうして、ミーアたち一行は、クラウジウス邸へと足を踏み入れた。

すでに、パティを連れたアンヌたちは、先に屋敷の中に入っている。また、護衛に当たっていた皇女専属近衛隊も屋敷の中に素早く展開していった。

その兵士たちの背中を見送りつつ、ミーアは、改めて屋敷の中を見回した。

――なんだか、やっぱり薄気味悪いですわ。

屋敷の外観と同じく、それは、ちょっとした違和感の積み重ねだった。微妙に、わからないぐらいに傾斜の付いた廊下。先が見通しづらい廊下は、蛇がのたうつように、わずかに曲がりくねっている。

天井も、なんとなく気持ちの悪い高さで、奇妙な圧迫感を覚える。

それに、窓が少ないせいで、空気が淀んでいるようにも感じる。長くこの場に留まっていたら、病気になってしまいそうな……あるいは、心を蝕まれてしまいそうな……そんな気配だ。

――パティの弟、ハンネスはここで地を這うモノの書を熱心に読みふけっていたと言いますけど……。

蛇にとり憑かれたように、邪悪な書を読みふける男……。そんな男がある日、忽然と姿を消したという。

ゲルタたちの監視すら届かぬ方法で、姿を消した……それは、いったいどこに？

――まさか、この屋敷に呑み込まれてしまったとか……。

なぁんて、自分で想像して、ミーアは、すっかり怖くなってしまう。

「あ、アンヌは、どこかしら？　アンヌ、アンヌぅ？」

などと、歩き出そうとした、まさにその時だった。

「おお、ミーア姫」
突如、声をかけられて、ミーアは、ぴょんこっ！　と飛び上がる。
それから、恐る恐る振り返ると……。
「ああ……慧馬さん」
ミーアたちの周囲を、ずっと隠れながら護衛してくれていた慧馬だった。彼女は、ドヤァ、ッという笑みを浮かべて、
「屋敷内に怪しい者の気配はないようだぞ」
そんな報告をしてきた。
「そう。それは朗報ですわね。感謝いたしますわ、慧馬さん」
「ふふふ、我と羽透にかかれば、隠れている人間を見つけることなど造作もないこと。もっと気軽に頼るがいい」
などと、ますます調子に乗った様子で胸を張る慧馬だったが、ふと、思い出したように後ろを振り返り、不安そうな顔をした。
――あら、やっぱり……。慧馬さんもこの屋敷のことを不気味に感じておりますのね？
ミーア、そんな慧馬の様子に親近感を覚える。
「やはり、慧馬さんも、この屋敷に不吉なものを感じるのかしら？」
そう問いかけると、慧馬はきょとんと首を傾げた。
「いや、屋敷自体はなんとも思わないが……。先ほど、廊下の突き当りでディオン・アライアと出くわしたのだ。あれは、心臓に悪い」
「……ああ」
未だにディオンに対して不安そうにしている慧馬に、ミーアは強い親しみを感じる。
――確かに、ディオンさんの殺気は心臓に悪いですものね……。うんうん、よくわかりますわ。
頷きつつも、ミーアは微笑む。
「でも、いかにディオンさんでも、急に斬りかかってくるなんてことは、そうそうございませんし……」
「それは、急にじゃなければ、斬りかかってくることがあるということか！？」

慧馬は目を見開いて、ぶるる、っと体を震えさせた。
「ああ……これは言い方が悪かったですわね。確かにディオンさんの場合、奇襲じゃなくて、正々堂々と斬りかかられても、その時点でおしまいですし……。うん、斬りかかられること自体が、そうそうございませんわ」
「し、しかし、そうそうない……ということは、たまにあるということか？」
「いや、滅多にありませんわ」
「ということは、ちょっぴりなら、斬りかかられることもあるということか？」
「うーん……」
ミーア、そこで長考。本当は、絶対にあり得ないと言ってやればいいのだが……。かつて、首を落とされた経験上、絶対とは言い切れないミーアである。
「あ、そうですわ。そういうことでしたら、リーナさんに扱いを聞いてみるのがいいのではないかしら？」
「どういうことだ？　毒物のことならばいざ知らず、ディオン・アライアの前では、彼女も無力なのでは……」
不思議そうな顔をする慧馬に、ミーアは静かに首を振った。
「いいえ。リーナさんは、かつて蛇として、ディオンさんとは敵対していた。にもかかわらず、今では軽口を叩きあう仲にまでなっておりますわ。きっと、ディオンさんの恐怖を克服した秘訣があるはずですわ」
そう力強く言ってやると、慧馬は神妙な顔をして、
「わかった。後で聞きに行ってみよう」
それから、辺りに油断なく視線を走らせながら、歩いて行ってしまった。
「ふぅむ……なんだか、慧馬さんを見ていたら、ちょっぴり安心できましたわね」
自分以上に怯えている人を見ると、冷静になれるものなのだな、

なぁんて思いつつ、ミーアは、今日、泊まる部屋へと向かおうとした。そこで……。
「失礼いたします。ミーアさま、少しよろしいでしょうか？」
ルードヴィッヒが話しかけてきた。彼の後ろには、人懐っこい笑みを浮かべる青年の姿があった。
「なにかしら、ルードヴィッヒ」
「実は、先にクラウジウス家のことを探っていたジルベール・ブーケから、報告したきことがある、とのことでしたので、連れてきたのですが……」
「それはご苦労さまでしたわね」
ミーアは、ジルベールに労いの言葉をかけてから……。
「そうですわね。後々、お父さまとお食事をしたりなんだりで、忙しくなりますし、報告を受けるならば、今ですわね」
腕組みしつつ、頷くのだった。

第九十五話　報告、そして……

とりあえず、ミーアは、自身が滞在する予定の部屋にやって来た。
そこは、領主の執務室、といった趣の部屋だった。
重厚な机と、分厚い本が収められた本棚、接客用の円形のテーブルなども置かれている。
オヤツの合間に仕事をするには、ちょうど良さそうな部屋だ、とミーアは分析する。さらに、壁には剽悍な青年の肖像画が飾られていた。おそらくは十代の後半ぐらいだろう。若々しい生気に溢れた彼が、パティの弟、ハンネスだろうか？
――大叔父、ハンネス。どんな人だったのかしら……？
っと、そうこうしている間に、ルードヴィッヒの後輩、ジルベール・ブーケがその場に片膝を付いて一礼する。
「ああ、そんなのは不要ですわ。ええと、ブーケさん？」
「よろしければ、ジルベール、もしくは、ジルと呼んでくれると嬉しいっす」
「そう。ならば、ジルさん。そこの椅子に座って、報告を聞かせていただけるかしら？」
それから、ミーアはルードヴィッヒにも目を向けて、
「ルードヴィッヒも、疑問に思ったことは構わないから、すぐに聞いていただきたいですわ。わたくしでは気付かないことがたくさんあると思いますし……」
「かしこまりました。もっとも、そんなことはあり得ないと思いますが……」
ルードヴィッヒは苦笑いしつつ、ジルの隣に座る。ミーアも同じく円形の卓を囲んだところで、ジルベールの報告が始まった。
「ルードヴィッヒ先輩の指示を受けて、私と護衛の二名は、クラウジウス家のことを探っていたっす。ただ、いかんせん、昔の話です

し、聞き取りをするにも限界がある。ということで、少しリアクションを見たいな、と思いまして……」
「……クラウジウス家のことを探る者がいるという情報を、それとなく流したのだな？」
ルードヴィッヒが探るような目つきで見つめる。と、ジルは苦笑いを浮かべて頬をかいた。
「まさか、それが、誘拐未遂事件を誘発するとは思ってなかったすけど……面目ないっす。リアクションが来るとしたら、こっちかと思ってました」
一転、しゅんと肩を落とすジルに、ミーアは首を振った。
「レティーツィアさんが誘拐されたのは、遅かれ早かれ確実なわけですし。防げたのですから、問題ありませんわ。それよりも、自分の身を危険に晒すようなことは、避けていただきたいですわ」
あのルードヴィッヒが信頼して、仕事を任せるような人物と釣り合うような情報というのは、ミーアには想像できない。自身がイエスマンでいるための貴重な人材を失う愚を避けたいミーアである。
「敵の最大戦力は狼使い……火馬駆だと思っておりましたけれど、聞くところによれば、それをも凌ぐ実力者がいるとか。用心するに越したことはありませんわ」
ミーアの言葉を受けて、ジルは、ぽかん、と口を開けたが、すぐに首を振り……。
「ご心配いただき恐縮っす。以後は、このようなことをしないように心がけるっす」
それに、一つ頷きを返してから、ミーアは続きを促した。
「はい。それで、ええと、クラウジウス候ハンネスが失踪したのは、今から二十二年ほど前、皇妃パトリシアさまが亡くなる五年前のことみたいっすね」
「まぁ……わたくしが生まれるより前のことなんですのね……」
どうりで、覚えていないはずだ、とミーアは納得する。そもそも、会ってすらいないのであれば、記憶に残るはずもない。まぁ、もっ

とも、会ったことがあるとしても、どうでもいいと思ったことは綺麗さっぱり忘れたりするのが、ミーアという人ではあるのだが……。
「では、もしかすると、あそこに飾ってある肖像画は、ハンネス卿の若かりし日の姿かしら？」
ミーアがそう問いかけると、ジルは、なぜだろう、悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「いえ、あれは失踪する、その直前に描かれたものみたいっすよ」
「失踪する直前……？　というと、ええと、四十代ぐらいかしら？　ですけれどあれは、どう見てもまだ少年の姿に見えるような……」
「どうも、それが呪われたクラウジウス家という噂に、信ぴょう性を生む結果になったとか、そういうことみたいっすよ。なんでも、ハンネス卿は、悪魔に魂を売ったがゆえに、年を取らず、いつまでも若々しいままであった……とか。領民の血をすすって若さを保ってるとか、いろいろと噂は耳にしましたが……」
それから、ジルは少しだけ真面目な顔をして、
「どうも調べたところ、ハンネスさまの失踪は、暗殺の線が濃厚のようっす」
「暗殺……ああ、やっぱり、そうなんですわね」
ミーア、小さくため息。それから、パティにどう話そうか考え出す。
――生きててくだされば、まだ話しやすかったのに……。ぐぬぬ、なんと説明したものかしら……。ああ、でも、蛇の関係者が暗殺したというのであれば、それをきっかけにパティを味方につけられるかもしれませんわね……。
考え込みつつも、ミーアは続きを促す。
「ちなみに、その暗殺、誰の手によってされたものですの？　やはり、蛇？」
その問いかけに、ジルはうーん、っと悩ましげに唸って……。
「犯人は捕まってない……というか、暗殺自体が確定したわけではないのでなんとも、っすけど……。ただ……」

と、そこで言葉を切るジル。それから、
「これは、今、確認を取りに行っているところなんっすけど、どうも、この暗殺には、イエロームーン家が関わっているのではないか、と思ってまして」
「まぁ！　ローレンツ殿が関わっているというんですの？　あら？　ということは……」
ミーアの脳裏に、かつてのローレンツの言葉が甦る。
自分たちは、ただの一度も暗殺をしたことはない、と。
「もしかすると、ハンネス卿は……」
と、その時だった。ドアの外、かたり、という物音が聞こえた。
「え……？」
ビクッと、肩を震わせるミーア。なにせ、呪われたクラウジウス家で鳴った怪音である。
ビビるなというのは、大変、酷な話であって……。
ルードヴィッヒとジルが急いで扉を開ける。っと、そこに立ち尽くしていたのは……。
「……ぱ、パティ？　今の話を聞いて……」
蒼白な顔をするパトリシアに、嫌な予感が、ミーアの中を駆け抜けて……。

第九十六話　ミーア姫、冴え渡る（ひさびさに……）

「ぱっ、ぱぱぱ、パティ？　あ、あなた、今の話、聞いておりまして？」

ミーア、思わず、パティに歩み寄る。っと、それに合わせて、パティは一歩、二歩、と後ろに下がる。その顔は血の気を失い、その瞳には絶望の色が見えた。

――ああ、これ、絶対、聞いておりましたわね？　しかも、この様子からすると、暗殺のくだりから、バッチリ聞いてましたわ！

そう確信した瞬間、ミーアは頭がクラァッとするのを感じる。そうして――思わず、戦慄する！

――あら？　今のって、もしや、過去が書き換わった時に感じるやつじゃないかしら？

以前、バルバラの事件の時に覚えた違和感と今の違和感は……なんだか、似ているような気がしたのだ！　まぁ……実際のところ、そのクラァッ！　は、一大事を目の前にした際の小心者の眩暈に過ぎず……時間の揺らぎによって生じたものではなかったのだが、まぁ、それはともかく。

――や、やや、やばいですわ。これは、もしかして過去が変わってしまったということですのね……？　でも、どのように……？

ミーアは推理を進めていく。

すでに、坂道を上ることで、糖分の大部分を消費しつくしているミーアであったが、懸命に、懸命に、頭脳を働かせる。

それはさながら、短距離走の選手が、ゴール付近、呼吸を止めてラストスパートするがごとく……。糖分をすべて燃焼しつくして、ぎゅんぎゅん脳みそを回転させていく。

――パティはローレンツさんが、殺しをしたことがないってことを知らない。もしも、パティがイエロームーン家を弟の仇として恨

むようなことがあったら……？　イエロームーン家をぶっつぶしてやろう！　なぁんて思っても、不思議ではないかもしれませんわ！
ミーアは知っている。
誰しもがミーア・ルーナ・ティアムーンのように、寛容ではいられないということを。
そして、それはミーアにしては珍しく真実である。
誰しもが、ミーア・ルーナ・ティアムーンのように、小心者ではないのだ。
――お祖母さまが、苛烈な復讐者となってしまった場合、今は、どのようなことになってしまうのか……？
嫌な予感に突き動かされるように、ミーアはさらに、パティに歩み寄る。
「ぱっ、パティ……？」
けれど、パティはうつむいたまま……。その場で踵を返して、走って行ってしまう。
「あっ、ちょっ、パティ？　お待ちなさい」
慌てて、ミーアは追いかける。途中、ルードヴィッヒたちに声をかけようとするが、すぐに思いとどまる。
――過去の歴史が、ルードヴィッヒにどう影響してるかわかりませんわ。パティの影響がどのように及んでいるかわからない以上、他者の手は借りづらいですわ。
今いる者たちは、はたして、味方か敵か……。過去の改変がもしも行われてしまっていたとしたら、判断がつかないからだ。なので、
「わたくしは、パティを追いますわ。後のことは、任せましたわよ」
そう言っておく。すると、まるでミーアを安心させるように、ルードヴィッヒが深々と頷き、
「どうぞ、お任せください」
と、力強く言ってくれた。
安堵の息もほどほどに、ミーアは部屋を走り出た。
――どうやら、ルードヴィッヒにはさほど影響を与えていないみ

たいですわ。
基本的に、ミーアの脳みそは、休眠状態になっていることが多いが、危機に際した時には、若干、マシになることがないではない。
そして、今のミーアの脳みそは、過去有数の危機に、かつてないほどに活性化していた。
すでにモクモク湯気が出始めていることから見ても、それは確実だ。
――パティはまだ過去に戻っていない。だから、現在が揺らぐなんてことは、ほとんどあり得ないはずですわ。
だって、まだ、目の前にパティがいるのだ。彼女が影響力を行使できるのは、過去に戻った後のはずなのだ。にもかかわらず、現在に影響が来る、というのはどういう状況だろうか？
――過去に戻ることが決まっているのと同様に、過去で変えることが確定しているようなものに関しては、揺らいでも不思議ではない、ということかしら？　例えば、わたくしが過去に戻ることが確定した瞬間に、断頭台の時間軸はすでに揺らぎ始めても不思議ではないはずですわ。断頭台にかけられるのなんか、まっぴらですもの。
懸命に手足を動かしながら、ミーアは考える。
であるとするならば、今の時点で影響が出ることは、パティにとって「過去に戻ったら絶対に変えなければいけないこと」と「変えることが容易なこと」の二つだろう。
断頭台への流れというのは、ミーアの中で絶対に変えなければならないことではあったのだが、変えることが容易ではなかった。同じようにパティも、過去に戻ったとしても絶対に変えられないことというのは存在しているはずで……。
そういうものは、恐らく影響を受けづらいはずで……。
――そして……その二つの条件がそろってしまうのが、イエロームーン家のことですわ！　よりにもよって、弟の暗殺をイエロームーン家がした、などということを聞かれてしまうとは……。
もしも、パティが、そのことに関して、ナニカしようと考えたと

して……歴史の流れにどのような影響が出るのか……。
っと、その時だった。
ミーアは、再び、頭がクラァッとするのを感じた。
またしても過去が変わってしまったか！？　と焦りかけるミーアであったが……。
「ああ、これは、違いますわね。頭を使いすぎて、くらくらしてきただけですわ」
ミーアの頭からは、もくもく、煙が立ち上っていた。知恵熱でクラァッとしてしまったミーアなのである。やはり、慣れないことはするものではないのだ。
「うう、これは、やっぱり、デザートに甘い物を出していただかなければ、割に合いませんわ……」
ただでさえ、坂道を上って足がパンパンなところを、さらに、パティとの追いかけっこはさすがにこたえる。
それでも、足を止めることなく、パティの小さな背中を追っていたミーアの……その目の前に、ゆらり、と人影が現われた。
可憐な野の花のような笑みを浮かべる少女……。
「りっ、りり、リーナさん？」
イエロームーン家令嬢、シュトリナが、不思議そうにミーアのほうを眺めていた。
そして、その手には……。

第九十六話　ミーア姫、冴え渡る（ひさびさに……）（後書き）

来週はゴールデンウイークのお休みとします。

第九十七話　名前の由来……？

「パティさま、とりあえず、こちらで休みましょう」
アンヌに連れられてパティがやって来たのは、奇しくも、かつて彼女が生活をしていた部屋だった。
その部屋を見て、パティは、また混乱する。
内装が一変していたためだ。
――ここは……なに？
まったく見覚えのない外国ならば、まだ、理解できた。
けれど、連れてこられたここは、パティの知るクラウジウス領の光景を、中途半端に残した場所だった。
ゆえに、パティはかつてないほどに混乱していた。
人の気配の絶えたクラウジウス邸と、どこにもいない弟、ハンネス。
仕立屋の年老いた店主と、どこか寂れた様子のある領都。
――これは、なんなの……？
なにが起きているのかわからない。
最初は、蛇の躾（しつけ）の一環だと思った。
蛇の工作員として、どのような状況にあっても適切に動けるように……。そんな訓練だと思った。
でも、どうやら、それは間違いだったらしい。しかし、では、これはどういうことなのか？
ここは、どこなのか？
無数に湧き上がる疑問。それが、さながら霧のように体にまとわりつき、目の前の光景を歪めていく。ふわふわと、不安げに揺れる不安定な世界。
そんな中、ただ一つ確かなのは、背中に感じる温かな手の感触……。

自らの友を名乗るヤナが、優しく、背中をさすり続けていた。
その、友の温もりだけが、この霧に包まれた不確かな世界で、唯一、確かなものだった。
――友とは、空腹の時のカッティーラのようなもの……。
先ほど、よくわからない男に言われたことが頭の中を過る。
皇帝を名乗るあの男……名前は、確か……。
「失礼する」
ドアの外で声。アンヌという名のメイドが慌てた様子でドアを開ける。
立っていたのは、皇帝を名乗る男だった。彼は、部屋の中を見回して、目を細めた。
「ここは……ああ、懐かしいな……。母上が使っていたという部屋だ」
――この人の名前は……そうだ。マティアスだ。
思い出し……それから、マティアスの顔を見て、思わず、パティは微笑ましい気持ちになる。
なぜなら、マティアスという名は、ずっとずっと昔……まだ、パティの母が生きていた時に飼っていた犬の名前だったから。病気で死んでしまった……大切な家族だった……その犬の名前だったから。
そんな犬と同じ名前を持つ男に、パティは不思議な親近感を覚えていた。
――それにしても、皇帝陛下って、呼ばれてたけど……。どういうことなんだろう？
改めて考える。
パティの知る限り、ティアムーン帝国の現皇帝も、その息子も、このような顔ではない。多少似ているような気はするが、別人であると断言できる。
では、いったい、これはどういうことなのか……？
首をひねるパティに、マティアスは笑いかけた。
「先ほどは、元気がなかったようだが、大丈夫かね？」

パティは、その言葉に、こくん、と小さく頷き……それだけで済ませた。
隣にいたヤナが慌てた様子で、
「あ……あの、えと……パティは、たった一人の家族の弟と離れ離れになってて、それで、それが心配で元気がなくって……。だから、あの……れ、礼を失することもあるかもしれないけど……」
まるで、本物の皇帝に相対(あいたい)した平民のように、緊張に強張った顔で言うヤナ。一方、マティアスは、そんなヤナの頭にずん、っと手を置いて髪を撫でた。
「そう緊張する必要はない。今の私は、お前たちの親ということになっているのだ。そのような態度では、偽装がすぐにバレてしまうではないか」
なんとも威厳たっぷりな顔で言ってから、
「それに、お前たちは我が娘ミーアの寵愛を受けた子どもたち。ならば、我が寵愛の内にあると考えてもなにも問題はない。なにしろ、もし万が一、私がお前たちに酷いことをしてみろ、ミーアに嫌われてしまうではないか？」
そんなことはありえん、と愉快そうな笑みを浮かべてから、マティアスは言った。
「しかし、そうか。たった一人の家族……。ということは、ヤナとキリルと似ているな……。ちなみに、お前の親は……」
「……いない。死んじゃったから……」
小さく首を振りながら、パティは言った。
一応、現在は、クラウジウス侯爵が親ということになっているが、パティはあれを親だと思ったことは一度もない。恐らく、相手もそうだろう。
「そうか……」
マティアスは、何事かを考えるように腕組みをし、うーむ、と唸る。が……。
「私は、友が大切ということは知っているが、同時に家族の大切さ

もよく知っているつもりだ……。どうかね？　いっそのこと、みなで本物の家族となってしまうというのは……」
「え……？」
ぱちくり、と瞳を瞬かせるパティの目の前で、マティアスはうんうん、と上機嫌に頷く。
「我が養子として、お前たちを本当に引き取るというのは、なかなか良いアイデアではないか。そうすれば、お前たちが空腹に苦しむことはないし、将来を不安に思うこともないはず。そうだそうだ、それならば、ベルも一緒に……」
トンデモないことを言い出した！
「陛下……あの、そのようなことは、さすがに……」
っと、やんわりと諌めにかかったのは、シュトリナだった。大貴族の令嬢たるシュトリナ以外、マティアスを止める者はいなかったからだ。が……。
「ああ。確かに、帝位の継承権は面倒そうだな。その辺りのことは、宰相になんとかさせて……。ミーアも反対はしないだろうし、これは、なかなか良いアイデアなのでは……」
「どうして……？」
不意に口を開いたのは、パティの隣にいたヤナだった。
「どうして、そんなふうに助けてくれるんですか？」
そう問いたくなるヤナの気持ちはよくわかった。
パティも、かつてクラウジウス家に引き取られた時に同じように不思議に思い……そして、その答えに絶望したのだ。
反射的に、パティはマティアスに目を向けた。マティアスは、特に考えるでもなく……。
「決まっているだろう。ただの気まぐれだ」
至極当たり前の様子で言い切った。
「……気、まぐれ……？」
小さくつぶやくヤナに、マティアスは言った。
「あるいは、持つべきものの傲慢、かな……」

自嘲するように笑い、彼は続ける。
「目の前で、蜘蛛の巣にかかった蝶が美しければ助けるだろう？　それと同じこと。森で、傷ついた兎がいれば、哀れに思い手当するだろう？　それと同じことだ。ただ、それだけのこと。蜘蛛が空腹で死のうと知らぬ。兎を食べるキツネのことなど知らぬ。我が目の届かぬ場所にいる、無力な弱者のことを助けるつもりはない。凡愚なる皇帝にできるのは、その程度よ。ただの傲慢。理由などない。優しさでも思いやりでもない。ただの気まぐれで傲慢だ。ゆえに……恩に感じる必要もない」
そこまで言って、けれど、マティアスは朗らかに笑った。
「だが、我が娘のミーアは……違うぞ？　自分の力を好き勝手に使うのではなく、国を、世界を変えて、多くの者を救おうとしているのだ。あれは、私には過ぎた娘だ」
愛する娘を誇るように、胸を張って。
それを聞き……パティは思ってしまった。
――多くの人々を救おうとする娘の功績を誇らしげに笑える……この人も、きっといい人だ……。
そして同時に思う。
ハンネスの命を救うためには、こういう人たちを絶望に堕としていかなければならないのか……と。
「……少し、トイレに」
そう言って、パティは静かにその部屋を後にする。
なぜだろう、これ以上、彼の声を聞いていたくなかった。
自分を心配してくれるヤナのそばにもいたくなかった。
そうして、パティが向かったのは、ミーアたちがいる部屋だった。
そこで、彼女は……。

第九十七話　名前の由来……？（後書き）

大型犬っぽい名前です

第九十八話　あの日の温もりをあなたに……

「り、りり、リーナさん……？」
シュトリナのほうを見たミーアは……思わず悲鳴を上げそうになった。シュトリナの手に、なにやら、謎の小瓶を見つけてしまったからだ。
――あっ、あれは、まさか……毒？
ゴクリっと生唾を飲み込みつつ、ついつい思ってしまう。
――リーナさんが……悪に染まってしまいましたわっ！
などと……。
理由はとても簡単で……パティはきっと、イエロームーン家を赦さなかったから、である。
――弟の仇としてきっと恨みに思ったはず。きっと何かしら、復讐をしたはずですわ！
シュトリナが目の前にいる以上、家を取り潰したりはしなかったのだろうが、それでも、優しい言葉をかけたりはしなかったに違いない。
ローレンツは言っていた。
ミーアの祖母がかけてくれた言葉が、自分の支えになったのだ、と。けれど、もし、パティがローレンツを仇と思っていたなら、そんな優しい言葉なんかかけるはずがないわけで……。その影響で、ローレンツが、暗殺に手を染め、シュトリナも闇に堕ちている可能性は大いにありそうだった。
――ひぃいいっ！　り、リーナさん、あの瓶をどうするつもりですの？
イエロームーン家が蛇の思惑に従って動いていることに変わってしまえば、当然、ミーアは敵。シュトリナのターゲットになってもおかしくはないわけで……。

――しっ、しかも、よりにもよって、なぜ、そっちに行きますの、パティ！
あの状態のパティを放っておくわけにもいかず、ミーアは仕方なく追いかける。
「パティ、待ちなさい！　今のリーナさんには……」
近づいたら、ダメだ……と言おうとするも間に合わず……。
パティは、そのままシュトリナにひしっとしがみついた。
「ああ、ちょうど良かった。今、少し落ち着く薬を……」
という、優しげなシュトリナの言葉を遮って、パティが言った。
「イエロームーンのお姉さん……、私を、殺してください」
「え……？」
「……生きてても、もう、仕方ないから……。殺して、ください」
懸命に、すがるように、パティは言った。

ハンネスが殺された……。
その事実は、パティを打ちのめした。
先ほど聞いた話を、疑うことはなかった。
イエロームーン家は、暗殺をもって、初代皇帝の志を成さんとする一族。それを知る者は、帝国内でもごくわずかだ。それを知る事情通が、ハンネスが暗殺されたと言っていた。
その事実は、混乱するパティの思考に、とどめを刺した。
細かな違和感や疑問を考える余裕は、すでに残っていなかった。
彼女の心は、すでに限界だったのだ。
年老いた顔見知りのメイド。様変わりしたクラウジウス邸、ハンネスと共に植えた庭の木……。
優しくしてくれる人たちと、その人たちを犠牲にしてでも為さなければならないこと……。
ハンネスを助けるために、蛇になり、すべての人たちを不幸にする。自分に優しくしてくれる人も、友だちだって言ってくれた人も……みんな、みんな……。でも……。でも！

そうまでして守ろうとしたハンネスが、死んだという。殺されてしまったという。
ならば……、これから、なんのために生きていけばいいだろう？
蛇として生きることに意味はない。されど、今さら、ヤナに友だちだって言うことはできなかった。
マティアスに、養子としてもらわれることもできない。
だって……自分はずっと心の中で、彼らを犠牲にすることを考えていたのだから。
どんなものをも蛇のために、ハンネスのために、犠牲にしようと、思っていたのだから……。
パティの胸を占めるのは、後悔と、深い諦めの心だった。
結局、悪いことをして、蛇の力に縋(すが)って、ハンネスを助けようとしても……無駄だったのだ。
そうして、なにもなくなった彼女は、ふと思ってしまう。
――もう、いいんじゃないかな……。生きていても仕方ないから……。

「パティ……」
ミーアは、悄然とした様子のパティを見つめていた。
なぜ、過去が変わらなかったのか……？
それは、今のパティがそのまま過去に戻ったとしても、イエロームーン家になにも及ぼさないから……。彼女は、なにかしようという気力を折られてしまったからではないか？
「これは……急いで事情の説明をしなければなりませんわね」
ここが未来であること……。ハンネスが、恐らくは生きているということ。それから、自分が、パティの孫娘であること……。
説明すべきことは、山積みで、整理したい事柄は溢れてて……でも、今は……。
ミーアは静かに、パティに歩み寄ると、その小さな体をギュッと抱きしめる。

どこにも行かないように、彼女が消えてしまわないように、しっかりと、力強く。
「パティ、大丈夫ですわ……大丈夫」
それは、かつて、ミーアがしてもらったこと……。
ただ一人、断頭台に登らんとする、その日……。
恐怖で折れそうになっていた彼女の心を支えた、ただ一つの温もり。
あの日、アンヌにしてもらったのと同じことを再現するように、ミーアはパティを抱きしめる。
「大丈夫……大丈夫」
言い聞かせるように、何度も、つぶやきながら。

第九十九話　ベル探検隊、出動す！

部屋を出て行ったパティ。その後を追って出ようとしたヤナを制して、シュトリナが言った。
「たぶん、お友だちじゃないほうがいいと思うから」
それから、シュトリナは部屋を出て行き……後には、ヤナとアンヌとマティアスが残された。けれど、気まずい沈黙は訪れなかった。
なぜなら、時を置かずして、新たなる闖入者がやって来たからだ。
「あ、ひいお……じゃない。パパ、こんなところにいたんですね」
ドアを開け、入ってきたのはベルとキリルだった。どちらかというと大人しい性格のキリルだったが、探検家姫ベルに引っ張られて、すっかり小さな冒険を満喫していた。
「おお。ベルとキリルか。探検の成果はどうだったかな？」
その問いかけに、ベルがちょっぴり肩を落とす。
「それが……とっても面白そうなお屋敷だと思ったんですけど……なにもない部屋が割と多くて……」
基本的にベルは、探検に成果を求める主義だった。
なにか物珍しいお宝とか、美味しそうなお菓子とか、そういうものを求めるタイプなのだ。
まぁ、ベッドにゴロゴロしながら、甘い物を求めるタイプのミーアよりは健康的なのかもしれないが……。
「ほう、そうなのか。ふむ……」
マティアスは腕組みしつつ、真剣な顔で考える！
ちなみに、彼が眉間に皺を寄せて考え込む、などということは、国政においてはほぼないことである。ミーアの誕生日プレゼント選びであったり、誕生祭のサプライズを何にしようか悩んだりした時には、そんな顔になるが、それは国政ではない。
「確かに、当主が行方不明になり、使用人たちが出て行った館には、

片づけられた部屋がいくつもあるだろうな……」
当主のハンネス・クラウジウスが失踪してから、もう、かなりの時が経つ。
その間、管理を任された者の手により、不用品が処分されていてもなんら不思議はないのだが……、
「そうか……。だが、当主の部屋には、いろいろ残っているかもしれんな……。よし！」
いいことを思いついたぞぅ！　とばかりに、おもむろに、マティアスは立ち上がる。
「ベル、キリルも来なさい。ああ、ヤナも一緒に来るといい。共に、この屋敷を探検しようではないか！」
そんなマティアスに慌ててついていこうとしたアンヌには、
「ああ、アンヌはミーアのそばに行ってもらおう」
「え……あ、でも……」
「専属メイドがそばにいなければ、ミーアも不自由するだろうからな」
そうして、マティアスは笑った。
自分よりもミーア……というミーアファーストの気持ちが半分。後の半分は無論、子どもたちと心行くまで遊ぶためである！
先代皇妃パトリシアの教育の成果が、ここに披露されていた！実になんとも、明るくて陽気な皇帝陛下であった。ナニカ大切なことを教え忘れているような気がしないでもなかったが……。まぁ、細かいことはいいのである。
ずんずん、廊下を歩き、階段へ。それをピョンピョン、飛ぶように上っていく。
ミーアとは違い、その足取りにはまだまだ余裕があった。レッドムーン公とのトレーニングの成果が確実に出ていた。
そうして、屋敷の奥。領主、ハンネスの私室へと向かう。
重厚なドアに手を伸ばすや否や、開ける！　なんの躊躇もなく！
その容赦のなさには、どことなくベルに通じるものがあった。

いくら物が残っていたとしても、さすがに侯爵の部屋を子どもの探検遊びに遣わせるのはいかがなものか……？　などという常識論を唱える者は……ここにはいなかったっ！

なにしろ、マティアスはこの国の一番偉い人。そして、ベルは、特にマティアスのお気に入り。喜ばせたい子なのである。躊躇すべき理由はどこにもない。

「この部屋がそうだ。ははは、そう言えば、ここで遊ぼうとして母上に止められたことがあったな。ふふふ、なにがあるのやら、楽しみだ」

そうして、後ろの子どもたちに悪戯っぽい笑みを浮かべてみせる。っと、先頭にいたベルがニッコリ笑みを返した。

実になんとも気が合う曾祖父ちゃんとひ孫である。

部屋に入って早々に、ベルが歓声を上げる。

「おお……いろいろありますね」

燃える探検家魂が、その瞳をキラッキラ輝かせていた。

そんなベルに触発されたのか、キリルも同じように部屋の中をワクワク顔で見回していた。

一方、ヤナは、そんなキリルを心配そうに見ていた。ベルの悪影響が心配なのかもしれない。弟想いのお姉ちゃんなのである。

「すごい数の本ですね……」

そんなことをつぶやきながら、ベルは、壁際に並び立つ本棚を眺めた。

そこには分厚い本が何冊も収められていた。背表紙だけを見ているのでは、いまいち、中身が想像できないようなものばかりである。

「これは、なんの本でしょう？」

ベルは、手にとった本をパラパラ―ッと流し見て、すぐに元の場所に戻した。

基本的に、本は嫌いではないベルなのだが……勉強は嫌いなのだ。

難しそうな本を読む気は……ない！　さらさらない！　ないのだが……。

「でも、なにか、怪しいものが挟まってることはあるかもしれません。ちょっと調べてみましょう。なにか、特別な本を取り出したら、秘密の隠し部屋が出てきたりするかもしれませんし……」
「……貴族さまの館って、そういう隠し部屋が普通にあるものなんですか……？」
前回、シューベルト邸にて、いろいろと酷い目に遭ったヤナが、げっそりした顔でつぶやく。
「ふふふ、驚かないでくださいね。実は、セントノエル学園にだってあるんですよ？」
そんなヤナに、ベルが事情ツウのドヤァ顔で言うのであった。

第九十九話　ベル探検隊、出動す！（後書き）

来週はゴールデンウィーク休暇です。

第百話　……はぇ？

「大丈夫……大丈夫……」
パティが落ち着くように何度も何度も、ミーアはつぶやく。
繰り返すことしばし……徐々に、パティに落ち着きが戻ってきたことを感じ……。
「大丈夫……大丈夫、だいじょう……ぶ？」
ミーアは、チラリと目を動かして、シュトリナを観察。彼女のほうは大丈夫かどうかを確認しておく。
――ふむ、変わった様子はありませんわね。やっぱり、パティの影響によって、リーナさんが変わってしまったということはなさそうかしら……？
と、そこで、シュトリナと目が合った。心配そうにパティを見つめていたシュトリナだが、どうやら、ミーアの視線を感じたらしい。不思議そうな顔で、きょとん、と首を傾げるシュトリナに、ミーアは、思わず悩んでしまう。
――ふむ、リーナさんも割となにを考えているのかわからない方ですけど……。どうなのかしら……。
パティの頭をなでなでしつつ……、ミーアは口を開いた。
「ええと、リーナさん、つかぬことをお聞きしますけど……ベルのトローヤって持っ……」
「これですか？」
シュシュっと、襟元から子馬のお守りを取り出すシュトリナ。どうやら、紐をくっつけて、首飾りにしているようだった。とても大切そうに、それを差し出してくる。
「肌身離さず持ってます。リーナの宝物です」
「ふむ……ちなみに、先ほど持っていた瓶の中身は……？」
「気持ちが落ち着くお薬です。数種類の香草を煮詰めて作ったもの

で、夜、寝る時なんかに枕元に置いておくと、ぐっすり眠れるんです。なんだと思ったんですか？」
あっけらかんと言うシュトリナに、ミーアは思わず、ほぅっと安堵の息を吐く。
「いえ、てっきりわたくし、毒かなにかだと……」
そう言うと、シュトリナは、ちょっぴり傷ついた顔で……。
「もう、ミーアさま。いくらリーナでも、毒を持って廊下を歩いたりはしません」
その答えに、ああ、悪いことをしたかな？　と一瞬、思うミーアだったが……。
「……誰の目があるかわからないんですから」
――不思議ですわ！　ちょっぴり言葉を付け足しただけで、不穏さが跳ねあがりましたわ！
目を丸くするミーアである。言葉とは不思議なものである。
まぁ、それはともかく……。
「パティ、少しは落ち着きまして？」
ミーアの問いかけに、パティは答えなかった。しかし、どうやら、このままどこかに走って行ってしまうということはなさそうだった。
「わたくしの部屋にいきましょうか。あなたにお話ししたいことがございますの」

そうして、パティの手を引いて、ミーアは先ほどの部屋に戻ってきた。
部屋には、ジルの姿はなく、代わりにアンヌの姿が増えていた。
「大丈夫ですか？　ミーアさま、先ほどは、慌てておられましたが……」
気づかわしげな口調で問いかけてくるルードヴィッヒに小さく頷きを返し……。
「ええ。問題ありませんわ。大丈夫」
それから、パティのほうに目をやる。

「ただ、もう潮時だと思いますわ。そろそろ、パティに事情を話してあげる時ではないかと思いますの」
ミーアは巧みなベテラン海月である。潮の満ち引き、波を完璧に読みきるため、浜辺に打ち上げられることはない。ほとんどない。
浜辺に打ち上げられて、ぐんにょりしてる海月と、ベッドに打ち上げられてぐんにょりしてるミーアとに類似性を見出さんとする者もいないではないが、まことに失礼な話である。
そんな、ベテラン海月のミーアの勘が告げていた。
今がその時。秘密を話すべき時である、と。
「それでは、リーナはここで……」
っと、同じく空気を読んだシュトリナが一礼して部屋を出ようとする。
「そうですわね……いえ」
シュトリナを送り出そうとしたミーアであったが……そこではたと気が付いた。
「いえ、やっぱり、リーナさんにも残ってもらおうかしら。おそらく、あなたにも関係ない話ではないと思いますし……。それに、脱蛇を経験したあなたにいていただけると心強いですわ」
「脱、蛇……？　イエロームーンなのに……？」
不思議そうに目を瞬かせるパティ。その頭を優しく撫でてから、ミーアは言った。
「ええ。そうですわ。リーナさんは、蛇の支配から抜け出した、とても頼りになるお姉さんですわ……。ところで、パティ、つかぬことをお聞きしますけれど、ここはクラウジウス候の執務室で合ってますわよね？　パティは入ったことありましたの？」
「いえ……。子どもは入ってはダメって……」
「なるほど……」
そう言いながら、ミーアは壁に歩み寄る。そこにかけられていた肖像画に手をかけて外すと、パティのところに歩み寄り……。
「では、パティ、この肖像画に見覚えはありますかしら？」

肖像画をまじまじと見つめるパティ。凍り付いたような無表情が、ジワリ、と溶けるかのように、驚愕に変わっていく。
「これ……この絵……ハンネスに似てる。似てるけど、でも……」
もの問いたげなパティに、ミーアはゆっくりと頷いてから、
「もう、おおむねわかっているかもしれませんけれど……」
小さく咳ばらいをして、告げる。
「ここは、あなたが生きていた時代よりもずっとずっと後の……未来の世界ですわ。ここに描かれているあなたの弟は、あなたが知っているより何十年も成長した姿をしている」
それから、ミーアは自らの胸に手を当てて続ける。
「そうして、わたくしは、あなたの孫娘、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
それを聞き、目をまん丸くしたパティは、ポカンと口を開け……。
「……はぇ？」
力のない息を吐くのだった。

第百話　……はぇ？（後書き）

今日からまた再開します。

第百一話　パティの告白

「ミーアお姉さまが、私の、孫……？　え……？」
「ちなみに、一緒にいるベルは、わたくしの孫。つまり、あなたの……えーと？　孫の孫ですから……まぁ、ともかく、子孫ですわ」
それを聞き、パティは……
「孫の……孫？　え、ええと……？」
などと、目をぐるぐるさせていた。
ちなみに「パティがミーアの祖母パトリシアである」というカミングアウトには、アンヌとシュトリナも驚いた様子だった。
ベルのことはなんとか受け入れられても、パトリシアのことはなかなかすんなりとは受け入れづらいものがあるのだろう。
なにしろ先代皇妃である。未来の皇女ミーアベルとは違い、それはすでに存在が知られている人……。歴史上の人物なのである。より受け入れがたいのも無理はないことかもしれない。
そんな二人の様子を見て、改めて、ミーアはパティのほうを向く。
「パティ、あなたの名前を問いますわ。あなたは、何者ですの？」
「え？　あ、私は……パトリシア。パトリシア・クラウジウス……。このクラウジウス家に引き取られて、次代の皇帝陛下の妻となるために教育を受けた……クラウジウスの血を引く妾の娘……」
パティは素直に名乗りをあげる。
確認するように、一つ一つ丁寧に口にする。
「ふむ……」
パティの言葉を受けて、ミーアはルードヴィッヒのほうに目を向けた。心得たとばかりに頷いたルードヴィッヒが口を開く。
「確かに、先代皇妃パトリシアさまはクラウジウス家のご出身だったと記録があります。しかし、クラウジウス候の嫡子ではないという話は聞いたことがありませんでした」

ルードヴィッヒの言葉に、シュトリナが、驚いた顔のまま答える。
「確かに、一般的には知られていないのだろうけど……。リーナは聞いたことがあるわ。お父さまが、そう言っていたから……。それじゃあ、本当に……」
そう言って、シュトリナは納得した様子で頷いた。
一般に知られている情報ならば、偽ることもできるだろう。けれど、本人を含めて、ごく一部の限られた者しか知らない情報を口にした時点で、その発言には説得力が生まれる。
まして、先代皇妃を名乗るなど、普通ではない。荒唐無稽も甚だしい。
騙すにしてももっとマシな嘘があるだろう。にもかかわらず、パティが、そう名乗ったということは……。
一方で、アンヌは、パティを気遣うように、そっとそばに歩み寄った。ただ一人、未来の世界に飛ばされてきた幼い少女を心配したのだろう。
ミーアは一度咳払いをして、改めてパティに向き直る。
「それで、どうかしら、パティ……。これで、いくつかあなたが不思議に思っていることに答えられたと思いますけど……」
ミーアの問いかけに、パティは無言で……小さく頷いてから、
「確かに……。この肖像画は、ハンネスにそっくり……。それにゲルタ……。あの人も、すごく年をとっていたけど、私の知っているのと同じ笑い方だった。それに、ここのお屋敷も、クラウジウス邸なのに少しだけ違う……。でも、ここが、私が生きていた時代の先にある世界だとしたら、納得できる……」
どうやら、信じてもらえたらしい。一番の関門を突破して、安堵しかけるミーアであったが、すぐに気を引き締める。
――いえ、むしろ、大事なのはこれからのことでしたわ。
ここが未来であると認識できてしまった以上、パティは過去の世界においては絶大な力を得ることになる。それゆえに、しっかりと、きっちりと、味方につけておかなければならない。

――まぁ、それは、パティがこちらの世界に来た時点で決まりきったことであるのですけど……。
パティが、この世界に飛ばされてきた理由が、ルードヴィッヒが言ったようなものであるならば……。ミーアがパティを味方につけるのは絶対に必要なことだった。
――わたくしが聡明すぎるから……わたくしの存在が歴史の流れから逸脱してしまった。それを是正するために歴史の流れが、パティをわたくしのもとに届けたというのなら……、パティは“わたくしが生まれてもおかしくない”ような、立派な人になってもらわないとダメですわ。そのためには、蛇の影響からは確実に脱してもらわなければ……。
ミーアは小さく頷いてから言った。
「はじめに、これだけは言っておきたいのですけど……」
一度、言葉を切り、キリリッと真剣な表情を浮かべて、ミーアは言う。
「パティ……あなたには……蛇を裏切っていただきますわ」
それこそが、重要なことだった。
パティに、余計な未来の知識を与える前に、しっかりとこちらの味方につけておくこと……。
これまで見たところでは、パティは決して、心から蛇に染まってしまうような少女ではない。味方につけるのは、十分可能なはずだった。
「ここには、あなたを見張る蛇は居ない。あなたをいじめるような者もおりませんわ。だから、どうかわたくしたちに話してほしいんですの。あなたは……どうして、蛇に加担しておりますの？」
「……」
「あなたが、なぜ、蛇に加担しているのかはわかりませんけれど……心から望んでそれをしているとは思えない。だから、なにか事情があるのではないかしら？」
そうして、じっとパティを見つめる。っと、

「……ハンネスは？」
唐突に、パティが言った。
「……え？」
「ハンネスは、どうなったんですか？」
パティの弟、ハンネス……ハンネス・クラウジウス侯爵……。
ジルベールから聞いた話では、彼はイエロームーン家に暗殺されたということだったが……。
「ああ……えーと」
と、ミーアはシュトリナのほうに目を向ける。
「お父さまに聞いてみないと、なんとも言えないですけど……もしもイエロームーン家が関わっているのだとすれば、どこか外国に脱出させていると思います」
「外国……」
何事か考え込むように、一瞬黙ってから、パティは言った。
「病気は……どうなりましたか？」
「病気……？　どういうことですの？」
「ハンネスは病気で……蛇が作る薬を飲まないと生きられない……。だから、私たちは……どこにも、逃げられない……」
パティの告白に、ミーアは息を飲んだ。

第百二話　妙ですわね……

「病気……？」
ミーアは確認するように、自らの知恵袋、ルードヴィッヒのほうに目を向ける。
「いえ、クラウジウス候が病気であったという話は聞いていませんが……。念のため、ジルベールにも確認したほうがいいでしょう」
「そうですわね。ふむ……」
ルードヴィッヒの答えを吟味するように腕組みし、ミーアは考え込んだ。
「治った……ということなのかしら。ねぇ、パティ、その病気は、治るものなんですの？」
「……わかりません」
吐き出すように言って、パティはギュッと唇を噛みしめる。
「詳しいことはなにも……」
大変、悔しそうなその顔に、ミーアは慌ててフォローする。
「ああ、そんなに気にする必要はありませんわよ？　それが普通というものですわ」
いかに聡明な自らの祖母パティといえど、十歳そこそこの少女に、病気の詳細を問うのは酷な話だろう。しかも、パティが持っている知識と言うのは、大部分が蛇からのもの。であれば、当然、蛇は大切なことは教えていないだろうし……。
などと考えつつ、ミーアは腕組み。考えてるっぽい雰囲気を醸し出す。
「とすると……ハンネス殿は……ええと……うーんと……」
ぐむむ、っと唸るミーア。っと、そこに、すすすっとアンヌが歩み寄ってきて……。
「ミーアさま、あの、よろしければ、お茶とお菓子をお持ちしよう

かと思うのですが……」
そんな提案をしてくれた！
それで、ミーアはようやく気付いた。自らの体内の糖分が、すでに払底しているということに！
お腹をさすりつつ、改めて空腹を実感したミーアは、ほわぁ、っと力の抜けた笑みを浮かべた。
「ああ、よく言ってくれましたわ、アンヌ。確かに考えごとをする時には大切ですわね、お茶とお菓子は。すぐに用意していただきたいですわ」
そうして、ミーアの命を受けて、素早くお茶の準備を始めるアンヌであった。

さて、小休止の後、ミーアの目の前には、淹れたての紅茶と、大きめのクッキー二枚が運ばれてきた。
二枚ではちょっと少ないような気がしないではなかったが、夕食前であることを考えると、こんなものだろうか。
「うふふ、やはり、考えごとをする時には甘いものとお茶、ですわね」
上機嫌に笑うミーア。その正面にはパティが座る。さらに、その両隣にはルードヴィッヒとシュトリナがそれぞれ座っていた。
アンヌだけは、やはり気遣うようにパティのそばに立ち、ミーアの指示があれば、すぐにでも動き出せる姿勢をとっていた。メイドの鑑である。
――本当に、アンヌにはいつも助けられてばかりですわ。
っと心の中で感謝しつつも、さっそく、クッキーを一口。
さくり、さくり……。
それを紅茶で洗い流す。
――おや、このクッキーなかなかですわね。甘さが控えめですけど、その分、上品なお味……。うーん、もう一枚。
さくりさくり……。

紅茶をもう一口。うーん、美味しい！
「ミーアさま……よろしければ、少し状況を整理いたしたく思いますが……」
ふと、そんな声が聞こえる。視線を上げると、ルードヴィッヒがこちらを見つめていた。
「ええ。そうですわね。現状わかっていることと、疑問点を挙げていただけるかしら……？」
「では、僭越ながら……」
眼鏡の位置をクイッと直し、ルードヴィッヒが話し始める。
「まず、今の休憩時間に、ジルベールに確認をとってきました。クラウジウス候ハンネスさまが、ご病気を召しておられた、という話は、少なくとも公の記録には残っていないようです」
「なるほど。ということは、やはり完治したということかしら……あるいは……」
っと、ミーアはパティのほうに目を向けて、
「その病気というのは、薬を飲んでいる限りは、わかりづらいものなんですの？　目立った症状が出ないとか、そういうことは？」
「薬を飲んでいれば、少し元気がないぐらい。体が弱い子というぐらいです……。でも、飲まなかったら、衰弱して死んでしまう……」
「薬を飲まなければ、死んでしまう……ふむ。とすると……」
ミーアは、ゴクリ、と紅茶を飲んでから、テーブルの上に手を伸ばし……。その手が空を切る。
ミーア、思わず目を見開き、確認。クッキーのお皿が空になっているのを見つける！
「……妙ですわね」
わたくし、いつの間にクッキーを食べたのかしら……？　と、思わず首を傾げるミーア。それに同調するようにルードヴィッヒが頷いて。
「ええ、ミーアさまの仰るとおり妙です。もしも、薬を与えないだけで死ぬというのであれば、わざわざ、イエロームーン家を使って

殺させる必要がない。薬を与えなければいいだけですから……」
　その指摘に、シュトリナが続く。
「お父さまの代になって以降、イエロームーン家は一人の暗殺にも関与していない。暗殺対象は国外に逃がし、いずれ、蛇と袂を分かつ際の味方にしようとしていたから……。だから、そんな症状を持つ人を、なんの備えもなしに国外に逃がしたとは思えません」
「確かにそうですわね。リーナさんのお父さま……ローレンツ卿は、抜け目ない方ですし……。となると、病気が完治したのか、あるいは、蛇以外から薬を継続的に手に入れる手段を得ていたのか……」
　クッキーから瞬時に思考を切り替え、さも〝まさに、そのことを考えていました〟的な顔を作るミーア。熟練波乗り師の面目躍如といったところだろうか。
「いずれにせよ、ハンネス大叔父さま……？　にお会いして聞いてみなければ、なんとも言えませんけれど……」
　っと、その時だった。不意に、ドアが勢いよく開いた。
「ミーアお姉さま！」
　賑やかな声をあげて入ってきたのは、ベル探検隊の一同だった。
「もう、ベル、少しはしたないですわよ？　もう少し慎み深く……」
「そんなことより、気になるものを見つけたんですけど、見ていただけますか？」
　ミーアの注意を華麗にスルーしつつ、ベルが差し出してきたもの……それは……。

第百三話　ベルの発見！

時間は少しだけ遡る。
ミーアがパティと真剣な話をしている頃、領主ハンネス・クラウジウスの私室にて。
ベル探検隊の奮闘（奮闘……？）が続いていた。
やはり、怪しいのは大量の本に違いない！　と鋭い観察眼で見抜いたベルは、部屋にある本を片っ端から、手に取り……。パラパラーっとめくってから、
「ふむ……」
そっと閉じて、本棚に戻していく。
まぁ、それも無理のないことではあった。なにしろ、この部屋の本の約半数は、帝国語で書かれているが、一ページも読めば、頭が痛くなってくる代物だった。さらに、四割は帝国語で書いてあるはずなのに、そもそも、読んでも意味がわからない難解なものだった。
そして、残りの一割は外国語で書いてあるものだった。
端的に言ってしまうと、ベルが読める本はほぼなかったわけで……。
「やっぱり、どの本を動かしても隠し通路が出る、みたいなことはなさそうですね。うーん、残念……」
早々に、本の内容から何かを発見することを断念。部屋の仕掛けへと興味をシフトしたベルである。スパッと割り切れる、判断力に優れたベル隊長なのである。
「ねぇ、ベルお姉ちゃん、このご本は……」
その時だった。キリルが一冊の本を胸に抱えて、おずおずとやってきた。
「ほう、それは……」
その本の表紙には、なにやら可愛い魚の絵が描かれていた。受け取ったベルは、しげしげとそれを眺めて……。

「これは、子どもの本……でしょうか。なんだか、薄いし、絵がたくさん描いてありますね……。これなら、ボク……じゃなくって、キリルくんやヤナちゃんも、退屈せずに読めるんじゃないかな」
……念のために言っておくと、ベルは別に本が嫌いではない。読めないわけでもない。
ただまぁ、難しい本は得意じゃないし、エンタメ性のない本は、こう……頭に入ってこないだけなのである。
そんなわけで、その絵本をぱらぱらと、めくっていると……ふいに、一枚の紙が落ちた。
「あれっ、これ、なんでしょう……？」
ひらり、ひらりと舞いながら、床に落ちた紙。一瞬、ページが取れて落ちたのかと思ったが、拾い上げて見ると、文字は書かれていなかった。
そして、奇妙なことに、そこには、小さな穴がいくつも開いていた。
「んー、それは、虫食いの穴か……？」
後ろから覗き込んできたマティアスが、顎に手を当てて首を傾げる。が……。
「いえ、違うんじゃないでしょうか……」
ベルは、穴の様子を見て、そっと目を細める。それから、持っていた本の縁と重ねてみて……。
「これ、穴の高さが、揃ってるところがあるみたいです。例えば、ほら、左から一つ目の穴と、四つ目の穴の高さがピッタリ揃っている。同じように、二つ目と七つ目とが揃ってるみたいです」
そう言って、ベルは、うむーむ、と唸る。
「これは、もしかすると、人の手で開けられたんじゃ……。でも、なんのために……？」
「ただの悪戯じゃないんですか？」
不思議そうに首を傾げるヤナに、ベルは、確信のこもった顔で首を振る。
「多分、違います。それにしては揃いすぎてる。ほら、ピッタリ高

さが合いますから……」
　それから、ベルは、ふぅむ、っと眉間に皺を寄せ、こめかみを指でトントン、と叩く。
「この紙になにか文字が書かれていれば、穴になっている文字をつなげて、なにか意味が出てきそうですけど……。それとも、なにか本のページに重ねると文字が浮かび上がるとか……」
　微妙な知恵の冴えを見せるベルであったが、無論、彼女オリジナルのアイデアではない。
　すべては、ベルが読んだ本……エリス・リトシュタインの著書「貧しい王子と黄金の竜　～草原の賢者の十二の問答～」によって得られた知識である。
　それは、主人公である王子が、草原の賢者と呼ばれる謎の老人から出された謎を解いていくお話しだった。
　物語の各所に『賢者からの提題』と呼ばれる暗号が配置されていて、さらに、途中で賢者が、密室から姿を消すなどという驚きの仕掛けが施された一冊になっている。
　ファンタジー、恋愛に続き、ミステリにまで手を伸ばしてしまったエリスである！
　その内、空想科学に挑戦し始めて、ミーアたちの時間転移の謎を解明してしまわないか、甚だ不安である。
「うーん、でも、どれも違うみたいですね。なにか、ものすごい秘密が隠されていそうな気がするんですけど……。これ、なんとなくですけど、宝の地図って感じがします……ふむ、となると……あ、もしかして、穴とか関係なく火であぶると出て来るとか……」
「あ……あの、み、ミーアさまのところに持っていったほうがいいんじゃ……」
　ヤバいことをつぶやくベルを、この中では一番の常識人のヤナが止めにかかる。幼いヤナが一番の常識人であるあたり、ベル冒険隊の危うさが匂い立つところであった。シュトリナやアンヌを欠いていることが悔やまれる。

「火であぶったりしたら、燃えちゃって、解けるものも解けなくなってしまうかも。だから、ええと、そのまま持って行ったほうがいい、と思います」
ヤナの必死の説得。それをジィっと聞いていたベルは……。
「なるほど。確かにそうですね。ミーアお姉さまなら、こんなのあっという間に解けるに違いありませんね。うん、そうしましょう」
ポンッと手を打ち、素直に頷いた。
基本的に、ベルには謎解きを自分でやってやろうという気概は、そこまでない。
ベルは、謎解きとか特に気にせずに小説を読み進め、答えが出た時に、純粋に驚きたいほうなのだ。
「じゃあ、行きましょう！」
そうして、ベル率いる冒険隊は、お宝の地図（ベル解釈）を手に、ミーアたちのもとへと向かうのだった。

第百四話　ミーア姫、かぶる……！

「あら……この紙……穴が空いてますわね」
ベルから受け取った紙を見て、ミーアは小さく首を傾げた。ゆっくりと、それを指でなぞってから……。
「これは、虫食い……かしら？」
「おお！　やはり、ミーアもそう思うか！　私も同意見だったぞ」
嬉しそうに笑みを浮かべるのは父、マティアスであった。
ギョッとしたミーアは、思わずベルのほうに目を向けると……。
「はい。パパもさっき同じことを言ってました」
ベルはニコニコしながら頷いて、
「やっぱり親子ですね」
「わはは、そうだろうそうだろう。さすがは我が娘ミーアだ。わはは！」
よほど嬉しかったのか……上機嫌に笑うマティアスである。
ウザ！　……と思ったミーアであったが、当然、口に出すようなことはせず、ただ、頬を引きつらせつつ……。
「い、いえ。よくよく見れば、穴の位置が揃ってますし、虫食いなはずがありませんでしたわね。わたくしとしたことが、ついうっかり愚かなことを言ってしまいましたわ」
それから、ミーアは改めて紙を見つめて、真剣に……真剣に！
考えて……！
「これは……もしや、火で炙ると文字が浮かび上がるとか……」
「ああ、やっぱり、そう思いますよね。ボクと同じ考えです！」
今度はベルが嬉しそうに声を上げる。
「さすがは、ミーアおば……お姉さまです。うふふ、意見が合うなんて嬉しいなぁ」
お気楽な笑みを浮かべるベルに……ミーア、若干の渋い顔をする。

――真剣に考えた結果がベルと同意見と言うのは……どう考えればいいのかしら？
っと、そこで、横からシュトリナが手を差し出して、
「ミーアさま、失礼いたします」
紙を受け取ったシュトリナは、そっとそれを鼻に近づける。そっと瞳を閉じて、小さな鼻をひくひくさせてから……。
「一般的な、炙り出しに使う薬品には、特徴のある匂いがつくものですが、これからは感じられません」
紙をミーアに返しながら、シュトリナは続ける。
「無臭の薬品を使ったか、あるいは、年月を経るうちに匂いが薄れてしまった可能性もありますが、今の時点で火に当てるのは、リスクが大きいと思います」
「ふむ……。なるほど……。とすると……」
再びミーアは、ジッとその紙を眺めていたが……ふと、なにか思いついたのか、ポン、と手を打ち、
「ああ。そうですわ。パティに聞くのがいいんじゃないかしら？」
なにしろ、パティは、この屋敷のもともとの住人である。しかも、この紙を残したのは、恐らく彼女の弟のハンネスのはずなのだ。
一瞬、そんなことしたら、父にパティの正体がバレるんじゃ？と考えなくもなかったが……。横目で窺った限りでは、父は、ちょっぴりお馬鹿な高笑いを続けている。
――まぁ、大丈夫ですわね。この感じなら、たぶん。
そもそも、時間を越えて幼き祖母が、この時代にやってきた、などという事態を想像しろというのが無理な話なのだ。
ということで、ミーアはパティに目を向けた。
話を振られたパティは、目をパチパチ瞬かせていたが、おずおずとその紙を受け取る。
「どうかしら、パティ。これに、なにか心当たりはございますかしら？」
言いつつ、ふと、ミーアは思った。

――しかし、よくよく考えると、この紙がなにか大きな手掛かりになっていると考えるのは、早計なのではないかしら？　仮にこの穴が人為的に開けられたものであったとしても、ハンネス卿に繋がる手掛かりになるとも限りませんし……。そもそも、屋敷にいた子どもの、ただの悪戯ということも考えられますわ。

「これは……」

紙を受け取ったパティは、マジマジとそれを見つめた。そっと紙の表面を細い指でなぞって、それから、ハッとした顔をする。

「音……」

「え……？」

パティはミーアのほうに目を向けて、それから、もう一度、紙に目を落として……。

「これは、音を記録したもの……。シューベルト侯爵家の、あの楽器があれば、弾けると思います」

「ほう。音を……」

唸るミーアの後ろで、ルードヴィッヒが手を打った。

「ああ、そうか。聞いたことがあります。十年近く前から、教会では、伝統的な聖讃美歌を民衆が歌えるように、音を記号であらわす試みをしていると……。確か、発案者の名前をとってヨルゴス式音階とか……」

音楽は、神が民に与えた喜びの表現法……と、神聖典は語る。

神を讃え、種蒔きに、収穫に、その御業を感謝する時に、人々は音楽を使ってきた。

けれど、それが、真に民衆のものになったのは、つい最近のことだった。

教会のとある神父が発案した表記方法。通称ヨルゴス式楽譜が登場するまでは、音楽を表記する方法は、この世界にはなかったのだ。

ゆえにそれまでの音楽は、楽器を扱う専門の職人によって、師から弟子へと伝わるもの。あるいは、歌い継いでいくもの、と思われていた。

人々が真の意味で音楽に親しむようになったのは、西方の小国に派遣された神父ヨルゴスによって、十二の音階の表記法が発案されてからのことで……。けれど……。
「え？　そんなはずない。だって、これは、私とハンネスが考えたんだから……」
パティは、目を見開いて言った。
「あの楽器を弾いて、二人で遊んだの……。私たちだけが知ってることのはず……」
その言葉に、紙を手にしたルードヴィッヒは、すっと眼鏡の位置を直した。
「もしも、それが本当であれば、その神父とハンネスさまは、なにか、繋がりがあるのやもしれませんね」
「なるほど。ハンネス大叔父さまから聞いたことをもとにして、その神父さまが、音階表記法を発案したと……」
顎に手を当てて、考え込むミーア。そのすぐそばで、
「ヨルゴス神父って……もしかして……」
ヤナが弟、キリルの顔を見た。
「もしかして……あの時の……」

第百四話　ミーア姫、かぶる……！（後書き）

皮肉屋ヨルゴスを忘れてもいいと言ったがあれは、嘘だ……

第百五話　彼の目指す剣

さて、ミーアを筆頭とする頭脳班（ごく一部を除く）が奮闘している頃、屋敷の警備にあたっていた者たちもまた、しっかりと仕事をしていた。

「どのような事態にも対応できるよう、しっかりと周囲を固めておくように」

指揮するのは、始まりの皇女専属近衛隊員こと、忠義の兵、オイゲンだった。

てきぱきと部下に指示を飛ばす彼のそばには、アベルとディオンの姿があった。

「敵の侵入を防ぐことはもちろんだが、館を出なければならなくなった時の、脱出路も想定しておく必要がありそうですね」

顎に手を添えながら、アベルが言った。

兵の数が揃っていれば、館への侵入を防ぐのは、そう難しいことではない。

逆に、屋敷に火を放つなどして、燻し出されたところを奇襲されるほうが危険そうだった。

城壁を打ち破り、外から城を攻め落とすのは楽ではない。それよりは、なんとかして城から出させるか、あるいは、こっそり内部に侵入する方法を考えるほうが幾分楽なものなのだ。

「なるほど。確かにその通りですな。いくつか脱出経路を想定しておいたほうがいいでしょう」

そう頷くと、オイゲンはすぐに部下に指示を飛ばす。

「ディオン殿は、なにか、お気づきのことはありますか？」

「そうだね……。まぁ、土地勘がないわけだから、警戒するに越したことはないと思うけどね……。僕としては、こっそり中に潜入される危険性も決して低くはない、と思ってるよ」

「それは、シューベルト邸のように、秘密の通路がこの屋敷にもある、と……？」
そう眉間に皺を寄せるアベル。
「無論、それも一つの方法だ。しかし、正面から突破してくるかもしれない」
ディオンは、静かにオイゲンに目を向ける。
「ここを襲うなんて言うんだったら、当然、敵は手練れだろう。もしも、あの狼使いと同程度の暗殺者が送り込まれたら……。君たち近衛兵は精鋭には違いないが、それでも、二人程度ならば声を上げる間もなく殺されるだろう」
「なるほど……。では、最低でも三人一組で行動するようにしましょう。そうすれば、声を上げて警告を発せるでしょう」
オイゲンは、特に怒った様子もなく、当然のことのように言った。
「そうだね。欲を言えばあと一人追加して、戦わずして、敵を威圧することを考えたほうがいい。兵の損耗はできるだけ防ぐべきだし、そのほうが姫さんも喜ぶだろう」
それから、ディオンはアベルのほうに目を向けた。
「姫さんが喜ぶといえば、アベル殿下は、こんなところにいてもよろしいんですか？」
わずかにからかうような笑みを浮かべて、ディオンが言った。
「ああ、あちらにはミーアもいるし、ルードヴィッヒ殿や、その後輩殿もいる。ボクがいても、あまり役に立てるとは思えなかったのでね」
ルードヴィッヒはともかく、ミーアが戦力として考えられている辺りに、致命的な計算ミスがあるような気がしてならないのではあるが……。
「それに、時間があれば、ディオン殿に稽古をつけてもらおうと思ったのだが……」
「稽古、ですか……ふーん」
すぅっと瞳を細めて、ディオンがアベルを見つめる。

「別に構いませんが……。ただ、もしも稽古をするのであれば、その前に方針を決めていただきたいですな」
「方針……？　というと？」
不思議そうに首を傾げるアベルに、ディオンは姿勢を正して言った。
「アベル・レムノ王子殿下……。あなたは、剣になにを求めているんですか？」
「なにを、求めて……？」
虚を突かれたような顔をするアベルに、ディオンは続けた。
「あなたは強いですよ。王族が戦場に出なければならないのだとしても、そのぐらい強ければ十分でしょう。それ以上を求めるのであれば……ただ漠然とした強さではなく、しっかりと、具体的なヴィジョンが必要なのではないか、などと思いましてね……」
それから、ディオンは、そっと腕組みをして……。
「レムノの剣聖、ギミマフィアス殿の教えは徹底していたのではないですか？　あの御仁は、王が必要とする剣術というものをよくご存じだ。戦場において、王が斃れることの意味を、彼はよく知っているのでしょう」
アベルの脳裏に、レムノの老剣士の顔が思い浮かぶ。
彼は、圧倒的な剣の技量を持ちつつ、常に、どんな手を使ってでも勝つこと、最後まで戦場に立ち続け、生き残ることを強調していた。
「では、あなたのご友人、シオン殿下の剣はどうか？　あれは天才の剣。されど、サンクランドの剣の本質は、正義を執行する、正々堂々たる剣。シオン殿下も、また、それに倣った剣の使い手となるでしょう」
相手の攻撃を、正々堂々と正面からいなし、圧倒的な一撃によって粉砕する。
卑怯さを一切含まない正義の剣。それこそがシオンの剣だ。
「そして、僭越ながら、僕、ディオン・アライアの剣は、戦場で百

人、二百人を斬り倒す剣。恐怖と威圧により、相手の足を止めることを目指した剣です。まぁ、自分で言うのもどうかと思いますがね」
ディオンは肩をすくめて言った。
「いや、正直、ミーア姫殿下の剣として、このやり方じゃダメだと、自分でもやり方を模索しているところなんですが……。まぁ、それはともかく……」
静かな、けれど、鋭い視線がアベルを貫く。
「アベル殿下が目指す剣は、奈辺にあるのか……。正直、他国の王子殿下にこのようなことを言うのはいかがなものかと思うのですがね……。ただ、あなたは、うちの姫さんの想い人。そして、あなた自身も、ご自身の将来を、姫さんの隣と定めているらしい。ならば、それを踏まえたうえで、聞かないわけにはいかなかったものでね」
「なるほど……それは、考えたことがなかったな……。そうか……」
アベルは、うつむき黙り込む。されど、沈黙は一瞬。すぐに答えは出た。
……否、答えは初めから決まっていた。
「ボクが目指すのは――ミーアを支え、守る剣だ」
顔を上げ、真っ直ぐにディオンを見つめて、アベルは言った。
「ミーアの盾となって守り、倒れそうになる時には支える、そんな剣術だ」
「ほう……。なるほど」
その言葉に、ディオンの目に、興味深げな光が宿る。それから、彼は悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「盾……。そうですな……。それならば……実際に持ってみますか？　盾を」
「盾……？」
思わぬことを言われ、アベルは目を瞬かせた。
「僕の見たところ、あなたの剣は攻めの剣。上段からの強烈な振り下ろしにより、相手の体勢を崩し、終始優位を確立しようという剣。確かに強いが、誰かを背中に守りながら戦うには、不向きな剣だ」

「なるほど、それを補うための盾か……」
「王族には相応しくない、ですかね？」
「いや、そんなことはない。ただ、盾というのは、考えたことがなかったな……」
物思いにふけるアベルに、ディオンは、彼にしては珍しく優しい笑みを浮かべるのだった。

第百六話　夜中の皇女子会

さて、とりあえず、シューベルト邸に帰るのは二日後にして……。予定通りこの日の夜は、クラウジウス邸に泊まることになった。

そう、あの……呪われたクラウジウス邸に……！

ということで……。

「……まぁ、ハンネス大叔父さまが生きているのであれば、呪いとかも嘘でしょうし……うん。大丈夫に違いありませんわ」

ミーアは、ベッドの上でぶつぶつつぶやいていた。

アンヌも一緒に……と思っていたミーアであったが、父が同行しているので、あまり好き勝手なことはできない。本来、主人と従者とは、同じ部屋で寝たりはしないものなのだ。否、そもそも、高貴なる姫殿下と言うものは、広い部屋に一人で眠るのが普通なわけで……。

ミーアは、客室に一人きりだった。

「大丈夫、大丈夫……だいじょう……ぶ？」

がたり、とどこかで音がする。

びっくーんっと跳び上がったミーアは、そのまま、ベッドの中に潜り込み、ギュッと目を閉じた。

「醍醐羊が一匹、醍醐羊が二匹……美味しいミルク、飲みたいですわ……」

雑念混じりに、羊の数を数え始めたミーアであるが……睡魔はなかなか訪れない。あまぁいホットミルクが飲みたくなってきて……眠気が飛んでしまう。

「羊を数えるからいけないんですわね。ここは、馬の数を数えて……荒嵐が一匹、東風が二匹……馬パンを久しぶりに食べたいですわね……」

ちょっぴり夕食の量が足りなかったミーアであった。

っと、その時だ。再び、がたり、と音が鳴る。それも、すぐそば……。ベッドの真下から！
びっくーんっと跳び上がったミーアは、恐る恐る、ベッドの下を覗き込んで……見たっ！
ベッドの下から、髪の長いナニカが這いだしてくるのを……っ！
「ひっ！　ひぃいいいいいっ！　あっ、アンヌ、アンヌぅっ！」
かすれた声を上げるミーアに、その這いだしてきたナニカは、ミーアの姿を見て、
「あ、ミーアお姉さま。よかった、無事に来られました」
ニッコリ笑みを浮かべた。
「へ……、あ……ああ。ベル……」
現れたのはベルだった。さらに、その後ろからは、パティが這いだしてくるのが見えて……。
「二人とも、なぜここに……？　というか、なぜ、ベッドの下から？」
「えへへ。パティ、すごいんですよ。このお屋敷の隠し通路のこと、すごく詳しくって」
パティのほうを見ながら、ベルは笑った。
「なるほど……。隠し通路……そのようなものが……。しかし、なんだか、前にもこんなことがあったような気がしますわね」
そういえば、初めてベルと出会った時、同じように幽霊だと思ったんだっけ……。
ミーアは思わず懐かしい気持ちになる。思えば、あれから二年近く経つのか……と。
「……って、まさか、探検しようと思っただけなんですの？」
「はて？　そこに隠し通路がある。入るのに十分な理由じゃないですか？」
きょっとーん、と不思議そうに首を傾げるベルに、ミーアは思わず頭を抱えかけるが。
「ふふふ、というのは、冗談で。実は、パティが、ミーアお姉さま

に用があるって言うんで、連れてきました」
「あら、パティが？」
首を傾げつつ、パティのほうに目を向ける。っと、パティは小さく頷いて、
「あの……どうしても聞きたいことがあって……」
おずおずと、パティは話し始めた。
「ミーアお姉さまが、私の孫だって……いうのは、本当ですか？」
「ええ。それはさっき言いましたわよね。本当のことですわ」
「ということは、ええと、パパ……じゃない。皇帝陛下が私の、子ども……？」
心なしか、顔色を悪くしながら、パティが言った。
「まぁ、そういうことになりますわね。あんな感じなので、不本意かとは思いますけど……、あ、でも、いい人ですわよ？　優しいし、そこまで悪い人ではありませんわよ？　だから、あまり気落ちしなくても……」
などと、自らの父を弁護するミーアだったが……。パティは、膝から崩れ落ちるようにしてうずくまる。それから、自らの頭を守るように、両手で抱えた。
「ありえない……。どうして……」
その口から、小さなつぶやきがこぼれおちた。
「どっ、どうしましたの？　パティ……？」
突然のパティの反応に慌てるミーア。パティは、うう、っと唸った後……。
「だって、マティアスって名前……犬の名前、だから」
「……はぇ？」
「マティアスっていうのは、私が昔飼っていた犬の名前です。私……どうして？」
などと、ガッツリへこむパティ。その一方でミーアは……。
「犬の名前……お父さまが……？」
脳裏に浮かぶのは、城に帰るたびに「パパと呼びなさい！」と言

いつつ、走り寄ってくる父の姿……。ちょっぴり大型犬めいた、その姿をついつい思い出してしまって……。
思わず、ベルと顔を見合わせて……それから、ミーアとベルは吹き出した。
しばし、しかつめらしい顔をしていたパティだったが、ミーアたちにつられたのか、くすくすと小さな笑い声をあげる。

それは、とても……とても、楽しい時間だった。
「あ、そうですわ。せっかくですし、アンヌとリーナさんも呼んで女子会にするのはどうかしら？　ヤナも呼んであげて……。キリルくんにはご遠慮いただいて……」
と、そこまで言ったところで、ミーアは一瞬、黙り……。
「いえ、そうですわね……。やっぱり、せっかくですし、今日は三人だけで……。それに、時々、また、三人でお話ししましょうか」
考えてみれば、ミーアは祖母と話をしたことがない。ミーアが物心つく頃には、彼女は亡くなっていたからだ。当然、ベルだって、こんなことがなければ、パティと話すことはなかったのだ。
こうして、三人が集まって話をする……それは、まるで奇跡のような瞬間で……。
「いつ二人が元の世界に帰ってしまうかわかりませんけれど、それまでの間は、たくさんお話ししたいですわ」
そんなミーアの提案に、孫と祖母は、笑顔で頷くのだった。

第百七話　闇夜の邂逅

古来より、闇は悪と関連付けられてきた。
白日の下に晒す、という言葉のあるとおり、日の光は容赦なく、すべての悪事を照らし出すもの。隠したいこと、後ろ暗いことのある者たちは、必然、日の光のない夜を愛し、月明りすらない新月を恋い慕う。
そのような、薄い闇のベールに覆われた町。領都クラウバルトを二人の男が歩いていた。
「やれやれ、相も変わらず、帝国の叡智は動きが速い」
ゆったりとした歩みで裏道を行くのは蛇導師、火燻狼（カ・クンロウ）だった。
「ここに来るのは、もう少し後かと思ってましたがねぇ……」
まぁ、それでもあまり変わりはなかったか、と自嘲の笑みを浮かべる燻狼である。
――準備の時間がなければ、動きが取れないってのに……。まったく、困ったもんです。
燻狼の考える蛇の本質……それは、崖から落ちそうになっている人間の背中を、そっと押してやることだった。
あるいは、社会の中に溶け込んで、崩れそうになっている場所を見つけ、そこに、ちょっとだけ力を加えること。存在に気付かれることなく、関係性を破壊して、世界を少しだけ悪いほうへと導くこと。
小さな悪意、一日一悪。それこそが肝要。
その悪が積み重なれば、歴史の流れは少しずつ、混沌のほうへと流れていく。
「だというのに、あの帝国の叡智ときたら、崖に落ちそうになってる人間を片っ端から助けるばかりか、崖のほうに向かわないように立ち回ってくる。まったく厄介なことです……」

燻狼の基本戦術は、徹底して、敵に気取られないことだ。そのために、直接的な攻撃は、得意ではないのだ。仕込みにはそれなりに時間がかかるし、顔が割れているとやりづらいことこの上ないわけで……。

「帝国の叡智の先兵だけでも排除できていれば、意味があったんじゃないのか？」

隣で不満そうな顔をするのは、額にバンダナを巻いた男、蛇の刺客の男だ。

燻狼とは違い、直接的な暴力によって悪を成す、その力を持ち合わせた男だが……。燻狼の見たところ、頭のほうは、あまりよくはないようだった。

――話してて楽しくはあるんですけどねぇ……。

などと言う燻狼の心に気付いた様子もなく、バンダナの男は続ける。

「この町で、派手に動き回ってるって噂だっただろう？　連中を殺すだけでも……」

「あれは、罠でしょう。情報の流れが露骨過ぎましたよ」

ゲルタにも言われていたこと……。帝国の叡智が、今は亡きクラウジウス候のこと、その家を調べているということ……。

それを聞いていた燻狼は、気まぐれに、確認のために立ち寄ったのだが……。来て早々に、クラウジウス家のことを調べて回る男たちの情報に接することができてしまった。

「あの帝国の叡智の手の者が、こんなにもわかりやすく、情報収集なんかするわけがない。明らかに罠ですよ。下手に食いついたら、どんな目に遭うことやら……」

「罠ごと食い破ってやればいいと思うが……しかし、なるほど……。それもそうか。権力を持った者にとって、末端の者の命など金貨よりも軽いのだろうな。わざわざ、敵の計算に乗ってやる必要もなし、か」

以前から思っていたことだが、このヴァイサリアンの末裔は、ど

うやら、権力者というものがひどく嫌いらしい。さて、過去にどんなことがあったのやら……などと思っていると。
「だが、それならば、直接、帝国の叡智を狙えばよかろう」
なかなかに、無茶なことを言い出した。
「クラウジウス邸を急襲すると？　なるほど、勇敢なアイデアですねぇ。騎士団の一つでも動かせれば考えてもいいのかもしれませんけれど」
「なにも警戒が厳しい館に突入することはない。火でも放てばよいのだ。出てきたところを襲えば、隙も作れよう」
なるほど、ただ、何も考えず突っ込むよりはマシかもしれないが……。
「ミーア・ルーナ・ティアムーンを知恵で出し抜こうなんて、無茶なんじゃないですかねぇ」
想定外の攻撃であれば、隙も作れるだろう。けれど、すべて予想済であったなら、それも難しい。
「帝国の叡智を侮るべきではない。あの者は、我らの巫女姫さまの知恵を上回り、ティアムーン帝国、レムノ王国、サンクランド王国の危機を防ぎ、騎馬王国の問題を解決してのけた……。初代皇帝の数百年越しの計画さえ、今や、風前の灯だ……」
口にして、改めて思う……。いや、すごいな！　と……。
とてもではないが、人間業とは思えない。
「あのような、叡智の持ち主と真っ向から知恵比べなど、愚かにもほどがある」
「俺に言わせれば、お前のやっていることのほうが、よほど滑稽に思えるが……」
眉をひそめて、彼は言った。
「そのように、袋を壁にこすりつけることに、いったい何の意味があるというんだ？」
「わかりませんか？　臭いですよ」
「ははは、なるほど。旅の途中だ。水浴びもできてないから、臭う

だろうよ。その臭いを建物に擦り付けて、嫌がらせをすることで、世界に悪意をばらまこうって寸法かな？」
「それはまた、地味に嫌な悪意の発露で……。実に心惹かれますがね」
燻狼はニヤリと口元を上げ……。
「今、相手にしてるのは、人じゃないんですよ、生憎と。もっと鼻の良い……おや？」
その時だった。二人の前に、立ち塞がる影が見えた。それは……。
「見つけたぞ。やはりいたか。燻狼」
火族の族長の妹、火慧馬（カ・エマ）と、その相棒の羽透（はすき）の姿だった。
「おやおや、これはこれは慧馬ではありませんか……」
目当ての人物が現れたことに、内心でほくそ笑みつつ、燻狼は、ことさらに親しげな口調で話しかけた。
「このようなところでお会いできるとは……ははぁ、なるほど。兄の馬駆同様に、帝国の叡智の犬になりましたか……」
煽る……煽る！　それに対し、慧馬は、素直にムッとした顔で……！
「失敬な。犬などではないぞ、狼だ！　それも、しっかりと飼いならされた優秀な狼だぞ！　間違えるな。なぁ、羽透」
頭を撫でられて、羽透が、ぼうふっと鳴く。
……狼ならいいんだろうか？　というか、飼いならされた狼って犬なんじゃ……？　などと、至極まっとうなツッコミの言葉が思い浮かぶ燻狼だったが、それを苦笑で呑み込んで……。
「それはそれは……。それで？　その狼さまが、このようなところでいったいなにを？」
「知れたこと。我は、戦士だ。我が友ミーアを守るため、そして、兄、火馬駆の仇を討つためにきた。お前たちが見つけられたのは、幸運以外の何物でもない」
そんな慧馬の言葉に反応したのは、隣の男だった。バンダナの男は、興味深げに慧馬のほうに目を向けて……。

「ほう！　兄の仇討ちとは面白い。その狼を使って、俺と戦おうっていうのか？　それとも、お前自身が剣を取るつもりか？　戦士の小娘よ」
バンダナの男は、嘲笑を浮かべ、剣を抜く。
「まぁ、俺はどっちでも構わないがね」
「ああ。殺さないでくださいよ？　あれは、人質にするんですから」
慌てて、燻狼が言った。
そう、それこそが、彼の狙いだ。
かつて、ミーア・ルーナ・ティアムーンを追い詰めたやり方……。
彼女の大切な者を人質にしておびき寄せる。帝国の叡智唯一の弱点を突く策である。
対して、慧馬は、ふふん、っと鼻で笑い、
「我が戦うまでもない。さぁ、こい！　帝国最強の騎士ディオン・アライアよ！」
堂々と胸を張り、声を上げた！

第百七話　闇夜の邂逅（後書き）

話の流れ的に、今度の月曜日もミーアは寝てることになるかと思います。
ということで、ミーアの登場は火曜日になります。

第百八話　慧馬、大失敗をやらかす！

朗らかに、高らかに、慧馬の声が夜空に響き……。響き？
「……あれ？」
一瞬の沈黙。慧馬は不思議そうに首を傾げる。
「変だな……。こうすれば、いいと確かに……」
っと、その時だった。
「やれやれ、そう勝手に出歩かれて、呼ばれても困るんだけどね……」
ぬぅっと……闇の中から現れる、一人の男。
戦場において鍛え上げられた体躯、その腰に二本の剣を佩いて……。涼やかな笑みを浮かべて立つ、その人物は……。
「お、おお……本当に来たな。ディオン・アライア。イエロームーンの娘の言ったとおりだ……」
慧馬は、感心した様子で言った。
そうなのだ……。慧馬は、ミーアの助言に素直に従い、シュトリナに助言を求めに行ったのだ。どうすれば、ディオン・アライアは怖くなくなるか……？　と。
その問いに、シュトリナは、うーん、と唸った後、
「武器を持って立ち向かおうとしないのが一番。それさえ守っていれば、殺されたりはしないし、逆に襲われている時にフラッと助けにきてくれたりすると思うけど……。あの人、神出鬼没だし……」
正直、半信半疑だった慧馬なのだが……シュトリナの目論見通り、ディオンは現れた。
「さすがは、ディオン・アライアの専門家。ミーア姫が推薦するだけのことはある。今度から、我が師と敬うことにしよう！」
まるで、凶暴な狼を手なずけた時のような快感に、ちょっぴり驚きつつも、いい気分になっている慧馬に、ディオンはチラリ、と視

線を向ける。
「ははは。なんだか、便利に使われているみたいで、ちょっと不快なんだけど……」
チャキッと剣を鳴らすと、慧馬はびっくーんと跳びあがった。
それから、すすすっとディオンから距離を置きつつ……。
「いや、まぁ、その……わっ、我は別にディオン・アライアを顎で使ったわけではないぞ？　ただ、我が友ミーア姫に敵対する輩を見つけたので、ここは、帝国の叡智の剣たる貴殿の出番かな、と思って呼んだだけで、決して……」
と、早口に言う慧馬。やれやれ、と首を振り、ディオンは言った。
「まぁ、別にいいけどね。君は姫さんのお友だちだし、今回は大目に見るよ。しかし……」
と、そこで、ディオンは改めて、燻狼に視線を向ける。
「またしても人質とはね。何番煎じかな？」
剣を抜き、肩に背負う。
「さすがに飽きてきた感は否めないのだけど……」
「有効な手は何度でも使う。ごく当たり前のことをしているつもりなんですがね……」
と言いつつ、燻狼は一歩足を引いた。できれば逃げたい、と全身で表すその傍らで、もう一人の男が剣を引き抜いた。
『武器を持って立ち向かおうとしないのが一番』
なぁんてシュトリナの言葉を、慧馬が思い出した次の瞬間。
「そうだったね。ああ、特に前回は上手いことやられたんだった……！」
直後、ディオンの姿が消える！
目を見開く慧馬の、その視界の中。空を覆っていた雲が切れ、月光が差し込んできた。
淡い光の中、現れたのは、燻狼に向かい、剣を振り上げるディオンの姿で……。
その、化け物じみたスピードに、慧馬は思わず……。

「……こ、こわぁ……でぃ、ディオン・アライア、こわぁっ！」
ドン引きした様子でつぶやいた。

一方、ドン引きする余裕すらなかったのは、燻狼だった。
「ひっ、ひぃいいいっ！」
突如、目の前に出現したディオン。剣を振り上げたその姿に、彼は思わず、その場にへたり込む。腰を抜かしたように……あるいは……そう見えるように。
直後、振り下ろされる刃、けれど、彼を守るように割り込んでくる者がいた。
「おお、いい太刀筋だが、素直に喰らってやるほど甘くはないぞ」
燻狼の相棒、バンダナの男は嬉々とした様子で、ディオンの斬撃を受け止める。
その手に持つのは、独特のフォルムをした曲刀。
それは、ガヌドス港湾国の近郊の海賊が好んで使うものだった。
「はっはー！」
ディオン・アライアの剛撃を受け止めて、得意げに笑う男、だったが……次の瞬間、その体が、真横に吹き飛ばされた。
くるりと体を反転させたディオンが、蹴りを放ったのだ。
――こいつ、お行儀の良い騎士って感じの動きじゃないねぇ。戦い慣れてるよ。
などと冷静に分析しつつ、燻狼は腰を抜かした演技を忘れない。その甲斐あってか、どうやら、ディオンの興味は、相方の暗殺者のほうに向かってくれたらしい。
「ほう、狼使いを葬ったというのは、君か」
剣を肩に担いで、ディオンは、のんびりとバンダナの男に歩み寄った。
「腕は悪くないみたいだが、まだ青いな。アベル王子のほうがよほど覚悟が決まってるよ」
「この俺が、生ぬるい王子の剣に劣ると……？」

「よかったよ。もしそう聞こえていなかったのなら、剣だけでなく、理解力まで王子殿下に劣るところだったよ」
「殺すっ！」
激高する蛇の刺客は、再び、ディオンに挑みかかっていき……。
――って、まともに戦ったらまずいんですけどねぇ。ああ、しかし、失敗しましたねぇ。ディオン・アライアがここまでの男とは。
燻狼は、己の判断ミスを悔いていた。
いかに、同じ町に帝国の叡智が訪れていようと、下手にちょっかいを出してはいけなかったのだ。それは……彼のやり方ではなかったのだ。
――上手くいかないことが多すぎて、焦りがあったということか。慣れないことをした報いですねぇ。
あわあわ、と口を震わせつつ、彼は、ディオンたちから離れるようにして後ずさる。後ずさりつつ……視線を巡らせる。その先にいたのは、火慧馬だった。
そう、確認すべきは……慧馬の視線から外れることができたかどうか、である。
火燻狼は、とても器用な男だった。彼は自らを「取るに足らぬ存在」であるかのように見せる術を心得ていた。
まぁ、実際問題として、戦闘力的に言えば、燻狼は取るに足りない存在には違いないので、演じることに、あまり苦労はないわけで。
その結果、彼はディオンの注意から外れ……慧馬の視線からすらも逃げ切ることに成功する。
彼らの注意の外、影の中に潜んだところで、彼は改めて状況を確認する。
残された時間は少ない。あの男と戦っているからこそ、ディオンの注意は逸れているだけで……。
――あいつが倒されるのは時間の問題。そうしたら、次は俺の番ということになりますからねぇ。
ならば、どうするか……？

この絶対的な危機にあって、彼が活路を見出したのは、慧馬の存在だった。
火慧馬は、かつては族長の戦士たちを率いて、略奪隊を指揮していた。
本人も、兄仕込みの剣を使う、なかなかの手練れである。その腕前は、恐らく燻狼をしのぐ。
ゆえにそこに油断がある……っと、燻狼は踏んだのだ。
そして……その予想は当たる。慧馬の視線は、今、ディオンに向いていた。
「よし！　やれ、ディオン・アライア！　我が兄の仇を取るのだっ！」
しかも、調子に乗っていた！
――さて、それじゃ、ま、やりますかね。
燻狼は、小さくつぶやくと、自らの剣の柄をひねる。柄から出てきた水と、自らの手のひらの中の粉とを混ぜ合わせ……。
「それっ！」
生まれたのは、強烈な光っ！
「なっ！？」
っと、驚きの声を上げ、固まる慧馬。
きゃんっと弱々しい声を上げる狼を尻目に、燻狼は流れるような動きで、慧馬の後ろに回り込む。
その体に腕を回し、鼻と口を布で塞いだ。
「むっぅっ！　ふ、ふんろ……ぅ……んぅ……」
バタバタと、一瞬、体を暴れさせかける慧馬だったが、すぐに、その体から力が抜けた。がくん、と膝を折りかける慧馬を抱きすくめつつ、一方で、混乱から回復しかけた戦狼には、
「近づいたら、お前の飼い主を殺しますよ？」
っと、念のために声をかけて足止めをする。さすがに訓練された戦狼なだけはあって、燻狼の言葉を聞いて、そこで動きを止めていた。

――さて、ここまでは計画通り。後は……。
ぐったりとした慧馬を抱えたまま、燻狼は声を上げる。
「ちょっといいですかね？」
その声に反応して、ディオンが大きくバンダナの男との距離を開ける。
一方で、バンダナの男は、追撃をかけようとはしなかった。その余裕は、どうやらなさそうだった。
――斬り殺されていないだけマシ、と言ったところでしょうね。彼も手練れではあるのでしょうが、このまま、戦えばどうなるかは明らか。やれやれ……。
ため息を吐きつつ、燻狼はディオンに目を向けた。
「さて、状況の確認、といきましょうか」
「まさか、その子を人質に剣を捨てろ、とでも脅してみるつもりかな？」
そう言いつつ、静かに刃を向けてくるディオンに、けれど、燻狼は肩をすくめた。
「いえいえ、そんな要求突き付けた瞬間、あなた、俺たちを殺しに来るでしょう」
人質が、かの帝国の叡智ならばいざ知らず。慧馬程度では意味をなさないことは、燻狼もよくわかっていた。
慧馬のために殺されてやるという選択肢は、ディオンの中にはないだろう。だからこそ、取引は『慧馬の命』と『ディオンの命』では成立しない。そうではなく……。
「慧馬には、すでに毒を投与しました。最終的には死ぬ類の毒ですが……今すぐにイエロームーンのお嬢さんに見せれば、解毒することも可能……かもしれませんねぇ」
燻狼は容易に妥協する。
それは『慧馬の命』と『自分たちが逃げる時間』との取引だった。
――帝国の叡智は人質に弱い。その剣たるこの男も、少なからず影響を受けているはず。であれば……。

「ほう。すぐには死なないが、最終的に死に至る類の毒……。しかも、イエロームーンのお嬢さまに見せれば、簡単に解毒できる……っと。あるものかな……？　そんなに都合のいい毒が……」
まるで馬鹿にするように、口元に笑みを浮かべるディオン。対して、燻狼は……。
「どうでしょうねぇ。どう思われます？」
できるだけ意味深に見える笑みを浮かべておく。
――まぁ、そんな都合のいい毒とか、ないんですけどね！
実際のところ、半ばヤケクソであった。
現在の、彼の手持ちの毒は、投与するとすぐ死んでしまう類の、毒性が高いやつだけだった。
そもそもが根無し草。イエロームーン家のように、屋敷内に多種多様な毒を取り揃えておく、などということは、当然できないわけで……。
――かといって、すぐに死なれたら、奴はそのまま殺しに来るでしょうし……。
慧馬を抱え上げた瞬間、彼女が死んでることに気付いたら、容赦なく斬りかかってくるだろう。であれば、慧馬は、きちんと生きていてもらわなければならないわけで……。
ということで、慧馬に与えたのは、ただの眠り薬だ。
以前、シュトリナを眠らせたのと同じものである。
「ちなみに、解毒はできるでしょうが、やるなら早くしたほうがいいと思いますよ。毒は毒。後遺症が残ったりするかもしれませんからねぇ」
無論、はったりである。後遺症的に言えば、ちょっぴり二日酔いっぽくなるかなぁ？　ぐらいのものであるのだが……。
蛇で鍛えられた燻狼が、それを顔に出すことはない。
そうして、彼はさっさと慧馬から離れる。慧馬を抱え上げるついでに、斬りかかられたら、ひとたまりもないからだ。
『慧馬を助けるためには急いでこの場を離れる必要がある』という

脅しを生かすためには、『燻狼たちを斬り殺すには、それなりに時間を消費する』という状況を維持する必要があるのだ。
「なるほど。十中八九、嘘なのだろうが、嘘と断定できるほどの確証はない。それに、君が嘘だ、と口にすれば、それはそれで疑わしい」
ディオンは何の未練もなくバンダナの男から離れると、慧馬のそばに行き、その体を抱え上げる。
「ははは、どうやら我ながら油断していたようだ。どうも、自分の命以外がかかってる駆け引きは、あまり得意じゃないみたいだよ」
小さく舌打ちしつつ、ディオンは何の未練もなく、さっさとその場を後にした。
その姿が闇に消えるのを確認してから、燻狼は、ふぅーっと、息を吐いてへたり込む。
「っと、一安心している暇なんてありませんでしたね。さっさとここを離れなければ……」
やれやれ、と首を振りつつ燻狼は、地面に倒れ込んでいるバンダナの男のほうへと歩み寄った。
「大丈夫ですか？」
「なんだあれは……。化け物かなにかか？」
「さんざん言ったと思いますけどねぇ。ヤバいって」
呆れたようにため息を吐き、燻狼は続ける。
「まぁ……手を出したらヤバいってわかってもらえただけでもよかったですよ。それで命があるんなら、上出来だ。とりあえず、急いでここを離れないとね」
「離れるのはいいが、これからどこへ行くんだ？」
立ち上がったバンダナの男を見て、燻狼は笑みを浮かべた。
「当分は、帝国の叡智とはお近づきになりたくないんでね……。帝国を出て、あなたの故郷に行くってのはどうですかね？」
「ガヌドス港湾国に……か」
「ええ。そこで、のんびりゆっくり、毒をまいていくとしましょう。

そのほうが、俺のやり方にあってるみたいなんでね……」

……ちなみに、慧馬は、ディオンに運ばれている途中、クラウジウス邸で目を覚ました。

目を覚まし……自分が、怖い、こわぁいディオン・アライアに抱えられていることに気付き……また、自らのミスで、燻狼らを取り逃がしたことを悟り……。

この後、ディオンに死ぬほど怒られるんじゃないかなぁ、とこわぁい想像をした結果……。

「ううん……」

再び、意識を手放すのだった。

第百八話　慧馬、大失敗をやらかす！（後書き）

※情報整理

〇ベルとパティの秘密を知っている人たち
ミーア、ベル、パティ、ルードヴィッヒ、ガルヴ、アンヌ、シュトリナ

〇ベルの秘密のみを知っている人たち
アベル、シオン、キースウッド、ラフィーナ、ティオーナ、リオラ、ラーニャ、リンシャ、モニカ、（おおむね生徒会の面々）、ディオン

※なお、未来のミーアの周りの人たちはベルの秘密は知っているようだが、パティに関しては記憶しておらず。そもそも、彼らの時にもタイムスリップしてきたのかどうかすら不明。

第百九話　ミーア姫、ちょっぴりおこがましくなる……

さて……。

ミーアにしては夜更かしをした翌日のこと。

柔らかな朝日を浴びて、ミーアはゆっくりと目を開ける。ぼんやりと滲む視界、その中には、すやぁっと気持ちよさげに眠るベルとパティの姿があった。

――はて、どうしてこんなことになっているんだったかしら……？

などと一瞬、首を傾げるも、すぐに昨夜のことを思い出し……。

それからミーアは、パティの顔を見た。

それまでは硬い表情というか……心の内がわかりづらいことが多かったが、昨夜のやり取りを経て、ほんの少しだけ距離が近づいたような気がして……。

「というか、こうして眠っている姿を見ると、まだまだ可愛い子どもですわね。ふふふ」

ついつい微笑ましい気持ちになったミーアは、優しくパティの頭を撫でた。

「ゆっくりと、良い夢が見れていればいいのですけど……」

その微笑みは年相応の、すなわち二十歳過ぎたお姉さんの包容力を、多少なりとも感じるような笑みだった。大変珍しいことである。

っと、そんな感じで心地よい目覚めを迎えていたミーアであったが……。

こんこん、っと遠慮がちなノック。

ドアを開け、現れたのは、アンヌだった。

「失礼いたします。ミーアさま、ルードヴィッヒさんとディオンさんが、お話ししたいことがあると、訪ねてこられたのですが……」

「あら……二人が？　こんな朝早くから珍しいですわね……。よほど緊急のことでも起こったのかしら？」

首を傾げるミーアであったが……。すぐにベッドから降りる。
「着替えをしますわ。アンヌ、手伝ってもらえるかしら？」
ミーアの嗅覚が、ほんのりとした危機的状況を嗅ぎ取っていた。
――ディオンさんが来ているという時点で、すでに危険な香りがしますし……。これは、急いで対処すべき案件かもしれませんわ。
っと、そう判断し……。直後……。
くぅっと、ミーアのお腹が切なげな声を上げる。
「……ふむ」
お腹をさすりつつ……ミーアは頷く。
「とりあえず……朝食を食べながら、お話を聞かせていただこうかしら……。お二人もお腹が減っていると、落ち着いて報告できないでしょうし……」
っということで、急遽、部屋に朝食が運び込まれる。
その音で目を覚ましたベルとパティは連れ立って部屋を出ていった。
一見すると姉妹めいたその姿に、またしても微笑ましい気持ちになってしまうミーア・オトナノオネーサン・ルーナ・ティアムーンであった。
さて……そんなこんなで、ディオンとルードヴィッヒを迎え入れたミーア。さらに、ディオンの後ろからは、しょんぼーりと肩を落とす慧馬もついてきた。
「あら、慧馬さんもいらしたのね。では……ええと、申し訳ありませんけど、一人分追加で……」
「あの、ミーアさま、皇帝陛下が朝食をご一緒にしたいとおっしゃられて……」
っと、おずおずというアンヌに、
「そっちはパティとベルにお任せしますわ」
ミーア、ニッコリ笑顔を浮かべてスルー。それから、
「お昼はぜひ一緒に食べましょう、と言っておいてくださいましね」
きちんとフォローも忘れない。できる大人のお姉さんは、スルー

&フォローを完璧に使いこなすのである。
「ええと、それで、いったいどうしましたの？　このメンバーで話しに来るなんて、珍しいですけど……」
首を傾げつつ、手前のパンをペロリ。
焼き加減は上々。バターは騎馬王国のものには劣るものの、まずまずといったところか。
追加で来たパンに、今度は蜂蜜をたっぷり塗ってペロリ。うーん、美味しい！
などとやっているところで……。
「実は、昨夜、混沌の蛇の刺客と遭遇しましてね……」
ディオンの言葉に、思わず、ゴクリ、とパンを飲み込んでしまう。
せっかく、もう少しもぐもぐ楽しもうと思ってたのに！　と、心の中で嘆きつつも……。
「まぁ！　わたくしの知らぬ間に、そのようなことになっていたんですのね……。それで、お二人ともケガはございませんの？」
ミーアは慧馬のほうに目を向ける。対して、慧馬は……ものすごーくすまなそうな顔で……。
「面目ない……。我が、調子に乗らなければ、みすみす敵に逃げられるようなことにはならなかったのに……」
そうして、しょんぼーりと肩を落とす慧馬に、ミーアは小さく首を振った。
「いいえ、あなたに怪我がなければ、なにも問題ありませんわ」
「しかし……」
「確かにあなたは、お兄さまの仇を討つためについてきた。それに、お兄さまの代わりとして、わたくしの護衛を買って出てくれた。けれど、同時にあなたは、わたくしの友なのですから。怪我一つなかったというのであれば、それで構いませんわ」
「うう……ミーア姫……。我が友よ」
などと感動に瞳をウルウルさせる慧馬を尻目に、ミーアはディオンのほうを見た。

「ディオンさん、あなたもよくやってくれましたわ。よく慧馬さんを守ってくれましたわね」
「そう言っていただけると、少しは気持ちが軽くはなりますがね。実際、してやられましたよ」
そう肩をすくめるディオンに、ミーアは首を振った。
「あなたがいて逃がしてしまったというのであれば、それは仕方のないこと。敵がそれだけ上手だったということですわ」
「ははは、返す言葉もありませんな。すっかり敵の実力を見誤りました。真に警戒すべきは、あの毒使いの男のほうだった」
毒使い……はて？　と一瞬、首を傾げるミーアだったが、すぐに思い出す。
「エシャール殿下に毒を渡したと思しき男ですわね。リーナさんを誘拐したのも彼だったのではなかったかしら……？」
「火燻狼という。我が火族出身の男だ。剣の腕はそれほどではないのだが……」
っと、苦々しい顔をする慧馬に、ルードヴィッヒが頷いてみせた。
「知恵は、時に、武力を上回る脅威となる。こちらにミーア姫殿下がおられるように、敵にも当然、知恵働きができる者がいると……そのことをしっかりと肝に刻むべきなのでしょうね。無論、ミーアさまに及ぶべくもない、とは思いますが……」
ルードヴィッヒの言にミーアは素直に頷いて、
「そうですわね。大いに警戒すべきですわ。敵にもわたくしのように聡明な者がいると……」
実におこがましい態度だった！

第百十話　水の音の子守歌

さらに、翌日。ミーアたちは急ぎ帝都にとって帰した。
ちなみに、帝都に戻ったところで、めでたく、マティアスとは別行動になった。
「シューベルト候とは、久しく顔を合わせておらんし、私も……」
などとぶつぶつ言っていたが、スルーである。
さて、ミーアたちのお願いを聞いたレティーツィアは、快く屋敷に入れてくれた。
「クラウジウス家から譲り受けた楽器というと、これのことでしょうか？」
そうして、レティーツィアが案内してくれた先にあったのは、木の箱と陶器を合わせたような、不思議な細工の楽器だった。
「あら……これが楽器なんですの？　なんだか、ヘンテコな形をしておりますけれど……」
「これは、クラウジウス家が保管していた、紙で音が鳴るという変わった楽器なんです」
そう言って、レティーツィアは、箱に大きな紙を入れて、それから横にあるハンドルを回し始めた。
穴の開いた紙が中に吸い込まれていき、直後、チィン、と陶器の澄んだ音が鳴る。
「あら、綺麗な音……。不思議な楽器ですわね」
硬質な音は、やや不規則ながら、ほぼ一定のリズムで鳴っていた。
まるで、中に小さな人間が入って、太鼓を叩いているみたい！
などと、ワクワクするミーアだったが……。ふとパティのほうを見ると、彼女は怪訝そうな顔をしていた。
「あの……これの使い方、ゲルタは言ってませんでしたか？」
そう問われて、レティーツィアは、首を傾げた。

「使い方、というと……これではだめなのかしら？」
その問いに、パティは静かに頷いて……。
「この楽器は、ここに水を入れないと、上手く音が出ないから」
そう言って、パティはちょこんと背伸びをすると、箱の上部につけられた陶器を取り外した。
「これに……水を入れるの？」
不思議そうな顔をするレティーツィアに、パティは小さく頷き、
「この印がついてるところまで水を入れるの」
ミーアが覗き込むと、陶器には、それぞれ微妙に違う位置に線が引かれていた。
パティの指示のもと、水を入れた後、木箱にはめる。それから再び紙を挟んでハンドルを回してみる……っと！
「おお！　これは……」
先ほどとは打って変わって、聞こえてくるのは、単純なリズムだけではなかった。
それは、れっきとした音の連なり。教会で聞く聖讃美歌のような、きちんとした曲だった。
「これは……すごいですわ！　こんなものがございますのね。どんな仕組みなのかしら？」
などと、ウキウキ喜んでいたミーア、であったのだが……。
「あら……なぜかしら……？　なんだか、こう……聞いてるとちょっと不安な気持ちになってきますわね」
流れるのは、確かに綺麗な音の連なりで……でも、どこかに不協和音が混じるような……なにか不快な音が混じっているような、そんな曲で……。
「これは、確か、聴いた人が一週間後に死んでしまうという呪いの曲だったような……」
「なっ！　なんで、そんな恐ろしそうな曲がございますのっ！？」
思わず悲鳴を上げるミーアである。
対して、パティも顔をしかめて、

「私も、この曲、怖いから嫌い。でも、クラウジウス家にあった曲は、全部、邪教の影響を受けた秘密の曲だったから……」
「そうか。中央正教会に知られるとまずいような、邪教の儀式歌。それを記録して後世に伝えるための道具が、この楽器なんですのね……」
つまりは、この楽器もまた、蛇の遺産ということになるのだろう。
「なるほど、だから、ゲルタさんは正しい使い方を教えなかったんですのね。納得ですわ」
腕組みしつつ、うむうむ、と頷くミーア。一方、ルードヴィッヒのほうも感心した様子で、楽器を眺めていた。
「そうか、ここから、着想を得たのが、ヨルゴス式音階か……」
「ん？　どういうことですの？」
「ヨルゴス式音階の優れた点は、言ってしまえば、音の共通化を成したことです」
そう言ってから、ルードヴィッヒは、レティーツィアにお願いして、グラスを用意してもらった。そこに、それぞれ、量を変えた水を入れていき、軽く指ではじいて音を出す。
「このように、グラスに入れる水の量によって、音の高さは変わります。これにより、それまで口伝でしか伝わってこなかった音階を共通のものとして広めたのです。例えば、この一番上の穴は、グラスのここまで水を入れたもの、二番目は、ここまで、といった具合に、あらかじめ決めておくわけです」
「なるほど。これは、なかなか面白いものですけど……」
それから、ミーアは、パティのほうに目を向けた。
「では、この紙をあの楽器に差し込むと、なにかの音楽が流れると……あら？　でも、これって、サイズが合わないような気がいたしますけど……」
ミーアは、手元の虫食い状態の紙と、目の前の楽器に差し込まれた紙とを見比べる。
「楽器に入れた紙のほうは四倍ぐらいの大きさがございますけど…

…」
「はい。これは、あれに、直接、差し込むためのものじゃないです」
そう言うと、パティは、ミーアから紙を受け取る。
それから、紙を指でなぞりながら、
「この一番左の穴が、この音……」
ルードヴィッヒが用意したグラスを指ではじく。
「次が、これ。その次が……」
キン、キン、と高さの異なる音が鳴る。音は繋がり、一つの曲を奏でだす。
「こうやって、いつもハンネスと遊んでるんです」
そうして奏でられたのは、どこかもの悲しいような、それでいて懐かしいような……。なんとも言えない曲だった。
「ふむ……、なるほど。
つまりこれは、ハンネス大叔父さまが、昔を懐かしんで、作曲したものを本に挟んでいただけ、ということかしら？」
意味深に挟んであった割には、ちょっぴり拍子抜けだったが……。
「いえ、どうなのでしょう……」
ルードヴィッヒが難しい顔でつぶやく。
「それならば、別に、わざわざ穴を開ける必要がないはず。ただペンで書けばいいだけではないでしょうか。わざわざ穴をあけたということは、この楽器のことを思い出してもらいたかったからで……」
「なにか、パティにだけ伝えたいことがあったのだ、と……そういうことですのね……」
と、その時だった。
黙って、パティの奏でる曲を聞いていたヤナが口を開いた。
「……これ……この、曲……。母さんが歌ってくれた歌だ……」
「へ？」
ぽかん、と口を開けるミーアに、ヤナが興奮した様子で言った。
「昔、母さんが歌ってくれたんです……。あたしたちに、子守歌でよく歌ってくれてた歌なんです」

エピローグ　ある些細な悲劇

「はて？　ヤナのお母さんの、歌、ですの？」
首を傾げるミーアに、ヤナは小さく頷いた。それから、そっと息を吸って、歌い始める。

「西の夜空に月、三つ。
東の夜明けに、日が六つ。
古き約束より出し、
我ら、いずれ帰らん。かの地へと。
いずれ帰らん、霧の海へと」

「いずれ帰らん……。なにやら、意味深ですわね。それに、最後の部分の歌は、なんだか、ちょっと音が変な感じがしますわね。上に行ったり、下に行ったり……」
パティのほうに目を向けると、彼女も小さく頷いて、
「その部分は、この紙には書いてなかった。ただ、繰り返しのメロディーになっていました」
そう言って、パティは自らの手元の紙に目を落とした。
「あはは……。それは、もしかしたら、あたしの母さんの覚え違いかもしれません。あたしも、なんか変な歌だなって、思ってましたから」
それから、ヤナは遠くを見つめるように瞳を細める。
「もしかしたら、途中まで歌って、気持ちよくなって……だから、最後のところだけ音が外れちゃったんじゃないかな……。最後のところだけすごく変だから逆に覚えてたけど……。母さん、歌、下手だったから。でも、下手なのに、毎日歌ってくれたから、すっかり覚えちゃった……」

そうして、ヤナは笑った。とても寂しそうな顔で……。
もしかすると幼かったキリルより、母親との思い出が多いから……だから、思い出して辛くなってしまったのかもしれない。
ミーアが、ヤナの頭を撫でてあげようと、近づこうとしたところで、パティがゆっくりとヤナのそばに寄り添い、その背中をさすった。それはちょうど昨日、パティがしてもらっていたような……そんな優しい仕草だった。
そして、子どもたちを労わるように、アンヌも、ベルやシュトリナも見守っている。
――ふむ……、あちらはなんだか大丈夫そうですわね。とすると、わたくしが今すべきことは、頭脳労働ですわね！
……ミーアが、また無茶なことを言い出した。
「ええと、状況を整理するべきですわね。まず……ハンネス大叔父さまは、地を這うモノの書を熱心に探っていた。そして、そんな彼の部屋から、ヤナたちのお母さまが歌っていた子守歌が出てきた。これは、何かしらの関係性があると考えるべきなのかしら？」
ミーアは、パティのほうに目を向けて、
「ちなみに、パティ、あなたはヴァイサリアンとなにか所縁があったりしますの？　例えば、出身がガヌドス港湾国のほうだったとか……」
クラウジウス家に引き取られる前のパティの暮らしを、そう言えば聞いていなかった、と思うミーアだったが……。パティは静かに首を振り。
「生まれも育ちも、帝国です。この曲も聞いたことはありません」
「ふむ……とすると、この音楽が残されていたことが、とても意味深な感じがしますわ」
「そうですね。紙に穴を開けているのも、気になります」
くいっと眼鏡の位置を直しつつ、ルードヴィッヒが言った。
「先ほども言った通り、ただ、音楽の記録をしておきたいだけであるなら、紙に書いておけばいい。ヨルゴス式音階で記録するために、

わざわざ穴を開ける必要はどこにもありません。自分のためのメモであるならば……。にもかかわらず、このように穴を開けたということは、この楽器を強く印象付けるためではないでしょうか」
「なるほど。つまり、ええと……この紙は、誰かに向けて、この音楽のことを伝えようとした……ハンネス大叔父さまのメッセージだったかもしれない、ということですわね」
それで、合ってるかなぁ？　っと、横目で窺えば、ルードヴィッヒは満足げに頷いていた。
どうやら、合っていたらしい！
「ふむ……。しかし、ヨルゴス式音階も、考えてみると気にはなりますわね。そのヨルゴス神父という方が自分で考えた可能性ももちろんございますけれど……ハンネス大叔父さまと知り合いである可能性も……」
「あ、そうだ。ミーアさま、あたしたちを保護して、セントノエルに送ってくれた神父さまの名前が……確か、ヨルゴスって言っていました」
それを聞いて、ミーアは瞳を見開いた。
「あら……それは、意外な偶然ですわね。ということは……」
「同名ということも考えられます。ミーアさま、ヴェールガのラフィーナさまに確認を取ってみるのがよろしいのではないでしょうか？」
ルードヴィッヒの言に頷きつつも、ミーアは腕組みする。
「ラフィーナさまと……それに、ローレンツ卿にも連絡が必要かしら？　ハンネス大叔父さまを国外に逃がしたのは、他ならぬイエロームーン家なのでしょうし。どこの国に脱出させたのか、確認が必要ですわね」
シュトリナのほうに目を向ける。と、シュトリナは静かに頷き、
「すぐに、お父さまに確認をとります」
「ええ。お願いしますわね。ただ……」
と、そこで言葉を切って、ミーアは窓の外に目を向ける。

「いずれにせよ、ガヌドス港湾国には、すぐにでも行くことになりそうですわね。エメラルダさんにも連絡して、段取りをつけていただきませんと……ああ、これから忙しくなりそうですわ」
そうつぶやく、ミーアであったが……その予想はある意味で裏切られる。
ミーアたち一行がガヌドス港湾国に行くのは、少し先のことになるのだった。

さて……。帝国からガヌドス港湾国に移り、のんびり陰謀工作に勤しもうとしていた火燻狼が、その悲報を受けとるのは、季節が秋から冬に変わりかけた頃のことになった。
大型台風ミーアが、ガヌドス港湾国に上陸しつつあるという悲報……それは、時期的に言えば、彼がようやく人間関係を構築しつつあり、これから、すこぅしずつ悪意の種蒔きをしようかな、と……、楽しくなってきたぞぅ！　という……まさにその時だったのだ。

それは世界中のどこにでもあるような、ちょっとした些細な悲劇。それをもたらした大型台風ミーアがかの地に何をもたらすのか、知る者は一人もいなかった。

エピローグ　ある些細な悲劇（後書き）

……あっ、今日で第六部終わります。
来週から第七部にします。

プロローグ　夏休みも終わりに近づき……

さて、夏の終わりも間近に迫った頃……。
ミーアのもとに、三通の手紙が届いていた。
一通目は、イエロームーン公ローレンツからのもの。
今しがた、白月宮殿へとやってきたシュトリナの手により、直接届けられたものだった。そこには、ミーアたちの予想通り、ハンネスがガヌドス港湾国に亡命したことが記されていた。
「やはり、生きておりましたのね……。しかし……」
と、シュトリナのほうに目を向ければ、彼女は静かに首を振り……。
「ハンネス卿のご病気のことは、父も把握していなかったようです」
「把握していなかった……ということは、ハンネス卿ご自身が口にしなかったということか……」
ミーアの隣には、知恵袋、ルードヴィッヒが当たり前のように待機している。
頭脳労働の際には、叡智の知恵袋の携帯を欠かすことのない、しっかり者のミーアなのである。
そんな叡智の知恵袋ことルードヴィッヒのつぶやきに、シュトリナが一つ頷いて……。
「もっとも、言う暇がなかったということも考えられますから。なにしろ、我がイエロームーン家の本分は、暗殺ですから」
「なるほど。確かに。暗殺すると見せかけて国外に逃がしていたということなら、病気の事情など、いちいち気にしている余裕はない、か……」
いずれにせよ、今も生きているのであれば、ぜひ、直接会って話を聞いてみなければならない。
そんなことを考えつつ、ミーアは二通目を開く。こちらは、緑月

省からのものだった。
書面に目を通したミーアは、うーむ、と唸った。
「ガヌドス王は、相変わらずですわね……」
ため息交じりに、ルードヴィッヒに書面を渡す。それを一読したルードヴィッヒは、シュトリナのほうにも手紙を回しつつ腕組みする。
「やはり、ガヌドス国王は食えない男のようですね。正式な方法では、取り合ってもらえませんか」
こちらも、眉間に皺を寄せて、悩ましげな顔をする。
手紙には、ガヌドス港湾国は現在、多忙な時期にあるため、仮に来てもらったとしてもろくなおもてなしができそうにない……みたいなことが、慇懃無礼かつ長々と書かれていた。
「うーん……そういえば、前の時ものらりくらりとかわされたんでしたかしら……」
そうつぶやき、思い出すのは前の時間軸、革命期の時代のこと。
ペルージャン農業国と同様、ガヌドス港湾国にも、当然のごとく救援を求めようとしたミーアたちであったが……何度、会談を望んでも、ガヌドス国王は、なんだかんだと理由をつけて、会おうとはしなかったのだ。
「表立って敵対してこない分、面倒なんですわよね。うーむむ。どうしたものか……。ちなみに、ガヌドスの協力を取り付けず、邪魔されることを覚悟のうえで調査を進めることは可能かしら？」
確認するように問いかけると、ルードヴィッヒは一瞬、考え込んでから……。
「不可能ではないと思いますが、難しいのではないかと……。ミーアさまもご存知のとおり、彼は、切れ者なので……。どのような妨害をしかけてくるか……」
「ですわよね……。ううん……となると、やはりグリーンムーン公に、なんとかとりなすように動いていただいて……。そのために、エメラルダさんの力を借りるか……」

そもそも、ミーアにはわからないのだ。
なぜ、ガヌドス国王が未だに、ミーアらに非協力的なのか……。
確かに、初代皇帝の立てた計画に乗っていれば、彼らは甘い汁を吸えるかもしれない。帝国が混乱に陥れば、その領土なり、権益なりを削り取り、自分たちの国を強化できるだろう。
あるいは、国王が蛇の影響を強く受けているのであるならば、確かに帝国を潰して秩序を破壊しようとしていることだってあり得るわけだが……初代皇帝の思惑は、すでに瓦解している。
これ以上、こちらに敵対しても意味がないような気がするのだが……、と首を傾げざるを得ないミーアであった。
「うーん……」
唸りつつ、ミーアは三通目の手紙を開く。
それは、ラフィーナに出した問い合わせの手紙で……文面に目を落としたミーアは、
「おおぅ……」
思わず、おかしな声を出す。
そこには「ヨルゴス式音階は、確かに、ガヌドス港湾国に赴任している神父ヨルゴスによって考案されたものである」という旨と共に……。
『ところで、そろそろ、夏休みも終わりですね。セントノエルでお会いできるのを楽しみにしています』
なる文面が……。
「こっ……これは……」
なぜだろう……ミーアは、その文章から、なにやら迫力のようなものを感じ取っていた。
「これは……夏休みが終わったら、絶対にセントノエルに戻らねばならぬような……このプレッシャーは……。これ、もしサボったりでもしたら……」
っと、その時だった。シュトリナと一緒に遊びに来ていたベルが声を上げた。

「あっ！　ミーアお姉さま、大変です。ルードヴィッヒ先生の日記帳に『司教帝』の文字が……っ！」
「なっ！」
驚愕に固まるミーアであったが……。
「あはは、なぁんて、冗談ですよ、冗談」
などと楽しげに笑うベルである。対するミーアは苦り切った顔で首を振った。
「ベル……あなたの冗談は、なんていうか、冗談になってないですわ」
なんというか……こう、あまりラフィーナに寂しい思いをさせると、すぐに獅子に変貌してしまいそうな、そんな予感があるのは確かなわけで……。
「とはいえ、あまり授業をサボるのもよろしくないのは、確かな事実……。ヤナとキリルにもきっちりと勉強してもらいたいですし……それ以上に、ベルをサボらせるわけにはいきませんし！」
ギラリ、と睨まれ、ベルがすくみ上る。
「早く帰らないと、司教帝が復活してしまうと言いますし、これは、予定通り夏休みが終わったらセントノエルに帰らねばなりませんわね！」
「え？　あ、いえ、あくまでも、冗談ですよ。ミーアお姉さま、そんな、焦ってセントノエルに帰らなくっても……」
あわわ、っと口を開けるベルに、ミーアはニヒルな笑みを浮かべる。
「ベル……人は自らが蒔いた種の刈り取りを、自分でする必要がございますのよ？　先ほどの軽口の報いは、自らで受け入れなければならないのですわ！」
キリリッと、人生の真理を伝えつつも、ミーアは腕組みする。
「問題は、パティですわね……。せっかく弟を探しに行けると思っているのでしょうし、気落ちしてしまうかも……」
などと心配したミーアであったが……予想に反して、パティは素

直に頷いてくれた。
「この時代で、学べることも多いと思うから……」
なぁんて、素直で健気なことを言うパティに、ミーアは思わず感動しつつ……。
「しかし、ベルとの差はいったい何なのかしら……？　こんなに勤勉な人の子孫が、なぜ、あんな……。これは、お父さまの影響か、あるいは、ベルの母親の影響か……。まったく、間にどんな人が挟まると、あのようなサボり癖が生じるのかしら……？」
ベルの祖母の影響をまったく考慮に入れていないミーアなのであった。

第一話　高貴なる公爵令嬢エメラルダとのお茶会

セントノエルへの帰還を決めたミーアは、とりあえず、帝都ですべきことをしておく。

それは、そう……エメラルダとのお茶会である！

「ガヌドス港湾国のことで力を借りなければなりませんし、根回しをしておく必要がありますわね」

グリーンムーン家保有の珍しい外国のお茶菓子が目当てではない。あくまでおまけである。念のため。

ということで、ミーアは早速、帝都にあるグリーンムーン邸を訪れていた。

――前時間軸で、ガヌドス側は、すべてグリーンムーン家を通して、とか言っておりましたし……。グリーンムーン公から言ってもらうのが手っ取り早いですけど……。

個人的に、あまりグリーンムーン公のことを好まないミーアである。

なにしろ彼は前時間軸において、一族郎党をまとめて、さっさと帝国の外に脱出してしまった男である。いわば裏切り者である。

エメラルダとの和解は済んでいるものの、彼女の父には未だにモヤモヤを抱えるミーアである。

――まぁ、それでなくても、大貴族には面倒な方が多いですし……。お父さまを通して声をかけてもらうのも手ではありますが、いささか確実性に欠けますわ。やはり、一番に頼るべきはエメラルダさんですわね。

あの冬の日に、盟約を交わしたエメラルダのことを、ミーアは信じていた。

――まぁ、幸いにして、エメラルダさんも、我が血族の中ではお調子者筆頭みたいな方ですし。おだてれば、動いてくれるのではな

いかしら……。
そう、ミーアは信じているのだ。エメラルダの単純さを！
――うふふ、となれば、問題はやはり、出されるお茶菓子ですわね。楽しみですわ！
……あくまでおまけ……のはずである。
ともあれ、比較的軽く考えていたミーアであったのだが……出迎えに現れたエメラルダの表情を見て、わずかばかり気持ちを引き締める。
なぜなら、ミーアを迎えるエメラルダの表情は、どこか硬く、よそよそしいものだったからだ。
「本日は、ようこそいらっしゃいました。ミーア姫殿下。家人一同、心より歓迎いたします」
スッと姿勢よく頭を下げるエメラルダに、礼を返しつつ、ミーアは首をひねる。
――これはいったい、どうしたのかしら……？　なにやら、エメラルダさんらしくないような……。
などと、頭の中を「？」で満たしつつ、案内されるままに入った部屋。丸いテーブルの上には、すでにお茶の用意がしてあった。
「どうぞ、早速、お茶にいたしましょう」
すまし顔でそう言ってから、エメラルダは、傍らに控えていたメイドのニーナに声をかけ、それから、ミーアをジッと見つめる。
ジッと……ジィィッと！　上目遣い気味に、ちょっぴり睨んでくるエメラルダ。やはり、どこか様子がおかしい気がする。
「ええと……ああ、そういえば、先日は、シオンの接待を感謝いたしますわ」
このまま黙っててても話が進まない、と、とりあえず話を振ってみるミーア。
「いえ。大したことではありません。エシャール殿下も、兄君とゆっくりお話しできたようでしたし、許嫁である私も手配のしがいがあるというものですわ」

エメラルダは、ニコリともせずに、運ばれてきたお茶を一口。それから、テーブルの上にあったケーキをフォークで切ってパクリ！

……やはり、様子がおかしい。

――これは、シオンがなにか言ったとかかしら？　それとも、エシャール殿下のことで、お父君ともめたとか？

などと考えていたミーアに、エメラルダは、再び、ジロォリと視線を向けて……。

「……それより、聞きましたわよ？　ミーアさま……。私のいないところで、ずいぶんと楽しい夏休みを過ごされたみたいですわね」

「……へ？」

「ルヴィさんと乗馬遊びをしたり？　レティーツィアさんのところで、お料理を一緒に作ったりしたとか……ああ、つい最近まで、クラウジウス領に遊びに行っていたんでしたっけ？　シュトリナさんたちと一緒に……」

「あ、え、ええ、そうですわね……。いや、まぁ、遊んだわけではありませんけれど……」

「夏休みは、親友の私と一番に遊ぶべきではありませんの！？」

だだんっとテーブルを手で叩き、エメラルダが立ち上がる。

その魂の叫びを耳にしたミーアは、思わず……。

――ああ、そう、これこれ。これでこそ、エメラルダさん……。実にエメラルダさんですわ！

うんうん、と思わず納得の頷きをしてしまう。

「なにをそんなに満足そうな顔をしておりますの？　ミーアさま、私、いつお誘いの声がかかるかと、楽しみにしておりましたのにっ！」

などと言う悲痛な声に、ミーアは心を揺さぶられて……そっと頭を下げた。

その内、相手が来るんじゃないか？　と待ち続ける辛さは、ミーアも前時間軸で経験済だったからだ。

自分が、あの！　アホのシオンと同じようなことをしていたかも

しれない、と考えたミーアの心は、思いのほか揺さぶられたのだ。
「それは、申し訳ないことをしましたわ。いろいろすることがあったとはいえ……そんなふうにお待たせしてしまっていたなんて。今日は……その分、お茶会を楽しめれば、と思いますわ」
そうして笑みを浮かべるミーアに、エメラルダは、まだ、頬を膨らませていたが……。
「まぁ、せっかく、待望のお茶会ですし……？　ミーアさまがいろいろと忙しくしておられるのは知っておりますから、これ以上は言いませんけれど……。私はいつでもミーアさまがいらっしゃるのを待っておりますわ。いつでもウエルカムだということは、お忘れなきようにお願いしたいですわ」
そうして、ふんっと顔を背ける、高貴なる公爵令嬢（ツンデレディ）・エメラルダなのであった。

第二話　四大公爵家筆頭令嬢

「それで、先ほどは聞き損なっておりましたけれど、シオン王子とエシャール殿下との会合では、どのようなお話が出ましたの？」
尋ねると、エメラルダは小さく首を傾げて……。
「さぁ……。実は、あまりお二人のお話には参加しませんでしたの。家族の内でしかできない会話と言うものもありますでしょうし……」
ミーア、その言葉を聞き、瞠目する！
あのエメラルダが……あの、面食い令嬢として知られる、あのエメラルダが、イケメン王子兄弟の会話に参加しに行かなかったのが、意外過ぎたためだ。
――まぁ……でも、エメラルダさんも弟を何人も持つ身。シオンの気持ちを慮れたとしても不思議はないか……。
なぁんて思いつつ、紅茶を一すすり。マカロンをパクリ。うーん美味しい！
「その間に、私はティオーナさんとお話しさせていただきましたわ。ルドルフォン家の令息が、エシャール殿下と学び舎を共にされているとのことでしたから」
「ああ。セロくんですわね。ふふふ、なかなか見どころがある、学者の卵ですわ」
なぜか、得意げなミーアに、エメラルダは真面目な顔で頷いた。
「ええ。私もとても驚きましたわ。ペルージャンとの小麦の共同研究……。各地で不作が続いていることは存じておりますけれど……まさか、今日の事態を見越し、ミーアさまが、あのような人材を見つけておられたなんて……」
頬に手を当てて、エメラルダは続ける。
「幼いながらも、優れた観察眼……。あのような俊英と、我が夫エシャールさまが交流を持つことは、とても素晴らしいことですわ」

――ふむ、さりげなく我が夫とか言っておりますわね……。まぁ、将来的にはそうなるのかもしれませんけれど、実に気が早いことですわ。
やれやれ、と首を振るミーアである。
ちなみに、ミーアも、某蛇の巫女姫を「お義姉さん」と呼んでいたような気がしないではないが……そんなことは一切忘れているミーアである。
「ということで、改めて、我がグリーンムーン家も、聖ミーア学園への助力を惜しみません。教員や資金面、なんでも言っていただきたいですわ」
「あら、それは、確かに助かりますわね。それでは、働きに期待させていただきますわ」
グリーンムーン家は、古くから国外に強力な人脈を持つ。その協力は、なにかと学校運営の役に立つものだろう。
などと、冷静に計算するミーアの目の前に、新たなお菓子が運ばれてきた。
「あら……これは？」
「お口直しですわ」
深めの容器に入ったそれは、たっぷりと黄金色のソースのかかった、透明の四角い塊だった。塊は、一口大で、遊戯に使うダイスのような見た目をしていた。
――ふむ、この透明の四角いのはいったい……？
試しにスプーンでつついてみると、プルン、プルン、と揺れる。
それをスプーンですくい、たっぷりのハチミツに絡めると、一口パクリ……。瞬間、口の中に広がるのは、ほのかに冷たい甘味だった。
「おお、ひんやりしておりますわね……。これは、いったい……」
「ふふふ、これは、寒月天という、海藻を固めたお菓子ですわ。ガヌドス港湾国辺りでは、古くから親しまれているもので……」
「ほう……」

つぶやき、ミーアはもう一口、透明のダイスを口に入れる。
ガヌドス港湾国ごと呑み込んでやるぞ、と意気込みを込めて……ゆっくりと口の中で咀嚼して……。
「しかし、不思議な風味ですわね……。ゼリーのようですけど、それよりは歯ごたえがありますわ。プルプルと口の中をくすぐりつつ、歯で噛めばぷっつりと切れる。独特の歯ごたえ……。これは、なかなかに、ふふふ」
新たなお菓子との出会いは、ミーアにとって至上の喜びだ。
――さすがは、グリーンムーン家ですわ。毎回、新しいお菓子を用意するとは、なかなかできますわね。
感心に唸りつつも、ミーアはつぶやく。
「それにしても……ガヌドス港湾国……」
こういう美味しいお菓子も手に入るなら、やっぱり、きちんと仲良くしておきたいなぁ、などと思っていると……。
「やはり、ガヌドス港湾国のこと、お気になさっていたんですのね……てっきり、御しやすい男かと思っておりましたけれど、あのガヌドス国王という人は、なかなか、手ごわい方のようですし……ミーアさまの悩みの種になるだなんて、生意気な……」
エメラルダは、実に不愉快そうに、爪を噛む。が、すぐにその顔には落ち着きが戻ってくる。
「でも、そうですわね……。あの者も、初代皇帝陛下……いえ、初代皇帝の意を尊重し、行動しているというのであれば、手ごわいのは当然のこと。ミーアさまの新たなる盟約によって結び合わされた我々は、初代皇帝より連綿と続く、古き盟約と戦っているようなものですもの」
エメラルダは――あの冬の月光会において、ミーアの新たなる盟約に一番にはせ参じた四大公爵家筆頭令嬢は、どこか心強さすら感じる笑みで言った。
「むしろ、多少なりとも歯応えがなければ、拍子抜けというものですわ」

「ふふふ、とても心強いですわ」
ミーアは、そっと微笑んで、エメラルダに言った。
「今日、お願いしたかったことを、先回りして言われてしまいましたけれど……わたくしは、どうしても、ガヌドスでしなければならないことがありますの。そのためには、ガヌドス国王の協力を取り付けるか……最低でも、その動きを掣肘（せいちゅう）する必要がありますの。だから……」
ミーアはそっと瞳を閉じて言った。
「エメラルダさん、あなたにお願いいたしますわ。グリーンムーン家の謀略をもって、ガヌドス国王を懐柔してちょうだい」
その言葉に、エメラルダは、ニヤリと勝気な笑みを浮かべて……。
「ふふふ、お任せくださいませ、ミーアさま。実は、すでに手は打ってありますの。楽しみにしていていただきたいですわ」
自信満々に言い放ったのであった。

第三話　豪華なお出迎え

エメラルダとのお茶会の後、根回しのため、帝都の有力者たちのもとを回ったミーア。

何回かの会合と、お茶会、挨拶を終えたところで、夏休みは終わりを迎えた。

「なんだったら、子どもたちとベルだけでも置いて行っては……」

などと真顔で言う父を華麗にスルーしつつ、ミーアはセントノエルへの旅路についた。

「今年の夏は、なかなかの強行軍でしたわね……。馬術勝負然り、シューベルト、クラウジウス家しかり……。あら？　これは、もしや、少しばかりシュッとしすぎてしまったのではないかしら？」

などと……自らの二の腕を揉んでみるミーア。その結果！

「……妙ですわね」

現実は、とても……残酷なものだった。

それはさておき、ミーア一行が乗る馬車は、特に何事もなく帝国国境を越えて、ヴェールガ公国へと差し掛かった。

帝都とヴェールガ公国とを結ぶ巡礼街道は、非常に治安の良い道として知られている。

人々の往来も盛んで、盗賊が出るなどということも、ほとんどない安全な場所。ゆえに、逆に油断しやすい場所でもあるわけで……。

「ふむ、もしかすると、またしても蛇が襲ってくるかと思っておりましたけど、杞憂のようですわね。珍しいこともあるものですわ」

こいつには、しばらくは絶対に会いたくないわ～！　と思う蛇の心情など、まったく想像もしないミーアなのであった。

まぁ、そんなこんなで、のんびりとセントノエルへと帰還を果たさんとするミーアたちであったのだが……そこへ、前方から騎馬の一団が向かってきた。

「あら……あれは？」
襲撃をしてくるという様子ではない。むしろ、のんびりゆっくりと、こちらに向かってくる集団。
「商隊かなにかかしら？　それとも、どこかの貴族の私兵団とか……？　ああ、そういえば、帝国に戻る時にも、こんな馬の一団に会いましたっけ……ヒルデブラントは元気かしら？」
などと、特に警戒もなく、その光景を眺めていたミーアは……次の瞬間に目を見開いた。
「ミーアさん、おひさしぶりね」
「ら、ラフィーナさま？」
なんと、騎馬を率いてやってきたのは、ヴェールガの聖女、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガだった。
「これは驚きましたわ。ラフィーナさま、お一人でも馬に乗れるようになったんですわね……」
などと、思わずつぶやきつつ、ミーアはラフィーナの堂々たる馬の乗りこなしを見た。
ラフィーナが乗る馬は、月兎馬、花陽だった。もともと花陽は頭の良い馬。初心者でも乗りやすい馬ではあるのだが……。
――それにしたって、つい先日まで、乗ったこともなかったのを考えると、大変な上達ぶりですわね。
「ふふふ、どう？　休みの間に練習したの。これでミーアさんといつでも遠乗りにいけるわ」
心なしか得意げなラフィーナを見たミーアは、息を吸うようにヨイショモードへと移行する。
「おお、さすがはラフィーナさまですわ。もう、完全に馬を乗りこなしておりますのね」
「あ！　でも、もちろん、ミーアさんと遊びたいという理由だけで、乗馬を身に着けたわけではないのよ？　これならば、馬車で行けないようなへき地の村々も回れるし、多くの民と触れ合うことができる。だから、天より与えられた馬に乗ることは、聖女には必須の技

術なのではないかしら……？」
なにやら、壮大なことを言いだしたラフィーナに、ミーアは、思わず吹き出して。
「ふふふ、なんだか、馬龍先輩みたいなこと言っておりますわね、ラフィーナさま」
つい、そんなことを口走ってしまう……。瞬間、かっちーん、とラフィーナが固まる。けれど、すぐに涼やかな笑みを浮かべて……なにか言おうと口を開こうとして……。
「それはそうですよ。ミーアお祖母さま、夏休みの間中、乗馬の練習って名目で、馬龍先輩と遊んでたら……」
「……ベルさん」
不意に聞こえる清らかな声……。ニッコリ、と澄み渡った……魚の一匹も住んでいない、とってーも澄み切った泉のような笑みを浮かべるラフィーナ。
その笑みを受けて、ベルは、慌てて口を塞ぎ……。
「あ、危ないところでした。危うくまた、司教帝の文字が、日記帳に現れてしまうところでした」
などと、不穏なジョークをつぶやく。
なんだか、よくわからないけど、ベルが、眠れる獅子の尻尾を持ってブンブン振ってそうな気がしたミーアは、素早く話を変える。
「ところで、荒嵐も連れてきているんですのね」
ミーアの視線の先、引っ張られてきたのは、花陽の彼氏である荒嵐だった。
久しぶりに見る荒れ馬に、ミーアは戦友と再会した時のような親しみを感じる。
「夏の間は、ずっと東風にばかり乗っていましたから、ふふ、懐かしいですわ」
「よければ、ここからはミーアさんも一緒に乗馬しないかな、と思って連れてきたのだけど、どうかしら？」
小さく首を傾げるラフィーナ。なんだか、すごく……ものすごー

く一緒に馬に乗りたそうな顔をしていたから……。
「……そうですわね。最近は、東風の大人しい乗馬に慣らされておりましたし……」
荒嵐のほうを見てから、ミーアは笑みを浮かべる。
「たまには暴れ馬に乗るのも一興。それでは、ラフィーナさま、お供いたしますわ」
そうして、ミーアは急ぎ、乗馬服に着替える。
「ふふふ、ミーアさんと遠乗り。あ、それと、後でお茶会も……楽しみだわ」
などと微笑むラフィーナの、少し後ろには……なぜか、自分もついていく気満々の慧馬が静かにたたずんでいたが……。
まったく気付いた様子のないラフィーナなのであった。

第四話　ミーア姫は乗りが良い！

さて、ラフィーナのお誘いに応じて、乗馬用の服に着替えると、ミーアは颯爽と荒嵐に飛び乗った。

誘いに乗れば、馬にも乗る。脂も乗れば、波にだってスイスイ乗ってしまう。

ミーアは乗りの良い皇女殿下なのである。

そうして二人で馬を並ばせると……さらに、もう一頭の馬が横に並んできた。

「ふっふっふ、聖女ラフィーナの乗り方も、なかなか様になっているな」

馬上で、そう評したのは火慧馬だった。

胸を張り、腕組みしつつ、ラフィーナのほうを見て……うんうん、っと頷く。

微妙に態度が……こう……、なんというか、偉そうな感じではあるのだが……。まぁでも、それは仕方ないことなのかもしれない。

なにしろ、慧馬は、蛇の暗殺者を退けたのだ。

悪辣な火燻狼と、あのバンダナの凄腕暗殺者を見事退けて、ミーアの危機を救ったのだ。しかも、その過程で、苦手としていたディオン・アライアを克服してのけたのだ。

……そうだっただろうか？　などと疑いの目で見てしまうのは、野暮というものだろう。事実とは別に、真実は人間の数だけ存在している。彼女の中では、そうなっている、と言われて、それを否定できるものはいないのだ。

ともかく、そんなわけだから、慧馬がちょっぴり増長していても、やむを得ないことなのだ。たぶん……きっと。

さて、そんなふうにドヤ顔でついてくる慧馬に、若干、イラァッとした顔をしていたラフィーナであったのだが……そこは聖女であ

る。すぐに、涼しい笑みの裏に感情を隠して、ミーアのほうに目を向ける。
「先ほども言った通り、騎馬王国の各地を回っていたの。その時に、林族の方に教わったのよ」
「ああ。馬龍だな。うん、あれは良い乗り手だ。あれに教わったのであれば、上手くなるのも当然……」
「いいえ、違います。馬龍さんの妹さんに教わったのよ」
きっぱりとそんなことを言うラフィーナだったが……。
――あら、ラフィーナさまは、馬龍先輩のご家族とも仲がよろしいんですのね……。これは、まさか……？
などと、ミーアの恋愛脳が、ひそかに活性化したことになど、まったく気付いた様子もなく、ラフィーナは、涼やかな顔のまま、ミーアに目を向けた。
「ところで、ミーアさんは、どうだった？　帝都での夏休みは、どのようなものだったのかしら？」
「ああ……ええ、まぁ……」
ミーア、ここで答えを一瞬、考える。
――エメラルダさんは、夏休みの間、遊べなかったことが気に食わない様子でしたし……。ラフィーナさまがエメラルダさんと同レベルだなんてことは思いませんけれど……それでも、似たようなことを思っている可能性は否定できませんわ。となれば、ここで、強調すべきは……。
刹那の判断。その後、ミーアはゆっくりと話し始める。
「ええ、なかなかに大変でしたわ。実は、ルヴィさんの婚約騒動がございまして……」
ラフィーナに披露すべきは、多忙を極めたアピールである。そのせいで、ラフィーナを遊びに誘えなかっただけで、決して、他意はないですよぅ！　と主張する。
「その婚約者というのが、なんと、わたくしの母方の従兄弟でして。さすがに、あの時は焦りましたわ。ルヴィさんに想い人がいること、

わたくしは存じておりましたから」
「まぁ、そのようなことが……。それで、どうやって解決なさったのかしら？」
興味津々で聞いてくるラフィーナに、ミーアは、意味深に頷いて、
「実は、レッドムーン家と共同で乗馬大会を開いて……」
「ふっふっふ。我が、友のために、一肌脱いだ乗馬勝負のことだな！」
実際に、あの時には活躍していた慧馬が、ドヤドヤァ！　と胸を張る。
「まぁ、我と、我が愛馬蛍雷の前では、あのような乗馬対決など児戯に同じ。そう騒ぐことでもないが……」
っとそこで、慧馬は、さすがにドヤり過ぎたと思ったのか、ちょっぴり謙虚な顔で……。
「ともあれ、友のために役立てたのであれば、これほど嬉しいことはない」
「ふふふ、ありがとう。慧馬さん。あの時は助かりましたわ」
笑みを浮かべて答えつつ、横目でラフィーナの顔を窺えば……ラフィーナは変わらず笑みを浮かべていた。
いつもと変わらないはずの笑み……なのだが……、ミーアは、なぜか、前時間軸のラフィーナのことを思い出した。
――あ、あら？　変ですわね。なんだか、あの、お近づきになりたくっても、まったくもって近づけなかった……あの時の笑みに似ている気がいたしますわ！
「それで……その、楽しい乗馬対決をして、その後は、どんなことがあったの？」
「そっ、そうですわね。その後は、サフィアスさんの婚約者のシューベルト侯爵家に行って、その……お料理会をしたんですけれど……」
「お料理会……」
ピクリ、っと、ラフィーナの頬が引きつる。ミーア、慌てて言葉

を続けて……。
「あっ、あの時も大変でしたわ。混沌の蛇の息がかかったメイドさんがいて……。危うく、毒を混入されそうになったんですもの！」
決死の大変だったアピール！　アピール！！　アピール！！！
あそこにいなくって良かったな！　っと思ってもらえるよう、懸命に論陣を張る。されど……。
「お料理会……」
ラフィーナには、まったく届いていなかった！
お料理会……お料理会……と、どこか遠くを見つめながらつぶやいたラフィーナだったが、気を取り直したように笑みを浮かべて。
「そう……。それで、その後は、どんなことが……？」
「あ、え、ええ……。そうですわね、その後は、クラウジウス家に行き……ああ、クラウジウス家というのは、わたくしの祖母の実家なのですけれど、そちらに行って、蛇の痕跡を探って……。ああ、あと、エメラルダさんとお茶会をしましたわね。ふふふ、エメラルダさんも聖ミーア学園に協力してくれるとか、嬉しいことを言ってくれましたし……。ガヌドスのこともなにか手を打ってくれるとのことで、頼もしくなってくれて嬉しい限りですわ」
ニコやかに語るミーアとは対照的に……ラフィーナは、ちょっぴりいじけた様子で唇を尖らせる。
「ふぅん、あの、エメラルダさんが……心強い協力を……へぇ……」
そんな、人間たちの会話を聞いてか聞かずか、荒嵐は、耳をピクピクッとさせた後、ぶーふ、っと深々とため息を吐くのだった。

第五話　意外な来客、意外な願い

セントノエルに着いたミーアを待っていたのは、友人たちとの再会だった。

シオンやティオーナは、シューベルト邸でのお料理会で会っていたものの、ラーニャやクロエらとは、ずいぶん久しぶりになる。ちょっぴりテンションがあがって、自然と笑みを浮かべてしまうミーアである。

さらに、もともとのミーア派の者たち、タチアナやユリウス、特別初等部の何人かの子どもたちからも挨拶されて……ミーアはふと感慨深く思う。

――思えば、わたくしは、前の時間軸で、本当の意味で挨拶をしたことがなかったかもしれませんわ……。

かつて、前時間軸において。ミーアは数限りない人々と挨拶を交わした。休みの前、帰国するミーアを見送る人々の数は決して少なくはなく……。再会を祝う人々の数も少なくはなく……。

けれど、きっと心から言葉をかけあった人というのは、そう多くはなくって……。

必要に駆られて、あるいは打算的になされたものが、ほとんどではなかっただろうか。

そんなミーアだったから、心から、友人たちと再会を喜ぶ自分の姿が、なんだか、不思議なもののように感じてしまうのだ。

――まぁ、なんにしても、わたくしのセントノエルでの学生期間はあと二年半ですし。悔いの残らぬ日々を送りたいものですわ……。

それから、ミーアは、晴れやかな空を眺めて……。

「ふむ、もうすぐ秋になりますし……なにか、美味しいイベントごとの企画がしたいですわね。生徒会主催で……これは、やはりキノコ狩り大会かしら……？　秋の色に彩られた森を歩くのは、なかな

かに楽しいですし……。それに、全校生徒を動員すれば、キノコもたくさん採れるはず……。ふむ！　これは、なかなか良いアイデアではないかしら？」
性懲りもなく……。全校生徒に被害を広めそうなことを企み始めるミーアであった。
さて、そんな風に一通りの通過儀礼を終えて、ミーアが部屋でのんびり、ごろごーろしている時だった。
唐突に、部屋にノックの音が響いた。
応対に出たアンヌが、小走りに戻ってきて……。
「ミーアさま、お客さまが訪ねてきておられるとのことなのですが……」
「あら？　わたくしに？　どなたかしら……？　せっかく、秋の昼寝を楽しもうと思っていたところですのに……」
ちょっぴり、不満そうに唇を尖らせるミーアだったが……軽くお腹をさすりさすり。それから、よーいしょっと起き上がる。
「まぁ、せっかく訪ねてきてくれた方をお待たせするのも申し訳ないですし、お茶とお菓子でお迎えするのがよろしいですわね。アンヌ、手配をお願いできますかしら？」
ミーアを訪ねる際には、彼女が空腹な時間帯を狙うと、美味しいお菓子でもてなしてくれる確率が高くなるというのは、一部の者たちには知られたことであった。まぁ、それはさておき。
セントノエル学園は、近隣の王侯貴族の子女の集う場所。来客も珍しくないため、そのお客を迎えるための部屋もきちんと用意されている。
そんな来客用のカフェスペースに向かいつつ、お茶菓子はなににしようかしら？　などと思案しつつも、ミーアはアンヌに尋ねる。
「ところで、来客とは、いったいどなたが訪ねてこられたんですの？」
ルードヴィッヒであれば、手紙を送るだろうから、おおかたどこかの商人とかだろうか。

クロエの父親や、シャローク辺りも考えられる……。などと予想するミーアであったのだが……、アンヌの口から出た答えは意外なものだった。
「職員の方によりますと……。ガヌドス港湾国の王女殿下だということでしたが」
その言葉に、不意にミーアは立ち止まる。
「ガヌドス港湾国の、王女殿下……？」

来客用のカフェスペースは、学園の中庭の一角に設けられている。室内だけでなく、屋外にもテーブルとイスが用意してあるのだが、どうやら、来客はそちらで待っているらしい。
ポカポカと気持ちの良い日の光に、ちょっぴり睡眠欲を刺激されて……ミーアは心の警戒レベルを少しだけ上げる。
――もしも、これが、わたくしを睡魔によって油断させようとして、この時間帯に訪ねてきたのであれば警戒に値する敵かもしれませんわね……。
ただでさえ、あのガヌドスの姫である。どのような策謀家か、想像もできない。
そうして、臨戦態勢でカフェスペースに足を踏み入れる。っと、座っていた少女が、おもむろに立ち上がり、こちらに歩いてきた。
すっす、と歩いてくるその姿に、ミーアは思わず、目を見張った。大きい……非常に大きい、まるで見上げるほどに背の高い長身の少女だったためだ。
ミーアより頭二つ分ぐらい大きいだろうか……？　すらりとしたその身に纏う豪奢なドレス、そのスカートの裾をちょこんと持ち上げ、
「お初にお目にかかります、ミーア姫殿下。オウラニア・ペルラ・ガヌドスと申します。ええと、ガヌドス港湾国の王女です」
それから、小さく頭を下げる。その動きに合わせて、豪奢にウェーブする髪が揺れる。髪には特徴的な髪飾りがつけられていた。あ

れは……槍……だろうか？　いや、でも、矢じりに穴が空いて、なんだか、魚の横顔のような……。いや、むしろ、魚の……骨の形？
一瞬、不思議な髪飾りに目を奪われかけたミーアであったが、すぐに気を取り直して、スカートの裾を持ち上げる。
「ティアムーン帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ。オウラニア姫」
薄く笑みを浮かべ……。
「それで、わざわざセントノエルにわたくしを訪ねて来られたのは、どのようなご用向きがあってのことかしら？」
キリリッと鋭い表情を浮かべて問いかけるミーア。対して、オウラニアは、ぽやーん、っとどこかぼやけたような、ちょっぴり困ったような顔つきで、言った。
「ええと、私を、そのー、聖ミーア学園に入学させていただけないでしょうか？」
「……はぇ？」
急転直下の展開に目を白黒させるミーアであった。

第六話　エメラルダのお茶会

エメラルダ・エトワ・グリーンムーンは、後世において、ミーアの親友の一人と目される女性である。

大貴族の令嬢らしい気位の高さと、目下の者に対する表面的な当たりの強さ、それと相反するような懐の深さで知られている。

そんな彼女であるが、公人としての働きを評価されることは、あまり多くはない。

歴史の表舞台において、彼女の活躍が記録されることは、ほとんどなかった。

されど……実のところ、彼女が果たした役割は決して小さくはないのだ。

サフィアス・エトワ・ブルームーンが国内の貴族の抑えとして……星持ち公爵令息として動いていたように、エメラルダもまた、星持ち公爵令嬢としての役割をしっかりと全うしていたのだ。

なにも「ミーアさまに誘われないかしら？」なぁんて、屋敷内でソワソワしてばかりはいなかったのだ！　まぁ、たまにはそんな日もあったのだが、ともかく、彼女はきちんと仕事をしていたのだ。

実のところ、エメラルダが動き出したのは、シオンたちが訪ねてきた翌日のことだった。

「やはり、まず着手すべきは、ガヌドス港湾国のことですわね」

ミーアに言われるより前から、そう目付をしていたエメラルダは、すぐさま、ガヌドスに自ら赴くことを決断。

果断速攻のその様は、思い付きの人ミーアを彷彿とさせるものだった。

ちなみに、準備はほとんど、メイドのニーナに丸投げである。

アンヌとルードヴィッヒがするような仕事を一手に担う、彼女は凄腕のメイドなのである。

「さすがの手際ですわね、ニーナ。さすがは、我がグリーンムーンのメイドですわ」
エメラルダの称賛を受けたニーナは、ニコリともせず、頭を下げて……。
「過分な評価、痛み入ります、お嬢さま。それと、僭越ながら……帝国四大公爵家の令嬢たる者がメイドの名前を覚えているのは、あまりよろしくないのではないかと……」
「まっ！　なにを言っておりますの？　あなたは、幼少の砌より、私に仕えてくれている大切なメイド。名前を覚えることぐらい当然のことですわ！」
なぜか、ドヤ顔で胸を張るエメラルダに、ニーナは、ふぅっと切なげなため息を吐いて……。
「……まぁ、でも、これはこれで……」
などとつぶやくニーナに、小首を傾げるエメラルダであった。
そんなこんなで、エメラルダはガヌドス港湾国に赴いた。

さて、ガヌドス王都にあるグリーンムーン家の別邸にて。
エメラルダは、客人を出迎える準備をしていた。と言っても、実際にやっているのはニーナなわけなのだが……。
ともあれ、並べられていく茶器やお茶菓子を眺めながら、エメラルダは小さく笑みを浮かべた。
「ふふふ、あの方とのお茶会も、思えば久しぶりですわね」
そうして、待つことしばし。
客人は、約束の時間ぴったり……にはやってこず、一刻ほど遅刻して現れた。
……まぁ、いつものことなので、エメラルダは気にしないことにしていたが……。
「ご機嫌よう、本日はお招きいただき感謝いたします。エメラルダさま」
そうして、スカートの裾をちょこんと持ち上げるのは一人の少女

だった。
　とても背の高い少女だった。舞台女優のように、すっと伸びた背筋と、すらりと長い手足を持つその少女は、エメラルダを見て、ふんわりした笑みを浮かべた。
「本日は、お忙しい中、いらしていただき感謝いたしますわ。心ばかりではございますけれど、お茶会を楽しんで行っていただけると嬉しいですわ。オウラニア姫殿下」
　その少女の名は、オウラニア・ペルラ・ガヌドス。ガヌドス港湾国の王女である。
　そして、二人は、お茶のみ友だちでもあるのだ。
　もともと、ガレリア海に遊びに来ることが多いエメラルダのこと……。この国の有力者と食事を共にすることも多く、必然的に、年の近いオウラニアとも親しくする機会があったのだ。
　そんなわけで、まぁ、彼女をお茶に誘うこと自体は珍しいことではないのだが……。
「ところで、オウラニア姫……」
　世間話もほどほどに、早速、エメラルダは斬り込む。
「少し小耳にはさんだのですけれど、どうもお父君は、我が帝国に対して、不穏な態度を取っておられるとか……」
「え、ええと……？　そう……なんですか？」
　オウラニアは、小さく首を傾げる。根本的に、彼女は政治に一切かかわりを持っていない。王宮の中、大切に世間から隔絶されるようにして育てられた姫なのである。
　そのことを把握していたエメラルダは、優雅に紅茶を飲みながら、
「ええ、そうなのですわ。まぁ、それは昨年の夏あたりからわかっていたことではありますけれど……。それで、そのことを、我が友ミーアさまが問題視されておりますの」
「まぁ、ミーア姫殿下が……？」
　オウラニアは、目を真ん丸にして口を押えた。
「ええ。そうなんですの。それで、私としても、どうしたものかし

ら……と思いまして。私、ガヌドス港湾国との仲は、とても大切と思っておりますのよ？　我が帝国と、あなたの国との仲がこじれること、これほど悲しいことはありませんわ。なにしろ、ガヌドス港湾国に最も近しい帝国貴族は我がグリーンムーン家ですしね」

すまし顔で、エメラルダは、ケーキを一口。それから、オウラニアのほうを上目遣いに見て……。

「だから、あなたに、国王陛下に態度を改めるように言っていただけないかしら？　と思って……」

「うーん、私が……ですか？　それは……無理なんじゃないでしょうか……？」

オウラニアは、のんびりとした口調で首を振った。その様子に、エメラルダは、内心で頷く。

エメラルダは、交渉の基本を知っている。

まず、大きなことを要求し、そのうえで、呑み込めるギリギリの条件を提示する。そのセオリーに則り、エメラルダは真の要求を突きつける。すなわち……。

「では、どうかしら？　あなたが聖ミーア学園で、勉学に励む、というのは……」

「……えぇと……それは」

オウラニアは、ぽーっとした視線をエメラルダに向けてから……。

「人質ということ、でしょうか？」

ゆーっくりとした仕草で首を傾げる。

エメラルダはにやり、と笑みを浮かべて頷いて……。

「ふふふ、相変わらず、言葉を飾りませんわね。あなたのそういう実直なところ、嫌いではありませんわよ？」

エメラルダは、オウラニアのことを世間知らずのお姫さまだと思っていた。箱入りで、王宮の外のことはまるで知らない……無知なる者であると。

されど、それは、愚かであることを意味しない。

オウラニアは世間知らずの箱入り姫ではあるが、相手の言葉をき

ちんと理解できる頭を持っている。ゆえに、エメラルダの言わんとするところの本質を、端的に言葉にしてきたのだ。
その実直さと頭の回転の速さを、以前からエメラルダは好ましく感じていた。
が……実のところ、エメラルダは、オウラニアを人質にしようとは思っていなかった。彼女が企んでいることは、もう少し、ミーア寄りのことで……すなわち。
――聖ミーア学園は、通っているだけでミーアさまの良さにたっぷり触れられる環境。であれば、オウラニア姫を入学させることで、こちらの仲間に引き入れられるはずですわ。
これである。
まぁ、もっとも、それを素直に教えるはずもなし。エメラルダは笑みを浮かべたまま続ける。
「まぁ、実際には、それほど悪い話ではありませんわ。聖ミーア学園は、我が帝国でも最高峰の学府となる予定の場所。あなたの学びのためにも、とても良い機会になるのではないかしら……？」
「あのー、私にはお断りする権利はないと……？」
「断る理由がない、と言っておりますのよ。こんないい話、滅多にございませんし……。仮に断った際、私から吹っ掛けられる面倒事を思えば……ここは引き受けておいたほうがいいのではないかしら？」
そうしてすまし顔で紅茶をすすってから……。
「あ、それと、寒月天がお土産に欲しいのですけれど、どこか、良いお店を紹介していただけるかしら？」
ずうずうしくも言ってのけるエメラルダであった。

第七話　ミーアエリート育成計画、密かに進行中！

「聖ミーア学園に……？　それは、ええと、どういう意味かしら？」
目を白黒させつつ、なんとか問う。
ついでに、手近にあった紅茶を一口。舌の上で転がし、糖分を補給しようとする……が……生憎と、砂糖の甘味は感じられなかったっ！
――っ！　そうでしたわ。夏の間に、ちょっぴり食べ過ぎたからって、当分の間、紅茶にお砂糖は控えるようにと言っておいたんでしたわ！
ちなみに、お茶菓子のほうには、特に注文を付けていないミーアである。
飲み物の甘味を控え、お菓子からのみ糖分を摂取する。飲み物は甘くなくってもいいから、お菓子は甘くしてほしいな！　というミーアの無言の訴えが聞こえてくるようだった。
まぁ、その辺りの事情を知ったタチアナから、
「お菓子の量も減らしたほうがよろしいのではないかと思います。お茶菓子には……そうですね。干した小魚なんてどうでしょう？」
などとニッコリ提案されてしまうことになるのだが……それはさておき。
ミーアは咳ばらいをした後、改めて、オウラニアのほうに目を向けた。
その視線を受けて、オウラニアは、ぽやーんっとした顔で、そっと首を傾げてから、ああ！　と小さく声を上げて……。
「そういえば、エメラルダさんから、これをお預かりしています。どうぞ……」
そうして、彼女が差し出してきたのは、一通の手紙だった。さっと手紙の文面に目を通し……ミーアはようやく事態を悟る。

――なるほど……これは、すべてエメラルダさんの差し金……。いえ、エメラルダさんがわたくしのために暗躍した結果、なんですわね……。

そこに書かれていたのは、要するに……。

ガヌドス国王を正面から説得するのは大変だから、娘のほうをミーア学園に入学させて、ミーアエリートに仕立て上げて、側面から攻撃してもらおうぜ！

みたいなノリのことだった。

――ぐむ……これは、確かに作戦としてはわかりますけれど……。

ミーア、思わず唸る。

そう、理屈は理解できるのだ。そして、恐らく、考え方も間違っていないのだろう。

ガヌドス国王とは、いわば強固な城だ。その城壁は高く、城門も分厚い。正面から落とそうと思えば、苦戦は必至。なればこそ、正面からあたるべきではない。

補給を断ったり、城壁の中に間諜を送り込んだり……そうした小細工が必要となってくるわけで……。

――力押しせず、周囲から切り崩していく……なるほど、エメラルダさんにしては実によくできた作戦ですわ。ルードヴィッヒとか、ガルヴさんとか、あのあたりの人たちが好みそうな策でもありますし……。しかし……。

一瞬、納得しかけたミーアであったが、すぐに眉間に皺を寄せる。

――なんか、ミーア学園、とんでもないことになってやしないかしら？

思うのは、そんなことだった。

例えば、エメラルダからの手紙には、エシャールのことが、ちょっぴりの自慢を交えて書いてあったのだが……。

とても勉強ができるし、心が清らかで素直だし……将来の夫として超楽しみ！　みたいな文章に、ちょっぴり胃もたれを感じつつも、ミーアが注目したのは次の文面だった。

『それに、エシャール殿下も、周りからの良い影響を受けて、今ではすっかりミーアさまの信奉者になられました』
――周りからの良い影響……信奉者……。
仄かに匂い立つキケンな香りを感じてしまうミーアである。
――これ以上、熱心な信奉者は必要ありませんわ。というか……聖ミーア学園、大丈夫なのかしら？
むしろエシャールや、今現在、通っている生徒たちのことが心配になるミーアである。
――それに、ガヌドスの手の者をミーア学園に入学させるというのも、危険と言えば危険ですし……。
聖ミーア学園は、新種の小麦の開発を担当してもらっている研究機関でもある。もしも、妨害工作でもされたら、一大事だ。
――それに、そもそも、ミーア学園の最終責任者は、わたくしということになりますわ。そこで起きた問題は、わたくし一人で対処することになりますけれど……それは、大変に不公平な話……。
ミーアが大事にしたいことは、責任回避、並びに、責任の分散化である。
重たい責任を一人で担うなんて真っ平ごめんのミーアである。ならば、どうするか？
――味方に引き入れるという基本線は、わたくしとしても望むところ。であれば、少しだけ軌道修正して……。
ミーアは、コクリっと、目の前に置かれていたクッキーを飲み込んで……！
「オウラニア姫殿下。ミーア学園に入学したいという旨、理解いたしましたわ」
手紙をそっと置いて、
「ただ、ご存知かどうかはわかりませんが、聖ミーア学園は、まだ、とても若い学校。貴女が通うには、相応しくないのではないかしら？」
それ自体に嘘はない。エシャールをはじめとして、ミーア学園に

通う学生は、子どもが多い。いきなり入学して最年長になるのは、オウラニアとしてもやりづらいことだろう。
「え……？　でも」
と、困り顔のオウラニアに、ミーアは優しい笑みを浮かべて。
「大丈夫ですわ。エメラルダさんには、わたくしのほうから言っておきますから。どうせ、無茶なことを言われたのだと思いますし……。それより、これは、わたくしのほうから提案なんですけど……」
ミーアはオウラニアの瞳を真っ直ぐに見つめて言った。
「このセントノエルに通ってみる……というのはいかがかしら？」
「え、ええと……」
返事を躊躇うオウラニアを見て、ミーアは確信する。
――この方、押しに弱そうですわ。確かに、上手くすると、ガヌドス港湾国攻略の糸口になりそうですわね。さすがはエメラルダさんですわ！
腹の中でニンマーリと笑みを浮かべつつ、ミーアは畳みかける。
「ラフィーナさまには、わたくしのほうでお願いしてみますわ。ですから、ね？」
ちょっぴり前のめりになるミーアに、オウラニアはおずおずと首を縦に振るのだった。

第八話　お友だち、ラフィーナからの提案

オウラニアには、セントノエル島に一日滞在してもらうことにして、ミーアは早速、ラフィーナのもとを訪れた。

ちょうど午後のティータイムの時間だったため、ミーアがお茶しに来たと思ったらしく、ラフィーナはニコニコ顔で出迎えてくれた。

いそいそと、自らが育てた花で作ったジャムを添えた紅茶を用意して、出してくれる。

スプーンに乗った赤いジャムを紅茶の中に落とし込み、かき混ぜる。と、芳しい花の香りが、ミーアの鼻孔をくすぐった。

「上品な香りですわね。甘さは控えめですけれど、とても美味しいですわ」

「ふふふ、喜んでもらえたなら、良かったわ。このジャム、パンに塗っても美味しいから、よろしければ、差し上げるわ」

「まぁ！　ありがとうございます、ラフィーナさま。ふふふ、これは、お食事がとっても楽しみになりそうですわ」

などと、明日の朝のパンに想いを馳せつつも、ミーアは本題を切り出した。

「ところで、ラフィーナさま、実はお願いがあってまいりましたの」

「あら？　なにかしら？　お友だちのミーアさんのお願いなら、なんでも聞いてあげたいところだけど……」

穏やかな表情で言うラフィーナに勝利を確信しつつ、ミーアは言った。

「実は、ガヌドス港湾国の王女、オウラニア姫殿下のことなんですの」

「ああ……ミーアさんを訪ねてこられたという方ね。その方がどうされたのかしら？」

小首を傾げるラフィーナに、ミーアは順を追って説明し始める。

「実は、セントノエルに来る途中にもお話ししましたけれど、ガヌドス港湾国に大叔父を探しにいかなければなりませんの。そして、そのためにはガヌドス国王の協力が必要となる」
ラフィーナは、優雅に紅茶を飲みながら、そっと目を閉じる。
「なるほど。オウラニア姫殿下をこちらの仲間につけてしまいたい、と？」
「簡単に言ってしまえば、そうですわ。そしてそのために、できれば、このセントノエルに入学していただきたく思っておりますの」
「そう。ここに……ガヌドスの姫君を……」
ラフィーナは考え事をするように視線を動かし……ティーポットのほうを見て……。
「ミーアさん、お替りはいかがかしら？」
「ありがとうございます。いただきますわ」
ミーアは頷いた。ティーポット……の隣のジャムの瓶を眺めながら。
……さて、若干の言葉のすれ違いはあったものの、無事にジャムと紅茶をゲットしたミーアは、改めてその上品な甘さにホッと一息。うーん、美味しい！
対して、ラフィーナも紅茶を一口。唇をほんのりと湿らせてから……、
「ガヌドス港湾国は、ティアムーン帝国の初代皇帝の息がかかった国。帝国を崩壊させる仕組みの一部を担う国……という理解で正しかったかしら？」
「ええ、その通りですわ。幸いにして、今はその企みは、ほとんど瓦解したと言ってもよろしいと思いますけど……。未だに頑なに、こちらとの対立姿勢を見せておりますの」
「けれど、表立って敵対するわけではないから、力で押しつぶすことも難しい、ということだったわね……」
――力で、押しつぶす……。なんだか、ラフィーナさま……時折、司教帝のお顔がチラリするんですわよね……。恐ろしいですわ。

獅子の皮をかぶった令嬢ラフィーナを、令嬢の皮をかぶった獅子ラフィーナと見誤るミーアなのであった。
「オウラニア姫が味方につけば、その援護によって、ガヌドス国王も折れるかもしれない、か。なるほど、確かに、お父さまというのは、娘に弱いものですものね」
ラフィーナは、小さくため息を吐きながら、壁を見つめる。そこには、なにもかかってはいなかったが……ミーアは、そこに、幻のラフィーナ肖像画の姿を見る。
「そうですわね……。お父さまというのは、そういうものですわ」
微妙に、偏った父親像を共有する二人である。
「しかし、さすがね。ミーアさん。よくオウラニア姫をここまで呼び寄せたものだわ」
ラフィーナの称賛に、けれど、ミーアは首を振った。
「お褒めに預かり光栄ですわ。けれど、この功績はわたくしのものではありませんの。すべて、エメラルダさんが手配してくれたものですわ」
その言葉に、ラフィーナの瞳が、すぅっと細くなる。
「エメラルダさんが……」
「ええ。グリーンムーン家は、外交的手腕に優れたお家柄。きっと、オウラニア姫とも、もともと繋がりがあったのではないかと思いますわ」
「そう……エメラルダさんが……」
ミーアの言葉を聞いてか、聞かずか……。ラフィーナは、じっと虚空を眺めていたが……。
しばらくしてから、ミーアのほうに目を戻した。
「わかったわ、ミーアさん。オウラニア姫の入学を、特別に認めましょう」
「ありがとうございます。感謝いたしますわ、ラフィーナさま」
半ば答えは予想できていたものの、ラフィーナの許可をもらえて一安心のミーアである。のだが……。

「ただし……。私からも一つ、条件があるの」
「はて？　条件……それは？」
続くラフィーナの言葉に、思わず首を傾げる。
ラフィーナは、一度、言葉を探すように黙ってから、
「セントノエルは大陸最高峰の学府であると自負しているわ。王侯貴族の子女に高度な教育を施し、倫理観を教え込むだけではない。知識の集積という意味でも、最高峰であると考えている」
「ええ、それはもちろんですけれど……」
「そこで、どうかしら？　聖ミーア学園とセントノエル学園、共同で、なにか研究プロジェクトを立ち上げるというのは……」
突然のラフィーナの提案に、ミーアは、目を白黒させるのだった。

第九話　聖女ラフィーナのアピール！　ミーア姫は油断した！

「共同研究……ですの？」
突然の提案を吟味するように、ミーアは口の中でつぶやく。対して、ラフィーナは、まるで以前から考えていたかのような、しかつめらしい顔で、重々しく頷いた。
「ミーア学園では、小麦の研究をなさっていると聞いているわ」
「ええ。そうですわね。寒さに強い小麦の開発を進めてもらっておりますわ」
「飢饉の問題は、すべての民に共通する問題。そして、ヴェールガ公国も、中央正教会もずっと取り組んできたことでもある。協力できることがあるんじゃないかと思うの」
困窮する人々に対し、常に手を差し伸べてきたのは中央正教会だった。
新月地区に踏みとどまり、孤児や病人の世話をしていた、あの神父の顔が、ミーアの脳裏を過る。
あの……清貧な……聖女マニアの神父の顔が……。
――ふむ、今度、働きを労うためにラフィーナさまの肖像画を送りましょうか。
などと思いつつも、ミーアは冷静に検討する。
――メリットとデメリット……を考えるべきですわね。
気になるのは、セントノエルに功績を横取りされることだった。もしそんなことになったら……なったら？
そこで、ミーア、はたと気付く。
――あら？　意外と問題ないのではないかしら……？
という事実に。
なるほど、確かにミーア学園が単独で新種の小麦を開発すれば、その分、学校の名も上がる。その設立者であるミーアの名もきっと

光り輝くことだろう……たぶん、黄金の色とかに……。
ごくり、と、紅茶で喉を鳴らしつつ、ミーアは思う。
――下手をすると、ベル辺りが……女帝ミーアとかいうわたくしが知らない方の功績をたたえる黄金像が立ったとか、言い出しそうですわね……。そのせいで財政が悪化したとかいうことになりかねませんわ。そうなると、いろいろと面倒……。
さらに、思い出されるのは、エメラルダからの手紙だった。
――その功績につられてやってきたたくさんの学生が、〝周囲からの良い影響〟とやらを受けて、わたくしの信奉者になってしまうかもしれませんわ。それは……ちょっと、アブナイ感じがいたしますわね。
大きすぎる功績というのも、厄介ごとを呼び寄せるものなのである。
――むしろ、その功績の実りさえ得られればそれで満足。その賞賛を誰が受けようとも、大陸全土が小麦で満ち足りれば、わたくしは、それで満足ですわ。
そうなのだ。ミーアの叡智はいつだって本質を見逃さないのだ。
大切なことはなにか？
それは、もちろん、美味しいものをお腹いっぱい食べることである。当たり前のことである。
では、そのために大切なことはなにか？
それは、すべての人に食べ物を行き渡らせることである。
それこそが、ミーアが求めるものであって……逆に言うと、それさえ手に入るならば、この際、功績に関しては誰のものでも構わないのだ。
むしろ、セントノエルが、小麦の知識の普及などに一役買ってくれるのならば望むところだ。
あるいは、こうも言えるかもしれない。
今や、ミーアの求めるものは、自身が栄誉を受けることでもなければ、帝国のみが飢饉を生き抜くための食べ物を得ることでもない。

それでは全然足りないのだ。
あの『パンケーキ宣言』をしてしまった以上、事は帝国よりももっと大きな規模、近隣諸国、否、大陸全土にも及ぶほどのものになってしまったのだ。
それゆえに、すでに、大陸最高峰の学府として知られるセントノエルの名は、大変有用なものだった。
自分がなにもせずとも、自分が望んだ結果が向こうからやってくる。これほど素晴らしいことが、この世界にあるだろうか？
ミーアはどちらかというと、種蒔きも刈り取りもしたくないし、その功績も欲しくはない。刈り取った後の果実をちょこっとわけてもらえることこそ、ミーアの理想なのだ。
――まぁ、そうそう上手くいかないから、頑張る羽目になっているわけですけど……。
ともかく、一緒に働いてもらえることならば、遠慮なく任せてしまいたいミーアである。が……。
「では、小麦の研究にセントノエルも参加するということで……」
と頷きかけたミーアに、けれど、ラフィーナは首を振った。
「いえ、それはミーア学園主導の研究。後から参加して、功績を横取りするような真似はできないわ。もちろん、協力を惜しむつもりはないけれど……」
と、やんわり断られてしまった。
「それに、ミーアさんのことですもの。もうそろそろ、小麦のほうは研究の成果が出て来ているのではないかしら？」
「ええ……まぁ、わたくしがどうこう言うより、セロくんやアーシャ姫が頑張ってくれておりますし……」
ミーア、すかさず訂正しておく。
上手くいかなかった時に「これだから、ミーアさんは！」などと言われぬようにということも、もちろんあるが、結果が出た時には、きっちり彼らの功績にしてもらわねばならないからである。
「功績をミーア姫殿下が横取りした！」などと言われてはたまらな

い。
――セロくんのお姉さんはティオーナさん……。怒らせると革命の鬼になってしまう可能性が万に一つもあるかもしれませんし……それに、アーシャ姫はペルージャンの姫君。あの国の機嫌を損なうのは、現状、とてもよろしくないですわ。
せっかく築いてきた良好な関係を崩さぬよう、細心の注意を払う。アフターケアに定評のあるミーアカンパニーである。
「うふふ、ティオーナさんやラーニャ姫から聞いているわ。すごく働きやすい場所でサポートも充実してるって。ミーアさんには感謝しかないって、言っていたわ」
そう微笑んでから、ラフィーナは続ける。
「でも、小麦だけでなく、もっといろいろなものを研究できるのではないか、と私は思っているの。まだ、具体的にはわからないけれど、きっとなにかあるはず。そして、できれば、各国の王たちにも、その動きへの協力を訴えたいと思っているの」
「飢饉への対策、そのためにミーア学園とセントノエルで共同研究を始めた、という、その表明を各国に示したいと……つまり、旗印ということですわね」
「そう。そして、そのための題材を、探したいと思っているのよ」
「それは、なかなかに難題ですわね」
ミーアは、うむむ、っと唸った。
寒さに強い小麦に関しては、ミーアには知識があった。されど、それ以外の飢饉への対処については、まったくのノーアイデアなミーアである。
そもそも、ミーアはイエスマンなのだ。
誰かの提案にイエスということはあっても、誰かに提案するというのは、あまり得意ではないのだ。
ということで……。
「そうですわね。これは、すぐに思いつく類のものでもございませんし、一度、持ち帰って考えたいと思いますわ」

「もちろん、構わないわ。ただ……」
っと、そこで、ラフィーナはとても真面目な顔で、ミーアを見つめてきた。心なしか、その頬をちょっぴり赤くしつつ……。
「私は……私も、ミーアさんのお友だちとして、ミーアさんの役に立ちたいと思ってる。ミーアさんがしようとしていることは、とても素晴らしいことだから……私も一緒にそれをしたいと思ってる。そのことを、どうか忘れないで」
その、真剣そのものの顔を見て、ミーアは、思わず嬉しくなる。
――ふむ、ラフィーナさまがこんなにやる気なのであれば、飢饉の心配はいっそう、遠ざかったと言えますわね。あら？　むしろ、わたくしが、それほど頑張らなくっても良いのではないかしら？
なぁんて……性懲りもなく、ちょっぴり危険な油断を始めそうになるミーアなのであった。

第十話　ミーア姫、ダメ出しされる！？

ラフィーナとの会合を終えたミーアは、新たなる難問に頭を抱えていた。

「共同研究……これは、なかなかに難しいところですわ。正直、ミーア学園の名が世界に轟いても大していいことがあるわけではないのですけど……」

ミーア学園の名声が高まるのは、悪いことではないにしても、それほど重視することとも思えないわけで……。しかし……。

「なにか新しい発見があった際には、セントノエルの名を使えるのは有意義ですわ。セントノエルの発見という時と、ミーア学園の発見という時とでは、受け取る側の印象がまるでちがいますもの」

セントノエルで新発見された技術ならば、自国も取り入れてみようかな？　となるが、ミーア学園では微妙だ。

「なんだ？　ミーア学園って……」などと鼻で笑われる可能性もあるし「自分の名前を学校につけるとか……ねぇ？」なぁんて、失笑を買うかもしれない。

もしも、寒さに強い小麦が完成に至ったとしても、それを活用してくれなければ意味がないわけで……セントノエルのネームヴァリューはぜひとも生かしたいところなのだ。

「小麦の生産高が各国で上がっていけば、間違いなく価格高騰は起こらないはず」

ミーアの視線は、常に、先を先を見通す。

今の備えは、ミーアが知る大飢饉に対するもの。されど、それ以降、飢饉の危機に一度も巻き込まれないわけもなく……。

「絶対に起きてほしくないことのためには、きちんと備えておくべきですわ」

そのためには、ラフィーナが納得するような研究内容を探す必要

がある。
　というわけで、研究のネタ探しに、ミーアは図書館を訪れていた。
　大きな机の一角に陣取り、腕組みする。
「飲食禁止というのが、少々、不満ではありますけれど……考え事をするには最適な場所ですわね。静かですし……せっかくですから、ある程度、ここで問題を整理してしまいたいですわね」
　ぶつぶつつぶやきつつ、ミーアは紙とペンを手に取った。
「ふぅむ……。問題を書き出してみることにいたしましょうか」
　眉間に皺を寄せつつも、ミーアは紙に文字を書きつけていく。
「まず、ガヌドス国王から協力を取り付ける件。目的は、大叔父さまである、ハンネス卿を探し出すため。そして、もろもろの事情を聞く……。そのためには……」
　ミーアは、紙に「ガヌドスの国内に対する対応」と書く。さらに、その横に、一番の邪魔者は国王か？　とメモをしておく。
「ガヌドス国王は一筋縄ではいかなそうな人ですし、オウラニア姫殿下との仲を深めることは、大切ですわね。エメラルダさんの献策にしては、上々のものですし、しっかりとやっておきたいですわ」
　そこに二重丸をつけておく。それから「どうやって？」とメモを書き足す。
「やはり、なにか楽しいイベントごとに巻き込むのが一番良いかしら……。
　トン、トン、っと人差し指で自らのこめかみを叩きつつ、次の案件へ。
「ラフィーナさまからの案件。ミーア学園とセントノエルの共同研究……。そのネタをどこかから探し出さねばなりませんわ」
　幸い、参考になりそうな本は、ここに溢れている。後は、その分厚い本を開いて、探すだけなのだが……。ミーア、無言で辺りを見回して……。
「あれ、読むの大変なんですわよね」
　ミーアは、かつて一応は（一応は！）飢饉について自分で勉強し

ているのだ。なので、難しい本を読んだことがないではない。
その点、孫娘ベルよりは、多少は帝国の叡智じみた行動はしているのだ。
だが……あれをもう一度やって、なにか飢饉に役立つ研究を考案しようなどという殊勝な考えはなく……。
「協力者が必要ですわね。確かクロエが図書室の本は全部目を通したとか、そんな噂を聞きましたから、協力を依頼して……。いえ、いっそのこと、生徒会でなにかアイデアを出してもらうとか……」
これは、なかなかに良いアイデア！　っとばかりに、メモしておく。
ミーアは基本的にイエスマン。アイデアマンではない。
アイデアを出すのは自分じゃなくていいのだ。
「あとは……そうですわね。やはり、みなで楽しめる遊びが必要ですわ。オウラニアさんを懐柔するためにも、秋ならではのレクリエーションを考えて……ふむ！　秋と言えば、やはり、紅葉で色づく森が良いスポットですわね」
森に遊びに行く、とメモしておく。さらに、
「一緒に、キノコ狩りもセットにすると、さらに、盛り上がるはずですわ」
メモのすぐ横に「全校生徒でのキノコ狩り」の文字を書き込む。
っと、そこで、ミーアは視線を感じた。
誰かが、ジィっと見つめてくる、そんな感触。辺りをキョロキョロ見回したミーアは、自らの背後に立っている青年の姿を見つける。
「あら、キースウッドさん、どうかしましたの？」
小首を傾げるミーア。対して、キースウッドはニコニコ笑みを浮かべたまま、無言で、ペンを手に取って、「全校生徒でのキノコ狩り」にばってんをつける。
「あら……？　これは、いったい？」
などと目をまん丸くするミーアに、キースウッド、無言のまま首を振る。

「あら、でも……」
っと、抗議しようとしたミーアであったが……。キースウッドは、優しく、穏やかな……まるで、なにかしらの……世を統べる真理に到達したかのような、悟りきった笑みを浮かべて、
「……」
はっきりと、首を振った。
「ふぅむ……でしたら……」
ミーア、さらさらさらりん、っとペンを動かし、次の案を提示する。
『生徒会＋オウラニア姫殿下でのキノコ……』
キノコ、まで書いたところで、ばってんをつけられる。
めげずにミーア、次の案を……。
『生徒会＋オウラニア姫殿下で、お料理会』
お料理会の文字で、一瞬、キースウッドの腕が動きかけるも、かろうじて、それを堪えた様子。うぐぐ、っと苦しげに唸りつつ、荒ぶりそうになる右腕を左腕で押さえるキースウッドを横目に、これはいけるか！？　っと、文字を書き足す。
『キノコを添えて』
キースウッドの腕が閃き、直後、紙に大きなばってんがついた。とても綺麗な……胸のすくような、お見事なばってんだった。

第十一話　小さな決意の芽生え

ミーアと共にセントノエルへと帰ってきた年少組の三人は、同じく故郷から帰ってきた特別初等部の子どもたちと再会を祝い合っていた。

もともとが、孤児院や貧民街出身の子どもたちである。一度の別れが永遠の別れになる、などということも決して珍しいことではなかった。

だからだろう、再会の喜びは大きく、みなの顔には笑みがあふれていた。

そんな笑顔の輪の中で、パティはいつも通り、みなの様子を観察していた。

「元気そうね。カロン」

そうヤナに話しかけられて、カロンはニヤリ、と片頬をあげた。

「お前のほうもな。弟ともども元気そうで良かったな。てっきりお貴族さまに売られちまったかと思ったぜ？」

悪ぶってみせるカロンに、ヤナは小さく笑みを浮かべて言った。

「あれ？　もしかして、あたしたちのこと、心配してくれたの？」

まるで、からかうような口調に、カロンは言い返そうとして……けれど、うっと唸るだけだった。なぜなら、ヤナが、心なしか柔らかな笑みを浮かべていたからだ。

ヤナは、とても整った顔立ちをしている。額の瞳の刺青も、どこか神秘的で……だから、素直な笑顔を浮かべると、とても可愛らしいのだ。

それはもう、見惚れてしまうほどに……。

――前までは、弟を守らなきゃって思ってたから、どこか棘があったけど……。

自分が心を許した結果、裏切られでもしたら、弟もろとも酷い目

に遭うという状況。そこから解放されて後も、しばらくは、信じ切れなかった彼女だが……ようやく、その警戒を解いたようだった。
友だちのそんな変化が、ちょっとだけ嬉しくて……。同時に、それを素直に認められるようになった自分に、パティは少しだけ戸惑う。
「良い顔をするようになりましたね」
ふと、声をかけられて振り返る。と、眼鏡の教師、ユリウスが立っていた。穏やかな笑みを浮かべる彼に、パティは素直に頷いて……。
「はい。ヤナは……夏休みの間、ミーアお……さまの良いところをたくさん見させてもらってたから……」
きっと改めて、ヤナは思ったのだろう。
ミーアならば、信じても大丈夫だ、と。
――あるいは、ただ単に、守られる環境に慣れてきたということ、なのかな……。
もしも、ここがあのクラウジウス家だったら……。蛇の教えを施す場であったなら……。まさに、その瞬間に、彼らは裏切ってくるだろう。
手ひどい裏切りを加え、根深い不信を植え付ける。だから、パティは、どんなことがあっても心を開くことはない……と思っていたのだが……。
「あなたのこと、だったのですが……」
パティの答えに、ユリウスは思わずといった様子で苦笑する。その顔を見たパティは、自らの口に手を当てて……。
「私……？　もしかして、私、笑って、ましたか？」
「ええ。ああ、でも、もちろん、あなただけではありませんよ。ヤナさんも、カロンさんも、キリルさんも……。みんな、ここに来た頃とは比べ物にならないぐらい、柔らかい表情をするようになりました」
優しげな口調で、ユリウスは続ける。

「パティさんは、まだ、少し緊張しているようにも見えますけど……大丈夫。私たちが、みなさんを守りますよ。ラフィーナさまも、ミーアさまも、絶対にみなさんのことを見捨てたりなんかしませんから。どうか、安心して……私たちを信じてください」
その言葉は……パティの胸の内に温かな感触を残した。
「ありがとうございます。ユリウス先生……」
その感情に促されるままに、パティは言葉を紡ぎだす。
心をそのまま言葉にしてもいい……。それが今は、少しだけ嬉しくって。でも……同時に思う。
それでも、きっと自分は、心から笑うようなことは、ないのだろう、と。
状況の把握ができた分、安心できるし、この世界ならば、もしかしたら心を許せる友だちもできるかもしれないけれど……それでも。
――過去に戻った時のために、警戒心のすべてを捨て去るようなことは、できないから。それに……。
「ユリウス先生……」
「うん？　なんでしょうか？」
首を傾げるユリウスに、パティは覚悟のこもった声で言った。
「ユリウス先生の、昔のお話、聞かせてください」
多分、この先、この人は、きっと多くの子どもを助けるだろう。
今までだって、たくさん助けてきたのだろう。だから……。
「オベラート子爵の家に引き取られたのは、いつ頃のことですか？」
バルバラは言っていた。自分の子どもは死んでしまったと……。
それは、バルバラが騙されていただけ、子爵家が口から出まかせを言ったということでもあるのかもしれないけれど……。
――私が、変えたから、そうなったのかもしれないから……。
あの時、バルバラの話を聞いた時、確かに、パティは思ったのだ。
可哀想……と。
そして、もしも、自分にそれを止める力があったら、どうだろう？　その子どもを、ユリウスを助けないだろうか？

パティは、自分が未来の世界に来ているという意味を、正確に把握していた。
蛇によって刷り込まれた、観察し、思考する習慣が、この時に役立った。
――できることはあまり多くないかもしれないけど……。
皇妃になったからと言って、できることは多くない。特に、蛇の監視がある以上、好き勝手なことをしていたら、いつ消されるかもわからない。
けれど……とパティは思う。
――たぶん、なにもできないというわけじゃないから……。
それは、少女の胸に芽生えた小さな決意。
蛇と戦おうという……勇敢な決意だった。

第十二話　ミーア姫、苦戦する

さて、すべきことを整理したミーアは、翌日から、オウラニアとの仲を深めるべく、早速行動を開始する。

「大きなイベントごとは互いの距離を縮めるもの。ゆえに必須ですわ。けれど、それだけでなく、普段からの関係性も大事だということもまた、紛れもない事実。エリスの恋愛小説にもそんなことが書かれていたはずですし……」

いささか心許ない根拠を口にしつつも、ミーアはオウラニアのもとを訪れた。

ちなみに、急遽決まったこととはいえ、オウラニアの転入はつつがなく行われた。

どうやら、エメラルダから相当せっつかれていたらしく、ミーアの許可が下り次第、すぐにでもミーア学園に入れるよう準備をしていたらしい。

それがセントノエルに変わっただけだということで、それ自体はスムーズに行ったのだが……。

「ご機嫌よう。オウラニア姫殿下。無事に転入が終わったようでなによりですわ」

早速、でっかい菓子折りを携えて、オウラニアの部屋に行ったミーアであったが……。

「あらぁ、ミーア姫殿下。わざわざ、申し訳ありません」

などと、にっこり、笑みを浮かべるオウラニアであったが……。

「美味しそうなお菓子をありがとうございました。それでは、荷物の片づけがまだありますので、これで……」

などと、頭を下げて、パタン、とドアを閉められてしまった。

「……あら？」

てっきり、部屋に迎え入れられて、一緒にお茶でも……などと誘

われるつもりになっていたミーアである。持参したお菓子も一緒に食べられて一石二鳥！　などと思っていたミーアなのである。
にもかかわらずの、この仕打ち……。
「……ま、まぁ……今日はたまたま忙しかったのかもしれませんし……。明日にでも、また訪ねてみましょうか」
などと、思っていたのだが……。
翌日は、メイドが不在だから、お茶を淹れるのが～、などと言われて断られ、その翌日には、実は甘い物はあんまり……などと言われて追い返された。
「これは……あからさまに避けられておりますわね」
目の前で閉められたドアを見て、ミーアは、ぐぬぬ、っと唸った。
「み、ミーアさまに、なんという無礼な……っ」
などと、珍しく真っ赤になって怒っているアンヌに、ミーアは……。
「わたくしのためにありがとう、アンヌ。でも、わたくし、気にしておりませんわ」
やや、ひきつった笑みを浮かべてみせた。
――なるほど……。そういう作戦なわけですわね……。
確かに、この対応はいかにも無礼。大国の姫がわざわざ会いに来ているのに、この仕打ちは、礼を欠くことこの上ないことではあるのだが……。
でも、このセントノエルでは、それこそが武器になる。
「ラフィーナさまのお膝元で、権力を背景にした圧力は、極めて危険な行動ですわ」
聖女ラフィーナは高潔な人。権力者の横暴を許さない公正な人。
ゆえに、ミーアは強く出られない。
ただでさえ、オウラニアをセントノエルに来させた経緯が経緯だ。下手なことをすれば、大国の横暴だ！　と訴えられてしまうかもしれない。
「ううむ……手ごわいですわよ。これは……」

そもそも、甘い物が嫌いな人間はいない、という確信を持っていたミーアである。菓子折りを抱えてきた相手はついつい招き入れたくなるのが人情というものではないか。なのに……。

「慧馬さんあたりなら、これで一発ですのに……」

つぶやいてから、ふと、ミーアは遠い目をした。

「思えば、慧馬さんにしろ、小驪さんにしろ、騎馬王国の方はとても素直で、純粋な方が多かったのですわね……。一緒に食事して、馬に乗れば、すぐに分かり合えましたもの」

ちなみに、ミーアと分かり合おうと思った場合には、ケーキを持って行くか、鍋をつつきあうのが良いらしい。鍋の具材はキノコが一番とされるが、兎肉でもいいらしい。

というか、ぶっちゃけ、ミーアもまた、美味しいものを一緒に食べれば概ね分かり合えるともっぱらの評判である。

まぁ、それはさておき……。

「ううむ、オウラニアさんのあの反応は、ちょっと想定外でしたわね……なんか、この感じ……ちょっぴり懐かしいですわ」

それから、ミーアは静かに瞳を閉じて……。

――ラフィーナさまに、こんな感じであしらわれたんでしたわね……。ああ、懐かしいですわ。懐かしい、というか、ほろ苦いというか……。

すっかり傷ついてしまった小心（リトルハート）を癒してもらうべく、ミーアはラフィーナのところに行った。これで、ラフィーナにまで、

「あなた……誰だったかしら？」

などと言われたら立ち直れないところだったが……幸いにしてそんなこともなく。

ニッコニコ、溢れんばかりの笑顔で迎え入れられたミーアは、美味しいジャムに紅茶を添えたものをたくさんもらって、すっかり回復。

それから、前の時間軸での苦労と、現在の、朗らかな笑みを浮かべるラフィーナとのギャップに、はらほろと涙をこぼしつつ、

「ああ。やはり……お友だちはいいものですわ……。ラフィーナさまは、わたくしの、大切な、お友だちですわ」
なぁんてつぶやいたりするものだから、ラフィーナがさらに感極まってしまって……その後、滅茶苦茶お茶会する羽目になってしまうのだが……。
それはともかく、ミーアは決心を新たにする。
「やはり、イベント。イベントが必要ですわ。みなでワイワイ盛り上がれるような企画を立てるのがよろしいですわね。それをきっかけに、徐々に仲良くなる。これこそが一番大事ですわ。問題は、オウラニアさんが、どんなことに興味を持っているかですけど……」
悩ましげな顔で、ミーアは唸り声を上げる。
「正直、こちらも生徒会でアイデアを募りたいところではありますけど……。キースウッドさんが意外と細かいダメ出しをしてくるんですわよね。アイデアを出す時には、否定せず、とりあえず、出るに任せろ、とクソメガネが言っておりましたのに……。基本がなってませんわね」
やれやれ、と首を振るミーアであった。

第十三話　マルチタスク・プリンセス

翌日のこと、ミーアは生徒会を招集した。
「イベントごと……イベントごとなんですわよねぇ。ううむ……」
なぁんてつぶやきつつも、今日の議題はセントノエル・ミーア学園共同研究の内容に絞っておく。
基本的に、ミーアはお腹一杯食べた後でも、甘い物を食べられる人だ。甘い物（マルチタスク）は別腹を得意としているといえるだろう。
オウラニアと仲良くなるためのイベントのアイデアは必要。されど、共同研究のアイデア出しもまた重要なことなのだ。ということで、
「先に、ガヌドス港湾国のオウラニア姫殿下の転入のことについて、みなさまにお知らせいたしますわ」
会議の冒頭、とりあえず、必要最低限なことを伝えておく、甘い物（マルチタスク）は別腹姫（プリンセス）ミーアである。
「そうか。オウラニア姫がセントノエルにやって来たのは、そういう経緯があったわけか」
腕組みしたシオンは、ニヤリと満足げな笑みを浮かべて……。
「それにしても、エメラルダ嬢は、さすがの外交的手腕だな。ガヌドス港湾国から王女を出させるとは……優秀な女性だ」
弟の婚約者の優秀さを、素直に喜ぶシオンである。
「……優秀？」
ミーアはそれを、ちょっぴり生暖かい目で見ていたが、すぐに話を戻す。
「ただ、今のお話はあくまでも、みなさまに共有したまでのこと。また別の機会に相談するかもしれませんが、本題は別ですわ」
ミーアは、チラリとラフィーナのほうに目を向ける。ラフィーナが頷くのを待って、ミーアはゆっくりと口を開けた。

「実は、セントノエル学園と我が国の聖ミーア学園とで、共同研究を始めようという話になりましたの」
「共同研究、というと……？」
不思議そうに首を傾げるアベル。ミーアは一度、言葉を切ってから……。
「国の別を問わぬ大きな問題……。飢饉への対策についての研究ですわ」
その言葉に、驚きを見せる者はいなかった。みな、そうだろうな、という顔で頷いていた。
それは、彼らが出会って以来、ずっとミーアが言い続けていたことだったからだ。
あるいは、それを一歩前に進めたものとも言えるかもしれない。
それは、目の前の危機に対する備えのみならず、将来の、数十年先の未来にも影響を及ぼすかもしれない研究だったからだ。
かつて蛇の巫女姫ヴァレンティナは言った。人が人である限り、強者が弱者を踏みつけにし、勝者が敗者を食い物にする、その構造は変わらない、と。それは人の性質であり、人が人である限り決して逃れられぬものである、と。
ミーアの提唱しようとしている、この研究もまた、同じことだった。
人が人である限り、食べるのをやめるわけにはいかない。人が物を食べ、そこから生きる力を得続ける限り、食料不足、飢饉の問題は消えることはないのだ。
そして、ミーアはまさに、そこに直結する研究を始めようとしているのだ。
一方で、ミーアは周囲の者たちが感銘を受けていることを見て取るや、言葉を重ねる。
「すべては、ラフィーナさまからのご提案ですわ。素晴らしい提案をいただき、わたくし、とても感銘を受けておりますわ。わたくしも、なにかできないか、とは思っていたのですけれど、先を越され

てしまいましたわね。ふふふ、さすがはラフィーナさまですわ」
ヨイショの精神を決して忘れない、議長兼ヨイショ部長姫のミーアである。他人の功績を自分のものにして恨みを買うなどもってのほか。相手がラフィーナであるならばなおのことである。
きちんと〝さすラフィ〟をした後、ミーアは続ける。
「本来これは、セントノエルと聖ミーア学園とで話し合うべき事柄……。あるいは、ミーア学園の責任を負うわたくしと、セントノエルの責任を負うラフィーナさまで決めるべきだとは思ったのですけれど……わたくしは、セントノエルの生徒会長でもある。ゆえに、この件をセントノエル学園生徒会の中で話し合うのがよろしいのではないかと思いましたの」
そうして、ミーアの話が一段落したところで……。
「これは、少し関係のないことなのですが、よろしいでしょうか、ミーアさま」
一番に、ラーニャが手を挙げた。
「構いませんわ。なにかしら？」
ラーニャは、静かに立ち上がり、みなの顔を見渡してから言った。
「聖ミーア学園で開発中の新種の小麦は、来年の夏ごろには、それなりの量が帝国の市場に出回ると聞いています」
ミーアは、それに頷いてみせて……。
「というよりも、備蓄の量を考えても、そうせざるを得ないというところだと思いますわ」
使えば減るのが備蓄というものだ。永遠になくならないならばともかく、流通に占める割合は徐々に減っていかざるを得ないわけで……。
――まして、他国にも供出しているのですから、その減りは当初の予定より遥かに早いですわ。
現在、近隣諸国の市場には目立った混乱は見られない。それは、寒冷による収穫高の不足分を、備蓄によって、あるいは、フォークロード商会が運んできた海外の小麦によって、適宜補填し、安定化

を図っているためだ。
だが、その備蓄はいつまでも使えるものではないわけで。
「備蓄がなくなれば、自然、その部分をなにかで補う必要が出て来る。海外からの輸入量を増やすのは現実的ではありませんし、そうなると、寒さに強い小麦を利用して、収穫高を上げるしかありませんわ」
ミーアの言に頷いてから、ラーニャは言った。
「その寒さに強い小麦を周囲の国々に伝え、利用してもらうためにも、セントノエルの名を使えるのでしょうか？」
ミーアは、確認するようにラフィーナに目を向ける。っと、
「それは、論じるまでもないこと。貧しき者、弱き者を助けるは、教会の本分でもある。寒さに強い小麦の普及に、ヴェールガ、中央正教会の名を使うことには、なんの異存もありません。セントノエル学園もまたしかり。ミーア学園の立てた功績を横取りする形になってしまいそうだから、そうね……。セントノエル学園推奨……ぐらいで、広めていったらどうかしら？」
ラフィーナの力強い了承を受けて、寒さに強い新しい小麦『ミーア一号』と改良版である『ミーア二号』『ミーア三号』が大陸の各国に広まる下地は着々とできあがりつつあるのであった。
それはともかく……。
「今のラーニャさんの話は、セントノエルとミーア学園の『協力関係』を利用して、新しい小麦の知識を効率的に広げることができる、と、その確認でしたわね。そうした副次的な効果ももちろん期待できると思いますけれど……そのためには、やはり、目玉となる研究が必要になると思いますの。そういうわけで、ぜひ、いろいろな意見を出していただきたいですわ。くれぐれも、この場では否定することなく……」
と、そこまで言ったところで、ミーアはチラリ、とキースウッドのほうを見る。
キースウッドは、ん？　と首を傾げているが……あえて強調する

ようにミーアは続ける。
「実現可能かどうかも気にしなくて良いですわ。今は自由に思考を羽ばたかせて、広くアイデアを募りたく思いますの」
そうして、図書室でばってんをつけ続けたキースウッドに、言外で抗議するアイデア待ち(マルチタスク)イエスマン兼執念深き(プリンセス)リベンジャーのミーアなのであった。

第十四話　聖女ラフィーナの懊悩

ミーアの司会進行を見ながら、ラフィーナは……。

――どうしよう……。

ちょっぴり、焦っていた。

なぜって……だって、共同研究を提案したのは、エメラルダに対抗心を燃やしてのことだったからだ。

「ラフィーナさまのお考えには、改めて、脱帽ですわ。実際、その効果のほどは、わたくしもよくわかってはいたのですけど、さすがに、ミーア学園のほうから、このお話を持って行くことはできなかったですし。感謝いたしますわ、ラフィーナさま」

そうして、ニッコリ微笑まれてしまうと、もうダメだった。

ラフィーナは、涼やかな笑みを浮かべつつ、すすすっと視線を逸らす。

誰もがミーア・ルーナ・ティアムーンのようであれるはずがない。無心で波に乗り続けられる海月は稀有な存在だ。

自分の意図とは別のことで、褒めたたえられれば当然、羞恥心は刺激される。

「もっ、もうこれ以上、言わないでぇ！」

などと、悲鳴を上げたくだってなるものなのだ。

なにしろ、ラフィーナはそんなご立派な考えで共同研究を提案したわけではないのだから。

それはちょっぴり醜い、私情によってなされたものだったから。

誰もがミーア・ルーナ・ティアムーンのようであれるはずがない。やって来た波の、その行き先がどこかであるかなど、まるで気にせず、ひょーいっと飛び乗れるほど、蛮勇に富んでいるわけではない。

つまり、要するに、ミーア・ルーナ・ティアムーンは常人離れした器の持ち主なのだ！

……とまぁ、冗談はさておき。
そんなわけで、ラフィーナは焦りつつ……けれど、その議論を止められずにいた。
なぜなら、話が、とても良い方向にいっていたためだ。
ミーアの舵取りは、とても巧みなものだった。
ラーニャの発言は今日の会議の主旨から言えば、少々外れたものだった。けれど、ミーアはそれを否定することなく、膨らませて意義あるものへと変えていった。
――それに、その後の誘導も素晴らしいわ。みんなが口を開きやすいように、否定せず、ともかく、アイデアを出すことだけに集中させている。素晴らしい手腕だわ。
ヴェールガ公爵令嬢として、たびたび、中央正教会の会議にも参加するラフィーナであるのだが……、その不毛さに嫌気がさすことも少なくない。
いたたまれない空気に、その場を離れたくなったことは幾度もある。有意義な会議の場を作るのは、至難の業なのだ。
にもかかわず、ミーアは、実に話しやすい空気を作っていた。
――さすがはミーアさんね。すごいわ……。
さらにラフィーナが感心するのは、ミーアがいつでも、他人の力を頼ることを厭わないことだった。
自分自身の力を過信せず、頼り過ぎず、大義を成すためには、どんな手段もとる。
それが、ラフィーナには大変まぶしいものに映った。
――やっぱり、私とミーアさんとは全然違う。私、まだまだだわ。もっと頑張らないと……。
思い出す。
昨日のお茶会……ミーアは、ラフィーナがお友だちでよかった、と言ってくれたのだ。
大切なお友だちだと、言ってくれたのだ。
――あのミーアさんの言葉に報いるためにも……頑張らないとダ

メね。
なぁんて、反省している間に、話し合いはちょっぴり危険な方向へと進みつつあった。
ラフィーナが気付いたのは、その流れができつつある時だった。
彼女の耳に、ふと、こんな言葉が聞こえてきたのだ。
「効率的に、ウサギ、とれる仕組みの研究する、どうでしょう？」
発言したのは、ティオーナの従者、リオラ・ルールーだった。彼女は厳密に言えば生徒会役員ではないが、従者の知恵は主人の知恵というのは、セントノエルでは常識だ。
ということで、森の民ルールー族の知恵を存分に披露するリオラだったのだが……。
「私たち、弓矢でウサギとる、です。でも、罠も使う、です。罠を改良して、たくさんウサギとれれば……」
っと、じゅるるっと口元を拭うリオラである。
「ほう。なるほど……」
ミーアは、顎に手を当てて頷く。
「ルールー族出身のリオラさんらしい素晴らしい意見ですわ。確かに、美味しいですものね、ウサギ鍋。あれは、いくらでも食べられる素晴らしいものですし、ウサギを効率的に捕まえてこられれば……」
じゅるるっと、ミーアも口元を拭っている。
……森のウサギが絶滅してしまわないか、不安である。
ちなみに、ラフィーナは基本的に、ウサギを見ると可愛いと感じる感性の持ち主である。ウサギを見て、美味しそう……と思うことは、あまりないわけで……。
「罠は……どうかしら？」
などと、思わず口を出しそうになるも……自重する。なにしろ、すでにミーアがどんな意見も否定せずに……と言ってしまっていたためだ。
――ウサギ鍋……。それを可哀想と思ってしまうことも、またエ

ゴなのでしょうね。子どもたちがお腹を空かせないためには、そういう研究も必要なのかもしれないし。うん、私もまだまだだわ。
「ミーアさま、よろしいでしょうか？」
続いて手を挙げたのはクロエだった。
「実は、最近、こういう本を読んでいるのですけど……」
っと言って、差し出したのは、『秘境の珍味グルメ　パート5』なる、なんともアブナイ臭いのする本だった。
キースウッドなどは、そのタイトルを見て仰け反っていたが、そんなことは一切無視して、クロエは言った。
「これを読んでいると、珍味というのは、普通は捨ててしまうような部分に宿るような印象があります。そこで、普通は捨ててしまうような部分、例えば、内臓の生肉とかを安全に食べられる方法を……」
――内臓の……生肉……。
ラフィーナは涼やかな笑顔を浮かべつつ、想像して、ちょっぴり背中が寒くなる。
ラフィーナは聖女だ。基本的に訪れた村で出された食事は、ニッコリ笑顔で食べるようにしている。が……ごく当たり前の話だが、好き嫌いはある。
そして、内臓の生肉とやらは……あんまり、食べたくない。いや、すごく食べたくない。火が通っているならまだしも、生は……ちょっときつい。
「さらに、ワーム類は、とても栄養が豊富だという話も載っていて……」
――ワーム類……。
思い浮かぶのは、うねうねと体をうねらせる、毛がたくさん生えたタイプのヤツである。
基本的に、ラフィーナは、虫が好きではない。というか、ごく普通に嫌いだ。
足の長いクモの類とか、幼虫類とか、甲虫類とか……。部屋で見

かけたら、直接、手では触れないし、潰しもしない。本の端っこに乗せて、外に出すようにしているが、その理由は、別に慈愛の心からではない。

潰すのが気持ち悪いからだ。

……それを、食べる……？　え？　食べ……るの？

もしも、それこそが飢饉を解決する重要な研究だと言われたとして……認めることができるかどうか……。

――で、でも、ミーアさんが作り出した良い空気を壊すのも……うう、でも……。

深い……深い葛藤の渦に飲み込まれる聖女ラフィーナであった。

そうして、ルールー族の叡智を存分に披露したリオラや、秘境の珍味本の知識を朗らかに披露するクロエを筆頭に、いくつかの独創的かつ突飛なアイデアが出てきて、それを聞いていたキースウッドがお腹を押さえていたりしたわけだが……。

結局、結論は出ずに議題は持ち越しとなって、その日の生徒会はお開きとなるのだった。

第十四話　聖女ラフィーナの懊悩（後書き）

個人的に、虫料理は、まだ食べる勇気がないのです……。

第十五話　ベル、ようやく考え始める。ようやく……。

「ふぅむ……」

その日、ベルは図書室に来ていた。

夏休み、いろいろなイベントをエンジョイしてしまったせいで、すっかり、ポーンッと記憶の彼方に飛んでしまってはいたが、自分がこの世界に召喚された意味を考えるためだ。

「パトリシア大お祖母さまが、この時代に飛ばされてきたことは……なんとなくわからなくもない……。それに、ミーアお祖母さまが、この世界を逸脱するほどの影響力を行使した結果、過去の時間にまでその叡智の力が及んでしまったというのも……わからなくはない。でも……」

ベルは、腕組みして、首をひねる。

「……ボクが、この時代ですることって、なんなんだろう……？」

それは、答えが出しづらい問題だった。仮に答えが出たとしても正解かどうかがわからない、そんな厄介な問題だったのだ。さらに……。

「それに、ボクが未来の世界に戻れるのって、いつになるんだろう……？　どうやって帰ればいいんだろう？」

そんな風に、ちょっぴり心配になったベルに、この時代のルードヴィッヒは言った。

「どうやって……という視点では、おそらく答えは出ないでしょう。人が時間を飛び越えるなどと言うのは、それこそ神の御業に他ならないことですから」

彼は、眼鏡を押し上げながら続けて言った。

「もし、そうならば、むしろ、なぜこの時代に来たのか？　なんのために、ベルさまは、この時代に飛ばされてきたのか？　その面から考えるべきではないでしょうか？」

物事の仕組みではなく、意味を問う視点。ルードヴィッヒの言葉は、ベルに答えを与えるものではなかったけれど……別の考え方へと導くものだった。

「ボクがこの時代に来た意味……かぁ……。でもなぁ、やっぱり難しい」

椅子にちょこん、と腰を下ろし、足をプラプラ。辺りに視線をさ迷わせながら、ベルは、うぅむ、っと唸り声を上げた。それから、辺りを見回した。

視線の先には、たくさんの本が置かれていた。

「本……本かぁ」

ベルの脳裏に一番に浮かんだのは、エリスの顔だった。けれど、次の瞬間に浮かんだのは、祖母の、もう一人の眼鏡の友人で……。

「そういえば、クロエ大おばさまが、いろいろな本を読めって言ってたっけ……」

ミーアネットの長にして、祖母ミーアの読み友。さらには、ベルの友人の祖母でもある人……クロエは、頻繁に帝都に立ち寄っては、いろいろな本をお土産にくれる人だった。

幼い頃、エリスの書く小説ばかりを読んでいたベルに、クロエは優しく笑みを浮かべて言っていた。

「エリスさんの書くお話には、エリスさんの思想が色濃く表れる。同じように、ミーアさまの皇女伝には、ミーアさまの思想が見て取れる。それを学ぶことは、とても大切なことだけど、より広い視野を持つためには、たくさんの人が書いた本を読んだほうがいいんじゃないかなって思って。本はいろいろなことを教えてくれる。考えるヒントをくれるものだから……」

「って言ってたけど……」

ベルは改めて、図書館の本を眺めた。

読むのは……すごく大変そうだ。

「あ……そうだ。この時代のクロエ大おばさまに、なにか、ヒントになることがないか聞いてみたら……」
なぁんて、ベルが〝そのまんまミーア〟な答えに流れていきそうになった、まさにその時だった。
「あれ……？　ベルさ……ま？」
ふと顔を上げると、そこに立っていたのは、他ならぬ、クロエ・フォークロードその人だった。
「あ、クロエさん……うふふ、ちょうど良かったです」
にんまーりと、悪い笑みを浮かべるベルに気付かず、クロエはあたりをキョロキョロしつつ、近づいてきた。
「お一人で読書ですか……？」
先日、ベルがミーアの孫娘であると聞いた時から、クロエはベルに敬語を使うようになっていた。未来の世界においては、「ベルさま」呼びに慣れているベルであったが……急に呼び方を変えられるのはこそばゆくもあり……。
「ベルさま？」
「あ、はい。あの、クロエさん、ボクには、別にそこまで敬語を使わなくっても……」
「いいえ。あなたがミーアさまのお孫さんだと言うのなら……そうミーアさまがおっしゃるのなら、そんなわけにはいきませんから」
生真面目な顔で首を振るクロエだったが……、それからマジマジとベルを見て……。
「それにしても、本当に、ベルさまは、ミーアさまのお孫さん、なんですね……。なんだか、小説の出来事みたいなお話ですね……」
「その言い方は、すごくクロエさんっぽいです」
ベルはニコニコ笑ってから……。
「それにしても、クロエさんは、物語以外にもたくさん読まれるんですね」
クロエの持つ分厚い本に目を留めて言った。
「ミーアお姉さまに聞きましたが、この図書館の本を全部読みつく

しているとか……。すごいですね」
そうして……流れを作り出す。ベルの悩みに対して、適切な助言をもらえるように……。楽して助言をもらえるように！
っと、
「そう、ですね……」
クロエは、静かに唇に指をあてて……。
「実は、私、最初は暇つぶしのために本を読んでいたんです。というか、教室で一人でいることの気まずさを紛らわすため、といったほうが正確かもしれませんけど……ともかく、時間があったので、ここの本はすべて読み切ってしまったんですよ……」
「え……？」
意外な話に、ベルは目をぱちくりさせる。てっきり、クロエは本が大好きな人だと思っていたので、意外の念は禁じ得なかった。
「最初は、本当にただの暇つぶしだったんです。だけど、ミーアさまとお会いして……お話しするお友だちができて、一人でいる気まずさを紛らわす必要もなくなって……それで、ふと思ったんです。私、どうして本を読むんだろうって……」
クロエはちょっぴり照れたように笑って。
「ミーアさまとお話しするネタになるから、というのはもちろんあるけど、でも、それだけじゃない。私はやっぱり本を読むのが好きなんだって……気付いて……」
そうして、クロエはベルのほうに視線を向けた。
「でも、今はそれだけじゃないんです。私は……、ただ好きなだけじゃなく、いろいろな文献で得た知識をミーアさまのために役立てたいって……そう思うようになりました。だから、私はたくさん本を読もうって思うんです」
「知識を役立てる……？」
「そう。大好きな本の知識を使って、大切なお友だちの役に立つことができる。それって、とても素敵なことじゃないでしょうか」
その言葉を聞いて、ベルは、すとんと腑に落ちた。

「そう、なんですね……。クロエおば……クロエさんの生き方は、そういうものだったんですね」
いつも、お土産に本をくれる優しい人……。彼女のそれは、自分自身が本によって力を得た経験からくるものだったのだ。
――やっぱり、ミーアお祖母さまのお友だちには、すごい人が多いんだなぁ。
そうして、帝国の叡智への尊敬の念を新たに、ベルは図書室を後にした。
……クロエから助言をもらうことは、ぽーんっと頭の中から飛び去ってしまっていたのだった。

第十六話　ミーア姫、避暑地のお姫さまっぽい雰囲気を出してしまう

セントノエル島には、いくつか湖に臨む浜辺が存在している。

辺り一面に広がる白い砂浜に、さく、さくと音を立て、一人の少女が歩いていた。白金色の髪が湖から吹いてくる風に踊り、陽の光にキラキラと輝いた。

なびく髪を片手で押さえつつ、ふぅっと憂いを帯びたため息……。湖の向こう側を見る青い瞳には、切なげな色が映り……一応、念のため誤解のないように言っておくと、ミーアの描写である。

さながら、避暑地にやって来た、良いところのお姫さまと言った風情を醸し出しているミーアの描写なのである。ミーアだってやる気を出せば、このぐらいはできるのだ。

……もっとも、ミーアは間違いなく、良いところのお姫さまなわけで、頑張らないとこのぐらいの風情が出せないことのほうが、むしろ問題なのかもしれないが……。それはともかく。

議長として、生徒会の話し合いを導き、適切な場所でヨイショを入れ（途中からやや適当になってきてヨッコイショになっていたかもしれないが）……、そうして、ちょっぴり疲れた心を癒すため、ミーアは湖にやってきていた。

夏を過ぎ、秋が深まりつつある今日この頃、穏やかな風には、わずかばかり、冬の寒さが感じられた。

「風が、気持ちいいですね、ミーアさま……」

後ろからついてくるアンヌが、穏やかな笑みを浮かべて言った。

「そうですわね……。もうすっかり秋。食事がとっても美味しい季節になってきましたわね」

天高く、姫肥える秋……。寒い冬に向け、たっぷりといろいろなものを蓄えておくべき季節である。

最近、なにを食べても美味しく感じてしまうことに首を傾げてい

たミーアであったが、先日、クロエから説明されて、なるほど！と手を打ったものだった。
冬に向けて蓄えなければいけない。だから美味しいのだ！
では、春と夏は食事が美味しくないのか？　と疑問が浮かんできそうなものではあるが、そんなこと思いもしないミーアなのである。
秋は、冬に向けて蓄える時期。だから、仕方ないのだ！　F・N・Y（証明終了！）
「ところで、アンヌ……誰かと仲を深めたいと思った時には、やはり、イベントごとが大切だと思うのですけど、どうかしら？」
ミーアは、ふと忠臣に、そんな問いを投げかけてみる。
オウラニアと仲良くなるためのイベント案は、結局、生徒会で募ることはできなかった。
共同研究の話し合いが想定以上に盛り上がってしまったため、切り上げ時を失ったのだ。
――まぁ、あれはあれで大切なことですし、結論は出なかったものの、充実した話し合いになりましたわ。
ラフィーナの手前、イベント事のために、有意義な議論を打ち切るのは、気が引けたミーアである。ということで……、ミーアは忠臣かつ軍師であるアンヌに相談事を持ち掛けたのだ。
「仲を深めたい……」
その言葉に、アンヌは顎に手を当て……ピンっと来た顔をした！
「ええ。そう。そのきっかけには、大きなイベントが有効だと思うのですけど……」
「そうですね。そう思います」
アンヌは生真面目な顔で頷く。その顔は、紛れもない、恋愛大都督（だいとく）アンヌの顔であった。今だったら、わずかな手勢で大水軍を迎え撃てそうなアンヌである。
「そこで、せっかくですし、秋らしいイベントを企画しようと思っておりますの」
「……なるほど。素晴らしいアイデアだと思います。ちなみに、ど

のような？」
「そうですわね。まず、食欲の秋ということで、森にキノコ狩りに……」
っと、キースウッドに却下されたアイデアを口にするミーアであったが……。
「それは、やめたほうがいいと思います」
アンヌ、きっぱりとした口調で否定する。
「なっ、なぜですの？　アンヌ、あなたまで、どうして……？」
アンヌよ！　お前もか！　っと、裏切られたような顔をするミーアに、アンヌはこんこんと説明する。
「キノコ狩りでは、二人きりになりづらいと思います。それに、ミーアさまは、キノコ狩りに熱中しすぎて、仲を深めることが疎かになる可能性もあります」
「むぅ……なるほど。言われてみれば、そうかもしれませんわ……聞くべき点がありそうですわ」
忠臣の言葉には、さすがに耳を傾けざるを得ないミーアである。
「では、アンヌ、あなたは、どのようなものが良いと思うのかしら……？」
「そう……ですね。馬の遠乗り……あるいは、ダンスなどが……」
と言いかけたところで、アンヌは、言葉を呑み込んだ。
「普通……。普通は、駄目ってエリスが言ってた……」
「普通は……だめ？」
ミーア、その言葉に、思わず唸る。
――普通はダメ。なるほど、それは、なかなかに含蓄のある言葉ではないかしら……。
乗馬やダンスは、ミーアにとっては慣れ親しんだ『普通』のことだ。楽しさが容易に想像できるから、企画も立てやすいし、誘いやすくもある。
けれど……それは、オウラニアにとっての『普通』ではないかもしれない。

乗馬はともかく、普通に考えれば、姫というのは幼き日より、ダンスに親しんでいるもの。されど、それは、あくまでもミーアの常識、相手の常識ではないかもしれない。
普通、甘い物は好まれる……それがミーアの常識にすぎず、オウラニアには通用しなかったように。
あるいは「普通、高価なプレゼントは相手を喜ばせる」という常識が、ミーアの常識にすぎず、前時間軸のラフィーナに通用しなかったように。
「考えてみれば……慣れない土地にやって来た人に対してすべきアプローチは、こちらの『普通』を押し付けることではなかった。もっと親しみのある、それこそ、彼女の故郷を思わせることを……なにか、考えてやるべきなのでは……」
っと、アイデアが固まりかけた、その時だった。
「ミーアさま、あれ……」
アンヌが指さす先、子どもたちがやってくるのが見えた。
「これは、ミーア姫殿下。ご機嫌麗しゅう」
特別初等部の子どもたちを引率していたユリウスが頭を下げる。
「ユリウス先生、ご機嫌よう。どこかに、お出かけだったのかしら？」
ミーアの問いかけに、ユリウスは子どもたちのほうに目を向けながら……。
「実は、セントノエル島の浜辺に住む生き物を子どもたちに見せたいと思いまして……」
「なるほど。それは大切なことですわね……」
ミーアは感心する。どこにどんな生物が住んでいて、なにが食べられるのかを知ることは、水を得る方法と同様、生存術の大切な知識であるからだ。美味しい食べ物があるかもしれないのに、それを知らずにいることは、とても不幸なことなのだ。
「良い授業をしておられますわね。ユリウス先生」
「お褒めに預かり恐縮です」

頷きあうミーアとユリウスの間で、若干の齟齬があるような気がしないではないが……それはさておき。
っとそこで、ミーアは、ふと気が付いた。
なんとなくだが、ヤナとキリルに元気がないような気がしたのだ。
「ヤナ、どうかしましたの？」
と、ミーアが聞こうとした時、不意に、服を引っ張られる。見れば、パティが物言いたげな顔をしていた。
「パティ……？」
パティはそのまま、ちょこん、と背伸びして、ミーアに顔を近づけて耳打ち。
「あの……ヤナとキリル……ガヌドスの姫殿下の姿を見て、昔を思い出しちゃったみたいで」
「ああ、オウラニアさんですわね……」
言われて、ようやく思い至る。
そう言えば、ヤナとキリルはガヌドス港湾国では差別されてきた身。あまり、良い印象はないのだろう。
「これは、失敗しましたわね……ふぅむ……」
腕組みして、考え込むミーアに、パティは続けた。
「さっき、あっちの浜辺で、釣りしてるのを見かけちゃって……」
「釣り……？　はて……」
意外な言葉に、きょっとーん、と首を傾げるミーアだった。

第十七話　ミーアはフォローを忘れない！

「釣り……釣りというと、あの、お魚を釣るアレですの？」
ちなみに、ミーア、釣りがどんなものかは、知っている。
あいにくと、自分でやる機会はなかったものの、あの無人島での生活がもう少し伸びていれば、自分でやってみたかもしれない。
――サバイバルには水の確保が大事。そして、水場で獲れる食料の中では、魚が最上のものですわ。
いついかなる時に、革命が起きても逃げ延びられるよう、常に知識の収集を怠らないミーアである。
けれど……それはあくまでも、生存のための知識であった。食べる物が十分にある時にしようとは思わないわけで……。
「でも……そうか。確かに帝国で釣りをする貴族というのはあまりおりませんけれど……代わりに狩猟がありますわ。あれと似たようなものかしら……。ガヌドス港湾国なら海に面しているわけですから、オウラニアさんが、狩猟の代わりに釣りをしていても不思議ではない……ということかしら？」
ううむ、っと思わず考え込むミーアであったが……。
――オウラニアさんと仲良くなるためには、彼女のことを知らなければならない……。彼女に合ったイベントを考える必要がある……。とすれば、これはきっかけになりうるのかもしれませんわ。
相手がお茶会に乗ってこないのは、なぜか。それは、お菓子に興味がないから。
では、どうするのか？
相手が興味津々で、ついつい参加したくなるような企画を立てればよいのだ。
――思えば、ラフィーナさまにだって、本当はそうすればよかったのですわ。例えば、お父さまが勝手に作ろうとする娘の肖像画に

ついて話をしましょう！　などと言えば、もしかしたら、分かり合えたかもしれませんし……。愚痴を言い合う仲にだってなれたかもしれませんわ。

今と近い関係だって、築けていたかもしれないわけで……。

「これは、良いことを聞きましたわ。すぐにでも行かなければなりませんわね。現場を押さえなければ……！」

走り出そうとしたミーアだったが、ふと、そこで立ち止まり、ヤナたちのほうへと向かった。

「ヤナ、それにキリル」

名前を呼ばれた幼い姉弟が、顔を上げる。彼女たちに視線を合わすように、わずかにしゃがんで、ミーアは言った。

「あなたたちが、ガヌドス港湾国で受けた嫌な想いについて、わたくしは、とやかく言うつもりはございませんわ。けれど、あなたたちは今や、このセントノエルの学生で、わたくしやラフィーナさまの庇護のもとにあるということ、どうか忘れないでいただきたいですわ」

そう言って、ヤナの頭を軽く撫でる。それから……。

「だから、大丈夫とは思いますけれど……それでももし、嫌なことがあれば、いつでもわたくしに言うのですのよ？　ないとは思いますけれど、オウラニア姫が、意地悪をしたとか、そういうことがあったら、すぐにでも……いいですわね？」

そう言ってやると、ヤナの顔に、パァッと明るさが戻ってきたように見えた。

ヤナとキリルは、ヴァイサリアンだ。ハンネスを追いかける際にも、力になってくれるかもしれないし、それ以前に、パティの大切な友人でもある。

良好な関係を保っておくに越したことはない。

――それに、もし万が一、子どもに意地悪をするようなところを見つけられれば……。それをきっかけに、お茶会に引きずり込むこともできるかもしれませんわ。

そんな計算のもと、ミーアはヤナに言う。
「いいですわね？　遠慮なんかしたら駄目ですわよ？　どんな些細なことでも言うこと……。いいですわね？」
それから、ミーアはほかの子どもたちにも目を向ける。
「ヤナたちだけではなく、みなもですわよ？」
突然、話を振られて、ポカンと口を開ける子どもたちに、ミーアは続ける。
「なにか困っていることがあれば、わたくしか、ユリウス先生に言うこと。遠慮は無用ですわ」
それから、ミーアはちょっぴり笑みを浮かべて、
「もちろん、わがままを言ってはダメですわよ？　例えば……そう、食堂のお料理を全部甘い物に変えてほしいとか、そういうわがままは実現しませんわ」
かつて、それに近いことを生徒会長の公約として出そうとしていたミーアは、気にせず、いけしゃあしゃあと言ってのける！
「けれど……そうですわね。わがままかどうか心配になっても、とりあえず言ってみてもらいたいですわ。実現するかどうかはわからないけれど……、あなたたちの言葉を無視することはない、ということだけは約束いたしますわ」
嘆願を無視されると、人は口を閉ざすもの。
なにを言っても無駄、状況は変わらないと思えば、わざわざ言いにはこないものなのだ。
だから、ミーアは強調しておく。
実現するかはわからないけれど、きちんと聞いている、と……。
「あなたたちの声を受け、どうするのが最善か、きちんと考えますから、遠慮せずに言っていただきたいですわ」
自分たちの不平、不満を、相手がきちんと聞いていて……そのためになにか考えてくれる。
そう思わせることこそが重要だ。
ミーアは知っている。人とは、不満を溜め込むものなのだ。

国王の圧政に対しての文句など、民衆は、そうそう気軽に言えるものではないし、言っても無駄なら余計に口をつぐむだろう。
そうして、彼らは不満を胸の内に溜め込んでいく。だが……それは永遠ではない。
容器に水を入れ続ければ、いつかは溢れ出すように……。
怒りはいずれ、なにかのきっかけで爆発する。
それが個人のものであれば、まだよいが、集団のものになると……ヤバイ。
革命からギロチンへと、強力な流れが生まれてしまう。
だからこそ、ミーアは、その芽を早めに摘み取るべきだと考える。
――気軽に不平を言ってもらえる環境、そして、その不平を、多少は和らげるように行動していると、きちんと見せることが重要ですわ。
ミーアは、子どもたちにニッコリ笑みを浮かべて、
「いいですわね。約束ですわよ？」
朗らかに言った……のだが……。
「……話を聞いてくれたって……なにもしてくれないかもしれないんじゃ、意味がない」
そんな声が、ミーアの耳に入ってきた！

第十八話　ミーアエリート・ルーキー！

特別初等部には、十歳の年長組が四人と、七、八歳の年少組が三人在籍している。
その年長組の四人の中で、最も勉強ができるのは、ヤナでもカロンでもパティでもなく……もう一人の少年ローロだった。
ローロは、レムノ王国の孤児院出身だった。
他の子どもたちと大差ない貧民街で生まれ、相応に苦労して、孤児院へとたどり着き、そうして、セントノエルにやってきた。
同じ孤児のカロンは、セントノエルで金目の物を盗んで、自分だけでも生きていけるだけの金を得ようとしたことがあったが、ローロも根っこの部分では同じだった。
貴族なんて信用ならない。いつ捨てられるかわからない。
だから、自分一人でも生きていく力が欲しい、と、そう思っていた。
そうして、彼は、勉強に力を入れた。
セントノエルの高度な教育によって、自分一人でも生きていけるだけの力を得ようと努力したのだ。
けれど、あの日……。
銀の大皿が盗まれた時……目の前の皇女殿下は言ってくれたのだ。
心配することはないと。
あなたたちが何者であっても……たとえ力のない子どもであっても、その全存在を受け入れよう、と……。
全校集会でのミーアの言葉は嬉しかった。あんなことを言われたのは、無条件にすべてを受け入れてもらったのは、はじめてだったから。
とても嬉しくって……だから、夏休み……。
ミーアがパティたち三人を連れて帝国に帰った時、「嫌だな……」

と思ったのだ。
パトリシアはミーアと特別な知り合いのようだから、仕方ないとしても、ヤナとキリルは、どうか？
どうして、あの姉弟がついていくというのだろう？
あの二人は、特別な存在なんだろうか？
思考はネガティブな方向へと進んでいく。
もしかして、あの日の、全校集会での言葉は……自分ではなく、パトリシアや、ヤナとキリルの姉弟にだけかけられたものではなかったのか？　と。
だからまるで、その想いを見透かすように、ミーアが、
「あなたたちも……」
と言ってくれたことが嬉しかった。
ヤナたちだけじゃなく、あなたたちのことも、きちんと気にかけているよ、と言われて嬉しかったのだ。だけど……。
――本当、かな……？
その言葉は、無条件に信じるには綺麗すぎたから……。彼は、どうしても信じ切れなかった。
なぜなら……彼は以前、そんな都合のいい、綺麗な言葉に騙されたことがあったから……。
それは、三年前、レムノ王国を襲った革命未遂事件でのこと。
ローロは、とても綺麗な言葉を話す青年と出会った。
青年の名前はランベール。革命軍を主導した男だった。
「王が我々になにをしてくれた？　我々を殴りつけ、搾り取れるだけ搾り取るだけではないか！　我々は暴虐なる王を打ち倒し、自由を手に入れるのだ！」
その言葉は耳心地よく、ローロの心を明るくした。
話の中身は、わからないこともあったけど、それでも、この人についていきたいと思って……ローロは革命派の仲間になろうとして……。
そこで、彼は思い知る。

革命派の中でだって……孤児は、踏みつけにされ、殴りつけられ、支配される立場だと……。
結局は、なにも変わらなかった。
ランベールが言うような、夢のような世界など、なかったのだ。
もちろん、あの男とミーアとを比べることはできない。実際に助けの手を差し伸べてくれたミーアと、言葉だけだった彼とを比べるのは、とても失礼なことだ。
けれど、同時に思ってしまうのだ。この温情だって、今だけではないか、って。
しょせんは、持っている者の、気まぐれに過ぎないんじゃないかって……そんな不安はどうしても拭えなくって。だから……。
「……話を聞いてくれたって……なにもしてくれないかもしれないんじゃ、意味がない」
つい言ってしまったのだ。
――そうだ。この姫殿下の耳心地の良い言葉だって……誤魔化しに過ぎないんじゃないか？　結局のところ、この人だって……。
ローロは上目遣いに、ミーアを見つめた。
「僕たちの話を聞くことに、どんな意味があるって言うんですか？」
――む、むぅ……なかなかに、答えづらいことを言われましたわね……。
ミーアは、その少年に、一瞬、たじろいだ。
それから改めて見ると、彼は、割と知性的な顔をしていた。しかも、なんと、その顔にはメガネがあったのだ！
どことなく、ルードヴィッヒを彷彿とさせる雰囲気があるような気がする。それも、クソメガネのほうのルードヴィッヒだ。
――ふむ、このミニクソメガネみたいな子、わたくしの揚げ足を取ろうだなんて、なかなかに小癪。けれど、負けてはいられませんわね……。
ミーアは、ふん、っと鼻を鳴らす。それから、刹那の黙考。その

後、結論を出す。
――もしも相手がミニクソメガネみたいな子でしたら、口先だけで誤魔化すのは、むしろ逆効果……。ここは、お姉さんの経験談を交えて、実感のこもった言葉で言いくるめるのが良いのではないかしら？
そうして、ミーアはゆっくりと口を開いた。
「まず、言っておきたいのですけれど、わたくしは、全知全能の神ではありませんわ。残念ながら……。欠けの多いただの人間に過ぎない。だから、あなたたちの求めが、真に必要なものであったとしても、それにすべて答えられはしませんわ」
前の時間軸、それは嫌というほどわかっているミーアである。
瞬時に、腹を空かせた民衆すべてに食べ物を用意することなど、人の身においては不可能。それができれば、一番良いのかもしれないが、それは不可能なことなのだ。
「実際に神さまが来て、直接、統治してくれたらどれだけいいか、と思うばかりですわ」
冗談めかした口調で言ってから、ミーアは続ける。
「でも、そうはならない。だから、当然、不足はあるし、失敗することだってあるでしょう。あなたたちの願いに対して、上手く答えを見つけられないことだってあると思いますわ。ただ問題は『完璧に上手くいくこと』と『最悪の結果』との間には、広い幅があるということですわ」
ミーアは思っている。
民の不平不満を一切生み出さないような善政を敷くことは、自分には無理だろう、と。
ゆえに、ミーアが目指すのはそこではない。
――革命が起こらない程度で、そこそこみんな幸せになってくれれば……。最低限、飢え死にしたりせず、どんな時も、そこそこに美味しい物を食べられる……。わたくしにできるのはこのぐらいですわ。

静かなる確信を胸に、ミーアはローロを見つめた。
「わたくしは、完璧なことはできない。たとえ、あなたたちの願いを聞いたって“あなたたちがもらったら心の底から嬉しいもの”は与えられないかもしれない。でも“もらうとちょっぴり嬉しいもの”だったらあげられるかもしれない。“されたらちょっと嫌だな”と思うことはしてしまうかもしれないけれど“絶対にしてほしくないこと”は、しませんわ。だからこそ、あなたたちの声が聞きたいんですの。だって、聞かなければわかりませんわ。他人の気持ちと言うものは」
それは、耳心地の良い綺麗事ではない。
ミーアの本心からの言葉だった。
「この答えでは、不足かしら？　ローロ」
ミーアに名を呼ばれ、少年……ローロはピクンッと肩を揺らした。
「僕の、名前を……」
驚きに目を見開くローロに、ミーアは、
「もちろん覚えておりますわ。うふふ、パティからも、ヤナたちからも、いろいろと聞いておりますわよ？　あなたたちの普段のこと。あなた、とっても勉強を頑張っているそうですわね」
すかさず、牽制がてら、軽くヨイショを交える。
人は褒められれば嬉しいもの。これで、ミーアの答えに多少文句があったとしても、許したくなるはず……。
――やれやれ、これで、なんとか誤魔化せたならいいのですけど……。
などと思うミーアであったが……。

さて、基本的にミーアは、ミーアエリートなる集団を作りたいとは思っていない。
自分の言うことを、なんの疑いもなく聞くような人材は、ちょっぴりアブナイんじゃないか、とすら思っている。
そんなミーアは知る由もなかった。

「ミーア姫殿下……」
その少年、ローロの心に、深く、揺るぎのない忠誠の心が芽生えつつあることなど……。
かくて、無意識に、新たなるミーアエリートをスカウトしてしまったミーアなのであった。

第十九話　知ったこっちゃないのであった。

「ふぅ……納得してもらえたみたいで何よりですわ……」
手を振る子どもたちを見送ってから、ミーアはほふぅっとため息。それから、パンパンっと頬を叩いてから、浜辺をズンズン進み出した。
足元で、サクサク鳴っていた砂の音が、徐々に、じゃりじゃりと硬い音に変わり、さらに、ごつごつと大きな岩が目立ってきた。
「ここには来たことがありませんでしたね、ミーアさま。お足元に気をつけ、きゃあっ！」
「ああ。アンヌのほうこそ気をつけて。ここ、転ぶと痛そうですわ」
すってーんと転びそうになったアンヌを、よーっこいしょーっと、ダンス仕込みのバランス感覚で支えつつも……、ミーアは懐かしげに目を細めた。
「しかし、なんだか、あの無人島を思い出しますわね……っと、ああ……本当におりましたわね……」
ミーアの視線の先……大きな岩に腰かけて、ぽげーっと湖面を眺めるオウラニアの姿があった。その右の手には、釣り竿が握られていて、糸が水面に垂れていた。
最初、会った時には『葉っぱを数える時のミーア』に匹敵するほどの、ぽげーっとした顔をしていたオウラニアだったが、水面を眺める彼女の瞳は、恐ろしいまでに鋭く……鋭くっ！　は、なっていなかった。
葉っぱを眺めてる時のミーアぐらい、ぽげーっとしていた！
「ふむ……」
その横顔を見て、ミーアは思わず唸る。
――無心になって釣り糸を垂らしている……。恐ろしいまでの集中力ですわ。この方、やっぱりデキる方ですわね！

ゴクリ、と生唾を呑み込むミーアであった。
それから、ミーアはふとオウラニアの足元に、水の入った魚籠が置かれているのを見つけた。
――ふむ、まぁ、いくら避けられているっぽくても、さすがにこの状況で逃げたりはしませんでしょうけど……。
そう思いつつも、ミーアはこっそりと足音を消して近づいてゆき……。魚籠を覗き込む。っと、そこには、大小さまざまな魚が五匹入っていた。
――おお。てっきり、格好だけで釣れてないんじゃないかと思いましたけれど、ちゃんと釣れておりますわね。
感心するミーアのすぐ目の前で、ひょーいっとオウラニアの腕が動いた。その動きに合わせるようにして、湖から、ちゃぽんっと大きな魚が跳ねあがった。
「おおっ！　お見事」
思わず歓声を上げるミーア。だったが……、オウラニアは、釣り上げた魚から視線を外すことはなかった……。手早く魚から針を外すと、流れるような動作で、釣り糸を垂らす。
――ものすごく洗練された動作ですわ。やはり、この方、デキますわね！
ミーアは新たに加わった魚に目をやった。それは長くて太い魚だった。
「この大きなお魚は……」
「オオグチヴェールガバスっていうお魚ですね。塩気のある海水では生きられないお魚で、大きくて、力強くて、釣り応えがとってもいいの。下手をすると糸が切れてしまうし、竿も折れてしまうから、力加減がとっても繊細で、うふふ、いい戦いでした」
どこか間延びした声が、今はちょっとだけキビキビしたものになっていた。
「ほう……」
釣り応えとか大切なのかぁ、などと思いつつ、いまいち、ピンと

こないミーアであったが……。
「鍋料理とかにするととってもいいお味。焼けば焼いたで骨からの身離れもよくって、食べやすいんですよー。それに、生のお刺身も脂がのっててとっても美味しくって」
「ほほうっ！」
今度はピンとくる！　ピピピンッとくる！
どんなお料理ができるのかで説明されると、途端に興味を刺激されるミーアなのである。
「ううむ、それは素晴らしいですわ。生でも食べられるし、煮ても焼いても食べられるだなんて……」
腕組みしつつ、うむうむっと頷くミーア。
それから、改めて、オウラアニアのほうを見る。
説明の間も、オウラニアは、湖面から目を放そうとしなかった。
――オウラニアさん、わたくしだって気付いてないみたいですわね……。ものすごい集中力ですわ。それに、とても楽しそう……。
これだけ集中しているのだ。さぞや楽しいのだろう。
っと、ミーアが見ている間に、さらに、二匹、三匹、と釣り上げていく。
「これは、ガレリア海でも似た種類がいるけど、やっぱり海水では生きられないお魚でたくさん卵を産むの。こっちは……」
なぁんて解説してくれるオウラニアを見つめながら、ミーアは確信する。
――なるほど、ガヌドスの姫を誘う時には、ガヌドス港湾国の人間の気持ちで誘うべき、ですわね……。甘いお菓子なら喜ぶだろうというのは、あくまでもわたくしの常識。普通を普通と考えないのが大事。こちらの普通を押し付けるのではなくって、彼女がなにを喜びとするのかを考えることこそが重要ですわ。
彼女が最も喜ぶもの、あるいは、参加しやすいものは何か？
答えは、初めからわかっていたのだ。
――海に面したガヌドス港湾国の方なのですから、答えは明らか。

釣り大会ですわ……。全校生徒で……いえ、魚が嫌いな方もいるでしょうし、自由参加ということにしておいてもいいかしら？　まぁ、細部は後で詰めるとして、早速、ラフィーナさまに相談しなければ……。

ミーアは、考え付いたアイデアを胸に、学園へと向かう。

――お魚料理は、あまり詳しくありませんし……うふふ、楽しみですわ。オウラニアさんと仲良くなって、詳しくなって……それでお料理会を……。

なぁんて、ミーアが考えてる、ちょうど同じ頃、男子寮でキースウッドが、なにやら、寒気を覚えたり、遠く帝国の地でサフィアスが……婚約者レティーツィアといちゃついたりしていたが……ミーアの知ったこっちゃないことなのであった。

第二十話　ミーア姫、鍋について哲学的考察を始める……

浜辺をのんびり歩いて戻ってきたミーアは、女子寮に着くなり、ふぅぅっとため息。
「ううむ……。すっかり汗をかいてしまいましたわね」
秋に入り、涼しさが勝っているとはいえ、さすがに、不安定な足場を長く歩けば、体も温まってくる。
「会議の疲れを洗い流すためにも、夕食の前に大浴場に行きたいですわね」
「はい。わかりました。すぐに準備をいたしますね」
「ああ。アンヌ、別に急ぐ必要はありませんわ。転ばぬよう、足元に気をつけて」
「もちろんです。ミーアさ……きゃあっ！」
などと、かしましく準備をして後、ミーアとアンヌは大浴場へとやって来た。
アンヌに手伝ってもらって、ひょひょひょーいっと服を脱ぎ捨ててから、ミーアはサクサクと浴場へ。っと、そこには、先客がいた。
「はて……あれは？」
浴槽を覗き込むようにしている少女、黒く、いささかもっさりした髪をしたその少女は……。
「クロエ、あなたも、これからお風呂ですの？」
声をかけると、少女は、ビックリした顔で振り返り……ずずいっとミーアに顔を寄せて……。
「あ、ミーアさま……」
ようやく気付いたのか、ホッとした顔をする。
「ふふふ、眼鏡かけてないと、ちょっと印象が変わりますわね」
普段は、賢そうに見えるクロエが、ちょっぴりポヤーっとした顔に見えて、ミーアはふふふ、っと笑みを浮かべ……。

「それで、なにをしておりますの？　普通にお風呂、という感じではありませんけど……」
「ええ。実は、新しい入浴剤を試してるんです」
クロエは、小さく笑みを浮かべて言った。
「あら？　そうなんですのね……。でも、それならば、なぜ、そんなにびくびくしているんですの？　あ！　まさか、ラフィーナさまに内緒で……？」
「いえ。一応、ラフィーナさまにも許可を取っているのですが、それを、入ってきた方にいちいち説明するのも、どうなのか、と思ってしまいまして……」
「ああ。なるほど。変に言い訳っぽく聞こえて、お風呂によからぬ悪戯をしようなどという、けしからんやつだと思われてしまいそうですわよね」
かつて……大浴場にキノコを浮かべようとしたけしからん姫は、そうして、肩をすくめるのだった。
「そんなわけで、できるだけ、手早く、こっそりと入れて試してみようと思っていたところなんです」
「なるほど。ちなみに、今回のはどんな入浴剤なんですの？」
ミーアは、早くも、クロエの持つ瓶に興味津々だ。
「これは、少し岩塩を混ぜたもので……」
「ほほう……塩を……それには、なにか意味がありますの？」
「はい。体の疲れが取れる効果がある、という触れ込みで」
「なんと……そうなんですのね。それは楽しみですわ」
などと言いつつ、ちゃちゃっと体と髪を洗うミーアｗｉｔｈアンヌ。
そうして、浴槽に身を沈めたミーアは、おふうっと、いささかアレな声を出す。
「なるほど……。なんだか、こう、じわりと沁みてきますわね。とてもいい感じですわ」
ぐぐいっと体を伸ばしつつ、ミーアは微笑んだ。

「しかし、塩が入浴剤になるなんて、変わってますわね……。うふふ、なんだか、ガレリア海で泳いだ時のことを思い出しますわ」
「ミーアさま、海で泳いだことがあるんですか？　あの、危なくはありませんか？」
「全然ですわ。やってみると、意外と簡単ですわよ？」
下弦の海月は、そう得意げに笑って……。
「まぁ、海のほうがしょっぱくて、目に染みるということはありますけど、それ以外は大したことありませんでしたわね」
それから、ふと、思い出したように小首を傾げた。
「それにしても、不思議ですわ。塩水と、そうでない水とで、生きられる魚の種類が違うだなんて……」
「え……と、どういうことですか？　ミーアさま」
「そのままの意味ですわ。塩を含んだ海水で生きている魚は、湖や川では生きられない。反対に、湖や川で生きている魚は、潮を含んだ海では生きられない」
ミーアは、先ほどオウラニアから聞いたことを、そのままクロエに話した。
「人は平気なのに、水に親しんでいる魚はダメだなんてよくよく考えるととっても不思議。いえ、水に親しんでいるからこそ、なのかしら……」
じんわーり、とお湯で体を温められて、ぽーっとした頭で、どうでもいいことをつぶやくミーア。あまりに、ぼおんやーりとしていたものだから、彼女は気付いていなかった。
そばで、クロエが、実に真剣な顔をしていることに……。
気付かずに……ミーアの思考は、さらにしょうもないほうへと向かって行く。
――不思議と言えば、なぜ、わたくしは、お湯に浸かっていても、鍋料理になったりしないのか……。お野菜と一緒に入っていないからかしら？　もしかすると、お野菜やキノコと一緒にお風呂に入れば、わたくしも鍋料理になってしまうのかしら……？　おお、これ

は、なかなか、哲学的な問いですわね……。
なぁんて、もっのすっごーく！　どうでもいいことを考えるミーアのかたわらで……。
「塩水では生きられない魚……。環境の変化で生きていられる魚と、死んでしまう魚がいる。確かに、不思議……」
クロエは、なにやら、考え込むようにして、唸り声を上げる。
「不思議と言えば、先ほどノエリージュ湖では、とっても大きな魚を見かけましたけど、あれだけ大きくなるのに、どのぐらいの時間がかかるのかしら……？　思えば、魚について、わたくし、まったくなにも知りませんでしたわ」
ううん、っと体を伸ばしつつ、ミーアは思う。
――あの大きさであれば、なかなか食べがいがありそうですし……。鍋料理にしても、焼き魚にしても、おいしそうでしたわね。うふふ、考えていたらお腹が空いてきましたわ。
湯船にもたれかかり、ポヤーっとするミーア。クロエは、それを真剣なまなざしで見つめていた。

第二十一話　夜の図書室へ

実は、聖女ラフィーナは……暇ではない。
最近はすっかりお友だちと遊んでる（遊びたがってる）イメージが定着しつつある彼女であるが、公人としての職務は少なくはないのだ。ガワだけ聖女ではない。きちんと仕事もしているのだ。
生徒会での会合が終わった後、彼女は、モニカを中心とした従者たちからの報告を聞き、セントノエル島内に異常がないことを確認。それから夕食を取った後、身を清めてから聖堂へと向かう。
そうして、聖女として、今日一日、学園が守られたことへの感謝と、生徒たち一人ひとりへの祝福を祈るのだ。
蝋燭の仄かな明かりに照らし出されるのは、膝を付き、手を組む、清らかな乙女の姿だ。
瞳を閉じ、微かに動く唇からは、祈りの言葉が囁きとなって響く。
「……明日もミーアさんと楽しく過ごせますように。あと、できれば虫の研究は避けられれば嬉しいのですけど、すべてはあなたの御心のままにお進めください。ただ……できれば、虫だけは何とか避けられれば……できるだけ気持ち悪くないのであれば、なんとか……」
……若干、個人的な祈りを最後に口にして、ラフィーナは、ふぅっと息を吐いた。
これは、以前、馬龍から受けた助言の影響だった。
人として――喜び、楽しみ、悲しみ、怒り……。感情を持つ人として、人々を教え導く聖女となること……。そのために、必要なことは何か……？
それは、隠すことなく、素直に、人としての葛藤を神の前にさらけ出すこと。
そして時には、それを友の前でも隠さないこと……。

孤高の聖女として、ただ一人、感情を胸に秘めるのではなく……きちんと話し、相談すること……。
それこそが、彼女が悩み、辿り着いた答えだった。
だから、ラフィーナは、公の聖女として祈りをささげた後、自分個人の感情のことも、ちょっぴり祈るようにしたのだ。若干、個人的に過ぎるというか、俗物っぽいかな？　と思うようなことも、隠さず祈るようにしたのだ。
「よし……」
そうして、すべての公務を終え、ラフィーナは聖堂を後にする。
入口のところで控えていたモニカと合流して、女子寮の部屋へと向かって歩き出そうとしたところで……。
「あら……？」
廊下の向こうから歩いてくる少女を見つける。
それは、つい先ほど、生徒会の会議で顔を合わせたばかりの人物……。
「クロエさん、こんなところで、なにを？」
「あっ、ラフィーナさま！」
声をかけられて、びくっと体を震わせたクロエだったが、相手の正体に気付いたのか、すぐに、ふぅっと安堵の息を吐く。そして、
「あの、これから、図書室を開けることって、できないでしょうか？」
思わぬことを言ってきた。
「図書室……？　もう、閉館時間は過ぎているけど、なにか急ぎの用事かしら？」
基本的に、クロエは常識をよくわきまえた人物だと、ラフィーナは見ている。その彼女が、わざわざ、夜の、閉館時間が過ぎた後の図書室に入りたいと言う。
これは、なにか理由があるのかな……？　などと考えていると……。
「はい。実は、先ほどミーアさまとお風呂でお話ししたんですけど

……」
思わぬ言葉に、ラフィーナは……瞳を見開いた。
「え……？　ミーアさんと、お風呂会？　私、誘われてない……」
「え……？」
クロエは、きょとりん、っと小首を傾げる。それで、ラフィーナ、自らの失言に気付き……慌てる！
「あ、ええと、そうではなくって……」
っと、あわわ、っと口を開けるラフィーナに、クロエは、パンッと手を叩いて、
「あ、申し訳ありません。ラフィーナさまも、やっぱり入浴剤の効果、確かめたかったですよね」
「え？　あ、ええ。そうね。うん、その通りだわ」
生真面目な、実に、しかつめらしい顔で頷き……。
「生徒が使う大浴場のお湯に興味を抱くのは、当然のことです」
聖女の顔で、涼やかな笑みを浮かべて……すぐに、
「それで、図書館には、なんの御用なのかしら？」
すぐに、話を変えにいく。
「あ、そうでした。わけは、後で話しますから、とりあえず、開けてください。ミーアさまのお役に立てるかもしれないことなんです」
そう言われては、ラフィーナとしても了承しないわけにはいかない。
ミーアの為すことは、ほとんどが民のためになることである。そのミーアの役に立つことというのであれば、反対すべき理由はどこにもないのだ。
すっとモニカのほうに視線を向ければ、モニカは一礼し、その場を去る。
「では、図書室のほうに向かいましょうか」
図書室に着くと、すでに、鍵は開いていた。入口のところでは、モニカが涼しい顔でたたずんでいる。さすがは敏腕メイドである。

そうして、図書室の中に入ったところで、クロエはゆっくりと語りだした。
「もしかしたら……ミーアさまは、共同研究の内容について、腹案があるのかもしれません」
唐突な言葉に、ラフィーナは思わず瞳を瞬かせる。
「お風呂で、ミーアさま、言っておられました。海水でのみ生きられる魚のこと、逆に普通の水でも生きられる魚のこと。その成長の速さのことも……。だから、飢饉への、新しい研究の内容……。もしかしたら、なんですけど……魚のことをお考えなのではないでしょうか？」
「魚……？」
思わぬ題材にラフィーナは顎に手を当てる。
確かに、魚であれば、作物の不作とは関係なく獲れるだろう。効率的に大量の魚を獲る方法ができれば、飢饉の対策にはなるかもしれない。
加えて、今までに食べていなかったような魚も研究し、食材にできれば、食料の全体量も増える。なかなか、悪くない着眼点に思えた。
それよりなにより、素晴らしいのは……。
――虫や内臓の生肉料理より、食べやすそう。さすがだわ、ミーアさん。
これである……。
もしも、ミーアが、この大きい虫、てかてかして、とってもジューシーで……などと言い出したら、どうしようかと思っていたラフィーナである。
笑顔でソレを勧められた時、果たして、自分はどうなってしまうのか……、なぁんて、真剣に悩んでいたラフィーナであったから、これは、朗報と言えた。
「そのための、知識を集めておこうと思って……居ても立ってもいられなかったんです。これが読みたくって……」

ある本棚の前で立ち止まり、クロエが取り出した本……それはっ！
『秘境の珍味レシピⅦ　～怪魚！　人面魚を美味しく食べる！～』
だった！
「クロエさん……ちょっと……」
ちょっぴり引きつった笑みを浮かべるラフィーナであった。

第二十二話　柔らかなる海月（かんしょうざい）ミーア

ノエリージュ湖にて、オウラニアを見つけた三日後のこと。
満を持してミーアは、生徒会を招集した。
副会長ラフィーナ、シオンを筆頭に、アベル、クロエ、ティオーナ、ラーニャと、主だった面々とその従者たちが入ってくる。
彼らの顔を眺めながら、ミーアはこれからの話の流れを整理する。
すべては、オウラニアを懐柔するためのイベント『釣り大会』を開催するために、である。
――まぁ、生徒会が『する』と言えば、否応なくできるわけですけど……。問題は、生徒会がそれをすると言い出しても、無理なく受け入れてもらえるような理屈をつけることですわ。
生徒会長ミーアになってから、生徒会が少し横暴になった気がする……などと言われてはたまらない。
「そのためには、生徒会のみなさんにも、意思を共有しておく必要がございますわね」
ということで、ミーアは釣り大会のメリットをプレゼンする必要を覚えていた。
本当ならば、オウラニアがお茶会の誘いを断ってくるから、釣り大会で誘い出したいですわ！　などと、素直に言ってしまいたいミーアであったが……今回はとある理由から、特別な配慮が必要だった。
ゆえに、とりあえず、訴えるべきは、釣り大会を開くメリットである。
そうして、生徒会室に集まったメンバーを眺めてから、ミーアは朗らかな笑みを浮かべて言った。
「秋ですわねぇ」
っと。なにげない風を装って話し出す。

「そうですね。森が綺麗に色づいてきました」
反応したのはティオーナだった。爽やかな笑みを浮かべつつ、会話に入ってくる。
ミーアはそれに、一つ頷いて……。
「昨年は、ゴタゴタしていてなにもできませんでしたけど、一昨年は乗馬大会にキノコ狩りツアーと、いろいろしましたし、今年もそうしたイベントごとを開いたらいいんじゃないかと思っておりますの」
キノコ狩り……のくだりで、ピクッと、キースウッドが反応していたようだったが……声を上げたのはその主であるシオンだった。
「なるほど。いいんじゃないか？　特別初等部の子どもたちのためにも、イベントを企画してやることには意味があるだろう」
「ええ。ということで、今回はわたくしに、腹案がございますの」
ミーアは、もったいつけるように、全員の顔を見まわした。
なぜだか、笑顔のまま固まっているキースウッドを尻目に、厳かな口調でミーアは言った。
「釣り大会を開くのはどうかしら？」
それを聞いた瞬間、キースウッドが拍子抜けしたような顔をした。けれど、すぐに真剣な顔になって、ぶつぶつ、なにかつぶやいているようだった。
「最悪の事態は免れたと思うべきか……。いや、だが、ミーア姫殿下が相手だから、まだ油断は……」
などと……。
一方で、他の面々は、一様に、意外さを顔に覗かせている。
「いきなり釣りだなんて、いったい、どうしたんだい？　ミーア」
代表して質問したのはアベルだった。
ミーアは一つ頷いて、
「実は過日、ノエリージュ湖の湖畔で、子どもたちと出会いましたの。ちょうど、湖に住む生き物を実地で見させているところだったのですけど。その勉強の一環として、特別初等部の子どもたちに、

魚と親しんでもらうようなイベントを開くことには意味があると考えましたの。パティやベルにも、この世界のことに関心を持ってもらえれば嬉しいですし……」
容赦なく、子どもたちを出汁に使うミーアである。
「それに、夏休み前にできた良い流れ、貴族の子女と特別初等部の子どもたちの交流も深めて行ければと思いますの」
「それはわかるが、しかし、釣りというのはいかにも突然だね」
その言葉に、ミーアは、降参とばかりに手を挙げた。
「そうですわね。実は、今のは、メインの理由ではありませんわ。釣り大会を開きたい一番の理由は、オウラニアさんのことですの」
「オウラニア姫の……？」
意外そうな顔をする面々。その中でも、特に、ミーアが気にするのは、ラフィーナだった。
――さて……ここからが難しいですわよ。
ミーアは、気合を入れるべく、お茶菓子のケーキをパクリ……。うーん、美味しい。
それから、口の中をゆすぐように紅茶をゴクリ……うーん、爽やか。
そうして、そっと瞳を閉じてから、話し出す。
「ガヌドス港湾国への足掛かりとするため、オウラニア姫を懐柔したい、と……。それはよろしいですわね？」
「ああ。そう聞いたね」
答えたアベルに頷いてみせて、それから、ミーアは言った。
「そのきっかけとしての釣り大会ですの。港湾国の姫ならば、魚にも親しみがわくのではないか、と……」
「でも、オウラニアさんと仲良くしたいだけならば、別に釣り大会を開く必要はないのではないかしら？　例えば、お茶会に誘ったり、どこかにピクニックに行ったりとか……」
ラフィーナが不思議そうに、きょとん、と小首を傾げた。
――ああ、やっぱり、そう思いますわよね……。

それは、実に、もっともな話ではあったが、ミーアとしては突かれたくないことでもあった。
なぜか……。それは、オウラニアに対する反感を高め過ぎないためである。
それこそが、ミーアが最初から本音を言えなかった『とある理由』であった。
――オウラニアさんに無視されている……などと言うことを、ラフィーナさまが知ったら、どんなことになるか……？
想像するだけで、恐ろしくなるミーアである。
下手をすると、眠れる獅子が目覚めてしまうかもしれない。
『へぇ、そうなの……。ふーん、ミーアさんのお誘いを無視ねぇ……へぇ……』
などと、こわぁい獅子の目つきでつぶやくラフィーナを想像して、ミーアは震え上がる。
他の友人たち、ラーニャやティオーナたちだって、きっと怒るだろう。
それは、ミーアとしては嬉しいことではある。自分が受けた無礼に対し、友だちが怒ってくれるというのは、それだけ、自分が慕われているということの裏返しだからだ。
しかし……問題は、その反感と怒りが燃え上がり、制御できなくなった時のことだ。
ミーア的に言えば、確かに、オウラニアの態度は腹の立つものではある。が、だからといって、怒りに任せて行動すると、後々で面倒なことが起こりそうな気がするのだ。
そもそも、ミーアがすべきことは、オウラニアを叩きのめすことではなく、味方につけ、協力を引き出すこと。そのためには、できるだけ険悪な状況は作りたくない。
――人間関係にしろ、なんにしろ、一度壊れてしまったものを直すのは容易なことではありませんし……。
幸いにして、ミーアはすでに、無視されるということを経験済み

である。
なんだったら、前の時間軸での無視はもっと酷かった。ラフィーナに「誰だったかしら？」　などと言われた日には泣きたくなったほどだ。
ゆえに、オウラニアの無視程度、ミーアにとっては怒るほどのことではない。怒って、後の禍根を残すほどのことでもないのだ。
――一番心が広いわたくしのところで、オウラニアさんの無礼な態度はとどめておくべきですわね。そのほうが問題は少ないはず。わたくしが飲み込んでしまえばいいだけですし……。アンヌにも、他言無用と言い含めておきましたから、問題はないと思いますけど……。
柔らかなる海月（かんしょうざい）ミーアの、細やかな配慮が冴え渡る。
――それに、なんというか……。あのオウラニアさんの態度は、昔のわたくしを見ているようで、ちょっぴりいたたまれない気がしますし……。
かつて……なにも知らずに横暴な態度をとった結果、痛い目を見た自らを思うミーアである。
同じような感じでオウラニアが孤立するのは、可哀想でもあり……。
ということで、ミーアは、用意しておいた答えを朗らかな顔で披露する。
「もちろん、この学園に慣れてきた後は、お茶会も良いと思いますわ。されど、慣れないセントノエルに来たオウラニア姫のことを思えば、まずは、ガヌドス港湾国の姫に相応しいおもてなし、というのをしてあげる必要があると思いましたの」
完璧な言い訳を披露してから、ミーアはそっと紅茶に口を付けた。すると、
「ああ……そういうことだったのね……」
ラフィーナとクロエは、ちょっぴり拍子抜けした顔をしていた。それに小さく首を傾げつつも、ミーアは続ける。

「ガヌドス港湾国の問題に関しては、この機に一気に問題を解決しておきたいと思っておりますの。申し訳ありませんけれど、ご協力をお願いいたしますわ」

そう言って、ミーアは静かに頭を下げるのだった。

第二十三話　無知の姫、オウラニアは笑う

「はぁ……」
セントノエル学園女子寮の一室に、満足げなため息が響いた。
部屋の住人は、ごく最近、セントノエルに入学してきた少女――他ならぬガヌドス港湾国の王女、オウラニア・ペルラ・ガヌドスだった。
ベッドの上に横になり、ニコニコと満足そうな笑みを浮かべる。
「あー、今日もたくさん釣れた。うふふ、ああ、楽しかった。あれをお料理できないのは、残念だけど、でも、楽しかったわー」
右手を見つめて、それから、うっとりと瞳を閉じて……。
「ノエリージュ湖……。ふふふ、素敵な釣り場だわぁ。海釣りもいいけど湖もなかなかねー。来て良かったかも」
頬に手を当てて、オウラニアは首を傾げた。
「でも、お勉強はやっぱり面倒。んー、うちのお城なら、口うるさいことは言われないのに、本当、面倒だわー」
っと、その時だった。部屋にノックの音が響いた。
「失礼いたします。オウラニア姫殿下。ご報告がございます」
ドアを開け、入ってきた従者に、オウラニアは、ぽーっとぼんやりとした視線を向ける。
「あらぁ？　なにかしら？」
「実は、先ほど、他のメイドから聞いたのですが、近々、生徒会主催の釣り大会が開催されるとのことです。基本的に生徒は全員参加とか……」
「まぁまぁ、釣り大会！　それは、とっても面白そうだわー。うふふ、ミーア姫殿下もなかなか、面白そうなことを思いつくものねー」
能天気に笑うオウラニアに、メイドは、わずかばかり軽蔑した目を向けた。

「ですが、生徒会主導のイベントとなれば……、国王陛下のご命令に逆らうことになりませんか？」
途端にオウラニアは眉間にしわを寄せる。出発前、父に言われた言葉を思い出したのだ。
「あー、うーん。確かに、お父さまからは、ミーア姫と距離を置くように、って言われてるわねー。でもー」
パンッと手を叩いて、オウラニアは言った。
「生徒が全員参加なら、出ないわけにはいかないんじゃないかしらー？　さすがに、そこまで露骨にお断りしたら、嫌われてしまうかもしれないしー」
すでに、かなり露骨にお断りしてるし、なんなら、結構、ミーアにムカつかれているわけなのだが……。オウラニアは、そんなの、まったく気づいていない様子で言った。
「それにー、ミーア姫殿下はともかくとして、下手なことをすると、エメラルダさまにも嫌われてしまうでしょう？　それはまずいのではないかしらー？　グリーンムーン公との関係は、ガヌドスにとってとても大切なんでしょう？」
「それはそうかもしれませんが……」
なにか言いたげな顔をするメイドを無視して、オウラニアは続ける。
「それにねぇ、お父さまは、たぶんなーんにも言わないわー。平気よ、平気、大丈夫」
歌うように楽しげに、なんの心配もないかのように朗らかに言って、それから、オウラニアはガバッとベッドの上で半身を起こす。
「そうでしょうか？」
「そうよー。だって、お父さまは……」
っと、そこで言葉を切って、オウラニアは……、小さく首を振って。
「お父さまは……可愛い娘の私のことが大好きだから。ちょっとぐらいのわがままなら、許してもらえるわよー。大丈夫、大丈夫」

おっとり、フワフワ、なにも考えていないように。
おっとり、フワフワ、オウラニアは笑う。
それは、姫の笑顔。
辛いことも怖いことも、悲しいことも、なにも、彼女の目には映らない。
彼女は姫だから……。ただ、温和な笑みを浮かべて、メイドに目を向ける。
その視線を受けて、メイドは深々と頭を下げる。
「もちろん、その通りです。オウラニア姫殿下は、御父君のご寵愛を一身に受ける方です。大抵のわがままならば、お許しいただけると思うのですが、しかし、今回は……」
「だからぁ、平気だってば―。別にあなたが怒られるわけでもなし。それにー、あのお父さまが怒るところなんか、想像できないでしょー？」
それよりなにより、ノエリージュ湖での魚釣り大会。そんな面白そうなものに参加しないなどという選択肢は彼女にはない。
一人でのんびり釣るのも楽しいが、その技術を他人と競い合わせることもまた一興。
深窓の姫君は、娯楽に飢えていた。
メイドは、小さく首を振ってから、小さくため息。
「まぁ、オウラニア姫殿下がそうおっしゃるなら……」
「そうそう。そうよ？　難しいことを考えてないで、もっと楽しいことを考えましょうよー。あなただって、釣り、好きでしょう？」
「いえ、私はそれほどでも……」
「あらー、そうなの？　まぁ、別にいいけど。準備だけはしっかりとしておいてねー」
「はい、釣り竿と魚籠を用意しておきます」
そうして、一礼して、部屋を出ていくメイドを見ながら……。オウラニアは、小さく首を傾げる。
「ううん、やっぱり軽く見られてるのかしらー。まぁ、どうでもい

いけど」

オウラニア・ペルラ・ガヌドス……。

彼女は無知の姫君だった。

民のことなど知らず、国と国同士の関係にも、さしたる興味はなく……。姫として必要な教養も、あまり身についてはいない。

されど、無知であることと、洞察の鋭さは矛盾しない。

彼女は、自分がメイドからどう見られているのか、しっかりと感じ取っているし、その視線の意味もきちんと理解しているのだ。

そのうえで……。

「そんなことより、釣りだわ。うふふ、とーっても、楽しみ。うふふふ」

メイドの軽蔑も、姫としての振る舞いも、どうでもいいこと。

自分が楽しいことのためだけに生きる……。

オウラニアは、そんな少女だった。

第二十四話　ヴェールガの釣りマニア（アングラー）

釣り大会の準備は始まった。
ミーアの召集によって生徒会室には、いつもの生徒会のメンバーに加え、特別初等部の教師ユリウスや、サンクランド島の警備を担当するサンテリ・バンドラーなど、主だった面々が集められていた。
「ということで、生徒間の親睦を兼ねた釣り大会を開こうと思っておりますの。子どもたちの教育のためにも、良いのではないかと思いまして……」
っと、そこでユリウスのほうに目を向ける。ユリウスはそっと頭を下げて、
「ありがとうございます。ミーア姫殿下。そのように楽しみながら、自然の知識を得ることは、子どもたちにとって財産になるでしょう」
そんなユリウスの承認を得て、ミーアは続ける。
「それで、みなさまにはいろいろとご協力いただくこともあるかと思いますけれど、どうか、よろしくお願いいたしますわね」
なにしろ、初めてのこと。全校生徒でやろうとすれば、釣り竿から餌から、準備はそれなりに必要だ。
さらに、大会と称する以上、いろいろなルールを話し合う必要もあるだろう。
「まぁ、とはいうものの、今回の大会は、あまり順位を競うようなものにしないほうがいいような気がしますわね」
ミーアの言葉に、生徒会の面々は、それぞれ納得の頷きを返した。
「そうだね。趣旨からいっても、魚の大きさを競うような会ではなく、純粋に釣りを楽しむ会としたほうがいいんじゃないかな」
そう言って、優しい笑みを浮かべるのはアベルである。
彼の応援を後押しに、ミーアは言った。
「勝敗を競うものも楽しいですけれど、今回は、みなで釣りをして、

それから、釣ったものを食す。これを大切にいたしましょう」
みんなで思い切り遊び、美味しいものを食べて笑い合う。
ミーアの基本的な外交のやり方である。
――お腹が満ちれば、いろいろ面倒くさくなる。オウラニアさんには、なにかわたくしを避ける理由があるようですけど、それだって、たっぷり食べて眠くなれば、どうでもよくなるに違いありませんわ。
そんな確信を持つミーアである。
「とすると、魚をその場で、食べられるものかどうか判断する熟練者も必要になりますわね。それに、料理はわたくしたちで……」
などと、ミーアが言いかけたところで、すぅっと手を挙げる者がいた。
「あら、キースウッドさん、なにか？」
シオンの従者、キースウッドが主を差し置いて発言するのは珍しいこと。はたして、なにを言うつもりなのか？　と興味津々、ミーアが見つめる先で。キースウッドは小さく一つ咳払い。それから、口を開いた。
「今回は、自分たちで料理するのではなく、しっかりとした料理人を手配するのがよいのではないでしょうか？」
「あら？　でも、みんなで料理するのは、とても楽しいですわよ？」
「……ええ。ええ。それはもちろん、存じ上げております」
キースウッドは一瞬遠い目をして、なにかを噛みしめるように、グッと口をつぐんでから……すぐに小さく首を振り、
「けれど……ミーア姫殿下は、一つ大切なことを忘れているのではないでしょうか？」
「大切なこと……？　はて、なんですの、それは」
キースウッドは、確信に満ちた顔でミーアを見つめる。
「それは、今回の釣り大会の楽しさは“自分が釣った魚を食べることにある”ということです」
「ほう……」

ミーアは腕組みをして、その言葉を吟味する。沈思することしばし、その正しさを見つめて、深々と頷く。
「それで？」
「つまり、自分たちで料理するとなると、どうしても失敗してしまう可能性が高いのではないでしょうか？　取り寄せた材料で料理するならまだしも、自分が釣ってきた魚で失敗するのは……どうでしょうか？」
「なるほど。自分の釣果を台無しにしてしまう可能性があると、そう言いたいのですわね？」
「はい。今回のお料理は失敗できない。そこで、専門の料理人を手配するのがよろしいのではないかと……」
「ふむ、それはなかなかに、説得力がありますわね」
それから、ミーアはラフィーナのほうに目を向ける。っと、ラフィーナは小さく頷いた。
「そうね。セントノエルの料理人たちと、他にも手配が必要かしら……？」
ミーアは、それから、キースウッドのほうに目を向けた。
「ありがとう。キースウッドさん。そこまでは思いが至りませんでしたわ。助かりましたわ」
「いえ、お役に立てたのであればなによりです」
満足げに目をつむるキースウッド。その……握りしめられた拳が、まるで歓喜に震えるように、微妙にぷるぷるしているのを見て、はて？　と首を傾げるミーアだったが……。
その時だった。そこで、声を上げる者がいた。
「……そもそも、釣りというのは、いささか危険なのではないでしょうか？」
むっつりと、険しい顔をするのは、セントノエル島の警備を担う男、サンテリ・バンドラーだった。
「万に一つでも、湖に落ちれば大変なことになります。生徒の中には泳げない者もおりましょう」

その指摘に、ミーアは思わず眉根を寄せた。それは、実に筋の通った指摘だったからだ。
「確かに、サンテリさんの言うことも一理ありますわね。貴族の子弟で泳げるなどと言う者は稀有ですわ」
さて、どうしたものかしら……？　とミーアは首を傾げる。
――生徒会と特別初等部の子どもたち、という限られた人員であれば、なんとかいけそうですけど。しかし、そこにオウラニアさんをお誘いするのは……。下手をするとお断りされてしまうかもしれませんし。
だからこそ、全校生徒のイベントにしたわけで……。などと、ミーアが真剣に悩みだそうとした、その時だった。
「やれやれ、仕方ありませんな……」
小さく肩をすくめ……サンテリは言った。
「ここは、わたくし、このサンテリ・バンドラーが……長年の経験を生かして、安全かつ、素人のみなさまでもある程度は釣れるような、釣り場をご紹介いたしましょう」
ものすごく……ものすごぅく！　得意げな顔で言った！
そうなのだ……。
騎馬王国ならぬ、ティアムーン帝国にウマニアがいたように……。
ガヌドス港湾国ならぬセントノエルにもまた、いたのだ。
海沿いの国の民に決して負けない釣りマニア……。サンテリ・アングラー……もとい、サンテリ・バンドラーが……。

第二十五話　水面に映る月のごとき……

「安全な釣り場となりますと、岩場は避けたほうがよろしいでしょうね」
「なるほど、確かに、あそこは滑りやすいですしね」
「とすると、釣り場として考えられるのは……」
サンテリ・バンドラーを筆頭に、釣りマニアの職員たちが生徒会室に集う。やおら賑やかになった室内には、熱い……あつぅい！熱気が渦を巻いた。
「釣りのスポットは良いとして、餌を針につけるのは、貴族のご令嬢には厳しいのでは？」
「そうですな。釣り上げた魚を外すのもなかなか難しいでしょうし。同志諸君（つりマニア）を何人か手配して、各所に配する必要があるのではないかと……」
などと……。自らの思い付きが細部まで具体化されていくのを見て、ミーアは満足げに頷いた。
――ふむ、やはりこの辺りのことは専門家に任せるのが早いみたいですわね。釣りに詳しい方がいて良かったですわ。ここは、任せてしまっても大丈夫かしら？
ミーアは、そっとラフィーナに視線を送る。っと、ラフィーナが頷くのを見て、ミーアは部屋を後にした。
本来の目的、すなわち、オウラニア姫を懐柔するために動き出したのだ。
――釣り大会を開いたはいいけれど、オウラニアさんが参加しない、とか、ゴネ始めたら大変ですし。きちんと外堀を埋めておく必要がありますわ。
そうして、オウラニアの部屋に向かおうとしたところで……ミーアは廊下を歩いてくる二人の子どもたちの姿を見つけた。それは、

ヤナとパティだった。
「あっ、ミーアさま」
先にヤナのほうが気付いて、小走りに近づいてきた。
「こんにちは、ミーアさま」
ミーアの前で、ちょこん、と頭を下げるヤナに、ミーアは優しい笑みを浮かべた。
「ああ。ヤナ。うふふ、すっかり元気になったみたいですわね」
そうして頭を撫でてやると、ヤナは恥ずかしそうにはにかんだ。
「あの、この前はありがとうございました」
「いいえ。いつものあなたに戻ってなによりですわ。それで、あれ以降、オウラニアさんになにか言われたりとか、そういうことはあったかしら？」
オウラニアを訪ねる前に、なにか弱味が握れないか……っと、情報収集に勤しむミーアである。が、ヤナは小さく首を振り、それから、前髪を軽くいじった。
「オウラニア姫殿下には、見られないように前髪で隠してます。キリルも、バンダナを巻かせました」
「ああ。なるほど、不必要なトラブルを避けるための配慮ですわね……」
ガヌドス港湾国において、差別されるヴァイサリアン。その証たる額の刺青だが、隠そうと思えば、隠せないこともない。ないのだが……。
「でも……いいのかしら？　それで、あなたは……」
「別に、気にしてません。あたしも、この刺青、あんまり好きじゃないから」
そうは言うものの、ヤナの言葉は微妙に歯切れが悪かった。
――ふむ、きっと、あの刺青にもいろいろと思い入れがあるのでしょうね。ご両親の思い出とか……。
だが……、とミーアは同時に思う。もしも、ヤナがそれでいいというのなら、こちらから何かを言う必要はないのかもしれない。確

かに無用のトラブルを避けられるならば、それでもいいのかもしれないし……。
「ミーアさま？」
ふと見れば、ヤナが不思議そうな顔で見つめていた。
「ああ、いえ、なんでもありませんわ。ところで、あなたは港湾国の出身でしたわね？　と言うことは、もしかして、釣りもお上手なのかしら？」
貴族の子女たちは、根本的に釣りなどしたことがない者たちがほとんどだ。
ミーア自身も、知識として持っている程度で、実際にやったことはない。餌を自分でつけられるか、あまり自信はないわけで……。
それゆえ、全校生徒でやるとなれば、釣りに詳しい者を随所に配する必要があるだろう。場合によってはグループを作り、その中に一人教官をつけるような形になるかもしれない。
――まぁ、詳しいことは、釣りマニアたちが詰めて考えてくれているでしょうけれど……。
もしも、ヤナが釣りに詳しいのであれば、ユリウスとヤナに特別初等部を教導してもらえるかも、と期待したミーアであったが……。ヤナは申し訳なさそうに首を振った。
「いえ……あたしは、その……釣りとかしたことなくって……」
「あら、そうなんですのね……。それは意外ですわ」
騎馬王国の民が、全員、熟練の騎手であるように、ガヌドスの国民は全員が釣りマニアだと思い込んでいたミーアであったが、そうでもないらしい。
ミーアの反応を見て、ヤナは、途端に表情を曇らせる。
「申し訳ありません。ミーアさま。海洋民族のヴァイサリアンなのに、あたし、そういうの全然詳しくなくって……。それに、全然、泳げなくって……」
しょんぼりと肩を落とすヤナに、ミーアは静かに首を振る。
「あら、謝る必要などどこにもございませんわ」

これでは、まるで自分がいじめたみたいなので、ミーアはきっちり言っておくことにする。パティの手前、危険の芽は手っ取り早く摘んでおかねば、教育上よろしくない。
「今のは、ただ聞いただけのこと。なにができるとか、できないとか、そんなことであなたの評価はかわりませんわ。それに、あなたはまだ子ども。これから、いろいろなことを身に着けていける立場なのですから……」
それから、ふと思いついたように、ミーアは笑った。
「ふふふ、そうですわね。それでは、今度、わたくしが泳ぎ方を教えてあげますわ」
「え？　ミーアお姉さま、泳げるの？」
目をまん丸くするパティに、ミーアはちょっぴり得意げな顔で、
「ふふふ、造作もないことですわ。水面に映る月のごとく美しき泳ぎ、などと言われたものですわ。ねぇ、アンヌ」
っと、自らの後ろを振り向けば、
「はい。ミーアさまの泳ぎは、とても素晴らしいものでした」
忠臣、アンヌは大きく頷く。アンヌの頭の中で、若干の記憶の改竄が行われているような気がしないではないが……。人は、自分に都合よく記憶を書き換えてしまうものなのだ。
ともあれ、水面に浮かぶ海月のごとき泳ぎの体得者、ミーアは微笑みながら言った。
「まぁ、でも、もう泳ぐには寒い時期になっておりますし、今回は水泳ではなく、釣りですわ。特別初等部のみなさんも、楽しんでもらえればよろしいのですけど……」

第二十六話　ミーア姫、耳より情報をゲットする

ヤナとパティと別れたミーアは、女子寮のオウラニアの部屋を目指した。

「オウラニアさん、いらっしゃるかしら……？　また釣りに行っていたりしなければいいのですけど……。あっ！」

っと、ちょうどタイミングよく、オウラニアの部屋のドアが開く。中から現れたオウラニアは、ミーアのほうを見ると、小首を傾げてみせた。

「あらぁ、ミーア姫殿下……。なにかありましたかー？」

おっとりとした口調で言う彼女に、ミーアは小さく頷いてみせて。

「ええ、実は、あなたに少しお話があるのですけど、よろしいかしら？」

「あー、えーと、お茶会でしたら、またの機会にー」

などと、そそくさと逃げ出そうとするオウラニアだったが……、ミーアは目ざとく、彼女の手元に視線を送る。オウラニアは……なんと、釣り竿と魚籠をもっていた！

まさに、これから、釣りに行くところだったのだ！

――ほほう、これは、想像以上の釣りマニア……。やはり、わたくしの狙いは当たったようですわね。

静かな確信を胸に、ミーアは厳かな口調で言った。

「いいえ、お茶会ではありませんわ。釣りについてのことなのですけど……」

ミーアの言葉を聞いた瞬間、オウラニアは、ピクンッと立ち止まる。

「釣りについて……ですかー？」

ゆるーりと振り返るオウラニアに、ミーアは深々と頷いた。

「ええ。釣りですわ」

「それはそのー、お魚を針と糸で釣り上げる、あの？」
「ええ……。というか、それ以外の釣りというものは、寡聞にして存じ上げませんけれど……」
ミーアは穏やかに笑みを浮かべて。
「それに、魚の詳しい話についてもお聞きしたいですわ。ご存知かしら？　生徒会主催で釣り大会を開こうとしている、と……」
「あー。ええ、まぁ、そのー」
などと言いつつ、オウラニアが体をこちらに向けた。それを見て、ミーアはニンマーリと笑みを浮かべる。
――ふふふ、食いついてきましたわね？
ミーアは澄まし顔で、オウラニアの手元を見た。
「ちょうど、釣りに行く途中だったようですわね。ならば、あなたのおススメの釣り場に向かいながら、少しお話しいたしましょうか。釣りのお話を……」
こう言われてしまえば、もうオウラニアに逃げ場はない。
今から部屋に戻るわけにもいかないし、急いでどこかに向かっているから、と断ろうにも、一緒に行くと言われてしまえば、断れない。
逃げ場はすべて潰している。
追い込み漁のごとき巧みさで、ミーアはオウラニアを捕まえる。
「さ、では、参りましょうか」

オウラニアは女子寮を出て、学園の裏手に回った。そこから伸びる細い道を、ずんずん進んでいく。
――あら、この道は、確か以前、アベルと通りましたわね。あの、秘密の砂浜に降りる道ですわ。
そう気付いた瞬間、ミーアは、シュシュっと足元を確認。馬の落し物は……ない！
「ええとー、それで、その、お話しってなんなんでしょうか？」
「へ？　あ、ああ。ええ。実は、みんなで釣りをした後で、釣り上

げた魚をその場で料理して食べようと思っておりますの」
そう言って、チラリと目を向ければ……。
「なるほどー！　それはとーっても、良い趣向ですねぇ」
目をキラッキラ輝かせるオウラニアの顔が見えた。
「自分で釣ったお魚をその場で食べるのって、とっても美味しいし、楽しいんですよねー」
そうして、彼女は上機嫌に笑う。
――ふふふ、ですわよね。美味しいお魚を釣った以上、食べたくなるのが人情と言うもの。森で採ってきたキノコは、すぐにお料理して食べたくなるものですもの。同じですわ。
正直なところ「甘い物がそれほど好きではなくってー」などと言われた時には、この想像の埒外の存在をどのように扱ったものか……っと、頭を抱えたミーアであったが……。
オウラニアは、今、この瞬間に、ミーアの理解の範疇に入ってきた。
そうなのだ、彼女は得体の知れない不気味な人ではない。ただの、魚介類好きなお姫さまに過ぎなかったのだ！
やがて、頭上を覆っていた木がなくなると、視界が開ける。
空から降り注ぐ柔らかな日光に照らされて、白い砂浜が輝いて見えた。
オウラニアは、意気揚々と砂浜に降りると、波打際まで行き、湖の中を覗き込んだ。
「私はお魚も好きですけどー、貝なんかも大好きですよー。ノエリージュ湖にも貝がいるって聞きましたけど、この辺りにはいませんねー」
靴のまま、水をぱしゃり、と蹴り上げて、オウラニアは笑った。
「ああ、貝類も、こりこりしてて美味しいですわよね」
などと返事をするミーアであったが、実は、貝類については、そこまで思い入れはない。のだが……。
「貝の中に、海のキノコって呼ばれてる貝がいて、それがすごーく、

美味しかったんですよー」
「ほう……海のキノコ……？　そんな変わった貝がいるんですのね」
ミーア、思わず唸り声を上げる。俄然、ミーアのテンションも上がってくる。が、ミーア、いったん、その耳寄り情報を脇に置き……。
「まぁ、それはともかく……。お魚の中には、食べられる魚と食べられない魚とおりますでしょう？　その見分けをどうやろうかと思ってまして……。それで、あなたのお知恵を借りたく……」
「わかりましたー。それは、ぜひ、協力させてください」
やや、食い気味に返事をするオウラニアに、ミーアは勝利を確信する。
「ありがとう、助かりますわ。オウラニアさん」
「うふふ、それにしてもー、ミーア姫殿下が、こんなに楽しい方だとは思っていませんでした」
「あら？　そうなんですの？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、オウラニアは言った。
「楽しい人って、私、大好きですよー。やっぱり、人生、美味しいものをたくさん食べて、たっぷり遊んで、楽しく生きないとダメですよねー」
そうして、オウラニアは朗らかに笑うのだった。

第二十七話　目指す剣に向かって

さて、ところ変わってセントノエル学園の剣術鍛練場。
そこに、二人の王子の姿があった。
「しかし、釣りとはね……。相変わらず、ミーアの思考はこちらの想像を上回ってくるな」
鍛練用の剣を手に取りながら、シオン・ソール・サンクランドは楽しげにつぶやいた。
「オウラニア姫を懐柔するためと言っていたが……あれは、おそらく、それ以外にも意図があるのだろうな」
その言葉に、アベルは頷いた。
「そうだろうね。ミーアの為すことは大抵がそうだ。表面に見えていることは、あくまでも全体の一部のみ。その裏には、幾重にも考えが張り巡らされているんだ。帝国でルードヴィッヒ殿やディオン殿、それに近衛兵らと話す機会があったが……いろいろと聞くことができた。ミーアの、あの行動力と発想の自由さには、驚かされるよ」
答えつつ、アベルは剣と、そばに置いてあった丸い盾を手に取る。
「シューベルト侯爵邸での料理会の後の話か。旧クラウジウス侯爵邸を訪ねたと聞いたが……まぁ、どんなことがあったのか気になると言えば、気になるが……今はそれよりもっと気になることがあるな」
そうして、シオンはアベルに目を向ける。
「しかし、驚いたよ。君が盾とはね……」
微かに眉をひそめて、シオンが言った。
「先制攻撃により相手を圧倒するのが、君の剣の真骨頂だと思っていたが……」
レムノ流剣術、第一の構え。上段からの振り下ろしこそがアベル・

レムノの最大の武器だと、シオンは指摘する。
「それは、君自身もわかっていると思ったが……」
「ああ、もちろんだ。それに、そちらのほうが性に合っているしね。一太刀に全身全霊をかける、そんなやり方のほうがね……だけど」
アベルは、苦笑いを浮かべながら、続ける。
「これから、ボクが果たすべき役割はなにか、と考えたんだ。敵陣に斬り込む剣は、華麗で魅力的ではあるが……それ以上に、ボクはミーアを守り、支えたいと思った。ボクが目指すのは、そういう剣なんだ」
闇雲に突っ込み、できるだけ多くの敵を斃す剣ではない。最後まで彼女を守り、彼女と共に歩む剣、それこそがアベルの目指すべき剣だった。
「なるほど。それが、君が出した答えだというのなら、是非もない」
言って、シオンは剣を構える。普段の下段構えではなく、中段。相手に突き付けるようにして、刃を立てて。
「友として協力させてもらうよ」
そう言ってから、シオンはニヤリ、と口元に笑みを浮かべた。
今日のこの場は、アベルのほうから願い出たものだった。
今度、帝国に行った時、ディオン・アライアに剣の稽古をつけてもらう約束を取り付けてあったのだが……。
――さすがに、なんの鍛練もしていない盾の稽古をお願いするのは失礼にあたる。
ということで、シオンに付き合ってもらうことにしたのだが……。
「さて、どんなものかな……」
小さくつぶやきながら、アベルは構える。
盾を持つ左手を前に突き出し、右手の剣を肩に担ぐ。
相手の一撃を盾で止め、剣を制したうえで、上から斬り伏せるための構え。それを見たシオンが、ふと表情を緩める。
「実を言うと、少しばかり憧れがあったんだ。アベル……」
「え？」

「後先考えない攻めの剣。徹底した攻撃の剣というものに、な」
鋭い踏み込み、同時に剣の振り下ろし。剣の先端が加速し、かすむ！
なんとか、上げた盾で受け止めるも、重たい衝撃に、アベルは呻く。
――以前より、さらに重くなっていないか？　あるいは、これが、剣の天才が攻撃のみに集中した時の威力か？
体を反転させ、すり抜けるようにして、シオンの背中側へ。シオンもそのまま前に進むことで、互いに位置を入れ替える。
振り返ったシオンが、静かに剣を構え直すのが見えた。そのままの体勢で、彼は瞳を細める。
「盾を持つと、わずかだが油断が見えるな。確かに防げる攻撃は増えるかもしれないが、集中力が分断されれば、防げるものも防げなくなるぞ」
「痛いところをついてくるな」
言いつつ、アベルは右肘を上げる。盾の位置は変えないまま、盾に添えるようにして刃を上げて、突きの構えを取る。
――シオンの剣を封じるのは難しい。受け流し、最小限の動作で反撃を狙うか。
「行くぞ」
言うが早いか、シオンが向かってくる。
先ほどのように振り下ろしか、それとも横から来るか？　敵の動きに即応できるよう盾に意識を集中させるが、次の瞬間っ！
ドツっと不意打ちのように盾に衝撃が走った。
「ぐっ……」
盾の、ちょうどど真ん中に、重たい突きが決まっていた。
「こちらの突きを警戒していないのは、油断が過ぎるというものだ」
天才、シオンの放つ突き。その速さ、威力は、アベルの予想をはるかに超える。盾を通じて走った衝撃に、アベルの口から息が漏れる。

「盾を通して相手に打撃を与える術もないわけじゃない。しっかりと衝撃を殺さないと、骨をやられるぞ」
「なるほど。覚えておくよ」
三度、構え直す。
次こそ、敵の攻撃を受け切って、反撃する。
そう気合を入れるアベルを、まるであざ笑うかのように、シオンが向かってくる。
最初と同じように大きく剣を振りかぶり……。それを受け流すべく、アベルが盾を上げたところで……シオンが消える！
「なっ！」
「当然、盾をくぐって、直接、体を狙うという戦術もあり得る」
体勢を低くして、シオンが剣を構えていた。
「ぐっ」
苦し紛れに右手の剣で受け止めにかかるが……。
「片手で受け止められるほど、軽い斬撃ではないぞ」
下から上へ。一閃、シオンの剣が軌跡を描く。
ガツン、と激しい音を立て、手の中の剣が飛ばされるも、アベルはそこで止まらなかった。
左腕の盾を思い切り、シオンに向けて叩きつける。
それを肩で受けながらも、シオンは後退。感心したように笑った。
「なるほど、それは利点だな。剣が飛ばされても、盾で戦うか……。レムノ王国の剛鉄槍の姿を思い出すよ」
「そう言ってもらえるとありがたいが、あれほどの剛の者と比較されるのは、面はゆいな」
アベルは苦笑いしつつ、剣を拾い上げた。
そうして、打ち合うこと一刻ほど。
結局、アベルは、その日、一本もシオンに打ち込むことはできなかった。
「確かに、盾には利点はあるが、難しさもあるみたいだな。盾と剣、

両方に意識を割かなければならない分、器用さが求められるな。先は長いんじゃないか？」
そう評するシオンに、アベルは肩をすくめてみせた。
「別に構わないさ。難しいことをしようとしていることは、わかっているからね」
それから、彼は朗らかに笑う。
「ようやく、ボクは、レムノ流第一の構えから一歩進めるんだ。のんびり、着実に進んでいくだけだ」
「……なるほど。覚悟の上ということか……。それならば、俺は、友として、その歩みが少しでも速くなるように協力するとしようか」
そう軽口を叩くシオンに、冗談めかした口調で、アベルは言った。
「おや、いいのかい？　手伝ってもらったからといって、次の剣術大会で手を抜いたりはできないが……」
「ははは、言うじゃないか。アベル・レムノ。そういう大口は、せめて、俺の攻撃を捌けるようになってからにしてもらおうか」
かくて、王子二人による剣術鍛練は続くのだった。

ちなみに、二人の鍛練を、たまたま見かけたベルが、
「ほわぁ……天秤王シオンとアベルお祖父さまの戦い、再びだぁ」
なぁんて、物陰で歓声を上げていたり、いなかったりしたが……。
まぁ、それはどうでもいいことなのであった。

第二十八話　第一回　大釣り大会……第一回？

『……どうして、こんなことに……？　なぜ、誰もわたくしに、言ってくれなかったんですの？』

耳の奥、聞こえた声。それは、前の時間軸、セントノエルで一人ぼっちになっていた頃の、自分の声で……。

釣り大会当日の朝……。ミーアは、珍しく朝早くからパッチリ目を開けていた。

「ふぅむ……やはり、オウラニアさんには、しっかりと教えて差し上げなければならないかしら……」

ベッドの上、寝転がったまま腕組みして、ミーアはつぶやく。

「言ってわかるものでもありませんけれど、言って聞かぬはあちらの罪。言わずにおくのは、わたくしの罪でしょうし……。下手をしたら、オウラニアさんにお尻を蹴っ飛ばされてしまいますわね……よし！」

気合の声を一つ上げ、それから、ミーアは起き上がった。

着替えを終えたミーアは、朝食をのんびり楽しんだ後、部屋に戻ってベルを起こし。それから、アンヌを伴って釣り大会の会場を訪れた。

晴れ渡る青空からは、さんさんと、豊かな日の光が降り注ぐ。まるで、夏がぶり返したような、暑い日だった。

否、冷夏であった今年の夏には、これほど暑い日はなかったのではないか、というぐらいに、素晴らしい快晴の日だった。

「晴れましたわねぇ……。少し暑すぎるぐらいですわ」

「そうですね。ミーアさま。どうぞ、これを……」

そう言って、アンヌが差し出してきたのは、真新しい帽子だった。

「ありがとう。アンヌ。あなたも気をつけて。とっても暑いですから」
帽子を被りながら、ミーアは、釣り大会の会場である港に目をやり……。
「はて……奇妙ですわね……」
小さくつぶやいた。
ミーア発案の釣り大会の準備は、サンテリを始めとした釣りマニアたちの手により、順調に進められていった。実に順調だった。それはそう、言ってしまえば、雪山の上から、雪の玉を転がし落とすような……そんな感じで。
コロコロ、コロコロ、転がり始めた雪玉は、周りの雪をくっつけて……大変、大きな、大きな雪玉になっていき……。そして。
「実に、奇妙なことですわ。この、盛り上がりはいったい……」
港には、たくさんの露店が並んでいた。
そこから感じられるのは、いつぞやの剣術大会や馬術大会を上回る熱気！　大変な熱気である！
「……なんだか、こう……思ったより遥かに大変なことになっているような……」
ミーアのイメージとしては、もっとこじんまりというか……、もう少し内輪の集まりのつもりだったのだが……。
「ちょっとした学校行事ぐらいのつもりでしたのに、なぜ、こんなに盛り上がっているのかしら？」
ふと、視線を向けた先には、
『第一回　セントノエル学園、大釣り大会』
などという、巨大な横断幕が揺れていた。
「第一回……」
ミーア、それを見て、思わず、クラァッとする。
――第一回ということは、二回目以降も行うことが前提となっている、ということかしら……？　そんなつもりは、まるでないのですけど……。

これは、なかなか面倒なことになってきたぞぅ、とミーアは頭を抱える。
そもそも、声をかけた釣りマニアたちが、まずかったのだ。
騎馬王国で乗馬大会を開く、などと口にすると、トンデモないことになってしまうように……。ノエリージュ湖近辺で、あるいは、ガヌドス港湾国の関係者の前で、釣りの大会を開く、などと言ったら大変なことになるのだな、ということを、ミーアは遅まきながらに気が付いた。
「こちらでは、釣った魚の大きさを競うコンテストを開いています。証拠として魚拓を取った後は、こちらで調理して食べられまーす」
なぁんて、元気のいい声が聞こえた。
「あれは……魚の大きさコンテスト……？」
その男の隣では、同じように、学園の職員が声を上げている。
「ノエリージュ湖には、たくさんの種類のお魚がいます。そのレア度で、順位を……」
「あちらは、レア度……っていうか、あそこに貼ってある魚リストは、オウラニアさんにまとめていただいたものでは……？」
さらにさらにさらに！　そのすぐ隣には……。
「さぁさぁ、ノエリージュ湖の主を釣り上げた者には賞品として、ラフィーナさまの肖像画を進呈……おや？　ラフィーナさま、視察に来られたのですか？　へ？　裏に行くのですか？　それはいったい……はぇ？」
なんだか、最後に、チラッと獅子の気配をまとったラフィーナの姿が見えた気がするが……。まぁ、それはともかく……。
「勝負とか、そういうことにはしなくてもいいと言ったのですけれど……」
こうした催し物を開くと、やはり、勝負をしたくなるものらしい。人と言うものは、互いに、争わずにいられないものなのだな……などと、人間と言うものの悲しいサガを思うミーアである。
「いやぁ、素晴らしい盛り上がりですな」

声をかけられ、振り返る。っと、そこにいたのは、釣り衣装できっちり決めた、サンテリだった。その腰には、使い古された魚籠が結び付けられていた。
「あら、サンテリさん……。面白い格好をしてますわね」
確か、彼は、生徒が海に落ちたりしないように、監視する役だったはずだが……。
「ああ、これですか。なぁに、大会が終わった後で、夜釣りをしようと思いまして。いつでも釣りに行けるよう、準備してきたのです。ははは」
どうやら、釣りマニアの血が大いに騒いでいるらしい。
「それにしても、想像していたより盛り上がっておりますわね。学生たち以上に、この島の人たちや、学園の職員の方たちが盛り上がっているように見えますけれど……」
っと、首を傾げるミーアに、サンテリは、しかり、と頷く。
「ええ。その通りです。なにしろ、ヴェールガ公は、もともと漁師だったという伝説があるぐらいですからな」
「ああ。そうでしたわね。そういえば、ヴェールガの歴史的には、確かに漁師が大きな役割を果たしておりましたわね」
騎馬王国の建国神話があるように、ヴェールガ公国にもまた、それが存在している。
羊飼いの末裔である騎馬王国に対して、ヴェールガの初代領主は、ノエリージュ湖で魚を獲る者であったと言われている。
「ええ。それにちなんで、中央正教会の中心となる教義を魚の頭文字で作るなど、ヴェールガ公国では、とかく、魚は親しまれた存在なのです」
サンテリは、穏やかな笑みを浮かべて続ける。
「さらに、ヴェールガ公オルレアンさまも、魚がたいそうお好きな方で。食べるだけでなく、あの形がとてもお好きだとか。それで、ある時、同じように大切にされている愛娘、ラフィーナさまと合わせてみたらよいのではないかと、伝説の人魚の肖像画をモチーフに

……」
「サンテリ……。少し、いいかしら？」
唐突に……音もなく現れたラフィーナに、ミーアは、思わず息を呑む。
「ら、ラフィーナさま……？」
ミーアのほうを見たラフィーナは、涼やかな笑みを浮かべて……。
「ああ、ミーアさん。後で、一緒に釣りをしましょう。私もしたことがないから、楽しみね」
なぁんて言いつつも、
「じゃあ、サンテリを借りていくわね。あ、それと、開会の挨拶も、楽しみにしているわ」
そうして、むんずっとサンテリの腕を掴んで去っていくラフィーナであった。

第二十九話　ミーア姫の釣り宣言！

「ラフィーナさま、ご苦労されているのですわね……人魚のような肖像画」

ミーア、思わず、それを想像し……。

「……大変な、ご苦労ですわ。おいたわしや」

歩み去るラフィーナに同情の視線を送りつつも、ミーアは気持ちを切り替える。

「まぁ、それはそれとして、開会宣言ですわね。しっかりと盛り上げないといけませんわ」

今日の釣り大会において、ミーアの一番の役目は、それだった。

実のところ、ミーアは、それをそこまで大事な役割とは思っていなかった。

なにしろ、今回の釣り大会の目的は、オウラニアとの仲を深めることにある。この開会宣言で、ミーアがどんな失敗をしたとしても、この釣り大会自体がなくなることはないだろうから、特になんの問題もないわけで……。実に気楽なものだった。

戦争を止めるためのものやら、生徒会長に相応しいものやら、子どもたちの居場所を守るためのものやら……。今まで幾度も修羅場を潜り抜けてきたミーアである。

たかが、学校行事の開会宣言程度、どうということもないのだ。

そのはずだったのだが……。会場の雰囲気を見て、ミーアは考えを変えた。

――これは、もしや、なにかの波が来ているのではないかしら……？

っと……熟練の波乗り海月ミーアのセンサーが、反応しているのだ。

ミーアは腕組みして、ふぅむ、っと唸る。

――今日、わたくしは、オウラニアさんと仲良くなって、できれば味方につけたい。けれど、同時に、少し彼女の耳に痛いことも言わなければならないかもしれませんわ。
先日のオウラニアの言葉が、ミーアの胸に残り続けていた。
『やっぱり、人生、美味しいものをたくさん食べて、たっぷり遊んで、楽しく生きないとダメですよねー』
あの言葉……あれは、まるで……。
――わたくし自身の言葉のようでしたわ。過去の、わたくしの……。
今のミーアは知っている。美味しいものをたくさん食べることも、遊ぶことも、楽しく生きることも大切だけど……ものすごーく大切だけど！　でも、それ以上に大切なことがあるということ。
否、正確に言うなら、幸せな生活を守るためには、相応にしなければならないことがあるのだ、ということを、知っているのだ。
――そうしないと、楽しく生きていたはずが、気付けば断頭台の上だった、なんてことになりかねませんし……。ここは先達として、しっかりと警告をしておいてあげるべきですわ。
断頭台にかけられることに関して語らせれば右に出る者のいない、断頭台の姫ミーアだからこそ語れることがきっとあるはずなのだ。けれど……。
――お説教しつつ仲良くなるのは、まぁまぁ大変なこと……。なんとか、お説教で痛くなった耳が気にならなくなるようにしなければなりませんわ。
そのために、参加する職員たちの士気を上げ、イベントを盛り上げるのは大切だ。
ミーアから多少お説教臭いことを言われたりもしたが、全体としては楽しい一日だった……と、そう思わせられれば重畳。楽しさの中に教訓がある一日だった、みたいになってくれれば言うことなしである。
――とすると、この開会宣言でも手を抜くことはできませんわね。

「ミーアさま、そろそろ……」
声をかけられたミーアは一つ頷いて、アンヌのほうを見る。
「どこか、おかしいところはないかしら？」
念のために、服装と髪型のチェック。
アンヌは、すっす、っとミーアの髪を梳き、それから一歩後退。顎に手を当て、むむむ、っと唸った後、
「はい。完璧です。ミーアさま！」
厳正なるアンヌチェックを終えたミーアは、力水ならぬ、力ジュースをコクリと一杯。うーん、甘くて美味しい！　もう一杯！
そうして、脳みそに栄養を注ぎ込んだうえで、満を持して演壇の上に登った。
「ご機嫌よう、みなさん」
その声に、思い思いの場所で談笑していた生徒たちが、一斉に姿勢を正す。
「ああ。かしこまらず、気楽に聞いていただいても構いませんわ。今日は楽しい日ですもの」
朗らかな笑みを浮かべて、周りを見回してから、ミーアは言った。
「さて、本日は、このように素晴らしい会を開くことができて、とても嬉しいですわ。この会は、たくさんの方の協力で、開催にこぎつけることができた。まず、はじめに、今日の釣り大会の準備に携わってくださった方々に、感謝したいですわ」
そう言って、ミーアはそっと頭を下げた。
それから、ミーアは、サンテリの同志たちに目を向ける。どこか誇らしげに胸を張る彼らに向かい、ミーアは……。
「しかし、ここで白状いたしますけれど……わたくし、実は釣りにはなーんの興味もございませんの」
冷めた顔で、いささか演技めいた仕草で、ゆっくりと首を振ってみせた。
それは、いわば釣り針……。釣り好きならば、噛みつかぬわけにはいかない、でっかい釣り針だった！

当然、自分たちの愛する趣味を馬鹿にされたと思った人々は、一斉にミーアに鋭い視線を向けてくる。それを一身に受けたところで、ミーアは表情を崩し、

「ふふふ、正確には、興味がございませんでした、と過去形で言うのが正しいかしら。幼い頃は、あんなことして何が楽しいのか、なんて思ったものですけど……。ある時、それが食べ物を得る手段だと知って、少しだけ興味が湧きましたわ」

その言葉に嘘はない。革命軍からの逃避行で使える、食料の獲得方法の一つとして。ミーアは釣りを調べたのだ。

「それにね、実はわたくし、先日、無人島で遭難しかけましたの」

その言葉に、聞いていた者たちは一瞬、ギョッとした顔をする。それを見て、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべて続ける。

「まぁ、大したことはなかったのですけど、その時、同行していた方たちが釣りで魚を獲ってきて……。それで、ますます興味が湧いてきましたの。これはなかなか、趣深いと。今回も、準備をすることで、ますます釣りの奥深さを知って、心から驚かされましたわ」

注目を集めたうえで、すかさず、ヨイショする。

人は、自分の趣味を褒められると嬉しいもの。そして、今日一日、生徒たちの面倒を見てくれる釣りマニアな職員たちのテンションが上がれば、今日の会はより盛り上がるだろう。

それに、釣りが趣味のオウラニアや、魚に親しんでいるラフィーナも、悪い気はしないだろう。二重、三重に考え抜かれた、熟練のヨイショ芸を披露するミーアである。

「もちろん、わたくしが、その奥深さのすべてを知れたなどとは思っておりませんけれど、それでも、その一端に触れられたことは大いなる喜びですわ」

それから、ミーアはセントノエル島の住民へと目を向けた。

商店街から駆り出され、露店の準備を進める者、学園から依頼を受けて、船を出そうとしている者、その他さまざまな人々が、今日の大会に関わっている。

そして、その住民のほとんどは、ヴェールガ公国の出身なのだ。
その証拠に、彼らは、みな、ミーアのほうに視線を向けて話を聞いていた。釣りを礼賛するミーアの宣言を聞き、熱い表情を浮かべていた。
――ふふふ、事前にヴェールガの釣り人事情をお聞きしておいて良かったですわ。
サンテリとの会話を思い出しながら、ミーアは思う。
――言われてみれば、確かに、神聖典の中でも、魚は役割を与えられておりますし、ヴェールガの方たちの思い入れが強いことも頷けますわ。釣りマニアの職員たちのみならず、彼らにも気合を入れることができるならば、この開会宣言にも意味があったというものですわ。
自分を押し上げる強力な波を感じながら、ミーアは切々と訴えかける。
釣りは楽しく、それ以上に、貴いものなのだ、と。
「釣りとは、まさに、高貴にして典雅な趣味。これは、貴族の嗜みといっても過言ではないのではないかしら？」
ヨイショヨイショ――！　とばかりに、ぶち上げてから、ミーアは優しい笑みを浮かべて。
「とまぁ、あまり長く話すのも気の利かぬことですし、わたくしからは、このぐらいで。では、みなさん、今日一日、釣りを楽しみ、ぜひ、その良さを知っていただきたいですわ」
最後に、セントノエルの学生たちに目を向けて、ミーアは言った。
「島内の指定されたスポットで釣るのもよし。船に乗って湖の深みに漕ぎ出して釣るという、熟練者の仕方を試してみるのもよし。場所を選んだり、移動したりも釣りの醍醐味ということですから、ぜひ、いろいろ試してみていただきたいですわ」
ミーア、そこで、チラリとオウラニアのほうに視線を送ってから……。
「さぁ、釣り竿と魚籠を受け取って、今日の釣り大会を楽しみまし

ょう」

そうして、一礼してからミーアは演壇を降りるのだった。

第三十話　蛇の毒、あるいは、海月の一刺しのような・・・

「釣りとは、まさに、高貴にして典雅な趣味。これは、貴族の嗜みといっても過言ではないのではないかしら？」

そのオーバーな物言いを、オウラニアは冷静に聞いていた。

「んー、どうして、ミーア姫は、あんな風に媚びるようなことを言っているのかしらー？」

彼女は……ミーアの演説を、どこかわざとらしい、作為的なものとして受け取っていた。わざとらしく釣りに興味がない、などと言って、人々の注意を惹き、その後で釣りを褒めたたえる。

下げて上げる、波のような演説。見事なご機嫌取り（ヨイショ）だったが……。

「釣りを褒めることで、魚に特別な思い入れのあるヴェールガの民の好感を買うのが目的かしらー？　それとも、ラフィーナさま？　あるいは、私かしらー？」

なんと、ミーアの狙いを完全無欠に看破するオウラニアである。極めて鋭い洞察力を有するオウラニアなのである。

「まぁ、やっぱり、一番はラフィーナさまかしらー。ヴェールガの聖女だし、ああ言っておけば、ご機嫌取りができるっていうのが、一番大きな理由ー？　んー、でもそれって浅ましくって、俗物っぽいわー」

そうして、無知の姫の、その鋭い観察眼が、叡智の皮を被ったミーアの正体を見透かそうとした……まさに、その時だった！

「でも……お父さまは、そんな人と私をお近づきさせたいはずじゃないのかしらー？」

生じたのは……小さな疑問。

父の言動に覚えた違和感だった。

普通に考えれば、浅ましく俗っぽい人物と娘とを遠ざけようとす

るのは、親としては当たり前のことかもしれない。あるいは、ミーアの権力に惹かれるような親ならば、ミーアの浅ましさに関わらず、お近づきにさせようとするだろうが……。

でも、オウラニアは知っている。

自分の父は、そんな人間ではない。

俗人から遠ざかり、健やかに育つことを望みもしなければ、ミーアの権力目当てに犠牲にしようとも思わない。

父は、自分にそんなことを望みはしない。

――そもそも、あの人は、私にはなにも……。

と考えかけたところで、オウラニアは、うーんっと声を上げる。

「ともかく、お父さまの口調は、明らかにミーア姫殿下を警戒するようなものだったわー。あの、お父さまが警戒する？　あーんな見え透いたお世辞を言う人のことを？」

頬に手を当て、オウラニアはつぶやく。それは、あり得ない、と。

「ということは……ミーア姫殿下のあの宣言はフェイク……。あんなことをやった理由が、ほかにあるってことかしらー？」

出発前に見た父の態度が、その言葉が、オウラニアの思考に、じんわりとした違和感を広げていく。

それは、さながら蛇の毒のよう……否、どちらかといえば、海月の一刺しのように……。彼女の思考を侵し、麻痺させて……曇らせる！

「うーん、まぁ、どうでもいいかしらー。別に、ミーア姫殿下の思惑も、お父さまの思惑も、私には関係ないしー。うふふ、今は釣りを楽しみましょう」

などと、そこで思考を切り替えるオウラニアである。

彼女がミーアの真意（……どこかの聖女たちによる解釈による）に直面し、打ちのめされるのは……もう少しだけ先のことになるのだった。

さて、改めて、オウラニアは今日の釣り大会の釣り場を確認する。
指定されている釣りスポットは、港近くの旧大橋跡か、森を抜けたところにある砂浜など。船釣りも選択肢に入っているらしく、学園で借り受けた船が三艘、港にとまっていた。
「船釣り……」
オウラニアは、感極まった声でつぶやいた。
釣りスポットに関しては、正直、面白みに欠ける。というか、一人でも行ったことがあるところばかりだ。
釣りはいつどこでやっても楽しいものだけど、せっかくだから、こういう時しかできないことをしたい。
――ガヌドスでは、毎日のように船を出させて釣りを楽しんだものだけど、ここではそういうわけにはかないからー。うふふ、楽しみー。
ということで……オウラニアが選んだのは、船釣り一択だった。
意気揚々と船に乗り込もうとした、まさにその時だった……。
「ああ、オウラニアさん、やっぱり来ましたわね」
ニコやかな笑みを浮かべるミーアが、船の上で手を振っていた。
「なっ……！？」
彼女の周りには、生徒会の面々と特別初等部の子どもたちの姿があった。
「さ、早く乗ってくださいな。ともに、釣りを楽しみましょう」
「ええーと、でもー」
っと、慌てて別の船に目をやるも……。
「ささ、行きますわよ。オウラニアさん」
いつの間にかそばに来ていたミーアに手を掴まれてしまっては、もはや逃げることはできず……。
――うーん、まぁ……いいかー。
オウラニアは、結局、その結論に落ち着く。
すべてのことは、どうでもいい。
考えても疲れるだけだし、考えてもどうにもならない。

今日を楽しめればいい。目の前の船釣りを楽しめれば重畳。
それこそが、オウラニア・ペルラ・ガヌドスの基本理念。
「それで、この船は、どこを回るつもりなんですかー？」
「ええ。それなのですが……」
スチャッと一歩前に出たのは……ヴェールガの釣りマニア代表こと、サンテリだった。
キリリッとした顔をした彼は、地図を広げ……。
「島からでは行きづらいのですが、船だとちょうど良い釣り場が……」
「あー、そこ、私も行ってみたいと思ってたところよー」
ニッコニコとご機嫌な笑みを浮かべるオウラニアだった。

第三十一話　ミーア・ヒロイン・ティアムーン

港に係留されていたのは、それなりの大きさを持つ船だった。さすがに馬車ごと乗せて運べるほどには大きくなくとも、おそらく、二十人ぐらいまでならば乗れるのではないだろうか？

――さて……撒き餌は仕込みましたし、オウラニアさん、来てくれるかしら……？

先ほどの開会宣言で、船釣りの存在を強調しておいたが……はたして、オウラニアは上手く食いついてくれるかどうか……。

そんなことを思いつつ、ミーアは、ふーぅ、とため息を吐いた。

「しかし、暑いですわね……。日差しがとっても強いですわ」

じーわじーわと、肌を焼く日の光に、じっとり汗が染み出してくる。

額の汗をハンカチで拭きながら、ミーアは、獲物がかかるのをじっと待っていた。けれど、待ち時間は、それほどかからなかった。

獲物……オウラニア姫が、いそいそと船のほうに向かってきたためだ。

――ふふふ、かかりましたわね！

計算通りだった。釣り好きなオウラニアが、素人向けの釣りスポットに行くはずがない、と。来るならば、船に違いない、と。

そんなミーアの予想は見事に的中した！

ミーアは、満足げな笑みを浮かべて、オウラニアに声をかけた。

「ご機嫌よう、オウラニア姫殿下。やっぱり来ましたわね？」

声をかけつつ、逃げられぬように、と素早くオウラニアに歩み寄る。

「さ、早く乗ってくださいな。ともに、釣りを楽しみましょう」

「ええーと、でもー」

キョロキョロ、とほかの船に目をやるオウラニア。その腕をがっ

しり、ミーアは捕まえる。
「ささ、行きますわよ。オウラニアさん」
にっこり微笑みかけてやると、オウラニアは諦めたように、ため息を吐いた。

船が港を出たところで、ミーアはほうっと安堵の息を吐く。
――とりあえずここまでは計画通りですわね。
これで、港に帰るまでオウラニアが逃げることはできない。一安心である。
サンテリから、楽しそうに釣り場の情報を聞くオウラニア。そんな彼女を見て、ミーアはうんうん、っと頷き……。
――嬉しそうでなによりですけど……一人で釣りを楽しませてしまっては、意味がありませんわ。次なる策を早々に打たねば……。
そうして、ミーアが視線を向けるのは、特別初等部の子どもたちのほうだった。
大軍師アンヌの「殿方は趣味を褒められると嬉しいものみたいですし、そこで培われた技を頼られると、さらに喜ぶ……と書いてありました」という進言を受けて、ミーアが立てていた作戦……それは……。
「オウラニアさんに、子どもたちが釣りをする、お手伝いをしていただくのはどうかしら？」
というものだった。
「殿方だけでなく、ご令嬢であったとしても自分の技術を褒められるのは嬉しいもの。頼られれば、悪い気持ちはしませんわ。たぶん……」
もちろん、オウラニアとしては、一人でじっくり釣りを楽しみたいのだろうが、それでは、ミーアの目的を達成するのは難しい。
「仲良くなるためには、わたくしと話しをしてもらわなければなりませんけれど、露骨にわたくし、避けられておりますし。なんとかして隙を作る必要がありますわ」

そのための、子どもたちである。
子どもたちのお手伝いをしがてら、話をする機会は、きっと増えるはず。素人を手伝う煩わしさは、自らの技術と知識を披露する喜びで緩和し、楽しい雰囲気を維持する。
――それに、オウラニアさんに、ご自分の危うさを自覚してもらうためにも、子どもたちと接することは意味がありますわ。
実際に、貧しい民の子どもたちと接することで、オウラニアが少しでも、自己の行いを反省する機会が作れれば……と。
そんなことを考えるミーアである。
過去の自分と似たオウラニアに……あの日、かけてもらえなかった言葉をかけるのだ。
『あなたのそれ、今のうちに、ちょっと悔い改めたほうがいいですわよ』
と。
さて、それじゃあ、子どもたちを紹介しよう……っと、ミーアが振り返った瞬間だった。
びょうっと強い風が吹いた。船が揺れ、ミーアはよろけないよう、ふんぬっと足を踏ん張る。
「おお、すごい風ですわね……。ふぎゃっ！」
突如、顔にぶつかってきたものに、カエルが潰されたような悲鳴を上げるのは、ミーア・ヒロイン・ティアムーンである。
手をバタバタさせつつ、顔に張り付いた布のようなものをはがす。
「なっ、何事ですの？　これは……」
それは、可愛らしい帽子だった。
「もっ、申し訳ありません。ミーアさま！」
慌てた声に目を向ければ、そこには、顔を真っ青にして立っているヤナの姿があった。
「ああ。風で帽子が飛ばされたんですのね」
手の中の帽子をヤナの頭に被せてあげて、それから、彼女の乱れた前髪をすっすっと整えてあげてから、ミーアは小さく笑みを浮か

べた。
「風が強いですし、飛ばされないように気をつけて。今日は日差しも強いですし、帽子は必須ですわよ？」
そうして、頭を撫でて上げた……その時だった。
ふと視線を感じて、振り返る。と、オウラニアが、ビックリした顔でこちらを見ていた。
――はて？　どうかしたかしら？
首を傾げるミーアから、オウラニアは、そっと目を逸らすのだった。

第三十二話　それ、ムーンボウかなにかなんじゃ……

――あらぁ？　今のって……。
突如として現れた光景に、オウラニアは、かっちーんと固まっていた。
スッと……頭が冷えていく。これから、ノエリージュ湖に漕ぎ出して釣りを楽しもう！　などというお気楽な興奮は、一瞬で霧散していた。
――まさか、まさかねー？
心の中で否定しつつも、頭に浮かぶのは、先ほどのシーン。風で帽子を飛ばされたヤナの、露わになった額……。そこに見えた、目の形をしたタトゥーだった。
――もしかして、あの子はー、か、海賊？
「あら？　どうかしましたの？　オウラニアさん？」
不意に、声をかけられて、オウラニアはビクンっと飛び上がる。見れば、ミーアがニッコリ笑みを浮かべて、話しかけていた。
「い、いいえ、なんでもありませんー」
「そうなんですの？　ですけど、なにやら、顔色が……」
「平気ですよー。ただ、暑かっただけですからー」
「まぁ、それはいけませんわね。帽子を被って……なにか、飲み物がないか、聞いてきましょうか？」
っと、ミーアが動き出そうとしたところで、とてとて、っと小さな男の子が近づいてきた。
オウラニアは……そこで気が付いた。男の子が、まるで、自らの額を隠すかのように、バンダナを巻いているということに……。
――もっ、もしかして、この子もー？
よくよく見ると、バンダナを巻いたその姿は、オウラニアが聞いていた海賊の風貌そのもので……。無邪気そうに見えるその顔から

も、なにやら得体の知れない恐ろしさを感じ取ってしまって……。
オウラニアは思わず、顔を引きつらせる。
男の子は、ミーアに陶器の器を手渡した。中には何かの液体が入っている。
「あら、キリル、これは……？」
「ジュースだって、パティお姉ちゃんが……。はい、どうぞ！」
そうして、バンダナの子どもは、オウラニアにも器を差し出してきた。
「あ、ああ、ええ、ありがと、う？」
ぎこちない笑みを浮かべつつ、オウラニアは、少年の顔を凝視した。
――このバンダナ、やっぱり、海賊みたいだわー。こ、こわぁー！　こわぁ！
ガヌドス港湾国において、海賊は恐怖の対象だった。
海からやってくると言う亡霊海賊を始め、海賊の幽霊船や、人々を海に引きずり込む、無数の海賊のかぎ爪の話などなど……その怪談のほとんどを海賊が占めている。
中でも、第三の目を持つという、こわぁい海賊団の話は、幼き日のオウラニアに大変な心の傷を植え付けていた。それは、幽霊としての怖さではなく、現実的な恐ろしさを持った話だった。
捕まれば、外国に売り飛ばされて酷い目に遭うだとか。場合によっては、両腕を縛られたうえ、ワニがうようよいるような場所に落とされたりだとか。樽に入れられて海に沈められて、魚釣りの餌にされたり……ちょっぴりリアルな怖い、こわぁいお話なのだ。
そして……基本的に、世間知らずに育てられたオウラニアは、そのお話を、全体的に信じていたりもして……。
――こわぁ……。
だからこそ、彼女は海賊が怖いし、第三の目のタトゥーを持つ者たちには、たとえ子どもであっても近づきたくはないのだ。
「ありがとう。キリル。うふふ、これ、とっても美味しいですわ」

そんな海賊の子どもの頭を、ミーアは笑顔で撫でていた。
高貴なる身分の姫が、平民の子どもの頭を撫でるだけでも、あまりないことなのに、怖い、こわぁい！　海賊の子どもの頭を撫でている……。それが、オウラニアには信じられなくって……。
――こっ、ここ、こわぁ！　ミーアさまって、もしかして、海賊団のボスなんじゃあ……？
ミーアの背後に、恐ろしい巨大ザメの姿を幻視するオウラニアである……！
もし仮にミーアの後ろにナニカの影が見えたなら、おそらくムーンボウかなにかだと思うのだが……少なくとも、オウラニアには、ミーアがおそろしーい存在に見えたのだ。
「ミーア姫殿下、間もなく釣り場に到着いたします」
その時だった。
タイミングよく、サンテリが声をかけてきた。
それで、オウラニアも気が付いた。
船は港を出て、セントノエル島から反対岸に向かって真っすぐ進んでいったらしい。ちょうど、馬車を乗せて船が行き来している航路と同じようなコースだった。
湖面に目を落とせば、水の色がわずかに濃い。深さがそれなりにありそうだった。
「この辺りは、湖底にかつての橋の残骸が沈んでいるとかで。そこを住処にしている魚が釣れるのです」
「おおー。これは、大物がいそうかもー」
無理やりに、先ほどの恐怖心を呑み込んで、オウラニアは釣りに集中することにする。
大丈夫、今日はともかく釣りだけして、後はミーアや子どもたちと距離を置けばいいのだ。っと、気持ちを切り替えようとした、まさにその時だった。
「あ、オウラニアさん。実はお願いがございますの」
ニッコリ、またしても満面の笑みを浮かべて近づいてくるミーア

……。
「へ？　えーと、なんですかー？　ミーア姫殿下」
恐る恐る問い返したオウラニアに、ミーアは事もなげに言った。
「子どもたちに、釣りを教えてあげてほしいのですけど……」
「うぇ……？」
思わずヘンテコな声を出して、オウラニアは固まる。
「なっ、どうして、私がー？」
「実は、生徒会でも釣りをしたことがある人が少なくって……。サンテリさんや、この船の船長さんはもちろんできるのですけど、手が足りませんの。それで、オウラニアさんにも少しだけお手伝い願えないかな、って思っているのですけど……」
ふと見れば、ミーアの近くには、先ほどの帽子の少女がいた。前髪から、今もちょぴっとだけ、タトゥーが見え隠れしている。隠しきれていないウッカリさん……などと思いかけて、オウラニアは、間違いに気づく。
――うっかりじゃない。わざとだわぁ！　私を脅してるのねー。しかも、その隣には、バンダナを巻いた男の子の姿もある。さらにさらに、よくよく見れば、その男の子の隣に立つ無表情の少女も、なんだか怖そうだ。ミーアに似た顔立ちだが、こちらの心をジッと探るように見つめてくるのが、実に恐ろしい。
「あ、あの、私はー」
「ああ、心配しなくっても大丈夫ですわ。なにも、すべて任せようなんて思っておりませんわ。わたくしもお手伝いしますし……」
と、そこで、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「ここはぜひ、今日を楽しい一日にするために、オウラニア姫殿下の素晴らしい腕前をご披露いただきたいですわ」
実に見え透いたお世辞を言うのだった。
――うう、こ、ここが船の上じゃなかったら、逃げられるのにー。
オウラニアは、泣く泣く頷くのだった。

第三十三話　犯人は……？

――キリル、ナイスですわよ。
美味しいジュースを飲んだミーアは、満足げに頷く。
別に、美味しいジュースを持ってきてくれたから、ではない。いや、それもあるのだが、それ以上に、オウラニアに親切にしたことが大きかった。
――見ず知らずの子どもたちに釣りを教えろというより、さっき親切にジュースを持ってきてくれた子に釣りを教えて、と言ったほうが断りづらいはずですわ。
ミーアは、キリルに指示を出したパティのほうにも目を向ける。っと、パティは、無言で頷いた。いつも通り、表情のうかがい知れない顔ながら……心なしか、胸を張って得意げな様子がうかがえた！
――ふふふ、さすがは、わたくしのお祖母さま。きちんと、なにも言わずとも、連携が取れるところが素晴らしいですわね。しかし……。
っと、そこでミーアは自らの孫娘のほうに目を向けた。そこには……。
「ふっふっふ、今日はこの湖の主を釣りますよぅ！　釣りスキルは、冒険家としては必須のスキルですから、諸君もきっちりと身に着けておくように！」
「おー！」
などと、特別初等部の子どもたちを、冒険家の暗黒面へと誘いこもうとしているベルの姿があった。
――ベルは……どうしてこう……いえ。でも、まぁ、あれはあれで、場を盛り上げるのに必要な人材と言えないこともない、はずですわ。うんうん。
そう、誰かと誰かを比べては良くない。

ミーアは知っているのだ。人にはそれぞれ役割があるのだということを。
ルードヴィッヒは優秀だが、全員がルードヴィッヒでは息が詰まる。気の抜けた、それこそ、ベルのような存在が必要なのだ。
――そう考えると、わたくしもあまり気を張り詰めてルードヴィッヒのようになるのは避けないといけませんわね。意識的に肩の力を抜くようにしておきませんと……。さておき、ベルにだって、相応しい役割と言うものがございますわ。もっと、こう……その……ええと、まぁ……。
ミーアは、思わず腕組みして、考え込んで……。
「ベルがこなすべき重要な役割って、なにかしら……」
なんぞと、思わずつぶやいてしまう。
まぁ、それはさておき……。
オウラニアの目が子どもたちに向いたタイミングで、ミーアは親しげな微笑みを浮かべて、オウラニアに言った。
「子どもたちに釣りを教えてほしいのですけど……」
「なっ、どうして、私がー？」
ものすごく断りたそうな顔をしているオウラニアだったが……ミーアは気付いていた。
オウラニアの視線に、どこか、恐怖の色が混じっていることに……。
――ふふふ、そうですわよ？　その恐怖は正しいこと。下手なことは言えませんわよ？　なにしろ、ここには、ラフィーナさまがいらっしゃるのですから……。
そうして、ミーアは振り返る。っと、ラフィーナは、
「うふふ、楽しみだわ。釣りに来るなんて、はじめてだから……」
なぁんて、上機嫌にニッコニコしていた。頬をちょっぴり赤らめて、無邪気な少女の笑みを浮かべる。
――今は、あの笑顔に隠されてはいますけど、時折見える獅子のオーラが恐ろしいのですわ。そう、ラフィーナさまはその身の内に

怒れる獅子を秘めた方。それが目覚めた時を恐れるのは、とても正しい認識ですわ。それに、シオンやティオーナさんだって、子どもたちに酷い扱いをしたら、きっと怒るはずですわ。
自らの背後に控えるものを確認してから、ミーアは、ゆっくり、じっくりと、逃げ道を塞いでいく。
釣りを教えられる人があまりいないから、手伝ってほしい、と、きちんとやむにやまれぬ理由を伝えつつ、あくまでもお手伝いでいいですよ、と責任を軽減させ……。さらに！
「ぜひ、オウラニア姫殿下の素晴らしい腕前をご披露いただきたいですわ」
必殺、ヨイショで締めくくる。
やはり、ヨイショだ。世を潤滑に回すもの、それこそが、ヨイショなのだ。
そんなミーアのヨイショに押されるようにして、オウラニアは静かに頷いた。
――ふふふ、計算通りですわ。ああ、これほどまでに計画通りに事が運んだことがあったかしら？　うふふ、なんだか、絶好調過ぎて怖いぐらいですわ。
などと上機嫌なミーアに、アンヌが釣り竿を渡してきた。
「ミーアさま。これをどうぞ」
「ほほう。これが釣り竿……。わたくしも手にするのははじめてですわね」
「この糸を押さえながら、竿をお持ちください。糸の先に針がついておりますので、お気をつけて」
「針……？」
ゴクリ、と喉を鳴らしつつ、ミーアは糸の先についた針を見つめて……。
「あら、この針……、この先っぽのところが……」
「それは返しといいます。一度、刺さったら抜けづらいような造りになっているのです。間違って指にでも刺したりしたら大変ですの

で、お気をつけください」
横から、サンテリの注意の声。ミーアは真剣そのものの顔で頷いて……。
「気をつけますわ。しかし、釣りがこれほど恐ろしい道具を使ってするものとは思いもしませんでしたわ」
恐々と、その針を眺めていると……。
「この餌を針に刺すんですよー」
ふと見ると、オウラニアが、なにかの入った箱を差し出していた。
どうやら、無事に手伝ってもらえるらしい。
内心でニンマリ笑うミーアであったが……、直後……、
「ふひゃあっ！」
とヘンテコな声をあげた。
「はっ、針に刺すんですの？　そそ、その気持ち悪いのを？」
箱の中、ウニョウニョと蠢く赤いもの……その不気味な姿に、ミーアはゾゾッと背筋を寒くする。
「はいー。ウミミズと言って、とってもいい餌なんですよー」
オウラニアは、特に気にした様子もなくソレを手に取り、躊躇なく針に刺してみせた。
「ほら、簡単でしょう？」
「なっ、なるほど……。や、やってみますわ」
ゴクリ、と生唾を飲みつつ、ミーアは……ウミミズを指先で摘まみ上げる。にゅるん、っとした手触りは、実になんとも気持ち悪かったが……。
「こ、これも、美味しい魚料理のためですわ……えい！」
などと、我慢して針に刺す。っと、
「ひっ……」
不意に、息を呑むような、可愛らしい悲鳴が、後ろのほうで聞こえた。
振り返ると、ミーアの手元を覗くようにして、パティとヤナ、それにラフィーナが立っていた。

――はて、今の声は……？

ラフィーナと目が合うと、ラフィーナは、ニッコリ、涼やかな笑みを浮かべていた。いつもと同様、否、いつも以上に透き通るように白い肌が、陽の光に輝いていた。

――ふむ、ラフィーナさまは、このぐらいで動揺するような方ではないでしょうし……。パティは、こういうのあんまり気にしなさそうですし、そうなると、ヤナかしら。うふふ、可愛い子どもの反応ですわね。

ミーアは、安心させるように、ニッコリとヤナに微笑みかけておくのだった。

第三十四話　真友（アースワームメイト）の夜明け

「ほら、大丈夫ですわよ？　ちょっぴり気持ち悪いですけど、こんなの余裕ですわ」

針先にウミミズをつけて、得意げにミーアは言った。

基本的にミーアは……、実は、普通の令嬢と変わらないセンスの持ち主である。

ごく当たり前のことながら、ウネウネした虫だの、ムカデだのミミズだのは、好きではない。もちろん、触るのもごめんである。

けれど……釣りのために必要と聞けば、話は別だ。生存術に関わる技術と聞けば、ミーアの頭の中で、意識が切り替わる。

有事の際、割と断頭台送りにされがちなミーアとしては、いついかなる時にも、脱出する準備はしておきたいところ。

水を確保しながら、食料も得られる釣りというのは、ぜひとも身につけておきたい技術の一つである。

――ふっ、お腹が減ることに比べれば、この程度の気持ち悪さなど、どうということもございませんわ。

などと笑うミーアである。

その姿勢を見たベルが「おお、さすがミーアお祖母さま！　いついかなる時でも、冒険に出られるための生存術……。あれこそが帝国の叡智の根幹なのですね！」なぁんて冒険家魂を燃え上がらせているわけだが……。まぁ、それはともかく。

「おお、さすがでございます。ミーア姫殿下。てっきり、針につけるのは我々の仕事とばかり思っておりましたが……」

意外そうな顔をするサンテリに、ミーアは静かに首を振ってみせた。

「いいえ……。気持ち悪いことだけ従者にさせて、楽しいことだけは自分がするなどと……それは都合の良い話ですわ」

貴族の中には、汚れ仕事はすべて従者に押し付け、自分はいいとこどりをしよう、などという考えの者がいる。けれど、ミーアは、できるだけそういうことをしたくなかった。
アンヌにすべて押し付けて、自分は美味しいところを取るなど、もってのほか、と思っているミーアである。
それに、そういうことは、きっとラフィーナだって嫌いだろう。
ラフィーナへのアピールがてら……あるいは、ラフィーナが味方であることをオウラニアに誇示するために、ミーアはラフィーナのほうに目を向けて、
「そうですわよね、ラフィーナさま？」
話を振ると、ラフィーナ、一瞬、ピクンッと体を震わせて、それから静かに瞳を閉じた。まるで祈るように、お腹の当たりでギュッと手を握り合わせて……。
「……ええ。そのとおりだわ、ミーアさん」
それから、そっと目を開ける。
そのかすかに潤んだ瞳は、何かを訴えかけてくるように、切実な輝きを宿していた。
はて？　ラフィーナさま、どうかされたのかしら？　と首を傾げつつも、ミーアはサンテリのほうを見た。
「それに、それでは本当の意味で釣りを楽しむことにはならないのではないかしら？　餌をつけるところから、釣り上げるところまで、一連の動作をしてこその釣りではないのかしら？」
「なるほど。それは大変、素晴らしいご意見です」
サンテリは、熟練の釣り師のような表情で、深々と頷いた。
「確かに、餌をつけるところから、一人でやってこそ、釣りの醍醐味と言えるでしょう。みなさまも、ぜひ、挑戦してみてください」
「でも……サンテリ？　子どもたちには、少し難しいのではないかしら？　ほら、それを手に取るのは、少し気持ち悪い……」
などと、ラフィーナが気遣うようなことを言いかけたが……。
「みんな、冒険家になるには、釣りは必須の技能。しっかり自分で

つけられるようにならないとダメですよ？」
その言葉に食い込むように、元気の良い声が聞こえてきた。
後の世に、冒険学の第一人者として知られるベルに率いられ、特別初等部の子どもたちが元気よく「はーい！」と返事をした。ヤナを始めとした女の子たちは、キャーキャー言いながらウミミズを摘まみ上げているが……なんだか、とっても楽しそうだ。
「……ええと、ラーニャさん、やはり、王族の方がするのは、難しくないかしら？」
優しげに、気遣うように話を振るラフィーナに、ラーニャはニッコリ笑みを返した。
「お気遣いありがとうございます。でも、畑に行けば、もっと気持ち悪いのとかたくさんいるので」
っと、ラーニャはティオーナに視線を向ける。っと、ティオーナも笑顔で頷いて、
「そうですね。作物について悪さをするものもいますから、よく捕まえてぷちっとやりますよね」
「はい。森にも、似てるの、よくいる、です」
うんうん、っとリオラが頷く。自然豊かな地域で暮らす令嬢たちは、楽しげに地元トークで盛り上がっていた！
さらにラフィーナは、涼やかな笑みを浮かべたまま、王子たちのほうへ視線を送る。が……。
「無人島では機会がなかったが、今日は釣りの腕を存分に競い合うとしようか」
「先日の鍛練では後れを取ったからね。今日は意趣返しさせてもらおう」
王子たちもノリノリである。それを見て、キースウッドが、やれやれ、と首を振っていた。
ラフィーナは、さらに、そのまま視線を巡らせる。まるで、助けを求めるように……っと、その視線が向いた先にいたのは、可憐な笑みを浮かべる少女、シュトリナだった。

視線を受けたシュトリナは、なにかを察したような顔をして……。
「あ、ええと、リーナは、そういう虫とかは、ちょっと……」
などと、言いかけるも……。
「え？　リーナちゃん、そんなんじゃ、一緒に冒険いけませんよ？」
ベルの言葉に押されるように、シュシュっと、その手を動かして！
「なんか、苦手かと思ったけど、やってみたら、案外、簡単だったみたい」
あっさりと、針にミミズをつけた。実に洗練された手際だった！
「……」
ラフィーナは、一瞬、裏切られたような、ショックを受けた顔をしたが、すぐにいつもの笑みを浮かべ直し、視線を転じて……。
「く、クロエさんは、部屋で本を読むのが好きなんじゃなかったかしら……？　だったら……」
「この、ウミミズで人面魚って釣れるでしょうか？」
「人面魚―？　そんなのいるのねー？　私も釣ったことがないから、わからないけどー」
などと、オウラニアと談笑するクロエを見て、ラフィーナは、言葉を呑み込んだ。
もう……ほかに声をかける人物はいない。
「ラフィーナさま……もしや……」
っと、そこで、ようやく気付いたのか、気遣いの人、ミーアが声をかけようとしたのだが……。
「えいっ！」
気合の声と同時にラフィーナがミミズの入った箱に手を伸ばした。そのまま、ほっそりとした指でミミズを摘まみ上げる。ひっ、と息を呑み込みつつ、鬼気迫る顔で、震える指を制し！　ウミミズを針に突き刺して！
「どっ、どど、どう、かしら？　ミーアさん……！　ほら、私も！」
などと、涙目ながら、ドヤァッとした顔をするラフィーナに、ミーアは、気圧されつつも、なんとか頷いてみせて、

「え、ええ。お見事ですわ、ラフィーナさま」
などと言ってやる。っと、ラフィーナはほわぁっと、無邪気な笑みを浮かべて、
「案外、簡単だったわ」
ちょっぴり胸を張るのだった。
――ううむ、これ……なんか、どうでもいいですけど、怪しげな秘密結社の入会式みたいになってますわね……。
それは、セントノエル学園に人知れず、魚釣りの秘密結社が生まれた……その夜明けの瞬間だったのかもしれないが、酷くどうでもいい話であった。
「まぁ、それはさておき。釣りますわよー」
竿を持ち、意気揚々と船の縁に出て、ミーアは湖面を覗き込んだ。
「おお、ここからでもお魚が見えますわね」
ノエリージュ湖の水は、とても澄んでいて……。だから、湖の底までが良く見通せた。
「本当はー、あまり水が澄んでないほうが、警戒心を持たれないんだけど、これぱっかりはしょうがないかしらー」
オウラニアは、ちょっぴり残念そうな口調だったが、
「うふふ。でも、それはそれで、魚との勝負が楽しみかも―」
などと笑っていた。
「さぁ、釣りますわよ！　この湖の主を釣って差し上げますわ！」
ミーアの号令を合図に、釣り友たちは、一斉に船の各所に散っていった。

第三十四話　真友（アースワームメイト）の夜明け（後書き）

伝統校だとソウルメイトとか、お約束で萌えますよね！

第三十五話　釣りマニアの習性

さて、それぞれの場所で釣りを始めた面々であったが、ミーアは、こっそりとオウラニアの姿を探した。船首のほうに歩いてく彼女を追って、シュシュっと歩み寄り……腰かけた瞬間に声をかける。

「お隣、よろしいかしら？」

ニッコニコと、かつて、いろいろとプレゼントを持って、ラフィーナのもとに通った時に匹敵するほどの愛想笑いを浮かべるミーアである。

――やはり、仲を深めるためには、たっぷり話をしなければなりませんし、近くに座るのは必須ですわ。それに、先日、言っていた海のキノコについて、もう少しお話を聞きたいですし……。まぁ、そっちはあくまでも、ついでで絶対ではありませんけど……。なにしろ、本当に大切な秘密というのは仲良くならないと教えてもらえないもの。海のキノコも、すぐには教えてもらえるとは思えませんわ……。ということは、やはり、先に仲良くなっておくことが大切か……。

なんのために仲良くなるのか、若干、迷走を始めるミーアであった。

「えー、ええーと……」

ミーアの声に、ビクッと体を震わせて、距離を置こうとするオウラニアだったが、ミーア、逃がさない。

「ほら。ヤナたちも、ここに来るといいですわ。オウラニアさんは、釣り名人。きっと近くで釣りをすると、いろいろ教えてもらえますわよ？」

ミーア、すかさず、特別初等部の子どもたちを召喚する。彼らに釣りを教えるよう、お願いされているオウラニアとしては、逃げづらくなったはずである。

さらに……。
「ラフィーナさまも、ご一緒にいかがかしら？」
釣りをする場所を決めかねていたのだろうか、ソワソワしつつ、ミーアのほうをチラチラ見ていたラフィーナにも声をかける。ミーアや子どもたちに、非道なことができないように、監視役をしてもらうためだ。
――ラフィーナさまの目の前で『子どもたちのため』という理由をお断りするのは、かなり難しいはず。わたくしを無視するのも、やりづらくなるはずですわ。それに、ラフィーナさまとは、釣りをする約束をしてましたし、一石二鳥というものですわ。
っと、ミーアの呼びかけを受けたラフィーナは、一瞬、ぱぁあっと笑みを輝かせるも……すぐに小さく咳払い。それから、いつも通りの涼やかな笑みを浮かべ直して……。
「そうね。子どもたちの近くにいたほうがいいでしょうし……それじゃあ、ミーアさんのお隣で釣りをさせていただくことにするわね。サンテリ、他の方のことはお願いね」
などと言いつつ、ミーアの隣にそそくさと座る。これにより、必然的に、子どもたちは、オウラニアの隣に座ることになった。
「ということで、お願いいたしますわね、オウラニアさん。子どもたちに、楽しい経験をさせるためにも」
「えー、うう……」
などとなんとも言えない顔をするオウラニアを見て、ミーアは、ふと首を傾げる。
――ふーむ、妙ですわね。なんか、やっぱり、怖がってるような気がしますけど……。それも、ラフィーナさまを、ではなく、子どもたちのほうを、ですわね。ただ単に、平民の子どもたちと接することに慣れてないだけかしら？
確かに、貴族の中には、貧民の子どもを嫌う者は居る。帝都の新月地区に貴族たちが近づかなかったのと、そう変わらない。
――まぁ、今日一日、一緒に釣りをすれば、それも変わるのでは

ないかしら？　実際に接して、言葉を交わしてしまえば、そうそう無視はできないものですし……。話し出すきっかけがあれば……。
などと考えるミーアであったが、その時はすぐに訪れた。
オウラニアは、最初こそ、ヤナたちのほうを見ないようにしていたようだったが……。それを許さぬ存在があった。他ならぬ彼女の内に流れる……釣りマニアの血である。
「あー、それじゃーダメですよ。もっと深くまで針を落とさないと魚まで届きませんからー」
っと、拙い手つきで竿を握るヤナに指示を飛ばす。
「時折、動かして、魚を誘ってあげるのもいいと思いますよー。あっ、あなた、引いてますよー。あ、でも、まだ引っ張ったらダメですよー。魚が突いてるだけかもしれないので、少し我慢ですよー」
今度はキリルに、てきぱきと指示する。
――ふふふ、ですわよね。口出しせずにはいられない。それこそが、真のマニアというものですわ。
目論見通り、子どもたちの面倒を見るオウラニアに、ニンマリ笑みを浮かべるミーア。そうして、子どもたちを使って、オウラニアの口を滑らかにしたうえで、ミーアも小粋にトークを始める。
「ところで、先日聞いた海のキノコというものの話なんですけど、もう少し詳しくお聞きできないかしら？」
「えー、あれは、貝なのでー、釣りとはあんまり関係ありませんよー」
なぁんて言いつつ、くわしーくその貝の性質を教えてくれるオウラニア・ウミマニア・ガヌドスである。
「なるほど……。ガヌドスの、海底が砂地の地域によく生息していると……。あの無人島にも、もしかしたら、いたのかしら？」
などと首を傾げていたミーアは、ふと気が付いた。
いつの間にやら、キースウッドがすぐ後ろで釣りをしていることに。
「あら、キースウッドさんもこっち側へ来たんですのね？　あっ、

もしや、あなたもオウラニアさんの釣果にあやかりたいと思ってるのかしら？」
釣り名人オウラニアの選んだ場所の近くであれば、たくさん釣れるだろう、という安直な考えを疑ったのだが……。
「……ええ。まぁ、そんなところですよ。ハハハ」
微妙に乾いた笑い声をあげるキースウッドに、ミーアは小さく首を傾げるのだった。

第三十六話　ミーア姫、宣戦布告を受ける

「おお……きっ、来ましたわ！」
釣り始めて早々に、ミーアは魚を釣り上げた。
ググイッと竿が振られるのを感じつつ、慎重に引き上げる。っと、竿の先がしなり、湖面から一匹の魚が跳びあがった。
糸を思い切りくわえ込んだその魚は、黄色みがかった銀色をした、流線型の魚だった。
ビチビチと糸を揺らしながら跳ねる魚を、恐る恐る引っ張り上げて、ミーアは、サンテリのほうに目を向けた。
「これって、食べられますの？」
確認するように聞くと、
「ええ。ハーモーという魚です。骨の処理が面倒ですが、職人が骨切りしたものは絶品です。少々小ぶりですが、腕の良い料理人ならば問題なく調理できるでしょう」
なんと、お墨付きをもらえた！
「ふふ、それは楽しみですわね。さぁ、どんどん釣りますわよー」
そして、ミーアは、その後……滅茶苦茶釣った！
意外なことに……ミーアの釣り上げた魚は意外なことに、どれも普通に食べられるものばかりだった。意外なことに！
それを後ろから見ていたキースウッドが……。
「……解せない。なぜ、ミーア姫殿下は、キノコ選びだけあそこまで……」
などと、怪訝そうな顔でブツブツ言っていたが、それはともかく。
「うふふ、楽しいですわ。釣り。最高ですわね！」
ミーアは、釣りを満喫していた。
そうして、お魚さんたちとキャッキャウフフを楽しむことしばし……ミーアは重大なことに気が付いた！

――って！　オウラニアさんと仲良くなる計画が、まったく進んでおりませんわ！

ついうっかり、釣りの楽しさに目覚めかけてしまったミーアである。

もともとミーアは、楽しいことに関しては、それなりに集中力を発揮してしまう性格なのだ。しかも、背浮きの極意や、葉っぱ数えの達人、など、釣り人と相性の良い特技を兼ね備えた人なのだ。

――いけませんわ。ベルを見てもっと肩の力を抜かなければ、などと思ったのが間違い。むしろ、わたくしを見習って少しは真面目になるように、とベルを説教しなければいけなかったのですわ。

などと、間違っているようで、そんなに間違ってもいないような……ちょっぴりツッコミに困るようなことを思いつつ、ミーアは気持ちを切り替え、対話を試みることにする。

「ねぇ、オウラニアさん、わたくしの釣ったお魚ですけど……」

先日来の反省を踏まえたうえで、ミーアは話しかけた。

――わたくしの普通を押し付けない。相手の普通に合わせる。相手のしゃべりやすい話題から、まず入る。

ゆえに、魚の話題を、自然な流れで振ってみる。

完璧な作戦のはず……だったのだが。落とし穴は意外なところに開いていた。

「あー、そのお魚は王女鱒（プリンセスサーモン）ですねー。焼いて良し、煮て良し。この時期は脂がのっててとっても美味しいですよー」

そう、オウラニアは……。

「卵もたくさん産むんですけど、その卵がお腹にある状態なものが、一番、良いと言われていますー。卵がプチプチして、とっても美味しいんですよー。ガレリア海にはいないんですけどー、川にいるのは見たことがありますー。岩陰に卵を産んでー」

魚の話になると、非常に、極めて……饒舌になるのだ！

一つ話題を振るごとに、その魚のわかっている限りの生態、どこで釣れるか、どんな料理に適しているか、などなど。微に入り細を

穿つ情報が返ってくる。
「私が釣った中で一番大きいのはー、こーんなおおきさでー」
などと、プチ釣果自慢も交えられては、それだけで結構な時間が過ぎてしまう。
その間に別の魚が釣れでもしたら、さらに大変だ。釣れたてほやほやのお魚の話に、流れるように移行してしまうのだ。
ミーアは、これはまずい、と急いで軌道修正を計ろうと……、はしなかった。
「ほほう。なるほど、魚料理はなかなかに奥深いですわね。卵がある状態が美味しい……。なるほど、勉強になりますわ」
むしろ、聞き入っていた！
オウラニアから得られるお魚料理の情報に、すっかり興味を惹かれてしまったミーアである。
――とても……美味しそうですわ！
などと、内心でじゅるりとしつつ、自らの魚料理への知識不足、不勉強ぶりを恥じ入るばかりである。
――ふふふ、ガヌドス港湾国に行った際には、とりあえず、食べておいたほうがよさそうなメニューですわね。それに、料理長にも相談して、さらに、メニューを豊富にしていけば白月宮殿での夕食がさらに充実するはず……。
とまぁ、そんな感じで、大いに盛り上がってはいたのだが……はたして、仲良くなれているかどうかは……やや微妙なところだった。
――って、さすがに、このままお魚トークだけで終わったら、まずいような気がしますわね。少しは踏み込んでいきませんと……。
ということで、ミーアは再度、気持ちを切り替えて、オウラニアに話しかけた。
「しかし、よく釣れますわね。さすがは、オウラニアさんですわ」
まず、ヨイショ。それが基本。
「ところで、お父君も釣りは得意なんですの？」
「えー、お父さま……ですかー？」

不意に……オウラニアの声が暗くなった。
「ええ。そうですわ。隣国の国王陛下ですし、近いうちに、一度会食でも……」
言いつつ、ミーアは気が付いた。オウラニアの様子が、どこかおかしいような……？
一瞬の沈黙の後、オウラニアはミーアのほうを向いて。
「ねぇー、ミーア姫殿下。私と勝負しませんかー？」
「はて……？　勝負、ですの？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、オウラニアはニッコリ笑って、
「そう。どっちがおっきなお魚を釣れるかの勝負。それで、私が勝ったらー……もう、私に構わないでくれないかしらー？」
はっきりと、そんなことを言った！

第三十六話　ミーア姫、宣戦布告を受ける（後書き）

来週は夏休みにします。
お盆休み？　いえ、次の巻の書き下ろし休みです。

第三十七話　煽れや煽れ！　起死回生の一手！

「しょ、勝負ですの？」
突然のオウラニアの申し出に、ミーアは思わず頬を強張らせる。
「あー、えーっと……」
目を逸らそうとするが、オウラニアは……逃がさないようにミーアの顔を覗き込んできて……。
「もしも、ミーアさまが勝ったら、ちゃんとお話ししてあげますよー。お父さまのことも、ガヌドスのこともー。会食でしたっけー？
なにか、協力してほしいことがあるなら、しますよー？」
「いえ、まぁ、その、それは、あの、焦らなくっても……」
などと、もにゅもにゅ言って、なんとか逃げようとするミーアであったが……。
「そのかわりー、この勝負を受けてもらえないんだったら、二度と、私に話しかけないでくださいねー」
――う、ぐ、ぬぬぬ……。なぜこんなことに……？
今日は、のんびーりと釣りをしつつ、親睦を深める会であったはず。勝ち負けで物事を決めようなどと、乱暴なことをするつもりは、まったくなかったのに……。
――くぅ、しかし……。
ミーアは改めてオウラニアのほうを見た。
理由はよくわからないが……オウラニアは機嫌を損ねたらしい。こちらを見る目は、どこか冷たく、鋭い。
――これは、やってしまいましたわね……。お断りするのは難しそうですわ。いったい、なにがまずかったのかしら……？
考えるも、後の祭りだった。
こうなってしまえば、周りの力を頼るわけにもいかない。ラフィーナ辺りにお説教してもらったとしても、おそらく効果はないだろ

う。
――となると、最善は勝利することか、負けてもできるだけ被害を少なくすることですけど……。今回はそれも難しそう。勝つしかなさそうですわ。ぐぬぬ、しょ、勝機は……？　勝機はありますの？　この、釣りマニアを相手に……。
幼き日より、ガレリア海で慣らした腕前に、バリバリの初心者が勝てる可能性は……ミーアの見たところ、あまりにも低かった。
――うんっ……？　相手は……釣りマニア……？　競争……。あ、そうですわ！
その時だった！　ミーアの脳内に起死回生のアイデアが閃く！
思いついたアイデアにニンマーリとほくそ笑みつつ、ミーアは言った。
「なるほど。選択肢はなさそうですわね……。その勝負、受けて立ちますわ」
重々しく頷くミーアを見て、オウラニアは、勝ち誇った笑みを浮かべかけたが……、そのタイミングで、ミーアは人差し指を立ててみせた。
「ただし……少しだけ、勝負の内容を修正したく思いますわ」
「なんですかー？　大きさ勝負じゃなくて、数で勝負にしますかー？　それでも負けませんけどー」
白けた顔で言うオウラニアに、ミーアは静かに首を振り、
「いいえ……。ただ、そのような勝負で雌雄を決するなど、味気ないにもほどがありますわ」
ミーア、あえて悪い笑みを浮かべて、煽るように……、
「勝負の内容は『どちらが先に、この湖のヌシを釣り上げるか』にいたしましょう」
堂々と言い放つ！
「この湖の、ヌシ？」
「ええ、そうですわ。先ほど、港で言っておりましたの。このノエリージュ湖には、ヌシがいると……」

しかつめらしい顔で頷いてから、ミーアは続ける。
「釣りで勝負というからには、そのぐらいしたいですわ。それに、せっかく、子どもたちもいるのですから、ヌシと呼ばれるほど大きなお魚、見せてあげたいとは思いますの」
断りづらい理由を付け足しつつも、ミーアはオウラニアを見つめた。
これこそが、ミーアが考えた起死回生の一手だった。
勝機が薄いと見て取ったミーアは、勝ち負けに加え、もう一つの逃げ道を用意したのだ。
すなわち、ドロー。あるいは、釣られなかったヌシの勝ち、という落としどころを。
オウラニアが、ミーアより大きな魚を釣り上げる可能性は極めて高い。けれど、ヌシと呼んでも差し支えがないほど巨大な魚を釣り上げられる可能性は……それほど高くはないのではないか？
――それに、仮に、オウラニアさんが巨大な魚を釣り上げたとして、それをヌシだと認めなければ、結果を有耶無耶にできるかもしれませんし……。
などと悪いことを考えていると……。
「それってー、ミーア姫殿下がヌシって言わなかったらー、勝負がつかなくなるっていうことじゃないですかー？」
ジトっと上目遣いで見つめてくるオウラニア。
痛いところを突かれたミーアは、思わずヘンテコな呻き声をあげそうになるが……。
「それは……ミーアさんに失礼なのではないかしら？」
涼やかな……けれど、ちょっぴり背中がゾクリとするような声が、横から聞こえる。
見れば、ラフィーナが笑顔を浮かべながら……怒っていた！　激怒していた！
ミーアにはよくわかる。ラフィーナの中の獅子が、のっそりと起き上がったのが……！

「ミーアさんが、そのようにズルいこと、インチキなことを考えるはずがない。そうよね、ミーアさん？」
確信に満ち溢れた声に、ミーアは……刹那の判断！
――オウラニアさんは、割と鋭い感じがしますわ。となれば、嘘は見抜かれる不安がある。であれば……！
咄嗟に、悪戯っぽい笑みを浮かべて、ミーアは言った。
「うふふ。そんなことありませんわ。ラフィーナさま。わたくしだとて、清廉潔白ではありませんから、そのようなインチキを考えてのことだったかもしれませんわよ？」
冗談めかして肩をすくめつつ、
「けれど、見抜かれてしまったのでは仕方ありませんわ。ここは大人しく、審判員を置くのが良いのではないかしら……ええと……」
辺りを見回す。そうして、その役に最適の人間を選び出す。それは！
「サンテリさん、お願いできるかしら？」
「私、でございますか？」
意外そうな顔をするサンテリに、ミーアは静かに頷いた。
「ええ。サンテリさんが、この中では最も釣りに詳しい方ですわ」
釣りに詳しい釣りマニア、ということは……。
――きっとヌシにだって大変なこだわりを持っているはず。ヌシに関して最も厳しい基準を持っているのは、おそらくこの方ですわ！
計算しつつ、ミーアは念押ししておく。
「ぜひ、あなたの釣り人としての誇りにかけたジャッジをお願いしたいですわ」
気を使い、中途半端な魚にヌシ判定を与えることは、あなたの釣り人としてのプライドを傷つけることになりますよぅ！　と暗に伝えつつ、ミーアは微笑みかける。っと、サンテリは静かに頭を下げて……。
「かしこまりました。公正なジャッジをお約束いたします。我が、釣り人魂にかけて……」

実に、毅然とした口調で言った！
「うーん……」
その様子を見て考え込むオウラニアに、ミーアは、駄目押しとばかりに……。
「もしかして、オウラニアさん……ヌシを釣り上げる自信が、ないのかしら？」
煽る！　煽る！
「そういうことでしたら、仕方ありませんわね。確かに、どちらもヌシを釣れなかった、となる可能性も十分にありますし？　オウラニアさんが、ヌシを釣る自信がないというのなら、仕方ありませんわね？」
大いに煽る！
ノエリージュ湖には、ヌシと呼ばれる、巨大なお魚がいるらしいけど……それを狙わなくって、いいの？　釣り好きなのに？　本当にいいの？
なぁんて、実にイラァッとする顔で、煽っていく！
「ああ、せっかく、子どもたちに、大きなお魚を見せて喜んでもらおうと思ったのですけど、まぁ、オウラニアさんが無理と言うのであれば、仕方ないですわね」
やれやれ、と肩をすくめたところで……。
「いいですよー。ヌシ釣り勝負、受けて立ちますよー」
オウラニアは、剣呑そのものの目つきで、ミーアを睨みつけてくるのだった。

第三十八話　無欲の勝利か？　初心者の幸運か？

「では、早速、勝負を……」
「ここじゃあ、ヌシは釣れませんよー、ミーア姫殿下」
オウラニアは、湖を眺めながら言った。
「いい釣り場だとは思いますけどー、ヌシを探すならばもっと、人が寄り付かない場所を選ばないとー」
その言に、サンテリは深々と頷いた。
「なるほど。良い目をお持ちですな。オウラニア姫殿下」
それから、サンテリは思案げな顔で腕組みしてから、
「実は、ヌシが目撃された釣り場は、誤って落ちると少し危険な場所なので、今回の釣り場には入れなかったのですが……まぁ、大丈夫でしょう」
ニヤリ、と笑みを浮かべて言った。
「ヌシを釣るというミーア姫殿下の心意気にお応えしなければなりませぬゆえな……」
そうして、サンテリが指示したのは、セントノエル島を挟んだ反対側だった。島の地形がやや入り組んでおり、あまり船の出入りのない場所である。
「ここは水の色が、少し深いですわね」
「ええ。この辺りは少々深さがありまして。しかも人の出入りが少ないために、大きめの魚が育っているのです」
「なるほど。いかにもといった雰囲気ですわ」
ミーアは、深みを増した水の色に、うむむっと唸る。
――できれば、ヌシとか、ヌシっぽい魚とかいないほうが嬉しかったのですけど、仕方ありませんわ。ここは、とりあえず正攻法。わたくしがなんとかヌシを釣り上げてやりますわ！
意気揚々と釣り糸を垂らすこと、しばし……。

ひょーい、ひょーい、っと、ミーアの隣で、次々に大物を釣り上げていくオウラニア。
負けじとミーアも、ひょーい、ひょーい、っと、釣り上げていく
――小魚を！
初心者の幸運（ビギナーズラック）の期間が終わったのか、はたまた、この釣り場の、大きめの魚の頭脳が、帝国の叡智を上回るものであったのか……。
ともかく、ミーアは、ひょいひょい小魚を釣り上げていくも、狙っている大物は一切かからなかった。
――ああ、まぁ、そうですわよね……。そうそう都合のいい話なんか、ありませんわよね。
ミーアは、はぁっとため息を吐いた。
こういう時のために、ヌシ釣りを提案したのだから、それは良いのだが……。
――うーむ、けれど、諦めて途中で勝負を投げ出すのも感じが悪いですわ。ここは、釣っているふりだけはしておくのがいいですわね。
っと、一応、釣り竿を下ろしたままにしておくも……、すでにやる気は、しなしなと萎んでいた。
――しかし……ちっちゃいのはやたら引っかかるんですわよね。小さくて可愛らしいお魚さんたちを釣り上げ過ぎるのも気が引けますし。いちいち、釣り上げて針にウミミズをつけるのも、やや、面倒……。ここはあえて、釣り針を垂らしたまま、波の数でも数えて過ごすのがよろしいかしら。ヌシがオウラニアさんの釣り針に引っかからないようにお祈りしつつ……。
などと、小さい魚たちの身を案じたり、ヌシが引っかからないようにお祈りしたり、と、パッと見、魚界の愛の女神めいたことを考える、ものぐさ海月姫ミーアである。
竿を動かさぬよう固定し、ジッと波に目を落とし、そのまま波の数をカウントし始める。
魚を釣り上げようという欲も、勝負に逸る気持ちも、もはやミー

アの中にはない。そこにいるのは、ただ、波の数を数えるだけの、無の境地に達した一匹の海月であった。
……実のところ、ミーアに本当の『初心者の幸運』が舞い降り始めたのは、まさに、この瞬間だった！
釣り竿が軽く、ピクピクッと動くのを感じるも、感触から小魚だと判断。そのまま、素知らぬ顔で、ミーアは竿を垂らし続け……じっと、じぃぃっと波の数にのみ集中する。
それに気が付いたサンテリが、様子を見に来て「なるほど……」っと、小さくつぶやきをこぼした。刹那っ！　ミーアの竿が、ぐぐぐぐいいっ！　と引っ張られた。
「ふひゃっ！　なっ、なな、なんですの？　こ、この手応えは……」
「おお、やりましたな！　ミーア姫殿下。これは、なかなかの大物ですぞ」
興奮した様子で声を上げたのは、様子を見ていたサンテリだった。
「まさか、釣れた小魚をそのままエサにしようとするとは、思いませんでしたぞ！」
そう、それは奇跡……。
ミーアの針にかかった哀れな小魚を、より大きな魚が丸呑みにしたという珍しい状況！
それはミーアの、海月のように存在感を消す能力と、初心者の幸運が起こした奇跡。あるいは、ミーアの、魚たちに対する〝慈悲深き祈り（クラゲのいのり）〟を聞いた湖の女神が与えてくれた恩寵か？
いずれにせよ……。
――こ、こんなこと、たぶん二度は起こりませんわ！　となれば、逃がすわけにはいきませんわ！
両脚を踏ん張り、腕に力を込めて竿を引く。が、魚の力は思いのほか強く……逆に引きずり込まれそうになる。
「ミーアさま、失礼いたします。お気をつけて！」
ミーアの腰の辺りをがっし、とアンヌが支える。こうして、ミーアが落ちる心配はなし！　あとは、うっかり竿を離したりしない限

りは大丈夫だ！
周囲の者たちがミーアの周りに集まってきた。湖を覗き込むようにして身をかがめていたキリルが、声を上げた。
「あっ！　あそこ、大きい！」
その小さな指が向かう先、湖面から一瞬跳ね上がった魚は、太くて、長くて……なにより、口がとっても大きかった。あれならば、小魚を丸呑みにしてしまったとしても納得だ。
「おお！　あれは、まさしく女帝の魚（エンプレスフィッシュ）。この湖のヌシと呼んでも差し支えのない威容」
サンテリのちょっぴり興奮した声を聞きつつ、ミーアは満身の力を込めて竿を引く。
「ぐ、これは、千載一遇のチャンス。なんとしても、物にしなければ……！　いよーっこいしょー！」
っと、いささか姫っぽくないというか……若干、アレな声を上げ、ミーアは思いっきり竿を引いた。いささか乱暴な引き方であったが、手応えは変わることなかった。
どうやら、あの女帝の魚、一度、食べ物に食いつけば放さない、不屈の食いしん坊のようだった！
ぐん、ぐぐんっと、魚の姿が湖に浮かび上がり……。バシャン！と音を立てて、宙を舞う女帝の魚！
船に向かい飛び上がった、その大きな口から……次の瞬間、スポーンっと糸が外れた。
どうやら、ギリギリのところで危機を察知する小心者さも兼ね備えていたらしい女帝の魚である。
「あ！　ああ……！」
ミーアの落胆するような声。
「まかせて、ミーアさま」
その時だった。キリルが、身を乗り出すようにして、魚に手を伸ばしていた。ヌシ（仮）を空中でキャッチするべく、体を大きく湖のほうに乗り出して。

「キリル、危ない！」
ヤナの注意する声が響いた、瞬間！　ひときわ強い風が吹き、それに押されるようにして……。
「あっ……」
キリルの身体が湖のほうに押されて、落ちていく！
「キリルっ！」
咄嗟にヤナが手を伸ばすも、それが届くことなく、小さな体は湖に落ちていき、落ちていき……。
どんぼっと音を立てて、湖に呑み込まれた。
「まっ、まずいですわ。引き上げないと」
慌ててミーアが立ち上がりかけたところで、隣から誰かが飛び込むのが見えた。
スラリとした長身を宙に躍らせて、綺麗な飛び込みを披露した少女、それは……。
「オウラニアさん！？」
ガヌドス港湾国の姫殿下だった。

第三十九話　オウラニアは楽しいことのためだけに生きる

「いい？　オウラニア、あなたは、立派な姫になるのですよ？　そうすれば、あの人は……私を愛してくれるでしょう」

それは、オウラニアが幼き日、母から言われ続けた言葉だった。

オウラニアの母は、夫からの愛に飢えた人だった。

夫からの愛を欲し……渇望していた人だった。

それは、普通の夫婦にとっては当たり前のようでいて、王家に嫁いだ者にとっては贅沢な願いだった。

王侯貴族にとって、結婚は家と家との結びつき。自らの家にとって、国にとって、それがどれだけ有利になることか……合理的なメリット、政略こそが重要であって、そこに感情は必要なかった。

けれど、オウラニアの母は、夫からの愛を求めた。

政略結婚で結び合わされた縁なれど夫は夫。妻として愛されたいという強い想いが、彼女の胸を焦がしていた。

彼女は高貴なる身分の女性として家のためにその身を捧げ、義務を果たし、そのうえで夫からの愛を求めたのだ。

だから、それは当然の権利だったろうが……、彼女が愛を得ることは叶わなかった。

彼女の夫、ガヌドス国王は、どこまでも妻への無関心を貫いた。

別に、嫌ったのではない。憎んだのでもない。

ただ……関心を示さなかった。

ゆえに、彼女は考えた。

良き後継ぎを生み、育て上げれば、きっと夫は私を愛するに違いない……と。

オウラニアは物心ついてから、しばらくの間、そんな母の期待を背負って、日々を過ごしていた。

辛くはなかった。むしろ、母から期待されることは誇らしかった

し、父に褒められるよう立派に振る舞うことも、やりがいがあった。
けれど、そんな日々は唐突に終わりを迎える。
母が、いなくなった日に。
……と言っても、別に死んではいない。
オウラニアの母は悲劇の女性ではなかった。
オウラニアが十歳になった日、母は、父から離縁された。
そのうえで、他国の貴族の男を紹介された。
そして、彼女の新たな夫となった人は適度に優秀で、温厚で……なにより、情に深い男だった。
かくて、オウラニアの母は、新たな夫からの愛を得て幸せになった。
遠回りはしたものの、彼女は幸福を得て、今では二児の母として、家族と共に幸せに暮らしている。
オウラニアによって得ようと思っていた愛を、惜しみなく与えてくれる相手と、無事に出会えたのだ。
それは、完璧なハッピーエンドで……。
ただ一人……取り残されたのはオウラニアのみ。彼女に残されたものは、母の願いの残滓のみで……。
幼き日の彼女は、それをギュッと握りしめたまま、父に問うた。
「お父さま、私は立派な王女になれるように頑張ります。私は、どうすればいいですか？」
どこかの国から有能な王族を婿として迎えればいいだろうか？
それとも、どこかの国の有力者と婚儀を結び、国に殉じようか？
父が、母の代わりに新たな王妃を迎え入れれば……そして、男児が生まれれば、そういう未来だってあり得るかもしれないが、それはそれで構わない。
それも王家に生まれた者の務めだろう、と。
オウラニアは自らの役割を父に問うた。

生き方を……存在意義を、父に問うた。
そんな彼女に父は言った。
「オウラニア、お前は……なにもしなくていい」
「……へ？」
不意を突かれ、オウラニアは、パチパチと瞳を瞬かせた。
「なにもしなくて……いい？」
「そうだ。なにもする必要はない」
曖昧に頷くと、父は、オウラニアから視線を外した。まるで彼女から興味を失ったかのように……。
否、オウラニアは、気付いていた。
この、ひときわ観察眼に優れた少女は……、とっくの昔から気付いていた。
父がそれ以前からずっと、ずっと……！　娘になんの興味も抱いていないということ。
それだけではない。この世界に対しても、彼は、なんの興味も抱いていないのだ。
かつての妻にも、オウラニアにも、愛を注ぐことはない。さりとて、放棄もしない。王宮から追い出すようなこともしない。
ただただ無関心で、なにもしない。
ただ、黙って成り行きを眺めるのみ……。
それこそが、父、ガヌドス国王、ネストリ・ペルラ・ガヌドスであるということ……。オウラニアは理解していた。
知っていたのに、見ないふりをしていたのだ。
いつか、父が自分を見てくれる日が来るのではないか、と。そうすれば、母はきっと喜んでくれるに違いない、と……。
それだけを導に生きてきた彼女は……その瞬間、生きる意味を失った。
「王族の義務など果たすことはない。なにができようができまいが、関係ない。このガヌドスの次の統治者はお前になるだろうが、だからといって、なにかをする必要はない」

オウラニアの耳に父の言葉が届く。
「好き勝手に生きるがいい」
酷く冷淡で、乾いた言葉が……。
――それはー、私が必要ないっていう意味ですかー？
心の中に浮かんだ問いを口にすることなく……。
オウラニアは、迷子になった。
今まで彼女の指針としていたものは幻のように消え……どう生きればいいのか、わからなくなった。
周りの者たちも、彼女に生きる目的を与えることはなかった。
彼女は、自由になんでもできたし、なにをせずとも注意されるようなこともなかった。
いてもいなくても同じものとして、無関心の中を、ただ無為に過ごした。
そうして……、いつしか、オウラニアは思うようになっていた。
なにもしなくていいのなら……なにも求められていないのなら、楽しいことだけのために生きていこう、と。
なにも期待されず、自分が生きることになんの意味もないのであれば、好き勝手に生きてなにが悪い……と。
だけど……楽しいことのためだけに自由に生きる日々は、あまり楽しいものではなかった。

――なーんで、そんな昔のこと思い出してるのかしらー？
湖に飛び込んだオウラニアは、沈んでいく男の子に向かって、懸命に泳いでいく。
――っていうか、どうして、私、こんなことをー？
そうは思うものの、手を止めることはない。
――そもそもヴァイサリアンなのに泳げないとか、どういうことかしらー？　海賊の子なのに泳げないとか、ほんと、どういうことなのかしらー？
手足をバタつかせながら、湖に沈んでいく男の子。

体の力さえ抜けば、難なく浮くというのに、そんな簡単なことすら知らぬ……馬鹿な、ヴァイサリアンの子ども……。海に生きる民のくせに、釣りの仕方一つ知らない仕方のない子……。

恐ろしい海賊を助ける必要などない。

そんなもの、放っておけばいいのに……気付けば、体は勝手に動いていて……。

――さっき、笑ってありがとうって言われたのが嬉しかったからとか……。まさか、そんなことでー？　私、ちょっとチョロすぎないかしらー？

頭の中にモヤモヤ浮かぶ疑問の答えも出せないまま、オウラニアはキリルに懸命に、手を伸ばすのだった。

第四十話　いい話風にまとめると……

キリルの落下と後を追うようにして湖に飛び込んだオウラニア。
事態の急転に、ミーアは目をぐるぐるさせるばかりだった。
――こ、これは、どど、どうすれば……。あっ、そうですわ。ヌシを釣り上げかけたわたくしの腕前を持って、キリルとオウラニアさんを釣り上げれば……。
などと、間違っているような、でも、微妙に間違っていないような？　ことさえ考えてしまうミーアである。
一方で、
「だっ、だめ。ヤナちゃんまで、溺れちゃいますよ」
慌てた声。視線を向ければ、そこには、ヤナを後ろから抱いて止めるアンヌの姿があった。
さらに、別の場所では……。
「王子殿下は、どうかこちらでお待ちを。上から引き上げてください」
素早く、男子勢に指示を与え、華麗に飛び込んだのは、釣り師サンテリ・バンドラーである。
オウラニアとキリルのもとにすぐさま飛び込んでいく勇ましき湖の男の姿が、そこにあった……のだが……？　そもそも、彼は、釣り師だっただろうか……？　なにかもっと、重要な仕事に就いていたような気がしないではないのだが……。
ともかく、サンテリと船の船員が湖に飛び込んでいく。
っと、そこで、キリルを抱きかかえたオウラニアが、水面に浮上した。
少し流されたのか、船からやや離れた場所だった。
キリルの頭を自分の左肩の上に乗せるようにして抱きかかえ、背浮きのまま、こちらに近づいてくる。

その横にサンテリらが近づいていき、サポートしていく。
さらに彼らを、船上からアベルとシオン、キースウッドが引き上げる体制を整えていた。
一方で、令嬢たちは、その様を固唾を飲んで見守っていた。
手伝えそうなことはなにもなかった。なにしろ、貴族のご令嬢というのは、基本的にそこまで泳げないわけで……。
かつて、人魚姫の肖像画のモデルにもなったラフィーナにしても、仮想仮装（イメージコスプレ）させられただけで、別に泳ぎが得意というわけではない。むしろ、水浴びぐらいしかしたことがないので、泳げない疑いが強い。
なんと、ご令嬢たちの中で泳げそうなのは、下弦の海月ミーアぐらいのものだった。ミーア万能説なる珍説が生まれてしまいかねない事態である。
そうこうしているうちに、オウラニアとキリルが船の上にあがってきた。
けほ、けほっと小さく咳き込み、水を吐いているキリルだったが、意識はあるらしく、どうやら無事のようだった。
一方で、オウラニアも、はぁはぁ、と息を切らしているが、こちらも問題なさそうだった。
ふぅー、っと安堵のため息を吐くミーアである。
「これを……」
っと、素早くティオーナとリオラが拭き布（タオル）を持ってくる。それで水を拭いながら、オウラニアがキリルのほうを睨んだ。
「泳げないのに、あんなふうに船から身を乗り出したらダメよー。今日は温かかったからまだよかったけど、もっと寒い日なら体が固まって動けなくなってしまうんだからー」
ちょっぴり厳しめの注意をしてから、今度はヤナのほうに目を向ける。
「あなたもよー。海賊のくせに水場での振る舞い方がなってないわー。弟から注意を逸らすなんて、言語道断なんだからー。もっと気

をつけなさい！」
ぴしゃり、と怒気のこもった声で言う。
「ごっ、ごめんなさい……」
ヤナが、首をすくませて、頭を下げた。
熟練の釣り師による、釣り初心者へのお説教には、実にまっとうな説得力があった。
――ふむ、正論ですわね。姉には、幼い妹弟の面倒を見る責任というものはあるのでしょうし、注意を怠れば大変なことになる……うん？　責任……？
ふと、そこで、ミーアの頭に冷静さが戻ってきた。
つい先ほどまでは、キリルが落ちたことで、それを助けることだけで頭がいっぱいになっていたが……彼が船の上に引き上げられたことで、思考する余裕が出てきたのだ。
そうして、ミーアは考える。
被害が出なかった、誰の命も損なわれなかったから問題ない……はたして、本当にそうだろうか？
子どもが湖に落ちて、それを助けるために一国の姫君が水に飛び込んだのだ……。
そこに、本当に問題はなかっただろうか……？
無論、言うまでもなく、そんなことはない。責任問題は生じるのだ。
では、それは、誰の責任か……？
今回の準備を整え、なおかつ危険な釣り場に案内したサンテリの責任はあるだろうが、大本を正せば、この釣り大会の主催を主導した……。
――あら、もしや、これって、巡り巡ってわたくしのせいにされるやつなんじゃ……？
そのことに気付いた瞬間、ミーアの背中に冷たい汗が流れる。
セントノエルで、危険な水難事故を起こしかけた責任、それを追求されたらどうなるか……。まして、飛び込み、体を張ったのは、

ミーアとはあまり友好関係にないオウラニアである。追及される可能性は極めて高い！
――ふむ、これは、先手を打つべきですわね。
刹那の決断、ミーアは即座に動き出す。
ヤナのほうを見て、まだ、プリプリお説教をしているオウラニアの手をそっと握って……。
「オウラニアさん、あなたがいてくれて、良かったですわ」
ミーアは、静かに、穏やかに言った。
「え……？」
驚くオウラニアの、その瞳を真っ直ぐに見つめて、ミーアは続ける。
「あなたがいなければ、キリルが溺れて大変なことになっていたかもしれませんわ。姫の身でありながら、躊躇なく飛び込み、無垢なる子どもを助けるその思いやり、わたくし感動いたしましたわ。泳げて、なおかつ、そのような心の持ち主であるあなたがこの場所にいた……これは、まさに神の配剤と言っても過言ではないのかもしれませんわ。本当に、感謝いたしますわ」
そんな、ちょっぴり大仰な言葉を、熱量を込めて語るミーアである。
そう、ミーアの狙いは、ずばり……いい話風にまとめて、責任の追及を有耶無耶にしてしまうこと、である。
ちょっとしたアクシデントが起きたが、その場に居合わせた泳ぎ名人の姫オウラニアの活躍で事なきを得て、良かったね……と、まぁ、こんな具合でまとめてしまいたいのだ。
オウラニアは、なにやら、口をもにゅもにゅさせつつ……。
「べ、別にー？　わ、私は、お礼なんか言われることをしてないしー。た、ただ、私は、そう。あのヌシを私の手で捕まえてやろうと思って飛び込んだだけでー、海賊の子どもがどうなろうと、全然、興味も何にも……」
などと早口に言うオウラニアである。その口調は、嬉々として魚

の説明をしている時と同じぐらい早口だった。
っとその時だった。ヤナがオウラニアに頭を下げて……。
「それでも、ありがとうございました。弟を助けてくれて……。キリルは、あたしの唯一の家族なんです。だから、本当に、ありがとうございました」
「だっ、だからー、海賊の末裔にお礼なんか言われても―」
と言いつつも、オウラニアの頬は赤く染まっている。それを見て、周りの者たちは、穏やかな、優しい笑顔を浮かべていた。
とても……いい雰囲気だった。
本当であれば、そこで終わらせても良かったのだが……。
「とはいえ、今後、こうした事故が起こる可能性も、考慮に入れておくべきですわね。今回は、オウラニアさんのおかげで何事もありませんでしたけれど、次またオウラニアさんのような方がいてくれるとは限りませんし……」
ミーアは、それからラフィーナに視線を振る。と、ラフィーナは一つ頷いて。
「ええ、ミーアさんの言う通りね。今回は、イレギュラーの事態で、危険な釣り場に来てしまったとはいえ、同じようなことが起こるかもしれない。泳げる者の随伴はもちろん、危険地域への立ち入り禁止は厳にすべきだわ」
穏やかなラフィーナの声に、サンテリが深々と頭を下げるのであった。

と、まぁ……このようにして。
起きてしまった事故の責任をいい話で有耶無耶にしつつ、今後の事故防止への対策をきっちりやるよう指示を出すことで、責任を果たした風を装うミーアなのであった。

第四十一話　……かげんの海月、ミーア姫

港に到着した一行は、そのままそこで解散になった。
サンテリらは、他の釣り場の様子を見るために散っていき、隊長ベルを筆頭に特別初等部の子どもたちは、焼き魚料理体験授業へと移行する。
随伴するのは、シュトリナはもちろんのこと、熾火での焼き料理には定評があるリオラや、みじん切りには定評があるティオーナ。さらに、無言でキースウッドが付き従う。
アベルとシオンも、どうやら、そちらに参加するらしい。
一方で、湖に落ちたキリルとオウラニアは体を温めるべく、学園の大浴場へと連行された。こちらは、キリルの付き添いとしてユリウス先生が。そして、オウラニアのほうには、ミーアとアンヌ、ラフィーナ、クロエ。
さらには、キリルを待つ間のついでということで、ヤナとパティが同行することになった。

一通り体を洗い流してから、オウラニアは湯の中に身を浸ける。じんわりと湯の熱さが肌にしみこんできて……思わず、ふぅっと吐息が漏れた。
――思ってたよりも、体が冷えてたみたいねー。
暑さが残っているとはいえ、今は秋だ。泳ぐには、当然、気温が低いわけで……。
ほんのりと顔を赤くしながら、はぁ、っと息を吐く姿は、ちょっぴり色っぽくって。
誰とは言わないが「おふぅっ！」などとアレな吐息を零すどこかの姫君とは大違いであった。同じ姫殿下なのに、大きな違いであった。まぁ、誰と比べてとは言わないが。

――あーあ、魚釣りの大会なのに、ぜーんぜん、楽しくなかったわー。
お湯の中、ぼんやーりと天井を眺めながら、オウラニアは思う。
――というかー、どうして、私が、海賊の子どもなんか助けなきゃいけなかったのかしらー？
今、考えてもまるでわからない。どうして、自分があんなことをしなければならなかったのか……。いや、どうして、あんなことをしてしまったのか……。
「うーん……」
オウラニアは膝を抱え、丸まるようにしてお湯に浸かる。顔の半分までお湯に沈めて、ブクブクと泡を吐きながら、ムーっと唸り声を上げる。
頭に響くは、先ほどの言葉……。
『オウラニアさん、あなたがいてくれて、良かったですわ』
『キリルは、あたしの唯一の家族なんです。だから、本当に、ありがとうございました』
ミーアの言葉と、ヤナの、素直で真っ直ぐなお礼……それを思い出すたびに、なんだか……。
バシャバシャとお湯を顔にかけて、オウラニアは、再びため息。
――あーあ、やっぱり、ミーア姫殿下に近づくんじゃなかったわー。
その要注意人物ことミーアは、今、ちょうど頭を洗っていた。しかも、自分のじゃなく、特別初等部の少女のを、である。確か、パティとかいう名前だっただろうか……。
――ミーア姫殿下にどこか似てるけど、親族の子かしらー。それにしたって、お姫さまなのに洗ってあげるなんて、変なのー。
ミーアのそばでは、あの、ヴァイサリアンの少女、ヤナが、ミーアのお付きのメイドに頭を洗ってもらっていた。ギュッと目を閉じ、体を固まらせるヤナに、やっぱりオウラニアは首を傾げる。
――水が嫌いなんて、あの子も、やっぱり変だわー。海賊のくせ

にー。というか、あの子の弟も情けない。泳げないし、釣りだってできない。あんなんじゃ、生きていけないじゃないの。
船を使い、各地の港を襲い、人々を攫って行く。それこそが恐ろしい三つ目の海賊ではないか。それなのに泳げなかったら、船から落ちただけで死んでしまう。いったい、あの子たちはどうやって生きていくつもりなのだろう、と少し心配になりかけたところで、オウラニアは、首を振った。
――って、そんなの私には関係ない話だったわー。どうでもいいわ。うん。ともかく、釣りだけしていたかったのに、こんなの、ぜんっぜん、楽しくない、楽しくない、楽しくない！！
確認するように……あるいは、自分に言い聞かせるように、つぶやく。
そう、楽しくない……そのはずなのだ。まったくもって楽しくなんかなかったはず……なのに……だというのに……。なぜだろう……？
その胸にあるのは、満ち足りた感覚だった。
体験したことがないような……いや、でも、遠い昔に感じたことがあるような……どこか懐かしい充足感……。
その正体がなにか、と考え込んだ、その時だった。
「オウラニア姫殿下、少し、よろしいかしら？」
見上げると、そこに立っていたのは、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガであった。
聖女ラフィーナは涼やかな笑みを浮かべたまま、オウラニアの隣に身を沈める。
「ええとー」
「少しお話をしようと思ったのだけど、構わないかしら？」
――あんまり、気は進まないんだけどー。
なにしろ、相手はミーアの親友を公言してはばからない人である。できれば、あまりお近づきになりたくはなかったが……。
無意識に体を離しかけたオウラニアであったが……反対側には、

いつの間にやら、クロエが座っていた。
お風呂の中だというのに、眼鏡をかけたままだったため、そのレンズは思いっきり曇っている。それを、お湯に浸けて湯気を取ってから……、改めてクロエが見つめてきた。
――あら、これってー。

オウラニアは、知らなかった。
水の上が、ガヌドスの姫君たるオウラニアのテリトリーとするならば、この大浴場が誰のテリトリーなのか……。
この大浴場こそが、（いい湯）下弦（かげん）の海月（くらげ）ことミーアの絶対的縄張りであることなど……オウラニアは知る由もないのであった。

第四十二話　ミーア姫、成長する

さて……風呂好きミーアが、浴槽に行かず、パティの背中を流してあげているのには、わけがあった。

それはもちろん、今のうちにお祖母ちゃん孝行しておこう！　などという殊勝な心掛けではなく……ヤナへのフォローをするためだ。

――弟を危険に晒した者と思われては、後の禍根にもなりかねませんし。

客観的に見て、ヤナは、取るに足りない子どもだ。仮に、ミーアに恨みを抱いたところで、さほどの脅威とは思えない……というのは、大きな誤りだ。

ミーアは決して、その恨みを軽視しない。なぜなら、ミーアは、ルールー族という取るに足らない小部族の恨みで、痛い目を見ているからだ。

――帝国末期の帝国軍によって壊滅させられたルールー族。そのわずかな生き残りがああも恐ろしいものに変貌した……。というか、リオラさん一人だって、恨みに駆られた姿は恐ろしいものでしたわ……。わたくしの安眠のためにも、ヤナにはしっかりとフォローをしておかなければ……。

かといって、いくらなんでも平民の子どもであるヤナの頭を洗ってあげるのは不自然。というか、さすがにわざとらしい。

ゆえにこそ、ヤナの隣に座るパティに目を付けたミーアなのである。

ミーアなりに、しっかりと間合いを読んだのだ。

「キリルが無事に助け出されて、本当に良かったですわ」

ミーアは、なにげないふうを装って、ヤナに話しかける。キリルのことを心配しているアピールをすることで、「姫さまは、我々、一平民のことなんか、そこらの雑草と同じに思っているに違いない」

などと言われないようにするのだ。
アンヌに背中を洗ってもらっていたヤナは、恥ずかしそうに、こくり、と頷き……。
「申し訳ありません。キリルが落ちたから……釣り大会が台無しに……」
「なにを言っておりますの？　そんなことまったくありませんわ。途中までは楽しかったですし、あなたは違いますの？」
そう尋ねてから、ヤナの立場では肯定しづらいかも、と即座に判断。
「パティは楽しかったですわよね？」
っとすかさずパティに話を振っておく。
「はい。とても楽しかったです。ミーアお姉さま」
心得たもので、パティはすぐに淀みなく返事をしてくれた。
「きっとほかの子どもたちだって楽しかったはずですわ。だから、あなたもキリルも、落ちたこと自体は気にしないで。それ抜きにしても、楽しくなかったんなら、申し訳なかったですけど……」
と言うと、ヤナはもう一度、ぶんぶん、っと首を振り、そして……。
「楽しかったです。釣り、したことなかったから……」
それから、ヤナは少しだけ、考えてから……。
「ここに来てからは……ずっと楽しいです。楽しいって思える、余裕があります。前は、生きていくだけで精いっぱいだったけど、今は……。キリルもよく笑うようになりました」
「そう。それならば、今日のことも、罪悪感ではなく、楽しい思い出として記憶してもらえれば嬉しいですわ。ちょっとしたアクシデントも、振り返ってみれば、楽しい思い出……と、そのぐらいに思っていただければ……」
「ミーアさま……」
こちらに目を向けてきたヤナに、ニッコリと笑みを浮かべて、
「ああ。それと、くれぐれもキリルを叱ってはいけませんわよ？

危ないことをしたことについては、しっかりと注意するべきですけれど……。わたくしが釣り上げた魚を思ってのことですし、むしろ、わたくしはお礼を言うべきだと思っておりますわ」
そうして、じっくりとフォローをした後、ミーアは立ち上がる。
「さて、それじゃあ、わたくしもお湯に……ん？　あら……？　あれは……」
浴槽のほうに目を向けた時、ミーアの嗅覚が敏感に、新たな危機を察知する。
ラフィーナとクロエがオウラニアと話している光景、そこに、何やらきな臭さを覚えたのだ。
（いい湯）下弦の海月ミーアにとって、浴場は自らの縄張り。勘が働きやすくなるのだ。
すすす、っと音もなく、そちらへ近づいていく……っと。目ざとくミーアを見つけたラフィーナが声をかけてきた。
「ああ、ミーアさん。ちょうど良かったわ」
お湯に温められて、ほんのりと赤く染まった頬、その顔に穏やかな笑みを浮かべて……。
「そろそろ、ミーアさんが、この前から考えていることを聞きたいと思っていたところなの」
ラフィーナは、静かに言った。それから、火照った体を冷ますように、お湯から上がって、浴槽の縁に腰かける。
……どうやら、ラフィーナはそれなりの長期戦を想定しているようである、のだが……。
――はて？　わたくしの、考えていること……？
無論、ミーアには思い当たるものはなにもない。なんのことやら、といったところである。
今まで、今日の不祥事の責任を追及されないことで、その小さな頭はいっぱいいっぱいだったのだ。
けれど、そこはそれ、数多の危機を乗り越えてきたミーアである。
傾げかけた首をぐるん、と回し、首の体操をした風を装いつつ…

…。
「なるほど、そういうことですのね……」
っと、小さく頷く。
オウラニアが、なにやら、疑わしげな目を向けてきている気がしたので、あえて、そちらに目を向けることなく、ミーアはお湯の中に身を沈める。
とりあえず、お湯を味わうふりをして……考える。考え、考え、考える！
そうして、しばしの黙考の後、ミーアは静かに目を開き……言った！
「ええ。そうですわね……、それでは、この場で……答え合わせをしましょうか」
そこで再び目を閉じ、腕組みし、ラフィーナらの見解を聞く構えを取る。
そうなのだ、ミーアとて生徒会長として、幾多の会議を経て、成長しているのだ。
イエスマンに徹さんとするその際の言葉遣いと語彙については、かなりの成長を見せるミーアなのであった。
「うふふ、そうね。私たちの出した答えが合っていればいいのだけど……」
そんなミーアの言葉を聞いてラフィーナは、嬉しそうに頷いた。

第四十三話　ミーア姫、自らの考え（注：ラフィーナ曰くの）の解説を求む

「では、私から話をするわね。実は先日、クロエさんと話していて……」

と、そこで、ミーアは静かに手を挙げた。それから素早く思考を巡らし……。

――オウラニアさんが、この場にいるということは、彼女にも聞かせたい話のはずですわ。ならば……。

一つ頷いてから、

「ラフィーナさま、ここは、オウラニアさんにもわかりやすく、お話ししていただけると助かるのですけれど……」

そう言うと、ラフィーナは心得たとばかりに頷き、

「もちろん、そのつもりよ。大切なことですものね」

そうなの？　と首を傾げたくなるも、グッと堪えて、ミーアは微笑む。

オウラニアにもわかるように話してくれるということは、同時に、ミーアにとってもわかりやすく話すということだ。イエスマンにとって、提案者の意見をしっかりきっちり把握することは重要なことなのだ。

「それは助かりますわ。では、改めて聞かせていただきますわ」

そうして、ミーアは目を閉じる。ポカポカしたお湯で頭がポーッとなってくるも、ラフィーナの話に集中、聞き逃さないように気をつけて。

「それでは、改めて。私は先日、図書館でクロエさんと相談したことがあったの。ミーアさんが、セントノエル・ミーア学園の共同研究として、どんなことを考えているのか……」

――ああ、そう言えば……そんなこともありましたっけ……。

言われるまで、すっかり忘れていたミーアは、お湯に浸かってい

るのに、背中に、冷たい汗が流れるのを感じる。
そんなこととは露知らず、ラフィーナの話は続く。
「それで……。そうね。オウラニア姫、ミーアさんがどうして突然、釣り大会がしたい、なんて言ったのか、わかるかしら？」
「えー、それはもちろん、釣りが楽しいからでー」
などと、釣り好き一直線なオウラニアの答えを、ラフィーナは笑顔で寛容に受け止める。
その笑顔、まさしく慈愛の聖女のごとく……。
そうなのだ、端的に言ってしまうと今日のラフィーナ、なにげにちょっぴり機嫌がいいのだ。
なにしろ、お友だちと一緒にお風呂に入り……しかも、一緒にクイズを解くなどという、ちょっとした戯れをしているのだ。
これは、ラフィーナの持つお友だちイベントのイメージを直撃するような出来事であって、涼しい笑みを浮かべてはいても、彼女の心はウッキウキと弾んでいたのだ。
なので、オウラニアのちょっぴり的外れな答えにも、笑顔でいられるのだ。
「もちろん、楽しいから、というのは一つの理由でしょう。特別初等部の子どもたちを楽しませるのは良いことだし、オウラニア姫を歓迎したい、という狙いももちろんあったのよ？　帝国とガヌドス港湾国とはお隣同士。ミーアさんが仲良くしたいというのはよくわかるわ……それと……」
と、そこでラフィーナの声色が、微妙に変わる。
「あなたが、ミーアさんを避けていたということも聞いているわ。ミーアさんは隠そうとしていたみたいだけど……まぁ、いろいろと事情があることでしょうし、ミーアさんも大事にしたくないようだから、その件については、今回は不問にするとして……」
ミーア、チラリと横目でラフィーナの顔を見る。っと、
――ひ、ひぃいいっ！　ら、ラフィーナさま、目が笑っておりませんわ！

その瞳に力強き獅子の怒りを見て、ミーアはすぐさま目を閉じる。
――わたくしは、なにも見ませんでしたわ。見てないものは、なかったのと同じことですわ。わたくしはなにも見なかった。だから、ラフィーナさまも怒りまくってなどいない……。
などと自分に言い聞かせている間にも、話は進んでいく。
「実はね、オウラニア姫は知らないでしょうけれど……先日来、生徒会で話し合っていたことがあるの。それは、セントノエル学園とミーア学園との共同研究について……」
「共同研究？」
「そう。この大陸すべての民を救うための研究……。飢饉に対する研究よ。あなたは、知っているかしら？　ミーアさんが成してきたこと……。各国を襲っている小麦の不作と、それを飢饉としないための対策のことを……」
そうして、ラフィーナは説明する。これまでのミーアの活躍を、だいぶ誇張を加えて、誇らしげに、高らかに……。
それを聞いたオウラニアは、思わずと言った様子で目を見開き……。
「そんなことがー」
「今回は、小麦ではなく、別のものが研究テーマになるのだけど……クロエさんは、それを魚だと見た、そうよね？」
ラフィーナの視線を受け、クロエが小さく頷く。
「はい。少し前、お風呂でミーアさまがお魚のことをすごくよく話されていて……。だから、そうなんじゃないかなって、思ったんです」
「魚……？」
オウラニアは首を傾げる。
「そう。オウラニア姫、あなたも覚えがあるんじゃないかしら？ミーアさんから、魚について聞かれたこと……」
「ああー、そういえば、さっき釣りしてる時も、すごーくしつっこく聞かれたかもー」

それから、オウラニアは驚きに目を見開いて……。
「まさか、あれがー、意味のあることだったなんてー」
――いや、あれは、あなたが勝手に……。
思わず言ってやりたくなるミーアだったが、グッとそれを呑み込んだ。
――しかし、なるほど。魚の研究。虫とかと同じく、今まで食べていなかった魚を食べられるようにする、とか、そんな感じかしら……？
なぁんて推理していると……。
「つまりー、釣り方の研究とか、食べ方の研究とかそういうことですかー？」
「いいえ、違うわ」
オウラニアの質問に、ラフィーナは自信満々の顔で首を振って……。
「ミーアさんが考えていること、それは、魚の養殖よ……」
それから、ミーアのほうを見て、ラフィーナは涼しげで……控え目なドヤ顔をして！
「どうかしら？　ミーアさん」
対して……。腕組みしたまま、目を閉じていたミーアは……しかつめらしい顔をして……。
「ええ……まぁ、そんな感じですわ。よく、おわかりになりましたわね？　ええと、なぜ、養殖だと……？」
再び、解説を求める、聞き上手のミーアなのであった。

第四十四話　ミーア、ラフィーナの推理を……採用する！

「そうね……。いろいろ考えるヒントはあったわ。例えば、ミーアさんの夏の過ごし方とか……」
「わたくしの夏の過ごし方……というと、旧クラウジウス領へ行ったこととか……」
「いいえ。その前、親戚のヒルデブラント・コティヤール殿と会ったと言っていたでしょう？　そして、コティヤール領は服飾が盛んな土地。絹織物も多くあるわね。そして、絹と言えば……」
「月糸虫（シルクワーム）ですね」
クロエが、スチャッと眼鏡を直しつつ言った。
「ミーアさまは、ヒルデブラントさまと久しぶりにお会いになったことで、月糸虫の養蚕業から連想して、魚の養殖に行きついたんじゃないか、と、そう推理しました」
「なるほど……。月糸虫のように魚を飼い育てる養殖を発想したと……」
うなるミーアに、クロエは嬉しそうに続ける。
「あ、ちなみに、絹糸を吐く月糸虫のこともついでに調べたんですけど、茹でると食べられるって書いてありました！」
などと余計な情報を追加するクロエを見て、ラフィーナは、
「ええ……まぁ、それはまた今度ということで……」
華麗なステップでかわしにかかる！
そうなのだ。ダンス上手として知られるミーアであるが、ラフィーナとて公爵令嬢。ダンスの腕前では負けていない。事前に危険がありそうだ、とわかっていれば、避けることなど容易いことなのだ。
ということで、涼しい笑みでクロエの言葉をスルーしてから、ラフィーナは話を元に戻す。
「とはいえ、これは少し強引な発想だったと思うわ。『養殖』とい

う答えが先にあったからこそ言えることね。それよりも、直接的にヒントになったのは……やっぱり今回の釣り大会かしら？」
ラフィーナは頬に指を当てて、悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「釣り大会が、ですの？」
「ええ。そう。いきなり、生徒会でミーアさんが提案した時には、すごくびっくりしたわ。どうして釣り大会なんだろうって……クロエさんと思わず頭を悩ませてしまったわ」
「はい。ラフィーナさまと、すごく考えたんですよ。釣り大会を開く意味はなにか……。最初は、ミーアさまがおっしゃられていたとおり、オウラニア姫殿下を歓待するためだけかと思ったんですけど……」
湯気で真っ白く曇ったレンズをキラリと光らせ、クロエは言った。
「思い出したんです。前にお父さまが、ミーアさまのすることには、いくつもの意味があるんだって言っていたこと……。だから一生懸命、考えました。釣り大会に隠された意味を……」
クロエの言葉を引き継いで、ラフィーナが口を開く。
「それでね、話しているうちに、原点に立ち返ろうということになったの。そもそも、この共同研究をする意義はなんだったかって……」
「共同研究の意義……？」
首を傾げるオウラニアに頷いてから、ラフィーナは言った。
「共同研究によってセントノエルの名を出すのは、研究の内容を周辺国の有力者に受け入れやすくするためだった。もしかしたらそれと同じことを、ミーアさんはしようとしているんじゃないか、と、そう考えたの……」
ラフィーナはお湯の中に、その身を沈めてからミーアのほうを見て……。
「単刀直入に言うわね。ミーアさん、あなたはこの釣り大会を開くことで……各国の貴族に『釣り』という娯楽を流行らそうとしたのではないかしら……？」

その問いかけに、ミーアは思わず「おお！　なるほど！」などと感嘆の声を上げかけるも……実際に声を上げたのはオウラニアだった。
「なるほど！　つまり、この学園に集う各国貴族の子弟を釣り好きにしてしまうとー？」
釣りの楽しさを熟知するオウラニアは、昔から疑問に思っていたのだ。なぜ、他国の貴族は、釣りを嗜まないのか？　もしも、一度でもやってみれば、きっとみんなハマるに違いないと……、確信を持っていたのだ。
だからこそ、ラフィーナの理屈がよくわかった。行事という形でやらせてしまえば、趣味として普及させるのは簡単なことで……。
「でも、釣りが趣味になると、なにかいいことがあるんですかー？」
「もちろんよ。民を飢えさせないために、という理由では素直に聞く貴族たちではないけれど、楽しい趣向のためならば、どうかしら……？　彼らはきっと、お金を惜しまないのではないかしら？」
澄まし顔で瞳を閉じて、ラフィーナは、まるで指揮でもするかのように、人差し指をふりふり、続ける。
「では、ミーアさんが彼らにさせようと思ったことは何か……？　釣りを流行らせて、何にお金を使わせようとしたのか？　領内の良い釣り場を探すことかしら？　それとも、今まで食べられていなかった魚を探すこと？　いいえ、そうじゃないでしょう」
もったいつけるように言葉を切ってから、ラフィーナはミーアを見つめる。
「ミーアさんが狙ったこと、それは、各国の貴族に、屋敷や領内に池を作らせること。そこで魚を育て、いつでも釣りが楽しめるようにすることじゃないかしら？　それこそ、オウラニア姫のような、王族が釣り好きになれば、接待のためにそういう施設を作ろうという貴族も出るかもしれない。もしかしたら、そこにたくさん魚を放流して釣りやすくする、みたいな……気遣いも、必要になるんじゃないかしら？」

「なるほどー。確かに私みたいな玄人は、そういうわざとらしいのは好きじゃないですけどー、たくさん釣れたほうが楽しいって人はたくさんいそうですねー。私は玄人だから、そういうの好きじゃないですけどー」

うんうん、っと頷くのは、ガヌドスのベテラン釣り師オウラニアである。

「では、そんな貴族にこう提案したら、どうなるかしら？　釣りごたえがあって、育てやすい魚があります、と。そして、実は、その魚がいざという時には、食料として、人々に提供できるものであったとしたら？　どうなるかしら？」

鼻歌でも歌いださんばかりに楽しげに、ラフィーナは続ける。

「食べ物がなくて民を切り捨てることは、あるいは許容されるかもしれないわ。仕方がないことだったって……。自分の子どもや家族に食べさせるためのものしかないと、貴族が言い張れば、王はなにも言えないのではないかしら……まぁ、私は許さないけれど……」

ぼそり、と付け足された一言が怖くて、ミーアは、ラフィーナの顔からそっと目を逸らす。

「けれど、もしも食べ物があるとして、それを趣味に使うものだからと出し渋る貴族がいたら……たぶん、私でなくとも許さないでしょう。各国の貴族たちは娯楽のために金を出しているつもりで、気づかぬうちに飢饉への備えのためにお金を出すことになる。それも、大喜びでね。それこそが、ミーアさんの狙いなのではないかしら？」

「それに、研究が進めば、もしかしたら、繁殖力に優れたもの、成長力に優れたものを見つけられるかもしれません。普段から、お魚を養殖して備えることは重要ですが……もしも、飢饉が発生した地域に魚を運びいれて、そこでも養殖する技術ができたら……。小麦による一時的な支援と、魚の養殖による中長期的な食料自給体制の確立。それが実現出来たら本当に画期的です」

白く曇った眼鏡をキラキラリンッと輝かせて、クロエが付け足す。

その補足に、ラフィーナは満足げに頷いてから、ミーアのほうに

目を向けて、
「これが、私たちの答えなのだけど……どうかしら？　ミーアさん」
問いかけに、それまでずっと黙っていたミーアは……静かに目を開けてニッコリ頷いた。
「ええ……。概ね正解ですわ。オウラニアさんを歓待するのが、もちろん第一目標ではありましたけれど、今言われたようなことも、頭になかったわけではありませんわ。お二人が言ったようなことほど、具体的ではありませんでしたけれど……ほほほ」
笑い方が若干、ヘンテコになるも、なんとか、普通の返事をするミーアである。
実際のところ、あまりの論理の飛躍に頭がクラクラしかけていたのだが……。
――よくよく考えれば、ラフィーナさまとクロエが言っていることは、とても理に適っていますわ。
良いアイデアが提案されれば、躊躇なく、迷いなく、即断即決する。それこそが熟練の海月ミーアである。
数多の生徒会の会議で鍛え上げられたミーアは、思わぬ提案であったとしても、検討し、良いものであれば聞き入れる。柔軟さを持っているのだ。
柔らかきこと海月のごとき、ミーアなのであった。
「そして、これも予想なのだけど……ミーアさん、もしかして、今回の件にオウラニアさんにも協力してもらおうと思ってないかしら？」
さらなるラフィーナの問いかけに、ミーアは、穏やかな顔で頷いた。
「ええ。無論ですわ。あれだけ魚に詳しいのですから……。ぜひとも協力していただかなければなりませんわ」
それから、ミーアはオウラニアのほうに目を向けて。
「どうかしら？　オウラニアさん……」
「……どうして？」

「え？」
静かに視線を上げたオウラニアは、ミーアのほうを真っ直ぐに見つめてから……。
「どうして、ミーア姫殿下は、民のためにこんなに頑張っているんですかー？」
迷子の幼子のような、すがるような……どこか切実な表情で言った。

第四十五話　ミーア姫、真摯に答える

「どうしてって……、不思議なことを聞きますわね。そんなの、決まってますわ」

ラフィーナらの提案に乗った勢いで、ミーアはペラペラとその問いに答えようとして……オウラニアの顔を見て――考えを改める。

無論、適当なことを言うこともできた。

民を思ってのことだとか、姫として当然のことだとかなんとか……耳心地の良い言葉を適当に言うことは、できたのだ。

日夜、自らの行いを、誇張した脚色によって日記帳に書きつけるミーアは、その手の語彙を鍛えられている。だから、綺麗事なら、いくらでも口にできたのだ。

でも……ミーアはそれをしなかった。

なぜなら、オウラニアの問いかけが……まるで、過去の自分からの問いかけのように感じたから。

――そうでしたわね……わたくしは、シオンに対して、腹を立てていたんでしたわね……。

レムノ王国に潜入した時のことを思い出す。

なぜ、まだ間に合うタイミングで注意してくれなかったのか？

と、かつてミーアはシオンに怒ったことがあった。手遅れになってから正義の味方面してくるなんて、酷いじゃないか！　と。

――今のオウラニアさんは、昔のわたくしと同じですわ。きっとこのままワガママ放題を続ければ、断頭台の運命に乗ってしまうはず……。断頭台への道は広く、なだらかで、とても歩きやすい道ですものね……。であれば、ここは半端な言葉ではなく、心からの言葉で、誠実に答えてやるべきですわ。

と、そうは思うものの、実際には簡単ではない。

なにしろ、ラフィーナとクロエが興味津々とばかりに、ミーアに

視線を注いでいたためだ。
自分が断頭台にかけられないように、全力で頑張ってるだけですから！　などと、素直には言えない。なので、ミーアは知恵を振り絞り……自らの行動の要約を試みる。
「なぜ、こんなことをするのか……。それはもちろん“わたくし自身”のためですわ」
そう言って、ミーアは宣言する。
すべては、自分ファーストであると。
それこそが首尾一貫、ミーアが胸の中心に置いていることである以上、隠すことはできない。
「ミーア姫殿下……自身のため？」
ミーアの言葉に込められた熱量に気圧されたのか、オウラニアがゴクリ、と喉を鳴らした。
「ええ。そうですわ。わたくし自身のため」
ミーア、力強く頷いて……。
「わたくしが……これから先もずっと、この歩みを続けていくためですわ！」
歩みを断ち切られるような、断頭台の運命から逃れて、生き永らえるためだ、と。
すべては、そのためなのだ、と！
ミーアは、拳をグッと握りしめ、最大限の熱量を込めて語る！
語る！
「そして、願わくば帝国の姫としての歩みを、その姫に相応しい歩みを続けていきたいと、そう思うばかりですわ」
まぁ、最悪、どこかに亡命して平民になってもいいけれど、できれば今のまま姫として、姫に相応しく美味しいものを食べて、たっぷり寝て……それなりにぐうたら過ごせればベスト……。
「そのために、わたくしは頑張っておりますわ」
そうして、ミーアはオウラニアに微笑みかける。
「それがわたくしなりの答えですけど……いかがかしら？」

「姫らしく……、姫に相応しく……」
「ええ。だって、せっかく一国の皇女に生まれたのですもの……。姫としてできることを模索し、やらなければもったいないですわ」
皇女でなければ、できぬ贅沢がある。
例えば、何人かでケーキを分け合わなければならない状況において、上に載った美味しいイチゴは、まず間違いなくミーアが食べられる。
あるいは、美味しいキノコ鍋。程よく煮えたキノコに一番にフォークを刺す、一番茸の栄誉に預かるのは、姫君たるミーアなのだ。
そんな特権を享受したい！　せっかく姫に生まれたのだから、それを行使しないのはもったいない、と考えるミーアなのである。
「自分のために……」
「ええ。わたくしのためですわ。誰に褒められるためでもなく、わたくし自身のためですわ」
順番は間違えない。
ミーアが頑張るのは姫として、断頭台の運命から逃れるため。他人からの称賛や、与えられた栄誉というのは気持ちのいいものだし、断頭台の運命を遠ざけるものではあるかもしれないが……どちらが主でどちらが従かを間違えるのは危険だ。
大事なことはあくまでも“自分”が断頭台にかけられないこと。
そうして、ミーアは朗らかな顔で、オウラニアに言った。
「誰に褒められるためでもなく、自分のため……。ああー、そうかー」
オウラニアは深く……深く、ため息を吐き、どこか脱力した顔をした。それは、まるで、憑き物が落ちたかのような……すっきりとした顔だった。
それから、彼女はスッと背筋を伸ばして、ミーアのほうを向く。身長の高い彼女に見下ろされると、微妙に迫力があって……ミーア、わずかばかり、身を引く。
「ミーア姫殿下……いえ……」

と、そこで、オウラニアは言葉を切って、深呼吸した後……。
「我が師、ミーアさま……私に、姫としてー、生きる道を教えていただけないでしょうか？」
「……はぇ？」
まったく、想像の埒外の言葉に、ミーアは瞳を瞬かせるのだった。

第四十六話　オウラニアの胸に深々と刺さる！

オウラニアは……混乱の渦中にあった。
今日一日の出来事は、彼女の価値観を揺るがすものだったからだ。
――まさか、ミーア姫殿下にそんな深い考えがあったなんてー。
ラフィーナの口から語られる数々のミーアの偉業。
そして、今回の釣り大会に隠されていた意義……。
――魚の養殖だなんて……。しかも、それをきちんと各国に導入させる方法まで考えてるなんて……。なーんにも、考えてなさそうな顔をしているのにー？　ぜんっぜん、そーんなふうには見えなかったわー。
驚きは大きかったが……けれど、同時に納得感もあった。
なぜなら、オウラニアはすでに経験していたから……。
自分の観察眼、そして、常識がアテにならないということを……。
すぅっと視線を向けた先、体を洗い終えたヤナが、遠慮がちに、お湯に浸かっていた。
その額に見えるのは、恐ろしい海賊の証、『目』の刺青。けれど……。
――注意して見るまでもないわー。あの子が、そんな恐ろしい海賊のはずないじゃないー。
釣りの仕方を知らない海賊がいるわけがない。
エサをおっかなびっくりつけるような海賊がいるわけがない。
泳げない海賊がいるわけがない。
溺れた弟を助けた相手に、自分にお説教をした相手に、素直に頭を下げてお礼を言える子どもが、海賊のはずがない。
オウラニアは、そこで、改めて気付かされた。
――ああー、私、なーんにも、見えてなかったんだー。ミーア姫のことも、なにもかもー。

改めて、ミーアのほうを見る。
ほんのりと、白く立ち上る湯気、その向こう側、腕組みして、微かに眉間にしわを寄せつつ、瞳を閉じているミーアは……なんだか、ちょっぴり威厳があるように見えてしまって……。
もしかしてミーア姫って他愛ない、ちょっぴりお馬鹿さんなんじゃ？　なぁんて、疑いすら持っていたオウラニアにとって、それは、大きな衝撃で……。
――そうだー、私が持っている価値観なんて、こーんなにも簡単に覆ってしまうんだ。それなら……。
だからこそ、オウラニアは聞いてみたかった。
「どうして、ミーア姫殿下は、民のためにこんなに頑張っているんですかー？」
父の期待に応えるためだろうか？　それとも母の期待に、だろうか？
周りの人たちの？　友の？　家臣の？
大切な人の期待に、応えるためだろうか……？
されど、オウラニアの予想は、見事に裏切られる。
ミーアは言った。
「もちろん、わたくし自身のため、ですわ」
と。
「え……？　ミーア姫殿下、自身のため？」
オウラニアは、思わず息を呑みつつも、問い返す。
――それってー、自分自身の矜持にかけて、とか、そういうことなのかしらー？　それとも、まさか、なにか自分勝手な事情があるとかー？
ミーアの顔を見たオウラニアは、すぐさま、その答えを得る。
ミーアは、微塵も恥ずかしげのない、堂々たる様子で頷いてみせたから……。その威風堂々たる態度に、オウラニアは、ミーアの答えが前者であるということ……すなわち、答えは「自分の矜持のためである」と確信する……ついにしちゃった！

さらに、続く言葉がオウラニアの確信を、より強固なものにする。
「願わくば帝国の姫としての歩みを、その姫に相応しい歩みを続けていきたいと、そう思っておりますの。そのために、わたくしは頑張っておりますわ」
帝国の姫に相応しい歩み……帝国の姫の名に恥じぬ歩み……。そのために頑張っているのだ、と……。
オウラニアは……思わず、ミーアに見惚れる。
一切の気負いもなく……ほんのわずかな気恥ずかしさのみを見せつつ、言い切ったミーア姫に。
――どうして……そんなふうに考えられるのー？
オウラニアの疑問は、言葉の形を取らなかったが……それにさえ、ミーアは答えてみせた。
「せっかく、一国の皇女に生まれたのですもの。姫としてできることを模索し、やらなければもったいないですわ」
せっかく、皇女に生まれたのだから……。
せっかく、民の上に立つ者として、いろいろなことができるのだから……。
弱き者に手を差し伸べ、助ける力を持っているのだから……。それをやらないのは、もったいない、と……。ミーアは言うのだ。
「誰に褒められるためでもなく、わたくし自身のためですわ。他者の評価など、些細なことですわ」
「他者の評価……。ああー、そうかー」
その言葉は、深く……ふかーく！　オウラニアの心に突き刺さる。突き刺さってしまう。
かつて……母の期待を受けて、立派な王女になろうとした少女がいた。
かつて……父の無関心によって、立派な王女になろうという志を折られた少女がいた。
そんな少女の成れの果てであったオウラニアに、ミーアは言うのだ。

「他人の評価など関係ない！」っと！
「自分の誇りのためである！」っと！
――私なんか、この世界にいてもいなくっても、同じだと思ってたのにー……。お父さまにもお母さまにも必要とされない、私の居場所なんかないって……役割なんかなにもないって思ってたのにー。
先ほど、船の上で、ミーアは言っていた。
オウラニアの手を取って、
「あなたのような方が、この場所にいてくれてよかった」と。
あの時、確かにオウラニアは、キリルの命を救う、その役割を担った。そして、その役割は誰から与えられたのでもなく……。
――私自身が、しなきゃって思って、やったんだ。
そして、それを目の前のミーアは認めてくれたのだ。
「あなたがいてくれて良かった」と。
オウラニアは思う。もしも、自分に役割がないと思うなら、それは、そのように生きてきたからに過ぎないんだ、と。
なぜなら、それは、誰かが与えてくれるものじゃないから……。
なぜなら、それは、自分で踏み出して、見出だしていくものだから……。
そして、無意識に踏み出した一歩を、目の前のミーアはきちんと見て、評価してくれたのだ。
――あー、そうか……。これが、帝国の叡智……。お父さまが畏怖して、エメラルダお姉さまが、慕う人……。
オウラニアは、改めてミーアのほうを見て……。
――私も、自分に恥じない生き方がしたい。姫に相応しい生き方を、してみたいわー。
幸い、そのお手本が、まさに今、目の前にいる。ならば、踏み出すべき一歩目は、すでに決まっていて……。
――自分に恥じない選択を、後悔のない選択をしなくっちゃいけないわー。
そうして、オウラニアは静かに口を開いた。

「ミーア姫殿下……いえ……」
一度、言葉を切って、大きく息を吸ってから、オウラニアは言った。
「我が師……。ミーアさまー……私に、姫としてー、生きる道を教えていただけないでしょうかー？」
ミーアは、ビックリした顔で、瞳を瞬かせていた。

第四十七話　ミーア姫、人を教え導く難しさを痛感する

「し、師匠……ですの？　わたくしが？」
突然の申し出に、ミーアは思わず声を上げる。
なるほど、確かに、最近では特別初等部の子どもたちを相手に教鞭を取ったり取らなかったりしているミーアではある。しかも、ミーアの講義は突拍子もなくって退屈しないだとか、まるでお勉強じゃなくって遊んでるみたい、だとか……子どもたちにすこぶる人気のあるものでもあった。問題は、それが勉強になっているのかが微妙なところなのだが、ともかく、教師経験がないではないミーアである。
けれど……それは、あくまでも、ろくに教育を受けたことのない子どもに対してのこと。いきなり、同年代の姫の師になる、というのは、さすがに及び腰になってしまう。
――さりとて、無下に断るのも、それはそれでもったいないですし……。
せっかく、オウラニアとの距離を縮める申し出である。できれば上手いこと活用していきたいところである。
――ふぅむ……師匠……姫の道の師匠……。
ミーアは、思わず目元に触れて眼鏡（けんいのしょうちょう）を探してしまったりもして……。
「ぜひ私にも、姫として相応しく生きる道……姫道を伝授してくださいませんか？」
なんだ、姫道って……？　と思わないでもないミーアであったが……しかし……。
――姫道……まぁ、姫として生きる心得みたいな？　そんな精神論であれば、教えることはできなくもないかも……。
なにしろ、その手のものは言ったもの勝ちである。

それならば、まぁ……なぁんて思いかけるミーアであったが……。
「ああー、それともちろん、それだけではなくー、どのようにして国の危機を乗り越えてきたのかとかー、その辺りのこともぜひ、お聞きしたいですけどー」
早速、逃げ道を塞がれるミーアである。海月が釣り師から逃げることは、とても難しいことなのだ。
「そう……ですわね。まぁ、わたくしに、どれだけのことができるか、いささか不安ではありますけれど……」
「ミーアさん、そんなに謙遜するべきじゃないわ。オウラニア姫の申し出は、とても素晴らしいことだと私は思うわ」
パンッと手を叩き、嬉しそうな顔をしたのはラフィーナだった。
「私は常々思っていたのよ。すべての人がミーアさんのようであったなら、どれだけよかっただろうって……」
「え？　すべての人が……わたくしのようであったなら……？」
ミーア、一瞬、想像して……。
「いえ、それは……困りますわ」
そんなことになったら、いったい誰が善き提案を持ってきてくれるというのか？
自身がイエスマンになりたいのに、周りまでイエスマンになってしまったら、いったい誰が頭をひねると言うのか！？　下手したら、立場が逆転し、ミーアが適当に言ったことを、周囲の者たちが、特に何も考えずに、いいね！　と言うようになるかもしれない。
そんな、怖い、こわぁい状況にゾッとしつつ、ミーアは言った。
「ただ、そうですわね。わたくしが教えられることがあるのならば、教えて差し上げたいですわ。あくまでも、オウラニアさんが、オウラニアさんとして……善き王女になるための、手助けのためですけど……」
それは、紛れもないミーアの本心だった。
知らず知らずのうちに断頭台に向かっていたであろう、ダメダメな姫が、助言を求めてきているのだ。それは、ミーアには、やっぱ

り過去の自分が助けを求めているように見えてしまって……。
それを放っておくことはできなかったのだ。だから……。
「まぁ、ですけど、師匠だ、弟子だ、と言うのは、少し……こう、水臭いのではないかしら？」
「水臭い、ですかー？」
きょとりん、と首を傾げるオウラニアに、ミーアはニッコリ笑みを浮かべて。
「ええ、そうですわ。ここはセントノエル、学び舎ではございませんの。生徒同士が互いに切磋琢磨し、教え合い、刺激し合う場所ですわ。ですから、わたくしから、なにか良い考えを得たいというのであれば、それは結構なことですけど、わたくしだってオウラニアさんから学ぶことだってあるでしょう？」
それから、ミーアはラフィーナに目を向けた。ラフィーナは、涼やかな笑みで頷いていた。
「ここにいるラフィーナさまやクロエからも、わたくし、たくさんのことを学ばせていただいておりますわ。そういう関係って弟子とか師匠とか、そんな肩ひじ張ったものではなくって……」
ミーアは、悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。
「お友だちって呼ばれるものじゃないかしら？」
ミーアは、自らの存在を「師」から「友だち」に変化させ、責任の軽減化に勤める。
友人が困っていたら、ミーアは快く助けるだろう。友人が嬉々として断頭台に向かって走っていたら、諌めることもやぶさかではない。
が、師として教え導くのは……正直、ちょっと面倒くさいわけで……。
「それに、学びを得られるのは、なにも、わたくしからだけではありませんわ。接する人それぞれに得意なことがあって、学ぶべきことがある。だから……」
さらに、ミーアは責任を切り分ける。

お友だちは、別に自分だけじゃないですよぅ、と。
ラフィーナやシオン辺りにもきちんと話を聞いて教わっておけよ、と……そう主張したいミーアである。
そうすれば、仮にオウラニアが何か失敗したとして、
「すべては、我が師ミーアの教えに基づいたものです」
などと言われずに済むではないか！
そうして、ミーアの言葉を真剣な顔で聞いていたオウラニアは、深々と頷いて……。
「なるほどー。それが、セントノエルでの過ごし方なんですねー。勉強になります、ミーア師匠」
「……あ、あら？　妙ですわね……。教えたはずのことが上手く伝わっていないような……？　あら？」
改めて、人に物を教えることの難しさを痛感する、師匠ミーアなのであった。

第四十八話　ミーア姫、ベルに苦言を呈す

釣り大会の日、ミーアの弟子一号に立候補したオウラニアは、それ以来、ミーアのもとに通っては、教えを請うて来た。

その日、七日に一度のミサの後、聖堂から出ようとしていたミーアは、オウラニアから声をかけられた。

「師匠ー、こんにちはー」

「あら……オウラニアさん。ご機嫌よう」

挨拶しつつ、ミーアは若干引きつった笑みを浮かべる。

これは、まずいところで会ったぞう……などと、背中に冷たい汗が流れる。

なぜか……理由はとても簡単で。すなわち！

「ミーア師匠、今日はどんなことを教えていただけますかー？」

「そ、そうですわね。ええと……」

そう、ネタ切れ、である。

ご承知のこととは思うが、ミーアには枯れることのない叡智の泉などというものは搭載されていない。どちらかと言うと、その知能はややペラいというか、なんというか……。ともかく、教えられるストックはそれほど多くはないわけで……。

さりとて、適当なことも言えない。もしヘタなことを言ってしまったら、

「ミーア師匠が言ったからー、こうしてるだけでー」

などと、ミーアが知らないところで言われる可能性だってあるわけで……。

それは、絶対に避けたいミーアである。

それに、よくよく考えれば……ミーアとしては、隣国は安定していてほしいのだ。

隣の国で革命の火が燃え上がった時、ティアムーンにも燃え移ら

ないとも限らない。否、むしろ、蛇の連中は、そういう状況が訪れれば、嬉々として、油を注ぐような者たちではないか。
　ということで、ミーアは自身の経験に基づき、断頭台を遠ざけるための心得を、オウラニアに伝授していた。
「いいですこと？　オウラニアさん。悪いことをするのは、もちろん罪ですけれど……我ら民の上に立つ者はすべきことをしないことも、また罪なのです」
　ミーアは、静海の森での出来事を思い出しつつ、続ける。
「問題があれば、積極的に解決。これこそが大事ですわ」
　積極的に遠ざからなければ、嬉々として駆け寄ってくるのが断頭台というものなのだ。
「それに、気付かなかったというのも、言い訳にならないことが多いですわ。ですから、不幸に繋がりそうな問題は、できる限り見つけられるよう感度を良くしておいて……」
「国の……気付かないふりをしている問題、ですかー」
　と、そこで、オウラニアがとても難しい顔をしていることに、ミーアは気付いた。
「どうかなさいましたの？」
「ああ……いえ、なんでもありませんー。それでは、師匠、私はこれでー」
　そうして去っていくオウラニアを見送り、ミーアは自室へと入っていく。
「あっ、おかえりなさい。ミーアさま。今、お茶をご用意いたしますね」
　ベッドメイキングをしていたと思しきアンヌが、素早くお茶とお茶菓子の用意を始める。
「ああ、助かりますわ。アンヌ。今、ちょうどオウラニアさんとお話をして、頭を使ってしまいましたから……」
　さすがは、我が専属メイド、気が利きますわ！　などと思っていたミーアは知らない。

アンヌが、あまりミーアが食べ過ぎないよう、今日はちょっぴり甘さ控えめの野菜ケーキを用意していることなど。
本当の意味で気が利くメイド、アンヌなのであった。
っと、そこで……。
「ただいま戻りましたー」
元気よく声をあげて入ってきたのは、ベルだった。
「あら、ベル、帰ってきましたのね」
「はい。これから、準備して、特別初等部の子どもたちに冒険の何たるかを語り聞かせる時間を持とうと……」
このところ、ベルは、特別初等部にできた舎弟たちを率いて、いろいろ遊んでいるらしい。
――人徳はあるようですけど……ふーむ。ちゃんと勉強してるのかしら……？
孫娘の将来を密かに心配するミーアお祖母ちゃんなのである。
「あ、そう言えば、ベル。オウラニアさんを味方につけたことで、未来が変わったとか、そういうことはあるのかしら？」
「……へ？」
きょっとーんと首を傾げるベルに、ミーアはジトッとした目を向ける。
「一応、聞いておきますけれど、きちんとルードヴィッヒの日記帳のチェックはしてますわよね？」
「……はぇ、い！　もちろんですよ？　当たり前じゃないですか？　毎日、隅々までよーく読んでます。ボクは帝国の叡智の血を引く者ですから……」
ベルの返事を聞いたミーアは、確信する。
これは、まったくチェックしてないっぽいですわ！　っと。
「まったく……きちんと注意してないと、あなたの知っている未来からますますかけ離れた未来になっていってしまいますわよ？　とりあえず、今の時点でどんなことになってるのか、読み直してみなさい」

指を振り振り、まっとうなお説教をするミーアである。
相対的に見て、ミーアのほうがまともなことを言っているというこの状況……帝国の未来に少々の不安を感じないでもなかったが……。
「はい。わかりました……」
ベルが素直に頷き、ルードヴィッヒ日記を取り出したところで、ミーアはふと気になっていたことを聞いてみる。
「ちなみに、ベル。あなたがいた未来では、ガヌドス港湾国はどうなっておりますの？」
「どう、とは……どういう意味ですか？」
「良好なのか、もめているのか、とか。そういったことですわ」
「あー、はい。普通に国交を保っていたと思います……たぶん」
微妙に歯切れの悪いベルに、ミーアは思わずため息を吐く。
「あ、もちろん、ものすごく敵対的だとか、そういうことなら、さすがにボクも覚えてると思いますから、敵対していたとしても、裏で目立たないようにだと思います。ルードヴィッヒ先生も何も言ってませんでしたし……あれ？　言ってなかったよね？」
などとブツブツつぶやきつつ、ベルがルードヴィッヒ日記を開き、そこに目を落として……。
「あっ！」
ビックリした様子で、声を上げた。
「たっ、大変です。ミーアお祖母さま」
「なんですの？　藪から棒に。貴婦人がそのような声を出すのは、はしたないですわよ？」
時折、「おふぅ」っとか、「いよーっこいしょー」などと言う、ちょっぴり変わった声を出す奇婦人ミーアが言う。
が、ツッコミはさておき、ベルは大慌てで言った。
「それどころじゃありません。ミーアお祖母さま！　ガヌドス港湾国が……滅亡します！」
「はぇ……？」

事態は、再び動き出そうとしていた。

第四十九話　そびえ立つ……黄金の……灯台

「ガヌドスが滅亡って……。ま、まさか、わたくしが、なにか余計なことをオウラニアさんに言ってしまって、それが原因、とか……？」

恐るおそーる……、ミーアが聞いてみれば、ベルは小さく首をひねる。

「いえ、そうは書いてないみたいですけど……ふむ……ふむむ……」

その眉間に、深い皺が生まれていき……。

「なんだか、難しい顔をしておりますけど……ベル、ちゃんとわかっておりますの？」

基本的に、孫娘の学力のほどを、そこまで信頼していないミーアである。まったく信用していないわけではない。ただ、自分ほどにはできないんだろうなぁ、と思っているだけである。

……まぁ、ツッコミどころは、イロイロとあるかもしれないが……まぁ。

「もちろん、わかってますよ。ボクはミーアお祖母さまの血を引く、帝国の叡智に連なる者なのですから」

ドヤドヤァ、と胸を張るベル。

だからこそ心配なのだ！　とツッコミを入れる者は、残念ながら、その場にはいなかった。

「ええと要約すると、国王陛下が暗殺されて、同時期にガヌドス港湾国で革命が起きて……あっ！　オウラニア姫殿下が断頭台で処刑されてます！」

断頭台……と言う言葉に、ミーアは暗い気持ちになる。

「ああ……オウラニアさんも、その運命の手に捕まってしまったのですわね……」

ふぅ、っと憂いを含んだため息を吐くミーアであったが……。

「ええと、それで、王族がいなくなり、国の上層部も軒並み殺されてしまったせいで、ガヌドス港湾国内は大混乱。内乱も発生したみたいです」
「内乱……。それは、実に良くないですわね……」
革命の火というのは厄介な代物だ。国が乱れれば、食料が不足し、疫病でも発生すれば、その混乱は国境を越えて襲ってくる。
「なるべく、戦などは起きないほうがよろしいのですけど……」
「それで、ミーアお祖母さまが事態収拾のために、レッドムーン公に働きかけ、帝国軍を動かしたそうです。ガヌドス国内の各勢力が疲弊したところへの派兵だったため、帝国軍にはほとんど被害も出ず。治安維持活動は順調に進み、ガヌドスの国民からはとても感謝された、と書いてあります」
「ああ……わたくしが……やっぱり、そのようになるわけですわね。ん？　けれど、わたくしが解決したのに滅亡というのは、どういうことですの……？」
「ええと、王族もいないし、上層部も軒並み死亡、各勢力の長も敵対勢力の長と足の引っ張り合いで、誰が国を治めても荒れるだろうということで……ええと」
ベルは、そこでミーアのほうを見て、瞳をキラッキラさせながら……。
「ガヌドス港湾国は滅亡し、ティアムーン帝国に編入。ガヌドス領となったとのことです。ミーアお祖母さまに、国の未来を委ねたいと申し出てきたとか……」
「編入……それは、また実に……」
おうふ……っと、胃もたれするものを食べた時のようなため息を吐き、ミーアは天を仰いだ。
なにしろ、他国のことであれば、その責任はその国のトップが負えばいいわけだが、帝国の属領となってしまえば、その責任は皇帝が負うことになる。将来的に、ミーアが女帝となったりすれば、ガッツリとその肩に責任が圧し掛かるわけで……。

――しかも、安定した地であるならばともかく、内乱で人心が荒んだ地など、厄介極まりないですわ……。海に面した土地というのは魅力的ですけれど、それはそれで、他国からやっかみを受けるかも……。下手をすれば、港を得るためにガヌドスの内乱を放置して、ちょうどいいタイミングで介入したとか言われかねませんし……。

いかにも、蛇が喜びそうな状況に、ミーアは頭を抱える。

「あ、すごい！」

っと、そこで、ベルが歓声を上げた。

「なんですの、ベル。どうかしましたの？」

「ガヌドス領は、女帝ミーア陛下の偉業を讃えて、黄金のミーア灯台を建設した、って書いてあります」

「……黄金の……ミーア、灯台……？」

ふらぁっとベッドに倒れ込みながら、ミーアは言った。

「なっ、なんですの、その珍奇かつ不吉な名前の建物は……」

「ええと……なんでも、金で作ったミーアお祖母さま形の灯台みたいで……」

「すごいスケールですわね！　灯台って、前にも見ましたけど、あの大きな塔みたいな建物ではありませんの？」

「そうみたいですね。ほら、ここに図が描いてあります」

ベルが見せたページには、松明を持った片手を高々と上げ、もう片方の手に本を持ったミーアの絵が描いてあった。

「この右手の松明が光になっているみたいですね。左手の本は神聖典、なんでしょうか？」

ベルの言葉を聞いて、ミーア、おおう……などと呻き声を漏らす。

「松明は明かりを示すものとしてわかりますけど……神聖典を片手に持ってたら、わたくしが宗教的な権威を帯びているように見えてしまいそうですわね……。これ、ラフィーナさまや中央正教会に、ものすごく喧嘩を売った作りですわ」

ヴェールガと帝国の仲に亀裂を入れそうなその作り……ミーアの嗅覚が鋭く反応する。

「もしや、これ……裏で蛇の策動があるのでは……？」
黄金で灯台を作ろうということ自体、国費を浪費させ、革命の機運を高めようという意図が見え隠れしている。実にアヤしい……！
「こんなもの建てさせるわけにはいきませんわ。これは、いよいよガヌドス港湾国に乗り込まないわけにはいきませんわね……」
それから、ミーアは、やれやれ、と首を振り、
「それに、不肖の弟子が断頭台にかけられるというのも、気分が良い話ではありませんしね。可能な限り早く……ガヌドスに行かねばなりませんわ」
鼻息荒く、ミーアは宣言するのだった。

第五十話　些細な不幸

「国の、気付いてない問題かー」
自室に戻ってきたオウラニアは、ため息混じりにつぶやく。それから、おもむろに釣りの準備を始める。
「やっぱりー、ミーア師匠、ガヌドスの問題を、きちんと把握してるのねー」
先ほどの、ミーアの真剣な顔を思い出し、オウラニアは思わず考え込んでしまう。
ミーアを師と仰いでから、しばし。彼女は気付くことがあった。
それは、普段のミーアは、相手を油断させるためなのか、ちょっぴりお間抜けなふりをしているということ……。けれど、時折、その雰囲気が変わる時があるということ。
ものすごく真剣に、注意をしてくれる時があるのだ。
今回がまさにそれであった。
――普段の抜けた仮面を脱ぎ捨てての教え……。やっぱり、アノことを言っているんだろうなー。でもー。
「オウラニア姫殿下、また、釣りですか？」
ふと振り返れば、相も変わらず、オウラニアの専属メイドが呆れ顔で立っていた。
隠す様子もない、露骨に馬鹿にした顔……。オウラニアはそれをなにげないふうで見つめてから……。
「ねぇ、あなたー、私のこと馬鹿にしてるでしょー？」
いつもと変わらない間延びした、ちょっぴりのんきな声……。だから、メイドはうすら笑いを浮かべて……。
「いいえ、そんなことは……」
「別にいいけどー、あなた、クビになると家族が路頭に迷うんじゃなかったかしらー？」

「……え？」
メイドの顔色がサッと変わる。が、構わず、オウラニアは続ける。
「確か、妹さんと弟さんがいたわねー。まだ幼いんじゃなかったかしら？　私もお誕生日にお金を送った気がしたけれどー」
そうして、オウラニアはジロリ、とメイドの顔を見た。メイドは、恐怖に目を見開いていた。
「あ、あの、えと、私……」
「人って、馬鹿ねー。少し考えればアブナイってわかるのに、どーして不安定な足場で踊ってみようとか、考えちゃうのかしらー？　あなた、今、自分が、沈みそうな小舟の上で、飛んで跳ねて、ダンスしてたってこと気付いてるー？」
たぶん、気付いていなかったのだろうな、と、オウラニアは思う。
自分が仕える姫さまは頭が悪くって、だから、どれだけ馬鹿にしても見過ごされる。それならば、日ごろの鬱憤を晴らすために、少々無礼な態度を取ってもいいのではないか……？
一線を越えるようなことをしなければ、大丈夫なのではないか……？
怒られなければ、注意されなければ……あるいは痛い目を見なければ、人はその危険性に気付けない。
変わることができない。
でも、痛い目を見た時には、すでに手遅れで……。
「おっ、おお、お許しください。オウラニア姫殿下。私は決して、そのような……」
言い訳はあるだろう。
例えば、他のメイドがやっているから、とか。
例えば、先輩メイドにそう聞いていたから、とか。
オウラニアの日々の態度を見て、つい油断してしまったから、とか……。
まことに人という者は度し難く、愚かだ。
――自分がやったことの先に、どんな報いが待っているのか、想

像できないのよねー。私も同じだったわー。
だけど、幸いなことに、オウラニアには、注意してくれる人がいた。師と仰げる人と出会うことができた。
だからこそ……。オウラニアは言う。
「そうねー。まぁ、誰も注意する人がいなかったんなら、仕方ないってことはあるのかもしれないしー。許してあげてもいいんだけどー」
んー、っと、唇に人差し指を当てて、オウラニアは続ける。
「ねぇー、私ね、ガヌドスの姫として、相応しく行動したいって思ってるのよー？」
「へ？　姫に……相応しく？」
「そうよー。せっかく姫に生まれたのですものー。問題を解決して、より良い国にしていかないと、姫に生まれた意味がないと言うものよー。例えば、そうねー。あなたがクビになっても、ご家族が路頭に迷わない、そんな国だったら素敵だと思わないかしら？」
「は……はぁ」
オウラニアの変わりようについていけなかったのか、メイドはパチパチと目を瞬かせている。
「そのために、あなたも協力してくれると、嬉しいのだけどー」
そうして、オウラニアはニコリと笑みを浮かべた。メイドは、気圧された様子で、それでも、膝を付き頭を下げた。
「ご無礼を許していただいたばかりか、そのように胸の内をお話しいただいたこと、心から感謝いたします。精一杯の忠勤を持って、姫殿下のご厚情にお応えしたく思います」
「そうー。それは嬉しいわー」
朗らかに笑いつつ、オウラニアはメイドをじっくり観察していた。
見たところ、彼女からは悪意は感じられない。軽んじ、侮蔑するような気配も、今は鳴りを潜めている。
けれど、だからといって、オウラニアは簡単に信用しない。
自身の観察眼がそれほど優れていないことは、先日の件で骨身に

沁みていたし、それ以上に、知っていたからだ。
人の心は移ろいゆくものだ、と。
どれほど、忠誠を誓われたところで、ほんの些細なことで、簡単に人の心は変わる。だから到底、信頼するに値しないものである、とオウラニアは思っている。
でも……だけど……。
――ミーア師匠ならば、たぶん、このメイドを罰するようなことはしないでしょうからー。
そう考えて……オウラニアはふと気付く。
人の心は、ごくごく簡単に移ろいゆくもの。昨日は白かったものが今日は黒くなっていることなんか、よくあることで……。でも、それでも、変わってしまえば二度と戻らないものもあるのかもしれない、と。
帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンと出会う前の自分には、きっと戻れないだろう、と、オウラニアは確信していた。
そして、自分はミーアのことを、どんなことがあっても裏切れないだろう、ということも……。
――さすがだわー、ミーア師匠、私も師匠のように、慣れればいいのだけどー。
自らが、なにに憧れているのか……よくわかっていないであろうオウラニアであった。
彼女の観察眼は、彼女が思っている以上に、アテにならないものになってしまったのかもしれなかった。不幸な話である。

第五十一話　神の御旗を振りかざせ！

「ふーむ。ガヌドス港湾国に行くのは良いとして……。どういう大義名分を掲げていくのか、ですけれど……。これはなかなかに大変ですわね……」

その日の夜、ミーアは寝間着に着替えて、ベッドに横たわりながら、考え込んでいた。

ガヌドス国王の暗殺時期は、思いのほか近かった。

「移動の時間を考えると、すぐにでも動き出さなければ間に合わなくなりそうですわ」

まぁ、最悪、暗殺されたところに、オウラニアを伴って入って行って、混乱を治めるだけでも良いかもしれないが……。

「オウラニアさんの気持ちを慮れば、できれば、暗殺自体を防ぎたいですわ。それに、混乱が起きてから行くのでは、それを静めたわたくしの功績とやらが発生してしまい、やはり、例のアレが建ってしまうかもしれませんわ……それはできれば避けたいところ……」

ということで、基本線は暗殺を防ぐこと。その原因になりそうなことを潰すことだ。

ゴロゴロリン、と転がりながら、ミーアはつぶやく。

「しかし、となると、皇女専属近衛隊を動かすわけにはいきませんわね。平時の隣国に、軍隊を伴って行くのは不穏なこと。まぁ、幸いにも、一人いれば百人襲ってきても大丈夫、みたいな方（ディオン）がおりますから、護衛や暗殺を止めることはできるでしょうけれど……。彼を動かすためにも、ルードヴィッヒを動かすためにも、なにか大義名分が必要ですわね……さて、どうしたものかしら……むにゅ」

ぶつぶつ、深刻そうにつぶやきつつ、流れるように寝落ちしそうになっていたところで……コン、コン、コン……っとノックの音が響いた。

ハッと目を開け、身を起こす。
応対に出たアンヌの背中越しに見えた人物、暗い廊下に立っていたのは……。
「あら、オウラニアさん、なにか、ございましたの？」
オウラニア・ペルラ・ガヌドスが、思いつめたような顔で立っていた。
「ミーア師匠……夜分に申し訳ありませんー」
ぼんやりとした明かりに照らされたオウラニアは、真剣そのものの顔をミーアのほうに向けて……。
「ご相談したきことがございますー」
「相談……。そういうことでしたら……」
っと、ミーアは部屋の中に目を向ける。
「ふむ……」
部屋では、すでに、パティとベルが寝る準備をしていた。まだまだ寝るには早い時間だったが、子ども（……とミーア）は早寝早起きなのだ。
「ベル、申し訳ないのだけど、今夜はリーナさんのところで寝てもらえるかしら？　それと、パティは、ヤナたちの部屋に行ってもらえる？」
てきぱきと人払いを済ませてから、ミーアは、改めてオウラニアを部屋に招いた。

「それで、相談というのは、なにかしら？」
ちょこん、と椅子に腰かけたオウラニアは、おずおずと口を開いた。
「ミーア師匠、昼間に言ってたじゃないですかー。ガヌドス港湾国にある問題に目を向けろ、と」
――はて？　そんなこと言ったかしら……？
なぁんて、首を傾げそうになるも、グッと我慢！　踏みとどまる！
「ええ……。その通りですわ。問題があれば積極的に解決。そのた

めに、きちんと問題がないか探すよう心掛けよ、と言いましたわ」
ミーアの言葉を吟味するように、オウラニアはそっと目を閉じて……。
「ガヌドス港湾国には、大きな問題がありますー。それは、正されるべき問題でー」
そこで、オウラニアは首を振って。
「ううんー、正されるべきとかじゃなくって……私は、それを、なんとかしたいと思ってるんですー」
はっきりと言った。
その瞳に宿る力強さに、ミーアは、思わず息を呑んだ。
「でもー、私一人ではどうにもできない。どうすればいいのか、わからないんですー。だから、ミーア師匠に聞きにきましたー」
「なるほど……。それで、その問題とは……？」
ゴクリ、と喉を鳴らすミーアに、オウラニアは一度、大きく息を吸って、吐いてから……。
「ガヌドスの問題、それはー、ヴァイサリアンの隔離地区ですー」
「隔離地区……？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、オウラニアは話し始める。
「ご存知のように、ガヌドス内には、ヴァイサリアン族への差別意識があり、人々は、彼らを忌避しています」
「ええ。そのようですわね。聞いておりますわ」
辛うじて知っていた情報だったので、ミーアは自信満々、若干、ドヤァッとしつつ頷いた。
「そんなヴァイサリアンの人々なのでー、国の一部の区画に隔離して、強制労働……奴隷労働を強いているんですー」
「奴隷労働……。まぁ、まだ、そんな制度が残っているんですの？」
帝国にもかつては、農奴と呼ばれる奴隷が存在してはいた。けれど、それは、ミーアの前の前の代、すなわち……。
――あら、そういえば、農奴の制度がなくなったのは、パティの世代なんですわね。気付きませんでしたけど……。

以降、奴隷は言葉だけの存在となった。
すべての人間を表す時、皇帝から奴隷まで、という言い回しを使うが、あくまでも、奴隷はそのような表現の中でのみ存在するものとなったのだが……。
「ガヌドスには、未だにその奴隷制度が残っていると？」
「無論、奴隷とは呼びませんが、実態は奴隷ですー。隔離地区に押し込めた彼らを、造船公社で、働かせているんですー。衣食住は保証するという名目ですけどー、給金はなく、移動の自由もないんですー」
ミーアは、深刻な顔で考え込む。
――なるほど。その扱いは、確かに奴隷扱いと言えますわね……。しかし、ふむ、これは……。
「私も、海賊なんだからー、閉じこめて働かせるのは、当たり前だと思ってましたー。ガヌドスの者たちは、誰もそのことを疑ってません。だけどー、でもー」
すっと目を逸らして、オウラニアは言う。
「……ヤナとキリル、あの子たちも、ヴァイサリアンだからー」
「ああ……。なるほど」
その言葉で、ミーアは納得する。
ただ言葉でだけ認識している存在と、実際に遊んだ存在……。
共に釣りをし、お風呂に入り、食卓をも囲んでしまえば、もはや、その者が奴隷に堕とされても良いとは思えない。
人間というのは、そういうものなのだ。
「あの子たちも、もしも、セントノエルに来られていなかったらー、あの場所に隔離されていたのかも、って。隔離地区にも、あの子たちと同じような子どもがいるのかもしれないって、思ったらー」
「ええ。気持ちはよくわかりましたわ。しかし……迫害されて、隔離されている少数部族……。虐げられている民、ですのね……」
腕組みし、ミーアは、ふむーむ、と唸る。
「それは……なかなか、使える状況じゃないかしら？」

ミーア、思わず、腕組みして唸る。
「なにか、言いましたかー？　ミーア師匠？」
「いえ……」
っと、首を振りつつも、ミーアは考える。
――これは、なんだか、いけそうな気がしますわね。
なぜなら、実績があったからだ。
オウラニアが口にした事実、それは、それこそが……前の時間軸、ティアムーンが攻められた理屈であった。
民を安んじて治めよという……神より課せられた義務を果たさぬ王族を、咎めるという大義名分。
――あれは、どの国にも認められ得る……完全無欠の大義名分でしたわ。それを用いれば、ルードヴィッヒやディオンさんも否とは言わないはず……。であれば……。
そうして、ミーアは静かに顔を上げて、
「ガヌドスへの道が、開かれた感じがしますわね……」
確信に満ちた声で言うのだった。

第五十二話　ミーア、ちょっぴりお祖母ちゃんっぽくなる

オウラニアから話を聞いてすぐに、ミーアは行動を開始する。
はじめに訪れたのは、ラフィーナのところだった。
そこで、大義名分に、中央正教会のお墨付きをもらうためだ。
聖女ラフィーナの「いいね！」がもらえれば、ルードヴィッヒたちも嫌とは言うまい……と思っていたミーアであったが……。ラフィーナの反応は予想を超えていた。
「ご機嫌よう、ミーアさん」
「ああ、ラフィーナさま、ご機嫌よう。お時間をいただいてしまい、申し訳ありません」
上機嫌に迎えてくれたラフィーナに、ミーアはオウラニアから聞いたガヌドス国内の話をした。
「そう……なるほど……」
すべてを聞き終えて、ラフィーナは一言。
「それは、確かに許せないわね……」
大変、珍しいことに……、ラフィーナは笑っていなかった。
涼しげな笑みを浮かべて怒っている時のラフィーナを、ミーアはたいそう恐ろしく思っていたものであったが……本気で怒った時のラフィーナはもっと怖いのだと、改めて知ったミーアである。
「もっ、もちろん、あくまでもオウラニアさんから聞いただけの話で、正確なことは行ってみないとわかりませんわ。多少、誇張が入っているのかも……」
「もちろん、承知しているわ。ミーアさんに弟子入りし、オウラニアさんも自分がしなければいけないことに気が付いて、気合が入っているのかもしれない。だけど……」
頬に手を当て、ラフィーナはつぶやく。
「いずれにせよ、放ってはおけない問題ね」

「ええ。わたくしも、助けを求められた以上は、全力で事に当たる所存ですわ」
ミーア、どん、っと胸を叩いた。
「そう……。ミーアさんが自分で行くのね」
「ええ、まぁ……」
不本意ながら……と、心の中でつぶやくミーア。
正直なところ、ミーアとしてはディオン辺りを派遣して、それで済むならば、そうしたいところではあるのだが……。
――暗殺を防ぐだけならばまだしも、革命が起こるというのであれば、その芽をしっかりと刈り取らなければなりませんし。ガヌドス側の姿勢をきちんと糾弾できるのは、国王と同格である皇帝の血筋のわたくしぐらい……。いっそのことシオン辺りにぶん投げてしまいたいところですわ。
それはそれでやりすぎるかもしれないが……などと考えれば、どうしたって、自分で行く以外にないわけで。
「ということは、今年は、ミーアさん、聖夜祭には出られないのね……」
そうつぶやくラフィーナは、ちょっぴり寂しそうだった。
「ええと、その代わりにはならないかもしれませんけど、今年もわたくしの生誕祭にご招待させていただきますわ。小麦の収穫事情を考えると、あまり贅沢はできないと思いますけど……」
現状、帝国内では、表立った飢饉などは起きていない。が、かといって無駄にできるほど食料が余っているわけでもない。
――正直、わたくしの生誕祭とか、やめといたほうがいいと思うのですけど……。
けれど、同時に、お祭りやイベント、楽しいことをすべて中止してしまうのも、人々の心を沈ませるもの。目端の利く人々の中には、来年あたりヤバイんじゃないか？　などと不安に思っている者もいるだろう。
その不安感を払拭するうえでも、みなが楽しめるようなイベント

を開くのは重要なことです！　などと、もっともらしい理由をルードヴィッヒ辺りは言っていたが……。
――やめろと言っても、お父さまはやめないだろうから、それなら、有効に生誕祭を使おう、ということなのでしょうね。ルードヴィッヒの真意は。その理屈もわからなくはありませんけれど……また、今年も巨大なわたくしの雪像を立てる、などと言われたら、どうしようかしら……。
厄介なのは、黄金像などとは違って、アレは、ほとんど無料でできてしまうということ。
人件費がかかっているかと思いきや、アレを作った者たちは、みな嬉々として、自ら進んで制作に携わったのだとか……。
――まぁ、やりたいと言う方がいるのであれば、無理に止めることはないのでしょうけれど……。
なぁんて、物思いにふけっていたミーアは、ふとラフィーナのほうに目を向ける……と。
「ありがとう、ミーアさん。楽しみにしているわ」
なんだか、キラッキラした笑顔で言われてしまった。
「あ、それと、もしも、私に手伝えることがあったら、なんでも言ってね」
などと、心強いお言葉までいただいてしまった。
――さて、これでラフィーナさまのオーケーはいただけましたし。後は、一緒に来ていただく方の人選ですけど……。
などと考えつつ、ミーアはラフィーナの出してくれたお茶をすする。
「あら、このお茶、なんだか、変わった香りですわね」
「うふふ、さすがミーアさん。よく気付いたわね。実は、これ、海藻を使ったお茶なのよ」
ラフィーナはおかしそうに笑って。
「東方の島国では、こうしてお茶に乾燥させた海藻を入れるんだそうよ。先日、魚について調べた時、一緒に載っていたから、試しに

どうか、と思って」
「海藻……。そういえば、少し塩辛い感じもしますが……」
もう一口すすり、ミーアは、ほふぅっと息を吐き……。
「ああ、なんだか落ち着きますわね。なんとも言えぬ滋味深さがございますわ。しかし、しょっぱいからか、なんだか、余計にお茶菓子の甘味を感じますわね」
などと、ご満悦の笑みを浮かべるのであった。

ちなみに……ミーアが、そのお茶にピッタリの、モチモチした新菓子と出会うのは、翌年のことであった。

第五十三話　規格外ヒロイン〇ミーア！

さて、ラフィーナとの会談を終えたミーアは、休むことなく、目的地へと向かっていた。大変珍しいことであるが、今日のミーアはちょっぴり勤勉だった。とっても珍しいことであった。今日のミーアは、ウルトラレアミーアなのだ。

なにしろ、先ほどのラフィーナの怒りまくった顔を思い出すだけで……。

――こっ、こわぁっ！　下手なことをして失敗したら、一大事ですわ！

もしかして、ラフィーナには内緒で事を進めたほうが良かったのでは？　などと思わなくもないのだが……。聖夜祭にミーアが出られないとわかった時の、ちょっぴり寂しげな顔が、それはそれで気になってしまうミーアなわけで……。

「くぅっ、これは、失敗しないよう、全力で頭を振り絞らねば……」

決意を新たに、ミーアは廊下を急ぐ。

「しかし、ガヌドスへの潜入は、やはりある程度、人選を絞るべきかしら……」

本来であれば……誰も彼も連れていき、数の力で圧倒したいミーアである。

戦において、より多くの兵を集め、圧倒的大軍をもって敵を圧倒する……物量作戦こそが、ティアムーン帝国の基本戦術。

大将軍ミーアは、いつでも、その構想に則って思考を進めていたのだが……。

「今回の場合、正式に乗り込むわけにはいきませんし、あまり大人数で行って目立つのは避けるべきかしら……」

ミーアは、うーむむ、と唸る。

「大義名分があるとはいえ、帝国皇女が訪問するとなれば、準備に

時間がかかるでしょうし、警戒したあちらが横槍を入れて来るかも……。繋がりが深いグリーンムーン家から話を通してもらうのも考えられますけれど、それで上手くいくかは、まったくの未知数」
今回も、ミーアの一番の目的ははっきりしていた。
すなわち、ディオン・アライアを、暗殺現場に連れていくこと。
これである！
「あの方がいれば、大概、なんとかなってしまいますし。敵だってなかなかに対策も練りづらいはず。となれば、ディオンさんを引っ張って、わたくしが直接行くのが一番手っ取り早いはずですわ」
腕組みしつつ、ミーアはつぶやく。
「オウラニアさんのお友だちということで入国するのもありですけど、ガヌドス国王に警戒心を持たれてしまっては、やはり動きづらいはず……」
なにより、その場合、暗殺者がこちらの動きを警戒して、姿を現わさないかもしれない。
「最悪、暗殺の日付がズレて、わたくしたちが帰国した後に実行、などということにもなりかねない。ということは、暗殺を防ぎつつ、できれば犯人は捕らえておきたい。とすると……基本的には、ルードヴィッヒの日記帳の流れをなぞりつつ、暗殺の場面にだけシュシュッと介入する。それがベストですわ」
そのためには、できるだけガヌドス国王には、ミーアたちがいない体で振る舞ってもらったほうがありがたい。
「やはり、行くのは少数精鋭。なおかつ帝国が横暴を働いた、などと言われぬよう、他の国の方にも監視してもらいたいところですわ。となると、また、アベルとシオンにお願いするのがよろしいかしら？」
ラフィーナについてきてもらうことも考えないではなかったが……。
「ラフィーナさまも、さっきの様子だと、割と素直についてきてくれそうな気はしますけど……さすがにネームヴァリューが大きすぎ

ますわ。なにかあったら大変ですし、ここは、アベルとシオンに頼らせてもらいましょうか」
そうしてミーアは、目的地である鍛練場へと急いでいた。
二人はこの時間、剣術の鍛練を行っていると予想していたが……その予想は見事に的中する。
ミーアはついてそうそう、剣を持ち、向かい合う二人の少年の姿を見つけた。
向かって奥側、だらりと、地面に垂らすように剣を構えるのはシオン。手前側には、アベルがこちらに背を向けて立っている。
そのしなやかな、引き締まった背中に、ミーアは思わず、うっとりしかけて……。
「行くぞ、アベル！」
気合の声。と同時に、シオンは剣を高々と頭上に掲げる。
その迫力に溢れた立ち居姿を見た瞬間、ミーアの胸が……ドックゥン！　と高鳴る！
なんと、ミーアは、シオンの凛々しい姿に思わずときめいてしまった……わけではなかった！
そんなヒロインらしい反応を、ミーアに求めるのは、いささか野暮がすぎるというもの。規格外のヒロイン（）ミーアには、そんな反応できるはずもなく。
ミーアは、ただ、シオンの放った剣気をまともに喰らい、小心者の心臓がすくみ上がらせただけだった。
ひぃっ！　と息を呑み、その場に尻餅をつきそうになったミーアであったが……寸でのところで救われる。なぜなら、
「来い。シオン！」
遮るように、アベルが、間に入ってくれたからだ。どっしりと地に足をつけ、シオンと対峙するアベル。頼もしくも、威風堂々たる男の背中に、ミーア、思わず、
「アベル……」
ほわぁ、っと、ちょっぴり間の抜けた声を上げる。

直後、シオンが動く。
高々と振り上げた剣が、瞬き一つの間に、アベルに向かい振り下ろされていた。
アベルは、それを左手の……左手の？
「……はて？　盾……？　アベル、あんなの持ってたかしら？」
ドツンッと鈍い音を立てて、剣と盾が激突。勢いを殺すためか、アベルが一歩後退し、直後、盾を投げ捨てて、両手持ちにした剣で斬りかかる。
「はぁあああっ！」
気合の声と共にアベル必殺の上段斬り下ろしが入る。が、シオンは難なくそれを受け止め、さらに、鍔迫り合いから思い切り押し返した。
両者の距離が離れたところで、アベルが、小さく肩をすくめた。
「やれやれ……。今のは決まったと思ったんだが……」
「一連の動作自体は悪くなかったが、普通に先制攻撃をする時より、斬撃が軽かったな。もしかして、第一撃を受け損なって、腕がしびれたんじゃないか？」
「ははは、かなわないな。盾だからって、楽に受けられるとは思っていなかったが……。衝撃を殺しきれないと、酷い醜態を晒しそうだよ」
っと、そこで、アベルがこちらを見た。
「やあ、ミーア。こんなところに、どうしたんだい？」
爽やかな笑みを浮かべるアベルに、ミーアもまた、柔らかな笑みを浮かべて。
「ええ、少しお二人にお話ししたいことがあって来たのですけど……」
と、そこで、ミーアは首を傾げた。
「その盾はどうしましたの？　以前から持っていたかしら？」
「ああ、これか」
アベルは左腕に持った盾を軽く持ち上げて、

「どんなものからでも君を守れるように、とね。先日から訓練しているんだけど……」
っと、照れくさそうに言ってから、
「なかなか、上手くいかなくってね」
「まぁっ！」
ミーア、その言葉に、思わず感動してしまう。
――ふふふ、アベルがまた頼もしくなってきてる気がしますわね。
「ところで、どうしたんだい？　わざわざ、鍛練場に来るなんて」
「ああ。そうでしたわ。肝心なことを忘れるところでしたわ」
ミーアは、アベルとシオンを交互に見てから、
「実は、少し相談したいことがございますの」

第五十四話　ミーアは主張したいのである！

鍛練場の一角に据え付けられた木製のベンチに三人は移動する。タイミングを見計らったかのように、アンヌとキースウッドが、飲み物を用意してきてくれた。

「どうもありがとう。助かりますわ」

アンヌに、そう微笑みかけてから、ミーアは改めて、二人の王子たちに目を向ける。

「実は、ガヌドス港湾国に行く用事ができましたの」

そうして、ミーアは、オウラニアから聞いた話を、そのまま伝える。堂に入った伝令兵ぶりである。

「恐らく、これはいずれ露見してしまったこと。そうなれば、ガヌドス王家の威信は失墜しかねませんわ」

ミーアとしては、まず、暗殺を防ぎたいわけだが、同時に、王権移譲などという事態も防ぎたいのだ。属領扱いに……などということにならぬよう、きちんと自浄作用を見せてほしいわけで……。

――黄金の不吉なモノが建たぬためにも、できるだけわたくしは、ひっそりと行動したいところですわ。

大切なことを確認しつつ、ミーアは続ける。

「ゆえに、実態の調査と、ガヌドス国王との対談。できれば、改心にまで導きたいですわ。幸い、オウラニアさんはすでに、自国の問題解決を望んでいる。であれば、彼女に協力し、王を説得し、状況の是正をすることこそが肝要」

目標を明確にするのが大切だ。ミーアが手ずから悪い奴をとっちめに行く、などと誤解をされた日には、たまったものではないのだ。

「そうか。喜んで行かせてもらうよ。我が国も、革命騒動で痛い目を見たことがあるからね」

いの一番に言ったのは、アベルだった。

自国の王に問題を認めつつ、それでも、王権の必要性を訴えていたアベルである。ガヌドスのことも、他人事とは思えなかったのだろう。
「ふふ、助かりますわ。アベル」
満足げに頷き、今度はシオンに目を向ける。
――まぁ、シオンは、この手のことにうるさいですし、放っておいても首を突っ込んでくるはず。ガヌドスが正義にもとる状況にあるのは確かなわけで……。
などと油断していた……のだが。
「俺は……今回は遠慮させてもらおう」
「……はぇ？」
想定外の返事に、ミーアは思わず、目をパチクリさせる。
「まぁ、どうしましたの？　シオン、あなたらしくもない。どこか、具合でも……？　お腹でも痛かったり……？」
などと、ものすごぉく心配そうな顔をするミーアに、シオンは苦笑して、
「いや、そうじゃないんだ……ただ……」
と、なにか言いかけて、けれど、すぐにその言葉を呑み込んで。
「実は、エシャールに会いに行ってやろうと思っていたんだ」
「あら、エシャール王子に？」
「ああ。サンクランドを離れて、やはり寂しがっているのではないかと思ってな。頑張っているらしいから、少し労ってやりたいと思うんだ」
「なるほど……。そういえば、夏にも会いに行ってましたわね。まぁ、そういうことでしたら……」
と一応納得するミーアであったが、微妙に腑に落ちないものがあった。
あのシオンが！　あの正義のためならば、その身を省みぬ男、シオン・ソール・サンクランドが！　このガヌドス港湾国の状況を見て黙っている……？

そんなことがあり得るだろうか？
――ふぅむ、もしや……シオンの偽物なんじゃ？
なぁんて、益体のないことを考えてしまうミーアなのであった。
――しかし、シオンがついてこないというのは、少々残念ですわね。
同時に、ミーアは思う。
ミーアは……、シオンに見せてやりたかったのだ。
かつての帝国に似たガヌドス港湾国に対し、どのように働きかけるか、しっかりと見せつけてやりたかったのだ。
世の中には黄金律と呼ばれるものがある。
自分がしてほしいことを相手にもしてあげなさい、と説くその力強き言葉。
さらに、その発展形として、自分が嬉しいと感じることではなく、相手が嬉しいと感じるであろうことを考えて、してあげなさい、というものも存在している。
ゆえに、ミーアは“黄金律”を利用し「ガヌドスへの自らの態度をもって、してほしいことを表明」し、シオンをはじめ、周りの者たちが黄金律の発展形を行いやすいよう……ミーアのしてほしいことを察して行いやすいように誘導したいと考えたのだ。
すなわち「もしも、帝国がヤバイことになったら、こうしてほしいですよ」と。
「わたくしは、こうしてもらえると嬉しいので、ちゃーんと、察してね？」と、訴えかけたかったのだ。
まず教えて……できれば優しく注意して……それでも聞かなければ説得して……粘り強く諭して……それでもだめなら警告して……最後通告をして……そういうプロセスをしっかり経てなおダメだったら、仕方ない。革命。断頭台、と……。
要は……段階というものがあると思うのだ。
地下牢に堕として、首を斬り落とす前に、もっともっともぉっと！　やることがあったと思うのだ！

仮に、それが普遍の定理ではなくとも、自分の時には、そうしてほしいのだ、と、きっちり伝えておきたいミーアなのである。
――ラフィーナさま同様、シオンも丸くなってきたとはいえ、油断は禁物。人の心は移ろうもの。いつの日にか、ちょっと正義の名のもとに断罪してみたくなったりするとも限らないわけですし。
ちょっと断罪されるにはちょうど良い首の持ち主であるミーアとしては、用心するに越したことはないわけで。
ミーアはそっとシオンのほうを窺う。
「では、グリーンムーン公爵領に行くつもり、と……」
「そうだな。聖夜祭に少し顔を出すか。それより前に帝国に行かせてもらって、そのままサンクランドに戻って年を越すか、と考えているが……」
――となれば……エメラルダさんに連絡を入れておけば……。さりげなくシオンをガヌドスまで引っ張ってくるように言っておけば、なんとかなるかもしれませんわね。
ミーアは、内心でニンマリと笑みを浮かべるのであった。

第五十五話　ミーア並み感

「どうかしたんですか？　シオン殿下」
部屋に戻って早々に、キースウッドが尋ねてきた。
「どうかした、とは？　なんのことだ、キースウッド」
「ほう、おとぼけになる？　例のガヌドス港湾国のことです」
やれやれ、と首を振りつつ、キースウッドが言った。
「本当に、ミーア姫殿下に、すべてお任せになるおつもりですか？」
「なんだ、不満か？　てっきりお前は喜んでくれると思ったんだがな。いつも、気軽に危険地帯に突っ込んでいくな、と言っているから」
「それはそうなんですがね……。ただ、あの手のことを放置するというのは、あまりにもシオン殿下らしくはないと思ったものですから……」
キースウッドは頭をかきつつ言った。
シオン・ソール・サンクランド――自らの主は、あの手の民を踏みつけにするような非道を見過ごすような男ではない。
今回の場合は、ミーアが対処に当たるとのことだから、見過ごすことにはならないだろうが……さりとて、手をこまねいてなにもしないというのは、実にらしくない。
まして、エシャールのもとを訪れるというのも、それほど優先順位が高いことではなかったのだから、なおさらだ。
「てっきり、怒りに燃えて、先陣をきって乗り込むものとばかり……」
「ははは。さすがにそこまではやらないが……まぁ、そうだな。聞いた限りでは確実にガヌドス港湾国が悪いと俺も思うし、放置もできないだろう。少なくとも現地に行き、王を、国の上層部を問いただす必要はあるだろうな」

思案げな顔で答えるシオンに、キースウッドは……、
――まさか、シオン殿下の偽物なんじゃ！？
などと、ミーア並みの感想まで抱いてしまう始末。重症である。
――っと、ふざけている場合ではないな……。
一度、二度、咳払いをしてから、
「もしや、ミーア姫殿下のことが、まだ引っかかっているとか？」
あえて軽い口調で尋ねた。
彼の知る限り、あれは、シオンにとって初めての失恋だったはず。いや、そもそも、恋愛自体、彼の主はしたことがなかったはずなのだ。
もしかすると、あれが、自分の思っている以上の傷になっているのでは……？　と、不意に心配になるキースウッドである。
色恋が、名君の目を曇らせるなどと言うことは、古今東西、どこの国にでも起こることなわけで……。
こんなことなら、俺が動いて、恋の一つや二つ、経験させておくべきだったか？　なぁんてことまで考えだしてしまう苦労人、キースウッドである。
「ああ、なるほど。確かにそういう解釈もあるか」
シオンは、おかしそうに笑った。
「ミーアと共に行けば、彼女の政治手腕を見ることができる。ガヌドスに対して、どのように働きかけるのか、その叡智をそばで見ることができるし、何かしらの手助けもできるかもしれない。が、反面、フラれた女性から政治を学び、その手伝いをするのは複雑だろう、と……そんなところか？」
「ええ。まぁ、そんなところですが……。違いましたか？」
キースウッドのほうを見て、シオンは苦笑交じりに首を振る。
「そのほうが、人間らしい感情と言えるのかもしれないが……残念ながらそうじゃないんだ。可愛げがなくて、甚だ申し訳ないが……俺が考えてるのはもう少し冷めたことだ」
そうして、シオンは目を開ける。その瞳に宿る知的な輝きに、キ

ースウッドは安堵のため息を吐く。
「なるほど。つまり、サンクランドの王族としての判断だと？」
「サンクランドの王族……というよりは、どちらかと言うと、蛇と戦う仲間としての判断、ということになるかな。サンクランドの王族であれば、キースウッドのイメージ通り、一番に行き、悪を正すべきだろう」
そこでシオンは言葉を止める。しばし黙考して後、
「これは、卑下して言うわけではないんだが、知恵働きならばミーアとルードヴィッヒ殿がいる。護衛にはディオン殿とアベルがいる。ならば、俺があえてミーアに同行する理由は、あまりないのではないか？」
ミーアが築いてきた家臣団は極めて優秀だ。アベルにしても、自身の命の懸けどころを見定め、メキメキと剣の腕を上げている。そうなると、シオンがすべきことというのは、確かにあまりないかもしれない。
「ふむ……つまり、遊兵に甘んじるつもりはない、と？」
「先陣切って敵に斬り込みたいという思いはないではない。非道が行われていることを知っても、怒りもせず、なにもせず、放置する……そのような者にはなりたくはない。だから、実際、盗賊団などが相手ならば、喜んで先陣をきるのだが……」
「いや、喜んで危険地帯に踏み込まないでくださいよ……」
などと言うキースウッドの苦言を華麗にスルーして、シオンは続ける。
「蛇と戦うには、そのやり方では駄目なのではないだろうか。もっと後方から、戦局全体を見渡すような……そんな視点が必要なのではないか、と、最近は思うようになってな」
「ああ。なるほど。それで、エシャール殿下のところ……。グリーンムーン公爵家、ですか。確かに、あの家は、帝国の外交に精通している。オウラニア姫殿下も、エメラルダ嬢の友人だった。となれば、当然、ガヌドスの情報も入ってきやすい。なにかあった時には

即座に行動でき、なおかつ、最前線に立つミーア姫殿下とは別行動ができる、か」
顎を撫でながら、キースウッドは続ける。
「確かに、蛇は、神出鬼没。しかも、“堅固な城塞のある場所を、ただ一つの進軍路”と見誤る愚は冒さない。むしろ、ガヌドス港湾国に、最強戦力であるミーア姫殿下ご一行が行ったとすると、別の場所で騒動を巻き起こす可能性もある、と？」
「別の場所かどうかはわからないがな。ともかく、引いた目で、冷静に事態の全容を見る……そんなことをしてみたいと思ったんだ」
それから、シオンはわずかに表情を引き締めて……。
「アベルが、自らの道を見定めて、歩き出したんだ。俺も負けてはいられないだろう」
静かに、決意のこもった声で言うのだった。

第五十六話　……状況は錯綜しているのだった

帝都ルナティアを目指して、馬車の一団が道を行く。周囲を護衛の兵に守られた馬車の数は二台。

一台目に乗るのは、ヤナとキリル、ベルとシュトリナの年少組だった。それに続き、ミーアとアベル、アンヌ、それにパティの乗った馬車が道を急いでいた。

「ふぅむ、帝都ルナティアまでは、まだ遠いですわね」

窓から外を眺めながら、ミーアは、ふぅっと、切なげなため息を吐いた。

本当であれば、聖夜祭で、美味しい料理を食べられたはずなのに……と思うと、気持ちも暗くなろうというものである。

「なにか、お飲みになりますか？　ミーアさま」

そんなミーアに気遣わしげな声をかけるのは、アンヌだった。

「そうですわね。次の休憩でお茶にしましょうか……。疲れを癒すために、少々甘味の強いものがよろしいのではないかしら？」

などと注文を付けていると……。

「ところで、ミーア、聞いても構わないだろうか？」

正面に座るアベルが話しかけてきた。

「あら、なにかしら、アベル」

「ガヌドス港湾国のこと、どうするつもりなのか聞いておきたいと思ってね」

「ああ。そうですわね。当面すべきこととしては、オウラニアさんに協力して、奴隷状態におかれているヴァイサリアンを解放することですわね」

その前に、ガヌドス国王の暗殺を防ぐこととというのがあるが……これを口にすると、いろいろと問題がありそうなので、とりあえず黙っておく。

――暗殺の現場に近づくなんて言ったら、きっと止められてしまいますし……。かといって、ディオンさんだけを送り込むのは、それはそれで恐ろしいですわ。やりすぎてしまいそうで……。

ということで、とりあえず、オウラニアの後ろでこっそりサポートするだけですよ、という体で言っておく。それから、ふと思い出したかのように、ミーアはポンっと手を叩いた。

「そういえば、レムノ王国は、その後、どのような様子ですの？」

その問いかけに、アベルは苦笑いを浮かべた。

「相変わらず、かな。革命騒動以降、民に過度な重税を課さぬよう、ドノヴァン伯ら良識的な政治家が頑張ってくれているが……。軍事偏重の考え方は変わっていないし、領土拡張の野心も相変わらずだね」

それから、彼は首を振って……。

「今回のガヌドス港湾国の件も、言い出したのがボクだったら、ラフィーナさまは支持してくださらなかったんじゃないかな？」

「まぁ！　そんなことないと思いますけど……」

「いや、いいんだ。それに“相変わらず”ではないことだってある。例えば、兄さまのこととかね」

「あら……？　ゲインお義兄さまが？」

無意識かつさりげなく、既成事実を作るミーアである。が、それに気付いた様子もなく、否、むしろ、それを自然に受け入れたような笑顔で、アベルは言った。

「ヴァレンティナ姉さまに、よく会いに行っているようなんだけどね。その影響からか、最近は、母や姉、それにメイドたちにも、あまり乱暴な態度を取らなくなったらしい。メイドたちが困惑しているようだったよ」

「まぁ、それは良いことですわね」

アベルの兄、ゲインと言えば、次なるレムノ王国の国王である。アベルの母国が、このまま平和に安定してくれれば、それに越したことはないわけで……。

――しかし、ヴァレンティナお義姉さまからの影響って、よくよく考えると蛇の巫女姫の影響ということかしら？　あまり良いこととは思えませんけれど……。いえ、でも逆に、ゲイン王子が良い方向に行っているとするなら、ヴァレンティナお義姉さまのほうが変わりつつある、ということなのかしら？

ううむ……などと、思わず考え込むミーアであったが……。

「だが、いずれにせよ、レムノ王国がどうなっていくのかは未知数だ。良いほうに行ってくれればいいが、逆もありうる。ガヌドスも、同じようなことにならないか、心配ではあるんだ。当面の問題は先送りにされ、どちらに転ぶかわからない、そうなってしまうことがね。だから……ボクは思っている。ミーアが直接、統治したほうが確実なのではないか、と」

そうして、アベルが視線を向けてきた。考え事から、瞬時に思考を戻したミーアは……。

「ほほほ、そのような、めん……ぼくを潰すようなことを、すべきではないと、わたくしは考えますわ」

危うく、ペラペラーッと心の内を吐露しそうになって、ミーア慌てる。

――あっ、危なかったですわ。なんとか、誤魔化せたとは思いますけど……。

などと思いつつ、アベルの顔を窺う。と……。

「めんぼく……？　それは、ガヌドス国王の面目を、つぶさないため……いや、違うな。むしろ国民の、か。そのために、ガヌドスの王族であるオウラニア姫を立てる、と？」

アベルの言葉を吟味するように頷き……生まれつつある流れに乗るようにして、ミーアは言った。

「ええ。そうですわ。王政府の非道は明らか。されど、大部分の国民は、おそらくそれを許容している。それを横から別の国の皇女がやってきて、とやかく言われるのは腹が立つでしょう？　それ以前に、その地に住まう者のプライドを損なうことにも繋がると思いま

すの」
「そうなれば、いかに正しいことを言ったとしても素直に聞き入れてはもらえないか。確かに、その通りかもしれない」
アベルの言葉に、うむうむっと頷きつつ、ミーアはチラリとパティのほうを窺う。
――危うく、本音をポロリしてしまうところでしたわ。パティが見てますし、面倒くさいとか、不真面目なことは言えませんわ。ここは、気を抜かぬようにしませんと……。
なにしろ、きちんと、パティを教育しなければ、過去が大変なことになってしまうわけで……。気合を入れ直すミーアであった……が。

パティは、静かにミーアのほうを見て……。
――今、面倒くさいって言おうとした……。
瞬時に、ミーアの誤魔化しを看破していた！
そうなのだ……蛇に教育を施された彼女は、オウラニア以上に、他者の心情を読むことに長けているのだ。ゆえに彼女は、ミーアの心の内を正確に把握し、そしてっ！
――この適当さが、蛇と戦うためには必要なんだ。確かに、適当さは柔軟さにもつながるし、それに、時々、ランダムに真面目に考えたりもするから対策が立てづらい。まさに、蛇を相手にするのには最適な動き方……。さすがミーアお姉さま。
なんか、感心していた！
ミーアの、ちょっぴりアレな心根を読み取り、それでもなお、そこに教訓めいたものを見出してしまう……実はパティこそが最も重症なのかもしれなかった。
――さすがは、私の孫娘！
心の中でドヤァッとする親馬鹿……ではなく、祖母馬鹿なパティ（十歳）なのであった。
状況は……極めて錯綜しているのだった。

第五十七話　男たちの酒飲み話

ルードヴィッヒの執務室に、ディオンがやって来た。
それ自体は、別に珍しいことでもない。二人は仕事終わりに、ミーアの“やらかし”……もとい、成してきた偉業を肴に酒を酌み交わすことがあったためだ。
ノックとともに室内に足を踏み入れたディオンは、窓際に立ち、なにかを読みふけっているルードヴィッヒに苦笑いを浮かべた。
「不用心だね。僕が蛇の暗殺者だったら、帝国を傾けることは容易だな」
「ああ。ディオン殿か……。あいにくと、俺が暗殺されたとしても、ミーアさまがいらっしゃれば、どうということはないだろう」
ルードヴィッヒは肩をすくめつつ、静かにディオンのほうに歩いてきた。
「ミーアさまがお戻りになるのだが、先んじて、このような指示が届いた」
手渡された書類に素早く目を通し、ディオンは呆れた様子で笑った。
「ガヌドス港湾国に潜入……？　これはまた……」
「少数民族ヴァイサリアンへの隔離政策と奴隷労働の強制。すべての人間の平等を宣言する中央正教会の教義に反することこの上ない。非難するに足る大義名分だ。ミーアさまご自身が行かれるのは、私としては止めたいところだが……」
クイッと眼鏡を押し上げてから、
「王族を咎めるのは、民の上に立つ使命を帯びた統治者の血筋でなければならないからな」
「まぁ、その辺りの大義名分の作り方は、あの姫さんのことだ。完璧にやっているだろうが……しかし、ガヌドスねぇ。なるほど。今

度はそちらに手を伸ばす、か……」
ディオンは書類をルードヴィッヒに返しながら言った。
「確かにきな臭い国だし、早めに潰せればそれに越したことはない。それに、上手くすれば、属領にして、我が帝国は海を手に入れることができる……」
と、そこまで言って、窺うように、ディオンはルードヴィッヒに笑みを向ける。
「と、そんなことを考えているわけではないのだろう？　我らの姫さんは……」
「ディオン殿のお察しのとおりだ。ミーアさまは、ガヌドス国王の態度を正すことを是とされているようだな」
「相変わらずだな……。実に面倒だが、実に姫さんらしい」
やれやれ、と首を振るディオンに、ルードヴィッヒは、静かに問いかける。
「なにか気に入らないことがあるのか？　ディオン殿」
「いや、なに。ただ、なんとも中途半端なことだと思っただけさ」
言いながら、ディオンは遠慮する様子もなく、ソファに腰を下ろす。
「中途半端……というと？」
ルードヴィッヒは、グラスを二つと酒瓶をもって、対面に座る。
トクトク、と音を立て、注がれる酒の色は深い赤。葡萄酒の作る、深い赤……。グラスを手に取り、その色を楽しむように静かに回してから、ディオンは言った。
「実際に、中途半端だと、君も思うだろう？　大義名分を得て、領土拡張を狙うならばわかる。国としては妥当な戦略だし、帝国皇女が国の発展を考えるのは自然なことだ。それに、サンクランドを真似るわけじゃないが、下手な統治者に治められるより、姫さんの統治下に入ったほうが、民も幸せになれるだろうから、意味だってあるだろうさ」
酒で喉を湿らせるように一口。味を楽しむように、一瞬黙ってか

ら、ディオンは続ける。
「だが、ガヌドス港湾国の、腐敗した王族を正す？　上層部を改心させるだって？　それは、わざわざするべきことだろうか？　他国の平和と安定を乱してまで、する必要があることなのかな、それは。余計なことなのではないか？　と。まぁ、思うわけだ」
「平和……か」
「まぁ、仮初のかもしれんがね。目下のところ、ガヌドスに騒乱の兆しはないのだろう？　だが、ミーア姫殿下が動けば、そうも言っていられなくなる。必ず波風が立ち、場合によっては火の粉を被る者だって出るだろう？　いや、ガヌドスの場合には、波しぶきと言うべきか？」
冗談めかして言うディオンに、ルードヴィッヒは苦笑する。
「確かにそれはそうだと思うが、それ以前に……。そうだな。試みに問うが、ディオン殿、平和というのは、戦がないだけの状態のことだろうか？」
「というと……？」
飲みかけたグラスを口に当てたまま、ディオンは静かにルードヴィッヒを見つめる。
「例えば、戦がなく、騒乱もなく、剣で殺すこともなく……。鞭で打って血を流させることすらなくとも……弱き者たちを脅し、苦難と抑圧の中に置いた状態というのは……やはり平和とは呼べないのではないのかな？」
「なるほど。戦がないのは当然として、それだけでは平和とは言えないと？」
「安定とは呼べるのかもしれないが、平和と呼べるかは疑問だ。同様に、実際に刃を交えずとも、突きつけ合った睨み合いも、平和ではなく拮抗と呼ぶべきだろう」
「戦の前段階とも言える状態かな」
「それに、力なき国を軍事力によって圧倒し、脅しつけた状態というのも平和とは呼べないだろう？　つまり、戦がないだけの状態も、

いくつかに分類できると思うのだ」
そこまで言って、ルードヴィッヒも静かに酒を口にして……。
「戦がないだけの状態を平和と呼べば、その言葉の持つ意味と乖離が生じるように思う。平和と聞けば、なにか良いもののように聞こえるが、実際には、醜悪な現状を維持するために、変化させないための言い訳として使われることが多いような気がする」
「姫さんが目指しているのは、そう言った偽の平和ではない、と……？」
静かに首肯しつつ、ルードヴィッヒは続ける。
「ミーアさまは、蛇とは違う意味で、現状に対する変革者なのだ」
「ほう？　統治する者というのは、体制の維持に腐心するものとばかり思っていたが……」
「それは、もちろんそうなのだろうが、ミーアさまは、そこで満足はされないのだ」
静かにグラスに目を落とし、それを回しながら、ルードヴィッヒはつぶやく。
「それに、おそらくは不公正な平和、偽りの平和は長続きしない」
「それは、どういう意味かな？」
「俺は、水準の信仰心と道徳心、倫理観しか持ち合わせていないから、本質的には正義やら平和を云々しようとは思わないのだ。正義だなんだというのは、少々、面映ゆい」
「ははは、それについては同感だね。それを議論するには、お互いひねくれすぎているだろうさ」
笑いながら、互いのグラスに酒を注ぎ足すディオンに、ルードヴィッヒは言った。
「だが、合理的に考えても、今のガヌドスの状態というのは正されるべきだと思う。ある者たちを踏みつけにして成り立っている社会というのは、酷く歪だ。安定しているように見えて、常に一部の層を抑圧する構造は極めて不安定と言える。そういったものは、長続きしない」

「まぁ、それはそうだろうな。蛇の力を借りるまでもなく、踏みつけにされ、殴りつけられた者は、きっかけさえあれば立ち上がるからね。寄せては返す波のようなものだ。いつそれが大きくなり、こちらに波しぶきが飛んでくる、か。いや、それが波しぶきで済めばいいが……なるほど。確かにガヌドスには平和でいてもらったほうが、都合がいいか」

そうして、ディオンはニヤリと悪戯っぽい笑みを浮かべるのだった。

「それはそうと、どうやってガヌドスに入るおつもりなんだ？」

「ガヌドス港湾国と付き合いのあるシャローク・コーンローグに協力を得たいと思っている」

「ほう。あの大商人か。確か、ペルージャンでは、こちらにちょっかいをかけてきたと聞いていたが……」

「今では、彼もミーアさまの貴重な協力者になっている。あの人脈は大いに役に立ちそうだ。恐らく、ミーアさまが目指すことは、そういうことなのだろうな……」

「なるほどね。敵だからといって排除していたら、彼の人脈は使えなかっただろうし……ふふふ、確かに姫さんらしいやり方なんだろうな」

そうして、二人の男たちは静かに笑い合うのだった。

第五十八話　シャローク、ちょっとだけシュッとする！

さて、帝都ルナティアに戻ったミーアは、早速、ガヌドス行きの態勢を整えていった。

「ルードヴィッヒ……には具体的な指示の必要はなし。むしろ、すると足を引っ張ることになりそうですし……。ディオンさんも剣さえ持ってきてくれれば問題ありませんわ。むしろ、あの方、素手でもなんとかなってしまいそうですし……」

仮に武器を持っていなかったとしても、戦狼の一匹や二匹、撃退してしまいそうだなぁ、などと思うミーアであった。

「問題は、ガヌドスへの潜入方法ですわね。さて、どうしたものか……」

などと、ぶつぶつつぶやきつつ、娘から学校での話を聞きたがる皇帝陛下を華麗にスルーして……。ミーアがやったのは、大商人シャローク・コーンローグとの対談だった。

ルードヴィッヒの要請によって、白月宮殿に呼ばれたシャロークを歓待するため、ミーアはしっかりとお茶菓子を手配していた。

「ペルージャンでの一件以降、仲良くやっておりますし、協力していただけると思いますけれど……」

つぶやきつつ……ミーアはテーブルの上のお菓子を眺めた。

そこには、エメラルダに頼んで揃えてもらった珍しい焼き菓子が並んでいた。

ラスコッティと呼ばれるそれは、二度焼きしたクッキー生地の上に、甘い果実のジャムを乗せて食べる、帝国の伝統的なお菓子だった。ただ、さすがはグリーンムーン家、用意されたジャムは、エメラルダのように美しい葡萄のジャムだった。

つぶつぶの果実がそのままの形で入ったジャムは、ミーアが見たどんなジャムよりも美しく、眺めているだけで、ついついうっとり

してしまうミーアである。
基本的に、宝石などの装飾類には、そこまで興味を示さないミーアであるが、食べ物に関しては別である。なにしろ、美しく美味しいものは、お腹の中に入れてしまえば、誰かに奪われることはないわけで。
目を喜ばせ、舌を喜ばせることに重きを置く合理主義者、ミーアなのである。
「失礼いたします。ミーアさま。シャローク・コーンローグ殿がおいでになりました」
ルードヴィッヒに連れられて、シャロークが現われた。
――あら……？
その姿を一目見た瞬間、ミーアは違和感を覚える。
――シャロークさん……なんだか……。
首を傾げつつもソファーを勧め、そして……。
「今日は、グリーンムーン公爵令嬢にお願いしてとっておきのお茶菓子を用意いたしましたわ。さ、どうぞ、お召し上がりくださいまし」
などと勧めるも、シャロークは一切、それに手を付けようとはしなかった。
「申し訳ありません。ミーア姫殿下。今日は、甘い物の類は、遠慮させていただきたく思います」
「あら……あなたが、お食べにならないのは意外ですわ」
ミーアは驚きに目を見開き……直後、
「もしや、そのお体のことと関係があるのかしら……？　よく見るとシャロークさん、少しシュッとされたのでは？」
ラスコッティにジャムをぬりぬり、ぬりぬりしながらのミーアの指摘に、シャロークは嬉しそうに頷いて、
「お気づきいただけましたか……。ふふふ、実は、あれからタチアナ嬢にいろいろ指導していただきましてな」
「なんと？　そうなんですのね……。よくよく見れば、見違えるほ

ど健康そうなお顔……。短時間で、そのように劇的に改善する効率の良い方法があるのですわね」
感心した様子でつぶやくミーアに、シャロークはほんのすこうし、目を逸らし……。
「効率……でございますか。まぁ……その、良いと言えば良いのかもしれませんな。なにしろ、もう二度と、暴飲暴食などしない、と思える程度には、その……厳しいものでございましたゆえ……」
微妙に引きつった顔をするシャローク。ミーア、それを見て察する。それを自分が実践することは決してない、と。
「……そう。で、では、まぁ、いつか機会があったら教わりに行くとしますわ」
そうつぶやいてしまうミーアであったが……彼女は気付いていなかった。
すぐ後ろ、アンヌがとても真面目な顔で、会話を聞いていたということにっ！
まぁ、そんなこんなで、シリアスな話はさておいて……。

「なるほど。我が商会の商人に紛れて、ガヌドス港湾国に……」
一通り、ミーアから事情を聞いたシャロークは、顎をさすった。
ちなみに、かつて弛みに弛んでいた顎の肉も、今は、ちょっぴりシュッとしている。
「ええ。そうですわ。オウラニア姫殿下と仲良くなり、ガヌドス国内の事情を聞きましたの。それを知り、相談されてしまっては、動かないわけにはいきませんわ」
「なるほど。さすがでございますな、ミーアさま。港湾国を手中におさめ、港を取りに行くとは……」
港を取る――それを聞いた瞬間、ミーアの脳裏に、いやぁな想像が浮かぶ。
港を取る、支配する……その象徴としての巨大な黄金……。権威の象徴を、黄金の灯台という形で建てたとみなされ……各国から非

難され、中央正教会からは思いっきり叱られて……。
「……ふふふ、港が欲しいだとか、そういった個人的な事情はございませんわ。そもそも、港が使いたいのであれば、ガヌドスにお願いすればいいだけのことではありませんの？」
まず、そのことだけは、はっきりとさせておく。決して、ガヌドスを属領にしたいとか、そう言った事情はありませんよ、と明言しておくのだ。
「なるほど、それもまた理ですな。帝国が力ずくで奪い取ったとあれば、住人の反感は計り知れない。船員の確保は難しくなりましょうし、港の整備や造船などの事業も止まってしまうかもしれない。それよりは友好関係を築き、使わせてもらったほうが得である、と」
「わたくしは、一人で全部できるとは思っておりませんわ。それに、得意なことは人それぞれ。ならば、得意なことを得意な人にやっていただきたいと思っているだけのこと。商売のことは商人に、戦は軍人に、そして、ガヌドス港湾国の統治は、ガヌドス港湾国の王族に」
というか、ぶっちゃけ、なんでもかんでも自らの責任にされてはたまらないと思うミーアである。ミーアがしたいのは、味見と昼寝、ダンスと乗馬。後は、まぁ、ちょっぴり我慢して、ルードヴィッヒらが優しく、やさぁしく要約してくれた書類に「いいね！」することだけなのである。
「けれど、友のすることをすべて認めてしまうは、友にあらず。友の悪癖を指摘し、咎めてこそ、真の友と言えるのではないかしら？」
「ふふふ、高貴なる方の高貴たる所以ということですか。商人であれば、相手の隙を突き、より大きな儲けを求めるが理ですが……」
「さすがは、シャロークさんですけれど、ほどほどに。そうでないと、またわたくしが、咎めることになってしまいますわ」
そう指摘すると、シャロークは、上機嫌に笑った。
「それはたまりませんな。ミーアさまのご機嫌を損なえば、せっかくのミーアネットの働きから外れることになりそうだ」

それから、彼は、そっと目を細めた。まるで輝かしいものを見つめるかのように……。
「歴史に対し、意義のある仕事をするというのは、実に甘美なことですな。多くの人を飢えから救い、世界を変え得る存在……ミーアネットの設立に関わらせていただいたことは、私の生涯の誇りとなりましょう」
もうすでに、引退する気満々と言った様子のシャロークに、ミーアはニヤリ、と意地の悪い笑みを浮かべる。
「ふふふ、それは少し早すぎますわね。老け込むにはまだ早く、生涯を語るにも、まだ早いのではないかしら？」
それから、ミーアは紅茶を一口飲んでから……。
「実は、セントノエルでこんな話が出ておりますの」
そうして、話すのは、例の『魚の養殖』の話だ。
「なんと……魚の養殖を飢餓対策に活用……と？」
「ええ。けれど、それを実現するためには、魚を生きた状態でいろいろな場所に運ばなければならない。そんなことが可能なものかしら……？」
「どう……なのでしょうか？　卵の状態で移動させることはできるのかもしれませんが……私も詳しくはありませんので……」
ううむむ、と唸るシャロークに、ミーアはニッコリ微笑みかける。
「やるべきことは、まだまだ、まだまだ、たくさんございますわ。シャロークさん。甘美な、意義のある仕事がたくさんあるのに、引退するようなことを口にするのは早すぎるのではないかしら？」
そう言ってやると、シャロークはきょとん、と首を傾げ……。
「はて？　私はただの一度も引退を考えているなどと申したことはございませぬが……」
それから、シャロークは、むん、っと立ち上がり……。
「この体とて、長く働くために健康が必要であればこそやっていること……ふふふ、まだまだ、老け込むつもりもありませぬよ」
朗らかな笑みを浮かべる。その笑みには邪気はなく、かつての狡

猾な商人の面影すらなく……あるのは、精悍な、夢に向かう若者のような、生気に溢れた色だった。

第五十九話　ツッコミを入れる者はなく……

シャロークとの対談を終えたミーアは、新たな客人を迎えていた。
それは……。
「ミーアさま、ご機嫌麗しゅう」
優雅な動作で室内に現れたのは、美しい緑色の髪を揺らす少女。星持ち公爵令嬢筆頭を自任する、自称ミーアの親友。
エメラルダ・エトワ・グリーンムーンだった。
スカートを持ち上げ、完璧な礼を取る彼女に、ミーアも笑顔で礼を返す。
「お久しぶりですわね。エメラルダさん。オウラニア姫のことでは、助かりましたわ」
「うふふ、なかなか、いい子でしたでしょう？」
そう微笑むエメラルダに、ミーアは思わず考え込んでしまう。
いい子……という言葉には、若干、疑問の余地がないではなかったが……。ミーアはすぐに頷いて、
「ええ。仲良くなってしまえば、そうかもしれませんわ。わたくしのことを師匠だなどと呼んで……ふふふ、可愛らしい方ではありますわね」
さて、楽しいお茶会が始まって、すぐに、テーブルの上にお茶とケーキが並べられた。
久しぶりに、グリーンムーン家が保有している、ちょっぴり変わったお菓子が食べたい、というミーアのリクエストに基づいて、エメラルダが持参したものだった。
「おお……これは……」
ミーアは、テーブルの上に置かれたケーキを見て、思わず歓声を上げる。
きつね色の、四角いケーキだった。その形状から、ペルージャン

のカッティーラを連想するミーアであったが、上のほうに施されたデコレーションが違っていた。
白いクリームと三食のベリーがちょっこりと添えられていて、実になんとも可愛らしい見た目である。
「ふふふ、シャロークさんも、これを見たら、もしかしたら、口にしていたかもしれませんわね」
などと上機嫌で笑いながら、ミーアは、そのケーキにフォークを押し当てる。
ふんわり、とフォークを受け止めた生地から、ジュワッとシロップが滲む。
「この香りは……お酒かしら？」
「ふふふ、ケーキをラムーン酒のシロップにつけたものだと聞いておりますわ」
「ほほう、変わっておりますわね。先ほど、シャロークさんに出したジャムも変わっておりましたけれど……」
つぶやきつつ、ミーアは、ケーキを一口。瞬間、口の中に、ジュジュワッと、シロップの甘みが広がった。鼻を駆け抜ける華やかな酒気の風味、遅れてどっしりと舌の上に立つケーキの甘さ。さらに、生地には、同じくアルコールにつけたであろう干しブドウが練り込まれていて、それが、しゃり、しゃり、っと良い歯ごたえのアクセントを追加する。
さらに、上に載っていたベリーからは、爽やかな酸味が追加され……重厚な甘みを洗い流していく。
「これは、なかなか……大人の味ですわね。ふふふ、でも、とても美味しいですわ」
微笑みつつも、もう一口パクリ。
ちなみに、直前に、シャロークのことを思い出したりだとか、彼が食事制限と運動によってやせた話だとか、彼が食べなかったから、一人でお茶菓子を食べることになっただとか……。そういう細々したことは、ミーアの脳内にはすでに存在しない。

そんな小さなことなど一顧だにしない、極めて器の大きなミーアなのである。
……唯一、タチアナに話を聞こうと決意しているアンヌの存在だけが救いであった。
まぁ、それはさておき……。
「ところで、エメラルダさん、シオンのことなのですけど……」
「あら、シオンお義兄さまがどうかなさいましたの？」
――お義兄さまって……。エメラルダさん、ずいぶんと気が早いことですわ。結婚前からお義兄さまだなんて……。
思わず苦笑するミーアである。
……ツッコミを入れる者は……いなかった！
「シオンは、どうもエシャール王子に会いに来るつもりらしいんですけど、そのためにガヌドスには同行しないつもりみたいなんですの。ガヌドスでどのようなことが起こるか、今のところ未知数ですけれど、彼の力が必要になる局面も訪れるかもしれませんわ。だから……」
「なるほど。わたくしのほうで、ガヌドスに行くように働きかけるようにいたしますわ……。あ、そうですわ」
っと、エメラルダはそこで、手を叩いた。
「どうせでしたら、グリーンムーン家の別邸に招待するというのはいかがかしら？」
言われて、ミーアは思い出す。
そういえば、ガヌドスの王都には、グリーンムーン家の別邸があるのだ。
そこに滞在していたもらえば、いつでも救援に来られるだろう。
「ふむ、それはありがたいですわね」
満足げに頷くミーアに、エメラルダは思案げな顔を向ける。
「それにしてもガヌドスのヴァイサリアン族、聞いたことはございましたけれど……」
エメラルダは頬に手を当てて、ううむ、と唸る。

「ヴァイサリアン族というのは、確か、ガレリア海の周辺部に集落を持つ少数部族でしたわね。先々代国王陛下の治世下で、海賊狩りが徹底して行われ、ほとんど者たちは、捕らえられたか、投降してガヌドス国民に加えられたかしたはずですわ。未だに隠れ里に潜んでいるという話もございますけれど、海賊を大っぴらに続けているということはないのではないかしら……」

「ほう……。それはなぜですの？」

問いかければ、エメラルダは、さも当たり前と言った様子で頷き、

「当然ですわ。なにしろ、私のように美しい貴族令嬢が、毎年、海遊びをしているのに、一度も、そういった海賊に遭遇したことがございませんもの」

――美しい……。まぁ、確かに、エメラルダさんは、わたくしの親戚ですし。美しくないとは言いませんけれど、自分で言える胆力がさすがですわね。

……ツッコミを入れる者は……いなかったっ！

「イケメンの海賊に連れ去られるのは、ちょっぴり素敵かも、なぁんて思ったものですわ。ああ、今はもちろん違いますけど。エシャール殿下一筋ですわ、もちろん」

「ええ……まぁ、それはさておき……。ヴァイサリアンの問題は意外と根深そうですわね……ふぅむ……。彼らは蛇に関係あるとか、そんなことも聞きますし、これは、気合を入れて行かなければなりませんわね。栄養を、しっかりと補給せねば」

そうして、ミーアは英気を養うべく、さらなるケーキに向かって突撃を開始するのだった。

……ツッコミを入れる者は……残念ながら、いないのであった。

第六十話　ローレンツ・エトワ・イエロームーンの訪問

さて、エメラルダが帰った時には、すでに、空は夕焼けに染まっていた。
「ふむ……」
ミーアは軽くお腹をさすりつつ……。
「今日のお夕食は……なにかしら？」
おっ、恐ろしいことをつぶやいていた！
けれど、それは仕方ないことなのかもしれない。
なにしろ、料理長の絶品料理は、どれだけお腹がいっぱいでも美味しく食べられてしまうという代物なのだ。夕食前に、メニューを気にするなというほうが無理な話なのだ。
しかしながら、料理長の腕が良いのが悪い、というのも理不尽な話。料理長は、ミーアたちの健康を気遣い、栄養豊富なものを美味しく食べられるよう、日夜研鑽を積んでいるだけなのだ。
だから結局は、誰も悪くはないのだ……そうだろうか？
――なんだったら、少し、つまみぐ……味見もできるかしら？
なぁんて、お茶目なことを考えつつ、ミーアは部屋を出た。
ちなみに、アンヌは「今日は少しお茶菓子を食べすぎだから、デザートの量を調節して……」などと言うことを考えつつ、料理長に相談に行っていた。
ミーアの食事量と体調を管理する、メイドの鑑アンヌなのであった。
さて、楽しい味見のために、そそくさと白夜の食堂に向かっていたミーアだったから……。
「失礼いたします。ミーアさま、少しよろしいでしょうか？」
急に声をかけられた瞬間に、うひゃっ！　などとヘンテコな声を上げて跳びあがった。ぎくしゃくと振り返れば、そこに立っていた

のは……。
「あ、ああ……。リーナさん。どうかなさいましたの？」
「はい。実は、ガヌドスに出立する前に、父にお会いいただきたいのですが」
「あら……、ローレンツ卿に？」
「はい。以前、お尋ねいただいていた、クラウジウス候ハンネス殿のことについて、直接、お話ししたほうがいいだろうと申しておりまして……」
「……ああ、例の……」
ミーアは……別に忘れていたわけではありませんよ？　という顔を装って頷いてみせた。
「そうですわね。ガヌドスに行くのであれば、先にお聞きして、情報を整理しておいたほうがよさそうですわ」
ミーアの目的は、もともと、ガヌドス国王の暗殺を云々することにあらず。また、ガヌドス港湾国のヴァイサリアン族を救い出すことでもなく……。
――ハンネス大叔父さまの行方を探ることが第一目標でしたわ……。
その時、ふと、視線を感じて、ミーアは辺りをキョロキョロ見回す。っと、いた！
白夜の食堂の入口近く！　パティとベル、さらにヤナとキリルの姿が見えた。
ハンネスの名前が出たからか、パティはジーっとこちらを見つめていた。
ミーアは、改めて「ええ、もちろん、忘れてなどいませんでしたわよ？」という顔をしつつも……。
「ちなみに、ローレンツ卿は今どこに？」
「実は、すでに白月宮殿に参上しております」
「あら、そうなんですの？　でしたらすぐにでもお会いしなければ……」

などとつぶやきつつ、ミーアはパティにちょいちょい、っと手招きをした。
そわそわした様子だったパティは、ちょこちょこ小走りにやってきて……。
「……ハンネスのことがわかったの？」
「ええ。そのはずですわ」
頷きつつ、ミーアは考えていた。
――パティは……いずれ過去に帰る。その際、ローレンツ卿に対して、悪印象を持っているようですと、いささかまずいことになりますわ。
ミーアは以前見た夢を思い出す。
イエロームーン家で出されたケーキに毒が入っている、という悪夢のことを。
ケーキに毒……それは言ってしまえば、大好きなキノコを食べてみたら毒キノコでした！　というのと同じ、大変ショックな出来事である。
否、毒キノコであれば、キノコ女帝として、まだしも愛でることができるかもしれないが、毒の入ったケーキはただの毒……。到底、容認できる代物ではない。
――そういう意味では、直接、ローレンツ卿と会わせて、ひととなりを知ってもらうことが必要かもしれませんわね。なにがあっても彼は悪人にならない、ハンネスを助けた人なのだ、と思っておいてもらえれば、悪いことにはならないはずですわ。
ミーアは、ふむ、とつぶやいて……。
「パティ、あなたも、一緒に話を聞きたいですわよね？」
「え？　いい、んですか？」
「構いませんわ。あなたが当事者ですし、まぁ、ローレンツ卿には上手いこと言って納得してもらいますわ」
基本的に、ローレンツは話のわからない男ではない。
ミーアと同じ、スイーツを愛する同好の士である。話せばわかっ

てもらえるだろう、と確信するミーアであった。

さて、応接用の部屋で待つことしばし。ノックと共にローレンツが入ってきた。

彼は、部屋に入って早々、パティのほうを見て、目を見開いた。

「ミーアさま……もしや、その方は、ハンネス殿の縁者の方でしょうか？」

パティのことをどう切り出そうか、と思っていたミーアだったから、渡りに船とばかりに頷いて。

「ええ……そんなようなものですわ。よくおわかりになりましたわね？」

「先代皇妃殿下の面影がございましたゆえ」

そうして、ローレンツは、懐かしそうに瞳を細めてパティに笑いかける。

「それにしても、そうでしたか。ハンネス殿の、縁者の方が……。もしや、ハンネス殿のことを急に知りたいとおっしゃられたのは……」

「ええ、察しが良くて助かりますわ」

深々と頷いてから、ミーアは続ける。

「ハンネス大叔父さまのこと、蛇と関係の深いクラウジウス家のこと……そして、ハンネス大叔父さまが、あなたに暗殺されたという噂……わたくしは、その辺りの事情をなにも知らないから、教えていただきたいんですの」

ミーアは真剣な顔で、ローレンツを見つめる。

「とりあえず、大叔父さまが生きていることは確実だと思っておりますけれど……その辺りはいかがかしら？」

ローレンツは腕組みしつつ、頷いて言った。

「わかりました。私の知っている限りをお話しさせていただきます」

第六十一話　過去への一撃

ミーアは、ローレンツにソファを進め、自らも対面に座る。隣にはパティがちょこん、と腰を下ろし、ローレンツの隣にはシュトリナが座った。

さて、腰を落ち着けたところで、テーブルに目をやり、おや？とミーアは首を傾げた。

テーブルの上……出されたのは紅茶だけで……。

チラリ、とアンヌのほうを見ると、

「もうすぐお夕食になりますので……」

と澄まし顔で答えた。

「私も先に皇帝陛下のところで食べてまいりましたので、遠慮させていただきました」

「そうですの？　まぁ、ローレンツ卿がそう言われるなら……」

とつぶやきつつ、ミーアは切な気にテーブルの上を見つめた。

――まぁ、空腹は、お料理を美味しく食べるための必要条件ですし……。仕方ないかしら……。

ちなみに、糖分を取らなければミーアの頭脳労働量が下がることが懸念されるところだが、その辺りも問題はない。これから頭脳労働モードに移行したとしても、あり余るほどの糖分を、今日のミーアはすでに摂取しているためだ。

「ええと、それでは改めてお聞きしますわ。ハンネス大叔父さまのこと」

「そうですな……」

ローレンツは、しばし考え込むようにして黙ってから……。

「クラウジウス家は、ご存知の通り、蛇とかかわりの深い家です。我がイエロームーン家に匹敵するほどの歴史を持ち、皇帝一族や他の家に蛇の息のかかった者たちを送り込む、そのような役割を果た

していました」
「なるほど……。皇帝の一族が蛇の道から外れぬように、と言っておりましたわね」
「当家にいたバルバラも、もともとはクラウジウス家と所縁のある者から蛇の教育を施されたのではないかと思われます。もっとも、蛇は出自や関係が露見するのを極端に嫌うため、直接、彼女から聞いたわけではありませんが……」
「バルバラさんは、オベラート子爵に酷い目に遭わされたと聞きますわ。その後で彼女に接近したとなると、帝国内に潜んでいた蛇のはず……。クラウジウス家の縁者である可能性は高そうですわね」
先ほど食べたジャムの糖分七割ほど消費しつつ、ミーアは言った。
「クラウジウス家では当主が領民に手を出し、子を作っては、その子を養子に引き入れて蛇の教育を施す、といったことも行われていたようで……」
その言葉に、ミーアは思わずパティのほうを窺う。パティは……ただ黙って、ローレンツの言葉を聞いていた。
「貧しい家で育てることで、金持ちや強者に対する恨みを持たせ、そのうえで引き取り、今度は、クラウジウス家で厳しい蛇の教育を施す。理想の蛇を生み出すための仕組みだったというわけです」
「なるほど……。悪質ですわね」
気遣うように、パティの頭を撫でると、パティは大丈夫、と言った様子で頷いてから、
「それで、ハンネス……候は？」
そわそわとした様子で尋ねる。
「彼は、皇妃殿下の弟君であらせられました。そして、皇妃殿下は、ちょうどミーア姫殿下と似ておられて、とてもご聡明な方でした」
「似てる……？」
パティはミーアの顔を見て……一瞬、複雑そうな顔を……顔をっ！　なんと、していなかった！　むしろ、ちょっぴり嬉しそうに頬を赤らめている！

――ううむ、これは、喜んでくれているのかしら……？　反応に困りますわね。
微妙に居心地が悪かったので、紅茶を一口すするミーアである。
「そんな聡明なる皇妃殿下の弟君ですから、ハンネス殿も、大変に明敏な方でした。彼は、クラウジウス家が姉に害を為すものだと考え、その影響力をできるだけ削ぐよう、ひそかに動いておられました。それに、どれだけ言われても自らは子を残すことはなく、のらりくらりと、上手く身を躱しておいででした。けれど、ついに、我がイエロームーン家に、暗殺の依頼が届くことになりました」
そこまで言ったところで、パティが首を傾げた。
「少し、変……。ハンネスが、そんな風に蛇の言うことを無視できるはず、ない」
パティの言葉に、ミーアはハッと思い出す。
「ああ。そうでしたわね。ええと、ローレンツ卿、ハンネス大叔父さまは、ご病気を患っていたと聞いておりますけれど、その辺りはどうなっておりますの？　蛇にしか作れない薬を服用していたと聞いておりますけれど……。国外に逃がす時、なにか、特別な薬を渡したりとか……」
「いえ、そのようなことは致しておりません。それどころか、ハンネス殿が病気であることさえ、私は知りませんでした」
「ということは、治ったということかしら……？」
「ちなみに、その病名はわかりますか？」
ちらり、とパティのほうを窺うと、パティは小さく頷いて……。
「禁実（きんじつ）の病と聞いた……」
その言葉に、ローレンツは、思わずと言った様子で、唸った。
「これは……珍しい病の名が出ましたな」
「ご存知ですの？　ローレンツ卿、その病気のことを……」
「はい。珍しい奇病です。名前は、我々の創生神話に基づきます。封じられた園、そこにある命の木の実と、禁じられた木の実。我らの祖先たる始まりの人は、命の木の実ではなく、禁じられた木の実

に手を伸ばし、死ぬ者となった」
　ローレンツは、そこで紅茶に口を付け……。
「この出来事にちなんで、その名がつけられました。すなわち、禁実のほうに手を出したがゆえに、命の木の実を口にできなくなった者の病、と……。この病は、幼少期には、体が弱いというだけに見えますが、成長するにつれ、その身を蝕み、やせ衰えさせる。二十の半ば前には亡くなるという恐ろしい病です」
　それから、ローレンツは疲れたように首を振った。
「現在のところ、治療法はありません。できるだけ栄養のあるものを食べさせて延命を図るというのが一応の対処法として知られていますが、効果のほどはあまり……」
「なるほど。しかし、ハンネス卿には、その様子はなかった、と。それならば、蛇が嘘を言っていたと……？」
　そう尋ねれば、ローレンツは眉間に皺を寄せる。
「それについては、なんとも言えません。騙すにしても、不治の病と言うならば、もっとありふれた病の名を言うのではないでしょうか……」
「それならば、毒はどうでしょうか？　お父さま」
　シュトリナが横から口を出すも、ローレンツは首を振る。
「私も、その可能性を考えていた。定期的に毒を混ぜて病のように見せる。徐々に衰弱させることは可能だろうし、体を弱らせることもできるかもしれない。地を這うモノの書を読んだハンネス殿は、そこに、自分が飲まされている毒の知識を見つけて……」
「あり得そうですわね。地を這うモノの書には、毒の知識が書かれていたほうが自然な気がしますし……」
　ミーアがそう言うと、ローレンツは苦笑して首を振った。
「そこが難しいところなのです、ミーア姫殿下。私は、地を這うモノの書に書かれたことが、すべて悪しき知識だとは思わないのです。毒の知識もあれば、薬の知識もまた、書かれていても不思議ではない、そのような書物なのです」

「あら、そういうものなんですの？」
「そうですね。例えば、薬の知識を使って、人々の信頼を集める医師となれば、どうでしょう……？　毒を使って、誰かを暗殺するより、よほど人々の心を操りやすいのではありませんか？」
それから、ローレンツは小さく唸り声を上げる。
「確かに毒を飲ませていた、ということはあるかもしれないが……引き取ってきた幼い姉弟を脅すのに、そんな面倒なことをするだろうか……？　むしろ、病は本当で、地を這うモノの書に、不治の奇病の解決を求めたと考えるべきではないか……？」
ミーアは、そこで違和感を覚える。
――けれど、聞いた話によれば、ハンネス大叔父さまは、おそらく病が治った後まで地を這うモノの書を読み込んでいたはず……。失踪直前まで、熱心に読み込んでいた印象がありましたわ。どこかの時点で病が治ったのに、なぜ、そんなにも熱心に読む必要があったのかが謎ですわ……。
ふとミーアは、傍らに座るパティのほうを見て……思わず、あっと声を上げかけた。
パティもまた、その可能性に気付いたのか……目を見開いていた。
――大叔父さまがなにをしようとしているのか、わかりましたわ。ローレンツ卿は知らないから、思いつかないのでしょうけれど……。
気分を落ち着けるために、紅茶を一口。それから、ミーアは自らの考えを整理するようにパティを見た。
――もしかして、ハンネス大叔父さまは……パティに病気の治し方を教えるつもりなのではないかしら？　地を這うモノの書に載っていると言われている薬の作り方……いいえ、もしかしたら、薬そのものを見つけるつもりなのかも……。そうして、それをパティに渡せば、それは過去の蛇に対する明確な一撃になりますわ。
定期的に薬を飲まなければ死んでしまうという弟を抱えて、なぜ、パティは蛇を裏切ることができたのか……？
それは、早い時期にハンネスが病気から解放されていたためだ。

では、なぜ、病気が治ったのか？
それは、パティが〝未来から持ち帰った蛇の薬〟をハンネスに飲ませたためだ。
――ハンネス大叔父さまは過去の自分を救い、姉を蛇から解放するために、今もなお、蛇の薬の作り方を調べている……。であれば、もしもそれが失敗すると……過去のパティが蛇に縛られてしまって……結果として現在が揺らぐことになるやも……。
ゴクリと喉を鳴らすミーアであった。

第六十二話　熟練のイエスマン、ミーアは平常運転である

ローレンツとの会談の翌日、ミーアたち一行は帝都ルナティアを後にした。

目指すは、ガヌドスとの国境付近に位置する村だった。

そこでシャロークの商隊と合流し、国へと侵入するのだ。

「以前、クラウジウス領に行った時にも経験済みかと思いますけれど、みな、きちんと演技するんですわよ？」

やや草臥れた木綿のシャツとズボンという、ちょっぴり地味な潜入服に着替えたミーアは、馬車の前に立って、偉そうに言った。

その言葉に、生真面目な表情で頷いたのは、ヤナだった。彼女も地味なシャツとズボンに着替えている。さらに、トレンチ帽を被り、額の刺青を隠すことにも抜かりはない。そんな姉の隣に立つキリルも、しかつめらしい顔で頷いている。服装は姉とお揃いのものだった。

ちょっと可愛いかも……などと、母性を刺激されるミーアお姉さん（２３）である。

さらに、キリルの隣には、パティがいつも通り無表情で立っていた。いや、よく見ると、その顔には、どこか緊張感が窺えた。

おそらく、昨日のローレンツとの会談が影響しているのだろう。

――蛇の束縛から逃れる道筋が見えているのですから、緊張するなというほうが無理な話ですわね。

と、まぁ、ここまでは良しとして……。

――この子たちは意外としっかりしてるから大丈夫でしょうけれど……問題は……。

とミーアが視線を向ける先……ベルが、きょとんと首を傾げていた。

「一応、言っておきますけど、ベルもきちんとバレないようにしな

いとダメですわよ？」
「ふふふ、大丈夫ですよ、ミーアおば……お姉さま。なにも問題ありませんから」
「どこかで探検したり、冒険したり、目立つようなことをしてはいけませんわよ？　くれぐれも……」
「はぇっ……？　あ、はい。それは、もちろんです当たり前です当然じゃないですか、あははいやだなぁ！」
やや軽めのその口調に、ミーア、若干不安を覚える。
「しかし、ミーアさま、どのような手順で進めましょうか？」
ミーアのやや後方、スッと背筋を伸ばして立つルードヴィッヒが、聞いてきた。
「ふむ……」
腕組みして、刹那の黙考。ちなみに、この手の話題についての、ミーアの思考はすこぶる速い。考えた末、ミーアは……。
「ルードヴィッヒ……あなたは、確か、ガヌドス国王と面識がございましたわね？」
「面識……というほどのものでもありませんが、私とディオン殿とは、一度、会ったことがございます」
「そう。ならば、どうかしら？　その時の印象をもとに、これから、どのように行動すべきかしら？」
妥当な理由をつけて、ルードヴィッヒの質問を跳ね返した！
熟練のイエスマン、ミーアにとって、自然な流れで周りから良いアイデアを聞き出すことなど造作もないことなのである。
「そうですね……」
ルードヴィッヒは、眼鏡をクイッと指で押し上げてから……。
「オウラニア姫殿下のお言葉のみで糾弾するのは危険かと……。のらりくらりと躱されるばかりか、思わぬ逆撃を被る恐れもあります」
ルードヴィッヒの言に、ディオンも続く。
「確かに、食えぬ男、という印象でしたな。こちらが軍事力で攻めようとすれば、なにか、別軸のからめ手で足止めをされるような、

そんな印象を受けました」
「なるほど。とすると、やはり、わたくしかアベルが実際にヴァイサリアンに対しての非道を目にする必要がございますわね」
一国の王族を責めるために、他国の王族の権威を使う……。それが今回の基本構想である。
――本当ならば、正義に関して一家言ありそうなシオンにもいろいろ言ってもらいたいところですけど……。
今回は、シオンは別行動である。
エメラルダに引っ張ってきてもらう予定であるが、ミーアたちの入国から少し遅れての到着となるだろう。
「オウラニアさんから、隔離区の場所をお聞きして、実際に見てくるのがよろしいかしら……。あ、そうですわ。ヤナ……」
名前を呼ばれ、ヤナがわずかに姿勢を正した。
「ヴァイサリアン族の隔離地区というものを、あなたたちは知っておりますの？」
小首を傾げるミーアに、ヤナは申し訳なさそうにうつむいて……。
「申し訳ありません。詳しいことは、なにも……。ヴァイサリアンだってバレないように生きなさいって、言われて生きてきたから……。もしも、それがバレたら、捕まるからって……言われてて……」
「ふむ……」
ミーアは、腕組みしつつ、つい、っとルードヴィッヒのほうに視線を送る。
「なるほど。つまり、ヴァイサリアン族であることを隠して、国の中に暮らしている者もいるということでしょうか……。先々代のガヌドス国王が行ったとされる海賊狩り……。そこで捕らえられた者たちが、隔離地区に住まわされたが、それ以前に、移り住んでいたヴァイサリアン族の者たちもいて、街中で密かに暮らしている、と言うことなのか……」
「それはまた、恨みも実に根深そうですな」
「ふむ……」

ミーアは深々と頷いてから……。
「いずれにせよ、隔離地区の視察が、どうやら急務のようですわね」
とりあえず、そう結論付けるのであった。

第六十三話　エメラルダお姉さんは翻弄されないのである

さて、時は少しだけ遡る。
ミーアが乗った馬車を見送ったエメラルダは、屋敷に戻りつつ、考え事をしていた。
「しかし、シオン殿下に、ガヌドスに行きましょうと言っても、聞いていただけないかもしれませんわね……。とすると……」
腕組みしつつ、ふむ、と唸る。
「エシャール殿下と、ガヌドスの別邸に遊びに行く……というのがよろしいかしら……？　シオン殿下には、そちらに追いかけて来ていただくということで……。ミーアさまの誕生祭までに帰って来られれば……」
っと、シオンを上手いことガヌドスに連れていく方法を練りつつ……エメラルダは別のことを考えていた。
「しかし、ガヌドス港湾国が、まさか、そんなことになっているだなんて、思いもしませんでしたわ」
毎年、夏にはガレリア海に遊びに行っていたエメラルダである。ガヌドスの王都だって、何度も訪れていたし、町を歩いたことだってある。にもかかわらず、隔離地区のことなんか聞いたこともなかった。
「それに、オウラニアさんも、まったく話してくれませんでしたわ……。少しでも相談してくれればよかったのに、水臭い……」
っと、そこで、エメラルダは、ふぅっとため息を吐き……。
「いえ……かつての私であれば、言っても無駄だと思われたかもしれませんわね。それに、オウラニアさんもきっと、ミーアさまに変えられたはず……。だから、話す気になったんですわね。ということは……結局は、さすが、私の親友ミーアさま、という結論になるのかしら……？」

そう考えると、なんだか、嬉しくなってくるから不思議である。
「それにしても、お父さまは……ガヌドスのことをご存知なのかしら？」
次に気になったのは、そのことだった。
ガヌドス港湾国と最も繋がりが深い帝国貴族は、間違いなく、グリーンムーン家である。かつてはイエロームーン家のほうが繋がりが強かったらしいが、今は、文句なくグリーンムーン家のはずで。だからこそ……。
「お父さまが知らない……ということがあり得るかしら？」
エメラルダは父のことを知っている。父は、切れ者ではないにしても、決して無能者ではない。自分と付き合いのある者たちの行いを見過ごすとは考えにくいわけで……。
「知っていて黙認した……ということかしら……」
そう考えると、気持ちが暗くなってしまうエメラルダである。

その日の夕食を終え、口元を拭きながら、小さくため息。それから、席を立とうとしたエメラルダだったが……。
「あの、エメラルダさん、どうかなさいましたか？」
エシャールが話しかけてきた。
眉をひそめる小さな婚約者に、エメラルダは、優しく笑みを浮かべてみせる。
「いいえ、なんでもありませんわ。少し考え事がございましたの。大したことではありませんわ」
「そう、なのですか……？　でも……」
っと、エシャール、何事か言いたげな顔をしていたので、
「大丈夫ですわ。なにも心配はありませんわ」
エメラルダは、もう一度、安心させるように言った。
それを聞いても、エシャールは浮かない顔をしていたが……やがて、なにかを思いついたのか、パッと顔を明るくした。
「そうだ。エメラルダさん。少しだけ、ここで待っていてください」

有無を言わさぬ口調で言うと、エシャールは小走りに食堂を出ていった。
「はて……？」
と首を傾げつつ、待つことしばし……。
エシャールに続いて、トレーにティーセットを乗せたニーナがやって来た。
「あら……？　それは……」
「サンクランドの茶葉です。ニーナさんにお願いしていたものが、届いてました。とてもいい匂いで、気分が落ち着くから……」
そう言って、エシャールはティーポットを持った。
「まぁ！　エシャール殿下が手ずから？　そのようなこと……」
慌てて立ち上がろうとするエメラルダに、彼は小さく笑みを浮かべて、
「ニーナさんにお願いしてもいいと思ったんですけど、ぼくが淹れて差し上げたかったので……」
そう言って、優雅な手つきで、カップに紅茶を注いでいく。
お砂糖を一杯入れて、かき混ぜてから、エシャールは言った。
「少し甘味をつけるといいみたいなんですけど、二杯目を入れるかどうかは、お好みで」
そうして、エメラルダの前にカップを置いてくれる。
カップを手に取ったエメラルダは、冷めないうちに、と紅茶に口を付けた。
すぅっと鼻をくすぐるのは、心地よい、すっきりとした香り。舌の上に柔らかな甘みと、微かな酸味が広がるのを感じながら、エメラルダは小さくため息を吐く。
「ああ……この紅茶……とても落ち着きますわ」
「気に入っていただけたなら、よかったです。実は、この紅茶、シオン兄さまに嫉妬していた時、よく飲んでいたんです」
過去を恥じるかのような言いように、エメラルダは思わず口を開きかけるが……。エシャールは穏やかな顔で首を振り……。

「昔の話です。今は、このお茶に頼ることは、もうほとんどありません。でも……」
それから、静かにエメラルダを見つめてきた。
「エメラルダさんには必要なんじゃないか、と思ったから……」
どこか気恥ずかしげに、顔を赤くするエシャール。
「まぁ……エシャール王子……」
その……なんとも純粋な心遣いに、エメラルダ、思わず、キュキュンッとしてしまう！
イケメンの、弟と同い年ぐらいの王子さまが、自分のために紅茶を淹れてくれるというレアなシチュエーションっ！
かつて、イケメン護衛に囲まれつつ、海水浴だの、街歩きだのをしていたエメラルダを、未知なる興奮が襲う！
――ああ、駄目ですわ。エシャール殿下は、まだ子ども。お子さまですわ。この程度のことで心が揺れるはずもありませんわ。それに、私と婚約者にという話は、有耶無耶になっているわけで……。
でも、可愛い……。
などと、目をグルグルさせるエメラルダだったが……、そこで小さく咳払い。それから、気分を落ち着けるため、もう一度、紅茶を一口。
ほふぅー、っと息を吐き……。
「感謝いたしますわ。エシャール殿下。このお紅茶、とても美味しいですわ」
落ち着いた、お姉さんスマイルを浮かべる！
そう、エメラルダは、これでもお姉さん。年下の男の子に翻弄されるなどということは、決してないのである。ないのである！
でも……。
「ふふ、淹れて、良かったです」
嬉しそうに笑うエシャールに再び、ときめいてしまうのだった。
――でも、そうですわね。私もまた、ミーアさまに救われた者で

すもの……。
エシャールの顔を見て、小さく頷く。
――エシャール殿下に偉そうに言ってしまった手前、なにもしないわけには参りませんわ。
あの日、サンクランドからティアムーンにやってくる途上でのこと……。エメラルダはエシャールに言ったのだ。
許された者、救われた者に相応しく生きることを心掛けよ、と。
その言葉もあったからか、エシャールは頑張っていた。慣れないミーア学園で、この帝国の地で、なにかを成さんと懸命に勉学に励んでいた。
だからこそ……。
「私も、しっかりしなければなりませんわ。ガヌドスのことを、調べなければ……。とりあえず、お父さまの部屋……いえ、ガヌドスの別邸のほうかしら……？」
静かに気合を入れるエメラルダであった。

第六十四話　ミーアのお茶目な冗談……冗談？

ガヌドス港湾国は、ティアムーン帝国に比べると、とても小さな国だった。
それでも王都には、国の要である港や海産物を売る鮮魚市場、造船所などの大型施設が集まっていて、街行く人々の顔には活気が溢れていた。
「ふむ、なかなかの賑わいですわね」
馬車から降りて、まずミーアたちが向かったのは宿屋だった。
ほかの客たちに紛れるようにして部屋に入り、ようやく安堵のため息一つ。
「まぁ、ここは商人の出入りが比較的ありますし、海に出たまま数日漁師が帰って来なかったり、出稼ぎにやって来た身分不確かな者がいたりしますので、まず見つかりませんよ」
などと悪い笑みを浮かべるのは、シャロークの子飼いの商人だった。
――なるほど、さすがは、あのシャロークさんのところの方ですわ。実に悪そうな顔をしておりますわね。
などと頷きつつ、ミーアは窓の外に目をやった。
以前、泊まったグリーンムーン公の別邸は、ここよりさらに王城に近い、高級住宅地のほうに見えた。
最初はそちらを使わせてもらおうかと思っていたミーアであったが、さすがに、そこは監視の目がありそうだったので、今回は普通に宿屋を使うことにしたのだ。
「さて、それでは、オウラニアさんが来るまでに、なにか、腹ごしらえでも……。ええと、ケーキかなにか……」
「ミーアさま、変わったお菓子をいただきましたよ」
どこに行っていたのか、タイミングよくアンヌが戻ってきた。

「変わったお菓子？　なんですの、それは……」
「はい。小魚を干したものにタレを付けたのだそうです」
そう言ってアンヌがお皿の上に並べたのは、茶色いタレのかかった、開きにした魚だった。
「あ、それ、美味しいやつ！」
と、横で見ていたキリルがニコニコしながら言った。
「ふふふ、それではみなで一緒にいただきましょうか。ほら、ヤナもこちらへ」
「え？　あ、でも……そんなに、たくさんないから……」
などと躊躇うヤナに、ミーアはおかしそうに笑った。
「なにを遠慮しておりますの？　子どもは気にせず、たくさん食べるべきですわ」
ミーアは、そこで、小さくウインクして、
「それに、わたくし、あまり食べるほうではありませんし、余ってしまうかもしれませんわ」
「えっ……？」
「え……？」
ミーアの言葉に、なぜか、きょとん、と首を傾げるヤナとキリル。
その反応に、はて？　と同じく首を傾げるミーアだったが……。
横で見ていたパティがおもむろにヤナたちのほうに歩み寄り……、小声で……。
「……たぶん冗談。たぶん」
「あ、ああ。そうか。ははは」
などと、あいまいな笑みを浮かべる子どもたちに、ミーア、またしても首を傾げ……。
――冗談……？　はて、なんのことかしら……。
と、その時だった。
「ミーア師匠ー！」
ドアを開け、オウラニアが入ってきた。
「ああ、オウラニアさん。ご機嫌よう」

「わざわざ、こんな辺鄙な国までご足労いただきましてー、申し訳ありませんー」
　ドレスにも関わらず、ミーアの前で片膝を付いて臣下の礼を取るオウラニア。ミーアはその姿に、ガヌドスの属領化という、実に面倒くさい事態を幻視する。
「ああ、ええと、オウラニアさん、そのようにされると困ってしまいますわ。わたくしたちは対等な国の姫同士ですし……」
「いいえー、ミーア師匠は、私の師匠ですからー。このぐらいはしないと、失礼にあたりますー。それに、我が国のために来ていただいたのですからー、礼を尽くすのは当たり前のことですー」
　キリリッとした顔で見上げてくるオウラニア。
　それを見て、ミーアは一抹の不安を覚える。
　先日より、さらに高まるオウラニアの尊敬……。なんとなくだが、これは、忌まわしき黄金のアレが建つという兆候のように感じられて……。
「え、ええと、そろそろ、その師匠というのは……」
「いえー、私はまだまだー、姫道を師匠から教わらなければいけませんからー」
　オウラニアは、ものすごーく真面目腐った顔で言った。
「……そ、そう」
　思わず、引きつった顔をするミーアであるが、とりあえず、咳払いして……。
「ミーア師匠……ですか？」
　っと、声のほうに目を向ければ、ルードヴィッヒが苦笑いで眺めていた。
「あ、ええ。ええと、なにやら、わたくしから学びたいことがあると言うので、そのようなことになっておりまして……」
「なるほど。さすがはミーアさまですね」
　きらり、っと眼鏡を光らせて、なんだか納得顔のルードヴィッヒである。

――って、なにを納得してますの？　こちらが困っている時に、このクソメガネは……あ、そうですわ！

ミーア、そこで思いつく。それから、澄まし顔でオウラニアに向かって……。

「オウラニアさん、実は、今回はわたくしの大切な忠臣を連れてまいりましたの。こっちの眼鏡をかけているほうがルードヴィッヒ。そして、あちらの剣を持ってる、ちょっぴり……すごく？　怖い感じの方がディオンさん」

「はぁー」

突然のことに、ポカンとした顔をするオウラニアに構わず、ミーアは続ける。

「ルードヴィッヒは、わたくしの頭脳労働の半分ぐらいを担っていただいておりますわ！」

ミーア、思いっきり盛る！　盛る！　盛る！

……もっとも、この場合の『盛る』が、多いのか少ないのかは、議論の余地がありそうなところであるが、それはともかく……。

――オウラニアさんの尊敬を少しでも削いでおければ、重畳ですわ。

今回のミーアには大きく分けて二つの目的がある。

一つは、言うまでもなくハンネスを探すこと。

もう一つは、ガヌドス国王の暗殺を防止し、ヴァイサリアンの隔離地区の問題を解決し、それにより、あの忌まわしき黄金のアレが建つことを事前に防ぐことだ。

特に黄金のアレを防ぐため、あまり目立ちたくないと思うミーアであるのだが……。

――オウラニアさんのこの態度を見るに……今回のことをオウラニアさんを前面に押し出して解決したとしても、わたくしの功績を讃えるとかなんとか言い出して、アレが建ってしまいそうですわ。

であれば、オウラニアの尊敬の念を少しでも下げておかなければならないわけで……。

「わたくしは、このルードヴィッヒがいなければ、大した働きもできませんわ。ルードヴィッヒやディオンさん、それにアンヌ……大切な臣下たちがいてこそのわたくしなのですわ」
だから、これからこの国ですることも、自分の功績だけじゃないよ？　だから、ワケのワカラン黄金の建造物とか建ててくれるなよ！　と言外に、力強く主張するミーアである。っと、
「えーと、つまりー、私も、ルードヴィッヒさんのような、頭のいい家臣が必要とー、そういうことですかー？」
「え？　あ、うーむ、まぁ、そういうこと……になるかしら？　わたくしたち、上に立つ者が、自分だけでできることなど、ほとんどないというのは事実ですわ」
「なるほど……。そういうことなんですねー」
オウラニアは、神妙な顔で頷き……。一冊の本を取り出した。その表紙には手書きで「ミーア師匠金言録」なる、珍妙なタイトルが書かれていた！
「なっ！　なんですの、その本は……」
「ミーア師匠のお言葉を忘れないようにメモしておこうと思ってー」
などと、筆を動かしつつ、オウラニアは言った。
「良き家臣を得ることこそが、良き姫への第一歩。ミーア師匠、とっても勉強になりますー。さすがは、ミーア師匠ですー」
「ちっ、違いますわ！　ああ、いえ、別に違いはしませんけれど……そうではなく……」
ミーア、思わず舌打ち。
これでは、まるで、ルードヴィッヒを家臣につけたこと自体が、ミーアの功績のようになってしまっている。ルードヴィッヒが優秀であればあるほど、自らの評判が上がる効果が生まれてしまいそうで……。
――ぐぅう、ぎゃ、逆効果ですわ……。なんとかしなければ……。
頭を抱えるミーアなのであった。

こうして、黄金のミーア燈台の建造までの道のりは、着々と舗装されつつあるのだった。

第六十五話　作戦会議

ミーアが、微妙に納得いかない顔をしている中で、オウラニアは、子どもたちのほうに目をやった。
「あらー、ヤナとキリルも来てたのねー」
そうして親しげに、ヴァイサリアンの子どもたちに、歩み寄る。
どうやら、あの釣り大会以降、仲良くなったらしい。いや、仲良くなったというか……どちらかと言うと、オウラニアのほうがいろいろ会いに行って面倒を見ているらしいが。
自国の民ということで、少し意識が変わったのかもしれない。
それはそれでよい変化と言えるのだろうが……。
ヤナとキリルのそばに行くと、躊躇いなく頭を撫でる。嬉しそうにするキリルと、恥ずかしそうに顔をしかめるヤナ。
そして、パティは、我関せず、と、すすっと音もなく引いていた。
……どうやら、馴れ馴れしくされるのは、あまり好きではないらしい。
「それでは、オウラニア姫殿下。詳しい話をお聞かせねがえますか？」
話を戻すように、ルードヴィッヒが咳払いした。
「ミーア姫殿下に助けを求めた、とお聞きしておりますが……」
「ああー、ええーと」
っと、オウラニアは小首を傾げて……。
「と言っても、詳しいことは、そんなには知らないのー」
そう言いつつ、彼女はヴァイサリアン族の現状について、ぽつり、ぽつりと話し始める。
話によると、ガヌドスには、ヴァイサリアンに自由はないのだという。
彼らは、隔離地区に閉じこめられて、そこで、無償で船を造らせ

られている、と。
「ヴァイサリアンだってバレたら、すぐに捕まって隔離地域に送られることになっているわー。だからー……」
っと、オウラニアは手近にいたヤナの頭をわしゃわしゃーっとして、
「こんなふうに、おでこの刺青が見えるようなことされちゃだめよー？」
「あっ、ちょっ、やっ」
などと、散々髪をわっしゃわしゃにされて、ヤナは、唇を尖らせた。むぅっとした顔をオウラニアに向けるが……。それは、他人を寄せ付けないような、とげとげしい怒りではなかった。どちらかと言うと子どもがいじけた時にするような顔に見えて……。
ミーアは、思わず微笑ましくなる。
セントノエルに来たばかりの頃のヤナは、いじけたり、誰かに頭を撫でることを許したり、そんな余裕すら、なかったのだから。
「ごめんねー。ヤナは可愛いから、からかいたくなっちゃってー」
などと、特に悪びれもせず言ってから、オウラニアは続ける。
「まぁ、今は、そこまで厳密に隔離地区に送るわけでもないしー、子どもだったら見逃してもらえるかもしれないけどー」
と言ってから、彼女は、深くため息を吐いた。
「前まではー、ヴァイサリアンは怖い海賊なんだって、ずっとずっと言われてたからー。隔離されてると聞いても、特に不審には思わなかったわー」
――ああ、わかりますわ！　その感じ！　確かに、そうなんですのよね！
ミーア、心の中で、オウラニアに深ーく共感する。
姫というものは、自分に直接関係ない民のことには、そんなに興味はないものなのだ。
ミーアがルールー族のことをまったく知らなかったように、あるいは、民の窮状を知らなかったように……。オウラニアもヴァイサ

リアンについては、ほとんど知らなかったのだ。
「しかし、恐ろしい海賊……。聞くのも恐ろしい怪談として扱うことで、詳しく知ろうと思わせない……そのやり口は、なんだか、クラウジウス家に似ている気がしますわね」
ふと、ミーアは思い出した。
「クラウジウス家ー？」
首を傾げるオウラニアに、ミーアは呪われたクラウジウス家と、混沌の蛇のことを教える。
混沌の蛇については、話すか、多少は迷ったものの、結局は話すことにした。
ここまできて、オウラニアが蛇だということはないだろうし、なにより、師として慕ってきてくれている彼女に、あまり隠し事はしたくなかったのだ。
「まぁー、そんな恐ろしい存在がー？」
「ええ。彼らは、国の腐敗に吸い寄せられるようにしてやってきて、潜在的な憎悪をより巨大なものへと育て上げる。そうして、内乱なり、戦なりを起こさせて、秩序を破壊し、混沌へと導く。実に姑息で嫌らしい連中ですわ」
言いながら、ミーアは、ふーむ、と考える。
――今回のガヌドス国王の暗殺事件……蛇はどの程度関与しているのかしら？
オウラニアから聞いたのは、あくまでもヴァイサリアンの隔離地区、及び、そこで行われている奴隷労働について、である。おそらく国王暗殺や、その後の内乱に関しては、その辺りに原因があると推測するミーアであったが……。その裏に蛇の暗躍があったかどうかは微妙なところだ。
――蛇がいなくても、もしかしたら、事件が起きていたかもしれない、という絶妙なポイントを狙ってくるのが、連中の嫌らしいところですわね。
「で、まぁ、話を戻しますけれど、基本的な段取りとしては、わた

くしかアベルがヴァイサリアンの方たちの窮状を直接見て、それから、ガヌドス国王に談判するというのが、妥当かな、と思うのですけど……」
ちらちらと知恵袋ルードヴィッヒの顔色を窺いつつ、ミーアが言う。
それに気付いたのかルードヴィッヒは、一瞬、オウラニアのほうに視線をやってから、わざとらしく深々と頷いてみせた。
「そうですかー。ヴァイサリアンの隔離地区を、ねー」
ミーアの言葉を受けたオウラニアは、なぜだろう、ちょっぴり浮かない顔をする。
「あら、なにかありますの？」
「それは、少し難しい、と思いましてー」
「あら？　なぜですの？」
オウラニアの言葉を疑うわけではないが、実際に見たほうが確実なのは事実。それに、先ほどのオウラニアの言葉を聞く限り、オウラニア自身もそれほど詳しく事情を知っているのではないようにも思える。
それならば、なおさら、視察に行く必要がありそうなものだが……。
「なぜかというと、隔離地区はー」
オウラニアは、すぅっと窓のほうを指さす。その先には、青々と光る海が見えて……。
「海を渡らないとダメだからー」

第六十六話　ミーア＝オト〇〇オネーサン・ルーナ・ティアムーン

ヴァイサリアンの隔離地区を見るべく、ミーアたちは、オウラニアの案内で宿屋を出た。

同行者は、アベル、アンヌ、オウラニア、ルードヴィッヒとディオンである。

他のメンバーは宿で休憩することになった。

特に子どもたちは、さすがにここまでの旅で疲れたのか、キリルなどはすでにウトウトし始めていた。

ミーアもウトウトしたかったし、このままベッドに入って寝てしまいたいのは山々だったが、暗殺事件が起こるのが、予定では明日になっているため、あまり余裕がなかったのだ。

――あまり早く現地入りしてしまうと、未来が変化してしまうかと思ってギリギリになってしまいましたけど……。

その甲斐あってか、ベルに確認したところ、暗殺事件の日時に変化はなかった。代わりに暗殺事件が暗殺未遂事件になっていた。それは良いのだが……。

――わたくしが、続きを見ようとした途端に、その続きが変化してしまったんですわよね……。

せっかく、これから起こることを盗み見して、できるだけ簡単に、黄金の燈台が立たないルートに入ってやろうと思ったのだが……。

――つまりは、今の状態というのは、非常に変わりやすい状況……ということかしら？　繊細で、少しの行動の違いが大きな変化に繋がる、みたいな……。

以前のミーアがつけていた日記とは大違いである。

おそらく、記述しているのがルードヴィッヒであるから、正確さを大切にしているというのもあると思うのだが、それ以上に、状況が流動的だからなのだろう。

――あるいは……わたくしの行動に重みが出てきた、ということもあるのかしら？

そんなことも思ってしまうミーアである。

そうなのだ……。今やミーアは、本人の資質に関わらず、相当な影響力の持ち主なのである。

未来に対する影響力どころか、過去に対する影響力とて持ち合わせる、まさに影響力の塊なのだ。巨大な塊なのだ！（物理的な塊ではないので念のため……）

そんなミーアが、これから先に起こることを読んでしまうとどういうことになるのか？

当然、未来はその瞬間に変化する。なぜなら、ミーアの行動が未来に及ぼす影響が大きすぎるからだ。

――ううむ……これはなかなか厄介な問題ですわ。わたくしがちょっぴりサボろうとするだけでも、大きな変化が出てしまう……。とすると、やはり、当初の予定通り、ベルから事情を聞くことが肝要ですけれど……あの子、サボりがちなんですわよね……いえ、でも、そのぐらい適当じゃないといけないのかしら……ううむ。

などとつぶやきつつ、ミーアはやれやれ、と首を振った。

「楽はできないものですわね。たまにはゴロゴロ、甘い物を食べて生活したいものですけど……」

割とすでに実現できている夢を口にしつつ、歩いていると……。不意に、建物が途切れ、潮の香りのする風が吹いてきた。

「おお、海ですわ！」

そうつぶやきつつ、ミーアは片手で髪を押さえる。キラキラ輝く海面に、瞳を細めつつ、ミーアは隣にいたアベルに微笑みかける。

「うふふ、あの夏が懐かしいですわね」

「ああ。なんだか、ずっと昔のことに感じるが、よくよく考えると二年前のことなんだね」

爽やかな笑みを浮かべるアベルに、ミーアは、うんうん、っと頷く。

「あれは、とても貴重な体験でしたわ。海で泳いだり、巨大な人食い魚を殴ったり、森で食べられるものを探したり。白月宮殿にいてはとても経験できないことばかり」
それからミーアは、両手を後ろ手に組んで、あざとい笑みを浮かべて……。
「そ・れ・に、アベルがとっても頼りになるってこともわかりましたし……」
上目遣いで、からかう気満々のミーア＝オトナノオネーサン・ルーナ・ティアムーンである。実にウザ……見る人が見れば可愛く見えなくもない仕草であったのだが……。
「ははは。今後もそう言ってもらえるよう鋭意努力するよ。君の期待に応えるためにね」
ものすごーく素直に、真摯に返されてしまったので……思わず照れくさくなって、ごふっとむせるミーアである。大人の余裕などどこにもなかった。
ミーア＝オトメナオネーサン・ルーナ・ティアムーンであった。
一方で、イチャイチャを始めるミーアたちを見てオウラニアが……。
「……なるほど。これが、ミーア師匠の恋愛戦略ー。とってもあざといわー！」
などと嬉しそうにメモを取っていたが、まぁ、それはともかく……。
「あっ、ミーア師匠、あそこがそうです」
その声に、ミーアはハッと顔を上げる。
オウラニアが指さす先、見えたのは、海の向こう側にぽっかりと浮かぶ島だった。
セントノエル島よりやや小さいものの、それなりの大きさのある島だった。
「ふむ……あれが……」
ミーアが、そちらに歩いていこうとしたところで……。

「おや？　あの島に興味がおありですか？　お嬢さん」
唐突に声をかけられる。
道の反対側、一人の男が立っていた。年の頃は二十代の半ばと言ったところだろうか？
頭には洒落たフェルトの帽子を被り、そこから、白金色の癖っ毛が外に飛び出している。
顔にはいたずらっ子のような笑みを浮かべ、その目は興味深げにミーアたちを眺めていた。
「ふーむ、察するに、ご旅行中の貴族のお嬢さまとか……？」
アベルがさりげなく、ミーアをかばうように身を寄せる。それに、ちょっぴり、ほわぁっとなりつつも、ミーアは、できるだけ平静を装った口調で答えた。
「外れですわ。わたくしは、シャローク・コーンローグの商隊の者ですわ」
「ほうほう。あの大商人シャロークの。なるほど、それでは、お嬢さんは商人ということか。あるいは、その娘さんかなにかかな？」
「まぁ、そんなところですわ。そういうあなたは、吟遊詩人かなにかかしら？」
「ははは。音楽は好きだが、そんな洒落たものじゃなし。ただのしがない探検家さ」
「まぁ、探検家！」
一瞬、ベルを連れてこないで良かった、と思うミーアである。もしも、ベルがいたら、きっとうるさかったことだろう。
「なるほど。探検家の方とお話しするのははじめてですわね」
マジマジと眺めるミーアに、男は、茶目っ気のある笑みを浮かべてから、
「しかし……」
帽子を脱ぎ、手の中でもてあそぶようにしてから、男は言った。
「今は、時期がよくないな。あまり、長居はしないほうがいいだろう。それに、ヴァイサリアン族のことやらなんやらにも、あまり首

を突っ込まないほうがいいだろうな」
ふわり、と、男の髪が風に踊る。それを見た瞬間、ミーアは、ふと気付く。
「あら？　あなた、どこかでお会いしたことがあったのではないかしら……」
彼の顔には見覚えがあった。だが……いったいどこで……？
首を傾げるミーアに、青年は、ウインクして。
「失礼、美しいお嬢さん。あいにくと、私には、あなたにお会いした記憶はないが……」
それから、彼は帽子を被り直して、
「まぁ、また縁があったらお会いすることもあるだろう」
それから、気障っぽくウインクして、颯爽と去っていった。

第六十七話　悲報！　ダレカの春、終わる……

さて、時間は少し遡る。ガヌドス港湾国、王都の一角にて。
蛇導士、火燻狼は、鼻歌など歌いながら町を闊歩していた。
生き生きとした彼の足取りは、すこぶる軽かった。
端的に言って、この国に来てからの燻狼は絶好調であった。
毎日、いろいろな場所に出ていっては、気軽に、気安く、悪意の種をばらまいていた。
人が集まる以上、どこにだって軋轢は生まれる。秩序を破壊し、混沌へと導く、そんな土壌はどこにだってあるものなのだ。
まして、この国は初代皇帝の影響を強く受けた国。混沌の蛇の源流に近いヴァイサリアン族の存在もある。国家構造自体に付け入る隙があり、実になんとも活動しやすい場所だった。
しかも、ここには邪魔者である帝国の叡智も、あの恐ろしいディオン・アライアもいないのだ。
気持ちはとっても朗らかで、充実した毎日である。
一日一悪、日々の積み重ねが大事。燻狼は、非常に勤勉に動き回っていた。
その日、彼が向かったのは、漁師町の一角にある家だった。
特に大きいでもなく、かといって小さくもなく、ありふれたどこにでもある家。
その選び方に、燻狼はニンマリ笑みを浮かべる。
――ふふふ、さすがは鴉の生き残り……。町に溶け込む術を持ってますねぇ。
特に躊躇いもなく扉を開けて、中に入る。っと、直後、目の前に刃が突き出される。
「おおっと！　いきなり物騒な」
燻狼は慌てて身を屈めつつ、

「勘弁してくれませんかねぇ。せっかく、ジェムの友人が訪ねてきたっていうのに」
「なんだと……？」
刃を突き出した男は、警戒心を解くことなく、油断なく燻狼を睨みつける。その身のこなしは俊敏だったが……、どちらかというと我流の趣が強かった。
――おや、鴉の生き残りだと思ってたが、こいつは……。
「どういうことだ？　お前は、風鴉の関係者か？　それとも、白き鴉のほうか？」
「どっちでもありませんよ。ああ、蛇のことはご存知ないんですかね？」
「蛇……？」
怪訝そうに眉をひそめる男を見て、燻狼は愛想笑いを浮かべる。
「ああ、いえいえ。なんでもありません。俺はジェムの……まぁ、個人的な友だちでね。いろいろと事情を知ってて、あなたに協力もできるだろうと思ってますが……」
そう言った瞬間、男の緊張感がわずかに薄らいだのを、燻狼は見て取った。
肩をすくめつつ、口も滑らかに続ける。
「いやぁ、しかし……まさか、あの鴉の関係者が、まだこの国に残っていたとは思いませんでしたねぇ」
かつて、各国に張り巡らされていた諜報網……。サンクランド王国の特殊部隊『風鴉』によって築かれたそれは、けれど、レムノ王国革命事件以降、サンクランド王国自体によって取り去られていた。
けれど……。
――諜報網なんてものが、そう簡単になくなるわけもないってね。
風鴉の構成員の引き揚げはできても、現地で築いた協力者の繋がりまで、完全に排除するのは難しいわけで……。
――帝国のほうは、あの帝国の叡智の手の者が根こそぎにしていったが、ガヌドス港湾国程度には、そんなことはできない。ふふふ、

読みが当たったねぇ。しかし、ジェムのやつも、意外と優秀だったんですねぇ。小物面してたくせして。おかげで、仕事がやりやすくなる。
燻狼は上機嫌に笑ってから、
「ところで、おたくは、どうして風鴉に協力を？」
その問いに、男は、おもむろに、自らの前髪を上げた。その額には、火傷の痕が見えた。
「ヴァイサリアン、か。なるほど。刺青を誤魔化すために焼いたんですか」
「この国では、なにかと生きづらくてな。だが、一族の誇りも、同胞の苦難も思わぬ日はない」
「だから、サンクランドに協力したと？」
「サンクランド国王は、正義と公正を重んじる、だったか？　この国のヴァイサリアン族の扱いを見れば、必ずや助けてくれるだろうと思ってな」
疑う様子を微塵も感じさせない言葉を聞いて、燻狼は小さく頷く。
――なるほど。蛇というよりは風鴉の協力者。それもかなり純粋な協力者らしい。
サンクランドの国粋主義者が訴える正義と公正に、ここまで感銘を受けているとは……っと、まるで擦れていない子どもを見るような微笑ましい気分で、燻狼は接し方を決める。
「なるほど、その気持ちよくわかりますよ。それじゃあ、その方向で考えていきましょうか。サンクランドが乗り出したくなるような騒動を起こして、ガヌドス王政府を転覆させるとか……ね」
いつものとおり、相手の欲求をくすぐるような物言いを、心おきなく披露する燻狼であった。
男のもとを離れた燻狼は、ルンルン気分で帰途に就く。
「まぁ、帝国やレムノ王国を堕とすよりは、効果は薄いんだろうが……混沌への足掛かりになれば重畳、重畳」

すべての国が、平和で、安定し、幸せを享受する、などということになれば、混沌は遠のくばかり。されど、どこか一つの国でもきな臭い空気を出していれば、秩序と平和は危うくなる。
「こんな小さな国だが、帝国の隣ですしねぇ。治安が悪化すれば、帝国としても見過ごすわけにはいかない。結果として……ふふふ」
とても……とってーも、朗らかな気持ちだった。
我が世の春を謳歌していた、と言っても過言ではなかったのだが……。
ものすごーく楽しげに、ルンルン気分でアジトに帰ってきた彼に、今やすっかり相棒となりつつあるヴァイサリアン族出身の暗殺者（……つい先ごろ名前を知ったがカルテリアというらしい。まぁ、蛇同士なので本名かどうかは知らないが）がなにげない口調で言った。
「聞いたか？　どうやら、連中、今度はこのガヌドスに来るらしいぞ」
「連中……？　はて？　それは一体全体、誰のことで……」
「決まってるだろ？　帝国の叡智ご一行さまだ」
肩をすくめるカルテリアに、燻狼はかくん、と首を傾げて……。
「んんっ……？」
微妙に笑顔を引きつらせる燻狼であった。

第六十八話　ミーア姫、ちょっとだけ頭脳労働する

「ミーアさま……い、今の方は、まさか……」
ふと見ると、ルードヴィッヒが……、彼にしては珍しく、ものすごーく驚いた顔をしていた！
それはもう、眼鏡の奥の目を思いっきり見開いて……その口はかすかに震えている。
その様子を見てミーア、若干、焦る。
――あら？　これ、もしかして、今の方に見覚えがあって当然と言うことなのかしら？
などと思ってしまったミーアは、咄嗟に、
「ええ……そうですわね」
ついつい、訳知り顔で頷いてしまったのだ。
ええ、もちろん、わかってますわよ？　という感じで！
――って！　そんな反応してしまったら、今のが誰だか教えてもらえませんわ！
自らの失態に気付いたものの、後の祭りである。
――うう、失敗しましたわ。ルードヴィッヒは、しっかり知っていそうな口調でしたのに……。
「それで、あの……追わなくとも、よろしいのでしょうか？」
さらにルードヴィッヒからの追撃が入る。が、それは、ミーアからしてみれば、小さな波だった。
そう、ミーアの背浮き式思考法は、自分で動くことはできない。誰かが立てた波に、のんびーりと流されていくことこそが、真骨頂なのだ。
ゆえに、ミーアは、その波に乗る！　流されるように、考える！
――追う……つまりは、追うべき人物なわけですわね……？　では、今のところ追うべきは誰かしら？　蛇の関係者という線と、ヴ

アイサリアンの隔離にまつわる人物……あとは、ハンネス大叔父さま……んっ？
っと、そこで、ミーアは、ポコンっと手を打った。
――ああ！　そうですわ！　今の方、あのクラウジウス邸で見た肖像画にそっくりなんですわ！
大叔父ハンネスとされる肖像画。パティも認めたその容姿に、先ほどの男はそっくりで……。ということは……。
「ハンネス大叔父さま……。まさか、本当に、あの肖像画のように若々しい姿をしているとは思いませんでしたわ……」
パティを連れてこなかったことが悔やまれる。
「申し訳ありません。私も、あまりのことで、止めることができませんでしたが……。今からでも追いかけますか？」
ルードヴィッヒの再度の問いかけ。
「ううむ……まぁ……そうですわね。追いたいのは山々ですけれど……」
ミーアは、チラリとディオンのほうに目を向ける。と、
「やめておいたほうがいいでしょうな。こちらを分断しようという狙いかもしれない」
「そうですわね。先ほどの方が蛇の手の者ということも考えられますし……。仮に大叔父さま本人だったとしても、ご自分で言っておられましたし。あまり首を突っ込まないほうがいい、と。ということは、少なからず、ここには危険があるのかも……」
そう考えれば、ディオン・アライアを追跡に出すわけにもいかず。ルードヴィッヒにお願いするのも危険。帝国の叡智の知恵袋になにかあれば、帝国は大変なことになってしまう。
であれば……。
「大叔父さまらしき方がいるとわかっただけでも収穫ですわ。今は、それで満足することにしますわ」
基本的に、ミーアは無理しないのだ。
明日すべきことまでしようとすれば、今日すべきことが疎かにな

る。
種を蒔くに適した時があり、刈り取るに適した時がある。種を蒔く前から刈り取る愚を冒すべきではないのだ。
「今すべきは、どうやって、あの島の様子を見るのか、ですわね。」しかし……」
そうして、改めて島を眺めるが……。
「ううむ……結構、距離がありそうですわ。船を手配する必要がありますわね」
そう言うと、オウラニアは眉間に皺を寄せて、難しい顔をする。
「そうなんですけどー、ガヌドスの船であそこに行ってくれる船はないと思いますー」
「まぁ、そうなのでしょうね……。隔離地区なわけですし……」
っと、納得の頷きを見せるミーアに、オウラニアは首を振った。
「もちろん、それもありますけどー、島の近くは岩礁と複雑な海流でー。食糧を運んでる船も、腕利きの船員に運ばせているぐらいなんですー」
「ううむ、さすがは隔離地区……ということかしら。これは、とても厄介ですわ」
「それなら、いっそ、泳いで行くってのはどうです？」
ディオンが、冗談とも本気ともつかない口調で言った。
ミーアは、島までの距離をなんとなく眺めて……。
――すごく……遠いですわ。
泳いでいくのは、ちょっと……と思っていると……。
「さっきも言ったとおりー、海流が強いから―、泳いでいくのも危ないかもー」
オウラニアはそう言って渋い顔をする。
「私もー、あっちのほうに海釣りに行こうとした時に、駄目だって止められたわー」
「なるほど。オウラニアさんがそういうのであれば、やめておいたほうがいいですわね。うん、うん……」

ミーア、あっさり頷いて、それから、ううむむっと唸る。
「しかし、そうなってしまうと、これはいよいよ視察に行くのは難しそうですわね。とすると……」
っと、ミーアは静かに頷き……。
「別の手を考えるしかありませんわね」
そうして、ミーアは、自らの知恵袋のほうに目を向けようとして……。

第六十九話　ナニカの干物をラフィーナの土産に……

「別の手？　もしかして、ミーア師匠には、なにかお考えがあるんですかー？」

ルードヴィッヒに話を振ろうとした瞬間、弟子であるオウラニアの問いかけが、横から滑り込んできた。

ミーアは、ちぃ！　っと舌打ち……を心の中でやりつつ、表面上は、しかつめらしい顔で腕組みしてみせる。

本当であれば、まず、ルードヴィッヒに聞いて、なにかアイデアをもらいたかったところであるが……。あっさりと、まぁ、仕方ないか、と思い直す。

今回に関して言うと、ミーアにも作戦がないではなかったためだ。

「そうですわね。一つ、あるにはありますけれど……」

そうつぶやきつつも、チラリと見るのは、ディオンのほうである。

――正直なところ、ディオンさんを、このガヌドスに連れてきた時点で、わたくしの仕事は、ほとんど終わっていると言っても過言ではありませんわ。

要するに、ミーアが考えていたのは、暗殺を防いでやった代わりにヴァイサリアン族の境遇を改善することである。

いわば、ガヌドス国王に恩を着せてやろうと思っているのだ。

――さすがに、命を救ったわたくしが、あの島が見たいと言えば、断りはしないでしょうし、これぞ一石二鳥ですわ。

なぁんてことを安直に考えているミーアである。

――ただ問題は、それをしてしまうと、すべてがわたくしの功績になりかねないこと……。なんとかオウラニアさんに、功績を擦り付けたいところですけど……。ここは、やはり……。

そうして、今度はオウラニアに目をやる。

「んー？」

っと、不思議そうに首を傾げるオウラニア。ミーアの腹案が気になるのか、なにやら考え込んでいる様子。
そんなオウラニアの目をまっすぐに見つめ、ミーアは、そっと問いかける。
「オウラニアさん……わたくし、大切なのは、手段よりも、あなたの気持ちだと思っておりますわ」
「え……？」
きょとん、と瞳を瞬かせるオウラニアに、ミーアは続ける。
「あなたが、どうしたいのか……。それ次第ですわ。大切なのは、あなたが、ヴァイサリアン族のことをどうしたいのか、どうするのが、正しいと思うのか……。だって、あなたは、ガヌドス港湾国の姫なのですから……」
ルードヴィッヒや、アベルの前できちんと、それを強調しておく。
あくまでもこれは、オウラニアの問題で、ガヌドス港湾国の問題なのだ。
ゆえに、オウラニアがどうしたいのか？　が、最重要なことだ、と。
「あなたは、どうしたいのかしら？　オウラニアさん」
「私……？　私、は……」
オウラニアは、うーん、うーん、っと難しい顔で唸ってから……。
「私はー、ヴァイサリアンが迫害されている状況が、良くないって、思ってー。それで、それをなんとかしたくってー」
「ふむ、この国で行われている不正義をなんとかしたい……そういうことですわね？」
確認するように、ミーアは言う。
オウラニア自身の口で、言葉で、それを表明させることが肝要だと考えるからだ。
彼女がそれを公言してくれれば、ミーアは、それを手伝ったという形がとれるからだ。
――わたくしは、オウラニアさんが言ったことの実現のために、

手助けをしただけ、と言い張る。黄金の灯台を遠ざけるには、これしかありませんわ。
「そうですー。私はー、ヤナやキリルみたいな思いをする子が、出なければいいなって、思ってー。それをなんとかしたくって……だから、ミーア師匠に助けを求めましたー」
そのオウラニアの言葉に満足してから、ミーアは言った。
「なるほど。よくわかりましたわ。わたくしは、あなたのしようとすることを、全面的にお手伝いいたしますわ」
あくまでも、お手伝いですよ！　と強調するミーアである。
「さて……と、それでは、見るべきものは見ましたし、宿に戻りましょうか……」
と、そこで、ミーアは街並みにふと目を転じ……。それから、自らのお腹をさすり、さすりして……。
「ふむ、せっかく、ガヌドスに来たのですから、なにか、お土産を買っていくというのもいいのではないかしら……？　ラフィーナさまも、誕生祭には来てくれるということでしたし、なにかお茶菓子でも……。ねぇ、オウラニアさん、ガヌドスには、なにか美味しいものはないかしら？」
「ありますよー。ガヌドスは特にお魚が美味しいですけどー、例えばー」
ととと、っと歩き出したオウラニアは、ニッコリ笑みを浮かべて、露店の一角を指さした。
「これなんてどうでしょうー？　これは、女王烏賊（じょおういか）の干物なんですけどー」
ミーアは、それを見て、軽く眉をひそめた。
そこにあったのは、なにやら、足が十本ある、不気味なナニカの干物だった。
「ええと……。なんだか、ちょっぴり見た目がグロテスクですけど、これ、食べられるのかしら？」
首を傾げるミーアにオウラニアはニコやかに言った。

「とっても美味しいですよー。噛めば噛むほど旨味が出て来る絶品でー、お土産としては、大変に人気があるみたいですー」
「なるほど。まぁ、よくよく考えれば、ラフィーナさまもヴェールガの民。魚類には親しんでいるでしょうし、こういったものも喜ばれるかもしれませんわね」
ということで、ミーアは、女王烏賊の干物を買って帰ることにするのだが……。
後日、ラフィーナにお土産として出した際、ラフィーナが、なにやら、泣き笑いのような顔をしているのを目の当たりにするミーアであったが……。
今のミーアにそんなこと、知る由もないのであった。
……ちなみに、ミーア自身は噛めば噛むほど味が出る干物がたいそう気に入ることになるのだが、どうでもいい話であった。

第七十話　刻み込まれる鮮烈なイメージ

「なにか、お考えがあるんですかー？」
そう聞いても、ミーアは答えてはくれなかった。
それも当然のことか、とオウラニアは思い直す。
――他人に聞く前に、姫ならば、まずは自分で考えろということねー。
ミーアは、いつもそばにいて答えをくれる、知恵袋のような存在ではない。そもそも、そんなものに頼ろうとするのを、きっと認めはしないだろう。
相手は帝国の叡智。国の危機や問題を、自らの知恵働きで解決してきたスゴイ人なのだ。
――家臣のルードヴィッヒさん……だったかしらー？　彼に頼っている部分が大きいなんて言っていたけれどー、ふふふ、さすがに半分は彼の手柄というのは、盛り過ぎじゃないかしら―？
思わず心の中で苦笑いしつつも、オウラニアは思う。
――でも、それはきっとー、ただの謙遜じゃなくって、家臣に頼る大切さを私に教えるためだったんじゃないかしらー？
誰もがミーア・ルーナ・ティアムーンのように、振る舞えるわけではない。
帝国の叡智のように、どんなことでも自分一人で最善の策を立てられる……そんな稀有な存在が、どこにでも転がっているはずがない。
……まぁ、ミーアは割とベッドの上に転がっていることも多いが、それはともかく。
――むしろ、何でも一人でやる、なんて常人離れした業は真似をしてはいけないということかしらー？　私ごときの力では、一人でなんでもしようとすると失敗するからー、信頼のおける家臣を作る

ようにって言ってくれてるんだわー。
と、オウラニアは、さらに考える。
――あるいは、自分で思いついたものが最善策だと確信が持てたとしても、きちんと家臣の意見には耳を傾けるように、という警句であった可能性も考えられるわー。
帝国の叡智が叡智たるゆえんは、自身の考えた良策に満足しないことなのではないか？
良策に、家臣の意見を取り入れて、最良策にするように、と……。他ならぬ、師匠であるミーア自身がそのようにしているよ、と……。
ミーア師匠は教えてくれようとしていたのではないだろうか……？
そのようにして、妄想の波が高まってきたところで……。
「大切なのは、手段よりも、あなたが、ヴァイサリアン族のことをどうしたいのか、どうするのが、正しいと思うのか……ですわ。あなたは、ガヌドス港湾国の姫なのですから！」
ざんぶっ！　っと、放り込まれるミーアの言葉。その重み……生まれた波はあまりに高く……、オウラニアの心は、呆気なく呑み込まれる。
――私が、どうしたいのか……。
そうして、オウラニアは考える。自分はどうしたいのか、どうすべきだと思ったのか……。
――ガヌドスの姫として……。
ああ！　これだ！　と、オウラニアは思う。
自分はミーアになにを期待したのか？
答えを教えてもらうことか？　否、違う！
姫としてどう生きればいいのか、その道を教えてほしいと願ったのではなかったか？
だからこそ、ミーアは……お前はガヌドスの姫だから、姫として考えなければならない、と指し示してくれたのだ。
ミーアが来てくれたから安心しかけていた。彼女がなんとかしてくれると期待していた。

だが、違う。違うのだ……。
ガヌドスの姫としてオウラニアが行動する、その手伝いにこそ、ミーアは来たのだ。
「私は、ヴァイサリアンが迫害されている状況が、良くないって思って……」
そうして、オウラニアは自身の心と向き合う。
セントノエルでの出会い、気持ち……姫としての決意を、口にする。
「だから、なんとかしたくって……」
我ながら拙い言葉、と思ったところで、ミーアが補足してくれる。
「この国で行われている不正義をなんとかしたい、そういうことですわね？」
しっかりと、オウラニアの目を見つめて、言ってくれた。だから、オウラニアは自然に頷いて、
「そうです。ヤナやキリルみたいな思いをする子が、出なければいいなって、それをなんとかしたくって。だから、ミーア師匠に助けを求めました」
そのオウラニアの答えに、ミーアはとても満足した顔をした。
まるで、不出来な弟子に「よくできました」とでも言わんばかりの顔で、
「わたくしは、あなたのしようとすることを全面的にお手伝いいたしますわ」
そう言ってくれた。
オウラニアの……王女としての初めての決意を支持し、手伝ってくれると言ってくれたのだ。
ミーアの言葉は、オウラニアを導く光のようだった。
――ミーア師匠の言葉って……私の行く道を、光で真っ直ぐに示してくれるみたい……。これって、まるでー。
その瞬間だった。
彼女の脳裏に、あるイメージが浮かぶ。浮かんでしまう！　それ

は……。

――そうー、まるで、灯台みたいー。

そのイメージは、ことのほかくっきりとオウラニアの頭に浮かび、なおかつ、すとーんと、彼女の腑に落ちてしまう。こう、すっとーん、っと見事に……はまってしまう！

そうなのだ、ミーアの言葉は、船が迷わぬよう、その行く先を照らし続ける、灯台のようなのだ。

――あるいは……そうねー。船乗りは、星々の光を頼りに方向を知るって言うけどー、ミーア師匠は、もっと強い光。まるで太陽か月みたいなー。そうー、月の灯台だわー。

上手いことを思いついた、とばかりに笑ってオウラニアは頷いた。

そのイメージは、オウラニアの深層心理に深々と刻み込まれてしまうのであった。

第七十一話　まさか……やっちまったんじゃあ……？

さて……ところ変わって。
シオン・ソール・サンクランドは、二年ぶりにガヌドスの王都にやってきていた。
馬車から降りたところで、思わずため息を一つ吐く。
「しかし、少々、想定外でしたね……」
肩をすくめつつのキースウッドの言葉に、シオンは苦笑いで答える。
「確かにな。まさか図らずも、こうしてガヌドスにまで来ることになるとは、思ってなかった」
エシャールの様子を見るため、グリーンムーン公爵家に行こうと思っていたシオンは、その件をエメラルダに打診した。結果、エメラルダの返答は、極めてシンプルだった。
『その期間は、ガヌドスに行っているため、できればそちらの別邸に来てもらいたい』
とのこと。
「まぁ、グリーンムーン家からガヌドスの情報を得ようと思っていたのだから、間違ってはいないが……、できれば、もう少し距離を置いたところから見ていたかった……」
と、そこで、シオンは腕組みした。
「しかし、逆に言えば……」
「どうかしましたか？」
「いや……。試みに問いたいのだが、エメラルダ嬢は、なぜ、ガヌドスに行ったんだと思う？」
「と言うと……？　いや、そうか……」
すぐに、キースウッドは合点がいったという様子で頷いた。
「我々をガヌドス港湾国まで引っ張ってくる必要があった。つまり、

ミーア姫殿下の指示で、ガヌドスに向かったと……、シオン殿下はそうお考えで？」
「そう考えるのが自然ではないだろうか？　さすがにこの時期に海水浴ということはないだろうし……」
そうして、シオンは空を見上げる。曇り空からは、今にも、ちらり、ちらり、と雪が降り始めそうだった。
ガレリア海沿いとはいえ、吹いて来る風は、それなりに冷たい。
「それに、エメラルダ嬢とて、暇ではないだろう。聖夜祭が終われば、ミーアの誕生祭がある。その後で、四大公爵家がそれぞれの威信をかけて、ミーアのために特別のパーティーを開いていると聞いている。そのような多忙な時期に、わざわざガヌドスに来る必要は、どこにもない」
「確かに言われてみれば……。エメラルダ嬢が、ミーア姫殿下の密命を受けて行動していると考えたほうが自然ですね」
ううむ、と唸るキースウッドに頷いてみせてから、シオンは続ける。
「あるいは……俺たちをガヌドスに連れていくことが目的と考えるなら、むしろ、メインで役割を与えられているのは俺たちのほうなのかも……。なにか、俺たちが対処すべき事案が、ガヌドスにあるのかもしれない」
小さく首を振ってから、シオンはグリーンムーン公の別邸を見上げた。
「いずれにせよ、当面は情報収集に努めるとしようか」
「そうですね。まぁ、ミーア姫殿下のことですから、どうしてもこちらに動いてほしい、などと言う時には必ず報せが来るはず」
などと、のんきなことを思っていたのだが……。
出迎えに出てきたエメラルダによって、即座に、その甘い考えは、捨てざるを得なくなってしまう。
「シオン殿下！　キースウッドさん、無事に辿り着けてなによりで

すわ」
　大貴族の令嬢に相応しくない慌てようで、パタパタと走ってきたエメラルダ。見れば、不安そうな顔をしたエシャールが、その後をついてくる。
「やぁ、エメラルダ嬢。それに、エシャール、息災なようで何よりだが……なにか、あったのかな？」
　怪訝そうに眉をひそめるシオンに、エメラルダが、唐突に言った。
「それが……ガヌドスの国王、ネストリ陛下が……暗殺されかけましたの」
　それを聞いた瞬間、シオンが厳しい顔をする。
「暗殺……？」
「ええ……そして、その容疑者として、オウラニアさんが……捕まってしまいましたの」
「なんだって……オウラニア姫殿下が……？　いったい、どういうことなんだ？」
　詰め寄ろうとするシオンを、キースウッドが慌てて止める。
「シオン殿下、ここでは、人目に付きます。続きは、屋敷の中で聞かせていただいたら、いかがでしょうか？」
　極めてスマートに、館の中に誘導しようとするキースウッド。であったが……。
「ただ、その前に……。ええと、ちなみに暗殺というのは、毒とか、もっと具体的に言うと毒キノコとか、そういったものでされたとか……そういうことは……？」
　暗殺未遂と聞いた瞬間、キースウッドは、咄嗟に思ってしまったのだ。
　これはもしや……ミーア姫殿下がやっちまったんじゃあ……？
などと。
　もちろん、キースウッドは、ミーアが暗殺を指示するような人物とは思わないし、彼女の周りが、忖度してやったとも思わない。
　ガヌドスで行われている非道は許されないものかもしれないし、

王に責任があるかもしれないが、そのために暗殺という手段をミーアが取るとは思わないのだ。
むしろ、キースウッドが疑ったのは、ミーアが、美味しいものでガヌドス国王を懐柔して、改心させちまおうぜ！　などと考えていたケースである。具体的には、キノコ料理などを、自作して、食べさせたのではないか？　と疑ったのだ。
――これは、大いにあり得るぞ？　ミーア姫殿下ならば嬉々として、善意を持って、やってしまいそうだ。
……ミーアへの信頼は、良い意味でも悪い意味でも揺らがないキースウッドである。が……。
「賊の襲撃があったということですわ。その下手人がどうやら、ヴァイサリアン族の男らしくて……」
話は数日前に遡る。

第七十二話　作戦会議は買い食いの後に

さて、話は少々さかのぼり……。

大叔父ハンネスらしき男が去った後、ラフィーナへのお土産に干物を買ってからのミーアなのだが……。さらに、オウラニア推奨のポヤァなる物を食べることになった。さながら、地獄に生える奇怪（きっかい）な果実といった見た目ながら、鮮烈な潮の香りと、プリプリっとした歯ごたえが魅力的な珍味だった。

こちらは、鮮度が大事らしく、お土産には適さないらしい。

――まぁ、見た目がグロテスクですし、どちらかというと珍味好きなクロエ向きかもしれませんわね。今度、誘って一緒に来た時にでも勧めてみようかしら……。それとも、ラフィーナさまも、誘わないと仲間外れにされたと思うかしら……？　どうせなら、みなに声をかけて、来てくれた方にはおススメすることにしましょうか。

ミーアはとても気が利くので、ラフィーナだけ仲間外れになったりしないよう、配慮を欠かさないのだ。

――しかし、思い出してみると、オウラニアさんは甘い物とか好きではなかったのですわね。それは、ちょっぴり計算外でしたわ。

珍味には満足したものの、甘い物がなければ、どうしても口寂しくなってしまうミーアである。

「あ、そうですわ。オウラニアさん、明日は、国王陛下の儀式がございますわよね？」

「ああー、冬漁の無事を祈るための『北網の儀式』ですねー。確かにありますけどー、よくご存じですね、ミーア師匠」

「ふふふ、それほどでもございませんけど……。それで、オウラニアさん、その件でお願いなのですが、わたくしたちも、見学させていただくことは可能かしら？」

「特に、見て楽しいものではないと思いますけどー」

っと、不思議そうな顔をするオウラニアに、ミーアはゆっくり頷いて。
「構いませんわ。ただ、その儀式の後で、お父さまのネストリ国王陛下に紹介していただきたいのですわ」
「ああ、なるほどー。確かに、正規のルートではお父さまはお会いにならないかもしれませんねー。明日の儀式で会ってしまえば、逃げられませんし、ちょうどいいかもー」
なぁんて、納得した様子のオウラニアであった。

「では、オウラニアさん、ここで」
お付きのメイドとともに去っていくオウラニアを見送ってから、ミーアは、ルードヴィッヒらのほうを見て……。
「さて……それでは、宿に帰りがてら、明日の段取りについて話をいたしましょうか」
「段取りということは……明日は儀式の後を狙って、そのまま国王陛下に談判する形をお考えですか？　島への視察をせずに？」
「ええ。そうですわね。それはそうなのですけど……それだけではありませんの」
ミーアはこくり、と頷いてから、
「明日は、特にディオンさんにしていただきたいことがあるのですけど……」
「おや、僕にですか……。それはそれは、そのようなきな臭い事態になるということですか」
ディオンは、自らの首をペシペシ叩きながら笑った。
「まぁ、なんにせよ、きちんと姫さんのことは守って見せますから、ご安心を」
などと気軽に言うディオンに、ミーアもにっこり微笑んで、
「ええ。期待しておりますわ。ですけど……」
と、そこで首を振ってから……。
「残念ながら、今回危険なのはわたくしでは、ございませんわ」

真っ直ぐにディオンを見つめて、かすかに声を潜めて言った。
「危ないのは、この国の国王陛下。明日、暗殺される恐れがございますの」
「暗殺……ですか？」
ルードヴィッヒは眉をひそめつつ、辺りに目をやる。
幸い、道は喧騒に満ちていた。
多少、漏れ聞こえたとしても、ただの戯言と聞き流してもらえるかもしれないが……。
「そのようなことを、いったい、どこから……？」
「例のあなたの日記帳から、ですわ。ルードヴィッヒ。ただ、あの日記帳、わたくしが知ってしまった時点で、微妙に記述が変化しますの。だから、あまりアテにし過ぎることはできないのですけど……」
「なるほど。ミーアさまの行動とその後の未来を記述したものゆえに、ミーアさまご自身が知った時点で変質してしまう、と、そういうわけですか」
「ええ。そうなんですの。それに、なぜかはわかりませんけど、記述の内容も、今回の件に関しては、あまり幅がないといいますか……夢と現実の記述が入れ替わるみたいなことは少なく、どちらかというと消えたまま文字が現れないということも……」
ルードヴィッヒの手による日記帳は、ミーアのものや、皇女伝とは一味違うものだった。
通常の記述のみならず、消えた時間線の記憶と思しき夢をも書き留めることで、最も到達する可能性が高い未来と、揺らぎの中で生まれた未来をも同時に知ることができる、優れもののはずで。けれど……。
「今回に関しては、いまいちなんですのよね」
しきりに首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒは、眉をひそめて……。
「あるいは……可能性としては、私の死というのもあるのかもしれ

ません」
唐突な言葉に、ミーアは思わずハッとする。
「死って……それは、どういうことですの、ルードヴィッヒ？」
「簡単なことです。観察者である私が死んでしまえば、日記の記述は残せない。記憶も残らないから、夢にも残らないわけです」
夢は、消えた時間線の記憶。なれど、その世界で早々に死んでしまっていれば、記憶が残りようもないわけで……。
「それは……」
ミーア、思わず唸ってしまう。
「確かに、考えられることかもしれませんわ……」
かつてのミーアが書いた日記は、ミーアが革命軍に捕まり、地下牢に幽閉されるという時間があったからこそ、書けた代物だった。
日々、ギロチンがにじり寄ってくるのは恐怖でもあったが、同時に、過去をのんびりと顧みる時間でもあったのだ。
けれど、このガヌドスでの危機は、どうやら、そういった類のものではないのだろう。おそらくは、もっと直接的な危機なのだ。
なにしろ、国王暗殺にしろ革命にしろ、下手に巻き込まれれば命にかかわるわけで。
「しかし……これは、おいそれと死ねなくなりましたね。せめて、死ぬにしてもミーアさまになにか、ヒントを残すような死にざまを……いや、けれど、それも意味がないのだろうか。今の行動が、どのようにベルさまのお持ちの情報に関係するのか……」
と、難しい顔をするルードヴィッヒに、ミーアは指を振り振り注意する。
「余計なことは考えなくても大丈夫ですわ。あなたに死なれたら困りますから、死なないことをまず考えなさい。あなたには、帝国の重臣として、きっちりと国を支えていただかなければなりませんもの」
「ミーアさま……」
思わず、目を見開くルードヴィッヒに構わず、ミーアはアンヌと

アベルに目を向け。
「アンヌも、もちろんアベルも、いいですわね。くれぐれも無理はしない、命を大事に行動すること」
最後にミーアはディオンに目を向ける。
「そういうことですから、ディオンさん、明日は、暗殺者への対応、よろしくお願いいたしますわ」
「おや？　僕には、命を大事に行動しろと言っていただけないので？」
おどけた顔をするディオンに、ミーアはニヤリと笑みを浮かべて。
「ええ。わたくしの剣は、暗殺者ごときの前で折れるほど、ヤワではございませんから」
ミーアのディオンへの信頼は、ある意味、とても強いのだった。

第七十二話　作戦会議は買い食いの後に（後書き）

ポヤァはホヤみたいなやつです。

第七十三話　ベルのすべきこと、見つか……らず？

さて、ミーアたちが帰ってくる前の宿屋にて。
部屋に残された少女たちは、かしましく話をしていた。
メンバーはベルとシュトリナ、パティとヤナ、キリルの五人だった。
「なるほど。ヤナたちが暮らしていたのは、もっとあっちの、ちょっと寂れたほうなんですね」
手のひらを庇のように額につけて、窓から身を乗り出すベル。その視線の先には、坂に沿って建ち並ぶ、赤い屋根があった。
「ベルちゃん、あんまり身を乗り出すと危ないわ。それに、ちょっぴりはしたない」
シュトリナの苦言に、素直に耳を傾けて、ベルはベッドの上に、ぴょこん、と飛び乗って。
「ええと、それで？」
足をぴょこぴょこさせながら言った。
「はい。貧民街の教会の神父さまに助けられて……もしも……あの時、助けてもらえなかったら、無事ではいられなかったかもしれない」
ヤナは、窓の外に目を向けながら言った。
「そうなんですね……。キリルくんを守りながら、生きてきたんですね」
しんみりとした口調で言うベル。
かつて、旧市街地に隠れ住んだこともあるベルである。幼い弟を抱えて、自分たちだけで生きていくということが、どれだけ大変なことなのかは、よくわかっているのだ。
――もしかしたら、あの町で遊んだ子どもたちの中に、ヤナやキリルみたいな子たちがいたのかもしれません。すごく苦労してたか

も……まぁ、ミーアお祖母さまの治世下の帝国では、そういう人たちも減ったと聞きますし……。ボクは、それを守っていけばいいのですけど。
「それは、大変だったね」
シュトリナの気遣うような言葉に、ヤナは小さく首を振った。
「いいえ。大したことはありません。キリルはいい子だから」
そう言って、彼女はキリルの頭を撫でた。キリルは、ちょっと嬉しそうな顔をしてから、急にハッとした顔をして、
「ヤナお姉ちゃん、あんまり撫でないで」
などと言い出した！
どうやら、お姉ちゃんたちに見られている前だと気づいて、恥ずかしくなってしまったらしい。
「とっ、ところで、ベルお姉ちゃんは、兄弟、いないの？」
誤魔化すように、キリルが声を上げた。
「え？　ボクですか？　うーん、そうですね。今のところ、ボクだけです。お母さまは、お祖母さまを見習って、もう一人ほしいとか言ってましたけど、どうするつもりなのやら……」
小首を傾げつつ、ベルはパティに目を向けた。
「パティのところも、弟さん一人、なんですよね？」
「はい。ハンネスです」
パティは表情一つ変えずに頷き……。
「ハンネスは、少し気が弱いけど、とっても優しい子です」
なにやら……唐突に、弟自慢などを始めた！
どうやら、ヤナのキリル自慢に刺激されたらしい。
「それに、勉強も得意で……顔もよくって……だから、大人になったらきっと、立派な貴族になる……」
一度、言葉を切ってから、パティは言った。
「だから、ハンネスを守るためなら、私は、なんだってする」
その言葉に同意するように、ヤナも小さく頷いていた。一方で、
「ふぅん、そういう、ものなんだ……」

シュトリナは、いまいちしっくりこない顔で首を傾げていた。見れば、ベルも、はぇー、という顔でパティたちのことを見ている。
なんと、お姉ちゃん力で、年下女子に競り負ける、ベルとシュトリナであった。
一人っ子の二人には、弟を守るお姉ちゃんの気持ちは、いまいち理解できないのだ。
「でも、ハンネスくんのために、お薬を探す……か。なるほど……。それが、パティのすべきこと……ですか」
ベルは、ううんっと唸って、パティを見つめる。と、パティは静かに頷いて。
「たぶん、そう。そのために、私はこの未来に来た」
その顔には、常ならぬ決意のような色が見えた。
「必ず……ハンネスを見つけ出して……薬を見つけて、持ち帰る」
それによって、蛇に縛られることなく、ある程度、自由にパティが動くことができるようになる。
そうして“帝国の叡智ミーアが生まれてもおかしくない状況”を作り出す。
それこそが、パティの役割。
「ミーアお姉さまが、世界から、歴史の流れから逸脱しないように、その道を整えること……」
しっかりと、自らのすべきことを見定めている、幼きパティを前に、ベルは改めて考える。
自分は……どうだろう？
はたして、自分がすべきことはなんだろうか……？
この時代に、自分が来た意味とはなんなのだろうか……？
別に、最近サボってたとか、全然忘れてシュトリナと遊んでたとか、決してそんなことはないけれど……、ベルは改めて気合を入れ直す。
そうして、思うのだ。
「やっぱり、ボクのすべきことは、未来の知識をミーアお祖母さま

に届けること……。これに違いありません」
っと、ちょうどその時だった。
「ただいま戻りましたわ」
ミーアたちが宿に帰ってきたのだ。
「ああ。みなさん、ちょうど集まっておりましたわね。明日は、いろいろあるかと思いますけど、よろしくお願いいたしますわね。後で、ベルとリーナさんは、明日の打ち合わせをしたいので、少し付き合っていただきますわ」
「わかりました。ミーアお姉さま。ボクも全力で、ルードヴィッヒ先生の日記帳を読み込んで……！」
などと気合を入れるベルに、ミーアはスッと手を挙げ……。
「いえ、そこまで気合を入れずとも大丈夫ですわ。昨日見た時点で、暗殺未遂となっておりましたし……そうですわね。できれば、あまりわたくしに事前情報を入れないほうがいいかもしれませんわ。昨日から記述が変わってないかだけ確認してもらえるかしら？」
「え……？　でも……」
ベルのすべきことがそれ……かどうか……甚だ怪しいところであった。

第七十四話　北網の儀の暗殺騒動

北網の儀……。それは、ガヌドス港湾国に伝わる伝承に基づいて行われる儀式であった。

その昔、ガレリア海にて、漁師を束ねていた男がいた。

冬のある日、男は漁師を率いて漁に出る。けれど、夜通し働いても、魚は一匹も獲れなかったという。

意気消沈して帰ってきた漁師たちの前に、突如として現れた客人（まれびと）が、船の反対側、北側に網を降ろすように助言したという。

漁の熟練者たる漁師たちは、客人の言うことを馬鹿にして聞かなかったが、唯一、漁師たちの長だけが北側に網を降ろした。すると、大量の魚が網にかかり、船が沈みそうになったという。

男たちが浜辺に目をやると、すでに客人の姿はなく……。あれは神の使いだったのではないか？　と考えた彼らは、大漁感謝の祭りをささげることになったという。

経験のみに頼らず、謙虚に神に頼り、その後で、経験と技術を振るえ……というような結論になるのだとか。

「なるほど……その時の伝承に基づいた儀式、と……」

「はいー。冬の大漁を願う儀式ですねー」

ミーアたちは、港の一角で、その儀式を見学していた。

その視線の先、ガレリア海には、何艘もの船が浮かんでいた。

その中の一隻、最も立派な船の船首に立つのが、ガヌドス国王、ネストリ・ペルラ・ガヌドスだった。

「お父さまが乗ってる船が、漁師長の船ですねー」

「なるほど。立派な船ですけれど……実際に漁に赴くには、いささか装飾過多な印象ですわね」

大きさは、ちょうどエメラルドスター号と同じぐらいだろうか。

船首に立派な船首像を付けた、漁師の船と言うには、いささか立派

過ぎる船だった。
その周囲に無数に浮かんでいる、実際に漁で使っている船と比べてしまうと、なおさら、違和感が際立っているようだった。
「この儀式に参加した漁師は、この冬、大漁にありつけるってー、そんな言い伝えがあるから、国中の漁船が集まってくるんですー」
「ご利益にあやかりたい、ということですわね。なるほど、なかなかに面白い儀式ですわ」
そうこう言っている間にも、国王が船の半ばまで進んできて、網を掴んだ。
「まず、南に落とし、それから、北に落とすんですー」
と、オウラニアが手順を説明してくれた……まさにその時だった。
「あら……あれは？」
ミーアの目が、異様なものを捉えた。
それは、海の上を移動する黒い影だった。
はじめは、目の錯覚かと思った。けれど……違う！
船から船へと飛び移りながら、国王のもとへと駆ける男の姿は、幻ではなかった。

一艘、二艘……。
頭に巻いたバンダナが、潮風になびいていた。

三艘、四艘……。
目を引くような長身を、鞭のようにしならせながら、さながら海の上を駆けるかの如く……。

五艘、六艘……。
ただでさえ、海の上。揺れる船上のこと。
並の護衛では見えてはいても反応はできず。そもそも、そのような場所での襲撃は、想定すらしておらず。
儀式であるがゆえ、王の周りに護り手の姿は少なく……。

七艘……八艘！　……跳躍！
空中で思い切り体をしならせ、一本の分厚い曲刀を思い切り振り上げて！

「覚悟しろ、ガヌドス国王！　ネストリっ！」
その声に、顔を向けた国王は……一瞬、呆けたような顔をした。
眼前に迫る凶刃。避ける事すらできず、ただただ、その場に立ち尽くす国王。
その光景を見たミーアは、思わず、つぶやいた。
「……こっ、こわぁ」
っと。
ミーアの視線が向かうのは、三日月のごとく仰け反り、剣を振り下ろさんとする暗殺者……の、さらに斜め後方だった。そう、そこにいたのは……。
「はたして、どちらが恐ろしいのかしら……。あの速度で迫って来られるのと……ディオンさんに後ろから追いかけられるのと……」

その声が聞こえたわけではないだろうが、暗殺者は、なにかを察したかのように、体をよじる。っと、そこにいたのは、
「ははは、さすがに気付くか？」
同じように、剣を振り上げたまま、斬りかかってくるディオン・アライアの姿があった。
「貴様っ！　帝国の叡智のっ！」
暗殺者が辛うじて構え直した剣に、ディオンの斬撃が――ぶち当たる！
がいんっと、重たい鋼の音。同時、暗殺者の男が吹き飛ばされる。
船の上、一度、二度、と跳ねながら、暗殺者は体勢を立て直そうとする。が、それを許すまいと、追いかけてきたディオンの蹴りが、暗殺者の肩を打ち抜いた。

「がはっ！」
思い切り、背中からマストに叩きつけられた暗殺者は、苦しげに息を吐きだした。
「おや、見覚えのある顔だな。確か、旧クラウジウス領で会ったことがなかったかな？」
「帝国の叡智の剣に覚えていてもらえたとは、光栄だ、とでも言えばいいのか？」
言いつつ、よろりと立ち上がる暗殺者。
「意外と記憶力がいいんじゃないか？」
煽るような笑いに、ディオンはニヤリと口元を歪めて、
「いやぁ、実際にはギリギリだったよ」
「ギリギリ？」
「そうさ。なにせ、狼も連れていなければ、実力自体もそこそこで、地味なことこの上ない。実に覚えづらかったものでね」
「貴様っ！」
激高する暗殺者に、ディオンは剣の切っ先を突きつける。
「さて、あの時の続きと行こうか、蛇の暗殺者。僕に覚えておいてもらえるように、せいぜいあがいてみせろ！」
言葉と同時、ディオンが踏み込む。
高々と振り上げた剣が、暗殺者に向かって振り下ろされた。

第七十四話　ミーア姫、沈没す！

振り下ろされるは刃。
されど、その一撃は、蛇の暗殺者の剣に受け止められた。
しかも、さほど苦労した様子もなく、である。
事実、暗殺者は意外そうな顔を一瞬したものの、次の瞬間には勝ち誇った笑い声を上げた。
「はは、どうした？　ディオン・アライア。不安定な足場では、さすがのお前でも剣筋が鈍るか？　この俺を相手に、船上で戦うことを選んだことを後悔するがいい」
鍔迫り合いの刃越し、嘲笑う暗殺者に、ディオンは、呆れた視線を送る。
「別になる気もないだろうから、どうでもいいだろうが、お前さんでは、うちの姫さんの剣にはなれんな」
「なに……？」
「うちの姫さんは人使いが粗くてな。森に行ったり、海に行ったり、草原に行ったり、廃城で二対一で戦わされたりね。場所などまったく選べないものだから、地の利を得ないと勝てない、だなんて弱気を吐いているような男には、務まらないだろうよ」
そう言って、鍔迫り合いのままディオンは一歩前に出る。剣に体重をかけ、押し込むようにして、前に、前に……。
「なっ！　ぐっ、このっ！」
暗殺者の男の顔に焦りが浮かぶ。
「船の上で、ちょこまかと動き回られては、厄介かと思ってね。いやぁ、早めに捕まえられて良かったよ」
暗殺者が下がれば、ディオンはすぐさま距離を詰める。その距離が開くことはなく、交えた刃は密着したまま、離れない。
「くっ、このっ！」

一転、暗殺者が仕掛ける。力任せに刃を押し込み、次の瞬間、全力で引く。
追いかけるようにしてディオンが放った斬撃が額をかすめるも、構うことなく、男は大きく後方へ。
「強引に距離を取ったか。悪くない判断だが……。しかし、あの蛇の男の相棒にしては、ずいぶんと引き際が悪いな。私怨でもあったのかい？」
ディオンが見つめる先、船の舳先に立つ暗殺者の姿があった。その殺気のこもった視線を、あえてすかすように、ディオンは肩をすくめて……。
「暗殺者ならば、暗殺が失敗した時点で素直に引いておけばいいものを。半端なことをするから、そんなことになる。未熟なことだ」
言葉と同時、男の額から、一筋の血が流れた。頭に巻いていたバンダナがひらり、とその場に落ち……露わになった額には、黒い瞳の刺青があった。
「あれは……まさか……」
後ろから、小さく呻くような声。
ガヌドス国王、ネストリが目を見開き、男のほうを見つめていた。
男は、バンダナを拾い、結びなおすと……。
「なるほど……。確かに、冷静さを失っていたらしい。ここは、ご忠告に従って引くとしよう」
言うが早いか、身をひるがえし、海に飛び込んだ。
その後ろ姿を見てディオンは――追わなかった。
「ここで捕らえられれば楽だったんだが……。さすがに、それは難しいか。泳ぎも達者なようだし……」
船の上、距離を置かれた時点で、すでに、ディオンは追うことを諦めていた。一応、挑発してはみたものの……残念ながら乗ってこなかった。
「意外に冷静だったな……。ムキになって斬りかかってきてくれれば、楽なものを。やれやれ、面倒な……」

敵が一人とも限らない状況。遠距離から、弓でも射られれば防ぐことは難しい以上、護衛対象の国王のそばから離れることはできない。それは、ディオンの数少ない弱点。
彼は、二対一の戦いをまったく苦にしないが、一対一の戦いを同時に二つの場所ですることはできないのだ。
ディオンは、思わず苦笑いを浮かべた。
「いかんな。判断力が鈍ってる気がする。蛇の城で、あのお嬢ちゃんを殺されたことが、我ながらショックだったらしいな」
自嘲するディオンと国王を乗せた船は、急ぎ港へと向かった。

やがて、船は港へとたどり着いた。
王のもとに、次々に兵が駆け付けるのを見て、ミーアは、ホッと安堵のため息を吐いた。
――ふぅむ、さすがはディオンさん。無事に、暗殺は防げましたわ。ここからは、わたくしの仕事ですわね。
きちんと恩に着せて、ヴァイサリアン族の島を視察できるようにしなければならない。
そのためには、もろもろの説明が必要だ。まず、ディオンが、なぜ、あの場にいたのかなど、文句のつけようもないぐらいにしっかりと説明しなければいけない。
――ガヌドス国王は、なかなかに油断のできぬ人と聞きますわ。下手をすると、こちらが暗殺者を送り込んだ、などと言われかねませんし。きちんと正論で押し込まねば……。
などと思うものの、ミーアには余裕があった。なぜなら、それらはすでに、きちんと考えてあったからだ。昨夜、ベッドの中で、ウトウトしながら考えたのだ。
そうなのだ、今日のミーアは、すべてが計画通りに行ったため、余裕があるのだ。
――さて、では、オウラニアさんにお願いして……。
「お父さま！」

などと言い、駆け寄ろうとするオウラニアの後を追って、国王のもとへと急ぐ。
――まずは、挨拶、第一印象が大事ですわね。ええと、オウラニアさんの、お友だちということでよろしいのかしら……？
っと、頭の中で確認していた……その時だった。王と兵たちの会話が聞こえてきた。
「今すぐ、追手を出します」
リーダーと思しき兵の言葉に……。
「いや、追うな！」
突如、王が声を荒げた。けれど、彼は、すぐに後悔するように首を振り……。
「追う必要はない」
ゆっくりと、再度、確認するように言った。
「ですが、国王陛下……そういうわけにも……」
「首謀者はわかっている。実行犯など追うだけ無意味だ」
ゆっくりと、厳かな口調で、王は言った。
「首謀者というのは、いったい……」
兵士の問いかけに、深々と頷いてから、国王の目が、不意にこちらを向き……向き？
「オウラニア、お前だな」

「……はぇ？」

気の抜けた、なんとも間抜けな声を上げたのは、オウラニア……ではなく、その師、ミーアであった！
最後の最後にやって来た想定外の大波に、ミーアは呆気なく呑み込まれてしまうのだった。

第七十六話　柔軟かつ柔軟なる帝国の叡智

ミーアは、突然の事態に、一瞬、頭が真っ白になる。
瞬きを、一つ……二つ……三つした後、
――ななな、どどど、どういうことですの？　どうなっておりますの？　なぜ、オウラニアさんが、おお、落ち着かなければなりませんわ。ここは、深呼吸、深呼吸。
こひゅー、こひゅーっと深呼吸し、ミーアは、改めて考えようとして……。
――どどど、どうなっておりますのっ！？
まだ、混乱していた！
「おっ、お父さまー？　いったい、なにをー？」
オウラニアも負けず劣らず困惑した様子で、父に歩み寄ろうとする。が、そちらに目を向けることなく、ガヌドス国王が言った。
「お前が、何らかの事情で私を害そうとした……。お前には、私を排してやりたいことがある……そういうことではないか？」
「え……？」
一瞬、言い淀んだオウラニアを見て、ミーアは事態の悪化を予測する。
――ああ、まずいですわ。確かにオウラニアさんはヴァイサリアンの迫害についてなんとかしようとしている……。それをきっかけに、疑惑を強固なものにされてしまうかも……。
ミーアは、再び大きく深呼吸。それから、堂々たる足取りで一歩前に出る。
兵たちの視線が一斉に飛んでくるも、それを涼しい笑みで受け流し、見つめる先はガヌドス国王、ネストリ・ペルラ・ガヌドスだ。
「なんだ、お前は……」
「ミーア師匠ー」

オウラニアの助けを求めるような、ちょっぴり情けない声を聞きつつ、ミーアはスカートの裾をちょこんと持ち上げ……。
「お初にお目にかかりますわ。わたくしはミーア……」
落ち着き払った自己紹介を……。
「ミーア・ルーニャ……」
噛んだ。全然、落ち着いてなかった！
「ティアムーン！　ティアムーン帝国皇女、ミーアですわ」
そうして、ニッコリ、何事もなかったかのように微笑んでみせる。
噛んでなどないですよー？　と言う顔を、よゆーしゃくしゃーくで作れるぐらいには、修羅場を潜り抜けてきたミーアなのである。
「ティアムーン帝国の……ミーア姫だと……？」
ガヌドス国王は、ミーアを見、それから、その後ろに立つルードヴィッヒに目をやってから……。
「これは、ご丁寧なご挨拶痛み入る。けれど、ミーア姫殿下が、このような場所でなにを？」
「ええ。実は、お忍びでガヌドス観光に来ておりましたの。セントノエルでオウラニアさんとお友だちになって、そのご縁で」
「ほう。観光。その一環で今日の儀式も、こっそりと見に来ていたと？」
「ええ。昨日は市場のほうでお買い物も。お土産に女王烏賊を干した物を買わせていただきましたわ。あと、そう、ポヤァ！　あれは、なかなかに奥深いお味でしたわ。プリプリして、潮の香りが癖になりそうで……」
「ほほう、ポヤァを食されたと……それは、なかなかに通な……」
「お土産にも干した女王烏賊……それはお目が高い」
辺りが、一瞬、ざわつく！
そうして、ミーアに感心の目を向けてくるのは、どちらかと言うと、やや年配のおじさん兵士や、文官たちであった。
「ええ。ガヌドスグルメを堪能いたしましたわ」
そんなことを言いつつミーアが微笑めば、ざわつきは、若干、好

意的な雰囲気を帯びる。
おつまみを通して、ガヌドスの民と心を通わせるミーアである。ミーアは渋い珍味もいける、万能のお姫さまなのだ。
「それはそれは、ガレリア海の幸を堪能いただけたなら重畳なこと。されど……」
っと、ガヌドス国王は鋭い眼光をミーアに向けてくる。
「無関係なことにまで、口を差し挟まないでいただきたいですな」
「あら、無関係とは異なことを。あなたの命をお救いしたのは、他ならぬわたくしの剣。ディオンさんですわ。それに、オウラニアさんは、わたくしの……」
弟子……と言いかけて、ミーアは思わず踏みとどまる。
弟子を守るために、師が一肌脱ぐ……。結果、生まれた功績はミーアに帰されることとなる。それは、よろしくない。功績は、なにか別のものに転嫁する必要がある。
そうして、ミーアが口にしたのは……。
「そう、学友。セントノエルで共に学ぶ学友ですわ。そんな友の困っているのを黙って見過ごすなどできませんわ！　セントノエルで学ぶ者として！」
大陸が誇る学府セントノエル。そこに、これからの功績を擦り付けに行くスタイルである。
「ミーア師匠……」
一方のオウラニアは、ミーアが助けに来てくれたのが嬉しかったのか、瞳をウルウルさせていた。
「学友……ふふふ、学友か。オウラニアになにを吹き込んだのかは知らぬが……」
国王は、一切、オウラニアには目を向けずに、兵たちに言った。
「ガヌドスで起きた騒動は、ガヌドスで解決する。余計な口を出さないでいただこう。お前たち、なにをしている。さっさとオウラニアを捕らえよ」
「なっ……」

ミーアの介入を意にも介さず、王は言った。
「お父さま……どう、して……、そこまで……」
呆然と目を見開くオウラニアの、その細い腕を、兵士が掴もうとして……。
「やめろ！」
その時だった。
兵たちの間に割って入るように、小さな男の子が駆けこんできた。
「オウラニア姫殿下をいじめるな」
両腕を広げ、兵士たちを睨むのは、キリルだった。
「キリル、だめ！」
遅れて、ヤナも弟のもとへと走る。そして、それを止めようとパティも……。
その姿を見て……ミーアは一瞬、違和感を覚える。
弟が危機に陥りそうになっているのだから、ヤナが行くのはわかる。けれど、なぜ、沈着冷静なはずのパティがあんなに焦っているのか……？
ふと見ると、ルードヴィッヒの顔にも焦りの色が見て取れて……。
「あっ……」
遅れて、ミーアは気が付いた。
――あ、まずいですわ。あの子たち……ヤナとキリルをオウラニアさんのそばに行かせたら……。
と思うも、後の祭りだった。
「んっ？　お前は……」
っと、走るヤナの腕を、一人の兵士が捕まえる。そのまま、力任せにヤナを振り向かせると、乱暴に髪を掴み……、
「あぅっ！」
苦痛に顔を歪ませるヤナの、その額を見て、兵士が声を上げた。
「陛下、こいつは……」
「ああ……」
国王は、それを見て……一瞬、なんとも言えないような顔をした。

怒りとも違う。憎しみとも違う。それは、諦めのような、あるいは……。
「ヴァイサリアンの子ども……か。決まりだな」
吐き出すように言ってから、ガヌドス王は、兵士たちに向けて言った。
「このとおり、今回のことは、我が娘オウラニアのしたことに間違いはない。重ねて言うが、あの下手人を追う必要はない。良いな？」
そう指示を出すと、王は踵を返した。
「お待ちくださいー。お父さま、この子たちは、なんの関係もー」
その声が、聞こえていないのか……国王は振り返ることはない。
兵士たちが乱暴にオウラニアを、そして、さらに手荒にキリルを、ヤナとパティまで拘束する。
「どうしますか？　姫殿下、今なら力づくで助け出すこともできますが……」
かたわらの、ディオンに問われ、ミーアはハッとする。それから……。
「乱暴な手段に出れば……むしろ危険な気がしますわね。今は……」
と言ってから、
「ガヌドス国王陛下！」
ミーアの呼びかけ。今度も王が振り返ることはなかったが、兵士たちの視線は一斉にこちらに向く。
「オウラニアさんは、我が友。そして、その子どもたちは、セントノエルの生徒であり、同時に、わたくしの庇護下にある者たちです」
堂々と、その場にいる全員に聞こえるように、高らかに言う。
「疑いがあるというのであれば、拘束するのは仕方ないこととしても、乱暴狼藉は許しませんわ」
ミーアが視線を向ける先、キリルに手を上げようとしていた兵士が、慌てて動きを止める。
「オウラニアさんのことも、わたくしが必ずや疑いを晴らしてご覧に入れますわ」

「ほう……！　帝国の叡智の閃きを、直接、見せてもらえるとは興味深い」
そこで、初めて国王が振り返る。その顔には、皮肉げな笑みが浮かべられていた。
「ええ。必ずや。ですから、それまでの間……オウラニアさんも、子どもたちも、丁重に扱っていただきたいですわ」
かくて、柔軟かつ柔軟な海月の思考力を持つ、めいたんてい……ミーアは事件解決へと動き出したのだった。

第七十七話　混迷する状況

ミーアたち一行は、ガヌドス港湾国の王宮に案内された。
ミーアにアンヌ、ルードヴィッヒとディオン、それにシュトリナである。
少し広めの部屋に通されたミーアは、ソファに座り、ふーぅ、と深いため息を吐いた。
「ここに案内されたのは、我々が自由に動き回れないように……ということでしょうか」
部屋の中を見回しつつ、ルードヴィッヒが言った。
「おそらくは、部屋の前に見張りも立っているでしょうし……」
「まぁ、仕方ありませんわ。オウラニアさんが暗殺犯と疑われてしまっている状況で、あれだけしっかりと繋がりを強調してしまったのですから」
あれは、ミーア自身にも疑いを向けてしまう行動だった。国王の暗殺犯の一味かもしれない隣国の姫などという存在は、厄介なことこの上ない。部屋にこもって大人しくしていてもらえれば、それに越したことはないわけで……。
「それこそ、国王を弑して、属領にしようとしている……などと疑われかねないかもしれませんからな」
からかうような口調で言うディオンだったが、実際のところ、疑われてもしょうがない立場のミーアである。
「それでも、あの場で名乗り出ないということは、あり得ないことですわ。あの場で声をあげていなければ、後で真犯人がわかったと言っても門前払いされてしまいそうですし……」
それに、曲がりなりにも、オウラニアに師と呼ばれているミーアである。あの場で無視を決め込むことはできない。さらに、子どもたち、特にパティが巻き込まれた時点で、ミーアに選択肢はなかっ

たのだ。
パティに何かあった時点で、ミーアの存在自体が揺らぐわけで……。だからこそ、仕方のないことで……。
――パティはヤナたちと親しくしていたし、パティが追いかけたことは、教育上は良い変化と言えるはず。であれば、あのパティの行動は、許容されるべきものですわ。
加えて、ヤナたちのこともある。
ヴァイサリアンの子どもで、しかもオウラニアをかばったとなれば、あの暗殺者の関係者として尋問される可能性が高い。酷い目に遭わされる可能性も低くはない。
「わたくしの庇護下にあるという宣言はそれなりに子どもたちを守ってくれるはず。その間に、暗殺犯さえ捕らえることができれば……」
しかし、とミーアは、不意に思った。
――わたくしが、仮に犯人を見つけ出したとして……その功績はわたくしのものになってしまわないかしら？　とすると……まぁ、今は国王が健在ですし、功績を認めないと思いますけれど……その後の世代……仮にオウラニアさんが後を継いだ場合……。
『私がー、お父さまに疑われて、暗殺犯にされそうな時ー、ミーア師匠に助けられましたー。あの時のお礼とー、ミーア師匠の偉大なるその叡智を讃えるために、巨大な黄金ミーア灯台を、国民からー血税を搾り取って作りましたー。ほらー、すごく立派でしょうー？』
などと満面の笑みを浮かべるオウラニアの顔が思い浮かび……ミーアは思わず首を振る。
「……それでは解決にならなりませんわ」
思わずこぼしたつぶやきに、ルードヴィッヒが、我が意を得たりと頷いた！
「やはり、ミーアさまも……そのように思われますか」
「……ん？」
きょっとーん、っと首を傾げるミーアに、意気揚々とルードヴィ

ッヒが言った。
「私も、ちょうど、そのように思っていたところです」
――また、なにか……ルードヴィッヒがわからないことを言っておりますわね。ええと、これは、聞いておいたほうがいいやつかしら？
と、ミーアが口を開こうとしたところで、
「どういうことですか？　ルードヴィッヒさん」
代わりに聞いてくれたのは、アンヌだった。わからないこと（ミーアが）はその都度、適切に質問してくれる。実によくできたメイドである。
「ああ、あくまでも、これは直感に過ぎないのだが……。あの時、ガヌドス国王は、本気でオウラニア姫殿下を疑っていたのだろうか？　前々から、なにかの疑いを持っていたということならばわからなくもないが、少なくともあの場面に、オウラニア姫殿下を疑う理由はなかった」
「そうか。ヤナちゃんとキリルくんのことがありましたけど……」
「そうなんだ。あの二人がヴァイサリアンの子どもだったことは、ヴァイサリアンの暗殺者とオウラニア姫殿下の関係を印象付けはしたが、そもそもその前から、国王はオウラニア姫を犯人扱いしていた」
ルードヴィッヒは、軽く眼鏡を押し上げて、
「もしも、ガヌドス国王が、なにか別の理由でオウラニア姫殿下を犯人扱いしたのであれば……その場合は、犯人を捕まえ、オウラニア姫殿下の無実を証明したとしても、意味がないのかもしれない。ガヌドス国王の思惑を探る必要がある」
「やれやれ、ガヌドス国王、ネストリ・ペルラ・ガヌドスか。食えない男だと思っていたが……。腹の探り合いとは、肩がこることだ」
ディオンのぼやきに、ルードヴィッヒは苦笑いを浮かべた
「なに、貴殿にそこまでは求めないさ。貴殿は、ミーアさまの剣だ。面倒な考え事のほうは、こちらに任せてもらおう」

「そうしてもらえると助かるな」
笑い合う二人の男たちに、ミーアは、ちょっぴり心強さを覚えつつ。
「それに、幸いにして、いろいろ動きまわって調べてもらう手段もございますわ」
「グリーンムーン公爵令嬢、エメラルダさまですね」
ルードヴィッヒの指摘に、ミーアは静かに頷き、シュトリナのほうに目を向けた。
実のところ、エメラルダには、すでに働きかけていた。それこそが、今この場にいない二人、ベルとアベルの二人に関係していた。
あの時……一歩前に進み出て声を上げたミーア。それを見ていたシュトリナは、同時に行動を開始していた。
今後、ミーアがおかれるであろう状況を正確に予測した彼女は、外で動ける人員を確保しておくべきと判断。すでに、ルードヴィッヒのことも視認していそうなガヌドス国王の様子から、消去法で、ベルとアベルとに声をかけたのだ。
アベルは驚いた様子であったが、すぐに事情を理解。対して、ベルは、冒険の予感に、目を輝かせていたという……。
「これから始まる冒険が、ボクが過去に来た理由になるのかも！」
などと意気込んでいたとか……。それを聞き、そこはかとなく不安を覚えるミーアであった。
ちなみに、シュトリナ自身は、ミーアに同行していた。
王宮の中で、万が一にも毒を盛られた時のために、ミーアのそばにいようと考えたという。
「まぁ、わたくしが毒殺されてしまえば、ベルが生まれてきませんしね」
っと、いかにもベルと一緒に行きたそうな顔をしていたシュトリナに、ミーアは苦笑いを浮かべる。対して、シュトリナは、頬を膨らませて、
「もう、ミーアさま、意地悪です。リーナは、イエロームーン家を

救い出してくださったミーアさまへの感謝を忘れた日はありませんよ？」
「あら……？　そうでしたの。それは申し訳ないことを言いましたわ。では、本当にわたくしの身を案じて、忠節を尽くすためだけに残ってくれたんですの？」
　そう問えば、シュトリナは静かに目を閉じて……。
「人の心は、一つの側面しか持っていないわけではない。いろいろな感情の合わさったものです。だから、ミーアさまへの感謝も、大好きなベルちゃんがきちんと生まれてくるようにミーアさまを守らなければならないという気持ちも、どちらもあるんです。ただ、その大きさが少しだけ違うというだけで……」
「なるほど……うん？　ということは、わたくしへの感謝と忠誠とベルへの友情を比べると……」
　っと、首を傾げるミーアに、シュトリナは可憐な笑みを浮かべて……。
「気持ちを比べるなんて、無粋なことですよ？　ミーアさま」
　……とまぁ、そんな会話が繰り広げられたわけだが……。ともかく、
「エメラルダさんのところには、シオンもいるはずですわ。アベルもきっと知恵を絞ってくれるはずですし。それに、ベルもいることですし……」
　なぜだろう、最後だけ、少々、不安感が増すような気がするが……。
「ところで、リーナさん、あの船の上を渡ってきていた男に、心当たりはありますかしら？　話に出ていた、ヴァイサリアン族の蛇だと思いますけど。直接、見たのは今回が初めてですわよね？」
　問われ、シュトリナは小さく首を傾げた。
「リーナは、少なくとも、会ったことないと思います」
「そう。ディオンさんは、以前、戦ったことがあるのでしたわね？」
「ええ。クラウジウス領で。しかし、やはり、船には乗り慣れてい

るようですね。以前よりは、戦いづらかったと思いますよ。多少ですが……」
――そうは見えませんでしたけど……。ていうか、大変、楽しそうに剣を振るっていたような気がいたしますけど……。
ミーアは腕組みしつつ、唸る。
「まぁ、ともかく今回の件に蛇が関わっているのは確実そうですわね……あら？」
そこで、にわかに、外が騒がしくなってきた。
「なにかしら？」
怪訝そうな顔をするミーアの前で、扉を開けたルードヴィッヒが、廊下を忙しなく歩く一人を捕まえて、話を聞いてきた。結果……。
「失礼いたします。ミーアさま、実は、オウラニア姫殿下が……」
「オウラニアさんが、どうかなさいましたの？」
嫌な予感に背中を押されるようにして、尋ねると……。
「どうやら、逃亡されたようです。三人の子どもたちも一緒です」
「……はぇ？」
事態は、混迷を極めつつあった。

第七十八話　ハングリーなミーアとメイドの暗躍

「オウラニアさんが、逃亡……。いったい、どうやって……」
俄然、興味が湧いてくるミーアである。
基本的に、ミーアは断頭台脱出系の知識収集と甘いものには、いつでもハングリーなのだ。
――オウラニアさんは、機転が利くほうだとは思いますけど……あの状態から逃亡は難しいのではないかしら？　ヤナとキリルはどちらも、ガヌドスの貧民街で生活しておりましたし、地の利はあると思いますけど……。やはり、子どもゆえに難しいはず。あとは、パティ……。
ふと、ミーアの脳裏に、無表情の、幼き祖母の姿が思い浮かぶ。
――あり得そうな気がしますわ……。パティならば、あるいは……あの子は、蛇の知恵たる地を這うモノの書を読んでおりましたし、可能性は否定できませんわ。
そうなると、自然、ミーアの好奇心は地を這うモノの書へと向かっていき……。
――これは、もしかして、革命が起きた時のために、一応、わたくしも読んでおいた方がいいのではないかしら？　読み込んで、逃げるのに使える知恵を収集したほうがいいのかも？
なぁんて思いつつ、ミーアはシュトリナのほうを見た。
「リーナさん、どうなのかしら？　もし仮に、捕まったのがリーナさんだったら、逃げることはできますの？」
同じく、蛇と馴染みが深いシュトリナならば、どうか？　と思い聞いてみると……。
「うーん。どうでしょうか……。リーナは、普通の女の子なので、訓練を受けた兵士たちから逃げ出すのは、よほど隙を突かないと難しいと思います」

シュトリナは小さく首を傾げつつ、チラリとディオンのほうを見て。
「捕まっていたのが、そこのディオン・アライアだったら、隙なんか突かなくても、楽に脱出できるんでしょうけど……」
「ははは。そうだね。あまり曲芸めいたものを期待されても困るが、まぁ、そのぐらいは、ね」
特になんでもないことのように言って、ディオンは笑った。
――まぁ、そうでしょうね。うん、知ってましたわ。
とりあえず、革命軍の手に落ちる時には、ディオンを仲間につけ、できれば一緒に捕まり、そして、脱出する際には連れて行ってもらうぐらいには好感度を上げておくべきだ、と、改めて確認しつつ。
「それで、詳しい話は、わかりませんの？　ルードヴィッヒ」
「申し訳ありません。いかんせん、こちらもオウラニア姫殿下の協力者と思われているらしく……あまり情報は得られませんでした」
「まぁ、それもそうでしょうね。ふーむ、どうしたものかしら……」
「ミーアさま、よろしいでしょうか？」
その時だった。アンヌが遠慮がちに手を挙げた。
「あら、アンヌ、どうなさいましたの？」
「よろしければ、お茶の用意をしてこようと思いまして……」
「まぁ、お茶菓子の用意を……。それは、大切なことですわね」
アンヌの言葉に若干の意訳を加えつつ、ミーアは深々と頷く。いつでも甘い物にはハングリーなミーアなのである。
「しかし、アンヌ一人で行かせるのも、少々心配ですわね」
「それでは、リーナも一緒に行きます」
「え……？　シュトリナさまが……？」
突然の立候補に、アンヌは目を白黒させる。
「なるほど。そうですわね。リーナさんがついて行っていただけるなら安心ですわ。毒の混入も防げますし。それでは、お願いいたしますわね」
そうして、ミーアの意を受けて、二人は部屋を後にした。

「シュトリナさま、なぜ……？」
廊下に出てすぐに、アンヌが問いかける。と、
「ミーアさまは、あなたのことをとても大切に思っている。そして、それは、ベルちゃんも同じ。だから、あなたに万が一のことがあると、リーナも困るから」
ちらり、とアンヌのほうを見てから、
「それに、ディオン・アライアやルードヴィッヒさんが一緒についてきたら、アンヌさんがしたいことができなくなるんじゃないかしら？」
ニコリ、と悪戯っ子のような笑みを浮かべるシュトリナである。それから、こっそり、悪戯を企む子どものような、ささやき声で。
「情報を集めるつもりなのでしょう？　メイドたちから」
自らの思惑を簡単に見抜かれて、アンヌは少し驚いた顔をして……それから、同じく共犯者のような笑みを浮かべて。
「あてがないわけではないんです。オウラニア姫殿下が捕まってしまった今なら、たぶん……あの人は暇なはずだから……」
そうして、二人は、廊下を通る人に聞きながら、やって来たのは、メイドたちの控室だった。
入ってきた二人を見て、室内の者たちは驚きに固まっていたが……構うことなく、アンヌは声をかける。
「申し訳ありません。ミーアさまにお茶をお出ししたいので、どなたか手の空いている方にお手伝いをお願いできるでしょうか？」
そうして、室内を見回したアンヌは、見知った顔のメイドを見つける。
「あっ、ちょうどよかった」
アンヌに声をかけられて、ビクッと跳びあがったのは、オウラニアの専属メイドとして、セントノエルに同行していた少女だった。
「すみませんが、お願いできますか？」
「わ、私ですか？」

「はい。知っている方にお会いできてよかったです」
セントノエルにて、学園スタッフや各生徒のメイドたちと交流を欠かさなかったアンヌである。オウラニアのメイドとは、一緒の期間が少なかったものの、それでも、何度か会話はしていた。
顔見知りと言える間柄だろう。
「お湯を沸かしたいのと、なにかお茶菓子が用意できればと思うのですが……」
「……わかりました。それでは、厨房に案内いたします」
渋々ながら頷く彼女に、アンヌは安心させるように柔らかな笑みを浮かべてみせた。
そうして、控室を出て、辺りに人気がなくなったところで、意を決してアンヌが話しかける。
「あの、オウラニア姫殿下のこと、なにかお聞きではありませんか？」
「……いえ……私は、なにも……」
その問いかけに、ビクリと肩を震わせるメイド。そんな彼女に、アンヌはさらに踏み込む。
「なんでもいいんです。お願いします。オウラニア姫殿下を助けるためにも、子どもたちを助けるためにも……ご協力をお願いできませんか？」
真っ直ぐにメイドを見つめるアンヌ。対して、メイドは、ついっと瞳を逸らし……。
「わっ、私は、別に、その、オウラニアさまのことは、そんなに……」
その様子を黙って見つめていたシュトリナだったが、なにかを思いついた様子で、ぽこん、っと手を叩くと、
「ぜひ、お願いします。もちろん、オウラニア姫殿下の無罪が証明された暁には、あなたのしてくださったことは、きっちり伝えさせていただきますよ。いいことも……もちろん……悪いことも」
可憐な笑みを浮かべるシュトリナに、メイドは、ひぃいっ！　と

悲鳴を上げた。

第七十九話　正統派王女と子どもたち、頑張る！

「どうしてー、こんなことにー」
オウラニアたちは、馬車で、造船ギルド長の館に向かっていた。
さすがに、姫であるオウラニアを閉じこめるのに牢屋は使えなかったため、臨時の軟禁場所として選ばれた場所だった。ちなみに、子どもたちに関しても、オウラニアが絶対に一緒に連れていけ、と譲らなかったため、同行している。
そして、向かいの席には、武装した兵士が一人、みなを見張っていた。
「うう、なんで、お父さまは、私をー？」
しょんぼり、と肩を落とすオウラニア。その頭は、未だに混乱の極みにあった。が……。
ふと、その手に、小さな手が重ねられた。
顔を上げれば、こちらを見つめてくるヤナとキリルの顔が見えた。不安げではあっても、オウラニアを励まそうとする、健気な子どもたちの顔が……。
自らの手の上、確かに感じる、幼くか弱い子どもの温もり……、これを守れるのが自分だけという状況に……オウラニアの心が燃え上がる！
「そうだわー。私がー、頑張らなきゃー」
帝国の叡智ミーアの弟子として、うつむいているわけにはいかない。
特に、子どもたちのうち二人はヴァイサリアンだ。温情など決してかけられない立場だ。パティにしたって、どうなるかはわからない。だからこそ……。
「私が、守ってあげないとー」
そうして、オウラニアがゆっくりと前を見た――次の瞬間だった！

馬車の前方で強烈な光が瞬いた！
「きゃっ」
思わず、顔を覆うオウラニア。直後、馬車が急停車する。
「なんだ？　おい、どうした？　なんで、止めた？」
御者に声をかけてから、兵士が外に出ようと扉を開けたところで、
「うぐっ」
突如、中に入ってきた男に、兵士が殴り倒された。
「なっ……」
「やれやれ……。俺は、こういう暴力的なのは好まないんですがねぇ」
自らの額に不器用に巻いてあったバンダナを外しながら、ボヤく男。つるりとした額をペシン、と一度叩いてから、オウラニアのほうに顔を向けて、愛想のよい笑みを浮かべた。
「あ、あなたはー？」
「なに、大したものじゃありません。ただ、あなたさまを救いに来た者ですよ」
それから彼は、おどけた仕草で頭を下げた。親しみの湧く、人懐っこい態度だったが……オウラニアは逆に、不信感を覚える。
「私をー、助けにー？」
「ええ。そうです。さ、どうぞこちらへ。子どもたちも……」
打って変わって紳士的な仕草でオウラニアの手を取ると、そのまま馬車の外へと誘う男。
降りてすぐに見えた光景に、オウラニアは息を呑んだ。御者が地面に倒れていたからだ。
「まさかー、殺したのー？」
硬い口調でオウラニアが問えば、男は楽しげに微笑んで、
「んん？　ああ、ははは。まさか、そんなことするはずがないじゃありませんか？」
御者を軽く蹴る。っと、御者は小さく身じろぎし、呻き声を上げた。

「ちょっと眠ってもらっただけですよ。中の兵士も殺しちゃいません。さ、そんなことより、行きますよ」
「行くって……あ、もしかしてー、あなた、ミーア師匠の」
この国に、オウラニアの味方はいない。サボって毎日、釣りばかりしていたのだから、当然だが……。唯一、助けてくれそうなのは、師匠であるミーアであったが……。
――ミーア師匠なら、子どもたちを拘束されたままにしておかにかもしれないしー。そのついでに、私のことを助けてくれるかもー？
などと思っていると……。
「はい。そのとおりですよ。ミーアさまの命により参上いたしました。ささ、どうぞ、こちらへ。隠れ家へご案内しますんで」
予想通りの答えが返ってきた。
……返ってきて欲しいと思った答えが……返ってきた。
そのことが、微妙な引っ掛かりとして、オウラニアの頭の中に残った。
そうこうしている間にも、ひょいひょい歩いて行こうとする男。オウラニアは、わずかに躊躇うも……倒れた兵士たちを見て……。
――んー、いつまでもここにはいられないし、それならー。
っと、覚悟を決めて歩き出そうとして――不意に、ドレスが引っ張られるのを感じる。
振り返ると、パティが真剣な顔で見つめていた。
「あらー、パティ……？　どうかしたのー？」
「あの人……ミーアお姉さまの仲間じゃないと思う」
声を潜めて、ささやいた。
オウラニアは少し考えてから、膝を屈めて、パティに顔を寄せて、
「それは、どうしてー？」
小声で問い返す、とパティは、ひそひそ声で言った。
「私が知る限り、ミーアお姉さまの知り合いに、あんな人はいないし、それに……」
「んー？　どうかしましたかー？」

振り向いた男。口元には変わらず笑みが浮かんでいたが……気のせいだろうか、その目は一切笑っていなかった。
そんな男を真っ直ぐ見つめ、一歩前に出て、パティが言った。
「今、ここから逃げたら、余計に疑われちゃう。それに、ミーアお姉さまだって余計に動きづらくなる。ミーアお姉さまのことを信じて動かないのが正解のはずだから、逃げないほうがいい」
「ほう！　なるほど。興味深い意見ですねぇ。それで、あなたは……？」
男は、ひょこひょこ、パティのそばに歩いてきた。
「あなたは……状況をより、混沌に満ちたほうへと向かわせようとしている。あなたは、敵」
物怖じしない真っ直ぐな……そして、幼い指摘にオウラニアは息を呑む。もしも、目の前の男が敵だとしたら……、パティのその態度はどのようにして報われるのか。
男は目を見開き……そして、ニヤリ、と厭（いや）な笑いを浮かべた。
「ふぅむ、何者でしょうねぇ。実に勘がいい……」
膝に手をつき、男はパティと目線を合わす。
「そう。まさにお嬢ちゃんの言う通り、我々としては、オウラニア姫殿下が捕らえられるのは好ましくないんですよ。なにしろ、オウラニア姫殿下には、ガヌドス国王の暗殺犯になってもらわなきゃならないんだから……」
それから、男はオウラニアのほうを見上げて、ウインクする。
「そのために兵士だって生かしてるんだ。オウラニア姫殿下が逃亡したと、おそらくはヴァイサリアンの手の者によって逃亡した、と、伝えてもらわなきゃならない。そうじゃないと、国王の暗殺がいつまでたってもできやしない」
小さく肩をすくめてから、続ける。
「だから、協力してもらえませんか？　脅して無理やり連れてくってのも、あんまりしたくないもんで……」
「したくない……それは正確じゃない。あなた一人では、私たち全

員を見張れないから、そう言ってるだけ」
男の言葉を遮って、パティが言った。
「聞いてはダメです。オウラニア姫殿下」
そうして、振り返ったパティ。その頭に、唐突に、ポンッと男の手が置かれる。
「ははは、なるほどなるほど。まぁ、間違っちゃいない。街中を刃物を突き付けて歩くのは、目立つしね。ガキを人質にってのも同じことだ。全員を見張るのは、ちと骨が折れる。助けを求めに走られるのも厄介。かといって、ヴァイサリアンの連中が助けに来たんなら、この場で、ヴァイサリアンの子どもを殺して数を減らすってわけにもいかない。一緒に連れて行かにゃならない。なるほど、無理やりにってのは確かに難しい。合理的に考えれば、そんなところかな……お嬢ちゃん」
優しくパティの髪を撫でた後で……不意に男がパティの首筋を撫でた。
「……え？」
瞳を瞬かせるパティに、男は優しい笑みを浮かべたまま続ける。
「でもねぇ、覚えておいたほうがいい。人間ってのは、合理的な理由がなくっても気分で殺したりもするもんだ。俺が、お嬢ちゃんの小癪な態度にイラついて、殺しちまうってこともあるかもしれない。どうする？　お嬢ちゃん、ちょいと力をこめれば、こんな細首、簡単に折れちまうが……」
「その子を殺したら、私も死ぬわよー」
突如の言葉に、男は目を瞬かせる。そんな男の手を、パチンと叩き、それから守るように、パティを自分のほうに抱き寄せるオウラニア。そこで、はじめて気が付いた。パティが、小さく震えていることに。
励ますように、ぎゅっと力を入れて、オウラニアは続ける。
「他の子たちを人質にする場合も同じ―、死んでやるからー。そして、私自身は人質にはならないわー。だって、私には生きていても

らいたいんでしょうー？」
　その言葉に、男は面白そうに頷いた。
「ふむ、なるほど。そいつは困りますねぇ。確かに。じゃあ、どうしますかね？」
「ここから、逃げさせてもらうわー。あなたたちも、私が捕まったままだと、都合が悪いんだしー、それが無難な妥協点じゃないかしらー？」
「ほほう。逃亡するが、我々の手には落ちず……。どこかに身を潜めると。まぁ、簡単に捕まらずに逃げ続けてくれるならば、悪くはありませんねぇ。確かに。それはそれで……ふふふ、事態はますます混沌としてきますねぇ」
　心の底から楽しげに笑う男に構わず、オウラニアは踵を返した。
「みんな、逃げるわよー」
　毅然とした顔でパティの手を掴むと、ヤナとキリルにも声をかけ、走り出す。曲がり角を曲がり、曲がり、男が見えなくなったところで……。
「だけどー、どうしようー。逃げるって言っても、いったいどこにー」
　途端に不安になってしまう。
　昔から、釣り以外に興味を持たなかったオウラニアである。
　町に出ることは極めて稀。町を歩くより、海に出て釣りをしているほうが多いぐらいで……。どこに隠れる場所があるかなんか、全然、わからなくって。
「エメラルダさまのところにー？　いえ、でもー、グリーンムーン公は、お父さまとも繋がりがあるから、無理だしー。じゃあー、えーっと」
　っと、その時だった。声を上げたのは、ヤナだった。
「オウラニア姫殿下……助けてくれそうな場所……、あたしに心当たりがあります」
　見上げてくるヤナの、その力強い視線に、オウラニアはすぐに決

断する。
「ヤナ……。ええー、わかったわー。あなたを信じるわー」
そうして、彼女たちが向かった先……。そこは……。

第八十話　メイドを制する者は、情報戦を制す

さて、アンヌとシュトリナを待つことしばし……。ミーアのお腹が、きゅうっと切なげな声を上げた。
「……ふむ、アンヌ、少し遅いですわね……」
大人しくソファーに座っていたミーアだったが、にわかにソワソワし始める。立ち上がり、部屋の中をうろうろ、のそのそ。落ち着かなげに歩き回る。
別にお腹が減って気が立っているわけではない……いや、まぁ、それがないとは言わないが、それがすべてではない。
いつまでも帰って来ない忠臣が、少し心配だったのだ。
「まぁ、リーナさんも一緒に行っておりますし、大丈夫でしょうけれど」
その意味で、シュトリナが同行しているのは心強いところだった。なにしろ、彼女はイエロームーン公ローレンツに鍛え上げられているのだ。毒に対する造詣も深いし、護身の術も身に着けていることだろう。なにより、そのスイーツ審味眼には、定評があるわけで……うん？
っと、ミーアの思考がより根源的な欲求に流されて行きかけたところで、唐突にドアが開いた。
「ああ、アンヌ……。待ちかねましたわよ……あら？　その方は？」
二人とともに部屋に入ってきたメイドを見て、ミーアは小さく首を傾げる。
「ええと、確か、オウラニアさんと一緒に、セントノエルにいらっしゃった方ですわね」
「覚えていていただけたとは、光栄です。ミーア姫殿下」
硬い表情で頭を下げたのは、オウラニアの専属メイドの少女だった。

「彼女が、オウラニア姫殿下の逃亡時のことを、ある程度、ご存知のようでしたので連れてまいりました。シュトリナさまが、説得し……」
「アンヌさん、そんな……リーナが脅したみたいなことを言わないで。あくまでも、アンヌさんが人脈を生かして情報収集をした。お手柄の横取りはしないわ」
澄まし顔で言うシュトリナである。
「なるほど……。まぁ、大体の経緯はわかりました。では改めて、なにがあったのか、お聞かせいただけますか？」
ルードヴィッヒに促され、メイドの少女は、ポツリ、ポツリと語りだした。

「なんと……。外部の協力を得て脱出……」
「あくまでも、メイド仲間から聞いた話ですが……。衛兵の話を立ち聞きしたとかで……」
王宮内に勤めるメイドたち。年頃の少女たちの噂話好きは、強固な情報網を築き上げているもの。それは時に、一国の諜報網にも匹敵する。
人の好奇心は際限なく、また、その口に戸を立てるのは難しい。自由自在にさえずる舌は真に御しがたい器官なのだ。
「ふーむ、しかしそうなると、オウラニアさんも、なかなかに人望がおありだったということになるのかしら……？」
てっきりオウラニアは、そういう人脈作りには無頓着なものだと思っていたが……。
っと、そんなミーアの胸中を知ってか知らずか、メイドの少女が首を振った。
「それが不思議なのです。オウラニアさまに人望はありませんから。城の者で助け出そうという人はいないでしょうし、かばい立てする人もいないと思います」
「ふむ……」

それを聞き、ミーアは眉間に皺を寄せる。
――専属メイドに言いきられてしまうとは……。人は自ら蒔いた種を、自分で刈り取らねばならない。悲しいことですけど、オウラニアさんも、結局はそういうことなのでしょうね。
っと考えたところで……。
「あら……？　ということは、オウラニアさんを助けたのは……」
「十中八九、蛇です」
シュトリナの声を聞き、ミーアは、さぁっと青くなった！
――えっ、ということは……、もしかして、今、蛇の手の中にパティがいるということになるのでは……？
もしも、パティの秘密がバレたら……？　それこそ、パティが命を落とすようなことになりでもしたら……？
――あ、や、ヤバイですわ。これ、急いでなんとかしませんと……。
「蛇がやったことならば、助けたというか、なにかに利用するつもりで連れ去ったと考えるべきではないでしょうか」
慌てそうになるミーアの耳に、シュトリナの声が静かに入ってくる。
浮かしかけた腰を、再び椅子に落ち着けて、ミーアは、ふぅーっとため息を吐き。
「いずれにせよ、探し出さねばなりませんわね。ルードヴィッヒ、どうするのがよろしいかしら？」
「そう、ですね。我々だけで探し出すのは、少々、難しいのではないでしょうか」
ルードヴィッヒが難しそうな顔をする。
「ディオンさんに動いていただく……というわけにもいきませんわよね？」
「居場所がわかってるなら、どこへなりとも行きますがね。人探しは、あまり得意じゃありませんので」
苦笑いを浮かべるディオンに……。

――でも、革命の時、わたくしを追いかけ回した手並みは、かなりのものでしたけど……。
などと、頬を膨らませるミーアであったが……。それでも彼の言うことは理解できた。
ディオン・アライアは最強の個であるが、人探しに必要なのはどちらかというと統一された意思によって動く集団だ。かといって……。
「ガヌドス港湾国内で帝国の兵を動かすわけにもいきませんわね」
「そうですね。目撃者への聞き込みなどには、やはり人数がいる。できれば、探し出すのは、この国の兵に任せたいところですが……」
っと、その時だった。
「あの……ミーア姫殿下……。オウラニアさまを、どうか、お助けください」
話においていかれていた、オウラニアのメイドが意を決した表情で言った。
「あら……？　そんなにオウラニアさんに助かっていただきたいんですの？　なにか恩義でもございますの？」
やや意外の念を禁じ得ないところだったが……。
「いえ、どちらかと言うと、脅されていたのですけど……」
メイドは、おずおずと言った。
「脅されて、それで、オウラニアさまの味方として協力させられて……。国王陛下に監視を命じられていたのに……それを裏切って。だから……」
と、そこで、メイドはググイッと身を乗り出して……、
「このままオウラニアさまが捕まってしまうと、困るんです」
切実な口調で言った。
「……はぇ？」
思わず、身を引くミーアに、メイドは続ける。
「このまま、オウラニアさまが処断されたら、国王陛下からどのような罰を受けるか……。きっと王宮を追い出されるでしょうし、も

っと悪くしたら、私も牢に入れられるかも！」
そのメイドの言葉は……深く、ミーアの心に刺さった！
――ああ……実に打算的、かつ小心者ですわ！　とてもわかりやすい心理！
目の前の彼女はすでに、中立の立場ではないのだ。国王にも、オウラニアにも従える、どちらが勝っても構わない、とはいかないのだ。
オウラニアの側に立ち、彼女の味方になってしまっているのだ。だからこそ、彼女に負けられては困る。勝ってもらわねば困るのだ！
それは、紛れもなく、打算的自分ファースト。極めてミーアに近しい思考法なのだ！
そう、誰しもが、アンヌのようでいられるわけではない。なんの打算もなく、ただ、己の優しさと、良心に従って行動できる人など、そうそうどこにでも転がってはいないのだ。
忠臣、アンヌは、誰かさんのように、ベッドの上を探せば大抵転がっている……というような人とは、一味違うのだ。
「ミーアさま、こちらを……」
っと、お茶を注いでくれたアンヌに、ミーアは深々と頭を下げて、
「アンヌ……どうもありがとう。心の底から感謝いたしますわ」
実感のこもったお礼をする。
いささか、オーバーなお礼の言葉に目を白黒させるアンヌを尻目に、お茶を一口。あまぁいお砂糖の味に、ほひゅー、っととろけそうな笑みを浮かべる。
そんなミーアの目の前で、メイドの話は続いていた。
「それに、オウラニアさまは変わろうと……されておられたように思いました」
ふと、メイドの声の調子が変わったような……そんな気がして、ミーアは目を上げる。っと、先ほどの切実さとは、また違う、どこか戸惑うような様子で、メイドが話を続けていた。
「オウラニアさまは、ミーア姫殿下に倣って、変わろうとされてい

たんです。はじめは、また馬鹿なことを始めたな、って思ったんです。海賊のヴァイサリアンのことなんか、助けようとするなんて、馬鹿なことをって思ったけど、でも……あの方は、変わろうとされていた。それを見るうちに、私は、なんだか……その、お味方をするのも悪くないなって……思ってしまって……この方は、もしかしたら、優れた指導者になってくださる方なのかもしれないって……も、もちろん、そうであってほしいっていう希望的観測なだけかもしれないのですけど、でも……」

その、たどたどしい語りに、先ほどのシュトリナの話を思い出すミーアである。

人の心は、一面的ではない。

打算がないわけではない。けれど、打算だけではない。

きちんと目の前のメイドは、オウラニアのことを思っているのではないか、と……ミーアは思うのだ。

それに、オウラニアと同様に、彼女もまたセントノエルで見てしまったのだろう。

ヴァイサリアンの子どもが、どういう者たちなのか？

それが、邪悪な海賊の資質を備えた、汚らわしい子どもたちではないということ。

自分たちと変わらない人間で、力の弱い子どもだということも。

否が応でも、それがわかってしまって……だから、彼らを救おうとするオウラニアの心が、彼女自身にも共感できてしまったのではないだろうか。

「それに、お可哀想な方でもあるんです。オウラニアさまは」

それから、メイドは、辺りをキョロキョロ見回してから、声を潜めて……。

「実は、とあるベテランの先輩メイドから聞いたお話しなのですが……どうやら、国王陛下には愛人がいて、だから、娘であるオウラニアさまも、王妃さまも、愛されることはなかったのではないか、と……」

それを聞き、ミーアは思わず驚いた。
「まぁ……そのような噂が……」
彼女の話を聞きつつ、
――こっ、こわぁ……！　これ、白月宮殿やセントノエルでも、迂闊なことできませんわ！
メイドたちによる情報網の恐ろしさを改めて実感するミーアであった。

第八十一話　剛盾のアベル、不吉な未来を知る

所変わって、ミーアたちと別れたアベルとベルの祖父孫コンビは、街中をグリーンムーン邸へと急いでいた。
前に一度来たことがあるとはいえ、馬車に乗ってのこと。いささか道順に不安があるのはもちろん、それ以上に気になるのは……。
アベルは、さりげなく辺りに視線を走らせつつ、追手の気配を探る。
ガヌドス国王の手の者に、混沌の蛇の関係者などなど。注意すべき要素はいくらでも存在している。
なにより、彼の脳裏には、あの日の蛇の廃城での光景が浮かんでいた。
首に矢を受け、血に染まった少女の姿。
その彼女が、今、また生きて、目の前にいるという奇跡。
――シュトリナ嬢は、ボクを信頼して、ベルと行くように取り計らってくれた。であれば、今は、なんとしてもベルを守らなければならない。
遠い未来からやって来た孫娘を守るため、アベルの心は燃えていた。
「ベル、あまりボクから離れないようにしてくれ」
ひょこひょこっと走って行こうとするベルに声をかける。っと、
「へ……？」
きょとりん、と首を傾げるベル。アベルは、そんな孫娘に小さくため息を吐き、
「君は、エメラルダ嬢の……グリーンムーン家の別邸の場所を知らないだろう？」
確か、二年前の夏に、彼女は同行していなかったはず、と指摘をすれば……。

「あ、いえ。未来の場所と変わってなければ、二、三回は行ったことがあると思います」
あっけらかんとした様子で、ベルは言った。
「そうなのかい？」
「はい。エメラルダ大おばさまに船遊びに誘っていただいて……。みなさんで遭難した島にも行ったことがありますよ」
――大おばさま……。
妙齢の令嬢に、その呼び方は問題があるのではないか、などと思っていたアベルだが……。
「ところで、アベルおじ、王子は……」
「未来の世界では、ボクはお祖父さまと呼ばれているのかい？」
「あ、はい。そうですね」
「そう、か……」
さすがに、十代の半ばでお祖父さまと呼ばれるのは、ちょっぴり胸に来るアベルである。
――これは、エメラルダ嬢に会う前に、ベルに注意をしておく必要があるかな……。
などと考えていると……。
「それに、異名もありますよ」
ベルが、なにやら言い出した。
「異名……というと？」
「剛盾（ごうじゅん）のアベルお父さまとか、堅牢要塞のアベルお祖父さまって」
「ああ、なるほど。ミーアに降りかかる攻撃のすべてを防げればいいと思っていたが……そう呼ばれるのは、悪くないな……」
などと、満更でもない顔をするアベルに、ベルは……。
「そう呼んでるのは、ボクたちのお母さんとか、親戚の……アベルお祖父さまの孫娘たちなんですけどね。娘に言い寄る男たちの、ありとあらゆる求愛を盾で防ぎ、要塞のように寄せ付けないという意味で……」
そんなことを朗らかな笑みを浮かべつつ、言う。

「え……ええと……」
アベルは……若干、引きつった顔をして、
「つまり、ボクは、娘や孫たちから敬遠されてると……？」
「……？　いいえ。すごく慕われてますよ。結婚するならお父さまとが良かった、とか、未だに、お母さまの妹の第四皇女の……って、ああ、あまり言わないほうがいいかもしれません」
ベルは、ペラペラ動く口を、シュシュっと押さえ……。
「あまり言ってしまうと、未来に関わりますし。うん、少し控えます」
「もう、だいぶ気になるところまで聞いてしまっているんだけど……」
アベルは苦笑しつつ、辺りを見回す。
ガヌドスの、変わらぬ港町の風景。今のところ、こちらを追ってくる者はなく、すれ違うのも仕事を終えた漁師や、市場の関係者である商人がほとんどで……。
っと……その時だった。彼の視界の外れに、不意に、見覚えのある人物が映り込んだ。
「あれは……」
「どうかされましたか？」
きょとん、と瞳を瞬かせるベルを横目に、アベルは声を潜めて言った。
「実は、君たちが宿屋で留守番している時に、ある出会いがあったんだ。覚えているだろうか？　クラウジウス侯ハンネス殿のこと」
「ああ。パ……大お祖母さまの、弟君ですね」
「そう。そのハンネス殿と思しき人と、港で会ってね。しがない探検家だ、などと名乗ってはいたが……」
「探検家……」
ベルが……スゥっと表情を変える。
それは、かつて、あの瓦礫と化した帝都にて。最後の姫として名乗りを上げた時に似た……帝国の叡智の血を引く者の、誇りを胸に

抱いた表情。
厳かで、侵しがたい王者の気配をまといつつ、ベルは言った。
「追いかけましょう、アベルお祖父さま」
「え？　いや……」
「ボクは、ぜひとも、お話しを聞かなければなりません」
そうして、止める間もなく、ベルは走り出した。
お城で大切に育てられた皇女とは思えないほど、素早く、さまになっている走りに苦笑しつつ、アベルはその背を追いかける。
――まぁ、グリーンムーン邸の場所はわかっている。今は、あの人を追うことを優先してもよし……としようか。
孫に甘いアベルお祖父さまの、この判断が後にどのような影響を及ぼすのか、今はまだ、誰も知らなかった。

第八十二話　クッキーにはクッキーを

「ふーむむ……」
ミーアは、アンヌが用意してくれたお茶菓子をモグモグ、モグモグ、モグモグしながら、唸り声を上げる。
テーブルの、大皿に並ぶクッキーに手を伸ばし……。
「オウラニアさんの逃亡と蛇の策謀、それに、ガヌドス国王とオウラニアさんの関係性……」
一枚、一枚、考えながら、自分の取り皿にのせていく。
いつものように、考える風を装って……ではない。真面目に、非常に真面目に考えているのだ。
なにしろ、今回はパティの命がかかっている。他人事ではないのだ。
「蛇の目的は不明ですけど、ともかく、オウラニアさんたちを取り戻さなければなりませんわね」
ミーアの言葉に、ルードヴィッヒは腕組みをして、
「それはそうですが、ガヌドス国王の思惑がわからないのが気になります」
「なぜ、オウラニアさんに罪を着せるようなことを言ったか、ですわね。しかし……」
っと、先ほど聞いた話を反芻する。
「ガヌドス国王には愛人がいて、オウラニアさんを軽視していた……邪魔者であった、と……」
つぶやきつつも、ミーアは小さく首を傾げる。
「まぁ、噂は噂、でしょうな」
そう言ったのは、ディオンだった。
「あら？　なぜですの、ディオンさん。なにか理由がございますの？」

「はは。残念ながら、ただの勘ですよ。だが、あの御仁に、そんな人間めいた情熱があるというのは、俄かには信じがたい」
ディオンの言葉に同調するように、ルードヴィッヒが頷いた。
「私も、感情的にはディオン殿に賛同したいところです。正直なところ、かの国王に対して、私が持つイメージとはズレを感じます。それに、邪魔者扱いというのも気にはなる。愛人がいるというのなら、それこそ、側室として迎え入れればいい。その愛人との子を世継ぎにしたいというのであれば、そうするのを邪魔するものもなし。別にオウラニア姫殿下を貶める必要はない。が……」
と、眼鏡の位置を軽く直してから、ルードヴィッヒは言った。
「もしも、そういった、人間的な感情が裏にあるなら、なにかの理由でオウラニア姫に罪を押し付けることは、容易だったでしょう」
それから、彼は眉間に皺を寄せる。
「そもそも、ガヌドス国王の底がよく見えないので、判断が難しい……ただ情報だけを眺めるなら先ほどの彼女の証言は、理屈には合っています」
ガヌドス国王は、オウラニアに対して愛情を持っておらず、むしろ邪魔だと疎んでいる。
だから、暗殺未遂事件が起きた時、これ幸いに、と犯人に仕立て上げた、と。
「うーむ……これは、なかなかに事態が錯綜してきましたわね。ヴァイサリアン族の問題を一気に解決するつもりが……このようなことになろうとは……」
腕組みしつつ、ミーアは考え込む。
――ダメですわね。問題が難しすぎて、甘い物を食べているのに、まったく閃きが足りませんわ。すっかり口が甘くなってしまいましたわ。
なにか、味を変えるものはないかしら……？
なぁんて思いつつも、さらにクッキーに手を伸ばし、もう一枚……。瞬間、ミーアは目を見開いたっ！

今度食べたクッキーは……甘くなかったのだ！
どちらかといえば、ほのかに塩気のあるクッキー。よく見れば、乾燥させた海藻の巻かれた、特殊なものだった。
――ほう……これは……！
ミーア、思わず、その趣向に瞠目する。
甘くなった口をリセットするために、クッキー以外のものを持ってくるのではなく、あえて、味の違うクッキーを持ってくるというこの趣向！
スイーツに精通したミーアでも思いつかなかった一工夫に、思わず、上機嫌になってしまう。
「ふむ、クッキーにはクッキーを……ですわね」
などと、なにやら格言めいたことを言いつつ、もう一枚。
すっかりお口直しして、紅茶をゴクリ。
うむうむ、っと満足げに頷くミーアだったが、直後、なにやら、強い視線を向けられていることに気付く。
ふと見れば、ルードヴィッヒが、目を見開いて見つめていたからだ。
「クッキーにはクッキーを……それは……もしや、冤罪には冤罪を、ということでしょうか」
「……ぅん？」
微妙に変な声が出たが、誤魔化すために咳ばらいを一つ。それから、なにやら、悩ましげな顔を作り、頷いておく。っと、
「そうか……それは盲点でした。確かに……そうすれば、ガヌドス国王に対する牽制としても、なかなか……」
「あの、ルードヴィッヒさん……どういうことでしょうか？」
ミーアが問いたいことを、またしても、忠義のメイドが代弁してくれる。よくできたミーアの右腕である。
「ああ、簡単なことだ。つまり、ミーアさまは、真実を明らかにするのではなく、ガヌドス国王の疑惑を、勝手にこちらで設定してしまおうとされているのだ」

「えーと……」
「最初から整理してみようか。我々がこの国に来たのは、そもそも、ヴァイサリアン族の迫害の事実を確認し彼らを助けるためだった。オウラニア姫の要請も、それだった。ここまではいいだろうか？」
「はい。大丈夫です」
頷くアンヌ……と心の中で頷くミーア。
――さすがにそのぐらいはわかっておりますわ……。
っと、うむうむ頷いておく。
「ミーアさまは、今回の暗殺未遂の冤罪を、そのことに絡めてしまおうとしているのだ。つまり、オウラニア姫が疑われたのは、国家として突かれたくない問題、ヴァイサリアンの迫害問題を改善しようとしたからではないか？　と。邪魔者を排除するために、今回の暗殺未遂事件を使ったのではないか、と」
「え……？　でも、それって……」
「無論、なんらの確証もない。冤罪の恐れが極めて高い。が……」
眼鏡をクイッと上げつつ、ルードヴィッヒは言った。
「もしも、ミーアさまが、その件で疑いを持っていると告げれば、それ自体が牽制になる。もしも、オウラニア姫になにかあれば『彼女は、正義の告発を為そうとし、そのせいで、冤罪によって葬られたのだ』と糾弾する。そのように、ガヌドス国王に警告しようとしているんだ。さらに、暗殺未遂事件を調べることに絡めて、ヴァイサリアン族の隔離地区を調べることをも視野に入ってくるかもしれない」
それから、ルードヴィッヒは静かにミーアのほうに視線を向けてきた。
ミーアは黙って、彼の話を聞きながら、ひたすらに感心していた！
――なるほど。そんな手があったのですわね……。クッキーにはクッキーを……。まさにそれですわね。
っと、小さく頷きつつも、
「もしも、オウラニアさんが邪魔者である、というのなら……逃亡

した今は、その存在を消す絶好の好機。仮に蛇の手から助け出したとしても、ガヌドス国王の手で葬られてしまう危険性は非常にたかいですわ。しっかり、疑いを表明しておかなければなりませんわ」
彼の献策を採用することを即断。堂々と席を立ち……。
「あっ、ミーアさま。失礼いたします」
アンヌが横から、ささっと口元のクッキーの欠片を拭きとってくれる。
ミーアは、唇をペロリと舐めてから、
「では、参りますわよ」
何事もなかったように、部屋を後にするのだった。

第八十三話　冤罪には冤罪を

ガヌドス国王と対面をするため、ミーアは廊下をズンズン進む。
港湾国側の人間たちが止めようとするも、その程度で止まるミーアではない。
そもそも、大国ティアムーンの皇女を止めようなどと言う気概のある者はそこにはいなかったのだ。
そうして、自らの剣に頼ることもなく、ミーアは、国王の執務室へとたどり着いた。
「失礼いたしますわ。ガヌドス国王陛下」
声とともに、バーンっと扉を開けミーアは颯爽と部屋に入る。
室内には、ガヌドス国王と、もう一人の男がいた。
「これは……ミーア姫殿下……。わざわざお越しいただけるとは光栄の至り」
口の端を釣り上げて笑う国王ネストリに、ミーアは軽やかな礼を返す。
「別に言葉を飾る必要はございませんわ。国王陛下。無礼は承知の上。わたくしはただ、王宮に招きながら、お茶菓子も出さずに放っておくという貴方の無礼に、突然の訪問という無礼で返しただけのこと」
「おお、それはいささか穿った見方というもの。他意はございませんよ。なにも出さずにいたのは、ただ、毒を疑われることを恐れたまでのこと」
「まぁ、そういうことにしておきますわ。ところで、そちらの方はどなたかしら？」
ミーアは視線を、もう一人の男に向ける。
「い、いえ、私は邪魔者のようですので、これで……」
などと立ち上がり、逃げようとする男に対しミーアは、

「お初にお目にかかりますわ。わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーン。ティアムーン帝国の皇女ですわ」
堂々と名乗りを上げる。
大国の皇女という、身分が上の者から名乗られてしまった以上、礼を返さないことはあり得ない。その無礼は国によっては、極刑に値するものにもなり得るもの。
男はミーアの後ろに立つディオンのほうにチラリと視線をやってから、やや青ざめた顔で言った。
「これは、ご丁寧な挨拶痛み入ります。ガヌドス港湾国、造船ギルド長のビガスと申します」
「造船ギルドの長……。ほほう、なーるほど」
ミーアは、内心でニヤリ、と笑みを浮かべる。
――確か、ヴァイサリアンの民は、船作りで働かされていると聞きましたわね。とすると、バリバリの関係者ではありませんの……。そんなお二人が揃って、いったい、なんの話をしていたのかしら？
これはとても怪しい……。実に使えそうな状況ですわ。
そう。今回のミーアは、ガヌドス国王に冤罪を押し付けることを決めているのだ。
「時に、陛下。オウラニア姫殿下が誘拐されたと耳にしましたが、それは本当のことですの？」
「誘拐？　はは、どこでそのような根も葉もない噂話を……」
「噂話ならば、それで結構。すぐにお会いしたいですわ。オウラニアさんへの疑惑を解くためにも、お話しを聞かねばなりませんし、それ以上にわたくし、心配でお菓子も喉を通らないぐらいですの」
いけしゃあしゃあと言うミーアに、すぐ後ろで、ディオンが思わず笑ってしまっていたが、それはともかく……。
「ふふふ、なるほど。お見それした。さすがは帝国の叡智」
ガヌドス国王は、急に、腰を低くして、卑屈な笑みを浮かべる。
「もっとも、別に驚くことはなにもわかってはいない。どうやら、娘は、ヴァイサリアン族の者の手を借りて逃亡を図ったということ

以外は……」
　そうして、国王は、そばにいたギルド長に視線を向けた。ギルド長ビガスは額の汗を拭きながら、
「オウラニア姫をお乗せしていた馬車は、我が造船ギルド保有のものでした。御者も我がギルドで雇っていた者だったのですが、その者が言うには、バンダナを額に巻いた男に殴り倒されたと……」
「暗殺犯もヴァイサリアン族の刺青をしていた。オウラニアがヴァイサリアンの者たちと結び、私を殺し、国を乗っ取ろうと計った。今回、馬車を襲ったのもその者本人か関係者であった、と……そのように考えるのが妥当であろう」
「あら、それは、いささか飛躍というものではないかしら？」
　ミーアの反論に、王は引きつった笑みを浮かべる。
「証言は、二人の人間のものをもって、正式なものとなせ……。神聖典にあるとおりだ。御者同様、警護についていた兵士も証言しているのだ。信用を置かぬ理由はなし」
「だからといって、ヴァイサリアン族とオウラニア姫殿下の関係を証明するものとはなり得ませんわ。百歩譲っても、それは、バンダナを付けた男とオウラニアさんの関係を証明しているに過ぎない。オウラニアさんが犯人であるという結論ありきで考えているのではないかしら？」
「そちらこそ、オウラニアが無罪であるという結論ありきで言っているのではないか？　ミーア皇女殿下」
　二人は睨み合い、けれど、すぐにミーアは微笑みを浮かべた。
「わたくしは、実のところ、むしろ別の可能性を疑っておりますの。陛下」
「ほう。別の可能性……それは？」
　興味深げに首を傾げる王に、ミーアは全力で押し付ける。
「単刀直入に言うならば……国王陛下。あなたが、オウラニア姫殿下に罪を押し付けたのではないか、と……」
　その言葉に、ガヌドス国王は愉快そうに笑い声を上げる。

「ははは。これはまた、突拍子もないことを。ミーア姫は、なにゆえに、私が一人娘に罪を着せていると？」
「そうですわね……」
ミーアは深々と頷いてから、ガヌドス国王と、造船ギルド長に目を向けて、
「あなたたちは、オウラニアさんのことが邪魔だったのではないかしら？」
軽く指を振り振り、続ける。
「オウラニアさんは、ヴァイサリアン族の境遇を憂えていた。隔離され、造船に従事していたヴァイサリアン族の人たちを、救い出そうとしておりましたわ。けれどそれは、あなたたちから、便利な労働力を奪うことだった。そうですわよね？　造船ギルドのギルド長さん」
急に話を振られて、ギルド長ビガスは飛び上がった。
「話にならぬ……。そのような根も葉もない冤罪……」
「どうかしら？　怪しいものですわ。少なくとも、筋は通っておりますわ。そして、もし、オウラニアさんが、ガヌドス港湾国の兵士によって害されれば……いえ、直接的に兵士にでなくとも、何者かによって害されてしまえば、その時点で……わたくしは、疑わざるを得ませんわね。オウラニアさんが、邪魔だから口封じされたのではないか、と」
それから、ミーアはニヤリと笑った。
「まぁ、わたくしは寛容なほうですけれど、わたくしのお友だちの中には、そのような非道を放っておけない方たちが多くおりますし……。すでにしていることとは思いますけれど、できるだけ早くオウラニアさんたちを探し出して、保護したほうがよろしいのではないかしら？　できるだけ安全に、傷一つつけることなく……。もちろん、子どもたちについても、ですけど」

第八十四話　勝ちの海流に乗って（前書き）

※前話に入れたつもりが、グリーンムーン公が行方不明になっておりました。
ということで、訂正します。お知らせくださった方ありがとうございました。

第八十四話　勝ちの海流に乗って

勝ち誇った笑みを浮かべて、ミーアはさらに踏み込む。
「それと……もしも、このような冤罪をかけられるのが嫌ならば、ヴァイサリアン族のことも是正して……」
「いけませんな。ミーア姫殿下」
その時だった。突如、部屋のドアが開き、一人の男が入ってきた。
深い緑色の髪、整えられた口髭を軽く撫でながら、やってきたその男は……。
「グリーンムーン公……。なぜ、ここに……」
エメラルダの父、グリーンムーン公爵その人だった。
なぜ、このような場所に、それもこのタイミングで……？　と首をひねるミーアの目の前で、グリーンムーン公は実に優雅な足取りで部屋の中に入ってきた。
「ミーア姫殿下が、王宮に軟禁状態にあるとお聞きして、急ぎお助けに上がった次第」
胸に手を当てて深々と頭を下げ、
「困りますな。陛下。我が国の大切なミーア姫殿下を軟禁などと……」
「これは、グリーンムーン公。実に申し訳ないことをした。我々としては、姫殿下に市井の宿をお使いいただくわけにもいかず。王宮にお招きしたまでのことながら、余計なご心配をおかけしてしまったようですな」
滑らかな二人のやり取りを見て、ミーアは気付く。
――この二人、実に仲が良さそうですわ。なるほど。わたくしたちを部屋に引き付けておく間に、国王陛下は、援軍を呼んでいたということですわね。グリーンムーン公は、我が国の重鎮。姫であるわたくしにも、諫言できる立場ですわ。

内心で舌打ちするミーアに、グリーンムーン公は、朗らかな笑みを浮かべて言った。
「しかし、いけませんな。ミーア姫殿下。他国のことに口を差し挟むのは、あまり感心できることではありませんぞ？」
「あら？　わたくしは、お友だちが不毛な冤罪に巻き込まれそうになっているのを止めに来ただけですわ」
澄まし顔で答えるミーアに、グリーンムーン公は首を振る。
「友を想う姫殿下のお心には感服いたしますが、それとて他国のこと。我が国が口出しする筋合いのことではございませぬ。それに、下手をすれば、我が国がガヌドス港湾国を欲しての介入と見做されるかもしれない。国が国を攻めるには大義名分が必要。それをでっちあげるために、そのようなことを言っていると見做されるかもしれません」
――む……。それは、確かに、由々しき問題ですわね。
痛いところを突かれて、黙り込むミーアである。
自らがしゃしゃり出ていって、ガヌドスを属領としてしまうというのは、ミーアにとっても避けたいところである。
横から口出しした結果「じゃあ、お前やって見ろよ？」なぁんて言われるのはミーアとしては、ぜひ避けたいところ。できれば、自分の国のことは自分でなんとかしてもらいたい、というのがミーアの本音なのだ。
――それに、もし仮に、ガヌドスが我が国のものになったとして……。一度、そのような前例を作ってしまえば、他国が帝国に対して真似をするかもしれませんわ。
お前の国だって似たようなことやってんだろ？　などと言われれば、それに反論するは難しく……。
ゆえに……。
――蒔く種は慎重に吟味しなければなりませんわ。
ミーアは一度、立ち止まり考える。
――これは、いったいどうしたものかしら……？

はたして、どこまで踏み込むべきか……、事前にルードヴィッヒらに意見を聞いておかなかったのが、今となっては悔やまれるところだ。

――とりあえず、オウラニアさんが冤罪を押し付けられ、抹殺されようとしていると、わたくしが疑いを持っている、と……それを表明しておくことが重要ですわ。逆に言えば、それさえやっておけば、ガヌドス国王だって、下手なことはしないはず。

今回のミーアたちの狙いは、ガヌドス港湾国の兵士を、オウラニアの捜索にあたらせることだった。それも、できる限り安全に、である。

混沌の蛇とガヌドス港湾国、その両方を敵に回すことを避けるべく、プレッシャーをかけにきたのだが……。その目的は、すでに果たせたのではないだろうか？

欲張るのは禁物だ。あくまでも、ここは、当初の目的が達成できたことに満足すべきなのでは……？　と思うミーアである。

――そうですわ。わたくしとしたことが、ここで全部を解決してしまおうなどと、それは勤勉に過ぎるというもの。働き過ぎは禁物ですわ。真面目に過ぎれば、どこぞの生真面目王子のように……うん？　アホのシオン……？

瞬間、ミーアの脳裏に鮮烈な姿が甦る。

帝国の非を正しに来た、シオン・ソール・サンクランドの華麗なる姿が……。

――国の別など関係ない。他国であれ、権力を持った者が民を虐げるのは黙って見てはいられない。あいつなら、そんなことを言いだしそうですわね。そして、その理屈で中央正教会も、ヴェールガ公国も納得したわけで……あら……？　これって、もしかして使えるのではないかしら？

かつて、帝国が責められた時の論理……。それは叩きつけられたミーアが、なにも反論できなかった正論中の正論だ。

王とは、民を安んじて統治することを条件に、統治の権能を神か

ら委託された者。ゆえに、民を安んじて統治していなければ、その委託は解消されるべきで……。
――昔、わたくしがやられたことを、今やり返すわけですわね。なるほど、これならば上手く話を運べるかも……。
そこで、ミーアを、ゾクリとした寒気が襲った。
そう、ミーアは気が付いてしまったのだ。事態は、もっと抜き差しならぬものであると……。
――いえ、というか、これって使えるというよりは、むしろ使わなければ危険になるやつでは……？
もしここで、ガヌドス国王の行いを見過ごせば、それをミーアが黙認したと思われるかもしれない。否、蛇はそういうところに目をつけて、こっそりラフィーナやシオンに耳打ちするかもしれなくって……。
――グリーンムーン公の言に耳を傾けるのも、この際は、わたくしに不利に働きそうですわ。
大貴族の横暴に付き合った形に見えるかもしれないし、ガヌドス港湾国が帝国にもたらす利益に目を向けたと取られるかもしれない。
いずれにせよ、オウラニアに罪を被せようとガヌドス国王が振る舞っている、と糾弾した時点で、すでに、ミーアには、その方向で進む以外の道はなかったのだ。一度、ヴァイサリアンへの非を指摘してしまった時点で……それは、ちょうど、あのメイドのように……。
そして、どちらにつくか決めてしまった以上、もう、そちらが勝つ以外に生き残る道はないのだ。
――あまり、そういう逃げ場がないのは、好きではないのですけど……。
やれやれ、と首を振るも、ミーアには、さほど不安はなかった。
なにせ、自分が乗ろうとしているこの波には、ラフィーナがいる。シオンもいる。さらに、自身の後ろにはルードヴィッヒやアンヌ、ディオンもいる。

――いざとなったら、後ろの方たちが助けてくれますし、シオンたちにも責任を押し付ければいいだけのこと。
懸念すべきは、行方不明のパティのことのみ。ゆえに、ミーアは静かに口を開く。
「なるほど。国の別は、確かに大切なことですわね。治めるべき地の区分を踏み越えれば、それは、秩序を乱すことにもなる……。されど……」
心に、聖女ラフィーナの姿を思い浮かべながら……、否、むしろ、その身に聖女ラフィーナの、獅子の迫力をまといながら……。
ミーアは厳かな表情を浮かべて。
「わたくしたちには従うべき正義が存在している。国の別を問わず、あらゆる者が守らねばならないものというのが存在するのではないかしら？」
穏やかな口調で、ミーアは話し出した。

第八十五話　真の平和とは、今この瞬間に断頭台にかけられないことにあらず……

「国の別を問わず……ですと？」
「ええ。そうですわ。例えば……」
ミーア、そこで刹那の思考。その後……。
「それは、目の前に人が倒れていたら助けなければならないという、人として当たり前のこととか、そういったこと。ございますわよね？」
さすがに、これは、否と言えないだろう……というところに線を引く。
「それは、まぁ、確かに……」
グリーンムーン公は、しぶしぶと言った様子で頷く。
「当然のことと言えるであろうな」
続いて頷くガヌドス国王。さらに、造船ギルド長が、困惑した様子で頷いた。
それを否定したら、即ラフィーナにチクってやるぞ、というスタンスで待ち構えていたミーアは、ちょっぴり残念に思う。が、気を取り直して続ける。
「そして、わたくしたち、貴族や王族、皇帝に連なる者には、より強い責任がございますわ。力を与えられているのだから、それを使い、果たすべき大きな義務がある。具体的に言えば、民の安寧を守ること、安んじて民を治めること。これが、我々が民を支配する条件となっているはずですわ」
またしても、ミーアは、神聖典のロジックを持ち出す。その上に立つ限り、聖女ラフィーナの後押しを受けることができるためだ。
後で、お土産に女王烏賊たくさん持って行くから、力を貸してくださいませね、と心の中でつぶやきつつも、ミーアは続ける。
「ゆえに……わたくしは、ガヌドスで行われていることを非難しな

ければなりませんわ。ヴァイサリアン族に行っている政策は、容認できるものではない。そして、それを改善しようというオウラニア姫殿下に、全面的な支持を表明しますわ」
抜かりなく、すべてはオウラニアの意思による、と。だから、功績はオウラニアに帰するべきで、黄金の灯台とか建てないようにね？　と言い含めておくミーアである。それから、
「きっと我が友ラフィーナさまも、シオン王子も、アベル王子も、同意してくれると思いますわ」
自分の味方が大勢いることをさりげなくアピール。付け加えるように、
「我が親友、エメラルダさんも、もちろん、味方をしてくれるはずですわ」
お前の娘だって味方だぞ！　と露骨に伝える。
一度、その流れに乗ると決めた以上、出し惜しみはしない。全力で押しにかかるミーアである。物量の一転投入こそが、ミーアの戦術なのだ！
そして、ミーアの反論には逆らい得ない説得力があった。なぜなら、ミーアが持ち出しているのは、国が依って立つ根拠に他ならないからだ。それが揺らげば、その地を統治する正当性が失われる……そのような理屈をもって、ミーアは戦いを挑んでいるのだ。
「無論そうでしょうが、しかし、これは、平和を損なってまですべきことではないのではないでしょうか？」
対してグリーンムーン公は、ミーアの言葉に一定の正しさを認めたうえで……やや、論点をズラしにかかる。
「平和……ですの？」
「さようでございます。姫殿下はご覧になりましたか？　町の様子を。どこかで、剣を手に取り斬り合う、そのような光景に出会いましたか？」
「儀式の最中に、剣を交える男たちの姿は見ましたけど……」
「ははは。それはイレギュラーというもの。概ね、この国が平和で

あることを、私はよく存じ上げております」
説得するような、朗らかな笑みを浮かべ、グリーンムーン公が言った。
「それは、とりもなおさずガヌドス国王、ネストリ陛下の治世が善政であるから。ならば、この平和を脅かしてまで、他国に変化を押し付けるという、その在り方は、はたして正しいのでしょうか？」
「平和……ふふ、そうですわね」
ミーアは腕組みをして、小さく笑った。
「力で押さえつけた、争いのない状況を平和と呼ぶのであれば、ガヌドスは平和なのかもしれませんわ」
ミーアの笑みは、失敗を知る者の笑みだった。その脳裏に浮かぶのは、かつての帝国のことだった。
そう、ミーア自身も思っていたのだ。あの革命までの間、帝国は平和であると。
――けれど、あの期間にも、断頭台はこっそり忍び寄っていたのですわ。争いがないことがイコール平和ではない。いいえ、わたくしたち、上に立つ者が平和でなくなった時には、すでにすべてが手遅れである可能性が高いのですわ。
っと、ミーアのほうを見て、ガヌドス国王が眉をひそめた。
「姫殿下は、もしや、正義の伴わぬ平和は、平和ではない、などと、サンクランド国王のようなことを言いたいのですかな？」
その言葉に、ミーアは苦笑を浮かべて首を振る。
「そのような立派なことは、わたくしは言いませんわ。争いがないこと自体が、価値のあることでしょう。確かに、それはその通りですわ。それならば、わたくしは、その仮初の平和をより価値あるものにしたいと願うばかりですわ」
正義が伴わない平和は真の平和ではない……などと、大仰なことを言うつもりは、ミーアにはない。
弱者を踏みつけにし、押さえつけて得た平穏が過ぎ去った後、力を失い、押さえつけられなくなった時……、自分のすぐ後ろまで断

頭台が来ていた、などと言うのはごめんなのだ。
ただ、今この瞬間だけ断頭台にかけられなければいい……だけではないのだ。
断頭台とは、できるだけ遠くにいたいと思うミーアなのである。ゆえに、
「帝国としても、隣国に余計な混乱をもたらすことは望まぬこと。グリーンムーン公、別に、あなただけはありませんわよ？　平和を愛する者は……」
グリーンムーン公が言う平和は、おそらく、すべての民のものではない。利益を得られる、自分たち、既得権益層の平和なのだ。
だが、ミーアは知っている。
民にまで、ある程度は平和と安寧が行き届いていなければ、ヤバイのだ、ということを。
民のためとか、正義のためとかじゃなく、自分の首を繋げ続けるための平和としなければ意味がないのだ。断頭台は可能な限り遠ざけなければならないのだ。
ゆえに、ミーアは、あえて言う。
「争いがないことは良いことですわ。国が乱れていないことは喜ばしきことですわ。であれば、我ら統治者は、その状態ができるだけ長く続くように尽力しなければいけないはずですわ」
平和が、次なる争いの準備の時間になってはならないと思うミーアである。
もしも、血で血を洗う騒乱が起きていないというのなら、その状態が長く続くよう、心配りをして、メンテナンスをしていく必要があると思うのだ。
「ふふふ、なるほど。確かに、姫殿下の言うことには理があるようだ」
ガヌドス国王は、静かに笑う。
「オウラニアのしようとしていることも、なるほど。神聖典に照らし合わせれば誠に正しい。娘を排斥するような真似は、中央正教会

と、ヴェールガ公国を敵に回すことになり得るかもしれぬ……。ゆえに、我が兵には、娘を必ず生きたまま捕らえるように、言い含めておく必要があるのだろうな」
ほぼ、満足できる内容の答えに、ミーアは思わずニンマリとほくそ笑みかけて……。
「だが……そのうえで、問いたい。帝国の叡智、ミーア姫殿下。具体的に、どのように事を進めるつもりか？」
次なる国王の言葉に、小さく首を傾げた。

第八十六話　じゃあ、お前やってみろよ？

「具体的に……？」
「そのとおり。ぜひ、ミーア姫殿下のお考えを窺いたいと思いましてな」
ジッとこちらを見つめてくる国王の顔を見て、ミーアは察した。
これは先ほどミーアが恐れたこと……すなわち「そう思うなら、お前やってみろよ？」と言われているのだ、と。
ゆえに、ミーアはすぐに流れを逸らそうとする。
「ええ……ですからそれは、オウラニア姫殿下を保護し、その疑いを解いたうえで改めて……」
「残念ながら、我が娘は愚者。考えを聞いたところで、大して益になるとも思いませぬ」
やれやれ、と首を振り、国王は続ける。
「それより、ミーア姫殿下のお考えをぜひお聞きしたい。姫殿下のご高説には、大変、感銘を受けた。いや、真にお見事なご賢察。帝国の叡智の名に恥じぬ高潔さ。ゆえに、きっと、その理想を実現するための道筋を立てておられるのだろう」
深々と頷いてから、国王は言った。
「して、どのように事を進めると？　それとも……姫は、この王が心を改めれば……王が命じれば、ヴァイサリアンへの差別が消えると、本気でお考えか？」
王は、芝居がかった仕草で首を振る。
「いかに王の言葉とはいえ、すべての国民を支配することはかなわぬ。我が国には兵の数は多くはない。王の目が届く範囲は狭く、裏で迫害や暴力が起こることを止めることはかなわぬ」
「そうですとも。ミーア姫殿下。隔離島は、ヴァイサリアンの者たちを閉じこめておく檻であると同時に、民から守るための城でもあ

るのです」
言葉を引き継いだのは、グリーンムーン公だった。
ここにきて、実際に、ヴァイサリアン族の状況を見ていなかったことが影響してきた。彼らがどの程度の窮状に晒されているのか、ミーアには把握できないからだ。
否、仮に、それが把握できていたとして……例えば、食糧が与えられるが自由がなく、重労働を課された状態と、自由だが、民草からの直接的な暴力と差別に晒される状態と、どちらが良いのか……。回答困難な問題が立ち塞がる。
追い打ちをかけるように、国王が続ける。
「それに、ヴァイサリアンの者たちが解放されれば、我が国は労働力を失う。いや、余計な賃金がかかるようになる、と言うほうが正しいだろうか？　なるほど、それは、支払われるのが正当なものだろうが……それを民たちが喜んで受け入れるだろうか？　民たちの間に生まれた怒りは、ヴァイサリアンの者たちに向かないだろうか？」
そこまで言って、王がニヤリと笑みを浮かべ。
「ぜひ、姫殿下のご見識をお示しいただきたいのだが……」
「ふぅ……、やれやれ。具体的な進め方はオウラニアさんと話し合いながら、と思っていたのですけれど、意外にせっかちですわね。国王陛下」
そう、軽く微笑みつつ……。余裕たっぷりな態度を見せるミーア。ふと見れば、いつの間にやら、アンヌが淹れてくれた紅茶が目の前に置かれていた。
カップを手に取り、一口すすり、その香りを楽しんで、楽し……めるはずもなく！
――って！　どどど、どうすれば！？
内心でパニックに陥る。
あとは、オウラニアの背を押しつつ、手助けをすればいいと思っていたミーアであったから、完全に油断していた。

この手の指摘をする時、最も気をつけるべきことは、悪い点を指摘することと、改善案を出すこととは、難易度が違うということだ。

誰だって、他人の悪いところ、欠点をあげつらうことはできるのだ。割と簡単だし、チクチク口撃するのは、ちょっぴり楽しかったりもするわけで……。けれど、それでは、その問題を解決するにはどうすればいいか？　という話になれば、容易に答えなど出せないのだ。

欠点や問題が放置されるのは、それに気が付いていないからではない。それを解決する術が見つからないからなのだ。

「ふぅむ、さて……どうしたものかしら？　なにか、良いアイデアはございますかしら？　ルードヴィッヒ」

こんな時、ミーアが頼るべき先は、決まっている。決まりきっている！

助けを求めて視線を振った先、ルードヴィッヒが軽く眼鏡を押し上げて、苦笑するのが見えた。

ミーアから話を振られたルードヴィッヒは……自分がミーアから、なにを期待されているのかを、完璧に把握していた。否……完璧に把握していると信じ込んでいた。

――ここで話を振るとは……相変わらず、ミーアさまは酷なお人だ。

ついつい苦笑しつつも、怒りや煩わしさはない。むしろ、自らの頭脳に期待してもらっているという、やりがいが喜びとなって、彼の胸を熱くさせていた。

――ミーアさまから、期待されていること……。それは、常人が考えるような、常識的な政策を提案することだ。

その考えに従い、ルードヴィッヒはごくごく常識的な提案をすることにする。

それを下敷きに、ミーアがさらなる意見を展開させていくことを、彼は確信しているのだ！

「そうですね。私が考え付くこととしては……帝国から監視団を派遣するということでしょうか……」
ルードヴィッヒの考えたところ、ヴァイサリアン族を隔離島から出したとして、町に住まわせるのは、なかなかに厳しい。国王の言う通り、どうしたって軋轢は生まれるだろう。新たな支出が生まれれば、民も権力者も、その怒りをヴァイサリアン族に向けるはず。
王が命じたところで、不当な差別や迫害は行われるだろう。それがないよう、監視する使節団を送ろうというのだ。
これは、国王が提示した三つの問題、すなわち、
①ヴァイサリアン族とそれ以外の民草との軋轢の解消
②ヴァイサリアンへの迫害
③余計な支出が増えること
の内、二つ目への解決策である。が……。
「なるほど。それは結構。帝国の監視団が滞在してくれる、と。それは実に頼もしい。帝国に対し、我が国の民が好感を抱くこと、疑いようもなし」
皮肉たっぷりに笑みを浮かべるのは、ガヌドス国王だった。
まるで小馬鹿にしたようなその顔にも、ルードヴィッヒは腹を立てなかった。なぜなら、彼が言うようなことは、自分も、そしてもちろん自らの主であるミーアも、百も承知であるだろうからだ。
ゆえに、ルードヴィッヒは眼鏡の位置を軽く直して、
「ふふふ。そのとおりですね。私もこれが最善とは思いませんが……。ただ、できることとしては、このぐらいではないか、というのが私の考えです」
そうして、彼は、ミーアに視線を振った。
ボールを……投げ返したのだ。

それを受け、ミーアは……。
――はぇ？
紅茶のカップを口につけた状態で……固まる。

まさか、ここで再び、自分の番が回ってくるなどとは、思っていなかったミーアである。
てっきりルードヴィッヒの完璧な政策に、ガヌドス国王が平伏して終わりかと思っていたのだが……。
――くぅっ！　まさか、ルードヴィッヒの意見が通用しないとは、想定外ですわ。しかし……なるほど。確かにその通りですわ。寛容なわたくしですら、四六時中、教師に見張られていたら、腹も立とうというもの。まして、そのせいで、支出が増える……生活が苦しくなるのだとしたら、なおのこと、余計なことをするな、と睨まれそうですし。これは、少々、危険ですわ。
ヴァイサリアン族への怒りが、より強化されて、帝国の側へと向けられる危機。その危険性に気付かないほど、ミーアは鈍くはなかった。
そんなミーアに、ガヌドス国王の優しげな言葉が届く。
「天秤にかければいいのだ、ミーア姫殿下。本当に、今、貴女がやろうとしていることが、ご自身の利になることなのか？」
その声を前に、ミーアは、ぐむっと声を呑み込み……。
っと、その時だった。部屋にノックの音が響く。入ってきたのは、お皿を携えた使用人たちだった。
「おお。先ほど失礼したお詫びに、お茶菓子として、ガヌドス名物のケーキを用意をさせた。まぁ、そう肩の力を張らず、のんびり考えていただきましょうか」
「あら……これは……」
コトリ、と目の前に置かれた皿、そこにのっていたのは、丸っこい魚形のケーキだった。

第八十七話　噛めば噛むほど味が出る姫殿下

さて、時間は少し戻り。
オウラニアは走っていた。
ヤナとキリルを追って、狭い路地裏を懸命に走る、走る。
ガヌドス港湾国は、あまり広い国ではない。
国民の数も多くはなく、国自体も決して裕福な国とは言えない。
王女であるオウラニアからして、ティアムーンの四大公爵家などには遠く及ばない、質素な生活をしているのだから、この国で金持ちと言っても大して裕福ではない。
されど……このような小さな国であったとしても、貧富の差は厳然と存在する。
家を持つ者と持たざる者。金を持つ者と持たざる者。
明日どんな物を食べて舌を楽しませようかと考える者と、今日、子どもが餓死しないためにどうすればいいか、頭を悩ませる者。
オウラニアが踏み込んだ場所は、今まで彼女が一切見たことのなかった、貧しい人々の町だった。
小さな家々が雑然と建ち並び、その間を道とは呼べないような細長い道が曲がりくねって続いていく。ドアのない家の中からは、住人たちが黙ってこちらを見つめていた。
そして、なにより一番、きつかったのは臭いだった。
オウラニアは、別に、温室育ちの姫ということはない。
ガレリア海に船を出させて、釣りをしたり、魚市場にだって顔を出したり、どちらかと言えば、王宮に留まっていない姫だった。
そんな彼女だから、日夜、花の香りに包まれて、などと言う優雅な生活を送っているわけではない。魚市場の少し生臭い香りも、波に乗って運ばれてくる潮の香りも、彼女は嗅いだことがあったし、嫌いではなかった。

だけど、ここには……死の香りがした。
ゴミが腐った臭い、病の臭い、暴力の臭い、死の臭い。
嗅ぎ慣れない臭気に、オウラニアは顔をしかめる。
――ここを通り抜けるのは、少し辛いけどー、でも、逆に追手を撒けていいかもしれないわー。普通は、こんなところ来ないだろうしー。
「オウラニア姫殿下、大丈夫ですか？」
ふと見れば、ヤナが心配そうな顔をしていた。
「ええー。大丈夫。ちょっと臭いがきつかっただけだからー」
「はは。そうですよね。久しぶりに来たけど、確かに少し臭いが気になります」
ヤナの浮かべた笑みの中に……微かに傷ついたような色を見つけて、オウラニアは、一瞬、疑問に思い……直後、気付いて立ちすくむ。
――あ、そうかー。ここって、ヤナたちが暮らしていた場所なんだっけー。
そう、まさに、ヤナは、このような世界で生きてきたのだ。幼い弟を守りながら、懸命に、自分たちだけで生きてきたのだ。
――二人だけじゃないわー。ここには、他にも子どもたちが暮らしててー。もしかしたら、この二人みたいに親がいない、子どもだけで生活してることだってあるかもー。
そして、その中には二人と同じく、隠れ住むヴァイサリアンの子どもたちだっているのかもしれない。
オウラニアの目の前に広がるのは虐げられた弱者と、その弱者にさらに虐げられる弱者だ。
ヴァイサリアンの隔離地区のことだけ解決すればいいと思っていたが、そんなことはなかった。こんなにも身近な町の中にだって、解決されなければならない問題があったのだ。
――そう言えばー、ミーア師匠が帝国ではじめに行った改革は、貧民街に足を運ぶことだったって聞いた記憶があるわー。あれは、

確かー、エメラルダお姉さまが話してくれたはずでー。
エメラルダは、皇女なのに皇女らしくないと、その当時は怒っていたものだった。けれど……。
――ミーア師匠は足を運んだだけでなく、そこに病院を作って、貧しい人たちを助けようとしたんだったわー。
今ならば、わかる。それが間違いなく、皇女の為すべきことであったと……。
その地を治める皇帝に連なる者、王に連なる者の、力を与えられた者の……その為すべきことに相応しいことであったと……。
オウラニアは、そう思って……。
――それに、特別初等部のことだってそうだわー。
セントノエルで見てきたことを思い出す。
こういう場所で暮らす、毎日、生きることだけで必死な子どもたちを、救済する試み。
それは、紛れもなく統治者の為すべきこと。与えられた力で為すべきことだった。
――やっぱり違うわー。ミーア師匠。普通の王族とは一味違う、知れば知るほど味わい深くなる……ふふ、噛めば噛むほど味が出る女王烏賊の干物みたいな方だわー。
一応言っておくと、褒め言葉である。
ミーアへの溢れんばかりの尊敬の念を新たにすると同時に、オウラニアは、王族の為すべき役割に、改めて圧倒される思いがした。けれど、
――大丈夫、闇雲に進まなければならないわけではないわー。
それは、さながら、暗い海に漕ぎ出す船乗りの気分ではあったが……その胸に不安はなかった。目の前を照らす、導のごとき光が見えていたからだ。
――ミーア師匠をお手本に、改革を進めていけばいいんだわー。
「姫殿下、あっちです」
キリルが指さした先に、オウラニアは目をやった。そこにあった

のは……。
「あらー？　あれって―、教会？」
「はい。あたしたちが、お世話になったところです」
答えつつ、ヤナは、少しだけ緊張した顔で、教会の扉をノックした。しばらくして現れた神父は、ヤナたちのほうを見て、眉をひそめた。
「お前たち、いったいどうして……それに……」
っと、そこで神父は、オウラニアの顔を見て怪訝そうな顔で見つめてきて……。
「なぜ、オウラニア姫殿下がこのような場所に……」
「あらー？　もしかして、私のこと知ってるのー？」
「はい。こちらの教会に着任した際、王宮にご挨拶にうかがいました折、一度お目にかかっております」
「あらー？　それはー、ごめんなさいね」
まーったく記憶にないことを、ちょっぴり反省しつつも、神父の案内で、教会の中に入る。っと、見覚えのある人物が、教会の子どもたちを集めて、なにやらやっていた。
腰に手を当て、堂々たる演説を披露していた少女は、オウラニアたちのほうを見て、目を丸くした。
「あれ……？　パティ、それに、みなさんも、どうして……？」
きょっとーんと首を傾げるベル。よく見れば、奥の机の前にはアベルと……。
「ん……？」
首を傾げる、見覚えのない青年の姿があって……。
「……はぇ？」
隣にいたパティが、ヘンテコな声を上げるのが聞こえた。

第八十七話　噛めば噛むほど味が出る姫殿下（後書き）

今週はミーアが頑張りすぎたため、来週は、ミーアの登場が少ない話をやる予定です。
月曜日だけガヌドス国王と殴り合いをする予定なのですが、その後、ミーアは一週間秋休みに行ったと思っていただければ幸いです。

第八十八話　行くべき道を指し示すモノ

「おお……これは……」
その魚形のケーキを前に、ミーアは唸った。
茶色い焦げ目のついた、芳ばしい香りを放つケーキ。ゴクリ、と喉を鳴らすミーアであったが、即座に、毒を疑う。
――ううむ、これは警戒するべきかしら……？　いや、しかし、美味しそうですし、わたくしが催促したのだから、食べないのも失礼にあたる。かも？　美味しそうですし、ここは、食べないわけにはいかないかしら？　なにより、美味しそうですし……。
っと、頭の中がケーキに持って行かれそうなのを、懸命に、踏みとどまろうとして……とどまろうとして……っ！
――ああ、甘くて美味しそうな香り。いけませんわ。相手のペースに乗っては……。なにか、気分を紛らわさなければ……。
ミーアは、荒ぶる食欲を静めるように、ふぅう、っと息を吐きつつ、思考を別方向に流さんとする。
――しかし、ケーキを魚形にするとは、わたくしの馬パンにも通じる考え方。やはり、魚と関係の深い港湾国ならではの形ということかしら……。魚……魚？
その瞬間っ！　ミーアの脳内で、丸々と太った魚が跳ねた！
「……ああ、具体的に……そうですわね」
わざとらしく、頬に指を当て考えるようなふりをしてから、実にあざとい笑みを浮かべて……。
「では、国王陛下、わたくしは提案いたしますわ」
胸を張り、ミーアは厳かに告げる。
「ガヌドス港湾国の中に……魚を研究する施設を作るのがよろしいのではないかしら？」
「魚を……研究する施設、ですと？」

ミーアは、深々と頷きつつ、
「そうですわ。つい先ごろ、セントノエル学園でこんな話が出ましたの。我が国のミーア学園と共同で、なにか、意義のある研究をしましょう、と。そして、話し合いの結果、飢饉に対処するための、魚の研究をすることになりましたの」
できるだけ、ニマニマしないようにしつつも、心の中では高々と拳を突き上げる。
――ふっふっふ、我ながら、実に冴えておりますわ！　監視の役割を果たすのはティアムーン帝国のみにあらず。ヴェールガやサンクランド、研究に携わる他の国にも担わせればいいのですわ。
責任をいくつかの国に分散してしまおうという、極めていつもどおりのミーアの考えである。
「いや、そのようなものを我が国に作る意味があるまい」
などと言う国王に、ミーアは、オウラニアから仕入れた知識を披露する。
「あら、ご存知ありませんの？　魚の中には海の潮水でしか生きられないものもいる、と。湖の魚の研究はヴェールガ公国の中に作ればいい。というか、セントノエル近くに作ればよろしいでしょうが、海に棲む魚のほうは、どうかしら？」
話しつつ、ミーアは、自らの思い付きが、なかなか隙が無いことに気が付いた。
――おお、もしや、わたくし、本当に叡智を身につけつつあるのでは？
なぁんて調子に乗りつつ、指を振り振り、得意げに説明を続ける。
「共同研究なのですから、一つをヴェールガの中に作るとすると、もう一つは、帝国の近くに作るのがバランスが良いですわ。とすると、ここしかございませんわね？」
「なるほど、つまり……ガヌドス港湾国内にヴェールガ、ティアムーンと関係の深い研究施設を作り、監視の機能を持たせる……と、そういうことでしょうか？」

ルードヴィッヒの問いかけに、ミーアは、しかつめらしい顔で頷いて、
「それだけではなく、せっかくですし、ヴァイサリアン族の方たちが働けるようにする、というのはどうかしら？　無論、ガヌドス港湾国のみなさんにも働いていただいて……ともに汗水を流せば、徐々に仲だって深まっていくものですわ」
その提案に、造船ギルド長が苦笑いを持って答える。
「それは、無謀というもの。確かに、奴らは海で生きてきた海洋民族ですが、それも過去の話。今は、あの島に閉じ込められてから世代交代がされています。奴らに、魚の研究などと言う学が必要なことができるはずがない」
「あら？　そうでもありませんわよ？　魚の研究と言っても、色々あるのではないかしら？」
ミーアはそれに異を唱える。
そう、ミーアは学び、成長しているのだ。
サンクランドで見たこと……そこで得られた深い教訓。シュトリナのほうをチラリと見てから、ミーアは思う。
――毒キノコには毒キノコの使い道がある。解毒にも使えますし、毒を抜けば珍味にだってなる。要は使い方次第。それは……。
「……ヴァイサリアン族とて同じことですわ」
小さくつぶやいてから、ミーアは言った。
「国王陛下は、具体的なことをご所望のようですから、アイデアを出しましょうか。例えば、彼らが造船に関わっているというのであれば、水を通さぬ船体を作ることができるはず。水を通さぬ技術を持つならば、逆に、車体に水を溜めることができる馬車というのも作ることが可能ではないかしら？　それができれば、生きたままの魚を、遠隔地に運ぶことができるようになるかもしれませんわ」
ミーアの言葉を、国王が鼻で笑い飛ばす。
「愚かな。水を溜めた程度で、魚を生かしたまま運べるはずがない」
けれど、その指摘にもミーアが揺らぐことはない。なぜなら……。

「ふふふ、無論、それで上手くいくとは限りませんわ。魚というのは、水を溜めた桶に入れ、餌さえあげていれば、ずっと生き続けられるものなのか、あるいは、なにかの具合で死んでしまうものなのか、それはわたくしにはわかりませんけれど……でも、それって、やってみなければ、誰にもわからぬことではないかしら？」

そもそもが、上手くいくかいかないかわからないから、とりあえず、やってみようぜ！　と言えるのが、研究の良いところである。

――研究とはキノコに似たものですわ。食べてみなければ、毒キノコか、食べられるものかわからない。だからこそ、あえて齧ってみるのが肝要なのですわ。

目を閉じ、うんうん、と頷くミーア。実際のところ、一般的には、齧ってみたら毒キノコでした！　というのは、やったらダメなことと思われるのだが……まぁ、どうでもいいことなのであった。

……いや、そうだろうか？

「なるほど。確かに、そういうものかもしれません。失敗からも学ぶことはある、が、そもそも始めなければ失敗すらできない」

そう言ったのは、意外なことにグリーンムーン公だった。学問とかかわりが深い家系ゆえに、ミーアの言葉の正しさを認めざるを得なかったのだ。

「無論、失敗が許されぬことというのもあるでしょう。ヴァイサリアン族の境遇改善は、失敗できぬこと。民との軋轢や衝突は絶対に避けるべきことで、慎重に進めるべきことですわ。けれど、少なくとも、今のままでいて良いというのは、あり得ませんわ」

そこまで言ってから、ミーアは、静かにガヌドス国王のほうを見つめて、

「とまぁ、このような感じのことをオウラニア姫殿下を中心に実現していただけたらと思っておりますの。ですから、ぜひ、一日も早く、オウラニア姫殿下と子どもたちが保護されることを望みますわ」

「い、いや、だが……。それでも、民の経済的な不満を和らげることはできないのではありませんか？」

「僭越ながら、新しい研究施設ができ、人が集まれば自然と新しい産業も……」
っと声を上げようとしたルードヴィッヒを、ミーアが片手を上げて制す。
「そこまでですわ。ルードヴィッヒ。なにからなにまで、わたくしが解決してしまっては、まるで属領のようになってしまいますわよ」
おほほ、っと冗談めかして笑いつつも、半ば本気のミーアである。
ここで、自身の家臣であるルードヴィッヒが良いアイデアを出してしまえば、その功績を押し付けられかねない。
そうなれば、下手をすると、ミーアのために黄金のナニカが立てられてしまうかもしれない。ゆえに……。ミーアは国王を、そして、造船ギルド長を見て、
「これは、あくまでもガヌドス港湾国の問題。であれば、あなたたちが自ら考え、決定する必要がある。そうではありませんの？　まぁ、お二人で話し合うのも限界があるでしょうし、　ガヌドスの議会に諮ればよろしいのではないかしら？」
これにて、ミーアは自身の責任と功績を完全に、彼らに投げつける。
『ミーア師匠の功績を讃えて、建てちゃいましたー！』
などと、オウラニアが嬉々として言い出さないように、である。
――ふぅ、これでなんとかなったのではないかしら……？
などと一息吐くミーアは……気付いていなかった。
船に直接指示を出し、操る者は船頭だが、それに対し、行くべき先を、光によって指し示す、堂々とそびえ立つような存在が、なんと呼ばれるのか……。
言葉なく、ただ感銘を受けた様子でミーアのほうを見つめる造船ギルド長。後に彼は、オウラニアと、“とあること”で大いに盛り上がり、意気投合することになるわけだが……。
そんなこと、想像もしないミーアなのであった。

第八十八話　行くべき道を指し示すモノ（後書き）

殴り合わそうと思ったのですが、殴り合いになりませんでした。不思議です。

ということで、明日からミーアは秋休みとなります。

第八十九話　オウラニアは混乱した

「……はぇ？」
突然、ヘンテコな声を上げたパティを見て、オウラニアは首を傾げる。
――あらー？　パティ、いったいどうしたのかしらー？
「え……？　え？　ハン、ネス……？　え？」
パティは混乱した様子で、何事かぶつぶつ。かと思えば、ジッとある一点に視線を向ける。
それは、アベルの……いや、正確には、その向かいに座る青年のほうだった。
――んー？　知り合いなのかしらー？　私としては、アベル王子やベルちゃんがいたことのほうがびっくりしたんだけどー。
師匠であるミーアの大切な人が二人もここにいたということ。それは、恐らくは、自分たちが逃げる先をミーアが把握していたということだろう。
その正確無比な予測に、オウラニアは改めて感銘を受けてしまうわけだが……。
――でも、パティは、あの男の人のほうを見て、明らかに驚いてるわー。なんだか、わけのわからないことを言ってるし―、ちょっと混乱してるみたいだわー。
オウラニアが視線を向ける先……。
「……ここが未来の世界なら、ハンネスが大人になってることだってあり得ること……あれ？　でも、ハンネスはもっと年をとってるはずじゃ……？　私が、ミーアお姉さまのお祖母ちゃんなんだから……ハンネスは……あれ？」
いつでも冷静沈着なパティが、目をグルグルさせていた。
一方の青年のほうはというと、パティのほうをジッと見つめてか

ら……おもむろに立ち上がった。
「ああ……」
薄く開いた口から零れ落ちたのは、深い、深いため息だった。
よろよろ、とパティに歩み寄り、そこで膝を付いて……。パティの顔を見つめて……。
「まさか……ああ、まさか……本当に……。本当に、お会いできるとは思っていませんでした」
そうして、パティの小さな手を両手でギュッと握りしめる。
「お会いできて、心から嬉しいです。姉上」
――姉上……って、どういうことかしらー？　あんなこと言われて、パティも驚いてるんじゃー？
などと、心配になって見つめていると、予想通り、パティは驚愕に瞳を見開いていた。それから、なぜか、疑わしげな、ジトッとした目つきで青年を見つめて……。
「あね……うえ？」
――そうよねー。私よりも年上っぽい男の人に姉上とか言われても困っちゃうわよねー。
オウラニアが納得感に浸っていると……。
「ハンネスは……お姉ちゃんって呼んでたはず……」
……パティがなにやら、わけのわからないことを言いだした！
――なっ、なに言ってるのかしらー、パティは。っていうか、これって、あの男の人は、どう反応するのかしらー？　ちょっと気になるわー。
オウラニアは、すっかり興味津々だ。
これからどうしようか？　とか、どうやって身を隠そうか？　とか、不安は一気に吹き飛んでいた。
ヘンテコなことを言いだしたパティに対して、青年はパチパチと目を瞬かせていたが……すぐに、困った様子で頬をかき、
「あ、ああ……ええと……さすがに、その……この歳でお姉ちゃん、とは呼びづらいので……」

さらに、よくわからない反応を返す。
「……この歳？」
「ええ。もう、お祖父さまと呼ばれても、おかしくはない年になりましたから……」
そうして、青年は笑った。
もはや、はたで聞いていたオウラニアは、首を傾げることしかできない。
――お祖父さまと呼ぶには、若いと思うけどー、あれは、謙遜なのかしらー？　っというか、それでパティをお姉ちゃんって呼ぶとか……どういうことー？
「じゃあ、やっぱり、あなたは、ハンネス……？」
青年はパティに深々と頷いてみせて、それから、こちらに目を向けて……。
「そうですね。改めて自己紹介を。私はティアムーン帝国、クラウジウス候ハンネスと申します。以後、お見知りおきを」
「あ、あー、えーっと、オウラニア・ペルラ・ガヌドス、ですー。えーっと、それでー、あなたとパティの関係って？」
「ああ……そうですね」
チラリ、とパティのほうを青年が見た。パティは小さく頷いてから、ゆっくりと首を振ってみせて……。それを確認した青年は……。
「私の姉の娘が、この子なのです。いや、昔の姉の面影があって、ついつい懐かしくて、姉上などと呼んでしまいましてね。ははは」
誤魔化すように笑った。
――うーん、なにか、隠してるみたいに見えるけどー、今は、気にすることではないのかしらー？
なんとなく釈然としないまでも、一応は納得しておくオウラニアであった。

さて、所変わって……。
ガヌドス港湾国内にある、小屋での一幕。

仄かな明かりに照らされた室内で、男たちが言い争いをしていた。
「おい、どうして、オウラニアを連れてこなかった？」
押し殺した声で、問い詰めるのは、蛇の暗殺者カルテリアだった。巻きなおしたバンダナを揺らしながら、燻狼に詰め寄る。
対して燻狼は、とぼけた口調で……。
「あれ？　言いませんでしたっけ？　連れてこれなかったんだって。手が足りないもんで仕方なく……」
っと、その言葉を途中で遮り、カルテリアがドンッと机を殴りつけた。
倒れそうになった杯を、慌てて掴んで、燻狼が抗議の声を上げる。
「おっとと、気をつけてくださいよ。せっかくの酒が……」
「ふざけるな。ガキの一人でも殺すか、さもなければ、傷をつけて脅せばよかったではないか。しかも、護衛や御者も生かしておいただと？　貴様、それでも蛇か！？」
「護衛二人は、オウラニア姫が、ヴァイサリアンと思しき男の手によって逃げた、ということを証言させなければならなかったから、生かしておいた。ヴァイサリアンの助けが来たのだから、ヴァイサリアンの子どもを殺すわけにもいかず、また、子どもを殺されたら自分も死ぬとオウラニア姫殿下に脅された。だから誰も殺さなかった。なにも不自然なところはないでしょうに。っというか……」
そこで、燻狼は上目遣いにカルテリアを睨んで、
「あなたが、ディオン・アライアを退けて、国王陛下の首を刈り取ってれば、計画通りにいっていた……ってことを忘れてませんかね？」
「うぐ……」
いかにも痛いところを突かれた、という顔をするカルテリアに、燻狼はやれやれと首を振る。
「どちらかというとあなたのほうが蛇らしくありませんよねぇ。感情をそんなに表に出すとか……。まったく蛇らしくない」
まぁ、巫女姫さまならば、色々な蛇がいたほうが混沌としていて

いい、とか言いそうですけど……などと心の中でつぶやきつつも、燻狼は続ける。
「やれやれ、どちらにしろ、オウラニア姫殿下は、連れてくるわけにゃいかなかったですねぇ」
「なぜだ？」
ギロリ、と睨んでくるカルテリア。それを涼しい顔で受け流し、
「いや、だって、あなた殺しちゃうでしょう？　恨みの募る男の血を引いた娘ですしねぇ……それが、たとえ妹君だったとしても、あっさり殺したくなっちゃうでしょう？」
カルテリアは、それを聞き、なんとも嫌な顔をする。
「嫌なことを思い出させるな。自分の中にあの男の血が流れていると思うだけで、反吐が出る」
「ほらね。そんな様子じゃ、オウラニア姫殿下に対してだって同じですよ。人質としても、犯人候補としても、殺しちゃ意味がないってのに、そんなの関係なく殺したくなるでしょう？　だから、今のところは、泳がせておけばいいんですよ」
「必要な時だけ連れてくればいいと？　だが、そう上手くいくかな？」
「場所のほうは、お仲間が調べてますよ。まぁ、ヴァイサリアン族の蜂起までの五日間、のんびり待ちましょうや」
そう言って、燻狼は机の上に並べた皿に手を伸ばす。
奇しくもそこにのっていたのは、女王烏賊の干物だった。

第九十話　サンクランドの王子たち

グリーンムーン家の別邸、応接間にて。
「……というわけなんですの」
エメラルダから大体の事情を聞いたシオンは眉をひそめた。
「オウラニア姫が父親を暗殺するというのは……少し急すぎる疑惑だ。セントノエルからガヌドスに来て、そう日数は経っていないはず。その短い期間に暗殺者と通じ、暗殺に踏み切ったと考えているのか、あるいは、それ以前から暗殺者と繋がりがあったと考えているのか……」
ソファに腰かけたシオンは腕組みし、考え込む。
「ヴァイサリアン……でしたか。暗殺犯が、例の海賊の末裔だというのも気になりますね。蛇との関わりも指摘される民だと聞きますし……」
シオンのつぶやきに、キースウッドが付け加える。
「そうだな。混沌の蛇……連中が背後で何か動いているのかもしれない」
っと、そこでシオンは気付いた。エシャールが気遣わしげに、エメラルダのほうを見つめていることに。その視線を追って、エメラルダのほうに目を向け、シオンは首を傾げた。
エメラルダは、どこか上の空な顔をしていたからだ。
「どうかしたのか？　エメラルダ嬢。オウラニア姫殿下やミーアのことが気になるのはわかるが……」
「いえ、王宮のほうは、ミーアさまがいらっしゃるのでなんとかなると思いますわ。けれど……」
ゆっくりと首を振ってから、エメラルダは続ける。
「気になるのは父のことですわ」
「お父上の……グリーンムーン公が？」

「はい。私がエシャール殿下とガヌドスに行くと言った時、一緒に行く、と強硬に言い張りましたの。はじめは、過保護のゆえと思ったのですけど、どうやら、それだけではないような気がして……」
そわそわと落ち着かなげに立ち上がり、エメラルダはうろうろと歩き出す。
「今も、そうですわ。オウラニア姫殿下のことに関係して、ミーアさまが軟禁されたと聞いたら、一目散に王宮へと赴いた」
「だが、それは、家臣ならば当然のことではありませんか？　自国の皇女殿下が不当な扱いを受けているとあれば……」
キースウッドの指摘にも、エメラルダは、あまり納得のいかない顔をする。
「確かに抗議は必要なことですわ。外交のことを考えるなら、ミーアさまに働いた無礼を盾に、有利に話を運べることもあるとは思いますし。けれど……気になりますわ。お父さまが……もしかしたら、今回の件に関係していたのではないか、と……」
うろうろ、うろうろ……歩いていたエメラルダが、パンッと手を打った。
「そうですわね、あまり気をもんでいても仕方ないことですわ。ということで……」
それから、ちょっぴり勝気な笑みを浮かべて、
「シオンお義兄さまとキースウッドさん、おもてなしできず大変恐縮なのですが、手をお貸しいただけないかしら？」
「どういうことだろうか？」
いや、義兄って……気が早いな！　などと心の中でツッコミを入れつつも、シオンが問い返せば、エメラルダは、さも当然とばかりに頷いて。
「決まっておりますわ。父が持つガヌドス関係の資料を洗ってみようと思っておりますの。父がいない今がチャンスなのですわ」
言うが早いか、エメラルダは足早に部屋を後にした。

「しかし、調べると言っても闇雲に調べるのは……」
廊下をズンズン歩いていくエメラルダ。その後を追いながら、シオンが難しい顔をする。
「ふふ、問題ありませんわ。我がグリーンムーン家は、外交と、主に学問に造詣が深い家ですわ」
その二つによって、得られた技術、それこそ……。
「私も、色々と覚えるようにはしておりますが、やはり、すべてを記憶するのは難しいですわ。ゆえに、きちんとメモを取るようにしておりますの」
出会った相手の情報を記憶するだけでなく、きちんと記録して、文章にしておくこと。その大切さをエメラルダは知っている。自分の記憶力というのが意外とアテにならない、ということも。
そして、そのことを教えてくれたのが父であった。
「外交に必要そうな情報は、きちんと、この辺りにまとめてあるはず……ねぇ、ニーナ」
声をかけられ答えるのは、エメラルダの忠実なるメイド、ニーナであった。
主から声をかけられた彼女は、その呼びかけに、嬉しそうな顔……をすることなく……。
「エメラルダお嬢さま、大貴族のご令嬢はメイドの名前など覚えないもの。グリーンムーン家では、ただでさえ、覚えるものがたくさんあるのですから、あまり無駄なことには……」
「あら、ニーナの名前を覚えることが無駄とは思いませんわ。ミーアさまだって、メイドの名前や従者の名前をきちんと記憶されておりますわ」
シレッとした顔で、そんなことを言われ、ニーナは、深い哀愁のこもったため息を吐いてから、
「こちらと、こちらの棚が、外交関連の書類をまとめた棚になっています」
ニーナが示したのは、壁際に据え付けられた本棚だ。その膨大な

資料に、シオンは、やや引きつった笑みを浮かべる。
「これを全部……というのは、さすがに難しそうだが……。目星はついているのかな？」
「そう……ですわね。ふーむ……」
エメラルダは腕組みして……、難しい顔で考え込んでから……。
「まるっっきり！　ですわね」
あんまりな答えに、思わず、転びかけるシオンとキースウッドである。
一方、エシャールはと言えば、年に似合わぬ苦笑いを浮かべている。どうやら、エメラルダの反応には慣れている様子だった。
「なにしろ、お父さまが出会う人は、一年に百では効かないでしょうし。どうにも役に立たなそうな方以外は、きちんとメモにまとめているはずですわ……。ですから、絞り込むのがなかなか大変なのですわ」
「とりあえず、地道に、ガヌドス港湾国の人間を当たっていく、というのがよろしいのではないでしょうか？」
ニーナの助言を受けて、エメラルダが頷く。
「そうですわね。その関係で怪しげな人物がいるかもしれませんし……」
ということで、本棚の中、ガヌドス港湾国に絞って、記録を漁っていく。
それは、エメラルダの父が作り上げた膨大な資料だった。
「しかし、すごいな。ガヌドス港湾国の主要な人物とは、大体知り合いか……」
ガヌドス港湾国国王、歴代の造船ギルド長に、元老議会の議員たち。そのほとんどと交流を持ち、対話し、ついでに、ちょっとした贈り物を送っている。
外交のグリーンムーンの名に恥じぬ記録が、そこにはあった。
「ふっふっふ、それだけではございませんわよ？　ガヌドスの重鎮ばかりでなく、ガヌドスに来た他国の方にも……あ、そうですわ」

とそこで、何やら思いついたのか、エメラルダはパンッと手を叩いて。
「サンクランドの方とも、面識がございましたわ」
「ああ、そうだったな、ランプロン伯と繋がりがあるのだったか……」
「ふふふ、それだけではございませんわ。ええと……確か、何年か前、まだ、幼い頃に一度、サンクランドからガヌドスに渡りたいという貴族の方と引き会わされたことがあったはず……」
などとつぶやきつつ、エメラルダは、書類をめくり始めた。
「そうですわ。話していて思い出しましたけど、あの方は、なんだか、少し変わった方でしたわね……」
「変わった人物……というと」
「そうですわね……言うなれば……アンバランスな方という印象かしら……？」
エメラルダの男性評価基準は、基本的にイケメンかどうかである……。面食いエメラルダにとって、その他のことは些末なこと。
今は、そこまでではないにしても、かつての彼女は紛れもなく、そんな価値観の持ち主だった。けれど……その男は……。
「顔立ちは、それほど整ってはいないのですけど、その立ち居振る舞いに気品があり、なんとも言えぬ魅力を放つ人物と言いましょうか」
明らかに、自分が魅力を感じるような人物ではない。にもかかわらず、否定できない色気がある……。そんな魅力的な人物で……。
「ああ、いましたわ。ジェロム・ムールホルン……。そう、この方ですわ」
名前と面会の記録、それに、紹介者の名前の書かれた羊皮紙をシオンへと渡す。
「ムールホルン……聞いたことのない家名だな」
「あら？　そうなんですの？　サンクランド貴族とお聞きしておりましたから、てっきり、ご存知かと思いましたけど……」

シオンは眉根を寄せて、唸った。
「キースウッド、この紹介者の名……この貴族は……」
「どうかしたのですか？　シオンお兄さま」
兄の様子に気付いたのか、疑問を口にするエシャールにシオンは首を振ってみせて、
「ああ、いや、なんでもない。お前は気にしなくても……」
と言いかけるも、すぐにハッとした顔をする。
「いや、そうだな……。お前も知っておいたほうがいいだろう」
まるで、重大な秘密を打ち明けるかのような、重々しい口調で言った。
「この紹介者の貴族は、我がサンクランドの諜報機関、風鴉の運営に深い関わりを持っていた者だ」
「え……？」
「ランプロン伯から風鴉のことを聞いていないか？　彼らは、各国に諜報網を築き、動きを探っていたんだ。民が虐げられることはないか、公正を欠く統治が行われていることはないか……と。もっとも、それを、サンクランド至上主義の貴族たちは、他国を併合する大義名分に使おうとしていたらしいし、混沌の蛇の介入で、白鴉という極端な集団を生み出すことにも繋がってしまったんだが……」
と、そこで、シオンは不意に目を瞬かせた。
「しかし……ヴァイサリアン族への迫害に関しては聞いたことがなかったな……」
「タイミングと国の大きさということでしょうか。当初、白鴉が狙っていたのは、レムノ王国とティアムーン帝国だという話もあります」
キースウッドの指摘に一つ頷き……。
「ガヌドスは小さい国だ。優先順位としては低かったのかもしれない。が、問題は……その仕掛けが今も生きていないか、ということだろうな。レムノ王国では、革命軍を組織して、王政府の転覆をはかった。では、ここ、ガヌドスではどうなるのか？」

それから、シオンはエシャールのほうに目を向けて……。
「もしかすると、俺たちで、サンクランドの不始末の後片付けをしなければならないかもしれないぞ」
兄の言葉を受け、表情を引き締めるエシャールだった。

第九十一話　鴉の痕跡を追い……

さて、翌日から早速、シオンたちは動き出した。
グリーンムーン邸を出たのは、シオンとキースウッド、エシャールのサンクランド組に加え、エメラルダとニーナを加えた五人だった。
ちなみに、エメラルダの私的な護衛も二人同行している。腕前のほうはディオン・アライアらには及ばないまでも、忠誠心はそれなりに高そうだ。
「でも、シオンお兄さま、いったいどこでなにをすればいいんでしょうか？　僕には皆目見当もつきませんが……」
そう言いつつも、懸命に考えようとしている弟に、シオンは軽く微笑んだ。
「そうだな……整理しようか……。ああ、はじめに確認したいんだが、ミーアが俺とキースウッドをガヌドスまで呼び寄せた、というのは間違いないかな？」
チラリとエメラルダのほうを見れば、彼女は、若干気まずげに視線を逸らし……。
「お、おほほ、なんのことかしら？」
「別に誤魔化さなくてもいい。君たちがこんな時期にガヌドスに来たのは、ミーアの指示によるものだ。そして、それは、エシャールに会いにきた俺たちをおびき寄せるためだった」
そうして、シオンは建物の間から見えるガレリア海に目をやった。
灰色に沈んだ海、その水の冷たさを楽しめる気候でもないだろう。
「……ええ。そのとおりですわ。さすがはシオンお義兄さま。私の思惑を完璧に言い当てるなんて……」
諦めたように首を振るエメラルダに苦笑しつつ、シオンは腕組みする。

「問題は、ミーアがなぜ俺たちをガヌドスに呼んだのか……だ。彼女は、俺たちになにを求めているのか？」
「素直に考えるなら、ミーア姫殿下は、ガヌドス国王陛下の暗殺を予期していたと考えるべきでしょうね。それは、情報収集の結果、導き出されたことなのか、それとも、例の、ベルさまがお持ちの日記帳によるものか……。やれやれ、これからわかることがわかっているなら、きちんと教えておいてもらいたいものですが……」
　そうして、肩をすくめるキースウッド。
「仕方ないさ。あの日記帳は、なかなかに厄介な代物だ。読んだ者が行動を変化させただけで、容易に記述が変わる……いや、場合によっては読むことそれ自体が原因となり、記述が変わるんだ。迂闊なことができないというのも納得できるさ」
「ええと、いったい何の話をしておりますの？　あの日記帳？　なんですの、それはいったい？」
　不審そうな顔で見つめてくるエメラルダを、その内、ミーアから話があるだろうから、と言い含め、納得させて……。
「ともかく、俺たちがすべきことは、ガヌドス国王の暗殺未遂に、我がサンクランドの風鴉、あるいは、風鴉が作った人脈が関わっていないかどうか、を調べることだ。悪政を敷く国王を排し、サンクランドの統治下において善政を敷く……それが、サンクランドの保守派の貴族層が使うロジック……。ジェムというあの男も、白鴉を率いていたのであれば、同じような論理を用いて諜報活動を行うはず。であれば、向かう先はおのずと決まってくる。サンクランドの正義にすがりたくなるような、虐げられた者たち。今の政府に不満を持つ者たちだ」
　そして、この国の中で迫害された人々というのはもちろん……。
「そこで、ヴァイサリアン族が出て来るんだが……」
「やはり、そこに辿り着きますか。暗殺未遂事件の根っこは、オウラニア姫殿下が問題視し、ミーア姫殿下が後押しして解決を図ろうとしていた問題だった、と……」

「確実ではないが、可能性は高い。そう仮定した場合、次に考えるのは、ヴァイサリアンの隔離島に近づける人物は誰かということだ」
エシャールが納得した様子で手を叩いた。
「なるほど、島が近づきがたい場所であるなら、彼らと繋がりを作れる人間は、そう多くないはず。なんとかできそうですね」
「そうですわね。隔離島に食料を届けている者、ヴァイサリアン族を監督する役人などもおかれているかしら……。後は、地元の漁師も海の事情にも詳しいかもしれませんわ。エメラルドスター号の船長に聞いてみようかしら……」
婚約者エシャールの背中を押すように、エメラルダが補足する。
「それに、ヤナたち姉弟の親のこともある」
「なるほど。隠れ潜んでいるヴァイサリアン族の者たちもいる、と……？」
キースウッドに一つ頷き返してから、シオンは続ける。
「可能性はあるだろう？　あの二人の親が唯一の、町に隠れ潜んだヴァイサリアンとも思えないからな」
「そうですね。では、いっそ手分けしますか？」
「そう、だな……」
一瞬、考え込むシオンであったが……。
「では、私とエシャール殿下は、エメラルドスター号のほうに向かいますわ。そこで漁業ギルドの関係者を紹介してもらおうと思います」
エメラルダの言葉に頷いて……。
「わかった。そうしてもらえると助かる。それでは、俺とキースウッドは、隔離島の関係者のほうをあたってみることにしよう」
それから、シオンは、弟の肩にそっと手を置いた。
「エシャールも頼んだぞ。サンクランドの王子として、恥じぬ行動をしよう」
「はい。シオンお兄さま」
そんな兄弟のやり取りを、ほわぁっと口を開けて眺めるエメラル

ダ……と、そのエメラルダを見て「……ああ、ひさしぶりに、実にエメラルダお嬢さまらしいお顔」っと満足げな顔をするメイド、ニーナであった。

第九十二話　ミーア姫、再び動き出す！

「ふわぁあむ……」

大きなあくびを一つ。ベッドの上でぽやーっと目を開けたミーアは、見慣れない部屋に、一瞬、戸惑う。が……。

「ああ……そうでしたわね。そう言えば、ガヌドスの王宮に泊まることになったんでしたわ……」

皇女である、と名乗りを上げてしまった以上、まさか普通の宿屋に泊まるわけにもいかず。グリーンムーン邸に行くことも考えたが……。

――一応、わたくしは、容疑者であるオウラニアさんを庇い立てした身。それに、オウラニアさんの逃亡を手助けした疑いもかけられてますし、下手に王宮を離れないほうが良いような気がしますわ。それに、一度、出てしまうと、警戒されて二度と入れなくなりそうでもありますし。

ということで、部屋を用意してもらったのだ。

ちなみに、身の回りのことは、アンヌと、オウラニアの専属メイドのトゥッカが担当してくれることになった。

そうして、部屋に引きこもり、ゴロゴロすること早二日。

正直、パティたちのことは心配ではあったが、こればかりはどうすることもできない。

――まぁ、ルードヴィッヒが、皇女専属近衛隊を呼ぶようなことを言っておりましたし、彼らが到着したら、捜索に加われるよう、国王に認めさせる必要がございますけれど……。

それまでは、特に何ができるでもなし。ルードヴィッヒの日記は、ベルが持って行ってしまっている。ここでこっそりと見るわけにもいかず……。結果として、やることがなくなってしまったミーアは、ダラダラ、ベッドの上で過ごしていた。

ゴロゴロ、ダラダラしつつ、朝食の時間をじっと待つ。
――まぁ、よくよく考えたら、パティもわたくしの祖母なだけあって、頭が切れる子ですし。心配ばかりしていても意味がありませんわね。今は英気を養うことを一番に考えましょう。
なぁんて、自分を甘やかしつつ、あくびをもう一つ。
「ふわむ……。朝食までもう少し時間がございますし、もうひと眠りしても……」
「ミーアさま……」
っと、声のほうに視線を向ければ、アンヌの真剣そのものの顔が見えた。
「あら。アンヌ、ふわぁ、おふぁよう……。今日のお食事はなにかしらね……。うふふ、甘いパイなどがついてると嬉しいのですけど……」
上機嫌に笑うミーアを見て、アンヌが眉をひそめた。
「ミーアさま……あの、お忘れかもしれないのですが……」
「あら？　なにかしら……？」
アンヌは、一瞬、言葉を呑み込んでから、そっと声を潜めて……。
「その……ミーアさまのお誕生祭が、迫っています」
とても、言いづらそうな顔で言った。
「このままでは、ドレスの、サイズが、その……」
その言葉に、ミーアは、カッと目を見開いた。
そうして、改めて、自らの姿を省みる……。食べて寝るだけの、自堕落姫の姿が、そこにあった！　ベッドに横たわりながら、一日を過ごすその生活スタイルは……かつてのシャローク・コーンローグの姿を彷彿とさせるもので……。
「おお、これは……いけませんわ！」
ミーアの危機感を大いに刺激するものであった！
晴れやかな気持ちで、みなの前にドレスを披露するためにも、それ以上に、誕生祭で心置きなく美味しいお料理を食べるためにも、こんなところでゴロゴロしてはいられない。

――むぅ、わたくしとしたことが、危うく失敗してしまうところでしたわ。
冷や汗をかきつつ、ミーアは起き上がる。
――まったく、危ないところでしたわ。これも、ガヌドス国王の罠……誘導ということかしら……？　恐るべき、ガヌドス国王……ですわね。
危うく網に引っかかりそうになった海月の気分を味わったミーアは、ふーぅとため息を吐き、
「ありがとう、アンヌ。おかげで目が覚めましたわ」
明るい笑みでアンヌにお礼を言って……。
「美味しい誕生祭を迎えるためにも、きっちりと運動しておかなければなりませんわね」
ふんぬ、っと気合を入れるのだった。

さて……一方で。
別室にて、ルードヴィッヒとディオンが、今後のことについて相談していた。
「ミーア姫殿下に今のところ動きはなし、か。さてさて、どうしたものかな」
「どうする、とは……？」
「いや、なに。もしも、このまま王宮に留まっているというのであれば、僕としては外でひと暴れしてきたい気分なんだけどね。どうも、イエロームーンのシュトリナ嬢も、なんだか落ち着かない様子だし、彼女を連れて、グリーンムーン邸にでも行ってみようかと思うんだが……」
「ああ。アベル王子とベル嬢か……。確かになにも連絡がないのは気になるな。皇女専属近衛隊も今日中には着く予定だし、ディオン殿に別行動で動いてもらっても問題ないと言えば、問題ないが……」
ルードヴィッヒはチラリとディオンに目を向けて、
「ミーアさまが、このまま、なにもせずにいるということは考えが

たいな。もう少し待っていれば、そのうちに……っと」
唐突に、ノックの音が響く。続いて、
「ルードヴィッヒ、少しよろしいかしら？」
「ああ。噂をすればだ……」
ルードヴィッヒとディオンは顔を見合わせてから、小さく笑みを浮かべ、ミーアを出迎えた。
「そろそろ、いらっしゃる頃だと思っておりました」
「ん……？　どういうことですの？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒは苦笑する。
「元老議会に出る必要があるのではないか、と考えていたのですが……。ミーアさまも、そうお考えでは？」
「あら……？　わたくしが、元老議会に、ですの……？　でも……」
と、なにか言いたげなミーアである。
――ミーアさまは、今回、ご自分の影響力をできるだけ行使しないようにされているように感じるな。ガヌドスを侵略した、と万に一つも見做されないようにするためなのだろうが……。
他の貴族に足をすくわれぬよう、細心の注意を払う。圧倒的な権力体制を築きつつある中でも、一切の慢心の感じられぬその態度に、ルードヴィッヒは感心しつつも……。
「セントノエルと聖ミーア学園の共同プロジェクトのことは、やはり、姫殿下の口から直接話さなければ、納得できぬ者もおりましょう。逆に、議会の納得が得られれば、その事実をヴァイサリアン族に伝えることで、不穏分子への牽制になるかと思います。ここは、ミーアさまの力強いお言葉が必要な局面です」
あえて、はっきりと言う。
「お疲れでしょうし、多くの者に向かって言葉を放つのは、簡単ではありません。おそらく、一日中、歩き回るのと同じぐらいの労力が必要なことなれど、なにとぞ……」
「労力　（カロリー）……そう、ですわね。まぁ、そういうことでしたら、仕方ないかしら……」

ミーアは、神妙な顔で頷きつつ、なぜか、お腹をさすっていた。

第九十三話　小心者の風情あり

「しかし、議会と言っても、そう簡単に参加できるものなのか？」
疑問を呈したのはディオンだった。
「他国の議会に、大国の姫君が出るのは、そう簡単でもないだろう？　それに、あの国王がそんなこと認めるだろうか？」
「造船ギルド長が協力してくれるらしくてね。使いの者をよこしたよ」
「へぇ。さすがはルードヴィッヒ殿、ってところかな。すでに分断工作に動いていた、とは驚きだ」
感心した様子のディオンに、ルードヴィッヒは苦笑いを返す。
「評価してもらって恐縮だが、残念ながら過大評価だ。今回の話は、あちらから持ち込まれたものでね。まぁ、分断工作自体は考えないわけじゃなかったんだが……まさか、こんなにもあっさりと実現してしまうとは思っていなかったよ」
肩をすくめてから、ルードヴィッヒはミーアのほうを見た。
「どうやら、国王陛下と造船ギルド長の間にも亀裂が入りつつあるようです」
「あら……。そうなんですのね」
不思議そうに首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒは肩をすくめる。
「おとぼけになるとは、お人が悪い。それを狙っておられたのでしょう？　ガヌドス国内で意見が割れるように、あえてミーアさまがお考えの最善策を口にされなかった。帝国の叡智の提案を受け入れるか否か、ではなく、彼ら自身が考え、悩む余地を残されたのではないのですか？」
「なるほど。国王と家臣も、そうそう一枚岩ではいられない、か。それぞれに考えがあるのだろうし、亀裂だって入るというものだ」

「それほど、ミーアさまのされた提案は、彼らにとって衝撃的だったんだろうな」
そうして、ルードヴィッヒが視線を向けてくる。
二人の会話をぽげーっと聞いていたミーアは、一瞬の沈黙の後、重々しく頷いて、
「ええ……まぁ……そんな感じの気持ちが、まったくなかったわけではありませんわ」
いけしゃあしゃあと言ってのけた。
もちろん、そんなつもりでしたけど、なにか？　と胸を張れない辺りが、いかにも小心者といった風情ではあるが、まぁ、それはともかく。
「しかし、造船ギルド長といえば、ヴァイサリアン族の奴隷労働に一番恩恵を受ける立場じゃないか？　労働力確保を考えれば反対しそうなものだが……」
「だからこそ、だろうな」
ルードヴィッヒは首を振った。
「ヴァイサリアンの労働力を使っているということは、その利益を一番に受け、なおかつ状況を最も把握していた、ということになる。知っていながら放置していたのであれば、その責任は非常に重い。まして、神聖典の理を旨とするヴェールガ公国の施設を国内に造るという話になればね。堂々とその教えに背く行為は、常人にはできぬことだろう」
「なるほど、その第一の責任者にされるのはまっぴら、ということか。あの国王のことだから守ってはくれないだろうし、切り捨てられることだって十分にあり得る。そう考えれば、ギルド長がすり寄ってきたのも理解できるな」
「もっとも、それもこれも、ミーアさまの打たれた手が効果的だったということでしょう」
ルードヴィッヒにそう言われれば、悪い気はしないミーアであったが……。

「しかし、裏を返せば、今に至るまでガヌドス国王がなんのアプローチも仕掛けてこないことが気になるところですね」
「もちろん、ミーア姫殿下が議会に出ることは妨害しようとするんじゃないかな？　というか、だから、僕にここにいてもらいたかったんだろう？」
　軽く、腰の剣に触れたディオンに、ルードヴィッヒはゆっくりと頷き、
「そうだな。それはもちろんあるが……。それにしたって、ガヌドス国王の心情が読めないな。いったい、なにを考えているのか……」
　っと、その時だった。
　唐突に、ノックの音が室内に響いた。
「失礼いたします。ミーアさま、こちらだとおうかがいしたので！」
　入ってきたのは、シュトリナだった。
「あら、リーナさん、どうしましたの？　そんなに慌てて……」
　首を傾げるミーアの前で、シュトリナは大きく一度深呼吸。それから……
「ベルちゃんが……あの、ベルちゃんから、連絡、まだありませんか？」
「はて……？　わたくしのほうには届いていないと思いますけど……」
　と、ルードヴィッヒのほうを窺えば、首を振っているのが見えた。
　――そういえば、確かに妙ですわね。ベルはともかく、アベルやエメラルダさんは、きっちり連絡を入れてきそうなものですけど……。ベルは、どっかに適当に行ってしまいそうですけど、アベルがついておりますしね……。ベルは信用なりませんけれど……。
　自分自身とベルに対する信用が、著しく低いミーアなのであった。
「まぁ、そう焦る必要もないのでは？　ガヌドス王宮側に報せを届けるのも一苦労なのだろうし。そもそも、あのお嬢ちゃんたちは秘密裏に動けるようにグリーンムーン公爵令嬢のところに送ったんだろう？　それならば、なおのこと、下手に連絡は取れないはずだ」

「それは、そうだけど……」
唇を噛み、なにかを堪えるような顔をするシュトリナに、ディオンは小さく肩をすくめてみせてから、
「心配せずとも、アベル王子殿下の腕前は、なかなかのものだ。あのヴァイサリアンの暗殺者が相手でも、そうそうはやられはしないだろう」
「……本当に？」
まだ、納得していない様子のシュトリナに、一つ大きく頷いてから、
「なにしろ、この僕が助言したんだから、そのぐらいは期待してもいいんじゃないかな？」
ディオンは、ニヤリ、と笑みを浮かべた。
「そうですわね。今は、心配しても仕方ありませんわ。とりあえず、できることから片づけていきましょうか」
ミーアは、軽くお腹をさすりながら、
――とりあえず、議会でなにを話すのか考えておく必要がありそうですわね。ルードヴィッヒにお願いすると、すべて、わたくしの功績になるような原稿ができあがってしまいそうですし、ここは、わたくしが自分で考えたほうが無難ですわ。頭を使った分、お腹がシュッとするはずですし……。
それから、ミーアは腕組みして……。
「しかし……そうなってくるとなおのこと、オウラニアさんが一緒にいてくれたほうがありがたいですわね……。その時までにガヌドス兵が見つけ出してくれればいいのですけど……」

第九十四話　年老いた弟と孫の孫と、一番年下なパティ

さて、シュトリナが心配している頃のベルはと言えば……。
「それで、ハンネス師匠は、いったい、どこを探検したのですか？」
教会での朝食時。テーブルの上に、ちょっぴりお行儀悪く身を乗り出して、ベルが言った。
生き生きと顔を輝かせるベル。そんなベル隊長に触発され、隊員たる孤児院の子どもたちも、ワクワク顔でハンネスを見つめる。
「ああ。ガレリア海の島々を巡っていろいろと、ね」
「ほほう、島々を……。って、それって、すごく本格的な探検じゃないですか！」
「いや、まぁ、準備はきちんとしているので、大して危険はないよ」
苦笑するハンネスだったが、ベルは心から感心した様子で頷いて、
「なるほど。探検には準備が大事……。確かに、ミーアお祖母さまも同じようなことを言っておられた気がします。キノコ狩りの前には、万全に食べられるキノコを調べておけ、と。それと同じでしょうか？」
「そうだな……。確かにキノコは、何の準備もせずに食べると危険だ。探検の時には、できるだけ手を出さないほうがいい。それこそ、無人島などでは、できる限り健康の維持に努めなければ命取りになる。安全第一で、無謀なことはできるだけしないほうがいい」
「おお……すごい！　勉強になります、ハンネス師匠！」
そんなふうに声を弾ませるベルを見ながら、パティは不思議な気分に浸っていた。
――あのハンネスが……大人になってる……。
小さくて体が弱かった、あの弟……。不治の病に侵され、大人になるまでは決して生きられないと言われていたハンネスが、こうして目の前にいるという状況。

加えて言うなら、そんな弟ハンネスに絡んで行っているのが、自分の孫の孫（自分より年上の）である。
不思議というか、意味がわからない、頭がクラクラする状況だった。けれど……。
「なんだかよくわからないけど、よかったな」
小声でヤナが耳打ちしてきた。ちなみに、キリルは教会の孤児たちに混じって、ベル隊長の賑やかしをしていた。すでに、パティ以外の子どもたちの心を掌握しつつあるベル隊長なのであった！
まぁ、それはともかく……。
「……んっ、ありがと」
パティはヤナにお礼を言う。っと、なぜだろう、ヤナがびっくりした様子で目を見開いた。
「……なに？」
「いや……パティが笑ってるの、珍しいから」
パティは、小さく首を傾げて……。
――私が、笑ってる？
両手で顔を触ってみるけど、自分で意識した瞬間、その笑みは溶けて消えていった。
不用意に笑うな、必要な時にだけ、相手の心を操るために笑え。決して、心を許すな……。
自らを縛る蛇の教えが、頭の中を駆け巡るけれど……パティはそれを笑い飛ばす。
その胸にはすでに、蛇の呪縛を打ち砕く希望が宿っていたから。
「そうか……私、笑ってたんだ……」
小さくつぶやきながら、パティは二日前の夜のことを思い出していた。
ハンネスと再会した日の夜、寝る前に、パティは年老いた弟から、おおかたの事情を聞いていた。
「まさか、本当にお会いできるとは、夢にも思っておりませんでし

た。改めまして、姉上、お会いできて嬉しいです」
　二人きりの礼拝堂、パティは、ハンネスの目を見つめて言った。
「ハンネス……もしも、あなたが本当にハンネスなら、疑問がいくつかある」
「なんでしょうか？　私にお答えできることでしたら、なんなりと……」
　ハンネスは、そんな姉の目を見つめ返して言った。
「あなたは、私がここに現れることを知ってるみたいだった。それは、なぜ？」
「他ならぬ、姉上ご自身からお聞きしていたからです」
「……私？」
　小さく目を見開いたパティに、ハンネスは頷いてみせた。
「どこまでを今の姉上にお話しして良いか、考えておりました……。けれど、こうして、再び、生きた姉上にお会いできたこと自体が奇跡。であれば、隠しごとなど一切不要でしょう。すべてをお話しします」
　そうして、ハンネスは話し出す。過去に、いったいなにがあったのか……この先、パティの身になにが起こるのか？
「あれは……私がまだ、幼い頃のことでした。姉上とお会いするのを禁止された期間がございます。その時には、他の蛇のところに預けられていると聞かされておりましたが……後にクラウジウス家の者たちは言っておりました。お姉さまは『原初の蛇の叡智に触れたのだ』と。そう姉上ご自身が言い、そのことを彼らも信じている様子でした」
「原初の蛇の……叡智？」
　おそらく……それは、こちらの世界に来ていた期間になにがあったのかを誤魔化すためのものだったのだろう。
　こちらの世界で得た知識、あるいはこれから得るであろう知識、特に≪地を這うモノの書≫の知識などを、適当に抜粋して語ってやり、「まだ読んでない蛇の知恵を持っている。蛇に直接出会ったの

だ！」などと言って誤魔化したのだろうが……。
ただ、その『叡智』と言う言葉に関しては、なんとなく、その場のノリでつけたような気がしないではないパティである。
――帝国の叡智というミーアお姉さまの異名に引っ張られて、適当につけてしまった気がする……。
息子の名前といい、自身のネーミングセンスに、深刻な疑念を抱くパティである。まぁ、それはさておき……。
「事前に、こっちに来ている間になにがあったのか、蛇が納得する言い訳を考えておかないといけないかな……」
うんうん、っと頷くパティに、ハンネスは、はっきりとした声で言った。
「そうして、姉上は私に蛇の秘薬を与えてくださいました」
「蛇の秘薬……？」
「はい。不老不死を与えるとも言われている薬だとのことです。実際には、生命力を高めて、体を活性化させることで、老化を緩やかにするぐらいの効果でしたが……私の病には特効薬となった」
ハンネスの病は、奇妙な病気だった。いくら食事をしても生気が抜けて行き、やせ衰えていく、そんな不治の病だった。
「クラウジウス家の者たちは、おそらく、蛇の秘薬を薄めるか、あるいは少量ずつ私に飲ませていたのでしょう。だから、一時的に体調が戻るだけで、完全には治り切らなかった」
「私が持ち帰る薬で、ハンネスの病が治る……」
「はい。そして、病から解放された私は、そのことを隠しながら、ずっと秘薬を探し続けていたのです。パトリシアお姉さま、あなたのお言いつけのとおりに」
クラウジウス家にて、地を這うモノの書を熱心に読み込んでいたというハンネス。それは、蛇の薬を探し出すためだった。
過去の自分に届けるための秘薬を……。
「未だに薬は見つかっておりませんが、それすらも姉上が言っておられたとおりです。姉上の孫娘、ミーア・ルーナ・ティアムーンと

姉上、パトリシア・ルーナ・ティアムーンとが揃う時、その薬への道が開かれる、と。姉上はそう言っておられました」

「そうか……。それが、私が、この時代にやって来た意味……」

ゴクリ、と喉を鳴らすパティであった。

第九十五話　ミーア姫、元老議会に向かう

さて、ガヌドス王暗殺未遂事件から五日が経った日のこと。
造船ギルド長の手配で、緊急議会が招集される運びとなった。
ミーアの期待に反して、オウラニアたちは見つけ出すことができなかった。ルードヴィッヒが呼び寄せた皇女専属近衛隊も捜索に加わったものの、慣れない土地でのこと。他国の兵士ということもあり、あまり突っ込んだ捜索はできなかったらしい。
――ううむ……塩梅がとても難しいところですわ。あまり完璧なことを口にしては、わたくしの功績となってしまう。けれど、ガヌドス王の前で披露した時から、すでに日が経っておりますわ。あちらはあちらで、反対する論理を練っているはず……。オウラニアさんが助け出せなかったのが悔やまれますわ。
悔やまれるというか、さすがに心配になってくるミーアである。
「ねぇ、リーナさん、蛇に捕らえられているオウラニアさんたちは、本当に大丈夫かしら……？」
ついつい、蛇に囚われた経験のあるシュトリナに聞いてみれば……。
「んー、そうですね」
頬に指を当て、首を傾げるシュトリナであったが……。
「いろいろ嫌がらせは受けると思いますけど……。基本的には大丈夫……じゃないかと思います。その場で殺されなかったわけですから……」
ちょっぴり心ここにあらずな答えが返ってくるのみだった。
――まぁ、リーナさんもベルのことが心配なんでしょうし……。ううむ……。しかし、アベルも一緒にいるはずなのに連絡がないというのは、やっぱり気になりますわね。
唸るミーアであったが、実のところ、これにはいささかの事情が

あった。
下手にオウラニアと合流してしまったがゆえに、アベルは逆に動きが取れなくなっていたのだ。なにしろ、オウラニアは今回の事件の明らかなキーマンだ。一度、蛇に襲われた以上、襲撃が再びあることは予想できるわけで……。
さらに、王宮に行き、ミーアたちに連絡を取れば、その後を尾行されるかもしれない。エメラルダのところにいるならばともかく、オウラニアがそばにいる以上、むしろ、動かず、身を潜めるのがベスト、と、そう判断したのだ。
ちなみに……エメラルダから連絡がないのは、エシャールとシオン、キースウッドのイケメンたちとともに行動するのが……こう、楽しすぎて、ほわぁっ！　っとなっちゃってるから、とか、そんなことは、もちろん決してないのである。
父であるグリーンムーン公の目から王子たちを隠しつつ、諜報活動っぽいことをするのが、なんだか、すごぅく楽しくって連絡を忘れてたとか、そんなことは決してないのである。
ともかく……そのような裏事情など露知らぬミーアであったが、とりあえず、目の前の仕事を終えることだけに集中することにする。
――まずは元老議会を納得させる。そして、ヴァイサリアン族を納得させる。地を這うモノの書が、踏みつけにされた弱者の心に寄生するモノだと言うならば、弱き者たちを救いだすことこそ、蛇に対する攻撃となる。騒動を起こされる前に、状況を解決してやりますわ。
よし！　と気合を入れるミーアであった。

さて、ガヌドス港湾国の元老議会の議場は、王宮のほど近くに建てられた大きな建物であった。立派な石造りの門を潜り抜ければ、王宮にも決して負けない大きさの議会が現れる。
アーチ状の入口には、二十のエンブレムが刻まれている。
「あら、見たことのない紋章ですわね。貴族の家紋ではないのかし

ら？」
なにげに、家紋の知識に関しては、いささか精通しているミーアであるが……刻まれた紋章は、まるで見たことのないものだった。
「あれは、組合の紋章ですね」
「組合……？　ああ、そういえば、ガヌドスでは、組合の発言権が強いのでしたわね」
各職人たちによって作られた組合（ギルド）、その長によって構成されるのが、この元老議会である。
「ふむ、貴族は領地を治める者……対して、ギルド長というのは、その職を領地として治める者、という感じなのかしら？」
「選ばれ方にも違いがありますね。ギルド長は、職人たちによって選び出された者で、世襲ではありませんから。職人としての腕前のみならず、同業者からの信用なども、おそらくは選考基準になるのではないかと……」
「ふーむ、その方たちで話し合って、国の行方を決めるわけですわね。なかなか、面白い制度ですわ」
色々な専門知識を持った者たちが集まった話し合いである。仕切り役が上手く回していけば、色々と良い意見も得られるかもしれない。
なにより、自分たちの選んだ組合長が話し合いに参加している以上、国が傾いたとしても文句は言えないわけで……。
――あら？　これは、もしかして、責任を押し付けられない良いシステムなのではないかしら……？
などと思うミーアであったが……。
「反面、なかなか話し合いで決まらないということもありそうですね。それぞれの利益を追求していては、まとまるものもまとまらなくなる」
「なるほど……。急ぎ動かねばならない時には、むしろ、皇帝の一存で事を進めてしまったほうが良いということですわね……。良し悪しですわね」

国が傾いた時、断頭台とダンスを踊らずに済むのは良いのだが、逆に国が傾きやすくなる体制というのも、どうなのか……。

――近衛たちが守ってくれるのは、わたくしが皇女の重責を担うものだからでしょうし……。もし誰も守ってくれない状態で国が傾くと、やっぱり命の危険がございますわ。わたくしがディオンさんぐらい強ければ、国が傾いても生きていけそうですけど……。なかなか、ままならないものですわね。

やれやれ、と小さくため息を零しながら、ミーアは議場に足を踏み入れた。

この時のミーアは知らなかった。

この裏で、どのようなことが起きているのか……。

事態は、ミーアの把握していないところで、大きく動き出していた。

第九十六話　王不在の元老議会

紋章の書かれたアーチを抜け、エントランスへ。
そこには、元老議員か、その関係の者だろうか。人々が談笑していた。会議が開かれる前に、こうして親交を深めておくのだろう。
エントランスの奥には重厚な扉が見えた。恐らくはその先が、会議を行うホールだろう。
っと、すすすっと横から一人の男が近づいて来た。それは、先日、王宮で顔を合わせた男、造船ギルド長ビガスだった。
「ご機嫌麗しゅう。ミーア姫殿下。今日はようこそ、おいでくださいました。ご足労いただき、誠に恐縮ですが、なにとぞ、よろしくお願いいたします」
平身低頭のビガスに、ミーアはスカートの裾をちょこんと持ち上げて応える。
「あら、ご機嫌よう。ビガス殿。こちらこそ、よろしくお願いいたしますわ。いろいろと、お骨折りいただいたみたいで、感謝いたしますわ。こうして、議会への参加を手配していただいた以上、みなさまへの説明はわたくしの責任ですわね。きっちりさせていただきますわ」
ニッコリ笑みを浮かべるミーアに、ビガスはさらに近づき、そっと声を潜める。
「私、先日のミーア姫殿下のお言葉に感銘を受けました。今日はすでに、議員の何人かには声をかけて、ミーア姫殿下に賛同するように、話をつけてあります」
「ほう……」
「ああ、それと、本日の議会はお茶菓子として、ガヌドス港湾国名物の『海鳥の卵プティング』を用意いたしました。姫殿下は、烏賊の干物がお好きとお聞きしましたが、こういった甘い物もどうかと

思いまして……」
「ほうっ！」
ミーアはニヤリ、とほくそ笑む。
――これは……予想外に、この男、できますわね！　抜かりありませんわ。
はたして、ビガスのどちらの用意に、ミーアが感銘を受けたのか……それは、神のみぞ知ることであるが、それはともかく……。
――ふむ、美味しくお茶菓子を食べるためにも、ここは気合を入れて演説を行わなければなりませんわね。
そうして、鼻息荒く、ミーアは扉に手をかけた。

ホールは、それなりに広い部屋だった。
正面には、議長席とその上には王の座る玉座が、左右には議員が座るのであろう長い椅子が左右に据え付けられている。そして、議長席の正面、左右の椅子に囲まれたところに、おそらくは発言者が立つのであろう、手すりで囲まれた場所があった。
さらに、会議の場を見下ろすように二階席、三階席が、ぐるりと四方を囲んでいる。そして、その席は、すでに人々で埋まっているようだった。
「あら……議員の数は十二名とか、そんなものではなかったかしら？」
軽く後ろを振り返り、ルードヴィッヒに聞いてみる。っと、ルードヴィッヒは小さく頷き、
「話し合いを行うのは十二名ですが、市民には傍聴が許されていますので」
「なるほど……。ということは、一般聴衆も味方につけたほうが有利に働く、ということですわね」
てっきり、決まった議員の前でだけ話せばいいと思っていたミーアだったから、これは少々、予想外だった。なかなかに大変そうではあるのだが……すでに幾度かの修羅場を潜り抜けているミーアに

は、どうということもない。そもそもミーアは、レムノ王国の完全武装した兵士たちの前に、身一つで立ったこともあるのだ。

さて、案内された席で待つことしばし……、会議はなかなか始まらなかった。

「すでに、予定の時刻のはずですが……」

横に座ったルードヴィッヒが眉をひそめる。

「ふうむ、どうかしたのかしら……？」

議長も元老議員も揃っているようだが、いつまでたっても王の玉座は空席のままだった。

そわそわと、元老議員たちの間に動揺した空気が広がる中、若い者から何事か耳打ちされたビガスが歩み寄ってきた。

「大変申し訳ありません。ミーア姫殿下、実は、国王陛下がいらっしゃらないのです」

「あら……そうなんですの？」

「今日の元老議会には出席されるご予定だったのですが……朝から姿が見えないとか」

「ふうむ……」

もしや、蛇の蠢動があったのでは？　とルードヴィッヒのほうを窺うも、現状では動きが取れないミーアである。

――まったく、嫌なタイミングで動きますわね。さすがは蛇といったところかしら……？

そんなミーアに、ビガスは落ち着いた口調で言った。

「王がいらっしゃれないというのでは、仕方ありません……。王不在のまま、会議を始めます」

「あら、それで大丈夫なんですの？　てっきり中止になるのかと思いましたけれど……」

「元老議員たちの賛同が得られれば、会議は開けます。もっとも、よほどのことがない限りは中止になるのでしょうが……ミーア姫殿下にご参加いただくというのは、よほどのことですので」

ビガスはそこで、声を潜めて。
「というか、それで押し切りますので……。なにとぞ、ミーア姫殿下のご威光をこの場でお示しいただければと……」
ニヤリ、と悪い笑みを浮かべた。
――ふむ、なるほど。そういうことならば、むしろ、これは好機と考えるべきなのかしら……。邪魔をしそうな国王陛下がいらっしゃらない場で、大部分の人たちを説得してしまえばよいのですし。
蛇の暗躍は依然として気にはなるが、今から議場を退席するのは現実的ではないし、さして意味があるとも思えない。ならば、今は目の前の問題を片付けよう、と改めて思うミーアである。
「これより、臨時の元老議会を開会する。本日の議題は、隣国、ティアムーン帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーン姫殿下より持ち込まれた、極めて重要な案件である。みな、心して聞くように！」
議長を務める老人が、ミーアのほうに目を向けてきた。同時に人々の視線が一斉にミーアに集まる。
ミーアは一つ頷いてから、堂々と胸を張り、議会の中央に立つ。
そして……話し始めて……ほどなくしてミーアは、
――むっ！　これは……！
そこに潜む危険の臭いを嗅ぎ取った！

第九十七話　彼は剣にあらず

始まりは、とても順調だった。
「お初にお目にかかりますわ。わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーン。ティアムーン帝国の皇女ですわ」
堂々たるミーアの名乗り、それに対して元老議員たちからは……。
「噂に名高き、ミーア姫殿下を、こうして元老議会にお招きできたこと、心からお喜び申し上げます」
歓迎の言葉とともに、大きな拍手が巻き起こる。それにつられて、見学の一般聴衆の中からも拍手が聞こえる。
おおよそ、ミーアは好意的な歓迎ムードをもって迎えられたのだった。
「本日は、このように、元老議会での発言を許可いただき感謝いたしますわ」
そうして、ミーアは話し出した。
先日、王と造船ギルド長ビガスに話した内容……。ヴァイサリアン族への不当な扱いを是正する要求と、セントノエル・ミーア学園共同の研究施設をこの国に建てようと考えているということ。
国王の暗殺未遂事件とオウラニアのことは、あえて口にはしなかった。いろいろと面倒なことになりそうだったので……。
おおよそのことを話し終えたところで、ミーアは改めて議員たちを見回した。
特に、ヴァイサリアンの扱いという反対されそうな案件についても、文句は出なかった。何人かの議員は困惑した様子で辺りをキョロキョロしているが……大部分はミーアの発言に賛同の意を示していた。
――あら、拍子抜けですわね。これは楽勝なのではないかしら？
などと気を良くしていたミーアであったが……その脳内に突如、

警鐘が鳴り響いた。
ミーアの言葉の一つ一つに湧き上がる拍手、歓声。歓迎するような笑顔。満面の笑顔。そして、崇拝するような視線……崇拝？
そこで、ミーアは気が付いた！　この状況の危険性にっ！
慌ててそちらに目を向ければ、造船ギルド長ビガスの得意げな顔が見えた。彼は議会全体を見渡し、満足げに頷いている。
――くぅっ、あの男……なるほど。確かに優秀ですわ。優秀なんですけど……やり過ぎですわ！
議場内は、ミーアを歓迎し、それを通り越して礼賛する空気感が支配している。それは、まるで、新たな支配者を迎え入れるがごとき雰囲気だった。
――ビガスの多数派工作が……効きすぎておりますわ！
無論、彼の心理は理解できる。
国王と袂を分かつ以上、ミーアに媚を売らなければならないのは理の当然。そして、自分たちの側が多数派として、ミーアを支持しなければならないことも。
それは、まぁ、いい。理解できないわけではない、のだが……。
――あまり、わたくしに期待されても困りますわ。
それこそがミーアの本音だった。
ミーアは別に、自身を統治者として崇めてほしいわけではないのだ。
面倒事は、きちんと自分たちで解決してもらいたいし、こちらに余計な仕事を振ってほしくないだけなのだ。だというのに……。
彼らの目に見えるのは「ぜーんぶミーアに任せときゃいいやー！」という、服従の色だった。
おそらく彼らの中には不満があるだろう。不安だってあるだろう。
もしかしたら「余計なことを言うな！　今のままでなにが悪いのか？」という憤りすらあるかもしれない。
けれど、それを飲み込み、問題はすべてミーアが解決してくれるだろうから、まぁいいかー、っと思考停止に陥っているのだ。

ヴァイサリアンを迫害することが、道義的に間違っているだとか、ヴァイサリアン族を町に戻すにあたって生じるであろう問題とか、そういうものを一切把握していない。
すべてをミーアにぶん投げてしまおうという態度である。
否、ミーアなら、それらもなんとかしてくれるに違いない、と期待しているのだ。
その期待の重さに、ミーアは早くも胃もたれを感じ始めていた。
このままでは、海鳥のプティングとやらも、二つ、三つを食べるのが精一杯になってしまうだろう……うんっ？
まぁ、それはともかく……。
さらに、悪いことにはこの場には、王がいなかった。本来、責任を取るべき立場であり、なおかつ、ミーアに反対する勢力の旗振り役である国王が、この場にはいないのだ。
元老議員の中には、ミーアに反対の者だっているだろうに、王の不在で彼らは統一した動きが取れていない。
つまり……この場は、ミーアを礼賛する勢力の独擅場。ミーアの評価は文字通り波に乗り、天高く舞い上がっているのだ。それこそ、問題をたった一人で、すべて解決してくれる、すごい人というほどにまで……。
ひしひしと感じる、自らへの期待感……っ！
そもそも、人というものは、責任は負いたくないものなのだ。
ベッドの上で、ほげーっとしている間にすべてが解決していることこそが理想。それは、ミーアであっても、他の人であっても変わりはないわけで。つまり……。
――もろもろの問題を、こちらに押し付けようって腹ですわね！
その手には乗りませんわ。
自身に向けられた期待の視線に、ミーアはぐぬっと唸る。
――我が弟子オウラニアさんに後で押し付けるために、できる限り、わたくしから注目を外しておきたいところですわね。なにか、アイデアは……。

っと考え込むミーア。その時だった。
「さすがは帝国の叡智。ミーア姫殿下の仰るとおりにしていれば、すべて間違いはない、と改めて感じます。時に、同行されているそちらの方が、名高き、ミーア姫殿下の剣殿ですか」
どこか、演技がかった声が飛んでくる。人々の視線が、ルードヴィッヒの隣に座る、ディオン・アライアのほうに向いた。
「さすがは、帝国の叡智の剣。実に剽悍な騎士殿でございますな」
あからさまに媚を売るようなその言葉に、当のディオンは呆れた苦笑いを浮かべている。ミーアも、思わず舌打ちしそうになるが……。
「ええ、彼はわたくしの剣……否、違いますわね」
言葉の途中で、ミーアは気付く。
なんとか、この流れを変えるための論理。その糸口に……。
その思いつきに身を任せ、ミーアは口を開く。
「彼は、わたくしの剣ではありませんわ。彼は、わたくしの腕ですわ」

第九十八話　叡智は問わん。国とはなんぞや？

堂々と胸を張り、ミーアは主張する。彼は剣ではない、と。
それは、なにゆえか……？
決まっている。いつだって、ミーアの考えは変わることはない。
その思考の基本線は、すなわち、責任と期待の分散だ！
ミーアは厳かな口調で、改めて言う。
「あなたたちの国王陛下を守ったのは、我が帝国の誇る最強の騎士。素晴らしい剣の腕前を持つ男、ディオン・アライアですわ」
強調すべきは彼が『道具』ではないということだ。なぜなら、道具が活躍した場合、使う者に功績が帰せられるからだ。彼を使いこなすミーアがスゴイ！　ということになり、ミーアに任せておけば大丈夫！　になってしまうからだ。
そうならないようミーアはしっかりと否定しておく！
「彼はわたくしの剣ではない。言うなれば、我が腕のようなものですわ。だって……」
ミーアは、そこで悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「わたくし、残念ながら剣のほうはからきしなんですのよ？」
剣を持ったところで、大したことはできませんよぅ～とミーアは主張する。
「同様に、わたくしが信頼を置く家臣、ルードヴィッヒも知識の書かれた本ではない。彼は、そうですわね……わたくしの見えぬことを知らせる、よく見える目かしら……？」
ミーアの目と言われたルードヴィッヒは、メガネの位置を直しながら小さく笑った……どうやら照れ笑いらしかった。
「メイドのアンヌは、わたくしの世話をよくしてくれる、もう一つの腕ですわ。そして……」
ミーアは最後に、可憐な笑みを浮かべるシュトリナのほうに目を

向けて。
「その隣にいるのはイエロームーン公爵令嬢。薬に詳しい彼女は、食料に含まれる毒をすべて無効にしてくれる。いわば、わたくしの体を守る……そうですわね、丈夫な胃袋と言ったところかしら？」
ミーアの胃袋扱いされたシュトリナの、その可憐な笑みがヒクッと引きつる。それをミーアは見逃さなかった。
……どうやら、今の喩えはあまり嬉しくなかったらしいと察し、すぐさま、まとめに入る。
「わたくしは、我が帝国の臣民に寵愛を与えておりますわ。彼らは、わたくしの身体の一部のようなものですもの」
だから、断じて道具じゃないぞ！　と主張すると同時に、別のことも暗に強調する。
すなわち、帝国の民は、体の一部だが、ガヌドスの民はそうじゃないから、責任とらないよ？　っと。
そして、そこで一度、言葉を切って聴衆の顔を窺う……なにやら、わかっていない様子なので、さらにミーアが言葉を続けようとした、その時だった。
「ミーアさま、いささか喩えが高尚に過ぎて、ミーアさまのお考えが伝わり切っていない様子。目と称していただいた後で、このように口を挟むのはいかがなものかと思いますが、今日は、私がよく動く舌になることを、お許しいただけるでしょうか？」
いささか芝居がかった口調で、ルードヴィッヒが立ち上がる。
――ふむ、さすがは知恵袋ルードヴィッヒですわ。良いタイミングですわね。
などと感心しつつ、ミーアは小さく頷いた。
「感謝いたします。それでは、議長殿、ミーアさまの舌として、私が発言するのをお許しいただけますか？」
次いで、ルードヴィッヒは元老議会の議長に許可を求める。さすがに、ここで発言を止める胆力もなかったのだろう、議長がゆるゆると頷くのを待ってから、ルードヴィッヒは話し始める。

「それでは……ミーアさま、もしも、国民が一つの体の器官だとするならば、このガヌドス港湾国もまた、一つの体と見做されるということでしょうか？」
――ほう、ルードヴィッヒ……なかなかやりますわ。ガヌドスの民は、帝国とは違う体と強調するとは……！　さすがはメガネをかけているだけのことはありますわね。
感心しつつ、ミーアは頷いた。
「そういうことですわね。ガヌドス国王ネストリ陛下、あるいは、オウラニア姫殿下……王族の方を頭とする体と見做すべきでしょう」
「ははは、面白い。ならば、我ら商人ギルドは良い商品を見抜く目、漁業ギルド辺りは、さしずめ足といったところですかな」
「おい、なんで、俺たちが足なんだ？」
元老議員の何人かが話に乗ってきた。それを見て、ミーアは上機嫌に笑う。
「不満に思う必要はありませんわ。目には目の、足には足の仕事がある。体を支える足の役割も大切なものですわ」
実に親しげな口調で帝国の姫に褒められて、漁業ギルド長が顔を赤らめる。ガヌドス港湾国の民にとって、帝国は紛うことなき大国で、それゆえ、その姫君から褒められることは、この上もない名誉なことなのだ。
「確かに、この国の屋台骨である漁業関係の人々は、国を支える足と言えるかもしれませんね。けれど、それ以上に、足のような扱いを受けている者たちがいる。下に置かれて踏みつけにされる、そのような者たちがいますね」
ルードヴィッヒは、そこで、クイッと眼鏡を上げる。
――踏みつけにされた弱者……ヴァイサリアンですわね！
瞬間、ミーアは、ルードヴィッヒの狙いを察して、おおっ！　と声を上げそうになった。
――なるほど、そのように論理を展開させるのですわね！　さすがは、ルードヴィッヒですわ。

ミーアは、ニヤケそうになる顔を、懸命にしかつめらしいものにして、
「ええ。おりますわね。同じ体の一部なのに、踏みつけにされている者たち……ヴァイサリアンの民が……」
議長を、議員のひとりひとりを見つめて、言葉を続ける。
「彼らとて、このガヌドスの民。では、これは、どのような状態と言えるかしら？　民が民を虐げ、苦しめること……それは、右の足で左の足を踏みつけにするようなものですわ。右の拳で、左の拳を殴りつけるようなものですわ」
視線を、一番近くにいた議員に向けて、ミーアは言った。
「そこのあなた、自分の友人がそんなことをしていたら、どうしますかしら？」
「え……？　あ、ああ。止める……でしょうか」
自信なさげに応える男に、ミーアは大きく頷いて。
「そう……。そんなことをしていたら、止めるのが当たり前ですわ。だって、自分の右足を左足で踏みつけて、痛めつけるだなんて……そんなことしていたら、倒れてしまいますわ」
っと、ミーアはあたりに目をやって、ふと思う。
――ふむ、少し抽象的に過ぎるかもしれませんわ。ここは、具体例を出して……ヤナとキリルに登場いただくとしましょうか。
そっと目を閉じて、ミーアは続ける。
「セントノエル学園の特別初等部にヴァイサリアンの子どもたちがおりますの。とても利発で可愛い姉弟で、ヤナとキリルという名前ですわ……。ねぇ、あなたたちが踏みつけにしているのは、海を荒らして回る海賊ではございませんのよ？　幼い子どもたちであり、子どもたちを育てるのに必死の親たちですわよ？　それを島に隔離して、閉じ込めて……そんなことを続けていて、国が倒れないと思いますの？　そんなことが本当に許され続けるとでも？」
種を蒔けば刈り取りの時が来る。
自らで足を痛めつければ、いつか立っていられない時が来る。

それは自明の理だ。
そんなことは、たぶん、彼ら自身だってわかっているはずなのだ。
ゆえに、ミーアは確信のこもった口調で言った。
「わたくしは、帝国皇女ですわ。ですから、それが正しいか、間違っているかを判断する立場ではない。それをするのは神であり、神聖典であり、中央正教会であり、我が友ラフィーナさまでしょう。だから、わたくしは、みなさんを間違っているとは言いませんわ。だから……」
ミーアは大きく息を吸った後、高々と声を上げる。
「わたくしがこうして言葉をかけるのは、ただ隣の友人に対してのことですわ。友を想う気持ちが、わたくしにこう言わせますわ。今のまま、ヴァイサリアン族への迫害を続ければ、ガヌドス港湾国は倒れてしまいますわ。だからこそ、今こそ、それを変えるべきではないかしら？」
言い切って、ミーアは達成感を覚える。
――これにて、わたくしは助言するお友だちの立場をゲットいたしましたわ。うふふ、やりましたわよ。
っと、ミーアはそこでふと思う。
最後のまとめに、とミーアは言葉を続ける。
「ガヌドス港湾国元老議会のみなさん、並びに、この話を聞く国民のみなさん、ぜひ考えていただきたいですわ。ヴァイサリアン族をどのように扱えばよいのか？　この国にヴェールガ公国の、いいえ……あの聖女ラフィーナさまの視察をお迎えするのに、どのようにすればよいのか……」
ニッコリと笑みを浮かべてミーアは言った。
「わたくしも、隣国の友として、協力できることはしっかりと協力させていただきますわ」
そうしてミーアはさっさと自らの席に戻り、ソワソワし始める。
――海鳥の卵のプティング、楽しみですわ！
重たい期待感を振り払った今ならば、いくらでも食べられそうな

気がするミーアであった。

第九十九話　前夜の戦い１　シオンとキースウッド

シオン・ソール・サンクランドは紛れもない天才だった。
剣の腕前はもちろんのこと、勉学においても高いレベルを誇り、そのうえ、機転と判断力にも優れる。まさに万能の天才の名に相応しい少年であった。
反面、高潔に過ぎて、少々、融通が利かないところがあったが、それも昔の話。
帝国のちょい悪皇女こと、ミーアと出会って以降、その影響を如実に受けた彼は、確実に成長していた……成長……？　成長していた！
具体的に言うと……。

そこは、場末の酒場。ミーアたちが元老議会に乗り込む前夜のことであった。
一日の労働から帰ってきた男たちが集う、憩いの場だった。
そのカウンター席の外れにシオンは座っていた。その隣には、前髪を長く伸ばした男の姿があった。うつむき気味で、そわそわと、どこか落ち着かなげな顔をしている男、その前に、シオンがスッと手を伸ばす。
「どうかな……。これが思い出すきっかけになればいいのだが……」
どけられた手の下からは、銀色に輝く硬貨が二枚。それは、サンクランド王国の銀貨だった。
そうなのだ、シオンは情報を得るために、どの程度の金額を渡せばいいのか、きちんと相場がわかるようになっていたのだ！
かつては、乗合馬車の値段すら、把握していなかったことを思えば、大変な進歩である。
……いや、もちろん、成長はそれだけではないのだが。

さて、当初は信用度を気にして、サンクランド銀貨を出していたシオンであったが……しばらくして、そこに思わぬ効果があることに気が付いた。それは……。
「……あんた、サンクランドの人間かい？」
男は窺うような目で、シオンを見つめた。シオンはしばし考えてから、おもむろに頷く。っと、
「おやおや、なんてこった。本当にガストンの旦那の言うとおりになったってわけか？」
男は銀貨を懐にしまいながら、皮肉げな笑みを浮かべた。
「どういうことだ？　ガストンというのは……？」
「俺ら隠れヴァイサリアンのまとめ役をやってる旦那さ。しばらく前に来た異国風の男と一緒に、隔離島の連中を訓練してるとか聞いたが……」
「どういうことだ？　ヴァイサリアンの隔離島に渡れるのか？」
「そりゃ、腕のいい船乗りならな。難しいってだけで、海は続いてる。行けないってことねぇな」
笑う男に、キースウッドが酒瓶片手に顔を寄せる。
「なるほど。詳しい話が聞きたいな。我々、サンクランドにも、なにか手助けができるかもしれない」
言いながら、男の酒杯に酒を注ぐ。男は上機嫌に笑いながら、
「なぁに、別にそう難しいことじゃない。国王陛下を呼び出して……」
声を潜めて言いながら、男は自分の首にとん、っと手刀を落とす。
「その混乱に乗じて、国内の主要施設を押さえるとかって話さ」
「国王を呼び出す？　簡単に言うが、どうやるつもりだ……？」
男が無言で手を差し出す。キースウッドは愛想よく笑って、さらに銀貨を差し出した。
「ガストンの旦那はオウラニア姫殿下を人質にするつもりらしい。なんでも、陛下との反目から、貧民街に逃げ込んでるとかいう話だからな。ただ……どうも、あの変な男の考えは違うみたいだな。別

の手を考えてるらしいが、いまいち、そいつは聞かせちゃくれない。まぁ、いずれにせよ、国王を殺して、その混乱に乗じてってのが基本の構想らしいぜ。上手くいくのかね」
肩をすくめる男を残し、シオンらは店を後にした。

「……ガストン、それに、異国風の男か……」
「はてさて、ガヌドス港湾国にとっての異国というのは、どこに当たるんでしょうね。ティアムーンか、ヴェールガか、サンクランドか、あるいは……」
「騎馬王国……」
シオンは重々しい口調で言った。
「父上に危害を加え、エシャールを罠に嵌めた、あの男がこの国にいるかもしれない……」
「想像を膨らませれば、と言ったレベルの話ですが、ね。もしかしたら、捕縛する機会も訪れるかも……」
キースウッドの言葉に一つ頷き、シオンは言った。
「しかし、これからどうするのがいいだろうな……。一番は、騒動が起こる前にガストン一味を押さえることだが……」
「……シオン殿下」
不意に、キースウッドが声を落とした。同時にシオンが一瞬、背後に目をやる。
「尾行か。さっきの男か……」
「やけに、ペラペラしゃべってましたからね。やれやれ、こんなことなら銀貨四枚も渡すんじゃなかった」
二人は頷きあうと、素早く次の角を曲がり、裏路地へと入っていく。少し進んだところで振り返る、っと、月明りの下、追ってきたのは四人の男だった。
先頭に立つのは、先ほど、酒場で情報を提供してくれた男だった。男は、剣を引き抜きながら言った。
「そんで、結局、兄さんらは何者なんだね？　もしや、どちらかは

帝国騎士、ディオン・アライアだったりするのかい？」
　その問いかけに、思わず笑い声を上げたのはキースウッドだった。
「さてね。生憎と俺はお前さんほど口が軽くないんだ。絶世の美女と高級な酒とをセットにしてもらわないと、話そうなんて気がおきないね」
「ふん、まぁ、そう言いなさんな。少し話がしたいだけなんだ。なぜ、我々のことを探っているのか、事情が聴きたい。もし、ディオン殿であるならば、事情を説明したいし、本当にサンクランドの人間ならば、なおのこと……」
　などと話し始める男に、キースウッドは眉をひそめた。
　――またしても、よくしゃべるな。こいつ、なにか企んでいるのか？
　油断なく剣を抜き、構える。月明りを受け、刀身が冷たい輝きを放った。
「悪いが、夜闇で剣を突きつけてくる人間と会話を楽しめるほど、豪胆でもないんでね」
　刹那の静寂の後……男たちは一斉にキースウッドに斬りかかってきた！
　……ところで、ここ最近はすっかり、調理場の番人（ミーアから王子たちの胃を守るための）と化しているキースウッドだが、その剣の腕は、シオンに勝るとも劣らないものだった。
　そう、勝るとも劣らないものではあるのだが、その質という意味では、シオンとは全く違うものでもあった。
　彼の剣は、シオンよりも遥かに――ひねくれていた。
　向かってくる男たちに向かい、キースウッドはおもむろに剣を投げつけた。
　先頭の男は、慌ててそれを、自らの刃で受け流す。が、それは致命的な隙になった。
　男の懐に飛び込んだキースウッドはそのまま男の股間に思いきり膝蹴りを入れ、即座に身を低くし、後ろの男に鋭い足払いをかける。

地面に落ちていた自らの剣を拾いつつ、三人目の男の剣を思い切り切りあげ、跳ね飛ばした。
そこに、最後の一人が斬りかかってくる。
夜闇にギラリ、と光る刃。迫りくる斬撃に、けれど、キースウッドは視線を向けようとはしなかった。なぜなら……。
天才、シオン・ソール・サンクランドの剣が、敵の剣をからめとり、高々と空に舞いあげてしまったからだ。
「なっ……」
苦悶に倒れ伏した男たちと、剣を失い、呆然と立ち尽くす男たち。
最も手近にいた、足払いで地面に叩きつけられた男に剣を突きつけながら、シオンが涼しい顔で言った。
「国王ネストリ陛下を暗殺し、混乱に乗じて国内各所を襲うか……。そんなに上手く事が運ぶと思っているのか？」
「はは、どうかな。この国の軍隊は、隣国ティアムーンに比べれば、弱小だ。混乱に乗じれば、やってやれないこともなし。そして、虐げられた民が声を上げれば、必ずサンクランドは動いてくれる」
「正義と公正を守る、か。難しいものだな……」
シオンは小さくため息を吐き……。
「それで、その無茶な計画の決行の日はいつなんだ？」
問えば、男はニヤリと口を釣り上げて。
「残念ながら――もうすでに始まっている」
「ああ……くそ。これは、時間稼ぎというわけか」
シオンは思わず舌打ちした。

第百話　眼鏡のピントを合わせる者！

言いたいことだけ言って、さっさと席に戻ってしまうミーア。その堂々たる威容を見ながらルードヴィッヒは、なんとも言えない充実感を覚えていた。

思えば、ミーアに同行していくつかの国を訪れた中で、今回ほど上手くフォローを入れられたこともなかったのではなかったか……。

じっくりと、戦果を確認するように、ルードヴィッヒは議員席を、そして会衆を眺める。まだ、大きな変化はない。されど、何人かの顔に困惑と動揺の色を見て取って、彼は満足げに頷いた。

――ミーアさまの唯一の弱点は、一を見て万を悟るという、ご自分を基準にして考えてしまうことだ。それを他人もできるはず、と、思ってしまう、天才ゆえの勘違い……これこそが最大の弱点なのだ。

ルードヴィッヒは、ミーアが「ディオンは剣ではなく腕である」と言った時点で、ミーアの言わんとしていることを理解していた。彼らに、なにを叩きつけ、なにを見せようとしているのかを正確に理解していたのだ。

……彼の中では、そういうことになっていたのだ。

それゆえ口を挟んだ。

ルードヴィッヒは軽く眼鏡を押し上げた瞬間に、ふと思う。

――そうか。俺が果たすべきは眼鏡のような役割か。ミーアさまのお話がよく見えるように、俺が眼鏡の役割を果たすのだ。

そう納得しつつ、ルードヴィッヒはミーアの言葉を思い出す。

ディオンのことを、なぜ、剣ではなく腕と称さなければいけなかったのか？　それは……。

――ミーアさまは問わんとされていたのだ。ガヌドスの民に……ヴァイサリアン族は、この国の民にとって、なんなのか？　ということを……。

ミーアは自国の話を出し、そして問うたのだ。
「帝国ではこのように考えている。では、ヴァイサリアン族というのは、この国にとってなんなのか？　お前たちの国の一員、すなわち体の一部か？　それとも、その足で踏みつけにする奴隷か？」と。
もしも国民、体の一部だと言うならミーアの言うとおり、今のような扱いは許されない。
一方で奴隷であると言うならば、果たして、その存在が許容されるものであるのかが、問われねばならなかった。
もちろん、便利な、使い勝手のいい奴隷であってほしいと思う者はいるだろう。いつでも切り捨てられる労働力、最低限の衣食住さえ与えておけば、自由に使える奴隷を欲しがらぬ者などいない。
けれど、それは許されぬことだ。他国からの非難を招く悪である。
その不利益は、体制を維持することによって得られる利益を、恐らくは上回る。だからこそ、ミーアの言葉を無視することはできない。
あるいは、そこまで悪辣ではなくても、現状を維持したい者たちもいることだろう。今まで問題にならなかったのだから、そのままそっとしておこう、という考え方だ。
人間は元来保守的な生き物だ。仮に変化によって良いものが得られるとしても、なかなかその一歩目が踏み出せぬものなのだ。
島に閉じこめて見ないようにする。目を閉じて忘れてしまえば、あたかも問題がなくなったかのように錯覚する。まるで、幽霊に対するミーアにも似た……そんな心理の人たちも一定数いることだろう。否、大部分がそうだろうか。
けれど……当然、帝国の叡智は、その思考停止を許さない。
――まるで、闇を払う月光のようだ……。
ルードヴィッヒは思う。
ミーアの言葉は、彼らが曖昧な霧の向こうに置いておきたかった問題に光を当ててしまった。影に隠されていた不都合な事実を光のもとに明らかにしてしまったのだ。

それは、ある意味では余計なことだったかもしれない。彼らにとっては、余分な問題を突きつけられた形に感じるかもしれない。

だが、見えていようがいなかろうが、表に出ていようが裏に隠れていようが……問題は厳然としてあるのだ。

この国の誰もが見えていなかったとしても、見ようとしなかったとしても、虐げられている人たちは確かにいるのだ。

ゆえにこそ、ミーアはあえて言ったのだろう。

「ディオン・アライアは替えの効く道具ではない。使い潰して新しくできるようなものではなく、替えの利かない人材である。腕のようなものである。では、お前たちにとってヴァイサリアンはどうか？」と。

そして、ルードヴィッヒの目に映るのは、消極的な人々ばかりでもなかった。

彼はしっかりと見ていたのだ。ミーアの言葉に同調するような、そんな表情の人々のことも。

そうなのだ。実際のところ、心ある人たちの中にはヴァイサリアンの境遇に同情する者も少なからずいるのだ。

考えてみれば当たり前のことだが、ヤナやキリルという子どもたちですら、隠れ住むことができていたのだ。今や、その隔離は徹底されてはおらず。本土に隠れ住むヴァイサリアンもそれなりにいる。

彼らは島に閉じこめた海賊の末裔でもなければ、見ず知らずの他人でもなく……共にこの地に住む、紛れもない隣人なのだ。

そして、困窮する彼らに……額を隠しながら懸命に生きる彼らに同情しないでいられる人間は、実はそこまで多くない。

そんな彼らにとってミーアの言葉は、まさに我が意を得たりといったものだった。

さらに、知恵ある人々の中には、ヴァイサリアンへの政策に危惧を覚える者もまた少なからずいた。元老議会の議員の中にも、その危機感は存在する。

ミーアに言われるまでもなく、ある人々を隔離し、重労働に従事させるなどと言う非道が、非難を浴びないはずがない。それが国を危うくする……まことに、ミーアが言うことは正しかった。
その者たちは知識と合理性に照らし合わせ、ミーアの言葉に耳を傾けていた。
そして、利に敏い人々の中には、隔離政策の見直しに旨味を見出す者がいた。
大陸一の学び舎、セントノエル学園と大国ティアムーン帝国の皇女の名を冠したミーア学園。その二校の共同研究施設……そこに新たな商売の匂いを敏感に感じ取ったのだ。
その新しい経済的要素は、ヴァイサリアン族を本土に受け入れることを可能とするか、否か。
いや、仮に多少の不利があったとて、すでにヴァイサリアン族の境遇を改善する以外に選択がないのだ。であれば、よりマシな、妥当な落としどころを見つける必要があるだろう。

かくて、色々な方面の人々に向けて、選択を迫ったミーアであるが……素知らぬ顔でプティングを食べていた。
「うふふ、美味しいですわ」
澄まし顔で、ほわぁっなどと息を吐いていたっ！
もはや、一切、話し合いに参加する気配のないミーアを見て、感心した様子でつぶやいたのは、造船ギルド長ビガスだった。
「なるほど……。ラフィーナさまとの関係をとりなしてやるから、自分たちで何とかする姿勢を見せておけ……と、そういうことか」
ミーアは言っていた。
協力は惜しまない、と。その協力とはズバリ、聖女ラフィーナ、並びにヴェールガ公国との関係をとりなしてやる、という意味だろう。
けれど、そのためにはこの国が、自らの選択で、決断で……変わらなければならない。変わる意思を見せなければならない。

「ヴァイサリアン族の受け入れ……か」
この国の淀みに新しく、清らかな水が流れ込んできた……。そのように感じずにはいられないビガスであった。

第百十一話　忠義の腕に止められる

自らの席に戻ってきたミーアは、頭の中の疲労感を洗い流すように、プティングと向き合う。

――海鳥の卵のプティング、と言っていましたわね……。ほう、表面は軽く焼いてあるのかしら？

スプーンでツンツンと突いてから、鼻を近づけクンクンと匂いを嗅ぐ。っと、甘い砂糖が焼ける、芳ばしい香りが鼻をくすぐった。

――あっ、これは、絶対美味しいやつですわ！

ミーアほどのスイーツソムリエになれば、もはや、匂いで大体の味が予想できてしまうのだ。問題は、その予想を超えてくるものかどうか、ということだが……。

ごくり、と喉を鳴らし……ミーアはスプーンをプティングに突き入れる。

表面はカリカリ、されど、中はプルプルのプティングをスプーンにすくいあげ、トロリと濃厚なカラメルソースにからめて、一口。

口の中に広がる甘味に、ミーアは、ほわぁっと歓声を上げる。

――ああ、舌の上にそびえ立つ甘味、ちょっぴり苦味のあるこのソースがアクセントになっていて、素晴らしいですわ！

さらに、ミーアは気付く。

これは、卵の味が普通とは違うぞ？　っと。

海鳥のと銘打つだけあって、その卵の味はミーアが慣れ親しんだものよりさらにコクがあり、どっしりとした食べ応えがあった。

――これは、片手間で食べるべきものではありませんわ。全感覚を集中させませんと……。

そう思い立ち、ミーアは集中して、プティングを食べた。結果……。

プティングを数秒でペロリしてしまうミーアである。

「ああ……素晴らしいお味でしたわ……。では、もう一口……あら？」
っと、そこでミーアは気付いた。
自らの右腕アンヌが、お替りのプティングを、すぅっと持ち上げたことに。
「あら？　アンヌ……あ、もしかして、あなたも食べたいんですの？　でしたら……」
「ミーアさま、こちらは、本日のお夕食の後に出していただきましょう」
「え……でも……」
ミーアは自らのお腹をさすりながら、アンヌのほうを見る。っと！
「お誕生祭が近いですから……」
ミーアは自らのお腹をＦＮＹＦＮＹしながら、自らのお腹のほうを見る。っと！
「……まぁ、仕方ありませんわね。今日の目的は、ちょっぴりシュッとすることでしたし。うん」
そうして、自分を納得させた後、ミーアは改めてルードヴィッヒに目を向けた。
「しかし、この場はなんとかなりそうですけど、国王陛下のことが気になりますわね。こちらでも、動いているのかしら？」
「はい。皇女専属近衛隊の者たちにすぐに調べるように伝えているのですが……」
「そうそうすぐには見つかりませんわよね。ふむ……場合によっては、グリーンムーン公の手を借りる必要もあるかしら……」
ガヌドス港湾国との外交の窓口は、グリーンムーン公である。
その人脈は侮れないものがあるし、国王との関係も深いはずだ。
「もしも蛇が関係しているとなると、あまり手段を選んではいられませんわ」
せっかく一度はガヌドス国王の暗殺を防いだのだ。できれば、このまま、平和裏にオウラニアに王権を委譲してもらえれば一番良い。

――まぁ、きちんと国王として仕事をするというのであれば、それでもいいですけど、いずれにせよ、蛇に暗殺されるというのは避けたいですわね。国のほうも混乱しそうですし。
「はい。そう思いまして、すでにそちらにも人を走らせています」
「まぁ、さすがですわね。ルードヴィッヒ」
なぁんて、ミーアが感心していると、ちょうどタイミングよく、一人の男がルードヴィッヒに歩み寄ってきた。
報告を聞いたルードヴィッヒは、一瞬、眉間に皺を寄せてから、ミーアのほうに顔を向けて。
「ミーアさま、急ぎ、報告したきことがございます。一度、議場を出ましょう」
「わかりましたわ」
ミーアは一瞬の躊躇いもなく頷く。
ルードヴィッヒが急ぎと言うのであれば、それを拒否することはあり得ない。前時間軸より、ルードヴィッヒの急ぎが、本当に急ぎでなかった試しなどないからだ。
それに、もはや、議場には用はない。言うべきことは言ったわけだし……。ということで、ミーアは議長に了解を取った後、その場を後にした。

自分たちの議論を最後まで聞かずに退出したミーアを見て、ある者は無責任だと揶揄したが、他の大部分のものたちは、それを信頼の証だと捉えた。
「自分の思い通りに事が運ぶか監視するのではなく、相手の非を指摘し、悔い改めを促したうえで、改善のための道を提案し、後は信頼して任せる……ですか」
造船ギルド長ビガスの隣に座っていた議員が、感心した様子でつぶやいた。
ビガスは、なぜか、自分のことのように偉そうな態度で頷いてから……。

「あれが帝国の叡智というものだ」
どこか、ドヤァッとした顔で微笑んだ。

さて、そんなこととは露知らず、ミーアたちは、議場のロビーに出る。っとそこで、
「ミーアさま！」
二人の子どもが走り寄ってくるのが見えた。
「あら……？　キリル。それに、ヤナも。どうやってここまで……まさか、蛇の手から逃げて来たんですの？　それに、オウラニアさんとパティはどうしましたの？」
蛇に囚われた二人の子どもたちが、突如、駆け付けてきたことに目を白黒させるミーア。そんなミーアに、ヤナが抱き着いてきた。
「お願いします。パティを、オウラニア姫殿下を……助けて、ください」
その必死の訴えに、ミーアはただただ、目を白黒させるのだった。

第百二話　ベル、お祖父ちゃんに見とれる！

それは、元老議会が開かれる前夜の出来事だった。
子どもたちが寝静まった、深夜の教会。
礼拝堂には、ハンネスとヨルゴス、オウラニアとアベル、さらに眠たげに目元をこするベルまでもが集まっていた。
「明日、開かれることが決まった元老議会にミーア姫殿下が参加されるらしいですよ」
その情報を持ってきたのは、ハンネスだった。長くガヌドスに潜伏していたハンネスは、議会にもそれなりに顔が利くらしい。
「元老議会……」
アベルは思わず腕組みして唸る。
「ミーアはそこに出てなにを話すつもりなんだろう……？」
っと、ベルのほうに目を向ければ、ベルは……うつらうつら、と船を漕いでいたっ！　どうやら、彼女から有益な意見は得られなさそうだった。
苦笑いを浮かべるアベルであったが……不意に、その脳内を深刻な疑問が過ぎる。
――待てよ……。彼女は、ミーアの孫娘のはず。あの、帝国の叡智の血を継いでいるのに、このちょっぴり怠けがちなところは……。
もしや、自分の血が悪影響を及ぼしたのでは……？　などと不安になってくるアベルである。そんな気持ちをかき消すように首を振り、彼はつぶやいた。
「問題はオウラニア姫殿下を伴って、元老議会に参上したほうがいいのかどうか……かな。蛇が狙ってきている以上、いつまでもここに隠れているのも……」
っと、その時だった！　突如、パリンッと硬質な音が室内に響いた。

「今のはっ……？」
視線を向けた先、ステンドグラスが粉々に砕けるのが見えて……
そして、そこから、びゅうっと風切り音を響かせて、一本の矢が飛来した。
「なっ、くそっ！」
咄嗟に、アベルは駆けだす。なぜなら、その矢が向かう先には、なんの因果か、ベルが座っていたからだ。矢は、寸分違わず、ベルの首元に向かってきていて……。
「はぇ……？」
寝ぼけた顔をしたベル、そこに、盾を構えたアベルが割り込んだ！
「くっ、させるかっ！」
カッと、音を立て、矢が盾を穿ち……。されど、ベルには届いていなかった。
そのまま、抱きかかえるようにして、ベルを床に伏せさせながら、アベルが声を張り上げる。
「みんな、伏せろ！　窓から離れて、長椅子に隠れながら、奥の部屋にっ！」
その指示の間にも、窓からは次々に矢が降り注いでくる。
アベルは、盾を構えたまま、床に伏せる孫娘に視線を向けた。
「ケガはないかい？　ベル」
呼びかけに、ゆるゆると顔を上げたベルは……ぽけーっとしていた。
「ベル？　どこか、怪我を……」
「アベルおじいさま……か、格好いいです……」
ほわぁっ！　と息を吐く……いつも通りのベルだった！
しかし、安堵する間もなく、目の前を真っ白な煙が埋め尽くした。
焼き討ちか？　と思ったが、炎の熱さは感じられない。つまり……。
「くっ、煙幕か？」
その時だった。子どもたちが眠る住居部分で悲鳴が上がった。

「あっ、みんなー。ヤナ、キリル、パティ、大丈夫ー？」
オウラニアの間延びしたような、それでいて、どこか緊張した声が響き、直後、パタパタと足音が聞こえてきて。
「オウラニア姫、動くなっ！」
アベルの制止も空しく、オウラニアが立ち上がり……瞬間っ！
礼拝堂の入口のドアが思い切り開け放たれた。
そこから踊りこむは、漆黒の影。一つ、二つ、三つ。
影は、素早くオウラニアのほうに走り寄る。
「オウラニア姫っ！」
立ち上がり、止めに入ろうとしたアベルだったが、再び、そこに矢が殺到する。
「ぐっ、このっ！」
背中にベルを守りながら、懸命に盾を操るアベル。見る間に、足元が矢で埋まっていく。
――この数の矢……もしも、盾がなかったらすべて防ぐのは難しかったな。
脳裏に、ディオンの言葉が甦る。
背中に誰かを庇いながら戦うなら、盾を持つのも一つの手段……。
かの帝国最強の騎士に感謝の言葉をつぶやいていると……。
「なっ、なにするのー？　うぐっ……」
くぐもった悲鳴。煙を透かして、影の一人がオウラニアを肩に担ぐ姿が見えた。
「待てっ！　くそっ、今、オウラニア姫殿下を連れ去られるわけには……」
悔しげにつぶやくアベルであったが、より一層、数を増す射撃に、盾を構え続けるのがやっとで……。っと、次の瞬間、静寂は唐突に訪れた。
「くそっ……」
小さく毒づき、外に出るも、もはや影たちの姿はどこにもなく……。

――かなりの手練れだったが……ええい、くそ。
何本も矢が刺さった盾を投げ捨て、すぐに追いかけようとするアベル。であったが、その腕をベルが引っ張って止めた。
「待ってください、アベルおじいさま。ボクも行きます」
「ダメだ。ベル、君はここに……」
っと声を荒げるアベルに、
「いや、ここは、落ち着いたほうがいい。アベル王子。この敵の動き自体、罠かもしれない」
教会堂から小走りに出てきたハンネスが言った。
「ヨルゴス神父と子どもたちの様子を見てきた。パトリシアおね……パトリシア嬢の姿もなかった」
「それは……また、事態は悪化の一途をたどっているようですね……」
「いや、逆だ……。あね……の子であれば、賢いから、なにかしら、目印を残していくと思う。追跡は可能だろう。だからこそ、落ち着いて行動せねば」
それから、ハンネスは改めて言った。
「私は、彼女たちを追う。アベル王子はミーア姫殿下への連絡を……」
「いや、それはダメです。ハンネス卿。あなただとて、ミーアにとっては大切な人のはず。一人で行かせるわけにはいかない。ボクも行きます」
そう言うと、アベルの後ろから、ぴょこんと手を挙げて、ベルが主張する。
「もちろん、ボクも行きます。ハンネス師匠の冒険劇を見ないわけにはいきませんし。それに……アベルおじいさまの雄姿も、見たいですし」
ちょっぴり照れくさそうに、そんなことを言うベルである。
正直なところ、アベルとしては、ベルを連れていくのは気が進まないところではあるが。

一方で、敵がわざわざベルを狙ってきたことが気にかかった。
――あの蛇での廃城でも、狙われたのはベルだった。あれが偶然でなかったとするなら、ここに残すのも危険かもしれない。
敵の狙いが分断であるとするなら、当然、ベルのそばにも護衛が必要になるかもしれない。
アベルは、無言で、矢が何本も突き刺さった盾を拾い上げ。矢じりを剣で斬り落とした。
「では、ミーアたちのところには……」
「あたしたちが……行きます」
立候補したのはヤナだった。
どこか覚悟の決まった顔で、小さな拳をギュッと握りしめて……ヤナは言う。
「必ず、ミーアさまには、お伝えします。だから、パティを……あたしの友だちを、助けてください……」
「それに、オウラニア姫殿下も！」
キリルが忘れないように、と付け加える。
「ああ……。約束しよう」
アベルは小さく頷いて答えた。
その時だった。暗い空が、にわかに明るさを増した。
「夜明けか……」
目を細め、空を見上げる。
夜明けの空から降り注ぐ光は、アベルたちの向かう先の道を照らしていた。

第百三話　信を置くに足る者たち

「むぅ……。では、オウラニアさんは、本当に蛇に連れ去られたと……。しかも、パティまで一緒とは……。それをアベルとベル、それにハンネス大叔父さまが追っている……？」

ミーア、思わず唸り声を上げる。

「カオスですわ……」

蛇の目論見通りかはわからないが、事態はかなり錯綜していた。

あまりの情報量に目をグルグルさせつつも、ミーアは思う。

――もしかして、これってかなりまずい状況なのでは……。

パティが自分から言うとは思えないが、彼女こそがミーアの最大の弱点である。

もし、パティが死んでしまうようなことがあれば、ミーアもミーアの父親も、この世界から消えることになる。

蛇にとっては、大変望ましい状況であるし、人質とするにも、非常に良い人物ではあるのだが……。

「というか、どうしてパティまで……？　あの子はオウラニア姫殿下に縁もゆかりもないはずですわ」

しきりに首を傾げるミーアに、ヤナは先日、誘拐されかけた折のパティの振る舞いを話した。

「……ああ、なるほど。そのようなことが……くぅっ。それは確かに蛇が興味を抱きそうな状況ですわ！」

ちぃっと舌打ちしつつ、ミーアは立ち上がる。

「ともかく、ここで大人しくなどしていられませんわ。急ぎ、追いかけねば……」

ミーアの務め、それは、敵の最大戦力のもとに味方の最強戦力を送り込むこと。すなわち……。

「ディオンさんには、共に来ていただき……」

などと言いかけた時だった。
「ミーアさま、ミーアさまはいらっしゃいますのっ！？」
威勢の良い声とともに、入ってきたのはエメラルダ・エトワ・グリーンムーンだった。
「あら、エメラルダさん……。どうしましたの？　そんなに慌てて……」
「どうかなさいましたの、ではありませんわ！　ガヌドス港湾国の危機ですわ！」
「ガヌドス港湾国の危機って……」
そりゃあ、オウラニアとパティが誘拐されて危機は危機だろうが……、と思うミーアだったが、エメラルダから事情を聞いて、思わずクラァッとする。
「私とエシャール王子は、お義兄さま……」
「お義兄さま……？」
「ああ、シオン王子ですわ。それとキースウッドさんも一緒に、蛇、並びにサンクランド諜報部の残党を追っていましたの」
――はて、サンクランド諜報部……？　そんなのもいたんですの？
初耳の情報に目を白黒させるミーア。一方で、
「なるほど。我が国にも諜報網を作っていたサンクランドですから、ガヌドスのほうまで手を伸ばしているということは十分にあり得ることですね」
ルードヴィッヒは、深々と頷きつつ、深刻な顔をする。
「ティアムーン帝国に関しては、風鴉、白鴉を撤退させると同時に、ミーアさまが国内状況を改善なさいました。彼らが付け入る隙を根こそぎ潰し、彼らに協力しそうな不満分子の懐柔に成功しています。けれど……ガヌドスからは、ただ、風鴉が撤退したのみだった、と」
現地の不満分子を焚きつけ、勢力として訓練し、協力組織とする。それこそが白鴉の目的だった。そして、諜報部隊が本国へ帰還したところで、不満分子は残り続ける。なぜなら、彼らの不満は解消されていないからだ。

「そして、白鴉のジェムに代わってそこに働きかけたのが……新たな蛇だった、と言うことでしょうか……」
シュトリナの言葉に、ルードヴィッヒは頷いた。
「ガヌドス港湾国はそもそもが、ティアムーン帝国を飢饉に陥れるための仕掛けの一部を担う国。いろいろと蛇が突きやすそうな状況が残っていたのでしょう……」
「話を戻しますわ。それで、私たちはその残党を追っていたのですけれど、蛇にそそのかされた彼らは、この国の政府を転覆させるため、今夜、襲撃を計画しているとのことですわ」
物騒な言葉だったが、ミーアには心当たりがあった。
――ヴァイサリアン族の蜂起、国王陛下の暗殺に端を発する騒乱。その中で、オウラニアさんも処刑されるんだったかしら……。
「潮の満ち引きの関係で、今夜が決行の日となったようですけど……」
そう言って、エメラルダは眉間にしわを寄せる。
「ミーア姫殿下、提案がございます」
不意に、ルードヴィッヒが手を挙げた。
「オウラニア姫殿下を誘拐した蛇の対処を、ディオン殿に任せるというのはいかがでしょうか？　そして、ミーアさまは、ヴァイサリアンの民を諫めるため、隔離島に行かれるのはいかがでしょうか」
「む、ぅ……」
彼の言葉に、ミーアは思わず唸る。腕組みして、しばし黙考……先ほど食べたプティングを消費し、脳をガンガン動かす。
そうして……確かにルードヴィッヒの言うとおり、戦力を分散させるよりほかはなさそうだ、と確信する！　ルードヴィッヒの言葉に間違いなどあるはずがないと再確認したのだ。
――本来であれば、わたくしの護衛をディオンさんにお願いしたいところですけれど、パティの身になにかあれば、どちらにしろ、わたくしの存在が消されてしまうわけですし……。それに、アベルのことも気になりますわ。無理して怪我でもしたら……。ベルもつ

いて行っているみたいですし、足を引っ張ってないか心配ですわ。
ゆえに、ディオンにそちらに行ってもらうのは確実として、問題はミーアが隔離島に行くべきかどうかである。
確かに、ヴァイサリアン族のことは気になる。それに、激発しそうな彼らを武力によって押さえ込むというのは、後の世に禍根を残しそうでもある。彼らを止めるには、言葉による説得が必要なわけで……。
さらに、基本的にミーアは部外者である。ヴァイサリアン族から直接的に危害を加えられる理由はないはず……。比較的安全な立場ではあるはずで。
そして、なにより……。
ミーアはルードヴィッヒやアンヌ、エメラルダ、エシャール、さらには、ヤナ、キリルからの期待の視線を感じる。ふつふつと感じる！　ミーアがこんな状況を放置して、一人で安全圏でのんびーりしていることなどあり得ないといわんばかりの、彼らの様子である。
――これ、わたくし、断れないいつものパターンなんじゃ……。
でもなぁ、ディオンが一緒じゃないとなぁ……などと思いかけたミーアであったが、そこで、はたと気付かされる。
自らに向けられた熱い視線は、ルードヴィッヒたちからだけではなかった。
少し離れた場所に立つ皇女専属近衛隊の兵たちもまた、ミーアの命令を今か今かと待っていたのだ。
その真剣そのものの顔を見て、ミーアは、自らの目が曇っていたことに気付く。
――ああ、そうでしたわ。わたくしは、なにを勘違いしていたのかしら……。わたくしは、最強の剣の鋭さにばかり目を奪われて……大切な味方のことを忘れておりましたわ。
前時間軸の頃より、ミーアを守りたてまつりし盾。
忠義の兵士、近衛兵。
真に信を置くべき者たち……。

そのことを忘れていたとミーアは深く反省する。
ゆっくりとした足取りで、ミーアは皇女専属近衛隊の者たちに近づく。
そこに集まっていたのは十名の兵士だった。先頭に立つ見覚えのある男に、ミーアは朗らかな笑みを浮かべる。
「ご機嫌よう、オイゲンさん、お久しぶりですわね」
「はっ！　おひさしゅうございます。姫殿下。この度の任務も全力を尽くします」
生真面目な返事に満足げな笑みを浮かべつつ、ミーアは、オイゲンの後ろに立つ女性騎士に目を留めた。
「あら……？　皇女専属近衛隊に女性の方もいらっしゃいますのね……。いえ、もしかすると、レッドムーン公の私兵団から編入された方かしら？」
「はっ！　セリスと申します。姫殿下」
「ああ、貴女が。ふふ、ルヴィさんから聞いておりますわ。お働きに期待しておりますわよ」
かつて一切、力を貸してくれなかったレッドムーン公。その兵士が、今は味方になってくれている。そのことがなんとも心強かった。
さらに、ミーアは、その隣の青年のほうに目を向ける。と……。
「お初にお目にかかります、エルンストと申します。ミーア姫殿下」
その名には、聞き覚えがあった。
前の時間軸……命を投げうって補給物資を守ろうとした忠義の兵の名前、それが確か……。
「エルンスト……そう。あなたが……」
ミーアは少しだけ遠い目をした。多くの貴族が倒れ、国民からは石を投げられた、あの地獄のような革命期。それでも、ミーアに味方をしてくれた人たちはいたのだ。
それを決して忘れてはいけないと心に刻みながら、ミーアは言った。
「あなたの忠義のことは、しっかりと聞いておりますわ。今日はよ

ろしくお願いいたしますわね」
柔らかな笑みを浮かべた。
――そうでしたわ。わたくしを守る力は、なにもディオンさんだけではありませんわ。皇女専属近衛隊のみながいるのですから……恐れるにたりませんわ。
そっと目を閉じて、ミーアは言った。
「ルードヴィッヒの献策を是としますわ。ディオンさん、オウラニア姫殿下、並びにパティを蛇の手から無事に救い出していただきたいですわ」
「念のために聞きますが、いつもどおり死者を出さずに、ですか？」
「あなたならば、それができると信じておりますわ」
ニッコリ笑みを浮かべつつ、ミーアは近衛兵たちに言う。
「そして、皇女専属近衛隊のみなさま、わたくしは、これより、ヴァイサリアンの隔離島に行きますわ。道中の護衛、よろしくお願いいたしますわね」
ミーアの言葉に、近衛たちが、おう！　と気を吐く。
こうしてミーアは、エメラルダの用意した馬車に乗って、隔離島へと向かうことになったのだった。

第百四話　湧き上がる不安

ミーアたちを乗せた馬車は、一路、港へ向かって道を急いだ。
揺れる車中にて、正面に座ったエメラルダが眉間に皺を寄せて身を乗り出した。
「しかし、ミーアさま、ヴァイサリアンを止めるといっても、どうするおつもりなんですの？」
さも不安そうな彼女に、ミーアは得意げに笑みを浮かべる。
「まぁ、それについては大丈夫なのではないかしら？」
自信満々に言ってのけるミーアである。
実のところ、ミーアは、その問題に関してはさほど心配してはいなかった。なにしろ、ヴァイサリアンが蜂起する理由はすでにないのだ。
彼らが、自分たちの置かれた境遇に対する怒りから、あるいは、それを改善するために、蜂起しようというのであれば、すでに、彼らにはそれをする理由はないのだ。
まさに、そのためにこそミーアは元老議会に出て、発言したわけで……。
――どのような形でかはわかりませんけれど、改善はなされるはずですわ。ヴァイサリアン族側とも、すり合わせが必要でしょうけれど……状況は確実に変わるはず。
なにせ、ここで適当なことをやっては、ラフィーナが黙っていないのだ。
ミーアは改めて、自らの背後で涼やかな笑みを浮かべる、聖女ラフィーナの姿を思う。
――ラフィーナさま、今回はたくさん、お力を借りてしまいましたし……。誕生祭でお会いした時にはたっぷり、お土産をもってお礼をしなければなりませんわね。オウラニアさんや、他の方にも何

か良いものがないか聞いておかなければなりませんわね。せっかくですから、ここでしか食べられないような変わったものを……。
などと、考えが横道に逸れそうな思考を、かろうじて修正して。
「要は、ガヌドス港湾国が変わろうとしているということ、ヴァイサリアンの置かれている状況が改善されることになったことを教えてあげればいいのですわ」
ルードヴィッヒは言っていた。
帝国からは、騒乱を煽る役割の白鴉並びに風鴉が退去し、騒乱の動機となる不満はミーアが一掃してしまった。だから、騒乱は起こらない、と。
ガヌドスですべきことも基本的には同じなのだ。騒乱の動機となる不満が解消されたとヴァイサリアン族に伝え、そのうえで、煽る役割をしている連中を一掃する。
――わたくしの役目は、元老議会に出席した者として、それを彼らに伝えることですわ。ふふふ、議会はもちろん、レムノ王国の兵士たちの前でも、演説をしたわたくしですし、楽勝ですわね。
なぁんて、かるーく考えていたミーアであるのだが……しかし……。ご承知のように、ミーアが自信満々の時というのは、どちらかというとヤバイ時のほうが多いわけで……。

そのヤバイ状況は、港に着いて早々に訪れた。
「ああ、ミーア。来たのか」
ミーアたちを出迎えたのはシオンだった。その後ろにはキースウッドも控えている。
「ご機嫌よう、シオン。それにキースウッドさんも。今日はよろしくお願いしますわね」
小さくスカートの裾を持ち上げてから、ミーアは彼らの後ろに浮かぶ船を見上げた。
「ふむ、エメラルドスター号で向かうんですのね」
あの夏の日以来、ひさしぶりに見るエメラルドスター号は、以前

と同じように美しい姿を誇っていた。
「はい、この船はとてもいい船ですからな。これ以上の船はなかなか用意できませんよ」
ミーアの言葉に、自信満々に頷いたのは、エメラルドスター号の船長だった。イケメン好きのエメラルダが選んだだけはあって、ちょっぴりダンディな、なんとも言えぬ色気を持つ男である。
「無事に、みなさまを島まで送り届けられるのは、この船以外にないと自負しております」
その言葉からは、自らの船と船員に対する自信が窺えた。
その態度に心強さを覚えるミーアであったが、そのすぐそばに立つ男に首を傾げた。
髭面のその男は、エメラルダの好みとはかなり遠い、粗野な見た目をしていたからだ。
「それで、ええと、そちらの方は……」
「地元の漁師ですわ。島の近くの海域に詳しいらしいですわ」
エメラルダの言葉に、髭面の男はニカッと笑みを浮かべる。
「あの辺りは岩礁が複雑だからな。地元のもんの案内がないと難しいのさ。もっとも、それでも辿り着けるか否かは、運しだいってとこがあるが……」
「……はぇ？」
ミーア、きょっとーんと首を傾げつつ、エメラルドスター号の船長に目を向ける。っと、
「こいつは、なかなか腕が鳴る仕事ですな」
力強い笑みを浮かべている。
「……はぇ？」
完全なる誤算であった。
ミーアは忘れていたのだ。ヴァイサリアンの隔離島が、入るのも出るのも難しい環境にあるということを。だからこそ、ヴァイサリアンの民は、そこから逃げ出さなかったのだし、蜂起の日も、今夜でなければならなかったわけで……。

「エシャール殿下と私とで探し当てましたのよ？　あの島に渡ることができる、腕の良い漁師を」
自信満々に胸を張るエメラルダだったが……ミーアの不安は消えることはなかった。むしろ、大きくなっていた。
――だ、大丈夫かしら？　これ、沈んだりは……。
「まぁ、失敗して座礁したら、隔離島まで泳ぐことになるでしょうけど……ミーアさま、きちんと泳ぎの練習続けておりますの？」
そんな風に念押しされ、ミーアはさらに不安を覚えるのだった。

第百五話　こみ上げる不安を呑み込んで

ミーアの覚えた不安感、あるいは、胸の中のモヤモヤ感は、エメラルドスター号が出港してからも、大きさを増し続けた。それは、お腹の底からせりあがってくるような、不安感……否、不快感。そう、すなわち！

「うう……き、気持ち悪いですわ」

……船酔いである。

かつて、帝都に向かう馬車の中で味わったのと同じ気持ちの悪さに、ミーアは、うーっふっと息を吐く。

「ミーアさま、大丈夫ですか？」

そんなミーアの背中を優しくさするアンヌであったが……、次の瞬間、うわわっと声を上げて尻餅をついた。

アンヌがちょっぴりそそっかしいから……ではない。船が、大きく揺れているからだ。

「こっ、これ……本当に、着きますの？　冗談じゃなく沈んだりとか……うぷ……」

なぁんて顔を青くするミーアに、珍しく苦り切った顔でルードヴィッヒが頭を下げた。

「申し訳ありません。ミーアさま。今回は、いささか、ご無理をお願いしてしまいました。本来であれば、ヴァイサリアンのことは他国のことに過ぎないこと。ゆえに、ミーアさま御自ら、このように命懸けで行く必要はなかったのかもしれません」

――あら？　これ、やっぱり命懸かっちゃってますの？

などと、ちょっぴり慌てるも、それを口には出さずに呑み込むミーア。否……。

「うっぷっ……」

呑み込んだのはこみ上げてくる吐き気のほうだったかもしれない。

まぁ、どちらでもいいか。
「されど、これは、ティアムーン帝国がこの先、百年、二百年、誤りなく進むために必要なことであると信じます」
「二百年……。それは、ずいぶんとスケールの大きい話ですね」
そう指摘するのは、ミーアの隣に座るシュトリナだった。ルードヴィッヒは大きく一度頷くと、眼鏡を軽く押し上げてから、ミーアのほうを見つめて……。
「ミーアさまも、そうお考えなのではないですか？」
対して、ミーアは黙ったまま、かすかにうつむくのみだった。吐き気が……こう……声を出すとヤバそうな感じだったからだ。
ルードヴィッヒはもう一度頷いてから続ける。
「古き盟約……ティアムーン帝国に施された初代皇帝陛下の呪い……。もともとの帝国にとって、ガヌドスは、滅びの構想の一部。いわば属領のようなものだった。だからこそ、侵略するようなことは、ただの一度もなかった」
国が違えど、彼ら、ガヌドスもまた初代皇帝の思惑の中にいた者たちなのだ。帝国は、食料不足……飢饉によって滅びる仕組みを維持しなければならない。だからこそ、国として、帝国から攻められることはなかった。今までは……。
「その盟約は、ミーア姫殿下によって破棄されました。それ自体は素晴らしいことですが、はたして、ミーアさま以降のティアムーン帝国の皇帝たちは、この海に面した土地という魅力に抗い続けられるでしょうか……？」
ルードヴィッヒの問いかけに、シュトリナは悩ましげな顔をした。
「確かに……ベルちゃんが帝位を継げば大丈夫だろうけど、それ以降はわからない……」
その意見には、ミーアも頷かざるを得ないところがあった。
別に、ミーア以降のなどと言う必要はない。ミーア自身も、あの革命を体験していなかったら……、自らの蒔いた種を自らが刈り取るという真理を実感できていなかったとすれば……どうだろうか？

舶来の、未知のあまぁいお菓子の誘惑に抗うことができるだろうか？

そのお菓子を、自らの手で取り寄せたいという欲求に抗うことができるだろうか？

「そうですわね。それは確かに難しいでしょうね……」

ルードヴィッヒは静かに頷く。

「中央正教会の教義は“神より賜りし土地”に、非常に重きを置くものです。自分に与えられた土地で満足するように、と諌め、他者のものを欲しがることを戒める……そう言った特徴があります」

それゆえ、他国の土地を奪い取り、己が利益を増やす、という考え方を否定し、強く非難する。無論、サンクランドのような理屈の立て方もできるが、あれはあくまでも、他国の統治が上手くいっていないことが前提だ。民が苦しんでいるという状況を正すための手段に過ぎない。

基本的に、中央正教会は、武力や外交的圧力によって国境が動くことを許容しない。

だからこそ、帝国が武力を以てガヌドスを侵略するなどと言うことになれば、非難を受けることは避けられない。

「戦によって得られる利益は、他国からの非難を凌駕するものになる、と主張する者は必ずいるでしょうが……私は懐疑的です。仮にさしたる抵抗を受けずに土地を占領できたとして、その時に得た悪評は、恨みは、幾代にもわたり、帝国に付きまとう呪いとなるでしょう。短い時間で大きな利益を得られる……などと言う甘い話に反動がないはずがない」

「ふむ、しかも、短期間で多くの利益を得たい時というのは、そうせざるを得ない状況に追い込まれた時が多いですからね。判断を誤る可能性は大いにありそうですわ」

前時間軸において、滅亡寸前の空気を吸ったことのあるミーアはよく知っている。

人は追い詰められた時にこそ、一発逆転を求めて、安直な手段を

選びがちなものなのだ。その結果……。
「国を立て直すため、侵略に出て、さらに国の死期を早めるなどと言う本末転倒を容易にやらかしてしまいそうですわね……」
だからこそ、ガヌドス港湾国と新たな関係を、しっかりと構築しておかなければならない。
オウラニア姫との関係をしっかりと結んで置き、なおかつ、国内にセントノエル・ミーア学園の共同研究施設を作っておくことで、未来の帝国皇帝に、ガヌドスを侵略する隙を与えない体制を作るのが大切なのだ。
ミーアは静かに目を開ける。峠を越えたのか……吐き気は幾分か軽くなっているような気がして……。
「ええ。大丈夫ですわ。ルードヴィッヒ。あなたのしようとしていることは、わたくしの心と一致しておりますわ。ガヌドス港湾国には、隣人として、平穏を保っていていただかなければなりませんわ……うっぷ」
微妙に、吐き気がぶり返してきて口元を押さえるミーアであった。

第百六話　連れ去られた二人

時間は、少しさかのぼり……。
教会から連れ去られたオウラニアとパティは、それぞれ抱えあげられて、狭い路地裏を運ばれていた。
時折、寝間着を掠めるほどに壁が近い、とても道幅の狭い裏道。その壁が近づく都度、パティは教会の子どもたちから失敬した落書き用の蝋石で壁にガリガリッと印を描く。
建物の持ち主には申し訳ないが、子どもの落書きだと諦めてもらうことにして。
幸いにして、空はまだ暗い。気付かれることはないだろう。
そうして何度も角を曲がり、曲がり。やがて、彼らの前に広い道が現れた。
そこには、一台の馬車が停まっていた。
パティは咄嗟に蝋石から手を放した。かつん、と落ちる音が鳴ったが、幸いにして、彼女を背負った男には聞こえていないようだった。
そのまま、パティたちは、どさっと道に放り捨てられる。
きゃっ！　と、ミーアの祖母には似つかわしくない、可愛らしい悲鳴を上げるパティ。そんなパティに、オウラニアが心配そうな視線を向けてきた。
「平気ー？　パティ？」
問いかけに、無言で、コクリと頷くと同時、馬車から男たちが降りてきた。
「やれやれ、どうにか上手くいったみたいで。いやぁ、ディオン・アライアがあそこにいないで良かったですよ」
手前には、先日、馬車を襲ってきた男がいた。その隣には、額に火傷の痕がある男。さらに、足取り軽くオウラニアのほうに歩み寄

ってきたのは、バンダナを巻いた男だった。
「ほーう、なるほど。これがオウラニア姫殿下ね」
パティの記憶に間違いがなければ、それは、先日、ガヌドス国王を狙いに来た暗殺犯だった。
オウラニアも、それに気付いたのか、口をポカン、と開けている。
面倒なことにならないように、と口を開こうとしたその時、まるで機先を制するように先日の誘拐犯、こと、火燻狼が微笑みかけてきた。
「いやぁ、またお会いしましたね」
などと、気安げに手を挙げる男を、パティは、表情一つ変えずに見つめる。
「おや、あまり驚いてはいただけないようで……」
「……どうして、あの時、私たちを連れ去らなかったの？」
小さく首を傾げて、パティは言った。
「あの時？　ああ、先日は、手が足りなかったもので……」
その答えに納得がいかずに、パティは小さく首を振った。
「これだけの戦力を揃えられるのだから、やろうと思えばできたはず。なのに、今日まで待ったのには、理由があるの？」
「いやぁ、正直なところ、できれば手元に置いておきたかったのは山々なんですがねぇ、色々と事情がありまして」
燻狼は、肩をすくめつつ、バンダナの暗殺者のほうにひょこひょこ歩いていき、その肩にポンと手を置いた。
「彼、カルテリア、というんですがね？　少しばかり乱暴者でしてね。そちらの……」
っと、燻狼はオウラニアのほうに目を向けて、困ったような笑みを浮かべる。
「オウラニア姫殿下に、個人的な、たいそう深い恨みをお持ちなのでね。もしかしたら、殺してしまうのではないか、と思った次第で」
「蛇なのに、個人的な恨みで計画を破綻させるの？」
不思議そうに、目を瞬かせるパティに、燻狼は朗らかな笑みを浮

かべた。
「ははは、蛇らしくないでしょう？　これなら、よっぽど、貴女のほうが蛇らしいと思いますよ、蛇の教育を受けた、蛇じゃないお嬢ちゃん」
　燻狼は顔を寄せて、パティの目を覗き込む。
「まぁ、巫女姫さまは、色々な蛇がいたほうが混沌としていていいって言ってましたがね。ところで、お嬢ちゃんは、どうして自分まで連れてこられたのか、わかってるかい？」
　問われ、パティは小さく頷いてから、
「私が、蛇を名乗ったから？」
「まぁ、そんなところなんだが……。いや、実際、気になっちまいましてね。今や、あの帝国の叡智のせいで、我らが蛇は蛇の息、いや、虫の息……」
　道化師のようにおどけた仕草で首を振り。
「っというか、それ以前に蛇の教育を専門的にできるところなんか、もともと、数えるぐらいしかないはずなんだ」
　わざとらしく指を折り、数え上げていく。
「まず、巫女姫さまのところに、イエロームーン公爵家も一応はそうかな。それと、ヴァイサリアン族の一部にも、まぁ、“地を這うモノの書”があるからできるか……。それに、クラウジウス家だ……けどねぇ」
　顎に手を当てつつ、燻狼は笑みを浮かべる。
「お嬢ちゃんは見たところ、ヴァイサリアンには見えないし、俺たち騎馬王国の人間でも、たぶんない。となると……はて、不思議なことにイエロームーン家で、お嬢ちゃんのような子どもを預かってるなんて話は聞いたことがない。かといってクラウジウス家も当主がいなくなって以来、まともに活動していない。すると、どういうことになるのか……」
　燻狼はゆっくりとした足取りでパティに歩み寄り、ジロリと睨みつけてくる。

「お嬢ちゃん、あんたは、いったい何者だい？　どうもあんたは、どこかで見たことがある気がするんだがね……」
対してパティは、燻狼から目を逸らさぬようにジッと見つめ返した。心を読まれないように、弱みを見せないように……表情を動かさぬように懸命に努める。
さらに、燻狼が何かを言おうとした、その瞬間だった。
「つまりー、私を人質に、お父さまを呼び出そうってわけねー？」
だしぬけに、オウラニアの、どこか気の抜けたような声が響いた。空気を読まないようなその言葉に、けれど、パティは作為を感じる。
――オウラニア姫、私を助けてくれた？
パティの見たところ、オウラニアは決して頭が悪くはない。むしろ、機転が利くほうだと思う。さらに今のように、頭の良さを隠して、あえて馬鹿なふりをしているようにも見える。
――その辺りは、ミーアお姉さまと似てるかもしれない。
などと、一人頷くパティであるが……それは、どうだろう……？
「でもー、お父さまは、私を人質にしても来ないと思うけどー。だって、私のことを、犯人扱いしてるのよー？」
その指摘に、燻狼は再び笑みを浮かべた。
「確かに、そいつは道理だが。まぁ、大した問題じゃない。多分、来ますよ、王は。貴女とは一切関係のない……貴方より大切な子どものためにね」
「……え？」
虚を突かれた様子のオウラニア。対して、バンダナの男が不満げな顔をする。
「なに？　そうなのか？　ならばなぜ、オウラニアを連れてきた？　王の目の前で殺すのか？　あるいは民の前で……？」
「あー、まぁ、殺すのも悪くはないんでしょうがね。俺としては、できれば生きたまま使いたいんですよ」
燻狼は呆れた様子で首を振った。

「あんたのような、暗殺者にはわからん感覚なのかもしれないが、人は死ねばそこで終わる。けれど、生きたまま堕とせば、周囲の者を破壊する、蛇の手先に成り代わる。人は、生きたまま堕としたほうが、世界ってのは歪み、壊れて、混沌に堕ちるもんですよ？」

その理屈は、パティにもわかった。

もし、この地域を混沌に堕としたいのであれば、力のあるティアムーンの統治に委ねてはならない。これから善政を敷くであろう、帝国の叡智の手にガヌドスを委ねることは、地域を安定させ、より長い平和へと繋がる道を開くことになる。

だから、王族を殺し、ガヌドスをティアムーンの属領にするようなことがあってはならない。

蛇にとっての理想は、おそらく、腐った国王に統治させること。統治者が悪である、ないし、力がないため民が荒れる。それが最も蛇にとって都合がよい状況だ。

ゆえに、燻狼はオウラニアの心を攻めようとしている。

「さぁ、それでは、そろそろ参りましょうか」

そうして燻狼は、芝居がかった仕草で、馬車のほうを指さした。

開け放たれた扉から見えるのは、まるで、闇が充満しているように暗い車内だ。一瞬、躊躇した様子で立ち竦むオウラニア。その手を、そっと、パティが握る。

先ほど助けてもらったお礼に、と励ますように……。

オウラニアは、ハッとした顔でパティのほうを見てから、すぐにキリリッと表情を引き締めて歩き出した。

第百七話　キースウッド、生き生きと種（ヤバイ）を蒔く！

さて、ようやくミーアが揺れにも慣れてきた頃、エメラルドスター号は隔離島のそばまで来ていた。

もともと島との距離は、そこまで遠くはなかったのだ。それは、腕の良い船乗りであれば、ちょっとした小舟でも行って帰って来られる距離。それならば、なぜ、ヴァイサリアンの人々は大人しく島に引きこもっているのか……。

一つには世代交代が成されたため、かつて船上で暮らしていた頃の技術が、ほとんど失われてしまっていたから。

そして、もう一つの理由こそが、島の周りを囲む、複雑な岩礁にあった。

島に近づけば近づくほど、水の流れは複雑になり、そのうえ波も高いから転覆の恐れもある。少しでも油断すれば、暗礁にだって乗り上げる。ゆえに、この海を知る船乗りであれば、好んで近づこうとしない場所が、この島だった。

「正直、私も気乗りはしないのですが、今回は挑戦してみましょう。大丈夫、案内人もいますし、このエメラルドスター号ならば行けます。物資を運ぶ輸送船でも行けるわけですし……」

そう豪語したのは、エメラルドスター号の船長だった。

ガヌドス出身の彼をして、島に近づくのは容易なことではないらしい。

船室から、固唾を飲んで行く先を見守っていたミーアであったが……船の揺れと打ち付ける波に怯んで、早々に室内に視線を移してしまった。ミーアの小心（チキンハート）には、少々、耐え難い光景であったので。

「これは……心配しても詮無きことですわ。エメラルダさんがあの船長を信じると言うのであれば、わたくしも信じるのみ……」

今まで幾多も命の危険を、忠ある人と、忠ある（かはやや微妙な）

馬と成り行きとに委ねて、すべて乗り切ってきたミーアである。
他人の手に責任と運命を委ねることなど、造作もないことなのだ。
そうして、ふと、ミーアは子どもたちのほうに目を向ける。ヤナとキリルは、ミーアと同じく、ちょっぴり不安そうな顔をしていた。
……ちなみに、もう一人の子ども……、すなわち、エメラルダについてきたエシャール王子は、ワクワクを抑えきれない様子だった。兄シオンの手伝いをしつつ、このようなちょっとした冒険に参加できるのが、嬉しくてたまらないようだった。
そんなイケメン兄弟の交流を見守るエメラルダも、実に満足そうな顔をしている。満ち足り切った顔をしている！
……まぁ、幸せそうで何よりである。
「二人とも、大丈夫ですの？」
ミーアは、子どもたちに声をかけた。顔を上げたヤナは、キリルの頭を撫でながら、気丈にも頷いてくれた。
「ふぅむ、しかし、二人を危険な場所に連れてきてしまったのは、少々、気が咎めますわね。申し訳ないことをしましたわ」
実のところ、この二人を連れてきたのは、完全な演出だった。
今回の件において、帝国の姫、ミーアは完全な部外者である。
だからこそ、安全圏にいられるし、逆に、第三者だからこそ届く言葉というのもあるかもしれないが……よそ者は黙っていろ！　と言われてしまう可能性も大いにある。
そんな時、彼らと同じヴァイサリアンの子どもを自分が保護していると言えばどうか？
少なくともミーアは無関係の第三者ではなくなる。どちらかと言えば、自分たちに味方してくれる、他国の姫君ということになるだろう。
そうなれば、話を聞いてもらえる可能性だって高くなるはず。
――それに、もしもなにかがあったら、二人にかばってもらえばいいですし……。
安全策は二重、三重にかける。それこそが、ミーアの生存戦略で

ある。
近衛たちに守ってもらう前に、そもそもヴァイサリアンと敵対しないように策を講じる。その策のキーパーソンがこの二人なのだ。
「あたしたちは、ミーアさまに救われましたから、そのお礼がしたい。それに、ミーアさまやパティ、オウラニア姫殿下が頑張っているのに、あたしたちがなにもしないなんてこと、あり得ません」
姉の言葉に、キリルも迷いなく頷く。
澄んだ瞳で自分を見つめてくる子どもたち。そんな彼らを、自分の都合で連れてきてしまったことにミーア、ちょっぴり罪悪感を刺激される。が……。
「ミーアさま、ここには、覚悟のできていない者など一人もおりませんのよ？」
話を聞いていたのか、エメラルダが、なぜだか、偉そうなドヤ顔で言う。
「みな、ミーアさまに協力したい、ミーアさまの為そうとしていることのお手伝いがしたいって、思っているんですもの」
その言葉に、子どもたちも、シオン、エシャールの両王子も、ルードヴィッヒにアンヌまで、力強い頷きで答えてくれた。
「そう……それならば、まぁ、よろしいのですけど……」
「みなさん、もうそろそろ、島に到着するみたいですよ。そろそろ、上陸の準備をしたほうがいいでしょう」
そこで、タイミングよくキースウッドが船室に入ってきた。
心なしか、キースウッドは実に、生き生きした顔をしていた。なぜだろう、割と危機的状況にも関わらず、実にいい表情をしている。それを見て、ミーアは思わず首を傾げるも……。
――ふぅむ、キースウッドさん、さては、海が好きなんですのね？
すぐに察する。なるほど、彼は女性にモテそうだし、海とかで遊ぶのが好きなのだろうなぁ、と……。
――あ、そうですわ。キースウッドさん、お料理が得意ですし、海が好きならば、海のお料理にも詳しいのではないかしら？　今度、

いくつか教えていただくというのも良いかもしれませんわね。
などと、新たな危機の種が、ミーアの胸の内で芽生えつつあったわけだが……。
生き生きと、つやつやした顔をするキースウッドは、そんなこと、知る由もないのであった。

まぁ、それはともかく。およそ半刻後、ミーアたちは、ヴァイサリアンの隔離島へと上陸を果たすことになるのだった。

第百八話　荒地に道を

ミーアたちに先立ち、皇女専属近衛隊十名とグリーンムーン家の私兵十名が島に上陸する。ゴツゴツとした岩が転がる殺風景な島は、いかにも恐ろしげで、グリーンムーン家の私兵たちは、どこか落ち着きのない顔をした。

一方で、皇女専属近衛隊の面々は、落ち着いたものだった。島に降り立つや否や、すぐに陣形を組んで、周囲の警戒を開始する。

「少し、足場が滑るな。みなさまに注意を促さねば……」

辺りを冷静に観察するオイゲンのそばで、エルンストは、いささか心ここにあらずな様子で、黒々とした岩地を眺めていた。

「そう緊張することもないぞ、エルンスト」

オイゲンから、気遣わしげな口調で声をかけられた彼は、ゆっくりと首を振る。

「すみません。緊張というか、考えていました」

「考えていた、なにを？」

「先ほどの、ミーア姫殿下のお言葉を……」

エルンストは、ミーアからかけられた言葉をずっと反芻していた。

「俺の忠義を知っている……とおっしゃられていましたが、正直なところ、忠義などという言葉に値することをしていなかったもので……」

困り顔をするエルンストである。普通に考えれば、誰かと誤解しているのではないか？　とか、知らなくて、口から出まかせを言っているのではないか？　などと思ってしまいそうなものだが……不思議とそうは思わなかった。

むしろ、その胸にあったのは「報われた」という感情だったのだ。

「別に驚くことはない。お前が真面目に任務に取り組む男であることは、みなが知っている。その評価をミーアさまもまたご存知であ

ったというだけのことだ」
オイゲンは、エメラルドスター号のほうに目を向けつつ、続ける。
「そういうお方なのだ、あの方は……。我らが命を懸けてお守りするのは当然のこと。されど、あの方は、それを当然のこととは思わず、忠勤であると、しっかりと評価してくださるのだ」
そうしてオイゲンは、若いエルンストのほうに目を向ける。
「励めよ、エルンスト。姫殿下は、我らをしっかりとご覧になっていてくださる。お前の生真面目さや、馬鹿正直さは、ここでは決して無価値とはされない」
その言葉に、エルンストは静かに頷いた。
皇女専属近衛隊へと編入されて以来、ずっと疑問であったこと……否、それ以前よりずっと心に引っかかり続けた小さな不満が、スゥっと溶けていくのを感じて……。
っと、次の瞬間、彼らは同時に剣の柄に手をかけた。
二人の周りの、同僚たちもまた、同じく武器に手をかけ、あたりに鋭い視線を放っていた。
ディオン隊の面々によって、あるいは隊長バノスによって、彼らは鍛えられていた。
帝国最強ディオン・アライアには及ばないまでも、その練度は、帝国軍最精鋭部隊と言っても過言ではない。
ゆえに、気付くことができた。
岩陰からこちらを窺う人々。武器を構え、こちらを窺う者たちの存在に。
「……かなり、数が多いですね。オイゲン殿。どうされますか？」
凛とした声で聞いてきたのは、エルンストと同じく編入組のセリスだった。臆することなく、潜む者たちを見やりつつ。
「見たところ相手は烏合の衆。一戦して、こちらの武威を示せば、制圧することは可能かと思いますが……」
その意見には、エルンストも賛成であった。
烏合の衆とはいえ、武器を持った人間が大挙して襲ってくれれば、

町は大混乱になるだろう。ガヌドスの兵も、さほど練度が高いわけではない。ゆえに、作戦次第では、彼らは十分脅威と言えるだろう。
ここは、一戦して彼らの士気をくじくべき、というのは、当然の判断だ。
しかし、オイゲンは、ゆっくりと首を振った。
「凡百の軍ならば、そうするだろうが、我々はそうはしない」
その判断にも、また、納得できる部分があった。
相手は、まだ、こちらを敵だとは認識していない。彼らの敵はあくまでもガヌドス港湾国。対して、こちらはガヌドスの軍ではない。ゆえに、無理に戦闘する必要はない。烏合の衆とはいえ、数の差は、やはり脅威には違いない。戦わずに済むならばそれに越したことはない。
エルンストはニヤリ、とおどけた顔をして、
「なるほど。栄えある帝国軍は、そのような乱暴なことはしないと……？」
けれど、その質問に、オイゲンはいたって真面目な顔で答える。
「いや、違う。我らは帝国軍である前に、ミーア姫殿下の軍である」
堂々とそんなことを言った！
思わず困惑するエルンストとセリスのほうに目を向けて……。
「ゆえに、我らは、どれほど劣勢であったとしても、決して怯まず、堂々と進軍する。どのような絶望的な戦いであっても、決して引くことなく、ただ、姫殿下の栄光を守り、その御心を為すのみ」
朗らかに、高らかに、オイゲンは続ける。
「しかし、今、ミーア姫殿下の御心は戦うことにあらず。我らは、ミーア姫殿下の軍である。ゆえに、我らが示すは武威にあらず。ただ、ミーア姫殿下の溢れる栄光のみである」
そうして、オイゲンは近くにあった岩の上に登り、高々と声を張り上げる。
「武器を収めよ！　ヴァイサリアンの民よ。我らは、ティアムーン帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンの軍である！　我らは、

貴殿らと剣を交えるために来たのではない」
　刹那の沈黙、その後、
「ティアムーン帝国の兵よ。問おう。ならば、なにをしにここに来たのだ？」
　声は岩陰、どこからか響いた。
「そうだ！　この良き日、我らの願いが叶わんとする、この復讐の日に、外国の軍がなにをしに来た？　我らに手を貸すためか？　それとも、その武をもって我らを掣肘（せいちゅう）するためか？」
　同調するように、声が上がる。それらが静まるのを待って、オイゲンは言った。
「我らは、ただ、ミーア姫殿下の良き報せを告げに来たのだ」
「良き報せ？　面白い。この期に及んで、どのような朗報があるというのか？　ガヌドス国王が死に、ガヌドスの民に報復する。それ以上に良き報せがあるのならば、言ってみろ」
　声が聞こえたほうに目を向けて、オイゲンは首を振る。
「それを貴殿らに届けるのは、我々ではない。我らが敬拝する、帝国の叡智、ミーア姫殿下ご自身である！」
　堂々たる宣言。瞬間、どよめきが辺りに広がった。
「帝国の皇女殿下が、この島に直接来ていると……？」
「そうだ。貴殿らのことを捨て置けぬと、この荒海を超えていらっしゃったのだ。今一度、言おう。ヴァイサリアンの民よ。武器を下ろし、姫殿下の御声に耳を傾けよ。もし、そのご厚意を踏みにじることがあれば、我ら近衛が当千の働きを持って、貴殿らを滅するだろう！」
　かくて、忠義の兵たちによって、ミーアへの期待と注目は高まっていくのだった。

第百九話　ミーア姫、演出もぬかりなく

「なるほど、ここがヴァイサリアンの民が閉じ込められている島ですのね……」

隔離島に渡ったミーアは、揺れない足場にホッと一息。ちょっぴり酸っぱい息を呑み込んでから、改めて辺りを見回す。

――しかし、ずいぶんと殺風景なところですわ。とても暮らしづらそうな場所で……。ふむ、これならば問題ないかしら……？

ミーアは自分の中で懸念が一つ消えたことを感じる。

そう、島に渡る前、ミーアは少し心配していたのだ。

もしも……島が、割とまともなところだったらどうしよう……と。

なにしろ、この島には、食料が届けられている。船を作っているというのなら、船の材料も届いているのだから、それを住居に当てることもできるかもしれない。

服なども送られてきているとするなら、衣食住が揃ってしまう。

いかに島に閉じこめられているとはいえ、衣食住が揃い、それなりの環境だったとしたら、助けに来たミーアたちがバカみたいではないか。

――閉じこめられるのは辛いものでしょうが、それは外の世界を知っているからそう思うだけのこと。この島で生まれた世代にとっては、ここは紛れもなく故郷のはず。別に普通に暮らしてますが、なにか……？　などと言われたらどうしようかと思いましたわ。

幸せの押し付けはミーアの望むところではない。その意味では、一安心であるのだが……。

――しかし、このような場所では甘い物も満足に食べられないでしょうし、それは、とても可哀想なことですわ。

思わず、憐みの視線を向けてしまうミーアである。っと、その目に、岩に溶け込むようにして立つ男の姿が見えた。その手には長い

槍がある。恐らく、今日、ガヌドスを攻めようとしていた戦士なのだろう。
思わず踵を返して逃げそうになるミーアであったが、ヴァイサリアンの戦士たちが襲ってくることはなかった。
ただ、黙って、ミーアたちのほうを見つめていた。
「ふむ、これは……」
「彼らは、ミーア姫殿下のお言葉を待っているのです」
先に船を降り、周囲を警戒していたオイゲンが、恭しく報告する。
「我々は敵ではないと伝えはしましたが、その言葉を真に受けることは難しいのでしょう。ゆえに、ミーアさまご自身のお言葉により、それをお示しいただきたく……」
「今は、わたくしたちが敵か味方かわからないから、とりあえず戦わないようにしている、そんな状況ということかしら……」
小さくミーアが首を傾げれば、そのそばでシオンが納得の頷きを見せる。
「なるほど。彼らを組織し、戦えるよう訓練したのは、サンクランドの諜報部「白鴉」だ。連中の建前が『サンクランド国王による公正な統治を、全地に広めること』だとするなら、その作戦は自ずと、サンクランドの援軍を頼りにしたものになる」
すなわち、ヴァイサリアンは外からの援軍を頼りに内乱を起こそうとしているわけで……ガヌドス以外の国をないがしろにはできないのだ。
まして、大国にして隣国、ティアムーン帝国の皇女ミーアの存在を無視できるはずもなし。
「それはよくやってくださいましたわ。よく戦わずに、この状況を作り上げてくれましたわね、オイゲンさん」
ミーアは、目の前の状況に満足して、オイゲンを労う。
議会の話さえすれば、すべてが解決する状況において、一番の懸念点は、大人しく話を聞いてもらうことだった。それを最初からクリアできたことは、ミーアにとって朗報だった。

不安は微塵もなかった。すでに言うべきことは決まっている。船の中で確認したとおりである。
――境遇が改善され、解放されるということをお話しすればいいだけのこと。どうやって聞いてもらおうかと思っておりましたけれど、こうも状況が整っているというのなら、言うことなしですわ。
ミーアは自らに集まる視線を感じつつ、ヤナとキリルに目を向ける。
「ヤナ、キリル、二人ともわたくしのそばへ」
せっかく一緒に来てくれたのだ。遠慮せず、二人に協力を求める。
見られているというのであれば、ここはアピールチャンスである。自分がヴァイサリアンの子どもたちと友好関係を築いていることをアピールするのだ。
それから、ミーアは穏やかな顔で声をかけた。
「それでは参りましょうか。話すのにちょうど良い場所はあるのかしら？」
「はい。調べてあります。どうぞ、こちらです」
オイゲンはそう言うと、胸を張り、声を張り上げる。
「皇女専属近衛隊、これよりミーアさまを護衛しつつ前進。無用な戦闘は避けるように。されど、もし、ミーアさまに害を為さんとする者がいれば、ただちに制圧せよ」
その指示に応えて、ミーアたちの周りに、陣形が作り上げられていく。一糸の乱れなく、自らの周りを固める兵士たち。忠義の兵エルンストや、元ディオン隊の手練れ、元レッドムーン家の腕利きの女性兵たちなど、バラエティに富んだ皇女専属近衛隊にミーアは改めて心強さを覚えつつ、ゆっくりと歩き出した。
まるで、ミーアの身体の一部のごとく、その歩みに合わせて動き出す兵たちに、シオンらが感嘆した様子で、ため息を吐いた。
「さすがに練度が高いな……」
「そうですね。よく訓練されています」
自分が褒められたわけではないのだが、満更でもないミーアであ

る。偉そうに、ふっふーん、と鼻を鳴らしつつ、ミーアは海岸線に沿って歩いた。
進むにつれて、次々と、人々が姿を現わしていく。彼らは、みな、兵たちに怯えた顔を見せていたが、その中央を歩くミーアを見、さらに、ミーアが親しげにヴァイサリアンの子どもたちと話すのを見て、わずかばかり表情を和らげていた。
やがて見えてきたのは、無数の船だった。どの船の前にも丸太が並べられていて、どうやら、その船を駆って、彼らは本土に渡ろうとしていたらしい。
おそらく、もともと造船をする場所だったのだろう。現場監督が乗るのであろう、木製の台が据え付けられた場所だった。
そこに登ったミーアは、静かに息を吐き、声を張り上げる。
「ヴァイサリアン族のみなさん、わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーン。ガヌドス港湾国の隣国、ティアムーン帝国の皇女ですわ」

第百十話　解放を告げる者

自己紹介の後、ミーアはスカートの裾をちょこん、と持ち上げる。
完璧な礼を見せた後、ミーアは顔を上げる。
集まってくる視線を意識しつつ、ミーアはサッと手を横に出して……。
「それと、こちらには、サンクランドのシオン王子殿下もいらっしゃいますわ。ねぇ、シオン、あなたからも、なにかございますかしら？」
今のミーアに抜け目はない。
ヴァイサリアンを先導したのが、サンクランドの諜報機関だと事前に聞いていたため、しっかりとサンクランド側の権威も味方に付いていることをアピールしておく。
「ないことはないが、まずは、君に任せよう」
「それでは、僭越ながら、わたくしのほうから……」
一度、喉を鳴らしてから、ミーアは言った。
「今日は、ヴァイサリアンのみなさんに、良き報せを持ってきましたの。喜ばしき解放の報せを。結論から言うと、あなたたちは、この島から出られますわ」
そうして、ミーアは本日の議会での話を繰り返す。
ヴァイサリアンのこれからについて。ガヌドスのこれからについて。
味方になってくれる聖女ラフィーナの偉大さと権威の大きさ、また、すべてがガヌドス王女オウラニアの手によってなされること……。
もう怖がる必要はないのだということ……などなど！
できるだけ自分の功績やら責任やらの部分を小さめにしつつ、切々と、ペラペラと語り倒した。

そうして、言うべきことを指折り数えた後、さて……言うべきことはすべて言ったかしら……？　などと、念のためルードヴィッヒのほうを窺ってから、ミーアは高らかに宣言する。
「それゆえに、あなた方が剣を取る必要はない。戦により、血を流すことはない」
「かくて、ガヌドスの平和は保たれる、と……。そういうことか……？」
どこかから声が聞こえる。その声にミーアは深々と頷き、
「そのとおりですわ。それも言葉だけの、上っ面だけの平和ではない。ヴァイサリアンへの抑圧なき、公正な平和ですわ！」
勝利を確信しつつ、ミーアは声のほうに目を向ける。が……。
「だが……復讐はどうなる……？」
どこか重たい一言に、ミーアは海から断頭台が上陸してきたのを感じる。
「ヴァイサリアンの、我々の……親たち、祖父母たち、先祖たち……その者たちから託された無念は、怒りは、どうなるというのだ？」
その声に同調するように、次々に声が上がる。
「我らにとって今日は、まことにめでたき日なのだ。わかるか？ミーア姫殿下。我らが大願は、今日、成就せん。我らを虐げし、ガヌドス港湾国の民に鉄槌を下す機会がようやく訪れたのだ」
「そうだ。我らは今日この日を待っていた。待望の日だ。祖先より託された憎悪を晴らすのは、今日なのだ」
次々に上がる声、声、声。あふれる声の大波を前に、ミーアは……思わず考え込んでしまう。
「先祖の恨み……」
口の中でつぶやいて、その言葉をじっくり吟味する。
「先祖の……恨み？」
相手の気持ちを理解するためには、自分のことに置き換えて考えるのが大事である。その基本に則り、ミーアはじっくり考える。
では、ミーアにとっての先祖とは誰か……？

それは、そう。他でもない。あの厄介者かつ面倒ものの……。
――初代皇帝の、恨み……？
そこに、想いが至った時、ミーアはそっと口を開いた。
「あなたたちが敬愛されるご先祖は、そのようなことを決して望んではおりませんわ。血で血を洗う復讐のために、あなたたち、子孫の命を浪費させようなどと……そんなことを、考えているわけがありませんわ」
「口から出まかせを言うな」
どこかから、ミーアを糾弾する声が響く。
「なぜ、お前にわかる？　我らの祖先のことが、親や、祖父母の気持ちが……、帝国人のお前などにわかるはずがないではないか！」
攻撃的な色の滲み出た言葉に、ミーアを守る皇女専属近衛隊の者たちの顔に緊張が走る。が、ミーアは涼しい顔でそれを聞き流し……。
「いいえ、これは口から出まかせではなく、厳然たる事実ですわ」
ぴしゃりと言い切る。
「なぜなら、あなたたちの先祖が、本当に、あなたたちが敬愛するような人たちであったのなら……あなたたちに、復讐を望まないでしょうから」
ミーアは初代皇帝を尊敬しない。敬愛もしない。なぜなら、それに値しない人物であると考えるからだ。自分に幸をもたらさぬ者を、自分たちに害しか残さない者を『ただ、自分の祖先である』という理由だけで尊敬するのは理不尽である、と……。
初代皇帝の企みによって首を刎ねられたミーアは思うからだ。
そして……。
「もしも、本気で『自分の復讐』のために『自分の納得いかないという感情』のために子や孫、それに連なる人たちを犠牲にするというのであれば、そうするのが当然である、とそう考えるのであれば……」
ミーアは顔も知らぬ初代皇帝に向かい、高らかに告げる。

「そんなやつは……くそったれですわ！」
大国の姫には似つかわしくない、ちょっぴりはしたない言葉に、ヴァイサリアンの民たちが静まり返る。ミーアのそばにいた人たちの中にも、驚きに目を見開く者たちがいた。
ミーア、ちょっぴり反省しつつ咳払い。それから、改めて断じる。
自らの先祖、帝国を立てた偉大な男……初代皇帝に向けて、ミーアは言ってやる。
「そんなやつは、敬愛に値する祖先などでは決してありませんわ。自身の怒りを晴らさせるため、無念を晴らさせるために、子孫の人生を浪費させようとするなど……そんなやつはろくでなしですわ！」
もはや届くことのない、けれど、どうしても言ってやりたいことを高らかに声にして……。それから、改めてヴァイサリアンの民たちに目を向ける。
「あなたたちの先祖は、そのようなことを望みはしませんわ。なぜなら、彼らは、あなたたちが自らの命を省みずに復讐しようと心に誓うような……敬愛に値するような人たちであったのでしょうから……」
胸の前、ぐっと拳を握りしめ、力を込めて。
「仮に死の瞬間に、その心が憎悪に埋め尽くされたとしても、きっといつまでもそのことに囚われたりはしないでしょう。むしろ、最後に、あなたたちに残した言葉を悔いるでしょう。あなたたちが敬愛する人たちとは、そういう方たちではありませんの？」
ミーアの問いに、ヴァイサリアンの者たちは声を失う。それに重ねるように、ミーアは続ける。
「それでもなお、納得がいかないのは、自分たちを虐げた者たちが、のうのうと生きているからかしら？　悪いことをした人間が、何の罰も受けずにいるからかしら？」
その言葉に、何人かが顔を上げた。まさに、我が意を得たり、という顔をする人たちに、ミーアは静かに首を振る。
「けれど、それについては、明確に否、と言うことができますわ。

なぜなら人は……自らが蒔いた種を、自らの手で刈り取るものですから」
静かな、断固たる口調で、ミーアが言った。
「誰の手を借りずとも、それはなされるものですわ。それなのに、あなたがたは彼らの口に、無理やり復讐の果実をねじ込もうとしている。未だ実らぬ復讐の果実を、強引にもいでしまおうとしている。されど……それは、あなたたち自身が復讐の種をこの地に蒔くことに他なりませんわ」
自らの手で果実をもいで、その種を自らの手で畑に蒔く。そうして実った復讐の実を次に刈り取るのは誰か？
「あなたたちは、その実を必ず自分で刈り取ることになる。復讐の果実を自分で収穫し、口にする。あなたたちは自らの蒔いた種によって必ず復讐を受ける。そしてそれは復讐の種として、あなたたちの子どもたちに残されるでしょう。あなたたちの子や、孫は、あなたたちへの想いのゆえに、破滅の種を蒔き、その実を自ら刈り取ることになる」
ミーアは知る。それこそが、おそらくは蛇の狙い。
あるいは、あのくそったれな初代皇帝の呪い。少なくともそれに近いものであると。
だからこそ、ミーアは意地でもそれを止めなければならない。
ヴァイサリアンの民たちを、過去から連綿と続く呪いから、解放してやらなければならない。
「それが、あなたたちの望みですの？　長き時を、この島で耐え忍んだのは、そのためだった、とでも言うつもりですの？」
静かに息を吸い、言葉を整えてから、ミーアは言う。
「今一度、わたくしは言いますわ。あなたたちは選ぶことができると……」
それからミーアは近くに立つ、ヤナとキリルに目をやって……。
「この、子どもたちの未来を、血で血を洗う、憎しみと復讐とで染めあげるのか？　あるいは……」

ミーアは、ヤナの頭を軽く撫で、それからその前髪を軽く持ち上げてから……。
「この子たちが、この一族の証を、気兼ねなく堂々と、日の下に晒すことができる、そんな未来か……。その選択は今、あなたたちに委ねられていますわ。すべては、あなたたち次第ですわ！」
そこまで言って……ふとミーアは気付く。ヤナが恥ずかしげに、もじもじと動いていて。
「あの、ミーアさま……恥ずかしいです」
どうやら、おでこを見られたのが、ちょっぴり恥ずかしかったらしい。
ミーアは小さく笑って、もう一度、ヤナの頭を撫でるのだった。

第百十一話　無為なる王の述懐

オウラニアたちが連れてこられたのは、古びた灯台だった。
そこに住まう灯台守に、蛇は巧みに近づき、すでに味方に引き入れていた。
「まぁ、蛇というか、白鴉の連中の置き土産なんですけどね。正直、微妙な派閥の違いとか、興味ないでしょう？」
などと、肩をすくめる燻狼の言葉、聞かされた裏事情にオウラニアは愕然とする。
――サンクランドの諜報部に、混沌の蛇……この国ってヴァイサリアンのことがなくっても、結構、危ないんじゃあ……。
灯台守と言えば、水産の要だ。ガヌドスの主要産業に関係する部分を他国に押さえられていた不気味さに、オウラニアは顔を引きつらせる。
「まぁ、帝国の叡智なら、この国の勘所はきちんと把握してるだろうから、ここもじきに見つかるだろうが……すぐは難しいだろうねぇ」
暗に、助けが来るのはまだまだ先だ、と言う燻狼に、オウラニアは強気に笑ってみせた。
「いくら時間をかけたって、無駄だと思うわー。こんなところに、お父さまが来るはずないものー。私を人質にしたって無駄なことよー」
「そうだな。燻狼。実のところ、それには俺も同意する。どうだ、この女、すぐにでも殺して国王に見せつけてやるというのは……」
バンダナの暗殺者、カルテリアはそう言うと、なんの躊躇もなく剣を引き抜き、オウラニアに突き付ける。
「ひっ……」
息を呑むオウラニアだったが、決然と彼を睨み返し……。

「あっ、あなたたちの思惑に乗るよりは、そっ、そのほうがマシかもしれないわー。ミーア師匠に迷惑をかけたくもないしー」
「いいだろう。利害の一致だな。お前の首を斬り落とし、この灯台に晒してやろう」
「はぁ、やれやれ、もっと仲良くしてくれませんかね。仮にも血を分けた兄妹なんですから」
「いちいち嫌なことを思い出させるな、燻狼」
吐き捨てるように言うと、カルテリアは、灯台の反射鏡を乱暴に叩き割った。
粉々に飛び散る破片。怯えるように、頭を抱えてしゃがみ込むパティ。オウラニアは、かばうようにして、パティに覆いかぶさる。そうしながらも……。
「兄妹？　どういう意味ー？」
その言葉が気になってしまう。
「王は来ますよ。オウラニア姫殿下。そして、何度でも言うが、それは、あなたのゆえではないのですよ」
追い打ちをかけるような燻狼の言葉が、オウラニアの胸に突き刺さった。

そして……その言葉は、ほどなくして成就した。
こつ、こつ……と。階段を登る足音、それが徐々に大きくなっていき……。やがて、現れたのは……。
「おっ……お父さま……どうして……？」
ネストリ・ペルラ・ガヌドス……。オウラニアの父の姿だった。
驚愕に目を見開くオウラニアだったが、父の目がこちらを向くことはなかった。
彼が、ただ見つめるのは、バンダナを巻いた暗殺者のほうだった。
そうして、暗殺者の男を観察してから、王は深々とため息を吐いた。
「ああ……そうだ。間違いない。彼女の……ゼナイダの面影がある」
その声には、聞いたことのない響きがあった。冷め切った父の声

は、常ならぬ熱を帯びているように、オウラニアには感じられた。
「そうか……生きていたか……」
「ふん、ぬけぬけと。よくも恥ずかしげもなく、そんな顔ができるものだ。自分が捨てた女の息子になど、興味はなかろうものを……」
カルテリアが怒りも露わに剣を抜く。
「あー、殺すのはもう少ししてからにしてもらいましょうかね。せっかく役者が揃ってるんだ。妹君にも事情を説明してやらないと、効果は半減だ」
「どういう、ことなの？　なにが、どうなっているのー？」
困惑するオウラニアに、燻狼の、奇妙に優しい声が告げる。
「そちらにいるカルテリアという男は、あなたと同じお父上の血を引く者ですよ」
「え……？　で、でもー」
問いかけるように、父のほうを見る。っと、ガヌドス国王は、目を合わせることなく言った。
「昔の話だ。お前の母と婚儀を結ぶより前……私は、一人の娘と恋に落ちたのだ。ヴァイサリアン族の、美しい娘とな……」
そうして、ネストリ王は静かな口調で語りだした。
自らの、無為なる王権の日々を。無為になるように生きた、己が人生のことを。
「私が彼女……ゼナイダと出会ったのは、二十、いや三十年近く前になるだろうか……」

それはまだ、ネストリが王子と呼ばれていた時代のことだった。
ガレリア海に点在する無人島の一つに渡り、優雅に釣りを楽しんでいた彼は、浜辺で、一人の娘と出会ったのだ。
長く美しい髪を持つ娘に、彼は一目で恋をした。
娘のほうも、満更ではない様子で彼を受け入れた。
娘の名は、ゼナイダと言った。
小島にて、逢瀬を交わすこと幾度か……。夕陽を背に、口づけを

交わし合った時……ネストリは、ついに見つけてしまう。
彼女の前髪に隠されていた額に……。あの、忌まわしき第三の目のタトゥーを。
この国の唯一の王子であった彼には、ヴァイサリアンとの恋は許されなかった。
当然のことであった。
「私は憎悪したよ。この国を……民すべてを。私が、愛する女と結ばれないのは、民の間に根付いた、ヴァイサリアンへの差別意識が原因であったからだ。それを当たり前のこととして押し付けてくる者たちを憎悪せずにはいられなかった。だが……」
ネストリは、燻狼のほうに目を向け、続ける。
「そもそも、ヴァイサリアンを虐げられる存在とした、それは、混沌の蛇の思惑であった。弱者の反抗、革命により国家を転覆させ、混沌へと堕とす。そのために、あえてヴァイサリアンの蛇たちは、自らを虐げられる者とした」
ティアムーン帝国の初代皇帝と、あの忘れ去られた島で出会った時……、すでに彼らには、世界を混沌に堕とさんとする強い意志があったのだ。それが、怒りか、悲しみか、絶望かはわからない。が、ヴァイサリアンの先祖はその想いが消えぬよう、子孫に引き継がれるよう……あえて自分たちを虐げられる者とした。
その狂気の犠牲となったのが、今のヴァイサリアン族であり、ネストリでもあった。
「こうして私は、恨みを晴らす術を失ったのだ。わかるか？　ガヌドス国民に怒りをぶつけ、この国を滅ぼさんとすれば、それは、ヴァイサリアン族が反逆するきっかけとなる。それは、そもそもの原因を作った蛇の思惑に乗ることになる。かといって、恨みの矛先を蛇に向けるならば、その思惑が成就せぬように、民を安んじて治めるよりほかはなし。それは、私とゼナイダを直接的に引き裂いた民たちを利することになる。どちらに矛先を向けても、私は、恨みの対象となるものたちを利することになってしまうのだ。ゆえに……」

ネストリは笑った。
「私は、何もしないことにした。それこそが、私のせめてもの復讐であったのだ」

さて……王の述懐をパティは静かに聞いていた。
町を背にして聞いていた。
日の当たる、暖かい位置で聞いていた。
そして、だらりと体の横に下げられた腕、その先の小さな手には……反射鏡の破片がいつの間にか握られていて……。

第百十二話　忠義の証の鎧をまといて

ミーアの言葉は、ヴァイサリアンの民に、大いなる動揺を巻き起こした。

彼らが突き付けられたのは、深刻な問いかけだった。

今日、彼らが、命を懸けてでも成そうとしていたことは、憎きガヌドスの民を討ち、この島で、無理矢理に働かされている現状を打開することだ。

対して、ミーアは、現状を打開する案を提示した。

憎きガヌドスの民を討たぬ代わりに、ヴァイサリアンの民の血も流されることなく……ただこの状況を変えるという提案をしてきた。

その話を取りつけてきた、と言っているのだ。

加えて、ミーアは子どもたちの未来を天秤に乗せてきた。

片方の皿には、過去の親たちの復讐を、その反対の皿に、未来の子どもたちの幸福を乗せ、さらに、過去の親たちの復讐は、お前たち自身の気持ちの問題ではないか？　と指摘を加えたのだ。

そうして、目の前でミーアが見せた光景が、人々の心に訴えかけていた。

自分たちと同族の少女、額に刺青を持つ少女を、帝国皇女がそばに置き、優しく頭を撫でる姿。少女のほうも、照れくさそうにしつつも、自然体で……だから、あれが無理やり、嫌々やらされていることではなく、普段からあのような関係であることは明らかで。

そのような未来を……次なる世代の子どもたちの幸せを捨ててでも、復讐を成さんとするのか？　と、目に見える形で見せつけられたかのようだった。

正面から叩きつけられた問いかけに、人々の心が動かされかけていた、まさにその時。

「みな、騙されるな！　おのれ、我らの同胞を惑わすな！」

一人の男が声を上げ、弓を弾き絞った。
男は、ヴァイサリアンとして生まれ、育てられた蛇だった。それも、サンクランドの白鴉によって、戦闘訓練を受けた、危険な蛇だった。
「なっ！」
驚愕に人々が固まる中、放たれたのは鋭い矢の一撃。それは、弓の名手リオラ・ルールーなどには及ばぬまでも、十分に鋭い一撃で……。
ぽっかーんと口を開けるミーアに向かい、真っ直ぐに飛んでいき……飛んでいき。
「はぇ……？」
ガツン、っと金属の音。ミーアの前に壁として立ち塞がるは、忠義の兵、エルンストだった。その胸には、矢が突き立っていた。
「ミーア姫殿下、伏せてください」
一瞬、遅れて、ミーアと子どもたちを押し倒すようにして、セリスが上から覆いかぶさってくる。
皇女専属近衛隊の者たちも、素早く壁を作るようにして、ミーアたちと、ヴァイサリアンの民の間に立ち塞がった。

一撃を受けたエルンストは、その場で片膝をつく。
――あっ、危なかった……間に合って良かった。もし、判断が一瞬でも遅れていたら……。あるいは、賊が声を上げずに矢を放っていたら……。
暗殺者としては、あの行動は三流の行動だった。
されど、扇動者としては、おそらく必要なことだった。
皇女ミーアは、あの時点で、ただ排除すればいいだけの存在ではなくなっていた。あの演説によって、下手をすれば、民を救うために命を落とした聖人に祭り上げられるかもしれない者になっていた。だから、明確な敵だと表明して、排除されなければならなかった。そうしなければ、民は、万に一つも立ち上がらなかったからだ。

――つまりは、あの男の予想以上にミーア姫殿下のお言葉が、人々の心を動かした……そういうことなのだろうな……。
「エルンストさん、大丈夫ですの？」
その声に顔を上げれば、自らの仕える主、ミーアが心配そうに覗き込んでいた。
安心させるように、エルンストはニヤリと微笑んで、
「ご安心ください。この鎧は、我らの姫殿下への忠誠と同じく、たいそう分厚くできておりますので」
矢を受けた胸には、言ってはなんだが、程よい痛みがあった。
これで、まったく痛みを感じないようであれば、逆に死が間近に迫っていそうなものだが……胸から感じるのは、肉が引き裂かれ、血が流れる感触だったから、むしろそれが彼を安心させる。
傷の痛みは正常に感じる。肉は裂かれたが、骨までは届いていない。死までは、まだまだ遠い。
――自分は、まだ戦える！
足に力を入れ、立ち上がる。
不屈の近衛は、この程度では倒れることはない。ミーア姫殿下を守り、死んでもなお戦うのが、彼らの誇りだからだ。
されど……。
「あれ……？」
残念ながら、エルンストの出番はなさそうだった。
自分たちの周りには、すでに、ミーアを中心にした防御陣ができあがっていた。
オイゲンの指示により、エルンストとセリスを除いた八人によって築かれた陣形。金属鎧を着こんだ近衛たちが作る壁は、分厚く、ヴァイサリアンの民に隠れた暗殺者からミーアたちを隔てていた。
さらに、その向こう側、賊を取り押さえに行っているのは、シオン王子らに率いられたグリーンムーン家の私兵たちだった。
率いる者が違えば、弱兵も強兵となる。シオン、キースウッドに率いられた彼らは、極めて迅速に混乱を収拾していく。

「賊が一人とは限らんぞ。周囲を警戒。弓を持っている者は即座に拘束する。無関係の者で弓を持っている者は、すぐに、それを手放せ。手放さぬ者は取り押さえる」
その仲間たちの姿に、心強さを覚えるエルンストである。
孤軍で奮闘する必要はないのだ。背中から槍を突き入れられることもない。ここには、背中を預けるに値する仲間がいて、身を挺して守るべき姫がいる。
「無理はしないでください。エルンスト」
同僚のセリスが心配そうな顔でこちらを見つめていた。
「ああ、いや、本当にかすり傷なんだ。鎧を貫くほどの威力はなかったから」
安心させるように笑うエルンストであったが、そこへ、可憐な花のような令嬢、シュトリナが歩み寄る。
「それでも、先端に毒が塗ってあることもあります。念のために、見せてください」
「そうだぞ、エルンスト。勲一等のお前にこれ以上活躍されては、俺たちの立つ瀬がないというものだ」
仲間たちからそう言われてしまえば、エルンストとしては、もはや無理に動こうとは思わなかった。
予備兵力は重要だ。仲間たちが働いている間に体を休め、不測の事態に備えることも立派な仕事だからだ。
そう判断した彼は、小さくため息を吐き、手当てを受けようとして……。
「って、少しやりづらいな……」
自身に集まる令嬢たちの視線にさらなる緊張を強いられることになるのであった。

第百十二話　忠義の証の鎧をまといて（後書き）

今週と来週は少しミーア分が薄いかもしれません。年末だからダラダラしてるんだと思います。

第百十三話　着々と、ヒタヒタと……

シオン、キースウッドらの手によって、騒乱者たちは迅速に取り押さえられた。
幸いにして、その数は少なかった。
――彼らが、直接的、間接的に白鴉の教導を受けた者たちか……。
シオンの目には、彼らもまた、被害者に映った。
ガヌドスの民に虐げられ、王政府に虐げられ、白鴉には利用され、混沌の蛇に使い潰されようとした者たちに見えた。
「シオン王子殿下は……サンクランドは、これで良いとお考えか？　ガヌドスの民が、なんの報いも受けずとも良いと……？　これが正義と言えるのか？」
憎々しげな目を向けてくる男。それを聞きながら、シオンはエシャールに声をかける。
「エシャール、よく見ておくんだ。我がサンクランドが起こしかけた悲劇を。一つの過ち、民を虐げる悪があったとして……その解決を誤れば、より多くの悲惨が引き起こされるということを」
問題を放置することは、正しいこととは言えない。されど、その解決に常に剣が使われるべきだ、とは思わない。その解決をするのが、常にサンクランドでなければならない、とは、今はもう思わないのと同様に。
「我々は、サンクランドを利するためにいるのではない。民が幸せに生きられるよう、最善を行うべきだ。悪を討つことは時に必要な手段ではあっても、それ自体が正義ではないし、まして、唯一の正義でもない」
シオンは、ミーアが権威を持つ者の務めを怠ったとは思わない。特定の人々が一つの島に閉じこめられて、労働を強制されることは、やはり悪であり、それを是正することは、正義だからだ。

だが、ミーアはその正義が、できるだけ多くの人を幸せにするよう……あるいは、新たな不幸が生み出されぬよう、最善の道を探り、実行した。
そこに、白鴉との違いがあったのだろう。
「答えろ？　シオン・ソール・サンクランド。ガヌドスの民は、なんの報いも受けない。それが正しいことか？」
シオンは男のそばに歩み寄って答える。
「そうは言わない。ガヌドス港湾国によって、“ある人々を虐げる”という悪が行われているのならば、それは正されなければならないし、行いの報いは与えられるべきだろう。が、その報いが刃によってのみ為されるべきとは思わない。ガヌドスの民は、償うべきだろうが、それは血を流すという形でなくとも良いはずだ」
それはかつてエシャールに、ミーアが示してくれたように。
あるいは、シオン自身にミーアが示してくれたように。
ガヌドスの民は、ヴァイサリアンの受け入れで、多くの労力を強いられることだろう。セントノエル・ミーア学園の共同研究所の設立と運営で、多くの汗が流されることだろう。
彼らの報いの形が、それで良いとは、断言できない。けれど、少なくとも、剣による復讐の応酬が続いていくよりは、よほどマシだとシオンは思う。
と、その時だった。別の場所で、一人の男が声を上げた。
「ふざけるな。未来、と言ったな、ミーア姫。ならば、ここで、死んだ子どもたちはどうなるというのだ！？」

皇女専属近衛隊に守られて、いったんその場所を離れようとしていたミーアの耳にも、その言葉は届いていた。
「答えろ！　この過酷な島で死んでいった子どもたち、未来の担い手を失った親たちの悲しみは、どうやって癒すというのだ？」
その言葉に、ミーアは思わず息を呑む。
そうなのだ、ミーアの言葉には一つの弱点があったのだ。

それは、過去ではなく未来に重きを置いたものであるということ。その復讐が、過去、すなわち“ヴァイサリアンの祖先に由来するもの”でなければ、成立しないものであるということだ。
祖先の復讐のゆえに、子孫の幸福を犠牲にするのか？　という理屈は、子孫を害された復讐を為さんとする者には通用しない。
それゆえに、もしもガヌドスの民が、ヴァイサリアンの子どもたちを殺すようなことをしていた場合、ヴァイサリアンの民は止まらない。
ミーアの言葉は、子を殺された親たちには、決して届かないものだからだ。
だが……。
「いや……違うぞ。お前は、勘違いしている」
「なにっ？」
いきり立つ男に、ほかの者が言う。
「王政府からのお達しだろう。子どもたちには、しっかりと食事を食べさせている……子は労働力。船の細かい部分を作り込むためにも、あるいは、次世代の働き手としても、粗末に扱わぬようにと言われて、だから、餓死するような子どもは、いなかったではないか」
そう言われ、最初の男が困惑した様子で黙り込んだ。
「いや……だが……そう、だったか？」
答えを求めるようにして見つめたその先、大人たちの様子を見つめる子どもたちの姿があった。粗末な身なりの子どもたちであったが……ミーアの目には、その体のほうはいたって健康そうに見えた。特に痩せ細ったりはしていなかったし、むしろ、ヤナたちのほうが、出会ったばかりの頃は痩せていたような気がする。
隔離された島に一つの部族を閉じこめていたために、逆に結束と助け合いが生じていたのだ。
「そうか……。それで、俺たちを使い潰す道具のようにしか思っていないと……憤ったのだったか……。いや、だが、確かに……ううむ」

納得のいかないという顔をする男を見て、ミーアはふと気付く。
――これは……ただの記憶違いかしら？　それとも、もしかすると、パティが何かした……ということかしら？
過去の変化、それによる記憶の揺らぎ……混乱。その現象にはミーアも覚えがあった。
――帝国皇妃ともなれば、ガヌドス王族にもいろいろと口出しできる立場でしょうし、ガヌドス国王が蛇とも関係があったとするなら、その方面からも、パティは影響を与えられたはず。あり得ないことではありませんけど……。
そこで、ふと、ミーアは海のほうに目をやった。
――そういえば、パティたちのほうは大丈夫かしら……？　ディオンさんに行ってもらいましたから、武力の面では問題ないと思いますけど、問題は、無事に探し出せるかどうかですわね……うーむ。
その時だった。ルードヴィッヒが難しい顔で、話しかけてきた。
「ミーアさま、男たちから蛇の居場所を聞き出すことができました」
「おお、早いですわね。さすが、ルードヴィッヒですわ。それで、いったいどこに……？」
「灯台です」
「……はぇ？」
その単語を聞いた瞬間、ミーアはイヤぁなことを思い出す。
――黄金のミーア灯台……でしたかしら？　ルードヴィッヒの日記帳に書いてあった、トンデモない建物の名は……。しかし、灯台……嫌な符合ですわね。
そうして、ミーアは考える。
灯台を、どこかに一から建てることと……もともとあった灯台が壊れてしまったから建て直すこと、そして、その時に建て直す灯台の形を、ちょっぴり変わったものにすること……どちらが容易だろうか？
壊れちゃったし、新しい灯台は、ナニカ、記念になるような形にしたらいいよね？　みたいなノリにならない保証は、どこにもなく

って……。いやむしろ……。
――あの議会の方たちやオウラニアさんのことを考えると……やらかしそうな気がしますわ！
ミーアはハッと顔を上げる。
――間に合うかはわかりませんけれど、ともかく、灯台が壊されるようなことがあってはなりませんわ。オウラニアさんとパティはもちろんのこと、中の設備なども何もかも、無事に救い出さなければ！
……残念ながら、ミーアのその願いは届かなかった。

第百十四話　追跡者たち

朝焼けにけぶる街を、アベルたちは走っていた。
その先頭を元気よく走っていくのは、ベルだった。
帝室の姫にもかかわらず、ベルは、かなり体力がある。
いつ、なんどき、どんな冒険に巻き込まれるかわからない以上、日ごろからきっちりと体を鍛えているのだ。馬にも乗れるし、いささか（……いささか？）適当ながら、ダンスの練習だって積んでいる。
しっかりと帝国の叡智ミーアの後を継ぐべく、どのような場所でも探検できるよう、ストイックに己を高めるベルである。
そうして、いくつかの角を曲がったところで、不意に、ベルは立ち止まる。そして……。
「えーと、ところで、どこに行けばいいんでしょうか？」
わからないで、走り出したのか！？　などとツッコミを入れ……たりはしないアベルである。
薄々とだが、ベルの性格を把握しつつあるアベルお祖父ちゃんは、孫娘の発言を華麗にスルーしつつ……。
「本来ならば、彼らに追いつければベストだったが、それは難しそうだね。道が曲がりくねって複雑だし、なんの手掛かりもなく見つけるのは至難の業だろう。敵も当然、追手の存在を警戒しているだろうし」
そうして、アベルはハンネスのほうに目を向けた。
「ハンネス殿、あなたは、この国の地理にも詳しいはず。どこか、彼らが根城に使いそうな場所に心当たりはありますか？」
「いや。だが、姉上……の子パトリシア嬢のこと……なにかしら、こちらにメッセージを残していそうなものだが……」
ハンネスの顔には焦りの色が見えた。辺りを落ち着きなく見回し

て、それから、地面に手をつき、すぐに立ち上がり……、うろうろ。それから、ふと、ベルに目を留める。
「ああ……そうだ」
小さく頷いて、ハンネスはベルに歩み寄る。
へ？　などと首を傾げるベルの前にしゃがみ込むと、
「失礼しますよ、お嬢さん」
そのまま、肩に担ぎ上げた！　こう、荷物を肩に担ぐ要領で、ちょっぴり雑めに……。
「うひゃあっ？」
突然、抱え上げられて、ベルがヘンテコな悲鳴（ミーア譲りの）を上げる。足をパタパタさせつつ、
「なっ、なな、なにするんですかぁ？」
抗議の声を上げる。
いきなりのことに、アベルもびっくりして、思わず固まる。そんな中、ハンネスはいたって冷静に壁のほうに近づき、
「ベル嬢、そこから何か見えないか？　君が誘拐される立場だったとして、どういうところに印を残す？」
「はぇ……？　あ、ああ、ええと……」
彼の意図を理解したのか、ベルはそのままの姿勢で周りを見回しながら……。
「地面に目印を落としていくのは難しそう……。落とすものを取り出そうにも、この体勢だとバレそうだし……。できるのは最低限。でも、曲がる時に、そっちの壁の近くに寄るとしたら……分かれ道で、自分が連れられて行くほうの壁に……あっ！　あれ！」
ブツブツと何事かつぶやいていたベルが、突如、声を上げ、壁の一点を指さす。
そこには、子どものいたずら書きのような、白い線が描かれていた。
「……子どもの落書き……にしては、面白みに欠ける。ということは、これが目印ということか」

「最低限、どちらの道に曲がったのかわかるように書きつけたのだろう……。さすがは姉上……の娘だ」
パティの機転に誇らしげな顔をするハンネスと、自らの観察眼に誇らしげな顔をするベル……。
ちょっぴり似たところのある二人に思わず苦笑してから、アベルは改めて印を見つめる。
「しかし……油断をしていると見失ってしまいそうだな。慎重に進むとしよう」
そうして、彼らは再び歩き出した。目印を見失わないように慎重に、慎重に。
分かれ道の度に現れる目印だったが、それは時に薄くかすれ、見つけるのはなかなかに大変だった。
焦りは禁物……それはわかってはいても、蛇の手の中に人質がいる気持ちの悪さを、すぐにでも解消したくて、気は急くばかり。
途中、何度か印が見つからず、道を間違えつつも、なんとか彼らが辿り着いた場所、それは、道幅の太い大通りだった。
「どうやら……ここで馬車に乗せられたようですね……」
地面に膝をついていたハンネスが、なにかを拾い上げる。それは、落書きに使われる蝋石の欠片だった。
「馬車か……」
ここから先は、どうやって追いかければいいものやら……と、途方に暮れつつ、アベルは辺りに視線を巡らせる。
「この大通りがどこに通じているのか……。せめて、どちらに行ったのかだけでもわかればいいんだが……」
「そうですね。誰か、見ていた人がいるかもしれません。聞いてみましょうか」
ベルの提案に従い、目撃者を探す。結果、馬車の向かって行った方向までは分かったが、さすがに、どこに行ったかまではわからなかった。
「当然か……。だが、ここでのんびりしているわけにもいかない。

ともかく、ボクたちも、馬車が行ったほうに……んっ？」
その時だった。アベルの視界の端に、キラキラと、光が瞬くのが見えて……。
「ハンネス殿……あなたは、パティ嬢のことをよく知っているようだが……。彼女は、捕まった状態でも、なお、こちらに合図を送りつづけるだろうか？」
「無論のこと……。姉上は、不屈の人。狡猾なる敵に囲まれても、なお一人で戦い続け、できうる限りの最善を尽くした人……そして、その姉上の娘たるパトリシア嬢もまた、その気質を受け継いでいるはず」
言いながら、ハンネスも気付いたのだろう。アベルが見つめる先……。不自然な瞬き。
それは、灯台の頂上から放たれた光だった。

第百十五話　パティとゼナイダ

「我が息子よ……名は、なんというのか？」
震えるような声で、国王ネストリが問う。
「お前に恨みを持つ息子に、名を問うのか……？」
「自分を殺す男の名を問うのは、それほど不思議ではあるまい」
カルテリアは、一瞬、虚を突かれたような顔をしてから、
「なるほど。口が回る。確かにそれは道理だ……。ならば教えてやる。お前を殺す男の名は、カルテリアだ」
「カルテリア……そうか」
静かに頷き、続けて、彼は言った。
「彼女は……ゼナイダは……」
「とっくに死んだ。お前と、ガヌドスの民への恨み言を残してな」
「そう……か」
そこで王は項垂れた。血を分けた息子との間にある断絶、その深い裂け目の前で膝をつくように。
その様子を見て、パティは、あることに気付き、なんとも言えない嫌なものを感じていた。
疑問に思ったのは、たった一つのこと。すなわちゼナイダという女は、ただの被害者であったのか……？　ということだった。
カルテリアに蛇の教えを施したのは誰か？　ヴァイサリアンの民に潜む蛇導士か？　伝わっていた≪地を這うモノの書≫を彼が自分で読んでしまったのか？
あるいは、その母、ゼナイダであったのだろうか……？
ではもしも、ゼナイダが蛇であったなら……それは、ガヌドス国王と会った後、すなわち、捨てられた後だろうか？　それともそれより、前だろうか……？
――普通に考えるなら、ガヌドス国王との失恋の後のはず。その

傷ついた心につけ込まれて、蛇に取り込まれた、って。だけど……。
もしも……最初から蛇だったら？　彼女が蛇として、ネストリに近づいたのだとしたら、どうだろう？
――次期ガヌドス国王を、蛇の支配下に置くために……その心に絶望を刻み込むために近づいたのだったら、どうだろう……？
男を絶望させるために恋を囁き、自分の子を蛇にするため恨みを囁く。
その結果、生まれたのが、この目の前の惨状だ。
過去の恋に心を打ち砕かれた父と、実の父を殺そうとする息子の、決定的な断絶。
――それって、私がしろって言われてることと同じなんじゃ……。
パティの体が小さく震える。
そう、その蛇の在り方は“蛇に忠実な皇帝を生み出す”というパティに与えられた任務と似たものだった。夫である皇帝を絶望させ、子である次世代の皇帝を蛇として育て上げる。
パティに求められていることを、そのまま実行した女性がいたのだ。そして、その結果が目の前の不幸だった。
そして、家族の断絶はもう一つ。オウラニアと王の間にもぽっくりと口を開けていた。
「どうしてー？　お父さま」
オウラニアが呆然とした口調で言った。
「愛する人がいたなら、どうしてお母さまとー、婚儀を結ばれたのですか？」
その問いかけに、ネストリ王は淡々と答える。
「国王として、世継ぎを残さぬわけにはいかなかろう」
その言葉は、どこまでも冷たく、乾ききっていた。
「……お前は、もともと生まれてくるはずではなかったのだ。そもそも、お前の母親とも婚儀を結ぶはずではなかったのだ。だが……」
口元に、自嘲の笑みを浮かべて、彼は続ける。
「帝国の皇妃パトリシアさまに言われてな。もしも、私がなにもし

ない、無為に生きるというのならば、血族を残すべきだ、とな。このままでは“一国の王の血筋を絶やす”という重大事を為すことになりはしないか？　と。なるほど、統治者を失うことは、国を混乱させ、ヴァイサリアンの反乱を引き起こすやもしれぬ。あるいは、王なき民が暴走し、ヴァイサリアンに対し、より過酷な政策が選ばれるかもしれぬ。無為に生きたいと言いながら、結局は重大な影響を及ぼしてしまうという、とな」

彼は、くくっと口の中で笑って、

「こうして、自らの口で言えば、酷い詭弁だと思うが。パトリシアさまは、口の上手い方であったゆえ、つい口車に乗せられてしまったのだ」

それを聞き、パティの肩がピクリと揺れる。

――つまり、私がなにもしないと、オウラニア姫は生まれてこないことになる……？

そうして、パティは心の中の“過去に戻った時にすべきことリスト”に、きっちりと書き込む。

その、ほんの刹那の隙……。意識が乱れた、瞬間に、

「お前、いったいなにを……あっ！」

驚いたような声が響いた。

カルテリアと王とのやり取りを見て、火燻狼は、よしよし、と頷いた。

――やれやれ、これでようやく相棒が大人しくなるってもんだ。あとは、奴がオウラニア姫殿下を殺さないように止めるのと、ヴァイサリアンのアホどもを煽って蜂起させる、と。まぁ、白鴉の薫陶のよろしきを得た連中が、せっせと煽動してくれたおかげで、そちらは簡単にいくだろう。

それから、燻狼は思い出したように、パティのほうに目を向ける。

――ああ、それと、こっちの自称蛇のお嬢ちゃんからいろいろと情報を聞き出さないとねぇ。人質にも使えるだろうから、あんまり

手荒なことはしないようにして。薬でしゃべらせるのがいいか。それから、帝国の叡智と交渉だ。いやぁ、これは忙しくなりそうだぞ。
なぁんて、舌なめずりをしていたものだから……彼は、それまで見逃していたのだ。
パティが、先ほどから、ちょっぴり体を不規則に動かしていることを……。
不意に、視界の外れ、何やら動くものを見つけて、燻狼は眉をひそめる。
――なんだ、今のは……。
パティの足の下、床の上を白い光が滑っていくのを見て……。
「お前、いったいなにを……あっ！」
ずかずかと歩み寄り、パティの腕を掴む。っと、その手の中にあったのは、反射鏡の欠片だった。
「しまった！　カルテリア、早く王をっ！」
その声が響いた直後、事態は急転した。

第百十五話　パティとゼナイダ（後書き）

来週は年末ということでお休み……にしようと思ったのですが、あんまりにあんまりな箇所だったのでちょっと続けます。ミーアは休んでると思います。

第百十六話　帝国の小心（えいち）を持たぬ者の不幸

火燻狼は、蛇の秘技に精通した男だった。
いくつかの便利かつ特徴的な毒、薬の類、水を含ませると光を放つ粉の調合に、部屋に粉塵を充満させて爆発を起こす術に加え、嘘を見抜き、人の心を読み、操る術などなど……。
およそ、この世界ではほとんどの人が知らないような技術を、彼は習得していた。
だが……。それはなにも、彼一人の特権というわけではなかった。
ゆえにこそ、彼はもっとよく話を聞いておくべきだった。
蛇を自称するパティから話を聞き出し、確かに彼女が蛇の技術を持っていることを確かめたうえで……警戒しておかなければならなかったのだ。
パティが蛇の技術を持っているなら、他にも蛇の技術を修めた者がいるかもしれないことを。
そして、自分と同じ技能を持った者すら、いるかもしれないということを
直後、灯台内に、強烈な光が瞬いた。
――ちっ、こいつは、水で光を作る目つぶし……。敵に俺と同じ技を持っているやつがいるってのか！
視界を失いつつも、彼はパティの腕を離さなかった。そのまま、後ろにひねり上げ、自分の前に立たせる。
パティの、小さく苦痛に呻く声が聞こえたが、そんなことに構ってはいられない。
「ぐっ、これは……いったい……」
カルテリアの狼狽した声。燻狼は即座に声を張り上げる。
「早く、王の首を刎ねろ。カルテリア、そして逃げないと、奴が……」

言葉の途中、ガツン、と金属と金属がぶつかる音が聞こえた。
――くっ、間に合わなかったか。ええい、忌々しい……。
白く染まった視界、それが徐々に、徐々に収まってきて……。最初に見えたのは、刃を振り下ろした姿勢で固まるカルテリア。そして、その前で盾を構えて王を庇う、アベル・レムノの姿だった。
「……おやおや、これは」
燻狼は、すぐに辺りを見回した。すると、アベルのほかに見覚えのある少女と、見知らぬ男の姿があった。
さらに、男は人質であったオウラニアを確保していて……。
「オウラニア姫を奪い返されてしまいましたか……」
小さく舌打ちしかけるも、燻狼は思い直す。
オウラニアには、すでに散々、絶望を味わわせた。人質と言うならば、この目の前の少女で十分事が足りる。
そう自分を落ち着けて、彼は検討を始める。
――アベル・レムノと正体不明の男……あいつが、さっきの目つぶしをやったんですかね？　それに……巫女姫さまが殺し損ねた少女が一人……これは。
その、ちょっと混沌としたメンバーに、燻狼は思わず笑ってしまう。
――帝国の叡智か、ディオン・アライアがいたらヤバイと思ったが、どうやらいないようだ。あの正体不明の男には警戒したほうが良さそうだが、これは、却ってチャンスなのでは……？　こっちにはカルテリアもいるわけだし……。
見覚えのない男の正体は気にはなったものの、自分と同じ技を使うというのであれば、むしろ、その技術は搦め手寄りのはず。となれば、カルテリアの武力で制圧することもできるかもしれない。
――それに、あの少女はイエロームーン公爵令嬢の無二の友人……となると、上手く使えば、シュトリナ嬢を再びこちらの手の内に収めることもできるやも……。アベル・レムノの剣の腕は油断ならぬものなれど、カルテリアのほうが上。

などと、皮算用を始める火燻狼であったが……。陰謀家気質の火燻狼には一つの弱点があった。
それは、あまり現場慣れしていない、ということ。
彼はいつだって、事が起きる時には、その場にいないことを信条としていた。
事前に備えを完璧にし、いざ事が起こる時には、その場から離れてしまう。だからこそ、彼が捕まることはないし、そこになんらかの工作がされていたことすら、人々は気付かない。それが彼の強みであった。
されど、その反面、彼は、事が起きた時の判断力に甘さがあった。
ひょいひょい、気軽に内乱が起こりそうな国に行ったり、睨み合いの森に波に流される海月のごとく顔を出したり……鎮圧に来た軍の前に引っ込みがつかなくなって立ち塞がってみたり、暗殺者の待つ荒野に馬一頭をお供にで出たり……。そんなことをする経験が不足しているのだ。
それゆえ、常に最悪に備えるミーアのような……研ぎ澄(エリート)まされた小心者(チキンハート)の戦略眼(タクティクス)が、この時の彼には、いささか欠けていた。
彼はまたしても事態を甘く見ていた。
彼は考えなければならなかったのだ。狼使いの凶刃を退けたアベルの剣は、侮るべからざるものではあれど、灯台下の仲間たちを無音で仕留めるほどの実力は、まだないということを。
数は少ないとはいえ、この灯台を守る者たちは、いずれも手練れだ。彼らを、声を出す間さえ与えず、無力化することができるとすれば……そんな芸当ができる者がいるとすれば、それはどんな人物なのか……？
燻狼は想像し、警戒しておかなければならなかった。
――ふふふ、とりあえず、この少女を人質にして、アベル・レムノと、あの男の動きを封じて……。
そして、その無警戒は……肩に走った激痛という形で姿を現わした。

「が……っ！」
唐突な衝撃に、思わず、手の力が緩む。と同時、横を通り過ぎた風が、そのままパティをさらい、流れるように燻狼に剣を突きつける。
「いやぁ、上手くいってよかったよ」
パティを片手で抱きながら、もう片方の手で剣を構える男……。帝国最強、ディオン・アライアは、平服に剣一本というラフな軽装で、彼らの前に姿を現わした。
「ディオン、アライア……。ぐっ、なぜだ？　なぜ、お前が、ここにいる？」
打ち据えられた肩を押さえ、悔しそうに呻く燻狼に、ディオンは肩をすくめてから、
「別に、大して難しいことじゃないさ。ここまでくる階段は螺旋状に建物を巻いていたからね。途中から壁をよじ登ってきただけのこと。石のでっぱりがあるから、やってみると、意外と登れるものだよ」
かつて――ベルとシュトリナは、巫女姫の幽閉されている塔を見て、ディオン・アライアならば外壁をよじ登って頂上まで行くことも可能だろう、などと冗談で言っていたものだが……。
そんな冗談とも信頼ともつかない言葉に応えて、ここまでやって来たディオンである。
ちょっと馬に乗るのを練習したぐらいで、ミーアが逃げきれないわけである。
「そんなことを聞いているんじゃない。なぜ、ここがわかった？　なぜ、こうも都合よく、この場所に現れる？」
「なぁに……別に難しいことじゃない。敵が蛇なら、ガヌドスの各所をバラバラに襲い、国内を混乱させるだけだろう。だが、ヴァイサリアンの民を鍛えたのが、サンクランドの諜報機関であった場合、ある程度は組織だった動きをするはず……。レムノ王国の革命軍を見れば、それがよくわかる」

ランベールに率いられていた革命軍、彼らが占領した都市は、レムノ王国軍の兵站を分断する、交通の要衝だった。軍事的な常識を踏まえたうえで、彼らは行動していたのだ。
「となると、今回も、町の各所を襲いつつ、ある程度の連携を図ろうとするはず。では、離れた兵に合図を送るためにはどうするのがいいだろう……。音か、狼煙か、あるいは……」
ディオンは抜いた剣で、自らの肩をトントン叩きながら、
「ルードヴィッヒ殿は、光を用いて遠隔地との簡単な情報のやり取りをしていたという。同じことを敵がやったとしても、なにもおかしくはないと、そう思っていたところを、ちょうど灯台のほうから、ちらちら明かりが見えたものだからね」
と、そこで、ディオンは小さく笑って……。
「しかし、君らは、アレだな……。混沌、混沌、と口では言いながら、やることは意外と合理的だね。完全に混沌とした行動をとられていたら、ここには辿り着けなかったよ」

第百十七話　孫娘の歓声！　アベルはちょっぴり脱力（リラックス）した

燻狼と向かい合うディオンほどには、アベルの余裕はなかった。
盾で受け止めた斬撃をなんとか押しとどめ、一歩前へ。
「ネストリ陛下、どうぞ、お下がりください」
っと、後ろを窺おうとしたところで、不意に、圧力が消える。たたらを踏んで一歩前に出かけたところを、殺気！
――やられるっ！
刹那の判断。思い切り体をひねると同時、首筋を鋭い突きがかすめる。
「ぐっ！」
足に力を入れ、咄嗟に後退。されど、追い打ちをかけるようにして敵が迫ってくる。直後、やみくもに上げた盾にがつんっと再びの衝撃。受け止められたのは、まったくの幸運で、完全に押されていることをアベルは改めて実感する。
――これ以上は、下がれない。
背中に、なにかを守っての戦い。それは、その場に踏みとどまり、敵の勢いを受け止めることを求められる戦いだ。
それこそが、アベルが選んだ道。剣の形。ゆえに……腕に走る衝撃、痛みに歯を食いしばりつつ、その場に踏みとどまって、アベルは吠える。
「はぁっ！」
敵の、暴力的な圧力を跳ね返すようにして、盾を叩きつける。
その姿は、まさに……まさにっ！
「おおっ！　さすがは、剛盾のアベルお祖父さま！」
そう、その姿、まさに剛盾！
娘、孫娘たちに対する幾多の恋のアプローチを跳ねのけた、剛盾そのもので……そのもので？

「さすがは、お母さまたちを、数多の貴族令息から遮ってきた鉄壁です！」
ちょっぴりズレたベルの歓声に、思わず脱力しそうになるアベル……であったが、次の瞬間、はたと気付く。
――肩の力が入りすぎていたか……。入れ込み過ぎていたな。
ともすれば、相手を殺しかねないほどの気負いがあった。アベルは苦笑いを浮かべつつ、相手を見る。
――ミーアを守るために、ボクの剣はある。ミーアの理想を守るために、この身はある。ならば、相手が誰であれ、殺すわけにはいかない。
「邪魔をするな。殺すぞ」
叩きつけられるのは、純然たる殺意。抜き身の刃のごときそれを受けて、けれど、アベルの心は落ち着き払っていた。
ミーアの行く道は、楽なものではない。
帝国初の女帝。それも、彼女の目指す国は、世界は……その理想は、とても高い。
この先、敵はいくらでもいるだろうし、この程度の殺意を突きつけられることも少なくはないだろう。
ならば、これは言うなれば一つの前哨戦。
女帝ミーアを守るための……女帝ミーアの理想のための戦いの、ほんの一つ。
まごついてなどいられない。
「なにを笑う？　アベル・レムノ」
憎しみのこもった視線を感じ、アベルは小さく首を振る。
「いや、なに……。先ほどの話が少し聞こえてね。君は、国王陛下の息子だというじゃないか？　となれば、これは、ガヌドス港湾国の王子と、レムノ王国の王子との一騎打ちなのだな、と……ふと、思ったまでのこと。それも、尊敬できぬ父上に対し、複雑な気持ちを抱く王子二人のね。なかなか、数奇なめぐりあわせと言えるんじゃないかな？」

軽口を叩くアベル、カルテリアは憎々しげに睨みつけながら叫んだ。
「ならば、なぜ、俺の邪魔をする？　先ほどの話を聞いていたというなら、わかっているはずだろう。これが復讐であるということ……。そこの男も、俺に殺されることを納得している。それをなぜ、部外者が邪魔をする？」
「それが、ミーアの望みだから、かな……」
直後、三度の衝撃。微妙に軌道を変える三撃を盾で受け止める。重たい剛撃、腕の痺れに、顔をしかめつつ、一歩も引かない。
「帝国の叡智の犬になるか。一国の王子が情けない」
「我がレムノ王国の旗には、戦狼が描かれていてね。惚れた女のために犬となるのは、レムノの王子としては、本懐なのではないかな」
ガツン、ガツン、っと二度の斬撃。いずれも盾で受け流しつつ、アベルは、敵の動きに目を凝らす。
柔軟無比な、シオンの剣より、さらに変則的な剣。
波間を揺れる船のごとく、ゆらり、ゆらり、と左右に揺れつつ、一度攻撃に転じれば、それは怒涛の如く。幾度も続く波状攻撃、その剣筋はいずれもこちらの予想を裏切る動きをし、しかも、一撃一撃が恐ろしいほどに重い。
――ディオン殿の助言のとおり、盾を練習しておいて良かった。剣のみで、この攻撃を受け切るのは容易なことではない……というか、ディオン殿は、どうやってこいつを圧倒できたんだ？
ついつい、そんなことを考えてしまう。圧倒的な力の差を改めて実感するアベルである。
「どうした、ただ、攻撃を受けるだけか？　巫女姫の弟よ」
カルテリアの、どこか嘲るような声が聞こえる。
「巫女姫ヴァレンティナは、父の悪政を正すため、声を上げ、結果、殺されそうになったというじゃないか。その反撃のために蛇になったと聞いたぞ？」
振り下ろしの一撃、盾を上げて受け止める。

「それなのに、弟のお前は父にただ従うだけか？　王を殺し、自らが王権を盗り、己が信ずるところの善政を敷こうという気概はないのか？」
沈み込むように、胴に横薙ぎ。剣を振り下ろして受ける。
「国を腐らせた者どもを一掃する、そんな気概もなく、唯々諾々と父の言うことに、これまでの国の在り方に従うのみ。既得権益に守られ、平和を言い訳にしてぬくぬくと生きる第二王子よ。それがよくお前の剣に現れているよ。盾に隠れ、盾にすがるだけの剣にな！」
さらに、二撃、三撃、四撃。重たい斬撃を受けてなお、アベルの心は揺れることはない。
「その剣、姉にも狼使いにも、あのサンクランドの王子にも劣るだろうよ」
かつてであれば、心を揺らされたであろう言葉にも、その心は小動もせず。その目は、ただカルテリアの挙動にのみ向けられていた。
高々と頭上に振り上げられた剣。それはアベルが得意とする剣に似た型。されど、それは、アベルのものほどには洗練されたものではなく。ゆえに……っ！
――ここだっ！
アベルは一歩踏み出した。盾を、相手の振り下ろしに向かって突き出すと同時に手放し、体を右へと流す。
一瞬、宙に盾に隠れ、相手の視界から消える動き。
ひたすらに攻撃を受け続けることで、次も「ただ受けるだけだろう」と思い込ませて、その思考の間隙を突く動き。
剣を振り下ろした体勢で、カルテリアが驚愕の表情を浮かべているのが見えて……。
「このっ！」
憎悪に満ちた目がこちらを向く。流れるように振り上げられた剣に向かい、アベルは小さく息を吐き……上段に構えた剣を一閃！
体勢万全のアベルと、体勢不十分のカルテリア。
心を揺らさず、ただ、幾度も鍛練で繰り返した動きを、普段通り

に繰り出したアベルと、意表を突かれ、苦し紛れに刃を振り上げたカルテリア。

その差は、歴然。

防御のためにあげられたカルテリアの剣は、半ばからへし折られ、勢いよく地面に叩きつけられた。

第百十八話　混沌と合理性と

「なぜだ……？」
剣を突きつけられたカルテリアは、驚きの表情を浮かべていた。
「なぜ、俺がお前ごときに……」
「お前には、ここが終着点だったのかもしれないが、ボクには、まだまだやるべきことがある。こんなところでは立ち止まっていられないし、それに……」
っと、アベルは苦笑いを浮かべて、
「どうやら、ボクは娘や孫に近づく男たちを、片っ端から叩き伏せなければならないらしいのでね」
それから、アベルは改めて告げる。
「さて……お前たちの負けだ。大人しくしてもら……」
けれど、その言葉は、途中で遮られた。
突如として、鈍い轟音が鳴り響いたためだ。と同時に、灯台が大きく振動した。
「おお！　す、すごいです。アベルお祖父さまの一撃が、灯台を揺らし……わわわっ！」
などという、ベルの焦ったような悲鳴。
「いやぁ、それは、さすがに無理だ……」
っと、ディオンの苦笑い。
そんな中、ひときわ焦った様子を見せたのは、ハンネスだった。
「これは――まずい！　みな、海に飛び込め！　早くっ！」
その声を合図に、事態は動き出した。
どんっと再びの振動。今度の揺れは、先ほどよりもさらに大きかった。そして、床が、わずかに傾いた……ように感じた。
想定外の事態、その一瞬の間隙を突いたのは意外な人物だった。
がしっと、後ろからタックルを喰らい、アベルが前につんのめる。

驚き、振り向けば、そこには、自らの腰に腕を回す国王、ネストリの姿が見えて……。
「行け。カルテリア。我が息子よ」
「くっ、しまった」
その声に弾かれたように、カルテリアが動き出す。追いかけようとしたアベルであったが、国王に邪魔されて走り出すことができなかった。
カルテリアは……しかし、逃げようとはしなかった。彼の取った行動は、またしても、その場のみなの予想を裏切った。
彼は……地面に落ちた、自らの剣の刀身を拾うと、真っ直ぐに――ディオンのところに向かったのだ。
「この揺れる足場では、実力を出せなかろう。ここで、帝国の最強戦力を削らせてもらおうか」
「おいおい、正気か……いや、そういうことか」
舌打ち一つ。それから、ディオンはパティを小脇に抱えると、半身に構える。
「つくづく蛇って連中は、矛盾の塊だな……」
突き出されたる刃。必殺の一撃を難なく横に薙ぎ、体勢を崩させたうえで、剣の柄をカルテリアの首筋に打ち込む。
「ぐっ！」
そのまま、前に崩れ落ちるようにして、どう、とカルテリアが倒れ伏す。
「なっ、なぜだ……カルテリア……。なぜ」
国王ネストリの、呆然とした問いかけに、カルテリアは、苦痛に歪む口元に笑みを浮かべた。
「……なぜ、もなにも、あるまい。俺はお前が憎いのだ。父よ。だから、お前の言うことは、なにも、なに一つ聞いてやる、つもりはない」
それから彼は、ディオンのほうに目を向ける。
「俺の、個人的な事情に巻き込んじまったから、な。捕まらすわけ

にはいくまいよ」
　彼が最後に為さんとしたこと、それは、ディオン・アライアに一矢報いること……ではなかった。
騎馬王国の蛇、火燻狼を、逃がすことだった。
つい先ほどまで剣を突き付けていた燻狼の姿が見えないことに、ディオンは珍しく苦り切った顔をする。
「まったく、つくづく混沌とは程遠い。自分の身を捨てて仲間を助けようだなんてね」
　ずずぅんっと再び、灯台が揺れる。
「ああ、くそ……。アベル王子、国王陛下をお願いするよ。僕のほうは……」
　ディオンは、カルテリアの襟首を持って肩に担ぐ。っと、いつの間にやら、彼の腕を抜け出したパティが、ひっしとディオンの首に腕を回して、おんぶの姿勢をとる。
「ああ、うん……。まぁ、動きやすくしてくれたのは助かるが……。君もずいぶんと変わった子だな……」
　姫さんの知り合いには、変わった子が多いな、などとつぶやきつつも、ディオンは何の躊躇いもなく、海に向かって跳躍した。

　冷たい海水に顔をしかめつつ、ディオンは全員の無事を確認。それから、改めて、灯台を見上げた。
　灯台は、赤々とした炎を上げていた。どん、どんっと鈍い音が断続的に耳を叩く。
「なるほど……。仕上げに灯台を壊して逃げようって腹だったわけか……。あれは、いったい、なんだったんだい？」
　声をかけた先にいたのは、ハンネスだった。その近く、わっぷわっぷ……などと溺れそうになっているベルには、オウラニアが寄り添っている。
「おそらくは、〝火風の薬〟と呼ばれるもの、でしょうな。不老不死の薬を探す過程で見つかったものと伝え聞いているが、なんでも、

火をつけると炎の暴風を生み出すのだとか」
「やれやれ、あんなもの大量に作られたら戦(いくさ)の形が変わりそうだな。世界がますます混沌に陥りそうだ」
ディオンはふぅっと深々とため息。それから、小さく首を振り、
「まぁ、それでも……一人の命も損なわずってオーダー通りには、できたから良しとするべきかね。オウラニア姫殿下も国王陛下も、みな無事だったわけだし……」
視界の外れ、何世代前かのガヌドス国王によって建てられた灯台は、今、その使命を終えて、崩れ落ちようとしていた。本来であれば、ガヌドス王室の権威の象徴をへし折るという、象徴的な演出だったのだろうが……。
「それにしてもアベル殿下、申し訳ありませんね。一番、華のない御仁の世話をお願いすることになってしまって……」
ハンネスがオウラニアとベルを、ディオンがパティとカルテリアを持って跳んだため、必然的にアベルは、ガヌドス国王とともに、海にダイブする羽目になっていた。
「……ははは。まぁ、これならば、ミーアにやきもちを焼かれずに済むでしょうから」
ただただ、苦笑いのアベルである。
っと、噂をすれば、少し離れた場所に、一隻の船が姿を現わした。
それは、グリーンムーン公爵家が誇る美しき船、エメラルドスター号の威容だった。

第百十九話　崩れ落ちるは灯台か、ミーアか……

ミーアたちを乗せたエメラルドスター号は、一路、ガヌドスの王都を目ざして進んでいた。

帰りの旅は、実に順調に推移していった。

行きは船酔いに悩まされたミーアであったが、帰りは、それどころではなく……。

その目は、ただただ不安げに、ガヌドスの港を見つめるのみ。否、港の、わずかに左側。海に突き出すような土地に建てられた、古びた灯台のほうで……。

――もしも、あそこに、黄金の灯台が建ったりしたら、どんなことになるか……。

ぶるり、と背筋を震わせながら、ミーアはルードヴィッヒのほうを見て。

「ルードヴィッヒ、一つ試みに問いたいのですけれど……。あの古びた灯台、建て直すとして、黄金で作ることというのは可能なのかしら？」

「黄金……でございますか？」

ルードヴィッヒは、一瞬、驚愕の表情を浮かべるも……。

「なるほど。黄金であれば、潮によって錆びることもなく……。理にかなっているか。だが、金銭的には……表面に塗るだけだったら……？」

ぶつぶつ、つぶやき始める。が、すぐにその表情が非常に真面目なものに変わってきて……それはすなわち、実現の可能性が、普通にあるということを意味していて……。

「もっ、もう結構ですわ。大体わかりましたわ」

ミーア、慌てて止めつつも、背筋につめたぁい物を感じる。

――ルードヴィッヒが即座に否定しないということは……やはり、

実現してしまうということかしら？　黄金の灯台が……。
なにやら、イケナイ着想をルードヴィッヒに与えてしまったのではないか、と慌てるミーアであったが、もはや後の祭りである。口は災いのもとなのである。
――い、いえ、しかし、まだですわ。黄金の、わたくしの姿を模した灯台でなければ、なんの問題もないはずですわ。ただの黄金の灯台だったら普通の無駄遣い。否、ルードヴィッヒが理に適っているというのであれば、無駄遣いにすらならない。形、形が大事ですわ。いや、そもそも、あの灯台が壊れなければ……。中の施設とかも、そのまま使える状態であれば、あえて、あそこに資金を投入しようなどと言う話にはならないはず。
ミーアは、キリリッと顔を上げ、
「急ぎますわよ！」
すべては、灯台すら守り切る勝利のために。それをするために、今為すべきことをしよう、と、ミーアは気持ちを切り替える。今、すべきことはなにか？　今すべきことは、そう……。
――ううむ……特にやることはなさそうですわね……。
「パティさまとオウラニア姫殿下、ご無事でしょうか？」
ふと、アンヌの声が聞こえる。視線を向ければ、アンヌが胸の前でキュッと拳を握って、心配そうな顔をしていた。
ミーアは小さく頷いて……。
「ディオンさんが行っておりますし、おそらくは問題ないと思いますわ」
そもそも、パティになにかあれば、自分の存在が消えてしまうわけで……だから、おそらく、パティのほうは大丈夫だろう、とミーアは考える。
一方で、オウラニアについては、心配ではあるものの、その無事を確かめる術はなく。
「そうですわ。今は、ただ信じるしかありませんわ。ともかく、あそこまで行きつかなければ、なんの手も打てませんし……。急がな

ければ……」
っと、つぶやいた、まさにその瞬間だった！
ずん、ずずんっと！　突如として、腹に響くような音が聞こえてきた。
「なっ！　なんですの、今の音は！？」
音は、遥か前方、そびえ立つ灯台のほうから聞こえてきていた。なにやら、よく見ると、もくもくもくっと、黒い煙が灯台を渦巻いていて……。
「なっ、なな、なんですの？　あれは。なぜ、あのように煙が出ているんですの？　いったいなにが……うん？」
ふと、視界の外れに、キラキラと、なにかが瞬いた。そちらに目を向けると、ちょうど、海に浮かぶ、人の姿が見えて……。
「あれは……」
目を凝らしたミーアは、すぐに気付く。それが、探している人たちであると。
「オウラニアさんにパティ、無事でしたのね。それに、ガヌドス国王陛下、ディオンさんにアベルにベル……ハンネス大叔父さまも。ふふふ、どうやら、全員そろっているみたいですわね」
こちらに気付いたのか、アベルが大きく手を振っていた。
「引き上げを急ぎなさい」
後ろで、エメラルダの指示する声が聞こえる。それに従い、船員たちは手早く、小型船を出そうと走り回っていた。それを横目に、ミーアは、ふーうと深々とため息を吐く。
どうやら、なんとか無事に終わりそうだぞぅ……っと、安堵しかけた、その時だった。
再び、灯台からずずぅん、っと、何やらおもたーい音が聞こえて……。
「あっ……そうでしたわ。灯台が燃えていたんでしたわ。早く火を消しませんと……あ！」
次の瞬間、ミーアは、ぽっかーんと口を開けて、固まる。

目の前の灯台、その下のほうで赤い光が瞬いたかと思うと……盛大な煙を上げて、灯台の上部が崩れ落ちていくのが見えて……。
「どうやら、灯台が崩れたようですね……」
ルードヴィッヒの、淡々とした、冷静極まる指摘に、ミーアは、お、おおぅ、っと呻き声を漏らし、膝から崩れ落ちるのだった。

第百十九話　崩れ落ちるは灯台か、ミーアか……（後書き）

やはり、年の最後にはミーアかな、と思いまして。登場してもらいました。

では、よいお年を！

第百二十話　ミーア姫、まともなお土産を選んでしまう

ガヌドスの王宮。その客室にて……。窓際に、一人の少女が座っていた。

憂いを帯びた顔で、ほふーう、とため息を吐くのは、我らが帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンであった。

「ああ……これからのことを考えると、頭が痛いですわ……」

なぁんて、ひどく憂鬱そうな顔をするミーア。そのテーブルの上にはお茶菓子であるガヌドス名物、海カモメのタマゴクッキーが載せられたお皿と、ホカホカの紅茶があった。

楽しい楽しいティータイム。ミーアにとっての至福の時であっても、ミーアの気持ちを明るくするには至っていない。

それほど、問題は山積しているのだ。

エメラルドスター号に引き上げられた者たちから、事件のあらましを聞いたミーアは、もう一度、おおう、っと深い嘆きの吐息を吐いた。

ガヌドス港湾国での一連の騒動は、こうして、幕を閉じた……などと、そうそうスムーズにいくはずもなく。

ミーアの戦いは、むしろ、ここからスタートすると言っても過言ではなかった。

――ヴァイサリアンのことは、なんとかなりそうですわ。議会の合意形成は順調にいっているようですし、幸いなことに、国王陛下の妨害がありませんわ。スムーズに決めることができそうですわ。

その辺りの事務的なことは、ガヌドスの元老議会に丸投げである。

――問題はオウラニアさんですわ。音頭を取ってもらわなければならないこの時に、あの様子では……。ううむ、なんとか立ち直ってもらわないといけませんわ。

無事に救い出されたオウラニア。国王暗殺の容疑も解かれ、晴れ

て潔白の身となったわけだが……。
「やっぱり、ショックですわよね……」
誘拐されて、どんなことがあったのか……。パティから聞かされたミーアは、思わず天を仰いだ。
父が、自分を愛していなかったこと、自分のことになんか、なんの興味もなかったこと……それを知らされることは、やっぱりショックだろう。
ミーアのように、ちょっぴり、てきとーなところがあっても、そんなことを言われたらショックを受けるはずで。まして、オウラニアは、ミーアが見たところ、割と真面目なところがある。
――やっぱり、ショックだと思いますわ。いえ、それ以前に……。
傷つくだけで終わるだろうか？　悲嘆に暮れるだけで、済むものだろうか？
「恨んだり、憎んだりもしそうですわね。うう、そうなると、蛇が心配ですわ」
ガヌドス国王に恨みを持つ男、カルテリアは無事に捕縛できた。それはいいのだが、彼の代わりに今度はオウラニアが、本当に父親を殺してしまう、などということになれば、目も当てられないわけで……。
――うう、気が重いですわ。けれど、オウラニアさんには、これからのガヌドスのための旗振りをぜひやっていただかなければなりませんし……。
ミーアや、ミーアの臣下にやらせるわけにはいかないのだ。ミーアの功績を讃える黄金の灯台を建てられないために、ここはなんとしても、オウラニアに前面に立ってもらわなければ……。
山積みの問題に、ミーアのお腹がキリキリ痛む。
こんなことでは、食欲も失せて、クッキーを食べることもできないことだろう。
ほーふーう、とため息を吐きながら、ミーアは頬杖を突く。それから、何気ない調子で、クッキーのお皿に手を伸ばし……伸ばし…

…その手が空を切った。
「あら……？」
不思議に思い、目を向ければ、お皿の上、クッキーはすでに消えていた！
「なっ！」
ミーア、驚愕のあまり固まる。それから、恐る恐る口の周りをペロリ……甘い！
「これは……っ！」
そうして、ミーアは悟る！
気付かぬうちに、クッキーをペロリしていたことに……！
そうなのだ。失せたのは食欲ではない。クッキーのほうだったのだ！
ついでに、口直しとばかりに、紅茶のほうも失せていた！
……つまり、おおむね、平常運転のミーアなのであった。
「とっ、ともかく、考え込んでばかりもいられませんわ。一に行動、二に行動ですわ。ガヌドスのことを片づけて、それで、帝都に帰還して誕生祭を楽しむ。これですわ！」
ミーアは、パンパン、っと自らの頬を叩いて、立ち上がる。
「あ、そうですわ。ラフィーナさまにも、ガヌドスのことでは大いにお骨折りいただきますし、お土産をしっかり買って行きませんといけませんわね……万が一、干物が気に入らないというケースも考えられますし……なにか……」
そう、小心者の戦略眼を持つミーアは、食べ物がダメだった時のこともきっちりと考えているのだ。今のミーアに、ぬかりはないのだ！
「アクセサリーみたいなものがいいかしら……と言って、あまりお金をかけたものだと、ラフィーナさまの場合には、あまり喜ばないかもしれませんわ。ガヌドスならではのアクセサリーをお土産に買って行けば……」
そうして、ミーアが選んだのは、貝殻を使った髪飾りだった。

とても、まともなチョイスだった！
そうなのだ。ミーアはこう見えても、一応は帝国の皇女殿下なのである。
そのセンスは一応は、お姫さまに相応しく、一応はまともなものなのだ。一応は……。

さて、後日、それをプレゼントされたラフィーナはたいそう喜んで、毎日のようにつけていたという。その結果……ラフィーナの肖像画担当の絵描きの中で人魚熱が再燃してしまうわけだが。
そうして、情熱がほとばしり過ぎた怪作を見たラフィーナが、思わず、はぇ……？　などとどこかのミーアのような声を上げることになるのだが……、まぁ、割とどうでもいいことなのであった。

第百二十話　ミーア姫、まともなお土産を選んでしまう（後書き）

今年もよろしくお願いいたします！

第百二十一話　海月は考える……最悪とはなにか？

さて、お茶菓子もなくなったし、とりあえず、なにかしなきゃなぁ、と部屋を出たミーア。廊下に出た直後、彼女はこちらに歩いて来る祖母、パトリシアの姿を発見する。
「あら、パティ、どうかしましたの？」
パティは、こちらを見て、ハッとした顔をしてから、とと、っと走り寄ってきて。
「ミーア……姫にお願いがあってきました」
「あら、わたくしにお願い……なにかしら？」
「蛇の男……カルテリアと話したい」
「まぁ、あの男と……？」
ミーアは、ふぅむ、っと唸る。
「そうですわね。彼の聴取はルードヴィッヒに任せておりましたけれど……。直接、話を聞いておいたほうがいいこともあるかしら……」
ミーアは一つ頷くと、パティを連れてひとまずルードヴィッヒのもとへと向かった。

今回の事件の首謀者たちは、ほとんどが、すでに捕縛されていた。その処遇を巡っても、なかなかに面倒な駆け引きが行われた。
普通に考えれば、彼らはガヌドス国王を害し、国内を混乱に陥れようとした大罪人である。処刑されても文句は言えない立場だ。けれど、国王ネストリの一言が、波紋を投げかけた。
この者を処刑することは、許さぬ……と。
あろうことか、自らに刃を向けた男の助命を告げる王に、議会は当然難色を示す。
けれど、それを好機と見たルードヴィッヒが、横から主張したの

だ。
「事件の首謀者たちは、ヴァイサリアン族の冷遇を見かねて立ち上がった者たちです。そんな彼らを処刑すれば、せっかくの融和ムードに水を注しかねないかと。それに、灯台守たちを一掃してしまえば、ガヌドス側としても困ったことになるのでは？」
逆に、一度は処刑を覚悟したのに、それを温情によって許されたとなれば、彼らはいっそう真剣に働くのではないか？　と。
なおかつ、彼らがなぜ陰謀に加担したのか、それをしっかり聞き、その原因を排除すれば、より万全の体制になるはず、とルードヴィッヒは力説した。
仮に彼らを一掃し、新たな人材を育成したとて、現状を維持していては、同じことの繰り返し。いつ同じ不満を突かれ、付け込まれるか、わかったものではない、と。
ルードヴィッヒの沈着冷静な言葉には確かな説得力があり、今では、すっかり議会のご意見番的な地位を獲得しつつある。
正直なところ……ミーアとしては自らの家臣であるルードヴィッヒの活躍は、あまり望ましいことではない。手柄がすべてミーアに帰せられてしまうからだ。
だが……ここへきて、ミーアは方針の転換を求められてもいた。
――灯台が壊れてしまった以上……改修工事は不可避となりますわ。だから、もう、こうなっては、多少、形をヘンテコにしたいとか言い出しても我慢すべきですわ。黄金で作ったとしても、それはガヌドス側の無駄遣い。わたくしの……知ったことではありませんわ！
そう、ミーアは妥協点を探し始めたのだ。
滝に堕ちる直前の、その強い流れの前では、しょせん海月は無力なもの。なればせめて、滝から落ちても、滝つぼに沈むようなことにだけはならないように、と……。
ミーアは落下点を模索したのだ。
では、最も避けるべきは何だろうか……？　それは……。

――黄金の灯台が信仰の対象になるようなことは、決して避けなければなりませんわ。
それが、結論だった。
「あの黄金の灯台を拝めば、帝国の叡智がやってきて、あらゆる問題を解決してくれるだろう」
なぁんてことを言われるのは、迷惑千万。ミーアとしては、絶対に避けるべきことなのだ。
――それに「信仰」の対象となってしまえば、中央正教会にも怒られてしまいそうですし……。ヴェールガとの関係がこじれるのは好ましくありませんわ。
かつて、ご当地聖女とかなんとか言われていた時とは、すでに状況は違うのだ。
本人は決して望んではいないことながら……ミーアにはすでにかなりの権力がある。
帝国内はもちろんのこと、サンクランドや騎馬王国、ペルージャンにもミーアの知己は多い。ミーアネットなるものの存在、ミーア学園の存在もある。
今やミーアは大陸の重要人物と言ってしまっても、決して過言ではないのだ。
けれど、そこにさらに信仰まで生じてしまえば……それは、極めて危険なことになる。
――ラフィーナさまとも、せっかく良好な関係を築けているわけですし……。ガヌドスには余計なことはしてほしくありませんわ。
ゆえにミーアとしては、ガヌドス国内が混乱し「もはや隣国の救世主に頼るしかない！」　などという状態にはなってほしくない。
国王ネストリ……はあてにならないかもしれないが、王女オウラニアや議会には、きちんと国家運営を担ってもらいたいのだ。
そのための助言であれば、許容せざるを得ない。転びかけているガヌドスに手を差し伸べ、もう一度、自分の足で走れるように手を貸す。そのぐらいならば、仕方ないのではないか、と、ミーアは考

えたのだ。
今回の騒動の記念碑やら、感謝、友好の証としての黄金のミーア灯台ならば、もはや仕方ないことなのだろう、と……。
そんな悟りの境地に至ってしまったミーアである。
今ならば「あんまり派手な肖像画じゃなければ、いいかしら？」という境地にあるラフィーナと美味しい紅茶が飲めそうだ。
まぁ、そんなこんなで、ルードヴィッヒの活躍により、今回の犯人一味は、一部を除いて釈放される予定である。
厳しく言い含められはするだろうが、ほぼ無罪放免と言っても良い状況だろう。
そして、その、無罪放免から除かれた一部に、例の蛇の暗殺者、カルテリアがいるのだ。
――それにしても、パティ、いったい何の話をしたいのかしら？
小さく首を傾げるミーアであった。

第百二十二話　ミーア姫、ふんわりと疑問を呈す

「ミーアさまが直々に尋問をなさると……そういうことでしょうか？」

蛇の男と話がしたい、と話したところ、ルードヴィッヒは、微かに姿勢を正した。

「ええ、まぁ……」

一応は頷いておく。本当は、パティが話したがっているだけなのだけど……と心の中で付け足しつつ。

「そうですか。わかりました。それでは、私も同行いたします。それと、念のためにディオン殿にも、一緒に行っていただきます」

ルードヴィッヒは立ち上がると、すぐに各所に話を付けに行ってくれる。

「パティも、皇妃になった時にはこういう方がいると便利ですわよ」

ちょっぴり誇らしげに言うミーアに、パティは小さく首を振り……。

「私の周りには、信用できる人が少ないから……。自分で動き回ったほうが安心できる」

難しい顔をする祖母に、ミーアは、ふぅむ、と唸ってから、

「ルードヴィッヒほど有能でも便利でもないかもしれませんけど、今の帝国宰相は、ある程度、信用のおける人物だと思いますわ」

父の下でずっと政務に当たっている宰相は、帝国革命時にも裏切ることなく、命を落とす人物である。蛇と通じている可能性は低いとミーアは判断する。

「一人でも、二人でも、信頼のできる人間がいれば、少しは気が休まるはずですわ」

そうして、パティの頭を静かに撫でつつ、ミーアはルードヴィッヒを待った。

やがて、やってきたルードヴィッヒとディオンの後について、ミーアは目的の場所に急いだ。

蛇の暗殺者、カルテリアが幽閉されているのは王宮の一室だった。牢というほど粗末な部屋ではない。他国の要人を泊めるための一般的な部屋だった。かつてミーアが幽閉されていた牢などとはまさに雲泥の差であり、ついつい「ズルいですわ！」などと言いたくなってくる。

中に入ると、両腕を縛り上げられたカルテリアが、ギロリと睨みつけてきた。

「ほう、これはこれは……。帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンに直々にお越しいただけるとはな」

「お初にお目にかかりますわ。カルテリア・ペルラ・ガヌドス王子殿下」

そうして、スカートをちょこん、っと持ち上げた瞬間に、

「俺の名に余計なものを付け足すな。気分が悪くなる！」

叩きつけられるむき出しの殺気！　その濃密な殺気に、傍らにいるパティが身を強張らせる。けれど……ミーアは涼しい顔をしていた。

なんなら、口元に笑みすら浮かべる、その余裕。どこか上から見下ろすかのような、揺らぎのない態度。

そうなのだ、ミーアはカルテリアに対して、精神的優位性を獲得し（マウントをとっ）ていたのだ。

なぜか？　理由はとても簡単で……。

――こいつ、しょせんディオンさんにボコボコにされてた奴ですし……。

これである！

かつて、ディオン・アライアに命を狙われ、追跡された経験を持つミーアは、ディオンの格下を前にして見下せるだけの胆力を習得しているのだ。

それに、すぐ後ろにはディオンが控えてもいるのだ。
正直、どれだけ殺気を向けられようと、鼻で笑えるレベルなのである。
「そう怖い顔をするものではありませんわ。子どもが怖がってしまうでしょう？　わたくしたちは、ただ、あなたの話を聞きに来ただけですわ」
「話を聞きに？　俺がそう簡単にしゃべると思っているのであれば、見くびられたものだが……。ああ、例の嘘が吐けなくなる薬でも飲ませるつもりか？」
「それも一興ですけれど、生憎と持ち合わせがありませんの」
シュトリナに聞いたらひょっこり出してきそうな気はしたが……。恐らく、パティがしたいのはそういうことではないだろう、と自重したミーアである。
それから、ミーアはそっとパティの肩に手を置いた。パティは、こくん、っと小さく頷き……。
「聞きたいことがあります。あなたのお母さんは、混沌の蛇？」
その言葉に、ミーアは思わずギョッとする。
それは、考えていなかったからだ。てっきり、母親を捨てたガヌドス国王に恨みを持ったこの男に、蛇がすり寄ってきたものとばかり思っていたのだが……。
「ああ。そのとおりだ。それが、どうかしたか？」
対するカルテリアは、パティの問いかけに不思議そうに首を傾げた。
「あなたは、それを知って、なにか思わないの？　最初から、あなたを殺し屋として、ガヌドス国王を仕留めさせるために育てたのだとしたら……」
「わからんな。その問いになんの意味がある？」
「あなたのお母さんが、ガヌドス国王を殺すために近づき、恋をしたふりをして、あなたを身ごもって、捨てられて……。あなたを蛇の暗殺者として育てた。そのすべてが、あなたのお母さんの計画だ

ったとしたら……、あなたを殺しの道具にしようとしたのだとしたら、あなたは、なにも思わないの？」
その言葉に、ミーアは再び目を剥いた。
――そっ、それは、考えておりませんでしたけれど……。なるほど、よくよく考えればパティは、帝国皇帝を堕落させ、帝国が崩壊するようにする、そのための役割を与えられておりましたわね。同じようなことがガヌドスに対して行われていても不思議ではない、と……。もしも、パティの言葉が正しければ、こいつにガヌドス国王を恨む理由はありませんわ。お母さまが捨てられたということ自体が、お母さま自身の計画であったということになりますもの。
パティの言葉には、さすがのカルテリアも、一瞬、考える様子を見せたが……。
「なんとも思わない。俺は母より生きる意味を与えられた。俺は、蛇の暗殺者として、ガヌドス国王を殺す。そのために生まれ、育てられた。剣の腕を鍛え、船上での戦い方を覚え、蛇の知識をもって、その機会を待ち続けた。すべては、母が憎んだあの男を殺すため。母がいつからそれを企んでいたのかなど些細な問題だ」
はっきりと言って、カルテリアは笑った。
「小娘、我が母を悪として、俺の心を変えようとしたか。なるほど、燻狼が言っていたとおり、お前は蛇の技を持っているらしいが……無駄なことだ」
パティの言葉は、カルテリアには届かない。それを見ていて、ミーアは察する。
――なるほど。その理屈では駄目ということですわね……。おそらく、パティは自分と、この男の母とを同一視している。だから、自分を……その母を悪にして、この男を被害者にしようとしている。けれど、それでは納得させられないのですわ。
おそらく、カルテリアにとって、母親の言葉に理があろうがなかろうが関係ないのだ。仮に母が悪意のみをもって彼を育て上げたと証明できたとしても、彼の心には響かないだろう。

それならそれで構わない、とこの男ならば言い切るに違いない。
ゆえに、むしろ言わなければならないことは……。
「可哀想……ですわね」
気付いた時には、言葉が出ていた。
「ほう。お前も俺を憐れむのか？　帝国の叡智よ。悪しき母に作られた、哀れな息子だと？」
小馬鹿にしたように笑うカルテリアに、ミーアは静かに首を振り、
「わたくしは、あなたを憐れむのではありませんわ。いいえ……」
一度、言葉を切って、息を吸ってから……。
「わたくしは、あなただけ、を憐れむのではありませんわ」
言い直す。はっきりと……。
「わたくしは、あなたのお母さまを憐みますわ。子を“誰かを殺すための存在”として育ててしまった女性を……ゼナイダさんを」
ミーアは、パティの頭に手を置きつつ、続ける。
「あったはずではないかしら？　幸せになれたはずの未来が……。母と子、平凡に、けれど、幸せに生きられる道が、まったくなかったのかしら……？　あなたのお母さまは、そのように生きて幸せだったのかしら？　あなたに復讐という想いを託せて幸せだったのかしら？」
「俺を説得するために、母の気持ちを捏造しようというのか？」
叩きつけられるは、滴るような暗い憎悪。けれど、ミーアはそれに怯むことはない。
ただ淡々と話を続ける。
ディオン・アライアに遥かに劣る男を相手に、怖がる必要などないのだ。
「無論、存じあげておりますわ。人にはそれぞれの幸せの形がある、と。だから、わたくしが、本来、あなたのお母さまのお心を語るだなんて、傲慢なことと思いますわ。けれど……」
そっと胸に手を当てて、ミーアは言った。
「わたくしは、断言しますわ。自らの子を殺すための道具のように

育てることを、幸せに思う親など、いるはずがない、と。そして、もし、本気でそんなことを思う方がいたとしたら、その方は……歪んでいる。歪められてしまっておりますわ。人々に、文化に、国に、世界に……。ゆえに、可哀想ですわ」

ミーアがしたのは、線引きの位置の変更だった。

パティは……ゼナイダとカルテリアとの間に線を引こうとした。ゼナイダという悪によって育てられたカルテリアを被害者にしようとした。

けれど、ミーアは、その母親すらも被害者として、線を引く。

カルテリアが、その母親の被害者と言ってはいけないのだ。

その母親すらも被害者で、あなたたちは幸せになれるはずだったのだ……と、そんなヴィジョンを示してあげることこそが肝要。

ミーアの脳は、この時、なかなかに冴えていた。

それは、先ほど消えたクッキーが、空中に消失したというのではないことを証明するものだった。あのクッキーは確かにエネルギーとして、ミーアの脳みそをぎゅんぎゅん回すのに使われ、余った分はきちんとＦＮＹとして蓄えられているのだ。

……大変なことである！

まぁ、それはともかく……。

「あなたたちは幸せになれるはずでしたわ。お金がない、小さな家での生活になったとしても。子を愛し、子に愛され、子の将来に希望を抱く。それは、人として当たり前の、そして、普遍の幸福ですわ」

ミーアは、人としての普遍的な幸福感を提示し、その当たり前が得られなかったゆえに、カルテリアの母を憐れむ。そして……。

「であるならば……あなたの怒りを向ける先は、本当に正しいのかしら？　あなたのお母さまもまた、被害者なのだとしたら……、あなたのお母さまをそんな風にしたのは、誰？　それは、あなたのお父さまではない。あなたが剣を向けるべきものは、本当はなんであるのか……あなたは考える必要がありますわ。カルテリア・ペルラ・

ガヌドス」
ミーアは問う。お前の復讐はなにゆえのものであったのか？　と。
母の怒りの、無念の原因を作ったものはなんであったのか、と。
それから、ポツリとつぶやくように……。
「あなたのお母さま……ゼナイダさんの、その“本当の心”は、いったい何を望んでいたのかしら……」
本当の心……それは、極めて危険な単語である。
「陛下の本当のお気持ちは、こんなものではない！」
などと言うのは、自らの都合の良い想いを君主に押し付けて、家臣が暴走する際の常套句であるし、ミーア自身、色々な像を建てられそうになるたびに戦わねばならない、厄介な言葉だ。
相手の気持ちを勝手に慮って、だから、今の姿は偽り、気の迷い、一過性のもの、と断ずる傲慢だ。
けれど、ミーアはあえてそれを口にする。
本当の気持ちはこうだ！　と断定するのではなく「本当の気持ちは、真実、こんなものだったのかしら？」とふんわり疑問を呈することで、それは本当の気持ちじゃなかったんじゃない？　と仄かに匂わせ……揺さぶるのだ。
そのうえで……。
「息子であるあなたは、それを考える必要がございますわ。そうしないと、何もわからぬまま、ただ、流されて父を殺すことになる。会ったことのない何者かの悪意に、踊らされるという愚を犯すことになる。それは、避けるべきではありませんの？」
それだけ言うと、答えを待たずに、ミーアは部屋を後にするのだった。

第百二十三話　贅沢な傷心

蛇の手から助け出されたオウラニアの傷は、思いのほか深かった。身体的な傷ではなく、その心につけられた傷のほうが……。

彼女は、あの日以降、ずっと部屋に引きこもっていた。

広い部屋、ただ一人でベッドに横になり、ぼんやりと天井を眺める。否、厳密に言えば、彼女は天井を見ていなかった。その瞳が映すのは、あの日の……灯台の記憶だ。

「お父上は来ますよ。命懸けでね。でも、残念ながら、それは、あなたのためじゃあないんですよ。オウラニア姫殿下」

事前に言われていた言葉。そのおかげで、父が来たことに驚きはなかった。

ただ、その時に……。

「ああ、本当に来たわー。私じゃない、兄のために……」

そうわかってしまった瞬間に……、ふっと心の中の火が消えてしまった気がした。今までギリギリのところで燻っていた火が……ミーアと出会って、再び燃えようとしていた小さな火が……呆気なく消えてしまったような……そんな気がしたのだ。

「あなたより、息子さんのほうが大切なんです。だから、あなたに興味なんかないんですよ」

その言葉は、深く、冷たく、オウラニアの胸を抉る。

何度も、何度も、強調されるのは、父が自分のために来たのではないという事実。父が、自分よりも兄のほうを重んじて、心から愛しているということだった。

――あれは、悪いやつの言葉だからー。真に受ける必要なんか、どこにもないんだからー。

あの男が、自分を傷つけようとしていることはわかっている。わざと嫌なことを、傷つくようなことを言っているのだということは

よくわかっている。
けれど、だからといって無視はできなかった。なぜなら、彼の言葉が真実だからだ。
その言葉が、頭の中を何度も何度も木霊する。
それは、まさに感染する思考だった。
知らなければ考えずにいられたのだ。けれど知ってしまったら、もう二度と知る前には戻れない。刷り込まれた言葉、気付いてしまった事実から、逃れることはできない。
「ああー、だから、お父さまは、私に頑張らなくってもいいなんて言ってたんだー」
もともと期待していない。興味もない。だから、頑張る必要がない、と。
『あなたは、ガヌドス王の血を引く者だから、一緒に連れてはいけないの』
かつて母は、そう言った。
寂しくなかったわけじゃないけど、自分にはすべき役割があると思えて、それが誇らしかった。
なのに……。
『お前はなにもしなくても良い』
父に言われた言葉重く響く。
それが、本当に……心からの本音であったことが、今ならばわかる。
「そうかそうかー。だから、お父さまはあんなことを言ったのかー」
自分は、もうなにもしないことに決めたのだ、とも父は言った。
それも、ひどくと腑に落ちた。
そうして、オウラニアは……父の虚無感に囚われた。
なんだか、なにもかも……どうでもよくなってしまったのだ。
もう、なにもやりたくなくなって……。けれど……。
「喉が、乾いた……」
体は不自由なもの。なにもしなくても、腹が減るし、喉も乾く。
億劫だけど、仕方ないことだ。

もぞもぞとベッドから起き上がった彼女は、枕元に置いてある水に手を伸ばす。それは、専属メイドが朝、汲んできてくれたもので……。

飲もうと容器に口を付けた、まさにその時……オウラニアは眉を潜めた。

なんだろう……？　なにか、聞こえたような……？

オウラニアは、何気なく、壁にかけられている大きな絵を眺めた。

それは、彼女の先祖が釣り上げたとされる巨大魚、ムーンボウの絵だった。かつてミーアが壮絶な殴り合いの末、撃退した恐ろしい魚である。

その絵が、ガタ、ガタガタっと揺れ……横にずれた。その裏の壁には、小さな穴が空いていて……。

「え……ええ……？」

ぽかーんと口を開けるオウラニア。その目の前で、穴から、小さな人影が這いずり出てきた。

一瞬、刺客かしらー？　悲鳴を上げたほうがいいかしらー？　などと思うオウラニアであったが、よく見ると、それは見知った子どもたちだった。

「や、ヤナ、それにキリルも……。どうして、どうやってここにー？」

首を傾げるオウラニアに、ドヤァな顔を披露するのは、先頭をきって部屋に入ってきたベルだった。腰に手を当てつつ、ベルは言う。

「ふっふっふ、どこに王宮にも隠し通路の一つや二つ、あるものですから。この程度の、隠し方で、ボクの目を欺こうだなんて、まだまだ甘いですよ」

なんか、こう、すごくベルだった！

ハンネスと会い、ちょっとした追走劇をも経験したベルの中では、今まさに、冒険魂が燃え上がっているのだ！

そして、国王とオウラニアが誘拐されかけた今、「警備のために、抜け穴を探す」とか適当なことを言えば、色々自由に動き回れてし

まうのだ。
まぁ、それはともかく……。
ベルについてきた二人のヴァイサリアンの子どもたちは、そんなベルをスルーして、オウラニアのところに小走りにやってきた。
「オウラニア姫殿下、大丈夫ですか？」
オウラニアの顔を見て、キリルが心配そうに眉根を寄せる。
学園で、そして、今回の旅ですっかり仲良くなってしまったヴァイサリアンの男の子。その姉、ヤナも気遣わしげな目を向けてきて……。
「えっと、パティから……聞きました。あの……すごく大変だったって……」
「ああー、二人とも、心配してきてくれたのねー」
部屋に引きこもり、出ようとしなかったから、こんなふうに強引に会いに来たのか……。
お姫さまの部屋に忍び込むなんて、無茶なことするなー。と思った。
部屋から出ないんだから、誰にも会いたくないって察してよ、とも思った。
けれど、わざわざ注意するのも怒るのも面倒だったから、曖昧な笑みだけ浮かべて。
「実は、そんなに大丈夫じゃないかもー」
適当に答えて、オウラニアはベッドのほうに歩いていき、ぽてん、っと横になった。
「なんだか、ちょっと疲れたわー。悪いけど、今は、あんまりお話ししたくないわー」
力なく横たわるその様は、ミーアがベッドの上に打ち上げられた時と少しだけ似ていて……けれど、決定的に違っていた。
ミーアのように、積極的にサボろうという気概が、オウラニアにはなかった。
そこには、なにもなかった……。

蛇のばらまいた毒は確実に……、オウラニアを弱らせ、殺しかけていたのだ。
が……。
「あ、あの、ミーアさまが『くそったれだ』って、大勢の前で叫んだ話……聞きたくないですか？」
ヤナの言葉に、オウラニアがゆっくり顔を向けた。
「ミーア師匠が……なんて？」
「くそったれ、です。ヴァイサリアン族の人たちの前で……」
「く……」
思わず、口に出すのを躊躇うオウラニア。釣り三昧な日々を送っているとはいえ、オウラニアは一国のお姫さまなのだ。口に出していいことと、悪いことがある。それゆえに……。
「みっ、ミーア師匠がそんなこと言ったの？」
ついつい興味を惹かれてしまうのだ。
自分などよりよほどお姫さまらしいミーアが、何に対して、そんなことを言ったのか……。どんな状況で言ったのか……。
ベッドの上に起き上がったオウラニアに、ヤナは静かに語りだす。
島でのこと……ミーアが何を語ったのか……。
すべてを聞き終えたオウラニアは、思わず、笑ってしまっていた。
「ああー、それは、すごくミーア師匠らしいわー。でも……ふふふ、すごいわー、ミーア師匠。相変わらずねー」
ヴァイサリアンの隔離島のことを見事に解決したとは聞いていたが、まさか、そんなことを言っているとは思わなかった。
「ああ、それにしても、ふふ。おかしい。ミーア師匠がそんなことー、ははは」
ひとしきり笑って、ちょっとだけ気分がスッキリしたオウラニア。その耳に小さな声が届く。
「あの、オウラニア姫殿下……」
ふと見ると、ヤナがまっすぐにこちらを見つめていた。きゅっと小さな拳を握りしめ、ものすごーく真剣な顔をしている。

「あらー？　なにかしらー？」
問い返すと、ヤナは一瞬、迷ったように視線を揺らしてから……。
「お父上と、ちゃんとお話ししたほうがいい、と思います」
その言葉に、息を呑む。
「どうして、そんなこと言うのー？　今、せっかく、気分がよくなってるのにー。なんで、関係ないあなたが、そんなことー」
「だって、あたしたちはっ……もう、できないけど……オウラニア姫殿下は……それができるから……」
「あっ……」
その言葉に、ガツンと、頭を殴られたような気がした。
――そっかー。ヤナも、キリルも、もう話したくっても話せないんだー。お父さまとも、お母さまとも……。
二人の親はすでに亡くなっている。どれだけ願おうと、それをすることはできない。
では、自分はどうか？
もう、話すことなんか、ないと思っていた。話したくもないと思っていた。けど……それができるということは、それだけで、幸せなことなのではないか？
そうして、彼女は改めて思い知らされた。
自分はやっぱり甘ったれのお姫さまだ。いじけて、ベッドの上で横になっていたって、水が出て来るし、お腹が空けば食べ物だってもらえる。
このまま死んじゃいたい、とか言っていたって、そんなの言葉だけ。ヤナやキリルのように必死に食べ物を探さなければ、本当に餓死してしまうなんてこともない……。
それに気付いたら……なんだか、子どもたちの前で、ダラダラしてるのが、ひどく恥ずかしくなった。
――傷ついた？　大丈夫じゃない？　私、この子たちの前で、そんなこと言っちゃったのー？
うわぁ、格好悪い……っと思いつつ、オウラニアは静かに立ち上

がる。
――私は、まだお父さまとお話ができるし、文句の一つや二つ、言ってやることだってできるんだー。それなら、言いたいこと言ってやろうかなー。
それから、彼女は改めてヤナのほうに目を向けた。視線を受けて、ヤナがピクンッとおびえた様子で立ちすくむ。
そんな彼女の頭を撫でて……オウラニアは言った。
「ありがとう。ヤナ。キリル。なんだかちょっと……ううん、すごく、元気が出たわー」
それから、部屋の外で控えているはずのメイドに声をかける。
「お父さまのところに行くわー。準備を手伝ってもらえるかしらー？」

第百二十四話　ミーアの懸念。休みながら働けばいいじゃない！

カルテリアが幽閉されている部屋から出て、ミーアは小さくため息を吐いた。

――さて、上手くいったのなら、良いのですけど……。

そうして、ミーアは、黙りこくっているパティのほうに目を向けた。

「言いたいことは、言えたかしら？」

パティはうつむいたまま、小さく頷く。が、その表情は晴れない。どうやら、あまり、納得はできていないらしい。

「ふぅむ……」

「ミーア姫殿下、少しよろしいでしょうか？」

ふと、話しかけられて、ミーアはそちらに視線を向ける。っと、ディオンが、興味深げな顔で、こちらを見ていた。。

「ディオンさん、なにかしら？」

「先ほどの話なんですが、ミーア姫殿下は、あの男にも改心をお求めてになっているってことですかね？」

「改心……ああ……まぁ、そのほうが話は聞きやすくはなるでしょうね。敵のこともいろいろ聞き出せそうではありますし、そうできるに越したことはないのでしょうけれど……それはなかなかに難しいのではないかしら……？」

先ほどの、カルテリアの様子を思い出しながら、ミーアは言った。

あの様子では、味方になれと言って納得するとは思えないし、蛇の情報を明かせと言っても承諾はしないだろう。

「では、なぜ、あのようなことを……？」

訝しげに眉をひそめるディオン。その横で、ルードヴィッヒが頷き、

「私も少し気になっていました。あれは、なんらかの布石というこ

とでしょうか？」
眼鏡の位置をクイッと直す。ガッツリ傾聴のスタンスだ。
よくよく見ると、ディオンのほうも相変わらず興味津々で、ミーアの答えを待っている様子……。
ぶっちゃけ、ただの勢いでした！　とは、言い難い空気を敏感に察し、ミーアは思考しつつ、口を開く。
「まぁ、そういった考えもないではなかった感じ……かしら？」
極上のケーキを彩るクリームぐらいふわっとした答えを返しながら、考えをまとめていく。
「先ほど言ったことで、彼の信念が少しでも揺らげば……、彼が自分の信念に疑念を抱いてくれれば、とは思いますわ。固い信念を持った暗殺者など、恐ろしいにもほどがございますし……でも」
っと、一応の論理（ロジック）を口にした後、
「ただまぁ、先ほどのは、あまり意味があることではありませんわ。彼も被害者だ、というのは半ば勢いで、半ばは本心で言ったこと。彼の母が被害者だというのも、ただの思い付きで言っただけですわ」
ミーアは、さっさとその論理を放棄する。
なにしろ、即興で考えたものである。どこに穴があるかわかったものではない。
ゆえに「一応、ちょっとは考えて言ったけど、ほとんど勢いだけで言ったよ！」と表明しておいたのだ。
最初からノリと勢いで、考えなしに口出ししちゃったの！　と言うよりはマシだろう、と判断するミーアである。
それから、ミーアは、パティの頭にポンっと手を置いた。
「パティ、一応、言っておきますけど、あなたとあの方のお母さまは別人ですわよ」
先ほど、カルテリアに言ったことは、半ば勢い、半ば本心で、ほとんど計算はなかった、というミーアの言葉に偽りはなかった。
ただ、唯一、ミーアが気になっていたのは、パティのことだった。
カルテリアの母親、ゼナイダを加害者だとしたパティ。それは、

悪に染まった未来の自分を、ゼナイダという人に重ねたパティの、自罰的な考え方と言えた。
パティは、カルテリアに「自分の罪の犠牲になった息子」という姿を見て、同情したのだ。
それ自体は、悪いことではないのかもしれない。パティが蛇を嫌い、警戒することは、ミーアにとっても望ましいことではある。が、問題は過去に戻ったパティが、蛇を嫌いすぎるゆえに、無茶をし過ぎることだった。
蛇に表立って敵対した結果、パティが殺されてしまったりしたら、ミーアの存在自体が消滅してしまう。それは、まずい。まずすぎる。
いつだって自分ファーストかつパティファーストなミーアなのである。
ということで、ミーアはきっちり言っておく。
「あなたは、ゼナイダさんのようにはなりませんわ。だから、無茶なことは禁物。無理せず、時には休み、なんだったら休みをメインにしつつ、時々、働くぐらいがちょうど……」
「……大丈夫。ハンネスのためにも、無茶は絶対にしないから……」
パティは小さく首を振ってから、ミーアのほうを真っ直ぐに見上げて、
「私は、私がすべきことをするから……」
「そう、ですの？　まぁ、あなたがそういうのであれば……」
これ以上は心配しても仕方ないか……と頭を切り替えにかかるミーアであったが……ふと、その目が、廊下を歩いて来る人物のほうを向く。
「あら……？　オウラニアさん？」
思わず、ミーアは驚きの声を上げた。
なにしろ、王宮に戻ってきてから、ずっと部屋に引きこもっていたオウラニアが、普通に歩いていたのだ。驚きもするだろう。
「ああー、ミーア師匠―。ご機嫌ようー」
スカートの裾をちょこん、と持ち上げるオウラニア。その身にま

とうドレスは、きちんと手入れのされたものだったし、その髪も、どうやら櫛を通して整えられているようだった。
――ああ、よかった。立ち直ったようですわね……。
っと、思わずホッと安堵の息を吐くが……。
「どこに行きますの？」
「ええーっと、これから、ちょっとー、お父さまをぶん殴りに行こうと思って……」
その答えを聞いて、ミーア、思わずギョッとする。
「ちょっ、お、オウラニアさん、そのようなことを口にしてはいけませんわ」
ぶん殴るだなんて、品がない言葉を使ってはいけません！　と。
姫には、保つべき品格があるのだ！　と。
そう主張するのは、先日「くそったれ！」などと口走った帝国の姫、ミーア・ルーナ・ティアムーン女史である。
まぁ、それはさておき……。ミーアは素早く、オウラニアの手元を見た。幸い、鈍器のようなものは、持っていないように見える。
――ということは、ガツンと頭をやっちまおう、という感じではなさそうですわね。それはいいのですけど……。
それでも、やはり心配になってしまうミーアである。
「あの、オウラニアさん、よろしければ、わたくしも、ご一緒しても……？」
恐る恐る聞いてみる。
――万が一、オウラニアさんが国王陛下を弑するようなことがあれば、極めて厄介……。何としても、防ぐ必要がございますわ！
今、ガヌドスから王族がいなくなったら、間違いなく頼られるのはミーアである。
そんな面倒事は真っ平ごめんなミーアなのであった。
「わかりましたー。ミーア師匠にも、聞いてもらえたら嬉しいですー」
どこか覚悟のキマった顔で頷くオウラニアに、そこはかとなく不

安を覚えるミーアであった。

第百二十五話　祖母と孫のアイコンタクト

ガヌドス国王、ネストリ・ペルラ・ガヌドスは、自室に閉じこもっていた。

彼は表向き、娘を救うために暗殺者のもとに赴いた勇敢なる王ということになっている。どちらかというと同情され、尊敬されるべき立場ではあるのだが……。今は、どこか腫物を扱うような態度で、周囲の者たちは接していた。

それは、言うまでもなく彼が、犯人であるカルテリアの助命と赦免を宣言しているからである。

――まぁ、そんなことをすれば、普通に考えても反応に困りますし……。周囲の者としても、この扱いは当然かしら。

しかも、彼は、カルテリアのことだけ明言すると、そのまま部屋に閉じこもり、以降、議会に顔を出すことはなかった。ヴァイサリアンの受け入れや、ミーア提案のミーア学園・セントノエル学園共同研究所のプロジェクトについても、一切、口出ししようとはしなかったのだ。

――こちらとしては、余計なことを言われないというのは好都合ですわね。それに、犯人を処刑しないというのも、こちらの方針とは一致しますわ。けれど……。

チラリとオウラニアのほうを窺い、小さくため息……。

――オウラニアさんは、どう考えているのかしら……？　お父さまの、この反応を……。

ある程度は元気を取り戻したように見えるオウラニアであるが、父の言葉次第では、また傷つき、部屋に引きこもってしまうかもしれない。いや、それ以上に、憎悪によって歪められて、蛇に取り込まれる危険だってある。それはなんとか避けたいところだが……。

っと、ミーアがモヤモヤ考え込んでいるうちに、オウラニアは、

さっさと扉をノックしていた。
ちなみに、同行するのはミーアとパティである。さすがに、ルードヴィッヒやディオンを伴って、一国の王のもとを訪れるのははばかられたためだ。
――まぁ、カルテリアさんなどと違って、いきなり襲われるということもないでしょうし……あら？　でも、オウラニアさんがいきなり殴りかかったりしたら、それをわたくしが止めなければならない、ということになるのかしら？
ミーアは自分より頭一個分背が高いオウラニアを見て、そのあとで、自分よりさらに小さなパティのほうを見る。っと、パティはミーアのアイコンタクトに気付いたのか、オウラニアのほうに目を向け、わずかに考えた様子で首を傾げてから、
『私では無理……』
とばかりに困った顔をする。
小さな祖母を頼る気満々であったミーアは、思わず、ぐむっと小さく呻く。
そうこうしている間にも、オウラニアは部屋の中に入って行ってしまった。仕方なく、ミーアも後に続く。っと、すぐに、窓際にたたずむ王の姿が見えた。
ネストリ王は、ミーアのほうに顔を向けると、皮肉げな笑みを浮かべた。
「これはこれは、帝国の叡智ミーア姫殿下に直々にいらしていただけるとは。お心遣い、痛み入る」
「ご機嫌麗しゅう、ネストリ陛下。お元気そうでなによりですわね。たびたび、お命を狙われて、さぞやご心労のことと思いますけれど……」
実際のところ、ミーアは、少しだけ彼に同情していた。
命を狙われるというのは、あまり気持ちの良い経験ではない、と、ミーアは身をもって知っていたからだ。
「どうかしら、ご気分は……」

「あまりよくはない。正直なところ、余計なことをするものだ……と思っておりますよ。なぜ、愛する我が子の手で殺されたいと願うこの者の命を救うのか……愚かで無駄な労力だ、と」
ネストリ王の言葉に、ミーアは渋い顔をする。
「お父さまー」
その時だった。オウラニアが静かに口を開いた。
「オウラニア、か……」
彼は、ようやく気付いたと言った様子で娘のほうを見てから、スッとその目を逸らした。
気まずくて逸らした……という感じではなかった。ただ、ああ、そこにいたのか、と確認し、すぐに興味を失った様子だった。
「お前と話すことは特にない……いや、私の暗殺の嫌疑を背負わせてしまったのだったか。あれは、すまないことをしたと思っている」
そうして、彼は頭を下げた。
一見するとそれは、誠意ある公人の態度で、それ故に、父が娘にすることとは程遠いものに見えた。
――ネストリ王からは、娘に対する情が一切窺えませんわ。他人に対する礼はあっても、血のつながった家族に対する温もりが、まるで感じられない。
けれど、オウラニアは、特に気にした様子もなく、ただ父を見つめ続けた。
それを見てネストリは、困ったように眉根を寄せた。
「なにか……父親らしい言葉をかけてやればいいのだろうが……残念ながら私は、お前になにも思わない。残せるものはない。王位はお前に渡るのだろうが……それは、お前がただこの国の王の娘に生まれたから継ぐものであって、私が意図して残すものでもないだろうし……」
「どうして……私をー、生ませたのですか？」
震えるようなオウラニアの声……。その答えは、あの灯台の上で告げられたのと同じもので……。

「私は、この世界になにもしたくなかった。なんの影響も与えたくなかった。ゆえに、世継ぎを残す必要があった。“世継ぎを残した”という事実が必要だった。ティアムーンの先代皇妃さまに、そう説得されてな。だから、お前の母を娶り、お前を産ませた。お前個人に含むところは何もない」

ただ淡々と、彼は告げる。

オウラニアのことを、憎んでも嫌ってもいないし、愛しても好いてもいない。

オウラニアに求めていたのは、ただ、世継ぎとしての存在。

ただ、普通に世継ぎを残したという事実。

それだけで、彼は、ガヌドス港湾国の王家の血筋を絶やすという多大な影響を、世界に与えずに済む。

彼は、世界を憎んではいなかった。別に壊したいとも思っていなかった。

でも、彼は世界を愛してもいなかった。なにかを建て上げたいとも思っていなかった。

別に憎いと思っていなかったから、オウラニアの母を離縁した。

いや、むしろ「愛を求める妻」に、自分では愛を与えることができないとわかっていたから、誠意をもって離縁を突きつけたのだろう。

愛せないが……憎んでもいなかったから……そうしたのだ。

彼が、感情を向ける先はただ、かつて愛した女性と、その息子のみなのだ。

――こっ、これって、かなり、ショックなことなのでは？

ミーアは、そっとオウラニアのほうに目を向ける。っと、オウラニアは、一つ、二つと瞬きをしてから……。

「お父さまー」

静かに口を開いた。

第百二十六話　そして彼女は歩き出す

「お父さま―」
意を決した様子で、オウラニアが口を開いた。けれど、そう呼びかけた後、言葉が続かなかった。言うべき言葉を探すように、オウラニアは視線をさ迷わせる。
「オウラニア、私が憎いか……？」
そんな娘に、ネストリは静かに問うた。
「憎んでもらっても構わんし、お前にはその資格があろう。だが、あいにくと、お前に殺されてやるつもりはない。我が命をお前にやることもない。この命は、ただ、我が息子、カルテリアのものだ」
「ずいぶんと、息子さんに固執しているようですけど、もし、彼がこの国が欲しいというなら、王位を譲るおつもりですの？」
そうなると面倒なことになる……と一瞬だけ懸念したミーアであったが、その問いかけをネストリは鼻で笑い飛ばした。
「欲しいというならば、もちろんくれてやるが……こんな国が欲しいとは思うまいよ」
「なるほど……それはそうかもしれませんわね」
確かに、ヴァイサリアン族を受け入れたこの国は、これから先、色々と苦労しそうだし、進んで苦労を背負いこんで王権を欲する者など、ミーアからしてみれば、想像の埒外の存在、端的に言ってヤベェ奴である。
――しかし、蛇的な視点でいえば、ガヌドス港湾国の王というのは、割とねらい目という気もしますけど、どうなのか……。
などと、ミーアが会話をしている時だった。
不意にオウラニアが、ああ、っと小さく声を上げた。
「ああ、そうだわー。私、結局、これを言おうと思っていたのねー」
パンッと手を叩き、実にスッキリした顔をして、オウラニアは父

の顔を見つめ……そして。
「お父さまー、私はー、あなたを許すわー」
意外なことを言った。
静かな、穏やかな声で、笑みすら浮かべながら言った。
『あなたを許す』と。
想定外の言葉に、ミーアはまじまじとオウラニアの横顔を見つめてしまった。
「許す……？　この、私を？」
ミーアと同様、驚いた様子のネストリ王。そんな彼に、オウラニアは不思議そうに首を傾げた。
「あら？　私に恨んでほしかったのかしらー？」
「別に恨まれても、恨まれなくとも何とも思いはしないが……意外ではあった」
彼の言葉に、ミーアも同意だった。
ガヌドス国王の言葉は、一般的に見れば酷いものだった。娘より息子を重視し、娘には何の感情も向けぬ父というのは……娘からの恨みを買っても当然の存在と言えるだろう。許される要素は一つもないような気がするが……。
――もしかして、許す、とあえて温情を見せることで、お父上の気を惹こうとしてるとか……？　けれど、そんなことでいちいち心動かされる方には見えませんけれど……。
などと言うミーアの予想は、次の瞬間、裏切られることになる。
オウラニアはあくまでも穏やかに、
「恨まないわよー。だって、あなたへの恨みに囚われているだなんてー、時間がもったいないんだものー」
一刀両断した。
オウラニアは堂々と言うのだ。
お前と関わる時間は……復讐のためであったとしても浪費である、と。
「お父さまへの怒りにも、恨みにも、使う時間はないわー。私には、

やるべきことが海辺の砂粒のようにたくさんあるんだからー、そんなことに使うなんてもったいないじゃないー」
復讐に使う時間がもったいないから、許すことでそれを放棄してしまう、とオウラニアは言っていた。
父への感情に心を使うことは浪費で、そんなことをしている暇がないから……オウラニアは、父を許すというのだ。
「だけどー、そうねー。今だけ、ほんのちょっぴり、嫌がらせさせてもらおうかしらー」
そうつぶやいて、オウラニアは自らの頭に手をやった。
「これのこと、覚えておられますかー？　お父さまー」
そうして、オウラニアの差し出したそれ――魚の骨の形の髪飾りを見て、ネストリは首を傾げた。
「これはお父さまがー、唯一、私にくれた髪飾りー。まだ、私が小さい頃に、ご自分で釣った魚の骨を削って作ったものよー」
そう言われても、ネストリ王は、ピンときていないようだった。
「ああ……。まぁ、ほんの気まぐれで作ったものだろう。あいにくと、覚えてすらない……」
なんでもない、と首を振る父に構わずオウラニアは微笑みかける。
「お父さまが覚えてなくっても、私は覚えてるわー。全部、ぜーんぶね。あなたは、私になにも与えないって言ってるけど、そんなのは無理ですよー。お父さまー」
「……なに？」
「同じように、あなたは世界になんの影響もしたくないって……。自分はなにもしたくないっていじけてるけれど、それだって無理ですよー。だって、あなたは私を生み出してしまったから」
優しく、あくまでも穏やかにオウラニアは言った。
それは、彼女の宣言。
世界になんの責任も果たしたくないと告げる父へと。
自分は王族として生き、世界に責任を果たしていくと……。それがお前の娘の姿なのだという……ぶん殴るような宣言。

「あなたは、なにもせず、ただ黙って見ているといいわー。あなたの血を引く娘を通して、世界に影響が広がっていくのをー。あなたが、望もうが望むまいがー、あなたという人間は、世界に影響を与え続けていくのー。この！　私を通してー」

自らの胸に手を当て、力強く、オウラニアは言う。

「なにを、愚かな……そのようなこと……」

「邪魔は、できないでしょうー？　だって、お父さまは、なにもしないのだから。私のすることを積極的に邪魔することだって、できないでしょう？」

挑発するように、煽るように言う。それから、オウラニアはもう一度、その、魚の骨の髪飾りを頭につけ直した。

かつて、それは、オウラニアの拠り所だった。

素っ気ない態度をとる父が、本当は、自分のことを思っていてくれていると、その証なんだと――彼女がすがろうとしたものだった。

けれど、これからは違う。図らずも、それはある意味では復讐の証だった。

それは、父がしようとしたことは、決してできないのだと彼に見せ続ける証だからだ。

でも、同時にそれは、一筋の救いでもあった。

世界になにもしないと心に決めた男が……死の間際、今までの人生を悔いることが、仮にあった時……それは、一筋の光として差し込むものだからだ。

自身の人生は無為ではなかったと……自身の娘が、世界に責任を果たしたと……そう思えるものだからだ。

そして、仮にそうならなかったとしても、オウラニアには関係ない。

彼女は、すでに許しているのだから。

「あなたを恨むなら、こんなもの捨てちゃうのがいいのかもしれないわー。復讐するなら、放り捨てて踏みにじるのがいいのかもしれない。カルテリアお兄さまは、お父さまから、名前も王位も、脱出

のチャンスも受け取らなかったって聞いたけどー、私はありがたくもらっておくわー。だってー、復讐のために捨てちゃうなんて、お父さまのゆえに手放すだなんてもったいないものー。いただける王位は、きちんと有効に使うし、この髪飾りもー」

そうして、オウラニアは髪飾りをつけ直して見せて……。

「ほらー、とっても可愛いでしょうー？　お父さまのために捨てるだなんて、もったいないものー」

ヤナやキリル、ヴァイサリアンの子どもたちのために……ガヌドス港湾国という国のために、そして、ミーアの弟子として自身を研鑽するためにも、時間はいくらでも必要だ。だから、彼女は復讐のためになんか、一秒たりとも使わない、と、そう決めたのだ。

今のオウラニアの心には、蛇に付け入られるような後ろ暗いところは、もはや一遍もない。

なぜなら、彼女はもう許しているからだ。

父の側が歩み寄ってくれれば、彼女は決して拒絶しない。謝罪は受け入れるし、父としての情を向けるなら、娘として情を返すこともあるだろう。

なぜなら、彼女は、もう許しているからだ。

父がどうであったとしても関係ないのだ。

彼女の中で、自分の選択は決まっている。彼女は堂々と胸を張って、許しているのだ。

それは、オウラニア・ペルラ・ガヌドスという一人の少女の、王族としての第一歩であった。

「それでは、お父さま、ご機嫌よう」

優雅にスカート裾を摘まむと、オウラニアは部屋を出て行った。

第百二十七話　火と水、風と土、知恵と命

「……で？　どう思う、ルードヴィッヒ殿」
ミーアたちの背中を見送ってすぐに、ディオンは口を開いた。
「どう……とは？」
「いやだなぁ、先ほどの、我らが姫さんのお言葉さ。蛇の暗殺者と対面したこと、大した意味はない、と言っていたが……」
「どうだろうな……ミーアさまのお考えは、多岐にわたる。そのすべてを把握することは、当然できないが……。いくつか、思い当たるものはある」
「聞かせてもらえるかな？」
その言葉には即答せず、ルードヴィッヒは辺りを窺う。聞き耳を立てているような者はいなかったが……念のため、少しだけ声のトーンを落とす。
「一つには、ガヌドス港湾国への備えだ。あの男を仲間につけられればネストリ陛下への権勢になる。オウラニア姫殿下への配慮もあるだろう」
「だろうね。実際、オウラニア姫殿下の心情は読めないから、あの男を懐柔できるなら、そうしておいたほうがいいだろうね」
「それに、あの男はヴァイサリアンだ」
もし、王が助命を訴えなかったとしても、あの男を処刑することはあり得なかった。もしそんなことをすれば、再びガヌドスとヴァイサリアンとの間で軋轢が生まれるだろうから。
「そういう意味でも、まぁ、味方につけておいたほうがベターではあるだろうね。しかし……それは、あくまでも副次的なもの、とルードヴィッヒ殿は考えているんじゃないかな？」
探るようなディオンの視線に、ルードヴィッヒは思わず苦笑いだ。
「さすがはディオン殿。お見通しか。ああ……そうだな。俺には…

…」
っと、ルードヴィッヒは眼鏡の位置を直しつつ、
「あれは……一つの試みに見えた」
「試み？」
「そう。蛇と人間とを切り離すため、あるいは、蛇がかけた呪いを解くための言葉かけ、とでも言うべきだろうか……」
「カルテリアの母すら、蛇の犠牲者である、と伝えて、奴を蛇という感染思想から切り離そうとした……か」
「今のところ、蛇の関係者のほとんどはヴェールガ国内に幽閉されている。そして、彼らを改心させるために、ラフィーナさまお一人が動いておられるが……。ミーアさまは、それを手伝おうとされているのではないだろうか？」
それから、ルードヴィッヒは、ミーアからお土産のことについて尋ねられたことを明かす。
「髪飾りはともかくとして、干物や、いくつかの食べ物は……おそらく、ラフィーナさまを元気づけたくて選んだものだろう」
「なるほど。てっきり珍味類は姫さんの趣味が悪いだけかと思ったけど、滋養強壮のため、と考えれば納得がいくか」
「それでも、さすがに、ウミヘビを酒に漬けたものなんかは、俺のほうで止めておいたが。ふふふ、ミーアさまも、さすがにどんなものかはご存じなかったのだろうな」
こうして、ギリギリの……本当にギリギリのラインで、ラフィーナへのお土産は、ラフィーナが食べられるもの（食べ……られる？）がセレクトされたのだった。

さて、そんな風にして盛り上がる二人に、声をかける者がいた。
「やぁ、お二方。おね……パティ嬢はご一緒ではなかったのかな？」
優雅な仕草で頭を下げるのは、ハンネス・クラウジウスであった。
五十代の半ばであろう彼であったが、その見た目は青年であり、見ようによってはルードヴィッヒよりも若く見えそうだ。

――あの肖像画の通りだな……。
などと思いつつ、ルードヴィッヒはハンネスに顔を向けた。
「ちょうどよかった、クラウジウス候、よろしければ、少しお話をお聞かせいただければと思うのですが……」
その言葉にハンネスはわずかに首を傾げてから、
「ああ、私も同じことを考えていたが……」
ニヤリと人懐っこい笑みを浮かべる。
「クラウジウス候はすでに死んでいる。私は、長らく帝国から離れていた一市民。だから、堅苦しい言葉遣いは不要だ。私もそうさせてもらおう」
それから、彼は辺りをキョロキョロと見回した。
「しかし、気兼ねなく話すには、王宮は少々、場所が悪いな。よろしければ、お二方、お付き合いいただこうか」
そうして、彼が向かったのは、貧民街の教会だった。
「ここは、祈りの場所。弱き子どもたちを守る神の家なのだがね……」
出てきたヨルゴスは、ものすごーく渋い顔でハンネスに言った。
どうやら、教会堂が壊されたことに、少々思うところがあるらしい。
「まぁまぁ、建物の修理費はきちんとガヌドスか帝国から捻出されるように手配するから」
などと、軽い口調でヨルゴスを説得し、さっさとハンネスは部屋に入ってしまう。勝手知ったる様子で、教会堂の奥、小さな部屋に入ると、遠慮なく椅子に腰かけた。
「さて、ここならば、他人に話を聞かれずに済むだろう」
一切の遠慮のない様子から、彼が、ヨルゴスと古い付き合いであることが窺えた。
やや遠慮がちに、彼の正面に座りながら、ルードヴィッヒは口を開いた。
「それにしても、灯台を崩すというのは、大した威力ですね」

その言葉に、ディオンも苦い顔で頷く。
「ああ、正直、あんなものがあると考えると頭が痛いね。あれは、戦の形を大きく変えるものだ」
「まぁ、悪いほうにばかり考えることもないさ。そんなものがあるのなら、鉱山の採掘ははかどるだろう。帝国は、ミーア姫殿下のもとで、もっと発展していく……」
「と言いつつ、あまり、表情は優れないように見えるが……」
ハンネスは、小さく微笑みながらルードヴィッヒの顔を眺めていた。その様子に、ルードヴィッヒは小さく肩をすくめた。
「人の身には過ぎたる知識……。そう言ったものが、おそらくは世界にはあるのだろう、と思いまして。灯台を吹き飛ばすほどの薬だ。そんなものが溢れた未来は、あまり楽しい世界には思えない」
顎をさすりつつ、ハンネスは興味深げにルードヴィッヒのほうを見た。
「なるほど……。それが、ミーア姫殿下の重臣の考え方か……。さて、ご安心を、というべきか……あるいは、帝国の発展を思うのであれば残念ながらと言うべきかもしれないが……あれが、戦争や採掘に使えるほどに大量に手に入るかと言われれば、正直なところ、難しいだろうと私は思う」
「難しい……？　それは、製法がということでしょうか？」
「というよりは、材料の入手が、かな……」
それから、ハンネスは一瞬だけ考えた様子だったが……。
「あの薬は、火風の薬という。それは、一つには火と風を生み出す薬という意味合からなのだが……ところで、ルードヴィッヒ殿、火とは、なんだと考える？」
「火……ですか」
唐突な質問の意味を吟味するようにつぶやいてから、ルードヴィッヒは答える。
「火とは神の力。あるいは、人と動物とを分ける存在……。文明に不可欠なもの。そんな認識ですが……」

「そう。大体イメージ通りだ。私も似たような認識だよ。だが、今は思い切って、こう定義しようか。火とは、人の知恵の源である、と……」
ハンネスは、そこで人差し指を立て、こめかみを、とんとん、っと叩いた。
「そう、知恵だ。そして、蛇の教典『地を這うモノの書』の異本には、このような記述がある。≪知恵の木の実≫の果汁を絞り、煮詰め、いくつかの薬と合わせると、恐ろしい火と風とを生み出す薬が出来上がると……」
「知恵の木の実というと、あの創世神話に出て来る木の実のことでしょうか？　食べたら必ず死ぬ、と言われていたにもかかわらず、人が、そそのかされて食べてしまったという……」
眉を顰めるルードヴィッヒ。ディオンもどこか呆気にとられた様子で……。
「そりゃまた、ずいぶんと突飛なものが出てきたもんだね」
「無論、本当にあるのかどうかはわからない。が、少なくとも、私の知る火風の薬の製法というのは、そのようなものなのだ。ゆえに、もしその記述が正しいのであれば……それは、大量に作りだして、なにかに使えると言った類のものではないのではないかな」
「それはそうでしょうね。神聖典によれば、知恵の実の生えた園には、人は入れなくなったと言いますから、少なくともおいそれとは作れないでしょうが……それは、あくまでも寓話的なことなのでは……」
ルードヴィッヒの問いかけに、ハンネスは苦笑いを返す。
「どうかな……。しかし、私がパトリシアお姉さまから探せと言われた薬もまた、同じ創世神話に関わるものである以上、軽視はできないと考えているよ」
「創世神話に関わる薬……？」
思わず顔を見合わせるルードヴィッヒとディオンに、ハンネスは言った。

「そうだ。神聖典にはこうあるな。神は大地の土を取り、それを水でこねて作ったものに、命の息を吹き込んだ。それが人となった、と。極論すれば、人とは水と土の器に、神の息を入れたモノであると」

そらんじるように、ハンネスは続ける。

「そして、最初の人は命の木から実を取って自由に食べることができていたという。命の木、すなわち人を形作り、養う『水と土』の木の実だ。その木の実を材料とした薬は、人に活力を与え、命を長らえさせる、『水土の薬』と呼ばれている」

「『火』と『風』の薬、それに『水』と『土』の薬……。世界を形作る四つの原素。なるほど、四原論ですか。ちなみにハンネス殿は、それをどの程度、信じているのですか？」

その問いかけに、ハンネスはひと際おかしそうに笑ってから、

「蛇の教典で得た知識に信ぴょう性もなにもあったものではないな。ただ、それが、創世神話に出て来る木の実そのものであっても、寓話的にその名を冠されているだけのものであったとしても、いずれにせよ、それほど多くは得られないだろうと考えているよ。そうでなければ、今までの歴史の中に、それらしきものが登場していてもおかしくはないからね」

「しかし、その割には、今回は、雑な使われ方をしている気がするな。あの灯台を崩すだけだなんて、そんなことのために使うだろうか？」

疑問を呈したのは、ディオンだった。

一度使えばなくなってしまうような薬を、あんな灯台を破壊するのに使うだろうか？　それは、無駄遣い以外の何物でもないのではないか？　と。

「いい質問だ。ディオン殿。だが、その答えはそう難しくはない」

ハンネスはニコやかに微笑んで、続ける。

「考えるべきは『誰にとっての無駄か』という点だ。混沌の蛇、すなわち、秩序を破壊し、混沌の到来を待ち望む者にとっては、確か

にあれは無駄遣いだろう。されど……あれを使ったヴァイサリアン族の者たちにとっては、どうかな？」
　その問いかけに、ルードヴィッヒは、ハッとした顔をする。
「そうか……。蛇の思想は感染し、歪めるもの。されど、その宿主の思想を完全に蛇のものに書き換えることはできない。なぜなら、蛇の思想自体が、ほとんど存在しないから」
　だから、ヴァイサリアンの復讐が優先されたのだ。仮に、世界を混沌へと落とし込むのに、最も有効な手が、帝国の叡智を爆殺することであったとしても、ヴァイサリアン族の蛇たちにとっては、あの灯台を破壊することのほうが優先されるのだ。
　ヴァイサリアン族の、先祖への想いは「世界を混沌に堕とす」という曖昧にして、無色透明な蛇の思想に勝るからだ。
「ヴァイサリアン族の、先祖の恨みを晴らしたと、高らかに告げるための方法であったと考えれば、あの使い方は、そこまでおかしいことではないのではないかな？」
「火風の薬の製法を書き記した者にとっても、知恵の実を後世に残そうとした者にとっても、あの使い方は本意ではなかっただろうが、なるほど。ヴァイサリアン族にとっては、確かに悪い使い方ではなさそうですね。それに、あの灯台を崩すというのは、あの薬を使わなければ一苦労だったはず……。手で崩すには時間がかかる。派手な演出で、我らヴァイサリアンここにあり、先祖の無念はここに晴らされん、と宣言するのであれば、使い方としてはおかしくはない、と……そういうことでしょうか」
　ハンネスは満足そうに頷いて、
「もっとも、あくまでもこれは推論に過ぎない。他にあの薬がないという保証もない以上、警戒するに越したことはないだろうがね……」
　抜け目なく、そう指摘するのであった。

第百二十八話　時至りて、策なれり

ネストリ王の部屋から出てすぐに、ミーアはオウラニアに声をかける。
「あれで、よろしかったんですの？」
その背に問う。あの解決で、本当に良かったのか、満足なのか……、と。そんな問いかけに、オウラニアは、どこかスッキリした顔で振り返り、
「んー、もう少しー、痛い目見せたほうが良かったですかー？」
「いえ、そうは言いませんけれど……。その、大丈夫なんですの？　オウラニアさんは……」
「残念だけどー、私のほうからできることは、なにもないですからー」
オウラニアは、そうして、ちょっぴり寂しげに笑う。が、すぐに……頬を膨らませて、
「でも、いつまでもー、昔の失恋を引きずって政治をされるのは迷惑だからー。なにもしたくないって言うなら、大人しく玉座に座っていてもらおうかなーってー」
ミーアは、まじまじとオウラニアの顔を見て、それから思わず吹き出した。
「なかなか、辛辣ですわね。オウラニアさん」
「えー？　そうですかー？　でも、ヴァイサリアンの子どもたちのことを思えばー、あんなふうにウジウジしてなんかいられないからー。あらー？」
っと、その時だった。オウラニアが小さく首を傾げた。その視線を追っていくと、そこには、
「これは、オウラニア姫殿下、ミーア姫殿下、ご機嫌麗しゅう」
深々と頭を下げるグリーンムーン公の姿があった。

「あら？　妙なところで会いますわね……。あ、もしや、国王陛下と、悪だくみでもしに来たのかしら？」
「ははは。国王陛下のご様子を伺うに、悪だくみであれば、オウラニア姫殿下とするほうが、実りがありそうな気がいたしますな」
チラリ、とオウラニアに視線を向けるグリーンムーン公。オウラニアは、それを笑顔で受け流すと、
「それでは、ミーア師匠ー。私は、これでー」
さっさと退散していく。
――面倒事の臭いを察知して、逃げましたわね。オウラニアさん。まぁ、グリーンムーン公は、帝国貴族ですし、別に押し付けられたとは思いませんけれど。
小さくため息。それから、ふと思う。
――この人は、帝国革命時に国外脱出してましたけど……蛇との関わりはどうだったのかしら……？　エメラルダさんは、蛇のことも初代皇帝のことも知らなかったみたいですけど……。
などと考えつつも、ミーアは小さく咳払い。
「しかし、今回のヴァイサリアン族のこと、上手く事が運んでなによりでしたわ。あなたには、良い結果ではなかったでしょうが、ラフィーナさまに目を付けられなかっただけでも、幸運と思っていただきたいですわね」
「なるほど。確かにそのとおり。本来であれば私は、苦々しくも、目の前の現実を受け止めるべきなのでしょうが……ふふふ」
っと、そこで、グリーンムーン公は、かすかに笑った。どこか嬉しげですらあるその笑みに、ミーアは思わず面食らう。
「あら？　なにか、笑うようなことがあったかしら？」
「いいえ。ただ、感銘を受けているのです。あの方の策が……長き時を経て、このような果実を実らせようとは……」
「策……？　はて……？」
小首を傾げるミーアに、グリーンムーン公は告げた。
「ヴァイサリアン族を捕らえ、島に隔離しておくこと……、それを

提案されたのは、ほかでもない。ミーア姫殿下、あなたさまのお祖母君、先代皇妃パトリシアさまだったのです」
「はぇ……？」
ミーア……、思わずヘンテコな声をあげる。
――え？　なっ、ちょっ、ぱ、パティ……？
思わず、パティのほうを見れば、パティは、やはり、ぽっかーんと口を開けていた。
――い、いったい、これはどういうことですの？　なぜ、パティは、そんな酷いことを……？
っと、首をひねるミーアであったが、それに気付いていないのか、グリーンムーン公は穏やかな声で解説を続ける。
「海賊行為に対する怒り、恨み。それらが直接的に、ヴァイサリアンの民全体に及ぶ危険があった。ゆえに、本土では受け入れず島に隔離する。そして、我がグリーンムーン家を通して島の体制を維持するようガヌドスに働きかけたのです」
それを聞いて、ミーアは、すとんと腑に落ちるような感覚を覚えた。
――ああ、なるほど。それは、確かに必要な措置なのかもしれませんわ。
確かに、島に隔離するというのは、非人道的な行いだ。おそらくは、非難されるべき政策と言えるだろう。されど、それをしていなければどうなっていたか……？
ヤナやキリルの陥っていた苦境。なぜ、ミーア学園・セントノエルの共同施設を作り、ヴェールガ公国の目を、ガヌドス国内に光らせなければならなかったのか……。
民の行動を、統治者がコントロールするのは難しい。目に見えない影で、ヴァイサリアンの弱者が酷い目にあったであろうことは、想像に難くない。
隔離島は、ヴァイサリアン族への憎悪が薄れた今でこそ不適切な政策となったが、その憎悪を薄れさせる時間を稼ぐためには、必要

なものだった。
ヴァイサリアン族に苦役を課して、国内の人々の怒りを和らげ、なおかつ、彼らに過剰な暴力が振るわれないように体制を整えた。さらに……。
「あなたが、お祖母さま亡き後も、その状況を維持したのは、それなりに旨みがあったからではなくて？」
ミーアは、ジトッとした目で見つめる。っと、グリーンムーン公は楽しげに笑った。
「まさか、滅相もないことでございます。それは、邪推が過ぎるというもの……」
などと笑ってはいるが……。
無償で、造船ができるというのは、ある種の奴隷労働を使うのと同じだ。旨みは当然あるし、利益が発生する仕組みであれば、維持しようとする者たちは多かったはずだ。
仮に、ヴァイサリアンの民を血祭りに！　などと、海賊行為の被害者が言い出したところで、議会はそれを突っぱねるだろう。
グリーンムーン公にしても、その利益に食い込めたのだとしたら、維持するよう働きかけを続けたに違いない。
――パトリシアお祖母さまは……グリーンムーン公の、この性格も見抜いていたのかしら……？
一瞬、考えかけるも、すぐに首を振り、ミーアは言った。
「いずれにせよ、今まで、ヴァイサリアン族で利益を得てきたのであれば、当然、その分は還元していただきますわよ？　グリーンムーン公。これから先、オウラニア姫殿下は、難しい舵取りをしなければならない。国王陛下はあんな様子ですし、議会のコントロールにだって苦労するでしょう。ゆえに、あなたには、我が友、我が弟子、オウラニアさんに、きちんと協力していただきたいですわ」
きっちりと釘を刺しておく。
オウラニアがきちんと国をまとめられるということは、ミーアにとってもメリットが大きい。それに、ヴァイサリアン族を説得した

のは、他ならぬミーアである。彼らが無事にガヌドス国民に受け入れられなければ、寝覚めが悪いだろう。
さらに、グリーンムーン公自身は、皇帝になる資格を持つ子どもたちの親でもある。
エメラルダが押さえとして効いているうちは良いが、将来への禍根を残しかねない要素ではあるわけで……。ゆえに……。
「特に、わたくしは期待しておりますのよ？　グリーンムーン家の持つ知識と人脈に。研究所の設立には、そう言った人脈がどうしても必要ですから」
「セントノエルとの共同研究施設の設立に協力せよ、と……？」
「それと、ヴァイサリアン族の教育も、かしら？」
セントノエル、ヴェールガ公国との繋がりが増えれば、悪いことはできなかろう？　と、ミーアは内心でほくそ笑む。自分の息子を次期皇帝にする、と言った秘密工作に力を入れる余力もなくなるだろうし……。
そんなミーアに、グリーンムーン公は、やや憮然とした顔で問うた。
「それは、ヴァイサリアンの隔離を黙認していた私に、贖罪の機会を与えるということでしょうか？　ヴェールガに、それをアピールする機会を設けよう、と？」
「あなたが、パトリシアお祖母さまの言葉を厳守し、ヴァイサリアン族を守るためにしていたというのであれば、贖罪は必要ないでしょう。この機会に善行を積めばよろしいですわ。けれど、もしも、隔離島という状況に旨味を感じ、悪徳を行っていたという自覚があるならば、贖罪のために励めばよろしい。それだけのことですわ」
ミーアは、そこで、頬に指を当てて、
「ただ、過去に囚われ、足を止めるのは統治者として愚かなこと、と、先ほどオウラニアさんに教わりましたの。だから、あなたも過去ではなく、より良い未来のために手を携えていければいい、とわたくしは思っておりますわ」

澄まし顔で言ってのけるミーアに、グリーンムーン公は……。
「なるほど……そうするのがよさそうですな」
ふっと力の抜けた笑みを浮かべるのだった。

第百二十九話　その意味を考えて……

さて、ミーアたちが帝国へと帰る日のこと。
貧民街の教会に二人の子どもが訪ねてきた。ヤナとキリルの姉弟である。
「ヨルゴス神父……」
「お前たちか……」
日課である、教会堂前の掃除をしていたヨルゴスは、いつもと変わらぬ仏頂面でヤナたちを迎えた。
「今日、帝国に発つことになったんで、ご挨拶にきました」
ちょっぴりかしこまった口調のヤナ。かすかに緊張した様子の彼女を、静かに見つめてから、ヨルゴスは言った。
「どうだ？」
「え……？」
「ここに……ガヌドス港湾国に戻ってきたいか？」
その問いかけに、ヤナは瞳を瞬かせた。
「幸いにも、ミーア姫殿下のお計らいで、ガヌドス国内でのヴァイサリアン族の扱いは改善されるだろう。この孤児院に住むことも、あるいは可能かもしれない。生まれ故郷にいたいというのであれば、ここで面倒を見ることもできるが……」
その言葉に、ヤナは一瞬だけ考えた様子だったが、すぐに首を振った。
「お気遣いありがとうございます。でも……」
っと言い淀んだヤナに、ヨルゴスは、ふん、と鼻を鳴らした。
「まぁ、そうだろうな。セントノエルにいれば食うのには困らない。それどころか、豪勢な食事が用意されている。美しい建物、寝心地の良いベッドと、礼儀正しい子どもたち。その暮らしやすさに比べれば、故郷への郷愁などどうということもなし。こんな国には何の

魅力もないし、今さらこの国に戻るなど馬鹿げたことに思えるだろう」
吐き捨てるようなヨルゴスの言葉に、ヤナの身体が強張る。思わず、うつむいた彼女の耳に……、
「……などと言う輩がいても気にすることはない」
「……え？」
顔を上げると、そこには、見慣れた、仏頂面のヨルゴスの顔があった。
「そんなものは嫉妬だ。耳を傾ける必要はまるでない」
それから彼は、真っ直ぐにヤナを、そしてキリルを見た。
「よく覚えておくことだ。セントノエルで学べるというのは類稀なる特権だ。衣食住の不安もなく、ただ勉学に打ち込める。それは、神の恩寵に等しきものだ。ゆえに、誤解をする者が多い。自らを特別な選ばれた者と……なにか偉大な存在なのだと誤解し、その特権を当然のものとして思いあがる。言うまでもなくそれは避けるべきことだ。が……」
っと、ここで、ヨルゴスが、なんとも言えない顔をする。どこか気まずそうに、口をムグムグさせるその顔が、彼の笑みなのだということに、ヤナは気がついた。
「だからといって、恵まれている自分を恥じたり、罪悪感を覚えたりする必要も、またないのだ。それを遠慮して受け取らないというのは美徳ではない。与えられた金貨を、自分のために使うのは申し訳ない、などと言って土に埋めてしまってはならない。それを無駄遣いすることは罪だが、使わずに埋めてしまうことも、また罪なのだ。望もうと望むまいと、金貨を与えられた物は、それをどのように使うかを、自分で考えなければならない」
「その金貨は、他の、困っている人のために使わなければいけない……ってことですか？」
「いいや、弟を食べさせるために使うとよい。あるいは、娯楽のために使ってはいけない、ということもない。目の前に空腹で倒れた

人がいるなら別だがね。娯楽のために使って、絆を育み、心を養い、そして良きことを行う……そんな使い方だってあるだろう。だが……いずれにせよ、宝を与えられたら、それを使い、何を為すかよく考える必要があるということだ」

「……ミーアさまは、種を蒔く……って言っておられました」

「うん？」

「良い種であれ、悪しき種であれ、その刈り取りは自分ですることになる。だから、良い種を蒔けって」

「ああ……そうか。さすがは、帝国の叡智と称えられるミーア姫殿下だ。ハンネス殿が誇るだけのことはあるな」

ヨルゴスは深々と頷いてから……。

「その喩えで言うのなら、与えられた種はきちんと蒔きなさい。自分の心の畑に蒔いて、惜しげなく水を注ぎ、大切に育てなさい。良い種をたくさんもらったからと言って、その収穫が多いからと言って、そのことに気後れする必要はない」

まるで、歌うようにヨルゴスは言う。その低く澄んだ声が、ヤナにはとても美しいものに聞こえた。

「そして良き実りを刈り取り、多くの人に新たな種を分け与える、そのように生きなさい」

それから、彼は一度、教会の中に入った。汚れた手を洗い、それを布で拭きながら出てきた彼は、ヤナと、そしてキリルの頭に手を置いた。二人の前髪に、軽く触れてから、

「ヴァイサリアンの子どもたち、ヤナとキリル。お前たちが生まれたことには意味がある。ヴァイサリアン族として生まれたことにも、出会った人にも、与えられたものにも、その足が踏む土地にも。我ら人には、それぞれ生きる意味があるのだ。そのことを忘れないでいなさい」

優しく、二人の頭を撫でてから、彼は続ける。

「そして、もし、それが救いになるのであれば、この教会を家だと、故郷だと思いなさい。お前たちが、ここに、一晩とはいえ泊まった

ことにも、ここに帰ってくることが許されるようになったことにも、きっと意味があるのだから」
それから、ヨルゴスは、ヤナたちの後ろに向かって頭を下げる。
「この子たちのことをよろしくお願いいたします。ミーア姫殿下」
いつから来ていたのだろうか……。ヤナたちの後ろには、ミーアたち一行の姿があった。
ヨルゴス神父の言葉を受けたミーアは、なぜだろう……どこか弱々しい顔で、片手を上げて、答えるのだった。

……話は一日前。元老議会のとある場面まで遡る。

第百三十話　弟子のお披露目～ミーア姫、希望を見出す～

オウラニア・ペルラ・ガヌドス。
ガヌドス港湾国における最も偉大なる女王として知られる彼女が、帝国の叡智こと、ミーア・ルーナ・ティアムーンの弟子であったということは広く知られたことであった。
そんな彼女が、王族として、初めて議会に登壇したのは、国王暗殺未遂、そして自身が誘拐されてから間もない日のことであった。

その日、ミーアはひょっこり元老議会に顔を出した。
帝国に帰る前の挨拶をするというのが表向きの理由ではあったが、その脳裏にはもう一つの狙いがあった。
国王の暗殺未遂から始まり、ヴァイサリアンによるクーデター未遂で終わる、この一連の事件の後始末で、議員たちは文字通り忙殺されていた。
そして……混乱もしていた。
この忙しい時、民心がただでさえ乱れる時に、国王が引きこもって何もしないためだ。
「やはり、国王陛下にご登壇いただき、お言葉を賜るべきではないか？」
という者がいる一方で、
「いや、その前に、あの暗殺未遂犯への扱いの是非を問うべきだ。サンクランド国王とまではいかずとも、王の公正は保たれなければ民が納得しない」
などと言う者もおり、議会は紛糾していた。
そのように、混沌とした議会への帝国の叡智ミーアの登場である。あの日、ヴァイサリアン族への非道の是正を訴えたミーアの鮮烈な印象、あるいは、彼女の家臣である少壮の文官、ルードヴィッヒの

知恵の冴えも記憶に新しい。
はたして、彼女がなにを言うのか……。議員たちだけでなく、人々の期待は高まり、議場は聴衆で溢れかえっていた。
ミーアは、そんな議場を眺めて……。
――これは、千載一遇のチャンスかもしれませんわ。
一縷の望みを抱いていた。
一度は諦めかけたミーアであったが……本音を言えば、自分の形の灯台なんぞ見たくもないのである。ちょっとした恨みでも買えば、引きずり倒されるのが権力者の銅像のサガというもの。そうなったら、悲しいではないか。
まして、黄金の灯台なんてものに至っては、表面の黄金をはがされたうえで叩き壊されること請け合いである。さすがに灯台を倒そう！　なぁんて無茶なことを考えるのは、蛇ぐらいのものだろうが……。
ということで、ミーアは最後のひとあがきのために、この議場に来たのだ。
自らの弟子、オウラニア姫を引き連れて！
「オウラニアさん、心の準備はできておりますかしら？」
ミーアの問いかけに、オウラニアは、のんびりした笑みを浮かべる。
「やっぱりちょっとー、緊張するかもー。ミーア師匠」
「大丈夫ですわ。わたくしが、しっかりとフォローしますし、胸を張って行けばよろしいですわ」
グッと拳を握って応援するミーアである。
ミーアの見た儚い希望……それは、父の前で堂々たる啖呵を切った、オウラニアの姿だった。
あの凛々しい姿、輝くような笑顔を見たミーアは反射的に思ったのだ。
――これ、オウラニアさんがカリスマ性を発揮すれば、わたくしの存在が薄れるのではないかしら……？

っと、そう思い、さらに……。
――わたくしの存在感が薄れれば、黄金の美しきミーア灯台などという物は、建たないのではないかしら？
余計な形容詞がついたような気がしないではないが……まぁ、それはともかく。
「それでは、ティアムーン帝国のミーア姫殿下がご到着されたようなので、お入りいただきます」
議長の声と同時に、ミーアは静かに、胸を張って議場に歩み入った。
発言者の立つべき台に乗ると、小さくスカートの裾をつかみ、
「ガヌドス港湾国、元老議会のみなさま。並びに、聴衆のみなさま。ご機嫌麗しゅう。ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
そっと頭を下げる。それから静かに瞳を開け、あたりを見回して……。
「先日は、ぶしつけなことを色々と申してしまったにもかかわらず、みなさまが、わたくしの提案を受け入れてくださったこと、ホッとしておりますわ。みなさまの決定が、選択が、この国をより発展させ、豊かにしていくことと、わたくし、確信しておりますわ」
「しかし、不安です。ミーア姫殿下。あなたさまが帰ってしまった後、この国がどうなってしまうのか……。どうか、その叡智でこの国をもお治めください！」
そんな声が飛んでくるも、ミーアは涼しい笑みで受け流す。
「心配には及びませんわ。この国を導く人が、きちんとここに用意されていますわ。あなたたちを、さながら灯台のように導く方が……」
そうして、ミーアは議場の入口に目を向ける。
そこに立っていたオウラニアに一声かけて……。
「あなたたちの姫、我が友にして我が弟子、オウラニア・ペルラ・ガヌドスが」
議場に現れたオウラニアの姿を見て、人々の間に動揺が走る。

彼女は、無能な……釣りにしか興味がない王女として知られていたためである。
にもかかわらず。
「実は、オウラニアさんは、わたくしに師事しておりましたの」
ミーアは、そう太鼓判を押す。
あなたたちが信用する帝国の叡智の弟子ですよぅ！　っとお墨付きを与えたのである。そのうえで……。
「もっとも、まだまだ出会ってから間もないので、まだ、なにが教えられたとも思いませんけれど……」
オウラニアが失敗した際の予防線もしっかりはっておく。師とは言っても、時間がなかったから、あんまり教えられなかったのよ、と、言い訳ができるようにである。
そして……。
「ここで言うことではないのかもしれませんけれど、あえて言わせていただくならば、オウラニアさんには、すでに教えることなどなにもない、とも思っておりますわ！　オウラニアさんに任せておけば、大抵のことは大丈夫だと、わたくし、信じておりますわ」
ひたすらに、オウラニアを持ち上げるミーア。そのあまりのヨイショっぷりに、オウラニアは困ったように微笑んだ。

第百三十一話　輝け！　黄金の、海と月の灯台

「さて、懸案となっている灯台のことについてですが、修理するのは当然として……ただ修理するだけでは、いささか知恵に欠ける感じがいたしませぬか？」

オウラニアの登場による騒ぎが収まってきたタイミングで、おもむろに一人の議員が口を開いた。それは、造船ギルド長のビガスであった。

「どういうことでしょう？　ビガス殿。私はてっきり、元の灯台の形に補修しなおせばいいだけかと思っておりましたが……」

その疑問に、ビガスは重々しく頷き、

「漁師のための導としてならば、それだけでも足りるでしょう。が、私はあえて主張したい。今回の騒乱、帝国のミーア姫殿下のご尽力があってこそ解決できたものである、と。そのことは、オウラニア姫殿下もお認めになるのでは？」

話を振られたオウラニアは、重々しく頷き、

「ミーア師匠のお働きがなければ、解決できなかったことでしょう」

「なれば！　灯台というのは、我が国にとって極めて大切なものですし、その形を大恩あるミーア姫殿下の形にし、感謝の想いを忘れぬようにするというのはどうでしょう？　材質も黄金かなにかにして、派手目に……」

「おっ、黄金？　灯台を黄金にしようというのですか？」

驚きの声を上げる議員が一人。されど、何人かの議員は、それはいい考えだ！　などと声を上げている。

――むっ、これは……。

ミーアは、その光景を見て違和感を覚え……次の瞬間に察する。これが、仕組まれたことである、と……。

――なるほど。つまり彼は……わたくしに止めさせたいというこ

とですわね？　わたくしに賢明で堅実な判断をさせたうえで、やはり、この国を指導してください、などと言い出すつもりなのではないかしら？

あえて、自らが愚かな俗物を演じても、ミーアとの繋がりを強く保とうという意思があるのではないか……。というか、そういう意思もなく、ただ単に黄金の灯台とか言い出してるんなら、ちょっとヤバイ人ということになってしまうし、ビガスという男は、そこまで愚かではないだろう、と、ミーアは考えて。

――これから先、なにかと頼られるのも大変ですし、属領などもってのほか。できれば自分たちで解決してもらいたいですわ。ここは、あえて……。

ミーアは、パンッと手を叩き、

「あら、それは素晴らしいですわ。黄金の……その、わたくしの形の……灯台？　それは、もう、ぜひやるべきですわね！　完成が楽しみですわ！」

自らも愚か者っぽく演じてみせる。

やれるもんなら、やってみやがれ！　というスタンスである。自身が決して叡智ではなく、むしろわがまま姫である、ということも、きっちりとアピールもしておかなければならない。

そうして、ミーアがお墨付きを与えたところ、

「おお。ミーア姫殿下もこう言っておられることですし、では、議員のみなさま、今回の意見にご異議のある方は……」

などと、ビガスは特に焦った様子もなく、穏やかな笑みすら浮かべて言いやがった！

――あ、あら……？　この方、まさか、本気でなんの狙いもなく、黄金の灯台とか言ってましたの？

いや、ちょっ、まっ！　などと慌てるミーア。けれど、口を開く前に……。

「ふふふー、ちょっと待ってもらえるかしらー？」

そこで声を上げたのは、ミーアの頼れる弟子、オウラニアだった。

度重なる苦境を乗り越えた今の彼女は、一味違うに違いない、と、ミーアは弟子の成長を頼もしく思いつつ、状況を見守ることにする。
「もしも、セントノエル学園と聖ミーア学園の研究施設を国内に作るのだとすればー、お金はかなりかかるでしょうー？　灯台にそんなにお金をかけることはできないわー」
幸いにして、彼女は至極まっとうなことを言ってくれた！
――そうですわ。灯台に余計なお金なんかかけている場合ではありませんわ。ああ、よかった、オウラニアさんがしっかりとした方で……。
「それにー、昔ながらの形状でないと、灯台守の方が働きづらいのではないー？　きちんと機能する物じゃないと、漁師さんたちも困るでしょうー？」
オウラニアに話を振られ、漁師ギルド長が、慌てた様子で頷いた。
「まさしく、オウラニア姫殿下のおっしゃるとおり」
その声に、目が覚めたように、他の議員たちも同調する。それを満足げに眺めたうえで、オウラニアはミーアのほうに目を向けて、
「ミーア師匠のお言葉はー、表面だけ聞いていては決して理解できない、深みを持ったものなのよー。だからー、みんなもきちんと考えないとダメだわー。灯台とはなにかをー」
さながら、ミーアの言葉解釈の第一人者のような顔で、オウラニアは言った。
「師匠はー、私を灯台のように国を導く姫だ、と言ってくださったわー。その言葉通り、ご自身も私をここまで導いてくれたわー。灯台とは導となるもの。そして、偉大なるミーア師匠を象った灯台だというのであればー、それは、船だけを導くものではないはずだわー」
ふと……ミーアは気づく。
おや？　なにやら、流れが変わってきたような……っと。
「ミーア師匠を象った灯台は、国を、人々を導く光だわー。それは、国の中心に置くべきなんじゃないかしらー？」

歌うように軽やかに、ニコニコと楽しげにオウラニアは言う。
「では、オウラニア姫殿下がおっしゃるのは……」
「そう……。この元老議会の議場前に黄金の灯台を建てるのがいいのではないかしら？」
とんでもないことを言い出した！
「今の元老議会は、ヴァイサリアンの人たちにとって、敵でしかない。あの壊れた灯台と同じで、自分たちを苦しめた権威にしか見えないんじゃないかしらー？　けれど、ミーア師匠を象った灯台像を立てたらどうかしらー？　隔離島から自分たちを出すために尽力してくれた、ミーア師匠のことを思い出してくれるのではないかしらー？」
そこで、オウラニアはそっと瞳を閉じた。
「私は、ヴァイサリアンの民に謝りたいって思ってる。だけど、謝り、謝られで終わらずに、共に未来を築きたいって思ってるのー。そのために、ミーア師匠のお力を借りれたらいいなって思っててー」
とても……とぉっても、まっとうなことを言っていた。
ヴァイサリアン族との融和のために、帝国の叡智の権威を使いたい……などと言われれば、ミーアとしても断りがたくはあり……。けれど。
――ああ、こ、これは、恐れていた事態ですわ。
ミーアは、話の流れにヤバイものを感じていた。
なにしろ、これは、黄金のミーア像が議会に立つという悪夢だ。人々はきっと、その像を、議事進行を守る知恵の女神とか、そんな扱いにして、下手をすると拝みだしたりするに違いない。金の像とは、それだけで、人々が伏し拝みたくなるような、魔性の魅力をもったものなのだ。
そんな中央正教会に喧嘩を売るような事態、何としてでも阻止しなければならなくって……。ということで、ミーアはすぐに軌道修正に入る。入……る？
口を開こうとして、そこで改めて、ミーアは思う。

――オウラニアさんの意見を真っ向から否定してしまっては、そんなに言うならお任せします！　などと言われかねませんわ。
さらに、なまじっか、オウラニアがまともで、理にかなったことを言っているがゆえに、真っ向から否定することは危険だった。これ以上のご意見があるなら、ぜひ伺いたい！　などと言われかねないからだ。
――ぐ、ぬぬ……。こっ、これは、どうすれば……。
ミーア、しばし頭を悩ませた末……微妙なる軌道修正をかけることとする。それは……。
「オウラニアさんのお考え、とても素晴らしいものと思いますわ。けれど少しだけ、わたくしのほうでも意見を言いたいところがございますわ」
「あらー、なんですかー？」
こくん、っと可愛らしく首を傾げるオウラニア。そんな弟子にミーアは一つ頷いてから、
「まず、灯台はこの国の、ガヌドスの権威の象徴なのでしょう？　この元老議会もまたしかり。その象徴として、わたくしが前面に出すぎてしまっては、ガヌドス港湾国が帝国の属国のようになってしまいますわ」
「私はー、それでもいいと思いますけどー」
などとつぶやくオウラニアと、うんうん、と同意を見せる何人かの議員たち。
……怖いので、あえて無視して、ミーアは言う。
「わたくしは、属国を求めておりませんわ。わたくしが求めるのは、あくまでも共に歩む友。ガヌドスにも、帝国の友として一緒に歩いてもらいたい。ゆえに、灯台をこの議会に建てるというのであれば、わたくしとオウラニア姫殿下が、こう……手を取り合って周囲を照らす的な……？　そんな感じの形にしたほうがいいのではないかしら？」
自分だけが偶像化されることを回避するべく、積極的にオウラニ

アを巻き込みに行くミーアである。
「つまり……ミーア姫殿下がオウラニア姫殿下を全面的に支持するということを、黄金の像の形で目に見えるようにしようと、そういうことですな」
訳知り顔で解説するビガスにひきつった笑みを浮かべつつ、ミーアは言った。
「ええ、まぁ、そんな感じですわ……。それと、もう一つ、訂正を求めたいですわ。わたくしは最初に黄金と言いましたけれど、それはあくまでも比喩のようなもの……本物の黄金のことではございませんわ」
ミーア、さらに修正をかける。金の像というのは、やはり危険だ。神格化されやすいものになりそうなので……。
「わたくしが黄金と言ったものは、オウラニアさんが言ったのと同じ、ヴァイサリアンとガヌドスの民が向かうべき……黄金の未来、といったような意味ですわ。黄金の未来への道筋を照らす灯台。ゆえに、今はまだ、黄金は手に入っていない。それはこれから手に入るもの、いずれ、必ず手中に収めるもの。我々は、それに向かって歩いていく……。そういったことを表現する灯台になればいいな、と思っておりますわ」
ミーアの言葉を聞いて、議員たちは、それぞれに感じ入った様子で頷いた。
「なるほど。黄金の灯台など無茶だと思ったが、そういう意味でしたか」
「我らを導く上での権威の象徴というのは、なるほど灯台のようなものですな」
「では、ミーア姫殿下とオウラニア姫殿下が手を携えて民を導いていく。そのような意味を持つ像を作るということで……」
「おいおい、灯台ということを忘れるんじゃないぞ？　しっかりと、両腕を頭上に掲げさせて、その手の部分が光るように……」
「全体に、その光を反射させる仕組みを作って……」

「いや、いっそのこと目が光るように……」
喧々諤々、議論を始める議員たちを見て、ミーアは、ふーぅ、っと疲れたため息を吐く。
「まぁ……うん。結局のところ、このぐらいが妥協点……ですわね、たぶん。これで良かったのですわよね……うん」

かくて、ガヌドス港湾国の元老議会の議場前には、大きな灯台が建てられることになった。
それは二人の姫が、両腕を空高く掲げる形をしていた。その腕の先に上っていけるようになっていて、そこが明かりを灯せる構造になっていた。
そして、なにか大きな行事の時には夜通し、町を照らし続けるようにするのが、この国の新しい伝統になった。

その灯台には、このような名前が付けられていた。
『黄金の未来を照らす海と月（オウラニヌーア）の灯台』と。

第七部　輝け！　黄金の海月の灯台　Ｆｉｎ

第百三十一話　輝け！　黄金の、海と月の灯台（後書き）

本日で、第七部終了となります。
活動報告更新します。

プロローグ　輝け！　純白のミーア灯台！

ガヌドス港湾国での厳しい戦いを終えたミーアは、意気揚々と帝都への凱旋を果たした。
そうなのだ。ガヌドスを出発する頃には、すっかり消沈していたミーアであったが……。
「まぁ、沈んでいても仕方ありませんし……オウラニアさんがまともな判断をしてくれれば、それほど酷いことにもならないはずですわ。うん、そのはずですわ！」
見事に浮上をはたしていた。浮かびやすい海月ことミーアは、わずかでも美味しいもののことを考えると、すぐに気持ちが上向きになるのだ。これから先の誕生祭で待っているご馳走を思えば……なんともないのだ。
それに、ミーアたちに遅れること数日で、オウラニアも帝都にやってくると言っていたし、そこでもう一度、念を押しておけば問題ないだろう。
「ともかく、わたくし、頑張りましたわ！　誕生祭を楽しんで、心を癒してもいいはずですわ」
ミーアが、自らの誕生祭で食い倒れることを決意した瞬間であった。
今年も紫のドレスが必要そうである。
さて、馬車の中、子どもたちが物珍しげに街並みを眺めていた。帝国において、ミーア誕生祭は、近隣諸国で有数の大規模なお祭りである。ゆえに、子どもたちが興奮するのもよく理解できるミーアである。
「すごいお祭りですね、ミーアさま」
呆気にとられた様子で言うヤナに、ミーアは、心なしか胸を張って言った。

「ええ。けれど、今年は少し規模を小さくしておりますわ。不作が続いてますし……」
「あ、ミーアさま、あれはなんですか？」
っと、キリルが指さした先。行列ができているのはミーア焼きの屋台だった。
帝都の新月地区名物、ミーア焼きは、帝都民に愛される焼き菓子として、不動の地位を築いていた。
ミーア的には、自身を模したお菓子の頭が齧られるのを見るのは、若干、複雑な感情があったが……まぁ、いいのだ。美味しいし。
「あれは、帝都名物のお菓子ですわね」
「じゃあ、その隣にあるのは……」
「そちらは……んっ？　眼鏡屋……？　なにやら、面白い形の眼鏡が並んでおりますわね。ふふふ、わたくしも、いくつか買っておこうかしら」
上機嫌に街並みを眺めていたミーアであったが……。
「ミーアお姉さま、じゃあ、あれは……？」
小さく声をあげ、パティが指さした先は白月宮殿だった。ミーアもそちらに目を向け……、
「ああ、あれは……」
目を……向け？
「あれ、は……ナニ？」
思わず口をあんぐり開ける。
白月宮殿の前、いつぞや見たのと同じミーアの形をした雪像が立っていた。
いや、それはいい。よくはないが……少なくとも驚くには値しない。
まぁ、今年もお父さまはやるだろうなぁ、などと覚悟していたミーアである。
だから、まぁ、雪像自体は想定内だし、その大きさが過去より若干大きくなっていても、許容できるのだが……。問題は、その雪像

の目が――明々と輝いていたことだった。
「お……おぉ……」
宮殿前に馬車を止め、大急ぎで雪像の下に立ったミーアは、それを見上げて、慄きの声を漏らす。
白月宮殿の前に立つ氷像。いや、ただ、立つなどと言うものではない。近くで見たそれは、どちらかというと、そびえ立つというほうが正しいほどの威容を誇っていた。そして、その目の部分では、松明の明かりが揺らめいていた。
「……あれは、どうなっておりますの？　松明が入っているようですけど、溶けないものなのかしら……？」
「はい。問題ありません。我が師、ガルヴの監督のもと、我が同輩の者たちも何人かが設計に関わっています。さらに、有志の職人たちも作成に協力しています」
スチャッと、音もなく現れて解説してくれたのは、ルードヴィッヒの同輩、バルタザルだった。
ルードヴィッヒの留守の間、もろもろの指揮を執っていた彼はすまし顔で続ける。
「もちろん、お金はかけていません。みな、そうしたいから、そうしたまでのことですので」
「そ、そうなんですのね。それは、お疲れさまでしたわね、バルタザルさん」
「お褒めに預かり恐縮です。ガヌドス港湾国でのこと、ルードヴィッヒから連絡をもらっています。お見事な沙汰に、我ら一同、驚愕しております」
「そう……。わたくしとしては、この雪像のほうが驚愕に値するもののように見えますけれど……。なんというか、灯台のようですわね……」
ミーアが引きつった笑みを浮かべれば、バルタザルは、納得の頷きを見せた。

「なるほど。それは、言い得て妙ですね。ミーア姫殿下の灯台か。なるほど、良きタイトルをいただきました」
「……まぁ、それはなによりですわ。うん」
黄金の灯台の悪夢から逃れてきた先に、純白の灯台が待ち受けているというサプライズに、ミーアは乾いた笑みを浮かべる。この世の不条理を思わずにはいられないミーアである。が……。
――まぁでも、こんなふうに馬鹿みたいなことで笑っていられるのは、良いことなのかもしれませんわ。
前時間軸において、今年の冬はすでに大飢饉の最中である。
街行く人々の顔に笑顔はなく、力なき者たちは容赦なく見捨てられる地獄であった。
ルールー族の森は焼かれ、各地で内乱の火が燃え上がり、疫病が蔓延り、国中を殺伐とした空気が覆っていた時期である。
それを思えば……こんな風に無駄に巨大な雪像を作れることは幸せなことなのだろう。
うん、それを、思えば、思えば……。
ミーアは改めて、巨大な、自らの雪像（目が光るＶｅｒ）を眺めて、
「いいこと……なんですわね。うん……」
やっぱり小さくため息を吐くのであった。
民のリーダーたる皇女殿下には、当人にしかわからぬ苦労があるのだ。

さて、そんなミーアであったが、城に入ってすぐに、苦労を分かち合える人の姿を見つける。
「ミーアさん、ご機嫌よう」
そう声をかけてきたのは、ヴェールガ公国から駆け付けたラフィーナだった。
「ああ、ラフィーナさま、ご機嫌よう……あら？」
っと、そこでミーアは気付いた。なぜだろう、ラフィーナは笑っ

ているけれど、ちょっぴり、不機嫌な顔をしていた。
「ラフィーナさま？　なにかございまして？　帝国になにか、お気に障るようなものが……？」
「ああ……ミーアさん。いえ、なんでもないわ。なんでも……」
そうは言うものの、その涼やかな笑みの中、ミーアはピリピリとした緊張感を覚えた。
それはそう、言ってしまえば、かつてのラフィーナが帯びていた獅子の気配。
――こっ、これは、ただ事ではありませんわ！
慌てたミーアは、すぐにラフィーナの手を取って。
「ラフィーナさま、せっかくいらしていただいたのですから、少しお茶にしましょう。ガヌドスで、色々とお土産を買ってきましたから」
そうして、自らのお部屋に招待することにしたのだが……。

プロローグ　輝け！　純白のミーア灯台！（後書き）

活動報告更新しました

第一話　ピン、ポン、パクン！

――ねっ、眠れる獅子を起こそうとするなど、いったいどこの恐れ知らずが、そんなことをしたんですの？　そんなことをするのは、ベルぐらいしかいないはず……でも、ベルはわたくしと一緒に来ていたというアリバイがございますし……。うぬぬ。

難解なアリバイ崩しに頭を悩ませつつも、ミーアはラフィーナを自室へと招待した。

「空中庭園でお茶と洒落込みたいところですけど、さすがに冬は寒いですし。わたくしの部屋で、申し訳ないのですけど……」

などと殊勝なことを言うミーアに、ラフィーナは小さく首を振り、

「いいえ。嬉しいわ。お友だちのお部屋に遊びに行くことなんて、たまにしかないから」

少しだけ寂しそうに笑った。それから、深いため息を吐き……。

「はぁ、やっぱり、駄目ね。ついつい引きずってしまって。せっかく、ミーアさんのお誕生日をお祝いしに来たのに……」

などと表情を曇らせる。

「それは別に構いませんけれど……いったい、なにがありましたの？　珍しいですわ。ラフィーナさまが、そんな風にお怒りを露わにされるだなんて……」

笑顔で怒るラフィーナを見るのは、前時間軸、いや、サンクランド以来だっただろうか……。最近はすっかり、獅子みも抜け、親しみやすい感じになってきたラフィーナである。

「いったい、なにがありましたの？」

眉を潜めるミーアに、ラフィーナは再び、ため息を吐いてから、

「実はね……」

不満たっぷりに頬をぷくーっと膨らませて……。

「先日の聖夜祭でのことなんだけど……ミーアさんたちがいない時

に、ヴェールガから司教が派遣されてきたのだけど……」
セントノエル学園での一件を話し始めた。

毎年、冬に行われる聖夜祭は、中央正教会最大の祭りだ。
セントノエル学園でも、例年、ヴェールガ本国から司教がやってきて、儀式を執り行うことになっている。
今年、セントノエル島にやって来た司教は、マルティン・ボーカウ・ルシーナという男だった。
この年、三十九歳になるこの男は、司教にして伯爵を務めるヴェールガの重鎮だった。けれど、それだけでなくヴェールガ公国の中では、さらに特別な地位にある男だった。
自由港湾都市セントバレーヌ。ヴェールガ公国の飛び地にして、商人たちが治める黄金の港……その地に派遣された司教こそが、他ならぬこの男であったのだ。
「ご機嫌よう。ルシーナ司教。お久しぶりですね」
涼しげな笑みを浮かべるラフィーナに、ルシーナ司教は深々と頭を下げる。
「ご機嫌麗しゅう、ラフィーナさま。こうして、拝謁が叶ったこと、心からお喜び申し上げます」
「どうかしら？　セントバレーヌの様子は」
セントバレーヌは極めて難しい土地だった。ヴェールガでありながら、ヴェールガではない。その地は、商人たちの組合によって治められており、治安などは彼らが雇った自警団によって守られている。
最も宗教心に篤いヴェールガ公国の飛び地ながら、そこは商人的な……合理主義的な金銭至上主義が思想の根底にある、変わった土地と言えた。
「相変わらずでございます。かの地は、金貨が支配する土地。それは永久に変わることがないことでしょう。まぁ、その分、献金は潤沢にいただいておりますが……」

ルシーナ司教の言葉は、どこか苦味の感じられるものだった。
ラフィーナは静かに彼の様子を見つめてから、
「それにしても珍しいわ。あなたがセントノエルに来るなんて。どういう風の吹き回しなのかしら？」
セントバレーヌ派遣司教は重鎮とはいえ、国の中央とはいささか離れた地位である。
聖夜祭のような大きな儀式の場合にも、ほとんど派遣先のセントバレーヌから離れることはないはずなのだが……。
ルシーナ司教は、やや表情を引き締めて、ラフィーナのほうに目を向け、
「実は、ラフィーナさまに直接、申し上げたきことがあり、こうして参上いたしました」
重々しい口調で言った。

ミーアは、そこまで話を聞いたところで、ピンっと来た。
「ああ……もしかするとその方は、ラフィーナさまの恋愛事情に口出ししてきたということではないかしら……？」
ミーアは思わず、ポンッと手を打つ。
これは、もしや楽しいお話しなのでは？　っと思い至ったミーアは、いつの間にやらテーブルの上に並べられていた野菜ケーキに手を伸ばす。
フォークで綺麗に切り分けて、パクンッとあまぁいスポンジ生地を口に入れる。
恋バナの時には、甘いケーキは欠かせないのだ。
けれど、そんなミーアを見てラフィーナは不思議そうな顔をしていた。
「私の、恋愛事情……？　なんのことかしら」
「なんのことって、馬龍先輩とのデートがヴェールガの重鎮にバレたとか、そう言ったお話しではありませんの？」
そう指摘してやると、途端に、ラフィーナは口をポカン、っと開

け……。次の瞬間には、
「なっ！　そ、そんなのではないわ。そもそも、私と馬龍先輩とは、そ、そんな関係じゃ……」
「あら、そうなんですの？　てっきり、またこの冬休みには遊びに行くものとばかりに……」
「まぁ、行く約束はしているけれど……で、デートとかじゃない……と思うし？　あくまでも馬に乗りに行くだけで……もう！」
そんな風に頬を膨らましつつも、お友だちと恋バナをして……心なしか楽しそうなラフィーナである。
――しかし、ルヴィさんもですけど、ラフィーナさまも負けず劣らず恋愛には疎いですわね。
……などと、ちょっぴり上から目線に評するのは、アベルとの幅広い恋愛経験を誇る帝国の恋愛脳（えいち）、ミーア・ルーナ・ティアムーン皇女殿下である。
「騎馬王国の民は、神聖典の中に登場する重要な民族よ。ヴェールガ公国との関係も悪くないし、姻戚関係も過去にないではないの」
騎馬王国十二部族の内、水の一族は儀式を司る一族だ。中央正教会の儀式にも通じる彼らとヴェールガ公国には深い結びつきがある。
ゆえに、林族の馬龍とラフィーナが恋仲になったとしても特に問題はなく……。
「まぁ、だからといって、私と馬龍先輩は別に、そういうのじゃないけど……」
なぁんて、恋する乙女の顔で言うラフィーナが、ちょっぴり微笑ましいミーアである。
――この調子なら、獅子が目覚める恐れは少ないのかしら……？
と、安堵したのも束の間……。
「では、なにが、ラフィーナさまをそんなに怒らせたんですの？」
改めて尋ねると、途端にラフィーナはこわぁい顔をして……。
「酷いのよ。ルシーナ司教は、私がミーアさんと仲良くし過ぎることは問題だ、って言ったの」

「……はぇ？」

思わぬ方向から来た波に、ミーアは、なんとも間の抜けた声を上げた。

第二話　獅子を恐れぬ者

「帝国皇女ミーア姫殿下と親しくするのは、いかがなものか……と私は考えています」

そう言われた時……ラフィーナは一瞬、表情を消した。けれど、すぐに涼やかな笑みを浮かべ直す。それは、数多の場面でミーアを戦慄させてきた、あの笑顔だった！

「あら……なぜかしら？　ルシーナ司教。ミーアさんは、とても素晴らしい方だと私は思っているのだけど……」

それから、ラフィーナはそっと胸に手を当てて、

「この大陸に住まう人々を安んじて治めよ、と……。神聖典の教えをよく守り、努力されている方よ？　貧しく弱き者に手を差し伸べ、悪を見逃さず、されど、悪人が正しき道に立ち返ることに尽力する。ミーアさんほど素晴らしい人を私は知らないわ。私は、ミーアさんと友であることを誇りに思ってる」

そう断言するラフィーナに、ルシーナ司教は首を振った。

「私もそのように聞いております。セントバレーヌにもミーア姫殿下の支持者はおりますゆえ。フォークロード商会や大商人シャローク・コーンローグ、彼らに与する者たちは、みなミーア姫殿下を支持している。それは存じておりますが……さてさて。それは本当か。素晴らしい人格者か、もしくは、そう振る舞っているだけか……」

「少し……ミーアさんに失礼なのではないかしら？　ルシーナ司教」

ラフィーナの声が、わずかばかり低くなる。笑みを消し、静謐な表情を湛えたラフィーナは、それでも穏やかな声で言う。

「私は、ミーアさんの友人として、怒りを禁じ得ないところよ」

「ご不興を買うのは百も承知。そのうえで、あえて申し上げます。ラフィーナさま。皇女ミーアと、あまり近づきすぎるのは危険です。あるいは……ラフィーナさまが友として振る舞うことが、かのミー

ア姫殿下のお心を歪めてしまうことになるかもしれません」
「ミーアさんは、そんな人ではないわ」
「そうでしょうか？　歴史上、強大な力を持ったがゆえ……持ってしまったがゆえに、堕落した権力者というのは、枚挙に暇がありません。人の心は移ろうもの。今日、明日は友として尊敬できる人であったとしても、その次の日はどうか。権威は人を変えるのです」
ルシーナ司教は、あくまでも自らの考えを変えない。
「ラフィーナさまが、友人として振る舞うこと自体、かの皇女殿下を変えてしまうかもしれない。どうかご理解ください。ラフィーナさま。あなたは、ヴェールガの聖女。その名には権威があり、その行動には常に責任が伴うのです」
「そんなこと……もちろん、わかっているわ」
改めて告げられた言葉に、ラフィーナの顔がかすかに曇る。そこに浮かぶのは、隠しようのない寂しさだ。聖女の孤独、友を持てない寂しさは、いつでもラフィーナを苛み続けたものだった。が……。
「いずれにせよ、皇女ミーアが、ラフィーナさまの権威を得たくて近づいてきたかもしれない、と、その疑いは持っておいたほうがいいでしょう」
その言葉に、カチンとくる。
今のラフィーナは……すでに、かつてのラフィーナではなかったからだ。
ガラス細工のように清廉な聖女ラフィーナは、すでにいない。友を知り、恋を知った彼女は、どうしようもないほどに、ミーア色に染められてしまっていたのだ！
ゆえに……。
「酷いのよ！　ミーアさんが、私の権威を笠に着るためにお友だちをやってるだなんて、本当に、本当に！　馬鹿にしているわ！」
ぷりぷり怒るラフィーナである。その口調からは、かつての近づきがたい迫力はすでになく……。それゆえ、ミーアは落ち着き払っ

て、そのお話を聞いていた。
「本当ですわね。馬鹿にされたとは思いませんけれど、わたくしが、ラフィーナさまの権威を利用するなどと……根拠のない出まかせで、まったく呆れてしまいますわ」
などと、しみじみと頷くミーアである。のだが……。
実際には、わりとラフィーナの威を借る小心者的な振る舞いをしがちなミーアであるが、そんなことは、記憶の彼方に放り捨てて、思い出すこともないのである。いつものことである。
ラフィーナは、気持ちを落ち着けるように、お茶を一口。ふぅ、っと細く息を吐き……。
「ところで、ミーアさんのほうは、どうだったの？　ヴァイサリアン族のこと……ガヌドス港湾国でどんなことがあったのか、教えてくれないかしら？」
「ああ……そうですわね。確かに、ラフィーナさまにもお知らせしておいたほうがいいことでしたわ。ええと……あ、アンヌ、例のものを……」
ミーアの指示に従い、アンヌが素早く部屋を後にする。
「まず、結論から言ってしまうと、ヴァイサリアン族のことは上手く片が付きましたわ。ガヌドス港湾国のほうで受け入れてもらうことになりまして。オウラニアさんが上手く事を運んでくださいましたわ」
ミーア、しっかりとアピール。クレームが来た時にはオウラニアのほうに言ってもらうよう、念入りに根回ししておく。けれど、
「そう……。オウラニアさんが……。さすがね、ミーアさん」
――んっ？　妙ですわね。なぜ、そこでわたくしに繋がるんですの……？
などと首を傾げるミーアである。
「けれど、少し不安だわ。国の上層部がそう決断したとしても、民がそれを引き受けてくれるとは限らない。それに、王の目が、民のすべてに及ぶわけでもない」

「ああ。その件も問題ありませんわ。あ、でも……」
っと、そこでミーアは思い出す。共同研究施設のこと、ラフィーナに許可を取っていなかったことを……。
「申し訳ありません。ラフィーナさま。これは事後承諾になってしまうのですけれど……。例のセントノエル学園とミーア学園の共同研究施設をガヌドス港湾国内に作ることを、許可いただきたいのですわ」
「あら、共同研究所を……？　ああ、なるほど。それにより、ヴェールガ公国と帝国の目を、街中に光らせようということね？」
「ええ、その通りですわ。いざという時には、ヴァイサリアンの民が逃げ込める場所を用意する。それに、そのような施設が国内にあると思うだけで意味がある。ガヌドスの民は、自らの行いに気をつけることでしょう」
「なるほど……。それに、海に棲む魚と湖に棲む魚、川に棲む魚はそれぞれ違うのでしょうから意味はある……と。そういうことね」
ラフィーナの指摘に、重々しく頷くミーア。
「さすがね、ミーアさん。見事な沙汰だわ」
パチパチと嬉しそうに拍手するラフィーナ。ちょうどそのタイミングで、アンヌが入ってくる。
「ああ、ちょうどよろしかったですわ。見本として、海の食べ物をいくつかお土産に買ってまいりましたの」
そんなミーアの言葉で、お皿の上に視線を移したラフィーナ、その笑みが、次の瞬間、かっちーんと固まる。なぜなら……。
「これが、とっても美味しかったんですわ。女王烏賊の干物と言いまして、噛めば噛むほど味が出る。一品ですわ！」
お皿の上に置かれた平べったい……にょろにょろとした足がたくさんある生き物に、一瞬、クラァッと眩暈がしてしまうラフィーナであった。

第三話　ベルっぽい人

ラフィーナは、干物にチラリ、と目をやってから、表情を変えることなく穏やかな笑みを崩すことないまま、落ち着き払った声で……。

「え、ええと、み、ミーアさん」

微妙に声が震える。動揺が隠せていなかった。

「あの、それ以外には、なにも事件などはなかったのかしら？　たとえば、ほら、蛇がなにかちょっかいをかけてきた、とか？　その辺りのこともできればお聞きしておきたいのだけど……」

「ああ、さすがはラフィーナさまですわ。ええ、確かに蛇も襲ってきましたわね。それに、ハンネス大叔父さまのことも、お話ししておいたほうがよさそうですわ。少し話が長くなるので、どうぞ、食べながら……」

「いえ！　お友だちのミーアさんが、とっても真面目な話をしているのに、食べながらなんて、そんなことできないわ！」

凛とした、生真面目な聖女の顔で言うラフィーナ。その瞳からは、断固たる意思のようなものが窺えた。

それで、自然と、ミーアも姿勢を正す。

「そうですの？　では、手短にいたしますわね」

「急がず、ゆっくりで大丈夫よ」

「え……？」

「その、蛇のことはきちんと聞いておきたいから」

なにやら、ちょっぴり焦った様子のラフィーナに首を傾げながら、ミーアは話し始めた。

「ガヌドス港湾国の国王、ネストリ陛下には、昔、恋人がおりましたの。その女性がヴァイサリアン族の出身で、二人の仲は引き裂かれた。その女性の子どもが、蛇の暗殺者でしたの」

ヴァイサリアン族とネストリにまつわる因縁話。そして、それに続けて話したのは、ハンネスとの会談のことだった。

「さて、それじゃあ、ハンネス大叔父さま、改めて、挨拶させていただきますわ。わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーン。パトリシアお祖母さまの孫娘ですわ」

ガヌドスを発つ少し前のこと。

ミーアは宿屋の一室にて、ハンネスとの会談に臨んだ。参加したのは、ミーアとハンネス、ルードヴィッヒにアンヌ、ベル、シュトリナ、それにパティである。

「お初にお目にかかります。ミーア姫殿下。お噂はかねがね……」

深々と頭を下げるハンネスに、ミーアは一つ頷いて。

「率直にお聞きいたしますわ。ハンネス卿。パティ……パトリシアお祖母さまに関して知っていること、蛇について知っていること、すべてをお話しいただきたいんですの」

「蛇について……。ですか」

ハンネスはチラッとパティのほうに目をやった。

パティがコクリ、っと小さく頷くのを確認して……。

「クラウジウス家と蛇との関係は、すでにご存じのことと思いますが……。クラウジウス家は、蛇の支配下にある家でした。というより、帝国初期から続く貴族の家柄は、すべて蛇の影響下にあった。なぜなら……」

意味深に言葉を切ってから、彼は、どどぉんっと言った！

「初代皇帝陛下は、混沌の蛇の協力者であったからです！」

ドヤァッという顔に、思わず、おおっ！　と声を上げたのは……残念ながらベルだけだった。

「おや……？　あまり驚いておられぬ様子ですが……」

「ああ、ええ、まぁ、その辺りのことはおおむね知っておりましたので……」

「なんと、そうなのですか……。ああ、でも、よくよく見ればイエ

ローム―ン家のご令嬢もいらっしゃいますし、ご存じでも不思議はないか……」
ミーアの言葉に、ちょっぴり恥ずかしそうに頬をかくハンネス大叔父さまである。
――この方……なんか、ちょっとお調子者っぽいですわね。
そう思いつつ、ミーアはチラリとベルのほうに目をやり……。
――冒険家とか自称してましたし、ちょっぴりベルっぽいかも……。
それから、パティのほうに目を向けると、パティは……いつもよりも、さらに感情が読み取れない顔で、どこか遠くを見つめていた！　それは、そう、失われた時を思うかのような、あるいは……純粋無垢であった弟を懐かしむかのような、そんな目つきだった。
まぁ、それはともかく……。
「その辺の帝国の歴史についてはご存じ、と……。では、私がパトリシアお姉さまから『水土の薬』を探すよう言われていたことは……」
「ああ、それは初耳ですわ。その『水土の薬』というのが蛇の秘薬、大叔父さまの病を治すお薬でしたの？」
「そのとおり。お姉さまは、どこからか手に入れた水土の薬を、幼き日の私に飲ませ、病を癒してくださいました。そして、それ以降は病が治り切っていないふりをしながら、蛇の秘薬を探すように、と言われたのです」
未来の世界から、ハンネスを癒す薬を持ち帰ったパティ。そして、それを弟に飲ませた後、その歴史を守るべく、ハンネスに薬を探すように言ったのだ。
――って、グルグルしておりますわね……。実にややこしいですわ。
「パトリシアお姉さまが亡くなってからも、ずっと私は『地を這うモノの書』を探り続けました。神聖典に偽典や外典があるように『地を這うモノの書』にも複数の異本が存在するのですが、それらも

可能な限り目を通し、周辺の歴史や伝承も調べました」
「ハンネス大叔父さまは、憑りつかれたように蛇の本を読んでいたとお聞きしましたけれど、なるほど。そう言う事情があったのですわね」
「はい。その結果、少なくともヴァイサリアン族というのは、かなり古い時代から蛇の影響下にあったこと、『地を這うモノの書』を保持していたことを突き止めました。であれば、彼らが、その薬か製法、その材料となるものを持っている可能性があるのではないかと考えたのです」
「それで、国外に脱出した際に、ガヌドス港湾国に行ったわけですわね」
納得の頷きを見せるミーアに、気をよくしたのか、ハンネスは饒舌に続ける。
「残念ながら今の彼らはそれを持っていなかった。けれど、希望はまだあります。彼らの故郷には、それが残されているかもしれない」
「故郷……？」
「ええ。彼らが初代皇帝と出会う前。どの土地に住んでいたのか……それさえはっきりすれば、あるいは……」

第四話　彼らはどこから……？

「ふむ……」
ミーア、ここで、一口紅茶を飲む。
――ヴァイサリアン族は、ガヌドス港湾国に島に閉じこめられた一族だとしか思っておりませんでしたけど、その前は海賊のようなことをしていた。そして、その前があった、と……。
言われてみれば、ヴァイサリアンがどこから来たのか、ミーアは把握していなかった。
邪教的な風習を持つ民族であることから、てっきり、中央正教会に追われたとばかり思っていたのだが……。
「少し、歴史の流れを整理いたします。失礼」
そう言って、ハンネスはおもむろにクッキーを手に取った。
「これは私の推測を交えたものですが……まず、これが初代皇帝陛下、並びに彼に付き従ったティアムーンの民です」
さらに彼はもう一枚のクッキーを手に取る。
「こちらは、ヴァイサリアンの者たち。ガレリア海を越えた先から渡って来た初代皇帝とヴァイサリアンの者たちは、ある場所で出会った」
「ああ、あの無人島ですわね。碑文がございましたわ」
「……はぇ？」
ハンネス、思わずと言った様子で瞳を瞬かせる。
「実は、夏にエメラルダさんの船で辿り着いた島の地下に初代皇帝の碑文を見つけましたの。ついでに混沌の蛇の地下神殿のようなものも見つけたので、現在はヴェールガ公国の調査隊が派遣されているはずですけれど……」
その言葉に、ハンネスは、
「なるほど……さすがは、パトリシアお姉さまの孫娘……素晴らし

い叡智です」
感心した様子で頷いた。
ふと見ると、パティは……心なしか、誇らしげに胸を張っていた。
なんか「うちの孫娘がやりました」みたいな顔で、ドヤァッとしていた！
ついでに、ベルも「うちのお祖母さまがやりました！」みたいな顔で、ドヤァッとしている。
連綿たる血の繋がりを感じるミーアである。
まぁ、それはさておき……。
「さて、その島で初代皇帝陛下と出会ったヴァイサリアンの者たちですが、ここに一つ、疑問が残ります。すなわち、彼らははたして、どこから来たのか、と……」
「そうですわね。わたくしは、内陸からガヌドス港湾国を経由して海に出た、と思っておりましたけれど……」
「そう、それが可能性の一つ目でしょう。内陸の、肥沃なる三日月地帯か、ペルージャン農業国の近辺からやって来た……という可能性。それにもっと海寄りのガヌドス港湾国の周辺から、追われて海に出た可能性もあるでしょうか……しかし」
っと、彼は言葉を切って、重々しい口調で続ける。
「私は、むしろ、こちらのほう……。ガレリア海の西南のほうに住んでいた人々ではないか……と考えているのです」
「ほう……。ちなみに、根拠はございますの？」
その言葉に、重々しく頷いて、ハンネスは言った。
「実は……ガヌドス港湾国は近海で漁をする者がほとんどなのですが、ごく一部に遠出をする漁師がいます。その漁師たちの間で、伝説となっている海域があるのです」
「伝説の海域……」
ミーアのつぶやきに一つ頷き、ハンネスは言った。
「ある年老いた漁師からこんな昔話を聞きました。その昔、嵐に巻き込まれた漁師たちが、方向を見失い謎の海に迷い込んだ、と。そ

こは、霧に包まれた海……。星も月も見えず、ただ、無数の島々のある場所であった……と」
「ふぅむ……」
唸るミーアの前で、ハンネスは続ける。
「そして、これも古い文献で見つけたものですが……ヴァイサリアン族には、こんな歌が古くから伝わっています」
そうして、彼が歌いだしたのは……。
「あら……この歌は、確か、ヤナたちが……」
かつて、シューベルト侯爵邸で耳にした、ヤナたちの歌だった。

「西の夜空に月、三つ。
東の夜明けに、日が六つ。
古き約束より出し、
我ら、いずれ帰らん。かの地へと。
いずれ帰らん、霧の海へと」

「いずれ帰らん『霧の海』へと……」
ミーアは、ゴクリ、と喉を鳴らした。
「霧の海とは……なにやら、意味深なフレーズですわね」
「はい。私もその言葉が、どうにも気になりました。それにその前の数字が入っている箇所も……。もしかするとこの歌は、故郷への帰り方を示しているのではないか、と……そのように考えたのですが……」
そこで、ハンネスはなんとも情けない顔をする。
「そこまでで行き詰りました。この数字の意味をどう解釈すればいいのか……。この数字だけだとどうとでも解釈できてしまいますし、闇雲に船を出すわけにもいかず……。あるいは、歌詞が違っているのか、なにか別のヒントと組み合わせないといけないのか……。ヴァイサリアン族の者たちから聞き取りをして、いろいろと検討したのですが、確証は得られず仕舞いでした」

「なるほど。難しいものですわね……」
ふーむむ、っと腕組みし、眉間にしわを寄せるミーア。っと、その時だった。
「……音」
不意にパティがつぶやいた。
「え……？」
視線を向ければ、パティは興奮した様子で、わずかに頬を紅潮させていた。
「音が違う。歌の最後の部分の音が、ヤナが歌ってたのと違ってる」
「ああ、そういえば……。そんなことをヤナが言っておりましたわね……」
などと頷くミーアの目の前で、パティがハンネスに言った。
「もしも、古代のヴァイサリアンが、私たちと同じことをやっていたとしたら……？」
「音階を使って、なにか、文字を伝えようとしていた……。なるほど。その可能性は考えていませんでしたが……」
「では、早速、ヤナたちを呼んで歌ってもらいましょうか」
ミーアの視線を受けて、心得た！　とばかりにアンヌが部屋を出て行った。

第五話　メイタン

アンヌに連れられてきたヤナとキリルは、困惑した様子だった。部屋の中にいた人たちの視線が、一斉に自分たちに向かって注がれたからだ。

「あの……？　ミーアさま……？」

助けを求めるようにミーアのほうを見るヤナ。そんな彼女に、ミーアは優しく微笑みかけて、

「そう緊張しなくっても大丈夫ですわ。ただ、少しお願いがありまして。あの、例のお母さんが教えてくれた歌、ここで歌ってもらえないかしら？」

なかなかな無茶振りをした。

「えっ？　歌うんですか……？　ここで……？」

突然、わけもわからず歌え、などと言われたヤナは、一瞬、戸惑った様子を見せたが……。すぐに、

「わかりました」

こっくりと頷いた。それから、キリルに目を向ける。っと、キリルのほうも頷き……ちょっぴり照れくさそうな顔をしつつも口を開いた。

そうして二人は小さく息を吸って……歌いだした。

息をひそめるような静寂が支配する室内に、可愛らしい声が響く。

「西の夜空に月、三つ。東の夜明けに日が六つ」

――ふむ、改めて歌詞を考えるならば、月が三つというのは、確かに奇妙な気がしますわね。月は空に一つきり。それが三つとはどういうことかしら……。それに、日も六つというのも、なにやら意味深ですわ。この数は、なんなのかしら……？

「古き約束より出し、我ら、いずれ帰らん。かの地へと。いずれ、

帰らん、霧の海へと」
――古き約束……は初代皇帝との盟約のことかもしれませんわね。ということは、いずれ帰らんかの地の『かの地』は、あの島のことかしら？　けれど、その後を聞くと、かの地は霧の海のことにも聞こえますわね。ふーむむ……。
迷探偵（メイタンてい）ミーアは、眉を潜めつつ、ふと隣を見る。っと、同じように腕組みし、眉間に皺を寄せる迷探検（メイタンけんか）（家）ベルと名探偵（メイタンてい）パティの姿があった。
孫祖母三代のメイタン揃い踏みの瞬間であった。
一方で……。
「なるほど。確かに、音がズレているな……」
ハンネスは聞き取った音を、ヨルゴス式音階に書きとっていた。
ちなみに、ヨルゴス式音階は、ハンネスから音を記号にするという着想を得たヨルゴス神父によって取りまとめられたものらしい。
当初は、ハンネス式にする、と言っていたヨルゴス神父であったが、当のハンネスからストップがかかったのだ。
「さすがに、蛇の耳に入るような事態は避けたかったので」
っと、頬をかくハンネスを見て、パティは、
「ハンネスの名前が歴史に残ったかもしれないのに……残念」
ちょっぴり悔しがっていたが……まぁ、それはともかく。
「あの……音がズレてるのは、その、お母さんが歌が下手だったからで……」
少しだけ慌てた様子で、そんなことを言うヤナに、
「なるほど。そうかもしれない……が」
一つ大きく頷いてから、ハンネスはスッと膝をついた。
「え……え？」
突然のことに、ヤナが戸惑った様子を見せるも、特に気にせずに……。
「少し、額を見せてもらえるだろうか？」
っと、ヤナが前髪を上げる。その刺青をしばし見つめ、次に隣の

キリルのほうも確認する。
「なるほど……」
「あら？　それでなにかわかりますの？」
立ち上がったハンネスは、顎に手を当てて、ふむ、と唸ってから……。
「紋章学……と言うのをご存知ですか？」
「もちろんですわ。家紋を読み解く学問ですわね。わたくし、とっても得意ですのよ」
かつて、自分とアベルが結ばれたら、どんな家紋になるんだろうなぁ～などと妄想にふけっていたこともあるミーアである。紋章学の大家を名乗ってもおかしくはないだろう。
「彼らヴァイサリアンの額の刺青、三つ目には邪教の影響を受けた宗教的意味合いと、もう一つ、家や一族を表す意味合いもあるのです」
「つまり、各部族ごとに、刺青の入れ方が違う、と？」
ハンネスは頷いて肯定したうえで、
「色や形にも、その傾向が表れるのですが……。彼女たちのものは、とても珍しい」
「と言いますと？」
「端的に言えば、形がとてもシンプルです。私が調べたところ、ヴァイサリアンの刺青は、時代を下るほど複雑になっていく。新たな家庭が生まれ、増え広がっていくたびに、刺青に新しい模様を足していくからです」
それから、ハンネスは濡らした指で、テーブルの上に形を描く。
「例えば、目の形を最も単純に描こうとすれば、黒い丸になるでしょう。あるいは、そこに線を二本つけるでしょうか」
そうして、〇の間に黒い丸を描いてみせてから、
「ヤナ嬢の刺青は、その最も簡単な瞳の刺青に一本線を足しただけだ。これを読み解くならば、最も直系に近い支流の家系……。初代当主の兄弟とか、その辺りの刺青をずっと受け継いできたことにな

るのではないだろうか……」
　それから、ハンネスは腕組みして、うむむっと唸る。
「ヴァイサリアン族に族長や、王家というものは、確認できていないのですが、もしかすると、ヤナ嬢は、特別な血筋の方なのやもしれません」
「ほう。つまり、ヴァイサリアン族の姫かもしれない、と……？」
　なるほど、言われてみれば、ヤナはとても可愛らしい顔をしている……っとミーアは頷く。
　――皇女や王女というのは、美しい顔立ちをしているというのは、わたくし自身のことを鑑みれば明白ですし……。
　などと、ちょっぴり、おこがましいことを腹のうちで考えるミーアである。
　一方のヤナは、驚いて言葉を失っていたが……これはもちろん、自分が姫かもしれない、などと突然言われたからであって、ミーアのおこがましい心の内を読んで呆れたわけではない。言うまでもないことではあるが。
「そうですね。王族か、あるいは……彼らの故郷の場所を知る血筋、一族の導き手か……。いや、まだ、結論を出すのは早計か」
　顎に手を当てつつ、ハンネスは深々と頷き、
「この件に関しては、私のほうで調べさせていただきましょう。ミーア姫殿下は、どうぞ、帝都に一度お戻りになって、ご公務に邁進なさるがよろしいでしょう」
「ハンネス殿お一人では難しいでしょう。何人か、動ける者をガヌドスに派遣いたしましょう」
　ルードヴィッヒの発言に、ハンネスは難しい顔をする。
「しかし……あまり、帝国が介入するのも……」
「聖ミーア学園とセントノエルの共同プロジェクトの件もございます。いずれにせよ、人員を派遣しなければなりませんから……」
「なるほど。わかりました。それでは、お願いしましょう」
　こうしてハンネスは、無事にミーアの陣営に迎え入れられること

になったのであった。

第五話　メイタン（後書き）

最近、ハモリを我慢する番組をよく見ます。つられないように歌うのって難しいですよね。

第六話　紡がれる友情、一歩一歩

「そんな具合で片付きましたの」
一息に話して、ミーアはお茶を一口飲んだ。それから、おもむろに干物に手を伸ばし、千切って一口、むぐむぐ、と噛んでゴクリ……。それから、改めて顔を上げる。
「それで、蛇の暗殺者のカルテリアさんなんですけど、できれば、ガヌドス港湾国から離して幽閉するのがよろしいのではないかと思いますわ。また、ヴェールガ公国のお力を借りたいのですけど……ラフィーナさま？」
「え……あ。ええ。そうね、カルテリアさんの処遇は、もちろん、ヴェールガ公国で担当するのがいいでしょう。蛇は、周りに感染する厄介な思想だものね」
一瞬、干物を食べるミーアを見て、呆気に取られてしまったラフィーナだったが、いつも通りの涼やかな笑みを浮かべ直してから続ける。
「それに、そう……。水土の薬、ね……」
「ルードヴィッヒに聞いたところ、創世神話と関わりがある、みたいなお話でしたけれど……」
「命の木の実や知恵の木の実の話は確かにそうだけど……。水土の薬、火風の薬の話は、いずれも神聖典の正典には載っていないわ。ただ、外典や、他の古い書物や伝承には参考になるものがあるかもしれない。少し、調べてみましょうか」
神聖典の正典から外された文書である外典、あるいは、その周辺の伝承、歴史書など、中央正教会の中には多くの書物が保管してある。いかにラフィーナでも、そのすべてを把握しているわけではない。
もしかしたら、役に立つ書物があるかもしれない。

「それに……ガヌドスの今後のことも少し気になるわ。私も行って、できれば直接、共同研究所の設立をお手伝いできれば、って思っていたけれど」
「まあ！　ラフィーナさまが、ですの……？　けれど、セントノエルのほうは……あ、そうでしたわね」
ミーアは、そこでハッとした顔をする。
そうなのだ……ラフィーナは、今度の春で学園を卒業することになっているのだ。
「それは……寂しくなりますわね」
「うふふ、そう言ってもらえると嬉しいわ。でも、セントノエルで仕事をすることもあるから、あまり寂しくはならないかもしれないけれど……」
それから、ラフィーナは紅茶を一口。その胸の内に生まれた寂しさを、静かに飲み下して……。
「ところで、ラフィーナさま。お土産のほう、どうぞ、お召し上がりくださいませ」
いい雰囲気でお開きにできそうだったのに、ミーアからのツッコミが入った。
ラフィーナ、カップを口につけた状態で固まる。
「あっ、もしかして、干物とか、お嫌いでしたかしら？　だとしたら、大変申し訳ないことを」
「……そっ！　そんなこと、ないわ。ええ、大好きよ、干物！」
思わず言ってしまったラフィーナは……自らが断崖絶壁に追い詰められたことを自覚した。
目の前、錯覚だろうか……干物の足がウネウネ蠢いているように見えた。
それから、ラフィーナは視線を上げる。っと、ミーアがニコニコしながら、
「それは良かったですわ。とっても美味しいから、きっと気に入っていただけると思いますわ」

ものすごーく嬉しそうに言った。わくわくした顔でラフィーナを見つめてくる。
その笑顔を……こんなに嬉しそうなお友だちを裏切ることなど……ラフィーナにはできなかった。
改めて……干物に目を落とし……これを食べるのかぁ……なぁんて、他人事みたいなことを思う。
いや、確かにわかる。
飢餓対策のため、活用できる海の食べ物をミーアはいろいろ買ってきてくれたのだ。
これは、共同研究所のために必要なことで、決して、自分に嫌がらせをしているわけではないし、まして、ミーアの食べ物の趣味が若干アレなわけでもないということは、わかっている。
ラフィーナはきちんと理解していて、だから、食べなければならないということはよくわかっているのだが……。
静かに息を吸って、吐いて……。
ラフィーナは決死の思いで、干物を口に入れたっ！

……潮の風味が利いていて、なかなか癖になりそうなお味だった。

もう一口食べてみて、改めて思う。見た目に囚われていたらいけないな、と。
心から反省するラフィーナであるのだが……。
「あ、それと、干物に比べれば、つまらないものですけど……」
目の前で、ミーアが再びゴソゴソし始めたのを見て、ラフィーナは、思わずクラァッとする。
「いえ、その、ミーアさん、もう私、お腹がいっぱいで……」
などと言いそうになるのを懸命に堪える。
――これは……大陸から飢餓をなくすための試練。であれば、すべてを飲み下してでも、前に進まなければ、いけないわ……。
そっと目を閉じ、心の中でそっと祈りをささげようとして……。

「本当は、もっと変わった食べ物を買ってこようと思いましたのよ？　ポヤァという奇怪な食べ物があって」
ミーアをして奇怪と言わしめる食べ物を想像し、ラフィーナ、震える。けれど……。
「あの見た目とのギャップをお楽しみいただきたかったのですけれど、鮮度が大事とのことで。だから……ラフィーナさま？」
「え……ええ」
そうして、ラフィーナは恐る恐る目を開ける。あまりにもギュッと閉じていたせいで若干、潤んでかすれた視界の中……彼女は見つけた。
貝殻を使った、綺麗な髪飾りを……。
「えっ……？」
ぽかぁん、と口を開けるラフィーナに、ミーアは、ちょっぴり緊張した様子で……。
「あまり高価な物でなくって申し訳ありませんけど、こういったものもガヌドス港湾国っぽいのかな、と思いまして、買ってきましたの。気に入ってもらえたら嬉しいのですけど……」
ラフィーナは、恐る恐る、その髪飾りに触れる。
小さな貝殻を使ったそれは、とっても可愛らしいデザインで……。ラフィーナの目には、それはもうキラキラ輝いて見えたのだ。
なにしろ、女王烏賊の干物を超える、オソロシイモノが出て来ると思っていたのだ。
その期待値のギャップに、ラフィーナは、ぱぁあっと、輝くような笑みを浮かべた。
「ありがとう、ミーアさん！　私……すごく嬉しい。この髪飾り、大切にするわね」
髪飾りを胸で抱き、こぼれるばかりの満面の笑みを浮かべるラフィーナであった。
一方、大喜びのラフィーナを見て、ミーアは首を傾げつつ、

――ふぅむ……前の時には、アクセサリーの類も結局受け取ってもらえませんでしたけれど、こんなに喜んでいただけるなんて……。もしや、ラフィーナさまは、髪飾りがお好きなのかしら？　それとも、このシンプルなデザインが良かったのか……？

こんなことを思っていた。

この時、ミーアは気付いていなかった。かつての自分と今の自分との大きな違い。

前時間軸のミーアは『聖女への貢物』を持って、ラフィーナのところに通っていた。

ヴェールガ公爵令嬢の権威を欲し、気に入られようとして、高価なアクセサリー類を選んで持って行ったのだ。

けれど、今のミーアが考えていたのは、

――うふふ、しかし、こんなふうに喜んでもらえると、こちらも嬉しいものですわ。次も、なにか良いものを選べればいいのですけど……。

そんなことで……。それはどちらかというと、お友だちへのプレゼントを選ぶ、年頃の娘のような感覚だった。

少しずつ、けれど着実に、二人の友情は紡がれていたのであった。

第七話　帝国の叡智は食道楽

帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンは稀代の食道楽家として、後世に名をとどろかせた人である。

その日、帝国の食道楽ミーアは、ニッコニコ顔で朝食を食べていた。

ここ最近、ミーアがはまっているのは、パンに甘い豆のペーストを塗りたくって食べることだった。

「ふふふ、クロエから教えていただいた甘い豆、やはり、こうしてパンに塗ると絶品ですわ」

先ごろ特別初等部で得た知見、甘いフルーツを挟んだサンドイッチが、ミーアの発想を自由にはばたかせたのだ。

まさか、あんなケーキのようなサンドイッチが存在するとは思いもしなかったミーアである。

「まぁ、実際のところクリームをパンに塗るのは、タチアナさん辺りに見つかったら怒られそうですし、フルーツも毎日はダメかもしれませんけれど……これは豆のペースト。ゆえに、怒られませんわ」

ケーキを毎日食べたら怒られる。ゆえに、甘いパンを代用とする。

しかし、パンとはいえ、クリームを塗ったものだと怒られるかもしれない。ならば、甘い豆にすればいい！

ミーアの発想は飛躍し、どこまでも自由に、天馬に乗るがごとく、天高く飛翔する。

天高く馬は翔け、姫は肥える冬である。

そうして、自由で斬新な発想の結果生み出された甘い豆ペーストを塗ったパンは、ミーアのお気に入りになっているのだ。

……いや、まぁ、この悪だくみも結局のところ、アンヌから問い合わせを受けたタチアナによって、控えめにしろとのお達しを受け

てしまうわけだが……。
まぁ、それはさておくとして。
その日、朝食を取り終えたミーアは部屋のベッドの上でのんびりしていた。
ガヌドス港湾国での騒動を終え、誕生祭のパーティーも、本日は午後からとのことで。ゆっくり朝寝……もとい、思索の時を持っていたのだ。
さて、昼間で少し時間があるし、朝のオヤツでも……。などとまたしても、悪だくみを始めるミーアのもとに、料理長ムスタ・ワッグマンが訪ねてきた。
「恐れ入ります、ミーア姫殿下。少しお時間、よろしいでしょうか？」
「あら、料理長、どうしましたの？」
姿勢を正し、澄まし顔で料理長を出迎えるミーア。なにしろ、相手は美味しい物を生み出すスペシャリストである。ミーアにとって最大限の敬意を払うべき相手なのだ。
そんな料理長は、深々と頭を下げながら、
「実は、ぜひご試食いただきたいものがございまして……」
「まぁ、試食……」
その言葉だけで、ミーアのモチベーションがギュギュンッとアップする。
基本的に仕事は好きではないミーアだが、唯一、試食を始めとした食べ物に関することだけは別だった。
そうして、やる気を逆らせるミーアであったのだが、料理長が運んできた皿を見て、思わず目を見開いた。
「あら、なんですの？　これは……？　雪、というわけではなさそうですけど……」
皿の上に載せられていたものは、白くてモチモチした、丸いナニカだった。
困惑した様子を見せるミーアに、ムスタは神妙な顔で言った。

「聖ミーア学園で開発された小麦、ミーア二号。その最適の調理法がこれである、と私は確信しております」
「ほう……！」
ミーア、俄然前のめりになる。
なにしろ、かの料理長の新作料理である。
これは、襟元を正して向き合うべき案件であること、疑いもなかった。
「僭越ながら、『月団子』と呼んでおります」
「なるほど。丸くて、満月のようですわね。ふむ、これは、そのまま食べるものなのかしら？」
「いえ、これ自体に味はほとんどありませんので、シチューやスープなどに入れるのがよろしいかと存じます」
そうして、はじめに出てきたのは、野菜スープに白い月団子が浮いた汁物だった。
葉物野菜に加え、キノコの類も入っているのが、ミーアには非常に気に入るところであった。
「では、早速……」
そうつぶやき、ミーアはそれをスプーンですくって、口の中へ。
熱い！
はふはふ、っと湯気を吐きながら、ミーアは月団子を口の中で咀嚼する。
モチモチ、ねっちょりとしたそれは、口の中に張り付きつつも、ジュワッとスープを染み出させる。火傷するかしないか、ギリギリの熱さ。されど、その熱さこそが、この料理の旨みの中心であると看破したミーアは、冷めるまで待つなど野暮、とばかりにスプーンを動かす。
月団子のモチモチ感、キノコのコリッコリッとした歯触り、茹でてしんなりした野菜の食感の三重奏がたまらない一品だった。
「これはなかなかですわね……。寒い冬などには、とても美味しいお料理ですわ」

「お褒めいただき恐縮です。さらに、こちらが……」
次に出てきたのは、月団子にソースのかかったものだった。
濃厚なソースによって味付けされた団子は、先ほどとはまた違った味わいで、ミーアはニッコリ笑みを浮かべる。
「素晴らしいですわね。スープに浮かべてよし、ソースに絡めてよし。実に素晴らしいお料理ですわ。文句なしですわ」
ミーアの手放しの称賛に、ムスタはジーンッと感じ入ったように、深い息を吐いた。
「そう言っていただけたなら報われます。調理場の料理人一同にも伝えたく思いますが……」
「ええ。ご苦労さまでした、と伝えていただきたいですわ」
ミーアは微笑んで、そう言った後……。
「しかし、これは……」
ふと、考え込む。
「……あの甘い豆のペーストと合いそうですわね」
「え……？」
きょとん、と瞳を瞬かせる料理長に、ミーアは続ける。
「ほら、最近、パンに塗ってる、あの甘い豆のペーストですわ」
「甘い……しかし……。いや、そうか……」
料理長の顔に見る間に驚愕の色が広がった。
「つまり、ミーア姫殿下は、この月団子は甘くしてデザートにも使えると……？」
「ええ。この食感、ケーキともクッキーとも違う、斬新な食感と言えますわ。こんな食感のデザートができたら、素晴らしいのではないかしら？」
「なるほど……。早速、作ってみましょう！」
ミーアの言葉に、ムスタは興奮した様子で、部屋を出て行った。
待つことしばし、皿にのって出てきたのは、黒い豆のペーストと白い月団子が絡み合ったものだった。豆のペーストを黒い空に見立てると、まん丸い月団子は、まるで本物の月のように見えて。

「うふふ、満月の夜空のようですわね。とても綺麗なお料理ですわ……」
などと、満足そうに頷きながら、ミーアはそれを一口、ぱくり、ぺろり。
もちもちとした団子に豆のペーストの優しい甘みが絡み合い、どっしりとした食べ応えがあった。香ばしい豆の風味と団子のほのかな麦の香り……。その素朴な風味の取り合わせもとても素敵だった。
むち、むち、っとしばしお団子を咀嚼した後、ごっくん、と飲み込んで……。
ミーアは言った。
「素晴らしいお味ですわ……。とても斬新で、見事なデザートですわね」
そうして、ニコニコと笑みを浮かべるミーアであったが、次の瞬間、ハッとする。
――わたくしと料理長、二人で考えただけでもこれだけのお料理ができる……。であれば、この新しい料理法を人々の間に広めたら……あるいは、わたくしが思いもよらなかったような美味が生まれるかもしれませんわ。あの、フルーツサンドイッチのような……。
ミーアは極めて、食に貪欲なのだ。神妙な顔で腕組みしつつ、ミーアは言った。
「せっかくですし、誕生祭に集まったみなさんにも、これ、食べて、知っていただいたらいいのではないかしら？」
「えっ……？」
「こんなに寒い中、わたくしの誕生祭に集まってくれた人々をもてなしたいですし。あなたが用意してくれたあの月団子スープなども一緒にお出しするのが良いのではないかしら？　それで、調理法も一緒に知らせてあげれば……」
「なるほど……。もともと、この料理はミーア二号小麦に最適な調理法を人々に知らしめたくて生み出したものなのですが……。それを広めるためにも、良い方法かもしれません」

ムスタは感じ入ったように頷いてから、
「では、さっそく、用意して人々にも配膳してみましょう」
力強く請け負ってくれるのだった。

この年の、皇女ミーアの誕生祭は、例年より小さな規模でスタートした。
けれど、祭りの二日目。皇女ミーアによって配られた料理が、その流れを変えた。
とても体が温まる月団子汁はもちろん、新感覚のスイーツは人々の、特に女性や子どもたちの心をガッチリと掴まえた。
それを見ていた商人や、料理屋の店主たちも、作り方を教わり、似たようなものを出したことで、帝都中にその料理法が拡散。
その冬の一大ブームとなり、ミーア二号小麦を美味しく食べる方法として人々に知られるようになったのだった。
それを見て、ミーアは満足げな笑みを浮かべていた。

帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンは稀代の食道楽家として、後世に名をとどろかせた人である。
そしてそれは、決して悪い文脈で語られる評価ではなかった。
彼女は食の楽しみを知り尽くす人だった。彼女は美食を一人きりで楽しむことは決してなかった。よりたくさんの人と、より楽しい食事を。それこそが食の楽しみの神髄であるとでも、言うかのように。
惜しげもなく美味しいものを人々に振る舞い、一人でも多くの人が……飢えないどころか、食事を楽しめるよう、様々な食材に対する料理法の開発を推奨した。
よりたくさんの食材を、より美味しく食べること……。そのことを誰よりも大切にした人として、ミーアは後年に語り継がれていた。
いろいろな食材を美味しく食べられれば、その分、食料が不足することもなくなる。それに、一部の者だけが美味しい物を食べるよ

うなこともなくなるだろう。
帝国最高の女帝として知られる彼女は、大陸食文化の中興の祖としても知られる人であった。帝国を中心とし豊かに花開いた食文化は、長く続く平和を彩り、華やかに飾るものとなっていくのであった。
その中核を担ったのが、女帝ミーアと料理長が考案した満月団子をはじめとした「満月全席」という総称の料理群だったりするのだが……。
それはまた別のお話である。

第七話　帝国の叡智は食道楽（後書き）

もうだいぶ前の話ですので、お忘れの方もいらっしゃるかもしれませんが、４３３部分、小麦秘話ヒストリーと関連話です。懐かしい。

第八話　裏切らず、見放さず、付き従うモノ

さて、誕生祭も終盤に差し掛かった頃、オウラニアが挨拶にやって来た。
「ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下」
白月宮殿前、ちょうど帝都を照らすミーア大雪像の麓（ふもと）に馬車を留めたオウラニアは、ちょこん、とスカートを持ち上げて挨拶する。
「ああ、オウラニアさん。待ってましたわ。ガヌドス国内の様子はいかがですの？」
「ええー。議会の掌握にー、少しだけ時間がかかってしまいましたけど、なんとか上手くやってますー。うふふ、お父さまが大人しくしててくれるから、とってもやりやすいんですよー」
やる気になったオウラニアは、実にしたたかだった。
父が何かしようとすると「なにもしないってー、言ってなかったかしらー？」などと、わざとらしく首を傾げてその動きを封殺していたのだ。
「それにー、今からやる気になっても動けないようにー、議会工作はきっちりやってますからー」
「そう。それならば、よろしいのですけど……」
ミーアは、そうして、オウラニアを宮殿内に案内する。
「ちょうど、ラフィーナさまもいらしてますから、共同研究所のことを相談していくのが良いのではないかしら？」
ミーアの誕生祭は、ある種の政治的会合の意味合いを持つものである。
周辺国の、王侯貴族が集まってくるイベントが、ただの楽しいだけのお祭りであるわけもなく。その裏では様々な話し合いが……そして時には悪だくみが成されるものであった。
「それにしてもー、あの雪像は見事ですねー」

廊下を歩きながら、オウラニアはのんびりした口調で言った。それが、白月宮殿前に立つ、あのミーアの巨像であると察し、ミーアは若干、笑顔を引きつらせる。
「ええ、まぁ……。みなが、わたくしのために張り切ってくれましたわ、おほほ」
「議会前に立てる予定のミーアさまの灯台にも、大いに参考になる部分があると思いますー」
「そっ、そうですの？　いや、でも、あれはそんなに参考にならないかも……」
などと、焦りながら言うミーア。なにしろ、あの巨体だ。そびえ立つ巨体なのだ。
あれは春が来れば溶けて消えてしまう期間限定のものだからまだしも、年がら年中、自分の巨像が議会の前にある、というのは、さすがにちょっと微妙なミーアである。それが、オウラニアと二人のものであったとしても、同じことなのだ。
「あー。確かにー、あれを作った人の情熱っていうのはー、あまり参考にはならないのかもしれないけどー」
などと、ミーアの言葉に、違う方向で納得した様子のオウラニア。
「そうですわ。ですから、アレの発想にとらわれることなく……特に、大きさとか？　あんまり気にせずに」
「そうですねー。あれを越えると言うことに囚われてしまったらー、そこまでで発想が止まってしまうからー。より良い、最高のものを仕上げるには、良くないのかもしれませんー」
それは、オウラニアの頭の中で目指すべき理想が『ミーア雪像灯台を超えたもの』から、『未だかつて誰も想像し得なかった、歴史に残る超スゴイ灯台』にランクアップを果たした瞬間であった。
黄金の明日を照らす灯台なんだから、本当に黄金で作っちゃうのもありかもー……などと言う思考も一挙に現実味を帯びてきていたが……もちろん、ミーアは気付いていなかった。空気や流れを読むのが得意なミーアにも、残念ながら読心術の心得はないのだ。

「まぁ、見習うべきところといえば、あまりお金をかけずに建てたというところぐらいで……うん、それは見習ってもらいたいですけれど……」
っと、釘を刺しに行くミーアであったが……もちろん、オウラニアは聞いていなかった。
師弟の心はなかなか一つになれないものなのだ。
「ミーアさん、ガヌドス議会前に立てるミーアさんの灯台ってなんのことかしら？」
ふと見ると……、いつから聞いていたのか、ラフィーナがそこに立っていた。
不思議そうにきょとんと首を傾げながら、ミーアのほうを見つめてくる。
「ああ、ええっと……」
ミーア、一瞬、返答に迷うも……。刹那の熟考。ミーアの灰色、もとい小豆色の脳細胞がぎゅぎゅんっと唸りを上げる。
そうなのだ、ここ数日、誕生祭で身に着けてきたＦＮＹは、決して彼女を裏切らない。ＦＮＹは常にミーアに付き従い、決して去ることはない、常に共にあるものなのだ。
そんなカロリーを消費し、そうして、出した結論……それは！
「実は、帝国とガヌドスの友情の印として、議会の前に、オウラニアさんとわたくしをモデルにした灯台を建てようということになりましたの」
ポイントは、ミーアだけの灯台ではない、というところと、ガヌドスと帝国の友好の証、というところだ。
ミーアが、個人の自己顕示欲を満足させるために建てた、と思われるのが、最も避けるべきところであった。
――ヴェールガ公国から、何らかの偶像だと見做されるのは、避けるべきですわ。あくまでも、権威の象徴ではなく、平和の証としてのものであることも、きっちりと強調しておかなければ。
そうして、実に、堅実なことを言ったつもりであったのだが。

「そう、ミーアさんとオウラニアさんの灯台……友情の証……ね」
ラフィーナは、美しい唇に人差し指を当てて、考え込むようにうつむいた。それは、可憐で、知的な聖女の仕草……のはずなのだが、こう、なんというか……、小さな子どもが美味しそうなケーキを目の前にしてする仕草のように見えてしまって……。
――あら？　わたくし、なにか、まずいことを言ったかしら？
ミーア、ちょっぴり慌てる。けれど、
「いいえー。私がミーア師匠と友情だなんてー、恐れ多いですからー。友情は帝国と我が港湾国との間のものでー、私とミーア師匠とは、師弟の絆ですー」
「師弟の絆？」
「はいー。友情じゃないですー。ミーア師匠は私の大切なお師匠さまですからー」
「師弟の絆……。そう。まぁ、そういうことなら……」
「あの、ラフィーナさま、それで、なにかご用がございましたの？　これから、お部屋にお邪魔しようと思っていたところなのですけど……」
ミーア、慌てて話を変える。
ラフィーナは誕生祭の間、この白月宮殿の客室に宿泊していた。だから、そこでガヌドスの今後のことについて話し合いを持とうと思ったのだが……。
「ああ……。ええ、そうだったわね。実は、ミーアさんにご相談したいことがあったの」
神妙な顔で頷いてから、ラフィーナは言った。
「例の……ムカ……、むか……むかりかい……そう。無理解をミーアさんに示している、例の方のことなのだけど……」
――あっ、ラフィーナさま、いま、ムカつくとか言おうとしてましたわ……。
噛み演説の名手ミーアは、他人の噛み方にも鋭い感性を持つ人なのであった。

第九話　生徒会長選挙、波乱の予感

ミーアが、ビックリしてラフィーナを見つめれば、ラフィーナはいつも通りの優しい笑みで、ん？　と首を傾げている。きょとん、と、どうかしたのかしら？　みたいに可愛らしく首を傾げているが……。

――ラフィーナさまも、本音がポロリしてしまうことがございますのね。ふふふ、ちょっぴり親近感が……。

などとのんきに考えそうになり、ミーア、ハッとする。

――って、そんな場合ではありませんわ。ラフィーナさまの中の獅子が目覚めそうになっておりますわ！

すぐさま頭を切り替えていく。切り替えが速いのはミーアの武器の一つなのだ。

「わたくしに無理解……というと、例のルシーナ司教、でしたかしら？　それとも、伯爵ならば、ルシーナ伯とお呼びしたほうがよろしいのかしら……」

「司教伯と呼ぶ方もいるのだけど……まぁ、それはともかく、そう。そのルシーナさん。あの方のね、長男が今年セントノエルに入学してくるんだけど……」

「あら、そうなんですのね」

考えてみれば、当然のことで、ラフィーナが卒業したからと言って、別に、セントノエルがヴェールガの中からなくなるわけでもなし。ヴェールガの勢力は依然として、学園の中に残り続けるのだろう。

新入生の中にヴェールガ公国の重鎮の子息がいたとして、不思議はない。

そこで、ミーアは考える。ラフィーナは、なぜ、こんなことを言い出したのか……。

刹那の思考、その後、ミーアは答えに辿り着く。
「なるほど。つまり、その方に生徒会長の座をお譲りすればいい……と」
考えるまでもない。これは、政治だ。
ルシーナ司教がいかにムカ……無理解で腹の立つ人物だとしても、まさか正面切って殴り合うわけにはいかない。むしろ、改善すべきはその無理解。すなわちここは、ミーアが理解してもらうために、譲るべき場面なのだろう。
――セントノエルの生徒会長と言う権威を、彼の子に譲ることで、わたくしに邪な考えがないことをアピールしろ、と。そういうことですわね？
そして、それは楽でいいかもしれない……なぁんて、ミーアは思う。
さらによくよく考えれば、ミーアとていつまでもセントノエルの生徒会長をしているわけにもいかない。ラフィーナ同様、二年後にはミーアも卒業しなければならないのだ。
その時に備えて、今のうちにヴェールガ出身の者に生徒会長の座を譲っておくことも有効だろう……っと、安易に考えていたミーアに、ラフィーナは小さく首を振り。
「いいえ、ミーアさん。そうではないの……」
あくまでも穏やかな、そう、とても穏やかな……さながら、獅子の……厳かな息吹のように穏やかな……迫力のある声で！
「ぶっつぶ……もとい。絶対に阻止してもらいたくって……」
「……はぇ？」
ぽっかーんと口を開けるミーアの前で、ラフィーナは指を振り振り言った。
「今、大陸各国は、気付いてはいないけれど危うい状況にある。危急の事態に備えて、万全な態勢をとるべき時期に、無用な混乱を引き起こすようなことは避けるべきよ。セントノエル学園は大陸の縮図よ？　どの国に飢餓が起こりそうかとか、どの国で緊張が高まっ

ているとか、そういった情報は、生徒会長をしていたほうが耳に入りやすいでしょう？　それに、各国の生徒たちをまとめるだけのカリスマ性は、ルシーナ司教の子にはないと思う。平時ならばいざ知らず、このような時期には、ミーアさんのように、みなを引っ張っていくリーダーシップがどうしても必要だし、この時期にミーアさんがセントノエルに遣わされたのは、それこそ、天の配剤じゃないかと思うの」

ラフィーナ、ちょっぴり早口に言った。ミーアは、なんとなくだが……。

――ああ、ラフィーナさま、ルシーナ司教に言われたことが、よっぽど悔しかったから、彼の思惑を潰すための理屈を頑張って考えてきたんですわね。

っと、察した。

――しかし……これは困ったことになりましたわ。

ミーア的には、どちらかと言うと、生徒会長の座を渡してしまいたいという気持ちがあるわけだが……。どうも、状況がそれを許してはくれなそうだぞぅ、っと彼女の本能が告げていた。

流れが、自分の願いとは違った方向に流れているのを、ミーアは敏感に感じ取っていたのだ。

これが、ラフィーナ個人の感情の問題であれば、ミーアとしても命懸けで諌めることも、できなくはないだろう。そのぐらいの諌言に耳を傾けてもらえるぐらいの関係性は築けているはずだ。たぶん……きっと！

けれど、厄介なのは、ミーア自身も、まぁ、そうだよなぁ、と思ってしまうところだった。

少々（？）の個人的な感情が絡んでいるとはいえ、概ねラフィーナの言うことは正しい。

ミーアが生徒会長でいられる間は、生徒会長でいたほうがいい。各国は、今のところ落ち着いてはいるものの、いつ危機的状況に陥るかわからない。そんな時、セントノエルの生徒会長の座と言うの

は、割と便利なのだ。
それに、聖ミーア学園とセントノエル学園の共同研究所の件がある。ガヌドス港湾国のヴァイサリアン族のために、その施設は、どうしても必要なのだ。
さすがに事情がわかれば、ルシーナ司教も反対はしないだろうが……。
――というか、もし反対でもしようものなら、そこを突いてやれそうではありますけれど……。
ともあれ、面倒事は避けたいのは事実。自分が生徒会長の座にいたほうが、安心と言えば安心なのだ。
――まぁ、仕方ありませんわね。ラフィーナさまの対抗馬として選挙に出るよりは、ずっと勝率はあるでしょうし……。うん、そういうことであれば……。
一つ頷いて、ミーアは言った。
「わかりましたわ。ラフィーナさま。わたくし、なんとか選挙で勝利できるよう、努力してみますわ」
少々気乗りしないまでも、そう請け負ったミーアであったが……。
状況は、ミーアが考えている以上に複雑であった。
まぁ、ミーアが直面する状況というのは大抵の場合はそうなので、驚くには値しないが。

第十話　収穫。そして、種を蒔け！

さて、帝国でのもろもろの行事をこなし、冬休みをのんびーり過ごしたミーアは、悠々とセントノエルへの帰還を果たした。

大聖堂に集まり、ラフィーナの新年初めの挨拶があり、それに続いて、生徒会長の言葉かけの時間があった。

――まぁ、もう慣れたものですけど……。しかし、次の選挙で勝つためには、しゃっきりしておかなければなりませんわ。

姿勢を正し、スッと背筋を伸ばして、生徒たちを見渡す。

そこには、冬休み前と変わらない生徒たちの姿があった。

欠けることなく揃った特別初等部の子どもたち。その子どもたちのそばには、彼らに絡んできた帝国貴族の子弟たちが、チェスクッティ子爵のクレメンス少年を筆頭に陣取っていた。さらに、視線を転じれば、タチアナや、タチアナに絡んできたミラナダ王国の貴族の子弟たちの姿も見える。

それに、クロエやラーニャ、ティオーナなど生徒会のメンバーもそこには揃っていて……。みんなが、そこに欠けることなく揃っていて……。

ぼんやりと、そんな光景を見ていたミーアは、なんとも言えない感慨に囚われた。

――あの子たち……特別初等部の子どもたちだけじゃない。帝国貴族の子どもたちは……たぶん、本来は、ここにはいなかった子たちなんですのね。

ついつい、そんなことを思ってしまう。

ミーア自身、この年にはすでにセントノエルには通えていなかった。当然だ。ミーアは今年十七歳。この年に、革命軍の手に堕ちたのだ。

帝国内はすでに各地で紛争の火が燃え上がり、ほとんどの帝国貴

族には、子どもをセントノエルに送る余裕などなかった。
だから、彼らはここにはいないはずだった。いや、むしろ、この世にいたかどうかも定かではない。蜂起した民衆の手によって、何人かの貴族は、一族郎党皆殺しの憂き目に遭っていたのだ。
ミーアの母の実家、コティヤール家もその一つだった。ヒルデブラントは今でこそ、騎馬王国に留学するなどと言っているらしいが、あの影響されやすい、気のいい青年も、過去の時間軸ではすでに死んでいたのだ。
この場にいないはずだった人たちがいて、敵だった人たちが、殺し合いをすることになった人たちが……ティオーナやリオラ、シオン、キースウッド、ラフィーナたちが笑顔を向けてくれる。
目の前の光景が、ミーアには奇跡に見えた。
――けれど、それを当然のことと思ってはダメですわ。今はまだ、気を抜ける時ではないのですから。
その実感が、ミーアの気を引き締めた。未だ、状況は綱渡りと言っても良い。
実際、今年も天候不良は続くはずで。だから、寒さに強い小麦をしっかりと収穫しつつ、輸送ルートを守っていかなければならない。
ならば、ここはあえて釘を刺しておくべきだ、と判断し、ミーアは口を開いた。
「こうして、新しい年、みなさんに挨拶できることを心より嬉しく思いますわ」
それは、ありふれた言葉。ありふれた……誰しもが口にし得る言葉だった。
ともすれば、聞き流してしまいそうな言葉だった。けれど……それを語るミーアの声には、どこか聞き流せない切実な響きがあったから……、幾人かの生徒たちは顔を上げ、ミーアのほうに目を向けた。
「嬉しく思いますわ。心から……。なぜなら、みなさんとこうして顔を合わせられること、これは、当たり前のことではないのですか

ら」
　集まった生徒たち一人ずつの顔を順番に見つめながら、ミーアは丁寧に言葉を投げかける。
「それは、一般論的に、人はいつ死んでしまうかわからない……ということではありませんわ。今現在、この大陸には明確な危機が訪れている、とそのような意味ですわ。そして、その魔の手は、わたくしたちにすら、容易に届き得るものであり、それゆえ、最大限の警戒が必要である、と……わたくしはあえて言っておきますわ」
　今のミーアには遠慮はなかった。
　なぜなら、すでに『未来の危機』を語る段階は過ぎているからだ。
「恐らく、ここに集う多くの方たちは、わかっているのではないかしら？　自分の領地の、領民の、ご両親の様子を見ていれば、察することがあるのではないかしら？　今年は……なにか例年とは違う。否、昨年から、なにか、様子が違うところがある……と」
　危険の兆候は、目ざとい者たちであれば、すでに気付くレベルにあり、それ故に、ミーアはその感覚を、より鮮明にさせるべく言葉を重ねる。
「具体的に言うならば、天候の不良によって収穫量が減っているのではないかしら？　少しずつではあっても、食料が不足している地域が、出てきているのではないかしら？」
　その言葉に、ハッとした顔をする者たちがいた。が、それはあくまでも、なぜ知っているのか、と言う困惑で……。まだ、具体的に自分自身の危機感として捉えられている者は少ないのではないか、とミーアは思う。
　けれど、破滅を経験しているがゆえに、ミーアは知っている。
　王侯貴族がヤバイ！　と感じた時点で、すでに手遅れということが往々にしてあるのだ。それゆえ、ミーアは切実に、力を込めて言う！
「ゆえに、もしも、危機の兆候を感じたら、すぐに教えていただきたいですわ。みなさんの親や大人たちはそれを隠そうとするかもし

れませんけれど……注意して見ていれば絶対に気付くはずですわ。そして、どうか、助けを求めることを躊躇わないでいただきたいですわ。あえてもう一度強調しますが、綺麗事でもなんでもなく、わたくしたちは、セントノエルの仲間。絆を育んだ者たち。ですから、遠慮せずに助けを求めていただきたいですわ」

すなわち、ヤバイと感じたら、遠慮なくすぐに言え……。隠すな、と。

間違っても、消せないぐらい火を大きくして、こっちに迷惑かけるんじゃないぞ、と声を大にして言いたいミーアである。

「そして、最善の行動を。我らは民を安んじて治めるべく、力を手にした者。ゆえに、各々、最善の行動をとっていただきたいですわ。このセントノエルに通う者に相応しく行動をとっていただきたいですわ。そうして踏ん張って、少しでも時間を作ってくれれば、必ずや助けの手は差し伸べられる、とわたくしは確信いたしますわ」

民を見捨てて、自分たちだけが助かる、などと言う動き方をされては迷惑なのだ。民を守るために汗水流せ、そうすれば民だって協力してくれるかもしれないし、失火は最小限に収められる。

この時期に内戦だ、クーデターだなどと言われるのは、まったくもって迷惑極まりない。できる限り協力してくれるよう、彼らの心を掴まなければならないのだ。

「それと、この中には商人のご子息もいるかと思いますけれど、ぜひ忠告をしておきたいですわ。命が懸かった状況で、金儲けをするものではない……命を、商売の天秤に乗せるな、と」

ミーアは、静かに首を振る。

「たとえ金を持っていたとしても、国が荒れ、甘いケーキが食べられないのでは意味がない。商品があり、お金があり、それを使う人がいてこそ商売をする意味がある。商人もまた、その世界の一部であることを肝に銘じていただきたいですわ」

ゆえに、この平穏な日常を、普通の日常を維持するように協力せよ、と告げて、ミーアの言葉は終わった。

ミーアの言葉は、後世に残るほどの派手さはなかった。
特に真新しくもなかった。
それは地味で、人々の心を動かすような感動的なものではなかった。
……だが、ゆえに……、そう、それゆえにこそ……それは特筆されるべきものであった。

この日から数日後、何人かの生徒たちが生徒会に助けを求めに来た。
自領の食料不足を訴えるその嘆願を受け、生徒会のメンバーは極めて迅速に行動し、一つ一つの問題を処理していった。
また、ミーアの話を聞いていた商人の息子の何人かは、実家に「最大限、食料危機に対処するよう採算度外視で行動せよ」と書き送った。
ミーアの示し続けた危機感は、すでに生徒たちに共有されつつあったのだ。
少なくともセントノエルに通う者たちの間では、未曽有の大飢饉に立ち向かう心構えが、かつてないほどに整っていた。
ゆえに、ミーアがしたのは、ただの確認で、ただの念押しであったが……。有効に働いた。
もはや、種を蒔く時ではなかった。否！　むしろ、今こそが種を蒔く時であった。
ミーアが、丹念に耕した畑が目の前にあった。
そして、彼女の言葉に耳を傾けた者たちが、その前に立たされていた。
あとは、種を蒔くばかり。
では、どんな種を蒔けばいいだろう？
未来に続く種……自らが蒔くべき種がどのようなものであるかを、セントノエルに通う者たち、一人一人が吟味し始めていた。

第十一話　セントバレーヌでの一幕

ヴェールガ公国の飛び地、独立港湾都市セントバレーヌの一角に、その建物は建っていた。

まるで、王族の住まう城のように荘厳で、巨大な建物、それは商人たちによって建てられ、ヴェールガ公国へと献げられた神殿だった。

そんな神殿の敷地内、神殿そのものよりは少し劣る館が建っていた。

それは、ヴェールガ公国から派遣されてきた司教が住まう邸宅。神殿管理の職をも兼ねるこの館の住人こそ、聖女ラフィーナに諫言した恐れ知らず、マルティン・ボーカウ・ルシーナ司教であった。

ヴェールガ国内に領地を持つ伯爵でもある彼だが、普段はこのセントバレーヌに家族とともに住んで職務にあたっている。

彼が、この地におけるヴェールガの権威を背負う立場である以上、当然、一般人が会うのはなかなか難しい人物ではあったが……少々、事情に詳しい人間であれば、方法がないわけではなかった。

抜け道は、わかりやすく用意されていた。単純に多少の金貨を積めばいいのだ。

商人の支配するこの独立都市において、金は力でルールだ。そんなわかりやすいルールに、この司教もまた縛られる人である……と一般的には思われていた。

そして、この日も、その慣習を知る男が、ルシーナ司教を訪ねてきた。

招き入れられた館の中で、男は愛想よくルシーナ司教に頭を下げた。

「ほう。なるほど。ミラナダ王国からいらっしゃった商人の方ですか」

問いかけに、男はへこへこ、と頭を下げる。
「はい。この地に来たからには、まず、ルシーナ司教にご挨拶差し上げねば、と……」
男のおべっかを聞き流し、ルシーナ司教は言った。
「商人ギルドへの顔つなぎ、ですか……」
紹介状に目を落とすルシーナ司教。すると、チャリン、と金貨がこすれる音が、耳に入ってきた。
目を上げれば、男が小さな袋を机の上に置いていた。音からして、おそらく中身は金貨だろう。
「どうぞ、お受け取りください」
「……これは？」
「献金ですよ、献金。教会でやり取りするお金なんか、それしかないでしょう？」
「神への捧げものならば、どうぞ、神殿の献金箱へ入れてください」
「いやぁ、これは『特別な献金』ですので、ぜひ、ルシーナ司教に直接お渡ししたく……」
男は、そう言って執拗に金貨の入った袋を押し付けてくる。
ルシーナ司教は、チラリとその中身に目をやってから、小さく頷いた。
「わかりました。それほど特別な献金だというのなら、私のほうで神にささげておきましょう」
そうして、ルシーナ司教はその小袋を自らの懐に入れた。
「しかし、ミラナダ王国であれば、私などではなく、シャローク・コーンローグ殿にでも頼ればよろしいのではありませんか？」
シャロークはミラナダ王国出身の大商人だ。しかも、セントバレーヌを活動の拠点にしているため、影響力も持ち合わせている。
郷里の先輩商人を頼るのが筋ではないか？　との問いかけに、男はへらへらと笑った。
「あの人は、もうダメですよ。すっかり慈善事業とやらに目覚めてしまったみたいで。ティアムーンのお姫さまにすっかり骨抜きにさ

れちまった。今じゃ、ただの好々爺って感じでさ」
「なるほど。帝国皇女ミーア姫殿下ですか。セントバレーヌの商人たちの中にも、彼女を支持する者は多い」
「ははは。まぁ、そちらのほうが商売に有利だってんなら、俺だってミーア姫殿下を礼賛してみせますがね」
恐らくは、セントバレーヌの利権に食い込みたい新興の商人……。もしくは、それに擬態した何者か……か。
静かに男を観察したルシーナ司教は穏やかな笑みを浮かべる。
「なるほど。商人の方たちはしたたかでいらっしゃる。ですが、礼賛の言葉は、まず神にささげるべき……と私は告げなければならない立場でしょうね」
「無論、商売に有利になるならば、惜しみなく賛美をささげますよ」
上機嫌に言う男を、ルシーナ司教は黙って見つめていた。

さて、男が帰った後、ルシーナ司教は執事を呼んだ。
「なにか、ございましたか？」
やって来た執事に彼は、恭しく金貨の入った小袋を渡す。
「司教伯さま、これは……？」
「先ほどの男が持ってきた『特別な献金』だそうです」
「賄賂……ですか。また受け取られたのですか？」
露骨に顔をしかめる執事に、ルシーナ司教は厳格な口調で言った。
「献金は献金。神にささげられたものにして、神が我らに『使え』と与えたもうたものです。粗雑には扱えないでしょう。が……神殿の献金箱を汚す必要もないか」
彼は静かに頷いて……。
「その金貨は当家の必要のために用いることにしよう。代わりに、本国から送られてきた私の給金から同額の金貨と、銀貨一枚を加えて献金箱に入れておいてください」
金貨に汚れが宿るという教えは神聖典にはなかった。だから、それを自分の懐に入れ、代わりに同額を別のところから捧げることに、

特に意味などないし、そこに銀貨一枚を上乗せすることにも決まりはなかった。
献金箱の中身は、そのままヴェールガ本国に送られ、各国の教会に分配される。そこで、孤児院の運営や、慈善活動に用いられるわけで……。だから、必要な場所に届くころには、それはただの金貨になり、ささげた者の気持ちなど微塵も残らないだろう、とは、ルシーナ司教自身も思っている。
だから、それはあくまでも、ちょっとしたこだわりで、気持ちの問題で……けれど、侵しがたい彼自身のルールであった。
「かしこまりました」
恭しく頭を下げる執事に、ルシーナ司教は続ける。
「それと、息子を……リオネルを呼んでください。少し話があるので」
それだけ言うと、彼は、紹介状に改めて目を落とした。
「ミラナダ王国、か……」

待つことしばし、部屋にノックの音が響く。
入ってきたのは彼の長子、リオネル・ボーカウ・ルシーナであった。
次の春からセントノエルに入学する予定の息子に、ルシーナ司教は、静かな声で言った。
「リオネル」
「はい、父上」
「セントノエルの生徒会長の座を、必ず奪還しなさい」
父の言葉に、リオネルは元気よく頷いた。
「はい。ラフィーナさまを誑かした魔女の手から、必ずや、セントノエルの生徒会の座を取り戻してみせます」
意気込む息子に、ルシーナ司教は厳しい口調で告げる。
「言葉は正確に、そして、大切に使いなさい。魔女などと言う言葉を気安く使ってはいけない。それは、ある者たちを虐げ、傷つけ、

殺す言葉になるだろう」
父の指摘に、リオネルはビクンっと肩を跳ねさせた。
「恐らく帝国のミーア姫は聖女ではないが魔女でもない。彼女は『人』だ。一貫した邪悪さを持たぬ、善にでも悪にでもなる、気まぐれな『人』に過ぎない。他の王族と変わりはしないでしょう」
ルシーナ司教は、そうつぶやいて首を振った。
「だからこそ……我らは神の威光のもとに、セントノエルを取り戻さなければならない」
つぶやくように、彼は言うのだった。

第十二話　聖女ラフィーナ、私情を捨てて……

「ふぅ、まぁ、なんとかこれで、上手くいってくれるとよろしいのですけど……」
新年の挨拶を終え、ミーアは、ホッと安堵の一息。けれど、そこで休んでいるわけにはいかない。
勝負は、すでに始まっている。
ラフィーナから勝ちを厳命されている以上、ミーアとしてはきっちりと選挙準備しておかなければならない。今の内から、生徒の支持をできるだけ集めておかなければならないのだ。
「さて、生徒会の方たちにも話を通しておく必要がございますわね」
ということで、翌日には、ミーアは生徒会に召集をかけた。
ミーアにしては珍しい、比較的、迅速な行動だった。そうして、部屋に集まった面々の前で、ミーアは改めて今年の抱負を告げる。
「今年もわたくし、生徒会長になろうと思っておりますの」
その言葉に、反対の声は上がらなかった。
「しかし……まぁ、正直なところ、わたくしとしては、少々荷が勝ちすぎるので、別にシオンにやっていただいても良いのですけど……」
チラッと目を向けるも……。
「いや、この時期に無理に変える必要はない。今は、ともかく、安定を図るべきだろう」
すげなく断られてしまった。他の者たちも、どうやらミーアの言葉は冗談だと思ったらしく、和やかな笑みを浮かべている。
まぁ、仕方ないか、と思い直し、ミーアは小さく頷く。
「このような時ですものね。あまり陣容を動かさないほうが良いのでしょうけれど……」
でもなぁ、面倒くさいんだよなぁ、っと、微妙に歯切れが悪くな

るミーアであった。
っと、その時である。
「よろしいでしょうか？　ミーア姫殿下」
手を挙げたのはキースウッドだった。通常であれば従者には一切の発言権がない場ではあるのだが、ミーアは細かいことは気にしない。
誰かの意見を聞かなかったせいで状況が悪化するのは避けたいし、この場にいる誰の意見も、自分よりは優秀であろうことを、ミーアは知っているからだ。
「なにかしら、キースウッドさん」
「以前、ミーア姫殿下は、ラフィーナさまに対抗する候補がいないと、選挙が機能しなくなる、というようなことをおっしゃっていたと思いますが、その辺りのことはどうお考えですか？」
「ああ、その懸念は不要よ。キースウッドさん」
答えたのはラフィーナだった。いつもと同じ、穏やかな笑みを浮かべて、ラフィーナは続ける。
「ヴェールガ公国からは、今年、立候補者が立つことになっているから」
「ヴェールガ公国から……？」
「ええ。マルティン・ボーカウ・ルシーナ司教の長男、リオネル君が、生徒会長候補として立つ、とすでに連絡を受けているわ」
「ルシーナ司教というと、今、セントバレーヌに赴任されている司教さまですか？」
尋ねたのは、アベルだった。地理的に、セントバレーヌはレムノ王国とも近い。特に、レムノ王国南方の貴族の中には、セントバレーヌとの繋がりが深い者もいるのだ。
「ええ、そうね。アベル王子は面識がおありかしら？」
「いえ。生憎と……。しかし、ヴェールガから候補が立つとなると、もしや、ラフィーナさまは……」
みなの視線を受け、ラフィーナは静かに瞳を閉じる。

「ええ。ヴェールガから立候補者が立つ以上、仕方ないわ。私としては、たいへん心苦しいところなのだけど、ここは私情を捨てて……」
ラフィーナは、涼やかな笑みを浮かべたまま続ける。
「ミーアさんを、応援するわ！」
その一言に、室内に静寂が立ち込めた。
「……うん？」
キースウッドが、聞き間違いかな？　という顔で首を傾げる。
他の生徒会の面々も反応は様々ながら、概ね、驚きの表情をしている者が多い。
「ええと、ラフィーナさま……？　私情を捨てて、ヴェールガの候補者を応援する、わけではなく？」
ラフィーナは静かに頷き、
「リオネル君とは、以前、会ったことがあるの。私をとても慕ってくれる、純粋な男の子だったわ」
――ふむ、ラフィーナさまは、どちらかというと年上趣味っぽいですし……。年下の男の子にはあまり興味がない、とか、そういうことかしら？
などと、恋愛脳ミーアが、若干、ポンコツなことを考えているが、それは気にしないとして。
「けれど、私はあえて知人への私情、同国人への想いを捨てて、ミーアさんを応援するわ。それが、それこそが公義だと信じるゆえに……！」
そのラフィーナの言葉に、アンヌは深々と頷いていた。
ミーアの味方をすることこそが、世界のためになる、と心から信じて疑わないためだ。
同じように、シュトリナも深々と頷いていた。
友の味方をすることこそが、絶対なる正義である、と心から信じて疑わないためだ。
ただ一人……キースウッドだけが、微妙な顔をしていた。

確かに……政治的な手腕、道義的な正しさにおいて、ミーアという人は文句のつけようがない人ではあるが……できれば、料理に関しては無条件に協力したりはしてほしくないなぁ、などと思うキースウッドである。

人は誰しも過ちを犯す者、ブレーキ役として、ラフィーナさまには動いてもらいたいな！　できれば、料理については！　などと、心から祈っているキースウッドである。

まぁ、それはさておき……。

「もっとも、私は、選挙の時には卒業してしまっているから、あまり意味はないのかもしれないけれど……」

そんなことを言うラフィーナであったが、その影響は、やはり計り知れないものがある。卒業後にミーアを支持すると……せめて、リオネルは支持しないと、表明してもらえるだけでも意味があることなのだ。

「感謝いたしますわ。ラフィーナさま。それでは、わたくしは、全力をもって生徒会長の任を務めさせていただきますわ」

ミーアの言葉に、ラフィーナは嬉しそうに微笑むのだった。

第十三話　消えた卒業式と、それぞれのラフィーナ

これは、消えた世界の物語。
大飢饉が幻とはならず、強かに大陸各国を打ち据えた、その時間軸での出来事である。
聖女ラフィーナの卒業する年、その年は混乱とともに幕を開けた。
各地で紛争が勃発し、飢餓に疫病、財政破綻によって傾いていたティアムーン帝国はもちろん、その他の国々も、セントノエルに人を送る余裕はほとんどなく。
なんとか卒業の式典だけでも、という本国の司教たちの言葉を、ラフィーナは涼しげな笑みとともに否定する。
「式典に、無駄なお金をかける必要などないでしょう。今は、民も大変な時。そのお金で、餓えた人々を一人でも多く救いましょう」
それは、ヴェールガの聖女としては当たり前の判断であったが、ラフィーナがセントノエルに対して、特に思い入れがなかったことにも由来する。
別に、ラフィーナは、セントノエルを去ることについてなにも思わなかった。
卒業を心から祝い合う友もいなければ、会えなくなって寂しくなる者もいない。
サンクランドのシオン王子やティオーナ・ルドルフォンとは緊密な連絡を取り合ってはいたが、それはあくまでも公的な必要のため。
その二人については、私的にも好意を抱ける者たちではあったが、腐敗した帝国の打倒という目的の前では、友誼を深めることなど些細なことだった。
そうして、ラフィーナがセントノエルを去る日、ラフィーナはふと学園を振り返る。
「さようなら、セントノエル。これからも、この場所が、各国の王

族を薫育し続ける場所でありますように」
小さく、形ばかりの祈りの言葉を口にして、ラフィーナは島を出て行った。
以後、彼女がセントノエルを訪れることは、特別な式典を除けば、ほとんどなかった。
そこは、彼女にとって印象に残らない場所、大切な場所ではなかったからだ。

これは、消えた世界の物語。
セントノエル学園に暗く深い闇が落ちた世界……学園のパーティーで毒物の混入事件が起こり、その手痛い失敗から、生徒会長ラフィーナが心に深い傷を負った世界。
卒業式を迎えたラフィーナは、静かに校舎を振り返る。
そこで命を落とした一人一人の顔を思い出し、ただ、彼らの魂が安らぐように祈りをささげる。
「ラフィーナさま……」
その声に、ふと顔を上げる。そこに立っていた友の姿に、ほんの少しだけ笑みを浮かべて。
「ああ、ミーアさん」
お祝いを言いに来てくれた人、ラフィーナがただ一人、心許せる友人で、心の支えだった人。
されど……それすら……その友情すらも彼女は失ってしまう。
皇女ミーア・ルーナ・ティアムーンの暗殺劇。
怒りに駆られたラフィーナは、自らを司教帝と称し、軍を起こす。
神の権威を我がものとして、敵はすべて殺した。敵を殺すのを邪魔する者たちも、容赦なく殺して、殺して、殺し尽くした。
そうして、彼女は居城をセントノエルに移した。
思い出の地。毒物混入事件が起きたあの日までは、そこは、確かに輝ける場所であった。
友や、大切な人たちと、共に明るい未来を見たそこは、彼女にと

って、甘い思い出と鈍い痛みの記憶の残る、最も印象深い場所だった。

かくて、時は流転して。

「ああ……。今日で、卒業、かぁ」

ラフィーナは、そっとため息を吐いた。

六年間を過ごした生徒会室、その机を軽く撫でる。

式典まではあともう少し。

儀式用の、白いローブを身にまとい、すでに準備は整っている。

そんなラフィーナの心にあるのは、わずかばかりの緊張と、気を抜けば、なんだか泣き出してしまいそうな切なさだった。

もう自分が、この学校の生徒でなくなるなんて、とても信じられなかった。

不意に、生徒会室のドアが開いた。

「あら、ラフィーナさま。こんなところにおりましたの？」

「ミーアさん……」

静かにラフィーナは顔を上げる。それから、いつもと変わらない笑みを浮かべて。

「少しね、考え事をしていたの……」

「考え事……？」

「そう。もしも、ミーアさんと出会っていなかったら、どうなっていただろうって」

ついつい、想像してしまう。

もしも、ミーアと出会っていなかったら、どんな学園生活を送っていたのか？

「ただの想像だけど、でも、私はきっと、特に何の思い出もないまま、このセントノエルでの生活を終えていたんじゃないかな、って、そう思って……」

それから、自嘲するようにラフィーナは笑った。

「きっと、お友だちだってできなかったでしょうね。もちろん、形だけのお友だちはできただろうけど……本音を語り合う、そんなお友だちはきっとできなかったと思うわ」
寂しげな、笑みを浮かべた。

そんなラフィーナを見て、ミーアは……。
――なんだか、ラフィーナさまが……弱ってますわ！
驚愕した！　驚嘆した！　吃驚である！
あの……かつて、笑顔でミーアをばっさばっさと切り捨てていったラフィーナが、弱々しく微笑んでいる。
なにやら、しゅん、と寂しそうにしていた。
あの、獅子ラフィーナが……。
けれど、刹那の混乱から抜け出したミーアは、
――ああ、でも……。そう、わたくしは、ラフィーナさまと、お友だちになったんでしたわね。
それを、思い出した。
よくよく考えれば、ミーアがセントノエルで最初に友だちになったのは、ラフィーナだった。
読み友クロエでも、前時間軸の因縁を越えたティオーナでも、ミーアの胃袋を支える姫ラーニャでもない。
誰よりも早く、ミーアに「友だちになってほしい」と言ってきたのは、ラフィーナだったのだ。
――ならば、その友が元気をなくしているならば、元気づけなければなりませんわ。これから、ラフィーナさまの晴れ舞台が待っているのですし……。
ミーアは、ふん、っと鼻を鳴らすと、ラフィーナの手をそっと握った。
「ミーアさん……？」
「楽しき時間が過ぎ去るのはあっという間のこと、でしたわね」
ラフィーナの目を見つめて、ミーアは続ける。

「されど、時は巡っていくもの。馬龍先輩が卒業して、新しい人たちが入ってきて、サフィアスさん、エメラルダさん、ルヴィさんが卒業して、クレメンス君や、ヤナ、パティたちが入ってきた。ラフィーナさまが卒業し、わたくしも、その二年後に卒業して、その代わりに新しい子どもたちが入ってくる。わたくしたちは、今度はそれを見守り、育む、大人になっていく」

それから、ミーアは朗らかな笑みを浮かべる。

「わたくし、思いますの。いつかきっとラフィーナさまと馬龍先輩のお子さまと、わたくしの子が、共にセントノエルに通う日が来るって。そうしたら、また、わたくしたちは、子の母同士、お茶を酌み交わす日だって来ると思いますの。共に、子を持つ親の悩みを分かち合い、励まし合い、笑い合う……。そんな関係に、お友だちに、なっていけたらいいんじゃないかな、って思いますのよ」

ミーアは言いたいのだ。

末永く……仲良くしてね？　っと。

なにしろ、卒業しても、ラフィーナはラフィーナ。獅子は獅子。なれば、ミーアとしては、疎遠にならず、密に連絡を取る友だちでいたいわけで。

「卒業しても、ラフィーナさまは、お友だちですわ。形は変われども、ずっと、それは変わることがない。そうではないかしら……？」

「ミーアさん……ん？」

ラフィーナは感動した様子で、目をうるうるさせたが……次の瞬間、おや？　っと首を傾げた。

「あの、危うく聞き逃すところだったけれど……ミーアさん、私の子がセントノエルに通うというのは、まぁ、いいのだけど……なぜ、私と馬龍さん……？」

「あら？　ラフィーナさまは、てっきり馬龍先輩と恋仲なんだとばかり……」

「ミーアお姉さま！　そろそろ、式典が……。あ、ラフィーナさまもご一緒だったんですね」

ニコニコ笑うベルに、ミーアは尋ねる。
「ねぇ、ベル、ラフィーナさまがどなたと結婚するのか、聞きたいのですけど……」
「ちょっ、ミーアさん……？」
ラフィーナが慌てた様子を見せるも、
「未来のことは、教えられません」
ベルは、神妙な顔で首を振った。
それを聞き、ラフィーナは、ふぅっと深いため息。胸に手を当てて……。
「そう。未来のことは神のみぞ知ること。それを無理に暴こうとするのは良くないこと……」
「でも、ヒントぐらいはいいかもしれません。すっごく馬に乗るのが上手い、豪快な人です」
「ベルさんっ！」
ラフィーナの、混乱に彩られた悲鳴が生徒会室に響いた。
そうこうしているうちに、時間は過ぎて行き。

ラフィーナの卒業式が始まる。

第十四話　卒業式　三視点

厳かに、オルガンの音が鳴り響く。
セントノエル学園の大聖堂。音響を最大限に生かせるよう設計されたその建物は、それ自体が巨大な楽器のようなものだった。
それは、秩序と計算の粋（すい）、建築学の極致。混沌の蛇が作り出す建物とは、対極の位置にある建物であった。
その計算には聴覚だけでなく、視覚的な効果も入っていた。
横に並んだ聖像や神聖典を元に描かれた聖画。さらには、日光の角度を計算して作られた窓からは、燦然と照り輝く日の光が降り注いでいる。
そして、そんな大聖堂が最も美しい姿を現わす日こそが、本日の卒業式であった。
この日は、いつも閉じている上方の窓も開け放ち、聖堂の中は、まさに、天におわす神の宮を思わせる威容を現していた。
やがて、前奏のオルガンが終わる。
式の始まり。司教の開会を告げる声が高らかに響き、それに引き続き、聖女ラフィーナが呼ばれる。
彼女は卒業生代表として、ヴェールガ公爵令嬢、聖女として、本来であれば生徒を代表する生徒会長として、話をする立場であった。
儀礼用の純白のローブに身を包み、ラフィーナが壇上に上がる。
静かに瞳を閉じ、心の中で祈りをささげてから、ラフィーナは目を開けた。
「今日、この日を迎えられたことを、まず、神に感謝を……」
穏やかな祈りの言葉……その瞬間、奇妙な感覚がラフィーナを襲った。
この言葉を言うのが初めてではないような、そんな気がしたのだ。

その日は、灰色の日であった。それは、世界が暗雲に包まれた歴史の一幕。
この大聖堂に人の姿はなく、卒業式の式典も開かれずに……だから、もしかしたら、事前練習の時の記憶だったのかと、一瞬錯覚する。
けれど、違う。確かに、それは卒業の日の記憶であったと、ラフィーナの深い部分が告げていた。
その日……紛れもなく卒業式の日に、ただ一人、ラフィーナは誰にも聞かれぬ祈りをつぶやいた。
「今日、この日を迎えられたことを、まず、神に感謝を。そして、大陸に蔓延する疫病と、飢え渇いた人たちに救いの手を、どうか伸べてくださいますように」
誰もいない大聖堂。無力感の内に、ただ心からの祈りをささげる。
一心に祈りをささげ、そして目を開けた時、目の前に広がっていたのは――底知れぬ孤独の風景だった。

息を呑み、今見た記憶を吟味する。そんなラフィーナに、別の光景が思い浮かぶ。

「今日、この日を迎えられたことを……」
自分に向けられた多くの視線、そんな中、祈りの声が、かすかに震える。
無事にその日を迎えられなかった生徒たちの顔が、ラフィーナを責め苛んでいたからだ。
苦しみ、もがきながら死んでいった者たち……その顔を忘れてはならないと、心に刻んだ。それなのに、今日を迎えられて感謝？
そんなことをどの口が言えようか。

なぜ、守ってくれなかった？
なぜ、このセントノエルで、あんな悲惨なことが起きた？
なぜ、私は、あれを止められなかったっ！？
いくつものなぜが頭を埋め尽くす。そんな中、拠り所を探して、ラフィーナは会場に目を移す。そこには、自分を支えてくれたただ一人の友、ミーアの姿があった。
……ああ、そうだ。
彼女と……大切な唯一無二の友人と出会えた。それは、確かに感謝すべきことであった、と。
ただ、それだけのために、ラフィーナは言う。
「神に、感謝を……」
ただ一人、自分を、聖女としてでも公爵令嬢としてでもなく、ただ一人の友として慕ってくれた人のために。ラフィーナは感謝をささげた。

――今のは、いったい……。
再びの、記憶の混乱。ラフィーナは、酷く心を乱された自分を見つける。
目の前を過ったのは二つの記憶。
誰にも心を開くことなく、無為に学園生活を送り、孤独に卒業していく記憶。
ただ一人の友のみを頼り、責任はすべて自分で負い、擦り切れた心で卒業していく記憶。
その悲しく、空しい記憶を思い……、ラフィーナは、改めてこの場に集う生徒たちに目を向けた。
自分と同じく卒業していく同級生たちがいた。
入学時、聖女ラフィーナに対する接し方をする彼らは、どこか遠かった。自分にかけられる声にも、笑顔にも、どこか距離を感じたものだったが、いつしか彼らは、親しき友としてラフィーナに接してくれるようになった。

ミーアを友としたあの日から、すべてが変わりだした。
――今ならば、わかる。入学式の日に距離を取っていたのは、むしろ私だった……。私が遠ざける笑みを浮かべ、遠ざける声で話し、遠ざける態度で接した。だから、彼らは私の友となってくれなかった。
けれど、今は……。
ラフィーナは改めて、自分と同じくこの学園を卒業していく生徒たちを見た。そして、生徒会のメンバーを見た。
ラフィーナには……たくさんの友がいた。
個人的な友人もいた。ラフィーナを一人の人として扱ってくれた人たちがいた。
そして、聖女でもあるラフィーナと、友になってくれた人たちもいた。
いろいろな彼女を受け入れてくれる仲間たちがいた。
そんな仲間たちとの日々を、今、ラフィーナは心から感謝し……口を開く。
「神に感謝を……。素晴らしき仲間たちを、素晴らしき、このセントノエルの日々を、神に感謝を……」
不意に……声が震える。
え？　と思った次の瞬間、その頬を涙が伝い落ちた。
――なぜ、私は、泣いているのかしら……？
ラフィーナは、自らが泣いていることに気付き、戸惑いの表情を浮かべた。

だって、この上もない学園生活だったはずだ。
充実し、実り多き日々だったはずだ。
紛れもなく、自分は満足しているはずだ。
陰ることのない、黄金のような日々を過ごし、今ここに立っている。
思い残すことなどなにもなかった。

後悔も、憂(うれ)いもなにも……何一つなかった。
ただ……そんな学園生活が終わってしまうことが心の底から悲しくて、寂しかった。
――ああ、そう……。私は、心からこの学園のことが、セントノエルのことが好きだった。
思い出す、その一瞬、一瞬が輝いていた。
ミーアたちとの、仲間たちとの、セントノエルの優しい人たちとの、その日々は、ラフィーナにとって、この上もなく愛おしいものだったのだ。
溢れてくる想いが抑えきれなくて、ラフィーナは泣いた。
息が、胸が苦しい。口からこぼれる嗚咽を抑えることができなかった。
けれど……そんな彼女に手を差し伸べられる者はいなかった。
今は儀式の真っ最中だ。それを中断することなど、誰にできようか。
みな心配そうな表情を浮かべながらも見守ることしかできない。
選ばれし聖女の出番に、割って入ることなど誰にもできず……だから、誰も彼女を支えることはできないのだ……そのはずだった。
少なくとも、彼女が幻視した、消えた世界たちにおいては。けれど……。
「ラフィーナさま……」
ふ、と自分の頬に、柔らかな布が当たるのをラフィーナは感じた。
涙でかすむ視界、そこに見えたのは、彼女の一番の友だちの姿で……。
「ミーア、さん……」
かすれた声で、ラフィーナは言った。
頭の中、卒業式を台無しにしてしまったという焦りが渦巻く。
生徒会のみなが用意してくれた卒業式を、自分の手で台無しにし

てしまったのだ。どうしよう、どうしよう……と、混乱しつつ、ラフィーナは言った。
「ごめんなさい。私、私は……」
半ばパニックに陥るラフィーナに、ミーアは無言でハンカチを押し付ける。ラフィーナは、静かに自分の涙を拭う。そうしている内に、少しずつ自分を取り戻していく。
――大丈夫、まだ、大丈夫。私は聖女だ。みなの前で胸を張り……顔を上げて話しだそう。大丈夫……大丈夫。
小さく息を吐き、気持ちを落ち着けてから、ラフィーナはミーアに笑いかけた。
「ごめんなさい。ミーアさん。もう、大丈夫。少し取り乱してしまったわ。このハンカチは洗って……え？」
ラフィーナの言葉を途中で遮り、ミーアはそっとラフィーナの手を握る。それから、その手からハンカチを取り返してしまった。
呆然とするラフィーナに、ミーアは優しく微笑んで……。それからハンカチを持ったまま、生徒たちのほうに向き直った。
「え……？」
誰もが驚きの視線を向けてくる中で……ミーアは高らかに言った。
「今ここに、ラフィーナさまの……惜別の涙に濡れたハンカチがございますわ」
そう言って、ミーアはそのハンカチを捧げ持つ。
「これは、ラフィーナさまのセントノエルに対する想いの結晶。セントノエルのこれからを思い流された深いお心ですわ。ですから、わたくしは、このラフィーナさまのお気持ちを、今ここで引き継ぎますわ！」
そう言って、ミーアは、ハンカチを自らの腕に巻いた。
それは――あの日の、あの光景を彷彿とさせるものだった。
生徒会選挙の時のラフィーナの行動、ぶどう酒に濡れたベールを自らの腕に巻くという行動を。
それから、ミーアはチラとラフィーナのほうに目を向けた。

その瞬間、ラフィーナにはミーアの意図するところが、はっきりと伝わった！

表向き、ミーアがしたのは「ラフィーナの志を受け継ぐ」というメッセージをみなに伝えることだ。それを見えやすく、象徴的に全校生徒の前でやってみせたのだ。

けれど、ラフィーナは覚えていた。自分がそれをした時に、なんのためにしたのか？　ということを。

ラフィーナは、ミーアへの支持を表明するために、ミーアの応援団がしているのと同じことを、やってみせたのだ。

ミーアを支持するために、やったのだ。であるならば、ミーアが今してみせたことは一体なにか？

それは……。

――私を、支持してくれていると、そういうことなの？

ミーアは、形で示そうとしているのではないか？

ただ一人、みなの前に立ち……心を揺さぶられることなく、完璧に儀礼をこなす聖女ラフィーナではなく、この、感情を揺さぶられ、人目をはばからずに涙を流すラフィーナを……支持すると……。

今の、ありのままのラフィーナを自分は支持していると……改めて言ってくれて、背中を押してくれているのではないだろうか？

それを認めるように、ミーアは、ちょっぴり困ったような顔で笑っていた。

そんな顔で見つめられるのが、ちょっぴりくすぐったくって、それでいて、とても嬉しい。

「ミーアさん、ありがとう……」

自然と、言葉がこぼれ落ちる。

胸がいっぱいになり、再び泣きそうになるラフィーナだったが……それを堪えて、飲み下す。

感情を抑えられず泣き出してしまうのも自分であれば、それに耐え、立ち上がるのもまた、自分であるから。

ありのままを認めてくれる人がいるからこそ……そこから前に歩

き出せる。
ラフィーナは、卒業というこの日に自らの立っている場所を確かめ、そして、そこから歩き出そうと決意した。
「私には、共に歩く人たちがいる。だから、歩いて行ける……」
それは、聖女ラフィーナの今後の生き方を決定づける、そんな瞬間であった。

第十五話　卒業式　ミ視点

卒業式の開始のオルガンが始まった時、ミーアは、思わず安堵の吐息を吐く。

――無事に今日までこぎつけて、良かったですわ。

実のところ、ここ最近、ミーアは結構なプレッシャーを感じていたのだ。

今回の卒業式、生徒会の責任は軽くない。

そしてその生徒会に、ラフィーナは含まれない。彼女は送り出される立場である。

かつてであれば、仮に卒業式が台無しになったとしても「準備している側に聖女ラフィーナさまがおりますが、なにか？」と言えたところを、今回に関しては言えないのだ！

これは、なかなかにプレッシャーだった。

無論、準備にはラフィーナはもちろん、司教やセントノエルの職員なども関わっている。が、生徒会の準備している部分に関しての責任は、ミーア他、生徒会の役員たちにかかるわけで……。

しかも、生徒会の役員を選んだのがミーアなのだから、最終的な責任はミーアが問われることになるのだ。

――万が一、なにかまずいことがあれば、その辺りを生徒会選挙で突かれる可能性もございますわ。次の生徒会長に選ばれるまでは、できるだけミスは避けるべきですわ。

そうして気を張り詰めていたゆえに、今日という日を無事に迎えられて、ミーアはホッと安堵したのだ。

「今日という日を無事に迎えられたことに、神に感謝を」

その言葉に、心から同意するミーアである。

本日は、特にミーアには役割は与えられていない。大勢の前で話す場面もなし。ミーアは完全な裏方として式を見守ればいいわけで

……気楽なものであった。気楽なものになるはずであった！
あとは、居眠りしないように気をつければ、なんて……完全に油断していたものだから、ミーアは咄嗟に、目の前で起きた出来事に理解が追い付かなかった。
ラフィーナが……あの、眠れる獅子ラフィーナが！　突然、泣き出したからだ！
「……はぇ？」
思わずヘンテコな声を出し固まることしばし。ミーアは内心で叫ぶ！
なぜだっ！　っと。
――なっ、なな、なぜ、ラフィーナさまが、あんなに感動を？
そう思いつつも、ミーアはすぐに、式の前のことを思い出す。
生徒会で切なげな顔をしていたラフィーナ。あの時、自分は、確かに彼女が弱っていると気づいていたはずで……。
――くぅ、あの伏線を見過ごしていたとは、何たる失態。
ミーアは頭を抱えつつ、ラフィーナを見守る。
儀式の最中に、突然、席を立って、あの場に出ていく？　そんな注目を集めることなどできるはずもなし。そう、絶対にできないし、やりたくない。それをやれば自身の評判が落ち、生徒会選挙でだって不利になるかもしれない。

……でも。

ミーアはもう一度、ラフィーナに目を向ける。
ただ一人立つラフィーナに、誰も手を差し伸べられない状況を見て……ぐぬっと一つ唸って。
――ええい、仕方ありませんわ。ラフィーナさまが困っているところを見過ごすと……その、いろいろまずそうですし！
意を決して、ミーアは立ち上がる。
仕方ないではないか……。

なんだかんだで、ラフィーナはお友だちなのだ。
セントノエルに来てからの四年間で、いろいろと思い出も、絆もできてしまったのだ。
仕方ないではないか！
なんだかんだで、ラフィーナは、一番に「お友だちになりたい」と言ってきてくれたのだ。
どこか不安そうな顔で、それでも勇気を出して言ってきてくれたのだ。
仕方ないではないか！！
そんな人を放っておくと、気分が、とても悪そうだったのだ！
ミーアは基本的には海月で流れには絶対に逆らわない人なのだが……同時に自分ファーストな姫でもあるのだ。
せっかくやり直しているのだから、寝覚めが悪いことはしたくないのだ。
そうして、ミーアは素早くシュシュッと歩き出す。
向かっている途中でラフィーナが立ち直ってしまい、すごすごと踵を返す……などということになっては恥ずかしすぎる。きっとそれも寝覚めが悪いだろう。ゆえに、ラフィーナのところに一刻も早く向かうことこそが肝要。
幸いにも生徒会長たるミーアは、聖堂の前方に座っていたため、ほどなくしてラフィーナのところに行くことができた。
未だに顔を覆い俯いているラフィーナ、ミーアはそっとハンカチを取り出し、その頬の涙を拭う。
ビックリした顔で自分を見つめるラフィーナに微笑みつつ……考える。考える！！
――っていうか……そもそも卒業式って卒業ミサですわよね？
これは礼拝で儀礼行為。それをこんな具合に、横紙破りみたいなことをするのはさすがにまずすぎますわ。中央正教会の神さまは割と寛容なところがございますし、ラフィーナさまを助けるためだったので仕方なかったわけですけど……。どうなのかしら？

むしろ、ラフィーナが自分で立ち直るのを待つ場面だったのでは……？　っとか今さらながら後悔しかけるも……。

「ミーアさん、ごめんなさい。私……」

ラフィーナの困惑したような声を聞いてしまうと、待つのが正しかったとは思えない。ならば、ここまでは間違いではないのだ。

やらなければよかったと「もしも」を考えるのは、もうやめにする。

問題は、この後、どうするか……である。

ミーアが思案に暮れている、その時だった。

「ごめんなさい。ミーアさん。もう、大丈夫」

ラフィーナの声がミーアの耳に届いた。目を向けると、ラフィーナは、ほんの少し照れくさそうに、頬を赤くしていた。どうやら、なんとか立ち直りつつあるようだった。

良かった。来た甲斐があったというものである。

あとは上手いこと誤魔化して、ラフィーナにこの場を引き継げば……そう思っている時だった。

「このハンカチは洗って……」

ラフィーナが手に持つハンカチ――それを見た瞬間、ミーアは目を見開いた。

と同時に、ミーアは手を伸ばす。ラフィーナの手が握るハンカチへと。

――ああ、そう……そうですわ。確か、あの時も……。

今日と同じように、儀礼的な順序が破られたことがあったのをミーアは思い出していた。

生徒会長選挙……あの時の光景がミーアの脳裏を過って……。

――あれを再現できれば……。そうですわ。あの時、問題にならなかったのだから今回も問題ない、と強弁することができるのではないかしら？

そうして、ミーアの手の中にあったのはハンカチだ。純粋にラフィーナの涙が……涙だけが沁み込んだハンカチだった。

これはいける、むしろいくしかない、とミーアは確信する。激流に身を投じてしまったのであれば、もう、諦めてその波に乗るしかないのだ。
もし仮に立場が逆ならばこうはいかないところだ。なぜなら、もしミーアであれば、ハンカチを差し出されれば、当然、涙を拭くだけではない。鼻だってかむ。
そりゃあもう、九分九厘、十中八九、鼻をかむ。
そうして、出来上がった涙ｗｉｔｈ粘液なハンカチは……さすがにミーアとしても手に取るのははばかられるわけで……。
だが今回は、その心配はなかった。ラフィーナが極めてまっとうに公爵令嬢として……あるいは聖女としての感覚を持ち合わせていたがゆえに……、活路が開けた！
それは、ミーアの目には、天の導きのように見えたのだ。
波だ。大きな波が来ている。ならば、全力で乗らなければ！！
ミーアは手の中のハンカチを握ったまま、生徒たちのほうに向き直った。
この状況の落としどころを……言い訳を作るために！
「今ここに、ラフィーナさまの、惜別の涙に濡れたハンカチがございますわ。これは、ラフィーナさまのセントノエルに対する想いの結晶。セントノエルのこれからを思い流された、深いお心。ですから、わたくしは、このラフィーナさまのお気持ちを、今ここで引き継ぎますわ！」
そう言って、ミーアはハンカチを自らの腕に巻いた。
若干、二の腕のＦＮＹが邪魔するが、気合で縮めて、ギュッと結ぶ。
そうして、みなに思い出させる。
今、自分がやってることは、かつての生徒会長選挙で、ラフィーナがやったことと、同じようなことだよ？　と。
だから、別に、怒られるようなことじゃないよね？　っと。
それから、ミーアはラフィーナのほうを見てニッコリ微笑みかけ

る。
　これにより、ラフィーナを自らの共犯関係に仕立て上げる。よろしくお願いしますわね、裏切らないでね、との祈りを込めて、ちょっぴり困った笑みを浮かべる。
　二人は、同じように儀式の手順を乱した、正真正銘の共犯関係なのだ！
「卒業生の代表ラフィーナさまのお言葉をお聞きする前に、ラフィーナさまのお志を継いだ、わたくしのほうから、先にお話ししたく思いますわ」
　そうして、ミーアは即興で送る言葉を話し出した。
「卒業生の諸先輩方、そして、ラフィーナさま、ご卒業おめでとうございます。みなさまが、いなくなってしまうのは寂しいですけれど、どうか、安心してこのセントノエルを旅立たれますように。ラフィーナさまの意思を受け継いだわたくしと、みなさま方からの想いを受け継いだ在校生で、このセントノエルを支えていきますわ」
　次期生徒会長として、きっちりアピールしつつ……。
「この学園を旅立っていかれるみなさまには、ぜひ、ここでのことを忘れずにいていただきたく思いますわ。ここで受けた想い、育んだ志をしっかりと握りしめて、ご自分の国に帰っていかれますように、と祈っておりますわ。みなさまの、母国でのご活躍を期待しておりますわ」
　自分の国に帰って、しっかりやれよ！　と言いたいミーアである。
　間違っても、蛇の甘言で惑わされたり、うっかり隣の国に喧嘩売ったりするんじゃないぞ？　と、きちんと言っておきたいミーアである。さらに、
「わたくしたちも、いずれ、この学園を出て行きますわ。そんな時には、どうか、先にセントノエルを旅立って行った先輩として、セントノエルの仲間として、友として……ぜひ、優しく指導して行っていただければ、と思っておりますわ」
　そうして、ミーアはもう一度、ラフィーナのほうを見る。すでに、

泣き止んだラフィーナは、いつも通りの穏やかな笑み、否、それ以上に嬉しそうな心からの笑みを浮かべて拍手をしていた。
――やれやれ、これは、なんとか誤魔化せたのではないかしら？
などと、胸を撫でおろすミーアであった。

第十六話　出会い

さて、卒業式に続き、今度は入学式の準備にミーアは追われた。
「といっても、まぁ、サンテリさんもいらっしゃいますし、なんとかなるのではないかしら？」
というミーアの予感は幸いにも当たり、ラフィーナが抜けた穴は、サンテリら職員や学園付きの司祭（チャプレン）と連絡を密にとることで、乗り切れそうだった。そんな自信を深める機会になった入学式を終え、大過なく新入生の受け入れを終えたミーアに、とある出会いが待っていた。
それは入学式直後の、女子寮でのことである。
廊下を歩いていたミーアは、部屋にワイワイ向かって行く新入生を見て……ちょっぴり偉そうに威張る子や、不安そうにソワソワする子たちを見て、思わず微笑ましい気持ちになる。
「……ふむ、そうですわ。新入生歓迎ダンスパーティーのことは、きちんと教えておいて差し上げないとダメですわね。それと、新入生を歓迎する意味でも、ここはお風呂に特製の入浴剤を入れて……パーティー前にみなを誘ってお風呂会をするというのもいいかもしれませんわ」
この年のダンスパーティーはたいそう、輝きに満ち溢れたものになってしまうわけだが、まぁ、それはともかく……。
そうして廊下を歩いていたミーアの、その視界の端に、ふと水色の輝きを見た気がした。
「……え？」
涼しげで澄んだ色……純粋無垢な聖女を思わせる、その色を見て思わず……。
「ラフィーナ、さま……？」
ミーアはその名をつぶやいていた。けれど、違う。

そこにいたのは、いかにも新入生という、幼さを残した少女だった。
よく見ると、その髪は、ラフィーナの髪色よりは少しだけ薄い、白にも近い水色だった。それに、その瞳の色は、淡い灰色で、それが光の加減で、時に緑色に輝いているのだった。
少女は、ミーアのほうを見て、白い顔をいっそう白くして、あ、あの……とつぶやいた。
「ああ、いえ……。なんでもありませんわ。怖がらせてしまったなら、申し訳ありませんでしたわね。わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーン。先ほどの入学式でもご挨拶させていただきましたが、セントノエルの現生徒会長ですわ」
スカートをちょこん、と持ち上げて頭を下げれば、少女は、あわあわと口を震わせながら、
「あ、あの……お初にお目に、かかります。私の名前はレア、と申します。ヴェールガ公国の……その、伯爵令嬢です。ミーア姫殿下」
そうして、少女、レアは一歩引いて、スカートの裾を小さく持ち上げる。
「まぁ、ヴェールガの……では、もしや、ラフィーナさまとも血縁がございますの？」
高級貴族の間ではしばしば政略結婚が行われ、複雑な血縁模様が描かれるものだが……。
「はい。あの、公爵家と我が伯爵家とは、遠く、血が繋がっていると聞いたことがございます……」
「なるほど。それで……。どこか、ラフィーナさまの面影がございますわね」
言いつつも、ミーアは腹の中で考える。
――ラフィーナさまの血縁がある伯爵令嬢となれば、優しくしておくに越したことはございませんわね。逆に、変なことをして、チクられたら大変ですわ。ここは最大限、親切に。
みなに愛され、慕われる生徒会長の笑みを浮かべ、ミーアは言っ

た。
「こうして出会えたのも、なにかの縁。ラフィーナさまは、わたくしの大切なお友だちですし……。仲良くしていただけたら嬉しいですわ」
ニッコリと優しい笑みを浮かべるミーア。レアは瞳を瞬かせた後に、
「あ、はい。あの……よろしく、お願いいたします。ミーア姫殿下」
いそいそと頭を下げて、行ってしまった。
「あら……もう少しお話を、と思いましたけれど……。しかし、ふふふ。レアさん……。顔はラフィーナさまとちょっぴり似てますけれど、中身は少し違うみたいですわね」
それから、ミーアは顎に手を当て、考える。
「しかし伯爵家……。どの伯爵家なのかしら……。ヴェールガの伯爵家と言えば、ええと確か、授業かなにかでやったはずですわね？」
基本的に、勉強は嫌いかつ嫌いなおかつ嫌いなミーアであるが、さすがに神聖ヴェールガ公国の貴族事情には、多少は通じている。そんなに数は多くないし、一応、上位の貴族の名前ぐらいは把握しているわけだが……。
「ううむ……むむむ……」
記憶を探りつつ、女子寮を出る。
部屋でじっくり思い出す、などと言うことはしないのだ。頭を動かさなければならない時にミーアが向かう場所は、風呂。あるいは……食堂である。
女子寮を出て、そそくさと、甘い物のところにミーアが向かおうとしたところで……。
「お待ちください。ミーア皇女殿下」
横から呼び止められ、ミーアは静かに視線を向ける。っと、そこに立っていたのは、淡い水色の髪を持つ、一人の少年だった。
深い緑色の瞳に、知的な輝きを湛えた少年は、華麗な仕草で礼をする。

「お初にお目にかかります。帝国の叡智、ミーア皇女殿下。私は、リオネル・ボーカウ・ルシーナ。セントバレーヌに派遣されたルシーナ伯爵家の嫡男でございます」
――ああ、現れましたわね。この子が……。
ミーアは愛想よく笑って、そっとスカートの裾を持ち上げる。
「ご機嫌よう、リオネルさん。ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
「ご機嫌麗しゅう。ミーア皇女殿下。聖女ラフィーナさまの一番のご学友にお会いできたこと、光栄に思います」
そうして、リオネルは朗らかな笑みを浮かべた。

第十七話　リオネルの揺さぶり。ミーア感心す

「聖女ラフィーナさまの一番のご学友とお会いできて光栄でございます。ミーア姫殿下、お噂はかねがね……」

朗らかな笑みを浮かべるリオネル少年。彼は思いのほか賢そうな顔をしていた。それに、どこかラフィーナを思わせるような、そんな美しさがあった。

――いえ、というか、それより後にもっと似ている方がいたような……はて？

と、思いかけるも、すぐに首を振る。

ともかく、このリオネル少年、割と見栄えが良い。

――アベルには劣りますわね。まぁ、シオンにも。あの二人はすっかりたくましく精悍になっておりますから。それにキースウッドさんのような色気もございませんけれど……ふむ、可愛げがある顔をしているから、割と人気を得るかもしれませんわね。

ミーアは冷静に分析し……。

――強力な対抗馬とまでは思いませんけれど、油断は禁物ですわ。

そう結論付ける。

相手はベルよりも年下、どちらかというとパティたちと年齢の近い、子どもだ。けれど、決して気は抜かない。

そう、獅子は、相手が子猫でも決して油断しない。かつてのラフィーナがそうであったように……ラフィーナの獅子の気概を受け継いだミーアは、全力でリオネルと戦うことを決意する。

――とりあえず、こちらのほうだけ情報を知られているというのも癪ですし、ここは反撃しておくべきかしら？

ミーアはニッコリと、獰猛な笑み（ミーア比）を浮かべて言った。

「ふふふ、リオネルさん。わたくしも、ラフィーナさまからあなたのことをお聞きしておりますわよ。セントバレーヌのルシーナ司教

の息子さんでしたわね。純粋ないい子だったと、ラフィーナさまはおっしゃられてましたわ」
こっちだって、お前のことを知ってるぞ！　とアピールしたつもり……だったミーアなのだが……。
「ラフィーナさまが、ぼ……私のことをっ！」
リオネルは、なぜだろう……ぱぁあっと輝く笑みを浮かべた。実に、なんとも子どもっぽい、純粋無垢な笑みだった。
それを見て、ミーア……ピンと来る！
――あら、可愛らしい。この子、もしかして、ラフィーナさまに淡い恋心でも抱いているのかしら？
優れた恋愛脳の持ち主、恋愛熟練者のミーアにとって、純粋な少年の恋心を見抜くことなど、わけないのだ。
――これ、もしかして、ラフィーナさまの特製肖像画とかプレゼントしたら、簡単に懐柔できてしまうんじゃ……？
などと考えていたのだが……。ミーアの視線に気付いたのか、リオネルはハッとした顔で、咳払い。それから、生真面目な顔をして……。
「ところで、ミーア姫殿下に、お願いがございます」
「あら、なにかしら？　わたくしに聞けることであればいいのですけど」
澄まし顔で、余裕たっぷりにミーアは答える。そんなミーアにリオネルは、
「ぜひ、私にセントノエルの生徒会長の座を譲っていただきたいのです」
鋭く切り込んできた。
――あらあら、これは……なんとも、ストレートな物言いですわ。
ミーアはその発言に、ある種の感動すら覚えつつ、口を開く。
「それはまた……何故ですの？　あなたに生徒会長の座を譲れなどと……」
「かつて、ラフィーナさまは、ご友人のミーア姫殿下に生徒会長の

座を譲られた。あの日、正式に選挙を行っていれば、ラフィーナさまは勝っておられた。そうではありませんか？」
一息に言って、リオネルはジッと見つめてきた。それは、決して言い訳を許さないといった態度だった。
「にもかかわらず、ミーア姫殿下は、今、生徒会長をしている。つまり、ラフィーナさまは何かのお考えがあって、ミーア姫殿下に生徒会長の座を預けたということ……ならば、その預けていたものを、ヴェールガにお返しいただきたいのです」
「なるほど。確かに、わたくしはラフィーナさまから、生徒会長の座を譲られた。預けていただいていた……とも考えられますわね。ちなみに、もし、わたくしが、預かり物を返すのを拒んだら、どうなるのかしら？」
「ヴェールガには、ミーア姫殿下が良からぬことをして、ラフィーナさまから生徒会長の座を奪った……と、そのように考える者もおります。そのような者たちの主張に、一定の説得力を与えることになってしまうかもしれません。もちろん、私は、あくまでも、ラフィーナさまは、理由があって預けただけだと信じています。だからこそミーア姫殿下は懸命なご判断のもと、生徒会長の座を明け渡してくださると思っていますが……」
そうして、彼は小さく肩をすくめた。
――つまり、わたくしが生徒会長の座をラフィーナさまから奪ったのではなく、預かっていただけ、と……。そうしておけ……と、そのように言っているわけですわね。逆にそうしないなら、なにか、ラフィーナさまから汚い手で奪ったと主張し、攻撃することも辞さない、と……。
ミーアはリオネル少年の顔を見て、ふむ、と鼻を鳴らした。
――これは意外と、理屈に合ってますわね……。それに、選挙を経ずに譲られたものを、選挙を経ずに返す、というのも筋としては通っていなくもない、か……。
彼とミーアの立場は、かつてのラフィーナとミーアを入れ替えた

ものだ。ゆえに、ミーアが譲ることに、それほどの違和感もなく……。
要するに、目の前の少年は、自分ではミーアに太刀打ちできないと認めたうえで、戦略を練ってきたというわけだ。
そうして、ミーアは感嘆のため息を吐く。
――この子……頭がいいですわ！　パティには及ばないでしょうけれど、ベルなどは簡単に手玉に取られてしまいそうですわ。いや……ベルが手玉に取られない人というのもあまり想像しがたくはありますけれど……あの子、もっとしっかりしないと危ないんじゃないかしら……？
なぁんて、孫娘のことを心配するミーアである。
「どうでしょうか？　ラフィーナさまが、ミーア姫殿下に預けていたものを、素直にお返しいただくことで、我が祖国、ヴェールガの疑惑も払拭できるというものだと思いますが」
判断を急かすように、一歩前に出るリオネルであったが……。
「ヴェールガの疑惑……とは、はたして、幾人の司教、幾人の貴族が抱くもののことだろうか？」
不意に、穏やかで……けれど、侵しがたい強さを持った声が響いた。
振り返れば、そこにはアベルが立っていた。
「すまない、ミーア。少し話が聞こえてしまってね。つい、気になってしまったんだ」
それから、アベルはリオネルのほうを見つめる。
「もし、そのような疑念が本当に生じているならば由々しきこと。ミーア自身が行って弁明する必要もあるかもしれないと思ってね。はたして、その疑惑はどれぐらい大きなものなのだろうか？」
アベルの問いに、リオネルは小さく首を振った。
「あいにくと、神ならぬこの身では、人の心の中のことはわかりかねます。しかし、そのような疑惑は、生まれてもおかしくない状況にある……と、そのことをお考えいただきたかったのです」

それから、リオネルは分が悪いと判断したのか、もう一度、ミーアのほうを見て、
「どうか、ご懸命な判断をなさいますように」
それだけ言い残して、去って行った。

第十八話　新司教帝、出現す。その名は……

「ふぅむ、なるほど……あれが、リオネル・ボーカウ・ルシーナ。わたくしの選挙の相手、ということですわね」
歩き去る少年の背中を見ながら、ミーアは小さく唸った。
「まだ幼いのに、なかなかに利発そうな少年ですわね」
きちんと頭を使い、勝ちに来ているところが、少なからず警戒に値するのかもしれないが……。
「正直、ボクが言うまでもないことだとは思うけど、あまり気にしないほうがいいと思うよ」
少しだけ心配そうなアベルに、ミーアは小さく頷いた。
「そうですわね。こう言ってはどうかと思いますけれど、ヴェールガのことは、ヴェールガに……ラフィーナさまにお任せしたいですわ」
ミーアに選挙で勝て、と言ってくれたのは他ならぬラフィーナである。ミーア的には確かに、ヴェールガの中央正教会やその司教たちが、今回の選挙をどう思っているのか気にならないわけではなかったが、その辺りのことは、ラフィーナに委ねてしまいたいところである。
「それに、選挙の結果は、神聖不可侵な神意……とも言いますし、いかに思うところがあったとしても、過去の選挙結果に文句はつけてこないはずですわ」
そう思いつつも一抹の不安を覚えるミーアであったが……。その気持ちが、具体的な形になって現れたのは……その日の夜のことであった。

その日の夜……。
夕食を食べ終えたミーアは、お風呂にのんびーり浸かっていた。

たまたま、お風呂に浸かりに来たオウラニアと、ポヤァのポテンシャルと将来性についてひとしきり議論を戦わせた後、部屋に戻る。
冷たいお水を片手に、アンヌにパティを交えた陣容で恋愛小説の未来について議論を深めていたところで……。
「たったた、大変です、ミーアお祖母さま！」
ベッドの上でゴーロゴロしつつ、なにかを読んでいたベルが悲鳴を上げた。
「あら、ベル……。ふふふ、ひさしぶりですわね、お祖母さま呼びされるのは。どうかしましたの？」
「そ、それが……司教帝が復活して、ボクが生まれないことになってしまいました」
「……ほう」
ミーアは、小さく頷いた。
「なるほど。司教帝が再び復活……そういうこともあるかもしれませんわね」
ベルの言葉を聞いたミーアには、けれど、そこまでの焦りはなかった。
「つまり、今度の選挙で負けると、ラフィーナさまが司教帝になってしまう可能性が生じる、と……」
それほどに、ラフィーナの怒りは深かったのだろう。
「ならば、なおのこと、負けるわけにはいきませんわね。まぁ、安心して大丈夫ですわ、ベル。今度の選挙は万全の態勢を整えますし。あなたが生まれないなどと言うことには、決していたしませ……ん？」
っと、ミーアはそこで首を傾げた。
ベルが片手を挙げて、小さく首を振っていたためだ。
「あら、どうかしましたの？」
「そうではありません、ミーアお祖母さま。司教帝になるのは、ラフィーナ大おば……さまではないんです」
「……はて？」

きょっとーんと首を傾げるミーアに、ベルは、いっそ厳かとも言えるような口調で言った。
「それに、選挙に負けると……でもないんです。逆です」
「……えーと、つまり、それは……？」
「ミーアお祖母さまが、選挙で勝って生徒会長になってしまうと、司教帝が出現して、ボクが生まれなくなってしまうんです！」
そこまで聞いた時、ミーアは、静かに体を起こす。顎に手を当てて立ち上がりつつ……。
「アンヌ、申し訳ないのだけど、なにか飲み物を持ってきていただけないかしら？　それと、パティ、今夜はヤナたちのお部屋で……」
っと、言いかけたところで、パティが小さく首を振る。
「私も、ここにいます……。子孫の危機を、放ってはおけないから……」
静かに見つめてくるパティに頷き返してから、ミーアはアンヌのほうに目を向けた。
「アンヌ、それでは、お願いいたしますわ。飲み物を、わたくしとベル、それにパティとアンヌの四人分用意してきて」
「わかりました！」
そうして、アンヌは部屋を出て……、しばらくして五人分の飲み物とともに戻ってきた。
部屋にはミーアとベル、パティとアンヌ……とシュトリナが揃っていた。
……シュトリナが、何食わぬ顔で、ベッドに座っていた！
「……リーナさん、ええと、なぜ、ここに？」
「ベルちゃんのピンチだと聞いて来ました」
「……そう」
どこで聞きつけたんだよ？　とか、いつの間に部屋に来たんだよ？　などと疑問は尽きないが、
――まぁ、リーナさんはベルの一番のお友だちですし、そのぐらいのことは、やるかしら……？

などと、無理に納得するミーアである。というか、それどころではないので……ツッコミは置いておいて。
「ええと……それで？　なにがどうなったのか、詳しく話してほしいですわ」
「はい。でも、実は、ボクにもなにがなんだかわからないところがあって……。順を追ってお話ししますが、まず今回の司教帝はラフィーナさまではありません。今度の司教帝は、ルシーナ司教のお子さまで……」
それを聞いて、ミーアは思わずと言った様子で頭を抱えた。
「ああ……。あの、リオネルさん……でしたかしら？　あの少年が、司教帝になってしまうと……？」
まぁ、確かに……それなら、選挙で勝ってはいけないというのも納得できてしまうミーアである。
「つまり、叩きのめされたあの方が、歪んで司教帝になってしまうということかしら？」
その問いに、けれど、再度、ベルは首を振る。
「いいえ……ルードヴィッヒ先生の日記帳に書かれていたのは、そのリオネルという方ではありません」
「……え？　それはどういう……」
「司教帝は女性で、名前はレア。レア・ボーカウ・ルシーナって、書かれてました！」
意外な名前の出現。ミーアは……、アンヌが持ってきてくれたジュースにそっと手を伸ばし、ごくごくごくっとそれを飲み干してから……。
「……はぇ？」
困惑の声を漏らすのだった。

第十九話　風呂の伝道師ミーア、動く！

新入生歓迎ダンスパーティー。
それはセントノエルにおいて、入学式の次に行われている大きなイベントである。
教会歴に従った儀礼的なものというわけではなく、どちらかというと、それは貴族の社交文化に根差した行事だった。
各国の王侯貴族の子女たちが仲を深める場所として、また、将来、社交界にデビューする時に困らないよう、その訓練する場所として、とても大切なイベントだった。
そして、ミーアはその前に、一つ別のイベントを付け加えることにした。
そう、みんなでお風呂に入る会……である。
大陸の貴族の中では、意外と風呂に親しみのない者が多い。お湯を沸かすのは手間であるし、さして体が汚れるようなことをするわけでもなし。水が豊富にあるヴェールガなどを除いて、風呂文化の浸透率は、実はそれほど高くはない。
その状況が、ミーア的には……ちょっぴり気に食わないのだ。
――外国に行った時にも、お風呂、入りたいですわ。
風呂好きミーアは、旅の最中でも、できればあつぅいお湯に浸かりたいのだ。
帝都っ子のミーアは「ちょっぴり熱すぎないか？」というぐらいのお湯に浸かって「おふぅ！」などと、ちょっぴり小粋な吐息を吐きたいのだ。
おもてなしの文化として、ぜひ、風呂を定着させたいと心から願うミーアである。
そんなわけで、ミーアは新入生歓迎ダンスパーティーの前に、お風呂会を開くことにしたのだ。

ちなみに、強制ではなく自由参加だったのだが、当日、共同浴場はかなりの盛況を誇っていた。
理由はとても簡単で、ダンスパーティーの生ける伝説、ミーアが呼びかけ人だったためだ。
入学早々に、月の女神のごとき美しさと、浮かび上がらんばかりの素晴らしいダンス（一説には本当に浮いていたとする者も……）を披露したミーアのことは、学園内でも有名な話であった。
そんなミーアが「美容のために、ダンスパーティー前にはお風呂が最適ですわ！」などと言い、おススメの入浴剤まで紹介しようというのだ。
興味を持つ者は決して少なくなかった。それは良いのだが……。
「ふぅむ……。さすがに、三回もお風呂に入っては、のぼせてしまいますわね」
参加人数が多すぎたため、一度では入りきれず、三交代制とせざるを得なかった。
風呂好きミーアとしては、新入生と親睦を深めるためにも、みなと一緒に入りたかったのだが、さすがに続けて三回はきつい。
ということで、第一グループと第三グループと一緒にお風呂に入ることにしたのだ。
――まぁ、第二グループには、クロエやティオーナさんも対応にあたってくれているはずですし、大丈夫なはずですわ。
ということで、一度、バスローブに着替え、脱衣所で、アンヌが持ってきた冷たい果実水を、ぐぐいっとあおっていると……。
「おや……？」
視界の外れに、ミーアは見つける。
ミーアが今、最も関心を払うべき人物、リオネル……の双子の妹、レア・ボーカウ・ルシーナの姿を。
「こんにちは、レアさん。あなたも、参加してくださったんですわね」
愛想よく微笑みつつ、ミーアは話しかける。

「あっ、こっ、ミーア姫殿下。ご、ご機嫌麗しゅう……」
制服を脱ぐ途中だったレアは、大慌てで頭を下げる。
「あなたもお風呂会に参加してくださったのですのね。嬉しいですわ」
「は、はい。えと、私は、お風呂好きなので……」
「ヴェールガは、お風呂文化が浸透してますものね。ふふふ、では、わたくしも、ご一緒しようかしら……」
「うえ？　あ、いえ、あの、その……そんな、帝国の叡智が私に付き合うだなんて、恐れ多い」
「ふふふ。そんなに気にする必要はありませんわ。ほら、言うではありませんか？　一糸をもまとわぬ風呂場では、皇女も伯爵令嬢も、貴族も民もない、と」
そうして笑みを浮かべつつも、ミーアは考える。
――しかし、とてもではありませんけど、司教帝になるようには見えませんわね。いったい、なにがどうなるのやら……。
あの日の夜、ベルははっきりと言ったのだ。
「司教帝になるのは、レア・ボーカウ・ルシーナさん。リオネルさんの双子の妹です」
と。
選挙で打ちのめされて傷心のリオネルが司教帝になるのでは？
と予想していたミーアは、文字通り度肝を抜かれた。
――なにがどうしてそうなるのか、因果関係がまったくわかりませんけれど……でも。
ミーアは信じている……。
孫娘の言葉は信じられなくっても。
自分の判断力も信じられなくっても。
忠臣ルードヴィッヒの書いた日記帳だけは……彼の、あの、権威の象徴たる眼鏡を通して得られた情報だけは、ミーアは信じるようにしているのだ。
ゆえに……。

――そうは見えずとも、この方は司教帝になる。どのような経緯かはわからずとも、そのことだけは確実。であるならば、なぜそうなるのか、事情を探ることこそが肝要ですわ。

ということで、ミーアは風呂の中で情報収集にあたることにしたのだ。

「ところで、あなた、ルシーナ司教の娘さんでしたのね」

汗を流し、身を清め、浴槽に身を沈めたレアに話しかける。

「へ……？　あ、はい。あの、司教の娘というよりも、その、伯爵令嬢と名乗ったほうが、通じるかと思いまして……」

「なるほど……そうなんですのね」

っと頷きつつ、ミーアは思う。

――怪しいですわね。その割に家名を言わなかったですし……。

ミーアの中では、レアはすでに、司教帝になる存在と確定している。

つまり、それなりの能力を持っている者として扱うことに、ミーアは決めているのだ。その前提で考えるに……。

――あえて家名まで名乗らなかった。あえて司教の娘であることを隠した。そう考えたほうがよさそうですわね。

司教帝という存在が善か悪か、自分にとっての味方か敵か、今のところはなんとも言えない。が、少なくとも、この少女はそれなりに頭の回る人物である……という前提で、ミーアはレアを見ていた。

「あの……？　なにか？」

不思議そうに見つめてくるレア。そのどこまでが演技なのか……などと考えつつも。

「いえ……。なんでもありませんわ。さ、お風呂を楽しみましょう」

そうして、ミーアは優しい笑みを浮かべるのであった。

第二十話　風呂探偵ミーア、考察を進める

――ふぅむ、しかし、このレアさんという方は、あまり貴族の令嬢らしくありませんわね。

ミーアはチラチラとレアのほうを見ながら、分析する。

ミーアも他人のことは言えないが、普通、大貴族の令嬢というものは、仮に風呂に入ることがあったとしても、自分の体は自分で洗わないものだ。

セントノエルには、一緒に連れてこれる従者の数が一人なこともあって、浴室の中では自分のことは自分でやる習慣はつくだろうが、それでも入学したての頃はみな戸惑うものなのだ。それなのに……。

――やけに一人ですることに手慣れていますわ。ヴェールガの方はみなそうなのかしら？

「あの……なにか？」

浴槽に浸かっていたレアが、チラッと居心地悪そうに目を向けてくる。

「ああ、いえ。お風呂、よく入るんですの？」

「え？　あ、そう……ですね」

レアは小さく首を傾げてから、

「比べるのも失礼な話なのですが、ラフィーナさまのように私も儀式の手伝いで色々な村に行くことはあります。そして、儀式の前には身を清めることもあるので」

「ああ。なるほど。司教の娘として身についていると……」

「はい。水で洗い清めるのは、罪を洗い清めることを表す、象徴的な動作ですから」

そうして、穏やかに笑う顔は、素朴で、純粋そのものだった。

――ふむ、どちらかというと、レアさんの中では、自分は司教の娘という意識が強いような感じがしますわね……。伯爵『令嬢』と

名乗ったのは、自分は令嬢だ、と意識的に思おうとしていたからかしら？　それとも、やはり、司教の娘だと隠そうという意識が強かったからか……。
ミーアは頷きつつも、笑みを浮かべる。
「幼い頃から司教の子として教育されてきたんですのね。ちなみに、お兄さまのリオネルさんも同じ感じですの？　お二人は双子の兄妹とお聞きしておりますけど……」
「……あ、ええと、はい。そう、ですね」
遠慮がちに頷くレアを見ながら、ミーアは思わず考える。
将来、帝国とヴェールガとの間に緊張関係が生まれること、それ自体は理解できなくもない。
ミーアは大飢饉に備え、各地の勢力をまとめていった。ミーア自身のしたことではないにしろ、ミーアネットなる代物は、それこそ、国を超えた組織だ。望まざることながら、その顔であるミーアの権威は、今や大陸有数といっても過言ではないのだ。実情はどうあれ……。
そして、そんなミーアの振る舞いは、見方によっては、大飢饉に乗じて自らの権力を伸ばした、と見ることもできるだろう。
――我が国は、信用があまりございませんし……。
なにしろ、肥沃なる三日月地帯を侵略し、その地の住人を農奴に堕として国を建てたのがティアムーン帝国なわけで……。
悪名高い迷惑者（ミーアの中で）初代皇帝の子孫たるミーアにも、そのような疑いの目が向くことは、ミーアとしては納得できるところではある。
だから、ミーアに権力が集中しすぎることを嫌ったヴェールガ公国というのは理解できる。サンクランドの保守派貴族の中にも、そのような態度をとる者たちはいた。
リオネルも、そのようなロジックを用いていたし、一定数それに納得を示す者は、実際にルシーナ司教の周りにもいるのだろう。が……。

――問題は『司教帝』としてその方たちを煽動したのが、このレアさんであるということですわ。これは解せないですわね。
ちなみに、ラフィーナはレアの蠢動により、国を追われて帝国に落ち延びてくる……らしい。騎馬王国のほうでも良かったらしいのだが、なぜか、帝国のほうに夫と共に落ち延びてきたとか……。
――まぁ、国を追われたラフィーナさまが、わたくしを頼り、帝国に居つくようになったというのは……理解できない話ではありませんけれど……。
なんとなく、沈鬱な面持ちながらも、すこぅしだけソワソワ嬉しそうな様子のラフィーナが想像できる。が……。
――レアさんが、そこに関与したというのが、どうにも解せませんわ。それに、そのためにベルの両親が出会う機会が失われたというのも問題ですわ。
もっとも、ベルが誕生しない未来はベルが情報を共有した時点で、消滅。未来の世界では再び、ベルが生まれることになっているらしい。
要するに、ベルが生まれなくなるというのは、そこまで確定的なことではなかったのだ。

「ボクのお母さまとお父さまはセントノエルで出会い、恋を育んできたって聞いたことがあります」
ベルは偉そうに指を振り振り、説明してくれた。
「ボクのお母さまは、第三皇女パトリシャンヌと言って……、生まれとしては五番目、だったかな……？」
小さく首を傾げるベルだったが、ミーアは、その名前の付け方が気になった。
――パトリ……シャンヌ……。パトリシアお祖母さまと、アンヌを足した感じかしら……。名前の付け方が、実になんとも……安直な感じがいたしますけれど……。実に、わたくしらしいですわ。
すでに、ベルの名づけという前科があるため、ミーアは未来の自

分のネーミングセンスに期待していないのだ。
「ええと、それはともかく、そのパトリシャンヌ母さまは、さる貴族のご令息と恋に落ちるのですが……それが、セントノエル学園でのことだったんです。お母さま、セントノエルでの運命の出会いに憧れてて……」
　それから、ベルはミーアのほうを見て。
「ミーアお祖母さまとアベルお祖父さまの学園での恋愛は、帝室では有名で。みんな憧れてるんです」
「まぁ、そうなんですの？　誰が、そんな話を……ああ、あれですわね？　アンヌから話を聞いたエリスが皇女伝にでも……」
「いえ、ミーアお祖母さまが事あるごとに、詳細に自慢していたとお聞きしています」
「……なるほど。ヴェールガとの関係が悪化したために、パトリシャンヌがセントノエルに通えなくなる……っと。そういうことですわね？」
　ちなみに、ベルが最初に生まれた時間軸において、帝国が内戦状態に入るのは、ミーアが暗殺された後のこと。パトリシャンヌ姫がセントノエルで夫となる男性と出会えたとしても、不思議はない。さらに、日記帳によれば、ヴェールガとの緊張関係を和らげるべく、ベルの母と公国貴族との間で婚儀を結ばせるという可能性もあったらしいが……。これも、ベルの母が誰なのか、ミーアたちが知ってしまった時点で、実現する可能性は潰えたといえるだろう。
　というか、場合によっては、過激派（シュトリナ）が暗殺とか言い出す可能性があるので、もし、家臣団からそんな提案があった場合には即刻握りつぶす必要が出てきたわけで。
　――まぁ、ベルが生まれるのは、あくまでも最低限。問題はその先ですわ……。
　対症療法的にベルが生まれればいいだけならば、どうとでもできる。けれど、ヴェールガとの関係の悪化は、決して望ましいことではない。

――ベルが生まれなくなる……その可能性の源流こそが、今度の選挙。ルードヴィッヒは、そのように見ているというわけですわね……。

そこまで考えて、ミーアは改めてレアのほうに目を向ける。

レアは、

「あ、あの……？」

などと、居心地悪そうに、姿勢を正すのだった。

第二十一話　ミーア姫、冴えわたる（ひさびさに……）

さて、風呂から上がり、脱衣所で髪を乾かしている時のことだった。

「ところで、レアさん、ダンスパートナーは、どなたにするおつもりですの？」

会話のきっかけを求めて、ミーアは話題を振ってみた。

「え……？」

「ほら、新入生歓迎ダンスパーティーですわ。どなたかからお誘いを受けているのではなくって？」

見たところ、レアは、なかなか可愛らしい容姿をしている。それに、なにより、ヴェールガ公国の司教の娘である。誰かから声をかけられていても不思議はないかと思ったのだが……。

「え……ええ？　い、いえ、その……そんな、相手なんて、私、いなくて……あの」

ぶんぶん、っと首を振りつつ、頬を赤らめるレア。そんな彼女を見ながら、ミーアは少しだけおかしくなった。

――ふふふ、これではまるで、かつてのラフィーナさまとわたくしのようですわね。

セントノエルに入りたての頃を思い出す。この大浴場でラフィーナと出会った時のことを……。

――あの時は、ラフィーナさまにダンスパーティーのことを教えていただいたんでしたわね。あれは、助かりましたわ。もしも、あれがなければ、アベルをダンスパートナーにすることもなかったでしょうし……。っというか、下手をするとボッチパーティーを満喫する羽目になるところでしたわ……。

まぁ、さすがに、誰かからは誘われたと思うし、シオンあたりが誘ってきたかもしれないけれど……。っと、思いつつも、脳裏に深

く刻まれていたのは、前時間軸でのボッチパーティーのトラウマだった。
あの、なんともいたたまれない気持ちを思い出しかけて、思わず、ぶるるっと体を震わせるミーアである。
「ミーアさま、大丈夫ですか？　お体が冷えたのでは……」
ミーアの髪を丁寧に拭いていたアンヌが、心配そうに話しかけてきた。
「ああ。いいえ、大丈夫ですわ。アンヌ。なにも問題ありませんわ」
微笑みつつ、ゆっくりと首を振り……。あんなことは二度と起こらない、起こらない！と自分に言い聞かせてから、レアのほうに目を向ける。
――しかし、よもや、ボッチパーティーの傷心が司教帝に繋がる、とも思いませんけれど……。どんなに小さな可能性でも潰しておくに越したことはありませんわ。ダンス会場で、誰かが声をかけてきてくれるだろうとか、きっとあの人は自分に声をかけてきてくれる、などと思い込んでいるとするならば、それは大きな誤りですわ！
そう、ミーアは知っている。“待ち”に徹するのは戦略的に誤りなのだ。きちんと冷静に、はたして自分は、殿方に声をかけられるに足る器なのか……？　と、きっちりと見つめなおさなければいけないわけで……。
――もし、そうでないなら、自分から動かなければなりませんし、そのことをきちんと教えて差し上げたほうがいいのではないかしら？
念のため、とミーアは口を開く。
「パートナーがいないようでしたら、わたくしも探すのを協力いたしますわよ？　ちょうど良い作戦を、いろいろと存じておりますから……」
自分には恋愛軍師もついているし……と、アンヌのほうに目を向ければ、アンヌもふんふん、と頼もしく頷いていた。
……恋愛小説で得た知識を実践してみる機会を探していた二人であった。が……。

「あ、いえ……。たぶん、誰もパートナーがいなければ、リオネル兄さまがなんとかしてくれると思うので……」
レアは、慌てた様子で手を振った。
「あら、お兄さまが、そんなことを？」
「はい。父に、私の面倒を見るように、と言われていたようで、とても気を張っているみたいでしたので……。私は特に何もしなくていいと言われています」
――なるほど。兄妹の仲は悪くない、と……。
話を聞きつつも、ミーアは、再び、おかしくなってしまう。
――しかし、ふふふ、ラフィーナさまも、こんなことを考えながら、わたくしに話しかけたのかしら……？　あの時は、純粋に興味半分で聞かれたのかと思いましたけれど、もしかしたら、わたくしが失敗しないように心配して教えてくれた、とそういうこともあったのかも……。
っと、そんなことを思った……瞬間だった。ミーアは、唐突に、とある感覚を覚える。それは、なにか、予感めいた感覚だった。
ふと見れば、レアだけでなく、たくさんの生徒たちの姿があった。セントノエルの、大陸各国の未来を支える、新入生たちの姿があった。
――この方たちに、わたくしは大切なことを教えることができますわ。ダンスパーティーのこともそう。黄月トマトの教訓や、種蒔きと刈り取りのことも……。でも、わたくしは、あと二年間しか、この学園にはいられない……。
漠然とした問題意識が、ミーアの中に芽生えつつあった。そして、意外なことに、ミーアが感覚的に捉えたものは、意外なことに的を射ていた。意外なことに。
お風呂に入るとミーアの知能は何割増かになるのだ。
お風呂に入るとミーアの知能は何割かマシになるのだ。
「あの、ミーア姫殿下？」
ふと見れば、レアが不思議そうに首を傾げていた。

「え？　あ、ああ……ええ。なんでもありませんわ。おほほほほ」
誤魔化すように笑ってから、ミーアは言った。
「まぁ、パーティーはいろいろな方との交流が主眼。そういう意味で、別にパートナーをお一方にする必要はありませんわ。約束がなくても構いませんしね。それでは、もしも、暇そうでしたら、お声がけしますわね」
「え？　あ、いえ、その、お気遣いには及びませんけど……」
「ふふふ、遠慮は無用ですわ。わたくしは、ラフィーナさまのお友だち。ラフィーナさまの遠い血縁でもあるあなたを気にかけるのは当然のことですわ」
ミーアはニコニコと愛想のよい笑みを浮かべるのであった。

第二十二話　ミーア姫、戦略的撤退を図る

「ふむ、なかなか、良い感じですわね」
パーティー会場を見渡して、ミーアは小さく唸った。
会場内には、華やかな笑顔が溢れていた。
紫色（ちちんでみえるいろ）のドレスに着替えたミーアは、愛敬を振りまきながら、颯爽とホールの中を歩いて回る。初めに向かったのは、無論、料理が並ぶ一角である。
並べられたテーブルの上には、色とりどりの料理が揃っていた。さして特別な感じのしないメニューではあったが……ミーアはそれを見て、思わず感動してしまう。
なぜなら、ミーアは、それが決して当たり前に揃えられた物だとは思わないからだ。
――むしろ、よく、これだけの料理を並べられたものですわ。
本来であれば、今年は、ここまで豪華な料理が出せるはずではなかったのだ。各国ともに食料に余裕がないため、いかにセントノエルのパーティーと言えど、普通に考えれば贅沢はできない。
けれど、だからといって、そこで立ち止まってしまっては進歩がない。今あるもの、手に入るものをもって、できるだけ上質な味を……と。そのような方針のもと、ミーアは、生徒会の食料通、ラーニャに相談することにした。
……ちなみに、新入生を歓迎するための料理で、決して、ミーアが自分で食べたいから、というわけではない。念のため。
「民の生活を圧迫するようなことは厳に避けるべきですけれど、そのうえで、パーティーに華やかさが欲しいと思っておりますの。ペルージャンの知恵をお借りできないかしら？」
「なるほど……。そうですね……」
ラーニャは、少々悩んでから動き出した。

今年の寒波を受けても、なお、影響を受けなかった食材はなにか？
それを使い、パーティー料理が作れないか……？
「三日月南瓜（クレッセ・ムーン・パンプキン）は、ダメージが少ないと聞いています。あれは、ケーキにしてもシチューにしても美味しいはずです。それと、ミーア二号小麦……あれは、全体の小麦供給量の底上げのために必要な物なので、大量に余っているとは言えませんが、その存在を各国に知らしめるうえで使う意味がある、とは言えそうです」
「意義のある使い方、と。確かに、その通りですわ」
そこにさらに、食料調達に加わる者が現れた。
サンテリ・バンドラー、並びに、オウラニア・ペルラ・ガヌドスによって組織された精鋭魚釣り部隊である！
「うふふー、パーティーの時のお料理はー、全部、私たちが釣ってくるので、特におかずは、用意しなくっても大丈夫ですよー」
なぁんて……あれ？　これ釣れないんじゃ？　と不安になることをつぶやきつつ、悠々と出陣していった一団であったが、予想に反し、かなりの釣果を上げたらしい。湖の幸によってテーブルの上は、一層華やかに彩られていた。
「豊富なお魚料理はパーティーに欠かせないものでしたわね。こうして見ると……」
ちなみに……ミーアも食料調達に一役買いたいと、ベル隊長率いる特別初等部（リトルプリンセスガード）の精鋭を動員し、キノコ狩り（もりのたんけん）に出陣しようとしたのだが、寸でのところをキースウッドに止められた。
「全軍の総大将が陣頭指揮に立つなど、言語道断！」
「いえ、しかし……わたくしがなにもしないわけには……総大将が後方にいては士気も上がらないというものではありませんの？」
「無論、そういう側面もないではありませんが……今は、その時ではありません」
「ほう。ならば、いつがその時ですの……？」
「ええと……てっ、帝国に帰られた時……とか、でしょうか？」
目を逸らしつつ、そんなことをつぶやくキースウッドに、

「ふむ、なるほど。確かに帝国のことはともかく、他国のことは、わからないこともなくはないですし……」
「まさに、その通り！　どうぞ、帝国にご帰還の折には、その手腕を存分にお振るいくださいますように」
などと勢い込んで言いつつも……。
「すまないな、サフィアス殿……」
なにやら、遠い目をするキースウッドであった。
そうして、着々と料理は揃って行った。
帝国料理長考案の満月団子に、ペルージャン製のジャムをかけた、コラボレーションデザート。ノエリージュ湖の魚をムニエルしたものに、ヴェールガ茸を乗せた、ミーア姫激推しの絶品料理。ペルージャンのカッティーラに、三日月南瓜（クレッセ・ムーン・パンプキン）のケーキ、イモと干し肉を使ったスープなどなど。
決して例年と見劣りしないパーティー料理が揃っていた。
「甘い物に塩気のある物まで……。ふふふ、これは楽しめそうですわ。やはり、新入生ダンスパーティー、最高ですわね！」
煌びやかな料理群を前に、ミーアは嬉しそうに舌なめずりする。
――ところで、お忘れかもしれないが、実は、ミーアはダンスが得意である。これに関しては勘違いや誇張なく（上手すぎて、体が浮いているなどと言う与太話を信じないのであれば、であるが）事実である。
一度でも踊って見せれば、周りの者たちすべての視線をかっさらえるほどに、そのダンスの腕前は巧みなものだ。
けれど、今日に限っては、ミーアはそれを披露するつもりがなかった。なぜなら、ミーアは今日の主役が自分たちではないことをしっかり心得ているからだ。
慎み深いミーアは、だから、今日はあまりダンスをするつもりはない。
自分の、生徒会長としての職責を全うすべく……食べ物をもって新入生を歓迎するという自らの食責を全うすべく、料理関係への配

慮を徹底しようと思う所存である。
っということで、ミーアはとりあえず、端から端まで味見をして……などと、なぁんとも悪いことを考えていると……。
「ご機嫌麗しゅう。ミーア姫殿下……」
その声に、ミーアはびっくーん！　と飛び上がった。振り返ると、そこには……。
「あ、あら、タチアナさん……ご機嫌よう。おほほ」
「ご機嫌麗しゅう。ミーア姫殿下」
ちょこんとスカートの裾を持ち上げて、少女、タチアナは笑みを浮かべた。彼女のそばには、まるで騎士のごとく、彼女を守る、数名の男子生徒がついていた。
――この方たちも、相変わらず、タチアナさんを守っておられるのですわね。うーむ、律義ですわ……。
などと思いつつ、ミーアはその少年たちにも声をかけた。
タチアナと話しをすると、うっかりボロが出そうという気がしたからではあるのだが、もう一つ気になっていることがあったためだ。
「あなたたちもご機嫌よう。ミラナダ王国の状況は、いかがかしら？」
そう、ミーアは、これが気になっていたからだ。
タチアナや、彼女をいじめていた男子たちの出身国は、ミラナダ王国という小国だ。
ヴェールガ公国から見て南南東、レムノ王国から見れば南南西にあるミラナダ王国は、かつて、港湾都市セントバレーヌの利権をめぐり、周辺国と小競り合いを繰り返していた国であった。
そして、セントバレーヌと言えば、クロエの父のフォークロード商会やシャローク・コーンローグの商会が海外貿易を営む拠点でもある。
その輸送ルートのいくつかがミラナダ王国を掠めている関係上、政情は気になるところであった。
――フォークロード商会にお友だち価格で運んでいただいている

小麦は貴重な物。もしも、ミラナダ王国領内が荒れて、輸送が乱れでもしたら一大事ですわ。混沌の蛇辺りにも狙われやすい場所でしょうし……。
話しつつミーアは、満月団子Ｗｉｔｈペルージャンベリーのジャムを口に運ぶ。
モチモチした食感に加え、ペルージャンベリーのプチプチ感が、なんとも言えずに美味しかった。
「ミラナダ王国でも状況は変わりません。不作による食料不足は各地で起きているようです。ただ幸いにも、我が国の近くにはセントバレーヌがありますから、なんとか、そのおかげで持ちこたえられています。海の幸も、海外からの貿易品も入ってきますから」
「そう……。やはり、海の近くというのは強いですわね」
もしも、革命期、帝国が海に面していれば……。あるいは、ガヌドス港湾国の協力を得られていれば……力があるうちにガヌドスを押さえておけば……。
あの時代、そう思わなかった者は一人もいない。
「もっとも、そのせいで、いささか不穏な動きもないではないのですが……」
「不穏な動き……ですの？」
眉を潜めるミーアに、慌てた様子で首を振り、
「いえ、なんでもありません。どうか、お気になさらず」
「ふむ……そうですの？　まぁ、なにか困ったことがあれば、いつでも言っていただきたいですわ。ああ、それと、あなたたちも、積極的に新入生のダンスパートナーを務めてあげてくださいませね」
そう言って、ミーアはさらに、テーブルの上のカッティーラＷｉｔｈペルージャンベリーのジャム、に手を出そうとして……。
「ミーアさま……」
そこで、タチアナから待ったがかかる！
タチアナは少しばかり眉を顰めつつ……。
「まさかとは思うのですが、それ、全部食べようとか、思ってませ

んよね？」
「……はて？　何のことかしら……？　このテーブルの上のお料理を一人で全部食べてしまうだなんて……さすがの、わたくしも、そこまでの食欲は……」
「一つ一つの量は少なくとも、すべてを食べればかなりの量になりますよ」
ミーアの誤魔化しなど一顧だにせず、タチアナは指を立ててお説教してから、
「ほどほどになさってくださいね」
「え、ええ。おほほ、それはもちろん、ほどほどにしますわ。おほほほ」
などと、笑って誤魔化しつつ、そそくさとその場を離れるミーア。
ミーアは戦術の基本を心得ている。勝ち目のない戦いは、早々に退却するのが、最も被害が少ないのだ。

第二十三話　兄の視線

タチアナの前から速やかに撤退したミーアは、特別初等部の子どもたちに囲まれたアベルの姿を発見する。

「あら、特別初等部の子どもたちの面倒を見てくれていましたのね」

優しい笑みを浮かべ、子どもたちの面倒を見ているアベルに……ミーアは自らの将来の光景を幻視する。

――あんなふうに、子どもたちと遊んであげるアベル。そして、わたくしが作った馬形サンドイッチをみんなで食べる……なんか……いいですわね！

思わずグッと来てしまうミーアである。

そそくさと一団に歩み寄り、声をかける。

「ご機嫌よう、アベル。みんなも、楽しんでるかしら？」

ミーアに気づいた子どもたちが、笑みを浮かべて、各々の手に持ったお皿を見せた。

どうやら、子どもたちはミーアの同類のようだった。あるいは、ミーア先生の教育が……生き様が……！　子どもたちに浸透している証拠かもしれないが。

「ふむ。確かに、今回のパーティーでは、食べ物に力を入れておりますけれど……。駄目ですわよ？　食べてばかりでは。ダンスパーティーなのですから、ダンスも頑張らないとね」

アベルの引率で、気兼ねなくケーキを頬張る子どもたちに、ちょっぴーり嫉妬しつつ、ミーアは言った。

「確か、ユリウス先生からダンスも教わっているはずではなかったかしら？」

特別初等部の子どもたちは別に貴族というわけではない。だから、こういったパーティーに出る必要は本来ない。けれど、彼らが将来、国の官吏になる場合には、もしかしたら、このような場に出る必要

が生じるかもしれない。
　そんな先々を見据えて、少しでも場の雰囲気に慣れておいてもらいたい、との願いから、こうして参加してもらっているわけだが……。
「さすがに、王侯貴族の子弟とダンス、というのは、気持ち的に難しいみたいでね」
　横から、アベルがこっそり教えてくれる。
「なるほど。まぁ、緊張するな、というのも難しいですわね。確かに……」
　この一年間で、在校生とは徐々に打ち解けてきた子どもたちであったが、新入生も交じえてとなると話が違う。孤児院出身の子どもたちに差別的な目を向ける者たちも少なくはないのだ。
「ふむ……ならば、どうかしら、アベル。ここは一つ、わたくしとあなたとで、この子たちをサポートしてあげるというのは」
　ミーアは、悪戯っぽい笑みを浮かべる。それを見て、アベルもニヤリと笑った。
「ふふふ、いいだろう。ボクも随分と君に鍛えられたからね。そろそろ、それを誰かに返してあげたいと思っていたんだ」
　それから、アベルは近くにいたパティの前に出て。
「それでは、パティ嬢、ボクと一曲、お付き合いいただけますか？」
　胸に手を当てて礼をするアベル。パティは一瞬、許可を取るようにミーアのほうを見てから、そっとドレスのスカートの裾を持ち上げ、
「よろしくお願いします」
　完璧な礼を返した。
　――ふむ、さすがはアベル。あの中ではパティが一番、ダンスの心得があるはず……。初めに上手い子と組んで、ほかの子も踊りやすい雰囲気を作ろうというわけですわね。それに、ダンスをするまでの流れを、ほかの子たちに見せるという意味もありそうですわね。
　そんなことを考えながら、ミーアは男子生徒のほうに目を向けた。

特別初等部の男子は三人。キリルと、以前、ヤナに盗みを持ち掛けたやんちゃなカロン、それに、ミーアが、かつて「ミニクソメガネ」と称した眼鏡の少年、ローロだった。
その中で、ミーアは、
「では、ローロ。あなたを栄えあるわたくしの、ダンスパートナーに指名いたしますわ」
「……え？　ぼ、僕、ですか？」
以前、ミーアに反抗的な態度をとったからだろうか。ローロはびっくりした視線をミーアに向けてくるが。
「ええ。さ、行きますわよ」
ミーアは穏やかな笑みを浮かべ、ローロの手を取った。
正直、誰でもいいといえば、誰でも良かったのだが……。
――キリルを選べば、ひいきしていると思われるでしょうし。あのカロンという子は、運動が得意っぽいので、わたくしがリードして、上手く躍らせてあげたら、すごく目立ってしまうかもしれませんわ。そうしたら、このローロの劣等感に繋がる危険性もありますし……。
お忘れかもしれないが、接待ダンスの名手たるミーアは、ダンスに関しても、ダンスに関しては……ダンスに関してだけは、本気で頼りになるお姉さんなのである。
そうして、戸惑うローロの手を引いて、ホールの中心に向かっていると、パティの手を取ったアベルが少しだけ近づいてきて。
「あら？　アベル、どうかなさいまして？」
「いや、なんというか……やっぱり、君が自分以外の人とダンスをしているのは、少し妬けるなと、思ってね」
「まっ！　ふふふ、それならば、後で存分にお付き合いいたしますわ。しっかり、体力を残しておいてくださいませね」
ニッコリと、小悪魔めいた笑みを浮かべるミーアであった。
なにしろ、ミーアは、しっかりと運動しなければならないのだ。
そうすれば、タチアナだって何も言わずに食べさせてくれるはず

だから……。今日のパーティーを、食的に楽しむためには、頑張らねばならないのだ。
「さっ、たっぷり踊りますわよ？」
ミーアは、ローロに小さくウインクして見せた。

さて、子どもたちに、一通りダンスを教示した後、ジュースとケーキにてエネルギーを補充。その後、会場内を歩き回ったミーアは、ようやく目的の人物を見つけた。
リオネルとレアの兄妹は、会場の一角、新入生たちに混じって談笑していた。
いや、よく見れば、談笑しているのは兄のほうばかりで、その一歩後ろに下がったレアが、控えめな笑みを浮かべている……そのような立ち位置だった。
「ふぅむ……まぁ、一人でポツンとしているよりはマシなのかもしれませんけれど……、うん？　一人で、ポツンと……？　う、頭が……」
一瞬、なにやら、記憶の彼方にポーンッと追いやっていた、忌まわしき記憶が甦りかけるも……。
「え、ええ、まぁ、それはともかく……。しかし、あれでは、パーティーに参加している、とは言えませんわね。ふむ……」
頷きつつ、ミーアは二人に歩み寄る。
「ご機嫌よう、お二人とも」
「これは、ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下」
まるで、姫君を守る騎士のごとく、一歩前に出るリオネル。白いシャツと水色のベスト、シュッとしたズボンを身に着けた彼は、堂々たる様子でミーアに応対する。どうやら、こうしたパーティーにも慣れているようだ。
対して、レアのほうも、綺麗な水色のドレスを身に着けているが、こちらはいまいち、着慣れていない様子。緊張が伺えた。
「レアさん、パーティー、楽しんでいるかしら？」

「あ……はい。ええと、素敵な、パーティーですね」
遠慮がちに笑みを浮かべるレア。けれど、未だに誰かと踊ったという様子はなく、また、誘われたとしても、遠慮してしまいそうな雰囲気……。
ミーア、そこで刹那の判断！
――レアさんのようなタイプは、むしろ、小さな男の子とかが相手のほうが、いいのではないかしら？
それから、ミーアは先ほどまで一緒にいた子どもたちのことを思い出して……。
「ねぇ、レアさん。あちらで、アベルが特別初等部の子どもたちの相手をしているのですけど……。もしよろしければ、お手伝いいただけないかしら？」
「え……？」
「ご存じかはわかりませんけれど、特別初等部というのは、各地の孤児院から子どもたちを集めて、学生として受け入れたクラスですの。今後のことを考えるとダンスができたほうが良いと思うのですけど、まだまだ慣れないみたいで……」
「孤児院の……」
小さくつぶやき、それから、レアは許可を求めるようにリオネルのほうに目をやりかけるが……、
「お願いいたしますわ。レアさん」
「は、はい！」
ミーアのさらなる言葉に、背中を押されるようにして、レアは子どもたちのほうへと歩き始めた。
「やれやれ……」
そんなレアの背中を見て、リオネルは小さくため息を吐いた。
「ミーア姫殿下、あまり、妹のことで余計なことをしないでいただきたいですね」
「あら……余計なことだったかしら？」
「ええ。ここで、私のそばにいれば、良き出会いまで導けたかもし

れないのに……」
「良き出会い……？　はて……」
首を傾げるミーアに、リオネルは苦々しい顔で言った。
「妹は、いずれ、我がルシーナの家を出て行くことになる。どこかの貴族と縁談を結ぶことになるでしょう。そのために、このような、貴族の交流に少しでも慣れさせておきたいと思っていたのです。もう少しすれば、誰か良きダンスパートナーと引き合わせて、と思っていたのですよ」
その物言いが、ミーアには、少しだけ気になった。
それは、ダンスパーティーの主旨とも沿ったものだし、特に気にすべきことでもないのかもしれないが……。なぜだか、引っかかったのだ。
「ちなみに、ヴェールガ公国では、女性は司教にはなれませんの？
確か司教は、完全な世襲ではないにしろ、血筋が多少は影響すると聞いておりますけれど……」
「そうですね。将来的に、私は伯爵家と司教を継ぐつもりでいます」
リオネルは深々と頷いて、
「しかし、妹はそうではありません。神聖な儀式の司式というのは重圧がかかるのです。妹に、ラフィーナさまのような振る舞いができるとは、残念ながら思えません」
「そうかしら……？　ラフィーナさまも、あれで結構、苦労されていたようですけど……」
ミーアは、まがりなりにも、ラフィーナの苦悩を知る者である。彼女が、少なくとも、当たり前のように聖女としての職務を全うしていたとはとても思えないのだが……。
「人には、分というものがあるのです。神に仕えるというのは、レアにとって非常な重荷になるでしょう。どこか……苦労が少ない地域の、優しい貴族の殿方と婚儀を結ぶこと。子を為し、良き家庭を築き、ほどほどに貴族社会との関係を続けていく……そういう生き方が、幸せが……妹には合っているのだと私は思っています」

その瞬間、ミーアは思った。
――ああ、こういうお兄さまが、わたくしもほしかったですわ！
重責から遠ざかり、貴族社会とも程よい関係？　暖かく幸せな家庭で、何不自由なく暮らす？　なんだ、その天国のような環境は！
ミーアの中で、リオネルに対する評価がワンランク上がりかけた。けれど……、次の瞬間、脳裏に浴槽でのレアの様子が思い浮かんでいた。
「レアが伯爵令嬢として、良き伴侶と結ばれる。それを私も、父も望んでいます」
「ですけれど、レアさんは、いろいろとお父さまの儀式のお手伝いをしているとお聞きしておりますけれど……」
「担う責任の大きさがまるで違いますので」
リオネルは小さく首を振ってから、
「自らの力を上回る責任を負わされるのは、不幸なことではありませんか？」
その言葉に、ミーアはレアのほうに目を向けた。
少し離れた場所、子どもたちにダンスを教えているレアは、実に様になっていた。
それが、家庭の中で子を育てる幸せに適した者の姿か、あるいは、力弱き民の子を慈しむ、神に仕える者の姿か……。ミーアには判断がつかなかった。

第二十四話　目覚める、海月馬！

さて、入学にまつわるもろもろの行事が終わると、いよいよ、選挙期間へと突入である。

生徒会室にこもったミーアは、そこで公約の草案を練っていた。のだが……。

「ううむ……ううううむ……」

眉間に皺を寄せ、ミーアは唸る。彼女は、未だに方針を決めかねていた。

――もう、いっそのことリオネルさんに、生徒会長の座を譲ってしまうのがよろしいのではないかしら……？

そんなことすら思ってしまう。

ベルの存在は、すでに明かしてあるのだ。彼女が消えてしまうかもしれない、と言えば、反対はされないだろう。

……ただ、不安もある。レアが司教帝になった、その経緯である。

――ルードヴィッヒの日記帳には、あくまでも、今回の選挙以降、ヴェールガとの緊張関係が大きくなる、という視点の推論が書かれていましたわ。

その緊張の高まりが、司教帝という存在を生み出し、両国の関係がこじれると……そんな具合の推論が書かれていた。

それは一面真理なのだろうが、あくまでも一つの側面でしかない。

――あのレアさんが……司教帝になった経緯は書かれてないのですわよね。リオネルさんではなく、レアさんが司教帝になるというのは、なんとも解せない話ですわ。

ルードヴィッヒの日記帳は極めて強力な情報源だ。けれど、彼も人間。限界はある。

――この時期のセントノエルにルードヴィッヒはおりませんわ。したがって彼は、誰かからのまた聞きで、司教帝レアの出現理由を

推測しなければならなかったわけで。
ミーアは、そこで考えてしまう。
「情報源が、わたくし……？」
まぁ、アンヌほか、何人かから情報を得る可能性はあるだろうが、やはり最重要の情報源として扱われるのはミーアだろう。
自分の与えた情報をもとにルードヴィッヒが組み立てた推理……それは、はたして信用に値するものなのだろうか？
ミーアは思う。それって、すごぅく、信用できなさそうっ！　と。自分自身のことが、いまひとつ信用できないミーアなのである。
「それに、ラフィーナさまのこともございますし……」
ラフィーナから受け継いだ生徒会長である。それを彼女の意に沿わぬ形でリオネルに渡してしまうことは、躊躇われた。
――せっかく、ラフィーナさまが、わたくしを信用してくれた。その信頼に反するようなことは、してはいけない気がしますわ！
それは、なんだか、あまり良い気分はしなさそうだし……それ以上に……っ！
――怒りのあまり、ラフィーナさまの中の獅子が目覚めても恐ろしいですし……。
司教帝レアが出現しない代わりに、司教帝ラフィーナが復活する、などと言うことになったら目も当てられない。
いや、たぶん、その二人ならば、司教帝レアのほうが敵にするのは楽なはずで……。ならば……どうしたものか？
ちなみに、ミーアが悩んでいる間に、リオネルの側はすでに動き始めているらしい。
対立軸を明らかにし、ミーアの急進的な考えに反対する勢力を糾合しようと動いているらしい。
――そのロジックは、ラフィーナさまが嫌われるもののような気がしますけど……。
などと、他人事ながら心配になるミーアである。
ともあれ、どちらにとっての幸運かは定かではないが、リオネル

のほうも上手くはいっていないらしい。
新入生の間では一定の支持を得られているものの、在校生に関しては、実績の巨大さがまるで違う。
実際にミーアに救われた者も数多くいるわけで……むしろ、リオネルの物言いは反感を買いかねないものであった。
だからこそ、悩ましい。この、余裕で勝ててしまえそうな状況が、悩ましくて仕方ないミーアである。
「ふぅむむむ……」
腕組みし、天を仰ぐミーア。そこへ、
「どうかしたのか？　ミーア」
部屋に入ってきたシオンが不思議そうに首を傾げた。
「そんなふうに、君が悩むなんて、珍しいじゃないか」
「もしかして、ミーア、この前のことかい？」
シオンと一緒に入ってきたアベルが、心配そうな顔をする。
「へ？　ああ、いえ、別にそんなことは……」
「この前のこと？　いったいなんのことだ？」
眉を潜めるシオンに、アベルが先日のリオネルとのやり取りのことを説明する。
「なるほど……。ヴェールガが疑念を持っている……か。確かに、あり得そうなことではあるが……だからといってこの時期にミーアに揺さぶりをかけてくる理由がわからないな」
顎に手を当てて、シオンがつぶやく。
「恐らく、リオネルという少年か、その父、ルシーナ司教が勝手に言っているだけ……。せいぜいが、くすぶっている不安、不満を誇張して言っているぐらいだろう。いずれにせよ、このような状況で何か動きがあるとも思えないが」
そう、未来を知らなければ、ヴェールガの疑念など無視しても問題ない代物のはずで……。ラフィーナに任せておけば上手くやるだろうと、ミーアだって考えていられたわけだが。
――ベルが生まれなくなる……帝国から皇女をセントノエルに送

れないほどに、関係が悪化する、と……。それほどヴェールガの疑念が大きくなるというのであれば、やはり対策は必要ですわ。
蛇に煽られた可能性は否定できないにしろ、やはり、その根はこの時代、今回の選挙にあるのだろう。情報源がミーアという、若干の（……若干の？）不安要素はあるにしろ、ルードヴィッヒがそう言っているのだ。信頼に値すべき情報だろう。
さらに今までの経験上、ミーアは知っている。
転がり落ちる大岩を止めるのは困難。山頂でぐらついている大岩が落ちないようにするほうが遥かに容易なのだ。
ヴェールガとの緊張関係が大きく育つ前に、それを排除するほうが楽なのだ。
そうなのだ。要するにミーアは楽がしたいのだ。
楽が！　したいのだ！！
再び考え込むミーアに、今度はキースウッドが話しかけてきた。
「しかし……、ミーア姫殿下が気にされているのは、そのことではないのではありませんか……？」
「ほう……？」
ミーア、瞠目しつつ、キースウッドのほうに顔を向ける。続けて、続けて！　というように手で促すミーアである。
他に、自身が気にしておくべきことがあるのであれば、ぜひとも把握しておきたいミーアである。
生徒会長ミーアは他人の意見によく耳を傾ける人として、知られている。
自身が考えなかった可能性、よいアイデアを出してくれる者を、ミーアは重宝する。そしてミーアの知るところ、キースウッドという男は、なかなかにできる男だ。かなりの洞察力の持ち主だ。これで、眼鏡さえかけていれば、知恵袋としては完璧なのに、残念なぐらいである。
まぁ、それはともかく、キースウッドの口から出たのは意外なことだった。

「もしや、ミーア姫殿下は、後継者を育てようとされているのではありませんか？　先日の、生徒会で話をされた時から、ずっと気になっていたのですが……」
「後継者……」
「はい。シオン殿下に生徒会長を譲ってもいい……と、そのように言った後、なにやら思案げな顔をされているな、と……。そう思いました」
それは、ちょうどミーアが……。でもなぁ、生徒会長とか、面倒くさいんだよなぁ！　と思った瞬間であったのだが……それはともかく。
「シオン殿下のお名前を出した後、なにかに気付かれていた……。それは、もしや、シオン殿下ではなく、別の……自分より年下の後進にこそ、むしろ生徒会長の座を譲りたいと……そのようなことをお考えだったのではありませんか？」
「……ふむ」
ミーアは、深々と頷いた。
威風堂々、一切の躊躇もなく頷いた。
まるで、先ほどからずっとそのことについて考えてましたが、なにか……？　という顔で、いけしゃあしゃあと頷いた！
乗れ……っと頭のどこかで声がしていた。
キースウッドの言葉、その中に見た乗り心地のよさそうな波に、ミーアの海馬（かいば）が……否、海月馬（クラゲウマ）が目を覚ました！
「そう……ですわね。実は、今回の選挙、わたくし自身が立候補しても、まぁ悪くはないのですけど……いろいろ思うところがございますの」
話しつつ、ミーアは検討してみる。この方向で考えを進めると……どうなるのか？
――後継者……後任、なるほど……。盲点でしたわ。
大浴場で抱いた不安感、その答えが今、目の前に提示されているかのようだった。

――そうですわ。わたくしの後任を立て、そして、わたくしはその後見人を務める。これですわ！
それは、ある種の、院政に近いものであった。ミーアは、セントノエル学園生徒会に、院政を敷こうとしているのだ。
そして、そのための生徒会長候補は……。
「わたくしは……ヴェールガ公国の、レアさん……リオネルさんの双子の妹を生徒会長に推薦しようと思いますわ」
ミーアの言葉に、その場にいたアベルら三人は、驚きの表情を浮かべた。

第二十五話　その生涯の意味は……

「司教帝猊下……レア猊下？」
遠く、自分を呼ぶ声に、レアは静かに目を開ける。
そこは、神聖ヴェールガ帝国の帝都、司教帝の城、そこにある玉座の間。
煌びやかな玉座に腰を下ろしたレアの前、老齢の男が膝をついていた。
「お休みのところ、申し訳ございません。猊下の寝顔を覗き見るはご無礼かと存じ上げますので」
愛想のよい笑みを浮かべるその男……騎馬王国の民と思しき男は、数年前よりレアに仕える流浪の男だった。
「そうですね。異性の寝顔は、人に、常ならぬ情欲を抱かせるもの。慎むべきでしょう」
清らかな、汚れのない聖女の笑みを浮かべてから、レアは肩をすくめた。
「しかし、その情動すらも使いこなすのが蛇だと言うのなら、それを利用する術も知っておくべきなのでしょうね」
その言葉に、男はニヤリ、と笑みを浮かべる。
「さすがは、レア猊下。実に無駄のない合理的なお考えでございます。しかし……帝国は、なかなかに手ごわいようで」
耳に痛いことではあったが、レアは、特に気にする様子もなく首を振る。
「女帝ミーアは、かの不作の年に、食料を使い人々の支持を集めた情けの人。簡単には行かないでしょう。人は正しい人のために滅多に命を捨てないけれど、情け深い人のためには命を捨てるものですから」
レアは、遠くを見つめて、続ける。

「それに、かの地には聖女ラフィーナもいます。爵位を失ったとはいえ、かつてのヴェールガ公爵令嬢に、忠節を尽くす者も少なくはない、ということでしょうね」

そう、それは仕方のないことなのだ。

レアは、自らにラフィーナほどの求心力がないことを知っている。

だが、幸い、彼女はそれを補う術を手に入れた。

人の心を操る術……綿密に計算された、その技術の粋が書かれた書物『地を這うモノの書』を。

――こんなに素晴らしい書物があるのに、使わずに封印するなど愚の骨頂。なにも躊躇わずに、使えばいいのに……。知識に善悪はない。知恵はあくまでも知恵。人の心を操る術を用いて、人々の信仰心を喚起し、神（わたし）の尖兵として仕立て上げることに、なんの遠慮がいるかしら？

司教帝レアは合理主義者だった。

ヴェールガ公国も、中央正教会も……天に頂く神ですら、彼女にとっては統治と支配の手段に過ぎなかった。

それに……混沌の蛇もまた、彼女は一つの道具に過ぎないと思っていた。

父が生涯をかけて信仰した神も、中央正教会が恐れ、封印しようとした蛇の知識も、すべてを使いこなせると……自分ならば道具にできると、そう思っていたのだ。

しょせんは、ただの知識。本などただの文字列に過ぎない。なにを恐れる必要があるというのか。

皮肉なことに中央正教会の頂点に立ったレアは、すでに神を捨てていた。

そして、神がいなければ、それが想像上の概念に過ぎないというのなら、知識に善悪はない。なぜなら、人の上に立つ神がいないならば、究極的に善悪を計る、普遍的な物差しがなくなるからだ。

神なき世界において、善悪を判断するのはあくまで「人」であり、一人一人の「個人」だ。それは、レア自身の道徳観、良心に過ぎず、

言ってしまえば、ある種の“感じ方”に過ぎない。
誰かが「それは間違いだ」と主張しても、「それはあなたの感じ方に過ぎない」と言い返せるし、「お前の価値観を私に押し付けるな」と撥ねつけることができる。
それは、神はいる、と言っている人たちにも同様だ。「お前たちの神を私に押し付けるな」と撥ねつけることができる。神が存在せず、「“神”が誰かが考え出した概念」である限り、それは、レアに何の影響も及ぼさない。
しょせんは誰かが勝手に信じているモノに過ぎないのだ。
そして善悪もまた、しかり。善悪など、しょせんはその程度のものに過ぎない、と……レアはそう考えていた。
では、善悪がないならば、いったいなにを価値基準とするのか？
レアは、それを便利さに求めた。利便性こそが、レアの思想の中心だ。
その点で『地を這うモノの書』は極めて優秀だった。便利で、使い甲斐のある道具だった。
そしてレアは、その視点でヴェールガ公国の持つ可能性をも洞察していた。
ヴェールガは、神を王として頂く国だ。それゆえ、国の最高権威者は神の司祭にして、王に仕える公爵となる。
その体制ゆえに、ヴェールガは他国に重んじられてきた。
他国の王は神によって、その土地の統治を委託された者だ。その権威は神によるもの。ゆえに、彼らは神を王として頂く国、ヴェールガに敬意と、忠誠を誓うのだ。
では……そのようなヴェールガで、自らを国の頂点である「王」としたら、どうなるか？　神が王の国で、王として振る舞えば……それは、神の権威をその身に帯びることにはなりはしないか？
神として振る舞うことが、できはしないだろうか？
――神聖典に従い、神の権威を用いて民を治めることと、私自身の価値観に従い、神の権威を利用して民を治めることとに差などな

い。むしろ、こちらのほうが効率的だ。
レアは、すべてを利用する。教会も、神聖典も、すべては彼女の目的を実現するための道具に過ぎない。
――リオネルは、大したことがなかった。お父さまも……中央正教会を正しく利用しさえすれば、権力を手中に収められたのに、どうして、そんな簡単なこともできないのかしら？
あの日、呆気なく生徒会長選挙に敗れ、失意に堕ちた兄をレアは見下した。
その兄を見込んでいた父も、その父が信奉する神すらも、レアの目には他愛ないものに映った。
――ああ、他愛ない。なんて他愛ない人たちだったんだろう？
過去に置き去りにした人たちの姿を瞼の裏に浮かべ、レアは勝ち誇った笑みを浮かべる。
その胸の内を焦がすのは、恐ろしいほどの渇望だ。
――私を認めさせる……。兄が聖女と崇めたラフィーナも、大陸の人々の希望である女帝ミーアも降し、すべての人を跪かせて、そして……。そして……？
彼女の思考は、いつもそこで止まる。
この世で最高の権威を手に入れて――では、その先は？
その先にはいったい、なにがあるのか？
もしも……世界のすべてが自分に膝を屈めたとして……それがなんだと言うのか？
蛇の技術と神の権威さえあれば、そんなもの、手にするのは容易で……。だけど、それじゃあ、いったい自分は何のために生きると言うのか？
父も、兄も、もうこの世にはいないというのに……。
「世界があなたを認めますよ。レア司教帝猊下。あなたこそが神の代理人。いや、あなたこそが、神だ」
蛇は囁く。
その言葉は、さながら強い果実酒のように。ねっとりと甘く彼女

を酔わせ、その思考を濁らせる。
「そう……。そうね。ならば、神の敵を滅しましょう。蛇の知恵を用いて、帝国のすべてをからめとり、壊死させてしまいなさい」

神の権威を己が手に、司教帝は突き進む。
己が存在を、ただ認めさせるために。
その先になにがあるのかを知らずに。
その先になにもないことすらも知らずに。
否、その先になにもないことを知っていて、なお、そこから目を逸らして……。
彼女は進み続ける。
その生涯の果てに、あったもの……それは。

「ん……ぅん？」
レアは、小さなノックの音で目を覚ました。
どうやら、予習の途中で眠ってしまっていたらしい。本を閉じ、寝ぼけ眼をこすりながら、ドアを開ける。
「ご機嫌よう、レアさん」
「ミーア姫殿下……？」
突然の来客に首を傾げるレア。そんな彼女に、ミーアは言った。
「実は、お願いがあってまいりましたの」
「お……お願い、ですか？」
警戒心が胸に疼く。目の前の少女は、兄の対立候補。父が苦々しく言っていた人物だ。あまり近づくのは良くないのではないか……っと、思っていたのだが。
ミーアは実に穏やかな笑みを浮かべて、言った。
「ええ。あなたに、生徒会長になってもらいたいんですの」
「……へ？」

第二十六話　あなただけ……あなただからこそ……

「えぁ……へ？」
口をぽっかーんと開けるレアに、ミーアは優しい笑みを浮かべてみせる。
――これは、我ながら妙手でしたわね。
などと、腹の内で自画自賛しつつも。
「わっ、私を、生徒会長に……？」
「ええ、そのとおりですわ！」
かつて、シオンに「生徒会長やったらいいじゃん！」とプッシュした時と同じ……否、それ以上の熱心さで、ミーアはプッシュを始める。
「セントノエル学園の生徒会長というのは、大変な重責が伴うもの。それゆえに、しっかりとした方にやっていただきたいと、わたくし、思っておりますの」
「そっ、そんなっ！　私、しっかりなんかしてません。無理。無理です。あ、兄なら、リオネルなら……」
「いいえ、それでは、駄目ですわ」
瞳を閉じ、断固たる様子で首を振るミーア。
なにせ、ミーアは直々にラフィーナから厳命を受けているのだ。リオネルを叩き潰して、ルシーナ司教の鼻を明かせ、と……。
獅子の笑みを浮かべるラフィーナを思い浮かべ、思わず、ぶるるっと体を震わせるミーアである。
――ラフィーナさまのご意向は、大前提。絶対的に重視すべきことですわ。
「でも、無理です。私は……」
なおも首を振るレア。ふと思いつき、ミーアは口を開いた。
「あ、もしかして、お兄さまの選挙の手伝いをしろ、とでも言われ

てるのかしら？」
「いえ……。それも必要ない、と言われています。私にできることなどないから、と……」
そう答え、レアは少しだけ寂しそうにうつむいた。
彼女は、紛れもなく父に……ルシーナ司教に選ばれなかった者であった。
――そう。それこそが、まさに重要ですわ！
ミーアは満足げに頷く。
ルシーナ司教の鼻を明かすためには、彼が思ってもみない人物を生徒会長につけねばならない。その点、レアは誠に好都合な人材と言えた。
ヴェールガ側には、自らが権力を欲していないことをアピールしつつ、ルシーナ司教の鼻を明かす。さらにラフィーナには、後進の育成という、かつてラフィーナがしたのと同じことをしようとしているのだ、とアピールすることができる。
――もっとも、ラフィーナさまには、きちんとお手紙を出してご理解を求める必要があるかもしれませんけれど……。
さらに、レアを推薦するにはもう一つの理由があった。言うまでもなく司教帝のことである。
「どうして……なぜ、私を推薦しようとなさっているのですか？」
困惑した様子でレアが言う。いかにも気弱で、おどおどした様子で問うてくる。
さすがに「いや、あなたが司教帝になりそうだから……」などと言えるはずもなく、ミーアはあらかじめ用意していた言い訳を披露する。
「あなたは、特別初等部の子どもたちにダンスを教えて欲しいと言った時に行ってくれましたわね。あれが大きな理由ですわ」
「え……？」
「嫌な顔一つせず、何の躊躇いもなく子どもたちにダンスを教えに行ってくれましたわ」

多少は躊躇っていた感はあったが、あえて無視して言い切る。
「あ、いえ、あの時はその……、パーティーのほかの方たちとダンスをするのが怖かったから……」
「しかし、子どもたちは怖くなかったんですの？　あの子たちは、各国の孤児院で育った。あまり素性のよろしくない子だっているし、盗人まがいのことをしていた子だっておりますのよ？」
その問いに対しては、レアは静かに首を振った。
「生きるためには仕方ないことではありませんか。それに、ミーア姫殿下は、子どもたちに罪を犯された者こそが悪い、とおっしゃって、あの子たちを庇われたとお聞きしていますが……」
「別に、特別なことを言ったつもりはありませんわ。あなたも同意してくださると……、あなたは、そのような方であると、わたくしは見込んでおりますわ」
この理屈は、いささかズルいものであった。これはヴェールガの貴族なら、司教の娘ならば、否とは言いづらいことではあった。おそらく、リオネルに言っても頷くことだろう。
案の定、レアは……。
「それは……まぁ……」
遠慮がちに頷いた。それを満足そうに眺めてから、ミーアは続ける。
「けれど、リオネルくんは、彼らの存在を知っていても行かなかった。パーティーに慣れていなかった子どもたちのもとに駆け付けることはなかった。あなたを手伝おうともしなかった。無論、彼には彼なりの事情があったのでしょうけれど……」
社交界の華やかな場が苦手なだけ、とレアは主張する。それは、たぶん事実だろう。
特別初等部の子どもたちの相手のほうが気楽だった、苦手な場から逃げるための口実に過ぎなかった、と言うのも、おそらくは本音で、事実なのだろう。
だが……ミーアはあえて、レアに言う。それも一つの美点ではな

いか……？　と。
「わたくしは、貴族の子女とのダンスより、特別初等部の子どもたちのことを親しく感じる、あなただからこそ、生徒会長をしていただきたいと思っておりますの」
「でも……だからといって、それで生徒会長の任が務まるとは限りません」
なおも首を振るレア。その肩にそっと優しく手を置いて、ミーアは言った。
「大丈夫。あなたならできますわ。できないところは、わたくしたちがサポートしますし」
サポートしながらも万が一、司教帝の兆候が現れれば、その都度、矯正する。万全の態勢に、ミーアはニヤリとほくそ笑む。
――ふっふっふ、考えれば考えるほど、完璧な態勢。我ながら見事ですわ。
「いえ、でも、やっぱり私には無理です。ラフィーナさまやミーア姫殿下のような振る舞いは、私には……」
「いいえ、できますわ。必ず」
きっちりと言いきる。そう、ミーアには根拠があった。
ミーアはレアの能力を知っているのだ。なぜなら、レアは司教帝として、ヴェールガ公国を手中に収めたからだ。
――あのラフィーナさまを追い出して、自分が国の頂点に就くなど、かなり高い能力を持っているに違いありませんわ。
ルードヴィッヒの日記帳を読む限り、レアが担ぎ上げられたただの神輿、という感じはしなかった。むしろ、レアは自分からラフィーナらを追い出し、その地位を簒奪している。
やったこと自体は決して褒められたことではないが、無能者にできることでもない。
であれば、その「能力」は十分に信用に値するはずである。ゆえに……。
「あなたができないと思っているのは、おそらくは今日までの自分

の経験からのこと。されど、ここはセントノエル。学び、自らの能力を高める学園です。あなたが今日できなかったことだとて、明日にはできるようになるかもしれない。経験を積んだ一年後、二年後にできるかもしれない」

それは、以前、アベルを励ました時と同じ論理だ。そこに、ミーアは一つの要素を付け加える。それは……。

「だからこそ、わたくしは、あなたが今立っている場所は問いませんわ。あなたが目を向ける方向にこそ、わたくしは興味がございますわ」

「私の……方向……？」

「そう。進んでいく方向ですわね」

静かに、穏やかに、言う。

能力のほうは、おそらく申し分ないはず。であれば気にすべきことはなにか？

彼女の成長していく方向である。

――セントノエルでたくさん学んで、力を伸ばして、悪の司教帝にまっしぐら！　などと言うことになられてはたまりませんわ。だからこそ……。

ミーアは穏やかな笑みを浮かべて言った。

「特別初等部の子どもたちと真摯に向き合い、彼らを守るために庇護するために行動すること。その思いを大切にしてくださるあなたであれば、間違うことはございませんわ。大丈夫」

確認するように、意識に刷り込むようにミーアは言う。

特別初等部の子どもたちにも優しくすること。

決して、あれを解散させようとか、思わないこと。

飢えた民を気遣い、きちんと食料を分け合うこと。

伝えたいことは山ほどあるが、それは追い追いでも構わないだろう

「でも、あの、えっと……」

目を逸らし、言葉を探す様子のレア。そんな彼女を見て、ミーアは察する。

――この方、実に押しに弱そうですわ！
であれば、ミーアは前に進むのみだ。土俵際に追い込むべく、前へ、前へ！
自分ファーストに、相手の事情など一切鑑みずに、ミーアはずずいっと前へ。前へ！
「大丈夫、大丈夫。怖いことなんか、まーるでありませんわ。わたくしたちがついておりますから、ね？」
そうして、にっこーり、悪い笑みを浮かべ……。
「大丈夫、大丈夫」
「大丈夫……？　なのでしょうか……？」
「ええ、大丈夫ですわ。ぜんっぜん怖いことなんでないですわよー？　うふふ、レアさんなら、必ずできますわ。むしろレアさんにしか、できないことですわ！」
あなただけに、あなただからこそ……っと、いささか詐欺師めいたことを言い、優しい笑みを浮かべるミーア。その顔は、若干、こう……胡散臭いものであったが……。
「私にしか……」
レアは、コクリと喉を鳴らして、
「わ、わかり……ました」
小さく頷くのであった。

第二十七話　次から次へ！

一気に押し切り、レアの了解を取り付けたミーア。そこまでは首尾よくいったものの、実際のところ、あまり時間はなかった。

すでに、リオネルは動き出している。ミーア自身が候補として立つならばともかく、レアが対抗馬となるためには、早々に動き出さなければ厳しい。

「すぐに動き出せるように、生徒会の方々にも話を通しておく必要がございますわね」

ミーアは急遽、生徒会に召集をかけた。

生徒会室に集まった面々を前に、ミーアは改めて事情を説明する。

と言っても、司教帝やらベルの消失のことは、あまり広く知らせると、それ自体が未来に影響を及ぼす可能性がある。

それに、司教帝のことは、説明するにはいささかデリケートな問題だ。

万が一、ヴェールガの耳に入ったりすれば、ミーアの側が敵視していると判断されかねない。

ここは先日、キースウッドが口にした、後進の育成というポイントに絞って話を進めるべきだろう。

ミーアは、共有する情報を頭の中で整理しながら、話し始めた。

「でも、大丈夫でしょうか？」

ミーアの話を聞いて、一番に不安そうな声を上げたのはティオーナだった。

「ミーアさまが生徒会長を退かれるというのは……」

「そうですね。以前にも話題に出てましたけど、今は時期があまり良くないかもしれません」

クロエと、ラーニャもそれに同意した。今現在、上手くいっているものを変えるというのは、勇気がいるものなのだ。けれど……。

「不安がないと言えばウソになりますけれど、おそらく大丈夫ではないかと思いますわ」
ミーアは、あえて堂々と頷いてみせる。理由はとても簡単で、すでに、飢饉に対する体制はできているからだ。
ミーアの声を受けて卒業していった者、在校生たち、飢饉への心備えができている者たちの数は、すでに十分すぎるほどだ。
寒さに強い小麦も、ラーニャの尽力によって、これから広がっていくはず。さらに、天候不順も永遠に続くわけではない。徐々に回復していき、それに合わせて小麦の不作も改善していくはずなのだ。
それゆえ“今回の”危機を乗り越えることは……おそらくできるだろう、とミーアは見ている。あくまでも“今回の”ではあるが。
だからこそ、これから先の新入生たちに必要なのは、大飢饉の危機を乗り越えた先のことなのだ。
――わたくしは、卒業した後、おそらくは女帝に祭り上げられることでしょう。まぁ、それで帝国が安定するなら、仕方のないことなのですけど……。
しかし、ミーアはすでに知っているのだ。帝国だけ安全で、安定していても意味がない。大陸の各国の状況も、帝国に大きな影響を及ぼすわけで……。そちらが平和でなければ、のんびりと寝て過ごすことはできないのだ。
要するに、ミーアとしてはセントノエルがしっかりしていてくれたほうが楽に統治ができるのだ！　そのことにミーアは気付いてしまったのである。
――せっかく、不作と言う共通の危機を通して、国々が一致団結するのなら、その状況を長く続けたいものですわ。平和じゃないと、いろいろな国の美味しい物を食べられませんし。
戦争とか起こってもらっては困るのである。
国の統治が乱れて、内戦だの、盗賊の跋扈だの、そういうのは御免こうむりたいミーアである。
ということで、ミーアは静かに告げる。

「わたくしたちは、今回の危機に良く対処できている。これから先も油断なく続けて、今年、そして来年を乗り切りたいと思っておりますわ。けれど、そのために、生徒会長の地位は、すでにそこまで必要ではない、とわたくしは思いますの。むしろ、その有効な使い方は別にあるのではないか、と……」
「必要なものは変わる。その時々、状況ごとに最善の態勢を整える、か」
シオンが腕組みしつつ、つぶやく。
「ええ。特別初等部もそう。国々の垣根を越えて、助け合うという心持ちもそう。わたくしたちが築いてきたものを、次なる世代に引き継ぐために……。わたくしはレアさんに生徒会長をしていただきたいと願っておりますの」
「次世代……」
ぽつり、とつぶやいたのは、クロエだった。
「そうか……。ミーアさまたちと、こうして学園にいられるのも、あと二年なんですね……」
その声は、思いのほか寂しげで……。
「私なんか、あと一年ですけどね」
ラーニャも、同じく寂しそうな笑みを浮かべていた。
「ええ。その通りですわ。わたくしたちはいつまでも学生でいるわけではありませんわ。だからこそ、わたくしたちと志を同じくしてくれる、若い世代を育てたい。そして、それを継承していっていただきたいんですの。できれば、わたくしの子や、孫……そう、ベルの世代までね」
「なるほどな。善政を敷いた王の世継ぎが、ろくでなしで、国が傾くということはよくある。それを避けるための体制を作ろうということか」
アベルも納得の様子で頷いていた。
「本来、セントノエルと言うのはそういう場所ですし。おそらく、ラフィーナさまも、生徒会長をされていたら、そのようになさって

いたのではないかしら？」
これならば、ラフィーナにも納得してもらえる。そう思えることが大切だ。
それから、ミーアは静かに頭を下げた。
「みなさんにも、ぜひ、協力していただきたいですわ。わたくしたちの想いを、次なる世代に引き継いでいくために……」

その日、セントノエルに激震が走った。
生徒会長ミーアが、次の会長選挙に立候補しないことと、自分の代わりに、新入生レアを推薦することを表明したためだ。

第二十八話　ミーアは言う。怠惰を言い訳にするな、と。

さて、翌日、早速ミーアはレア……とオウラニアを引き連れて、セントノエル内を歩き回っていた。生徒会長候補として、必要なことをみっちり教え込むためである。

……ちなみに、オウラニアのほうはと言えば、どうも弟子一号として、レアの存在を看過できなかったらしい。

『自分が知らないところで、ミーア師匠が誰かに何かを教えているだなんて、許せないわー』

などとつぶやきつつ、なにげないふうを装ってついてきていた。

その姿は、こう、なんというか、どこかの聖女に似たところがないではなかったが、まぁ、それはともかく……。

「それで、レアさん、公約のほうは、もう出来上がったかしら？」

ミーアに話しかけられて、レアがビクンっと肩を跳ねさせる。それから、申し訳なさそうに肩を落として……。

「それが、その……。まだ、糸口も見つからなくて……」

「ふふふ、そんなに肩を落とす必要はございませんわ。はじめはそんなもの、わたくしだとて、似たようなものでしたわ」

かつて、食堂のメニュー改善を公約に掲げようとした日を思い出し、ミーアは静かに笑う。

「覚えておくとよろしいですわ。レアさん。一人ですべてをやる必要はどこにもないのだと……。自分でできぬことがあれば、誰かの力を借りればいいだけのことですわ」

ミーアは、人差し指を振り振り、大変偉そうに言った。

「それで、良いのでしょうか？　それは、怠惰になってしまうんじゃ……」

「ふむ、怠惰……」

痛いところを突かれて、思わず黙り込むミーアであったが、すぐ

に首を振る。
「それは、考え方が逆ですわね……」
「考え方が……逆？」
「ええ、そうですわ。まず、第一に言っておきたいのですけど、すべてを一人でやろうとするのは高慢というものですわ。だって、そんなことできるはずがありませんもの」
ミーアの言葉に、うむうむ、っとなぜか偉そうに頷くオウラニア。一方のレアは、少し驚いた様子だった。が、構わず、ミーアは続ける。
「そして、そのうえで、怠惰になることは、もちろん戒めるべきことではありますけれど、それ以上に大切なことは、自分が怠惰になっても機能する体制作りですわ」
「怠惰に……なっても？」
「そうですわ。上に立つ者が怠惰になったとしても結果が出せることこそが、肝要ですわ。なぜなら、人とは、時折、怠惰になってしまうものなのですから」
時折と言わず、いつでも怠惰で、GNY（ぐんにょり）していたいミーアは力強く主張する。
「なにかを失敗した時、もっと自分が頑張っておけば……などと言うのは一つの自己陶酔に過ぎませんわ。頑張るのは当然としても、自分が頑張れなくても上手くいくように体制を整えることこそが真に必要なことですわ。なにしろ、わたくしたちは、時に失敗の許されぬ立場。自分が怠惰だったから、などと自分を責め、自己満足に立ち止まるべきではありませんわ」
「怠惰だと、自分を責めるのは……自己満足」
小さく喉を鳴らすレアに、静かに頷き、それからミーアは優しい笑みを浮かべる。
「ですから、肩の力を抜いて大丈夫ですわ。セントノエルには、レアさんが多少サボったとしても、きちんと手助けしてくれる人たちがたくさんいるのですから」

そう結んで、ミーアはふと食堂の前で立ち止まる。
「公約作りで悩んでいるということでしたけれど、現状の、このセントノエル学園を見て、問題点を把握し、その是正を訴える、という基本はわかっておりますわね？」
「あ、はい。それは、もちろん……」
「では、外のことはどうかしら？　この大陸の、各国の様子を見て、なにか思うことはありますかしら？」
「国々の様子……ですか？」
「ええ、そうですわ。ここは、国を統治する王侯貴族の子女が集まる場所、セントノエルですから、より広く、世界を見渡す視野が必要ですわ。例えば、生徒会にいるクロエさん、ラーニャさん、ティオーナさんなどは、食料や流通に通じている。なぜ彼女たちを生徒会役員に選んだのかといえば、現在、大陸を襲っている農作物の不作が大きな理由ですの」
「大陸の問題解決のために……詳しい人を生徒会に……」
「ええ、そのとおりですわ」
ミーアは惜しげもなく、レアに生徒会のことを教え込んでいく。それこそが、未来の自分を楽にすることだと、ミーアの直感が告げているためである。
次に、ミーアは特別初等部の教室にやってきた。
ちょうど、ユリウスが教壇に立ち、基礎算術を教えていた。
まかり間違って、こちらに質問が飛んでこないよう、気配を消して子どもたちの姿を見守っていると……レアが囁くような声で言った。
「あの、ミーア姫殿下は、なぜ、特別初等部をセントノエルに作ろうとされているのですか？」
「え？　あ、そうですわね……。ちなみに、レアさん、あなたは、蛇のことはご存じなのかしら？」
「え……蛇？」
きょとん、と首を傾げるレアを見て、ミーアは、ふむ、と頷いた。

――まぁ、レアさんもまだ子どもですし。混沌の蛇のことを知らされていなくても、不思議はありませんわね。
腕組みしてから、ミーアは話し始めた。
「わたくしたちは、民が安らいで生きるため、秩序を守らなければならない。そのことは、ご存じですわよね」
「神の与えた権威を持って秩序を維持し、それにより民の安寧を守れ、ですね。神聖典の『王族』に対する教えです。『民』は王が神に従う限り忠節を尽くせ。それが己が幸せのためである。なぜなら、その権威は神からきているのだから、と対を成す教えです」
神聖典をそらんじてみせるレアに、ミーアは、難しい顔で頷いてみせる。
ちなみに……ミーアはそれが神聖典に書かれていることなど、まったく知らなかった。
ミーアがそれを知っていたのは、ひとえに、前時間軸のルードヴィッヒの言葉によることだった。
革命の前夜、帝国が飢饉に襲われていた時代……。
ミーアに求められた役割は、学ぶことではなかった。
他国との外交や、商人たちとの交渉のために、言われた通りに行動する操り人形の役割さえ果たしていれば、それで足りる状況。むしろ、国の破滅を目前に、学ぶことなどなんになろうか？
されど……ルードヴィッヒは、そのような状況においても、教えることを諦めなかった。
それは、危機を乗り越えた先、ミーアが帝位を継いでも良いように、と考えたからだ。
彼は先を見据え、希望を捨てることなく、ミーアに教え続けたのだ。
その努力は断頭台により潰えてしまったかに思えたが……決してそんなことはなかったのだ。
ミーアの無意識化に刻まれた、厭味ったらしい言葉は種となり、今この時、花を芽吹かせつつあった。

「最も貧しく力なき者たちに、希望を与え、秩序のもと生きることの大切さを教える。それは、わたくしたち、統治者の義務だとわたくしは思いますわ」
ポケットに入れた眼鏡にこっそり手を当て、その権威を借りつつ、厳かに言うミーアである。っと、
「ミーア姫殿下！　これは、どういうことですか？」
その時だった。
ミーアたちのもとに小走りに近づいて来る少年の姿が見えた。

第二十九話　成長の機会……誰にとっても

「あら、あなたは、リオネルさん。ご機嫌よう」
スカートの裾をちょこんと持ち上げるミーア。
「これは、ご丁寧に。ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下……」
胸に手を当てて、丁寧に頭を下げるリオネル。であったが、すぐに、
「それで、いったい、これはどういうことなのでしょうか？」
満面の怒りを湛えた顔で噛みついて来る。が……。
――あら、しっかり挨拶を返した後に……ふふふ、意外と律儀な方ですわね、リオネルさん。
怒りの表情で睨んでくるリオネルであったが、セントノエルに入りたての子どもに睨まれたからと言って、どうということもなし。
革命軍やら、怒り心頭の民衆に責め立てられたこともあるミーアである。その程度の怒気など、涼しい笑顔で返せるようになっているのだ。
――というか、この子、そもそも、司教帝にもなりませんし……。
などと思ってしまえば、むしろ、レアのほうが警戒に値するわけで……。
余裕の態度で、リオネルに対峙するミーアである。
「説明してください、ミーア姫殿下。なぜ、妹が……レアが生徒会長に立候補などと……っ！」
っと、その目がレアのほうを捉える。
「レア、どういうことだ、これは……」
厳しい声でリオネルが言う。それを聞き、レアがビクンッと肩を震わせ……。
「兄さん、あの……、これは、その……ごめんなさい。私……」
などと、あわあわするレア。そんな彼女を庇うように、ミーアは

一歩前に出ようとして……。
「あらぁ、駄目よぅ。そんなふうに、妹をいじめたらー」
声を上げたのはオウラニアだった。頭一つ小さいリオネルを見下ろして、オウラニアはニッコリ笑みを浮かべる。
「レアさんは、一応、ミーア姫殿下の弟子のようなもの。ということは、私のー、妹弟子みたいなものなんだからー、いじめるのは許さないわー」
「……どなたでしょうか？」
眉根を寄せ、不審げな顔で睨んでくるリオネルに、オウラニアはのんびりとした笑みを浮かべる。
「お初にお目にかかるわねー。リオネル殿。私はー、オウラニア・ペルラ・ガヌドス。ガヌドス港湾国の王女よー」
胸を張り名乗るオウラニア。不審げな目で見ていたリオネルだったが……その名を聞いた瞬間、
「ああ、あなたが、ガヌドスの釣り名人と噂の！」
うわぁっ！　と、小さく歓声を上げた。
「サンテリさんから聞いています！　今度、ぜひ、一度、釣りの腕前を拝見できればと……できればと……はっ！」
っと、そこで何かに気付いたような顔で、ミーアのほうに視線を向け、咳ばらいを一つ。それから、しかつめらしい顔をする。
――ふむ、リオネルさん……案外、面白い子なんじゃ？
思わず、まじまじと観察してしまうミーアであったが……。
「ミーア姫殿下、あなたは……なんて、残酷なことをさせるんですか？」
「残酷……はて？　なんのことですの？」
突然のことに、ミーアはきょとん、と首を傾げる。
「生徒会長になりたくば、実の妹を打ち負かせ、と言うことでしょう？　そのような嫌がらせをせずに、素直に生徒会長の座を譲ってくだされば、いいのに……」
「それは、聞き捨てなりませんわね。リオネルさん、あなたは、ご

自分が勝てるつもりでいるのかしら？　レアさんのことは、ただの嫌がらせでしていると？　超えるべき、ちょっとした壁でしかないとでもお思いかしら？」
「なんですって？」
っと、眉を跳ねさせるリオネルに、ミーアはニヤリと悪い笑みを浮かべる。
「ぼっ、いえ、私が……あなたならばいざ知らず、妹に負けると……そう言うのですか？」
「かもしれない……という話ですわ。結果が出るまではわからないでしょう？　選挙なのですから」
ミーアの言葉に、馬鹿馬鹿しい、と、リオネルは首を振る。
「私は負けません。負けるわけがない。確かに、レアと私は双子ですが……父上は、私に、セントノエルの生徒会長になれ、と言ってくださいました」
「あら、お父さまの言葉が……あなたが勝つ根拠なんですの？」
そう問えば、リオネルはスッと背筋を伸ばして頷く。
「そうです。父が、間違うはずがありませんから。私はただ、その期待に応えるだけです」
「そうかしら？　あなたのお父さまだとて間違うことはあるのではないかしら？」
「父に限って、そのようなことはありません。それに、親を敬うは人として当然の理。そのように疑うなど、とんでもないことです」
「あら、敬うのと、何も考えずに従うのとは違いますわよ？　そもそも、あなたの尊敬するラフィーナさまだって、時にはお父上のやり方が間違っていると異議を唱えていたはずですわ」
具体的には、肖像画とかについて……っと心の中でこっそりと付け足すミーアであるが……。
「なっ！　ら、ラフィーナ、さまが……？」
リオネルは、がーんっ！　っと衝撃を受けたように後ずさる。
ミーア、それを見てなんとなく思う。

――この子、よく見ると表情がコロコロしてて、面白いですわね。
リオネルは、再び咳払いしてから、
「……レアには生徒会長なんか、できやしませんよ。双子の兄の私が一番知ってる」
その言葉に、レアは、しゅんと肩を落とすが、ミーアは静かに首を振った。
「リオネルさん、こんな言葉を聞いたことはないかしら？　キノコの森に、三日足を踏み入れずば刮目して見よ、と」
「……どういう意味でしょうか？」
不審そうに眉を顰めるリオネル……とレアとオウラニア。
構わず、ミーアは言った。
「キノコは、三日もあれば大きくなる。人もまた同じことですわ。人は、成長するのですわ、リオネルさん。そして、ここは、セントノエル。学び、成長する場所ですわ。どなたにとっても、ね……」
そうして、ミーアは静かにリオネルを見つめる。お前がレアの何を知ってるのか知らないが、彼女だってこれからぐんぐん成長していくんだぞ、この野郎……！　という想いを、その眼光に乗せて……。
「成長……」
「ええ。そうですわ。これは、成長の機会である……とわたくしは思っておりますわ。そして、わたくしは、ラフィーナさまの想いを継いでおりますの。だから、これはラフィーナさまのお気持ちと同じであると言ってしまっても、間違いはないはずですわ」
ちょっぴりラフィーナの威を借りつつ、力強く言うのであった。

第三十話　聖なる俗物

さて、所変わってヴェールガ公国の公都ドルファニア、公爵邸の私室にて、ラフィーナは、ミーアからの手紙を読んでいた。

ウッキウキで手紙を受け取ったラフィーナは、当初、ミーアが生徒会長の座をレアに譲ろうとしていることに困惑した。

けれど、詳しく読んでいくと、その将来を見越したミーアの考えには、唸らざるを得なかった。

さらに、手紙の文面「ラフィーナさまと、わたくしたちが築いてきた、セントノエルの良き慣習を次世代に受け継ぐ」の文面に、彼女は深く心を打たれた。

「ミーアさんが、そこまでセントノエルのことを考えてくれていたなんて……思いもしなかったわ……」

セントノエルの生徒会長の立場への深い洞察はもとより、自分との学生生活を、そんなに大切に思っていてくれたなんて、思いもしなかったから……。

不覚にも感動してしまったラフィーナは、軽く目元を押さえた後……おもむろに立ち上がり！

「こうしてはいられないわ。やっぱり、私もセントノエルに……！」

「ラフィーナさま……」

ふと見ると、部屋付きの、老齢のメイドがこちらを見つめていて……。

「残念ながら、そのお時間はございません。村々を回る回遊聖餐（かいゆうせいさん）の儀が迫っておりますから」

そう……割と忘れられがちなことかもしれないが、ラフィーナはヴェールガ公爵令嬢である。聖女と呼ばれる、立場ある人なのである。

卒業後の彼女を待っていたのは、ヴェールガ国内のいくつかの村

を回り、人々と共に聖なる食卓に着く、回遊聖餐の儀であった。
数年に一度行われるその儀式は、人々に神の祝福を確認してもらうための、象徴的な儀式。それは、各地の孤児院や救護院の視察を兼ねた、とても大切な仕事だとわかっているのだが……でも……。
「ミーア姫殿下ならば、なにも問題ないでしょう。ラフィーナさまの、大切な親友なのでしょう？」
「それは……そうだけど……そうなんだけど……」
おずおずと、椅子に腰を下ろして……。
「それよりも、ラフィーナさま、例の肖像画のコンペの件ですが……」
っと言われ、ラフィーナの笑顔が引きつる。
そうなのだ、ラフィーナがミーアの手紙に目を通していたのは、気が進まない仕事が待っていたからなのだ。
「そう……また、今年も、アレの季節がやって来たのね」
聖女ラフィーナの肖像画は、毎年、ヴェールガ公爵家付きの何人かの画家によってデザインが決まっている。そのデザインをもとに、同様の肖像画が複製され、さらには版画も作られて、大陸の各地に広まっていく。
なかなかに、ラフィーナの忍耐力が試される行事である、のだが……。
「今年は、新人の画家が加わり、デザインにもかなりのバリエーションがあるようですね」
「新人の……ああ。確か、女性の方だったわね……」
「はい。シャルガールと言う女性画家ですね。かなり腕が良いらしく、仲間内での評判も良いようです」
「そう……。良い絵ができるといいですね」
涼やかな笑みと同様に、あんまーり熱量の感じられない涼しい声で言うラフィーナであったが……その、件の肖像画を見た時には、さすがに唸らざるを得なかった。
いや、唸るというか……呻くというか……。

おおぅ……っと、思わず、小さく息を吐きラフィーナは、
「……こっ、これは……ええと、なっ、なに……かしら？」
震える声でつぶやいた。
「ラフィーナさまの勇ましさをイメージしたものだそうで……」
「そう……私の……勇ましさ？」
そうかー、勇ましさかー、そんなに勇ましいつもりはないんだけどなぁー！　と思いながら、ラフィーナは改めて肖像画を眺めて……くらぁっとした。
「ええと、この……やたらと派手で、奇妙な衣装は、いったいなにかしら？」
その肖像画は、構図としては一般的（一般的？）なものだった。
よくある、ラフィーナが邪悪な悪魔を滅する図であった。
それは、まぁ、いい。いや、よくはないが……実際問題、ものすごーく凶悪そうな怪物を踏みつぶす自らの図を見るのは、精神的になかなか削られるものはあったが……、まぁ、慣れていると言えば慣れている。
問題は、ラフィーナの服装であった。
膝より少し上でひらりん、と揺れるスカート。その色は、珍しい桃色だった。
その上のシャツも同じハデな色で、さらに肩の部分は半分透けている。
腰には、宝石がいくつも組み込まれた大きめのベルト、髪型は頭の両側で結ばれた、ミーアのメイドアンヌのような髪型で、しかも、どでかいリボンがつけられている。
さらに、その手には謎の武器……武器？　ヘンテコなステッキ状のものがあった。そのステッキの先端からはキラキラと七色の光が放たれていて……。
そして極めつけは、なんだか、全体的にやたらキラッキラしていた。こう、見る角度によって、色合いが変わる感じのキラッキラだった。

「なんでも、独自の絵の具を使っているらしく……」
「そう……それは、ものすごい技術ね！」
ヤケクソ気味に言えば、
「はい。ものすごい技術です」
メイドが極めて冷静な口調で返す。けれど、その目には、どこか同情の色合いが見て取れた。
ものすごーい技術で、キラッキラに描かれた自分の姿を眺めながら、ラフィーナは実に嫌そうな顔をして……。
「これ、絵も……とても、上手いと思うわ」
「はい。このラフィーナさまの表情とか、体のバランスなどは、ラフィーナさまそのもののように見えます」
「他のデザインより……圧倒的に出来がいいように見えるわ」
「そうですね。並べれば、この絵の勝利は揺るがないかと……」
「ちなみに……お父さまは、この絵、どう思われるかしら？」
「オルレアン公は、ラフィーナさまの美しさをいかに表現するかにしか興味がない方ですから……」
つまり、父のもとに持ち込めば、自然と、今年の肖像画のデザインはコレになってしまうだろう。
「では、お母さま……は……特に何も言わないでしょうね」
ラフィーナの母、ヴェールガ公爵夫人は、少し変わった人だった。世間的には、聖女の母に相応しい無私の聖人として捉えられている母であったが、娘のラフィーナの見解はいささか異なる。
母は、聖なる俗物だ……というのが、ラフィーナが母に抱く印象だった。
ラフィーナの母は、定期的に国内のいろいろな村々を回る。そこで、人々の仕事を手伝ったり、不足がないか聞いて回ったり。時に家族を失った人と一緒に泣き、落ち込む者を励まし、対立する者の仲裁をする。
彼女の行動によって多くの人々が救われ、生きる希望を取り戻す、それはまさに聖人の所業だった。

そして……彼女は決して、決して！　報いを受け取ろうとはしなかった。
お礼でお金を渡されても受け取ろうとはしないし、ご馳走を自分に供してくれても、自分のお供や食べ物を作ってくれた人、あるいは、道行く子どもにあげてしまう。
彼女が受け取るのは必要最低限だけだった。なんだったら、場合によっては、身分や顔を隠してまで、善行を成さんとする徹底ぶりであった。
幼い頃、ラフィーナにはそれが不思議でならなかった。だから、ある日、聞いてみたのだ。
「お母さまは、なにゆえに、そんなふうに無欲に善いことができるのですか？」
それを聞いた母は、優しい……慈愛に満ちた笑みを浮かべて……。
「天に宝を積むためよ。決まっているでしょう」
こんなことを言った。
「地上で蓄えた宝は、盗人に奪われ、朽ちる。そんな不確かな形でしか働いた報いが受けられないなんて、面白くないでしょう？」
もしも、良い行いをし、その報いを人々から受け取ってしまったら、話はそこで終わりだ。行為があり報いがある。完結してしまう。
けれど、もし、誰にも知られず良い行いをし、報いを受けることがなければどうなるか？　その行いは、決して無為にはならない。なぜなら、天の神がそれを見て報いを与えてくれるからだ。
それは、中央正教会の基本的な教理であり、母の行動の原点にあるものだった。
「本当はね。溢れる愛ゆえに、無償でやってます、とか言いたいのだけれど、私にはそんなに愛はない。ただ働きなんて御免だって思ってしまうし、お礼を言ってもらわないと、満足できない。私は、弱くて俗っぽい人間なのよ」
彼女は、悪戯っぽい笑みを浮かべて……。
「だからね、私は不満が積もらないように、報いは全部、後で神さ

まからもらうことにしているの。私が死んだ後、神さまから今まで積んだ分の報いをすべて受け取るの。私は、死んだ後に始まる永遠の日々のために、天に城を建てようと思っているのよ」
意外にも俗っぽい母の言葉に、当時のラフィーナは圧倒されたものであった。
ちなみに、それでは、なぜ、城を建てようとしているかと聞けば……。
「もちろん、天に宝を積めずに、身一つで天国に来た人を泊めて上げるためです。誰しもが聖人ではないのですから……」
などと答えたりするものだから、ただの俗物とも言い難い、なんとも言えない風格の持ち主であった。
ともあれ……である。
少し変わっていて、大変、おおらかな人でもあって……割と細かいことはどうでもいいと考えがちな人であることは確かであった。
だから、娘の肖像画が、ちょっぴりキラキラしてて、その服が珍妙なものであったとしても……。
「あら、綺麗ね。素敵じゃないかしら？」
ぐらいで、流したりするのだ！
まぁ、さすがに、人魚姫Ｖｅｒの時には、
「んー、少し露出が多すぎるわね。お腹とか出てるし……。これは描きなおしたほうがいいでしょうね」
と意見してくれたので、娘のことを気にしていないわけではないのだ。きちんと、言ってくれるのだが、その動き出すまでがとても長いというか……。
ラフィーナは、その肖像画をジッと見て、母が止めてくれるかどうか大いに検討した後……。
「このぐらいなら……オーケーを出してしまいそうだわ。お腹も、出てないし……」
この肖像画の恥ずかしさは露出の問題ではない。この、過剰にキラッキラした、珍妙なデザインのせいなのだ。

いや、よくよく見ると服装だけじゃなく、この髪型も微妙に恥ずかしいような……。
「ちなみに……もう少し、こう、全体的に抑え目な、普通なデザインには……」
「どうも、フィーリングに身を委ねるタイプだとのことで……筆が赴くままにしか描けないとか……」
「そう……」
ラフィーナは、大変、悩ましげな顔をしてから……。
「ええと、私としては、この……最初のやつ……あの『スペシャルレア天使バージョン』のが、気に入りました。やはり、人々もあまり斬新なものより、恒例のもののほうが気に入るのではないかしら？」
かくて、ラフィーナの意向を受けて、今年の肖像画のデザインは決定するのであった。

第三十一話　原点回帰を促して

セントノエル学園の生徒会選挙は、全二十日間にも及ぶ長大な儀式だ。
それは、選挙を通し、生徒会長を誰にするか、神の御心を問うための儀式なのだ。
その期間は、厳粛な開会ミサによって始まる。
厳かなオルガンと学園付き神父による神聖典の説き明かし。その後、現生徒会長による開会宣言がなされることになっている。
名前を呼ばれたミーアは静かに立ち上がり、壇上に進む。
みなの視線を一身に受けたミーアは、かつての生徒会長選挙を思い出し、なんとも言えない懐かしさを覚えた。
――うふふ、あの時は、緊張しましたわね。
胸に芽生えた思いを噛みしめながら、
「みなさん、ご機嫌にょ……」
セリフまでも噛みしめた（噛んだ！）。
けれど、そこはミーア。慌てず、騒がず。何事もなかったかのように、続ける。
「……などと、このように挨拶の言葉を噛んでしまうぐらいに、みなさまを慌てさせてしまったのではないかと、わたくし、危惧しておりましたのよ？　次期生徒会長選挙に立候補しなかったことで、みなさまを驚かせてしまったのではないかと心配しておりましたの」
まるで、わざとですよぅ、という笑顔でミーアは言った。
それに合わせて、みなの顔に小さな笑みが広がる。みなをリラックスさせるための、ミーア式のジョークだと思ったのだろう。
「今日は、生徒会長選挙の開会を宣言すると同時に、そのあたりのことも少しだけお話ししたいと思っておりますわ」
一度、言葉を切って、目を閉じてから、ミーアは続ける。

「この大陸に迫りつつあった危機、天候の不順と穀物の不作、それによって起こり得る大飢饉……そして、その対策……。わたくしは多くの方に声を届ける必要があった。いわば必要に迫られて、みなさまに声を届けるために、今日まで生徒会長の座を務めていた、といっても過言ではございません。けれど、その役割ももうおしまい。みなさまには、わたくしの考えを余すところなく伝えることができたと、わたくしは信じておりますわ。ゆえに……生徒会長を、本来の形に戻そうと考えていますの」

それから、静かに目を開けて、ミーアは言う。

「では、本来の形とはなにか？　そんなの、決まっておりますわね、そう……ここはセントノエル学園。その役割は教育を施すこと。後継者を育成することが、セントノエルの意義。であれば、生徒会長という役職もまたしかり、ですわ」

ここまでは、生徒会役員に語ったのと同じである。

けれど、ミーアとしては、さらに突っ込んで言っておきたいことがあった。

「わたくしには、この方が次の生徒会長になればいい……という考えはございますけれど、それが受け入れられるかどうかは神のみぞ知ること……。それこそが、この選挙というものですから。ですから、今は誰を推薦する、とは申しませんわ」

ここで、自身が推すレアの名を出すのはルール違反になる。それ以前に、やり方としても、嫌われる可能性が高い。ゆえに、そのことにはあえて触れず、むしろミーアが言っておきたいのはここから先のことだった。

「今、ここに二人の候補者が立てられておりますわ。一人は、ヴェールガ公国出身の新一年生、リオネル・ボーカウ・ルシーナさん。もう一人は、同じくヴェールガ公国出身で、リオネルさんの妹さんである、レア・ボーカウ・ルシーナさん」

名前を呼ばれた双子が、一瞬、驚いた顔をするも、すぐに生徒たちのほうに顔を向け、小さく頭を下げる。

「わたくし、みなさんにお願いしたいことがございますわ。それは、お二人のうち、どちらが選挙で勝ったとしても、先輩として、教え、支えてあげていただきたい、ということですの」
そう……。ミーアは……危惧していた。
レアの能力に関しては疑っていないものの、万が一、失敗した場合、その責任はレアと、彼女を推薦した自分にかかってくる。
それは……できれば避けたい。
できることならば、一年生を生徒会長に推薦するとかいう無茶なことをやらかした自分に……、ではなく、みんなで、分担して責任を取ってもらいたい。ぜひ、そうしたい！
ということで、ミーアは、高らかに言う。
「そんなわけですから、わたくしたちみなで、新しい生徒会長を支えていく。間違いに気づけば、きちんと話し、教える。それこそが、わたくしが、みなさまに望むことですわ。セントノエルの先輩に相応しい働きを、期待しておりますわ」
そう言ってから、ミーアは厳かな声で続ける。
「これより、セントノエル学園、生徒会長選挙を始めます」

さて……ミーアの言葉を聞いた時、在校生たちは、一様に首を傾げた。
なるほど、後継者を育てたい、というミーアの考えはわかった。しかし、それでは、ミーアは、なぜレアを生徒会の他の役職にしなかったのだろうか？　と。
それは、誰しもが思うことだった。だって、それが自然な流れだから。
最も、失敗の少ないやり方だから……。
いったいどういうことだろう……？　っと、ミサが終わり、教室に帰った後も疑問はくすぶり続ける……かに思えたが、そうはならなかった。
何人かの勘のいい生徒たちが、気が付いたからだ。

「なんだ、お前ら、まだわからないのか？」
訳知り顔の彼や彼女は、思い思いの言葉で、こんなことを言った。
「誰か、他にも生徒会の経験なく、会長の座に就いた者がいなかったかな？」
疑問の答えはすぐに出る。
そう、他ならぬミーア自身がその経験者だったのだ。
であれば……これはどういうことか？　そんなの、考えるまでもない。
「ミーアさまと同じ境遇を体験させることで……レアという少女に何かを教えようとしている、ということか」
それならば納得である。その狙いまではわからないが、今までのミーアの実績を考えれば、まさか、なにも考えていなかったはずがない。きっと深い洞察があるに違いない。
そういうことならば、自分たちも協力しよう、と、ほとんどの者たちは一応の納得をすることになるのだが……。
けれど……後に、彼らは気づくことになる。
それは、レアに対しての教えだけではなかったということに。むしろ、自分たちに対してこそ、ミーアは教えようとしていたのではなかったか？　ということに。
卒業し、領地に戻った彼らの多くが、その後の人生でこうつぶやくことになった。
「ああ……そうか。そうだった。確かにセントノエルで、我々は、学んだのだった……」
それは、家臣から、忠言を、時に諫言を受けた時のことだった。
若き領主への遠慮がちな忠言、それを聞いた時に胸に生じかけた小さな怒り……。されど、その瞬間を狙って、まるで自身を咎めるように頭を過ったのはセントノエルでのことで。
そもそも、セントノエルとはなにか？　そこは各国の次世代を担う、王侯貴族の子弟を教育する場所だ。
それゆえ、生徒会長の立場はかなりの力を持ち、その分、重責も

負うわけだが……されど、学生であるがゆえに、ミスも許されるものなわけで。
生徒間で多少のもめ事が起きたとしても、大目に見てもらえるわけで……。
「生徒会長と、その行動を咎める我らという関係性で、ミーア姫殿下は、仕える者の心を学ばせようとお考えになったのか……。我々が卒業し、爵位と領地を継ぐ時のことをお考えになっていたのか」
レアに進言した者は、その時の気持ちを忘れずに国に帰るだろう。そして、同じように自分が進言を受けた時、きっと思い出すだろう。自分がどんな気持ちでそれをしたのか……。自分たちが新しい生徒会長を、どんな目で見ていたのか、と。
翻って考えるだろう。
自分は家臣たちからどのような目で見られていて、家臣はどのような気持ちで、この進言をしているのか、と。
彼らは、そうして思い知るのだ。
ミーアが成そうとしたことの意味を。
すなわち、あの生徒会選挙は、本当の意味で「大陸の次世代を担う王侯貴族を育て上げるための策」すなわち、セントノエル学園を原点回帰へと向かわせるための策であったのだ、ということを。
同時に、彼らは思うのだ。
何度でもあの場所に帰ろう、と。
セントノエルでの日々は、あそこで学んだ多くのことは……すべて、人の上に立つうえで大切なことなのだから。
あの帝国の叡智が、そう教えようとしたことなのだから、と。

第三十二話　ミーアの油断と野菜のケーキ

かくして、選挙戦が始まった。

レアが選んだ戦略は、ミーアの思惑通り、現生徒会の政策の継続だった。

それに対して、ミーアが立候補しないことで、大義名分を失ったリオネルであったが、すぐに軌道修正をかけてきた。

「ミーア姫殿下が、我が妹レアを生徒会長として立てようとしているのは、レアの実力が不足しているからです。そのレアに力を貸す形で、自らの影響力を維持したい、ミーア姫殿下の思惑がそこに見て取れます。このようなことを許してはいけません」

それは、当初の構想であった反ミーアの者たちを支持の中心に置くという基本は変えずに、さらにレアの能力不足をも主張していく形だった。

選挙対策本部として借りた教室にて。ミーアは唸り声を上げていた。

「つまりは、わたくしとの全面対決の感じを崩したくないわけですわね。ふぅむ……」

「ミーアさまの存在は、とても大きいですから、旗印にしたくなるのは仕方ないと思います」

そう話すのは、かつて、ミーアの選挙活動を一番に支えた、ティオーナだった。

「味方であっても、敵として対峙するにしても、使わない手はないです」

「そ、そう……ですのね」

前時間軸で、革命軍を率いた彼女に、そう評されるのは……若干、微妙なところがあるミーアであったが……。

――というか、敵として代表者扱いされた挙句、断頭台送り、な

どと言うのは、あまり嬉しくないのですけれど……。
まぁ、それはさておき。
「当初の構想にしがみつく、と言えば頑固者のそしりを免れないところだが。一方で、急な作戦変更は混乱を生む。もしそう考えてのことならば、リオネル少年は、なかなか侮りがたいかもしれないな」
腕組みして、シオンが言う。同意するようにアベルが微笑み……。
「そうだね。もっとも、自分自身の構想に固執して全軍を崩壊に招いてしまう、なんてこともあるから、どちらがいいとは一概には言えないが……。ちなみに、レア嬢、君のお兄さんのタイプ的にはどちらだろうか？　考えたうえでのことか、それとも思考停止ゆえの頑固さか……」
突然、話を振られて、レアは、あわわ、っと口を動かした。
「あ、あの、え、えっと……その……」
こんな具合で、レアは、時折、緊張で言葉が出なくなることがあった。ミーアは彼女を落ち着けるように穏やかな声で言う。
「大丈夫ですわ。レアさん。ゆっくり、考えをまとめてからで……。ああ、考えをまとめる時間が欲しければ、お茶菓子など食べながらでも……」
きょろきょろ、とテーブルの上を探すミーアであったが……あいにくと、ちょうど今、アンヌが用意しに行っている時だった。
ごく自然に、お菓子を口に運ぶ流れを作り出したミーア、思わずしょんぼりする。
一方で、レアは目を閉じて考えていたが……。
「そう、ですね。兄は、確かに頭がいいと思います。私よりも、ずっと……。でも、ミーアさまを敵として、支持者を固めるという構想は、父から言いつけられていることだと思います」
難しい顔で眉間に皺を寄せるレアである。
「ふぅむ、噂のルシーナ司教ですわね。以前からわたくしを敵視しているという……。しかし、どこかで、恨みでも買うようなことがあったかしら……？」

基本的に、ミーアは、ヴェールガとは仲良くしていたい人である。自国の教会の神父や、ガヌドスのヨルゴス神父あたりとも友好関係を築けていたはず。
孤児院への寄付や、配慮も欠かしたことはないのだが……。
「知らぬ間に誰かの恨みを買ってしまうということもあり得ますけれど……ふーむ」
っと、唸っていると、レアが慌てて首を振った。
「いえ、その……、ミーア姫殿下を完全な敵として見ている……というのとも少し違うかもしれません。父は、ミーアさまのされたことを褒めていましたから……」
「あら、そうなんですの？　それは、意外ですわ」
思わぬ言葉に、瞳を瞬かせるミーアである。
「はい。帝国でされたこと、食料支援の体制作りや、セントノエルでの言葉なども、すべて興味深く、感心して読んでいたように思います」
「ふむむむ……」
ということは、どこかに妥協点が見出せるだろうか……？　と、ミーアは首をひねる。
――それに、レアさんのことも気になりますわね。選挙自体には、たぶん勝てると思いますけれど……。
司教帝と言う災厄になってしまうのは、ルシーナ司教でもリオネルでもない。レアなのだ。
ミーアが一番しなければならないのは、レアが司教帝になるのを防ぐことだ。それはなんとしてでも避けたいところなのだが……。
――今のところ、その傾向は見当たらないのですわよね。このままで良いものか、どうなのか。
腕組みしたミーアは、ウームウーム、と唸りつつ、考え、考えて……昼食分のエネルギーが頭脳活動によってすっかり消費されそうになったところで……。
「どうぞ、みなさん。お茶の用意ができました」

アンヌがおやつを引き連れて戻って来た。
「おお……。お待ちしておりましたわ。やはり考え事をする際には、お菓子が必要ですわね。どうもありがとう、アンヌ」
今日のお菓子は、料理長考案の寒月キャロットのケーキだった。寒さに強い冬野菜である寒月キャロットを使ったケーキは、素材本来の自然な甘みを生かしたものである。
フワフワした舌触りもさることながら、やはり、この素朴な味には好感が持てる。
フォークで、すっすっと三口大に切った生地を一口。モグモグした後、ほわぁっと笑みを浮かべて。
「うふふ、やはり料理長のレシピは素晴らしいですわね。どうかしら、レアさん」
「とても美味しいケーキですね」
ニコニコ微笑むレアの顔を見て、ご満悦のミーアである。
「そう言っていただけると嬉しいですわ。やはり、美味しいケーキは誰かと一緒に食べてこそ、ですわね」
良いものを相手に勧めて、喜んでもらうのは、やはり嬉しいこと。ついでに、仮に食べ過ぎたとしても、怒られるのを分散できれば言うことなし！　なのだ。
「それにしても、ケーキと言えば、パン・ケーキ宣言を思い出しますけれど、ミーア姫殿下の演説は、すごいですね」
不意に、レアが感心した様子で言った。
「あら、そうですの？」
「はい。あんな素晴らしい内容のことを堂々と人々に声を届けるなんて、私にはとてもできないことです。私、緊張して上手く話せなくなってしまうので」
などと言うレアの言葉を、半ば聞き流しながら、ミーアは思っていた。
――まぁ、とりあえず、レアさんの選挙公約は妥当なものですし。演説をしていただいて、わたくしたちがそれをサポートする。堅実

にしていれば、勝てるのではないかしら？
そんなことを安易に思っていたミーアであったが……。

第三十三話　誰もがミーアのようではなく……

さて、選挙公約も早々に固まり、それを表明すべく、レアは各教室を回ることになった。

ミーアも応援サポーターとしてついて行くことになっている。

――正直、わたくし自身がついて行くと、えこひいきと言う感じが出てしまうかと思いましたけれど……リオネルさんの言葉を聞いていると今さらですわね。

彼は、ミーアがレアを全面的に応援し、影響を与えるとして訴えている。ならば、今さら距離をおいても仕方ない。開き直って全力で応援するつもりである。

その、つもりであったのだが……。

「では、レアさん、高等部の三年生から行きましょうか。みなさん、優しい先輩方ですから、リラックスしていきましょう」

そう言って、レアの肩を叩く。っと！　瞬間、レアがびっくーんっと跳びあがった。

「なっ、どっ、どうしましたの？　レアさん」

驚いて問いかければ、レアは、は、はひ……っと返事をして……。

「あ、え、あ、ぅ、いっ、行って、きます」

ぜはーぜはー、っと息を吐き、胸に手を当てるレア。それから、両手両足の動きを揃え、ギクシャクと教室の中に入っていく。それを見て、ミーアは、若干の不安を拭えなかったが……。その不安は見事に的中することになった。

教室前方に出たレアは、その場に集う生徒たちを見て……。

ほわわ、っと口を動かした後、ぶんっと頭を下げ……。

「み、みなさん、は、はじめまして。レア・ボーカウ・ルシーニャ……」

噛んだ……。盛大に、噛んだ！

レアは、再び、あわわ、っと唇を震わせる。その顔が見る間に青くなっていき……そして、
クラァッと横に倒れそうになった。
「う、ううん……」
「レアさん！？」
ミーアの悲鳴、直後、咄嗟にレアに駆け寄ったのは、アンヌだった。ミーアの右腕は、極めて忠実にレアが倒れるのを防ぎつつ、さっとミーアのほうに視線を向けてきた。
『どうしますか！？　ミーアさま！』
視線で訴えかけられ、ミーアは……、
――え？　これ、どうすればいいのかしら？
目をグルグルさせる。今回、ミーアとしては、レアが話した後に、レアを礼賛することしか、考えていなかったわけで……。
「み、ミーア姫殿下、これは？」
クラスの生徒たちが不思議そうにミーアを見つめていた。その内、何人かは、心配そうにレアのほうを見つめていて……、ミーア、咄嗟にそこに活路を求める！
「あ、ああ、ええと、レアさんは、その、あまり体が強くないようで、時折、体調が優れなくなるようですの。ぜ、ぜひ、みなさま、支えて上げていただきたいですわ。お、おほほ」
っと、レアに対する同情票に繋げんとフォローしつつも、ミーアは教室から撤退した。

ほどなくして、レアは目を覚ました。
「申し訳、ありません。ミーア姫殿下。私、緊張してしまって……」
しょんぼり、小さく肩を落とすレアに、ミーアは優しい笑みを浮かべつつ。
「ええ、まぁ……その、こういうことも、ございますわ、ね……うん」
そうは言うものの、内心で頭を抱えていた。

――こっ、これは……想定外でしたわね……。
レアの顔を見ながら、思わず考え込んでしまう。
基本的には小心者なれど、いざみなの前に出ると途端に肝が太くな（ＦＮＹ）るミーアである。されど、誰もが、ミーアのようであれるわけではない。あるいは、生まれながらにして威風堂々としているシオンやラフィーナのようであるわけもなく。
みなの視線に晒されると、緊張して体が縮こまってしまう、レアのような少女は、むしろ、普通なのだろう。
なにしろ、彼女が対峙するのは、ただの民衆ではない。この大陸の有力貴族の子女であり、なおかつ、そのほとんどがレアよりも年上なのだ。
――けれど、何とかしなければなりませんわね。生徒会長になれば、おのずと、全校生徒の前に立つ必要も出てきますし、訓示を垂れる機会だって増えることでしょう。
ラフィーナの場合には、神聖典の講解説教なども行っていた。ヴェールガの司教の娘が生徒会長になれば、似たような役割を期待されるかもしれないし、いずれにせよ、生徒たちに言葉を届け導く勤めを負うのだ。
ちなみに、一方のリオネルのほうも、緊張はしてるのだろうが、それを押し隠して、人前で話せるだけの胆力はあるらしい。無難に、選挙演説を続けていると聞くし、そういう意味では、彼のほうが生徒会長の資質があると言えるのだろう。
――選挙演説で、この調子だと少しまずいかもしれませんわね。
いかに、レアの政策が無難な物であっても、それを伝えることができないのであれば意味がないわけで……、
――まぁ、仮に生徒会長になれなかったとしても、リオネルさんが上手くやってくれれば司教帝の出現は防げるはずですし……どうとでもな、る……？。
っとミーアが低きに流れそうになった、まさにその時だった。不意に、ミーアの脳裏にラフィーナの笑顔が浮かんだ。それは、涼や

かな――獅子の笑みだった！
瞬間、ミーアは悟る。あれ……これ、まずいんじゃあ？　と。
そうなのだ。ミーアは、すでにラフィーナに手紙を送ってしまったのだ。
レアに生徒会長を譲るのを納得してもらうため、全力で、レアが生徒会長になることが、さも素晴らしいことのように……。
――ラフィーナさまと共に学園に築いてきた大切なものを継承するために……とか、ついつい、筆の乗るままに書いてしまいましたわ！
そう、上手くいっていたから……選挙で勝つことなど当然といった感じだったから……上手くいきすぎて、いたから……、ついついさらさらーっと書いてしまったのだ。
――ああ、そう、そうですのね。わたくし誤解しておりましたのね……。レアさんが生徒会長になるのは、現状では、唯一の安全策でしたわ。
実際は、まぁ、滅多なことは起こらないとは思うのだが……なにがおこるかわ駆らないのが、歴史の流れというもの。
そして、こうするのが絶対に安全と思える道があるならば、そこを全力で駆け抜けることこそが、小心者に相応しい戦略で……。
――そうですわね。なんとかするしか……ないですわね。
ミーアは、静かに覚悟を決めるのであった。

第三十四話　声が届く幸福

レア・ボーカウ・ルシーナに、混沌の蛇がもたらした福音、それは、彼女の餓え乾いた心を満たす肯定感だけではなかった。

彼女を革新的に変え、その能力を飛躍的に向上させたもの、それは「他人とのコミュニケーションなど、一つの駆け引きにすぎない」という、極めてドライな認識だった。

レアは、他人との接触を苦手としていた。

笑顔で会話をしていても、どこか、心から笑えないような……意識的に表情を取り繕っているような、気が休まらないような、気恥ずかしくて落ち着かないような……。そんな感覚が常に彼女に付きまとっていた。

人々の心を癒し、導く、司教の娘に自分は相応しくないのではないか……と、いつしか彼女の胸にはそんな想いが芽生えていた。

そんな彼女の葛藤をさらに大きくしたのは、双子の兄、リオネルの存在だった。

常に胸を張り、堂々と振る舞う彼に、レアはいつでも劣等感と、圧倒的な敗北感を覚えてきた。リオネルはいつでも、レアを気遣ってくれた。兄らしく、レアを守ってくれた。けれど、その都度、レアの心にはじくじくと敗北感が募っていく。

それに、父がリオネルを認めていることも、彼女の敗北感を大きくした。

兄は父の後継者、対して自分はただ『与えられる者』であった。気遣われ、守られる、弱き敗北者であった。

それが、口惜しかった。

与えられるだけなら、守られるだけなら、それなら、いったい自分は何のために、この世界に生まれてきたのか？

そんな疑問が、いつでも彼女の心に付きまとい……されど、彼女

はそれを呑み込んだ。
自分より正しく、決して間違うことのない父が、兄が、自分のことを思い、歩くべき道を用意してくれている。それならば、その道を誠実に、一歩も外れることなく歩くことが、自分にできるせめてものことではないか？　と。
そんな時、転機は訪れた。
父の思惑に反して、兄が生徒会長選挙で破れたのだ。それは、彼女の常識を揺るがすような、大きな事件であった。
そして……彼女が砕かれた常識を再構成する前に、蛇はやって来た。
きっかけは、セントバレーヌの神殿に持ち込まれた一冊の本。禁書だというその本は、ヴェールガ本国に送られる予定だったものだが……、何気なく、レアはそれを読んでしまった。
そこには、驚くべきことが書かれていた。
「人と人が言葉を交わすのは、交渉のため。相手を自分の都合の良いように動かすため。言葉が、本物である必要はない。相手の言葉から感情を読み取り、最適の言葉を計算によって割り出せ」
その認識は、彼女にとって、紛れもない福音であった。
他者との接触の都度、心を騒がす苦しさも、居たたまれない気恥ずかしさも、自分自身が取るに足らぬ小さな者だという劣等感も、すべてを一歩引いて、客観視することができた。
――そうか。しょせん、失敗したとしても相手との関係が途切れるだけ。成功すれば、相手から有利な条件を引き出せるし、失敗したって、それができないだけ。ならば、なにを恐れる必要があるだろう？
それを足掛かりに、彼女は常識を再構成する。
すべてのことに、意味などないのだ。
司教の娘に相応しくない、と思っていたけれど、そもそも、相応しいも相応しくないもない。そんなこと考える意味もないし悩む価値もない。

そうして、いろいろな物の意味を殺し、殺して、最後の最後に残ったのは、ただ、認められたいという、根源的な渇望のみだった。
それこそが、司教帝レアと言う人の、心の中心だった。

さて、教室で倒れたレアは、そのまま食堂にやってきていた。
医務室に行こうとするミーアたちをレア自身が止めたのだ。
「あの、実は、朝から何も食べていなくって……」
などという口から出まかせを、信じているのかいないのか、ミーアは、
「まっ！　それはよくないですわね。それではすぐに食堂に参りましょう」
そんなことを言った。
そうして、食堂の椅子に座り、レアはしょんぼーりと肩を落とす。
――また、やってしまった。せっかく、ミーア姫殿下は、私を見込んで生徒会長に推薦してくれたのに……。
「あの、レアさま、これを……」
気遣わしげな声に顔を上げれば、ミーアのお付きのメイド、アンヌが温かい紅茶を持って立っていた。
「気分が落ち着きますから……」
「ありがとう……ございます」
うつむいたまま、ジッと紅茶を見つめる。優しくしてもらっている。だけど、だからこそ、それを素直に受け取ることができなくって……。紅茶のカップを、ただ手に持ったまま、レアは唇を噛んだ。ふがいない。与えられるだけの自分……。
生徒会長には、やっぱり相応しくない。
レアは意を決して、ミーアのほうに目を向けて……。
「あの、ミーアさま、私は、やっぱり生徒会長には……」
「ふふふ、なにを言っておりますの？　一度や、二度の失敗ぐらい、なんともありませんわよ」
そう言って笑ってくれるミーアだったが、レアの気持ちは、まっ

たく晴れない。むしろ、より深く沈んでいく感じがした。ミーアの期待が重く、苦しい。
あんな失敗をしてしまった自分にはとても、生徒会長なんか勤まりはしない。
レアは、思わず笑いたくなる。
なんのことはない。兄も、父も、正しかった。
きちんとレアのことを考えていてくれていたのだ。考えて、最善になるようにしてくれたのだ。にもかかわらず、自分は……。
「レアさん……。大丈夫、大丈夫ですわ」
「どうして、ですか……？　どうして、大丈夫だなんて言えるんですか？」
つい、声が尖ってしまう。失敗したのに、どうして、大丈夫だなんて、無責任なことが言えるのか、と。
「そう……ですわね」
ミーアは、ううむ、っと唸ってから、いつの間にか、テーブルの上にのっていたクッキーに手を伸ばした。それをパクリ、サクリ、むぐむぐしながら、しばし黙考。その後、
「前にも言ったとおりですけれど……補足するのならば、口が上手い人間が生徒会長に向いているとは、思わないからですわ。口が上手く、他者の心に訴えかけるのが上手い者がいたとして、その心が邪悪ならば、かえって、それは将来への禍根になりかねない」
それは、先日もミーアが言ってくれたことだけど、でも……。
「わたくしから、あなたに助言できることがあるとすれば、一つだけですわね。それは、失敗しようと、諦めずに話しかけ続けることですわ」
どこかで聞いたことのある言葉。しょせんは綺麗事。そんなものは、レアの心には響かなくって……。レアは、手に持った紅茶をテーブルの上に置こうとして……。
「相手が、話を聞いてくれる方だということを感謝して、ね……」
その言葉に、手が止まる。

「……どういう、意味ですか？」
「言葉を通して、自分の考えを伝えることができること、相手がちゃんと聞いて、それを吟味してくれること……それは、決して当たり前のことではない、ということですわ。そして、相手が話を聞いてくれるならば……別に、ちょっと言い間違えたところで構いませんわ」
ミーアの言葉には、不思議な力があった。
それは、まるで……心から語り掛けても、話を聞いてもらえない、そんな経験をしたことがあるかのような、そんな物言いだった。
「でも……さっきみたいなことがあったら、みんなから失望されて……」
その言葉に、ミーアは苦笑いを浮かべた。
「失望されても、取り返せる。あの程度、大したことありませんわ。ただ、もう一度行き直せばいいだけのこと。もう一度、誠実に、伝わるように話せばいい。わかってもらえるように話し直せばいい。それだけですわ」
それから、ミーアは肩をすくめてみせた。
「それで、レアさんの考えを理解したうえで、反対されたら、それは仕方のないことでしょう？　それが選挙というものですし。ああ、それと、選挙でないのであれば、きちんと相手の考えに耳を傾けることも必要ですわ。自分の考えを理解してもらい、相手の考えを理解する。そのうえで、最善の道を探ればいいのですわ」
ミーアは、うんうん、と頷いて、
「もう一度言いますけれど、一度、あのように失敗したからと言って、やり直せないなどと言うことは決してございませんわ。焦らなくっても大丈夫。むしろ、噛んだら、照れ隠しに笑ってやればいいですわ。レアさんは可愛いのですし、それも魅力としてアピールできるかもしれませんわ」
真剣に話を聞いていたレアは、急に、可愛いなどと言われて、思わずのけ反る。

「え、あ、あの、可愛いとか、そ、そういうのは……あ、あの……。そ、それより、ミーア姫殿下も、そうされてきたんですか？　やっぱり、そんなふうにやり直したりすることもあるんですか？」
レアの知る、ミーアという人は極めて頭の良い人物だ。
なにしろ、自らの父が認め、聖女ラフィーナが友と呼ぶ人だ。そんな人が、間違えてもいいとか、やり直せるといっているのは、もしかしたら、口から出まかせ、ただ言葉だけのことなのではないか、とか……ひねくれた自分が言っていて……。だけど、そう問いかけた時のミーアは、なんとも言えない不思議な表情を浮かべて……。
「ふふふ、そうですわね。わたくしは、未だやり直しの道半ば、と言ったところかしら？」
そうして、ミーアは小さく首を振った。
「あなたは大丈夫ですわ。レアさん。まだまだ、やり直すことはできるし、いつだって、やり直せる。だから、落ち着いていただきたいですわ」
ありふれた言葉のはずなのに……どうして、こんなにも説得力があるんだろう……、とレアは小さく首を傾げるのだった。

第三十五話　ついに……

その日、ルードヴィッヒは、自らの執務室で仕事をしていた。
ミーアの片腕として政治全般に関わるようになってから、ルードヴィッヒの立場は、いささか、微妙なものになった。
未だ、その所属は金月省であるものの、その仕事の幅は、一月省に留まらない。皇女ミーアから全権を委託された彼は、どちらかと言うと皇女ミーア直属の文官と言う扱いであり、小宰相などと呼ぶ者もいるほどであった。
あまりその状況を好ましく思わない者もいたが、ルードヴィッヒとしては構ってもいられない。ミーアの思惑を実現するためには、遠慮などしている暇はないのだ。
そんな彼は、現在、金月省のほど近くに建物を用意し、そこで政務にあたるようにしていた。
表向き、そこは、特別行政区である新月地区の税体制を整えるための、金月省の特命機関という扱いになっている。
後の世に、新たなる月省「紫月省」と呼ばれることになる機関である。
そんな建物に、その日、来客があった。
フォークロード商会の長、マルコ・フォークロード、ミーアの友人クロエの父にして、今は帝国の食料事情を支える重要人物である。
「これは、マルコ殿、しばらくぶりですね」
笑顔で彼を迎えたルードヴィッヒは、挨拶もそこそこに、早速、本題に入る。
「それで、いかがですか？　他国の状況は……どこかで、飢饉の兆候はございますか？」
「いえ。小麦の不作と、それに伴う食料不足の傾向は確かにありますが、それでも、各国ともに持ちこたえている、といってよいでし

ょう。我々のほうに助けを求めて来る国もございますが……大まかに言えば、食料は足りています。しかし……」
と、そこで、マルコは黙り込んだ。
「なにか、問題がありますか？」
眼鏡を軽く押し上げて、ルードヴィッヒが問う。っと、
「噂は、どこからともなく広まっていくもの。小麦の不作への不安感は、やはり高まっているように感じます」
民衆は食料不足を知らない。できるだけ知らせないように、取り計らったのだ。
流通の混乱が飢饉を生む。それゆえに『普通』の維持こそが肝要、とミーアが方針を定めたゆえである。にもかかわらず……。
「流通が、きちんと動き続ければ、この不作は乗り越えられる。そのようにミーアさまが取り計らわれました。我ら商人はその辺りを肌で直接感じ取ることができるが、人々はそうではありませんので……。だからといって、現状を素直に明らかにしてしまえば、やはり、不安感から暴徒を生みかねない」
「難しいものだ……」
ルードヴィッヒは思わず、天を仰ぐ。
商家に生まれたルードヴィッヒの思考は、どちらかと言えば、商人のものに近い。
数字に忠実な合理主義者、いかに心に不安があれど、理を優先させることができる。感情を、ある程度は客観視し、切り離して考えることができる。
ゆえに、いかに不安であれど、計算によって足りると導き出せるのであれば、それを信じることができた。が……誰もがそうであるわけではない。不安が合理的結論を上回り、略奪が起こりかねないわけで……。
「ミーアさまへの信用、それこそが、おそらくは鍵でしょう」
不安感を上回る、ミーアへの信頼、それさえあれば乗り切れるであろう、とマルコは断言する。けれど……。

「帝国内では、帝国の叡智の名は、すでに知られたもの。だが、ヴェールガ公国並びに、その南にある諸国の民にとっては、まだまだミーアさまの名は遠い、か」
商人たちは、ミーアネットの存在を知り、驚嘆しているものの、人々には直接関係はないのだ。むしろ、食料不足の危機下にあっては、自分たちの港、セントバレーヌから、食料を奪っていく者……と言う見方をする者すらいるかもしれない。
「セントバレーヌが近くにあれば、海産物や海外からの食料輸送も比較的容易だ。彼らは、ミーア姫殿下の恩恵に、直接的には与っていないのです」
マルコの言葉に、ルードヴィッヒは思わず唸ってしまう。
「なるほど。ミーアさまのことをあまり知らない者にとっては、ミーアさまの訴えは、却って不安感をあおるものである、と」
深々とため息を吐いてから、ルードヴィッヒは首を振った。
「遺憾ながら頷ける状況ですね。不安とは、具体的正体のない、されど、放置すれば見る間に大きく膨らみあがる厄介な代物……。さて、ミーアさまは、その辺りをどうお考えだろうか……」
まったく、考えていないはずはないだろうが……。
ルードヴィッヒは遠くセントノエルにいるミーアのことを思う。
「信用を得るのは、容易なことではない。となると、もしかすると、我々が思ってもみなかった方向で、策を練っておられるかもしれないな」
いつだって、ルードヴィッヒらの想像を超えていく。それこそが、帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンである。
「農作物の不作は、もうしばらく続く。ならば、人心の安定は絶対に必要なこと……。どうやって……」
マルコと別れて後、ルードヴィッヒが向かったのは、白月宮殿の大図書館だった。
なにか、ヒントはないものか……。分厚い本を眺めていると……。
「あ、ルードヴィッヒさん」

突然、声をかけられた。視線を向けると、そこには眼鏡の少女が立っていた。
「ああ、君は……確か、ミーア姫殿下のお抱え作家の……」
「はい。エリス・リトシュタインと申します」
エリスは小さく頭を下げてから、
「図書館に、なにか御用ですか？」
「いや。少し考え事をね。君のほうは執筆かな？」
「はい。アンヌお姉ちゃんに、原稿を届けてもらおうとしていたところです」
そうして、エリスはニコリと微笑んで、
「ようやく、一冊分がまとまりました。これならば、本にしても問題なさそうです」
差し出された紙の束……。それは、貧しい王子と黄金の竜の、第一巻の完成原稿だった。

第三十六話　ミーアはそっと自らのこめかみに触れ……

「レアさん、大丈夫、大丈夫ですわ」

どうどう、っと、手を動かしつつ、ミーアは、課題を素早く整理するために、目の前に用意されていたお茶菓子に手を伸ばす……お菓子を食べるために、考えて、カロリー消費をしようとしたわけではない。念のため。

ミーアが手を伸ばした先には、大きなお皿が置かれていた。それは、ミーアとレアの真剣なやり取りに気を使ってか、アンヌがこっそり用意してくれたものだが……バッチリ視界の外れで、捉えていたミーアである。

ちなみに、今日のオヤツは薄いクッキーに、バターと甘い豆のペーストがのったものだった。

サクリ、ホロホロリと口の中に溶けるクッキー生地、その味は仄かに塩気を感じるもの。そこに、濃厚な甘味を持った豆ペーストのトロリとした舌触りと、サラリと舌の上で溶けるバターのコクのある味が合わさり、実に味わい深いものとなっている。

――これは……ただのクッキーより数段上のお味……実に素晴らしいですわ。うんうん。

その極上の味は、ミーアの頭を覚醒させ、クリアにし、伝えるべきことを明確にしていく。

――問題は、レアさんが、選挙演説を難しく考え過ぎていること……かしら。もしかして、レアさん、絶対に間違えないように、とか、考えていたりしないかしら？

ミーアは経験上、知っている。

そちらに向かって行っては駄目だ駄目だ、と思うほど、そちらに向かって行ってしまう法則があるのだ。馬に乗っている時など、特にそうだ。そっちに行くと泥が跳ねて服が汚れちゃうなぁ、嫌だな

ぁ、嫌だなぁ、と思っていると、大抵、馬がそちらに向かって行って泥の中に突っ込む羽目に陥る。
ちなみに、その傾向は、荒嵐に乗っている時に、より顕著に表れるのだが、まぁ、それは些細なことである。
ともかく、ミーアは思うのだ。
――間違えたらダメだと思えば思うほど、間違えてしまうものなのですわ。であれば、むしろその逆。間違えたっていい、と思わせることが大事ですわね。
ミーアは腕組みし、偉そうな顔でレアに言ってやる。
「間違えたって、やり直しができますわ」
そのぐらいの気持ちでいたほうが、むしろ間違えずに済むのだ。にもかかわらず、深刻に考えすぎるから、ドツボにはまってしまうのだ。
……そもそも、そんな必要はまったくないのだ。だって、ここはセントノエルで、今は平時なのだから。
目の前の人々が、一切話を聞かずに暴徒化することもなければ、腐った卵を投げつけられることもないではないか。
一言でも言い間違おうものなら……というか、そもそも、言葉を間違えなくたって、殺気立ち剣を振り上げる連中を相手にすることに比べれば、なんと平和なことだろうか？
仮に言い間違えても、笑ってくれるのだ。
ミーアは、数多、自身が行ってきた演説を思い起こし……つくづく思う。
「相手が話を聞いてくれるということを、感謝するべきですわ」
心から、思う。
言葉が通じるとは、なんと幸せなことだろうか？
話せば、とりあえず耳を傾けてくれるというのは、実に幸せなことではないか、と。
それから、ミーアは、柔らかな笑みを浮かべる。
「大丈夫ですわ。間違えたって、言い直せばいいだけのことですも

の。伝わるように誠実に、もう一度、話せばいいだけですわ」
あくまでも、選挙演説なんか、簡単ですよ、と。間違えたってなんともないですよー、と強調しておく。だから、絶対に間違えないように、とか難しく考えなくってもいいよー、と。
「みんな、あなたの言葉を聞きたいのですから、たっぷり時間をかけて大丈夫。落ち着くまで待って話し出せばよろしいのですわ」
「私の言葉を、聞きたい……？」
不思議そうに目を瞬かせるレアに、ミーアは重々しく頷く。
それから、軽くこめかみのあたりを指で触れ、いささか偉そうな顔をして……。
「いいですこと？　レアさん。そもそも、誰も話を聞いていないなら、言い間違えてもなんともありませんでしょう？」
「それは、まぁ……」
何を言いたいのか、と首を傾げるレアに、ミーアは堂々と言う。
「そして、誰かが注目している、あなたの話を聞きたがっているのなら、多少は言い間違えたところで問題ないはずですわ」
その指摘を聞いて、レアは思わずといった様子で目を見開いた。
「な……なるほど。つまり、どちらにしても、多少の言い間違えは問題ない、と……」
それは、極めて合理的な話だった。
聞きたがっていてもいなくても、言い間違えても問題ない、という……。実に、実に！　ミーアらしくない合理性だった。
それもそのはず、このロジックを考えたのは、ミーアではない。こめかみのあたり、幻の眼鏡の位置を直しつつ、ミーアは笑う。
――ふふふ、クソメガネはこんな感じで、えっらそうに、わたくしに言っていたのですわね。ふふふ、気持ちいいですわ。
……要するに、かつて呆れ顔のルードヴィッヒに言われたことを、繰り返しただけであった。いつものやつである。
それから、ミーアは腕組みする。
――しかし、理屈では納得できたとて、それで解決とはなりませ

んわね。他の手もいろいろと考えておくべきですわ。話すことを原稿化しておいて、当日は、それを読み上げるだけにするとか……。演説の形としてはいまいちかもしれませんけれど、確実ではあるはず……。むしろ、余計なことを言い出さない分、良いかもしれませんわ。

などと考えつつ、さらにクッキーに手を伸ばしかけたところで、不意に、ミーアの肩に手が置かれた。

「ミーアさま……これ以上食べるとお夕食が食べられなくなってしまいますから……」

振り向けば、アンヌの生真面目な顔……。さらに、ふと視線を巡らせれば、少し離れたところに、特別初等部の子どもたちの姿が……。

なにやら、観察するように、ミーアたちのほうをチラチラ見ている。先日、ダンスパーティーで仲良くなったレアのことが気になるのか、それとも、美味しそうなクッキーが気になっているのか……。

いずれにせよ、オヤツの食べ過ぎで夕食を食べられない、などと言う醜態を、見せられるわけもなく。

「ふむ……レアさん、これからお時間はございますかしら？」

「え？　あ、はい。大丈夫、ですけど……」

「それはよかったですわ。実は、特別初等部の子どもたちへ、ダンスの手ほどきをして差し上げようと思いますの。少し体を動かしたほうが頭もスッキリするでしょうし、いかがかしら、ご一緒に……」

「あ、はい。わかりました」

素直に頷くレアに、満足げな笑みを浮かべるミーアであった。

第三十七話　楽しみの効用

「今からダンスのレッスンをいたしますわよ。よろしいですわね？」
ミーアは、得意の自分ファーストを発動！　子どもたちを引き連れて、ホールへと向かった。
そこは、先日、新入生ダンスパーティーの会場となった場所だった。
――ふむ、広々としたこの場所ならば、結構な運動量が稼げるのではないかしら……？
ミーアはニコニコしながら、中を見ていた。
「あの、ミーア姫殿下……ここ、あたしたちが使っても大丈夫、なんですか？」
不安そうに聞いてくるヤナに、ミーアは指を振り振り、偉そうに言った。
「正しい使い方をするのに、何を遠慮することがございますの？　あなたたちは、このセントノエルの生徒なのですから、胸を張って使えばいいですわ」
ヤナの頭に軽く手を置いて、それから、ミーアは子どもたちを見渡した。
「ところで、先日のダンスパーティー、いかがだったかしら？」
そう問いかけると、子どもたちは、微妙な顔をした。確かに、ミーアやアベル、レアなどにダンスを教わっている間は、楽しかったが、居心地はあんまりよくなかったかなぁ、みたいな、そんな様子だった。
……というか、パティとヤナから聞いた話では、そんなことを漏らす子どもたちが多かったらしい。
「うふふ、その様子では、あまり楽しめなかったようですわね」
そう結論付ける。

それも仕方のないことではあるだろう。なにしろ、特別初等部の子どもたちは、社交界とは縁遠い場所にいたのだ。多少、事前に練習をしていたものの、それでできるほど甘いものでもない。

「以前にも言いましたけれど、みなさんが、将来、確実にダンスパーティーに出ることになるとは限りませんわ。ですから、まぁ、別に踊れなくってもよいといえばよいのですけど……やはり練習は必要ではないかと思いますの。だって……」

一度、言葉を切ってから、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「ダンスができたほうが楽しめますもの」

可愛らしくウインクしてから、ミーアは言った。

それは、今から始めるのが決して、厳しいレッスンではない、と言うことのアピールだ。

自らの空腹具合を促進するために、子どもたちを巻き込んでしまったことに罪悪感を覚えないわけではないのだ。ゆえに、楽しいですよー、ということを強調するのだ。

「いいですこと？　いつでも、どんな時でも、楽しめるようになることは、とても大切ですわよ？　楽しさや喜びで、空腹は癒されませんけれど……それでも、それがあれば、顔を上げて前に進む力にはなると思いますの」

あの地下牢でミーアを支えたのは、アンヌと、アンヌが持ってきてくれた楽しいお話だった。あれがあったからこそ、ミーアは絶望に沈まずに済んだのだ。

「そして、ダンスは割とどんな時でも楽しい気持ちになれるスキルですわ。どんな時にだって、ちょっとした手拍子でだって、ダンスはできますわ。だからこそ、できるようになっておいて損はないはずですわ」

などと、偉そうに言うミーアである。

「ということで、今日は楽しく、たっぷりとダンスをしてみましょう」

なにしろ、先ほどは、まぁまぁ食べてしまったので、それを消費

しなければ、夕食に差し障りがある。ここは気合の入れどころなのだ。
それから、ミーアは、部屋の片隅に置かれたオルガンに目をやった。
「ふむ、手拍子一つで、とは言ったものの、せっかくオルガンがございますし、どなたか弾いてくださる方がいればいいのですけど……」
ユリウスあたりが弾けないかなぁ、とそちらに目を向けかけたところで……。
「あ、それならば、私が……」
小さく手を挙げたのは、レアだった。
「あら、レアさんはオルガンが弾けますの？」
「はい……いろいろな村で儀式に必要なので一通りは……」
「なるほど。それはいいですわね。では……賑やかな、楽しい曲をお願いできるかしら？」
運動量の多い曲で、一気に先ほどのクッキーを消滅させるつもりのミーアである。
やがて、レアが弾き始めた曲に合わせて、ミーアはダンスを始める。
それは、パートナーがいなければできない社交ダンスとは違う。一人でもできる、即興のダンスだった。月光ダンスによって、ダンスの基礎をその身に刻んだミーアにとって、この程度のことは造作もないことなのだ。
自由に楽しげに踊るミーアに、最初は戸惑う様子を見せていた子どもたちだったが、ミーアがヤナの手を取って踊りに引き込むと、遠慮がちに近づいてきた。
「そう、音楽を聴いて。リズムに合わせるのですわ。ワン、ツー。リズムに合わせて、足を踏み鳴らす」
たん、たたーん、っと足を踏み鳴らし、くるり、と一回転。
笑顔で楽しそうに体を動かすミーアにつられて、子どもたちも体

を動かし始めた。
子どもたちのものは、どれも、ダンスとは呼べないようなものだった。ステップも振り付けもバラバラのダンスだったが……ミーアは構わなかった。
むしろ、今は、運動量こそが正義。動きなどバラバラでも構わないのだ。
「そうそう。楽しそうに踊ることが大事ですわ。ダンスのステップとか、型とか、いったん忘れてしまってかまいませんわよ。今日は、楽しむことが大事ですわ」
それを聞いて、レアが、ちょっぴり驚いたような顔をした。けれど、子どもたちの顔を見て、すぐにその顔に納得の笑みが浮かぶ。
「……楽しむことが大事……。楽しむことで、人の心を明るくする……」
噛みしめるようにつぶやき、レアはオルガンを弾き続けた。

さて、しばし即興ダンスで汗を流してから、いったん休憩をとったミーア。
ホールの端で、まだ踊っている子どもたちを見て、小さくため息。
「子どもは元気ですわね……無限の体力ですわ」
などと、自らの加齢について実感するミーアお姉さんである。
っと、その時だった。
「ミーアお姉さま……。お話があります」
パティが、静かに近づいてきた。
「あら、パティ、どうかしましたの？」
「……実は、つい先ほど、リオネル殿も、特別初等部を見学に来ました」
「え……？　そうなんですの？」
ミーアは思わず瞳を瞬かせた。
「熱心に、見ていきました」
「リオネルさんが……そう」

それを聞いて、ミーアは思わず考えてしまう。
――特別初等部の粗探しにでも来たということかしら？
いずれにせよ、特別初等部の存在はラフィーナも認めるものだ。そうそう簡単にはつぶせないだろうが……。
「すごく熱心に、話を聞いていきました。特別初等部の意義をユリウス先生から聞いて、いろいろ考えている様子でした」
「ということは、純粋に生徒会長になった時のことを考えて、見学に来ただけということも考えられるかしら……。まぁ、レアさんが選挙で負けても特別初等部を残していただけるならば、朗報なのかもしれませんけれど……」
はたしてリオネルが何を考えているのか……。ミーアは悩まざるを得なかった。

第三十八話　ベルーツ

古来より王侯貴族の血筋に関しては、時にスキャンダラスな、時にミステリアスなところがあるのが常と言われている。
神話の登場人物にルーツを持つ騎馬王国の族長しかり、神を王と戴いた初代ヴェールガ公爵しかり。
その風潮はティアムーン帝国においても、例外ではない。
何らかの事情で、サンクランド王国から出た第二王子エシャールと結婚したエメラルダ・エトワ、グリーンムーン、一兵士でありながら、士爵に叙せられた男と結婚したルヴィ・エトワ・レッドムーンをはじめ、イエロームーン家令嬢や、他の貴族たちにおいても、その手の話は後を絶たない。
そして、帝国の叡智の孫娘、ミーアベル・ルーナ・ティアムーンの出自にも、いささかミステリアスかつ、スキャンダラスな一面が存在していた。
と言っても彼女自身や両親に関するものではない。それは、彼女の父方の祖父に関するもので……。

「ねぇ、ベルちゃん、少しいいかしら……？」
その日、ベルは、シュトリナと共に図書館に来ていた。
自らが持つ課題を解決するため……。すなわち、彼女が過去に飛ばされてきた理由を、真面目に検討するため……などではなく……もちろん、単純にテスト対策である。
冬休み明けのテストを見て、さすがにヤバイと気付いたらしいシュトリナとリンシャによって、ベルへの大変厳しい（リンシャ＆シュトリナ比）教育が施されようとしていた。
そうして、ルードヴィッヒ作成の、初級（ルードヴィッヒ比）問題集を前に、ベルは悲しげな顔で佇んでいたのだが……。

そんなベルにシュトリナが話しかけたのだ。
「リーナは、ベルちゃんが生まれてくるために全力を尽くそうと思ってるの。だから、教えてほしいことがあるの」
「教えてほしいこと……？」
「うん、そう。ベルちゃんのお父さまって、どこの誰なの？」
唐突な問い。ベルは、んー、っと小さく首を傾げてから。
「はい。そうですね。お話ししておいても大丈夫だと思います」
珍しく、キリリッとした顔をして言った。別に、勉強をやるより楽そうだぞぅ、などと思ったわけでは決してない。ベルだってやる時にはやる人なのだ……たぶん。きっと！
なので、それは、ただ単に、こちらのほうが重要だとベルが判断しただけであって、決してサボれるから、というわけではないのだ。
そういうわけで、ベルは嬉々として、話し始める。
「ボクのお父さまは、ツロギニア王国という国のチャルコス伯爵家の人です」
「ええと……ツロギニアというと、帝国の南方の国だったかしら？」
シュトリナは頬に指をつけて、ちょこん、と首を傾げる。
「あまり大きな国だったという記憶はないのだけど、ずいぶんとミーアさまも思い切ったことをなさったのね。でも、一応、地理的には政略結婚の意味はあるか……」
「それが、そうとも言い切れなくて。実は少し込み入った話があるんです」
ベルは、ちょっぴーり声を潜めて続ける。
「チャルコス伯爵と言うのが、ボクの大叔父に当たる人なのですが、その妹の夫、すなわちボクの祖父と言うのが謎の人でして……」
「謎の人……？」
「はい。お祖母さま……あ、ミーアお祖母さまじゃないほうのですけど、ともかく情熱的な恋に落ち、ボクの父を身ごもった……のは良かったのですが、婚儀までは結ばなかったとか……」
なかなかにスキャンダラスな話に、シュトリナは思わず目を見開

いた。
　要は、伯爵家令嬢ともあろう者が、誰ともわからぬ男の、子を宿したということなのだから……。
「それって、大丈夫なの……？」
　眉を顰めるシュトリナに、ベルはペラペラと手を振った。
「それだけだと大丈夫じゃないんですけど、さらに込み入った事情がありまして……」
　それは、例の、かつてベルがやって来た未来の記憶に依存する事情であった。
かの、司教帝ラフィーナの世界……その時の記憶によれば、いささか話は変わってくる。
　実のところ、ベルにはかすかながら、祖父と言う人の記憶が残っていた。さる高貴な血筋と聞いたことがあるどころか、そもそも、どこかの貴族の息子であることを聞いたことがあったのだ。婚姻関係もきちんと結ばれていた。けれど、なにかがあった……。ゆえに、祖父のことは公然の秘密のように、母は口に出さなくなっていったのだ。
「なるほど……口に出しづらい雰囲気になったということは、お家が取り潰しになったとか、そういうことかしら……。時の権力者に逆らったとか、あるいは、廃嫡の憂き目に遭ったということも考えられるか……。そもそも、結婚前にご令嬢に手を出すなんて、あまり素性の良くない人なのかも……いや、だけど、ベルちゃんのお祖父さまが、そんなことは……ううん」
　難しい顔で考え込むシュトリナ。そんな彼女を尻目に、ベルはこっそーりと問題集を脇に置く。一応、二ページほど進めて、本日のノルマの三分の一は消化したため、罪悪感はさほど……否、まったくない！
　さぁて、それじゃあ、なにか面白い本でも読もうかなぁ！　と立ち上がったベルの目が、不意に捉えた者……
「あれ……あれは？」

それは図書室に入ってくるリオネルの姿だった。
一人で室内に入って来た彼は、ふぅー、っと深いため息を吐き、椅子に座り込む。
――ミーアお祖母さまの敵対者……これは、少し探りを入れてみる良い機会かも……。
そうしてベルは意気揚々と立ち上がり、リオネルのほうへと向かった。

第三十八話　ベルーッ（後書き）

活動報告更新しました。
来週は遅めの春休みにする予定です。

第三十九話　帝国の叡智の勝利

図書室に入って来たリオネルは、眉間に皺を寄せたまま、近くのテーブル席に着いた。
特に本を読む様子もなく、何事か考え込んでいた。
「……ありえない。あの、特別初等部をつぶすなんて……でも。支持をまとめるためには……」
つぶやきつつ、悩ましげなため息を吐く。
「こんにちは、リオネルくん！」
たん、っと机に手をついて、ベルが明るく声をかけた。
「うわぁっ！」
突然のことに、思い切り後ろにのけぞったリオネルだったが……。
「あ、あなたは、ミーア姫殿下の……」
リオネルはベルのほうを見ると、露骨に顔をしかめる。
「なにか、私に用ですか？」
「いえ、なんだか、浮かない顔をしているな、と思いまして。なにかお悩みですか？」
興味津々、身を乗り出すベルに、リオネルは眉根を寄せる。
「なぜ、ぼ……私があなたに話さなければならないと？　いえ、そもそも、別に悩んでなどいないですが……」
っと、ベルはすかさず、したり顔で、
「ふっふっふ、決まってるじゃないですか。ボクは、セントノエルの先輩として、後輩の悩みをしっかり聞いてあげないといけません」
などと言いつつも、野次馬根性を隠しきれていないベルである。
「それは……ミーア姫殿下の理屈です。私がそれに従う必要などない」
「いいえ、誰が言ったか、ではなく、言葉の中身で判断するべきです。君は、ミーアおば……お姉さまの言葉が間違っていると思うの

ですか？」
　ベルは実に楽しげに言った。別に、年下の少年を正論で殴るのが楽しい……わけではない。ただ、単純に物のわかっていない後輩に、正しき道を教えるのが楽しいだけだ。ミーアと同じく、ベルも他人に偉そうに教えるのは楽しいのだ。
「次の世代に教えるべきことを教え、次なる世代を担う者としてみなで育てていく。その言葉のどこかに、間違いはありますか？」
　再度の問いかけ。リオネルは、うぐぐぬ、と唸りつつ、
「いいえ……。間違っていないと思います」
　しぶしぶながら頷いた。
「ふふふ、そうでしょう。ならば、さぁ、この先輩に悩みを話してみてください」
　ドヤァッと笑みを浮かべて、ベルが自らの胸をぽふん、っと叩く。
「……ちなみに、今から話すことは、全部、ミーア姫殿下に伝わってしまうのですか？」
　ジロリと見つめてくるリオネルにも、ベルは涼しげな顔で首を振った。
「いいえ、黙っていてほしいというならば、黙っています。それが、セントノエルの先輩としての度量です」
　そんなベルの様子にリオネルは、半ば呆れたような、諦めた様子でため息を吐いてから、
「まぁ、いいでしょう。もし、あなたが約束を違えれば、そのことで、ミーア姫殿下を責める口実になりますし……」
　釘を刺すように言ってから、リオネルは話し始めた。
「実は、選挙のため支持層を固めているのですが……正直な話、改めて、ミーア姫殿下の恐ろしさを実感しています」
　それを聞き、ベルはドヤァッと胸を張った。
　帝国の叡智、ミーアお祖母さまは、ベルの中で揺るがぬ誇りなのだ。
「なぜ、あなたが偉そうにしているのかは理解に苦しみますが……、

ともかく、ミーア姫殿下の影響は巨大です。それは認めざるを得なかった。だから、ミーア姫殿下の支持を受けたレアに勝つために、ミーア姫殿下に反感を持つ層の票を固めるのが、最低条件だと思いました」

「なるほど。考え方は正しいと思います」

極めて冷静にそう評したのはベル……ではなく、いつの間にやらそばにやってきたシュトリナだった。どうやら、ベルよりシュトリナのほうが賢そうだぞ……と判断したかどうかは定かではないが、リオネルはシュトリナのほうにチラリと視線をやってから続ける。

「だから、彼らと積極的に話し合い、彼らの意に沿う選挙公約を作ろうと思ったのです。妥協できない部分はなかったし、彼らの考え方にも一理はあるのかもしれない」

と言いつつも、リオネルの顔には苦悶の表情が浮かぶ。どうやら、なかなかに無茶なことを要求されているらしい。

「……けれど、彼らは言ったのです。特別初等部の存在が、セントノエルの格を貶めている、と。だから、私が生徒会長になったら、それを潰すことを公約にしろ、と……。それだけは……受け入れ難かった」

リオネルは眉間に皺を寄せて言った。

「そのような者たちと、手を取り合って戦うことができるでしょうか？　もし、それで勝利できたとして、私は、どうすればいいでしょうか……？」

意外とまっとうな悩みに、シュトリナは感心した様子だった。一方で、ベルは……。

「ふむ……」

腕組みしつつ唸ってから……。

「ここは、釣りでもしたらいいんじゃないでしょうか？」

「……は？」

思わぬ答えだったのだろう。リオネルが口をポカンと開ける。

「釣り大会、ミーアお姉さまがやりましたけど、あれはとても楽し

かった。あれの規模をもっと広げて開催することを公約にするとか……」
「……ふざけているのですか？」
リオネルがムッとした顔で睨んでくる。それから、すぐに肩をすくめて、
「いえ、敵であるあなたに相談した私が愚かでした」
諦めたようにため息を吐く。けれど、ベルは、静かに悟りを開いたかのような顔で首を振った。
「いいえ、ふざけてません。そうですね……一つ、ミーアお姉さまのお話をして差し上げましょう。ラフィーナおば……さま、と最初に選挙で競い合った時のことです。ミーアお姉さまは、当初、公約として『学食の充実』を掲げようとなさっていました」
「学食の……？」
「はい。特にスイーツを……」
「すっ、スイーツの！？」
目を丸くするリオネル。
どうやら、こいつぁ甘い物に弱そうだぞ？　と看破するベルである。まぁ、それはともかく……。
「聞くところによれば、ラフィーナさまの選挙公約が完璧すぎて、対抗する公約が思いつかなかったんだそうです。もちろん、賄賂や卑怯な手を使えば勝てる可能性はあったかもしれない。けれど、ミーアお姉さまはそれをしなかった。それをして勝ったところで、意味がないから。今のリオネルくんと、ちょうど同じ状況です」
同じ状況……なのだろうか……？　疑問の余地がないではなかったが……。
「だから、釣りを……？　確かに、レアが完全に正しい選挙公約を出して来たら、その正反対のものは出せない。かといって似たような選挙公約であれば、ミーア姫殿下の支持を取り付けているレアが有利。だからこそ、まったく違う方向の公約にする、と。なるほど……」

顎に手を当て、考え込んだ様子のリオネルに、ベルは厳かに告げる。
それはかつて、廃墟となった帝都で、誇らしく名乗りを上げた皇女ミーアベルの高貴さを彷彿とさせるような、極めて珍しい光景だった。
「卑怯な手を使ったら、リオネルくんは絶対に勝てません。仮に、ミーアお姉さまに勝てたとしても、君は負けるんです」
その言葉に、リオネルは思わず目を見開いた。
「けれど、正々堂々と戦えば、君は大切なものを守り抜ける。そして、選挙でも勝てる可能性がゼロではない。だけど……もし、リオネルくんが正々堂々と戦うことを選ぶなら、その時点で、ミーアお姉さまの勝利なのです」
「……どういう意味でしょうか？」
「リオネルくんが生徒会長として、正しく振る舞えるのであれば、ミーアお姉さまはご自分のことに集中できる。帝国のこと、大陸の、世界のこと……。ミーアお姉さまは、とても多忙なので」
帝国の叡智、祖母ミーアは、いつだってベルの誇りだ。ゆえにベルは、胸を張り、朗らかに語る。
「ミーアお姉さまは、この大陸から飢餓をなくすおつもりです。貧しき者たちに手を差し伸べ、教育を施し、生きていくのに困らないようにしようとなさろうとしています」
「なんと……そのような、ことを……？」
「はい。それは、ミーアお姉さまのされてきたことを見れば明らかなことです」
ベルは一切揺るぎなく自信満々に頷いて……。
「だからこそ、信用できる方に、セントノエルの生徒会長を任せられるなら、それだけでミーアお姉さまにとっては勝利なのです」
そうなのだ。ベルはベルなりに考えていたのだ。
どうして、素直にリオネルに生徒会長を譲ってやらないのか、と。
――ラフィーナ大おばさまとの約束と言うのは、もちろんあるで

しょうけど、それだけと言うのは不自然。おそらく、リオネルさんでは力不足だった。だから、もし譲るのだとしても、選挙でリオネルさんが成長した時とお考えなんだ。

「僕が、勝っても負けても勝利する……？　それが、帝国の叡智の戦略……？」

ベルの言葉を聞き、ゴクリ、と喉を鳴らすリオネルであった。

第四十話　ベル足す？？？、お前もか！？

特別初等部の子たちとダンスに勤しみ、その後、あつぅいお風呂で汗を流したことで、ちょっぴりシュッとしたミーア（自己申告比）は、部屋で考え事をしていた。

そのそば、ベッドの上では、パティがアンヌに髪を梳いてもらっていた。

いつも通りの、夕食前の平穏な風景。

ミーアは、頭の半分をこれからの選挙戦に割きつつ、もう半分を今夜の晩餐のメニューに割いていた。

「久々にキノコが食べたい……いえ、それはともかく、とりあえずレアさんに、原稿を作るように指示しましたけれど、それでどれだけ上手くいくか……。原稿をミニサイズにして、目立たないようにできれば……。いや、それじゃ意味がないかしら？　問題は緊張することですし。ふむ、やはり今夜は六種のキノコグラタンが……」

っと、まさにその時だった。

ドアが開き、ベルが入ってきた。その後ろからは、ちゃっかりシュトリナもついてくる。

「あら、ベル。遅かったですわね」

ベッドの上に横たわったまま、にゅーっと顔を向けると、ベルは、うつむいていた。なにか言い出そうとして、口をつぐみ、それから息を吸って、吐いて……。

「あ、あの、ミーアお姉さま」

「ん？　どうかしましたの？」

「ごめん、なさい……ミーアお姉さま。ボク……」

ベルは、そこで意を決した様子で顔を上げて……、

「ボク、リオネルくんの応援演説をすることになってしまいました！」

「……は……ぇ？」
思いもよらぬ言葉に、ミーアは口をぽっかーんと開けた。
いったん落ち着くべく、座り直し、ベルの顔を正面から見て……。
「……ええと、その、なにがあったのか、聞いてもいいかしら？」
「はい。実は、先ほど図書室でリオネルくんとお話しさせていただいたんですが……」
そうして、ベルは話し出す。
図書室でのやり取り。リオネルの様子や、彼が言っていたこと。
そして……。
「彼は、ミーアお姉さまのお考えを聞いて、とても感銘を受けた様子でした。そして、自分はミーア姫殿下の政策を受け継ぐ方向で考えているから、ボクに応援演説をお願いできないか、と言い出しまして……」
「ベルに応援演説を、ね……」
ミーアは思わずといった様子で唸り声を上げる。
「ボクが応援に入ることで、ミーアお姉さまにとってマイナスになることはわかっています。けれど、ボクがリオネルくんをサポートすることで、彼の陣営に入り込むことができれば、必ずやミーアお姉さまのお力になれると思います」
「……それは、中に潜り込んで破壊工作をするとか、そういうこと？」
横で聞いていたパティが興味深そうに物騒なことを言うが……。
「いえ。ただ、リオネル君が道を誤りそうになった時には止められる。そんな立ち位置を確保できれば、ミーアお姉さまの役に立てる。仮にリオネルくんが勝ったとしても大きな問題にはならないと思います。ボクが生徒会の内部に食い込めるわけですから……」
「なるほど……、それは確かに……」
どちらが勝っても問題ないというのは理想と言えば理想。絶対にレアが勝てるとは断言できない以上、ベルの考えはわからないでもないが……。

――しかし、リオネルさんが勝った場合、わたくしはラフィーナさまに大いに謝罪しなければならなくなりますわね。下手をすれば、司教帝ラフィーナさまが復活してしまうかも……。いえ、さすがに、そこまではないかしら……。でも……ん？

っと、ミーアは、気弱になっている自分に気づき、ふと、おかしくなる。

――まぁ、でも、別にベルが敵についたからといって、大勢にそこまでの影響はないのではないかしら？　リーナさんは確かに強敵ではありますけど、まぁ、そのぐらいなら……。

ぶっちゃけ、恐るるに足らずでは？　と思ったミーアは次の瞬間、

「あっ、それと、実は図書室にキースウッドさんとシオン王子が来ていて……」

「うんうん、うん……？」

なにやら、きな臭いにおいを感じ、思わず固まる。

「それで、ボクたちの話を聞いて褒めてくれたんです。もっともなことだ、って」

「ほうほう……それで？」

「はい。それで、選挙の公平性を確保するためにも、ご自分も応援に回ろうと……」

頬を赤らめて興奮した様子のベル。どうも、天秤王や忠義の従者キースウッドと共闘できることに興奮しているらしい。けれど、ミーアはそんなことに構っちゃいられなかった。

「なっ……シオンが、リオネルさんの側につく……と？」

うぐぬぅ、っと呻くミーア。であったが、なるほど、確かに、理屈はわからないでもない。

なにしろ、リオネルはミーアのやってきたことを正しく評価している。彼がその路線を引き継ぐことになるのだとすれば、応援しない理由もなくなるわけで……。

むしろ、片方に支持を集中させて選挙の形を壊してしまうよりは、きちんと競り合えるよう、状況を整えることも対外的には必要で…

…。

――しっ、しかし、シオンが敵に回る……？　いえ、けれど、まぁ、そこまで本気じゃないのではないかしら？　わたくしが、レアさんを応援することはみなに表明してありますし、それでもなお対立候補を応援するようなことは……。ことは……。

ミーアの本能が告げる。

シオンなら、思いっきりやりそうだ……っと。

むしろ、全力でリオネルを応援しそうだぞ！　っと。

ああ、ちくしょう。あいつぁ、そういうやつだった……！　っと、ミーアは思わず頭を抱える。

――シオンのことですから、融通を利かせろ、とか言っても絶対に聞きませんわ。選挙の公正を損なうから、とか言い出しそうですわ。あら？　これって、もしや、結構なピンチなんじゃ……？

いや、まぁ、選挙を公正にというのは、わからなくもない。ヴェールガの手前、それは、とても重要な要素だ。

それに、もしも、シオンがリオネルの応援に回るとするならば、リオネルが生徒会長になった時にも安心と言えば安心だ。その影響力を考えれば、シオンを副会長あたりに据えなければならないわけで、ベルを送り込むよりもよほど信頼がおけるだろう。

いや、むしろ、ミーア自身が院生を敷くより、そのほうが楽だとさえいえるかもしれない。

確かに、そりゃまぁ、そうなのだが……。

――うぐぐ、もし、これで負けたら、ラフィーナさまに次会う時が、すごーく気が重いですわ。

「というわけで、ミーアお祖母さま。今回は胸をお借りするつもりで、全力でやらせていただきます」

それでも、ベルは、レアの勝利、すなわち、ミーアの勝利を全く疑っていない様子だった。あくまでも……これは、あくまでも選挙を一方的な形にしないための手段。そして、万が一、リオネルが勝ってしまった際、彼がまっとうな生徒会運営をするための策だと考

えているようだ。
リオネルの勝ちがラフィーナの意にそぐわないということにさえ、目をつぶれば、まさに妙手。ほめてやりたいぐらいである。だが……。
――う、うう、お腹が痛くなってきましたわ……。
ベルの宣戦布告にミーアは、お腹が痛くなってくるような気がした。
……夕食前の空腹によるもの、という感じがしないでもないが……。

第四十一話　リオネルの覚悟とシオンの想い

その日の夕食時。
食堂に足を運んだミーアは、手早くキノコシチューを駆けつけ三杯した後、シオンのところに足を運んだ。先ほどのベルの話を確認するためである。
「シオン、少しよろしいかしら？」
「おや、ミーア。どうかしたのか？」
不思議そうな顔をするシオン。そんな彼の隣にささっと座ると、ミーアは声を潜めて言った。
「ベルから話を聞いたんですけど、あなた、リオネルさんの味方をするつもりとか……」
「ああ、あれか」
それを聞き、シオンは思わずといった様子で手を打った。
「あれは、なかなかの妙手だったな。俺もつい協力したくなってしまったよ。さすがは、帝国の叡智の孫娘、と言ったところかな？」
実に、感心したという様子だった。どうやら、協力するというのも間違いではないらしい。わかってはいても、舌打ちしたくなるミーアである。
「あるいは、もしかすると、君も似たようなことを考えていたんじゃないのか？」
「おほほ。まさか、あくまえも、あの子の考えたことですわ。まったくもって、わたくしが想像しなかったことでしたわ」
あくまでも、ベルの行動は想定外のこと……とアピールしておく。
すべて計算通りで、勝つ算段すら立っていると思われたら、手加減だってしてもらえないだろう。まぁ、最初から、手加減はほとんど期待できそうにないが……。
「ふふふ、そうか。あくまでも手柄を孫娘に譲るということか。い

ずれにせよ、帝国の未来は明るいな。うらやましいことだよ」
シオンは愉快そうに笑い、
「それはともかくとして……やるからには全力でやろうと思っているよ」
やっぱり、そんなことを言いやがった。
性格的にそうだろうなぁ、と思いつつも、ミーアは少しだけ驚く。
「あら？　ずいぶんと、リオネルさんの肩を持ちますのね？」
全然、手加減してくれてもいいんだよぅ？　なんだったら、手抜きしてくれても、オーケーよ？　っと力強く主張したいミーアなのであるが……シオンは少し黙って、何事か考えた様子を見せてから……。
「ベル嬢から聞いているかは知らないが、彼は『特別初等部を潰せ』と言った者たちを遠ざけることにしたんだ。一番確実な支持層、確実に味方にできる者たちを、正義に反する者たちとして、ね」
シオンは食堂の外れ、一人で食事をするリオネルのほうに目を向けた。
「なかなか勇敢な行動と言えるんじゃないかな。わずかでも、安全を捨てて、正しいことをしようというのは……」
そう言われ、ミーアも思わず唸ってしまう。
なるほど、確かに、それは評価に値することだろう。その勇気が持てずに、飢饉を呼び込んだ貴族が多かったことを考えれば、躊躇いなく正しい判断ができるリオネルは、十分に評価に値するだろう。
――それに、そういうタイプは、シオンが好きそうですし……。
正義と公正のために、目の前のわかりやすい安全を投げ捨てる。実に、好きそうだ！
「彼は間違えかけた。けれど、悔い改めて正しい道を歩もうとしている。そんな若者を応援したい、応援してやらなければならない、と思ったのさ。ちなみに、俺のほうから、サンクランド貴族に声をかけるつもりはないが、幾人かの者は忖度するだろうから、結構いい勝負になるかもしれないな」

そう笑うシオンに、ミーアは思わず頬がひきつる。
――いい勝負どころか、むしろ、戦況不利な気がいたしますわ。なにしろ、シオンは顔がいいですし、リオネルくんも、なかなか可愛らしい顔立ちをしている。油断はできませんわ。
負けた時のダメージが減るほどに、勝ちが遠ざかっていく状況。司教帝の影に怯えるミーアとしても、これはもう、リオネルが勝ってもいいんじゃないかな？　などと、ついつい思い始めてしまって。
――そもそも、レアさん自体、わたくしが巻き込んでしまった感が強いですし。この逆風の中で、頑張り続けてくれるかしら……？
それもまた問題だった。これは、いよいよ、ラフィーナを説得するほうが楽なんじゃ……？　なぁんて、諦めモードに入るミーアである。そこへ……。
「ミーアさま……、ご相談したいことがあります」
自分を呼ぶ声に顔を上げると、レアがそこに立っていた。
「ああ、レアさん。ちょうどよかったですわ。わたくしのほうからもお話ししておきたいことがございましたの。もう、お食事は済みましたの？」
その問いに無言で頷くレア。
「そう。わたくしもお食事は終わりましたわ。それならば、デザートを食べつつ、わたくしのお部屋で話しましょうか？」
そうして、誰にも何も文句を言われぬよう素早くデザートを手配、それから、レアを伴い、自らの部屋にやってきた。
「ええと……それで、何のお話しかしら？」
そわそわとデザートを待ちつつ、ミーアは話を振ってみる。っと、レアはもじもじとうつむいてから、やがて、静かに顔を上げて……。
「私に……演説の仕方を教えてください」
真っすぐに見つめてくるレアに、
「とっ、とりあえず、デザートが来るのを待ちましょうか」
そう答えつつ、ちょっぴり気まずさを覚えるミーアである。
――うう、せっかくやる気になってきたところを、出鼻をくじい

てしまいそうですわね……。

第四十二話　海月の励まし

そうこうしているうちに、デザートがやってきた。
深めの小皿に入ったそれは、ヨーグルトにブレスベリーのジャムをかけたものだった。
早速ミーアはスプーンを手に取り、心持ち、ジャムを多めに絡めたヨーグルトを口に運ぶ。
舌の上で溶けていくヨーグルト、広がるのは優しい酸味だ。そこに、砂糖漬けにしたベリーの甘みが加わり、絶妙なハーモニーを奏でる。
ミーアが特にお気に入りなのは、ジャムがしっかりとベリーの形を残しているところだ。小さなブレスベリーは弾力があり、ヨーグルトとは全く違う歯応えを返してくる。それをぷつん、っと噛んだ瞬間、一転、口に広がるのはヨーグルトとは別の酸味だ。
――うふふ、これは、単純に見えてよく考えられたお料理ですわ。ジャムぐらいでしたら、わたくしでも作れそうですし、そのうち、試してみてもいいかしら。いえ、でも、普通のジャムでは面白くない……となると、やはり入れるのはキノコが無難か……。
などと、ちょっぴりイケナイことを考えてから、ミーアは改めてレアに目を向けた。
「実は、演説の練習の前に、お話ししたいことがございましたの」
これは、少々、話しづらいこと。されど、後になればもっと話しづらいうえ、万が一、ミーアが話すより先に誰かから聞いたりしたら、きっとレアはショックを受けるに違いない。
タイミングは今しかない。
「はい？　なんでしょうか？」
きょとりん、っと小首を傾げるレアに、ミーアは手短に、リオネルのこと、ベルとシオンが彼の応援に回ることなどを話す。

暗に、リオネルとレア、どちらが勝ってもミーア的には問題ない状態にあることをほのめかすことで、探りを入れることにしたのだ。

ミーアのミッションは、あくまでも、ラフィーナ及びレアを司教帝にしないことにある。

選挙結果が、レアにどのような影響を与えるのか様子を見てみよう、というわけなのだが……。

「では……ミーアさまが、私を支持する理由は、もう、ないのですね……」

ず、ずぅーん、っと沈んだ顔をするレア。せっかくやる気を出したところだったのに……思わぬ状況に、へこんでいるのだろう。いや、へこんでいるというか……、その瞳に映る色は、もっと暗い感じがした。それは、そう……ちょうど、司教帝とか名乗る悪の帝王は、こぉんな目つきしてるんだろうなぁ！　とミーアに確信させるもので……。

「いえいえいえ、わたくしがあなたを支持することに変わりはありませんわ！　あなたには生徒会長になっていただきたいと、わたくし心から思っておりますのよ？」

ぶんぶん、っと手を振り、ミーアは言った。それを聞いて、レアが、少しだけ表情を明るくさせる。が……。

「でも……ミーアさまの政策を兄が引き継ぐのであれば、なにも、私なんかを推薦しなくっても……。それに、ミーアさまは誤解されているかもしれませんが、兄は決して悪人というわけではありません。特別初等部を潰そうなどということは言わないと思います。ダンスパーティーの時だって、兄のほうに声をかけていれば、きっと兄は子どもたちのところに行ったはずです」

「ええ。それは存じておりますわ。それでも、わたくしはあなたを推薦いたしますわ」

「それは、なぜですか？」

じぃっと……上目遣いに見つめてくるレア。それを見てミーアは、察する。

――これは、適当なことを言うと、後で面倒なことになる場面ですわ！

そのうえで、ミーアは整理する。現状、しなければならないこと……。それは……。

――万が一、リオネルさんに選挙で負けた時、レアさんが司教帝堕ちしないようにすることですわ。そうじゃないと、ラフィーナさまとダブル司教帝が誕生してしまう可能性も……それは悪夢ですわ！

選挙で負けた時には、できれば、ラフィーナのことにだけ集中したい。ゆえに、レアは選挙で負けたとしても、傷つかないようにしたい。

条件を確認したうえで、ミーアは話し始める。

「そう……ですわね。月並みな言い方になってしまいそうなのですけど……、あなたが投げ出さなかったから、かしら……？」

「投げ出さない……？」

「ええ。そうですわ。これは、わたくしの思い違いかもしれませんけれど、レアさんは、生徒会長になることに、そこまで乗り気ではありませんでしたわね？」

「それは……」

言い淀むレアに、ミーアは構わず続ける。

「別に、否定する必要はありませんわ。わたくしが、勝手にあなたを後継者に推薦した。あなたは、ただ、それに流されただけ、そうではなくって？」

その指摘に、レアは、こくん、と頷く。それから、小さな声で……。

「すみません……」

「あら、なぜ謝るんですの？」

「だって……私には、立派な志なんか、ないから……。ただ流されて、断れないだけで、生徒会長選挙に出てしまいました……。だから……」

「レアさん、それは、別に恥じる必要のないことですわ」

ミーアは、本心から、レアの言葉を否定する。
なぜなら、状況に流されつつ、その中で最善を目指すのは、ミーアの海月戦術そのものであるからだ！　流されて何が悪い？　波に逆らうのは疲れるし、そもそも、流れに逆らったところで、激流からは逃れられないのだ。ならば、滝に落ちる直前で頑張って泳ぐより、滝から落ちた時に滝つぼに落ち込まないようにすることこそが、むしろ肝要なのだ。
「あなたは、与えられた状況の中で最善の努力をしようとした。わたくしから学び取ろうと懸命に努力している。それは、賞賛に値する姿勢ですわ」
そして、それは、かつての自分とも重なる行動でもあった。
あの帝国革命の時期。ミーアは決して、自分で考えて行動はしなかった。ルードヴィッヒに言われたことをこなすように、全力を尽くすことしかできなかった。
状況から逃げられなかっただけ、断れなかっただけ……されど、そこで懸命に努力したことが否定されるわけではない。それは自分と、あのクソメガネの頑張りを否定することだからだ。
「やりたくて立候補した者が職務を勤め上げることは、立派ではあっても、当然のこと。気が進まなくとも、与えられた課題と向き合い、逃げずに懸命に努力する人のほうをこそ、わたくしは評価いたしますわ」
そうして、ミーアはグッと拳を握りしめ、締めの言葉を口にする。
「あなたは、逃げずに課題を乗り越えようと努力している。しっかりと考え、助言を求め、成長しようとしている。立派なことですわ。だから、まぁ、その……選挙で勝てなくっても……」
「ミーアさま……」
「うん？　なにかしら……？」
「私は……本当に、このまま、選挙戦を続けていいのでしょうか？」
レアの放った言葉は、思いのほか、重くミーアの耳に届いた。

第四十三話　甘い物を食べると、嬉しい

「どういう、意味かしら？」
瞳を瞬かせるミーア、レアは、ヨーグルトの容器を手に取って続ける。
「私……嬉しかったんです。誰かに、こんなに必要とされたのは初めてでしたから。ミーアさまはああ言ってくれたけど、頑張るのは全然大変じゃなかった。楽しかったんです。でも……ずっと思ってたんです。本当に、このまま生徒会長選挙に出ていいのか、って迷いがありました。それと、罪悪感も……」
「ざ、罪悪感、ですの……？」
若干、引いた顔をするミーアにレアは静かに頷いて、
「父の考えは、兄が生徒会長選挙に出て、ミーア姫殿下と戦うことにありました。それを無視して私が生徒会長選挙に出ていいのか……まして、兄に勝って私が生徒会長になるだなんて、そんなの許されるのかな、って……ずっと思ってました」
レアは、そっと胸に手を当てて、目を閉じる。
「それに、楽しむこと自体にも、罪悪感があって……」
「たっ、楽しむこと、自体に……？」
「ずっとずっと幼い頃から、遊んでいる時によく思っていました。こんなふうに遊んでいていいんだろうかって。遊んでいるこの時間に、もっと……できることがあるんじゃないかって」
それから、レアは、ヨーグルトを乗せたスプーンを口に運び……。
「このデザート、とっても美味しいですね……」
なぜだろう、美味しいと言っているのに、その顔に見えたのは、かすかな苦悶の表情だった。
「とても美味しい……。ミーアさまは、罪悪感がありませんか？こういう美味しい物をお食べになると……」

「ふむ……」
ミーアの脳裏に、ふと、タチアナの顔が浮かんだ。それから、ミーアは二の腕をＦＮＹっとして己が罪悪感を刺激してみた。
「ふむ、まぁ、感じないことはないですわね……」
むしろ、危機感のほうが刺激されたような気がしたが、それはともかく……。
「こういう美味しい物を食べる時にも、そうなんです。いつも罪悪感を覚えていました。これを誰かに……それこそ、孤児院の子どもたちに食べさせてあげるべきなんじゃないかって……」
「ええと、それはあなたのお父上……ルシーナ司教の教えによるものかしら？」
禁欲的に過ぎるその考え方は、いかにも噂に聞くルシーナ司教っぽいと思ったのだが……。
「いいえ。確かに父は礼儀作法や神への儀式への向き合い方には厳しいですが、それ以外のことは、そこまでではありません。食事も好きな物を食べさせてくれましたし、兄と二人で遊んでいても咎められることはありませんでした。だから、これは、あくまでも私の考え方です」
レアは真っすぐにミーアを見つめて言った。
「でも、先ほど、ミーアさまはおっしゃられました。楽しめ、と。楽しむことは大切なんだ、と。なぜ、あんなふうに考えられるのですか？」
「なぜって……」
咄嗟には答えられない質問。されど、ミーアは、レアの言葉の中にある危険なニオイを嗅ぎ取っていた。すなわち……。
――これ……このままレアさんが生徒会長になったら、ものすごーく禁欲的なセントノエルになってしまいそうな感じがいたします わ。もしかすると、せっかく、わたくしが頑張って充実させた学食のスイーツも削減されてしまうかも？
セントノエルでの学校生活はあと二年あるのだ。その間、甘味が

不足するようなことはできるだけ避けたい。
――これは、少々、慎重に答える必要がありますわ。どう、答えたものか……。
考えつつもミーアは、デザートとともに、アンヌが淹れてくれたホットミルクｗｉｔｈハチミツを飲む。
じんわりと、舌の上に広がる濃厚な風味、かすかに酸味を含んだハチミツの、トロリとした甘みに身を委ねつつ、ミーアは考え……考えて。
――いや、でも、楽しむ理由とか聞かれても……困りますわ。
早々に諦めそうになる。なぜなら、
――楽しいものは楽しいし、美味しいものを食べると嬉しい。甘い物を食べると笑顔になるし、みんなでキノコ鍋を食べると幸せになる。それは自然なこと、仕方のないことで、それを否定されても困りますわ。だって……。
「……わたくしは、そうできているのだから」
無意識にミーアがつぶやいた言葉……それを聞いた瞬間、レアがハッとした顔をした。
「そう……できている……？」
衝撃を受けた様子のレアに、ミーアはさらに慌てる。
――ああ！　まずいですわ。これでは、わたくしが美味しい物を欲し、楽しいことを欲する、強欲姫として生きている、と言っているように聞こえてしまいますわ。ここは……もう少し対象を広げて……。
できるだけ生真面目に、深めの含蓄を語る哲学者っぽい顔を作って、ミーアは答える。
「そうですわ。人間……というのは、そのようにできているのですわ」
対象を「自分」から「人間」に広げ、一般論的な話に落とさんとするミーア。であったが、その言葉に、レアはさらに衝撃を受けた様子だった。

「人間は、そのようにできている……。つまり、神が人間をそのように造られた、と、ミーアさまは、そのようにおっしゃられるのですか？」
レアからの問い。ミーアは、先ほど平らげたデザート分を燃焼させて頭をぎゅんぎゅん動かす。
――神が人を造った、というのは中央正教会の教えの基礎。そして、人間がそのようにできている……というなら、神がそのように造ったということになりますわね。別に矛盾はございませんわ。
確認してから、ゆっくりと、ミーアは頷いてみせる。
「そういうこと、になるのではないかしら？」
「神は間違いを犯さない。であれば、人間がそのようにできていることも、間違いではない、と……？」
「無論、美味しい物を独り占めしようというのは、罪でしょうけれど。それは独り占めをすることが罪なのであって、美味しい物を美味しいと喜ぶこと自体は罪ではない、と思いますけれど」
みなで揃い、美味しい物を食べることが悪のはずがない！　と力を込めて主張する。
学食で、みんなでワイワイスイーツを食べることが悪なはずがない！　と全力で主張する！
「楽しむことも、悪ではない？」
「そう思いますわ。まぁ、楽しいことばかり求めるようでは、怠惰になりますけれど……」
ちょっぴり脳裏に、どこかの孫娘の顔を思い浮かべつつも……自分自身のことは一切思い浮かべずに……ミーアは続ける。
「あなただとて、あの特別初等部の子どもたちが楽しそうにしているのを、悪だとは思わないでしょう？」
その指摘に、レアは再び目を見開いた。
「そう……ですね。確かに、私には、あの光景はとても好ましいものに見えました。人には、楽しむことが必要……そこに罪悪感を覚える必要はない……？　人間は、そのようにできているから……」

そうつぶやいてから、レアは……ああ、と……天を仰いだ。
「では……私が父の思惑に疑問を感じ、考えることも罪ではないと、そういうことに、なるのでしょうか？　それは、私がそう造られているから……疑問を持ち、それを思考するように造られているからで。私が、生徒会長になりたい、と願うことも、ミーア姫殿下の期待に答えたいって思うことも、間違いではない……？」
「そのとおりですわ……私は、レアさんが頑張ることが間違いだとは、思いませんわ。たとえ結果が、ＦＮＹ……ええと、好ましいものではなかったとしても……」
ミーアの脳内翻訳機が、ギュンギュン唸りを上げる。
そう、ミーアは自らの心情を、レア向けに翻訳しているのだ。すなわち、
「わたくしは、食べ物を美味しくいただくことが、間違いだとは決して思いませんわ。たとえ、その結果、多少、ＦＮＹったとしても、それはそれで……」
そんな、心の内にある固い信念を、レア向けに翻訳したのだ。
さらに、そのうえで、
「ですから、わたくしは、レアさんを応援いたしますわ。レアさんが頑張りたい、生徒会長をしたいと思ってくださるならば、全力で応援いたしますわ」
ミーアは、そう決めていた。レアを応援しよう、と。
なぜならば、美食にすら罪悪感を覚えるという、レアの禁欲的な側面を、双子の兄であるリオネルが持っていないという確証がないからだ。
――とりあえず、美食に対して一定の理解をしてくれたレアさんになっていただかないと、学食の甘味が一掃されてしまうかも……。リオネルさんも特別初等部の子どもたちを見に来ていたと聞きますし、それこそ、子どもの体に良いお野菜ばかりの学食に、とか言い出されたら大変ですわ！
野菜は野菜で、まぁ、嫌いではないが、そればかりは、ちょっと

……なミーアである。
そんなわけで……。
「頑張りますわよ！　レアさん」
そんなミーアの声に、レアは力強く頷くのであった。

第四十四話　リオネルの戦略転換

かくて、選挙戦は再びの分岐点を迎えた。
ミーア陣営の分裂……その噂は、当初、スキャンダラスな響きをもって人々に伝えられた。
得体の知れない少女ベルはまだしも、シオンとの対立を思わせるそれは、反ミーア陣営の者たちに喜びをもって受け入れられた。
かのサンクランド王国王子、シオン・ソール・サンクランドが皇女ミーアと袂を分かち、自分たちの味方についてくれる、これほど心強いものはない！　と。
されど……。
「私は、一つ誤解をしていたことがあります。それはミーア姫殿下のこれまでなしてきたことを、よく知らず、否定してきたことです。これは大きな誤りでした」
リオネルのその言葉に、彼らは仰天した。今まで訴えていたことと真逆のことを、リオネルが言い始めたからだ。
話が違うと詰め寄ってくる者たちに、リオネルはゆっくりと首を振り、潔く自らの過ちを認めた。それをもって、自分が支持層の中心に据えていた生徒たちとの決別を表明したのだ。
そのうえで、リオネルは言う。
「私は、ミーア姫殿下のなされてきたことを支持します。民への向き合い方、ことに孤児院の子どもたちをセントノエルに招き、そこで学ばせるというのは、中央正教会の教えに沿うものであると考えます。力の弱い子どもたち、貧しい者たちを顧みないような者は、ミーア姫殿下だけでなく、私も看過することができない。統治者の資格なし、とラフィーナさまもおっしゃることでしょう……ゆえに、私もミーア姫殿下が築いてきたものをできる限り継承し、そこに学び、それを守っていこうと考えていきます」

それは、リオネルの戦略の大転換を意味する言葉だった。
そして、レアを窮地に追い込む言葉でもあった。
なぜなら、リオネルは、ミーアの政策の是非ではなく、妹と自分、どちらが上手くミーアの政策を引き継げるのか、という点に争点を持ってきたからだ。
そして、シオンは、その勘所を完全に把握していた。
「私、シオン・ソール・サンクランドは、リオネル殿を推薦する。彼は、過ちを過ちとして認め、それを改め、前に歩みだす、その勇気を持っている。自身の拠り所であった支持層と決別してでも、正義を行おうという気持ちもある。彼がミーアの後を継ぎ、次の生徒会長を務めることを、ぜひ応援したい」
彼らは、これにより、ミーア対リオネルの構図を、レア対リオネルに塗り直して見せたのだ。
「……これはなかなか危機的な状況ですわ……おそらく、この構想はシオンが考えたもの。いえ、あるいは、リーナさんあたりかしら。いずれにせよ、面倒な……」
思わず、舌打ちしたくなるミーアである。
さらに、そこに、ベルの存在が良い具合にはまった。
憧れのシオンのそばで張り切るベルと、それを支えるシュトリナ。シオンのみならず、帝国四大公爵家のシュトリナや、ミーアの妹分として周知されているベルがリオネルの応援に回ったことで、生徒たちは思った。
なるほど、やはり今回の選挙は、文字通りミーアの後継者を決めるもの。
ミーアの後を継ぐのは、リオネルか、レアか、それを選ぶのであって、どちらが勝ったとしても、ミーアの後継者として扱われるということか。
ミーアの陣営から人が送られているのがその証左。であれば、純粋に候補者の人柄を見るべきではないか？　などと……。
そんな状況を見て、ミーアは……。

――これは、まずいですわ。実にまずいですわ……。
若干、焦っていた。
リオネルの示した態度に、どこかレアに通じる厳格さを感じたからだ。このままでは、やはり、学食のスイーツは取りやめと言い始めるかもしれない……。
さらにさらに、そこにタイミングよくラフィーナから、お手紙が届いた。
ざっくり内容を言うと、ミーアが推薦するレアを自分も応援する旨と、リオネルに勝ってルシーナ司教の鼻を明かしてやることを期待する！　というものだった。
――レアさんが生徒会長を継ぐことを認めてくれるのは嬉しいのですけど……ううむ。
などと思っていたミーアは、手紙の最後に、選挙の日にはラフィーナが直接、応援に寄る！　という文面を見つけて……。
「これは一大事ですわ！　万が一にも、目の前で負けることになったら……。実に気まずいことになりそうですわ。それに……」
っと、視線を転じた先には、レアの姿があった。
ミーアの指導の下、レアも頑張っていた。
きちんと原稿を書き、それに集中することで、みなの視線を意識しないようにした。
演説の前、何の意味があるかわからないが「ディオン・アライアよりマシ」と三度唱えるようにと言われたので、律義に四度唱えるようにしている。
モチベーションを上げるため、子どもたちのところに通い、彼らのために何ができるか考えているし、ラーニャやクロエ、ティオーナやリオラ辺りとも積極的に話をして、見分を広げようともしている。
途中で噛んでも決して止まらず、深呼吸をして、詰まりながらも最後まで演説を続ける、根性もある。
そう……、多少、おかしな行動が混じってはいるものの、レアは

頑張っているのだ。
もちろん、世の中、頑張ったからと言ってすべてに結果が出るわけではない。そんな単純にはできていない。
努力した結果、なにも報われなかった。そんなこと、世の中には腐るほどありふれている。だから、レアが勝ちを手に入れて当然とは思わない。
けれど、それでも……。
「やはり、レアさんの努力が報われないというのは……納得いきませんわ」
そうならないと、とても、後味が悪くなりそうだ。
そう、これはあくまでも、ミーアの後味の問題なのだ
リオネルの側も努力してるとか、そうそう都合よく話は転がらないとか、報われない世の中だとか、そんなの知ったこっちゃないのだ。
なぜなら、ミーアは自分ファーストなのだから。レアが報われてほしいという気持ちを、優先させるのだ。
ミーアの仲間たち、アベルはもちろん、ティオーナ、ラーニャ、クロエらも応援に動いていた。かつての選挙で、ミーアを後押ししたような応援団も作り、気合が入っている。
「できることはすべてやってやりますわよ……」
そうして、両勢力拮抗のまま、選挙戦は進んでいき、最終日を迎えることになったのだが……。

第四十五話　ＭＮＹ

そうして、投票日当日になった。
この日の朝、ミーアは港に待機していた。
本日、やってくる予定のラフィーナを待つためである。
「まさか、ラフィーナさまがいらっしゃるとは思っておりませんでしたけれど……上手いこと話しをしておければ、仮に負けたとしても、許していただけるかもしれませんわね」
むしろ、負けた後、手紙で言い訳するよりは、そちらのほうが良い、とミーアは気持ちを切り替える。
ともかく、事前言い訳を成功させるためには、ラフィーナを出迎え、気持ちよく過ごしていただくことこそが肝要。
「投票の儀は午後からの予定ですし。今日は心から歓迎して差し上げなければ……」
熱く燃えるおもてなし精神を胸に、気合を入れるミーアである。
やがて、船が到着した。
そこから降りてきたラフィーナは、ミーアの顔を見て、一瞬、ぱぁあっ！　と顔を輝かせるも、すぐに、お付きの従者たちの手前、スゥっと涼しい笑みを浮かべて、
「ご機嫌よう、ミーアさん」
「ご機嫌麗しゅう、ラフィーナさま。ご無事の到着、心よりお喜び申し上げますわ」
そのミーアの言葉に、ラフィーナは再び嬉しそうに微笑んで……。
「ありがとう。本当は、ミーアさんからお手紙をいただいてから、すぐに来たいと思っていたのだけど、いろいろと都合がつかなくって」
「回遊聖餐、でしたわね。近隣の村々を回っておられるとか……。大変なお仕事ですわね」

そう言いつつ、ミーアはラフィーナの服装を見た。
ラフィーナは旅装用の外套こそ身に着けているものの、その中には白い儀式用の服を身に着けていた。上下一帯の純白のローブを、青い帯で締めたその姿からは、どこか、侵しがたい神聖な雰囲気が感じられて、ミーアは思わず気圧される。
かつて、ミーアも一時期、なんちゃってご当地聖女もどきに化けていた時期があったわけだが、そんなミーアでは決して出せないような、神聖なオーラをまとっているように見えた。
――ふぅむ、久しぶりにお会いすると、改めて、ラフィーナさま、聖女という感じがしますわ。なんだか、少し近づきがたい、遠くの方になってしま……うん？
っと、そこでミーアは重大なことに思い至る。その清らかな服装の、秘密に……。
――ふむ、回遊聖餐というのは、近隣の村々を巡って、食事を一緒にするということでしたけれど……。もしや、あのダボっとした服の感じは……食べ過ぎた時に、お腹が苦しくならないようにということなのかしら……？　帯を緩めるのも簡単そうですし。ということは、ラフィーナさまも、食べ過ぎてお腹が苦しくなることって、あるのかしら？
さりげなく、あの帯を緩めて食事するラフィーナを想像し、一気に親しみが増してくるミーアである。ミーアの中で、勝手にラフィーナが唯一（むにい）ＭＮＹの友にされようとしていた！
「それにしても、なんだか懐かしくなってしまうわね」
ミーアが心の中で、ちょっぴり失礼なことを考えていようとはつゆ知らず、ラフィーナは、学園の校舎を見上げながら、ポツンとつぶやいた。
「こうして、セントノエルに来ると、あの日々がとてもかけがえのないものだったんだなと、改めて思わされるわ」
それから、悪戯っぽい笑みを浮かべて、ラフィーナは続ける。
「ふふふ、いっそ居をここに移して住みたいぐらいだわ」

「それは……とても素敵ですわね……ふふふ」
と笑みを浮かべつつ……ミーアの背中をつめたぁい汗が流れ落ちる。
なぜなら、ミーアはベルから聞いていたからだ。
司教帝ラフィーナがセントノエル島に自らの城を建てたということを。
――え、ええと、これは、たまたま、ですわよね？　刻一刻と司教帝が目を覚まそうとしているとか、ラフィーナさまの内なる獅子が今まさに伸びをして立ち上がろうとしているとか……そういうこと、ございませんわよね？
などとちょっぴり震えつつも、ミーアは、ラフィーナに言った。
「さ、立ち話もなんですし、とりあえず、参りましょうか」

二人が向かったのは、懐かしき、生徒会室であった。
用意されている紅茶の香りにて、心を落ち着け、ついでにお茶菓子で頭をスッキリさせてから、ミーアは口を開いた。
「すでに、お手紙でお伝えしていることではございますけど、今回の選挙、わたくしはレアさんを応援するつもりですわ。わたくしが生徒会長として、セントノエルを導く、というラフィーナさまのお考えとは、少し外れてしまったかもしれませんけれど……」
ミーア、そこでチラリと視線を転じる。っと、ラフィーナはかすかにうつむいたまま、
「ミーアさん、私……怒ってるのよ」
静かな声が……響いた。
思わず、ミーア、震え上がる！　ああ、やはり、納得してくれていなかったか！　一応、手紙では、応援すると書いただけで、やっぱり、眠れる獅子を目覚めさせてしまったか！？
ミーアの体が今まさに灰と化し、さらさら―っと崩れ落ちそうになった、次の瞬間……。
「私、怒っているの。自分自身に……」

ラフィーナのちょっぴり苦しげな声が耳に届いた。
ミーアは、ハッと目を瞠る。サラサラになりかけていた体が、モチモチのいつものミーア肌（スキン）に戻った。
「私は、ルシーナ司教への私怨から、ミーアさんを縛ってしまった。ミーアさんは、こんなにもセントノエルの、大陸各国の未来のことを考えてくれたのに……」
それから、ラフィーナは真っすぐにミーアを見つめ、ミーアの手を取って言った。
「さすがね、ミーアさん。ぜひとも、レアさんを生徒会長にしてあげて。私も全力で応援するから」
「ご理解いただけて嬉しいですわ。でも……」
シオンとベルのことを説明して、もしかしたら、負けるかも？と、におわそうとするミーアであったが……。
「レアさんのことは、私も昔から知ってるわ。少し内気な彼女の自信にもなることだし、リオネルさんに勝って、ルシーナ司教の思惑をぶっつぶ……ぶっとば……。うん、頑張って！」
グッと小さく拳を握り、そんなことを言うラフィーナ。その勇ましい応援を耳にして、ミーアはかすかに笑みを浮かべた。
それは、一見すると、任せとけ！　という笑み……のように見えて、けれど、よくよく見ると、ああ、まぁ、そうだよね……という諦めの笑みだった。
「……もちろんですわ。ええ、絶対に勝ちますわ！」
勝つしかありませんもの……。と、心の中で付け足しつつ……。
「例の手が、間に合えばいいのですけど……」
ミーアは、静かにつぶやくのだった。

第四十六話　頭がスッキリ、思考がクリアにな……った気になるアレ

同日、午後。
アンヌは一人、セントノエル島の商店街にやってきていた。
彼女が急ぎ足で向かった先は、裏通りに建つ小さな商店だった。
明るく華やかな表通りとは打って変わり、裏通りは薄暗く、汚れていて、治安がいいとはとても言えないような場所――などということは、このセントノエルに限ってはもちろんなく……。
そこに広がるのは、歴史を感じさせる工房が建ち並ぶ風景だった。そう、そこは島で暮らす人々の家具や、雑貨の修理を請け負う職人街なのだ。
顔なじみの職人たちと笑顔で挨拶を交わしてから、アンヌは、奥の店に入る。
雑多に物が溢れた店内、店の奥のカウンターで、一人の男が顔を上げる。
「ああ……来たか。お嬢ちゃん」
そこにいたのは老齢の男だった。年老いた男は、眼鏡を光らせながら、アンヌのほうに目を向ける。眼光鋭い男に臆することなく、アンヌは真剣な顔で頭を下げる。
「おはようございます……。今回は、ご無理を言ってしまい申し訳ありません。それで、あの、例の物は……？」
「できてるよ。ギリギリだったがね……」
肩をすくめつつ、男が差し出したのは、手のひらサイズの木の箱だった。差し出されたそれを捧げ持つように受け取って、アンヌが小さく頭を下げる。
「ありがとうございます」
中身を確認したアンヌは満足そうに笑みを浮かべた。
「完璧なお仕事ですね。さすがです」

その言葉に、男は、かすかに苦々しい表情を浮かべて、
「そんなものは、ワシからしたら邪道……なんだがね。まったく、そんなものを使って、なにがしたいのやら……」
「使うと緊張が忘れられる、とミーアさまは言っておられました。頭がスッキリして、思考がクリアになる、と」
アンヌは、その木箱をグッと握ってから、もう一度、男に頭を下げた。
「それでは、急ぎますから。私はこれで……」
「ああ、気を付けて帰りなさい。落とさないようにね」
アンヌはこくり、と小さく頷いて、小走りに店を出た。
急がなければならない。
選挙の最終演説までは、もうあまり時間がないのだから。

裏通りから、表通りへ。行きの道順を逆に辿るようにして進む。
近道などは考えない。変に道を変えて迷ったら元も子もない。
全力で走りたくなる気持ちも抑える。全速力で走ったら、学園にたどり着く前に息が上がってしまう。そうしたら、結果的に遅くなってしまう。
「焦らず、急ごう。大丈夫、ちゃんと間に合うから」
小さな声で自分を鼓舞しつつも、アンヌは道を急いだ。
「それにしても……これで一体どうするつもりなんだろう？」
手の中の木の箱を見て、うーん、っと唸るアンヌ。
「前も、ミーアさまは同じようなものを買っていたけど……どうして余分にもう一つ必要なんだろう？」
首を傾げつつも校門をくぐる。学園の敷地に入り、聖堂が見えてきたところで、アンヌは思わず、ホッと安堵の息を吐く。
「ともかく、間に合って良かった……」
と足を速めた、次の瞬間だった！
「きゃっ！」
「うわっ！」

突然、角から現れた人物に激突。その衝撃で、アンヌは尻餅をついてしまう。
そして、その手から、ひょーいっと例の木の箱が飛んでいき……。
「あ、いたたた……」
お尻をさすりつつ、ぶつかってしまった人のほうに目を向ける。
っと、そこに倒れていたのは……。
「あ、ユリウス先生……も、申し訳ありません」
慌てて頭を下げると、ユリウスは、苦笑いを浮かべて立ち上がった。
「いえいえ、こちらのほうこそよそ見をしていました。お嬢さんにぶつかられて、転んでしまうとは、我ながら情けない」
頬をかきつつ、バツの悪そうな様子で、彼は優しく手を差し出した。
「大丈夫ですか？　アンヌさん」
遠慮がちにその手をとって立ち上がるアンヌ。見れば、ユリウスの物だろうか、足元には、彼の荷物だろうか、大量に本が散乱していた。
「大変……ごめんなさい」
急いで拾い集めようとするアンヌをユリウスが止める。
「ああ、大丈夫ですから。それより、お急ぎの様子でしたけれど、大丈夫ですか？」
言われて、すぐに思い出す。そうだった！
「ここは、大丈夫ですから。行ってください」
その言葉に、アンヌは躊躇いがちに頷いて、
「あ、はい。すみません。それじゃあ……」
そこでようやく、アンヌは持っていた木の箱をどこかに落としたことに気が付いた。けれど幸い、すぐに見つける。それは、ユリウスの足元に転がっていた。
急いで拾いあげてから、もう一度、頭を下げて、アンヌは聖堂に向かい走り出した。

走りながら、箱の中身を確認。どうやら、無事なようで、思わず安堵の息を吐くアンヌであった。

さて、そんなアンヌを見送ってから、ユリウスは落ちていた自分の本を拾い集めていく。今日は、子どもたちに周辺国の歴史を教える予定だった。

「生徒会長選挙も絡めて、何か話ができればいいんだが……」

ぶつぶつつぶやきつつ、本を拾いあげ……、あたりをキョロキョロ……。

「ああ、こんなところにまで飛ばされてたか」

彼はおもむろに、少し離れた草むらの中、小さな木箱に手を伸ばした。

中を開け、中身の無事を確認してから、彼は特別初等部の教室へと向かった。

第四十七話　勝負の日

セントノエル学園において、生徒会長選挙というのは、神聖なる儀式だ。

立候補者は、それぞれに、学園地下の清めの泉で身を清め、投票に臨むことになる。応援演説の者が立つ場合には、その者も同様に身を清め、純白の衣装に着替える必要があった。

さて、衣服を脱ぎ、一糸まとわぬ姿となったミーアは、レアと共に泉へと降りる。

白い石が敷き詰められた中を進んでいき……っと、先に、そこにいた人物に思わず驚きの声を上げる。

「あら……ベル。今日の応援演説は、あなたがしますの？」

てっきり、応援演説はシオンがやるものとばかり思っていたから驚いてしまうミーアであるが……。

「ふふふ、当然です。リオネルさんが最初に声をかけたのは、ボクなのですから」

ドヤァ、という顔で胸を張るベル。

それを見て、ミーアは首を傾げる。

――ふむ、ベルはいい気になっているみたいですけど……これは戦略としてはどうなのかしら？

思考を深めるため、ミーアは、清めの泉の水に身を沈める。

清めの泉の地形効果……すなわち、水風呂効果により、知能レベルを上昇させるために！

――素直にシオンに応援させたほうが、サンクランド貴族の支持を得られそうな気がしますけれど……しかし、逆にそれでは露骨に過ぎるのかしら？　他の生徒は事情を知らないでしょうけれど、リオネルさんが先に声をかけたのがベルであること、シオンは知っているでしょうから。

かといって無理にシオンに応援を頼むのは逆効果。むしろ、潔く最初に声をかけたベルにお願いするのがベスト……。なかなかの好判断に、ミーアは唸ってしまう。

――しかし、考えたのはリオネルさんかしら？　シオンが進言したのか……案外、リーナさんということも考えられますわね。

そう推理するミーアであったが……ちなみに、正解はシュトリナであった。

もっとも、深い計算があったというわけでもなく、ベルちゃんの晴れ姿が見たいわ！　というちょっぴりアレな思惑に基づいたものであったが……。まぁ、それはさておき。

「ふっふっふ、ボクの応援演説、ちゃんと見ていてくださいね。ミーアお姉さま！」

そう言って、颯爽と出ていこうとするベルに声をかける。

「ああ、ベル。どうでもいいですけど、髪はきちんと拭かないと傷みますわよ？」

っと、適当にザーッと髪を拭いただけだったベルが、おずおずと戻ってきて、タオルで拭き始め……。

「ミーアお祖母さま、意外と細かいです……」

などと、ぶつぶつ言うのであった。

さて、汚れなき衣装に身を包んだミーアたちは、聖堂に足を運んだ。

生徒たちの視線を受けて、レアが、くらぁっとしかけたのを、何とか支えつつ、椅子に座らせる。

どちらが先に最終演説を始めるのか、その順番は、まだ、決まっていなかったが……。

「司教さま、妹は、少し緊張してしまっているようです。私が先に演説をしてもよろしいでしょうか？」

そんなリオネルの問いかけに、司式を担当する司教は穏やかな顔で頷いた。

――むぅ……。堂々たる態度はご立派ですけれど、あれで、みなの心をがっちり掴まれてしまっていないか心配ですわね。まぁ、レアさんもこんな様子ですし、アンヌもまだ着いていないから後攻なのは望むところですけど……。

レアの背中をさすりながら、ミーアはリオネルの演説と孫娘の晴れ舞台を見守った。

「ボクは、リオネルさんのことを生徒会長に推薦します。彼は…………」

っと、そこで、ベルが瞳を閉じた。まるで、リオネルのこれまでの選挙活動を思い出すように、一瞬黙ってから、

「彼は、自分の間違いを改め、ミーア生徒会長の政策を引き継ぐことを表明しました。自分の過ちを認め、改めるというのは、なかなかにできることではありません。それが、自らの支持層を遠ざけることになるならば、なおさらです」

ベルは、ここでグッと拳を握り、続ける。

「しかし、リオネルさんは、それをすることで、かつての仲間、自らの支持者だった人たちをも訓育しようとしている。彼は生徒会長の資質を備えた人だと、ボクは考えます」

特に噛むでもなく、最後まで堂々とやり切ってから、ドヤァッという笑みを浮かべるベル。やや短くも、コンパクトにまとまった応援演説に、ミーアは思わず唸る。

それに続いて、リオネルの演説が始まる。

「私はミーア姫殿下の政策を支持します。各国から孤児を集め、教育を施す、特別初等部の試みをセントノエルでやることはとても意義深い。よくぞ、やってくれました、と言いたいです。そのほかの振る舞いも、中央正教会の教理に完全に則ったもので、反対する余地のない素晴らしいものです。だからこそ、私は訴えたいのです。それをしっかりと引き継げる者が次の生徒会長になるべきであると」

それは、今までの彼の主張と同じだったが、十二分に説得力のあるものだった。

ミーアの政策を引き継ぐことができるのは自分だ。妹には無理だ、と彼は繰り返す。
妹はミーアには遠く及ばず、その偉業を守っていくことはできない、と。それが可能なのは、自分のほうである、と。
今、椅子の上に座り込んでぐったりしているレアの姿が、そこに一定の説得力を付け加えていた。
――ふむ……ベルの応援演説がきっちり様になっていたのも想定外でしたわ。てっきりもっと適当な感じかと思いましたのに。
……ベルが、用意していた原稿の一部をすっ飛ばしたため、結構なアドリブが入ったことを知るのは、すべてが終わった後のことになるのだが。
まぁ、それはともかく。
会場の空気の波を、ミーアは敏感にキャッチする。
――これは、なかなか厳しい状況ですわね。
うつむくレアの顔を見てから、ミーアは会場に目を向ける。
――ふむ……。アンヌは、もう少し時間がかかるかしら……。
っと、その時だった。聖堂の後方、扉が開き、アンヌが姿を現した。
――来ましたわね。何とか、間に合って良かったですわ。
幸い、リオネルの演説は続いている。ミーアはさりげない様子で席を立ち、聖堂の壁沿いに小走りで向かってくるアンヌのところへ。
そこで、例の木箱を受け取ると、再び、自らの席に戻る。
タイミングよく、リオネルの演説が終わった。
――さて、行きますわよ。反撃開始ですわ！
ミーアは鼻息荒く、席を立った。

第四十八話　ミーア姫、リミット解除！

アンヌからもらった秘密兵器を握りしめたまま、ミーアは講壇に立つ。そこに、そっとその箱を置き、それからミーアは生徒たちを見回した。

ベル＆リオネルの演説によって、すっかりと温まりつつある場。生まれつつある流れに、ミーアは敢然と立ち向かう……ようなことは、もちろんしない。

ミーアは海月。流れに乗ることこそ、ミーアの本質。なればこそ、まずは、その流れを利用すべく、ミーアは語り始める。

「今日、こうして応援演説の場に立てることを、わたくしは嬉しく思いますわ。また、特に今回の会長候補であるお二人の成長を、心から喜ばしく思いますわ」

そうして、ミーアはリオネルの演説に乗っかる形で話を進める。

「リオネルさんのお心遣い、とても嬉しいですわ。確かに、わたくしもなにかと忙しい身。わたくしが、他のことに集中できるよう、セントノエルの仕事を自分が担いたい、それができるのは妹ではなく自分だ、という言葉は、わたくしへの思いやりに溢れ、また熱意の溢れるものでした。とても心強く感じましたわ」

ちなみに、本心である。

ミーア的にセントノエルのことを任せられるのであれば、楽ができるし、それに越したことはないのだ。そうして、微妙に本音を交えつつ、リオネルの作った流れに乗りつつも……、

「でも……」

ここで、ミーアは方向を変える。

「それは、無用の心遣いとも言えますわ。なぜなら、わたくしは、次の生徒会長に対してしっかりと責任を持ち、引継ぎをしていくからですわ」

それから、ミーアは来賓席に座るラフィーナのほうに、チラッと視線をやって……。
「わたくしが、ラフィーナさまから生徒会長の任を引き継いだ時も、そうでした。前任のラフィーナさまは、決して手を抜かず、わたくしが会長として困らぬよう、生徒会の中に残って、さまざまな役割を担ってくださいました。わたくしも、そのラフィーナさまの姿に倣いたいと思っておりますの」
まずヨイショ。これが、ミーアの基本である。
そうして、リオネルの主張、すなわち「ミーアに苦労をかけないよう、自分が生徒会長になる」と言う論理を弱めたうえで……さらに、ミーアは追撃をかける。
「そして……それ以上に、わたくしには、どうしても許容できないことがございますの」
ミーアは、静かにリオネルに目を向けた。
ギンッと、リオネルを睨みつけてから、ミーアは、大上段に論理の剣を構える。
そうなのだ、今日のミーアは覚悟をキメているのだ。
なにしろ、レアは、これ以上ないぐらいに頑張っている。
ゆえに、これ以上の上がり目を期待するのは酷というものだろう。であれば……やるべきことは一つだけ。こちらが上がらないなら、相手を下げるしかない。
すなわち、やるべきことはリオネルに対する――ネガキャンである！
基本的にミーアは相手を貶めることが好きではない。自分がやられて大変、腹が立ったこともあったし、自分がいつまでも責める側にいられるとも限らない。やられたことをやり返される可能性は十二分にある。
人は、自らが他人を裁いた秤によって、自分自身も裁かれるもの。なれば、ミーアはできるだけ他人に優しくしていたいのだ。
けれど……今日だけは、そのモットーをかなぐり捨てる。

言うなれば、今日のミーアはリミットを解除しているのだ。
ミーアは再びチラリとラフィーナのほうに目を向ける。その、白きローブのような、ダボっとした服を見ながら、ミーアは小さく頷く。
そうなのだ。ミーアはリミットを解除している。気分はちょうど、帯を緩めて、食事に挑まんとするラフィーナと同じ……唯一ＭＮＹの友と同じ気持ちなのだ。
そんなミーアの視線を感じてから、ラフィーナは少し驚いた顔をしてから、穏やかに笑みを浮かべて頷いた。
今まさに、親友同士の心は、重なり合っているのだ！
……そうだろうか？
いや、まぁ、それはともかく……。
ミーアは心の中で「ほわぁあ！」っと気合の掛け声を上げつつ、思い切りリオネルに斬りかかる！
「リオネルさん……あなたは、ずっと言っておりましたわよね……。レアさんでは、わたくしの後継者になれない。妹では、力不足である、と」
問いかけるように、リオネルのほうに目を向け、それから、みなのほうに顔を向ける。
「ずっと言ってきたのですわ。リオネルさん、あなたは、この選挙の間、ずっと、ずっと……妹にはできない、レアには無理だ、と」
それは、誰も否定できないことだった。
確かに、リオネルは、選挙の争点を鮮明にするため、そう主張し続けてきたのだ。
動かしがたい、彼の主張の中心、それこそが、彼が大きく踏み出さんとして揚げた足。ミーアは……それを全力で取りに行く！
「わたくしは、それを許容することができませんわ。それをこそ……許すことができませんわ。なぜなら、あなたのその言葉は、妹であるレアさんが『信じられない』と言っているのと、同じことなのですから……」

その指摘に、思わずと言った様子で、リオネルが腰を浮かしかけるも、ミーアは静かに手を挙げて、それを制した。
「あなたは、レアさんのことを信じることができていないのですわ。リオネルさん。たとえ、それが、心配から来ることであっても、妹が傷つかぬよう守りたいという気持ちから来ているのだとしても……。それは、妹を信じず、結果として成長を邪魔することになるのですわ。それを許容することは、できませんわ」
ミーアは、それから、レアのほうに目を向けた。
「わたくしは、レアさんを信じます。誰が何と言おうと。彼女は、わたくしの後を立派に継いでくれる。今はその力がなかったとしても、弛まず努力して、きっと立派に勤め上げてくれる。ラフィーナさまから生徒会長の座を受け継いだ、わたくしと同じように」
……最後に、若干、引っかかる部分がないではなかったが、まぁ、それはおいておくとして。
ミーアは堂々と、胸を張って言い放つ。
「わたくしは、信じます。信じて任せます。それは、その姿勢が、このセントノエルには必要だと思うからですわ。ここは学び舎。通う者たちが、課題に挑み、努力し、時に挫折しつつ、手を取り合って成長する……そのような場だからですわ。そして、そのためには、どうしても『信じる』という姿勢が必要ですわ……」
そっと胸に手を当てて、ミーアは続ける。
「そして、もしも、失敗してしまったら……信頼に応えることができなかったら……、また、挑戦すればいいだけのこと。失敗の穴埋めはわたくしたち、この学園に通う上級生がいたしますわ。かつて、ラフィーナさまや、他の先輩たちがしてくださったように。そのような営みの中で、成長し高めあう、それこそがセントノエル学園ではないかしら？」
そこまで言って、ミーアは静かに頭を下げて、壇上から降りた。
その手にしっかりと、小箱を握りしめたミーアは、真っ直ぐにレアのもとに戻っていき……。

第四十九話　合理性と眼鏡と

レアのもとに戻って来たミーアは、おもむろに小箱を開き、中身を取り出した。

「レアさん……これをあなたに渡しておきますわ」

そうして差し出した物……それは――眼鏡だった！

かつてミーアがクソメガネの力を借りるべく頼った、伝説の眼鏡。そうなのだ、ミーアが用意した秘策、それは、すなわち……。

――もう、最後の最後は、すがるしかありませんわ……。帝国最高の権威に！

すなわち、クソメガネの権威である！　眼鏡の威を借るミーアである！

眼鏡をかければ、頭もスッキリ良くなり、そのうえ、勇気も出てくる。堂々と演説できるに違いない、と確信しているミーアである。

数日前、その着想を得たミーアは、急ぎ、セントノエルの職人を頼った。

以前、ミーアの伊達眼鏡を作った職人に、である。

「せっかくの晴れ舞台ですし、レアさんに合うサイズの眼鏡があるといいのではないかしら？」

度が入っていない眼鏡を作ることに難色を示す職人を、なんとか説き伏せ、ミーアは生徒会長選の投票日に間に合わせることに成功したのであった。

――ギリギリでしたけれど、間に合ってよかった。これで完璧ですわ。

これこそが、ミーアができる最後の一手。最も信頼のおける手なのだ。

「あ、あの、ミーア、さま……？」

唐突に眼鏡を手渡され、レアは困惑している様子だった。

このことに、なんの意味があるのかわからない、とばかりに首を傾げるレアに、ミーアは優しく、朗らかな顔で言った。
「大丈夫ですわ。レアさん。必ず、上手くいきますわ。さ、かけてかけて」
自信満々で頷くミーアに、押されるように、レアは眼鏡をかけ……くらぁっと体が傾きかける。
「大丈夫ですわ。レアさん。大丈夫。あなたはしっかりと物事を考えられる方ですから」
仮に原稿を読み飛ばしたって大丈夫だよぅ、っと……。緊張した様子のレアに、ミーアは生真面目な顔で言う。
「みんな、あなたの言葉を聞いておりますわ。どうか、それを信じて」
ギュッと手を握って言う。っと、レアはハッとした顔をする。
――ふむ、あとは念のための備えとして、選挙で負けても気落ちしないでね、と言っておきたいですわね。できるだけ、婉曲的に……。

ミーアは、少しだけ考えてから言った。
「神は見……」
えなくとも、きっと、あなたの努力を見ているから、仮に負けても大丈夫よ？　ちゃんと、その努力は報われるはずだから、落ち込んでうっかり司教帝にならないでね……、などと言おうとして、さすがに、白々しいかと自重する。
そんなの、司教の娘ならば百も承知なこと。むしろ偉そうに言われたら、腹が立つだろう。
「あなたなら、やれますわ。頑張ってくださいませね」
ミーアは、ポンポン、っとレアの肩を叩く。っと、レアは、小さく頷き、それから、なにかを思い出したような顔をして……。
「ディオン・アライアよりマシ。ディオン・アライアよりマシ……」
呪文のように四度繰り返し……。
「あの、ミーアさま、このおまじないって、どういう意味があるん

ですか？」
「ん？　ああ、実は、帝国にはディオン・アライアという、こわぁい騎士がおりまして。わたくしがサボろうとするとすごく怖いお顔をするのですけど……。彼の殺気に比べれば、こんなのどうということもない、という意味ですわ」
レアは、ポカンとした顔をしたが、その顔にすぐに理解の色が広がっていき……。
「ああ……そういうこと、なのですね」
小さく頷いた。

ミーアから、わけのわからない眼鏡を手渡されて、レアは首を傾げるばかりだった。
ぐにゃあ、っと歪んだ視界に、彼女はただただ、戸惑っていた。
――ど、どうして、こんな眼鏡を……？　こんなのかけてたら、前が全然見えない……。
強い度の入ったその眼鏡なのだが……実は、ミーアが手配した伊達眼鏡ではない。
まぁ、言うまでもないことながら、それは、アンヌがぶつかった際に取り違えてしまった、ユリウスのスペアの眼鏡なのである。
緊張と混乱の最中にあるレア、その手が、ギュッと握られる感触がして……。
「みんな、あなたの言葉を聞いておりますわ。どうか、それを信じて」
ミーアの声に、レアは、思わずハッとする。
――この眼鏡……みんなの顔が見えなければ、緊張せずに話ができるだろう、ってことなのかな……。
見えていなくたって……みなが聞いていると信じて話をしろ、と……ミーアはそう言っているのだと、レアは思って……。
確かに、これは、とても合理的な選択だった。
観衆が見えているから怖い。ならば、見なければいい。

目を閉じていれば、彼らの視線を感じなければ、意識しなければ……緊張することもないだろう。ただ、演説を彼らに聞かせればいいだけなら、原稿に目を落とし、顔を上げなければいい。

それでは見栄えが悪いなら、こうして、度が合っていない眼鏡をかければいい。そうすれば……緊張せずに済むだろう、と。

それは、とても理に適った考え方。レアが理解しやすい考え方で……だけど……。

――でも、それって……なんだか、嫌だ……。

そう、思ってしまう。

だって、それって結局は、逃げに過ぎないじゃないか、と。

怖いものから目を逸らして、見えないふりをして……ただ虚空に向かって声を上げろと言われているようだった。生徒たちの顔を見る勇気がないのだから、顔を上げるな、逃げろ、と言われているようだったから。

――あんなに、信じてくれるって、言ってたのに……。

結局は口ばかり……ミーアもまた、自分を信じていないのだと、思ったから……。

だけど……。

「神は見……」

ミーアのつぶやく言葉が、聞こえてきた。

レアの、最も親しみのある単語が、聞こえてきたから……。レアは、再び、ミーアの声に耳を傾ける。

けれど、ミーアは言葉を途中で止め、すぐに別のことを言った。

「あなたならやれますわ。頑張ってくださいませね」

――今、なにを……？

ボヤけたレンズの向こう側、ミーアがどんな顔をしているのか見えない。

それ以上、言葉が続くこともない。

だから、レアは自分で考えることにする。

ミーアは言った。あなたは考えられる人だから、と。あの言葉は、

きちんと自分で考えろということだと、レアは理解する。
そうだ。考えなければならない。なぜなら、理性と論理によって、きちんと考えるように、自分は作られているのだから……。
――神は見、という言葉……。この眼鏡……目の前が見えない……。ということは「神は見……えない、と続けようとした？
瞬間、レアの脳裏に、稲妻が走った！
――神は見えないけれど、私たちの祈りを聞いている。私は、それを信じている。ミーアさまが指摘しようとしたのは、これ？
そして、ミーアは言った。みんなが聞いていると信じろと、と。見えなくとも、信じろ、と。
それは、どちらも同じことだ。
見えないけれど、確かに聞いていると信じること……。
ただ、違いは、聞いている存在が人か神かの違いで……。
――ああ、そうか。そういうこと？
まるで、問われているようだった。
あなたは、神の前に出る時には緊張しないのに、人の前に出る時には、緊張するのか？　と。
それは、理屈に合わないのではないか？　と。
なぜなら、神は人より、畏怖されるべきものなのだから。
「……あの、このおまじないってなんの意味があるのですか？」
例のおまじないのことを聞いてみる。誰かの名前を、何度もつぶやくことに何の意味があるのか？　と。
実は、その意味は、なんとなくわかってはいたけど……念のために聞いてみる。
「ああ、実は帝国にはディオン・アライアという怖い騎士がおりまして……」
冗談めかしてミーアが言ったのは、レアの推測の正しさを裏付けるかのようなものだった。
――ディオン・アライアよりマシ……。ああ、やっぱり……ミーアさまは、すごく合理的な方なんだ。

ミーアは言っているのだ。それは比較の問題だ、と。
ディオン・アライアという恐ろしい男に睨まれるより、今の状況はマシ、ということ。
全知全能の神と比べれば、人を前にすることのほうがマシ、ということ。
緊張などするはずがないではないか、ということ。
――ミーアさまは、私を信じて……、緊張することなんかないって、少し考えればわかるって、そう言ってくださっているんだ。
先ほどの、ミーアの応援演説が今もレアの耳に残っている。
「信じる」と言ってくれた……その言葉を胸に抱き、レアは静かに壇上に向かい……。
視界がボヤけていることをすっかり忘れて、思わず転びかけた。
ちょっぴりアンヌめいたところのあるレアであった。

第五十話　その上へ、もっと前へ

なんとか、転ばずに壇上まで来たレアは、眼鏡を外そうとするが……。

――ううん、ミーアさまがつけろ、と言っていたものだから……。

とりあえず、そのままにして顔を上げる。

理屈ではわかっていても、体が反応してしまうことなんて、よくあること。だから、とりあえずは、このまま、見えないままで……。

――って……原稿が、読めないや……。

度入り眼鏡のせいで、手元の文字が歪んで読めなかった。

――つまり、原稿をそのまま読むのではなく、私の言葉で語りかけろということ……かな。

小さく息を吸って、吐いてから、レアはゆっくりと口を開いた。

「みなさん、私が、生徒会長に立候補した、レア・ボーカウ・ルシーナです」

読まずとも、原稿の文章は頭の中に入っている。言葉に詰まることはない。記憶のままに、それを語ればいいだけだ……けれど。

――ミーアさまがお求めなのは、それだけじゃない。ミーアさまは、おっしゃったんだ。私は、しっかり考えられる人だから大丈夫だ、と。

ミーアの言葉を指針に、レアは考えながら、話し始めた。

「私は……前任生徒会長ミーアさまの政策を、とても素晴らしいものだと思います。ミーアさまの政策は、我らの神の慈愛を表すようなものです。貧しき子どもたちへの向き合い方、民への配慮、飢える者の無きように、助け合う仕組み……。どれも、一切の反論の余地なく、素晴らしいものです」

そこまではリオネルと同じだ。

けれど、レアはそこで立ち止まらない。彼女は、もう、考えるこ

とをやめない。
「私は、その、ミーアさまが築き上げてくださったものから始めて……それを土台として……さらに積み上げたいと思っているのです」
レアは言う……。さらに前へ、さらに上へ……と。
「ミーア姫殿下が始めた、特別初等部の試みは素晴らしいものでした。だから、私は……いずれこの『特別』の文字を取りたいと考えています」
彼女が告げた言葉……それに、生徒たちが、かすかにどよめいた。
「特別初等部に反対の方たちがいました。兄、リオネルを支持し、ミーア姫殿下に反対の意思を示そうとした方たちです。兄が言ったように、これは大きな誤りです」
そっと眼鏡の位置を直しながら、レアは言った。
「私たち、民を治める権能を、神から委託された者たちは……王や皇帝、貴族に連なる私たちは……民のことを知らなければならない。民の友でなければならない。時に剣をもって権威を示さなければならないとしても、それは、道を誤った友にするように、しなければなりません」
選挙戦が始まってから、レアは、ずっとミーアの宣言を、わかる限り調べてきた。
パン・ケーキ宣言も、特別初等部の子どもたちに、盗難の疑いがかけられた時の発言も、その言葉のすべてが学びだと思ったからだ。
……ちなみに、そのレアの後ろにこっそーりと寄り添い、一緒にメモを取るオウラニアの姿があったとかなかったとかいう話があるが、まぁ、それはともかく……。
そんなミーアの言葉の一節が、レアの心に残っている。
幼子に、罪を犯させるは親の罪。そして、そうせざるを得なくさせた、統治者の罪。
ゆえに裁くのではなく、過ちを犯さぬようにさせることが大事である、と。
では、そのように振る舞うのに必要なことは何だろうか？

レアは、考え……そして答えを出した。
それこそが、民を、友として扱うように、というものだ。
「この学園で、民と共に学ぶことは特別なことではない。孤児たちと、食卓を囲むことを、特別なことと考えてはならない。この学園にいる間だけの『特別』だと思ってはいけない。学園を卒業してからも、その心を持ち続けなければならない。そのために、特別初等部は特別ではなく、当たり前に子どもたちを受け入れるクラスにすべきだと思います。正式なクラスとして、子どもたちの受け入れを増やすべきです」
ミーアの始めた特別初等部の規模を広げ、さらに、そこに意義を付け加える。それは、リオネルがやらなかった……否、やれなかった戦略だった。
なぜならリオネルは、今でこそ支持しているものの、はじめはミーアの政策を否定するところから入ったからだ。
そのような者が、自分の考えに基づいて、政策をより前進させて……などと言えば、やはり、ミーアの政策を退けて、自分の思い通りにするつもりか、などと言われかねない。
ゆえに、リオネルは、ミーアのしてきたことを、何一つ変えることなく、忠実に継承する必要があった。
けれど、レアは違う。
レアは最初から、ミーアのやったことを正しいと主張していた。
そのうえで、それを土台として自らの考えを付け加えた。
ただ、ミーアの政策を擁護するだけでなく、自らが……生徒会長になる意義を主張したのだ。
「私は、ミーア姫殿下と同じことをしようとは思いません。できるとも思いません。それに意味があるとも思わない。受け継いだ物を守り抜くだけでなく、そこから一歩ずつ歩みを進めたいと、私は思っています」
それから、レアはそっと眼鏡に手をやり、それを外した。
はっきりと周りを見て……みなが、自分のほうを見つめているの

を確認して、ちょっぴり、クラァッとしつつも……。その顔に浮かぶのは、やり切った、爽やかな笑みで……。

「ああ……本当だ。本当に、みんな、聞いててくれたんだ」

ため息を吐くように、つぶやいた。

第五十一話　……と、ミーア

――おお、レアさん、なかなかすごいですわ……。

じっくりと、固唾を飲んで見守っていたミーアは、聖堂内の空気が変わるのを感じていた。

最初、あざとくも転びかけ、上級生の庇護欲をくすぐった直後、レアは立派に、堂々と演説をやってのけた。リオネルの演説の中で、頷けるものはきちんと取り入れつつ、それを上回る論理を展開してのけたのだ。

途中、もともとの原稿から外れた時にはどうしようかと一瞬焦ったが、レアのほうはまったく慌てる様子は見せなかった。

その威風堂々たる話しぶりは、今までの応援演説とは一線を画すもの。ずっとうつむき、目を合わさず、ただ原稿にだけ集中していたレアとは違い、今日のレアには、清らかな威厳があった。

それを見た誰もが思った。

「これは、本当にあの、自信なさそうにしていたのと同じ少女だろうか？」

と。

そして……感じた。

ミーアの言葉の正しさを……。

なるほど、このレアという少女は、確かに弱々しく頼りなかった。けれど、今日、演説をした彼女は十分に、人の上に立つ風格を備えていた。成長が、あったのだ。

であれば、ミーアの言うことも頷けるのではないか、と。

レアの成長を信じる、レアならば必ず生徒会長ができると信じる、みなの支えと助けを受けて成長するから、と、その言葉に一定の説得力が生まれた。

さらに、話し終えた、まさにそのタイミングで、レアが眼鏡を外

した。瞬間、何人かの生徒たち……特に、男子生徒たちが息を呑んだ！

そう、俗に言う「分厚い眼鏡を取ったら美少女でした」というやつを、目の当たりにしてしまったからである。選挙演説で回っていた間は、いつも、ちょっぴりうつむき気味であったゆえに、あまり見てはいなかったが……こうして見ると、レアはとても愛らしい顔をしていた。

しかも、レアのまとう空気感も微妙に変わっていた。なんというか、こう、弱々しくて、つい守ってあげたくなるような、小動物めいた雰囲気が戻ってきたのだ。

レアは……ギャップの塊だった。

少し前の立派な演説との間に生じた激しい落差に、何人かの生徒がクラァッと来ていた。

……大丈夫なのだろうか？　セントノエル……。

……大丈夫なのだろうか？　大陸の未来……。

まぁ、それはともかく。

その後、司教の祈りの後、投票の時間に移った。すべての生徒が、前方の投票箱に票を投じた後、集計作業が始まる。作業にあたるのは、ヴェールガ本国から選挙のために派遣された司教たちだ。

そうして、しばしの静寂の後……司教の口から告げられたのは、レアの勝利だった。

「ミーア姫殿下……」

投票の儀の終了が告げられ、にわかに生徒たちにざわめきが戻って来たところで、リオネルが歩み寄ってきた。

ミーアのそばまでやって来た彼は、一瞬、悔しそうに唇を噛んだが、すぐに首を振り、深々と頭を下げる。

「どうか、レアのことを、よろしくお願いします」

それから彼は、レアのほうに目を向ける。

「しかし、本当に大丈夫か？　レア……。父上が期待した生徒会長

の大任を、本当に……」
っと、そこまで言ったところで、彼は口をつぐんだ。
「いや、なんでもない……。これじゃあ、ただの負け惜しみだ。選挙で負けた私に、何を言う資格もないな。負けたんだから……」
悔しげに唇を噛むリオネル。しょんぼりと肩を落とした、その居たたまれない姿を見たミーアは、ちょっぴり可哀想になって……声をかけようとして……。その時だった。
「お二人とも、見事な選挙戦だったわ」
涼やかな声が響いた。
「らっ、ラフィーナさま！？」
ぴょんこっと跳びあがり、姿勢を正すリオネル。
つい先ほどまでの悲壮な顔はどこへやら……その顔に浮かぶのは、憧れの舞台女優に会えた少年のような……ウキウキのワックワクの顔だった。
そんなリオネルに微笑ましげな視線を向けて、ラフィーナは続ける。
「リオネルさんも、素晴らしい演説だったわ。さすがは、将来のルシーナ伯。立派でしたよ」
それから彼女は、そっとリオネルの頭に手を置き、優しく撫でた。
それは、聖女がするような慈愛の行為ではなく、少しだけ親しみのこもった、親戚のお姉さんが、傷ついた少年に向ける優しい仕草だった。
「だから、そんなに自分を卑下しなくてもいいのです。セントノエルは生徒の成長と学びの場。であれば、あなたの成長だって、ミーアさんは考えていた。そうよね、ミーアさん」
ラフィーナの言葉に、ミーアは、一瞬、あら？　そうだったかしら？　と思わないでもなかったが……そんなのはおくびにも出さずに、澄まし顔で頷いて、
「ええ、そのとおりですわ！」
いけしゃあしゃあと言い切った！

それを聞いて、騙されたリオネルが、驚愕の表情を浮かべる。
「ぼ……私の、成長を……？」
「ええ、そうよ。あなたは、ここに立つ前に、すでに一つの成長をしている。そうでしょう？」
ラフィーナは、まるで、自分のことのように誇らしげに言った。
「あなたは、ミーアさんが成したことを見て、知った。そして、それを維持するのが正しいことだと考えた。これは立派な成長だわ。だって、あなたは、この学園に来る前、ミーアさんのしたことを悪しきことと思っていたのでしょう？」
「それは、確かに……」
「それに、ミーアさんのあの応援演説……あれは、あなたの問題を指摘したものだったでしょう？」
「はい……」
「あれは、あなたの成長を期待してのもの。あなたがすべきことを、指し示すものだった。あなたは、もっと妹を信じなさい、というミーアさんのメッセージを、しっかりと吟味するといいでしょう。妹を大切にすることと、信用せず、何もさせないこととは違うのだから」
それから、ラフィーナは何かを思い出すように、遠くを見つめて……。
「なんでも自分でやることは簡単よ。そして、気も楽でしょう。けれど、それはレアさんのためにならない。レアさんの可能性を潰してしまう。そして、あなた自身も……」
「私、自身も？」
「そう。一人ですべてを背負い込んでは、いつか潰れてしまう。人は神ではない。なんでも自分一人ではできないの」
諭すように言うラフィーナ。
「だから、あなたは、信じて任せることを学ばなければならない。そのために、今回の選挙は良い機会だったでしょう。この選挙は、神意を明らかにするための儀式。であれば、その結果は最善であり、

すべての人に意味があるものとなる。生徒会長に選ばれた者にも、選ばれなかった者にも、ね」
その言葉を噛みしめるように、一瞬黙ってから、リオネルは再び頭を下げた。
「お心遣い、ありがとうございます。ラフィーナさま。考えてみます」
そう言って、踵を返そうとした彼を、レアが呼び止めた。
「待って、兄さん」
遠慮がちに、けれど、しっかりと届くように……。
「あの、生徒会の副会長を、お願いできますか？」
その言葉に、リオネルは驚いた顔をする。
「いいのか？　レア、それで……。それじゃあ、今までと何も変わらないんじゃないか？」
「確かに、兄さんの力を借りたら、振り出しに戻ってしまうのかもしれない。だけど、これはもう、私がどうこうじゃないから。生徒会長の地位は私にとって挑戦で、成長の機会かもしれないけど、それよりも大切なものがあるから……」
そうして微笑むレアは、けれど、もうすでに、与えられ、守られてばかりの者ではなかった。
彼女にはやりたいことがあり、そのために力を欲していた。
だから、一番、信頼が置ける兄の力を借りようとしている。それこそが、レアの成長の証であった。
そして……。
「妹を裏から支え、その想いの実現のために尽力する……。それが、神の意思だというなら……」
リオネルは、静かにそれを受け入れるのであった。

こうして、新生徒会長レアのもと、新たな生徒会が活動を始める。
副会長には兄、リオネル……とミーアを迎え、さらに、セントノエル・ミーア学園の共同研究プロジェクト担当として、オウラ

ニアを迎え入れた生徒会メンバーは……概ね今までと変わらない顔ぶれになっていた。
「……妙ですわね、楽ができると思っておりましたけれど、これじゃあ、なにも変わらないんじゃ？」
などとしきりに首をひねるミーアであった。

第五十二話　形なき敵

生徒会長選挙も一段落し、ラフィーナも無事に送り出してから数日後のこと。
ミーアは、生徒会室に詰めていた。定例の会議のためだ。
「ふぅむ、しかし、ラフィーナさまも大変ですわね。もう少しゆっくりしていってもよろしかったのに……」
ものすごぅく、名残惜しそうな顔をしつつ、船に乗り込むラフィーナを思い出すミーアである。
「それは、仕方ありません。回遊聖餐は、とても大切な儀式ですから」
「そうなんですの？」
首を傾げるミーアに、説明してくれたのはレアだった。
「聖餐を授け、民の心を神へと向ける。民に、神の家族としての、連帯意識を持たせる。とても重要な儀式です」
「なるほど……。国をまとめるうえで重要な儀式ということですわね」
互いに、神の家族であるという意識があれば、確かに、革命を起こそうとまでは思わないかも……、などと、断頭台の姫視点で検証するミーアである。
「確かに、それは大切な儀式ですわね……。しかし、村々を巡って食事というのは、なかなか大変そうですわね」
訪れる村ごとに、大ご馳走でもてなされるのは、とても大変そうだった。出された物を残すなんてもったいないこと、ミーアにはとてもできないから……。
そんな意味で「大変そうだぞぅ！」と言うミーアであったが……。
「そうですね。人見知りの私には、とても真似できません」
レアは、別の意味での大変さで受け取ったようだった。苦笑いを

浮かべるレアに、隣に座っていたリオネルが呆れ顔を見せる。
「まったく、そんなことでどうする。ラフィーナさまになにかあった時は、お前が代わりを務めることだってあるんだぞ。もっとその自覚を……」
ヴェールガ公爵家と血縁関係にあるレアやリオネルも、どうやら、儀式を執り行う資格があるらしい。
――選挙の時を思えば、なかなかレアさんには厳しい儀式っぽいですけど……。
なぁんて思いつつ、次なる資料に目を通す。選挙後から、ミーアは生徒会室で仕事に明け暮れていた。
「ガヌドスのほうのー、研究所作りも、結構、順調に行ってますねー」
オウラニアの報告に、ミーアは深く頷いて……。
「それは朗報ですわ。ミーア学園からどなたに行っていただくかは、ルードヴィッヒに一任しておりますし、セントノエルからは……」
っと、レアのほうに目を向ければ、
「司教さまに話は通っているはずですから、人選は進んでいると思います。私も夏にでも、見学に行ければと思いますが……」
「あー、それはいいわー。ミーア師匠の功績を、自分の目で見ることは、とぉーっても大切なことだからー。うふふ、もっとも、その当時の現場にいた私ほどに学べるかは、わからないけどー」
微妙なマウントを取ったりするオウラニアである。
さらに、ティオーナやラーニャ姫からの小麦供給の報告を受けつつ……サンクランドやレムノ王国のことを、それぞれシオンやアベルと情報交換しつつも……。
ミーアは、眉間に皺を寄せて唸った。
――ううぬ……やはり、先日、予想したとおり、以前より大変になってる気がしますわ。極めて、不可思議なことですわ。
むしろ、仕事の量は、自身が生徒会長をやっていた時よりも増えているような気さえする。

それもそのはず、今まではラフィーナが担っていたもろもろの仕事が回ってきているわけで……無論、それを一人で背負いこんだりはしないミーアであるが……仕事を各員に割り振るだけでも、なかなかの労働量になってしまい……必然的に……。
「……あーー、頭の使いすぎで、甘い物が欲しいですわ！」
そんなことを言い出す始末である。まぁ、それは大体いつものことではあるのだが。
そうして、公的な報告が一段落したところで、
「そういえば、ミーアさま、ご存じですか？」
話しかけてきたのは、クロエだった。真剣そのものの顔で、ミーアを見つめてから……。
「民の間では、じわじわと不安感が広がってきているようです」
「ふむ……不安感、ですの？」
「はい。食料が不足するんじゃないか、とか。今のうちに買い占めておいたほうがいいんじゃないか、とか……そんな空気がだんだんと高まってきているみたいで……」
「ああ、それは由々しき問題ですわね」
ミーアの言葉に、レアが小首を傾げた。
「それほど問題でしょうか？　事実、食料は足りているのですよね？」
レアの言うことは正論だった。
いくら不安に感じようが、食料自体は足りる計算なのだ。ならば、放っておいても問題ないのでは？　というのは、理性的に考えればわかることなのだが……。
「レアさん……人というのは、いつでも冷静でいられるものでは、残念ながらありませんわ」
ミーアは知っている。
雰囲気……というのは、なかなかに厄介な敵なのだ。
貴族にしろ、民草にしろ、人というのは、割と簡単に雰囲気に乗せられて行動したりするものなのだ。

人は、自らの持つ心に従って行動するものであるが、雰囲気は、その心に作用する極めて厄介なものなのだ。
雰囲気の悪化を放置した挙句、なんかわかんないが、食料が不足してるっぽいから、食料輸送者をフワッと襲おうぜ！　とか言い出されるのは、真っ平ごめんなミーアである。
一方で、
「多少、不安を感じたとしても、民が領主を信頼しているなら、持ちこたえられるのではありませんか？」
リオネルは、こう主張した。
「サンクランドのエイブラム陛下やシオン殿下、ミーア姫殿下のような人徳ある方がお声がけすれば、民は耳を傾け、そうそう愚かなことをしないと思うのですが……」
「ええ。それは正しい見識ですけれど……残念ながら、誰もが、エイブラム陛下のように信頼される統治者ではありませんわ。そして信頼構築を怠った代償は、その統治者に留まるものではない」
一国でその被害が留まるならば、自業自得と言えるかもしれないが、その手の火は、大抵、他国まで飛び火するのが常だ。
他国のやらかしで、帝国が傾くのは、ミーアの望むところではない。
「なるほど……。確かに、統治者の怠惰によって治安が悪化し、民が苦しむことになるのは避けるべきですね。さすがはミーア姫殿下」
飛び火する先が、民か自国かによって、若干の解釈の違いはあったが……まぁ、わかってもらえたので、結果オーライだろう。
「といって、その不安を払しょくするのも、そう楽なことではありませんわ」
もしも、食料不足の雰囲気が完全な間違いであれば問題はない。つまびらかに現状を開示すれば、それで解決だ。
けれど、実際にはギリギリ綱渡りなのが現状だ。
食料輸送などに不測の事態が起こらなければ、乗り切れる計算ではあるが、そのありのままの現状こそが、まさに、不安を煽る状況

なのだ。不測の事態が起きなければ……というのは、不測の事態が起きたらヤバイということの裏返しなわけで……。
さらに、蛇のことも気がかりだ。
食料不足は、彼らも察してはいるだろうが、仮にミーアが認めてしまえば、その言葉を利用して、さらに混乱を助長するかもしれない。
「となると、やはり、現状を民に伝えるのは得策ではない。民との信頼関係維持に全力を尽くすのはもちろんのこと、なにか別の方法で、人々の目を逸らす必要があるのではないかしら」
ミーアの言を受け、いくつかのアイデアが検討されるも、答えは出ず。
ヘロヘロになりつつ、自室へと帰りついたミーアであったが……。

第五十三話　絶望を照らす光

ヘロヘロになって、部屋に戻ったミーアは、そのまま、ベッドの上にポテンと落ちた。浜辺に打ち上がった海の月のように、儚く、しんなりしてしまうミーア。そんなミーアに、アンヌが話しかけてきた。

「あ、おかえりなさい。ミーアさま。お疲れのところ申し訳ありません。帝都から、ルードヴィッヒさんのお手紙が届いていますが……」

基本的に、アンヌは、ミーアが疲れていそうな時には、不必要な報告を上げてこない。けれど、帝都から、特にルードヴィッヒからのものは、ノータイムでミーアに届けるようにしていた。

彼からの連絡は、ほとんどの場合、大切なものが多いからだ。

「あら、ルードヴィッヒから？　確か、つい先日、連絡をもらったばかりだったはずですけど……なにかあったのかしら？」

定時ではない連絡、緊急度は高そうだった。

「それと、エリスからの原稿も届いていますが……」

「まぁ！　もしや、新作が……！？」

これは、生徒会で頑張ったご褒美か？　と顔を輝かせるも、アンヌは申し訳なそうな顔で首を振り……。

「いえ、どうやら、今までの原稿をまとめて推敲したものみたいです」

「なるほど、ということは、本の形になる直前の原稿ということですわね……」

ミーアはアンヌから原稿を受け取って、表紙を軽く撫でる。

「ああ、確かに、この書き出しは、最初のお話ですわね。しかし、これがいよいよ本に……そう考えると……ふふふ、少しだけ不思議な感じがしますわね」

ミーアがこの物語と出逢ったのは、あの地下牢でのこと。あの時、聞いた物語が、いよいよ本の形になろうとしているというのは、なんとも言えぬ感慨深さがあった。
いずれにせよ、この物語は、ミーアにとって非常に重要で思い入れのあるものである。
良い本に仕立て上げなければならないだろう。
「良き表紙をつけてあげて……。装丁は、そうですわね。重厚な革がいいかしら？　木の表紙というのもあるみたいですけど……いえ、黄金の竜だから、やはり、金の表紙で……？　あとは、キノコ形のしおりをつけるとかどうかしら？　ううぬ、やはり、クロエに相談するのが良いですわね……。ふふふ、完成が楽しみですわ」
っと、いったん楽しい気分に浸って、多少は気力を回復させてから……。
「それと、ルードヴィッヒからの手紙でしたわね。アンヌ、すみませんけれど、読んでいただけないかしら？」
「わかりました」
そうして、アンヌが読み上げた内容は、概ね、先ほど生徒会で話が出たのと同じようなものだった。
「帝国内でも不安の声が上がっている……なるほど。ルードヴィッヒも、その対応が必要であると考えているわけですわね」
あの、ルードヴィッヒが必要あり、と認めているならば、これはもう間違いない。
ミーアとしては、より気を引き締める必要があるわけで……。
「あるいは、蛇の介入があるのではないか、とも書いてあります。帝国内では、ミーアさまへの深い信頼があるのに、それでも不安が広がるのはおかしい、と……」
「ああ、隠れていた蛇の手の者が、ここぞとばかりに不安を煽っているというわけですわね。あるいは、食料輸送網に攻撃を仕掛ける……それも十分に考えられることですわね」
そうは言いつつも、ミーアとしては半信半疑だった。

確かに、ミーアは民との関係を大事にしてきた。誕生祭などで、民からの人気を得るべく、尽力してきたつもりだし、新月地区のことをはじめとして、できるだけ慕われるように振る舞ってきたつもりだ。

されど……それをもって民の不安感を完璧に拭えるかというと、ミーア的には甚だ疑問であった。

――人は、理由もなく明日が心配になる生き物ですわ。

その気持ちは、ミーアの知る限り、とても強い。そして、理屈ではないために、厄介だ。

――蛇ならば、情報を流している者を叩けばいい。原因となる人間がいるならば、いくらでも対処できますわ。けれど……もしも、漠然とした、理由のない不安感だというのであれば、対処はより難しいですわ。

それこそ、本当のことを言って、落ち着いて行動すれば大丈夫、と納得させるしかないかもしれないが……。

「ふぅむ……しかし、あくまでも気分的な問題、なんですのよね……」

ミーアは、思わず考え込む。腕組みし、眉間に皺を寄せつつ、ムムムッと唸る。

考え、考え、考え込んで……ぷしゅー、っと萎んでいく。

「だ、駄目ですわ。お腹が減って考えがまとまりませんわ。ケーキ、ケーキが足りませんわ！　わたくしのケーキはいずこ？」

「もう少しお待ちください。ミーアさま。もうすぐ、お夕食ですから……。気を紛らわすために、エリスの原稿でも……」

「あ……ああ、そうですわね。確かに、貧しい王子と黄金の竜は、何度読んでも楽しい名作ですし……」

あの地下牢でも、空腹を紛らわすために読んでたっけなぁ！　と懐かしく思いつつ、ミーアは原稿を手に取りかけて……。

「ふむ……エリスの小説は、とても楽しいですわね……」

それは、とても楽しい読み物。地下牢の、あの絶望を、あの、死

にそうなほどの退屈を癒してくれた、無限の楽しさを持つもの……。
ミーアは原稿に目を落として、ふとつぶやく。
「そうですわ……。エリスの小説を……本として出版して、世に広めれば……それが、大ヒットすれば……漠然とした不安を打開するとっかかりになるのではないかしら？　不安感を楽しさで上塗りしてしまえば、あるいは……！」
ぶつぶつとつぶやきつつ、ミーアは静かに立ち上がる！
「ミーアさま、どちらへ……？」
「ええ……少し、その……食堂へ」
厨房の香りで、空腹を紛らわそうと考えたミーアであった。
逆効果だと思うが……。

第五十四話　パティ、忠義のメイドのなんたるかを知る

さて、翌朝のことだった。
自室を出たミーアは、廊下をズンズン進みつつ、ふわぁぁむ、っと大きなあくびを一つ。
「ううむ……昨夜は眠れませんでしたわね……」
そんなことをつぶやいた。
そうなのだ。ミーアは、自らの思い付き、エリスの原稿を本にして、ヒット作にする！　の素敵さに、ワクワクしてしまい、ついついいろいろ考えてしまったのだ。
こんな表紙はどうだろう？　背表紙の文字はこのぐらい。お店に並べた時に映えるのは、どういうデザインがいいだろう？　しおりに押し（あるいは推し？）キノコを挟んでおくのはどうか？
などなど……そんな構想を練っている内に、眠れなくなってしまったのだ。
「目を開けたら、朝でしたの」
そうして、アンヌに微笑みかければ、アンヌはニッコリ頷いた。
「ダメですよ。ミーアさま。夜はきちんと眠らないと、お肌に悪いです」
などと、緩めに注意する。そんな二人のやりとりを見て、
「えっ……？」
思わず、と言った様子で疑問の声を上げたのは、パティだった。
なぜなら、夜中にトイレに起きた彼女は目撃していたからだ。口を開けて、気持ちよさそうに眠るミーアを！
「眠れ、なかった……？」
ついでに、物音で目を覚ましたアンヌが、熟睡するミーアに毛布を掛け直し、それから一緒に、トイレについてきてくれたわけだが……。アンヌは何も言わずに、黙ってミーアの話を聞いていた。

「そうなんですの。ダメですわね。眠る時にいろいろ考えごとをしては。うふふ、あまりに真剣に考えたものですから、途中からお話の登場人物が枕元に現れて……」
「おお！　それは楽しそうですね。ボクもあの王子とは話してみたいと思ってました！」
楽しそうに歓声を上げるのは、朝から元気なベルだった。
それって、夢なんじゃ……？　というツッコミを……する者はいない！
再度、パティはアンヌに目を向ける。っと、アンヌは優しげな笑みを浮かべてミーアの話を聞いていた。
「……なるほど……これが、忠臣」
忠義のメイドのなんたるかを学ぶパティであった。
まぁ、それはともかく……。

こうして朝食を終え、着替えて授業の準備をしてから、ミーアはいち早く教室にやって来た。
窓際の席、本を開いている読み友のところに一目散に向かったミーアは、
「あら、クロエ、なにを読んでおりますの？」
「あ、ミーアさま。実は、例の共同研究について、海の食べ物の知識が欲しいって、レアさんとリオネルさんから相談を受けまして」
そうして、クロエが差し出したのは「絶叫！　秘境の珍味レシピ　絶海の怪奇生物料理篇」なる本だった！　どうやら、「絶品！　秘境の珍味レシピ」の外伝的な本らしい。
「あら、表紙に描かれている絵は、ポヤァですわね。ふふふ、それを最初に持ってくるとは、なかなかにセンスが良い本ですわ」
「そうなんです。他にも、見るからに奇怪だけど、食べてみたらすごく美味しかった、という食べ物がたくさんで。ほら、このウニィというのも、トゲトゲしたのの中に、ねっとりしたのが入ってて、とっても美味しいんだとか……。それに、このユキフラシというの

は、見た目がちょっぴり気持ち悪いんですけど……」
　などと、クロエが紹介してくれるのは、どれも、突然、部屋で見かけたら、ちょっと悲鳴を上げてしまいそうなものばかりで……。
「こんなのが食べられるなんて、盲点ですわね。ふふふ、でも、子どもはこういうの好きだから、喜んでくれるのではないかしら？」
「はい。リオネルさんはすごく興味深そうにしていて。レアさんのほうは、そんなに乗り気ではなさそうでしたが、何が食べられるのか知っておくことは、生徒会長として大事なことなんじゃないかって言ってました」
　……大切な親戚の子どもたちに、恐ろしい本がもたらされようとしていることを、ラフィーナは知る由もないのであった。
　それはともかく……。
「ところで、少し相談があるのですけど、よろしいかしら？」
　きょとん、と瞳を瞬かせるクロエに、ミーアは昨夜の思い付きを開示した。
「なるほど。貧しい王子と黄金の竜を本にして、大陸中に広める……」
　クロエは、顎に手を当てて、ムムム、っと唸った。
「確かに、あの本は、とても面白い。興奮して、不安感なんかなくなってしまうかもしれません……けど」
　っと、そこでクロエは腕組みする。
「あの内容に没入させるために、しっかりとした商品に仕上げなければなりませんね」
「わたくしは、しっかりとした革の表紙にするのがよろしいんじゃないかと思いますの。あの重厚なお話に耐えうる、立派な表紙をつけて上げて……」
「はい。それはわかりますが……あまり値段が高くなってしまうと、庶民には広まりづらいかもしれません。それよりは……。ううん、でも……あまり安っぽくても……。もともと高価な物だし、それならいっそ、値段を上げて、耐久度を上げる……？」

なにやら、ぶつぶつとつぶやいているクロエ。
「キノコをスライスして乾燥させた、押し花のようなしおりを特典につけるのはどうかと思っておりますの」
などと言う、ミーアのアレな言葉も聞こえていないのか……クロエはジッと考え込んで、それから、眼鏡をクイッと上げて……。
「いずれにせよ、そういったものには流行り廃りがありますから、ここは、市場調査が必要なのではないかと思います」
クロエの提案に、ミーアは瞳を瞬かせた。
「ほう！　市場調査……というと？」
「巷に出ている本の装丁や表紙のデザイン、全体の作りなどを調べるんです。下手な物を作ってしまったら、せっかくの原稿が台無しになってしまいますから。挿絵なんかにも、良い絵が見つかるかもしれません。市場で色々と見て回るのがよろしいんじゃないでしょうか」
その提案に、ミーアは重々しく頷いた。
「なるほど。ここは、セントノエル。流行の最先端ですわ。良きアイデアが見つかるかもしれませんわ。わたくしたちだけで回るのも大変ですから、生徒会のほかの方たちも巻き込んで……」
かくてミーア発案のセントノエルの市場（いちば）見学が企画されることになった。

第五十五話　ルードヴィッヒ、読み切る！

帝都ルナティア、新月地区の外れに、小さな酒場が建っていた。
新月地区に施された税の優遇に伴い、そこで店を始めた男、それは、ルードヴィッヒと同門の、ガルヴの弟子であった。
ルードヴィッヒの協力要請を受けた彼は、この酒場で、民草の声を拾う役割を担っていた。と同時に、ここは、ルードヴィッヒの仲間たちが集う、隠れ家的な役割も担っているのだ。
その日、ルードヴィッヒは、一人で店にやって来た。店の中には、すでに待ち合わせの人物、バルタザルと、後輩ジルベールが待っていた。
「すまない。待たせたな。ちょうど、姫殿下からのご連絡があってな」
酒を注文し、席に座る。と、早速、バルタザルが興味深げに聞いてきた。
「タイミングが良かったな。で、ミーア姫殿下はなんと？」
「ああ、そうだな。概ね想像通りといったところだが……やはり、あの小説を用いて、人々の不安を軽減しようとお考えらしい」
ルードヴィッヒは、自らの手紙と共に送られていった、エリスの原稿を思い出す。この時期に、一巻の原稿が完成し、後は本にするだけ、というのは、やはり計算されたタイミングだったのだろう。
「例のお抱え作家のか……」
バルタザルは、顎髭を撫でながらつぶやく。
「販路は、フォークロード、コーンローグの両名に協力してもらえばいい。フォークロードは、本も取り扱っていたはずだから、製本の知恵も借りられるかもしれない。あとは、本の内容次第だが……」
チラリ、と視線を向けてくるバルタザルに、ルードヴィッヒは肩をすくめる。

「正直、物語の良し悪しについては、俺が論じることではないと思うが、少し読んだ限りでは……そうだな。斬新な話だった。個人的には、かなり面白いのではないかと思う」
娯楽を目的とした本を、ほとんど読まないルードヴィッヒではあったが、そんな彼の目から見ても、その原稿はよくできていた。
ミーアの狙いを実現するために、不足はないようにも思えた。
「なるほどな。それはなによりだ」
バルタザルは腕組みしてから、酒を一口。美味い酒だったのか、その口もとに笑みが浮かぶ。
「しかし、今回のミーア姫殿下の行動は、お前の予想通りだったな。お前もだいぶ、帝国の叡智のなさりようを理解できるようになってきたんじゃないか？」
その言葉には、けれど、ルードヴィッヒは苦笑する以外にない。なぜなら……。
「言うは易し、というものだろうな……、それは。俺が気付いたのは、つい先日のこと、それも、ミーアさまがご準備されたヒントを見てようやく辿り着けたわけだが……、ミーアさまが、エリス嬢をお抱え作家に迎えたのは、セントノエルにご入学される前のことだ」
そう、それこそが恐るべきことだった。
もしも、すべてが計算の内であるとするなら、ミーアはずっと以前から今日のような状況が訪れることを、読んでいたことになるからだ。
――ベルさまが未来の情報をもたらしたから、というわけでもない。彼女が来たのは、ミーアさまがセントノエルに入学された二年目のこと。エリス嬢のことは、それより前になる。
「もし、それが本当なら……恐ろしいことだぞ。ミーア姫殿下は、五年以上前から今の状況を予想していた、ということなのか？」
今の民の状況に対する備えを、五年以上前からしていた……はたして、そんなことがあり得るのか……。
思わず、考え込むルードヴィッヒである。

「確かに、食料が不足すれば、人々は不安になる。確かに考えればわかることっすけど……そんな昔から備えをするとか、できるんっすか？」
ゴクリ、と喉を鳴らすのは、ジルベール・ブーケだった。
青月省に所属する彼は、最近ではサフィアスに協力して、中央貴族の反ミーア派への抑えを担当していた。ノリは軽いが、その実、堅実な仕事をする男であり、よく頭も働く。けれど、そんな彼をして、ミーアの知恵働きは常軌を逸しているように見えたのだろう。
「まさに、人智を超えた知恵、恐ろしい叡智だな……」
バルタザルもまた、その顔に畏怖の念が見られた。
そんな二人の様子を、ルードヴィッヒは、どこか微笑ましいもののように感じていた。
――なるほど、ミーアさまと出逢ったばかりの頃の俺は、こんな感じだったのかもしれないな……。
ルードヴィッヒは、そっと酒を口に含んでから、
「そう……恐ろしい叡智かもしれない。が……もっと簡単なこと、恐れる必要のないことかもしれないがな」
「というと？」
眉を潜めるバルタザルに、ルードヴィッヒは表情を和らげて、
「大したことじゃない。ミーアさまは未来を完璧に予想したわけではなく、ただ単に、なにかあった時のために、いろいろと備えをしておられた、ということもあり得るだろう」
その言に、ジルベールが納得の頷きを見せる。
「なるほど。どんなことが起こってもいいように、手駒を揃えていたってことっすか？」
身も蓋もない問いかけに頷いてから、ルードヴィッヒは、眼鏡をクイッと上げて……。
「もしくは、もっとシンプルかもしれない。ミーアさまは、人間というものを愛される方。その人間の持つ才能を惜しみ、なんとか生かそうとなさる方だ。それは、聖ミーア学園やセントノエル学園に

おける振る舞いを見ていれば察することができるだろう？」
「そうっすね。それは、ガルヴ師匠の方針とも重なるっす」
頷くジルベールに、ルードヴィッヒは続ける。
「であれば、おのずと見えてくるだろう？　ミーア姫殿下のお考えが……」
バルタザルは、納得の頷きをみせながら、
「なるほど。師匠と同じお考えとすると……エリス嬢に関してもそういうことか。ミーア姫殿下は、エリス嬢の才能を見出し、それが生かされずに枯れるのはもったいないと思われた、と？」
「使える手駒を揃えたわけではなく、才能を伸ばすためにお抱えとし、その結果、自らを助ける人材に成長した、とそういうことっすか？」
二人に頷いて、ルードヴィッヒが言う。
「計算高い智者は、その知恵の及ばぬ状況に陥った時、無力だ。けれど、慈悲深き人格者は、己がかけた情けゆえに、周囲から助力を受ける。人が有限で、その能力に限界があると考えるなら、おのずとどちらが優れているかの答えは出るはずだ」
それから、彼は静かに眼鏡の位置を直し、
「いずれにせよ、我らが成すべきことは変わりはないだろうがな。計算高い智者にしろ、慈悲深き人格者にしろ、ミーア姫殿下が女帝になることが、帝国にとって最善だ」
そうして、三人は頷きあって、酒杯を高く掲げるのであった。

第五十六話　孫〇〇誕生！

「本を使って、不安感を抑える、ですか……？」
ミーアのアイデアを聞いて、リオネルは眉を潜めた。
「そんなことが可能なのでしょうか？　それに、楽しいだけの本を作ることに、意味があるのでしょうか？」
怪訝そうな顔で首を傾げる。
一方で、シオンとアベルの男子勢は、どちらかというと納得の表情を浮かべていた。それは、ミーアへの信頼の厚さを証明するもの……では、実はなかった。
そう……違うのだ。彼らは……すでに、沈められているのだ。女子勢によって……深い、深い沼に！
今や、本にハマっているのは、ミーアとクロエ、ベルだけではない。ティオーナもラーニャもシュトリナも、生徒会の女子勢は、それぞれの事情から、本を嗜むようになっていたのだ。
そして、その影響から、二人の王子たちも、すっかり小説の楽しさを、わからされてしまっていたのだ。
「確かに、読みだすと止まらない本というのは、存在するからな」
「ああ。そうだね。市民に娯楽小説が浸透すれば、暗い世相が改善されるかもしれない」
頷きあう二人を見て、驚愕の表情を浮かべるリオネル。そして、レアは……、と言えば……。
「なるほど……要は、問題を切り分けようということですね」
「……うん？」
なにやら、よくわからないことを言い出した。
「今回の問題は『食料不足から生じる不安感』ですが、ミーアさまは、食料不足は食料不足で、不安感は不安感で対処する……問題を切り分け、個別に対応しようとされている……そういうことでしょ

うか？」
どうでしょう？　と、ちょっぴり不安げな視線を向けてくるレア。
それに応えたのは……。
「ふふふー、よくわかったわねー。さすがは、私の妹弟子だわー。お魚だってそうよー。お頭と尾っぽとでは料理の仕方が違うものー。切り分けて調理するのが、時には有効なのよー」
腕組みし、ちょっぴりドヤァな顔を見せるオウラニアだった。
そんな弟子たち（自称）を横目に、ミーアは神妙な顔で頷いた。
「……ええ、まぁ、その……そんな感じで大体合ってると思いますわ」
まぁ、レアとオウラニアがそう言うなら、間違ってはいないのだろう、と認めるミーアである。
「なるほど……っ！」
一方で、リオネルは、ようやく納得した顔を見せて……。
「さすがは、オウラニア師匠です。とてもわかりやすい、例え話でした！」
なんと、知らぬ間に孫弟子までできてしまったミーアである！
……まぁ、孫娘がいる時点で、今さらといった感じではあるのだが。
そんなやり取りを経て、市場調査が行われたのは、次の週のことだった。せっかくだから、週の始まりの聖日、市場が最も活発になる日に調査に出ようということになったのだ。
多忙の生徒会を動員して、一行は町へと繰り出した。
ひさしぶりの町歩き、とあれば、ミーアのすべきことは決まっていた。
すすすっとアベルの隣にやって来たミーアは、ニコニコ上機嫌な笑みを浮かべる。
「思えば、アベルと町歩きは久方ぶりという気がしますわね」
他のメンバーがいるとはいえ、気分はすっかり楽しいデートである。

「そうだね。ガヌドス港湾国以来だったかな……」
あの時は、大変だった、と苦笑いを浮かべつつ、自然な動作でミーアに手を差し出し、エスコートするアベル。
ミーアは華やかな笑みを浮かべて、アベルの手を取りながら……。
「そうですわね。オウラニアさんのお兄さまには、いろいろとかき回されてしまいましたけど……、まぁ、上手くいってよかったですわ。ああ、そう言えば、ヴァレンティナお義姉さまの様子は、いかがですの？」
「ん？　ああ……そうだね。相変わらずみたいだけど……。例の狼使い、火馬駆が面会に来た、という話はしただろうか……」
「ええ、そう……ですわね。うん、そんな話を聞いたような気がしますわ……」
「そうか。彼と話して、いろいろ思うところがあったらしくてね……。いや、それだけじゃなく、ベルが生きていたということでも、考えさせられたことがあったみたいで。少し様子が変わってきたらしいんだ」
「あら、それは喜ばしいことですわね。ヴァレンティナお義姉さまは、頭の良い方ですから、油断は禁物かもしれませんけれど……」
「ははは、大丈夫さ。もしも、姉さまが逃亡するようなことになれば……ボクがなんとかするから」
覚悟の表情を浮かべるアベル、その手を握る力を、少しだけ強めて、ミーアは言った。
「アベル、無理は駄目ですわよ？　いかにお姉さんのことと言えど……一人で背負い込んではいけませんわ。わたくしがいるのですから、一緒に悩んでいただきたいですわ」
そんなふうに、親しげに話す二人を見て、リオネルがすすっと寄って来た。
「あの……つかぬことをお聞きしますが、お二人は、恋仲なのでしょうか……？」
「あら、ご存じありませんでしたの？」

なにを今さら……と首を傾げるミーアに、リオネルは神妙な顔で頷いて、
「はい。驚きました。てっきり、ミーア姫殿下は、シオン王子と恋仲なのとばかり……」
うぐ、っと、小さな呻き声が聞こえたような気がする。
「優れた統治者であるミーア姫殿下とシオン王子はピッタリじゃないかと思っていたのですが……とっても意外です！」
悪意なき刃に刻まれて、シオンのうぐぐ、という呻き声が聞こえてくる。
――ふぅむ……この容赦のなさ……どこかで見たことがあるような……。
「リオネル殿、ちょっと……」
などと、キースウッドが間に入ろうとするが、
「いや、キースウッド、別に構わない。俺だって、そうそう過去に囚われたりはしないさ。ハハハ……」
ちょっぴり、よろよろするシオンを見て、ベルが、腰の手を当てる。
「そうですよ。シオン王子がそんなの気にするはずありませんよ、キースウッドさん。それに、シオン王子は少し影がある感じが、渋くていいんじゃないですか！」
天秤王シオンの熱狂的な信奉者、ベルは、シオンの魅力を知り尽くしているのだ。
シオンにとって、大変、厄介な娘なのだ！
とまぁ、そんな感じで、みなは、いったん分散。
ミーアはアベルと共に、絵画店（ギャラリー）を訪れた（ちなみに、他の面々はお邪魔にならないように遠慮した。のぞき見をしようとしていたベルも、年少のレアとリオネルの無言の視線に、さすがに耐えかねてその場を離れて行ったという……）
そこは、以前、ラフィーナの肖像画が何枚も飾られていた場所だった。

「ふむ……絵……。そう言えば、クロエが挿絵次第で本の良し悪しが決まるとか、言っておりましたわね……。本につけるのにちょうど良い絵が見つかるかもしれませんわ」
エリスの書く物語、貧しい王子と黄金の竜は、独創的で、冒険する土地も変わった場所が多い。端的に言って、想像しづらい場所なんかもあるわけで……。
「相応しい絵描きを探すためにも、こうした場所を見るのも、良いかもしれませんわね」
一つ頷き、ミーアは、アベルのほうを見た。
アベルは、優しい笑みを浮かべて頷いた。
こうして、ミーアの楽しい絵画店デートが始まったのだった！

第五十七話　ウキウキ、妄想、ギャラリーデート

「へぇ、こんな店があったのか」
「あら、アベルは、来るのは初めてですの？」
興味深げに店内を見回すアベルに、ミーアは笑みを浮かべて言った。
「そうだね、不勉強ながら。セントノエル島に絵画が楽しめる店があるとは思ってもみなかったよ。王族として恥ずかしくない程度には絵画にも通じているつもりなのだが……」
「まぁ、では、もしかして、ご自分で描いたりも……？」
「いや、生憎と見るほうが専門だね。なにせ、知ってのとおり我が国は、芸術より軍事力が重視される国なものでね。一応、戦場を把握する一環として、地形図の描き方なんかは、習ったことがあったが……。ははは、風情に欠けることこの上ないな」
そうして、肩をすくめるアベルであった。
「ミーアは何度か、来たことがあるのかい？」
「ええ、そうですわね。以前、来た時には確か、この辺りにラフィーナさまの肖像画を集めたコーナーがございましたわね」
そう言えば、自分が一緒に描かれた肖像画もあったっけ……っと探してみるも、どうやら、もう展示していないらしい。
――さすがに、ラフィーナさまの肖像画は人気みたいですわね。一枚もなくなってるなんて……。
ちなみに、ミーアは自分の肖像画に対しては、やや気恥ずかしさは感じるものの、そこまで拒否はしていない。自分の黄金の像とか、黄金の灯台とかに対しては抵抗を感じるが、肖像画はそれほどではない。
なにかあった時、燃やされてるのを見るのは、切ないだろうが……それで国が傾くはずもなし。

――お父さまの怒りを買うような物でなければ、特に気にする必要もございませんわね。
達観しているミーアである。
いや、達観ではなく……、それは、油断だったのかもしれない……。
「いろいろな趣向の絵が取り揃えてありますから、少し回ってみましょうか」
そうして、二人は並んで、お店の中をゆったり歩いた。
まるで……セレブのデートのようだった！　珍しいことに！
「ああ、この絵はヴェールガの有名な画家のものじゃなかったかな。聖画をメインで描いてたはずだけど、へぇ、こんなふうに風景画も描くのか」
その都度、ちょっとした絵の解説をしてくれるアベルに、ミーアは……うっとり見惚れてしまう。
――アベル、とても博識ですわね。最近、たくましさが際立ってましたけど、こういう知的なところも素敵ですわ。
頬に手を当て、ほぅ、っとため息を吐くミーア。その脳裏に、むくむくむく、っと妄想が広がっていく。
――アベルと結婚したら、部屋に絵を飾ることになるのかしら……とすると……ふむ。アベルはどういった絵が好みか、調べておくのも良いですわね。飾る絵でギクシャクするのもつまらないですし……。
うんうん、っと頷いてからミーアはアベルのほうを見た。
「アベルは、どういった絵が好きなんですの？」
「好きな絵か。うーん、そう、だね……」
腕組みし、小さく唸るアベル。それから、あたりをゆっくり見てから、
「ああ。この風景画なんかは綺麗でいいんじゃないかな」
アベルが指さしたのは、無数の花が咲き誇る野原の絵だった。鮮やかな色味は、なるほど、部屋の中を明るくしてくれるだろう。

――おお、さすがはアベル。なかなか、センスがよろしいですわ。寝室に飾るには、少し派手かしら。とすると……。

結婚後に暮らす部屋の妄想を、ふっくら膨らませていくミーアである。

「こっちの絵もいいな。少し空虚な感じが……。逆に見ていて落ち着くというか……」

それは、薄暗い森の絵だった。

――ふぅむ、これは、葉っぱを数えるには、良い絵かもしれませんわね。退屈な時の暇つぶしにはもってこいの絵ですわ！　それに……こっそりと、この木の根元に描かれているキノコもお見事。着眼点が素晴らしいですわ。

ミーアは、アベルの審美眼を高く評価した！

さらにさらに、

「あとは、聖画なんかもいいな。幼い頃から慣れ親しんだものだからね。兄上と一緒に、絵を見ながら神聖典の話を聞いたっけな」

「まぁ。ゲインお義兄さまと……。ふふふ、大人しく、神聖典の話を聞くあの方の姿が想像できませんけど……」

「ふふふ、ちなみに、もっと驚くべきことに、お話をしてくれたのはヴァレンティナお姉さまだったんだけどね」

「まぁ！　それは……確かに、まったく想像できませんわ」

とは言ったものの……ミーアは、その光景を想像しようと努力する。

それは、幸せだったレムノ王家の姉弟たちの風景だったから。

ミーアが目指すべき、一つの指針のように感じられたから……。

――アベルが、これから先、レムノ国王と揉め、廃嫡される可能性というのは、否定できませんわ。

それは、かつて図書室で見た記述の未来。

ミーアが退けた可能性ではあったが……。あの時と今とで、レムノ王国にはさほど大きな変化があるとは思えない。

ゆえに、アベルが国を追われる可能性は依然として残ったままだ

った。が……。
――お兄さまや妹さん、それにヴァレンティナお義姉さま……。せっかく生きて再び会えるようになったのですから、関係を修復するお手伝いができればよろしいのですけど……。
などと、ちょっぴり真面目なことを考えていたミーアであったが……。
「ああ、この馬の絵もいいな。いかにも名馬と言った感じだね」
アベルが指さしたのは、白き馬が草原を駆け抜ける絵だった。
馬は、二人の恋を象徴するようなもの。ミーアの脳内が再び、恋愛モードに移行する。
「うふふ、さすがは、アベルですわ。とても良いセンスをしておりますわね。これは、寝室に飾るのがよろしいかしら……」
なぁんて、上機嫌なミーアである。
ひさしぶりのデートに、心はルンルン、体もウキウキ弾んでいたのだ。
完全に……油断していたのだ。
店の奥までやって来たところで、アベルが不意に声を上げた。
「……むっ、この絵は」
その声に宿った警戒の響きに、けれど、ミーアは気付かなかった。
「あら、どうかしましたの？」
なにか、ほかにも良い絵があったのだろうか？　とか、気に入った絵があれば今のうちに買ってしまっても良いかも？　などと……当初の目的を完全に忘れていたから……罰が当たったのかもしれない。
アベルを追うように、視線を巡らせたミーアは、そこで、見つけてしまう！
「こっ、これは……」
店の端のほうに、その絵は飾られていた。
それは、少女の人物画だった……。キラキラのドレスと背中に生えた幻想的な翼。背後に三日月を背負った少女は、神々しいまでに

輝いて見えた。
実に、美しい絵だった。表面がキラッキラ輝く、変わった絵だった。
けれど、それ以上に……ミーアは、その絵に描かれた少女の顔が、気になった。
サラサラの、美しい白金色の髪、宝石のように綺麗な碧眼……。見惚れるばかりの可愛らしい少女の笑顔……。これは……。
――この美しい少女……わたくしにそっくりですわ！
ミーアは心の中で叫んだ。
……まぁ、その……なんというか……ツッコミを入れたいのはやまやまではあるのだが……今回に限っては、それはできなかった。
なぜなら、そこに描かれていたのは、紛れもなくミーアだったからだ。
その髪も、その瞳も……ミーアそのものだったからだ。まぁ、若干、誇張はされていたが……。
そうなのだ、それは、ちょっぴり綺麗めに描かれたミーア……すなわち、綺麗なミーアの絵だったのだ！
そして、その絵には、こんなタイトルがつけられていた。
『女神ミーアの肖像画』
っと。

第五十八話　ミーア姫、女神に祭り上げられる！

「こっ、この絵……これは……」
震える手で、その絵を持ち上げる。
厳かな微笑みを浮かべる自身の、幻想的な絵を。
「めっ、女神……っ！」
なるほど、それは確かにミーアの絵だった。ミーアを女神に模したものだった！
以前から、自身を模したもの自体は見慣れているミーアである。
『ミーア焼き』のようなシャレの利いたものから、ちょっぴりアレな像まで、さまざまなバリエーションを見飽きているとすら言っても過言ではないミーアである。
それに、以前、ラフィーナと一緒に肖像画を描いてもらったこともある。だから、肖像画自体に驚きも、慌てたりもしないわけだが……。
――しかし、このタイトルは、マズいですわ！
ミーアの胸に湧きあがる不安に同意するかのように、アベルが厳しい顔をしていた。
「ああ……これは……少し、危険だ……」
「でっ、ですわよね！　やっぱり」
ミーア、思わず、声が高くなる。
なにせ、それは、中央正教会に思いっきり喧嘩を売ったものだったからだ。
権力者を神と称するなど、明確な敵対行為に等しい。考えるのも恐ろしいことだ。
「それに、これは下手をすると……蛇にも利用されてしまうかもしれませんわ」
中央正教会の建て上げた秩序、それは、唯一の神を権威とするも

のだ。
絶対的な唯一の神という権威があるからこそ、倫理も、道徳も唯一の普遍的なものとなるのだ。ここにもしも、別の神が現れたら……。価値基準は見る間に分裂し、生じた混乱は、世界を混沌へと堕とし込むことだろう。
実に、蛇が好みそうな状況であった。
「ぐ、ぬぬ……いったいぜんたい、どこのどなたがこのような絵を……」
歯ぎしりしつつも、ミーアは誰にも見られないように、その絵を手に取り、店主の姿を探す。っと、ちょうど店の奥から出てきた店主を捕まえ、話しかける。
「ええと、ちょっとお聞きしたいのですけど……」
「はいはい、なんでしょうか？」
ミーアは朗らかな笑みを浮かべつつ、自らの持つ絵を示した。
「ええと、この絵なんですけど……」
「ああ！　その絵ですか。良い絵でしょう？　特別な技法で描かれた絵でして。ほら、見る角度によって、輝き方が変わるでしょう？　素晴らしい絵ですよ」
店主は、どうやら、ミーアが、この絵のモデルになっていると気付いていないようだった。
確かに……この絵に描かれた綺麗なミーアと、目の前にいるミーアとは、少々の乖離がないではなかったが……それはそれで、微妙に釈然としないミーアである。
「そうなんですの。ふむ……」
試しに、ミーアは絵の角度を変えてみる。と、色鮮やかな光がその表面に現れた。
――確かに、珍しい、そして、とても美しい絵ですわ。ラフィーナさまの肖像画でも、ここまで見事な絵はございませんわね。ぐぬぬ、それも後々問題になりそうですわ。
まるで、ラフィーナを押しのけて、自らが聖女と呼ばれんとして

いるかのようだった。いや、聖女どころか、女神なのだが……。
内心で歯ぎしりしつつも、ミーアはなんとか笑みを浮かべる。
「……しかし、なにやら、この絵、どうもわたくしに似ているような気がするのですけど……」
「ほ……？」
店主の顔が一瞬固まるが……。
「あ、ああ、ええ。なる、ほど……？　まぁ、確かに、言われてみれば……」
まるで「まぁ！　この子、可愛い絵のモデルを自分だなんて！」みたいな顔を、営業スマイルで覆い隠し、店主は頷いた。
「ははは、これは、きっと、美しいものを描こうと思うと、似てきてしまうということでしょうな。お嬢さまの美しさと、この画家の美的感覚が合致してしまったのですよ」
なぁんて、お世辞半分の軽口を叩く店主。どうやら、帝国皇女ミーアと女神ミーアのイメージが繋がっていないらしいが……。
それにしても、その危機感の薄さに、ミーアは愕然とする。
ここは、セントノエル。ヴェールガ公国のただなかにある島なのだ。だというのに……。
――いえ、だからこそ、ということかしら……？　ヴェールガ公国という……中央正教会の価値観が絶対的に根付いた土地であればこそ、この絵が……ただのシャレとして扱われているのですわ。
そうなのだ、言ってしまえば、これは、ただの絵なのだ。拝むべき対象として造られた偶像などではないのだ。
民草にとっては、それこそただのシャレ。例の「ミーア焼き」と大差ないものなのかもしれない。けれど、話はそう簡単ではないのだ。
知っている者は知っている。
今や、ミーアがこの大陸各国の食料供給のキーマンであること……。
その握っている権威が、国を超えた、極めて巨大なものとなって

いること……。
「これ、どこで描かれたものなのかしら？　わたくし、とても気になりますわ」
「ああ、ここら辺の絵は、すべてセントバレーヌから運ばれてきたものだよ」
「セント、バレーヌ……ですの？」
その名を聞いて、思わずミーアとアベルは顔を見合わせた。
急ぎ、その絵を買ってから、ミーアたちは学園にとって返した。
「これは……ルシーナ司教の攻撃だろうか……？」
アベルの問いかけに、ミーアは、うーむむ、っと唸った。
「判断が難しいところですわ。確かに、これをわたくしが作らせた、などと難癖をつけることはできそうですけど……」
あるいは、ある種の風刺とも考えられるだろうか。ヴェールガの築いた価値基準が、ミーアという権威によって、揺らがされている、と……そんなことを表現するものかもしれないが……。
「やり方として、わからなくはないけど、しっくりしない、か。むしろ、人々が勝手にミーアのことを神格化している……そういうこともあり得るかもしれないね……。人々の間に不安感が広がっているというのなら、なおさら、こういったことが起きてもおかしくはない」
人は、見えやすく、わかりやすいものに頼りたがるものだ。中央正教会の目に見えない神と比べ、わかりやすいミーアを神格化する、というのはあり得ないことではない。
――うう、だとしたら、余計にルシーナ司教やラフィーナさまに知られる前にさっさとなんとかする必要がございますわ！　ここは、潔白を証明するためにも……。
っとそこで、ミーアは小さく首を振る。
――いえ、これは、ラフィーナさまには、むしろ事前に連絡しておいたほうが良いですわね。
お友だちだから言わなくてもわかるだろう……などとは、ミーア

は思わない。ラフィーナは、神ではないのだから、言わなければ当然伝わらないということはあるのだ。
――しっかり、わたくしが関与していないことを主張して……ついでに信じてもらえるよう、ちょっぴりお友だちを強調する文章にして……友情を確認するような内容にすれば……。
っと、すべきことを頭で整理しつつも……ミーアは、深々とため息を吐いて……。
「……しかし、これは、仕方ありませんわ。直接、セントバレーヌに行かねばなりませんわね」
やれやれ、と首を振るのだった。

第五十九話　四人寄れば帝国の叡智

さて、クロエは、ラーニャとティオーナとともに、市場を回っていた。
ちなみに、ミーアたちのお邪魔虫にならないように、アンヌもこちらについて来ている。
女子四人、かしましく町を行く。
クロエの希望で、彼女たちは、特に市場で売られている本の状況を調べていった。
さすがは流行の最先端たるセントノエルだけあって、それなりの本が揃っていたが……。クロエは、店主から話を聞いて、とても難しい顔をしていた。
「やっぱり、本は高価ですから……買う人が限られてしまいますね。普及させるのが、とても難しいような気がします」
店から出て早々に、クロエは言った。
「そうですね。貴族の子弟が揃うセントノエルだから商売として成り立つけど、普通の町人が買うのは難しいですね……」
ティオーナが難しい顔をする。
「というか……ルドルフォン家でも、買い揃えるのは難しいです。セロに植物の本を買ってあげるのも、やっとですから」
「そうね。私なんか、一応は王女だけど、あの値段は、少し躊躇いがあるし……」
同意したのはラーニャだった。そのぐらい、本というのは高価なものなのだ。
「だから、私は、貸本にするのがいいと思っていたんですけど……」
軽く、眼鏡に触れながら、クロエが言った。
「ああ。なるほど、貸本ですか」
納得の頷きをみせたのは、庶民事情に詳しい第一人者であるアン

ヌだった。
基本的に、本というものは高価で、庶民には手の出ないものだ。
では、本に親しみがないか、と言われると、実はそんなことはない。本を見たこともなく、手に取ったこともない、という人は、あまりいないのだ。
それには、中央正教会が行っている貸本が関係している。
中央正教会は、すべての民が神聖典を読めるよう識字教育に力を入れていた。その一環として、神聖典のみならず、その周辺の伝承や、教訓を伝えるための物語を積極的に本にし、貸し出しを行っていた。
そのおかげもあって、人々の間には、共通の倫理的価値基準が浸透することになっているのだが……。
「娯楽色の強い本ですから、中央正教会の協力は得られないかもしれませんが、貸本という存在自体は、人々に浸透しています。だから、ミーアさまもそんなことをお考えなんじゃないかと思ったんです。販売を伸ばすために、栞にスライスしたキノコをつければいい、なんて冗談をおっしゃってましたから……」
そう、高価な本を売るのは難しい。なにか、適当なオマケをつけたところで、どうなるものでもない。だから、ミーアは実現性のないキノコの栞、なんて冗談を口にしたのだ。
クロエは、そう判断していたのだが……。
「それ、本当に、冗談なのかな……？」
思いのほか、真剣な顔で疑問を呈したのは、ラーニャだった。腕組みしつつ、眉間に皺を寄せている。
「えと、どういうこと……でしょうか？」
クロエの問いかけに、ラーニャは静かに頷いて、
「ミーアさまは、時々、よくわからないことをおっしゃるわ。それは、ただの冗談のこともちろんあるけど、でも……よくわからないのは、私たちの考えが足りないから……ということもある。なにげない一言に深い意味がこめられてるということもあるから、考え

る必要があるんじゃないかな、って……」
言われて、クロエはハッとする。
確かに妙な話なのだ。
押し花ならばともかく、キノコをスライスして栞にするだなんて、普通では考えられないことだ。普通では、考えられないことだ！
普通では、考えられないことなのだ！！
となれば、そこに、なにか意味があるのかもしれない。意味を読み取ることを期待していると……そういうことかもしれない。
「あの……私もそう思います」
同意の声を上げたのは、ミーアのことを誰よりも知る人物、ミーア事情に詳しい第一人者のアンヌだった。
「ミーアさまは、周りを明るくするために、ウィットに富んだ冗談をおっしゃることはありますけど……でも、本当に大切なことで、ふざけるような真似はしないと思います」
……まぁ、ミーアは本気で「キノコの栞はどうかしら？」と思っていたので、ふざけていないというアンヌの指摘は間違ってはいないだろう。
「だから……ラーニャ姫殿下の、なにか深い意味があるんじゃないか、というお考えは正しいんじゃないかって、思います」
こちらに関しては、まぁ、誤りではあるけれど……。
アンヌの言葉に、ティオーナも頷く。
「そうですね。ただの冗談にしては、意味深ですよね。キノコの栞だなんて……普通の冗談じゃないと思います」
そう、普通の人の冗談ではない。まぁ、ミーアが普通かどうか、と言われると、いささかに議論の余地がないではないのだが……。
「栞に、か……。でも……栞……それは、普通の栞という意味じゃない？　もっと、別の……栞って、そもそもなんだろう？」
みなの話を聞いて、クロエは静かに考える。
栞とはなにか？　それは、どこまで読んだかわかるよう、本に挟んでおく印だ。

「それをキノコ……ミーアさまの大好きな『食材』でするということは……？　その意味は……」
顎に手をやり、考え込むクロエだったが……。
「前の話の続きを、食べ物でわかるようにする……？　それは、つまり……」
ハッとした顔をする。
「もしかすると……。食べ物を配って、その都度、物語の続きを読み進めていく……ということ？」
「え……どういうこと、でしょうか？」
アンヌの問いかけに、クロエは静かに頷いた。
「はい……。先ほどもお話したことなんですけど、私は、庶民に高価な本を販売するのは、少し難しいと思っていました。だから、少し丈夫な本を作って、貸本として、いろいろな場所に広めるのはどうか、と思ったのですけど……」
クロエは神妙な顔でクイッと眼鏡の位置を直してから（その動作は、どこかのダレカに似た動作だったが、それはともかく……）
「もしかすると、ミーアさまは……読み聞かせをお考えなのではないかな、と」
「読み聞かせ……？」
「そうです。ええと、つまりこうです。本そのものは買えない。けれど、物語に触れさせたい。だから、人を集めて、朗読するんです」
「それと、キノコの栞とに、どういう関係が？」
きょとん、と首を傾げるティオーナに、クロエは少し興奮した様子で言った。
「食べ物で人を呼ぶんです。なにか……簡単に大量に作れるお菓子を販売して、そこで本を朗読する。お菓子を買った人は、ちょうど良い区切りのところまでお話を聞く。続きは、次に食べ物を買った時……」
話の区切りにキノコ、すなわち『食べ物』を挟む。さながら、栞のように。

「続きのお話を聞くために、その食べ物を買うか。安価で美味しい食べ物なら……ん？　待って……。そこで、ミーア二号小麦で作った食べ物を販売する、というのはどうかな？」
ラーニャが、ハッとした顔で言った。
寒さに強い小麦、ミーア二号。その存在は、徐々に浸透しつつあるが、その調理法のほうは、まだそれほど知られてはいない。けれど、この方法ならば……。
「物語を聞きに来た人たちに、ミーア二号の美味しさを知ってもらえるかもしれない。食料不足の不安感を上書きするだけじゃなくって……小麦の知識を広めることにも貢献できるかもしれない」
そのラーニャのアイデアに、ティオーナも、クロエも、アンヌも、拍手する。
「とすると、本は販売用の比較的安価なものと、朗読の演出用に重厚な、高そうなものを作る……と。挿絵も大きめのものを何枚か用意して、聞きに来た人に見せながらやれば……」
四人寄れば帝国の叡智、とばかりに彼女たちは、かしましく相談を進めていくのだった。

第六十話　うん？　……うん！

生徒会室に戻ると、幸いにも、みな帰ってきていた。
リンシャとリオラの留守部隊の手によって用意された、焼き鳥サンドイッチを片手に、話し合いが始まった。
「おお……。ふふふ、ちょうど小腹が減っておりましたのよ。さすがの配慮ですわ」
ひさしぶりのデートと謎の肖像画により、すっかり疲弊、空腹状態になっていたミーアは、さっそく、サンドイッチをパクリ。もぐもぐ。
パリリッと焼けたパン、ジュジュワッと口の中に広がる肉汁に舌鼓。
うん、うん……とうま味を確認するように頷きながら食べ、人心地ついたところで、満を持してと言った感じて、クロエたちが口を開いた。
「やはり、本は値段の高さがネックだと思いました。市場で見かけた本ですが、どれも、とても高くって。一般的な庶民にはとても手が出ないようなものばかりでした」
クロエの言葉に、ミーアは、ふんむ、っと頷く。
「……言われてみれば、その通りですわね。では、素材のクオリティを下げて、人々の手に行き渡るようにする必要があるかしら……？」
その問いかけに、クロエは、ニコリと微笑み……。
「そうですね。それに加えて、重要になってくるのが、ミーアさまが仰っておられた、例の栞だと思います」
「はて……？　栞、ですの？」
「はい。キノコの栞です」
その言葉を聞いた瞬間、ビクッと肩を跳ねさせる者がいた。

キースウッドが「そ、そんなことになっていたのか！？」などと驚愕の表情を浮かべていたが……。まぁ、それはさておき……。
「ああ、あれ……。なかなか、わたくしとしては良いアイデアだと思っておりましたのよね」
「はい。極めて斬新的かつ、画期的なアイデアだと思います」
クロエの言葉に同意するように、ラーニャ、ティオーナ、アンヌが頷いている。
みなに同意してもらえて、ミーアもご満悦であった……のだが。
「食べ物を販売し、そこに集まった人に朗読を聞かせる。食べ物を栞とする……。素晴らしいアイデアだと思います」
「うん？　……うん！」
一瞬、疑問の声が出そうになるも、再び頷くことで誤魔化す。
「そう……でしょう？　ええと……せっかくですし、ほかのみなさんにも、仕組みをお話ししていただけないかしら？」
「あ、はい。それなんですが、実は、資料を作っていて……」
そう言って、クロエが差し出してきた紙に目をやり……、ミーア、思わず唸る。
――なぜ、キノコの栞が……こんなことに？
戸惑うミーアを置き去りに、クロエたちのチームが解説を始める。
「食べ物を栞にする、すなわち、食べ物、お菓子などを買った人たちに物語を朗読して聞かせていく。区切りの良いところまで行ったら、続きはまた次回、といった具合に、ちょうど買ったお菓子が食べ終わるぐらいで話を一区切りさせます。物語の続きを聞くために、人々は、その食べ物を買いに来るし、どうしても気になった人は本を買うかもしれません」
クロエは眼鏡をクイッと上げて、
「貸本にした場合、一人が長く本を独占するのがネックでしたが、これならば、多くの人たちが同時に物語に触れられる。しかも、続きを楽しみにしてもらえれば、不安感は徐々に薄れていくのではないでしょうか」

後を継ぐように、ラーニャが話し出す。
「それに、ここで販売するお菓子を、ミーア二号小麦にしたらどうかって思うんです。例の茹でたお団子の作り方を人々に知らせていけば……」
寒さに強い小麦と、その最適な料理の仕方を周知させるためにも役に立つかもしれない。
「商売としての体裁も取れると思うんです。巡礼商人や旅商人に協力してもらえば、各国で物語を広めることができると思います」
娯楽性が強い小説なので、教会の貸本に加えてもらうわけにはいかない。けれど、商人であれば、少しでも金になるなら引き受けてもらえるかもしれない。
その完璧な計画を前に、ミーアは、うーむむっと唸り、
――なにやら……わたくしが思っていたのとは、まったく違うことを考えているようですけど……。うん、まぁ、結果オーライですわね！
ミーアは自分の考えに固執しない。波に逆らって、元居た場所に留まろうとなどしないのだ。
自由気まま、融通無碍、それこそが、海月のミーアの真骨頂。
むしろ、波に乗っていくことこそが、ミーアの基本戦術なわけで。
「朗読は良い手段ですわね。あるいは、もう少し規模を大きくして、劇団の演目にしてもらうとかも良いかもしれませんわ。以前、帝都に公演に来た移動劇団の方とお話ししたことがございましたけど……」
「なるほど。それもいいですね。素晴らしいアイデアだと思います。朗読よりも多くの人々に知ってもらえると思いますし……」
などと、楽しくアイデアを交換した後で、ミーアは、小さく咳払いをした。
「さて、それはそれとして……一つ問題が起こりましたの」
「問題、ですか？」
首を傾げたのはレアだった。

……ちなみに、レアとリオネルにオウラニアを加えた海鮮部隊の面々は、港に行って、いろいろなお魚を見学していたらしい。まぁ……本の役に立つかは微妙だが、共同研究所の建設のためには、意味があることだろう。たぶん……。

それはともかく……。

「実は、わたくしとアベルは、挿絵に良い絵がないか、良い絵描きがいないかと思って、絵画店に行きましたの。そうして、見つけてしまったのですけど……」

ミーアが差し出した物、それは、一枚の絵だった。

「こんなものを見つけてしまいまして……どうしたものかと思っておりますの」

絵の梱包を解き、中が露わになった時……その場のみなが息を呑むのがわかった。

第六十話　うん？　……うん！（後書き）

なんだかんだで１０００話到達です。
まぁ、間にキャラ紹介などもあるので、厳密に１０００話かは微妙なのですが……思えば遠くまで来たものです。これもみなさまの応援のおかげです。これからも頑張ります。
それはそれとして、そろそろキャラ紹介を入れる必要を感じる今日この頃です。

第六十一話　疑惑

「これはまた、とんでもない物を見つけてきたな……」
シオンが、呻くような声で言った。
レアやリオネルは、まだ顔をひきつらせたまま固まっている。そんなヴェールガの双子に聞かせるように、あえて、といった口調で、シオンは言った。
「ちなみに、ミーアはこのことを知らなかった、ということだな？」
「無論ですわ。こんなもの、知っていたら、さすがに止めますわ」
『ミーア焼き』をはじめとして、基本的に民草の活動に寛容なミーアであったが、この肖像画は、ミーア自身の感情とは別のところで、問題だった。
「こんなものが、このセントノエルで……」
ショックを受けた様子で、リオネルがつぶやく。さらにショックなことを告げねばならないと思うと気が咎めたが、ここは言わないでおくわけにもいかない。
「作られた場所も聞きましたわ。セントバレーヌで作られたと……」
「馬鹿な！」
リオネルが腰を浮かせかける。レアのほうも口に手を当て、青い顔をしている。
「これが……セントバレーヌで……そんな、そんなこと……」
言葉が、続かなかった。それほどに、破壊力のあるものなのだ。権力者を、神として崇めるような商品というのは……。
「あの……あまり、難しく考えなくても……悪意のない商品ということは、考えられませんか？」
そう指摘したのは、商人の娘、クロエだった。
商人にとっての価値基準は、あくまでも商品が売れるかどうかだ。人気の貴族がいて、その貴族を利用した商品を作ることは、あり

得ることだ。
怒られない範囲でとはいえ、売れるならばギリギリを攻めるのが商人というもの。そのような観点から、この肖像画を見ると、そこまで不思議なことはない、とクロエは主張していた。
「ミーアさまは、今や大陸の人気者ですから、こういったものが出てきてもおかしくはないと思います。セントバレーヌは商人の町ですし……」
「そうですわね。わたくしも、別に自分の姿を模したもの自体に目くじらを立てようとは思いませんわ」
黄金の巨像とか、灯台とかには、まぁ……資金的に一言言ってやりたいところだし、巨大雪像にも、いろいろと思うところはあるのだが……。それでも、民草が親しみをこめて作ったミーア焼きに関して「無礼者！」などと怒ろうとは思わない。美味しいところを献上せよとは思うが……。
けれど……。
「わたくしへの信頼は別に良いですわ。それが、わたくし個人ではなく、食料を融通しあう仕組み自体への信頼ならばなお良いですけれど、ともかく構いませんわ……。しかし、神格化されてしまうのは、避けたいですわ」
なにしろそれは、ヴェールガ、並びに、ヴェールガを支持する国を敵に回すことになるからだ。否、帝国内だとて、場合によっては敵に回してしまうわけで……。
それに、ミーアは知っているのだ。
自身の経験や、ベルやパティを通して……自身の常識では測り得ないものが存在しているのだ、ということを。
では、それが、中央正教会の言うところの神と同一の存在であったとしたら……どうだろうか？
他の神を認めない、その強大な存在に喧嘩を売る可能性があるなど、言語道断！
絶対に避けるべきことである！

「そうだね。蛇に付け入る隙を与えることはないだろう」
そんなアベルの言葉に、眉を潜めたのはリオネルだった。
「ええと、蛇……とは、なんのことでしょうか？」
「ん？　ああ、そうですわね……。まだ、お二人は知らなかったのでしたわね」
頷いてから、ミーアは、考え込む。
――しかし、話してしまっても良いものかしら……。ヴェールガに居ながら、お二人がご存知ないというのは、なにか理由があるのでは……？
一瞬、迷うも、ミーアはすぐに覚悟を決める。
「……本当は、ラフィーナさまに事前に相談しなければいけないのかもしれませんけれど……あなたたちお二人は、知っておくべきである、とわたくしは判断いたしますわ」
もしも、ここで情報を秘してしまうと、彼らが気になってしまうだろう。また、自分たちだけ知らされていないということに、不満を感じるかもしれない。
そんな関係のギクシャクを、蛇は容易く突いてくる。だからこそ、ここは、あえて教えておくべきだろう。
――将来、この二人が心折れて蛇のことを思い出してしまうと、それは逆効果になりそうではありますけれど……。仕方ないですわね。
そう割り切って、ミーアは話し出す。
混沌の蛇という存在。そして、ヴェールガ公国と中央正教会のスタンスを。
「そんなことが……。ラフィーナさまとミーア姫殿下が協力して……」
リオネルは、それを聞いて、呆気にとられた顔をした。
「いや、でも……そうか。確かに、今ならば信じることができます。お二人が本当の友誼を結び、そのような悪辣なものと戦っていたこと……」

「あの……」
その時だった。意を決した様子で、レアが手を挙げた。
「なにかしら、レアさん」
レアは一度口を開きかけ、思いとどまり……。大きく息を吸って、吐いてから……。
「お父さまは、その肖像画作りに関係しているのでしょうか……？」
そんなことを言った。

第六十二話　便利な蛇

「なにを馬鹿なことをっ！」
再び、リオネルが声を上げる。
その声の激しさは、おそらくは、信じがたい……信じたくない事実を目の前に突き付けられた、その動揺からくるものだった。
かつてのレアであれば、その圧力に言葉を呑み込んだかもしれない。けれど、今のレアは違っていた。
青ざめた顔は相変わらずだったが、毅然として引かなかった。
「兄さんも、同じことを考えたのではないの？　確かに、父さまは、中央正教会の司教として、セントバレーヌの商人たちとは一定の距離を置いていた。あくまでも、あの土地は独立都市。ヴェールガであって、ヴェールガでない場所だから過度な干渉はしない。それは、大原則だった。でも……」
レアは淡々と言葉を続ける。
「父さまは、市井のことに疎いわけではない。民草の声に耳を傾け、いつでも町に目を向けていた。父さまは、とても優秀だから、知らなかったということは、あり得ない……」
レアのその言葉に、リオネルはギリッと歯を噛みしめる。
実のところ、リオネルは、レアよりも先にその疑いに辿り着いていた。
セントバレーヌで起きている異常事態に、父が気付かないはずがない、と……。
なぜなら、彼にとっての父は、敬愛と憧れの対象であると同時に、全知全能に近しい存在でもあったからだ。
リオネルは、無邪気にもそう信じていた。そしてその信頼は、一度たりとも裏切られることはなかった。
……これまでは。

父の目の届かないことはなく、父ができないこともない。
そんな父が、はたして、このような肖像画が作られることを知らなかった、ということがあり得るだろうか？
ヴェールガ国内のどこかで作られたというならばいざ知らず、作られたのはセントバレーヌだという。それを知らなかった、あるいは、知っていて放置した……そんなことが、あり得るのだろうか？
「父上が……このような……そんな……」
そのつぶやきは、泣き出してしまいそうなほどに、悲痛な色に塗れていて……。

「ま、まぁまぁ、まだ決まったわけではございませんわ。お二人とも、落ち着いて」
極めて深刻な反応をする二人に、ミーアはちょっぴり慌てる。
ここで二人に落ち込まれては、セントバレーヌへの足掛かりを失うことになる。それに、なんと言っても、レアは有力な司教帝候補でもある。下手に歪ませるようなことがあってはならない。
ここは、とりあえず、元気を取り戻してもらわなければならない。
「ルシーナ司教だとて人間。見落とすこともあるとわたくしは思いますわ。それに、わたくし、言いましたわよね……」
ミーアは、ここで、そっとトーンを落とす。
「混沌の蛇という存在のこと……。彼らが裏で蠢動したとなれば……このようなことをやったとしても、不思議はございませんわ」
ミーアの必殺パターン、とりあえず、困ったら蛇のせいにしときゃあいいや！　である。
そもそもの話……蛇というのは、神出鬼没である。どこに潜んでいるかもしれない者たちである。
ならば、逆にセントバレーヌに潜んでいる可能性だって否定できないではないか。
もちろん、最終的な冤罪を生み出すつもりはない。冤罪は根深い恨みを買う。それは、断頭台に潤滑油を塗り込むがごとき行為だ。

ゆえに、あくまでもミーアは可能性をほのめかすだけ。そちらのほうが、話が上手く転がりそうな時だけ、ちょっぴり責任を負わせるだけにしているのだ。
「その、邪教の集団が、父上の目をかいくぐって……？」
「いえ、実際のところはわかりませんわ。あくまでも可能性の話で。それだけのことをやってのける者たちがいる、というだけのこと」
ミーアは、あくまでも事実のみを口にする。
混沌の蛇がいる可能性は、否定できない。
彼らがルシーナ司教の目をかいくぐることも、否定はできない。
その事実を確認したうえで……。
「だからこそ、考えても仕方がない、とわたくしは考えますわ。セントノエルで、ああだこうだと考えていても、悪いほうにしか考えはいきませんわ。不安や心配は、いわば繁殖力の強い雑草のようなもの。放っておけば際限なく増えていくものですわ。だからこそ、直接行って、その根を刈り取ってしまわなければ……と思いますの」
「ミーアさまが、セントバレーヌにいらっしゃる、と……？」
「ええ。せっかくの機会ですし、ルシーナ司教にもご挨拶させていただきたいですわ。それと、ラフィーナさまには、念のために、早めに連絡を入れておいたほうが良いと思っているのですけど……」
「なるほど……確かにそれが理にかなっていますね。父が関わっているにせよ、いないにせよ、ここで、話していても仕方ありません」
静かに頷いたのはレアだった。
「そう……だな。うん、父上に、ミーア姫殿下のことを知ってもらうことは意味があると思うし……。うん、それがいい」
まるで、それさえすれば、すべて片付くと……そう信じているような口調でリオネルが言った。
――本当に、すべて丸く収まってくれればいいのですけど……。
ミーアはため息を吐きながら首を振るのだった。

第六十三話　慧馬、叡智を語る

さて、ミーアたちが怪しげな肖像画に右往左往していた頃のこと……。

火慧馬は、セントノエル島を離れていた。

騎馬王国の族長会議に顔を出し、レッドムーン家の乗り手と腕を競い合ったことを報告（大いに盛り上がった！）、帝国から乗馬術を学びに来ているヒルデブラントの様子を聞いて（騎馬王国の民とすっかり馴染んでいた！）から、再びヴェールガ公国へ。

ヴェールガの使者に連れられて向かったのは、巫女姫ヴァレンティナの幽閉された場所だった。

「羽透、賊はいないか……？」

念のために、と相棒に頼む。と、従者たる戦狼、羽透は、顔を上向け、くんくん、と鼻を動かした。それから、ぶーふっと鼻を鳴らし、慧馬の足元に顔を摺り寄せてきた。

「そうか。問題なし、か……」

つぶやきつつも、決して警戒を緩めることのない慧馬。

なぜなら、その場所は、多くの者に秘された場所だったから。

ヴェールガ公国の、とある場所に立つその建物は、一見すると、天を貫く塔に見える。

「ここに、巫女姫ヴァレンティナが……」

慧馬がここに来たのは、一つには兄が来ていると聞いたからだが……、もう一つには、ヴァレンティナとの約束を果たすためだ。

「お茶会の誘い……。別に聞く必要はないが……逃げたと思われるのもシャクだからな」

火の一族の里にいる間、何度か誘われたことがあったのだが、慧馬はすべて断っていた。

それは、巫女姫ヴァレンティナの危険な気配を、慧馬が敏感に察

知していたから……では、ない。実は違う。
ではなぜか、といえば……。
「レムノ王国の姫君のお茶会……あの時の我は正式なマナーがわからなかった……」
……割としょうもない理由であった。
だが、っと、慧馬は拳を握りしめる。
「我が友ミーアと共に、お茶会を重ねること数度。マナーは完璧に身に着けた。これで、弱みを見せることはない！」
そう、セントノエルに行き、ティアムーンにも行き……その空気を吸った。
白月宮殿にも行ったし、そこで食事までした。
今や、慧馬は、帝国式のテーブルマナーを完璧に身に着けたと言っても過言ではないのだ。
……そうだろうか？
「しかし、我が兄ながら、まだ完全に回復せぬとは……情けない」
ふん、っと鼻を鳴らして、慧馬は塔に足を踏み入れた。一瞬、警備の兵に声を掛けられそうになったが……すぐに、慧馬……の連れている狼を見て納得の笑みを浮かべた。
ラフィーナから、慧馬が訪ねてくることを聞いていたのだ。
「どうぞ、お入りください。火慧馬殿」
「うむ、世話になる」
深々と頭を下げてから、慧馬は塔に足を踏み入れた。
長い階段を登り、登り、ヴァレンティナが幽閉されている部屋の前、待機室に入ったところで、
「申し訳ありません。こちらでお待ちください。ただ今、先客がおられますので」
「わかった。だが……客？」
っと、そこで気が付いた。待機室にひっそりとたたずむ、金属鎧の男……。慧馬は、その男に見覚えがあった。
「むっ……貴殿は……確か、レムノ王国の……」

慧馬のほうに目を向けた男……ギミマフィアスは、静かな笑みを浮かべて頭を下げた。
「これはこれは、ご無沙汰しております。火族の姫君……」
「なぜ、貴殿がここに……まさか……巫女姫の命を奪いに来た、とか……？」
「おや、心配ですかな？　ヴァレンティナさまのことが……。貴女たちの一族は、ヴァレンティナさまのせいで、酷い目に遭ったと聞いておりますがな……」
「いや、別に、心配というわけではないが……」
ではなぜ、そんなことを聞いたのか……と考え、すぐに慧馬は気付く。
自分は、ミーアの作り出す未来のことが気に入っているのだ、と……。だから、それをぶち壊しにするようなことは、してほしくないのだ。
「ふふ、そのような顔をなさいますな。すでに、与えられた命令は撤回されておりますでな」
ギミマフィアスは苦笑いを浮かべてから……。
「しかし、ミーア姫殿下は、処刑せずにどうするおつもりなのですかな」
「どういう意味だ……？」
首を傾げる慧馬に、ギミマフィアスは、あくまでも穏やかな口調で言った。
「蛇……でしたか。あのような者たちを生かしたままで、いったいどうするつもりか、と思いましてな。死を恐れず、秩序の破壊に暗き情熱を燃やす者たち……生かしておいたとして、矯正するのは、容易なことではないでしょうに……。殺してしまうのが、一番簡単なのではないか、と思いますが……」
「それはどうだろうな……蛇は確かに厄介ではあるが……手がないわけではないだろう」
慧馬は緩やかに首を振った。

例えばの話、慧馬は、戦士だ。命を惜しむことはない。戦士は死を恐れない。
けれど、今は……死ぬのが少しだけ怖い。戦場から遠く、離れすぎたからだ。
戦士が死を恐れぬのは、すぐ隣に死があるからだ。いつ死んでもおかしくないからこそ、どう死ぬかを考え、覚悟を決める。
けれど今は違う。死は、遠く離れて行った。
では、死が遠い環境において、躊躇いなく命を差し出すことができる者がどれほどいるだろうか？
衣食住が揃い、すべきことが与えられた環境において、突然、死ねと言われて、なにも感じずにいられる者がどれほどいるだろうか？
満ち足りた環境に身を置いてなお、蛇の信念を持ち続けられるものだろうか……？
「少なくとも、あの者たちを死を恐れる者にするのは、案外、簡単かもしれない」
「ほう……それは？」
「簡単なことだ。毎日、食い物を与え、寝る場所と服を与え、すべきことを与える。正しく、『人』として扱ってやればいいだけのこと」
そう、人間は、正しく人として扱われる時には、死を恐れるものなのだ。
なぜなら、人とは、本来、生きて、なにかを成す存在であるからだ。もし、そうでない者がいたなら、さまざまな状況が、その者を「人」として生きられないようにしているのだ。
「大切な者を失った復讐ならば……取り返しのつかぬ傷を受けた者であれば、あるいは、変えることはできないかもしれないが……。それはあくまでも相手側の問題だろう」
慧馬は、そう考える。
「なぜ、この私が『善き者』となれるよう取り計らってくれなかったのか？」などと言うのは、甘えだ。与える者が言われる筋合い

のなきことだ。
「やり直しの機会を与えるは統治者の領分。されど、その機会を生かし、あるいは殺すのは、与えられた者の領分だ」
「やり直しの機会を与えられた時、どのように振る舞うかは当人次第、と。なるほど……。ちなみに、それは、ミーア姫殿下のお考えで？」
顎を撫でつつ問うてくるギミマフィアスに、慧馬はそっと胸を張り、
「はっきり聞いたわけではない。が、我は、ミーア姫の一番の友ゆえに。その心を知るは容易い」
堂々と言い放つのだった！

第六十四話　さんいいったい

さて、ミーアたちがセントバレーヌへと出発したのは、五日後のことだった。

成り行き上、メンバーは、生徒会のメンバー総出でということになった。

商人たちに顔の利くクロエはもちろんのこと、ルシーナ司教への弁明が必要になった際、助力が期待できるシオンとアベル。さらに、将来的にペルージャンの農作物を輸出する際の参考に、と輸送網について学ぼうとしているラーニャも、今回は同行する。

護衛として同行するティオーナとリオラ、キースウッド。シュトリナとベルもまだ見ぬ土地への旅行にワクワク顔で、それを見たリンシャが、やれやれ、などとため息を吐きつつ同行する。

さらにさらに、

「セントバレーヌの港湾施設は、どんななのか見るのが楽しみだわー」

などとウッキウキのオウラニアもいたりして……。

実に……こう、楽しい旅になりそうだった！　ラフィーナやエメラルダに知られたら、大変である！

さながら、修学旅行の様相を呈してきたセントバレーヌ行きだが、そんな中、ミーアだけが浮かない顔をしていた。

そうなのだ、これから行くセントバレーヌでのあれやこれや、を考えると、ついつい気持ちが重く……重く、なった……のではなく、ただ眠いだけだった。

今日からの旅行が楽しみで、前日、ちょっぴり眠れなかったのだ。

そんな、元気のないミーアに気を使って、現在、この馬車に乗っているのは、アンヌとミーアの二人きりだった。

「ふわぁむ、眠いですわ……」

「ミーアさま、あの、大丈夫ですか？　少しお休みになられてはいかがですか……？」
心配そうな顔で声をかけてくれるアンヌに、ミーアは笑みを浮かべて首を振る。
「ええ……大丈夫ですわ。ふふ……しかし、こうして二人でのんびりするのは、ひさしぶりという感じがいたしますわね」
最近は、やることが多くて、アンヌとまったりする機会が減っていた。それに、パティやヤナたちのほうの面倒も見てもらっていることもあり、アンヌも忙しくなってしまった。
助かる反面、ちょっぴり寂しくもあるミーアである。
だから、こうして二人で話す時間は貴重なものに感じられた。
……まぁ、実際には、勉強のサポートに、日々の髪やお肌のお手入れに、と、ミーアが思っているよりは、普通に会話していたりするのだが……それはさておき。
「ところでミーアさま、あの肖像画……本当に、そんなに問題なのでしょうか？」
ふと、アンヌが不思議そうな顔で聞いてきた。
「ミーアさまのなさってきたことを思えば、あんなふうに神さまとして崇めたくなるのも、わかるなって、思うんですけど……」
そんなアンヌの言葉に、ミーアは小さく笑みを返して。
「ふふふ、そう言ってもらえるのは嬉しいのですけど……。わたくし、別に、神さまと崇められたいなんて、まったく思いませんわ」
静かに首を振る。
それはもちろん、中央正教会と敵対したくないという気持ちからのことではあるのだが、それ以上に……、単純に面倒くさいからだ！
「神のごとく、なんでも一人でするというのは、きっととても大変なことですわ」
何でも自分一人でやる……やらされるっ！　そんなのはごめんだ、できれば、仕事は周りのみんなにやってもらいたい。それで、最後のほうに、ちょこっと手を出して、一緒にやった感を出す。これこ

そがベストである。
などと考えるミーアであったが……そこで、ハッと気付く。
さすがに、そんな本音を言うわけにもいかない。なので、ちょっぴり軌道修正して……。
「なんでも、一人でするのは、ええと、その……きっと辛いことですわ。サンクランドのエイブラム陛下も、きっとそんな気持ちだったのではないかしら……。神は三位一体といいますから、きっと、神の中で交流を計れるということでしょう。けれど、わたくしは、やはり寂しいですわ。わたくしは人で、三位一体ではありませんから」
……まぁ、ミーアは、食事とキノコとお菓子、それぞれに胃を持つ三胃一体の人ではあるかもしれないが。それはさておき……。
ミーアの言葉を聞き、アンヌは深々と頷いて……。
「よくわかりました。では私は、ミーアさまのことを、何があっても神さまだなんて思いません。みなが神さまとして扱ったとしても、私だけは決して……」
っと、そこで、アンヌは悪戯っぽい笑みを浮かべて。
「ですけど、もしも、ミーアさまが女神さまになるんだったら、私も司教になってミーアさまの一番の相談相手になる、というのも楽しいかもしれません」
思わぬ発想に、ミーアは思わず笑ってしまった。
「あら、アンヌが教会のトップになろうというのですわね？　大司教アンヌ、あるいは、聖女アンヌかしら？　ふふふ、似合うかもしれませんわね」
そうして、二人は、くすくすと、ひとしきり笑い合った。
「それにしても、驚いてしまいました。まさか、エリスの書いていた小説が、このような形で、お役に立つなんて……」
「あら？　驚くには値しませんわ。エリスの小説はとても出来がよろしいですもの。冒険小説だけでなく、恋愛小説のほうも、とても楽しいですし」

っと、そこで、ミーアはパンッと手を叩いた。
「そうだ。恋愛小説といえば、アンヌ、あなたは、どなたか、意中の殿方はおりませんの？」
そう言えば、未だにアンヌの恋バナを聞いたことがないな、と思いつくミーアである。
「……はぇ？　あ、え、い、いませんよ、そ、そんな人……」
大慌てで、手をぶんぶん振るアンヌ。
「あら、そんなに慌てずともよろしいではありませんの？　あなたとて若い娘。恋の一つや二つしてもよいのではないかしら？」
ミーアは朗らかな笑みを浮かべて言った。
「あなたには、わたくしの子どもたちの乳母になってもらいたいと思っておりますけれど……あなたの子どもには、わたくしの子どもの友になってもらいたい、とも思っておりますのよ？」
そうして思い描くのは、明るい未来だ。
自らの子がアンヌの子と友となり、自分の友人たちの子どもたちと共に未来を作り上げていく。それを見守るのは、とっても、素敵なことに思えてならないミーアである。
――そうなれば、わたくしは引退してゆっくりできますし……うむ。盤石な未来のためにも、今が頑張り時ですわ！
将来の楽のために、全力で今を頑張る所存のミーアであった。

第六十五話　ベル、諫言を呈する

ミーアたち一行が向かったのは、ヴェールガ南方にある小さな村だった。そこで、ルードヴィッヒ、ディオンに加え、皇女専属近衛隊の二分隊二十名と落ち合う予定なのだ。

ちなみに少し前まで、食料輸送の護衛で手一杯だった皇女専属近衛隊だったが、現在は、レッドムーン家の私兵団が協力してくれているらしく、多少は余裕が出てきているという。

先日の乗馬大会を通じて、交流を深めていたのが生きてきたのだろう。

「まぁ、よほどのことはないとは思いますけれど……」

ミーアがそんなつぶやきをこぼしたのは、村まであと一刻ほどといった場所でのこと。

休憩がてら馬車を降り、ううん、っと伸びをしつつ、辺りをキョロキョロ見回してみる。

見渡す限り広がるのは、のどかで平和な風景。整備された巡礼街道をのんびりと歩く人々の姿だった。

さすがは聖ヴェールガ公国。その治安は大陸随一であり、名うての盗賊ですら、この国で悪事を働くことはないと言われている。

けれど……。

「ヴェールガを出てしまえば、そうもいかないでしょうし。やはり、皇女専属近衛隊が護衛についてくれると安心ですわね。ディオンさんもおりますし」

そのつぶやきを聞いてビクンッと体を震わせる者がいた！

それは言わずもがな、ディオンにトラウマを抱いている火慧馬……ではない。彼女は、今回、同行していないのだ。

では、誰かといえば……。

「あ、あの……ミーア姫殿下。その、ディオンさんというのは、も

しかして……」
「ん？　ああ、そうですわね。例の、ディオン・アライアですわ」
そういえば、レアには、ディオンのことを話していたっけ……と思い出し、ミーアは釘を刺しておくことにする。
「一応、言っておきますけれど、レアさん。余計なことは言ってはいけませんわよ？」
そう声を潜めて言えば……。
「そっ、それは……余計なことを言って怒らせないほうがいい、ということでしょうか」
レアは、ぶるるるるっと震え上がった。
「まぁ、そうですわね。あまり小さいことを気にする方ではありませんけど、怒らせると怖い方ですから……。なにせ、あの方、軽々と鉄を切り裂きますし……」
「まぁ、鉄を！？」
レアが目をまん丸くして、声を上げた。
「ええ。それに、本気を出せば海を割ったり、山を切ったり、それはもう、恐ろしい方なんですのよ」
レアの反応が面白くって、ついつい盛ってしまうミーアである。それを聞きつけたのか、どこからともなくベルが近づいてきて……。
「そうなんです。ディオン将軍は、ものすごいんですよ。お一人で百の兵を切り捨て、万の兵を撤退させると言われてて……」
などと聞くと、レアは、う、ううん……などと吐息をこぼし、ふらぁっとしてしまう。
「あっ、ちょっ、レアさんしっかり……」
慌てて、その体を抱きとめつつも、ミーアは小さく首を傾げた。
「しかし、レアさん、直接会ったことがないにしては、やけに怯えておりますわね」
まぁ、実際に見たことがないからこそ想像の中で怖さが増していくということはあるかもしれないが、それにしても、やや解せない反応だった。

「その……なぜか、わからないのですが……。私には、その方が、すごく怖い方だというのがわかってしまって……」
レアは心底、困惑したような顔をしていた。普通に考えれば理屈に合わないような恐怖に、ただただ首をひねるばかりだった。
「どうしてなんでしょう……？　直接お会いしたこともないですし、ミーアさまに敵対するようなことなんか絶対しないのに……剣を突きつけられたことがあるみたいな……そんな怖さがあるんです」
「そんなに怯えることないと、リーナは思いますよ」
ミーアたちの話を聞いていたのか、シュトリナが口を挟んできた。彼女は可憐な、花のような笑みを浮かべて……。頬に手を当てたまま、小さく首を傾げる。
「たぶん、想像しているよりは、怖くないというか……。慣れれば、案外、手玉にとれるんじゃないかって思いますけど……」
っと、それを聞いて、生暖かい笑みを浮かべたのはベルだった。その、なんとも言えない表情に気付いたのか、シュトリナは眉をひそめた。
「ベルちゃん、どうかしたの？」
「……あの、リーナちゃん、あんまり、その……そういうこと言わないほうがいいですよ」
まるで、言いづらいことを忠告するように、ベルが言う。
「えっと……どういうこと？」
「返り討ちに遭っちゃいますから……」
そっと声を潜めて、ベルは語り出した。
「ミーアお祖母さまとアベルお祖父さまは、ミーアお祖母さまが、シオン陛下とティオーナさんは、ティオーナさんが、いずれも主導権を握ってます。だけど……その、リーナちゃんは、からかいに行こうとして、返り討ちにあうことが多いというか……主導権を取られて翻弄されて、赤くなってることが多いというか……」
「なっ……！」
思わず言葉を失うシュトリナに、ベルが、すまなそうな顔で続け

る。
「だから、あまり、その、後で恥ずかしくなるようなことは言わないほうがいいかなって、思って……。ディオン将軍は口も強いですし、リーナちゃん、勝負しても、大抵、手玉にとられちゃいますから……」
「おや、僕のことを、呼んだかい？」
その時だった。突如、聞こえた声に、ぴょんこっ！　っとシュトリナ……とレアが跳びあがった。
「あら、ディオンさん。合流地点までは、もう少しあるかと思っておりましたけれど」
「いやなに、道に留まる馬車の一団が見えたもので。ミーア姫殿下になにかあっては一大事、と、はせ参じたまでのことですよ」
ニコニコ上機嫌に笑みを浮かべるディオンに、ミーアも愛想よく答える。
「それは心強いですわ。百戦錬磨のあなたに来てもらえれば百人力ですわね。おほほほほ」
などと誤魔化しの笑みを浮かべるミーア……であったが。
「ところで、ミーア姫殿下……そちらのお嬢さんが、なにやら僕のことを見て、ひどく怯えているように見えるんですけど……」
チラリ、とディオンの視線を受けて、レアがびっくーんっと跳ねあがった。
「なにか、僕に関して、あることないこと、言ったんじゃありませんか？」
「そっ、そぉんなこと、ございませんわよ？　あなたの武勇伝を語ったまでのこと」
多少は盛ったという自覚があるミーアは、笑って誤魔化そうとする。
「そうですか？　なんだか、イエロームーンのお姫さまのほうも、様子がおかしいような気がしますがね」
ディオンのじっとりとした、疑いの視線が、今度はシュトリナの

ほうを向く。
それを受け、シュトリナは、一度ベルに目をやってから、堂々と胸を張り、
「ご機嫌よう、ディオン・アライア。淑女（レディー）の会話を盗み聞きなんて、帝国最強の騎士にしては、少しやることがセコいんじゃないかしら？」
可憐な笑みを浮かべるシュトリナである。が……。
「それは失礼。淑女というには、いささか、姦しすぎる声が聞こえたものでね」
軽く流してから、ディオンは、からかうように笑みを浮かべて……。
「もう少し、淑やかさを身に着けてから、出直すと良い。淑女（リトル）見習のお嬢（レディー）さん」
「なっ、ぁっ！」
そんな二人のやりとりを、生暖かい笑みを浮かべて見守るベルであった。

第六十六話　MはYであり、Iではない

ディオンに遅れることしばし、ルードヴィッヒと皇女専属近衛隊二十名が合流した。
善は急げということで、ミーアは早速、馬車の中でルードヴィッヒに情報を共有すべく、会議を開くことにする。参加者はミーアとクロエ、アンヌとルードヴィッヒであった。
「ご機嫌麗しゅうございます。ミーア姫殿下」
ドアを開け、入ってきたルードヴィッヒにミーアは笑みを浮かべる。
「来ていただいて助かりましたわ。ルードヴィッヒ。いささか、面倒なことになりそうでしたから、ぜひともあなたの知恵を借りたいと思っておりましたの」
それを聞いたルードヴィッヒは苦笑いを浮かべて……。
「この非才の身になにができるかはわかりませんが……。セントバレーヌは要衝。この機に、味方を増やしておくに越したことはないでしょう。微力ながら、力を尽くしたく思います」
そうして、深々と頭を下げた。
「頼りにしておりますわ。では、とりあえず、情報を共有しておきますわね。ええと、クロエのことは、ご存じでしたわね？」
「無論です。お父上のフォークロード商会にはいつもお世話になっております」
「はい。こちらこそ……いつも、父がお世話になっています」
やや緊張した口調ながら、そう返して、クロエが頭を下げた。
「それで、まずは例の民草に広がりつつある不安感への対処なのですけど……」
そうして、ミーアはクロエに視線を送る。っと、クロエは軽く眼鏡に触れて、

「対策は、ずばり、茸(えいち)の栞作戦です」
「えいちの……栞？」
……どのような字にルビが振られたのか、知らないルードヴィッヒである。
まぁ、それはさておき。クロエは、淡々と例の読み聞かせのアイデアを開示する。
ルードヴィッヒは、それを聞いて目を見開いた。
「なんと……食べ物を栞にした読み聞かせ……とは」
口元に手をやり、思わずといった様子で唸る。
「確かに、我々の中でも懸念があったのです。本とは高級なもの。仮に安価に作ったところで、はたして、どこまで普及するものだろうか、と……。しかし、この方法ならば……」
その策を吟味するように、彼はつぶやく。
「しかも、そこでミーア二号小麦の調理法を広める、と……」
腕組みして目を閉じることしばし……。やがて、ルードヴィッヒはクイっと眼鏡の位置を直して！
「なんという……素晴らしい……見事な策だと思います。一手で、複数の効果が期待できる……二重三重に狙いを持った素晴らしいアイデアです」
感心しきりのルードヴィッヒに、ミーアはしっかりと強調しておく。
「クロエたちが出してくれたアイデアですわ。ティオーナさんとラーニャ姫、それにアンヌも一緒に考えてくれたのですわよね。わたくしの益体もない言葉を、吟味し、膨らませて、見事な形にしてくださいましたの」
情報の正確性を喫するべく、ミーアは言葉を紡ぐ。
自分の考えでないことを、なんとしても強調しておかなければならないのだ。余計な期待値を上げないために。
クロエたちのアイデアは、実際、とても素晴らしいものだった。ミーアですらわかる素晴らしさであった。であればこそ……、これ

がミーアの考えであると誤解され、さらに次も同レベルの解決策を期待されては大変だ。
ミーアはイエスマンであっても、アイデアマンではないのだ。きちんと、それをわかっておいてもらいたいところであった。
問題があった際、ミーアに報告を上げれば何かしら解決策が提示されるだろう……などと思われているのは迷惑なことこの上ないのだ。できれば、問題だけでなく、解決策までセットで提案してもらいたいのである！　それにいいね！　するこことこそが、ミーアの理想なのだ。
「いえ、それはミーアさまが……」
っと、クロエもアンヌも慌てた様子だったが、ミーアは首を振り、
「わたくしの、ちょっとしたアイデアを膨らませて、思いもよらない形にしていただきましたわ。みなさんの頭脳労働に敬意を表したいと思いますわ」
なにも……何一つ、嘘偽りは口にしない、極めて正直者なミーアである……のだが……。
「ミーアさま……」
その場にいた全員の目に浮かぶのは、尊敬の念に満ちた色であった。
「では……話を戻しますが、今回のセントバレーヌ行きの目的は、女神の肖像画の調査と、その読み聞かせ企画の下準備、ということでよろしいでしょうか？」
「そうですわね。セントバレーヌの商人たちに協力してもらえれば、読み聞かせの策もスムーズにいくと思いますわ。ふむ……」
ミーアは小さく頷いて、
「申し訳ありませんけれど、クロエ、そちらのほうは、あなたに任せてもよろしいかしら？」
「わっ、私ですか？」
突然のことに、驚いた顔をするクロエ。
「ええ。わたくしたちの中で、最も商人の心理を理解しているのは

あなたですわ。だからこそ、あなたが適任だと思いますの」
「そうですね。フォークロード商会のご令嬢であれば、他の商会にも話が通しやすいはず。お願いできないでしょうか？」
ルードヴィッヒの、極めて冷静な言葉に、クロエは軽く眼鏡に触れてから……。
「わかりました。そちらに関しては、私に任せてください」
「よろしくお願いいたしますわ。わたくしたちは、例の肖像画のことで、手一杯でしょうから」
ミーアの言を受けて、ルードヴィッヒが頷いた。
「ミーアさまには、ルシーナ司教への探りを入れていただきたく存じます。それと並行して、肖像画の製造元は、私が調べさせていただきます」
「わかりましたわ。まぁ、レアさんやリオネルさんもおりますし、問題ないのではないかしら……」
さすがに、門前払いされることはないだろう、と踏んでいるミーアである。
「シオンやアベルもおりますから、お屋敷に滞在することになるのではないかしら？」
ミーアが訪ねてくることは、すでにレアたちを通して知らせてある。けれど、さらに他国の王族や貴族令嬢までが同行しているとなれば、無下には扱えないだろう。
「ルシーナ司教が関係していれば、その真意を探る必要があるでしょうし、関係していなければ、きちんとわたくしの潔白を訴えておかなければなりませんものね」
ミーアは、まだ見ぬルシーナ司教を想像し……生真面目でとっつきにくそうな顔を思い浮かべて、深々とため息を吐くのであった。

第六十七話　慧馬、邂逅す

火慧馬は、レムノの剣聖ギミマフィアスと、馬談議に花を咲かせていた。
どこの国であっても馬トークは鉄板、とばかりに、生まれた国も年齢も違う二人は、大いに盛り上がっていた。
「なるほど。レムノ王国の馬術教練には、山族が関わっていると……。しかし、興味深いな。レムノの軍馬と帝国の軍馬にそんな違いが……」
などと、すっかり空気が温まっていたところで……巫女姫の部屋から一人の男が出てきた。
黒い髪と不機嫌そうな顔……。目つきの悪いその男を見て、慧馬は、
――アベル・レムノの兄か。なるほど、彼を不良にしたような顔だな……。
「なんだ、お前は……」
慧馬に気づいたのか、鋭い視線を送ってきた男、ゲイン・レムノは、不快さを隠すことなく言った。
「そう殺気立つことはないぞ、ゲイン・レムノ。程度が知れる」
向けられた敵意を涼しい顔で受け流し、慧馬は言った。
余裕の態度だった。余裕綽々だった！
なにしろ、慧馬は戦士である。しかも、かの狼使い、火馬駆の妹でもあるのだ。
多少、腕が立つ相手程度であれば見慣れているし、ぶっちゃけ敵意を向けられても、どうということはないのだ。
兄と比べれば、ちゃんちゃらおかしいわけで……。
そうなのだ、彼女の恐怖の基準は、あのディオン・アライア水準。
ミーアの奥義「ディオン・アライアよりもマシ」を、慧馬は、持

ち前の野生の感覚で身に着けているのだ。
それゆえ、王子の殺気程度、可愛いもの。他愛なさすぎて、鼻で笑ってしまうのだ。
それに、外には羽透も控えているし……。
ということで、慧馬は堂々たる態度で、名乗りを上げる。
「お初にお目にかかる。我は、火慧馬。騎馬王国は火族の族長の妹だ」
それを聞き、ゲインの眉が、ぴくんっと上がる。
「火族の族長……ということは、あの男の……」
「いかにも。火馬駆は、我が兄だ」
「ふん。そうか。お前も、あの蛇とか言うふざけた連中の仲間か？」
腕組みし、見下ろしてくるゲイン。慧馬は静かに首を振り、
「それは過去のこと。今は、我が友ミーアにより、火族は蛇の影響下から救い出されている」
まるで、友の偉業を誇るように、あるいは、してもらった親切を告げ知らせるかのように、慧馬ははっきりと言った。
「ミーア姫により、我らは解放されたのだ」
「ああ、そういえば、そうだったか」
ゲインは、つぶやきつつ、ゆっくりと歩み寄ってくる。ジッと見つめくるゲインに、なんだ、こいつ。やんのか、この野郎！　と身構える慧馬。
慧馬は戦士である。温室育ちの王子に負ける気などサラサラないのだ。売られた喧嘩を買う気満々で待っていた慧馬、であったのだが……。
目の前まで来たゲインは、その場で頭を下げた。
「我が姉、ヴァレンティナが迷惑をかけた」
突然の殊勝な態度に、慧馬、思わず仰け反る。あまりに予想外過ぎて、言葉に詰まってしまって。
「なっ……」
呆然とする慧馬の目の前、ゲインは踵を返す。バサリとマントを

翻して、まるで、埃を払うかのように……。
「行くぞ、ギミマフィアス」
「なっ、ちょっ、おい……」
「なんだ、まだなにか用があるのか？」
立ち止まり、軽く顔を向けてくるゲインに、咄嗟にかける言葉が見つからず……。慧馬は、途切れ途切れに言った。
「いや……謝罪を受けようとは思っていなかったから、驚いただけだ。それに、詫びを受ける筋合いのことでもない」
「ふん、気にするな。形だけだ。レムノ王家に携わる者として、けじめとして頭を下げただけのこと」
ゲインは、小馬鹿にするように口の端を上げ、それから、再び背を向ける。
その後ろから、ギミマフィアスが付き従う。
「時に、ヴァレンティナさまは、どのようなご用件で……？」
「この俺に頼みたいことがあるそうだ。なんの気まぐれかは知らんが……」
「頼み……？　ヴァレンティナさまが、ですか？」
「正直、聞いてやる必要を微塵も感じぬが……俺自身、気になっていることにも関係していてな。行かぬわけにはいかなくなった。悪いが、付き合ってもらうぞ」
その言葉を聞いていて、慧馬は、生ぬるい笑みを浮かべる。
――ああ、上手いこと、巫女姫に乗せられたのだろうな……。
なにしろ、相手は、かの巫女姫だ。相手の心を操る術に長けた、恐るべき相手。この王子程度なら、容易く操れてしまうんだろうなぁ、なんて思ってしまって。
そうして、慧馬を残して、二人は出て行った。
「ふん……。無礼な男だが……我と同じように兄姉に振り回されていると思うと、少々、同情できなくもないか」
苦笑いを浮かべてから、慧馬もまた踵を返す。
巫女姫の待つ部屋のドアを大きく開け放ち、

「失礼する」
ドアの向こうには、椅子に座る巫女姫ヴァレンティナ、それに、自らの兄、火馬駆の姿があった。
「慧馬か……」
「久しいな。兄上。怪我はまだ癒えぬか？」
馬駆は、軽く腕を動かして見せてから……。
「問題ない。それより、燻狼の行方は……？」
「ガヌドス港湾国で行方をくらまして以来、行方が知れぬ。ヴァイサリアンの暗殺者と行動を共にしていた時には、多少、強引な手を使っていたから見つけることができたが……。本気で身を潜めようとされたら、なかなか、な……」
「ふふふ、蛇のすべてを捕らえることはできない」
嘲笑うように言うヴァレンティナ。まるで歌うように、彼女は言った。
「捨て置けばいいわ。無駄な努力を続ける意味はない」
その様子を見て、慧馬は、微妙な違和感を覚えた。以前までの彼女とは違い、どこか、余裕のない印象を受けたのだ。
「意味がない……か。もとより、人生に意味などない……とか言っていた気がしたが……？」
慧馬からの思わぬツッコミに、ヴァレンティナは、かすかに目を見開いた。
「なにやら、雰囲気が変わったのではないか？」
その指摘に、ヴァレンティナは、儚げな笑みを浮かべて首を傾げた。
「別に驚くには値しないわ。人は変わるものよ、慧馬さん。永久に変わらないものは、蛇と、人がいずれ滅びるという事実だけ」
変わらぬ主張、蛇の不変を歌うヴァレンティナ、であったが……。その言葉にも、かすかな揺らぎを感じる慧馬であった。

第六十八話　いざセントバレーヌへ！

独立港湾都市セントバレーヌ。
聖ヴェールガ公国の飛び地として厚い加護を受けるその都市は、大陸最大の港を有している。否、むしろ、巨大な港が都市の機能を有していると言うほうが正しいかもしれない。広い海岸線に沿って、厳かに横たわるその威容、周辺国による利権の争奪戦を経るごとに厚みを増した城壁は、一国の首都のように堅牢だった。
広大な海原、その海と大地とを区切るようにして建ち並ぶのは白い石造りの建物群だ。その間を綺麗に直線を描いて大通りが通っている。美しい機能性を誇る街並みが、そこには広がっていた。
大通りが向かう先には、何隻もの船が停泊する巨大な港があった。船乗りたちが活発に動き回る船着き場、さらにその先の張り出し部分には、数多の船を導く灯台がそびえ立っていた。
「おお、あれが……聖なる港、セントバレーヌですのね。うん、灯台も新しそうですし、当面、建て直す必要はなさそうですわね……」
都市を見下ろす丘の上、馬車から降りたミーアは、ううん、っと伸びをしつつ深呼吸。ほのかに香る潮の香りに、思わず頬を綻ばせる。
「あー、ガヌドスが懐かしいわー」
っと、近くに降りてきたのは、オウラニアだった。潮風が彼女の心を高ぶらせるのか、彼女はウキウキ弾みながら背伸びをして、
「うふふ、良い海だわー。どんなお魚が釣れるか、とっても楽しみー」
港湾施設の見学などという言い訳を早々に投げ捨てて、ルンルン鼻歌を歌いだすオウラニアである。
「あー、ほら、ミーア師匠―、大きな船が入港してきますよー」
彼女の指さす先、一艘の巨大な帆船が入港してくるところだった。

「おお、そうですわね。エメラルドスター号より二回り大きいぐらいかしら。あんな船も受け入れられるとは、すごい港ですわね」
実に壮観な風景に思わず、歓声を上げるミーアである。一方で、ガヌドスに同行しなかったティオーナやリオラ、ラーニャなどは、その光景に言葉を失っていた。
セントノエルに通う者たちは、みな、ノエリージュ湖を知っている。巨大な湖というのは、海とさして変わらぬもの。だから、水がたくさんある場所としての海に驚くということはない。
されど、そこをひっきりなしに巨大な船が行き来している光景、人々の活気と活発な物の流れは見る者を圧倒せずにはおかなかった。
「大きい船……すごい、です」
特に、感銘を受けた様子だったのはリオラだった。
「あんなの三隻も作ったら、静海の森の木が、全部なくなってしまいそう、です」
「ふふふ、そこまでではないでしょうけれど。確かに、そう言っても誇張ではないぐらいの大きさがありそうですわね。ちなみに、あれは、やはり海の向こうとの交易に使われている船なのかしら……？」
ミーアは、クロエのほうを見て尋ねる。っと、クロエは軽く眼鏡に触れながら、
「そうですね。ええと、あっ、あそこに停泊しているのがフォークロード商会の船です」
彼女が指さす先、大きな帆船の姿が見えた。
「海外からの絨毯や絹織物、それに、帝国に輸送される小麦なんかも運びますね」
「小麦……」
その言葉に、ピクリと反応したのはラーニャだった。クロエは、その興味に応えるように、
「他にも葡萄酒なんかも輸送したりしますね。それと、香辛料とかでしょうか。海の向こうから、こちらでは育てられない作物を買い、

こちらでしか作れない物を向こうで売る。そんなことをしています」
「こちらでしか作れない物。ミーアさま、後で、港に見学に行ってきたいんですけど……」
ラーニャの言葉に、ミーアは深々と頷いた。
「ええ。ペルージャンの将来にとっても必要なことですわね。わたくしも、商人の方たちとは顔繋ぎをしたいと思っておりますし、後で行ってみましょう。クロエ、お願いできるかしら？」
「わかりました。父にも伝えてあるので、大丈夫だと思います」
頷くクロエの腕をちょいちょいっと引き、オウラニアが言った。
「あっちの、小回りが利きそうな船は、漁師の船かしらー？　少し変わった形だけどー」
「あ、はい。そうですね。ガヌドスでも同じだと思いますが、川では獲れないような変わった魚もたくさん獲れるんですよ」
「ふふふー。どんなお魚が釣れるのかしらー。とっても楽しみだわー」
テンションが上がるオウラニアと対照的に、微妙に暗い顔になったのが……。
「魚……」
森と焼き肉をこよなく愛す人、リオラ・ルールーだった。
「あら？　リオラさん、もしかして、お魚、嫌いですの？」
尋ねると、リオラは眉を潜めたまま、うう……とつぶやいて。
「肉のほうが好き、です。鳥も、ウサギも、魚より美味しいし、捕まえるのが簡単、です」
「大丈夫ですよ。リオラさん。いろいろなお魚もいますから、きっと気に入るものもあると思いますよ。お魚だって美味しいんですから。それに、ここでしか捕れない珍味だってありますし」
眼鏡をきらりん、っとさせて言うクロエに、ミーアは首を傾げ、
「珍味というと、女王烏賊の干物とか、そういったものかしら？」
「はい。他にも、皇帝タコという奇怪なお魚がとっても淡白な味で美味しいです。足が八本もある変わった姿で……あとは、ニャマコ

というのも変な見た目ですけど、素敵なお味なんですよ」
「ほほう……。それらも、干物にできるのかしら？　お土産とかには……」
ミーアの脳裏にあるのは、今回一緒に来られなかった友人たち、エメラルダやラフィーナ、それに慧馬の顔であった。持って帰れるものならば、持って帰りたいところだが。
「そうですね。たぶん、売っていると思います」
「なるほど……。それは良いことを聞きましたわ」
っと、ひとしきり観光トークを楽しんだところで……。
「それでミーアさま、まずは、どちらに向かわれますか？」
生真面目な口調で尋ねてきたのは、ティオーナだった。今回、ミーアのそばに付き従う令嬢として、ミーアの護衛を仰せつかったティオーナは、とても気合が入っていた。
同じく、ルードヴィッヒやディオンをはじめ、皇女専属近衛隊の面々がミーアを見つめていた。そして、レアと、リオネルも……。
ミーアは、こほん、と咳ばらいを一つしてから。
「まずは、ルシーナ司教にご挨拶を。それから、港のほうを見学させていただくことにしましょうか」
さすがに、レアとリオネルの手前、ルシーナ司教とか放っといて、港に買い食いに行こうぜ！　とは言えない、ちょっぴり小心者のミーアなのであった。

第六十九話　善き王もまた人なり

「なぜですか、王よ。なぜ、そのような……」
声を張り、訴える。
「困窮する民がいるのです。それなのに、なぜ、そのようなことを……」
あなたは、そんな人ではなかった……と声を限りに訴える。
「ヴェールガ本国からの支援は必ず届く。どうか、王室が保有している食料を……」
その声を、必死の訴えを、王や家臣たちは淡々と退ける。
昨日まで、善人であったはずの彼ら……弱き者に目を留め、憐み、手を差し伸べていた彼らが……まるで、恐ろしい邪神の使徒のように冷淡に……。

「マルティン……あなた……」
ゆさゆさ、と体を揺すられる感覚。
ハッと目を開ける、っと、そこは、見慣れた館の寝室だった。
自らを心配そうに見つめる妻の顔。その頬にそっと手を伸ばしかけ……けれど、その手を引いて……。彼、マルティン・ボーカウ・ルシーナ司教は小さく息を吐いた。
「ああ……これは恥ずかしいところを見せてしまったな」
「別にいいんじゃありませんか。妻に甘えたとしても……。夫婦は互いの不足を補い合うものでしょうに」
優しく……慈しむような妻の言葉……けれど、マルティンは、小さく笑みを返しただけだった。子の胸の痛みは自分だけのもの。妻にまで背負わせようとは思わなかったから。
「ただの夢でこれほど取り乱すのは、やはり情けないことだ。もっと精進しなければ……」

「例の……ツロギニア王国での、ことですか？」
その言葉に、一瞬だけ、体が固まる。

ツロギニア王国……それは、若き日に、マルティンが初めて派遣された国の名だ。
ヴェールガ南方に位置するその国は、公国とも中央正教会とも友好的な関係を築く、歴史のある国だった。
先代王は人徳の人として名高い人であったし、その子である現国王も、概ね評判がよく、中央正教会でも評価の高い人物であった。頑迷で聞き分けのない人物ではなく悪辣でもなく……それゆえに、若い司教にとっては、仕事がしやすい環境といえた。
ルシーナ家は、ヴェールガの名門。それゆえに気を使われたなどと思わなくもなかったが、それでもマルティンは誠実に職務をこなしていった。国の重鎮たちと協力し、民に仕えていった。
充実した日々だった。実り多き日々、神の祝福に溢れた日々であった。
あの、飢饉が起きる時までは……。

「話しては、いただけないのですか？　あなたの心の内……抱えているお気持ちを……」
妻の言葉に、マルティンはゆっくりと首を振る。
「話したところで大して意味のあることでもない。そう大したことでもない。いわば……そう、ありふれたことなんだ」
たぶんどこの国でも、多かれ少なかれ起きていること……。
ただ、国王が、庇護すべき民を見捨て、自己の保身に走ったというだけのこと。それで、民が命を落としたという……ただ、それだけの他愛のないこと。
「そして、だからこそ……救いがたい」
彼が、あの国で得た教訓は、ただ一つのことであった。
それは本当にありふれたことで……すなわち、善き人であっても

裏切るということ。
善き王であったとしても、簡単に、何の躊躇いもなく裏切るということだった。
マルティンを……ではない。
神を……倫理を、正義を、人の道を……、あまりにも容易く、王は裏切ったのだ。
いかに、神の前に膝を屈めるポーズをとったとしても……いかに、その行いが善意に満ちたものであったとしても、それが徹底されるとは限らない。
彼らは容易に裏切るのだ。
元からそうであったなら……まだ救いはあるかもしれない。善人の仮面を被った悪人であったなら、それは、ただの、憎むべき悪だからだ。
されど……マルティンは知っている。彼らは悪ではない。
彼らは人間だ。
彼らは本当に善人で、思いやりがあり、称賛されるべき美徳の持ち主で……それをあまりにも簡単に覆す。変わってしまうのだ……。
どれだけ優れた王であっても、貴族であっても……環境を問わずに善の判断を下し続けることは難しい。
されど、彼らは人の上に立つ者であるがゆえに、その堕落は、下々の民の大いなる苦しみとなる。
ゆえにこそ……。
「そういえば、レアとリオネルが、帰ってくるんでしたわね」
その言葉で、マルティンは我に返った。
「そう、順調にいけば、数日中には着くだろう」
「あまり……あの子を叱らないでくださいね」
「叱る……なんのことかな？」
一瞬、本気でわからずに首を傾げてしまうが……。
「セントノエルの生徒会長のこと。リオネルは、あなたの期待に応えられなかったし、レアは、あなたの思惑とは違ったことをしまし

たから」
「ああ……」
それを聞き、マルティンは、小さく笑って首を振った。
「選挙は神意の表れ。私がとやかく言うものではない。それに、あれはあれで、別に良かったんだ」
リオネルがなっていれば、一番良かった。だが、別にレアならば、それでも構わないのだ。
「レアが生徒会長になれたのは、おそらく、帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンの意思が働いた結果だろうが……。そして、レアのほうが御しやすしと考えてのことなのだろうが、この際は関係ない」
そう、問題ではないのだ。なぜなら、
「セントノエル学園の生徒会長にヴェールガの人間が就くということ、それこそが重要なことなのだから」
他国の人間では駄目だ。神の治める国、ヴェールガ公国が、それをしなければならないのだ。神の法を順守する司教の子が、ならなければならなかったから。
帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーン。彼女がいかに優秀であろうと、いかに正しかろうと……いつかは裏切るかもしれない。状況次第では、彼女も簡単に変わってしまうだろう。人間とは……そういうものだ。
だからこそ、いずれ裁きの時が来る、という事実を常に忘れぬ者が……己が行いを裁く絶対的な存在がいると、揺るぎなく信じた者が上に立ち、治めていく必要があるのだ。
そうでなければ、犠牲になる者が、無為になる魂が、あまりにも多すぎるから。
「しかし……この時期に現れるとは、やはり、帝国の叡智の異名は伊達ではないということか」
つぶやくようにそう言って、マルティンは体を起こした。

第七十話　アンヌ式殿方心掌握術を使って……

ミーアたち一行は、セントバレーヌに到着した。
直接、ルシーナ司教の館に馬車で乗りつけることも考えたが、ミーアの選択は、少し手前で馬車を降りることだった。それは、館の前に数台の馬車で乗り付けるなどという威圧的な態度をとることを避けるため……ということでもなく。
「せっかくですし、少し町の中を歩いてみたいですわね」
軽く、お腹をさすりつつ、そんなことを言うミーアである。先ほどのお茶が……その……ちょっと重たかったのだ。
今回の旅、ラーニャが一緒ということで、お茶菓子はペルージャン産の物が惜しげもなく出てきたりするわけで……。大変、お腹に優しくないのだ。
――しかし、セントバレーヌに泊まるとなれば、お夕食は海の幸が出てくるはず。ルシーナ司教だとて、可愛い子どもたちが帰って来たのだから、張り切って料理を用意したはずですわ。であれば……少しでもお腹の状態を万全にしなければ……。
ということで、軽く散歩してみたいと思うミーアなのである。
「では、私が、我が館までご案内いたします」
かしこまってそう言ったのは、リオネルだった。ミーアは再び、お腹をさすりながら……ふむっと頷き……。
「そうですわね。ですけれど……、その前に行きたいところがございますの」
「行きたいところですか？　しかし、商人たちより先に、我が父にお会いになると……」
怪訝そうな顔をするリオネルに、ミーアは小さく首を振る。
「ええ。それはもちろんですけれど、ルシーナ司教に会う前に、先に教会に行っておきたいと思いまして……」

ミーアは静かに言った。
理由としては、もちろん、お腹の空腹具合の問題なのだが、もう一つ……。
――かつて、アンヌが言っておりましたわね……。殿方というのは、自分の仕事を認められると、嬉しくなってしまうものだ、と……。
そう、ミーアは馬車の中で考えていたのだ。ルシーナ司教との会談を、できればスムーズに、和やかなムードで終わらせたいと。そのために、以前、アンヌのアイデアを再び採用しようとしていたのだ。
では、ルシーナ司教の仕事とはなにか？　もちろん、司教として神に仕え、教会に仕えることだ。となれば、彼の仕事場に行き、どこかしら、褒めるべき点を見出してから、館のほうに行ったほうがいいだろう。散歩もできるし、一石二鳥と言えるだろう。
「それはもちろん、ご案内することはできますが……その、館よりも前にですか？　普通は、父と面会し、その後、父がご案内する形で教会に行くのが常なのですが……」
「なるほど……そのような順番がございますのね」
ミーアは、しばし考えてから小さく首を振る。
「それでは、順序が逆、ですわね」
厳かに、ミーアは告げる。
なにしろ、面会でヨイショする種が欲しいのだ。面会をスムーズに、和やかにいかせるために『相手の仕事を褒める』という戦術を取りたいのだ。面会の後で教会を案内されたのでは、遅いのだ。
気まずい面会の後で教会に行ったのでは、意味がない。
ゆえに、ミーアは断固とした口調で続ける。
「ぜひ行きたいんですの。お願いできるかしら？　リオネルさん」
再度請われ、リオネルは一瞬、目を見開いたが、すぐに頷いて、
「わかりました。それでは、どうぞ、こちらです」
足早に教会堂に向かった。

「おお、さすがに大きいですわね」
セントバレーヌの教会堂を見上げ、ミーアは思わず唸った。小さな城といっても過言ではないぐらいの大きさがある。実に見事な教会堂だった。
「商人の方たちの献金で建てられたものだ、と聞いています」
横から、レアが説明してくれる。
「なるほど。それで……。とても立派な建物ですわね」
白く磨き上げられた外壁、窓には大きなステンドグラスが使われており、実に荘厳な雰囲気を醸し出していた。
入口に足を向けようとして、ふと、ミーアは後ろに目を向ける。
「んっ？　どうかしたかな？」
そこにいたのは、アベルだった。ミーアの視線に気付いたのか、アベルは小さく首を傾げる。
実のところ、ミーアは気付いていた。先ほどから、アベルがさりげなく、自分の近くを歩き、いつでも守れるような位置取りをしていることを。
「いえ、せっかくですし、エスコートしていただけないかしら？」
そう言ってミーアが差し出した手を、アベルは優しく握った。
――ふふふ、アベルとこうして並んで教会に入ると……こう……いいですわね！
上機嫌なミーア。うっかり鼻歌など歌いそうになり、慌てて自重。あくまでも敬虔っぽい、清らかに見えなくもない表情を浮かべて、鼻歌を聖歌にチェンジしたりする。っと！
「あら……あの子たちは……」
「あ、はい。読み書きを勉強に来ている子どもたちですね。漁師の子どもたちや、商人の子どもたちも、こうして教会で勉強しているんです」
説明しながら、レアがそちらに視線を向ける。と、それに気付いたのか、

「レアお姉ちゃんっ！」
子どもの一人が声を上げた。同時に子どもたちがワイワイやってきて、あっという間にレアを取り囲んでいく。
「ふふふ、レアさん、大人気ですわね」
などと、微笑ましげにその様子を眺めていると……。
「父上！」
リオネルが思わずと言った様子で声を上げる。つられてそちらに視線を向ければ、線の細い男がこちらに歩いてくるのが見えた。
司教のローブに身を包み、リオネルを見つめる男。澄んだ水色の髪は、リオネルやレアと同じ色で……。
――父上……ということは、あれがルシーナ司教、ですわね。
「なぜ、ここに？　館のほうに来ると思っていたが……」
ルシーナ司教は怪訝そうな顔で、リオネルに目をやる。
「はい。あの、ミーア姫殿下が、まずこちらに来たいとおっしゃられて……」
「そうか……」
その男は、厳かな表情で頷いて、ミーアの前に立つ。
「お初にお目にかかります。帝国のミーア皇女殿下。私はマルティン・ボーカウ・ルシーナと申します」
「これは、ご丁寧に。ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」
軽くスカートを上げるミーア。
予想外のルシーナ司教の登場に、一瞬、焦りかけるミーアであったが、よくよく考えれば、別に大した問題もない。
それに、少し前に食べたお茶菓子の貯蔵も十分すぎるほどだ。思いっきりこの教会のことをヨイショして、相手の心をガッチリ掴んでやろうと意気込むミーアである。
「とても良い教会ですわね」
ニッコリ、笑みを浮かべて言うミーアであったが……。
「それは、ありがとうございます。姫殿下。ちなみに……どのようなところが？」

切り返されて、ミーア、刹那の黙考……その後、
――商人たちのお金で建てられたと言ってましたわね。つまり、この建物自体を褒めたところで、ルシーナ司教の仕事を褒めたことにはならない。であれば……はて？
っと、そこでミーアは肝心なことに気付く。普段、司祭というのは、何をしているものなのか……っと！
――ええと、確か神父さまは……孤児院で子どもたちを預かっておりましたわね。それに、子どもに教育を施すのも中央正教会の仕事……となれば。
ミーアはチラリと目を向ける。その先にいたのは、聖堂に来ている子どもたちだった。明るい表情で、教わる子どもたちは、しっかりと教育を施されているように見えた。
「そうですわね。子どもたちの顔……かしら？」
「子どもたちの顔、ですか」
「ええ、そうですわ。あの子たちが明るく勉強をすることができている。それこそ、ここが良い教会の証ではないかしら？　それに、司教さまのお子さんであるレアさんも、たいそう子どもたちに慕われているようですし……。とても良い光景だと思いますわ」
そうして、澄まし顔でミーアは言うのであった。

第七十一話　私の知らないこと……

巫女姫ヴァレンティナの部屋を見回してから、慧馬は、ふぅん、っと鼻を鳴らした。
「なるほど。咎人とはいえ、一国の王女ともなれば、待遇が違うのだな」
勧められるままに椅子に座り、ヴァレンティナのほうを見れば……相も変らぬ嫣然たる笑みで見つめ返してくる。その妖しくも、どこか魅力的な笑みに、慧馬はグッと息が詰まるような思いがした。
「ふふふ、そうね。食べるのにも苦労はしていないし、お茶も用意してもらえるから、快適に過ごしているわ。火の一族のところにいた時と、まぁ、あまり変わらないのではないかしら」
「むしろ、我が一族の村より、良いものを食べられていそうだがな……」
「あら？　火の一族のお食事も、私は好きだったのだけど……どうぞ」
そう言って、ヴァレンティナは、手ずから紅茶を注いだ。
慧馬はそのカップを手に取り、香りを楽しんでから、両手でカップを持った。そのまま、一口すすり、ほう、っとため息を吐く。
それから、ドヤァッという顔でヴァレンティナを見る。っと……。
「ふふふ、慧馬さん、素敵なお茶の飲み方ね」
「そうだろう？　ティアムーン帝国のお茶会で鍛えたマナーだ」
「ああ……、そう。帝国で……」
くすくす、と馬鹿にするように、ヴァレンティナが笑っていた。
「なんだ？　なにがおかしい？」
「いえ……。ミーア姫は、どうやら、あなたはマナーなんか知らない蛮族だと思っているみたいね」
「どういう意味だ？」

眉を潜める慧馬に、ヴァレンティナは言う。
「紅茶のカップを両手で持ってはいけないのよ。正式なマナーではね。それは、紅茶が冷えていると相手に苦情を言うのと同じことだから」
優雅に、自らのカップを持ち上げて、その中の紅茶の色を眺めながら、ヴァレンティナは続ける。
「もしも、あなたにそれを教えてくれなかったのなら、教えても意味のない蛮族だと、あなたのことを思っていたのではないかしら？
馬に乗るしか能のない野蛮な人だと……なにかしら？」
そこまで言ったところで、ヴァレンティナは眉を潜めた。慧馬が……余裕の表情で笑っていたから。
「ふっ、いや……なるほど。やはり、切れ味が鈍っているようだな」
慧馬は片手でカップを持ち、そっと一口。それから、
「もしも、ミーア姫が、我にそれを教えなかったのだとしたら、きっと気を使わせぬように、お茶を楽しめるように、と、そう考えたからだろう。あるいは、自由に楽しめばいい、と思ったのだろうな。飲み方など騎馬王国の飲み方でも構わない、と。あの楽しいお茶会を思い出せば、マナーをどうこう言うのは、無粋だろうからな」
慧馬は、ドヤァッと胸を張り、言うのだった。
ちなみに……この推測はどちらも外れである。
ミーアは純粋に、お茶菓子を楽しみたい人。ゆえに……他人のマナーなどは、あまり気にならないのだ！　マナーなどより大切なものがこの世にはあるのだ！　と主張したいミーアなのである。ケーキとか、クッキーとかそういったものが……。
まぁ、それでも、どちらかというと、慧馬の発想のほうが近いので、自称一番の友の面目躍如といったところだろうか。
「そういえば、先ほど、ゲイン・レムノとすれ違ったが……。なにを吹き込んだのだ？」
「ああ。会ったのね。別に大したことではないわ」
ヴァレンティナは、くすくすと笑って。

「ただ、私の暗殺に関わった貴族について、少し調べてもらおうと思って……」
まさか答えが返ってくるとは思っていなかったので、慧馬は思わず、目を瞬かせた。
「……そうやって、踊らせる、ということか？」
ジロリ、と見つめる慧馬に、ヴァレンティナは笑みを浮かべる。
「そう言われてしまうのは、とても心外ね。別に、騙したわけではないのよ？」
紅茶のカップに口をつけながら、優雅に続ける。
「本当に、疑いのある貴族のことを教えただけだもの」
「しかし、下手人のことはずいぶん前から、知っていたことでは？」
それは、火の一族の里に、ヴァレンティナがやってきて、すぐのことだった。
「我が兄が、とっくに調べていたと思ったが……今さらなぜ……？」
ヴァレンティナは、自分の暗殺を画策した貴族たちがわかっても殺したりはしなかった。それどころか、その真偽を確かめようともしなかった。
自身の命など些細なことである、と言わんばかりに、完全に放置していたのだ。
「そうね。私の命など、さして気にするようなものでもない。それに、詳しく調べるまでもないでしょう。犯人は察しがついている。レムノ国王、私の父が犯人でしょうし、それだけわかっていれば、王の手足となって働いたのが誰か、なんて気にしても仕方ないと思っていたわ」
「ならば、なぜ……」
重ねて問えば、ヴァレンティナは嫣然とした笑みを浮かべて、朗らかに答える。
「だって、知りたがっていたから。あの子が……」
「知りたがっていた……？」
「そう。私は、ただ、その気持ちに寄り添うように言葉を重ねただ

け」
歌うように優雅に、煽るように憎らしげに。
「はたして、あの子が、自分の父が姉殺しを画策したと知ったら……どうなるかしらね」
それを見て、慧馬は、眉を潜める。
「やはり、あまり好かぬな。そういう企みは……。兄上は、それを許容するのか？」
「あら、馬駆が私に文句を言うことなんかないわ。ふふふ、とても優しい人なのだから」
慧馬は、不機嫌そうな顔で一息に紅茶を飲むと、席を立った。

部屋を出て行く妹を見送ってから、馬駆はヴァレンティナに目をやった。
「慧馬とのお茶会は、気に入らなかったか？」
「……なんのことかしら？」
「慧馬は鋭いところがあるから、色々と見透かされるような感じがする……だから、わざと怒らせて帰らせた……。我にはそう見えたが……」
「あら……あなたは、地を這うモノの書には興味がないのではなかったかしら？　そんなふうに、他人の心を読むなんて、あなたらしくないでしょう？」
「相手の心を読むのは、地を這うモノの書の特権というわけではない。一流の戦士は相手の心を読みながら剣を交えるもの。レムノの剣聖から、そう教わらなかったか？」
ヴァレンティナは、わざとらしく首を傾げて……。
「さぁ、どうだったかしら……。もう、遠い昔のことだから、忘れてしまったわ」
遠くを見つめるヴァレンティナ。その顔をじっと見つめながら、馬駆は続ける。
「我が妹は単純だ。心を操るのもさぞや簡単だっただろうが……お

前の弟のほうはどうかな？」
「あはは、ゲインも単純よ。操ることだって造作も無いこと……」
「戯れに操っただけ……。相手の心に重ねて、言葉をかけただけ、か。本当にそうなのか？」
踏み込んでくるような問いかけに、ヴァレンティナは一瞬だけ黙ってから……。
「ゲインが知りたがっていたのは、本当のこと。だけど、それは、弟だけじゃない。私もよ」
紅茶のカップを指でもてあそびながら、ヴァレンティナは言う。
「どうやら、この世界には、私の知らないことがたくさんあるらしい。だからこそ、それを知ることも、悪くはないでしょう」
それから、ヴァレンティナは新しく紅茶を注ぐ。そのカップを両手で包み込むようにして持ち……。
「なるほど……。こうやって、手に温もりを感じながら飲むと……こんな味になるのね……。そんなこと、地を這うモノの書にも、王室のマナーの本にも書いてなかったわ……」
まるで、無垢な少女のような笑みを浮かべるのであった。

第七十二話　最悪とはなにか？

それから、ミーアたちは教会の中を見て回った。
最初は、敵対的な態度を取られるか？　などと思っていたが、そんなこともなく……和やかな雰囲気の中で回ることができた。
――これは、やはり、最初にお仕事を褒めたからかしら？　ふふふ、さすがはアンヌですわ。
恋愛大軍師こと、腹心アンヌの識見の正しさを、改めて実感するミーアである。
教会堂の中はとても広かった。なかなかに見甲斐があり、じっくり歩き回った結果、ミーアのお腹の具合もすっかり整ってきていた。軽くお腹をさすり、自らの胃と語らい合ってから、ミーアは、うんうん、っと満足げに頷いた。今ならば、大海の幸を食べ尽くすことはできずとも、ノエリージュ湖の幸ぐらいならば平らげることができそうだ。
「ルシーナ司教、案内に感謝いたします。とても良い教会であることが、よくわかりましたわ」
ミーアの言葉に、特に感想を返さず、ただ、穏やかな顔で頷いて、
「では、そろそろ、屋敷へとご案内いたします」
と、その時だった。
「それでは、ミーアさま、私は、このあたりで」
そっとクロエが寄ってきて言った。
「ああ、そうですわね。ふふふ、今日は親子水入らずですわね。お父さまによろしくお伝えくださいませ。明日から、商人の方たちへの顔繋ぎ、よろしくお願いいたしますわね」
ミーアの言葉に、クロエは小さくはにかんで、
「はい。わかりました」
それから小走りに出て行った。

「ミーア姫殿下、あのお嬢さんは……」
「ああ。彼女は、クロエ・フォークロードといいまして、フォークロード商会のご令嬢ですわ。彼女のお父さまには、我が帝国も大変お世話になっておりますの」
ミーアの言葉を聞いて、ルシーナ司教は納得の頷きを見せる。
「なるほど。あれが、フォークロード卿の……」
「あら、ご存知ですの？」
「もちろんです。セントバレーヌは商人の街。フォークロード卿も、その中のお一人ですから」
そう頷いたルシーナ司教であったが……その顔に、ミーアは、かすかに苦み走ったものを感じ取った。
――あら……。今の顔は……。ルシーナ司教とこの街の商人たちは……もしや、あまり上手くいっていないのではないかしら……？
あるいは、関係自体は上手く行っていても、ルシーナ司教は商人たちを快く思っていないか……ん？
と、その時だった。不意に、いやぁな想像がミーアの脳裏を過った。
それは、例の肖像画を撒いた者たちの思惑についてだ。
馬車の中、ルードヴィッヒは推測を語った。
「あの肖像画は、民衆の不安感の産物ではないでしょうか？」
と。
ミーアも概ね、その見解には賛成だった。
民は目に見えるものに頼りたくなるもの。食料を背負ってやってくるミーアの旗印に頼りたくなるのは、わからなくもない心理だ。
あるいは、口から出まかせで言ったものの、蛇が悪意のもとにやったということも考えられる。ミーアとヴェールガ公国の間をこじれさせるために撒いたもの、というのは、十分な説得力がありそうだった。
その場合は、厄介だが潜む蛇を炙り出す必要があるだろう。
しかし……だ。それならば、まだ、最悪とは言い難いのではない

か、と、ミーアはそれ以上に最悪な可能性を、この瞬間に思いついてしまった。
すなわち、あれが「意図的にミーアの権勢を高めるため」に撒かれたものであった場合である。
それこそ、ヴェールガ国内では比較的、影が薄いミーアの存在を人々に知らしめるために、誰かが撒いたのだとしたら、どうなるだろうか。
――そうですわね。わたくしを錦の御旗として勢力を糾合し……ルシーナ司教に対抗するためにやった、商人たちの仕業とかだったらどうかしら？
セントバレーヌはヴェールガの飛び地ではあるものの、その支配はこの地の商人たちに委ねられている。派遣司教であるルシーナ司教には、実質的な権限はほとんどないはずで……というのは、あくまでも建前だろう。
実際にはルシーナ司教がその気になれば、商人たちに対する掣肘を強めることもあるかもしれない。
もし、両者の関係が悪化したとしたら……そして、ルシーナ司教への牽制のために商人たちが、ミーアの力を使おうとしているのだとしたら……。
――いえ、あるいは、もっと単純に、わたくしの味方であるフォークロード商会や、シャロークさんの商会の誰かがやったことだったら……。
それこそ最悪の事態だ。あの女神肖像画がミーアの命令で作られたものだと言われかねない。
「どうかなさいましたか？　ミーア姫殿下」
怪訝そうな顔で聞いてきたルシーナ司教に、ミーアは、朗らかな笑みを浮かべる。
「おほほ、いいえ、なんでもありませんわ。それよりも、行きましょう」
ともかく、調べる必要がある。

可能性だけならば、なんだって考えられるのだ。不安は、放っておくと育つ雑草のようなもの。そして、その雑草は、せっかく蒔いた種を枯らす厄介な代物なのだ。

――明日、クロエにお願いして、商人たちに事情を聴かなければ……。

心の中で決めつつも、ミーアは教会を後にした。

第七十三話　大きくて豪華な、学びの家

教会のほど近くに、ルシーナ司教の館は建っていた。
それは、先ほど見た立派な教会堂に負けず劣らずの大きな館だった。
――これは……なんというか、小さな城といった感じですわね。
高い壁や立派な門、広い庭と、それに相応しい、豪奢で荘厳な建物……。まさに、そこは、このセントバレーヌを治める領主の城といった様相を呈していた。
ミーアは、一瞬、考える。
相手の口を軽くするという点でも、友好を計るという点でも、ヨイショの使いどころはポイントだ。ゆえに、もしかすると、この館に対しても、なにか言っておく必要があるのかもしれないが……。
――なかなか、言葉選びが難しいですわ。
ルシーナ司教は、司教伯と呼ばれる人。貴族と司教を兼ね備えた人だ。
はたして、自尊心をくすぐるような貴族的褒め方をするべきか、それとも、清貧な司教にかける言葉を選ぶべきか……。
刹那の思考。その後、ミーアは選択する。
「……大きくて、ご立派な館ですわね」
ただ、事実のみを口にする！　これである！
良いとも、悪いとも言わない。受け取った相手に委ねる形である。
目の前の館が大きくて立派な作りなのだから、それをただ口にするのみ……。と、思ったのだが……。
「どう思われますか？　姫殿下は、この建物を見て……」
曖昧さは許さないとばかりに、ルシーナ司教が踏み込んできたっ！
「ふむ……そう、ですわね」
まさか、ツッコミが入るとは思っていなかったミーアは、内心で、

慌てる。
――ぐぬ……。なかなかに、手ごわい。おそらく、レアさんやリオネルさんを見ている限り、この方は俗物ではないはず。ですけれど、断定しづらいですわ……。
腕組みしつつ、ミーアは答えを編み出す。
「少なくとも、帝都ルナティアの、わたくしが敬愛する神父さまであれば、持て余してしまいそうな建物だ、と思いましたわ」
ミーア、またしても、善悪の評価を保留！　代わりに、新月地区の神父の価値観を借りつつ、敬愛するの一言を加えることで、ふんわり、否定的なニュアンスを付け加える！
ペルージャンの良質なお茶菓子は、ミーアの脳内環境を整え、クリアな思考へと導くものであった。
「なるほど。ルナティアに派遣された者は、善き神の使徒なのですね……」
「ええ。ご自分のことより、教会で面倒を見る子どもたちのことを気にする、とても優しい方ですわ」
……若干、ラフィーナの肖像画関係が気にならないではないが……まぁ、概ねいい人だと思うミーアである。
それはさておき、どうやら、ミーアの答えは正解だったらしく、ルシーナ司教は、少しだけ苦い顔で続ける。
「この建物は、ヴェールガから派遣される司教のために、と、この街の商人たちが建ててくれたものです」
「ああ。なるほど……。この地の商人たちの感謝の徴といったところですわね」
あるいは、それは、周辺国への牽制、ともとれるだろうか。
このセントバレーヌは、ヴェールガ公国の領土であると……それを証明するために、あえて、ヴェールガから派遣されてくる司教に、最良の館を提供する。
そのような思惑が陰に潜んでいそうだが……。
「華美に過ぎる建物だと私などは思うのですが、歴代の司教の中に

はここに住むことで、ある種の特権を享受していた者もいたと聞きます。お恥ずかしい話ですが……ただ、広ければ、広いなりに使いようもあると思います」
　その時だった。ルシーナ司教の帰宅を、館内の使用人たちが出迎えに出てくる。老齢の執事とメイド長を筆頭に並ぶのは、若い使用人たち。その中には、ベルやシュトリナはおろか、ヤナやパティほどの子どももいたため、ミーアは少しだけ驚く。
「海は恐ろしいところです、ミーア姫殿下。商人や漁師、船乗りたちは、とても呆気なく命を落とし、後には孤児たちが残される。商会や、漁師仲間で子どもたちの面倒を見ることができればいいのですが、すべて担えるわけがない。なので、この館で引き取り、生きていく術を教えているのです」
「なるほど。行き場のない子どもたちをルシーナ伯爵家の使用人として雇用すると……？」
　感心した様子で問いかけたのは、シオンだった。けれど、ルシーナ司教は静かに首を振る。
「いえ、ここはあくまでも修行の場。技術を身に着けた者は、それぞれ、ヴェールガや他国に渡って、その家で働けるように取り計らっています。そうして、常にここには新しい子どもを受け入れられるようにしています」
　それから、ルシーナ司教は、近くにいた子どもの頭に、そっと手を置いて、
「孤児たちを養育すると謳えば、商人たちはお金を寄付してくれる。その寄付は、次の子どもたちを養い育てるために使われる。善き金の流れを作り出すことができる」
　それから、彼は、ミーアに、シオンに、アベルに目を向けて言った。
「私は、孤児院や教会が貧しくて良い、と思ったことはないのです。教会や孤児院に金があったほうが、より多くを救える。その建物が大きく堅牢なほど、多くの弱き者たちを受け入れることができるか

らです」
「この立派なお屋敷も、そうであると……？」
「ええ。この屋敷には、商人たちが献上した、一級品の家具や調度品が揃っていますから、ここで練習すれば、他国の貴族たちの家でも粗相をすることはないでしょう。壊しても良い一級品の道具が揃っている。修練を積むには良き環境でしょう？」
それから、彼は柔らかな笑みを浮かべた。
「ミーア姫殿下、セントノエル学園の特別初等部という構想……あれは、とても素晴らしいものでした。惜しむらくは、ラフィーナさまが、あれを始めたのではないことですが……それでも、意義があることに代わりはないのでしょうね」
そう言いながら、彼は屋敷の中へと、ミーアたちを誘った。

第七十四話　先輩メイドアンヌの励まし

――ふぅむ……リオネルさんたちに聞いていたとおり、やはり、ルシーナ司教は、わたくしのことを敵視していないような気がしますわね。

ルシーナ司教と話しながら、ミーアは思う。

――特別初等部に関しても賛成のご様子ですし、ここでやっていること自体も、わたくしたちとあまり変わりの無いこと。ということは、やはり、ルシーナ司教が、わたくしを攻撃するために、肖像画を作ったわけではない、ということかしら……。

ミーアは考え込みつつ、使用人たちの前を歩いていく。

――であれば、先手を打って女神肖像画のことを話しておくべきか……。いえ、しかし……。

焦りは禁物、とミーアは踏みとどまる。

相手がラフィーナであれば、信用できる。すべてを包み隠さず話したほうが良いのは確実だ。けれど、ルシーナ司教の場合、まだ何とも言えないところがある。

――警戒されてしまったら……まずいことになりますわ。むしろ、こちらが把握していない体でいたほうが……少なくとも海の幸を食すまでは……。

そう、ミーアは心配していたのだ。この後に用意されているであろう、晩餐会を！

長旅だったし、せっかく歩いてお腹を空かしてきたのだ。できれば、和やかに、心おきなく、ご馳走を食べたいのだ。

であれば、今は、言う必要のないことは言わないに限る。

刹那の判断、その後、ミーアは屋敷に向かって歩いていく……が、ふと、一人のメイドの少女が目に留まった。年の頃は、ヤナやパティと同年代だろうか？　そばかすがチャーミングポイントの、ちょ

っぴり垢抜けない少女だった。
「……あなた、少し顔色が悪いようですけど、大丈夫ですの？」
ミーアに声をかけられた少女は、ひぅっと声を上げて、跳びあがった。緊張のせいだろうか。ギクシャクした動きで、頭を下げるのみだった。
「申し訳ございません。ミーア姫殿下」
代わりに口を開いたのは、少女のそばにいた老齢のメイドだった。少し厳しい印象のあるメイドは、その少女をかばうように一歩前に出て、
「この者は、その……少々、そそっかしいところがありまして……。高貴なる方々がいらっしゃるということで、緊張してしまっているのです」
「まぁ！」
ミーアは少女の顔を見て……その、そばかすの散った顔に、ついつい微笑ましいものを感じて。
「ふふふ、別に気にする必要はございませんわよ。多少、そそっかしくても……」
それから、ミーアは自らの専属メイド、アンヌのほうに目を向けて……一瞬、これは、アンヌの不名誉になってしまうかな、と心配になったが……。
「わたくしの大切な腹心である、このアンヌも、最初は割とそそっかしかったですわ。今でこそ、わたくしの信頼する彼女も、なかなかのものでしたのよ。ねぇ、アンヌ……」
アンヌは、一瞬、ミーアの目を見つめてから、心得た！　とばかりに頷いて、
「はい。ミーアさまが楽しみにしていたケーキをひっくり返してしまったことがありましたね」
おどけた様子で笑ってから、
「ですけれど、ミーアさまは、広いお心で許してくださいました。それどころか、私を専属メイドにしてくださったんです」

アンヌは、そっと自らの胸に手を当てて……未熟なメイドの少女に優しく語りかける。
「だから、大丈夫ですよ。ミーアさまはとても広いお心をお持ちの方ですから……」
自らの期待に完全に答えてくれたアンヌに、ミーアは満足げに頷くのだった。
さて……ミーアはなぜ、少女に声をかけたのだろうか？　このように、緊張を解すように、優しく接したのだろうか？
それは、もちろん、ミーアが慈愛の聖女だから……なぁんてこたぁなかった。
ミーアは知っているのだ。叱責したり、プレッシャーを与えるのは逆効果であると。むしろ、緊張しすぎてより大きな失敗につながりかねない。
むしろ、ここは、リラックスさせてあげたほうが、良い結果が得られるだろう。
――緊張しすぎて、お料理をひっくり返されたりしたら、たまりませんし……。
さらに、ミーアは考える。ここの若い使用人たちは、修行中であると言っていた。であれば……熟練者であれば練られた忍耐力で耐えるような横暴にも、腹を立て、態度に出すかもしれない。
それは良くない。せっかくだから、滞在中は心地よく過ごしたいではないか。
であれば、むしろやるべきことは、愛嬌を振りまくことだ。自分から、丁重に扱いたい、と思わせるように振る舞うのがベスト。
ということで、ミーアは大変寛容な態度で、少女に言った。
「わたくしの友人たちは、誰も心が広いから、気にする必要はありませんわ。多少の粗相など……いいえ、ケーキをひっくり返されたって、何ほどもことはございませんわ。ね、アンヌ」
「もう、ミーアさま。ひどいです」
頬を膨らませるアンヌ。

そして、そんなやりとりを見て、そばかすの少女は、小さく笑っていた。さらに、そこから伝播するように、使用人たちの間にあった緊張感が薄らいでいくようだった。
――ふふふ、さすがはアンヌですわ。よく合わせてくれましたわ。
満足げに頷きつつ、ミーアは屋敷の中に足を踏み入れた。

ミーアたちは、晩餐会までの時間、それぞれ滞在する部屋に通された。
「失礼いたします。ミーアさま」
ノックと共に現れたのはルードヴィッヒだった。
「ああ、ルードヴィッヒ。どうかしたのかしら？」
「はい。実は、執事の方から、我々も晩餐会に招待を受けているのですが……」
「あら、あなたも？　それは好都合ですけれど……」
知恵袋であるルードヴィッヒが同席してくれるのは、ありがたい話である。のだが……。
「それは、ルシーナ司教の側から言い出したことですの？」
どうにも、怪しく感じてしまう。こう……関係者を一堂に集めて、ヤバイ毒で一網打尽にしようとしているとか……。
――まぁ、そこまでするとは思えませんけれど……。うう、しかし、蛇のことを知ってしまったおかげで嫌な想像をしてしまうようになってしまいましたわ。美味しい食べ物にヘンテコなモノを入れるなんていうのは、まったく、信じられない非道ですわ！
どこかで、ダレカさんが、シラーッとした顔をしているような気がしないでもなかったが、まぁ、それはともかく……。
「いえ、どうも、リオネルさまが、気を回してくださったようですね。ティオーナさまのところの、リオラ嬢が魚を好きになれるように、と……」
「ああ……なるほど……。そういえば、お魚が嫌いと言ってましたわね。それで……」

はたして、それは、リオネルが自分で言い出したことか、はたまた、オウラニア辺りがせっついたか……。
「魚好きのプライドというものですわね……。リオラさんが焚火で焼いたお肉をプッシュしてくれたり、クロエが変わった食べ物をプッシュしてくれたりするのと、同じような感じかしら……ふふふ、いずれにせよ楽しみですわ。お魚嫌いを魚好きにしてしまうという絶品料理……。実に待ち遠しいですわ」
ベッドに座ったミーアは、足をぴょこぴょこさせながら晩餐会の始まりを待つのだった。

第七十四話　先輩メイドアンヌの励まし（後書き）

活動報告にも書きましたが、来週は急遽、一週間お休みとします。
特典が……特典が……なのであります……。

第七十五話　大海月ミーア、溺れる

さて、部屋に留まることしばし。待ちに待った時間は、ようやく訪れた。
呼びに来たメイドの少女について行った先には、とても広い食堂が。中央に置かれた長いテーブルの上には皿やグラスが並んでいた。
ちなみに、アンヌやリオラ、リンシャ、キースウッド、ルードヴィッヒら、従者の者たち用にも別のテーブルが用意されていた。
ミーアの知る限り、これは、貴族の晩餐会では大変珍しいことではあるが……。
――まぁ、ラフィーナさまも、似たような感じでしたし、ヴェールガ公国の感覚では、普通なのかもしれませんわね。
ラフィーナと初めて会った時の、大浴場での出来事を思い出すミーアである。あの時も、アンヌが一緒に浴槽に入ることを、ラフィーナは咎めなかった。
――一糸をもまとわぬ舌の前では、貴族も平民もなく、ただ人と人とがあるばかり。ふむ、真理ですわね。
っと、ミーアが心の中でラフィーナの言葉を改竄していると、
「ようこそいらっしゃいました。お初にお目にかかります。リオネルとレアの母、レベッカ・ボーカウ・ルシーナです」
テーブルの前で控えていた女性が、頭を下げた。
穏やかな雰囲気の女性だった。
優しげに笑みを浮かべるその目元に、ミーアは、子どもたちと接する時のレアと似たものを感じる。
「いつも、子どもたちがお世話になっています」
「ご機嫌麗しゅう、ルシーナ夫人。ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ。以後、お見知りおきを」
ミーアに続き、同行の面々が自己紹介する。

「よろしくお願いいたします。それにしても……ふふ」
レベッカは、小さく笑い声をこぼして、
「リオネルとレアが、こんなふうにお友だちを連れてくるなんて、想像もしていなかったわ」
「お母さま、お友だちなどでは……。みなさんは、ぼ……私たちの先輩で……」
「あら、そうでしたね」
明るい、和やかな空気の中、晩餐会は始まった。

「おお……」
目の前の皿の上、並べられていく料理に、ミーアは思わず唸った。
ミーアの手のひらほどの大きさの貝殻、その上に、つやつやした白い身が乗っている。オレンジ色のソースの色が、その白い身を飾り上げ、それはまるで、一枚の絵画のような美しさだった。
「それは、茹でたソイスターという貝に、魚卵のソースをかけたものです」
レベッカの説明を聞きつつ、ミーアは早速、貝を手に取り、スプーンで口に運ぶ。
貝殻から、つるん、と口の中に飛び込んでくる実の部分。ぷるん、ぷるん、とした口触り。柔らかで、歯応えがまったくないかと思いきや、かすかに歯に当たる、プリプリとした固さ。
噛みしめるたび、口にジュジュワッと湧き出してくるのは、ほのかに苦味の混じる濃厚な旨味だ。口の中に広がるクリーミーな味、鼻を抜ける新鮮な潮の香りに、ミーアは、ほーふー、と息を吐く。
「これは……実にお見事なお味ですわ。これは、まるで上質のキノコを食べているかのような、素晴らしいお味ですわね」
ミーアのする最大級の賛辞を受け、レベッカ・ボーカウ・ルシーナは柔らかな笑みを浮かべた。
「お褒めに預かり光栄です。ミーア姫殿下。きっと、調理場を預かる者たちも喜ぶことでしょう。この貝の料理は、日持ちがしないの

で、つい先ほど仕上げたものなのです」
「まぁ、短い時間しか楽しめない、贅沢な料理なのですわね」
「ええ。帝国はもちろん、セントノエルでも楽しめない、この地ならではのものをお楽しみいただこうと思いまして……」
「ふふふ、歓迎の徴ですわね、とっても嬉しいですわ」
上機嫌に微笑むミーア。であったが、
「ところで、ミーア姫殿下。この度は、どのようなご用件で、このセントバレーヌにいらしたのですか？」
その一言に、わずか……ほんの少しだけ意識をルシーナ司教のほうへ。
「ああ……。そうですわね……」
ミーアは、近くのパンを取り、軽くちぎって口の中へ。もっもっ！　っと噛みしめつつ、考える。
――女神肖像画の件は、まだ伏せておく、という方針は変わりませんわ。ならば、ここは……。
美味しい果実水で口をすすいでから、ミーアは言った。
「次期生徒会長を担ってくださるレアさん、そして、レアさんを支えるリオネルさんのお父さまと、一度お話ししたいと思っておりましたの」
「お話し……ですか。どのようなお話しをご所望なのでしょうか？」
「いろいろ、ですわ。なにしろ、直接、こうして対話をしなければわからないこと、誤解してしまうことというのはございますから」
仮に女神肖像画を見つけてたとしても、誤解ですから。きちんと疑問に思ったら、口に出して聞いてね！　と暗に主張しておくミーアである。
「誤解……なるほど。それでは、その誤解のほうは解けそうですか？」
「そうですわね……。互いに言葉をかわしていれば、おのずと理解は深まり、誤解は解けるものではないかしら」
だからこそ、きちんと懸念がある時は直接言え！　とミーアは言

いたいのだ。黙って勝手に敵視しないで、悪いところがあったら、ちゃんと直すよう鋭意努力するから！　と……前時間軸のシオンやラフィーナに訴えたかったミーアである。

「なるほど。相手を深く知れば、誤解は解消される……それは真理でしょう。が、誤解が解消され、相手の真の姿を見てしまったがゆえに、却って対立が深まるということもあるのではないですか？」

「あるいは、そういうこともあるかもしれませんけれど……それを危惧するのは、理解を深めた後になるのではないかしら？」

そうして、ミーアは、近くにあった貝を手に取って、

「この貝と同じこと、だと思いますわ。明日食べる貝の心配をして、今日食べるべき貝の食べ時を逃すのはもったいないこと。今日食べるべき美味しいものを、まず楽しんで食べることが大切だ、とわたくしは考えますの」

つるん、っと美味しい貝を口に入れ……。

――ふふふ、さて……明日からの調査を頑張るためにも、今日はたっぷり食べて英気を養いますわよ！

アンヌがそばにいない今、ミーアを止める者はなく……。

海の幸に溺れる大海月ミーアなのであった。

第七十六話　先を見据えるミーア姫

帝国の叡智ミーアは、常に先を見据えて行動する人である。
今日、セントバレーヌ入りをしてから、すぐにルシーナ司教の屋敷には向かわず、教会に寄ったこともそうだ。いろいろ歩き回って調整したから、海の幸を見事に平らげ、お腹の具合は八分といったところ。
デザートが入る余地は十二分にある。
ということで、デザートまだかな？　と、ウッキウキしているミーアであったが……。
「そういえば、ミーア姫殿下……。お聞きしたいことがあるのでした」
ルシーナ司教が不意に、生真面目な口調で言った。
「あら……？　なにかしら？」
食堂の入口のほうを気にしつつも、チラリ、とルシーナ司教のほうに目を向ける。っと、司教は実に穏やかな顔で……。
「我が息子リオネルではなく、レアを生徒会長に推薦したという、その意図について……」
再び、鋭く切り込んできた。
「ああ、それはラフィーナさま……」
っと、そこで、ミーアは口を閉じる。
……うっかり、ラフィーナさまが、ルシーナ司教に一泡吹かせろと言ってたから……などと口を滑らせそうになってしまったのだ！
どうやら、お料理に使われていた油が、ミーアの舌の滑りを良くしていたらしい。危ない、危ない。
ミーアは口の中を洗い流すべく、グラスの果実水をコクリ……。
うーん、美味しい。
それから、真っ直ぐにルシーナ司教を見つめ、

「そう、ラフィーナさまとわたくしたちとで、守ってきた生徒会を……その施策を、レアさんならば、立派に継いでくださる、と思えたからですわ。ルシーナ司教が褒めてくださった、特別初等部の構想や、わたくしたちが訴え続けた、各国の助け合いの理念についても……」
「それが、リオネルではできないと……？」
「そうですわね……」
ミーアはチラリ、とリオネルのほうに目を向ける。っと、父とミーアの会話が気になっているのか、ジッとこちらに視線を注いでいるのがわかったので……。
「言葉を交わし、互いのことを理解できた今であればいざ知らず……あの時点では、不安がございましたわね」
すかさずフォローを入れる。さらにさらに……！
「それに、わたくしのみならず、きっと当事者である子どもたちも、不安だったのではないかしら……？」
責任の所在を若干、子どもたちのほうにシフト。これにより、子どもたちへの気遣いゆえの選択であったと訴える。
「レアさんは、新入生歓迎パーティーの折、子どもたちの面倒をよく見てくださいましたわ。きっと特別初等部の子どもたちも、レアさんならば、心安らかでいられたはず。それにわたくしも、レアさんは、心の優しい方……生徒会を任せるに値する方であると、思いましたわ」
「なるほど……。短い期間の中で、レアは、あなたの信頼を勝ち得たということですか」
「ふふふ、そういうことですわね。素晴らしい娘さんですわ」
「みっ、ミーアさま……！」
っと、そこで、レアが恥ずかしそうに声を上げた。その頬が赤く染まっている。
「あらぁ、照れることないのにー。あなたは、立派だったわよー」
そんな妹弟子に、姉弟子オウラニアが、自分のことのように誇ら

しげに胸を張った！
「補足させてもらうならば、リオネルくんも立派に選挙を戦ったことも、ぜひ伝えておきたいな」
続いて口を開いたのは、シオンだった。
「ああ。シオン殿下は、リオネルの応援演説をしてくださったのでしたね」
「ええ。彼の選挙戦が潔いものだったので……。結果は残念でしたが、過程での行いが否定されるものではないでしょう。彼は立派でした」
シオンの言葉に、今度はリオネルが、居心地悪そうに体をもじもじさせていた。親の前で褒められるのが、照れくさかったらしい。
「それは、ありがとうございます。ふふ、あなたほどの方にお気遣いいただけるとは、リオネルも果報者ですね」
そう言って、頬を緩めたルシーナ司教は、純粋に子を思う優しい父親の顔をしていた。少なくとも、ミーアには……そう見えた。
「けれど、ルシーナ司教の思惑と外れてしまったのでしたら、申し訳なかったですわ。もしや、リオネルさんに生徒会長を務めさせて、伯爵家を継ぐための箔をつけたかったとか……そのような事情があったのかしら？」
試しに、逆に探りを入れるミーアであったが、当の司教は気にした様子もなく……。
「いえ、そういったことは特にありません……。しかし、なるほど。選挙の状況がわかって納得しました」
満足げに頷くルシーナ司教を見て、ミーアは小さく首を傾げる。
――ふぅむ……。少し意外な反応ですわね。てっきり、なにか文句でも言われるかと思いましたけれど……この反応は……。ラフィーナさまの思惑とは、少し違ってきてしまいますわね。
ぎゃふんと言わせろ、とのことだったが……。見たところルシーナ司教は、特にショックを受けてはいなそうだった。
いや、むしろ……計算通りに事が進んだというような空気すら感

じられて……感じ、られて……？
ふわりと甘い香りが、鼻先をくすぐり……そこで……、ミーアの思考は途絶えた。
ミーアの視界が白く染まる。白く……すべすべの……。そう！美しいケーキにっ！
――あっ、あれ……は？　まさか……。でっ、デザートっ！？
そう、待ちに待ったケーキを前にして、ミーアの思考は呆気なく吹き飛んでしまったのだ。
「お……おぉ……これは……」
現れたケーキを前に、ミーアは思わず、歓声を上げる。
「セントバレーヌ近郊で採れるクックナッツという実の汁を使って作ったケーキです。ミーア姫殿下は甘いものがお好きだと子どもたちからお聞きしまして、作ってみたものなのですけど、お口に合うかどうか……」
などと、謙遜したのはルシーナ伯夫人であったが……。ミーアには確信があった。
――このケーキ、匂いだけで、とっても美味しいですわ！
ミーアは満面の笑みで、そのケーキを見つめる。
「クックナッツとは聞いたことがございませんけれど……」
「固い木の実で、とても栄養豊富なんですよ。絞るとミルクのような果汁が取れて……」
ルシーナ夫人の言葉に、ミーアは感心した様子で頷く。
「なるほど。木の実からもミルクが絞れるのですわね。ほう！　しかも、このケーキ、よく見ると三段になっておりますわ！　間にフルーツとクリームが挟まっている。実に芸が細かいですわ！」
などと上機嫌に鼻歌を歌いつつ、切り分けられるケーキを眺めているミーア。
一方で、少し離れた従者たちのテーブルの様子は、というと……。

第七十七話　多層的を好むミーア姫

帝国の叡智ミーアは、常に先を見据えて行動している……と、ルードヴィッヒは信じている。この時期に、セントバレーヌを訪れたこともそうだ、と彼は考えていた。

ミーアがデザートのケーキに歓声を上げている頃……従者たちの席では、少しばかり真面目な会話が成されていた。

「やれやれ、こうして我々従者にまで豪勢な料理を提供していただけるとは。ルシーナ司教は、ずいぶんと心が広い方のようで……」

目の前の……ご令嬢(あんしんして)たちの手作り(たべられる)じゃないお料理を食べながら、キースウッドは笑みを浮かべた。心なしか、その目じりには感動の涙まで浮かんでいるように見える。

「ところで、ディオン殿の姿が見えないようですが……」

「ああ、彼は街に出ていますよ。あまりこういった場所は好まないというのでね」

答えたのはルードヴィッヒだった。

「それに……どうも落ち着かないようで」

「まさか、町に暗殺者が紛れ込んでいる、とでも？」

キースウッドはそっと声を落とした。

港で、商人の出入りも激しい町ではある。あり得ないこともないが……。

そんな彼にルードヴィッヒは首を振った。

「いや、それよりは、商人たちの私兵によって守られている町というものが……ですね」

セントバレーヌは、ヴェールガ公国の飛び地である。この地を守るのは、あくまでもヴェールガ、そして、中央正教会の権威でしかない。実際的な武力は、あくまでも各商会が金を出し合って雇った

傭兵団であって……。
「念のため、防備のほうを確認しておきたいとか……」
「なるほど。職業軍人としての視点というわけですか」
腕組みしつつ頷いて……それから、そっとキースウッドは声を潜める。
「ところで、正直なところ、ルードヴィッヒ殿はどうお考えなのですか？　今回の事態を……」
いささか際どい質問に、ルードヴィッヒは静かに周りに目をやってから、わずかばかり声を低くして……
「早めに手を打てばそれほど大きな問題になるとは思わないが……放置は危険といったところ……でしょうか。キースウッド殿も、似たようなものでは？」
逆に問われ、キースウッドは静かに頷いた。
「地理的に見て、セントバレーヌはレムノ王国の南方との関係も深い。大陸の商人たちがこぞって拠点にしているうえ、ミラナダ王国やその周辺の小国にも影響力がある。となれば、無視はできない場所、ではありますかね」
だからこそ、この地に派遣された司教との対立は、色々と面倒事が多い。そう判断したらしいキースウッドに、ルードヴィッヒは静かに頷く。
「民衆の抱く不安感を軽減させるための対策をするにしても、ここは良い場所でしょう。商人たちの流通網を利用すれば、効率的に手を打つことができる。そういう意味では、この地は重要地点と言えますが……ただ」
「ただ……？」
怪訝そうな顔をするキースウッドに、ルードヴィッヒは腕組みする。
「それだけではない気もします。なにしろ、ミーアさまは、多層的な思考を好まれる方ですから……。はたして、それだけなのか……」
なぁんて、ルードヴィッヒが言っている後ろのほうで、ミーアが、

「ほうっ！　このケーキ、三段になっておりますわ。間にフルーツとクリームが挟まっている。実に芸が細かいですわ！」
などと声を上げていたりする。多層的なケーキを好むミーアである。
まぁ、ルードヴィッヒらの耳には届いてはいなかったが……。
「あるいは、ミーアさまは、もしかすると、女帝になる時のことを考えておられるのではないか、と私は考えています。これからミーアさまが女帝を目指すうえで、ルシーナ司教との友好関係を築くことが重要なのではないかと……」
「というと……？」
ルードヴィッヒは人差し指で、クイっと眼鏡の位置を直しつつ……。
「今後、女帝になるために、ミーアさまは国内のことに注力しなければならない。そのために、ある程度は国外のことから手を引きたいとお考えで、そのために、中央正教会の力を期待されているのではないかと……」
中央正教会は、国を超えた組織である。ゆえに国家間の助け合いなど、調整役はある程度は彼らに任せたいというのが、ミーアの思惑なのではないか、とルードヴィッヒは考えていた。
……面倒くさいことはすべて、誰か上手いことできる人に任せたい！　と考えているミーアと、概ね一致していた！
「それに……女帝になるためにも、ミーアさまは、中央正教会と対立するようなことは、絶対に避けたいのではないかとも思うのです」
視線を向けた先、ミーアはニコニコとケーキを食べていた。それから、ルシーナ伯爵夫人と、愛想よく談笑している。実に、友好的な雰囲気である。
「てっきり、ミーア姫殿下が女帝になることは既定路線だと思っていましたが……。まだ、そこまで気を使う必要があるのですか？帝国内の権力の掌握は済んでいるものとばかり……」
と、首を傾げるキースウッドに、ルードヴィッヒは小さく首を振った。

「もちろん、万全を期してはいます。権力者や民の心を掴むことに、余念はありません。けれど、中央正教会と敵対した場合、民の中に反対者を生む恐れがある。民は、本質的に変化を嫌うもの。女帝になるというだけでも、それは、前例のなきことですから。そのうえ、人々の生活に密着した中央正教会との関係まで悪化してしまえば、どんな反応が返ってくるかわからない」

「ラフィーナさまとミーア姫殿下の関係性は良いが……それ以外の司教たちとも繋がりを持ちたいとお考えということですか」

腕組みしつつ、納得の頷きを見せるキースウッド。そんな彼に、さらにルードヴィッヒが言葉を続ける。

「あるいは……」

「まだ、なにかあると……？」

驚いた様子のキースウッドに、ルードヴィッヒは苦笑して……。

「なに、大したことではないのですが……姫殿下が幼き日に、このようなことを言っておられたのです。海を越え、遠き異国に行くことは可能か……と」

幼き日……具体的に言うならば、それはまだ、ミーアが断頭台の運命から逃れ得ぬ日に、であるが……。

ミーアは言ったのだ。

「（革命が起きて、命が危うくなったら、革命軍の手の届かない）海を越えた遠き異国に行く（逃げる）ことは可能かしら？」

と。

それをきっちり覚えていたルードヴィッヒである。

「……つまり、ミーア姫殿下は、ゆくゆくは、海外の異国に渡り、同盟関係を結ぶことを望んでいる、と？」

「単純に、小麦の輸入先を海外に、と考えていただけかもしれませんが……あるいは、海の向こうの国とも積極的な交流をお考えということもあり得るかもしれません。国内のことを片づけ、近隣国とも友好的な関係を築いたら……その先は」

「海の向こう側の国、かぁ。なるほど……相変わらず、スケールが

とても大きいですね」
そんな感じで、キースウッドが苦笑しかけた、まさに、その時だった！
「ほう！　このケーキに使われているクリームも海外の調理法……。それは興味深いですわね！　これは研究の余地がありそうですわ」
なぁああんてミーアの興奮した声が聞こえてきたので……。
「……ちなみに、ルードヴィッヒ殿、一つお聞きしたいのですが……海外にも毒キノコというものは、あるのでしょうか？」
何の脈絡もないキースウッドの問いに、首を傾げるルードヴィッヒであった。

第七十八話　フォークロード家の団欒

さて、ミーアたちと別れたクロエは、馬車で一路、実家に向かっていた。
彼女の家は、セントバレーヌの一角にあった。そこは、大商人の館が多く建ち並ぶ、いわば、金持ちたちが集中して住まう区画であった。
きらびやかな街並みを眺めながら、クロエは、思わず懐かしさを覚え……たりはしなかった。
むしろ……。
「また、新しい家が建ってる……。変わらないな、ここ」
盛者必衰なうえ、新しもの好きが多い商人たちらしく、ここの街並みはコロコロと変わる。それこそ、クロエがセントノエルから帰ってくるたびに変わるわけで、正直なところ、懐かしさなど覚えようもない。
それでも、この街の活気ある空気が、クロエは好きだった。
「ありがとうございます」
屋敷の前まで送ってくれた御者に挨拶してから、門をくぐる。
そこでふと立ち止まる。
母自慢の園庭には、異国の花だろうか？　見たことこのない美しい花が咲き誇っていた。
赤い、手のひらサイズの花。それを眺めていると……ひらり、ひらりと蝶が飛んできて……。花に留まった……次の瞬間っ！
ぱくんっと、花が閉じ、蝶をひと飲みにしてしまった。
「わっ……これって……もしかして、本に載ってた虫を食べる花……？」
クロエは思わずと言った様子で観察してしまう。それから、小さくため息を吐いて……。

「もう、お母さん……。変わった物に価値を見出すのは、商人のサガだけど……花ぐらい普通の物を植えればいいのに」
秘境の花に文句をつける、秘境の珍味レシピ愛好家のクロエである。小さくため息を吐いてから、クロエは玄関のドアを開けた。
「ただいま」
「あら、クロエ、おかえりなさい」
すでに、馬車が止まる音が聞こえていたのか、そこにはクロエの母が柔らかな笑みを浮かべて待っていた。
ふっくら、丸みを帯びたふくよかな顔、丸いメガネの奥には知的な好奇心の光が輝いていた。そして、その隣には、
「やぁ、お帰り、クロエ」
「あ、お父さんも帰ってたのね」
同じく、優しげな笑みを浮かべる父の姿もあった。
クロエの父、マルコ・フォークロードは、多忙な人だった。ミーアネットの手伝いはもちろんのこと、未だに商会の長である自らが各国を飛び回っては、商談をまとめることもしばしばで。
その気質は、若き日に、行商人をしていた頃のままなのだ。
「ミーア姫殿下がいらっしゃるとお聞きしたからな。なんとか、予定を切り上げてきたんだ」
「さぁ、早く入って。お食事をしながら、学園のことを聞かせてくださいな」
誘われるままに食堂に入れば、そこには、クロエの好きな食べ物が、いっぱいに並んでいた……補足するが、別に珍味の類ではない。せいぜい、ナニカの塩辛が、小さなお皿に盛られているぐらいで、他は、特にない。
これならば、たとえラフィーナであっても、このしょっぱい食べ物はなにかしら？　などと余計なことを聞かなければ、楽しくお食事ができそうなぐらいだ。
「ふふふ、この塩辛ひさしぶり……。それに、ランプモンクフィッシュの肝もある。こってりしてて美味しいのよね」

「ははは、クロエは、将来、酒飲みになりそうだなぁ」
などと、久しぶりの家族水入らずのひと時を過ごした後に……。
「それで、父さん、手紙で知らせたことなのだけど……」
クロエは、本題を切り出す。
「ああ。ミーア姫殿下との会談の件だね。もちろん、問題ない。むしろ商人組合に所属している者はみな、ミーアさまのお話を聞きたがるだろう。新しい小麦のことや、ミーアネットのことなどをな」
「えっと……もしかして、お父さんが事前に広めてくれたの？」
そう尋ねると、マルコはニヤリ、と笑みを浮かべて。
「まぁ、多少は、な。いずれにせよ、ミーア姫殿下が話したいというのなら、それを止める者はいないだろう。今や、ミーア姫殿下は、大陸の小麦事情のキーマンだからね」
「あくまでも、儲け話として、だよね……？」
クロエの問いかけに、マルコは難しい顔で頷いた。
「商人にとって、金を稼ぐことは絶対の価値基準だ。一度に大量に稼ぐのか、それとも長く平均的に稼ぐのか、そこに考えの違いはあれど、価値観はすべてそこに依存する。儲け話と捉えれば協力を惜しまないだろうが、一方で、ただ倫理的な話をしたとしても納得は得られない。ミーア姫殿下はその辺りのことを十分におわかりだとは思うが……もしもの時にはお前がしっかりとサポートするのだよ」
クロエは、静かに考える。
ミーアネットに関して言えば……大商人シャロック・コーンローグとフォークロード商会によって、すでに体制が固まっている。新たな商会の協力は、今のところ必要ない。
今回、商人たちに協力してもらいたいのは、例の本の読み聞かせと、女神肖像画の出どころ調査についてだ。
「二人に、先に聞いてもらいたいんだけど……」
とりあえず、クロエは読み聞かせと、食べ物の栞のアイデアを両親の前で披露する。
「なるほど……。確かに、帝国で普及しつつある寒さに強い小麦は、

癖が強いな……。美味しく食べる調理法もセットで教え込めるならば、普及の速度も上がるだろう。あまり儲けは出ないかもしれないが、完全な慈善事業というわけでもないから、耳を貸してくれる者もいるかもしれない」
「それと、フォークロード商会で、本を刷りたいんだけど……」
「そうだな。何人か職人を当たってみよう。だが、どちらかというと、中央正教会の側のほうが、伝手があるのではないかな」
なんといっても、神聖典を刷るための職人たちがいる。それに、聖女ラフィーナの肖像画を毎年刷っては各国に流通させているわけで……。
「ミーアさまは、ラフィーナさまとも懇意にされているはず。そちらのほうにも話を通しておいたほうがいいだろう」
父の助言に、クロエは一つ頷いてから……。
「それと、これも話しておきたいんだけど、実はセントノエルで、こんな肖像画が見つかったの……」
そうして、クロエは例の肖像画のことも話してみる。
「女神の肖像画……そのモチーフがミーア姫殿下である、か……」
マルコは、腕組みしつつ、難しい顔をする。
「それはいかにも厄介な話ね」
母のほうも、頬に手を当てて困った顔をした。
「どう思う？　誰か、そういうことをしそうな人に心当たりとか……」
「難しいところだな。商人たちの間でミーア姫殿下の評価は高いし……というより、そうなるように、私とシャローク殿とで画策したのだが……」
ミーアネットに関して、互いに協力していくことで同意していた二人は、さらに支援者を増やすべく、セントバレーヌで行動していた。
ミーアネットの理念や、ミーアの先見性、さらに、新種小麦ミーア二号のことを、細大漏らさず、嘘にならない程度の誇張も交えて、

付き合いのある商人たちに触れ回った。
その結果……。
「いささかやり過ぎた感はあったのかもしれない。ミーア姫殿下に民草の人気が集まることを予見して、そのような肖像画を作った商人がいないとは言い切れないな。我が商会やコーンローグ殿のところで作ったとは思いたくないが……」
それすらも断言できない。
商人として、その肖像画が売れるということが予想できてしまう以上、誰もやらないとは言い切れないわけで……。
「長期的に見れば、それは中央正教会からにらまれる悪手ではあるが……目先の儲けを出すためにやる者もいるかもしれない」
眉間に皺をよせ、マルコは続ける。
「可能性はないことはない。が……」
クロエは、うーん、と唸り腕組みする。その姿は、どこか、その父マルコに似ていた。

第七十九話　令嬢たちの入浴会議

ヴェールガ公国は、水が豊富な国として知られている。
だからというわけではないのだろうが、ヴェールガの飛び地たるこのセントバレーヌにおいても、水関連の施設は充実していた。
そして、ルシーナ司教の館にも、温泉施設が充実していて……。
「素晴らしいですわ！」
ミーアは、その施設を見て、思わず、感嘆の息を吐いてしまった。
大きなお風呂は、二、三十人が一斉に入っても問題ないぐらいの広さがあった。
巨大なライオンの口からダバダバと、常にお湯が流れ込み、浴槽に湯気を立てている。
「天然の温泉を引いているので、常に新しいお湯が供給されているんです……。あ、洗髪薬や肌に塗る香油なんかも、自由に使ってください」
レアの言葉に、うんうんっと満足そうに頷くミーア。洗髪薬に関しては、ミーア愛用の馬マークのものはないようだが、それを求めるのは贅沢というものだろう。
というか、香油などが揃っている時点で十分贅沢だ。
「ええと、それとその……使用人たちも使っている浴場なので、王族の方たちにお使いいただくのは申し訳ないのですが……」
レアが見つめる先には、三人の姫君、ミーア、ラーニャ、オウラニアがいた。けれど、ミーアは、その言葉を聞いて逆に納得してしまった。
――ああ、なるほど……。ルシーナ司教が自分のために使っていると考えるのはイメージに合わない感じがしましたけれど……。引き取って面倒を見てる子どもたちのためにしているのですわね……。
ゆくゆくは貴族の家の使用人として独り立ちさせるのであれば、

身ぎれいにする術を学んでおくべきだろうし……。
すまなそうに言うレアに、ミーアはゆっくりと首を振った。
「ルシーナ司教の性格からすれば、当然のことではないかしら？わたくしも、セントノエルでは、アンヌと背中の流しっこをしましたし、それを見て、ラフィーナさまは、文句はおっしゃいませんでしたわ。むしろ、一糸をもまとわぬこの場では、民も王もなく、人と人がいるばかり、とおっしゃられて……」
「ああ……。そうでしたね……うふふ、懐かしいです」
ミーアの言葉に、アンヌがニコニコ笑顔で頷く。
「ミーア師匠もー……」
一方、オウラニアは、ちょっぴり驚いた顔を見せてから、いそいそと自らのメイドのほうに行く。そのまま何事か話すと、メイドの少女が、驚愕に目を見開いた。
それから、オウラニアはニッコニコ顔で戻ってきて、
「なるほどー、私もやってみますー」
どうやら、ミーアに倣うことにしたらしい。
「私も、農作業をした後に、民と共に汗を流すこともありますから、特に気にしません」
ラーニャもまったく気にする様子はなさそうなので……。
「ふふふ、では、女子チームみなで、お風呂に入りましょうか。楽しそうですし」
などというミーアの鶴の一声で、全員でお風呂に入ることになった。

さて……素早く体を洗い、お湯に身を沈めたミーアは……。
「おふぅ……」
などという、若干、令嬢っぽくない声をあげて、お湯に浸かる。
ポカポカ、体の隅々に熱が伝わってきて、馬車旅で固まっていた筋肉がほぐれて、ＦＮＹっとしてくるのが実感できた。
――ふぅむ……このまま寝てしまいたいぐらいですわ……。

なぁんて、思考のほうまでＦＮＹ(ふにゅ)けて……もとい、腑(ふぬ)抜けてきたところで……。
「ところで、ミーアさま、明日はどうなさいますか？」
ふと見ると、ティオーナが隣に来ていた。
「そうですわね……。クロエにお願いしてありましたから、午前中は商人の方たちと対談して、その後で町のほうを回ろうかしら……」
仕事を午前中に終わらせて、午後は観光を満喫する気満々のミーアである！
「あるいは、港のほうに見学に行くのも良いと思いますけれど……」
とれたての魚はたいそう美味である、とリオネルが話していたのを思い出す。
――先ほどの晩餐会でも、お魚料理がなかなか食べ応えがありましたし……うふふ、楽しみですわ。
「魚料理……興味ある、です」
ミーアと同じく、じゅるり、っと口元を拭うのはリオラだった。どうやら、リオネルの狙い通り、すっかり魚料理の魅力を、わからせられてしまったらしい。
――うふふ、気持ちはよくわかりますわ。
などと親近感を覚えていると……。
「もう、リオラ。そういうことじゃないわ。ミーアさまがおっしゃられているのは」
ティオーナが苦笑いを浮かべて、リオラに言う。それから、ミーアのほうに向きなおり……。
「まだルシーナ司教の思惑が読み切れないから、観光でカモフラージュをしつつ、例の肖像画のことを調べる、ということ、でよろしいでしょうか……？」
その言葉に、ミーアは素直に頷こうとしたが……ふと、リオラに罪悪感を覚える。むしろ、リオラのほうが正解だったわけで、そのことで彼女を間違いと言うのは、なんとなく気が咎めたので……。
「ふふ、少し違いますわ。ただ、カモフラージュするだけではもっ

たいない。お魚もたっぷり楽しもう、ということですわ」
ミーアの言葉に、リオラは嬉しそうに、おお、お魚楽しみです！
などと歓声を上げる。
「もう、リオラ。しょうがないな……」
苦笑するティオーナに、ミーアは言った。
「せっかく、セントバレーヌに来たのですから、あまり、固い話ばかりではもったいないですわ。ティオーナさんも、もっと肩の力を抜いて、楽しみましょう」
ミーアの言葉に、一瞬、ポカン、と口を開いたティオーナだったが、
「わかりました」
小さく頷くのだった。

第八十話　究極かつ画期的な……

翌朝のこと。ミーアは爽快な目覚めを迎えていた。
「ふわぁあむ、よく寝ましたわ！」
清潔なベッドの上、体をのびのびーっとさせる。っと、なんだか、いつもより軽い感じがする。
なんだか、絶好調だった！
それもそのはずで、昨夜は適度な運動と入浴、さらに、お腹を満たす美食が揃っていたのだ。
お風呂を終え、ポカポカになったミーアは、すでに、その時点でウトウトしていたわけで……。その後は、流れるようにベッドに入り、一度も起きることなく、この朝を迎えていた。
「ううむ……。しかし、あれだけ食べてもお腹がもたれておりませんわね……」
お腹をさすりながら、ミーアは首を傾げる。
「お魚料理というのは、お腹に優しいのかしら……？　もたれていない……と言うことは、体の中に残っていないということ……っ！　これはもしや、いくら食べてもＦＮＹらないということになるのでは？」
……いや、ならない。などと言うツッコミの声が届くはずもなく……。ミーアがついに究極かつ画期的なカロリーオフ論に到達しそうになった、まさにその時……。
「おはようございます、ミーアさま」
すでに、メイド服に着替えを済ませたアンヌが部屋に入って来た。隣のベッドで寝ていたアンヌがいなくなっていたことに、そこでようやく気付いたミーアである。
「ああ、アンヌ。おはよう。早いですわね」
「はい。お水の用意をしてまいりました」

そう言って、ミーアに寝起きの一杯の水を差しだす。
「ああ、ありがとう。ちょうど喉が渇いていたところでしたの」
仄かに柑橘系の香りのするお水を一息にあおり、ほふーう、とため息。それから、急に真面目な顔になって……。
「そういえば、昨日、レアさんが、温泉を引いているから、いつでも入れると言ってましたわね」
セントバレーヌに来てからの一挙手一投足が、今後に大きく影響を与えるこの状況。頭をスッキリさせるために、ミーアは湯垢(ゆごり)離に臨まんとしている……などというわけは、もちろんなく、ただ単に風呂好きなだけである。
「では、朝風呂と洒落込みますわよ」
などと、アンヌを引き連れて浴場へと向かう。っと、ちょうど前のほうにシオンとアベルの両王子が歩いているのが見えた。
「アベル、シオン。ご機嫌よう」
声をかけ、振り返った二人に、スカートの裾をちょこんと上げてから、ミーアは首を傾げた。
「お二人とも、こんな朝から剣の鍛練ですの？」
彼らは、どちらも、鍛練用の軽装を身に着け、その手には木剣があった。
「ああ。なにしろ、シオンとは違って、一日鍛練をサボると見る間に腕が衰えてしまうものでね」
そう言いつつ、肩をすくめるのはアベル。
「ははは。おだててもらって申し訳ないが、油断させようとしても無駄だぞ、アベル。俺はもう二度と君に負けるつもりはない」
「それはこちらも同じことだ。次こそは、君に一撃入れてやるとも」
なぁんて、爽やかな王子さまたちの友情トークが展開された後、
「ところで、今日はどうするつもりだい？　ミーア」
「ああ……そうですわね。わたくしは商人組合のほうに行って、読み聞かせ作戦への協力を要請して……。あとは、例の肖像画に関わっている商人がいないかどうか、探りを入れてみるつもりですわ」

その答えを聞いて、シオンが腕組みする。
「とすると、全員でそちらに行くのも効率が悪いな。俺は市場のほうにでも行ってみようか」
「そうだね。そちらのほうが人手が必要そうだし、ボクもシオンたちについて行ってもいいかい？」
「あら、アベルもですの？」
「ああ。セントバレーヌとは、我がレムノ王国も付き合いがある。港の関係者にも、何人か顔が利く者がいるかもしれないから、あたってみようと思ってね」
「ふむ……それでしたら……」
ミーアは、ニッコリと笑みを浮かべて、
「ついでに、美味しいお料理が食べられる穴場も聞いておいていただけると嬉しいですわ」
ミーアは、午後は食い倒れ観光……もとい、デートする気満々なのだ。恋する乙女なミーアなのだ。たぶん……。
「しかし、そうですわね。確かに、あまり時間をかけたくはありませんし、人選をあらかじめしておいたほうがいいかしら……」
王子たちと別れて、お風呂に体を沈めることしばし。
温泉成分により、すっかり活性化した脳でミーアは考える。結果は、その日の朝食で発表された。
商人組合に行くのは、ミーアとアンヌ、ティオーナとラーニャ。さらにルードヴィッヒが続く。本の読み聞かせに詳しいメンバーに加えて、叡智の知恵袋も同行させる予定である。
「オウラニアさんとアベル、シオンは、港と市場のほうで聞き込みをしてもらってもいいかしら？」
「ミーア師匠のご指示とあらばー、なんでも大歓迎ですよー」
オウラニアはニッコニコ顔で頷いた。
「ボクもミーアお姉さまのご指示とあれば喜んで、シオン王子たちと一緒に町歩きに行きたいと思います！」
意気込むベル……であるが、ベルたちに対しては、まだ何も言っ

ていないのだが……。
ともあれ、別動隊の面々は、リオネルとレアの案内で、港近くの市場を回ることになった。

さて、クロエが用意してくれた馬車に乗ることしばし。到着したのは、セントバレーヌの中心部にある大きな建物の前であった。
「ふむ、ここが、セントバレーヌの市庁舎ですのね」
ミーアは小さく深呼吸してから、後ろを振り返る。
仲間たちが揃っているのを確認したうえで……。
「それでは、参りますわよ！」
気合いっぱい、市庁舎に踏み込んだ。

第八十一話　商人たちの期待

港湾都市セントバレーヌの商人組合。それは、ただの商人の寄り合い所ではない。
それは、聖なる黄金の港とも呼ばれる、この港湾都市の政を司る権力の中枢であった。
商人が金を出しあって建てた市庁舎は、会議場と行政府としての機能を兼ねており、数多くの者たちが日夜出入りする場所であった。
その会議室には、すでに三十人近い商人が集まっていた。
「おお、すごいな。急なことだったのに、よくこれだけ集まったもんだ」
部屋に入って早々に、年若い商人が言った。それに答えたのは年配の商人だった。
「そりゃあそうさ。なんと言ったって、フォークロード商会とシャロークの旦那があれだけ評価する御仁だ。お近づきになれるものなら、そうしたいってやつぁ山ほどいるさ」
「違いない。ところで、そのミーア姫殿下のお気に入りの、フォークロード商会の大将とシャロークの旦那は来てんのかい？」
「旦那はお休みだそうだ。ガヌドスで新しい商売の予感がするとかなんとかでな。マルコ殿は、ほら、あそこに」
指さした先には、フォークロード商会の長、マルコが、周囲からの視線に素知らぬ顔で、髭をいじっていた。
「まぁ、正直なところ別に新しい商売に繋がらなくっても構わないんだが……セントバレーヌでは今まで通り平和に商売を続けたいものだな」
「違いないな。帝国のミーア姫殿下といえば、聖女ラフィーナさまの無二の友と聞く。あるいは、なにか、ラフィーナさまのご意向を受けてのことかもしれないな」

実のところ……彼らには密かな期待があった。
公然の秘密となっていることではあるのだが、商人組合とルシーナ司教との間には、ここ数年、微妙な緊張があるのだ。それが、少しでも解消されてくれれば、と……。期待するものは少なくない。
もともと、ここ、セントバレーヌは、いささか配慮が必要な土地であった。
彼らは、金を価値基準とする商人だ。儲かるか、儲からないかが、彼らの絶対の物差しであるし、その基本は変わらないのだが……同時に、彼らはもう一つの理に強く縛られていた。
すなわち、中央正教会の理、神聖典の理である。そして、商人たちの理と中央正教会の理とは、しばしば、整合性が取れなくなることがあるのだ。
例えばの話……、商人たちは、なんの儲けにもならぬ「慈善」が嫌いだ。それは無能者が働き者から金を恵んでもらう方便に過ぎない、と見做す者さえいた。
そんなことに使う金があるならば、事業を拡大し、より大きな利益を得るべきではないか？　と。船の一隻、二隻でも増やせれば、より多くの者に働き口を提供できるではないか……などと声高に言う者もいた。
だから、彼らがなぜ、孤児院に寄付するのかといえば、ヴェールガ公国の護りを失わないためである。
さらに寄付だけではない。賃金においても、特別な配慮が求められた。
この都市では最も身分が低く、商才に欠けるとされる、積み荷の上げ下ろしをする者たち、その日雇いの男たちにさえ、それなりの賃金が支払われるよう、配慮しなければならない。
「汝、彼らを奴隷と考えるなかれ。人は人として正当に扱え」
そのような神聖典の教えを斟酌し、中央正教会との関係を重んじたうえで、商人組合が決めた事ではあるのだが……。
「半分にしろとは言わないが、もう少し減らせれば、その分を商売

に充てられるんだがなぁ」
そうボヤいたことがある者は、一人、二人ではなかった。
けれど、それらの不満もまた、ヴェールガ公国の、中央正教会の庇護と比べてしまえば、簡単に飲み下せるものだった。
小国同士の戦乱に巻き込まれ、幾度となく商売が頓挫した過去の歴史に鑑みれば、今のなんと恵まれたことか……。
これを失うことは愚かしさの極みであることは、すべての商人の共通認識といえた。
だからこそ、商人組合と派遣司教との関係は、若干の駆け引きや、互いの腹の内を探り合いつつも、表向きは常に平穏を保っていたのだが……。
「どうも、最近、司教との関係が上手く行っていないらしい……」
そんな噂話が、流れ出したのは、いつ頃からだっただろうか。
その手の噂は、派遣司教の交代に伴って、よく囁かれるものであった。
次に赴任する司教は、たいへん厳格で、厳しい人だ、とか、反対に、あの司教は一定の“特別な”献金さえ納めていれば、なにも文句は言わないだとか。
その手の噂話には事欠かないし、たいていが誇張されているものなのだが……。
「どうも、今度の噂話は本当らしくてな。ルシーナ司教と組合長たちが、上手く行っていないらしい」
そんな噂がまことしやかに聞こえてきていた。
なんでも、ルシーナ司教という人は賄賂を渡しても、それを教会への献金として受け取るとか、孤児院への寄付として受け取るとか……。
建前として言った言葉を、そのまま杓子定規に受け取って、そのように処理しているらしい。かといって、賄賂です、と言って渡すわけにもいかない。彼は高潔な人として名の知られた男だったからだ。

「どうも掴みどころのない人だが……噂では、我らに対する縛りを強めるお考えだとか」
「それは、また……。ミーア姫殿下が、我らと司教殿との間を取り持ってくださるなら助かるな」
「いやいや、いっそのこと、我らの後ろ盾になってくれるなら……もっと商売がやりやすくなるかもしれんな」
善意という枠組みを取り払い、完全に自由な商売がしたい。
一切の配慮なく、ただ、金を儲けることのみが正義の……そのような商売ができるのではないか？　と。
そのような欲望は、常に彼らの心の中に存在していた。
されど、彼らは知らないのだ。
枠組みという名の秩序を取り去った後の自由。何物にも……善意や良心にすら縛られぬ自由というのは、他愛なく混沌へと堕ち得るものである、と。
その時、商人たちのざわめきを切り裂いて、扉が開け放たれる音が響いた。

第八十二話　ミーア姫、小物を装う

会議場に、先陣を切って入って来た少女、白金色の髪を揺らし入って来た彼女は、ちょこんとスカートを持ち上げながら頭を下げる。
「ご機嫌よう、みなさま。わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーン。ティアムーン帝国の皇女ですわ」
その言葉を聞き、商人たちは、泡を食って一斉に立ち上がった。そんな彼らの様子にも構わず、帝国皇女、ミーア姫は続ける。
「このように、お話しする機会をいただき感謝いたしますわ。今日、このようにみなさんに、貴重なお時間をいただいたのは、ぜひ協力していただきたいことがあったからなんですの」
その場にいた商人たちは、さらに慌てる。
まさか、帝国の姫殿下に、先に自己紹介をされてしまうとは思っていなかったのだ。
普通はこういう場合、家臣の者が先に来て色々と場が整ってから動き出すもの。身分的にも、帝国の姫が、平民である商人たちより先に挨拶をするなど、とてもあり得ない。そんな礼を失することが許されるはずがない。
もしも、王侯貴族が、そのように下手に出るとしたら、理由は一つしか考えられなかった。すなわち……。
――これは、なにか、とんでもないことをお願いされるのでは……？
今まで幾度も、理不尽な要求を突き付けられてきた商人たちは、自然と身構える。けれど……。
「みなさま、ご存知のことと思いますけれど……今、この大陸各国は食料不足の危機にありますわ。そして、そのことはできるだけ表に出ないように配慮しておりますけれど……民の中には、それに気付き、不安感を持つ者も現れてきておりますわ。わたくしが協力を

願いたいのは、そのことなんですの」
ミーアが言ったのは、表向き、至極、真っ当なことで……。
「……と言いますと？」
思わず、と言った様子で口を開いた商人に、ミーアは深々と頷き……。
「詳しいことは、この後でお話ししますけれど、このまま民の不安感が高まると、混乱から食料流通が乱れるかもしれない。そうなると、飢饉が発生し、より一層、不安感が高まっていく。負の連鎖を生まないために、人々の不安感を和らげたいと考えておりますの」
極めて真っ当な……そして、善良なことを言い出したミーア姫に、商人たちは肩透かしを食らったような気分になった。

さて……ミーアがなぜ、丁寧な挨拶から始めたかと言えば……理由はいたってシンプルなことであった。
――こちらは、お願いする立場ですわ。相手の心証を悪くして断られでもしたら面倒です……。
基本的に、頭を下げることには抵抗のないミーアである。お金がかかるわけでもなし、下げて有利になるならば、いくらでも下げるのである。
地下牢を経験したミーアには、この程度、どうということもないのだ。
――それに、ルシーナ司教と対立する後ろ盾になどされたら、たまりませんわ。ここは、謙虚さを見せることこそが肝要。
そもそもルシーナは、ただの伯爵ではない。中央正教会の司教である。まともに渡り合えるのは、せいぜい、聖女ラフィーナぐらいのものだろう。ご当地聖女のミーアには、元より荷が勝ちすぎることなのだ。
ゆえに……。
――できるだけ腰を低く……。決して威厳など見せてはなりませんわ。ルシーナ司教と並び立つ偉大な人物、などと見られては一大

事。できるだけ、こう……頼りなく、小物に見えるようにしなければ……。謙虚さが大切ですわ！

腹にグッと力を込めて、自らの背中から後（誤？）光が溢れださないように意識しつつ、ミーアは続ける。

「そこで、具体的に協力していただきたいことですけど……わたくしが心から頼り、信頼する友人たち、クロエとティオーナさん、それにラーニャさんが考えてくれたことがございますの……。説明していただけるかしら？」

彼らに開示するのは、ルードヴィッヒも認めた素晴らしい策である。これを自分が考えた、と思われるのはいかにもまずい。

なんと聡明な！

頼りになる美しき姫殿下だ！

よし！　ルシーナ司教と戦う後ろ盾となってもらおう……などと言うのは、最悪の流れである。

ゆえに、謙虚に、一歩も二歩も引いたところで話を進めることが、今日のミーアのテーマなのだ。

さて、ミーアに話を振られ、三人の令嬢たちは一瞬、顔を見合わせた。けれど、すぐに……頷きあって……。

「では……フォークロード商会、マルコ・フォークロードの娘、クロエが説明させていただきます」

クイッと眼鏡を押し上げて話し出したのはクロエだった。

彼女は、本の読み聞かせと食の栞のアイデアをプレゼンしていく。理路整然とした語り口、さらに、ミーアのお抱え小説家が書いたという物語の斬新さに、彼らは目を瞠った。

寒さに強い小麦ミーア二号とその調理法については、ティオーナとラーニャが説明を担当する。発見に至る経緯、その調理法が特殊であること、それをどのように広めていくのか……。二人のご令嬢の話も、商売の理にかなっており、ゆえに、商人たちは納得の頷きを見せた。

「なるほど……。確かに、面白い物語があれば、その方法であれば

上手く不安を和らげられるかもしれませんな……」
みなの意見を代表するように口を開いたのは、老齢の男だった。
「ビオンデッティ商会の会長です。セントバレーヌ初期から、商人組合を支える大商人の一人です」
小声で、ルードヴィッヒが耳打ちする。
「ほう、よく知っておりますわね。ルードヴィッヒ。さすがですわ」
「お褒めに与り光栄です……と言いたいところですが、バルタザルからの又聞きです。彼は、セントバレーヌの商人たちとも付き合いがあるらしいので」
「それでも感謝いたしますわ。例の肖像画を調べるうえで、協力を仰ぐべき相手がわかるのは、とても助かりますもの」
そう微笑んで、ミーアは、ビオンデッティ商会長に目を向けた。

第八十三話　苦労人の弟と妹

さて、話は少しだけ遡り……。
楽しい楽しいお茶会を終え、巫女姫の塔から出た慧馬は、そこにゲインとギミマフィアスの姿を見つけた。
「むっ？　お前は……、このようなところでなにを……」
てっきり、もう、去った後かと思っていたので、思わず驚いてしまうが……。
「なに、良い馬が見えたので、少し鑑賞していたまでのこと……」
そんなことを言うゲインの視線が向かう先には、慧馬の愛馬、蛍雷の姿があった。
黒く艶やかな毛並み、しなやかに引き締まった筋肉……。走るために洗練された、圧倒的な姿かたちは、なるほど、見惚れるに足る美しさがある。
「ほう。そうか、それならば仕方あるまい……」
なぁんて偉そうに頷きつつも、慧馬の頬がわずかばかり緩む。
ニマニマしそうなのを堪え、あえて、しかつめらしい顔をしてから、慧馬は言った。
「我が愛馬、蛍雷は火一族の宝。月兎馬の中の月兎馬、駿馬の中の駿馬だ。滅多に見られるものではないから、よく見ていくと良い」
上機嫌な慧馬に、ゲインはゆっくりと首を振り、
「いや、十分に堪能させてもらった。それに、あまり熱心に見ていると、盗むと勘違いされて、そこの戦狼に噛みつかれそうなのでな」
そう彼が視線を向けた先、茂みの中にはジッと視線を注ぐ一匹の狼がいた。
「ほう。我の羽透に気付いているとはさすがだな。レムノの剣聖ならばいざ知らず、王子殿下にしては、なかなかできるではないか」
「その口ぶり……あれは、お前の狼か？　てっきり、お前の兄の連

れかと思ったが……」
怪訝そうな顔をするゲインに、慧馬は、ドヤァッという顔で頷き、
「そうだ。我が相棒の戦狼、羽透だ」
その声に応え、茂みから羽透が走り出る。
待ちくたびれましたぜ！　とばかりに、慧馬の隣にお座りすると、ドヤァッとゲインたちのほうに顔を向ける。
「なるほど、よく訓練されているようだな……」
ゲインは、何事か考えるように頷いてから、
「……しかし、お前の兄は、なかなか難解な男のようだな」
「それを言うならば、お前のほうが、だな。ゲイン・レムノ。弱体化したとはいえ、蛇の巫女姫の弟とは、なかなか因果な……あの姉とでは、会話をするだけで精神を削られたのではないか？」
「違いないな。しかし、互いに、兄姉には苦労させられるな」
「だが、お前のほうは、弟には恵まれたのではないか？　アベル・レムノは、なかなかに見どころのある戦士だと思うが……」
ゲインは、一瞬、頬を引きつらせる。けれど、慧馬の、そのあまりにもあけすけな物言いに、却って毒気を抜かれたらしい。苦笑いを浮かべた顔からは、普段の険が感じられなかった。
「ところが、よくできた弟というのも、なかなかに厄介なものでな。馬鹿にして、自分以下だと見下せればよいのだが、こちらが真っ当であろうとするなら、抜かされぬように手を抜くことができないのさ」
肩をすくめるゲインに、そっとギミマフィアスが歩み寄る。
「ゲイン殿下、そろそろ出発しませんと、途中の村までたどり着けませんので」
「ああ……そうだな。狼もいる地では、おちおち野営もできんか……」
そう言って、踵を返しかけたゲインであったが……ふと、そこで立ち止まる。
「どうだ、お前も来るか？」

突然の申し出に、慧馬は、二度、三度と目を瞬かせた。
「どういうことだ……？　むっ、まさか、我を襲って、我が愛馬を盗もうというのでは……」
主の疑念に応えるように、羽透が、ぐるる、っと敵意を表す。が、ゲインは鼻で笑い飛ばす。
「お前の馬が、俺の馬に勝っているとでも思うのなら、それは自惚れというものだ」
そのゲインの言葉に応えるように、彼の馬が嘶きを返した。
「むっ……。確かに……我としたことが、軽率だったようだ」
素直に頭を下げる慧馬に、ゲインは苦笑をこぼす。
「詫びには及ばぬし、警戒する必要もない。別に大して理由があるわけじゃないからな。ただ、俺はこれから、姉の暗殺未遂事件を調べようと思っている。もしも、巫女姫の過去の事件がわかれば、お前の兄に対する巫女姫の影響力を減ずることができるのではないか、と思ったのだがな」
チラリと慧馬に視線を向けるゲイン。それを受け、慧馬は、むむむっと眉根を寄せて……。
「……それは、まぁ確かに。それに、燻狼の手掛かりもないし……。兄上があの様子ならば、追跡はむしろ任せてしまうこともできるか……ううむ……」
ぶつぶつつぶやきつつ、考え込む慧馬であった。

一方で、ゲインのそばに、ギミマフィアスが歩み寄り……。
「よろしいのですか？　同行者など……。下手をすると、レムノ王国の恥に繋がることが明らかになってしまうやもしれませぬが……」
「構わんさ。それに、あの女にも無関係のことでもあるまい」
その言葉に、レムノの剣聖はしばし、髭に手をやってから……。
「なにか、狙いがあってのことですか？」
「狙い、というほどのことはない。ただ、女の狼使いというのは、面白いと思っただけだ」

それから、ゲインは自らの外套を手に持った。その家紋に勇ましく描かれたものは……。
「知らぬはずがないだろう？　この家紋の意味。我がレムノ王家の家紋が、なぜ戦狼であるのか……。その興りには、狼を従えた強者が大きく関与しているということを」
「建国神話ですな。無論、存じておりますが……」
訝しげに眉を潜めるギミマフィアスに、愉快そうな笑みを浮かべ、ゲインは言った。
「狼の使い手はみな男と言われていたが……。女の狼使いがいるのならば、それは実に皮肉な話じゃないか」
っと、ひそひそと話をする二人に、慧馬が振り向いて、
「ところで、目的地はどこなのだ？」
問いに対する答えは、簡潔だった。
「レムノ王国の南方、黄金の港セントバレーヌにほど近い貴族領だ」

第八十四話　ペロリ、サクリ、ゴクリ

――ふぅむ、とりあえず……あの大物っぽい方に肖像画のことを聞くのは良いとして……しかし、この商人組合、これだけの方々が集った組織である以上、一枚岩ではないはずですわね……。この中にも司教寄りの方と、司教とは距離を置きたい方といるのではないかしら……。

ミーアは、知っている。人にはそれぞれ考えがある。

そして、大勢の人が集まる以上、いつでも一致して、とはいかないもの。みなが司教に好意的でもないが、みなが敵対的でもないだろう。この場の情報を売って、司教と懇意になりたい者もいるはずだ。

――わたくしが、ここで言ったことは、司教に筒抜けになっていると考えたほうが良いのかもしれませんわね。少し気を付けたほうが良さそうですわね……。例のビオンデッティさんが、口が堅い方であればいいのですけど……。

などと、ミーアが視線を向けた時だった。

「しかし……どうでしょうね。ミーア姫殿下、民の不安は……はたして解消したほうが良いものでしょうか？」

ビオンデッティは、くるりん、っとした面白い形の口髭を撫でながら言った。

「はて……それは、どういう意味かしら？」

「そちらの、フォークロード商会のお嬢さんのお話は興味深かったです。なるほど、読み聞かせに食べ物の栞でしたか。確かに、儲けが出せそうなお話しではありますな……」

そこで、彼はチラリとミーアのほうを見て……。

「されど……大きな儲けではない。現在の状況を用いて、最も儲けを出せるのは、このやり方ではない。人々の不安を煽ったほうが、

むしろ、儲けが出せるのではないか……」
何人かの商人たちが頷くのを見て……。彼は笑みを浮かべ……、
「とまぁ、こう考える者がいても不思議はないだろう、と思いましてな」
これは、あくまでも自分の意見ではなく、自分はただの代弁者である、というスタンスを取るビオンデッティ。頷いた商人たちが、しまった、という顔をしているのが見えたが……。
――ふぅむ、言いづらいことを言って、他人に責任を押し付けるこのやり口……この方、なかなかできますわね！
なかなか、参考になりそうなやり方だぞぅ、っと心の内でメモするミーアの目の前で、ビオンデッティは話を続ける。
「事は命にかかわることだ。それゆえ……そこに儲けが生まれやすい。誰しも、命がかかっていれば、法外な金だとて出すものでしょう。日照りの荒野において、一杯の水が千金の価値を持つように……。不作の土地では、小麦が家の価値を持つかもしれません」
「そうですわね。食料が不足し、人々が困窮した世界では、小麦が城の価値を持つことだって、あるいはあり得るのかもしれませんわね」
かつての帝国の、あの地獄を思い出しながら、ミーアは彼の主張の正しさを認める。
「で、あるならば……我々としてはむしろ、食料不足の情報を流し、食料を割高で売りつけたほうが良いのではないか……と、ワシなどは考えてしまいますが……。それとも……」
一度、言葉を切って、彼は上目遣いに見詰めてくる。
「そのようなやり方をしては神の裁きがある、とでもおっしゃりますかな？　ルシーナ司教と同じように……」
その言葉に、ミーアは軽く眉をひそめる。
――この方、わたくしを試しているのかしら……それとも、なにか他に意図があるのかしら……？
っと、その時だ。ミーアは、自らの前に置かれていた紅茶に目を

やった。それは、アンヌが淹れてくれたものだった。その隣には、ラーニャが持ち込んだペルージャン産の上等なクッキーがあった。
ミーアは優雅に、それらをペロリ、サクリ、ゴクリ×3　して、脳の回転速度を軽く上げてから……。
「悪事を働けば裁きがある……。それは当然のことではないかしら？」
言葉を選びつつ、口を開いた。
まず、自身の立場をはっきりさせておかなければならない。中央正教会の教えに含むところがある……などと取られるようなことは避けるべきだ。
けれど、彼らを納得させ、協力してもらうことも必要だ。目の前の老商人の言葉通り、この機会に一儲け……などと考える者には、しっかりと釘を刺しておくべきだろう。
「ははは。神の裁きがある……などというのは、愚かなる戯言である。と、かつてのシャローク・コーンローグ殿ならば、言ったことでしょうな」
「あら？　あなたも、同じお考えなんですの？」
チラリ、と彼に視線をやってから、周りの者たちの様子も窺う。
目の前の老人はわからないが、彼の言うようなことを考えていそうな者は少なからずいそうだった。
「ワシの意見を披露するなどとても恐れ多いこと。ただ、天国の沙汰は金次第、などと言う商人はいるでしょうな。商人にとっては金がすべてですから……」
その言葉に、ミーアは、ふむ、と唸る。
――やはり、この方はわたくしに商人たちの考えを教えてくれようとしているのではないかしら……。でしたら、ここはそれにしっかり乗って……。
ミーアは、咳払いをしてから……。
「なるほど。では、誤りのないように、はっきりとわたくしの考えを伝えておきますわ」

ミーアはそっと胸に手を当てて言った。
「裁きはございますわ。確実に」
誤解の余地がないほどはっきりとした口調で、ミーアは言った。
それは、ミーアが信仰心に篤い聖女だからである……などではもちろんない。
ただミーアは事実として知っているだけなのだ。
「横暴は、滅びの種を蒔くことに繋がり、蒔いた種の実りを刈り取るのは自分である、と、わたくしは信じておりますわ」
それは、かつて経験したこと……。良い種であっても、悪い種であっても、その実りは必ず、自分が刈り取ることになるということ……。
けれど、そこで、ミーアは言葉を切る。恐らく、それでは、商人たちは納得しないだろう。彼らには、彼らの理屈で語りかける必要があるわけで……ミーアはしばし考えて……。考えて……。
――あら、どう言えばいいかしら……？
ちょっぴり焦る。
――う、ううむ……。てっきりクロエたちのアイデアに乗ってくると思ってましたのに。ティオーナさんの説明も良かったですし、新種の小麦のことを情熱的に宣伝してくれたラーニャさんも……ラーニャさん……？
ふと、目に映ったのはラーニャの顔だった。心配そうにこちらを見つめているラーニャ姫……。彼女を見ると、ミーアの脳裏に甦ってくる光景があった。それは、そう……。
――ああ、ケーキのお城……ペルージャンのお城、ふふふ、あれが全部カッティーラでしたら、きっと食べきれないでしょうね！
ミーア、ついに、現実逃避を始めそうになって……けれどっ！
――うふふ、美味しかったですわね。カッティーラ、ケーキも……ケーキ！？
瞬間、ミーアの脳裏に、閃きが生まれた！

第八十五話　好意と敬意を買いなさい

「大きなケーキは……一人では食べきれないもの……ではないかしら？」
お城のように大きなケーキが目の前に出されたら嬉しい。全部、一人で食べたら、きっとものすごく幸せな気分になるだろうという確信が、ミーアの中にはある。
されど、それは、現実には不可能なのだ。お城のケーキは一人では食べられない。
「……は？」
唐突な言葉に、老商人は目を瞬かせた。他の者たちも目を丸くして、なにを言い出すんだ？　という顔をしている。
「仮に、お城のように大きなケーキがあったとして……一人では食べきれはしない。独り占めしようとしても、腐ってしまうだけ。そうではないかしら？」
「はぁ、まぁ、それはそうでしょうが……」
「ですから、わたくし、思いますの。それならば、みなでわけて、楽しく食べてしまえばいいのではないか、って」
ミーアは、そこでニッコリ笑みを浮かべる。
「無論、イチゴは……一番美味しいところはきっちりと、わたくしがいただきますわ。けれど……食べきれないケーキを抱え込むことに意味などない」
「つまり……儲け話も同じである、と？」
ビオンデッティのつぶやき。それに小さく頷き……、ミーア、内心でグッと拳を握る。
――ふふふ、我ながら、なかなかに良い喩えですわ。ケーキの魅力は人類普遍のもの。伝わらないはずがありませんわ。
なぁんて、思っていると……。

「しかし、金は腐りませんが……」
冷静なツッコミがどこかから入る。余計なこと言いやがったのは誰かなぁ……？　などと声のほうにチラリと目を向けてから、ミーアは、問う。
「あら、本当にそうかしら……？」
一度、間を置き、紅茶を一口。口を湿らせてから、再度、ミーアは問う。
「抱え込んだ宝は、本当に腐らないものかしら？」
穏やかで、静かな問い。されど、ミーアの言葉に、その場は沈黙に包まれる。
「なるほど、確かに食べもののように簡単に腐りはしないかもしれない。けれど、油断すれば盗まれ、時を経れば、財宝であっても錆びて朽ちていく。そうならぬように心を砕いて、心配しながら日々を生きる……それは、はたして幸せと呼べるのかしら？」
自分一人で食べようと大切に採っておいたケーキ。腐らないか、と心配し、アリやネズミに食べられないかと心配して、時間を過ごす。
それは実に不毛なこと。それならば、みなで食べて、楽しい思い出にしてしまったほうがいい。
それは、あの日、実現した奇跡の光景。
ミーアの放蕩祭りで、ミーアが実現したことだった。
「なるほど、あなたたちが心の中で神の裁きがないと嗤うのは、ご自由になればよいと思いますわ。されど、もし仮に、神の裁きがなかったとしても、あなたたちの持つ商人の理が、あなたたち自身を裁くことになるのではないかしら？」
「商人の理が……？　それは……どういう意味でしょうかな？」
「簡単なことですわ。使わずに、財宝を眠らせておいて、盗まれでもしたら、商人の理があなたたちを許さないということですわ。自分自身の愚かさに、あなたたちは自らを責めるでしょう。そして……人々もまた、あなたたちを裁くのではないかと思いますわ」

ミーアはきちんと付け加えておく。
他者を省みない横暴さ、踏みつけにしてまで自身の欲望を優先させることは、断頭台への道を整えることに繋がるのだ。
ゆえに……神の裁きが、もしもなかったとしても、民の裁きはあるのだよ、ときっちり教えておいてやるのだ。ミーアは優しいので、きちんと注意してやるのだ。
「ゆえに、わたくしはあえて言いますわ。小麦一袋を城の値段で売るような、自らの分を超えたやり方で、なりふり構わず財を蓄えたところで、どうせ使い切れやしませんわ。あるいは、自分で釣り上げた小麦粉に、自分自身で無駄金を支払う、そんな羽目に陥りますわ。人は自ら蒔いた種は、自分で刈り取らねばならぬもの。商人の理で他人を裁いた者は、自分自身をもその理によって裁かれることになる」
そっと目を閉じ、胸に手を当てて、ミーアは続ける。
「そして、そこには慈悲も良心もない。商人の理がそれらのものを否定し、あなたたち自身も否定するのなら……自分が受ける時だけ慈悲を得ようというのは公平ではありませんもの。自分にだけ、良心をもって接してくれなどと……それは、子どものわがままというものではないかしら？」
その言葉は、厳かに……確かな威厳をもって会議場内に響いた。
……響いてしまった。

ミーア姫の、その言葉は実に奇妙なものだった。
誰からも咎められる必要もなく、裁かれることもないはずの帝国の姫君。そんな彼女の言葉には、されど、確かな重みと説得力とがあった。
なるほど、確かに、慈悲を示さぬ者に、慈悲を与える者はない。
他人の利益を削り、自己の利益のみを追求する者に、好意を持つ者などいるはずもない。
商人の理、金儲けのみを追求した者は、その理によって裁かれる。

それこそが、公平だ、と……。
そのミーアの言葉は奇妙な重みをもって、商人たちの胸に迫った。
また、ベテランの商人たちの幾人かは、実感として知っていることもあった。
貯め込んだ金は、使わずにおけば、確かに腐るのだ。金は使ってこそ意味があるもの。
……では、その金を何に使うのが正解なのだろうか？
莫大な……それこそ、城を買えるほどの金を得て……それを何に使うのか？
当然、商人であれば、次なる金儲けに使うに決まっている。そうして、さらに莫大な金を得て……徐々に徐々に量を増やしていく金貨。高さを増していく黄金の山、山。
そして、いつしか、その高さを増やすことこそが目的になっていく。
金は使わなければ意味がない、と、知っていたはずなのに……。金を増やすために金を増やすという、矛盾に陥っていく……。
それは、もしかすると、不毛なことなのではないか……。
商人たちの脳裏に一人の男の姿が思い浮かぶ。
シャローク・コーンローグ。
あらゆる商人の憧れ。最も金を持ち、商売に長けた、商人の王。
商人の理に照らし出せば、圧倒的な成功者になるはずの……あの男は、目の前のミーア姫に協力しているという。
もしかすると、あの男は……自らの莫大な富の使いどころを、見つけたのではないだろうか？
その金を何に使うことが、意義あることなのか……答えを見つけたのではないだろうか……？
商人たちがそんな想いに囚われかけた時、まさにそのタイミングで、ミーアの声が響く。
「こういう言い方が、正しいのかどうかは、わかりませんけれど……純粋に、なりふり構わず商人の理に従った結果、得られるはずだ

った莫大なお金……そのお金を使って、人々の好意と敬意を買うことをお勧めしますわ」
　続くミーアの言葉に、商人たちは目を上げる。
「わたくしは、なにも、あなたたちに金儲けをするな、とは言っておりませんわ。ケーキのイチゴは食べたいもの。読み聞かせと食べ物の栞によって、旨味を得ればいい。商売をすればいい。そして、新たな小麦とその食べ方を教えることで、人々の好意と敬意を得ればいい。商人の理を半分、それ以外を半分……。そのようにご協力いただきたい、と、わたくしのお願いはそのようなものですわ。あるいは……」
　っと、そこで、ミーアはニヤリと笑みを浮かべて……。
「民草の好意と敬意とで不足があるというのなら、このわたくし……帝国皇女ミーア・ルーナ・ティアムーンの好意と敬意を買いなさい。まぁ、もっとも、そこに価値を見出すか否かは、あなたたち次第ですけれど……」
　そうして、話したいことを終えたのか、ミーアは、澄まし顔で紅茶のカップを手に取った。

第八十六話　小物アピール、成功……せず

「この帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンの好意と敬意を買いなさい」

などと言ったミーアであるが……、もちろん、そんなもの空手形である。けれど、ミーアに罪悪感はない。

――むしろ、感謝してもらいたいぐらいですわ。民草を軽んじる者は、滅びの種を自ら蒔くことになるのですから……。しかし、少々、説得に言葉を弄してしまいましたわね……。

ついつい、前時間軸のことを思い出し、言葉に力が入りすぎてしまったことを反省するミーアである。

――せっかく、小物感を出そうとしておりましたのに、少しばかりしゃべり過ぎたかも……。まぁでも……肝心な部分の説明はクロエたちがしましたし、きちんと彼女たちが優秀なだけだ、とわかっていただけたのではないかしら……。

自分がルシーナ司教と並び立つ大物だなどと思われては一大事。なんとか、目立たぬよう、聡明さ（）が溢れ出さないように自らを律するミーアである。

と、その時だった。

「なるほど。宝は使ってこそのもの……。だから、私めどもの贈り物である髪飾りを手放された……ということですか」

ミーアは声のほうに視線を転じる。と、どこかで見覚えのある商人の姿が見えた。

――はて、髪飾り……それに、あの顔は……。

考えることしばし。ミーアの脳裏に、その商人と出会った時の光景が浮かぶ。確か、白月宮殿に、献上品をもってやって来た商人で……。

「ああ。あのかんざし……そうですわね。あれは、まさに素晴らし

き宝でしたわ。あれをきっかけにして、病院が建ち、死にかけていた町が甦ったのですから」
　かつて、ミーアが気に入って、よく身に着けていたかんざしを送った、さる大商人こそ、この目の前にいる商人であった。
「帝都ルナティアの経済特区、新月地区ですな。貧困地区を、あのように経済活動が活発な地区にするとは、素晴らしい叡智です」
　突如、襲ってきたヨイショの横波を、ミーア海月は華麗に受け流し……。
「ああ、ですが、あれを成したのは、わたくしが信を置く家臣。このルードヴィッヒの功績ですわ」
　ささっとルードヴィッヒを紹介、引き波に合わせて、静かに身を引こうとするミーアである。その狙い通り、
「なるほど。ミーア姫殿下のお考えをしっかりと読み取り実現する、有能な方なのですな」
　商人たちは、感心した様子を見せるが……。
「そのような、有能な家臣の方がミーア姫殿下に付き従っている、と……」
　再び、別のヨイショが襲ってきた。
　気付けば、ミーアが漂う海域は、いつの間にやら、嵐の様相を呈していた！
「過分な評価をいただいております。されど、私だけではありません。我が国の能吏たちが、ミーア姫殿下のお考えを実現するため、日夜、働いております」
「おお……。有能な部下の方がそんなにもたくさん……」
　さらにさらに、巨大な波が、海の月ミーアを、天の月にまで押し上げんとしていた。
「え……ええ。まぁ、優秀な方たちにいつも助けられていますわ。お、おほほほ」
　ミーアは、なんとか、その波から降りようとする。
　優秀なのは家臣たちであって、自分じゃあないんですよぅ、っと

……察してね、と伝えようとするが……。
「しかし、せっかくああして顔繋ぎをし、覚えていただきましたのに……帝国内の小麦輸送でお声がけいただけぬとは、いささか残念でしたな。フォークロードだけでなく、我が商会もご協力できたと思いますが……」
「おほほ、お戯れを。わたくしに贈り物をしておきながら、お父さまがなにも便宜を図らなかった、とでも言うおつもりですの？」
ついうっかり、答えてしまう。先ほど、自身の好意と敬意を買えと言ってしまった以上、ここで「自分たちを遇する力がないから、好意を買っても意味がない」などと思われないための配慮である。
ミーアには確信があった。自分が気に入った髪飾りの贈り主を、父がどのように遇するのか……。なにも良い目を見ていないということは絶対にあり得ない。リターン受けてるだろうから、なにも便宜を図らなかっただけよ？　と主張しておく。っと、
「ははは、敵いませんな。ミーア姫殿下には……」
などと、降参のポーズをする商人。どうやら、ミーアの勘は当たったらしい。それはいいのだが……そのやり取りすら、なんだか、賢そうに見えてしまって……周りの商人たちの視線は、熱を帯びる一方だ。
「ミーア姫殿下……お話はわかりました。この様子ですし、協力したいと思っている者も少なからずいるでしょう。ワシも、姫殿下のお考えにいたく感銘を受けました。協力するもやぶさかではないのですが……」
ビオンデッティ商会長は、そこで、チラリと視線を送ってきた。
「ただ一つだけ、条件……いえ、お願いしたきことがあるのですが、よろしいでしょうか？」
その申し出に、ミーアは軽く眉をひそめる。
「あら？　なにかしら……？」
小さく首を傾げるミーアに、ビオンデッティは苦笑いを浮かべて……。

「ルシーナ司教と我々との関係改善のために、ご協力いただけないでしょうか？」
「……ルシーナ司教との関係改善……それは、内容によりますわね……。わたくしにできることでしたら、いたしますけど……」
「お恥ずかしいことながら、セントバレーヌは、ここ最近、いささか困ったことになっておりまして。どうもルシーナ司教は我ら商人が、この都市で大きな顔をするのを、あまり好まないようでして……」
「なるほど、その執り成しをわたくしにしろということですわね……ふむ」
頷くミーア。その首の角度が……微妙に傾いだ。
――あ、あら……？　妙ですわね……。わたくしのような小物に、ルシーナ司教との仲を取り持つことを願い出るなど……。おかしいですわ。なぜ、わたくしに、なんとかできると思ったのかしら……？
などと、胸の中でしきりに首を傾げつつも……。
「まぁ、そうですわね。ビオンデッティさんとは、他にもお話ししたいことがございましたから……少し話を聞かせていただきますわ」
とりあえず、頷いておくミーアであった。

第八十七話　港風景、三者三様

ミーアが天に輝く海月……もとい、月のごとく、商人たちに、確かな威光を示してしまっている、ちょうどその頃、ベルたち別動隊は港を訪れていた。

タイミングよく入港してきた船に、ベルが元気よく走っていった。

「わあ！　大きい！」

見上げるほどに巨大なマスト、船首の猛々しい獅子の顔、城と見まごうばかりの巨大な船に、ベルは思わず歓声を上げる。

「すごい船ですね！　冒険の香りがします」

海の大冒険の香りに誘われて、ふらふらーっと船のほうに向かっていくベル。

「ああ、よくわかりますね。あれは、世界の果てを目ざす船です」

そんなベルに解説するのは、リオネルだった。ちょっぴり得意げに、知識を披露するリオネル。対して、ベルは、

「世界の果て！」

思わず、口をぽっかーんと開ける。

「そう。ベルさんは考えたことがありませんか？　あの海の向こう側、水平線の彼方にはなにがあるのか、と……」

厳かな口調でリオネルが語る。

その指さした先、青い空と青い海、その交わる一本の線。あの先になにがあるのか……それは、冒険や探検を愛好するベルと言えども、知らないことだった。

「そんなこと……考えたこともありませんでした」

非常に感銘を受けた口調でつぶやくベルに、リオネルはキラキラした瞳で言った。

「魚はもちろん、この世界はとてもユニークで、興味深いものです。神がお創りになったこの世界を隅々まで回って、この目で見てみた

い……。小さい頃からの憧れです」
「ああ……。うふふ、よくわかります。こう、まだ見たことのない場所って、ついつい行ってみたくなりますよね！」
なぁんて、リオネルと意気投合するベルである。若干、志の高さに違いがあるような気がしないではないのだが……まぁ、それはさておき。
「でも、ベルちゃん。あんな船に乗って、世界の果てに行くなんて、ちょっと危ないんじゃ……」
などと、軽く諌めにかかるシュトリナに、ベルは真顔で、
「え？　なに言ってるんですか、リーナちゃん。冒険に危険はつきものじゃないですか？」
「え、あ、ま、まぁ、それはそう……だけど……」
そう言いつつ、思わず息を呑むシュトリナ。その脳内では、孫がいる年で、未知なる船旅に乗り出す自分とベルの姿が、ありありと思い浮かんでいて……。
「……健康でいよう。船旅って、体力使いそうだし……」
などとつぶやくシュトリナである。
「じゃあ、リオネルくんは、将来は船に同乗する司祭さまになるのですか？」
ベルは嬉々としてリオネルに問う。と、思わぬことを言われた、とばかりに、リオネルは目を瞬かせた。
「いえ……私は父の後を継ぎ、伯爵領を統治しなければなりませんから……」
寂しそうに笑みを浮かべながら、彼は続ける。
「あくまでも、幼い頃の……他愛のない憧れですから……」
「そう、なんですか……？　でも……」
っと、言おうとしたベルだったが、すでに、リオネルは船に背を向けていた。
せっかく、同好の士を見つけたのに、ちょっぴり残念そうなベルである。

一方で、オウラニアのほうは、というと……。
「あらー、あのお魚は、ガレリア海でも見たことがあるわー。ちょっと大きい気がするけどー。あ、あれは見たことないかもー。ふふふー、どんな味がするのかしらー」
「白身でとても淡泊なお味ですよ。骨の身離れが良くって食べやすいですね」
「そうなのー。ふふふ、大きいから、釣り応えがすっごくありそうねー」
妹弟子の解説を聞きつつ、オウラニアがお魚調査をしていた。
「んー、それにしてもー、ミーア師匠は、飢饉の対策のためにお魚を使おうってお考えみたいだけどー、いいお魚はいるかしらー？育てるのが簡単で、早く大きくなるのがいいと思うけどー」
「そうですね。お魚だけでなく、貝類も候補に入るでしょうか？他にも、海の生き物はたくさんいますし……」
「なるほどー。確かにそれもそうねー。あ、あれって、ポヤァじゃないかしらー？　ふふふー、美味しいのよねー。レアさん、食べたこと、あるかしらー？」
ウキウキしながら、オウラニアが問う。っと……。
「え？　あ……いえ、その、私は、あのー、ふ、普通のお魚のほうが、好き……かも……」
先ほどまで、生き生きと答えていたレアが一転。ちょっぴり引き気味の顔をする。が……。
「あらー、だめよー。ミーア師匠の弟子なら、食わず嫌いをしていてはー。未知への挑戦こそ、新しい可能性を開くものなんだからー。試してみなくっちゃー」
「あ、その……でも……あの……」
「それに、お父さまに言われなかったかしらー？　神さまが与えた物を残したらいけないってー」
合理的かつ司教的論理で攻め込むオウラニア。

オウラニアは、なかなかに機転が利くほうなのだ。
「あ……あぅう……」
同好の士になりそうな人材を、決して見過ごさないオウラニアであった。

さて……若干、温度差のある二組を遠めに眺めつつ、アベルとシオンは話していた。
「そうか。セントバレーヌには、レムノ王国の貴族の別邸まであるのか……」
「ああ。南方の貴族たちは付き合いが深くてね。そのまとめ役の、ポッタッキアーリ侯はセントバレーヌに対するレムノ政府の代弁者としての地位を確立しているんだよ」
「ガヌドス港湾国におけるグリーンムーン公爵家のようなものか」
「そうだね。海というのは利益を生む。レムノ王国も一枚噛ませてもらおうということでね」
小さく肩をすくめながら、アベルは言った。
「軍事的な新技術も海外から入ってくるものは、なかなかに侮れない。父も力を入れているんだ」
「なるほどな。セントバレーヌは独立都市だからな。国の別や身分を問わず、決まり事さえ守っていれば文句は言われない。ならば、その権益に手を伸ばしたくもなる、か……。しかし、下手な野心家がその任に就けば、危険なのではないか？」
怪訝そうな顔をするシオンに、アベルは苦笑いを浮かべる。
「ポッタッキアーリ侯は、良い意味でも悪い意味でも保守的な俗物でね。私服は肥やすが、野心とは無縁の人物だと聞いているよ。もちろん、それだけじゃない。ダサエフ宰相の領地も近いから、睨みを利かせてくれているが……」
「ああ、例の宰相殿か。なるほど、小人物と忠臣の睨みによって維持されている体制ということか……」
「そういうことだな。だが、俗物なだけあって、セントバレーヌの

事情に関しては、かなり詳しいはずだ。なにせ、商人たちに先んじて情報を得るために、港近くに館を建てたぐらいだからな」
「それじゃあ、ご令嬢たちが満足したら、そちらに向かうか……？」
シオンは、オウラニアチームとベルチームのほうを眺めながら言った。
「あの、僭越ながら両殿下……。お話が終わったなら、ご令嬢方が危険な食べ物に手を出さないように、もう少し……こう、監視と言いますか……注意を払ったほうが……」
などと、進言を呈するキースウッドであった。

第八十八話　セントバレーヌの現状確認１

さて、ミーアたちは、大会議場から場所を移した。
「ここは、我が商会が、この市庁舎の中に借りている部屋でしてな」
先ほどの会議室より狭い部屋の中には彼の秘書だろうか、女性が一人、出迎えのために待機していた。
そうしてソファに腰を下ろし、出されたお茶菓子に、おおっ！とミーアが歓声を上げる、という……まぁ、いつものやり取りを経て……。
「改めまして、老人の話にお付き合いいただきまして、感謝いたします」
ビオンデッティは殊勝な口調でそう言った。それから、深々と頭を下げる。
その様子を見て、ミーアはピンとくる。
「上手くまとまったようで何よりでしたけど……。もしや、あなたの言葉はわざとだったのかしら？」
「ふふふ、よくおわかりになられましたな」
顔を上げた時、老商人の顔には、悪戯っぽい笑みが浮かべられていた。
「バルタザル殿より、ミーア姫殿下の聡明さはよく聞き及んでおりましたゆえ、一芝居打たせていただきました。いや、一芝居……というか、みなの思っていそうなことを、代弁しただけですが……」
ビオンデッティがしたのは、ミーアの予想と大体の部分で合致していた。要するに、商人たちを説得するため、彼らが思っていそうな疑問をあえて形にして、それをミーアに論破されることで、話をまとめようとしたのだ。
「申し訳ありません。ミーアさま。バルタザルが同行できていれば、もっとしっかりと根回しできたのですが……」

そう頭を下げるルードヴィッヒである。
これが、正式な会談であれば、事前に彼ら文官たちが状況を詰めるべきであったのだが……、今回の急なセントバレーヌ行きに、ルードヴィッヒらは、完璧には対応できていなかったのだ。
「仕方ありませんわ。今回は急な旅でしたし。それに、バルタザルさんは赤月省所属でしょう？　帝国内の食料事情を把握するので忙しいのではないかしら？」
肝心要の帝国内で飢饉が起きては一大事。事の軽重を見誤ってはいけない。ミーアは自分ファースト、断頭台回避ファーストの人であり、その断頭台が立つのはほかならぬ帝国なのだ。
「ほほう、ということは、やはり、帝国内でも食料の不足が……？」
「ええ。他国とあまり状況は変わりませんわ。ただ、貴族というのは、しばしば、民の空腹に無関心なものですから、状況を逐一把握しておきたいと思っておりますの」
「なるほど。それで、民の間に広がる不安感をお気になさっていたと……」
ミーアは、静かに頷いてから、
「ところで、ルシーナ司教との仲を取り持ってほしいとのことですけれど……いったい、なにがどうなっておりますの？」
ミーアの興味はそちらに移る。はたして、このセントバレーヌで何が起きているのか……。そのことに女神肖像画は関係しているのか、など、頭を使う機会は色々あるのだ。
この場が終わってから、楽しくグルメ観光ツアーに出るためにも、今は頭の使いどころなのである。
「そうですな。我ら商人組合の施策について、最近、少々、介入の度合いを強めておりまして……例えば、このような話がございました」
それは、とある孤児院についてのことだった。
古くからあるその施設は、もともと商人組合によって建てられたもの。時代を経て、周りの区域の開発が進む中、ポツンと取り残さ

れた施設だった。
老朽化が進む孤児院で預かっている子どもは、十名に届かない程度。建物の傷みを勘案し、子どもたちを他へ移し、建物を取り壊そうという話が立ち上がったのだという。
「けれど、ルシーナ司教は……古い孤児院を取り壊すことに反対され、あろうことか、商人組合の提案を握り潰してしまいましてな」
哀れげな顔で言うビオンデッティに、ミーアは小さく笑みを浮かべ……。
「なるほど。頑迷なる司教が、古くなった孤児院を取り壊すことに頑なに反対し、商人組合の邪魔をした……と」
それから、わずかに目つきを鋭くして……。
「それは、一面的な言い分ですわね」
誰かを悪く言おうと思えば、いくらでも言えてしまうもの。
革命の時期、ミーアに立った悪評は一面真理ではあっても、ミーアのすべてではなかった……っと、声を大にして主張したいミーアである。
飢饉で死者を多く出した村に、慰問に行った時……。確かにアピールの側面があったことは否定できないが、そこに一切の思いやりも、心痛もなかったかと言われるとそんなはずもない。
そんなかつてのミーアですら、自身の行動に一定の正しさを持っていたのだ。であれば、ルシーナ司教が、何の理由もなく反対していたとは思えない。
「物事にはいろいろな側面がある。ルシーナ司教が反対したのだとすると、彼なりの理屈があったのではないかしら？」
ニヤリ、とビオンデッティは口元に笑みを湛える。
「確かに。それを進めようとしていた者たちは、配慮を欠いておりました。計画では、孤児院は取り壊され、そこには新しく商業施設が作られることになっていた。そして、子どもたちは、別々の孤児院に預けられることになっていました」
「家族同然に生活していた孤児たちを、離れ離れにするなんて……」

小さくつぶやいたのは、ミーアの後ろに控えていたアンヌだった。弟妹の多いアンヌのこと、家族間の絆については、人一倍敏感なのだ。

「そう……。彼らは孤児院を、子どもに衣食住さえ与えていれば役割を果たせる場所だと見なしていた。別の孤児院でそれらを用意できるのだから、それで満足すべきだ、と。一緒にいたいだとか、家族としての絆だとか……そんなもの気にする必要はない。与えられる者は、贅沢を言わず我慢するべきだ……と、まぁ、そのような考えがあったことは事実でしょう」

商人たちと、ルシーナ司教との差。

「義務として最低限は与えなければならないと考える者」と「最善を与えることが正しいと信じ、できうる限りの良い物を与えんとする者」との差。

両者の溝は埋めがたく……されど、

「商人組合と、ルシーナ司教とのお考えには差異があった。ゆえに……妥協点を探るべきだった。そもそも、ここはヴェールガにあってヴェールガにはあらずの場所。であれば、ルシーナ司教は意向を匂わせるにとどめ、商人組合はそれを忖度し、計画を修正する。それが、今までのやり方でした」

子どもたちにとって必要なものは何と考えるか。ルシーナ司教に条件を出させ、その条件をクリアする形で計画を修正する。

その努力をせず、初めから計画を取り潰すというのは、商人たちには受け入れがたいことであった。

「まぁ、もっとも……今までの司教の中には、我らの計画を全面的に支持し、一切の異を唱えず、かえって孤児たちの説得に動いてくれそうな方というのも、ままおられましたが……。ともあれ、我ら商人組合と派遣司教とは、互いの意向をすり合わせつつ、物事を進めてきたのです。が……」

ビオンデッティは悩ましげな顔で、深々とため息を吐いた。

第八十九話　セントバレーヌの現状報告2

「ミーアさま、少しよろしいでしょうか」
ルードヴィッヒから発言の許可を求められ、ミーアは静かに頷いた。当然だ。知恵袋ルードヴィッヒの言葉を封じていいことなど、何一つないのだから。
――ふむ、ルードヴィッヒがどう見てるのか、興味がありますわね。それに、新しく運ばれてきたお茶菓子にも……。
テーブルの上には、新しいお茶と、先ほどとは違った焼き菓子が載っていた。
「失礼ながら、そういった不和は、時間をかけてゆっくりと解決していくものでは？」
ルードヴィッヒは怪訝そうな口調で言った。
「それこそ、ヴェールガ本国に対して訴え出るなり、他の司教を頼るなり、色々と方法はあるはず。そうした交渉事は、商人の方たちも得意なのでは？」
ヴェールガ公国がセントバレーヌを飛び地としたのは、あくまでも、この港を騒乱の種にしないため。そのために、周辺諸国に不公平感を与えるのは厳禁だ。それゆえ、本来、ヴェールガから派遣されたルシーナ司教は、そこまで強引なことができないはずなのだ。
ヴェールガ公国が利権を独占している、などと言われないために。
それに、そもそも実際的な力は、自警団を雇っている商人たちのほうがあるわけで……。
「正しい見識ですな。ルードヴィッヒ殿。さすが、あのバルタザル殿が評価しているだけはある」
ビオンデッティは感心した様子で頷き……。
「本来であれば、我々でなんとかするのが筋でしょうし、そういったことを我々が得意としているのも事実。なれど……ルシーナ司教

はなかなかにやりづらい相手なのです。なにしろ、彼には、咎められるべき点が、なにもありませんので」
ゆっくりと首を振りつつ、老商人は言った。
「彼は正しいのです。言っていることは常に正論。否定のしようがない。孤児のこともそうですが、それ以外も、彼には、道徳的に否定されるところがないのです。ゆえに、ヴェールガ本国としても、やりづらいらしく……」
商人組合が求めるのは、政治的な配慮だ。対して、ルシーナ司教がよって立つのは、神聖典によって確立された道徳的な正しさだ。
そして、ヴェールガ公国が、神を王として頂く国である以上、どちらが優先されるかは明白だった。
「なるほど。ヴェールガとしては、せいぜい、配慮を求める旨をルシーナ司教に伝えるぐらいで、本質的な解決にはなり得ない、と……」
「はい。それに……むしろ、こちらのほうが理由としては大きいのですが、いささか、周辺国に気になる動きがございましてな……」
「はて、周辺国……？」
首を傾げるミーアに、視線を送ってから、ビオンデッティは言った。
「ミラナダ王国の貴族たちに、良からぬことを企んでいる者がいると……そのような情報があるのです」
「ミラナダ王国……」
何度か耳にしたことのある国の名だった。
例の、タチアナをイジメていた貴族の子弟たちが、確か、その国の貴族だったはず……。
「ああ、というか、そもそも、シャロークさんって、その国のご出身だったのではなかったかしら」
「ええ。大商人シャローク・コーンローグはミラナダ王国のご出身です。そして、ミラナダは、このセントバレーヌの利権を争って、過去に幾度も紛争を起こした国の一つです。実際に、セントバレー

ヌを手中に収め、その莫大な富を独占していた時代もあったと言われています」
その繁栄の時代があったがゆえに、シャローク・コーンローグの人気は高い。
過去の自国の繁栄を思い出させる男、シャロークは、紛れもなく民の英雄だった。
「そのミラナダ王国に不穏な動きがある……と？」
「はい。シャローク殿は、癖の強い方ではありますが、その剛腕ぶりは、商人たちの守りでもあったのです。彼の存在が、周辺地域の王侯貴族たちから、商人たちが侮られぬように盾となっていたのです。されど……」
チラリ、とミーアのほうに視線を向けて、ビオンデッティは続ける。
「だからこそ、ここしばらくの彼の変節ぶりは、さまざまなところに影響を及ぼした」
「なるほど。わたくしの協力者としていろいろと動いてもらっていることが、セントバレーヌにおける彼の存在感を薄れさせて、ミラナダ王国の貴族たちが、これを機になにかしようとしている……と？」
ミーアの問いかけに、老商人は苦笑いを浮かべ。
「あくまでも、その可能性がある……といったところでしょうか。もちろん、ミラナダ王国がヴェールガと敵対してまで、セントバレーヌに手を伸ばすことはあり得ないとは思うのですが……。かの国に、軽はずみな行動をさせないためにも、ルシーナ司教と商人組合の協力関係をしっかりと見せておかなければならない、と考えているのです」
今は、独立都市セントバレーヌが一丸とならなければいけない時……少なくとも、外部にはそう見せなければならない時だ、と、ビオンデッティは訴えていた。
「実のところ、レムノ王国のポッタッキアーリ侯にもお力を借りら

れればと思ったのですが、上手く行きませんでな……」
セントバレーヌの安定の要因は、主に二つある。
一つは、ヴェールガ公国の飛び地という立ち位置。もう一つは、周辺国の軍事的拮抗だ。
すなわち、セントバレーヌは、ヴェールガに反し、なおかつ他国と戦争してまで維持するべき土地か、ということ。あるいは、それが可能か、ということだ。
ヴェールガに反した時点で、自国は正当性を喪失している。逆に他国には恰好の攻撃材料を与えることにもなる。
セントバレーヌに別邸を置くポッタッキアーリ侯に近づこうとしたのは、レムノ王国の武力を背景に、ミラナダ王国を牽制する狙いであった。
さて……話を静かに聞いていたミーアは、そっとルードヴィッヒのほうに目を向ける。っと、その視線を受けたルードヴィッヒが、小さく頷くのを見て……。
――ふむ、どうやら……ビオンデッティ商会長の言葉には聞くべきところがあるようですわね。
ルードヴィッヒのお墨付きがあるな、間違いなかろう、とばかりに頷き返して……。
「ええ、そうですわね。わたくしにできることがあるかはわかりませんけど……ラフィーナさまに相談すれば、なにかできることもあるかと思いますわ」
とりあえず、ルシーナ司教への執り成しを了承しておく。さらに……。
「ところで、実は、わたくしのほうで、もう一つお聞きしたいことがございますの。お知恵をお貸し願えるかしら？」
小さく首を傾げつつ、ミーアは言うのだった。

第九十話　独特のアレンジを好む画家の噂

「実は、絵描きを探しておりますの」
単刀直入に言えば、ビオンデッティは目を丸くした。
「絵描き……といいますと？」
ミーアは一つ頷いて、続く言葉を口にする。
「本の挿絵を描いていただくための絵描き、ですわ」
実のところ、ミーアは少しばかり迷っていた。
目の前のビオンデッティは、ある程度は信頼が置ける人物のように見えるが……。さりとて、マルコ・フォークロードのように全幅の信頼を置くには至っていない。読み友クロエの父に抱く信頼感と、今日初めて会った人間に抱く信頼感では同じにはならないわけで……。
――まして、この方には、帝国革命時にお会いしたわけでもありませんし……。
要するに、彼を信じるには情報が不足しているのだ。
幸い、絵描きを探す別の理由があるので、そちらの方面で聞いてみればいい。ということで、ミーアは、澄まし顔で続ける。
「先ほどの会議場でもお話ししましたけれど、食べ物の栞。読み聞かせに使う本には、良さそうな挿絵をつけようかと思いますの」
「なるほど。大きめの絵を用意して、みなに見せながら読み聞かせをする、というのも良さそうですな」
ビオンデッティが興味津々に目を輝かせる。政治的な話もできるものの、元より彼は商人だ。商売的な話になると、さすがに、目つきが鋭くなっていた。
「ええ。イメージを助けるためにあったらいいな、と思いまして。とても幻想的なお話なので、そういったものが描けるような……想像力に優れた描き手が好ましいと思いますの」

ミーアは、例の女神肖像画を思い出しながら言った。
あの、キラキラした、極めて幻想的な絵を描くような人間だ。きっと、そういった作風の人物に違いない……。他にも似たようなものを描いているはずっと、想像するミーアである。
「なるほど……。そういうことでしたら……そうですね。詳しい者にあたらせてみましょう」
何事か考え込むように、腕組みをしながら、ビオンデッティは続ける。
「いや……そういえば、絵描きといえば、ヴェールガ公爵家をクビになった画家が、セントバレーヌに落ち延びてきた……そんな噂を聞きましたな……。少し前の話ですが……」
「落ち延びてきた……ですの？　なにやら、穏やかではない言い方ですけれど……」
眉をひそめるミーアに、ビオンデッティは愉快げに笑った。
「ああ、いえ。これは誇張が過ぎましたな。あくまでも、本国から、飛び地であるこのセントバレーヌに流れ着いてきただけなのですが……。どうやら、こだわりが強い人物らしく、描きたくないものは描かない、が口癖らしくて……、どうもそれで揉めたとか……」
揉めた……そう聞いて、ミーアは静かに考える。
――ヴェールガ公爵家付きの絵描きであったのならば、信仰はしっかりしていそうなもの。はたして、わたくしを女神に見立てたりするものかしら……？　クビになった腹いせに描いたということも考えられるかもしれませんけれど……。
ううぬ、と唸りつつ、ミーアはビオンデッティに目を向ける。
「ちなみに、元公爵家付きの画家ということは、腕前のほうはかなりのもの……と？」
「それはもちろん。なんでもラフィーナさまの肖像画家の候補になったこともあるほどだったとか……。まぁ、酒場でやけ酒がてら言っていたことらしいので、真偽のほどは定かではありませんが……」
「まぁ、あのラフィーナさまの肖像画を……。本当でしたら、大し

たものですわね」
　ヴェールガ公爵が毎年気合を入れてばらまいている聖女ラフィーナの肖像画である。関わる絵描きは誰も腕利き揃いのはずだった。
「ただ、一度だけ、金のために描いた絵は、なかなか見事なものでした。その商人の妻を、少々、その……独特のアレンジを施して描いたとか。大変、夫婦仲が良い商人だったので、見たこともない妻の姿にご満悦だったとか」
　話の内容の割に、なにやら、苦笑いのビオンデッティ。
「もしや、あなたも、その絵を見ましたの？」
「ははは、実は自慢されましてな。私も描いてもらえばいいと勧められたのですが……。あいにくと妻を失ってしばらくたちますのでね。残念ながら、機会に恵まれませんでした」
　独特のアレンジ、という言葉を聞いた瞬間、ミーアの脳内に、ちょっとアレなことになっているラフィーナの肖像画が思い浮かんだ。
　具体的に、どうアレなことになっているのかはわからないが……、こう、独特な感じで、アレな感じになっているのだろうことが、なんとなく想像できてしまって……。
「そう……やっぱり、ラフィーナさまも、ご苦労されておりますのね。ちなみに、その絵ですけど、表面がキラキラ輝くような加工がなされていたりは……」
「おや、よくご存じですね。確かに、それは、彼女の独自の技術らしいと聞きました。あれほどの技術を持ちながら、肖像画家になれないとは……。やはり、ヴェールガ公オルレアンさまの理想は、とても高いということなのでしょうな」
　ビオンデッティの言葉に、ミーアは生暖かい笑みを浮かべてから、
「え、ええと、まぁ、それはともかく彼女……？　の、お名前を聞いてもよろしいかしら？」
「ああ、確か……シャルとかなんとか……言っていたような気がいたしますが……」
　ビオンデッティは眉間に皺を寄せることしばし……。

「時折、酒場に現れるということですから、後で行かれてはいかがでしょうか？　なんでしたら、我が商会の中で、顔を知っている者をつけますが」
「ええ。そうしていただけると助かりますわ。ただ、その方に決まるかは未知数ですので、ほかにも絵描きに詳しい方を紹介していただけるかしら？」
女神肖像画の件はもちろんのこと、エリス・リトシュタインのデビュー作につける挿絵なのだ。
思い出深い「貧しい王子と黄金の竜」に変な絵はつけられない。
「最高の絵をつけたいと思っておりますの」
そう言って、ミーアはニッコリ微笑んだ。

第九十一話　ポッタッキアーリ侯邸にて……

レムノ王国の侯爵、ポッタッキアーリの別邸は港のほど近くにあった。
雑然とした街並みに突如現れる豪邸、その違和感に、シオンは眉をひそめた。
「レムノ王国の貴族は、比較的、質実剛健というか……こういった贅を凝らした造りの家は好まないものだと思っていたが……」
「この商人の町に住んでいれば、自然と染まってしまう、ということなのかな……」
苦笑いを浮かべつつ、アベルは屋敷のほうに目を向けた。
ちなみに、他の面々もぞろぞろ後ろについてきている。
「以前、見たことがある、ワラウツボというのが、大きなミミズに牙を付けたような見た目でー、とっても美味しかったのよー」
「おっ、大きなミミズ……」
「そんな見た目なのに、食べられるんですね。やっぱり、冒険にはそういう知識も必要なのかな……」
などと、実にかしましい！
釣り好きと冒険好きが合流し、冒険した際に獲れる魚談義に花が咲いていた！
キースウッドが無言でお腹をさすっているっぽいのが、シオンの視界の端に映ったり、映らなかったりしたが……まぁ、それはともかく。
「さて、それでは、行こうか」
屋敷のほうに近づくと、門番の男たちが訝しげな視線を向けてくる。
そのうちの一人が、高圧的な態度で近づいてきて……。
「おい、なんだ、お前たちは……。ここは、ポッタッキアーリ侯爵

のお屋敷だぞ？　許可はとって……え……？」
　言葉が、途中で止まる。
アベルの顔をジィっと見つめた後、彼はワナワナと震える声で言った。
「あっ、あなたさまは……まさか……」
「ん？　ボクの顔を知っているのか……。ポッタッキアーリ侯の館には何度か来たことがあったが、もしかしたら、会話をしたことがあっただろうか……」
　首を傾げつつも、アベルは言った。
「レムノ王国の第二王子、アベル・レムノだ」
「なっ、なぜ、殿下が、ここに……」
　緊張に背筋を伸ばす門番に、アベルは苦笑いを浮かべた。
「すまないな。突然のことなのだが、少々、野暮用でね。立ち寄らせてもらった。ポッタッキアーリ侯は、おられるだろうか？」
　問われ、門番は、途端に顔を曇らせる。
「いえ、その……侯爵さまは、現在、屋敷を空けていまして……」
「ああ、留守だったか。そうだな、まぁ、約束があるわけでもなかったし……」
　セントバレーヌに来ること自体が急なことだった。本来であれば、事前に連絡を入れ、協力を仰いでいるところだったが……。
　――まぁ、そもそも、女神肖像画などという危険な物の存在を教えるのはどうかと思うから、なにか、伝え方を工夫する必要はあっただろうが……。
「あの……なにか？」
「いや……。それより、ポッタッキアーリ侯はいつ頃お戻りになるのだろう？　すぐにでも相談したい事があるのだが……」
「はぁ……あの、しばらくはお戻りにならないかと……」
「戻らない？　失礼だが、ポッタッキアーリ侯は、いずこへ行かれたのか？」
　アベルは、怪訝そうな顔で言った。

セントバレーヌは、情報という名の甘い甘い果実が集まる場所。されど、甘い果実というものは、誰しもが欲しがるもの。
耳寄りな情報を商人たちに奪われては一大事。そんなことがあってはならない、と……。
アベルの知る、ポッタッキアーリ侯は、そんな風に考える男だった。
「ええ、実は、その、レムノ王国の領地に戻っておりまして……」
「侯爵領か……。なにか、問題でも起きたのかな？」
「いえ、そのようなことは……ただ、その、少し領地の様子を見に帰っているだけでして……」
なぜか、慌てた様子で言う門番。
「そうなのか……。それならば、何日かすれば、お会いすることができるだろうか？」
「あ、さぁ、どうでしょうか……。いつお帰りかは聞いていないので……」
「そうそう。今日帰るのか、明日帰るのか……十日後か」
もう一人の門番が、軽い口調で付け足した。
「今日帰ってくるかもしれない、というのなら、しばらく、屋敷の中で待たせてもらうというのは、どうかな、アベル」
不意に、話を聞いていたシオンが口を開いた。
「なんだ、お前は……」
途端、態度が硬化する門番だったが……。
「ああ、こちらは、サンクランドの第一王子、シオン殿下だ」
「なっ、さっ……サンクランドのっ！？」
げぇっ！　と声が裏返る門番に、シオンは苦笑いを浮かべる。
「ちなみに、後ろにおわす淑女たちも、各国の姫君たちだ。失礼のないように先に言っておこうか」
「たったた、大変失礼を……」
ピンと背筋を伸ばす門番たちに、迫るように、アベルが続ける。
「それで？　中で待たせてはもらえるのかな……？」

「い、いえ、そんな……。高貴な方々を、ポッタッキアーリさまのお許しもなくお迎えすることは、とてもとても……」
「門番の君たちに判断できることじゃないんじゃないのか？　執事なり、この別邸を任せられている責任者は……」
「その者も、留守にしております。何卒、ご容赦を……」
そう言って、深々と頭を下げる門番。
「そうか……。まぁ、こちらも急に来たからな。準備が必要と言われれば、返す言葉もない。出直すとしようか」
潮時か、と、アベルはシオンのほうに視線を送る。一つ頷くと、シオンは、
「やれやれ、休憩してから、市場でもうひと遊びしたかったんだがなぁ」
っと、わざとらしく言った。
「ははは、あまりわがままを言ったら彼らが可哀想だ。やれやれ、淑女たちを少し休ませてやりたかったんだが……」
いかにも軽薄な感じで返しつつ、アベルは踵を返した。

さて、館の前を少し離れたところで、シオンは口を開いた。
「妙な反応だったな……」
シオンの言葉に、アベルは頷いて応える。
「ああ。厄介なことになった……そんな反応だった。それに、屋敷の中に入れたくないようだったが……」
「まぁ、突然、王族が訪ねてきたら、少なからず厄介だと感じるものだとは思いますがね」
茶化すように指摘したのは、キースウッドだった。
「もっとも、確かに、屋敷に入れたくない、というのは奇妙な話ですね。それに、心なしか、サンクランドの名を聞いた時に、緊張したように見えましたが……」
振り返った屋敷、刹那、その二階の窓から、誰かがこちらを見つめているような……。そんな感覚に囚われるアベルであった。

第九十二話　”きねん”してミーアの像を建てる

ビオンデッティとの会合を終えたミーアたちは、会議室に戻って来た。
画家に関する有益な情報を手に入れ、ほくほく顔で帰還したミーアであったのだが……。
「……そうです。ミーア姫殿下はその時、こうおっしゃいました」
会議場に響くティオーナの声に、軽く首を傾げた。
「そう。そう、です。静海の森でも、ミーア姫殿下は、私たちの一族のこと、助けてくれたです。それどころか皇女の町を作り、ルールー族が発展するように、と……」
ティオーナに続き、リオラの誇らしげな声が……。さらに、
「我がペルージャンでもそうです。ミーアさまは、その黄金の坂を裸足で登って、しかも……」
ラーニャの声。さらにさらに！　おおぅ！　という商人たちの歓声のようなものまで聞こえてきて……。
「あら……なにやら、中が騒がしいですわね。何事かしら……」
いまいち話の内容はわからなかったが……断片的に聞こえてきた単語に、なにやら、不吉なものを感じて、ミーアは急いで会議室のドアを開けた。
瞬間、集中してくる視線、視線、視線、視線。室内にいる商人たちすべての視線が、一斉にこちらに向いた。
しかも、その視線、その目つきが、こう……妙にキラキラしてるというか、やたらと熱量が高いというか……。
それに、ティオーナをはじめ、リオラもクロエもラーニャも、残してきたメンバーがやけに、すっきりした顔をしているのも、少々解せないものがあり……。
「ええと……クロエ、本の読み聞かせの話は、詰めてくれたかしら

？」

ミーアはとりあえず、クロエに話を振ってみる。っと……。

「はい。製本に詳しいいくつかの商会が協力してくれて、急いで本の形にすることになりました。場合によっては、読み聞かせは、本の形ではなくても良いのではないか、という意見も出ました」

「なるほど、読み聞かせには原稿だけあればいいですし、紙束のままでも問題はない、ということですわね」

どうやら、真面目に話を詰めてくれたらしい。ホッと一安心のミーア……であったのだが……。

「あとは、少し時間が余ったので、これまでのミーアさまの偉業をみなさまにも、お教えして差し上げようと……」

なにやら、きな臭いことを言い出すクロエである。それに続き、

「ミーアさまが、この小麦の大不作を予測してその対策を立てておられたこと、ルールー族の森の紛争やレムノ王国の革命を未然に防がれたこと、ペルージャンで民をどのように取り扱ったか……それ以外のことも……」

ティオーナが言う。さらに……。

「私も知らないことがたくさんあって、とても驚かされました。負けないように、ペルージャンでのお見事な立ち回りはしっかりお話しさせていただきました。あの時の素晴らしい感謝祭の舞のことも……」

「私も、です。ルールー族の森に、部下一人を連れて乗り込んだお話、しっかりしておいた、です」

ラーニャとリオラが得意げに話した。

ミーアは、恐る恐る商人たちのほうを見て……察する。先ほどの熱心な視線に含まれていたもの、それは、尊敬の念……あるいは、畏敬の念で……。

――ああ、うん。まぁ、あれですわ。オウラニアさんをこちらに連れて来なくてよかったですわ。

ミーアは、さらに考えられる最悪の事態を想像し、それよりはマ

シ……と思うことで、なんとか心の平静を保とうとする。
いわゆる、ディオン・アライアよりマシ思考法の応用である。
――オウラニアさんの口からガヌドスでのことを聞いたりしたら、さらに盛り上がってしまうところだったかもしれませんし……それに、灯台の話とか聞いたら、どうなっていたことやら……。
対抗してセントバレーヌの港にも、黄金のミーア灯台を建てるなどと言い出しかねなかったかもしれない。想像するだけで恐ろしい！
などと考えてから、ミーアは思わず苦笑する。
――いえ、さすがにそれは……。商人たちを見くびり過ぎですわね。黄金のナニカを建てるだなんて、そんな無駄遣い、利に敏い商人がするはずはありませんわ。たぶん……きっと。
なんとなぁく、自身が希望的観測にすがっているような気がしないではなかったが、ミーアは、そこで一つ咳払いし、
「いずれにせよ、協力してもらえるようでなによりですわ。みなさん、感謝いたしますわ」
「それは、当然のことです。ミーア姫殿下」
商人組合を代表して答えるように歩み出たのは、クロエの父、マルコ・フォークロードであった。
「みなにも言ったことではありますが、ミーアさまのなさろうとしていることは、我ら商人が稼ぐ土壌を守ることに繋がります。いくら一時的に金をたくさん得たとしても、その土壌を損なってしまっては意味がない。そのことがわかれば、協力を惜しむような、物わかりの悪い者など、この場にはおりません」
基本的に、フォークロード商会は、ミーアの味方だ。それゆえ、当初、マルコの発言には説得力がなかった。ミーア寄りの発言をするものと、どうしても、割り引かれて受け取られてしまうからだ。
だからこそ、先ほどは発言を控えていたわけだが……。
こうして、ミーアの叡智が明らかにされ、その言葉の正しさが明らかになった今となっては、言葉を躊躇う必要はない。
みなに現状を正しく認識させ、商人組合の意見をまとめる、調整

役を買って出る構えだった。
「そう。それならば、なにより。安心しましたわ」
ミーアはニッコリ微笑んだ。
そうだ。いろいろと、こう……、マズいことになっているような気がしないではないのだが、そんな漠然とした将来の不安を憂うよりは、今日得られた成果を喜ぶべきだろう。
――商人たちの協力を取り付け、怪しげな画家の情報も得ることができた。完全なる成果ですわ。万々歳ですわ。うん、なにも、憂う必要などありませんわ……きっと！
自分に言い聞かせるように、心の中で力説するミーアであった。

さて、後日の話であるが……。商人組合代表として、ビオンデッティから、とある提案が届いた。
なんでも、商人組合のほうで、セントバレーヌ平和祈念のための、ミーアをモデルにした白金像を建てたいとの声が上がっているとか……。
「黄金は、あまりお好きではないとのことでしたので、白金の像はいかがかと……」
などと付け足すようにして書かれた書状。ミーアは無言で、その提案を握りつぶした！
ミーアがセントバレーヌを訪れた〝記念〟に、というのならば、まだ考慮の余地はあったかもしれない。けれど、ミーアにセントバレーヌの平和を〝祈念〟されてしまうのは、ヴェールガとの仲が、大変、面倒なことになりそうなので。

議論も妥協も、余地のないものというのが、この世にはあるのだということを、改めて知ったミーアであった。

第九十三話　原点回帰を忘れずに

話は、少しだけ遡る。
それは、ミーアたちがセントバレーヌにやってくるしばらく前の出来事である。
ある男たちが、セントバレーヌの酒場で飲んでいた。
「いやぁ、助かりましたよ。来たばかりで、手持ちが心もとなかったのでねぇ」
一人は、騎馬王国の衣装を着崩した男……。
ニヤニヤと愛想よく笑う、その男は名を火燻狼という。
そうなのだ！　ガヌドス港湾国を命からがら逃げ延びた彼は、ここ、セントバレーヌまでやってきていたのだ。
帝国に潜伏することは、あり得ない。いつ帝国の叡智の魔の手が伸びて来るかはわからないし、あのディオン・アライアの剣で肩ポンされるかわからない。
では、サンクランドはどうか？　エシャールに手を出した以上、危険度が高いし、いつ帝国の叡智が気まぐれで現れるかわからない。却下。
では、ヴェールガ公国はどうか？　それも否だ。セントノエル学園からひょっこり、渡ってやってくるかもしれない。騎馬王国に戻るわけにもいかないし、ツロギニア王国は帝国に近すぎる。
いくつかの選択肢を検討しつつ、ともかく、帝国の叡智から、できるだけ遠くへ！　遠くへ！！　遠くへ！！！　っと考え、馬を飛ばした結果、こうしてセントバレーヌに流れついていたのだ。
正直なところ、これからどうするか決めかねていた彼であったが、ただ、一つ……。
「反省が、必要でしょうねぇ……」
それだけは心に誓っていた。

そう、自分には、絶対的な反省が必要なのだ。
そもそも……っと彼は考える。
「ここ最近は、どうもらしくないことをやっちまったからねぇ。あのカルテリアが下手に強かったから、どうも強引になっちまった……」
彼は謙虚に反省した。彼は反省できる男なのだ。
「やはり、ここは原点回帰。自分らしくをモットーに。一日一悪。それに、危険には絶対近づかない。罠を張るだけ張って、それが作動する時には、その場にいない。自分の手では絶対にやらない。これを絶対に守るようにするとしましょうか」
心に深く深く誓う燻狼である。
そんな燻狼だったが、セントバレーヌについてすぐに、土着の蛇と巡り会えたのは、幸運であった。
「この出会いを神に感謝……といったところでしょうかねぇ」
皮肉げな笑みを浮かべる彼に、対面の、商人の男がニヤリと笑みを返す。
「まさに、お取り計らいというものだろう。ここは、ありがたい神の港、セントバレーヌだからね」
愉快げに笑うと、二人は酒杯をかかげる。
「それでは、出会いを祝しつつ……互いに、有意義な情報交換といこうか……」
その言葉に、燻狼はピクンッと眉を上げた。
基本的に、蛇は群れない。
互いの素性を明かすこともなければ、心の内も、他人に教えることはない。相手が、たとえ同じ蛇であってもそれは変わらない。共闘することはあっても、彼らは仲間などではないのだ。
もちろん、互いの計画を邪魔しあうようなことをすることがないよう、必要とあれば、ある程度の情報を交換することはある。が、互いの破壊計画が、相互に影響し合った結果、さらなる混沌が生まれることもある。

燻狼は、それもまた一興、と、あまり情報共有を大切にしていなかった。
けれど……。
「聞いてくださいよ。実は……」
今は、情報共有したい気分だった。
誰かに愚痴りたい気分だったのだ！
それはもう、何度、やつに煮え湯を飲まされたことか……。
燻狼の半ば愚痴、半ば警告を聞いて、商人の男が眉をひそめた。
「へぇ、なるほど。噂に聞く帝国の叡智が、そこまで我ら蛇と敵対していたとはね」
「まったく忌々しいことですがね。大陸の平穏は、今となっては、あの小娘の肩にかかっていると言っても過言じゃないですね」
「なるほど。それほどまでに……。だが、逆にそれは利用できるのでは？」
商人の男に、燻狼は首を傾げた。
「ほう……というと？」
「わかるだろう。大きなものを、そのまま頬張るのは得策じゃない。割りやすいところから割って、互いに相争わせ、弱まったところを、さらに割り、相争わせて小さく砕くのが基本。では、この場合、割りやすいのはどこか？」
そう言って、商人はテーブルの上、つまみとして出された魚の切れ目にフォークを突き刺す。行儀悪く、魚の身をバラバラにしながらあ……。
「帝国の叡智の名が、大きくなればなるほど、あるいは、人々からの期待が大きくなればなるだけ、それは危険を孕んでいく……」
祈りをささげるように目を閉じ、魚をパクリ。美味しそうに頬張る。
そんな彼に、ううむっと唸った燻狼は、
「神格化ということですか。あるいは、偶像化、でしょうかね。中央正教会の権威と、それに保証された価値観……そこに、あの帝国

の叡智を使って打撃を与えると……」
我が意を得たり、とばかりに頷き、商人は話し出す。
とある画家との出会い、そして……。
「ほほう。女神の肖像画、ですか」
燻狼ほどの者にもなれば、それがなにを意味するか、よくよく理解していて……。
「なぁるほど、なるほど。つまりは、帝国の叡智ミーアと中央正教会との関係性をこじれさせようとの魂胆なわけですねぇ」
腕組みして、納得の頷きを見せた後、燻狼は難しい顔をした。
「しかし、それはやめたほうがいいと思いますけど……」
さんざん、痛い目を見させられた彼は、経験として知っている。
帝国の叡智と正面切って、やり合うのは愚策。ちょっかいをかけて、あの災厄を呼び寄せるのもまた同じ。
彼は、しっかりと学習していた。
悪事を働くならば、お月さまの目の届かないところで、それも、なるべくあちらの関心を惹かないよう、こっそりと。自ら得た教訓を、目の前の男に教授しようとして……。
ふと、商人の顔を見て首を傾げた。
「というか、もうすでに？」
「うん？　ああ。何枚か流してある。ヴェールガ本国のほうに流れるようにしておいた」
「ヴェールガ本国、まぁ……そう、でしょうねぇ。ち、ちなみに、ですけど、きちんと、司教なり、中央正教会の目につくようには……」
「値段的には、貴族じゃないと手が出ないようにはなってるさ。そして、ヴェールガの貴族は、みな、教会との繋がりが深い」
あまりわかりやすく教会に届けたり、通報したりすれば、それは帝国の叡智を攻撃するための捏造と思われるだろう。それは、まぁ、わかる。
聖女ラフィーナはミーア姫の無二の親友と聞くし、きっとミーア

をかばうだろう。
だからこそ、自分と関係の薄い商人に絵を売り、その者を通してヴェールガに流し、問題を大きくしよう、というのは……わからないではない。ないが……。
燻狼の脳裏に……いやぁな予感が芽生える。
通常の国であれば、商品は都に集まるもの。されど、ヴェールガ公国においては、そうではない。
この国の流行の最先端は、とある島に集まる。
各国の貴族の子女が集まる場所……そう、あの忌々しき……セントノエルに！
……翌日、燻狼は反省を生かすべく、とっととセントバレーヌを後にするのだった。

第九十四話　名もなき蛇は眠りにつき

さて、燻狼がそそくさと出て行くのを、商人の蛇は半ば嘲笑いつつ見送った。

「いかに帝国の叡智が恐ろしいとはいえ、このようにやりやすい場所を離れるとは情けない……」

そう……この商人の町、セントバレーヌは蛇を生むにはうってつけの場所だった。

なにしろ、商売というのは、必然的に勝ち負けが生まれるもの。敗者に寄生し弱者を誘惑する、蛇が非常に入り込みやすい場所だった。

そんな町に生まれた、この商人もまた、緩やかな敗北者だった。

大商会の二代目、三代目が幅を利かせるこの町にあって、彼は、貧乏商家の出だった。

すでに、ガッチリと固まった商人組合の幹部席、市場も硬直し、そこに食い込むのは至難の業だった。

自分は、しょせん敗北者だ。

どれほど頑張ってもシャローク・コーンローグのようにはなれない。

マルコ・フォークロードのように、商会を立ちあげる力もない。

その事実が、彼を強かに叩きのめした。

いや、才能で負けるのは、まだ許せた。けれど、親からの遺産と市場基盤を受け継いだだけのくせに、大商人面する者たちに、なによりも腹が立った。

壊してしまいたい、とすら思った。

そんな時、彼の前に、一冊の本が流れてきた。

地を這うモノの書……。その本は、禁書であることすら秘密にされた、呪われた本だった。そして、彼にとっては、福音の書でもあ

った。
はじめ、商品の具合を確かめるために本を開いた彼であったが、すっかり、その本にのめり込んでしまったのだ。
そして、そこから得られる無限とも言える知識により、彼は悟ってしまった。
「商人の理というのは、なんと脆弱なものなんだろう……」
それは画期的な発見であった。
商人の理……その合理性は、一見すると強固なものだ。
金がある者こそが力を持つ、金がある者こそが正義。それは絶対的な真理に見える。彼の目の前にいつでもそびえ立つ、それは高く分厚い常識の絶壁であった。
されど……蛇の知恵は言う。それは中身のない、揺らぎやすいものであるのだ、と。
金を増やすことが正しい。金は力だ。力が増えるのは正しいことだ。
力が増えれば、できることだって増える。それが間違いであるはずがない。
……だが、では、増えた金、あるいは“できること”の中からなにを選択して使うのか……そこに対する答えが、この理には存在しない。
十の金を得るため、一の金を使い、得られた十の金を使って、百の金を得んとするという論理。それは、ただ、なにかを増やすためだけの理屈で……。増やした物を何に使うのが正解かの答えは、そこには存在しないのだ。
商人の理とは、芯のない、ただ増やすためだけの理屈なのだ。
――だからこそ、操りやすい。芯がなく、左右にゆらゆら揺れる脆弱な理であればこそ……。
彼は……蛇導士ではなかった。
ただ、地を這うモノの書の知識を用いて、既存の市場を破壊して、儲けを出そうとする打算的な協力者であった。その程度の協力者で

さえ、蛇の一員として秩序の破壊に邁進するからこそ、蛇は恐ろしいとも言えるのかもしれないが。
ともかく、そんな彼であったから、肖像画を売った件には、そこまで深い意味はなかった。
せいぜい、混乱が生じれば、それに乗じて儲けが出せるかも……ぐらいの考えだった。
市場が既得権益で固められているならば、それが壊れるような混沌を。そのような考えから、軽い気持ちでやってみたことであったのだが……。
それに誘われるようにして、意気揚々と、ミーアがやってきたっ！
――どっどっど、どういうことだ！？
彼は大いに狼狽えた。
なぜ、このタイミングで、あの帝国の叡智がセントバレーヌに来るのか？　なにをしにきたのか……？
――あの肖像画の件を察して……いや、しかし、そんなことが、あり得るのか？　あり得ないだろう、そんなこと……。
笑おうとした彼の脳裏に、火燻狼の愚痴が過る。
長年、他の蛇たちが立てた計画のすべてを平らげ、台無しにする悪夢……帝国の叡智。
――偶然なはずが、ない……！
即座に、彼は自身の考え、あるいは、希望的観測を捨てた。にもかかわらず……皇女ミーアは肖像画のことには、まったく触れなかった。犯人捜しをしようという様子もない。
ミーアがやったこと、それは……彼の予想より遥かに最悪なことで……。
最悪なこと、すなわち、商人の理に……芯を通してしまったのだ。
帝国の叡智は、ただ、金を儲けることを正義とした理屈に、儲けた金をこう使うのが正しい、という芯を通してのけたのだ。
「わたくしの、好意と尊敬を買いなさい」
と堂々と、商人たちにもわかる理屈で語りかけ、それによって、

金の「正しい」使い方を示してみせたのだ。
働きやすかったはずの場所が……今や大きく変えられようとしていた。
商人の理は、フワフワした、芯を持たず、流されやすいもの。だからこそ、ミーアの示した道は、商人たちにとって衝撃的であった。
それは、その蛇自身にすら、強い衝撃を残した。否、商人の理の本質を理解している彼だったからこそ、なおのこと、ミーアの言葉は衝撃的だった。
彼女の堂々とした、統治者としての答え、それは、完全な正論で、商人たちの心の飢えに、答えるものでもあった。
金儲けに傾倒した商人たちでさえ、その心には良心があるのだ。完全に心を殺し、金儲けに徹することなど、人にはできない。だから、大部分の商人たちは、その渇望から目を背け、できるだけ気にしないようにして、商売に勤しんでいた。
商人の理のど真ん中、そこには何もないのだということ……金を効率的に儲けたとして、それが世界にとってどのような意味を持ち、自分にとってどのような意味を持つのか……。その重要な部分が決定的に欠けているのだと、それに気付かぬふりをして。
大切なことから目を逸らし、ただ目の前の商売にのみ目を向ける。
ミーアの言葉は、まさに、その商人の渇望に応えるものだった。
――ああ、そうか……。これが、かの強欲なる大商人、シャローク・コーンローグをも手中に収めた帝国の叡智……。
彼は、思わず舌打ちしそうになる。
できるだけ目立たないように、息を潜めていたが、これ以上は黙っていられない。
商人組合の常識が、帝国の叡智によって書き換えられる前に、なんとか、場の空気を悪くするべく、隙を伺う。が……。
ふと、そこで、気付いてしまう。
――俺は、金儲けして、どうしようというんだ……？
既存の秩序を破壊し、その間隙をついて商売する。

莫大な金を儲け……その金で、秩序を破壊する？
それは否だった。彼は心から蛇ではない。ただの、積極的な協力者だ。蛇から利益を得られればこそ、その考えに同調するだけであって……行くところまで行く破壊には、興味がない。
ならば……それならば、その儲けた金でなにをする？
美味い物を食うか？　巨大な城でも買おうか？　宝石、美術品に囲まれてみるか？　美酒に酔い、美女に酔ってみようか……。
思いつく限りの富を手に入れた男、シャローク・コーンローグは、嬉々として、積極的にミーアに協力しているというのに……？
彼の心は揺れていた。商人の理に芯が通っていないように、彼の理にも芯は通っていなかったのだ。
「う……うう……」
彼の胸の内、蛇は静かに息を止める。
されど……肖像画と共に放たれた蛇は、すでに動き出していた。
混沌を求めて、次なる場所に、静かに音もなく……。

第九十五話　情報共有

市庁舎での会合を終えたミーアたちは、その後、アベルたちと合流した。
互いに情報共有を図りつつ、海鮮食べ歩きツアーを断行。酒場が開くまでの時間を潰すことにする。結果……、
「ふむ……。海藻を干したもののスープ……これはなかなか。塩味が効いてて素敵ですわね。それに、貝というのは、やはり、キノコに似ておりますわね。コリコリのこの食感、たまりませんわ」
「この貝類も干せば、保存が効きますー。それに、海藻類も輸送には良いように思いますねー。どちらも釣りの面白さがないのが欠点だとは思いますけどー」
などと言うオウラニア班からの報告。
「なかなか、上手くはいかないな。レムノ王国のツテをたどろうとしたが、アテが外れた」
「ああ。だが、侯爵邸の雰囲気は、少し気になるところがあった。注意が必要かもしれない」
王子たちからの報告。さらにさらに、
「ミーアお姉さま……ボクは決意しました」
珍しく真面目な顔で言ってくるベルに、ミーアは首を傾げる。
「あら？　どうかしましたの、ベル」
「はい！　帝国で……船を買いましょう！　世界の果てを冒険できるぐらいおっきい船を……。できれば、ボクの時代ではすでに乗れるように完成していて、すぐにでも旅に出られれば……」
などとちゃっかりベルから、どうでもいい報告と提案を受け……。
それからミーアは、スープを飲み干し、ホッとため息。レアとリオネル推薦の店の味は、さすがだった。
――これは、料理長にお願いして研究の余地がありそうですわ。

作り方を教わって……。
帝国臣民を愛する皇女ミーアは、自国の食文化の発展に一切の余念がないのだ。
まぁ、それはさておき……。
「すまない。いくつか、絵画を扱っていそうな店も回ってみたんだが、そちらも空振りだった。ポッタッキアーリ侯爵の協力を得られれば、もう少し有益な情報が手に入ったかもしれないが……」
「仕方ありませんわ。町を歩いて肖像画を探すというのは、難しいものでしょうし」
それに、このメンバーを引き連れて町を歩くのは、大変だったでしょうしね……と心の中で付け足すミーアである。
「それよりも、先ほどのビオンデッティ殿の話にも出てきましたが……ポッタッキアーリ侯の動向は、気になりますね」
ルードヴィッヒが難しい顔で指摘する。
ミラナダ王国に対する牽制として、レムノ王国に動いてもらえるよう働きかけを行ったというビオンデッティだったが、ポッタッキアーリ侯は、商人組合の希望通りには動いてくれなかったということだった。
「それは、とても奇妙な話だ。本来であれば、商人たちに借りを作る絶好の機会なのに……」
「ポッタッキアーリ侯の性格に合わないでしょうか？」
ルードヴィッヒの問いかけに、アベルは少しだけ考えて……。
「逆に、ここで力を貸さない理由がボクには思いつかない」
「だが、レムノ国王との関係はどうなんだ？　アベル。レムノ王国の中央政府との仲が上手く行っていないというのならば、勝手に私兵を動かして他国との緊張を高めることは、好ましくないと思うが……」
シオンの言葉には、アベルは小さく首を振った。
「戦端を開けば、むしろ、誉と言われるかもしれないな。ヴェールガ公国のセントバレーヌを守るための戦だ。大義名分としては十分

だろう」
「にもかかわらず……兵を動かすそぶりを見せなかった……。確かに奇妙ですね」
眼鏡をそっと押し上げて、ルードヴィッヒがつぶやく。
「あの……」
その時、手を挙げたのは、ティオーナだった。
「兵を動かすにも、食料がいると思います。それが不足しているということは……」
その問いかけにもアベルは首を振った。
「恐らく、牽制する目的で兵を動かするぐらいならば問題ない。それに、セントバレーヌの依頼で兵を動かすのだから、兵站の相談にも乗ってもらえるだろう」
「逆にいえば、ミラナダ王国に不穏な動きがある、というのは、食料事情から判断したんでしょうか？　兵を動かすために食料を大量に買い込んだから、とか……」
首を傾げるラーニャに、ミーアは苦笑いを浮かべた。
「そういえば、サンクランドでも、疑われましたわね……」
「ああ、そうだったな……。ということは、ミラナダも単純に、食料不足に備えて溜めていただけ、ということも考えられるか？」
シオンが腕組みして、難しい顔をした。
ミラナダ出身の者は、セントノエルにもいる。ミーアの警告を受けて、食料の備蓄に努めていた者もいるかもしれない。
「まぁ、ミラナダのことがどうであれ、商人組合とルシーナ司教の間が平和であることは良いことですわ。女神肖像画のこともですけれど、両者の仲を取り持つためにも、少し動かせていただこうと思いますけれど……」
っと、それから、ミーアはリオネルたちに目を向けた。
「ルシーナ司教は、本当に商人たちとの仲が悪いのかしら？」
その言葉に兄妹は、互いに顔を見合わせて渋い顔をした。
「険悪な仲……とまでは言いませんが、父は、あまり商人たちのこ

とを信用していないようではありますね」
代表して口を開いたリオネルだったが、言葉は実に歯切れの悪いものだった。
「まぁ、いずれにせよ、そちらは追い追いですわね。とりあえず、この後は、例の画家ですわね。上手く出会えればよろしいのですけど……」
小さく息を吐くミーア。その顔は、ちょっぴり憂いを含んでいるように見えた。心労が絶えない様子のミーアに、同情の視線を向ける面々であったが……。
ミーアがちょっぴり、お腹をさすりつつ、
――ふぅ、少し食べ過ぎましたわね。
などと思っていることに気付く者はいなかった。
否っ！　ただ一人、アンヌだけはこっそりその姿を見て……。
「今夜のお食事を少し減らしていただいたほうがいいかもしれないわ」
心のメモ帳に書き込むのであった。

第九十六話　画家シャルガールの憂鬱（前書き）

月曜日ですが、久しぶりにミーアが出ません。
たぶん、かき氷の食べ過ぎで休んでます。
明日から普通に出ます。

第九十六話　画家シャルガールの憂鬱

セントバレーヌの外れ……。廃屋と見まがうばかりの安宿にて。
固く小さいベッドの上、その女性は目を覚ました。
年の頃は、二十代の半ばといったところだろうか。整った顔立ちの女性ではあったが、長い栗色の髪には、くしゃくしゃに寝癖が付き、その目の下にはうっすらと隈が目立っていた。
「やっぱり、寝にくいですね……このベッド」
少し前まで滞在していた、公爵邸とは程遠い環境に、彼女……シャルガールは深々とため息を吐いた。
しばらく前、ヴェールガ公国の公都に住んでいた頃とは、全く違う環境だった。
お抱えとはいえ、一画家に過ぎない身。さすがに館を下賜されるということはなかったが、それでも与えられた部屋は清潔で、ベッドももっと柔らかかった。食べ物だって良いものをもらっていたのだ。
だというのに……。
「まったく……世の中、間違ってます。なぜ、この私がこんな目に……」
……概ね、自分の責任ではあった。
「各国で売られるものだし、民草の目にも触れるものなので、もっと大人しいものにしなさい」
ラフィーナに天使の衣装を着せた肖像画を描いた男が言った。
「そうだそうだ、こんなヘンテコな衣装、許されるわけがないだろう！」
ラフィーナを伝説の人魚に見立てた男が、頷いていた。
シャルガールは、納得がいかなかった！
……まぁ、それについては、ちょっぴり同情の余地がないではな

い感じもするが。
ともかく、シャルガールは、批判に負けずに描いた。同じテイストの絵を何枚も描いて、描いて描きまくった。
衣装の色も桃色、青色、緑色、黄色、といろいろと変えてみた。
スカートを少しだけ長くしたり、お腹を出してアクティブにしてみたり……いろいろ工夫したものの、それらの努力は一切受け入れられることはなかった。
「私の美を理解できないとは、なんて蒙昧なんでしょうか……奴らは芸術のなんたるかをわかっていないのです……」
憤慨した彼女は、ついうっかり、主任の肖像画家に悪態を吐き、自分から公爵のところを飛び出してしまったのだ。
「世の中、間違ってます……」
そうつぶやく彼女の脳裏に、不意に師匠の言葉が思い出された。
「シャルよ。問いましょう。美とはなんですか？」
シャルは胸を張って、その問いに答える。
「決まっています、先生。私が美しいと思うものです。私が、そう感じるもの。それこそが美です！　それを絵に描き続けることこそが、私の生きる意味です」
彼女には強い自我と自尊心があった。
美の基準を決めるのは、あくまでも自分自身であった。
それ以外の何者にも決して影響を受けない。折れず、媚びず、妥協せず、ただ自分は、自分自身の芸術を極めるのみ。
ただ、己が内にある情熱に身を任せ、己が美しいと思うものを描くのみ……と。
それこそが、シャルの固い信念だった。
そんな彼女に、師は苦笑いで言った。
「それでは、あなたの美は、あなたの感性以上のものにはならないのではありませんか？」
その問いかけに、シャルは一瞬、虚を突かれる。
「あるいは、あなたの感性を理解してくれる一部の人たちにのみ通

じる価値になっていくのでしょうか？」
師は、線の細い、穏やかな笑みを浮かべて、シャルに問うた。
「そもそも人は、自分を基準とした、自分だけの美を、何物にも縛られぬ方法で、相手に伝えることができるものでしょうか？」
「やってみせます。私の絵をわかってくれる人は、必ずいますから……」
鼻息荒く言うシャルに、師匠は静かな声で言った。
「そうですか……。あなた個人の美が、普遍の美に到達することを……あなたの美の感覚が神の祝福を受けることを、祈っていますよ」
そんな師の祈りを受けて、描き出されたのが、例の、ラフィーナのちょっぴりアレな感じの肖像画だったというのは、世の無常を表す好例であったのかもしれないが……まぁ、それはともかく……。
あの時の言葉を思い出すたびに、シャルは顔をしかめる。
要するに、彼女の美は、描き出した価値は、周りの者たちに通じなかったのだ。
こだわりにこだわって、あの肖像画に込めた彼女の美は、認められなかったのだ。
さりとて、それで悔い改めて、別の美を求めようとは、今の彼女には思えない。
自分は変わりたくない、でも、認められたい……。そんな葛藤を前に、シャルはため息を吐いた。
「あー、どこかに私の才能をまるっと認めてお抱えにしてくれる、変わり物の貴族はいないでしょうか……」
なぁんて不毛なことをつぶやきつつ、彼女は身を起こした。
さすがに、夕方までふて寝をしては、腹も減る。
「なにか、景気づけに美味いものでも食べましょう」
髪に軽く櫛を通し、お気に入りの帽子をかぶる。壁にかけておいた、いささか、目がチカチカする色のローブを身にまとって、鏡で確認。
絵描きたるもの、いつでも、身なりに気を使うべし。彼女のモッ

トーである。
「あーあ、ヴェールガ公爵家のお抱えになれば、出世できる……と思ったのにな……」
切なげなため息を吐いて、彼女は宿屋を後にした。

第九十七話　神罰の理由

さて、市場の食べ歩きツアーを断行した後、ミーアたちは案内の者と合流した。
ビオンデッティが手配してくれたのは、商会が雇用している傭兵たちの長だという。
身長は、ディオンと同じぐらい。体もなかなか引き締まっていて大きい。これは、護衛を兼ねて、ということだろうか？
ミーアは、チラッとキースウッドのほうに目を向けると、
「……ん？　ああ、水準の腕前……ですかね。ディオン殿に比べると物足りないかもしれませんが……」
彼は声を潜めて言った。
「そう。それならば、まぁ、安心かしら……まぁ、危険地帯に行くわけでもありませんし」
というか……そもそも、ディオン・アライアがひょいひょいどこにでもいたらたまらないわけで……。
ちなみに、ベルとシュトリナ、レア、リオネルの年少組とご令嬢たちは先にルシーナ司教邸に戻っている。酒場に行くのは、ミーアとアンヌに加えて、ルードヴィッヒ、キースウッドと二人の王子たちである。
「本来であれば、ミーアさまや王子殿下方も酒場のような場所にお連れしたくはないのですが……」
苦い顔をするルードヴィッヒに、ミーアは笑みを浮かべた。
「あら、そう心配することもないのではないかしら？　酒場とはいえ、セントバレーヌはヴェールガ公国の飛び地。滅多なことは起こらないのではないでしょう」
ビオンデッティが護衛を一人しかよこさなかったことも、逆に言えば、それだけ治安がいいからだろう。万が一、他国の要人が危険

な目に遭えば、それはヴェールガ公国並びに、他国の介入を強めるきっかけともなる。あの老獪な商人が、そんなことを許すはずもなし。

ここは商人たちの統治でも十分に治安が維持できる平和の港。商人たちは自由を確保しておくため、その体裁を整えなければならないのだ。

「ところで、護衛といえば、ディオン殿の姿が見当たらないようだが……」

「そうですね。昨夜、周辺の見回りに行くと言っていたのですが……。専属近衛隊の一隊も連れて行っていますし、心配はしていませんが、ただ……」

と、そこで、ルードヴィッヒが顎に手をやった。

「ミラナダ方面の偵察に行くと言っていたのが、少々気になりますね。未だに、何も連絡が入らないというのが……」

「ミラナダ王国か。それは嫌な符合だ。何かしらの兆候を、彼らが掴まえたということ……か」

「まぁ、彼に限って敵に後れを取ることはないとは思うのですが……」

っと、話していると、案内役の男が一軒の酒場を指さした。あまり大きくない、どちらかといえば、今にも潰れてしまいそうな、と形容されそうな粗末な店だった。

「こちらの酒場が、彼女をよく見かける店なのですが……あの、本当に、よろしいのですか？　このような店にみなさんをお連れしてしまって……」

ビオンデッティから厳しく言い含められているのだろう、彼の顔には緊張の色が見えた。

「別に、気にする必要などございませんわ。こういったお店にこそ、美味しいものがあったりするものですわ。烏賊の干物とか、ね」

かつての猟師飯しかり。小さな店には小さな店の味がある。その土地土地に、特有の味があるわけで。

――むしろ、こういったお店のお味を楽しむことこそが、旅の醍醐味というものですわ。
そんなミーアを見て、護衛の男は意表を突かれた顔になってから、
「ミーア姫殿下は、なかなか、できますね……。干物のお味がわかるとは……」
感心した様子で言った。
さて、店に入って早々に、男が言った。
「あ、よかった。いましたよ。あの女です」
その指さす先、一人の人物が座っていた。鳥の羽がついたベレー帽、ゴテゴテと派手なローブを身にまとったその女性は、こちらに背中を向けている。
――逃げられることはないと思いますけれど……。
ミーアは、男に目配せを送り、さらに、ルードヴィッヒたちに頷いてみせた。
各自、少しだけ広がって、万が一にも逃げ出されないようにしつつ……。ミーアの両脇には、アベルとシオンがつく。
それから、ミーアは静かに声をかける。
「少し、よろしいかしら？　あなたが、シャルガールさんかしら？」
その女性は、ゆっくりミーアたちのほうを振り向く……。途端に、ギョッとした顔で跳びあがった。
「あっ、ああ、あ、あなたは……」
震える声で指をさす女性、シャルガールにミーアは確信する。
「ああ、どうやら、当たりだったみたいだね」
アベルの頷き。シオンも厳しい顔をしている。
どうやら、間違いない。彼女、シャルガールこそが、例の肖像画の犯人なのだ。
「あなたに、少しお聞きしたいことがございますの。よろしいかしら？」
そう問えば、シャルガールは、深々とため息を吐き……天を仰いだ。

「あ……ああ、そう、か……。これは、神罰が下ったということ、ですね……」
彼女の口から出た「神罰」という言葉……。それを聞き、ミーアの中で警戒レベルが一つ上がる。
つまり、それは、あの肖像画を罰されることだと認識しているということ。すなわち……。
――悪意をもって、なんらかの狙いをもって描いたと……そういうことですわね！　となると、その狙いは、わたくしと中央正教会の仲をこじれさせること……。
まったく、厄介なことを……っと、思わず恨みがましい目つきで彼女を見つめるミーアであったが……。
「私が……自らの美に誠実ではなかったから……。気が進まないモデルで、肖像画を描いてしまったから……神罰が下った、ということ……」
「うん……？」
なにやら……微妙にズレているような……それに、こう、微妙に聞き捨てならぬ言葉があったような……？
思わず首を傾げるミーアであった。

第九十八話　ミーア姫、悪意なくｄｉｓられる

「え、ええと……とりあえず、お話を聞かせていただいてもいいかしら？　シャルガールさん」
っと、話を進めようとしたところで、ミーアは気付く。例の、ビオンデッティの護衛に聞かれるのは、あまり良いことではないだろう。
そんなミーアの様子に気付いたのか、すぐさま、ルードヴィッヒが動く。
「案内、ありがとうございました。我々は、少し彼女と話がありますから、お酒でも飲んできてください」
そう言って、銀貨を渡そうとする。
「いや、しかし……職務を放棄するわけには……」
っと、目を泳がせる護衛に、
「心配は無用だ。我が従者キースウッドは、君に負けない手練れだよ」
シオンは穏やかな笑みを浮かべた。合わせてキースウッドも腰に下げた剣に軽く触れる。
「ええ。任せてください。みなさまを守るのが、私の仕事なので」
常の軽薄さを一度、引っ込めて、生真面目な口調で言うキースウッド。実に信用できそうな、誠実そうな顔を作っている。
それでも護衛は、一瞬、躊躇した様子だったが……、
「そ、それじゃあ、少しだけ……」
などと言いつつ、この場を離れて行った。
そうして、人払いした後、ミーアは改めてシャルガールに話しかける。
「実は、わたくし、セントノエルで、ある肖像画を……」
「……はい。私が描いたもので間違いありません」

シャルガールは、抑揚のない声で答えた。
――あら、すごく簡単に認めますのね。手っ取り早く手助かりますわ。
満足げに頷くミーアであったが……。そのうえ……。
「恥ずべきことをしてしまったと思っています」
ひどく反省した様子でうつむく。
「うんうん、そうですわね。まぁ、悔い改めるのはとても大切なこと。悪いところがあれば、直すのが大事ですわ」
その大切さは、ミーアもよくわかっている。
「私は、私の美の感覚を裏切り、描きたくないものを描いてしまったのです。気が進まないのに、金のために描いてしまいました」
――ふむ、描きたくない、気が進まない……。まぁ、ヴェールガの中央正教会に反旗を翻すような肖像画ですし、描きたくない、気が進まないというのはわかりますわ。お金のために仕方なくなら、悪い人ではないのかしら……？
そう思いかけた時だった。
「美しいと思わないものを描いてしまった……だから、神罰が下ったのです」
その言葉に、ミーア、思わず、んっ？　と首を傾げる。
――美しいと思わないものをモデルに絵を描いた……そのモデルって……あ、あら？
ミーアの様子を見て、シャルガールは首を傾げた。
「あの肖像画のことで、文句を言いに来たわけですよね。あんな適当なものを描きやがってって」
「まぁ……確かに文句を言いに来たと言えば、そうなのですけど……」
「ああ……やっぱり……。私、駄目なんです。描く対象が、私の美的感覚に反すると、どうしても、力が入らなくって……」
っと、すまなそうな顔をしたシャルガール。いかにも、殊勝な態度……ではあるのだが……。

「あ、ああ、でも、それはあくまでも、私の美的感覚に合う合わないという話であって、別に、あなたさまの顔がどうこうというお話しではありませんが……」
言い訳のように付け足してくる。どうやら、気を使われてしまったらしい。
なるほど、確かに、それはこの画家のセンスの問題なのかもしれないが……。
――しかし……画家の美的センスに合わないと言われるのも、それはそれで、複雑なような……。
ミーアは別に、自分のことを絶世の美少女とは思っていない。傾国の皇女ではあっても、傾国の美女ではない、と、慎む深く思ってはいるわけだが……。
それでも、こう……微妙にモヤモヤしてしまうのは、否定できないことなわけで……。
年頃の乙女なミーアなのである。
「あの、一つよろしいでしょうか？」
とそこで、ルードヴィッヒが手を挙げた。
「ミーア姫殿下をモデルにした肖像画を、いったいどのようにして描かれたのですか？」
「え？　あ、ええ……そうですね。実は以前、ヴェールガ公爵邸で、ミーア姫殿下の肖像画を見たことがあったのです」
「ミーア姫殿下の肖像画、ですか……？」
ルードヴィッヒが首を傾げていた。
ヴェールガ公爵とは違い、ミーアの父である皇帝が、ミーアの肖像画を各国に配っている、ということはない。セントノエルにいる者ならばいざ知らず、他国の者たちは当然、ミーアの顔を知らないわけで……。
「はい。ラフィーナさまのお部屋に堂々と飾られているのを見まして。基本的にラフィーナさまは、ご自分の肖像画をあまり人前には出したがらない方なのですが、その肖像画は部屋の一番目立つとこ

ろに飾られていて。だから気になっていたんです」
　ペラペラとシャルは続ける。
「それで、お願いしたら、ニッコニコ上機嫌で見せてくれました。ラフィーナさまと一緒にミーア姫殿下が描かれているもので……どんな由来かもすごく丁寧に説明してくれました。で、その時にみたものを参考にイメージを膨らませまして描かせていただきました」
「あー……なるほどー。そんなことも、ありましたわねー」
　微妙にやる気が減退しているミーアをよそに、ルードヴィッヒが話を進めていく。
「なるほど……。つまり、ヴェールガ公爵邸で見た肖像画をモデルにして絵を描き、それを商人に売ったと……？」
「いえ、注文を受けて描きました。私がヴェールガ公爵のお抱え画家であったと、どこかで耳にした商人が、ラフィーナさまの友人であるミーア姫殿下の肖像画は描けないか？　と……」
　それを聞き、ルードヴィッヒはそっと目を細める。
「ミーア姫殿下の肖像画を、あえて描いてもらいたいと……そうですか。ちなみに、あの女神のアレンジは、あなたが……？」
「女神のアレンジ……？　いえ、あれは、女神ではありません。あれは、私の美意識の塊です！」
　どどーんっと胸を張るシャルガール。それには特に触れず、ルードヴィッヒは続ける。
「しかし、女神肖像画というタイトルは……」
「タイトル……？」
　怪訝そうな顔で首を傾げるシャルガール。
「なるほど、あのタイトルを付けたのは、あなたではない、ということですか……。ちなみに、絵は何枚お描きになったのですか？」
「五枚です。ほとんど同じで」
「五枚……なるほど。そうですか」
　ルードヴィッヒは、軽く眼鏡の位置を直しながら、小さくつぶやいた。

第九十九話　ミーア姫、アンヌの忠義の矢に射抜かれる

シャルガールに、許可なくミーアの肖像画を描かないように言い含めて、ミーアたちはルシーナ司教の館に戻った。
迎えの馬車に乗るや否や、ルードヴィッヒが口を開いた。
「彼女の話を信じるならばですが……怪しいのは彼女に近づいてきた商人でしょうね」
ちなみに、車内にはルードヴィッヒとアンヌしかいない。秘密の話をするには、もってこいの状況だった。
「ふむ……」
それにはミーアも同意だった。
「先ほどの彼女の様子を見ていると、そんな感じがしますわね。とぼけているようには、思えませんでしたし……」
「ただ、その商人が純粋に金儲けのためにやったのか、悪意を持ってやったのかは気になるところですが……」
ルードヴィッヒの言に深々と頷き、
「蛇の策動というわけですわね……ぐぬぬ、厄介極まりますわね……」
「そうでなかったとしても、面倒なことには変わりはありませんが。なんの悪意もなく、純然たる好意でやることが、ミーアさまのご計画を損じることだってあるのですから」
「ふむ……」
腕組みしつつ、ミーアの脳裏に黄金の何かが、次々と過った。
像に始まり、灯台に終わる、純然たる好意でなされんとする、その黄金のなんとか群を思い浮かべ……。
「そうですわね。厄介ですわ」
しかつめらしい顔で、ミーアは頷いた。
「ただ、五枚で済んだのは、不幸中の幸いではないかしら？」

「そうですね。十枚、二十枚とバラまかれたら、さすがに厄介でしたが……。しかし、いずれにせよ、その商人を探し出し、事情を聴く必要があるでしょうか。誰に売ったのか……。追跡できれば良いのですが」
「ビオンデッティさんに、協力していただくのが手っ取り早い気がしますわね」
商人のことを聞くならば、商人組合に……である。
「それがよろしいでしょうね。セントバレーヌで商売をしている商人であれば、誰しも、商人組合に属しているものですし……」
「上手く見つかればいいのですけど……あら？」
っと、そこで、ミーアは気が付いた。先ほどから、アンヌがむっつり黙り込んでいることに……。
分乗している関係上、今、馬車にはルードヴィッヒとアンヌしかいない。王子たちに気を使って黙っている、ということはないはずだが……。
「アンヌ、どうかしましたの？　先ほどから黙り込んで……少し歩き回ったから、疲れたのかしら？」
そう尋ねると、アンヌはギュッと唇を引き結んだまま、首を振った。
それを見て、ミーアは察する。
――あら、これは……。アンヌ……もしかして、機嫌が悪いのでは……？
ミーア、即座に自己チェックを始める。
――なにか、アンヌに怒られるようなことをしたかしら……？
今日一日のことを目まぐるしく、目の前に思い浮かべ……特に、何も思い当たることがなかったので、改めて口を開く。
「なにか……あなたを怒らせるようなことがあったかしら……？」
ミーアの問いかけに、アンヌは、再び、唇を噛んでから……。
「申し訳ありません……ミーアさま。私、自分が、悔しくて……」
ギュッと拳を握りしめ、アンヌは絞り出すように声を出した。

「ミーアさまを、侮らせるようなことになってしまいました……」
「……はて？」
思い当たることがなくて、ミーアは思わず首を傾げる。
「侮らせる……というと……」
「もしかすると、アンヌ嬢は、先ほどのシャルガールという画家の言葉を気にしているのか？　絵のモデルとして美しくない、とミーア姫殿下のことを言っていたことを……」
ルードヴィッヒの指摘に、アンヌは重々しく頷き……。
「ミーアさまが、女神の肖像画に相応しくないだなんて……そんなこと、絶対にあり得ません！　きっと、私が至らないから……最近の髪やお肌のお手入れが疎かになっていて、それで……」
思い悩んだ様子のアンヌに、そんなことはない、と言ってやりたいミーアであったが……。
――しかし、それをわたくしが言ったところで、かえって気を使わせた、とアンヌが落ち込むかもしれませんわね。言い方が、とても難しいですわ。
っと、困り顔のミーア。それを見たルードヴィッヒが再び口を開いた。
「個人的には、アンヌ嬢の言うことに賛成だ。ミーアさまの威光、美しさが女神の肖像画のモデルに相応しくない、などと言うことはあり得ないと思う。感情的には全く納得いかないが……、しかし、合理的に考えれば、あのシャルガール嬢がそう言ったことは仕方ないこととも言える」
「……なぜでしょうか？」
アンヌがキッと顔を上げれば、ルードヴィッヒは小さく肩をすくめて……。
「美しさというのは、あくまでも受け取り手の側の、感じ方の問題だからだ。そうだな……例えば……」
っと、ルードヴィッヒは眼鏡を外し、そこに息をかける。レンズを曇らせたうえで、アンヌの目の前に持ってきた。

「これを見てもらえるとわかると思うんだが、どうだろう？　目の前が見えるだろうか？」
「いえ……その、はっきりとは……」
　困惑した様子で言ってくるアンヌに、ルードヴィッヒは一つ頷き、
「そう。目の前がボヤけてよく見えない。その結果、美しいものを美しくないと感じ、美しくないものを美しいと感じてしまう。そう言うことだってあるだろう」
　それから、ルードヴィッヒはレンズを拭いて、眼鏡をかけなおし……。
「シャルガール嬢に目の前の光景がどう見えているのか、それは彼女にしかわからないこと。彼女の感覚が、この眼鏡と同じく透明か、先ほどのように曇っているのか、それは誰にもわからないことなんだ」
　クイッと眼鏡を押し上げてから、厳かな口調でルードヴィッヒは言った。
「それに、芸術家というのは、変わり者が多いとも聞く。これは、我が師からの受け売りだが、とある異国の芸術家は、そこらに落ちている石を美しいと言い、道端の石を拾ってきては、それを作品と称しているとか……」
「え？　道端の石、ですか……？」
「そうだ。だが、よく考えてもらいたいんだが、我々が通常美しいと感じている宝石も、もとは石のようなものだ。だから、同じ石に価値を見出し、美しいと感じる者がいても不思議ではないと思うんだ。世の中には、石を宝石のように大切にし、宝石を石のように粗末に扱う、そう言う人間だっているということだ」
「ルードヴィッヒさん……」
　アンヌは生真面目な顔で頷いてから、
「でも、それでもやっぱり、最近少しミーアさまのお肌や髪のことに手が回っていなかったことは否めません。ミーアさま、今日のお風呂から、きっちりさせていただこうと思います」

そう言うアンヌに、ミーアは穏やかな笑みを浮かべて、
「ええ。頼りにしていますわ、アンヌ」
上機嫌に頷いた……のだが。
「あ、それと、あまり食べすぎは、体によくありません。本日のデザートは少し控えめにしていただきますね」
「……はぇ？」
ルードヴィッヒがいい感じにまとめてくれましたわ……などと油断していたミーアは、まさかの流れ矢に撃たれ、目をパチパチさせるのだった。

第百話　ディオン・アライアの帰還

ミーアのもとに、さらなる厄介ごとがやってきたのは、それから二日後のことだった。

シャルガールに釘を刺した翌日、ミーアは再び、ルシーナ司教に探りを入れてみた。

商人たちとの不和について聞くために、である。が、結果は空ぶり。のらりくらりとかわされた挙句、前日、控えめにしか食べられなかったデザートを改めて出されたミーアは、ご満悦で客室に戻ることになった。

部屋に戻って、ひと眠りしてから……。

「あら？　もしや、わたくし、上手く誤魔化されたのでは？」

などと気付き……。次こそはっ、と気合を入れて……。そうして迎えた日の朝。

ディオン・アライアと皇女専属近衛兵たちが帰って来たのだ。

「ミーア姫殿下、少々、よろしいでしょうか？」

その朝、ミーアの部屋にルードヴィッヒが訪ねてきた。

「失礼いたします。ミーアさま、ディオン殿から、至急、報告したいことがあるとのことなのですが……」

っと、ルードヴィッヒの後ろから、ディオンがぬぅっと姿を現した。

「失礼いたします。ミーア姫殿下。急ぎのことゆえ、そのままの格好で失礼しますよ」

入って来たディオンは、セントバレーヌに来た時と同じ、旅装束に身を包んでいた。おそらく、偵察から戻って来たその足で、ここに来たのだろう。

「着替えをする余裕もなかったので、少々臭うかもしれませんが……」

っと肩をすくめるディオンに、ミーアはむしろ、危機感を刺激される。
「別に構いませんわ。元来、人というものは、一日、二日と湯浴みをせねば臭うようになるもの。そんなもので死にはしませんわ」
帝国最強の騎士が……、あの、ディオン・アライアが急いだほうがいい、と判断する事態である。これはもう、断頭台の刃も上がり切り、気付かぬうちにそこに頭を突っ込みそうになっている、まさに瀬戸際とも言ってよいほどの、警戒すべき事態だ。
臭いだの、体が汚れているだのを、いちいち気にしている場合ではない。
「では、早速……」
っと、ここで、ミーアは気付く。
あの！　ディオン・アライアが！　急ぎで！　というほどの、やべぇ事態である。ルードヴィッヒがいるとはいえ、ここで聞いて良いものだろうか。
アンヌとルードヴィッヒしかいないこの現状、行動の指針を出すのは、当然、ミーアということになるわけで……。
――アベルやシオン……それに、リーナさん辺りの意見も聞きたいですわ。言え、それを言うなら、セントバレーヌに詳しいクロエやレアさんたちにも……。
ミーアは首を振り、
「みなで聞いたほうがいいかもしれませんわね……。食堂ならば広くてよろしいかもしれませんけれど……」
問題は、ルシーナ司教に聞かせても良い話かどうか、である。
その判断は、おそらく、ディオンから話を聞いた後、すべきことだろう。
「いえ、市庁舎……。ビオンデッティさんの商会の部屋をお借りして、そこで話を聞くことにいたしましょうか」
ミーアの判断に、ディオンは、ほう、と感心の声を上げた。
「なるほど。そうですね、そのほうが面倒がなくていい。正直、時

間もあまりないでしょうからね」
ディオンの言葉に、ミーアは再び眉をひそめる。
――時間がない、急ぎ、とは、いったいなにが起きたのかしら？
まさか、蛇の連中が襲ってきたというわけでもないでしょうに……。
首を傾げつつ、ミーアたちは市庁舎へと向かった。

幸い、ビオンデッティはミーアのお願いを快く聞いてくれた。
「我が商会に、帝国の皇女殿下のみならず、サンクランドやレムノ王家の方々をお招きできるとは……」
などと、感無量の様子のビオンデッティである。
さらに彼は、姫君たちのほうに目を向けて、
「それに、美しきご令嬢方も……。ふふふ、このような華やかな場は、老人の目には、ちと毒ですな」
「もう、お祖父さま……。そのようなことを言っては……」
軽口を叩く彼を、先日の、秘書の女性がたしなめた。どうやら、ビオンデッティの孫娘らしい。まぁ、それはともかく……。
そうして、部屋を出て行こうとする彼と秘書を、ディオンが止めた。
「ああ、できれば商人組合のほうにも話を通しておいたほうがいいんですがね……」
そうして、彼は、ミーアのほうを窺う。
「ええ、ビオンデッティさんは、いろいろと協力しあう関係ですわ。少なくとも、この、セントバレーヌに混乱を起こさせないという点においては、一致しておりますわ」
「ああ。それならば、ぜひ聞いておいてもらったほうがいいでしょう。なにしろ、事はまさにセントバレーヌの安全にかかわることなのでね」
ディオンの言葉に、ビオンデッティは眉をひそめた。
「それは……確かに聞いておいたほうが良さそうですな……」

そうして、各々に椅子と、ついでにお茶菓子が用意されたところで……（ミーアが無言でそれを要求したわけでもなければ、それが出て来るまで話を止めていたわけでは決してない。念のため……）

「それで、いったいなにがあったんですの？　ディオンさん」

ごく自然な仕草でクッキーを手に取りながら、ミーアが言った。

「そうですね……順を追って話すのがわかりやすいでしょうね」

そうして、ディオンは話し始めた。

第百一話　帝国最強の騎士の勘

時間は少し遡る。
ミーアたちのことをルードヴィッヒに任せ、ディオン・アライアはセントバレーヌを後にした。彼に付き従うのは、五人の皇女専属近衛兵たちだ。ちなみに、その全員が元ディオンの百人隊の面々である。
「やれやれ、今日は町の宿でゆっくり、と思ってたんですがね」
一人がそう言えば、別の一人が苦笑いを浮かべる。
「それは、ずいぶん贅沢なことだな。百人隊にいた頃じゃ、とても考えられねぇ」
「違ぇねぇや」
普段は、近衛兵として節度を保った口調を心掛けている彼らも、かつての仲間同士で行動するとなると、気が緩むのだろう。その口調は、少々、粗雑なものになっていた。
「ところで、ディオン隊長、一つ聞きたいんですが」
「おいおい、君たちの隊長はバノスだろう」
思わず、ディオンは苦笑しつつも、
「隊長扱いされると、なんだか、バノスの指揮権を侵害しているようで、気が引けるんだけどな」
一応、釘を刺しておく。軍隊である以上、指揮系統の混乱は命に係わる問題だからだ。皇女専属近衛隊をバノス隊長派とディオン元隊長派とで割るようなことになったら、それこそ一大事だ。
「ああ、すいません。わかっちゃいるんですが……どうも、ディオン殿と呼ぶのは、いまいち抵抗があると言いますか、違和感があると言いますか……」
「なるほど、呼び方かぁ。まぁ、適当に呼んでくれて構わないんだが……そうだな。それじゃあ、今日だけは臨時の隊長を務めさせて

もらおうかな」
そっと肩をすくめつつ、続ける。
「それで、なんだっけ？　質問があるとか言ってたが……」
「ああ、そうでした。なぜ、このタイミングで偵察に出られたので？」
わずかばかり、表情を引き締めて、近衛兵が言った。鋭い目をしたその兵は、百人隊の中でも目が良く、常に警戒を怠らぬ男だった。
「確かに、セントバレーヌの守備はいまひとつ。町を守る守備兵は、商人たちの雇ってる私兵団だ。命を張ってまで主人に仕えようって気概のない、あまり信用のおけない連中。滞在するには不安な土地ってのはわかりますがね……」
「それとも、お偉い司教さまと顔合わせするのが、気が進まなかっただけとか？」
茶化すような別の兵士の指摘に、ディオンは愉快そうに笑った。
「なかなか鋭いじゃないか。そのとおりだよ」
それから、少しばかり表情を改めて、
「しかし、まぁ、それは半分冗談だとしても、んー。端的に言ってしまうと……勘なんだよね。何か起こりそうっていう勘。別に根拠なんかはないのさ」
「ああ、勘……ですか」
その答えに、近衛兵たちは、実に嫌そうな顔をした。
「ガッカリさせてしまったかな？」
問われた兵士は、ゆっくりと首を振って……。
「いやぁ、逆ですよ、逆。ディオン隊長の勘はよく当たりますからね。静海の森しかり、ミーア姫殿下への評価しかり……」
「ああ、隊長の勘はよく当たるからなぁ」
「隊長がなにか起こるってんなら、本当に起こるんだろうなぁ……やれやれ」
頷きあう兵士たちは、みなそれぞれに……。
「面倒なことになりそうだなぁ！」

なぁんて、愚痴る。
「信用してもらってるところ申し訳ないが、本当に起こるかはわからないよ。ただ、まぁ、仮に何か起きたとして、退屈するより、いいんじゃないかな？　護衛任務なのに、その実、宿屋でゆっくりするだけなんて、やりがいがないだろう？」
「はっはっは、いやいや、最近は輸送路の護衛任務で出ずっぱりでしたからな。今回ぐらいは、麗しき貴人たちの護衛だけで済めばなぁ、なんて思ってたり……」
お調子者の一人の言葉に、他の面々が同意を示す。
「これは驚いたな。お貴族さまやら、王族やらが嫌いな連中ばっかりかと思ってたが……」
ディオンの指摘に、彼らはそれぞれ顔を見合わせてから……。
「言われてみれば、その通りですな。まぁ、貴族にも嫌な奴がいれば、良い奴もいるってことでしょうか」
「というか、我らがバノス隊長も今やお貴族さまの仲間入りを果たしましたからな」
「はっはっは。もういっそのこと勢いで、レッドムーン家の婿にでもなっちまえば、いっそう箔が付くってもんですな」
などと好き勝手に笑い合う男たちである。
「おいおい、さすがにそいつは、年の差がありすぎるだろう。どこかの恋愛小説じゃないんだから」
などと、呆れ顔を見せるディオンであったが……。
「まぁ、冗談はさておき。それで、どこに行きますかね？」
「ああ、そうだね。とりあえず……」
ディオンは一瞬、空を仰いで……。
「ミラナダ方面……かな」
つぶやくように言った。
「そいつも、勘ですか？　それとも、もしかして……なにか、においを感じてるとか……？」
空に向かい、鼻を上げたディオンに、兵の一人が眉をひそめた。

「いやいや、さすがに戦狼じゃないんでね。においはしないよ」
苦笑いを浮かべつつ、ディオンは続ける。
「半分は確かに勘。もう半分は、兵を進めるなら、ミラナダ側のほうが簡単そうだな、と思ったまでのことだ」
地図を広げ、ディオンは続ける。
「レムノ王国の側には、太い川がある。橋は架かっているが、もしも落とされれば補給を断たれるかもしれない。その点、ミラナダのほうは平野が続いている。身を隠すのにちょうどいい森もあるらしいし……」
っと言ってから、ディオンは首を振った。
「いや、だが、こいつはいかにも後付けだな。やはり一番は勘だ」
いろいろと理屈をつけてはみたものの、結局、一番の理由は自身の勘だった。ミラナダ王国の側に、なんとなくではあるが、嫌なものを感じるのだ。そして……。
「それが一番信頼できますよ、ディオン隊長。あなたの勘というやつがね」
兵たちは一様に納得の頷きを見せてから、ディオンに付き従った。
そうして、彼らが向かったのは、途中にある森のほうで……。

第百二話　それは、帝国の叡智の勘か推論か、それとも……

「……で、まぁ、その森でミラナダ王国の斥候と鉢合わせになりまして……軽く戦闘の後、全員捕縛することに成功したのですが……」

「ふむ、なるほど……。ディオンさんの勘に従って行動した結果、怪しげなミラナダ王国軍の動きを察知することができたと……」

ミーアはふむふむ、っと頷いた後……。

――こっわっ！

心の中で思わずつぶやく。

――いやいやいや、勘ってなんなんですの？　斥候というのは、偵察のことですわよね、確か。ということは、ある程度、敵に見つからないように行動する兵士なのではありませんの？　なに簡単に見つけておりますの！？

味方が優秀なのは好ましいことではあるのだが……かつて敵対したミーアから見ると、実に理不尽、かつ恐ろしい光景に見えてしまうわけで……。

――これ、いざという時のために、軽く探りを入れておくほうがよろしいかしら？

別に、ディオンのことを信じていないわけではない。彼はミーアがしっかりしている限りにおいて、守ってくれる、強力な騎士であると認識している。そう……ミーアが信じていないのは、ディオンではなく、自分なのだ。

――わたくしは、うっかりするところがありますし……。ディオンさんとうっかり敵対なんてはめになったら大変ですわ。それに、追跡者はディオンさんだけとも限りませんし、どういうふうに追跡してくるのか、きちんとわかっていたほうがいいかもしれませんわ。

素早く判断。澄まし顔で尋ねる。

「ちなみに、勘って具体的には、どういったことで追跡したのかし

ら？」
「ん？　ああ、そう、ですね……。んー……地形？　周囲の様子？　あとは、空気とか……？
まぁ、そういったものを、いろいろと、ですかね……」
ディオンは頭をかきつつ、困った顔をした。
「いろいろ……」
「正直、よくわからないんですよ。他にも無意識になにか感じ取ってるかもしれない。それこそ、冗談じゃなく、戦が起こる臭いを感じ取ってるのかもしれないんですが……それが自分でもわからない。なので、まぁ、当たるならただ勘でもいいんじゃないかって思ってますよ」
「むぅ……それは実に理不尽極まる能力ですわ」
ミーアのつぶやきに、うんうん、っと熱心な頷きを見せたのは、かつてミーアたちと敵対していたシュトリナだった。
蛇として活動していた彼女もまた、ミーアと同じように、ディオンの恐るべき力を実感したことがあるのだろう。
一方でディオンは、ミーアのほうに苦笑いを向けて……。
「いや、というか、勘について理不尽とか、ミーア姫殿下には、言われたくないですけどね」
「……ん？　どういうことですの？」
「とぼけなくてもいいですよ、今回のセントバレーヌ行きは、なにかあると思われたからでしょう？」
ディオンは顎を撫でながら続ける。
「セントバレーヌに来なければいけなかった事情はお聞きしてますけどね、こうして、ご自身が足を運ぶほどだったのか、と考えると……僕は少々疑問でしてね。そのタイミングで、ミラナダ王国の不穏な動きがあるとか……偶然とはとても思えないんですよ」
――いや、ミラナダ王国のことなんか、ぜんっぜん、知りませんでしたけど……っ！
抗議しようとするミーアに先んじて、ルードヴィッヒが口を開い

た。
「お言葉だが、ディオン殿。ミーアさまのご判断は勘ではなく、情報収集と考察、そうして得られた結論に基づく予防的な措置ではないだろうか」
ミーアが、説明のできない勘によっての行動と主張するディオンと、合理的思考によって野行動である主張するルードヴィッヒ。
だが、いずれにせよ「ミーアがミラナダ王国の怪しい動きを察知して、解決のために颯爽と乗り込んできた！」と言っているのは同じであって……。
――あっ、これは、マズいですわ……。
ミーアは思わず、ビオンデッティのほうに目を向ける。っと、彼のその目に映る光は……尊敬と、畏敬に溢れたものに変わっていた！！　頼りがいのある帝国の叡智に向けるまなざしへと変貌していた！！！
――こ、これは、厄介なことになりそうですわ。は、話を変えなければとんでもないことに……。
ミーア、大慌てで話を進める。のだが……。
「え、ええと、まぁ、それはともかく……。それで？　あなたの勘によって捕らえた斥候は、なんておっしゃってましたの？　お話しを聞いたんですのよね？」
「ああ、そうですね……。ルードヴィッヒ殿に教わった、極めてクリーンな尋問の結果、簡単に吐いてくれましたよ。ミラナダ王国軍が、このセントバレーヌに向けて進行中である、と」
「……はぇ？」
ディオンの言葉に、思わず、ヘンテコな声を上げてしまう。
「え？　いや、あの……このセントバレーヌに、ですの？　攻め落とそうとして、ということかしら？　ヴェールガの飛び地である、ここを……？」
想像の埒外の出来事に、ミーアは思わず、あんぐーり、と口を開ける。

「ヴェールガ公国に喧嘩を売るとか……なっ、なにを考えておりますの？」
混乱するミーアに、けれど、ディオンは首を振って……。
「いえ、そうじゃありません。ミーア姫殿下。彼らが敵として見ているのは……」
そうして、ディオンはビオンデッティのほうに目を向けて……。
「あなたたち、商人組合だ」

第百三話　大事なことは……

「……それは、どういう意味ですかな？　ワシら、商人組合が敵である、などと……」

「さぁて……。どういう理屈かはわからないが、彼らは、セントバレーヌを“支配”する商人組合の排除を掲げて、軍を動かしたようだよ。まぁ、王家自体らが動いたのか、地方貴族の暴走なのかは知らないけどね」

虚を突かれ、みな一様に黙り込む。そんな中、ミーアは一つのことを思い出していた。

――統治者の不正を指摘して、他国が軍事介入する……このやり方は、かつて帝国がされたことに近いですわね。あの時、サンクランドは、民の安寧という普遍的な正義を掲げて帝国に進軍しましたわ。

では、その『サンクランドの正義』を保証したものはなにか？　それは、すべての王権は、民の安寧を守るため神から権威を委託されているという、中央正教会の教え。あるいは神自身とも言えるだろうか……。

――ならば、今回の場合は……ミラナダの正しさを保証する者は誰か……彼らがヴェールガ公国に敵対したのだと言わせない……そのことを保証する者は誰かというと……。

そこで、ミーアは一つの可能性に辿り着いた。もしや……っと、リオネルとレアのほうに視線を向けると……。

なにがなにやらわかっていない様子のリオネル、対して、レアは……場合によっては司教帝の立場にすら上り詰める、明敏な頭脳を持つかの少女は……衝撃に口をわなわな、と震わせていた。

――ああ……やはりレアさんも、同じ考えのようですわね。これは、さらに面倒なことになりそうですけれど……。

それでも、誰かに否定してもらいたい、と、一縷の望みをかけて、ミーアは口を開いた。
「これは、ミラナダ王国は、この地の派遣司教……ルシーナ司教と話しをつけてある、と……そう考えるべきなのかしら？」
ミーアの指摘に、ビオンデッティはギョッとする。
「そんな、まさか……」
首を振りつつ、老人は続ける。
「それは、あり得ぬことでしょう。あり得ない」
ミーアの期待通り、彼は否定してくれたが……それはまるで、自分自身に言い聞かせているようで……。
「そうですよ。ミーア姫殿下。我が父が、そのようなこと、するはずありません。そんなことをすれば、セントバレーヌが再び戦火に包まれます」
同調するリオネルもまた、その声に力なく……。
――なんの根拠もなく、感情で否定してる感じがしますわ。
それもそのはずで、ルシーナ司教は、決して馬鹿ではない。合理的に物事を考えられる男だ。しかも、民や弱き者たちのことをきちんと考えられる男なのだ。
――ルシーナ司教が関係しているのだとしたら……しっかりと、考えてからやっているような気がしますわ。民に戦火が及ばぬよう、きちんと算段を付けているはず……。
さらに、なんとか否定して欲しいというミーアの考えを……。
「……ミーア姫殿下の仰るとおりでしょう」
知恵袋、ルードヴィッヒが無情にも認めてしまう。
「すでに話がついているのか、それとも、進軍した後に話をつける算段がついているのかはわかりませんが……ヴェールガと敵対せず、商人組合の影響力のみを排除するというのは、そういうことだと思います」
セントバレーヌはヴェールガにして、ヴェールガにあらず。この地を統治するのは、ヴェールガではない。ヴェールガはあくまでも

名前を貸しているだけであり……、そのため、実質的統治者との争いは、ヴェールガとは別のところで起きていることである、と……。
それを主張するためには、ヴェールガから派遣されている司教、ルシーナとは敵対してはいけない。彼がミラナダを敵である、と認定した時点で、ミラナダ王国はヴェールガ公国に対して敵対した、ということになるからだ。
「いや、しかし……いかに我らとの関係が悪化しているとはいえ、そのようなことをルシーナ司教がするとは思えませんが……第一、そんなことをして、ルシーナ司教になんの利があるというのですか？」
その問いに、ルードヴィッヒも頷いた。
「そう……確かにそのとおりです。それでは、商人組合からミラナダ王国へと、このセントバレーヌの権益が移るだけ……。商人組合よりもミラナダ王国のほうが御しやすしと考えただけなのか……それとも何かほかに……」
ルードヴィッヒの疑問には、ミーアも賛成だった。
もし、ルシーナ司教の側からミラナダ王国へ、商人組合の影響の排除を願い出たならば、ミラナダに借りを作ることになる。下手をすると、商人組合以上に御しづらいものにセントバレーヌの支配権を譲るということになりはしないか？
「失礼する。こちらにミーア姫がいると聞いて来たのだが……」
その時だった。部屋のドアが開き、一人の少女が入って来た。
火族の誇り高き戦士……凛とした乗馬の名手にして、族長の妹として一族をまとめ上げる威厳を帯びた人、ミーアの友でもある少女、火慧馬であった。
彼女は、ミーアを見つけると笑みを浮かべて部屋に足を踏み入れ……かけて、直後、ディオンの姿を見て、そっと踵を返し、
「どっ、どうやら、忙しそうなので、また、改めて……」
などと、とっとと逃亡に移ろうとする。が……。
「やぁ、君は火族の族長の妹君じゃないか」

いつの間に動いていたのか、ディオンは、慧馬の肩に、ポンッと剣……ではなく、手を置いた。
「ひぃっ！」
息を呑み、慧馬が跳びあがるが、そんなことには構わずに、ディオンが言った。
「なにか、急ぎの話があったんじゃないのかい？　ここにはみな集まっているんだし、また改めて、などと言わずに、話していくといい」
そうして、呆気なく捕まる慧馬を見て、ミーアは思う。
――ふぅむ、やっぱりディオンさんから逃げなければならないような事態になったら……諦めたほうがいいですわね。ということは、むしろ、そうならないようにしっかりと立ち回らなければなりませんわ。ディオン・アライアと敵対しないように……それが大事。
心にきっちり刻み込むミーアであった。

第百四話　良い秘書の資質

「慧馬さん、なぜ、セントバレーヌに……？　というか、確か、ヴァレンティナお義姉さまのところに行っていたはずではありませんの？」

いつも通り自然に、さりげなく！　ヴァレンティナをお義姉さま呼びするミーアである。まぁ、いつものことなので、それは良いとして……。

「ああ。そうなのだ。実は、巫女姫ヴァレンティナを閉じこめている塔に行ったら、そこで、ゲイン王子と護衛のレムノの剣聖と出会ってな……」

ごくごく自然に、さりげな～く、慧馬はディオンから距離が取れるミーアのそばで話し始めた。そのさりげなさは、ミーアがクッキーをペロリ、ゴクリする時に匹敵するほどの、さりげなさだった。

そうして、そのまま話し出そうとした慧馬に、ビオンデッティの秘書が素早く椅子を用意する。敏感に空気を読むことは、良い秘書の資質なのだ。

「ああ、感謝する」

非常に心のこもった感謝を告げて、慧馬はその椅子に腰かける。それから、目視でディオンの位置を確認。とりあえず、大丈夫そうだぞぅ、っとばかりに頷き、ふぅー、っとため息を吐く。

それから、ふと、その目がミーアの空いたお皿に留まった。

「ん？　ああ、そうですわね。申し訳ないのですけど、クッキーを慧馬さんにも、それとわたくしにも……」

「ミーアさま、私が行ってまいります」

すっくと立ち上がったのは、アンヌだった。よく働く、気の利くアンヌに、ミーアはニッコリ笑みを浮かべて、

「ええ。では、よろしくお願いいたしますわ」

送り出した、のだが……。
帰って来たアンヌは、慧馬の前にクッキーの載ったお皿を置き、ミーアには代わりの紅茶を置くのみだった。
「あ、あら……？」
「ミーアさまは、もうたくさんお召し上がりになっていますので……」
ニコニコ、笑みを浮かべつつも、断固たる口調で言うアンヌ。
――妙ですわ……。先日来、アンヌが……厳しくなってしまいましたわ！　おのれ、あのシャルガールという画家……許しませんわ！
すでに一皿ペロリした後にもかかわらず、そんなことを思うミーアである。鼻息荒く、ぐぐっと怒りに拳を震わせる。
まぁ……クッキーの怒りは、デザートで洗い流してしまえるのがミーアの美徳なので、まったくもって心配はないわけだが……。
そうして、クッキーを三枚ほど、パクリ、サクリとやってから、慧馬は小さく首を傾げた。
「ええと、それで、どこまで話したか……そうだ。ゲイン・レムノと出会ってな……」
「兄上と……」
本題に戻った慧馬に、アベルはわずかに眉間に皺を寄せ、
「もしや、なにか失礼なことを言われたり、されたりしたのでは……」
心配そうに尋ねる。っと、
「うん？　ああ、いや……そうだな……」
慧馬は、ううん、っと首を傾げて……腕組みして……考えることしばし。
「いや、特に、どうということはなかったな。うん。それに、蛍雷を褒めてくれたし、馬を見る目があるのには実に感心させられたな！」
上機嫌に笑う慧馬は、馬ファーストな騎馬王国の人なのであった。
「そう……か。いや、なにもなかったのなら良いのだが……」

「まぁ、そういうわけで、我はゲイン・レムノと出会い、同行することにしたのだ」
「あら？　ゲインさんと同行まで？　いったい、なぜ、そのようなことに……？」
慧馬は、ここしばらく怪我をした兄、馬駆の代わりに蛇導士を追っていた。
顔馴染みの燻狼はもちろんのこと、巫女姫のもとで鍛えられた火族出身の蛇導士は、各地に身を潜めて、活動を行っていると聞く。
その彼らを狩り出すために、いろいろ動いているものだと思っていたが……。
「ああ、それは……」
慧馬は、何事か言おうとしたが、そこで言葉を止めて……。
「いや、それは、アベル・レムノとも関係がある話ゆえ、我が気安く話すわけにもいかなかろう」
眉間に皺を寄せて、慧馬は首を振って。
「まぁ、いろいろ事情があって、同行することにしたのだが……。その向かった先が、レムノ王国南方の地、ポッタッキアーリ侯爵領であったのだ……」

領都に着いたのは、夕暮れ時であった。
レムノ王国の南西の地、ポッタッキアーリ侯の領地には、セントバレーヌとレムノ王国を結ぶ街道が存在する。
それは、さながら国と海とを繋ぐ陸の運河。海から見たレムノ王国の玄関口として、流通の要衝として発展した豊かな土地であった。
国境沿いの地でもあるため領都の城壁は高く、巨大な城門も極めて立派なものであった。にもかかわらず、その門は夜ですら一度も閉じられたことがないと、もっぱらの評判であった。
いついかなる時でも商人の出入りを妨げない。賊が侵入しないよう、街の中の巡回する兵の数を増やしてでも、流通を重要視するそのやり方は、ポッタッキアーリ侯爵領の特徴をよく表すもの……の、

はずだったのだが……。
「妙だな……城門が閉じているぞ」
赤い夕陽に照らされた城門は、完全に閉じられていた。
「ゲイン・レムノ……聞いていたとおり、お前、やはり人望が……」
からかうように言う慧馬を、ゲインはジロリと睨んで……。
「姉に聞いたのか、我が愚弟に聞いたのか、興味は尽きんところだが……。あいにく、ポッタッキアーリ候に事前に連絡を入れてはいないのでな」
それから、彼は肩をすくめてから、ギミマフィアスのほうをチラッと見る。
「それで、なぜ、城門を閉じている？　戦争でも始めるつもりでもあるまいに……」
「そうですな……。普通に考えれば、街を守る兵の手に余る凶悪な外敵が現れた……もしくは、逆に、守備兵の数を減らさざるを得ない理由があって、夜の間は閉じることにしたとか。あるいは……近々、戦があるから、城門を閉じる訓練をしている、などということも考えられますな」
「それは、なかなかに面白いことになりそうだ」
唇を釣り上げて、ゲインは城門へと向かった。
「おい……」
城門の上、見張りの兵に声をかける。
通常、そう言った役目は従者のほうがやるものではあるが、かの王子は、あまり面倒なことが好きではないのだ。
声をかけられた見張りは、ゲインのほうを見て訝しげな顔をする。
「なんだ、貴様は……」
「ふん、質の低い番兵だ。自国の王子の顔も知らんか……」
不機嫌そうに言うゲインに、その兵士は驚愕に固まる。
「なっ、なにを言っている。王子殿下がいらっしゃるなどという報告は……」
「ふん、別に問題なかろう。王の息子が行きたいと言って行けぬ場

所などないのだからな」
ニヤリ、と口元に皮肉げな笑みを浮かべ、
「とっとと、中に入れろ。それとも、王子である俺を入れられぬ理由でもあるのか？」
実に傲慢極まる口調で言うのであった。

第百四話　良い秘書の資質（後書き）

なんだか少し前もそんなこと言っていましたが、今週はミーアが盆踊りでシェイプアップに行ってる関係で少し出番が少なめです（慧馬パートです）

第百五話　戦士の勘が告げている！

領都に入った慧馬たちは、そのまま真っ直ぐに領主、ポッタッキアーリ候の邸宅を訪ねた。
「それで、そのポッタッキアーリ候というのが、例の巫女姫暗殺事件に関係しているのか？」
慧馬に問われ、ゲインの顔に暗い笑みが浮かんだ。
「そうだ……と姉上は考えているらしい。父の命を受けた貴族の、その中の一人がポッタッキアーリ候であると……」
「なるほど。それで、その巫女姫の言葉は信用できるのか？」
慧馬は鋭い視線をゲインに向ける。
「我が言うまでもないことだろうが、巫女姫の言葉を素直にそのまま受け取るのは危険だ」
「わかっている。ポッタッキアーリ候は、南部貴族の重鎮。レムノ王国の経済にとっても無視できぬ人物だ。蛇なる連中が狙うには良い人材だろうな」
かつて、レムノ王国で起こりかけた革命未遂事件……あれが、混沌の蛇なる者たちによって引き起こされたものであったとゲインが聞かされたのは、つい先日のこと。
それも姉であるヴァレンティナからの話であったが、その後、アベルにも確認をとっていた。正直なところ、弟だけが知っていたという事実は業腹であったが、すぐに気持ちを切り替える。
自分は、アベルに剣で負けた身。剣の強さに価値を置くレムノ王国の王子である以上、仕方のないことである、と。
「ところで、ゲイン・レムノ。巫女姫のことは、お前の父には話してあるのか？」
ふと思いついた、という様子で慧馬が尋ねてきた。
「はん、まさか。あの父に言えば、ヴェールガと開戦の危機を冒し

てでも暗殺に行くだろうからな」
そうだろう？　と話しを振られ、ギミマフィアスは髭を撫でた。
「さて、どうでしょうな……」
かつて、ヴァレンティナに剣を教え、その後、王より調査・暗殺の任を与えられた男は、とぼけた顔で続ける。
「今の吾輩は、あくまでもゲイン殿下の護衛ゆえ。それ以外のことに頭を使う余力などございませぬが……暗殺するかはさておき、取り返そうとするのは確実でしょうな」
「一応、尋ねておくが……ポッタッキアーリ候を口封じのために殺す……などという命は、よもや受けていないだろうな」
「ははは、さすがにそこまでは国王陛下も読めますまい。第一、此度のゲイン殿下の旅は、遊興の旅という名目ではありませんか」
「なるほど、それもそうか」
頷きはしたものの、ゲインは決して納得していなかった。
レムノの剣聖は食えない男だ。達人級の剣の腕前に加えて、その思考は飄々として実に読みづらい。警戒するに越したことはない。
その意味では、むしろ、もう一人の同行者、火慧馬のほうが、まだ信用できた。なにしろ、隠しごとが下手そうだし……。
「まぁ、いずれにせよ、ポッタッキアーリ候には直に会って探りを入れてみんことにはなんとも言えんが……はたして、こちらにいるかな……」
ポッタッキアーリ候は、普段、セントバレーヌの別邸にいることが多いという。
貴族の中には、自領ではなく王都に居を構え、そこを中心に生活している者も多いが、ポッタッキアーリの場合には、その対象地がセントバレーヌのようなのだ。
それゆえ、こちらの館にはいないかもしれないが……。
「と、実は心配していたのだが……あの城門の様子をネタに館の者たちを揺さぶってみるのも悪くないような気がしてきたな。そういう意味では、主がいないほうがむしろやりやすいかもしれん」

そんなことをつぶやくゲインであったが……。

期待に反して……あるいは意外なことに、ポッタッキアーリ候は館にいた。

「こっ、これは、ゲイン殿下。ご機嫌麗しゅう」

応接室にて、ゲインたちを迎えた侯爵は、額に浮いた汗を拭き拭き、目をキョロキョロさせつつ……。実になんとも、落ち着きがなかった。顔色もあまり、よろしくない。

「ゲイン・レムノ、こいつ、怪しいぞ。我の戦士の勘が告げている」

声を潜め、偉そうに言う慧馬。であったが、生憎と、戦士の勘とやらに頼らずとも、怪しいことはよくわかっていた。

ゲインは唇を吊り上げて、ポッタッキアーリ候を見つめる。

「ああ、ポッタッキアーリ候。しばらくぶりだな。壮健そうでなによりだ」

ソファに深々と腰を下ろしたまま、ゲインは足を組む。その、実になんとも偉そうな態度は、悪役王子に相応しい風格を備えたものだった。

「しかし、どうしたというのだ？　ずいぶん、焦っているようだが……」

ゲインは、ポッタッキアーリ家の執事のほうにも目をやり……。

「ここまで、通してもらうのも、なかなかに苦労させられたが……。第一王子を出迎える以上の大事が、なにか起きているのか？」

「い、いえ、滅相もございません。そのようなことは決して……」

「そうなのか？　俺はてっきり城門を閉じるような事態が起きているものとばかり思っていたが……。この町の城門は夜も閉じないという噂を聞いていたのでな」

「いやぁ、あれは……あくまでも、その……訓練といいますか」

「訓練？　やはり、近々、閉じるような事態が起きるというのか？　例えば、どこかの国と戦争でもするつもりか？　それとも……」

畳みかけるように、ゲインは身を起こして……。ポッタッキアー

リ候に顔を寄せて……。
「もしや、南部の貴族で徒党を組んで、我が王家に弓引こうとしている……とか？」
「めっっっそうも、ございません！　そのような、恐ろしいことを考えるわけがないではないですか。私が考えるのは、あくまでも、レムノ王国の繁栄のみでして……」
ぴょーんっと跳ねるポッタッキアーリ候。その姿は一見すると滑稽で……されど、ゲインは油断せずに言葉を続ける。
「なるほど、信じよう。だがな……あいにくと、俺の護衛についてきている男が、大変、忠義に厚い男なのでな」
ゲインがギミマフィアスのほうを流し見つつ、
「レムノの剣聖、ギミマフィアスの名を知らぬわけはあるまい」
話を振られ、ギミマフィアスは、苦笑いを浮かべた後、その笑みを好戦的なものに変える。
ニヤリと口角を上げ……。
「吾輩は、王家の敵を葬るのみ。どれほど小さな危機であれど……ただ、一刀のもとに斬り伏せる。先ほどの説明では、我が刃を留めるには足りぬなぁ」
きん、っと刃を鳴らすと、ポッタッキアーリは再び跳びあがった。
「どうだろう、ポッタッキアーリ候。俺としても無実の罪で候との信頼を損なうことになってはいけないと思っている……。話してもらえないだろうか……」
そうして、実に……実にわるぅい笑顔を浮かべるゲインである。
「そ……そのぅ……実は、セントバレーヌの司教から親書が送られてきまして……」

第百六話　慧馬への依頼

「商人組合に軍事力を放棄させ、政治的影響力を低下させる……そのための助力を求める、と……。そう、派遣司教の側から持ち掛けられたというのだな？」

ポッタッキアーリ候の話を聞いたゲインは、眉根を寄せた。

「そのとおりです。そもそも、セントバレーヌの現状からしておかしいのです。貴族ではない商人が町を治めるなど……」

っと、片手を挙げて、ゲインは言葉を遮って……。

「それは、司教の主張か？」

「無論です。ああ、ですが、私も同意見ですが……」

どうやら、司教の側の言い分を繰り返していただけのようだった。無能者め、と心の中で毒づいてから、ゲインは口を開いた。

「それで、軍を動かす見返りとして、商人組合の持つ権益の一部を任せる、と？」

「ええ。まぁ、ミラナダ王国にも声をかけているらしいですが、僭越ながら私は、商いの心得もございますので、後れを取ることはございません。セントバレーヌの権益に食い込み、見事、港を手に入れてみせましょう」

自信たっぷりに言う侯爵に、ゲインは冷ややかな笑みを浮かべる。

「そのうえ、先行部隊によって私兵団の主だった面々を亡き者とし、敵軍を混乱せしむれば、こちらのほうが功績は多いか……」

セントバレーヌの別邸には、すでに秘密裏に十名前後の兵士が滞在しているという。いずれも腕利きの彼らを使って暗殺部隊を編成、セントバレーヌの守備を担う商人組合の軍の指揮官を討ち取る算段になっているらしい。

指揮官を失った混乱の中、自軍より多くの兵に囲まれれば戦意の低下は避けられない。戦わずして、セントバレーヌを手中に収める

ことも可能になる……と。
ポッタッキアーリ候の話す作戦は、そんなところだった。
「必ずや、セントバレーヌの権益は、我がレムノ王国の繁栄へと繋がりましょう！」
豪語するポッタッキアーリ候に冷めた目を向けていたゲインであったが、
「いや、見事だ。ポッタッキアーリ候。お前の国に対する貢献、誠に大なるものだ！」
次の瞬間、明るく、実に上機嫌な声で言った後、
「それで、どうだろう？　その功績に、俺も与らせてはもらえぬか？」
「え……？」
「幸い、今回は現地の兵たちが上手く動いてくれれば、戦闘は起こるまい。俺が一軍を率いて参じても、特に大きな問題はないと思うが……」
「い、いえ……そのような……。ゲイン殿下のお手を煩わせることになるのは……」
汗を拭きつつ、難色を示すポッタッキアーリ候であったが、ゲインはさらに踏み込んで……。
「いいや、ぜひそうすべきだ、ポッタッキアーリ候。その功績、もしもお前が独り占めするようなことになれば……我が父は、嫉妬の目を向けるやもしれんしな……」
「それは……確かにそうかもしれませぬが……」
ポッタッキアーリ候の顔に、苦い表情が浮かぶ。
「それに、お前は忘れているかもしれないが……俺は、レムノ王国の次の国王だ。今の内から、恩を売っておくに越したことはないと思うが……」
上目遣いに睨む……。っと、ポッタッキアーリ候は、一瞬、息を呑んだようだったが……。
やがては、しぶしぶ頷いた。

「そうかそうか。それはなによりだ」
それを見て、ゲインは上機嫌に笑うのだった。

さて、会談の後、ゲインたちは客間に通された。
部屋に入るまでは、ずっと「めでたい、セントバレーヌが手に入るぞ！」と上機嫌そうに話していたゲインであったが……部屋に入り、案内の者が退室した直後、不機嫌そうな顔になって……。
「おい、火慧馬……お前、乗馬の腕前はどうなんだ？」
唐突に、尋ねてきた。
「むっ、ゲイン・レムノ……お前、我のことを愚弄する気か？　騎馬王国の乗り手に乗馬の腕を尋ねるとは……」
「なに、ただの雑談だ。気軽に答えろ。それで、どうなのだ？　我がレムノ王国の……それこそ貴族の私兵程度ならば振り切れるし、馬上弓兵の矢にも当たらぬほどに、馬に乗れるのか？」
「それは当然……。ん？　もしや真面目に聞いているのか？」
胸を張り答えようとした慧馬だったが……ゲインの顔を見て姿勢を正す。
「ああ、残念ながら、そうだ。王族としての敬意を払い、騎馬王国の火族の姫、火慧馬に尋ねる。貴女は、ポッタッキアーリ候の騎兵を振り切り、目的の場所に辿り着くことができるか？」
「そうか……ならば、我も敬意を持って答えよう。我は、火族の族長の妹にして戦士。我が馬は天馬さえも置き去りに地を駆ける名馬蛍雷なり。ゆえに、矢を番える隙さえ与えず、地の果てまで駆け抜けよう。レムノの騎兵が何騎来ようと、捕まることなど決してない」
その答えに満足そうに頷いて、ゲインは言った。
「……ならば、一つ頼まれてほしい。このことを、セントバレーヌの商人連合に伝えてもらいたい。できれば、ポッタッキアーリ候が動き出す前に……な」
「良いのか？　我がいなくなれば、お前の立場は……」
慧馬の問いに対して、ゲインは、彼らしくもなく、疲れた笑みを

浮かべた。
「なに、心配はいらない。我がレムノ王国では、女は物の数には入らん。騎馬王国の女が一人いなくなったところで、誰も気にもしないだろうよ」
変わって口を開いたのはギミマフィアスだった。
「よろしいのですか？　ゲイン殿下。セントバレーヌの利権は確かに魅力的なもの。今回は、大義名分も揃っているようですが……」
レムノの剣聖の指摘に、されど、ゲインは、忌々しげに首を振った。
「阿呆が……。レムノ王国の軍がヴェールガ公国の飛び地に進軍する……？　そのようなこと、成功するはずがない。それに、仮に成功したとして、我がレムノ王家に利点はない。むしろ、ポッタッキアーリが権勢を増し、つけあがった奴が良からぬことを考えるやもしれぬ」
あの革命未遂事件以降、王家と民の信頼関係は回復していない。そんな中、力のある貴族の台頭は、あまりありがたい話とは言えない。
「小麦の不作のこの年に、港を手中に収める貴族の出現は避けるべきだ。下手をすればレムノを割ることになる」
「しかし、南部の貴族たちは、宰相殿が抑えになっているのでは？」
先の事件でも、老齢の宰相は王家を裏切ることはなかった。彼の存在は、南部の貴族たちを抑える重しのようなものだった。が……。
「ダサエフ・ドノヴァンか。確かに奴は良識ある穏健派。民をいたずらに苦しめるようなことはしなかろうが……、生憎と我が父は良識ある人間とは言えんのでな。ポッタッキアーリ候のほうが民の幸福に繋がると考えるなら、容赦なく王家を切り捨てるだろう」
ゲインは、自らの父のことを、そこまで信用していないのだ。
「それに、なにより、ヴァレンティナさまの暗殺を目論んだ貴族が力を持つことは許容できない、ですかな？」
ギミマフィアスの、どこかからかうような問いに、ゲインは不機

嫌そうに顔を歪めた。
「姉上……あの女は関係ない。あくまでもレムノ王国の王子としての判断だ」
舌打ちしつつ、ゲインはつぶやく。
「いずれにせよ、ポッタッキアーリ候の本軍をしばし足止めせねばなるまい。やれやれ」
「それで、止まりますかな？」
「止まってほしいものだな。それが一番マシな未来だからな」
吐き捨てるように言ってから、ゲインは慧馬のほうを見て……。
「それで、俺の頼みは聞いてもらえるか、火慧馬」
その問いに、慧馬は、ふぅむ……と腕組みしてから……。
「いいだろう。戦乱は、我が友ミーアの望むところでもないしな……」
「すまんな。この借りはいずれなにかの形で返そう」
「期待しよう。ちなみに我は、馬以外だと焼き菓子などが好みだ」
それだけ言うと、慧馬は颯爽と部屋を出て行った。

第百七話　良き海月の資質

「……ということだ」
慧馬の話を聞いたミーアは、頭がクラァッとしてくるのを感じた。
――みっ、ミラナダ王国だけじゃなく、レムノ王国まで……？
「なるほど……。ルシーナ司教は、ミラナダとレムノ王国……双方の軍の力を利用することで、拮抗を作り出そうとしているということか……」
ルードヴィッヒの言葉に、ディオンが頷く。
「互いに牽制させ合いつつ、どちらに大義を与えるかは、司教次第。となれば、司教の言に従わざるを得ない、か。他国から責められないためには、あくまでも、この地はヴェールガの飛び地でなければならない。司教の存在は現在よりさらに重要な、命綱になる」
それを聞き、シオンが声を上げた。
「いや……確かに話はわかるが……。そんなことをヴェールガ公は、納得するだろうか？　中央正教会にしても、これを是とはできないと思うが……」
「シオン殿下、残念ながら、その算段が付いている……ということではありませんか」
こういった場では、普段は発言を慎むキースウッドが、珍しく口を開いた。
「彼の行動は多少強引とはいえ、ヴェールガの伝統に則ったやり方です。本国から文句をつけられぬよう、慎重に事を計画したことが窺えます」
ヴェールガ公国は必要最低限しか軍を持たない。ゆえに、ヴェールガが軍を動かす必要がある時には、周辺国に要請するのだ。
小さな例で言えば、それは、聖女ラフィーナの護衛。聖女が連れるヴェールガの護衛は最低限の数であり、それ以外は訪れた国の兵

によって担われることになる。
そして、大きな例で言えば、聖瓶軍。混沌の蛇の打倒を旗印に、周辺国に募った義勇軍は、司教帝の軍として再編され、世界に混乱をもたらした。
いずれにせよ、ルシーナ司教の動きは、ヴェールガ公国の伝統的な、正しいやり方だった。
「だから、あとは“そうせざるを得なかった理由”があれば、ヴェールガ本国も認めるかもしれません」
キースウッドの指摘に、ルードヴィッヒは頷いて、
「当然、考えているでしょうね。ルシーナ司教は、用意周到に準備を整えているはずだ。そういう意味では……ポッタッキアーリ候の先行部隊を食い止めるのは、重要かもしれません。ルシーナ司教は、民に累が及ばぬよう、商人組合の私兵を少ない犠牲で制圧、無血に近い状態で事を成そうとしている。その状況が崩れれば、あるいは、ルシーナ司教は思いとどまるかもしれない。軍と軍がぶつかる、武力衝突の状態を司教は望まないでしょう。あくまでも、最大限、好意的に解釈すれば、ですが……」
「そうです。もし仮に、父上がこの件に関係していたとしても……民の血が流れるような事態になるというのならば、きっと思いとどまるはず……きっと」
祈るように、そう主張したのはリオネルだった。必死にそう主張するその顔は、色を失っていた。
「どちらにせよ、だな。商人組合の私兵団が機能すれば、膠着を作り出すこともできる。ミラナダにしろ、レムノにしろ、セントバレーヌの中に入れなければ、長く軍を駐留させてはいられないだろう」
ディオンが腰の剣に手をやり、
「ミーア姫殿下、皇女専属近衛隊の者たちを借りたい。当然、僕自身も行くことを許可してもらいたいですがね……」
「ディオン殿、ボクも行こう。ポッタッキアーリ候はレムノ王国の貴族、その部下ならば、第二王子のボクの言葉を聞くかもしれない」

「俺たちも同行しよう。戦力はできるだけ必要だろう」
アベルに続き、シオンまで同行を申し出る。行く気満々の王子二人に、一人、しぶーい顔をするのはキースウッドであった。
「やれやれ……。アベル王子はともかく、シオン殿下まで行かなくとも良いのに……。しかし、なぜだろう……いつもの令嬢方のアレに比べたら……遥かに心が安らかだな」
なぁんてことを、遠い目をしてつぶやくのだった。

さて……目の前で次々と展開する事態を尻目に、ミーアは……半ば思考を放棄していた！
――ふむ……ビオンデッティさんのところのお茶菓子は、さすがは商人らしく、見事な一品でしたけれど、昨日、ルシーナ司教のところでいただいたものも負けておりませんでしたわね。やはり、ルシーナ司教もなかなかの目利きと言うことが……。
現実逃避にふけるミーアである。
なにせ、話が大きくなり過ぎていた。
――そんな面倒くさいこと、わたくしの知ったことではありませんわ！
っと、声を大にして主張したいミーアである。
巻き込まれないよう、できるだけ存在を消して、息を潜めて、小さくなっていたミーアである。が……ミーアのここまでの振る舞いが、ミーアの不介入を許さない。
ここにいる一番の新参であるビオンデッティですら、セントバレーヌでのミーアの振る舞いを見て、すっかり、帝国の叡智の輝きに心を奪われてしまっているのだ。
おおかた話がまとまったところで、その視線が向かうのは、やはり、帝国の叡智、ミーアのところで……。
――う、うう……やはり、これ、わたくしも参加しなければいけない流れ……ですわよね。
ものすごーく気が進まないながらも、ミーアは目の前の紅茶を一

口。

――しかし、そもそも、これ……わたくしの仕事なのかしら……。

その思考が、若干、逃げの方向に流れかける。

――もしかして、これ、わたくしがタッチしなくてもいい案件なんじゃ……？

試しに考えてみる。これを放置するとどういうことになるか……？

――ルシーナ司教ができるだけスムーズに事を進めたとして……それでも、一時的な混乱は避けられないはず……。それで、食料の供給が滞ったりすれば……。

瞬間！　ミーアは懐かしい感触を首筋に覚える。まるで、旧知の幼馴染にでもあったかのような懐かしさに……ミーアの体に鳥肌が立った。

いつの間にやら、ヤツが……すぐ後ろに迫っているような、いやぁな感覚、断頭台の刃の冷たさにミーアは震え上がった。

これは、放置しちゃいけない案件だぞぅ、とミーアの本能が告げていた。さらに……。

「申し訳ありません。ミーア姫殿下。面倒事が大きくなってしまいました。けれど、大変恐縮ながら、我々としては、この時期にミーア姫殿下がここにいらっしゃったこと、天の配剤のように思えてなりません。なにとぞ、我々をお見捨てになりませぬよう、心からお願い申し上げます」

深々と頭を下げるビオンデッティ。その言葉で、ミーアは思い出す。

――ああ……そうでしたわね。ルシーナ司教と商人組合との不和をなんとかするよう、お願いされていたんでしたわ。今回の事態は、いわばそれの延長。であれば、これを無下に扱えば、商人組合の信頼を裏切ることになりそうですし、もろもろまずいことになりそうですわ。

セントバレーヌの商人組合は、味方につけておいたほうがなにかと便利な存在だ。目の前の面倒事と比較しても、その重要度は決し

て低くはない。
――それに、頼って来られた方を無視するのは、後味が悪そうですし……くぅっ！　な、なぜこんなことに……。
ミーアは、ふーっぅっとため息を吐き……それから、改めて、冷静に事態を見つめ直して、
――ああ、これ……逃げられないやつですわ。
……察する。そして……諦める。諦めが良いのは、ミーアの美徳、良き海月の資質である。
流れに逆らっても意味がないならば、諦めてその波に乗るしかない……そう諦めたうえでも、なお、ミーアは足掻く。
この波に……誰を巻き込めば楽ができるか……っと思考をシフトさせたのだ。
――ルードヴィッヒとアンヌには付き添ってもらうとして、リオネルさんとレアさんにも一緒に行っていただくのがよろしいかしら。お父さまの説得にどれぐらい影響するかは微妙なところですけど……
っと、考えたところで、不意にミーアは気付く。
この場に居ない……けれど、一番、この場に居てほしい人のこと……。
「ラフィーナさま……」
――がいてくれたら、すごーく楽なのになぁ！　ルシーナ司教とか、一喝してもらえるのに！　っと。
聞かれてはまずい部分は、なんとか呑み込み、ぶんぶん、っと首を振る。
――いない方に頼るのは、意味のないことですわ！　ここにいる者たちでなんとかしなければ……。ここにいる全員で、責任を分かち合えるように、きっちりと状況を整えなければなりませんわ！
そう気合を入れるミーアは気付いていなかった。
ミーアのつぶやき、それをただ一人聞いていた人物……レアが、ハッと顔をあげたことに……。

第百八話　ミーア姫、ちょっとだけ獅子の風格を帯びる

一同は一斉に動き出した。

ビオンデッティは、商人組合の主だった面々を召集。町を守る私兵団の長たちにも注意を促し、即応態勢を取らせる。クロエも父であるマルコと合流して万が一に備えるという。

一方、アベルたちは、ポッタッキアーリ候邸を急襲すべく、皇女専属近衛隊のメンバーと合流する。指揮はディオンがとることになるだろう。

幸いなことに、秘密裏に町の中に入れる必要があったため、相手は少数精鋭らしい。

「こっそりとセントバレーヌに兵を送っておいて、私兵団の各兵長を排除する作戦なのだ、と言っていたな。不穏な動きを察知されぬよう、できるだけ数を絞った、ポッタッキアーリ侯爵家の精鋭中の精鋭であると……」

「ほう……精鋭中の精鋭……」

ミーアは口元を押さえて考える……ふりをして、にんまーりとほくそ笑むのを隠す。

なにしろ、こちらには少数精鋭の極致たる男……ディオン・アライアがいる。

さらに言えば、皇女専属近衛隊の面々にしても、かなりの精鋭。レッドムーン家じゃあるまいし、一貴族の私兵団の精鋭など、鼻で笑ってしまう程度のものなのだ。

――いえ、油断は禁物ですわ。レムノ王国は軍事に力を入れていると聞きますし……。

キリリッと顔を引き締め、ミーアはディオンたちに「くれぐれも油断のなきように」と言い含めておいて……。

それからミーアたちは、今回の騒動の肝であるルシーナ司教のと

ころへ向かった。
その道中……。
「大丈夫ですか？　リオネルくん」
そんな声に振り返れば、リオネルが蒼白な顔をしていた。そんな彼に優しく声をかけたのは、ベルだった。その顔を覗き込み、心配そうに眉根を寄せる。
話しかけられたリオネルは、ハッと顔を上げて、硬い表情のまま首を振った。
「大丈夫です。父が……あんなことをするはず、ありませんし……それに、もしもそうだとしても、きっと話せば……わかってもらえるはずですから」
「そうですね。きっと誠心誠意話せば、きっとわかってもらえますよ」
励ますためだろうか、楽観的なことを言うベルであったが……それでリオネルが納得した様子はなかった。さらに……。
「……」
レアのほうもまた、先ほどから黙り込み、なにがしか思い悩んでいるようだった。
――レアさんは、なにか思い当たることがあるのではないかしら……。ルシーナ司教に会う前に、少し話を聞いておきたいところですけど……いえ、やっぱり先にルシーナ司教ですわね。
ともかく一刻も早く、ルシーナ司教を説得して、軍を止めなければならない。

今の時間、司教は教会に詰めているという。馬車を飛ばし、教会前までやって来たミーアは、バーンっと勢いよく重厚な扉を開け放つ。っと、広い礼拝堂の前方、聖餐卓の前で膝をつく司教の姿があった。目を閉じ、祈りの姿勢を取る司教に声をかけて良いものか……。迷うミーアを尻目に……。
「父上……お話があります」

リオネルが声をかけた。ずんずんとそばまで歩み寄り、真っ直ぐにルシーナ司教の背中を睨みつける。
それでも、司教はしばらく、その姿勢を取り続けた。その後、静かに立ち上がり、
「どうかしたのか、リオネル……。それに、みなさんも……なにかご用でしょうか？」
みなの顔を順番に眺めていってから、その視線が止まったのはミーアのところだった。
「ええ……。リオネルさんが言っておられましたけど、少しルシーナ司教とお話ししたいことがございまして……」
「ほう。それはちょうど良かった。実は、私からもお話があったのです」
笑みを浮かべたまま、ルシーナ司教は言った。
「ちょうど、新しいお茶菓子が届いたものですから、またご一緒にいかがかと……」
「ほほう！　新しいお茶菓子。それは……」
脳内に、めくるめく新作スイーツの行列が躍りながら横切っていき……。思わず声と体が踊り……そうになるも、すぐに思い出す。
今は、自分一人ではない。そうそう浮かれてはいられないし……そもそもの話、これまでも美味しいお菓子でやり込められた、などということがバレるのはバツが悪い。
刹那の思考の後、ミーアは声のトーンを落とし……。
「それは、ちょうど良かったですわね。てっきり忙しいから、お付き合いいただけないものと思っておりましたけれど……」
喜びのあまり声が踊りかけた理由をさりげなくつけ足して、誤魔化しつつ……、
「それにしても、新しいお茶菓子とは心躍りますわ。そんな素晴らしいものがあるならば、わたくし一人で楽しむのもなんですし、みなも一緒によろしいかしら？」
スッと後ろを振り返る。

ルシーナ司教にやり込められた時は、仲間たちの助力を得られていなかった。特に知恵袋ルードヴィッヒを同行させることができなかったのは痛手だったと考えるミーアである。
あの時は、家臣をお茶会に連れて行く流れにならなかったからできなかったが……。
「一糸をもまとうことなき舌には、姫も貴族も民もなく、ただ人と人とがあるのみ……。と、わたくしは思っているのですけれど……」
かつてのラフィーナの言葉を剽窃し、ちょっぴりアレンジすることで、獅子の風格を言葉に宿すミーアである。
「なるほど……。美味の前には、王も民も貴族もない……と、そういうことですか」
「ええ。あなたならば、同意していただけると思いますけれど……。ディナーにわたくしの従者たちを参加させることを勧めてくださったあなたなら……」
「確かに、同意しないわけにはいかないでしょうね……」
ルシーナ司教は苦笑いを浮かべてから、
「もちろん、みなさんもご招待いたしますとも」
「それはなによりですわ。いろいろお話しして、互いの胸の内を明かし合うことにいたしましょう」
その答えに、ミーアは、嫣然と微笑むのだった。

第百九話　シュトリナ、思うところがある……

案内されたのは、教会堂内の広い食堂だった。
普段は、ここで、近所の子どもたちや孤児院の子どもたちに食事を配給しているのだという。あまり、秘密の対談をするには適さない場所ではあるが、そもそも、名目上は気軽なお茶会だ。仕方ないだろう。
各人が席に着くと、すぐに紅茶とお茶菓子が出てきた。しっとりとしたケーキだった！
「ほう……これは……手が込んでますわね」
どうやら、生地に果物のソースをしみ込ませているらしい。断面を見ると、そこにはナッツ類が練り込まれていた。
では、早速……などとフォークに手を伸ばそうとしたところで……シュトリナがスッと手を伸ばしてきた。
「ミーアさま、ケーキを交換いたしましょうか？」
「え……？」
ミーア、一瞬、驚きに目を見開く。切り分けられたケーキの大きさは、自分のもののほうが大きかったからだ！
「り、リーナさん……？」
「なるほど……。連れの令嬢に毒見をさせよう、ということですか？」
ルシーナ司教のその指摘で、ようやく気付く。
――あ、ああ、そうですわよね。なるほど、毒見……。確かに、そういう可能性もございますわね。
ルシーナ司教が陰謀に加担している疑いがある以上、そういうことだってあり得るわけだが……そんなことまーったく考えていないミーアである。
てっきり、シュトリナの中に眠る、父ローレンツ公の血が目覚め

たのでは……？　なぁんて、失礼なことを思ってしまったミーアなのである。
だが、それも仕方のないことかもしれない。可憐な見た目から忘れてしまいそうではあるが、シュトリナの父は、若干、ＦＮＹッとした人なのだ。
さて、ルシーナ司教の指摘に対して、シュトリナは可憐な笑みを浮かべて……。
「いいえ、リーナはただ、食べるのが好きなだけです。なにしろ、帝国の叡智の胃袋と言われてますから……」
それから、チロッとミーアのほうに目をやるシュトリナ。どうやら、ミーアの心の中は読まれていたらしく、ちょっぴりご立腹の様子であった。
「あ、ああ……あの時は……」
そんな様子に慌てるミーアであったが……そこで、楽しそうな笑い声が響いた。
「うふふ、リーナちゃん、健啖家なのはいいことですよ。リーナちゃんが、たーくさん食べるところが可愛いって言ってましたから」
「え……？　誰が……はっ！」
即座に、シュトリナは口元を押さえて……。
「ううん、言わなくていいから。ベルちゃん」
「え？　そうですか？　でも……」
「いいから。本当、大丈夫だから！」
それから、シュトリナは、急いでパクリとケーキを一口。もぐもぐ、ごくり、とやって……。
「さ、ミーアさま、話を進めてください」
どうやら、大丈夫だったらしい。それで、ミーアは一つ頷いてから……。
「ルシーナ司教、ミラナダ王国軍の動き、それに、ポッタッキアーリ候に不穏な動きがございますけれど、司教はすべてご承知のことですの？」

単刀直入に、ルシーナ司教……とケーキに切り込む。フォークで大きめに切り込み、あーんぐり、と一口。舌の上にジュジュワッと広がるソースの甘味に、思わず、ほわぁ、っと笑みを浮かべてから……。キリッとした顔でルシーナ司教に目を移した。
「無論です。なにしろ、私が依頼したことですから……」
彼は、表情一つ変えずに、紅茶のカップを手に取った。
「そんな……」
あまりのショックに言葉を失うリオネル。
さすがのレアも、こんなにあっさりと……しかも、悪びれる事もなく認めるとは思っていなかったのだろう。呆気にとられた顔をしていた。
「そう……けれど……」
ミーアは、一瞬、口にするのを躊躇う。が……。
「大丈夫でしょう、ミーアさま。それを我々が知っているというだけでも、牽制になりますから」
ルードヴィッヒがそう請け負ってくれたので、自信を持ってミーアは言った。
「ポッタッキアーリ候の策に関しては、すでに聞いておりますわ。候の邸宅にも、我が専属近衛隊の精鋭が向かっておりますわ。それに、商人組合の私兵団にも、このことは知らせています。だから、事前にこの町の防衛力を削ぐという企みは、すでに破綻しておりますわ」
「そうですか……。上手くいかなかったのは残念です」
ルシーナ司教は、特に感慨を受けたようには見えなかった。深く憂いを帯びた瞳で、ただ、カップの中を眺めているだけだった。
「ですから、すぐにミラナダとポッタッキアーリ候に連絡を入れていただきたいですわ。このような騒乱を起こすことに意味などないのですから」
「いえ、むしろ、ミーア姫殿下、どうぞ商人組合に勧告してください。商人組合の保有する武力を放棄し、セントバレーヌの統治権を

ヴェールガ公国に帰すると……そう宣言するように。もともと彼らは商人。政治から手を引き、商売に専念せよと言われることに、不都合はないでしょう？」
　ルシーナ司教の言葉は固く、その目には依然として強い力があった。決して折れない人の態度であった。
「父上！　もうこのようなことは、おやめください！　セントバレーヌを手に入れたとして、いったい、何になるというのです？　この地の、港の富が父上を惑わせたのですか？　それとも、権力ですか？　名誉ですか？」
「そのどれでもない。それに惑ってもいない。私は、自分がなにをしているのか、きちんと把握しているつもりだよ、リオネル」
　息子に、穏やかに声をかけて、ルシーナ司教はミーアのほうに目を向けた。

第百十話　当然、食べ終えている……

「姫殿下は、ご存知ですか？　あなたの姿を象った女神の肖像画が存在していることを……」
「あっ……」
ルシーナ司教の、唐突な問いかけ。ミーアは口をぽっかーんと開けた。すっかり解決したと思っていた案件の突然の復活に、意表を突かれたのだ。
「その様子では、ご存知でしたか……」
目つきを鋭くさせるルシーナ司教に、ミーアは慌てて言い募る。
「い、いえ、あれは決してわたくしが、自らを神格化するために作ったわけではなく……」
「そうですか……。なるほど、そうなのでしょうね。あなたは、そういう愚劣なことをされる方ではないのでしょう」
静かに頷いてから、ルシーナ司教は言った。
「ミーア姫殿下、あなたは、貴族の非道を許さぬ方であるとお聞きしています。民を軽視し、餓えさせる貴族に対して厳しい目を向けていると……。貴族が自分たちの食料を不安視するあまり、民に食べ物を配らない……そんなことは許さないと言っておられると……」
ミーアは落ち着きを取り戻し、深々と頷く。慌てはしない。それは、ミーアが一貫して訴えていたことだから、否定することも、謙遜する必要もない。
そんなミーアを見つめ、それから、ルシーナ司教は視線を外す。その目はどこか遠くを見つめているかのようだった。
「私も、そのお考えには同意いたします。心から同意する。よく、仰ってくださった、とさえ思います。セントノエルで語るべき、これ以上の言葉はないと思います。貴族の、そのような非道は絶対に許されるべきではない……けれど……同時にこうも思うのです」

彼は、紅茶のカップを静かにテーブルの上に置いてから、鋭い視線をミーアに向けて。
「貴族や王は、それが非道なことと知りながら、自らの弱さのゆえに行うのだ、と。彼らは、自分自身が悪であることを自覚しながら、罪悪感を持ちながら……それをするのだ、と」
王や貴族の権威は、神に委託されたものだ。それゆえ、彼らは、神の正義と公正をもって民を治めなければならない。貴族の権威を保証する神聖典、その倫理に従わなければ、彼らの権威は成り立たないのだ。
「つまり、彼らの善悪と我らの善悪は一致しているのです。それを行うかどうかは別にして、善は善、悪は悪。その秤は一つなのです。されど……商人たちは、彼らの理は違うのです」
どうやら、難しい話になってきたぞぅ、っと察したミーアは、コメントを求められると困るので、ケーキにフォークを伸ば……そうとするが、当然、すでにケーキは食べ終えている。
仕方なく、紅茶のほうに手を伸ばし一口。っと、そうこうしている間に、代わりにルードヴィッヒがつぶやくように言った。
「商人の理は、金を儲けることを正義とする理である、と……？」
「そのとおり。そして、その理に適う限りにおいて、商人たちは確かに神聖典の理に従うでしょう。しかし……もしも、金を一番儲けることが正義であるというなら、彼らの正義と我らの正義は食い違っているのです。その意味が、わかりますか？」
「……」
ミーアは口を閉じたまま、ルシーナ司教を見返す。っと、そこになにを読み取ったのかはわからないが、ルシーナ司教はゆっくりと頷き……。
「そうです。我らが悪と見ることが、公然と正義の行為として行われることがあり得るかもしれないということになってしまう。善悪の基準が絶対性を失い、相対的なものになってしまった世界では、人の命を救うという行為の正しさでさえ、比較されるようになる。

絶対的に正しいとは言えなくなる……」
　憂いを帯びた目で、ルシーナ司教は続ける。
「我らの正義に照らし合わせれば当然であることが、商人の正義に照らし合わせれば、そんなことをしてなにになる？　と問われることになるのです。普遍は消え、混乱が訪れる」
　それから、ルシーナ司教は改めて、視線を向けてくる。すでに飲み終わった紅茶のカップの底を見つめていたミーアは、
　――い、今、なにか聞かれたら答えられる自信がございませんわ。どなたかに話を振れるよう、きちんと備えておかなければ……。
　コクリ、と喉を鳴らしつつ、ルシーナ司教に視線を向ける。
「そして、ミーア姫殿下……あなたは、彼らの偶像になってしまうかもしれない。彼らに都合の良い権威を与える、女神になってしまうかもしれないのです。もはや、あなた自身がどう考えるのかは、問題ではない」
　ふと思いついたといった様子で、ルシーナ司教は言った。
「ところで、ミーア姫殿下は、蛇のことはご存知でしょう。リオネル、レア、お前たちは……？」
　父の問いを受けて、兄妹は、それぞれに神妙な顔で頷く。
「そうか……聞いてしまったか」
「申し訳ありません、ルシーナ司教。わたくしの一存で二人にも知っていただきましたけれど……」
「いえ、いつかは教えなければならないことでしたから。しかし……それならば、この意味はわかるでしょうか？　彼ら商人の中に、地を這うモノの書を……・混沌の蛇の聖典を読んだ者がいるのです。そして、女神の肖像画は、その影響で生み出されたものかもしれない」
「地を這うモノの書が？　見つかったんですの？」
　思わず目を見開くミーア。
「はい。二月ほど前に通報がありました。怪しげな本が荷物に紛れ込んでいた、と……」

それから、ルシーナ司教は静かに告げる。
「そして、女神の肖像画の発見……。蛇の策動であれば当然警戒すべきことでしょう。商人たちの中にも、蛇にそそのかされた者がいるはずですから」
「……善悪の基準を相対化させることで、正義と正義が対立するような状況を起こし、騒乱を起こし……混沌を呼び起こす……」
つぶやいたのは、レアだった。その声にミーアは、思わずハッとした顔をする。
――れ、レアさん……さすがに司教帝候補だったことはございますわ。ちゃんと、話についていけておりますわ……。
ミーアは、そこで、仲間たちの顔を窺う。
ルードヴィッヒは……おそらく理解できているだろう。シュトリナも神妙な顔をしている。たぶん、理解できているのだろう。
一方で、アンヌとベル……それにリオネルは……ちょっぴりわかっていないような顔をしていた！
上手く話しを呑み込めていなかったのが自分だけじゃなく、ホッと安心するミーアである。まぁ、それはさておき……。
「蛇が関係していないのだとしたら、それも深刻なことだ。なんの作為もなく、ミーア姫殿下を偶像視しようとする動きがあるのだとしたら憂慮すべきことと言えるでしょう。いずれにせよ……これ以上、商人たちにこの町を統治させることは、容認できない」
ルシーナ司教は、硬い声で言うのだった。

第百十一話　獅子聖女を召喚せよ

ルシーナ司教のもとを辞してから、ミーアは悩ましげなため息を吐いた。
「どうやら……説得は難しそうな気がしますわ」
単なる思い付きでもなければ、欲に目がくらんだわけでもない。地を這うモノの書と女神肖像画を押さえている以上、動くべき理由も十分だ。
――これは、なにかしら、彼の理屈を打ち砕く必要がありますわね。くぅ、なかなか、難しいですわ。
「申し訳ありません、ミーア姫殿下」
すまなそうに口を開いたのはリオネルだった。その顔色は、やはり優れない。
「別に、あなたが謝るようなことではありませんわ。親の罪は子が償う、などというのは、理不尽なことですから」
初代皇帝の末裔、ミーアが常に主張し続けることである。
「しかし、困りましたわね……どうしたものか」
ポッタッキアーリ候の先行部隊を潰すことで……商人組合の私兵団が問題なく機能するとして……、いったいどの程度、持ちこたえることができるか。
「当たり前の話ですけれど、全面的に戦いが始まってからでは止めるのは困難。軍が展開する前に何とかしなければ……」
「そうですね。ディオン殿たちが、ポッタッキアーリ候の先行部隊を押さえつつ、ゲイン王子殿下にポッタッキアーリ候の動きを止めてもらえれば、多少なりとも時間稼ぎにはなるはずですが……」
ミラナダ王国軍はすでに動いているが……そちらは、ルシーナ司教が止めてくれるのを期待するしかない。二つの軍で拮抗状態を作り出すためには、先にミラナダ王国軍が突入してくるような事態は

避けたいはずだからだ。
「それでも、確実性はありませんし……。急ぎ、何とかしなければいけないということですわね。ううむ……」
ミーアは眉間に皺を寄せながら、むーむむ……っと唸る。それから、チラッとルードヴィッヒを見て、レアを、リオネルを見る。シュトリナやベルにも目をやるが……誰も口を開いてはくれなかった。
――くぅ、どなたか、この窮地を打開する良い手はないのかしら？　今であれば、一切文句を付けずに二つ返事でアイデアを採用してあげますのに……。
イエス！　という機会を窺う、貪欲なイエスマンミーアであるが……あいにくと、その機会は与えられなかった。なので、仕方なしに……。
「あまり意味はなさそうですけど……仕方ありませんわ。シャルガールさん……彼女にお願いしましょうか……」
なんとか、アイデアをひねり出す。
「彼女に、ですか……？」
想定外の言葉だったのだろう、ルードヴィッヒは目を瞬かせた。
「シャルガール嬢に、いったいなにを……？」
「そうですわね……」
実際のところ、彼女に、証言をしてもらうことには、ほとんど意味がない。
怪しげな商人が依頼に来たと言ってもらったところで、その商人が蛇であったとしても、ただの商人であったとしても……どちらにせよ問題だとルシーナ司教は言っているのだから。
だからこそ、ルードヴィッヒが怪訝そうな顔をするのは頷けることだった。けれど、この時のミーアの思い付きは、ルードヴィッヒの想像を軽く超えていた！
「彼女には……絵を描いていただこうと思っておりますわ……ラフィーナさまの、絵を……」
斜め下方向に、超えていたのだ！

「ラフィーナさまの絵……ですか？」
心の底から怪訝そうな顔をしたルードヴィッヒであるが、すぐに眉間に皺を寄せ、何やら考え始める。一方、リオネルやレアも意味がわからず、言葉を失っている。
「まぁ、上手くいかない可能性のほうが高いでしょうけれど、上手くいけば……あるいは……」
そう意味深につぶやくミーアが考えていたこと……それは……。
――ラフィーナさまの……わたくしよりも派手な女神っぽい肖像画を描いていただいて、誤魔化す……これしかありませんわ！
……ミーアは、混乱していたっ！
高度な神学的論争を前に、ミーアの脳みそは煙を上げていたのだ。モクモクミーアなのだ。
すなわち、ミーアはこう考えていた。自分一人が女神肖像画のモデルになってるから、偶像化とかガチっぽく、深刻っぽく映ってしまうのだ。ラフィーナも巻き込み、ほかにも何人か女神肖像画を作れれば、ただのジョーク商品と言い張れるかもしれないではないか。
まぁ、ラフィーナには多少、怒られるかもしれないが、この際は仕方ないと諦めるミーアである。
すでに、ルシーナ司教の手にある以上、もはや隠し立てすることはできない。なかったことにはできない。減らすことができないなら、いっそ増やして、薄めてしまえばいい。
名誉も負担も責任も何もかも……分散化に勤めるミーアである。
「ともかく……できる手を全部打って止めなければなりませんわ。なんとかして、ルシーナ司教を説得しなければ……」
「そう、ですか……。では、シャルガール嬢のところに参りますか？」
なにやら、もの問いたげな顔をしていたルードヴィッヒだったが、すぐに気を取り直した様子で言った。
「そうですわね。急いで……」
「ミーアさま」

その時だ。レアが、意を決した様子で話しかけてきた。
「あら、レアさん。なにか……？」
レアは、ギュッと拳を握りしめたまま、小さく息を吸って、吐いてから……。
「ミーアさま、私、ラフィーナさまを呼びに行ってきたいと思います。回遊聖餐の日程はある程度決まっていますから……お会いすることは可能なはずです」
「おい、レア、なにを言ってるんだ！」
そんなレアの肩に、リオネルが手をかける。
「わかってるのか？　ラフィーナさまは、回遊聖餐の途中なんだぞ。あれは、ヴェールガ公国にとって大切な儀式で……」
っと、そんな兄に、レアは静かに頷いて、
「わかってる……。だから、私が代わりに……」
「でも、レア……。お前は、人見知りで……」
妹のその言葉に、リオネルは目を見開いた。レアは兄の手を優しく外すと、ミーアのほうに顔を向けた。
「お父さまは、ラフィーナさまが大切な儀式に参加している、この時期を狙って動いたのだと思います。裏を返せば、ラフィーナさまがセントバレーヌにいらっしゃることを、避けたいのだと思います。だから……」
「そういうことならば、我が連れて行こう！」
っと、力強く請け負ったのは、いつの間にやって来たのか……偉そうに胸を張る火慧馬だった。
「我と蛍雷であれば、そう時間をかけずに行って帰ってくることができるだろう」
「慧馬さん……」
この場に、有能な乗り手、慧馬と彼女の愛馬がいたことが、不幸中の幸いと言えた。ミーアは信頼を込めて、慧馬に頭を下げる。
「そうですわね。お願いいたしますわ」
「うむ、任されよう！」

どん、っと胸を叩く慧馬が、実に頼もしかった。
「ともあれ、間に合うかは微妙なところですわね。時間稼ぎをするのはもちろん、やはり、わたくしたちでも動いておかなければ……シャルガールさんのところに行きますわよ」
ミーアは自らの考えを形にするべく、動き出した。

第百十二話　リオネルの覚悟

ラフィーナがいる村が最も近い村だったとして、最短でも数日は戻ってこられないとのことだった。
「もしその村に居なければ、探さなければなりませんし、合流はますます遅れますわね。ラフィーナさまに来ていただければ心強いですけれど、それまで何もしないというわけにはいきませんわね。わたくしたちも頑張らねば……」
そう言って、ミーアが歩き出そうとしたところで、
「ミーアさま、よろしいでしょうか？」
ルードヴィッヒがそっと手を挙げた。
「あら、なにかしら？　ルードヴィッヒ」
きょとん、と小首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒは言った。
「シャルガール嬢のところに行くのであれば、肖像画の依頼をした商人の話をもう少し詳しく聞きたく思います。肖像画を流したのがその商人だとして……『地を這うモノの書』の出所も、もしかすると……」
「なるほど。その商人が蛇であり、何らかの意図をもって『地を這うモノの書』をルシーナ司教のところに流した、と……？」
「どうでしょう。ただ、地を這うモノの書と女神の肖像画の出現のタイミングが良すぎると思います。それに、ルシーナ司教の予想のとおり、商人組合の中に蛇が巣食っているのであれば彼らを全面的に信用もできなくなってくるでしょうし、いずれにせよより詳しく調べる必要があるかと……」
「なるほど、確かにその通りですわね。しかし、商人組合の調査は、ビオンデッティさんとクロエのお父さまにお願いしたいところですけど……。混沌の蛇の話を伏せながらというのは難しそうですわね」
それを言うならば、そもそも、彼らは信用できるのか、という根

本的な話ではあるのだが……。
「クロエにも一緒に行ってもらって、監視していただくほうがよろしいかしら？　いずれにせよ、シャルガールさんに協力を求めてからですわね」
　それに、もしかすると、ラフィーナの肖像画を描いてもらうより良い作戦が思い浮かぶかもしれない。
「ミーアさま、申し訳ありません。ぼ……私は父をもう一度、説得してみます」
　そこでリオネルが口を開いた。
「それは……」
「難しいことは重々承知しています。でも、妹が……レアが勇気を振り絞って行動した。私がなにもせずにいることはできません」
「そうですわね。時間もないですし、いろいろと手分けをしたほうがいいでしょうね。こちらについてきてもらっても仕方ありませんし、それならば……」
　ふと、ミーアはそこで……ちょっぴり悪いことを思いつく。
　――しかし、考えてみるとリオネルさんは、ルシーナ司教の息子さん……身内なんですわね……。であれば……もしかすると……なにかルシーナ司教の弱点とか、探り出せるのではないかしら！？　ルシーナ司教の奥さまからも話を聞きやすいでしょうし……場合によっては、味方につけることだってできるかも……。
「あの、ミーア姫殿下……？」
　不安そうに尋ねてくるリオネルに、ミーアはにっこーりと、とても良い笑顔を浮かべる。
「リオネルさん、ルシーナ司教の説得は大切なことですわ。けれど、闇雲にやっても意味がない感じがしますわ。わたくしが見たところ、あの方は、家族の情や、説得の熱意に動かされるような感情型の人ではない。どちらかと言えば、理性に訴えかけるような、理屈の人という感じがいたしますわ」
「ええ、確かに父はそういう人だと思いますが……」

「であれば、彼を合理的に納得させる、説得する材料が必要なのではないかしら？」
具体的には、彼の弱みとか、弱点とか、表に出たらまずい恥ずかしい過去とか、ついこちらの言うことを聞きたくなっちゃうようなヤバイ秘密とか……などと心の中で付け足すミーアである。
「なるほど……父が、あのように考えるに至った原因を探り、その方向からアプローチをするべき……と、そういうことでしょうか？」
リオネルの若干ズレた答えにも、しかつめらしい顔で、
「……ええ、まぁ、大体、そんなところですわ」
そうじゃないんだけどなぁ、もっと、こうスカッと言うことを聞かせられるもののほうがいいんだけどなぁ！　などと思いつつも、深々と頷いてみせた。
「わかりました。やってみます」
っと、決意のこもった顔で頷くリオネル。それを見て、ベルがそっと近づいてきて……。
「あの、ミーアお姉さま、ボクもリオネルくんについて行ってもいいですか？」
「あら？　ベル、珍しいですわね……」
ちょっぴり意外な申し出に、ミーアは目を瞬かせた。
「なんでしょう……？　同じ冒険愛好家としてというか……どうも他人事とは思えなくて、放っておけない感じがして……」
「ふぅむ……まぁ、そうですわね。彼が一人で動くのは心配ですし……」
ベルが行くのなら、シュトリナとリンシャも共に行くことになるだろう。それだけいれば、なにかあった時にも大丈夫……なはずだ。
「わかりましたわ。それでは、あなたたちもルシーナ司教のことを調べるのを手伝いなさい。説得に使えそうな材料を……その、イロイロと集めてくださいませね……」
その、イロイロのニュアンスに、シュトリナとリンシャは気付いたらしく……各々に力強く頷くのだった。

第百十二話　リオネルの覚悟（後書き）

設定間違って遅れました。すみません。

第百十三話　ルードヴィッヒの評価

さて、リオネルたちと別れたミーアは、ルードヴィッヒとアンヌ、それに、皇女専属近衛隊二名に守られて、シャルガールのいる宿屋へと向かった。

シャルガールは、どうやら、あまりお金がないようで、その滞在先は小さな、古びた建物だった。宿屋だけでなく、周りの町全体が古びていて、少しばかり荒々しい雰囲気がある。

「本来であれば、あまりこうした裏通りには姫殿下をお連れしたくないのですが……それでも治安はほどほどのところを保っているのがさすがですね」

近衛兵たちが辺りをキョロキョロしながら言った。なるほど、確かに建物自体は古びて、汚れたところは見えるが、道に人が倒れていることもなく、怪しげな男たちが物陰でたむろしているようなこともない。

「シャルガールさん行きつけの酒場もそうでしたけれど、町の守備兵が見回りを頑張っているということかしら……。信用が大事だから、商人たちが厳しく言いつけているいうことなのでしょうね……ふむ」

ふと、ミーアは気になったのでルードヴィッヒのほうを振り向いて……。

「ルードヴィッヒ、ルシーナ司教の先ほどの話、あなたはどう思ったかしら？」

「そう……ですね」

その問いかけに、ルードヴィッヒは軽く眼鏡に触れながら……。

「彼の言っていることは……概ね正しいのだろうと思います。道義的には正しいですし、人格者でもあるのでしょう」

それから、ルードヴィッヒは辺りを……商人たちの築き上げた町

を見た。
「利益のみを追求する思考は危険です。あのシャローク・コーンローグしかり、凡百の商人たちしかり……。他者を踏みつけにし、自己のみの利益を追求する、それは自分のみならず社会全体を不幸にする。だから、商売には、しっかりとした道義的な正しさが必要ですし、統治にもそれが必要というのは、厳正な事実でしょう。が……」
一度、言葉を切ってから、ルードヴィッヒはミーアに目を向けた。
「私は、ミーア姫殿下は、慈悲深い方だと思っています」
「ほう……」
突然の言葉に、ミーアは、しかつめらしい顔で腕組みする。
正直、思い当たることは特になかったが……まぁ、慈悲深いほうが断頭台を回避できる可能性は上がりそうなので、意識していなくても慈悲深く振る舞っていたことはあるだろう、たぶん……っと納得するミーアである。
「ですが、ミーア姫殿下は慈悲深さのみを理由に、なにかを強要することはなさらない方であると考えます。慈悲深くあることを求めるとしても、必ず、相手の利益を考える……いや、相手が喜んで、慈悲深く、善行を積めるように状況を整えるといえばいいでしょうか……」
顎に手をやりながら、ルードヴィッヒは続ける。
「ルシーナ司教のやり方は、正しさを誇示して、相手に義務を課すやり方のように思えます。ミーアさまは、どのようにすれば、相手がそれをできるか、しっかりと考えたやり方のように思います。正しいからそれに従えではなく、それを相手にさせるにはどうすればいいのかをしっかりと考えている……。私は、そちらのやり方のほうが優れていると思っていますが……」
「ふふふ、あなたに認められるのは、悪い気はしませんわね」
かつてのルードヴィッヒ・クソ・メガネ・ヒューイットに褒められているようで、なんとなく嬉しいミーアである。

そんなミーアに、ルードヴィッヒは難しい顔で続ける。
「ただ……ルシーナ司教がどこまで胸の内を明かしているのか……先ほど言っていたことを、どの程度、本気で言っているのか……。正直、判断に迷います」
「彼が偽りを口にしていたと……？」
「偽りなのか、あるいは、隠しごとなのか……。セントバレーヌのことがすべてか、それとも一部に過ぎないのか……確信が持てないのです。ですから、先ほど、リオネルさまへの指示には、感心させられました。ルシーナ司教の思惑を知るためには、情報が不足していると思いますので」
「ふぅむ……」
そうして、頭がくらっくらしてきたところで、
「まぁ、とりあえず、中に入りましょうか。こちらもやるべきことはやらなければなりませんし……」
ミーアの声で一行は宿屋の中に踏み込んだ。
「ああ、これは、ミーア姫殿下……。ご機嫌麗しゅう」
部屋を尋ねると、がさがさ、ごそそっと派手な音がした直後、帽子にローブを羽織ったシャルガールが出てきた。ぴょこん、ぴょこん、っとあちこちに髪が跳ねているのを見ると、どうやら、寝起きだったらしい。
「突然、お邪魔して申し訳ありませんでしたわね。少し、急ぎの用事があったものですから、来てしまったのですけど……お邪魔だったかしら？」
「いえ、なにも問題ありませんが……」
っと、シャルガールの視線で気付く。彼女の部屋は、どうやら、あまり広くはない。
「ふむ、全員は入りきれませんわね。それじゃあ……」
「ミーアさま……」
アンヌがスッと手を挙げる。
「どうか、私も一緒に……」

「あら、アンヌ。ええ、それはもちろんですけれど……」
珍しく主張してくるアンヌに首を傾げつつ、ミーアは近衛兵二人を部屋の前に残して、室内へ。
右には知恵袋ルードヴィッヒ。左には敏腕メイドアンヌを従えて、シャルガールと対峙した。
「それで、ご用というのは……」
「ええ、あなたにお聞きしたいことと、お願いしたいことがあるのですけど……」
そう言ってから、ミーアはルードヴィッヒに目を向ける。一つ頷き、ルードヴィッヒは言った。
「あなたに、ミーア姫殿下をモデルにした女神の肖像画を依頼した人物について……。もう一度、詳しく聞きたいのですが……」

第百十四話　怒れるメイドと流れ矢と

「へ？　依頼人、ですか？」
シャルガールは、きょとんと首を傾げる。
一瞬、依頼人のことは詳しく言えません……などと突っぱねられるかと思ったのだが……。
「さぁ……普通の若い商人だったので、覚えていることと言われても、特には……」
心の底から興味がないといった様子で首を振るシャルガールである。
「なにか、ございませんか？　どこかで見かけたことがあるとか……」
「うーん……あまり部屋から出ないので……」
シャルガールの後ろには、何枚か、描きかけの絵があった。どうやら、普段は、ここにこもって絵を描いているらしい。
「なんでもいいのです。印象とか、言葉の訛りとか、あるいは、匂いとか……」
「そうですね。そういうのにもあまり興味が……あっ！　そうだ！」
っと、そこで、シャルガールは手を叩いて、
「絵のモデルには、あまり相応しくないかな、と思いました。華がないというか、絵描きの心をくすぐらないとか……そういう意味でも、普通の人でした」
サラリと失敬なことを言うシャルガール。モデルとして相応しくない、と言われたミーアは、思わず、ヒクッと頬を引きつらせる。
っと、その時だった。
「あの……よろしいでしょうか？」
意外なことに、アンヌが声を上げた。その顔は、とても険しいものだった。

「ええと？　なにか……？」
「シャルガールさんは、なにをもって、絵のモデルに相応しいとおっしゃっているのですか？　どんな意味で華がないとか、絵描きの心をくすぐらないとか、言っておられるのですか？」
ちょっぴり怒った声で、アンヌが尋ねる。
「ええと……？　それはどういう意味ですか？」
「美しいとか、美しくないとか、そういったことをどのような基準で判断して言っているのでしょうか？」
食い下がるように、アンヌが言う。
――ふむ、そう言えば、シャルガールさんに、ずいぶんと怒ってましたわね、アンヌ。わたくしが、絵のモデルに相応しくない、と言われたから……。
どうやら、自分のために怒ってくれているらしいアンヌ。それがちょっぴり嬉しくもあり……。
――しかし、これ以上、アンヌの美容的指導が厳しくなるのも、これは問題ですわ。ケーキとかクッキーとか好きな時に食べられなくなってしまいそうですわ……。
ううぬぬ、っとミーアが唸っていると……。
「それは、私の美的感覚を問うているのですか？」
アンヌの問いかけに、シャルガールの表情もまた険しくなっていた。
「美的感覚……そうですね。それがどのようなものなのか、ぜひお聞きしたいなって思って。先日、言っておられましたね。ミーアさまが、モデルに相応しくない、美しくない、全然、可愛くないし、華がない、と！」
アンヌは、ものすごく怒っていた！
なるほど、自分の名誉のために、アンヌが怒ってくれるのはとても嬉しい。確かに嬉しいのだが……。
――あ……あら？　相応しくないというのは言ってた気もしますけど、美しくないとか、可愛くないとか、華がないとか、言われた

かしら？　具体的なことは、特に言われてなかったような……。
　などとは思ったものの、激昂するアンヌに口を差し挟めるわけもなく……。
「うーん、感覚を言葉にするのは難しいんですよね。こう、見た瞬間にビビッとくるかどうか、みたいな……？」
　首を傾げつつ、そんなことを言うシャルガールに、アンヌはキッと目を向けて……。
「見た瞬間……つまり見た目、人のうわべだけ……外見的な美しさだけが重要なんですか？　あなたが美しいと、外見を評価した人がモデルに相応しいと……」
「まぁ、そう……ですけど……」
　そこで、ようやくシャルガールは気付いたらしい。アンヌが、怒っているということに……。なにやら、落ち着かなげに目を泳がせる彼女に、アンヌは続ける。
「その外見的な美しさだけを忠実に描きこむことだけが、あなたのしたいことなんですか？」
　畳みかけるように質問を重ねていく。さすがに、これは、機嫌を損なってしまうんじゃ？　と心配になってシャルガールの顔を見ると、彼女は……何やら微妙な顔をしていた。
　もちろん、機嫌が良くはないのだろうけれど、どちらかというとそれは、意表を突かれたというか……あるいは、なにか悩んでいるような……そんな顔だった。
「そんな人にミーアさまを……可愛くないだなんて……」
「アンヌ……」
　まだ言い足りなそうなアンヌを、ミーアは片手を挙げて制する。
「わたくしのために怒ってくれたのは嬉しいですけれど……今日は文句を言うためではなく、お願いに来ている立場ですから」
「あっ、もっ、申し訳ありません」
　アンヌはミーアに頭を下げて、それから、シャルガールのほうに向いて、深々と頭を下げた。

「申し訳ありません。過ぎたことを言ってしまいました」
そんなアンヌにシャルガールは、慌てて首を振り、
「いえ、もしも、不快にさせてしまったら申し訳ありませんでした。どうも、私は、デリカシーに欠けるとよく言われてて……」
などと、一応の和解が済んだところで、ミーアは口を開いた。
「シャルガールさん、わたくしから、一つ依頼がございますの」
「はぁ、依頼……ですか？」
「ええ。そうですわ。あなたに描いていただきたいものがございますの」
一度、言葉を切って、もったいつけるように一呼吸。それから、
「聖女、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガをモデルにした、女神のような肖像画を……」
ミーアは、重たい口調で言った。
「わたくしの時よりも、派手なものが好ましいですわ」
余計な一言を、付け足して……。

第百十五話　イロイロなラフィーナ……ミーアは混乱した！

「はっ、派手な……？」
シャルガールが、小さく声を震わせた。
「そっ、それは……ラフィーナさまを、私の好きに描いてもいいということでしょうか？」
「あら……？　妙ですわ。別にそんなことは言ってないのですけど……」
シャルガールの口にした言葉に、微妙な飛躍を感じて、ミーア、思わず首を傾げる。
はて？　大陸共通語の「派手」に「好き勝手」のニュアンスなんてあったかしら？　などと思いつつ、訂正を試みる。
「そうではなく、目立つ感じで、と言いますか……」
「なるほどなるほど、目を引く感じ、ということですね。ふむ……露出を増やすと人目を惹きますが、こう、おへそが出てる感じのキワドイ衣装とかどうでしょう……？」
「いや、それは駄目でしょう」
……真顔で答える常識人のミーアである。
いやいやいや……おへそが見えたいかがわしい絵とか、なにを考えてんだ！　と思わずツッコミを入れてしまったミーアなのである。
確かにそれならば、女神肖像画の件は有耶無耶になるだろうが、より大きな問題がやってくるわけで……それではまったく意味がないのだ。
――っというか、この方、微妙に話が通じない感がありますわね……常識がないというかなんというか……。
っと思いかけたところで、ミーアは、いや、違うぞ！　と気付く。
――ああ、つまりあれですわ。最初に言っていたとおり、この方、好き勝手に描くつもりなんですわ！

要するにシャルガールには、自分が描きたいビジョンがあり、その中から「派手な」や「目立つ」という条件に合うものを提案しているのだろう。
ただ、その描きたいデザインというのが、到底許容できないというか……獅子の尾を掴んでブンブン振る感じなだけで……。
「え、ええと……あの、わたくしの女神肖像画っぽい感じで……その色違いとかでも全然いいのですけど……」
「あー、でも、あれは一度、描きましたし……。いまいち、これから描こうというやる気がなぁ……。お金さえ払ってもらえるなら、頑張って描きますけど、やる気が起きない物って描くのにとっても時間がかかってしまって……」
なぁんて言ってやがる！　実になんともわがままなヤツである！
――これは、なかなか、骨が折れるかも……。
頭を抱えつつ、ミーアは言った。
「ええと、ちなみにあなたが今までに描いた絵は、どんな感じですの？」
なんとか、シャルガールの好みを探ろうと、ダメで元々で、そんなことを言い出すミーアであったが……。
「あ、見ますか？　私が描いた聖女さまの肖像画案を！」
「あら、そんなものがございますの？　それはいいかもしれませんわね」
さすがにヴェールガ公爵家に出そうとしてた肖像画案だったら変なことはしてないだろう……っと、思っていたミーアであったが……シャルガールがノリノリで差し出してきた絵の数々を見て……思わず唸る。
「こっ……これ、は……」
そのデザインに、思わず頭がクラァッとしてしまうミーアである。
一枚目は……なんか飛んでいた、ラフィーナが……。キラキラした星をつま先から出しながら、しかも、なにやら、人差し指を突き出して、こうカッコイ……恥ずかしい！　ポーズをとったラフ

ィーナが、可愛らしくウインクしていた……ウインクしていたっ！
「ラフィーナさまを天使に見立てた肖像画があったので、それに躍動感と可憐さを付け足したのがそれです。発想に面白みがないので提出は見送りましたが……分析によると、どうやら、ラフィーナさまは、天使の衣装が好きみたいですね。天使の衣装が選ばれることがとっても多い感じがします」
　それは、天使の衣装が一番マシだからなんじゃ……？　などと思うミーアだったが……あえてそれを口にすることはなく……。
「へー、そうなんですのねー」
　やや言葉から感情が抜けてしまった気がするが、まぁ、置いておいて……次の一枚を手に取り……。
「……おぅ」
　思わず声が漏れる。次の一枚は……なんか、こう、ラフィーナの頭に耳が生えていた。獅子の耳だった。着てる服ももふもふとした毛皮状の服で、ぴょこんと尻尾まで生えていた。
　ラフィーナに獅子の格好をさせて、その中に眠る獅子を目覚めさせようとは、なんと高度な……などと慄きつつも、ミーアは思う。
　――しかし、これは可愛らしいですし、露出もないからダメではないのでしょうけれど……獣の格好というのが引っかかりそうですわね。これを描かせたら、ラフィーナさまを悪魔扱いしてるとか言われてしまいそうですわ。これは使えなさそう……。
　っと、ミーアが思っていると……。
「これは、先輩が攻め過ぎだというので断念しました。悪魔っぽいとか言ってましたけど、今にして思えば、私のセンスを恐れて邪魔をしただけかもしれません」
　どうやら、シャルガールの先輩は、自分と同じ常識人らしい、とミーアは判断する。
　――その方がいなかったら、シャルガールさんの立場はもっと悪くなっていたかもしれませんわ。
　などと思うミーアである。さらに、

「あ、これは自信作ですね。無難も無難に怪物を倒す聖女の力強さを表したもので……」
などと胸を張って、シャルガールが出してきたもの、それは、白いドレスを身に着けたラフィーナが、でっかい光の剣で怪物を切り倒してるものだった。それはもう大きい剣だった。ラフィーナの身長の二倍ぐらいの大きさがある。
しかも、それを振り切ってるラフィーナが、また、こう、実に、キラッキラしていた。
「見る角度によって色が変わるんですよ」
そう言われ、試してみると、ラフィーナの髪の色が変わった。ついでに瞳の色も、こう、派手になった。さらに、右と左で色が違う。
実に凝っている！
――これを見たら、ラフィーナさま……悩んでしまうのではないかしら……。自分が、周りからはこう見えてるのかしら？　っと……。
「残念ながら、見せる前に先輩から止められました。ラフィーナさまのご不興を買うと……。本当かなぁ、と疑わしく思っていますが……」
どうやら、ラフィーナの心痛は、先輩の肖像画家によって回避されたらしい。なによりである。
――これは……公爵家の肖像画家をクビになっても仕方ないかも……？
などと思いかけたミーアだったが、直後、一枚の絵に目を留める。
「あら……これ……」
それは、同じくラフィーナが悪魔を滅する図だった。
――ふむ、題材としては無難ですし……それに、この衣装も……ちょっぴりスカートが短いけれど、まぁ、まとも……？　人魚とかよりは露出も抑えられてますし……。武器もあのでっかい剣とかよりは小さくて普通……？
ミーアは、その肖像画を角度を変えつつ眺めてから言った。

「うん、これは……いいんじゃないかしら？」
……あまりにアレな絵を見続けたために……ミーアの審美眼は曇っていたっ！
ミーアは……混乱しているのだ。
「ああ、やはり、それですか。お目が高い。それは、肖像画コンペで、あと一歩までいったものです」
「まぁ、そうなんですのね！　ふふふ、やはりわたくしの審美眼も大したものということかしら。では、こういうデザインで、女神をイメージした絵がよろしいのですけど、描けますかしら？」
「もちろんそれなら描きます。精魂込めて描かせていただきます」
なにやらテンション高く言うシャルガールに、ミーアは満足げに頷くのであった。
……大丈夫だろうか？

第百十五話　イロイロなラフィーナ……ミーアは混乱した！（後書き）

美術館に行くと美しい絵ってなんだろう……？　と言う感じになりますよね。

第百十六話　芽吹き、兵の足を絡めとり……

ミーアがシャルガールにロクでもないことをお願いしている頃、ディオン・アライア率いる皇女専属近衛隊はポッタッキアーリ候の邸宅の襲撃に向かっていた。

「奇襲で二、三人を制圧した時点で、アベル王子殿下に説得していただく。そんな感じの流れでどうですかね？　ああ、もちろん、制圧と言っても殺しませんよ。あまり追い詰めて死兵にでもなられたら面倒なのでね」

ディオンの言葉に、アベルは頭を下げて、

「我が国の貴族が申し訳ない」

「ははは、別にどうということもありませんよ。まぁ、欲を言えば、レムノの剣聖や剛鉄槍みたいな、どうということもある敵がいてくれると退屈しなくて済むんですがね」

肩をすくめつつ、ディオンは笑った。

「しかし……レムノ王国のほうはゲイン王子が足止めするとして、ミラナダ王国軍は大丈夫だろうか。あちらにもなにか足止めができればいいのだが……」

ふとつぶやいたのはシオンだった。そんなシオンに、ディオンは、うーん、と唸り、

「まぁ、脅しはかけてきましたけどね。どこまで効くかはわかりませんが……」

「脅し……というと？」

「なに、簡単なことです。今、セントバレーヌには帝国のミーア皇女殿下がいらっしゃる。我々はその専属近衛隊だ、と教えてやったまでのこと」

別に、ミーアが商人の側に立っている、とは言わない。ただ、そこにいる、とだけ教えたのだ。

「なるほど。進軍したことによって、第三者である帝国皇女を危険にさらすようなことになれば、ティアムーン帝国を敵に回すことになる……と暗に伝えたわけか」
納得した様子で頷くシオンとアベルに、ディオンは続ける。
「ついでに、姫さんがラフィーナさまのご友人であることを、少しばかり誇張して伝えておきましたんでね。彼らの頭の中では、セントバレーヌに進軍することが、ティアムーンとヴェールガ、どちらも敵に回すことになる、ということになっている……と良いなとは思うのですがね」
ディオンはそう言って、首を振った。
「もっとも、希望的観測ですがね、これは。こうなってほしいという願いは、戦場においては聞かれないのが常ですから、備えは必要でしょう」
どこか含蓄のあるその言葉に、
「なるほど……。大変、よくわかります。料理場(せんじょう)では必要な心構えですね」
なぜだろう……、キースウッドがしみじみと頷いていた。それはもう、心からの同意であった。なぜだろう……？
そうこうしている内に、一行はポッタッキアーリ候邸の前に着いた。
「ま、いずれにせよ、ここの奇襲部隊を制圧できないとどうにもできないので、手早くやりましょうか」
そうして、ディオンは剣を抜いた。

さて、ディオン・アライアに脅しつけられたミラナダ王国軍であるのだが……皇女ミーアの情報は、ディオンの想像以上の足止め効果を発揮していた。
「帝国の……ミーア姫殿下がいる……だと？」
震える声でそうつぶやいたのは、一隊を率いる貴族、ビアウデット伯爵であった。ちなみに、彼の息子はセントノエルにて、タチア

ナに絡んでいた少年だったりするのだが、それはさておき……。
王命により、セントバレーヌ攻略を命じられた彼は、三百人の歩兵をもって、それを成そうとしていた。もっとも、歩兵と言っても、多くは農民たちからの徴用であり、実質的な戦力としては、その三分の一と言ったところだった。
しかも、実のところ、彼らは戦う気はほとんどなかった。まったくなかったといっても過言ではない。
その兵站は脆弱で、セントバレーヌに行きつく程度、街を守る守備兵と数週間にも及ぶ戦闘を！　などというのはもってのほかだった。
彼らの役割はあくまでも脅しである。
セントバレーヌの守備兵が機能不全に陥っているところを、ポッタッキアーリ候の軍との合算による兵数によって威圧、瓦解させることこそが目的だった。
楽な戦のはずだった。戦というか、ちょっとした軍事パレードぐらいのつもりだったのだ。
それだけに、ディオンたちの出現は、彼らに強烈な衝撃を与えた。
「なっ、なんということだ……、なぜ、こんなことに……」
ビアウデット伯は、王の口車に乗せられてしまった自信を呪った。
そもそも、そんな甘い話が、あるわけがないのだ。ただ、兵を出すだけで目的が達成できるなどと……。
「伯爵さま、これは……まずいのでは？」
部下の言葉に、伯爵は舌打ちする。そんなこと言われるまでもないことだった。
帝国皇女がいる町を、知っていながら攻撃した、などということになれば、帝国を全面的に敵に回すことになる。
否、それだけではない。ミーア・ルーナ・ティアムーンを敵に回すということは、それ以上に致命的なことであった。
そもそも、ミラナダ王国は、なぜ、ルシーナ司教の話に乗ったのか……。

そこには、大陸全土を襲う食料不足が大きく影響していた。
小麦の不作はミラナダ王国も変わらないことだった。港湾都市セントバレーヌから流れてくる食料があるため、今のところ飢饉は起きていないが、その供給が何らかの事情で断たれでもしたら、これから先、厳しい状況がやってくるだろう。
それが、恐れとなって国全体を覆っていた。そんな折、今回の話が届いたのだ。
彼らはなにを求めて出兵したのか……？　ビアウデット伯は、なにを求めて兵を率いているのか……？
それは、港に回る食料が減った時に、優先的に食料を得る権利。要は、自国の安全だった。自国の優先的な安全であった。自国のみの安全であった。
ミーアが遥か昔に捨てざるを得なかった“自国のみの安全”を、彼らは求めてしまった。それゆえの出兵であった。
甘さが……楽観的な計算があったのだ。
もしも、安全が手に入るならばよい。仮に失敗しても、かの大商人シャロークに頼ればいい。あの男も、出身地たるミラナダが苦境に瀕していれば、助けてはくれるだろう。
それに……自らの息子が言っていた言葉がビアウデット伯の頭に残っていた。
セントノエル学園の生徒会長、ミーア・ルーナ・ティアムーンは非常に慈悲深く、パン・ケーキ宣言なるものを提唱していると聞く。いざという時は、帝国のミーア姫殿下に頼れば大丈夫のはず……。
けれど、そのことを信じ切れないから、最初からそれに頼ることはしないし、できない。
他国の善意に頼り切ること、それを信じぬくことは難しい。自分でなんとかできるなら、そうすべきだ、と。そう考えていたのだが……。
「皇女ミーアがいる……もしも、戦闘が始まって皇女の身になにかあれば、食料が……」

ミーアの慈悲にすがることはもちろんのこと、シャロークに金を積んで、食料を恵んでもらうこともできなくなるだろう。彼はミーアの事業に協力していると聞くし……。

「それに、やはり帝国を敵に回すことなど、できるはずがない……」

ビアウデット伯は、呻くようにつぶやく。

ミラナダ王国は小国だ。仮にティアムーンと戦争にでもなれば一瞬で踏みつぶされてしまうだろう。

「それだけではありません。皇女ミーアは聖女ラフィーナの無二の友というではありませんか。であれば、都市の制圧が上手くいくにしろ、いかないにしろ、戦闘が始まってしまった時点でおしまいです」

彼らに大義名分を与えているのはルシーナ司教だが、聖女ラフィーナの怒りを買ったとあれば、それも怪しい。

「ということは……」

「戦闘状態にならぬよう、セントバレーヌ守備隊を無力化したうえで、無血開城ということになれば良いのですが……」

夢物語のようなことを言う部下に、ビアウデット伯は、絶望的な目を向けた。

「どうしたものか……」

ミラナダ王国軍を足止めしたもの……それもまた、セントノエルにおいてミーアが撒いた小さな種の芽吹き。大きく育ったその草は、兵たちの足を絡めとり……時間は無為に、否……有意に過ぎていくのだった。

第百十七話　ほどほどでいい……

さて……シャルガールに大まかな肖像画のイメージを伝え終わった時だった。
「ところで、ミーア姫殿下、このラフィーナさまの肖像画はなにに使うご予定ですか？　ラフィーナさまへのプレゼントとか？」
唐突な問いに、ミーアは首を傾げた。
「……プレゼント？」
ミーア、シャルガールの肖像画群を改めて眺めて、それから、自分が指定した絵を想像して、
「はて……プレゼント」
「はい。ラフィーナさまへのプレゼントかと思ったのですが……」
いやいやいや、少なくともラフィーナさまへのプレゼントにはなりませんでしょう……と心の中でつぶやくミーアである。プレゼントしたら喜びそうな神父に心当たりがないわけではなかったが……。
「まぁ、そう……ですわね。プレゼント……そのぐらいのつもりで描いていただけると嬉しいですわね。うん……。しかし、残念ながら、プレゼントというわけではありませんわ」
「では、なんのためのものでしょうか……？」
「それは……」
さて、なんと答えたものか……一瞬、黙ったミーアであったが……。
――まぁ、別に隠す必要もございませんかしら？
小さく頷き、言った。
「詳しいことは省きますけれど、このセントバレーヌを救うためのもの、ですわ。今現在、このセントバレーヌには危機が迫っておりますの」
「え？　セントバレーヌを救うために……私の絵が……？」

きょとん、と首を傾げるシャルガールに、ミーアは頷いてみせた。
「ええ。そもそも、わたくしたちが、セントバレーヌに来たのは、その危機を回避するためなんですの」
今までの会話から、シャルガールに対しては、変に持って回ったことは言わないほうがいいと判断する。ロクなことになりそうにない。
「でも、なぜ、そのようなことを……？　ここはセントバレーヌ、ヴェールガの領土です。帝国の皇女殿下には関係ないのでは？　それに、民を救うためにわざわざ、皇女殿下が？　いったいなぜ……」
「決まっておりますわ。わたくし自身の幸せのためですわ」
シャルガールにはストレートな物言いを、できるだけ素直に……っと思っていたため、ミーア、勢い余って本音がポロリしてしまった。
口に出してから、あ、やばい……っと思うも……。
「つまり、民の幸せが、ミーア姫殿下の幸せ……ということですか？」
どうやら、良い感じに解釈してくれたらしい。
なので、ミーアはそれに乗ることにする。
「そうですわ。そのために、いろいろと駆けずりまわらなければならないのですわ」
そう言った刹那、ミーアの脳内に、ある閃きがあった。思い付きに促されるままに、ミーアは続ける。
「だからこそ、あなたのモデルには相応しくないのかもしれませんわね……。帝都やセントノエルで、のんびり美容に勤しむわけにもいかないものですから」
ちょっぴり、ミーアは付け足した。
いろいろな場所に行き、いろいろな人と共に、いろいろな物を食べなければならない。だから、ちょっぴり、ＦＮＹって、やや絵のモデルに相応しくなくなってしまう。
それって、もう、仕方のないことじゃないかしら？　っと、訴え

かけたいミーアである。
だから、絵のモデルに相応しくなくっても、甘いものを控えたりとか、しなくってもいいんじゃないかしら？　っと、アンヌに訴えかけたいミーアなのである！
「忙しい中でも、このアンヌは精一杯、わたくしの美容と健康に気を使ってくれていますわ。それで、わたくしは十分。だから、もしもあなたの美の基準にわたくしが満たないというのなら、きっとあなたの求める美というのは、わたくしには不要のものなのでしょう。わたくしには、それ以上に大切なものがあるのですから」
過度に甘いものを控えて、過度な運動をしてまで求める美など、ミーアは欲しくはないのだ！　そう、何事も、ほどほどがいい、それこそがミーアの理想なのだ。
「民を幸せにするために……美しさを捨てるっ！？」
「いや、捨てるとまでは言っておりませんけれど……っていうか、この方、あんまり話聞かない方ですわね？」
まぁ、わかってましたけど、っとミーアは、ため息を吐き、
「ともあれ、見た目をどうこう言っていられない時があるのも確かですわね。だから、まぁ、その、絵のモデルに相応しくないと言われてしまっても仕方ありませんわ。うんうん……」
「そんな……見た目……美より大切なことがある……ある？　そんなことが、ある……いや、美が最上ならば、むしろ、見た目は……逆に？」
なにやら、ぶつぶつとつぶやくシャルガール。
「ええと、それで、依頼に関しては、引き受けていただけたのかしら？」
そう問いかければ、シャルガールは、ひどく神妙な顔をして頷いた。
「それと、万が一、例の依頼人が来たらその時は急ぎお知らせください。商人組合のほうで容疑者があがった時に、確認にもご協力いただければ嬉しいのですが」

付け加えるように口を開いたルードヴィッヒに、シャルガールは頷いて、
「ああ、はい。わかりました。お呼びいただければすぐにでも参ります」
素直に請け負ってくれるのだった。

さて、宿屋を出てすぐに、ルードヴィッヒが話しかけてきた。
「ミーアさま、このまま商人組合に行き、例の商人についての調査をするのがよろしいかと思いますが……」
「ああ、そうですわね……」
ミーアは少しだけ考えてから……。
「ビオンデッティさんや目ぼしい方たちと会談して、これからの動きについても少し話しておいたほうがいいですわね」
ディオンが失敗するなど、万に一つもあり得ないと思っているミーアではあるが……かといって彼が成功したら、それで終わりということでもない。それで撤退してくれれば楽でいいのだが……あくまでも、それは時間稼ぎに過ぎない。やるべきことはたくさんあるのだ。
「一つ一つやれることからやって行きましょうか」
ミーアの指示に、ルードヴィッヒとアンヌは静かに頷いた。
「しかし、こちらはなんとかなりましたけれど……ベルたちは大丈夫かしら？」
ふと、ミーアはつぶやいた。
「まぁ、リーナさんもいますし……リンシャさんもなかなかに機転が利く方。それに、リオネルさんも優秀ですし……。まぁ、ベルは置いておくとして、あの三人がいるならば、たぶん大丈夫だと思いますけれど……冒険だの探検だのと言ってなければいいのですけれど……」
ミーアが、そんなことを思っていた頃……。ベルたちはというと……。

第百十八話　愚直な追求

さて、ミーアたちと別れたリオネル一行は、一路、ルシーナ司教の屋敷に向かっていた。

「やはり、父上のことを聞くのは母上、それに、付き合いの古い使用人たちに聞くのが良いと思います」

そう言うリオネルに、頷くのは、シュトリナだった。

「話を聞くならば、今の内ですね。ルシーナ司教と対立したとわかったら、素直に教えてもらえないと思うし……」

そう言ってから、シュトリナはリオネルの顔を眺めた。その顔は、緊張と不安を色濃く映していた。

実の父と、場合によっては母や周りの使用人たちすべてと対立するかもしれないのだ。その気持ちが明るいはずもないが……。あえて指摘せず、続ける。

「問題は、ルシーナ司教のしようとしていることを、みなさんが把握しているかどうかということですけど……」

はたして、素直に情報を聞き出せるのか……少しばかり不安を感じるシュトリナである。

――もしも、納得づくで協力しているというのなら、話を聞き出すのは難しいんじゃないかな。ルシーナ司教は、別に暴君ではないし、どちらかというとみなから慕われている印象がある。それに、見たところ夫婦仲も決して悪くないし……。とすると、突くべき隙は、あまり多くない。リオネル・ボーカウ・ルシーナとレア、ボーカウ・ルシーナの兄妹がこちらの味方にいるということぐらいしか……。

場合によっては、なにかしらのお薬を処方したほうが、気持ちよく話してもらえるんじゃないかな……などと……可憐な笑みを浮かべつつも思ってしまうシュトリナであったのだが……。

「母上には、きちんとお話しすればわかっていただけると思います。もしもわかっていただけなければ……私が説得します」
その裏表のない真っ直ぐな……真っ直ぐすぎる言葉を聞いて、シュトリナは、思わずたじろいだ。
改めて見ると、リオネルの顔には、確かな決意の色が窺えた。真っ直ぐに前だけ見つめるのは、澄み切った瞳……そのあまりにも純粋な覚悟に、思わず息を呑む。
なんて単純な……と嗤うことは簡単だ。けれど、彼の言葉からは、確かな威厳のようなものが感じられた。
――これは、逆に強みがあるのかもしれない。それなら、リーナたちは……。
っと、考えを勧めようとしたところで……。
「あの、リオネルくん……ボクにも考えがあります」
ベルがそっと手を挙げた。シュトリナは……ちょおっぴり嫌な予感がした。
こういう真剣な場面においても、割とアレなことを言い出すことがあるベルは……極めて真面目腐った口調で……
「あの……お家に秘密の隠し部屋とか……ないんですか？　もしかしたら、そこに秘密の計画書とか……」
「ベルさま……ちょっと」
さすがに、この空気では自重を……っとリンシャが口を挟みかけたところで……。
「なるほど。探してみる価値は、あるかもしれません。基本的に父上は、そういったものをしっかり管理していると思いますので、探し出すのは難しいでしょうが……」
「ふっふっふ、隠されている秘密を暴くのが冒険というものです」
「そうですね。確かに、あの屋敷は古いですし、私も知らない部屋があるかもしれません。探してみる価値はありますね」
心なしか、肩の力を抜き、楽しそうに話すリオネル。
――緊張が解けたならいいけど……でも、あの二人、やっぱり気

が合うのかな……？
首を傾げるシュトリナであった。

さて、そんなこんなで、ある程度、事前に話し合ってから、彼らはルシーナ司教邸に乗り込んだ。
「あら、リオネル……。みなさんも、ちょうど良かったわ」
ルシーナ司教の妻、レベッカ・ボーカウ・ルシーナは、優しい笑みで出迎えに出てきた。
「もうすぐランチの準備ができるわ。今日はリオネルの好物のパイ包み焼きよ。良いキノコも手に入ったから、姫殿下にもお食べいただこうと思っているのだけど……あら、ミーア姫殿下たちは……？」
「お母さま、お聞きしたいことがございます」
途中で言葉を遮って、リオネルが言った。
「母上……今、このセントバレーヌでなにが起きつつあるのか、母上はご存知ですか？」
我が子の、探るような言葉……。それを聞いたルシーナ夫人は、一転、悲しげな、寂しげな笑みを浮かべた。
「そう、聞いたのね、リオネル。あの人の考えを……」
それから、彼女は辺りをキョロキョロ見回した。
「レアも……？」
「ええ。レアも知っています。そして……私もレアも、それを止めるべきだと考えています」
はっきりとした口調で、リオネルは言った。
「母上は、どうなのですか？　このセントバレーヌを、商人組合の手からヴェールガ公国に、取り戻すべきだとお考えですか？」
その問いに、ルシーナ夫人は小さく首を傾げてみせた。
「あら、リオネル。お父さまのお考えが、間違っていたことがあったかしら？」
なにか、とぼけるような、はぐらかすような言葉……。すかさず、それを指摘しようとしたシュトリナであったが……。

「父上と言えど、間違えることはあります」
その前に、リオネルが決然とした口調で言った。
「私はそれを、生徒会長選挙で知りました。父上は、私のことをミーア姫殿下に勝ち得る器と見て、期待してくださいました。でも違った……。結果として、私は……危うくしてはいけないことをしそうになった」
リオネルはキュッと拳を握りしめてから続ける。
「私は父上の期待を裏切った。父上は、見立てを誤ったのです。父上もまた人です。神ではない。だから、間違うことはあります」
そう言ってから、リオネルは胸に手を当てた。
「それに、母上……僕は……リオネル・ボーカウ・ルシーナなのです。父上、ルシーナ伯爵の後を継ぐのは、僕なのです。父が天に召された後もなお、僕はこの世に生き、判断を下していくことになる。だからこそ僕は、知りたい。知らなければだめなんです。父上が、なにを考えているのか……なぜ、その考えを得るに至ったか……。知らなければ……」
リオネルに気圧されたように、ルシーナ夫人は目を瞬かせた。けれど、すぐに、まぶしいものを見るかのように、その目が細められる。
「そう……。そうね……セントノエルで良い学びをしているみたいね……」
ギュッと目を閉じてから、
「あの人が、マルティンが今回のことを起こしたのは……多分、若い時に派遣されていた国、ツロギニア王国でのことが関係していると思う……」
「ツロギニア王国……？」
聞き覚えのある名前……シュトリナは一瞬考えて、すぐに気付く。
――あれ？　それって、確かベルちゃんのお祖父さまの……？
軽く視線を向けると、ベルは、んー？　っと首を傾げていた。それから、リオネルのほうに目を向け、ジーっと目をすがめて……な

にかに気付いたのか、口をぽっかーんと開けるのだった。

第百十九話　物語みたいな戦いを

「これは、ミーア姫殿下……。ルシーナ司教は、いかがでしたか？」
市庁舎のビオンデッティ商会の部屋に戻ると、ビオンデッティがいそいそと近づいてきた。
「なかなか、説得は難しそうですわ」
首を振るミーアに、ビオンデッティは顔を曇らせた。
「説得のための努力は続けるつもりですけど、そのために協力していただきたいことがございますの。先日お願いしておいたシャルガールさんに肖像画の依頼をした商人を探す件ですけど……」
「探させておりますが、出入りの商人の数が多く、難航しております」
「そう……。まぁ、短時間では難しいでしょうね……」
「ええ。ただ、ルシーナ司教のところに肖像画を持ち込んだ者については、すでに判明しています。セントバレーヌに運んだ者についても特定ができましたので、両者の証言を合わせれば……」
――ふむ、その二人は蛇とは関係ないのかしら……？　それも調べる必要がありそうですわね。
「ところで、ミーア姫殿下、実は折り入ってお願いしたいことがございます」
「あら？　なにかしら？」
「このセントバレーヌを守る我々の私兵団のことなのですが……かなり浮足立っています。もともと、盗賊の相手はしたことがございますが、本格的な軍事行動となると、なかなか……。都市戦は訓練もままなりませんで……」
苦り切った顔で、ビオンデッティは続ける。
「そこで、できればミーア姫殿下の近衛隊の方たちに、指揮を執っていただけないか、と思っておりまして……」

「ふむ……」
ミーアは、腕組みし、即答を避ける。
――一応、形としては、ミラナダ王国とポッタッキアーリ候は、ヴェールガ公国の要請を受けて軍を動かしたことになるはず……となれば、下手に帝国軍を関わらせてしまうと、ヴェールガと敵対したと見なされてしまう可能性もございますかしら……？　でも……。
「やはり……難しいでしょうか？」
ミーアの抱く危惧を理解できているからだろうか。ビオンデッティは見捨てられた老犬のような目で、ミーアを見た。
――ううむ……そんな目で見られると弱いですわね……。要するに、なにか言い訳ができればいいだけですし……。
ミーアは、シュシュっとルードヴィッヒに目を向ける。知恵袋が傍らに控えているのは、実に心強い。
「ルードヴィッヒ、どうかしら？」
「そうですね……。多少強引でも、言い訳さえ用意できるならば……例えば……」
ルードヴィッヒは顎に手を当てつつ、
「セントバレーヌは、豊かな港湾都市。しかも、聞けば都市防衛の訓練もままならなかったとのこと。そこで、商人組合が、軍事訓練の顧問をミーア姫殿下に依頼した、という形はどうでしょう……？」
「訓練、ですか？」
「はい。訓練です。民にも協力してもらう、大規模なものです。食料不足による緊張感の高まりは民も知るところですから、セントバレーヌが襲われる想定も、理解が得られるかと」
そう言ってから、ルードヴィッヒはクイッと眼鏡を押し上げて……。
「そして、その訓練が数日間に及び、たまたま、両軍の侵攻の日と重なってしまったとしても、それは責められることではないでしょう」
「なるほど。では、商人組合からただちに依頼を出させていただき

ます」
　そのやり取りを横目に、ミーアはポツリとつぶやく。
「……まったく、すべてが訓練だった、ということにできれば楽ですのに……」
　っと、その時だった。
「失礼いたします。こちらに、ミーア姫殿下はおられますか？」
　入ってきたのは、ディオン、アベル、シオンだった。
「ああ、アベル。シオンも、みなさん、ケガはないですわね？」
　小走りに近づいてきたミーアに、アベルは苦笑いを浮かべた。
「ボクとシオンは、なにもすることがなかったよ。ディオン殿が全部やってくれてね」
　それを受けて、ディオンが肩をすくめた。
「以前、レムノ王国でやり合った連中より歯応えがなくって。簡単に降伏するので、拍子抜けしましたよ。まぁ、彼らとしては、大義名分を見出せない戦いなのかもしれませんがね」
「そう。それはなによりでしたわ。それで、捕らえた方たちは……」
「今、君の近衛隊とキースウッドが見てるよ。アベルの説得も効いてたみたいだから、まぁ、大丈夫だろう」
　答えたシオンに一つ頷き、それから、ミーアは改めてディオンに顔を向けた。
「ディオンさん、続けてで申し訳ないのですけど、お願いしたいことがございますの」
「まぁ、こんな状況ですからね。なんなりとお申し付けください」
　どこか、お道化た様子で、頭を下げるディオンに、ミーアは言った。
「実は、ビオンデッティさんの要請を受けて、皇女専属近衛隊に、この町の私兵団の指揮をしてもらうことになりましたの。あなたには、そのまとめ役をしていただこうと思っているのですけど……」
「それは……よろしいのですか？」
　チラリと窺うような視線をミーアに向けるディオンであったが…

…。

「ああ、名目上は、軍事訓練ということにする」

答えたのはルードヴィッヒだった。一瞬黙ったディオンだが、すぐにその顔に納得の色が広がる。

「なるほど、訓練の最中に、思わぬ軍が攻めてきた……と。しかし、不意のこととはいえ、戦いが起これば血が流れる……。無論、それを止めるために、姫殿下は動かれるのでしょうが……いざ、軍が攻めてきた時には普通に戦ってしまってもよろしいので？」

試すように問われて、ミーアは、ぐむむ、っと唸る。

正直……それは避けたいところであった。

仮にセントバレーヌを守れたところで、後始末が非常に……非常に！　面倒くさいことになりそうだからだ。

それゆえに、先ほどミーアがこぼしたことは、彼女の本心だった。ルシーナ司教を説得し、軍隊はすべて軍事訓練でした、と言って引いてもらう。

それが楽でいいんだけどなぁ！　と心の底から思っているミーアなので、ついつい……、

「戦い……。そうですわね。戦いになってしまえば、仕方のないことかもしれませんわ。他の兵たちには普通に戦い、街と自分たちを守るように言っておくべきだと思いますけれど……しかし、ディオンさん……特別に、あなたには命じますわ」

しっかりと、ミーアはディオンの目を見つめて言った。

「帝国最強の騎士、ディオン・アライア。もしも戦闘になった際には、商人組合の兵たちと協力し港を守りなさい。敵、味方を一兵も損なうことなく……」

その言葉に、その場にいた一同は、思わず息を呑んだ。

かつて……レムノ王国の最強軍団と呼ばれた、金剛歩兵団の隊長は、レムノ国王から無茶振りをされた。

自軍の兵を一兵も損なうことなく、反乱軍を壊滅させよ……などという……およそ現実的でない命令を前にして彼は兵たちを動かす

ことを躊躇した。
今、ミーアが命じたのは、それよりもさらに、難易度が高いこと。
敵味方を一兵も損なうことなく、敵を食い止めろ、という滅茶苦茶な物であった。
「ははは、なかなかに無茶なことを言いますね、姫殿下」
ディオンは苦笑いを浮かべた後……それを引っ込めて、
「まさか、本気ではないんでしょう……？」
探るように見つめてくるディオンに、ミーアは静かに首を振る。
「本気ですわ。わたくし、このセントバレーヌに平穏を取り戻すためならな、できる限りのことをするつもりですもの」
セントバレーヌに混乱が生じるようなことになってはまずい。仮に戦闘状態による混乱が十日間も続けば、その悪影響は各地に及ぶ。そうして生じた不安感は、さらなる不安感を呼び、治安は加速度的に悪化していくだろう。
だからこそ、迅速に……後に尾を引かないように、今回の騒乱を鎮めたいのだ。
「それはそれは……。いざという時に、上手く脱出する算段を付けろ、と命じられるものとばかり思ってましたが……。まさか、そんな無茶な命令を受けようとはね」
「普通の兵であれば……そう命じますわ。けれど、あなたは普通ではございませんでしょう？　ならば、あるいはできるのではないか……と、そう思ったのですわ。帝国最強たるあなたなら、物語の英雄譚のように……」
ミーアは、祈るかのように目を閉じて言った。
否、祈るかのように……ではない。ミーアは実際に祈っていた！
そうなのだ！　もしも軍が目前まで迫ったならば……ミーアは、もう祈るしかない……すがるしかないのだ。
本の中から飛び出してきたような男……物語の中で語られる人間離れした英雄のような男……帝国最強の騎士ディオン・アライアが、英雄譚のごとき活躍を持って、敵兵を、バッタバッタと……命を損

なうことなく薙ぎ払っていくことを！
　それはそう、まるで、エリスの物語に出てくる英雄の戦いのような光景……。
「そう……あの橋の上での戦いなんか……実に……」
　良いシーンでしたっけ……などと、現実逃避し始めたミーアに、ディオンは目を細めた。
「ほう……なるほど。橋の上……物語のように……ね」
　つぶやく、ディオンに次いで、ルードヴィッヒが眼鏡をクイッと押し上げた。
「ああ……そうか。物語……つまり、彼らに付き合って本当に戦争をする必要はなし……と。彼らに本物の戦争ではなく、物語を見せて……いや、後始末のことを考えると……むしろ……」
「いや、しかし、そのためには相手にも……ああ。そうか……役者は揃っているのか……」
　ディオンは、ニヤリと好戦的な笑みを浮かべてから……。
「上手く行けば、なかなか楽しいことになりそうだ。地図を用意してもらえるかな？　この港湾都市、セントバレーヌの」
　かくて……事態は静かに動き出した。

第百二十話　ナニカに誘われるように

「ところで、ミーア姫殿下、一つ、ご提案がございます」
「あら？　なにかしら、ルードヴィッヒ」
首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒが難しい顔で言った。
「今回のセントバレーヌ侵攻に関して、情報を絞ったほうがよろしいように思います。建前上、訓練ということにするのであれば、そのように触れを出し、戦闘のことはなるべく隠したほうが良いのではないかと……」
「なるほど。無用の混乱を避けるためには、そのほうが良いかもしれませんわね」
ミーアはすぐに頷いてみせる。
下手に軍が攻めてきているなどと伝えては、住民はパニックに陥る。商人たちにしても、冷静ではいられないだろう。場合によっては、このセントバレーヌからの脱出を図り、混乱が大きくなるかもしれない。
軍事衝突ともなれば、不測の事態が起きても不思議ではないわけで……。
「その点、訓練であれば、ある程度は心安らかでいられるはずですけど……はたして素直に従っていただけるかしら？」
ビオンデッティに目を向ければ、彼は深々と頷いて……。
「それは、我ら商人組合の仕事でしょうな……。緊急で避難訓練を行うことを予告しておけば、ある程度は動いていただけると思いますが……ふむ、なにか、考えておきましょう」
「ええ、お任せいたしますわ。完全に情報を伏せてしまうのも危険でしょうから、本当のことは……そうですわね。フォークロード卿と……あとは、信頼できそうな何人かに伝えてくださいませ。それと、シャルガールさんに依頼した商人を探す件もよろしくお願いい

たしますわね」
　そうして、細かい話を詰めてから、ミーアは市庁舎を後にした。
　さて、馬車に乗ろうとしたところで、護衛の皇女専属近衛兵が話しかけてきた。
「ミーア姫殿下、この後はどちらに……？」
「ああ……。そうですわね」
　ミーアは素早く腹時計を確認し……。
「とりあえず、ルシーナ司教の館に戻りましょうか。ベルたちが気になりますし、そろそろ、お昼時ですわ」
　なにやら、今日のランチは逃せない、とミーアの勘が告げているのだ。
「みっ、ミーア姫殿下、この上で、まだ、ルシーナ司教のところにご滞在なさるのですか？」
　ミーアの言葉に、皇女専属近衛隊の兵は驚いた顔をした。
「ふむ……。確かに、ルシーナ司教のところに戻るというのも、いささか、不思議な感じはしますわね」
　なるほど、言われてみれば、尤もな話だ。
　なにしろ、ルシーナ司教は敵の中核だ。にもかかわらず、その彼の館に行き、そこに宿泊するとは、確かに奇妙と言えば奇妙な感じがする。
　――さて、どうするのがよろしいかしら？
「どこか、別の場所を手配いたしますか？　ビオンデッティ殿か……フォークロード殿にお願いすれば、すぐに用意していただけると思いますが……」
　不意に、わざと聞かせるような口調で、ルードヴィッヒが問うた。彼の様子に、ミーアはそっと瞳を細める。
　――これは、近衛たちを納得させる理屈を言えということかしら……ということは、裏を返せば、ルシーナ司教のところにいたほうがいい、と……。
　空気を読み、叡智の知恵袋たるルードヴィッヒの考えを察知！

それから、ルシーナ司教のもとにいたほうが良い理由を考えてみる。
腕組みし、しばしの黙考。その後、
「いえ、それは……むしろ悪手という感じがいたしますわね……」
厳かな……まるで、最初からそう考えていたかのような口調で、ミーアは言った。
それは、少し考えれば、わかることだった。
先ほどの軍を迎える策に関してはともかく、その他のものはルシーナ司教を説得するためのものだ。では、そのような時、されると一番、嫌なことはなにか？
「一度、館を出てしまって、ルシーナ司教と会えなくなったりしたら面倒ですわ。今回の事態は、ルシーナ司教の説得が一番の勘所ですもの」
彼を説得して、彼の口で大義名分を奪えば、ポッタッキアーリ候もミラナダ王国も兵を引かざるを得ない。それこそが最善。だからこそ、彼と話ができるよう、彼のそばにいることは必要なことだった。
――それに、なんと言っても、より安全なのは、ルシーナ司教のところでしょうし……。
もしも、騒乱が起きた際、安全なのはルシーナ司教のところだろう。
確かにミーアはルシーナ司教にとっての邪魔者ではあるが、だからと言って排除してしまえば、彼は正義を失う。シュトリナは毒を警戒していたようだったが、それは、おそらくほとんどあり得ない選択肢だ。
あくまでも、司教の目的は商人組合から、セントバレーヌの統治権を奪還することにある。そして「それが正しいことである」という体を取り続けなければ、誰からの支持も得られない。
――ラフィーナさまからも支持を取り付けることを考えれば、わたくしたちに下手に手は出せないはず。
彼は、強欲な権力者ではない。悪人でもないし、愚か者とも言い

難い。
――自分がしたいことがわかっているのなら、この状況でわたくしが死ぬようなことは、逆に絶対に避けたいはずですわ。
ミーアはうむうむ、っと頷いてから、
「ともあれ、皇女専属近衛隊とディオンさんについては、自由に動いていただいたほうがいいでしょう。最低限の護衛のみ同行していただきましょうか」
おそらく、ディオンたちは、これから忙しくなる。ある程度、自由裁量に任せてしまったほうが良い仕事をしてくれる気がする。
「なっ！　み、ミーア姫殿下、それはあまりにも危険……」
慌てた様子の皇女専属近衛兵に、ミーアはニッコリ微笑みを浮かべる。
「ふふふ、問題ありませんわ。わたくしは、わたくしの専属近衛隊の者たちを信用しておりますもの」
そう、ミーアは知っている。
ディオン・アライアは時に危険な男ではあるのだが、同時に極めて優秀な、頼りになる騎士である。皇女専属近衛隊の面々もまた精鋭だ。十分に信用に値する。
では、信用できないのは誰か……？　決まっている。自分自身だ！
ミーアは、未来の自分が油断したり、サボったりで、誤った判断を兵たちに下してしまうことを恐れている。自分の判断ミスで窮地に陥ったのに、そのために命を懸けろと言われて、士気が上がるはずもなし。
ミーアは自分自身のことを、まったくもって信用していない。それゆえ、あえて、その最大の不安要素を排除したのだ。
――面倒な戦闘やら護衛やらのことは、すべてディオンさんや現場の兵たちに丸投げして、わたくしは、司教のほうに集中するのがベストですわ。いえ、ベストはラフィーナさまが来てくれて、全部丸く収めてくれることかしら……。
胸の内で都合の良いことを考えながら、ミーアは馬車に乗り込む

のだった。

第百二十一話　このお料理が美味しかったから……

ルシーナ司教邸に着くと、すぐに、リンシャが迎えに出てきた。その顔を見て、ミーアは、おや？　と思う。なにやら……困惑した様子が窺えたからだ。

「あら、リンシャさん、どうかなさいましたの？　ベルとリーナさん……リオネルさんは？」

他はともかく、ベル辺りはいそいそと出迎えに出てきそうなものだと思ったのだが……。

「それが……」

リンシャは、一瞬黙り込んでから、

「ちょっと私も持て余していますし、ご本人から聞いたほうがよろしいかもしれません。どうぞ、こちらへ」

「ふむ……ということは、なにか収穫があった……ということかしら？　それならば、わたくしたちの部屋で……むっ！」

不意に、ミーアの鼻がひくひく、と動き、ナニカの存在を捕らえた。

「その前に……お食事ですわね。お腹が空いていると、頭も働かなくなりそうですし……」

ミーアの勘が……否、胃袋が訴えかけている。今日の昼食は逃してはいけない、と。まぁ、今日は……と言わず、基本的にミーアは食事を逃すことはないのだが……。

「ああ、ミーア姫殿下、戻られたのですか……」

屋敷の中に入ると、すぐにルシーナ夫人が出てきた。ミーアを見たその顔には、驚きと……どこか寂しそうな色が見えた。それは、子どもたちが連れてきた友人であるミーアとの、決別の時を思ってのことだったかもしれないが……。

「ええ。少し遅れてしまいましたけれど、お昼をいただくことはで

きますかしら？」
「あ、え？　ええ……それはもちろん……ですけど……」
っと、ルシーナ夫人のそばに控えていた幼いメイドの少女が口を開いた。
「みなさんに喜んでいただけるように、奥さまが、ご自分で作られた力作です。ミーアさまに喜んでいただきたいからって、キノコも使って……それで……」
必死の口調でアピールするメイド。どうやら、自分たちの主人であるルシーナ司教とミーアたちの関係が、あまりよろしくなさそうだということを気にしているようだった。ゆえに、美味しい食事を作ったのがルシーナ夫人だと知らせて、それで、ミーアらの好感度を上げようとしているのだろう。
「まぁ、キノコのお料理を！？　それは、お気遣いを無駄にするようなことがあってはなりませんわね。ぜひともその傑作手料理をいただかなければ……！」
メイドの狙いは、見事にミーアに的中する。なにしろ、素人弓兵でも当たるほどでっかい的だったのだ。
そうして、ミーアはいそいそと食堂のほうへと向かった。
「まぁ……これは……」
テーブルについて、しばし……。大きなお皿がミーアの前に置かれた。
ふぅわり、と鼻をくすぐる芳ばしい香り。お皿に乗せられていたのは、大きな魚をパイ包み焼きしたものだった。その上にかけられたソースの中に、見慣れぬキノコの姿を見て、ミーアは歓声を上げる。
「これは美味しそうな魚ですわね。見たことがないですけど、なんの魚なのかしら？」
「クリンゲルバウムという魚をパイ包み焼きしたものです。ミーア姫殿下がお好きだとお聞きしていたので、キノコソースをかけてみました」

「ほほう……」
ミーアはササッとフォークとナイフを手にして、パイに当てる。パリリ、サクサク、っと音を立てて崩れた瞬間、中に隠れていた魚からふわぁっと、なんとも美味しそうな香りが立った。
「おお……身がほろほろですわね……ふふふ」
フォークで刺して、ソースに絡める。キノコを乗せるのも忘れずに。
そうして……一口。
「ほふほふ……」
口から湯気を吐きながら、ミーアは笑った。
口の中に広がるのは濃厚な磯の香り。香草類の風味がそこに交じり合い、独特の、食欲をそそる香りが匂い立つ。
魚の身はホロリ、サクリと崩れ、柔らかなソースの甘味に溶けていく。
「なるほど、パイで包んだのは、魚の風味を損なわないためなのですわね……。ふふふ、このお料理のキモは風味なのかしら？」
「はい。その通りです」
「パイの芳ばしさ、魚の風味と香草の香り、ソースの風味も……すべてが混然となって素晴らしいお味ですわ。そして、その風味を損なわないように、あえて、香りの薄いキノコの歯ごたえを追加しているというわけですわね」
ソースの中、滑らかな舌触りのキノコが隠れていた。コリコリ、カリリっと音を立て、キノコを噛みしめ、思わずと言った様子で微笑む。
「ああ、素晴らしいお味ですわ。実にお見事、感服いたしましたわ」
「あの……ミーア姫殿下」
ふと目を向けると、ルシーナ夫人が、神妙な顔で見つめていた。
「あら、なにか……？」
「リオネルから聞いています。ミーア姫殿下は、私の夫、マルティンのしようとしていることを、阻止するおつもりだと……」

「ええ、まぁ、そうですわね。ルシーナ司教のなさろうとしていることには、賛同はいたしかねますわ」
「では、なぜ、ここに戻ってこられたのですか？　ここは……あなたにとって敵の家では……？」
ミーアは、ふむ、っと小さく唸ってから……。
「ふふふ、このシチューが、とても美味しかったから……でしょうか」
冗談めかした口調で言った。めかしているだけであって、本当に冗談であったかどうかは定かではないが……。
「……え？」
目をパチクリと瞬かせるルシーナ夫人に、ミーアは続ける。
「わたくし、ここでいただいたお料理をとっても気に入ってしまいましたの。わたくしたちのためを思って……というよりは、子どもたちのためを思ってなのかもしれませんけれど……とても心がこもっておりますわ。だから……」
パクリ、とパンを一口食べてから、ミーアは続ける。
「できれば、ルシーナ司教に思いとどまっていただいて……敵ではなく、客人の立場に戻りたいと思っておりますの……それがわたくしの望みですわ」
「ミーア姫殿下、お戻りになられていたのですか……」
その時だった。食堂に、リオネルが入って来た。
「ああ、リオネルさん。ええ、今、お食事を。それに、お母上と少々お話ししていたところですわ」
ミーアは、残っていたパイ包み焼きを、ひょいひょいひょい、っと流し込み……、口元をササッと拭ってから、
「それでは、わたくし、部屋に戻らせていただきますわ」
優雅に一礼してから、食堂を後にした。

第百二十二話　驚愕の事実！（ベル比）

部屋に戻ると、すでにベルとシュトリナが待ち構えていた。ミーアがリオネルと共に入ってくると、二人は、なにかもの言いたげな顔をしたが……。

「そうですわね……。とりあえず、リオネルさんがなにかお話があるみたいですから、そちらから先に聞きますわ」

ミーアは三人の顔を見比べてから言った。リオネルは、厳しい顔で頷いてから口を開いた。

「実は……母から聞いた話なのですが、父上があのように強硬な態度を取るのは、どうやら、過去の事件が原因なのではないか、と……」

「ほう……」

頷き、先を促すミーアに、リオネルは苦しげな顔のまま続ける。

かつて、ツロギニアで起きたこと……。飢饉と、王侯貴族による食料の独占、救えなかった人たちのこと……。

「派遣司教であったため、できることがあまりにも少なく……無力の内に多くの命が失われていったと……。母は、その時はまだ父と結婚してはいなかったため、あくまでも伝聞らしいのですが……」

「そう……」

ミーアは、珍しく、重たいため息を吐いた。前時間軸の自分たちのことを少しだけ思い出していたのだ。

飢えた民草を前になにもできず、ただ、頭を下げるしかできなかったこと……食料を用意する手立てはなく、無数の命が失われていくのを前にして、ただ無力感に打ちひしがれるという経験……。

――ルシーナ司教も、わたくしと同じようなことを経験されていたのですわね。

どこか憂いを帯びたルシーナ司教の顔を思い浮かべながら、ミー

アはつぶやく。
「その時の経験から、今回のことを……。なるほど……。ルシーナ司教には志があり、引けない理由がある、というわけですわね……」
腕組みし、眉間に皺を寄せつつ、しかつめらしい顔をして。
「この港湾都市、セントバレーヌに、より強くヴェールガ公国の意向を反映させることができれば、少なくとも近隣の国々で食料が不足することはなくなる。飢饉に乗じて、食料の価格を釣り上げることもなくなる、というわけですわね」
港というものは、極めて重要な拠点だ。海路によって輸送される物資は膨大な量だし、海からは海産物の恵みを得ることもできる。
ゆえに、セントバレーヌの統治者が道徳的に優れた存在であるべき、というのは理解できなくもない。のだが……。
ミーアは、そこで、ふむ、と唸った。
――これは……どうなのかしら……？
一見して、リオネルの言う動機はわからないではないのだが……本当に、それを真に受けて良いものだろうか……。なにやら……どこか釈然としないものがあるような……。
わずかの逡巡……その後、ミーアは思考を変える。
こういう時、一番、アテにならないのは自らの頭脳であることを、帝国の叡智はよーく知っている。それゆえ、ミーアはすぐそばに控える帝国の叡智の知恵袋、真・帝国の叡智ことルードヴィッヒに目を向ける。
「どうかしら、ルードヴィッヒ。あなたは、どう感じますかしら？」
「そう……ですね」
ルードヴィッヒは眼鏡をクイッと上げて……。
「これだけ大きなことをするにしては……リターンが少ないように思います。軍を動かし、場合によっては更迭されるリスクを冒してまですることなのかどうか……」
「リーナも同感です。それに、仮にセントバレーヌの商人たちの上に君臨したとして……彼らが行った先の国で、どんな商売をするか

までは縛れない。それに、それこそ、飢饉が起きている国の王侯貴族に接収されてしまえば意味がないんじゃないか、ってリーナは思います」
シュトリナが補足するように口を開いた。
知者二人の意見が一致しているとなれば、ミーアとしては反対する理由もなし。
「そうですわね、わたくしも同意見ですわ」
神妙な顔つきで、いけしゃあしゃあと言い放ちつつ、ミーアは、その流れに乗らんとする。精一杯、パイ包み焼きを消費して、ミーアは脳みそを回転させていく。
「リーナさんの指摘する通り、動機と目的がちぐはぐ、というだけであれば、動機が間違っているケースと、目的が違っているケースが考えられますわ。けれど、そこにリターンが少なすぎるということも加えると……動機のほうではなく、目的が違っているのではないか……という気がしますわね」
「これだけ大きなことをして、セントバレーヌの統治権が目的では割に合わない。つまり、父上の狙いがセントバレーヌだけではない、と？」
ゴクリ、と喉を鳴らすリオネルに、ミーアは、もくもく煙を上げつつある頭で頷いて……。
「しかし、これだけではまだ何とも言えませんわね。いずれにせよ、はっきりとした動機と、譲れない想いを持ってルシーナ司教が行動していることだけはわかりましたけど」
これは、説得がなかなか大変そうだぞ、とため息を吐くミーアである。
「ともかく、両軍を止めることはディオンさんに任せて、わたくしたちは引き続き、ルシーナ司教のことをなんとかしますわよ」
それから、ミーアはリオネルに目をやり、
「ということで、申し訳ありませんけど、リオネルさんにはもう少しルシーナ司教のことを探っていただけると嬉しいですわ。当時の

使用人の方からも引き続き、聞き取りをしていただけるかしら？」
ミーアの要請を受けて、リオネルが生真面目な顔で頷いた。

さて、リオネルが退室した後、ミーアは大きなあくびを一つ。
本日摂取した分のカロリーを頭脳労働に当てた（すっかりそのつもりになっている）ミーアは、そろそろ眠くなりかけていたが……。
そのままベッドに直行、というわけにはいかなかった。
ベルとシュトリナ、それにリンシャが物言いたげな顔で待っていたからだ。
ミーアはあくびを噛み殺しつつ、ベルたちのほうに目を向けた。
「それで、なにか、追加の報告があるのかしら？」
話を向けられ、ベルは一瞬、言い淀むが……すぐに意を決した顔で……。
「ミーアお祖母さま……あの、リオネルくんですが……」
一度言葉を切って、自らを落ち着けるように息を吸って……吐いて。それからベルはキッと顔を上げて……。
「ボクのお祖父さまなんじゃないかと思います……たぶん」
「はぇ……？」
突然のことに目を丸くするミーアであった。

第百二十三話　例えばそれは、燃え尽きた世界で……

マルティン・ボーカウ・ルシーナ。
大陸を襲う大不作、大飢饉の時期にセントバレーヌに司教として派遣されていた彼は、どの時間軸においても、それぞれに重要な役割を果たす人物であった。
もしもすべての歴史の可能性を俯瞰して、評価できる存在がいたとするならば、彼の名が各歴史の表舞台に必ず登場することに気付くだろう。

例えばそれは、ミーアベルの瞬きの合間に燃え尽きた世界でのこと。
ミーア・ルーナ・ティアムーンがちょっぴり手を抜き、帝位に就かないのはもちろんのこと、帝国に引きこもってのんびーりした結果、暗殺されてしまった歴史の物語。

神聖ヴェールガ公国は一つの歴史の帰路に立たされていた。
聖女ラフィーナによる司教帝宣言。それに伴い、ヴェールガ公国を帝政に以降することを各国に通達したのだ。
ラフィーナは、すべての国に対する敵、混沌の蛇の存在を公表。恐るべき邪教集団を団結して討滅するべく、各国に兵の供出を求めた。
「我らの神の敵を討つべく、諸国の力を糾合する。その指揮を執るために……私、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガは、今日この時より、ヴェールガ公国を神聖ヴェールガ帝国とし、悪を滅する先陣を切る」
美しき聖女の勇ましき言葉に、諸国は奮い立った。
さて、そんなラフィーナのもとを、一人の老人が訪れた。矍鑠（かくしゃく）と

した老人だった。齢八十を超えてなお、その背筋は伸び、その目には静かな力があった。
　マルティン・ボーカウ・ルシーナ司教。先代ヴェールガ公オルレアンの時代から神と公国とに仕え、その爵位を息子リオネルに譲って後もヴェールガの重鎮であり続けた人である。
「ご機嫌麗しゅう。ラフィーナさま」
「ああ、ご機嫌よう、ルシーナ司教。来ていただけて嬉しいわ」
　玉座に座るラフィーナは、かつてと変わらない、小川の流れのような清らかな笑みを浮かべて、ルシーナ司教を見下ろした。
「突然の面会に対応いただき、感謝いたします」
「ふふふ、気にする必要はないわ。我らはともに神に仕える者。門は常に開かれているのだから」
　上機嫌に歌うように、ラフィーナは言った。
「それで、なにかあったのかしら？　司教帝への就任に対するお祝いや激励……とかだったら嬉しいのだけど……」
　冗談めかしたその口調に、ルシーナ司教は表情を厳しくする。
「残念ですが……。それを思いとどまっていただくために来ました。ラフィーナさま……どうか、公国の帝国化、撤回していただきたい。我らの王はあくまでも神。人たる身で、このヴェールガの頂点に立つは傲慢に過ぎます」
「あら、でも蛇を討つのに必要なことよ？　今までのままであれば、私たちは周辺諸国に協力を訴えることしかできない。それでは、徹底して蛇を狩り出すことなどできないわ」
　まるで、物わかりの悪い子どもを諭すかのように、優しい口調でラフィーナは言った。けれど、老人は頑なに首を振る。
「それで良いのです。神の権威を帯びた我が国は、いつでも謙虚に慎重に……軽挙妄動は厳に控えるべきです」
　ラフィーナはしばし無言でルシーナ司教を見つめていたが……。
「ねぇ、ルシーナ司教、あなたは、かつて蛇の教典「地を這うモノの書」を見つけ、それを届けた功により、ヴェールガ国内で強い発

言権を持つようになった。そうではなかったかしら？」
「……だとしたら、なんでしょうか？」
穏やかな口調で返すルシーナ司教に、ラフィーナもまた笑みを浮かべて
「その本の出所は……どこだったのかしら？」
「なにが言いたいのでしょうか？」
「いえ、誤解なら申し訳ないのだけど、あなたの話を聞いていると、どうにも、蛇に有利に働くことを言っているような気がしたものだから。あなたが、蛇に対して強硬な態度をとることに反対だというのならば……地を這うモノの書の出所について、おのずと一つの推論が導き出されるのではないかと思って……」
上目遣いに見つめてくるラフィーナに、ルシーナ司教は目を見開いて……。
「本気でそうお考えですか？　ラフィーナさま」
「そう考えたくはない、とは思っているわ。ルシーナ司教。あなたは、ヴェールガがまとまるために必要な人だから……」
ラフィーナの脅しに、ルシーナ司教は疲れた様子で首を振った。
「変わられましたね。ラフィーナさま……」
「あら、私をいくつだと思っているのかしら？　私のお友だちのミーアさんは、もう孫がいる年よ」
「誤魔化さないでいただきたい……。あなたほど聡明な方が判っていないはずがない」
はっきりとした口調で、ルシーナ司教は言った。
「我が公国は神のしもべ。神を王とするしもべの国。だからこそ、我らは神の権威を帯び、代わりに、より強い自制と神の掟への服従が求められる。あなたは、その理を壊そうとしている」
その指摘に、ラフィーナは苦笑いを浮かべた。
「別に、そんな大それたことを考えてはいないわ。私が求めることは二つだけよ。我が友、ミーア・ルーナ・ティアムーンを手にかけた者たちを地獄に堕とし、悪を悪として断ずること。そして、その

邪魔をしないでもらいたいということ。たった二つだけ……それだけよ？　それなのに、あなたは、それすらも許してはくれないのかしら？」
　こつ、こつ……ラフィーナのほっそりとした指が、わずかに、苛立たしげに椅子を叩く。
「混沌の蛇のごとき悪に情けは無用。躊躇う必要もない。悪は滅さなければならない」
「失礼ながら……それは個人的な復讐の想いから来ていることではありませんか？　悪を滅するは神の業。個人の復讐心でそれを為すのは控えるべきでしょう」
「神の臣として悪を滅すること、ヴェールガの君主として人に復讐すること……結果は変わらないならば、より効率的にできたほうがいいって思わないかしら？」
「あなたのやり方では、流れる血の量が多すぎる……それは、我らヴェールガのやり方ではない。賛同はしかねます」
「そう……それは、残念だわ」
　ラフィーナは興味を失ったように首を振った。

　かくて、司教帝ラフィーナとルシーナ司教は対立する。
　ヴェールガ公国の理を解き、中央正教会の司教として、曲がることなく振る舞った彼の行動は、やがて、ラフィーナの怒りを買い……結果としてルシーナ司教は処断されることになる。
　蛇を擁護する者として……。
　そして、ルシーナ伯リオネルは、そのことに抗議をし、同じく処刑されるに至る。
　ラフィーナのもとに参上する少し前のこと。自身とルシーナ伯爵家に訪れる未来を予想していたリオネルは妻に実家であるチャルコス伯爵家に戻るように伝える。
　一方、その当時、ツロギニア王国に派遣されていたリオネルの息子、すなわちベルの父にしてパトリシャンヌの夫であった人は、そ

の任を解かれて以降、母の実家であるチャルコス伯爵家に身を寄せることになるのであった。

マルティン、およびリオネルの死後、ルシーナ伯爵家はヴェールガ国内では、邪教に与した呪われた一族と揶揄されるようになる。やがては周辺国にもその話は広がり……ルシーナ家に連なる人々は、その名を口にすることもなくなっていき……。

ベルが物心つく頃には、その家の名が語られることはなくなっていた。

第百二十四話　ミーア姫、孫の成長を心強く……

「り、リオネルさんが、ベルのお祖父さま……？　そ、それは……ええと？」

ミーア、一瞬、混乱するも、すぐに考え出す。

「つまり、まだ見ぬわたくしの娘、パトリシャンヌと結婚するのが、リオネルさんの子ども、ということかしら？」

その問いに、ベルは無言で頷いた。どうやら、冗談ではなさそうだ……と判断したミーアは、しっかりとベルの目を見つめて……。

「その根拠は？　なにかございますの？」

「確実ではありませんが、父上の面影があるように思います」

意外と冷静な口調だったが、しかし、そう言われても、ミーアのほうとしては検証のしようがないわけで……。

「ううん、まぁ、確かに冒険愛好家のところもベルに似てますわね……」

ミーアは腕組みしつつ、唸る。

「そういえば、ベルのお父さま……わたくしの義理の息子に当たる人のことを、詳しく聞いたことはございませんでしたわね」

「はい。ええと、リーナちゃんにはすでに話したことなのですが、ボクの父は、ツロギニア王国のチャルコス伯爵家の人間で……」

そうして、ベルは改めて、自らの身の上話をしていく。それを聞くにつれ、ミーアの眉間の皺が深くなっていく。

「なるほど、ベルの父方のお祖父さまは正体不明の人物で……それがリオネルさんと、そういうことですわね」

「ツロギニア王国は、ヴェールガ公国とも国境を接する国ですね。古くより、ヴェールガ公国の庇護を受けてきた国でもある。そのため、ヴェールガに追従することが多く、司教の派遣も頻繁に行われているはずです」

国が近ければ、食や風習も近い。ヴェールガから移り住む者も多いはずだ。
関係が深いツロギニアで、リオネルが生涯の伴侶を見つけるということは、あり得ないでもないような気がするが……。
「でも、結婚自体はしていなかった……それが気になりますわね。ツロギニア王国の貴族令嬢と結ばれる可能性はむしろ高そうですし、それほど難しいこともなさそうですのに」
過去に何度も、両国の貴族同士の婚姻というのは結ばれてきたはずだ。リオネルがツロギニアの伯爵家の令嬢と結婚したいと言ったところで、反対は出なさそうだが。
「それに、ベルのお父さまがルシーナ家を名乗らなかったのも気になりますわね。ふぅむ、謎が多いですわ」
「もしかして……リオネルお祖父さま……実はああ見えて、ものすごく遊び人で、お祖母さまの乙女心をもてあそんだとか……」
ベルが、なにやら、疑わしそうな目つきでつぶやく。
「あの真面目なリオネルさんが、ですの？　まさか、そんなことは……。仮にも司教に連なる方ですし、子どもだけ作って結婚はしない、などということが許されるはずは……」
言いかけて、ミーアははたと思い出す。
――そういえば、アベルも以前は遊び人でしたわね……。今では、あんなに誠実な人ですのに……。真面目な殿方って、なにかショックなことがあると、そのようになってしまうものなのかしら……例えば、今回の時とはまた違って、リオネルさんは、生徒会長選挙で、わたくしに敗北を喫しているはずですし……。
司教帝レア自体は、ベルのいた未来では登場していないので、はたして、ルシーナ家でなにが起きたのかは定かではないが、リオネルはチャルコス伯爵令嬢との間に子を成し、そして、婚儀を結ぶことはなかったということだろうか。
まぁ、ベルの言うことを真に受ければ、であるが……。
「いずれにせよ……ますます、今回のことを軽々に扱うことはでき

なくなってしまいましたわ」
いざとなれば、皇女専属近衛隊の護衛を頼って、さっさとセントバレーヌを脱出。そんな選択肢は、もう取れない。
「事を荒立てずに解決しなければならなくなりましたわ。ルシーナ司教一家が処断などということになれば、ベルが生まれなくなってしまいますし……」
っと、そう言った瞬間だった！
ミーアの背筋にゾクゾクっとした寒気が走る。それは、断頭台の形をしたヤツが放つのに、極めて近しい感覚……殺気にも似たなにかの気配！
原因を探るようにシュシュっと辺りを見回せば……シュトリナがものすごく怖い目で見つめていた！　何なら、その隣にいるリンシャの目つきも微妙に鋭い。これは怖い！
「ま、まぁ……やるべきことは変わりませんわ。今回の出来事をできるだけ穏便に解決し、ルシーナ司教一家に対する影響もできるだけ少なくする。そのために、ルシーナ司教を説得し、戦争を止める。これしかありませんわ」
そう言いつつ、ミーアはこちらに向かっているであろうラフィーナに想いを馳せる。
――ああ、ラフィーナさま、早く来ていただけないかしら……？
本当に……。
なぁんて、早くも他人任せにしたくなってくるミーアであったが……。
「リオネルくんがツロギニア王国に行くようにしないといけませんね」
ベルの言葉にハッとする。
「そうですわね……。どのような経緯で行くのかはわかりませんけれど、きちんと条件を整えておいたほうが良さそうですわ。そういう意味でも、ベルとリーナさんには引き続きリオネルさんについていていただくのが良いのですわね」

「任せてください！　ツロギニアにある冒険スポットを調べて、リオネルくんにたっぷりアピールしておきます」
ドン、っと胸を叩くベルを、ミーアは心強く……心、強く？　は思わなかったが、ともかく、任せてみよう、という気になるミーアであった。
「わたくしも頑張らねば……」
そう、気合も入っていた……のだが。悲劇の足音はすぐ近くまで来ていた。

第百二十五話　赤い悲劇の色～ミーア姫、崩れ落ちる～

赤い……それは、あまりにも赤い絶望だった。
「あ……あぁ……ああ……」
眼前に広がる惨状を見て……ミーアは膝から崩れ落ちた。
赤い……目の前すべてが、真っ赤に燃え上がっていた。
赤い……あまりにも赤い、それは悪夢の色……。
あまりの光景に、ミーアは言葉を失う。
できれば、夢だと思いたかった。こんなこと、あっていいはずがない。こんな悲劇が、許されていい……はずがないのに……。
けれど、背筋を流れ落ちる冷たい汗が……これがまぎれもない現実であることを訴えていた。
――なぜ……なぜ、こんなことに……。わたくしは、いったいどこで、なにを間違えたというんですの？
その問いの答えは……けれど、ミーアにはよくわかっていた。
すべては、自分の判断のミスだ。
信じてはいけないものを信じ、頼ってはいけないものに頼ってしまった……。それが、それこそが……間違いだったのだ。
力なく崩れ落ち、絶望に暮れるミーアに、彼女のすぐ後ろに立つ人物……、
「会心の……一作です！」
シャルガールは、万感の思いのこもった声で言った。
……堂々と胸を張り、得意げなのが何とも腹立たしかった！
その日……ミーアはシャルガールから絵が完成したと連絡を受けた。
幸い、軍事侵攻は、まだ始まっていない。ラフィーナの女神肖像画を使い、ミーアの女神肖像画の深刻度を減らす……ミーア自身、

いまいち上手くいくとは思えないのだが……せっかく描いてもらったなら使わない手はない。
「さて……とりあえず、なにに使えるかわかりませんけど、どんなものができたか確認が必要ですわね」
もしも、出来が良いようなら、何枚か同じものを作り、それでラフィーナのほうが人気だから、自分が偶像視される恐れはない、と言ってやるのはどうだろうか……？
「いや、その場合は、商人組合がラフィーナさまを女神にしようとしてる、などと言われてしまうだけですわね。ぐぅぬぬ、なかなかに厄介ですわ」
ともあれ、まずは、絵の出来栄えを確認せねば……。
ミーアはシャルガールの滞在している宿屋に行き……そして、それを見た……。
それは、巨大な絵だった。
……でっっかい！　絵だった。すごく……すっごーく、でっかかった！
どのぐらいかというと、皇女専属近衛隊の隊旗……の倍ぐらいはあった。
なんだこれ、なんで、こんなに巨大なんだ？　とミーアは、思わずクラァッとした。
さらに、問題はその絵柄だった。
そこに描かれているのは、確かにミーアのオーダー通り、ラフィーナの絵だった。デザイン自体も大きな翼とゴージャスなドレス、さらに鱗めいた模様の付いた鎧を身にまとった、大変勇ましい姿をしている。実にド派手なものだった。これは注文通りといえるだろう。全体的に赤っぽいのが、若干気になるところだが……。
「天使の衣装だけでは派手さに欠けるので、伝説の火蜥蜴の鎧を合わせてみました」
得意げに言うシャルガール。さらに、
「それと、生徒会長選挙の逸話を聞きました。お二人の絵を描くに

は、やはり、この赤い色が良いのではないかと思いまして」
いちいち解説してくれるシャルガールである。
なるほど、確かに、以前までの絵は表面に虹色に輝くコーティングがしてあったが、今回の絵は、赤く光る加工がされている。
その赤も、ミーアの思い入れのあるギロチンレッドではなく、もう少し明るい、どちらかというと炎の色に近い。
縁起が悪い感じはしないものの、その炎の色が、なんとなくラフィーナの怒りを表しているように感じてしまって、若干、恐ろしくはあるが……。
しかし、大きな問題は、そこではなくって……。
「二人の絵……わたくし、ラフィーナさまの絵を描いてと言いましたのに、なぜ、わたくしまで……」
そうなのだ。ラフィーナと並ぶようにして、ミーアまでもが、その絵の中には描かれているのだ。幸いなことに、その服装はどちらかといえば地味な旅装だが……なにやら、こう……体からキラキラしたオーラのようなものを発散しているのが不穏だ……。実に不穏だ。
「このキラキラは、いったい……いえ、そもそも、わたくしはモデルに相応しくないと、あなた、言ってなかったかしら？　なぜ、わざわざわたくしを……？」
その言葉に、シャルガールは深々と頭を下げた。
「その点は申し訳ありません。先日の言葉は撤回いたします。あれは、私が未熟な故の失言でした。ご容赦いただけますと幸いです」
そうして、彼女はアンヌに目を向ける。
「アンヌさんに言われて、目が覚めました。今までの私は、自分自身の見たもの……ただ目に映るものに基づいて、美しさを決めていました」
まぁ、美しさって、そういうものでは……？　と首を傾げるミーアに、シャルガールはグッと拳を握りしめて続ける。
「しかし、ミーアさまは、見た目の美しさを犠牲にして……捨て去

ってまで、民の平和のために駆け回っているとお聞きしました。そして、私は……そのような姿を美しいと思ったのです。それは、なんと美しく、麗しい姿なのだと……この絵に、その美しさを描いてみたいと、そう思ったのです……」

「っ！　シャルガールさんっ！」

それを聞き、アンヌが感動に目を見開いた。わかってもらえたんですね！　みたいな感じで、目をウルウルさせている。その問いかけに、シャルガールは力強く頷いている。

どうやら、二人の和解は済んだらしい。それ自体は喜ばしいことではあるのだが……あるのだが！

「なるほど……。美しさを捨てて、駆け回る……というのを、キラキラしたのを振りまきながら、で表現した……と。そして、助けて回るというのを、この旅装をしてることで表現した、ということかしら……？」

現実のミーアより凛々しく格好良くて、一見すると男装の令嬢といった趣の絵に、ミーアは再び、クラァッとする。

――ううむ、まぁ、確かに美しい絵だとは思いますけれど……美化されすぎというか、見てて恥ずかしいですわね。実に……。

っていうか、そもそものオーダーは、先日のミーア女神肖像画より派手目な女神肖像画だったはず。なぜ、女神ラフィーナと女神の美を捨てて人々を助けるミーアのコラボ絵になってしまったのか……。

――しかも、この巨大さ……これを一体何に使えば良いと思ってますの……？

そんな疑問に答えるように、シャルガールは快活な笑みを浮かべて。

「うっかり大きくなりすぎてしまったのですが、旗にして振る、とか、そういうのはどうかと思いまして……。特殊な描き方をしましたので、布のようにはためくはずです」

相変わらずの無駄に高い技術を披露してくるシャルガールである

が、ミーアがツッコミたいのはそこではなかった。
「旗にして……振る？」
その光景を想像して……再びクラァッとする。
なぜ、そんなことになるのか全く理解できないものの、一部の自分の支持者たちは喜んでその旗を振りそうなのが、何とも恐ろしいところだった。
――これは……シャルガールさんには申し訳ないけれど、お蔵入りにするしかないかしら……。
深々とため息を吐くミーアであった。

第百二十六話　タイムリミット

シャルガールの宿屋で、すっかり疲弊してしまったミーアは、商人組合のほうにも顔を出した。
「ご機嫌よう、ビオンデッティ殿……これは、なにかしら……？」
商人組合の大会議室には、大量の紙類が並べられていた。
「おお、ミーア姫殿下。こちらは、住民の訓練計画案となっております」
「ほほう、これが……」
ミーアはそれを手に取り、満足げに頷いて……それから、裏を見て、ん？　と首を傾げる。
「あら、この裏は……？」
「こちらは、以前ご依頼いただいていたものの宣伝の一環です」
それは、ミーアの依頼していた、貧しい王子と黄金の竜の情報だった。商人組合が主催で、試しに読み聞かせを、このセントバレーヌでやってみるらしい。
「物語の盛り上がる部分を載せておくのも良いですわね。敵キャラのサイモンとの橋の上での決闘シーンとか……」
「ほほう、それはなかなか興味深いですな。興味を引くことができるかもしれません。早速、やってみましょう」
深々と感心の頷きを見せるビオンデッティに、ミーアは尋ねる。
「ところで、ディオンさんもこちらに来ていると思いましたけど……」
「ああ、ディオン殿たちは……」
っと、案内されたのは、お馴染み、ビオンデッティ商会の部屋だった。
部屋の真ん中に置かれた大きな地図、その上には、兵を表すのであろう、駒が置かれていた。

「ああ、姫さ……ミーア姫殿下、ご機嫌麗しゅう」
部屋にはディオンのみならず、アベルとシオン、さらにティオーナとリオラの姿もあった。
「まぁ、みなさん、揃ってましたのね……。これは……」
「住人の避難といざという時の対応について、話し合っているところなんだ。リオラ嬢の意見も参考に、弓兵の配置なども決めておきたいと思ってね」
そんなシオンの言葉に、リオラが誇らしげに、ドヤァ顔をする。どうやら、ティオーナを通して、ルールー族の弓の腕前は、シオンにも伝わっているらしい。
一瞬……シオンと敵対するようなことになれば厄介……と思いかけるミーアであったが、まぁ、そんなことにはならないだろう、とすぐに思い直す。
同時に、万が一にもそうなった時のために、ティオーナと仲良くしておかなければ、と心に誓うミーアである。
「ポッタッキアーリ候か、兄上と連絡が取れればと思っているのだが、そちらはなかなか上手く行かないな……。ポッタッキアーリ邸にいた者を連絡にやったのだが……」
渋い顔のアベルに、ディオンが肩をすくめてみせた。
「そのまま逃げてしまったか、あるいは、ポッタッキアーリ候が握りつぶしたか……。いずれにせよ、動き出した軍というのは簡単には止まれませんからね。それこそ、軍事侵攻の大義名分を失うとかしないと、ね」
それから、ディオンはミーアのほうに目を向けた。
「ということで、ルシーナ司教の説得、よろしくお願いしますよ。姫殿下」
「そちらは鋭意努力中ですわ……。ルシーナ司教は難攻不落の砦のような方なので、苦戦しておりますけれど……。ところで、避難計画はどうなっておりますの？」
「そうですね。幸い、後ろは海。敵が来るとすれば、北側から来る

しかない状況なので、住民は思い切って南に避難させます」
ディオンは、顎をさすりながら続ける。
「攻め滅ぼすつもりであれば、火攻めなんかも怖いですが、目的がセントバレーヌの占領、いや、この都市の統治権であるならば、できるだけ住民や町の施設には被害を出したくないはずですから」
「そうですね。同意できる相手が敵だといいのですが……」
ディオンの言葉に、眉根を寄せてつぶやくルードヴィッヒ。深刻な顔をする男たちにミーアは、あえて明るい口調で言った。
「まぁ、物は考えようですわ。相手が、物わかりが悪い者たちであれば、逆にルシーナ司教は大義名分を与え続けられなくなる。説得しやすくなるんじゃないかしら？」
そんなミーアの軽口に、ディオンとルードヴィッヒは苦笑いを浮かべた。
それは、帝国の叡智にとっての勝利ではないのでしょう？　わかってますよ……と言わんばかりの態度であった。
確かに、まぁ、その通りではあるのだが……二人の設定しているミーアへの要求水準の高さを窺わせる態度に、ミーアは若干、背筋が寒くなるのを感じる。
「ええと、ちなみに軍の動きは、どうなっておりますの？　ポッタッキアーリ候とミラナダ王国軍の動きは……？」
「今のところ、連絡はないですね」
皇女専属近衛隊を含めた私兵団二十名を交代制で見張らせている。接近する軍があれば、狼煙があがるはずだった。
「このまま来なければ嬉しいのですけれど……。うん、軍が展開する前に、ラフィーナさまが来てくだされば、すべては解決するはずで……」
それこそが最善。だから、ラフィーナさま、早く来てね！　と熱心に祈るミーアであったのだが……。ミーアの願いは、けれど届くことはなかった。
その二日後、前線より報告が届いたのだ。

「ポッタッキアーリ候の軍、歩兵百人隊が五個、騎兵三十騎がセントバレーヌ北方に展開した」と。

第百二十七話　ベル探検隊ｆｅａｔ．リオネル

さて、ミーアが忙しく動き回っている頃、リオネルたちは聞き取りを続けていたのだが……。

「申し訳ありません、リオネルお坊ちゃま。私の口から、マルティンさまを裏切るようなことは……申し訳ありません」

リオネルの前に立ち、深々と頭を下げるのは、古くからルシーナ司教に仕えているという老執事だった。リオネルにとっては実の祖父のような存在の人であったが……。望みのことを聞き出すことはできなかった。

「……そうか。わかった、すまなかった。余計な心労をかけてしまって……」

「いえ……。そのようなことは……」

老執事は苦い顔で頭を下げてから、行ってしまった。

その背中が見えなくなってから、リオネルは苦々しい口調でつぶやいた。

「やはり、父上の秘密を知っていそうな、昔馴染みは、その分、忠誠心も高いですね。聞き出せる機会がない」

その言葉に同意するように頷いて、シュトリナが感心した様子で頷いた。

「それにしても、ルシーナ司教は、臣下からも慕われているのですね」

「私の兄も多くの者たちを扇動し慕われていましたけど……ルシーナ司教はそれとは全然違いますね。革命が失敗して後、兄を慕う者はいなくなってしまいましたけど、同じことが起きた時でもあの執事さんや、この館で育てている子どもたちは、きっと変わらずにルシーナ司教を慕い続けると思います」

同意したのはリンシャだった。その言葉に、リオネルは少しだけ

嬉しそうな顔をしてから、
「だけど、困りました。この調子では、有益な情報を聞き出すのは難しいかもしれません」
そんなリオネルの困り切った言葉に、なぜだろう……シュトリナは、軽く、スカートの裾に触れた……。理由は、よくわからない……。なぜだろう……。
っと、その時だった！
「あの……」
ベルが、とぉっても真剣な顔で手を挙げた。
「どうしたの？　ベルちゃん」
不思議そうな顔で首を傾げたシュトリナに、ベルは深々と頷いて、
「はい。ここは、やはり……屋敷の中を探るしかないんじゃないかなって……」
「……それは、父上の部屋を探ってみる、と、そういうこと、でしょうか？」
眉根を寄せるリオネルに、けれど、ベルは小さく首を振り、
「いいえ、こんな大規模な企みに関するものは、普通に部屋には隠してないんじゃないかと思うので、それよりは、秘密の部屋とか閉ざされた地下道なんかを探してみるのがいいんじゃないかって思って……」
普通の屋敷には探検すべき隠された部屋や、冒険すべき地下道などというものはないもの……とは一概に言い切れない経験を、何度かしているベルではあるのだが……。まぁ、それでも、その発言は九割方、趣味に根差した発言であった。
にもかかわらず……。
「隠された部屋……そうですね。あり得るかもしれません。確かに、この屋敷が建てられたのは、ぼ……私たちが来るよりずっと前のこと……。父上しか知らない部屋があるのかも……」
真に受けてしまうリオネルである。彼は大変、生真面目にベルの発言を吟味しつつ……。

「実は、噂だけはあるのです」
「噂……？」
きょとん、と首を傾げるシュトリナに、リオネルはしかつめらしい顔で続ける。
「夜な夜な、この館に商人が出入りしていた、という噂です。恐らく、秘密の抜け穴のような場所があって、そこから賄賂なんかを渡しに来ていたのではないかと……」
「秘密の抜け穴……」
ゴクリ、と喉を鳴らすベル。その顔は緊張に強張っている……ようなことはなく、むしろ、キラッキラ、好奇心に輝いていた。
「その入り口はどのあたりにあるのかはわかってますか？」
「いえ、残念ながら。あくまでも噂です。あるかどうかもわかっていなくって……だからこそ、探す価値があるかと……」
なぁんて、早くも秘密の抜け道探しに傾きつつある二人に……。
「まずは、ルシーナ司教のお部屋を探すのがいいんじゃないかな。なにか、見つかるかもしれないし……」
軌道修正をかけるシュトリナである。けれど……。
「どうでしょうか……実を言うと、父の部屋は誰でも入れるように鍵がかかっていないんです。そんなところに、なにか大切な資料を置いておくものでしょうか？」
それを聞き、シュトリナは小さく唸った。
「それは、本当にないのか、探しても見つかるものか、という自信か……あるいは」
「探されたら困るから、あえて、探す必要のない場所に見せている、ですか」
言葉を引き継いだのはリンシャだった。
シュトリナは、少し意外そうにリンシャに目を向ける。
「うちの兄が似たようなことをしていました。革命軍にまつわる資料をあえて目に付く場所に置いておいて……。隠し立てするような恥ずべきことじゃないから、と兄は言っていたけど、確かに、無造

作に置かれている物の中に、そんな大切な物が混じっているって思わないかも……」
一つ頷き、それからシュトリナはリオネルに目を向けた。
「なさそうでも、一応は探してみるのがいいんじゃないかな、って思いますけど……」
「そうですね。それに、抜け道とかもやっぱり、ルシーナ司教のお部屋にあるんじゃないか、って、ボクは思います」
ベルが力強く同意する。それを見て、しばし考えていたリオネルだったが、やがては覚悟を決めた様子で頷いて……。
「わかりました。いずれにせよ、何もせずに手をこまねいてはいられないのですから。ミーア姫殿下が言っておられたとおり、できることはなんでもやる、ぐらいに考えておきましょう」
かくして、ベル探検隊ｆｅａｔ．リオネルは、ルシーナ司教邸の探索を開始した。

第百二十八話　ベル、所信表明す

ベル探検隊は、二日に渡って、ルシーナ司教邸の探索を進めていた。途中、屋敷の使用人やら執事やら、リオネルの母と遭遇することはあったが……。

「リオネルくんに案内してもらって、館の中を探検してるんです！」

っと言い切るベルの、その純粋無垢なる眼力に押されて、特に注意はされなかった。

「この古いお屋敷には、秘密の通路が隠されていると聞きますし、ぜひ、それを発見したいと思っています！」

そう所信表明するベルの意気込みに偽りはなく、それゆえ、話を聞いた館の人々は、むしろ安堵した様子もあった。リオネルが、父と対立する材料を探すより、館の探検遊びに付き合わされているほうが、彼らとしても安心できたのだろう。

ちなみに、ルシーナ司教のもう一人の子ども、レアに関しては、先にセントノエルに帰した、ということにしておいた。

セントバレーヌにいるのは危険でもあるし、そのうえ、レアはセントノエル学園の生徒会長でもある。万が一、セントバレーヌでの紛争が大掛かりなものになった場合、民心の安定のためにも動かなければならない立場なのだ。

それは、ルシーナ司教を納得させるのに十分な理屈であった。仮に怪しいと思ったとしても、文句のつけられない、そのような理屈であった。

さて、そんな風にして、屋敷の中を闊歩するベル探検隊ではあるのだが……成果は思わしくなかった。

隠し通路とその先の地下に隠し部屋を二つ三つ発見したのだが、そこは埃塗れの、いかにも長年使われていないような部屋だった。

ルシーナ司教が、なにか悪だくみに使っていそうな感じは、残念

ながらなかった。
　さて、そんな地下探索を終え、地上に這い出たシュトリナに、ベルが近づいてきた。
「あっ、リーナちゃん、髪に……」
　っと言おうとしたところで、ベルは急に黙り込み、ササッとシュトリナの髪に触れた。
「え？　ベルちゃん、どうしたの？　髪になにか？」
「なんでもありません。大丈夫、もう取れましたから」
「え？　え？　なにが？　リーナの髪になにがついてたの？　くっ、クモの巣とか？」
「はい。それもあります」
「それも？　それ以外にもなにがついてたの？　ねぇ、ベルちゃん？」
「シュトリナさま、知らないほうがいいこともありますから……」
　そんなシュトリナの肩にぽんっと手を置くリンシャ。なにやら、自分の髪にキモチノワルイナニカがついていたことを察したシュトリナは、ぶるるっと震えた後に……。
「ち、地下通路をこれ以上探るのは、不毛なんじゃないかな。他のところを探したほうがいいってリーナは思うな」
　可憐な笑みを浮かべるシュトリナである。
「他のところですか？　でも、いったいどこを？」
「んー、ベルちゃんは、ルシーナ司教の思惑を探るためには、なにを探せばいいと思う？」
　自らの髪を、恐々と撫でつつ、シュトリナは言った。
「ううむ……そう……ですね……。隠し部屋や隠し通路に隠しているお宝……じゃないとしたら……」
　ベルは腕組みして、唸ってから、
「手紙……とかどうでしょうか？」
「……手紙？」
「はい。手紙です。こういう時って、そこにヒントが書いてあるこ

とが多いような……」
微妙に自信なさげな声で言うベルに、シュトリナはパチパチパチっと拍手して。
「さすがね、ベルちゃん。リーナもそう思う」
満面の笑みを浮かべる。そんなシュトリナに、ベルは、なにやら、気恥ずかしそうに頬をかき、
「あの、ええと、エリスか……さんの著作にそんなお話が合って……」
などと、モゴモゴ言うが、シュトリナは小さく首を振った。
「ううん、どこから得た知識であろうと、解決のために利用できるのは立派なことよ？」
指を振り振り、まるで、教師のようにシュトリナは言った。
「はい。そうですね。有益な知識は苦労しなければ得られないというものでもないですし。楽しいことからだって学んでもいいはずです」
リンシャが後を引き継ぐ。ベルに甘い二人である。
「リーナの予想だと……ルシーナ司教はヴェールガ公国の司教たちとも連携をとってると思うんだ」
頬に指を当て、そんなことをつぶやくシュトリナ。
「どういう意味ですか？」
眉をひそめるリオネルに、シュトリナは少しだけ考えてから……。
「セントバレーヌの統治権を確立させたとしても、ヴェールガ本国から放逐されては意味がない。少なくとも、ルシーナ司教をかばい、彼の成果を守ろうとする人がいないと、今回のことは無駄に終わってしまうんじゃないかな、って思って」
最悪、今回の出来事の責任を問われて、ルシーナ司教が解任されるとして、その後に派遣された司教が、この港湾都市の統治者として振る舞えないならば意味がない。ルシーナ司教がいなくなった後、再び、商人組合が出張って来たのでは意味がないのだ。
その状況を確保するために、ヴェールガ公国内に協力者がいる可

能性は、大いに考えられた。
「ああ、そうか……それはそうかもしれませんが……そのようなやりとりをした手紙を残しておくでしょうか？」
リオネルの問いかけに、シュトリナは首を振り、
「あれば儲けもの。なければ仕方ない。そのぐらいで探さないとダメ。時間もやれることも少ないのであれば……やれることを一つずつやっていくしかないですから」

第百二十八話　ベル、所信表明す（後書き）

今日、明日、ベルサイドです。
活動報告を更新しました。

第百二十九話　ベル、奥深そうな暗号に触れる

シュトリナの号令の下、ベル探検隊はルシーナ司教の書斎へと向かった。
「手紙があるとしたら、ここでしょうか。もっとも、公務に関係する手紙は教会のほうに保管していると思いますが……」
言いつつ、机の上に目をやった彼は、そこに置かれている分厚い紙の束に目を見開いた。
「それは……？」
「ヴェールガ本国にいる父の友人からの手紙のようです。本国で司教をされている方ですが……」
リオネルは一瞬、躊躇うように手を止めたが、
「……このような事態ですから、仕方ありません」
意を決した様子でそれを開けた。
緊張気味に中を改めた彼は、すぐにふっと表情を和らげた。
「ああ、これは、かつてこの屋敷で育てられた子どもたちからの手紙です」
「これ、全部ですか？」
リンシャが驚きの声を上げた。手紙は、ちょっとした本ぐらいの分厚さがあったからだ。
「人数が多いですから。父は自分の友人たちにお願いして、子どもたちの働き口を探しています。その子どもたちの手紙を、働き口を紹介して下さった方ごとに、こうしてまとめて送ってきてくれるんです」
一番上の手紙を手に取り、リオネルは優しい笑みを浮かべた。懐かしそうに目を細めて……手紙に目を落とし……。
「んっ……？」
その顔に疑問の色が浮かんだ。

「どうかしましたか？」
シュトリナの問いかけに、リオネルは一瞬、考え込んでから……。
「この手紙が……少し……おかしい気がします」
「おかしい……？」
シュシュっと素早く手紙に目を通したシュトリナは、眉間に皺を寄せて黙り込む。さらに、その後ろから覗き込んだベルが……。
「ええと、なになに……。え？　普通の近況報告に見えますけど……」
「いえ……この最後に書かれた聖句なのですが……」
「聖句……？」
きょとりん、と首を傾げるベルに、頷いて……。
「はい。手紙の締めに神聖典の聖句を書くことは、よくやるんです。自分の好きな聖句だったり、最近、励まされている聖句を書く……。教会の孤児院育ちの子や、神父さま、司教さまもやったりすることなのですが……」
その手紙の文面を軽く撫でてから、リオネルは首を傾げた。
「この子が好きな聖句は、よく知っています。けれど、ここに書かれた聖句は、まったく違う……それが少し気になります。確かに、環境の変化で好みが変わることはあると思うのですが……これは……」
納得のいかない様子のリオネルを見て、シュトリナは顎に手を当ててから……。
「ああ……書籍暗号……。そうか……」
小さくつぶやき、シュトリナは目を見開いた。それから、急いで手紙に目を通していく。
「この手紙……リーナも違和感があったの。数字の出現頻度が高いような気がして……。少し不自然なぐらいに……」
リンシャが驚いた様子で、口を開いた。
「その数字に意味がある……つまり暗号である、と？」
「そう……。そして、その数字に意味を与えるのが、指定される書

籍」
　あらかじめ、ある本を定め、数字によってその本の中の文字を指定することで、相手に情報を伝達するのが書籍暗号だ。
例えば、ミーア皇女伝の一ページ目、一行目、一文字目を暗号の第一文字、同じく、二ページ目、二行目、二文字目を暗号の第二文字、三ページ目の……と文字を指定していき、文章にしていくのだ。
　どの本が暗号に使われる書籍であるか、わからなければ、数字だけでは意味が読み取れないうえに、その都度、指定する書籍が変わればその解読は極めて困難なものとなる。のだが……。
「神聖典は、複数の書物の集合体。創世の書に始まり、いくつかの預言書や歴史書、手紙、終末の書などによって構成されている。それを、手紙の最後に書かれた聖句によって指定し、そして、手紙の中に書かれる数字に暗号を送っているのだとしたら……。手紙一枚につき、記せる文字数は少ないけれど、これだけの厚さがあれば情報のやり取りには十分なんじゃないかなって……」
　シュトリナは、手紙の中から数字を素早く書き出していく。そうして、リオネルが持ってきた神聖典に照らし合わせて、文字を抜き出していく…っと……。
「すごい、やっぱり、文章になった……！」
　ベルが、キラキラと目を輝かせた。
　そこに表れたのは、ルシーナ司教の計画が成功することを祈る、という励ましのメッセージだった。
「この調子で読み解いていけば……」
「ううん、駄目……」
　答えたシュトリナの声には、けれど、諦念の色が見えた。
「今回の手紙みたいに束になっていればわかるけど、もうすでにバラバラにされてしまっていたら、読み解くのは難しいと思う」
　送られてきた時点では、こうしてまとまっていても、読み終わってしまえば、手紙はバラバラになってしまう。仮に手紙自体があったとしても、どの子とどの子の手紙が同じ時期に来たのか、合致し

なければ暗号の意味が通じなくなってしまう。
「ある程度なら、文脈を見ればわかるだろうけど……それをしている時間はないかも……」
っと、そんなシュトリナに、リオネルは静かに首を振った。
「ああ、それは大丈夫です。全部、覚えてますから」
こともなげに言ったリオネルに、その場の全員が驚いた顔をした。
「覚えてるんですか？　全部？」
驚愕の声を上げるベルに、リオネルはゆっくり頷いて……。
「？　ええ。手紙はすべて読んでます。それに、みんなの顔も覚えています。僕……私たちの大切な家族ですから……」
それから、リオネルの記憶を頼りに、手紙の解読作業が始まった。
そうして、浮かび上がってきた文字を読んだ時……リオネルは天を仰いだ。
「ああ……そう……そういう、ことか……」
そのつぶやきは、どこか寂しげで……。
「セントバレーヌを手にすることの意味……僕は、完全に見過ごしていた。セントバレーヌは大陸有数の港湾都市、その港が生み出す利益にのみ、目を奪われていた」
リオネルは悔しげに歯噛みしつつ続ける。
「要するに、ここは、セントノエルと同じだったんだ……」

第百三十話　叡智と幸運、計画と偶然

「そう……なんですのね。ポッタッキアーリ候の軍が……」
その日、ディオンから報告を受けたミーアは顔をしかめた。
「はい。今日明日中にはセントバレーヌに到達するでしょう。商人組合の私兵団の無力化に失敗したと知って強硬策に出てきたんでしょうが……。とりあえず、今朝方から住民の避難を急がせていますよ」
「百人隊五個、それに騎兵が三十騎……か。どうだろう、ディオン殿」
難しい顔で尋ねてくるルードヴィッヒに、ディオンは苦笑いを浮かべた。
「んー、動員数としてはそれなりだね。もともとはミラナダ王国と合わせて千人ぐらいって想定だったんじゃないかな……」
ディオンは地図に目を落としながら腕組みする。
「実際、このセントバレーヌを攻め落とそうというなら十分な数だよ。こちらは、町の守備に当たっている商人組合の兵に、荷馬車の護衛、そして、皇女専属近衛隊を合わせても二百と少々といったところ……。仮に高い城壁の中に立てこもれるのだとしても、戦力差五倍は負け戦ってもんだからね。これで勝てたら、本当に物語みたいなものだ」
こともなげに言うディオンに、ミーアはしかつめらしい顔をする。
「ミラナダ王国に関しても攻めてきているのかしら？」
「追従するように北西に展開したようです。こちらは、歩兵で、どうも隊列が崩れているらしいですが、おそらく百人隊三個程度。それも、農民からの徴兵のようです」
ディオンの発言に、アベルが頷いた。
「そうだろうな。帝国やサンクランドならいざ知らず、職業軍人な

んて金のかかるものは、そうそう維持はできない。レムノ王国の重税もそのことによるものだしね」
　それに続けて、シオンが難しい顔をする。
「しかし、統制が取れない分、一度、血の味を覚えると厄介かもしれない。戦に慣れていない分、平気で略奪に加担する者が出てきそうだ」
　戦場という非日常、死と隣り合わせの緊張感は、容易に人間の倫理観を破壊する。職業軍人であってもそうなのだから、まして、徴兵された者たちは余計である。
「まぁ、いずれにせよ、一度、戦が始まり、血が流れてしまえば、戦いはどんどんエスカレートしていく。ルシーナ司教を説得するならば、早いところお願いしますよ」
　その算段、付いてるんですよね？　という顔で問われ、ミーアは、すすーっと目を逸らしつつ……、
「え、ええ、まぁ、その……一応は……」
　などと、モゴモゴ言った！　全然、駄目そうだった！
　そうなのだ。例の女神肖像画の件が頓挫した時点で、ミーアには具体的な策が一切なくなってしまったのだ。
　――た、頼りのラフィーナさまは、いらっしゃいませんし……くぅう、いったい、どうすればいいんですのっ！？
　大変、久しぶりに窮地に陥りまくっているミーアに、ディオンは苦笑いを浮かべた。
「まぁ、こちらはこちらの仕事をちゃんとやっておきますから、頼みますよ」
　そう……ディオンの中でのミーアの信頼は、すでに揺らぎようがないほどに確固たるものになっていた。それだけに、その信頼を裏切ってしまった時を想像してミーアは震え上がる。
　――やっ、やばいですわ。今回に限っては失敗した時のダメージを少なく……とは言っていられない状況ですし……。未来のベルにも関わってくる重大な局面……だというのに、まったくもって、波

が来ておりませんわ！
いや、大波は確かに来ていた。
にもかかわらず、ミーアは未だ、自分がそれに乗れていないことを実感していた。そう、今のミーアは浜辺に打ち上げられて、ぐんによりしている海月のようなものなのだった。
ゆえに、ミーアを波のただ中に押し戻すなにかが、浜辺に打ち上げられたミーアを優しくすくい取り、海の中に引きずり込んでくれるような誰かが必要だった。
お友だちを優しく海の中へと返してくれる……聖女のような人が……。

さて、ミーアたちが去って後、ディオンは皇女専属近衛隊の者たちに声をかける。
「商人組合の私兵団に伝達。住人の避難が済み次第、持ち場につくように、と。南部への避難が終了次第、中央の橋を残して、残りの橋を全部塞ぐんだ」
すでに準備は進んでいた。
港湾都市セントバレーヌに複雑に走る運河、そこにかかる橋を塞ぎ、南北を運河によって分断するのだ。
橋を落とすことも検討されたが、その場合は無理に渡河してきて収拾がつかなくなるおそれがあった。ゆえに、ルードヴィッヒは提案した。
橋を酒樽で塞ぎ……彼らの心を縛ることを。
作戦はこうだ。
彼らに渡ってもらいたくない橋に大量の酒樽を積み上げておく。そして、侵攻軍がやってきた目の前で、橋の一本を燃やして落とすのだ。
そうしておいて、脅すのだ。
「他の橋の酒樽を撤去しようとしたり、無理に渡ろうとした場合には橋を燃やして落とす」と。

「この都市を壊滅させようという相手には効かない脅しだが……彼らは、この港湾都市の機能をできるだけ損ないたくないはず。ポッタッキアーリ候にしても、自分の別邸がある町なわけだから、できるだけ壊したくはない……。施設に対する攻撃は脅しになる、と良いのですが……」

そして、それはただの足止めではなかった。

唯一、中央部の橋のみを残しておき、そこに敵軍の注目を集めようという、それは作戦なのだ。そして……そこに陣取る者こそが……。

「仮に上手くいったとして、ディオン殿にすべてをお任せしなければならなくなってしまうが……」

「ははは、まぁ、暴れ足りないと思っていたからそれはいいんだけどね……しかし、どうだろうね。実際、これ見よがしに真ん中の橋が空いていたら、明らかに罠だと判断するだろうけど。少なくとも、僕ならそう判断する」

「そう判断される前に……上手く誘導できるかどうか……でしょうね」

ルードヴィッヒは、ここで、何とも言えない苦笑いを浮かべて。

「しかし、不思議なことに、誘導するのに必要な要素が揃っている。偶然か、あるいは、どなたかの思惑なのかはわからないが……」

その言葉に、ディオンは肩をすくめた。

「これが、すべて計算づくだとしたら、姫さんが、神から本物の叡智をもらっていると認めるよ。もっとも、これがすべて偶然だとすれば、神から授けられたのは幸運ということになるのだから、いずれにせよ心強い話だがね」

そう言ってから、ディオンは少しだけ表情を引き締めた。

「肝心なのは姫さんの説得が上手くいくかどうかだが……まぁ、姫さんのことだ。なんとかするだろう……僕は僕で仕事をしないとね」

そうして、彼は庁舎を後にする。

明日の、決戦の場所となるであろう、中央部の橋を見るために。

第百三十一話　イロイロなフラグ……立つ

「ルシーナ司教を説得するには……やはり、胃袋を攻めるしかないのではないかしら……そのためには……やはりキノコ……」

ディオンと別れたミーアはルシーナ司教邸に戻って来た。

そのつぶやきは、司教の胃袋を極めてヤバイ方法で〝攻め〟ようとしているのがうかがえる……実にキケン極まるものであったが……それはともかく。

アンヌを伴い食堂に顔を出したミーアは、おやつを所望。今回ばかりは仕方ない、とアンヌ、これを黙認！　結果として、おやつを抱えて部屋に閉じこもることに成功するミーアである。

「しかし……よくよく考えれば、ルシーナ司教の奥さまは料理の達人……あの美味なるお魚料理を超えることは、料理長の力を借りでもしない限りは不可能。キースウッドさんの力を借りたとしても、太刀打ちできなそうですわね……」

危ういところで、ルシーナ司教の胃袋の安寧は守られたのであった。それはさておき、

「どうすれば、ルシーナ司教に届くのか……説得するヒントが欲しいですわ……なにか……」

クッキーをサクリペロリしながら、懸命に頭を働かせる。

途中でシャルガールが訪ねてきて、旗が完成間近とか、明日持ってくるとか何とか言ってたが、華麗にスルーし考えて、考えて、考える。

だというのに、良い案は一向に浮かばない。

波が……来ない。

「うう……た、助けが必要ですわ」

っと、ミーアがつぶやいた、その時だった！　こんこん、っとドアをノックする音が聞こえてきた！

「ラフィーナさま？」
ようやく待ち人が来たか？　と声が踊りかけるも……現れたのはオウラニアだった。
「ミーア師匠ー、珍しいお魚見つけたんですよー」
入ってきて早々に、オウラニアは言った。
そうなのだ、オウラニアは、ミーアたちがルシーナ司教関係のゴタゴタで駆け回っている間、ずっと港に行き、釣り……否、魚の調査をしていたのだ。
ミーアはセントバレーヌの問題のみ解決すればいいわけではない。忙しいのだ。これから、セントノエル・ミーア学園の共同プロジェクトも動き出すことだし、そのための下調べは必須のこと。
そんなミーアの事情を斟酌し、一人、お魚調査に勤しんでいたオウラニアである。決して、趣味に没頭していたわけではないのだ。たぶん……。
オウラニアは、ミーアの顔を見て、かすかに心配そうな顔をしてから、すぐに笑みを浮かべて。
「すごくすっごーく、珍しくて、美味しいお魚なんですー。だからー、全部終わったら、お魚パーティーしましょうー」
彼女の言葉に、ミーアは気が付いた。
どうやら、自分に気を使ってくれたらしいぞぅ、っと。
――これではいけませんわね。ふふ、弟子に心配をかけるなど、言語道断ですわ。
ミーアは笑みを浮かべて言った。
「そうですわね……全部終わったら……美味しいお魚でパーティーしたいですわね。お魚なら、いくら食べても問題ない、みたいな話を聞いたことがございますし……。お腹いっぱい食べてやりますわ……。無事に、この戦いを止めることができたら……」
「はい。期待してくださいー。こんなの食べられるんだーって、ビックリな見た目のお魚とも、たーっくさん出会えましたからー」
「あら、それは楽しみですわ。ラフィーナさまにも無理を言って来

ていただいておりますし、全部終わったら絶対に宴を開きますわよ」
「はいー。珍味祭りですー」
なにやら……イロイロな方向のフラグが立ちまくる、盛りだくさんな会話をして後、ミーアはパンパンっと顔を叩いた。
「ともかく、ルシーナ司教と対話をしながら探るしかないですわね……」
気合を入れて、ミーアは部屋を出ようとして……。
「ミーアおば……姉さま！」
ばーんっとドアを開け、今度は、ベル探検隊の面々が入って来た。
「あら、ベル……。みなさんも……どうかしましたの？」
首を傾げるミーアに、リオネルが、少しだけ青ざめた顔で……。
「外が騒がしいようですが……まさか」
「ええ……。ついに軍が動き出したようですわ。ああ、でも、大丈夫ですわ。ディオンさんのほうでも万全の準備をしてくださっているみたいですし、そう深刻な顔をせずとも……」
「そうです。ディオン将軍なら上手くやってくれるに決まってます」
ミーアの言葉に、ドンッと胸を叩くベル。ディオンに絶対的な信用を置くベルであるが……ミーアには「上手くやってくれます」が「上手く殺ってくれます」に聞こえてしまい、微妙に背筋が寒くなってしまう。
「ええと、それで、なにかありましたの？」
「あ、そうでした。実は……父が外部とやり取りをしていた手紙の解読が済みました。その結果、父の計画が明らかになった、と思います」
「ほう、計画……？」
ミーア、その知らせにキランと目を輝かせる。なにか、説得のヒントを得られるかもしれない。
「結論から言ってしまいますと、父は、セントバレーヌの統治権を得ることを、足掛かりとしか思っていないようなのです」
続くリオネルの話を聞いて、ミーアは思わず目を見開いた。

ベル探検隊の面々を引き連れて、ミーアはルシーナ司教のもとを訪れたのは、翌朝のことだった。
前日、ルシーナ司教が、館に戻ってこなかったから、会談の機会を得られなかったのだ。
戦が迫っている状況にもかかわらず、彼は変わらず教会にいた。
「ルシーナ司教」
「ああ、ミーア姫殿下……いらっしゃいましたか……」
ミーアたちを迎える彼の顔には、特に緊張の色は見えなかった。普段と変わることのない穏やかな笑みを浮かべたまま、彼は続ける。
「住民の避難を感謝いたします」
「それには及びませんわ。血を流すことなんて、誰も望んではおりませんでしょう」
「そうですね。できれば、戦いが始まる前に商人組合が統治権を委譲してくれると、助かるのですが……」
そうつぶやくルシーナ司教に、ミーアは思い切り切り込んだ。
「軍事力による脅迫で、セントバレーヌの統治権を手放させる……本当に、そのようなことをして、本国のご友人たちの支持が得られるとでも思っておりますの？」
ミーアのその言葉に、ルシーナ司教は、一瞬、目を見開いた。
「なるほど……気付かれたのですか。さすがは帝国の叡智だ……」
「いいえ、気付いたのは、わたくしではない。あなたの息子さんである、リオネルさんですわ」
その言葉に、ルシーナ司教の視線がリオネルのほうに動いた。
「それは、本当なのか……？　リオネル……」
その問いに答えるように静かに頷いてから、リオネルは言った。
「父上……あなたが欲していたのは……ヴェールガが変わるための象徴だったのですね」
秘密の手紙のやりとりによって明らかになったこと……。
マルティン・ボーカウ・ルシーナが求めていたもの。

それは、ヴェールガ公国の司教たちを説得するための、象徴を得ることだった。
ヴェールガ公国、並びに大陸を代表するセントノエル学園の生徒会長を、ヴェールガの手に取り戻し、セントバレーヌを司教の統治下におく。
その二つを象徴として……あるいは、功績として、ヴェールガ国内の司教たちに訴えるのだ。
ヴェールガが、中央正教会が、各国王族への影響力を強めることを……。
いや、もっと言えば……。
「父上、あなたは……、あなたの願いは……すべての国がヴェールガのようになることだったのですね……」
リオネルは……真っ直ぐに父の顔を見つめた。

第百三十二話　干からびかけたその時に……

すべての国がヴェールガのようになる……。
すなわち、あらゆる国の王が、王位を神に献上し、自身の身分を公爵に落とすこと。
そして、その公爵の責務を担う者は、神に身をささげた神職、司教に連なる者にすること。それこそが、ルシーナ司教の思惑である、とリオネルは指摘した。
その言葉を受けたルシーナ司教は、あくまでも穏やかな顔をしていた。取り乱す様子は、まるでない。
「誤解のないように言いますが……別に、ヴェールガ国の出身者で国々を統治するように、などと過激なことは考えてはいません。各国の王位継承者をセントノエルのような学園に集め、そこで司教としての教育を施し、中央正教会が各国に派遣する形とする……そのような体制を作るのが、私の目的です」
まるで祈りをささげるように、静かに両手を組んで、ルシーナ司教は続ける。
「私が求めるものは、ただそれだけのことなのです……。国々の統治者が、神のしもべとして振る舞い、民を正しく率いること。民の安らかな暮らしを守るため、統治者の権限が使われること……、私はそれをこそ求めます」
「それは……今までだってそうなのではありませんか？　だって、各国の王権は神より与えられしもので……」
っと指摘するリオネルに、ルシーナ司教は首を振った。
「名目上は、そうだ。言葉だけならば、そのとおりだ。そして、ヴェールガ公国は、国々の見張りとしての立場にあった。神のしもべとして……どこかの国に暴君が立った時には、各国に訴えかけて、それを責め、咎め、改心するように迫り……それでも駄目ならば実

力によってそれを排除する。そのような役割を持ったのが我が公国だった。だが、実際のところ、それが行われることは、ほとんどない。かつてのツロギニア王国で起きたことは、どの国でだって起きる。民を見捨て、王侯貴族だけが生き残る……そのようなことは、呆気なく起きてしまう。このまま、悪を放置するようなヴェールガ公国であっていいとは、私は思わない」

そんなことは、ほとんどない――前時間軸に、その、ほとんどなかった例になってしまった悪役皇女ミーアは、複雑な顔で、ぐむっと唸る。

――ま、まぁ、帝国の状態は確かにアレでしたけれど……数百年に一度レベルのヴェールガのお叱りだったとは思いませんでしたわ。うぬぬ、おっ、おのれ、初代皇帝、許せませんわ！

当時の帝国内がダメダメだったことを熟知しているミーアとしては、責めるべきは、ご先祖さま以外にはあり得ないのだった。

まぁ、それはさておき……。

「そして、変化のためには象徴がいります。それは、政治を動かす功績であり、中央正教会を動かす神の徴だ。神が、我が計画を認め導かんとしていると……それを証明するものが必要なのです」

静かに拳を握りしめて、ルシーナ司教が言った。

「それが、セントノエル学園の生徒会長の座を取り戻すこと、そして、セントバレーヌの統治権をヴェールガの手に収めることだった、と……」

ただ、口で言っただけでは変わらない。それが理論上いかに正しいものであったとしても、その発言に力を与えるものが必要だった。

そこまで聞いて、ミーアはようやく合点がいった。

やはり、ルシーナ司教の目的は、ただセントバレーヌの統治権を得ることではなかった。

――大陸の、すべての国に対するヴェールガ公国の……否、中央正教会の影響力の増大……。実現すれば、それは、かなりの変革ということになりますわ。

司教の主張は、一見すると、今までの国の在り方を大きく変えるものではない。
「国の統治を委託されている」という建前を、より鮮明に、明文化、制度化しただけなのだから、あえて反対する理由はない。そう、一見しただけならば……。しかし……、
「あなたの主張する体制が立った場合、国の王……いいえ、公爵でしたかしら？　ともかく統治者を誰にするか、任命するのは中央正教会ということになりはしないかしら？」
逆に言えば、王位を継ぎたいと思う場合、司教として徳を積み、中央正教会への忠誠を誓わなければならなくなるのではないか……？
いかに、国内で王位継承権が決まっていたとしても、中央正教会の支持がなければ、王位を継ぐことはできない。
現状でも、王位継承の折には、中央正教会の聖職者による油注ぎの儀が必要ではあるが……、半ば形骸化しつつある、その権限を、ルシーナ司教は強め、復活させようとしていた。
「王位を継がせないと言うより、聖職者として認めないと言うほうが、中央正教会の発言権が強くなりますけれど……。統治者が聖職者でなければならないというのであれば、誰を王位につけるのか、あるいは、つけないのかを、中央正教会の意向でできるようになりますわ」
「なんの問題があるでしょうか？　民を率いるのに相応しい人徳者であれば、中央正教会は認めざるを得ないのですから何も問題はないではありませんか。恣意的な判断があれば、責められるのは中央正教会になのですから」
その口調は揺らがない。彼は、それが正しいことであると確信しているようだった。
「このような強引な方法によってでも、ですの？　当初の予定どおりであれば支持すると言っていた方たちも、軍を使い、実際に戦いが起きてしまえば支持はしないのではないかしら？」
「そうですね。我が友人たちの支持は得られないかもしれない。し

かし、友人たちが声掛けしてくれた、ヴェールガの保守層の者たちは、おそらく私のやり方を支持してくれるでしょう」
志を持った友人たち、正しさを求める人たちの支持は得られないかもしれない。けれど、純粋に、ヴェールガ公国の権威を強めたい者たちの支持は得られる。
……そうして、国が動けば、それで構わない。実現しようとしていること自体は、間違っていないのだから、と……。
ミーアは、思わず、頭がクラァッとするのを感じる。
――これ……やっぱり、ルシーナ司教を説得するのは、不可能なんじゃ……。
っと、ミーアが諦めて干からびるに任せようとした……まさにその時だった！
「そこまでに、してもらいましょうか」
涼やかな、美しい声。
それは、海月を海へと優しく誘う柔らかな波のごとく……。

第百三十三話　高　潔な海月

開け放たれる教会堂の扉。その向こう側に立っていた懐かしい人の顔を見て、ミーアは思わず歓声を上げてしまう。

「ああ、ラフィーナさま！」

これで、ラフィーナさまに全部お任せできますわ！　と潔く思考を放棄し、ニッコニコと表情を明るくしたミーアを見て、ラフィーナはあくまでも落ち着き払った聖女の笑みを浮かべて、浮かべ、て？　――否！　そうではない。その口元が、わずかばかり、ニヨニヨと緩んでいた。獅子なる聖女ラフィーナは、その尾がブンブン動いていることを隠しきれていなかった。

「ご機嫌よう、ミーアさん。ふふふ、お元気そうでなによりよ」

そうなのだ……ラフィーナは、とても、とてーも嬉しかったのだ。お友だちから助けを求められ、駆け付ける……。

親友のピンチに颯爽と現れる……。それは、ラフィーナにとって憧れの友情シチュエーションなのだ。

――ここ最近、回遊聖餐ですっかり忙しくて、セントノエルに遊びに行けていなかったし……。

っと、選挙の時に遊びに行ったことをすっかり記憶の彼方に放り投げる聖女ラフィーナであった。ミーア色に染まりつつある聖女がそこはかとなく不安ではあるが……まぁ、それはさておき……。

「ラフィーナさま……確か、回遊聖餐の最中であったと記憶しておりますが……」

ラフィーナの登場には、さすがのルシーナ司教も困惑を隠しきれていなかった。そんな彼に、ラフィーナはあくまでも澄んだ声で答える。

「ええ。ミーアさんから報せを受けて、切り上げてきました。騎馬王国の慧馬さんに、ここまで送っていただいてね」

その言葉で、ミーアは小さく首を傾げた。
「あら、そういえば慧馬さんは……？」
「今、蛍雷を労っているわ。本当に、蛍雷、すごく頑張って走ってくれたから」
「大切な儀式を途中で切り上げる、そのようなことが許されるとお思いですか？　あの回遊聖餐は、ヴェールガ公国にとって、民にとっての大切な儀式。それを……」
そんなルシーナ司教の糾弾にも、ラフィーナは涼しい顔だ。
「ああ、誤解を与えてしまったのなら、ごめんなさい。切り上げたのは私だけで、回遊聖餐自体は続いています。私の代理を立てて、ね」
まるで悪戯の種明かしをするように、楽しげにラフィーナは言った。
「代理……？　それはいったい……」
怪訝そうに眉をひそめるルシーナ司教、その目を真っすぐに見つめて、ラフィーナは告げる。
「司教であるあなたはご存知でしょう？　代理として回遊聖餐の儀を執り行うことができるのは誰か……。あなたはできるし、リオネルさんもできる。そして、当然……」
それで察したのか……ルシーナ司教はポカン、と口を開けた。
「まさか、レアが……？　しかし……あの子は内向的で、ひどく人見知りだ。村々を回り、食事を共にする、回遊聖餐の重責に耐えられるとは、とても……」
「ええ。私もはじめはそう思っていました。でも……レアさんが、言ってくれたのよ。代理は自分が、責任を持って務めるからって。セントバレーヌに行って、お父さんを助けてほしいって……」
そう話すラフィーナの顔は、いつになく優しいものだった。
それは、まさに聖女に相応しい穏やかな笑み。が、静かに視線を転じ、ルシーナ司教を見つめた時、その笑みは、苛烈な、獅子のものになっていた。

「レアさんから、大体の事情は聞かせていただきました。それに、先ほどのリオネルさんの話も、あなた自身の告白も……」
「……ならば、おわかりいただけたでしょう？」
小さく息を吐き、改めて、ルシーナ司教は言った。
「私が求めていることは、些細で、当たり前のことなのです。私は……」
っと、その言葉を片手で上げて制して、ラフィーナははっきりとした口調で告げる。
「マルティン・ボーカウ・ルシーナ司教。あなたは、ご自分の子どもたちが、なぜ、あなたを止めようとしているのか、わからないの？　なぜ、レアさんとリオネルさんが、ミーアさんの側につき、あなたの思惑を止めようとしているのか……本当にわからないのかしら？」
そう告げるラフィーナの口調は、どこまでも清く澄み渡り……否、そこには、わずかな濁り、色があった。
それは、悲しみ、あるいは、憐み……。
それは、生き物の住めない、断固たる清らかさを持った声ではない。傷ついた魚を、憐み包み込む、そんな優しい濁りが確かにあった。
静かに、確固たる仕草で、ラフィーナは首を振る。
「私の結論は、ミーアさんと同じよ。ルシーナ司教。今すぐにミラナダ王国軍、並びに、ポッタッキアーリ候の軍を引かせなさい。まだ、間に合ううちに早く……」
っと、その時だった。教会堂の外が騒がしくなった。
聞こえてきたのは、悲鳴のような声。続いて、そこに報せが届く。
ポッタッキアーリ候の軍が、北部より町に侵入してきた、と……。
「残念ですが……すでに、賽は投げられた。今さら何をしたとしても手遅れ……」
「いいえ、まだですわ……」
司教の言葉を真っ向から否定したのは、ミーアであった。

ミーアは知っている。自分の脳みそは、残念ながら、あまり信用ならない。けれど、今、軍の指揮をしているのは、ミーアが最も頼りとする男たちなのだ。
「ルードヴィッヒもいる。ディオンさんもいる。アベルやシオン、キースウッドさん……それに、皇女専属近衛隊のみなさんもいる……ならば……」
ミーアは自信満々に言い放つ。
「一刻や二刻、いいえ、半日だって押さえ込んで見せますわ。まだ、取り返しがつく状態で……。彼らならば、必ずやってくれますわ」
ミーアは信じているのだ……信じるしかない現状なので、信じることに決めたのだ。
自分ではどうにもできないことは、考えたって意味がないという潔い諦めが、そこにはあった。
高い波が襲ってきたら、素直に潔く諦める海月。
ミーアは高―中略―潔　な海月なのだ。

第百三十四話　物語のような戦いを～飛来する矢と剣聖と～

古来、戦はある種の娯楽であった。
多くの人が血を流し、あまつさえ命を落とす者すらいる、そのようなものに楽しみを感じてしまう……それは愚劣なる人間の持った罪深き性質を表す良い証左であるだろう。
けれど……。
帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、その戦の愚劣さを物語に閉じこめ、完全なる娯楽へと変えようとしていた。
その物語の開幕は、進軍の太鼓によって幕を開けた。

「レムノ王国軍、及び、ミラナダ王国軍、進軍開始です。セントバレーヌの北東、北西より南下。町に侵入してきます」
報告を受け、ルードヴィッヒは眼鏡をクイッと上げる。
「予定通り、橋を燃やすよう準備を」
指示を出しつつ、ルードヴィッヒは改めて地図を見た。
恐らく……この町を設計した者は、外部からの侵攻があった際、張り巡らされた運河を利用して迎撃することを考えていたのではないだろうか？　運河を城の堀として利用するつもりだったのではないか？　と、そう思わせるほど、運河の通し方が絶妙であった。
「足止めだけならば容易い。ただ、敵を追い返すだけなら、ディオン殿に率いられた皇女専属近衛隊ならば、十分にやってのけるはずだが……」
彼らが求めるのは、その上。
帝国の叡智の求める戦い。後々に、禍根を残さぬ戦い。
命懸けの戦いがあったということすら否定する……そのような戦いだった。
「そのためには、誘導が必要だが……さて、上手く行くかな……」

ポッタッキアーリ軍とミラナダ王国軍は、整然と足並みを揃えて進軍した……わけではなかった。
実際のところ、両軍にそこまでの連携は望むべくもなく。特に、ミラナダ王国軍は、農民からの徴用も多く、さらに、帝国皇女ミーアの存在が、その足を鈍らせていた。
だからこそ、ポッタッキアーリ候の軍が先行すると申し入れてきた時には、司令官は歓迎した。
しかし……同時に不安もあった。もしかすると、功績を独占され、取り分が減るかもしれない。
求めるものは、自国に対する優先的な食料の輸送。不作が続けば、死活問題となる権益である以上、妥協は許されぬ。
ミラナダ王国を率いるビアウデット伯爵は悩みつつ、自身と、護衛の兵士数名を率いて、ポッタッキアーリ候のもとに赴き、同行を申し出る。
一方、ポッタッキアーリ候の側にもまた、懸念すべき事情があった。
成り行きで同行することになった第一王子ゲイン・レムノの存在である。
「ただでさえ、セントバレーヌの抵抗力を削ぐことに失敗したのだ。これ以上の失態は許さぬ。他国の軍に後れを取ることは許されん」
王位継承権一位の王子の前での無様は許されぬ、とばかりに気合が入る……と、いうよりは、気合を入れざるを得なくなったポッタッキアーリ候である。
ゆえに、彼は自ら軍を率いて、前線に出て指揮を執ることを宣言。ちょうどそこに、ミラナダ王国軍から使者が訪れる。
「ミラナダ王国より、司令官ビアウデット伯がいらっしゃいました。我らの軍に同行したいとのことですが……」
「そうか。まぁ、何もせずにいたと言われたくはないだろうからな。両軍揃っての進軍を、ルシーナ司教もお望みだったことだし、いい

だろう。認めよう」

さて、そんなわけで、ポッタッキアーリ候とビアウデット伯、さらに、王子ゲインを加えたポッタッキアーリ侯軍は前進。急進し、奇襲を仕掛けるような真似はせず、堂々たる行軍を見せつける。

あえて、降参を申し出る時間を作りつつの進軍であった。のだが……そんな彼らを出迎えたのは、あっさりと燃え落ちる橋だった！

煌々と赤い炎を上げる橋を前に、ポッタッキアーリ候があんぐーりと口を開ける。

馬を並べるビアウデット伯も、思わぬことに言葉を失っていた。

「なっ！　なな、なんということを！」

悲鳴を上げるポッタッキアーリ候のもとに、焦った様子で兵士が走って来た。

「報告！　先行した斥候によると、すべての橋に同じように酒樽が置かれ、塞がれているとのことです」

「なっ、ななな、なん……」

「落ち着け。ポッタッキアーリ候。燃やされる前に、酒樽を取り除けばいいだけのことだ」

ゲインに言われ、ポッタッキアーリ候はハッとする。

「む、無論でございます。おい、どの橋の酒樽をどければいいか、斥候と……」

っと、その時だった。

遠く、どこかから、風切り音が迫ってきた！

盾になるように、前に出たのはギミマフィアスだった。剣を引き抜き無造作に一振り。飛来した矢を斬り落とす。

「……はて、今のは……むっ！」

さらに続けて三本の矢。ほぼ同時に向かい来るそれらを一閃、二閃、三閃。

まるで、舞を舞うがごとく、流れるような身のこなしで斬り落とす。その目は、なぜか、斬り落とした矢の先端を見ていた。

さらに、風切り音。一つ、二つ、否、四つ！　続いて二つ！
飛来した四本を難なく斬り落とし、直後、ギミマフィアスが剣から片手を外す。片手持ちの剣で一本、空いた右腕の小手で、もう一本の矢を叩き落とした！
そうして彼は、
「おおう！　レムノの剣聖たる吾輩に剣ではなく、腕で受けさせるとは。敵にはなかなかの射手がいるようですぞ！」
どこか、ちょっぴり芝居がかった様子で言った。
「お……おお、あ、危ないところを感謝いたします。ギミマフィアス殿」
ポッタッキアーリ候が、震え慄く声で言った。その隣、馬首を並べたミラナダ王国の者たちも恐々とした視線を向けてきていた。
「お褒めいただいたところ誠に恐縮ながら、おそらく敵には殺すつもりがなかったようですぞ」
そう言って、ギミマフィアスは落ちた矢を拾い上げた。矢の先端、矢尻は潰されて丸くなっていた。これでは、よほど当たり所が悪くなければ鎧を刺し貫くことはできなかっただろう。
「いや、しかし、今回は脅しだとしても、次も同じとは思えませぬ。あれほどの弓の射手がいては、酒樽を撤去している間に狙い撃たれてしまう。おのれ……」
忌々しげに舌打ちするポッタッキアーリ候に、ゲインが意地の悪い笑みを浮かべた。
「そうだな。まぁ、橋を先に燃やしてしまうというのも一つの手かもしれんが……」
「そっ、それはなりません。ルシーナ司教との約束で、施設にはなるべく被害を出さないように、と……」
「やれやれ、ずいぶんと良いように動かされているようだな」
呆れたようにため息を吐くゲインに、ギミマフィアスが拾い上げた矢を手渡した。その矢の先端には、文が結び付けられていた。
「ほう、これは……」

文を一読したゲインは、不機嫌そうな顔をポッタッキアーリ候に向けて……。
「ポッタッキアーリ候、どうやら、この軍の斥候の者たちの目は節穴だな」
「は……？　え、いや、それは、どういう……」
「酒樽に封鎖されていない橋があるようではないか」
ゲインは、意地の悪い笑みを浮かべてから、ギミマフィアスに目を向けた。
「どうやら敵は、一騎打ちをご所望のようだぞ、ギミマフィアス」
「ほほう、なるほどなるほど。先ほど、剣を手放してしまった失態を、埋め合わせる機会が早々に頂けるということですかな……」
ギミマフィアスは、ニヤリと獰猛な笑みで答えた。

第百三十五話　物語のような戦いを～英雄譚、二人の射手～

セントバレーヌの一角……。少し背の高い建物の屋上に、二人の少女が立っていた。
矢筒を背負い、目立たぬ色の外套に身を包んだ二人……ティオーナとリオラだった。
その見下ろす先には、今にも燃え落ちそうな橋があった。
踊る炎のそのまた向こう、立ちつくし混乱の表情を浮かべる軍の指揮官と思しき男。さらに、そのそばには見覚えのある青年の姿も見えて……。
「あれは、ゲイン王子……それに……」
そのすぐ後ろに、全身を金属鎧に包んだ一人の騎士の姿を認めて、ティオーナは頷いた。
「あれが、レムノの剣聖ギミマフィアス」
レムノ王国の……否、この大陸の最強の剣士の一人。
アベルから彼のことを聞いていたティオーナだったが、いざ実際に見てみると、遠目でもわかるほどの強者の風格を備えた騎士であることがよくわかった。
「こちらの狙いが上手く伝わればいいんだけど……慧馬さんに情報を託したということは、ゲイン王子も今回の派兵には反対のはず……であれば……」
そっと唇を舐めて、気持ちを切り替える。
いずれにせよ、こちらでやることは変わらない。
弓を静かに持ち上げる。
緊張に手が汗ばむ。
失敗の恐れに手が震える。
深く息を吸う、一度、二度。
深呼吸を繰り返し、体から硬さを取る。

気負いはあった。でも、嫌な気分ではない。
ミーアの護衛としてついてきた以上、場合によっては、誰かを傷つけ、殺さなければならないという決意はあったし、自分が傷つき殺されるかもしれないという覚悟もあった。けれど、ミーアが求めたのは殺し合いではなく、物語のような戦争。
人々の心を躍らせる英雄譚。
なれば、その求めに応じ、ティオーナもまた、身につけた技を振るうのみ。
もう一度、深く息を吸う。一度、二度、三度。
ゆっくり深呼吸をしてから、弓を構える。
それは普段、彼女が使っているものより、さらに長い弓だった。
矢をより遠く、より強く飛ばすための長弓。引き絞るのに力がいるその弓は、ここ最近、彼女が練習していたものだった。
「ティオーナさま、風向きはちょうどいい、です。狙いを少しだけ左にズラす、です」
横で、同じく弓を構えるリオラが指示してくれる。それを受け、わずかに調整。目をすがめ、狙いをつける。
息を吸って、吐いて、吸って……止めて……。
「行くよ」
「どうぞ、です」
短いやり取り。刹那、ティオーナは矢を放った。
美しい軌道を描き、天空に放たれた矢。高い風切り音を上げ、弧を描くように向かう先、それは、馬上の指揮官のほうだった。
わずかに狙いを外すように放った矢は、けれど、流れるように剣を振るった騎士、ギミマフィアスによって斬り落とされた。
「よかった。食いついた」
安堵の吐息、直後、隣のリオラも矢を放つ。その数、続けて三本。一呼吸に放たれた矢は、今度は一直線にギミマフィアスのほうへと向かっていく。
金属鎧に当たるよう、今度はしっかりと狙いをつけてある。

さらに、ティオーナも再び一矢。
騎士を襲う四本の矢。されど、彼は難なくそれらを斬り落とし――否！　リオラがさらに続けて放った三本……その直後、息を合わせ、ティオーナとリオラが同時に二本！　その内の一本に剣が間に合わず……ギミマフィアスが鎧の小手でそれを叩き落とした！
それは、護衛の騎士としては至極当然で、あっぱれな動き。されど……剣一本で生きてきた達人にとっては屈辱的な敗北。
まして……その叩き落とした矢が矢文であったとするならば、なおさらのこと。
「やった、リオラ、上手くいったよ」
ティオーナは思わず、安堵の笑みを浮かべた。
彼女たちに課された役割は二つ。
一つは、言わずもがな、文を届けるということ。中央の橋における一騎打ち、それによりこの戦の雌雄を決さんとする、その果たし状を送り届けること。
今一つは、こちらに侮りがたい射手がいることを、相手に印象付けること。橋の上の酒樽を撤去する余裕などないことを、相手にわからせること。
そして……欲を言えばもう一つ。
それは、ギミマフィアスの誇りに傷をつけ、名誉を挽回する機会を橋での一騎打ちに求めるよう、誘導すること。
そのすべてに成功した、とティオーナは一瞬喜んだが……彼女の従者にして、弓の師でもあるリオラ・ルールーは、むーっと不機嫌そうに眉をひそめていた。
「いえ、あれは、わざと、です……」
「え……？」
驚きに目を見開くティオーナに、リオラは小さく首を振って、
「何の手応えもなかったので、やろうと思えば簡単に剣で防げた、です。たぶん、矢の先が潰してあることも、矢文を放ったことも、音でわかってた、です。こっちの狙いに気付いてる、です」

ふん、っと不機嫌そうに吐いて、ギミマフィアスのほうを恨めしげに睨んでから、
「でも、こちらも殺さないようにしていたから、引き分け、です」
負けず嫌いにもそんなことを言った。
そんなリオラに、ティオーナは思わず苦笑いを浮かべてから、
「なにはともあれ、これで、あの人がミーアさまの思惑の通りに動いてくれれば……」
祈るように、ティオーナはそっとつぶやくのだった。

第百三十六話　ミーア姫、しかつめらしい顔で首肯す

急報に、一瞬、立ち上がりかけたラフィーナだったが、自分を落ち着けるように、小さく息を吐いて、座り直す。それから、ミーアのほうにそっと目を向けてきて。

「ミーアさんが大丈夫、というのであれば、きっと大丈夫なのでしょう。私も信じるわ」

涼しげな笑みを浮かべる。

その声には、微塵の動揺も感じられない。

万が一にも戦火が広がれば、セントバレーヌ全体を焼き尽くす業火となるであろうことを承知であろうに、その表情は相変わらず穏やかなものだった。

それは、すべてミーアの言葉を信じ切っているから……。

そのことを察して、ミーアは、背筋につめたぁい汗が垂れるのを感じる。

――ほっ、本当に大丈夫かしら……。いえ、大丈夫だと思いますけど……でも、ルードヴィッヒって時々、わたくしにとっておきの秘策があると思い込んでることがございますし……大丈夫かしら？

などと、内心で焦るミーアを尻目に、ラフィーナはルシーナ司教に視線を向けて……。

「ところでルシーナ司教……、ミーアさんの今の言葉、その在り方……きちんと見ていたかしら？」

静かに問うた。その声は、清く、汚れなき厳格さを持ったものだった。

「どういう、意味でしょうか……？」

一瞬、その言葉の意味を捉えかねたのか、怪訝そうに眉をひそめるルシーナ司教に、ラフィーナは続ける。

「ミーアさんは、自分の家臣に任せておけば大丈夫、とそう言った

わ。それは、家臣を心から信頼して、託したということ……。ミーアさんは大切な家臣を信じたということ……」
そこで、ラフィーナは静かに首を振った。
「いいえ、それだけではなかったわね。ミーアさんは、あなたの娘であるレアさんを信じて、私のもとに送った。レアさんなら、私の代理として回遊聖餐の職務を果たせると、そう信じたゆえでしょう……そうよね、ミーアさん」
突然、話を振られたミーアは、一瞬、え？　と思いかけるも……むっつりとしかつめらしい顔を作って、首肯する。
腕組みして眉間に皺を寄せた、大変、厳格な表情であった。
――うん？　そうだったかしら……？
なぁんて疑問は、もちろん顔に出すことはない。とりあえず、ラフィーナがこう言ってるんだから乗っておけ、の精神である。波が来た時には、信じて、素直に身を委ねるミーアなのである。
「そもそもの始まりは生徒会長選挙だった。私はミーアさんが生徒会長を続けるのが良いと思っていた。でも、ミーアさんはレアさんを見出し、彼女を信じて託した。レアさんならば、その重責を担えると、成長できると……そう信じて……それこそが、ヴェールガ公国の、いえ、大陸の未来のためになるから、と考えたから……そうよね、ミーアさん」
再度、話を振られ、ミーアは、うんうんっと頷く。
うん……うん？　っと思っていはいたが、一度乗ってしまった波である以上、途中で降りることは難しい。
たとえ、自身を天空に投げ出し、本物の月にしてしまうような高波であっても、否、そうであればこそ、もう降りることはできないのだ。不幸なことに……。
ラフィーナは、それから、リオネルのほうに目を向ける。
「それだけじゃない。ミーアさんは対戦者であったリオネルさんも生徒会に入るようにした。リオネルさんが成長することを信じて……そうだったわよね、ミーアさん」

そうだったかしら？　などとは思っても、無論、顔には出さない。
さも、その通り！　とばかりの顔をして、頷く。頷く。
ただただ、眉間に皺を寄せた、硬く、まじめーな顔で頷く、頷く。
それを見て、嬉しそうに微笑んだラフィーナが、続ける。
「その結果が、今の状況よ。ルシーナ司教。ミーアさんは信じた。その結果、レアさんやリオネルさんを味方につけ、私はここに来ることができた。そして……」
責めるでもなく、怒るでもなく、ただ澄み渡った瞳で、ラフィーナはルシーナ司教を見つめる。
「ルシーナ司教、あなたは、それができなかった。あなたは間違っている。伯爵として、為政者として、政を司る者としてではないわ。あなたは、司教として間違っている。信仰者として……あるいは、親として間違えてしまっている。あなたは……」
そこで、ラフィーナは一度、言葉を止める。言いづらそうに、唇を噛んで、悩ましげな顔をしてから、それでも大きく息を吸って、吐いて……。
ラフィーナは厳かに告げる。
「あなたは誰のことも信じることができていない。愛する家族すらも……そして、おそらくは、信頼すべき友人たちも……。そのような在り方が、神から愛し合うように造られた『人間』の正しい姿とは思えない」
そう指摘した後、ラフィーナは無言でルシーナ司教を見つめた。
まるで鋭い矢のような、射抜くような視線――を横から見ていたミーアは、思っていた。
――こ……こわぁ……。
っと。
――やっぱり、ラフィーナさまとは敵対したくありませんわね。お友だちで良かったですわ……。しかし、よくよく考えると、間違えを指摘してもらえる分、ルシーナ司教は幸せとも言えますわね。わたくしの時にはなにも言ってもらえませんでしたし……。そう考

えると、ちょっぴりズルいような……。
などと、恨めしげな視線を向けるミーアであった。
まぁ、それはさておき……。
「……ご指摘痛み入ります。確かに、我が子たちのことを、私は信じることができていなかったようだ。あるいは、友人たちのことも、あるいはそうなのかもしれません。私は弱く罪深き者ですから。それは、この場で悔い改めましょう」
微かに動揺に震える声で、ルシーナ司教は言った。が……。次の瞬間に顔を上げ……。
「ですが……それと、セントバレーヌのこととは、何の関係も……」
「すべての国がヴェールガ公国のようである必要はない」
遮るように断固たる口調で、ラフィーナは言った。それから、上目遣いにルシーナ司教を見つめ……。
「それは、他ならぬ神聖典に書かれていることではないかしら？」
静かに問いかけた。

第百三十七話　そんなラフィーナも今では……

ラフィーナの問いかけに、ルシーナ司教は鼻白んだ様子だった。
「なにを馬鹿な……そのようなことはどこにも書かれてはおりません」
「神は、我ら人間を画一的な存在としては造らなかった。手ずから個性を与え、独自の存在として人格を確立した。それぞれを違う者として造ったから、互いに愛し合い、助け合うよう命じられた。神聖典には、そう書かれているでしょう？」
「それは、そうですが……」
「同じように、国もまた多様であることが許されている。その在り方を、神聖典では体に喩える。あなたからすると、ヴェールガ公国は頭にあたるのかしら？　されど、すべてが頭になってしまえば、どうやって食べ物を口に運ぶのかしら？　どうやって道を歩き、務めを果たすというのかしら？　手は手の役割を持ち、足は足の役割を持ち、頭は頭の役割を持つ。同様に、ティアムーンにはティアムーンの役割があり、ヴェールガにはヴェールガの役割があるのではないかしら？」
ミーアは、その堂々たる物言いに、おおっ！　と内心で歓声を上げた。
ラフィーナが、ルシーナ司教のロジックによって……彼のよって立つ価値観によって、彼を説得にかかっていることが理解できたからだ。
「そのぐらいのこと、私に言われるまでもなく、あなたはわかっているんでしょう……？　それでも、あなたはそうせざるを得なかった……信じることが、できなかったから……。だから……良心や信仰ではなく、制度という枠組みによって安心したかった。司教が国を治めるという制度によって……」

ルシーナ司教はうつむいたまま、ラフィーナの話を聞いていたが、やがて、絞り出すような口調で言った。
「ラフィーナさまは、恐ろしくないのですか？」
「なにが、かしら……？」
「商人たちの価値観が……、いや、我らとはまったく違うすべての価値観、国の在りようが……恐ろしいとは思われないのですか？」
ルシーナ司教は苦しげな顔で続ける。
「孤児院に対する商人たちの考えを聞いた時、私は理解できませんでした。なぜ、子どもたちの生活と、金を儲けることが天秤に載り得るのか……。私は理解できませんでした。なぜ、親を失った子どもの心を守ることと、孤児院の土地を商用利用することが比較されうるのか……。私は、理解できませんでした。金という秤で、すべてを測ろうとする……そのような価値観を持つ者が都市を治めるということが……」
ルシーナ司教の目には、なにを優先するのかは明らかなことだった。
セントバレーヌの孤児院に預けられたのは、海の事故で親を失った子どもたちだ。行き場を失った、深く傷ついた子どもたちだ。それは、考えるまでもなく保護するべき存在。それは、比べるまでも無いこと。
傷ついた子どもたちが、ようやく得た孤児院という家族を、金のために解散する……そのような考えが出ること自体、理解できない、と彼は言っていた。
「それは、ツロギニア王国に派遣されていた時から感じていたことでした。かの国の国王は言いました。食料を与えず、民が死んでも仕方ない、と。命が失われることが、仕方ないの一言で片付いてしまう……。周りの国々も、仕方ないと諦めて、その責任を責めることもしない。その価値観が、私には途方もなく恐ろしく感じられるのです」
深く、深く、ため息を吐いて、ルシーナ司教が言った。

「そのような国の在り方を価値観を……多様性の名の下に認めてしまえば、いずれ我らは何が善であるか、なにが悪であるかをわからなくなってしまう。そうではありませんか？　善悪の基準が相対化されてしまえば、我らは善悪という形のないものを定める参照点を失うのではありませんか？」

「いいえ、そうはならないわ」

ルシーナ司教の問いかけに答えるラフィーナの声は、まるで揺るがない。

「なぜなら、私たちは、そう造られてはいない。私たちは生まれながらに良心を備えている。神の定めた道徳律に従うように、造られているのだから……」

彼女の言葉は、人間を定義していた。神にこのように造られたから、というのがラフィーナの根拠だ。そして、ルシーナ司教の根拠でもあるはずだった。

胸に手を当て、その身の内にある何かを確かめるように、ラフィーナは続ける。

「私たちは神という統一の下で多様な存在に造られた。それゆえ、多様ではあっても一つの道徳観を持っているわ。悪人は自分が善を行っているという認識で悪を行わない。罪悪感を覚え、仕方ないと言い訳して悪を行う。善なるものを綺麗事だと貶め、行動が伴わないと貶し、なんとかして、善を行わなくて良い理由を探すけれど……それは善い生き方をしなければならないと、わかっているから。それが悪であるか、善であるかは、すべての人の目に明らかよ」

ラフィーナは、穏やかに語りかける。揺るがない確信を持って……。

「力なき子どもたちを助けることが悪になることは決してない。空腹の誰かを助けることが悪になることは決してない。すべて人は、神の、普遍的な善悪の基準の下にいる。善く生きるように促されている。そして、その統一の下で、どのように善く生きるのかには、多様な形がある」

淡々と、清らかな声が続く。ルシーナ司教の過ちを、徹底して否定するように。
「王は王であるから悪に定められることはない。王として善を行わないことによって悪に定められる。そして、その罪が神に裁かれないことは決してない。でも……」
そこで、ラフィーナは悲しそうな顔をした。
「ルシーナ司教……あなたは、それを信じることができなかった。昔、ツロギニア王国で裏切られたから……。だから、目に見える、わかりやすい制度という形によって、王を縛ろうと思った……。そうではないかしら？」
ラフィーナには、その気持ちがわかった。
かつて、彼女も友の裏切りにあった。そのせいで、彼女は長らく真に信頼できる友を持つことができなかった。
けれど、そんな彼女に出会いがあった。
すぐ隣、真剣な顔で話に耳を傾ける人、ミーア・ルーナ・ティアムーン。慈愛と叡智に溢れた帝国のお姫さま……。
もしも、ミーアと出会うことがなければ、もしかしたら……。
――もしかしたら、私はルシーナ司教と同じようになっていたかもしれない。いいえ、彼よりももっと直接的に、力をもって悪を滅する……そんな存在になっていたかもしれないわ。
ふと、そんな想いに囚われたラフィーナは、心に促されるままに言葉を連ねる。
「そんなあなたの不安を払しょくしてくださる方こそ、ミーアさんよ。そうよね、ミーアさん」
そうして、視線を向けた先、
「……はぇ……い」
ミーアが、ちょっぴーり間延びした返事を口にした。

第百三十八話　物語のような戦いを～わからせる！～

「さて、上手くいくと良いんだけど……」
中央の橋の上、ディオン・アライアは一人、佇んでいた。
その腰には彼の二本の愛剣が、さらに、その後ろには、数本の予備の剣が用意されている。
そして、その身を覆うのは、使い慣れた彼の鎧ではなかった。真新しく、戦場で着るにはいささか派手な輝きを放つものだった。
さらに、鎧の上からは、赤を基調としたマントまで羽織っている。その背に、帝国の紋章が刺繍されたものだ。少々、見栄えのする……目立つ格好だった。
「これで、来なかったら作戦はともかくとして、完全に道化だな。やれやれ……」
肩をすくめるディオンだったが、直後、その目に鋭い光が宿る。
「ああ、よかった。来たか……」
橋の反対側、のんびりと歩いてきたのは、全身金属鎧の男だった。
大陸きっての騎士、練達の老剣士、レムノの剣聖ギミマフィアスは、肩に数本の剣を背負ったまま、ゆったりとした歩調でディオンの前にやって来た。
「良かったよ、力押しで来られたら危ないところだった」
金属鎧の老騎士に、ディオンはニヤリと笑いかける。
「吾輩もそう思わないではなかったが、なにせ、侯爵は司教猊下の大義名分によって動かねばならぬ身。悪逆の行いと取られるようなことは避けたいご様子でしてな。それに、レムノ王国の次期国王の眼前で、レムノの武人が一騎打ちを拒否するなどあり得ぬこと……」
髭を撫でながら、ギミマフィアスは言った。
「それに、吾輩としても、一騎打ちを断ったとあってはレムノの剣聖の名折れ。断るわけにはまいらなかった……と、我々がそう判断

すると読まれたのではないですかな？　帝国の叡智は……」
「まぁ、そういうことだね」
より正確に言うなら、帝国の叡智の従者は、だけど、と心の中で付け足すディオンである。
もっとも、ルードヴィッヒがミーアの意向を受けて立てた作戦なので、そう大差はないだろうが……そうだろうか？
「しかし、解せぬな。古の戦でもあるまいし、一騎打ちによって貴公が勝ったとして……ポッタッキアーリ候やミラナダ王国が納得するとでも……？」
仮に、ここでギミマフィアスが敗れたとして、両軍が引く理由はない。結果次第では、一騎打ちなどなかったことにしてしまうことだってできるのだが……。
「まぁ、第一義的には時間稼ぎなんだよ。そちらの大義名分を奪うね。しかし、それに頼り切りになるのも芸がないということで……」
ディオンは獰猛な笑みを浮かべる。
「ちょっと、ビビらせてやればいいと思ってね。レムノの剣聖と死闘を演じることによって、ね」
物語のように……。
ミーアのそんな命令を受けて、ディオンとルードヴィッヒは頭を悩ませた。
双方に、それなりの犠牲を出せば……敵を撃退することは可能だったかもしれない。
ミラナダ王国軍は貧弱で、ポッタッキアーリ候のほうも、少なくとも短期間でセントバレーヌを攻め落とせるだけの戦力はない。
その間に、この紛争が他国に……否、ヴェールガ本国に伝われば、状況は好転しただろう。
されど、それは血を流し、後に禍根が残る現実的な落としどころ……。ミーアが求めた「物語のような」都合の良い終わり方とは言えない。
ゆえに、彼らが立てたのは、現実的な作戦ではなく、相手の心を

打つ作戦。
まだ、互いに余裕があるうちに……勝利の形や面子にこだわることができるうちに誘導し……冷静な判断ができるうちに、正常な恐怖がまだ感じ取れるうちに、その心を攻める作戦。
それこそが、最強戦力による一騎打ちであった。
ルードヴィッヒがディオンに願ったのは、ただ一つのことだった。
「その武によって、敵軍の戦意を挫いてもらいたい」
それすなわち、存分に帝国最強の強さをわからせてやること……。
「え？　次、俺たちがこいつと戦うの？　マジで？」
っと、敵軍に全力でわからせてやるのだ。
自分たちが相手をしなければならないのが何者か……。帝国最強の騎士、ディオン・アライアがどんな存在であるかを、その目に焼き付け、わからせてやるのだ。
そのためには、ディオンが全力を出せる相手が必要だった。
そして、偶然にも……相手方には、その男がいた。
レムノの剣聖、ギミマフィアス……。
そう仕向けたのか、あるいは、天の配剤に気付いたミーアが、咄嗟の閃きから、この図柄を書き「物語のように」と口にしたのかは定かではない。
ともかく、ルードヴィッヒは、その意を汲み、この局面を整えた。
「なるほど……。それで……」
ギミマフィアスは、そこで悪戯っぽい笑みを浮かべてディオンを見つめ、
「その少々、目立つ鎧は、そのためのものですか」
「ああ、そいつはできれば触れないでもらいたかったがね」
物語のような勝利が必要だからと言って、物語の人物のような、派手な格好をする必要もないだろうに……。
ため息混じりに首を振り、ディオンは剣を抜いた。
「さて、それじゃあ、とにもかくにも始めようか。できれば、協力してもらえるとありがたいが……」

「ふむ……協力する義理はない。が……どうやら、ゲイン殿下の思惑とも重なるところがありそうであるな……」
そうつぶやいて、ギミマフィアスは肩をすくめた。
そして……現実離れした、物語のような戦いが始まった。

第百三十八話　物語のような戦いを～わからせる！～（後書き）

来週なのですが、申し訳ありません。急遽、お休みとさせていただきます。

ＳＳが……特典ＳＳの波が……。

あ、それとキャラクターボイスドラマなるものがｙｏｕｔｕｂｅのほうで公開中です。前回、更新休んで頑張って書いたやつなのです……。よろしければ、ぜひ。

第百三十九話　物語のような戦いを～激突、レムノの剣聖　ＶＳ　帝国最強！～

一騎打ちの始まりは、物語に相応しく華々しい……否、ド派手なものだった。

「では、早速、吾輩の名誉を挽回させていただこうか」

持ってきた剣を橋に置き、ギミマフィアスは一本の剣を肩に担いだ。その刀身を見て、ディオンはかすかに眉をひそめた。

「へぇ、ずいぶんと重そうな剣だ。老人にはキツイんじゃないかな？」

ディオンの持つ騎士剣の倍ほども長い刀身、重量感のある幅広の刃を横目に、ギミマフィアスは笑った。

「なぁに、先日やられた意趣返しに、今日は吾輩の技を披露しようと思ってのこと」

そうして、彼は剣を両手で持つと、

「では、参るぞ、帝国最強」

開戦を継げる気合の声。直後、ドンッと腹に響く音！

踏み込みの音とほぼ同時、金属鎧の鋼色がディオンの目の前に迫っていた。

頭上に高々と振り上げたる剣、それは、レムノ流剣術、第一の構え！

上段から振り下ろされるは、神速にして圧倒的な破壊力を持つ一撃だ。

ごうっと、嵐のごとき音を立てるその一撃を前に、ディオンは……。

「やれやれ、素直に受けたら腕ごと持っていかれそうだけど……まぁ、避けるよね」

一歩足を引き、半身で躱す。

ドォンッと……重たい激音が周囲に響き渡る。

それは、斬撃が出す音では決してなかった。
それは、雷か、はたまたがけ崩れの轟音か……人智を超えた大自然の破壊音を思わせる轟音だった。
その一撃は、橋に深々とめり込み、やすやすと橋げたの木材を破砕した。激しく弾け飛ぶ木片、その中で目を細めたディオンは、直後、感心の声を上げた。
「へぇ……」
刹那、閃き。ぶつかり合う刃と刃。
脇腹を狙った強烈な一撃に、刀身をねじ込んで防御しつつ、ディオンは一歩後退。
「そんな重たい武器で、攻撃を外したらどうするのかと思ってたけど、なるほど」
「わはは、挨拶代わりに、その真新しい鎧に傷でもつけてやろうと思ったが……さすがは帝国最強。これを避けるか……」
ギミマフィアスの手にあったのは、通常の騎士剣。長剣を振り下ろした直後、その腰に佩いた剣に持ち替え、抜きざまの横薙ぎ一閃。その流れるような動きは洗練の極みであった。
「レムノ流剣術には、いくつかの構えがあってな……。アベル殿下が極めつつある第一の構えは、その一つ。それは、剣術の動きを効率的に身に着けるために活用しているが……」
ギミマフィアスは、剣を下段に構えて、
「本来の力は、こうして、違う剣を使うことで発揮されるものでしてな」
それは、レムノの剣聖が数多の戦いを経て身に着けた技。
あらゆる種類の剣の能力を最大限に生かす動きを極めし者、それこそがギミマフィアスが剣聖と呼ばれる理由。剣聖は剣を選ばず、なのである。
「あらゆる戦場で戦えるよう、武器を選ばず、あらゆる剣で達人としての強さを発揮する、それがレムノの剣聖ということか」
「さよう。そこらで拾った使い古された剣であろうと、貴殿と渡り

合って見せよう」
　言いつつ、再度の踏み込み。剣聖の神速の横薙ぎを剣の腹で受けながら、ディオンは笑った。
「なるほど、どうりで。長さの違う剣を何本も用意していると思ったよ！」
　そのまま、ディオンはもう一本の剣を抜き放つ。左右に剣を構えたディオンに、ギミマフィアスは大きく引き、
「二刀流で、この一撃を受け切れるのかな？」
　橋げたに突き刺さった両手剣まで戻り、振り上げるも、
「ははは、そうそう攻めこませるとでも？」
　ディオンの踏み込み。その足に、ギミマフィアスの低い横薙ぎが迫る。
「おっと！」
　地面を蹴り、再び後退。その目の前、巨岩が振って来たかのような、圧倒的な上段振り下ろしが迫る。
　舌打ちしつつ、ディオンは片方の剣を宙に放り投げ、両手持ちにした刀身を合わせる。
　激突！　と同時に刃を傾け、衝撃を下に逃がす！
　柄から手を離し、その勢いのままに体を回転、宙に放った剣を取ると、ギミマフィアスの背中に向けて振り下ろそうとするが……。
「ふん！」
　鼻で笑うような声、直後、ギミマフィアスの脇から、突きが迫る！
　それを剣の腹で受けて、ディオンは一歩後退。楽しげな笑みを浮かべる。
「持ってきた刺突剣を何に使うのかと思ってたけど、なるほど、そう使うのか。やるなぁ」
　賞賛の言葉を受けて、ギミマフィアスは肩をすくめた。
「はっはっは、吾輩が使えばどのような剣でも、名剣になりますのでな」
　しゅん、しゅんっと細身の剣を振り回してから、それを鞘に納め

る。
「さて、次はどんな技をお見せしようか」
これこそが、レムノの剣聖の一騎打ち。
それは、決して戦場でできる戦い方ではない。複数の異なる種類の剣を持ち替えて戦うなど……そのような手間のかかる準備をすることは、通常ではありえない。
されど、このような一騎打ちにおいて、それは、無類の力を放つ。持ち替える都度、間合いも、太刀筋も変わるうえ、そのどれもが達人の剣技なのだ。
戦うほうとしては対処のしようのないことではあったが……。
「いやぁ、さすがは剣聖だ。ギミマフィアス殿。敬意とお礼を申し上げる」
剣を構えつつ、ディオンは笑った。
「こんなに楽しいのはひさしぶりだ」
ものすごぉく楽しそうに笑っていた！

さて……その戦いを、遠巻きに眺めている一団があった。
ポッタッキアーリ候の私兵団、及び、ミラナダ王国軍の者たちである。
彼らは、各々に思っていた。
「いや、なにあれ……」
っと。
ふつふつと感じる。アレは……戦場で出逢ったら絶対いけない類のヤツだ……っと。
「レムノの剣聖は、すごいが……あの剣をまともに受け止めつつ、笑ってる……あの敵方の騎士は何者だ……？」
自分たちであれば、一瞬で真っ二つにされそうなギミマフィアスの連撃。難なくそれを捌きつつ、楽しげに、朗らかに笑うディオンにドン引きだった。
「あれ……もしかして、レムノの剣聖より強いんじゃ……」

「え、レムノの剣聖が負けたら、俺たちが、あれと戦うの？　マジで……？」
仮に、あの橋を使わなかったとして、あの騎士が追いかけて来るであろうことは必至で……その時に対峙するのが自分ではないという保証はどこにもなくって……。
戦場では決して与えられなかったであろう、頭を冷やす時間。
戦場の興奮、高揚とは無縁のその時間は、兵士たちにヤバイ現実を突きつけ、その士気をゴリゴリ削っていくのだった。

第百四十話　遠くても、色あせない記憶

「はぇ……い？」

うっかり気の抜けた返事をしてしまったミーアは……次の瞬間、後悔する。

――あ、あら……？　今のって肯定の返事をしちゃいけないやつだったんじゃ……。

そんなミーアに構わず、ラフィーナは続ける。ノリノリで続ける！　ちょっぴり、ドヤァっとした顔で、友だちを誇る！

「あなたは、ミーアさんの行いを我らの神に成り代わる業だと思ったようだけど、違うわ。彼女は、ただ、我らの神が、せよと言われたとおり、善なる行いを、自分の職責に従ってやっているだけ。帝国皇女として、統治者に連なる者として、ただ、正しくあろうとしただけ」

断言である！　疑問も、否定の入る余地もない、完全無欠な断言である！

そうして、一転、穏やかな声で、ラフィーナは続ける。

「そして、それこそが、あなたの祈り求めた者でしょう？　ここにいるミーアさんこそが、力弱き子どもたちを助け、育て、決して見捨てない王よ。神から委託された権威を正しく用いている人よ」

大層な紹介のされ方に、ミーアはますます青くなる。

――これ、認めてしまったら、わたくしってずっとルシーナ司教の目に叶うような、清廉潔白な生き方をしなければならなくなるのでは……？

どちらかと言えば、勤勉じゃなく、できれば怠惰にダラダラしていたいミーアとしては、それは、ちょーっぴり遠慮したいところだった。疲れそうだし……。

それに、全幅の信頼はやはり恐ろしいもの。できれば、悪いとこ

ろに気付いたならば、はっきりと言ってもらいたくもある。
　ということで……、できれば、信頼をやや弱めたいし、責任を分散したい……であれば……。
　ミーアはシュシュっとその場の陣容を確認し……素早く考えをまとめ……そして、静かに口を開いた。
「その通りですわ……っと言いたいところですけど、おそらく、ルシーナ司教には、それでは不足なのでしょう？」
　その言葉に、ルシーナ司教はゆっくりと目を上げた。その目を真っ直ぐ見つめ返し、ミーアは言った。
「わたくしは、今まで、自分にできる最善を行ってまいりましたわ。それは神から与えられた機会を生かしてきただけ、とわたくしは思っておりますわ」
　まず、ミーアは事実を告げる。ここには一切の嘘はない。
　ミーアは確かに常識を遥かに超えたことを体験していて、そんなことができるのは、神さまぐらいしかいないだろうなぁ、と漠然と考えているからだ。
　その与えられた機会を生かしているだけ、どこにも嘘はない。正直者のミーアである。
「そして、わたくしがそれを始めたのは、すべて、ある方の祈りによるものですの……」
　そっとミーアは目を閉じる。
　それは、もう、遠くなってしまった、されど決して色あせることのない、一つの記憶。
　断頭台へと送られる、あの日……地下牢でミーアのために祈ってくれた人がいた。
　最期の日まで寄り添い、親切にしてくれた人がいた……。
　――アンヌさんは、処刑されるわたくしのために、神の加護を祈ってくれた。思えば、あれから、すべてが始まったと言っても、過言ではありませんわ。
　それから、ミーアは目を開けて、

「その方だけではありませんわ。わたくしには、懇意にしている新月地区の神父さまがおりますけれど、彼もきっと祈ってくれているでしょう。もちろん、お友だちのラフィーナさまだって、わたくしのために祈ってくれているはず。統治者には、きっと祈る人というのが必要なのでしょう……ところで、ルシーナ司教」

ミーアは強い視線をルシーナ司教に向けて……、

「あなたは、祈っておりますかしら？　子どもたちのためだけではありませんわ。商人組合の方々のために、この地を統治する者たちのために、あなたは、祈っておられるのかしら？」

「え……？」

不意を突かれたように口を開けたルシーナ司教に、ミーアは続ける。

「彼らが判断を誤らぬよう、悪の道に堕ちぬよう、善き判断ができるように……祈り、励まし、説教していたかしら？」

「それは……」

言い淀んだルシーナ司教を見て、ミーアはニンマーリ、と心の中で微笑む。

――まぁ、そうですわよね。やってきた！　と胸を張っては、言えませんわよね。

それは、別に賭けでもなかった。

ルシーナ司教のように真面目な人は、仮にしっかりやっていたとしても、問い返されると、その真面目さゆえに、やっていました、とは答えられないもの。つい、自分自身を省みてしまうもの……。まして、実力で商人組合を廃そうとしていたなら、より一層、胸を張って、やってた！　とは言えない。

それを見越してのミーアの質問だった。

そのうえで、統治者のために祈る者の存在を強調したうえで……ミーアは言った。

「ルシーナ司教、わたくしは思いますの。あなたが、わたくしを信用できなくっても、それは仕方のないことですわ。それほどまでに、

ルシーナ司教が過去に受けた傷は大きなものだったのでしょう」
　それを聞いて、ラフィーナがなにか言いたげな顔をしていたが、ミーアは、大丈夫だ、と頷いてみせてから……。
「いかに、ラフィーナさまが認めてくださっていても……あるいは、わたくしの今までの実績があったとしても、それだけでは信じられない。だって、それは、たぶん、ツロギニア王国の王族と、本質的には変わらないものだから……」
　信じて裏切られたから、傷つくのだ。最初から軽蔑している相手に裏切られたとて、何ほどのこともなし。とすれば、ツロギニアの王族というのは、ルシーナ司教にとって、善良に見える人たちだったのだろう。実績だって、それなりにあったのだろう。
　であれば……実績において信用を勝ち取るのは不可能。ゆえに！
「だから、ルシーナ司教は、まず信じやすい人……信じるべき人、信じなければいけない人を信じるところから、始めればいいのではないかしら？」
「信じなければ、いけない人……？」
　問い返す彼に、ミーアは深々と頷く。
「そう……あなたの愛する家族……奥さまであり、レアさんであり……そして」
　スッと目を向けて、ミーアは厳かな声で言った。
「リオネルさん……あなたの誇るべきご子息ですわ」
　突如、自分のほうに話が飛んできて、リオネルが、ビックリした顔をしていたが、まぁ、当然、スルー。ミーアは続ける。
「生徒会長選挙の時のこと、ルシーナ司教もお聞きになりましたわよね？　彼は、自身の支持層になってくれそうな者たちを、安易に味方にすることはなかった。打算に、わかりやすさに、自分の理解できる力に……逃げなかった」
　ミーア、全身全霊のヨイショである。
「彼は、正しいと信じることをし、その結果が自分の望みとは違ったものであっても、それを受け入れ、呑み込んだ。そのうえで、妹

を支えるために、全力を尽くそうと、一歩前に出ましたわ」
奇しくもそれは“わかりやすい制度”を頼ろうとし、打算的方法を選んでしまった、ルシーナ司教とは真逆の道だった。
弱さゆえに……ルシーナ司教が取らざるを得なかった道と、真逆の道だった。
「それは……」
と、口を開きかけたルシーナ司教を、ミーアは片手で制す。
「それは、リオネルさんがまだ若いから。まだ、一度も折れたことがなく、手ひどい裏切りを経験したことがないから……だから、その道を選んだ、と言いたいかもしれませんわ。そして、それは、あるいはその通りなのかもしれませんわ。されど……」
ミーアは、グッと拳を握りしめて、言った。
「わたくしは思いますの。だからと言って、失敗し、心折れて、見えやすい力に安易に頼ることは、はたして正しいのかしら、と……」
それから、ミーアは真っ直ぐにルシーナ司教を見つめて。
「あなたも、もうわかっているのではないかしら？　ご自分のやり方が間違っていると……心折れ、諦めに身を委ねることが誤りであると……」
次に、リオネルのほうに目を向けて……。
「ルシーナ司教、あなたが統治者を信じられないなら、統治者のために祈り、統治者を教え導く、リオネルさんを信じればいい。あなたの後を継ぎ、司教となるリオネルさんを、神があなたに与えた誇るべき息子である、リオネルさんを信じればいいのですわ」
ミーアは、そこで、小さく息を吐く。
――こっ、これで、とりあえず、責任をリオネルさんにも分散できたはず……。
っと、安堵するミーアの目の前で、リオネルが静かに立ち上がった。

第百四十一話　凶報が扉を叩いて

「父上……」
ルシーナ司教のほうを見たリオネルは、一瞬、言葉に詰まったようだった。
いつも厳格で、正しく、強かった父の顔に、憔悴の色が見て取れたからだ。
彼にとって、神にも等しき絶対者であった父、揺らぐことなき正義の体現者であった父が、今は一人の弱き人間に見えた。
過去に傷つき、未来の希望を信じることができなくなった、頼りない人間に見えた。
そのことがリオネルに与えた衝撃は、思いのほか大きかった。けれど……目を逸らすことなく、父の顔を真っ直ぐに見つめたまま、リオネルは口を開いた。
「父上のお考えはよくわかりました。その不安も、理解できます……いえ、今の僕では、完全に理解なんか、できないのかもしれないけど……。それでも、なさろうとしたことは、わかるつもりです」
静かに、父のやろうとしたことを認めたうえで……。
「しかし、たぶん、父上はそれでは、安心できないのではないですか？　父上の思うとおりの体制が築けたとしても父上の心は安らがないのではないでしょうか？　今度は、その体制を悪用し、腐敗する王族が出るかもしれない。裏金をもらう司教がいるかもしれない。体制自体の腐敗を防ぐための、強力な体制が必要になるかもしれない。そうでは、ありませんか？」
各国の王は必ず、聖職者でなければならないとして、その聖職者の任命が公平に判断されるよう、常に監視しなければならない。一度、選ばれた聖職者が、生涯ずっと神の掟に従っているか、監視し続けなければならない。監視する者が腐敗しないか、監視し、縛ら

なければならない。
……それではきりがない。それでは解決にならない。
その実感があったからだろうか……リオネルの指摘にルシーナ司教は苦い顔をしていた。
そんな父に、リオネルは静かに告げる。
「父上、僕は……セントノエル学園を卒業したらヴェールガを出て、ツロギニア王国に行きたいと思います。派遣司教として……」
「なに……？」
息子の言葉が想定外だったからだろう、ルシーナ司教は、思わずと言った様子でつぶやいた。
「ツロギニアに……、なぜだ？」
「父上ができなかったこと……、やり残したこと、心残りとなっている過去を払拭するために……」
確固たる口調で、リオネルは言った。
「ツロギニアからもセントノエルに学生は来ています。ミーア姫殿下のお言葉を聞き、セントノエル学園でなされていることを目にした学生が、卒業後に国に戻った時、良い方向に国を変えることを、僕は手伝いたいのです」
すでに、ルシーナ司教が派遣司教をしていた時から長い時間が経っている。あの当時の王侯貴族の性質が、今もなお残っているとは限らない。
ゆえに、リオネルがツロギニアを選んだのは、あくまでも象徴的な意味だ。かつて父が救えなかった国で、今なお、弱き者が軽視されるようなことが行われているなら、それを放置することはできないから。
それから、リオネルは深々と頭を下げた。
「ミーア姫殿下に示されるまで、父上のお気持ちに気付かなかった僕を、どうか許してください。そして、どうか、僕を信用してください。セントノエルは、確実に良い方向に変わりました。ラフィーナさまや、ミーア姫殿下の生徒会が作り上げてきたものは、学園を

変え、世界を変えていく。決して急進的ではないけれど、少しずつ良いほうに……それを見守り、祈り、導く、それこそが、我々の仕事だと、僕は思います。だから……」

真っ直ぐに、父の目を見つめて……リオネルは言った。

「その、僕の未来を……その働きを信じてはいただけませんか、父上。僕を信じて、ミラナダ王国軍とポッタッキアーリ候の軍に、引くように言っていただけませんか？」

その言葉に、ルシーナ司教は揺れているようだった。今までのように、取り付く島もないといった様子ではない。迷い悩んでいる様子が確かにあった。

――おお！　これは、予想外に良い方向に話が進みそうですわ！

二人のやりとりをはたで見ていたミーアは、心の中で快哉を上げた。

――ルシーナ司教もここで、ノーとは言いづらいはず。それにリオネルさんも、ツロギニアに行けば、ベルの問題も片付きますわ！

想定外のことながら、これには、シュトリナもニッコリだろう。

――あとは、このまま、ルシーナ司教がうん、と言ってくれれば、戦闘は止まりますし……。後片づけは商人組合のビオンデッティ商会とフォークロード商会に任せて……ルードヴィッヒにも手伝ってもらえば、そう悪いことにはならないはずですわ。となると、うふふ、オウラニアさんが調べた海の幸を使っての宴会が待ってますわ。ラフィーナさまをたっぷりと歓待しなければ……。

そう……すべては、上手くいきそうだったのだ。

このまま、何事も起こらず、無事にミラナダとポッタッキアーリ候の連合軍は引いていき、もろもろの処理を終えて、楽しい宴が待っていると……ミーアは心から安堵していたのだ。

……その安堵が、油断という名の甘い誘惑であるとも知らずに。

そうして、凶報は、唐突に聖堂のドアを開いた。

「失礼いたします。ミーア姫殿下！」

聞き覚えのある声、それは、高い女性の声だった。
聞いた瞬間、ミーアは嫌な予感に……いやぁな予感に囚われる。
ゆーっくりと振り向いたミーアの視界に、その人物が映りこむ。
こだわりの強そうな外套に身を包んだ女性、満面の笑みを浮かべる彼女の名は……。
「ご注文いただいていた旗が、ついに完成いたしました！」
その凶報は……シャルガールという女性絵描きの姿をしていた。

第百四十二話　見事な旗ができました！

――はて……旗とはなんのことでしたかしら？

一瞬、首を傾げるミーアであったが……次の瞬間、背筋に寒気が走った。

――まっ、まさか、あの、例の肖像画のことなんじゃ……？

そうなのだ、ミーアが考えごとをしていたため、ほとんど聞き流していたことだが……。訪ねてきたシャルガールから旗の話をされた時、ミーアはそれを聞き流し、あろうことか、反射的に、いいね！　などと笑みを見せてしまっていたのだ。

その結実が、今、目の前に広げられようとしていた。

シャルガールは、嬉々として、旗の図柄を見せようと、くるくる、巻かれた旗を開こうとする。

――ま、まま、まずいですわ。あれは、わたくしが自らを神格化させようと思われても仕方ない代物。それに、下手をするとラフィーナさままで、敵に回してしまうかも……っ！

ミーアは慌てて、シャルガールに手を伸ばす。

「ちょっ、まっ！」

なんとか止めようと、声をかける。が……。

「じゃじゃーんっ！」

遅かった……。シャルガールは意気込んで、その旗を広げた。

「お……おお……」

ミーアは、思わず呻いた。

それは、実に……実に見事な旗だった。

描かれた絵の迫力はそのままに、その周りにド派手な装飾が施されていた。旗の棒の先端には、輝く月と魚のエンブレム。肖像画の周りには、キラキラ、キラキラ、輝く金糸。

――ああ、シャルガールさんってば、絵を描くだけじゃなくって、

刺繍的なこともいけるのですわね。
なぁんて、現実逃避気味に感心していると……。
「ミーアさん……あれは……ナニ？」
ミーアを現実に呼び戻す、涼やかな声……。
ぎくしゃく、っと振り返れば……ああ、ラフィーナが温度のない笑みを浮かべていた。その笑みは、どこか、前時間軸のラフィーナの姿を彷彿とさせて……ミーアは久しぶりに、背筋が凍り付くのを感じる。
――あ、ああ、まずい、まずいですわ。ラフィーナさまの内に眠る獅子が、目覚めようとしておりますわ！　なな、なんとか、誤魔化さねば……。
ミーアは、考え……考え……考えて……っ！
――あっ、駄目ですわ……なぁんにも、思い浮かびませんわ！
ミーアが諦めて、サラサラ―ッと砂になって崩れ落ちかけた……
まさにその時だった！
「おお、すごいです！　ミーアお祖母さま、まるで、貧しい王子と黄金の竜の一場面みたいですね！」
ベルの能天気な言葉……瞬間っ！　ミーアの脳裏に、閃きが駆け巡る。
ミーアは改めて、その肖像画……否、旗を見る。
キラキラと、体の周りに黄金を散らす旅装のミーアと、赤い、鱗のような鎧を身にまとうラフィーナ……。なるほど、それは、自らの黄金を周りに施し、貧しくなった王子と人の姿をとったドラゴンに見えなくもなくって……。
ルードヴィッヒから聞かされている作戦、橋の上での一騎打ち。
軍事訓練という擬装……女神肖像画とド派手な旗……っ！
すべてのピースを繋ぐもの……。それは『貧しい王子と黄金の竜』
「ええ、実は、そうなんですの……」
ミーアは厳かな顔で、頷いた。
それから、とりあえず、話が面倒になるから、とシャルガールを

労いつつ、いったん退出させてから、ミーアは考えを整理する。そうして……。
「ルシーナ司教には、謝らねばと思っておりましたの。誤解させてしまったことを、ね。あ、もちろん、ラフィーナさまにも、ですけど……」
深々と頭を下げてから、ミーアは言った。
「実は、例の女神肖像画……手違いがございましたけれど……わたくしが依頼して描かせたものでしたの」
そう言ってから、ミーアは素早くラフィーナに目配せする。っと、ラフィーナは、いろいろ言いたげな顔をしていたが……。
「そう……。そういうこと、なのね」
そういうことにするのね……という感じで頷いた。
「……どういうこと、でしょうか？」
対して、ルシーナ司教の顔には隠しようのない困惑があった。ミーアは、ちょっぴりバツの悪そうな顔をして……あえて、そう見えるような表情を作って、言った！
「あの肖像画は、いわば試し。シャルガールさんの腕前のほどを確認するためのものでしたの。そして、その目的は……」
意味深に言葉を切って、一瞬、間を作ってからミーアは続ける。
「物語の挿絵を描いていただくため、ですわ」
「物語の、挿絵……？」
ルシーナ司教が目を瞬かせる。
「そう。わたくしのお抱え小説家、エリス・リトシュタインの処女作『貧しい王子と黄金の竜』の挿絵ですわ」
そうして、ミーアは、話し始める。
民の間に蔓延しつつある不安感、それを払拭するために、物語と新しい小麦の調理法を広めようとしていること……。
「ただ、イメージが難しいお話なので、誰でも描けるというものではない。ということで、絵描きを探しておりましたの。そして、それっぽい絵を描いていただいたのですけど、手違いで、商人の方の

手に渡ってしまい、勝手に女神などと、恐れ多い題名までつけられてしまいましたの。蛇の関与や、民草の暴走などではない。あくまでも、わたくしのミスによって生み出されたものですわ」
「では、ミーアさん、その旗は？」
ラフィーナが怪訝そうな顔で聞いてくる。それに頷いてから、
「これは、その小説のイメージを描いていただいたもの。ラフィーナさまと、わたくしを作中人物のモデルにしてもらいましたの。肖像画家として描き慣れたラフィーナさまと、その友である、わたくしを……」
友である、を強調する。
お友だちだから、大目に見てね、許してね……という意味を言外に込めて……。
「お友だち……そう。確かに、ミーアさんに読ませてもらったあの物語の中の王子と竜とは、とても良いお友だちだった……あの関係を表すのに、私とミーアさんを、ね……ふふ、そう」
眉間に皺を寄せ、しかつめらしい顔で腕組みするラフィーナ……であったが、口元が微妙にムズムズしている。こう、笑うのを堪えるような、ちょっぴり複雑な顔だった。
これでラフィーナのほうは大丈夫かも、と思っていると……。
「でも、どうして旗に……？」
ラフィーナから、追加で質問。それに対して、ミーアは再び真面目くさった顔で頷いた。
「それは、もちろん振るためですわ。振って人々の目を惹くため、ですわ」
そうして、ミーアは、ルシーナ司教のほうに目を向ける。
「ところで、ルシーナ司教、確認いたしますわ。ミラナダ王国、並びにポッタッキアーリ候に与えていた大義名分、それを取り下げていただくということで、問題ないかしら？」
その問いに、ルシーナ司教は、ハッとして……それから、深々と頭を下げる。

「そう。ならば……すべての問題を一気に解決するとしましょうか」
格好よくニヤリと微笑み、ミーアは巨大な旗を抱え……ようとして、フラついた。
微妙に締まらない、いつものミーアであった。

第百四十三話　物語のような戦いを～英雄の曲芸～

天高くより降り注ぐ日の光……その光が、橋の上で、キラリキラリと反射していた。
弾ける光をまとい、二人の騎士が剣を交わす。
一合、二合、三合、四合……。
刃が交わるたび、硬質な金属の音が響く。
それは、あまりにも美しい剣舞。
示しを合わせたように披露される剣技は、鍛練を積んだ者であれば、誰しもが憧れる技の極致。
変幻自在に変化するギミマフィアスの剣筋に対し、ディオン・アライアは、ただ己が鍛え上げた型で、愚直に迎え撃つ。
一合、二合、三合、四合……。
鍔迫り合いが生じたところで、ギミマフィアスが声を上げる。
「ところで、実際のところ、どうするつもりなのでしょうな？」
「どうする……とは？」
「いやなに、ふと思ったまでのこと。貴公は、戦いを長引かせて時間を稼ごうとしている。吾輩もまぁ、その思惑に乗っているわけだが……」
両者、息を合わせて引く。肩に剣を担いだギミマフィアスは、挑発するように笑みを浮かべ、
「もし、これが、実際の戦いであれば……貴公はこのまま、吾輩の剣技の前になすすべもなく敗れ去るばかりなのか、とね」
「ははは、なるほど。自分の剣技を披露したのだから、僕のほうの技も見てみたい、と、そういうことかな？」
ディオンはニヤリ、と口元に好戦的な笑みを浮かべる。
「貴公の腕前も見せておかなければ、彼らへの脅しにならなかろう、と思ったまでのこと」

そう言い放ち、ギミマフィアスは長剣を振りかぶる。再びの第一の構え！　対するディオンは……、
「なるほど、ならば……一つ、お見せしようか」
だらりと両手持ちにした剣を下げる。どこか力の抜けたその姿を見て、ギミマフィアスは眉をひそめたが、構わず、そのまま走り出す。
ディオンの眼前、振り下ろされるは剛剣。その刃の根元を狙い、ディオンは剣を振り上げる。
激突！
直後、ギミマフィアスの長剣の刃が断ち切られ、空中へ弾き飛ばされた。
キィンッと……響いた音は美しく、三つの音が重なり、実に重層的なものとなっていた。
……三つ？　そう、三つ……三つなのだ！
ほぼ同時に鳴った音は美しく絡み合い、さながら楽器のような音を辺りに響かせた。
そして、その音の意味を表すように……直後、宙に舞った刃が、綺麗に三つに分かれる。
ディオン・アライア……帝国最強が使う剣技は鉄を断つ。その剣の前では、いかなる鎧も、剣も、鋼鉄の槍さえも呆気なく断ち切られる。
それは、凡百の剣士とは一線を画する超人技だ。
されど……、それは、あくまでも固定された鉄に限られたこと……。
では……、宙に斬り飛ばした刃をさらに断ち切る技は、はたして、なんと呼ばれるべきか……。
その鬼神のごとき剣技を見て、ギミマフィアスは目を細めた。
「……恐ろしい剣技であるな。そして……うらやましくもある」
「正直、こういった場面で披露する技ではないんだけどね……なにせ、これは、戦場での殺し合いの技なんで、ね」

そう、それは、相手の武器を破壊する絶技。
相手が巧みに剣を使うのであれば、その剣を壊してしまえばいい。相手が鎧や盾で防御を固めるなら、それごと斬ってしまえばいい。
そのような発想のもとに生まれた武器破壊の絶技……されど、ギミマフィアスはそれを鼻で笑った。
「どこが実践向きなものか。それでは、ただの曲芸にすぎぬであろうに……」
宙を舞った刃が、キラキラと残光の中に消えていく。
そう、刃を断ったならば、その隙に敵に一撃くれてやればいい。宙に舞った刃を二度、三度と斬るのは、明らかにやり過ぎで……意味のない技術。
ディオンは、ギミマフィアスの言葉に肩をすくめた。
「だろうね。ただ勝つなら、これはやり過ぎの技だ。ただ……正直、うちの姫さんは、ただ敵を殺して勝つ以上のことをお求めになるものでね」
かつて、アベルに問いかけたこと。どのような剣を求めるのか……ということ。
その問いは、ディオンが自身に課した問いでもあった。
そして、これこそが、一つの答え。
「鉄をやすやすと斬ってみせれば、相手の戦意ごと刈り取れるのではないか……と、そう思ったまでのことさ」
戦場において、剣が折れることは、しばしば起きること……それでは意味がない。
相手の目に、しっかりと見せつける。
自身が鋼鉄を断ち切ったのだ、ということ……。お前たちの持つ武器も、防具も、なんの意味もなさぬ強者が目の前にいるのだと……わからせてやること。
なんのことはない。ディオンの剣術は、ルードヴィッヒらが立てた作戦と変わらぬものだった。
そして……、それは、橋の上の戦いを固唾を呑んで見守る兵たち

の心を、確かに打っていた。
美しく三つに断ち切られた刃を見て、兵士たちは幻視する。
自らの体が、空中で美しく三枚に下ろされる様を……。
兵士たちは一様に、彼らの上官のほうに目をやっていた。
「まさか、あれに突撃しろ……とは言わないですよね？　まさか、ね……？」
言葉にはせずとも、その視線からは、そんな声が聞こえてくるようだった。

……ところで、橋を挟んだ反対側……住民たちが避難した場所においても、その橋の戦いは注目の的となっていた。
そして、その場の雰囲気は……北側とは対照的であった。
「うおおおお！　なんだ、あれ、すげー！」
「いいぞー、そこだー、やれ！」
「じいさんも負けるなー！」
古来、戦（いくさ）は、ある種の娯楽であった。
多くの者が血を流し、命を燃やす愚劣なる娯楽であった。
されど、橋の上の決闘には血生臭さも、殺し合いを見物する後ろめたさもない。
なぜなら、それは、軍事訓練だからだ。あくまでも、観戦する住民たちは訓練の一環として避難しただけだった。
正直、必要な訓練とはいえ、数日間も商売を停止させられるのだから、迷惑な話であったわけで……。このぐらいの楽しみはあっても良いだろうと、成り行きを見物していた彼らは、生涯で出逢ったことのない達人の剣舞を目の当たりにすることになった。
片方の、金属鎧の男の剣を持ち替えての戦いに目を奪われ、それを難なく受ける、もう一人の男の剣技に酔いしれる。
それゆえ、ディオン・アライアの絶技が披露された時にも、彼らは一切恐れてはいなかった。ただ、そのあまりに人間離れした技に、大きな歓声を上げるのみ。

ギミマフィアスの言葉は正しかった。
それは、人々を熱狂させる曲芸だった。
そして、それは、ミーアの言葉を正しく体現する技だった。
それは物語のような戦い、その一場面に相応しい、英雄の技だった。

そして、人々の歓声を受けるようにして、橋の近くの建物に、巨大な旗が翻った。
「両者そこまで！」
よく響く声と共に、旗の根元、二人の少女の姿が現れた。

第百四十四話　二人の聖女

橋を見下ろす位置にある、他より少し高い三階建ての建物。その屋上を目ざして、ミーアは階段を上っていた。後ろに付き従うのはルードヴィッヒとラフィーナ、加えて、シャルガールと皇女専属近衛兵が二人である。

ちなみに、シャルガールと近衛兵には、旗を振る役が与えられている。

旗は、女性の力では、いささか重い物であったが……。

「私が作ったものですので！　私が振らずして、誰が振りますか！　堂々と、派手に振ってみせましょう！」

なぁんて言うシャルガールの熱意に負けたミーアであった。

ちなみに、シャルガールはラフィーナの顔を見つけて、

「あっ、お久しぶりです。ラフィーナさま」

声をかけられたラフィーナがヒクッと頬を引きつらせていた辺り……シャルガールがかつて描いた肖像画がラフィーナに与えた衝撃の大きさを物語っていた。

「ご機嫌よう、シャルガールさん。ええと……相変わらず、お元気そうでよかったわ」

それでも、なんとか微笑むラフィーナに、シャルガールは続ける。

「ところで、ラフィーナさま、この旗の絵はどうですか？　私が描いたのですが……」

その問いを前に、ラフィーナは……実になんとも、複雑な顔をしていた。

正直……かなり恥ずかしい派手さだ。やたらと目立つ鎧を着た、勇ましい自分の姿など、羞恥心を刺激するものでしかないわけで……。

しかし、それではダメな絵かと言われると、そうも言い切れなく

って。
なにせ、ラフィーナは、ちょっぴり嬉しかったのだ……。ミーアのお抱え作家が書いた、貧しい王子と黄金の竜は、以前、読んだことがあった。とても良い物語であったし、なにより、そこに描かれた友情は素晴らしかった。
「あの王子と竜の友情物語、そのモデルに私とミーアさんを……ふふ」
なぁんて考えただけで、ついつい、ニマニマしてしまいそうになってしまって……。
正直、肖像画のモデルにされてこんなに嬉しいのは、以前、ミーアと一緒にモデルを務めて以来だったので……。ということで、ラフィーナは、シャルガールの質問に対して……キリリッとしかつめらしい顔をして……。
「ええ……悪くない、と思うわ。うん、あの物語の挿絵だとしたら……ちょっぴり派手なところはあるけど、うん、でも、まぁ……」
「なるほど、ということは、ラフィーナさまは、こういった派手な鎧を着た凛々しいお姿が好みと……」
「え？　や、ちがっ……」
っと、ちょっぴり慌てるラフィーナだったが……残念ながら、その言葉はシャルガールには届かないのだった。

「おお、やっておりますわね……」
屋上に着いたところで、ミーアは橋のほうに目を向ける。
そこで激しく戦う二人を見て……。
――派手にやっている……というか……こ、こわぁ……。いや、なんですの、あれ……刃が空中で粉々になってますし……いや、どうなってますの、あれ……こっわ！
なぁんて、思わず心の中でつぶやいて……。
――あれは早く止めないと、やってる本人たちは無傷でも、周囲に被害が広がりそうですわね……。まぁ、そのぐらいやらないと、

軍の足止めにはならなかったのかもしれませんけど……。
そうして、ミーアはシャルガールのほうに目を向けた。
「さて……それでは、やりますわよ。準備はよろしいかしら？」
その声に、シャルガールと、近衛兵二名が頷く。さらに、ルードヴィッヒ、そしてラフィーナが小さく頷いたのを確認して……ミーアは厳かに言った。
「では、旗を掲げなさい」
それを合図に、シャルガールと近衛兵が旗のポールを高々と持ち上げる。風を受け、勢いよく広がっていく旗。誇らしげに描かれたミーアとラフィーナの、ちょっぴりファンタジーな姿があたりに晒されたところで……。
「両者それまで！」
ルードヴィッヒの声が響いた。
それを聞き、橋の上での戦いが止まる。ディオンとギミマフィアス、双方が大きく間合いを開け、こちらに視線を向けてくる。
――ふむ、以前のレムノ王国のことを思い出しますわね。
そんなことを思うミーアの目の前で、
「剣を納めよ！　聖女ラフィーナさま、そして、帝国皇女ミーアさまの御前である！」
その声に応えるようにして、橋の上の二人が剣を鞘に納めた。
それを確認してから、ミーアはラフィーナの顔を見た。
「では、ラフィーナさま、事前に打ち合わせておいたとおりに……」
「ええ、わかっているわ。お互いに頑張りましょう」
そうして二人は頷きあうと、階段を降りていく。
ラフィーナは、ミラナダ王国、ポッタッキアーリ候連合軍のほうへ。そして、ミーアは、橋の南側、住民が避難しているほうへと。
その姿を建物の屋上、シャルガールが、どこか感動した様子でジッと見つめていた。
……後日、港湾都市セントバレーヌの市庁舎に一枚の絵が寄贈さ

れる。
タイトルは『二人の聖女』。
凛々しい顔で背を預け合う二人の聖女。互いに向かうべき戦場へと赴く様を描いたその絵は、多くの者を魅了し、また、多くの者に生きる希望を与える、大変に力強い絵であった。
そしてそれは、高名な挿絵画家、シャルガールの代表作の一つとして、歴史に記録されていくことになるのであった。

第百四十五話　娯楽に閉じ込めて……

旗を背に、二人の聖女は、互いの無事を祈り合ってから歩き出した。

片や、正真正銘の聖女、ラフィーナ・オルカ・ヴェールガは、ルシーナ司教を引き連れて、ミラナダ王国、並びにポッタッキアーリ候の軍のほうに。

片や、帝国のご当地聖女にして、大陸の食の聖女――略して『大食聖女』と一部で称される、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、避難した民のほうへ。

互いに語るべき言葉を携えて、二人の聖女は進んでいく。

途中でアンヌと合流したミーアは、ルードヴィッヒとアンヌを従えて、橋の南側、集まって見学していた住民たちのところまで歩いて行った。

「みなさん、ご機嫌よう。わたくしは、ティアムーン帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ」

避難を指揮していた皇女専属近衛隊の者たちは、ミーアの声が聞こえる位置まで、住民たちを誘導し、その後、音もなくミーアを守る位置へと移動する。さりげなくも完璧な動きに、注意をひかれる住民たちはおらず……。

優秀な護衛に守られながらも、ミーアは話を続ける。

「大規模な避難訓練、お疲れさまでした。みなさまのご協力で、一人の怪我人もなく終えることができましたわ」

と、そこで、ミーアは一度言葉を切る。人々の顔をゆっくり眺めてから小さく笑みを浮かべた。

「ふふふ、不思議そうな顔をしている方がおりますわね。なぜ、この場面で帝国の皇女が出てきたのか、と、そんなところかしら？」

くすくす、と笑ってから、ミーアは続ける。

「そう不思議がることもありませんわ。実は、今回の訓練には、我が帝国の近衛隊も協力させていただいておりましたの。ここにいる彼らはわたくしの専属近衛隊ですし、あの橋の上で戦っていた片方の騎士は、我が国の誇る最強の騎士なんですの。ちなみに、侵攻軍役としては、ミラナダ王国軍、並びにレムノ王国侯爵、ポッタッキアーリ候の軍が協力してくださっておりますわ。もちろん、ルシーナ司教と商人組合の要請を受けて、ですけど……」

きっちり予定通りであったことを強調。あくまでも、セントバレーヌに対する侵略行為などなかった、という体で続ける。

「そして、今回、訓練にご協力くださったみなさまを労うため、と言いますか、少しでもお楽しみいただこうかと思いまして、訓練の仕上げに、橋の上での決闘を演出させていただきましたけれど……、みなさま、お楽しみいただけましたかしら？」

ミーアの声に、ところどころから、興奮した様子の歓声が上がった。

見栄えの良い鎧を着て戦うディオンと全身金属鎧のギミマフィアス。二人の達人の戦いは、すさまじい迫力と洗練された美しさを秘めた、素晴らしいものであった。

それが、訓練の終わりに披露された娯楽的な剣舞であったといわれれば、納得してしまうのも無理のないところだろう。

ミーアは、住民たちの顔が明るいのを確認してから、深々と頷いて、

「ところで、みなさまのお手元に避難計画書が行き渡っていると思いますけれど、その裏にある宣伝を読んでいただけましたかしら？」

唐突な問い。人々の顔に、一瞬、疑問の色が浮かんだ。

「実は、わたくしのお抱え作家が、この度、本を出版することになりましたの。タイトルは『貧しい王子と黄金の竜』ですわ。あの旗、見えますかしら？」

ミーアは、先ほどまで自分たちがいた建物を指さす。そこでは誇らしげに、ミーアとラフィーナの描かれた旗がはためいている。

「あの旗に描かれているのが、イメージ図ですわ。自らの持つ財宝を貧しい人々に与えたがゆえに貧しくなってしまった王子と、黄金の竜との冒険物語で……」

ミーアは、そこで、滔々と語り出す。

貧しい王子と黄金の竜に対する熱い熱い絶賛レビュー！　まったくもって隠す(レクト)気のない(ダイ)マーケティングを展開してから、ミーアは小さく咳払い。

「そして、実は先ほどの橋の上の決戦は、その小説の一場面を再現したものでしたの」

もちろん、橋の上の一騎打ちは、侵攻軍に対する脅し、敵の戦意をくじくためのものだった。

軍事訓練としてみれば、いささか意味不明のアレを誤魔化すため、協力した住人へのご褒美＝娯楽の提供という理屈をつけてはみたものの、それでもいささか弱いかもしれない。

だからこそ、ミーアはさらに納得の行きやすい答えを与えようとしていた。すなわち、

「商人組合が企画した訓練に乗っかる形で、自分のお抱え作家の小説を宣伝しようとした」という答えを……

「ということで、ぜひ、みなさんもお読みいただいて、面白ければご友人や、取引に行った先の国の人にも、教えてあげて欲しいんですの」

ここ、セントバレーヌは商人の町。ゆえに、そこに住む住民たちも、商売に絡めた答えを与えてもらったほうが受け入れやすいだろう、と、ミーアは考えていた。

さらに……。

――わたくしのほうも利を求めてやったこと、としておいたほうが牽制になるのではないかしら……黄金の像の建造に対して……。

そうなのだ、ミーアは、きちんと覚えていた。

このセントバレーヌにやって来た理由……。自身を神格化する危険な空気のことを。

――もしも、戦争をわたくしが止めたなどという評判が広がってしまえば、商人組合がヤバイことを言い出すかもしれませんわ。このセントバレーヌの平和を祈念して、わたくしの黄金像を立てるとか、なんとか……ものすごぉく言いそうですわ！

正確に、将来起こり得る危機を予測する、帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンである！　そして、そうはさせじと、先手を打ったのだ。

と、そこまで考えたうえで、ミーアはふと思う。

――しかし……わたくしのワガママで、推し本を勧めようとしているだけ、と考えられると、反感を持たれて逆に売れなくなってしまうかもしれませんわね。ふむ……。ここは、少し……。

っと、ミーアは、少しだけ生真面目な表情を作り……。

「わたくしはこう思いますの。人には楽しみが必要である、人の心には喜びが必要である、人が生きるためには娯楽が不可欠である……と」

厳かに、朗々と、ミーアは語り出した。

第百四十六話　帝国の叡智は娯楽にも通ず

偉大なる帝国の叡智、女帝ミーア・ルーナ・ティアムーンは娯楽、すなわち、エンターテイメントに対して造詣の深い人物として知られている。

後の大作家、エリス・リトシュタインをお抱えにしたことはもちろん、その他の小説や詩劇、演劇にも精通し、乗馬レースやダンスにも詳しいこと、さらには、料理に独自のアレンジを加え、食べる者の目を楽しませようとする遊び心などからも、そのことはうかがえる。

では、彼女はなぜ、娯楽を好んだのか？

一時的な享楽にふけるためか？

否、そうではない。そうではないことは、セントバレーヌで民に語りかけた言葉が証明していた。

帝国の叡智ミーアは、娯楽を、民を治めるために必要な要素、あるいは、人が希望を持って生きるために重要な要素として考えていたと、私は指摘したいのだ。

とある歴史学者の論文より

「人が生きるためには娯楽が不可欠である……と」

ミーアは、厳かに民に語りかけ始める。

思い出すのは、地下牢での出来事だった。

アンヌの話してくれた、貧しい王子と黄金の竜。あの物語によって、ミーアは確かに生きる気力を得ていた。救われていたのだ。

あの時間がなければ、確かに、自分は生きてはいなかっただろう、とミーアは思っている。いかにミーアが地下牢の石の数で暇つぶし

が出来る精神力を持っていると言っても、まさか、それだけでは、心は徐々に死んでいったことだろう。
「人と動物とは違いますわ。ただ生きるのに必要な食べ物を口の中に放り込んでおけば生きていける……そんなことは決してありえない、とわたくしは思いますわ。なるほど、確かに食べ物がなければ死んでしまう。味気ない食べ物でもないよりはマシ。そうかもしれませんわ。けれど、貧しいのだから、買えないのだから、最低限の味気ない食事と水だけで満足しろ、というのは違うとわたくしは思いますわ。食事は体を満たし、心を喜ばせるものでなければいけないと、わたくしは思いますの」
……ちなみに、この「食事は体を満たし、心を喜ばせるものでなければいけない」という言葉と、帝国の叡智が料理において見せるちょっとした遊び心とを繋げて考える歴史研究家もいる。その者の書いた『馬形サンドイッチに見る女帝ミーアの深いおもてなしの心』という論文には、そのことが詳しく書かれているのだが。まぁ、それはさておき。
「事は食事に限りませんわ。人には楽しみが必要なのです。それがなぜかと説明することは難しいですけれど、ラフィーナさまのお言葉をお借りするならば、人は、そのように造られているから、と言ったところかしら？」
ここ、セントバレーヌにおいて、聖女ラフィーナの言葉には、格別の権威がある。なので、先ほど、ルシーナ司教とのやり取りで、ラフィーナが話していた言い回しを若干パクリつつ、ミーアは続ける。
「逆に、わたくしは、このことを一つの、良い戒めであると考えておりますわ。民が、人が……家畜とは違うということを、心に刻み、忘れないようにするための、ね」
そうして、ミーアは静かに人々のほうに視線を向けて……。
「人は、心が折れてしまえば簡単に倒れて、動けなくなってしまうもの。自暴自棄になり、生きることを諦めて……あるいは、それを

怒りに変えて剣を持って暴挙に出たり……。逆に、ちょっとしたことに希望を見出し、満身創痍から立ち上がることだってできる。今日読んだ物語がちょっとだけ面白かったから……続きにはもっと面白い物語が待っているかもしれないから……そう、想像するだけで生きる気力を得られることがあるのですわ」

それから、ミーアは、グッと拳を握りしめた。

「例の本、貧しい王子と黄金の竜は、そういう意味でとても楽しい物語ですわ。読むと元気が湧いてくる、生きる気力が湧き上がる、わたくしが大好きな物語ですわ。ですから……みなさんにも、ぜひ、お友だちなどにお勧めしていただきたいんですの！」

清々しくも朗らかに、高らかに、ダイレクトマーケティングをしてから、ミーアは再度、生真面目な声で……。

「人には心があって、人は自分で思っている以上に心に支配されている。その人の心が見た光景がその人の世界だとすら言えてしまうかもしれない。ならば……その人の世界が明るくなるように、良い物語がたくさん出回ることは、良いことであるとわたくしは考えておりますわ」

決して、自分のワガママのみでやってるんじゃないんだぞ！　ということを強調して、言葉を閉じるのであった。

さて……ミーアの言葉は、通常の住民たちにとっては、彼女の狙い通りに受け取られた。

「なるほど、姫のお気に入りの作家の小説の宣伝か……」

「軍事訓練という派手な場で、しかも、あんな一騎打ちに旗まで作って宣伝するとは、この姫さまは、なかなかやり手だぞ」

「確かに、良い娯楽に触れると心が明るくなるし、良い面もあるよな」

そんな感じで、感心する者たちがいた。

一方で、今回の騒動の真相を知る商人たちの中には、ハッとした顔をする者たちがいた。

ある者たちは、自らの商会で雇っている使用人のことを思い出した。荷運びの男たちを……誰にでもできる単純な仕事を任せている者たちを、ただ、重たいものを運ぶしか能のない者たち、と自分たちは見下し、ある種の家畜のように扱ってはいなかったか……と。

あるいは、ある者たちは、より具体的に過去の出来事を思い出していた。

古びた孤児院の扱いについて、雨風を避けられる建物と、毎日、食べる物を与えておけばよい……と、ごく潰しの弱き者たちなど、生かしてもらっているだけで十分で、気遣う必要もなければ、文句を言う資格すら彼らにはないのだと……そんな風に思ってはいなかっただろうか……それがもとで、ルシーナ司教と意見が対立したことはなかったか……と。

そして、彼らは思い至る。

なぜ、この局面でミーアがこのようなことを言っているのか……。

――ミーア姫殿下は、諭そうとされているのか？　人をどのように扱うのかを……。そして、おそらくは、ルシーナ司教と対話して、彼との付き合い方を教えてくれているのではあるまいか……。

……ミーアの思いとは裏腹に、商人組合に属する商人たちの間では、ますますミーアへの信頼が高まってしまっていたのだが……。

そんなこと、知る由もないミーアであった。

第百四十七話　獅子なる聖女は騎士を従えて

話は少しだけ遡る。
建物を降りたところで、ラフィーナはミーアのほうを見た。
「それでは、ラフィーナさま、お気をつけて。ああ、ディオンさんを護衛として連れて行くと安心で……」
「ミーアさん……」
ミーアの言葉を遮って、ラフィーナは口を開けた。
「ん？　なにかございましたの？　ラフィーナさま」
きょとん、と首を傾げるミーアに、ラフィーナは深々と頭を下げる。
「ごめんなさい、ミーアさん。我がヴェールガ公国のことで、ミーアさんに、泥をかぶってもらって……」
「ふふふ、なにを言っておりますの、ラフィーナさま。セントバレーヌの重要性はよく存じ上げておりますわ。ここが平和でなければ、大陸の食料流通にも支障をきたしますし」
っと、軽く笑って首を振ったミーアだったが、それからふと真面目な顔になる。
「しかし……先ほどルシーナ司教に言ったことは、ラフィーナさまにも、ぜひお願いしたいことですわ」
「え……？」
「わたくしのために祈り、そして、わたくしがもしも間違ったことをしていたら、すぐに言っていただきたいんですの」
その謙虚に過ぎる言葉に、ラフィーナは苦笑いを浮かべる。
「ミーアさんが間違うことなんてないと思うのだけど……」
軽い口調でそう言うと、ミーアは大きく首を振り、
「いいえ……そんなことはありませんわ。わたくしだって、間違いを犯すはあると思いますわ！」

やけに気合の入った声で言った。
「だからこそ、お友だちのラフィーナさまにお願いしたいんですの。わたくしは、忠臣の諫言だけでなく、気の置けないお友だちの助言も求めたいと思っておりますの。お友だちにしか見えないことだってあると思いますし……」
その言葉に、ラフィーナは思わず、こう……グッと来た。なにしろ、聖女としてではなく、お友だちとしての助言を求められることなど、ほとんどなかったので……
「ええ……わかったわ。ミーアさん。でも……それならばミーアさんにもお願いしたいわ。私のために祈り、わたしが間違えた時には、指摘して欲しいの。ルシーナ司教にしたのと同じように……」
聖女にではなく、お友だちへの助言を、ぜひ受けてみたいラフィーナである！
互いを思い、アドバイスを送り合ってこそ友なのではないか？
とラフィーナは思っているのだ。まぁ、それは経験譚ではなく、あくまでも想像でしかないのだが……。
「わたくしのほうこそ、なにも指摘することなどないような気がしますけれど……」
と笑うミーアであったが……ふと、なにかを思いついたように……。
「しかし……獅子みが溢れ出ていると指摘してあげられる機会は貴重かも……」
なにやら、つぶやいてから、小さく咳払い。
「でも、そうですわね……。自分では見えないことというのは、誰にでもあること……。ならば、わたくしも気付いた時は、友として遠慮なく言うことにしますわ」
なにか、シシミ？　とか、よくわからない言葉が聞こえてきた気がしたが、そんなものは、「友として遠慮なく」というパワーワードですっかり洗い流されてしまう。
湧き上がる嬉しさを胸に秘めたまま、ラフィーナはそっと目を閉

じた。
「気を付けてね、ミーアさん。上手くいくようにお祈りしているわ」
「ええ。ラフィーナさまも……」
そうして、二人はそれぞれの決戦の地に向かう。
避難した住民たちへの語りかけるため、ミーアは南に。
ミラナダ王国とポッタッキアーリ侯軍に語りかけるため、ラフィーナは北に。
荒くれ者の軍に語りかけるにもかかわらず、ラフィーナのそばに近衛兵の姿はない。そのお供はただ一人、事件の中心にいた人物、ルシーナ司教のみだった。
そんな蛮勇の聖女に、橋の上に佇んでいた二人の騎士が歩み寄る。
「聖女ラフィーナさま、橋の北側は両軍の集う場所。いささか危険がありますゆえ、この老骨が護衛を務めることをお許しいただきたい」
金属鎧の騎士が恭しく礼をとる。
「ありがとうございます。ギミマフィアス殿。それではよろしくお願いします」
それから、ラフィーナはディオンのほうに目を向ける。っと、ディオンは小さく肩をすくめて、
「まぁ、正直、レムノの剣聖殿だけでも十分かと思いますがね。一応、姫さんのご友人に何かあったら一大事なんで、僕もいきますよ」
「ふふふ、お友だちの大切な家臣に護衛していただけるとは光栄ね」
朗らかに笑みを浮かべるラフィーナは、上機嫌だった！
なんと言うか、ミーアとの友情が、ちょっぴり深まったように感じていたのだ。今ならば、あの、上のほうではためいている旗を見上げても……見上げて……も？
「……ふぅ」
いささか、精神力を削られてから、ラフィーナは二人に目を向けた。
「それでは、お二人にお願いいたします。私だけでなく、ルシーナ

司教もしっかりと護衛してください。解決に必要だから、というだけでなく、ミーアさんの求める決着をつけるために……」
帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンの影響は、ディオン・アライアだけではなく、聖女ラフィーナにも及んでいた。
ミーアの描いた最善の決着の形、彼女と出会うまでは決して思いもよらなかったその終わり方を、好ましく思う自分に、少しだけ戸惑いつつも、ラフィーナは顔を上げた。
「それでは、参りましょう」
かくて、やる気にみなぎるラフィーナは、最強戦力を従えて橋を渡る。
その身にまとう雰囲気は、旗に描かれた、ちょっぴり迫力に溢れた姿と重なるところがあったりなかったりするのだが……。まったく気づかないラフィーナであった。

第百四十八話　変えられた者たち

二人の最強騎士を従えて、橋を渡ってくる聖女ラフィーナ。
その姿を前に、兵たちは浮足立っていた。
そこは橋の北方の大通りだった。
一騎打ちが終わった直後、一斉に雪崩を打って攻められるよう、そこに兵たちが詰めていた。仮に一騎打ちで負けたとて、大人しく引く道理もなし。ポッタッキアーリ候も、ミラナダ王国軍も、すぐに数を頼りに攻め込めるよう準備していたわけだが……。
――物量でなんとかしなければならないのは確かだろうが、一桁少なかろうに。
レムノ王国第二王子、ゲインは半ば呆れた目で、その醜態を眺めていた。
――遠距離に弓兵を並べて射殺すならば、まだ可能性はありそうだが……敵軍の弓兵のほうが腕が良さそうだ。指揮官を射殺されて混乱したところを、あの男に突撃されればひとたまりもないな。
唯一、可能性があるのは、ギミマフィアスが健在なうちに、どこか別の場所から渡河して要所を押さえてしまうことだが……。
――手勢が足りんな。もともと戦うつもりなく来たのだから仕方ないが……。戦う前から勝つのが戦略と聞くが、戦略家を気取るには知恵が不足しているようだ。
舌打ちしたくなるのを堪えつつ、なお彼がこの場に留まっているのは、いくつかの理由があった。その内の一つが、今まさに、目の前にやってこようとしていた。
――聖女ラフィーナ……そして、あの女……いや、帝国の叡智がどのように事を治めるつもりなのかは興味がある。
姉であるヴァレンティナの企みを破ったこと、今回のポッタッキアーリ候らの企みにしても、ここまで台無しにしたその手腕……そ

の鮮やかさに、ゲインは瞠目していた。
元より、慧馬をこの地に向かわせた時から、ポッタッキアーリ候の思惑を阻止しようとは考えていたが、まさかそこに帝国の叡智の介入があるなどとは予想もしていなかった。
――だが、これも好機か……あの女がどのように解決するつもりなのか、じっくり観察してやろう。
っと、そこまで考えたところで、ゲインは不意におかしくなった。
――そんなことを考えるとは、我ながらずいぶんと変えられたものだな。
彼は、その変化の始まりを、弟アベルに負けた日だと考えていた。
一度も負けたことがなかった弟に負けた日……弟の実力も、第一の構えの真価も見誤っていたことに彼は気が付いた。
けれど、考えてみればその前……初めて帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンと出会った時から、すでに、それは始まっていたのかもしれなかった。
――女になど大した価値はない。それがレムノ王国の常識だ。だが、その女によって、アベルは俺に勝ち、革命派は解体された。なにより、俺は一度として、姉上に勝てたことがなかったではないか……。
ゲイン・レムノは、それゆえ、あの日以来、考えるようになった。
そのものの真の価値は、やはり自らの目で見定めなければならない。
これから、聖女ラフィーナがなにを言うのか……そして、帝国の叡智が出す、この騒動の落としどころはどのようなものなのか……。半ば興味本位で、彼は成り行きを見守っていた。

やがて、ラフィーナが、軍の前まで歩いてきた。
ギミマフィアスが、一瞬、こちらに視線を向けたので、ゲインは静かに頷いてみせる。
ヴェールガの聖女の護衛は、周辺国の者たちの務め。それに、下

手にポッタッキアーリ候の兵に任せでもして、なにかあれば一大事だ。
っと、ラフィーナを出迎えるようにして、ポッタッキアーリ候、並びにミラナダ王国軍の司令官、ビアウデット伯爵が進み出る。
「これは、ラフィーナさま、ご機嫌麗しゅう」
揉み手でもしかねないほど、腰を低くして、ポッタッキアーリ候が口を開いた。
元より、今回の騒動は、ヴェールガ本国に知られず、秘密裏かつ迅速に進めなければならなかったこと。こうして、聖女ラフィーナが出張って来た以上、計画を進めるわけにはいかない。
なれば、できるだけ印象を良くしておこう、ということなのだろうが……その姿は卑屈そのものだった。
「ご機嫌よう、ポッタッキアーリ候。確か……以前、回遊聖餐でこの地を訪れて以来だったかしら……」
ラフィーナは、涼やかな笑みをポッタッキアーリ候に向け、さらに、ビアウデット伯爵のほうに顔を向ける。
「ラフィーナさま、セントノエル学園では我が子が、大変、お世話になりまして……」
「ビアウデット伯……ご子息というと……ああ」
ラフィーナは何事か思い出したのか、小さく笑みを浮かべて、
「セントノエルでの学びが、ご子息の身になっていれば良いのですけど……」
つぶやくように言った。それから、さらに、ラフィーナは視線を転じ……。
「お久しぶりね、ゲイン・レムノ王子殿下……」
ゲインのほうにも目を向けてきた。
「ご機嫌よう、セントノエル学園を卒業されて以来かしら？」
「ご機嫌麗しゅう、ラフィーナさま。ええ、確かに……卒業式以来となりましょうか」
同じセントノエルにて、学んでいた者同士ではあったが、ゲイン

はラフィーナとまともに会話をしたことはなかった。
ついでに言うと、あまり好意的でもなかった。
入学して以来、ラフィーナは、一貫してゲインに冷たい目を向けていた。価値のないものを見るかのような冷たい目を……。
もっとも、ゲインのほうも同様に、価値のないものと見做していたから、お相子ではあったが……。
女になど、価値はない。あの姉……あのヴァレンティナさえ価値がないとするなら、それ以下の女どもにはなおのこと、価値などあろうはずもない。そう思っていたからだ。
けれど……。
――少々、雰囲気が変わったか……？
ゲインは、ラフィーナを眺めながら、腹の中で思う。以前までの透き通った硬質な……それでいて脆さもありそうな感じが、少しだけ変わったように思えた。
――まぁ、変わったのは俺も同じことか……。
小さく首を振ってから、
「立ち話もなんでしょう。建物を一つ接収してあるので、そちらで対談ということでいかがか？　兵の糧食なれど、茶の一杯も用意するが……」
ゲインの問いかけに、ラフィーナは小さく頷き、
「そうですね。それでは、再会を祝して、軽くお茶会でもいたしましょう」
涼やかな笑みを浮かべた。

第百四十九話　ミーアさん、そういうことなのね？

ラフィーナが案内されたのは、どうやら、宿屋のようだった。
店の者たちがすべて退避した建物内は、ガランとしているものの、特に荒らされた様子もなかった。
食堂のテーブルの上には簡易ながら、お茶の用意がされていた。
ラフィーナは特に緊張した様子もなく、テーブルにつく。っと、緊張した様子のポッタッキアーリ候、それにビアウデット伯を両側に従えて、ラフィーナの正面にゲイン王子が腰を下ろした。
「さて、先ほども言ったが、私は今回の件の主導者というわけではない。なので、詳しいことはポッタッキアーリ候に任せて、ここで見守らせてもらおうか」
そんなことを言うゲインに、ラフィーナは小さく頷いた。
――どうやら、ゲイン王子は都合よく味方をする気はない、というつもりみたいね。
ポッタッキアーリ候のやり方には反対ではあるが、さりとて、なんの道理もなく軍を引くこともできない。そもそも、今回の軍事行動は、ルシーナ司教の要請によるものなのだから、彼のスタンスは理解できた。
ラフィーナはゆっくりと紅茶のカップを持ち上げる。その香りを楽しむように、一口。
「とても美味しいわ。よい紅茶を用意してくださったのね」
「お、おお、おわかりいただけますか。これは、海外の……」
などと、いそいそと茶葉の解説を始めるポッタッキアーリ候。
「し、しかし、戦場でお茶とは、なかなかに風流ですね……」
さらに、ビアウデット伯が雰囲気を和らげようと軽口を叩くが……。
「戦場……？　あら……ここは、戦場なのでしょうか？」

ラフィーナは、ちょっぴり驚いたような顔で首を傾げた。
「てっきり、軍事訓練の訓練場所、と思っていたのですけれど……」
「は……？　ぐ、軍事訓練？」
理解できない様子のポッタッキアーリ侯。対して、ラフィーナは静かに、ルシーナ司教へと視線を移した。ルシーナ司教は……深々と頭を下げて、
「この度の騒動について、まず、謝罪したい。私が軽挙妄動により、多くの者たちにご迷惑をかけてしまったこと……誠に申し訳なかった」
その言葉により、ようやく状況が呑み込めたのだろう。いや、あるいは、ラフィーナが登場した時、ルシーナ司教と共にやってきた時に、すでに半ばわかっていたことだっただろうか。自分たちの計画がすでに、破綻しているということが……。
驚きに言葉を失っている者たちを尻目に、最初に口を開いたのは、ゲインだった。
「なるほど、軍事訓練……か。落としどころとしては妥当だろうな……」
腕組みしつつ、ゲインが頷く。
「そう。今回のことは、軍事訓練、並びに、帝国皇女ミーア・ルーナ・ティアムーン姫殿下が近々、出版なさろうとしているお抱え作家の小説の宣伝にしてしまおう……と私たちは考えているわ」
「宣伝……ああ。なるほど、それでは、あの勇ましい聖女さまが描かれた旗もその一環ということですか？」
ポッタッキアーリ侯の不用意な一言に……。
「勇ましい……」
一瞬、ヒクッと頬を引きつらせるラフィーナであったが、すぐに咳払いして……。
「ええ、まぁ……。ともかく、今回の軍の動きが正式な軍事行動であると知られては、民の間に不安が募ってしまうことでしょう……。ただでさえ、食料への不安が広まりつつある時ですから、できるだ

け事を荒立てないようにするのが良いだろう、と、ミーアさんと私は考えています」
　ラフィーナの言葉に、ゲインは一つ頷いて……。
「だが、我が国は、そちらにおられるルシーナ司教の要請によって来たのだ。この騒動の原因は、そちらの司教殿にある……とも言えるはずだ。その責任はどうする？」
「そうですね……」
　ラフィーナは、静かに横に座ったルシーナ司教に目をやった。彼は、表情を動かすことなく、静かに座っていた。
「私の責任については、すべてラフィーナさまにお任せしております。が、重ねて、私の誤解と短慮から、ポッタッキアーリ候、並びにミラナダ王国にご迷惑をおかけしたこと、大変申し訳なく思います。罪を謝し、悔い改めたいと思っております」
「なるほど。我らの神は、過ちを悔い改めれば、罪を赦される。だが、神は赦しても、軍を動かした責任は、どうするつもりか？」
　そう言って、ゲインはラフィーナに視線を向ける。
　対するラフィーナは、あくまでも涼やかな笑みを浮かべたまま、
「そうですね。確かに、軍を動かすのもただではないでしょう。それでは、お詫びに望みを言っていただけるかしら？　できる限りのものは用意いたしましょう」
　その言葉に、ポッタッキアーリ候は、嬉しそうに腰を浮かせた。
「おおっ！　そっ、それでは、ぜひ、私めに、このセントバレーヌの権益の……」
「馬鹿が……」
　声を躍らせるポッタッキアーリ候を、舌打ち混じりにゲインが一蹴する。
「そんなもの、軍事演習でどのように得ようというのだ？　それでは、我が国が軍を動かし、武力によってセントバレーヌの権益を脅し取ったように見えるではないか」
　ラフィーナの言葉の意図を、どうやら、ゲインは正確に把握して

いるようだった。
そう、「ルシーナ司教の正式な要請によって、商人組合の私兵団を排除すべく軍隊を派遣した」という大義名分は、すでに失われている。したがって、彼が正当に受け取ることができるのは、訓練の協力の費用と謝礼のみである。
もし、それ以上を求めたのであれば、それは、ポッタッキアーリ候が軍を動かした動機への疑いとなる。
港の権益を求めなどすれば、それを求めてセントバレーヌに侵攻したと、周辺国からは受け取られかねないのだ。
ポッタッキアーリ候もそれに気付いたのか、ハッと目を見開いた。
そう、彼らは、あくまでも私情なく、ただ司教の要請を、善意を持って受け止めて派兵した……というスタンスを取らなければならないのだ。
代わって口を開いたのは、ミラナダ王国軍司令官、ビアウデット伯だった。
「我が国に、ぜひ、小麦の輸送の優先権をいただきたい。我が国の食料状況は厳しく……もしも、セントバレーヌからの供給が少しでも滞れば、民は窮することになってしまうのです。私が率いている者たちは、兵ではなく、農民がほとんどです。彼らの行動も、ひとえに食料を求めてのこと。どうか、なにとぞ……」
ポッタッキアーリ候とは違い、彼は心の内を隠すことはしなかった。それに対し、ラフィーナはわずかばかり、驚いた様子だった。
「なるほど……それで、ミーアさんが……」
その脳裏には、今回の落としどころについて、ミーアと話し合った時の光景が浮かんでいた。

第百五十話　朗らかに、高らかに、友を讃えん

　時間は、少し遡る。　それは、旗を持って建物へと向かう途中のことだった。
「ところで、ミーアさん……ポッタッキアーリ候とミラナダ王国のことについてだけど……」
　これから別れて行動しなければならなかったので、ある程度、コンセンサスを得ておく必要があったため、二人は綿密に打ち合わせていたのだが……。
「どのように、彼らを遇すれば良いかしら……？」
　穏やかな声でそう問われ……ミーアは思わず震える！
　――遇する……、なるほど。さすがはラフィーナさまですわ。きっかけは、ルシーナ司教であったにしろ、両軍がなにか良からぬことを考えてやってきたのは、ほぼ確実。となれば、それに相応しい報いを……罰を与えてやろうというわけですわね……！
　ミーアは、ふんむ、っとわずかに考えてから……。
「そうですわね……ポッタッキアーリ候のほうに関してはなんとも言えませんけれど、確か、ミラナダ王国軍は、平民からの徴兵がほとんどということではなかったかしら？」
　ミーアの問いかけに、付き添っていたルードヴィッヒが頷いて応えた。
「農民も多いようですが……」
「農民が多い……っ！」
　腕組みして、考えることしばし……。ミーアは厳かな口調で言った。
「それならば、こういうのはどうかしら……？　寒さに強い小麦の栽培に協力していただく、というのは……」
「え……？」

パチクリ、と目を瞬かせるラフィーナに、ミーアは意味深に笑った。
「寒さに強い小麦……」
「ミーア二号ですね……」
ルードヴィッヒがその微妙な名前を口にする。
正直、ミーア的にはその名前、どうなんだ？　と思わなくもないのだが……。
――ふむ、しかし、わたくしの名前を冠した小麦が広まっていれば、民衆はわたくしにも功績のあることだと考えて、断頭台にかけようとは思わないかもしれませんし……。
などと、容認しているのであった。
「その……ミーア二号？　ですけど、ラーニャさんを通して、近隣国に広めているところですわ。しかし、なかなか、手が足りておりませんの。各国ともに、保守的なようで、進んで協力しようというところが、なかなか出てこないんですの」
料理長の新しい料理法をセットにしたとしても、それでも、食べ慣れたパンが作りづらいというのは一つのネックではある。
「ですから、ミラナダ王国に協力していただくのですわ」
ミラナダ王国は立地的に、セントバレーヌの近郊にある国だ。近くに海があり、そこから食料を運んでこられるとするなら、もしかすると、寒さに強い小麦は、そこまで必要としていないかもしれない。
されど……、
――不作の時期に、ミラナダ王国でしっかり小麦が取れてさえいれば、セントバレーヌからの食料を別の地域に回すこともできるかもしれませんし……。最低限、自国のことは自国で面倒を見てもらえれば、その分、こちらへの負担は減るはずですわ。
ミーアは、楽がしたいのだ。
ミーアは、楽が、ものすごくしたいのだ！
食料が不足してる、などという知らせを聞いて、あくせくと手配

をするのは面倒だし、間に合わなかったらどうしようと気をもむのは、心の平安によろしくない。
そう、ミーアは誰かの危機を助けたいなどとは思わない。目指すべきは危機が起こらないことであって、それでも防ぎきれなかったものを救っていく体制を築くことなのだ。
転がって勢いがついた巨岩を受け止めるのは大変なので、まず、巨岩が落ち始めないようにし、そこからこぼれた小さな石を確実に止められるようにする。これこそがベストなのだ。
――だからこそ、この近辺の国も、セントバレーヌの輸送路におごらずに、いざという時に備えて、寒さに強い小麦を育てさせておくほうが良いですわ。罰として、ミーア二号を育ててもらうことには、意味がありますわ。
そう強く確信するミーアであった。
「ミラナダ王国に、寒さに強い小麦を渡す……？」
一方で、ラフィーナは首を傾げていた。のだが……。

ミラナダ王国の要求に、ラフィーナは戦慄すら覚えていた。
「まさか、ミーアさん……そこまで」
思わずつぶやいてしまうほどに、彼女は動揺していた。
なぜ、寒さに強い小麦の種を分け与えることが、軍事訓練に協力したミラナダ王国にとっての報酬となり得るのか……？
それは、ミラナダ王国軍が、食料供給の不安から動いたためだ。
その心理を正確に読み取り、そのうえで「他国より自国を優先しろ」という、一見すると利己的な彼らの要求を、そのまま受け入れるのではなく、かといって拒絶するのでもなく……変える。
ラフィーナのまぶたの裏に、セントノエルでの情景が浮かんでくる。
そうだ、いつだって、ミーアはそうだった。
相手を排除するのでもなく、甘やかすのでもなく……。
――相手を、善き者へと変えようとする。そう働きかける……。

それが私のお友だち、ミーアさんの在り方……。あの頃からずっと変わらない、ミーアさんの本質……。

ラフィーナは、そっと目を閉じて、口を開いた。

「どんな時でもミラナダ王国に、優先的に食料を送り、ミラナダ王国の民に安心を与えること……それは残念ながら聞くことのできない要求です。けれど、その代わりに、我が友ミーアより言付かっていることがあります」

朗らかに、高らかに、その友ミーアを讃えるかのように、ラフィーナは言った。

「我が友、ミーアさんは、今回の小麦の不作、そして、飢饉が起こる危険を早い段階から予測していました。そして、いち早く、海外からの小麦の輸送路を確保し、自国内でも備蓄を進めていました」

友の功績を讃える、ラフィーナの顔は、ものすごぉく、輝いていた。

「そして、それだけではなく、これから先、より大きな寒冷期が訪れた時のために、寒さに強い小麦の発見にも尽力していたのです」

「寒さに強い小麦……？」

「そう。今年のように……昨年のように、夏の日光の力が弱い年にも例年と変わらずに収穫が期待できる小麦です。料理法が少し変わっていますが、すでに確立されています」

「そっ、それを我が国に与えてくださると……？」

ラフィーナは厳かな、聖女スマイルで頷いて、

「ええ。ミーアさんは、その小麦を金儲けのためでも、ご自分の名誉のためでもなく、ただ、民が餓えないために使いたいと思っているの。ご自分の帝国だけではないわ。この大陸の、すべての民が餓えないように、ただの一人も、そのことで苦しまなくっても良いように……。だから、セントノエルで宣言を出し、各国に語りかけた。だから、国同士の相互援助の仕組みを作ろうとしている。ペルージャン農業国やフォークロード商会、それに、他ならぬ大商人、シャローク・コーンローグ殿の協力を得て、ね」

ミラナダの国民であれば、誰しも知る大人物……シャローク・コーンローグの名前を聞き、ビアウデット伯は息を呑んだ様子だった。
「そのうえで、改めて言うわ。ビアウデット伯。私は……私たちは、ミラナダ王国に優先権を与えることはできない。けれど、あなたがたが自分たちの安心のために努力する協力はすることができる。それと、もちろんだけど、その小麦が実るのは来年以降のことになるから、それまでの間、食料が不足しないよう緊密に連絡もとりましょう」
ミーアが示したもの……それは、実のところ寒さに強い小麦という「物」ではなく、自分たちが信頼に足る存在であるということだった。このような考え方をする自分たちをどうか信じてほしいと……。あなたたちが窮した時には必ず助けると……。そして、あなたたちも自分たちと共に歩んでほしいと……。
そんなメッセージであった。
万感の想いを胸に秘めながら、ラフィーナは真っ直ぐにビアウデット伯のほうを見て……。
「これが我が友ミーアと、私が出した結論よ。いかがかしら？」
それを聞いたビアウデット伯は、深々と頭を下げるのだった。

第百五十一話　類稀なる夜の風景

ルシーナ司教、並びに、ビアウデット伯が納得してしまったことで、ポッタッキアーリ候は追い詰められた。
本当は、港の権益に少しでも食い込みたい。けれど、それでは、自分がその目的のために軍を動かしたことがまるわかり。ここは、軍の糧食を得るぐらいで押さえるべき……だが……。
理性と欲望に揺れるポッタッキアーリ候であったが、
「残念ながらここまでだ。軍の遠征にかかった費用、それ以上を求めれば我がレムノ王国の悪評に繋がりかねん。それを見過ごすわけにはいかんな」
そうゲインに諭され、渋々ながらも兵を引くことを了承。
かくして、侵攻軍の撤退は決まった……のだが……。

「おお、さすがはラフィーナさまですわ」
住民のほうを片づけて、ミーアはラフィーナと合流した。
すでに、話はついたのか、ラフィーナは敵軍の司令官、ポッタッキアーリ候とビアウデット伯、さらにはゲイン・レムノを従えていた。
まったくもって涼やかな笑みを崩さなかったラフィーナだったが、ミーアの姿を見ると、ちょっぴり嬉しそうな顔で、小さく手を振った。
――ふぅむ……これから、兵士たちに声をかけるとのことでしたけれど……、これ、わたくしがいる必要ってあるかしら？
小さく首を傾げるミーアである。
正直なところ、ミーアとしては、別にこっちはラフィーナさまだけで片付けてくれてもいいんだけどなぁ！　と思ってはいたのだが、ラフィーナの強い希望とあっては仕方ないので……。

そうして、兵士たちによく声が届くよう、近くの建物の屋上へ。
「みな、聞け！　ヴェールガ公爵令嬢、ラフィーナさまから、みなに話がある」
整列した兵士たちに向かい、ビアウデット伯が声を上げる。
それで、ざわついていたミラナダ王国兵が背筋を伸ばした。ちなみに、ポッタッキアーリ候の私兵団のほうは、すでに、傾聴の姿勢を取っていた。軍の規律の差が出ているようだった。
さて、みなの視線を受けて、ラフィーナが静かに話し出した。
「ミラナダ王国軍のみなさん、それに、ポッタッキアーリ侯爵家の私兵団のみなさん、ご機嫌よう。私はラフィーナ・オルカ・ヴェールガ。ヴェールガ公爵家の娘です」
小さく頭を下げてから、ちょこん、とスカートを持ち上げるラフィーナ。
「この度は、セントバレーヌへの遠征、お疲れさまでした」
労いの言葉を口にする、その声はどこまでも澄み渡り……兵士たちは聞き入るように、口をつぐんでいた。
ラフィーナは、一人一人に微笑みかけながら、これまでの経緯を伝えていく。
ルシーナ司教の要請が誤解によるものであったこと、両軍は、すでに戦う必要は無いこと。
特に、戦う必要がない、と聞かされて、兵士たちは見るからに安堵した様子だった。
なにしろ、ラフィーナとミーアの後ろには、最恐の騎士が連れ添っている。
自分たちの側にもレムノの剣聖がいるとはいえ……、あの橋の上の戦いを見る限り、どちらにも近づきたいとは思わない。
「戦は、無事に回避されました。帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーン姫殿下によって……。無為に命が失われずに済んだことを神に感謝を。そして、この争いの回避に尽力してくださったミーアさん、それに、我がヴェールガの求めに応じて、この地に集った勇

敢なるみなさまがたにも感謝をささげます」
そう言って、ラフィーナは深々と頭を下げてから……ちら、っとミーアのほうに目を向けた。
――これは……わたくしにも、なにかしら声をかけろということかしら……？
正直なところ、ミーアとしては特に撤退を決めてもらえれば、それで十分ではあったのだが……。
――いえ、しかし……ここはわたくしがバランスを取っておく必要があるのかしら……。
ミーアは、ふと思い至る。
ミラナダ王国には罰として、新種の小麦を育てることを命じてはどうか……とラフィーナに提案したわけだし、たぶんポッタッキアーリ候のほうも、相応の罰を受けているはず……。
――戦に来た兵たちが、不満に思っている可能性は高いですわ。それに、まったく暴れられずに鬱憤が溜まっている方もいるはずですわ。ならば……。
ラフィーナに促されるように前に出たミーアは、スカートをちょこんと持ち上げてから、
「みなさま、ご機嫌よう。わたくしは、ティアムーン帝国皇女、ミーア・ルーナ・ティアムーンですわ。以後お見知りおきを」
華やかな笑みを浮かべた。それから、辺りをゆっくり見回して……。
「こうして、みなさまと言葉を交わす機会が得られて嬉しいですわ。剣を向け合うのでもなく、恨みを持ち合うのではなく……こうして穏やかに言葉を交わすことができる、なんと幸福なことかしら……」
強調すべきは、戦いにならなくて良かったね！　という点である。
そうして、ミーアは、そっと自らのかたわらに立つ、ディオン・アライアに目を向ける。三枚に下ろされなくって良かったね……と、視線に乗せ、無言のうちに語りかける、っと、兵士たちの中の何人かが、ゴクリ、と喉を鳴らした。

「それに、考えてみると、これは、なかなかに珍しい事態ではないかしら？」
さらに、ミーアは強調する。
これって……結構、希少な経験じゃない？　っと。
「だって、そうではありませんこと？　今、みなさまは、勝者でも敗者でもない。戦をしに来たというのに、殺すことも殺されることもなかった。戦をしなかった者として、侵攻しようとした土地に立っている。無血開城もなく、撤退もなく、そこに立っている。恐怖も憎悪もなく、セントバレーヌの民の前に立つ機会を得ている。なかなか珍しい事態と言えますわ」
みなさんは、今、とても珍しくて、貴重な経験をしてますよ……、とミーアは言う。そして……。
「ならば、今宵を得難い夜として、楽しく過ごして帰るのがよろしいですわ。セントバレーヌの防衛訓練に協力した、善意の者たちとして、宴に参加してから、故郷に帰られるのがよろしいのではないかしら」
多少、罰を受けたろうけど、せいぜい貴重な経験を楽しんでから帰ったらいいよ、と言いたいミーアである。徒労感はあるかもしれないけど、良い経験ができたんだから、それで満足して帰りなさいよ、と言いたいのであった。
そうして、如才なく、商人組合に宴の準備を手配しておく。美味い物さえ食わせておけば、大抵のことは片付くと信じるミーアなのであった。

さて、その夜のこと……。
兵たちは、ミーアの言葉通り、軍事訓練に協力した者たちとして歓迎を受けた。
ディオンとギミマフィアスの決闘にテンションが上がっていた住民たちにより、宴は大いに盛り上がった。
途中から、ディオン、ギミマフィアスに加え、アベルやシオン、

キースウッドにゲインさえ交えて、模擬剣を使った試合が行われた。飛び入りで各軍のお調子者の兵士たちも参加して、それはそれは盛大に執り行われたのだった。

それは、実に楽しい夜だった。

戦をしなかったからこそ、なんの禍根もなく、互いの肩を抱き合い、酒を酌み交わす、出兵の結末としては、類稀なる夜だった。

……かくて、ミーアは戦を、平和な娯楽に閉じこめた。

すべての真相を知る、商人たちの目に、その奇蹟の夜がどのように映ったのか……。

蒔かれた種がどのような実りをつけるのか、知る由もないミーアであった。

第百五十一話　類稀なる夜の風景（後書き）

来週は、一話を除いてお遊び回にする予定です。
その後は第九部になる……はずです。

第百五十二話　歴史書に載らない一幕（前書き）

今回は真面目回です。

第百五十二話　歴史書に載らない一幕

さて、軍を撤退させた日のこと。
ゲイン・レムノはセントバレーヌ内のポッタッキアーリ候の館で、酒杯を傾けていた。
「聞いたか？　ポッタッキアーリ候。ルシーナ司教は取り立てておとがめなしだそうだ」
「なっ、なんですとっ！？」
ポッタッキアーリ侯が声を荒げた。
「馬鹿な……なぜ、そのような……」
「今回の出来事は、公に軍事訓練ということになったのだ。表立って処分しては理にかなわないとは思っていたが、こう来るとはな……」
愉快そうに笑うゲインに、ポッタッキアーリ侯は怪訝そうな顔をした。
「わからんか？　おそらく帝国の叡智は、新しく派遣される司教より、ルシーナ司教を与しやすしと考えたのだろう。今回のことでルシーナ司教は、ミーア姫や聖女ラフィーナに弱みができたのだ。ならば、彼をセントバレーヌ派遣司教という重役につけておいたほうが、連中には有利となるだろう」
「なっ……なるほど」
ちなみに、この時のゲインの予想は当たっていた。すなわち……。
「ルシーナ司教を更迭し、本国に送還？　それは、決してなりませんわ」
ミーアの言葉に、ラフィーナだけではなく、当のルシーナ司教も驚愕の表情を浮かべていた。
「しかし、私は……」

なにか言おうとするルシーナ司教を片手で制し、ミーアは首を振った。
「ルシーナ司教、償い方にもいろいろございますわ。あなたは、今回の失敗によって大切なことを知った。ならば、それを生かし、商人組合と折り合いをつけていっていただく、それこそが、あなたの償い方ではないかしら？」
言いつつ、ミーアは思っていた。
――ルシーナ司教を更迭して、次に来る司教が、もっと話のわかる方である保証は、どこにもありませんわ！
そう、最悪、ルシーナ司教の後に、よりお堅い司教が来てしまう可能性だってあるのだ。現に、今回だって、ルシーナ司教に協力してくれそうな者たちは、ヴェールガ本国にいたのだ。もし、そんな人が司教として派遣されてきたら、すべては振り出しに戻ってしまうではないか！
そんなことになっては一大事、とミーアはルシーナ司教の引き留めにやっきになる。
「ルシーナ司教、確かに商人組合の中には、利益のみを追求し、人の道を踏み外しそうな商人というのは出てくるかもしれませんわ。されど、彼らが道を逸れないように、教え導くのがあなたの償いですわ」
ミーアは、優しい笑みを浮かべてルシーナ司教に言うのだった。

さて、そんなやり取りは知らぬものの、ゲインは納得顔で頷いた。
「帝国の叡智、なかなかどうして……実に参考になる……」
「は、はぁ……」
微妙な返事をするポッタッキアーリ候に、ゲインは、一転、鋭い視線を向ける。
「時に、だ。ポッタッキアーリ候……実はつい最近、このような噂を耳にしたのだが……」
そうして彼は話し出す。彼がポッタッキアーリ候を訪ねた、真の

目的を。すなわち……。
「我が姉、ヴァレンティナ・レムノの暗殺に、貴公が関わっているという噂だ」
聞いた途端、ポッタッキアーリ候の顔色が変わる。
「なっ、そ、そのような根も葉もないことをいったい誰が……」
声を震わせる侯爵に、ゲインはつまらなそうに鼻を鳴らした。
「ところが、困ったことに、根も葉もあることでな……。まぁ、希望があれば証拠を揃えてやってもいいが……言い逃れができると思っているのなら、俺をナメすぎだとだけ言っておこう」
断定するようなゲインの物言いに、ポッタッキアーリ候は、口をパクパクさせていたが……やがて、ガックリと肩を落とした。
「ごっ、誤解しないでもらいたい。あれは、あくまでも国王陛下の御意によるもの。なにかと小うるさい第一王女殿下を黙らせるために少し脅しつけてやれと……それがあのような……そう。あれは、あくまでも事故……」
「……さえずるな」
ゲインの口からこぼれ落ちたのは、低く、重い一言だった。それを受け、侯爵はビクンっと震えあがる。
「さえずるな、侯爵。お前の声は気に障る」
不快げにゲインは吐き捨てる。助けを求めるように、ポッタッキアーリは、ゲインの背後、無言で立つギミマフィアスのほうに目を向けた。
「そう案ずるな。ポッタッキアーリ候。お前は、我が国の南部貴族の重鎮。そう簡単に排除はできん……」
その言葉に、ポッタッキアーリ候が安堵し、表情を緩めた……次の瞬間！
「などということは、まったくない」
言葉と同時、ゲインは剣を抜き放った。刃は一呼吸の間に、ポッタッキアーリ候の首に迫り、そして……。
「ひっ、ひぃっ！」

ポッタッキアーリ候の悲鳴が響いた。
「誤解がないように言っておく。お前の首を落とすことなど容易い。俺はレムノの次期国王だ。お前程度の命、どうとでもなることを肝に銘じておけ」
言ってから、彼は剣を鞘に納める。
「しかし……俺も王になる身だ。かの帝国の叡智や聖女ラフィーナのやり方から学ぶというのも一興だろうと思ってな」
「はへ……？　あ……と言いますと……？」
ぽっかーんっと口を開けるポッタッキアーリ候に、ゲインはニヤリと、実にあくどい笑みを浮かべて。
「言わないとわからんか？　今回の失態、それに、姉上への狼藉、あまつさえ、暗殺を失敗したということ……お前には、数多、他人には教えられぬ秘密があろう」
ゲインは、どっかりと椅子に腰を下ろしてから、
「俺の協力者となれ」
短く、要求を突きつける。
「はぁ？　きょ、協力者……でございますか？」
素っ頓狂な声を上げるポッタッキアーリ候に、ゲインは静かに微笑んで……。
「そうだ。俺が見たところ、我がレムノ王国の先は、あまり明るくなさそうなんでな……できるだけ早い段階で、父上には退位してもらおうと考えている。そして……お前には、その協力をしてもらおうと考えている」
「なっ、そ、それは……」
思わず腰を浮かせかけるポッタッキアーリ候に、ゲインはニヤリと悪い笑みを浮かべた。
「落ち着け、ポッタッキアーリ候。なにも、力づくでどうこうしようというわけではない。国を割る内乱などゾッとしないしな」
「いや、しかし……」
「もし協力してもらえるならば、お前のもろもろのことを、不問に

付そうではないか。姉の暗殺に絡んだことを、罪に問うことはしないでおこう」
俺はな……と心の中で付け足してから、ゲインは再び、ポッタッキアーリ候を見つめた。
「どうだろう、侯爵。俺の誘いを受けるか、それとも、父に忠義をささげ続けるか……もっとも、後者を選んだ場合は、今回の失態は、すべて父上に話すがな」
実に悪人らしい笑顔を浮かべたまま、ゲインは言った。
「困ったな。お前が忠義をささげる王は、お前を軽視するだろう。もしかすると、罰するかもしれない。いや、困った、困った」
「なっ……ぁ」
「と、いうわけだ。残念ながら、お前に選択の余地はない」
首筋に剣を突きつけられた時と同じような表情を浮かべるポッタッキアーリ候に、ゲインは肩をすくめてみせて。
「さて、それでは、そうだな……手始めに……姉の暗殺に関わった貴族を、すべて教えてもらおうか……。知っているのだろう？　その陰謀に加担した者たちのことを」
その言葉に、ポッタッキアーリ候は、ガックリと肩を落とした。

さて、ポッタッキアーリ候を去らせて後、ゲインは深々とため息を吐いた。
「よろしかったのですか？　このような形で……」
「そうだな。俺らしくはないかもしれんが……」
ゲインはそこで肩をすくめた。
「悔しいが……アベルの掴まえたあの女は……本当にロクでもないぞ」
「は……？」
「考えれば考えるほど……あのやり口は完璧だ。完全な機能停止をしている領主であれば、排除しても問題はなかろうが……曲がりなりにもポッタッキアーリ候は宰相と並ぶレムノ王国南部貴族の代表

格だ。しかも、セントバレーヌに多くの商船を持つ大貴族でもある。排除すれば混乱が国全体に影響を及ぼす」
「そのために、姉君の仇を討つことを諦める、と……？」
その言葉に、ゲインはスゥっと目を細めた。
「誤解をしているならば、訂正してやる。ギミマフィアス。俺はあの女の……姉上の仇を取りたいわけでもなければ、無念を晴らしたいわけでもない。俺は姉上を超える。姉上のできなかったことを成し遂げて、徹底的な屈辱を叩きつけてやる」
それから、彼は酒杯を煽ってから……。
「ところで、だ……。ギミマフィアス、今日のことを、お前は父上に教えるか？」
鋭い視線を、ギミマフィアスに向ける。
「レムノの剣聖、お前はどう見る？　俺か父上か……どちらにつく？」
「そうですな……」
ギミマフィアスは、静かに自らの髭を撫でる。まるで器の大きさを測るかのように、ゲインを見つめてから……その顔に苦笑いが浮かんだ。
「ふふ、本当であれば、国王陛下、と迷うことなく答えねばならぬところなれど……今日はいささか、血がたぎっておりましてな……。橋の上での、あの男との戦いが、どうやら、老骨に活を入れたと見えまして……」
それから、彼は遠くに目を向ける。
「レムノ王国に新しき風が吹くというのならば……見たことのない景色を、最前線で見られるというのであれば……それもまた一興」
「そうか……」
老兵の答えに、ゲインはつまらなそうに、ふん、と鼻を鳴らす。
っと、その時だった。
「失礼いたします。ゲイン殿下、お客人が訪ねてきているのですが……」

「なに？　客だと……？」
眉をひそめるゲインに、報せを持ってきた兵は背筋を伸ばした。
「はっ！　騎馬王国の娘で、なんでも、約束の菓子をもらいうけにきた、と……」
「ああ……そうだった……」
小さくつぶやき、一瞬、しまった、という顔をしたゲインだったが……直後、ギミマフィアスの表情を見て、舌打ちする。
「他国の姫に世話になったのだ。約束通り礼をせねば沽券にかかわるだろうな……」
「さようでございますな。ここは、協力者殿のポッタッキアーリ候にでも頼るのはいかがでしょうか？」
「なるほど。確かに、奴ならば珍しい海外の菓子にも詳しいか……よし、そうしよう」

レムノ王国の国王、ゲイン・レムノが、陰謀劇の協力者ポッタッキアーリ候に最初に願ったのが、海外の珍しいお菓子だったというのは、後の世に知られることのない歴史の裏に隠された秘話であった。

第百五十三話　思いついちゃった……！

かくして、セントバレーヌで起こりかけた騒乱は、上陸した台風ミーア二号と獅子なる聖女ラフィーナ・オルカ・ヴェールガによって一掃されてしまった。

さて、ミラナダ王国軍とポッタッキアーリ候の私兵団を帰還させた後、ミーアたちは祝勝会を開くことになった。

「ラフィーナさま、大急ぎで来ていただきましたし、心ばかりですけど、お礼をしたいですわね……ふむ、これは、みんなでお料理を作ってお祝いするのがよろしいのではないかしら！」

などとつぶやくミーアに、シュシュシュッと音もなく近づいてきたのは、キースウッドだった。

「あー、ミーア姫殿下、なにを悪だく……いえ、なにか、その、深遠なことでもお考えで……？」

「いいえ、ただ、回遊聖餐を切り上げてきてくださったラフィーナさまに、代わりに美味しいものをご馳走したいな、と思いまして」

「ああ、それは素晴らしいことですね。セントバレーヌには良い料理屋がたくさんありますから、どこか紹介してもらえば……」

っというキースウッドの言葉を、ミーアは片手で遮り……。

「そうではありませんわ。やはり、お礼の気持ちというものは、自分自身の手で表現しなくてはなりませんわ。それがおもてなしの心というものですわ」

帝国の叡智が、おもてなしに一家言ある人物であることは、有名な話である。

「いや、まぁ、それは、間違ってないかもしれませんが……」

「もっとも、ラフィーナさまは、一緒に作りたいとおっしゃるかもしれませんわね。それなら、それで構いませんわ。ぜひ、楽しいひと時を過ごしていただきたいんですの」

ラフィーナが一番、喜ぶ形でのもてなしを……と。ミーアの、それはそれは殊勝な言葉に感動したのか、キースウッドは目頭を押さえていた。
「ええと……ちなみに、ラフィーナさまは……その、メイドを連れておいでで……？　具体的には、モニカ嬢とか……」
「はて、見ておりませんけれど……。慧馬さんに急ぎで運んでもらった、ということを考えると、誰も連れずにいらしたのではないかしら……。申し訳ないことをいたしましたわ」
危険を顧みず、身の回りの不自由をも厭わずに駆け付けてくれたラフィーナに、ミーアは、実のところ非常に感動していたのだ。そんなミーアの感動に触発されたのか、キースウッドもまた、溢れる涙を堪えるかのように、天を仰いだ。
「ということで、ここは、みなで海産物のお料理会を開こうかと……」
「ミーア姫殿下……」
っと、その時だった。後ろから、声をかけて来る者がいた。
「あら、レベッカさん、なにかご用かしら……？」
ルシーナ伯爵夫人、レベッカは深々と頭を下げて……。
「この度は、夫のことで、みなさまに大変なご苦労をおかけしました。こんなことしかできないのは心苦しいのですけど、ぜひとも、お料理の準備は私たち、家の者にお任せいただきたく思っています。海の材料は、慣れていないと料理するのが難しいものもありますし……」
「まぁ、そうなんですのね。ちなみに、どんなものが……」
「そうですね。例えば、焼き加減を上手くすると、鱗までサックリ美味しく食べられるお魚があります。ただ、失敗すると鱗が硬くてとても食べられません。ほかにも、毒の処理が難しいけれど、とても淡泊で美味しいお魚とか……」
「ほほう……なるほど。毒があるのでは、難しいかもしれませんわね……ふむ……」

「ミーア師匠―、いろいろ片付いたのであればー、ぜひ、市場に出てー、私の研究成果も見ていただきたいんですけどー」
そこに、オウラニアがやって来た。
「あら、オウラニアさん……」
小さく首を傾げるミーアに、オウラニアは、ぷくーっと頬を膨らませ、
「あら、じゃありませんー。もしかして、ミーア師匠―、私のこと忘れてたんじゃないですかー？」
「ふふ、まさか、そんなわけありませんわ。お願いしておいた共同プロジェクトに使えそうな魚介類を調べておいてくださったんですのね」「
「そうですー。クロエさんに協力してもらってー、ぜんっぜん知らないような食べ物も見つけておいたんですよー」
そうして胸を張るオウラニアに、ミーアは、おお、っと声を上げる。
「それは楽しみですわね。ふむ、市場……、わたくしたちでお料理の準備をしなくっても良いならば市場に出る余裕もございますけれど……」
ミーアは、腕組みして考える。
「せっかく、ラフィーナさまへの感謝の気持ちを伝えるのであれば、普通にお料理を用意していただくというのも、つまらないですわね……とすると……むっ！」
っと、なにやら思いついちゃった様子のミーアに、キースウッドは、ぶるるっと体を震わせる。
「あー、ミーア姫殿下……その、なにか、とても良いことを思いついた顔をしていらっしゃいますが……そのー、できれば、なにをお考えか、お聞かせいただけると、こちらとしても心の準備が……」
「はて……心の準備……ですの？」
「ああ、いえ、その……そう。料理をみなさんでなさるということでしたら、こちらでも準備がありますので……」

その言葉に、ミーアは朗らかな笑みを浮かべた。
「ああ、いつもお手伝いいただいておりますものね。ふふ、ですが、今回はレベッカさんの仰るとおり、お料理はやめておきますわ。その代わりと言っては何ですけど……」
そう言って、ミーアはレベッカのほうを見て……。
「少し無理なお願いになってしまうかもしれないのですけど……わたくしたちが指定した食材を使ってお食事を作っていただくことって、可能かしら……？」
ミーアのお願いに、レベッカは、やや戸惑った様子だったが、小さく頷くのだった。

第百五十三話　思いついちゃった……！（後書き）

今週まで八部の予定でしたが、もうちょっと書くことがあったので、来週も八部の後始末の、少し雑多な話を書きます。

第百五十四話　ラフィーナ、決意する！

その日、ラフィーナはミーアからお誘いを受けて、セントバレーヌの市場を見て回ることになった。

「気楽なお出かけではなくて、共同プロジェクトの題材の下調べなので、申し訳ありませんけど……」

なぁんてすまなそうにするミーアであったが、ラフィーナは静かに首を振った。

全く気にならない……なにも問題ないと思った。

ほかの仲間たちと共に市場を回る……それは、とても素敵なことに思えたから。

それに、もしもこれがただの遊びであったなら、回遊聖餐を代わりに行ってくれているレアに申し訳なく思うところだったが……きちんとした仕事ならばそんな気兼ねもない。むしろ、ありがたいぐらいだった。

思う存分、市場見学を楽しめるのだ。

「両学園の共同プロジェクトに関することならば、もちろん喜んでするわ。それに、市場の見学なんて楽しそうだしね」

なぁんて、ウキウキ弾みつつ、市場へとたどり着いたラフィーナであった。

セントバレーヌの市場は、数日間の取引の停止を取り戻すかのように、活気にあふれていた。朝早く漁に出た漁師や海産物を加工した物を並べる商人たち、海外からの輸入品を並べる商人たちまで……。

明るい顔で仕事をする人々を見て、ラフィーナは静かな笑みを浮かべる。

「良かった……」

守られた平和な風景、人々の日々の営みを慈しむようにつぶやくラフィーナに、ミーアもそっと頷いて……。
「ラフィーナさまに来ていただいたおかげですわ」
すかさず言っておく。
実のところ、これはヨイショではない。きちんと功績の分散化を図っておかないと、自身の評価が大変なことになってしまう。なので、全部、ラフィーナのおかげですよぅ、っと、せっせと種を蒔いているのだ。
もっとも、それがミーアの期待したとおりの実りをつけるのかは定かではないが、まぁ、それはさておき……。
「ミーア師匠ー、こっちですよー」
っと、ミーアたちに向かって手を振るオウラニアの姿が見えた。
彼女とクロエは先行して市場で準備していたのだ。
「ああ、オウラニアさん。クロエも、早くからお疲れさまですわね」
上機嫌なミーアに、オウラニアは意気込みからか、頬を上気させていた。
「うふふー、早く来た甲斐がありましたー。珍しいお魚をたーくさん用意したんですからー」
「いろいろと考えて、体によくて保存が効くものをいくつか用意させていただきました。あ、もちろん、みなさんに喜んでもらえるように、普段は食べられないような珍しいものも用意していますから」
クロエが控えめに補足する。
「……珍しいもの」
不意に、ラフィーナが小さな声でつぶやいた。
その声からは、そこはかとなく、不安げな様子が窺えた。
「どうかなさいましたか？　ラフィーナさま」
きょとりん、っと実に無害そうな顔で首を傾げるクロエに、ラフィーナは静かに首を振って……。
「いえ、なんでもないわ。それで、ええと……？」
「ああ、それでは、早速、参りましょうかー。あちらに並べてあり

ますからー」
「確か、お見せしていただいた食材を、ルシーナ司教のところで、お料理してもらうとか聞いたけど……」
ミーアのほうを窺えば、我が意を得たりとミーアは頷く。
「ええ、なにしろ、食材は見ただけではよくわからないもの。食べて、自らの舌で味わってこそ、その真価が見えてくるというものですし……」
「物の価値は自分で確かめないと判断できない……。さすがね、ミーアさん」
なぁんて、感心した様子のラフィーナ……であったのだが……。
「それでは、最初にご紹介するのが、ワラウツボの干物ですー」
オウラニアがでーん、っと持ってきた、箱の中に入っていた生物を見て……
「え……あ……え？」
……思わず二度見する。
箱の中央、堂々と鎮座していたのは、一見すると、蛇かなにかの干物のようなものだった。
いや、仮に蛇だったとしても、まぁ、あまり食べたいとは思わないのだが、問題は、蛇よりも、こう……化物じみた見た目をしていることだった。
なんというか、口の部分に牙が突き出しているというか……頭もつるりと丸くて、それが微妙に不気味だし……。少なくとも、ラフィーナの知っている、既存の魚とは、まったくもってイメージが一致しないナニカが、そこにいたのだ。
「このワラウツボの干物は水で戻したり、このまま焼いて、パリパリ食べても、とぉっても美味しいと言われてて―」
え？　嘘でしょ、これ、食べられるの……？　どうやって……？
混乱に目をグルグルさせつつも、なんとかオウラニアの説明に集中しようとするラフィーナだったが……、ワラウツボのあまりにもインパクトのある顔に目を奪われて、話が入ってこなかった。

「ほほう、これが、セントバレーヌの珍味……。ちなみに、どんなお味なのかしら？」
興味津々に問いかけるミーアに、一瞬、ラフィーナは信じられぬ者を見た、とばかりに、目を見開いた。
「あ、あの、クロエさん、一つ……試みに問いたいのだけど……」
小さく手を挙げてから、ラフィーナは、なんとか逃げ場を探す。
「なぜ、わざわざ珍味を……？　普通の食べ物でも別に……」
別に、無理にヘンテコな食材を味わわなくてもいいんじゃないかな？　と訴えたいラフィーナである。
やんわりと苦言を呈するラフィーナに、クロエは……まるで、よくわかっていない素人さんを前にするような、ちょっぴり困った笑みを浮かべる。
――あら、私、なにか変なことを言ったかしら……？
なぁんて、錯覚にとらわれるラフィーナに、クロエは厳かな口調で答えた。
「今までに知られている魚だけでは、あまりにも視野が狭いと思います。珍しい食べ物、新しい味の開発、それこそが、研究には必要なのではないでしょうか」
そう言われ、ラフィーナは思わず唸る。
なるほど、それは正論だ……。少なくとも、ラフィーナには正論に聞こえた。
ならば、きっとクロエが愛好しているから珍味ばかり選んでいる、というのは、穿った見方というものなのだろう。たぶん……おそらく……きっと。
――で、でも、あれを食べるのは、さすがにみなさんも……。
きょろきょろ、と辺りを窺いつつも、ラフィーナはオウラニアに問いかける。
「あ……ああ、あの……本当に、アレを……食べ、るの？」
「うふふー、ちょっと美味しそうに見えませんよねー。でもでもー、とぉっても、美味しいですよー」

自信満々、胸を張って、オウラニアが請け負った。その笑みには、一切の悪意はない。
「え、え、で、でも……、でも……」
ラフィーナは再び、そのワラウツボを見て……ひくっと頬を引きつらせる。
そこへ……。
「ラフィーナさま……」
ミーアが穏やかな声で言った。優しい顔をしたお友だちを見て、ラフィーナは、一瞬、救われたような気持ちになるが……。
「食わず嫌いは良くないですわ。わたくし、以前、黄月トマトが嫌いで……そんな時、料理長が諭してくださいましたの」
っと、ミーアは自らの食わず嫌いのエピソードを披露する。
そんなミーアの後ろでは、そんなこともあったんですね……っと、アンヌが優しい笑みを浮かべている。
「そう……なのね」
ラフィーナも、お友だちの意外なエピソードに、一瞬、誤魔化されそうになるが……。
――え？　でも、黄月トマトと、あのワラウツボでは全然違わないかしら！
ふと、重大なことに気付いてしまう。
ラフィーナは、ちょっとイイハナシ程度では誤魔化されない、賢い少女なのだ。
さらに、助けを求めるように、視線を巡らせるラフィーナ。すると……、
「楽しみですね、リーナちゃん。どんな味がするんだろう？」
なぁんて、持ち前の冒険心を発揮して食べる気満々のベルと、それに追従するシュトリナが見えた。ラーニャやティオーナは恐る恐る、と言った具合で食材を見ているが……。自分から主張しようとはしていない。
リンシャはいささか顔を引きつらせているようにも見えるが……

やはり、自分から反対とは言ってくれなそうだった。
……ラフィーナの味方は、いない……っ！
――いえ、まだ……。
ラフィーナは最後の希望とばかりに、二人の王子たち……の、その隣、キースウッドに目を向ける。
前に、メイドのモニカに言われたことがあったのだ。
「いいですか、ラフィーナさま。もしも、ミーアさまにキケンな食べ物を勧められた際には、迷うことなくキースウッドさんを頼ってください。料理を自分たちで作ろう、なんて時にも、たぶん、キースウッドさんがそばにいますから……」
その言葉を胸に、ラフィーナは最後の希望を胸に、すがるような視線をキースウッドに向けて……向け……て？
「なるほど、これをルシーナ伯爵夫人が料理を……。どう料理するか興味がありますね、今後の参考のために……」
なぁんて言っていた！
そうなのだ……キースウッドは、危険か安全か、にのみ興味を持っているがゆえに……ゲテモノかどうかということへの関心は薄いのだ！
むしろ、ちょっぴり触るのが躊躇われる見た目の食材のほうが、ご令嬢たちが料理したいとか言い出さなくって良いかも！　などと思っている節すらあって……。
「うふふー、ほかにも釣り応え……じゃなくって、共同プロジェクトに良さそうな海産物がいろいろありますよー。漁師さんも言ってましたー。海は、神が与えてくださった恵みのものであるってー」
「ああ……ええ……そう、ね……」
その言葉に……ラフィーナは、なにやら、目尻を軽く指で拭ってから、祈りをささげるかのように、手を組み、目を閉じた。
「今日を生きる糧は、神が私たちに与えてくださったもの……。ならば、ええ、食わず嫌いは……よく……ないわね」
自分を説得するようにつぶやくラフィーナである。

覚悟を決めたラフィーナは、毅然と背筋を伸ばし、キリリッと表情を作ってから……。

――レベッカさんに……元の姿があまり残ってない料理法をお願いしましょう。

心の中で固く、かたーく！　決意するのであった。

第百五十五話　オウラニア、躍動する！

さて……。

様々な食材を見学してから、ミーアたちはルシーナ司教の館へ帰った。

「海の幸……これは、なかなかに研究のし甲斐がありそうですわ」

食堂で、お料理ができてくるのを今か今か、と待ち望みつつ、ミーアはウッキウキの声で言った。

「え、ええ……そうみたいね……」

ラフィーナは、ちょっぴり疲れた顔をしていた。

ワラウツボのみならず、あの場で紹介された大変に刺激的な食材の数々に、ちょっぴりクラァっとしてしまったのだ。

「あの、黒くてトゲトゲの……マロンのような見た目のものはともかく、あの大きなカタツムリみたいなのとか……本当に食べられるのかしら……。それに、あのにょろにょろしたものとか、どうやって食べるのかしら……」

オウラニアに勧められて、指先で突いてみた感触が、微妙に指に残っているようで、ラフィーナは微妙に顔色が悪い。

そうなのだ……ラフィーナはごく一般的なご令嬢の感覚を持つ、年相応の少女なのだ。海産物なら何でも喜ぶ猫でもなければ、食べ物全般に広い許容量を持つ広食の聖女でもないのだ。

「そういえば、ラフィーナさま、例の回遊聖餐の儀はいかがでしたの？」

とそこで、ミーアは、ふと思いついた、と言った様子で口を開いた。

「え？　あ……ええ。そうね……」

少し、考えるように首を傾げてから……。

「回った村では歓迎してもらえたけれど……やっぱり、食料はギリ

ギリと言った村も多かったわ」
「まぁ、ヴェールガでも、やはりそうなんですの？」
「事前に、回遊聖餐のための食料は、絶対に無理をしてはいけないと厳命していたということもあるのかもしれないけど……。例年に比べて、出される食事は寂しい感じがした」
と、ちょうどそこで、お料理がやって来た。
「こちらが、ワラウツボのスープです」
置かれたスープ皿に、ラフィーナがちょっぴり体を引く。それを見て、ルシーナ伯爵夫人レベッカは、優しげな笑みを浮かべた。
「ワラウツボの干物を粉にして、出汁に使いましたので、姿は残っていません」
「感謝いたします、レベッカさん」
やたらと実感のこもった声で言うラフィーナである。それから、震える手でスプーンを手にとった。
食料が不足していることを知っている以上、ワガママを言って残すわけにはいかない。回遊聖餐で、村々の様子を実際に見てきた以上、余計にそう思う。
ちなみに、本日の晩餐会には、今回の事件に関係したミーアの仲間たち以外の、ゲストの姿もあった。
「あのぉ、私も来てしまって、よろしかったのでしょうか……？」
困惑顔を見せるのは、例の旗を描いたシャルガールだった。自らの絵を見せる時とは打って変わって、どこか遠慮がちな様子だったが……。
「なに言ってるんですか。あの素晴らしい旗を描いたシャルガールさんの功績を無視するなんて、できませんよ。ね、ミーアお……姉さま」
明るく輝く顔でそう言ったのは、ベルだった。
「うふふ、あの迫力ある絵で、エリスか……さんの小説の挿絵を描いてもらえるなんて、すごく楽しみです」
上機嫌に鼻歌を歌うベル。ミーアのほうも、

「まぁ、そうですわね。やはり、あのインパクトの貢献は大きかった気がしますわ」
などと認めているものだから……。
「ええ……そう……かもしれないわね」
そう認めざるを得ないラフィーナである。やや声から感情が消えているような感じがしないではないが……それはさておき……。
「恐縮です、ミーアさま。私もまさか、あのような旗が描けるとは思っておりませんでした」
三人の称賛を受けて、シャルガールは神妙な顔で頭を下げた。
「ミーア姫殿下には、数々のご無礼を働いてしまいましたが……そのおかげで、私は新しい美について知ることができました。見た目の美をかなぐり捨ててまで、民のために尽力するお姿、感動させられました」
心なしか、目を赤くしつつ、シャルガールが言った。
「……いえ、別に美をかなぐり捨ててはおりませんけれど……」
などとささやかに抗議しつつも、ミーアは首を振った。
「まぁ、いいですわ。それより、シャルガールさん、例の小説の挿絵の件、引き受けていただけるかしら？」
そう問うと、シャルガールは改めて背筋を伸ばして……。
「謹んでお引き受けいたします。できれば、お話を書かれた方ともイメージのすり合わせをしたいのですが……」
「なるほど、とすると、帝国に来ていただくのがよろしいかしら……。作者のエリスは少し体が弱いのでここまで来るのも大変ですし……。できれば、帝国内に住む場所を用意して、と思いますけど」
「はい、問題ありません。住む場所とお給金をいただいて好きなように絵を描けるなんて、夢のようです」
「いや、好きなように、とは言っておりませんけれど……」
などという、ミーアの言葉を聞いているのかいないのか、シャルガールは、よろしくお願いします、と頭を下げる。
「ま、まぁ、いいですわ。それでは、よろしくお願いいたしますわ

ね」
っと、それから、ミーアはワラウツボのスープにスプーンを落とした。
鼻孔をくすぐるのは、ほのかな磯の香り。干物を炙ったのか、芳ばしい香りも合わさって、さらに、そこに香草のスパイシーな香りが加わる。
混然一体となった香りのハーモニーを楽しみながら、一口。
舌の上に広がるは、香りに負けない重厚かつ複雑な味。程よい塩加減、香辛料の絡み、魚介類の脂の出すあっさりとした甘味とまろやかなコク……。
「おお……なるほど。あの恐ろしげな見た目からはとても想像できないお味ですわ」
「ワラウツボだけでなく、他にもいろいろなお魚が入っていますが、ベースは、ワラウツボのスープになります。ワラウツボはその名の通り、食べると笑ってしまうぐらい美味しい魚なので」
レベッカの解説に満足げに頷くミーア。そんな時、視界の端で、スプーンを持ったまま固まっているラフィーナが見えた。
声をかけようとしたミーアだったが……。
「うふふー、そうですよねー。とーっても美味しいし、研究の価値があると思います」
オウラニアがるんるん、っと鼻歌混じりに言った。さらに、
「それに、海外の作物類も見ることができました。種も入手することができましたから、これをペルージャンに持ち帰って、いろいろ試してみたいと思います」
続くラーニャの言葉に、ミーアは満足げに頷いて、
「ほほう、それは楽しみですわ。寒さに強い小麦は強力な飢饉対策になるでしょうけれど、逆に暑くなる時もあるかもしれませんし……。いろいろな作物を植えておけば、どんな変化が起きても対応できるようになるかもしれませんわ」
暑かろうが、寒かろうが、いつでも食べたいものが食べられる世

界こそが、ミーアの理想だ。食材さえあれば、どんな物であっても、料理長ならば美味しく料理してくれるだろう、と確信しているミーアである。

「今日のデザートにも、新しく見つけた果物を使ってもらいました」

「あら、それはとっても楽しみですわね！」

ニコニコとご機嫌な笑みを浮かべるミーア。っと、その時だった。すぐ隣から、小さな声が聞こえてきて……。

「美味……しい？」

目を向けると、呆然とスープを見つめるラフィーナと目が合って……。

――うふふ、黄月トマトのシチューを食べた時を思い出しますわね。

ちょっぴり微笑ましい気持ちになるミーアである。

「やっぱり、食わず嫌いはいけませんわね、ラフィーナさま」

「ええ。そうね。これは、次のものも楽しみかもしれ……」

「じゃーん！　次は、なんと、ガヌドスの伝統料理『八目ウミヘビ』のステーキですよー。宿敵、混沌の蛇を食べて倒してしまおうという縁起物と思って、こっそり内緒で用意してましたー。料理前のものがこれでー」

などと……意気揚々と入って来たオウラニアと、彼女の持っている、ニョロッとした食材を見て……クラァッと倒れていくラフィーナの姿があって……。

かくて、セントバレーヌの平和な夜は明けていくのだった。

第百五十六話　宴の夜に

それは、橋の上での決闘を終えた後のこと。
ディオン・アライアは一人で、酒杯を片手に月を眺めていた。
そこは、宴の喧騒から少し離れた場所。決闘の場にほど近い別の橋の上だった。
川の水音、夜風の駆け抜ける音、それに……遠くに聞こえる賑やかな宴の声。
このセントバレーヌの侵略のために来たというのに、まったく、勝手なものだ、などと苦笑いを浮かべつつも、彼の気持ちは晴れやかなものだった。
「まぁ、この終わり方に乾杯したくなるのはわかるがね」
悪くない……そう、悪くないどころか……これほどまでに良い気分は、ひさしぶりのことだった。
これは、帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンが目指した結末。
ルードヴィッヒの立てた作戦や、ディオンの剣の貢献ももちろん大きかったものの、この夜を迎えることができたのは、間違いなくミーアのおかげだろう。
「強敵を打ち倒すことも、橋の上で華々しく討ち死にするのも悪くはない死に方なのだろうけど……はは、やっぱり姫さんは、美味い酒を飲ませる天才だな。勝負がつかなかったのに、こんな気持ちで酒を味わうことになろうとはね」
じわりと胸に湧く満足感に、ディオンは静かに笑う。
っと、その時だった。
「ああ、こんなところにいたの」
「これはこれは、イエロームーン公爵令嬢」
少し前から近づいてくる足音には気付いていたから、慌てること

はなかったが……。
「こんな時間にお一人で外出とは、いささか不用心じゃないかな？　ミラナダ王国の兵も、ポッタッキアーリ候の兵も、酒を飲んで羽目を外しているだろう？」
橋によりかかるようにして体を後ろに向ける。っと、そこには、可憐な笑みを浮かべる少女、シュトリナ・エトワ・イエロームーンが立っていた。その手が不意に動き……。
「おっと……」
直後、飛んできた瓶を、ディオンは片手で受け止める。
「これは？」
「薬よ……」
「薬……？　ああ、傷薬だったら不要だよ。生憎と、あの程度でケガなんてね……」
「心配しないで。傷薬じゃない。ただの臭い消しの香水よ」
「臭い消し……？」
シュトリナは、両手を後ろ手に組んで、澄まし顔で言った。
「あれだけ動き回ったのだから、鎧の中は相当、蒸れたでしょう？　かといって、後始末のもろもろで、まだお風呂に入れていないのでしょう？　汗臭いままにしていたら、ご令嬢からは嫌われるし、姫殿下の騎士としても失格なんじゃないかしら？」
シュトリナは、からかうような笑みを浮かべた。
「はは、なるほど。これは、無骨なる兵士には気付かぬご配慮、感謝しますよ。しかし……香水ねぇ……」
ディオンは、香水の瓶のふたを開けてみる。っと、鼻に届いたのは、優しい花の香りだった。
「あまりきつくないな……。少し気が休まるような香りだ」
「戦いの後の夜にはぴったりの香りでしょう？　帝国最強の騎士なら、多少、気を抜いても不意は突かれないでしょうしね」
そんなシュトリナに、ディオンは肩をすくめた。
「お気遣いはありがたいが……しかし、僕なんかに構っていないで、

こういう時こそ、きちんと友だち作りに精を出したほうがいいんじゃないかね？　例の、未来から来たという姫さん以外の、ね」
「……言っておくけど、リーナ、別にお友だちがいないわけじゃないから」
シュトリナは、ちょっぴり頬を膨らませて、ムッとした顔をする。
「生徒会の仕事でいろいろな人と交流があるし、お茶会だって行くようにしてるし……それに……」
「姫さんの話がどこまで本当かは知らないが……いずれ、遠くへ送り返さなければならないんだろう？　あの子は……」
その言葉に、シュトリナは一瞬、頬を強張らせる。
「だからこそ今の時間を大切にしたいってのは、まぁ、わかるが……ほかにも友だちでも作っておいたほうが良いんじゃないかな」
「偉そうなことを言うけれど……ディオン・アライア、そう言うあなたは、いるのかしら？　友だちと呼べる人が」
思わぬ反撃を受け、ディオンは二度、三度と瞬きして……。
「友……か。友ねぇ……」
静かに、空を仰いだ。
「心を許せる友と呼べるのは、僕にとっては戦友のことかな、やっぱり……。そういう意味では、かつての百人隊やバノス辺りがそうかもしれないが……ただ、たぶん君が思っているような関係ではないんじゃないかな」
不意に、ディオンの顔に影が差した。
「命のやり取りの場では、安心して背中を任せられる戦友が必須の存在になる。心から信頼して……けれど、その友がいつ、どんな死に方をしても動揺しないように、そんな関係を結ばなければならない。今日、楽しく酒を酌み交わし、明日死んだら、互いに笑って見送ってやれる関係……それが僕の考える友というやつだよ」
酒杯を口に近づけようとして、中が空になっていることに気付いた。小さく肩をすくめてから、ディオンは続ける。
「ただ、まぁ、なんというか……どうも、姫さんのそばにいると、

そういう在り方がはたして正しいのか……と、思わなくもないのだけどね……」
その様子を見て、シュトリナはわずかばかり驚いた様子で……。
「帝国最強の騎士を心変わりさせるだなんて、さすがはミーアさまね」
「望むと望まざるとにかかわらず、良い方向へと変えてしまう。ミーア姫殿下はそのような方だ、とルードヴィッヒ殿が言っていたよ……ああ、そうだ」
ふと、そこで、思いついたとばかりにディオンが言った。
「ルードヴィッヒ殿は、普通に、友と呼んでも差し支えない関係かもしれないな……。ふふ、この僕に戦友以外の友ができるとはね」
かつて言われた言葉の通り、変わっていく自分を意識し……それを不快だと思っていない自分がおかしくて、ディオンは笑った。それから、
「さて……それじゃあ、ルシーナ司教の館までエスコートしようか。酒を飲んだ兵に絡まれでもしたら、面倒だろう？」
「あら、その時は助けに来てくれるんでしょう？　あなたは帝国最強の騎士なんだから」
悪戯っぽい笑みを浮かべるシュトリナに、やれやれ、と首を振るディオンであった。

第百五十六話　宴の夜に（後書き）

今週は、セントバレーヌのゴタゴタ後のそれぞれのエピローグ的なものを雑多にやっていきます。
恋と冒険の一週間にする予定です。来週には9部に入ると思います。

第百五十七話　小さな大冒険！

セントバレーヌに平和が訪れた翌日のことだった。
ベルは、リオネルに誘われて冒険に出かけた。
……冒険に！　出かけた！
まぁ、とは言っても、例のルシーナ司教の館の地下の、ではあるのだが……。
「館の地下に把握していない空間があるのは少し不安なので、できれば地図など作りたいのですが……」
などというリオネルに、ベルは、ドンっと胸を叩いて、
「任せてください。リオネルくん。ボクがきちんとすみずみまでマッピングしてみせますから！」
自信満々に請け負った。
冒険と探検には一家言あるベルである。マッピングなど基礎も基礎。できて当然なのである。
ちなみに、冒険の同行者はシュトリナとリンシャの二人だった。
「それじゃあ、マッピング用の紙と、それと念のために……」
っと、リンシャに、入口に縛ったロープを持ってもらう。
「あれ？　リーナちゃん、そのロープ……。ボクがちゃんとマッピングするからそんなのなくっても……」
「暗いから念のためね。あくまでも念のため。それと、このランプの火が消えたら危ないから戻ること。それと万が一のことがないように、細心の注意を……」
などと口にするシュトリナに、ベルはペラペラと手を振って、
「もちろん、心得ています。こう見えても、ボク、結構、冒険には詳しいんですよ……？」
探検学の祖、後の冒険姫の異名を持つベルは、地底探索にも精通している人なのである……たぶん。

「そう……それなら、まぁ、良いんだけど……」
なにか言いたげな顔をしていたシュトリナだったが、すぐに、まぁ、いいか、とつぶやいた。
さすがに、屋敷の地下の空間で遭難したりはしないだろう、との推測からだったのだが……。その推測は早々に崩れ落ちることになるのだった。
「ここまでですね、前回来たのは……」
狭い隠し通路は、基本的に一本道だった。屋敷の壁の中を通り長い階段を下り、地下道へ。
その道の先にある部屋を一つ一つ回っていく。
部屋は通路に沿って左右に二つ、奥に一つ。
前回来た時は、ザっと見ただけで、長年使っていた形跡がなかったので、詳しく調べなかったが、今回はきっちり調べる。
と言っても、探すべき場所はそれほど多くない。室内には、今にも朽ち果てそうな戸棚があるのみで、他に家具などもない。戸棚も中には何もなく、新しい発見はなかった。
三つの部屋とも大した変わりはなく、調べるのにさほど時間を要すこともなかった。
「なにもないみたいね……」
部屋の中を見回して、リンシャが小さくため息を吐いた。
「どうやら、外に通じてるという感じもないみたい。隠し通路じゃなく、あくまでも隠し部屋って感じね」
シュトリナの言葉に、
「ここまで、ですか……」
リオネルも、小さな声でつぶやいた。心なしか、その声は、少しだけ寂しげだった。
そうして、屋敷に戻ろうか、という空気が生まれ始めた……その時だった。
「この部屋だけ……空気が違う感じがします」
そんなことを言い出す者がいた。探検学の権威、後の世に冒険姫

として知られる、ミーアベル・ルーナ・ティアムーンである！
ベルは、顎に手を当てて、こつ、こつ、っと足音を立てて部屋の中を歩き回る。
こつ、こつ、こつ……だん……。
「あれ……？」
不意に、ベルが声を上げた。それから、むーん、っと眉間に皺を寄せて、床に顔を寄せる。
「どうかしましたか？」
「いえ……ここ、戸棚の下の床だけ、音が違うような……これ、もしかして、外れる？　リンシャさん」
リンシャを呼び、二人で戸棚に手をかける。っと、がこん、っと音を立てて、戸棚が奥に倒れる。その下の床板も一緒に持ち上がっていき……そこに現れたのは……！
「なっ……」
声を上げたのが、誰かはわからなかった。けれど、誰が上げたとしても不思議ではなかった。
なぜなら、そこには、さらに地下へと続く階段が続いていたからだ。
びょう、っと気味の悪い音を立てて、風が吹いて来る。どこか湿った重たい風を受けて、ベルの髪が仄かに揺れた。
思わず、ぶるっると身震いするベル。それは穴の醸し出す不気味な雰囲気に恐れをなしたから……などではない。もちろん、ない！
さらなる大冒険を予感した、武者震いのためだ！
「まさか、さらに地下があるなんて……」
一方で、呆気にとられていたのは、常識人のご令嬢二人だった。
シュトリナもリンシャも、まさか、そこまで大がかりなものにはならないだろう、と思っていただけに、さらなるエリアの拡張には驚愕を禁じ得なかった。
「さぁ、行きますよ、みなさん！」
ベルの声に促されるようにして、三人は階段を降り始めた。

「足を踏み外さないように注意してくださいね」
ずんずん進んでいくベルを尻目に、シュトリナがそっとリンシャに耳打ちした。
「もしも、ロープの限界が来たら、そこで引き返すことにします。あまり深入りすると危なそうなので」
シュトリナに言われ、リンシャは手に持ったロープを確認する。残りは、あと三分の二程度。それを確認してから、リンシャは小さく頷いた。

第百五十八話　冒険の終わりに……

階段を下った先に広がっていたのは、思いのほか広い通路だった。それはまぁ、良いのだが……。
「な、なに、ここ……？」
先ほどまでとは打って変わって、壁にはむき出しの岩肌が覗いていた。地面もゴツゴツとした岩が転がり、さらに天井からは尖った鍾乳石が伸びている。
「これは、自然の洞穴……でしょうか？」
リオネルが、目を丸くして辺りを見回していた。
館を建てる時に掘った人工の穴ではなく、もともと洞穴があるところの上に、館を建てた感じだろうか。
「それにしても、まさか、こんな空間が広がっているなんて……」
唖然とした顔で辺りを見回すリオネルに、ベルはニッコリ笑みを浮かべた。
「まだまだ、冒険は終わらないみたいですね、リオネルくん。さ、行きますよ」
「あっ、ちょっと待って、ベルちゃん。足元注意して！」
「天井もです。頭ぶつけないように気を付けてください」
追いかけてきたシュトリナとリンシャの声に、ベルは自信満々に頷き、
「大丈夫です。その辺りも抜かりは……あいたっ！」
鍾乳石に頭をぶつけていた。
まぁ……それはさておき……。
一行は、曲がりくねった洞窟の中を進んでいく。
「それにしても、ここっていったいなんなんでしょうか？　もしかして、海賊が使ってたアジトに繋がってて、財宝が眠ってたりして……」

なぁんて甘々な予想をするベル。であったが……リオネルが、そっと声を潜めて……。
「あり得る……かもしれません」
意外なことを言った。それから、彼は、通路の一点を指さして……。
「ほら、それ……」
その指した先を見て……ベルは思わず目を見開いた。
「それって……」
そこに、人が横たわっていたからだ。いや、正確に言えば、かつて人であったもの……かなりの大昔に人であったもの……すなわち骸骨が……。
しかも、骸骨の首元には、黄金の首飾りがつけられていて……。
「こっ、これって……それじゃあ、本当にっ！？」
なぁんて歓声を上げるベルの隣で、シュトリナがそっとしゃがみ込む。拾い上げたのは、今にも崩れ落ちそうな、赤い帽子だった。こう、いかにも海賊が被っていそうな……。
そして、帽子の額には、なにかのエンブレムが刺繍されていた。
「これは……海賊団の文様、なのかな？」
基本的には博識なシュトリナではあるものの、さすがに海賊の文様には詳しくない。けれど……。
「三本斧に船の家紋……これは、もしかすると……」
紋章学に詳しいミーアと、同じぐらい知識を持つ令嬢がいた。すなわち、元貴族令嬢たる、リンシャだった。元レムノ王国の貴族令嬢であった彼女は、シュトリナよりもこの辺りの貴族の事情に詳しい。
しばし、その文様を見つめていた彼女は……。
「確証はありませんけど、海賊公と謳われた、ゼデルストローム卿の家紋ではないでしょうか？」
「海賊公ゼデルストローム……」
覚えがあるのか、その名を聞いて、ベルは、腕組みして唸ってか

ら……。
「なんだか、冒険の匂いのする名前ですね！」
……いつものベルだった。まぁ、それはいいとして。
「かつて、この辺りを荒らしまわっていたレムノ王国の公爵にして、大海賊です。今から百年以上前の話だと思いますけど……」
「セントバレーヌが生まれる前の話ですか……？　それじゃあ、この骸骨が、まさか……？」
「いえ、さすがに海賊公本人ではないかと。でも、その一団の海賊という可能性はあるかもしれません」
慎重な口調で言うリンシャに……。
「じゃあ、ここが海賊公のアジトだったということは？」
眉をひそめてリオネルが問うた。
「そうであっても不思議はないかもしれません。もしかしたら、本当に、この奥に財宝が眠っているかも……」
リンシャの言葉に、ベルは、ぱぁあっと顔を輝かせて。
「これは、もう行くしかありませんね！　さぁ、夜になる前に行きましょう！」
声を弾ませた。のだけど……。

それ以降、大きな発見はなく……。
やがて、さー、ささー、っと遠くのほうから音が聞こえてきた。
「あれ……？　この音って……」
ベルがつぶやいた直後、風。同時に、強い潮の香りが届いて……。
角を曲がった刹那、視界に真っ赤な光が広がった。
「あっ……」
大冒険の終着点……そこは、海だった。
夕日に、赤々と染まった、大きな大きな海だった。
どこまでも、どこまでも続いていく、海だった。
残念ながら、海賊公の財宝はそこにはなかったのだ。
呆然と、波を眺めるリオネル。そんなリオネルに……。

「ふっふっふ、やりますね、リオネルくん。こんな大冒険、ボクもはじめてです」
探検学の権威たる冒険姫ベルは、ニヤリと悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「そう……ですね。ただ、できればなにか……成果が得られれば良かったのですが……」
残念そうな顔をするリオネルに、ベルはきょとん、と首を傾げた。
「そうですか？　大冒険のゴールが、こんなに綺麗な夕日だなんて、素敵だと思いますけど……」
楽しげに笑ってから、ベルは続ける。
「それに、たった一回の冒険で、全部を明らかにしてしまうだなんて、もったいないですし」
そうして、ベルは手を差し出した。
「また、いつか一緒に冒険しましょう！　今日みたいな、とっても楽しい冒険を」
リオネルは、きょとんとした顔で、その手を見つめて、それから、自らの手を差し出そうとして……けれど、ベルの手を握ることなく、すぐに引っ込めた。
「いいえ、僕の冒険は……これでおしまいです」
そう言って、リオネルはゆっくりと首を振る。
「え……？　リオネルくん？」
「僕は、セントノエル卒業後に、すぐにツロギニア王国に派遣されて、そこで神父として働きます。その次の任地がどこになるかはわかりませんけれど……父の名を汚さぬよう立派に務めを果たし、そして、ルシーナ伯爵領に戻るか、あるいは、ヴェールガの中央正教会の本部で働くことになると思います」
穏やかに微笑んで、続ける。
「いずれにせよ、世界を冒険して、神の御業をこの目で見るという夢は、もうありません」
もしも、それが可能だとすれば、セントノエルを卒業してすぐの

ことだった。商船付きの神父として世界を旅する、まだ自分に体力があり、父もルシーナ伯として健在であったならば、できたかもしれないが……その道はすでに断たれた。
ツロギニア王国に行き、父の無念を晴らすこと……そのために、リオネルは、自らの夢を諦めたのだ。
「ふふふ、だから、これが僕の最初で最後の冒険でした」
そう言って、リオネルは無邪気に笑った。
「とっても楽しい冒険ができました。今日は、本当にありがとうございました」
それから、夕日に染まった海に、目をすがめた。
それはまるで、今日という日の光景を刻みつけるように。
そして、まだ見ぬ海の彼方に、思いを馳せるかのように……。
「リオネルくん……」
そんな少年の顔を、ベルは静かに見つめていた。

それは、遠い遠い未来の物語。
リオネル・ボーカウ・ルシーナは、長男に家督を譲り、悠々自適の隠居生活を送っていた。
神聖典と、愛読書である冒険小説を読みながら、平穏な日々を送っていた。
そんな彼のもとに、ある日、孫娘の一人がやってきた。
孫娘は、リオネルお祖父さまの前に立つと、腰に手を当てて胸を張った。
「リオネルお祖父さま、ボクと一緒に海の向こう側を冒険してみませんか？」
だしぬけにそんなことを言い出した孫娘に、リオネルは目を丸くする。そんな彼に、孫娘は、朗らかな笑みを浮かべて……。
「いつか見た夢の続きを、ボクと一緒に見てみませんか？」
そう、手を差し出す彼女の姿は、リオネルにあの日を思い起こさせた。

初めての冒険の日、夕日に染まる美しい海へとたどり着いた、あの夢のような日を……。
差し出された右手、あの日、取ることができなかったその手を、リオネルは静かに握りしめるのだった。

リオネル・ボーカウ・ルシーナ。
その名は、前半生と後半生とで、がらりと印象を変える人物の名だ。
若き日の彼は、生真面目な司教として、伯爵として、堅実に、誠実に役目を果たす人であった。赴任した地の王族に、臆することなく意見し、非道があれば、その行いを改めさせた、善良かつ常識的な人と、歴史家は評価する。
では……後半生はどうだったか？
彼の後半生を、歴史家はたった一言で評す。
すなわち「ファンタスティック」と……。
たまたま孫娘と出かけた、半ば遊び半分の船旅で、海賊公のお宝が眠る無人島に行きついてしまうとか。持ち帰った財宝がもとになって、隠されていた歴史に触れるような遺跡の位置を知ってしまうとか……。
神聖典に出てくる聖遺物すら、うっかり発見してしまったりとか……。
そんな、あり得ないほどの波乱万丈、ファンタスティックな人生が、彼を待ち受けているのだが……。
若き日の彼には、そのようなこと、知る由もないのであった。

第百五十八話　冒険の終わりに……（後書き）

ちなみに、海賊公に設定とかはまるっきりありません。
もしかしたら、蛇かも……？　などということは今のところありません。
後で設定が生えてくるかは微妙ですが。

第百五十九話　小さな恋と友情と

それは前の時間軸。
帝国が革命軍によって倒れ……そして、新しく革命政府の樹立が宣言された、その日の夜の物語。喜びの宴の……物語。

その日、帝都ルナティア、白月宮殿は喜びに満ち溢れていた。
目の前の問題は山積みだ。未だに飢饉を引きずっている地域、領主たる貴族を失い、混乱状態の地域があった。国内の治安の乱れ、流通網の止まった地域も数限りない。
明日からは、また多くの課題に頭を悩ませなければならないという、そんな状況ではあっても、今宵ぐらいは勝利を祝おうと……人々は踊りあかしていた。
辛い現実から目を背けるように酒を飲み、踊り、歌い、騒いでいた。
そんな宴の中で……。
「ティオーナ……！」
名を呼ばれ、ティオーナ・ルドルフォンは立ち止まった。
振り返れば、そこには、美しい白銀の髪の王子、シオンが立っていた。激務によって、少々やつれてはいるものの、その美貌はいささかも損なわれることはなかった。
彼はその場で、芝居がかった態度で礼をして、
「一曲、俺と踊ってもらえるだろうか、革命の聖女さま」
おどけた様子でそんなことを言うシオンに、ティオーナは一瞬、首を傾げる。
その口調が、少しだけいつもよりも軽薄なものに感じられたからだ。
でも、すぐにその理由に気付く。

自分たちへと集まってくる視線。そして、期待……。
おそらく、シオンはダンスなどしたくないのだろう。
ティオーナは知っている。彼は、かつての級友を殺して、間もなくダンスができるほどに、非情な人ではない。
ただ、彼は、周囲が求める正義の国の王子として振る舞おうとしているだけだ。
今、そうすることが必要だと判断したから、そうしようとしているだけだ。
だから「革命の聖女」とティオーナを呼んだ。
革命の聖女としての振る舞いを求めて……。
ティオーナはそっとスカートの裾を持ち上げた。
「お受けいたします、シオン王子殿下」
そうして、二人は身を寄せた。
愛ではない。親密さでもない。ただ、周りに見せるためだけの、儀礼的なダンス。
この革命の主導者たちの仲をアピールし、周囲を安心させるためのダンスを。
革命政府は、サンクランドの助けを得て帝国を立て直していく。そのことに疑いを抱くことなど一切ないのだと……そう伝えるための、これはポーズだった。
「渋い顔をしているな、ティオーナ。なにかあったのか？」
囁くような問いかけに、ティオーナは取り繕うような笑みを浮かべた。
「すみません……。少し考え事をしていただけです……」
それを受け、シオンも優しげな笑みを返す。
「辛くても、今は笑わなければいけない時だ。すまないが……」
「いえ、シオン王子には、我が帝国のことで大変お世話になっていますから。気にしないでください」
小声で囁き合う二人を見て、人々はひそひそとつぶやいた。
「お似合いの二人じゃないか。この帝国の未来を導く革命の聖女さ

まと、次期サンクランドの国王陛下とは」
「ふふふ、しかし、あのティオーナと言う娘、こんな世の中でなければ、ただの田舎貴族の娘で終わっていたものを。まさか、シオン王子殿下のダンスパートナーに選ばれるとは」
「自分より上の貴族の首をことごとく刎ねて手に入れた身分だ。さぞや気持ちがよかろうよ」
周りに満ちた嫉妬の声、怨嗟の声、蔑む声……。
それらを笑顔で受け流し、二人は踊り続ける。
――私はただ、自分の役割を果たすだけだ。それが死んでいった人たちへの……なにより、お父さまへの手向けとなるだろうから……。
祝宴の夜は明けていく。仮初の喜びと、新たな謀略をその身に孕んだまま。

かくて、時は流転して。

それは、奇跡の夜の物語。
セントバレーヌの戦いが、ただ一つの命をも損なうことなく、娯楽の内に封じ込められた日、その夜の宴の出来事だった。
町の中央の広場では、帝国最強とレムノの剣聖の剣技に魅了された剣術馬鹿たちが、楽しげに自らの剣を振るっていた。実に……実に楽しそうだ！
まぁ、もちろん、真剣ではなく鍛練用の剣なので、刃を真っ二つに斬る、といった馬鹿げた真似はできなかったが……。それでも……いや、それ故に……なのか？　ともかく、ディオンやギミマフィアスに挑む者は続々と現れては、自らの剣の腕前を披露していった。
レムノの剣聖に剣の指導をつけてもらえる機会など滅多にあるものではない。そのうえ、あの絶技……刃の三枚おろしを披露した強者と、命の心配をせずに剣を交えられる。
剣術馬鹿たちは、その幸せを噛みしめていた。

さらに、三人の、いずれも剣術巧者の王子たちを加え、即席の剣術大会は大いに盛り上がっていた。

さて、そんな中で、いったん休憩をと下がったシオンのもとに、セントバレーヌの美女たちが駆け寄って行った。

避難の指揮を執っていた美貌の王子は、女性たちの間で大いに話題となっていた。無論、アベルもその対象ではあったが、シオンと比べれば、断然、シオンの人気のほうが高かった。

面食いベルの見立ては確かなのだ……アベルお祖父ちゃんは泣いていい。

それはともかく……。

汗を拭くタオルを渡す令嬢たちに、卒ない笑顔で応えるシオン。だったが、その目が、誰かを探すように辺りを見回していた。っと、ティオーナと目が合うと、わずかばかりに、その目が微笑んだように感じられて……。

シオンは、令嬢たちに軽く礼をして、こちらに駆け寄って来た。

「やあ、ティオーナ。見学に来ていたのか？」

「はい。あの、これをどうぞ」

差し出したのは、果実水だった。動き回った後で、喉が渇いているだろうと、先ほどもらっておいたのだ。

「ありがとう、ああ、こっちへ」

微笑みつつ、近くのベンチへとエスコートするシオン。その背後から、令嬢たちのちょっぴり嫉妬に尖った視線が追いかけてくる。

けれど、ティオーナがそれに動じるようなことはない。なにせ、その嫉妬は見当違いだからだ。

――辺土伯令嬢の私が、シオン王子といくら仲良くしようと、なんの意味もないのに。

そう考えると、ちょっぴりおかしくなってしまう。

「うん……？」

っと、その時だった。シオンがわずかに顔を上げた。遠くから、

踊りの賑やかな音が聞こえてきていた。
「ダンスもやっているのか……。サンクランドの王子が剣しか能のない血の気の多い男と思われるのも困るな。どうだろう、ティオーナ。もしよければ、一曲、俺と踊ってもらえないだろうか？」
「はい、わかりました」
ティオーナは一瞬、首を傾げるも、すぐにご令嬢たちに目を向けて理解する。
――ええと、彼女たちへの牽制……かな？
自分には相手がいるとアピールしておいて、彼女たちを遠ざけようということなのだろうか。
――この方も、やっぱり疲れるんだろうなぁ……。
先ほどの様子を思い出してティオーナは思った。
ご令嬢たちの熱烈なアピールに晒されたからといって、サンクランドの王子としては、そうそう無下にも扱えない。相応に気を使うのだろうし、疲れるだろう。
――うん、私が協力できることだったら、喜んでしよう。
ティオーナは、少しだけ気合を入れて、シオンのダンスパートナーを務めることにした。
シオンの優しいリードに身を委ねるようにして、ティオーナはステップを踏む。中央貴族に負けぬよう鍛練を積んだダンスのステップは、なかなかに巧みなものだった。
次々に嫉妬と羨望、さらに、こそこそとした囁き声が聞こえて来るけれど、ティオーナは気にしなかった。
彼女の胸には、シオンを楽にしてやろう、という強い意志があったからだ。
そんなティオーナを見つめて、シオンはつぶやくように言った。
「君と踊っていると、心が落ち着くな」
その言葉に、ティオーナは、くすりと微笑んだ。ちょっぴりできの悪い弟に向けるような、しょうがないなぁ、という顔で頷いてから、

「どうぞ、心おきなく安らいでください。私ならば誤解を生んでも、辺土伯令嬢なら、すぐに解けるでしょうし……」
っと、そう言った時だった。不意に、シオンの顔が曇ったように見えた。
「……ティオーナ、俺が君をダンスに誘うのは、そういうことじゃないんだが……」
シオンが、どこか寂しげな顔で言った。
「え……？」
ティオーナは瞳を瞬かせて、シオンを見つめるが……。続く言葉はなかった。
やがて、音楽が終わる。
踊り終わったシオンは、再び誘われて、剣術大会のほうに行ってしまった。
後に残されたティオーナは、戸惑いから、そこに立ちつくしていた。
――今のって、どういう意味……？
途方に暮れるティオーナに、されど、答えを与えてくれる者は誰もいなくって……。

否っ、そうではなかった！

「ふんふんふーん……」
なぁんて、鼻歌を歌いながら……お皿を片手にスキップしながら、やってくる一人の少女の姿があった！
「うふふ、アベルったら、また格好よくなってましたわね。後で、ダンスにも付き合っていただこうかしら……」
それは……、剣術大会でのアベルの健闘ぶりを、スイーツ片手に堪能しつつ、堪能した甘味を消費すべく、ダンスにも付き合ってもらおうかしら？　などと考える、我らがミーア・ルーナ・ティアムーンであった！

今まさに、そこに通りかかったミーアは、ぽかーん、と立ちつくすティオーナを見て、首を傾げた。
「あら、ティオーナさん、どうかなさいましたの？　変な顔をして……」
「あ、ミーアさま……？」
まるで、暗闇で灯を見つけた人のように、ティオーナはミーアのそばに歩み寄った。
「あの、ミーアさま……その、今、お時間はありますか？」
「時間……？　そうですわね……」
ミーアは、ふいっと剣術大会のほうに目を戻した。
戦いを終えたアベルは、一緒に戦った者たちと健闘をたたえ合っていた。
手が空くのはもう少し先になりそうだった。
「ふむ、少しならば大丈夫ですけど……」
っと答えると、ティオーナは、先ほどのシオンとの話をして……。
「ということなのですが……」
聞いた瞬間……ミーアはカッと目を見開いた！
――こっ、これは……恋のお話ですわ！
ミーアのピンク色の脳細胞が瞬時に活性化する！
「あの……ミーアさま？」
呼ばれ、ティオーナの顔を見たミーアは、直後に少しだけ驚く。
ティオーナの顔に、どこか不安の色を見たからだ。
彼女のそんな顔を、ミーアは見たことがなかった。
前時間軸からずっと、彼女は、どんな権威にでも立ち向かう勇気の持ち主だった。
折れぬ強い意志の、持ち主であった。
けれど、そんな彼女が……戸惑い、不安げな顔をしている。それを見て……ミーアは一つ咳払い。それから口を開いた。
「そんなの、決まってますわ」
ミーアは腕組みしつつ、言った。

「ティオーナさん、あなたは……わたくしの友なのでしょう？」
「え……？　あ、それは、はい……」
戸惑い気味に頷くティオーナに、ミーアは続ける。
「あなたは、辺土伯令嬢である以前にわたくしの友。ならば、それだけで十分。たとえサンクランドだろうが、レムノ王国だろうが、どこの国の王子だろうが、釣り合わないなどということはあり得ませんわ。噂になっても結ばれることはない、などということは、あなたが勝手に思っていることに過ぎませんわ」
そう指摘してやってから、ミーアは真っ直ぐにティオーナを見つめる。
「だから、胸を張りなさい。ティオーナ・ルドルフォン。何をおいても、あなたはわたくしの友なのですから。そして、それゆえに、シオンはあなたが結ばれる可能性がないご令嬢だから、利用しているわけではありませんわ。その可能性がないから、心が落ち着くと言っているわけでもない。あなたが、あなただから、そう言っているということですわ」
「私が……私、だから？」
「そう。そして、それは、あなた自身も気付いているのではなくって？　だからこそ、そんな衝撃を受けているのでしょう？　もしかしたら……と思った通りになってしまったから……真剣に向き合わざるを得ないと思ったから……そうなのではなくって？」
言いながら、ミーアは不意に笑いそうになる。
――って、わたくしが、まさか、ティオーナさんとシオンの間を取り持とうとするとは、実に奇妙なことですわ……。
かつての仇敵を前に、けれど、ミーアは言葉を止めない。
なぜなら、ティオーナは、もう友となった人だから。大切な友と思える人だから。
シオンもティオーナも、幸せになってくれなければ、きっと、ミーアの気分が悪くなるから。
――わたくしの幸せのためにも、ベルのいる未来のためにも、こ

の二人の仲がつまらないすれ違いでこじれたりしたら一大事ですし……。
常に揺らがぬ自分ファーストに背中を押されるように、ミーアは続ける。
「ティオーナさんは、どうしたいのかしら？」
「え……？」
「もしも、シオンがあなたという人間に……気軽に付き合える身分の辺土伯令嬢ではなく……、一人の人間としてのティオーナさんに安らぎを求めているとしたら……あなたは、どう答えたいんですの？　あなたは、それを嬉しいと感じるのかしら？　それとも……」
「私……私は……」
混乱に、目を泳がせているティオーナに、ミーアは優しく語りかける。
「ねぇ、ティオーナさん、実はわたくし、これからアベルをダンスに誘いに行こうと思っておりましたの」
それから、ミーアはそっとティオーナの手を取って……。
「よろしければ、一緒に誘いにいきませんこと？　ダンスを終えた後、そんな気分でいるのは、もったいないこと。今宵をそんな気分で終えるのは、とてももったいないことですもの」
そうして、ミーアはティオーナの手を引いた。

かくて、セントバレーヌの夜は過ぎていく。
その日の宴は、朝方近くまで続いた。
小さな恋と、友情と、喜びの実りと共に。

第百五十九話　小さな恋と友情と（後書き）

来週、エピローグを挟んで九部に行きます。今度こそ……。

エピローグ　黄金のミーア像、林立す！

さて、セントバレーヌでの騒動からしばらくたった日のこと。
『平和を祈念する、ミーア白金像の建立願い』なる、危険な代物をノータイムで却下したミーアのもとに、新たに商人組合から要望が届いた。
いやだなぁ、見たくないなぁ、と思いつつ、ミーアはその書類を手にとって……。
「……というか、こういう要望って、ヴェールガ公国のほうで処理していただくのが筋なのではないかと思いますけど……。まぁ、でも、題材がわたくしということであれば、仕方ないのかしら……それに、下手をするとラフィーナさまが許可してしまうかもしれませんし……いや、さすがにそんなことはしないかしら……しませんわよね？　さすがに……」
などと、いささか渋い顔をしつつ、ミーアは書類の内容に目を通した。
「ええと、なになに、平和と娯楽の祭典？　一年に一回、その年の最高の娯楽作品を決める賞を設立……ほう」
ミーア、少しばかり、興味を惹かれる。
基本的にミーアは、娯楽が好きだ。
小説はもちろん、演劇などにも興味がある。その年最高の娯楽作品を！　などと順位をつけて争うのも、それはそれで盛り上がりそうだし、なにより、いろいろな楽しみに触れられて良いかもしれない。
「世相が暗くなるより、良い娯楽で溢れているほうが好ましいのは事実。それに、あそこもヴェールガ公国内ですし、なにより、ルシーナ司教が目を光らせているのであれば、それほど退廃的な娯楽が流行るということもないでしょうし……これは、よいのではないか

しら？」
今度は、どんなトンデモナイことを言い出すのか、と覚悟していただけに、これは嬉しい誤算であった。
ミーアは、ちょっぴり機嫌よく、その要望書を読み進め……ある箇所で、眉間に皺を寄せた。
「ええと……ミーアカデミー賞……？　まぁ、その……名前とかはどうでもいいのですけれど……優勝者には、トロフィー大の黄金の像を授与？　わたくしを模した像……？」
これには、ミーア、少々考える。
「巨大な黄金の像を建てる、などというのは、当然、却下ですけど……。ううむ……このトロフィー大の黄金の像というのは……どうなのかしら？」
自らを偶像視するようなやり方は、絶対的に避けるべきではあるが、このように、賞品として自身を象ったものを出す、というのは……どうなのか……。
「ダメ……とは言い切れないかしら……。そう言ってしまえば楽なのですけど、前回もお断りしている以上、今回は若干、断りづらくもありますわね」
セントバレーヌの商人組合は、食料輸送にとって重要な存在だ。へそを曲げられるようなことは、まぁ、あまりないかもしれないが、友好関係を築いておくに越したことはない。
「まぁ……トロフィーぐらいの大きさならば、まぁ、許容するべき……なのかしら？」
ううむ……と唸りつつも、ミーアは……その申し出にオーケーを出した。出して……しまった。
「おおっ！　ミーア姫殿下にご了承いただけたか……」
商人組合のビオンデッティは、その報せを聞いて、満足げなため息を吐いた。
先日、平和を祈念するミーア女神像の提案が却下された時、彼は、

ミーアの懸念が理解できた。
自身の神格化は、ヴェールガとの間に亀裂を生む。巨大な黄金の像を建てたがる権力者は、歴史上、何人かいたが、いずれも自身の神格化にそれを利用しようとし、国を混乱へと堕とし込んだ。
帝国の叡智は、それを嫌ったのだろう。しかし……それがわかっていても、なお、商人組合は、それを欲した。
帝国の叡智が、この地で成したことを記念するための、象徴となるものを……。
彼らには、我慢がならないことがあったのだ。
それは、あの騒ぎが、皇女ミーアのわがままによって……ただ、自身のお抱え作家の小説の宣伝のためだけにやったことなのだと……そんな批判をする者が、多くはないがいるのだ。
それが、騒乱の舞台裏を知っている商人たちには、我慢ならなかった。
自分たちの町の平和を守り、ただの一滴の血も流さずに解決へと導いた叡智が、貶されることが、許せなかったのだ。
かといって、真実を話すわけにはいかない。それはさらなる混乱を生むことになってしまう。
だからこそ……欲したのだ。帝国の叡智の功績を、その一部だけでも記念し、語り継ぐ象徴を……。

かくて、ミーアカデミー賞は、セントバレーヌの名物となった。
その第一回授賞式においてのこと……。
ゲストとして呼ばれていたミーアは、並べられた数々の、トロフィー大の黄金ミーア女神像……通称「娯楽のミーア女神像」を見て、いささか頬を引きつらせつつ、スピーチに立った。
「ええと……こっ、このように、娯楽を楽しめることは、きっと幸せなことですわ。戦争、紛争、飢饉、疫病……社会にどのような混乱があったとしても、娯楽というものは、時に不謹慎と眉を顰められてしまうもの。だから、健全な娯楽を人々が楽しめるということ

は、きっと平和の証拠ですわ。誰に気兼ねすることもなく、笑顔で楽しめる……そのような社会こそ、わたくしの目指すものですわ。このえーと……ミーアカデミー賞？　の授賞式がずっとずっと続けられていくことを望みますわ」

娯楽の女神とか言われたら、遊び人と思われて、咎められるかも……なぁんて、危機感を覚えたミーアは、全力で、娯楽っていいよね！　平和の象徴だよね！　と力説。強調！

その時のミーアのスピーチは、過日、市庁舎で語られた言葉、さらに、停戦の夜に語られた言葉と共に、市庁舎の一角に刻まれ、飾られることになった。

例の、勇ましい旗と共に……。

そして、トロフィー代わりの黄金のミーア像は「平和と娯楽のミーア女神像」と呼ばれ、エンターテイメントの権威として、あるいは、平和の象徴として、長く大陸を席捲することになるのだが……。

そんなこと、想像すらしないミーアなのであった。

エピローグ　黄金のミーア像、林立す！（後書き）

第八部は本日で終了となります。

第一話　セントノエルへの帰還

「みなさん、お世話になりましたわ」
その日……ミーア一行が、セントバレーヌを旅立つ日のこと。
ミーアは、ルシーナ司教邸の人々、それに、商人組合のビオンデッティ、クロエの父マルコ・フォークロードら、見送りに来てくれた人々に笑顔で挨拶した。
来た時は、大きな問題が山積みであったが、今となってはすべてが懐かしい。
――絶品の珍味三昧も楽しめましたし、食の奥深さを知ることができましたわね。あの、オウラニアさんお手製の八目ウミヘビの姿焼きは、ちょっとグロテスクでしたけれど……。ふふ、なにごとも経験ですわね。あんなにサックリあっさりとしたお味になるなんて……。
そんなことを思っていると、ルシーナ司教が深々と頭を下げてきた。
「この度は、本当にご迷惑をおかけしました。旅のご無事を祈っています」
「感謝いたしますわ、ルシーナ司教。こたびはいろいろなことがございましたけれど、この出会いもまた天の配剤。むしろ、このセントバレーヌに民を想う方がいると知ることができた、ルシーナ司教と面識を持つことができたことを、わたくしは感謝いたしますわ」
ニッコリ笑みを浮かべてから、ミーアはふと、ラフィーナのほうに目を向けた。
――そういえば、最初にルシーナ司教のことを聞いたのは、ラフィーナさまからでしたわね。わたくしとあまり仲良くするなと諫言されたと、愚痴を言っておりましたっけ……。
それも、今では遠き過去のこと。まさか、本当にルシーナ司教の

思惑を蹴っ飛ばすような羽目になろうとは夢にも思っていなかったが……。人生、予想のつかないものである。
苦笑いを浮かべつつ、ミーアはラフィーナに言った。
「ではラフィーナさまも、お元気で……。また、冬のわたくしの誕生祭にはご招待……」
と言いかけた言葉を、ラフィーナは、スッと片手を上げて遮って……。
「レアさんは、回遊聖餐を終えて、そのままセントノエルに帰ったはずだけど、ぜひ、お礼が言いたいわ」
そんなことを言い出した……！
「あら？　と言いますと……？」
首を傾げるミーアに、ラフィーナは涼やかな笑みを浮かべて、
「私もセントノエルまでご一緒します」
「まぁ、そうなのですね。でも、大丈夫なんですの？」
「ええ、問題ないわ。それに、レアさんと回遊聖餐の引き継ぎもしたいしね」
あくまでも、公務の一環だから、と澄ました顔で、そう主張するラフィーナ。
そうして、ちゃっかりお友だちとの旅行の延長をはかるのである。
まぁ、嘘は言っていないので、咎められることではないのだが……。
「わかりましたわ。そうしましたら、護衛は我が皇女専属近衛隊の者たちにお任せくださいませ。それに、旅のお食事も期待していただいても結構ですわ」
旅の食事……と聞き、一瞬、ラフィーナの顔が引きつったような気がしなかったでもなかったが……。
「ああ……そうか。オウラニアさんとクロエさんが関わっていないなら……大丈夫かしら？　大丈夫よね？　うん……」
なぁんて、なにやらつぶやく、ちょっぴり傷心のラフィーナであった。

かくて、一行は無事にセントノエルに到着した。
馬車を降りて早々に、ミラナダ王国出身の生徒が詫びを入れてきた。
「手紙で知りました。父のこと、大変お世話になりました」
深々と、それはもう、地に付きそうなぐらいに頭を下げる少年に、ミーアは一瞬考えて……。
「ああ、ビアウデット伯だったかしら……。自制的な方で助かりましたわ」
「寒さに強い小麦の件と言い、感謝の念に堪えないと、父が申しておりました」
「はて、感謝……？」
きょっとーん、と首を傾げるミーアであったが……。
――ああ、もしかして、ティオーナさんのお父さまと同じタイプの……。
っと納得し、いささか頬をひきつらせつつも、
「ま、まぁ、苦しゅうない、ですわ」
余裕たっぷりに返事をする。
続いてミーアの前に表れたのは、一足先に帰っていたレアだった。
「お疲れさまです、ミーアさま。この度は、父のことで、大変なご迷惑を……」
「いえ、ルシーナ司教にはお世話になりましたわ。それに、お母さまのレベッカ夫人、あの方は、とてもお料理上手ですわね。堪能いたしましたわ！」
美味しいものは、すべてのいさかい、わだかまりを洗い流すカギなのだ。特に甘いものと、美味しいキノコの類は、効果抜群だ。ミーアの中では、そうなっているのだ。
そんなわけで、たいそう穏やかな顔をしているミーアに、レアは安堵した顔を見せた。
「それよりも、回遊聖餐のお勤め、無事にやり遂げたんですわね」

ミーアとしては、むしろ、レアには感謝の気持ちのほうが強い。
「そうね。レアさん、お疲れさま」
「あっ、ラフィーナさま……」
ミーアの後ろから現れたラフィーナに、レアはピンっと背筋を伸ばして、やや緊張した顔をした。
「ラフィーナさまの偉大さを学ばせていただきました。民のひとりひとりが、心からラフィーナさまを慕っていて……。お会いできないことを残念がっていました」
「そう……」
ラフィーナは優しい笑みを浮かべて頷いた。
「みなさん、手に手に天使の格好をしたラフィーナさまの肖像画を持って出てこられたのですが……私が代わりにサインを書くわけにはいかずに……。握手会だけは代わりにさせていただきましたが……」
「……そ、そう」
ラフィーナは……少々、ひきつった笑みを浮かべて頷いた。
っと、不意にレアは表情を引き締めて……。
「ラフィーナさまもいらしていただけたなら、ちょうど良かったです。ミーアさま、回遊聖餐に参加したことで、実感したことがあるのです。後で、生徒会室のほうまで来てください。ラフィーナさまもぜひ」
「あら……なにかしら……？」
どこか真剣な顔をするレアに、首を傾げるミーアであった。

第二話　レアの相談

レアについて、ミーアとラフィーナは生徒会室へとやって来た。
「お疲れのところ申し訳ありません。ミーアさま、ラフィーナさま」
頭を下げるレアに、優しく微笑み返し……。
「いいえ、構いませんわ。あ、そうだ、アンヌ、申し訳ありませんけれど、この後、すぐにお風呂に入れるよう、準備をしておいてちょうだい」
「かしこまりました、ミーアさま」
アンヌは、ドン、と胸を叩いて請け負った。
「セントバレーヌで手に入れた、新しい香油をお試しいただけるよう用意しておきますね」
ミーアの美容と入浴には余念のない忠臣アンヌである。旅で少しばかり荒れたミーアのお肌のケアをすべく、忠臣の鼻息は荒い。帝国の叡智の美肌（ビューティフルミーアスキン）の品質は、アンヌの手にかかっているのだ。
実に頼りがいのありそうな顔で出て行くアンヌを見送り、それから、ミーアは改めてレアのほうに目を向けた。
「改めてレアさん、今回のこと、とても助かりましたわ。ラフィーナさまに来ていただかなければ、こうも上手くすべては片付かなかったでしょうし……」
ミーアの言葉に、ラフィーナも頷く。
「友人の危機に駆け付けることができたこと、すべてあなたのおかげよ、レアさん。本当にありがとう」
なにやら、微妙に実感がこもった……こもり過ぎた口調で言うラフィーナに戸惑いを見せつつも、レアは恥ずかしそうに頬を赤らめた。
「いえ、あの……本当にそこまで上手く代理を務められたか、甚だ不安ではあるんですけど……精一杯、務めさせていただきました」

などというやり取りを終えて、一段落ついてから、改めてミーアは言った。
「それで、お話というのはなにかしら？」
問われ、レアはすぐに真剣な顔をする。
「はい、実は、回遊聖餐でいくつかの村を回ってみた実感なのですが……」
そうして、レアは話し出した。
回遊聖餐での出来事を……。

あの日、セントバレーヌを後にしたレアは一路、回遊聖餐の巡回コースを目ざした。
もともと、レアは、いざとなればラフィーナの代理を務めることになっていたため、今年の順路は熟知していた。
「たぶん、今頃は、あの村に……」
っと、レアから村の場所を聞いた慧馬は、
「心得た。安心して、任せてもらおう」
などと、実に、実に頼もしいことを言い……そして、その言葉の通りに振る舞った。
巧みな馬の乗り手である慧馬であるが、さらに、相棒の羽透を先行させることで、夜闇の中も、馬を走らせ続けることができたのだ。
そうして、極めて迅速かつスムーズにラフィーナとの合流を果たしたレアである。
「レアさん、どうしてここに……？」
目を丸くするラフィーナに、レアは素早く事情を話し、セントバレーヌに行ってもらえるように説得した。
「ミーアさんの危機……。でも……」
っと、ラフィーナは不安げな顔をしたが……すぐに首を振る。
「ミーアさんならば……お一人でもなんとかできるのではないかしら？」
「ラフィーナさま……」

そんな彼女に、レアはギュッと拳を握りしめる。ラフィーナがなぜ、そんなことを言うのか、理解できたからだ。
――私が、頼りないから……。
回遊聖餐の代理を任せられないから……だから、心配だけど行けない、とラフィーナは言っているのだ。が……。
「どうぞ、行ってください。回遊聖餐は、私が勤めます」
胸に手を当てて、レアは言った。震えそうになる声を堪えながら……。
「お任せください。私は……中央正教会司教の娘……いえ」
一度、ギュッと目を閉じて……それから、真っ直ぐにラフィーナを見つめる。
「私は、セントノエルの生徒会長をミーアさまから継いだ者です」
こんな大口を叩いて失敗したらどうしよう……そんな弱気の声を無理やり飲み込み、レアは笑みを浮かべる。
「大丈夫ですから……。行ってください、ラフィーナさま」
「レアさん……」
ラフィーナはジッとレアの顔を見つめてから……。
「無事に務めを果たせるように祈っているわ、レアさん」
「ラフィーナさまも……。そして、どうか、セントバレーヌでの騒乱が無事におさまりますように、祈ります」
そうして、二人は別れた。

さて、そんなやり取りを経て、ラフィーナを送り出して後、レアは回遊聖餐の司式を執り行うことになった。
「ラフィーナさまの代理で、回遊聖餐に参りました。レア・ボーカウ・ルシーナです」
レアを出迎えた村の神父は一瞬、心配そうな顔をして……。
「ラフィーナさまに、なにかございましたか？　お体の調子が優れないとか、あるいは……」
「いえ、ラフィーナさまは、どうしても欠かせぬお勤めを神からい

ただき、そちらに出向かれました」
回遊聖餐はれっきとした中央正教会の儀式だ。
村々を回って、美味しいお食事を一緒にいただくだけの楽しい楽しいイベントごと……などと、どこかの大国の姫殿下は想像するかもしれないが、決して、そんなことはない。
それは、統治者と民との絆を深めるための、神聖典の記述に基づいたものなのだ。
ゆえに、もしも代理を立てる際には、それ相応の理由が必要となる。
ともあれ同時に、儀式は厳守すべきものであって、死守すべきものではない、というのも、彼らの常識として根付いているものであった。厳しく守らなければならないが、死んでまで守る必要はない。重大な事態が起きた時には、そちらを優先しても良いし、神からそのような命を受けることもある、というのが、彼らの認識だった。
ゆえに、レアからそれを聞いた神父は、穏やかな顔で頷いてから、
「そうでしたか……。ようこそおいでくださいました。どうぞ、村の代表者たちがお待ちです」
そうして、レアを優しく迎え入れてくれたのだが……。

第三話　獅子味……漏れ出……さない！

「ようこそ、いらっしゃいました。レアさま」
村長を名乗った老人は、穏やかな笑みを浮かべて頭を下げた。礼を返したレアは、ふと、村長の手に一枚の絵が抱えられていることに気づいた。その視線に気づいた村長は、慌ててそれを背中に隠し……。
「え、ええと、これはその……ラフィーナさまのサインを孫に頼まれまして……」
ちょっぴり早口で言う村長である。
レアは穏やかな笑みで頷いてから、
「申し訳ありません。ラフィーナさまは事情があって……」
「はい。神父さまにお聞きしております。レアさま、ようこそ、我が村へ。歓迎いたします。今宵、我が村の祝宴にご参加いただけること、心よりお喜び申し上げます」
それから、村長は、わずかばかり表情を曇らせて……。
「しかし、申し訳なきことながら、今宵の食事は例年に比べ、いささか少なくございます。これは、農作物の不作によるところゆえ……」
村長の言葉の意味を、レアは正確に読み取った。
――なるほど、つまり来たのがラフィーナさまではなかったので、食事が粗末になったのではない、とそう言いたいんだ。……
ラフィーナとレアとで扱いに差をつけることはない、すなわち、レアを軽視するのではない、と彼は言いたいのだろう。
逆に言えば、そう誤解されかねないほど、使える食料が限られているということなのだろう。
そんな事情を察して、レアは優しい微笑みを浮かべる。
「心得ております。元より、ラフィーナさまはおっしゃったはずで

す。今年は農作物の不作ゆえ、回遊聖餐の食事の準備には、できるだけ無理のないように、と。私も事前に聞かされていますから」
それから、村長をいたわるように続ける。
「しかし、この辺りの村でも、やはり不作は深刻なのですね」
レアの問いかけに、村長は眉をひそめた。
「はい。農作物の不作による食料不足で、村の者たちが心配しています。本来であれば……」
っと、なおも続けようとする村長を、レアは片手で制した。
「先ほども言いましたが、状況は理解しています。そして、どうぞご安心ください。小麦が足りなければ、すぐに助けが届きますから。どうぞ無理なさらずに、お知らせください」
そのレアの言葉に、村長は、おお、と声を上げた。
「それに、食料不足や飢饉の回避について、現在、我がヴェールガのセントノエル学園とティアムーン帝国の聖ミーア学園が共同で、プロジェクトを立ち上げたところです」
「はて……聖ミーア学園……？」
途端に、村長は不審げな顔で首を傾げる。
「はい。ティアムーン帝国のミーア皇女殿下の肝いりで、帝国に建てられた学園です。寒さに強い小麦の開発など、飢饉対策に力を入れていて……」
「それは……その、大丈夫なのでしょうか？」
「大丈夫……とは？」
首を傾げるレアに、村長は言った。
「聖ミーア学園という、その怪しげな学園のことです。そもそも、学校に自分の名前をつけるというのは、浅ましい自己顕示欲のように思えますが……。セントノエルとの共同研究も、もしや、その学園が名を売るために利用しようとしているのかも……。そのような学園と共同で何かをするというのは、セントノエルにとってはマイナスとはなりませんか？」

っと……そこまで聞いたところで、ミーアは……、
――ですわよね！
心底、村長に同意した！　我が意を得たり、と言った感じだった！
――まさに、その通りですわ。なぜ、学園にわたくしの名前がついているのか……前々から、気になっておりましたわ。こんな学園を建てたら、目立ちたがり屋だと思われるに違いない、と心配したものですけれど……。その村長さんの気持ちがよーくわかりますわ。
胸中でうんうん、と頷くミーアである。
「なるほど……そんな感じで、共同プロジェクトにも懐疑的だったと、そういうことですわね？」
「はい、そうなんです。ミーアさまのセントノエルでの素晴らしい振る舞いなどを教えようとしたのですが、言葉の拙い私では、わかってもらえたかどうか……」
「いえ、それはレアさんのせいでは……」
っと、ミーアがフォローを入れようとしたところで……。
「そう……そういう無理解は、やはりよくないわ……。やはり、私が直接行って、わからせ……」
「それは、許せないわー」
っと、なにやら獅子味が漏れ出したような気がした、まさにその瞬間、意外な声が響いた。
「あら、オウラニアさん、いつの間に……」
いつの間にやってきたのやら、背後に立っていたオウラニアは、むぅーっと頬を膨らませ、
「そんな物わかりの悪いヤツにはー、八目ウミヘビのモツを口に突っ込んでー」
「……おっ、オウラニアさん！」
ラフィーナが、焦った声を上げた。
「はい？　なんですかー？　ラフィーナさまー」
きょっとーんっと小首を傾げるオウラニアに、ラフィーナは、
「民に……いえ、誰にでも、そのような乱暴なことは、してはいけ

ないわ……絶対に」
なにやら、ものすごぅく実感のこもった声で言うラフィーナであった。
「そうですよ、オウラニア姫殿下。第一、八目ウミヘビは珍味として有名ですし、そんなに罰にはならないじゃないですか？」
「えっ……？」
信じられない物を見た、と目を見開いて、レアのほうを見るラフィーナ。
「えっ……？」
一方、レアのほうは、心底、不思議そうな顔で首を傾げた。
レアのような、ご令嬢であっても、珍味の色に染めてしまう……セントバレーヌは恐ろしい場所なのだ。
「あらー、レアちゃんは八目ウミヘビの味は知ってるのねー。さすが、釣り好きのリオネルくんの妹さん。なかなか、ツウだわー」
なぁんて、感心している。
まぁ、それはともかく……。
「それより、聖ミーア学園とミーアさまの存在を事前に、周知させる必要があるのではないかと思います」
「ええ、それは、大切なことね。具体的にはどうしようというのかしら？」
気を取り直して、問いかけるラフィーナに、レアは深々と頷き、
「パライナ祭を復活させるというのは、いかがでしょうか？」
厳かな口調で言った。

第四話　パライナ祭とは……

「はて……パライナ祭というと？」
きょっとーんと首を傾げるミーアに、ラフィーナがちょっぴり嬉しそうな笑みを浮かべて言った。
「パライナ祭は、ヴェールガ公国の神聖図書館、初代館長、聖人パライナに由来するお祭りよ。七年に一度、行われていたの」
瞳を閉じて、胸に手を当て、ラフィーナはそらんじる。
「我らはともに神に造られた人間。助け合い、共に前に歩み続ける者。ゆえに、有益な知識は独占せず、すべての国、すべての民に共有されるべき、と……。そのような考えのもと、各国の知識人や教育者を集めて情報交換する場を作っていたの。もちろん、祭りに参加できるのは、そういった一部の人たちだけじゃない。各国の民も招かれていたし、その恩恵にも与っていた」
仮に、なにか革新的な技術を発見したとして、それを独占できるのは最長で七年間。それ以降は、人類全体の革新のために情報を共有せよ、と……それは、そのような発想のもとで行われるものだった。
「もっとも、それが行われていたのは、今から二十年前まで。それも、形ばかりで、各国ともに一切を秘匿することなく、とはいかなかったようだけど……」
そこまで言ってから、ラフィーナはレアのほうに目を向けた。
「それを復活させる、と……？」
「はい。ただ、昔と同じ形で復活させるのではありません。知識人を招くのではなく、各国の代表的な学校が共同で行う催しの形でするのはどうか、と思いまして……」
セントノエルを真似て、学校を作ろうとしたのは、なにもミーアだけではない。サンクランドやレムノ王国はもちろん、他ならぬテ

ィアムーン帝国にもいくつかの学校が存在している。代表的なのは、ブルームーン家、グリーンムーン家が共同出資した学校だ。
　その他の国々にも大小さまざまな学び舎は存在している。それは、ひとえに、セントノエルに招かれなかった貴族の子弟たちの心情を慮ってのもの。セントノエルに通う者たちをうらやむ彼らの心を慰めるためのもの。
　また、中央正教会も学校の設立を推奨している。場合によっては、その地に派遣された司教が中心となって学校を建て上げることも、ままあることであった。
「なるほど、かつては各国知識人の情報共有の場であったパライナ祭を、各国の学校の情報共有の場として執り行うと……。そして、その学校の中にはもちろん……」
「はい、聖ミーア学園にも協力していただきます。そして、そこでミーア学園の存在をアピールするのはどうか、と……」
「なるほど、寒さに強い小麦を生み出し、大陸から飢饉をなくすという、ミーアさんの崇高な志を世に示すのね。それに、平民や貧しき民にも教育を施すという学園の在り方も、中央正教会の考え方に一致する……でも」
　っとそこで、ラフィーナは難しい顔をする。
「問題は、神聖図書館の館長の同意を得られるかどうか、かしら……」
　その言葉に、レアも小さく頷いて……。
「はい。私もそれが懸念点でした」
「はて……？　どういうことですの？　なぜ、図書館館長の同意が？」
　首を傾げるミーアに、ラフィーナが腕組みして……。
「パライナ祭は、その始まりの経緯から、神聖図書館の協力が不可欠のものなのだけど……神聖図書館は中央正教会からの独立性の高い組織なの。仮にお父さま……ヴェールガ公爵であっても、言うことを聞かせられるとは限らないのよ」

「まぁ、ラフィーナさまのお父さまでも……それはなかなか、難儀なことですわ」
「しかも、パライナ祭が取りやめになって経緯も問題なの。有名無実化していた祭りを嘆いた嘆いた当時の館長が、自ら取り止めを命じているから、再開するとなれば、それ相応の説得の材料が必要になるかもしれない」
ラフィーナの言葉に、レアが複雑そうな顔を見せた。
「現図書館長のユバータ司教はお父さまの旧知の人です。なので、その方向から話を持って行っていただくことも考えられなくはないのですが……。父と懇意ということは、必然的に……」
「ああ、なるほど……。少なくとも味方とは言い難い方と……そういうことかしら？」
もしかすると、例のルシーナ司教が手紙を出していた友人の一人であった可能性もあるかもしれない。ならば、ミーアの存在を好ましく思わない可能性もあるわけで……。
「かといって、勝手に別のお祭りをするわけにもいきません。これは、あくまでも、伝統あるパライナ祭としてやらなければ意味がないことなので……」
目的は、あくまでも聖ミーア学園並びにミーアが『伝統あるヴェールガの権威』によって認められることだ。もしも、新しく自分たちで祭りを始めるだけならば、ラフィーナが一言、ミーアは素晴らしいお友だち！　と宣言する以上の効果はないだろう。
それはそれで、効果はありそうだし、ラフィーナは嬉々として……ウッキウキで、やりそうではあるが……。
――その場合、学園の名前に自分の名前を使う自己顕示欲の強い皇女に、人の良い聖女ラフィーナが騙されている……なぁんてことを言われる可能性もありますわね……。ううぬ……それは確かに、共同プロジェクトを邪魔する者たちが現れるかも……。
逆に、パライナ祭をするのであれば、その場で、共同プロジェクト開始の宣言をしてしまうことだってできるかもしれない。

――まぁ、聖ミーア学園の存在を知らしめることは、確かに大切なことかもしれませんわ。セントノエルと並び立つ学園なのだと事前に知らせておかなければ、セントノエルの名声を利用しているだけ、と取られかねないわけですし……。

そこまでは理解できるが……ミーアには一つだけ懸念があった。それは……。

――問題は、聖ミーア学園の本当の姿を見せてしまって良いのかどうか、ということですわね。

ミーアにとって、聖ミーア学園とはミーアエリートが集う魔窟である！　七色に輝くミーア木像などを、嬉々として飾っているような連中の巣食う場所なのである！

そのような場所の存在を高らかに、朗らかに……ヴェールガに知らせても良いものか……ミーアとしては甚だ疑問なわけで……。

――下手に学園の生徒たちを見たら、ますます悪評が立ってしまう可能性もございますわね。どうしたものかしら……。

いまいち、気が進まないミーアであった。

第五話　帝国の叡智（風呂脳）の思考

生徒会での会合を終えたミーアは、早速、行動に移る。

……そう！　待望のお風呂である！

やはり、旅から帰って一番にすることといえば、これだ。旅の汚れや汗を洗い流し、すっきりしないと、落ち着いて考えごともできないではないか！

「アンヌにお願いしましたけど、もう準備できているかしら？」

季節はすっかり夏間近。日差しはそれなりで、汗がしっとりと肌を湿らせている。早く、あっつぅいお湯で洗い流したいところだった！　ミーアは熱めのお風呂が好きな、帝都っ子なのだ。

「しかし……今日はまだ暑いとはいえ、今年も来年も不作は続くんでしたわね……。そして、今年の終わり頃には、わたくしは革命軍の手に堕ちて……」

ふと、ミーアは廊下に目を移す。かしましく廊下を通り過ぎていく下級生たち。それを目で追いながら……、

「結局、わたくしは卒業できませんでしたけど……よくよく考えると、あと一年半で卒業なんですのね……」

なんだか、名残惜しくなってきてしまうミーアである。

「卒業すれば、気軽にみなで集まって、ということもなくなってしまうわけで……少し寂しい気もいたしますわ」

それを思うと……レアの提案も、そこまで悪くはないような気がしてきてしまうのだ。

要は、思い出作りのようなものであるが……セントノエルとミーア学園、それにほかの学校と共同で大きなお祭りを作り上げること……。それはきっと忘れられない、楽しくて、良い思い出になることだろう。

っと、考え事をしながらも、ミーアは大浴場の脱衣所へ。

「あっ、お待ちしていました。ミーアさま」
そこには、すでに、アンヌが準備万端で待っていた。その手に持った桶には、いつもの洗髪薬のほか、お肌の手入れ用の香草入り油のビンと、セントバレーヌで新しく仕入れた垢すり、花の香りのする石鹸などが揃っていた。
「うふふ、お待たせしましたわね、アンヌ。では、早速、参りましょうか」
ミーアは流れるように、ぽぽいっと服を脱ぐと、颯爽と大浴場の中に突撃する。その大きなドアをばばーんっ！　と開けた瞬間……。
「あっ、ミーアお姉さま……」
驚いたような声が、ミーアを出迎えた。
ふと見れば、大浴場には先客がいた。
広い浴槽の中心付近、その身をお湯に沈める少女、しっとりと濡れ艶やかな輝きを放つ、ミーアと同じ白金色の髪、青く澄んだ瞳は、ミーアの姿を見て、わずかばかり嬉しそうに細められていた。
「お帰りなさい。ミーアお姉さま」
ミーアの祖母、パティはいつもと変わらぬ感情の乗らない声を、ほんの少しだけ弾ませて言った。
「うふふ、ただいま帰りましたわ。パティ。それに、ヤナも」
ミーアは、パティの隣に視線を送る。っと、長い髪を頭の上にまとめたヤナが、少し慌てた様子で立ち上がろうとした。
「ああ、ここでかしこまった態度は不要ですわ。一糸をもまとわぬこの場所では、王も貴族も民もなく、ただ人と人とがいるばかり……。ですわ」
聖女の言葉をまるパクリして、ちょっぴり聖女っぽい雰囲気を醸し出しつつも、ミーアは、ヤナの後ろへと視線を転じた。
「ところで、そちらにいる子たちは、今年から、特別初等部に入った子たちですわね」
パティとヤナの後ろには、二人に隠れるようにして、三人の少女たちの姿があった。

「ええと、確か……、あなたが帝国出身の……」
などと、少女たちの名前と出身地を言い当てていく。そう！　当然のことながら、ミーアはその全員の名前を憶えている。出身地もセットでだ。
なにしろ、帝国出身の孤児が万が一にも悪いことをしたら、大変だからだ！
民が悪しき行いをするのは統治者の責任……とかなんとか、みなの前で言ってしまった手前、後には引けない。
問題がないように、きちんと把握しておかなければならないのだ。
一方で、名前を呼ばれた子どもたちは、ポカンと口を開けた。帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンは、生徒会長の座を退いたとはいえ、このセントノエルの重鎮だ。しかも、あの大国ティアムーン帝国の皇女殿下なのだ。そんな人に名前を知られているというのが、信じられなかったのだ。
「もしかして、パティたちが先輩として、その子たちにお風呂の使い方を教えていたとか、そんな感じかしら……ふむ……しかし、それにしては妙な時間にお風呂に入っておりますわね。あ、もしかすると、他の貴族令嬢たちと鉢合わせにならないように気を使ってるとか、そういうことは……」
「いえ……その」
っと、ちょっぴり言葉を濁してから、パティは微妙に言いにくそうな顔で、
「実は、今日、ハンネスがくるってお手紙が届いて……。だから、お風呂に入っておこうと思って……ええと……」
「ああ、なるほど。ハンネス大叔父さまが……」
どうやら、ひさしぶりに弟に会うので身綺麗にしておこうということらしい。
パティの弟、ハンネスは、自らの病気の治療薬である「水土の薬」を探すために、ヴァイサリアンのルーツを探っていたはずだったが……。

「わざわざセントノエルに来るということは、なにか調査に進展があったと考えるべきかしら……？」
お風呂の近くでは、地形補正が入り、ミーアの脳みそは回転数を増していた。
そのまま考え事をしつつ、アンヌに髪を洗ってもらいながら、ミーアは考え事を続けるのだった。

第六話　帝国の叡智（風呂脳）は、冴え渡り……

さて……。

頭と体を洗ってから、ミーアは素早く湯船に身を沈めた。

「ああ……いいですわ……」

馬車の中で、硬くなった体をポキポキ言わせながら伸ばし、伸ばして、ほぐしていく。

ポカポカ、体の芯まで温められていく感覚に、思わず、おーふっと息をこぼす。そう……、忘れがちなことではあるが、ミーアは大人のお姉さん。旅の疲れは、こうしてすっかりケアしておかないと、二日後、三日後に筋肉痛が出てしまうのだ。

……大人のお姉さんなのだっ！

「うふふ、やはり、こうたくさんのお湯に身を沈めるのは、たまりませんわね」

「そうですね、ミーアさま」

ミーアの隣には、アンヌの姿があった。

一瞬、遠慮しそうな仕草を見せたアンヌだったが、お風呂の隅で心なしか、居心地悪そうにしている子どもたちのほうを見て、かえって堂々とお湯に浸かっていた。

親しき仲にも礼儀は必要だ。ミーアの忠臣、腹心とは言っても、そこには主従の関係がある。だから、こうして同じ湯船に浸かることを当然の特権だなどと思ってはいけない、と普段からアンヌは思っていた。

でも……同時に、アンヌは、こうも思っていた。自分の主が、弱き者たちを慈しむ人であると……孤児たちに気を使わせるようなことを好まない人だと……そう示すことこそが、今は必要なのではないか、と。

だからこそ、アンヌはあえて親しげに、ミーアと接する。自らの

主の慈悲深さを、優しさを見せるように振る舞うのだ。
そんなアンヌの意図を知ってか知らずか、ミーアは子どもたちに声をかける。
「あなたたちも、もっとこちらで温まったらよろしいですわ。セントノエルのお風呂は本当に素晴らしいのですから、味わっておかないと損ですわよ？」
久しぶりの広いお風呂に、ミーアの機嫌はすこぶるよかった。
声をかけられた子どもたちは、パティとヤナの顔をうかがって、それから、おずおずと浴槽の中に入ってくる。それを見ながら、ミーアは心の中で小さく唸った。
――しかし、この子たちも当然のことながら、孤児院で面倒を見てる子どもたちなのでしょうけれど……やっぱり、あまり良い環境で暮らしていなさそうですわね。
今年、特別初等部に迎えた少女たちは四人。どの子も少しやせ気味で、かつて新月地区で見たワグルに似ていた。顔にもどこか生気がなく、肌艶もまだ悪い。
去年、入学してきた子どもたちよりも、もしかしたら、貧しい地域から来たのかもしれない。痛々しくもあるその姿に、ミーアは思わず考えてしまう。
――この子たちが革命の種火として、蛇に使われたかもしれないと考えると……こうしてセントノエルに保護できたのは良いことですわね……。種を蒔き刈り取る、ということから考えると、これは、特別初等部という種蒔きの実りということができるのかも……。
ミーアは、ここに来て気付く。
なるほど、種を蒔けば実りはある。悪い種を蒔けば悪い実を、けれど、良い種を蒔けば良い実を刈り取ることになるわけで……。
お湯に浸かり無邪気に笑う子どもたちの姿は、将来の良い実りを確信させるものだった。
それは、良い。だが……ミーアはふと、一つの問題に思いが至る。
それは……。

――しかし、これをセントノエルで賄うには、手が足りない……かもしれませんわね。ミーア学園も似たようなことをして、孤児院から子どもたちを入学させていますけれど、やっぱりそれでも足りませんわ。

種を蒔けば収穫はあるもの。されど、少なくしか種を蒔かないのであれば、その収穫もまた少ないというのも真理。

――ふぅむ……しかし、それをすべてわたくしがやるというのも……なかなかに大変ですし……。

ミーアは、できればサボりたいのだ。自国のことは自国でなんとかしてもらいたいし、ティアムーンのことは、ルードヴィッヒらになんとかしてもらいたいと思っている。

切に思っている！

ゆえに……。

――そのために、今度のパライナ祭を、使えないかしら……？

ポヤァッとお湯に浸かりつつ、ミーアは考える。じっくりとお風呂のお湯で温まった脳みそは、ぎゅんぎゅんと良い感じに回っていた。

――この子たち……踏みつけにされた弱き者たちが革命の種火になり得ると訴えかけるのでは、おそらくダメですわね。

ミーアと同じように危機感を持っては貰えるだろうが、逆に弾圧に走る者もいるだろう。締め付けを厳しくし、反抗する気が起きないように、と……。そうなってしまっては目も当てられない。

その発想では駄目なのだ。そうではなく……。

「八目ウミヘビというのが、とっても美味しくて……」

っと、その時だった。ミーアの耳にアンヌとヤナの会話が聞こえてきた。

「ああ……あれ……。見た目は怖いけど、美味しいですよね」

「そうそう。ふふふ、あんな見た目なのに、肉がホロホロしてて」

楽しそうに会話をする二人。

――うふふ、確かに。美味しかったですわね……。八目ウミヘビ

……。

っと、口をにんまりさせつつも……ミーアはさらに思い出す。先ほどのやり取りを。

村長の口に八目ウミヘビのモツを突っ込むと言うオウラニアに対して、レアは、それは美味しいから罰にならない、と言った。

――料理すれば美味しくなるから、そんなことをしてはもったいない……。もしかすると……これと似たようなことなのではないかしら……？

マイナスに思えるもの、あるいは、無価値に思えるものが、実は価値があるものであると知ったなら……おのずと扱いは変わっていく。

路傍の石だと思えばこそ、踏みつけ、蹴り上げてもなんとも思わないが……もしも、それが宝石の原石であるかもしれないと知れば、そうそう祖末には扱えない。かえって大切に磨き上げ、その真価を見極めようとするかもしれない。

よしんば、磨き上げたそれがただの石であったとして……労力を割いて磨き上げたものには愛着だって湧くだろう。

であれば……。

――ミーア学園の功績をアピールすることによって、平民に教育することの価値を説く……。彼らが原石であって、そこから価値が生み出されるかもしれないと……各国に知らしめること……。それをするためにならば、パライナ祭には十分、意味があるかもしれませんわ。

ミーアエリートの魔窟、聖ミーア学園の存在を世界にアピールする……などというアレな目的はさておくとして、パライナ祭に関しては、案外、悪くはないのかもしれない、とミーアは考え始めていた。

そう……やはり、お風呂は偉大なのだ。ミーアの脳みそは地形効果で、確かに冴えていたのだ！

そうして、パライナ祭に対して、ちょっぴり前向きになれたとこ

ろで、ミーアはお風呂を上がった。

アンヌの揃えてきた入浴セットは、実にお見事なものであった。

お風呂から上がる頃には、ミーアは、すっかり、つやつやになっていた。

月の女神のよう、とはいかないまでも、「海」に浮かぶ美しき「月」略して海月のようなすべすべのお肌と名馬のごとき艶やかな髪は少なくとも取り戻していた。

そうして、身綺麗になったミーアは、パティと連れ立って、ハンネスを迎えることになったのだが……。

第七話　進め！　ハンネス探検隊！！

寮内の迎賓室にて、ミーアたちは、ハンネスを迎えることになった。

ちなみに、パティはもちろん、ベルとシュトリナも同行している。シュトリナは、蛇関連の助言をもらうため、ベルはハンネスの冒険譚を聞くためである。

「ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下。ご令嬢方も……」

やって来たハンネスは、深々と頭を下げる。相変わらず、その姿は若々しい。ミーアの父より年上とはとても思えない。せいぜいが二十代半ば……場合によっては十代に見えそうなほどに、若々しい生気に溢れている。

だからだろうか、ハンネスとパティを見ると、親子、もしくは、年の離れた兄妹に見えるので……。

「お元気そうでなによりです。姉上」

「ハンネス……ここでは、蛇の監視があるわけではないのだから、別に、お姉ちゃんって呼んでくれても……」

そんなやり取りを見ると、一瞬、頭が混乱してしまうミーアであったが……それはさておき。

「ご機嫌よう、ハンネス大叔父さま。歓迎いたしますわ」

ニコやかに微笑みながら、お茶菓子を勧めるミーア。ちなみに、それは、ラーニャ姫が市場で見つけた、南国のドライフルーツだった。

本来は赤い棒状の果実らしいが、皮をむくと中からは白い果肉が現れるとか。

果肉を薄く切って干したものは、少々、黒ずんではいるものの、大変甘い代物で、ミーアのお気に入りになっていた。

早速、それを口に入れつつ、ミーアは尋ねる。

「それで、今日はどのような用向きでいらっしゃいましたの？　例の、ヴァイサリアンの故郷、霧の海の話かしら？」
　水を向けられて、ハンネスは少しだけ真面目な顔で頷く。
「ええ。その霧の海のことです。ええと……あの、ヴァイサリアンの姉弟は、ご一緒ではないのですか？」
「ああ、ヤナとキリルですわね。ええと……」
　っと、ミーアの意を汲んで、ササッと出て行ったのは腹心のアンヌである。数分後、ヤナとキリルを連れて戻って来たアンヌは、ササッとテーブルの上のお茶菓子を確認。お皿が半分空になっているのを見て取って……。
「ミーアさま、食堂のスタッフの方に聞いたのですが……今夜のメニューは十種のキノコシチューだとか……」
「ほほう……！」
　ミーア、すかさず、お茶菓子のお皿に伸ばしていた手を引っ込める。そんな主従の愉快なやりとりを尻目に、ハンネスは話し出した。
「やはり、ヒントはあの曲でした。それも後半の……君が歌ってくれたところだ」
　それから、ハンネスはヤナのほうに目を向けた。
「君の母上は、やはり、ヴァイサリアンの族長の直系に近しい人だったのだろう。本来の音階とヤナ嬢が歌ってくれたもの、その差から導き出された数字が大きなヒントだった」
　言いながら、ハンネスはテーブルの上にガレリア海の海図を広げる。
「初代皇帝の碑文がある島……現在、ヴェールガの調査団が拠点として使っているあの島が、ここです」
　ハンネスは、地図の一点を指さし、
「ここを起点として、音階から導き出された地点を算出し……」
　っと、指で印をつけていく。
「さすがは海洋民族と言われるだけあって、彼らの測量は恐ろしいほどに正確でした。あるいは……それもまた蛇の知識なのやもしれ

ませぬが……」
難しい顔でそう言ってから、ハンネスは首を振った。
「ともあれ、私と、ヴァイサリアン族の精鋭船乗りは、ついに辿り着いたのです。霧の海……ヴァイサリアンの隠れ里へと！」
そうして語られるは……ベルが目を輝かせる大冒険だった！　大冒険！　だった！
上陸したのは、数多の船が沈む死の海岸線。幽霊船と見まごうばかりの海賊船を横目に、ハンネスたちはゴツゴツとした岩場に上陸。黒い岩を踏み越えて向かった先は、霧にけぶる森だった。
グネグネと人をからめとり、食べてしまう食人植物！　人体ほどの太さがある大蛇！　船を丸呑みにするほどのワニが闊歩するその森を抜け……さらに、太い川では巨大人食い魚を殴り飛ばし……っと、そこまで聞いてミーアは……そーっとパティに耳打ちする。
「パティ……その、あなたの弟って、もしかして、少しばかり話を盛る癖があるのではないかしら？」
パティは、パチクリ、と瞳を瞬かせてから……。
「……いい子だけど、少し、調子に乗りやすいところは否めない……いい子だけど」
なぁんて言っていた！
ハンネスの話を五割引きで聞くことに決めるミーアであった。

さて、ハンネス探検隊は、ついにヴァイサリアンの隠れ里に辿り着いたのだという。
「里というよりも、そこは、一つの都と呼んでも差し支えのない場所でした。石造りの家が建ち並び、神殿のような建物もある、まさに王都。ですが、そこはすでに人が住まなくなった、死の都でした」
そうハンネスは、沈んだ声で言った。
「生き残りがいれば話を聞くこともできたのでしょうが……ただ、新しい発見もありました」
「と言いますと……？」

「いくつかの文書が、発見されたのです。神殿の地下に続く迷宮で……」
やや熱っぽい口調で語られる冒険譚。熱心に目を輝かせるのは、ベルだった。
「おお……すごい。いつか、ボクも……」
なぁんて、熱い吐息をこぼしているが、まぁ、それはともかく……。
「地下迷宮の奥深くにその古文書は残されていました。陶器の瓶に入れられていたからでしょうか……。保存状態は良く、十分に読むことができるものでした」
「まぁ！　それでは……」
とそこで、ハンネスはゆっくりと首を振った。
「もっとも、解読はできませんでした。それは、今は使われていない、古の文字によって記されていたからです」
「古の文字……？」
「はい。古代帝国語でもなく、ヴァイサリアン族の伝統的な文字とも違う。大陸共通語とも異なる古き文字です」
「未知なる言語……」
「もしかすると、あの「地を這うモノの書」の原文ということもあるかもしれません」
「もともと水土の薬の作り方は、蛇の者たちが知っていた……。それが、地を這うモノの書の原書に近いものだとすれば、手掛かりはあるかもしれない」
しかつめらしい顔で言うパティに、一つ頷き、ハンネスはミーアのほうに目を向けた。
「そこで、ぜひともラフィーナさまにお力添えをいただきたいと思いまして……」
「あら、ラフィーナさまですの？　それはどのような……」
突然のことに、ミーアは首を傾げる。っと、
「ヴェールガ公国は、中央正教会の本拠地。古の時代より、地を這

うモノの書に対抗するため、その全容を明らかにするために、各地の古文書や知の集積に積極的であったとお聞きしています。そして、中央の図書館には、地を這うモノの書の写本のような、危険性の高い書物も焚書にせず収められ、研究されているとか……その図書館に、発見された文書の解析をお願いしたいのです」

「なるほど……ヴェールガ公国の図書館……ふむ？」

聞き覚えのあるその施設に、ミーアは思わず首を傾げる。

「……それは、もしや、パライナ祭と関係が深い神聖図書館のことかしら？」

第八話　ミーア姫の原点回帰……キノコ

その日の夜のこと。
ミーアは早速、ハンネスとラフィーナとの面会の場を設定することにした。
幸い、ラフィーナは急いで公都に帰ることもなく、数日間はこの地に滞在する予定だという。なので、晩餐会の予定を取り付けることは容易だった。
「はじめまして、ハンネス・クラウジウス殿。本当に、お若いのですね」
「ははは、若く見えるだけでございます。実際には、あなたのお父君よりも年上でございますよ。高名な聖女ラフィーナさまと、こうしてディナーをともにできること、光栄至極にございます」
さすがに、クラウジウス侯を継いだだけあって、ハンネスの態度は落ち着いたものだった。
「私も、ミーアさんの大叔父さまにお会いすることができて光栄です」
ラフィーナは涼やかな笑みを浮かべてから……ふと、探るように上目遣いで見つめて……。
「それに……ハンネス殿は、古き蛇の教育を受けているとか……。その点でも、協力できることがあると思っているのだけど……」
「ああ……それはもちろんです」
対して、ハンネスは穏やかな笑みで応じる。
「蛇は私を……それ以上に我が姉を苦しめた……」
パティのほうにチラリと目を向け……それからハンネスはラフィーナを見た。
「ですから、ご協力することは望むところです」
「蛇に復讐をしたい、と……？」

「いえ……。それは、すでに姉が……そして、ミーア姫殿下が成してくださいました。だから、私は、同じように蛇によって苦しめられる人たちが出ないようにしたいというだけです」
その声は相変わらず穏やかで……されど、揺るがしがたい、確固たる意志のような者が窺えた。

そうして、和やかな雰囲気で晩餐会は始まった。
参加したメンバーは、ラフィーナとハンネス、ミーアとパティ、さらに、レアとリオネルも揃っていた。
帝国の重鎮とヴェールガの重鎮とのトップ会談と言ったメンバーではあるが……そんなことよりミーアとしては、本日のお料理が気になって仕方ないところだ。
――十種のキノコシチューには興味がございますわ。はたして、どのようなキノコを使っているのか……ふふふ、最近は珍味に心を奪われることもございましたけれど、やはり、わたくしの原点は黄月トマトと野菜ケーキ……そして、キノコですわ！
色々な珍味を試してはみたが、もしも、明日世界が終わるならば、最後に食べるのは、黄月トマトのシチューと野菜ケーキ、キノコ料理にペルージャンクッキーにカッティーラ、さらに、騎馬王国のミルクに、レムノ王国のウサギ鍋に……。
めくるめく美食メニューが目の前を過り、最後に食べる物をなかなか決められないミーアなのである。
そうして、ウキウキしながら待っていると、ふと、視線を感じる。見ると、ハンネスがこちらを見つめていた。
ミーアは、わずかに考えてから……ポンっと手を打って、
「ところで、ラフィーナさま……。お聞きしたいことがございますの」
「あら、なにかしら……？」
ラフィーナは穏やかな笑みで応える。
――おや？　ラフィーナさま、なにやら、ちょっぴり機嫌が良い

ような気がしますわね……。セントバレーヌでは少し緊張されて、お顔が強張っておられたと思いましたけれど……。まぁ、あの時は一触即発の状況でしたし……それに、オウラニアさんの見つけてきた食材が研究するに値するか精査しなければなりませんでしたしね。気が休まらなかったのですわね。

それに引き換え、ここはセントノエルだ。

きっと慣れ親しんだセントノエルで、心を休めているのだろう。

「ミーアさん？」

「いえ……。ラフィーナさま、これはわたくしが言うことではないかもしれませんけれど、お疲れの時には、どうぞ、気兼ねなくセントノエルにいらしてくださいませ。わたくしは、あと一年半で卒業してしまいますけれど、ここに通う生徒は、みな、ラフィーナさまをお慕いしておりますから」

「……ミーアさん」

ラフィーナは、ものすごぅく嬉しそうな、輝く笑みを浮かべて、勢いよく頷いた。

それから、怪訝そうに首を傾げて……。

「ええと、ミーアさん、私に話したいことというのは、それかしら？」

「ああ、いえ、そうではありませんわ。実はヴェールガ公国の神聖図書館のことなのですけれど……。わたくしたち、帝国の者であっても、収められた本を読むことはできますの？」

「ええ、もちろん、ヴェールガの人間でなくとも入館の希望を出すことは可能よ。可能ではあるのだけど……」

っと、ラフィーナは眉をひそめた。

「どうしてそんなことを？」

首を傾げるラフィーナに、ミーアは一つ頷き、それからハンネスのほうに目を向けた。

ハンネスは、心得た、と口を開いた。

「実は……」

ハンネスの話を聞いて、ラフィーナは難しい顔をする。
「それで、神聖図書館の本を……。それは少し難しいかもしれないわね。特に、地を這うモノの書や、それに類するものの翻訳にまつわることは余計ね」
「と言いますと……？　禁書に類する者も収められている区画だから、限られた者しか入ることができない、ということでしょうか？」
ハンネスの問いに、ラフィーナは深々と頷く。
「簡単に言ってしまうとそういうことです。信用のおける者……あるいは、地を這うモノの書を読んだとしても誘惑されず、感化されて蛇にならない者、そのような方たち以外は、そう言った本には触れられないようになっています」」
それを聞いて、ミーアは腕組みしつつ唸る。
「ちなみに……ラフィーナさまの推薦をいただくというのは……やっぱりなし、でしょうね」
神聖図書館は独立性の高い機関だと聞く。まして、館長がルシーナ司教と同様、ラフィーナが他国の姫と親しくすることを、よくは思わないだろう。
「そうね。あまり意味はないかもしれないわ。まぁ、話しぐらいは聞いてもらえるかもしれないけど……」

そんなやり取りを横で話を聞きながら、レアは、ミーアの言葉の正しさを認めた。
――ミーアさまのお願いで、ラフィーナさまが動く、ということを、あまりしないほうが良いというのは確かなことだ……。
もしも、ミーアを快く思わない者がいるとして、その者が取るべき第一の策は、ミーアとラフィーナとを引き離すことだ。けれど、それができないとなれば、別の策を取るだろう。
すなわち、ミーアとラフィーナを分断するのではなく、ラフィーナをミーアの側につけて、ヴェールガと分断を狙うだろう。
聖女は、ミーア皇女の軍門に下ったと民衆を煽りつつ、ラフィー

ナの耳元で、こんな国を捨てて、帝国に亡命したらどうでしょうか？　とでも囁いてやればいい。

――って、さすがに、そんなに悪辣なことを実行する人は、ヴェールガにはいないと思うけど……。

第九話　合わせて考えるべきですわ！

そこで、ちょうどタイミングよく料理が運ばれてきた。
ほかほかと上がる湯気、漂うは甘く濃厚なミルクの香り。
「おお……」
鼻をひくひくさせながら、ミーアは歓声を上げる。そのホワイトソースからちょこちょこと顔を出すキノコに、目を奪われたからだ。
――あれは、もしや、評判のヴェールガ茸ではないかしら……？
偽ヴェールガ茸と見分けがつきづらいから、なかなか食べることができませんでしたけど……。む、それにあれは旨芽慈茸（しめじだけ）……滋味深い旨味がたまらぬ一品ですわ。それに、あの表面に浮いている緑色の粉……あれは、干した抹茸（まったけ）を粉にして浮かべているのではないかしら……？　風味の中に独特の、お茶のような香りがありますわ。それに……ああ、ふふふ、やはりございましたわね。キノコの王、紫偉茸（しいたけ）……。あれが入ると入らないのとでは、味がまったく変わりますし……。しかし、これで、四種……残り六種が隠れているとは、これは、実に楽しみ……。
まったく、個性の異なるキノコを十種も入れてしまおうという発想にミーアは思わず笑みを浮かべる。
――これは、一杯で十回楽しめるシチューですわ……！
ミーアはニコニコしながら、シチューをすくい、口へと運ぶ。ふわりと香る、濃厚なホワイトソースの甘い風味、抹茸の豊潤な香りが、そこに彩りを加える。たなびく風味と共に、舌の上に広がるのは、実に濃密、重厚な味。熱々のキノコを、ほふほふと舌の上で転がし、歯で噛めば、こりりっと心地よい歯ごたえが口の中に響く。
――おお、これは、実に愉快ですわ。いろいろな心地よさが混然一体となって……うふふ、なるほど。十回楽しめるかと思いましたが、そうではありませんわね。これは……。

ミーアは、うん、っと頷いて……。
「合わせて考えるべきですわね……」
ミーアは上機嫌につぶやいた。
それを聞いていたのは、ラフィーナだった。
ここ最近の出来事で、すっかり心が傷ついていたラフィーナは、他の人が食べるのを待って、様子を見てから、自分が食べる癖がついてしまっていたのだ。どうやら、まともな食材っぽいぞぅっと確認したラフィーナはようやくスプーンを手にとろうとしていたところだったのだが……。ミーアの言葉を聞いて眉をひそめた。
「ええと、それはどういうことかしら？　ミーアさん……」
その言葉の真意を探るように、ミーアを見つめるラフィーナ。だったが……その目が、すぅっと細くなる。
「いえ、なるほど……。つまり、パライナ祭の件と合わせて、神聖図書館長を説得してしまえと……そう考えているのかしら？」
「え？　あ、ええ……そ、そうですわね。もしも、そうできたら一挙に解決できるな、と思っただけで……」
さすがに「キノコシチューのことを考えていました！」などと言えるはずもなく……。ミーアは、とりあえず、ラフィーナの言うことに乗った。
「パライナ祭……？」
目を瞬かせたのは、パティとハンネスだった。ちなみに、あの場に居なかったリオネルは、といえば、すでにレアから聞かされていたのか、訳知り顔で頷いてから、
「パライナ祭というのは、ヴェールガ公国で昔、行われていた祭りです。もしかすると、ハンネス殿はご存じでは？」
「確かに、聞いたことぐらいはありますが……」
怪訝そうな顔をするハンネスに、リオネルが続ける。
「そのパライナ祭を復活させて、ミーア学園の存在を世に知らしめることを、妹のレアが思いつきまして……」
話を振られ、レアが口を開く。

「実は、先日……」
村での出来事、ヴェールガ国内におけるミーアの評判、さらに、ミーア公安の共同プロジェクトのことを説明する。
それを聞いて、ハンネスが感心したような顔をする。
「なるほど、魚を……。さすがは、姉上の孫娘……。素晴らしい発想だ。それでパライナ祭の開催許可をもらうと同時に、図書館長と関係を築き、入館許可ももらってしまうと……」
「そうですね。神聖図書館の館長、ユバータ司教はパライナ祭と関係の深い方……。確かに、一気に解決することはできるかもしれませんが……そのためには、やはり、最低限、パライナ祭の内容を決めて、それで説得しなければなりませんが……」
「ふふふ、心配は無用よ。レアさん」
っと、そこで、ちょっぴりドヤァッとした顔で、ラフィーナが言った。
「合わせて考えるべき、とミーアさんが言っているのだから、ミーアさんには良い腹案があるに違いないわ」
朗らかに友を誇る口調で言ってから、ラフィーナはミーアのほうに目を向けて……。
「そういうことでしょう？」
「……はぁい……ええ、も、もちろんですわ。当然のことですわ！」
ミーア、危うくヘンテコな声を出してしまいそうになり、慌てて修正。それから、水をゴクゴクと飲んでから、検討する。
――確かに、パライナ祭の方針について、先ほど、お風呂で思いついたことは理に適っていたように思いますけれど……。
刹那の逡巡、その後、ミーアは口を開く。
「実は、パライナ祭の件で、一つ、わたくしのほうからも、提案したいことがありましたの」
「提案、ですか？」
「ええ。レアさんの発案では、各国の学校を集めて知識を共有する

ということでしたけれど……」
そこで、ミーアは言葉を切る。扉が開き、お替りが運ばれてきたことを確認。
この難局を乗り切れば、美味しいシチューが待っているぞ！　と自分を励まし、
「レアさんのお考えは、もちろん良いと思うのですけれど、わたくしは、それに加えて、各国の意識を変えるよう、働きかけるものになればいいと思いましたの」
「意識を変える……と言いますと……？」
きょとんと目を瞬かせるレアに、小さく頷いて見せてから……。
「つまり、わたくしとしては、セントノエルの特別初等部、あるいは、我が国のミーア学園のように、平民たちからも広く生徒を取ることの価値を示したいと思いましたの。その生徒たちの功績を示すことで、貴族たちの平民に対する見方を変えたいと思っておりますの。彼らが平民を侮ることがないように……その価値を、しっかりと理解し、適切に扱うようになる、そのきっかけ作りができればいいのではないか、と思っておりますの」

第十話　幸せのネズミ

ミーアはいったん黙って、水をもう一口。それから、みなの顔を見回してから、再び話し出す。

「実はそう思ったのにはきっかけがありますの。先ほど生徒会室でお話した後でお風呂に行ってきたのですけど……」

「え？　お風呂……？　私、誘われて……」

なんだろう、ラフィーナが、なにやらつぶやいているのが聞こえた……ような気がしたが……？

ミーアが目を向けると、ラフィーナはいつもと変わらぬ涼やかな笑みを浮かべて、ん？　っと不思議そうに首を傾げる。気のせいだろうか……？

「それで、特別初等部の子どもたちと一緒に、お風呂を楽しみましたの。うふふ、いろいろとお話もできましたし、なかなか有意義な時間でしたわ。なにより楽しかったですし……」

「楽しかった……」

なんだろう、ラフィーナが、またしても、なにやらつぶやくのが聞こえた……ような気がしたが……？

ミーアが目を向けると、ラフィーナは、やっぱりいつもと変わらぬ涼やかな笑みを浮かべて、なにかしら？　と首を傾げている。やっぱり、気のせいだっただろうか……？

っと、その時だった。

「ミーアお姉さま、ラフィーナさまも、特別初等部の子どもたちと触れ合う機会を作っていただくのが良いかもしれません」

敏感に空気を読んだのは、パティだった！

シュシュッとラフィーナの顔を見て、それから、ミーアの顔を見て、何事か悟ったような顔でパティは続ける。

「なので、セントノエルにご滞在の間に、一緒にお風呂に入る機会を……ミーアお姉さまも一緒に」
「ああ。そうですわね。これは不覚でしたわ。確かに、互いのことをよく知るには、お風呂か食事をするのが一番ですし……」
ミーアが目を向ければ、ラフィーナは、ぱぁあっと嬉しそうな笑みを浮かべて……。
「ええ、もちろん。私も、それが必要だと思っていたの」
なぁんて言うのだった。
まぁ、それはともかく……。
「それで、まぁ、話を戻しますけれど……。お風呂で子どもたちを見て思いましたの……彼らの扱いは、あまり良いものではないな、と」
セントノエルに来てからは、きちんとした食事をしているであろうに、まだまだ細く頼りない体をした子どもたち。あれではかつての新月地区のように、疫病が流行れば、ひとたまりもないだろう。
そして、そのような環境に革命の種は芽吹くもの。ゆえに、彼女らのような子どもたちに救いの手を差し伸べなければならない。
だが……それをするのにセントノエルとミーア学園だけでは、とても手が足りない。
もっと積極的に、各国の王侯貴族たちが介入しなければならない。その必要を、わからせてやらなければならない。
「王や貴族、統治者に連なる者たちは、民を安んじて治める義務を負っていますわ。けれど、すべての者がそのように振る舞えるわけではない。といって、悪徳の貴族をいちいち一人ずつ咎め、罰していくことは不可能ですわ」
「なるほど……。自らの悪徳を隠そうとする者も現れるかもしれませんね」
難しい顔でつぶやくリオネル。その頭には、もしかしたら、父であるルシーナ司教の挫折、ツロギニア王国のことがあるのかもしれない。

「そう、だからこそ、考え方を変えるべきですわ、むしろ、王侯貴族たちに、善を行うことに、利を説くべきではないかしら。弱き者たちを助け、養い、教育することの利点を見せるのが良いのではないかと思っておりますの」

ミーア学園や特別初等部を巣立って行った卒業生が行く先々で活躍し、貴族の目に留まり「よし、うちの領地でも平民に教育を施して、有能な人材を得よう！」と思わせる。

新しく学校が建ち、そこの卒業生が活躍し、それを見た別の貴族が……といった具合に、特別初等部のような場所が増えていく。

――そうなれば、とても楽ですわ。ミーア学園や、わたくし自らが何かする必要はない。巣立って行った彼らが勝手に活躍して、その活躍が他の孤児たちの境遇改善に繋がっていく。革命の種は芽吹かない。素晴らしいことですわ。

ミーアの頭の中に、ふとあるイメージが浮かぶ。

それは、多産な生き物として有名なネズミだ。

ネズミが子を産み、その子が子を産み……と、加速度的に広がっていくイメージ。

――楽して勝手にネズミのように増え広がっていく。ふふふ、幸せのネズミ算ですわね。

「それができれば、特別初等部やミーア学園の取り組みを真似て、いろいろな国でも、孤児たちの境遇が改善されるかもしれない……そういうことね、ミーアさん」

ようやくミーアのイメージが伝わったのか、どこか感動した口調でラフィーナが言った。

「そのとおりですわ。そして、そのために、ミーア学園の卒業生や、特別初等部の子たちの優秀さを示す必要がございますの。パライナ祭は、その良いきっかけになるかもしれませんわ」

聖ミーア学園の卒業生が優秀であればあるほど、あるいは、特別初等部の子どもたちが将来、活躍すればするほど、他国はそのような人材を欲し、平民の子どもたちに目を向けることになるのだ。

「無論、こちらが誠意をもって接したからと言って、相手が誠意で応えてくれるとは限りませんわ。学園に入れ、衣食住を与え、教育を施したとして、貴族にとって価値ある人間になるとは限らない。なにかのきっかけで恨みを持たれることだって、あるいはあるかもしれませんわ。されど……」

ミーアは小さく首を振ってから……。

「されど、少なくともこちらが誠意をもってあたらなければ、相手が誠意で返してくれることはない。これは確かなことだと思いますわ」

揚げ足を取ろうというものはいくらだっている。欠点を指摘したり、失敗の例をあげつらおうという者もいるだろう。

されど、それでも、やらなければ何も始まらないのもまた事実なのだ。

「つまり、知識の共有を目的とするのではなく、平民を教育することの利点を共有するということね？」

ラフィーナの言葉に、レアが意表を突かれたという顔をする。

「そうか……。過去のパライナ祭と同じように、自国を利する知識ならば隠匿されるかもしれない。でも、教育を施した孤児たちの功績を見せることで、教育の利益を知らしめることができれば、各国の孤児たちへの扱いも変わる……。これならば、もしかすると、図書館長のユバータ司教を説得できるかもしれません」

明るい声を上げるレアと、さらに、キノコシチューをお替りしようとして、さすがに、三杯目は……と給仕に止められているミーア。

それを見て、孫を誇った顔をするパティと友を誇った顔をするラフィーナ。

幸せそうな顔で姉を見守るハンネスと、妹を見守るリオネル。

そんなふうに和やかに、晩餐会は進んでいくのだった。

番外編　天才と天才

ティアムーン帝国、帝都ルナティア。その中心である白月宮殿の一角、帝国中の本が集まる大図書館にエリス・リトシュタインの仕事部屋があった。

普段は部屋の主、エリスしかいないその部屋に、その日は客人の姿があった。

机を挟み、エリスの対面に座るその人物は……。

「この度、ミーアさまより、挿絵画家として召し抱えられました、シャルガールと申します。エリスさんの書かれた小説の挿絵を描くよう、仰せつかっております」

「はい、存じております。どうぞ、よろしくお願いいたします」

深々と頭を下げたエリスは、早速、シャルガールに自らの小説「貧しい王子と黄金の竜」を渡した。

「長い話ですが、今、お渡しした分がとりあえずの一冊分です。あと、ミーアさまがお考えの紙芝居は、さらに、それを二十等分にして……」

「なるほど、では、拝読させていただきます」

真剣な顔で頷いて、シャルガールは原稿を読み始めた。

しばらくして、原稿の最初の数十ページを読み終えてから、シャルガールは顔を上げた。

「なるほど……これがミーアさまの仰っていた小説なのですね」

シャルガールは、しかつめらしい顔で頷いた。原稿を机の上に置き、ほぅっとため息。それから、彼女はエリスのほうに目を向け……。

「素晴らしい……。確かに、今まで見たことのない物語です」

笑みを浮かべる。その顔には素直な称賛、そして、同じクリエイターとしての尊敬の念が浮かんでいた。

「まだ見ぬ光景を見せる、素晴らしい物語ですね。さすがは、ミーア姫殿下のお抱え作家さんが書かれた物語です」
「ありがとうございます」
シャルガールの絶賛を受けて、エリスは嬉しそうに頬を赤らめた。
それから、
「でも、シャルガールさんの絵も素晴らしいですね。とても想像力を掻き立てられます」
エリスの手には、シャルガールの絵の見本として、何枚かの挿絵のラフがあった。まだスケッチ段階のものだったが、それでも十分に見えてくる風景があった。
深い海の中、厳かに佇む水色の髪の人魚、どこまでも広がる砂の海、雲の合間から覗く重厚な城とその周りを飛び回る美しい天使、切り立つ崖にかけられた太い橋、向かい合う二人の騎士と、それを見守る二人の乙女。
どこか見覚えがあるかな？　なんだか、誰かと似てるかな？　と一瞬思うような人物造形ではあるのだが、まぁ、それは置いておくとして。
「私のお話に、こんなに素晴らしい絵を付けていただけるなんて……すごく嬉しいです」
エリスは素直に感動していた。
まさか、自分の小説に、こんなにも素晴らしい挿絵が付くだなんて……少し前までは想像すらしていなかった。
病気がちで、小さい部屋の中で、一人でお話を考えていた時には、こんなこと、まったく想像もしなくって……。
――それも、これも、ミーアさまと出会ってから始まったんだよね……。
そう思った、瞬間だった！
「そういえば、セントバレーヌでミーアさまとお会いになられたと聞きましたけど、ミーアさまのこれまでの功績については、ご存知ですか？」

……若干、風向きが変わる。
ふと思いついたという様子で、ポンッと手を叩いたエリスに、シャルガールは首を振ってみせた。
「いえ、大まかなことしかお聞きしていませんが……」
「それなら、ちょうど良かった」
エリスはニコッと微笑んで、
「実は、ミーアさまの功績をまとめた、皇女伝を書いているところなのですが……。よろしければ、お読みになりますか？」
「ああ。それは興味深いですね。ぜひ、読ませてください」
そんなやり取りを経て、皇女伝（未完）はシャルガールの目に触れることになったのだ。
なって……しまったのだ！

「エリスさん……ミーアさまの記録、読ませていただきました」
シャルガールが訪ねてきたのは、翌日のことだった。
「えっ……もうですか？　まだ、一日しか経ってませんが……」
渡した原稿は、かなりの厚みのあるものだった。エリスの分厚い熱意のほとばしり出るものであったのだ。が……。
「絵を描き始めれば、徹夜などざらですから、この程度、どうということもありません」
どこか赤い目をしたシャルガールは当然のように言って……。
「正直言って、感服いたしました……」
その声は、かすかに震えていた。
「ミーア姫殿下のこれまでなされてきたこと、そこに溢れる慈愛と叡智……感動を禁じ得ませんでした」
興奮した様子のシャルガールに、エリスはうんうん、っと頷く。
「ミーア姫殿下の外面をそのまま描いたのでは、これは、とてもではないですが足りません。姫殿下の美しく輝く内面をも表現した絵にしなければ……この感動は表現しきれないと思いました！」
煮えたぎる情熱がほとばしる声で……言った！

「すごい……。そんな絵、見たことありませんけど、でも、それができたら……ミーアさまの魅力をもっともっとお伝えすることができるかも……」
「はい。見た目だけではミーアさまの美しさはせいぜい、中の上ぐらい。あまり絵画には向いていませんが、そうした内面的な美しさも合わせれば、あるいは、帝国の叡智の魅力の一端でも人々に伝えることができるかも……」
「……一部、賛同できかねるところもありましたが、概ね、賛成です！　ぜひ、取り組んでください！」
かくて、二人の天才は出会いを果たしたのであった。

さて……後日のこと。
エリスが書いていたミーア皇女伝に、挿絵が付くなどと言う話を小耳に挟んだミーアは、早速、シャルガールを呼び出した。
「ええと、シャルガールさん、聞くところによれば、エリスの小説だけでなく、執筆途中の皇女伝のほうにも挿絵を付ける予定だとか……」
「おお、さすがは、ミーア姫殿下。お耳が早いですね」
シャルガールは、鼻息荒く頷いて、
「実は、いくつか試作品を描いてみたので、ぜひ、ご覧いただければと思っていたところなのです。特にこれが一番気に入ってるもので……」
そうして、胸を張ってシャルガールが差し出してきた絵！　それを見てミーアは……。
「ナニコレ……？」
衝撃のあまり、口をあんぐーりと開けてしまうのであった。
それは、こう……なんというか、ええと、その……なんだこれ？
ともかく、とても人物画とは見えないような、なにやら、意味不明の絵に、これもしかして、上下逆なんじゃ？　とか、鏡に映したら普通の絵になるのかも？　なぁんて、ひたすらに首を傾げるミー

アであった。

その奇怪かつ難解な絵は、後に、絵画の世界に具象画とは一線を画す新たなジャンルを生み出してしまうことになるのだが……。

ミーアはそんなこと知ったこっちゃないのであった。

第十一話　聖ミーア学園にて……

セントバレーヌから帰還したルードヴィッヒであったが、程なくして届いたミーアからの書状を一読。
目を見開き、眼鏡を輝かせるや、即座に、馬車に飛び乗った。
向かうはベルマン子爵領、静海の森のほど近く。
栄光（グロリアス）あふれる皇女（プリンセス）ミーアの町、その中心である聖ミーア学園である。
「よく来たな、ルードヴィッヒ」
穏やかな笑顔で出迎えた師に挨拶もそこそこに、ルードヴィッヒはその書状を手渡した。
学長ガルヴは、素早くそれに目を通し……深い、深い息を吐いた。
「どう思われますか、師匠」
生真面目に見つめてくる弟子に、ガルヴは苦笑いを浮かべる。
「ふっ、師匠はよせ、ルードヴィッヒ。わしはもはや、森の賢者でもなければ、お前たちの師匠ではない」
そうして、豊かな顎髭を撫でつつ……。
「そう、お前たちだけの師ではないのだ。わしは、今や、この聖ミーア学園の学長なのだ！」
ばばぁんっとドヤァ顔で言った！
賢者ガルヴは権力を嫌っていた。
王侯貴族を嫌い、権威を嫌い野に下った。
自由気ままに各地を巡り、知識を集め、知恵を磨き、森の賢者などと呼ばれるようになった。その過程で幾人かの弟子を取り、その一人一人を大切に思ってはいたが、それでもなお、彼は縛られぬ者であった。
そのはずだった……。
だがしかし……そう、だがしかし、なのだ！

今のガルヴは、聖ミーア学園の学長という地位に、大いなる喜びを感じていた。
こう……なんというか、楽しくなっちゃったのだ！
年甲斐もなく、若く有望な子どもたちを教えるのが……その子どもたちがゴリゴリ成長し、有能な人材に育っていくのを見るのが……実になんとも楽しくなってしまったのだ！
孫、場合によってはひ孫とも呼べるような子どもたちの成長を見守ること、人生の終わりも差し掛かったこの時期に、これほどの喜びを得られようとは思ってもみなかったのだ。
まるで、枯れ土に水がしみ込むように、日々、知識を吸収し、才能を開花させていく生徒たちを……それ以上に、顔を輝かせて学問に取り組む子どもたちを見ているのが、ものすごぅく楽しかった。
ガッツリやりがいを感じていたのだ。
正直、立ち上げで教師を集めて、ある程度の体制を整えるところまでやれば、まぁ、自分の仕事は終わりかな、と思っていた時もあった。
だが、今や、そんな枯れた気持ちはない。
自分の命尽き果てるまで、学長としての責任を背負い、この学園のために尽くそうと、彼は心の底から願うようになっていた。
誇りは責任感の裏返しだ。彼は自らが子どもたちを教える学長であることに誇りを持ち、重責を担うことを自らに誓っていた。
そんなわけで、学長としての自負を胸に、ガルヴは言った。
「帝国の叡智、ミーア姫殿下が造られた聖ミーア学園は素晴らしい学び舎だ。理念と実践において、セントノエルにも負けてはいないと、わしは確信しておる。だが……」
と、そこで彼は顔を曇らせた。
「その評価は、依然としてあまり高くない。無論、まっとうに続けていけば、評価は高まっていくものだとは思うが……聖ミーア学園の理念から言えば、それではまずいのだ」
その言葉に、ルードヴィッヒは軽く眼鏡を押し上げた。

「今だから……危機的な状況が目に見えている今だからこそ、やらなければならないことがある、ということでしょうか」
愛弟子ルードヴィッヒが、自らと同じ考察に至っていたことに、ガルヴは上機嫌に微笑んだ。
彼らは、事態の推移を正確に読んでいた。
なるほど、寒さに強い小麦は有用だ。
数年にも及ぶ小麦の大不作、それは、貴族たちの認識を揺るがすのに十分なインパクトを持っていた。
実際の食料不足を前に、誰も「反農思想」になど、こだわってはいられない。そんなつまらない思想はとっとと捨て去り、畑を作れと言うだろう。農業は素晴らしいと賛美してみせることだろう。
寒さに強い小麦を作った聖ミーア学園への評価も高まるだろう。
だが……不作の時期が終わったら？
喉元過ぎれば……というのが人のサガというものだ。
長き悪習に囚われた帝国貴族は、すぐにでも、かつての反農思想へと戻っていくだろう。
聖ミーア学園が「反農思想の払拭」のために建てられた学び舎だというのであれば、それは、ぜひとも避けたいところであった。
ゆえにこそ、今のうちに……農業の価値が注目されている今だからこそ、聖ミーア学園がセントノエルに並ぶ、大陸最高峰の学府であることを帝国貴族に示し、その評価を確立しなければならない。
そうは思ってはいたのだが……。
「なるほど、古のパライナ祭か……。中央正教会に……ヴェールガに、聖ミーア学園を認めさせるとは……」
「帝室の権威に加え、中央正教会のお墨付きをもらえれば、聖ミーア学園の価値は認めざるを得なくなるはずです」
ガルヴはルードヴィッヒに頷いてみせてから、
「いずれ、なにがしかの手を打たれるとは思っていたが、まさか、そのような場を用意してくださるとは……」
感慨深げにつぶやき、しばし瞠目。その後、

「手紙を読む限り、教育の方法論の共有はもちろんだが、それ以外に、教師が手を出すことなく、生徒たちの手で準備をし、その功績を示す必要もあるのだろうな……」
ガルヴは立ち上がり、わずかに思案してから……。
「この件は、セリアに担当させようと思う」
「セリア……というと、あのミーア姫殿下が孤児院で見出したという少女ですか……」
「さよう。あの子は特に優秀だ。専門的な部分ではセロやワグルに劣っていても、いろいろな準備の段取りを整え、調整する手腕は見事なもの。将来的には、この国の有能な官吏として腕を振るうだろう」
ガルヴは、軽く眼鏡を押し上げて、
「此度のことは、そのための、良い訓練にもなるだろう」
かくてミーアエリートたちは静かに動き出すのだった。

第十二話　ラーニャ姫、あ〇に会う

ハンネスらとの晩餐会の翌日、生徒会メンバーへパライナ祭の情報が共有された。

さらに、その翌日、ラーニャ・タフリーフ・ペルージャンは、みなより一足早く夏休みに入り、帰国の途についた。

毎年恒例の収穫感謝祭の演舞のためである。

彼女の見送りには生徒会のメンバーが揃って出てきた。その一人一人に笑顔で挨拶をしていく。

――それにしても、すごかったな、セントバレーヌ。

彼女の胸にあるのは、ここしばらく経験したセントバレーヌでの出来事だった。

それは、実に刺激的な経験だった。

もちろん、戦争になりかける、などという絶対的な危機を、なんだかんだで、お祭り騒ぎに納めてしまったミーアの手腕に驚いたのはもちろんのことなのだが……。それ以上に、彼女の印象に残ったのは、やはり、大きな港のことだった。

海の向こうから、大きな大きな船で運ばれてくる農作物。その輸送方法もさることながら、見たこともない果物に、ラーニャの心は踊った。

――帝国との関係が変わって、小麦畑を少し減らしたら、代わりに色々な作物が育てられる……。そうしたら……。

見たこともない、美味しい果物を売ることができる。人気が出れば、それだけ輸出が増え、国も潤うかもしれない。

もちろん、環境によって育つものと、育たぬものとはあるだろうが、それはもう試行錯誤だ。

――それに、ああやって船で作物が運ばれてくるのを見るのは、なんだかんだではじめてだったかもしれない。

巨大な船に積み込まれた大量の積み荷、輸送の現場を実際に見たことは、ラーニャにとって貴重な経験となった。そこにあるノウハウを手に入れることは、農業国ペルージャンにとって、意味のあることだろう。

――普通にしていれば、セントバレーヌに行く機会もなかっただろうし……うふふ、なんだか、すごい経験をした気がするな。

「ラーニャさん」

っと、その時だった。

名を呼ばれ、ラーニャは視線を転じると、そこにはミーアが穏やかな笑みを浮かべて立っていた。

「道中、お気をつけて。みなさまに、よろしくお伝えくださいませね」

その言葉に頷きつつも、ラーニャは、ふと不思議な感慨に囚われる。

――なんだか、信じられないな……。もう、あの日から五年も経ったんだ。

保存用のクッキーを巡って、意気投合した日のことが今は懐かしい。

この夢のような日々は、すべてあの日に始まったのだ。

「ラーニャさん？」

不思議そうな顔で首を傾げるミーアに、ラーニャは首を振ってから、

「お心遣い感謝いたします。ミーア姫殿下。ラフィーナさま、みなさまもお元気で」

深々と頭を下げたラーニャは、それから、ふと真面目な顔をして、

「ペルージャンのほうでも、パライナ祭に関して話を通しておきます。それと、アーシャ姉さまにも」

ラーニャは、セントノエルから皇女の町を経由して、ペルージャンに帰る予定を立てていた。レア発案のパライナ祭のことについて、事前に知らせる必要があるためだ。

「ええ、ぜひ、アーシャさんにもよろしくお伝え願いますわ。ルードヴィッヒにも手紙を送っておきますけれど……」
ミーアは、そこで、少しだけ考えるように黙ってから……。
「その……できるだけ、常識……」
なにやら、言いづらそうな口調で言った。
「はい……？」
きょとん、と首を傾げるラーニャに、ミーアは慌てた様子で首を振り、
「いえ、なんでもありませんわ。ともかく、よろしくお願いいたしますわね」
「わかりました。下準備はきっちりしておきます」
胸を張り、ラーニャは言った。

さて、特にトラブルもなく聖ミーア学園にたどり着いたラーニャ。そんな彼女を出迎えに出てきたのは、ほかならぬ、姉、アーシャであった。
「ようこそ、ラーニャ。歓迎するわ」
「お久しぶりです、アーシャ姉さま」
スカートをちょこんと持ち上げて挨拶。それからラーニャは微笑んで、
「お元気そうですね」
「ええ、あなたも。元気そうでよかったわ」
互いの無事を確認し合ってから、アーシャは、学園校舎内の自室へとラーニャを誘う。
「それにしても、とても良い畑ですね」
ラーニャは、学園の周りに広がっていた畑を思い出して言った。どこか故郷、ペルージャン農業国を思い出させるものだった。それを耕した者たちの、土地への愛着が感じられるような……そんな美しい畑だった。
「ふふふ、ありがとう。生徒たちの力作よ」

「本当に、力作と言った感じですね」
それが、姉のこれまでの努力の結晶のようにラーニャは、少しだけ嬉しくなってしまう。
「ところで、どうですか？　その生徒たちの様子は……」
「ええ。ここに来るのは、ほとんどが平民や、中央貴族とのかかわりが薄い子たちだから、意外と素直に私の話を聞いてくれるけど……。ああ、でも……元白月宮殿メイドという人がいたかな。彼女は確か、ローゼンフランツ伯爵家のご令嬢だから、中央貴族なのではないかしら……」
そう言うアーシャだったが、その顔には否定的な色は見えなかった。帝国貴族への嫌悪感も、その顔からはうかがえない。
「彼女も最初は農業を学ぶなんて……と言っていたけど、でも、他の子どもたちとの関係は意外と悪くなくって。その影響でなのかは知らないけど、授業も意外と真面目に受けてるし、農作業も手伝ってるわ。虫は嫌いみたいで、文句言ってるけどね」
くすくすと笑うアーシャに、ラーニャは少しだけ安心して……、だから、ふと軽口を叩いてしまう。
「ところで、アーシャ姉さま、どうするおつもりですか？」
「ん？　どうって？」
首を傾げる姉に、ラーニャは苦笑いを浮かべた。
「聖ミーア学園のお仕事が楽しいのはわかりますし、意義のある仕事をしているのもわかります。けれど、そろそろ、ご結婚を考えても良い頃合いなんじゃないかな、って思って……」
「あー……」
っと、途端に、アーシャは困り顔をする。
「もう少し……ミーア二号小麦のことにもう少し関わっていたくって。それにそのぅ、ほら、あまり出会いが、ね……」
などとモゴモゴ言うアーシャに、ラーニャは苦笑いを浮かべる。
「もしも、同じように研究や教育に関わる人が良いというのであれば、今度のパライナ祭は、良い出会いがあるかもしれませんよ」

「ああ、例の……」
すでに報せは届いていたのか、アーシャは一つ頷いて、
「さすがはミーア姫殿下ね。私は、お腹を空かした子どもがいない世界を作るために、寒さに強い小麦の研究をしていたけど、ミーアさまはその先を見ているのね」
「はい。食べるものだけでなく、その将来をも視野に入れ、学びを与える手段をお考えだなんて……思ってもみませんでした」
そこで、ラーニャは思い出す。出発間際に、ミーアが言いかけていた言葉……。ミーアは言っていた。
〝できるだけ、常識〟……否……〝できれば、常識〟と。
その意味は……。
ラーニャは、ハッと目を見開いて……。
「アーシャ姉さま、たぶん、ミーアさまは、〝できれば〟〝各国に新しい〟〝常識〟を築こうとされていると思います。今度のパライナ祭が、その第一歩になればいいと……そうお考えなのではないかなって」
「常識……？」
「そう。力なき子どもたちを教え導き、やがて育った彼らの協力を得て、その力を束ねて、国を、世界を前に進めていく……。そのような王族の在り方が常識となるような……その第一歩となるような祭りになればいいと、そうお考えなのだと思います。ただ、私たちや子どもたちへの重圧になるから、はっきりとはおっしゃらなかったけれど……」
「孤児たちを助け、教育するのが常識になる世界……。ふふふ、それは、とても素敵ね。それに、とてもミーア姫殿下らしい……」
っと、そんなことを話している時だった。
「失礼します、アーシャ先生……あっ」
ドアを開けて、一人の少年が入って来た。彼は、ラーニャのほうを見ると、慌てた様子で視線をさまよわせて……。
「失礼しました。お客さまがいらっしゃったなんて……」

「あら、あなたは、もしかして……」
その顔に、ラーニャは見覚えがあった。生徒会で共に働くティオーナの顔に、どこか似た雰囲気がある。
「もしかして、ティオーナさんの弟さん？」
話しかけると、少年は、ピンっと背筋を伸ばした。
「あ、はい。お初にお目にかかります、セロ・ルドルフォンです」
「はじめまして、アーシャの妹のラーニャ・タフリーフ・ペルージャンです」
緊張した様子のセロを微笑ましく思いつつも、
――このミーア学園でいい人との出会いがあればいいとも思ったけど……こういう子どもたちばかりだと、なかなか難しいのかな……。
なぁんてことを思うラーニャであった。

第十二話　ラーニャ姫、あ〇に会う（後書き）

お伝えし忘れましたが、今週はミーアが誕生祭で忙しいので出番少なめです。
来週は、年末ですがバリバリ働いてもらおうと思います。

第十三話　おひさしぶり！

「ミーア、ちょっといいだろうか？」
みなでラーニャを見送った後、ミーアはアベルに呼び止められた。
「あら、アベル、どうかなさいましたの？」
きょとん、と首を傾げるミーアに、アベルはなにやら、ちょぉっぴり気恥ずかしげな顔で……。
「いや、その……ひさしぶりに遠乗りでもどうかな、と思ったのだが……」
「遠乗り……？」
はて、なんのことかしらー？　とポヤァッとした顔をしていたミーアであったが……直後、察する！
自分は、今、デートに誘われているのだ！　っと。
そうなのだ、ここ最近、忙しさと美食の中に置かれていたミーアは、すっかり恋愛脳が退化しかかっていたのだ！
これはいけない、と気合を入れつつ、ミーアは可憐な笑みを浮かべた。
「そうですわね。ふふふ、確かに、馬に乗るのは、ずいぶんとひさしぶりですわ。荒嵐、元気かしら？」
「相変わらずの暴れ馬のようだよ。そのせいで、あまり乗りこなせる者がいなくて、退屈しているらしい」
冗談めかして言うアベルに、ミーアは、
「まぁ、それはよくありませんわね。それならば、ひさしぶりに、たっぷり乗って差し上げますわ」
悪戯っぽい笑みで返した。
さて、着替えて、ウキウキで厩舎に向かう。と、アベルが誰かと話しているのが見えた。

「よぉ、嬢ちゃん。元気だったかい？」
ミーアのほうを見て、軽く手を挙げたのは、セントノエルを卒業したはずの林馬龍だった。ニヤリと豪快な笑みを浮かべるその顔に、ミーアは懐かしさを覚える。
「ご無沙汰しておりますわ、馬龍先輩。セントノエルにいらしてましたのね？」
「ああ、ちょうど近くに来てたところで、ラフィーナ嬢ちゃんが公都に帰る護衛を頼まれてな」
なぁんて、世間話もほどほどに……。
「ところで……な」
馬龍は、そこで、わずかばかり声を低くした。
スゥッと目が鋭くなり……、まるで睨むような視線を送ってくる。
――あら、どうかしたのかしら、馬龍先輩……。わたくし、なにか怒らせるようなことをしてしまったかしら……？
そんな彼の顔を見たのは初めてだったから、ミーアは思わず考えてしまう。
……思い当たる節は……ない！
そもそも、林馬龍と言えば、いつでも豪快で朗らかな笑みを浮かべている人物、多少、不快なことがあってもすぐに深い懐におさめて、笑い飛ばしてしまう人物、と……。ミーアはそのような印象を持っていた。
そんな人物が怒っている……いったい、なにがあったというのか？
少しばかり、姿勢を正したミーアに、馬龍は言った。
「ちょいと小耳に挟んだんだが……。なんだか、帝国で面白いことをやったんだって？」
「面白いこと……はて？」
なんのことやらわからずに、小首を傾げるミーアであったが……。
「あのレッドムーン家でのことじゃないかな。ほら、例の馬術大会……」
アベルに言われて思い出す。レッドムーン家の私兵団と皇女専属

近衛隊との馬術勝負、後の世にいうミーアピックのことを……。
「ああ……あれですのね」
ポンッと手を叩いたミーア、であったが、直後、馬龍のほうに視線を向けて……若干、引く。
馬龍は、ものすごく……ものすごぅく！　悔しそうな、口惜しさを噛みしめた顔をしていたからだ。
「酷いじゃねぇか！　そんな面白そうなものがあるのに、俺たち騎馬王国に一言もないなんて！」
グッと拳を握りしめて、嘆く、嘆く！
「しかも、速さ勝負だけじゃなく、馬上戦闘や、馬上弓術とか、いろいろやったんだろ？　嬢ちゃんだって、ホースダンスとかいうものを披露したそうだな」
「え？　あー、ええ、まぁ……その……」
「そんな面白そうなことをやっておきながら、誘われないとは……。俺たちと嬢ちゃんとの仲は、そんなものだったのかよ……」
ずぅん、っといじけた顔をする馬龍。
ミーアは、チロリっとアベルのほうに目を向ける。っと、すすすっと視線を逸らすのが見えた。
どうやら、情報源はアベルのようだった。しかも、ミーアの姿を、まぁまぁ誇張して伝えちゃった節が見て取れた。なにやら手を合わせて、ごめん、とやっているアベルに苦笑いを返してから、ミーアは、こほん、っと一つ咳払い。
「此度の馬術大会は、あくまでもレッドムーン家との関係で開いた余興。次に開く時には騎馬王国の方たちもぜひ、おねが……」
「本当か？　絶対だぞ！！」
なにやら、やたらと気合の入った声で言う馬龍である。
「それに、他の一族の連中にも声をかけないとな」
嬉しそうに微笑む馬龍を見て……。
――あら、これ、下手したら、騎馬王国の方が全員で帝国に押しかけてきてしまうのでは？

なぁんて、そこはかとなく不安を覚えてしまうミーアであるが……それはさておき

「ああ、そうでしたわ。馬龍先輩、実は折り入ってご相談したいことがございましたの」

ミーアはポンッと手を叩く。

「聖ミーア学園で、馬についての教育をしたらどうか、と思っているのですけど、どなたか適任の方は、いらっしゃいますかしら？」

「馬の研究……？　それは、より良い軍馬を作るための技術とか、そういった話か？」

一瞬、険しい顔をする馬龍だったが……。

「無論、それを目的とする貴族たちはいるでしょう。けれど、わたくしとしては、そのように限定的ではなく、もっと幅広く、総合的に馬のことを学べる場所があればよいと思っておりますの。馬の病気やケガの治療などの技術が進んでいけば、馬のためにもなると思っておりますわ」

それから、ミーアは、厩舎のほうに目をやって……。

「荒嵐にもできるだけ元気で、いつまでも走れる馬であってほしいですもの」

いざという時、乗ったはいいけれど、速く走れないのでは意味がない。後ろから追いかけてくる断頭台を振り切れる速さが必要なのだ。

――それに、危機的状況にあっては、若くて、まだよく知らない馬よりも、気心の知れた馬のほうが良いですし。

死地を共に駆け抜けた荒嵐には、できるだけ健康で、長生きしていてもらいたいと思うミーアである。

「そうか……。なるほどな、そういうことならば、誰か良いやつがいないか、探してみよう」

馬龍は、何事か感じ入った顔で、深々と頷くのだった。

第十四話　奇跡とはなにか？

ヴェールガ公国、神聖図書館館長には、古くから強い権限が与えられていた。

それは、彼らが「言葉」というものを重要視してきたからだ。

中央正教会、その基はなにか？　と問われれば、神から与えられた「神聖典」である、ということができる。

神聖典、それは、古来より変わることのない神の言葉だ。

そこに書きつけられた文字、その一文字さえも、後の世に書き換えられることはない。歴史の流れに左右されず、その時代の習俗、人間の変化、堕落、一切に左右されず……世の始まりから終わりまで変わることのない神の言葉だ。

だからこそ問題となるのは、その解釈だった。

文章というものは、いかようにも曲解して、読むことができるもの。自分の好き勝手に読み解くことで、神聖典すら曲げてしまうことができる。そして、かつて、そのような蛮行が行われた時代が確かにあった。

そのような過ちを防ぐため、ヴェールガには、釈義院（しゃくぎいん）と呼ばれる、神聖典の解釈の正しさを問う組織が存在している。

「神により書かれた唯一の書物、神聖典の解釈の正しさは、ただ神聖典によってのみ保証される」という考え方を基本とし、議論の的になった箇所を、神聖典の他の箇所と照らし合わせて正誤の判断をする。そこでの議論はすべて公開され、その結果は、仮にヴェールガ公爵であっても曲げることはできない。

そして、書物と文字とのスペシャリストである神聖図書館館長の座にある者は、釈義院の一員にして、一目置かれる存在なのだ。

そんな神聖図書館の館長ユバータ司教は、セントノエル学園から

の書状に目を通していた。
「パライナ祭か……懐かしい名前だな」
かけていた眼鏡を外し、目尻を揉みながら、ユバータ司教はつぶやく。
「今さら、あの古の祭りを再開しようとはな」
さて、発案者は誰だろう、と見てみれば、そこにあったのは知人の娘の名で……。
「セントノエルの生徒会長、レア・ボーカウ・ルシーナ……。マルティンの娘か……。それに、連名でラフィーナさまもか……」
先日、ルシーナ司教から届いた手紙を……そして、そこに含まれていた暗号を思い出し、ユバータ司教は眉をひそめる。
「セントバレーヌで計画していたことは、上手くいかなかったと聞いていたが……。ラフィーナさまの名があるということは、この裏には確実に、かの帝国の叡智がいるのだろうな。レア嬢もミーア姫殿下の側についたとは、マルティンにとっては手痛い結果だったな」
今度、訪ねてきたら愚痴でも聞いてやるか、とつぶやきつつ、思索を続ける。
実のところ、ユバータ司教は、ルシーナ司教ほど、ミーアのことを警戒していなかった。
蛇の巫女姫を捕らえたことはもちろん、それ以前から彼女の行いは一貫して、民のためのものだった。弱き者たちを救う公正なものであった。
それは少なくとも、皇女としての善良な行いであったし、かのサンクランド国王にさえ引けをとるものではない。称賛されこそすれ、咎められる筋のものではない。それでもなおミーア姫を警戒しなければならないとするなら、この大陸のすべての権力者を警戒しなければ、公平性と整合性を欠くことになるだろう。
――マルティンは、過去の経験ゆえに、信じた後で裏切られることを恐れたのだろうが、未来のことなど誰にもわからぬもの。将来的に裏切られるかもしれないことは、これまでの行いを否定する材

料にはなり得ない。
　そして、そんな善良な皇女が建てた聖ミーア学園というのも、なるほど、おそらくは良い学校なのだろうとも思う。
「パライナ祭にその学園を参加させることで、ヴェールガの信認を得ている……と、そう世に示すことが目的か……」
　彼は、帝国内の教育事情についても、多少は耳にしていた。貴族主義的な学校が幅を利かせている現状、聖ミーア学園の存在は、さぞ目障りなことだろう。
　そんな攻撃を避けるために、中央正教会の承認を得ることは、プラスに働くのだろう。
「あるいは、我らヴェールガと敵対する意思はないと、あえて表明しようとした、と……そのような狙いも見て取れるな」
　ヴェールガからのお墨付きを重視するやり方は、ヴェールガの力を認め、友好的関係を築きたい、との意思表明と取れないこともない。
　その姿勢は、覇を唱え、争いと混乱を巻き起こすような者とは程遠い、理性的で好ましい人物のようにも見える。
　ただ……懸念がないではない。
「パライナ祭をそのように利用すること自体、好ましく思わない者はいるだろうが……それは問題の本質にあらず。むしろ、問題は、上手くいくとは限らないことだろうな……」
　どれほど狙いが善良なものであったとしても、それで成功するとは限らない。
　そして上手くいかずに一度は中止にした祭りを再開したにもかかわらず、再び失敗しては、面目は丸つぶれだ。
　ヴェールガはもちろんのこと、セントノエルも、聖ミーア学園も、名を落とすことになるだろう。そして、その失敗に付け入ろうとする者たちが、この世には存在している。
「混沌の蛇……か」
　どこにでもいて、誰もがその誘惑に陥る危険性を孕んでいる、恐

るべき存在。
かの者たちは、古くから帝国の中に深く根差していたと聞くが……。
「そう、それも不安と言えば、不安なところだ。混沌の蛇の影響……初代皇帝の影響から、かの姫君は、完全に脱しているのだろうか……」
ミーアの行い自体は善良に見える、けれど、それでも油断できないのが蛇の警戒すべきところだ。彼らは、こちらの心に侵入するために、善行さえも利用する。
誰が見え見えの悪を口にする者に耳を傾けるだろう？
蛇の甘言とは、耳に心地よく、善良で、好ましく思えるもの。
誰が明らかな悪人を家にあげたいと思うだろう？
蛇とは、誠に友にするによい、好人物の顔をして、心の中に入ってくるものなのだ。
「蛇……地を這うモノの書、か……」
その不可思議な書物がいつ、どのようにしてこの世に現れたのか、詳しいことはわかっていない。
確かに、その大部分、混沌をもたらす方法論に関しては、書き手がはっきりしているものもある。が、その大本となった思想、人の意識の根底に絡みつく、あの感染する思想については、誰がどのようにして生み出したものなのか……明らかにはなってはいないのだ。
そして、それこそが、この世の理の外からの物のように、ユバータ司教には見えていた。
それは、邪神か悪魔か……いずれにせよ神に敵対するものが、自然の法則を超えてもたらしたもの……と、彼は考えていた。
「はたして、神は、地を這うモノの書をどのように取り扱うのか……」
ユバータ司教の興味はそこにあった。
彼は、神の無制限な奇跡というものに否定的だった。
もしも、神がこの世の理を造ったのだとして、自分で定めた理を

簡単に破るのは、理屈に合わないからだ。
それは、自作のゲームで遊ばんとする子どもと同じだ。自分が勝つためにルールを勝手に変えてしまっては、ゲーム自体が破綻する。それでは面白くもなんともない。
神も、同じではないか？
奇跡を起こすことはもちろん可能だが、自分で造ったルールを、なんの縛りもなく破るのは、理性的なこととは言い難い。
ゆえに、もしも「自然の理を超えた奇跡」があるとすれば、それは必要最低限であり、なおかつ極めて厳格かつ公正に行使されるものであると、彼は考えている。
すなわち、仮に「地を這うモノの書」が本という形で、世の理の外からもたらされた悪の奇跡であれば、その反作用として行使される善の奇跡は同じく本のような形なのではないかと考えているのだが……。
「対となる書物が神聖典かとも思ったが……違うような気がする」
もしも、神聖典が、人を律するために与えられたものだとするなら――人が、神聖典を与えられる前提で造られた存在であるとするなら、それは「地を這うモノの書」に対して与えられたものではない。
もっと別の「地を這うモノの書」に対応したなにかが与えられるか……あるいは、すでに与えられているのではないか……。
ユバータ司教は、そこで小さく首を振る。
「いずれにせよ、ここにいては、判断がつかぬな……」
しばしの熟考、長い祈りの末に、ユバータ司教は一つの結論を得る。
「帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンなる人物が信用に値するかどうか。そして、パライナ祭の開催が本当に、我が神の御心かどうか見極めるためにも、どうやら、私は会わねばならぬようだ……。帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンに」
そうして、ユバータ司教は静かに部屋を後にした。

第十五話　ミーアの記憶は、確かじゃない

「ふふふ、荒嵐、ずいぶんとひさしぶりですわね」
厩舎の中に入ると、のっそりと荒嵐が顔を向けてきた。一瞬、大きな鼻をむぐむぐさせた荒嵐だったが、構わずミーアは、その頬を撫でる。
「ふふふ、相変わらずですわね、荒嵐。変わりがないようで安心しましたわ」
そうなのだ、すでに荒嵐との付き合いも長くなってきたミーアは、本当にくしゃみが来るのか、それともフェイクなのか……その辺りの見極めが、なんとなく、できるようになっているのだ！
漂う海月、波乗りミーアは、波も空気も読むのが得意なのだ！
「最近、すっかりご無沙汰になっておりましたし、今日はよろしくお願いいたしますわね」
笑顔で話しかけるミーアに、荒嵐は、ぶーふっと鼻を鳴らした。
「やれやれ、仕方ねぇなぁ！」
なぁんて、言っていそうな荒嵐であった。
そうして、ミーアとアベルは連れ立って出かけた。ちなみに、アベルのほうは、荒嵐の息子である銀月に乗っている。
目指すは、セントノエルの浜辺。白く美しい砂浜だ。
荒嵐の背にのんびり揺られながら、細い道を進んでいった先、ぱぁっと視界が開ける。目の前に浮かぶのは、白と青で形作られた息を呑む光景。
そよぐ風に髪を押さえながら、ミーアは言った。
「ああ、潮風がとても気持ちいいですわね。ふふふ、天気もいいですし、誘っていただいて感謝しますわ、アベル」
ニッコリと上機嫌に微笑みかけるミーア。アベルは柔らかな、優しい笑みを返してから……。

「いや、ボク自身が行きたいと思っていただけだ。お礼には及ばないよ。君は、これから忙しくなるだろうから、今のうちに二人で出かけて、のんびり話でもしたいと思ってね」
「まぁ、そうなんですのね。うふふ、それは光栄ですわ」
なぁんて、何げないやりとりをした……瞬間っ！
ミーアの脳が、たとえようのない違和感を捉えたっ！
――はて、なにかしら……。今、なにかアベルの言葉で引っかかるところが……うんっ！？
刹那、ミーアは気付く。自らが引っかかったもの、それは、一つの言葉であった。
――これから、忙しくなる……？
この一言が、どうにも気にかかった。
なるほど、確かに、パライナ祭をすることになれば、いろいろな準備をしなければならなくなる。仕事は、まぁ、増えることだろう。
……だがしかし……そう、だがしかし、なのだ。
そこまでだろうか？　ちょっぴりデートがてら、遠乗りに行けないほど、忙しくなるだろうか？
――わたくしは、あくまでも発案者のレアさんを助ける立場……。そこまで忙しくなるとは思えませんけれど……。
そう漠然と思っていたミーアである。
……そこには、小さな油断があったのだ。
けれど、それも無理からぬこと。なにしろ、パライナ祭はヴェールガ公国の、中央正教会のお祭りだ。そして、目下のところ、ミーアは別に、セントノエルの生徒会長ではない。だから、パライナ祭を主宰する立場ではなく、あくまでも協力を求められて参加すればいいだけのはず。聖ミーア学園の代表として、あくまでもゲストぐらいの扱いのはずで……。
そこまで考えたところで、ミーアは思わず、舌打ちしそうになる。
――ああ、そうでしたわ！　パライナ祭の方向性に関して、わたくしは、口出ししてしまったのでしたわ！

本来は、発案者である生徒会長レアが音頭を取り、積極的に進めていけば良い話だったものを、ミーアは、ついうっかり口出ししてしまったのだ。そして、あろうことか、祭りの方向性を決めてしまったのだ。

えてして、こういうものは、言い出しっぺが責任を負わなければならないもの。

――くぅ、生徒会長だった頃の癖が抜けきらずに、余計なことをしてしまいましたわ。今から、わたくしは、お手伝いだけして……などと言うことができるかしら……。

刹那の黙考、その後、ミーアは結論に至る。

――答えは否、ですわ！

そんなことをすれば、無責任のそしりを免れないだろう。

加えて、もともとレアが「パライナ祭を開こう」と言い出したのは、ミーアの存在をヴェールガの人々に知らせるためであった。

いわば、自分のためにレアが頑張って、考えて、提案してくれた企画なのだ。そんな企画を前にして、ミーアがなにもせず、ゴロゴロしていることなど許されるだろうか？　言うまでもなく、許されはしない。

――というか、セントノエル自体が参加するということであれば、レアさんはそのとりまとめをしなければならないはず。同時に、祭り全体の準備委員長をやってほしいというのは酷ですわね。

生徒会長一年目のレアである。まだ、十三歳の少女に、あまり負担をかけることは、やはり良しとはされないだろう。

――こ、ここは、ラフィーナさまか、あるいは、リオネルさんにでも……。

などと考えつつ、ミーアの経験則が告げていた。

これは、なんとなく、自分に一番、ヤバイ役割が回ってきそうだぞぅ、っと。

うっかり、祭りの方向性に口出ししてしまったがゆえに「その功績を横取りするような真似は……」なぁんて、辞退するラフィーナ

たちの姿が見えるようだった。
それに、である。
例えば、サンクランド王国やレムノ王国、ガヌドス港湾国にペルージャン農業国、騎馬王国に、ミラナダ王国にまで……ミーアは、なんだかんだで人脈を持っている。
パライナ祭が各国の協力によって成り立つものである以上、根回しは必要なはずで……。その人脈は大いに活用できるもので……。
もろもろの状況を鑑みて、ミーアは、深々とため息を吐いた。
――アベルの言うとおり、忙しくなりそうですわね。やれやれ……。
これは、下手に手を抜いたほうが、却って厄介なことになる、とミーアの直感が告げていた。であれば、積極的に関わるべき……と、ミーアが覚悟を決めようとしたところで。
「実はね、今度のパライナ祭のこと……レムノ王国にも良い影響がないだろうか、と思っているんだ」
唐突に、アベルが言った。
「あら、レムノ王国に、ですの？」
「そう……」
アベルは遠くを眺めるように目をすがめて、
「覚えているだろうか……以前、ボクは、シオンと本気で決闘をしたことがあっただろう？　レムノ王国の、紛争の時に……」
「ああ……」
言われて、ミーアも思いだす。
あの日、革命を止めるために、レムノ王国に潜入した時のこと。
――わたくしの記憶が確かであれば、アベルを助けるため、そしてレムノ王国を革命の混沌から救うために、仲間たちの協力を得て、レムノ王国に踏み込んだんでしたわね……。懐かしいですわ。
……いや、そうだっただろうか？
いささかの捏造が加えられたミーアの記憶は、あまり確かではな

いようだった。

第十五話　ミーアの記憶は、確かじゃない（後書き）

来週は年始ということでお休みといたします。
一月の八日より、餅でモチモチになったミーアの冒険を再開できる……予定です。

第十六話　一つの覚悟の形

「あの時は、まったくハラハラしましたわ」
ミーアは、ふぅっとため息を吐いてみせる。
「ははは、そうだね。あの時は、君にもずいぶんと心配をかけてしまった」
爽やかな笑みを浮かべてから、アベルは言った。
「あの時、シオンはボクに問うただろう？　腐った王権のために殉じるのか、と。ボクは腐っていても王権は必要だと……そう答えたんだ。そして同時に、王権が腐っていれば、中からそれを正すことが自分の責務だとも言ったんだ」
アベルは淡々と、けれど、揺るぎない決意のこもった口調で続ける。
「ボクは母上や姉上の姿を見て……王宮での女性たちの扱いを見て……レムノ王国には確かに問題があると思っている。シオンに批難されても否定のしようのない、大きな問題がね。正すべきことがあるのは明らかで……だから、ボクはそれを為さなければならないと思ったんだ……」
真剣な顔で語るアベルに、ミーアは……トゥックーンと胸が高鳴るのを感じる。
――アベル……なんだか、すごくたくましいと言うか……格好いいですわ！
錆びついていたミーアの恋愛脳がぎゅんぎゅん回っていた！
「それは、ヴァレンティナ姉さまがなさろうとしていたことと、たぶん同じことだ。つまり、あのヴァレンティナ姉さまでさえ、失敗したことだ。でも……」
アベルは一度、小さく息を吐いて……。
「なんとかしなければならない。レムノ王家に連なる者として、そ

れを放置しておくことはできない。民を安んじて治めるために黙っているわけにはいかない」
「なるほど。レムノ王国を変えていくためにも、今度のパライナ祭が有用であると、そういうことですわね」
「ああ、協力を得たい人がいるんだ。情けない話だが、ボク一人ではどうにもならないからね」
「協力を……？」
小さく首を傾げるミーアに、アベルは頷いてみせて……。
「そう。姉上の……、クラリッサ姉さまの協力をね……」
それは、ヴァレンティナ・レムノの失敗を知ったからこそ、彼が辿り着いた答えだった。
自分一人ではどうにもならない。がむしゃらさの力押しでは、どうにもならない。
協力者を、得なければならない、と……彼はそう考えていた。
「なるほど、第二王女クラリッサ王女殿下ですのね。わたくしはお会いしたことがございませんでしたけど……確か、大人しい方だとお聞きしておりましたわね……」
アベルは一つ頷いて……。
「本当は、兄上の協力を得られれば心強いんだが、お考えが読めないところがある。それにこれは、女性の王族の協力が、どうしても必要なことだと思うんだ」
男尊女卑の思想が根強いレムノ王国。その在り方を問題視するなら、その解決は、王子たる彼が上から押し付けるのでは意味がない。
王女であるヴァレンティナか、あるいは、クラリッサ王女が、改革の旗印として立たなければならない。
「クラリッサ姉さまの協力を得るために、ぜひともミーアと会ってもらいたいと思うんだ」
「あら、わたくしと……？　それは、なぜですの？」
「皇女の身で、君が成してきたことを、クラリッサ姉さまに見てもらいたいんだ。クラリッサ姉さまは、幼い頃から、なにもできぬ無

能者として扱われてきたから」
　ヴァレンティナ・レムノは極めて優秀な姫だった。あのゲインにすら、敵わないと言わしめた、才能あふれる王女であった。そんな彼女ですら、レムノ王国では、取るに足らないものとして扱われていたのだ。
　まして、才において劣るクラリッサ王女は、言わずもがなであった。
「クラリッサ姉さまは、昔のボクと似ていてね。いや、ボク以上に、その立場は厳しいんだ。だから、最初から諦めてしまっている。自分にはなにもできない、と」
　それから、アベルはミーアのほうを振り向いた。
「だから、君のことを見てもらいたい。君の声を、言葉を、聞いてもらいたいと思ったんだ。そうして、姉上にも勇気をもらってもらいたいんだ……ボクが君からもらったように……」
「アベル……」
　真っ直ぐに見つめてくるアベル。彼の熱い信頼を前に、ちょっぴり胸が高鳴りかけたミーアであったが……次の瞬間、ふと気付く。
――あら……これ、わたくしに対する期待値がものすごく、高いんじゃ……？
　いや、まぁ、確かに、自分の言葉がアベルを励まし、力を与えたというのは、嬉しい。嬉しいが……。
――こっ、これは、ますます、パライナ祭が大変なことになりそうな予感がしますわ。
　なぁんて、ミーアがちょっぴり焦っている時だった。
「そして……我が国の状況が改善され……後顧の憂いを断ったうえで……」
　不意に、アベルが顔を向けた。真っ直ぐに自身に向けられた目に、ミーアは、うん？　っと首を傾げて……。
「君に伝えたいことがあるんだ……」
　その真剣な眼差しに貫かれてミーアは……、完全に油断していた

ミーアは……。
「……はぇ？」
目をまん丸くして、ちょっぴーり間の抜けた声を上げ、そして、荒嵐は……。
「ぶるるーふ」
っと、鼻を鳴らすのだった。
のどかな遠乗りの時間は、こうして過ぎていった。

第十七話　ユバータ司教との出会い

さて、ミーアが遠乗りデートに行ってさらに五日後、セントノエル学園にある男が現れた。
年の頃は、五十代前半と言ったところだろうか。分厚い眼鏡に、ダボッとした司教服の男は、船着き場に目を向けて、おや、という顔をする。
そうして、ゆっくりと船を降りてきた男を出迎えたのは、ミーアに加え、ユバータ司教に所縁の三人、ラフィーナとリオネル、それにレアだった。
「ご機嫌よう、ユバータ司教。ようこそ、セントノエルへ」
はじめに声をかけたのは、ラフィーナだった。
ユバータ司教が訪ねてくると聞いて、急遽、セントノエルへの滞在を延長したのだ。
……決して、お友だちと別れがたかったからではないし、生徒会のメンバーに囲まれて過ごす時間が、すごぅく楽しかったから……などではない。
あくまでも必要に駆られてのことだ……本当だ！　本当だ！！
さて、話しかけられた男、ユバータ司教は、分厚い眼鏡のレンズの奥、優しげな目を笑みの形に細めて……。
「これは、ラフィーナさま、ご無沙汰しております」
穏やかな声で言ってから、彼は視線を転じる。
「それに、リオネルくん、レア嬢も、おひさしぶりだね」
話しかけられ、リオネルがスッと背筋を伸ばす。
「はい。ご無沙汰しております。父、ルシーナから、くれぐれもよろしくお伝えするように、と伝言を預かっています」
兄が、いささか緊張した顔で言えば、続くようにレアが深々と頭を下げる。

「わざわざ、お越しいただきありがとうございます。ユバータさま」
「なぁに、私にとっても興味深い提案だったのでね。ぜひ、直接話を聞いてみたいと思ったまでのことさ」
そうして、彼はミーアのほうに目を向けた。
「お初にお目にかかります。ミーア皇女殿下。私は、ニコラス・ダ＝モポーカ・ユバータと申します。神聖図書館の館長、並びに、ヴェールガ公国釈義院の議員を務めております」
「これは、ご丁寧な挨拶、痛み入りますわ。ユバータ司教。わたくしは、ミーア・ルーナ・ティアムーン。ティアムーン帝国の皇女ですわ」
ミーアは、スカートをちょこんと持ち上げ、完璧な礼を返し、
「高名なユバータ司教とお会いできて嬉しいですわ」
「私のほうこそ、お目に光栄至極にございます……帝国の叡智よ」
チラリ、と上目遣いで見つめてくるユバータ司教に、ミーアは、おほほっと誤魔化すように笑った。
「まぁ！　叡智だなどと、そのような、大仰な名で呼ばれるのは、恐れ多いことですわ」
「なるほど、ミーア姫殿下は、謙遜な方のようだ」
目を閉じ、口元に笑みを浮かべながら、ユバータ司教は言った。
「ところで、なにやら、少々、思い切った提案をお送りいただきまして」
眼鏡の位置を軽く直しながら、彼は鋭い視線を向けてくる。
「なんでも、パライナ祭を再開したい、とか」
その問いに答えたのは、ミーアではなく、レアだった。
「いえ、ユバータさま。そうではありません」
生真面目な、熱意のこもった声でレアは続ける。
「確かに、私はただ再開することを提案いたしましたが、ミーア姫殿下が、さらに素晴らしいものを提案してくださいました」
そうして、自然に……そう、ものすごぅく自然に！　レアはミーアに話を振って来た。

視線をスッと振って、ささ！　出番です！　っとばかりに。
その、熟練の伝令兵もかくや、といった手腕にミーアは思わず瞠目する。
それから、ごくごく自然に自分もパスの先を探そうとするも、自分に視線が集まってくるのを感じて……ふぅっとため息を吐いて……。
「ええ、そうですわね。ちょっとしたアイデアを思いついたので、提案させていただきましたの」
諦め半分にそう言ってから、すかさず、
「ああ、でも、もちろん、わたくしが一人で思いついたわけではなく、特別初等部の子たちを見ていてヒントをいただいて……」
自分の手柄ではないよ、と、抜かりなくアピール！
――ふむ、よくよく考えてみると、わたくしの功績をわかっていただくと同時に、功績を誇りすぎて謙遜さを失ってもダメというのは……いささか加減が難しいですわね。
なぁんて、頭を悩ませるミーアであったが……。
「なるほど。神はこの世界のすべてのものを用いて、我ら人に導きを与えられることがあります。もしも、そのアイデアが善なるものであるならば、きっと、神はあなたに語りかけられたのでしょうね」
ユバータ司教は、朗らかな笑みを浮かべた。。
ミーアはそこで、おや？　と思う。
――なんだか、思っていたより、敵対的ではないような……。いえ、逆に……好意的なような？
まるで、神に語りかけられた聖人に対するような司教の態度に、ミーアは困惑する。
「それは、ミーアさまが、神に選ばれた人であるとおっしゃっているのでしょうか？」
困惑した様子で問うリオネルに、ユバータ司教はあくまでも穏やかな顔で首を振った。
「そうではあるが、たぶん、君の言っている意味とは違う」

それは、さながら、教えを請う弟子に語る、教師のような口調で……。

「もしも、その提案が真に善なるものであるならば、神はミーア姫殿下を選ばれたと言えるだろう。しかし、それは、別にミーア姫殿下が優れた知恵を持っているとか、慈愛の人であるとか、そういったこととは関係ない。神は、取るに足らぬ者に語りかけ、働きのために用いることもあれば、皇女殿下をお用いになることもある。善人を用いることもあれば、悪人ですら用いることがある。その選びの基準は我らには計り知れないが、一つ言えることは、その選びに間違いがないということだけだ」

その言葉を聞き、ミーアは、ユバータ司教への評価を微妙に改める。

――この方は、敵対的というわけではありませんけれど、かといって好意的というわけでもなさそうですわね……。なんだかこう……冷静に観察されているような……そんな感じがしますわ。

その推理を証明するように、ユバータ司教が分厚い眼鏡の奥、鋭い視線を送ってきているように、ミーアには感じられた。

番外編　パティとハンネス……とベルとシュトリナ

その日、ハンネスとパティの二人はセントノエル内の宿屋でのんびりしていた。
そこは、しばしセントノエル島に滞在することにしたハンネスに、ラフィーナが用意してくれた場所だった。
今日は、部屋にパティが来ており、二人は姉弟水入らずの時間を過ごしているのだ。
「ところで、姉上、セントノエルでの生活は、いかがですか？」
問われ、パティはきょとん、と小首を傾げた。
「どうしたの？　急に……」
「いえ……その、少し気になってしまいまして……」
「心配しているということ？」
「心配、と言いますか……」
ハンネスは微妙に言葉を詰まらせてから……。
「お姉さまはご存知ないでしょうが、私が幼い頃、お姉さまが行方不明になられた時があったのです」
「行方不明……？」
眉間に皺を寄せるパティに、ハンネスは頷いてみせて。
「そうです。ある日、突然、クラウジウス家からお姿が見えなくなった。そして、帰って来たお姉さまは……それ以前より、さらに感情を表に出すことがなくなり、また、蛇に従順に従うようになりました」
ハンネスは深々とため息を吐いた。
「だから、私はずっと思っていました。その期間に、姉上が、蛇に酷い扱いを受けていたのだろうと……抵抗する心を完全にへし折られるほどに酷い経験をされ……だから、姉上は、蛇に従順な奴隷になってしまったのだと、そう考えたのです」

その話に、パティは、ああ、とつぶやいた。
「……それは、たぶん逆」
おそらく、それはこの時代で得たものを……希望を、覆い隠すための擬装。
それを知られれば、蛇に排除されるから……決して見せぬように施した、パトリシア渾身の擬装だ。
「そのようですね。お顔を見れば……なんとなくわかります」
ハンネスは、少しだけ微笑んだ。それから、なにやら言いづらいことを言い出すような様子で、口をモゴモゴさせつつ。
「だから、これは、そのぅ……姉上のことが心配だからというよりは、セントノエルでの幸せなご経験を、ただ私が、お聞きしたいというだけなのです。ご結婚されてからも、ずっとずっと、私は、姉上の幸福そうなお姿を見たことがありませんでしたから」
「そう……」
パティはちょっぴり目を見開いてから、
「安心した……。ハンネスにも気付かれなかったなら……私は上手く隠せたんだ」
その顔をほころばせた。それから……。
「あのね、ハンネス。私、セントノエルでとっても楽しく暮らしてるよ。前にも会ってるよね、ヤナっていうお友だち。特別初等部のみんなとも仲良くしてる。みんな、優しくしてくれるの。この前も……」
嬉しげに、楽しげに、年相応に、無邪気に……パティは日々の記憶を語る。
それは、ハンネスが知らなかった姉の顔。姉が、クラウジウス家にいなかった空白の時間に得た、大切な希望。
それを聞けたことが嬉しくて、彼は思わず笑みを浮かべる。
「そうですか……。幸せな時間を過ごせているようで、ホッとしました」
「うん……」

パティは、そっと静かに頷いて……。
「だから私はここにいる間に、一生分の幸せを味わい尽くす。これから先、なにがあっても、決して折れることがないために……」
その言葉に、ハンネスは目を見開いた。
「私の頑張りが、この日の幸せに繋がるって思えるように、この時代のことを目に焼き付けていくから……私は、もう二度と、この時代に帰ることはないから……」
「姉上、それは……っ」
驚愕に固まるハンネスに、パティはそっと目を向ける。
「私は、もう、この時代では死んでいる。そうなんでしょう？」
その問いに、ハンネスは息を呑んだ。
「……大丈夫。私がどう死んだかは、教えなくてもいい。今までであなたが言わなかったということは、たぶん、私が知らないほうが良いことだろうから」
パティが知ってしまうことで、今の状況が一変してしまう情報……。
自身がどう死ぬかわかっていれば人は恐怖し、判断を誤るものだ。
今この時、この未来に至ることが最も重要であると考えるならば、パティに、自身の死に様を教えないほうが良いと、ハンネスはそう考えたのだろう。
パティは、彼の考えに納得していた。そして、その正しさも認めていた。
「しかし、姉上……」
「大丈夫だから。私は孫娘が作ったこの世界が大好きだから……そのためだったら、どんなことだって……」
っと、その時だった。
唐突に、ノックの音が響いた。
「失礼します。ハンネス師匠！」
元気の良い声と共に入ってきたのは、ベルとシュトリナだった。
「おや、君は……」

「はい。先日の冒険譚の続きを聞きに来ました」
緊張した空気をう吹き飛ばすようにして入って来たベルは、パティの姿を見つけて笑みを浮かべた。
「あっ、パティも来てたんですね……」
それから、ハッとして……。
「あ、もしかして、お邪魔だったでしょうか……？」
「……いえ、大丈夫です。私もハンネスから話を聞きたいと思っていたところですから。それに、シュトリナさんにも、ぜひ、ご相談したいと思っていました」
「例の、水土の薬のことですね？」
シュトリナの言葉にパティは一つ頷いて、
「はい。蛇の情報を追うだけで、ハンネスの病を治す薬が作れるとは限りませんから」
蛇からもらった薬は、確かにハンネスの病を押さえた。けれど、完全に治すには至っていない。けれど、今のハンネスはその病を克服している。ということは、地を這うモノの書から得られる薬の知識を、さらに進化させた可能性もあるのかもしれない。
「そうですね。イエロームーン家の知恵を借りることができれば、ありがたい」
ハンネスは深々と頷いてから、
「では、そうですね。すでにわかっていることをお話ししましょう」
それから、彼はベルのほうにも目を向け、
「それに、冒険の話も少し詳しくいたしましょうか」
それを聞き、ベルはパァッと笑みを浮かべた。
「はい！　ぜひ！」

番外編　パティとハンネス……とベルとシュトリナ（後書き）

活動報告更新しました。来週はお休みです。

第十八話　ニッコニコ、もっちもち

「それで、パライナ祭について、提案したきこととは？」
場所を生徒会室に移し、改めて対談を再開する。
スッと背筋を伸ばして椅子に座ったユバータ司教は、澄んだ瞳でミーアを見つめてくる。っと、その時だった。
「失礼いたします」
ちょうど待ち構えていたように、アンヌが入って来た。
「お茶菓子をお持ちいたしました」
「ありがとう、アンヌ。良いタイミングですわ」
ミーアの労いを受けて、アンヌは少しだけ嬉しそうに微笑んで、それから、ユバータ司教にも頭を下げる。
そうして、テーブルの上に置かれたもの……深みのある皿の中身を見て、ユバータ司教は小さく首を傾げた。
「これは……」
「我が帝国の自慢のお菓子……満月団子ですわ！」
それは、ユバータ司教攻略のためにミーアが用意したものだった。
そうなのだ、なんの備えもなくユバータ司教を迎え撃つような真似を、ミーアがするはずがないのだ。ミーアは……ユバータ司教の胃袋を掴んでしまう戦術に出たのだ！
――とりあえず、牽制がてら、美味しい満月団子をご馳走して、その美味しさの説得力を持って、ユバータ司教を言いくるめる。これですわ。
ミーアの基本戦術の一つ、相手の胃袋を掴みに行く作戦だ。
胃袋のご機嫌を取ることで、好意的な反応を引き出そうという、極めて戦略的な行動である。別に、ミーアが食べたかったから用意してもらったわけではない。あくまでも作戦だ……本当だ！
「おお、これはなかなか！」

ユバータ司教は満月団子を食べて目を丸くした。その顔に、自然と笑みが浮かぶ。
「これは、食べたことのないお菓子ですね。モチモチとして、ふふふ、この甘味のある豆もなかなか美味しい」
上機嫌に笑っている。どうやら、彼は甘い物好きっぽいぞ、とミーアは察する。
それならば、案外、味方につけるのは簡単かも……などと思いつつ、ミーアも早速、自分の分の満月団子にフォークを伸ばした。
むにむに、としたお団子をフォークで刺し、これでもか！　というぐらいに、あまぁいペーストを絡める。絡める……まだまだ絡め！　絡め！！　絡める！！！
そうして、表面に甘い豆のペーストを塗りたくると、一思いにパクリ。
瞬間、広がるのは甘くてコクのある味。それを楽しみつつ、歯で噛みしめれば、もち、もち、っと団子が音を立てる。
――ふふふ、この歯応えがたまりませんわ……ふむっ！
っと、そこで、ミーアは気付く。
――このお団子、中にも甘いソースが入っておりますわ！　これは、なんとも嬉しい一工夫ですわ！
帝国の叡智（グルメ）ミーアの舌が、料理に施された工夫を見抜く！　その叡智の閃きは、留まるところを知らないのだ。
ミーアがニッコニコしつつ、モチモチと満月団子を楽しみ、それから、お茶で口を漱いだところで……。
「して、このお菓子を今、私に食べさせた理由は？」
ユバータ司教が真面目な顔で、視線を向けてきた。
「そうですわね……。もう一つ、食べていただきたいものがございますの」
ミーアはそう言うと、パンパンっと手を叩く。と、待ってましたとばかりに、アンヌが再び入って来た。運ばれてきた皿の上には、平べったいパンがのせられていた。

「どうぞ、こちらも食べていただき、それから話をいたしますわ」
ユバータ司教は一つ頷き、それから、パンを手に取った。ポソポソとしたパンは、全体にひび割れていて、ちょっとしたことで崩れてしまいそうだった。
ミーアも同じくそれを手に取り、口へと運ぶ。
口の中の水分がすべてもっていかれてしまうような感覚、さらに、全体的に硬くて、粉っぽい感じがする。
「いかがかしら？　ユバータ司教、お味のほうは」
ユバータ司教は問いには答えず、黙ってそれをすべて食べてから、
「そうですね。率直な感想を言えば、あまり良い出来のパンとは言えないでしょう」
「同意見ですわ。味のほうは、まぁ、そこそこだと思いますけど、やはりボソボソとした口触りがいかんともしがたいですわ」
ミーアはそのパンに、先ほどの満月団子にかけられていた、甘い豆のペーストにつけてパクリ。
「このように、ペーストやシチューと絡めれば食べられないこともないですけれど、既存のパンに比べれば、食べにくいことは確かですわ」
「そうですね。確かにその通りだと思いますが……このパンは一体、なんですかな？」
その問いに、ミーアは満を持して答える。
「これは、実は、どちらも寒さに強い小麦によって作ったお料理なんですの」
「寒さに強い小麦の……」
ユバータ司教は少し驚いた様子で目を見開いた。
「なるほど、これが噂の……」
「そうですわ。巷ではミーア二号小麦、などと、わたくしの名を冠して呼ばれているようで……、わたくしの忠臣たちが勝手にやったこととはいえ、お恥ずかしいことですわ」
きちんと、名前つけたの、自分じゃないよ？　そこんとこ、誤解

しないようにね？　とアピールしたうえで、ミーアは続ける。
「それはさておき、恐らく、もうご存知かと思いますけれど……この大陸を今現在、食糧危機が襲っておりますわ。顕在化はしておりませんけれど……」
「村々からの報告で、多少は把握しております。今年は、回遊聖餐の調理も少なかったとか……」
ユバータ司教の視線を受けて、ラフィーナとレアが頷いた。
「わたくしは、こう思いますの。ユバータ司教。今日、このような状況であるからこそ……パライナ祭を開かなければならない、と……」
ミーアは、厳かな口調で言った。

第十九話　プレゼンミーア

「このような状況だからこそ……ですか」
ユバータ司教は、なにかを考えるように黙り込み、それから、目の前のお皿に手を伸ばした。手に取ったのは、先ほどの、できの悪いパンだ。
「寒さに強い小麦か。なるほど。調理方法でずいぶんと味が変わるものですね」
「ええ、上手く処理すればこんなにも美味しくなりますのに、今までと同じやり方をしてしまうと、あまり美味しくないパンになってしまう。これは不幸なことですわ。ですから、寒さに強い小麦の存在と、それに適した調理法を各国に知っていただくために、情報共有の場としてパライナ祭が用いられればいいと思っておりますの」
そこで、ミーアは一応、付け足しておく。
「無論、味をどうこう言うのは贅沢なことと思われるかもしれませんけれど……」
「そんなことはないでしょう。ちょっとした調理の違いで、味が良くなるのなら、それに越したことはない。“不味い”小麦ならば、あまり作りたがらないでしょうが、単に“味が違う”小麦ならば、寒さに強いという特性と合わせて、作りたがる国は増えるはず。再び、今年のような天候不順の年がやって来た時のために、この小麦を普及させることには意味がある」
ユバータ司教は、団子をフォークで突きながら、小さく笑みを浮かべた。
「子どもたちも、そのほうが幸せでしょう。食事は楽しみの一つ。ならば、できるだけ美味しい物をあげたいと思うのは、大人として当然のこと。それが人々の幸福に繋がるというのなら、する意義は十分にあるでしょう」

意外なほどあっさりと認められて、ミーアは意表を突かれる。
「ええ、まぁ……その、わかっていただけたなら、幸いですわ。ええと、それともう一つ、パライナ祭について提案したいことがございますの」
「ほう、伺いましょう」
眼鏡を押し上げて、ユバータ司教は、ミーアのほうに目を向ける。そこには、好奇心の光が輝いていた。
そんな純粋な興味の視線を向けられ、ミーアは、ちょっぴりたじろいだ。
――どうも、話が違う感じがしますわ。てっきりもっと敵対的な方だとばかり……。
「どうかなさいましたか？　ミーア姫殿下」
不審そうな顔をするユバータ司教に、小さく首を振ってから、ミーアは続ける。
「いいえ……。実は、この寒さに強い小麦は、帝国内では蔑まれた辺土貴族、ルドルフォン辺土伯家のセロという少年が発見したんですの。我がミーア学園で教育を受けた彼が、その教師と共に発見した小麦を改良したものが、このミーア二号小麦なのですわ」
「ほう……。それで？」
「裏を返せば、セロ・ルドルフォンが教育を施されなければ、この発見はなかった。彼の家は、あまり裕福ではございませんの。だから、セントノエルのような、知識の集まる素晴らしい学校に通わせることはできなかった。結果として、彼の才能は眠ったままだったかもしれない。寒さに強い小麦だって見つからなかったかもしれない。もしも、そうなっていたら……」
「恐ろしいことが起きていたでしょうな……。飢饉が起きて、餓死者が出ていたやもしれませんし、帝国も無事では済まなかったでしょう」
「ええ。すべてはセロくんのおかげですわ。ミーア学園にはほかにも、優秀な平民の子どもがおります。孤児院育ちの子も通っていて、

力をつけてきている。その功績をもって、各国に、平民の子どもたちへの教育の大切さを説くつもりですわ」
それを聞き、ユバータの顔にも理解の色が広がる。
「なるほど。虐げられる子どもたちの中にも素晴らしい人材がいるから、教育を施すことの利を説く場としてパライナ祭で共有したいと？」
「そうですわ。それによって、貴族の民に対する態度を改めさせたいとも思っておりますわ」
「ああ、それは、実に素晴らしいお考えですね。未だに民を乱雑に扱う領主は少なくはない。民の人材としての可能性を見せることができれば、態度を変える者もあるでしょう。とても理に適ったお考えだ」
またしても、特に反発を受けるようなことはなかった。
ユバータ司教は、とてもすんなりと、ミーアの言葉を受け入れているようだった。いや、むしろ、その声には称賛の色さえある。
まぁ、それはそれで良いのだが……。
――違和感が拭えませんわね。この方は、味方と考えてよろしいのかしら？
レアから聞いた話によれば、ユバータ司教は、ヴェールガの保守派の重鎮だ。ルシーナ司教とも仲が良いと聞くし、仮にミーアの提案が良いものであったとしても、ヴェールガ公国の人間でないという一点で、ケチをつけて来るものとばかり思っていたが……。
そう思いますわよね……っと、ラフィーナのほうに視線を送ると……なぜだろう、ラフィーナは、こうなって、当然！　みたいな顔をしていた。
自らのご自慢のお友だちの勇姿を披露できたからなのか、誇らしげな顔をしていた！
――ラフィーナさまの意見はアテにならなそうですわね……。レアさんは……。
っと見てみると、やっぱり、レアも納得顔をしていた！　私の師

匠がまたやらかしてしまいましたか……などと、ちょっぴりドヤァな顔すらしていた。
ミーアは小さくため息。それから、改めて考える。
――このままユバータ司教を味方にできてしまえれば楽で良いのですけど……ここは油断禁物ですわ。祭りのテーマに感心したからといって、肝心の神聖図書館への入館許可を得られるとも限りませんし……。不測の事態に備えて、彼のひととなりを探っておくべきかしら……ふむ……。
っと、ミーアが考えごとをしている目の前で……。
「本当に素晴らしいお考えだと思います……。けれど」
っと、唐突にユバータ司教が難しい顔をする。
「パライナ祭の開催に賛成するには、懸念すべきことがございます」
「ほう、懸念すべきこと、ですの？」
ミーアは、紅茶のカップに静かに手を伸ばしつつ、ほぅら、来たぞ！　と気を引き締めるのだった。

第二十話　どちらでも良いからこそ……

「それは、いったいなにかしら？　ユバータ司教、私のお友だちのミーアさんのなさることに、なにか引っかかることでも？」
そう問うたのはラフィーナだった。
微妙に……その目つきが獅子めいた輝きを放っていたので、ちょっぴりビクッとなってしまうミーアであったが……。
「パライナ祭に関しての二つの提案、それは素晴らしいものだと思います。実現すれば、祭りはきっと素晴らしいものになるでしょう。が……問題は、成功するかどうかでしょうか」
一度、言葉を切ってから、ユバータ司教は深皿の中……残っていた団子をパクリと一口……。
どうやら、満月団子が気に入ったようだったっ！
もぐもぐ、モチモチと食べてから、彼は静かに告げる。
「私が懸念するのは、ほかならぬ帝国内部のこと。すなわち、聖ミーア学園が帝国の代表校として選ばれるかどうか、です」
「え……？」
思ってもみなかった指摘に、ミーアは思わず口を開ける。
「帝国にはいくつかの学校があるはず。その中には、名門と呼ばれるものもあるでしょう。そこに新参の、それも、平民にも広く門戸を開いた学校が出てきて、帝国を代表する学校としてパライナ祭に参加する……そのことを、他校が認めるでしょうか」
もちろん、パライナ祭に参加するのが各国から一校ずつなどという決りはないだろうけれども……。
「ミーア姫殿下であれば、権力でごり推すこともできるでしょうが……そのような形で祭りに参加した聖ミーア学園に、はたしてどの程度の発言力があるのか……。自国内の人々にすら認められていないマイナー校が、はたして他国から注目されるか……」

「それは……」
ミーアは思わず言葉を失う。
「これは良いことですよ」と他人に紹介する人間が、自分ではそれをやっていないというのでは話にならない、とユバータ司教は言っていた。まず自国内で全面的な支持を受けてから勧めてこいと言われるのがオチだ、と……そう言っているのだ。
痛いところを突かれて、ミーアは思わず唸る。
「功績を誇示し、平民の子に教育を施すことの大切さを語ったところで、その声に誰も耳を傾けぬのであれば意味はなし。さらに、聖ミーア学園に箔をつけるために、パライナ祭を利用した、などと言われれば、ヴェールガ公国との仲もこじれる。ラフィーナさまのお立場も悪くなるやもしれません」
それは、まさに、ミーアたちが心配していたことだ。ユバータ司教自身もそのように考え、攻撃してくるのでは、と懸念していたことでもあったのだが……。
「まぁ、実際にはそこまでのことにはならないかもしれませんが……それでも、パライナ祭を再開するのであれば、絶対に成功させなければなりませんから」
慎重な口調で言うユバータ司教に、ミーアは腕組みする。
――確かに、懸念は尤もですわ。ミーア学園の功績を見せるためには、ミーア学園が帝国を代表する学校として、パライナ祭に出る必要がある。けれど、帝国貴族がそれを認めてくれるものかしら……。
考え込むミーア。一瞬の沈黙。その空気を嫌ったのか、声を上げたのはリオネルだった。
「それにしても意外です。ユバータ司教は祭りの成功に、こだわるのですね？」
「それは、当然のことでは？」
怪訝そうな顔をするユバータ司教に、リオネルはとても真面目な顔で頷く。

「一般的にはもちろんそうでしょうけれど、あなたは先ほどおっしゃいました。神は善き者も、悪人さえも用いる、と。であるならば、神は祭りの成功であれ、失敗であれ用いて、歴史を善い方向へと導いていく、と言うこともできるのではありませんか？　我らの信仰に照らし合わせるならば、そこまで成功にこだわらずとも良いのでは？」

その問いに、ユバータ司教は優しげな笑みを浮かべて……。まるで弟子を教える師のような、丁寧な口調で応える。

「ああ、その通りだね。神は、人々の失敗すらも用いて、歴史を善き方向へと導いていくことを私は知っている。そして、仮に生きている間に報われることはなかったとしても、死後に報われることも、もちろん知っている」

彼はラフィーナのほうに視線をやりながら言った。ラフィーナの母は、まさに、そのような論理によって、この世での報いを求めずに働いているからだ。

そのうえで……。

「ただ、まぁ……上手くいくに越したことはないでしょう？」

不意に、お道化た様子で、ユバータ司教は肩をすくめた。軽く眼鏡の位置を直しながら、彼は続ける。

「これは、いささか理屈っぽい話だけれど、確かに避けられぬ不幸があったとする。我々には計り知れない「必要な失敗」「必要な不幸」というものがあるのかもしれない。それすら糧として世界は、善き方へと進んでいく……そういうものであると私は思っているけれど……」

それを聞いた瞬間、ミーアは思わず目を見開いた。

自身の……断頭台で終わってしまった世界のことを思い出したからだ。

失敗に終わった人生、それすらも、今に至るための必要な犠牲だったのだとしたら……あの失敗は必然だったのだろうか……？　でも……。それは……。

「しかし、残念ながら我らの目には何が必要な失敗か、などわかりはしないのだ」
ユバータ司教は、厳かな口調で続ける。
「この世界にはきっと、絶対に必要な成功と、絶対に必要な失敗とが存在している。けれど、失敗でも成功でもどちらでも構わないことも、恐らくは数多く存在している。全てが最初から決定づけられている、などとは、私は思わない。そして、もしも、失敗であれ、成功であれ、神が善きことに用いてくださるというのならば……成功したほうがいいでしょう？」
悪戯っぽい笑みを浮かべて、彼は言った。
もしも、失敗が決定づけられたことがあるとして、それは人の目には見えない。
もしも、成功が決定づけられたことがあるとして、それも人の目には見えない。
見えないならば、それを考えても意味がない。
そして……もしも失敗しても、成功しても、どちらであっても善きことのために神は用いるというのならば、成功したほうが良い。
ならば、頑張って成功に勤めるべきではないか……と彼は言っているのだ。
そちらのほうがいいから、と。
ミーアは……その言葉に同意することができた。失敗の果てにここに立つミーアであればこそ、彼の言葉に心の底から同意することができたのだ。
あの帝国末期の日々、積み重ねた努力は、最初から決定づけられた失敗に繋がっているのではなくて……成功した可能性だってあって……ほんの少し届かなかった、それだけで……。
でも、その失敗すら糧として、あの努力の結果が今に繋がっているのだと……そう考えたほうが救われるから。
ユバータ司教は優しく微笑む。
「だから、私は、善き計らい事のためには努力して成功に努めるべ

きではないか、と思います」
　それから静かに目を閉じて続ける。
「これは、結局のところ、単純な話なのだ。リオネルくん。私が言いたいのは、善きことのために努力したことが、たとえ失敗したのだとしても、その努力には、必ず何らかの形で神が報いてくださるということ。だから、無駄な努力などないし、失敗を恐れる必要もないという……ただ、それだけの……これは、小さな救いの話です」
　そこまで話してから、ユバータ司教は改めてミーアに視線を向けてきた。
「いずれにせよ、今のままでは、パライナ祭の開催に賛同はできません。帝国内の状況もわかりませんから。だから、どうでしょうか？　少し、聖ミーア学園に行って、見学させていただこうと思うのですが……」
「……わざわざいらしていただけるのですの？　帝国へ……」
「ええ。帝国の叡智が、各国に誇らんとする学校に、少々興味がございますので」
　眼鏡を軽く押し上げて、ユバータ司教は言うのだった。

第二十一話　紫月花（しげつか）の会

ティアムーン帝国には、いくつかの勢力が存在している。
四大公爵家それぞれに連なる四つの派閥、そこに属さない辺土貴族を中心とした勢力、各領地に出入りする商人たち……。そのほとんどが、今や帝国の叡智ミーアに膝を屈していた……などと言うことは、もちろんない。
未だ、ミーアに友好でない者たちの数は少なくはなかった。
そして、その中でも特に強硬に、ミーアのやり方に反発する勢力があった。
「紫月花の会（しげつかのかい）」と呼ばれるそれは、帝国中央貴族の夫人たちによって組織された会だった。

紫月花の会の長は、ブルームーン公爵夫人、ヨハンナ・エトワ・ブルームーンであった。
サフィアスの母でもある彼女は、若かりし日には剣術を嗜んでいたほどの、大変、気の強い女性であった。どちらかと言えば、レッドムーン家のほうが似合いそうな人であった。
ちなみに、サフィアスが痛いのが嫌いというのは、幼い頃、彼女から剣の手ほどきを受けたからだったりもするのだが……それはさておき。
「まったく、ミーア姫殿下には、困ったものじゃ。そう思うであろ？」
お茶会の席上、ヨハンナは不機嫌そうに鼻を鳴らした。その言葉に、取り巻きの夫人たちが次々と頷いた。
「まさに、ヨハンナさまの仰るとおりです」
「そうであろ？　我が帝国では、貴族の妻たるは、夫を支え、子を育てるもの。政に口を出し、あまつさえ帝位を継ごうなどと……皇

女のすべきことではない」
「まったく、もっともなお話です。ヨハンナさま」
「次期皇帝陛下には、やはりサフィアスさまが相応しいと、私、常々思っておりましたのよ？」
あからさまなおべっかに、ヨハンナは軽く眉を上げる。
「うちの愚息が帝位を継げばそれに越したことはない。けれど、別にサフィアスでなくても構わぬ。グリーンムーン家の小童か、レッドムーンの小童か……帝位継承権を持つ男児が継ぐことが一番じゃ。愚息がミーア姫殿下に忠誠を誓うというのならば、あれにこだわる必要はない」
ぴしゃりとそう言われて、慌てるのは、取り巻きたちである。
皇帝サフィアスに気に入られるように、必死にヨハンナに取り入っているのだ。帝位を継がないなどということになっては、目も当てられない。
そんな有象無象の取り巻きなど一切気にせず、ヨハンナはグリーンムーン公夫人の姿を探す。
「時に、グリーンムーン公夫人は今日は来ておらんのかえ？　例の聖ミーア学園のことについて、相談しようと思うておったのに」
不機嫌そうにため息を吐くヨハンナに、取り巻きたちは震え上がる。
「そっ、それより、せっかくのお茶会なのですから、お茶の香りを楽しむのはいかがかでしょうか？　本日のお茶は、ランジェス男爵夫人が用意してくれたものですのよ？　ね？」
話を振られたのは、ふくよかな女性、ランジェス男爵夫人だった。ちなみに、彼女の息子、ウロス・ランジェスは、ティオーナ監禁事件で危うく追放されそうになったところ、ミーアに救われた少年である。
ブルームーン公の派閥に属するランジェス家は、下っ端ながらも、良質な茶葉や菓子、さらに細やかな贈り物により、派閥内での地位を確立していた。

話を振られたランジェス男爵夫人は、ふっくらした頬に笑みを浮かべて、ちょっぴり胸を張り……。
「本日は、ペルージャン産の良い茶葉が手に入りましたので、お持ちしました。みずみずしい香りが、とても素敵な……」
「まっ！　ペルージャンですって！？」
声を上げたのは、つい最近、紫月花の会に入った、年若い子爵夫人だった。
「下賤な農奴の末裔の作った下賤な茶葉をこの紫月花の会で出すなんて。あまつさえヨハンナさまに出すなんて、まったく呆れてしまいますわ」
ヨハンナに取り入るためだろうか、ランジェス男爵夫人をこき下ろす子爵夫人であったが、当のランジェス夫人は、気にした様子はなかった。というか、むしろ、ビクッと、なにかに恐れるような顔をした。
得意げな子爵令嬢とランジェス男爵夫人の視線の向かう先、ヨハンナは、静かに紅茶をすすってから、
「土いじりなど、下賤な農奴の末裔のすること……だが、ペルージャンの茶葉は先の皇妃パトリシアさまが好まれた茶葉。それを、子爵家の小娘が……馬鹿にすると？」
ギロリ、と鋭い視線を受け、その取り巻きは跳びあがった。
「いいい、いえ、そのようなことは、けけ、決して……」
「美味い、不味いを己が舌で判別できぬとは情けない。この紫月花の会に相応しからぬ者じゃな」
「ひ、ひぃ……」
涙目になる子爵夫人……であったが……。
「ヨハンナさま、彼女も悪気があったわけでは……」
っと間に入ったのは、サフィアスの婚約者、レティーツィアの母であるシューベルト侯爵夫人だった。
彼女はとりなすように笑みを浮かべてから、
「せっかくのお茶が不味くなってしまいますし、ここは、どうぞお

納めください」
「まぁ、それもそうか。未来の息子の嫁のご母堂にそう言われては、引き下がらぬわけにもいかぬ」
ヨハンナは不機嫌そうに、ふん、と鼻を鳴らしてから、子爵夫人に片手をひらひら、とした。それを見て、子爵夫人は思い切り頭を下げてから、その場を逃げ去って行った。

さて、こうして、紫月花の会のお茶会を終えたヨハンナは、自室に戻って来た。
頭を下げてメイドが退出するのを待ってから、彼女は小さくため息を吐き……。
「帝国の伝統を守らなければならぬ。アデラ……わらわに力を……。そして、パトリシアさま、ご照覧あれ……。あなたさまが愛した帝国と、ミーア姫殿下は、必ずや、わらわが守ってみせましょうぞ」
静かにつぶやくのだった。

第二十二話　パティのお願い

こうして、生徒会室での会談は終わった。
ユバータ司教を説得することは叶わなかったが、まず満足な結果に、ミーアはホッと安堵の吐息を吐いた。
――それに、思わぬ懸念にも気付かせていただきましたわ。
ユバータ司教の言うことはもっともだった。
確かに、パライナ祭に聖ミーア学園が参加すると言えば、反対する者は多いだろう。そんなゴタゴタを祭りの準備中にするわけにはいかない。気付けて僥倖といったところだ。
――中央貴族には面倒な方が多いですし、大いにあり得そうですわ。まったく、面倒なこと極まりありませんけれど……。
そんなふうにしてミーアが物思いにふける中、立ち上がったリオネルがユバータ司教に歩み寄った。
「お見事でした、ユバータ司教」
賞賛の言葉を受け、ユバータ司教は不思議そうに視線を上げる。
「さて、見事、とは……？」
「ミーア姫殿下のことを正しく評価されておられる点です。父上はそうではありませんでした。ミーア姫殿下のことを、なかなか信じることができなかった……」
少しだけ苦い顔をするリオネルを見つめていたユバータ司教であったが、その顔に、ふっと笑みが広がる。
「……その評価は、フェアじゃないな」
「フェアじゃない……？　どういうことですか？」
首を傾げるリオネルに、ユバータ司教は肩をすくめる。
「言葉通りの意味さ。いいかな？　私は、君たちの父上、マルティンのことを知っている。なにしろ、彼の友人だからね」
おどけるように微笑んで、続ける。

「だから彼が信頼のおける友であるということも知っている。いささか疑い深いのは玉に瑕だとは思うが……ともかく、そんな彼がミーア姫殿下のことを認めたという事実を、私は事前に知っていたんだ。事前に知識を得ているというのは、とても大きいのだよ」
分厚い眼鏡のレンズの奥、灰色の目は優しい光を湛えていた。それは、弟子に向ける師の視線、あるいは、子に向ける父のような視線で……。
「だから、君たちのお父上より、私のほうが優れているなどということは決してない。我が友の名誉のために断言しておくよ……。といっても、多少の失敗があったとしても、君の彼への信頼は揺るがないとは思うがね」
その指摘に、リオネルは目を見開いて……、
「ユバータ司教……ありがとうございます」
それから、深々と頭を下げるのだった。

さて、一仕事終えて、満月団子でちょっぴり苦しくなったお腹をさすりつつ部屋に戻ったミーアだったが、それを待ち受けている者がいた。
「ミーアお姉さま」
アンヌに入れてもらったのだろうか。パティが真剣な顔で話しかけてきた。
「あら、パティ、どうかしましたの？」
きょとりん、と首を傾げるミーアに、パティが続ける。
「お願いがあります。私たちを……特別初等部のみんなを、聖ミーア学園に連れて行っていただけないでしょうか？」
「まぁ、特別初等部の子どもたちを……ふむ」
一瞬驚くも、すぐに、その真意を測るように、パティに視線を返す。っと、パティは小さく頷いて、
「ずっとパライナ祭について考えていました。聖ミーア学園は、確かに功績を立てています。けれど、特別初等部は、まだ特に功績を

立てているわけではありません」
「なるほど、確かにそうですわね……」
なにしろ、セントノエルで孤児たちを受け入れ始めたのは、昨年のことなのだ。いくらなんでも、一年かそこらで何かの手柄を立てられるはずもなし。
そもそも、特別初等部に集められた子どもたちは、その資質によって集められたわけではない。才能の有無にかかわらず、孤児たちに生きる知恵を与えるために、との願いをもって、特別初等部は造られたものだ。
ミーアの中では違うのだが、少なくとも世間的には、そうなっているのだ！
なので、功績がないこと自体は別に驚くに値しないが……。
「ミーアお姉さまがなさろうとされていることのためには、特別初等部の子どもたちの功績を示す必要もあるのではないでしょうか。だから、聖ミーア学園と一緒に、パライナ祭に参加できればと思って……」
その一言に、ミーアは思わず唸る。
「なるほど。ミーア学園側の功績に相乗りするのですわね。それならば、簡単なお手伝いでも、特別初等部を良く見せることができるかも……」
例えば、寒さに強い小麦の研究を発表する際に、その手伝いをさせる……などだろうか。特別初等部の中でも特に優秀なローロ辺りならば普通に戦力になるかもしれないし、着飾らせた可愛い子どもたちが、きちんとお手伝いをしている姿は、良いアピールになるだろう。
――特別初等部の子どもたちはほとんどが孤児院出身。そんな子どもたちの立派な姿を見せられれば……。特別初等部をただの慈善活動ではなく、人材育成の場として紹介できれば、意味がありそうですわ。
「それに、その……昨年、私たちだけが帝国に連れて行ってもらっ

た時、少しですけど、初等部内に軋轢が生まれましたから」
「ああ、そういえば、そうでしたわね。今回の帰国もパティとヤナたちを連れていく予定ではありましたけれど、あまり待遇に差をつけるべきではないということですわね。でも、里帰りしたいという子もいるんじゃないかしら？」
首を傾げるミーアであったが、パティは静かに首を振り……。
「みんなにも聞いてみました。どちらにしろ、冬には里帰りすることになっているので、帝国に行ってみたい、とみんな言っていました」
「そう……」
自身よりも遥かに頭が回る、賢き祖母パティの提案に、ミーアはしばし黙考。その後、
「わかりましたわ。では、そのように手配いたしましょう」
それから、ミーアは小さく微笑んで……。
「しかし、今年の夏は、なんだか、賑やかなことになりそうですわね」
楽しげにつぶやくのだった。

第二十三話　終わる……ラフィーナの夏休み……終わる？

かくて、ミーアたち一行はセントノエル島を後にすることになった。

ちなみに、旅の同行者は、なんだかんだで、ちゃっかりギリギリテストを乗り切ったベルとシュトリナ、ベルにきっちり夏休みの宿題をさせようと意気込むリンシャ、レアとリオネル、特別初等部の面々に加え、シオンとキースウッド、ティオーナとリオラだった。

「パライナ祭という大事に関連したことなので、私も同行を……」

なぁんて意気揚々と言っていたラフィーナであったが、

「いえ、ラフィーナさまには、ヴェールガ国内のとりまとめをしていただくがよろしいでしょう。パライナ祭が実際に開催されるかはまだわかりませんが、もしも本当に開くとなると、ヴェールガ全体の支持が必要となるでしょうから」

っというユバータ司教の揺るがぬ正論を前に、見事にその希望を打ち砕かれた。

ラフィーナは、一瞬、表情を失ったものの、すぐに瞳を閉じ、そっと天を仰いで……。

「……ええ、そうね。それは、確かに、私の仕事ね」

そう、これは、仕方のないこと。仕方のないことなのだ！　と自分に言い聞かせるラフィーナである。

「公都に戻り、ヴェールガ公にもお伝えいただけると幸いです」

そう言われてしまえば、もはや、返す言葉もなかった。

馬龍を待たせていたこともあって、泣く泣く、泣く泣く、同行を断念。

こうして、ラフィーナの楽しい楽しい夏休みは終わりを迎えるのであった。

……ちなみに、しょんぼーりと寂しげな顔をするラフィーナを見

て、
「おお、どうした、ラフィーナ嬢ちゃん。やけに元気がないな。遠乗りでも行って気分転換するか？」
なぁんて馬龍に誘われて、帰還途中に遠乗り&速駆けを楽しんだりしていたので、まだ夏休みは終わってなかった説もあるのだが……まぁ、それはさておき。
さらに、今回の帰国には、アベルも同行しないことになった。レムノ王国に帰国し、姉、クラリッサ王女と話をしたいというのだ。
「すまない、ミーア。本当は、同行して、君のことを守りたいと思っているのだが……」
ものすごく、すまなそうな顔をするアベルを気遣うように、ミーアは微笑んで、
「ご一緒できないのは、とてもとても残念ですけれど……仕方ありませんわ」
そう、これは仕方のないこと。仕方のないことなのだ！　と自分に言い聞かせるミーアである。
「本当にすまない。その代わりと言ってはなんだが、しっかりとパライナ祭に向けての準備を整えてこようと思っているよ」
そう言われてしまえば、もはや、返す言葉もなかった。
馬車を待たせていることもあって、泣く泣く、泣く泣く、アベルを見送る。
……図らずも、親友と同じようなムーブをしてしまったミーアなのであった。類友というやつである。
アベルはシオンのところに行き、真っ直ぐにその目を見つめた。
「君にこんなことを頼むのは筋違いだと思うが……ミーアのことをよろしく頼む」
「言われるまでも無いことだが……友の頼みならば、より一層、気合も入ろうというものだ。安心して行ってくるといい」
そうして、二人の王子はしっかりと握手を交わすのだった。
ちなみに、サンクランドに関しては、すでにシオンから連絡を受

けて、動き出しているらしい。幸いなことに、サンクランドの場合には、代表校となる学校は決まっているらしく、もめることはないらしい。

国内のことよりは、むしろエシャールと会って、パライナ祭に向けての話し合いをしたいとのことで、今回の帝国行きに同行することになったのだ。ちなみに、途中でルドルフォン領に寄る予定にもなっているが、まぁ、他意はない。まったくない。

オウラニアも、一度、港湾国に戻る予定だ。ミーア学園とセントノエルの共同プロジェクトである、飢饉の際の海産物の利用計画を発表できるよう、準備を進めるためだ。

クロエも今回は帝都まで同行。そこから足を延ばし、ペルージャンにてラーニャと準備を進めることになっている。

一斉に動き出す仲間たちに心強さを感じつつも、ミーアの胸には一抹の不安が渦巻いていた。

それは、ミーア学園に対して良い印象を抱いていない中央貴族たち、また、帝国を代表する学校、その名も「グロワールリュンヌ学園」の妨害を予期してのこと……ではなかった。

そうではなく、気にかかっていることといえば……。

――あの魔窟ミーア学園にユバータ司教をお連れして、大丈夫かしら……？　ここ最近の学園の様子をあまり聞いておりませんでしたけれど……まさか、皇女伝を教科書に使うとか、そんな馬鹿げたことをやってたりは……まさかしてませんわよね……。ませんわよ……ね？

そうは思いつつも、どうにも信用しきれなかったミーアは、直接、ミーア学園に向かうのではなく、いったん、帝都に立ち寄り、そこで時間を稼ぐことに決める。

――ユバータ司教を帝都でもてなし、その間に、ミーア学園の準備を整えていただくことにいたしましょうか……。確か……あそこにはわたくしの像があったはずですけど、それを撤去……いや、しかし、あれはルールー族からの友好の証……。無下に扱うことはで

きませんわ。であれば、むしろ、その経緯をしっかりと像の脇に書いておいていただくのがよろしいですわね。

かくて、一行はセントノエルを後にした。目指すは帝都ルナティアである。

第二十四話　ミーア姫、ナニカの気配を感じる

馬車旅はつつがなく進んだ。

さしたる足止めもなく、一行は帝都ルナティアへと到着する。町の中を馬車で走ることしばし、遠くに白月宮殿を認めて、ミーアは思わず声を上げた。

「ああ、久しぶりの白月宮殿ですわね……うん？」

不意にミーアは眉をひそめた。

遥か彼方で、きらりきらりと、なにかが輝いているのが見えたためだ。輝いている、というか、はためいているというか……。

目をすがめ、眺めることしばし……ミーアの口から呻き声が漏れた。

「お……おお、あ、あれは……」

ミーアは白月宮殿の前に堂々とはためく、巨大なモノを見て、思わず頭を抱える。それは記憶に新しい……美しく輝く巨大な旗だった！

そして、まぁ、言うまでもなく当たり前のことながら……その旗にはド派手なミーアの絵が描かれていた。でかでかと、ミーアの顔が描かれていた！

――って、見ようによっては、アレ……生首っぽく見えて嫌ですわね……。

一瞬、背後にナニカの気配を感じて、思わず震え上がるミーアである。

そうなのだ！　ミーアは完全に忘れていたのだ。この帝都には、かの天才画家、シャルガールがいること……。そう！　あの！！シャルガールが！！！　いるのだ！！！！

――おっ、大人しくエリスの本の挿絵を描いているかと思いきや、あ、あのような恐ろしいものを作っているだなんて……。

思わず、頭を抱えたくなるミーアである。
しかも、その巨大な旗を振っている人物がまた問題だった。
「……お父さま、なにしてますのっ！？」
そう、旗を振っているのは他ならぬ、ティアムーン帝国皇帝、マティアス・ルーナ・ティアムーンその人なのであった。
満面の笑みで旗をブンブン振っている父の姿に、ミーアは天を仰いだ。
――っというか、あの大きさ……旗はかなり重たいはずですけど、お父さま、よく振っていますわね。
どうやら、レッドムーン公との筋トレは順調に進んでいるらしい。心なしか、ちょっぴり体が大きくなったような……それに、チラリと覗く二の腕も少しばかり筋肉質になったようにも見える。
――ふむ……お父さま、ちょっぴり格好よくなったかも……って、そうではなくって！
ミーアは、大男との相性がとても良いのだ。
「おお！　ミーア、よくぞ、戻った。宴の準備はできているぞ」
馬車を降りてすぐに、皇帝マティアスが駆け寄って来た。満面の笑みを浮かべる父に、ミーアはなんとか挨拶を返す。
「……お父さま、ご機嫌よう」
「うむ、壮健そうでなによりだ。ところで……」
「今回は、ヴェールガ公国の神聖図書館館長、ユバータ司教をお客様としてお連れしましたの」
ミーアの紹介を受け、ユバータ司教が礼をする。
「我が主の祝福がございますように、陛下。ニコラス・ダ＝モポーカ・ユバータと申します」
それを受け、マティアスは、威厳たっぷりに……旗を立てかけてから、
「よくぞ参られた。ユバータ司教殿。心より歓迎する」
そうして、白月宮殿の中に誘うマティアス。ミーアはその背を追って宮殿内に入ろうとして……、ふと思い出した様子で、特別初等

部の子どもたちを振り返る。それから、近衛が大切そうに片づけようとしている旗にチラと目を向け……。
「あなたたちには、特に言っておきますけれど……あなたたちは、アレを真似する必要は一切ございませんわ」
っというか、あんなこと、真似したら、絶対ダメだよ！　と言ってやりたいミーアである。
「えっ……？」
ミーアの言葉に、キョトン、と首を傾げる子どもたち。なにを言われているのか、わからない、という顔をしている。これはいけない！　っと、ミーアはさらに言葉を重ねる。
「あのような旗を作ろうとか、そういうことを考える必要はまるっきりないということですわ」
そう、この子たちがこれから行くのは、魔窟ミーア学園なのだ。常識など通じない、魔境なのだ！
もしも、セントノエルで学ぶ子どもたちが、ミーア学園に行くことで、変に感化されてしまったらどうなるだろうか？　あの巨大な旗を嬉々として振ったり、皇女伝の音読を始めたりしたら……。それは、悪夢である！
はたしてそれは、ユバータ司教の目にはどう映るか？
ぶるるっとミーアは背筋を震わせる。
――ユバータ司教に、そんな姿を見られたら、絶対にまずいですわ。下手をすれば、パライナ祭を利用して、わたくしへの信仰を植え付けようとしている、などと思われてしまうかも……。
最悪のケースを想定し、早め早めに釘を刺しておきたいミーアである。
――ルードヴィッヒにもくれぐれも言っておかなければなりませんわ。先に学園のほうに連絡を入れておいて……。
そう思いつつも、ミーアは口を開いた。
「今度、行くミーア学園の生徒たちの真似をする必要もまったくありませんわ。なにしろ、あなたがたはセントノエルの特別初等部の

子どもたちなのですから、そのことに誇りをもって行動しなさい。自分に恥じることなく、堂々と胸を張りなさい」
励ますように、力づけるように、ミーアは言う。
「あなたたちが変わる必要などまるでございませんわ。あなたたちはあなたたちで考えて、良いと思うことをしなさい。あなたたちは、セントノエルの子どもたちですから」
ミーアの言葉に、目を瞬かせる子どもたちであった。

第二十五話　これがミーアのやり方だ！

さて、ミーアが自室で一息吐いて、それから料理長の新作ケーキでも……なぁんて考えていたところで、ルードヴィッヒが訪ねてきた。

「ああ、ルードヴィッヒ、ご苦労さまですわね」

挨拶もそこそこに、ミーアは早速本題に入る。

「早速ですけれど、手紙に書いたとおり、パライナ祭の開催の可否について判断していただくために、ユバータ司教にお越しいただきましたの。それで、ミーア学園に行き、直接、見ていただこうと思っているのですけど……」

ミーアの言葉に、ルードヴィッヒは力強く頷いた。

「はい。お任せください。我が師ガルヴを始め、みな気合が入っておりますので……」

「きっ、気合……いえ、その、そこまでやる気を出さなくても大丈夫ですのよ？　その、ほどほどで……、いつもどおりで……」

「彼らの心理的重圧へのご配慮、感謝いたします。しかし、今は彼らの士気を生かす方向で振る舞われるほうがよろしいかと……」

キリリッと眼鏡を光らせるルードヴィッヒに、ミーアは、むむっと眉根を寄せて……。

「……まぁ、あなたがそう言うならば、そうなのかもしれませんけれど」

頷かざるを得ない。基本的に、ルードヴィッヒこと帝国の叡智の知恵袋の言うことには反対しないというのが、揺るぎないミーアのスタンスだ。ただ、一抹の不安を覚えないでもないが……。

「ぜひ、彼らに、お言葉を承れればと……」

「……考えておきますわ。それより……」

下手に声をかけようものなら、ミーア学園の周りに大量の黄金像

が立ってしまうのではないか、との深刻な危惧に囚われたミーアは、素早く話題を転換する。
「ユバータ司教の懸念について、あなたの率直な感想をお聞きしたいのですけど……」
「グロワールリュンヌ学園のこと、ですね……」
ルードヴィッヒは頷いてから、眼鏡をクイッと押し上げる。
「確かに、ユバータ司教のご懸念はもっともなことのように思います。グロワールリュンヌ学園は、長らく、この帝国における学問の第一人者を自任してきた学校です。伝統と誇りがある。そのうえ、通っているのは、帝国有数の貴族の子弟たちです。自分たちが通う学校が、セントノエルに劣るだけならばいざ知らず、国内の、それも平民が通う学校にまで格で劣ると思われるのは、不本意なことでしょう」
セントノエルから招待が来た生徒たちはセントノエルへ通い、そこから漏れた者たちは、国内の名門校でカバーする。それが基本的な考え方なのだが、その名門校が新興の学校に劣るという扱いを受ければ、貴族としても黙ってはいられないだろう。
あくまでも名門校はセントノエルに勝るとも劣らない、と……そのような体裁を取る必要があるのだ。
それはわかってはいるのだが……。
「それに、ミーア学園が教える農業のことは、反農思想に染まった貴族には従い難きこと。ミーア学園がパライナ祭に参加することを知られれば……それも、帝国の代表のような形だと知られれば、まず間違いなく抗議が来るでしょう」
「やはり、そうですわよねぇ……やれやれ……」
答えつつも、ミーアは深々とため息を吐く。
――ああ、実に面倒くさいですわ。
首を振りつつ、ミーアはルードヴィッヒに問う。
「では、彼らを黙らせるにはどうすればいいかしら……」
「考え方次第といったところでしょうか……。ミーアさまが造られ

た聖ミーア学園のほうが優れていることは、一目瞭然。火を見るよりも明らかです。理念の上でも、教育水準の上でも、教師の質も、劣る点は何一つありません。ですから、客観的に両校の実力を比べるような状況を作れさえすれば、差はおのずから明らかになるでしょう」

それを聞き、ミーアは、腕組みして頷いた。

――確かに、ルードヴィッヒのお師匠さまであるガルヴさんが携わっている以上、差は歴然としているはず。ならば、別に不安に思う必要もなし。

ミーアの顔に、ニヤリ、と意地の悪い笑みが浮かぶ。

――その差が明らかになるよう取り計らって、完膚なきまでに叩きのめすのが……。

なぁんて、ちょっぴり好戦的な気分になるミーアであったが……。

「けれど、それを突きつけ、彼らをへこませることが、ミーアさまの目的ではないのでしょう？」

「……はぇ……い」

ルードヴィッヒの言葉に、口をポッカーンと開け……そうになったミーアであるが、土俵際で踏みとどまる。

なにやら、大事なことを言い出しそうな気配を、ルードヴィッヒから感じ取ったためだ。

波が……乗るのにちょうど良さそうな波が来るような……そんな予感がしたのだ。

「やはり、そうでしたか……。これは、もしかすると思い上がりかもしれませんが……私は、ミーアさまのおそばで、あなたのなさることを今日まで見て参りました」

目を閉じ、昔を懐かしむような顔で、ルードヴィッヒが言う。

「あなたは、それがたとえ腐敗した貴族であったとしても、ただ排除することはなさらない。できれば彼らに改心を促し、民のために生きる者へと変えようとなさる方だ。そうではありませんか？」

そう言って、まっすぐに見つめてくるルードヴィッヒ。その強い

視線を受けて、ミーアは……深々とため息を吐く。
――ああ、そうでしたわね……わたくしとしたことが……これは、確かにわたくしのやり方ではなかった……。
ルードヴィッヒに指摘され、気付くことがあった。つまるところ、ミーアは、腹が立っていたのだ。
なぜなら、貴族たちのその態度こそがミーアをかつて断頭台に送った遠因となるものだから。そして、それは、初代皇帝から受け継がれる帝国の呪いのようなものだったから……。
だからミーアは腹が立ち、そして、正面から奴らを叩き潰してやればいい！　などと思ってしまったのだ。
だけど……。
――それは、わたくしのやり方ではありませんわ。彼らを叩き潰し、排除するようなやり方は、わたくしらしくない。
なにせ、排除してしまったら、代わりに彼らの仕事をする者を置かなければならない。そして、その責任はミーアにまで及ぶだろう。
それは、避けるべきだ。
悪しき思想に染まった貴族たちがいるならば排除するのではなく、改心して、ちゃんと仕事してもらいたいのだ。ちゃんと貴族らしく、統治をしてもらいたいのだ。
ミーアの理想は自分一人が辣腕を振るい、国を動かしていくことなどではない。そもそも、ミーアには辣腕と呼ばれるようなシュッとした腕はないのだ。ミーアのどちらかというとソフトな二の腕は、そんなに素早くは動かないのだ。
「なるほど……。これを機に、グロワールリュンヌの学生たちを、逆に教育してやろう、というわけですわね」
方法は思いつかないものの、言われてみれば確かにこれは良い機会なのかもしれない。
「ふぅむ……まぁ、いずれにせよ、それもこれもパライナ祭が無事に開かれることになってこそ、ですわね」
ミーアは小さくため息を吐くのだった。

第二十六話　思いやりに打算をひと匙

「ふわぁ……しかし、さすがに少し疲れましたわね」
ルードヴィッヒへの情報共有を終えたミーアは大きなあくびをする。セントノエルからの馬車旅で、少々疲れが溜まっているのだ。
ここは、ゆーっくりお風呂に浸かって、体を揉み解したいところであるが……。
「お疲れさまです。ミーアさま。お茶を淹れましたので、少し休まれてはいかがでしょうか」
「あら、ありがとう、アンヌ。ちょうど喉が渇いてましたの」
お盆の上に紅茶とクッキーを見つけて、ミーアは上機嫌に笑った。疲れている時は、やはり甘い紅茶と甘い甘いお菓子に限るのだ。
それから、ミーアは、忠義のメイドを労うように声をかける。
「アンヌもお疲れさまでしたわね。やはり、長く馬車に乗っていると疲れますわね」
そこでミーアは、ふと、なにかを思い出したように手を打った。
「ああ、そうですわ。今日と明日……いえ、明後日まで、ご実家のほうで、ゆっくり体を休めて来るといいですわ」
「お気遣い感謝します、ミーアさま。でも、私はミーアさまのおそばに……」
っとそんなアンヌの言葉を、ミーアは片手で制して、
「ええ、あなたの忠義はよくわかっておりますわ。もちろん、わたくしのそばで働いていただかないと困ります。だからこそ、今は少し休んでいただきたいですわ。聖ミーア学園に行く時には、あなたには万全の状態でついてきていただきたいんですの。そのために、ゆっくりと疲れを癒してくること。いいですわね」
指を振り振り言うミーアに、アンヌは呆気にとられた様子だったが、やがて深々と頭を下げて、

「わかりました。それでは、お言葉に甘えてお休みをいただきます」
「ああ、それならば、途中まで送ろう」
不意に、ルードヴィッヒが言った。
「え……？」
目を丸くするアンヌに、ルードヴィッヒは窓の外に目を向けて、
「もう夕方過ぎだし、外は少し暗くなってきている。ちょうど帰り道の途中だから、馬車で送ろう」
「え？　そんな、いいですよ、そんな大げさな……」
っと大慌てのアンヌだったが、ルードヴィッヒは少しだけ厳しい表情で……。
「先ほどミーア姫殿下ご自身も言っていたことだが……君はミーアさまにとって、欠かすことのできない人だ。だからこそ、ここは遠慮や謙遜をすべき場面ではないと思う。混沌の蛇は、どこに潜んでいるかわからない。そして、もしも君が誘拐でもされれば、ミーアさまがどのような行動に出るか、わかるはずだ」
それは、アンヌに自覚を促す言葉だった。
帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンの専属メイドとしての自覚を……。
アンヌは、思わずといった様子で息を呑んだ。
正直なところ、自分などにそれほどの価値はない、とアンヌは思っているが……、それでもなお、一人でひょいひょい助けに来てしまうのが、ミーア・ルーナ・ティアムーンという人なのだということを、アンヌはよく知っていた。
「皇女専属近衛隊を手配して、君の家まで護衛することもできるが……」
「いえ、わかりました。ルードヴィッヒさんに送っていただくことにします。よろしくお願いします」
そんなアンヌの言葉を聞いて、ミーアも深々と頷いて、
「ルードヴィッヒ、くれぐれもお願いしますわ。きちんとアンヌをご実家まで送り届けてくださいませね」

「はい、お任せください」
「それと、ミーア学園への連絡のほうも……。ユバータ司教も同行いたしますし、くれぐれも準備を怠ることのないように、と」
「心得ました！」
やけに気合の入った返事に一抹の不安を覚えないではないミーアであった。

その日の夜のことだった。
ひさしぶりの白月宮殿での晩餐会に、ミーアが心躍らせていると……。
「なに、ベルマン子爵領に？」
夏休みの予定について聞いた皇帝マティアスが、眉をひそめた。
「ええ、そうなんですの。皇女の町にある学園のほうにユバータ司教をご案内しようと思っておりますの」
運ばれてきたパンにスッと手を伸ばしつつ、ミーアはパライナ祭のことを説明する。
「なるほどなぁ。パライナ祭か……。そういえば、昔、そんなものもあった気がするな……」
腕組みしつつ、唸る父。そんな父を横目に、ミーアはパリリッとパンを裂く。芳ばしくカリッカリに焼かれた表面、中はしっとりフワフワのパンをひょいっと口の中へ。
――ああ、パンとは……こんなにも美味しい物だったかしら……。
なにもつけずとも、とぉっても美味しいパンに感動を覚えるミーア。一つはなにもつけずに食べて、もう一つはシチューにつけて、もう一つはバターでもう一つはジャムを、その次はハチミツで……などと、今日はパンを楽しみつくすぞぅ！　と心に決めていたミーアであったが……。
「ならば、当然、私も行こう！」
堂々と、胸を張って、そんなことを言い出す父に、目を瞬かせることしばし……。当然のごとく、お断りしようと思ったミーアであ

ったが、寸前で思い直す。
――お父さまが同行したほうが、ベルマン子爵は喜ぶでしょうね……。もしかすると、パライナ祭のことで協力していただくこともあるかもしれませんし……となると。
「ははは、なぁんてな……。もちろん、わかっているとも。帝都をそうそう気軽に離れるわけにはいかぬと。父は寂しく帝都で公務にあたると……」
「別に、構わないのではないかしら……」
「え、いいの？」
マティアス、あまりのことに、口調から皇帝の威厳がすっぽり抜け落ちる。まぁ、いつも抜け落ちているという話もないではないが。
「皇帝陛下が行けば、ベルマン子爵も喜ぶでしょうし、夏の避暑地旅行ということにすればよろしいと思いますわ」
それに、とミーアは胸の中で思う。
――パティもいつまでこちらの世界にいられるかわかりませんし、お父さまと接する時間はできるだけ用意してあげるのが良いのではないかしら。
父マティアスと祖母パトリシアの時間を少しでも確保してあげたいという、ミーアの思いやりである。
「お、おお、ミーア……、私のことはパパと呼んでも……」
なぁんて、感極まった声で言う父を華麗にスルーしつつ……。
――それに、シャルガールさんがいる帝都にお父さまをおいておくのも、いささか危険な気がいたしますし……
ちょっぴりの打算をもつぶやくミーアであった。

第二十七話　ツンデレイジョウ、襲来す！

白月宮殿を、一人のご令嬢が歩いていた。
胸を張ってずんずんと、腕を振って意気揚々と、髪を揺らしてウキウキと、廊下を進んでいく。
案内に出てきたメイドを置き去りに、専属メイドのニーナのみを引き連れて……。
エメラルダ・エトワ・グリーンムーンは、やってきた。
夏休みで帰国中の、ミーアと遊ぶべくやってきたのだ！
「ミーアさま、遊びに来ましたわよ！」
元気よく声を上げつつ、ミーアの部屋のドアを開ける。けれど……部屋には親友、ミーアの姿はなかった。
「あ……あ、れ……？」
キラッキラと花のように輝いていた顔が見る間に、しょんぼりとしおれていく。
……そうなのだ。残念なことに、ミーアたちは、すでにベルマン子爵領に旅立って……旅立って……？
「僭越ながら、エメラルダお嬢さま。いただいたお手紙のほうには、空中庭園にてお茶会を、と書かれておりますが……」
よかった！　旅立っていなかったっ！
メイドのニーナの指摘に、エメラルダの顔が再び、ぱぁあっ！と輝いた。
「そういえば、そうでしたわね。ありがとう、ニーナ」
「恐縮です。ですが、できれば私のことは、メイドとか、そこの、とか、もう少しその……ぞんざいに扱っていただけると、大貴族のご令嬢としての品格というものが……」
「さ、行きますわよ！」
ニーナの言葉を華麗にスルーし、エメラルダは空中庭園に向かっ

た。

「ミーアさまっ！　遊びに来ましたわよ！！」

ばばーんっと音を立てつつ現れたエメラルダに、ミーアは思わず苦笑いを浮かべる。

「ああ、エメラルダさん。来ましたわね。やっぱり帝都にいたんですのね」

「とーぜん、ですわ！　今年こそ、ミーアさまからお誘いがかかるって信じておりましたもの！」

ニッコニコ、上機嫌に笑うエメラルダを見て、ミーアはそっと胸を撫でおろす。ああ、覚えていて良かった、と。

――あっぶないところでしたわ。なにも言わずに聖ミーア学園に行っていたら、また不満をぶつけられてしまうところでしたわ。

もっとも、エメラルダを呼んだ理由はもちろん、それだけではない。

彼女は他ならぬ、グリーンムーン公爵家の娘。グロワールリュンヌ学園との関係は深いし、彼女の弟たちも、学園に通っているはずなのだ。

なおかつ、グリーンムーン家で預かるエシャール王子は、ミーア学園のほうに通っている。

すなわち、エメラルダは、バリバリの関係者なのだ。

――正直なところグロワールリュンヌのことはどうすればいいのか、まーるっきり思いつきませんし……、ここは力を借りられそうな方をどんどん巻き込んでいきましょう。

そうなのだ。ルードヴィッヒに言われて、ミーアは反省したのだ。

やはり、貴族を排除しては駄目だ。悔い改めさせて、仲間にしてしまえば、きちんと使えるのだ。そして、悔い改めた仲間にはちゃんと情報を共有して、力を使ってやらなければならない。それこそが、楽をするコツなのだ！

ということで、ミーアはエメラルダの協力を得るべく、こうして

お茶会に誘ったのだ。
　もちろん、ブルームーン家のサフィアスにも忘れずに、要点をまとめた手紙を出していた。ちなみに……手紙の結びに、またレティーツィアと一緒に、お料理会などどうだろう？　という誘いの一文を入れてしまったがゆえに、サフィアスが震え上がることになるのだが……それはともかく。
「あら？　ところで、そこのお二人はどなたですの？　見たところ、ラフィーナさまに似ておられるような気がしますけど……」
　小首をかしげるエメラルダに、レアとリオネルがそれぞれ挨拶する。
「なるほど、ルシーナ司教伯家といえば、ヴェールガの名門ですわね。それに、神聖図書館長まで同行しているだなんて、さすがですわね、ミーアさま」
　エメラルダは感心した様子で微笑んでから、腕組みした。
「ですが、いったい何をなさるおつもりですの？」
「そうですわね……。エメラルダさんは、パライナ祭というのをご存じですの？」
「技術の祭典パライナ祭。ヴェールガ公国の古いお祭りですわね。各国の様々な技術を共有し、人間すべての生活を発展させていこうという……。ずいぶんと古臭い物が出てきましたわね」
「ふふふ、知ってましたのね。さすがは、外交のグリーンムーン家ですわ。実は、今度、そのパライナ祭を再び開催しようという話になっておりますの。かつてと違い、教育の分野で、ですけど……。とりあえず、座ってお茶にしましょう」
　率先して席に座り、それから口を滑らかに動かすために紅茶を一口。クッキーをサクリ、ペロリ、うーん美味しい。
　それから、ミーアは、これまでの流れを説明する。
　セントバレーヌでの一件、そして、ユバータ司教の件、さらには、これを機に、グロワールリュンヌ学園に、逆侵攻をかけよう、というあたりまで。

「なるほど、そういうことでしたのね。確かに、グロワールリュンヌ学園には、反農思想が根深く残っておりますわ。うちの弟たちも、現在、教育中ですけど……」
頬に手を当てて、悩ましげに眉間に皺を寄せるエメラルダ。
「とても厄介な思想ですわ。私自身、ミーアさまやエシャール殿下との出会いがなければ、同じような思想に囚われたままであったと思いますし……」
「ほとんどの帝国貴族は、そのように教え込まれておりますもの。仕方のないことではありますけれど、いつまでもそれを放置しておくこともできませんわ。この機に、わたくしは、その辺りのことを変えていきたいと思いますの」
それから、ミーアはがっしとエメラルダの手を握りしめる。
「だから、エメラルダさん、あなたにはぜひ、協力していただきたいと思っておりますの！　わたくしに、力を貸していただけるかしら？」
将来、楽をするために！　気合が入るミーアであった。

第二十八話　別にどうしてもって言うなら……

「エメラルダさん、わたくしは、特別にあなたにお願いいたしますわ。新しい帝国のために、どうか、わたくしに力を貸してくださらないかしら……？」

その言葉を聞いた瞬間、エメラルダの心は震えた。

それは、あの冬の日……新たなる盟約が結ばれた日。

あるいは、あの夏の日……無人島にて、自らの友として協力してほしいと言われた時と、同じ衝撃だった。

グリーンムーン公爵家としては、ミーアに協力することは難しい。なにしろ、グロワールリュンヌ学園は、他ならぬグリーンムーン公爵家も出資した学園なのだ。

しかも、四大公爵家は、帝国中央貴族の代表たる家柄だ。帝国の慣習を擁護し、下々の者たちへの範を示さねばならぬ立場。エメラルダも当然、グリーンムーン家の一員としては、おいそれとミーア学園の応援などできはしない。

けれど……にもかかわらずミーアは、エメラルダに協力を求めている。

親友として！　協力を求めている！！

かつて、初代皇帝ではなく、友である自分に力を貸してほしいと言った時と同じように。

決して裏切ることはないと……そう信じて。

ならば……応えなければならない、その信頼に、友情に。心から応えなければならない。

……けれど、実のところそれは、決して苦ではなかった。難しい選択でもないし、葛藤もほとんどなかった。

なぜなら、たとえ一時的にグリーンムーン家の方針に逆らったとしても、ミーアに従ったほうが最終的には、グリーンムーン家のた

めになる、という確信があったからだ。
ミーアの求める忠誠は容易く、共に負う荷は重くとも、喜びにあふれるもの。だからこそ、エメラルダは一切の迷いなく、揺らぐことなく伝える。
「もちろんですわ。問われるまでもないことですわ！　私の全身全霊をもって、ミーアさまにご協力いたしますわ！」
エメラルダの言葉に、ミーアは満足げに頷いて、
「ありがとう。期待しておりますわ」
ニッコリ微笑むのだった。
さて、エメラルダは紅茶を一口。高まった気分を落ち着かせる。
ミーアの信頼に応えるべく、エメラルダはううむ、っと頭を悩ませる。
「先ほどお聞きしたパライナ祭の件ですが……今、ミーアさまがお考えなのは、道義的な正しさという面と利点に関する面ですわね。そうですわね。これだけでも、いかようにもやりようはあるように思いますけれど、私が付け加えるとしたら……嫉妬を使うこと、かしら」
「嫉妬を使う、ですか？」
驚いた様子で声を上げたのは、リオネルだった。司教の息子である彼にとって、嫉妬という感情は、ネガティブなもの。驚くのもわからないではないが……。
「別に驚くには値しませんわ。嫉妬というのは、極めて強い感情ですわ。上手く使えれば、交渉を有利に進められますの」
「なるほど……。得ではなく、損を利用するということでしょうか……」
納得の声を上げたのは、レアのほうだった。その指摘に、エメラルダは感心した様子で頷いて、
「そうですわね。これは、グリーンムーン家の交渉術の一つですわ。例えば、イチゴを一つもらえるから、これをやってください、というのと、これをやらないともらえるはずのイチゴがもらえなくなり

ます、というのは違いますわよね」
「ふむ、なるほど、それは確かにその通りですわね！」
顎に手を当てて、ミーアは唸った。
食べ物の喩えを用いられると、ミーアの脳みその働きは1．5倍程度に上がるのだ。
「今回の場合だと、自分たちは、古きしきたりに従っているから、損をしている、と思わせるようにするとか、かしら……。ミーアさまのお言葉に従った結果、利益を得ている者がいる、と示し、嫉妬を煽り、自分たちはそれをしないから損をしていると……そのような見せ方をすれば、心を動かされる者もいるかもしれませんわ」
「ふむ……なるほど」
そこでミーアは紅茶を一口。それからクッキーをサクリ。
「初代皇帝の言葉に従っていないからこそ得をしている……ルドルフォン辺土伯やギルデン辺土伯……あるいは」
ぶつぶつとつぶやくミーアに、エメラルダは意気揚々とつぶやいた。
「それはそうと、ミーアさま、どうですの？」
「はて……？　どう、とは……？」
不思議そうに首を傾げるミーアに、もどかしさを感じつつ、エメラルダは言った。
「私、お役に立てると思いますけど……？　まぁ、夏の予定はございますけど？　でも、親友であるミーアさまがどうしても、と言えば、ついて行かなくもありませんけど？　エシャール王子ともお会いしたいと思ってましたし……だから、ミーアさまが、どうしても、と言えば、その……」
モジモジ、ぶつぶつ、つぶやくツンデレディ・エメラルダ。それを見て、彼女の従者であるニーナが、ふぅううっと深ぁいため息を吐き、それからミーアのほうに視線を向けた。
『どうか、うちのお嬢さまをよろしくお願いいたします』
などという心の声が聞こえたのか……ミーアは小さく頷いてから、

「パライナ祭を開けるよう、エメラルダさんにもベルマン子爵領に同行していただけると嬉しいのですけど、来ていただけるかしら？」
その声に、ぱぁあああっと表情を輝かせつつ、
「ま、まぁ、そこまで言うならば、ご一緒してもよろしくってよ？」
なんともツンデレディなエメラルダなのであった。

番外編　ユバータ司教の顔なじみ

――ふむ、これは、思わぬ機会が訪れたものだ……。

その日、ユバータ司教は、帝都ルナティアの新月地区を訪れていた。

旧知の友を訪ねるためである。

「ここが噂に聞く新月地区ですか……。なるほど、かつて貧民街だったとは思えないほどの盛況ぶりですね」

同行してくれた皇女専属近衛隊の兵士に話しかけると、彼は穏やかな笑みを浮かべた。

「はじめてミーア姫殿下をお連れした時には、それはもう、酷い環境でした。そこらの路上で貧民が倒れ、それが放置されているような、そんな場所でした。けれど、ミーアさまは、この町の者たちを憐れんで、手を差し伸べられたのです」

「なるほど……あなたは、それを目撃された、と……」

問いかけに深々と頷き、兵士、オイゲンは言った。

「倒れていた孤児に駆け寄られたあの方は、その子を連れ、教会へと向かわれました。そして、神父さまから必要を聞き、この地に病院を建てた。さらに、忠臣たるルードヴィッヒ殿に権限を与え、この町を蘇らせたのです」

「そうでしたか……」

その辺りの事情は、手紙で知っていた。

彼の旧知の友も、まさに、その現場に立ち会った目撃者の一人であったから。

――モレス神父……新月地区の教会で働くと聞いた時には心配したものだったが……よかった。

ちなみに……新月地区の孤児院のモレス神父に会いに行くと聞い

た時、ミーアは一も二もなく賛成した。
「ああ、それは実に良いことですわ。神父さまもきっと喜びますわ。ぜひ、お会いになってくるとよろしいですわ」
なぁんて、ニコニコしつつ、信頼のおける皇女専属近衛兵オイゲンほか数名を護衛に付けてくれたのだ。
その理由はもちろん、新月地区における自らの人気を加味し、ユバータ司教に好印象を与える算段を付けたから……などではもちろんない。
重要だったのは、モレス神父が非常にまともなことだ。
そう……彼は未だに、聖女ラフィーナの熱烈なファンなのだ！
帝都において、大部分の民衆が「聖女ラフィーナは帝国の叡智ミーアの友人である」という認識なのに対し、彼だけが「帝国皇女ミーアは、聖女ラフィーナの友人である」という認識なのである。
どちらが主でどちらが従か、それを間違えない、非常に信用できる男なのである。
彼ならば、まかり間違っても、黄金のミーア像とか言い出さないだろう、という確信がミーアにはあったのだ。黄金のラフィーナ像（フィギュア）と言い出さないかは定かではないが……。
まぁ、それはともかく……。
ほどなくして、一行の前に教会と、それに併設された孤児院が姿を現した。
そして、その建物の前には、懐かしい男が立っていた。
「やぁ、来たか。ニコラス」
そう言って、モレス神父は手を差しだしてきた。その手を固く握りしめながら、ユバータ司教は言った。
「すまない。ずっと来たいとは思っていたのだが……」
眉尻を下げるユバータ司教に、モレス神父は首を振った。
「それは当たり前だ。神聖図書館の館長ともなれば、個人的な都合で国外に出るわけにもいかないだろう？」
それから、神父は孤児院の中へと誘った。

何度も補修が加えられた孤児院、ヒビだらけの壁を見て、ユバータ司教はつぶやいた。
「ここが君の仕事場か……」
「ああ、良い場所だろう？　数年前までは冬は隙間風が酷かったが、ミーア姫殿下のおかげで、それもなくなった。見栄えは少し悪いが、必要なものはすべて揃っているのさ。おっと……」
前方から走ってくる子どもに向けて、モレス神父が言った。
「こらこら、走ったら危ないよ。誰かにぶつかったら、ケガをしてしまうだろう？」
優しくも、はっきりとした言葉に、声をかけられた子どもはハッとした顔をする。
「あっ、神父さま。ごめんなさい」
すまなそうな顔で頭を下げて、それからユバータ司教のほうを見てちょっぴり緊張した様子を見せるが……。
「彼は私の友人でね、訪ねてきてくれたんだ」
「神父さまのお友だち？」
「ああ、とても大切なね。ご挨拶してくれるかな？」
それを聞くと、子どもは小さく笑みを浮かべて挨拶してから、外に向かっていった。どうやら、孤児院の庭で遊ぶつもりのようだった。
「気を付けて遊びなさい」
神父の声に、手だけ上げて行ってしまう。
モレス神父に無警戒な信頼を寄せている様子、それに、初対面の自分に緊張した態度をとったこと……人との関係が適切に取れていることに、ユバータ司教は感心する。
親を亡くし、社会に絶望した孤児というのは、不必要に他者を遠ざけるか、反対に、無警戒に馴れ馴れしく接してくるもの。
親という、自分を守ってくれる壁がないから、隠れることさえできない子どもたちは、しばしば人との距離感を見失うものなのだ。
そんな孤児たちが、ごく普通の子どものように振る舞っているこ

とが、モレス神父がいかに心を砕いて仕事にあたっているかを証明しているかのようだった。
「子どもの相手というのは、なかなか難しいものだよ」
苦笑いを浮かべ、肩をすくめるモレス神父に、ユバータ司教は頷いた。
「そうだろうな。苦労は多いだろうが……少し、うらやましくもあるな」
その言葉に、神父は目を丸くする。
「ははは、ヴェールガの神聖図書館長がなにを言うか。君の負った重責に比べれば、私のものなど……。いや、違うな。人にはそれぞれに神に与えられた負うべき荷がある。感謝なことに、私は弱き者たちに直接手を差し伸べる機会を与えられた。君は神聖図書館の館長として、その頭を生かす機会を与えられた。ならば、互いに、自らの役割を全力で果たすのみさ。そうだろう？」
そう、それは正しいこと。
ユバータ司教は知っている。
自分の働きは、決して卑下すべきものではない。
それは、中央正教会の、そして、ヴェールガの正しさを確保するために重要な仕事だ。国がおかしな方向に押し流されていかぬようにすることは、とてもとても大切なこと。
されど……文献に囲まれ、神聖典に書かれた文字に深く、深く意識を向ける時、彼の胸には、小さな罪悪感があった。
落ち着いて、論文の構想を練っていると、どうしても、思ってしまうのだ。
――私は、こんなところで、なにをしているんだろう？　と。
今、この時に倒れ、力尽きようとしている者に、助けを必要としている貧しき人たちに手を差し伸べること……これほどわかりやすい善はあるだろうか。
それは長年、ユバータ司教の胸を焼く、強い、強い、強い熱望だった。
けれど……。

「しかし、パライナ祭とはな。また、懐かしいものが出てきたものだな」
モレス神父の言葉にハッとする。
「ああ、私もはじめに聞いた時には驚いたものだったが……」
そう、最初はただの驚きに過ぎなかった。けれど、皇女ミーアの話を聞いて、驚きはさらに大きなものになった。
――民に対する貴族の意識を変える……。孤児たちを、各国の貴族が救うよう、働きかける試みか……。
弱き者たちに手を差し伸べる機会が、彼の目の前に示されていた。直接的ではないにしても、効果的で、意義のあること……彼の熱望に対しての答えが示されたかのようだった。
失敗するよりは、成功したほうが良い。それは間違いない。けれど、彼の本音は少し違う。
なんとしても、成功させたい。
現場で働く神父ではなく、神聖図書館館長だからこそ、できることがあるのだと、その道がはっきりと、目の前に示されているかのようだった。
だからこそ、成功させたいと、強く強く思う。
「……なんとしてでも成功させなければ」
誰にも聞こえぬつぶやきをもらすユバータ司教であった。

第二十九話　すでに動き出していた！

さて、帝都での短い滞在期間を経て、ミーアは、ベルマン子爵領へと向かった。
グリーンムーン家令嬢、エメラルダのみならず、こっそり皇帝陛下も同行する、その一行は、結構な大所帯となっていた。
ぜひとも、ミーアと一緒の馬車に！　と主張する父、マティアスに対し……、
「皇帝陛下、僭越ながら……年頃の娘にあまりグイグイいくと嫌われますわよ」
なぁんて横から口を出したのは、エメラルダだった。
そんな彼女は、ちゃっかりミーアと同じ馬車、お隣の席をキープ！
それを見たミーアは、さらにルードヴィッヒとアンヌに、自分の馬車に乗るように指示する。ベルマン子爵領に着くまでに、これからのことを相談、共有、コンセンサスを得る構えだ。
一方、しょんぼり顔のマティアスだったが、直後、手招きするベルを発見。見事、ひ孫と母パトリシアとの同席をゲット。ついでに、四大公爵家令嬢シュトリナより、娘の扱いについての知見を得る機会に恵まれることになった。
馬車が走り出したところで、ふと、ミーアは首を傾げた。
「あら……ルードヴィッヒ、心なしか顔色が良くなったような気がしますわね」
「はい？　そうでしょうか……」
「ええ。少しばかり血色がよくなっているような……肌艶も……。なにか、ありまして？」
問いかけると、ルードヴィッヒはわずかに首を傾げ、それから、アンヌのほうにチラと目を向けて穏やかに笑った。
「いえ……強いて言うならば、ミーアさまに倣い、食事をしっかり

ととって、睡眠もきちんととるようにしたこと……でしょうか」
「わたくしに……倣う？」
一瞬、ルードヴィッヒがベッドの上でゴロゴロしてたり、あまぁいスイーツをしっかりと食べている姿が思い浮かび、帝国の将来が心配になるミーアであったが……。
「ミーアさまに倣うなんて、感心ですわ。あなた、見どころがありますわね！」
うんうん、っと感心した様子のエメラルダである。気を取り直すようにミーアは一つ咳払い。
「ともあれ、せっかく、こうして集まって話ができるわけですし……情報の整理がしたいですわ。今回はいろいろな状況が錯綜していますし……」
ミーアとしては、叡智袋、ルードヴィッヒの認識と、グロワールリュンヌの内情に詳しいエメラルダの認識をすり合わせておきたいところだった。
ミーアはイエスマンでいたい。そのために、自らの頭脳たるルードヴィッヒに、必要な情報を与えて、最適解を導き出すよう、取り計らっておきたいのだ。
そう、ミーアは腕利きの伝令兵なのだ。ということで……。
「まず、これからのことですけど……」
そう言って、ミーアはルードヴィッヒに視線を送る。っと、彼は一つ頷いて、
「とりあえず、旅程の確認ですが、ベルマン子爵領の領都にて一泊。その後、皇女の町へと向かう予定です」
その言葉に、ミーアはスゥっと瞳を細め……。
「ふむ……つまり……ミーア学園が近づいたところで、一日のタイムラグを生むことができる、ということですわね？」
「そうですね。領都にてバルタザルが待っているとのことです。なので、到着した日に細かいことを打ち合わせて、それから彼が先行してミーア学園に戻るか……。あるいは、私が先行してミーア学園

にて打ち合わせをすることも考えられますね」
「なるほど、重要なことですわ」
そう、極めて極めて！　重要なことである。
きちんと、ミーア像の状況とか確認したいし……数が増えてないか、とか、大きく成長してないか、とか……。
放っておくと成長する木の像や、勝手に表面が黄金に変わったりする像など怪奇現象以外の何者でもないが、それが起こる場所こそ、魔窟、聖ミーア学園なのだ。ミーアへの忠誠が増すたびに、大きな像に作り替えられていくなんてことは、よくあることなのだ。
できれば、自分が先行して、きっちり釘を刺しておきたいところではあったが……ここは、グッと我慢。
「こちらを出迎えるために、過剰な準備は不要ですわ。ユバータ司教は、中央正教会の司教ですし、過度に豪華な出迎えは好まれないはず」
「はい。私も、あまり金銭をかけた出迎えには賛同できませんので、その分、真心のこもったお出迎えをすることになるかと……」
「……まごころ」
一瞬、いやぁな予感がするが、とりあえず、今はそれを呑み込んでおいて……。
「今回の目的は、ユバータ司教に聖ミーア学園の教育理念や、実践、子どもたちの状況や成果である小麦を実際に見ていただくこと。それにより、パライナ祭の実施の許可をもらうことですわ」
ミーアは確認するように言って、
「くれぐれも、そのことを聖ミーア学園のみなには確認しておいていただきたいですわ」
念を押すようにルードヴィッヒに目を向けてから、今度はミーア、エメラルダに目を向ける。
「それと、グロワールリュンヌの件について、ですわね。帝国内には、他にもいくつか学校はあると思いますけど、文句を言ってきそうなのは、グロワールリュンヌだけかしら？」

ミーアの言葉を受け、エメラルダが頷く。
「グロワールリュンヌが良いと言えば、他校も黙ると思いますわ。ですから、ユバータ司教に、そのことを見せて、不安を払拭して差し上げればよいと思いますけれど……」
「一番、避けたいのは、彼らが何の反応もしてこないことでしょうか……」
ルードヴィッヒが難しい顔で言った。
「どういうことですか？　ルードヴィッヒさん」
不思議そうな顔でアンヌが尋ねる。そして、ミーアも、その疑問には同意だった。
――見栄っ張りな貴族が、黙っているとも思いませんけど……。
そう考えるミーアの前で、ルードヴィッヒが説明を始める。
「グロワールリュンヌ学園側としては、聖ミーア学園が帝国の代表校という扱いをされれば、確かに文句を言ってくるかもしれない。しかし……そもそもパライナ祭を歯牙にもかけない可能性も十分にある」
そう聞いて、ミーアは、ああ、確かに、と納得してしまう。
セントノエルに通う者であれば、ヴェールガの権威を肌で感じている。聖女ラフィーナと直接的に接したことがあるならば、彼女に逆らおうなどという気にはならないはずだ。
けれど、帝国の中央貴族の中には、ティアムーン以外の国を見下し、ヴェールガを単なる小国と鼻で笑う者たちがいないでもない。
それは自分たちがセントノエルに選ばれなかったことへの腹いせという側面もあるだろうが、いずれにせよ、古臭い祭りの代表校に選ばれずとも、痛くもかゆくもない、などと言う者もいるかもしれない。
「それに、タイミングの問題もある。いざ、祭りをすることが決まり、準備が進んだ段階で否を唱えられたら、それこそ厄介だ。だから、反対するならば、今のうちに声を上げてもらいたいところだ」
「なるほど。その懸念を司教さまは抱いていて……それをなんとか

しないと、パライナ祭の開催が決まらない……だから、今の時点での沈黙と言うのは、望ましいものではない、ということですわね」
むむむ、っと眉間に皺を寄せるミーアに、けれど、エメラルダは涼しい顔で言った。
「あら、それなら、心配ありませんわ。ミーアさまのご許可をいただき、すでに手は打っておりますもの」
――うん？
ミーア、一瞬、固まる。
――はて？　許可、とは……？
「それは、どういうことでしょうか？」
眼鏡を押し上げつつ、問いかけるルードヴィッヒに、エメラルダは胸を張り……。
「実は、先日、ミーアさまにご提案いたしましたの。彼らの嫉妬を刺激するような策を取ったらどうか、と。ミーアさまは、とぉっても感心してくださいましたから、早速、昨日、母に申し上げましたの。さりげなく、パライナ祭という、名誉ある、伝統的な祭りが再開されること。聖ミーア学園が帝国の代表校に選ばれるかもしれないこと。そして、その視察のために、ヴェールガ公国から、とても偉い司教さまがいらっしゃっているということも……」
それを聞き、ミーアは、思わず口をあんぐーりと開ける。
――え、いや、わたくし、何一つ許可とかしてませんけれど……。
そうなのだ……ミーアは完璧に忘れていたが……エメラルダは、声をかけられるのを待ち、声をかけられるよう働きかける……釣り野伏せ戦略の第一人者なのである！
ミーアから、お茶のお誘いがないかじっと待ち……時にお手紙や贈り物などにさりげなくお茶の香りを混ぜつつ、夏休みの間ずっとミーアからお呼びがかかるのを待っていた……面倒くさいやつなのだ！
そんな、面倒くさいエメラルダが、グロワールリュンヌに対して煽るようなことをしないだろうか？　否、そんなはずがない！

――ああ、でも……それ、すごく反応がありそうですわ。エメラルダさんの言葉が事実ならば……絶対に抗議がありますわ！
「なるほど……。相手の反応を待つのではなく、相手が反応するように仕掛ける、ですか……。確かに、いずれ起こるかもしれない危険ならば、こちらの計画の内にその危険を含めてしまえばいい。タイミングもこちらで決められる分、それが上策ですね」
ルードヴィッヒはそう言うと、ミーアのほうに目を向けてきた。
「さすがは、ミーア姫殿下。すでにそんな手を打たれているとは……」
「え、お、おほほ……え、ええ、そういうことですわ。うん。さすがは、エメラルダさん、期待通りの働きですわね」
「お役に立てたようで嬉しいですわ、ミーアさま」
エメラルダは、もっと褒めてもよろしいんですわよ？　とばかりに、ドヤァっと胸を張るのだった。

第三十話　心休まる時間

ティアムーン帝国、帝都ルナティアの周辺には中央貴族領が広がっている。その南、辺土領域と呼ばれる地域との境界にベルマン子爵領はあった。

あの日以来……ベルマン子爵領の様子は様変わりしていた。あの日……そう、ミーア・ルーナ・ティアムーンがやって来た、あの日から少しずつ。

聖ミーア学園が広める新種の小麦『ミーア二号』はベルマン子爵領の各地の畑で実りをつけつつあった。

それは、徐々に子爵領を富ませつつあった。

当初こそ、味に難ありと敬遠されてもいたが、それも昔の話。料理長ムスタ・ワッグマンによって開発された調理法が広まるにつれて、その評価は一変する。

先んじて寒さに強い小麦を作っていたベルマン子爵領では、例年と変わらぬ実りをつけ、いくばくかを他領にも売るほどまでになった。

法外な値段で売るような真似はしなかったが、それでも、それなりの金が流れこむことになったのだ。

そのことがわかった時、ベルマン子爵は思わずひとりごちた。

愚かなことであった……、と。

そう、それは、よくよく考えれば、わかることだった。

目の前には土地がある。肥沃なる三日月地帯がある。それを、なにに使う？　なにに使えばいい？

かつて、ベルマンは静海の森を切り開こうとした。領地を増やすために、多くの者たちの血を流させようとした。

だが……そうまでして、切り開いてどうするのか、そのヴィジョンが彼にはなかった。

新たな土地を得て……それで、なにに使うというのか？
町を建てるのか？　殖産業でもするか？　牧場として、牛や羊でも飼うか？
否、最も簡単な土地の使い方は、そうではない。土地を使い、領地を富ませるには、どうすればいいのか、言うまでもないことである。畑にするのだ。
土に種を蒔き、収穫を得るのだ。
ここは肥沃なる三日月地帯、合理的に考えれば、農作地にするのが、最も効率的だ。
そう……効率的なのだ、そのはずなのに……。
――我ら帝国貴族は農民を見下した。畑仕事を下賤な仕事だと軽視した。それは愚かなことであった。
ベルマンは、生まれながらに、ギリギリの中央貴族、中央貴族未満などと言われ続けた男だった。だからこそ、中央貴族たることに、余計に囚われたのだ。
けれど、そこから解放された彼は、極めて素直に物事を見ることができていた。
「あれは、呪いのようなものであったな……」
中央貴族たちを今なお捉える常識、慣習、呪い……そこから解放してくれた者、そして、ベルマンの栄誉を約束してくれる者、それこそが……。
「ミーア姫殿下……」
自らの館の前で、ベルマン子爵は待ちかねていた。
皇女ミーアを。さらには、皇帝マティアス・ルーナ・ティアムーンを。
「まさか、陛下までいらっしゃることになるとは……」
身に余る栄誉と誇りを胸に、彼は、今か今かと、その到来を待ちかねていた。
そんな彼の目に……馬車の一団が入って来た。
随伴の者たちに続いて、馬車を降りた恩人、ミーアは……なぜか、

ニコニコ上機嫌な顔をしていた！

「ご機嫌よう、ベルマン子爵」

ミーアは、鼻歌混じりにスカートをちょこん、と持ち上げ、ベルマン子爵に挨拶する。

そうなのだ、ミーアは大変……大変に！　機嫌がいいのだ。理由はとてもシンプルで……。

――ああ、この、実に適切な規模のお出迎え、素晴らしいですわ！

ミーアはベルマン子爵のお出迎えに、心から感心していた。

なにしろ、子爵家の者たちが出迎えているのは、ミーアではない。皇帝、マティアス・ルーナ・ティアムーンなのだ！

それに、振られている旗はティアムーンの国旗だ。ミーアの顔が付いた珍妙な旗ではない！　それに、ヘンテコな像が出迎えることもなければ、ミーアを賛美するおかしな歌が聞こえてきたりもしない。

極めて普通。常識的！　ああ、素晴らしきかな常識人、である。

ミーアは、ベルマン子爵のことを見直した！

さて、ミーアに続き、皇帝マティアスが馬車を降りた。それを見て、ベルマン子爵が感動のため息を漏らす。

「おお、ベルマンよ。短い滞在だが、よろしく頼むぞ」

片手を挙げ、威厳たっぷりに言うマティアスに、ベルマンは膝をつき、深々と頭を下げる。

「ははー！　皇帝陛下が、我が屋敷に御玉体（おんぎょくたい）をお運びあそばせられましたこと、誠に光栄至極にございます。このベルマン、全身全霊を持ちまして……」

それを見て、マティアスは首を振った。

「ベルマン子爵よ、そうかしこまらずとも良い。私は、休暇に来ているのだ。それより、こたびは、ヴェールガからの客人も同行している。くれぐれも無礼のないよう注意せよ」

「ははー。臣の心に深く刻ませていただきます！」

――ああ、そう。これですわ。熱烈な忠誠がこちらに向かってこない、この気楽さ……素晴らしいですわ。
これから向かう聖ミーア学園前の、ひと時の心休まる時間。
それをじんわり噛みしめるミーアである。そう、心の平安を保つためには、適度な休息が必要なのだ。
そうして徐々に徐々に、恐ろしい場所に足を踏み入れる、心の準備をするミーアなのであった。

第三十一話　三つの罪悪感

ベルマン子爵邸の中には、馴染みの顔が待っていた。
「あら、バルタザルさん。ご機嫌よう。しばらくぶりですわね」
「ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下。大変、ご無沙汰しております」
恭しく頭を下げるバルタザルに、ミーアは早速、釘を刺しておく。
「ルードヴィッヒには一応言いましたけれど、聖ミーア学園ではくれぐれも、過度なお出迎えなどしないよう、お願いいたしますわ。子どもたちの学業を妨げることのないように。それに、過度な金銭をかけるのもなしでお願いいたしますわ」
「心得ております。我が友ルードヴィッヒも無駄な支出は嫌うところ。みなもそれは存じておりますので、代わりに心を込めたおもてなしを用意しております」
「心を込めたおもてなし……。そう、ま、まぁ、楽しみにしておりますわ」
「それにしても、さすがはミーア姫殿下です。学園のみなも、そのご謙遜な在り方に敬意を新たにしております」
ミーア、微妙に自身の評価が上がったことを察する。
――まぁ、ある程度は、評価しておいていただきたいですけれど……あまり過剰だと困りますわ。あのミーア学園の場合は特に……。ならば……。
ミーア、咳払いを一つ。それから、ニヤリと悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「あら、わたくしだってわがままも無駄遣いもいたしますわよ？特に、食べ物に関することには、妥協はしておりませんの」
「ほう、それは意外ですね」
後ろから声が聞こえて、ミーアは思わず跳びあがる。
見ると、ユバータ司教がこちらを見ていた。

――ああ、ヤバいですわ。大量の金を浪費して贅沢をする暴君、などと思われては一大事。
ミーア、再び咳払いして、方向性を変えにかかる。
「ええ、わたくしは、食にはお金をかけますわ。誰かの分が足りない、などと言うことがあれば悲しいですし……。美味しいものがみなに行き渡るように、一切の妥協はしませんわ。そういうことに関しては、きっちりとお金をかけますの」
っと言った直後、
「ああ、さすがはミーア姫殿下……」
その声に、目を向けると……見覚えのある少女がいた。
「あら……セリアさん、ご機嫌よう」
声をかけると、セリアはビクンっと肩を揺らし、
「は、はい。ミーア姫殿下、ごっ、ご機嫌麗しゅう」
「ふふふ、そう緊張することもございませんわ。はじめてお会いした時には、あなたはそんなに緊張していなかったのではなくって？」
上機嫌に笑いながら、ミーアはセリアに近づいた。彼女との会話であれば、あまり寿命が縮むようなことにはならないだろう、と……信じて。

「どうですの？　ミーア学園での学びは」
その問いに、セリアは間髪入れずに答える。
「はい！　大変なこともございますが、でも……」
楽しいです……と言いかけて、そこでセリアは言葉を止めた。
はたして、楽しい……と、言っても良いものだろうか？
心の内をそのまま話しても良いものだろうか……？
そんな問いが、胸の中に生まれる。
やりがいを感じている、と、楽しくて仕方ないと言っても良いものだろうか？
温情により、勉強をさせてもらっている立場で楽しいだなんて、言っても良いんだろうか？

それは、なんだか、ものすごく罪深いことのように感じられて……。
胸の内、生じた罪悪感が、セリアの言葉を詰まらせたのだ。
ジッとセリアの顔を見つめていたミーアは小さく首を振り……。
「罪悪感を覚えてしまいますわね……」
そんなことをつぶやいた。
自らの胸の内を読んだかのようなその言葉に、セリアはハッと視線を上げる。っと、目の前に、柔らかな笑みを浮かべるミーアの顔があって。
「セリアさん、あなたが頑張っていること、わたくしは知っておりますわ。そして、頑張って苦労した分、きっと報いもあるものだと、わたくしは信じておりますの」
思わず……セリアは息を呑む。
孤児院に行く前のこと……苦労して、苦労して……流れ着いた孤児院、食べる物に困らなくなってからも、懸命に、懸命に……頑張ってきたこと。
その報いとして、今があるのだ、と……。
ミーアは、そう言っているのだ……と思った。
「楽しいことだってあるし、やりがいのあることだってきっとある。それが当然だと思いますわ。あなたは、それだけ頑張っているのですから。だから……その、無理だけはしないようにしていただきたいですわ」
ミーアは、そうして、労わるような笑みを浮かべた。
まるで、楽しくてやりがいがあることであっても、きちんと休むように、と……そう心配してもらっているかのようで……。
「はい……はい！　ありがとうございます、ミーア姫殿下」
セリアは、小さく声を震わせながら、言うのだった。
「はい。大変なこともございますが、でも……」
そこで、言葉を詰まらせたセリアを見て、ミーアは思わず罪悪感

を覚える。
――これは……相当、苦労しているみたいですわね。あの時、わたくしだけ苦労するのは業腹だ、と彼女を巻き込んでしまいましたけど……ううむ、胸がチクチク痛みますわ。
なにやら、言葉を探している様子のセリアに、心から申し訳ない気持ちになって……。
「罪悪感を……覚えてしまいますわね」
思わずつぶやいてしまうが……次の瞬間、ミーアはハッと後ろを振り返る。
そこには、ジッとこちらのやり取りを見守るユバータ司教の姿があった。
――ああ、わ、忘れておりましたわ。司教が見ていること……。まずいですわ。これでは、わたくしがイジメているように見えるかも……。
ミーアは一つ咳払い。それから、セリアに、ニッコリ優しい笑みを浮かべ、できるだけ優しく語りかける。
「セリアさん、あなたのことは聞いておりますわ」
嫌ならやめてもいいよ！　逃げたっていいんだよ！　と言ってやりたい。それが一番簡単だ。でも、それは聖ミーア学園の印象の悪化を招くかもしれない。なので……。
「あなたが頑張っていること、わたくしはよく知っていますわ。そして、頑張って苦労した分、きっと報いもあるものだと、わたくしは知っておりますわ。楽しいことだってあるし、やりがいのあることだってきっとある」
頑張った分、良い目にだって会えるかもしれないし、今やッてることだって無駄にはならないよ！　っと、実感を込めて言うミーアである。
かつて、ルードヴィッヒ・クソメガネ・ヒューイットの勉強に鍛えられ、現在、その実りを手にしつつあるミーアだからこそ、その言葉には説得力があった。

「だから……その、無理だけはしないようにしていただきたいですわ」
最後にきちんと逃げ場を付け足す。どうしても辛かったら、全然、無理せず逃げちゃってもいいよ？　と。
それは、ミーアの胸の内の罪悪感を和らげるための言葉。
けれど、それを聞いたセリアは、じわり、と目を潤ませて、ちょっぴり声すら震わせて、
「はい……はい！　ありがとうございます。ミーア姫殿下」
などと言うのだった。
――な、泣くほど辛いのかしら……。ううぬ、やはり聖ミーア学園については、きちんと一言言ってやる必要がございますわね……。
心に決めるミーアであった。

「罪悪感を、覚えてしまいますわね」
その言葉を聞いた時、ユバータ司教は目を見開いた。
帝国の叡智ミーアの口からこぼれたその言葉に、信じられない気持ちになる。
――ミーア姫殿下は、やれることをやっている。この少女のように、孤児院では育てきれない才を持つ者たちに機会を与え、育てている。それだけではない。セントノエルの特別初等部などでも、教育改革をしている。それなのに、罪悪感を覚えるとは……。
それから、彼は、改めてパライナ祭のことを思う。
――パライナ祭によって、貴族たちの意識を変える……。それは、ミーア姫殿下の罪悪感によるもの、と言うことか……。自分の手が届かない者たちがいる。その者たちを救うため、貴族たちが救うように、と……。そういうことなのだろうか。
自らと似た罪悪感を持つ姫、帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンに対しての評価を上げるユバータ司教であった。

番外編　ミーアに倣う者として

さて、話は少しだけ遡る。
夜闇の迫る帝都ルナティアを一台の馬車が走っていた。
御者台には、御者と護衛の騎士が一名ずつ。そして、馬車の中には男女の姿があった。
そう、アンヌとルードヴィッヒである。
「なんだか、すみません。こんな、馬車で送っていただくなんて……」
ミーアと一緒に馬車に乗ることはあるのだが、こうして自分のために用意されるようなことには、今一つ慣れないアンヌである。まして、護衛としてついてきたのが、破格の男であるとなれば、なおさらのことで……。
「あー、気にしなくっていいよ。僕もルードヴィッヒ殿を護衛するついでなんだから」
御者台に座る帝国最強の騎士、ディオン・アライアは不敵な笑みを浮かべて言った。
「今の蛇にとって、最もお手軽な攻撃が暗殺だからね。君やルードヴィッヒ殿は、ミーア姫殿下の大事な忠臣。狼使いクラスの暗殺者が送られることを考えて、僕が護衛に就くのは、そんなにおかしなことじゃない。まぁ、きっちり護衛するから、安心して休んでいてくれ」
それだけ言うと、彼は馬車前方の扉を閉めた。
――そう言われても、やっぱりちょっと落ち着かない。
それから、アンヌはルードヴィッヒのほうに目を向けた。
なにやら書類に目を落として、難しい顔をしていたルードヴィッヒであるが、アンヌの視線を感じたのか、ん？　と顔を上げる。
目が合ってしまい、ちょっぴり気まずくなりつつも、アンヌは口

を開いた。
「そういえば、ルードヴィッヒさんは、ご実家には帰られているのですか？」
「いや……最近はまったくだな」
小さく首を振って、ルードヴィッヒは答える。
「そうなんですね。ちなみに、ルードヴィッヒさんのご家族って……」
「両親と兄が一人だ。商家をやってるんだが、家は兄が継いでる」
淡々と言うルードヴィッヒに、アンヌは少しだけ眉をひそめた。
「もしかして、あまり仲が良くないんですか？」
その問いかけに、ルードヴィッヒは不意を突かれた様子で、目を瞬かせた。
「どう、だろうな……。自分ではそんなに仲が悪いとは思わないんだが……。会えば普通に話をするし、酒だって酌み交わす仲だよ……。しかし、言われてみれば、もう二、三年は会っていないな」
その言葉に、アンヌは驚いたように目を見開いた。それから遠慮がちな様子で……。
「あの、たまには、ルードヴィッヒさんもお休みをいただいたほうがよろしいのではありませんか？」
ルードヴィッヒは、思わずと言った様子で苦笑いを浮かべる。
「え？　あの、どうして笑ってるんですか？」
「いや、バルタザルや後輩のジルにも同じようなことを言われてね。もちろん、たまに休息はとっているよ。ただ、いかんせん仕事が楽しすぎるから、なかなかね。つい、休むのが後回しに……」
「いけません。ルードヴィッヒさん！」
ビシッと、アンヌが言った。それは、ちょうど、ミーアが食べ過ぎた時の口調に似ていた。そうなのだ。ミーアにとっての甘いものが、ルードヴィッヒにとっての仕事なのだ。
どちらも健康を害する恐るべきもの、ＦＮＹと過労は親戚関係にあるのだ。

……そうだろうか？
「きちんと休む時には休まないとダメです。もっと、ミーアさまを見習ってください」
「ミーアさまを……？」
不思議そうに目を瞬かせるルードヴィッヒに、アンヌは腕組みして堂々と頷く。
「はい。ミーアさまは、必要な時には迅速に動かれますが、そうじゃない時には、ベッドでお休みになっています。緊急時のために、休める時には積極的に休んでいるんです」
「そう、なのか……」
意外な事実だったのだろうか。ルードヴィッヒはかすかに目を見開いた。
「それに、思い返せば、甘いものを食べて、のんびりしていることも多いと思います」
アンヌは深々と頷いてから、
「私は、先ほどのミーアさまのお言葉で気付かされました……いざという時、力を発揮するべき時のために、休むべき時にはしっかりと休む。それが、大切なんだと……」
アンヌの脳裏にあるのは、いつもベッドの上でゴロゴロ、ダラダラ、ゴロゴロ、ダラダラ……ゴロゴロゴロゴロ、ダーラダラするミーアの姿だ。その姿はさながら、浜辺に打ち上がった海月のごとく、しんなりしていることも多いのだが……今のアンヌには、それもすべて、ミーアのすごさに繋がっているように思えた。
こう……心配事はあれど、休む時はしっかり休める胆力とか、そういうナニカに見えたのだ。うん。
「頑張るのは気が楽です。だけど、それじゃあダメだって、ミーアさまはお考えなのだと思います。心配でも、休むべき時にはきちんと休まないと……」
「……なるほど、そのとおりかもしれないな。ミーアさまの忠臣として……、我らは、ミーアさまに倣う者とならなければ、というこ

とか……」
ルードヴィッヒは悩ましげな顔でつぶやく。
ルードヴィッヒがミーアに倣う者になってしまうと、国が傾くような気がしないではないのだが……。
そんなルードヴィッヒにアンヌが優しい笑みを浮かべて言う。
その笑みは、さながら傾国のメイドの笑みと言ったところだろうか……？
「はい。ルードヴィッヒさん、少しお疲れに見えますから。しっかりとお休みを取ったほうが良いと思います。もしかして、お食事も抜いたりすることがあるのではありませんか？」
「よくわかったな……確かに、今日は昼食を食べている余裕がなかったが……」
「でしたら……」
っとそこで、馬車が、アンヌの家の前に着いた。
アンヌは少しだけ、自分の家に目を向けてから、
「あの、もしよろしければ、ルードヴィッヒさんたちもご一緒にどうですか？」
「は……？」
「お食事です。きちんとしないと、お体に障りますから」
「いや、しかし……ひさしぶりの家族での食事に邪魔するわけには……」
「いえ、私は明日もお休みをいただいていますから。それに、ルードヴィッヒさんになにかあったら、ミーアさまだってとても困ると思います」
っと、そこで、
「いいんじゃないか？　ルードヴィッヒ殿も少し休んだほうがいい。僕たちの分まで用意するのは大変だろうから、ルードヴィッヒ殿だけでも構わないけど」
「しかしな……飛び入りしたら、君のご家族も困るんじゃ？」
「いえ、大丈夫です。追加のお料理ぐらいすぐに……母に作っ

てもらいますから」
なぜか、自信満々に、ふん、っと力こぶを作るアンヌであった。

第三十二話　不穏にきらめく……キラキラと

ベルマン邸にて、一泊したミーアは心機一転。養った英気を用いて、行動を開始する。

――ふむ、どうせ馬車に乗っている時間は長いことですし、ミーア学園でどんなことをお話しするのか考えておこうかしら。

馬車に乗り込み、ミーアは腕組みする。

むぅっと眉間に皺を寄せ、言わなければならないことを確認しておく。

――すべきことは、最悪を想定して備えることですわ。例えば、例の七色に輝くわたくしの像。あれの数が増えていたりとか、もしくは、大きさが倍になってたりとか……そういうことはないかしら？

そして、それを見たユバータ司教がどのように反応するか……いや、彼だけじゃない。レア……はいいかもしれないが、真面目なリオネルあたりはきっと眉をひそめるかもしれない。

――わたくしが命じて作らせたのでないことを確認しなければなりませんわ。それだけでなく、わたくしの監督不行き届きを咎められるようなことにもならぬように、きちんとわかっていただかなければなりませんわ。

最悪の事態が「起こらぬようにする」段階は、すでに終わった。今やっておくべきことは、起きた時のダメージを少なくすることだ。

――例の像がそのまま残っていると仮定して、神格化とは思われないようにしたいところですわね。となれば、あの像が親愛の証であることをきっちり強調するとして……。ルールー族への感謝と、ルールー族との縁が生まれたことに対して神への感謝を表明……事の経緯を話す必要があるかしら。とすると、ベルマン子爵のやらかしにも触れる必要があるか……。昨夜、ベルマン子爵の人柄はユバータ司教も見ているはずですし、真摯な悔い改めがあったことにし

て……それに感動したルールー族が、なんか、盛り上がって、像を作っちゃった的な感じにできれば……。ううむ、話さなきゃいけないことがたくさんありますわ。
「ミーアさま、難しいお顔をされておりますけど、どうかなさいましたか？」
ふと顔を上げると、アンヌが心配そうな顔をして見つめていた。
「もしかして、馬車酔いでしょうか？」
「ああ、いえ、そういうわけではありませんわ。学園で、どのような声掛けを行えばいいか、と少し考えておりまして……」
「ああ、ルードヴィッヒさんが言っておられましたね」
「そう。学園に到着してすぐに、みなに声をかけることになると思いますし、行く前に準備をしておく必要があると思いますの」
「そう……、なんですね。でも……」
アンヌが気遣わしげに首を傾げた。
「なんだか、とても悩まれていますけれど……なにか、心配事でもあるのですか？」
「ええ……そうですわね……」
歯切れ悪く答えるミーア、であったが……。
「もしかして……特別初等部の子どもたちのことを、気にされているのですか？」
横からそう指摘したのは、馬車に同乗していたレアだった。演説のアイデアをもらおうと、ミーアが同乗を求めたのだ。
イエスマンの鬼であるミーアは、使える人材を遊ばせておくほど、甘くはない。なんでも使って少しでも楽をする。これこそがミーアのスタイルなのだ！
「気にしている……そうですわね。そういう面ももちろんございますわ」
頷きつつ、ミーアは感心する。
――さすがはレアさん。重要なことを思い出させてくれましたわ。ミーア学園の者たちへの声掛けと言うことは、必然、わたくしたち

と同行している特別初等部の子どもたちへの声掛けと言う側面もあるわけで。紹介だけで終わらせずに、影響を受けないように、ときっちり言い含めておく必要がございますわね。
きちんと心のメモに書き留めておくミーアである。
「各所への心遣いがなかなか難しいですね」
レアが難しい顔で頷いて、
「そうですね……それならば……私もセントノエル学園の代表として挨拶をする、というのはいかがでしょうか？」
「……ほう……、なるほど」
ミーア、一瞬考えて……それは悪くないかもしれない……と思う。
――わたくしが一人で挨拶したら、目立ってしまいそうですけど、セントノエルの生徒会長であるレアさんと共に挨拶をしたら……。注目も分散するかも……。
聖ミーア学園の士気を上げ過ぎないよう、でも、ユバータ司教に対するアピールを考えると、士気を下げ過ぎてもいけないわけで……。匙加減がとってーも難しかったわけだが……。
レアも声掛けを行ってくれると言うならば、それを見て、バランスを調整しても良いかもしれない。
――レアさんならば、滅多なことは言わないでしょうし。パライナ祭のこともきちんと説明してくれますわ。
ミーアは深々と頷いて、
「そうですわね。ならば、セントノエル生徒会長としてご挨拶していただこうかしら。パライナ祭のことも、レアさんからお話しいただくのがよろしいように思いますわ」
「わかりました。でしたら、私もどんなことをお話しするか考えておきます」
「よろしくお願いいたしますわね……あら？」
っと、そこで、ミーアは馬車の外に目を向けた。
遠くのほう、皇女の町が見えてきたのだ。
「ああ、ようやく着きましたのね……。はて……あれは……？」

ミーアは、不意に眉をひそめた。
皇女の町、その入り口のところに、不穏にきらめくナニカを見つけて……。
「あれ……は？」
口から、かすれたつぶやきがこぼれ落ちた。

第三十三話　他人事ではなかった……

「もしかして、特別初等部の子どもたちのことを、気にされているのですか？」

そう口にした時、レアには、ある確信があった。

なにしろ、あの帝国の叡智が演説で悩むなど、通常では考えられないこと。聖ミーア学園の学生たちをその気にさせることなど、その知恵の前では、ごくごく簡単なことのはずなのだ。にもかかわらずのあの悩み方……、これはなにかあるぞ……とレアは気付いた。

そうして、考えた結果、導き出された答えこそ……。

――そうか、きっと、特別初等部の子どもたちへの気遣いに悩んでいるんだ！

これである。

考えてみれば、特別初等部というのは、ある意味で、聖ミーア学園の姉妹クラスのようなものだ。きっと子どもたちも、ミーア学園の生徒たちを意識せずにはいられないだろう。

けれど、特別初等部の子どもたちは、いわば普通の子どもたちだ。なにも特別な才能はない。だから……。

――きっと、聖ミーア学園の生徒を見たら焦ってしまう。ミーアさまが士気を高めるような激励をされたら余計に、重圧を感じてしまう。それが、ミーアさまは心配なんだ。

レアの目から見れば、子どもたちが抱くであろう、その焦りは的外れだ。

ミーアの持っている期待感は、ミーア学園の生徒へのものと、特別初等部へのものとで違ってるだろうからだ。

帝国の叡智は、一人一人を大切に見守っている。

子どもたちがそれぞれに違いを持っていて、だけど、それぞれがかけがえのない存在だと考えている。一人一人に、与えられた才を

生かす道があると信じている。
それは慈悲深い考え方だとは思うけれど、それだけではなく、もっとわかりやすい、合理的な狙いも、レアには見えていた。
特別初等部の子どもたちには、聖ミーア学園の生徒とは別の役割があるのだ。
――才能の有無ではなく、すべての子どもたちを救う環境を作る。そのためには、今は才能がなくても、将来、才能に目覚める子どもがいるかもしれない、と……貴族たちにそう思わせなければならない。そのためには、才能によって集められたのではない子どもたちにだって、役割があるんだ。
他のメンバーであれば、慈愛の聖女だなんだと勝手に盛り上がりそうなところでも、レアは合理的かつ現実的に考えを進めていく。
ミーアの示したパライナ祭のコンセプトに照らし合わせ、ミーアの思考を予測していく。
昨夜、顔を合わせたセリアと言う少女は、自分より少し年上だろうけど、しっかり者の印象を受けた。話してみた感じも、まるで大人の文官のような、てきぱきとした様子だった。
――あれを見たら、確かに焦ってしまうかもしれない。子どもたちへのフォローは必須だ。焦らないようにって……きちんと言ってあげなければいけない。
ミーアは、それを悩んでいるのだろう。
――それならば、私の役目は……。
一つ頷き、レアは口を開いた。
「それならば……私もセントノエル学園の代表として挨拶をする、というのはいかがでしょうか？」
レアの提案は、すなわち、特別初等部へのケアは自分に任せ、ミーアはミーア学園の生徒たちを激励することに集中してはどうか？というものだった。
それを聞き、ミーアは何事か考えるように一瞬黙ってから、
「そうですわね。ならば、セントノエルの生徒会長としてご挨拶し

ていただこうかしら」
深々と頷いた。続けて、
「パライナ祭のことも、レアさんからお話しいただくのがよろしいように思いますわ」
その言葉には、少しだけ驚いた。
――ミーアさまの口から説明するんじゃないんだ。
例のコンセプトを考えたのはミーアだ。当然、その栄光はミーアに帰されるものだと思ったのだが……。
けれど、考えてみれば、確かにそれもセントノエルの生徒会長として……あるいは、ヴェールガ公国の人間としての仕事だ。
誰が主体となり、なにを目的として行うものか……。それをはっきりさせる必要があるのだ。
――そうしないと、ミーア学園がヴェールガに選ばれたのか、ミーアさまが勝手に自身の学園の宣伝のためにパライナ祭を使おうとしているのか、わからなくなるかもしれない。
今回はミーア学園を舞台としているため、そこまでこだわる必要はないにしても、今後は、主体的に祭りを進める国がどこなのか、という意識をきちんと持たなければならないだろう。
そのためには、始めが肝心。
レアは改めて、ミーアの配慮と、それ以上に、民への自分の見せ方について、考えさせられてしまう。
――私が全然気づかないところまで……。やっぱりミーアさまを見てるとすごく勉強になる。
オウラニア姫が、ミーアのことを師匠だの、姫道だの言っているが、実に的を射ている！　などと感心しつつも、レアは言った。
「わかりました。でしたら、私もどんなことをお話しするか考えておきます」
その返事に満足げに頷いたミーア……であったが、不意に、その顔が怪訝そうに曇った。
「うん……あれ、は？」

その視線は、馬車の外、正確に言えば前方に向けられていた。
進行方向に背中を向けていたレアは振り返り……直後、その目に、七色に輝くなにかが見えて……。
「なっ……なんですの、アレは……」
わなわなと、つぶやくミーアの顔を見て、レアはふと思い出す。
――この顔、町でご自分の肖像画を見つけた時の、ラフィーナさまに似ているような……。
有名人の悲哀に同情の目を向けるレアは、知らない。
来年、セントノエルの生徒会長の職務の一環として、自らの肖像画が造られ、しかも、貧しい者たちを救うためのチャリティー目的で、こっそり発売されてしまうという……過酷な未来のことを……。

第三十四話　皇女の町ｉｓＦＮＹミーアランド

皇女の町の前につき、馬車を降りたミーアは、思わずソレを見上げる。

「お、おお……。なっ、なんですの、これは……」

ミーア一行を出迎えたもの、それは、七色に輝く木でできたアーチ状の門だった。

……まぁ、それは良い。町の入口に門を作るのは、まぁ、おかしなことではない。けれど、その門、遠目にもわかるほど磨き抜かれ、七色の輝きを放っているのが、実になんとも気になってしまう。しかも、表面には極めて精緻な彫刻がされていて……。

――この……なにやら、背中に羽が生えている天使は……いえ、でも、まさか、ねぇ……。

「おお、この門、素晴らしい仕事がしてあるな。これは、ミーアではないか？」

背後に立つ父の声が、ミーアのすがろうとした希望を粉々に打ち砕く！　そうなのだ、その天使の表情、髪形なども実に上手くミーアを表現していて……。

皇帝マティアスは、七色に輝く立派な門を見て、ニコニコと上機嫌に笑った。

「こちらは、ルールー族より寄贈されたものでございます」

門のすぐそばから声が聞こえた。そちらに目を向ければ、見覚えのある少年がそこに立っていた。

「あら、あなたは……ワグルではありませんの？」

新月地区で出会った、ルールー族族長の孫、ワグルは嬉しげな笑みを浮かべて頭を下げた。

「おひさしぶりです。ミーア姫殿下！」

「ふふふ、そうですわね。ずいぶんと、背も伸びたみたいで。立派

になりましたわね。元気そうでなによりですわ」
　ミーアは愛想よくそれに応えてから、
「それでえーと、この門のことなのですけど……」
　早速、本題に入る。
「はい。ルールー族の者たちみなで造りました。ミーアさまが以前ここにいらっしゃった時の出来事を刻んであります」
　じゃあ、この羽はなんなんだ！　っと問い詰めたいのを堪えつつも、ミーアは言った。
「そ、そう。ルールー族のみなさんが……しかし、ルールー族にとって、この木は神より与えられた財産なのでは……？」
　ミーアの記憶が確かであれば、あの木は戦争の原因にもなるほど、貴重なもののはず。そのような木で門を作るなど、良いのだろうか？　と疑問に思うも……。
「はい。大恩あるミーア姫殿下へのお礼の気持ちを表すために、最も大切な宝をささげさせていただきました」
　それから、ワグルは、ちょっぴり照れくさそうにはにかんで、
「そこのミーアさまの彫刻は僕が彫りました」
「まぁ！　そうなんですのね……」
「はい。ミーア学園では、木材の加工について学んでいて……。ルールー族に伝わる技法と帝国式の新しい技法について学んでいます。先日、筋が良いって褒められました」
「確かに、この彫刻は見事な出来ですものね」
　まぁ、その、なんというか……若干、ミーアが飛んでいるように見えるというか、見ようによっては天使か妖精に見えてしまいそうなのが、少々気になるところではあるが。
「むっ？　ところで、この弓矢を射かけられているような、彫刻だが……これは、以前、ミーアが来た時の記録ということだが……ということは……」
　眉を顰めるマティアス。それを見たミーアは、慌てて口を開く。
「と・こ・ろ・で！　その門の上のほうに書いてあるのはなんです

の……？　ええとなになに……Ｆｏｒｅｓｔ　Ｎｅｗ　Ｙａｒｄ　ミーアランド……？」
「この場所の名前です。学園都市聖ミーア学園はあくまでも全体の名称。学園部分ではない、こちらの町には独自の名前を付けるのが良いのではないかと……。みなは略して、皇女の町（プリンセスタウン）ＦＮＹ（フニィ）ミーアランドと呼んでいます」
「フニィミーアランド……。まぁ、フォレストニューヤードというのは、森にできた新しい町と言う感じではありますけど……ミーアランドというのは、いかがなものかしら？」
　それに、略し方が、こう……フニィッとしてる感じが、いまいち不吉と言うか……。
　思わず、二の腕を確認するミーアである。が……。
「この町は、ミーアさまによって造られた町なので……。そう名付けるのが適切なのではないか、とみなが言っています。それに、聖ミーア学園と対になる町なので……、ミーアさまのお名前を冠するのがよろしいのではないか、と……」
　そうまで言われてしまえば、ミーアとしても言い返すこともできない。ただ、一つ、疑問があったのは……。
「ところで、この命名をしたのは……」
「ベルマン子爵です。町を建てる資材のお金はベルマン子爵が出されましたから。もちろん、僕たちルール族も賛成しましたけど」
「うむ、ミーアランド。ミーアの国か。なかなか良いではないか！」
　皇帝マティアスの満足げな頷きを横目に、ミーアは、ぐぬぬっと胸の内で歯ぎしりする。
　――おっ、おのれ、ベルマン子爵。まともな方かと信用しかけたところで、この仕打ち……許せませんわ！　これは、過去のあの方を思い出させますわね！
　チラリ、とそちらに目を向けると、んっ？　と小首を傾げるエメラルダの姿が見えた。目が合ったことが嬉しかったのか、ひらひらっと手など振っている！

まぁ、それはともかく……。
「え、えーと、それは、ともかく学園のほうに向かいましょうか」
「ミーアよ、せっかく、ベルマン子爵が建設した町だ。まだ完成していないとはいえ、見てやらねば可哀想ではないか」
「いや、しかし……」
っと、ミーアはヴェールガから来た一行のほうに目を向けた。
立派な門の彫刻に興味津々の子どもたち。それを見て微笑ましげな顔をしているユバータ司教とリオネル、レアの兄妹……否！　リオネルは、むしろ、その彫刻の仕上がりに関心があるらしく、ワグルから熱心に話を聞いていた。年が近いワグルがそれを作ったことに、衝撃を受けたようで……。
「これと同じものをラフィーナさまでも……」
なぁんて話が聞こえてきたりしたが、まぁ、それはどうでもよくって。
――ふぅむ、確かに、町のほうにも興味があるかもしれませんわ。まぁ、皇女の町とか、ミーアランドとか言っても、基本的には普通の町でしょうし……それならば、まぁ、行ってみても、よろしいかしら……。
ミーアは深々とため息を吐き、
「まぁ、そうですわね。みなさんも興味がありそうですし、それならば、少し寄って行きましょうか」
仕方ないな、と思っていたミーアであったが……町に入ってしばらくしたところに建っていた建物の前で、思わず口をあんぐーりと開ける。
「……こっ、皇女ミーア……記念館？」
ちなみに、ベルマン子爵肝いりの建物である。

第三十四話　皇女の町ｉｓＦＮＹミーアランド（後書き）

名前の由来は、某有名遊園地ではなく、かつて伊豆にあったテーマパークです。

四輪バギーが上手く運転できなかったけど、楽しかった思い出……。

番外編　皇帝と子爵と

話は少しだけ遡る。
ベルマン子爵邸での、夜の風景。
子どもたちが寝静まった頃、皇帝マティアスは、ベルマン子爵と共に応接室にいた。
深々と椅子に腰かけ、ワイングラスを片手に上機嫌に笑う皇帝。
それを見て、ベルマンは眉をひそめた。
「陛下、その、よろしいのでしょうか……。このように、酒を酌み交わすなど……この栄誉は、我が身には余ります」
ベルマンは、所在なげに、ワイングラスを持っていた。中に注ぎ入れられたワインは、あろうことか、皇帝が手ずから注いだものだった。
身に余る光栄、どころの話ではない。一子爵に向けるには到底あり得ぬほどの、皇帝の態度に、彼は逆に恐ろしくなった。
なにやら、無茶なことを言われるのではないか……などと言う不安が、ふつふつと胸の中に湧いてくる。
「そう固くなるな、と申しておろうが。ここは、公式の場ではない」
そんなベルマンの胸中を察したのか、マティアスは穏やかな口調で言った。
「それに、家臣と酒を酌み交わし、その胸の内を聞いておくことも必要である、と私は考えている」
その言葉に、一応は安堵して、ベルマンは少しだけ肩の力を抜く。
「それで、どうだ？　命じてあった皇女の町は……」
「はっ！　皇女の町には、我が子爵領の総力を挙げて取り組んでおります。すでに、各地の商人にも声をかけ、いくつかの商店ができています。それに、開拓団として、領民の一部に募集をかけ、税の優遇措置を褒美として、移住を進めています。幸いにも、予定して

いた人数はすぐに埋まりまして……」
領民の中でも、特に行き場のない農家の次男、三男が積極的に参加したことが、逆にミーア学園との相互協力を進めた。
学園の周りに実験的な畑を作り、そこでいくつかの新種の小麦を並行して育てること。そのための働き手が絶対的に必要だったのだ。
放っておけば働き口にありつけず、場合によっては賊になっていたかもしれない者たちを、有効に活用できたことで、領内での子爵の評判は上がっていた。
「ほう……」
ベルマンの言葉に、皇帝は興味深そうに頷き、それから、ワインに口をつける。それから、髭を撫でつつ、
「そうか……。皇女の町は順調か。して、ミーアが手掛けているという学園のほうはどうか？」
「はっ！　聖ミーア学園は、姫殿下がお選びになられた者たちが務めに当たっておりますゆえ、私は一切口出しをしておりません。我が務めは、学園に通う生徒たちが気兼ねなく学業に専念できるよう、周りの設備を整えることと心得ております」
深々と頭を下げるベルマンに、マティアスは威厳たっぷりに頷く。
「うむ、それでよい。ベルマンよ。その忠誠と謙遜、余は嬉しく思うぞ」
実に、実に！　皇帝らしい口調でマティアスが言った。それを受け、ベルマンは、ははーっと平伏する。
「恐れながら、実は、ミーア姫殿下のご栄光を少しでも表すことができるよう、町のほうには趣向を凝らしましてございます」
「なるほど。それは、つまり、子爵の忠義が形になったものだな……。ふふふ、楽しみだ」
上機嫌に笑って、ワインをもう一口。
それから、マティアスは不意に、声を低くして……。
「ところでな、ベルマンよ。これは、ここだけの話にしておいてもらいたいのだが……」

「はっ！」
ベルマンは素早く頷き、部屋の中に控えていた執事を下がらせる。きびきびとしたその動きを黙って見つめてから……マティアスは続ける。
「ベルマンよ……改めて問いたい。貴公の忠義は、どこに向く？」
「はっ！　我が忠節のすべてはこの帝国に。そして、皇帝陛下、並びに帝室の方々に。我が身命を賭して、我が子孫、一族の身命を賭して、この忠節に尽くす所存にございます」
「うむ……」
重々しく頷いてから、マティアスはおもむろに口を開いた。
「それでは……ベルマンよ。そのお前の忠義の向かう先を、変えてもらいたい、と言ったら、どうする？」
「……と言いますと？」
片眉を上げ、ベルマンは問うた。皇帝マティアスの言葉は、彼の理解を軽く超えていた。
それを受け、マティアスは一口、ワインを口にしてから。
「単刀直入に言おう。ベルマンよ、その忠義を、どうか、我が娘、ミーアのほうに向けてはくれないか」
その言葉に含まれた意味を吟味して、ベルマンは驚愕に固まる。
「それは……つまり……ミーア姫殿下に帝位を譲る……そのことを支持せよ、と……？」
問いかけに、けれど、マティアスは直接は答えなかった。
しばし、考え込むように黙ってから……。
「こんなことを言うのは、どうかと思うのだがなぁ。ミーアはなぁ……頭が良いのだ」
照れくさそうに笑みを浮かべて、
「あれは私ではなく妻に似たのだろうな……あるいは、我が母のほうだろうか。聡明で、この国のことを冷静に見て、明日、明後日ではなく、二年後、三年後、十年後のことまで視野に収めている」
「はい。存じあげております。我が子爵領が栄えているのも、すべ

て姫殿下の叡智によるものでございます」
「ああ、そういえば、そうであったな」
上機嫌に笑ってから、マティアスは言った。
「あれが女帝になれば、良い統治者となるだろう。が、継承権の問題には、四大公爵家が絡んでくる」
「星持ち公爵家の方々……特に、男児を持つブルームーン家を筆頭に、イエロームーン家以外の三家とその派閥に属する貴族たちは反対するでしょうな……」
「そう。我ら帝室は、四大公爵家の上に立つ者。ゆえに、独自の派閥というものを持たぬ。まして、ミーア個人を支持する派閥というものは存在しない。なので、その辺りのことのフォローは余が……と思っていたのだが……」
マティアスは、そこで苦笑いを浮かべる。
「ミーアと家臣の者たちは、上手く四大公爵家とも接近して、しっかりと固めてしまっているようだ。だから、余にできることはこのぐらいだ」
それから、皇帝マティアスは改めて、ベルマンのほうを見つめて……。
「ベルマンよ。これから先、ミーアが女帝の地位に就く時、もしも、他の四大公爵家と揉めるようなことがあったとしても、貴公はミーアの味方として、忠義をささげてもらいたい」
「過分なお言葉……痛み入ります。ですが、陛下、ミーア姫殿下は、すでに、辺土貴族からの絶大な支持を受けておられます。彼らこそが、姫殿下の派閥の中核となる者たちでは……？」
ベルマンには、かすかな罪悪感があった。
ミーアが自身のもとにやって来た経緯。皇女の権威を利用しようとしたことに。
だからこそ、ミーアのことは支持するし、力を貸せと言われればいくらでも出し惜しみはしないつもりであったが……ミーアを支持する派閥に自身がはせ参じても良いものか、という気後れがあった

のだ。
けれど……。
「わかっている。辺土貴族は確かにミーアの味方をするであろう。が、それは中央貴族と辺土貴族との間に深刻な亀裂を生むであろう。ならば、中央貴族の者の中にもミーアを直接的に支持する者が必要なのだ」
その理屈は十分に、ベルマンにも理解できるものであった。そして、自分が選ばれたことが誇らしくもあった。
「陛下……私のような小さき者に、過分な務めを与えていただき……歓喜の念に堪えません。ええ、大いなる喜びを持ちまして、我が忠義をミーア姫殿下に。そして、変わらぬ忠義を陛下におささげいたします所存にございます」
その返事に、マティアスは満足げに頷き、
「さぁ、今夜は大いに飲むぞ、ベルマンよ。貴公の子の話も聞かせてもらおうか」
かくて、ベルマン邸の夜は更けていくのだった。

第三十五話　皇女ミーア記念館

その建物の前に立ち、ミーアは、わなわなと唇を震わせる。
「こっ、皇女ミーア……記念館？」
建物の名前を見て気付いたのだが、この建物、入口のところにオシャレなアーチがあるのだが……よく見るとそれは、ミーアが付けているティアラを象ったものらしかった。
ちょっぴりシャレた感じなのが、微妙に腹立たしい！
「ここは、ベルマン子爵の肝いりの建物なんです」
「べっ、ベルマン子爵が……っ！？」
ミーアは、カッと目を見開く！
――くぅ、あ、あいつ、またしても……。何たる裏切りですの……。
っと、そこまで考えた時、ミーアはふと思う。
――っていうか、正気ですの？　わたくしの行動を記録するということは、ベルマン子爵自身の悪行をも明らかにすることですのに！
ミーアの疑問に気付いたのだろう。ワグルは神妙な顔で頷いて、
「確かに、ミーアさまの功績を讃えるということは、裏を返せば、ベルマン子爵の過ちを世に明らかにすることです。でも、ベルマン子爵は、これをご自分のお金で建てられたのです」
ワグルはそう言ってから、建物を見上げた。
「この建物は、悔い改めの心を表すためだって、ベルマン子爵はおっしゃっていました。自分の過ちを決して忘れないようにって……。その言葉に、族長も打たれたみたいで、和解に至ったんです」
「そっ、そう……なんですのね」
それにしちゃあ、ずいぶん入口がシャレてますけど！？　とツッコミを入れたいミーアであったが……なるほど、ルールー族とベルマン子爵との関係改善にも役に立っているらしい。

――それならば、まぁ、仕方ない……のかしら？
ううむ、っと唸るミーアに、ワグルは続ける。
「村の中には、まだベルマン子爵に複雑な気持ちを持っている人もいます。でも、このミーアランドを作ろうというベルマン子爵の姿勢を見て、だんだんと態度を軟化させています。祖父ちゃんなんかは、あの時のことがあったおかげで、ミーア姫殿下との縁ができたし、それに、ぼくがルールー族の村に帰れたのも、もとはと言えばベルマン子爵の行動がきっかけでしたから、ベルマン子爵の謝罪を受け入れています」
「なっ、なるほど……」
ますます、こんな建物壊しちまえ！　という悪役ムーブを封じられるミーアである。まぁ、もともと、そんなことをするつもりはないが……。
そんなわけで、ミーアは自然と、流されるように建物の中へと入った。
ミーアは海月。生まれた流れに逆らうことは、ない。
「あっ、それでは、これをどうぞ」
っと、入口のところでワグルが渡してきたものに、ミーアは首を傾げる。
「はて、これは……？」
「来館記念の髪飾りです。簡単なものですが、記念館に訪れたお客さんに渡すようにしていて……」
「ああ、確かに髪飾りというのは、あの時の出来事にちなんだものですけど……しかし、この耳は、いったい……」
「そちらは馬の耳を模したものになります。ミーアさまといえば馬ですから」
ベルマン子爵の悔い改めを表現してるにしては、やたらと楽しそうじゃねぇか！　とツッコミたくなるミーアである。
それはさておき、この耳のこだわり……まさか、アンヌも、この記念館に関わっているんじゃ！？　などと疑心暗鬼に陥りかけるミ

ーアであったが。
――いえ、アンヌだけは裏切らないはずですわ。問題は、これが裏切りではなく、溢れ出る忠義から出た可能性ですけど……。馬の耳の形に並々ならぬこだわりを持つアンヌですし……こういったものを提案した可能性も……。
「セロのお姉さん……ティオーナさまからお聞きしました。馬術大会のこと。あ、そこのところに、ちょうど絵が飾ってありますね」
ティオーナよ、お前かっ！　と心の中でツッコミを入れるミーアである。
なんだか、頭の中で、グッと親指を立てるティオーナの満面の笑みが見えたような気がした。
それはともかく……。
「むっ！　ここにも、ミーアのすぐそばに矢が刺さった絵が……」
突如聞こえて来た声に、ミーアは慌てて、
「お父さま！　その、これ、どうかしら？」
シュシュっと馬耳カチューシャをつけて、父を呼ぶ。
「おおー！　ミーア、なかなか良いではないか！」
途端に、満面の笑みになる皇帝マティアス。その変わりようをそばで見つめていたパティが、どこか複雑そうな顔で、スッと目を逸らしたが……。まぁ、そんなパティもしっかり馬耳をつけているので、楽しんでいるようではあった。
「ミーアさま、この馬の耳、造詣がとても深いですね！」
アンヌも、実になんとも嬉しそうだ。指をクイックイッとさせるアンヌに曖昧に微笑み返してから、ミーアは改めて、その絵の前にやって来た。
「これは……なるほど」
飾られていたのは、確かに、セントノエルでの乗馬大会の絵だった。
騎手のミーアだけでなく、荒嵐の姿まで、なかなかに特徴を捉えて描かれている。

他にも、セントノエルでの生徒会選挙の様子や、ミーアが全校生徒の前でなにかを語っている様子、さらには、なんと、無人島やペルージャンでの演舞の絵まで飾られていた。
「この……でっかい魚を殴り倒している絵は……まさか」
ミーアはジトッとそちらに目を向けると、エメラルダＷｉｔｈ馬耳カチューシャが意気揚々と胸を張り、
「それに関しては、わたくしの証言をもとにして描いていただいたものですわ！」
まったくもって、悪びれる様子もないエメラルダに頭を抱えつつも、ミーアはさらに順路に従って進んでいく。
「それにしても、この絵は、なかなかに見ごたえがございますわね」
描いてある内容が、若干、アレなのはさておき、それは見事な絵だった。
シャルガールのような華やかさはない。されど、その絵には確かに、人々の心に訴えかける何かがあった。
……ちなみに、描いたのはペルージャン出身の絵描きで、例の坂を上る二人の姫君の絵を描いた人物でもある。
「絵だけではなく、僕たちの作った彫刻のコーナーもございます。どうぞこちらへ」
「ふむ……まぁ、一応は一回りしましょうか……」
歯切れ悪くつぶやくミーアであった。

第三十六話　真なる魔窟からの脱出

「お……おお……これ、は……」
その広い部屋に並んだ彫刻群を前に、ミーアはワナワナと唇を震わせた。
そこには、粗削りながら、実に勇壮なミーアの彫像が並んでいた。ミーアですら圧倒されるほどの迫力を、その彫像は持っていた。
圧倒されるほど、豪気な彫像が、自分の姿をしているという現実に、思わず頭がクラァッとする。
眺めている内に、ミーアの瞳から感情の輝きが失われていく……。それでもツッコミを入れないわけにはいかず……いささか気が進まないながらも、ミーアは手前の彫像を指さして……。
「え、ええと、これは、なにかしら？」
なにやら、こう、花のようなドレスを着て、頭に花の冠を被り、ついでに両手には本物の花が活けてある大層美しいミーア像があった。等身大なだけに、実に迫力がある。
まるで、あのラフィーナのヘンテコな肖像画が、立体になって目の前に現れたかのようだった。
「これは、セロの意見を取り入れて、ミーアさまと美しいお花というのは相性が良いのではないかと考えまして。このように、いろいろな花を活けることで、季節感を出すことができます」
端的に言って実に、出来が良かった……。いや、もう、ほんと、これで自分の姿を模してなければ、手放しで褒められるのにナァ、と思うミーアであった。
「そっ、そう、アイデアが良いですわね。確かに、まぁ、花の蜜とかは好みですし……こっ、こっちの隣のものは……」
花の妖精ミーア像の隣にあったのは、天使のような衣装を身にまとったミーアであった。天使っぽい服を着た絵は、ラフィーナの肖

像画などで見慣れているが……こう、立体造形になって突きつけられると、得も言われぬ凄みがあった。
「それは、ぼくを助け上げてくださった時を思い出して作りました。ぼくに駆け寄ってくださった、あの時には、このように見えましたので……」
どうやら、ワグルの目には、ミーアが自らを救ってくれた天使に見えちゃったらしい！
見えちゃったなら仕方ないかぁ……といささか、感情の見えない表情で頷くと、ミーアは彫像についての解説を聞いていく。
手の部分に明かりが灯せる像とか、なにか大切な物を収納しておく用の隠し金庫仕様のものとか……こう、実に創意工夫に富んだものが多かった。
ただの芸術品ではなく、どちらかというと家具とか、工芸品の類に近い。ルールー族の木材加工技術の粋が、そこには見え隠れしているようだった。
「まだ、数は少ないですが、いずれは、このフロアを一杯にしようと思っています」
ずらぁっと自らの彫刻が並ぶ様を想像し、うっぷ、と胸がいっぱいになるミーアである。
「ふむ、ワグルと言ったか。そのほうの働き、誠に見事である」
言葉を失っているミーアに代わって、そう評したのは皇帝マティアスであった。皇帝の風格を漂わせつつ、彼は天使ミーア彫像に近づき……。
「この彫刻、同じものをミーアの誕生祭で飾ろうと思うのだが、もう少し、こう、サイズ感をアップして作ることができるか？」
「おっ、お父さま、そっ、そのような無茶を言うものではありませんわ！」
ミーア、慌てて止める。もちろん、ワグルを傷つけないよう言葉に気をつけながら、である。あくまでも、彫像がトンデモないから止めたのではなく、ワグルに負担をかけないように、というスタン

スだ。
「これ以上の大きさなど、ワグルの負担になってしまいますわ」
雪像と違って、一回作ったら消えないんだぞ！　と悲鳴を上げつつも、計画阻止のために言葉を重ねる。
「それに、大きな像というのは、ある種の神格化に繋がってしまいかねない。人々の心を悪しき方向へと向けてしまいますし。ねぇ、そうですわよね、ユバータ司教」
神格化とか、偶像化とか、そんな意志は自分にはまぁったくありませんよ！　とアピールがてら、話を振ってみる。っと、
「確かに、巨大な像というのは、暴走した権力者が建てがちなもの。民衆を惑わす危険はあるかもしれません」
ユバータ司教の同意を得て、ミーアは、ほらほらぁ！　っと視線を転じれば……黙って話を聞いていたワグルが、ポンっと手を打った。
「ならば、逆に小さくするのはいかがでしょうか？　陛下」
「なに？　小さくだと？」
カッと目を見開く皇帝に臆することなく、ワグルは言った。
「はい。小さな像をたくさん作って、誕生祭に参加した人たちに配るのです。地方の工芸品に岩ダヌキの木像というのがあるのですが、それに似たもので……」
なにやら、キケンな匂いが漂い始めたので、ミーアはすかさずワグルに声をかける。
「そっ、それよりも、ワグル、次の部屋はなにかしら？　ええと特設コーナー、帝国の叡智の……実像に迫る？」
実像に迫る……その言葉にドキッとするミーアであるが……。
「ああ、次のコーナーはミーアさまの思想を知ってもらうためのコーナーですね」
「わっ、わたくしの、思想……？」
「はい。ガルヴ学長のご意見で。ミーア姫殿下のこれまでの言行録を頼りに、その歩みを追体験できるようにして……。それで、ミー

ア姫殿下のお持ちの人生哲学や思想に迫ろうという展示です」
「そっ……そう、なんですのね……」
ミーアは誇らしげに飾られた、自らの過去の宣言などを眺めながら、しみじみと思う。
――ああ、そういえば、こんなこともございましたわね。生徒会選挙でのこと……ああ、レムノ王国での兵士たちへの声掛けなんかは、とても大変だった記憶がございますわ。なんだか、遠い遠い昔のことのようですけど……。
そこで一つ咳払い。
「まっ、まぁ……その、み、みなさんのわたくしへの熱き忠義、とても嬉しく思いましたわ。ぜひ、ルールー族の族長さまにも、お礼をお伝えいただきたいですわ」
色々な意味で胸がいっぱいいっぱいになったミーアは、足早に記念館を後にした。
魔窟ミーア学園などと、半ば冗談で思っていたミーアであったが……まさか、真なる魔窟が学園の手前にあることなど、想像だにしなかったので、その心に負ったダメージはなかなか大きいのであった。

第三十七話　ＦＮＹミーア……ランドにて

這う這うの体で皇女ミーア記念館を出たところで、ミーアは深々と息を吐いた。
「……の、濃密な空間でしたわ」
振り返れば、実に楽しげな、皇女ミーア記念館が、ぽっかりと口を開けていた。その胃袋の中で経験した恐ろしさに、ゴリッゴリに精神力を消耗してしまったミーア。そんなミーアにワグルが話しかけてくる。
「どうでしたでしょうか？　記念館は……」
不安そうに、でも半ばは期待感でソワソワ体を揺らしつつ尋ねてくるワグルに、ミーアはなんとか笑みを浮かべて……。
「え、あ、ええ……そっ、そうですわね。うん、なかなか、楽しかった……のではないかしら？」
なんとかそれだけ返して、その後、ミーアは、特別初等部の子どもたちのほうに目を向けた。
みんな、お揃いの馬耳カチューシャをつけている。レアとリオネル、ベルとシュトリナもだ。パティに至っては、いつも通りの無表情にもかかわらず、未だに楽しそうな空気を出している！
――ふむ、まぁ、パティが楽しめたならば、それでよしっ！　ですわね。
っと、ミーアは、ちょっぴり優しい気持ちになってしまい、
「子どもたちも、楽しめたみたいですし、とても良い施設ですわね」
うっかり褒めた。褒めて、しまった……。
「それは、良かったです！　実は、ギルデン辺土伯家からも、同じようなものを作りたいという要請が来ているらしいのですが……」
突如、別の横波が襲って来て、海月は一気に呑み込まれる。
「ぎっ、ギルデン辺土伯領……って、確か……」

ミーアの助言に従って、小麦を植えていない時には、花畑にして、それを目玉に観光で稼ごうとしていた辺土伯である。
ルードヴィッヒの報告によると、中央貴族からの評判も上々と聞くが……そんな観光地に、この皇女ミーア記念館と同じようなものが建ってしまう……。
ミーア、思わずクラァッとするが……。
「おお、それは素晴らしいではないか。どうせならば、同じようなものを全国に作るというのもよいのではないか？」
ノリノリの声でそんなことを言い出すマティアスに、即座に、正気に戻る。これは、放っておいたらやばい！
激流の気配に覚醒したミーアの脳みそは、即座に回転を始める。
「こっ、こういったものは、その、どこにでもあると、却ってありがたみが薄れるものですわ。こんな素晴らしい施設なのですから？
ここは、特別性を生かさなければ……」
っと、ミーアの言葉を聞いたワグルがハッとした顔をする。
「それは……つまり、ぼくたちルールー族との友好の懸け橋としての施設を、特別なものとして大切にせよ、と……そういうことでしょうか？」
「え？　ええ、まぁ、そんな感じ？　ですわね、うん……たぶん」
などともにゅもにゅ。とりあえず、嬉しそうに微笑んだワグルは良いとして、続けてミーアは、父のほうにも目を向けて、
「いろいろな場所に力を分散させてしまうよりも、一か所に集中させた方が良いものができる、という感じがいたしますわ。それに、ええと、いろいろな場所にあったら、どこに行くか迷ってしまうのではないかしら？」
「ううむ、なるほど……私もあまり帝都を離れられぬ身。自分がまだ見れていない記念館があるというのは、それはそれで歯がゆいものかもしれぬ。ここはミーアの言うことが正しそうだ」
渋々と頷く父、マティアスにミーアは満足げに頷いて、それから、ワグルのほうを見る。

「わかりました。それなら、祖父ちゃんのほうから、ベルマン子爵に進言させていただきます。ギルデン辺土伯のお申し出は断り、なにか代わりのものを提案するように、と」
「ええ。お願いいたしますわ」
代わりのものがなにになるのか……少々不安は残れども、とりあえず、安堵のため息をこぼすミーアである。
――う、ううむ……この後が本命のミーア学園。いよいよですわね。ちょっと予定外に精神力をすり減らしてしまいましたけれど……なんとか回復しなければ……。
「ミーア焼きー、ミーア焼きいかがですか？」
ふとそんな声が聞こえてきて、ミーアは視線を巡らせる。っと、すぐ近くの露店で、新月地区名物の「ミーア焼き」が売っていた。
その焼き菓子のあまぁい、あまぁい味は、ミーアの好むところである。
「ふむ、ケーキづけに……いえ、景気づけに、あれを食べながら行くことにしましょうか……。アンヌ、申し訳ありませんけれど、わたくしにミーア焼きを三つ……、それに、子どもたちにも買って来ていただけるかしら？」
「はい、かしこまりました」
姿勢よく返事をするアンヌと、それに続く、リンシャ、ニーナのメイド隊。それを見送りつつも、ミーアは、ふと考える――なにをだろうか？　それはもちろん……、
――しかし、ミーア焼きは頭のほうにたっぷりクリームが詰まっているのですけど、頭から齧るのは、なんかちょっと複雑な気持ちがするのですわよね。かといって、頭だけ残すのも、少し縁起が悪いし……。食べ方がとても難しいですわ。
ちょっぴりしょーもないことを……であった。実にミーアなのであった。
やがて、アンヌが買ってきたミーア焼きは一人一つずつだった。例外なく、ミーアもそうだ。

「あら……？　わたくしの分は三つと……」
「はい。ですが、その……聖ミーア学園の側でもミーアさまをお出迎えするために宴会の準備をしているとのことでしたので。その前に、お腹が満ちてしまってはいけないと思いまして」
「まぁ、そうなんですのね。確かに、せっかく用意してくださったお料理を食べられないというのは大問題。そういうことなら、まぁ……」
と言いつつ、ちょっぴーり肩を落とすミーア。そんな主にアンヌは小さく首を振ってから……。
「もう、仕方ありませんね。ミーアさま。一つだけですよ」
追加で、お替り一個を手渡した。
「まぁ！　さすがはアンヌですわ！」
パァアッと顔を輝かせるミーア。

それは、ＦＮＹミーア……ランドでの平和な一幕であった。

第三十八話　くもるくもるくもる、もる、べる

皇女ミーア記念館を無難に乗り切ったと思っていたミーアであったが、実のところ一つだけ、重大な見落としをしていた。

ミーアは子どもたち全員が馬耳カチューシャをつけて、素直に喜んでいるものだと思ってしまったのだ。

完璧に、忘れていたのだ。ミニクソメガネこと、賢いローロのことを……。

「すごいところだった……」

彼は圧倒されていた。ミーア記念館の素晴らしさに。

ここは、記念館という名前から想像できるような、退屈な記録が展示されているだけの場所ではなかった。自分たちのような子どもでもわかるように、楽しめるように配慮された施設だった。

楽しみながら、ミーアの功績を学べる、創意工夫の詰まった素晴らしい施設だったのだ。

絵画も、彫刻も、とてつもない熱量だった。大恩ある皇女ミーアを慕い、なんとかして忠義を返さんとする姿勢に、ローロは感銘を受けた。と同時に歯がゆさも感じていた。

自分たちも、あのワグルという先輩と同じなのに……と。

ミーアの働きかけで、学ぶ機会を与えられた者なのに、と。

「あなたたちは、ミーア学園の生徒のようにならなくても良いですわ」

ミーアからそう言われた時、ローロの胸にあったのは悔しさだった。

だけど、今は少し安堵してしまっている。だって、あんなこととてもできない。だから、真似をしなくてもいいという言葉を思い出し、安堵した。してしまった。

それが心の底から悔しかった。

「どうしたんだよ、ローロ、そんな難しい顔して」
ふと見れば、カロンが不思議そうに首を傾げていた。のんきな顔で馬の耳をつけて……なんだか、なんだか、とても楽しそうだ。
「カロン、楽しんでるみたいだね」
「そりゃそうだ。こんなところ見たことねぇからさ。すげえよな、ミーア姫殿下って」
「そう、だね……」
ローロは無力感に打ちのめされた。
自分は、決して頭が悪くない。勉強はできる。カロンやその他のメンバーとは違うんだ、と、そう思っていた。
だから、今は無理でも、きっと将来は……、とそう思っていた。
国を救い、人々を救う、寒さに強い小麦ミーア二号。そこまでの手柄は立てられないだろうけど、それでも……と思っていた。
そんな彼の想いを、あの彫刻は粉々に打ち砕いた。
ミーア学園に通う生徒は、きっと、誰も才能に溢れる生徒たちなのだろう。自分とは違う。
――ああ、僕も結局は、カロンたちと同じだ。いや、素直に楽しめない分、僕のほうが、よほどダメなやつじゃないか。
アイデア溢れるあの彫刻が、ローロを追い詰めていた。すでに、在学中に結果を示しつつあるミーア学園の生徒たちに、ローロは追い詰められているのだ。
「僕も……僕も頑張らないといけないのに……」
ギュッと、小さな拳を握りしめるローロ。そんな少年の葛藤を陰から見つめている人物がいた！
「やはり、焦りを感じる者は、いるだろうな……」
眉をひそめつつ、ユバータ司教はつぶやいた。
概ね、特別初等部の子どもたちはほとんどが、先ほどの記念館を楽しんでいたようだが、すべての子どもがおなじではない。彼のように焦る子はいるだろうし、その焦り、傷つき方もユバータ司教に

は容易に想像ができた。
記念館のほうを振り返り、つぶやく。
「ずいぶんと民から慕われている……さすがは帝国の叡智といえる。この記念館は、その表れだろう。森の部族からも慕われている。その人望は、あの発言録を見れば、頷けるというもの……だが」
それゆえに……特別初等部の子どもたちにとっては、厳しい現実となった。
「あの案内をしてくれた少年、ワグルと言っただろうか……。彼のあの力作を見れば、不安を覚えるのも、よくわかる」
なにしろ、自分たちと同じ立場の者が立派な仕事をしているのだ。焦るなというのが無理な話だ。
「本来であれば、司教たる私が、フォローすべきなのかもしれないが……」
ユバータ司教の脳裏に過るのは、先ほど記念館で見たミーアの言行録だった。
「ミーア姫殿下のお言葉の中に、特別初等部の子どもたちにかけた言葉があった。行いではなく、その存在を愛すると……そうメッセージを発せられていたはずだ」
それは、ユバータ司教の考えに一致する。孤児たちは、その能力の有無にかかわらず助けるべき存在だ。
「であれば……きっと彼らを放置はすまい。なにか、手を打つはずだ……。ミーア姫殿下ならば、きっと、間違いなく……」
その確信があったゆえに、ユバータ司教は、ここは観察に徹することにする。
帝国の叡智の手腕を見極めるために……。ちょっぴり、ワクワクと、その手腕を楽しみにしつつも。
眼鏡の位置をクイッと上げてから、彼は鋭い瞳で子どもたちを見つめていた。
そんな、特別初等部の子どもたち、の様子を見ていたユバータ司

教……の様子を見ていたレアは思った。
――ユバータ司教のあの目……すごい、ミーア姫殿下、これを見越していたんだ……。
生真面目な顔で、馬耳カチューシャを外すことすら忘れて……レアは思い出していた。
昨夜、ミーアが悩んでいたことが、まさしく的を射ていたことを……。
確かに、これは配慮が必要なことだった。聖ミーア学園学生を鼓舞するだけでは、特別初等部の子どもたちが傷つくことになる。
――それを見たからと言って、ユバータ司教の心境はそこまで悪くはならないかもしれないけど……でも、用心に越したことはない。
それから、レアは改めて自らの役割の重さを思う。
――セントノエルの生徒会長として、彼らにかけて上げるべき言葉……。焦らなくってもいいって、とりあえず、安心させてあげないと……。ローロ君にも……。
っと、そこで……。
「あれ……あのローロ君って……もしかして、レムノ王国宰相府の重鎮……」
「え……？」
振り返った先、馬耳をぴょこぴょこ揺らしながら、ベルが歩いてきた。
レアの顔を見たベルは、んー？　と考えてから、ハッとした顔をして……。
「あ、ええと、そう！　きっとセントノエルを卒業したら、レムノ王国に帰って、宰相府の重鎮になるぐらい、出世するんじゃないかなって……」
「宰相府の重鎮、ですか……。ふふふ、ベル先輩、意外と盛りますね」
「そうですね。でも、彼ならきっと、そのぐらいは頑張ってくれると思いますよ」

ベルは、なぜだろう、やけに確信に満ちた顔で、そんなことを言うのであった。

第三十九話　小麦畑で微笑んで

皇女の町「ＦｏｒｅｓｔＮｅｗＹａｒｄ　ミーアランド」からさらに森に寄った場所に、聖ミーア学園があった。町からは少し離れており、その間には広大な畑が広がっていた。

そここそが、寒さに強い小麦ミーアシリーズを生み出した実験用の畑だった。

なにもない土地を耕し、多少の土壌改良を施せば畑として機能する。それこそが、肥沃なる三日月地帯の強みだ。ルールー族やベルマン子爵領の開拓民の協力もあって、見渡す限りの畑には、見渡すばかりに小麦が、穏やかに揺れていた。

「……あら？　そういえば、小麦はもう少し早い時期に刈り取っているのではなかったかしら？」

前時間軸の革命期……。早く小麦が実って、食糧事情が改善しないかしら……と指折り待っていたミーアは知っている。

小麦とは、初夏に刈り取り、秋に蒔くものなのだ。が……。

「そのお話は、説明するのに適任の者がいますから」

ワグルのその言葉に、はて？　と首を傾げたところで、前方から歩いてくる少年の姿があった。優しく、大人しそうなその顔は、見覚えのあるもので……。

「ああ、セロくん。ご機嫌よう」

ニッコリ笑顔を浮かべて、ちょこん、とスカートを持ち上げるミーア。切り札たる新種の小麦を発見した功労者に、最大限の敬意を払っておく。

「はい、ご機嫌麗しゅうございます。ミーア姫殿下！」

ぺこっと元気よく頭を下げるセロ。そして、そのすぐ後ろには、

「アーシャ姫殿下もご機嫌よう。ミーア学園での良きお働きに心からの感謝を」

ミーアの言葉を受けて、アーシャ・タフリーフ・ペルージャンは、ビックリした顔をしてから、穏やかな笑みを浮かべた。
「いえ、こちらこそ、最善の働きの場をお与えいただき、心から感謝いたします。それに、妹、ラーニャもいつもお世話になっています」
などと、一通りの挨拶を終えた後で、
「それで、今、小麦がある理由ですけど、実は種蒔きの時期をずらしました」
「時期をズラした？」
セロの言葉に、きょとりん、と小首を傾げるミーア。セロの言葉を継いで、アーシャが口を開く。
「通常、帝国では、秋口に小麦を蒔き、初夏にかけて収穫という周期で農作を行っていたかと存じます。我がペルージャンでも、それは同じでした。しかし、冬の間に死んでしまう小麦が多かった……」
アーシャは、難しい顔で続ける。
「だから、種蒔きの時期をズラして、春から秋にかけてにしてはどうか、と思いまして……」
「なるほど。つまり、秋口に寒さに強い小麦を蒔き、初夏に刈り取る。その後で、今までの小麦を蒔いて、秋に刈り取る、と、そんなことをやっているということかしら？」
「まだ、そこまでは。今は、この周りの畑だけで実験している段階です。上手くいかなければ、小麦が無駄になってしまいますから。ただ、もうしばらく、寒さがこの気候が続くのであれば、農作のやり方を考える必要があるのではないか、と」
「なるほど、確かにその通りですわ」
ミーアは深々と頷く。
実際のところ、ミーアは知らない。自分が処刑された後の世界のこと。
ミーアが断頭台に送られる頃には、帝都の食料事情は多少は改善していた。けれど、それが気候の改善か、寒さに強い小麦によるも

のなのか、あるいは、サンクランドなどの他国から流れ込んだ小麦によるものなのか……。

――まぁ、ベルに聞いた感じでは、ほどなく気候は元には戻るような感じでしたけど、いろいろと試しておくことは必要かもしれませんわ。ベルの知らない、その先に、また寒冷期が訪れるかもしれませんし、常に備えは必要ですわ。ミーア二号の良い調理法が開発されたとはいえ、以前の小麦も時期をずらせば実るというのであれば、それに越したことはないですし……。

満月団子は好きだが、今までのパリッパリ、サクッサクのパンも捨て難いミーアなのである。

うむうむ、っと納得の頷きを見せてから、ミーアは改めて小麦畑に目をやって……。

「あら……？　ところで、一部に色の違う小麦が混じってないかしら？」

不意に気付く。小麦畑の中にチラホラと見える、少しばかり異なる色合い。周りのものより幾分か色味の深いそれらは、なにやら、不自然なラインを描いているように見える。

「さすがはミーアさま。よくお気づきになられましたね」

すると、セロが嬉しそうに声を弾ませる。それから、ある物を指さしながらニッコリ笑みを浮かべた。

「あちらに登ってみると、その理由がわかると思いますよ」

彼が指し示した先、そびえ立つのは、やぐらだった。

……ミーア、若干のいやぁな予感を覚えつつも、渋々ながら、そこに登ることになった。のだが……。

「こっ……これはっ！」

畑のほうを改めて見下ろしたミーアは驚愕する。

「コンパニオンプランツと呼ばれるやり方で、小望月（こもちづき）パンプキンと小麦を一緒に育てると育ちが良いという話がありまして……」

「なっ、なるほど……。さすがはペルージャン農業国。いろいろな方法がございますのね」

アーシャの説明に、一応は納得の返事を返すミーアであったが……問題は、そこではない。
「ですけれど……その、アレは、なんというか、人の顔のように見えますけれど……」
ミーアの視線の先、畑に揺れるのは、巨大な人の顔の形……。否、人というか、アレは、どこからどう見ても……。
「はい。せっかくですからミーアさまのお顔の形に植えてみようと思いまして……」
その声に反応するかのように、小麦畑の上を風が吹き抜ける。それに合わせて、ニッコニコと上機嫌な笑みを浮かべたミーアの絵が、綺麗に揺れていた。
……なかなかのクオリティだった！　芸術点がとても高かった！
「あ……ああ、そ、そうなんですのね……」
ミーアの口からこぼれ落ちたのは、いささか諦めの混じったため息だった。
いや、まぁ、別に畑で自分の顔を描いたとしても、良いのだが……。
別に、きちんと小麦ができているのだから、問題はないのだが……。
別に、収穫してしまえば、消えてしまうものだから良いのだがっ！！！
――とっ、とりあえず、みなをこの上に連れてくるのはやめたほうが……。
と思っているそばから、皇帝マティアスを筆頭に、みなが興味津々、こちらに視線を向けているのを感じる。それに、セロたちはあくまでも善意でこれをやってくれている。ミーアが喜ぶと思っていて、これをやってくれている。
そう、ミーアを出迎えるためにこれを……。
「んっ……？」
っと、不意に、ミーアはそこで気が付いた。

――あら？　わたくしが来ると決まったのはごく最近のことですけど……この色違いの畑を作るのって、もっと前からやらないといけないのではないかしら？

それの意味するところは、すなわち、あれらの小麦絵がミーアを歓迎するために作られたのではない……ということである。ミーアが来ても来なくても……あれは、この畑の中でのんびーりと揺れていた、という事実である！

「こういう図形を描くのが上手い生徒が何人かいて、彼らの協力で植えたんです」

嬉しそうに話してくれるセロの、その溢れんばかりの忠誠心に圧倒されつつ、ミーアは……、

「そっ、そう、なんですのね。うふふ、これは、きっと子どもたちも見たら喜びますわ。うん……」

なぁんて、微妙に引きつった笑みを浮かべるのだった。

第四十話　分散と拡散と……

「よくぞいらっしゃいました。皇帝陛下」
聖ミーア学園の前……七色に輝くミーア像の周りに講師一同が集まり、ミーアたちを出迎えた。
その先頭に立つのは、学園の長、ガルヴであった。
基本的に貴族や帝室が嫌いな彼ではあるが、それはそれ。こうした場ではきちんと空気を読んで、皇帝マティアスに頭を下げていた。
そんなガルヴの手をがっしりと握って、皇帝マティアスが答える。
「働き、誠に大義である。ミーアから、貴公のことは聞いている。よくぞ、我が娘の理想のために尽力してくれた」
その声には、普段以上の熱量があった。ミーア記念館や先ほどの畑アートにいたく感動しているマティアスなのである。心が……大いに、震えたのである！
「これからも、ぜひ、我が娘ミーアのために、力を尽くしてもらいたい」
「はっ！　枯れかけた身なれど、ミーア姫殿下の描かれる未来のため、粉骨砕身の覚悟で当たらせていただきます」
ガルヴは、別に皇帝に忠誠を誓っているわけではない。帝国に忠誠を誓っているわけでもない。しかし、ミーアの思い描く未来には深い興味がある。忠誠だって誓えるほどに。
ゆえに、皇帝マティアスとガルヴの想いは、重なっていた！
ゆえに！　二人の握手は、まるで長年の友ででもあるかのように、とてもとってーも固かった！！
「ガルヴ殿、わたくしからもお礼を申し上げたいですわ。学園の生徒たちの忠誠、嬉しく思いますわ」
父に続き、ミーアが口を開いた。本当はあまり触れたくはなかったが……触れざるを得なかった。

「ミーアランドの記念館も……その、なかなか見ごたえがございましたわ。これも学長のガルヴ殿の薫陶によるものと思いますわ。さすがは、ルードヴィッヒのお師匠さまですわね」
とりあえず、ヨイショ！　ヨイショ！　イヨーッコイショ！！
ガルヴを大いに持ち上げるミーアである。そのうえで……。
「ですが、なんというか……そう、枠の中に、彼らを押し込めるようなことは、したくないですわね……」
ふんわり、と苦言をにじませる。
「それは、どういう……？」
意味が分からない、と首を傾げるガルヴ。
さて、なんと言ったものか……。ミーア、刹那の思考。その後、目標を定める。
すべきことは被害の分散だ。すなわち……。
「簡単なことですわ。ワグルくんのあの木材加工の腕前や、畑に絵を描く、あの図形的な知識も……、狭い限定を懸けていては駄目ですわ。もっとこう、広い世界に目を向けていただきたいんですの！」
あんなに素晴らしい技術があるのなら、自分を描くためだけに使ってたら駄目だよ？　もっと世界の偉人を讃えるために、使ったほうが良いよね？
っと言いたいミーアである。
ラフィーナとかシオンとか、サンクランドのエイブラム王とか、将来のレアとか、彫刻の題材になりそうな人物は世界中にいるわけで……。そのために力を割ければミーアの彫像を作る力を、削げるのではないかと思うミーアである。
――そう、わたくしに集中すべきではありませんわ。もっと分散！　分散ですわ！
ミーアは力説する！　記念館で言ったことなど忘れて……全力で力説する！
「種を蒔き、収穫した小麦をすべて一人で食べてしまうのは良いことではありませんわ。なぜなら刈り取った種を再び蒔けば、より多

くの収穫を得られるのですから」
ミーアに恩を返すのではない。自分に直接、恩を返す必要はない！　ミーアは拳をグッと握りしめて続ける。
「ゆえに……学生たちは、わたくしのために、わたくしを喜ばせるために力を尽くすべきではない。いいえ、彼らが帝国の多くの民のため、世界のために力を使うことこそが、わたくしの喜びである、と……。ぜひ、そのように教えていただきたいですわ。世界に広がっていくことこそが、わたくしの喜びですわ！」
心の底から、分散を訴えかけるミーアである。
それを聞き、ガルヴは、ぶるるっと身を震わせて……。
「それは、つまり……世界に、聖ミーア学園の功績を世界に広めよ、と。そういうことでしょうか？」
「え？　ええ、まあ、そんな感じですわ」
頷いたミーアは気付いていなかった。
ミーアの訴えたい分散が、ガルヴの中では拡散に変質していることに。
しかも、ミーアは、これだ、と思ってしまった。
――ミーア学園の学生にかけるべき言葉はこれですわね。帝国内で力を振るってもらいたいのはもちろんですけれど、より広い世界に目を向けて……。特に芸術方面の労力は、分散させる……そのような方向でお話しすれば、激励しつつ、標的を変えられるはずですわ！
「おお……ミーアさま……そのお言葉を、ぜひとも、学園の学生たちに……」
「無論ですわ。そのつもりで来ておりますわ」
そう答えるミーアに、ガルヴ学長は、深々と頭を下げた。
「それは、心より感謝いたします。きっと生徒たちも励みになるでしょう」
「ふふ、そうなればよろしいのですけれど……。ああ、それと、今回は聖ミーア学園の見学も予定しておりますの。ヴェールガ公国の

お客さまもいらっしゃいますし」
　そう言って、ミーアは振り返る。視線の先にいたのは、ユバータ司教とリオネル、さらに、馬耳カチューシャを外し忘れたレアだった……否、忘れた……のだろうか？　もしかしたら、気に入ってしまったのかもしれないが……まぁ、それはともかく。
「ようこそ、おいでくださいました。最古にして最大の図書館の管理人、ユバータ司教。ご高名はかねがね……」
「こちらこそ、賢者ガルヴァノス殿。あなたの書かれた、いくつかの神学的提題、中央正教会でも大いに議論になりました」
「なに……。どのような分野であれ、理性と論理を下敷きに、議論をすることは可能でしょう」
「なるほど、確かに。それは真理ですね」
　そうして、知者二人は、静かに笑い合うのだった。

第四十一話　増殖する、聖ミーア学園

さて、挨拶もそこそこに、ミーアは学園の校庭へと向かった。その途中、ふと、学園校舎のほうに目を向けて……。

「報告には聞いておりましたけど、増えましたわね。しかも、あれは……」

建物は、メインとなる校舎の周りに、かなり数を増していた。しかも、なにやら、見たことのない、ちょっと変わった形状の建物だった。

セントノエルのように立派な建物ではない。帝都にある白月宮殿はおろか、一般的な貴族の邸宅ほどの大きさもない。

それは小さな建物だった。否、小さな建物群、といえばいいのだろうか。

それは平屋の、六角形の建物だった。六角形の建物をいくつかくっつけたようなものもあった。材質は木材だろうか……。そんなちょっと変わった建物が、あちらこちらに、ポコポコと建っていた。

「なにやら、変わった建て方をしてますわね」

「はい。これは異国の築城に範を得た作り方なのですが……曰く、木材を運ぶ前にすでに加工しておいて、現場では組み立てるだけで作るとか。それも、すべての建物を同じ形、同じ組み立て方にすれば手間を少なく建てられるということです。六角形なので、隙間なく増築していくこともでき、土地を無駄なく使えますし」

「ほほう、なるほど……。それはなかなか考えられておりますわね」

ミーア、思わず唸る。

確かに、聖ミーア学園は急場の学園だった。セロに植物学の研究を深めてもらい、新しい寒さに強い小麦を発見してもらうことこそが、その目的であった。

ゆえに、別に豪華な建物は必要ない。いずれ、聖ミーア学園が伝

統的な学校になっていくのであれば、建物もそれなりのものが必要になるかもしれないが……。
それよりなにより、ミーアは、その形状がちょっぴり気に入ってもいた。
六角形の建物はどことなく、キノコの傘を想像させる。上から見ると、きっとキノコの形の建物が並んでいるように見えるのではないだろうか？
そうなのだ、畑アートを通して、ミーアは見る角度を変えることの大切さを身に着けていたのだ！　未だ、成長速度に鈍りが見えないミーアなのである！
「ちなみに、現在の学生は……」
「三百名ほどです。どんどん数を増やしていきたいと思っているのですが……」
「なるほど。生徒数の増加に合わせて、建物の増築が追い付かないかもしれない。だからこそ、このような建て方でやっておりますのね。良いのではないかしら」
ミーアとしては、セロの研究さえ結果が出てくれれば、他のことは後でも構わないわけで……。最悪、今のところは、雨風が防げて、寒さも防げる建物があれば問題はないのだ。
「では、その三百人をやる気にさせればよろしいということですわね……ふむ……」
ミーア、そこで黙考。それからレアのほうを見る。ミーアの視線を受けたレアはキリッとした顔をして……それから、ふと何かを思い出した様子で、頭に手をやり……、それからちょっぴり恥ずかしげに、馬耳カチューシャを取った！
ここまで外し忘れていたらしい。意外とうっかりなところがあるレアである。まぁ、それはさておき……。
――本来であれば、わたくしが先に出てあげたほうがプレッシャーを感じずに済むのかもしれませんけれど……。
後にレアを話させた場合、フォローができないのが一つのネック

だった。
善意や好意が時に自らを窮地に立たせるのだということ、それを散々目の当たりにしてきたミーアである。
――レアさんだから、大丈夫だとは思いますけれど……でも、一抹の不安はございますわ。ならば、パライナ祭の説明がてら、先にしていただくのが、やはりよろしいのではないかしら……。
ミーアは、ふむ、と一つ頷いて、
「レアさん。できれば、先にお話ししていただきたいのですけど、よろしいかしら？」
「え……？」
驚きに目を見開くレアに代わって抗議の声を上げたのはリオネルだった。
「ミーアさま、さすがに、このような場所で妹からというのは……」
「兄さま、大丈夫……」
「え……？」
驚く兄に、レアは決意のこもった顔で頷いて、
「大丈夫だから。心配しないで。これは、セントノエルの生徒会長としての役割だから」
それから、ミーアのほうに顔を向ける。
「それに、もしかすると、ミーアさまは、私のことを鍛えようとされているんじゃないでしょうか？」
思わぬ指摘に、ミーア、目をパチクリ……。けれど、すぐに態勢を立て直し……。
「え……ええ、さすがレアさんですわ。とってもご慧眼ですわね。おほほ」
などと、ちょっぴーり口調がおかしなことになってしまうミーアであったが、レアは特に気付いた様子もなく……。
「わかりました。では、私のほうで先にパライナ祭の概要や、その狙いについてお話しさせていただきます！」
レアは、心持ち緊張した顔ながらも、しっかりと頷いてみせた。

ササッと眼鏡をかけたその……いささか気合が入り過ぎたような顔に、ミーアは一抹の不安を覚える。

――そこまで気合を入れなくとも良いのですけど……。ううむ、やはり少し心配ですわね……。これは、レアさんのお話を聞いて、しっかり何を話すのかを考えておく必要がございますわね。

第四十二話　赤い記憶

赤い……それは、とても赤い風景だった。
肌を焼く業火……天井は落ち、壁は崩れ、広かった廊下は今や、息苦しいほどに狭い通路になり果てていた。
崩れた足場の向こう側、屋敷の奥に取り残されたというのに、皇太后パトリシア・ルーナ・ティアムーンは、一切の表情を変えずに状況を眺めていた。静かで、穏やかな瞳には、焦りも混乱もなく……ただ、なにか、決意のような……静かな光が宿っているようだった。
「パトリシアさま！　こちらへ、お早く！」
足場の反対側……館の出口に近い側で、ヨハンナは声を限りに叫ぶ。
そのかたわら、ヨハンナに守られるようにして、皇妃アデライードが苦しげに息を切らしていた。元から体の弱い彼女には、この環境は厳しすぎた。舞い上がる炎からアデライードを守りつつ、ヨハンナは声を上げる。
「パトリシアさま、どうぞ、お早くっ！」
その声にパトリシアは常の無表情を崩した。浮かべたのは、困ったような笑みで……。
「ヨハンナ……どうか、アデラをお願い。我が子マティアスを、その娘を、……それにあの人……陛下を……ティアムーン帝国を、お願い」
それだけ言うと、パトリシアは毅然と踵を返した。向かう先は、炎に呑み込まれつつある館の中だ。
「パトリシアさま！　パトリシアさま！」
必死の呼びかけにも応えることなく……立ち止まることなく、皇太后パトリシアは燃え盛る館の中へと消えていった。

クラウジウス家の呪い、と呼ばれるものがある。
旧クラウジウス邸を焼失させた大火事、さらに、当主ハンネス・クラウジウスの失踪に続き、極めつけは現皇帝の母、皇太后パトリシアの焼死……。この家には、常に、不穏な噂が付きまとう。
そうして、いつしか人々は、その家名を口にすることもなくなっていき……。

「ひさしぶりに、嫌な夢を見たものじゃ……」
まどろみからの覚醒は、最悪の気分と共に訪れた。
不快げにつぶやき、ヨハンナ・エトワ・ブルームーンはゆっくりと身を起こす。
どうやら、椅子に座ったまま眠っていたらしい。
気持ちの良い午後のひと時を、過去の不快な記憶に邪魔されて、彼女は苛立たしげに息を吐く。
否……不快な記憶とばかり言えないのも、また、彼女の苛立ちを募らせることになる。なぜなら、それは、彼女の大切な人との最期の記憶で……同時に、大切な人と再会できる時でもあったから。
皇太后パトリシア、そして、親友アデライード……その二人の女性たちと過ごした時は、それほど長くはなかった。
けれど、ヨハンナにとってかけがえのない時間であったから……。
今でも思い出す。
初めて、パトリシアの前に出た日のこと。
異国から、政略結婚のため、星持ち公爵家に嫁ぐことになったヨハンナのことを、パトリシアはよく気遣ってくれた。
未だ大陸共通語が流暢に話せなかった時、パトリシアは片言ながら、ヨハンナの国の言葉で話しかけてきてくれた。
社交界に馴染めるように、まめに話しかけ、孤立しないようにしてくれた。
後に親友となるアデライードを交えた三人でのお茶会は、今でも

なお、良き思い出として、ヨハンナの中に残り続けている。
「……完全な感傷じゃな。されど、恩義は返さねばならぬ……」
っと、その時だった。
「失礼いたします。ヨハンナさま。少々、お聞きいただきたいことが……」
入ってきたのは、見覚えのある男。伝統あるグロワールリュンヌにて長く教鞭を振るっている男だった。
「ああ……お主か。どうかしたのかえ？」
「ははっ！　実は、ヴェールガ公国より、ユバータ司教が、この帝国にいらしているとのことをお聞きしまして……」
慇懃に頭を下げて言う男に、ヨハンナは首を傾げる。
「はて、聞かぬ名じゃが……。帝都ルナティアの聖堂付きの司教が交代でもしたのか？」
「いえ、そうではありませぬ。ユバータ司教はヴェールガ公国の知の中心、中央図書館の館長を務める司教でして……」
「ほう、ヴェールガ公国の学問の重鎮ということか……。して、その男がなにゆえに、我が帝国に来たと？」
「なんでもパライナ祭の……失礼ながら、ヨハンナさまはパライナ祭をご存知で……？」
「知らぬな。さしずめ、ヴェールガの祭りかえ？」
「はっ！　さまざまな技術、情報の交換を目的とした祭りで、非常に権威のある祭りとして知られています」
話を聞いたヨハンナは、つまらなそうにあくびをし、
「ふん、ヴェールガごとき小国の祭り程度……我がティアムーン帝国がなにを騒ぐことがあろう？」
吐き捨てるように言って、それから、辺りに視線をやる。
「誰ぞ、紅茶を持て」
その声に、廊下に控えていたメイドが動き出す気配がした。
「それで？　主の話は、妾の寝起きの茶を邪魔してでも、聞く価値のある話かえ？」

「ははは、さようでございますな。四大公爵家最大のブルームーン家、それも次期皇帝陛下のお母君たるあなたさまのお茶の時間を邪魔するほどのものではないかもしれませぬ。されど、パライナ祭は国をまたいだ祭り。各国の注目も集まるものです。そして、その祭りに、帝国の代表として、例の聖ミーア学園が関わることになる、ということは、ぜひお耳に入れておくべきかと考えますが……」

それを聞いた瞬間、ピクリ、とヨハンナの眉が動く。

「その話、偽りはあるまいな？」

一段低くなった声で問うヨハンナに、男はゆっくりと背筋を伸ばして……。

「無論です。我ら、グロワールリュンヌ校の講師陣は、みな、怒っております。我が校が、取るに足りぬ祭りであったとしても、その代表に選ばれぬことがあってよいものか、と」

やがて、用意された紅茶に優雅に口をつけてから……。

「なるほど、それは由々しき問題。確かに座して見守るわけにはいかぬな。まぁ、妾（ｏｒわらわ）のお茶の時間に匹敵するとは思わぬが……」

ティーカップの中に、そっと視線を落としてから、ヨハンナは目を細めるのだった。

第四十三話　お兄ちゃんの耳は馬の耳

校庭には、すでに生徒たちが集合していた。
先ほどミーアに随伴し、説明してくれたワグルとセロ、さらにセリアの姿もそこにはあった。また、サンクランドのエシャール王子もその列に加わっていた。
――ふむ、三百人とはいえ、兵士たちや怒ったヴァイサリアン族の方たちを前に語りかけるよりは、よほど気持ちが楽ですわね。
ふと、そこで、レアのほうに視線を移せば……レアは小さく何事かつぶやいていた。
「ディオン・アライアよりマシ……ディオン・アライアより……」
ミーアの教えてあげたおまじないを使っているらしい。どうやら、結構、緊張している様子だった。
「本日は、帝都より、皇帝マティアス陛下、並びにミーア皇女殿下が視察にいらっしゃっている。さらに、ヴェールガ公国より、ユバータ司教、ルシーナ司教のご令息、ご令嬢もいらっしゃっている。みな、くれぐれもご無礼のないように」
学長ガルヴの言葉の後、はじめに、皇帝マティアスが短く挨拶をし、続いてレアの出番がやって来た。
「レアさん、くれぐれもよろしくお願いいたしますわね」
ミーアの声を受けて、レアはギクシャクと振り返ってから……。
「少し……少しだけ、緊張、していますが……が、頑張ります」
なにやら、ものすごぅく不安になるような返事をされて、ミーアは眉をひそめる。一方で、リオネルお兄ちゃんはというと……。
「いざとなれば、僕が助けに行くから、心配するな」
と妹を励ましている。その頭には、未だに馬耳カチューシャがつけられていた。
「うん……ありがとう、兄さま。でも……それは、取ったほうが良

いかも」
　くすり、と……ちょっとだけ笑って、レアはリオネルの馬耳に手を伸ばした。ふよふよ、ふよふよ、と指先でそれをいじってから、レアは、うんっと小さく頷いて、眼鏡の位置をクイッと押し上げて……。踵を返した。
「それじゃあ、行ってきます」
　そんな妹の背中を見送りながら、リオネルはそっと馬耳カチューシャを取って……。
「ふぅ、やれやれ……大丈夫そうだな……」
　どうやら、妹を落ち着けるために、わざとつけていたらしい。気遣いができるいいお兄ちゃんだった！
「ふふ、リオネルさん、なかなか優しいですわね」
「レアは、好きなんですよ。こういうフワフワしたもの。昔から、不安な時には、よくぬいぐるみをいじってましたから」
「まぁ、そうなんですのね。ということは、このカチューシャをつけるのも意外と気に入っていたのかしら？」
　そう問えば、リオネルは苦笑いを浮かべて、
「どうでしょう……？　自分でつけるのはどうなのかわかりませんが……」
　さて、そんなことを話している内に、レアが演壇へと上がった。
　並ぶミーア学園の生徒たちに目をやり、それから、特別初等部の子どもたちにも目を向ける。
「初めまして、聖ミーア学園のみなさん。私は、レア・ボーカウ・ルシーナ。セントノエル学園の生徒会長です」
　涼やかなその声に、生徒たちが息を呑んだのがわかった。
「本当であれば、ラフィーナさまに来ていただければ一番良かったのでしょうけれど、私もヴェールガ公爵の血族、司教の娘です。力不足なのは百も承知ですが、今回は及ばずながらも代理をさせていただきます」
　その堂々とした物言いは、生徒たちのみならず、講師たちの注目

を集めるのに十分な風格があった。セントノエルの生徒会長という役職に、レアは、決して負けてはいなかった。
「やっぱり……セントノエルの生徒会長には……、ミーアさまの、後を継ぐのはレアが相応しかったと思います」
つぶやくように言ったリオネルの顔には、ほんの少しだけ悔しさのようなものが見えた。
「ふふふ、そうですわね。レアさんに、あなたと同じ気遣いができたかはわかりませんもの」
「え……？」
きょとん、と目を見開いたリオネルに、ミーアは笑った。
「レアさんが、あんなふうに落ち着いて話せるのは、あなたが落ち着けてあげたから。それは、お兄さんのあなたが、レアさんのことをよく見ていたからではないかしら？　もしも、あなたが不安な時があったとして、同じようにレアさんが落ち着けることができた、とは思いませんわ」
合理的で、とても頭の良いレアだが、反面、絶大な信頼を置いている兄や父が揺らいでいる時に、それを支えるのは、難しいのではないか、と思うミーアである。
「それに、あなたが生徒会長をすれば、レアさんと同じにはできないでしょうけれど、別のやり方で、きちんと対処したのではないかしら？　レアさんは効率的で、合理的なやり方が好きですけれど、必ずしもそれだけがやり方ではないと、わたくしは思いますわ」
っと、そんなミーアの言葉を聞きつけたのか、ひょこっと顔を出したベルが、
「そうですよ、リオネルくん。冒険だって同じです。正しいルートは一つじゃない。いいえ、未踏の地にそんなものなんかない。目的地に着きさえすれば、それが正解なんですから」
グッと拳を握りしめ、力説する！
「やっぱり、そういう考え方が冒険家にとって大切なことなんじゃないでしょうか？」

「ベル先輩……」
冒険家の大切な心得について説くベルに、ちょっぴーり感動した様子のリオネル……であったが、
「いえ、僕はそもそも冒険家には……」
などと、控えめにツッコミを入れるのだった。

第四十四話　ミーア姫、危うくうっかり幻惑されかける

「さて、この度、聖ミーア学園に見学に来させていただいたのは、ある祭りのためです。古の時代より、ヴェールガ公国で行われていた、パライナ祭というお祭りです」

そうして、レアは説明を始める。

「各国の持っている技術や情報を共有し、人類すべてが手を携えて、前に進んでいく、というのが、もともとの祭りの意図するところでした。今回、私たちは……」

っと、とりあえず、事前に生徒会にて打ち合わせたことを下敷きに、パライナ祭の紹介を続ける。

「そして、私たちの期待は完全に正しく報いられました。Ｆｏｒｅｓｔ　Ｎｅｗ　Ｙａｒｄミーアランドしかり。あの記念館しかり、です。あのような素晴らしい芸術作品を貴族たちに突きつければ、きっと、この聖ミーア学園と同じような学校を自国にも造りたくなることでしょう。パライナ祭が開催された折には、ぜひご参加いただき、その力を存分に振るっていただきたく思います」

きちんと、聖ミーア学園の生徒たちのやる気を焚きつけにいく。

――まぁ……正しいことではありますけれど……。あの彫刻を貴族たちに突きつけるのは、いかがなものかしら……？

それは、割と悪夢のような感じがしてしまうミーアである。

ミーアのイメージはあくまでも分散だ。それは、さながらそびえ立つケーキのようなものだ。

一人でケーキを食べるのは、良くない。アンヌに怒られてしまうし、濃厚なクリームを食べ過ぎれば、胸やけだってするだろう。だから、分散するのだ。そうすれば、一人一人が食べる分は減るので、完食するのも容易になる。

――そう、わたくしのように小食なものは、巨大なケーキを一人

で食べるなどもってのほか。こういうものは、みなさんと分け合ってこそ、ですわ！

あのように、迫力ある彫刻や、畑アートのモデルになる栄誉を自分一人で独占していていいものだろうか！？　いや、よくない！　よくないっ！！

ここは、ぜひとも、ミーアの誇るべき友人であるラフィーナや、尊敬に値する、後の天秤王シオンとも、この栄誉を分かち合いたいと、切に願うミーアである。

――そのためには、やはり、世界に目を向けるようにさせたいですわね。今、すでに完成している成果を披露するだけでなく、その力をもっと広い世界に散らしていく感じで。ふむ、ということは……。

ミーアが頭の中で言うべきことを考えている間に、レアは特別初等部のメンバーへと目を向けた。

「私たちと一緒に来た子どもたちは、セントノエル学園で学んでいる子たちです。彼らはもともと孤児でした。中央正教会は、各国に孤児院を作り、このような子どもたちを保護しています。けれど……我々では力不足なのです。王侯貴族たちを、各国を動かすために、パライナ祭を成功させなければなりません」

高らかにそう言ってから、レアは初等部の子たちに声をかける。

「そして、みんな……。あまり緊張しないようにね」

優しく、柔らかな微笑みを浮かべて、レアは続ける。

「ミーアランドで見て、その成果を思えば、焦ってしまうかもしれないけれど……どうか、忘れないで。みんなは、セントノエルの大切な生徒だから……」

一度、言葉を切って、そっと目を閉じてから、レアは続ける。

「今は成果が必要な時じゃない。今すぐにミーア学園の生徒の皆さんと同じことができる必要はない。今は学ぶべき時だから……。そして、学んだことを生かしていくのは、まだ先のことだから……だから、くれぐれも焦らないで。聖ミーア学園を見て、この学園で生

徒のみなさんが成したことを、きちんと覚えて、それで帰ればいい。それは、きっとみんなにとって、とても大きな経験になるから」

そんなレアの言葉をじっくりと聞いていたミーアは、ふぅむ、っと唸る。

――レアさんのフォロー、特別初等部の子たちへの配慮が見られますわね。

ミーア学園の生徒たちのように振る舞わなくても良い……それは、ミーアが強調したいところではある。では、あるのだが……。

――しかし、聖ミーア学園の学生たちに気を使ってか、少し温い感じがしますわ。

スゥっと目を細めて、ミーアは思う。

そうなのだ。実際、レアに課されたミッションはとても難しい。

純粋な子どもたちが、過激なミーア信者に染められぬためとはいえ「あんなの真似したら駄目だよ？」と、馬鹿正直に言うわけにもいかず。

折衷案として、今、ああいうふうにできなくてもいいよ？　むしろ、ああいうの真似しなくてもいいよ？　という方向で論理を組み立てているようだが……。

――今はそう振る舞わなくても良い、ということは、裏を返せばいずれは、そう振る舞うのが望ましい、とも受け取れますし……。不足がございますわ。

できれば、ミーア学園の子どもたちとは違う方向性を模索して欲しい、ぐらいには言ってもらいたいミーアである。なんなら、気遣いも一切なく、アレを真似しちゃダメ、絶対！　と言ってもいいぐらいだと思うミーアである。

――もっとしっかり言っておきませんと、特別初等部のみなさんが染められてしまって、今度はセントノエルにわたくしの彫刻が湧き出るかもしれない。あの森のキノコを使って、紅白キノコアートができてしまうかも……。いや……。

っと、そこで、ミーアはふと思う。思って、しまう。

いや、それは、それでいいかもしれない……と。
キノコで自らの顔を描かれるのは、割と魅力的なことかも……？
と、一瞬、キノコ女帝的な発想に陥りかけ、ミーア、慌てて首を振る。
――いや、いかにキノコでも、駄目ですわ。セントノエルにヤバイ発想を持ち帰られてしまうことは絶対的に避けるべきですわ。でもキノコアートは、食べてしまえば残りませんし……いえ、やはりダメですわ。
キノコアートに幻惑されそうになったミーアは、パンパンっと頬を叩きつつ思う。
――となれば、きちんと事前に誘導しておく必要がございますわ。決して、決して、真似をする必要はない、と。
そうして、ミーアは腕組みしつつ、レアの言葉が終わるのを待った。

第四十五話　なんのために頑張るのか……？

やがて、レアの話が終わった。
自分たちに求められている役割……。パライナ祭を通して、このミーア学園の教育システムを各国に伝えること……。その重みを噛みしめた様子の生徒たちを前に、満を持して、ミーアが演壇に上がった。
「レアさん、どうもありがとう。適切な説明に感謝いたしますわ」
レアに小さく微笑みかけてから、ミーアは、改めて居並ぶミーアエリート候補生たちに目を向け、現役ミーアエリートの講師一同に目を向けてから……。
「ご機嫌よう、我が誇るべき学び舎のみなさん。今日、このようにして、みなさんにお声がけできますことを、わたくしは心から神に感謝しておりますわ」
謙遜に、神への感謝を表明することで、まず、ユバータ司教へ、自らの基本姿勢をアピール。決して、決して！　ヴェールガと対立するつもりはありませんよ？　中央正教会の神さまと並び立とうとするなど、本気で思ってませんよ！　と強調する。
自らを、過去に連れ戻したかもしれないような存在と肩を並べようとするなど、もってのほかである。そんな恐ろしいこと、考えたこともない！
ぶるる、っと小さく背筋を振るわせてから、ミーアは話を戻す。
「今しがた、レアさんからお話があったように、わたくしたちは、大きなことをしようとしておりますの。国々の貴族の価値観を変える……と言ってしまうと、少しおこがましいですけれど……少なくとも一石を投じ、できればその価値観を揺らしたいと思っておりますの」
ここでいったん言葉を切って、ミーアは考える。

価値観を物理的に揺らすような、歩く黄金ミーア像などと言うものが出てきたりしないように、きちんと言っておく必要があるだろう。ミーア学園の生徒たちには頑張ってもらおうと思うが、それは、はたしてなんのために頑張るのか？　そのことをはっきりとさせておく必要があるだろう。

ミーアは小さく咳払いしてから続ける。

「あなたたちにはそれができる、とわたくしは考えていますわ。貴族の価値観を揺らし……そして、あなたたちは、あなたたち自身の手で自分たちを……自分たちのような子どもたちを助けることができるのですわ」

決して、皇女ミーアのために頑張るのではないのだぞ！　そこんとこ間違えるなよ！！　と強調したいミーアである。

皇女の彫刻とか、畑アートとか、そういうのにうつつを抜かしてる場合じゃないぞ！　と強調したいミーアなのである！

「あなたたちの頑張りが、他国の弱き者たちを救う、そのための手助けとなりますわ。上に立つ領主たちに、自主的に正しいことをさせる、その一助となり得るのですわ」

別に他国のこととか知ったこっちゃないミーアであるが、そこはそれ。セントノエルの学び舎で、共に時間を過ごした誰かが、遠き異国で断頭台にかけられた、などと聞けば、あまり気持ちよくはないわけで……その飛び火が自分の国にまでやってくる危険があるとなれば、なおのこと、避けたいわけで。

ゆえに、他国の者たちに、自分から進んで、断頭台を回避するような動きをしてもらいたいのだ。それこそが、ひいては、大陸の安定化に繋がり、自身へのケーキ供給量への安定化に繋がるのだと、信じて疑わぬミーアなのである。

さらに、さらに、ミーアは奮起を促すべく言葉を重ねる。

「あなたたちは、助ける術を与えられ、示された。あなたたちは、助けることができる。ゆえに、選ばなければなりませんわ。助けるのか、助けないのか。力を尽くすのか、惰眠を貪るのか……」

グッと拳を握りしめ、ミーアは続ける。
「家畜ならば、餌が出てくるのを待っていればよいでしょう。されど、あなたたちは人間で、わたくしの民ですわ。王は、民が安んじて生活するために力を尽くさなければならない。そして、民は生活しなければならない。働いて、生を営んでいかなければならない」
サボるなよ。力を尽くせよ！　と切に訴えたいミーアである。
「あなたたちは、この学園で学んだ。人として生きていく術は、すでに学んでいる。それを用いれば、この帝国に縛られることさえなく、広い世界に目を向け、出て行き……力を発揮できる。だからこそ責任がありますわ。後に続く者たちのために、学び与えられた力を尽くす責任が」
その責任を自覚すれば、きっと、ミーア畑アートとかに力を入れてる場合ではないとわかってもらえるはず……と確信しているミーアなのである。
そうして、ミーアは深々と頭を下げて……。
「ぜひ、祭りの成功に、協力をお願いいたしますわ」
それを聞き、ミーア学園の生徒たちの顔にやる気がみなぎる。
なぜなら、それは、彼らにとって過去の自分たちを救うがごときことだったから。
ただ救われるだけの者であった自分が、この学園で学び、育ち、今度は誰かを救う者となる、そんな機会だったから……。
自然、彼らのモチベーションは上がっていく。
「また、これは、発見された寒さに強い小麦を、より広く知らしめるための場でもありますわ。この小麦により、命を救われる者は、きっと少なくはないでしょう」
他ならぬ、ミーア自身が、小麦によって断頭台から救われた身。経験者の言葉には、必然的に、熱量がこもっていた。
「さて……」
っと、そこで、言葉を切って、ミーアは特別初等部の子どもたちに目を向けた。

ひとりひとりに目を向けて、それから、先ほどのレアの言葉を頭の中で反芻する。
――ここは、やはりわたくしからも一言言っておく必要がございますわね。念には念を押しておかなければ。
そう……ミーア学園の生徒たちの真似をしないように、と……言うだけでは不足だ。それは、なにかをするな、と禁じるだけで、もしも彼らにやる気があるのであれば、その流れを阻害することになる。
できれば、ベッドで寝ていたいミーアのような人たちばかりではない。やる気に満ち満ちたミーア学園の生徒たちのような人というのは、確かにいるわけで……そのやる気の方向性をつけてやる必要があるのだ。
――この子たちがミーア学園の生徒たちに触発されて、そのせいでヴェールガとの仲がこじれるなど、願い下げですわ。
自分のとこの、セントノエルで面倒を見ている子どもたちが、帝国から帰ってきてすぐに、ミーア信奉者に変わっていました！　などということになってしまえば、保守的な強硬派の司教でなくても、一言文句を言いたくもなるだろう。
――概ねレアさんが言ってくれましたし、わたくしからは補足ぐらいで良いはず。
うんっと一つ咳払いしてから、ミーアは続ける。

第四十六話　特別なあなたへ

「それと……先ほどもレアさんからもお聞きかと思いますけど、セントノエルから子どもたちが見学に来ていますわ。この子たちは、セントノエルの学生とはいえ、孤児院の出身。みなさんと同じ立場ですわ」

ミーアはそっと視線を向けて、

「みなさん、先輩として優しく教えてあげるんですのよ」

まず、ミーア学園の生徒たちに言いおく。

「そして、特別初等部のみなさん……あなたたちには、ミーア学園の生徒たちをしっかりと見て……そのうえで、ぜひ、違ったものを目指していただきたいですわ」

違ったものを……のところに、若干の力がこもる。そんなミーアの言葉を聞き、眼鏡の少年、ローロがギリッと悔しげに歯を噛みしめる。

ミーアには、その気持ちはよくわかった。

――ああ、やはり……そうですわよね。彼も、ミーア学園の生徒の真似をすればいいと思っていたのですわね。うんうん、その気持ちはよくわかりますわ。そのほうが楽……いえ、合理的ですし。あのミニクソ眼鏡少年ならば、効率化のために、きっとそう考えるはずですわ。

効率化できる（サボれる）ところは、効率化する（サボる）べき……少なくともミーアならばそう考える。

――けれど、それではまずいのですわ。セントノエルのあなたたちは、わたくしの彫像を作るがごとき所業は真似してはいけないのですわ。

ミーア、一つ気合を入れて、ローロの合理的思考に対抗する理屈を披露する。それは、レアの話を聞きながら、考えていたものだっ

た。すなわち……。
「わたくしは、ダンスが得意、ということは、ご存じかしら？」
ミーアは、その場でくるりん、くるりん、っと回ってみせる。腕を優雅に動かし、くるりん、くるりん、魅惑のターン。
「このように、ダンスには、手の動きが大切ですわ。美しく舞うために、指先まで優雅に振る舞わねばならない」
言いながら、今度は、ターンタターンっと足を鳴らし、
「それに、足。ステップを踏む足の動きは、ダンスの要と言えるでしょう」
さらに、くるりと回ってみせてから、
「また、体幹。すべての動きを支えるこの体の柔らかさは大切ですわ」
そっとお腹に手を当てて……一瞬、ちょっぴりＦＮＹッとしたのが気にならないではなかったが、それも見て見ぬふりで流して。
「あるいは、目。相手の動きに合わせるために、よく見ることは重要ですわ。あるいは耳。音楽をしっかり聴いて、そのリズムを感じることが大切ですわ」
ミーアはそれから、大きく両手を広げて……。
「わたくしが指摘するまでもなく、このように体には、それぞれに役割がある。だから、わたくしは、足を笑いませんわ。足が大地を踏み、土に汚れたとしても。あるいは、手を笑いませんわ。口のようにお菓子が食べられなくても。目を笑いませんわ。耳のように聞けずとも。すべてわたくしは、笑うことはしませんわ。すべてが必要であると知っているから」
それから、ミーアは特別初等部の子どもたちのほうを見た。
「みなさんも同じことですわ。国が、あるいは、各国が、世界が……一つの体であるとするなら、みなさんは、それを担う体の部分。では、仮に手が足の代わりをしたいと言い出したら、どうなると思いますの？」
小さく小首を傾げて、ミーアは言った。

「わたくしは、逆立ちでダンスを踊らなければならなくなるかもしれませんわ。それはそれで楽しい踊りになるかもしれませんけれど……」

おどけたように笑みを浮かべて首を振り、

「みなさんは若いから、何者にでもなれる……という言葉は、時に希望にもなりうる言葉ですけれど……同時にひどく残酷な言葉だとわたくしは思いますわ。そこには、みなさんひとりひとりが、特別な一人として造られたという視点が欠けている。だから、何者にでもなれるはずなのに、どうして、あの人のようになれないのか、と悩むことになるのですもの」

ミーアは恐れている。特別初等部の子どもたちが、ミーア学園の生徒のように振る舞えないから、と迷い、悩み、葛藤し……それを克服した際に生み出されるであろう……惨劇を。

――空飛ぶ黄金像とか、透き通る（クリスタル）ミーア像とか……わけのわからない物を作ってこられたりしたら、一大事ですわ。製作者の手前、褒めないわけにはいきませんけれど、個人崇拝のようなその態度は、きっとヴェールガの司教たちからは睨まれてしまいますわ……。もしかしたら、ラフィーナさまの中の獅子も目覚めてしまうかも……。

ゆえに、ミーアは全力で強調する！

「みなさんは、ひとりひとりが特別な存在ですわ。みなさんは決して何者にもなれはしない。みなさんは、みなさんにしかなれない。役割を与えられた全員が、かけがえのない存在で、だから誰かの真似をする必要などどこにもありませんわ。だって……」

ミーア、ここで、ユバータ司教へのアピールを一匙、パラリ。

「みなさんは、神が必要に応じて造られたものなのですから。だからこそ、今は、自分の役割というものを、ゆっくり探していただきたいですわ。それは、あなた一人で担う役割かもしれない。あるいは、誰かと一緒に作り上げるものかもしれない。されど……それは誇るべきことですわ。それは、確かに、あなたに与えられたことで、

あなたが生きる意味で、あなたにしかできないことなのですもの」
　さすがに「自分にしかできないことは、ミーア焼きを作ることだ！」とか「畑にアレな感じのミーアの顔を描くことだ」とか「アレな旗を作ることだ」とか、そんなことを思うやつぁ、そうそういないだろう、と考えるミーアである。
　ゆえに……、特別初等部の子どもたちの真剣そのもののまなざしを受けて、ミーアは満足げに頷く。
「そして、わたくしは、再度、我が聖ミーア学園のみなさんにも言いたいですわ。みなさんの力を、この帝国内に縛り付けることを、わたくしは心苦しく思いますの。無論、この帝国を支えてくださる方もいてくれなくては困りますけれど……、世界を視野に入れて、将来、他の国に行き、そこで力を発揮することを、選択肢から外していただきたくはありませんわ。みなさんの力は、世界に羽ばたいていくべきものである、とわたくしは考えておりますわ」
　ラフィーナ、エイブラム王、シオン、あるいは、月兎馬などなど。世界には、モデルにすべき偉人や、素晴らしい生き物がいくらでもいる。ゆえにこそ、ミーアの彫像やら肖像画やらだけに力を尽くすのは、非常にもったいないことだ、と。
　言葉を尽くし、心を尽くして、全力で説得するミーアなのであった。

第四十七話　拡散すれども、薄まらず１（前書き）

今週はミーア成分薄めです。
先週頑張り過ぎたのでガス欠（スイーツ欠）になってしまいました。

第四十七話　拡散すれども、薄まらず1

レアの話が始まった時、ローロの胸には、なんとも言えない不満があった。

その言葉は、自分たち特別初等部の可哀想な子どもたちに対する気遣いに溢れていた。とても慈悲深いものだった。

セントノエルに来るまでは、ほとんど、そんな気遣いを受けたことはなかった。だから、ありがたくて、感謝しなければならないことだと思った。周りのみんなも、そう受け取っていただろう。でも……ローロのプライドはひどく傷つけられた。

いや、レアは司教の娘だ。神聖ヴェールガ公国の伯爵令嬢なのだ。慈悲の言葉をかけられてることは、それほど不思議ではないのかもしれない。

けれど……ミーアは……。次に立ったミーアは、帝国の叡智と呼ばれる人だ。彼女のもとには、たくさんの才能が集まっている。にもかかわらず……、彼女の口で、ミーア学園の者たちのようにできなくてもいい、と言われてしまったことは、屈辱だった。

なにより、それなら「ＦＮＹミーアランド」のようなものを、あの「皇女記念館」のようなものを、あの「小麦畑アート」のようなものを……お前が作れるのか？　と問われた時、自信をもって頷けないであろう自分自身に、腹が立っていた。

ギュッと握りしめた拳、けれど、そこに込められた力の意味は、直後に一変する。

「みなさんは何者かにはなれない。みなさんは、みなさんにしかなれない……」

ミーアのその言葉を聞いた時、ローロの背筋に雷が走った。

さながらそれは、自らを包む霧が、ふっと晴れていくような感覚……。白く靄のかかっていた視界が、一気にクリアになるような、

そんな感覚……。
眼鏡を軽く押さえて……彼は胸中でつぶやく。
――ああ……そう。それはそうだ。確かに真似をする必要はない。自分には自分にしか到達できない場所がある……確かにその通りだけど……。
ローロは、思わずといった様子でつぶやいた。
「なんて……厳しく、やりがいがある言葉なんだろう……」
皇女ミーアは「誰かになれ」とは言わない。あなたはあなたなのだから、と、ありのままの自分を見つめてくれている。
されど……ありのまま、今のままであり続けても良いとは、決して言わないのだ。
ローロたちが、ただ与えられるだけの弱者であることを、弱者であり続けることを、ミーアは許さない。
ありのままで、今のままで、なんの成長もなく安穏と生きることを、彼女は決して許さない。思考を放棄した奴隷であることを、ミーアは許さないのだ。
教育を受けず、何の知識もないのであれば、その者に罪はないかもしれない。が、教育を受け、使うべき知恵を与えられたのに、何もせずに、その場に留まるというのは、怠惰。その者の罪となる。
力を与えられたなら、それをどう使うかの責任を負うことになる。あるいは、使わないことを選んでしまった責任を負うことになる。
そして、ミーアはさらに苛烈だった。彼女は、自分たちの出す成果が、今もなお苦境に立つ他の孤児たちを、あるいは、将来、存在するであろう貧しき者たちを救うことになる、と言っているのだ。
勉強する機会を与えられ、仲間たちを助ける手段すら示されている。後は、するかしないかだけの問題……。
さらに、ローロには、その言葉の裏には、こんな信用も含まれているような気がしていた。すなわち。
“あなたたちは、あなたたちらしく、成長し、いつか、いつの日か……偉業を成し遂げることができる。そう、自分は信じている……

”と。
演説を終えたミーアの満足げな顔は、無言のうちに、そう告げているようだった。
「そんなふうに信じられてしまったら……頑張らざるを得ないじゃないか……」
小さくつぶやくローロの顔は、けれど、どこか晴れやかだった。
同様に、その顔に光る眼鏡のレンズが晴れやかであったかは、議論の余地がありそうではあるが……。

一方で、サンクランド王国王子、エシャール・ソール・サンクランドもまた、心を打たれた者の一人だった。
「僕は、僕にしかなれない……」
その言葉は、彼の胸の内、深いところを刺し貫いていた。
なぜなら、彼こそが、天才である兄、シオン・ソール・サンクランドのようなものになろうとして、つまずき、傷ついた者だったからだ。
そんな彼に、ミーアは言うのだ。
エシャールは、エシャールらしく、その道を歩んでいけばいい。無理をして、自分以外の何者かになる必要などない、と。エシャールには、エシャールにだけ与えられた役割があるのだから、それを果たしていけばいい。それが、あの日、許された者としての責務なのだ、と。
それをどのようにこなすか、エシャールなりに考えて、こなしていけばいいのだ、と……。
その言葉は、優しくも、厳しく、奮起を促すものだった。
「そうか……。僕は、僕として……すべきことをする……それこそが、償い」
そうつぶやいた刹那、
「エシャール殿下！」
声をかけられて振り返る。っと、そこには、美しいドレスに身を

飾ったエメラルダの姿があった。
「ご機嫌麗しゅう、エシャール殿下」
その涼やかな声に、少しだけ心が落ち着くのを、エシャールは自覚する。
グリーンムーン家に来て以来、なにかにつけて気を使い、いつでも変わらず優しく話しかけてくれるエメラルダお姉さまに……エシャールはすっかりなついていた！
「エメラルダさま、ご機嫌よう」
はにかむように微笑んで、エシャールは言った。
「ミーア姫殿下と一緒にいらしていたのですね」
「ええ。ミーアさまが私の力を必要とされているようでしたので」
「ミーア姫殿下……それにしても、すごいですね……」
「え……？」
小さく首を傾げるエメラルダに、エシャールは真面目な顔で続ける。
「王族は言葉を大切にしなければならない……と以前、父上に言われたことがあります。王族は言葉を用いて、民の心を安らげ、時に民の心を奮い立たせなければならない、と。無論、政治も重要なことではありますが、その前提には民の信用を勝ち取る、権威のある言葉がなければならない、と……」
それから、エシャールは、周りの者たちと談笑するミーアに目を向けて……。
「先ほどのミーア姫殿下のお言葉は、まさにそのようなものであったと思います。あの方の言葉に力づけられた者たちは、きっと多いのではないかと……」
「うふふ、それは当然のことですわ。なにしろ、ミーア姫殿下はわたくしの誇るべき親友ですもの」
そう言って、得意げに胸を張るエメラルダ。まるで自分のことでもあるかのように、ミーアが褒めたたえられることを喜んでいた。
その笑顔を見て、エシャールは、少しだけ微笑ましい気持ちにな

ってしまう。が……。
「けれど……少しだけ妬けますわ」
「え……？」
「我が親友とはいえ、エシャール殿下をも魅了してしまうだなんて……。まぁ、ミーアさまは、大変、魅力的な方ですし、仕方ありませんけれど……」
なぁんて、ちょっぴーり複雑な顔をするエメラルダを前に……。
――エメラルダさまも、ミーア姫殿下に負けないぐらい魅力的な女性だと思うけど……。
その心に浮かんだ言葉を、エシャールが、エメラルダに伝えるまでには、今しばらくの時が必要なようだった。

第四十八話　拡散すれども、薄まらず2

「どうでしたかな？　ミーア姫殿下は……」
ミーアの話が終わり、生徒たちが教室へと戻っていった後のこと。
学長ガルヴに話しかけられたユバータ司教は、深々と息を吐いた。
まるで、高ぶる感情を鎮めるかのように……。
「あれが、ミーア姫殿下の演説ですか……。なるほど……。正直に申し上げまして……」
軽く眼鏡の位置を直してから、
「圧倒されました」
ミーアの言葉の一つ一つを思い出しながら、ユバータ司教は目を閉じる。ミーア記念館で目にした素晴らしき発言録に、先ほどのミーアの演説は全く劣らぬものだった。
「各国の、力の弱い子どもたちを助けたいという想い、救われた者たちに、自分たちと同じような子どもたちを救う機会を与える配慮、さらに、特別初等部の子どもたちへの気遣い……。非の打ち所がまるでありません」
ユバータ司教の胸には、もはやミーアを疑う気持ちなど、微塵もなくなっていた。まぁ、ここに来る前に、すでにそうなっていたような気がしないではないが……。
っと、そこで言葉を切って、彼は静かに腕組みする。
「しかし、一つだけわからぬことがあります。ご自分の彫刻や、あの畑の絵を咎めなかったことです。あれには、いささか戸惑いましたが……」
あのような、個人の神格化へと繋がるような発想を止めない理由が、なにかあるのだろうか……。
――凡百の王族であれば、理解できる。王侯貴族と言うのは、しばしば、自らの力を過大に見積もり、神として崇められるという欲

求に抗えなくなるもの。されど、ミーア姫殿下は、そのような愚劣な者たちとは違う。おそらくは、学生たちの自主性を尊重することを良しとされたのだろうが……。

難しい顔をするユバータ司教に対して、ガルヴは、

「ああ……あれですかな」

どこか悪戯を企んだ少年のように、ニヤリとした笑みを浮かべた。

「確かに、彫刻に関してはわかりかねます。学生たちの忠誠の発露なので咎めなかったというのが、妥当な理由でしょうが……。されど、あの畑アートに関しては、おそらくミーア姫殿下も、その有用性を認められたゆえ、と思っておりましてな」

「有用性……ですか？」

首を傾げるユバータ司教に、ガルヴは深々と首肯して……。

「さよう。帝国貴族に巣食う、馬鹿げた思想のことはご存知ですかな？」

「初代皇帝の時代より培われた、反農思想のことでしょうか。報告は受けていましたが、しかし、にわかには信じがたい思想です」

例の初代皇帝ゆかりの無人島を調査している者たちから報告は受けていた。

蛇の影響で帝国に根付いてしまった悪しき思想、反農思想。それを聞いた時、けれど、ユバータ司教の脳裏にあったのは、そんな馬鹿な、という想いだった。

「食は、日々必要な物。貴族とは言え、それは変わらない。だというのに、農業に携わる者たちを見下すなどと……そんな馬鹿げたことが本当にあるのかと不思議に思っていたのですが……」

「まことに残念なことながら……。肥沃なる三日月地帯であるがゆえに、なんの苦労もなく農作物が作れてしまう。ゆえに、農民とは誰でもなれるもの、農業とは非才な者のすることである、と……そのような常識がまかり通ってしまっているのです。そして、さらに愚かなことながら、その常識を塗り替えるのは、容易ではない」

今まで馬鹿にしていたものを、突然、良いものですと言われたと

ころで、そうそう納得などできないのが人間と言うものだ。誤ったプライドで凝り固まった貴族たちであれば、なおのこと、それは容易なことではない。
「そうでしょうね。理を説けば納得する者もいるかもしれませんが、多くの者たちは反発するでしょう」
人とは、保守的な生き物だ。自分の価値観や生き方を変えることには、強い抵抗を覚える。仮に、目の前で理を説かれたとしても、仮にそれが正しかったとしても、なかなか従うのは難しい。
「仮にミーア姫殿下や皇帝陛下が命じたとしても、中央貴族の中には、それに従わない者たちもいるやもしれませぬ。少し考えれば、自身が不合理の中にいることは十分理解できるはずなのに、それでも、なお、思考することをやめ態度を改めぬ者がいるやもしれぬ」
ガルヴは髭を撫でながら言った。
「そこで、我々は上書きを試みようと思いましてな」
「上書き……ですか？」
「さよう。帝国に沁みついた反農思想に対しての上書きです」
「ああ、なるほど。つまり〝農業が良いものだから〟という理由で畑を作らせるのではなく〝ミーア姫殿下の姿を畑に描くため〟に畑を作らせようと？」
「まさに。小麦畑にミーア姫殿下のお顔が描かれたアートを皇帝陛下はいたく気に入られた、と貴族たちに教えてやるのです」
「そうすれば、貴族たちは、皇帝陛下から気に入られるために、自領の小麦畑にアートを作る」
「農業が見下される状況を真っ向から否定しても、凝り固まった価値観は揺らがぬでしょう。それは守備の固い砦を落とすようなもの。ならば、正面から戦うのは愚かなこと……」
真っ向から農業は良いものだから畑を増やせというのは難しい。ならば、搦め手をもって……。貴族の者たちの価値観に合わせて、アプローチをしていく。その手腕に、ユバータ司教は思わず瞠目する。

「そして、この話には説得力が重要でしてな。ミーア姫殿下の小麦畑アートであれば、皇帝陛下が喜び激賞した、という話にも説得力が出る」
「なるほど……あの畑アートには、そういう意味が……。そして、ミーア姫殿下は、それを読み切った、と、そういうことですか？」
「そうですな。なにせ、そうでなければ、我ら臣下のすることを完全に信頼しているから何も言わなかった……ということになってしまいそうですし……。さすがに、そこまで自惚れてはおりませんでな」
おどけた口調で肩をすくめるガルヴに、ユバータ司教は尊敬のまなざしを向ける。
帝国の叡智の下にはせ参じた老賢者に、この素晴らしき学園を運用する立役者に敬意を抱くユバータ司教であった。

第四十九話　パティの戦い、バッドエンド（前書き）

今回、ほろ苦ビターです。ご注意ください。
ハッピーエンドを目指す五部以降なのですが……ほろ苦ビターです。

第四十九話　パティの戦い、バッドエンド

「どうも、いかんな……」
皇帝マティアス・ルーナ・ティアムーンは、聖ミーア学園で演説するミーアを見て、ちょっぴり涙ぐんでいた。
この姿を妻、アデライードにも見せたかった……などと思うと、どうにも泣けてきてしまって……。
「年のせいか、涙腺が緩くなっているようだ……」
目元を拭いつつ、つぶやく。
年のせいといえば、ここ最近、記憶のほうも、いささか怪しいところがあった。
先日、ミーアと話した時……クラウジウスの別邸が焼け落ちたのは、母が亡くなった後だと話をしたが……。
「よくよく考えれば……あの時はまだ母上は存命だった……」
その後、母が火事で死んだ時には、思わず背筋が寒くなったものだった。
まるで、あの別邸の火事で死ななかった母を、火事が追いかけてきたようだと思った。その火事に妻アデライードまでもが巻き込まれそうになったと思えば、まさにクラウジウス家の「呪い」ではないか……、などとその実在を、一瞬とは言え疑ってしまったほどだった。
その記憶は確かにあるから、間違いはないはずなのだが……。
「どうも、記憶違いが酷いな……」
彼の中、対立するもう一つの記憶があった。
それは、クラウジウス家の火災よりも前のこと。行方不明になったパトリシアは遺体で発見されたという記憶だ。
彼女の弟、クラウジウス候ハンネスは自暴自棄になり、別邸に火を放ち、自らも命を絶った、などと言う噂を耳にした記憶が確かに

あったのだが……。
「思えば、どちらにせよ、私は母上の死に際にお会いすることができなかった。親不孝なことだが……」
深々とため息を吐くマティアスであった。

矛盾する二つの記憶。それは、過去が変わりつつある、一つの証左。
パティによって、歴史は少しずつ揺らいでいた。それは例えば、彼女自身の死にまつわる運命のことで……。

白月宮殿で、皇太后パトリシアが落ち着ける場所は多くない。
どこに蛇が潜んでいるかわからないうえ、味方はほとんどいない、孤立無援。それゆえ、気を抜くことは許されない。
上手く蛇として立ち回りつつも、なんとか状況が有利になるようにするために……。
――ミーアお姉さまが作ろうとしていた、あの幸せな世界を、この帝国にもたらすために、私は頑張らないといけない……。
さて、そんな彼女が気を抜ける数少ない場所、そこそが、中庭にある寂れた小さな花壇の前だった。
彼女の夫も息子マティアスも、ここには滅多に近づくことはない。ただ一人、パトリシアが花と蝶を愛でながら、のんびりできる場所が、その場所であった。
咲き誇る花をぼんやりと眺めながら、彼女は以前、命を狙われた時のことを思い出していた。
――あの時は、危なかった……。
蛇からの命令を保留としたことで、反感を買い、命を狙われたのだ。
間一髪と言うところで、彼女が逃げ込んだのは、帝都の一角、シューベルト侯爵邸だった。
――ヤナが、助けてくれたのかもしれない。

親友と共に、連れ込まれた地下道。あの時の経験から、抜け道の存在を知っていたパトリシアは、いつか、なにかに使えないかと思っていたのだ。
今回、それが、見事に役に立った。
――守られている……。そんな気がする。
孫娘……ミーアに。あるいは、親友のヤナに。
――私が、あそこで死んでしまったら、歴史が変わってしまったかもしれない。下手をすると、ハンネスの脱出にも影響があったかも……。
幸い、暗殺は未然に回避し、否、回避したことすら気付かせなかったパティである。
その後、保留としていた蛇の命令も誤魔化すことに成功。なんとか生きながらえてはいるが……。
――私が敵対していると、気付かせたらいけない。殺されそうになったと私が認識していると、そう思わせてもいけない。あくまでも、私は、蛇の一員だと自任している、と思わせなければならない。
パトリシアの戦いは、孤独なものだった。
彼女の味方はあまりにも少ない。否、少なくなければいけなかった。
あの歴史に……あの未来に行きつくために……。
――私の役目は、あくまでも、その先触れ。ミーアお姉さまの到来への備えをすること。未来を変えてはいけないから……。
自身の些細な行動が、あの幸せな世界に影響を及ぼし得ることを、彼女は知っていた。
それゆえ、犬の名前だなぁ、犬の名前なんだよなぁ！　と思いつつも、我が子にマティアスと名付けたりもしたが……そこは変えても良かったんじゃ？　と若干思わなくもないが……さておき。
すでに、マティアスは生まれ、アデライードとの婚姻もなった。
ついでに……息子マティアスに「……皇帝の子は社交ダンスが大事。さまざまな場面で恥ずかしい思いをしなくて済むよう、くれぐ

れも、生まれてくる子にはダンスを厳しく仕込むように」などと言いつけていたものだから、後々で、ミーアが苦労する羽目になったりするのだが……それもご愛嬌というものだろう。
イエロームーン家やガヌドス港湾国、ペルージャン農業国への根回しも、粛々と進めて、やるべきことは、ほとんど終わっている。
あとすべきことは……一つだけだった。
――古き蛇……。古の、初代皇帝の時代より連綿と続く蛇の流れ……それを、私のところで断つ。
未来の世界を知るパトリシアには、不思議なことがあった。
それは、あの世界の帝国の蛇が……あまりにも脆弱だったこと。
そして、あまりにも独立し、勝手気ままに行動しているということ。
対して、パトリシアの時代……蛇は遥かに組織立った動きをしていた。それゆえに、未来を知るパトリシアでさえ、ほとんど自由に行動することができていなかったのだ。
その理由は、明らかであった。
帝国内の古き蛇たちをまとめ上げる人物が――この時代にはいるのだ。
かつて、蛇の巫女姫ヴァレンティナは言った。蛇とは、決して滅びない感染する思想である、と。だから、それぞれが、地を這うモノの書に従い、混沌へと向かう行動をとり、教えを広め続ければ、いずれ、世界は滅ぶであろう、と……。
されど、誰もがそのような境地に至れるはずもない。不安を持った者の中に、より効率的に破壊活動ができるよう、結束力を持ち、組織立って動こうとする者が現れても、不思議ではなかった。
白鴉を使い、組織的に破壊活動を行おうとしたジェムのように……かつての帝国にも、蛇たちを束ねる者がいたのだ。
されど、それが何者であるのか……その謎はついぞ解けなかった。
そして、ミーアの時代には、その者はいなかった。なぜか……？
その問いに、パトリシアは胸の内で応える。
――私が、仕留めていたから……。

そう、それは、一つの逆算だった。
あの、ミーアの時代に、帝国の蛇は弱体化していた。白鴉の台頭に合わせるでもなく、息を潜めていた。それはなぜか……？　蛇を導く指導者が失われたからではないか？
ではいつ？　どこで……？
また、マティアスには一切、蛇の影響が及んでいないのは、なぜか？
そんなの決まってる。
――私が、刺し違えた。だから、あの世界の蛇たちは、マティアスや、ミーアお姉さまに、ほとんど有効な手出しができていなかったんだ。
そう考えたパトリシアは、一つの罠を張った。
それは、自身の命を使った罠。すべては、あの幸せな世界を迎えるために……。
パティの推論は、彼女にしては珍しく短絡的で、安直なものであった。
それに、自分の命と引き換えに、敵を殺すというのは、ミーアが示したやり方からも遠いものであった。されど、パティはそれを実行した。
そうせざるを得ない、別の事情が、彼女にはあったからだ。
――私は、マティアスを裏切った、アデラを裏切った……。ミーアお姉さまを……裏切ってしまった……。
胸の内にあるのは一つの後悔だった。
されど、それが裏切りであると理解してなお、後悔していてなお……過去に戻ったとしても、やはり同じ行動をとってしまうであろう……つまりは、パティの譲れない気持ち。
その蒔いた種の刈り取りは、自分でしなければならなかった。そうでなければ、蛇はマティアスを容易に操るだろうから……。
「あの者を殺す……。それもまた、マティアスやミーアお姉さまにとっての裏切りになってしまうけど……でもやらなければ……」

パティが、自らの死を知ってなお、その燃え落ちる館に赴いた理由。そして、火事に巻き込まれることを知ってなお、アデライードとヨハンナとを伴った理由。
それは、その日、帝国の蛇の首魁をおびき寄せ、仕留めるため。
そして、それはある秘密を知る者を葬り去るためのもの。
ゆえに、炎に巻かれながらも、パトリシアは幸せだった。
すべてをやり遂げた……赤く染まる世界の中、けれど、その胸にあるのは小さな満足と罪悪感で……。
「……できれば……もう一度だけ、あの世界を……。私のしたことが許されなかったとしても、それでも……もう一度……」
つぶやきは、炎の中に溶けて、誰の耳にも届くことはなく。
崩れ落ちる館が、パトリシアの体を包み込んでいった。

第五十話　たっぷり、たっぷり！

その日、ミーアたち一行は、聖ミーア学園内に泊まることになった。

当初は、ＦＮＹミーアランドまで戻るか、あるいは、ベルマン子爵領へと戻ることも考えたが……。

「せっかくですし、ミーア学園に泊まっていくのがよろしいのではないかしら。そのほうが、明日も朝から見学できるでしょうし。それに、明日はルールー族の森にも行って、みなさんに挨拶したいですわ」

森の木をもっと大切にするように言っておきたいミーアである。

無駄に、皇女の彫像とか、作ってんじゃねぇぞ！　っと釘を刺したいミーアである。

あの七色に光る木は神からもらった宝物なんだろう！　雑に使うなよ！　っと強く注意を促したいミーアなのである！

幸いなことに、学園内にはきちんと寮が完備されていた。これも、例の六角形の小屋である。

割り当てられた部屋の中に入って、ベッドの上にポーンッと飛び乗ったミーアはほーふ、と一息吐く。

「ふむ、これが子どもたちが寝起きしている場所なんですわね。セントノエルよりは少々、狭いですけど、でも、良いお部屋ですわ」

というか、面白い部屋だった。普通の四角形の部屋より、ちょっぴり広々としているような……。

「騎馬王国の幕屋を思い出しますわね」

「お疲れさまでした。ミーアさま」

アンヌに声をかけられて、ミーアはニッコリ笑みを浮かべる。

「うふふ、アンヌもお疲れさまでしたわね。それに、ありがとう。先ほど、ミーアランドで、忠告してくれなかったら、宴会料理がた

っぷり食べられないところでしたわ」
アンヌの忠言通り、ミーア学園では、宴会の準備ができていた。
校庭にいくつか焚火を作り、そこで、肉や野菜を焼いて食べるのだ。
焼き立ての、肉汁たっぷりのお肉の美味しさは言うに及ばず。焼いたフルムーンポテトにバターを乗せ、それがジュワッと溶けたところに、塩気の強いソースをかけ、ほふほふ言いながら食べるのは、言葉にならない感動だった。
――それに、あの、マッシュマナとか言う、白いフワフワのお菓子を焚火で炙ったものも実に美味でしたわ。熱々で、とろとろにとけて、とってもあまぁくて……。
どうやら、庶民の食べ方らしいが、すっかり気に入ってしまったミーアである。
――危ないところでしたわ。ミーアランドでミーア焼きをたくさん食べてたら、こんなに気兼ねなく、今夜の宴会を楽しめないところでしたわ。
演説の際、お腹の触り心地がちょっぴり気になっていたものだから、もしも「ミーアランドで食べるのを我慢した！」という実感がなければ危ないところだった。
……我慢した、といっても、ミーア焼き二つは食べていたのだが……まぁ、それはどうでもいいことなのであった。
っと、そこへ。
「失礼いたします。ミーア姫殿下」
入ってきたのは、眼鏡の忠臣、ルードヴィッヒだった。
「ああ、ルードヴィッヒ。みなさんの宿泊の手配、ご苦労さまでしたわね」
「いえ……。ですが、さすがに陛下がお泊りになるというのは……。こういったことは事前に、お知らせ頂いていると、ありがたいのですが……」
ルードヴィッヒは疲れた顔で、やれやれ、と首を振った。

「ところで、どうだったかしら？　ルードヴィッヒ、学園のみなさんの様子は？　ちゃんとやる気になっていたかしら？」
その問いかけに、ルードヴィッヒはスッと背筋を伸ばして。
「もちろんです。学生たちだけでなく、講師一同、襟元を正さずにはいられないでしょう」
「そう。それならば良かったですけど……上手く伝えられたか心配ですわ」
まかり間違っても、小麦畑ミーアートが広まるようなことだけは防ぎたいミーアである。小麦畑ラフィーナートとかなら、全然構わないのだが……。
――理想は、ラフィーナさまの彫像を見て、この見事な彫像を作ったのは、ミーア学園の生徒らしいぞ、と思われることかしら……。直接的にわたくしを描いたり、讃えたりするのではなく……そう、あくまでも、注目を浴びるのはわたくしではなく別の方。わたくしは、その余光を……間接的に浴びられればそれで充分ですわ。
ミーアは太陽が好きではない。月ぐらいがちょうどいい。直接、自身が光り輝くのではなく、間接照明ぐらいがちょうどいいのだ。
根っからの月明かり気質なミーアなのであった。
「ところで、ここに来たのは、明日以降の予定についての打ち合わせのためですの？」
首を傾げるミーアに、ルードヴィッヒは、思い出した、と言わんばかりに、眼鏡をクイッと押し上げて……。
「いえ、それもあるのですが……もう一つご報告がございまして。先ほど、仲間より、伝書が届いたのですが……」
一度、言葉を切ってから、
「どうやら、グロワールリュンヌ学園が動き出したようです」
「あら……。ふふふ、エメラルダさんの策が早速、実ったということですわね」
ミーアは、うんっと頷いて……。
「それでは、迎え撃つ準備をしておいたほうがよろしいかしら……

甘い物も食べ過ぎましたし、腹ごなしということで……。アンヌ、紅茶を淹れてきていただけるかしら？　お砂糖をたっぷり入れて」
「はい。ミルクたっぷりのミルクティーを淹れてきますね」
主の命令を、健康翻訳（ローカロリーライズ）して、ニッコリと微笑むアンヌであった。

第五十一話　忠臣アンヌは見逃さない

さて、アンヌが砂糖一個入り（ミーア的ノンシュガー）ミルクティーを持ってきたところで、ミーアは話を再開する。
「それで、具体的には、どう動きだしたんですの？」
「サフィアス殿から連絡が入りました。ちなみに、ミーアさまは、紫月花の会をご存知ですか？」
「聞いたことがございますわ。帝国貴族夫人の集まりですわね。いろいろな方面に強い影響力を持っているとのことですけど……」
その答えに満足した様子で頷いて、ルードヴィッヒは言った。
「実は、グロワールリュンヌの後援団体が、その紫月花の会なのです」
「なるほど、ありそうな話ですわね。なんといっても帝国貴族の子弟が集まる学園ですし……」
「それで、サフィアス殿の報告によると、その紫月花の会の会長であるブルームーン公爵夫人のところへ、グロワールリュンヌ学園の講師がやってきて、なにやら話し込んでいたとか……」
「ほほう、それは重要な情報ですわね。つまり、聖ミーア学園をパライナ祭の代表校にするためには、グロワールリュンヌのみならず、紫月花の会まで相手にしなければならない、と……そういうわけですわね？」
「現状では、その可能性は非常に高いかと……」
ミーア、そこでミルクティーを一口。その中に含まれる微量の糖分を抽出し、濃縮し、脳みそに送り込む！　ミーアの脳が、ぎゅんぎゅんと動き出した！
――それは、下手をすれば中央貴族を軒並み敵に回すことになりそうですわね……。レッドムーン公、イエロームーン公には協力してもらえるでしょうし、サフィアスさんたちの援護も期待できるで

しょうけれど……。それでも、あまり気が進みませんわ。それに、グロワールリュンヌ学園の生徒たちには、この機会に聖ミーア学園と交流し、反農思想の払拭に繋がればと思いますし……そのためには、紫月花の会が少々邪魔くさいですわね。

ミーアは小さく唸った。

「ふうむ、できれば、問題を切り離したいですわね……」

というか、できれば紫月花の会とは、まともに争いたくないミーアである。貴族夫人と言うのは総じてプライドが高い。ゆえに、彼女たちを説得するのは、なかなかに骨の折れる作業なのだ。

となれば……どうするか。

「ここは、せっかく、一緒に来ておりますし、お父さまのお力を借りるのがよろしいかしら？」

「皇帝陛下の、ですか？」

目を瞬かせるルードヴィッヒに、ミーアは大きく頷いた。

「ええ。グロワールリュンヌと紫月花の会は実際には別物ですから。そして、貴族夫人たちの動きの牽制には、やはり、皇帝たる父上に一言言っていただくのが効くのではないかしら？」

ルードヴィッヒは、なるほど、と頷いて……。

「現状、グロワールリュンヌ校本体より、確かに、紫月花の会のほうが、面倒が大きいように思います。ミーアさまのおっしゃられるとおり、そちらを押さえられれば、案外簡単に済んでしまうかもしれません」

「まぁ、あくまでもとりあえず、ですわ。他にも手を考えておくに越したことはないでしょうけど……」

とは言いつつも、ミーアは、概ねこれで問題が片付くと高をくくっていた。のだが……。

「紫月花の会……ヨハンナが長をやっている会か……」

「ええ、そうですわ。ぜひ、聖ミーア学園の邪魔をしないよう、お父さまのほうからガツンと言ってやっていただきたいんですの。こ

う、ガッツーンと……」
翌朝の朝食時。ミーアは、早速、父に話を持ち掛けたところ、
「ううむ……それは、なかなかに、難しいかもしれんなぁ」
非常にしっぶーい顔をされてしまった！　思わず面食らってしまうミーアである。
「どっ、どっ、どうしましたの？　お父さま……そのような弱気な……」
「いや……なぁ。ヨハンナは、うーん……」
実になんとも、歯切れが悪い！
――どういうことですの、お父さまが、わたくしのお願いをこんなに渋るだなんて……はっ！　ま、まさか……！？
瞬間、ミーアのピンク色の脳細胞が唸りを上げた！
――もしかして、お父さま……ブルームーン公爵夫人のことを……？
そうなのだ。ミーアとて、もう子どもではない。
いや、まぁ、そもそもの話、断頭台にかけられた時点で子どもではないのだが……それはさておき。
そんな大人のお姉さんミーアだから、父にいい人がいても、取り乱したりはしないし、なんだったら、自分への愛情が若干分散して良いので？　とすら思っている。
パパ呼びの回数が減ったりするのではないか？　と期待すらしている。しているが……。
――けれど、さすがに人妻……それも、ブルームーン公の奥さまなど、言語道断！　あり得ぬことですわ。下手をすれば、帝国を二分する内戦に突入して……。とてもドラマチックなことになってしまうかも……。
ちょっぴり見てみたい、だなんてまったく思わないミーアである。ドラマチックなのは物語の世界のみにしてほしいわけで、波乱万丈な人生など自分で経験したくもないミーアなのである。
平穏、平和、安定がモットーなのである。

さて、妄想をたくましくしているミーアに、父、マティアスは苦り切った顔で言った。
「ヨハンナはなぁ、アデラの親友だったのだ」
「……へ？」
思わず、目をパチクリさせるミーアであったが……。
「それに、母上とも懇意にしていてな。本当の娘のような関係を築いていて……だから、なぁ……こう、今一つ言いづらくてな……」
「なんと……。帝国内に、お父さまが頭が上がらない方がいるだなんて、思いませんでしたわ！」
てっきり、自分がお願いすれば、大抵のわがままは通してくれるものと思っていたのだが……。とミーアはそこで苦笑いを浮かべて……。
「しかし、焦りましたわ。てっきり、ブルームーン公爵夫人が、お父さまのいい人なのかと誤解してしまいましたわ」
その答えに、マティアスは、ははは、と乾いた笑い声を上げた。
「いやぁ……ブルームーン公には申し訳ないが、あのように気の強いのは、ちょっと……なぁ」
苦り切った顔をする父に、ミーアは、ふぅむっと唸る。
――意外ですわ……。お父さまに苦手な方がいるなんて……。
ともあれ、今回は、父の権威は、どうやらあてにはできなさそうだった。
――仕方ありませんわ。なにか別の手を考えなければ……。しかし……。
ミーアは、父の言葉の中に聞き捨てならない言葉を捉えていた。それは……。
「ところで、お父さま、そのヨハンナさんは、お祖母さまと仲が良かったという話は、本当なのかしら……？」
「ああ、そうなのだ。母上とは、よくお茶会を開いていた。アデラも交えてな」
「とすると……」

腕組みしつつ、唸るミーア。

その目の前のお皿の上、いつの間にやら、山盛りになっていたパンが消えているのを、背後に立つ、忠臣アンヌはきっちり見逃さずにいるのだった。

第五十二話　我、確信す、一日のカロリーを消費しきったと……

皇帝マティアスの権威によって、紫月花の会の行動を牽制する……という計画が見事に失敗してしまったミーアであるが……そこは慌てず騒がず。

優雅な朝の時間……アンヌに髪を整えてもらっている最中に、のんびり考える。

――まぁ、ブルームーン公爵夫人とグロワールリュンヌ学園の講師が会っていたというだけで……別になにか深刻なことが起きているわけでもありませんし……焦る必要はありませんわね。

かつて、ミーア学園に対して妨害工作を働いたエメラルダの時と違い、具体的な妨害を受けたわけではないので、それに対応するような動きをすることもできない。となれば、できることは少ない。

そう判断したミーアは、地道かつ堅実な手を打つことにする。すなわち……。

「まず、サフィアスさんにお返事を出すべきですわね」

小さくつぶやく。

問題となっているのは、他ならぬサフィアスの母である。止めてくれれば、それで問題ないのだが……。

「まぁ、わたくしに連絡してきた以上、難しいということですわね」

ミーアの味方になるよう、貴族の子弟たちの支持を固めているサフィアスではあるのだが、あまり、武闘派という印象はない。一方で、話に聞く限り、ヨハンナという女性は、ゴリゴリの武闘派だ。

サフィアスが逆らおうものなら、折檻されて、あっさり折れてしまいそうな気がした。

「まぁ、サフィアスさんですし、それは仕方のないことですわ」

本人が聞いたら、いささか憤慨しそうなことをつぶやいて、ミーアは思考を進めていく。

「それに、イエロームーン派閥……。ううむ……リーナさんに言っておけば、大丈夫だとは思いますけれど……。紫月花の会と関係が薄いことを、どう考えればよいかしら……」
正直、影響は受けづらいのだろうが、一方で紫月花の会を分断するためには、あまり役には立たないかもしれない。
余談だが……最近のミーアのマイブームは、分散とか拡散とか、分断とか、である。
「恐ろしいものも、散らし薄めてしまえばよいのですわ。そうすれば、恐れるに足らず、ですわ。わたくし、聖ミーア学園でついに、物事の真理を学びましたわ！」
なぁんてことを思っていたわけだが……。
そんなミーアが拡散すれども薄まらない……どころか、むしろ散っていった先でより濃さを増し、増殖していく例を目の当たりにするのは、もう少し先のことだった。
それを目撃したミーアは、あまりの惨状に……。
「こっ……こわぁ！」
とつぶやくことになるのだが、まぁ、どうでもいいことなのであった。
「分断して、できれば内部で牽制しあうようになってくれれば、良い足止めになるのですけど、そのためにはローレンツ殿自身よりも、イエロームーン派閥の他の貴族に期待するべきかしら……。まぁ、無理にイエロームーン派閥の貴族に期待せずとも良いですけれど……。あとは、ルヴィさん……それに、レッドムーン公にも話を通すべきですわね」
どちらかと言うと、レッドムーン家のほうが、紫月花の会に伝手がありそうではあるが……。
「まぁ、分断できなかったとしても、やることは決まってますし……」
貴族に対しての戦い方は、とてもシンプルだ。すなわち、相手より多くの味方を集めて、支持を固めてしまうことである。

「辺土伯は、根本的に紫月花の会とは関係ないでしょうし……。ルドルフォン辺土伯は、聖ミーア学園の側で動いてくれるはず……ギルデン辺土伯も、おそらくは味方をしてくれるのではないかしら？」
他にもサンクランド、ヴェールガなど、帝国貴族に無視できぬ影響力を持つ国の知己にも連絡を取る必要があるだろうか。
「シオンもこちらで合流する手はずになっておりますし……いえ、その前に、エメラルダさんを通して、エシャール王子に話を通しておくべきですわね……エメラルダさんといえば、グリーンムーン派の動向は微妙なところですけど……どうなのかしら。自分のところで預かっているエシャール殿下が通っている学園である以上、あまり悪しざまには言えないはずですし……」
もし仮に、グリーンムーン公がミーア学園を否定でもしようものなら、サンクランド貴族から一斉に反感を買うだろう。
自国の王子殿下を、なんてとこに通わせてんだ！　と。
実際、ＦＮＹミーアランドや畑アートを見た後だと、ミーア的にも、なんてとこに通わせてんだ！　と思わないではないのだが……まぁ、それはさておき。
「グリーンムーン公自身のお考えもわからないですけど、ガヌドスでは多少の貸しは作れているはず……となれば、案外その方向で紫月花の会の分断は可能か……」
いずれにせよ、ここは持てる人脈のすべてを使って対処すべきだと判断。各所への手紙を出すようにルードヴィッヒに指示を出したところで、ふーうとため息を一つ。
「なんだか、今日すべき仕事はすべてやり切ったような気がいたしますわね……」
頭脳労働の時間は、正味半刻ほど。それで、一日の労働に用いるカロリーのすべてを消費した気分になっているミーアであったが……。
「けど……そうも言っていられませんわね。今すべきことを、きちんとやらなければ……」

そうして、ミーアは部屋を後にする。

今すべきこと、すなわち、ユバータ司教の学校見学に同行するために、である。

第五十三話　計算が、間違っている！

さて、その日は、ユバータ司教たっての希望とあって、ミーア学園の図書館の見学をすることになった。
「どのような本を揃えているのかによって、学園の思想が見えてくるものですから」
さすがは、神聖図書館館長、本には並々ならぬこだわりがあるらしい。
聖ミーア学園の図書館は、周りの建物と同じく、六角形を基本とした建物だった。六つの六角形を繋げた、大きな建物だ。
「それでは、どうぞ。ごゆるりとご見学ください」
そう微笑むのは、学長ガルヴだった。なんと、学長自らが案内を買って出てくれたらしい。
ガルヴの後について図書館に入ったミーアは、収蔵された本の多さに、おお、っと声を上げた。
「なかなかの冊数が揃っておりますわね。むっ！　あれは、名著『森の生存術』ではありませんの？　わたくしも、非常に参考にさせていただきましたわ」
「ほほう、さすがにお目が高い。あの本は、森に溶け込んで生活する際には、非常に参考になるものでしてな。特に山菜とウサギ鍋に関する項が秀逸で……」
などと、すっかりガルヴと意気投合するミーアである。
っと、そんな時だった。ふと、ミーアは、図書館の中に空いているスペースを見つける。とても目立つ、良い場所なのだが……。
「あら、ここには本が入っておりませんの？」
「ああ、そちらですかな？　そこには、将来的には、ミーア姫殿下に関連する本を並べてみてはどうか、と思いましてな。こう、背が高い本棚をいくつも並べて、大々的に……」

ガルヴのその言葉に、ミーア、思わず、笑顔を引きつらせる。
「わっ、わたくしに、関する本を……」
「はい。我が弟子ルードヴィッヒに、今度、ミーア姫殿下の言行録を書くよう持ち掛けようと思っておりましてな。それに、姫殿下のお抱え作家であるエリス嬢も、なにやら、皇女伝を作成中とか……」
「よっ、よくご存じですわね、おほほ……」
などと笑いつつも、ミーアは、ゾォっとする。
――皇女伝が、ここにずらぁっと並んでるのは、さぞや恐ろしい光景でしょうね……。中身が正確に書かれているならばまだしも、エリスの本は、時に誇張が過ぎることがございますし……。
「ミーア姫殿下の人物伝ですか。それは、ぜひ読んでみたいですね」
興味津々に言うユバータ司教に、おほほ、と笑って誤魔化して、
「それよりも、どうかしら、ユバータ司教。本の揃えは……」
そう問えば、ユバータ司教は難しい顔で頷いて。
「さすがは、賢者ガルヴ殿が学長をなされているだけはありますね。素晴らしい揃えです」
彼は、手近の本棚へ行き、
「高等算術の本も新しい本が揃っていますし。それに、この神学書はヴェールガ公国にも何冊もない、賢人アインザイアの書ですね。なかなか値が張ったのでは？」
「我が弟子たちの寄贈でしてな。すべて読んで暗記してしまったから、コレクション以上の意味はない。だから寄贈する、などと言っておりました」
ミーア、分厚い本を何とはなしに眺めてから……。
――あんな分厚い本を暗記するとか……さすがはガルヴさんのお弟子さんですわね。ものすごい記憶力ですわ。
基本的に、テスト勉強はすべて暗記戦術で乗り切っているミーアである。あの本の厚さすべてを暗記しようと思ったら、どれほどの労力が必要か、瞬時に察することができるわけで。
――暗記には、パンケーキ三十枚……わたくしのオヤツ三日分と

いったところではないかしら？
……どこかで、計算が致命的に間違っているような気がしないこともないのだが、ツッコミを入れられる者はどこにもいないのだ。
「この図書館の本に、いつでも触れられる子どもたちは幸せですね」
ユバータ司教のその言葉に、ミーアはふと思う。
――あら？　この話題……、もしかして、例のお願いを申し出るチャンスなのでは？
例のお願い、すなわち……。
「ふふふ、ユバータ司教にそう言っていただけると、わたくしも鼻が高いですわ。ところで、ユバータ司教、わたくし、ヴェールガ公国にも素晴らしい図書館があることを存じ上げておりますのよ？」
ミーアは穏やかな笑みを浮かべて言った。
「神聖図書館、あなたが館長を務めるかの図書館には、さまざまな国から時代を問わず、たくさんの本を集めているとお聞きしておりますわ」
「ええ。そのとおりでございます、ミーア姫殿下。なにしろ、例の者たち……」
そこでチラリ、と、ユバータ司教はガルヴのほうに目を向けた。
「ああ、混沌の蛇という者たちについては、聞き及んでおります。我が弟子に限ってそのような思想に染まることはないとは思いますが……もしも、学園内にそのような思想が入り込んでは大変ですのでな」
その答えにユバータ司教は頷いてから、
「私は、混沌の蛇に対抗するために、知識は欠かすことのできぬものと考えます。相手を知らなければ対処のしようがないというのが、世の真理ですから。地を這うモノの書は、世の知識を集積し、どんどん成長を繰り返してきた知識の書。ならば、それに対抗するために、我らも知識を収集することが大切だと心得ております」
「ええ、知識はとても大切な物ですわ」
ミーアはしかつめらしい顔で頷いて……。

「実は、わたくし、どうしても知りたいこと……知らなければいけないことがございますの。ユバータ司教、わたくしたちに、神聖図書館への立ち入りを、許可していただけないかしら？」

思い切って、切り込んだ！

第五十三話　計算が、間違っている！（後書き）

来週の更新はお休みにします。
ミーアが頭を使い過ぎたので少し早めの春休みですね。
よろしくお願いいたします。

第五十四話　りーなみかん

ミーアが図書館ツアーに勤しんでいた頃、シュトリナもまた、図書館へと向かっていた。
「イエロームーンの館に置いてない本があるかもしれないし……」
本当は、ベルと遊びたいところではあるのだが、グッと我慢。パティとハンネスにお願いされていた件について調べを進めなければ……と思ったわけだが……。
「リーナちゃんが図書館に行くなら、ボクも行きます」
親友ベルは、殊勝なことを言ってくれた。さらに、
「ボクもこの時代に来た意味を、まだ見つけられてませんから、本の知識は役に立つと思います……」
帝国の叡智、女帝ミーア・ルーナ・ティアムーンの後継者に相応しい、実に威厳に溢れた顔で、そんなことまで言って……。
「……それに、冒険に役立つ知識が見つかるかもしれませんし」
ついでに、本音もポロリしてしまうベルである。
……素直で正直者ないい子なのである！（リーナ並感）
まぁ、それはさておき……。
「あら、リーナさんにベルまで。図書館に……」
っと、図書館にいたミーアは、シュトリナの次にベルにチラッと目を向けて……。
「……遊びに来ましたの？」
ベルにイメージが引っ張られたようだった！
「はい。えっと、少し調べ物をしようかと思いまして……。読ませていただいても構わないでしょうか？」
シュトリナはチラリとガルヴのほうに目を向ける。っと、
「それはもちろんのこと。されど、イエロームーンに蓄積された知識の前では、あまり大した情報は得られぬやもしれませぬぞ？」

「いえ、確かにイエロームーン家には毒と薬の知識は揃っていますが、それ以外は心もとないので」
シュトリナは可憐な笑みを浮かべて一礼してから、本棚に目を移した。
「あっ！　森の生存術が揃っているじゃないですか。これ、ボクの時代では、改定されて、危険な知識が書き替えられてて……」
ユバータ司教の前で、いささかキワドイことを、うっかりポロリするベルである。とても素直で正直ないい子に育っているのである！　（リーナ並感）
まぁ、それはさておき……。
――どこから調べればいいかな……。
パティたちにお願いされたこと、それは、蛇の秘術『水土の薬』の作り方と、ハンネスの治療法についての調査である。
ハンネスの側の調査が上手くいかなかった時のために、調べるようにとお願いされているのだ。
基本的に、シュトリナはパティに同情していた。蛇に支配された家で育てられることの苦しさは、彼女もよく知っている。だから、できるだけ協力はしてあげたいと思っているのだが……。
「それにしても、ハンネスさんがかかっていた病気……。聞いたこともないからな……」
毒を扱う関係上、薬にも、そして、病にもそれなりの知識を有しているシュトリナではあるが、その症状を聞く限り、なにをどう調薬したものか……と首をひねってしまう。
「基本的には精気をつけるための食べ物や薬を飲ませる、かな……でも、そう簡単じゃないんだろうな」
つぶやきつつも、帝国内の病について記された本を紐解いていくが……。
「うーん……というか、この症状だと、むしろ、病気だって気付かないかも……」
病気は、病気であると認識されるからこそ、治療法が研究され、

薬が発達していく。されど、ハンネスの示す症状は、俗に言う「体の弱い子ども」と見分けがつきづらい。
もし仮に、なにかの病気でそうなっているのだとしても、これでは気付かれないだろう。
「これじゃあ、なにか、良い食べ物を食べさせて様子を見るというのが基本的な治療になるかも……。貴族ならば、それで多少は寿命が延びるのかもしれないけど……根本的な解決にはならない」
食料に使う金のない庶民であれば、もっと悲惨だ。おそらく、病気だと認識されずに、ただ衰弱して死んでいくのみだろう。
そう考えると、ハンネスは、とても危険な状態だったと言える。
混沌の蛇は、確かにろくでなしではあるが、ハンネスにとっては、救世主と呼んでも良い存在だったのだろう。ろくでなしだが……。
「だからこそ依存せざるを得ないのが厄介だけど……」
蛇が邪悪なだけの存在ならば近づけなければ良いだけのこと。一時的であれど、必要で有用な力を与える存在であればこそ、排除できずに厄介なのだ。
「クラウジウス家と蛇のおかげで生き永らえることができたというのは確かなことなんだろうな……」
まぁ、パティの前では決して口には出せないことではあるのだが……。
「それにしても、病気として認識されてないから、治療法や薬についても記述がないのが厄介かもしれない。イエロームーンにもそれらしい病気の記述はなかったし……」
地を這うモノの書そのものを読ませてもらったことはなかったが、そこから得られる毒と病の知識は、独自に蓄積していたイエロームーン家である。
けれど、その集積された知識にも、ハンネスの病は見当たらなかった。
「蛇が、パティを脅すための材料である病気の情報を、簡単に流してくるわけはないか……」

それから、ふと、シュトリナは思った。
「パティは、誰が薬を調薬しているか、とか、そういうことは知ってたのかな？」
混沌の蛇の性質を考えるならば、全員がその情報を持っていたとは思えない。情報と言うのは、知っている人間の数が増えるほど、漏れやすくなるもの。そんな迂闊なことをするとも思えない。
「お父さまも知らないみたいだったけど……蛇にトップはいないだろうけど、巫女姫みたいな重要な存在が情報を一手に握っていたとか……そういうことなのかな……」
思わず、考え込んでしまうシュトリナだった。

第五十五話　いつかの蛇に、心重ねて

「神聖図書館への入館許可を……」
「ええ、そうですわ。ユバータ司教のご許可が必要とお聞きしましたわ」
ミーアの言葉にユバータ司教は深々と頷き、
「その通りでございます。が……ちなみに、どのような知識をお求めなのでしょうか？」
澄んだ瞳で、そう問うてきた。真っ直ぐに、探るように……見つめてきた。
――ああ、やはり、そうなりますわよね。
ただ見学したいから、では、おそらくは通らないだろう。
ユバータ司教は知っている。
神聖図書館にどのような本が収蔵されているか、ミーアがラフィーナから聞いている、ということを。
だからこそ、きっとこう考えているだろう。
ミーアの目的は、神聖図書館に収められている、混沌の蛇に関連する書物なのだろう、と。
それを踏まえたうえで、ミーアはしばしの逡巡を経て、口を開いた。
「地を這うモノの書に関連する書物、ですわ」
その言葉に、ユバータ司教の目が、わずかばかり鋭さを増す。メガネの奥、瞳に宿ったその光、ミーアは悟る。
――ああ、この方は、ルードヴィッヒやガルヴ学長、ルシーナ司教なんかと同じ類ですわ。下手に言い訳をしたり、誤魔化そうとしたりしたら、却って印象が悪くなる類の人。となれば、嘘は厳禁ですわね。
ミーアの直感の正しさを証明するように、ユバータ司教が厳格な

口調で問いかける。
「なにゆえに、地を這うモノの書の知識をお求めになる、と？」
わずかばかり、ミーアが施したワンクッション……「関連する書物」の部分はざっくりと切り捨てられていた。
――やっぱり、そうですわよね。嘘や誤魔化しは逆効果ですわね。
小さくため息を吐いてから、ミーアは答える。
「答えは先ほど、あなたがおっしゃられていたことですわ。蛇と戦うためには、蛇のことを知らなければならないから、ですわ」
幸い、答えはすぐに出る。
蛇と戦うため。相手のことをよく知り、的確に戦うためである、と。
それは、つい先ほど、ユバータ司教自身が口にした言葉でもあった。ゆえに、説得力がある。なにより、それは嘘でもなければ、口から出まかせでもなかった。ゆえに、ミーアは胸を張って堂々と答えた。
「わたくしが蛇と戦うために、その動きを抑制するために、どうしても、知識が必要なのですわ」
「彼らを炙り出すためでしょうか？　あるいは、攻撃し、殲滅するためでしょうか？」
ミーアは、問いの意味を吟味する。
――炙り出すにしろ、攻撃の手段にしろ、そんなものがあるなら教えろ、と言われてしまいそうですわね。なにより、嘘になってしまいますわ。
ミーアは小さく首を振ってから、
「どちらでもありませんわ。詳しいことは言えないのですけれど……蛇の呪縛を解き、ある少女を救うため……ですわ」
一切の嘘を交えず、ミーアは伝える。
蛇に縛られ続けたパティを助けるため、ハンネスを人質に取られたパティが、自由に動けるようになるため。これから先、過去に戻り、たった一人で戦わねばならないパティの、少しでも援護になる

ために。
……まぁ……これで、自分もちょっぴり楽になるし？　という意識がないではないのだが……さすがに、そこまで馬鹿正直に口に出したりはしない。
後で自分が楽になるから！　というのは、常に、ミーアが念頭に置いている概念ではあるのだが、わざわざ公言するようなことでもないのだ。
まったくもって、そんな自分ファーストなこと、全然思ってもいませんよ？　っというシレッとした顔で、ミーアは言うのだった。
……まぁ、実際のところ、今回に限って言えば「楽になったらいいなぁ」ぐらいには思っているが……三割から四割ぐらいはそう思わないでもないのだけれど……それ以上に、やはり、ミーアは「今」を守りたいのだ。
苦労して、ここまで築き上げてきたものが、過去によって変えられるなどと、そんなこと、真っ平ごめんなのだ。
――そんな酷いことなんか、絶対させませんわ。ここまでわたくしが頑張って来た努力が水泡に帰するなど、絶対に許されることではありませんわ。
そうなのだ……ミーアは、この時初めて……「混沌の蛇」の誰かさんと心が重なってしまったのだ！
せっかく、成功したことを、過去に戻って覆されるとか！　やってらんねーよ！！　と……どこか遠くで叫ぶ蛇の声に、心の底から同意できてしまいそうな、そんな心持ちのミーアなのであった。
「いかがかしら……。神聖図書館に収められている本を、わたくしたちに読ませてはいただけないかしら？」
「重ねての問い、大変、心苦しく思います。されど、お聞かせください、ミーア姫殿下。あなたのお求めの知識は、具体的にはなんですか？」
ユバータ司教は、けれど、頑強であった。
「私個人としましては、ミーア姫殿下は全幅の信頼に値するお方で

あると考えています。されど、神聖図書館館長として、問いたださねばならぬことがあるのです。地を這うモノの書は、危険な書物です。その誘惑は、人間であれば、誰でも揺らいでしまう、それほどに強力なものなのです。ゆえに……」

「そう……ですわね」

刹那の逡巡……その後、ミーアはガルヴのほうに目を向けた。

そう言えば、彼にも聞いたことはなかったかもしれない。智者二人がこの場に集っている現状、聞かずにいるのはもったいないかもしれない。

ミーアは意を決して、口を開いた。

「ある病を治すための薬……その知識を求めておりますの」

「薬、ですか……」

「ええ。水土の薬、と呼ばれるものなのですけど、お心当たりはございますかしら？」

その問いかけに、ユバータ司教は首を傾げた。

第五十六話　ミーア姫、パンケーキの浪費は避けたい所存

「水土の薬、ですか……」
記憶を探るように、ユバータ司教は瞳を閉じた。そのまま考え込むことしばし……。
「いえ、申し訳ございません。ミーア姫殿下。すぐに思い当たるものはございません」
わずかばかりの困り顔で、そんなことを言った。
「そう。ちなみに、火風の薬というのはいかがかしら？　これは実際に蛇が使った薬で……灯台を吹き飛ばすほどのとんでもない物なのですけど……」
「なんと、そのように恐ろしいものが……？」
ミーアは一つ頷いて、それからハンネスの受け売りの知識をユバータ司教に披露する。水土、火風、どちらの薬も創世神話における二つの果実を用いた薬であることを口にした時点で……。
「なんと……。創世神話の木の実が材料？　そのようなことが……」
衝撃を受けた表情で固まるユバータ司教に、ミーアはちょっぴり慌てる。
「もちろん、彼らが勝手にそう名付けているだけかもしれませんけれど……」
「はい。確かに……神話に基づいて、単純に名前を付けただけかもしれません。あるいは、神聖典を汚すために、あえて、そのように地を這うモノの書に取り込んだか……逆に、地を這うモノの書の権威付けとして使っているだけかもしれませんが……」
ユバータ司教の声は、とても硬かった。
もしも仮に……蛇と言うものが創世の時代より存在しているモノであるとするならば、その脅威は、後の時代にパッと出て消えていく、泡沫のような邪教の集団よりも大きいからだ。元より、蛇の脅

威度は高かった。けれど、その存在が超古代から生きながらえているものだとするならば、改めて、その恐ろしさを実感せざるを得ない。
古さとは、時に一つの権威だ。古から語り継がれてきた言葉には、重さが宿るし、人々に対する影響もより広く深くなる。
まして、世界の始まり、創世の時代よりの悪が、今、直面している敵であるとするなら、その脅威は計り知れない。
どこか呆然とした様子のユバータ司教に咳ばらいを一つして、ガルヴは言った。
「実際のところ、古き時代から語り継がれてきた知識であるならば、語源的な変化も考えたほうがよろしいかもしれませぬな」
「はて……語源的な変化、ですの……？」
なんのことやら、と小首傾げるミーアに一つ頷いてから、ガルヴはユバータ司教に目を向けた。
「神聖典の専門家、言語のスペシャリストたるユバータ司教がおられるのであれば、自分などが指摘するまでも無きことかとは思いますが……。簡単に言ってしまうと、その薬を言い表す名前が、現代とは異なる可能性がある、ということです。水土の薬と火風の薬、その名のつけ方は四元論に基づいたやり方でしょうが、その考え方が発生したのは、創世神話の時代より後のことになる。ゆえに、それ以前の資料では、薬の呼び名が変わっている可能性があるのではないか、と」
「なるほど。知恵の木の実の薬と命の木の実の薬、と、創世神話の言葉に合わせるならば、そんな呼び名で記録されている可能性もありますわね」
「さようでございます。また、同じように二つの木が生えていたとされる地名であったり、その他の地名も、なにか別のものに変化している可能性もございます」
「言葉は日夜変化する、ということですわね。実に厄介な話ですけれど……」

将来的に「帝国の叡智」の意味が「あり得ないほどの幸運」と置き換わる可能性だとてゼロではないのだ。むしろ、真実が明らかになれば、その可能性が高いとすら言えるかもしれないわけで……。

「もっとも、創世の時代の木の実を材料とする薬というのが、どこまで本当なのかは定かではありませぬが……」

ガルヴの言葉に、重々しく頷いてから、ミーアは改めてユバータ司教のほうに目を向けた。

「……いずれにせよ、今すぐに、という話ではありませんわ。今はパライナ祭のほうに尽力したく思っておりますし……」

腕組みし、ビシッと言うミーアである。

今、目の前に迫っている問題は、パライナ祭を無事に開催し、大陸各国に新種の小麦の存在を知らしめること、その栽培方法を伝授することである。

事の優先順位を誤ることのない、非常に有能な皇女殿下なのである！　……などということは、もちろんなく……。それは、ちょっとした逃避から出た言葉であった。すなわち、

――複数の言語体系を視野に入れた調べ物とか……聞いただけで頭が痛くなってきますわ。うう……想像しただけで甘い物が不足してきてしまいますわ。

これである。

なので、とりあえず、忙しいアピールをしておいて「なんなら、私のほうで調べておきますが？」と、ユバータ司教が言い出さないかなぁ、と期待してしまうミーアである。

本当であれば、ルードヴィッヒかハンネス辺りに行ってもらって調べてもらいたいところではあるのだが……。ルードヴィッヒが帝国を離れている間に、ギロちんがひょっこり訪ねてきたら一大事である。それに、ハンネスは蛇と繋がりが深いクラウジウス候だ。そんな人物を派遣したとあっては、ヴェールガとの仲がこじれてしまいかねない。

であれば、少なくともミーアが家臣団を率いていくという形を整

えなければならないわけで……。
そして、帝国の叡智が同行しているとなると、ルードヴィッヒらが、どんなことを言い出すかは、なんとなくわかっているわけで……。
――わたくしのところに資料がたっぷり集まってきて、読まされる未来が見えますわ……。
そんなことになってしまったら、いったい何枚のパンケーキを犠牲にしなければならないというのか！　とミーアは悲嘆に暮れる。
きっと十枚、二十枚では済まないパンケーキを食べる羽目になるだろう。
ミーアは難しい顔でうつむきつつも……。
――それはそうと、今日のオヤツはパンケーキにしようかしら……？
などと思うのであった。

第五十七話　ミーアの忠臣なのである

帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンが個性を好む人だというのは有名な話である。

彼女は、人間を形作る様々な人格を許容するだけでなく、それを愛し、その違いを重んじた。

「様々な違いは、可能性の多様さを生む。いろいろな問題に対処し、ギロち……悲劇を回避し、より良い未来を迎えるためには、さまざまな人材が必要となるのは自明のことですわ」

そんな言葉が、ミーアの発言として残されている。

さて……そんな「個性」を愛するミーアの学園、聖ミーア学園だが、そこに通う者がすべて品行方正、一律的にミーアに絶対なる忠誠を誓う者たちだけである……と考えるのは、ある種の矛盾のある話であって。

当然、ミーア学園にも様々な考えの学生が通っているのであった。

ミーアの言葉を聞きながら、特別初等部の子どもたちに鋭い視線を送る少年の姿があった。彼の名前はドミニク。ドミニク・ベルマン、十四歳。そう、あのベルマン子爵の長男である！

もともと、グロワールリュンヌ学園に通っていた彼であるが、父の命令により、この聖ミーア学園に転校させられていたのだ。

……最初、彼はふてくされていた。

なぜ、中央貴族の子弟が通う名門校から、こんな辺境の新設校に転校させられなければならないというのか。しかも、生徒の中には、辺土伯の息子や近隣のルールー族の子ども、さらには孤児院出身の者たちもいるし、講師の中にすら貴族でない者がいるというではないか。

いかに皇女肝いりの学園だといっても、あんまりではないか！

などと……憤っていたのも、今は昔。その状況には、いくつかの変化が訪れていた。
一つは、中央貴族、ローゼンフランツ伯爵家令嬢ペトラが入学してきたこと。
別に恋などではないのだが、伯爵家の令嬢が入ったことに彼は驚いた。
「……まぁ、ミーア姫殿下のご機嫌取りかなにかだろう」
などと冷めた目で見ていた彼であったが、さらに仰天させられることになる。なんと、ほどなくしてサンクランド王国の第二王子エシャールまでもが、入学してきたのだ。
「たっ、大国サンクランドの第二王子が、なぜ、こんな片田舎の学校に……？」
しかも、王子を連れてきたのは、帝国四大公爵家令嬢、エメラルダである。どちらも、ドミニクにとっては雲の上の存在だ。
そんな人たちが、平然と訪れるこの学園はいったいなんなのか……。少年の頭には、やがて、劇的なパラダイムシフトが訪れる。
すなわち……。
「この聖ミーア学園って、もしかして、大国の王子殿下が通うほど、すごいところなのかも……？」
エシャールの存在は、彼のかけていた色眼鏡を外させ……否、曇らせた！
すごい学園だと思って見てみれば、確かに、ミーア学園に集う生徒たちは傑物揃いであった。
植物の知識に長じたセロ・ルドルフォン。万能の才女セリア。さらに、木像加工……もとい、木材加工に才能を開花させつつあるワグルなどは言うに及ばず。
それ以外の者たちも、顔つきが違う！　目つきが違う！！　熱意が、まるで違う！！！
皇女ミーアに見出された孤児たち、この学園で学び、成長し、いつか、姫殿下の役に立ちたいとの思いを持った者たちだ。その溢れ

出る熱に、彼はあてられた。
それは、かのグロワールリュンヌでは決して感じられないものだった。
そして、幸いなことに彼は……まだ若かった。
諦めに身を委ね、冷笑を浮かべる大人ではなかった。擦り切れ疲れた大人でもなかった。
青春の真っただ中で、溢れる活力を持て余した少年が、燃えるような情熱のただ中に投げ入れられたらどうなるか……。
ドミニクは感化された。絶対に自分もこの学園で功績を挙げてやる……そんなやる気を刺激された彼は、真剣に〝学業〟に取り組むようになった。
ちなみに、ミーア学園で言うところの〝学業〟という言葉は、半分はもともとの意味であり、もう半分は「帝国の叡智の偉業を学ぶ」という意味であったりするわけで……彼は熱心に、その〝学業〟に取り組んでいるのだが……。まぁ、それは別に良い。
ドミニクは、アイデアマンだった。
植物学を深く学ぶでもなく、事務作業に優れているわけでもなく、職人の技術に才能を発揮するでもない。彼が得意としたのは、発想力。既存の知識を下敷きに、それにひと手間加えることで、新たな価値を生み出す……そのような才能だった。
そんな彼の生み出したものこそが……そう「小麦畑ミーアート」であった！
父子ともども、ミーアの天敵（ちゅうしん）なのである！
……そして、まぁ、これは余談なのだが、ミーア亡き未来において、ベルを救ったのも他ならぬドミニクであった。
彼は、皇女パトリシャンヌの「自らを囮とすることで，娘を助けようとする作戦」に全面的に協力。子爵領の私兵団とルドルフォン辺土伯の残党とを糾合した大規模な陽動・遅滞作戦を成功させ、司教帝の軍を見事に欺いてみせた。
そして、自らは、その戦いで戦死することになった。

……父子ともども、紛れもなく、ミーアの忠臣なのである。
そんなドミニクであるがゆえに、セントノエル学園特別初等部の子どもたちには敵愾心を燃やしていた。敵愾心というか、ライバル心というか……。
すでにミーアたち一行が来てから四日が経っていた。その間、彼はずっと特別初等部の子どもたちを観察していた。
――ミーア姫殿下の寵愛を受けた……セントノエルの孤児たち。いつでも、ミーア姫殿下のお話しを聞ける環境にいるなんて、なんてズルいんだ。
しかも、相手は、まだ、なんの手柄も立てていないのだ。
――ふん。ミーア姫殿下は、将来に期待するようなことを言っていたけど……少しばかりいじめて……じゃない。教育的な指導をしてやるか……。
そんなことを考えて、彼は、見学中の特別初等部の子どもたちを探し始めた。

第五十八話　紳士的にわからせる！

特別初等部の子どもたちは、ちょうど、建物の脇にある虹色のミーア木像を眺めているところだった。それは、ルールー族の紛争の際、和解、並びに皇女ミーアへのお礼の印として、ルールー族から贈られたものだった。

本来、それは、父であるベルマン子爵の敗北の証ともいえるようなものであったが、ドミニクは気にしていなかった。むしろ、聖ミーア学園が、紛れもなく帝国の叡智ミーアの建てた学園なのだと表しているようで、それを見るといつも、誇らしい気持ちになるのだ。

なので、子どもたちが、像を前に感嘆の表情を浮かべていることに、少しだけ満足して……。それから、キリリッと表情を整えて歩み寄る。

「こんにちは、セントノエルのみなさん」

『セントノエルの』を、あえて強調する、ちょっぴりアレなところのあるドミニクである。

子どもたちの視線が集まったのを確認してから、彼は胸に手を当てた。

「俺は、ドミニク・ベルマン。ベルマン子爵領の領主、ベルマン家の長男にして、この聖ミーア学園の！　二年生だ」

堂々たる名乗りを上げ、華麗に頭を下げる。

基本的に、特別初等部の生徒に対して敵対的な彼であるが……、他ならぬミーアから、お願いされている。乱暴な態度を取るわけにもいかないし、露骨に見下すようなこともちろんしない。あくまでも紳士的に礼を尽くす。

聖ミーア学園の生徒である以上、学園の名を汚すような真似はできない。

そのような態度を取りつつも……どちらが帝国の叡智の生徒に相

応しいかを、きっちりわからせようというのだ。
「あっ、えと、はじめまして……ヤナです。こっちは弟のキリルで……」
反射的にそう返してきたのは、一人の少女だった。額に特徴的な刺青がある、美しい少女だった。
――ふん、まぁ、月の美しさを誇るミーア姫殿下には劣るけど……。
海月の美しさを誇るミーアを、そんな風に評してしまうあたり、ドミニクの審美眼は大いに曇っているようだが……まぁ、それはさておき。
続く子どもたちの自己紹介を受けて、うんうん、と頷く。
ガキ大将っぽい雰囲気なのはカロン。頭が良さそうな眼鏡の少年がローロ。それに、ミーア姫殿下に少しだけ雰囲気が似た少女がパティ。
他にも年少組が何人かいたが、とりあえずは、年長組のほうをわからせてやればいいだろう、と判断。視線をそちらに向ける。
「その像が気に入ったのかな？」
「はい。とても綺麗な像だなってみんなで話をしていて……」
「そうかそうか。ふふふ、それは聖ミーア学園を象徴するような像だよ。この像の由来は知っているかな？」
彼の問いかけに、フルフルと首を振る子どもたち。そんな彼らに、ドミニクは丁寧に、朗々と、語る。
ミーアがここで成したことを……。この森に訪れた奇跡の逸話を。
「……そうして、我がベルマン家の過ちを正し、森でのいさかいをおさめてくださった。その時の出来事を参考に作られているんだ。ちなみに、この七色に輝く木は、静海の森にある木で、よく磨くとあんな色になる。我がベルマン子爵領の特産品にならないかと今、相談しているところで……」
などと、小さい子どもでもわかるように、わかりやすく丁寧に解説してあげる。

無論、わからせるためである！
「ところで、ＦＮＹミーアランドはどうだったかな？　子どもでも楽しめるものもあったと思うけど」
次に視線を向けたのは、幼年の子どもたちのほうだった。怖がらせないように膝を屈めて、視線を合わせる。
常に紳士であることを心掛ける。あくまでも優しく、丁寧に……格の違いをわからせてやるのだ。
悪辣な態度、蔑むような態度を取れば咎められる。されど、丁重に、紳士的に、事実のみを親切に教えてあげるだけならば、なにも咎められることはない。そうやって格の違いを見せつけてやれば、誰からも文句を言われる筋合いはないのだ！
それはかつて、ティオーナ・ルドルフォンに向けて、どこかの姫殿下が取ったような態度に、少しだけ似たものであった。聖ミーア学園にしっかりと受け継がれるミーアのやり口である。
それはさておき……。
「えっと、すごく楽しかったです。いろいろなミーアさまの像があって……」
「あの畑のアートも素晴らしかったです」
その答えに、彼はパァアッと顔を輝かせた。
「ふっふっふ、実は、あのアイデアを出したのは、他ならぬ俺なんだ」
「えっ……そうなんですか？」
「そうだ。小麦畑に小麦以外のものを植えると聞いて、それで絵にしてみたらいいんじゃないか、と思ってね」
丁寧に、優しく解説しつつ、お前たちよりも、俺たちのほうがすごいんだぞぅ！　っと、気持ちよーくわからせてやっているところで……。
「んっ？」
ふと、彼の耳がこちらに近づいてくる音を捉えた。それは、連なるようにして、向かってくる馬車の音で……。視線を向けると、馬

車の一団が、走ってくるのが見えた。
「あれは……？」
先頭を行く豪奢な馬車に、かすかに眉をひそめるドミニクであった。

第五十九話　小さき貴族の誇り

土煙を上げやって来た馬車の一団は、ドミニクたちの目の前で止まった。

その馬車を見て、ドミニクは思わず気圧される。

一目見ただけでもわかる豪勢な馬車だった。ベルマン家で保有するどの馬車よりも立派な車体だった。さらに、馬車を守るようにして随伴する騎兵の動きも見事に訓練されたもので、ミーア一行を護衛してきた近衛兵にも引けを取らない動きに見えた。

国の重鎮……相当な大貴族がやって来たことが窺える。

――いったい、誰が来たっていうんだ……？

固唾を呑んで見守る最中、扉が開き、降りてきたのは一人の男だった。手入れの行き届いた豪奢な金髪と、高そうな装飾の施された服。自らの父、ベルマン子爵の晴れ着でも、あれほどの物はそうはないだろう、と思わせるほどの高級感。

けれど、それ以上に、ドミニクを緊張させたもの、それは、男の顔に見覚えがあるという事実……。

――あの顔……あの人は、グロワールリュンヌのっ！

男は、初等部の子どもたちに目をやると、小さく舌打ちした。

「邪魔だ。汚らわしい」

そう言って、一番、手前にいた年少組の少女に手を伸ばした。ドンッと押された少女は、バランスを崩し、そのまま倒れそうになる。が、間一髪！　カロンが走り寄り、少女の体を支える。

貧民街育ちで鍛えられた俊敏さがかろうじて発揮された形だったが……。一方で、少女は、ポカンと目を丸くしていた。

セントノエル島で暮らすようになってから、久しく遠ざかっていた大人からの暴力に、驚き、固まってしまっていた。

「なにしやがるっ！」

カロンが男に食って掛かる。けれど、男は、冷めた目をカロンに向けると、
「嘆かわしい。これだから、嫌なのだ。こんな学校を作るから、愚にもつかない者たちがつけあがる」
吐き捨てるように言い、
「失せろ。汚らわしい貧民のガキが、我ら帝国貴族の視界に入って来るな」
「そこまでに、してもらいましょうか」
子どもたちをかばうように、一歩前に出たのは、ドミニクだった。拳をギュッと握りしめ、男と対峙する。
特別初等部の子どもたちは気に食わない。しかし、同じミーアの選んだ学生だ。
ここで、何も言わずに放っておくことは、何もせずに傍観することは、自らの誇りを傷つけるばかりか、聖ミーア学園の生徒としての誇りすらも傷つけることだった。
「この子どもたちはセントノエルの学生です。あなたは、ヴェールガ公国の、中央正教会のやり方を非難するおつもりですか？」
怒りを覚えつつも、あくまでも冷静に、理を説く。っと、男の視線がドミニクに向いた。
「君は……どうやら、貴族の子弟のようだが……」
スッと男の目つきが鋭さを増す。
「平民をかばい立てするというのかね？　しかも、その子ども……特に額に刺青を持つ者たちはガヌドスの海賊の末裔だぞ？　そんなものをかばい立てすると、君の家の名に傷がつくとは思わないのかね？」
「関係ありません。ここは、聖ミーア学園。ミーア姫殿下の治める地ですから」
そして、同時にここは、他ならぬ父、ベルマン子爵が任された地でもある。誇り高きベルマン子爵家に連なる者として、黙っているわけにはいかない。

「呆れた価値観だ。帝国貴族に連なる者が、まったく嘆かわしい……いや、待てよ」
そこで、男は顎に手をやり、ドミニクをジッと見つめて……。
「ああ、そうか。見覚えがあると思った。君は、グロワールリュンヌにいたベルマン君じゃないか」
嘲笑うように、男は言った。
「辺土と中央の境界貴族が、偉そうに。グロワールリュンヌから逃げ出した者が教師たるこの私に説教を垂れるとは。世も末というものだな！」
「なっ。俺は逃げ出してなど……」
「落ちこぼれ貴族の父の言葉に従って、辺境の新設校に転入したのだろ？　逆らいも、抵抗もせずに。はは、これが逃げたと言わずしてなんと言う？」
叩きつけられた侮辱の言葉に、怒りで目の前が白くなる。危うく殴りかかりそうになるのをなんとか堪えたのは、ここで自分が問題を起こせば、聖ミーア学園の名に傷がつくから。
そして、今、背中にかばう子どもたちを守る者がいなくなってしまうから。
大きく息を吐き、ドミニクは言う。
「俺に対する侮辱は置くとして、子どもたちに対する侮辱に謝罪を要求する」
「はっ！　負け犬がなにをほざくか……」
「なにを騒いでおる？」
不意に馬車のほうから声が聞こえた。直後、そこから一人の女性が降りてくるのが見えた。
豪奢に広がるスカート。その色は濃い青色だ。美しい花の刺繍の施されたドレスを優雅に揺らしながら、その女性はドミニクの前に立った。扇子で顔をあおぎながら、
「まったく、暑いというに、なにを騒いでおるのじゃ？」
女性は、男のところまで来ると、その額をペシッと扇子で叩いた。

「くだらぬ騒ぎを起こすな。たわけが。こちらには陛下もおわすのであろ？」
「はっ。申し訳ございません。ヨハンナさまのお目に入れるも汚らわしい者どもがおりましたゆえ……」
ヨハンナ……その名に、ドミニクは覚えがあった。
帝国四大公爵家……星持ち公爵家の一角、ブルームーン家の公爵夫人が、確か、そのような名前ではなかったか……。だとすれば……。
「いちいちくだらぬことを申すな。見ただけで、このわらわを汚すことが、いったい何者にできようか」
ペンっと、畳んだ扇子で男の額を叩いてから、彼女はドミニクのほうに目を向けた。その鋭い視線は、さながら、戦場の騎士のごとく、ドミニクを貫いた。
「して、なんじゃ、お前は……。帝国貴族の子弟かえ？」
ぱちり、ぱちりと扇子を手の中で弄びながら、
「名乗ることを許そうぞ」
厳かに……許しを与えた。
圧力に押されるようにして、ドミニクは膝をついた。
「俺……私は、ベルマン子爵家が長男、ドミニクと申します」
「ベルマン？　ベルマン……ああ、中央貴族の末席、ベルマン子爵か。言われてみれば確かに、ここはもともとベルマン子爵の領地であったか……」
深々と頷いてから、再び、鋭い視線が突き刺さる。
「ふむ、子爵の小倅か。その小倅が、わらわの供に、なんぞ、文句を付けていたように見えたが……」
聞いた瞬間、背筋が震えるような声……。息が止まるほどの迫力に、ドミニクの顔から血の気が引く。
公爵夫人の一行の邪魔をしたとなれば、ただでは済まない。まして、ドミニクはまだ、自身が爵位を持っているわけではないのだ。さらに、口答えなど、決して……決して許されるわけがない。

けれど……。それでも……。
「恐れながら、そちらの方が、セントノエルの学生に乱暴を働こうとしておりましたので……」
彼は、諫言を止めることはない。今、この場で子どもたちをかばえる者はいないという認識が……それ以上に、聖ミーア学園の一員として、恥ずべきことはできないという自負が、彼を支えていた。
「それに、この地でそのような乱暴が振るわれることを、ミーア姫殿下は……」
「なにを言うか！　この痴れ者が！」
言葉を遮ったのは、男のほうだった。ヨハンナはそれを、ただ黙って見ているのみで……。
「グロワールリュンヌから、このような辺境の学園に転校させられた愚物が、この私に文句を……」
っと、声を震わせる男であったが、その言葉が途中で止まる。
「あら、いったい、なんの騒ぎかしら？」
凛とした、涼やかな声が響いた。
そちらに目を向ければ、今まさに、その人が歩いて来るところだった。
「このように、我が学園の前で……しかも、子どもたちの前で、そのように大声を出すものではありませんわ。客人が、怖がってしまいますわ。この子たちはセントノエルの……聖女ラフィーナさまの寵愛厚き子どもたちなのですから……」
そうして、皇女ミーア・ルーナ・ティアムーンは穏やかな目を男に向けて、
「あまり、帝国貴族の品位を傷つけるようなことをするべきではない、とわたくしは思いますけれど……」
一転、その顔に怒りの表情を浮かべた！

第六十話　ミーア姫は怒っていた。ところで余談だが……。

ミーアは怒っていた。このうえなく怒っていたのだ！

それは、目の前で行われた非道に対する義憤……などでは、もちろんなかった。頭を打ってうっかり正義に目覚めてしまった、などということも当然ない。言うまでもないことだが。

……では、なぜかというと――ところで、これは完全に余談なのだが、ミーアはここ数日、非常に鬱憤が溜まっていた。聖ミーア学園での日々は、ミーアの精神力をゴリゴリッと削っていたのだ。

念のためにと訪れたルールー族の村では、今まさに、虹色のミーア木像が量産体制に入りかけているのを、寸でのところで止めた（すごく危なかった！）し、皇女ミーア学なる、ミーアの発言から、その深淵なる思考を探るというトンデモ授業を見学した際には、過去の発言の真意を問われ、引きつり笑顔で答えたり、学生たちの忠義の産物的なナニカの数々に、思わず胃もたれを覚えたり……。

ともかく！　非常に！！　鬱憤が！！！！　溜まっていたのだ！！！！

……まぁ、だから、どうということはないのだが、ともあれ……そんなミーアが、

「うう、つ、疲れが取れませんわ。でも、もうすぐランチの時間ですし……食堂であまぁい物をたぁっぷり食べて午後に備えねば……うううぅ……」

そんな、空腹の、ミーアが、見てしまったのだ！

特別初等部の子どもたちを、大人げなくもイジメようとする男の姿を！！！！

――くぅっ！　この期に及んで、これ以上の問題を起こそうなどと……ばっ、万死に値しますわ！！

ただでさえ、特別初等部の子どもたちが、この帝国で嫌な目に遭

ったら一大事なのだ。ラフィーナに知られれば、
「そう。それは、良くないことね……それで、ミーアさん。責任者の方には、きちんと責任を取っていただいたのかしら？」
などと、涼やかな笑みを浮かべながら、ちょっぴり獅子耳がチラリしてしまうかもしれないではないか！
それに、ミニ司教帝ことレアもこの場にはいる。リオネルやユバータ司教など、ヴェールガ関係者もいる以上、誰にどう情報が伝わるかわかったものではない。
あのような非道など、言語道断！
ミーアは、念のため、男の顔を確認……見覚えがないけど、嫌な奴っぽい！　蹴りあげてやっても問題なし、と判断！
正義は我にあり！　ちょうど良い鬱憤晴らしに、お尻を蹴っ飛ばしてやりますわ！　とばかりに、ズンズン歩み寄っていき……。
「あら。いったい、なんの騒ぎかしら？　このようにわが校の前で……しかも、子どもたちの前で……」
穏やかに、いっそ、優しく感じられるほどの口調で、語りかける。
「そのように大声を出すものではありませんわ。客人が、怖がってしまいますわ。この子たちはセントノエルの……聖女ラフィーナさまの寵愛厚き子どもたちなのですから……」
さらりと、厳かな顔で、獅子なる聖女ラフィーナの威光を身にまとう！
「あまり、帝国貴族の品位を傷つけるようなことをするべきではない、とわたくしは思いますけれど……」
今すぐにでも蹴り上げてやりたい衝動を堪えつつ、男を睨みつける。
男は、ああん？　っとミーアのほうに目を向けると、直後、ハッとした顔をして……。
「あっ、こ、これは、大変失礼を……ミーア姫殿下……私はっ！」
「ミーア姫殿下、ご機嫌麗しゅう」
男の言葉を遮るようにして、艶やかな女性が進み出た。男のほう

に怒りと注意を向けていたミーアは、一瞬、不意を突かれた。
――あら、これは……。まさか、ブルームーン公爵夫人自らがいらっしゃるとは……。これは少々意外でしたわね。
そう思いつつも、スカートをちょこんと持ち上げて挨拶する。
「ご機嫌麗しゅう、ブルームーン公爵夫人」
「ほほほ、お変わりないようで、なによりじゃ。ミーア姫殿下」
上機嫌に微笑んで、ブルームーン公爵夫人ヨハンナは言った。
ちなみに、ミーア個人としては、ヨハンナのことをそれほど嫌ってはいない。ごく普通の親戚の女性という感じである。どちらかというとわかりやすく、からっとした印象で、それほど厭味な人という印象もないので、自然とその表情は柔らかくなる。
「ええ。過日は、盛大な誕生パーティーを改めて感謝いたしますわ。サフィアス殿やレティーツィアさんにも、いつも良くしていただいておりますわ」
そこまで言ってから、ミーアは表情を引き締め、上目遣いに見つめる。
「それで……この聖ミーア学園に、なにかご用ですの？」
「いや、なに。こちらに陛下がおわすとお聞きしたゆえ。一言ご挨拶をと思ったまでのこと。それと、ミーア姫殿下の肝いりという学園を、妾も一度見てみようか、とな」
扇子を取り出し、パタパタとあおぐ。
「それで、陛下はいずこにおられるのかえ？　ご挨拶をせねば。それに、ここは暑くてかなわぬ」
そうして学園に入って行こうとするヨハンナに、ミーアは言った。
「ええ、もちろん、ご案内いたしますわ。けれど……」
っと、一度言葉を切ってから、
「その前に、そちらのお供の方には謝っていただきたいですわね」
「へ……？」
ミーアが鋭い視線を向けたのは、男のほうだった。
さすがに、ブルームーン公爵夫人を責めるようなことはしない。

今後のことを考えて、きちんと勢力の切り分けを図っておく。ヨハンナのお供でやって来たとは言え、この男とヨハンナは別に扱う、とはっきり示しておくのだ。
「どこの方なのかは知りませんけれど……」
「ああ、この者はグロワールリュンヌの教師じゃ。我がブルームーン公爵家の縁戚であるフーバー子爵じゃ」
フーバー子爵、と呼ばれた男は、深々と頭を下げる。
「以後、お見知りおきを。ミーア姫殿下。我がフーバー子爵家は、グロワールリュンヌにて長く教鞭をとっております」
「ほほう、グロワールリュンヌで……」
ミーアは静かに男を見つめてから、思わず唸る。
――なるほど、この方が、サフィアスさんのお手紙にあった方なのかしら……？
首を傾げつつも、とりあえず、先制パンチ、とばかりに釘を刺しに行く。
「教師と言うのであれば、しっかりと礼儀を心得ているでしょうし、安心しましたわ。ならば、わかりますわよね？　悪いことをした時に、どうしなければならないか……。それに、この子どもたちがヴェールガ公国の庇護下にある子どもたちであるというのが、どういう意味を持っているのか……。その子たちに、どのような態度を取ればいいのか、ということも」
腕組みしつつ、ミーアはジロリ、と睨みつける。けれど……。
「おお、なんと。知らなかったこととはいえ、それは大変な失礼をしてしまったものじゃ」
いささか、芝居がかった声を上げたのは、ヨハンナのほうだった。
「皇女殿下たるミーア姫殿下のお客人に、そのような無礼を。従者の罪は、主の罪であろ。妾の供が、すまなんだ。許してたもれ」
そうして、ヨハンナは素直に子どもたちに頭を下げる。それを見て、ミーアはまたしても意外な想いに囚われるが……。
「さて……これで、よろしいかえ？　ミーア姫殿下」

「え……ええ。そうですわね。それでは、ご案内いたしますわ」
毒気を抜かれたミーアは、しぶしぶ頷く。それから、特別初等部の子どもたちに目を向けた。
「大丈夫？　帝国の貴族が、大変申し訳ないことをしましたわ」
その言葉を受けて、子どもたちは、ビックリした様子で、それから、慌てて首を振った。
「……大丈夫。ドミニクさまが、守ってくれました」
代表して、パティが報告してくれる。静かな瞳でジッと見つめてくるパティを見て、ミーアはその真意を悟る。
――信賞必罰ですわね。なるほど、確かにその通りですわ。
それから、ミーアはニッコリ笑みを浮かべて、ドミニクのほうを見て。
「ドミニクさん。特別初等部の子どもたちを守ってくれましたのね。感謝いたしますわ」
「なっ！　なぜ……どうして、俺のことを……」
「ベルマン子爵のご子息、ですわよね？　もちろん、存じておりますわ。ミーア学園の生徒として、よくやってくれましたわ」
優しい口調で言って、それから踵を返した。
そうなのだ、ミーアは、彼、ドミニクが何者なのか、きちんと知っていたのだ。
なにしろ、彼は、例のヤベェ小麦畑のアイデアを出した要注意人物である。チェックしていないわけがないではないか！
ミーアは、学園に来た初日に、ガルヴからそのことを聞き出しており、それが、あのベルマン子爵の息子だと聞いて、ギリギリと歯ぎしりしたものだった。
「ぐ、ぐぬぬ、ベルマン子爵も厄介な方でしたけど、その息子が、まさか、あのようなことを企もうなどと……」
なぁんて、憎々しく思っていたのも今は昔……。
――帝国貴族に嫌がらせを受けたけれど、それを守ったのも帝国貴族だった。となれば、まぁ、ある程度の悪評は相殺されるのでは

ないかしら……。
腹の中で、そんなことを思いつつ、ミーアはヨハンナたちの案内に戻った。

第六十一話　ドミニクはちょっとだけ混乱した！

さて……ミーアたちが去っていくのを、ドミニクはポッカーンと口を開けて見送っていた。その背が見えなくなった瞬間、彼の顔にジワジワと笑みが広がっていき……。

「み、ミーア姫殿下に、褒められた……！」

実感は遅れてやってきた。思わず、グッと拳を握りしめる。

なんと……光栄なこと。なんと誇らしいことだろう！

あの皇女ミーア学で学んでいる帝国の叡智に、数々の奇跡を成した帝国の聖女、否、大陸の大聖女に、あのようにお褒めいただくなどと……！

かつて、皇帝陛下から「皇女の町」の建設を命じられた父は、屋敷に戻って来て小躍りしていた。あの時の嬉しそうな顔が、ドミニクの脳裏に甦る。

――そうか。父上は、きっと、このような気持ちだったんだな。

踊り出したくなるのを懸命に堪えつつ、幸せを噛みしめるドミニクである。自分の行動は、間違っていなかった……と、心なしか涙ぐみ、感動に打ち震えていると……。

「あ……あの……」

ふと見ると、先ほど突き飛ばされた女の子がこちらを見ていた。上目遣いに、なにかもの言いたげに、ドミニクを見つめてくる。

一瞬、うん？　っと考え込んだドミニクだったが、すぐに、ぽんっと心の中で手を打って、

「ああ、そうだったね。君、大丈夫だったかい？」

この子は、大人の男に突き飛ばされたのだ。どこかにぶつけた、といったことはなかっただろうから、ケガはしていないだろうが、それでもショックは受けているだろうし、年長者として、上に立つ者として、気遣う必要があるだろう。

「君も、よく受け止めたね、カロン。さすが年長組の男子だ」
それから、ドミニクはカロンのほうにも声をかける。カロンは、それで、照れくさそうに鼻の頭をかいた。
「あ、あの、ありがとう、ございました。ドミニクさま」
その声に、少女のほうに目を向ける。っと、少女は途切れ途切れにそう言うと、ポッと頬を赤くして、いそいそとヤナの後ろに隠れてしまった。
その、見ようによっては怯えているようにも見える態度を見て、ドミニクは眉をひそめる。先ほどのことが原因で、無闇に貴族を恐れるようになっては一大事だ。せっかく、褒めてもらったというのに、台無しになってしまう。
フォローすべく、彼は口を開いた。
「帝国貴族が怖がらせてしまったのなら申し訳ないことをした。我が帝国の名誉のために言っておくが、帝国貴族はあのように非道な男ばかりではないと、それだけは覚えておいてもらいたい」
頭を下げ、そんなことを言うドミニク。
彼の顔と、それから、ヤナの後ろに隠れた少女とを交互に眺めていたパティが、なにやらもの言いたげな顔をしていたが……結局は、開いた口から言葉が出ることはなく。ただ小さくため息を吐くのみだった。
「ところで、どうかな？　気分転換に、食堂でオヤツにするというのは。無礼のお詫びに、とっておきをご馳走してあげようかと思うのだが」
そんなドミニクの言葉に、ワッと沸く子どもたち。それを見て、満足げな笑みを浮かべるドミニクであったが……。
「ドミニク・ベルマン、殿？」
その時だ。背後から、ドミニクに声をかける者がいた。
振り向いた先に立っていた少女を見て、ドミニクは小さく首を傾げた。
「ん？　君は……？」

確か、皇女ミーアの一行にいた少女だったか。特別初等部の関係者というわけでもないようだが、セントノエルの生徒だろうか。ということは、貴族か、あるいは、どこぞの商人の娘か……。どこかミーアに面影の似た少女だが、いったい、何者なのだろうか、と思っていると、不意に、少女が深々と頭を下げた。

「あの時は……母ともども、大変、お世話になりました」

「うん？　ええと、母？　世話？　なんのことだろう……」

一瞬、意味が分からず、ドミニクは首を傾げる。

「無事に、帝都に行くことができました。あの時は、本当にありがとうございました」

どうやら、詳しく説明してくれる様子はない。

言葉から察するに、ベルマン子爵家でその母親ともども面倒を見たとか、そういうことだろうか？　例えば、帝都に行く途中に路銀が尽きたとか……。そんな事情で、ベルマン子爵家で面倒を見たということかもしれない。

――それは、父上に言うべきお礼で、俺が言われるべき言葉じゃないな。

そう思ったドミニクは、口を開いて……。

「それは……」

言い淀む。紡ごうとした言葉が……形を成さずに、溶けて消えた。

――え？　どうして……。

彼は……己が心の変化に、思わず戸惑う。

理由はわからない。

彼女になにを言われたのかも、詳しくはわからないはずだ。

……だけど、目の前の少女の言葉を聞いた途端、心に去来したのは、体の力が抜けてしまうような、深い安堵感だった。

そうして、彼の口から、こぼれたのは小さな一言。

「それはよかった。安心した……」

本心から、そう言っていた。

まるで、自分ではない誰かに、心を乗っ取られてしまったような

感覚。されど、他人の感情というにはあまりにも自分に馴染み過ぎているような、不思議な感覚だった。
己が声にこもる感情の強さに、ドミニクは驚く。けれど、その疑問が解消される前に、目の前の少女は、パン、っと手を打った。
「あっ、とそうでした。パティ、申し訳ありませんけど、一緒に来てください」
「……私？」
小さく首を傾げるパティの手を取って、
「ミーアお姉さまが呼んでいるので」
――ミーア……お姉さまっ！？　どういうことだっ！？
驚愕に固まるドミニクに、もう一度、深々と頭を下げてから、少女は小走りに行ってしまった。

第六十二話　……記録しておく

「父上はどちらにいらっしゃいますかしら？」
ちょうど良く通りかかったルードヴィッヒに尋ねる。っと、ミーアの背後に目を向けたルードヴィッヒは一瞬、眼光を鋭くしてから、父の所在を教えてくれた。
どうやらマティアスは食堂にいるという。ちなみに、ミーアたちは、食堂の中でも、来賓用の、個室になっているスペースで食事をするようになっている。
つまり、人目は……ない！　ということで、もしや、パンケーキの踊り食いをしているのでは？　と一瞬、疑念を持ったミーアであるが、もちろん違う。マティアスはミーアではないのだ。
ここ最近、皇帝マティアスは、非常に機嫌が良かった。
上機嫌に鼻歌を歌っていることが多いし、会うたびにニコニコ笑っていた。ガルヴやユバータ司教などと対話することも多かったし、ルールー族の族長との対談、学校見学など、必ずしも楽しいことばかりではないし、退屈なことも多かったはずなのだが、その機嫌が悪くなることはなかった。
そうなのだ、ここ最近、彼は、非常に幸せな日々を送っていたのだ。
なにしろ、ここでは三食すべて、娘ミーアと一緒に食べられる。しかも、それだけではない。ミーアの妹分ベルや、どこか母の面影を持った少女パティまでも一緒に食事ができているのだ。
はじめの内、ニッコニコ笑う父を見て「不気味ですわ……」などと思っていたミーアであったが、よくよく考えると、亡くなった母とまだ見ぬひ孫、さらに愛娘までもが一堂に会する食事会というのも、なかなかに奇跡的な状況だなぁ、と考えなおし……。
――まぁ、ここにいる間ぐらいは、優しくしてあげようかしら。

ユバータ司教の前で変なことを口走られてもアレですし……。上機嫌にさせておけば何かと便利ですわね。

っと割り切ることにしたのだ。

さて、そんなマティアスだったが、すでに、食堂のテーブルにつき、ルンルンと弾んでいた。

入って来たミーアを見て、彼はにっこーりと笑みを浮かべ、

「おお、ミーア、来たのか。まだ早いかと思ったが、そろそろ、ランチの時間かと思って……」

その言葉がしりすぼみに消えていく。ミーアの後ろに目を向けた彼は、思わずといった様子で、引きつった笑みを浮かべた。

ミーアはその反応を見て、少しだけ驚いた。

――事前に、苦手だという話は聞いておりましたけれど……。ここまで露骨に苦手とは思っておりませんでしたわね。お父さまのあんな顔、初めて見ましたわ。

ミーアの誕生祭の時にも、ブルームーン家には行っている。その時のことを思い出しても、こんな様子ではなかったはずだ。

もっとも、パーティーの間はずっとブルームーン公爵と話しているうえ、ミーアの誕生日というスペシャルな状況でスーパーハイになっていた可能性も高い。

通常の反応は望めないだろうが……。

――やはり、ベルにパティを呼ぶようにお願いしておいて良かったですわ。パトリシアお祖母さまとヨハンナさんとは関係が深かったようですし……。

途中、ルンルンと廊下を歩いていくベルに、パティを連れてくるように指示しておいたミーアである。いざという時のため、隣で待機して話を聞いているように、と伝えていたのだ。

「あ、ああ、ヨハンナ……。来ていたのか」

「はい。ご機嫌麗しゅうございます、陛下」

優雅な仕草でスカートを持ち上げるヨハンナ。それは、ミーアですらも見惚れそうになるほど、完璧かつ優雅な礼だった。

「息災のようでなによりだ」
「おかげさまをもちまして、陛下のご寵愛をいただき、妾も夫も、日々、帝国に仕えるため邁進しております」
ヨハンナは、嫣然と微笑んでから、
「それにしましても、まさか、このような辺境の土地に玉体をお運びになられているとは、思いもよらぬことでございました。この夏は、ぜひ我がブルームーン家の領地にお越しいただけるよう、お誘いしておりましたのに……」
「あ、ああ、すまんな。えー、そのー、ミーアがな」
突如、話を振られ、ミーアは澄まし顔で頷いた。
「ええ。わたくしのほうの都合で、お父さまにも来ていただきましたの。ヴェールガからのお客さまを、お迎えしなければならなかったので……」
「おお、そうじゃ、そうじゃ」
っと、ヨハンナはパンッと手を叩いた。
「実は、その件で陛下にお願いしたきことがありましたのじゃ」
それから、すぅっと目を細めて、ヨハンナは続ける。
「なんでも、ヴェールガの伝統的な祭りを開くと小耳に挟みましてな。しかも、此度の祭りは各国の学校を集めての祭りとか……」
「よくご存じですわね。仰るとおりですわ。セントノエルの生徒会で、祭りの再開を発案いたしましたの」
ミーアの言葉を聞いて、ヨハンナはわざとらしく驚いてみせて……。
「ほほう！　それはそれは、なかなか興味深い……」
っと、そこで一度、言葉を切って。
「では、当然、我が帝国のグロワールリュンヌ校が選ばれるのでありましょうな？」
パンッと手を叩き、笑みを浮かべる。
「いや、それは楽しみ。我が紫月花の会も全面的に協力させていただく所存。帝国貴族夫人の力を結集し、我が帝国の栄光を世界に知

らしめましょうぞ！」
意気揚々と言い放つヨハンナに、ミーアは機先を制されたことを察する。
――ちぃっ！　まさか、直訴に来るなど、さすがに予想しておりませんでしたわ。なんとか、ペースを取り戻さなければ……。
心の中で盛大に舌打ちしつつ、ミーアは素早く視線を転じる。幸い、次に取るべき手段はすぐに見つかる。
食堂の扉を開け、入って来たアンヌ。そのトレーの上に乗せられた、お茶菓子を見て！
そう、ここは……食堂なのだ！　しかも、もうすぐお昼という時間だ！！
「ほほほ、まぁ、その辺りのことは追い追いということで。いかがかしら？　ヨハンナさま、込み入ったお話は、お食事をしながら、ということで。お腹が減っていては、あまり難しい話をする気になりませんでしょう？」
時間稼ぎをしつつ、脳みそに糖分を送り込もうというミーアの鉄板戦術であった。
……ちなみに、アンヌが持ってきてくれたお茶菓子はミーアが美味しくいただいたことも、ここに記録しておく。

第六十三話　漠然とした、不安……虹色の……

「昼食、なるほどなるほど、それは名案じゃ！」
ヨハンナはニッコリと笑みを浮かべ、歌うように言った。
これでようやく、時間稼ぎと糖分の補給ができそうだぞう！　と思いながら、ミーアは、口元についたお茶菓子の欠片をハンカチで拭った。
……ミーアの目の前にあったお茶菓子は、すでに消えていたが、そんなこと、すっかり忘れてしまっているミーアなのであった。糖分補給ができていないことになっているのだ、ミーアの中では。
それはともかく、ミーアが安堵の息吐いた、まさにその瞬間、ヨハンナは口を開いた。
「それならば、せっかくなので、ヴェールガからのお客人もご一緒するのはどうじゃろうな？」
チラリ、と横目にミーアを見て、ヨハンナは言った。
「へ……？」
「せっかく、ヴェールガからのお客人が来ておると言うのならば、妾もご挨拶するのが礼儀というもの。それに、パライナ祭について事前に色々と打ち合わせることもあるであろ？　幸いにも、妾の連れは、グロワールリュンヌの講師じゃ。セントノエル関係の方にご挨拶をしておく良き機会となろう」
その言葉に、ミーアの危険察知能力が刺激される！
――これは……極めて危険ですわ！
残念ながら、断るのは難しそうだった。ヴェールガ公国の司教が客人として来ている以上、ブルームーン公爵夫人が挨拶したい、というのはごく当たり前のこと。
さりとて、今ここで、パライナ祭には聖ミーア学園が参加する予定、などと言えば、ゴネて来るに違いない。それは、ユバータ司教

がパライナ祭の開催を渋っていた懸念と合致する状況だ。
――帝国内で代表校をめぐって揉めていては、パライナ祭の目的が達成できないと見なされてもおかしくはありませんわ。
そもそも、パライナ祭の目的は、聖ミーア学園のやり方を各国に知らしめ……知ら、しめて……？
――知らしめて大丈夫かしら……？
一瞬、ミーアの脳裏を漠然とした不安（虹色の……）が過る。世に広めてはまずいナニカが、頭の中、浮かび上がりかけて……。
――い、いいえ……今は、とりあえずそちらは考えないようにすべきですわ。それより問題は、ユバータ司教と、ヨハンナさんとを会わせなければいけないことですわ。しかも、あの連れのフーバー子爵と顔合わせなんかさせたら、ますます、帝国貴族の評判が悪くなってしまいますわ。以前のサフィアスさんの様子を見る限り、ラフィーナさまやヴェールガ公国のことを下に見ているような雰囲気もございましたし……。
帝国中央貴族の中には、ヴェールガのことを田舎の小国扱いする者も時折いる。セントノエルに行っていたサフィアスですら、実際に、ラフィーナの獅子のオーラにあてられて震え上がらなければ、その恐ろしさに気付かなかったほどなのだ。
――きっとパライナ祭にしても、大したものだとは思っていないのでしょうけれど……それはそれとして、グロワールリュンヌ校が選ばれないのはシャクということですわね。ぐぬぬ、実に厄介極まる態度ですわ！
最悪の事態を回避すべく、ミーアは懸命に頭を働かせようとする！　けれど……ああ、しかし、残念なことに糖分が決定的に足りていない。
ミーアは無意識にお腹をさする。
そうなのだ……朝食の栄養素を使い果たしたこのお昼前の時間こそが、最も糖分が足りない時間。お腹が減る時間で……時間――否……！　断じて否！

ミーアの腹の虫が声を上げる！
そうなのだ、忠臣によって用意された貴重な補給、お茶菓子……行方不明になったと思われていた糖分は、本当はきちんとミーアによってパクパクされ、胃袋を経由して……その叡智へと到達していたのだ！
その貴重な糖分が、ミーアに一つの閃きをもたらした。すなわち！
「ヴェールガのお客人を、というのであれば、ルシーナ司教伯のお子さま方と、もちろん、特別初等部の子どもたちも同席する、ということになりますわね。それでもよろしいかしら？」
上目遣いに、ヨハンナのほうを見つめて、ミーアは言った。
あの、孤児出身の子どもたちも同じ食卓につくことになるけど、それでも構わないか？　とミーアは問うていた。
――平民と昼食を共にするなど御免だ、などと言ってくだされば楽なのですけど……。
そう考えつつ、ヨハンナの顔を観察する。っと、まるで、ミーアの狙いなどお見通しとばかりに、ヨハンナは上機嫌に微笑んで、
「ああ、先ほどの幼子たちかえ？　ふふふ、もちろん、歓迎じゃ。皇女殿下のお客人だということならば……それに、陛下のお許しなさったことならば、妾になんの文句があろうか」
事もなげにそう言った。
一瞬、ぐむっと唸るミーアであったが……。
――ま、まぁ……それならそれで構いませんわ……。うん、やり方によってはここですべて解決してしまえるかもしれませんし、そんなことだって、あり得るかもしれませんし、どうにか上手く立ち回れれば……たぶん、きっと……。だから……。
それから、ミーアはそっと目を閉じ……。
――頼みましたわよ！　パティ！
幼き自らの祖母に、すべての希望を託した！
――しばらく、裏で様子を見てもらおうかと思っておりましたけど、こうなっては仕方ありませんわ。パティにも参加してもらって、

何かしら、ヨハンナさんの不意を突かなければ……。ヨハンナさんとパティとは親しい仲だったと聞きますし……それでなんとか、隙が作れるかもしれませんわ。そのまま押し切って万事解決となるかもしれませんし。まだ、子どもですけど、ベルと違ってパティはしっかり者ですし……。大丈夫に違いありませんわ。

そうして、祈るような心地で援軍を待ちつつ……

――そう言えば、今日のお昼は何か趣向を凝らしたお料理だったはずですわね。ふふ、ちょっと楽しみですわ。

夢見るような心地で昼食を待つミーアであった。

第六十四話　器の大きなイエスマン！

急遽決まった昼食会。準備が整うまでの間に、ミーアは急ぎ、パティらと打ち合わせをすることになった。
ちなみに、ヨハンナらの相手は父に任せている。
先ほど助けてやったんだし、そのぐらいはやってもらっても問題ないだろう。
――最低限の打ち合わせをしておかなければ。ヨハンナさん、かなりの強敵ですわ……。
ゴクリ、と生唾を呑みつつ、状況の大まかな説明をする。と、パティはすぐに、心強い頷きをみせた。
「……わかった。特別初等部のみんなにも伝えておきます」
「よろしくお願いいたしますわ。まぁ、あまり緊張せずに。それと、不快なことを言われるかもしれませんけれど、後でなにか甘い物をご馳走するから我慢してくれるように、と言っておいてもらいたいですわ」
そう言うと、パティは小さく首を振った。
「そんなこと言わなくても大丈夫。それにみんな、ドミニク先輩にご馳走してもらう約束をしてたから、食べ過ぎになると思う」
「まぁ、ドミニクさんと？」
意外な言葉に、思わず声を上げるミーア。その隣でエメラルダが訳知り顔で頷いた。
「エシャール殿下にもお聞きしましたけど、ドミニク・ベルマンは、なかなか、評判がよろしい子みたいですわね。ふむ、ベルマン子爵家のことを、少々低く見積もっていたかもしれませんわ」
その内、我がグリーンムーン派閥に勧誘して……などとつぶやくエメラルダをよそに、真剣な顔でパティが口を開いた。
「それより、ヨハンナさんが、どんな狙いを持っているのかを考え

ておいたほうがいいかもしれない」
「ふむ、というと……？」
ミーアは腕組みし、真剣に考え込んでいる風を装って、即座に先を促す、聞き上手のミーアである。
そう、ミーアは知っている。良きイエスマンになるためには、周囲の知恵ある者の言葉には、きちんと、熱心に耳を傾けなければいけない。
そして、自らの祖母パトリシアは知恵ある者なのだ。
ミーアより若干年下であるのが、多少気になるところではあるが……。そんな細かいことは気にしない、器の大きいイエスマン、ミーアなのである。
「ヨハンナさんの目的は、グロワールリュンヌ校をパライナ祭に出すこと、なのでしょうか？」
パティは、眉間に皺を寄せながら言った。
「中央貴族の常識に照らし合わせれば、そういうことになりますわね。違和感のない考え方だと思いますけれど……」
そう太鼓判を押したのは、帝国貴族令嬢代表のエメラルダだった。ミーアもその意見に賛同するところではあったが、あえて、ここでは口を開かず、聞くに徹する。聞き上手のミーアである。
そんなミーアの目の前で、エメラルダが続ける。
「私とて、もともとはセントノエルではなく、グロワールリュンヌに行きたいと思っておりましたし。プライドの高い中央貴族の者たちであれば、グロワールリュンヌこそが最高の学校だと思っておりますし、選ばれるのが当然だと考えても不思議ではありませんわ」
「だとしたら、もう少し行儀の良い供の者を連れて来るのではないでしょうか？」
パティはそれから、すこぅしだけ不機嫌そうな顔で、
「幼い子どもたちへの乱暴な態度をヴェールガ公国の使者が嫌うということがわかっていないのは愚か者の行い。また、セントノエルの特別初等部の子たちだと知ってなお、態度を改めないのは、さら

に愚かなこと。そのような行いをする者を、はたして連れてくるでしょうか？」
　パライナ祭にグロワールリュンヌを推そうと言うのであれば、ヴェールガ公国との関係性を軽視するわけがない、とパティは訴えていた。一般的な、蒙昧な帝国貴族であれば、あるいはそういったこともするかもしれないが……。
「ヨハンナさんが、ミーアお姉さまの警戒するような方であるというのなら……あのグロワールリュンヌの教師が目的にそぐわぬ方であるとわかるはず。自分一人で来たほうが、おそらくは上手く立ち回れるでしょう」
「なるほど、確かにその通りですわ……。実に理に適った考え方ですわね」
　ミーアは唸る。パティの言うとおり、ヨハンナから受ける印象は、高慢な中央貴族とは少しだけ異なっていた。切れ者の匂いがするというか……手ごわい相手という匂いがプンプンするのだ！
「ならば、ヨハンナさんの真の目的は……」
「あら、そういうことならば、話は簡単ですわよ」
　再び横から口を挟んだのは、エメラルダだった。けれど、ミーアはそれを咎めない。我が恐れるは四角いアイツのみ！　とばかりに、大概のことはワガママで通せてしまうミーアとは違い、エメラルダは貴族のしがらみの世界に生きる人である。
　その意見や分析は大いに参考になるだろう。
　ミーアは無言で頷いて先を促す。っと、エメラルダは得意そうに微笑んで、
「ヨハンナさんは単純に、ミーアさまの功績を世に広めることを邪魔したいだけですわ。あの方は、サフィアスさんを次の皇帝にしたいのでしょう。ミーアさまが女帝になる確率を、少しでも低くしたいのですわ」
　そう言ってから、ふと、エメラルダは腕組みして……。
「ふむ……しかし、そういうことでしたら、わたくしも黙っていら

れませんわね。サフィアスさんが皇帝になり、上に立つなどというのは実に業腹でしょうし。それに……」
ドヤァッと笑みを浮かべて！
「私は、ティアムーン帝国初の女帝の親友になると決めておりますの」
胸を張って、言い放った！
「サフィアスさんとルヴィさんも、きっと動いているでしょうし。私たちもミーアさまのおそばで、できる限りフォローすることにいたしますわよ、ね、リーナさん」
そこで、唐突に話を振られて、シュトリナが目をパチクリさせた。
「え、あ、ええ。もちろん、リーナも協力します」
ベルと楽しくお話しすることに注力していたシュトリナは……キリリッとしかつめらしい顔で言うのであった。

第六十五話　古き者と新しき者

ところ変わって、帝都ルナティア。
皇女専属近衛隊の詰め所では、とても珍しい光景が繰り広げられていた。
副隊長ルヴィの部屋に、星持ち公爵令息、サフィアス・エトワ・ブルームーンが訪ねてきたのだ。ただでさえ、近衛隊の詰め所に高級貴族が訪ねてくることは珍しいのに、さらに、サフィアスの付き添いとして、後のシューベルト候たるダリオ・シューベルト、同じく後のランジェス男爵たるウロスを伴って、という実に風変わりなメンバーである。
表向きは、皇女専属近衛隊副隊長、ルヴィへの慰問ということになっているが……。
「おいおい、どうしたんだい、サフィアス殿。ずいぶんとやつれてしまったんじゃないか？」
副隊長室に入って早々に、ルヴィ・エトワ・レッドムーンは言った。
「顔色も悪いし、目元も腫れぼったいな。もしかして、よく眠れていないんじゃないかな？」
そんなことを言うルヴィのほうは、なんというか……生き生きしていた！　それはもう、仕事が楽しくって仕方ない、という様子だった！
「そちらは、ずいぶんと楽しそうに仕事をしていて、うらやましい限りだね。ルヴィ嬢。実は、ご指摘の通り、ここ数日間、眠れていなくてね」
そう肩をすくめるサフィアスを、ルヴィは興味深げに見つめて。
「ほほう、なにがあったんだい？　それに、シューベルト家のダリオ殿はまだしも、ランジェス家のウロスくんまで一緒とは……。も

しや、セントノエルの同窓会でもやろうして、準備で忙しいとか？」
のんきな問いかけに、サフィアスは思わず苦笑する。
「そんな話ならば、楽しそうでいいんだがね」
深々とため息を吐いてから、出された紅茶を一口。フルーティーな香りに、ほぅっと安堵の表情を浮かべる。
「この茶葉は……実に落ち着くな……良い茶葉だ」
「ははは、ブルームーン家の次期当主殿にそう言ってもらえると鼻が高いよ」
言いつつ、ルヴィも紅茶を一口。それから、上目遣いにサフィアスを窺う。
その視線を受けても、サフィアスは口を開こうとはしなかった。
しばし、目を閉じ、紅茶の味と香りに集中する……けれど、いつまでも黙っているわけにはいかない。
言いづらいこととはいえ、言わなければならないのなら、早いに越したことはない。
意を決して、彼は息を吸って、吐いてから……。
「実は我が母と紫月花の会の事なのだが……」
そこで言葉を切ってルヴィの顔を見る。特に表情を変えることなく、澄まし顔で紅茶を飲んでいるルヴィに、サフィアスは詰めていた息を吐きだした。
「どうやら、その様子では、君のほうでもある程度は把握しているようだな」
「そうだね。まぁ、ある程度のところはね。ミーア姫殿下からも報せが届いていたし、我がレッドムーン家と懇意にしている貴族たちからも、まぁ、いろいろと聞いてはいるね」
ならば話は早い、とばかりに、サフィアスは口を開いた。
「ヴェールガ公国で長らく行われていなかったパライナ祭が再開されるらしい。そこに聖ミーア学園が帝国代表として参加させようと、ミーア姫殿下は動いておられたが、それに待ったをかけるべく、紫月花の会の会長たる母上が動いたんだ」

「ヴェールガが主催する世界的行事に参加するとなれば、それは、一国を代表する学校と見做されるだろうからね。グロワールリュンヌの後援をしている紫月花の会は当然動くだろう。驚くには値しない」
「そうだな。それだけなら、確かにそうなんだが……。母は、未だに俺に次の皇帝になってほしいらしくてね。ミーア姫殿下が女帝になる要素をできる限り排除したいというのが本音のところらしい。パライナ祭への聖ミーア学園の参加は、ミーアさまが女帝となるための足掛かりとして十分な功績となるだろうしね」
そこでサフィアスは残っていた紅茶をすべて飲み干して……。
「だが、言わずもがな、こいつは、それだけで済む話じゃない」
その言葉に、ルヴィは興味深げに目を瞬かせた。
「ほう、というと？」
「わかっているだろう？　グロワールリュンヌと聖ミーア学園の対立だぞ？　こいつは、一つの象徴と見なすべきだろう」
それから、サフィアスは深い……深いため息を吐く。
「初代皇帝陛下……いや、ここはあえて初代皇帝と呼び捨てにすべきだろうか……。我らが帝国の始祖が文化の中に組み込んだ悪しき思想、反農思想……。そして、それを教育するグロワールリュンヌと、その思想を覆そうとする聖ミーア学園の争い……。これは、古き者と新しき者との全面戦争だ。古き価値観と新しき価値観との戦争なんだ。まぁ、剣は交えないだろうが……」
「今さらだね、それは。そもそも、戦争というのは準備段階で、すでに大方の勝ち負けは決まっているものだ。それに、貴族の暗闘というのも、剣を交えるものばかりではないというのもよく知られていること。剣を交えないからといって、激しくないわけでもないし、重要性が低いわけでもない。血が流れないからといって、軽視するのは致命傷になりかねないだろう」
それから、ルヴィは両手を組んで……。
「ということは、だ。我々も動かざるを得ないと、サフィアス殿は、

そうお考えかな？」
「そうだろうな。少なくとも、ミーア姫殿下の側につくというのならば、そうだろうと見ているよ。俺はね。だからこそ、信頼のおける同志を伴って、こうして訪ねてきたんだ」
　ダリオ・シューベルトとウロス・ランジェス、二人に一瞬、視線を向けてから、サフィアスは言った。一方でルヴィは楽しげに笑みを浮かべて。
「ふふ、紫月花の会と袂を分かつというのは、なかなかに刺激的だね。君の場合は、あの恐ろしい母君と争うことになるのだから、なおのことだろうね」
「それこそ今さらだな。ラフィーナさまやシオン王子らと敵対するのとどちらがマシかという話さ」
　肩をすくめてみせるサフィアスに、ルヴィは少しだけ真面目な顔をして……。
「あの日の……新たなる盟約に従って、かい？」
「……ああ、その通りだ。あの日の誓いに従って、さ……」
「なるほど。ついに、誓いを果たす時が来たということか……。それで、具体的にはどうするつもりかな？」
「紫月花の会に対抗するために、我らが、ミーアさまにお味方する。我ら……月光会がね」
「ほう、グロワールリュンヌの後援を紫月花の会が行うように、聖ミーア学園の後援を月光会で行う、と？」
「我ら月光会だけでは足りないだろう。月光会が発起人となり、各貴族家の者たちを味方につけるべきだろうな。ダリオやウロスのような若手の次期当主たちに積極的に声掛けをしていく。すでにブルームーン派の中で、見どころがある者たちには声をかけているんだが、君のところはどうかな？」
　その問いかけに、ニヤリと笑みを浮かべて、ルヴィは言った。
「多分、似たようなものさ。もっとも、我がレッドムーンは、そもそも公爵たる我が父も、ミーアさまへの支持を表明しているからね。

そこまで苦労はしないとも。しかし……」
ルヴィは、そこで足を組みなおし、頬杖をついてサフィアスを見つめる。
「まさか、君のほうから、そんなことを言い出すとは思ってもみなかったよ。ずいぶんと思い切ったものだね」
「なぁに。古代の賢人曰く、新しい酒は新しい革袋に、さ。聖ミーア学園という新しい酒は、新しい革袋に入れないと、袋が破れて台無しになってしまう。仮にミーア姫殿下が紫月花の会すらも味方にできたとしても、聖ミーア学園の後援には、新しい者たちが必要だろうと思ってね」
ニヤリと笑みを浮かべ、サフィアスは言った。
――それに、まぁ……料理会に参加させられるよりはよほど気が楽だし……。
なぁんて、心の中でつぶやきつつも。
ナニカ……非常にキケンなナニカを立ててしまった気がしないではないが……。それはさておき。
「まぁ、正直なところ、エメラルダ嬢がいないところで、月光会を名乗るのは、後々で文句を言われそうではあるのだがね」
サフィアスの苦笑いに、ルヴィは肩をすくめた。
「場合が場合さ。それに、エメラルダ嬢はエメラルダ嬢で、あちらで奮闘することだろうし、我々は、我々にできることをしようじゃないか」

かくて……、ブルームーン公爵令息サフィアスと、レッドムーン公爵令嬢ルヴィによって、事態は動き出す。
紫月花の会と月光会、古き者と新しき者との争いは人知れず……当事者筆頭たるミーアですら与り知らぬところで静かに幕を開けたのだった。

第六十六話　始まる昼食会

さて、皇帝の昼食会に呼ばれたのは次の者たちであった。
皇女ミーア、公爵令嬢のエメラルダ、シュトリナ。皇帝マティアス公認のミーアの妹分ベルとパティ。さらに、特別初等部の子どもたち。
ヴェールガ公国のユバータ司教、リオネル、レアの兄妹。
そして、ブルームーン公爵夫人ヨハンナとフーバー子爵である。
結構な人数になってしまうので、場所を移さねばならなかったし、用意に少々時間がかかってしまったが、その分、きっちりと仲間たちと打ち合わせができたミーアである。
――エメラルダさんが、やる気に満ち溢れているのが少しだけ心配ですわね。あと、リオネルさんとレアさんに事前に話ができなかったのが、少々気がかりといえば気がかりですけど……。ふむ、気がかりといえば……。
っと、そこで、ミーアの鼻がひくひくと動いた。その優れた嗅覚が敏感に嗅ぎとる！　絶対的な危機の予感……否！　絶対的な、嬉々の予感を！
――ああ、芳ばしい……素晴らしい香り……うふふ、実に楽しみですわ。
ミーアの視線の向かう先、大きなテーブルの上には、絢爛豪華なお料理が並んでいた。
本日の料理は、ミーア二号小麦とペルージャン産の通常の小麦、さらには黄色みがかった玉月麦（フルムーンコーン）を使った料理だった。三種の小麦粉の違いを生かした、それぞれ異なる調理法の妙を楽しむ趣向となっている。
余談だが、聖ミーア学園には、料理を研究する学部が存在している。各国の食文化を研究し、外交使節をもてなすのに利用しようと

いう……聖ミーア学園の中では珍しい、大変、まともな学部である。
その成果を目の前に、ミーアのお腹は切なげな声を上げていた。
――あれは、ペルージャンで食べたターコースですわね。それに、あちらにあるのは満月団子が入ったスープ……あら、あちらの奥にはデザートのカッティーラもございますわ！　それに……あらあら？　あの平べったいのにチーズをのっけたのは何かしら？　トロリとチーズがとけてて、トマトソースと絡み合って、実に美味しそうですわ。芳ばしい匂いもたまりませんわね。うふふ、三段ぐらい重ねて食べたいですわ。もともと、ターコースも包む具材によってはガラッと趣が変わる食べ物ですし、あのチーズとトマトソースの物がこってりしているなら、ターコースにはシャキシャキのお野菜を包んで食べても良いかもしれませんわ。
脂っこくなった口を、別の食べ物ですっきりさせ、再び脂っぽいものを食べるという無限サイクルが、今まさに実現しようとしていた。
めくるめく、味を想像するミーアの脳裏には、厄介な相手を迎え撃たなければならないという認識は、すでにない。
美味しい物はすべてに優先される。それは、ごくごく当たり前の真理というものであった。

さて、ミーアが美味しい美味しい昼食に目と心を奪われている隙に、ヨハンナはユバータ司教へと接近していた。
「ご機嫌よう、ユバータ司教殿。お初にお目にかかる。妾はヨハンナ・エトワ・ブルームーン。星持ち公爵、ブルームーン家の公爵夫人じゃ。以後、お見知りおきを」
スカートをちょこんと持ち上げて優雅に礼をし、嫣然と微笑む。
そこには、侮りがたき大貴族の風格があった。
礼を失する高慢さは見えない。敵意も悪意も、戦意も向けてはいない。けれど、他者を圧する強烈な迫力が、そこにはあった。
ユバータ司教は、けれど、その圧力を穏やかな表情で受け止める。

気圧された風もなく、自然体で……。まるで、孤児院の子どもたちと向かい合うような、柔らかな態度で。
ヨハンナは、さらに続けて、自らの傍らに立つフーバー子爵に目を向ける。
「それと、こちらは我が帝国の誇る名門校、グロワールリュンヌ校の講師、フーバー子爵じゃ。主に、帝国貴族の歴史や礼儀作法について教鞭をとっている」
ヨハンナの紹介を受けて、フーバー子爵が深々と頭を下げる。
「これは、ご丁寧に。私は、ニコラス・ダ＝モボーカ・ユバータと申します。ヴェールガ公国の神聖図書館の館長を務めております。お会いできて光栄です、ブルームーン公爵夫人。それに、フーバー子爵」
その挨拶の言葉に、フーバー子爵が、おお、と感銘を受けた様子で唸った。
「かの神聖図書館長とお会いできるとは、望外の喜びにございます。ユバータ司教。深淵なる叡智を収めた図書館、ぜひ、私もその知恵に触れてみたいと思っておりました」
揉み手をしながら、フーバー子爵が言った。
ヨハンナとは違い、小物感の溢れる、そのいささか卑屈に見える態度に、けれど、ユバータ司教が笑みを崩すことはない。
ただ、その澄んだ瞳は、相手の価値を測らんとするがごとく、真っ直ぐにフーバー子爵を見つめていた。
続いて、リオネルやレアが自己紹介をしようとしたところで、
「まぁまぁ、話は後にいたしましょう。せっかくのお料理が冷めてしまいますわ」
パンッと手を叩き、ミーアが言った。
「早速ですけれど、昼食会を始めますわよ」
そうして、昼食会は和やかな雰囲気で始まった。

第六十七話　然（さ）る者の好物

食事会が始まってしばらくは、平和な時が続いていた。
特に、薄く焼いた小麦粉の上にチーズとトマトソースをのせたものは、シンプルに美味しくて、その単純極まる味は、特別初等部の子どもたち――とミーアとベルには、大変好評だった！
「ふむ、これは……パリパリしつつ、トロリとしたソースがなんとも……。チーズの酸味とトマトの酸味がマッチングしていて、ふふふ、笑ってしまうほど美味しいですわ」
トローリ、とろけるチーズをみょーんっと伸ばしつつ、熱々の食感にはふほふ言いつつも、ミーアは笑った。
「ミラナダ王国のお料理で、プニッツァと呼ばれるものです。かの大商人、シャローク・コーンローグさまの大好物だとか……」
調理学部の講師が説明してくれる。なんでも、白月宮殿の料理長、ムスタともいろいろあって親しくしているらしく、頻繁に調理法の情報交換をしているらしい。
――素晴らしいことですわ！　やはり、こういった情報は積極的に共有して、世に広めていったほうがみなさん幸せになれますわ。パライナ祭で広めるべきは、むしろ、そういうものではないかしら？
などと思いつつ、ミーアは相槌を打つ。
「ほほう、さすがはシャロークさんですわ。美味しいものを食べておりますのね。ふふふ、こんなに美味しいと、何枚でも食べられますわね！」
一瞬……ほんの一瞬だけ、シャロークの好物というところに引っかかりを覚える。理由はよくわからないが、こう……なにか、致命的な見落としがあるような気がしないではなかったが……。
――まぁ、子どもたちも盛り上がっていますし、問題ありませんわね。

ミーアは違和感をひょーいっと遠くへ投げ飛ばし、上機嫌に笑みを浮かべる。
こんなふうにみんなで食べれば、盛り上がるし、いろいろ使いようがある料理だ。素晴らしい研究成果と言えるだろう。
「ターコースと似たような感じかと思いましたけれど、全然違いますわね。パリパリ、サクサクで。それに、上に乗っているキノコのコリコリ感と合わさって、実に楽しい食感ですわ。チーズとソースの甘味もたまりませんわね」
っと、そこで、ミーアは気付く。
ヨハンナとフーバー子爵の食が進んでいないということに。さらに、フーバー子爵などは、目を丸くして、ミーアのほうを見ていた。
――ふふふ、どうやら、食べ慣れない物に戸惑っているようですわね。手づかみで食べることに抵抗でもあるのかしら……。いかにも頭の固い帝国貴族といった感じですわね。
地下牢で鍛えられたミーアである。手づかみだの、食べづらいだのを気にすることはないのだ！
そうして、ミーアは澄まし顔で言った。
「さ、フーバー子爵、遠慮なさらずに。食べづらいかもしれませんけれど、食べてみれば意外と美味しいものですわよ？」
一応は勧めておく。
――食べないというのであれば、わたくしがすべて食べてしまっても構いませんけれど……、かといって、こんなに美味しいものを勧めなかったとあっては、後で恨まれてしまうかもしれませんし……。食べ物の恨みは恐ろしいものですし。でもまぁ、無理にとは言いませんし、わたくしがすべて食べてしまっても全然構わないのですけれど……。
もっとも、子どもたちも、ものすごく美味しそうに食べてるから、そう何枚も食べられなそうだけど……っと、特別初等部の子どもたちに視線を向けるミーアであった。

さてミーアの隣、エメラルダはミーアのやりようを見て「さすがだなぁ！」っと感心していた。
――今のは――見事にフーバー子爵の機先を制しましたわね！
エメラルダは知っている。こういう食事の場で相手を攻撃する方法。すなわち……マナーマウントである！
――恐らく、フーバー子爵は子どもたちの食べ方に文句をつけようとしていたはずですわ。
彼女はじっくり観察していたのだ。フーバー子爵の顔に浮かびかけた侮蔑の色と、その目に宿った嗜虐的な光を……。
無論、皇帝の昼食会において、直接的な攻撃をしたりはしないだろうけれど、ねちねちと嫌味を言って責めることは可能だろう。
――いいえ、あるいは、それをしても怒りを受けないと思い込んでいたら……わかりませんわね。彼らの常識に従うならば、仮に食卓に招かれた者だとしても、それが民草であれば無礼は許される。否、民草だからこそ、マナーがなっていないと叱責すべきであるとすら考えているかもしれませんわ。まさか、陛下が自分たち中央貴族より、孤児をかばうなどと、想像すらしない。それが彼らの常識というものですわ。
けれど、ミーアは、そんなフーバー子爵の口を封じてみせたのだ。子どもたちを救ったのだ。
――自らが率先して、プニッツァを食べることで、子どもたちに嫌味を言えなくした。素晴らしい配慮でしたわ、さすがはミーアさま。私も負けていられませんわ。
などと気合の入るエメラルダ。その目の前で、ヨハンナが口を開いた。
「ときに、ユバータ司教。聞くところによれば、ヴェールガ公国の伝統的な祭りであるパライナ祭を再開するとか。それは、確かな話なのであろうか？」
ちなみに、ヨハンナはプニッツァをフォークとナイフで器用に畳んで食べていた。

ターコースやミーア団子もきちんと上品に食している。見惚れるほどに優雅な仕草だ。
貴族の中の貴族と名高い、ブルームーン公爵夫人に隙は無いのだ。
「ええ。まぁ、まだ検討している段階といいますか……。今回は、その下準備として聖ミーア学園を見学させていただいて……」
ユバータ司教の答えに、食い気味にフーバー子爵が声を上げた。
「おお、ならば、ぜひ我がグロワールリュンヌにも足をお運びいただきたい」
その言葉に、ヨハンナが続く。
「そうじゃな。グロワールリュンヌがパライナ祭に出れば、我が帝国の気高き貴族のしきたりを知らせる良き機会となろう」
「さよう。まさにその通り。なにしろ、しっかりと教育せねば、思いあがる者たちもおりますし……」
っと、フーバー子爵の視線が、子どもたちのほうへと向いた、まさにその瞬間、
「それは素晴らしきことですわ。フーバー子爵。我ら帝国貴族は、神聖典の教えのとおり、民の安寧を守護するために立てられている。それをしっかりと教えておかねば、思いあがる高慢な貴族というのは、確かにいるかもしれませんわね」
エメラルダが勝気な笑みを浮かべて言った。
「もっとも、その手の教えは、ヴェールガにしろ、サンクランドにしろ、きっちりと施されているようにも思いますけど……」

第六十八話　パラダイムシフト

エメラルダの言葉に視線を鋭くさせたのは、ヨハンナだった。チラリと切れ長の瞳で、エメラルダを一瞥し……。

「ほほう。グリーンムーン公爵令嬢はパライナ祭に相応しい学校が、グロワールリュンヌではないと、そう言いたいのかえ？」

刺し貫くような視線、それを笑顔で受け止めて、エメラルダは答える。

「少なくとも、グロワールリュンヌがパライナ祭に推薦したいほど、心から素晴らしい学校であるならば、我がグリーンムーン家で預かる、サンクランドの王子殿下はグロワールリュンヌに入学していたと思いますわ」

大国サンクランドの第二王子、エシャールの入学こそ、聖ミーア学園が優れている証拠である、とエメラルダは告げていた。その言葉に、フーバー子爵が頬を引きつらせる。

「なっ！　それは、グリーンムーン公爵令嬢といえど、聞き捨てなりませぬこと！」

っと、声を荒げるフーバー子爵であったが、その後ろ盾たるヨハンナはあくまでも落ち着き払った態度で言う。

「なるほど、しかし、そなたの母君、グリーンムーン公爵夫人は、紫月花の会の一員だったように思うが……。グロワールリュンヌの後援をしている紫月花の会の……」

「帝国貴族婦人の会である紫月花の会に、私の母が属していることは、不自然なことではありませんわ。そしてそれは学校の良し悪しには、関係のないことですわ」

鋭い視線をぶつけ合うヨハンナとエメラルダ。その、剣戟を交わすかのようなやりとりに、食事会の雰囲気が一気にピリリッと緊張する。

一方、ミーアはプニッツァを一気にペロリッと完食する。六枚目である。
壁際に立つアンヌが、そわそわと、心配そうな顔をしていたが……それはさておき……。
――ふむ……そろそろ、わたくしが動くべき、ですわね……。
そう考え、ミーアは、デザートのカッティーラを、ひょいぱくしてから、紅茶で口をすすぎ、うーん、美味しい。もう一個！　と行こうとしたところで……。
『ミーアさま、食べすぎです！』
遠く、壁際でアンヌが口をパクパクしているのが見えた。
ミーアは自らのフォークの先にあるカッティーラと、アンヌの顔を見比べ……素知らぬ顔で、それを食べた！
――もったいないですし、うん、これが最後。最後ですわ……うん。
などと、自分に言い訳しつつ……それから、ミーアは静かに口を開いた。
「ヨハンナさん、それに、フーバー子爵、だったかしら……？　改めて言っておかなければなりませんわ」
そっと胸に手を当て、ミーアは言った。
「わたくしはパライナ祭に、この聖ミーア学園を参加させようと考えておりますわ」
厳かなる、宣戦布告をぶちかました！
「ほう？」
ヨハンナの鋭い視線が向くも、ミーアはそれを無視。それから、ユバータ司教のほうをチラリと見る。
その眼鏡の奥の瞳には、興味深げな光が宿っているようだった。
――まぁ、そうですわよね。見事に、ユバータ司教の心配が当たってしまった形ですし、わたくしが言うことに、注目しておりますわよね……。
帝国内での意思の統一……。仮に聖ミーア学園の教育が優れたも

のであったとしても、それが帝国内部に浸透していなければ、説得力がないと、そんな彼の懸念が的中したような光景が、今まさに目の前に広がっているのだ。
ミーアの次の手に興味がわくのも当然だろう。
――けれど、おそらくヨハンナさんたち、そして、グロワールリュンヌ校の面々を納得させることは……不可能ですわ！
ミーアは、そう割り切っていた。
実際、ヨハンナのやり方はシンプルで、それゆえに防ぎがたいものであった。
グロワールリュンヌをパライナ祭に参加させることが目的なのでないのならば、彼女は、ただ、ごねるだけでいい。
帝国からの参加者なし。帝国では代表の学校を決められないだろう、とユバータ司教に示せれば、彼女の勝ちなのだ。
仮に聖ミーア学園の参加が成ったとしても、皇女がわがままから、自らの建てた学校をパライナ祭に参加させた、ただの箔付けに過ぎない、と悪評を立てれば、おそらく彼女の本来の目的は達成されてしまう。
そして、そんな彼女のやり方は、ユバータ司教に、パライナ祭の再開を断念させるのにも、極めて有効な手だった。
ユバータ司教の思惑をどこまで読んでいるのかはわからないが、フーバー子爵を連れてきて、ぶち壊しにするという策は、実に効果的なのだ。
てっきりヨハンナがグロワールリュンヌを推そうとしているのだと思い込んでいたミーアであったから、これは、ある種のパラダイムシフトであった。
勝利条件の設定のズレ……。なるほど、そういうこともあるか、とついつい感心してしまったのだ。そして……その衝撃は、ミーアにもまた一つのパラダイムシフトをもたらそうとしていた。
すなわち……。
――よくよく考えてみると……パライナ祭が開かれないほうが、

わたくしにとっても好都合なのでは？
ミーアの脳裏に、風に揺れる小麦畑ミーアートの姿が過る。
虹色に輝く、林立するミーア木像の姿が過る。
無邪気に、純粋に、ミーアを礼賛する、ミーア学園の生徒たちの笑顔が過る……。
恐ろしい、数々の光景が、脳裏を過り……。
――パライナ祭の会場で、わたくしの虹色ミニ人形を売り出す、などと言われたら一大事。さすがにヴェールガ側から待ったがかかりそうなものですけど、ミーア学園の生徒たちは、賢いですし、ラフィーナさま人形とセットで、などと提案し始めるかもしれませんわ。
ここ数日間見てきた、聖ミーア学園の熱量にミーアは圧倒されていた。彼らの活力であれば、そのような説得を試みる可能性は十二分にあり得る。
――もしそんなことになれば……ら、ラフィーナさまが激怒して獅子に豹変しても不思議はありませんわ。恐ろしいことですわ！
確かに、パライナ祭は、有効に使えればメリットもあるだろうが、デメリットだってある。ならば、無理して開催しなくても良いのではないか？　とミーアは考えを改めた。
否……そもそもの目的に立ち返ったのだ。すなわち……。
――もともとの目的は、神聖図書館への入館を許可していただくこと。それはほとんど叶ったと言っても過言ではありませんわ。ユバータ司教もノーとは言わない雰囲気ですし。であれば……それ以外にしなければならないことは、なにか……。
そうして、ミーアは改めて原点に回帰し、大切なことを確認する。すなわち、
――今回の出来事を通して、グロワールリュンヌ校を内側から改革する。もって、帝国の貴族子弟の反農思想を払しょくする、これですわ！
そうなのだ。フーバー子爵を見ていて改めて実感したが……帝国

貴族はヤバイ奴らなのだ。隙あらば農業を忌避するような教育を施し、破滅へと突き進むロクでもないやからなのだ。
ミーアがせっかく蹴り飛ばしたギロちんを助け起こし、神輿に乗せてわっしょいわっしょいやってくる、オソロシイ連中なのだ！
そんな中、ミーアに希望を抱かせる人物がいる。
ベルマン子爵親子である。
――あのベルマン子爵が、変わるものですわ。それに、ドミニクさんは、小麦畑の一件はさておき、特別初等部の子どもたちをかばったのも評価できますわ。
となれば、グロワールリュンヌ校の生徒たちも……変わることができるかもしれない。学校自体を内側から変える……そのためには……！
ミーアはしかつめらしい表情を作り、
「ここで、わたくしたちが言い争っていても、不毛なことですわ」
厳かな口調で言い切った！

第六十九話　わたくしのように少々の心得がなければ……わたくしのように？

「それは、どういう……」
怪訝そうに眉をひそめて、つぶやくヨハンナ。対して、ミーアは落ち着き払って紅茶を一すすり。それから、静かな声で答える。
「簡単なことですわ。ここでわたくしたちが、いくら話したところで、水掛け論。どちらの学校が優れているかは、明らかにはなりませんもの」
小さく肩をすくめて、ミーアは首を振る。
「例えば、そうですわね。パライナ祭には、帝国内の最も優れた学校が出るべきだと思いますけれど……では、学校の良し悪しはどのように判断いたしますの？」
「それは、もちろん、その学校でなにを教えているかで……」
歯切れ悪く答えるフーバー子爵に、ミーアはスゥっと視線を向けて。
「なるほど、教えていることが正しければ優れた学校であると……。であれば『正しいこと』とはなにかしら？　すべての人が等しく正しいと、あるいは、優れていると認める知識は、神聖典以外にはないと思いますけれど……最低限、神聖典を教えるのは、どこの学校でも変わらぬことでしょう？」
チラリとユバータ司教に視線を向けて、ちょっぴりアピール。帝国の叡智は常にアピールを忘れない。
「だから、比較すべきは各校が独自に教えるもの、あるいは、力を入れて教えるものであるべきですわ。けれど、そうですわね……例えば、帝国貴族の文化を教えているとして……それが、なぜ、聖ミーア学園で教えていることより優れていることだ、と言えるのかしら？　テーブルマナーが調理知識より優れていると、どなたが決めるのかしら？」

「いや、それは……」
反駁の言葉が一瞬行き詰ったのを見計らい、畳みかける！
「それに、仮に教えている内容が正しいとして……それが学生たちに身についていなければ意味が無いことですわ。ただ、正しい知識を提供するだけで良いならば、正しいことが書いてある本を配ればいい。それだけではないかしら？」
クソだメガネだなんだと言いつつも、ミーアはクソメガネ・ルードヴィッヒのことを評価している。彼が教えたことは、腹立たしくはあったが、それでもミーアの中にしっかりと記憶されていたのだから。腹立たしくはあったが……。
――まぁ、わたくしの記憶力が優れているというのもあるのでしょうけど、彼の教え方が上手かったということもあるはずですわ。教えられている時には腹が立ちましたけど！
「もっ、もちろん、教え方というのもあります。ええ……」
慌てた様子で、フーバー子爵が言う。が、ミーアは特に気にした様子もなく。
「なるほど。では、教え方が優れているというのは、どうやって判断するのかしら？　授業の内容を、みなで精査するのかしら？　それとも、皇帝たるお父さま、あるいは、皇女たるわたくしも、優劣を判断する資格があるかしら？」
「なっ！　い、いえ、それは、その……」
ここは帝国だ。皇帝一族のわがままが、ほとんどすべてのものに優先される国なのだ。
その権威を使われれば、反論の余地などないわけで……。
しかも、皇帝マティアスはミーアを溺愛している。ミーアが「パパ、お願い」などと言おうものならば、いくらでもわがままを聞いてしまうだろう。
フーバー子爵が慌てるのはもっともなことだった。まぁ、ミーアは間違っても、パパ、とは言わないのだが。
「わたくしは思いますの。そんな面倒なことをせずとも、どのよう

な学校が優れているのか、判断するのは、とても簡単なことですわ。どちらの職人の腕が優れているか見るには、彼らの技を見るのではなく、その作品を見ればよいのですわ」
　辺りをキョロキョロして、空の皿の上に視線をやったミーアは、テーブルの外れ、カッティーラのお皿を手に取る。
「例えば、このデザート……。料理人の腕前の良し悪しを判断するのにはどうするのが賢明か。わたくしのように、少々、料理の心得がある者であれば、調理の姿を見れば、多少は判断できるかと思いますけれど、そうでないなら、その技術を見ただけで判断することは不可能、けれど……」
　一部、若干の異論が出そうなことを言いつつも、ミーアは続ける。
「こうして、食べてしまえば……」
　素早く、カッティーラを、ひょいっ、はくっ、もぐもぐっ、ごっくん！　としてから、
「結果は明らかではありませんの？　料理人の腕前の良し悪しを見たいならば、単純に彼の作った料理を食べるのが一番ですわ」
　ミーアはペロリ、と唇についた甘い欠片を味わいつつも……。
「では……学校という料理人の作った料理とはなにかしら？」
「なるほど、料理は学生じゃな？」
　いち早く答えに行きついたのはヨハンナだった。
　ミーアは、満足げに頷いて腕組みする。
「そう、その通りですわ。学校の良し悪しを判断したいなら、その学生を見れば良い。そこにいる特別初等部の子どもたちを見れば、セントノエルがいかに優れた学校であるか、一目瞭然でしょう？」
「ぐむ……」
　微妙に苦い顔をするのは、フーバー子爵だった。いかに彼とて、大陸最高峰のセントノエルを否定することはできない。遠回しに、特別初等部の子どもたちを馬鹿にしたフーバー子爵を咎めたミーアである。
「それでは、逆に問いたいのじゃが、学生の良し悪しは、どのよう

に判断しようというのじゃ？」
ヨハンナの問いかけに、ミーアは自信満々に胸を張り……。
「簡単ですわ。両校の生徒たちに、直接、語り合わせれば良いのですわ。そうですわね。せっかくですし、グロワールリュンヌの学生たちにも、この聖ミーア学園の見学をしていただいて、その後で、討論会でも開けばよろしいのではないかしら？」
そっと瞳を閉じて……。
「帝国の未来にとって、有望な若者たちの、貴重な交流の機会となるでしょう」

第六十九話　ミーア姫、ぶん投げる！

「生徒たち自身に討論会を……？」
意表を突かれたのだろうか、フーバー子爵は目を白黒させていた。ヨハンナも何事か考えるかのように黙り込む。
一方で上手いこと結論にまで行きついてから、ミーアはニンマリ、内心で笑みを浮かべる。
――ふふふ、なんとか話を持っていけましたわ。あとはこのまま……。
「なるほど。学生同士の討論会……。しかし、その優劣はどうやってつけるおつもりじゃ？　まさか、ミーア姫殿下、あるいは、陛下が判断するなどと言うことではありますまいな？」
安堵しかけた直後、ヨハンナのツッコミが飛んでくる。
「もしくは、司教さまにお願いするとか？　それともミーア姫殿下とたいそう仲がよろしいと聞く、ラフィーナさまにでもお願いするつもりかえ？」
どうやら、ミーアの提案をそのまま受け入れることに危機感を覚えたらしい。討論会の不備を突こうとしてくるが……。ミーアは落ち着き払った様子で首を振る。
「生徒同士の討論の優劣を、外部の我々が付けるなど、野暮というものですわ」
ミーアやマティアスが評価するとなれば、当然反対されるだろうし、自身が懇意にしているラフィーナにお願いするのも賛成はされないだろう。ユバータ司教やレア、リオネルなども、同様にミーア有利な審判をすると思われるだろう。
正直、それで揉めるのは、ミーアの望むところではない。かといって、相手に有利過ぎるような人材を選ぶわけにもいかない。聖ミーア学園の側に敵を作っては本末転倒だからだ。

それゆえに、落としどころが難しくはあったが……ミーアは、なんでもないことのように言う。ごくごくあっさりと……、自明の、当たり前のことを言うかのような口調で。
「討論をした生徒たち自身が、それを判断すればよいだけのことですわ」
そう……ミーアは責任を、ぶん投げる！　自分が選んで恨みを買うのもごめんだし、自分が指名した審判の件で恨みを買うのもごめんだからだ。
けれど、ミーアのその言葉に、その場のみなは驚愕に目を見開いた。
「当人たち自身に判断させる……ですと？」
はじめに口を開いたのはフーバー子爵だった。
「そんな……そのようなこと……」
対して、ヨハンナは、ふん、っと鼻を鳴らし、
「なるほど。そうすれば勝てる……そのような算段が立っている、と、そういうことかえ？　討論会ならば、必ず勝てる自信があると？」
そんなヨハンナの言葉をミーアは涼しい顔で聞き流す。
「別に勝てる算段なんかありませんわ。というか、そもそも勝ち負けの問題というわけでもございませんし。ただ、学校の良し悪しを論ずるには、学生を見るのが一番というのは厳然たる事実。そして、その結果を目の当たりにすれば、教師陣も文句のつけようがございませんでしょう？」
お前もな！　っとフーバー子爵のほうに目を向ける。
「それに、討論の中で自身の勝ちを、負けを、悟り認められないような者は、その事実をもって劣っていることを衆目に証明するのだと思いますわ。まさか、グロワールリュンヌには、そのように潔くない生徒はおりませんわよね？」
問われ、フーバー子爵は、むっつりとした顔で、
「もっ、もちろんでございます。ですが……」

その言葉をパンッと手を叩くことで封じつつ、ミーアはニッコニコと上機嫌に笑った。
「ならば、なにも問題はありませんわ。パライナ祭にどちらの学校が出るのが相応しいか、ぜひ、討論会を開いて決めることにいたしましょう」
ビシッと言いつつも、ミーアは思う。
――まぁ、正直、討論会の勝ち負けなんか関係ありませんし……。これで問題ないですわ。
グロワールリュンヌの学生たちを、この聖ミーア学園に呼び寄せて、農業技術の向上の大切さをわからせる。ついでに料理学部の絶品料理で胃袋を掴めてしまえば言うことなし。
ミーアには確固たる自信があった。なぜなら、つい先ほど食べたプニッツァがとても美味しかったからだ！
――ウロスさんのような、食べ物に興味のある方が増えてくれれば、美味しい物が食べられるところが増えて、言うことなしですわ。帝国内に美味しい物が増えれば、なにかあった時に民の不満が噴出することも少なくなるはず。その分、ギロチンは遠ざかるというものですわ。
心の中で皮算用……否、プニッツァ算用をしつつ、ミーアは勝利の笑みを浮かべるのだった。

さて、一連のやり取りを見ていたユバータ司教は、小さくつぶやく。
「学生たちの、討論会……」
思ってもみなかったミーアの提案に、思わず唸ってしまう。
――それが、私の懸念に対するミーア姫殿下のお答え、ということか……。
いかに、ミーア学園が優れた教育方針を持っていようとも、帝国内で認められていないのであれば、世界に見せたところで意味がない。まず、自国内で認められるのが先だろう、と指摘されてしまう

からだ。
そうなっては、パライナ祭が台無しになってしまう。だからこそ、ミーアはグロワールリュンヌと対決し、聖ミーア学園が優れていることを圧倒的に示さなければいけないのだが……。
――その重大な役割を、学生たち自身に……。学園の生徒たちを信じ切っている、ということか……この聖ミーア学園の生徒たちを……。
そこで、彼は眼鏡の位置を直しながら……。
――あるいは、グロワールリュンヌに通う生徒たちをも……。
ミーアの器の大きさに慄くユバータ司教だった。

第七十話　パティ、幻惑されてしまう……！

「ならば、なにも問題はありませんわ。パライナ祭にどちらの学校が出るのが相応しいか、ぜひ、討論会を開いて決めることにいたしましょう」

凛と言い放つミーア、その顔にヨハンナは、在りし日の恩人、パトリシアの姿を見た。

――ああ……ミーア姫殿下は、確かにパトリシアさまの面影をもっておられるようじゃ。

親友たるアデライードはまだしも、マティアスを経由している点が少々不安ではあったのだが……。ヨハンナの目に映るミーアは、思慮深く聡明で、パトリシアのような深い知性を身にまとっているように見えた。

ゆえに……ゆえにこそ……彼女は悲しかった。なぜなら……。

――ミーア姫殿下のなさろうとしていることは、パトリシアさまの御心とは違う。そのはずじゃ……。

皇太后パトリシアの想い、託された願い。

ティアムーン帝国を、アデラを、生まれてくる子を守ってほしい、と……。

――アデラの子を……ミーア姫殿下を守るためには、この国の枠組みを守ることこそが肝要。連綿と受け継がれてきた、しきたりと文化を守ることこそが、なによりも大切なことじゃ。

ヨハンナはもともと異国人であった。だからこそ、違う国の形というものを知っていたし、だからこそ、この帝国の在り方がおかしいことにも気が付いていた。けれど、それゆえに「これこそが帝国が帝国たる所以、国独自の文化で、国としての枠組みなのだ」と言われれば、それに逆らうことはできない。

帝国貴族であれば必ず持っているであろう常識、反農思想がいか

に愚かなことだと思っても「そう感じるのは自分が異国人だからである」という結論に達してしまう。だからこそ、ヨハンナは、その「帝国貴族の常識」を維持することに心血を注ぐ。

帝国に来た当初、戸惑う彼女を気遣って、いろいろと世話を焼いてくれたパトリシア。その想いに少しでも応えるために……ヨハンナは常に帝国貴族らしくあろうとした。

民草に頭を下げるは帝国貴族の行いではない。されど、皇女の客にならば下げるのが当たり前。ゆえに、なんの躊躇もなく、屈辱も感じずにそれを行うことができる。

この帝国に根付いた文化を、彼女ほど尊重する者はいなかった。だからこそ、彼女はミーアを見つめる。

パトリシアの想いとは違う方向へ向かおうとしている――とヨハンナが信じる――帝国皇女の行いを止めるために、ヨハンナは口を開いた。

「否……じゃな、それは」

ヨハンナの、直感が告げている。武闘派として知られる彼女は、戦士の勘として、ミーアの言に従った時の危険性を敏感に察知していた。理由はわからない、が、言うとおりにしては危険だと……。

「あら……なぜですの？　ヨハンナさん。わたくしの話になにか不都合でも……？」

不都合、不整合、不合理……それらのものは、見当たらない。

両校の討論会についても、今までミーアが行ってきた改革についても、実に合理的かつ正論のようにヨハンナには聞こえた。

けれど、同時に、ミーアのしようとしていることは、このティアムーン帝国という枠組みを壊す行いに、ヨハンナには見えていた。

ティアムーン帝国は……育まれた文化は、帝室の血筋を守るための固き城。初代皇帝が子孫の繁栄のために作り上げた絶対のしきたり。

それこそが、長きに渡り帝国を維持してきたものならば、それを守ることこそが、皇女ミーアを守ることに繋がるのだと、ヨハンナ

は信じた。
だからこそ、彼女は今立ち塞がる。大切な人の孫娘の前に……親友の愛娘の前に。
「仮に……もしも仮に、この学園が民草にとって良き学びの場であったとしても、伝統ある貴族の子弟に良いものであるとも限らぬ。学生同士の交流がグロワールリュンヌの学生たちに、良くない影響を及ぼすやもしれぬ」
その答えに、ミーアは、ぬぅっと呻く。
「ゆえに、討論会には、妾は反対じゃ」
いささか強引に、話を切り上げんとするヨハンナ。その耳に、不意に……。
「……頑な」
小さな、けれど、揺らぎのない声が聞こえてくる。
「なぜ、そんなに頑なに反対を……？」
抑揚の薄い幼い少女の声だ。
普段のヨハンナであれば、聞き流したであろう、子どもの声だ。されど、今のヨハンナには、それは不快だった。
ただでさえ、恩人の孫の、親友の娘の、邪魔をしなければならないところなのだ。心を鬼にして、反対を述べなければならない場面なのだ。
――ブルームーン公爵夫人たる妾に……このヨハンナ・エトワ・ブルームーンに諫言を宣うとは……。いかに、皇女の客人といえど、我慢ならぬ。
彼女は武闘派なのだ。
殴って聞き分けのない奴に言うことを聞かせるスタンス！　なのだ。
手元の扇を手に取り、不機嫌に歪む口元を隠しながら、
「うん？　誰ぞ？　なにか言ったかえ？」
ジロリ、と周囲に鋭い視線を巡らせる。が……。
「なんぞ、妾の言に、文句でも……え？」

視線と言葉が、同時に止まる。その先にいたのは、一人の少女だった。
ヨハンナの視線を怒気を受けても、怯む様子もなく、ただただ、無表情に見つめている少女。切りそろえた髪、その色は、皇女ミーアと同じ……あるいは、皇太后パトリシアと同じ……どこか懐かしさを感じさせる色で。
真っ直ぐにこちらを見つめている瞳、その色は静かで冷たい青。見つめられると、心の奥底まで見抜かれてしまいそうな、その眼光に、ヨハンナは確かに覚えがあった。
……気付いていなかった。
先ほどの馬車から降りた時も……この食事会が始まった時も……。まったく眼中になかったから……視界にも入れていなかった。
――あの娘……、あの面影、パトリシアさまにそっくりじゃ。あの者はいったい……。
驚愕に言葉を失ったヨハンナ。パティは、そんなヨハンナの顔をジッと見つめる――プニッツァで汚れた手を、ふきふきしながら……！
……どうやら、パティも、その魅惑の味に幻惑されてしまったらしかった。まぁ、どうでもいいが……。

第七十一話　ミーア姫、ギュンギュン頭を働かせる

「あっ、あなた、は……」

「……なぜ、そんなにも強硬に反対するのですか？　ミーア……姫殿下の言に理があることは、あなたもおわかりなのではありませんか？　それなのに……」

パティの言葉は、実直で、いささか危険を孕んだものだった。皇女の客人とはいえ、身分なき小娘が星持ち公爵夫人に疑問を呈する。それは、慈悲を得られなければ成立しない行為。にもかかわらず、パティを咎める者はいなかった。一瞬、口を開こうとしたフーバー子爵であったが、ヨハンナの尋常ではない様子を見て、口をつぐんでいた。

「……なぜ？」

再度の、踏み込んだ問いかけ。その静かな声に……ヨハンナの肩がビクンっと震えた。

「あなたが……それを問われるのですか……？　妾は、あなたの……」

明らかな動揺。状況の停滞。

されど、それを一瞬の拮抗と見て取ったミーアは、素早く頭を働かせる。

――これは……ヨハンナさんが冷静になる前に、動いたほうが良さそうですわ！

今は、パティに不意を突かれた故、一時的に混乱しているヨハンナだが、それは長くはないはず。パティが他愛のない小娘に過ぎないと思い出せば、この停滞は、すぐさま終わる。それに、これ以上、質問を続ければ、却って強硬に押し切られるかもしれない。

余談だが、今日のミーアの脳みそは、よく働いていた。食べた分のカロリーの一割ほどを消費して、素早く思考を深めていくミーア

である。非常に燃費の良い脳みそなのである。
――しかし、なにを言うべきかしら……。間違っても正気に戻るようなことを言ってはいけませんわ。あまり欲張って冷や水をかけるようなことをすべきではない。とりあえず、認めてもいいかな、というようなラインで、できるだけ、こちらに有利な落としどころを提案するのがベストですわ……。とすると……。
ミーアはやや迷った末、口を開いた。
「ならば、数日間、この聖ミーア学園を見学して、それで決めるというのはいかがかしら？」
言ってから、ミーアは内心でニンマリする。
――我ながら、これはなかなかに良い手ではないかしら？　これで、ヨハンナさんは、しばらく、この学園に滞在することになる。その間に、パティにプレッシャーをかけてもらえれば押し切ることは可能かもしれませんわ。
頼りになる祖母、パティの有用性は、今まさに目の前で証明されたのだ。このアドバンテージは最大限に生かすべきだろう。
――それに、ヨハンナさんの態度も気になると言えば、気になりますわ。
そう、ミーアには一つ気になっていることがあったのだ。
フーバー子爵は、少なくとも討論会を容認する様子が見えた。ミーアに押し切られた形とは言え、強硬に反対する様子ではなかった。あそこでゴネるようなことはしなさそうだった。対して、ヨハンナの頑なさはどうだろう？
なにか……違和感があった。
彼女は、はたして、そこまで偏狭な貴族主義者なのだろうか？
一切の妥協を考慮しないほど、強硬な人なのだろうか？
そして、そんなミーアの直感を裏付けるように、パティが声を上げたのだ。
なぜ、そんなに頑ななのか、と……。
――帝国の中央貴族に長らく染められてきたという事情はあるの

かもしれませんけれど、あるいは、星持ち公爵夫人としての矜持か……紫月花の会の長としての立場からのものかもしれませんけれど……。

いくつもの可能性が頭を過る。

プニッツァの油分によって滑りが良くなったミーアの脳みそは、ぎゅんぎゅん、唸りを上げて回転していた。今日のミーアの脳みそは、たっぷりの油によって、非常に滑りが良くなっているのだ！

――いずれにせよ、やはり、おかしな態度ですわ。もしかすると、その辺りを探っていけば、ヨハンナさんを説得することもできるかもしれませんわ。

紫月花の会の長にして、ブルームーン公爵夫人たるヨハンナを味方につけられれば、かなり大きい。

チラリとパティのほうに目を向けてから、ミーアは頷く。

――ふふふ、やはり、パティを助っ人に呼んでおいて正解でしたわ。あとはじっくりと、ヨハンナさんの考えを変えていければ……。

ミーアの提案に、ヨハンナはぎくしゃくと視線を向けてくる。

「なるほど……確かに……。この学園のことを知らなければ、是非を決めることもできぬじゃろうな。ならば、お言葉に甘えて、しばし、滞在させていただこうか……」

ヨハンナは、重々しくつぶやいて席を立った。

その答えに、ミーアはしかつめらしい顔で頷いた。

「それがよろしいですわ。フーバー子爵もそういうことで、よろしいですわね？」

「ブルームーン公爵夫人が、そうおっしゃられるのであれば……」

渋々と頷くフーバー子爵に、ミーアは内心でニンマリほくそ笑む。

――ふぅ、なんとか、凌げましたわね。やれやれですわ。

ただ一人……皇帝マティアスだけが「えー！？」っとしっぶーい顔をしていたのだが、まぁ、当然、そんなのはスルーするミーアである。が、いや、それも可哀想か、と思い直し、シュシュっと視線を転じる。向けた先には……大きな口を開けてカッティーラを食べ

ようとしているベルの姿があった。
ミーアからのアイコンタクトを受けたベルは、心得た！　とばかりに頷き、マティアスのほうに向かっていった。
――さて、これでお父さまは良いとして……。
っと、改めて、視線をヨハンナに向ける。ヨハンナは、まるで熱に浮かされたような顔で、席を立つと……。
「妾は……皇太后パトリシアさまのお言葉を守らねばならぬのじゃ……」
「……え？」
こぼれ落ちたつぶやき。それを聞き、パティがきょとん、と目を瞬かせた。

第七十二話　メイド会議

「ううん……どうしようかな」
アンヌは、眉間に皺を寄せて悩んでいた。
そこは、昼食会が終わり、食事が片づけられた後の来賓用の食堂。
人の気配のない室内に、アンヌの悩ましげなため息が響く。
脳裏を過るのは、先ほど見た風景だった。ミーアがペロリ、パクリと見惚れるほどに気持ちのいい食べ方っぷりを披露していた風景だ。
すごぉく！　心から！　嬉しそうに食べている光景だった。
それは、まぁ、いいのだが……。
「あれは……絶対に食べすぎだ。タチアナさんに、食べ過ぎには気を付けるように言われてたのに……」
「……どうかなさいましたか？」
その時だ。ふと顔を上げると、そこに立っていたのは……。
「あ、ニーナさん……」
エメラルダのメイド、ニーナだった。ジッと観察するように見つめてきてから、ニーナは小さく首を傾げた。
「なにやら、心配事でも？」
「あ、はい……実は……」
ニーナはエメラルダに長く仕えるベテランのメイドだ。なにか、良い考えを聞けるかもしれない。
アンヌは、タチアナから聞いた話を、ニーナに話した。
「ミーアさまが食べ過ぎたり、運動不足だったりすると、健康を害する恐れがある、と。でも、聖ミーア学園に来てから、毎日、たくさん食べておられるので」
確かに、学園内の査察や森の中に行ったりもしているので、運動していないわけではないのだが……。やはり、食べた量に比して運

動は足りていないだろう。
「今日も、あんなにたくさん食べておられましたから……。少し心配で」
「なるほど……」
ニーナは顎に手を当てて考え込んでから……。
「そうですね。エメラルダお嬢さまも、少し食べ過ぎだったかもしれませんね。よし……」
スッと胸に手を当てて、ニーナは言った。
「では……僭越ながら、この私が、エメラルダお嬢さまで手本を見せて差し上げます。もっとも、ミーアさまは、エメラルダお嬢さまほどひねくれていないとは思いますので、もっと簡単だと思いますが……もっとも、それでは味気ないと言いますか……最近は、エメラルダお嬢さまもすっかり素直になってしまって、歯応えがなくて面白くないと言いますか……」
なにやら、ぶつぶつつぶやくニーナであった。が、まぁ、それはともかく。
「あ、ちょうどよくいらっしゃいました。では、そこで見ていてください」
ニーナの言葉通り、食堂にはエメラルダが入ってくるところだった。ニーナは、スススッと音もなくエメラルダのところへ歩み寄ると……。
「エメラルダお嬢さま」
「あら、ニーナ、なにかご用かしら？」
きょとりん、と瞳を瞬かせるエメラルダに、ニーナは渋い顔をする。
「……どうぞ、私のことは、もう少し粗雑な感じで……。本当に、その、そこのメイドとか。以前みたいな感じで全然大丈夫なのですが……」
「なにを言っておりますの、ニーナ。あなたは、私の大切な専属メイド。そのような扱いをしていては、ミーアさまに叱られてしまい

ますわ。ねぇ、アンヌさん」
話を振られ……ついでに、ニーナからの、なにやら、あつぅい視線を受けて、アンヌは困ったように笑みを浮かべる。
「それはそうと、エメラルダさま、これは私の経験譚ではなく、聞いた話なので、はっきりとしたことは言えないのですが……」
ニーナは、まるで……とっておきの極秘情報を話すような感じで、エメラルダにそっと顔を寄せる。
エメラルダも不思議そうにしつつも耳を寄せる。っと……。
「十代の頃に食べ過ぎたり、運動が不足したりすると、二十代後半から、徐々に肌に影響が出始めるそうです」
「あら、そうなんですの……それで？」
「恐らくですが……あと五年ぐらいでエシャール殿下がご結婚できるようになるのではないかと思います。その頃には、エメラルダさまは二十代前半……。それはよろしいのですが、その……ご結婚して少しすると、肌に悪影響が出てくるのではないかと……」
「……なっ、そ、それは、本当のことですの？」
「あくまでも聞いた話です。経験譚ではないので、はっきりしたことは……ええ。決して、私自身の体験ではないのですが……」
なにやら、念入りに言ってから、ニーナは言った。
「本日は、少々、食べ過ぎておられたように思いましたので……少し、運動をなさったほうがよろしいのではないか、と」
「なっ、なるほど。確かにそうですわね。エシャール殿下と結婚した暁には、できるだけ長く若さと美しさを維持していたいですし……」
っと、言いかけてから、エメラルダはハッとした顔をして。
「いえ、でも、誤解のないように言っておきますけれど、エシャール殿下との婚約関係は今は、解消されておりますのよ？　私の夫となる方がエシャール殿下とは限りませんし。それに、今は、異国の地で頑張るあの方を応援したいと、純粋に思って……」
などと、なにやらぶつぶつ言うエメラルダに、ニーナは訳知り顔

で頷いて。
「承知しております。けれど、長く社交界の花として君臨するためにも、やはり、できるだけ健康的な食事と運動を心掛けることが肝要かと……。なので、食べ過ぎた時には、その分、運動をされたほうがよろしいかと思います」
「そっ、そうですわね。うん、それは道理ですわ。よく言ってくれましたわ、ニーナ。さすがは、私の専属メイドですわ」
「お褒めに与り、光栄です。しかし、名前を呼んでのお褒めの言葉は、恐れ多いですので、ぜひ、もう少しぞんざいな感じで。そこのメイド、ご苦労、ぐらいで全然、大丈夫といいますか……」
などとなにやら言っているニーナを、完全にスルーし……。
「どんな運動が良いのか、一緒に考えてくれるかしら？　エシャール殿下の前ではずっと若くいたいですし……」
「……そのように無視せずとも……いえ、でも、なぜでしょう……。なんだか、懐かしさで胸が満たされるような……この満足感……」
「……ヨハンナさまにも、なにか、コツをお聞きしておこうかしら。あの方も、大変、若々しいし、美しい容姿を保っておられますし……」
どこかすれ違っているような、ガッチリ噛み合っているようなやり取りをしてから、歩いて行ってしまう主従。
ふい、と後ろを歩いていたニーナがアンヌのほうに振り返り、表情を変えずに片目をつぶった。
ポカン、と二人を見守っていたアンヌだったが……。
「さすがだなぁ。ニーナさん……」
熟練のメイドの見事な手綱さばきに、ほぅっとため息を吐きつつも……。
「私も、考えないと……どうすればいいのか……」
ミーアの健康のために頭を悩ませるアンヌ。その健気な忠臣の想いが、どのような実りをもたらすのか。今はまだ誰も知らない。

第七十三話　明日の自分を頑張らせるために！

「ミーアさま……」
「あら、アンヌ、どうかしましたの？　そんな怖い顔をして……」
昼食会が終わり、食休みと短いお昼寝のために、ミーアは部屋に戻っていた。
そんなミーアを、アンヌはジィっと見つめてから……。
「ミーアさま……その……食べ過ぎ、だと思います」
「あら……？　そんなことは……」
その言葉の是非を確かめるように、ミーア、お腹をさする。
ちょっぴりＦＮＹっと……は、していなかった。むしろ、固いというか……ぱんぱんに、張っているように感じた！！
そう！　紛うことなき、食べ過ぎである！　食べ過ぎて、しまったのである！
プニッツァがスルスルと呑み込めてしまったものだから、油断してしまったのだ。
――これは、料理に改善の余地ありかしら……いや、しかし、あの味を変えてしまうというのは、もったいなさすぎますわ……。
なぁんて、現実逃避をするミーア。であったが、じぃいっと自分に向いてくるアンヌの視線に耐え切れずに、ううっと唸って……。
「仕方ありませんわ、今夜のお料理の量を少し減らしていただいて……。それに、デザートのケーキを三分の二、いいえ、五分の四に……むしろ、八分の七……？」
などと、実に甘っちょろいことを言うミーアに、アンヌは極めて真剣な顔で首を振った。
「それに、最近、運動もサボっておられるように思います」
「うぐ……」
痛いところを突かれ、ミーア、思わず胸を押さえて呻く。

そうなのだ、ここ最近、聖ミーア学園での刺激的な日々で、ミーアはすっかり精神的にダメージを受けてしまい、気力をガリガリ削られてしまっているのだ。けれど、残念ながら、精神の消耗は、肉体の消耗と完全にはリンクしていない。心が疲れたからといって、肉体疲労時と同じには、カロリーは消費されないのだ！

むしろ、それを言い訳に、ベッドにグンニョリしてしまっていたので、逆に運動不足になってしまっていたのだ！

その事実を自覚し、衝撃のあまり呆然とするミーア。そんな様子を見たアンヌは、ちょっぴり申し訳なさそうな顔をして……。

「もちろん、アベル王子は気付かれないかもしれませんが……」

軽くフォローを入れてしまう、鬼になり切れないアンヌである。が……、愛しのアベルは気付かないかもしれないし、もしも気付いたとしても、まぁ、その程度で嫌いにはならないでしょう、というニュアンスの言葉を聞いた瞬間、ミーアは、さぁっと顔色を青くした。

「なっ！　あ、アベルに気付かれない……わたくしが、わたくしだと！？」

ガッツリ誤解するミーアである。

そう、目を向けないようにしてはいたが、ミーア自身、気付いていたのだ。食べ過ぎと、運動不足による絶対的な危機の存在。その無意識の危機感が、ミーアに誤解をさせたのだ。

「きっ、気付かぬうちに、わたくし、そこまで変わってしまったと……？」

頬に手を当て、ミーアはウニウニと体をよじった。

その時だ。不意に脳裏に甦る言葉があった。それは「プニッツァがシャローク・コーンローグの大好物である」という事実で……。

――あのシャロークさんの好物……シャロークさんがいつも食べている物……すなわち、たくさん食べると、シャロークさんのようになってしまうものっ！？

ミーアの中、ようやく先ほどの引っ掛かりの正体がわかる。そし

て、その危険性も、即座に理解したミーアは……。
「そっ、それは、まずいですわ。今日から、食べるのを控えねば……」
などと言い出すも、アンヌは大きく首を振った。
「皇帝陛下も、ブルームーン公爵夫人もいらっしゃいます。ミーアさまだけが食べないということは無理だと思います。それに、学園の学生が良かれと思って作ってきた物を残すようなことは、慈愛に溢れるミーアさまにはできないと思います」
アンヌはしかつめらしい顔で、ミーアを見つめ、
「それよりも、ミーアさま、むしろ、運動をしたほうが良いと思います」
「うっ、運動、ですの……？」
「そうです。最初から無理なことを目指すより、できることから始める。お料理を減らすことが、あまり現実的ではない以上、食べた分、運動するほうが良いと思います」
「なるほど。それは道理というものですわ。ならば、この学園でできる運動をいたしましょうか……」
と言いつつも、ミーアは、考えてしまう。
――しかし、続けることができるかしら……？　というか、始めることができるかしら？
基本的にミーアは、自分を信用していない。明日の自分は今日以上に頑張れる、などということを、一切期待していない。なんだったら、明日の自分は今日の自分の期待を裏切るほどに、グータラかもしれないとさえ思っている。
――たぶん、今日のわたくしは、昨日のわたくしが夢想したほどには、頑張っておりませんし。とすると、運動するにしても、なにか、続けられる工夫をしなければ……。
考えた末に、ミーアが出した答えは極めてシンプルだった。すなわち……。
「ああ、そうですわ。そういうことでしたら、この聖ミーア学園の

学生たちに、ダンスの手ほどきをして差し上げる、というのはいかがかしら……」
そう、いつも通りの巻き込み戦術である。
別に、自分だけが運動して疲れるのは業腹だなぁ、とか思ったわけでは決してない。単純に、自分を慕ってくれている生徒たちを誘っておけば、いくら明日の自分でもきちんとダンスをするだろう、という読みゆえである。
「学生たちに、ですか？」
「ええ。これから先、帝国や他国でなんらかのパーティーに招かれることだってあるでしょうし。社交ダンスの腕前は、彼らの働きの、きっと助けになると思いますし。うふふ、これは、我ながらになかなかナイスアイデアですわ」
パンッと手を叩き、嬉しげな笑みを浮かべるミーアであった。

第七十四話　動き出し、立ち止まり、生まれた流れを見定めん……

さて、善は急げ！　とばかりに、ミーアはアンヌを伴って、ルードヴィッヒのもとを訪れた。自らの「運動不足解消計画！」を引っ提げて。

ルードヴィッヒは学長室にいた。どうやら、ガルヴとバルタザルと共に、今後のことを協議していたようだった。

「これは、ミーア姫殿下、ようこそいらっしゃいました」

「ご機嫌よう、みなさん」

ニッコリと笑みを浮かべつつも、視線を巡らせ、ミーアは考える。

――ふむ、先に討論会のことをお話ししておいたほうがよろしいかしら。

さすがに、運動不足解消のためにダンスをしたいから、サボらないための監視を生徒たちに協力してもらいたいです！　などと言い出せるほどの胆力はミーアにはない。

それに、ルードヴィッヒたちには、先ほどの昼食会の様子は共有しておいたほうが良いだろうし……と判断。一つ咳払いして、口を開いた。

「みなさんが、揃っていて良かったですわ。実は、グロワールリュンヌ学園について、少しお話ししておきたいことがございますの」

それから、ミーアは、先ほどの昼食会でのやり取りを話した。

途中、フーバー子爵の件に話が及ぶと……。

「ああ、フーバー子爵ですか。聞いたことがあります」

と、口を開いたのは、バルタザル・ブラントだった。伯爵家の三男であるバルタザルのもとには、当然のことながら、グロワールリュンヌの話も入ってくるのだろう。

「古き良き……いや、良きと言ってもいいかは議論の余地がありましょうが、ともかく、帝国貴族の伝統を重んじる男ですね。先代皇

帝陛下の教育係を務めていた、グロワールリュンヌの当時の学長に師事していた経緯もあって、学校内でもかなりの発言力を持っているとか」
　中央貴族出身という、ルードヴィッヒの同門の中では極めて珍しい経歴の持ち主であるバルタザルならではの情報だった。もしかすると、彼自身もグロワールリュンヌに通ったことがあるのかもしれない。
「ほう、それは初耳ですわね。ということは、彼をこちらの陣営に引き込めれば、グロワールリュンヌ内の改革も進めることができる、と……」
「それはそうですが、彼を説得するのはなかなかに難しいかと存じます。なにしろ、筋金入りですから……」
　苦笑いしたバルタザルは、そこで表情を引き締めて、
「申し訳ありません。お話を遮ってしまいまして……」
「いえ、問題ありませんわ。貴重な情報を感謝いたしますわ。ええと、それで、どこまで話したかしら……。ああ、そうそう、パライナ祭に出る代表校の決め方なのですけど……両校の生徒による討論会を開いたらどうか、と提案いたしましたの」
　ミーアのその言葉に、ガルヴが髭に手をやった。
「なるほど、討論会……ですか」
「ええ。この聖ミーア学園の中を、次代を担う貴族の子弟に見てもらいたいのが一つ。もう一つは、直接、学生同士が言葉を交わすことで、彼ら自身にも、自分たちの価値観が間違っていると、気付いてもらいたいと思いましたの」
　そう、ミーアは期待しているのだ。
　グロワールリュンヌの学生たちが、反農思想の歪さに気付くこと。
　そして……聖ミーア学園の学生たちが、小麦畑ミーアートを始めとしたアレコレのおかしさに気付くことを！
　ミーアは声を大にして言ってやりたいのだ！　お前ら、冷静になれよ！　と。

「なるほど……。では、ミーア姫殿下は、いよいよ本格的に、帝国内の意識改革を行っていこうと、そうお考えなのですな」
豊かな顎髭を撫でながら、ガルヴは唸った。
「いつかは、とは思っておりましたが……まさか、これほど急に事が動こうとは……ふふ、長生きは、するものですな」
「そうですわよ。まだまだ、楽しいことがございますから、もっともっと長生きして、この聖ミーア学園を盛り立てていただかないと困りますわ、ガルヴ学長」
っと、半ば本気、半ばおだてることを言ってから、ミーアはスッと背筋を伸ばす。
「まぁ、それはそれとして、実は、一つお願いしたいことがございますの」
「はて、お願い、ですかな？」
不思議そうに目を瞬かせるガルヴにミーアは一つ頷いて……。
「実は、聖ミーア学園の生徒たちに、ダンスの鍛練にお付き合いいただきたいな、と思っておりますの」
「ダンス……ですと？」
少し驚いた様子を見せるガルヴ。一方で、ルードヴィッヒは、すかさず眼鏡をスチャッと押し上げて、
「ダンス……ですか。なるほど、それは素晴らしい」
訳知り顔で頷いた。
「ん？　どういうことだ、ルードヴィッヒ？」
バルタザルの問いかけに、ニヤリと笑みを浮かべるルードヴィッヒ。
「わからないか？　これは、グロワールリュンヌの学生たちを迎え撃つための準備さ」
「なに……？」
「ほう……？」
「……はぇ？」
首を傾げるバルタザルとガルヴ……と、誰かの声が聞こえたよう

だったが……特に気にした様子もなくルードヴィッヒは続ける。
「これはあくまでも私の推測なのですが……ミーア姫殿下は、グロワールリュンヌから呼び寄せた学生を歓迎するため、という名目で、ダンスパーティーを開かれるおつもりなのではありませんか？」
こいつ、なに言ってんだろう……？　と、眉を潜めそうになったミーアであったが、すぐに真面目腐った様子で腕組みし……。
「……ええ、まぁ、大体当たっておりますわ。うん……」
とりあえず、乗って見定めんとする。
生み出された流れが、どこへ向かっていくのかを……。

第七十五話　ミーア姫、毅然と意見を表明す！

突然のミーアの発案。

聖ミーア学園の学生たちに対するダンスレッスンという策に、ルードヴィッヒ舌を巻いていた。衰えることのない、その叡智の冴えに……。

――ミーアさまは、聖ミーア学園の学生たちが気後れせず、冷静な心で討論会に望めるよう、下準備をなさるおつもりなのだろう。

ルードヴィッヒは考える。聖ミーア学園で行っている教育の質は、グロワールリュンヌに劣るものではない。むしろ、大いに勝っている、と。

そもそも、そうなるように、自らの師であるガルヴを推薦したのだし、同門の者たちにも呼び掛けている。最初は敵対的であったグリーンムーン家とも、今は良好な関係を築けている。

そう、体制だけ見れば、この学園は、まさに、帝国最高峰の学府といっても過言ではないのだ。

……けれど、通っている学生たちに目を向けた時、一つだけ懸念するところがあった。それは、貴族の子弟に対する引け目である。

同門の者たちの中には、学問において秀でていれば、その他のことは気にする必要はない、と考える者もいる。けれど、そこまで極まった考え方をする者は、むしろ稀だ。ほとんどの者はそこまで強くない。ルードヴィッヒもバルタザルも後輩ジルベールにしてもそうだ。

国か、商人か、貴族か……いずれと関わるにしても、相応の礼節は求められるもの。

――我が師ガルヴのように、しがらみをすべて捨て去ってというのは、常人にできることではない。ほとんどの者はそれを自覚している。だからこそ、それを指摘されれば、動揺は禁じ得ない。

グロワールリュンヌ校の者たちは、それを熟知している。であれば、どういうことになるか……。
「グロワールリュンヌ校の学生たち、あるいは教師は、聖ミーア学園の生徒たちに対して精神的優位を保つため、社交マナーの不心得を突いてくるかもしれない」
ちなみに、ルードヴィッヒの推測は、的外れとは言い難かった。なぜなら、先ほどの昼食会において、まさに、フーバー子爵がそれを行おうとしたからだ。
「そのような思惑に対して、ミーアさまは備えようとされている。否……むしろ、逆撃を加えようとしているのではないだろうか、とそう考えたのです」
礼儀作法がまったくなっていない平民の子ども……と、そのように見下していた者たちが、歓迎ダンスパーティーにおいて、完璧な礼で出迎えたら、どう思うだろうか？
場合によっては、自分たち以上に優れた社交ダンスの腕前を見せられたら、どうなるか？
呆気にとられ、戸惑い、焦るのではないだろうか……？
「なるほど、討論会の前に、強かに一撃加えようということですか。ははは、それはいい。彼らはプライドが高いですから、冷静ではいられないでしょうな」
そう笑いながら、バルタザルが愉快げな視線を向けてくる。
伯爵家の出身の癖に、どこか、中央貴族に冷めた態度をとる友人に、ルードヴィッヒもニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。
「そういうことならば、ダンスのための楽器を用意する必要がございましょうな。ふむ、これは、ベルマン子爵に相談しなければなるまい」
聖ミーア学園には、音楽を扱う学部はない。一応は礼拝堂にオルガンがあるが、それでは不足があるだろう。
もしかすると、楽団を手配する必要があるかもしれない。
「それに、パーティーとなれば、料理の準備が必要かの。料理学科

の者たちと相談しなければ……」
どうやら、学長ガルヴにも異存はないらしい。てきぱきと、段取りを考え始めている様子だった。
「ああ、それならば、例の……プニッツァはぜひ、出していただきたいですわ。あれは、素晴らしいお料理でしたし」
最後にミーアの指示を受け、ダンスパーティーの開催は決定したのだった。
――しかし、さすがはミーアさまだ。このような計略は、俺では思いつかない。貴族社会にも通じていなければ、決して考え付かぬもの。相も変わらず、溢れるばかりの叡智だ。
感心の視線を向けるその先で、ミーアは、ニコニコ笑みを浮かべていた。
……ちなみに、お気づきだろうか……？
歓迎ダンスパーティーの件について、ミーアが口を差し挟んだのは、最後の最後。
プニッツァに対しての注文だけだ、ということを……。
それまでは、なんか、ルードヴィッヒがいろいろと言い出したけど、とりあえず、黙って聞いておこうかしら……？　などと……無言で、ただ生み出された流れに身を委ねるのみだったということ。
ゆえに、ミーアの意志は、最後の最後。料理のメニューにしか反映されてはいないわけだが……。
まぁ、だからどうということもないのだが。

さて、ルードヴィッヒらのもとを後にしたミーアは、ニコニコ顔で歩いていた。
「うふふ、ダンスパーティーで、またあの美味しい物を食べられるだなんて、素晴らしいことですわ！　グロワールリュンヌの学生たちの心も掴めれば言うことなし。なかなかに、良い方向に進んでいるのではないかしら？」
ミーアにとってダンスパーティーは最高の存在だった。

なにしろ、美味しい物を食べたそばから、ダンスで消費していけば、差し引きゼロなのだから。

――うふふ、気にせず、たくさん食べられるというのは、実に幸せなことですわ！

収支の計算が微妙に合わないというか……なにかが多大に繰り越されて行ってしまいそうな気がしないではないのだが……。

ともあれ、着々と健康減量計画の準備を整えていくミーアなのであった。

第七十六話　ミーア姫、プニッツァの危険な影響を受ける

さて、ルードヴィッヒらとの相談を終えたミーアは、部屋へと戻る。っと、部屋の扉の前で、パティが待っていた。ドアにもたれかかるようにして立ちつくすパティに、ミーアは首を傾げた。

「あら、パティ……どうしましたの？　そんな難しい顔をして……。眉間に皺が寄ってしまっておりますわよ？」

重たい空気を和らげるかのように、お道化た様子で自らの額をこするミーア。けれど、それに取り合わず、極めて真面目な顔のパティは、

「……ミーアお姉さま、お話があります」

どこか、思いつめたような声で言った。

「そう……。まぁ、ちょうどよかったですわ。わたくしも、話をしておかないとと思っておりましたし。では、部屋の中でお話しましょうか……。ふむ、少し喉が渇きましたわね。アンヌ、申し訳ありませんけど、お茶の用意をお願いできるかしら？　ジャムとお砂糖……」

「ミーアさま……」

ジッとアンヌに見つめられ、うぐっと唸ったミーアは、

「……はパティだけで。わたくしはストレートで……」

「あ、じゃあ、ボクが一緒に行きます！　ちょうどハチミツを入れたホットミルクを飲みたいと思っていたので」

どこからか、甘い匂いに誘われてベルが現れた……！　その後ろにはシュトリナの姿もある。

「ベルさまも、少し食べ過ぎです。ハチミツはなしにしておきましょう」

「え……？」

ベルが悲しそうな声を上げるも、アンヌはゆっくり首を振り、

「健康を害してしまいますから……」
言い聞かせるように言った。
ベルの援護をしようと口を開きかけたシュトリナであったが、ベルの健康にかかわることであれば、呑み込まざるを得なかったのだろう。すごすごと引き下がり、ベルの肩にぽむんっと手を置き、
「ホットミルクだけでも美味しいよ、ベルちゃん」
「うう……まぁ、確かにハチミツを入れなくても美味しいですけど……」
などと言う、しょうもないやりとりをしつつ、三人は行ってしまった。
「ふぅむ、では、お茶が来るのを待ちつつ、話しましょうか」
そう言って、ミーアは、パティの手を引いて部屋に入った。そのまま、ベッドに座らせて、ミーアは正面に椅子を持っていく。ジッとパティの顔を見つめて……。
「それで、お話というのはなにかしら……」
パティは、小さな拳をギュッと握る。なにかをこらえるように。そして……。
「……私がやらかしてしまったみたいだから」
「え……？」
パティは、小さな両手で頭を抱え……。
「うう……なんか、ヨハンナさんが、あんなふうに頑なになったのは、私がやらかしてしまったからみたいだから……」
うーっと唸りながら、頭を振るパティ。
「あら……？　やらかしたかどうかは、まだわかりませんわ。パティが言ったことをヨハンナさんが間違って受け取っただけとも考えられますし」
ミーアは、やんわりとパティの言葉を否定してやる。
そう、血は争えぬという言葉もあるではないか。ミーアは信じているのだ。
パティ……皇太后パトリシアは、ミーアの祖母なのだ。自身の祖

母が、そんな変なことを言うだろうか？　そんなに迂闊なことを、言うだろうか？

否……と、ミーアは思う。

――そんなことを言うはずがありませんわ。このわたくしのお祖母さまである、パティが、そのような……。

「ホットミルクとお茶、入れてきました！」

バーンっと元気よくドアが開き、ミーアの孫娘……ベルが姿を現した！

ミーアたちのほうを見て、ん？　っと小首を傾げ、不思議そうな顔をするベルを見て……。それから、パティの顔と見比べて……。

……血は争えぬものだから、そんなに変なことはしない……だろうか？　っと、一抹の不安を覚えるミーアである。

――ま、まぁ、ホットミルクは美味しいですし、冒険とかは、別に変なことではありませんし。うん、変なことは言っていないと思いますわ。迂闊なことでもない……はずですわ。だから、同じように、パティも……きっと、たぶん……おそらく？

だんだんと自信がなくなってくるミーアであったが……。

「……ヨハンナさんを、説得するつもり？」

パティの静かな問いかけに、ミーアは視線を戻した。

「そう、ですわね……。ヨハンナさんが、この学園にいる間に説得できれば良いのですけれど……」

最低限、討論会を認めてもらわないと、話にならないわけだが……。

パティはジッと黙ってそれを聞いていたが……。

「ミーアお姉さま、お願いがあります。私に、ヨハンナさんの説得を任せてください」

「あら、あなたが……ですの？」

「……はい。昼食会の様子を見た感じ、ヨハンナさんは、私に反応していた。不意を突けるかもしれない。それに、私の言葉がヨハンナさんを頑なにしているというのなら……なにか気付くことがある

かも……」
っと、そこまで言ってから、パティは難しい顔をする。
「……でも、私は、この世界では身分不詳だから」
「ふむ、なるほど……。それはなんとかすべきですわね……」
ミーアは一瞬考える。
一番、簡単なのは、マティアスの隠し子であると匂わせることだが……。
――お母さまと仲が良かったというならば、それはむしろ悪手な気がしますわ。それに、お父さまも、さすがにそれは否定しそうな気がしますし。それよりも良いのは……。
ミーアは、ポコン、っと手を叩いた。
「ああ、そうですわ。それならば、パティ。ハンネス大叔父さまの隠し子という設定でいかがかしら？」
「……はぇ？」
その提案に、極めて珍しいことに、パティが目をまん丸くした。口をポッカーンと開け、気の抜けた声を上げる。
「だから、あなたの身分ですわ。行方不明になったクラウジウス候の隠し子と、そう名乗っておけば、パトリシアお祖母さまと似ていても不思議はありませんし。あなたのことを尊重して言葉に耳を傾けてくれるかもしれませんわ」
パティは、しばし無言で考え込んでいたが、やがては、こくり、と頷いた。
「わかった……。それで。自分のことは自分で責任をとる……」
「ええ、そうしていただけると、とても助かりますわ」
さて、上手いことヨハンナのことをパティに任せてしまったミーアであったが……ふと気付く。
「しかし、そうすると、いささか暇になってしまうかもしれませんわね。ダンスレッスンはあるとはいえ……」
それは、あくまでも自分自身の体調のためである。それ以外、何もせずにいるのは、少々気が引けるわけで……。

「あっ、そうですわ！　それならば、料理学部と協力して、グロワールリュンヌの学生たちを歓迎するための、ナニカ良いお料理を作るのはいかがかしら？」
先ほど食べたプニッツァの美味しさが、ミーアの脳みそに危険な刺激を与えていた！
「ふふふ、あれには、わたくしの、料理脳が大いに刺激されましたわ。あの上に何種類かのキノコをのせれば、きっと素敵なお味になるはず……。いや、いっそ、甘くするというのもよろしいかもしれませんわ。ふふふ、楽しみですわ！」

……ところで、これはまったくの余談であるのだが……。
ルドルフォン辺土伯に立ち寄っていたシオンたち一行は、現在、聖ミーア学園を目指して移動中だった。
一両日中には、到着するであろう、その一団の中で……。
「……妙だな。風邪でも引いたか……。なんだか、寒気がするな」
ダレカがそんなことをつぶやいていたのだが……。まぁ、どうでもいいことである。

第七十七話　失われた人たち

昼食会が終わった後、ヨハンナは、賓客用の部屋に通された。
それなりの部屋とはいえ、大貴族の夫人に対しては、いささか粗末な部屋であった。が……。今はそんなことはどうでもいい。
「ふぅ……。してやられたわ」
ベッドに腰かけ、深々とため息を吐く。
「まさか、あのような……。ふふふ、確かに面影はあったが……あのような小娘を、あの方と見間違うとは……。我ながら老いたものじゃ」
苦笑いを浮かべつつ、ヨハンナは首を振った。
その時だった。
コンコン、と控えめにノックする音。それに続いて、自らの専属メイドに連れられて入ってきたのは、フーバー子爵だった。
「失礼いたします。ブルームーン公爵夫人」
深々と頭を下げてから、部屋の中にチラと視線をやって……。
「帝国最大の門閥、ブルームーン公爵のご夫人にこのような粗末な部屋を当てるとは……。この学園の者どもは、まったくけしからんことでございます」
「よい。陛下や皇女殿下も同じ部屋だと聞いておる。ならば、妾が文句を言うわけにもいくまい。そちも余計なことは口に出さぬことじゃ」
片手をひらひらと振ってから、ヨハンナは言った。
「しかし、先ほどはすまなんだな。少々、取り乱してしまったようじゃ」
「さようでございましたか。いえ、ですが、お気持ち、お察しいたします。皇帝陛下と公爵夫人との食事会にあのような……民草の子が紛れ込むなど、言語道断。唖然としてしまうのも理解できようと

いうもの。そもそも……」
っと、ヨハンナは片手を挙げてフーバー子爵を黙らせる。
「それもまた、陛下が許されたことじゃ」
「ですが、陛下は、ミーア皇女殿下に、いささか寛容が過ぎるのではありますまいか？　この聖ミーア学園もそうですが、あのように、民草の……」
「よせ……と言ったのがわからぬか？」
ヨハンナの視線が、スゥっと鋭さを増す。射抜かれたフーバー子爵は、ビクンっと背筋を伸ばし、頭を下げる。
「これは、出過ぎた真似をいたしました。ですが、私は不安なのです。このままでは、この帝国の古き良き慣習が変えられていってしまうのではないかと……」
そこで、フーバー子爵は眉間に皺を寄せる。
「我が義兄の守ってきた、帝国の伝統が変えられてしまうのではないかと……不安なのです。あの日、あの炎の中に消えるまで、義兄が守って来たものが……変えられてしまうのが」
つぶやくようなその声に、ヨハンナは静かに目を見開いた。
「そうじゃな……。思えばあの日、妾同様に、そちもまた大恩ある師を失ったのであったな」
フーバー子爵は、神経質そうな顔を、フッと緩めて、懐かしげに目を細めた。
「あれから、ずいぶんと長い時間が過ぎてしまいました」
感慨深げなつぶやきに頷いて、ヨハンナは言った。
「妾も、そちの師には世話になった。異国に生まれた妾に、この国の貴族の常識を叩きこんでくれた。感謝している」
四大公爵家の一角、ブルームーン公爵家に嫁入りするため、ヨハンナを教育したのは、他ならぬ、フーバー子爵の師にして、彼の年の離れた義兄でもある人であった。
厳格な、決して揺らぐことのない貴族のしきたりを守りながらも、穏やかな物腰と柔らかな笑みを欠かさない……なんとも言えぬ魅力

を持った男だった。
だが……、彼は死んでしまった。
あの日、大火事の日……。皇太后パトリシアと共に……。
「大恩ある方々に応えるために、これまで懸命に生きてきた。ここで、その生き方を曲げるわけにもいかぬであろうな」
「無論です。永劫、このティアムーン帝国は、我ら貴き血筋の者によって指導されなければなりませぬ。上は上で、下は下。定めししきたりを破るは混乱のもと。長く続く帝国の文化を守ることこそ、国の安寧に繋がりましょう」
フーバー子爵はそう言ってから、そっとヨハンナを見つめる。
「時に、やはり討論会には反対なさるのですか？」
「ふん、別に正面から受けて立っても良いとは思う。我が中央貴族の子弟たちが、どのようなことであれ、民草や辺土貴族の子弟に負けることは無かろう。ただ、この聖ミーア学園には、あのサンクランドの第二王子殿下がいるというではないか。その格に勝てる学生はおるまい？」
「それは、確かに……」
「それに、ミーア姫殿下は、たいそう知恵の働くお方と聞く。その思惑に乗っても良いものか、どうなのか……」
腕組みしつつ、ヨハンナは首を振った。
「いずれにせよ、数日は、この学園に滞在することとなろう。そちも、そのつもりでいるがよい」
「はっ。ヨハンナさまの、ご随意に」
姿勢を正し、部屋から出て行ったフーバー子爵を見送ってから、ヨハンナはふとつぶやく。
「しかし、あのパトリシアさまに似た小娘……あれは偶然か……？
それとも、妾に備えて、用意していたということか……。だとすると、ミーア姫殿下も、なかなかに悪辣というものじゃが……」
っと、そこで、ヨハンナは小さく笑った。
「ふふふ、もしかすると、この後でアデラに似た娘でも出てくるの

かな……。もしもそうならば……」
どこか遠くを眺めるような瞳をして……。
「少し楽しみでもあるな……」
上機嫌に鼻歌でも歌いだしそうな……、年若い乙女のような表情で。

第七十八話　きっとご褒美に違いない

「ミーアさまが、ダンスの手ほどきをしてくれる……？」
その話を聞いた時、セロ・ルドルフォンは、思わず驚きの声を上げた。
それは、彼が教室で、パライナ祭でのミーア二号のプレゼン方法を、セリアと検討している時のことだった。
観察記録や育成の要点に関しては、アーシャと相談していたものの、その情報の出し方となると研究担当の自分たちは向いていない。専門知識に踏み込み過ぎてしまうからだ。
だからこそ、万能の秀才、セリアに協力を求めていたのだが……、そこにワグルが駆けこんできたのだ。
ミーアが、聖ミーア学園の学生にダンスレッスンを施してくれる、という、驚愕の情報を持って。
教室に残っていた生徒も、それを聞きつけて、一様に同じような驚愕の表情を浮かべていた。
まさか……と思う。
そんなことはあり得ない、と常識が言う。
けれど……。
「ミーアさまならば、そうなさるかもしれない」
セロは思ってしまう。
彼が知るミーア・ルーナ・ティアムーンという人は、そういう人だからだ。そして……。
「やっぱり、セロもそう思うか？」
どうやら、ワグルも同じ考えのようだった。驚きつつも、その表情にはどこか納得の色も見えた。
「だけど、さすがに、ミーアさまご自身が教えてくださるなんてことは……」

対して、異を唱えるのは、常識人のセリアだった。孤児院から、聖ミーア学園へと引き上げてもらった彼女だから、ミーアの慈悲深さはよく知ってはいるのだが……、さすがにダンスレッスンを、皇女殿下自らがしてくれるなどとは思えないようだった。が……。

「普通は、そんなことあり得ないって、僕だって思うよ。だけど、ミーアさまは慈悲深い方だから」

あの、ミーアならば、身分の差なんか気にしないのではないかと、セロは思ってしまうのだ。姉であるティオーナの手紙を読み、すぐに助けに駆け付けてくれた、あの姫殿下ならば、と。

けれど、そこでワグルが首を傾げた。

「でも、どうして、急にダンスレッスンをしてくださろうって、思ったんだろう……？」

その疑問は、セロも同意するところだった。

――確かに、ミーアさまならそれをなさることに躊躇いはないだろうけど……、どうしてそうなさろうと思ったのかは、確かに気になるな……。なにがきっかけだったんだろう……？

一瞬、考えてから……。

「もしかして、僕たちの生み出したものに感動して……それに応えるために、ご自身もなにか教えようって考えてくださった……とかだったりして……」

思いつきを口にしてみる。っと、

「もちろん、そうだろうな。我ら学生の功績を評価してくださったに違いない」

堂々と、そう主張するのは、いつの間にやらやってきた、ドミニク・ベルマンだった。

偉そうに腕組みし、胸を張って、彼は言う。

「まぁ、俺の発案した小麦畑アートに一番感動してくださったことは、確実だろうが……、お前たちもなかなか頑張っていたしな。きっと、これは、ミーア姫殿下からのご褒美に違いない」

なぁんて、ドヤァッという顔をしている。

ちなみに、やって来た当初は中央貴族風を吹かせて、威張ろうとするドミニクに、微妙に距離を置いていたセロたちであったが……今となっては、ちょっと態度がアレなところがあって、時々、イラッとすることも言うけど、中身は真面目でいい奴という扱いである。ちょっと、結構、だいぶ態度がアレなところがあるが……。

そんなドミニクに笑みを浮かべてから、セロはつぶやく。

「もしも、そうだったら、嬉しいな……」

ミーアの役に立てているということ……ミーアが自分たちの発見に対して喜んでくれていること、それは、セロにとって何よりも嬉しいことだった。

「でも、ミーアさまとダンスかぁ……」

それを想像しただけで、緊張に体が固まってしまう。

セロとて貴族の一員。ダンスに関してまったく覚えがないということはない。

むしろ、姉のティオーナに付き合って、きっちりと練習を積んできたほうだと言えるだろう。まぁ、それを披露する機会は、あまりなかったが……。

そんなセロであっても、やはり、帝国の皇女殿下に、直にダンスの指導をつけてもらうなどということになれば、緊張しないはずもなく……。

――ミーアさまと、ダンス……かぁ。

あの日、初めてミーアと出会った日……。

自分の育てていた花を褒めてくれたこと、あの時の輝くような笑みを、今でも思い出すことができた。かすかに熱くなった頬を誤魔化すように、セロは首を振り、

「緊張して、まともに踊れないかも……」

「情けないことを言うな、セロ・ルドルフォン。我ら聖ミーア学園の生徒たるもの、ミーア姫殿下の恥とならぬよう、日々、鍛練と研鑽を……」

「ドミニクさまは、ダンスができるのですか？」

微妙に長くなりそうな空気を察したのか、セリアがすかさず口を開く。
「無論だとも。むしろ、教導する側に回っても良いぐらいだ……。そうだ、せっかくの機会だし、特別初等部の者たちにも指導をつけてやるか……」
ここ数日ですっかり、子どもたちに懐かれてしまっているドミニクである。まぁ、それはともかく……。

さて、その翌日、午後の時間……、聖ミーア学園の生徒たちは、最も広い講堂に集められた。
すでに、ミーア主宰のダンスレッスンの件は、噂として生徒たちの間で共有されていた。
そんなことあり得ないだろう、という常識と、慈悲深きミーア姫殿下ならば、あるいは、という期待。
その割合は、セロたちとは違い、おおよそ半々といったところであったが……。
そんな彼らの期待に応えるようにして、帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンは現れた。
「ご機嫌よう、みなさん。お集まりいただいたこと、感謝いたしますわ」
そうして、ミーアはニコリと穏やかな笑みを浮かべるのだった。

第七十九話　まぁ、些細なことなので……

その日、講堂には、学生たちが集まっていた。
自らに向く、キラキラした純粋な好意に、ミーアの心がチクリと痛む。そのちょっとした罪悪感に背中を押されるようにして、ミーアは口を開いた。
「みなさん、集まっていただき、感謝いたしますわ」
それから、胸にそっと手を当てて、
「みなさんの貴重な勉強の時間をいただいてしまうこと、申し訳なく思いますわ」
それはミーアの紛れもない本心だった。
なにせ、このダンスレッスンは、ミーアが運動するためのもの。すなわち、よりたくさんの美味しいものを食べられるようになるためなのだ！　いくらミーアが自分ファーストの人といっても、恥ずかしげもなく、生徒たちに迷惑をかけられるほどの胆力はないわけで……。
「ですけれど、ダンスの技術というのは、将来的にはきっとみなさんのお役に立つと思いますの。なにしろ、ダンスはテーブルマナーと並ぶ教養の一つですもの」
ということで、心の均衡を保つため、ミーアはダンスレッスンの正当性を強調する。
「セントノエルにおける新入生歓迎ダンスパーティーでもわかるように、みなさんが、世界に出て行くのであれば、必ずそうしたパーティーに参加する機会もあると思いますわ。それに、今度のグロワールリュンヌ校との討論会でも、歓迎ダンスパーティーを企画しておりますの」
ちゃっかりルードヴィッヒのアイデアに乗るミーア。良い波が目の前にやってきたのに、乗らぬは海月の名折れとばかりに、堂々た

る波乗りであった。
それから、ミーアは悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「みなさんの上手なダンスで、彼らを驚かせてやりましょう」
そんなことを言った。その言葉に、生徒たちの熱気は否が応でも高まっていく。
「さて……それでは、早速、始めましょうか。楽団の方たちも準備はよろしいかしら？」
ちなみに、ベルマン子爵の手配によって、それなりの楽団員が揃っていた。彼らには、グロワールリュンヌの学生の歓迎ダンスパーティーの演奏もやってもらう予定である。もっとも、ヨハンナが了承したら、ではあるのだが。
ミーアは、問いかけに楽団員の者たちが頷くのを確認してから、
「とりあえず、細かいことを教える前に、一度、見本を見せたいのですけれど……ふむ……」
ダンスパートナーをどうしようか、と辺りを見回す。
――まぁ、基本的にどなたでも構いませんけれど、お手本である以上、それなりに上手い方がよろしいですわね。となると……。
一番の候補は、無論、言わずもがなでエシャールだった。
――エシャール殿下はサンクランドの王子だけあって、きっとダンスのほうもお上手でしょう。それに、どこかのアホのシオンとは違って、失礼なことは言わないでしょうし……。でも……。
ミーアはチラリと、自らの隣に立つ少女、エメラルダを窺う。彼女は、ダンスレッスンの話を聞いて、それならば自分も！　と張り切って立候補してくれたのだ。ちなみに、食べ過ぎのベルも健康のために強制参加。シュトリナも付き合いで参加している。エメラルダにしろ、シュトリナにしろ、ダンスの腕前は、ミーアほどではないにしても、水準以上だ。一方でベルに関しては、随所に適当な箇所が点在しているため、生徒たちの手本にはならない。あくまでも、運動不足の解消のためである。
まぁ、ミーア的にはダンスなんか楽しく踊れればいいという想い

があるので、その意味ではベルも合格と言っても良いのだが……それはさておき。
ミーアの視線に気付いたのだろうか……ん？　と、不思議そうに首を傾げるエメラルダだが……。
――ふぅむ、エシャール殿下をダンスパートナーに選ぶと、エメラルダさんがちょおっと面倒くさそうですわね。表向きは了承してくださりそうですけど……。うん、やっぱり、面倒くさそうですわ。
即座に判断、ミーアはとっとと別の人材を探す。しばし、生徒たちの顔を見まわしてから、ふむ、っと頷いて、
「セロくん、よろしいかしら？」
「え……？」
突然、声をかけられたセロは、ビックリした顔で、思わずといった様子で、自分の鼻先を指さして……。
「あ、えと……僕、ですか？」
「ええ、そうですわ。さ、どうぞ、こちらへ」
そう言って、手を真っすぐに伸ばしてセロを呼び寄せる。
――確か、ティオーナさんは、剣術やダンスもこなす万能の方だったはず……。セロくんも、おそらく、同じように教わっているでしょうし、ある程度はできるのではないかしら？
おずおず、といった様子で前に出て来たセロ。そんなセロを正面に迎え、ミーアは生徒たちに目を向けた。
「それでは、今から、セロくんとお手本をお見せいたしますわ。細かいことは、後でじっくりと教えていきますけれど、一度、流れを見ていただくほうがよろしいと思いますの」
それから、ミーアはニッコリとセロに微笑みかける。
「ということで、パートナーをよろしくお願いいたしますわね。セロくん。彼らに、ダンスの楽しさを感じ取っていただければと思いますわ」
「は、はい！　わかりました……！」
ピンっと背筋を伸ばすセロに、ミーアは、ふぅむ、っと唸る。

――少し緊張気味かしら……。ふふふ、まぁ、良いですわ。気持ちよく躍らせて差し上げますわ！　頑張りますわよ、ご馳走を美味しくいただくために！

食べ過ぎと運動不足の解消のため、という目的が、いつの間にか、美味しいもの＝プニッツァをたらふく食べる言い訳を得るため、に変化しているような気がしないではないのだが。

まぁ、些細なことなので、気にしても仕方のないことだろう。

第八十話　ガチなのである……

そうして、ミーアはセロと向かい合った。

……ところで、これはここだけの話であるのだが……実はミーアは、そこまで勉強が得意ではない。

危機に瀕した時はともかく、標準時の学力はパティ未満、ベルよりはマシと言ったところだろうか。

なにしろ、暗記、暗記、暗記パンケーキで生きて来たミーアである。その記憶力にはそれなりに定評があるし、糖分や風呂ブーストによる勘の冴えも、時に侮れないものがないではないが……それでも、帝国の叡智などと言う二つ名からすると、名前負けのそしりを免れないところではある。

そんなミーアが、ただ一つ、名前負けしない才能がある。それこそがダンスである。

ダンスから派生した乗馬についてもなかなかの腕前を誇るものの、そちらは馬の状態に左右される。

けれど、ダンスは違う。ダンスだけは……違うのだ！

少々、食べ過ぎて体が重いということがあっても、簡単に適応してしまう。むしろ、その重さを利用して、アンニュイな大人のダンスに変えてしまったりもする（注：フニョイなダンスではない。念のため）。自らの身体の変化を念頭に、最も映えるダンスをすることができるのだ。

それに、ダンスパートナーにも左右されはしない。相手のレベルに合わせることもできるし、ちょっぴり高めのレベルで相手を教え導くことだってできる。相手を転ばせることだって自由自在なのだ。

そう、ダンスはガチなのだ。ダンスだけはガチなのだ。ダンスだけは……！

ということで、

「よろしいですこと？　まずは、向かい合って、こう！」
ミーアはちょこん、とスカートの裾を持ち上げて、
「こうして相手に挨拶をする。それから、こう相手に身を委ねて……」
ミーアはそうして、両腕を大きく開いてセロに身を寄せる。背丈はちょうど同じぐらい……いや、
「あら、セロくん、少し背が伸びましたわね」
自分よりも少々、背が高くなったセロに、ミーアは驚いた。
――まぁ、以前会った時からずいぶん経ちますし。驚くことはないのかもしれませんけれど……。
小さく微笑み、
「ワグルもずいぶん大きくなったみたいですし、男の子は、あっという間に大きくなるものですわね」
なぁんて、親戚のおばちゃんめいたことを口にする。
にもかかわらず、セロが、ぽぉっと頬を赤くしたのは……、きっと純粋にミーアのダンスの魅力が高かっただろう。ガチなのだ、ダンスだけは！
「ゆっくり、音楽を聴いて。合わせて。いきますわよ、アン、ドゥー……」
一歩、二歩、流れるようにステップを始める。セロの腕に軽く体を委ねつつ、くるり、と回る。
「そう、上手いですわ、その調子」
セロのダンスは、いささか硬さが残っているものの、基本に忠実な、好感が持てるものだった。ミーアの歩幅に合わせて、慎重に歩を進めている。間違っても足を踏まないようにという気づかいは、どことなく、アベルと最初にダンスした時を彷彿とさせた。
ミーアは、くすり、と笑い、
「なかなかに、紳士的なダンスですわね。セロくん。でも……」
小さくウインクしてみせる。
「わたくしの足を踏むのは、そう簡単なことではありませんから、

そう硬くならずとも大丈夫ですわ。ダンスは楽しく、情熱的に、ですわ」
そう言うと、ミーアはほんの少しだけセロの手を引く力を強める。心持ち、ターンのスピードが上がる。セロが頑張れば、ついてこられないほどではない程度に。
「わ、わわ……」
戸惑ったように吐息をこぼすセロに、ミーアは言う。
「そう、もっと、大胆に、大きな動きで」
小さく縮こまっていたステップ、その歩幅を半歩広くさせる。ダイナミックな、体中を使った動きで、導いていく。
下手をすれば、相手を振り回す、自分よがりな動きになってしまうところを、ギリギリのラインを突いていく。
「緩やかに、一つの流れで。緩急で流れを切らず、そう、良い感じですわ」
歌うように楽しげに、誘うように華やかに。セロを導く。
セロは懸命にミーアについてきていた。
「そう、そう。いきますわよ、パートナーを受け止めて」
くるり、くるり、と回りながら、セロのほうに体を預け、また離れ。大きくステップ、ステップ！
実に実にダイナミックなダンスを披露するミーアである。
そう、大きな動きこそが、肝要なのだ。なぜなら、このまま遠慮がちな……腑抜けたダンスを続けていたら……きちんとした運動量を確保できないだろうからだっ！
そうなのだ……帝国の叡智は、自らの目的を見失うなどということは決してないのだ。
――今の運動が後のプニッツァに繋がるのですわ。今日は、激しく踊って、踊って、踊りあかしますわよっ！
決してないのだ！　目的を見失うことは、決して、決して！
だから、当初の目的が「先日の食べ過ぎと最近の運動不足の解消だった」などという事実はないのだ。

……この時、ミーアの頭の中で、パティを介さない過去改変が行われたような気がしないではないのだが……。ともあれ、しょうもない胸の内は一切悟らせず、極めて見事なダンスを披露してしまったミーアなのである。

……ガチなのだ、ダンスだけは……。

第八十一話　薔薇の仮面

「すごいですね、ミーア姫殿下」
踊る二人の姿を見て、エシャールは小さくつぶやいた。
「ええ。まったくですわ」
その隣で、エメラルダは深々と頷く。
まったく、ミーアのダンスはいつ見ても、惚れ惚れするほどに美しかった。あのダイナミックで迫力のある動き、パートナーを導く繊細さ……。実に見事としか言いようがなかった。
「兄上とダンスをされていた時から思っていましたが、ここまでお上手とは……」
「ミーア姫殿下は、私が知る限り、帝国で一番のダンスの達人ですわ。相手のレベルを一つも二つも押し上げる、その相手が最も輝くような踊り方ができますの」
親友のダンススキルをちょっぴり自慢げに誇ってから、エメラルダは少しだけ躊躇うような口調で……。
「……ぜひ、エシャール殿下も稽古をつけていただくとよろしいですわ」
「え？　ですが、僕は……」
などと、どこか遠慮した様子で言うエシャール。その顔を見て、エメラルダはピンとくる。
――もしや、私に気を使っているのかしら……？　まだお若いのに、紳士ですわね。
ちょっぴり微笑ましい気持ちになりながら、エメラルダは優しい笑みを浮かべる。
「こんな機会は滅多にありませんわ。パートナーをしていただかなければ、もったいないですわよ」
そうして、エメラルダはエシャールの背中を押した。

「さ、次はエシャール殿下の番ですわ。行っていらしてくださいませ」
とまあ快く、というよりは、いささか強引にエシャールを送り出したわけだが……エメラルダは、ちょっぴり気持ちが沈むのを感じる。
もしも、エシャールがミーアのダンスに魅了されるようなことがあったら……。
――それは、でも仕方のないことですわ。ミーアさまは他ならぬ私の親友。大変、魅力的な方ですし？　いかにエシャール殿下と言えど、ある程度は見惚れたりするのも、当然と言いますか……。それに、ミーアさまとのダンス経験は、エシャール殿下にとってもきっと貴重なものとなるはずですし……うん、だから、これは良いことですわ。良いことに違いありませんわ。でも、私とダンスする時にミーアさまより劣るとか思われたら、どうしよう……うう……。
などと、もやもや、もやもやしていたエメラルダだったが……。
「……うん？」
次の瞬間、目に飛び込んできた光景に、思わずポカンと口を開けた。
心の中に渦巻いていた、ちょっぴりセンチメンタルな気持ちなど、ポーンッとどこかへ飛んで行ってしまう！
彼女の目に映ったもの、それは一人の少女の姿だった。ダンスの練習用にあつらえたであろう簡易なドレス、踊りやすさとデザイン性を両立させた素敵な靴。とまぁ、ここまでは別に良い。平民の学生や孤児院出身の学生も多いので、破れ目のないドレスに身を包んだ彼女は、どこか高貴な空気を醸し出しているが……まぁ、そのぐらいならば、そこまで驚くことではない。まだ、見過ごすことができる。のだが……。
……問題は、その目元を覆う、バラ模様の入った仮面だった！
――なっ、なんですの、あのド派手な仮面は……。いや、まぁ確かに仮面舞踏会ってございますし……。貴族の間では、お互いの身

分を隠したダンスパーティーだってございますけれど……。
エメラルダ自身も何度か参加したことはあるのだが……しかし、である。わざわざダンスの練習に、仮面舞踏会仕様で来る必要はまるでないわけで……。
――気合いの入りすぎというわけではありませんでしょうし……ん？　というか、あの髪型、どこかで……。
エメラルダは眉をひそめながら、その少女に歩み寄り……。
「……ええと、何をしておりますの？　ペトラさん……」
声をかけて良いものか迷いつつも、一応は話しかけてみる。っと、仮面の少女……かつてミーアのメイドを務めた少女、ペトラ・ローゼンフランツは、びっくーんっと跳びあがった！
「へ？　あ……っ、ああ、え、エメラルダさま……」
ぎくしゃくと振り返ったペトラだったが、エメラルダの顔を認めて、思わずといった様子で、ふー、っとため息を吐いた。
「おっ、驚かさないでください。エメラルダさま」
「いや、まぁ、急に声をかけてしまったのは、申し訳ありませんでしたけど……なにをしておりますの、そんな格好で」
改めて、その珍妙な格好の真意を問う。と、ペトラは仮面を軽く押さえつつ……。
「あー、いや、その……ミーアさまと顔を合わせるのは、少し気まずいと言いますか……」
チラッとペトラが視線を向けた先、ダンスをするミーアの姿が見えた。どうやら、こちらには気付いていないようだった。
「確か、以前も言いましたけれど……。ミーアさまは、あまり細かいことを気にする方ではありませんわよ？」
っていうか、その仮面、素顔で参加するよりよほど目立ってしまっている気がするけど……などと、呆れ顔のエメラルダであったが……。
「わかってはいるのですけど……」
気まずそうに髪をいじりながら、ペトラは言った。

「こんなに急にいらっしゃるとは思っていなかったので、その、心の準備が……」
などと、実に弱気なことを言う。っと、その時だった。
「ペトラお姉さま、あの……」
ふと見ると、聖ミーア学園の女生徒たちがもの言いたげに、ペトラのほうを見つめていた。
「ん？　ああ、はいはい。ダンスを教えてあげる約束だったわね。とりあえず、ミーアさまのあれは参考にしなくていいから。もっと簡単なところから練習が始まるはずだし、気楽にしてて大丈夫よ」
なぁんて、すっかり、ミーア学園の生徒たちの姉貴分として振る舞うペトラである。
「ふふふ、懐かれていますのね」
「あ、ええ……まぁ……」
そこで、ペトラはハッとした顔をして、
「あっ、もちろん、エシャール殿下に変な色目を使うようなことはしていませんから、ご安心ください」
慌てた様子で、そんなことを付け加えるのであった。

第八十二話　帝国の叡智は変幻自在

「どうもありがとう、セロくん」
踊り終わり、スカートを小さく持ち上げて一礼。それから、ミーアは穏やかな笑みを浮かべた。
「あっ、いえ、こちらこそ……。ありがとうございました」
勢いよく頭を下げるセロ。ミーアの顔を見た彼は、ぽぉっと頬を赤くして、行ってしまう。そんな彼を見送りながら……。
――ふむ、セロくん、少し顔が赤かったですわね。少し、運動量がハードだったかしら……。悪いことをしてしまったかもしれませんわ。
なぁんて、ちょっぴり殊勝なことを考えつつも、
――しかし、これだけ運動したのですからプニッツァ一枚……いえ、二枚は堅いのではないかしら？
裏腹に、腹の内で、帝国の胃袋（えいち）が早くもプニッツァ算用を始める。そして……。
――ともあれ、まだまだ足りませんわね！
ふと見れば、ワグルやドミニク、さらに、エシャールまでもが踊りたそうな顔をしている。ミーアには、そんな彼らの顔がプニッツァに……見えたりはさすがにしないが、けれど、まだまだ、ダンス相手がたくさんいる状況は、ミーアにとって好ましいものだった。
しかしながら、自分だけがダンスするわけにもいかない。始める前に大口を叩いてしまった手前、きっちりとミーア学園の学生たちにも教えなければならない。
「とりあえず、今、セロくんと踊ってみせたのが基本のダンスとなりますわ。といっても、さすがに見ただけで踊れたりはしないでしょうから、未経験の方たちは足運びから覚えてもらいましょうか。ええと……エメラルダさんとリーナさん、よろしいかしら？」

ボクも行けますよ！　と言う顔をするベルを華麗にスルーしつつ、二人の令嬢にサポートをお願いする。ベルの意気も買いたいところだが……あの、ところどころアバウトな、ある意味で自由奔放なベルのダンスは、基礎練習には向かないのだ。

「ベルは、ミーア学園の生徒たちに混ざって、一緒に練習に参加すること、良いですわね？」

「えっ……？」

ミーアお祖母ちゃんは、ダンスには一家言ある人なのだ。

そうして、ダンスレッスンが始まる。

「アン、ドゥー、トロワ。そうですわ、このリズムで。そう、流れるように」

手を叩きながら歩いて見て回りつつ、程よいところで中級者以上の相手をする。

きちんとミーア学園の学生たちのケアをしつつ、自身の運動量をも確保する、しっかり者のミーアである。

「さて、次は……あら？　エシャール殿下？　エメラルダさんは、よろしいんですの？」

近づいてきたエシャールを見て、ミーアは少し離れたところで指導に当たるエメラルダのほうに目を向けた。

「あ、はい。せっかくだから、稽古をつけてもらうようにと言っていただきました」

と言いつつも、エシャールはエメラルダのほうに目を向ける。その、なにか言いたげな顔を見て、帝国の恋愛脳（えいち）がピンとくる！

――あら……？　これは……エメラルダさん、あんな感じでなかなかに隅に置けませんわね。まさか、こんなに幼い王子殿下の恋心をもてあそんでしまうなんて……！

他人の恋路については、鋭い恋愛脳なのである。

「ふむ、それならば……」

っと、ミーアは一歩下がり、スカートをちょこんと持ち上げ……。

「しっかりと稽古をつけて差し上げますわ。エメラルダさんといつ

でも素敵なダンスができるように」
そうして、ミーアはエシャールと踊り始めた。
「おお、さすがはエシャール殿下。なかなかお上手ですわね。シオンにも負けてませんわよ」
兄シオンにも見られた、どこか華やかで色気のあるダンスにミーアは思わず感心する。
――まさに兄弟という感じですわね。
その言葉に、エシャールは思わずといった様子で苦笑いを浮かべる。
「……さすがに、シオンお兄さまと比べられてしまうのは……」
などと言葉を濁すエシャールに、ミーアは小さく首を傾げる。
「あら、お世辞を言っていると思われるのは心外ですわ。わたくし、安っぽいお世辞や嘘は、あまり好きではありませんのよ……？」
……割とミーアはヨイショを得意技とする人ではあるのだが……都合の悪い記憶はポーイっと遠くに投げ捨てられる、都合の良い脳みそなのだ。
「少なくとも、シオンよりエシャール殿下のほうが実に紳士的ですわ」
そう言いながら、ミーアは思い出す。あの新入生歓迎ダンスパーティーの日のシオンのことを。
「なにしろ、あのや……」
あの野郎……と、ちょおっぴりアレなことを言いそうになり、慌てて言葉を呑み込む。
不思議そうにこちらを見つめてくるエシャールにニッコリ笑みを浮かべて誤魔化しつつ、
「あのや……かい……そう、新入生歓迎夜会の日に、わたくしとダンスしたシオンがなんて言ったか、わかるかしら？」
「いえ……想像もつきませんが……」
「なんと、言うに事欠いて『ふっ、意外とじゃじゃ馬なんだな……』とか、失敬なことを言いましたのよ？」

シオンの声真似をしてやると、エシャールは目をまん丸くした。
「シオンお兄さまが、そんなことを……？」
「ええ。それに比べれば、エシャール殿下は実に紳士的。レディーの扱い方がわかっておりますわ」
小さくウインクしてみせて、
「なので、わたくしがいる間に、きっちりダンスを仕込んで差し上げますわ。お兄さまを超えるダンス上手になって、シオンを見返してやると良いですわ」
とまぁ、そんな感じで、エシャールと、さらにドミニク、ワグルと順番に稽古をつけていく。
ふぉおおお！　っと、ダンスしただけで、満足げな顔をするドミニクには、
「特別初等部の子どもたちに優しくしてあげているようですわね。その調子で、帝国貴族の貴き務め（ノブリスオブリージュ）を果たしていただきたいですわ」
「かしこまりました！　帝国の叡智の栄光を世界に告げ知らせる務め（ノブリスオブリージュ）を果たすため、粉骨砕身の覚悟で頑張ります！」
などと、しっかりと言いつけておき、一方で故郷の森ですっかり鍛えられたワグルとは、
「おお、なかなか動けますわね。ワグル。ならば、少々、動きのあるダンスで……」
などと、運動量をきっちり確保。額に汗しつつ、体を引き締めにかかる！

そんな風に、キラッキラと汗を輝かせて踊るミーアを見た、聖ミーア学園の生徒たちが……。
「ミーアさまが、私たちのために、額に汗しながら、ダンスの稽古をつけてくれるなんて……」
などと、アレな感じで感動していることなど、一切気付きもしな

いミーアなのであった。

第八十三話　ミーア姫、イロイロと企む

「ふぅー……」

さて、たーっぷり運動したミーアは、椅子に腰かけ一休み。大きく息を吐く。

ほんのりと汗ばんだ体、心地良い疲労感に確かな手応えを覚える。

――だいぶ運動しましたわね。これならば少々食べ過ぎても問題ないのでは……。

などと晴れやかな気持ちで顔を上げたミーアは、不意に広がった目の前の光景に思わず見惚れた。

「……ふふふ、平和な光景ですわね」

踊る子どもたちを見て、自然と笑みがこぼれる。

よくよく考えれば、それは不思議な光景だった。前の時間軸ではあり得ない、とても幸せな光景だった。

――当たり前のように感じてしまいますけれど、この中の何人かは孤児院の出身。ワグルやセリアのように新月地区の出身の子たちもいるのですわね。

それは、あの大飢饉が訪れていたら決して……決して見られない平和な光景だ。そう思うと実になんとも感慨深いものがあって……。

「うん……？」

っと、その時だった。ミーアの視界に、なんとも場違いなものが入って来た。

それは、こう……場違いな仮面をつけた少女の姿だった。

――あら、あれは……仮面舞踏会仕様ということかしら……。ずいぶんと気合が入っておりますわね。そういえば結局、わたくしは一度も行けなかったんですわよね。

思い出すのは、白月宮殿での風景。

自慢げに話す専属メイドの姿だった。

「仮面をつけているから、相手が誰かはわからないんですけど、それが逆にドキドキするんですよー。貴族や、青年文官とか。あとは舞台俳優なんかも来てると思うんですけど」
明るく華やかな声で話すのは、メイドのペトラ・ローゼンフランツだった。
帝国中央貴族ローゼンフランツ伯爵家の令嬢にして、白月宮殿に勤める彼女は、セントノエルにも同行するミーアの専属メイドであった。
「まぁ！　そんなに楽しいなら、わたくしも行ってみたいですわ」
「ふふふ、いいですよ。機会があれば一緒に行きましょう。ミーアさまが行ったら、きっと大人気ですよ？」
などと気軽に返事をするペトラだったが、結局、一度もその機会はなかった。
時に遊びに行くために、メイドの仕事を休んだりする……ちょっぴりアレな少女の姿を思い出し、ミーアは思わず苦笑いを浮かべた……苦笑いを浮かべられるぐらいには、それは、懐かしい思い出になっていた。
「しかし……仮面舞踏会の夜は無礼講とか言ってましたけど……アンヌに比べると、あの方、いつでも無礼講みたいな方でしたわね」
風邪をひいて放っておかれたりとか、よくよく考えると腹が立つことがいっぱいあったし、決して信用のおけるメイドではなかったが……けれど、一緒に遊びに行って楽しかった記憶も確かにあった。
甘いお茶菓子を前に朗らかに笑い合った記憶も、確かにあったのだ。
だから、少しだけ気になった。
「あの方、元気にしているのかしら……。そういえば、前の時間軸でもこのぐらいの時期には、すでに白月宮殿にはいなかったんだったかしら……？」
帝国革命期、ペトラの実家ローゼンフランツ伯爵家は革命軍に潰

された。実家に帰っていたことで、巻き込まれ、行方不明になったペトラを偶然にも帝都の路上で見つけたのは、それからしばらくしてからのことだった。
そして……その時の彼女は、あの恐るべき流行病におかされ衰弱していた。
「気まぐれに白月宮殿で保護するようにしましたけれど……結局、城は革命軍に落とされてしまったのですわよね……」
放っておくのも後味が悪そうだと保護したのだが、逆にその命を奪うようなことになってしまったかもしれないと思うと、いささか胸が痛まないでもないミーアである。
――まぁ、革命がおきてない今は、元気にしているはずですけど……。専属メイドに選ばれなかったから実家に帰ったのかしら……？　いや……というか……。
そこで、ミーアはマジマジと、仮面の少女のほうに目をすがめる。なんというか……あの、仮面の少女、どことなくペトラに似ている……気がする。いや、むしろ、そっくりではないか……？
――いや、しかしペトラさんが、なぜここに……？　それに、あの仮面は……正体を知られたくない、ということなのかしら……？
とそこで、ミーアはピンとくる！
――身分を隠し、実家からも距離を置く……。ははぁん、ペトラさんもお年頃ですし、思うに望まぬ縁談でも勧められそうになったのかしら……。とすると、わたくしも気付かないふりをしてあげるべきかしら……。
帝国の恋愛脳は、たいそう気が利くのである。
――しかし、仮面舞踏会……身分を隠してのダンスパーティー……ふぅむ。
「お疲れさまです。ミーアさま」
そこで、アンヌが歩み寄ってきて、冷えた水を渡してくれる。
「ああ、ありがとう、アンヌ。ふふ、ひさしぶりにたっぷり踊りましたわ」

爽やかに汗をかいて、すっかりいい気分のミーアである。
汗を拭いつつ、さぁて、少し休んだらさらにプニッツァポイントを稼ぎに行くかぁ！　と気合を入れるが……。
「やあ、ミーア、やってるな」
不意に声をかけられて振り返る。っと、
「あら……シオン。それに、ティオーナさんも、いらしていたんですのね」
そこにいたのは、爽やかな笑みを浮かべる少年、シオン・ソール・サンクランドと、その隣に立つティオーナ・ルドルフォンの姿だった。
「おひさしぶりです、ミーアさま」
笑みを浮かべてペコリと頭を下げるティオーナに、微笑み返して、
「ご機嫌よう、ティオーナさん。ふふふ、お元気そうでなによりですわ。お二人とも弟さんの様子を見に来られたのかしら？」
言いつつ、そこで気が付く。
――そういえば、よくよく考えると、お二人の弟君とダンスしたのですわね。ふふふ、これもまた少し不思議な感じがしますわね。
すでに、かつての仇敵という印象はない二人であったが、それでも彼らの弟にダンスの稽古を施したと思うのは、実に不思議な感じがした。
「エシャール殿下もセロくんも、なかなかにダンス、お上手でしたわよ？」
「え……セロが、ミーアさまとダンスをしたのですか？」
それを聞き、なぜか心配げな顔をするティオーナ。これは、セロのダンスの腕前を心配しているな？　と察したミーアは、安心させるように微笑んで。
「ええ。なかなかに模範的なダンスでしたわね。研鑽を積めば、もっと良くなるのではないかしら」
「そう……ですか」
ミーアの言葉に歯切れ悪く答えて、セロを探すように視線を巡ら

せるティオーナ。一方で、
「ところで、ルードヴィッヒ殿から連絡を受けたんだが、なかなか、大変なことになっているようだな」
声を潜めて、シオンが言う。
「ブルームーン公爵夫人が踏み込んできたとか……」
「ええ、そうなんですの。もっとも、それはエメラルダさんがおびき寄せた結果ですので、大変という感じでもないのですけど……。これを機に帝国内の問題を一掃してしまえれば良いと思っておりますわ。その辺りは、とりあえず、後で詳しくお話ししますわ」
とそこで、ミーアはきょろきょろと視線を巡らせる。
「そういえば、キースウッドさんはいらしてますの？　見たところ、いらっしゃらないようですけど……」
「ああ。学園の職員と打ち合わせをしてもらっているんだ」
「そうなんですのね。それは良かったですわ」
そう言いつつ、ミーアは考える。
――ふむ……キースウッドさんは意外と、古い考え方や常識に縛られがちな方ですし、いると邪魔をされそうではありますけど……。反面、あの馬サンドイッチの時の働きを考えると、その功績を無視することはできませんわ。わたくしも、時折、発想力に引っ張られ過ぎて、現実離れした物を考案してしまう悪い癖もございますし。
そう、ミーアだって成長しているのだ。
触っただけでも危ないキノコはどうやったって食べられないし、子馬サイズのパンというのは、さすがに中まで火が通らない。その程度のことはわかっているのだ！
――あれではさすがに大きすぎましたわね。せめて、あの三分の二ぐらいの大きさにするか、もしくは、平べったくしなければいけませんわ……。毒キノコにしても、あの色はさすがにまずかったですわ。もっと地味めなものならば、試す価値はあるかもしれませんけど……。
ミーアだって……成長している、のだろうか？

ともあれ、ミーアは、キノコをのせたプニッツァの開発に、キースウッドを巻き込むことに決める。ミーアの中で、決定する！
「キースウッドさんには、後で相談したい事がございますので、お借りしてもよろしいかしら？」
「うん？　それは構わないが……」
不審げな顔をするシオンに、ニッコリ笑みを返して、
「それはそうと、エシャール殿下とお話ししてこなくて大丈夫ですの？」
「ああ。それは後でゆっくりと。それより、ダンスレッスンだが、俺たちも手伝ったほうがいいんじゃないのか？」
「あら？　それは願っても無いことですわ」
ミーア学園の生徒たちも、シオンで慣れておけば、グロワールリュンヌとの本番では緊張せずに済むだろう。
――それに、シオンは踊りがいがあるやつですし、良い感じに運動量を確保できるのではないかしら？
内心でニンマーリするミーアなのであった。

第八十四話　パティお姉ちゃん、歯切れが悪くなる

さて……ダンスレッスンの後、軽く汗を流してから、パティはヨハンナのもとを訪れた。
ただ一人、誰も味方を連れることなく。
ヨハンナから、話を聞き出すためには、そのほうが都合が良いとの判断があったためだ。
――ミーアお姉さまがいては、警戒感が増す。他の人もおそらく同じ。でも、私なら、小娘と侮ってくれるかもしれない。
グッと拳を握りしめ、いつになく気合の入るパティである。
なにしろ、ヨハンナの頑なさは、パティ自らのやらかしによるものらしいのだ。将来の自分がなにをやらかしてしまうのか、事前に知っておかなければならないわけで……。
小さく息を吸って、吐いてから、パティはヨハンナの客室のドアをノックした。
「む？　誰じゃ……？」
「失礼します。ミーア姫殿下の命により、参上いたしました」
パティの声を聞き、ドアがゆっくりと開く。ドアを開けたのは、ヨハンナのメイドと思しき女性だった。さらに、部屋の中にはフーバー子爵もいた。こちらを、どこか咎めるような目つきで見ている。
――あの人がいると、ゆっくり話を聞き出すのは難しい。まずは、追い出さないと……。
「ほう、そなたは、確かミーア姫殿下の客人であったな……」
部屋の中、椅子に腰かけたまま、ヨハンナはパティを見つめる。その瞳は、興味深げな光を灯していた。
「はい……。ミーアさまのご命令で、お話しに来ました」
パティの見たところ、ヨハンナは帝室の権威を大切にしている。皇女の命令とあれば、聞かないわけにはいかないだろう、と考えた

のだが……。
「ふふふ、奇遇じゃな。妾もぜひ話がしたいと思っていたのじゃ」
ヨハンナはそんなことに関係なく、上機嫌に笑った。それから、
「これ、メイド。妾はこの娘と話がしたい。しばし、外すがよい」
「はっ、かしこまりました。ヨハンナさま」
頭を下げると部屋を出て行くメイド。それを当然、と見送っていたフーバー子爵であったが……。
「そなたもじゃ、フーバー子爵」
そう声をかけられて、目を瞬かせた。
「は？　いえ、ですが、公爵夫人たる方が二人きりで、このような娘と面会などと……」
その言葉に、ヨハンナは不機嫌そうに眉根を寄せた。
「何度も言うが、この娘はミーア姫殿下の客人じゃ。それに、もしも、妾に対する害意があったところで、この程度の小娘、どうということもなし。知っての通り、妾は武に少々の心得がある。仮にフーバー子爵、そなたが剣を抜いて斬りかかってきたところで……ふふ、返り討ちじゃ」
ニヤリと獰猛な笑みを浮かべるヨハンナに、パティはちょっぴり眉をひそめる。
クラウジウス候ハンネスの隠し子を匂わせて、人払いをお願いしようと思っていたから、彼女の行動は好都合ではあるのだが……。
ヨハンナはフーバー子爵が出て行くのを見送ってから、改めてパティに視線を向けてくる。常に鋭い目つきをしている印象があるヨハンナだったが、その視線はどこか穏やかで優しいものだった。
「して……そなたは、いったい何者じゃ？　なぜ、パトリシアさまとそっくりの見た目をしておる？」
潔いほどの単刀直入な問いかけ。それはある意味で、パティのことを小娘だと侮っている証拠でもあるのだが……。
静かな視線で、パティはヨハンナを観察していた。
……もしかしたら、という気持ちが、パティの中に芽生えていた。

先ほどの、フーバー子爵を追い出した時にも、そう思ったのだが……もしかしたら、彼女は……。
考えごとをしつつも、パティは答える。
「……実は、私は……父の正体を知りませんでした。けれど、ミーアさまは、私のことを、帝国侯爵家の隠し子と見ているようで」
「ほう、帝国侯爵家……いや、待て。では、まさか……」
パティは思わせぶりな様子で頷いてから……。
「ミーアさまは、言いました。私が、クラウジウス候ハンネスの隠し子である……と」
聞いた瞬間、ヨハンナはわずかばかり腰を浮かせた。
「なんと……そなたが、ハンネス殿の……？　いや、しかし、そうか……」
なにやら、納得した様子で頷くヨハンナ。それも当然のことだろう。なにしろ、パトリシアとハンネスは姉弟。血の繋がりがある以上、似ていても不思議はないわけで……。
っと、思っていると……。
「確かに、ハンネス殿はいつまでも若々しかった。行方不明になった後、年甲斐もなくどこぞの若い女と恋に落ち、子をなしたとしても、あの若々しさならば不思議ではない」
微妙に、弟の評判が落ちたような気がして、パティはむっつりとした顔で口を開いた。
「……いや……ハンネス……殿は、そんなに節操なしな感じじゃない……」
「ん？　ああ、そうじゃな。そなたにとっては父の誇りに関わることであったか。いや、言葉の選び方が悪かったようじゃ。ただ、妾よりも年上のハンネス殿に、そなたのような幼い娘がいると聞いて、少々、驚いてしまったのじゃ」
ふふふ、と優しげな笑みを浮かべて、ヨハンナは言った。
「しかし、その口ぶりでは、ハンネス殿はそなたを置いてどこかに姿を消したということじゃな？」

「え……？　あ、はい。そう……です？」
これって、そうだって言ったら、またハンネスの評判が落ちるんじゃ……？　などとちょっぴり心配になってしまい、微妙に歯切れが悪くなってしまうパティお姉ちゃんなのであった。

第八十五話　私の名は……

「それで、ええと……お聞きしたいことがあります」
気を取り直して、パティは情報収集に徹する。
聞きたいことは、ヨハンナがなぜ頑なになっているのかということ。そして、自分が、その原因をどのように作り出してしまったのか、ということ。
いきなり、それを聞いても話してはくれないだろうから……と知恵を巡らせて……。
「私のお父さまのこと、それに、その姉であるパトリシアさまのことを……」
「ふむ、まぁ、それは構わぬが……」
ヨハンナはスゥっと目を細めてパティのほうを眺めてから、
「その前に、名乗るのが礼儀じゃろうと妾は思うが、どうじゃ？」
その言葉に、パティはハッとする。
確かに、名乗っていなかったが……まさか、正直に名乗るわけにもいかない。なにか、考えなければ……。
名前、名前……、名前？
適当に名乗ればいいとは思うのだが、その脳裏に、マティアスの……飼い犬マティアスの顔がチラつく！　尻尾なんか振って、すごくのんきな顔でパティを眺めている！
自身のネーミングセンスに関して、深刻な疑念を持っているパティは、刹那、黙考、その後、なんとか、ひねり出す！
「私はパ……、パティヤナ……」
ナニカ……こう、誰かと誰かの名前をくっつけたような……なんとも言い難い名前ができてしまった。内心で頭を抱えつつ、パティは続ける。
「ミーア姫殿下からは、パティ、と呼ばれています」

「パティ……そうか。ハンネス殿は、パトリシアさまにちなんだ名前を自らの娘につけたのじゃなぁ」
感慨深げにつぶやいてから、ヨハンナは続ける。
「して、なにが聞きたいのじゃ？　パティ」
「まず、ハンネス……お父さま、についてヨハンナさまがご存知のことを……」
……別に大切な弟が、将来どうなるのかを聞きたいなどと言う野次馬根性ではない。ここから話を繋げて、ヨハンナとパトリシアの関係性について糸口を探っていくつもりなのだ……本当だ！
「ふぅむ、ハンネス殿とは、若い頃に何度かお会いしたことがある程度じゃが……。初めてお会いした時は精悍な青年貴族といった様子じゃったから、妾より年が上と聞いて驚かされたわ」
懐かしげに微笑んで、ヨハンナは続ける。
「人当たりの良い親しみやすい人物、他家の者からも慕われている、好人物じゃったが……」
そこで、言葉を切って……。
「それが、あのような……姉上の後を追うような亡くなり方をするとは、思っておらなんだ。それも、まるで同じような状況で……。共に、帝国貴族をまとめ上げていっていただきたかったが……しかし、まさか生きて、しかも若い女と隠し子を作って、さらには、またしても失踪とは……妾の見る目がなかったということか……」
なぁんて、またまたハンネスの名誉にかかわることをつぶやいていたが……今度はパティも構ってはいられなかった。
「姉上と、同じ……」
その言葉に潜む危険な匂いに、思わず息を呑む。
かつて、ハンネスと再会した時、パティは自らの未来を聞こうとはしなかった。むしろ、それを聞くことを拒否した。
なぜなら、もしも、自分がどのように死ぬのかを聞いてしまったら、この未来が崩れてしまうかもしれないからだ。
パティは、この世界が好きだった。

ミーアが多くの人を救い……ヤナやキリル、特別初等部の子どもたちが、幸せを手に入れつつある、この世界が好きだった。だから、パティは、自らの行動がこの世界を損なってしまうようなことはしたくなかった。

そんなパティにとって、自らの死の情報は禁忌に等しい。なぜなら、それを聞いてしまった時、どうすれば回避できるか、生き残れるのかと考えてしまうからだ。

その誘惑は、きっと、とてつもなく大きいだろうからだ。

だからこそ、パティは、それを聞かないようにしていたのだが……。

――これは……聞かないわけにはいかない。ここで話は遮れないし、それに……もしかしたら、そこにヨハンナさんを頑なにさせている理由があるかもしれない。だったら……。

意を決して、パティは口を開いた。

「ハンネス……お父さまは、火事に巻き込まれて消えたと聞いていますけど……。それが、パトリシアさまと同じというのは、いったい……」

ヨハンナは一瞬、躊躇ったように見えたが……。

「いや、そなたにとっても身内のことであったか。パトリシアさまは、伯母にあたるのじゃったな。ならば、ここで話さずにおくことは、仁義にもとるか……」

腕組みして、小さく頷いてから、ヨハンナは言った。

「皇太后パトリシアさまは、火事で亡くなられたのだ。妾とアデラ、それに、パトリシアさまと、フーバー子爵領に行った時の話じゃ」

「え？　フーバー子爵領……？」

意外な名前に、パティは思わず目を瞬かせる。

いったいなぜ、ここで、あの男の名が出て来るのか……？　と首を傾げる。

「ああ、ふふふ、不思議がるのも当然じゃな。フーバー子爵の兄、つまり、その当時のフーバー子爵だった男は、妾の教育係じゃった。

それだけでなく、先の皇帝陛下の教育係も勤め上げた方でな」
「先の皇帝陛下……」
つまり、自分が結婚する人か……、とちょっぴり変な気持ちになりつつも、その教育係というのが微妙に引っかかる。
クラウジウス家に与えられた使命は、歴代の皇帝を絶望させ、蛇に染め上げること。
他にもその役割を果たす者がいた可能性は非常に高い。
「その教育係のフーバー子爵領に行っていた、と？」
「そうなのじゃ。アデラの療養と避暑を兼ねての旅行じゃったのじゃ。楽しみにしておったのじゃが……まさか、あのようなことになろうとは、な」
ヨハンナは寂しげな顔でそう言った。

第八十六話　白きに染まらぬ黒き鴉

さて、学園職員との打ち合わせを終えたキースウッドは、各学部の見学をさせてもらうことになった。

ミーアのダンスレッスンによってテンションが上がった生徒たち。その学ぶ姿勢は熱意に溢れた、非常に素晴らしいものだった。

その中で、彼が最も興味を惹かれたのは……。

「なんと、料理学科……。料理の研究を……」

そう、ミーア姫直々の指示で作られたと評判の料理学部だった。

……ミーア姫直々の……というあたりにいささか引っかからないではなかったが……そこはそれ。指示を出したのが誰であれ、現場の人間がしっかりと仕事をしていれば、物事というのは上手く回っていくものなのだ。

とは言うものの……やはり不安が拭えなかったので、ちゃーんと敵情視察……もとい、見学に来たのだ。が……。

「研究とは具体的には、どのような……？」

「はい、各国の料理を研究し、外交使節団をもてなすためのメニュー開発などですね。それに、危険な野草やキノコ類の見極め方や、毒を持つ魚の捌き方など、専門家を招いての授業を行っています」

「ほう……、それは感心だ！」

ここの学生たちが卒業し、一人でもミーアのそばに随伴するようになれば、過去のイロイロな悲劇のようなことは回避できるはず。自分やサフィアスの心と内臓の平安も守られるに違いない……っと、キースウッドは大きく頷き……そこで不意に不安に駆られる。

専門家という言葉が、こう……少々引っかかったのだ。

そういえば、セントノエルでミーアが自身のことを「キノコの専門家」とかなんとか、つぶやいてはいなかっただろうか……なぁんて、思い出してしまったキースウッドである。

もしや、その専門家というのは、かの帝国の叡智のことでは……？
なぁんて、不安感に背中を押されるように、キースウッドは口を開いた。
「専門家……ちなみにですが、それは、その……本物の……？」
「は……？　本物と言いますと……？」
不思議そうに首を傾げる教員に、キースウッドは慌てて首を振る。
「ああいえ、ええと、つまり現場で料理を作っているような方が教えておられるということでしょうか？」
「なるほど、そういうことですか。もちろん、現場で修業を積んだ料理人も参加しています。それに、学長のガルヴは、森の賢者との異名を持つ人です。野草やキノコのことなどにもとても詳しいのです。ルールー族の方々にも協力していただき、森の食材についても知見を蓄積しています」
「そうなのですか。なるほど、それは重ね重ね素晴らしい」
危険を知る者がいる。その知識を次なる世代に広め、正しい知識を持った者たちが増えてくる。そうして、その者たちが、権威者に諫言を呈していく。
それは、なんと素晴らしい光景だろうか……。
不覚にも、目頭が熱くなってしまうキースウッドである。
――ああ、ここは、なんと素晴らしい教育機関だろう。まさに、ここは、ティアムーン帝国が誇るべき教育施設だ……。
「あら、キースウッドさん、こんなところにおりましたのね」
その時だった。感動に震えるキースウッドに声をかける者がいた。
他ならぬ、帝国の叡智、ミーア・ルーナ・ティアムーンが、朗らかな笑みを浮かべて、そこに立っていた。
「これは、ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下」
「ふふふ、ちょうどいいところにいましたわね。実は、相談したいことがございましたの」
「相談したいこと……ですか？」
その一言で、一気にキースウッドの警戒心が刺激される。

「それに、この料理学部の方たちにもぜひともアイデアをいただきたいんですの」
続く一言で、さらに一段階……。危険レベルが跳ねあがる！
「傾聴！　これより、ミーア姫殿下からありがたいお言葉をいただけるぞ！」
職員の声に、生徒たちがスッと背筋を伸ばす。
「ああ、そんなにかしこまらなくても大丈夫ですわ。楽に聞いていただきたいんですけど……まず、例のプニッツァ、実にお見事なお味でしたわ。あれが帝国で食べられるのは、ここの料理学部の研究成果とお聞きしておりますけど、素晴らしい成果ですわね」
まず、ひとしきりプニッツァなる料理を褒めたたえた後、ミーアは続ける。
「わたくし、あれで大いに刺激を受けましたの。だから、ぜひ、美味しいプニッツァを、グロワールリュンヌとの討論会で出したいと思っておりますの。そう、美味しくて……新しいプニッツァを！」
「新しい、プニッツァ！？」
「ええ、その通りですわ。あのお料理には、大いなる可能性を感じますの。たくさんのバリエーションを試していくべきお料理だと思いますわ」
新しいプニッツァの開発……その言葉に、生徒たちがざわめく。
「とりあえず、そうですわね。キノコとか、のせるとかいいんじゃないかと思いますの。あ！　そうですわ。せっかくですし、静海の森で発見した新しいキノコをのせるとか、そういうのはどうかしら？」
思い付きで、トンデモないことを言い出した！
一瞬、焦りかけるキースウッドだったが、すぐに思い直す。
そうだ……料理学部では危険な食べ物に対する知識を教えている。いわば、料理の常識を身につけた者たちの集団だ。ミーアの無茶な要求を、きっと撥ねつけてくれるはず……。
期待の目を向けたキースウッドは……すぐに絶望する。

生徒たちの……そして、それを導く講師の……その目に映る情熱の炎を見て……！

そうなのだ、ここは……魔窟、聖ミーア学園！

ミーアの言葉、ミーアの願いを全力で叶えようという、熱い、熱ぅい！　志を持った者たちの集まりなのだ。

凡百の料理人ならば、諦めるだろう。

だが、なまじ優秀な彼らは諦めることを知らない。身につけた技術によって、それを可能にしようとしてしまう！

ミーアの採ってきた毒キノコを、食べられるよう、なんとか努力を始めてしまうかもしれない！

キースウッドの本能が告げる。

――誰かが、止めなければ死者が出る！

やべぇ予感に背中を押されるように、キースウッドは言った。

「なるほど……その新メニューの開発、ぜひ、私も協力させていただきたい」

そんな彼に、ミーアはニッコリと微笑みを浮かべて、

「あら、なにを言っておりますの、キースウッドさん」

満足げな……笑みを浮かべて、

「そんなの、当たり前ではございませんの」

上機嫌にウインクなんかしやがった！

自らの願いの通りの結果を得たというのに、どこか……こう、釈然としない気持ちになるキースウッドであった。

ともあれ、沈んでもいられない。

ミーア色に染まったこの学園において、彼はただ一人、抗わなければならないのだ。

――ああ、しかし、なるほど……モニカ嬢は、こんな感じで頑張っていたのか。

遠い目をして、思うのは、みなが白き色に染められる中、黒き鴉であり続けた女性の姿。

ただ一人、染まらずにいることの、どれほど大変なことか……。

――できれば、傍らにいてもらいたかったものだが……特に、こういった場面ではっ！　あるいは、サフィアス殿でも、構わないが……。

孤軍奮闘の予感に背筋を震わせるキースウッドであった。

ちなみに、現在、聖ミーア学園には無人島で共同戦線を張ったエメラルダのメイド、ニーナがいたりするのだが……そんなことは知る由もないキースウッドであった。

第八十七話　ミーア式高等算術

料理学部に寄った後、ミーアは宿泊している建物とは繋がってはいないため、一度、外に出る必要があった。
教室と、ミーアたちが宿泊している建物とは繋がってはいないた
た。
青々とした芝生をザクザク音をさせて歩くと、心地よい緑の香りが匂い立つ。
爽やかな夏の空は、ミーアの晴れ晴れとした気持ちを表すように雲一つない青空だ。降り注ぐ日に軽く目を細めながら、ミーアはつぶやく。
「ふふふ、上手くいって良かったですわ。キースウッドさんも快く引き受けていただけましたし……」
なぁんて、ほくそ笑むミーアに、アンヌが心配そうな顔をする。
「でも、ミーアさま、食べ過ぎは……」
「アンヌ……だからこそ、ですわ」
ちっちっち、と人差し指を振り振り、ミーアが言った。
なんというか、こう……見る人が見たら……それこそ、キースウッドやサフィアス辺りが見たら、非常にイラァッとするような、余裕たっぷりの顔で。
「だからこそ、新しいプニッツァを開発しようというのですわ」
偉そうに胸を張り、ミーアは言う。これまた見る人が見れば、という態度なのだが、生憎とここにいるアンヌの目には、それはひどく頼りになる態度に見えてしまう。
「それは、どういう意味なのでしょうか？」
「ふっふっふ、いいですこと？　アンヌ。プニッツァは、確かに食べ過ぎると体に悪そうですわ。たぶん、タチアナさんに怒られてしまうであろうこと、想像に難くありませんわ。けれど、ここの料理

学部のみなさんならば、作ることができるのではないかしら……体に良いプニッツァを！」
「体に良い、プニッツァ？　あ、もしかして、それでキノコを……？」
腕組みしつつ、ドヤァ顔でミーアは頷く。
「ええ、その通りですわ。リーナさんが以前言ってましたの、キノコの中には体に良いものがあると。さて、ここで高等算術の問題ですわ。もしも、プニッツァが体に悪いもの……プラスであったとしても、その上に体に良い食べ物、すなわち帳消しにするマイナスをのせれば、どうなるかしら……？」
「……っ！　まさか、悪いものが相殺される……ということですか？」
愕然とした様子でつぶやくアンヌに、ミーアは格好よくウインクして。
「ええ、そのとおりですわ！　一マイナス一はゼロ。その応用ですわ。一の良いものを食べることで、一の悪いものを食べることを相殺する。すなわち、結果は……」
「なにも食べてないことになるっ！」
ハッと目を見開いたアンヌ。よくできました、とばかりに、ミーアはパチパチ拍手した。
「わたくしは、さらに考えを進めておりますわ。むしろ良いものを二食べれば、多少体に悪い甘いケーキを食べても良いのではないかしら？　体に良いプニッツァを二枚食べれば、甘い甘いケーキを食べる余裕も生み出すことができるのかもしれませんわ」
ミーアは、タチアナが聞いたら気絶してしまいそうな、実に、良からぬことまで言い出した！
「そう……なのでしょうか。でも……う、ううん……」
アンヌは、混乱に目をグルグルさせている。
「もちろん、運動も頑張りますわよ？　それならば、この理屈が多少間違っていたとしても、問題ないのではないかしら？」

大いに間違っていたら問題大ありなのだが、その可能性は考慮しないミーアなのである。そんなミーアに押されるように、アンヌは……。

「確かに……そう、なのかもしれません。特別初等部の子どもたちも楽しそうでしたし……それでいい、のかも……？」

ついに押し負けてしまう！

……だが、ミーアには一つだけ見落としていることがあった。

それは、とても基本的なこと……。自らが蒔いた種は、自らが刈り取らなければならないということ。

すなわち、いくらアンヌが納得してくれたとしても、食べ過ぎた反動は確実に自分に帰ってくるのだ、ということだ。けれど……残念ながら、それに気付くことはなく……。

「そうですわ。ついでに、ティオーナさんもお料理会に誘うのはどうかしら？　お野菜も体に良いと言いますし、たっぷりプニッツァの上にのせれば、その分、たくさん食べられ……あら？」

と、そこで、ミーアは気が付いた。

ミーアたちの宿泊している部屋の前に、一人の少女が立っていることに。

「あれは……パティ？」

心なしか肩を落とし、立ちつくしていたのは、ミーアの祖母であるパティだった。どこか思いつめた顔をしてうつむいているパティに、ミーアは首を傾げる。

「パティ、どうしましたの？　こんなところで……そんな顔をして」

小走りに近づき声をかける。っと、そこでミーアはハッとする。

普段、表情の変化が薄いパティが……、いつでも沈着冷静な祖母パティが……こんな表情をするとは……。ただ事ではないと気付いたのだ。

パティは顔を上げ、ミーアのほうに目を向ける。けれど、すぐに、ううっと頭を抱えてしまう。

「ちょっ、どうしましたの、パティ。ヨハンナさんになにかされま

したの？　それとも、あ！　あの、フーバー子爵とか言う野郎に……」

などと、思わず、姫らしくない言葉がチラリしかけるが、パティはゆるゆると首を振って、

「……ヨハンナさんとお話はできた。フーバー子爵や従者に邪魔されることもなかった。それに、ヨハンナさんがどうして、あんな感じなのかは、だいたいわかった、けど……」

パティは困り切った顔で言った。

「どうしよう……どうすればいいのか、わからない」

「な、なるほど。わかりましたわ。とりあえず、ここでは落ち着けませんし。部屋の中に入りましょうか。アンヌ、申し訳ありませんけれど、気分を落ち着けるお紅茶を持ってきていただけるかしら？」

「はい。かしこまりました！」

ビシッと背筋を伸ばし、走っていくアンヌを見送ってから、ミーアは改めてパティから事情を聞くことにした。

ちなみに、ミーア式高等算術がイマイチ釈然としなかったアンヌは、タチアナに検算をお願いし、その結果、いろいろと大変なことになったりするのだが……。

まぁ、それは別の話である。

第八十八話　パティ、確信してしまう！

部屋に入り、紅茶を一口。
それから、パティは静かに口を開いた。
ヨハンナから聞いた話を……。
あの日……皇太后パトリシアが没した日に何があったのかを。

「あれは、まだ夏が始まったばかりの日……。確か、七つ月の八日じゃったろうか。妾は、皇妃アデライードさま、それに、皇太后パトリシアさまとともに、フーバー子爵領の別荘に行ったんじゃ。大きな川沿いの、とても美しい場所でな。涼むにはもってこいの場所で、何度か、パトリシアさまとも行ったことがある場所じゃった」
フーバー子爵領……聞いたことのない場所だった。これから先、馴染みの場所になっていくのだろうか、と少しだけ不思議な気持ちになる。
「あまり知られてはおらぬが、パトリシアさまは釣りがご趣味でな。近くに川がある、釣りにはもってこいの場所であるから、さぞやお喜びだろうと思うておったが……その日はやけに沈んだ顔をしておられてな」
釣り……趣味になるのだろうか……？　と先日の釣り大会のことを思い出しつつも、パティは注意深く、ヨハンナの話を分析する。
避暑地に遊びに行っても沈んだ様子だった……この目の前のヨハンナにさえも見て取られるほどに沈んでいた……とするならば……。
――私は、私が死ぬことを知っている。知っていてなお、それは回避できないものとして、そこに向かっているんだ。
とするならば、それは未来の情報を得た自分……すなわち今の自分の将来の姿と言えるのだろう。そして、その将来の自分は危機を回避することなく、きちんと死を受け入れたのだ。

この未来を変えないために、パティは死の運命を受け入れるつもりではいる。けれど、それが何の意味も見出せない死であったなら、それをすんなり受け入れられるとも思えないのだが……。

――私は、火事で死ぬことに、なにかの意味を見出したのかな……。

じっくり考えている間にも、ヨハンナの話は続く。

「川のほとりでのんびり過ごしてから、夜はフーバー子爵の別邸で、軽く帝国の歴史について学び、それから眠ることにしたのじゃ。そして……その夜、館は火に包まれた」

ヨハンナは暗い目をして続ける。

「火の回りは恐ろしく早かった。妾たちはあっという間に煙と炎に包まれた。パトリシアさまの冷静な指示がなければ、三人共に死んでいたところであろう」

恐らく……、その時の自分は火事が起こることを知っていたのだろう、とパティは考える。そして、そうなった時のために、屋敷の配置をきちんと頭の中に入れていたのであろうとも。

「けれど、あと一歩……。もう少しで脱出できるというところで、パトリシアさまと分断されてしまったんじゃ……。天井と床が崩れ、下は火の海。飛び移ることは難しい。そのような状況で、パトリシアさまは、妾に言われたのじゃ……。帝国を頼む、と。マティアス陛下を、アデラを、そして生まれてくる子を頼む、と……」

グッと拳を握りしめ、ヨハンナは続ける。

「それから、パトリシアさまは、炎の中に消えて行かれたのじゃ。妾たちの未練を断ち切るように……。妾は、なんとかアデラを守って、館を脱出したのじゃが……」

悔しげに唇を噛んで、ヨハンナは言った。

「今でも思うことがある。確かにアデラは体が弱く、だから、妾が守りながら脱出しなければならなかった。しかし、他にもできたことがあるのではないか、と。パトリシアさまをお守りすることができたのではないか、と……」

それから、ヨハンナは小さく首を振った。
「結局、その火事では、パトリシアさまと、館の主たるフーバー子爵、妾の師匠も犠牲になられたのじゃ」
目まぐるしく開示された情報を、パティは一つ一つ冷静に分析する。
――私と、同じ時に亡くなった人……。これは、偶然？
そうかもしれない。しかし、そうでない可能性もかなり高い気がする。
――フーバー子爵邸の火事……そこで、私が死ぬ……。
正直、実感は湧かなかった。
何十年も後のことだし、火事で死ぬと言われても想像がつかなかった。
そもそも、蛇として生きるように育てられたのに、夫を得て、子を成し、子の妻まで見ている。そこまで生きること自体が、想像もできないことであった。
――それにしても、こんな大切なことを、あっさりと話してしまうなんて……。
この情報は、実際のところ、かなり危険なものだ。
なにしろヨハンナは「自分が皇太后を助けることができなかった」と言っているのだ。確かに、皇妃の命を守る必要があったとはいえ、政敵にでも知られれば悪用されかねない情報だ。
それを、こんなにも他愛なく……。
パティは改めてヨハンナの顔を見る。薄っすら涙ぐみつつ、グッと拳を握りしめるヨハンナ。
ハンネスの隠し子……などと言うやや雑な言い分を信じ、なんの警戒もなく、皇太后の死亡に至る経緯をあっさりと話してしまう……その事実を鑑みて、パティは思わず唸ってしまう。
――ああ、これは、やっぱり……。ヨハンナさんは……。
事ここに至って、パティは、抱いていた疑念を確信へと変える。
なにをか？　それは……。

――たぶん、この人……、ヨハンナさんは、武闘派(のうきん)だ……。
そう……ヨハンナの身にまとった、老獪にして近づきがたい雰囲気、けれど、その分厚いベールの下に、隠しきれない本来の気質。
――シンプルかつ素直な性格……。会って間もない私にすら、簡単に読み取れてしまう、隠しきれない素の感情……この単純さ……間違いない。この人は、純然たる武闘派(のうきん)だ！
そして……パティは内心で頭を抱えた。
なぜ、自分が誤解をさせるようなことを言ってしまったのか……気付いてしまったからだ。すなわち……。
――たぶん、私は、この人のことを敵だと思わなかった。素直だし、単純でとても読みやすい。きっと悪い人じゃない。もしも私が蛇の立場なら、隠しごとができなさそうな人は味方にしない。でも……。だからと言って、彼女を仲間と……協力者とすることも難しい。蛇に、私の真意を知られるわけにはいかなかったから……。
ミーアの時代に至る状況を整えるためには、決して蛇に心の内を知られるわけにはいかない。だから、きっと打ち明けられなかったのだ。善良で、頼れるかもしれなかったヨハンナに、言うわけにはいかなかったのだ。
蛇と思しき男が教育係としてついているヨハンナに……どこに蛇が潜んでいるか、判然としない状況では、胸の内を明かすことが、できなかったのだ。
もし仮に、シュトリナのような人が過去にいれば……。最初の内は疑ったかもしれないが、いざ味方だとわかれば、きっとすべてを打ち明けただろう。口が堅いし、なにを言ってよいか、なにを口にしてはいけないのかをわきまえているからだ。
けれど、武闘派は……煽られれば簡単に秘密を口走ってしまう恐れがある。
ゆえに、言えなかった。蛇にまつわること、未来にまつわること、何一つ、言えなかったのだろう。
――でも、それでも、言わずにはいれなかったんだ。別れ際に帝

国を頼むって。ミーアお姉さまとそのお母さまのことを頼むって……。

それは隠しに隠し続けたパティが、生涯の最期でお願いしたかったこと……。

その結果……っ！

「ゆえに、妾は帝国の文化を守らねばならぬ。聖ミーア学園で教えているような、古きしきたりに反する教えを妾は止めなければならぬのじゃ！」

ヨハンナは曲解した。あるいは、別の蛇によって曲げられてしまったのかもしれないが……。ともかく、曲解し、頑なに凝り固まってしまった。

それが、真実だった。

第八十九話　ミーア姫、煽ることを提案す！

「なるほど、そんなことが……」
パティから聞いた話に、ミーアは愕然とした。
紅茶を持ってきたアンヌも、悲痛な顔でパティのほうを見つめている。
――パトリシアお祖母さまが亡くなったということは、もちろん知っておりましたけれど、まさか、そのような亡くなり方だったとは……。
確かに、どこで、どのように死亡したのかは聞いたことがなかった。祖父である先代皇帝が病死であることに対して、祖母については、ほとんど耳にしたことがなかった。
まるで、それを口にすることが禁忌であるかのように。
――火事で亡くなったということならば、それも頷けますわ。
それから、気遣わしげな顔で、ミーアはパティのほうを見つめ……。
「パティ……」
声をかけようとした、のだが、パティは顔を上げて首を振る。
「……大丈夫。別にショックは受けてないから」
静かに、淡々とした口調で言う。
「夫を得て、子を成して、弟も生きてる。大切な人たちを蛇から守った。この、今の時代に繋ぐことができたなら、それだけで満足だから……」
そうして、小さく笑みを浮かべる。その悲痛な決意すら感じられる笑みに、ミーアは言葉を失う。
「パティ……」
「それより、考えないといけないことがある。一緒に亡くなった先代のフーバー子爵が何者だったのか、ということ……。皇帝陛下の

教育係だったと言うなら、もしかしたら……」
「蛇かもしれない……ということですわね。先代のフーバー子爵……ふむ。そのあたりは、ルードヴィッヒたちを交えて話を聞いたほうが良さそうですわね。アンヌ……」
「わかりました。すぐにお呼びしてきます」
ミーアの指示を受け、シュシュっとアンヌが動き出す。それを見送ってから、ミーアは、ふと首を傾げた。
「ところで、ヨハンナさんは、お聞きした感じでは、蛇ではございませんわよね？　ということは、パティの味方になってくれるかも……」
と言いかけたところで、パティはゆっくりと首を振った。
「……それは、難しいと思う」
「はて？　なぜですの？」
パティは、なにか言おうとして、すぐに口を閉じ……何事か考え込んだ後、意を決した様子で、言った。
「ヨハンナさまは……武闘派（のうきん）だから」
「なっ！」
ミーア、思わず仰け反る。
「もしも、蛇のことを話してしまったら……私が、蛇と敵対していると話してしまったら……ヨハンナさんの口から秘密が漏れてしまうかもしれない」
その言葉で、ミーアも納得する。
パティの味方は、過去には少ない。だからこそ、敵対の意志を気取られてはいけない。蛇の中にいるゆえに、蛇に味方だと思われているがゆえに、パティは自らの安全を確保できるし、妨害工作もできるのだ。
けれど、もしもヨハンナが、隠しごとが苦手な単純な性格であったとすると……。
「確かに……過去のその時点で味方に事情を話してしまうのは危険かもしれませんわね」

パティはコクリと頷き、
「だけど、その分、思い込みも強いようだから、ヨハンナさんの説得は難しいかもしれない」
「余計なことを言わないようにする、ということはできないのかしら？」
「わからない。だけど、今が変わってないから、言わないわけにはいかないのかも……。例えば、火事で分断された時、『私が死んだら、この帝国はどうなるか？』みたいなことをヨハンナさんに言われたとしたら……彼女を逃がすために『帝国のことは任せた』と言わざるを得ないのかもしれない。ヨハンナさんを納得させる言葉を、彼女を誤解させることなく言うことが出来たとして、その言葉に解釈を加え、歪める蛇が現れるのかもしれない」
その分析に、ミーアも思わず考え込む。
「それは、その通りですわね。ということは……その過去の言葉自体をどうこうするのは、現状では難しいと思うべきか……。むしろ、現在でなんとかすべきことなのかもしれませんけれど……ふむ。パティがパトリシアお祖母さまだって証明できればわかりませんけれど……いえ、それでも、子ども時代のパトリシアお祖母さまが、否定しても意味がないかもしれませんわ」
あくまでも「皇太后パトリシアが自らの死の寸前に遺した言葉」が、ヨハンナを縛っているのだ。今のパティの言葉では、説得することは難しいのかもしれない。
「ううむ、なんとか、その時のパティの真意が間違いであると、わかっていただければよいのですけど……」
と、つぶやきかけて、ふと気付く。
――いえ、本当は、パティがそんな言葉を遺さなくていい状況になってくれれば良いのですけど……。しかし、今はとりあえず、ヨハンナさんに認めていただかなければなりませんわ。なんとか……ふむ！
っと、そこでミーアはポコンと手を叩いた。

「あ、そうですわ。ねぇ、パティ、確認ですけれど、ヨハンナさんは……その、少々、単純な方なのですわよね？」
「……はい。たぶん、かなりの武闘派（のうきん）ではないかと」
小さく頷くパティ。それを見てミーアは、ふむ、っと腕組みし、
「ならば……煽る、というのは、どうかしら……？」
「……煽る？」
「ええ。そうですわ。ヨハンナさんが、武闘派であり、単純な性格であるというならば、きっとひっかけることができると思いますわ」
ミーアは、そこでニッコリ笑みを浮かべる。
「ヨハンナさんにとって、望ましい状況を鼻先に吊るしてあげれば……。あとは、フーバー子爵の扱いですけれど……。そちらはルードヴィッヒたちを待たなければなりませんわね」
ミーアがそうつぶやいたところで、タイミングよく扉が開いた。
「失礼いたします。ミーアさま。お呼びとのことでしたが……」
「ああ、来ましたわね。ルードヴィッヒ。バルタザルさんも」
ミーアは、ニッコリと、頼りになる知恵袋たちを迎えた。

第九十話　のう……のう？

「実は、お二人にお聞きたいことがございますの。フーバー子爵のことなのですけど……」
「フーバー子爵、ですか……？」
バルタザルは眉をひそめた。
「先日、お話しした以上のことは、私も存じ上げませんが……」
「今のフーバー子爵ではなく、先代のフーバー子爵についてですわ。現フーバー子爵の異母兄だったのですわよね？」
そう問いかけると、バルタザルは難しい顔で頷いて。
「そう聞いています。フーバー子爵家の現当主は、先代フーバー子爵の腹違いの弟で、先代が直々に探してきたのだとか」
それから、腕組みして、バルタザルは続ける。
「それもあって、先代はある意味で有名人ですね。自らの子を成すことなく、年の離れた腹違いの弟に爵位を譲ってしまった変わり者だとか。そして、教育界の重鎮として知られる方だったとも聞いています。グロワールリュンヌの学長を務めたこともそうですが、皇帝陛下の教育係をしていたこともあって、中央貴族の中では一目置かれる存在だったと聞いたことがあります」
「子爵で皇帝陛下の教育係を務めたというのは、陛下に対する影響力を考慮したうえのこと、なのだろうな」
補足するようにルードヴィッヒが言った。
例えばこれが、四大公爵家の誰かということになれば、他の四大公爵家としては面白くない。かといって侯爵や伯爵であったとするならば、皇帝の寵愛を受け、星持ち公爵に並ぶ権勢を得てしまうかもしれない。それは、国内の混乱を招く恐れがある。
けれど、バルタザルは、この見解には首を振った。
「確かに、あまり高位の貴族を充てるわけにはいかないという考え

もあったのかもしれないが、それ以上に、能力的なものだろう。俺は直接会ったことがないが、優秀な人だったと聞いている。帝国貴族の伝統を明文化し、体系化し、教育の形にまで落とし込んだのは、フーバー子爵の功績と言われているしな」
「クソッたれな初代皇帝の教え（でんとう）の明文化……それは聞き捨てなりませんわね」
つまり、そいつが、ギロちんを呼び寄せるのを、効率化しやがったのか……！　とミーアはムキィッ！　と目つきを鋭くする。
「フーバー子爵が蛇の関係者だとお考えですか？」
ルードヴィッヒの問いかけは、端的で、極めて直接的だった。対して、ミーアは、ふぅむ、と考え込んで……。
「そうですわね。その疑いはあるように思いますわ。秘密裏に調べてみていただけるかしら？　フーバー子爵家のこと、現フーバー子爵のこと、それに先代フーバー子爵のことも……。火事で亡くなったと聞きましたけれど……あるいは生きている、などと言うこともあり得るのかもしれませんわ」
その言葉に、ルードヴィッヒはチラリとパティのほうに目をやってから、眼鏡をクイッと押し上げる。
「なるほど、わかりました。では、そのように手配いたします」
「ところで、フーバー子爵については良いとして、ブルームーン公爵夫人のほうはどう対処なさるおつもりですか？　ミーア姫殿下。あの御仁は、なかなかに頑なですから、討論会をすんなりと受け入れてくれるとは思えないのですが……」
バルタザルが興味深げな顔で聞いてきた。帝国の叡智を直に見られる期待感からか、その瞳はキラッキラと輝いていた！
ミーアは、ふむと頷いた。威厳（えらそう）たっぷりに！
「ああ、そうですわね。少し煽ってみようかと思っておりますの」
「煽る……ですか？」
ミーアの口から出た不穏な言葉に、ルードヴィッヒとバルタザルが顔を見合わせた。

「そう。まぁ、交渉術の基本ですけれど……。要は、ヨハンナさんが喜ぶ状況を、鼻先に吊るしてあげようということですわ」
ミーアは指を振り振り、続ける。弟子に訓示を垂れる賢者のような態度で！
「ヨハンナさんが嬉しい状況とは、なにか……。それは、親友たるアデライードお母さまの娘である、わたくしが、帝国の伝統に回帰することではないかしら？」
その問いかけに、一同は頷いてみせる。
「それは……そうかもしれない。けど……」
代表して、パティが口を開いた。
言わんとすることがわからないのか、一瞬、考え込むようにうつむいたが、すぐにハッと顔を上げる。ミーアは静かに微笑んで、
「そうですわ。であるならば……、今度の討論会を、わたくしを説得する機会だと言って煽ってやればよいのですわ。せっかく『ミーア姫殿下の価値観を正す機会なのに、それを逸するのですか？』と煽ってやるのですわ」
「……なるほど」
顎に手を当てて、ウーム、と考え込むパティにミーアは得意げに続ける。
「ヨハンナさまはああ見えて、なかなかに武闘派な方とお聞きしておりますわ。であれば、挑発してやれば、乗ってくるのではないかしら？」
「いや、しかし、そう簡単にいくでしょうか？　ブルームーン公爵夫人は、紫月花の会の長を務めている方ですし、そう簡単に、こちらの思惑には乗ってこないと思いますが……」
バルタザルの懸念を余裕の笑みで受け止めて、ミーアは言った。真理を悟り切った顔で！
「人は、なかなかに自らの本質からは逃れられないものですわ。わたくしは、彼女の本質がのう……」
うっかりポロリとしかける。

「のう……？」
きょとん、っと目を瞬かせるバルタザルに、ミーア、咳ばらいを一つ。
「のう……どうてきかつ、裏表のない性格だと思っておりますわ」
「能動的かつ裏表のない性格……」
「ええ。ですから、挑発すれば乗ってきてくださると思いますわ。ね、パティ」
ミーアの言葉を受けて、パティは、コクリと頷いた。
うちの孫、やっぱりすごい……やっぱり帝国の叡智は違うなぁ！
と、大いに感銘を受けた顔で。

第九十一話　こっそりと、さりげなく……

「なるほど……。ブルームーン公爵夫人の件、安心いたしました。ところで……」

こほん、と咳払いを一つして、ルードヴィッヒはチラリとミーアのほうに目を向けた。

「ミーア姫殿下……なんでも、新しいお料理の開発をなさるとか……」

「あら、ルードヴィッヒ、耳が早いですわね。ええ。そのとおりですわ。先日食べたプニッツァに、わたくし、大いに感動してしまいましたの」

ミーアはパンッと手を叩き、ニッコリ笑みを浮かべた。

「あれは、素晴らしいお料理でしたわ。パンともケーキとも違う味わいで。薄めのパイと言えばいいのかしら……。ふふふ、ともかくとっても美味しくって。わたくし、大いに想像力を刺激されてしまいましたの」

「なるほど、それで、さらなる美食の開発のために御自らが開発に参加なさるということなのですね。使者の胃袋を掴んでしまうというのは、確かに、良い手段だと思います」

応じたのはバルタザルだった。これが帝国の叡智か、やっぱり違うなぁ！　とひとしきり感心した様子の彼に、ミーアは上機嫌に微笑んで、それから、ハッとした顔でアンヌのほうに目をやって……。

「ええ、まぁもちろん美味というのも大切なことですけれど、わたくしは、別のことも考えておりますの」

「別のこと、と言いますと……？」

不思議そうな顔をするバルタザルに、ミーアは、もったいぶるようにたっぷり溜めてから、

「食べる者の健康を視野に入れたメニューですわ！」

ばばーんっ！　と、腰に手を当て胸を張り、ミーアは言った！

その答えに、意表を突かれた、とばかりにバルタザルは目を見開く。

「なるほど。食を通した健康……ですか。それは盲点でした……。確かにそれは他国との関係構築で使えるメニューができるかもしれません」

『王よ、永遠に健やかに生きられますように』という文言は、古き時代の外交使節の常套句だ。食を通し、相手の健康を願う姿勢を見せるのは、外交手段として有効なように思えた。

「他国の使者の食べ慣れたメニューを出すのももてなしならば、相手の健康を祈るのもまたもてなし。なるほど、実に理に適っている」

「ついでに、帝国の各地の食材を楽しんでもらえればいいとも思っておりますの。その地域ごとに、あるいは季節ごとに使える食材は異なりますわ。今回は、静海の森が近くにあるということで、森で採れる食べ物を使うのはどうかと思っておりますの。ウサギとか、野草とか……キノコとか」

こっそりと、さりげなーく、キノコを付け足すミーアである。

そんなちょっとした工作でも、バルタザルはコロッと騙されてしまうようで。

「おお、それは素晴らしい！」

キラッキラと目を輝かせるバルタザルに対し、黙って話を聞いていたルードヴィッヒは、あくまでも冷静な態度を崩さなかった。

彼は眼鏡をグッと押し上げ、

「ミーアさま、その件で、お願いしたきことがございます」

キラリと光るレンズの奥、知性の色を湛えた瞳は真っ直ぐにミーアを見つめている。

「あら……ルードヴィッヒ、なにかしら？」

その視線の鋭さに、ミーアは、ゴクリと喉を鳴らす。

彼の発する圧力が、かつてのクソメガネ・ルードヴィッヒを思わせるものだったので、ついつい、自分に不手際があったのではない

か？　と不安になってしまう。
……いや、まぁ実際には不手際……というか、不正な改竄をプニッツァ・ポイントに対して行っているミーアなわけなので、かつてのクソメガネが現れたら、怒られるというか、呆れられることは間違いないミーアなのであるが……。
けれど、生憎なことに、かつての澄みきった眼鏡は、今やすっかり白く曇ってしまっているようで……。
「私も、その新メニュー開発会に参加させていただけないでしょうか？」
真っ直ぐな瞳で、ルードヴィッヒは言った！
「あら、ルードヴィッヒも……？　お料理ができるんですの？」
意外な申し出にミーアは目を丸くする。一瞬、この忠臣は料理までできるのか？　などと驚くミーアであったが……。
「いえ、残念ながら素人です。もっとも、師匠のところで、一人で生きていける程度のものは仕込まれておりますが……、残念ながら、ミーアさまのお役に立つ意見を出せる自信はありません。しかし、その……」
ルードヴィッヒは、心なしか、ソワソワした顔で言った。
「噂に聞くミーアさまのお料理会を、一度見学してみたいと思っていたのです」
「あら、そうでしたのね？　ふふ、プニッツァは美味しいですしね。参加希望というのもよくわかりますわ」
楽しげに微笑んで、ミーアは言った。
「もちろん、歓迎いたしますわ。ルードヴィッヒの視点からもぜひ、意見がいただきたいですわ」
快く参加を許可して、満足げに頷くミーアである。
――まぁ、謙遜しておりますけど、ルードヴィッヒのことですし、きっと料理にも卓見を示してくれるに違いありませんわ。
っと、そこでミーアはポコンッと手を打った。
「あ、そうですわ！　ガルヴさんにも、なにか良い食材を紹介して

いただくというのはいかがかしら？　確か、大陸中を旅されているということでしたわよね？」
「そうですね。それに、ルールー族の族長殿にも協力を要請して、なにか良い食材を紹介してもらうのが良いのではないでしょうか？」
「名案ですわね。きっとわたくしたちの知らないとっておきのキノコを紹介していただけますわよ。うふふ、楽しみですわ！」
上機嫌に鼻歌混じりに笑うミーアだった。

第九十二話　彼は選び、進んでいく

さて、ミーアがせっせと悪だくみに勤しんでいた頃のこと。
ティオーナ・ルドルフォンは弟のところに急いでいた。
どうやら、この時間は、ミーア二号の小麦畑の様子を見に出ているらしい。
……例の、あの……ミーアの顔が描かれたロクでもない畑である。
学園の敷地を出て、早足で畑のほうへ。っと、どこか、心ここにあらずな様子で小麦畑を見つめるセロが立っているのが見えた。
一瞬、声をかけるのを躊躇ってから、ティオーナは口を開いた。
「セロ……」
「ああ、姉さま、来てたんだ」
ハッと顔を上げたセロはティオーナのほうを見て小さな笑みを浮かべた。
「ええ。いつ見ても、見事な小麦畑ね」
そうして、ティオーナは聖ミーア学園自慢の小麦畑を眺めた。憂いを帯びた顔で……ミーアの顔の描かれたロクでもない小麦畑を……。
……実に、こう、シュールな光景であった。
「ミーア二号小麦、春にも蒔いたのね」
ルドルフォン辺土伯領では、秋に種を蒔き、冬を越えて、初夏に刈り取っている。それからしばらくの間、畑を休ませるのだが、どうやらここでは、その後でもう一度、種を蒔いたらしい。
「そうなんだ。試しにね……」
「いい具合に育ってるみたいね」
そよそよと揺れるミーアの顔……もとい、小麦の葉を見つめて、ティオーナは言った。対して、セロは首を振った。
「まだ、なんとも言えないんだ。ペルージャンには、こういう畑を

酷使するようなやり方だと却って収穫量が減るって話もあって。だから、その実験でもあるんだ」
楽しそうに話すセロに優しい笑みを浮かべてから、ティオーナは言った。
「セロ……大丈夫？」
「ん？　もちろんだよ。少し忙しいけど、やりがいがある仕事だし、すごくいい勉強させてもらってる。ルドルフォン領のみんなにも、きっとすごく役に立つと思うよ」
「そう……」
そこで、一度言葉を切って……、かすかな逡巡の後、ティオーナは言った。
「ミーアさまと、ダンスしたんでしょう？」
その問いかけに、セロはピクッと身じろぎして、それから黙って頷いた。
「ミーアさま、ダンスが上手いって褒めてたよ」
「ふふ、たぶんミーアさまとダンスをしたら、みんな上手くなっちゃうんじゃないかな？」
ようやく、セロはティオーナのほうに体を向けた。まるで言葉を探すようにしばらく黙ってから……意を決した様子で、彼は言った。
「ねぇ、ティオーナ姉さま。やっぱり、僕は……ミーア姫殿下が好きみたいだ」
弟の、勇気を振り絞った言葉に、ティオーナは息を呑んだ。
「セロ……それは……」
「ふふ、そんな顔しないで。姉さま。僕だってわかってるよ」
寂しげに微笑んでから、セロは首を振った。
「想いを伝えたりとか、そういうことはしない。そんな大それたことは、全然、考えてもないよ。ただ、姉さまは、僕のことを心配してたみたいだから、はっきり言っておこうと思って……」
皇女殿下に、田舎貴族たる辺土伯の長男が恋心を伝える……そんなことをすれば、どうなるか……。中央貴族からは怒りを買うだろ

う、もしかしたら、皇帝からも叱責を受けるかもしれない。
けれど、それはあくまでも普通であれば、というだけで……。
「でも、ミーアさまは、きっと受け止めてくれるよ？　セロの気持ちもきちんと受け止めて、それで、答えをくれると思う」
ミーアへの揺るがぬ信頼があった。そして……それ以上に、ただ一人の弟への情があった。
自らの想いを胸に秘め続けるのは、たぶん、きっと辛いことだ。その想いを味わわせたくはない、とそう思って……。でも……。
「あの方を困らせるような、そんなことはしたくないよ。それに……ええと、言葉にするのは難しいんだけど、そういうことじゃないんだ。そうじゃなくて……」
セロは、少しだけ考えてから……。
「あの方は、花みたいなものだと思うんだ」
「花……？」
きょとん、と首を傾げるティオーナに、セロは頷いた。
「うん、そう。花……。美しく咲き誇る花だ。でも……僕は違う。僕は姫殿下と同じ花になって咲き誇ることはできない」
ギュッと拳を握りしめて、セロは言う。
「僕は花が朗らかに咲き誇れるように、その備えをするのが性に合ってるんだ。遠くから花を見守り、環境を整える……それが僕の役目であり、幸せなんだ」
セロの、その言葉に、その顔に、ティオーナは思わず息を呑んだ。弟は、今まで見たことのない顔をしていたから……。
その表情は、悲嘆に暮れてもいなければ、投げやりな諦念に身を委ねた人のものでもなかった。かつての弟に見ていた弱々しさの欠片もなかった。
それは、自ら歩む道を見定め、選び、踏み出した若者の顔だった。
――そうか……セロは、選んだんだ……。ミーアさまに言わないことを、自分で……。
心のままに行動することの影響と、自らの肩にかかっている重責、

はたさなければならない役割……そして、未来に残すべき研究……。
それらすべてを鑑みて、選んだのだ。
『言わない』ということを……。
「心配してくれてありがとう、ティオーナ姉さま。でも、大丈夫だから。僕は大丈夫だから」
そうして、セロは穏やかに笑った。その笑みを見てティオーナは、けれど、キュッと胸が苦しくなった。
「さ、もう行って。僕はまだもう少し、畑の様子を見ないといけないから……」
踵を返そうとするセロに、ティオーナは声を上げる。
「セロ、一つだけ。それでも一つだけ覚えておいて。ミーアさまは、民を大切にする。自分以外の他者を大切になさる方だけど、決してご自分を軽んじる方ではないっていうことを……」
「え……？」
きょとん、と首を傾げるセロに、ティオーナは続ける。
「ミーアさまは、他者もご自分も尊ばれる方。そのことを大切にしている方だと思うの。だからセロも……。他のことを優先させて、自分の気持ちをないがしろにするような、そんなことを続けたらダメだよ」
誰にも言わず、その気持ちを自分の中で殺すということは、誰からの励ましも、慰めすらも受けられないということ……。ただ一人、傷ついたことすら誰にも伝えずに、抱え込むということ……。
「一人で背負い込むことはないんだから……。私は、いつだってセロの味方だから……。それは、忘れないで」
ティオーナは真っ直ぐにセロの顔を見て言った。
……そして、そんな姉弟のやり取りを物陰からひっそりと眺めている人物がいた。
それは、実に……実に怪しげな風貌の人物で……。

第九十三話　仮面の（あやしい）人のお節介

セロとティオーナから離れること、およそ十数歩と言ったところだろうか。小麦畑の観察用に建てられた小屋の陰、そこに怪しげな……実に怪しげな人間が立っていた。

ちなみに、具体的にどこが怪しげかというと、その……、顔につけた薔薇の仮面が、なのであるが……。

っということで、皇女ミーア・ルーナ・ティアムーンの元メイド、ペトラ・ローゼンフランツは、小屋の陰から一部始終を眺めて、頭を抱えていた。

――うう、気まずい……まいったな……。

さて、ペトラは、非常に機転の利く人物である……いや、機転が利く人物であった……というべきだろうか。

面倒事からは距離を置くし、そうそうトラブルに巻き込まれることもない。ひらりひらりと可憐に危機を避け、華やかな花々を行きめぐるその様は、薔薇と言うよりはむしろ，蝶のようだった。

けれど、ここ最近……、それが少しばかり鈍っているようだった。

聖ミーア学園の生徒たちに懐かれてしまったあまりに、面倒事にもよく巻き込まれるようになったし、そもそも、この夏休みの間に実家に帰っていなかったものだから、うっかりミーアと顔を合わせそうになってしまった。そのうえ……。

――ミーアさまと会わないようにって、小麦畑に来てたけど……まさか、こんな場面に出くわすなんて……。

小さくため息を吐いて、ペトラは思う。

――まぁ、このまま、黙って見なかったことにしよう。そうだ、そうしよう……。

っと、かつての彼女であればそうしたのだろうけど……今だって、そうしたいところなんだけど……だけどっ！

「心に、思いを秘め続ける……かぁ」
セロの、下したその決断が彼女に見て見ぬふりを許さなかった。
……彼女には、忘れられない夢があったからだ。

夢、ティアムーン帝国が斃れる夢……あり得ない、荒唐無稽な夢。
その夢の中でペトラはミーアを裏切った。
皇女付きの専属メイドであった彼女は、ミーアに忠節を尽くさなかった。
革命の噂が聞こえて来た時、いち早く白月宮殿を見限り、ミーアを見捨てて、ローゼンフランツ家へと帰ってしまったのだ。
されど、そこも安全ではなかった。
革命の火は呆気なくローゼンフランツ家を焼き尽くし、家族を失った彼女は、命からがら帝都へと落ち延びる。
すべてを失った彼女は、さらに、流行病にかかり、その命は風前の灯であった。
衰弱し、路地に倒れた彼女に救いの手を伸ばしたのは、他ならぬミーアであった。
白月宮殿で保護されたペトラは、しばしの平穏な時を過ごした。
されど、それも長くは続かない。燃え広がる革命の火は、やがては帝都を呑み込み、白月宮殿もほどなく落城した。
そして、ペトラは……革命軍に『保護』された。
悪の帝国皇女に虐げられた、哀れな女性として……。
彼女は……彼女は言えなかった。
自分がミーアに助けられたということを……。
ミーアを庇えば、彼女自身の身も危なくなる。ペトラは帝国中央貴族、ローゼンフランツ伯爵家の令嬢だからだ。
それに彼女が弁護したからといって意味もなかった。すでにミーアの運命は決められていて、助けられる道は閉ざされていたのだ。
ここで、それを言っても意味がない。ミーアがかつての専属メイドの命を救おうとしたからといって、何の弁護になろうか……？

黙っているのが得策だ、と。
もっともらしい正論、都合の良い言い訳が幾重にも心に浮かんでは消え、ついに彼女は言えなかった。その口を開くことができなかった。
それが、一生背負うことになる鋭い呪いの棘であると気づきながらも……。
その後……革命軍から放逐されたペトラは、新月地区の教会に流れ着いた。
運良く病から生き残った彼女は、そこで、孤児たちの面倒を見ながら余生を過ごすことになった。
生涯、誰にも、その罪を告白することはなかった。
誰かに言えば、憐みはもらえただろう。
神父さまに言えば、赦しをもらえたかもしれない。
シスターに言えば、慰めてもらえたかもしれない。
……あるいは、誰かが裁いてくれたかもしれない。
彼女の罪悪感を和らげてくれるかもしれない。
それだけは、駄目だと思った。
唯一、自分を赦すことができるのは、裏切ってしまった人……ミーアだけだと思ったから。
だから、ペトラは口を閉ざした。
自らの罪悪感を決して薄れさせることのないように、ただ、その想いを自らの胸に抱き続けて……。
それは、そんな贖罪の人生の……夢だった。

――まぁ、ただの夢なんだけど……。
結局のところ、彼女がミーアに会いづらいというのも、その夢によるものだった。現実にあったことではない。だから、とりあえず、謝ってしまえば楽になるのだろう……けれど、さりとてそれは夢のこと。どうにも伝え難いわけで……。
それに「ミーアさまがわからないことを、勝手に謝って気持ちを

楽にしようとしてるんじゃ？」なぁんてことも思ってしまうわけで……。

実に不可思議な、それは呪いのような気持ちだった。

そして、そんなペトラだからこそ、セロを放っておくことはできなかった。

「正直、ルドルフォン家とか、どうでもいいんだけど……」

なぜだか親しみを覚えてしまう新月地区の孤児院出身の子どもたちとは違って、田舎者のルドルフォン家の人間とは距離をおくつもりでいたのだが……。

しばし待ち、セロが去るのを見送ってから、ペトラは小屋の陰を出た。

ううん、っと体を伸ばしつつ……。

「さて、どうしようかな……」

セロの気持ちはよくわかるし、思いを告げないという選択も理解できるものだった。あれは、賢い選択と言えるだろう。

けれど、あれは、違う。あれは、ペトラの罪とは違う性質のものだ。厄介な感情ではあるだろうけど、慰められ、励まされても許される類のものだ。だからこそ、なんとかしてあげたくもあり……。

「あのお姉ちゃんがやってあげれば楽だったのに……うーん、弟くんの意地とかなのかな？　お姉ちゃんにばっかり頼ってられない、みたいな……」

誰か、適当な者がそれをしてくれればいいのだが……しかし、その役割を自分がやろうとは思わない。

なぜって……もちろん、面倒そうだからだ！

基本的に厄介事には近づきたくないペトラである。

「うーん、誰か適当な……あっ！」

その時だ。彼女の目に映ったのは、小麦畑のほうにやってくる教師の姿だった。黒い髪をまとめ、スラリと背を伸ばして歩いてきたのは……。

「アーシャ姫殿下……」

ペルージャン農業国の第二王女にして、教師も務めるアーシャ姫だった。
ペトラのほうを見たアーシャは、軽く驚いた様子で、あら、と声を上げた。それでペトラは思い出す。
――あっ、そういえば、仮面付けっぱなしだったっけ……。
そうして、仮面を外して……。
「私です。ペトラ・ローゼンフランツです」
「いや、それはわかるけど……」
バレバレだったっ！
「畑のほうに来るなんて、珍しいですね。ペトラさん」
「あー、あはは……」
基本的に、ペトラは農作業には参加していない。帝国中央貴族のご令嬢で、小麦畑に興味を示すなど、よほどの変わり者だけだろう。まぁ、あのミーアの顔が描かれた小麦畑はちょっと面白いと思ったが……。
「こんなところでなにを？」
小さく首を傾げるアーシャを見て、ペトラは考える。
アーシャ姫……帝国貴族から蔑まれるペルージャン農業国の姫にもかかわらず、帝国中央貴族出身のペトラにも気さくに話しかけてくれる人。内心はわからないまでも、普通に接してくれる、心の穏やかな女性。
ついでに、セロとも研究を通して親しくしているし、ミーアが自らスカウトした、信頼に足る人物でもある。
――ちょうどいいかな？
ペトラは軽い気持ちで思う。
なにより、アーシャは教師だ。生徒のケアをする責任があるはずだ。
内心で、うんうん、っと頷きながら、ペトラはニッコリ笑みを浮かべた。
「あの、アーシャ先生、実はご相談したいことがありまして……」

言いながら、ペトラは思う。
――それにしても、教師って大変だなぁ。ふふふ、ただの生徒で良かった。
などということを、うっかり思ってしまったペトラであるのだが……。

そんな彼女は数年後、聖ミーア学園の教師として、正式にスカウトを受けてしまったりすることになるのだが……。
それはまた別の話なのである。

第九十四話　ミーア姫、生き生きと撒き餌をする

さて、ミーアは早速、行動を始める。
シン・プニッツァ開発プロジェクトのために、力を尽くさなければならない以上、あまりヨハンナに時間をかけてもいられない。
「さっさと煽って釣り上げなければいけませんわね……。パティ、釣り上げる役はあなたに任せてもよろしいかしら？」
ミーアの問いかけに、パティはコクリと頷く。
「……自分でやることは、自分で責任を取りたい」
覚悟のこもった返答に満足げに微笑むミーアである。
っということで、翌日、ミーアはヨハンナのもとを訪れた。
「ヨハンナさま、せっかくですし、一緒に聖ミーア学園の授業の見学に行くのはいかがかしら？」
愛想よく微笑んで、それから、ミーアはとあるものを取り出す。
「我が学園の授業の素晴らしさを見ていただけば、討論会などせずとも、パライナ祭に相応しいのがこちらであると、ご納得いただけるかもしれませんし……」
そうして、パサリ、と開く。ヨハンナのものに似た扇子を！
それで口元を隠し、嫣然と微笑むミーア。ヨハンナの真似をして、パタパタと……煽りに煽っていく！
けれど、ヨハンナは、あくまでも涼しげな顔で、
「おや、素晴らしい扇子をお持ちじゃな、ミーア姫殿下。どこで手に入れたものか後で、ぜひお教え願いたいものじゃ」
シレッとそんなことを言う。余裕の態度である。
「しかし、さて……はたして見学する価値があるのかどうか……。妾には甚だ疑問じゃ。のう、フーバー子爵」
「ごもっともです。ヨハンナさま。このような学校に……」
「わかりましたわ。ちなみに、サンクランドのエシャール殿下が授

業を受けておられるということで、兄君のシオン王子からも、参加希望が出ておりますのよ。当然、陛下も参加なさるとのことですけれど……」
チラッと横目で窺うと、うがが、っと言葉を失うフーバー子爵とため息を吐くヨハンナの姿が見えた。
「なるほど……、どうやら、妾も同行せぬわけにはいかぬようじゃな」
首を振るヨハンナに満足げに頷きつつも、ミーアは再びフーバー子爵を窺う。
――ふぅむ、しかし、こんなに簡単にやり込めてしまうなんて、蛇にしては少し歯応えがなさ過ぎますわね。本当に、この方、蛇の仲間なのかしら……？
首を傾げつつも、ミーアはニッコリ笑みを浮かべ、
「それでは、参りましょうか」
さて、ミーアの提案の目的、それはもちろん、ヨハンナを釣り上げるための布石である。
ミーア学園並びにミーア自身の価値観が、いかに古い貴族たちの価値観と違うのかを見せつけてやるのだ。
――わたくしの価値観を是が非でも変えたくなるように振る舞わねば……。さぁ、煽りに煽ってやりますわよぅ！
気合を入れつつ、ミーアは教室へと向かった。
見学するのは最も効果的であろう授業、すなわち農学である。
「ミーア二号小麦の主な問題点は、食べた時の食感が旧来のものとは異なることにあります。これは調理方法によって克服されたと言っても良いことではありますが、やはり、旧来の小麦と同質の寒さに強い小麦を作ることが次なる課題であると考えられており……」
教壇に立つアーシャの邪魔をしないように、ミーアはひっそりとヨハンナに声をかける。
「ご覧になられたかと思いますけど、聖ミーア学園では小麦を始めとした農作物の研究に力を入れておりますの」

「農作物……」
チッと舌打ちしそうな顔をしているのは、ヨハンナの隣に立つフーバー子爵だった。
「まぁ、民草にとっては必要な知識……」
「貴族にも、ですわ。自領の農地がどのような状況か、知っているに越したことはございませんもの。それに、もしもミーア学園で発見された寒さに強い小麦がなければ、今頃、帝国は食料不足に陥っていたかもしれませんわ。我がティアムーン帝国の名を高めるうえでも、我が国の国力を落とさないという点においても、これは大いなる貢献と言えるのではないかしら？」
だからこそ、パライナ祭に出るのは、ミーア学園のほうが相応しいんだぞこの野郎！　と、言外に付け足すミーアである。
それを聞き、うがが、っと口元を震わせるフーバー子爵。さらに……。
「なるほど、これがミーアが作った学校か……」
感無量と言った様子でつぶやいているのは、皇帝マティアスだった。
これには、さすがのヨハンナも苦々しげな顔をする。
帝国の頂点に立つ皇帝が、反農思想に反するような教育に関心を示しているというのは、ヨハンナにとっては許容できないことなのだろう。
――ふふふ、良い感じで煽れておりますわね。ふむ、そろそろかしら？
ミーアは上機嫌に微笑みながら、ヨハンナに問いかける。
「それで、いかがかしら？　ヨハンナさま。先日の討論会の件、ご検討いただけたかしら？」
ミーアのほうに鋭い目を向けてから、ヨハンナは断固とした様子で首を振る。
「残念じゃが、グロワールリュンヌの学生たちを、このようなところに来させるわけにはいきませぬな」

それから、ヨハンナは学生たちのほうへと目を向けた。
「なるほど、確かにここは民草にとっては良い学校なのかもしれぬ。けれど、ここでの学びが、中央貴族の子弟に悪影響を及ぼすことは確実じゃ。このような場所にグロワールリュンヌの若人を呼ぶなどあり得ぬ。討論会にも、妾はなんの意義も感じませぬな」
断固たる口調でそう言って教室を後にするヨハンナ。その背を追おうとしたフーバー子爵に、ミーアは声をかける。
「フーバー子爵、申し訳ありませんけれど、陛下とシオン王子のお相手をお願いできますかしら？」
「は？　いえ、しかし、私はヨハンナさまを……」
「ヨハンナさまの機嫌を損なってしまったみたいですし、わたくし、追いかけて謝りたいと思っておりますの。ですから、お願いいたしますわ」
しおらしい態度でそんなことを言うミーアであるが、無論、演技である。
視線を転じれば、ジィイッと、こちらを見つめるマティアスの姿があった。
皇帝陛下の前で、このような態度で皇女にお願いされてしまった以上、それを断ることは……不可能である！
そうして、フーバー子爵の足止めをしたミーアは颯爽とヨハンナの後を追いかける。
ニンマーリと笑みを浮かべながら……。
――ふふふ、舞台は整いましたわ。頼みますわよ、パティ！

第九十五話　パティヤナ、釣り上げる！

すっ、すすっと、ミーアはヨハンナの後を尾行していく。
その動き、さながらダンスのステップのごとく……。
そうなのだ。ミーアはパーティーの主役となるべく華やかに踊ることもできれば、主役を立てるためにこっそりと、目立たぬように踊ることもできるのだ。
それを応用すれば、このように……パーティー会場の端で佇む端役のような存在感で尾行することも可能なのだ。
……ちなみに前の時間軸の新入生歓迎パーティーでも用いられた大変悲しい技術であったりするのだが……まぁ、それはさておき。
そうして、尾行することしばし……教室の建物を出てしばらく歩いたところで、ヨハンナはふと立ち止まった。彼女を呼び止める者がいたためだ。
「ヨハンナさま……」
「おや？　お前は……」
その人物、パティを見て、ヨハンナは嬉しげに微笑み――言った！
「おお、パティヤナではないか」
――はて？　パティヤナ？
物陰で聞いていたミーア、耳慣れぬ言葉に、思わず身を乗り出す。そこで、パティと目が合った。微妙に、気まずげな顔をしていた！
――まぁ、本名を名乗るわけにはいかなかったのでしょうけれど、しかし……。
ミーアは、ううむっと考え込んでから……。
――まぁ、お父さまの名前は犬からとったみたいなこと言ってましたし、まぁ、以前よりはマシになったのではないかしら……？
そう評価した！　偉そうに！
っと、どうやら、パティは決然とした表情でミーアから視線を逸

らしてから、
「……どうして、例の討論会に反対なさっているのですか？」
スルーして、話し出した！
「なに……？」
ヨハンナの声が低くなるが、構わずに続ける。
「ヨハンナさまが反対されていると聞きました。そのご様子では教室を見学しても、お考えは変わらなかったのではありませんか？」
「そのとおりじゃ。討論会など茶番。それに、この聖ミーア学園に我が帝国の次世代を支える大切な人材を連れてきて、悪影響を受けたら一大事じゃ」
頑なに首を振るヨハンナをパティは上目遣いに見つめて、
「……討論会は、ミーア姫殿下の価値観を改めるための良い機会ではありませんか？」
静かに、けれど、鋭く切れ込んだ。
「なんじゃと……？」
思いもよらぬことを言われた、とばかりに目を見開くヨハンナ。パティはあくまでも冷静に、淡々と言葉を重ねる。
その様は、さながら、湖面に垂らした糸を、くいっくいっと引く熟練の釣り師のごとく……。
「この帝国の、古き良き伝統を守るグロワールリュンヌと、それを壊そうとする聖ミーア学園、両校を比較する良き機会が討論会なのではないでしょうか？　そして、その違いを目の当たりにすればこそ、ミーア姫殿下も、お考えを改めるのではありませんか？」
湖のヌシの前で、ふりふり、っと餌を動かして見せる。っと、ヨハンナは、しばし黙り……取り出した扇子で口元を隠してから……。
「ふふん、なるほど。つまり、そなたは妾を挑発しようというのじゃな？」
鋭い視線をパティに向けた。
「どうじゃ？　図星であろ？　そうでなければ、そなたがミーア姫殿下に敵対するようなことを言うはずがない。ふふん、安い挑発じ

ゃな」
っと、パティの横を通り過ぎようとするヨハンナに、けれど、パティはあくまでも静かな口調で言う。
「……挑発？　いいえ、違います」
あえて必死さもない、感情のこもらない声で……。
「ただ、私は事実を言い、そして問うているのです……。ミーア姫殿下を、このまま放っておいて良いのか……と。ヨハンナさまは、どちらが大切とお考えか、と」
「どちらが……とは？」
「グロワールリュンヌの学生か、それとも……ミーア姫殿下か」
パティは両手のひらを肩の高さまで上げて……天秤を作り出す。
「グロワールリュンヌの学生たちがこの学園の新しき教えに染まってしまうことを心配するのはわかります。帝国の伝統を守る中央貴族の子弟にとって、農業に価値を見出すような考え方は混乱のもとになるかもしれません。しかし……皇太后パトリシアさまにとって、どちらが大切だったのでしょうか……。この帝国の伝統を守ることと、ミーア姫殿下を守ることと……」
片手に帝国の伝統、片手に皇女ミーアの価値観をのせて、パティはゆらゆら両手を上下させる。
「ミーア姫殿下が悪しき価値観に染まってしまうとするなら、それを止めることこそが、忠臣としての在り方なのではないでしょうか。今の状態を見て、パトリシアさまは、どう思われるでしょうか？」
別に、どうも思ってなさそうな声で、パティは言った。
むしろ、ミーアのほうが正しいんだけどね、と言いたいのであろうパティは、あえて表情を動かさずに淡々とヨハンナを挑発する。
「仮にこれが挑発であったとしても、事実は変わりません。このような、説得する機会を逸することは、勇無きこと、ではないでしょうか」
その言葉に、ヨハンナはカッと目を見開いた。
ミーアは、その背に、ほのかな炎が立ち上るのを幻視する。

「なるほどのう……。確かに、戦うべき時に戦わぬは、勇無き者と侮られること。パトリシアさまの御思いにも反することであろうな……」

ヨハンナは、持っていた扇子をスッとドレスの中にしまい込み、

「妾は……少々、臆病になっていたようじゃ……。確かに、今度のことは、ミーア姫殿下を説得する絶好の機会。この学園の生徒たちを、そして、ミーア姫殿下ご自身を完膚なきまでに論破できれば、帝国の文化を壊すがごとき悪しき思考から解放されるであろう」

パチンと手を叩いてから、ヨハンナはパティのほうに目を向けた。

「ふふふ、待っているがよい。そなたを妾のもとへと送ったミーア姫殿下を、せいぜいわからせてやるのじゃ！」

かくて、三日月形の湖に住むヌシ、ヨハンナは釣り名人パティヤナによって釣り上げられたのであった。

第九十六話　キースウッド、朗らかに提案する

ヨハンナの了解を取り付けたことで、正式に討論会の開催が決定した。

具体的には、グロワールリュンヌの生徒会を中心にした十名を聖ミーア学園へと招き、そこで、いくつかのテーマについて討論をしてもらいことになったのだ。

日取りは十日後。初日に、歓迎のダンスパーティーを開き、その後、数日間かけて討論会を開催。その結果で、パライナ祭の代表校をどちらにするかを決めるのだ。

「……ということで、美味しい新プニッツァの開発が急務となりますわ」

整列する料理学部の学生たち。その前で、ミーア・ルーナ・ティアムーンは堂々たる口調で言った。その、リーダーシップに溢れた様は皇女というよりも、年若き女帝と言った印象のほうがしっくりくる、威厳に溢れるものだった。

威風堂々、なににはばかることもないと言った口調で、ミーアは続ける。

「わたくしが見たところ、プニッツァの良し悪しは上に乗せるもので決まりますわ。であれば、やはり良い食材に目星をつけなければなりませんわ。ワグル」

名を呼ばれ、ワグルは静かに一歩歩み出る。

堂々と、誇らしげに胸を張る。その中心に宿るのは、誇らしい気持ちだった。

皇女ミーアに、帝国の叡智に頼られるということ……仕事を任されるということ……。

揺らぐことのない深い誇りを握りしめ、彼は言った。

「ミーアさま、直々の命を受け、祖父ちゃん……じゃない、祖父に協力を要請しました。すでに、ルールー族の精鋭が、静海の森内の食材を集めるために動き出しています」
その声を合図に、部屋にルールー族の若者たちが入って来た。彼らの手により、手際よく、調理台の上に食材が並べられていく。各種の野草や村で育てている野菜、木の実や瑞々しい果実類、キノコの類、そして……。
「外では、リオラさんの指示のもと、お肉の準備も進んでいます。川魚も準備しました」
それを聞き、ミーアは満足げに頷いた。
「ふむ、これだけ材料が豊富にあると、組み合わせがいがありますわね」
熟練の料理人のような空気感を醸し出しながら、ミーアは言った。
「ありがとう。ワグル。お祖父さまにも、ぜひお礼をお伝えいただきたいですわ」
微笑むミーアにワグルは、深々と頭を下げ、
「そう言っていただけると、きっと、みな喜ぶと思います。でも、ミーアさま、これだけではありません。ルールー族に伝わる、伝統的な食材もお持ちしようと思っていまして」
「ほう、伝統的な食材……と言いますと？」
興味深げに目を輝かせるミーアに、ワグルは説明する。
静海の森で採れる食材の中には、そのままでは食べられないようなものがある。
例えば、樽詰めにして数日置くと毒が抜ける木の実、芽の部分に毒があるため、それ以外が食べられるイモ類、そして……。
「煮詰めて毒抜きをしたキノコもございます」
「なんと、キノコ！　それも毒抜きということは……もともとは毒キノコだったものが食べられるようになるんですの？」
目をキラッキラと輝かせるミーアに、ワグルは思わず嬉しくなってしまい……。

「はい。もっとも、少し手間がかかるみたいなのですが……煮詰めた後、日干しして、もう一度、水で戻してということを繰り返すようですが……」
「ああ、それはぜひ、作り方を教えていただきたいですわ。あ、そうですわ。他の毒キノコも同じ処理をすると行けるものがあるのではないかしら？」
ミーアは踊り出しそうなほどに上機嫌に言った。

――ああ、いかん！　ミーア姫殿下にそのような知識を与えてしまっては……っ！
あわわ、っと思わず顔を青くしたのは、無論、言わずもがななキースウッドだった。
――毒抜きしたから問題ない！　などと豪語して、キノコを差し出されたら、止められないかもしれん！
そして、ミーアが実践する毒抜きが有効であったかどうか、確かめさせられるのは、それを食べる王子たちだったりするのだ。
さらに、当然の帰結として、それを止めるために忠義の徒である自分が犠牲になることだってあり得るかもしれない！　ミーアが毒抜きした（毒抜きできているとは言っていない！）キノコを食べなければならなくなるかもしれないのだ！
危機感に背を押され、一歩前に出ようとしたキースウッドであったが、彼に先んじて前に出る者がいた！
「ミーアさま……それは……」
スチャッと一歩前に出たルードヴィッヒは、おもむろに眼鏡を押し上げる。
――ああ、そうだよな。ルードヴィッヒ殿は常識人……。主の無謀な試みには当然、否を突きつけるはず……。
「確かにあり得ますね。私もかつて、森で迷った際、イチかバチかで毒抜きした野草を食したことがございます」
お墨付きを与えちゃった！

そうなのだ。ルードヴィッヒは基本的には堅実な男で、現実的な思考ができる人ではあると思うのだが……。ガルヴによって仕込まれた前提知識が、その眼鏡を曇らせていたのだ。

すなわち、

「森に迷い込んだ時には、まずなにが食べられるかを知らねばならぬ。そして、食べられる物がなければ、加工すれば食べられる物を探さねばならない。我々人間にとって食事は欠かすことのできぬもの。食を軽視し敗北した軍隊は、歴史上、数限りなく存在する。ゆえに、まず食べられる物を知り、次に、手を加えれば食べられる物を知ることがなにより重要じゃ」

そんな哲学がルードヴィッヒの中に根差している。

そしてその哲学とミーアの発言がピッタリと、ガッチリと重なっているように、ルードヴィッヒには思えてしまったのだ！

「そうですね。我ら森の賢者ガルヴの徒も、毒抜きの方法をいくつかは教わっております。それを用いれば、あるいは……」

などと、さらにバルタザルが火に油を注ごうとした時だった！

「肉とお魚の準備ができた、です！」

バァンっと扉を開けて、リオラが入って来た！

これ幸いに、とキースウッドは言った。

「ミーア姫殿下、肉や魚を始めとして、食材は無数にございます。毒抜きには時間がかかるようですし、ここは、とりあえず、ルール族の方たちからいただいたものに絞って料理開発を行うのがよろしいのではないでしょうか？」

恭しく、正論を提示！　とりあえず、毒抜きなどと言うオソロシイ事態からミーアを遠ざけようとする。

「ふむ……それもそうですわね。時間も無いことですし……」

「それと、せっかくの華やかなパーティーですし、見栄えも大切なのではないでしょうか」

キースウッドはそこで、渾身の進言を行う。

「はて……見栄え？」

意味深に頷き、それから、キースウッドは言った。朗らかな笑顔で……。
「ええ、具体的には、馬の形にするとか……」
提案するのだ。手間がかかりそうな改造を。そうして、余力を削り取るのだ。ミーアが、毒抜きなどと言うオソロシイことを始めるような余力を！
「馬の形……なるほど！　それは実に素晴らしいアイデアですわね。それならば討論会のみならず、騎馬王国の方たちもいらっしゃるであろう、パライナ祭でも出せるメニューになるかもしれませんわ！」
ミーアは、それから、キースウッドに優しい目を向けて、
「ふふふ、さすがはキースウッドさんですわ。お呼びした甲斐がございましたわ」
「ははは、そう言っていただけるとなによりですよ、ハハハ」
乾いた笑い声を上げるキースウッドであった。

第九十七話　エプロンボーイズトーク

時間は少し遡る。
「やれることは、すべてやった……」
戦場に赴く兵士のような、悲壮な顔つきで、キースウッドはつぶやく。手早くエプロンを身につけながら……。
戦とは、始まる前の段階で大方の勝敗は決まっているもの。そして、今回のシン・プニッツァ攻防戦の肝は、やはりなんと言っても森の食材の安全性を担保することである。
「専門家の協力を得られて、本当に良かった」
ルールー族の協力を取り付けられたことは、実に僥倖であった。
森に住まう彼らのこと。さすがに毒のある野草や、あまつさえ毒キノコなどを取ってくるような真似はしないはず……。
――ミーア姫殿下をお止めできて本当に良かった。
昨日のことである。
ブルームーン公爵夫人ヨハンナの説得に成功したミーアは、いよいよ新たなるプニッツァ開発に向けて、意気揚々と森の食材集めを提案した。
「やはり、パーティーに出す大切なメニューですし、わたくしが手ずから狩ってきたキノコを食材に使うのがよろしいと思いますわ！」
朗らかにそんなことを言うミーアに、追従するのは、
「おお！　良いですね、森の冒険。きっと特別初等部の子どもたちが大喜びすると思います！」
などと大いに賛同する冒険好き令嬢であった。
ウキウキと体を弾ませるベルに、ミーアもニッコニコと上機嫌だ。
「あー、ええと……」
そんなオソロシイことが決して実現しないよう、キースウッドはなんとか、ミーアたちを押しとどめて、

「ミーア姫殿下には、ダンスレッスンという大切なお仕事があるはずです。プニッツァの制作指揮に加え、食材の調達までするというのはいかがなものかと……」
などと諫言を呈する。
「むっ……確かに、言われてみればその通りかもしれませんけど……でも」
「ミーアさま、食材の調達はぜひ、ルールー族に任せる、です」
っと、キースウッドに同調したのは、なんと、リオラ・ルールーだった！
そうなのだ、なにも人脈を用いるのはミーアだけではない。キースウッドはモニカを見習い、せっせと味方作りに勤しんでいたのだ。
ルドルフォン領にて、狩りと屋外バーベキューにて、すっかり親睦を深めたキースウッドは、早い段階でリオラに協力を要請していたのだ。
「ルールー族、ミーアさまに御恩があります。だから、ぜひ、私たちにやらせてほしい、です」
「リオラさん……」
「森に住むルールー族の方たちですから、きっとミーアさまのご存じない素晴らしい食材を集めてきてもらえるのではないでしょうか」
グッと拳を握りしめて力説するキースウッドに、ミーアはフッと頬を緩めて、
「そうですわね……。確かにその通りですわ。では、食材はリオラさん……それにワグルにも担当していただこうかしら。族長さんからの協力も、そのほうが得やすいでしょう。わたくしは、実際のメニュー開発のほうを取り仕切ろうと思いますわ」
などと言うやり取りがあり、なんとか、材料の安全性を確保したキースウッドである。
「そう……。今までの俺は、問題の本質を突いていなかったんだ。料理とは、材料の安全さえ保たれていれば、大きな不幸を生み出すことはないものなんだ。味が多少辛かったり、甘くないはずのもの

が甘かったり、すっぱかったらいけないようなものがすっぱかったり……、舌が焼けるほど辛かったり……そんなのは些細なことなんだ。命に比べれば、どうということもないものなんだ。命に、比べれば……」

……そうだろうか？

エプロンに身を包み（ちなみに、聖ミーア学園で用意されたエプロンの胸の部分には、ミーアの顔が刺繍されていた……しかも、能天気に笑っていやがる！）っとそこで、更衣室に誰かが入って来た。

「おや、これは、キースウッド殿」

声をかけられ振り向けば、そこには、ミーアの忠臣ルードヴィッヒとその同僚、バルタザルの姿があった。

「ああ、ルードヴィッヒ殿」

軽く会釈をしつつ、キースウッドは続ける。

「そういえば、今回の料理開発には、ルードヴィッヒ殿たちもご参加されるとお聞きしましたが……」

「ええ。お恥ずかしながら、料理のほうはからきしなのですが……」

エプロンをつけつつ苦笑いを浮かべるルードヴィッヒ（ちなみに自前のエプロンなのか、胸の部分には眼鏡の刺繍が去れている……まぁ、どうでもいいが）に、からかうように、バルタザルが言った。

「そんなに卑下することもないだろう。我々は、あの森の賢者に料理を仕込まれているのだから、胸を張って貢献すればいいのさ」

「ほう、ガルヴ殿は、料理の腕前も達者なのですね」

驚くキースウッドに、ルードヴィッヒが肩をすくめた。

「そうですね。食べ物がまったく見当たらないような場所で、食べ物を見つけることに関しては、我が師の右に出る者はいないでしょう」

――ん？

どういう意味だ？　と首を傾げるキースウッドに、さらに、バルタザルが続ける。

「味はともかく、どんなものでも、それほど腹を壊さずに食べる術

に関しては、叩きこまれましたよ」
「何も食べなければ死ぬ、という過酷な経験から生み出した料理法らしいのですが。いや、驚きました。見るからに毒がありそうなキノコを、まさかあのような方法で……」
っと、そこまで聞いて、キースウッドは軽い頭痛を覚えた。片手で頭を押さえつつ、
「ところで……これは、ちょっとした興味本位で聞かせていただきたいのですが……もしも、ミーアさまが毒のある食材、例えばキノコをプニッツァに乗せることを選んだしたら、お二人は、どうお考えになりますか？」
唐突な問いかけに対し、二人は互いの顔を見合わせてから……ゆっくりとバルタザルが口を開いた。
「なんらかの意味があるのではないか、と考えますね。そのお考えの真意はわかりませんが、その実現に向けて全力で行動するのが臣の役割ではないかと考えますが……」
バルタザルの非常に生真面目な答えに、おお、っと小さくつぶやいて、キースウッドは天を仰いだ。

第九十八話　ただ人と人とが立つこと

シン・プニッツァ開発プロジェクトにて……。

「ふむ、ではこの特選キノコをスライスして、馬の歯を表現する感じで、こう並べて……」

とか。

「甘いプニッツァもアリなのではないかしら？　クリームをたっぷり塗って、それにイチゴ……。イチゴはないのかしら？　なければ、ベリー系の何か……。あっ、ルビワを運んでくるとかできるかしら……？　ペルージャンの、あれは運ぶには難しいんだったかしら……？」

とか。

「ふむ……むしろ、厚みが必要ではないかしら……？　こう、三段ぐらいにして……間にたっぷりチーズと具材を挟み込めば食べ応えもあって……ふむっ！」

などと……当初の「健康に良いプニッツァ」なる名目をひょーいっと遠くへ放り投げたアイデアを出しに出し……。「なんだか、いい仕事をしましたわ！」感を出しつつミーアは、調理場を後にした。もうすぐ、ダンスレッスンが始まるということで、しぶしぶ、である。

「さて……パーティーでたっぷり食べるためにも、ダンスを頑張らねばなりませんわね！」

「そうですね。美味しそうなプニッツァがたくさんできそうでしたし……今のうちに運動、頑張りましょう！　頑張れば……大丈夫なはず、たぶん……」

グッと拳を握りしめ励ましてくれるアンヌに笑みを返したところで、不意に小走りに近づいてくる者たちがいた。

「ミーア姫殿下！」

「ん？　あら、レアさん。リオネルさんも、どうしましたの？」
ルシーナ家の兄妹を見て、ミーアは首を傾げた。
「もしや、特別初等部の子どもたちになにか……？」
「あ、いえ、そうではなく……」
レアは慌てた様子で首を振ってから、
「討論会の見学は、私たちもできるのか、お聞きしたいと思いまして……」
不安そうな顔で尋ねて来た。
「ああ、そうですわね……」
ミーアは一瞬、考える……。
――ふぅむ、確かに討論会は帝国内のこと。場合によっては、あまり国外の方には明かさないほうが良いと考えることもできるでしょうけれど……それでも、ヴェールガ公国の方の目があったほうが良いですわね。そのほうが帝国貴族の子弟はお行儀よくしているでしょうし。
素早く計算、ミーアはニッコリ笑みを浮かべる。
「それはぜひ、見ていっていただきたいですわ。討論会の前には歓迎ダンスパーティーも行う予定ですからそちらも参加していただけると嬉しいですわ。ああ、そうなると、仮面をいくつか追加発注しておいたほうがよろしいかしら……」
「仮面、ですか……？」
眉をひそめるリオネルに、深々と頷くミーア。
そうなのだ。ミーアにはプニッツァのほかに、もう一つやりたいことがあった。それは……。
「実は、グロワールリュンヌ学園の学生を迎えての歓迎パーティーなのですけど……仮面舞踏会にしてはどうかと思っておりますの」
それは、練習中にペトラを見た時に得た着想だった。そんなミーアの言葉に、レアは驚いた顔をする。
「仮面、舞踏会……ですか？」
対して、リオネルは、不審げに眉をひそめた。

彼の気持ちは、ミーアにも理解できた。
正体を隠しての交流というのは、どこかいかがわしい印象があるためだ。無礼講が極まって、羽目を外し過ぎる者も現れるかもしれない。それは、司教の子である彼らには、許せない乱れだろう。が……。
「ええ、仮面舞踏会ですわ。念のために言っておきますけれど、お酒を出したりはしませんわよ？　セントノエルと同じく、清く正しいダンスパーティーにする予定ですわ。仮面舞踏会と聞いて、世間一般でイメージされるような、いかがわしいものではない、ということは断言いたしますわ」
「つまり、悪いことをするために、自らの顔を隠し、身分を隠すのではないと？」
確認するリオネルに、一つ頷いてみせて、
「ええ、それは約束いたしますわ。なぜなら、わたくしが仮面を提案するのはただ一つ。グロワールリュンヌの学生を素直にさせることだからですわ」
「素直にさせる？」
「ええ。もしも彼らが顔を晒してパーティーに参加すれば、どうなるかしら？　フーバー子爵やヨハンナさまの手前、きっとミーア学園の生徒や特別初等部の子どもたちにも、酷い態度を取るでしょう。もしもしたくなかったとしても、そうせざるを得ないのですわ」
その言葉に、レアはハッとして、それから顎に手を当てて難しい顔を下。
「なるほど。〝帝国貴族はこうあるべき〟というくびきから、彼らを解放する、と？」
「ええ、その通りですわ」
スゥっと瞳を閉じ、胸に手を当ててミーアは続ける。
「かつてラフィーナさまは、セントノエルの大浴場にておっしゃいましたわ。一糸をも纏わぬこの場では、王も貴族も民もなく、ただ、人と人とがあるばかり、と。わたくしが求めるのは、まさにそれで

すわ」
そうなのだ。ミーアは作りたいのだ。
美味しいプニッツァの前に、ただ人と人とが立つという状況を！
――せっかく美味しいお料理が出てきたとしても、ギスギスしてるとか、真っ平ですわ！
まぁ、ミーアならばギスギスしてても、それはそれで美味しく食べられてしまいそうではあるのだが……。それでも、できるものならみんなで楽しく食べたいのだ。
そして、つまらない肩書や家の繋がりから解放されれば、そこにあるのは、ただ純粋に美味しいプニッツァのみで……。必然的に、楽しい雰囲気は生まれようというものだ。
「ラフィーナさまのお言葉を実践する……なるほど。そのような崇高な思惑が仮面舞踏会に……」
感心した様子で頷くリオネルと……。
「貴族の子弟たちと、聖ミーア学園の生徒たちをなんの肩書もなく交流させる……」
驚愕に目を見開くレア。
「なるほど……。よもやそこまでの計算がございましたとは……。ということは、もしや、プニッツァを推しているのも、それが理由でしょうか？」
さらに、そこに第三の声が混じる。それは……。
「あら、ユバータ司教……」
眼鏡の位置を軽く直す、ユバータ司教が立っていた。

第九十九話　みんなで食べれば……食べれば？

聖ミーア学園に来て以来、ユバータ司教は自らの心が若返ったような心地がしていた。

そこは、あまりにも理想的、あまりにも楽しい場所であったからだ。

――このような学園で勉強できたら、楽しいのだろうな。それに、もしも、ここで働けたら、きっとやりがいがあるだろう。

改めてそう思う。

聖ミーア学園で行われているのは、まさに生きた教育だった。

孤児たちに生きるための知恵を授けること、農業の改良により飢饉を遠ざけること。

それら、目に見えて人類に貢献する勉学は、学問を志したことがある者であれば、一度は憧れる理想的なものであった。

だからだろうか……ユバータ司教は、まるで学徒に戻ったような、新鮮な、若々しい心持ちになってしまっていたのだ。

この日、ミーアのもとを訪れた時にも、その心は、師の教えをウキウキで聞きに行く弟子のようなものであった。

「ご機嫌よう、ユバータ司教」

ミーアはスカートの裾をちょこんと持ち上げる。

「ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下」

胸に手を当てて深々と頭を下げてから、早速、ユバータ司教は口を開く。

「プニッツァの開発はいかがでしたか？」

「ふふふ、なかなかに順調でしたわ。いろいろと画期的な物が出来上がるのではないかしら？」

上機嫌に笑うミーアに、ユバータ司教は頷いてから……。

「実は、その件についてのお考えをお聞きしたかったのです」

早速本題に入る。
「ん……？　と言いますと……」
「なぜ、プニッツァを歓迎パーティーのメニューに選ばれたのでしょうか？」
「ふむ……美味しいから、という答えでは、不足かしら？」
まるで、言わんとしていることを探るように、ミーアがジッと見つめてくる。
こういった知的な駆け引きは、なかなかに楽しいものであった。ユバータ司教は、ついつい笑みを浮かべつつも、
「確かに、あれは非常に美味しい料理でした。特に平民の子どもたちには、人気が出るでしょう。しかし……それだけが理由でしょうか？」
言外に、貴族の子弟が集まるグロワールリュンヌの学生に出すには、相応しくない料理なのではないか？　と言う意味を含めて、問いかける。
ミーア学園の料理学部の目的は、相手国の料理を出すことで、もてなすことにある。相手に合わせ、相手に相応しい物を出すことで、歓迎の意を表すのだ。
にもかかわらず、プニッツァは、ゲストである貴族の子弟に相応しいものではない。手が汚れるし、口の周りも汚れる可能性が高い。
なぜ、あの料理を選んだのか……？
ユバータ司教には、一つの推論があった。
その推論が、はたして正しいのか、どうしても答え合わせをしてみたくなったのだ。
こんなにドキドキするのは、若い頃、師匠の司祭と問答をして以来だった。
――ミーア姫殿下は……一つのプニッツァを貴族と力の弱い孤児が分け合うという状況を作り出したいのではあるまいか……？　そして、一つの、同じものを共に食べることで、彼らの心に親愛の情を育てようとしているのではないだろうか。

そして、その状況を成立させるために仮面舞踏会にして、互いに相手の正体をわからないようにしたのだ。
「他に、なにか理由があるのではありませんか？」
ミーアの答えを興味深く、そして、心から楽しみにしながら、彼は待った。

ユバータ司教の問いかけに……ミーアは思わず微笑んだ。
――あら、ふふふ。そんなに興味があるなんて……。ユバータ司教は、よほどプニッツァが気に入ったのですわね。
よくよく見ると、ユバータ司教は、ちょっぴり丸みを帯びた顔をしているような気がする！　思わぬ同好の士（ＦＮＹなかま）の出現にミーアは喜んだ。
それから、指を振り振り語り出す。
「なぜプニッツァを出すのか……。それは、決まり切ったことではないかしら？」
そう、ミーアにとってそれは自明のことだった。すなわち、
――一人ではたくさんの味が食べられませんもの。いろいろ味わおうと思うならば、パーティーで出すしかありませんわ。
これである。ゆえに、ミーアは朗々と答える。
「みなで分け合うためですわ」
一つのプニッツァにつき、一つの味。であれば、いろいろな味を食べるためには、その分、口を増やさなければならない。一口だけ食べて、残りは捨てなさい、というやり方を、ミーアは良しとしないのだ。
「みなで分け合う……」
「ええ、その通りですわ」
それに、とミーアは考える。
――一人で食べてもあまり美味しくありませんし、食べた分、運動するのもなかなかに大変ですわ。その点、みなで食べれば怖くはありませんわ。運動だって、みなで一緒にやればよい。わたくしだ

けがたくさん食べて、ダンスを頑張っているというのは、見た目がよろしくありませんし……。
腕組みし、いかにも真面目なことを考えてます！　という顔で、ミーアは頷く。
「それに、せっかくの美味しいものを、わたくしだけが知っているだなんて、もったいないと思いますわ。このお料理を各貴族領で共有できれば、帝国内どこででも食べられるようになりますし……」
どこで歓待を受けても、美味しいプニッツァが食べられる。それは実に理想的なことではないだろうか。
「なるほど……。そのようなお考えが……。どの貴族領でも……。どこででも、誰とでも食べられるように……」
ユバータ司教は、感心した様子で頷くのだった。

ちなみに、ヴェールガの一行が、ミーアの真意（と思われるもの）に気付く少し前のこと……。
先んじて、ミーアの狙いに気付いていた者たちがいた。
言わずもがな、それは、ルードヴィッヒら、ミーアの忠臣たちだった。
「ああ……そうか。つまり、ミーアさまは……あの日の再現をなさろうとされているのだな」
思わずといった様子でつぶやくルードヴィッヒに、ガルヴが頷いてみせた。
「まさか、この目で、あの奇跡の祭りを目の当たりにしようとは思わなんだ……」
「確か、あの頃、師匠はこの学園の設立に躍起になっていたのでしたか……」
「ああ、そうじゃな……。ふふふ、ミーア姫殿下が学園に来てから、見られると思っていなかったことを、次々に目の当たりにしているような気がするよ。長生きするものじゃな」
豊かな髭を撫でながら、学長ガルヴは笑った。

かくて……伝説の祭りは、再現されることになる。
かの「ミーア姫の放蕩祭り」が……。

第百話　兄と弟

ヨハンナが討論会への許可を出したその日の夜。
フリオ・フーバー子爵は、早速、グロワールリュンヌへの手紙を書いていた。開催される討論会に向けて、グロワールリュンヌの精鋭を送るようにとの指示である。
討論会の開催自体は、別に構わなかった。むしろ、望むところという感じだ。
「我がグロワールリュンヌの、帝国貴族の伝統の守護者としての主張をわからせてやる」
静かにつぶやくその胸には、今は亡き恩人たる兄への想いがあった。
「兄が守って来たグロワールリュンヌの名誉を傷つけるわけにはいかぬ……」
彼は知っている。帝国を守り支えるのは、帝室と貴族の作る秩序なのだ。
「初代皇帝陛下の御世より続く、栄光あるこの帝国の伝統を守り奉ること……それこそが、我が兄の意志なのだ！」
そうして、彼は思い出す。
あの日……兄が亡くなる少し前のこと。
彼がまだ二十代の青年だった頃の出来事である。

「シドーニウス兄さん、お聞きしたいことがあります」
その日、彼は兄、シドーニウス・フーバー子爵の私室を訪ねた。
そこは、避暑地に建てられたフーバー家の別荘だった。
翌日、ここに皇太后パトリシアと皇妃アデライード、ブルームーン公爵夫人ヨハンナを迎えることになっているのだ。
「ああ、フリオか。どうかしたか？」

部屋に入ったフリオに、シドーニウスは笑みを浮かべて、
「なにか読みたい本でもあるのか？」
そう言って、室内に目をやった。
部屋には背の高い本棚がしつらえてあり、そこにはぎっしりと本が詰まっていた。中央正教会が出した神学書や、今では異端と呼ばれるようになった学派の書籍、各地の習俗をまとめた書物に帝国の文化史など。
数多の書物は、フリオの知識欲を満足させるのに十分な魅力を持っていたが……今日の彼は、本を求めて来たのではなかった。
フリオはゆっくりと首を振ってから言った。
「なぜ、私を跡取りに指名したのですか？　なぜ、妻を取り、子を成すことをしないのですか？」
フリオには、それが不思議でならなかった。兄のシドーニウス・フーバー子爵は、未だに婚儀を結ぶこともなく、自ら子を成すこともなかった。それは、帝国貴族の伝統を重んじる兄には相応しくない行動だった。
「……ううん、効果的だと思ったからなんだが」
シドーニウスは、自らの長い前髪に触れた。それは、兄が考え事をする時の癖だった。
「そうだな……変に情が生まれると思ったから、かな……」
まるで、動物の生態を観察するように、じっくりフリオのことを見つめてから、兄は続ける。
「酷く残酷なことを言うようだが……フリオ、お前と私は血を分けた兄弟ではあっても完全な他人だ。他人だからこそ、情を介すことなく、私のすべてを教えることができると考えたのだ」
兄の言葉は、フリオを失望させることはなかった。貧しさの中から救われたのだ。恩こそあれ、負の感情を抱くなどあり得ない。
ただ、わずかに……心が動いた。それは、そんな兄の期待を裏切ってしまわないか、という緊張……あるいは、怯え。
フリオは、兄に恩義を感じていたし、尊敬もしていたが……同時

に言いようのない違和感も覚えていた。どこか底知れぬ異様な雰囲気、畏怖にも誓い感覚は、兄の期待を裏切れないという怯えに繋がっていた。
そんなフリオを見て、兄は……なぜだろう、少しだけ困った顔をした。
「……てっきり、気落ちすると思ったが……」
「そんなことはあり得ません。シドーニウス兄さん。むしろ、兄さんの深いお考えに感銘を受けています」
堂々と答えるフリオに、しばし考え込んでから、
「いや……、そういうやり方もあるか」
なにやら思いついたような顔で、シドーニウスは言った。
「私には役割があるんだ。フリオ」
「存じております。皇帝陛下の教育係。それに、我が帝国の伝統を守ること、非常に重大な務めであると心に刻んでおります」
なにも疑う様子もないフリオに、兄は苦笑いを浮かべる。
「まぁ……そうだ。だが、それだけではないのだ」
「……といいますと？」
「ああ。お前にだけは話しておかなければならないだろう……。先に言っておくが、これは、決して、誰にも話してはならないよ」
そうして、話し始めようとした、まさにその時だった。
コンコン、っとノックの音が響いた。
「失礼いたします。お館さま、皇妃殿下をお迎えする準備のことで……」
入って来たメイドによって、会話は中断してしまう。
シドーニウスは、いったん口を閉じてから、
「いや、そうだな。フリオ、話は皇太后殿下の件が済んでから、落ち着いた時にしよう」
そう言って、笑った。
柔和な……柔和に見える……けれど、どこか寒気のするような笑みだった。理由はわからないが、その時の、フリオ・フーバーには、

少なくとも、そう見えたのだった。

「あれは、あの後の兄の運命を無意識に感じ取っていたということなのだろうな……。まさか、あのような恐ろしい火事に巻き込まれようとは……」

フリオ・フーバーは、ゆっくりと首を振る。

「しかし……兄はなにを教えるつもりだったのだろうか……」

兄が伝えようとしていた大切なことを教えられていない……その想いは、フーバー子爵の心にずっと残り続けていた。

「なんにせよ、グロワールリュンヌ校を守らなければ……。我が校の正しさが討論会で明らかになるのは、むしろ、望むところだ」

そうして、彼は手紙に封をした。

そこには、彼が選び抜いた、グロワールリュンヌ生え抜きの精鋭学生の名が記されている。

……ちなみにその筆頭は、グリーンムーン公爵家の令息……つまり、エメラルダの弟の一人だったりするのだが……。さらに、十人の中にはサフィアスの妹などもいたりするのだが……。

まぁ、どうでもいいことなのであった。

番外編　義人パティヤナの伝説

セントノエル学園には、各国の文化史を研究する学科が存在している。互いの文化を知り、敬意を持って外交できるように、との願いから、かなり力の入った学科である。

さて、その日の授業でのこと。雑談がてら、教授はこんな話をし始めた。

「大陸には、さまざまな偉人がいますね。筆頭は、ティアムーン帝国女帝ミーア・ルーナ・ティアムーンでしょう。彼女は、自国に富と平和をもたらしただけでなく、国と国とを越えた助け合いの理念を実現した。彼女の功績を知らぬ者はいないでしょう。あるいは、その友となった聖女ラフィーナも、我がヴェールガのみならず、他国でも有名ですね。天秤王シオン・ソール・サンクランドや、その父である善王エイブラム王も歴史を学ぶ者ならばみな知っている偉人と言えるでしょう」

一度言葉を切り、教授は柔らかな笑みを浮かべた。

「一方で、実在が定かではないがらも、根強く人々に語り継がれている人物というのもいますね。例えば、そうですね。帝国の義人パティヤナなんかが、それにあたると思いますが……」

そうして、始まったのは、ティアムーン帝国に伝わる、不思議な伝説の話だった。

それは、女帝ミーアよりも前の時代の出来事。帝都ルナティアの、貧しい一家に訪れた奇跡の物語。

その一家は、絶望に暮れていた。

父はすでに亡く、母もまた病に臥せっているという絶望的な状況。

幼い姉弟は苦労して、町の酒場で働きながら、懸命に薬代と日々の食事代を稼いでいた。けれど、破綻はすぐに訪れる。母の病はなかなか治らず、高価な薬代を出し続けることは難しい。いよいよ、

姉のほうが身売りしなければ、この冬を乗り越えられないのではないか……となったある日のこと。

家に、一人の貴婦人が訪ねてきたのだ。

それは、そう、雪がチラつくとても寒い日。後に、女帝ミーアの生誕祭が行われるぐらいの時期のことであった。

貴婦人は、実に変わった人だった。顔を仮面で隠した白金色の髪の女性だったと、伝説には言われている。

貴婦人は、事情を聞くと、必要なだけのお金と薬を手配して去っていったのだという。

「これにはいくつかバリエーションがある。孤児院に訪れるケースや、貧しい老夫婦がやっている傾きかけの商店の場合もあったかな？」

いずれの出来事でも、仮面をつけた貴婦人が、困った人のもとに現れ助けてくれるというものだ。そして彼女は、自らの正体を明かすことはない。

ただ「せめて、お名前を……」と聞かれた時のみ、短く「パティヤナ」という名前のみ名乗って、彼女は去っていったという。

「有名な話だから、知っている人もいるんじゃないかしら？　帝国出身の人は、少なくとも聞いたことぐらいはあるんじゃない？」

教授は笑みを浮かべて続ける。

「これは、実際にそういう人がいた、ということかもしれないけれど、人々の期待が生み出したフィクションに過ぎないという学者もいるわ。国の上に立つ王侯貴族の中にも、貧しい私たちを助けてくれる人がいるんだ、と……市民のそんな願いが生み出した噂話ということね。さらに、このパティヤナ伝説には、一つ興味深いところがあってね。それは……」

さて、ヨハンナを見事釣り上げた日の夜のこと。

宿泊している部屋にて、パティはヤナを待っていた。

今回の旅で、キリルは特別初等部男子チームと一緒に行動してい

るため、この部屋にはパティとヤナが泊まることになっていたのだ。
「あれ？　パティ、なにしてるの？」
部屋に入って来たヤナは、小さく首を傾げた。
ベッドに座り、心なしか真剣な顔をするパティを見つけたためだ。
「……ヤナ、少し、話がある」
「ああ、それは別にいいけど……どうかしたの？　あ、もしかして、ブルームーン公爵令嬢を説得するのが上手くいかなかったとか？」
心配そうに眉根を寄せるヤナに、パティは静かに首を振った。
「……それは、難しくなかった」
あっさりと言って、それからパティは立ち上がる。それから、深々と頭を下げて……。
「ごめんなさい、ヤナの名前を、借りた」
「え……？」
怪訝そうな顔をしたヤナであったが、よくよく事情を聞いて、思わず笑ってしまった。
「へぇ、そうか。パティヤナ……。パティとあたしの名前かぁ」
「うん……危なかった。下手をしたら、パティアスとか言ってたかもしれない」
自分の息子にして、愛犬の名前と自分の名前の組み合わせとか……後で思い出したら、悶絶すること請け合いだ。
「でも、勝手に使って、変な名前にしちゃって、ごめん」
そんなパティに、ヤナは苦笑いを浮かべて、
「別に、そんなに変でもないんじゃない？　パティヤナ……うん。パティにしては、悪くない命名じゃないかな？」
「……そう。ん？　ヤナ、もしかして、私のネーミングセンスが悪いと思ってる？」
「え？　や、そんなことないよ？　あっ、そうだ。そういうことなら、あたしも使わせてもらおうかな？」
なにやら……結構、露骨に誤魔化されたような気がしないでもなかったパティであったが、それはさておき……。

「使うって……？」
「いや、正体を隠さなきゃいけなくなった時とかさ。パティとあたしの名前を合わせたんだから、別にいいだろ？　そう名乗っても」
「それは、別にいいけど……。でも、名前を偽る機会がある？」
眉をひそめるパティに、ヤナは笑みを浮かべる。
「わからないぞ？　それこそ、ミーアさまの肖像画を描いたり、小説を書いたりするかもしれないから、その時にペンネームで使うかも……」
「……ヤナが芸術家志望とは知らなかった。その内、作品を見せて」
冗談半分に言うパティであったが……。
「そうだなぁ……あ、そうだ。そういえば、学校に仮面をつけた女の人が歩いてて。あの仮面とか格好良かったから作ってみようかな」
「……仮面が……格好、良かった？」
その独特のセンスは、確かに芸術家向きなのかも？　なぁんて考えてしまうパティであった。

「義人パティヤナ伝説の一番不思議なところは、その出現の時期が大きく二つに分かれることです。一つは、賢き皇妃パトリシアの時代。これはわかる。パティヤナの名前は、おそらく時の皇妃パトリシアからとったものでしょうから。だけど、それから下ること二世代。女帝ミーアの時代に、パティヤナは再び現れるの」
教授は、実に興味深い、と微笑んで。
「その出現の時期があまりにも離れすぎている。だから、義人パティヤナが実在するとしても複数人、最低でも二人はいたのではないか、と考えるのが定説となっています。前パティヤナの伝説を真似て、後パティヤナがそう名乗ったということなのかもしれませんが……。それにしては、いささかマイナーな伝説であるパティヤナの名前をなぜ名乗ったのか。あるいは、パティヤナ伝説が民衆の願いが形になったものと考えると、この二つの時代の世相に共通点があるのかもしれません。いずれにせよ……」

っと、生徒たちの顔を見回して、
「そのようなことを考察、研究していくのがこの文化史の授業の醍醐味と言えるでしょう」
そう結び、その教授は授業を締めくくった。

はたして、義人パティヤナは実在の人物であったのか？
前パティヤナと後パティヤナの関係はどのようなものであったのか？
歴史的な定説は確立されることなく。ただ、その名の秘密は、二人の少女たちの胸の内にのみ秘められているのであった。

第百一話　精鋭たちとフーバーの誤算

フリオ・フーバー子爵の手紙によって召集された者たちは、馬車に乗り、一路、聖ミーア学園へと向かっていた。

途中、街道の脇に馬車を止め、休憩がてらのお茶の時間を挟む。実に、中央貴族の関係者らしい旅路である。

「やれやれ、このような田舎に呼び出すなんて、いったいミーア姫殿下は何をお考えなのだろうか」

「まさにその通り。誇り高き中央貴族に連なる我々にこのような……。かろうじて帝国の地、少し行けば辺土というようなこのような土地に呼び出すとはなんという……」

「そもそも、その聖ミーア学園というのは、あのペルージャンの姫を講師に招いているのだとか。属国から何を学ぶことがあるのやら……」

従者の入れた紅茶に口をつけつつも、口々に不平をつぶやく者たち。それを見て、一人の少年が深々とため息を吐いた。スラリとした長身、深い緑色の髪をサラリと揺らし、ヤーデン・エトワ・グリーンムーンは呆れ顔で首を振った。

「アホだな、お前ら。これから向かう聖ミーア学園は、ミーア姫殿下の肝いりの学園だぞ。しかも、サンクランドのエシャール王子殿下も通われている学園だ」

ジロリと鋭い視線を送ってから、厳然たる口調で、彼は言う。

「下手なことを言えば、お前らなどひとたまりもない。そんなこともわからんのか？」

一度、言葉を切って腕組みしてから、ヤーデンは続ける。

「くれぐれも、失礼のないようにしろ。お前たちがどうなろうとそれは自己責任だが、我がグロワールリュンヌの名に泥を塗るようなことも、帝国貴族の恥をさらすようなことも、俺が許さん。いいな

？」
強めに言ってやると、不平を言っていた者たちの顔に恐怖の色が浮かんだ。それを見て、ヤーデンは満足げに頷いた。
フーバー子爵の呼んだ生徒たちは、確かに精鋭だった。
おそらく、能力という点においては、ミーア学園の者たちに引けを取らない者たちだった。けれど、フーバー子爵には一つだけ誤算があった。
それは、彼らがまったくもって一枚岩ではなかったこと……。それぞれに、思惑を持っていたということだった。
そして、それは生徒たちの筆頭格であるグリーンムーン家のヤーデンからしてそうなのだ。
きっちりと他の学生を締めてやりつつも、彼は内心で冷や汗をかいていた。
――しかし、討論会か……。これは下手なことをすると、きっと姉上に怒られるぞ。
脳裏に浮かぶのは、彼が崇める姉の顔。いつでも彼の上に君臨する、絶対的な姉の姿だった！
「ヤーデン、我が弟……。これだけは忘れないでもらいたいですわ。あなたのオムツを替えたのは、この私……のメイドのニーナであるということを！」
ドヤァッとした顔をする姉の隣、ムッツリとしかつめらしい顔をしたメイドが無言で頷く。
「まぁ、二、三回ではございますが……ふふ、たいそう、お可愛いご様子でした」
なぁんて、どうでもいいことを付け足してくれるが、それはさておき。
「それだけではありませんわ。あなたがいくつまでおねしょをしていたかも知っていますし、お化けが怖くて夜眠れなくて、この姉のベッドにもぐりこんできたことも、すべて、記憶しておりますわ！」
そんなの昔のことだろう！　という抗議は意味をなさなかった。

どれだけ昔のことであっても、ヤーデンが羞恥を感じている時点で、十分に効果的であるからだ。
そして、さらに厄介なことに……それ以上の恩義を彼は姉に感じていた。姉は、いつだって彼の上に君臨する暴君にして、頼りになる指導者。彼がくじけそうな時にも、折れず、曲がらず、高笑いができる。そのような人であった。
それゆえに、ヤーデンは、難しい立場に追い込まれていた。
グロワールリュンヌの代表にして、中央貴族の子弟のまとめ役という立場と、エメラルダの忠実なる弟という立場は、実に両立しがたいものであったからだ。
――くぅ……こんなことならば、さっさとセントノエルに行っておけばよかった。
帝国四大公爵家の一角、グリーンムーン家には、エメラルダの代わりに一人、子息を受け入れるとの連絡が来ていたのだが……。グリーンムーン家が送り出したのは、ヤーデンの弟であった。
――あと三年だからと弟に譲ってしまったが……。まさか、こんなに難しい立ち回りを求められるとは……。
幸いなことに、今のところ、グリーンムーン家とエメラルダの思惑は一致している。皇女ミーアの権勢の大きさを、グリーンムーン家では正確に把握していたからだ。
イエロームーン家とレッドムーン家は、すでにミーアとの協調路線を鮮明に打ち出している。また、騎馬王国、サンクランド、レムノ王国に加え、ヴェールガ公国までもが、ミーアとは非常に親しい関係を築いている。
特に、聖女ラフィーナとの友誼が決定的だ。ミーアはすでに、いくつかの帝国貴族が結んだとしても対抗できないほどの権力を手中に収めているのだ。
ゆえに、皇女ミーアには逆らうべきではない、というのが現在の家の意向だった。
幸いにして、グリーンムーン家は、エメラルダのおかげで、ミー

アとは良好な関係を築いている。ならば、それを維持すべきである、と。

さりとて……露骨にミーアに賛同もできない。グリーンムーン派の貴族の中には、ミーアの開明的な方針に反対する者も数多い。既得権益層である帝国中央貴族は、根本的に保守的であり、現状の変更を望まないものなのだ。

――まったくの板挟みだ。くそ、これでヘタを打つと、また姉上に、あの冷たぁい目で見られて叱責されるに違いない……。

ブルルッと背筋を震わせるヤーデンである。

――まぁ、とはいえ、基本的にはそう難しいことでもないのだろう。要するに、我々に期待されているのは、負け役なのだろうし。

彼は、自分に求められている役割を、そう考えていた。

皇女ミーアは国に改革の波を起こさせたいのだ。古き慣習を洗い流し、新しく、実効性のある体制に、国を作り変えたいと思っているのだ。

――どうやら、姉上やブルームーン公のところのサフィアスさまもそれには同意されているようだし……というか、サフィアスさまは、すでに結構な数の味方を作っていると聞くし……その流れに逆らうことはできないだろう。

とすれば、彼が今回の件でしなければならないことは、聖ミーア学園に負けることだ。グロワールリュンヌを古き帝国の伝統と位置づけ、聖ミーア学園がそれを打ち負かすことによって、改革の旗色を鮮明に掲げる、というのがミーアの思惑なのだろう。

――それをもって、ご自身の女帝への道を切り開く、か。帝国初の女帝陛下だなんて、思い切ったことするもんだ。

その構想の壮大さに舌を巻きつつも……与えられた負け役という役回りに少々、複雑な気持ちを抱くヤーデンであった。

さて、そんなヤーデンから少し離れた馬車の中。一人の令嬢が、外の光景を眺めていた。青い髪をサラリと揺らし、つまらなそうに

扇子をもてあそぶ少女……彼女の名はカルラ・エトワ・ブルームーン。今年、十四歳になるサフィアスの妹である。
――パライナ祭ねぇ……。サフィアス兄さまはミーア姫殿下に協力したいみたいですけれど……わらわとしてはぜひとも兄さまに皇帝陛下になってもらいたいですし……そのためには、とりあえず、母さまに協力するべきですわ。逆らうの怖いし……。
そう……あの怖い、こわぁい母に逆らうような勇気は彼女にはない。それに、皇帝の妹という地位、それは、彼女には実に魅力的なものに映った。なんか、今よりもっともぉっと、贅沢できそうだし……。
――しかし、あのサフィアス兄さまとミーア姫殿下では……圧倒的にミーア姫殿下のほうが人望があるでしょうし、能力的にも太刀打ちできないはず。となれば……伝統による優位性を主張する以外にないですわ！
そして、そのためには、今度の討議会で、聖ミーア学園を打ち負かし、ミーアの思惑をくじくしかない。
――皇帝の妹になって、わらわの将来はより一層、華やかなものになるのですわ！　その機会を与えられているというのに、それに手を伸ばさぬのは、神のご意志を軽んじることにもつながりましょう！
カルラ・エトワ・ブルームーンは、ちょっぴり俗っぽい、上昇志向の少女であった。

そして、さらに……もう一人。
「父上の期待に応えるために……」
そうつぶやく少年がいて……。

かくて、それぞれの思惑を秘めたまま、グロワールリュンヌの学生たちは聖ミーア学園へと向かうのだった。

第百二話　サフィアス、駆け付ける

グロワールリュンヌの学生がやってくる一日前のことだった。
「ふぅ……ダンスレッスンも十分にやりましたし、準備は万端と言ったところかしら……」
迎撃の準備は整った。っと、ミーアはお腹をさすりながら思う。
なにを迎撃するのか……？　無論、プニッツァを、である！
あの日から、数日にわたって検討を重ねて来たプニッツァ制作。
「なにも、毎日のようにミーア姫殿下のお手を煩わすこともない、とキースウッド殿から言われたのですが……」
などと言ってきた料理学部の講師に、ミーアは静かに、穏やかに首を振り、
「いいえ、わたくしにもできることがあるならば、それをしたいと思っておりますの。それに、わたくし自らが制作指揮に関わっていると言えば、グロワールリュンヌの学生たちも食べないわけにはいかないでしょう？」
ミーアには確信がある。プニッツァの美味しさの前では、つまらない意地など張ってはいられないだろう、と。
けれど、それも食べてもらえれば、という条件が付く。
「下賤な者の作ったものなど食べられない！」
などと言うことを言い出す輩がいないとも限らない。
「わたくしが直接指揮を執り、手ずから料理をしようと考えるのは、そういった理由から、ですわ」
こう言われては、講師も……そして、その裏で操ろうとしていたキースウッドも、なにも言えなくなってしまう。
結果として、ミーアは、パーティーの料理に直前まで関わることになってしまったのだ。
ついでに、ミーアを手伝うため、ティオーナやリオラ、ベルやシ

ュトリナ、さらには、シオンまでもが参戦。
「グリーンムーン公爵令嬢を、ニーナ嬢に止めてもらっている関係で、彼女も動きが取れないが……。いや、これは、むしろ、もう、全員を受け入れて、こちらも戦力を集中したほうが……いや、だが……ぐむ……」
などと、陰で全軍の総指揮を執る苦労人が、とってーも頭を悩ます事態になったとかならなかったとか……。まぁ、それも些細な話であるが……。
そうして、さぁて、今日も料理学部に様子を見に行くかなぁ、などと思っていたミーアのところに、ルードヴィッヒがやってきた。
「失礼いたします。ミーア姫殿下」
「あら、ルードヴィッヒ。どうかなさいましたの？」
「グロワールリュンヌ校に先駆けて、サフィアス殿がいらっしゃっております」
「まぁ、サフィアスさんが……？　ふふふ」
ミーアは小さく微笑んで。
「確か、サフィアスさんはキースウッドさんと仲良しでしたし、ナイスタイミングですわね。お二方ともお料理好きな方ですし、明日のプニッツァ準備にはぜひ参加していただかないといけませんわ」
とりあえず、キースウッドを呼んでくるように、とルードヴィッヒに言いつけつつ、ミーアはサフィアスを出迎えた。
「ご機嫌麗しゅう、ミーア姫殿下」
部屋に入って来たサフィアスは深々と頭を下げる。
「ご機嫌よう、サフィアスさん。ずいぶんと久しぶりですわね。父上には、もう？」
「はい。皇帝陛下には先にご挨拶させていただきました。本当に、この度は母が、大変ご迷惑を……」
「あら、迷惑だなんてことはございませんわよ？　ヨハンナさんのおかげで、いろいろと進められた気がしますし」
そもそも、ヨハンナに噂を流したのはエメラルダなのだ。謝られ

る筋合いはまったくない。
「そう言っていただけると……」
などと、ほぉっとため息を吐きつつ、しかし、とサフィアスは続ける。
「しかし、実のところ、母のことだけではないのです。我が妹のこともお話ししておかなければと思っておりまして……」
「あら、サフィアスさんの妹君、といいますと……確か、カルラさんだったかしら？」
ミーアは頬に指を当て、小さく首を傾げる。
カルラ・エトワ・ブルームーンに関して、ミーアが知っていることは少ない。
サフィアスと同じ青い髪を持つ少女、年は自分の一つか二つ下。パーティーやお茶会で何度か顔を合わせたことはあるものの、それほど親しく話したことはない。
性格は……。
「割と大人しい方だったように思いますけれど……」
どちらかと言えば物静かな、一般的な帝国貴族の令嬢の範疇を出ない人物。そんな評価だった。セントノエルにも来ていなかったから、余計にその印象は薄いのだが……。
「実は、我が愚昧は、私を次期皇帝の座につけようと考えているらしく……」
「まぁ……サフィアスさんを……それは」
ミーア、そこでふと考える。
――そういうことでしたら、表向きにはサフィアスさんが皇帝ということにしておいて、わたくしは裏でゴロゴロしながら、帝国の危険を回避するという可能性は……。
なぁんて、考えた瞬間だった。
「たっ、大変です。ミーアおば、お姉さまっ！　ミーアお姉さまの非常に悲惨な末路の記述が……！」
などと、ベルが駆けこんできたので、ミーア、慌てて首を振る。

――ああ、やはり、わたくしが女帝になるしかないのですわね……。ええ、もちろん、そのつもりでしたわ。面倒だから誰かに責任を押し付けようとか、そんなこと、まぁったく思っておりませんわ！

誰に言うでもなく、心の中で宣言してから……。ミーア、キリリッと表情を引き締めて。

「つまり、カルラさんは、わたくしの邪魔をしに来た可能性がある、ということですわね？」

「大変、恐れ多いことながら……」

深々と頭を下げるサフィアスに、ミーアはにこやかな笑みを浮かべる。

幸いにして、ミーアには腹案があった。

「ならば、良い手がございますわ」

堂々と宣言するミーアに、サフィアスは眉をひそめた。

「良い手……？　といいますと？」

ミーアは、こっそりと声を潜めつつ、厳かに告げる。

「実は……討論会の参加メンバーには、聖ミーア学園特製のプニッツァという料理を振る舞おうと思っているんですの。わたくしが、手ずから作ったものなのですけど……」

ミーア、ちょっぴり盛る！　本当は、かるーく手伝う程度の関わり方なのだが、自身が一から十まで作りましたが、なにか？　というような空気感で！

そんなミーアの空気を前に、サフィアスが引きつった顔をする。

「みっ、ミーアさまが手ずからお作りになられた料理……まっ、まさか、それで我が妹を……」

「ええ……」

深々と頷き、ミーアは言った。

「カルラさんの胃を攻める、というのはいかがかしら？」

そう、ミーアの作戦は常に単純だ。ミーアはプニッツァで、サフィアスの妹、カルラの胃を掴んでしまおうというのだ。が……。

「胃を……攻めるっ！？」

それを聞いた瞬間、サフィアスの表情が、絶望に染まった！

第百三話　轡（くつわ）を並べん

――なっ、なんてことだ！　ミーア姫殿下……カルラを料理で殺っちまうつもりのようだぞ！

ミーアの言葉に、サフィアス、心底から震える。その、一切の悪意のない笑顔が、ただただ恐ろしい。が……。

――い、いや、だが、そのようなことは、さすがに……。

サフィアスは、じいっとミーアを見つめる。んっ？　と小首を傾げるミーアに、再び思い直す。

――ミーア姫殿下は、善良な方だが――その叡智がどのような計算をはじき出すのか、わからないぞ！

慌てて、サフィアスは口を開く。

「ちっ、ちなみに……キースウッド殿はいらっしゃるのでしょうか……？」

救いを求めるように問えば、ミーアは楽しげに笑った。

「あら、やはり仲良しなのですわね。もちろん、キースウッドさんにも参加していただいておりますわ。とても熱意をもって仕事にあたっていただいておりますわ」

「ああ……そうですか。それなら……」

かの正義の国、サンクランドに属する彼ならば滅多なことはしないはず……っと、そう安堵しかけて……違和感！

――いや、いやいやいや……。ミーア姫殿下が、充実した顔をしておられる……実に、満足げな顔をしておられるぞっ！

はたして、キースウッドのストッパーが働いているのに、こんなに、輝かんばかりの笑顔をしているものだろうか？　彼が正常に働いているのであれば、ミーアは思い通りになどできないはず……。このような……思うようにやってやった！　という満足感に溢れた顔をするものだろうか！？

芽生えた疑問に危機感を刺激されたサフィアスは、尋ねてみる。
「ちなみに、そのプニッツァなる料理、どのような料理なのでしょうか……？」
「そう……ですわね。それは見てのお楽しみ！」
なぁんて、悪戯っぽい笑みを浮かべるミーアに、イラァッとしかけるも……。
「と言いたいところですけど、ふふふ、わかっておりますわよ。サフィアスさんもキースウッドさんと同じく、お料理好きですものね」
続くミーアの一言に、やっぱりイラァアッとしてしまうのだった！
それをなんとか呑みこんで……。
「え、ええ……そうですね。なにか、お手伝いできることがあればと思いまして……」
「ならば教えて差し上げますけど、薄く伸ばしたパンの上に色々な具材をのせて、チーズでとじたような食べ物ですわ」
「色々な具材……それは、具体的には……？」
「そうですわね。キノコはもちろんですけれど……」
「キノコ……」
確か、ここは静海の森のそばだったはず。キノコは、まぁ、当然、のせるか……などと思っていると……。
「ふふふ、ビックリしますわよ？　目玉は、なんと毒抜きした毒キノコで……」
――毒キノコっ！？　それは、本当に毒が抜けてるのか？　あの、いわゆる『死ななければ毒とは呼ばない』とかいうトンデモイエロームーン理論で毒抜きされたものなのでは……？
ニッコリとシュトリナの可憐な笑みが頭に思い浮かび、サフィアス、震える。
――こっ、これは、場合によっては早期に撤退もあり得るか……。くぅっ、すっすまん、我が妹よ。そして、母上、どうぞ、ご無事で……。
撤退の判断が非常に早いサフィアスであったが……。

「失礼いたします……おおっ！　これは、サフィアス殿！」
部屋にキースウッドが入って来た！
「お、あ、ああ……き、キースウッド殿……これは……」
「ふふふ、お二人はお友だちのようでしたから、気を利かせてお呼びしておきましたの」
シレッとミーアがそんなことを言いやがった！
呆然とするサフィアスの手を両手でギュッと握りしめ、
「よくぞ……よくぞ来てくださった。サフィアス殿」
しみじみとした口調で、キースウッドが言った。彼の嬉しそうな……心底から嬉しそうな笑顔を見て……友の、戦友の、顔を見て……サフィアスは思い出す。
この友が以前、ブルームーン家に助けに来てくれた日のことを……！
彼を残し、逃げることなどできるだろうか？
友を戦場に残し、自分一人が撤退する……？　そんなこと、できようはずもない。
「なぁに……ミーア姫殿下が、料理の腕前を振るおうというのだ。俺にも、なにか役割が回ってくるのではないかと思ってね」
引きつった笑みを浮かべつつ、サフィアスは言った。
「それに……グロワールリュンヌの代表には、我が妹も選ばれているらしくてな。母もいることだし……」
「それは……。そうだな、引くわけにはいかない戦いというのは、あるものだ」
腕組みし、うんうん、っと生真面目な顔で頷くキースウッド。
「では、共に、この、災難……」
サフィアスの合流で気が抜けたのだろう。うっかり災難などと言いかけたキースウッドであったが……。
「はて？　災難……？」
きょとんと小首を傾げるミーアに咳払いを一つ。それから、キースウッドは笑みを浮かべ、

「この際……なんにも代えがたい光栄を、二人で享受しましょう……」
「なんにも代えがたい光栄か……ははは、そうだな。そうしたいものだな、アハハハ」
サフィアスもまた、乾いた笑みを浮かべる。
そう……戦友との絆は、時に家族の絆を上回るほどに重いもの……。事ここに至っては、もはや撤退はあり得ない。となれば……。
「それで、そのプニッツァという料理を実際に見てみたいのだが……」
事前にできる限り備えるしかない。
覚悟のキマッた顔をするサフィアスに、キースウッドが感動した様子で頷いた。
「それは……実に心強い」
感動に、声を震わせるキースウッドであった。

第百四話　準備は整い

さて、明けて翌日、グロワールリュンヌ学園の生徒たちがやってくる当日の午後のこと……。

先行してきた使者によると、本日の午後、グロワールリュンヌの学生はここに到着するらしい。

会場となる場所では、パーティーの準備が進んでいた。当初、学園のグラウンドで行う予定であったのだが……そこに待ったがかかった。

「せっかくですし、例の畑が見える場所でするというのはいかがでしょうか？」

そんな提案をしたのは、学園長ガルヴだった。

「……ああ、なるほど」

ミーア、微妙に苦い顔をするも……。

――あの畑を見ながら食べるというのは、ちょっと味が悪くなりそうではありますけど……いや、しかし、セロやドミニクさんの気持ちを思えばこれは断らないほうが良いかも……？　それに、よくよく考えれば、あれは小麦の畑。となれば……。

瞬間、ミーアの脳みそが時間を超える！

ミーアは、これから摂取するであろう未来のプニッツァポイントを消費して、叡智を発揮する！　すなわち……。

――わたくしの顔を描いた小麦畑ならば、グロワールリュンヌの学生たちが、下手に馬鹿にできなくて、良いかもしれませんわ！

そのような判断のもと、歓迎パーティーの会場は、畑からほど近い広場に決まった。

そこは、いずれは畑にしようとしていた土地であり、広さは十分に確保できそうだった。

木製のテーブルを並べ、その上に森の幸である料理が並んでいく。

ティオーナを一番槍とした野菜刻み隊による大量のサラダ。リオラを指揮官としたルールー族による巨大な十五面鶏の丸焼き、さらに料理学部の面々が腕を振るったサイドメニューが並ぶ。ちなみに、特別アドバイザーとして、エメラルダのメイドニーナが控えている。

ということで、そちらに関しては問題はないのだが……しかし、目玉であるプニッツァはまだである。

グロワールリュンヌの学生に作りたてを食べさせるためだ。

「ふむ、首尾はどうかしら？」

少々気になり、ミーアはソコに向かった。

学園のグラウンドの端に建てられた、見上げるほどに大きな……石窯の前に！

「これはミーア姫殿下……なにか？」

ササッとキースウッドとサフィアスが寄ってくる。ヤベェのが来たぞ！　とばかりの迅速さで。

さらに、その後に、ルードヴィッヒとバルタザルがススッと馳せ参じる。叡智の女神が来てくださったぞ！　っとばかりに歓迎の雰囲気を持って。

「わざわざ来ていただき心から感謝いたします、ミーア姫殿下」

「ええ。今回のパーティーの主役はプニッツァですし、やはり気になってしまいまして。しかし……」

ミーアは改めて、石窯を眺める。

「さすがは、お二人ですわね。この石窯、素晴らしいですわ」

この石窯のアイデアは、ルードヴィッヒとバルタザルのアイデアだった。外でプニッツァを焼けるよう、大きな石窯を設計したのだ。ルールー族の全面協力のもと作られた石窯は大変立派なもので、今後、この学校の名物となることだろう。

「ルールー族の方たちのお力添えがあってこそです」

謙遜するルードヴィッヒに、ミーアは微笑みを浮かべる。

「ふふふ、そうですわね。とても助かりましたわ」

腕組みし、ご機嫌に石窯を見ていたミーアであったが、不意に…

…。
「ふむ……しかし……」
何事か、思いついたような顔で……。
「この大きさがあれば、もしや、等身大の馬パンもいけるのではないかしら……？　以前は、キースウッドさんの妨害によって実現できませんでしたけれど……この大きさならば、入るのでは？」
などというつぶやきを……キースウッドが死んだ魚のような目で見つめていた。
「みっ、ミーア姫殿下……、入るは入ると思うのですが、全体に火が通らないのではないかと……」
代わりにサフィアスが諫言を呈する。
「なるほど、では、火力を強くすれば……」
「いや、だが、それでは表面が焦げてしまうかも……」
「そうじゃな……とすれば、確か、以前見たあのやり方が……」
なぁんて、ルードヴィッヒとバルタザル……さらにいつの間にやら現れたガルヴが、余計な知恵を出し合っていたりしたのだが……。
それはともかく。
「ちなみにルードヴィッヒ、演奏隊のほうも準備はできているのかしら？」
「はい。そちらに関しては、ベルマン家のドミニク殿が準備してくださっています」
「ふむ、仮面もすでに配ってありますかしら？」
「すでに、手配済みですわ！」
ずずいっと現れたのは、エメラルダだった。その顔には、特製の仮面がつけられている。そして、その傍らには、なぜか、薔薇の仮面の令嬢が立っていた。
――あらあら、そもそもの発端となっただけあって、ペトラさん、早くもやる気満々ですわね。よっぽど仮面舞踏会が好きなんですわね。
ミーアは、ついついおかしくなってしまって思わず笑みを浮かべ

る。それから、きりりっと表情を引き締め、
「今回の歓迎パーティーは互いの身分がわからないことが大切ですわ。抜かりなく、全員に仮面が行き渡るようにしておいてくださいましね」
っと、その時だった。
「ミーアさま、グロワールリュンヌのみなさんが到着されたようです」
アンヌが走って来た。
「来ましたわね。それでは、出迎えに行きましょうか」
そう言って、ミーアはビシッと仮面を身に着けた。

第百五話　ヤーデン、ちょっぴりほっこりする

馬車が止まった時、ヤーデン・エトワ・グリーンムーンは、おや？　と思った。
「妙だな。学園まではもう少しかかるかと思っていたが……」
その疑問はすぐに解消された。
馬車から降りてすぐに、目の前に仮面の少女たちが現れたのだ！
――こっ、これは、いったい何事だ！？
戸惑う彼らに、涼やかな声がかけられる。
「ご機嫌よう、グロワールリュンヌのみなさま。ようこそ、我が聖ミーア学園へ」
先頭に立つ少女、その白金色の髪に、ヤーデンは見覚えがあった。
――我が……ということは、もしや、この方は……。
少女は、スカートをちょこんと持ち上げ、それから、ハッとした顔をして、仮面を外してみせた。その素顔を見て、グロワールリュンヌの者たちに動揺が走る。
「わたくしはミーア・ルーナ・ティアムーン。初めてお会いする方もいるかしら？」
悪戯っぽい笑みを浮かべてミーアは続ける。
「実は、みなさんを歓迎するために、本日は楽しい趣向として、仮面舞踏会を企画いたしましたのよ？」
仮面をつけ直すミーアに、ヤーデンが深々と頭を下げた。
「これは、お心遣いに感謝いたします、ミーア姫殿下。私は……」
っと、ミーアはその言葉を遮り、唇に人差し指をつけ……。
「ふふふ、ダメですわ。仮面をつけている時に名前を呼んでは。今日は、お互いの身分を仮面の内に隠す仮面舞踏会ですわ。互いの正体を気にせず、お楽しみいただきたいですわ」
それから、ミーアはくるりんっと振り返る。っと、そこに立って

いた少女、よくよく見れば……。
――って、姉上じゃねぇかっ！
見まごう事なき姉、エメラルダ・エトワ・グリーンムーンがそこに控えていた。
一つ頷き、姉とその隣に控えた女性（恐らく彼女も貴族令嬢だろう）は、持っていた仮面を手渡してきて……。
「どうぞ、これをつけて、パーティーの間は外さないようにしてくださいましね」
ご機嫌に、そんなことを言っていた！
弟に特別な言葉をかけたり、などということもなく……、まるで初対面の相手に接するような……一切の姉感を出さずの澄ました様子で、である。
――ああ、ちくしょう、姉上、すっげぇ楽しんでるなぁ！
仮面をつけてルンルンなエメラルダに、うぐぐ、っと恨めしげな視線を向けるヤーデンである。
なにせ自分は、これからミーアとグロワールリュンヌの間で苦労することになるのだ。視線がついつい恨みがましくもなろうってもんである。
……けれど、そんな気持ちもすぐに消える。
直後、口元に浮かぶのは、打って変わった苦笑いだった。
――でもまぁ、良かったな、姉上。きっと、前からああいうふうにミーアさまと一緒に行動したかったんだろうから。
そう、彼は知っている。
夏休み、ミーアにお茶会に呼ばれないか、とソワソワしていた姉のこと。船旅に一緒に行ったことを心から楽しそうにしていたこと。
幼い頃から姉はいつでも、ミーアの友として行動することに憧れていたのだ。だからこそ……。
――まぁ、姉上が嬉しそうにしてるんだから、少々の苦労は呑み込もう。俺が頑張れば丸く収まるんだしな、うん……。
自分に言い聞かせるように、内心でつぶやく。

そう……彼は知っている。
姉、エメラルダ・エトワ・グリーンムーンが、グロワールリュンヌの者たちに「弟のことをよろしく」と声掛けしていたこと。
セントノエルのほうにも、弟が行くから、とミーアやラフィーナに手紙を出していたこと。
なんだかんだとエメラルダが、弟たちがやりやすいよう、自身の持つ人脈をフル活用しつつ、それを一切、弟たちには知らせていないこと……。
暴君エメラルダは、面倒見の良いお姉ちゃんなのだ。幼い頃から、姉にはいろいろと世話になっているのだ！
――しかし、それにしても、仮面舞踏会とはな……。
受け取った仮面をつけつつも、ヤーデンは改めて考える。
――余計ないさかいを避けようということか。まぁ、所作を見れば相手が貴族かどうかはわかるだろうが、それを問うのも野暮というもの。
野暮――それは軽視すべきではない要素。むしろ、門閥貴族には最も有効な抑えと言えるかもしれないものである。
下手に間違えて、ミーアの関係者や他国の王族に対し無礼を働くというのは、もちろん危険ではあるのだが……それ以上にグロワールリュンヌの生徒たちが嫌うのは、中央貴族としての矜持を傷つけられることだ。
貴族の仮面舞踏会においては、相手の正体を問うようなことはしない。それは、ある種のマナーのような者。そのように風情のない、野暮なことをするような者は、帝国中央貴族にはいない、というのが、彼らの常識だ。
帝国貴族の伝統と文化を尊重する彼らが、そのような野暮なことをするわけがない。
――まぁ、それ以前に、そもそもパライナ祭の代表校に選ばれたいなら、ミーア学園の生徒を揶揄するようなことはすべきじゃあないんだが……わかってない奴もいそうだからな。

その点、ミーアのやり方は実に理に適っていた。彼女は帝国貴族に適格に、グロワールリュンヌの学生たちの気質を押さえているのだ。

――さすがはミーア姫殿下と言ったところか……ん？

っと、その時だった。彼の目に、なにやら不思議な光景が飛び込んできた。

人々が集まる広場、歓迎パーティーの会場となる場所だろう。それはまぁ、良い。学園の校舎から少し離れた場所のように感じるが、問題ない。

それより彼が気になるのは、その会場のほど近く、風に揺れる小麦畑だった。

なんだろう、その畑には、なにやら模様のようなものが見えて……。

「あれは、いったい……」

「ん？　あ、ああ……あれが、気になりますのね」

ヤーデンの声を聞いたミーアは、なにやら一瞬、渋い顔をした。

「あれは、聖ミーア学園の生徒たちが作ってくれた畑ですの。上から見てみると良いですわ」

そうして、ミーアは木造の台の上に彼らを誘った。首を傾げつつも上った先、目の前に広がった風景……それを見た誰もが、息を呑んだ！

「なっ……なんだ、あれ……」

普段は、冷静なはずのヤーデンも思わず、ぽっかーんと口を開ける。

それは、ダレカの顔の描かれた小麦畑だった。いや、誰かのというか、あれは、まさか？

「ミーア姫殿下の……お顔、でしょうか？」

「ええ……まぁ、そう、みたいですわね」

微妙に歯切れの悪いミーアである。一方で、

「……いい」

ぽつり、とつぶやくような声が聞こえる。
想像もしていなかった言葉に、思わず振り向けば、見えたのは、ヤーデンと同じく星持ち公爵家の……。
「カルラ嬢……今、なにか？」
問いかけると、カルラ・エトワ・ブルームーンはハッとした顔をして、小さく咳払い。
「いえ、なんでもございませんわ……おほほ」
口元を扇子で隠しながら言うのだった。

第百五話　ヤーデン、ちょっぴりほっこりする（後書き）

今週はミーア成分やや薄しです。
そしてどうでも良いことながら、プニッツァの参考のために某ファミレスで甘いピザを食べてきました。

第百六話　カルラ、刹那の美に魅了される

――それにしても、ミーア姫殿下の顔がデザインされた小麦畑、か……。上手いな……。

ヤーデンの脳裏に、途中の休憩中の会話が甦る。

「ミーア学園では農業などと言う下賤なものを教えているとか」

「ああ、ペルージャンの姫を講師に呼んでらしいな。まぁ、あの属国から講師を招いたのであれば、そのようにくだらぬ教育をしていてもおかしくはないのかもしれないが……」

などと話していた者がいたが……連中には、良い牽制になるだろう。

――下手に畑を馬鹿にしたりすれば、ミーア姫殿下のお顔を馬鹿にしたのか？　と言われかねないからな。皇帝陛下の前で、ミーア姫殿下に馬鹿にされた、などと言い出されれば、それこそ首が飛びかねない。

そこまでは、まだヤーデンの理解の範疇であったが……、カルラの一言が、そんな彼を戦慄させた！

「……いい」

その一言の意味が、咄嗟に理解できなかったヤーデンである。

いい……？　とは、どういうことか。なにが〝いい〟のか？　あの小麦畑の、なにが……。

刹那の思考の末、辿り着いた答えに鳥肌が立った。

――カルラ嬢は、あの、小麦畑に顔が描いてあるモノをいいと……うらやましいと思ったというのかっ！？

正直なところ、ヤーデンには、まぁったく理解できない感覚である。その感性に唖然としそうになるが……。

――あるいは、ああいうのが、ご令嬢は好きなのだろうか……。であれば、姉上のためにあの小麦畑肖像画をグリーンムーン領に作

ってみるのもありか……。
などと考えた彼は、再びの戦慄に背筋を震わせる。
――あれは中央貴族の心に羨望を植え付け、自発的に小麦畑を作らせる……誘導か！？
反農思想は、帝国中央貴族の子弟に深く根付いた思想だ。それをやすやすと覆すような思想誘導に、ヤーデンは驚愕する。
――カルラのように自己顕示欲を刺激された貴族は、きっと、このやり方を真似したがるだろう。それだけでなく、ミーア姫殿下や、それこそ皇帝陛下に気に入られようとするならば、ミーア姫殿下の顔が描かれた小麦畑を積極的に作るのではないだろうか？
ゴクリ、と喉を鳴らしつつ、ヤーデンはミーアを見つめる。
「でも、ミーア姫殿下、なぜ、あのような畑に肖像画を？」
そう問いかけたのは、カルラだった。
その質問の意味を吟味するように、ミーアは一瞬考え込んでから……。
「そう、ですわね。刈り取って食べれば消えてしまうから、かしら……？」
その言葉に、カルラが驚きに目を見開いた。

カルラ・エトワ・ブルームーンは、自身の中に芽生えた気持ちに戸惑っていた。
小麦畑アートを見た瞬間、彼女の中に衝撃が走った。
その圧巻の迫力……あの小麦畑には、圧倒的な凄みがあった。
――妾は、あの大きさに憧れてるのかしら？　でも、それだけではしっくりこない気がいたしますわ。
胸に芽生えた疑問を抑えきれずに、カルラはミーアに問うた。
「でも、ミーア姫殿下、なぜ、あのような畑に肖像画を？」
わざわざ、小麦畑に自分の顔を描いた理由は何か？　美しい肖像画でもなく、黄金の彫像でもなく……なぜ、いずれ消えてしまう小麦畑に？

その問いにミーアはきょとん、と小首を傾げてから、ごくごく当たり前のことを言うような口調で……。

「刈り取って食べれば消えてしまうからかしら？」

その言葉に、カルラは、ずががーん！　っと衝撃を受けた。

帝国最大の門閥の一角、ブルームーン公爵令嬢たる彼女である。

肖像画を描いてもらったこともあれば、永遠に残りそうなプチ黄金像を作らせたこともある――ミーア的には、ヤッベェ奴なのであるが……まぁ、それはさておき……。

そんなカルラにとって、ミーアの言葉は非常に衝撃的だったのだ。

――永遠に美を残す、ではなく……消えてしまうのが良い……？

それは、ある種のパラダイムシフトだった。

――すぐに消えてなくなってしまう、その一瞬のために全労力を使う。だからこそ、価値がある……そういうことですの？

それは実に……実に魅力的な発想で、しかも、

「自身の肖像画を描いた小麦畑のケーキの味は、また格別ですわよ？」

一瞬しか存在しない、甘く美味しい芸術……。その刹那の儚さを思う時、なんだかカルラは負けたような気がした。

ブルームーン公爵家の姫として、いつでも褒め讃えられ、金銀財宝に囲まれた日々を送るうちに、いつしか、彼女の心を動かすものはなくなっていた。もはや、この世の美も、価値ある物も、自分は手に入れられたと考えていたから。

だからこそ、今より上の地位、皇帝の妹にでもなって、世界中の価値ある物を集めてやろうと思っていたのに。

けれど、皇女ミーアは、カルラが知らぬ価値を知っていた。儚く消えていく美にこそ価値を見出すという……究極的な贅沢を知っていたのだ。

思えば、ミーアにはそうした潔い思考が見え隠れしていた。あの誕生祭の時の雪像もしかりである。いつまでも、永遠に残り続ける必要などない。一瞬で消えてしまう美であるからこそ、より人々の

心に深く刻まれ、魂に刻み込まれるのだ。
――妾もあれ……欲しい。肖像画の小麦畑から作ったケーキ……食べてみたいですわ！
帰ったら、絶対にあの小麦畑をねだろうと心に決めるカルラである。なんだったら、ミーアの物より遥かに巨大な小麦畑を作ってやろうと、そう決心するカルラである。

ちなみに、まぁ、お分かりかと思うが、一応の答え合わせをすると……。
「でも、ミーア姫殿下、なぜ、あのような畑に肖像画を？」
その問いかけに、ミーアは思わず考えてしまう。
小麦畑に肖像画を描く意味は何か……？　それは、もちろん……。
「刈り取って食べれば消えてしまうから、かしら……？」
もし仮に、その肖像画が脚色過多で空とか飛んでいたりしても、でっかい剣とか構えた勇ましーいものでも……刈り取って食べてしまえば全部、なかったことにできる。
消えてしまうというのは、とても良いことだ。しかも、その後、ケーキにもパンにも、プニッツァにすらなるのだ。普通の肖像画よりも良いのは、考えるまでも無いことだった。
「目で楽しんだ後、食べて終える。実に、素晴らしいことですわ！」
そう、強調するミーアであった。

第百七話　（血）雨後の……

ヤーデンを先頭に、グロワールリュンヌの学生たちは、着の身着のまま、歓迎会の場にやって来た。
通常であれば、パーティー用の礼装に着替えるところではあるのだが、それをしようという者はいなかった。
――本当なら、平民には手が出せないような高級服を着て、思い切り見下すところだろうが誰も……カルラ嬢さえも言い出さないな……。
ヤーデンは思わず感心してしまう。
この歓迎会を、仮面舞踏会としたミーアの叡智に……。
通常のパーティーとは違い、仮面舞踏会で大事なのは、言わずもがな、互いの正体を秘すること。わかっていても指摘しないし、華美なドレスを身に纏い、あからさまに身分をバラすようなことはしない。
正体を明かすことほど、野暮なことはない。帝国中央貴族は野暮を嫌うのだ。
本質的に彼らの敵は平民ではない。同じ貴族たち、中央の門閥貴族たちこそが、彼らの本当の競争相手なのだ。
ヤーデンにしても、本来であれば警戒すべきは、同格のブルーム公爵令嬢なわけで……辺土貴族や平民など、眼中にないのだ。
であれば、避けるべきは野暮なことをして、同格の中央貴族の子弟に笑われることだ。
だからこそ……彼らは高級品でマウントを取ることを避けた。あえて普段使いの服で来ることで、ミーア学園の学生たちとのバランスを取ったのだ。
――見事な思想誘導、見事な牽制だ……。
姉であるエメラルダから、日夜、親友自慢という名の、ミーアの

叡智っぷりを聞かされてきたヤーデンである。ミーアの深慮を疑うようなことはないのだ。

さて、ゲストが揃ったところで、ミーアは会場の前方に歩み出た。

「グロワールリュンヌのみなさまもいらっしゃいましたし、お料理のほうも……」

っと、視線をやると、うっかり近づいてきたら一大事だぞ！　とばかりに、サフィアスが焦った様子で、腕で丸を作った。キースウッドも、うんうん、っと大きく頷いてみせる。

「ふふふ、大丈夫そうですわね。それでは早速、歓迎パーティーを始めましょうか」

プニッツァはできたてが一番美味しい。うっかり、そのタイミングを逃すなどと言うことになったら一大事である。挨拶などは、さっさと終わらせてしまいおう、と、ミーアは話し出した。

「改めまして、ようこそ、我が聖ミーア学園へ。グロワールリュンヌのみなさまに心から歓迎の意を表しますわ」

一度、そこで言葉を切り、話すべきことを整理する。大切なこと、しなければならないことは……プニッツァを美味しく食べられる状況を作ることである。

「すでに、フーバー子爵からお聞きのこととは思いますけれど、わざわざみなさんにお越しいただいたのは、ヴェールガ公国で開かれる予定の、パライナ祭に出場する代表校を決めるためですわ。明日からの数日間、聖ミーア学園とグロワールリュンヌ学園の選抜学生により、討論会を開き、その結果で決めようと思っておりますの」

とりあえず、事実を確認したうえで……ミーアは息を吸って、吐いてから……。

「けれど、確認しておきたいことなのですけれど、聖ミーア学園とグロワールリュンヌ学園は、別に敵同士ではありませんわ」

静かな……けれど、毅然とした口調で言った。はっきりと言った！

敵同士でパーティーを開いたところで、美味しい食事などできな

い。互いに牽制しあうような、緊張した空気感の中で美味しいものを食べるなど、ミーアは御免なのだ。
「ただ、そうですわね……あえて『敵』という言葉を使うのであれば『好敵手』という言葉が相応しいかしら？」
口元に穏やかな笑みを浮かべ、あくまでもみなの緊張感を鎮めるように心がけつつ、ミーアは続ける。
「人には……聖ミーア学園には競い合う好敵手が必要だと、わたくしは考えておりますわ。鉄は、ただそこにあるだけでは、いずれ錆びて朽ちていくのみ。だから、鉄は鉄によって研がれる必要がある。人もまた同じこと。わたくしたちは、一人でいれば、サボるものですわ」
チラリ、とミーアが視線をやった先、んっ？　と首を傾げるベルの姿があった。
ミーアは、そんな孫娘に語るように力強く拳を握りしめ……。
「だから、鉄が鉄によって研がれるように、人も、またその友によって研がれなければならない。友……すなわち好敵手によって」
っと、そこでミーアは思う。
――しかし……競い合うにしてもディオンさんとギミマフィアスさんのような物騒なのは御免ですわ。誤解のないように、きちんと言っておきませんと……。
小さく頷き、続ける。
「無論、好敵手で互いに研鑽すると言っても、剣と剣で打ち合うようなものではない、ということはお分かりかと思いますけれど」
人の血は、人の血を呼ぶ。人の死は別の死を呼び寄せ、戦が起こる。
血の雨が降った後、臭い立つのは革命の危険な香り、それはヤツを呼び寄せる。
――気をつけねばなりませんわ。〝血雨（ちうご）後のギロちん〟とも申しますし……。
……そんな言葉はない。

ミーアはうんうん、と納得しつつ、
「議論と議論を戦わせ、より良い結論へと至る。互いの考えを交換し、時に相手に学び、時に自身の論に対しての理解を深めていく。それこそが、わたくしがみなさんに期待することですわ」
そこまで言って、ニッコリと笑みを浮かべる。
「だから、わたくしは、みなさんを歓迎いたしますわ。このミーア学園の学生たちをより高みへと導いてくれる好敵手として。あるいは、この帝国をより豊かにしてくれる味方として」
それから、ミーアは両腕を広げて厳かに告げる。
「では、そろそろ、歓迎パーティーを始めましょうか」

第百八話　青い瞳の……

――敵ではない、ね……。

ヤーデンは静かに、今聞いたばかりのミーアの言葉について考えていたが。

――まぁ……綺麗事だよな……。

そう結論づける。

普通に考えれば、そうなのだろう。けれど、なぜだろう？　ミーアの言葉は、どこかそのまま信じてしまいそうな……そんな響きがあった。

「さ、メインディッシュが来ましたわよ！」

不意に、ミーアの明るい声が響いた。と同時に、ふわり、とチーズの焦げた芳ばしい香りが漂ってきた。

その、なんとも言えない美味そうな香りに、思わずお腹がくぅっと鳴る。

――おっと、そう言えば、ちょうど飯時だったな……。

大貴族とはいえ、旅の途上では、そこまで豪勢な食事ができるわけではないわけで……。自然、興味はパーティーの料理のほうへと向いていき……。

「あれは……？　なんだろう？」

運ばれてきた料理に、視線が釘付けになる。

それは、巨大な皿の上に乗せられた平たいパン……いや、パイのようなものだろうか？

その形は、なんと、馬の形をしていた。丸みを帯びた、どことなく間抜けな顔が、実になんとも……。

「……カワイイ」

ふと、そんなつぶやきが聞こえてくる。見ると、おそらくカルラと思しき少女が、それを見つめていた。

平たい馬形の上にはたっぷりのチーズがかけられていた。炙ったチーズはちょうど良い感じに、とろぉりと溶けており、ところどころについた焦げ目が実になんとも良い匂いを漂わせている。とても美味しそうだ。
さらに、馬の目の部分は、なぜか青かった。

……なぜか！　さりげなく！　青かったっ！

「あれ？　目が青い？」
疑問の声を上げるカルラに、ミーアは嬉しそうな顔で微笑んで……。
「ふふふ、気付きましたわね。このお料理は、聖ミーア学園で開発した特製馬形プニッツァと言いますわ。そして、この目の部分、なんと、キノコで作ってありますの！　ルールー族の秘伝の技を使ったキノコで……」
などと、ニッコニコ顔で料理の解説をするミーアである。
「わたくしもかかわっているのですけど、実に不可思議な作り方で……」
「え？　これって、ミーア姫殿下が御自らお作りになったということですか？」
ギョッとした様子で言うカルラに、ミーアは誇らしげに胸を張り、
「ええ、もちろんですわ。みなさんを歓迎するために、腕を振るわせていただけましたわ」
そう言うと……なぜだろう、カルラの口元が微妙に引きつったように見えた。
「さ、一緒に食べましょうか」
そんなことを完全に無視して、ミーアはプニッツァを切るための丸いナイフを手に取った。刃の部分が回転するのこぎりのようになっているものだ。
ミーアは、馬形プニッツァをサク、サクッと切っていく。よく火

の通った生地が、ぱり、ぱりり、っと乾いた音を立てる。切り離したプニッツァから、みょーんっとチーズが伸びて、実になんとも美味しそうだ。
　手早く、自らのお皿に馬プニッツァの頭の部分を載せたミーア……であったが、しばし迷った様子を見せてから、
「一番美味しいところは、やはり、ゲストに差し上げないといけませんわね」
　そう言って、ニッコリ微笑んでから、そのお皿をヤーデンとカルラの前に差し出してきた！
「どうぞ、この美味しいところはお譲りしますわ。この一番美味しそうなところは」
　一番、美味しそうなところ……すなわち、青いキノコがのっけられた部分であるっ！
　――実に美味しそうな料理ではあるが……青いキノコか……。
　それを見て、ヤーデンはふと冷静になる。先ほどからのスピーチやお料理の美味しそうな匂いにつられて、少しばかり冷静さを失っていたが……はたして、青い食べ物……というのは大丈夫なのだろうか？　それもキノコというのは……。
　悩んでいると、隣のカルラが、
「あ、あの、ミーア姫殿下は、シューベルト侯爵令嬢……レティーツィアさまと仲がよろしいとお聞きしましたけど……」
「あら？　レティーツィアさんですの？　ふふ、そうですわね……確かに、時々、お料理を一緒に研究する間柄ですし、仲は良いほうかと思いますけど……」
「そっ、そうですのね……」
　なにやら、カルラが、ゴクリと喉を鳴らした。仮面で顔を隠されてはいるが……見えている頬の部分からは、スゥっと血の気が引いたように見えた。
　――どうかしたんだろうか？
「どうかしましたの？」

ヤーデンと同じで、ミーアもまたいつまでも皿を取らないカルラに疑問を抱いたのだろう。
――やれやれ、仕方ないな……。
ヤーデンは、空気を読んで、ミーアから皿を受け取り……。
「それでは、その栄誉は私が……」
それから、彼は一瞬迷って後、手づかみでプニッツァを掴み、パクリ、と一口。
瞬間、口の中に熱さを感じる。トロリ、と舌にまとわりついてくるチーズ、トマトをベースにしたソースの酸味と甘み。さらに、あの青いキノコのシャキシャキ、コリリ、という歯応えが、すべて合わさって、口の中に美味を奏でる。
今までに食べたことのない、それでいて、実に濃厚で素晴らしい味に、思わず……。
「美味い……」
お世辞抜きに、そんな感想がこぼれる。それを聞き、ミーアは口元に笑みを浮かべた。
「ふふふ、当然ですわ。なんと言っても、このお料理は、聖ミーア学園の生徒たちが、グロワールリュンヌ学園の方たちを歓迎するために作ったもの。わたくしも力を尽くしたものですもの。美味しくて当たり前ですわ」
上機嫌に微笑んで、ミーアは自らの分のプニッツァを大きな口でパクリ。はふほふ、と熱そうに口をパクパクさせつつ……。
「ふむ！　このキノコとチーズの取り合わせは見事ですわね。火加減も良い感じですわ。この、チーズのカリッカリに焦げたところなど、言葉になりませんわね」
嬉しげな歓声を上げるのだった。

第百九話　皇女ミーアの放蕩祭り～プニッツァの祭典～

パーティーが始まった当初、学生たちは、どこかぎこちなかった。それも当然のことだろう。いきなり、育った環境がまったく違う者たちが集められ、パーティーに放り込まれたのだ。しかも、仮面をつけられた仮面舞踏会。仲間内で固まって会話を楽しむ、などと言うわけにもいかず……。

もちろん、大体はわかる。誰が中央貴族の子弟で、誰が平民の子どもたちかということは、雰囲気で察することはできる。けれど、それを言うのは貴族からすれば野暮。そして、ミーア学園の生徒たちにしても、ミーアの取り計らいによる仮面舞踏会である以上、そのやり方に従うのは当然のことである。

そうして生まれるのは、微妙に話しづらく、盛り上がりづらい環境で……。

そんな空気を打ち破ったものが……ミーアの馬プニッツァだった。

「おお、あれは……」

会場に登場した大きなプニッツァを見て、誰かがつぶやいた。

芳ばしいチーズが焦げる匂い。トマトソースの甘い香り、上に乗せられた香草の芳しさに、思わず腹が鳴る。

ところで、これは余談だが……帝国中央貴族の令嬢たちは、他国の貴族の令嬢たちと同じようにドレスや宝石、アクセサリー類が好きだ。花を愛でる者、小鳥などの愛玩動物を愛でる者も少なくはない。

では、令息たちは、どうか？

彼らもそう変わったものではない。剣や鎧などが好きだし、集める者もいる。少年たちにとって、強い騎士への憧れというのは普遍のものだった。

そして、騎士と言えばもう一つ欠かせないものがある。そう、馬

である。
中央貴族の男子は……結構な割合で馬好きなのだ！
そんな彼らにとって、多少のデフォルメがされているとはいえ……馬形のプニッツァは、心躍らせるものであった。
「あの食べ物、馬の形をしているな」
「ああ……。あの耳の形は、テールトルテュエ種だろう？」
「いや、月兎馬じゃないか？　やはり、馬と言えば……」
などと、その口は軽くなり……。さらに、ミーアが率先してプニッツァを切り分け、周りの者たちに渡しているのを見て、俄然、あの食べ物に興味を抱いた。
っと、そんな時……。
「はーい。こちらにも、プニッツァが来ましたよー」
近くのテーブルにプニッツァ皿がやってくる。あいにくと馬の形のものではなかったが、この際、仕方ない。その美味しそうな匂いにつられ、ついつい、手が伸びるわけで。
「おお！　これは、美味い」
思わず歓声を上げたのは、グロワールリュンヌの学生だ。対して、
「ああ、本当に、美味しいなぁ」
みょーんっとチーズを伸ばして食べるのは……同い年ぐらいの、聖ミーア学園の学生だった。
各テーブルに、次々と焼き立てプニッツァが襲来。分断されるように、グロワールリュンヌの学生たちは散り散りになり……聖ミーア学園の学生たちに混じり合っていく。
プニッツァの力は偉大だった。同じテーブルの皿から、同じ料理を取り、同じように味わうこと、それは奇妙な連帯を生んだ。今までの気まずい空気から打って変わって、場の空気感は明るく華やいだものになる。
美味しい料理を食べれば、表情も自然と柔らかくなる。
口だって軽くなる。
それに、今日は仮面舞踏会。貴族という身分さえ仮面の下に隠さ

れてしまえば、いるのは同年代の少年少女で……。
談笑の花のつぼみは各所で綻んでいった。
「しかし、これは、この料理が優れているだけのこと。この学園で教えている農学の手柄ではない」
辛うじて、聖ミーア学園と農学の関係深さを思い出した少年が言う。この料理は素晴らしいが、だからと言って、この聖ミーア学園が優れているというわけではないという主張。そんな、空気を読まぬ愚行に、微妙に雰囲気が悪くなりかけたところで……。
「あら、残念ですけれど、それは二流の言うことですわ」
現れたるは、帝国の叡智……。その手に、分厚いプニッツァ三枚ののった（三枚の！　のった！）皿を持った、ミーア・ルーナ・ティアムーンであった。
「あっ、これは、ミー……」
言いかけた少年に、ミーアはスゥっと手を挙げ、
「それは野暮、というものですわ」
言葉を制し、続ける。
「それに、先ほどの言は、野暮というよりは二流と言わざるを得ませんわね」
「なっ、どういうことです？　私が二流だなどと……！」
たじろぐ少年に見せつけるように、ミーアは分厚いプニッツァを手に取り、パクリ。その先端をかじる。サクリ、と心地よい音。モグモグ……ゴクリ。うーん、美味しい！　もう一枚！　とやってから、ミーアはお皿に目を落とす。
「このサクサク感、見事だとは思いませんこと？」
「え？　は、はぁ……そうですね。大変、美味しい料理かと思いますが……」
「ふふふ、そうでしょう？　この聖ミーア学園の料理学部が開発した傑作料理ですわ」
若干、偉そうにミーアは胸を張り、それから……。
「では、この歯応えの秘訣は、どこにあると思いますの？」

「は？　いや、それは……」
　言い淀む少年に指を振り振り、ミーアは言う。
「焼き加減はもちろん重要ですけど……同時に小麦の種類も重要になるのですわ」
「小麦の……種類？」
　きょとん、と目を瞬かせる少年に、ミーアは笑みを浮かべつつ続ける。
「ええ。もしかしたら、ご存知ないかもしれませんけれど……同じ小麦といってもその種類、そして、産地によってその質は変わってくるのですわ」
　プニッツァ開発の際に得た、受け売りの知識を、実に偉そうな口調で披露するミーア。
「この厚みのあるプニッツァと薄いプニッツァとでは、小麦の種類が違う。また、味付け。小麦自体に強い甘味を持つものがございますけれど、このプニッツァ生地自体に甘味のあるものと、そうでないものとでは、当然、トッピングの味付けが異なってくる。その小麦に合った調理法があり、その料理に適した質の小麦がある」
　それから、ミーアは少年の目を見つめ、
「そうしたことを知らずして、美食は極めることができない。最良の料理は作れない」
「だっ、だからこそ、小麦や農学の研究をする必要がある……と？」
　その問いかけには答えずに、ミーアは微笑みを浮かべ、
「すべて同じ小麦で作った料理と、それぞれの調理法に適した小麦で作った料理……どちらが上なのか。どちらが一流か……。ふふふ、あなたの領地でも、いろいろな、最高のお料理が食べられるようになればいいですわね」
　それだけ言うと、次のテーブルへと歩いて行ってしまった。

第百十話　皇女ミーアの放蕩祭り　Sプニッツァの祭典

さて、ミーアはテーブルからテーブルへ。無抵抗に流されていた。

ティオーナたちが作ったサラダをお皿にとり、葉物野菜で口の中を漱ぐ。酸味の強いドレッシングのかかったサラダは、プニッツァの濃厚な味をスッキリさせ、まるでまだ一枚も食べていないかのような新鮮な気持ちにさせてくれた。

いや、本当はまだ一枚も食べてないのでは？　と軽く錯覚しかけるミーアである。

ついでに、静海の森で採れるという、月光無花果（げっこういちじく）のドライフルーツを摘まみ……ふむ！　甘い物で味変も良いものですわね！　なぁんて思いつつ、華麗にスキップ＆ステップ。さりげなく運動し、消費することを忘れないミーアである。

途中、プニッツァや小麦に関する受け売りをドヤァ顔でゲストたちに披露して、ちょっぴり気分よくなりつつも、次のお料理へ。

ダンス？　そんなのは、後、後、後！　である。

なにせ、プニッツァは焼き立てが美味しいのだ。一番、美味しい瞬間を逃すなど、愚の骨頂。まして、本日はカロリーを気にしなくても良い日だ。食べた分、ダンスをすれば、すべてが帳消しになる……すべてが許された日なのだ。

いや、そうだっただろうか……？

不意に、ミーアの鼻がひくひくと動いた。その嗅覚が、敏感に甘い香りを捉えた！

「おお……出ましたわね、甘いプニッツァ！　デザートにはまだ早いと思いますけれど……」

そうしてミーアが流れ着いたのは、フルーツがふんだんにのった、あまぁいプニッツァのところだった。

赤い宝玉のような、艶やかな赤月（せきげつ）チェリー、青い宝玉のような青

月ベリー、その上から、クリームソースがかけられている。
「ふふふ、これは実にとても美味しそうですわ！」
ミーア、早速、その場で丸いプニッツァカッターを手に取り……
ふと、そこで自分に向く視線に気付く。
はて……？　と周囲を見回せば、ジーっと甘いプニッツァを見つめる、小さな女の子がいた。
仮面をつけていてもわかる、明らかな幼さ。おそらくは、セントノエル特別初等部の子どもだろう。どうやら、プニッツァを食べたいけれど、手を伸ばす勇気が出ないらしい。そわそわ、とミーアのほうに目を向けては、なにか言いたげに口をもにゅもにゅさせている。
「ふむ……」
ミーアは、手元のプニッツァカッターに目を落とすと、それを素早く動かした！　淀みのないその姿は、さながら達人のごとく、甘いプニッツァを綺麗に切り分けていく。
そうして、お皿を二つ用意して一切れずつのせて、その二つを見比べてから……。
「どうぞ、遠慮しなくってもよろしいんですのよ？」
なんと！　大きいほうの一切れがのった皿を優しく少女に渡した！
そうなのだ、今のミーアは……寛大な人なのだ。
なにしろ、今日はプニッツァのお替り自由の日なのだ（ミーアの中では）
いくらでもお替りができる状況においては、大きめのほうを子どもに譲って笑顔でいられる程度の余裕は、ミーアは持ち合わせているのだ。
「あっ……、ありがとう、ございます」
遠慮がちにお皿を受け取った少女に、ニッコリ微笑んで答えてから、ミーアは自らの甘いプニッツァを手に取る。
トロリとしたソースがこぼれ落ちないように気をつけつつ、生地を急いで口元へ。パリリッとプニッツァ生地が割れる。同時に口の

中に甘いソースが広がった。ミルクベースのソースは、緑月ミカンのジャムの酸味と合わさり、爽やかな味を口の中に残した。
「ふふふ、これは、素晴らしいお味ですわ！」
「すごくおいしい！」
少女のほうも、どうやら気に入ってくれたらしい。ミーアはニッコニコと満足げな笑みを浮かべて、
「あっちにある馬形プニッツァもとても良いお味ですわよ？　甘いものばかりでなく、しょっぱいものも食べて、味変することが美味しく食べるポイントですわ」
きちんとキノコを使った体に良いプニッツァを勧め、子どもの健康にも気を使える、食育キノコ聖人ミーアであった。
「あら……？」
っと、そこで、ミーアは再び視線を感じた。それも、今度の視線は少女のものよりも強く、鋭い感じがする。
場所は……少し離れた位置だ。
いったい誰が……？　とそちらに目を向けて――見つけた！
こちらにジィッと心配そうな視線を向けている自らのメイドの姿を！
まるで祈りを捧げるかのように両手を組んで、ハラハラした顔で、ミーアを見つめているアンヌ。
ミーアは、ふと、自らのお皿の上に視線を落とした。そこには、いつの間にか、新たにお替りとして取り分けた、スイートプニッツァがのっていた！！
――ああ、アンヌ……わたくしが食べ過ぎないか、心配してくれておりますのね。
ミーアは、目頭が熱くなるのを感じる。
思えば……前の時間軸。料理長をクビにして以来、ミーアの食事事情や健康を気遣ってくれるものはいなかった。料理長のように、野菜を食べるよう勧めてくれる人も、アンヌのように諫言を呈してくれる人もいなかった。

ミーアは……アンヌのほうに安心させるように頷いてみせた。
――大丈夫ですわ、アンヌ。食べた分は、ちゃんと運動して消費いたしますから。
それから……お皿の上のスイートプニッツァをチラと見てから、その視線を切って――ひょい、っと掴んでパクっと食べた！　熟練メイドでなければ見逃してしまいそうな、見事なひょいパクだった！
……まぁ、アンヌは見逃していなかったが。
それから誤魔化すように、ミーアは素知らぬ顔で手を拭いて、ついでに口の周りを拭いてから、ああっ！　と悲鳴を上げるように口を開けたアンヌを安心させるように、力強く頷いて……。
「さっ、それでは、ダンスの時間にいたしましょうか」
気合の入った声でつぶやきとともに、ミーアは食事が並べられたテーブル群から離れた。

第百十一話　皇女ミーアの放蕩祭り～我が月、我が月よ！～

少女の名は、ニコといった。

セントノエル特別初等部第一期生、年少組に選ばれるという幸運に与った人にして、フーバー子爵に絡まれそうになった際、ドミニク・ベルマンに救われた少女でもある。

仮面舞踏会の日、小さめの仮面をつけた彼女は……こっそりドミニクの後をつけていた。

先日、助けてもらって以降、なにくれと特別初等部の面倒を見てくれる、頼りがいのあるドミニクお兄ちゃんのことを、彼女はこっそりと慕っていた。のだが……。

――お兄ちゃん、かわいそう……。

彼女の視線の先、ドミニクが手持ち無沙汰な様子で佇んでいた。

彼は、プニッツァにばかり人が集まることを危惧し、いつダンスが始まっても参加できるようにと、楽団の近くで待機していた。ベルマン家が手配したこともあってか、時折、楽団の団長らに声をかけ、いろいろと指示をしているようだったが……。

そのやる気とは裏腹に、ダンス会場は閑散とした雰囲気が漂っていた。そもそも、歓迎すべきグロワールリュンヌの学生たちはもちろん、聖ミーア学園の生徒たちも、プニッツァ会場のほうに集まっていた。

――みんな……こっちに来てくれないよ。

それが、ニコは悲しかった。

ドミニクをはじめ、聖ミーア学園の生徒たちがどれだけ頑張ってダンスの練習をしていたか、彼女はよく見ていた。それなのに、こんなにダンスが盛り上がらないのは、あまりにも可哀想だった。

見ていられなくって、彼女はその場を離れ……プニッツァのほうに来た……仕方ないのだ。気になってしまったのだから！

そうして、辿り着いたテーブルで、彼女は見つける。
甘いあまぁい、プニッツァを。
――すごい、美味しそう！
けれど、デザートにあたるそれに手を付ける者はまだいなかったので、それは未だ丸い形を保っていた。それに最初に手を伸ばす勇気は、さすがに少女にはなかった。
――食べたい……でも、どうしよう……。
そうして、きょろきょろ辺りを見回していると……まるで、ニコの助けてほしいという気持ちを感じ取ったように現れたのだ。帝国の叡智ミーア・ルーナ・ティアムーンが！
ミーアはニコのほうを見ると、あろうことか、手ずからプニッツァを切り分けた挙句、お皿に取り分けて渡してくれた。そのうえ、
「遠慮すること、ありませんわよ？」
などと、優しい笑みを浮かべる。それを見て、ニコは思った。
――もしかしたら、ミーアさまなら、あっちのダンスも……。
そう、彼女は知っているのだ。ミーアは、いつだって物事を動かす人だった。
セントノエル学園でもそうだった。ミーアの言葉はいつでも、生徒たちの心を動かし、物事は力強く動き出したのだ。
今だって、きっと……。
そんな彼女の期待に応えるように……ミーアは言った。
「さっ、それでは、ダンスの時間にいたしましょうか！」
気合の入った顔で……そう言ってくれたのだ！

ダンス会場へと向かうミーアに、ニコはこっそりついていった。
そして……。
「ふぅむ、いささか、少ないですわね」
そんなつぶやきを聞く。見ると、ミーアはなぜだろう……お腹の辺りをさすっていた。
――あれは……気合を入れてる、のかな……。それにしても、少

ないってまさか……。
その言葉の意味を考えて……次の瞬間、ニコはハッとする。
ミーアは、いささか不機嫌そうな顔をしていた。ということは、もしかして……。
――ダンスに来る人が少ないっていうこと……？
せっかく、ミーア学園の生徒たちがダンスのために準備しているのに、グロワールリュンヌの学生たちが来ないから……。ミーアはそのことに不満を抱いているのだろうか……？
ミーアは、堂々たる歩調で楽団のほうへと向かった。
「あっ、これは、ミー……」
っと背筋を伸ばす仮面の少年、ドミニクに、ミーアはしーっと人差し指を立てて。それから、楽団員に目を向ける。
「失礼、みなさん。景気づけに元気の良い曲を踊りたいのですけれど、お願いできますかしら？」
「かしこまりました。なにをお弾きしましょうか？」
「そうですわね……ふぅむ」
ミーアは頬に指を当て、それから、ふとニコのほうに目をやった。
おや？　という顔をしたミーアは、そこで、思いついたように……。
「ならば……そうですわね。『マイムーン・マイムーン（我が月、我が月よ！）』をお願いできますかしら？」
朗らかな顔で言った。

マイムーン・マイムーン（我が月、我が月よ！）は、伝統的なダンスだった。
霧と静寂の荒野で彷徨う流浪の民が、神の遣わした導きの月に従い、命の湧水に辿り着いた時に踊った、歓喜のダンスだと言われている。
丸く円を描き、みなで手を繋いで踊るそのダンスは子どもでも踊れる簡単なもののうえ、認知度も極めて高いものだった。

「なるほど、かしこまりました」
楽団の団長が、納得顔で頷くのを確認してから、
「さ、踊りますわよ、みんなで！」
ミーアは笑顔を浮かべて、ニコの手を取った。
「ほら、そちらの仮面の少年も！」
声をかけられたドミニクは、一瞬、躊躇った様子を見せたが……。
その手に、なけなしの勇気を振り絞って、ニコは手を伸ばした。
「あっ……」
今日は仮面舞踏会。貴族も平民もないから。
ミーアはそんなニコたちの様子を見て楽しげに微笑み、スキップしながら近くの生徒たちに声をかけていく。戸惑いの表情を浮かべる者たちを次々に呼び集めて……。
「知らない方は、わたくしに合わせて踊ればいいですわ。簡単ですから、すぐに覚えられますわよ。音楽をよく聞いて、一回目はゆっくり行きますわよ。団長さん、お願いいたしますわね」
ミーアの言に応えるように、楽団長が小さく頷き、音楽が緩やかなものになった。
ところで……これは百もご承知のこととは思うがミーアはダンスに関してはすごいのだ。ものすごいのだ！　その腕前たるや、一対一で相手に心地よく躍らせることはもちろん、人数が多くなっても変わることはないのだ！
「足運びだけ覚えて。はい！」
みなに見えやすいように、綺麗なステップ。それを見て、おっかなびっくり、ニコはステップを踏んだ。今日までに何度か参加したミーアのダンスレッスンで、ステップの練習はなれたものだった。
「いいですわよ、右回りに、はい、ここで手を打つ」
パンッと手を叩き、
「今度は逆回りですわ！」
ダンスの達人（えんかいこうじょ）こと、ミーアのセレクションは、まさに完璧であった。

そもそも、野外で社交ダンスをすること自体、とても難易度が高いことなのだ。ゆえに、まず、簡単かつノリの良いもので釣って、テンションを上げることが必要なわけで……。そのことを、ミーアは肌で感じていたのだ。海月の肌は、微細な流れを感じ取れるほど、敏感なのだ。

さらに、賑やかな音楽に誘われるようにして、

「おお、マイムーン・マイムーン（我が女帝、我が女帝よ！）ですね。うふふ、楽しそうなのをやってますね！　ミーアお……姉さま」

ベルとシュトリナがやって来た。

ダンスの腕前はそこそこながら、基本練習が好きではないベルにとって、適当に（そのばのノリで）踊れるマイムーン・マイムーンはうってつけのものだった。

プニッツァを食べていた者たちにも次々声をかけ、こちらに呼び寄せるベル。それを手伝うシュトリナ。パティやヤナ、特別初等部の子どもたちも加わり、見る間に、ダンス会場の人数が増えていく。

そして、その流れにグロワールリュンヌの者たちも呑み込まれていく。

そもそも皇女であるミーアが「踊れ！　踊れぇ！」と言っているのだ。いったい、誰が逆らえるというのだろうか。

「おお、ふふふ。増えてきましたわね。では、みなで手を繋いで、踊りますわよ！」

ミーアの明るい声につられるように、みなが踊り出した。

最初、どこか遠慮がちで、戸惑った顔をしていた者たちは、ほどなくして、余裕がなくなっていく。それは、ミーアが徐々に、徐々に、音楽のペースを上げるように指示を飛ばしたからだ。

「もっと速くステップいたしますわよ！　ほら、みなさん、しっかりつきてきてくださいましね」

そんな明るい声に合わせて、激しさを増す踊りに、いつしか、みな余裕を失い……頭が空っぽになって……そうして、次第に楽しくなってきた。

賑やかな音楽に乗って、無理やりにでも体を動かしたこともある。それ以上に、なにより、仮面をつけたことで、貴族の身分から自由であったことも大きかった。
次第に年相応の無邪気な笑みが、参加者みなの顔に広がっていって……。
やがて、ぎこちないダンスは喜びの……歓喜のダンスへと変わっていった。

それは、皇女の生誕祭に現れた奇跡の再来だった。
貴族と平民が同じ高さに立ち、一つの食べ物を分け合って食べること……。皇女自らが、その食べ物を切り分け、手ずから振る舞ったこと……。それは、確かにかつてのミーアの放蕩祭りを彷彿とさせるものであった。
されど、同時に、かつての地点に留まらないものでもあった。
みなが同じものを食べ、共に手を取り合い、喜びの踊りを踊る。それは、帝国の長い歴史の中で、ただの一度も実現しなかった光景……。

それを見て、
「おお……これが、これが、ミーア姫殿下が目指す帝国の姿なのか……」
若人たちの邪魔をしないよう……、トクベツな服に身を包み、ひっそーりと小麦畑の中に潜んでいた、どこかの学長（某賢者）が、涙にむせぶことになったのだが……。
彼の多くの弟子たちは、師のそのように、ちょっぴりアレな姿を知ることはないのであった。

マイムーン・マイムーン（我が女帝、我が親愛なる女帝よ！）
それは、伝統的な踊りであった。
そして、女帝ミーアの治世以降、帝国では特別な意味を持つ踊りとなった。

女帝ミーアが帝位を継いだ際、帝国のあらゆる者たちがその踊りに参加し、歓喜の声は帝都を揺らしたという……それは伝説の踊りであった。

以降、ミーアの生誕祭で踊ることが慣例となっていくのだが……。

その踊りの裏にあった、ミーアの切実な想いを知る者は誰もいないのであった。

第百十二話　エメラルダ満喫する

華やかな音楽が響いていた。
食事が一段落したところで、始まったマイムーン・マイムーン。
それをきっかけとして始まったダンスタイム、その中心で軽やかなステップを踏むのは、言わずもがな、ミーア・ルーナ・ティアムーンだった。
その顔を仮面で隠していても、その身に纏った圧倒的なダンスの腕前は隠しようがないものだった。
まぁ、仮面舞踏会ということを考えると、いささか目立ちすぎという感じもないことはないが……。
――ミーア姫殿下、この会を成功させようと、一生懸命なんだな……。
エシャール・ソール・サンクランドは、そんなミーアに好意的な視線を向けていた。今日のために、自ら進んで、聖ミーア学園の生徒たちにダンスを教え込んだのだ。その姿勢を、エシャールは好意的に見ていた。
……ちなみに、頑張ってダンスしているのは言うまでもなく、プニッツァを食べた分、ダンスで消費しようという魂胆なだけなのだが……。
まぁ、それはさておき、そんなミーアを尻目に、エシャールは会場を歩いていた。
途中、プニッツァを軽く食べ、少しの談笑をしたものの、まだ、ダンスには参加していない。何度か誘われてはいるのだが、その都度、それを断っていた。
「ダンスを一曲、いかがですか？」
唐突に声をかけられる。綺麗な大陸共通語、おそらくは貴族。グロワールリュンヌの学生だろうか。

エシャールは控えめな笑みを浮かべて首を振り、
「すみません。少し疲れてしまったので……」
そうして踵を返して歩きだす。っと、
「楽しんでいるかな？」
聞き覚えのある声に、思わず立ち止まった。
「ああ、兄上……」
思わず言葉にしそうになったエシャールに、シオンは口元に苦笑いを浮かべた。
「仮面舞踏会で互いの正体に繋がることを言うのは、マナー違反だぞ、少年」
そう言って、シオンは顔の仮面をコツコツ叩いた。
「失礼しました」
背筋を伸ばしてから、エシャールは首を傾げた。
「でも、どうかなさいましたか？」
「いや、今日は仮面舞踏会だ。もっと肩の力を抜いて、ダンスをすればいいのに、と思ってな。先ほどから、ダンスの誘いをずっと断っているように見えたものだから」
ほんの少し、声に心配を滲ませてシオンは続ける。
「もしや、サンクランドでのことを気に病んで、禁欲に走っているのではないかと思ったんだが……」
兄の言に、エシャールは慌てて、手をパタパタ振った。
「ああ、いえ、そういうわけではないのです」
かつて、エシャールは、シオンに毒を盛りかけ、父を毒殺しかけた。その罪はあまりに大きく、その咎は容易に消せるものではなかった。
されど……エシャールは、そのくびきからは、すでに解放されていた。解放してくれた人がいたからだ……。
あの時、自分の罪を赦してくれたのは、父と兄で、そう状況を整えてくれたのはミーアだったけれど……でも、それを教えてくれた人は……。

「実は、その……最初にダンスをしたい人がいまして」
少しだけ恥ずかしげに言うエシャール。そんな彼を見て、シオンは驚いた顔をする。
「仮面舞踏会でか？　それもまた、少し野暮かと思うが……」
そうは言いつつも、シオンは優しい笑みを浮かべ、
「エメラルダ嬢には、よくしてもらっているようだな……」
「はい……。でも、その……恩返しとか、そういうことだけではなくって……」
わずかばかり迷った顔をしてから、エシャールは言った。
「あの方は素敵な方ですよ、兄上」
胸を張り、真っ直ぐに兄を見つめて、エシャールは言った。
「ミーア姫殿下にも劣らない、とても素敵な女性です。だから……僕が今日のパーティーの最初のパートナーになる栄誉を得たいと思ってるんです」
堂々たる言葉に、シオンは再び驚いた様子を見せるも、すぐに首を振って……。
「仮面をつけているので本人かはわからないが……お探しのご令嬢なら、あちらのほうにいたよ」
シオンの言葉に目を丸くしたエシャールは……、
「ありがとうございます、兄上」
深々と頭を下げて、小走りにその場を後にした。

会場の端、エメラルダは一人で立っていた。そんな彼女に歩み寄る者がいて……。
「お嬢さん、よろしければ、私と一曲……」
「あら、ヤーデン。この姉にダンスパートナーを申し込むとは……ずいぶんと偉くなりましたわね」
チラリと目を向けるエメラルダに、ヤーデンは呆れ顔で肩をすくめた。
「姉上……本日の趣向は身分を明かさぬ仮面舞踏会なのだとばかり

思っていましたが……」
小さく首を振りつつ、ヤーデンは続ける。
「踊らないのですか？　せっかく、羽目を外せる仮面舞踏会だというのに。それに、ダンスはお好きでしょうに……」
「そうですわね。私の目に叶う殿方が現れれば、踊ろうかと思いますけれど……」
おほほ、と笑う姉に、ヤーデンはため息を吐き、
「なるほど。エシャール殿下が来てくれるのをお待ち、と……」
「なっ！」
あっさりと指摘され、エメラルダは、固まった。
「待っていても来てくれるとは限らないでしょう。ご自分からいけばいいのに」
「だって……」
正論を前に口を閉ざすエメラルダ。
「もしや、余計なことを考えていますか？　『姉上に気を使って、エシャール殿下が受け入れざるを得ないから、自分のほうからはいけない』とか……」
「エシャール殿下は非常に弱い立場にありますわ。私が誘えば、ダンスに付き合わざるを得ないでしょうけど……そんなのは嫌ですわ」
「おお、外交のグリーンムーンらしくもない。自分の希望を叶えるのに有利な状況を利用しないとは……我が姉ながら情けない」
「余計なお世話ですわ。弟、とっとと行かないと、あなたのほうもダンスをする相手がいなくなりますわよ？」
しっし、っと手を振るエメラルダ……だったが。
「あっ、あの……」
「へ……？」
突如の声、反射的に振り返ったエメラルダは……そこに目当ての人物の姿を見つけた。
自分よりも少し小さい身長、仮面で隠した顔に真剣な表情を浮かべて、その少年……エシャールは言った。

「お嬢さん、ダンスを一曲、お付き合いいただけますか？」
「ふふふ、私でよろしいんですの？」
悪戯っぽく微笑んだエメラルダ。であったが、それを真っ直ぐに見つめて……エシャールは言った。
「はい。あなたとダンスがしたいと思って……ずっと探していました」
「まぁ……それは、ずいぶんと熱烈なアプローチですわね」
ちょっぴり驚いた様子の彼女に、エシャールは真面目腐った口調で言う。
「お受けいただけますか？」
差し出された小さな手のひら、なんとも堂々たる誘いに、エメラルダは、一瞬、ほわぁっとなってから……。
「は、はい……喜んで……」
静々と自らの手をエシャールの手と重ねるのだった。

そして、そんな姉たちを見送りつつ……、
「ああ……まぁ、良かったは良かったのか……いや、しかし……我が姉上は、まだ幼いエシャール殿下と同程度の恋愛観ということか……それは、なんだか……いいのか？　いや、だが……」
微妙に複雑そうな顔をするヤーデンであった。

第百十三話　出陣前、それぞれの朝

さて、ミーア主宰のプニッツァパーティーの翌日のことだった。グロワールリュンヌの学生たちは、ヨハンナのもとに集められていた。

「今さら、私がわざわざ言う必要もないことだと思う。君たちは、中央貴族の家に連なる者として家名を傷つけることがないように振る舞わねばならない。各自の発奮を期待してやまない」

厳格な表情を浮かべ、重々しく言葉を紡いでいるのは、フリオ・フーバー子爵だった。

「わかっているとは思うが、今回の討論会、聖ミーア学園の生徒に負けるなどということは、絶対に許されないこと、あり得ないことである。中央貴族の家に生まれた者として、平民に負けるなど、決してあってはならぬこと。無論、聖ミーア学園はミーア姫殿下が作られた学園である。それに、サンクランドの王子殿下もおられる。そういう意味では、君たちと同格と言える生徒もいるかもしれない。が、それでも十人の代表すべてがそうであるとは、考えられない。負けることは許されぬ」

両腕を後ろ手に組んで、こつ、こつと足音を立てて歩きながら、フーバー子爵は続ける。

「もう一度、重ねて言うが、決して負けることは許されぬ。ヴェールガの伝統的な祭りであるパライナ祭に出るのは、グロワールリュンヌでなければならぬ。我が帝国の伝統を守るため、ぜひとも力を尽くしてもらいたい」

そこまで言ってから、彼はヨハンナのほうに目を向けた。

「ここで、我がグロワールリュンヌの後援会、紫月花の会の長を務めておられるブルームーン公爵夫人からも一言いただきたく思う。みな、心して聞くように」

そこで、言葉を切る。しばしの沈黙……その後、フーバー子爵は眉をひそめた。
「あの、ヨハンナさま……？」
再度、声をかけられて、ヨハンナはハッとした顔をする。見れば、学生たちの視線は自分に集まっていた。
「あ、ああ……そうじゃ、な」
考えごとをしていたヨハンナは、一瞬、答えに詰まってしまった。
――さて、なにを言うべきか……。
生徒たちを見て、思わず考えてしまう。
――なにを言っても無駄ではあるまいか……。
などと言うことを……。
彼女の胸にあるのは、否定のしようのない諦念だった。
脳裏に甦るのは、昨日の風景。あの仮面舞踏会を包み込んでいた熱い空気……、皇女ミーアの生み出した奇跡のような熱狂だった。
グロワールリュンヌの学生たちを歓迎するための会ということで、昨日、ヨハンナはパーティーに参加しなかった。ただ、遠くから、それを見ていただけだった。外野から、眺めていただけなのだ。
にもかかわらず……その光景には、圧倒されてしまった。
隣で同じく見学していた皇帝マティアスが、誇らしげな顔をしているのが、ちょっぴり腹立たしくもあり、されど……。
――あれが、アデラの娘、パトリシアさまの孫娘なのじゃなぁ……。
などと思うと、ついつい感慨深くなってしまったりもして……。
それほど訴えかけるものがあったのだ、昨日の光景には。
――あのただ中にあったこの若人たちに、妾の言葉が、はたして、どれだけ届くものか……。
先ほどのフーバー子爵の言葉も、正直なところ空回りしている感が強かった。
己が娘のカルラは、もちろん、グリーンムーン家のヤーデンもあまり真面目に聞いている様子はなかった。

唯一、例外は……端のほうにいる目つきの鋭い少年で……。
――確か、フーバー子爵の、遅くできた息子であったか。
今回のグロワールリュンヌの選抜メンバーには、フリオ・フーバーの息子、ナコル・フーバーも選ばれていたのだ。
――さすがに、父の教育が行き届いているということか。しかし、一人だけやる気があったとしてもな……。それが、妾の言葉で、さらに二、三人増えたところで、はたしてなんの意味があるのやら……いや……。
と、そこでヨハンナは思い直す。
――そうじゃな。ミーア姫殿下は、パトリシアさま譲りの知恵を持っている。仮面舞踏会のみならず、討論会自体にも何か狙いを持っておられるのではあるまいか……。
仮面舞踏会で、すでに勝負は決したように見えるのに、それでもなお討論会自体は開くという。それならば、そこにミーアがなにかの意味を見出している、とヨハンナは考える。
――妾は、それを見届けねばなるまい。アデラの代わりとして、パトリシアさまの代わりとして……。
ミーアの思惑、真意をしっかりと見極めねば、と改めて思う。
なぜならば……ヨハンナはまだ譲ることができないからだ。
ミーアの思惑に乗ること、ミーアの成そうとしていることに賛同することが、できないからだ。
皇太后パトリシアから託されたものがある。
ティアムーン帝国を、ミーアを、よろしくと頼まれたのだ。あの日託されたものを……その信念を、凌駕する価値が、ミーアの成すことにあるのか、どうか。
――妾は見極めねばならない。討論会は、そのためのものとなろう。ならば……。
ヨハンナは、小さく息を吐いて……。
「フーバー子爵の言ったとおりじゃ。我が帝国の、栄えある中央貴族として義務を果たせ。誇りを持って議論し、堂々とこの学園の者

たちを打ち倒すのじゃ」
厳かに、高らかに告げた。

一方、その頃、ミーアはと言えば……。
「ふわぁむ……ううむ……眠いですわ」
大きなあくびをしながら、少し遅めの朝食をとっていた。ちなみに、なぜ、そんなに眠そうなのかと言えば……。朝、早めにアンヌに起こされたからだ。
「ミーアさま……ミーアさま」
ゆさゆさ、と体を揺すられる感覚。ミーアは、ぼんやーりと目を開け、辺りを窺う。かすむ視界に現れたのは、自らの忠義のメイド、アンヌであった。
「あら？　アンヌ、どうしましたの？　こんな早くに……」
一目でわかる。まだ、辺りは薄暗い。起きるにはまだ早い……まだまだまだまだ早い！　と即座に判断。再び、寝に入ろうとするミーアに、アンヌがむむむっと真剣な顔で……。
「実は、タチアナさんから、指示をいただいておりまして……。ミーアさま、昨日は少し食べ過ぎたうえ、運動量が足りないご様子でしたから、本日は、朝から軽く運動をしていただこうと思います」
「……はぇ？」
しぱしぱの目を瞬かせるミーアに、アンヌは続ける。
「ミーアさまのご健康を守るため、しばし、私はとぉっても厳しくしなければなりません」
「え……あ……ちょ、アンヌ？　なにやら、目つきが、怖いですわよ？」
などと慌てるミーア。なんとか、アンヌを諌めようとしているところへ……。
「おはようございます！　ミーアお祖母さま！」
元気よくドアを開け、ベルが入って来た！
「あら、ベル……こんな朝早くにいったいどうしましたの？」

「はい。ミーアお姉さまの健康作りにお付き合いしようかと思いまして。それに、冒険旅行の体力作りのためにも、一緒に運動、頑張りますよ！」
ミーアが逃げられないように、アンヌに呼ばれていたベル、その後ろにシュトリナと監視役のリンシャの姿もあって……。
「え……あ……え？」
「頑張りましょう、みなさん」
恋愛大軍師アンヌの巧みな用兵により、完全に逃げ道を塞がれたミーアなのであった。

第百十四話　ミーアの脳みそ、運動によりいい感じに整う！

「ふぅむ……」
さて、朝食を食べ終えたミーアは、お腹を軽くさすり……。
「なにやら……とっても美味しくいただけましたわね！」
早起きしての運動は、実に良い具合にミーアの体を整えてくれた。
正直、眠いし面倒だなぁ、と思っていたミーアだったが、アンヌの熱心さに負けて、仕方なく運動に参加したのだが……そのおかげで、しっかり目が覚め、そのうえ、お腹も良い感じに減ってくれた。
ということで、朝食も大変美味しくいただけたのだった。
「ありがとう、アンヌ。なんだか、すごく調子が良いですわ」
「はい！　それはなによりです」
ニッコリ嬉しそうに笑うアンヌに、ミーアも穏やかに微笑み返す。
ちなみに朝食は、昨日、野菜刻み隊が刻み過ぎた野菜をたっぷり、たぁっぷりと入れたスープだった。
スープにはパンが入っており、しっとりとしたパンと野菜の甘味を十分に味わうことができた。
ピリリとした香辛料も相まって、大変美味な野菜スープに、ミーアはついついお替りをしてしまったりもして。
「ああ、なにやら、とってもすっきりとした気分ですわ。充実した朝という感じですわね」
憑き物が落ちたような、すっきりした顔をしていた。なんだったら、実際に余分な憑き物（ＦＮＹ）が落ちたのではないかしら？などと思うミーアであったが、さすがにそこまで甘くはなく、アンヌトレーニングは、とりあえず、一週間の予定で実施されることになるのであった。
翌日からは、マティアスも参戦してきて、ミーア的には大変面倒くっせぇ！　ことになったりするのだが、まぁ、それはさておき…

…。

「やはり、健康のためには、たっぷり食事を食べて、適度に運動する。これこそが大切なことですわ。食事、食事、運動、食事……。これが大事なのですわ」

改めて、食事の大切さを実感するミーアであった。

ナニカがすり替わったような気がしないではなかったが、まぁ、それはさておき！

本日の討論会の会場へ向かいつつ、ミーアはすっきりした頭で考え始める。

討論会の、目的を再確認しておかなければ、と思ったのだ。

――討論会の達成目標を、きちんと設定しておくことが必要ですわ。

今のミーアにとって、パライナ祭はメインではない。そもそも、よくよく考えれば、パライナ祭では、どちらにしろ、セントノエルとの共同研究開始を発表しなければならないため、ミーア学園の参加は確定しているのだ。

――たぶん、ラフィーナさまがその辺りのことはなんとかしてくださるでしょうし、ぶっちゃけ、別にミーア学園が出なくても問題ありませんわ。面倒そうですし……。

そう割り切っている。

ゆえに、ミーアの真の目的は「グロワールリュンヌの学生たちに、このミーア学園の良さを伝えること」であった。

ここで教えている農学の良さを伝え、反農思想を払しょくすること。また、できれば、中央貴族の子弟たちに、ギロちんの危険性をわかってもらい、意識改革を進めていくこと。

それこそが、ミーアの達成すべき目的だ。

――今の貴族の当主たちは、わたくしが女帝になる頃には引退している者も多いはず。となれば、若い世代に正しい認識を持ってもらうほうが効率的というものですわ。

楽して、ギロちんを遠ざけられるならば、それに越したことはな

い。朝から運動&水浴びしたミーアの頭は、すっきり冴え渡っているのだ。

討論会の会場は、聖ミーア学園で最も広い教室だった。

大きな六角形の教室の中央には、机が四角く置かれており、それを取り囲むように傍聴用の椅子が並べられていた。

机には向かい合うようにして、すでに、聖ミーア学園の生徒たちと、グロワールリュンヌの生徒たちが並んでいた。

ミーア学園のリーダーは新月地区の孤児院出身、孤児院の歴史上一番の秀才と謳われた少女、セリアだった。

やや緊張して、うつむいている彼女に、ミーアはそっと歩みより、その肩に手を置く。

「あ……ミーア姫殿下」

「セリアさん、今日はよろしくお願いいたしますわね」

「はい……精一杯務めさせていただきます……」

そう答えたものの、その声には覇気はなく。その瞳は不安に揺れていた。

数瞬、迷った様子を見せたうえ、セリアは続ける。

「あの……本当に、私で、よろしいのでしょうか？」

「……ふむ」

不安そうな顔で問いかけられて、ミーアは思わず考える。

――ここで、口先だけの適当な励ましを言っても、意味はありませんわね。

朝の適度な運動が、ミーアの脳みその血流をいい感じにしていた！

自らの勘に従い、ミーアは、嘘偽りのない本音で勝負することを決断。口を開く。

「わたくしが選んだわけではないので、あまり軽々しくは言えませんけれど……わたくしは、あなたが、この聖ミーア学園で努力してきたことを知っておりますわ」

そう……ミーアは知っている。この学園は、あのクソメガネの師匠、ガルヴが理事長をしている学園なのだということ。しかも、セリアに関しては、他ならぬミーアが余計なことをやっちまったせいで、ガルヴに直接、師事するように手配してしまったのである。

――あのガルヴさん……見た感じは好々爺っぽいですけど、それでも、ルードヴィッヒらの師匠ですし……。きっとあのクソメガネの数倍は心を抉ってくるはず。厭味ったらしくねちねちと、言ってくるはずですわ……にもかかわらず、ここに踏みとどまっているというのは、十分に誇るべきことなのではないかしら……。

そうして、ミーアはセリアの目を見つめ、頷いてみせる。

「あなたは、あの孤児院から聖ミーア学園にやってきて、逃げることなく、学びを続けてきた。それこそが、あなたがこの席に座る資格を持っているという証左なのではないかしら……？」

ミーアのその言葉に、セリアはポカンと口を開けたが……その顔が徐々に嬉しそうに笑みを浮かべていく。

「それに、あなたは一人ではありませんわ。セロもワグルもおりますし。だから、絶対に大丈夫ですわ」

「はい……！　ありがとうございます、ミーアさま」

明るくも、活力のある声を上げたセリアに、ミーアは満足げな笑みを浮かべた。

第百十五話　大将軍ミーア・ルーナ・ティアムーン、開戦を告げる！

ミーアが入室してから待つことしばし、ユバータ司教が入って来た。その後ろには、ルシーナ伯爵家の兄妹が続く。

裁定役のヴェールガ勢が席に着くのを待ってから、ミーアは静かに口を開いた。

「みなさま、お揃いですわね。昨日は、歓迎パーティー、お楽しみいただけましたかしら？」

そんなミーアの問いかけに、ヤーデン・エトワ・グリーンムーンが立ち上がる。

「昨日は、素晴らしい歓迎会を感謝いたします。ミーア姫殿下。我ら、グロワールリュンヌ校の一同、姫殿下のお計らいに、心から感謝をおささげいたします。それに……」

なにか言いたげな顔をしてから、ちらり、とヤーデンが視線を向けた先……、そこにはヨハンナと、ティアムーン帝国皇帝マティアスの姿もあった。

――ふむ、これはほめ過ぎるとヨハンナさんにお叱りを受けると考えたか……。しかし、お父さまの手前、わたくしの学園に対する礼も尽くす必要があるか……とか考えているのかしら……。

色々と葛藤を抱えていそうなヤーデンに、ミーアは助け舟を出すことにした。

「その言葉、きっと我が聖ミーア学園の者たちも喜ばしく思うことでしょう」

ミーアの側で、ヤーデンからのお礼を学園のお礼へと転化してしまう。それから、余裕たっぷりの態度で辺りを見回し……。

「さて、本日は討論会によって、お互い存分に、議論を戦わせていただきたいですわ。無論、戦わせると言っても、昨日も言ったとおり両校は敵同士ではありませんけれど……」

大切なことなので、もう一度、強調しておく。
そう、敵同士ではない。どちらの学校が勝とうがミーア的には構わない。
むしろ避けるべきは、相手を倒すために不毛な罵り合いになること。揚げ足取りをしあうこと。それでは議論が深まらない。
グロワールリュンヌの学生の意識改革こそがミーアの真の勝利である以上、きちんと意義のある議論をしてもらわなければならない。
――それと、きちんとテーマを設定してあげることも肝要ですわね。
そう考えつつ、ミーアは静かに言葉を連ねる。
「あまり内容を絞らずにいては、有益な議論もできないことでしょう。であれば、ここはやはり、両校の意見が別れそうなものをテーマにして、話し始めるのがよろしいのではないかしら……」
そうして、ミーアは微笑んで、悠然と告げる。
「討論のテーマはずばり『農学』でいかがかしら？」
「ミーア姫殿下、それは……」
腰を浮かそうとするフーバー子爵。ミーアは、チラリと横目を向けて、
「あら？　それほど驚くことでもございませんでしょう？　聖ミーア学園の一番の強みは農学ですし……。最大の功績もまた、寒さに強い小麦ですから。パライナ祭についても、そのテーマで参加することになるでしょう」
それから、静かな目でグロワールリュンヌの学生たちを見つめて……。
「そして、言わずもがな、グロワールリュンヌの者たちにとって、農学は否定されるべきものでしょう？　帝国貴族の間では、農業をする者は才なき者という扱い。帝国の国土は、非常に恵まれた土地ゆえに、なんの才能もなくとも、農作物はできる。簡単に収穫を得られる。だからこそ、それは才なき者のすることだ。さらに言えば、農業などと言うつまらないものは、属国であるペルージャン農業国

にやらせておけばよい、と、そのような常識がまかり通っているのではないかしら？」
ミーアが口にした常識、それは徹底して叩くべき、初代皇帝がこの帝国の施した呪いの縛りだ。その恐ろしさに気付いている貴族が、はたして、どれだけいるだろうか。
――この討論会はグロワールリュンヌの者たちに気付かせるためのもの。あのクソッたれな初代皇帝が確立した反農思想を明らかにするためのものですわ。だからこそ、きちんと言葉にしてあげませんと……。
と、その刹那……ミーアは不意に、とある想いに囚われる。それは……。
――ああ、そうか。そういう意味ではこれは……過去の初代皇帝との戦いということになるのではないかしら……？
それは、帝国を縛って来た古き呪いを、白日の下に晒すための戦い。
初代皇帝の確立した滅びの仕組み、悪しき価値観との戦い。
敵は、これまでの歴史の流れによって固められた、極めて強固な、ティアムーン帝国の伝統だ。
対して味方は、ミーアが絆を築いてきた者たち。
そして――この帝国の未来をより良きものにしようという意思を持つすべての者たちだ。
――だから、わたくしは、グロワールリュンヌの生徒たちを敵だと思えないのですわね。なにしろ、彼らとて、決してこの帝国の滅びを望まないでしょうから……。
結局のところ、グロワールリュンヌの生徒たちというのは、かつての自分と同じものなのだ。
前の時間軸において、なすすべもなく滅びに堕ちていった被害者なのだ。
中央貴族の者たちの、そのほとんどは、断頭台にかけられたかどうかは別にして、破滅させられたのだ。

蛇に……あるいは、初代皇帝に。
――そして、ミーア学園の生徒たち、孤児たちや平民の出の者たちも、クソッたれな初代皇帝のせいで被害を受ける者たち。いわば、互いに被害者と言えますわ。
だからこそ、手を結び、戦うことだとてできるはずなのだ。
この帝国の幸福な未来という旗のもと、共に戦うことができるはずなのだ。
――ならば、その総指揮官たるわたくしとしても気合を入れなければなりませんわね。これは、わたくしの最大の敵との戦いなのですから。
静かに顔を上げ、ミーアは告げる。
「そのような常識を持つグロワールリュンヌのみなさんにとって、我がミーア学園の農学に対するスタンスは決して放置できないもののはず。であれば、それをテーマにして討論することに、何の不都合がございますかしら？」
ニコリとフーバー子爵に微笑んでみせてから、ミーアは改めて、生徒たちに目を向ける。
「両者の議論が、このティアムーン帝国にある問題を照らし出し……より良い未来を引き寄せられるよう、祈りますわ」
切実な祈りの言葉と共に、一つの戦いが始まろうとしていた。

第百十六話　クソメガネの系譜、脈々と……

「では、農学というテーマで、聖ミーア学園の研究についてお話しさせていただこうと思います」
そう言って、セリアが立ち上がった。合わせて、用意していた資料を、ワグルが全員に配っていく。
「近年、帝国の小麦の収穫高が落ちているということを、ご存知でしょうか？」
セリアが指し示した資料には、帝国のいくつかの土地の収穫高についての数値が書かれていた。ルードヴィッヒの同輩、バルタザルとジルベールのまとめたものを、ミーア学園の教材として使っているのだ。
将来、赤月省や青月省に“物のわかっている”官僚が増えてほしいという、切実な願いの結晶だ。
「旧来の小麦の収穫高は、この夏の寒さでかなり低下しています。その減少量は、領民たちを飢えさせるほどで……」
「それが、どうしたというのだ？」
グロワールリュンヌの男子学生が遮るように言った。
「どうした……というのは、領民が餓えても問題ないと……？」
一瞬、セリアの目つきが鋭くなるが、男子学生のほうは涼しい顔のまま、
「いや、そうは言わん。しかし、帝国内で獲れなければ、ペルージャンなり、周辺国から買えばいいではないか」
その言葉に、周りの学生たちも、同意を示すように頷いている。
――そう。これが彼らの常識ですわ。なければ買えばいい。それが、帝国貴族の一般的な認識。いえ、むしろ、領民を飢えさせないという立場をとっている分、良識的な見解と言えるかもしれませんわ。まぁ、ユバータ司教の手前ということもあるでしょうけれど…

…。
そして、その、他国から買えばいいというのは、前時間軸のミーアの認識でもあった。
ないのなら、ペルージャンやガヌドス、ヴェールガ辺りから買えばよいのだ。自分たちのもとにおべっかを言いに来る商人など、吐いて捨てるほどいる。
「小麦を買ってやる」と言えば、奴ら、きっと涎を垂らして喜ぶぞ！　むしろ、買ってやれば、今後もごひいきに、と、なにか手土産も持参するかもしれないではないか。
門閥貴族は、食糧不足を、適当に金で解決できる問題だと考えている。
――けれど……問題は買える小麦があるとは限らないということ。そして……商人は、彼らの考えるほど甘くはないということですわ。
供給量が不足している時に、小麦を欲すれば、その値段は法外なものとなる。ミーアが実体験として知っていることである。
そして、その仕組みをも、ミーアはルードヴィッヒから聞いていたのだ。
――わたくしが欲しいケーキは、みんなも欲しい。だから奪い合いになり、より高い値段で買うと言った者のもとにいく。とてもわかりやすい話ですわ。
あのわがまま皇女ミーアでもちゃんと理解できるように説明した、クソメガネの苦労が偲ばれる話であった。まぁ、それはさておき……。
「そうですね。実際に、小麦が不足した地域では、他国、他領から来た商隊から買い付けて、その不足分を補っています。けれど、その結果はどうでしょうか？」
セリアは変わらず、落ち着いた口調で言う。
「その領地からは、本来不要なはずのお金が外に逃げています。本来、別のことに使えたはずのお金が小麦に使われた。それも、輸送費のかかった、通常よりも遥かに割高の小麦に……です。それは無

駄な支出と言えるのではないでしょうか」
セリアは指摘する。
自領の小麦が不足したがゆえに『無駄』が生まれた。そのお金が、あれば、なにか別のことができたのではないか、と。
「農学は無駄を出さぬための学問。それどころか、飢饉の際には、金銭を稼ぐ大きな力になると思います。ここで、聖ミーア学園から寒さに強い小麦の提供を受けた、ベルマン子爵領の収穫高、並びに財政状況をお知らせしたいと思います」
セリアの言葉を聞きながら、ミーアは感心していた。
――なるほど。考えましたわね、セリア。農業を領内の経済状況と結び付けて、農学の価値を語ろうとしている……貴族にもわかる価値観で説明しようとしておりますわね。
飢饉における犠牲者の数は産出することはできない。なぜならば、大飢饉は起きなかったからだ。
あの地獄を実際に経験すれば一目瞭然のことであっても、それを見せることはできない。
それに、仮に寒さに強いミーア二号がなかったとしたら……などと言う試算を出すことには、あまり意味はないだろう。なぜなら、それは起こらなかったことだからだ。
しかし、財政的な状況であれば、目に見える形の利益・不利益という形で提示することができる。しかも、貴族に理解できる価値観で。
貧民がどれだけ死のうとも、貴族の心を動かすのは難しい。けれど、自分たちが使える金が減ると言われれば、グロワールリュンヌの学生たちだとて、無視はできないはず。
そして、それゆえに、ミーアネット……すなわち、ミーアが手配した食料援助に関しては、勘定から抜いてある。話がややこしくなるために、あえて省いてあるのだろう。足りなくなっても、ミーアネットに助けてもらえるんだから、無駄な支出は出ない、などと言われては元も子もない。

――しかし、この『相手にわかる形で説明する』というのは、ちょっぴりクソメガネみがありますわね。クソメガネは、わたくしにわかるように説明するのは骨が折れるとかなんとか言っておりましたし……

セリアの言葉を受けて、立ち上がったのは、ドミニク・ベルマンだった。

「我が領地、ベルマン子爵領では、聖ミーア学園に農地を解放しました。複数の農村にミーア二号小麦を提供した結果、収穫高は、例年とほぼ変わらぬ量を維持しています。通常の小麦の不足分をミーア二号小麦で補った結果、隣接の領地にも売ることで、財政的にも微増が見られると……」

「ふふ、ベルマン子爵領では、まぁ、そうでしょう」

どこか馬鹿にした口調で、グロワールリュンヌの学生が笑った。

ミーアは、その顔に見覚えがあった。

――あの顔、どこかで……。ふぅむ、どこでだったかしら……？

首を傾げるミーアの前で、その男子生徒は続ける。

「この僻地では、他に外貨を稼ぐ手段はない。領内に目だった才ある者もいないのでしょう？　ならば農作物に頼りたくなるというのもわかる。しかし、我ら中央貴族にとってはそうではない」

彼はセリアのほうに視線を向けて……。

「先ほど、そちらの娘が言った『無駄』という点で言うならば、農地に使う土地は無駄になるのではないか？　領地は有限。であれば、もっと価値のあるもののために使うべきでしょう」

――ふむ、これは、なかなかに手ごわいですわね。

セリアの攻勢で早々に決まってしまうのではないか、と思っていたミーアであったが……どうやら、話はそう簡単ではないらしい。

――まぁ、この帝国建国以来の呪いですし……この機会に根の部分から掘り起こしてしまうべきですわね。

ミーアは、ニッコリと笑みを浮かべて、

「なるほど。そちらの方……ええと……」

「お初にお目にかかります。ミーア姫殿下。私はフーバー子爵家の長男、ナコル・フーバーと申します」
「ほう、あのフーバー子爵の……なるほど」
ミーアはチラリとフーバー子爵に目をやってから……。
「わたくし、あなたの話に興味がございますわ。農地よりも価値のあるものとは、どのようなものかしら？」
きょとん、と首を傾げてみせるミーアであった。

第百十七話　クソメガネの教え、脈々と2

「ミーア姫殿下……」
っと、少しばかり慌てた様子で立ち上がったフーバー子爵に、ニッコリ笑みをみせて、
「ふふふ、そうですわね。確かに、少々、話がわき道に逸れてしまうかもしれませんけれど、それでも、実に興味深いお話でしたから、ぜひ、もっと深く聞きたいですわ。グロワールリュンヌの方の見解を」
あくまでも、グロワールリュンヌの意見に耳を傾けるだけですよ、という体で、ミーアはグロワールリュンヌの学生たちのほうに目を向ける。
「農地より価値のある土地の使い方があるのであれば、なるほど、確かに、農地にしておくのは無駄という理屈になるでしょう」
その論理は一見すると正しいように感じる。が……。
「では、具体的に、農地より価値のある使い方というのは、いったいなにかしら？」
言いつつ、ミーアは横目に誰かを探す。その男は壁際に立って、討論の様子をジッと眺めていた。ミーアと目が合うと、ハッとした顔で頭を下げる男……ルードヴィッヒ。
ミーアの脳裏に、忠臣、ルードヴィッヒ・クソメガネ・ヒューイットの声が甦る。
「ルードヴィッヒ、わたくし、良いことを思いつきましたの」
ある時、ミーアは、得意げに言い出した。
ミーアは昨晩、考えたのだ。
帝国の状況を改善するために、どうするのか……。
ルードヴィッヒは言っていた。帝国の問題点は入ってくるお金よ

り出て行くお金が多いことだ、と。それをなんとかするにはどうするか……。
解決は、極めて簡単なことではないか！
「帝国の問題を解決するには、出て行くお金より、入ってくるお金を増やせばよい。つまり、小麦一袋を金貨百枚で輸入するならば、その倍の額、外国に輸出すればよい。それだけで、帝国の財政は回復する。非常に簡単な話ですわ！」
得意げに胸を張るミーアを静かに眺めたルードヴィッヒは……
「なるほど、素晴らしい見識ですね。私が教えたことがよくご理解できているようです」
っとにこやかに拍手をした後、
「では、どのように輸出を増やすのか……、具体的にはどうすればよいでしょうか？」
真顔で尋ねて来た。
「……はぇ？」
「この帝国の、どのような物を売りましょうか？　なにか、他国が欲しがる物がこの帝国に残されているでしょうか？」
「え、えーっと、ああ、ほら、お母さまのご実家の絹織物、とか……？」
「コティヤール侯爵領はすでに革命の火で焼かれました。産業が回復するまでにはしばらくの時間が必要となるでしょう」
「ええと、それでは……宝石、とか……？」
「残念ながら、我が帝国には名産品となるような宝石はほとんどありません」
「え、えええと、あとは……うーぬぬ……」
っと唸るミーアに、ルードヴィッヒは、ふっと笑みを浮かべて、
「申し訳ありません。我ながら意地悪をしました」
そっと眼鏡を押し上げてから、彼は言った。
「本来、そのようなことは、我ら臣下が考えるべきことだと思います。なにを売るか、なにを作るかなどは、皇女殿下御自らが考える

必要はないでしょう」
「なっ！」
あまりの言葉を失うミーア。しかし、考えてみればそれも当然のことで……。
――そっ、そうですわ！　わたくしがそんな細々したことを考える必要もなければ、知っている必要だってございませんわ！　ぐぬぬ、このクソメガネ……また、意地の悪いことをねちねちと……。
っと、怒り心頭のミーアに、一転、ルードヴィッヒは真面目な顔で、
「しかし、どうか覚えておいていただきたいのです。ミーア姫殿下。あなたの言葉は……とても重いものなのです」
「はて？　重い……とは、どういうことですの？」
「あなたの希望を通すために時に軍が動き、民衆が犠牲になることもある、ということです」
その言葉は、鋭く、ミーアの胸を抉った。
「あなたは、輸出すればよいという。輸出して、小麦を買う金を作れという。しかし、現状、帝国に、そこまでの輸出品はないのです。小麦を賄うだけの品はないのです」
改めて聞かされる帝国の惨状。革命軍に削り取られ、焼かれ、帝国は今まさに死に瀕しているのだ。
「にもかかわらず、あなたが、その命令を下したらどうなるでしょうか。その命令を実現するために、兵たちは民草の持ち物を徴収し、他国へ売り渡すかもしれない。それだけならばまだ良いでしょう。しかし、それで足りなければ、民の子を、男を、女を、民自身を、奴隷として売って外貨を得ようとするかもしれない。むしろ、必要な小麦の量を減らすため、民の口減らしのために、積極的に、奴隷売買に手を染めるかもしれない」
「そっ、そんなことしろとは、わたくしは言っておりませんわ」
慌てて主張するミーアだったが、あくまでも冷静にルードヴィッヒは首を振った。

「それはわかっています。しかし、状況を一切理解せずに下される命令は、下々の者たちに無理を強い、時に最悪の忖度という形で実現してしまうのです」
上の者の無責任な命令を、絶対に不可能な命令を……実現するために、下々の者が過激化し、取り返しのつかない悲劇を生む。それは現実として、今まさに、帝国各地で起こっていることだった。
貴族の暴虐は、貴族本人によるものばかりではない。無知ゆえの無謀な命令によって、臣下が起こしていることも多いのだ。逆に、臣下が、領主の無茶な命令を大義名分として、好き勝手に振る舞うというケースも存在する。
「ミーア姫殿下、私は、上に立つ者がすべてを知っている必要はないと思います。具体的な方策を考える必要もないとも思います。されど、あなたは、ご自分の言葉の重さに釣り合う程度には、物を知らなければならない。ご自分の言葉によって、どのような事態が起こるのか、ある程度はわかっていなければならない、と私は考えます。少なくとも、絶対に不可能な命令は出すべきではない。その命令の可否を必ず家臣に問うべきだし、家臣があなたに否と言える関係を築いておかなければならない。そのためにこそ、私は、あなたに教えているのです」
その言葉は、ミーアの魂に確実に刻まれていた。
だからこそ、ミーアは思うのだ。
できるかできないか判断してくれる、知恵袋をそばに置き、自らはイエスマンに徹しようと！
まぁ、一応は、勉強のほうもそれなりに頑張るつもりではあるのだが……それはさておき。

――フワッとしたことを言うやつには、具体的にという言葉が意外と利くんですのよね。
ミーアは、経験則に則って、もう一度尋ねる。
「具体的に、農地より優れた価値のある使い方とは、どのようなも

のかしら？」
腕組みしつつ問う。
――あの時は、したり顔で、具体的には？　とか聞いてきてましたわね……クソメガネ。あれには、ムカつきましたけれど……ふっふっふ、こうして自分でやってみると、実に楽しいですわ。
「具体的に、ですか？」
その問いかけに、ナコルはわずかばかり言い淀む。その隙を逃さずに、ミーアは質問を重ねる。
「ナコルさんだけでなく、他の方も、なにかございますかしら？　農業が、下賤なものであるとするならば、それよりも貴い、価値ある土地の使い方とはどのような物なのか……」
そうして、ミーアは視線を向ける。
「わたくし、ぜひ聞いてみたいですわ」

第百十八話　ミーア姫、気持ちよく正論を振りかざす！

ミーアの無邪気を装った質問に、グロワールリュンヌの学生たちは戸惑った。

みなが、さりげなく互いの顔を見合わせて、どう答えたものか、と悩んでいる様子だった。

それを見たミーアは、思わず内心でほくそ笑む。

――まぁ、そう簡単ではございませんわよね。画期的な産業など、そうそう思い付きませんし。

外貨が獲得できるような画期的な産業があるならいいが、実際にはそうそう簡単に思いつけるはずもなし。あの革命期に、ミーア自身が考え、考え、考え抜いても、まぁったく思いつかなかったのだ。

そう簡単に思いつかれてたまるか！　という感じなのである。

まぁ、実際のところ、ミーアが思いつかないからと言って、他の者たちまで思いつかないかといったら、そんなことはないはずなのだが……。

それでも、これまでの中央貴族たちの誰もが知恵を絞った末のこの状況なのだ。

歴史的に、さまざまな可能性が実行されてきたうえで、国の状況をルードヴィッヒは評したのだ。

「帝国の問題は、入ってくるお金よりも出ていくお金のほうが多いことだ」と。

ゆえに……。

「例えば、ええと……き、絹織物とかはいかがでしょうか？　ドレス用の素晴らしい生地を……」

口火を切ったのは、今まで黙っていた別の男子生徒だった。

「ほう……我が母アデライードの実家、コティヤール領のライバルに立候補する……っと？」

その言葉に、鋭く目を輝かせたのはミーア……だけではなかった。その後ろの席に座り、ジッと話を聞いている皇帝……マティアス・ルーナ・ティアムーンが、実になんとも鋭い目で見つめていた！

それに気付いた男子生徒は、ひぃっと悲鳴を上げて、うつむいてしまう。そこへ、ミーアは追撃！

「実際に、帝国内にもう一つ、布製品の根拠地ができるのは良いことかもしれませんけれど。しかし、コティヤール領だとて、農地をすべて潰してそこを布職人の家だとか、養蚕業に使ったりはしておりませんわ」

きょとん、と頬に人差し指を当てて、ミーアは言った。

「それに、あまり大量に作ると、値段が落ちて、却ってよくないという考え方もあります」

補足するようにセリアが続く。

――なるほど、小麦が手に入らないと値段が高くなる、その反対ですわね……。

納得の頷きを見せるミーアの目の前で、今度は別のグロワールリュンヌの学生が口を開いた。

「では、鉄などはいかがでしょうか？　製鉄業を盛り上げるために、土地を有効活用すれば……。土臭い農業などに頼らずとも……」

「あの……」

その時だ。遠慮がちに手を挙げる少年がいた。

ミーア学園の生徒として参加していたエシャールであった。

美貌の少年王子を見て、グロワールリュンヌの女子学生たちが、色めき立ち……！　次の瞬間、なにやら、恐ろしい気配が膨れ上がるのを、ミーアは感じる！

思わず、辺りをキョロキョロしたミーアは、直後、見つけた。

弟の様子を心配そうに見守るシオンと、その隣のティオーナ……そのさらに隣！　女子生徒たちに、ギンッと鋭い視線を向ける、エメラルダの姿を……。

――って、別に憧れの視線ぐらい向けたっていいんじゃないかし

ら？　エメラルダさん、なかなかに大人げない……。
などと呆れるミーア。
一方で、エメラルダの弟、ヤーデンも姉の様子にいち早く気付いたらしく……、やれやれ、と呆れ顔をしつつも、グロワールリュンヌの女子学生たちを肘で突いた。それで、エメラルダの存在に気付いたのか、女子たちは一斉にエシャールから目を逸らした。
そぉんな外野の様子など気にせず、エシャールは言った。
「私は、あまり帝国内の事情に詳しくはないのですが、帝国内に鉄鉱石の産出する鉄山はあるのでしょうか？」
「……へ？」
「製鉄業は有力な産業だと思います。サンクランド王国内にもいくつか、鉄を産出する山はあり、そこは確かに、鉱山業の町として栄えています。しかし、それが成立するためには、まず鉄山がなければいけないと思うのですが……」
エシャールの素朴な疑問に、製鉄業を提案した少年は、ぽっかーんと口を開ける。
「いや、まぁ、鉄山はもちろんありますが……」
と言って、彼は、しまった、という顔をする。話しを聞いていたヤーデンも、舌打ちしかねない険しい顔をする。
なにしろ、帝国内の鉱山は、概ね四大公爵家とその係累によって占められているからだ。
最大の鉄山を有する地は皇帝直轄領にあたり、双璧を成す鉱山を所有するのはブルームーン家だったりもして……。
その権益を侵そうとするのは、いささかリスクのある発言と言えるわけで……。
「それに……」
そんな空気を察したのか、エシャールは冗談めかした口調で、
「土臭いのが嫌ならば、鉱山労働者も同じではありませんか？　あれも土にまみれてする仕事でしょうし」
ミーアもすかさず、それに乗り……。

「ふふふ、それもそうですわね。それに臭いを云々するならば、馬や動物を飼うのもダメかもしれませんわね。馬は可愛いですけれど、生き物は臭いますものね。土臭いのは駄目で、獣臭いのは良いというのは……個人の好みの問題になるのではないかしら？」

ついでに、牧畜の可能性についても軽くけん制しておく。

馬好きミーアの発言を受けて、グロワールリュンヌの学生たちは、ぐぬ、っと言葉を呑み込んだ。

「具体的なことは今は思い浮かびませんが、将来的に、農業より価値のある素晴らしい物に置き換えていけばよいと……」

っと、ナコルが立て直しを図るも……。

「それならば、今現在、土地を遊ばせておくのもなんですし、農地として活用すればよろしいのではないかしら？」

否定のしようのない正論で、ミーアはぶん殴りに行く！

それから、ミーアは穏やかな顔でそっと目を閉じ……。

「わたくしは、なにも、鉱山を閉鎖して小麦畑を作れ、などと言うことは申しませんわ。村の一つ二つを潰し、人々の家を潰してそこを畑にしようなどとは申しませんし……」

それから、ミーアはチラリとワグルと、ティオーナの隣で話を聞いていたリオラのほうに目を向けてから……。

「当然のことながら、無闇に森を切り開いて、そこを畑にしろ、とも申しませんわ。なにしろ、森には森の幸があり、鉱山には鉱山の幸があるものですし」

そこで、ミーアは肩をすくめて、

「わたくしが思うのはただ一つ。農業に適した土地があるのだとすれば、そこは農地にしてしまうのが良いと思っているだけですわ。そして、この肥沃なる三日月地帯は、農地に適した土地。才なき者すら大いなる収穫を得られる土地。ならば、この帝国で農業について教えることこそが、理に適ったことと言えるのではないかしら？」

それから、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

第百十九話　それは不自然なこと……

「ミーア姫殿下、そのように横から口出しされては……」
フーバー子爵が再び立ち上がる。それを見たミーアは、ああ、と小さく声を上げ……。
「それは申し訳ないことをしましたわ。つい興味がある事柄でしたので、自分の意見を口にしてしまいましたの」
朗らかな笑みを浮かべて、ミーアはいけしゃあしゃあと言った。
「これは無粋な介入でしたわね。さ、続きをどうぞ」
っと、ミーアは、聖ミーア学園の学生たちに話を振る。
――すごいな、ミーア姫殿下。すっかり、ご自分のペースに持ち込んでいるぞ。
それを見たヤーデンは、思わずといった様子でため息を吐いた。
――これは、フーバー教諭とは格が違うな……。だが、それ以前に……。
ヤーデンの感覚が訴えかけていた。ミーア学園の主張を覆すことは、極めて難しいということを。
聖ミーア学園の生徒たちは、優秀だった。
いくつかの種類の小麦を用いた交配実験、他の植物と合わせて植えた時の実験、種を蒔く時期に関する実験。さらに、小麦の種類と合わせた料理の開発などなど。
そこには隣国ペルージャンの知識も含まれているらしく、資料にはセロ・ルドルフォンと併記して、アーシャ・タフリーフ・ペルージャン姫の名前が記載されていた。
そのどれもが、ヤーデンの目には、有効なものに映った。ある程度、物のわかっている者ならば、それが読み取れることだろう。
けれど――ミーア学園の主張を覆しがたく思うのは、生徒の優秀者が理由ではなかった。

ではなぜか……？　それは……。
――ミーア学園のやり方のほうが自然だから、か……。
その一言に尽きる。
そう、聖ミーア学園で農学を教えること……この帝国の、肥沃なる三日月地帯で農学を教え、農業を進めるということ……それは、ごくごく自然かつ真っ当なことのようにヤーデンには思えた。
湖がある土地で、湖を埋めて畑を作るだろうか？　否、そんなことはしない。湖があるならば、その魚を獲って生活すればいい。あるいは水を引いて、少し離れた平地に畑を作るのでも良い。
土地がまったくないならまだしも、わざわざ湖を埋め立てるのは不自然だ。
同じように農作に適した土地を潰して、なぜわざわざ、別の何かを作らなければいけないのか？
その何かの形もわからぬのに、なぜ、農地にするのを拒むのか？
いったい、なぜ……？
――そうだ……我ら貴族の教えは、ひどく……不自然だ。
ミーアが言っているのは、この帝国の土地を生かすのに最も良い方法はなにか、ということだ。
それは、自明の理なのだ。
この帝国では、才能のない者であっても……適当に種蒔きしただけで、多くの収穫を得ることができる。だから、農民は奴隷のごとく、一切の才なき有象無象がなるものだ、と……。
帝国貴族の常識に、刻み込まれている。
すなわち、この帝国の国土は『農業をするのに向いた土地』なのだ。
それが、聖ミーア学園の生徒、セリアやセロ・ルドルフォンの言葉によって解き明かされていく。そう、それは否定のしようのない事実だ。
では……なぜ……？　なぜ、こんなにも中央貴族の常識は歪められているのか？

ただ、嫌悪感という曖昧なものにより、なぜ、農業はこんなにも軽視されたのか……？

ゾクリ、とヤーデンの背筋に、得体のしれない寒気が走った。まさに、そのタイミングで、

「美味しいお茶菓子を出されれば、食べるのが当たり前。それが自然というもの……。それを食べないのは不自然……それを実現しようとするには、意志の力が必要……」

お茶菓子を眺めながら、ミーアがつぶやくのが聞こえた。

――美味しいお茶菓子……？　いったい何を……いや！

疑問に感じたのは一瞬だった。あの帝国の叡智が（あの姉が大絶賛する、あの叡智が！）なんの意味もないことを、この場面でつぶやくだろうか……。

――否、そんなことは決してない！

あのエメラルダが自慢げに、誇らしげに語っていた皇女ミーアの偉業……それを鑑みれば、ここで無意味なことをつぶやく理由はどこにもない。であれば、あの言葉には意味があるはず……。

――不自然を実現しようとするには、意志の力が必要……。

例えばの話だ。

川の流れに逆らって、落ち葉が流れてくる……などと言うことがあり得るだろうか？　波に逆らってぷかぷかと、布が流れてくるなどと言うことがあり得るだろうか？

あり得ない。そう、あり得ないのだ。川の流れに逆らってくるならば、そこには川を遡ろうとする意志を持った生き物がいなければならない。波に逆らってくるとすれば、その布は、布ではなく生き物……海月かなにかでなければならない。

……まぁ、偉大なる帝国の海月は大抵の場合、波に逆らうような無駄なことはしないのだが、それはさておき……。

ヤーデンは、そこで、ハッと口を開けた。

「この帝国がより栄え、富むための方法、最も単純に、それを行う方法がある。にもかかわらず、それをしないのはひどく不自然なこ

と。そして、その不自然さは偶然に生まれたものではなく……何者かの意志によってもたらされたもの……？」
ヤーデンのつぶやきを聞いて、ナコル・フーバーが驚きの声を上げる。
「馬鹿な……。つまり、何者かが悪意を持って、この帝国の繁栄を阻害しようとしている、と……？　いや、そんなことが……」
彼のつぶやきを受け、困惑が広がっていく。
グロワールリュンヌの生徒たちの間に――そして、今日はお紅茶だけにしておきましょうか……などとちょっぴり気落ちした様子のミーアの顔にも！
「ミーア姫殿下！　要するにおっしゃりたいのはそういうことではないのですか？　何者かが、悪意を持って、帝国貴族の認識を変えようとしているのだ、と……」
みなの視線が、一斉に、ミーアのもとに集まっていき……！
「はぇ……い……、まぁ……その、そういう感じですわ」
ミーアは深々と頷き、堂々たる仕草で紅茶のカップを持ち上げるのだった。

第百二十話　紅茶を飲みつつ、考えて……

「それは申し訳ないことをしましたわ。つい興味がある事柄でしたので、自分の意見を口にしてしまいましたの」

フーバー子爵の指摘を受け、ミーアはちょっぴり反省した。

――ああ、いけませんわね。ついつい、口を挟み過ぎてしまったみたいですわ。今回の主役は学生たちですし……。少し控えなければ……。

そうして、話をミーア学園の学生に譲ってから、ミーアは目の前のお茶に集中した。

上等な紅茶と共に、目の前に出されたのは……美味しそうなケーキだったっ！

わぁっ！　と内心で声を上げつつ、ミーアは早速フォークを手に取る。いや、取ろうとした……。

けれど、そこでミーアはハッとする。

ススッと視線を動かす、と……アンヌが実に心配そうな顔で見つめていた。ギュッとスカートを握りしめて、真っ直ぐにミーアに視線を向けてくる。

――ここで好き放題にケーキを食べてしまっては、今朝の運動が無駄になってしまうかもしれませんわ。それに、アンヌの心遣いを無碍にすることになるかも……。

ミーアは小さく息を吐き、フォークを置こうとした……置こうとしたのだ！　しかし、そこで、驚愕の事実に気付く！

――て、手が、動きませんわ！　こっ、これはいったい！

すわ毒薬でも飲まされたか？　などと思うも、すぐに違うと気付く。

――わたくしの身体が……この美味しそうなケーキを欲している。わたくしの理性に逆らって動こうとしているというんですの？　は

っ！　ということは、わたくしが気付かぬうちに食べ物が消えている現象も、わたくしの身体が勝手に動いたということ？　この体がわたくしに逆らっているということですの！？
　などと……愉快なことを考えつつ、ミーアは首を振り、
「美味しいお茶菓子を出されれば、食べるのが当たり前。それが自然というもの……それを食べないのは不自然ともいえる」
　思わずつぶやいてしまう。そうなのだ、目の前にケーキがあれば食べるのが当然というものなのだ。それは、ちょうど、手を放したフォークが下に落ちるのと同じようなもの。
　食べるのが自然。食べないのは不自然。その不自然をするためには……。
「それを、実現しようとするには、意志の力が必要……」
　うぐぐっと右の手を左の手で押さえ、意志の力を総動員。ケーキから全力で意識を逸らしつつ、なんとか、紅茶のほうに意識を向ける。
　ミルクたっぷりの紅茶には、当然、砂糖は入っていないが……仕方ない。これで我慢！
　ミーアは紅茶を一すすり、ふぅーっとため息を吐いたところで……。
「この帝国がより栄え、富むための方法、最も単純に、それを行う方法がある。にもかかわらず、それをしないのはひどく不自然なこと」
　なにやら、グロワールリュンヌの学生、ヤーデンが驚愕の表情を浮かべていた。
　――はて、ヤーデンさん……。どうかしたのかしら？
　不思議に思いつつ、成り行きを見守っていると……。
「そして、その不自然さは偶然に生まれたものではなく……何者かの意志によってもたらされたもの……？」
「馬鹿な……。つまり、何者かが悪意を持って、この帝国の繁栄を阻害しようとしている、と……？　いや、そんなことが……」

なにやら、困惑の表情を浮かべるグロワールリュンヌの学生たち。それを見て、ミーアも、はて？　と小首を傾げる。傾げつつも……、「ミーア姫殿下！　要するにおっしゃりたいのはそういうことではないのですか？　何者かが、悪意を持って、帝国貴族の認識を変えようとしているのだ、と……」

思わぬ質問が飛んできた。

「はぇ……？」

思わずヘンテコな声が出るも、瞬間に察する！　これは、なにか、流れが来ている気がするぞ！　っと。

即座に首の動きを修正、深々と頷くムーブを取りつつも、

「い……。まぁ、その……そういう感じですわ」

それから、紅茶を一口。ゆっくり、じっくり飲んで、時間稼ぎをする。

――ヤーデンさんの言葉を、思い出す必要がございますわ。帝国がより栄えるために農地を活用すればいいのに、それをしないのはひどく不自然とか……そんな感じのことを言ってましたわね、そして、その不自然が起こるには、何者かの意志の介入が必要、と。

幸い、ミーアがつい先ほど考えていた『美味しそうなケーキを食する必然性に関する哲学的考察』と同じようなことを言っていたため、すぐに理解することができた。

そうして、ミーアは気付く。

――あら？　これ、もしかして、初代皇帝を上手いこと炙り出すことができるんじゃ？

ミーア学園の学生たちによって証明されつつある、農学の有用性。農地活用の合理性。にもかかわらず、それが今まで疎外されてきた不自然性。

そして、その不自然に、何者かの悪意が絡んだ可能性……！

グロワールリュンヌの学生たちは、貴族の常識に囚われがちではあっても、愚かではない。それを阻害する要素が多くあるだけで、合理的な思考ができないわけではないのだ。

ゆえに、彼らは辿り着いた。
初代皇帝の真実に繋がりそうな推論へと。
けれど……ミーアは、もう一度、紅茶をすすりつつ、考える。
――その悪意を持った何者かを初代皇帝である、と断定してしまっても良いものかしら……？
懸念点はそこである。下手に初代皇帝が犯人だったと言ってしまえば、受け入れられない者もいるだろうし、なにより……。
――それって、わたくしたち、皇帝一族の責任に繋がりかねないかもしれませんし……。
お前らのせいで、帝国が豊かにならなかったんだぞ、ふざけんな！　などと言われるような事態は避けたいところである。であれば……。
ミーアは静かに頷いて、みなの顔を見つめて。
「そう、何者か……この帝国に悪意を持った者が、農業に対する軽蔑の思想を過去に取り入れた。帝国貴族の思想は歪められてしまった。わたくしは、そう考えておりますわ」
キリリッとした顔で言い切るミーア。
とりあえず、未知の仮想敵を登場させることに決めたミーアであった。

第百二十一話　忠義のメイドは見た！

「なっ、何者か？　そっ、それはいったい？」
ざわざわするグロワールリュンヌの学生たち。けれど、ミーアは静かに首を振り、
「そこまではわかりませんわ。帝国の大貴族であったのか、グロワールリュンヌに入り込んだ異物か、それとも市井の思想家か……」
ミーアは、仮想敵を正体不明の存在とすることを決定。蛇という名前は使わない。なぜなら、それが何者であるかわかっていると言ってしまえば……。
――攻撃手段として、政敵を陥れるために、相手を蛇だと訴える輩が出てくるかもしれませんわ。あるいは、隣にいる者が蛇であると、疑心暗鬼になるかも……。
それは、帝国革命末期にミーアが目撃した、とてもありふれた風景。
相手が革命派だと糾弾して陥れ、あるいは、陥れられぬよう逆に訴え……疑心暗鬼は際限なく広がり、帝国は割れに割れた。それもまた、飢饉に対する国としての動きを著しく阻害するものとなった。
あるいはそれは……司教帝ラフィーナの世界、ベルが最期の皇女となってしまった世界の風景でもあった。
蛇は、通常の組織などではない。強硬な手段で叩けば、それを逆用し、混沌を増し加えていく。極めて厄介な存在であるうえ、それを説明したからといって対処ができるものでもない。
ゆえに、信頼できる者以外には情報を共有しないほうが良い。
革命期の人心の動きを知り、なおかつ、その面倒くささを体感するミーアだからこその判断であった。
そして、それ以上に、そもそも地を這うモノの書などというものは、その存在が明るみに出た時点で、悪影響があるという代物だと

いうこともある。
――秩序を破壊する知識が詰まった厄介な代物、そんなものがあると知ってしまった時点で悪影響がございますわ。興味本位で読んでみたくなりますし……。知識を知れば、使う誘惑にだってさらされるかもしれませんわ。
蛇の本体は、あくまでも、その思想だ。ゆえに、その思想に触れる者の数を限定するため、その存在自体を隠す必要がある。
ミーアの頭脳が、冴え渡っていた！
ちなみに、この時、ミーアはうっかり右腕を押さえるのを忘れていたり……目の前のケーキがいつの間にか、三分の二のサイズになっていたりしたのだが……それに気が付いたものは、忠義のメイド以外にはいないのであった。
まぁ、どうでもいい話ではあるが……。
もぐもぐ、ごっくん、と無意識に口を動かしてから、ミーアはあくまでも、フワッとした敵として、それを説明していく。
否！　ミーアはそこで気が付いた。
ソレを表すのに、もっと良い言葉がある。それは……。
「あるいは、それは、邪神や悪魔と呼ばれる存在、神にあだなす存在であるかもしれませんわね」
せっかくユバータ司教がいるのだ。こまめにアピールしておくに越したことはないだろう。
「いずれにせよ、悪魔であれ、人であれ……それが悪意を持った何者かであることは事実ですわ。なぜならばこの価値観は、帝国に害を為すものだからですわ」
セリアの資料によって、それは明らかにされていた。
帝国貴族の農業軽視に合理性はない。そこにあるのは、不合理な嫌悪感に基づいた価値観である。
それでも、なお、ナコル・フーバーは声を上げる。父であるフーバー子爵の心を代弁するかのように。
「帝国中央貴族の価値観が、帝国を害する悪であるというのですか

？」
「帝国が富まぬようにする、という思考が悪でないとするならば、我が帝国にとっての悪とはなにかしら？　食料とは人が毎日、必要とする物、決して不要にはならない物なのですから、それを改善し、豊作を目指すことほど帝国を富ませる物はないのではないかしら？」
静かに問い返し、次の瞬間、ミーアは自らの危険性に気付く。
頭の中、意地の悪い顔をした、巨漢の商人の姿がデーンっと現れる。
「いえ……しかし、その考え方はいささか商人的に過ぎるかしら……」
つぶやきつつも、ミーアは思考する。
――これでは、あのシャロークさんのような方にしてやられてしまいますわ。小麦よりも儲かる物、食物より儲かる物があるならば……『帝国を富ませるため』ならば、そちらに置き換えても良いということになってしまう。
危ない、危ない……とつぶやきつつ……ミーアは口を開いた。
「みなさんには、考えていただかなければなりませんわね。我ら、人の上に立つ者が持つべき、正しい価値観とは何か……」
「統治者が持つべき、正しい価値観……？」
「グロワールリュンヌでは、どう教えているのかしら？　貴族とは、どのようなものだと考えておりますの？」
グロワールリュンヌの学生たちは顔を見合わせた。
結局、答えたのは、リーダーであるヤーデン・エトワ・グリーンムーンであった。
「我ら、貴き血筋の者たちは、誇りを持って民の上に君臨し、帝国と帝室を守り奉り給う者である、と」
それは、極めて模範的な答えであった。そして、ミーアが否定しなければならないものでもあった。なぜなら、前時間軸、帝国を滅ぼした貴族の価値観は、それであるからだ。
「ふむ……。いささか具体性に欠けますわね」

「では、ミーア姫殿下は、なんである、とお考えですか？」
ムッとした顔で、ナコルが問いかける。
「そう……ですわね」
ミーアは思う。
あの……断頭台の未来を迎えぬために、どのような国にすればよいのか……。
ベルの生まれる世界が、光で包まれたものとなるためには、どのように振る舞えばよいのか……。
しばし言葉を探すかのような、どこか違う世界を見るかのような……あるいは、遥かな未来の帝国に思いを馳せるかのような……そんな遠くを見つめる目つきをしてから……。
ミーアは言った。
「少なくとも……農業に力を入れることは、正しいことだと思っておりますわ。農地を増やし、食べる物を増やすことは、正しいことだと確信しておりますわ。だって……」
ミーアは静かに瞳を閉じて……。
「今日、食べる物がある。明日も食べる物がある。これほどの幸せがあるかしら？」
地下牢の、あの日の空腹を思いながら、ミーアは問うた。
「明後日、子どもに食べさせる物がある、その次の日も……。それほど心安らかでいられることは、ありますかしら？」
まぶたの裏、あの日ぶつけられた憎悪を思う。
子を失った母親の、あの憎しみの視線を思う。
それから、聖ミーア学園の者たちに目を向けて……。
「共に食べ、共に踊った者たちを見捨てずに済む、その者たちの友を、親兄弟を、切り捨てるという判断をせずに済む……それほどの幸せがあるかしら？」
昨日の、歓迎パーティーの姿を思い浮かべながら……。
「もしかしたら、こう考えるかもしれませんわね。昨日、踊った者たちぐらいの食事ならば、我々で用意できるだろうと……。事実、

そうでしょう。けれど、飢饉が起きた時、あなたが友に食べさせるために用意した食料は、その友の家族や、友の友から取り上げたものかもしれない。食料が限られているならば、救える数が限られているならば……あなたたちは、救う者と救わない者とを、線引きしなければならなくなりますわ」

もしも飢饉が起きれば、皇女の特権で、自身の食料は用意できることを、ミーアは知っている。アンヌやルードヴィッヒ、その他大切な人たち、その家族の分も用意できるだろうとは思っている。

では……あの日、町を歩いていた母親は？　馬車の中から眺めた街並み、そこを行く人々は？

たぶん、救えない。それどころか、彼らが食べるはずだった食料を奪い、それにより、自身の食卓を満たすことにすらなるだろう。

それは、断頭台に駆け寄る、恐ろしい行為だ。

その未来が、ミーアにはありありと見えていた。ゆえに……。

「我らは……王侯貴族は……明日食べられる安らぎを我らで独占してはならない。我らは、その安らぎを民にももたらす者。共に食べ、喜びを分かち合う者」

それこそが、断頭台を遠ざける道だ。確信を込めて、ミーアは言う。そして！

「民を安んじて治めることが我ら王侯貴族の成すべきことと、神聖典にも書かれている通りですわ！」

ヴェールガ勢へのアピールを決して忘れることのない、ミーアであった。

第百二十二話　ヨハンナ、立つ！

――すごい……。ミーア姫殿下。

ミーアの言葉を聞いて、内心で感嘆の声を上げたのは、ルードヴィッヒ……ではなくバルタザル……でもなく、ガルヴ、ユバータ司教などでもなかった。

いや、まぁ、彼らは彼らで感嘆の声を上げていたことだろうが、あえて言わずとも、それは確実なことなので、別に言う必要もないだろう。

この時、ミーアのやりようを唖然とした顔で見守っていたのは、レアだった。

ミーアのやり方を見てしっかり学ぼうと思って聞いていたレアだったから、最初、戸惑いのほうが大きかった。

――ミーアさま、すごく口出ししてるけど、これじゃあ、ミーアさまとグロワールリュンヌの学生との討論会になってしまうような……。

その違和感は、さらに、ミーアの言葉で大きくなる。

「そこまではわかりませんわ。帝国の大貴族であったのか、グロワールリュンヌに入り込んだ異物か、それとも市井の思想家か……。あるいは、それは、邪神や悪魔と呼ばれる存在、神にあだなす存在であるかもしれませんわ」

――どうして、初代皇帝の名を出さないんだろう？　蛇も……。いや、蛇については仕方ないのかもしれない。あれは、信用のおける人以外には、秘匿しておくべき情報だから。でも……。

初代皇帝のことを隠しておく意味がない。

中央貴族の歪んだ常識を意図的に作り出した悪人がはっきりいるのだと、そう言ったほうが、説得力が出るのではないか？

首を傾げかけたレアであったが……続く言葉で、気が付いた。

「こう問わなければいけませんわね。我ら、人の上に立つ者が持つべき、正しい価値観は何か、と」
――ああ、そうか……ミーアさまは、討論の前提を整えようとされているんだ。
異なる価値観、異なる常識を持つ者たちが討論するのは難しい。すれ違い、噛み合わず、揚げ足取りに終始する、そんな討論会になってしまっては、両校の仲がこじれるだけだろう。
だから、ミーアは上辺の価値観を引き剥がし、同意できるところまで掘り進めた。
――初代皇帝の名前を出さなかったのも、そのためだ。その悪を個人のものとして扱わず……貴族の価値観に対する、普遍の悪として扱うために……。ミーアさまは、貴族にとっての善悪を定義しようとしているんだ。
あるいは……貴族の権威の裏付けである「民を安んじて治めるための権威」という言葉を、より具体的に定義しようとしている。
貴族にとっての善を定義するために、初代皇帝という個人や、蛇という集団の悪事にするのでなく、より普遍的な『悪』を論証しようとした。
だから、邪神や悪魔という普遍的な悪の名を出したのだ。
「今日、食べる物がある。明日も食べる物がある。これほどの幸せがあるかしら？　明後日、子どもに食べさせる物がある、その次の日も……。それほど心安らかでいられることは、ありますかしら？」
続くミーアの言葉には、なぜかはわからないが重みがあった。まるで、その苦難を実際に自身が経験したことがあるかのように……。
さらに、そのうえで、
「共に食べ、共に踊った者たちを見捨てずに済む、その者たちの友を親兄弟を切り捨てるという判断をせずに済む……それほどの幸せがあるかしら？」
正論で相手を黙らせることなく、共感によって補強した。
その言葉で思い出されるのは、昨日のパーティーの光景だ。

――見ず知らずの民ではなく、共に踊り、共に食べ、共に笑った、親しみのある者たちにした。仲間意識を、昨日の時点で植え付けていた。貴族の子弟でも実感を伴って、食料不足の害を考えられるようにしたんだ……。

マイムーン・マイムーンの歓喜のダンス。

輝く月の下で、貴族と民が憎み合うことなく、見下し合うことなく、ただ食べ、喜びに舞い踊る。

それこそが、ミーアの描く正しさであり、幸せなのだ。

そして、その幸せを阻害するような価値観は『悪』である、と……ミーアは言っているのだ。

――神聖典の規定する貴族の権威、それを、グロワールリュンヌの学生にもわかるように伝え、その価値観に従って、聖ミーア学園の正しさを、論証している！

神聖典に書かれた倫理観は、みなが同意できる明文だ。されど、そこに書かれているのは、普遍的かつ基本的な理屈であり、個別の指示ではない。

困っている人がいたら助けなさい……当たり前のことだ。では、困っている人とは具体的にはどんな人か？　どのように助けるのか？　どこまでを助けるのか……？

その問いに答えを出すのは個々人であり、その適用をめぐっては葛藤が起きることもしばしばだ。

時に、悪意を持って恣意的に適用しようとする貴族もいる中で、ミーアは、これを帝国貴族の価値観として適用し、より具体化してみせたのだ。

レア・ボーカウ・ルシーナは、合理的な少女であった。それゆえ、ミーアの組み上げたロジックとその完璧さに、思わず感銘を受けてしまう。

――これこそが、帝国の叡智……っ！

「妾からも一つ……よろしいじゃろうか？」

勝負は決した……と思われた、まさにその時のことだった。

静かに立ち上がる者がいた。
帝国最大の門閥、ブルームーン公爵家夫人、ヨハンナ・エトワ・ブルームーンは凛とした態度のまま辺りを見つめて……。
「聖ミーア学園からのみテーマを設定するのは不公平というもの。今度は、グロワールリュンヌから、討論のテーマを指定したい」
その言葉に、ユバータ司教が軽く眼鏡の位置を直して、
「なるほど、確かに、それが公平というものでしょう」
それを聞き、満足げに頷いてから、ヨハンナは言った。
「ティアムーン帝国の最高位……皇帝の地位を女が務めることを是とするか、非とするか……。これをぜひ、論じてもらいたい」
その瞳は、烈火のごとき怒りのためだろうか……赤く染まっているように見えた！

第百二十三話　ヨハンナ・エトワ・ブルームーン、震える……！

ヨハンナ・エトワ・ブルームーンは……感情の高ぶりに打ち震えていた！

それを抑えつけるためにこぶしを握り締めるが、力がこもりすぎて、それも、ぶるぶる震えていた。抑えきれなかった……。

それほどに、彼女の感情は高ぶっていたのだ……怒りに……否！

歓喜に、である！

そうなのだ、ミーアの言葉はこの上ないほどに、ヨハンナの胸に突き刺さっていたのだ。それは、あの騎馬王国の者たちがミーアから受けたのと同じぐらいには、深く、ふかぁーく、突き刺さってしまっていたのだ！

けれど、それは仕方のないことなのかもしれない。

なにしろ、ミーアの口にした言葉は、ヨハンナが聞きたかったもの、ミーアが見せた帝国像は、ヨハンナがずっと見たかったもの、そして、ミーアの言葉はずっとずっとヨハンナが欲していたものに他ならないのだから。

ミーアは、ヨハンナが長年抱えていた違和感の正体を、まさに、白日の下へと晒しだしたのだ。ここがどこであれ……仮にここが帝国であれ、海外の国であれ……おかしいものは、おかしいのだ。

ヨハンナの心の変遷は、レアと大体同じようなものだった。

当初は「これでは、ミーアとグロワールリュンヌの学生の討論会になるだろう」とツッコミを入れそうになるも、ミーアの考えを見るために、あえて黙っていた。

フーバー子爵にもできる限り、様子見するようにとの指示を出していた。

そうして展開されたものこそが、ミーアの描く国家観、あるいは、

帝国の将来像にまつわるものであった。
――ああ……そうじゃ。あれこそが、まさに皇帝としての器。
ミーアの見せる帝国の姿、それはヨハンナの持つ理想像に合致するものだった。否、それ以上のものだった。
――まさに、パトリシアさまと同じ叡智の煌めき……。
なぁんてことを思っているが、もしもパティがそれを見たら、たぶん、いやぁな顔をすることだろう……。
『いや、さすがにその期待に応えるのは無理……』
と言いたくなるほどに、高い評価であったからだ。
――昨日の、みなで踊り舞う姿も……パトリシアさまにお見せしたかった。今日のご立派な姿を、アデラにも見せたかった。
ヨハンナは感動に目を潤ませながら、しみじみと思う。
――さすがは、パトリシアさまの血筋。アデラの血筋も入っているのだろうが……つくづくマティアス陛下に似なくって良かった！
……マティアスは泣いていい！　……が、たぶん、泣かずに「もっともである！　アデラに似て良かった！」とか言いそうではあるが。まぁ、それはさておき。
ヨハンナは静かに目を閉じ、じっと黙想してから……小さく息を吐く。
――だが、だからこそ、妾は声を上げなければならぬ。ミーアさまに皇帝としての器を認めればこそ……。
胸の中に、固い決意があった。パトリシアからかけられた言葉、それは、彼女の中で、ずっと守るべき言葉としてとどまり続けたもの。絶対の規範ともいうべきもの。
帝国貴族の伝統を守り、パトリシアの息子のマティアスを支え、孫娘ミーアを守り奉ること……。これまでの彼女の人生は、そのためにこそあったのだ。
だからこそ、簡単には譲れないものがあった。譲るのだとすれば、それに値するものを見せてもらわなければならなかった。
――妾の浅はかなる懸念など、軽々と吹き飛ばすぐらいでなけれ

ば、皇帝の地位に就いても苦労するだけ。パトリシアさまのご懸念が当たる形になってしまうやもしれぬ。それはまさに最悪の事態じゃ。が……逆に、妾を納得させた、その暁には……。

決然と立ち上がり、ヨハンナは口を開いた。

「ティアムーン帝国の最高位……皇帝の地位を女が務めることを是とするか、非とするか……。これをぜひ、論じてもらいたい」

「なっ！　よ、ヨハンナさま！　いったい何を！？　そのような恐れ多いことを……」

フーバー子爵が慌てた様子で声を上げるが、ヨハンナは涼しげな顔で微笑む。

「なに、せっかく妾たちでテーマを設定できるのじゃ。揺らぐことのなき、帝国の伝統に関するものにするのは当然のことであろ？最初のテーマはあちらに有利なものを設定したのじゃ。今度はこちらの番ということじゃ」

ヨハンナは鋭い視線をミーアのほうに向けた。

――それに、もしも、ここで納得のいく答えが出せないというのであれば、妾は変わらずに済む。パトリシアさまの御言葉に従い、アデラの娘を守っていけばよいだけじゃ。

ヨハンナにもまた考えがあった。

もしも、このテーマで女帝の地位が認められないという結論が出たのであれば、それはそれで構わないのだ。ヨハンナが納得いくような、満足のいく答えを出せないというのなら、当初の考え通り、パトリシアの言葉を守って女帝に反対すればよいだけのこと。

今回の討論会を利用して、ミーアの道を阻むこともできる。聖ミーア学園という、ミーアのお膝元の学生たちですら、女帝の地位を認められないとするならば、それはミーアにとってダメージとなるだろう。

ヨハンナは穏やかな顔でミーアを見つめる。

――さぁ、ミーア姫殿下……。妾を納得させてみよ。

挑むように……期待を込めて、視線をぶつけるヨハンナであった。

番外編　決死の我慢のその先に

副題「次世代ＦＮＹの芽生え……？」

「ミーア姫殿下が……ケーキを残された……っ！？」

聖ミーア学園の調理学部教室に、その日、激震が走った！

動揺は波紋のごとく、関係者の胸に大きな衝撃として伝わっていく。

あの、健啖家として知られるミーアが……食べ物を残したのだ。これはよほどのことである。なにしろ、皇女ミーアといえば、お替りするのが当たり前。それを残すことなく、ペロリと平らげる。大変に食いしん坊……いや、大食漢……でもなくって、ともかく……その、よく食べる人として有名なのだ。だというのに……。

「まぁ、ミーア姫殿下も体調が優れず、食欲がないこともあるだろう」

慰めるような教諭の言葉を、ぼんやりと聞き流している少年がいた。

ミーアのケーキの用意を担当した男子学生だった。

「どうして……」

つぶやきが漏れる。

正直、ショックだった。

料理の腕前には自信があった。

他のクラスメイトと比べても、決して負けてないと思っている。

というか、なんだったら、クラスで一番だと思っているし、将来は、白月宮殿に雇われてもおかしくないのではないか、とさえ思っている。

……思いあがっている！　けれど、それも仕方ないぐらいに、彼の技術は高いものだった。

そして、今日のケーキは、その技術力を如何なく発揮できた素晴らしい出来だった。
上品な甘味を出すことができたし、見た目も美しく仕上げられた。
お貴族さまはもちろん、皇女殿下にお出ししたって問題ない出来のものになったと、彼は自身を持っていた。なのに……。
「いったい何が悪かったんだ……？」
戻って来たケーキを前に、彼は愕然と立ち尽くす。
「三分の二しかお食べになっていない……ということは、味なのか……？　いや、だが……」
お替り用に切り分けておいた別のケーキの味見は、すでにしていた。良い味だった。甘味は上々、焼き加減も絶妙。砂糖の焦げた匂いがとても美味しそうな一品に仕上がっていた。なのに……。
まったくもって、理由がわからなかった。いったい、どうして、こんなことに……？
数日前に他の生徒が出したお茶菓子のクッキーは、残さず食べたうえにお替りまでしたというのに……いったいなぜ……？
眉間に皺を寄せ、腕組みして大いに悩む。そんな彼の雰囲気が伝染したのか、周りの学生たちや、教諭も一緒に悩み始めてしまう。
っと、その時だった。
「失礼いたします」
調理室に入ってくる人物がいた。
赤く長い髪のメイドの女性……それは、
「あっ、あなたは、ミーアさまのっ……」
皇女ミーアの専属メイド、アンヌ・リトシュタインだった。
専属メイドという、ミーアの側近の出現に、室内に緊張が走った。
なにか、あのお茶菓子に不都合があったのではないか？　そんな疑念に、ケーキ作りを担当した少年は、青くなる。
「あっ、あの、なにか……」
いつもは頼りになる教諭も、心なしか緊張した様子で問いかける。
っと、アンヌは小さく頷いて……。

「はい、その、先ほどのケーキをミーアさまが残されたことについて、お話ししたいことがあります」
まさに気になっていることを話し始めた！
「まさか、その理由を、ご存じなのですか！？」
少年は、思わず声を出していた。礼を失することかと思ったが、止めることができなかった。いったい、自分のケーキのどこが悪かったというのか……教えてほしかった。
「はい。みなさまが気にされているのではないか、とミーアさまから仰せつかっておりまして……」
アンヌは真剣な顔で続ける。
「まず、誤解のないようにお伝えしたいのですが、ミーアさまは、みなさんに作っていただいたお料理をとても喜んでいます。昨日のパーティーのプニッツァはもちろん、今朝のお茶菓子に至るまで、心から、それを喜んでおられるのです」
それから、アンヌは机の上に置かれたケーキに目をやって。
「それに、残してしまったものも、もったいないから捨てないように、と。これから、みんなで食べたいから、もらってくるように、とおっしゃいました」
「では、なぜ……どうして、俺のケーキは完食していただけなかったのでしょうか？」
少年は思わず食い下がった。理由が知りたかった。
なぜ、出したものは必ず完食するとまで言われているミーアが、欠片一つ残さないというミーアが……どうしたら、こんなに綺麗に食べられるんだ！　とシェフを瞠目させるとまで言われたミーアが！　自分のケーキだけは残したのか……。なにが悪かったのか……？
そんな少年に静かに目を向けてから、アンヌは言った。
「それは、私がお止めしたからです。ミーアさまの……ご健康のために」
そうして、語られたのは、衝撃的な事実だった。
甘い物、脂の多い物の食べ過ぎによって健康が害されることがあ

るという事実。
そのせいで倒れた大商人という実例と医師を志す少女からの助言。言われてみればもっともなことだった。
昨日のパーティーで出された食事量は、確かに過剰なものだった。それに、甘く、脂っぽい物も多かった。
だから、今日はできるだけ控えたのだ、と言われれば納得はできるが……。
「食べ過ぎが……ミーアさまのご健康を害する……？」
今までまったく考えたこともないような話に、少年は頭を殴られたような衝撃を受ける。
ただ、美味しく、甘く作れば良いと思っていた。味さえ一流ならば良いのだと思っていた。けれど、そうなのだ。
食とは、楽しみだけでない。体を支えるための重要な要素でもあったのだ。
「甘い物を食べ過ぎると、健康を崩してしまう。肉やパンばかり食べていても同様に、体調が崩れてしまうのだそうです。野菜も食べなければいけないらしくって……」
アンヌは、さらに続ける。
「例えば、白月宮殿のムスタ料理長は、ミーアさまのご健康を気遣い、食事のバランスや体に良い食材の研究に余念がありません。ミーアさまがケーキがお好きということから、甘さを控えめにした野菜ケーキなるものも作って……」
「ミーアさまの健康を気遣った食事……」
「はい、しかも、美味しい食事です」
テーブルに腕を突き、少年は項垂れる。
――そうか……そうだったのか。俺たちに求められているものは……。
後日、少年は、たまたま臨時講師としてやってきたムスタ・ワッグマンに弟子入りを志願することになる。この学園を卒業した暁に

は、ぜひに、と。
やがて彼はムスタ料理長と鎬を削り合い、帝国の次なる世代の食文化に多大なる貢献をすることになるのだが。
その最初の一歩が、ミーアの決死の我慢によって生み出されたものであったことを知る者は、誰もいないのであった。

第百二十四話　ヨハンナの目、赤くなる！

「女帝の是非について……？」
ヨハンナの言葉に、ミーアは思わず内心で舌打ちする。
――これは嫌なテーマを設定されてしまいましたわ。これでは、なにかあっても、わたくしは、ほとんど口出しできませんわ。
なにしろ、ミーア自身にストレートに関係するテーマである。下手なことを言えば、お前が帝位を継ぎたいから言ってんだろ！とツッコミを受けること、疑いない。
――それは愉快なことではありませんわね。ユバータ司教への印象もあまりよくなさそうですし、さて、どうするか……。
っと一瞬だけ考えるミーアであったが、答えはすぐに出た。
――いえ、しかし……よくよく考えればわたくしのそもそもの目的はグロワールリュンヌの学生たちに農業の大切さを浸透させること。農業振興をしないのは悪だと、もう十分に伝えましたし、これ以上、わたくしが口出しする必要はないかもしれませんわ。
それからミーアは聖ミーア学園の生徒たちのほうに目を向けた。すると、彼らは……力強く頷いてくれた。
――ふむ、それならば、まぁ、任せてしまっても問題ないかしら……。
ミーアは小さく頷いて、
「なるほど、わたくしに異存はありませんわ。確かに、互いの学園からテーマを出すのが公平というものですし……」
こうして、スムーズに次の討論テーマは決まったのだが……。
……その流れに、ヤーデン・エトワ・グリーンムーンは焦っていた！　なんだったら、ミーア以上に盛大に舌打ちをしそうになっていた！

――くっ、ヨハンナさま、なかなかに厳しいことを言うっ！
素早くヨハンナ……の隣、興味深そうに話を聞いている皇帝陛下を見て、彼は思わず頭を抱えかける。
――皇帝陛下の前で、女帝の是非を論ずるだと？　下手に女帝反対なんて言おうものなら、ミーア姫殿下への批判だと受け取られるじゃないか！
ふと、彼の視界に一人の青年の姿が入ってくる。ちょうど、見物に来ていたのであろうか、サフィアス・エトワ・ブルームーンが母の言葉を聞いて、驚愕に固まっていた。その顔色は、微妙に悪い。
――だよなぁっ！　サフィアス殿！　これは、ちょっと無茶振り過ぎだよなぁ！　もうちょっと、こう、母君を抑えてもらえると、すごく助かるんですけどねぇ！
グロワールリュンヌのみなの中にも、ヨハンナの言葉の危険性に気付いた者がいるのだろう。誰も、口火を切る様子がない。
先ほど迂闊にも、絹織物と口走った学生など、とてもではないが口を開きそうにない。石のようになってしまっている。
――フーバー教諭は、皇帝陛下が帝国の伝統を重視する方だから大丈夫と確信しているみたいだけど、陛下がミーア姫殿下を優先するのは明らかだ。これは、なんとかしないと……。
眉間に皺を寄せ、うーん、うーん、と唸ること数秒……ヤーデンは静かに手を挙げた。
「まず、確認しておきたいことがあります」
ユバータ司教が頷くのを確認してから、彼は周りの学生たちに目をやって……。
「ミーア姫殿下が、女帝の資質を十分に示されているということは、明らかでしょう。そのお考えには、心から感服いたしました。この場に示された叡智はまさに噂に違わぬもの。我が帝国どころか、周辺のどの国であろうと、ミーア姫殿下の統治を求めることでしょう」
両手を広げ、いささか芝居がかった仕草で、ミーアを礼賛！　大絶賛！　褒めに褒めたたえたうえで……！

「ゆえに、その溢れる資質にのみ目を向けたうえで、ミーア姫殿下が帝位を継ぐべきか？　という問いであれば、答えは明らかでありましょう」
答えは明らか……と言いつつ、是非は明言しない。
言葉の流れ的にははっきりしているだろうが、あえて言質を取られるような明言は避け、そのうえで、進める。
「そして、さればこそ、これから討論すべきは、ミーア姫殿下が帝位を継ぐことの是非ではなく『女性が帝位を継ぐこと』である、と。そのことをまず確認したいのです」
皇帝陛下が溺愛するミーア姫殿下の資質に関することではなく、あくまでも、女性が皇帝になることについての議論である、と、しっかりと言明しておく。
そうでなければ、議論などできたものではない。
ふと目を向けると、その正しさを認めるように、ヨハンナが満足そうに頷いていた。
――いやいや、信頼していたぞ！　みたいな顔をされましてもね……。それとも、このぐらいのことはグロワールリュンヌの学生ならばわかって当然、とでも思っているんですかね！
ブルームーン公爵夫人の考えをいまいち測りかねるヤーデンである。ともあれ、これで、最低限、議論の状況は整った。
彼は穏やかな表情で続ける。
「そして、我らグロワールリュンヌの側は、当然、女帝を認めない立場を取ろうと思いますが……」
「あら……？　そうとばかりは言えませんわ」
直後、ヤーデンの言葉を真っ向から否定する者がいた！　そして、その声は、なんと、あろうことか……彼の隣の席から聞こえて来た。
「……は？」
「女帝、大変、結構なことですわ。妾は、その考えに反対いたしませんわ！」
ぽかんと口を開けるヤーデンの隣……カルラ・エトワ・ブルーム

ーンがキラキラ輝く瞳で言った。
直後、バキンッと何かがへし折れる音。ギクシャクと、そちらに目を向けてみると……。
「あの、馬鹿娘が……」
ヨハンナが、へし折った扇子を手に震えているのが見えた。
そして、その目は……紛れもない激昂のためであろう、赤く染まっていた！

第百二十五話　ギロちんフェロモン

「女性が帝位を継ぐ、などという可能性は考えてもみませんでしたけど、それは素晴らしい考えですわ。もしそんなことが可能であれば、妾が女帝となることもできる……もしも、女帝になったら、大きな黄金の像とか建ててみるのも良いかもしれませんわね」

なぁんて、つぶやいているカルラである。るんるん体を弾ませつつ、口元がニマニマ緩んでいた。

「……いや、それ以上に、あの小麦畑アート……。あの刹那の美を妾も……。いえ、ミーア姫殿下以上のものを……いっそのこと帝都と同じぐらい大きなものを作らせて……うへへ」

……カルラは、なんというか、こう……俗物だった。紛うことなき、俗物なのであった！

正直なところ、トップになると不味い類の人物であった。

そんな彼女の様子を見て、ミーアは危険な香りを嗅ぎ取った。

――これは……、なにやら、かつてのわたくしと同じような匂いを感じますわ！

それは前時間軸のミーアも纏ったことのある危険な香り……ギロちんを引き寄せる、いわばギロちんフェロモンとでもいうべきものだった。

こいつを帝位に就けるのだけは、絶対にまずいぞ！　とミーアが直感したのと、ほぼ同時、同じ危機感を持っている者がいた。

それは……。

――ここで口を挟んでくるのは想定外だぞ、くそったれ！

話を上手いこともっていこうとしていたヤーデンである。

エメラルダの意向を汲んで、適度に反論しつつ、最終的には敗者を演じるつもりであったヤーデンだが、ここでカルラのまさかの発

言。思わず頭を抱えたくなっても無理からぬところだろう。
――ええい、こうなればっ！
彼は静かに視線を転じて、聖ミーア学園の者たちに問いかける。
「その……こういったご令嬢が皇帝になる可能性があるのですが……どうだろうっ！？　どう思われるだろうかっ！？」
声を荒げて、問う！
……ヤーデン、ヤケクソである。
「まっ！　それはあんまりというものですわ、ヤーデン殿。妾を侮辱しようとしておりますの？」
なぁんて、プリプリ怒っているカルラであるが……ヤーデンはチラリとブルームーン公爵夫人のほうに目を向け……その怒りがカルラのほうに向かっているのを確認して、あえてスルー。
――あとで、ヨハンナさまに怒られるだろうから、カルラ嬢については問題ないだろう。無視でいいな、うん……。
それから改めて、辺りに目を向け、自身の発言が意外と効果的であったことを知る。
そうなのだ、帝国の叡智（の虚像）によって、今まで忘れられていたことではあるのだが、帝国貴族の中にはポンコツもいれば、悪人もいる。
無論、それは四大公爵家の者であっても、例外ではない。そんな者がもしも継承権を与えられ、女帝になってしまったら、どんなことになるのか……？
カルラは身をもって、その危険性を見せつけてくれたのだ。まぁ、本人にはその気はなかっただろうが……。
「……それは、確かに」
同意の声は、グロワールリュンヌの学生のみならず、ミーア学園の学生たちにも広がった。
「いえ、でも、それは個人の資質ではないでしょうか。そこに男女差は関係ないのでは……」
沈着冷静に、セリアが正論を差し挟もうとするも……。

「残念ながら、そうとばかりも言えないと思う」
ヤーデンは再び首を振ってみせた。
「先に言っておくが、カルラ嬢は悪人ではない。それに、彼女の実家ブルームーン家の考え方自体が悪ということでもない。それは、私が保証しよう」
軽くブルームーン家並びにカルラにフォローを入れつつ、ヤーデンは続ける。
「彼女の、先の『責任感』を欠いた発言は、ひとえに、彼女に、統治者となるのに必要な覚悟がないから、ではないだろうか。我が帝国は伝統的に、男児が家督を継ぐことを常識としてきた。それは、統治者として、民の上に立つ者としての責任を育むのに一役買ってきたのだ」
生まれついての男女の資質の差を論証しようとする場合、頼るべきは神聖典ということになる。人間の始まり、神は人間をどのように作り、男と女とをどのように設計したのか、という辺りの話になってしまう。
しかし、神聖典を読み解く限りにおいて、そこに明確な差は見出しづらい。
ヴェールガ公国が聖女ラフィーナに権威を与え、将来的には政治的な権限もおそらくは与えるであろうことからもわかるが、ヴェールガ公国は女性が権威を持つことに寛容だ。神聖典には男女それぞれが尊重されるべきと書かれているがゆえに、である。
同じく、血統による継承というのも、実は論拠が薄い。
あくまでも、権威を認めるのは神であり、論拠となるのは神聖典である以上、血統に関することはあくまでも単なる慣習に過ぎない。論拠としては弱い。
それゆえ、ヤーデンは後天的要因に論拠を求めた。帝国の伝統によって形成される要因、同一の学校において、同一の教育を受けていてなお生まれてくる差。
『将来、家督を継ぐ』

『領主となる』
『民を率いる者となる』
それらの認識と覚悟の差。
そこに、ヤーデンは論拠を求めたのだ。
――我ながら、これは、なかなかに説得力があるかもしれないぞ。それに、ミーア姫殿下には当てはまらないから、エメラルダ姉さまに怒られることもなし。
我ながら良い敵役ができているぞぅ！　と自画自賛するヤーデンであるが……。
「それは、そのような自覚を持てるよう教育し、常識を変化させていけば、女帝も容認できるようになる、と。そういうことでしょうか？」
問いかけたのは、セロ・ルドルフォンであった。
「あるいは、女性の中で、その資質と責任、覚悟を持ち合わせていれば、家督を継ぐことができるということでしょうか？　僕には姉がいます。僕などよりもずっと民を治めるのに相応しい、力を持った姉です。以前から、僕は姉が家督を継げばいいのに、と思っているのですが……」
ほう、こいつとは、話が合いそうだぞ！　などと……、偉大なる姉を持つ弟という共通点を発見し、ちょっぴり親しみを覚えたヤーデンが、口を開こうとした、まさにその時だった。
「それは、秩序を破壊し、混乱を生み出すもとになるんじゃないか……？」
静かに反論の声を上げたのは、ナコル・フーバーであった。

第百二十六話　……はぇ？

「それは、秩序を破壊し、混乱を生み出すもとになるんじゃないか……」

ナコル・フーバーは静かに口を開いた。

「過去の歩みの蓄積――文化という秩序を破壊することは、人心の乱れにも繋がることではないでしょうか？」

先ほどミーア学園に……というより、皇女ミーアにやり込められて以来、彼はしばらく考えていた。

それは、どうすれば、この討論に勝ち筋が見出せるかということ……ではない。そうではなくって……どうすれば、己の確信へと議論を導けるか、である。

ナコル・フーバーは、自分たちの正しさを信じて疑わなかった。

かつて、彼の父、フリオ・フーバー子爵は言った。

「我が兄、シドーニウスは生涯、妻を持たず、子を成さなかった。兄は腹違いの弟であった私を後継ぎとして指名し、この帝国の貴族文化を守る者として取り立ててくださった」

遠くを見つめたまま、父は続けた。

「私は、兄のようになれなかった。妻を持たぬこと、子を持たぬことは、弱き私には耐えられなかった。だからこそ、ナコルよ。お前には励んでもらいたい。この帝国の貴族文化を守る者として、勉学に励み、思想を守ってもらいたいのだ。私が、独身を貫くことで果たせた成果……それ以上のものを、お前には果たしてもらいたいのだ」

そんな父の言葉と期待を受け、ナコルは日々、勉学に励んでいた。

父が、兄に対する罪悪感を持たなくても良いように。

父が子を成したことに、意義をもたらすために。

「お前が生まれてきてよかった」と言ってもらうために。

ナコルは日夜、父の部屋に通い、そこにある本を片っ端から読んでいった。
帝国貴族に蔓延る反農思想、その不合理に、彼はとっくに気付いていた。なぜ、このような不合理を維持しなければならないのか……その理由を彼は探していた。
伯父シドーニウス・フーバーは、この帝国の思想になんの疑問も持っていなかったという。父が認める賢人がそうなのであれば、きっとなにか、理由があるはず。
ナコルは答えを探し続け……ある本に挟まれた、ページの切れ端を見つける。そこには、彼の求めていた答えに繋がるヒントが……政に対しての驚くほどにドライで、それでいて否定のしようのない論理が書かれていた。

「統治とはなにか？　政とはなにか……？」
ゆっくりと、問いかけるように辺りを見回して、彼は続ける。
「私は、こう考えます。政治とはすなわち『集団行動』である、と」
王侯貴族の権威、統治者の権威は、神によって保証された権威。それが中央正教会の論理だ。そして政とは、神から与えられた権威を行使する、神聖で特別な行為――と一般的には捉えられている。
けれど、ナコルは、端的に言う。
それは、しょせん『集団行動』に過ぎない、と。
「集団行動、すなわち、人の群れをどのように動かすのか……。集団の心をどのように動かすのか、政とは、そのための手段である、と」
国とはしょせん、人の群れに過ぎず。国を動かすとは、人の群れを動かすのと同義である。すなわち、それは集団行動である、と。
その論理に立脚し、彼は続ける。
「では、そのために大切なことはなにか……？　政にとって大切なこと、それは『納得』です」
「納得……？」

ミーア学園の者たちが、小さくつぶやく。それを認めるように頷き、ナコルは堂々と言った。
「なぜ、女性が帝位を継ぐべきではないか？　それは、多くの者の『納得』が得られないからである、と私は考えます。民も貴族も納得しなければ動かない、それでは集団を動かすことはできないからです。まぁ、暴力をもって、言うことを聞かせるという方法も考えられるかもしれませんが、中央正教会の司教さまには、認められない方法でしょう。であれば、政に『納得』は不可欠なものと言えるでしょう」
肩をすくめつつ、ナコルはユバータ司教のほうを見た。
「神に権威を与えられた、という論理も、また同じことです。神に権威を与えられた統治者から命じられれば、民は納得し、動くのです。言うことを聞かぬ民に兵を差し向け、暴力を以て行動させるのと同様、納得させることで、動かすのです」
神の権威を、人間の心理によって解釈しようとするそれは、ミーアのような媚びを一切廃したものだった。
遠くで聞いているミーアが「そんなこと言ったら、ヤバイんじゃないかしら……」などとちょっぴりアワワとしていたが、お構いなしに、ナコルは続ける。
「そして、これは、先ほどの農学にも言えることです。すでに、聖ミーア学園で農学をすることが優れたこと、と結論づいてしまっているかもしれませんが、私は改めて意義を申し上げたい。なぜ、農業に力を入れないのか？　それは『納得』が得られないからです。伝統には納得がある。今までそのように生きてきたのだから、と民は素直に聞き、従うのです」
一息吐いて、ナコルは聖ミーア学園の生徒たちに目を向けた。
「なるほど、聖ミーア学園で農学をするのは理解できます。合理的なのでしょう。が、人は、理によってのみ生きてはいない」
断言し、さらに畳みかける。
「そして、納得は心の安定にもつながる。民を安んじて治めるべし、

とする神聖典の教えとも矛盾しない。今までと同じであるということは、安心に繋がるし、変わっていくということには、どうしても不安が付きまとう。できあがった文化は一つの秩序であり、その秩序を変える、壊すということは、人心を乱れさせるのです。ゆえに、女性が帝位を継ぐべきではない」

そうして、ナコルの言葉は終わった。

それは、聖ミーア学園の生徒たちを圧倒するに足る、力のあるものので……。

その場を静寂が支配しかけた……、まさに、その瞬間だった！

スゥっと手を挙げ……ドミニク・ベルマンが静かに口を開いた。

「ゆえに……ゆえにこそ……私は作ったのです。ミーア姫殿下の顔を描いた、小麦畑アートを！」

「……はぇ？」

どこかで誰かの、ちょっぴーりお間抜けな声が聞こえたような気がしなくはなかったが、誰も気にする者はいなかった。

第百二十七話　女帝への期待、高まる！

「……はぇ？」

ハラハラしつつ、討論の進行を見守っていたミーアは、一瞬、呆気にとられた顔をした。

――こっ、こいつ、なにを言っておりますの……？

突然のドミニク・ベルマンの妄言に、思わず瞠目するミーアであったが……。

ドミニクは、一切、なんの不明点もない、とばかりの堂々たる態度で言った。

「小麦畑ミーアートについて……もう、グロワールリュンヌのみなさんも、ご覧になったと思います。この私、ドミニク・ベルマンの発案のもと、級友のセロ・ルドルフォンの全面協力もあって実現したものです」

チラリ、とセロのほうに目をやってから、プイッと視線を外すドミニク。それは、まるで、

『きちんと隠し立てせずにお前の功績も指摘してやったからな。文句はあるまい？』

とでも言わんばかりの態度だった。それを見てセロは、小さく苦笑している。

後の世に女帝ミーア派の二大巨頭と呼ばれる、ベルマン伯爵とルドルフォン辺境伯の友情の芽吹きが感じられる場面ではあったが……それはさておき。

「小麦畑にミーア姫殿下のお顔を描くことで、中央貴族は納得して、喜びをもって小麦畑を作ることができるはずです。なぜなら、これは、ただの土臭い農作業ではない。ミーア姫殿下のお顔を描く、貴い芸術作業だからです」

「ええと、つまり……古き不合理な常識を、できるだけ抵抗なく新

しい合理的な常識に塗り替えようとしている、と……？」
　問いかけたのは、中立の立場としてこの場に参加しているリオネル・ボーカウ・ルシーナだった。突然の話の展開に目を白黒させつつも、なんとか消化しようと努めているようだった。
　そんなリオネルにドミニクは、我が意を得たりと頷いて……。
「まさに、そのとおりです。納得を得るための下準備として、それをしています。そして、民草に対しては、小麦にミーア姫殿下の名前を冠したミーア二号小麦と同じく、日々の食を通して、ミーア姫殿下への敬意を抱かせる効果がある、と自負しています。農民たちはミーア姫殿下の偉大さを知り、ミーア姫殿下が女帝になることに抵抗を感じないことでしょう」
　堂々と、恥ずかしげもなく、なんの疑問も抱かぬ澄み切った顔で、彼は小麦畑ミーアートを誇っていた。
　こう……一言言ってやりたいミーアであるが、議題が女帝の是非に関わることである以上、口出ししづらかった。
　そして、ミーアが迷っている間に、別の者が口を開いた。
　ミーア学園のまとめ役、セリアだった。
「しかし、ドミニクさまの素晴らしい計画も、ミーアさまであったから、実現できたことである、と私は思います。ミーアさま以外の方でこのようなことをしてしまえば、きっと、食べ物を使って遊ぶ不届き者の自惚れ屋、と、そのような評価を受けたことでしょう」
　――いや、わたくしがモデルになっていたって、駄目なのではないかしら……というか、口には出さないだけで、きっとわたくしの肖像画であったとしても、なんだこれ？　と思う方は一定数いそうな気がしますけれど……。
　などという、ミーアの内心の抗議はもちろん、誰にも届くことなく……。話は進んでいく。朗らかな顔で語りだすのはワグルだった。
「同感です。我らルールー族は、ミーア姫殿下に深い深い恩義があります。だから、畑で肖像画を描くことにはなんの抵抗もないし、我が静海の森の木を用いて、ミーアさまを褒め称える像を作ること

にもなんの抵抗もない。きっと森の木を全部、ミーアさまの像にしたとしても、むしろ、喜びを感じることでしょう！」
――いやいやいや、きちんと冷静に抵抗を感じていただきたいですわ。森の木を全部とか、お祖父さまである族長さまが泣きますわよっ！
などという、ミーアの内心の抗議は……以下略。
「納得が大切ということは、よくわかります。だからこそ、ミーア姫殿下は女帝にならなければならない、と、私は考えます」
再び口を開いたのは、セリアだった。その顔には、一切の曇りのない、ミーアへの信頼感があった。
「女性が帝位に就くべきではない理由が過去の積み重ねにあるのはわかります。しかし、それは永久不変の真理ではない。だとするのであれば、それは今までそうだったということに過ぎない。だからこそ、いつの日にか、変化の時が来る。そして、今が変化の時ではないでしょうか」
そっと目を閉じ、セリアは続ける。
「変化には不安が付きまとう、それは民の心を乱す。それもまた真理です。でも、だからこそ、正しい方向へと変化させるためには、民の不安を最小限に抑えつつ、民の期待を絶対に裏切らない、そんな方が、最初に女帝になる必要があります」
そうして、セリアは、真っ直ぐにミーアに視線を向けてきた。
その、あまりにも熱量の高い期待の視線を受けて、ミーアは……。
――あ、あら……ということは、もしかして、わたくし、女帝になってからも功績を挙げ続けて、期待に応え続けないといけない、ということなのでは……？
なぁんて、背筋を寒くする！
この民の期待に応えられなかったりすると、もしかして、ギロちんのヤツが駆け寄って来るのでは……？　などと思ったりもして。
っと、そんなミーアのそばに、静かに歩み寄る者がいた。
それは、シュトリナとパティで……。まったく違う方向から近づ

いてきた二人は、同じことをミーアに耳打ちした。すなわち……。
「先ほどの、ナコル・フーバーの言葉には、なんとなく蛇の臭いを感じます」
ということだった。

第百二十七話　女帝への期待、高まる！（後書き）

活動報告を更新しました。

第百二十八話　聖人のごとき善良さと隔絶した叡智の持ち主であるミーア姫は実在する！（……する？）

「政（まつりごと）などと、たいそうなことを言ったところで、そんなものは、しょせんは人の群れを率いる集団行動の術に過ぎない」

シュトリナ・エトワ・イエロームーンは、かつてバルバラが吐き捨てるのを聞いたことがあった。その日、バルバラは、シュトリナの髪を梳きながら言ったのだ。

「統治者、王侯貴族などしょせんは、人の心を操るのが上手い詐欺師と何ら変わりはない。神から与えられた権威もそう、血筋もそう、そんなものは、他者に言うことを聞かせるための理屈でしかないのです。要は心の問題、気の持ちようといった程度の話」

貴族を殊更に嫌う彼女は、憎々しげな笑みを浮かべてシュトリナに言った。

「ですから、お嬢さま……四大公爵家令嬢などという肩書も、愚か者に言うことを聞かせるのに、役立つ程度のものでしかないのです。ゆめゆめ、忘れることのなきように」

とても冷めた口調で、彼女は言った。

貴族の権威など、命令を通すための道具に過ぎない。血統もまた同じ。それは、愚かなる民を納得させ、従わせるための要素でしかなく、神の与える権威ですら、しょせんは、矮小なる人の心の問題に過ぎないのだ、と貶める。

それは、ヴェールガ公国の、中央正教会の敷いた秩序を破壊するための、蛇のロジックであった。

聞いた時には、なるほどと思ったものだが、今のシュトリナはそこに疑問を覚えてもいた。

一つは、民を率いるのに使えるからといって、それがないとは言えないということ。

例えばの話、ある商人が「古の竜の化石」を高価な値段で売って

いたとして、それが偽物であったとする。
商人は「高く売れる」効果を狙って「古の竜」のものと嘘を言ったわけだが……、では、この「古の竜」は商人が考え出した「値段を釣り上げるのに便利な幻想」だろうか？
それとも、実在するものだろうか？
商人が売っていたものが偽りの化石だったからと言って、その大本の存在までもが否定されるわけではないのではないか、ということである。
そしてもう一つ。
気の持ちよう、などと言われる、人間の心はそこまで軽視されるべきものであろうか？　ということ。
シュトリナは知っている。
友情は、相手を操るのにも使える便利な感情。されど、それは「操るのにも使える」という理由で貶められるべきものでは、決してない。
人の感情は……心は、すべてに優先されるべきものではないにしても、すべての下に置かれるべき無価値なものではない、と
現にバルバラ自身が、その自らの感情によって運命を左右されたことを思うたびに、そして、親友ベルが、自分のために命を懸けてくれたことを思い出すたびに、シュトリナはそう考えるようになっていた。
「なるほど……蛇の……。パティも同じことを言ってきましたわ」
物思いにふけっていたシュトリナは、ミーアの声で我に返る。
そこは、討論会の部屋の片隅。話を聞かれぬように移動したミーアと、そしてパティが難しい顔をしていた。
「……はい。確かに、蛇の思考に近いものだと思います」
ミーアの祖母、今は亡き皇太后であるパトリシア……。自分と同じ、蛇の教育を受けた少女も、どうやら同じ臭いを感じ取ったらしかった。
「ということは……ナコル・フーバーは混沌の蛇の一員ということ

なのかしら……？」
その問いかけに、けれど、シュトリナは答えるのを躊躇した。
「その疑いは強まるかもしれませんが……」
その答えは、どこか歯切れが悪い。
理由はとても簡単で……。
「……ヴェールガの司教さまがいる中で、あんなふうに目立つことを言うのは、少ししっくりこない」
シュトリナの心を代弁するかのように、パティが言った。同意を示すために首肯してから、改めてシュトリナは考える。
言ってしまえば、あの発言は、とても迂闊なものだった。
蛇の強みは、自身の存在を気取らせないこと。目立たず、善人として振る舞い……最も効果的な時に牙を立てる。あるいは、ジワジワと気付かぬ程度の毒を流して、殺す。
それこそが蛇の戦い方。蛇はその存在が露見することを基本的には嫌う。その在り方からすると、あのナコルの在り方には違和感があった。
それを言うなら、父であるフーバー子爵も、であるが……。
「もしも、彼が蛇ならば、あそこまで意固地になって、帝国の伝統を守ろうとはしないように思います」
この期に及んで、そこに固執するとは思えない。
むしろ、ミーアの改革を後押ししつつ、同時に中央貴族の者たちの不満を助長させ、さらに民の不安を煽る、などと言った戦術に出そうな気がする。
あるいは、一度、ミーアを女帝に就けてから失政を誘い、改革の不安を煽ったほうが蛇のやり方に近いような気がする。
蛇は融通無碍。一つの思考に囚われず、その場の流れに乗りつつ、ジワジワと混沌の方向へと誘っていくはず。
あのような頑なさは蛇らしくない。
「……リーナも同感です。少し蛇にしては迂闊。でも、それ自体が擬態なのかもしれませんが……どちらかというと、蛇の知識に触れ

たことはあるけど、極めて断片的という感じがします」
「ふむ……ではナコルさんは『地を這うモノの書』の政治に関する項目の切れ端に触れたことがあるとか、そういうことかしら……」
つぶやきながら、ミーアが視線を向けた先、ちょうど、そのナコルが立ち上がるところだった。

「この議論が始まる前に、ミーアさま個人の資質とは切り分けて議論をする、ということにしたはずだ」
わずかに、苛立ったようなナコルに、反論するのはセリアだった。
「そうですね。ならば、言い換えます。ミーアさまのような方が現れれば、女帝は容認されるべきではないか、と。ミーアさまのお名前を出したのは、あくまでも、これが机上の空論ではないとわかっていただくためのことであった、と、そうお考えください」
その態度にミーアは思わず、おお、っと歓声を上げる。
――なんか、すごく頭が良さそうに見えますわ！　セリアさん、相当鍛えられたんですわね……。大変だったでしょうに……。
ミーア学園での厳しい指導を想像し、そんな魔窟に送り込んでしまったことを、ちょっぴーり反省するミーアである。
「人心を納得させるために伝統の保証が必要であるというのなら、伝統的継承を上回る納得感を与える、素晴らしい方が帝位を継げばよい。弱き民を見捨てず、その一人一人を見守る、聖人のごとき善良さを持つ方が……」
――ああ、ユバータ司教の目の前で、聖人とか言ったらいけませんわ。セリアさん。そのように、軽々しく……。
などと、ミーアの注意する心の声は、まぁ、当然、届くこともなく……。
「あるいは、この国を治める力に、民が不安を持つというのなら、誰しもが知る、天より与えられし隔絶した叡智の持ち主たる方が帝位を継げばいい。それは理論を成立させるために考え出された便利な想像の存在ではない。実在する人物なのです」

そう言ってから、セリアは駄目押しをするように、微笑んで。
「こんなこと、実際に、そういう方がいらっしゃらなければ、決して言えなかったことです。そのような都合の良い者がいるはずはないと、反論されてしまいますから」
迷いのない澄みきった瞳で、セリアは言った。
――いやいやいや、さすがに、そこまで期待されては……。
微妙に胃がキリキリするミーアを尻目に、ミーア学園の生徒たちは、みな口々に……。
「ミーアさまならば……」
「いや、むしろ、ミーアさま以外の何者にもそんなことは不可能……」
などと、ぶつぶつ言っていた。
そして、それを聞いて、皇帝マティアスは、腕組みしつつ満足げに頷くのだった。

第百二十九話　ミーア姫、大丈夫だと信じる！

――ふむ、まぁ……あちらはとりあえず、大丈夫そうですわね。たぶん。うん……大丈夫だと信じることにしますわ。信じることは、とても大切ですし……大丈夫！

ミーア、自分に言い聞かせつつ、そっと目を逸らす。

意識を、フーバー子爵家の問題へと向けて、改めて考える。

「……しかし、フーバー家については、どういうことかしら……。蛇の知識を利用している様子なのに、蛇ではないようだ、というのは……」

シュトリナとパティの話を検証する。

奇妙な話であるし、そもそも感覚的なものだから、本来はあまり信用できないかもしれない。これが、自分自身の直感だったり、ベルがなんか言ってる……程度の話だったりすれば、まぁ、考慮せずとも良いかもしれないが……。

――蛇に精通し、なおかつ頭も良いこの二人が言っているというのであれば、考えなければなりませんわ。

ミーアは、そうして考える。どのような事情があったのか……。フーバー子爵にチラリと目をやり……直後、閃いたっ！

「あるいは、一部しか知らされていなかった……肝心な部分を知らされていなかった、と……信用の問題で……」

つぶやくミーアの脳裏には、前時間軸の光景が思い出されていた。

それは、いつも通りにクソメガネに愚痴っていた時の記憶で……。

「うぐぐ……いったい、なぜ、誰もこのように大切なことを、わたくしに教えてくださらなかったのかしら？　この帝国がここまで大変なことになる前に、少しでもわたくしに教えておいていただければ、もっとやりようがございましたのに……」

八方ふさがりな状況……。ルードヴィッヒから伝えられるものは、どれもこれも絶望的で、ミーアにはどうすることもできなくって……。

思わず情報を隠していた文官たちを蹴り飛ばしたくなるミーアである。

まぁ、そういう者たちは、すでに白月宮殿にも月省にも顔を出さなくなっているわけだが……。

「あるいは、より状況を悪化させてしまう、と思われたのかもしれません」

ルードヴィッヒのつぶやきに、ミーアはギンッと鋭い目を向け、

「どういう意味ですの、それは……！　わたくしに知らせることで、いったい、どのような不都合があるというんですの！？」

「無論、ミーア姫殿下が、余計なことを口走らぬよう、という配慮です。知らなければ余計なことを言ってしまうこともない。そのような配慮もあり得るでしょう。なにしろ、私もしてますから。商人との会談の時とか、事前に注意しますよね」

「ぐむ……。確かに、そうした側面もあるかもしれませんけれど……。しかし、あなたのように事前に言っておいてくれればいいだけのことですわ。言われてなお、余計なことを口走ると思われるのは心外ですわ！　わたくしが、そこまでのうっかり者だと思われているということかしら？」

「……それもあるでしょうが、あるいは、悪意からわざと口走ると思われたのかも……」

「なっ！」

ミーアは信じられない、と言った顔で、ルードヴィッヒを睨みつけた。っと、そんな恨めしげな視線を受けて、ルードヴィッヒは苦笑いを浮かべる。

「なにしろ私もはじめのうちは、愚かで、わがまま勝手な極悪姫だとお聞きしておりましたから……」

歯に衣着せぬ物言いに、ミーアの頬がヒクッと引きつる。が……、

「……はじめのうち、ということは、今は違うとわかったということかしら……？」
「そうですね。少なくとも極悪ではないことはわかりました。どちらかと言えば、善良と言っても問題ない姫殿下であるということは……」
「ふっふーん、そうでしょう、そうでしょう。わかればよろしいのですわ……って、あら？　わがままで愚か者かつうっかり者というほうは……？」
「……まぁ、それはともかく」
「ちょっ！　ルードヴィッヒ、ちゃんと答えなさい！」
ミーアの抗議の声が響いた。

――あの時のクソメガネにはムカついたものですけれど……しかし、確かに、信頼できる方にしか、大切な情報を明かさないということはあり得ることかもしれませんわ。そして……。
ミーアは、チラリ、とフーバー子爵のほうに目を向ける。
――なるほど、確かにあの方は……少々、迂闊というか、小物というか……。蛇の側としてもあまり信用できる方ではないのかもしれませんわ。だから、仲間にするのではなく、利用した、と。
その頑迷さを使い「破局へと向かうように仕向けられた帝国の伝統」を死守するようにのみ言われた。そう考えるのが良いのかもしれない。
――しかし、もしそうならば、これはなかなかに扱いが難しそうですわ……。蛇であるならば、明確な敵としてラフィーナさま送りにできますけれど……。
ミーアは、シュトリナとパティのほうに目を向けて、自らの推論を開示する。
「……はい。私も同感です」
「リーナもそう思います」
二人の見解を聞いたミーアは、もう一度検討し……。

「ふむ、では前提として、フリオ・フーバー子爵、並びにナコルは蛇の知識を一部持ってはいても、蛇ではない、ということで、働きかけるとしましょうか……」
まぁ、後で話してみて、もし怪しければシュトリナにお願いして、ちょっぴり口が軽くなるお薬でも使えばいいか……と思いつつ、さぁてどうするかなぁ、と考えながら、再びミーアは討論のほうへと意識を戻す。っと……。
「ミーア姫殿下お一人が、この帝国の初代皇帝陛下から始まる歴史の積み重ねに勝る信用をお持ちだと……そう思うのか？」
「はい。そのとおりです。ミーア姫殿下への信頼は、これまでの帝国の歴史に勝るほど大きなものである、と私たちは考えます」
「はぇ……？」
ミーアが聞いていないうちに、討論は、ととっ、トンデモネェ！ことになっていた！

第百三十話　悪役令嬢の帝国

「はい。そのとおりです。ミーア姫殿下への信頼は、これまでの帝国の歴史に勝るほど大きなものである、と私たちは考えます」

堂々と胸を張り、迷いのない朗らかな顔で高らかに、セリアが言った。言い切ったっ！

それに追随するように、聖ミーア学園の生徒たちが歓声を上げる。

勝手にセリアが「私たち」と主語を大きくしたわけではない、と証明するかのように！

そんな、凄絶な光景に、ミーアは口をあんぐり開ける。

「こっ……これは、いったい、なにが……？」

ミーアは咄嗟に室内に目を向け、事情を聞けそうな者を探す。っと、ベルと目が合ったため、手招き。ととっと駆け寄ってきたベルに、ささっと事情を聴取する。っと！

「ええと、グロワールリュンヌのナコルさんから一つの疑念が呈されて……」

などと語るベル。その口元に、ちょっぴり、ケーキの欠片がついているのを目ざとく見つけたミーアは……。

――わたくしが、こちらで頭を悩ませている間に、ケーキを味わっていたとは……なかなか良い根性をしておりますわね。ベル……。ふむ、ベルも昨日はたくさん食べていたはずですし、食べ過ぎですわね。あとで、またわたくしと一緒に運動させることにいたしましょうか。

悪役の笑みを浮かべるミーアである。それはさておき……。

「ミーアおば……姉さまのお知恵や功績はもちろん評価されるべきですけど、それは、ティアムーン帝国がこれまでに積み重ねてきた歴史と信頼に並ぶものなのか……と。ミーアお姉さまを女帝にすることが既定路線のようになっているけれど、それは、伝統を覆して

までなされるべきなのか？　とナコルさんが問いかけたんです。それで、セリアさんが、その通りです、ミーア姫殿下は史上最高の女帝になります、と言い切って……」

「なっ……！」

なんと、いつの間にか、ミーアは、史上最高の女帝にまで持ち上げられていた！

正直、女帝になるのは、まぁ良い……。良くないが、良いことにしておく。

女帝になるならば、民草を不安にしないように、期待に応え続けなければならないということだったので、気は重いが……それも良いことにしておく。

だが……史上最高の女帝になる……なんて期待感に応えられる自信は……ない！

まぁったくない！！！

しかも……。

――いや、というか、史上最高の女帝というか……よくよく聞いていると、帝国の歴史の積み重ねにも勝るとか言ってなかったかしら？　それって、歴代の皇帝以上というだけでなく、帝国の歴史……というか、ティアムーン帝国というもの以上の存在にならなければならないということでは……？

自らを押し上げるかつてない巨大な期待の波に酔い、ミーアは思わず、おうふ、っと息を漏らす。

――なっ、だっ、誰かこんなことになる前に止める者はおりませんでしたの？　ルードヴィッヒは……？

っと、壁際で聞いていた忠臣に素早く目をやれば……満足げに頷いていやがった！　こんなの当然のことですね、などと言いそうな顔で！　隣のバルタザルも同様だ！

――くぅっ、ルードヴィッヒたちはアテにならなそうですわ。そうですわ！　がっ、ガルヴ学長は……くっ、おりませんわ！

実は、こっそりとナニカに擬態して様子見に来ていたりするのだ

が……そして、ルードヴィッヒと同じ感じで、うんうん、っと納得の頷きをみせているのだが……あいにくとミーアの目にはその姿は映らなかった。

――セリアさんがノリノリで話してますけど……ワグルやセロくんは……ああ、駄目ですわ！　むしろ、なんか応援したそうな顔をしてますわ！　ドミニクさんも自分も口出ししたそうな顔してるし……。っというか、そもそも、先ほど同意の声を上げてましたし……。

聖ミーア学園の者たちにしゃべらせては、セリアを後押ししそうな雰囲気。かといって、他国の王子であるエシャールが口出しできる感じでもなし。

――ゆ、ユバータ司教は……こういう時に、良い感じに諌めてくれそうなヴェールガの方たちは……。

裁定役のユバータ司教は、なにやらまぶしげな顔で、セリアを見つめていた！　それは、さながら、孫娘の成長を見守るお祖父ちゃんのような顔つきだった。

――だっ！　駄目そうですわ！　ユバータ司教まで空気に飲まれてしまっておりますわ！　それに、グロワールリュンヌの学生たちも、なんだか言葉を差し挟みづらそうだし……。

彼らは、満足げに腕組みしている皇帝マティアスのほうをチラチラ見ては、微妙に言いにくそうに口を閉ざしている。

「あ……あー、えーっと……」

っと、なんとか、口を挟もうとしたところで……。

「ミーア姫殿下、私たちの信頼は的外れでしょうか？　先ほどのミーアさまがおっしゃられていた幸せということ……あれを実現なさるというのなら、私たちの意見は間違ってはいないと思うのですが」

不意に飛んできたセリアの問いかけに、ミーアは、思わず……。

「はぇ……？」

否定したくはある……が、ミーアは瞬時に察してしまう。

――これ、否定できないやつじゃ……？

ミーアの視界の外れにはエメラルダの姿があった。サフィアスも、それに、傍らのシュトリナも……。
あの日……新たなる盟約が結ばれた日に、その場にいた者たちが、見守っていた。
言ってやれ！　という感じで、真っ直ぐに見つめていた。
そう……ミーアはあの日言ったのだ。
この帝国を縛っていた古き盟約を破棄し、新たなる盟約を結ぶ、と。
それは、すなわち、初代皇帝から始まる古き帝国を、新たなる帝国によって作り変える……すなわち、打倒し、新たなものを立て上げるということ。
必然、新たなるものにする以上、それは過去のものに勝るものでなければならないわけで……。
それは、新しき盟約の主たるミーアは、古き盟約によって築かれた帝国に勝るものでなければならない、ということに……。
――えっ、エメラルダさんが、ものすごーく期待した顔をしているのが気になりますし……ベルもパティも、なんだか、すごくキラキラした目で見てますし……。ぐぅ、ひ、引っ込みがつきませんわ！
しゅしゅっと視線を巡らせて、状況を把握。
そうして、息が切れる前に、付け足す一音！
「……い」
大きく頷きつつ、確認するは、己が覚悟。
――あの革命の日を迎えないために、そして、ベルの生まれてくる未来を明るいものとするために、すでに覚悟は決めておりましたし……。やるべきことは、それと大して変わらないはずですわ……。
さらに、ミーアは思うのだ。
――そもそも、戦わなければならない相手というのは、初代皇帝の野郎が作ったダメな帝国ですわ。それを超えることは簡単なはず……。
それは、ちょうど、物語の悪役のような……傲慢なわがまま姫が

ある日、改心して周りにちょっぴり優しくするようなものだ。
今までが酷かったがゆえに、ほんのちょっぴり優しくすれば、それだけで見直されるという、そのようなもののはずで。
――そう、今までが酷かったのだから、ほんの少しばかり改善すればよいだけ。その程度のこと、わたくしにできないはずがありませんわ！
そうして、顔を上げ、ミーアは決然とした表情で！
「ええ、……まぁ、その……大まかな方向性？　とかは、そこまで間違ってはいないと思いますわ……たぶん」
できるだけ……広めに解釈できるよう、曖昧さをたっぷり含めた返事をするのであった！

番外編　楽しい夜の宴は続き

それは、実に楽しい宴の夜だった。
討論会が行われた日の夜、聖ミーア学園の学長室にて。
賢者ガルヴとその弟子たちが旧交を温めていた。
メンバーはルードヴィッヒとバルタザル。それに加えて、ミーア学園で教鞭をとる者が数名混じっていた。
みな、ガルヴによって才能を見出された、優秀な弟子たちだった。
その場にいた者たちの表情は、一様に明るかった。
酒杯を手に、上機嫌に笑みを浮かべる者たち。誰からともなく、つぶやきがこぼれる。
「素晴らしい討論会だったな……」
「ああ……あれを見ていると、帝国の未来は明るいと思えるな」
彼らは感動していた。深く、深く！　感動していた！！
この聖ミーア学園で育ちつつある若き才能に。
まぶたの裏、浮かぶのは、聖ミーア学園の生徒たちの堂々たる態度だ。中央貴族の子弟たちを前にして、臆することなく己が意見をぶつけ、そして、建設的に深めていく。
罵倒しあうのではなく、揚げ足を取り合うのではなく、相手を言い負かすことを目指すのでもなく……違った視点、違った考えをぶつけることで、より高みを目指していく。
この国をよりよくするためには、どうすればよいか……ただ、それを考え、熱意をぶつけ合う。
馬鹿貴族どもに何度も苦杯を飲まされたことのある彼らにとって、それは実に理想的な光景だった。
「あのセリアという少女は、どの月省であろうと力を発揮しそうだな」
バルタザルの言に、ルードヴィッヒは頷いた。

「そうだな。彼女は、確かミーア姫殿下が孤児院で見出された俊英だ。そういう意味では驚くこともないのかもしれないが……」
いや、それでも、ここまで来るのは並大抵のことではなかっただろう、と思い直す。
持って生まれた才能は、磨かなければ光りはしないのだ。きっと彼女は、この学園で努力を積み重ねてきたのだろう。
「セリアは、堅実で理性的な思考をすることができる。視野も広いから、官僚向きの子じゃな」
ガルヴは、まるで孫娘の自慢をするような口調で言った。
「じゃが、他の子たちもそれぞれに優秀じゃ。ワグルは木材の加工に才能を示しつつある。他者に教えるのも上手いから教師などが向いているやもしれん。セロは言わずもがなじゃな。ドミニクはアイデアの閃きと、思いのほか人に頼るのが上手い。自らの着想を実現するために誰の力を使えば良いのかを把握している辺り、貴族の跡継ぎとしては優秀なのじゃろうな」
「ミーア姫殿下が目指されている国造りのために必要な人材が育ちつつありますね」
感心した様子のバルタザルに、深々と頷き、ガルヴは続ける。
「そうであろうな。この学園の生徒たちは、その中核を担う者たちであろうが……同時に、あの方は、それだけでは満足されていないようにも思えるな」
顎髭を撫でつつ、ガルヴが言う。その意味を考えるように、彼の弟子たちは黙り込む。
軽く眼鏡の位置を直しつつ、ルードヴィッヒが口火を切る。
「グロワールリュンヌの者たちへの語りかけにも意味があった、と……？」
「しかり。そして、そこから、ミーア姫殿下の考えておられる改革の形が見える。すなわち、急進ではなく漸進を……とな」
厳かな口調で、ガルヴが言った。それを認めるように、ルードヴィッヒは頷いた。

「そうですね。間違いなく、それこそがミーアさまのお考えなのでしょう……」

自らの権力で強引に押し進めるのではなく、良くない物を一つずつ改めながら、少しずつ国を改革していく。

急進的な改革というのは、目覚ましく華やかに見えるもの。とても魅力的に見えるもの。

今日寝て、明日起きたら問題が解決している、というのは、理想的で、好ましく思えるもの。

けれど、現実はそう上手くはいかない。

急進的な改革は、しばしば混乱を生み、不安を生み、高い確率で誰かの血を流させるもの。生じた恨みは、さらなる復讐と血を生み、国内は荒んでいく。

それが本当に急進であるならば、まだ救いはあるだろう。されど、急すぎる改革は、急進ではなく、ただの急変で終わることもよくある。変わる先のヴィジョンの共有のない変化は、ただの、旧勢力の破壊に過ぎず。やってくるのは、改善された未来ではなく、混沌と破壊のみ。

仮に権力が腐敗しているからといって、強引に破壊してはいけない理由がそこにある。

それでも時に、強引に改革をなさねばならぬ時もなくはないが……。

「ミーアさまのお働きにより、帝国には猶予ができた。食料事情に何の手も付けぬまま、この不作の年を迎えていれば、四の五の言ってはいられなかっただろうけれど……今は未来を考える余裕がある」

はじめの頃、ミーアは自らの権力を使うことに遠慮がなかった。

それは、喫緊の大きな危機に備えてのこと。今のルードヴィッヒには、それがよくわかる。確かに、あの時は、悠長なことは言っていられなかった。食料体制並びに新月地区の状況を改善し、食料不足に備えること。

それを断行しつつも、ミーアの目はすでに将来のことへと向けら

れていたのだ。
一つの危機を乗り越えたからと言って、今のままならばいずれは、帝国は斃れてしまう。多くの民の犠牲とともに……。それを回避するために……。
「人々がついてこられるように、人々が自分で考え、納得したうえで変わっていけるようにする、か……」
「さよう。ミーア姫殿下の改革は少数の精鋭によってなされるものにあらず。精鋭たちによって、多数の貴族を、民衆を動かし、より良き未来に向けての歩んでいくように促すものである、と、今回のことで明らかになったのではないかな？」
師の問いかけに、弟子たちは納得の頷きを返し……そして、
「帝国の叡智に……」
「大陸が誇る叡智に……」
「帝国初の女帝陛下に！」
誰からともなく、乾杯の声が上がる。
楽しい夜の宴は続く。

第百三十一話　ダメコンミーア

ミーアの答えに、その場のみなが目を丸くしていた。
――ああ、これは、ちょっぴりしくじったかしら……？　史上最高の女帝になるなどと……言い過ぎだったかも……？　くぅ、これは、少し微調整が必要かもしれませんわ。
すぐさま、己が発言の危険性に気付いたミーアはいそいそと始める……ダメージコントロールを……。
「……この際、誤解のなきようにはっきりと言っておきますけれど……わたくしは、己が腕で、この帝国に大改革をもたらそうというわけではございませんわ」
まず言い切る！　そのうえで、
「そもそも、否応なく変わっていくものなのですわ、国も、世界も。それは、ちょうど流れていく川のようなもの」
自分がなにもしなくったって、もともと、変わっていくものなんだよ！　と訴えたいミーアである。だから、国が変わっていくのは、自分の責任じゃないんだよ？　と、伝えたいミーアなのである。
「だから、どうせ変わるのであれば悪いほうにではなく、より良いほうへと変わっていきたい……。そう考えるのは、とても自然なことではないかしら？」
それから、ミーアはレアやリオネルのほうに目を向ける。
「わたくしは、セントノエルが好きですわ。親しい仲間たちがおりますし、とても楽しく、
居心地が良い場所だと思っておりますわ。叶うならばずっと女学生として、いたいぐらい」
視界の外れ、ビクッと皇帝マティアスが肩を震わせ、それは困る、と口を開けるのが見えたが、華麗にスルーし……。
「でも人は、いつまでも同じではいられない。いつか学校を卒業し、

各々の場所で務めを果たす時が来る。その時が来たなら、わたくしたちは、選ばなければならない。務めを誠実に果たすか、それとも、果たさないか……。果たすことを選ばないということは、そのまま、務めを果たさないことを選ぶことと同じ」

皇女として、国のことを一切省みず、与えられた権威に相応しく振る舞うことを選ばなかった。前時間軸の末路を思い出しつつ、ミーアは続ける。

「国もまた同じこと。いつまでも同じではいられませんわ。時を重ね常に変化し続ける。であるならば、我々が目指すのは、より良い未来であるべきではないかしら？」

こうして、ミーアは「国の変革」についての自身の責任を軽くしつつ……さらに！

「そして、わたくしは、信じておりますわ。もしも、わたくしが女帝になれば、これまでのティアムーン帝国を凌駕する国を作ることができる、と……。なぜなら……」

ミーア、ここで巧みな言い回しを弄する。すなわちっ！

「みなさんがおりますわ！」

流れるように、責任を分散（ダメージコントロール）する！

すなわち……。

「わたくしが女帝になって、この帝国が過去を凌駕するものになるとすれば、それは、みなさん一人一人の働きによるものである、とわたくしは考えますわ」

女帝ミーアを、過去の帝国以上の存在にするのは、この場に居る一人一人の働きである！　と訴えたいミーアである。

ミーアが史上最高の女帝になるのではない！　帝国の民が、ミーアを史上最高の女帝にするのだ。

それこそが、ミーア式イエスマンの究極形！　ミーアがいいね！をしているだけで、最高の女帝となれる、最高のシステムだ。

ミーアは静かな視線で、グロワールリュンヌの学生たちを見つめて、

「我が帝室にとって、あなたたち貴族は、なにかしら？」
問うた。
穏やかな、それでいて凛とした声で……。その問いかけに、学生たちの背筋が自然と伸びる。そして、答えたのは……。
「我ら中央貴族は皇帝陛下、並びに帝室の方々の腕にして、足。そのご栄光を支える、忠実なる臣である！」
答えは意外な方向から返って来た。
堂々と声を張ったのは、ジッと討論を見守っていた公爵夫人……ヨハンナ・エトワ・ブルームーンであった！
ちなみに非常にどうでも良い話であるが……ヨハンナはカルラの座る椅子のすぐ後ろに立っていた。グッと握った両の拳を、カルラの頭の両側面に押し当て、こう、ぐりぐりぐりーっとしている。ぐりぐりーっと。
しぱしぱ、涙目になっているカルラ。
「あれ、痛いんだよな……」
っとどこか遠くからサフィアスのつぶやきが聞こえてきたような気がするが、まぁ、それはどうでもいいことで。
ヨハンナは、娘の頭をぐりぐりー、ぐりぐりーっ！！　とやったまま、続ける。
「帝室の方々を支えることこそが至上の喜び。それこそが、我ら帝国中央貴族なり！」
ミーアは、ちょっぴり驚いた顔をしてから、
「感謝いたしますわ、ブルームーン公爵夫人。そう言っていただけると心強い限りですわ」
言いつつ、責任を、さまざまなところに分散、押し付ける！
さらにさらに！
「今日、こうしてみなさんで語り合っていることは、素晴らしいことであると、わたくしは考えますわ。今日の討論は、はじめにわたくしが言ったように大変に意義深いものとなった、とわたくしは考えますわ」

念のため、ミーアは確認しておく。
最初に言ったとおり、この討論会は勝ち負けではない、と、もう一度、念押ししておく。
そうでなければ「最終的な勝敗は“ミーアが過去の帝国に匹敵するほど偉大な女帝になる”と言ったことによって決した！」などと言われかねないわけで。
自身の発言が勝負を決めたと思われては、その発言の責任が重くなる。
「あの時、ああ言ったのに！　あの言葉で勝負が決まったのに、ミーアは結局、その言葉を守らなかった！」
「あの時、偉そうに史上最高の女帝になるなんて言ってたのに、全然、そうならなかったじゃないか！」
などと批難されるかもしれない。それは厄介極まることなので。
「みなさんの討論で、この帝国の抱える問題点が明らかになってきたように思いますわ。わたくしが女帝になるための障害も、それをどのように乗り越えていけばよいのかも……」
そうして、討論会の目的は達成されました感を匂わせつつ……一度、言葉を切ってから。
「あと望むことがあるとすれば、それは、この議論を“より良い未来のために生かしていく”こと。わたくしが最も嫌うのは間違いが見つかることではない。それを正そうとしないことですわ」
真っ直ぐに、ナコル・フーバーに、そして、グロワールリュンヌの学生たちに目を向ける。
「間違えることは恥ではない。我々、人間は間違える者。貴き血筋たる我らも、それは変わりはない。では何が我らの恥か？　それは、問題が明らかであるにもかかわらず、それを見ぬよう目を背けることですわ」
ミーアは、前時間軸の帝国貴族が、全員、愚かであったとは思ってはいなかった。
――恐らくは、わたくし並に知恵の働く方がいたはずですわ。わ

たくしのように……。
……それについては、イロイロな角度から検証が必要そうではあるが。ともあれ、合理性のない愚か者ばかりではなかったと、ミーアは思っている。
けれど、彼らは頑なであった。自己のやり方や常識を改めることはしなかった。
そして、楽観的でもあった。それでなんとかなるのだと自分自身すらも騙し続けた。
その結果が、あの断頭台だ。
「グロワールリュンヌの方たちの慧眼を、わたくしは確認させていただきましたわ。あなたたちであれば、この帝国の持つ問題も、自領が抱える問題をも、見つけることができるはず。そして、それが見つかったならば、それを恥じ入る必要などない。ただ、それを認め、改めれば良いだけのことですわ」
静かに目を閉じるミーアには、あの革命の日が思い浮かぶ。
焼かれた帝都、暗い地下牢、絶望の日々……。
ミーアは祈る。あの日が決してこの帝国に訪れぬように。
「ただ、改めれば良い……それだけなのですわ。うつむき、悲しみ、恥じ入り、後悔するよりほかに、何もできなくなる前に」
それから、ゆっくりと目を開けて、
「ああ、口を出さぬようにと思っておりましたのに、聞かれたから、ついつい答えてしまいましたわ。申し訳ないことをしてしまいましたわ」
深々と頭を下げてから、ミーアは言った。
「それはそうと、ユバータ司教、議論も白熱してきておりますし、ここはいったん休憩を入れるということで、いかがかしら？」
その場をおさめつつ、ミーアはナコル・フーバーとフリオ・フーバー子爵に軽く視線を送るのだった。

第百三十二話　一口（……比）のケーキ

「ふぅ……」
ミーアは一息吐いて紅茶を一杯。そんなミーアに、静かにアンヌが歩み寄り……。
「ミーアさま、これを……」
っと、差し出してきたのは……なんとっ！　切り分けたケーキの置かれたお皿だった。その大きさは一口分（ミーアの！）もある！
「こっ、これは……」
「はい、あの……少し、気分転換が必要なのではないかと思いましたから……」
アンヌは優しい笑みを浮かべて、
「あとで運動すれば……大丈夫だと思います。私もご一緒いたしますから……」
「あ、アンヌぅ……」
そのケーキは、討論会の場において、孤軍奮闘であったミーアにとっては、一服の清涼剤となった。
ミーアは、一口分（ミーアの！）のケーキを一口分（一般人の！）に切り分けて、パクリと一口……。口の中に、さらりとした甘みが広がる。
――ああ、美味しい。ケーキ断ちをした後のケーキが、こんなにも美味しいだなんて……。これは、新しい食べ方を発見してしまったかもしれませんわ。こうすれば、全体の量も抑えられるし、美味しく食べられる。言うことなしですわ。
そうして、じっくり甘味を味わうこと、四度。それから、脳内に糖分が回っていくのをじっくりと実感し……。その甘さの余韻に浸ること数秒。それが、消えていく、消えていく……。その最後の刹那、未練を残さぬよう紅茶で口の中をすすぎ……。

それから、改めて、フーバー子爵の問題に取り組むべく、気持ちを引き締める。
「ありがとう、アンヌ。元気が出ましたわ」
言いつつ、ミーアは自らの頬をパンッと叩く。
――さっ、それじゃあ、やりますわよ。フーバー子爵たちをなんとかしてやりますわ！
それから、ミーアは、フーバー子爵に歩み寄る。
「フーバー子爵、少しよろしいかしら……。ナコルさんも……」
っと、二人に声をかけた
「少しお聞きしたいことがあるのですけれど、よろしいかしら？」
「私と息子に、でございますか？　さて、なんでしょうか？」
ミーアの動きに、ヨハンナが少々、心配そうな顔を向けて来た。
――ああ、ヨハンナさんはフーバー子爵と親しい間柄でしたわね……。気になっても仕方のないことではありますけれど……もしかしたら、ヨハンナさんからもなにかお話が聞けるかもしれませんわね。親しい間柄であったと言うなら、先代のことも、あるいは……。
ミーアはヨハンナに向けて笑みを浮かべて、
「ヨハンナさんもご一緒にいらしていただけると嬉しいですわ」
「ならば、私も行こう……」
唐突に声を上げたのは、皇帝マティアスであった！　どうやら、ミーアはおろか、パティやベルにも放っておかれたことで我慢の限界に達したらしい。
「ああ、いえ、お父さまは……」
と言いかけたミーアであったが、ここでふと考える。
――ヨハンナさんはまだしも、フーバー子爵に関してはお父さまがいらしたほうが、口が軽くなるやもしれませんわね。もしも、彼が蛇でないのだとすれば、皇帝陛下の命令は絶対のはず……。それに、よくよく考えると先代皇帝陛下、すなわちわたくしのお祖父さまの教育係が先代のフーバー子爵であるとするなら……お父さまもご存知かもしれませんし……。

なにより、と、ミーアは討論会のほうへと目を向けた。
――お父さまがいると、グロワールリュンヌの学生が好きに意見を言えませんわ。そうなると、必然的にわたくしを礼賛するような意見に対しては、あまり強く言い返せなくなってしまう。その結果が、史上最高の女帝などというものであったことを考えると……お父さまもここには残さないほうが良いかもしれませんわ。
ミーアは小さくため息を吐いてから、
「では……まぁ、あまり気は進みませんけれど、お父さまにも来ていただきましょうか」
さて、フーバー子爵たちをどうするのかは問題だが、もう一つ問題が残されている。
温まりに温まった、白熱した討論会の場を、このままにしていって良いのか、という点である。
下手をすると、ミーアの功績を讃える黄金像建設のための会議に変化したりはしないか……？　余計なことを話し合い始めたりはしないか？　と一抹の不安を覚えたミーアは、そこで、ぽこんっと手を叩いた。
「ああ、そうですわ。わたくしたちが席を外している間、セントノエルの方々も加えて、各国の問題点について、議論を深めておくのはいかがかしら？」
視線を向けるのは、シオンのほうだった。
せっかく、居るのだから、弟の授業参観などという楽な役に就けておく必要はない。コイツもきっちりと働かさなければ……！
「せっかくサンクランドの王子殿下が、それもお二人もおりますし……。セントノエル生徒会のレアさんやリオネルさんもおりますわ。ああ、それと、アーシャさんもお呼びして……それで帝国のことに限らず、この大陸全体の未来について、論じ合うのはいかがかしら？」
言いつつ、ミーアは、これは良いことを思いついた、とほくそ笑む。

――帝国のことをこのまま論じ合わせていると、ナニカ余計なことを言い出しそうですけれど、視野を複数の国々に広げれば、そうそうおかしなことにはならないはず。シオンもいることですし……。

「なるほど、確かに、パライナ祭は、国々の共同行事。帝国の学園の者たちと意見を交換し合うことに意味はあるか」

ミーアの思惑を汲んでくれたのか、シオンが頷いた。

「では、お願いしますわね。みなさん」

そう言いおいて、ミーアたちは部屋を後にした。

第百三十二話　事情聴取

別室に移動して早々に、フーバー子爵が口火を切った。
「して、我らにお聞きになりたいこととは、いったいなんでしょうか？」
「そう、ですわね……」
ミーアは、すぐに本題に入っても良いものか……一瞬、考えて後……、念のために神聖典の一節を唱える。
「褒めたたえよ、神の名を。我らの日々の労苦に報い、我ら弱き者を養いたもう大いなる方を」
高らかに声を張り、ミーアはみなに視線をやる。
――確か、蛇は神聖典に拒否反応を示す、という話がございましたけど……。
そうして反応を確認するが……フーバー親子も、ヨハンナも、キョトンとした顔をしていた。
――まぁ、この確認の仕方は確実ではないようですけれど、一応は安心しても良いのかしら……。ん？
その時、ふとミーアは気付く。
自らのかたわら、しっかりついてきたパティが……パティまでもが不思議そうな顔で見上げていたから。
――あら、パティはこの確認の仕方を知らないのかしら？
少々、不思議には思ったものの、ミーアは咳払い。それから、
「失礼しましたわ。先ほどの討論会が素晴らしくて、ついつい、神に賛美を送りたくなりましたの」
ユバータ司教の目のないところでも、さりげなく、信仰に篤い皇女殿下をアピール。万が一にも足元をすくわれないように余念がないミーアである。
一口のケーキは、ミーアの脳みそを活性化させているのだ。

「さて、実はお聞きしたいことがあって、こうして集まっていただいたんですの。まず、ナコルさんにお聞きしたいのですけれど……あなたが先ほど言った言葉、『政治とは集団行動である』というのは、非常に興味深い見解でしたわ」
まず褒めつつ、ミーアは鋭い視線を向けて、ナコルに問う。
「あれは、あなたが自分で考え出したことかしら？　先ほどは“学んだ”というように言っていたかと思いますけれど、なにか、本の知識かしら？　あるいは、どなたかから聞いた話か……」
「はい、ご賢察のとおり、私は、その言葉を父の持つ本の中に見つけました。厳密に言えば、本に挟まれたメモによって、ですが……」
「ほう、メモ……」
ミーアは腕組みしつつ、深々と頷いた。
「なるほど、本ではないのですわね」
「はい。切れ端に書かれたものでした」
眉間に皺を寄せつつも、ミーアは唸る。
――地を這うモノの書本体というわけではないのですわね。とすると……。
「ああ、それは兄の残したものではないかと思います」
横から、フーバー子爵が口を挟んできた。
「我が兄、シドーニウスは、時折、そのように思いついたもののメモを本に挟む癖がありました。古の賢人の本を読みつつ、そこから得られた知識をどのように若者に伝えるか、日々考えている人でしたから。自らの考え付いたことを忘れないように、その都度、メモして残していたのだと思います」
「なるほど……先代フーバー子爵のメモ……」
「はい。日夜、本を読み、グロワールリュンヌの学生たちをよりよく導くために思索を深める、そういう人でした」
「そう……なんですのね」
正直、よりよく導くに関しては、一言、物申したくはなるものの、それをグッと呑み込んで、それからミーアはパティに目を向ける。

っと、パティも無言で頷いて応える。
――やっぱり、そういうことですわね。蛇の知識を書いたメモが、ところどころに残されている、だから、断片的な知識は得られても、蛇の核心、秩序を破壊し、混沌を招くというあたりまでは教えられていないのですわ。
そこまで考えたところで、ミーアは小さく首を振る。
「いえ、そう判断するのは、早計かもしれませんわ……」
自分にとって都合の良い情報こそ、信じやすいもの。
今年は不作だったかもしれないけれど、来年は大丈夫だろう。きっと今年少なかった分、例年以上の豊作年で、切り崩した備蓄も回復するに違いない。
そんな楽観主義に毒されて、斃れていった貴族が何人いたことか……。
――結論を出すにはまだ早いですわ。もっとじっくりと、そのシドーニウスさんという方のことを聞き出さなければ……。
「ああ、シドーニウス……フーバー子爵か。懐かしいな……。確かに、いつも考え事をしているような、物静かな男だった」
そうつぶやいたのは、マティアスだった。
「しかし……ふふふ」
そこで、マティアスは、なにやら思い出し笑いを浮かべる。
「今だから言えるが……てっきり、私は、母がシドーニウスに好意を抱いているものと思ったのだ」
「なんと！　陛下！　それは、パトリシアさまに失礼というものじゃ。パトリシアさまは、表情にこそ出さないものの、当時の皇帝陛下にぞっこんであったことは、陛下もご存知でございましょうに！」
ヨハンナが、抗議の声を上げる。
それを聞きパティが……こう、なんとも言えない、味のある表情を浮かべる。嬉しげでもなく、照れるでもなく、なんというか……実に胡散臭そうな顔をしていた！
えー、ぞっこんとか、本当かよ……とか、思っていそうな、しか

めっ面だ！
　そんなパティの様子になどまったく気づかずに、マティアスは頷いた。
「わかっている。一度、聞いてみたことがあるからな……。フーバー子爵には悪いが、実に嫌そうな顔をされてしまった」
「滅相もございません、陛下。皇太后さまと兄が、そのような恐れ多いことにならず、安堵しております」
　恐縮するフーバーに一つ頷いてから、マティアスは言った。
「恐らく、母はシドーニウスが子を成さなかったことを気にかけていたのであろうな。子爵家の存続にも、グロワールリュンヌの教育にも影響があることであろうしな……」
　――ふむ、パティが気にしていたというのは、少々、気になりますわね。
　チラリ、とパティに目を向ければ、パティは小さく頷いてから、
「……やっぱり、疑わしい人物のように思います。先代のフーバー子爵は……」
　囁くような声で言った。
　――パティがそういうのであれば、もう少し、話を膨らませてみましょうか。
　ミーアは一つ頷き、フーバー子爵に目を向けた。
「シドーニウス殿……先代、フーバー子爵は、実に興味深い人物のようですわね。それに、わたくしも気になってしまいますわ。なぜ、子を成さなかったのか……。貴族にとって世継ぎは必須な物ですし……。なにか考えがあったのかしら？」

第百三十三話　ミーア姫、切り分ける（ケーキに非ず）

「我が兄の、シドーニウス・フーバーが子を成さなかった理由、でございますか？」

フーバー子爵が面食らった顔をした。今まで考えたことがなかったのか、難しい顔で腕組みする。

「ええ、そのとおりですわ。婚儀を結んだ末、子ができなかったわけではなく、妻すら持たず、独身を貫いていたという在り方が、どうにも伝統ある帝国貴族とはかけ離れているように思うのですけれど……」

言いつつ、ミーアは考える。

――ふむ、どうやら、フーバー子爵はお兄さまのことを尊敬している様子。それに、ヨハンナさんも、割と信頼している感じがいたしますわ。ということは、悪役として断罪する、と言ったスタンスでは反感を買ってしまうかもしれませんわね。とすると、どうするか……。

「なるほどな。そういえば、妾も気になったことがあったのじゃ。いったい、シドーニウス殿がなにをお考えか……」

ミーアの見解に同意するように頷くヨハンナ。対して、フーバー子爵は難しい顔で、

「実は、私は一度聞いたことがあります。その際、兄は、情が生まれるから、と言っていました」

「ほう、情が生まれる……」

「はい。血を分けた兄弟であっても、お前は他人である、と、私に言いました。だからこそ、情を介すことなくすべてのことを教えることができる、と……」

「なるほど、つまりは、シドーニウス殿は、子ではなく、弟子をこそ欲しがっていた、ということかしら……」

ミーアの問いかけを吟味するように唸ってから、フーバー子爵は頷いた。
「恐らくは、そうではないかと……」
「そう。そして、あなたは弟子として、そのお兄さまの志を継ぐためにグロワールリュンヌにて教鞭をとられている、と……」
「はっ！　フーバー子爵家の一員として、恥ずかしくないよう務めさせていただいております」
「なるほど……」
小さくつぶやき、ミーア……大きく一歩踏み込む！
「ふむ……ならば……考えなければなりませんわね、フーバー子爵」
「は？　なにを、でございますか？」
「無論、知れたことですわ。あなたが、何者にならなければならないか……ですわ」
それから、ミーアは上目遣いにフーバー子爵を見つめた。
「なぜなら、あなたは、お兄さまにはなれない。シドーニウス・フーバーのようには決してなれないから」
「なっ！　なんですと！？」
ミーアの言葉に目を見開くフーバー子爵。ミーアは噛んで含めるように続ける。
「あなたは、兄の意志を継いだとしても、兄と同じものにはなれませんわ。なぜならば、あなたは、妻と結ばれ、子を成したからですわ」
ミーアは、断言してやる。
それは、目の前のフーバー子爵を、その兄であるシドーニウスから切り離すためのもの。
蛇であった可能性の高い、悪影響のある兄から、フーバー親子を解き放つためのもの。
お前と兄とは違う！　と、まずはっきりと断言してやるのだ。
「我が父を愚弄するのは、おやめいただきたい！」
声を荒げつつ立ち上がったナコルに、けれど、ミーアは首を振っ

てみせた。
「別に、フーバー子爵を愚弄するつもりはございませんわ。ただ、これは、当然の論理の帰結というものですわ」
あえて、学問に携わる者に刺さる言い方をしつつも、ミーアは嫣然と笑みを浮かべた。
「あなたとシドーニウス殿とは違いますわ。彼は子を成さず、己が子孫の繁栄を望まず……ゆえにこそ言えたのでしょう。帝国の、反農思想を維持すべき、と……。フーバー子爵は、それをしっかりと認識すべきですわ」
「子孫の繁栄を望まず？　いや、そのようなことは決して……」
「先ほどの討論、お聞きになっていなかったわけではございませんでしょう？　帝国が、これから先、発展していくためには、農業技術の発展は必須。反農思想を維持すべきというのは、最もシンプルな帝国繁栄の道を閉ざすものなのではないかしら？」
そこまで言ってから、ミーアはふと、表情を緩めた。
「あるいは、こう考えることもできますわ。シドーニウス殿は貴族の中の貴族、誇り高き帝国貴族であったのでしょう。だから、もしかしたら、彼は、詳しく知らなかったのかもしれませんわ。下賤なる農業のことを。農業を伸ばすことが、帝国を繁栄させていくことに繋がるのだ、ということを」
帝国の伝統の中に、反農思想が組み込まれている以上、帝国の伝統を強硬に保守すべき、と訴える人物が知らなくてもおかしくはない。唾棄すべき知識を、わざわざ習得する必要はないからだ。
もっとも、ミーアはそれを全く信じてはいなかった。たぶん、シドーニウス・フーバーは農学に関しても、相応の知識を持っていただろう。地を這うモノの書を知る男が、農学の知識に疎いなどということはあり得ない。時に農学の知識すら悪用し、秩序を破壊しに来るのが蛇というものなのだ。
けれど、死人に口なし。ゆえに、ミーアは積み重ねていく。フリオ・フーバー子爵を感化させるためのロジックを。

「それは……確かに。私も、先ほどの討論を聞くまでは、農学がこの帝国を資するものになるなどというのは、考えたこともございませんでしたが……」
渋々認めたフーバー子爵に、ミーアは満足げに頷き、
「そう。農学が国を豊かにするなどと思いもしなかったし、それに、彼は子を飢えさせる不安を抱くこともなかったのでしょう。なぜなら、彼は子を成さなかったから。彼は完全に論理の中に居続けることができたのですわ。なぜなら、彼には、理論より感情を優先させてしまうような、そのきっかけになる妻や子がいなかったから。親ならば当然抱くであろう、子が餓える不安。そんなものと、彼は無縁でいられた。でも……あなたは、違いますわね？」
そうして、ミーアはフーバー子爵を真っ直ぐに見据える。
「あなたは、お兄さまにはなれない。である以上……あなたは、考えなければならないのですわ、フーバー子爵。ご自身の、振る舞い方を。自分がいったい、なにになるのか、ということを」

第百三十四話　ミーア姫、省エネ海月戦術の粋を見せる

さて……これでなんとかなるかしら……と思いつつ、ミーアはふと自らのお腹をさする。

――あら、今日食べたケーキに関しては、そろそろ消費してしまったのではないかしら？

我ながら、今日はよく頭を使ってるぞぅ！　っと自覚するミーアである。そして……！

――今日食べた分を消費しきれば、昨日食べたプニッツァ分を消費しなければならなくなるはず……。それをも全部使い切れば、無理に運動することもないのかも……。

「なにになるか……」

ミーアが色々な意味で甘いことを考えている間に、いささか戸惑った顔をしているフーバー子爵。ミーアは頷いて応える。

「ええ、その通りですわ。あなたがお兄さんの思想に生きようと思っても中途半端にしかなれないのですから、それは当然のことではないかしら？　あるいは、こうも言うことができますわ」

ミーアはニッコリと笑みを浮かべて言う。

「師が最も嬉しい時はいつか？　それは弟子が自分を越えてくれた時ですわ！」

こう……師匠とか弟子といった関係がたまらん人たちが、好きそうな言葉を！

ちなみに、クロエがお勧めしてくれた「師匠と弟子との熱い友情モノ」の小説による知識である。それは、師匠推しと兄弟子推しと弟弟子推しで、ミーアの周りの令嬢たちの人気が三分される傑作であったのだが……まぁ、それはさておき。

「兄を……超える？」

フーバー子爵は呆気にとられた顔をした。けれど、その顔にかす

かに……小さな熱意がほとばしるのを、ミーアは見逃さない。
教師をやっているだけはあって、フーバー子爵は、きっと好きなのだろう。師匠と弟子の絆とか、そういうのが！
内心でにんまーりしつつ、ミーアは頷く。
「ええ、その通りですわ。あなたは、農学が帝国を資するものであると知った……知ってしまったのですから……お兄さまにはなかった知見を持っていると言えるのではないかしら。その時点で、お兄さまより有利とも言えるでしょうし、お兄さまとは違う道を切り開かなければならない、とも言えるかもしれませんわ」
すでに、種は蒔かれたのだ。
彼はすでに知ってしまっている。である以上、彼には二つしか道はない。
その種を育てるか、放置し、枯れさせるか……。
けれど、ミーアは許さない。
見て見ぬふりで、その種を枯れさせることを……。貴族のそれは、断頭台を近づけるための近道だ。ゆえに、まずいところがあれば、それを正していかなければならないのだ。
特に人の上に立つ者たちは……。
「それが、この帝国のために忠義を尽くした、お兄さまに恥じぬ生き方ではないかしら？」
あくまでも、シドーニウスを、この帝国の忠臣として扱うミーアである。
彼の兄が蛇として「肥沃（ティア）なる三日月地帯を涙（ムーン）で染め上げる」帝国を保守しようとしていたのならば、その保守しようという部分はそのままに、帝国の内情をすり替えるのだ。
『三日月（ティア）をすべての臣民の歓喜（ムーン）の涙で染め上げる』帝国へと。
――お兄さまの記憶をあえて汚す必要もなし。お兄さまが立派な忠臣であったと信じているのならば、その幻想をそのまま使ってやるのが面倒のないやり方ではないかしら？
利用できる波は利用し、最低限の動きで波に乗る。省エネ海月戦

術の粋を見せるミーアである。昨日より己が内に蓄えたエネルギーがすでに枯渇しつつある……と思い込んでいるミーアである。ミーアの中ではそういうことになっているのだ。

――しかし、このフーバー子爵は、お兄さまから蛇の秘密を話してもらえなかった……ちょっぴり頼りない方ですわ。ならば、変な方向に行かないように、少しだけ、方向を定めてあげる必要がございますかしら……？

ミーアは無意識に眉間に手をやる。そうして、幻想の眼鏡をクイッと押し上げつつ、イメージするのは、かつてのクソメガネ・ルードヴィッヒ。

できの悪い生徒（ミーア）を偉そうに指導するクソメガネの口調で、ミーアは言った。

「あなたがお兄さまを超える、その最初の一歩は、もう決まっているのではないかしら？」

その言葉に、フーバー子爵は眉間に皺を寄せる。

「それは……反農思想の是正、でございますか？」

「まさにそのとおりですわ。なにしろ、あなたは教師。悪しき偏見を払拭するのに、学校は良い場所ですわ」

言いつつも……ミーアは心の中で、ちょっぴーり悪い笑顔を浮かべる。

――フーバー子爵がその任を負ってくれるのであれば……わたくしに対する反感を逸らすことができるかもしれませんわ。

保守的な中央貴族を説得するのは、なかなか骨が折れる作業だろうなぁ、と思っていたミーアである。代わりにフーバー子爵がやってくれるならば、これほど楽なことはない。

「今の帝国貴族が持つ、農民を下賤な者と見下す思想……。けれど、農業が帝国の繁栄に有益であるならば、必然、農民は下賤な者ではない、と。そう思わせなければいけないわけですか……。しかし……」

ふとそこで、躊躇うように言葉を呑み込むフーバー子爵。

「別に、迷うことなどあるまい、フーバー子爵」
横から口を挟んできたのは、ヨハンナであった。
「先ほどミーア姫殿下がおっしゃられた通りじゃ。帝国貴族の古き慣習が誤っていたのであれば、同じ、帝国貴族である我らが正さねばならぬ。誤りと知ってなお正さぬは恥ずべきこと。先ほどのミーア姫殿下の言に妾は賛成じゃ」
堂々と言って、ヨハンナは扇子を取り出し開こうとして……そこでふと苦い顔をした。
扇子は……先ほどイロイロあったせいで、へし折れていたからだ。そう、イロイロと……。
「……妾の娘……カルラも根っこから叩きなおしてもらいたい。徹底的に、なぁ……」
先ほどの怒りがぶり返したのか、鼻息荒く言うヨハンナ。

同じ頃、少し離れた討論会の場で、なぜか、サフィアスとカルラの兄妹が、同時にぶるるるっと背筋を震わせていたとかいないとか……。

第百三十五話　腕利きメッセンジャーに徹す

「ところで、ナコルさん、少しよろしいかしら」
フーバー子爵がヨハンナの言葉を受け、なにやら考え込んでいる間に、ミーアはナコルのほうに目を向けた。
突如、話を向けられて、ナコルは驚いた顔をする。
実のところ、ミーアはナコルも油断ならぬ者と思っていた。なぜなら彼は、もしかすると地を這うモノの書の一部に触れたことがあるかもしれないのだ。
混沌の蛇とは、弱者に感染する思想と、巫女姫ヴァレンティナは言っていた。であれば、父親が蛇でなかったとしても、地を這うモノの書の記述によって隔世的（かくせいてき）にナコルに蛇が伝染していることだってあり得るではないか。
――油断は禁物ですわ。蛇はどこにでも現れるもの。であれば、せめて居場所をきちんと把握しておかなければ……。
蛇の強みは、思いもよらぬところから攻撃してくるところである。言ってしまえば、その正体が判明していないことこそが、蛇の最大の武器とも言えるだろう。
極論してしまえば「蛇だと判明している力ある蛇導師」と「判明していない実力不足の蛇」と、どちらが脅威かと言われれば、おそらくは後者だ。
そう、少し考えれば実に簡単なことなのだ。
はたして、ジリジリと目の前からにじり寄ってくるギロちんと、突如、出現するギロちん、どちらが恐ろしいだろうか？
どちらのほうが、マシと言えるだろうか？
それは、考えるまでもなく……。
――そんなの、どっちもごめんですわ！

……そう、言わずもがなである。
どっちもごめん……そんなの当たり前のことなのだ！
っということで、どちらの危険も潰しにいくために、ミーアはナコルに向き合った。
「先ほどの議論、なかなかに見どころがございましたわ」
「お褒めに与り、光栄です……ミーア姫殿下」
恐らくは、なにかしら叱責を受けることを警戒していたのだろう、ナコルはミーアの言葉に意外そうな顔をした。
「あなたは、お父上、さらに、伯父上の言葉をしっかりと学んでいるのですわね」
「はっ！　フーバー家の名に恥じぬよう、日夜、努めております」
胸を張るナコルに、ミーアは、軽く探りを入れていく。
「ところで、今回の討論会のメンバーに選ばれたということは、あなたはグロワールリュンヌ内でも成績上位者ということなのかしら？」
「はい。僭越ながら、常に、同年代の者たちの中で、上位三名から漏れることのないように、と、自らに課しております」
その自信に満ち溢れた顔を見て、ミーアは頷く。
――ふむ……この様子ですと“敗者になったこと”はないと考えても良いのかしら……？
蛇は、敗者から敗者へと感染していく思想だ。もしも、ナコルが成績優秀で、敗者の立場に立ったことがないのであれば安心できるのだが……。
「なるほど……。ふふふ、昨日の歓迎会では、あまりお話しする機会がございませんでしたから、こうしていろいろとお話しできて嬉しいですわ」
微笑みつつも、ふと、ミーアの脳裏に疑問が浮かぶ。
「しかし、なぜ、昨日はお話しできなかったのかしら……。わたくし、てっきりグロワールリュンヌの方たちとは、みな、ダンスをし

たように思っておりましたけれど……」
その言葉に、ナコルの顔が、ちょっぴり曇る。
「いえ、その……恥ずかしながら……ダンスは、あまり得意ではなくって……」
どこか劣等感の滲む言葉に、ミーアの嗅覚が鋭く反応する！
――ほう、ダンスが苦手！　ということは、もしかすると、運動全般が苦手かもしれませんわね……。そうでないとしても、貴族の社交界において、ダンスが苦手なのは、なかなかに敗北感を抱きがちな要素かもしれませんわ。
ナコルに対する疑いを解かぬまま、ミーアは話を進める。
「あら、そうなんですのね。それは残念ですわ……。ところで、伯父上のメモに、わたくし、少々、興味がございますの。他にもなにか、覚えているものはあるかしら？」
「色々とございますが、やはり、印象深かったのは、イエロームーン家のゲオルギアとカルディエの研究でしょうか……」
っと言ってから、ふと、まずい、という顔でフーバー子爵やマティアスのほうに目を向け……。
「あ、えと、その、帝室に反旗を翻したことが興味深いというのではなく、あくまでも、過去の歴史研究として……」
「別に気にする必要はございませんわ。シドーニウス殿は、帝国文化に興味がある方ですし。歴史を研究していたとしても不思議はございませんわ」
微笑みつつ、ミーアは思わぬ答えに首を傾げていた。
――イエロームーン公ゲオルギアの反乱……。そして、兄を止めた、次のイエロームーン公カルディエ……。帝国史に残る内戦未遂事件の研究というのは……なかなかに興味深い話が出てきましたわね……。イエロームーン家は蛇と関係の深い家柄ですし……。はたして、単純に調べていただけなのかしら……それとも……。
そこで、ミーアは苦笑いを浮かべる。
自分らしくないことをしていると、気付かされたからだ。

そうなのだ、ミーアが目指すのはあくまでもイエスマンになること。考えるのは自分の仕事ではない。

今は、帝国の叡智の知恵袋と名高いルードヴィッヒはいないものの、代わりに、頼りになる賢き祖母パトリシアがいるのだ！　頼らないなんてもったいないのだ！

その祖母……実は、ミーアよりちょっぴり年下だったりするのだが、ミーアはそんなの気にしない。若さで相手を侮らない、さすがの叡智なのである！

……そうだろうか？

ということで、ミーアは助言を求めるべく横のパティに目を移す……。けれど、パティは、かたわらにはいなかった。

見ると、とととっと、ヨハンナのほうに小走りに向かっていくところだった。その顔には、いつになく、真剣な表情が浮かんでいた。

――ああ、パティ……ヨハンナさんと話しをつけにいったのですわね。ふむ、であれば……。

ミーアはナコルに視線を戻し……。

――後でパティとルードヴィッヒに相談できるよう、きっちりと聞き取り作業を進めておくことにいたしましょうか！

帝国の通信使（メッセンジャー）、ミーア・ルーナ・ティアムーンの本領発揮である！

第百三十六話　小さな寂しさ……

「あの、ヨハンナさま……」
ミーアたちの話が一段落ついたところで、パティは意を決し話しかける。
ヨハンナを縛ってしまった、未来の自分のけじめをつけるために。
「うん？　おお、パティ。なんじゃ？　妾になんぞ、用か？」
話しかけられたヨハンナは、嬉しそうに相好を崩した。ヨハンナは、大変、機嫌がよい様子だった。
聖ミーア学園の生徒たちに、否、他ならぬミーアに言い負かされて、帝国の古よりの伝統を守れ、という、皇太后パトリシアの言葉を守れなくなりそうだというのに……なぜか。
「……皇太后パトリシアさまに言われたことは、もういいのですか？」
そう問いかけるパティであったが、予想はついていた。
ミーアの見せた未来像が、過去の皇太后パトリシアへの信頼を上回ったのだろう。
先ほど聞いたミーアの言葉には、それだけの重みがあったのだ。
聞きようによっては無礼な、踏み込んだ質問であったにもかかわらず、ヨハンナは機嫌を損なうこともなく……。
「ふふ……そうじゃな」
ただ、苦笑いを浮かべて言った。
「なんというか、このままじゃと、パトリシアさまに苦言を呈されてしまいそうな気がして、な……」
「……？」
きょとん、と首を傾げるパティに、ヨハンナは続ける。
「妾は、ただ帝国を、今のまま守っていれば良いと思っておった。何一つ変えぬことが、守ることであると考えた。じゃが……それは、

怠惰に過ぎぬ。きっと、ミーア姫殿下のような勤勉な方には、歯がゆく見えたのじゃろうな」
苦笑するヨハンナに、パティは愕然とした表情を返す。
ミーアお姉さまが……勤勉……？
うっかり口からポロリしかけた言葉を呑み込み、無言で見守る。
「そして、たぶん、パトリシアさまも同じであったろう。孫娘のことを助けず、あまつさえ邪魔をする妾に、きっとやきもきしていたのではあるまいか……」
うん、まぁ、それはそう……とパティは心の中で大いに頷きつつ、無言で見守る。
「じゃが……あるいは、妾は……勝手にパトリシアさまのお考えを歪めているのやもしれぬな……。自分に都合よく……」
ヨハンナはそう言って、かすかに目を細めた。まるで、まぶしい光を見つめるかのように……。
「ミーアさまがおっしゃられた未来……妾はそこに、我が子たちの未来を見てしまったのじゃ。フーバー子爵と同じじゃ。妾は、パトリシアさまのお考えを守りたいと言いながら、同時に、サフィアスやカルラの幸せをも願ってしまう。サフィアスとカルラだけではない。その子の、孫の、妾に連なるすべての子どもたちの未来に、思いを馳せてしまったのじゃ」
その顔に、わずかばかりの苦しさを浮かべて、ヨハンナは吐き出す。
「ただ純粋に、パトリシアさまのお考えを守ることは、もう妾にはできぬ。妾には、守る者たちができてしまったからじゃ……」
苦悩に歪むその顔に、パティは慰めの言葉をかけようとした……のだが……、次の瞬間！
「じゃが、妾は思ったのじゃ！　それはどう考えても、パトリシアさまが悪い！」
グッと拳を握りしめるヨハンナに、パティ、驚いて跳びあがる。
それから、咎めるようにジッとヨハンナを見つめる……。が、それ

に気付いた様子もなく、ヨハンナは言った。
「だってそうじゃろう？　あのような形で、あんなにも早く亡くなられたのが悪いのじゃ。妾のような者に後を任せて、お亡くなりになられたのがすべて悪いのじゃ。あの程度の火事、軽く抜け出して戻ってくればよかっただろうに」
そんな無茶な……と思いつつも、パティは静かに息を呑んだ。
ヨハンナの、その目が、かすかに潤んでいたから。
「じゃからな、もしも妾に文句があるのならば、生き返って、妾の前に出てきて、直接、言えばよいのじゃ……そうすれば、妾も文句を言うことができるじゃろう。言ってやりたいことは、妾にだって、たくさん……たくさんあるのじゃ」
奇しくも……そのヨハンナの願いは叶っていた。
今まさにヨハンナの前に立ち、その話に耳を傾けているのは、他ならぬ、パトリシア本人なのだから。
――もちろん、私は、この人が知っている皇太后じゃないけど……。それでも……。この人は二度と私（パトリシア）と話をすることはないんだから……。
これから先、パティが過去に戻れば、過去のヨハンナと話すことはできる。いろいろな言葉を交わし、仲を深めることはできるだろう。
けれど……この目の前の人は……そうではない。もしかしたら、これは、皇太后パトリシアとヨハンナとが会話する、最後の機会になるのかもしれないから……。
なんの打算もなく、なんの考えもなく……パティは声を出していた。
「……もしも」
「うん？」
「もしも本当に、パトリシアさまが今、この場所に生き返って来たとしたら……きっとヨハンナさまのお考えには、反対しないと思います」

「ほう……？」
ヨハンナが、ぴくっと眉を動かした。
一瞬、怒られるか、とパティは覚悟する。
なぜならば、見ようによっては、パティがしていることは、大切な人の言葉を騙ることだからだ。
大切な人の魂を愚弄する者と、思われてしまうかもしれないからだ。
けれど、言葉を止めることはしない。
未来の自分が残してしまった言葉に、縛られ続けた彼女に……その言葉を守り続けた彼女の想いに、応えたいと思ったから。
「……パトリシアさまは、ミーアさまや、皇帝陛下だけを守ってほしいとは、思ってないと、思います。ヨハンナさまのことだって大切に思っていたのだから、そのお子さまたちのことも、子孫のことも、きっと大切に思っていたはずだから……」
その時だった。ふと、パティは思った。
――私は……この人の子どもを抱き上げることはあったんだろうか……？
カルラは無理でも、あのサフィアスが生まれた時、自分はまだ生きていたんだろうか？
その赤子を抱き、ヨハンナと笑い合う時は、あったのだろうか……？
そして、思う。
――仮に、ヨハンナさまの子を抱き上げることはあったとしても……。どちらにしろ、ミーアお姉さまが生まれた時には立ち会うことができないんだっけ……。
それは要するに、過去に戻ってしまえば、もう二度と、会うことはできないということだ。
ミーアにも、ベルにも、ヤナにも、キリルにも……。
その実感が不意に、パティの胸に迫ってきた。
火事で死ぬと言われても、なんとも思わなかったのに……ここに

いる人たちと別れて過去に戻れば、もう二度と会うことができないのだと……そう思った瞬間に、なんだか……。
「そなたは……良き子じゃな……」
ヨハンナに抱きしめられた。
ギュッと体を締め付けるように……。顔が押し付けられたドレス、優しい花の香りのするそのドレスが、わずかに濡れていくのを感じ……パティは自分が泣いているのに気付いた。
「……あっ」
「良き、子じゃ。他人のために涙を流すことのできる、優しい子じゃ」
「え……や、あの……ちが……」
パティは戸惑いつつも、否定しようとする。
もし仮に、自分が泣いていたとしても、それは別にヨハンナのためじゃない。
ただの勘違いなのに優しくされてしまうと、気まずいやら、恥ずかしいやら……。なので、パティは否定しようと、腕をパタパタさせるが……。
「そなたの言葉、妾はとても嬉しかった。名前が似ている、ただ、それだけのことだとは思うのじゃが……まるでパトリシアさまご本人に声をかけられたような……そんな心地がしたのじゃ」
そう言われてしまうと、もう、否定もできない。
「……ぅう……」
困ったように、小さく呻いてから、パティは力を抜いた。
――まぁ……ヨハンナさまがずっと会いたいと思っていたパトリシアと再会できたのだから……うん、まぁ、これはこれでいい、のかな……？
ぼんやりと、そんなことを思いながらも……。
その胸に生じた、小さな寂しさは消えることはなかった。

番外編　ミーアの秘密、ついにバレる！

さて、ミーアたちが去ってから、討論場の配置が少し変わった。
ミーアの指示を受けて入って来たアーシャ・タフリーフ・ペルージャン、並びにシオン、ティオーナ、サフィアスにエメラルダの席を追加。それに合わせて……。
「そうだな……せっかくだから、席替えをするのはどうだろうか？」
シオンが厳かに提案する。
「ミーア姫殿下の言っていたとおり、この話し合いには敵も味方もない。より良い未来を目指し、意見を交換するためのものだ。こうして、ヴェールガ公国やサンクランド、ペルージャン農業国も加わったことだし、ミーア学園とグロワールリュンヌの学生が対立するように座っている必要はないのではないか？」
シオンの言葉に、グロワールリュンヌの女生徒たちが、一斉に色めき立つ！
なにしろ、シオンと言えば、イケメンで有名だ。しかも、大国サンクランドの王子殿下ときている。その隣の席をゲットし、仲を深めたいと思う令嬢たちは多かった。
そうして、ササッとくじ引きした結果――結果っ！
「よろしく頼む、サフィアス殿。それに、ヤーデン殿も……」
シオンの両脇は、ブルームーン公爵令息、グリーンムーン公爵令息によって固まってしまった！
令嬢たちの、ちょっぴーり恨みがましい目つきに苦笑いのご両人である。
それはさておき、こうして、綺麗にシャッフルされた生徒たちを眺めて、シオンは静かに頷いた。
――これは、良い練習になるな……。
シオンは知っている。

ミーアがなにかを提案する時、その言葉には、いくつもの狙いが隠されていることを。
さまざまな立場の者たちで、この大陸の、各国が内包する問題点を検証することは、意味のあることだ。複数国にまたがる意見交換の場は、パライナ祭の下準備にもなるかもしれないし、それだけでも意義深いことと言えるだろう。
しかし、あのミーアの狙いが、それだけ、ということは、あり得るだろうか？
そんなことはないとシオンは思う。そう確信している！
ゆえに、彼はこう考える。
――もしかすると、ミーアは、俺に“将来の国家運営の形”を模索させようとしたのではないだろうか。
国王の発言力が極めて大きいサンクランド王国。
シオンは、王が間違えないように、諮問機関たる議会を作ろうと考え、模索していた。
具体的な形はまだ見えてはいないのだが……ミーアは、そのシミュレーションをさせようとしているのではないか、とシオンは考えていた。
ゆえに、提案したのだ。
できるだけ、地位や立場を意識せずに、自由に、忌憚なく意見を言い合える場所の形を。
――王が座る場所は、固定しないほうが良いのかもしれないな。どの場所に座るかで、己が立場を表したり、徒党を組んだり……。それは時に意味があることだが、忌憚なく、自らの胸の内を話す時には、邪魔になるような気がする。もしも、諮問機関を作るのであれば、それは気を付けよう……。
そんなことを考えていると、席に着いたユバータ司教が口を開いた。
「しかし、大陸の未来というのは、いかにも壮大なテーマですね。ミーア姫殿下のように、なにか、狭義のテーマを設定できるとよろ

しいかと思うのですが……」
その提案に、シオンは一つ頷く。
「そうですね。さて、どんなテーマがいいか……」
そうしてシオンは考える。
この場にいる者たち……聖ミーア学園の学生たちとグロワールリュンヌの学生たち、サンクランド、ペルージャン、大貴族から弱小貴族に至るまで……。できれば、みなが発言でき、関心を持って話し合えるような、共通の、将来に関する話題と言えば……。
「……そうだな。やはり、共通するのはミーアか」
シオンは小さく頷いてから、
「どうだろう、ミーア姫殿下がこれまでに成してきた功績の意義と、それをいかにして伸ばし、生かしていくのかについて考えるのは……」
「ミーア姫殿下の功績、ですか……？」
目を瞬かせるヤーデンに、シオンは一つ頷いて。
「ミーアネットを、この場に居るみなは知っているのだろうか？」
「ミーアネット……？」
何人かの者たちが首を傾げる。グロワールリュンヌの者たちはもちろん、星持ち公爵家に連なるカルラやヤーデンも首を傾げていた。
「そうか。知らない者がいるならば説明しよう。アーシャ姫殿下とルドルフォン嬢、俺の説明で不足があれば遠慮なく言ってくれ」
一言断りを入れてから、シオンは続ける。
「ミーアネットとは簡単に言うと、食料に関する国同士の相互補助の仕組みだ。現在、この大陸を襲う小麦の不足、それに伴う飢饉の発生を抑えるためにミーア姫殿下が考案したものだ」
ペルージャンを拠点とする、国を超えた救済組織の構想、それを聞いたグロワールリュンヌの者たちは、一様に首を傾げる。
「国を問わず……ですか？」
「そう。国を問わずだ。おそらく、それが重要なことだったのだろう。食料をめぐった武力衝突が起きることを、おそらくミーア姫殿

下は予想したのだ」
　シオンは、大国の王子に相応しい、堂々とした態度で続ける。
「武力を持つ者は、しばしば誤解をする。圧倒的な武力さえ備えていれば、相手を従わせることができる。逆らってくることはないのだと……。だから、戦になることなど夢にも思わないし、仮に戦になったとしても、すぐに終わると高を括る。だから、想像すらしないんだ。その戦が、大切な、来年の実りとなる畑を焼くことも。作物を作る農民たちを殺すことも。以後、数十年にも及ぶ怒りと憎しみをその土地に残すことも」
　シオンの脳裏にも『混沌の蛇』のことが常にある。安直な手段に頼り、他国を踏みにじった時に、彼らは容易に民を取り込み、蛇へと変容させるのだ。
　けれど、おいそれと蛇のことを公言できないので、その部分は伏せたうえで、シオンは論じていく。武力による解決の危険性を……。
「それは悪手というものだ。国と国が正常に交流し、共に発展していくことこそが、我々が選ぶべき道だろう。その意味で、ミーアネットは素晴らしい仕組みだ。国を問わず、相手を問わず、食料を支援し、それだけでなく、小麦の知識も与えていくのだから」
　シオンの言葉に、アーシャが、どこか誇らしげに頷いて立ち上がり……。
「寒さに強い小麦の知識を、ミーアさまは惜しげもなく分け与えるように、とおっしゃいました。それを売れとも、独占せよとも言わずに、むしろ、積極的に伝え、広めよ、と。飢え死にする者がただの一人も、この地にいなくなるように、と……」
　多少、盛った感じで……話し出した！　さらにさらに！
「そういうことであれば、我々も少しお役に立てると思いますが……」
　ルードヴィッヒとバルタザルが颯爽と立ち上がる。それを見たシオンは納得顔で頷いて、
「ぜひ、お願いしたい。みなで、ミーアの功績を共有していこう」

こうして、ミーアの功績(ヒミツ)が次々に暴露されていくという、恐ろしい連鎖反応が起こりつつあったが……ミーアが知る由は、もちろんないのであった。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://ncode.syosetu.com/n8920ex/

ティアムーン帝国物語　～断頭台から始まる、姫の転生逆転ストーリー～

2024年8月23日12時21分発行